魔軍参謀の憂鬱

黒岩

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＳＳ期に生まれたとある人間の男。

魔王や魔人という存在に苦悩し、戦い続ける中、魔王スラルが彼の前に現れ、彼は人から外れた存在となる。

苦悩から解き放たれたかと思いきや、魔人達は一癖、二癖もある人物ばかりで彼は苦労することになる。

魔人の話です。ランスシリーズの二次創作が増えないので自分用で書いていた物を投稿。

ＳＳ期完結。ＮＣ期も完結。ＧＬ期、始まります。

目次

SS期
剣の王 1
魔軍 9
魔人 16
魔王スラル 24
スラルの宣言 31
魔人ギリウム 39
魔剣 47
決闘の意味 56
魔軍参謀と魔王の料理 74
ムシ使い 87
スラルの命令 98
やるべき事 108
獣の王 116
ガルティア 128
使徒と魔軍の食糧事情 154
カミーラの命令 163
七星 171
魔王の料理2 188
二人の約束 202
金髪灼眼の魔人 212
レオンハルトの悩み 227
使徒候補 240
レオンハルトの使徒 255

忠誠心 275
魔人ケイブリス 291
迷宮と魔王の料理３ 308
犠牲 322
謎の女性 335
交渉 350
魔人レオンハルト 367
達人の境地 387
ドラゴンカラー 399
急成長 413
ハンティ・カラー 423
不機嫌な魔王 437
一ヶ月目 448
同胞 458
追及 469
ハンティと魔王の料理４ 478
酒宴計画 494
酒宴 504
とある魔物将軍の評価 515
接待 526
酔いどれスラル 535
夜の王 549
二人の使徒 557
休暇 568
レオンハルトの休暇 578

カラーの集落 587
大森林の戦い 600
迷子 616
翔竜山 633
魔軍参謀がいない日 642
ドラゴン 654
四大聖竜 666
ライゼン 677
危機感 690
だんご殺し 706
丸いもの 720
無自覚な想い 730
秘めた想い 748
企み 764
知らぬが仏 779
変化 793
スラルの不安 804
十日振りの再会 815
真相 835
ケッセルリンク 847
最後の休暇日 862
立ち位置 875
王達の戦い 887
グルメ魔人の怒り 902
戦士長の最後 920

剣の畢竟 936
生きる意味 956
竜の唄 971
伝説 1000
新しい縁 1015
レオンハルトの宣言 1032
二人の女魔人 1047
ケッセルリンクと魔王の料理５ 1063
魔法 1075
握手会と進化 1087
奈落の王 1101
真・奈落の王 1113
魔人ますぞぇ 1129
デート計画会議 1140
二人の関係 1153
初めてのデート 1167
スラルの一撃 1180
二人の想い 1194
事後 1209
海 1221
聖女の子モンスター 1238
聖女の子モンスター２ 1249
聖女の子モンスター３ 1264
運命の決まった日 1283
その願いは 1293

その原因は　1302
数百年振りの再戦　1318
スラルの選択　1328
ＳＳ５００年　1339
託されたもの　1352
ＮＣ期
魔王ナイチサ　1380
レオンハルトの城　1396
野望　1409
魔人ザビエル　1421
営みと不安　1433
とある王国と大将軍会議　1449
葛藤　1462
変わらない故郷　1476
終戦と開戦準備　1492
光あれ　1504
蹂躙　1519
使徒シャロン　1543
魔法生物の誕生　1561
使徒二人　1575
使徒戯骸　1589
カミーラとライゼン　1600
寄生　1612
ガウガウ・ケスチナ　1624
魔人レッドアイ　1637

トッポス　54
使徒パレロア　66
東部超大型地震　71
ＪＡＰＡＮ　84
魔人レキシントン　168
とある姉弟と昼食　169
料理長　170
パワードスーツ　171
魔人パイアール　171
科学兵器　172
魔人になった理由　173
聖女の子モンスター４　174
ケイブリスの憂鬱　175
使徒エルシール　176
英雄の生まれた日　177
夢　178
ザビエルの企み　179
レオンハルトＶＳザビエル　181
余興　182
カミーラの城　183
石丸の旅路　184
仮面の男　185
月餅　186
戦争前夜　187
魔軍出陣　189
19
28
19
15
19
04
18
89
18
75
18
66
18
55
18
42
18
32
18
20
18
12
17
99
17
88
17
77
17
68
17
59
17
47
17
38
17
25
17
17
17
05
16
94
16
84
16
67

開戦の日 ―― 1938
レオンハルト軍 ―― 1948
ザビエル軍 ―― 1968
藤原家 ―― 1982
キナニ平野の戦い ―― 1993
キナニ平野の戦い２ ―― 2005
キナニ平野の戦い３ ―― 2018
魔物大将軍コウウ ―― 2029
キャロルＶＳ煉獄 ―― 2038
ペールＶＳ魔導 ―― 2049
式部の潜入 ―― 2060
ハンティＶＳ戯骸 ―― 2073
使徒としての ―― 2085
最強の使徒 ―― 2097
激戦 ―― 2110
藤原石丸ＶＳ魔人ザビエル ―― 2121
魔人の敗北 ―― 2134
戦いの休息 ―― 2147
第二次キナニ平野の戦い ―― 2162
二人の英雄 ―― 2179
舌戦 ―― 2190
剣の理 ―― 2202
王の器 ―― 2212
キャロルＶＳ源頼光 ―― 2225
ハンティＶＳ黒部 ―― 2235

ペールＶＳ菅原ミッチー　247
最期の意地　257
ハンティの自覚　268
初めての挫折　276
魔人の秘術　295
死地　302
転移魔法陣　314
包囲網　323
戦争終結　336
戦勝報告　349
支配　361
彼らの夢　371
戦後処理　387
新たな剣　405
挑戦者　424
夢の果て　437
おやつ休憩　455
ケイブリスの成長　485
使徒加奈代　502
カラー王国　525
クライア・カラー　529
招待　540
反抗　550
レガリア・カラー　562
王国の最後　584

メイドの日常 ―― 604
使徒バーバラ ―― 635
接待 ―― 647
勇者クエタプノ ―― 668
違和感 ―― 681
東部オピロス帝国 ―― 691
大将軍会議と勇者パーティ ―― 704
三体の魔人 ―― 727
襲撃 ―― 739
勇者の敗北 ―― 751
その戦争の名は ―― 768
死滅戦争 ―― 781
魔物大将軍ヴラド ―― 796
勇者の覚悟 ―― 812
勇者襲撃 ―― 824
最期の願い ―― 847
クエタプノVSレオンハルト ―― 866
刹那の力 ―― 877
クエタプノVSナイチサ ―― 896
決着 ―― 911
勇者の真実 ―― 925
善と悪 ―― 929
GL期 ―― 939
国狩り ―― 955
魔王ジル ―― 2968

凶行 ―― 979
魔人ノス ―― 902
下級使徒 ―― 729
魔人ジーク ―― 300
インデックス・カラー ―― 407
人間牧場 ―― 523
魔人メディウサ ―― 663
敵情視察 ―― 806
勇者アキラ ―― 953
独りの人間 ―― 1083
魔人レイ ―― 1183
レオンハルトＶＳレイ ―― 1423
レオンハルト直営人間牧場 ―― 1603
レオンハルト直営人間牧場２ ―― 1723
白兎 ―― 1883
親馬鹿 ―― 1231
母親 ―― 1321
親子として ―― 1432
使徒ラインコック ―― 1543
まともな人間 ―― 1693
破壊神 ―― 1793
魔人姉妹 ―― 1913
魔人ラ・ハウゼル ―― 2013
魔人ラ・サイゼル ―― 2133
嵐の前の静けさ ―― 2333

姉妹喧嘩 ―― 362
姉妹喧嘩の結果 ―― 372
サイゼルの気持ち ―― 384
ハウゼルの気持ち ―― 396
人の意志 ―― 406
魔人アイゼル ―― 417
性技指導 ―― 429
５人の英雄 ―― 442
エターナルヒーロー ―― 456
復讐の種 ―― 470
白兎の冒険 ―― 481
再会と新たな依頼 ―― 493
二代目妖怪王 ―― 505
白兎の剣 ―― 516
宿命 ―― 527
お町 ―― 535
暗黒時代の冒険 ―― 545
その目的は ―― 557
前哨戦 ―― 570
姉妹斬り ―― 587
選択肢 ―― 598
魔人との遭遇 ―― 610
ＶＳ魔人レイ ―― 620
おっぱい ―― 634
次の目的 ―― 648
―― 663

使徒女子会 ―― 671
晩餐 ―― 823
最後の黄金像 ―― 936
潜入準備 ―― 1023
魔物の街 ―― 1143
人間街 ―― 1263
英雄達の邂逅 ―― 1374
幸福とは ―― 1563
布石 ―― 1703
永い旅の始まり ―― 1778
ガウガウの発明 ―― 1893
料理人達の日常 ―― 1938
メイドの日常2 ―― 2938
彼が彼として生まれた日 ―― 3849
少年奴隷としての日々 ―― 3864
混沌の産声 ―― 3873
居場所を探して ―― 3888
これから先 ―― 3911
衝撃事件 ―― 3925
家出しました ―― 3940
カラーの里で一泊 ―― 3955
真夜中の指導 ―― 3975
怒りの日 ―― 3991
子供の夢 ―― 4008
解けない呪い ―― 4023
40374

親子の在り方と新たな報告 ―― 47
新たな命と新たな協力者 ―― 64
才能の覚醒 ―― 94
旅立ちの日 ―― 109
アルベルト ―― 124
初めての友達 ―― 141
実家 ―― 157
魔物討伐隊 ―― 174
悪意に満ちた世界 ―― 187
初めての体験 ―― 205
最も効率のいい仲直り方法 ―― 218
姉妹丼 ―― 230
強盗 ―― 243
魔人の恐怖 ―― 252
聖女の子モンスター5 ―― 266
鋼の騎士団 ―― 274
初出勤 ―― 291
暴露 ―― 305
遺跡の調査 ―― 318
魔剣 ―― 329
提案 ―― 340
ガイVSロラン ―― 354
石ころの意地 ―― 369
魔法の隠れ里 ―― 384
友人と仲間の再会 ―― 399

前触れと予感 414
炎帝 428
禁呪 444
氷の女王 449
動き出す事態 457
かかし男 472
災厄 485
夜闇の暗躍 502
早朝の天気 516
氷の使徒 531
竜の魔王 545
魔王の戦い 560
異常気象 575
覚悟の時 588
恐怖はすぐそこに 597
決別の時 610
殲滅 631
竜の闇 646
迫る脅威 661
鋼の意志 677
恐れる必要はない 693
最強の魔人と最強の人間 708
禁呪の力 722
ガイＶＳレオンハルト 736
魔物界の英雄 747
476

人生の終焉 …… 777
魔人招集 …… 802
魔人ガイ …… 820
意外な提案 …… 836
牧場の最高傑作 …… 852
勘違い …… 870
使徒の親睦会 …… 887
性技指導2 …… 904
ガイの休日 …… 924
勝ち組 …… 945
ガイの休日2 …… 964
悪魔的接待 …… 982
ケッセルリンクの休日 …… 995
ハンティとガウガウの日常 …… 1007
新たな別荘での休日 …… 1018
カミーラとの休日 …… 1032
カミーラと温泉 …… 1049
悪魔界の異端児 …… 1065
予知の使徒 …… 1089
魔王の休日 …… 1103
イヴのお仕事 …… 1120
変わらないもの …… 1145
永遠の魔王 …… 1162
二度目の決意 …… 1178
欲望 …… 1195

ガイ派 ―― 215
レオンハルト様親衛隊 ―― 243
調整 ―― 260
開戦の狼煙 ―― 274
初陣 ―― 287
狩る者 ―― 311
鍛えあげられたもの ―― 328
使徒の誇り ―― 345
１０００年に１人の天才 ―― 360
積年の怒り ―― 381

ＳＳ期
剣の王

――ＳＳ１００年

第２世代メインプレイヤーであったドラゴンが滅ぼされ１００年。新たに作られた第３世代メインプレイヤーである人間。彼らの生態も確立されてきていた。

最初は数十人からなる集落を作り生活していた。男達は毎日狩猟に出かけ、女達はそれ以外の雑務と子育て。無論、何もなければこれだけでも生活は成り立つ筈であった。それが難しいのは他の集落との縄張り争いやその他の事情もあるが、それより何よりも魔物の存在が大きい。

――――魔王。

魔物達の王であり、この世界に存在する絶対的支配者だ。そしてその配下であり魔王の血を与えられた強大な力を持った魔人。これらを旗頭とし、軍として機能している魔軍の脅威に人類は脅かされていた。

魔物たちは人間を見つけると襲いかかってくる。男は呆気なく殺され、女は無残に犯される。これが人類が生まれてから数十年経っても変わらない常識だ。

だが、人間たちも指をくわえて黙っているわけではない。彼らは同じ人間たちの集落と手を組み、更に大きな集落を作った。

元より狩り場の縄張り争いで他の集落との仲は良くもなかったが、魔物の存在により人間達は否応なく徒党を組むことになったのだ。１対１で魔物には勝てない。なら２対１ならどうだろう、善戦くらいは出来るかもしれない。５対１ならどうだ、なんとか勝利を収められるかもしれない。それなら１０対１なら、それ以上の数なら、魔物相手でも圧勝出来るかもしれない。

そうして人間達は大きな集落を作りあげていった。後に村や町、国と呼ばれるであろうこの大きな集落のトップは王と呼ばれ、いつも集

落の中で一番強い人間が務めていた。強力な魔法を使い、夜において絶対的な強さを持つ亜人、カラーの集落の長である夜の王や、ムシと呼ばれる生き物を何十体も使役し戦うムシ使いである獣の王の武勇伝は遠くの集落にも噂が聞こえてくる程。

さて、そんな中。とある集落にも王が一人。幼い頃から剣を振り続け、数多の魔物を屠ってきた王。

剣の王と呼ばれる王、その男の名は――――

「王！　王は居られますか!?」

石造りの廊下にドタバタと人の足音が鳴り響く。小走りで自らの集落に仕える王を探す男の表情に余裕はなく、ここまで走ってきたのであろう汗が床に飛び散るのも構わず必死の有様だ。

途中、女中や兵士に聞いた所どうやら私室にいることがわかると一目散にその部屋に向かう。

やがて数分と経たず部屋の前に辿り着く。

「王！　失礼致します！」

一声掛けてから、扉を開いた。

するとそこでは。

「はい、あーん！」

「あ～ん！」

「やんっ！　もうレオンハルト様ったら変なとこ触らないでくださいよ～」

「へっへっへ、いいだろ？　……おっ、ちょっと大きくなった？」

「レオン様のえっち～！」

「はっはっは」

女中を侍らせて遊んでいる王の姿がそこにあった。

「な、なな、何をやっているんですか王――!?」

兵士の声が周囲に木霊した。

その大声でようやく気づいたのか、女中に膝枕をしてもらいながら別の女中に果物を食べさせてもらっていたこの集落の王である男性――レオンハルトは顔だけを向けた。

「……ん、ああっ……んん！　……どうした？」
「いや、レオンハルト様？　声だけ厳格にしても全然威厳無いよ？」
女中のツッコミは聞こえていたのであろう、しかし無言のままレオンハルトは兵士を見る。
この一瞬で、レオンハルトに対するイメージが破壊された兵士はしばらく呆然としていたが、やがて自分の使命を思い出すと気を取り直して報告を初めた。
「レオンハルト王！　魔軍です！　魔軍が攻めてきました！」
「ん……じゃあ、行くか」
レオンハルトは直ぐ様立ち上がると、部屋に立てかけてあった装飾の付いた剣を手に取る。
「それで、何処から攻めてきた？　やっぱ北か？　それとも西か？」
「は……はっ！　仰る通り集落の北西から大規模な魔物の部隊が向かってきているようです。王には是非、戦いに出て敵の首級をあげてほしいと長老達が――」
「あー、わかった。とりあえずお前はもう先に戻ってくれ。俺も直ぐに向かう」
「了解しました！　では、戦場にてお待ちしております！」
兵士はその言葉を聞いて、一礼すると直ぐ様、戦場に向かうため走って部屋を後にした。それを見届けるレオンハルトの大きな溜息には当然気づかないまま。

兵士が立ち去ったのを見て、俺は女中を部屋から追い出し一度頭を抱えた。
……ざっけんじゃねえぞ。
その言葉は口に出さず、飲み込んだ。
俺、レオンハルトは自分の運命を呪った。というのも俺には特殊な生まれながらの事情があるせいだ。
俺には所謂、前世の記憶というのがあった。いや、そこまで確かなものじゃない――知識と言うべきか。俺はとある人間の男であり、その世界での普通の人生を送り、一生を終えた。そんな覚えがある。

これだけならば然程問題ないというかむしろどれほどよかったことか。知りたくない事を知らずに済んだのだから。
何が問題かと結論を言うのならば俺の前世はこの世界ではない異世界の人間であり、更にはこの今俺がいる世界の事が記されており、それを前世の俺が知っていることだ。
つまりどういうことか、それを説明するにはかなり複雑で難しい。この世界の人間に言っても頭がおかしいとしか思われないだろう。……いや、前の世界でもそれは変わらんか。
前の世界では、こちらの世界と違いかなり文明が発達した世界であった。そこにはこの世界に存在しない数多の物があり、テレビ、電話、車、冷蔵庫……上げればキリがない程である。
そんな中、ゲームというものがある。説明は出来ん。いや、出来るかもしれんがしたくない。頭がおかしくなりそうになるからだ。
簡潔に言うならば娯楽、それもコンピューターという精密機械という金属や色んな物質の集合体を使ったもの。うん、これだけじゃ意味がわからんな。
まあ、ここは然程重要じゃないかもしれん。要はそのゲームという娯楽の中にこの世界を模したモノが存在し、俺はそういった娯楽をたくさん所有しており、それを遊んだことがあるということ。
そのゲームを『ランス』と言う。幾つもの作品が存在し、それらを総称して『ランスシリーズ』とも言われ、一人の男の冒険者が世界を冒険する英雄譚。簡単に言うならそういうものだ。
そしてその『ランス』の世界観、それがあまりにもこの世界と合致しているのだ。
まぁ、実のところ前世で言うこの世界は所謂ファンタジーと呼ぶべき世界観であり、その手の話はいくらでもあったのだが、何故その数ある作品の中から『ランス』世界に合致するかと確信出来たのはやはりこの世界が独特であるからだろう。
ＬＶの概念、才能限界、技能ＬＶ、ハニーやぷりょ等の魔物、幾つもの存在が俺の中にある知識と完全に一致したため、俺はそれを確信、この世界が『ランスシリーズ』、ルドラサウム世界であると断定し

たのだ。
それらを踏まえて俺の状況を前世風に言うならこうだ。
俺、ランス世界に異世界転生しちゃいましたっ！　てへぺろっ！
――――ふざけんじゃねえぞごらあっっっ!!
この事を思い返す度に俺は自分の運命というか境遇に怒りや嘆きを覚えざるを得ない。そもそも俺の前世があんなへなちょこ野郎だということにむかっ腹が立つっていうのに……。
というのも俺は確かに転生をしたということになるんだが、それを俺は認めたくない。認めたくなかった。
何故なら俺は前世の俺ではないからだ。これは自分でも説明しづらいんだが、要約すると『前世の俺は俺という自覚はある』。しかしそれは、『俺と同じ俺ではない』ということだ。
まぁ、難しいし、自分語りに――いや、今更か。まぁ、とにかく聞いてほしい。
俺はこの世界に生まれた時、なんとも曖昧な意識と自我を持っていた。なにせ前世の知識、経験、記憶があるからな。だが、考えてみてほしい。俺は生まれた時、当然赤ん坊だ。人間なんだから当たり前で、そして赤ん坊であったからこそなのか俺はその記憶が何なのかよくわからなかった。
俺は脳科学なんかにゃ詳しくないが、多分脳が俺の記憶や知識に追いついてなかったんじゃないかとか考えている。記憶や知識があっても脳が赤ん坊なので上手くそれを出力出来ない。もしくはそもそも完全に記憶出来なかったか。
もしかしたら間違ってるかもしれない。言ったとおり脳科学には詳しくないからな。
だが、重要なのは俺が事実、そういう自覚が薄い曖昧な状態で生まれてきたことだ。
前世の俺なんかよりよっぽど頭の良い連中なら理解るだろうし、予測出来るだろうが、俺はその後、徐々にその記憶と一緒に自我を確立

させていった。
1歳を半ば過ぎた頃、既に俺の意識ははっきりしていてこの世界を、周囲を認識していた。これは木だ。これは石だ。これは雨だ。この世界の物を前の世界の知識と摺り合せて理解出来た。
そして同時に俺は前世の俺の事を知った。そしてここが肝心の部分だ。
短いながらも俺は赤ん坊の頃をこの世界に生まれた赤ん坊の状態で育ってきたんだ。そこには前世の俺も何もない。真っ新な新しい生命だ。それは前世の俺はほぼ介在しないこの世界での俺であり自我だ。
赤ん坊の頃の環境に大きな差はないとか、自我もはっきりとしてないんだから自分という意識も希薄とかそういう疑問は俺も同意するところだ。
だが、俺は俺という部分だけは曲げられなくなってしまった。前世の俺は俺ではあるもののなんというか、ｉｆの俺という認識だ。
実際、俺は年を重ねるに連れて前世での環境との違いや肉体のスペックの差からそういう思いが強くなり割り切れるようにはなった。ほら、双子や仮に全く同じクローンがいたとしても育ちの環境の差で全然別の人間になるとか言うだろ？　そういう認識だ。
前世でこういう育ち方すると俺ってこんな感じだったんだなーって感じだ。
という訳で、俺は俺だけど前世の俺は苦い思い出として残ってるという事か。
さて、長くなって申し訳ないな。こんな話はおそらく二度としないだろうから勘弁してくれ。そもそもさっきも言ったが前世の俺の事はあまり思い出したくもないしな。
最初の疑問に戻ろう。何故俺は自分のこの境遇に悲嘆の感情を抱くのか。
それはこのルドラサウム世界で最も強大な存在――魔王と魔人。
これらに虐げられる人間という種に生まれてきており、更に俺はこの集落の王であり剣の王と呼ばれているからだ。

今の時代は力がモノを言う時代であり、弱肉強食の世界だ。
人間は魔物の脅威に晒されており、手を取りあい魔物を撃退しなければならない。それなら強い人間が先頭に立ち、戦うのは自然な事。かく言う俺も幼少期から自衛の為にも剣を振って必死に戦った。強くなるためにはそうするしかなかったからだ。そして俺には幸いな事に才能があったらしい。戦っていくにつれて直ぐに俺より強い奴は集落にいなくなった。
そして毎日毎日魔物と戦っていく日々で集落の王が魔物に殺されて死んだ。すると直ぐ様、集落の長老達は俺を次の王にと担ぎ上げた。長老達は隠居した王や強さ以外の能力を持った老人達でかなりの権力を持っているため、集落の人間は長老達の言うことに逆らわない。
というより集落での取り決めや運営は長老達が行っているため、実質一番の権力者は長老達だ。
王の役目は前線で兵を率いて戦うだけ。俺も長老達には逆らわない。というか逆らっても村八分にされるだろうしな。
自慢じゃないが俺は兵以外の集落の人間から化け物みたいな扱いを受けている。強すぎるため腫れ物扱いだな。さっきの女中達からは好かれているかもと思うかもしれんが、あれは演技だ。俺に媚びていれば多少良い生活を送れるしな。それを分かった上で俺は好きにさせてもらっている。俺も男だし、こういう時くらい王の特権を使って好き放題しないとストレスが溜まる。据え膳は食った方が良いに決まってる。
話を戻そう。俺が長老達を殺すなりなんなりして排除したところで、集落の人間がはいそうですかと素直に言うことを聞くのか。恐怖心から聞くかもしれないが、そういう恐怖政治なんかしたところで俺は仕事が増えて面倒なだけで楽しくとも何ともない。
かといって戦い続けるのは無謀だ。
魔軍だけなら別にいい。俺も剣技には自信があるし、負けない……と思う。実際ここまで勝ってきているしな。
だが、戦い続けていると近い内に魔人や魔王が来るだろう。そした

ら俺に待っているのは死だ。
ひょっとしたら魔人には勝てるかもしれないが……戦った事がないためどれくらい強いのか知らんが、今の時代は確か無敵結界が無いためワンチャンある。
だが、魔王は論外だ。勝てるわけがない。戦わないタイプのホラーゲームの敵みたいなもん。
そもそもこの世界に生きてる存在では勝てるように出来ていない。それくらいめちゃくちゃな存在だ。この世界の主人公であらせられるランスは魔王に勝ったらしいが、魔王もランスもまだ俺自身は見ておらずどれくらい差があるのか分からないが到底信じられないし、未来の事であるため本当に勝てるとも言い切れない。
なんにせよこの世界に生きる者としては避けたい存在であることは確か。
ならどうするか。戦いに出ず逃げるか？　本心では女でも連れて、適当な所に隠れ潜んで楽して暮らしたい。しかし、集落にいる奴らはともかく俺についてきてくれる兵達を見捨てるのは避けたい。なら兵を連れて行くか？
それも無理だろう。兵には愛する家族もいる。戦友よりは家族の方が優先度が高いのは自明の理。当たり前の事だ。
俺は手に持った銀の直剣を眺める。そろそろ行かないとな。
今日も答えが出ないまま、俺は戦場に向かった。

魔軍

――集落北西の高原

既にそこでは数多の血が流れていた。

その血を流すのは人間で、血を流させるのは――魔物。

「おら死ねぇ――!!」

「ぎゃあああああああっっっ!?」

「ぐっ！　怯むな！　陣を崩さないようにしながら耐え続けろ！」

魔物の猛攻に集落の兵達は、木と尖った石で出来た長い槍を突き出すようにして耐え続ける。この集落特有のこの武器は比較的守ることに優れていた。

だが、それを見た魔物達は怯えることなく突っ込んでいく。

「ヒャッハー――！　そんなもの効くかぁ！」

「ぐぁっ!?」

数と力で勝る魔物に槍を払われ、無残に殴り飛ばされる兵。

「どんどん殺してやる――」

「炎の矢！」

「ぐぁぁッ!?」

「おらぁっ！　魔法打ったな？　なら死ね――!!」

「ぐうぅ！」

この時代では数少ない魔法を使える者が魔物を倒すも、他の魔物にその隙を狙われてしまう。

戦場は魔物達――魔軍の優勢だった。

「このままでは……！」

全滅もありうる、と兵をまとめる隊長も消極的に考える。

魔物の攻勢がいつにも増して激しい。

更にいうなら先日にも魔物が攻めてきたばかりであり、連日の攻勢で兵達は疲弊している。王の不在も大きい。早く来てくれねば今度ばかりは――

撤退も視野に入れるべきか。それを考えざるを得ない。

「おいおいどうしたぁ!?　いつもの威勢がねぇぞ!!」

「ぎゃあああ！　がっ！　た、いちょ……」
「くっ！」
今も目の前で部下が一人やられた。いや、別の場所でも次々と兵がやられている。
そして次は――
「おらあ！　テメェが隊長かぁ!?」
「っ！」
眼の前に来た魔物兵を迎え撃とうと槍を手放し、剣を抜いたその瞬間。
ぼとり、と。
魔物兵の身体が２つに別れた。
「ぼっ、な……」
何が起こったか解らず魔物兵は倒れる。近くにいた魔物は謎の現象に戸惑い立ち止まり、兵達はその現象を起こした人物を連想し、そしてその姿を見つける。
切り揃えられた黄金の髪に蒼い瞳、そして銀色の直剣。
自分達の集落の王であり、最強の人物。
剣の王であるレオンハルト。
彼は兵達を、正確には隊長に視線をやると短く。
「すまない。遅くなったな」
と謝った。
その瞬間、兵達から咆哮が上がった。
「王が来たぞ――!!」
「おおおおおおおおおおおおおっっっ!!!!」
士気が最高潮に高まったこの瞬間、それを見逃さずレオンハルトは声を上げて指示を出す。
「俺が中央に突っ込む！　体力有り余ってる奴らは剣持って付いてこい！　残りは槍持って敵の前面を押し返せ！」
「了解!!」
その言葉と同時にレオンハルトは言葉通り敵の中央に真っ直ぐ突っ込む。

「人間一人来たからなんだってんだ！　死ねッ！」
魔物兵が突っ込んでくるレオンハルトを攻撃しようと狙いを定める。
だが、それでは遅かった。
ブン、とレオンハルトが剣を振る。
それと同時に――
「がはっ――な、速い……！」
前面にいた魔物兵が斬り捨てられる。
レオンハルトと魔物兵の攻撃の間合いが触れ合うその瞬間、魔物達は次々と身体を真っ二つに両断されるのだ。これには魔物兵も怖れてしまう。
「ひぃっ！　ば、バケモンだっ!?」
「え、ええい！　怯えるな！　相手は一人だぞ！」
と魔物兵よりも人間に近い姿を持った個体、魔物隊長が発破をかけるも、
「死ね」
「がが、あっ……」
最初から狙いを付けられていたのか、真っ直ぐに魔物隊長に向かってきていたレオンハルトに言葉少なに斬り捨てられる。
これにより周囲の魔物は更に狂乱させられる。
「に、逃げろ！　あんな奴相手にしてられるかっ！」
「で、でも……持ち場が」
向かってくる金髪の死神を恐れ、魔物兵の動きが鈍くなる。
そしてそれを許す程、人間の兵は甘くなかった。
「今だ！　突っ込め――!!!」
「うおおおおおおおおおっ!!!」
隊長の号令により、槍を捨て、剣を抜いた兵達が隙を見せた魔物兵達に刃を突き立てる。
これにより何体もの魔物兵が亡骸を晒した。
「ぐうう、言わんこっちゃない！　人間を迎え撃て――！」
「王に続け――！」

かくして戦場は更に苛烈さを増していった。

その渦中におり、今も前面にいる敵だけを斬り捨てながらひたすらに足を進めるレオンハルトは――

……はぁ、面倒だな。

内心、戦いの面倒さに憂鬱な感情を抱いていた。

というか何だ、今日は。やけに魔物の士気が高いし、数も多い。これは魔物将軍一人じゃ足りないかもな。

解説すると魔軍の指揮系統は魔物将軍、魔物隊長、魔物兵の順で階級が定められている。

まず、魔物兵。不思議な緑やら赤やら青やらのスーツを着た奴らだ。

え、魔物ってもっと色んな種類がいるんじゃないの？　なんで同じ見た目の奴しかいないの？　とかそういう疑問を持つのはしょうがないだろう。

魔物は様々な種類が存在する。そりゃあもう沢山だ。前世で知っている筈の俺が把握出来ないくらいには沢山いる。

それらはやはり生態が全然違う。移動方法も攻撃方法も何が得意かも何もかも違うのだ。

そんな様々な連中が寄り集まって部隊運用するなんてのは不可能じゃないにしても効率が悪すぎるし、何より魔物隊長や魔物将軍はあのスーツを着た魔物兵でないと指揮することが出来ないらしい。

そこであの不思議スーツ。あれには魔物の性能をある程度同じにする力がある。あのスーツを着れば姿形が違う魔物達も全員一律同じ姿、攻撃方法に統一されるのだ。

そのため指揮、運用がしやすくなる。なら、同じ魔物だけで統一したら魔物隊長は指揮出来るのかとか疑問もあるがその辺は知らない。

とにかく魔軍の大部分はあの魔物兵であるということだ。ちなみに、一応赤、青、緑の順で強いとのこと。といっても緑でも人間より余裕で強いんだが。理不尽。

続いて魔物隊長。魔物隊長は魔物兵を二百体まで指揮出来る。魔物隊長に指揮されることで魔物兵は初めて組織的な動きを為すことが出来るのだ。当然、魔物兵よりも強い。
そして魔物将軍。こいつは魔物隊長を百体まで指揮することが出来る。
つまり魔軍の一個軍の単位は二万となる。
この規模の魔軍に攻められたら基本的に人間は為す術がない。唯でさえ一兵一兵の強さが向こうの方が上であり、数の上でも向こうの方が上だ。人間は戦える奴は限られているしな。
さて、しかし魔軍にも明確な弱点が一応存在する。
それを俺は今、狙ってひたすら奥に進んでいる訳だが――って、いた。
「！　人間がまさかたった一人でここまで……お前が剣の王だな」
どうやら向こうもこちらに気づいたようだ。
腹に大きい球体、鎧に手足を付けた全体的に丸っこい姿のモンスター、魔物将軍だ。
……どうでもいいが、剣の王って呼ばれるとどっちつかずの感情が俺をかき乱す。前世基準で言うなら中二病的で痛いはずなんだが、当の俺は少し格好いいのでは？　と思ってしまう。
結果、俺は否定も肯定もしない。
「俺が誰かなんてどうでもいいだろ」
俺は短くそう返答して、相変わらず真っ直ぐ突っ込む。
「くっ、魔物兵！　迎え撃て！」
「はっ！」
魔物将軍が少し焦ったように周囲の部下に命令する。それにより大勢の魔物兵が俺を数の暴力で押し潰そうとしてくるが付き合う義理というか意味もない。
俺は進路上にいる魔物兵を数体斬りつけて、道を空けさせると魔物将軍の元まで跳躍した。
「ちぃっ！　だが、その態勢では攻撃は躱せんだろう！」
魔物将軍が舌打ちをし、高く跳躍して向かってくる俺に拳を振り上

げてくる。
「――！」
「なぁっ!?　くっ――！」
剣を相手の拳に合わせるように受け流すと、そのまま魔物将軍の足元に着地。
そして踏み潰そうと動く魔物将軍よりも速く、剣で腹を掻っ捌いた。
「ぐううっ！　な、なんて人間だ……」
その言葉を最後に魔物将軍はその巨体を地面に倒れ込ませた。
「しょ、将軍っ!?」
「うわあああああ!?　将軍がやられたぞ!!」
「お、おい、どうするんだ？　やるのか？」
「俺は嫌だからな！　お前ら勝手にやってろ！」
「おい、ふざけるな！　敵が目の前にいるんだぞ！　やるんだよ！」
「じゃあお前最初に行けよっ！」
「はぁっ？　冗談じゃねぇ！　あんな化け物に最初に突っ込んだって死ぬだけじゃねぇか！」
「なら俺もごめんだ！」
「ひぃぃぃ!!　俺は逃げるからな!!」
「俺も！」
魔物将軍を殺された魔物兵は収集がつかなくなったようで、それぞれ好き勝手に行動し始める。その大部分は逃走しようと動いており、数少ない戦おうとする奴らも将軍を倒した奴を相手にはしたくないため、その役を他の奴に押し付けようとする。
そう、魔軍は頭を潰されると瓦解するのだ。
魔物将軍や魔物隊長がいれば組織だって動ける魔軍は、逆に言えば彼らが居なければ組織だった集団行動を取ることが出来ない。
更に言うなら魔物の社会は力がモノを言う縦社会で、魔物隊長や魔物将軍は魔物兵よりも強い為、自分より強い奴を倒した相手に対しては足踏みしてしまう。
これが魔軍の弱点だ。

魔物将軍を倒しさえすれば後は烏合の衆でしかない。
まぁ、魔物将軍は基本的に陣の中央や後方にいて前面で指揮を執ることがない上、周囲に大量の魔物兵がいることも確実であるため、そこまで辿り着く事が出来、なおかつ倒すことが出来ればという限定的な弱点ではあるが。
うちの集落は大体この戦法で勝ってきた。ていうかこれ以外魔軍の倒し方ってあんのか？　あるなら教えてほしい。
さて、いつもなら攻めて来ているのは一個軍だけであるため魔物将軍を倒した時点で終了なのだが、この規模だともう一体か二体は倒さないといけないだろう。
魔物将軍程度なら負けることはないだろうし、仮に危なくても逃げるくらいは出来るだろう。
俺は周囲の敵を斬り払うと、次の魔物将軍を見つける為に陣をもう少し深くまで進むことにした。

魔人

「おい！　何やってやがんだ！　俺を早く守――れ」
　都合、七体目の魔物隊長を斬り捨てると、相も変わらず周囲の魔物兵が悲鳴を上げながら混乱する。
「ひぃッ!?　だから俺はこの集落を襲うのは嫌だったんだ！」
「はぁっ!?　テメェ乗り気だったじゃねぇか！」
「うるせぇんだよ！　とにかく俺たちじゃ敵わねぇ！　あの方を呼んで来い！」
「出てくるわけねぇだろ!!　俺はさっさと――ぎゃあっ!!?」
　俺は喚いてる魔物兵を袈裟に斬る。
「い、言わんこっちゃねえ！　逃げるぞ！」
「うわぁあああああああ!!」
　俺は逃げていく魔物兵を尻目に剣を振り、滴る魔物の血を払うと息を吐く。
　……さすがに疲れたな。
　もう味方の陣からはかなり遠くに来てしまった。彼らは大丈夫だろうか。情に厚いとは言えない俺も長年一緒に戦ってきた兵達には思うところもある。一応、これだけ混乱させればそうそうやられることはない筈。
　しかし、そろそろ兵の疲れも限界に近いだろう。この所の魔軍の侵攻は頻度を増してきており、それに鞭を打つような連日の攻勢。俺の中で撤退の文字が浮かび上がる。
　だが、俺は曲がりなりにも王だ。
　そんな柄じゃないし、戦うくらいしか脳はない。実際の権力は長老達が握っているとはいえ、だ。
　ここで残りの魔物将軍を倒さないまま撤退すればどうなる？
　撤退するに当たって兵達を休ませるためには戦線を後退せざるを得ないだろう。
　なら、途中の集落は犠牲になる。
　予備兵力なんてものは存在しない。女性に戦わせることも提案し

たいが、そんな事を長老達が許すはずもない。
幾ら化け物と腫れ物扱いを受けようが良心くらいはあるのだ。余裕がある内は見捨てない。
自身の身体の状態を確認する。
細かい切り傷はあれど、致命傷や大きな傷は皆無。ダメージらしいダメージは受けていない。
問題は疲労のみ。ならば魔物将軍を倒すまでは保つ。
そして魔物将軍を倒した後は魔軍の瓦解に合わせて撤退、か。
俺は気を引き締めると魔物の群れに向かって突撃していった。

そしてさらに三体の魔物隊長を倒した後、俺はやっと目標を見つけた。
「な、もうこんな所まで――！」
「！」
俺は言外に首を取るという意思を込めて止まらず魔物将軍に突っ込む。
「お前は何なんだ！　くそっ、魔物兵をゴミみたいに斬り捨ておって……くっ、おい、俺は下がるぞ。足止めを――」
「逃さん――」
俺は力を振り絞り、両手で剣を振り回しながら、突き進む。
「うおおおおおおおおおおおおおおおおッッッ!!」
魔物兵をまた一人、また一人と斬り捨て――
遂に魔物将軍の眼の前まで辿り着く。
「これで最後――！」
「く、クソっ！　こんな所で終わる訳には――！」
と、魔物将軍の腹に剣を突き刺そうとした瞬間。
俺は突然、気配を感じ――直ぐ様左側面を剣で防御した瞬間、衝撃が来た。
「が、がああああああっっっ!?」
防御した筈があまりの衝撃の強さに身体が吹き飛ばされ、浮いた身体が地面に衝突し、土煙が舞い上がり、魔物兵をも巻き込んでようや

く止まる。
……何だ、何が起こった……？
手を地面に突き、身体を何とか起こしながら顔を魔物将軍の方へ向けるとそこには何かが立っていた。
人間ではない。細長いシルエットからそれは理解る。
なら、あれは……。
やがて土煙が晴れていき、その姿が露わになる。
真っ先に目につくのは白い身体。そして次に羽。赤い目に爪。
その存在を前にした為か、はたまたそれに受けたダメージの為か、俺は呆然としたまま魔物将軍が呟いたその名前を聞いた。
「メ、メガラス様――！」

魔王の血を分けた忠実なる配下――魔人メガラス。
その存在を前に人間である俺は頭の中に最大限の警鐘を鳴らした。
「……」
少しの時間を置いて立ち上がった俺を見ているのか、しかしメガラスは何も言葉を発しない。
ただじっと見つめているだけ。
そんな姿を不審に思ったのか魔物将軍が声を掛けた。
「あの、メガラス様……？」
「……下がれ」
「――は？」
ようやく口を開いたメガラスの言葉を理解出来ず、思わず間の抜けた声が出る魔物将軍。
「え、それはどういう……？」
意味を理解出来ず、問い返してみようとするもそれは同じくメガラスの言葉に遮られる。
「……戦いの邪魔だ」
「は、はっ！　つまりメガラス様があれのお相手をするということで……？」
「……」

これ以上は語らぬ。さっさとしろ。メガラスは態度で言外にそう示しているようであった。
「……わかりました。おい、お前らメガラス様の戦闘の邪魔にならぬよう少し下がるぞ！」
「え、いいんですか？」
一人の魔物兵が聞き返すが、魔物将軍はうむ、と神妙に頷いた。
「メガラス様であれば確実に仕留めるであろう。お前たちは邪魔にならぬよう離れた所で見ておけ。俺は前線の指揮に徹する」
「……は、了解しました！」
そのやり取りを最後に魔物将軍と魔物兵らが離れていく。その場には俺とメガラスだけが残った。
……中々マズい状況だな。
さっさと魔物将軍を倒さないといけないのに、目の前には魔人。俺は最初の一撃と疲労で満身創痍。
最悪、兵達は隊長や自分達の判断で撤退することも出来るかもしれないが、俺の方は逃げることも困難。
俺は返答は期待出来ないな、と思いながらも口を開く。
「……見逃してくれたりはしないんだな？」
「……」
それこそ愚問だ。とメガラスは戦闘の意思だけをこちらに見せてきているように感じた。
やるしかない、か……。
「レオンハルトだ」
「……メガラス」
名乗ってはくれるんだな。と、最後に感想を抱いて戦闘は始まった。

戦闘は先程と同じ、メガラスの超高速の突撃から始まった。
「ぐううっ！」
俺は攻撃の瞬間、必死に横に転げるようにしてなんとか回避する。
くそっ、こいつさっきも思ったがあまりにも速すぎる！

見てから回避はほぼ不可能と判断するしかない。回避するには攻撃の意を読んで、その瞬間思いっきり動いて避けるしかない。

「……」

メガラスは俺が攻撃を躱した事に少し驚いたのか、一瞬だけ間を空ける――が直ぐ様再度の突撃。

絶対に俺に向かってくるんなら――！

俺は横っ飛びで回避しながら両手で俺が居た場所に剣を振った。

「……！」

メガラスが今度こそ驚いたのか、慌てたように空に方向転換、飛んで回避する。

空に飛び上がったメガラスはまたしても俺の事を一瞬見つめる。

まさか人間に見切られるとは思わなかったとでも言いたげだ。俺も速さにはそこそこ自信があったんだが、その自信も今日でばっきばきにへし折られた。

それに飛ばれたらどうしようもない。俺の攻撃手段は剣だけ。魔法なんて使えない。

だが、それは相手にも同じことが言える。メガラスがどれだけ速く、空が飛べたとしても魔法が使えない以上、俺にダメージを与えるなら、俺に近づくしか無い。

さて、どうする？　躱すことだけなら出来る――とか考えていたら来る！

俺は攻撃の瞬間を見て、横に飛ぶ。さっきよりも速い気がする。そして剣を振り回し――

俺の身体は宙を舞った。

「っ――ぁ――ッ！」

声にならない叫びが口から漏れ出る。そのくらい瞬間的に感じた衝撃は凄まじかった。

痛みで声が出ない。なんなら考えることすら億劫だ。

だが、今ので一つ分かったことがある。というより当たり前の話だ。

こいつの超高速の突進は直進だけ、という訳ではない。少しだが、曲がることが出来る。
完全に方向転換するならブレーキが入るだろうが、曲がるならそれは必要ない。だが、それだけで俺に攻撃は当たらない。
恐ろしいのはこいつも俺の動きを見てから行動を変えた事だ。あれだけのスピードを出せるならメガラス自身の反応速度もそれ相応であるのが必然。しかも相手は魔人。人間の反応速度なんて本来上回るのが当たり前の筈だ。
メガラスは俺が右か左かどちらかに避けるのを見た瞬間、突撃をその方向へと曲がるようにしたのだ。
結果、右方向に避けた俺を見たメガラスが右に全力で曲がりながら突撃したことでメガラスの突撃に俺は直撃した。
ふざけやがって、スピードが速いだけの魔人じゃない。こいつは戦士だ。
いや、分かっていた筈の事か。俺の知識はメガラスがホルス最速の戦士であることを知っている。それを正しく理解出来なかった事が――いや、それも違うか。この負けは必然だ。
ルドラサウム世界の運命、魔人と人間の覆す事が出来ない絶対的な差、それが埋まることが無い以上、魔人と戦う状況になった時点で俺の負けは確定していた。
「……く……あぁ……」
くそ、こんなとこで俺は終わるのか。ともすればまた転生出来るかもしれない。だが、それは俺じゃない。俺という自覚があるだけの別人だ。
正真正銘、俺の人生の終着点はここでしかない。
「……」
メガラスが気づけば俺の近くまで来ていた。戦士として俺の死を見届けてでもくれるのだろうか。まぁ、文句の一つでも言ってやりたいがもう口はほとんど動かないし、別段悪い気分はしない。存分に見届けてもらおう。
「……！」

あ、なんだ？　突然膝なんかついたりして。そこまで敬意を表する必要はないんだが。
様子のおかしいメガラスをぼーっと眺めていると、俺の顔に影がかかった。
……誰だ？　お迎えか？
そいつは小柄な少女だった。白い髪に紅い瞳、表情は固く俺をじっと見つめている。
確かにこの世界には天使もいるが、天使ってこんな姿じゃ無かった気が……いやまぁ、何でもいい。身体も苦しいしお迎えでも介錯でも早くしてくれ。
「……そう、わかったわ」
少女はどうやらメガラスと何か二、三言会話か何かの確認をしたのか理解したように頷いた。
「ねぇ、貴方……その、私についてきてくれる？」
はぁ？　俺に言ってるんだろうか？
いや、何でもいいから早くしてくれ。天国でも地獄でも好きにしろ。
俺は何とか最後に、首を縦に振る事で答えた。
「そ、そう……約束だからね」
少女は何故か目を逸しながらもじもじと頷くと、やがて決心したようにしゃがみ込むと指先を俺の口元に運んだ。
あ……？　こいつ何して――ぐううッッ!?
――身体が熱い。熱い。熱い。
身体の内側で何かが暴れ回り、肉体を弾き飛ばしそうだ。
先程まで消えかけていた痛みまで復活し、身体のあちこちが壊され、作り変えられるような感覚。
無限にも一瞬にも感じたその熱さが無くなった時。

「――――あ？」

俺はその場で立ち尽くしていた。

俺は――どうなった？

……生きてるのか？

両手を確認、問題なく動く。

周囲を確認――しようとして眼の前にメガラスと先程の少女がいた。

少女は俺を頭から足の先まで一通り眺めると、興味深いといったように頷く。

「どうやら問題ないみたいね。それじゃ行くわよ」

「は、はぁ？　お前何言ってんだ？　ていうかお前、俺に何した？」

気が動転していた所為か俺が普段、集落の人間に対する口調とは違って完全に素のような喋り方で問いかける。

「それは後で教えるからとりあえず行くわよ。メガラス、運んであげて」

「……」

何だか物凄く嫌そうな気配を感じた後、メガラスは俺を手で掴んで持ち上げた。

「なっ、お前、だから何なんだよ!?」

俺はメガラスに宙吊りにされながらも少女に疑問を叫ぶ。

少女はジトっと睨むと、やれやれとでも言いたげに首を振った。

「じゃあ先に一つだけ」

「あ？」

「私の名前はスラル。そして――――魔王よ」

「――――は？」

その少女、スラルと名乗った少女は俺にとんでもない爆弾を落としていった。

魔王スラル

「――貴方は魔人になったのよ」

「……」

俺はのっけから衝撃的な事実を突きつけられていた。

だが、ここに来るまで――メガラスに運ばれて魔軍の陣地に来るまでに殆ど確信していたことではあった。

身体中に力が漲っている。戦士である俺は以前の人間の身体と今の身体のスペックの差をある程度理解していた。視覚や聴覚は鋭敏に、筋力は格段に増し、更には魔法すら使える気がした。

見た目こそ大きく変わらないものの、生物として明らかに引き上げられている。

まぁ、変わった部分もあるのだが。

「それにしても魔人になったら容姿が多少変化するとは聞いていたけど……服装まで変わるのね」

「……そうみたいだな」

スラルが俺の容姿をしげしげと眺めながら興味深そうに言う。

俺の容姿の変化……肉体的な変化は青かった瞳が赤に変わった事くらいだが、服装は以前着ていた白い布製の服ではなく、やたらと黒っぽくなっていた。

前世でいうところの黒のシャツにズボン、靴。それに黒のコートで前を止めた格好をしている。

「ま、格好いいし、問題ないわね」

「……あ、ああ」

いや、かっこ悪いとまでは俺も言わんが……何だこれは魔王の趣味か？

アニメとかＲＰＧの敵キャラってこういう黒を基調にした格好しがちだよな、とかそういう感想を抱いてしまう。

そういや魔人になった時にやたら変な格好をさせられたメインキャラがいたような……誰だっけか。

……思い出せないしいいか。それよりも今の方が大切だ。聞きた

い事は山ほどある。
「それで、何で俺を魔人にした？」
俺の疑問にスラルは首を傾げる。
「……？　貴方が良いって言ったから――」
「いや、そうじゃねぇ！　確かに頷いたけどな！」
それにあの時は、ほとんど瀕死の状態で何が何だかわからない状態であったことに対して少し苦言を呈したい。……いや、ちゃんと聞いてなかった俺も悪いんだろうが、意識は朦朧としていたし、あんな事になるなんて想像出来ないだろ。
俺は心を落ち着けて再度質問をぶつける。
「わざわざ何で俺を魔人にしようと思ったんだ？」
「……貴方の評判を聞いたのよ」
「俺の評判？」
「そう。数多の魔物兵、魔物隊長、魔物将軍を剣一本で単身斬り捨て、魔軍を何度も撃退した人類最強の化け物である剣の王――レオンハルト。貴方の事をね」
……随分と過大な評判をされてるんだな。さすがに人類最強は言い過ぎだろう。
化け物扱いされてるのは間違ってないが。
そして俺は得心する。
「なるほどな。俺を魔軍に引き入れれば集落は簡単に落ちるだろうし、戦力の増強にもなるって考えたのか」
「……そう、ね。そういうことよ」
……？　何だか歯切れが悪いな。間違ってたか？
「言っておくけど抵抗したって無駄よ。魔王は魔人に対して絶対命令権を持つ。私の命令には逆らえないわ」
「……ふん、わざわざ忠告ありがとよ」
知識の上では知っていたが改めて言われると、いや……改めて体験するとやはり全然違うな。
おそらく魔人になった所為だろう、目の前のスラルに対して俺は本能で従うべき存在だと膝を突くべきだと訴えている。

スラルは容姿だけを見ると小柄な少女にしか見えないが、その身体には圧倒的な力があることが分かる。魔人になった俺や先程戦ったメガラスと比べて途方もない強さであることが身にしみて理解出来るのだ。

……だが、どうしてか。彼女は強大な魔王の印象とは全く逆の――非常に弱々しい印象を感じる。

それは見た目が少女だからなのか……それとも――

「……それで、どうするの？　私に忠誠を誓う？」

「――！　ん、ああ……」

思考はスラルの問いかけによって中断させられる。さて、そうだな。

俺は改めて考えてみる。現在の俺はもう魔人。人間ではない。人間の時から化け物扱いされていたが、本当に正真正銘の化け物になってしまったという訳だ。

……集落に戻る、という選択肢は選べないだろう。背後にはメガラスが控えている。魔人になった今の俺ならという気持ちが湧き上がってくるのは魔人化の影響だろうか。アイツを斬ってみたいという欲が脳裏によぎる。

だが、メガラスをどうにかする。どうにか出来たとしても目の前の魔王をどうすることも出来ない以上は無理だ。

仮にその問題が無くなったとしても魔人となった俺を集落の奴らは受け入れてくれるのか？

集落の民は元々俺の事を避けていた。今度はもっと酷くなるだろう。

上辺だけでも俺の事を慕う女中も魔人になった俺には距離を置こうとするかもしれない。

兵達は俺を見てどう思うだろう。魔人になって更に強くなったからといって尊敬されることはないだろう。そこに湧き出る感情はおそらく恐怖であり、以前のように俺を慕ってくれるとは到底思えない。

なら、大人しく魔軍に――魔王の配下になるか？

この状況はそうせざるを得ないのだろうし、この魔王、スラルに仕えるのも別に忌避感はない。問題はその後、そうなったとして俺が取るべき行動は何だ？

……普通に考えれば、人間への攻勢に参加を求められる。

俺の手で、俺の集落を、隣人を殺す。その選択を選ぶのか？　否、選べるのか？

……出来る、筈だ。俺はあいつらに、兵達は別にしても腫れ物扱いを受けてきたんだぞ。

幼少の頃はそうでもなかった。普通に年が近い子供達と遊んで、他愛もない話をしていたんだ。精神が普通の子供よりも成熟していたが、それでも童心に帰って無邪気に行動するのは嫌いではなかった。

大人達からは頭が良いこと、訓練に熱心だったことで期待されていたものだ。もしかしたら将来は王になるかもな、そんな冗談を聞かされて。

だが、それから数年が経ち俺が戦場に出始めた頃、周りの反応が変わった。

その日も、魔物隊長を何体か仕留めることが出来た。魔物兵も沢山斬った。魔物を沢山仕留める程大人や集落の人間は喜んでくれるからだ。だが、集落に戻った俺に待っていたのは遠巻きに俺を見る人々の視線だった。

皆、何かをひそひそと話している。何だろうと近づいて見れば離れていく。仲の良い友人も歯切れの悪い言葉を返し、話を適当に切り上げて去っていく。

一年後、俺は王になっていた。

前王が死に、集落で一番の戦士になっていた俺は長老達に満場一致で次の王に選ばれたという。

だが、俺の周りには誰もいなかった。

戦場で魔物と戦っている間と、女中と遊んでいる間だけが俺をその苦悩から開放した。兵達は戦場では俺を尊敬し、付いてくる。女中はより良い生活を求めて、自ら俺に媚びて誘ってくる。

それは俺に近づくことで利があるからだ。それは俺も否定しない

し、非難することもない。
だが、俺の周りにはそれしかいなかった。
いつしか俺は何のために戦っているのかを苦悩することになった。
この世界の事を知っていたのも仇となった。魔王や魔人が率いる魔軍に、人類が勝てると思うほど俺は楽観的に思えなかった。
いずれ自分は死ぬ。しかし、俺は何のために死ぬのだ？
俺には愛する友も友人も恋人も家族もいない。敢えていうなら戦友である兵達だけ。
そこに俺の利はない。仲間意識も故郷を思う心ももう無くなった筈だ。
――それならば、何故俺はこんなに悩んでいる？
人間を、集落の人々を殺すことを躊躇う必要はないだろう？
それに俺はこの状況を望んでいた筈だ。人間という種からの脱却。魔王や魔人にいつ殺されるかわからないこの世界の人間に生まれた事による怒りと悲しみからの解放。
奪われる者から奪う者へと生まれ変わったのだ。
なら何も悩む必要はない。この世界の理に則り、強大な力を持つ魔人として脆弱極まりない人間を苦しめればいい。

――長い長い思考の末、俺はとうとう答えを得た。意思を持って眼前にいる魔王スラルを見つめる。
そして、膝を着いて恭しく臣下の礼を取った。
「――――魔王スラルに、忠誠を誓います」
「……ん、わかったわ」
スラルは表情は固いまま、一応の納得を見せた。
だが、俺は言葉を更に続ける。
「ですが、一つだけお願いがあります」
「……？　まぁ、いいけど。言ってみて」
「はい、それは――」
一息で、俺はその提案を突きつけた。
「――俺の集落から手を引いてください」

「――――！」
スラルが言葉を失い、その紅い瞳が驚愕で見開かれた。
「……」
背後にいるメガラスも何かの感情を持って見ているようだった。
少しの合間、実際には二秒足らずの時間。スラルは表情を取り戻して疑問を口にした。
「……どうして？　貴方はあの集落で、その……化け物扱いされてきたんでしょ？　ならそんなお願いする理由は――」
「ないですね。仰る通りで」
「意味がわからない……」
スラルは少し困惑したように小さく否定する。
そんな少女の姿を見つめながら俺は口を開いた。
「別に大した理由はない、ただの気まぐれですよ。……ほんの少し、見捨てるのもどうかと思っただけで」
だから、と俺は頭を下げる。
「お願いします魔王様」
「……」
スラルはそんな俺の姿をじっと見つめていたが、やがて俺から視線を切って、
「……分かったわ。貴方の集落から魔軍は撤退させる。これから先、襲う事もしない。……それでいい？」
「っ！　ありがとうございます！」
俺は再び、いや何度も頭を下げた。
スラルが困ったように視線を戸惑わせる。
「そ、そんなに感謝しないでよ……私もただの気まぐれだし。ちょっと席を外すわ」
「あ、ああ……本当にありがとう」
少し小走りで逃げるようにその場から離れるスラルに俺は感謝し続けた。
先程いた所から離れた場所で、スラルは独り言を宙に乗せる。

「気まぐれなら……なんでそんなに必死なのよ、もう……」
その言葉は自分でも驚くほど、喜色の感情を含んでいた。

それから数日後、剣の王レオンハルトがいなくなって浮き足立つ集落に一つの報が伝わる。
――魔軍の撤退。
それも今集落の近くにある魔軍の拠点を引き払い、後方に大きく下がるこの地域からの完全なる撤退だ。
それは終戦を意味しており、その事に集落の人々は大いに沸き、数日に渡る宴会が開かれたという。
――一人の王の存在を無かったことにして。

スラルの宣言

――魔王城

ルドラサウム大陸の東部。そこは魔軍の――魔物達の拠点であった。

魔王城。魔王スラルの居城であり、ＳＳ歴に入ってスラルが魔物達に造らせた城がそれであった。

その中の一室。幾つかの本棚が並べてある書斎が特徴的で、他は椅子や机、ベッド等普通の家具が立ち並ぶ。

そしてそれに隠れるようにして幾つもの魔法トラップが仕掛けられたその部屋が魔王スラルの私室であった。

そこには二人の強大な力を持った存在がいた。

一人は魔人レオンハルト。金色の髪を持つ美丈夫でその力は人間であった頃よりも遥かに増しており、その鋭い双眸を一点に捉えて離さない。

そしてもう一人は当然、この部屋の、この城の主である世界の支配者。魔王スラル。

一見可愛らしい少女であるが、その力は神などを除けばあらゆる生物の頂点に立つ存在である。

そんな彼女も自らの配下である魔人と視線を合わせたまま離さない。

そして魔王は何度めかになる命令を魔人に下そうとしていた。彼女の小さな口がゆっくりと開く。

「――レオンハルト。貴方は……」

「――嫌だ」

「……！」

瞬間、スラルの怒号が響き渡った。

「っっっ！　なんで断るのよ!!!」

魔王の一喝は部屋を揺らす。余波ですら生物を縮こまらせるには十分だ。

しかし、レオンハルトは嫌そうな顔をしたまま短く答えた。

「……いや、なんで俺が魔人筆頭にならなきゃなんねぇんだよ……」

魔王の配下である魔人に栄えある転身をした俺こと魔人レオンハルトは魔王城の魔王様の一室に連れてこられていた。

魔人になることを受け入れ、さてどんな役目というか、どんな働きをさせられるのだろうかとか色々考えてしまう。

といっても俺に出来るのは戦うことくらいだ。部隊の指揮なんかは任せられるかもしれんが、魔軍には魔物将軍という知恵の回る便利な魔物がいるのだからそんなにやることはないだろう。

魔人であることから魔軍での地位は高い。しかしながら、魔人の中では俺は新参者であるわけだ。

下っ端とまではいかないが、魔軍と魔人を繋ぐ中間管理職的な立場になることは明白……というかそれが適当である。

と思っていたのだが、言うに事欠いてこの魔王少女スラルちゃんは俺が考えていたこととは正反対のとんちんかんな事を言いやがった。

魔人筆頭。

言葉を額面通りに受け取るなら、魔人のトップ。最高位の称号だ。

それを俺みたいな木っ端の人間の魔人が就任って、前世なら陰湿ないじめが起きるところだ。

というかここだといじめだけならまだいい。下手しなくても戦いを挑まれる。相手が俺より強けりゃ俺が死ぬ。

それを俺に命令している張本人、スラルは怒ったように俺を見上げる。

「というか何で私の命令に逆らうのよ！　貴方、私に忠誠誓ったでしょ！」

「いや……確かに誓ったけど……なぁ」

「歯切れが悪い！　約束はちゃんと守らないと駄目なんだからね！」

「ああ、うん……まぁ、そうだな」

「だったら頷きなさいよ！　絶対命令権使うわよ！」

「どんな脅しだよ……」

なら普通に絶対命令権使って命令すりゃいいのに、とは言わない。

そんな事を言えばマジで魔人筆頭になってしまう。
「というか大前提なんだが……魔人筆頭って何なんだ？」
「魔人の最高位の称号よ。私が作ったの」
「何でちょっと自慢げなんだ。そういうことじゃねぇ。一体どういう事するんだ？」
　というか魔人筆頭ってスラルが作ったのか。それは初めて知った。
「ん……仕事とかはあんまり、仕切ってもらったりはするかもしれないけど他は何もしなくていいわ」
　それに、と一旦区切ってスラルは続ける。
「魔人四天王と違って別にそこまで強くなくてもいいしね」
「何だそりゃ。じゃあ誰でもいいって事か？」
　記憶だと魔人の中でも強い奴が魔人筆頭になっていた憶えがあるんだが、そうじゃないのか？
「そういう訳じゃなくて、えっと、魔王にとってお気に……いや、贔屓。……でもなくて」
　スラルは俺の言葉に少し言葉を選んでいるようだった。
「だから……私が作った――」
　そこでスラルはようやく我が意を得たのか声を大にした。
「そう！　貴方は私が初めて作った魔人なのよ！　だから魔人筆頭になるべきなの！」
「……」
　何だそれはつまり。
　自分の作った魔人は近くに置いておきたいってこと、か？
　思い出してみるが、確か魔人筆頭であったのは……ガイ、と……ホーネットだったか？
　それらの共通点。サンプルが少なすぎてなんとも言えないが、その当時の魔王が作った魔人というのは共通してるだろう。
　だが、それだけなら他にも沢山いるだろうし、条件はそうじゃない。
　いや、違うな。多分、これはもっとシンプルな問題だ。魔人筆頭を決めるのは魔王。ならそれに選ばれるのは――
　……最も魔王に気に入られた者、か。

……いや、でもなぁ。
何だかやぶさかでもない気がしてきたが、それでもデメリットを無視することは出来ない。
せめてもうちょっとどうにかならないものか。
「なぁ、せめてもうちょっとこう……どうにかならないか？」
「？　どうにかって？」
「いきなり最高位の称号なんてもらっても角が立つだろ？　最初はちょっと下で周りに認められるまで様子を見た方がいいんじゃないか？」
「……んー、そうね……」
スラルは目を瞑って考え込みはじめた。
そんな時だ。部屋のドアがノックされたのは。
「魔王様。そろそろお時間ですが……」
おそらく魔物隊長か魔物将軍であろうその声にスラルは反応した。
「……わかったわ。レオンハルト、行くわよ」
「行くって、何か用事でもあるのか？」
スラルは考え込んだ状態のまま、片手間のように俺の質問に答えた。
「……貴方のお披露目よ」

魔王城の謁見の間。
魔王が座る玉座があるその一室には、既に魔軍の重要人物が集められていた。
魔軍の幹部である数体の魔物将軍。それに追随する数体の魔物隊長。
そして彼らより少し離れた視線の先には――魔人。
数こそ少ないものの魔王を除けば大陸の絶対強者である彼らには魔物将軍とはいえ迂闊には近づかない。
遠巻きに畏怖と敬意を込めた視線を送るだけだ。
その中でも特に視線を集めているのは二名の魔人。
「……」

魔人メガラス。
この大陸にやってきた宇宙人ホルスの魔人であるメガラス。
無口で何を考えているかは誰にもわからない。
しかし、前魔王アベルの時代より戦ってきた最速の戦士は魔軍の中でも特に畏怖されている。
だが、そんなメガラスよりも更に、魔王に次いでの崇拝を集める存在が一人。
「――――」
周囲に与える威圧感はその実力だけではない。彼女の圧倒的な美貌も要因の一つだろう。
白い肌に、見ているだけで滑らかさを感じる長く青白い髪。
その体つきは女性としての魅力が詰まっており、端正な顔立ちが見る者に息を漏らさせる。
女性としての黄金率、一つの正解形がそこにいた。
魔人カミーラ。
第二世代メインプレイヤー、ドラゴンの生ける王冠。プラチナドラゴンの魔人である。
その美貌でラストウォーの切っ掛けにもなった魔人は退屈そうに虚空を見ていた。
そしてもう一体。そんなカミーラをチラチラ見ながら、部屋の隅で隠れるようにしている魔人がいた。
「カカカミーラさん、相変わらず綺麗だなぁ……眩しすぎるぜ……」
彼こそが初代魔王ククルククルに作られた最古の魔人。
魔人ケイブリス。
リスの魔人であり、魔人になって二千年以上経った今も魔人としての実力は低く、ともすれば魔物将軍や魔物隊長にすら負ける最弱の魔人である。
他にも数体の魔人がいるも、彼らは皆魔王が現れるのを待ちながら、遠巻きにカミーラに視線を向けたりして手持ち無沙汰そうにしていた。
ケイブリスを気にかける者はいない。それはこの場に限った話で

もなく、大体いつもそうだ。
気にかけられるのは仲間である筈の魔人からいじめられる時くらいである。
今更そんなことを気にした様子もなくケイブリスは独り言を呟いた。
「ていうか遅えな魔王様は……」
それはこの場にいる者の代弁でもあった。いちいちそんな事を口にする者がいないだけで、この場にいる者の内心は魔王の遅れと魔王が連れてくる魔人の存在で占められていた。
新しい魔人の紹介。魔王スラルが皆を集めた理由がそれだ。
魔物将軍らはともかく魔人達はそんなことでいちいち全員集めなくてもと思わないでもなかったが、魔王の命令には逆らえない。こんな事で機嫌を悪くして殺されでもしたら最悪だ。
それで欠席は一人もおらず、全員時間どおりに集まっている訳だが、興味が無いわけではないため、新しい魔人の存在に思考を巡らせる。
集合がかかるまでの間、幾つかの情報が魔軍内には流れていた。
曰く、元は人間で剣の王と呼ばれていた魔人である。
魔人達は何となく聞いたことがあるという程度の認識だったが、魔物将軍達はその事実に恐れを抱いた。
魔物将軍はその指揮能力もさることながら、強さも魔物の中で上位であるエリートである。
そんな彼らを何体も単身で倒してきた剣の王。そんなやつが魔人になる。
だが、恐れと同時に喜びを感じたのも確かだ。それだけ強い奴が魔人に、味方になったのならば頼もしい。
「人間の魔人なぁ……つってもどうせ俺様より強いんだろうが」
その魔人が弱いことを望んでいるケイブリスはしかし期待出来ないと息を吐いた。
そもそも魔王スラルが人間だ。ククルククルやアベルより弱いと言っても魔王は魔王。

人間の一個体が脆弱でも魔人になったのなら別。ケイブリスはその事実に暗然たる感情を抱く。
さて、ならばどうやって媚びようか。そんなことをケイブリスが考えた時。
「――!」「――!」「――!」
居並ぶ魔物隊長、魔物将軍、魔人がそれを感じ取った。
この場で最も強いであろうカミーラ。それを凌駕する絶対的な圧。
「……待たせたわね」
魔王スラル。
ゆっくりと部屋に入ってきた彼女に彼らは膝を突き、臣下の礼を取る。
そして礼を取りながら、ちらりと皆が盗み見る。
魔王の背後から付いてくる人間。
だが、魔に属する彼らは直ぐに理解した。人間の姿を取っていても隠しきれない存在感。
――あれが新しい魔人か。
皆がそれを認識した。
金色の髪に紅い瞳。黒を基調とした服を着た青年。
幾つもの視線を受けながら二人はゆっくりと玉座に近づく。
そしてスラルが玉座に掛ける。
「楽にして」
短いその言葉で居並ぶ面々は立ち上がる。
「皆に紹介するわ。彼が――」
そこでスラルは一度言葉を区切り、横目で隣にいる魔人を見る。
そしてはっきりとした口調で宣言した。
「魔人レオンハルト。新しい魔人四天王」
「――!?」「――!?」「――!!???」
魔王の言葉に謁見の間が騒がしくなる。いや、厳密には誰も言葉は発していない。
彼らの内に渦巻く感情は驚愕。その言葉に尽きるだろう。一番驚いているのが、件の魔人であることには誰も気が付かなかったが。

しかし、彼らの驚きはそれだけでは済まされなかった。
「そして……新たに魔軍参謀という職に彼を付けるわ」
その言葉に皆が絶句する中、今度こそ口を噤ませることが出来なかった者がいた。
「――お、お待ち下さい！」

魔人ギリウム

――おい、この馬鹿何言ってやがんだッ!?

魔王スラルの横に控えるように立ち、能面のような表情を貫くレオンハルトは、内心パニックになっていた。

眼前では魔人――だろうか。緑色の長髪と角を持つ男が戸惑いがちに声を上げた所だった。

いやまぁ、そんな反応にもなるだろうよ。お前の反応は正解だ。なにせ当事者である俺が一番理解不能だからな。

「……ギリウムね。どうしたの？」

どうやらその魔人はギリウムと言うらしい。俺の知識にはいない魔人だな。

そのギリウムはスラルに問いかけられ、自分がした事を少し後悔しているようだったが、やがて意を決したように話し始めた。

「……はい、魔王様！　恐れながら申し上げますと魔軍参謀、というのはともかく。その魔人を魔人四天王にするのは如何なものかと思います！」

その言葉に周りがざわつきはじめる。こいつ言いやがったって感じの雰囲気だな。魔王に意見するのも一苦労って所か。

……そういや、俺さっきめちゃくちゃ突っぱねたなぁ。何か許してくれそうな雰囲気をスラルから感じたというか口調に関しては特に何も言ってなかったからいいんだろうけど。

さて、肝心の魔王様は――

「――それは何で？　理由は？」

物凄く苛立ってるようだった。口調こそ先程までと変わらないが隠しきれてない苛立ちが滲み出ている。

何でそんなにキレ気味なんだ……というかこいつ普段はこんな感じなのか？

「な、何でと言われましても……今まで魔人四天王の席は殆ど空席であったのに何故今その席を埋めるのかと。……そ、それに！　カミーラ様と同じ地位を戴くにその男は相応しくないかと！」

……おいおい可愛そうに。冷や汗かいてめちゃくちゃ怖がってるじゃねぇか。
でもちゃんと理由を言い切ったのは凄いな。肝心の理由がちょっとあれなんだが。どう考えても前半の理由より後半の理由が本音って感じだ。魔軍参謀とかいう訳わかんない役職についても否定してくんねぇかな。
「そう、カミーラはどう思ってるの」
スラルの言葉に皆の視線がカミーラに集まる。って、うおっ！　めちゃくちゃ美人！
確かにこの美貌は男なら振り向かざるを得ない。カミーラを巡って過去にドラゴンが戦争したってのも納得の美しさだ。
とんでもなくプライド高そうで俺にはどうも敷居が高そうだが。
「……」
さて、そんなカミーラ。魔王を含めた部屋中の視線を集めていながら無言を貫いている。予想以上にとっつきにくそうな女だな。
ギリウムもおろおろしている。いかん、俺も沈黙が苦しくなってきた。いっそ、俺から辞退してやろうか。
というかカミーラちょっと俺の事めっちゃ見てないか？　俺の事品定めでもしてんのか、いやそれなら早く言ってくれ。
カミーラが相応しくないとでもいえば直ぐにこの話もなくなるだろうし。
「か、カミーラ様……」
「――異論はない」
「……は？」
「魔王様のお好きに」
カミーラは端的に意思を語るとこれ以上言うことはないとばかりに目を閉じる。いや、異論あるだろぉ！
おい見ろ！　ギリウム君なんかぐぬぬって唇噛みながら悔しそうに、それでいて俺の事を後で絞めるっつう意思をバリバリ送ってきてんだよ！
何がお好きに、だ。なら俺が本当に魔人四天王になったらテメェの

乳めちゃくちゃ揉みしだいてやるからな！　多分その後、直ぐに殺されるけど！

ていうか……くっそ。あのギリウムって奴の敵意がマジで鬱陶しい。魔人の殺意を直接ぶつけられるのは身体が重くなり、正直快適とは言い難い。

というかこいつもしかしてドラゴンの魔人か？　耳の所にある羽っぽい部分と角っぽいものを見る限り――後、カミーラに執着してるらしきところがどうにもそれっぽい。

おいおいこのままじゃ……俺が嫌な予感を覚えていると、スラルは話を纏めようと声を出した。

「ん、なら構わないわね？」

「は、は……。い、いや、ならば決闘を！　決闘の許可を下さい！」

「う、うん？　どういう事？」

スラルが問い返す中、俺はげっ、と声が出そうになる。

いやお前まさか――

「はい！　魔人四天王は魔人の中でもかなりの強者でなければなりません！　なので私とその男で魔人四天王の座をかけて決闘させてください！」

言いやがったコイツ！　決闘なんて言いやがって、ライト〇ベル最初の巻に出てくるかませキャラじゃねぇんだぞ！　問題が起こったからって何でもかんでも決闘で解決出来ると思うなよ！

しかもこの野郎、言うに事欠いてちゃっかり自分が魔人四天王になろうとしてやがる。その点は、他の魔人や魔物将軍も俺と似た感想を得たのか、じろりとギリウムに非難の視線を浴びせる。

しかしギリウムはそれに気づいていないのか、無視するように言葉を続けた。

「そうでなくては納得出来ません！　魔王様！　何卒、私に決闘の許可を！」

「……」

スラルはギリウムの嘆願を聞き、ちらりと俺の方を見る。俺と目が合う。おい、わかってるな。断れよ。こ・と・わ・れ。

俺の意思が伝わったのかスラルは少し迷ったように視線を彷徨わせた後、俺の方を再度見て、コクリと頷く。なになに、わ・か・っ・た。よしよしわかってくれたならいいんだ。さすがは魔王様だ。

そしてスラルはギリウムに返答した。

「……わかった、許可します」

「――――!?」

「――――！　ははっ！　感謝致します！」

俺が驚愕する中、ギリウムはスラルの許可を貰う事が出来て平服する。

そんなスラルは絶句する俺を見上げて小さく苦笑。

そして俺にだけに聞こえる声で。

「……もう、私は止めたからね」

……んん？　止めた？

「でも、自分でやるって言ったからには勝ってよ。じゃないと怒るからね」

……ぜっっっっっっんぜん1ミリも伝わってねぇ!!!!

いつの間にか、俺の方が決闘を望んだように曲解され俺はスラルの、やれやれしょうがないわね、とでも言いたげな生暖かい目に心底ビンタしてやりたくなった。

「……」

魔人ギリウムと魔人レオンハルトによる決闘のお触れが魔王スラルより出された。

そのため、謁見の間に集まっていた魔軍の重鎮達は魔王城の中庭に集まっていた。

そんな中、魔人レオンハルトと唯一人間の時に面識があり、戦ったメガラスはこの決闘の行方を思考する。

……果たしてどちらが勝つか。

メガラスは両者の事を知っている。

レオンハルトの方は記憶にも新しい。まだ人間だった状態での戦いだ。
魔王スラルの命令で彼に接触し、戦いを始めた。
人間の身で魔物を歯牙にもかけず倒していた彼の強さは実際に戦ったメガラスをも驚かせた。
初撃で彼は満身創痍だった。にも関わらず自分の突撃を、もっとも自信のある超高速の突撃を躱し、なおかつ反撃までしてみせた。
通常では、反応することも出来ないだろう。反応出来てもあの状態で動けるものか？
願わくば万全の状態で戦ってみたかった。
そんな彼が魔人となり生物としての格を引き上げられ、どれほど強くなったのか。種族は違えどホルスの戦士であるメガラスにとって彼は同じ戦士である。故に興味がある。
もしかすると魔王スラルへと自らの故郷と引き換えに出した部分を重ね合わせているのかもしれない。少なくとも悪い奴ではないだろう。
だがそれでも、と同時にメガラスは思う。
果たして勝てるのだろうか。
自分と同じ時代を戦った――ドラゴンの魔人ギリウムに。

魔人ギリウムは決闘に向けて集中しながら、内心は荒れていた。
魔人ギリウム。彼は魔王アベルの時代、ドラゴン王マギーホアとの戦い、ラストウォーに備えてアベルが作ったＧＲドラゴンの魔人だ。
アベルはドラゴン出身の魔王であり、誇り高いドラゴンらしからぬ性格であったが、魔人を作る際に優先したのはやはり同じドラゴン族だった。何体かのドラゴンの魔人が作られたが、生ける王冠であったカミーラを除いてほぼ全員ドラゴン王マギーホアに殺された。
そんな中、唯一の生き残りがギリウム。
彼はアベルについて来たドラゴンの中では異端。どちらかと言うと誇り高い――ドラゴンらしい性格の個体だった。
何故、彼が卑怯者と噂されるアベルに付いたのか。それは端的に夢

が、野心があったからだ。
ドラゴン族の生ける王冠カミーラ。彼は他の多くのドラゴン族の例に漏れず、カミーラに懸想していた。当然、何度もマギーホアに決闘を挑んだ。しかし、その実力差は火を見るより明らか、幾つもの敗北を重ねていった。
マギーホアはあまりにも強すぎる。他の四大聖竜といった面々もマギーホアにはまるで刃が立たなかった。
そんな中、唯一マギーホアに匹敵する存在が現れたのだ。魔王ククルククルに偶然とどめを刺して自らが魔王になったアベルだ。
狡猾で臆病であったアベルだが、実力だけはマギーホアに届く程に強い。ともすれば彼ならマギーホアを倒すことが出来るのではないか？
ギリウムにとって目の上のたんこぶであるマギーホア。もし、彼がいなくなれば――。
奴さえいなければ、四大聖竜くらいなら自分でも決闘に勝つことが出来るかもしれない。そうして彼は魔王アベルに付いて魔人となった。
だが、彼は一度絶望した。魔人となってラストウォーを戦い理解した。
魔王アベルはドラゴン王マギーホアに敵わない。そして自身も四大聖竜といったドラゴンのお歴々には敵わなかった。
そんな事実に絶望して数十年。アベルはマギーホアに敗北した。
多くの魔人が殺されたが、ギリウムが早めにアベルに見切りをつけて逃走し、隠れ潜んだのでなんとか助かった。
カミーラも再びマギーホアの物になり、ギリウムはひっそりと息を潜めるように過ごした。
だが、そんなある日。とんでもない事件が起こった。
全てのドラゴンが羽の生えた生き物に殺されていった。
天使と呼ばれる奴らはドラゴン族を狩り続け、滅亡させたのである。ギリウムは怖れた。自分もああはなりたくない。
しかし、ギリウムは狩られなかった。魔人であった為である。その

日、彼は初めてアベルに感謝した。
そして更に数百年の時が流れる。
最早、ドラゴン族はその殆どが死に絶え、残っている者は数える程。ギリウムは気ままに暮らしていた。
そしてギリウムは転換の日を迎える。アコンカの花が咲き、新たな魔王を伝える。
――ＳＳ期。魔王スラルと人間の時代の到来だ。
ギリウムは本能的に魔王への恭順を誓った。人間という弱い種族とはいえ魔王は魔王。従うことに否応もない。
そしてギリウムは新しい魔王の元に参じた。そこで愛しの存在と再会を果たしたのだ。
魔人カミーラ。ドラゴン族の生ける王冠。長年の想い人だ。
彼女を見た時、ギリウムはある事に気づく。
今、彼女は誰の物だ？　マギーホアはいない。アベルもいない。四大聖竜もいない。　ドラゴン族は殆ど誰も残っていない。
残っているのは誰だ？
――――自分だ。
ドラゴン族の掟に従うなら、彼女を手にする資格があるのは自分なのだ！
そう思い、ギリウムは想い人であるカミーラに思いの丈をぶつけた。
だが、カミーラは全く靡かなかった。力づくも不可能だ。カミーラは自分よりも強かった。
地道に口説くしかないのか……？　そう思ったが悲嘆することもない。
何故ならドラゴンは、候補は自分だけしかいないから。どれだけかかっても最終的には自分の物になる。そう考えれば中々に滾る。その日を待ち遠しく待つのみだ。
だが、そんな折に邪魔者が現れた。
魔人レオンハルト。魔王スラルが連れてきた人間の、剣の王と呼ばれた魔人らしい。

それだけならばどうだっていい。なんなら別に同じ魔人として仲良くしてやっても構わない。
だが、魔人四天王になる。そんなのは到底許容出来ない。
魔人四天王の席は未だカミーラが座するのみ。あのメガラスも、他の魔人もスラルは魔人四天王を冠する事を認めなかった。
ギリウムは魔人四天王になればカミーラが振り向いてくれるのではと考えた。ドラゴン族として強い雄に雌は靡くものである。
それをあんな人間の新参者にくれてたまるか。あのカミーラと同じ席を。
――カミーラは私の物だ。
嫉妬の炎を燃やして、ギリウムは決闘の相手であるレオンハルトを見つめた。

魔剣

魔人レオンハルトは魔王城の中庭で、決闘の相手であるギリウムの強い視線を受けていた。
両者の戦いを見ようと魔軍の幹部達は離れた場所で二人の周囲を囲むようにしており、決闘の時を今か今かと待ち続けている。
「……」
「……」
お互いに何も語ることもなく、集中しているようだ。二人の魔人が戦闘状態に入り、周囲の圧がどんどん増している。
「……これは、中々に効きますね」
「ああ……滅多にない魔人同士の戦いだ。目に焼き付けておかねば」
集まった魔物隊長や魔物将軍は魔人が気を高めているのを感じ取り、ごくりと喉を鳴らす。
「しかし、どちらが勝つのでしょうか。将軍はどう思います？」
とある魔物隊長が自分の上官である魔物将軍に問いかける。この場にいる誰もがそれぞれ考えている部分であろう。
魔物将軍は少し考えてから魔物隊長に返答した。
「……さすがにギリウム様、だろうな。ドラゴンと人間では同じ魔人でも地力が違う」
「……ですよね」
魔物隊長も魔物将軍と同じ考えだったようで、同意を返す。魔物将軍は付け加えるなら、と話を続けた。
「それに経験の差もあるだろう。魔人になって長いギリウム様とあの新しい魔人――レオンハルト様とでは戦ってきた年月が違いすぎる」
ギリウムはドラゴンの時代――魔王ククルククルとの戦いからラストウォーを経（へ）て現在に至るまでとかなりの数の戦いを経験してきている。
それに対してレオンハルトの歳は二十代といった所。剣の王と呼ばれる程の実力を持っていたとしても戦ってきたのは精々十数年。

この経験の差は簡単に埋められるものではないし、彼はドラゴンや魔人と戦った経験はないだろう。
「なら、ギリウム様の圧勝ですかね」
「いや、そうとも限らんぞ」
「え？　どういう事です？」
魔物隊長の言葉を魔物将軍は否定してみせる。彼がそう考えるのには理由があった。
「レオンハルト様は長年空席だった魔人四天王にあの魔王様が推す程のお方だ。ならばそれ相応の実力を持っているのだろう。それに――」
魔物将軍は視線をレオンハルトに向ける。隣の魔物隊長も同じように顔を向けた。
視線の先にはレオンハルト。そして彼の背に背負われている物。
身の丈を越し、刀身が蒼く輝いている長剣を彼らは見た。
「あの剣。先程の謁見の間ではあれは無かった。おそらくだが魔王様に下賜されたものだろう」
「確かに……何だか吸い込まれそうな、何処か貫禄を感じる剣ですね」
「ああ。レオンハルト様は剣の王と呼ばれる程の剣の達人だと聞く。それに加えて魔王様に太鼓判を押された実力を裏付けるかのように賜ったあの剣。ギリウム様相手でも善戦はするのではないか、というのが俺の予想だ」
魔物将軍の予想に魔物隊長は納得したように頷く。
「なるほど、なら凄い戦いが見れそうですね。早く始まりませんかね？」
「うむ。……それに決闘が終われば勝敗に関わらず魔王様に伺わねばならない事もあるしな」
「伺う、ですか？」
「仰っていただろう。レオンハルト様を魔軍参謀の職に就けると」
「ああ、あの」
魔軍参謀。
言葉の響きから察するに魔物将軍の仕事に関係してくるであろう

ことは想像がつく。
「我々も無関係じゃない。おそらくは新しい魔軍の要職。詳しい内容はまだわからないが、我々の身近な上司になるかもしれんし、その事についての方がよっぽど重要だ」
「……なら、今のうちに見れたのはラッキーですね」
「ああ、複雑ではあるが魔王様が決めたこと。どのようなお方なのかもこの戦いで見定める事も出来る」
そう言って彼らは再び、決闘を行わんとする二人に集中する。
他の居並ぶ面々も意見は違えど、予想や話を交えていた。

――そんな視線を受ける魔人レオンハルトは。
……やっぱやるしかねぇんだよな……。
背中に背負った剣を感じながら内心、忸怩たる思いを抱いていた。

――それはレオンハルトが魔王城中庭に移動する前の事。
魔王スラルが決闘のお触れを出し、二人して謁見の間から先に離れ――そして二人は一度、スラルの私室に戻ってきていた。
部屋の中では主従関係であるはずのレオンハルトと魔王スラルがお互いに怒号を相手に浴びせていた。
「なんで決闘なんて許可しやがった！　いや、そもそも魔人四天王とか魔軍参謀とか変に地位上げやがってよ！　これなら魔人筆頭の方がマシじゃねぇか！」
「何よ！　貴方が良いって言うから許可したんでしょ！　それに貴方が魔人筆頭は嫌だって言うからその通りにちょっと下の地位に就けたのよ！　何が不満なのよ！」
「んだと――」
先程からお互いにこの言い分の繰り返しである。
俺は譲らないしスラルも譲らない。話は完全に平行線だ。
「もう！　だから勝てばいいでしょ！　勝ったら何も問題なくなるじゃない！　違う!?」

「それが難しいから頭抱えてんだろうがっ！」
そう、問題はそこだ。俺がめちゃくちゃ――それこそあの場にいるどの魔人よりも強ければ別にこんなの大した問題じゃない。
やっかみなんて起きないだろうし、決闘なんて相手をたたっ斬れば終いだ。ある程度、傍若に振る舞っても誰も何も言わないだろう。
魔人四天王だの魔軍参謀だのそれらの要職はスラルを説き伏せるか、無理でも別に構わない。一応、俺はこの魔王スラルに忠誠を誓ったんだ。散々ごねている身では説得力も無いかもしれないがこいつが例えば人間を虐殺しろとか水汲みしてこいとか、どんな重い命令も軽い命令も聞くつもりだ。
そう考えているのに俺がスラルの命令に駄々をこねるのは自分の進退や命に関わるからだろうか。
……いや、違う。スラルとの関係、雰囲気に呑まれているんだ。
まだ短い付き合いだが、こいつは俺に何かと良くしようとしてくれているのがわかる。絶対命令権なんかも使わない。魔王と魔人という関係には相応しくない雰囲気をスラルは作ろうとするのだ。
そこに俺が考えていた関係と少なからずギャップ――乖離があったのは事実だ。俺はもっとあれをしろ、これをしろ、と否応もない絶対的な主従関係を想像していた。そんな妄想は覆された。
つまり俺は、スラルに甘えているのだ。予想と違って随分と優しいもんだからそれに引っ張られて素で反抗してしまう。
そうやって自分を見つめ直すと怒りが萎んでいくのがわかった。
こいつがそういった地で話せるような関係をたとえ望んでいたとしても、俺は最終的に折れるべきだ。反抗して嫌々でもその命令を遂行する。でないと忠誠を誓った身として情けない。
俺は一度、溜息を吐いて気持ちを落ち着けると口を開いた。
「……魔人四天王だのは置いておいても決闘で勝つのはやっぱ厳しいと思うぞ。俺は剣士だ。なのに肝心の剣がないんじゃな」
そう。今の俺には剣がない。以前に使っていた銀の装飾が付いた直剣はメガラスとの戦いの時の一撃で何処かに飛んでいってしまった。

……あれ気に入ってたんだがなぁ。集落でも数少ない職人にわざわざ造らせた一品で、切れ味も悪くなかった。
「あ、それなら大丈夫よ」
「あ？」
「ちょっと待ってて。良い物上げるから」
スラルはそう言って部屋の隅にあったタンスからある物を取り出して見せた。
「ほら、凄いでしょ？」
「――これは……」
スラルが抱えるようにして持ってきたそれは――剣、だった。
綺麗に真っ直ぐ伸びた刀身が蒼く輝いている。
だが、俺が目を見張ったのはそこではない。
――長い。
その蒼い剣はスラルの小柄な身長よりも大きく、ともすれば身長が１８０を超える俺の身の丈をも超える程だ。
「――魔剣オル＝フェイル。古いダンジョンで見つけたの。ほら、持ってみて」
「魔剣、ね……」
俺はスラルから渡された魔剣オル＝フェイルを手に取る。長さの割には軽いな。
それに長すぎて使いにくいだろうと思っていたその剣は持った途端、予想に反して驚くほど手に馴染んだ。
刃先が曲線を描いていて何だか前世でいう大太刀みたいだが……。
俺は手に持った剣を何気なく軽く動かしてみる。
「あ、気をつけて。それ切れ味が――」
「――ん？」
思わず剣の先が軽く机の足にぶつかる。
だが、俺は机に剣が当たったと思わず、それを見て気づいた。
何故なら――
「あ、斬れてる」
机の足を殆ど抵抗なく通過した刃はするりと机の足の先を斬り落

としていたからだ。
　そしてスラルが一拍置いて、叫んだ。
「あ、斬れてる。じゃないわよ馬鹿！」
「い、いや、すまん」
「その剣、斬れ味鋭すぎて刃を立てて置いたりするだけで斬れる時もあるんだから気をつけなさい！」
　足が一本、床から離れて不安定になった机を指差して怒るスラル。
　俺はあまりにも鋭すぎる魔剣オル＝フェイルを見ながら恐々とする。
「なんつう物騒な剣だ……下手したら俺が斬れそうだ。最早凶器だな」
「……貴方、剣の達人でしょ。剣の王だし、問題ないわよね？」
「うーむ、いや、まぁ確かに自分でもびっくりするくらい剣がしっくりくるんだが……」
　というか何だこの感覚は。確かに剣を持ってる筈なんだが、俺が知ってる剣と違う。
　魔剣だからだろうか――剣ってのはこんなにも手に馴染むものだったか？
　どうにも不思議な感覚が消えない。以前はこんなこと無かったんだが。

「何にしてもこれで剣の問題は解決。これなら勝てるでしょ？」
「――！　ああ、そうかもな」
　スラルの期待した声で我に返る。
　確かにこれほどの剣ならどうにかなるかもしれない。相手が硬くてもこの剣ならそれを上回ってくれそうだ。
「良かった、それなら行くわよ。剣は背中にでも背負って。確か魔法でくっつく筈だから」
「……ああ」
　言われて俺はスラルから貰った新しい剣、魔剣オル＝フェイルを背中に背負ってみる。ゆっくり手を離すと――落ちない。確かに魔法

か何かでくっついているようだ。
……まぁ、こんな物くれる程期待してるなら頑張らないとな。
そうして俺はスラルと共に決闘の場へと赴いた。

――だが、しかし。本当に勝てるかどうかは別問題だ。
レオンハルトは中庭にてギリウムと相対してそう感じていた。
……いや、あいつ、俺が魔人になったからか実力差が何となくわかるがかなり強くねぇか？　俺との実力が結構離れてるような気が……。
この世界ではＬＶ。それがある程度の強さの指標になる。
自慢じゃないが俺のレベルは結構高い。確か６８だ。この数字は客観的に見てもかなり上の方だと思う。
しかし、ＬＶが同じでも強さが全く同じにはならない。
それは生物としての特性や個体としての特徴で大きく前後するからだ。
力の強い奴と足の速い奴では同じレベルでもその差ははっきりと分かれるだろう。その点俺は人間であった頃より強くなったと確実にいえる。魔人になったからだ。
生物としての格を引き上げられた俺はレベルは人間の頃と変わっていなくても膂力も体力も俊敏性も跳ね上がっているだろう。
魔人は魔人というだけで他の生物よりも強いのだ。
相手が人間であれば同じレベルでもその差で勝利することが出来るだろう。だが問題は、魔人同士であること。
それも魔人になる前の種族差だ。
俺より少し離れた場所で決闘に向けて戦意を高めているであろうギリウム。
来る途中にスラルに聞いたがやはりドラゴンの魔人であるという。
ドラゴン。それは人間より遥かに強大な生物だ。
その身体能力、地力の差は歴然であり、仮に奴が俺と同じレベルだったとしても敵わないのだ。
それに同じレベルの筈もない。何百年と戦ってきた経験値は確実

に俺よりも上なのだ。
……さて、どうしよう。勝つ気ではやるつもりだが客観的には勝算は絶望的だな。
一応技能ＬＶという概念もあるが、これはこの世界に生きる個体がそれぞれ持っている才能を数値化したものだ。
だが、自分や他人にどんな技能ＬＶがあるかは基本的に調べられない。何でも特殊な魔法などで調べられるらしいのだが……。
だが、俺の場合は予備知識で何となく予想出来る。多分、剣戦闘ＬＶ２ってのが妥当なところだろう。これだけでも十分恵まれている。
だが、これだけで差を埋めることはおそらく出来まい。
明確に勝っていそうなのは剣技とスラルから貰った魔剣――つまり装備の差くらいじゃないだろうか。
頭の中で勝算を弾き出そうとしていると、周囲がざわつきはじめた。
何だ、と思ったが見るとスラルが中央に進み出てきていた。その後ろには魔物隊長。
「――そろそろ始めるわ。魔物隊長」
「はっ！」
スラルの呼びかけに魔物隊長がスラルの前に進み出る。
「僭越ながら私が決闘の開始を宣言させていただきます！」
宣言っていうかそこは審判とか立会人って言うんじゃねぇのか？
少し訝しげに感じるが、その理由は直ぐにわかった。
「魔人の方々の決闘ということでルールを設ける無粋は致しません。両者、存分に納得のいくまで戦ってくださいとの事です！」
「……それは」
思わず声を漏らす。
いやだって、それはつまりあれだろ？　事実上のデスマッチって事だろ？
……はぁぁぁぁ!?　ふざけんじゃねぇっ!!!
てっきり気絶するまでとかまいったと言ったら負けとかルールを設けてやると思ってた部分が――いや、そりゃあそれを守る程相手は

お優しくないだろうが、だからと言ってデスマッチなんかするか？
スラルは何考えてんだ？　というかこれだと俺が勝ったとしても相手を殺すことになるがいいのか？
横目でスラルに視線を送るも、スラルは視線に答えずだんまりを決め込むだけだ。
「……では、お二方。準備はよろしいですか？」
「いつでも構いません」
「……！　ああ！」
いや、待った。いきなり声掛けられて返事しちまった。
魔物隊長は頷くと手を振り上げた。え、もう始めんのか？
「――では……始めッ!!!」
「――――！」
「――――ッ！」
俺が開始の宣言を受け地面を思い切り蹴ると、同時にギリウムが襲いかかってきた。

決闘の意味

魔人同士の激突。
常人では視認できない程の速度を持ってぶつかり合い、周囲には衝撃波が広がる。
それを完全に視認できるのは魔王と魔人のみ。他の者達は衝撃に耐えながら戦闘の把握に必死であった。
「ぎゃあああああっ!?」
一部、衝撃波に吹き飛ばされるリスの魔人がいたりしたが魔人にとってこの程度の戦闘の余波は問題ない。
彼らの目には少なくない驚きの色が混じっていた。魔人ギリウムは弱い魔人ではない。強さでいうなら上から数えた方が早い魔人だ。
彼の武器である鋭い爪。レオンハルトの身体に突き立てようと振るわれた爪をレオンハルトはその長剣で弾いたのだ。
だが、その弾いた本人はその事実に驚愕していた。
――おいおいこれで斬れないってどんな爪してんだ!?
魔剣オル＝フェイル。
先程その斬れ味の一端を垣間見たレオンハルトはギリウムの爪の硬さにげんなりしてしまっていた。
……おいおいこれで斬れない爪ってお前爪長くなったらどうするつもりだ？　爪切りすらろくに出来ねぇじゃねぇかよ。
ドラゴンってのは皆こんなふざけた種族なのか？　さすがにこんなことが出来るのは魔人になったこいつとカミーラくらいだと信じたいが。
それに打ち合った剣から衝撃が伝わりめちゃくちゃ手が痺れる。
それは打ち合って一瞬でわかった幾つかの事実の結果。
即ち力負けだ。
予想していたことだが、俺の膂力が上がっていても相手の力の方が何倍も上。攻撃の瞬間、咄嗟に背後に下がることで衝撃を逃したがそれでも足裏が地面を引きずられるようにして押された。
クリーンヒットを貰えばアウトか……頭の中で情報を書き加える。

爪の硬さから察するに、耐久力も相応に高いだろう。
唯一の救いは速さだろうか。僅かに俺の方が速い。
今も左から振るわれた爪を叩き落とすように上段からの振り下ろしで弾く。
随分と速くなったなぁ俺。今ならメガラスと楽しい戦いが出来そうだ。
もう一つ。長けている部分を上げるなら――客観的というより俺の自尊心から言わせてもらうなら技術。
剣術、近接戦闘では他のやつに負けたくない。――右斜め前。俺の首、頸動脈を狙って爪が振るわれる――が、それを右足を一歩下げながら半身になっての下段からの斬り上げでなんとか弾く。くっそ手が痛いな。
なんとか戦闘になっている事が少しだけ俺の心の余裕に繋がる。とはいえこのままではジリ貧。
僅かに勝る速度も俺がギリウムの力を完全に受け流せないでいるためあまり意味をなしていない。態勢を立て直すのに時間を使ってしまうからだ。
人間の時にやったメガラス戦よりはマシってくらいだ。今は身体も万全ではあるのだし。
やはり何処かで攻勢に回らないといけない。そんな余裕がないのだが、時間が経つにつれてどんどん俺の――前から、と見せかけたフェイント。一歩で俺の背後に回って俺の後頭部に爪が振るわれ、って、危、ないっ！　と身体を捻っての回避――俺の疲労がどんどん蓄積されていく。
というかこいつ、さっきから完全に俺の事殺そうとしている。致命傷になるような部位ばっかり狙いやがって。戦術としては正しい、一つの正解だがいくらなんでも仲間である筈の魔人に容赦ねぇ。
その事にムカムカするものの現状を打破することが出来ない。
このままではなぶり殺しだ――最悪の未来を想像する。
そんな時だ。ギリウムが行動を起こしたのは。

ギリウムは目の前で戦うレオンハルトに対して腹立たしくも内心、称賛していた。
――ふん、存外やるではないか。
ともすれば初撃で終わってしまうやも――というギリウムの予想は裏切られた。レオンハルトの振るった剣で自慢の爪を弾かれたのだ。
なるほど、業物だ。おそらく魔王様から賜ったのであろうその剣は名剣であることを認めざるを得ない。
なにせ、自分の爪を弾いたのだ。鈍らなら一合、多くとも数合も打ち合わせれば折れているところである。
この爪はドラゴンであった時代、ククルククルとの戦いの時から現在に至るまでひたすらに鍛え続けた爪だ。この爪だけはカミーラ様にも負けないと自負している。
使い方も心得ている、魔人になってからも戦闘の腕は衰えていない。それを力負けしながらも弾くことが出来ているその技量。
人間なら一秒もかからず身体を別れさせ、亡き者にしているところだ。止めることなど天地がひっくり返っても出来ないであろう。
なるほど、こいつは魔人だ。認めよう。しかし、魔人であってもこうも簡単に爪を止めることが出来るか？
認めよう。こいつの技量は人間の間で剣の王と呼ばれるに相応しい。魔物将軍程度では荷が重いのも頷ける。
ドラゴンとして強者には敬意を払うものだ。ただの決闘であったのならその実力を認めて仲間と認められるべきだろう。
だが――それは叶わない。
それだけは――ありえない。
自分の僅かに冷静な部分が奴の実力を認めるのと同時に、奴を強く憎悪する。
これは魔人四天王を賭けた決闘。それが意味するのは――これがカミーラを賭けた戦いであるということ。
もしこれで負けたらどうなる？　昔と同じように他のドラゴンに、マギーホアに負けた時のように。アベルに連れ去られた時のように。

目の前で愛する雌を他の雄に取られるのか？
――瞬間、ギリウムは過去と同じように、自分との決闘に勝ちカミーラを組み伏せるレオンハルトの姿を幻視した。
――――プツリ、と静かに激情が、誰にも気づかれないまま内心で荒れ狂う。
――ああああああああああああああああ!!!　カミーラ!!　カミーラァッ!!!
ありえないありえないありえない。カミーラは渡さない。渡してたまるものか。カミーラを戴くのは私だ！
ドラゴン種、最後の雌に対する欲望が爆発する。いつもしている時と同じように。
あの髪を、あの足を、あの尻も、あの胸も、あの腕も、あの指も、あの顔も、あの性器も、あの美貌を！　次に味わうのは私、私、私だっ!!!
ギリウムは誇り高いドラゴン種であった。その欲望を表立ってさらけ出すような下品な真似はしない。
ただ、カミーラへの激情と比例してレオンハルトへの敵意が募り攻撃に容赦がなくなっていく。
許さん。許さんぞレオンハルト。新参者の、脆弱な人間であるお前にカミーラは渡さん。生ける王冠はお前に相応しくない。
――殺さねば。生かせば更に強くなって奪い返しにくるかもしれない。
それはある意味、ギリウムにとっては最大限の敬意であるかもしれない。
この雄は強い。今はまだ自分よりも弱いが、いずれ更なる成長を遂げるだろう。それが自分を超えることはないと楽観は出来ない。
あくまでもレオンハルトがカミーラを欲しがっている、という前提でギリウムは考えを進める。良くも悪くも彼の世界の中心はカミーラであった。
ギリウムは考えた。目の前の雄を速やかに戦いで殺す――そして行動に起こした。

「ガァアアッ!!」
「――なっ!?」
自慢の爪を地面に思い切り叩き込む。
辺りに土煙が舞い上がり、奴が驚きの声を上げる。
上空に飛び上がると直ぐ様力を溜めて、それを地面に、レオンハルトに向けて吐き出した。
ブレス。ドラゴン種がドラゴンたる所以。魔人になって強化されたそれは凄まじい勢いとエネルギーで放射状に広がる。
さて、これで終わるのか。そんな自問をしながら眼下に全速力で突撃した。
「ウガァァァアアアッ!!!」
土煙とブレスの余波が残る中、ギリウムは正確にレオンハルトの姿を捉えた。
――どうやらブレスの直撃は回避したようだな。それを確信していたギリウムは真っ直ぐにレオンハルトに向けて――
「ゴォオオオオオオオオオオオオオ!!!」
「――ッッッ!?」
爪を叩き込んだ。
「――レオンハルト!?」

「……がっ、はっ」
ギリウムに爪を叩き込まれ、城の壁に激突したレオンハルトは意識が吹っ飛びそうな衝撃とダメージを受けて苦悶の声を漏らした。
……痛ぇ。くそ、あんな単純な手に引っかかっちまうとは……
ブレスの存在は知っていた。筈なのにそれが意識の中に無かった。単純な目くらましとブレスを囮に爪でとどめ。
視界を封じて、体勢を崩し、本命を叩き込む。くそっ、戦いの基本じゃねぇか。
そんな手に引っかかった自分にむかっ腹が立つ。
だが、このダメージは……。

幸いにもまだ命に別状はない。というより魔人の身体が頑丈すぎる。大きな傷が腹に出来て血が出ているが、人間であればやがて死ぬような傷も致命傷ではない。
それでも殆ど瀕死のようなものだ。
早く動かねば殺されるだろう。いや、ひょっとしたらもう手遅れかもしれない。
最近、負けてばっかりだな俺は。
俺は目眩を覚えつつも周囲に視線をくばった。幸いにも、追撃はまだ来ない。
……もういいんじゃないか？　そんな思いが俺の中に浮かび始める。
十分、戦った。魔人になりたてでそれなりに保ったんだから善戦しただろう。参った、ごめんなさいと言って命乞いすれば助かるかもしれない。
魔人四天王や魔軍参謀には興味がない。それを譲ってスラルにでも泣きつけば――
――そうだ、スラルは。
ふと自分が忠誠を誓った相手を思わず探してしまう。そしてその姿は直ぐに見つかった。
壁際にてこちらを見るスラルの表情を見た時――俺の心臓は止まりそうなほどに脈打った。

――おい……なんつう顔してんだ。
スラルの表情は魔王としての体裁を保とうとしていたが――俺には分かる。今にも泣いてしまいそうな表情だ。
おいおいあれ、周りの奴ら気づいてないのか？　あれじゃあ威厳なんて木っ端微塵に砕け散るぜ？　早く元の表情に戻せよ。このままじゃカリスマブレイクしちまう。
つーか、何だ。前から思ってたけどあいつ本当に魔王か？　全然そんな感じしねぇぞ？　見た目はただの少女だし、性格だって人間としか思えねぇ。大人になってからあれほど喧嘩するとは思わなかった

ぞ。傍から見たらギャグみたいなもんだ。魔王を自称するなら今すぐその顔やめろよ。魔人なんか幾らでも作れるんだから主の命令を守れない俺なんかゴミみたいに捨てりゃあ――

瞬間、俺は何故か左手を壁に叩きつけていた。

――はぁ、勝手な事ばかり言いやがってよ――自分に嫌気が差してくる。

あんなふうに泣きそうな表情を浮かべさせてるのは誰なんだよ。

――俺、だろ。

自分の情けなさを主に押し付けてんじゃねぇよ。

……はぁ――……俺もヤキが回ったかな。随分と情けない。むかつく。俺はいつからこんな弱くなったんだ？

一度は集落を背負うという思いを胸にして、一度は主に忠誠を誓っただろう？

――俺はまだ、一度もあいつの命令をこなせてないだろうが。

……あー、頭がすっきりしてきた。そうだな、やることはしっかりと決まっている。

気づけば俺は握ったままの剣に強く力を込めていた。冷静に考えると何やってんだ俺、って感じだけどよ。

情を裏切られて、情を受けずに長いこと過ごしてきた所為か？　出会ってまだそんなに経ってないっていうのによ。俺はこんなにもちょろかったか？　でも、俺に良くしようとしてくれるあいつの期待を、他ならぬあいつの魔人である俺が裏切ってどうする。

「……おらよっと」

「――！」

壁を背もたれに倒れ込んでいた俺が立ち上がると、ギリウムや周囲から驚愕した雰囲気が感じ取れる。

「ふん、まだ生きていたか。だが既に――」

「あー、ちょっとストップ。黙れ」
「――何だと？」
ギリウムから怒気が感じ取れる。
「そういうのもういいだろ？　水差すなよ。今頭すっきりしてていい気分で今なら何でも出来そうなんだから」
余計な事は考えない。
今考えるのは目の前の相手を斬ること、殺すことだけだ。
「やることはお互いはっきりしてるだろ？　――最初に殺気を見せたテメェが悪いんだからな。斬り殺してやる」
「き、貴様――言うに事欠いてそのような戯言をッ！　死ぬのは貴様だ――!!!」
第二ラウンド――いや、最終ラウンドにしてやる――！

ギリウムの再度の、最初の攻撃はやはりと言うべきか爪だった。
右手で振るわれるそれは確実に俺を仕留めようと頭を狙ってきている。
「――あ？　……ククッ、何だそりゃ？」
「なぁっ――!?」
ギリウムの攻撃を受け止めることすらせず身体を反らすだけで回避する。
ギリウムが仰天したような声を出すのが面白い。
「貴様……！」
「不可解って顔だな。いや、俺も見えてるって訳じゃ――」
「ッ!!!」
「ん……こっち、か」
ギリウムの左からの横薙ぎに振るわれた爪を今度はかがむようにして回避。
「な、何故だっ!?　ええい、こんなの偶然――」
「何ていうか不思議な感覚でよ。お前のその爪攻撃が剣術のそれに似てるからか？　何処からどう来るか大体読める」

斜めに振るわれる爪を感覚に従って回避する。
ギリウムはそれを信じまいと今度は連撃を見舞ってくる。
「死ねェ――!!」
「……」
攻撃を躱す。躱す。躱す。振るわれる相手の攻撃を自身の感覚に従って回避し続ける。
何だろうな、これは。見切り？　心眼ってやつか？　相手の攻撃が読めてしまう。
というかだんだん目も慣れて――
「――あー……一つ訂正しとくぞ」
「――死ね死ね死ねェェ――!!」
「聞いてないか。……悪いが見えてないってのは嘘だ。だんだん目の方も慣れてきた」
「――ッ?!」
ギリウムが今度こそ驚愕し、一度下がる。
「まずい！　皆退避――！」
魔物将軍がその動作を見て叫ぶ。俺の背後にいた奴らはその軌道から急いで離れた。
「――!!!!」
声にならない声と共にブレスが放射される。
相手は満身創痍、当たれば仕留められると放たれたそれは、しかし俺には当たらない。
「ブレスしてくるってのは読めないが、そんだけわかりやすい動きをされると予想がつくな」
「――ッッッ!?」
ブレスの範囲内からいち早く逃れるように側面に移動した俺は剣を両手で握る。
すると俺の身体の周囲から細い線のようなオーラが浮かんで見えるようだった。
「そろそろ振るからな。防御しろよ」
「――!!　グゥッ――舐めるなッ！」

その言葉と共に魔剣オル＝フェイルを袈裟に振り下ろす。
ギリウムは爪で何とか防御し、力で俺の剣を弾き飛ばそうとする。
だが、俺はその勢いを利用して回転するように今度は逆側から剣を振り上げた。
「なっ――！　グッ！」
ギリウムはそれも爪で防御。その勢いでまた剣を振る。
「ガァッ!?」
今度は少し逸れて腕に赤い線を斬り刻む。
それでも攻撃は止めない。斬る。
「――あ、ガッ！　ギィっ！　ゴッ！」
斬る。斬る。突く。斬る。払う。斬る。突く。突く。払う。斬る。
払う。斬る。斬る。斬る。斬る。斬る。斬る。斬る。斬る。斬る。
俺の手数に対応出来ず防御を失敗する度にギリウムは全身に無数の斬り傷を作った。
おいおい、まさかここまで出来るようになってるとはな。俺は自身の成長に驚いていた。
ここをこうすればまた攻撃出来る。こう動けば有利になる。こういう風に身体を動かせば隙は無くせる。
雪崩のように次から次へとアイデアが浮かんで、それを実行出来る。剣を振るうのが楽しくてしょうがない。
剣ってこんなにも自由で、果てのないものだったのか？　まだまだ先があるじゃねぇか！　例え果てに到達したとしてもこの魅力からは抜け出せないと確信出来る。
もっとだ、剣の理ってやつを俺にもっと極めさせろ!!!

――その境地を知るものが見れば、こう確信しただろう。

――前人未到。伝説。達人の中の達人。バランスブレイカー。魔人になって彼の才能は開花した。

「――――剣戦闘ＬＶ３」

「まさか、このような展開になるとは……」
周囲では魔人、魔物将軍、魔物隊長らがざわついていた。
その中心には二人の魔人。
「ククク……！」
「グウゥウウっ、こんな、こんな馬鹿な事が……ッ！」
おかしい。なんだこの状況は。
私は誇り高いドラゴン種の魔人だぞ！　生ける王冠であるカミーラを戴くドラゴンの新しい王だ！
人間に負ける道理はない筈だ！
ギリウムは酷く動揺、狼狽していた。
身体には無数の切り傷。それは奴が剣を振るう度に増えていく。
こちらの攻撃は通じず、そもそも最早攻撃の機会すら与えられない。ずっと相手の攻撃。防御しても逃げても相手の攻撃。
一度は追い詰めた筈の形勢は完全に逆転していた。
眼前で剣を振るい続ける剣鬼、魔人レオンハルトには、抑えきれない喜びの感情が口角や声に表れていた。
「……悪いなぁ？　こんなにしちまってよ。ちょっとやられてから覚醒して逆転なんて展開、使い古されすぎて寒いだろ？」
「くっ――！」
挑発するような言葉も嬉々として言ってみせる。先程までの印象からガラリと変わっている。
「アンタにも悪い気がするし、ぺちゃくちゃ喋られながら甚振られるのも嫌だろ？　だから――」
――そろそろ終わらせるぞ。
「――ッ！　ま、待て――ッ!?」
反転。底冷えするような冷たい表情を浮かべたレオンハルトは蒼い剣を振り上げ、
「――――」
一閃。

奴が私の身体を通り過ぎ、時が止まったように動きが止まる。
先程までとは打って変わって静寂が辺りを支配しており、周囲も息を呑んでいる様子だ。
わ、私はどうなった？　何故動けないんだ？
――いや、手は、上半身は動く。支障はない。
――――なら、下半身は？
そうギリウムが考えた時――身体が滑るようにズレ始めた。
――ッッッッッッ!!??
ギリウムは自分の身体の状況に気づく。
「――ァ……あぁ……！」
嫌だ。やめろ。止まれ。それだけは嫌だ。
心の中で否定を続けるギリウム。その願いは聞き届けられることなく――
「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっっっ――――――!!!」
身体が真っ二つに別れた。
急激にギリウムの身体に痛みが駆け巡り、しかし同時に少しずつ身体の感覚が薄れていた。
――魔人ギリウムはその命を終えようとしていたのである。
それを理解し、ギリウムは視線である人物を捉える。
レオンハルト――ではない。ここに至ってギリウムは自分をこうしたレオンハルトなど眼中になかった。
「カ、ミーラ……」
言葉を振り絞り、愛しい人の名前を呼ぶ。
頼む、助けてくれカミーラ。私はこの世界で数少ない同胞――お前とつがいになる男の筈だ。
「……」
しかし、カミーラは答えない。それどころかギリウムを見るその視線は――汚らわしい虫けらを見る目そのもの。
――あぁ……何故だ、何故だ、カミーラ……私の愛しい人よ……！
ギリウムは結局、最後の最後までカミーラを理解出来なかった。それは、ともすれば彼にとって幸運だったのかもしれない。

「れ、レオンハルト様の勝利……」
魔人ギリウムの身体が紅い球体――魔血魂になり決闘が終わっても辺りは静寂に包まれたままだった。
彼らの心中は戦いの勝者、即ち新しい魔人四天王となったレオンハルトのことで締められていた。
戦いの最中に突然豹変し、ギリウムに圧倒的な実力をもって勝利した彼を畏ろしく思い、それでいながら敬意を払った。
魔物は強い者が正義。実力を示したレオンハルトの就任を拒むことは、少なくともこの場にいる者はしないだろう。
「……」
そして視線を集める魔人、レオンハルトはゆっくりとギリウムの魔血魂を拾い上げると、そのまま真っ直ぐ歩みを進める。
その歩みの先には――この場の絶対支配者である魔王スラル。
「……」
「……」
二人は無言のまま視線を交わす。
少しの間を置いて、レオンハルトが膝を突き、その手に持っていた魔血魂を献上する。
それを少し見つめてから受け取ったスラルは、突然瞳を輝かせ力を込めるように魔血魂を射抜いた。
――突如、魔血魂がスラルに吸い込まれていく。
魔血魂の初期化。魔人の完全なる死である。
魔人は死んでも魔血魂になり、宿主にそれを飲ませればその肉体を乗っ取って復活することが出来る。
だが、魔王に魔血魂を初期化されるとその中にある精神もなくなる。
この瞬間、魔人ギリウムはこの世界から完全に消滅した。
そしてスラルは作業を終えると、レオンハルトに視線を戻してその場にいる皆に聞こえるように言い放った。

「――大義よ」
魔王からの称賛の言葉。それに続けて、
「正式に魔人レオンハルトを魔人四天王、並びに魔軍参謀の任に就けるわ。異論のある者はいる？」
その言葉が自分達に向けられた問いであることに気づき、魔物将軍や魔物隊長は一斉に言葉を発する。
『はっ！　おりません！』
異論などある筈もない。実力のある魔人なら歓迎だ。
その日、新しい魔人四天王――レオンハルトが誕生した。

決闘を終え、一度怪我の治療をするため、魔王スラルはレオンハルトを連れて自らの私室に戻って来た。
「おお……神魔法なんて初めて受けたが、マジで痛くなくなっていくんだな」
「使える人ほとんどいないから知られてないけどね」
ヒーリングを掛けて彼の身体を治す。関心したような表情が面白い。
「これで大体は治ったはずだけど……どう？」
「痛みはないし、身体も動くな……ただまぁ、言いにくいんだが」
言い淀む彼に私は催促の言葉を掛ける。
「なに？　言ってみて」
「……めちゃくちゃ眠い。何処か眠る場所ないか？」
なんだ。そんなこと。
「私のベッド使っていいわよ」
「は、はぁ？」
「？　なんでちょっと嫌そうなのよ。疲れてるなら寝た方がいいわ」
ヒーリングは怪我は治せても、失った体力や疲労までは癒せない。おそらく眠いのはそういう事だ。
……それにしても、自分から眠りたいって言ったのに何故ベッドを断るんだろう。

あ、ひょっとして主のベッドを使う訳にはいかないとか？
「いや、あー、うん……まぁいいか。なら借りるぞ」
「あ、うん。おやすみ」
「……おやすみ」
彼は何故か最後まで私を見て変な顔をしていたが、ベッドに潜ると直ぐに寝てしまった。
……無理させちゃったなぁ。
よっぽど疲労が溜まっていたのだろう。思えば魔人化してからここまで急だった。
魔人は殆ど休まなくても身体を壊すことはないが、だからといって休まない道理もない。
「……」
ベッドに腰掛け、彼の寝顔を眺める。目を瞑ると印象変わるなぁ。普段は鋭い目で眉間にシワを寄せることが多くクールな印象が強いが、こうしてみると随分と穏やかな印象。寝てるからかな。
先程の決闘の時も後半、物凄い迫力だった。ＬＶ３ならあれくらい出来ると思っていたが、あれはちょっと怖い。今度注意しよう。あれじゃギリウムも相当――
「――っ」
ギリウムの事を考えた瞬間、私は胸を押さえる。
今思えばあそこまでする必要はなかった。
決闘もそうだ。あんな死んだ方が負けなんてルールを提案しなければよかった。
レオンハルトがギリウムを斬り刻んでいった時――
――私は口端を僅かに上げていた。
彼が、自分の作った魔人が生意気な前魔王の魔人を苦しめているのを見るとドキドキして心が躍った。
あの魔人の血をもっと見せてほしかった。あれほど痛快な見世物はないと思った。

あそこまでする必要はなかった。少し欲求を発散させるだけでいいのにあの時は歯止めが利かなかった。
――全て言い訳でしかない。
私は立ち上がると部屋の鏡に映る自分の姿を見る。
そう、私は魔王だ。
どこまでいっても私は魔王でしかない。
「……私って酷いわね」
スラルの呟きは誰の耳にも届かなかった。

――魔王城
スラルがレオンハルトを連れて、部屋で治療を行っている頃――魔人四天王カミーラは割り当てられた部屋のソファーに腰掛けていた。
彼女はいつもと同じように無表情で虚空を見つめて怠惰を貪っていた。
だが、
「――――く、くくっ」
不意にカミーラの口から声が漏れる。
見れば表情も僅かに笑みを浮かべており、それはカミーラが誕生してから今まで一度もなかった事だ。
「……くくっ……くくくっ……」
カミーラは笑いが抑えきれないとばかりに美しい唇を笑みの形に変えた。
「……くくっ……まさか……ここまで都合良く……転ぶとは……」
正に夢にも思わなかったとカミーラは笑う。
カミーラが愉悦を感じている原因――それは魔人ギリウムの死にあった。
神に飽きられて絶滅させられたドラゴン種の中で、ギリウムは唯一の同胞ともいえる存在だった。
それ故にカミーラに懸想しているのは無理もない事である。ドラゴン種は多かれ少なかれ皆そうであったのだ。好意を見せることは

なくても嫌いになる程ではない筈である。
しかしカミーラはギリウムが嫌いだった。それも無理のない事ではあるが。
――戦いを恐れ……逃げ隠れた臆病者の分際で……！　いけしゃあしゃあと……私の前に現れおって……！
ギリウムは魔王アベルとドラゴン王マギーホアとの戦い、ラストウォーでアベル側について戦った。
だがギリウムはアベルがマギーホアに勝てないと知ると早々に雲隠れした。
あの戦争では皆が戦いに繰り出され最後まで戦った。アベルに付いたドラゴンも死ぬまで戦い、あのアベルですらも何度も負けて逃げ隠れながらもマギーホアに挑み続けた。
ドラゴンが天使に狩られ尽くし、カミーラは少なからず衝撃を受けた。そして新しい人間の魔王――スラルに魔人として恭順した。
そんな折に奴は、魔人ギリウムは現れた。身の毛もよだつ愛の言葉を口から嘯きながら。
――私の妻になってほしい。愛している。今世界で一番強いドラゴンは私だ。
ふざけるな……！
直ぐ様殺してやろうと思った。ギリウムはカミーラよりも弱者であった為、それは容易であったがさしものカミーラも同胞が天使に狩られた直後とあって躊躇した。
だが、それでも口説き文句は止まらない。
よくもまあそんな言葉を吐けたものだ。今更姿を表した卑怯者の弱者の癖に。今最強のドラゴンは私だと嘯く。
お前などマギーホアやアベルはおろか、四大聖竜や散っていったドラゴン魔人にも及ぶものか。
そう言ってもしばらくすれば再び愛の言葉。そして自らを持ち上げる発言。
今日に至るまで１００年。いつも前時代の古い掟を引っ張り出しては近づいてくる。

その際に視線が胸や尻にいっているのも不快だった。何度殺そうかと思ったか。気づいていないとでも思っているのだろうか。カミーラにもプライドがある。少なくともあんな奴に見せるための肉体ではないと断言出来た。

アベルが可愛く見えるレベルの執着心にカミーラは辟易していた。

そんな時に今回の集まりだ。

魔王が新しい魔人を紹介するといった。それには別段興味もなかった。剣の王と呼ばれた人間。どうだっていい。

しかしその魔人、レオンハルトを魔王スラルは気にいっているようで、新しい魔人四天王と魔軍参謀という要職に就けると言った。それも好きにすればいいと思った。

だが、それに反抗した魔人ギリウムが自身に意見を聞いてきたところで少し恨みを晴らしてやろうと思った。

レオンハルトは魔王様のお気に入り。そんな奴にギリウムが私に対する嫉妬心から因縁をつければどうなるか。それは魔王の怒りを買うことに他ならない。少しでも苦しめ。そんな思いからレオンハルトが魔人四天王の座に就くことに賛成した。

案の定、ギリウムが決闘を申し出た。カミーラの予想に反してレオンハルトがギリウムを殺し、更には魔王スラルがギリウムの魔血魂を初期化したのは驚いたが。

――だが、その瞬間。カミーラは呪縛から解放されたような清々しい気分だった。

憎かろうが同胞であったギリウムが死んでも心が傷まない。むしろ溜飲が下がった。こんな事ならさっさと自らの手で殺してやるべきだった。

「……くくくっ……魔王様とレオンハルトに……感謝してやりたい気分だ……」

暫くの間、カミーラは部屋でくつくつと笑い続けた。

魔軍参謀と魔王の料理

――決闘の翌日。

魔王城の片隅では異常な光景が見られた。

「お、おい……あれ……」

「しっ！　馬鹿見るな！　殺されるぞ……！」

それを見かけた魔物達は足早にそこから立ち去るか、遠巻きに様子を伺うかの二択。

何故なら彼らの視線の先では、二体の魔人が顔を突き合わせていたからだ。

「……」

「……」

魔人カミーラと魔人レオンハルト――二人の魔人四天王がそこにいた。

お互いに視線を交えたまま無言で微動だにしない。いったいどうしたのだろうか。

様子を伺う魔物隊長だったが、はっ、と気づいたように最悪の考えが心に浮かぶ。

「まさかレオンハルト様……カミーラ様まで斬り殺すつもりじゃ……」

「ええっ!?　いや、そんなまさか……」

「ない、とは言い切れないだろう……？　先日の決闘での様子を見る限りでは、レオンハルト様は強い奴を斬るのがお好きみたいだからな……」

「……でも、流石にカミーラ様は無理、なんじゃないか？　というかそれがマジならどうしようもないじゃねぇか。魔王様に報告するか？」

「いや、まだいいだろう。……もしお二方が戦い始めたら直ぐに逃げて報告しに行くべきだけどな」

そんな魔物隊長らの会話が声を潜めて行われる。

そして、件の魔人――レオンハルトは。

「……」

――なんで俺の事ずっと見てんだ……？
自分でも何故こんな状況になったか知らずにいた。

数分前の事だ。
疲労から回復して起床した後、俺はスラルに連れられて自分の部屋に案内された。
中々に豪勢な造りの部屋で俺には持て余しそうであったが、魔人四天王専用の部屋らしい。
そしてその際にしばらく待機、二時間後に部屋に来るようスラルに命令された。
なので部屋の設備を確認したり、軽く身体を動かしたりして時間を潰した。
約束の十五分前。俺はスラルの部屋に向かう為に部屋を出た。
すると、隣から同じようにドアを開ける音が。誰かと思ってそちらを向いてみれば――
そこには俺と同じ魔人四天王――カミーラが部屋から出てくるところだった。
「――――」
「――――」
ピタリ、とお互いに動きが止まる。その顔には疑問がありありと見て取れた。俺も多分似たような表情をしているだろう。
……だがよく考えれば当然の話だ。先程スラルが、ここの部屋は魔人四天王専用の部屋だと言っていたのを思い出す。
ならば、隣の部屋は当然カミーラしかいない。
やがて向こうも同じ結論に至ったのか、少し気を取り直して外に出るとドアをガチャリと閉める。
しかし何故かカミーラのその視線は俺を捉えたまま離さなかった。
ここで俺が直ぐに――あっ、こんちはー！　今日からお隣に住むことになったレオンハルトですー。同じ魔人四天王としてよろしくおねがいしますねー、ではまた――と軽く自然に立ち去っていれば何も問題は無かっただろう。何か用でもあるのか？　と、視線を合わせたま

ま相手の言葉を待ってみたのが間違いだった。
それから数分の間ずっとこの状態。いつの間にか周りには魔物隊長や魔物将軍が遠巻きにこちらを見ている気配がする。
いい加減に立ち去りたい。というか何でこんなメンチ切られてんだ？　特に理由は思いつかな――って、あっ。
そういえば、昨日俺が殺した魔人はカミーラと同じドラゴンだった。
……もしやそれか？
つまりカミーラは、よくもウチのドラゴンに手を出してくれたな？　この落とし前はただじゃすまないぞ？　と威嚇しているのか？
だからこの視線か。確かに同族がやられたのなら怒るのは当然だろう。カミーラ姉さん怖いです。
この状況を打破するにはどうすればいいんだ？
……謝るか？
謝ったところで許してくれるかは知らんが、未だ威嚇で済ませてくれるあたりこちらの誠意ある対応を求めているのだろう。
そう考えればこの沈黙も納得だ。被害者側が加害者に抗議してから謝るようでは反省しているとは言い難い。これは全面的に俺が悪い。
それに出来る事ならばこれから少ない同族であり同僚になるカミーラとは、友好的とまではいかずとも普通に話せるくらいの関係になっておかねば居心地が悪い。
ならばやることは一つ。大分時間を取らせた。俺は早速、ゆっくりと頭を下げた。
「……ふん……借り――」
「――悪かったな」
「を……なに……？」
何か言おうとしていた所だったようで被ってしまう。重ね重ね申し訳ない。俺は頭を一度上げて言葉を続ける。
「お前の同胞を殺しちまって悪かった。幾ら決闘とはいえやりすぎた。――本当にすまない」

「……！」
そして再度、頭を下げる。
しかしカミーラは謝っても何も反応を返さず、何故か固まったままのようだった。やっぱり怒って――
「……くくっ」
突如、頭上から声が聞こえた。笑ってる、のか？
「……くっ……ふぅ……頭を……上げるが良い」
「……！　ああ……」
最後に息を漏らすとカミーラは俺に頭を上げるように言う。何だったんだ今の笑いは。
そして再び能面のような無表情に戻ったカミーラは俺を見据えて口を開いた。
「……貸しだ」
「貸し……？」
「そうだ……悪いと思ってるんだろう……？　なら私の命令は聞けるな……？」
「！　あ、ああ……！　勿論だ」
俺はカミーラの問いかけに強く頷いた。
「ならいい……何かあれば呼ぶ……」
「ああ、そうしてくれ」
「私はもう行く……」
「ああ。本当に悪かったな」
「悪いと思ってるなら逆らおう等とは考えるな……悪いと思ってるなら、な……くくくっ……」
そう言ってカミーラは含み笑いを続けたまま廊下の先に消えていった。
「……何だったんだ……？」
「カカカ、カミーラさんが笑った……」
「……あ？」
気づけば近くになんか毛玉のような物体がいた。
こいつ、いつからここにいた？　カミーラの存在感が強すぎたの

か、立ち去っていくまで気配が薄すぎて気づかなかった。
「ヒィ!? ごごごめんなさいっ！」
「……いや、別にいいが。お前は？」
こんな弱そうな魔物も魔軍では働かされているのか？　流石に可哀想な気もするが。
そんな事を考えていたら毛玉が自己紹介をし始めた。
「僕はケイブリスと言いましてですね……魔軍参謀で魔人四天王にもなられたレオンハルト様に挨拶をと思いまして、はい」
「そうかケイブリス――ケイブリス？」
こいつケイブリスって言ったか？
……ケイブリスって、あのケイブリスだよな？
俺は目の前の毛玉に目と口と手足を付けたような生き物をじっと見る。
「あああ、あの、何か粗相をしてしまいましたか……？」
俺に視線を浴びせられたケイブリスと名乗る毛玉は怯えたように俺の様子を伺っていた。
俺は思い出す。いや、イメージが強すぎて前世の記憶を思い出そうとしなければ思い出せない俺でもこいつの事は憶えている。この毛玉は魔人の中でも特に印象深い存在。
――最強の魔人、ケイブリス。
魔人の中で最も強大な存在である魔人――の筈だ。
……そういえば、ケイブリスは昔は弱かったんだっけか？
……俺は流石に悩む。こいつはここで殺しておくべきか？
このケイブリスの所為で未来の人類はめちゃくちゃ苦労させられた筈だ。こいつを殺しておけば色々と問題は解消されるのでは？
いや、本来なら未来の事を憂うなんてやりたくないんだがな。未来に何があろうと俺の人生だ。多少情報を利用するならともかく、ここをこうすれば未来が変わる、なんて面倒な事はまっぴらごめんだ。
そんな俺でも迷ってしまう程の重要人物。
――と、そこまで考え俺はふっと気を抜いた。
「……いや、別に何でも無い。ケイブリスだな。同じ魔人同士よろし

く頼む」
「は、はい！　よろしくお願いします！」
　未来で酷い事をしたのかもしれないが、必ずしもそうなるとも限らない。
　今のこいつが俺に何かしたわけではないのだし、普通に仲良くしてやるのがいいだろう。
「そんなに畏まらなくてもいいからな？　俺は魔人四天王かも知れないが新参者だし」
「いえいえ！　実は僕、昨日の決闘を見てレオンハルト様のファンになりました！　なので何かあれば仰ってください！　出来る限りは努力します！」
「あ、ああ。そうなのか」
「何か欲しいものはありますか？　あっ、人間の女くらいなら僕でも攫ってこれますよ！　へへへっ……！」
「……いや、今はいい」
　……いや、こいつ……媚びへつらいすぎだろ……。
　集落の王だった時でもここまでへりくだる奴はいなかったぞ。
「あー……とりあえず今はスラル……魔王様に呼ばれてるからまた今度でいいか？」
「あっ……そ、そうだったんですね。えへへ……す、すみませんでした」
「おう……じゃあな」
「はい！　何かあればレオンハルト様のファンである僕をよろしくお願いします！」
　……スラルの所行くまでに、大分精神消費したな。
　前途多難もいいところだ、と俺は改めてスラルの部屋に向かった。
　俺が立ち去る姿をケイブリスは小さい体で跳ねながら見送ってきていた。

「――遅い！」

「悪かったよ……」
スラルの部屋に着くと、スラルは腰に両手を当てて怒っていた。
俺は早々に遅刻を注意されてしまう。
「時間は守るのが普通でしょ！　というより貴方は二時間前に約束した事も守れないの!?」
「う、ぐ……」
今の言葉は心にぐさりときた。
俺だって好きで遅刻した訳じゃねぇよ……。
そう言いたいが、途中で他の魔人に会って話していたから遅れた、なんてくそみたいな言い訳、俺はしたくない。
もっと早くに部屋を出とけって話だ。
「わ、悪かった……確かにこれは俺が悪い」
「む……」
俺がスラルに頭を下げて謝ると、スラルは少しバツが悪そうにする。
「……もう。そんな普通に謝られると怒るに怒れないじゃない」
「……いや、そうかもしれないが俺が悪いしなぁ」
「あー、もう！　そういう暗くなるの禁止！　せっかくの歓迎会なんだから！」
「……歓迎会？」
疑問符を浮かべるように、ん？　と首を傾げると、スラルは少し顔を背けながら説明してくれた。
「そうよ。貴方が魔人四天王、魔軍参謀に就任したし……それも兼ねての歓迎会よ」
「それは――」
流石にそれは予想していなかった。決闘の後に一応労ってくれたしあれで終わりかと。
というか魔王が魔人の為に歓迎会を開くなんて想像がつかない。その字面だけ見ると髑髏の盃でも持ち出しそうだ。
「あ、一応仕事の説明もあるけど……そっちはついでだから」
「あ？　仕事の説明？　それってあれの事か？」

「そう――魔軍参謀としてのお仕事」
――それは決闘が終わった後の事。
魔王スラルは魔軍の幹部である魔物将軍や魔物隊長を集めて通達した。
――魔軍全体の指揮と戦略、作戦立案を行う魔人を就ける。
それが魔軍参謀だと魔王は言った。
現在、魔軍の指揮系統はトップに魔王。その下に魔人とその使徒。その下に魔物将軍、魔物隊長、魔物兵となっている。
だが実際にはこれは階級順であり、指揮系統が上手く機能しているとは言い難い。
魔人は基本的にその個による強大な戦力が強みだ。その反面、軍の指揮は魔物将軍に劣る。
そして何よりの問題は、魔人に魔物将軍が振り回されることにある。魔人には我が強い者が多い。魔物将軍に基本は任せていても、その提案を聞かないことも多い。
魔物将軍も魔人には逆らえないし、天地がひっくり返っても命令することは出来ない。
それなら同じ魔人――それも魔王直属の強い魔人に命令させればいいとスラルは考えた。
魔王に逆らえないのは当たり前だが、それは階級の高い上級魔人――魔人筆頭や魔人四天王には同じ魔人でも差が生じる。
例え渋々ではあっても命令は聞くだろうし、少なくとも魔物将軍が全てを動かそうとするよりはマシだ。
なので魔軍参謀は魔人四天王や魔人筆頭を兼任――もしくはそれに準ずる強さを持つ魔人に務めさせる。
魔人筆頭が魔人の代表のまとめ役で、魔人四天王が強さを基準にした幹部なら、魔軍参謀は魔軍全体のまとめ役であり魔人との折衝役。
魔軍をこれまで以上に円滑に動かす為の職である。
「――めちゃくちゃ面倒そうだな」
「文句言わない。実際の仕事量はそんなに変わらないんだから。命令を沢山するってだけよ」

言われてみればそうかもしれない。色々と小難しいが、要は偉い称号で魔人や魔軍に命令出来るってだけだ。
だが、それは俺が無能ならめちゃくちゃになったりしないか？
俺自身の失敗は全体の失敗に繋がりやすい。責任重大な職務だ。
「……考えるとやっぱ楽ではなさそうだな」
「う、そんな事はないと思うけど……」
おい、なら俺の目を見て話せ。ひゅーひゅー息吐きやがって。口笛鳴らせてねぇぞ。
視線を逸らして誤魔化そうとするスラルに俺は嘆息すると気持ちを切り替える。
ま、規模がでかくなっただけでやることは人間の時と変わんねぇしな。
俺はスラルの背後にある物に視線を向ける、とそれを指差して尋ねた。
「……それはもういい。それよりその後ろにあるものは、ひょっとして準備してたのか？」
「！　ふふっ、気づいた？　それじゃあ仕事の話は後にして――」
スラルは少し下がるとテーブルの上に並べられた物をじゃん！と手を広げて紹介した。
「どう？　手料理を作ったわ！」
「いやまぁ、部屋に入ってきた時からチラチラ見えてたけどな……」
「――っっっ！　そこは気にしないで……！」
無理やりテンションを上げて恥ずかしかったのか、スラルの白い頬が少し赤くなる。恥ずかしがるくらいならやんなきゃいいのによ。
「でも、確かにこれはちょっといいな」
「！　でしょう？」
「ああ、手料理なんて久しぶりだ」
テーブルに所狭しと置かれた料理の数々は、どれもこれも美味しそうな匂いを漂わせている。
「オムライスにハンバーグに……おっ、へんでろぱ、それにこっちは俺の故郷の名物、焼き肉そうめんじゃねぇか」

「ん、一生懸命調べて作ったから……」
なるほどな。これを作って待ってたのなら遅れた事を怒るのも無理はない。冷めたら美味しさも半減だ。正直、かなり嬉しい。手料理なんて食べたのは本当にガキの頃以来だ。
魔王と手料理ってかなりミスマッチだが――いや、そういうのはいい。そんな無粋な事を考えるのは失礼だ。
俺はスラルに向き直る。
「……あー、その……ありがとな？」
「む……別に大したことないけど？」
「いや、それでもだよ。どれも美味そうだな……食べてもいいか？」
俺は近くにあったへんでろぱを食器と共に手に取る。俺、こかとりすの肉が好きなんだよなぁ。唐揚げにしても美味いし。
「ん……ちゃんといただきますって言ったらいいわよ」
「ああ、それじゃ――いただきます」
そう言って俺はへんでろぱを口にした。
……あれ？　何か味が――がぁぁぁッッ!?
――瞬間。
身体の内側が弾け飛びそうな衝撃を味わった。
熱い、熱い、熱い!!!
身体が作り変えられるような痛みを味覚から感じる。ていうかこの感覚何処かで――ッ!?
俺は次の瞬間、それを思い出した。
これは、あれだ。そう、魔人化した時の――
――俺は再び、魔人化を経験していた。
「――どう？　美味しい？」
「――あ？」
「あ？　じゃなくて！　美味しかったの？」
「……」
スラルの言葉で我に返る。
俺はへんでろぱを持ったまま恐る恐るスラルに聞いてみた。
「……まさかとは思うがお前、料理に自分の血とか入れてないだろう

な……？」
「!?　し、失礼ね！　そんなの入れるわけないでしょ!?」
「だよな……」
　さっきのは何かの間違いか……？　と匂いを嗅いでみる。美味しそうなへんでろぱの匂いだ。
　一度へんでろぱを置き、今度は焼き肉そうめんを手に取る。
　香ばしい匂いが食欲を唆る。俺の故郷の料理で好物の一つだ。
　そしてゆっくりとそれを口に運ぶと。
「――――ッッッ!!??」
　今度はもっとダイレクトに衝撃が来た。
　ああ――身体が痛くて熱い。
　――俺は三度目の魔人化を幻視した。
「なに？　どうしたの？」
　俺の様子を不審に思ったスラルが首を傾げている。
　俺は焼き肉そうめんをテーブルに置くと、スラルに向かって叫んだ。
「まっっっっっっっずい!!!」
「――――え？」
　スラルが思わず間の抜けた顔になる。
　それにも構わず俺はまくし立てた。
「お前の料理はどうなってんだ!?　俺、既に魔人なのにまた魔人化したのかと思ったぞ！　本当に変な物入れてるんじゃねぇだろうな!?」
「な!?　そんなわけないでしょ!?　それにマズいなんて……！」
「……なら食ってみろ。お前が美味しいって言ったら俺は床に頭擦りつけて足でも何でも舐めてやる。……マズいというかもっと恐ろしい何かだった気がするがな」
「……」
　スラルが俺の本気度を感じ取ったのか自分の手料理を見て冷や汗を垂らす。
　スラルはおそるおそる、ゆっくりとへんでろぱを口に運び――
「――――っっっ!!!」

表情が固まった。言わんこっちゃねえ。
俺はスラルの顔の前でひらひらと手を振ってやる。
「おい、大丈夫か？」
「――――あ」
どうやら気がついたようだ。
「あれ……私は魔王なのに、魔王になったわ……」
わけがわからない事を言うスラル。俺の苦しみを知ったか。
「とりあえずこの料理は無しだ。いいな？」
「う、うん……」
スラルはまだ少し混乱しているようで、料理をチラチラと見ては手を差し出したりしていた。悪い事は言わないからやめとけ。
「……多分、調理途中に何か変な物が入ったんだろ。今回のは事故だ」
「多分そうよね……うん、うん。わかった、次はちゃんと作るわ」
「……ぁぁ」
「声が小さすぎる!?　もっと期待して！」
正直、恐れしかない。
というか今回のこれが事故だったとしても、次で駄目だったら――
……考えるのはやめておこう。それが懸命だ。
「コックにでも何か作ってもらおう」
「しょうがないわね……」
「ああ、その間さっき言ってた仕事の話してくれよ」
「……ふぅ、そうね」
スラルは部屋の外に控えている魔物隊長に料理を持ってくるように伝えると、気を取り直してベッドに腰掛けた。
「さっきは魔軍参謀としての仕事って言ったけど……今回はどちらかと言えば普通に魔人としてやることと大差ないわ」
「魔人として……人間でも襲うのか？」
「一応軍は率いてもらうけど……貴方の仕事は、とある人間の相手よ」
「――人間？」
俺は訝しげに眉をひそめる。その人間はわざわざ魔人を充てがわないといけない程厄介なのか？

「その人間とその人間が率いる集落は、これまで魔軍が何度も撃退されてるの」
「へぇ……」
どうにも身に覚えのある話だな。ひょっとして何処も同じようなものなのか？
俺は他の人間の集落の話を殆ど知らない。そういうのは長老達の仕事だったしな。何にしても少し面白そうだ。
「それで魔人にその人間を倒してもらって制圧する作戦か？　別に俺じゃなくてもいい気もするが」
「……駄目。出来れば上位の魔人じゃないと」
「俺が上位の魔人かはさておくとして、それは何でだ？　それなりに強い魔人はいるだろ？　そいつらでも――」
「――倒されたの」
「……は？」
「魔軍と一緒に何体かの魔人を送り込んだけど、それすらもその人間に倒されたのよ」
「！　それは……」
何だその無茶苦茶な話は……。
スラルはその名を、俺が戦うことになるであろう人間の名を告げた。
「その男の名前は――ガルティア」
――獣の王と呼ばれた人間よ。

ムシ使い

――ルドラサウム大陸南方

他の地方より温暖で乾燥した気候の大地に一つの集落があった。

そこに住む人々は――普通の人間ではない。

「見てみてー！　私の紋様ー！　綺麗でしょー？」

「あら、良かったわねぇ」

「婆ちゃんに感謝しないとな」

「うん！」

道行く人々は皆、褐色の肌に緑の髪。そして身体には一族特有の刺青。

この刺青は、集落の人々にとって大切な風習であり、健康や様々な願いを家族に込められて彫るもの。

立ち並ぶ出店では多くの食材が売買されており、活気に満ちていた。

「おいおい、そんなに食うのか？　いつもより多いじゃないか」

「仕方ねぇだろ？　昨日から俺は六匹もムシがいるからな。こいつらの為にもちゃんと食わねぇと」

『わーい、ご飯ー』

「おうおう、ちょっと待ってろよ」

普通の人間よりも遥かに多い食材を買っていった男は、何処からか聞こえてきた声と会話して踵を返した。

だが、よく見てみるとそれは男だけではない。市場にいる殆どの人が人間一人が食べるよりも多い食材、最低でも三倍以上の量を買っていき、小さな子供ですら二倍の量の食事を取っていた。

それは彼らの体内に居る存在が関係していた。

「へへーん、どうだ。昨日の儀式でとうとう二匹までムシを入れたんだぜ」

「いいよなー。俺も早くじっさまに認められてムシ増やしたいよ」

『よろしくね』

『こちらこそよろしく頼む』

彼らの体内にいるのは――ムシ。
大陸で自然発生した動物、昆虫、とり、サカナ、植物など、魂のない様々な生物の総称だ。
この集落にいる人間はムシ使いと呼ばれる一族であり、このムシを自身の身体に宿し、共存していく人々である。
ムシ使いはその身に宿るムシの分まで食事を取らなければならないため、一族全員がムシ使いであるこの集落では、食材の消費量は普通の集落の数倍以上。
更に彼らはムシの好みにあった物を食べなければならないため、最もグルメな一族でもあった。
そんな彼らの中でも一際目を引く存在がいた。
「がつがつ……おっ、やっぱ三丁目の爺さんの店のこかとりすの唐揚げは美味いな。……んっ、こっちのザワッスの味はちょっといつもと違うな。調味料変えたか……？　これはこれで美味いけどよ」
「……あの人は流石というかなんというか」
「朝見かけた時も食ってたよ。というか一日中食ってる」
「……相変わらずよね」
男の周囲には大量の食事が積まれており、それを次々に口にしては味の批評をしていた。
大量の食事を取るムシ使いの中にあって更にその上をいく食事量。
整った顔立ちに片目を隠す額当て。刺青が刻まれた肉体は鍛えられており、力強さを感じられる。
彼こそがこの集落の長。
――獣の王、ガルティアだ。
そんなガルティアの元に小さい影が近づいていく。
「ガルティア！」
「むぐむぐ、おっ、何だ小僧か。今日も来たのか」
近づいてきたのはガルティアの半分程の背丈。ムシ使いの子供であった。
その子供は少し怒ったようにガルティアに言い放つ。
「ガルティアがさっさとムシを沢山入れるコツ教えないからだろ！」

「いや、いつも……んぐ、大人になったら、もぐ……教えてやるって言ってるだろ、ごく、ぷはぁ」
「食べながら喋るなっ！」
ガルティアは喋りながらも食事の手を休めない。ガルティアにとってはいつもの事ではあったが、少年は憤慨してしまう。
食事を続けなければ体内のムシを飢えさせてしまうので食べることはやめないが、彼は器用に食べる口と喋る口が別であるかのように喋り始めた。
「……毎日毎日それ聞いてくるのは、何でだ？」
「え？」
「理由を教えろ。納得がいく理由なら考える」
ガルティアは少し真剣な口調で問いかけた。すると子供は語気を荒くして、
「それは！　早く一人前のムシ使いになって魔物を倒すために決まってるだろっ！」
「……」
「うっ……な、何だよ……」
「……はぁ、やっぱりな。おい小僧、ちょっと聞け」
「え？　い、いや……」
「いいから聞け」
ガルティアは予想していたのか、一度息を吐くと強い口調で少年に向かって聞けと迫る。その有無を言わせない視線と態度に少年は逆らえなかった。
「魔物と戦いたいってのはいい。お前の両親が魔軍にやられたのは俺も知ってる。腕の立つ奴らだったが、戦場だ、当然死ぬ時もある。その仇討ちがしたいのはわかる。その事について文句を言うつもりはねえ。何なら俺の責任でもあるしな」
「……っ」
集落の長として先頭に立って戦うガルティアと少年の両親は友人だった。いつもガルティアの後ろに付いてきて戦っていた両者を、戦争で失ったのは偏にガルティアの責任でもある。

だから、その事は咎めない。言いたい事はもっと別の話だとガルティアは語る。
「小僧だけが戦って死ぬなら俺は何も言わねえ。勝手にしろ。……でもよ――」
ガルティアは敢えて厳しく少年を突き放した。そうしなければ彼と彼と共に生きる者の為にならない、と。
「――小僧が死んだらお前の中にいるムシはどうなるかちゃんとわかってるのか？」
「あ……」
その言葉に稲妻が落とされたように目を見開く少年。
なおもガルティアは続ける。
「わかってんだろ。当然死ぬ。それに付き合わされるムシはたまったもんじゃねえよな？　死ぬ前に躰から放せばいいって問題じゃねえぞ？」
「……っ」
「お前のムシはそんな事を承知の上でお前に付いていくだろうな。ムシ使いとムシの関係性は人それぞれだ。俺が態々口出しする事もねえ。……だがムシの気持ちも考えてやらねえで何がムシ使いだ？」
ガルティアはいつの間にか食事の手を休めていた。
「小僧にとってのムシは戦う為の道具なのか？　小僧にとってのムシは都合の良い――」
「……ち、違う!!」
少年の強い声がガルティアの声を遮る。
「……へえ、じゃあ何だ？」
少年はガルティアの問いに答えた。
「僕にとってのムシは……家族だ！　戦う為の道具なんかじゃない！」
「……へっ、ちゃんとわかってんじゃねえか」
「えっ……？」
ガルティアはふっと笑って気を霧散させると食事を再開した。
目を丸くする少年にガルティアは最後のアドバイスを送る。

「その気持ちを忘れなきゃ上等だ――精々気張りな」
「あ――！」
苦笑して料理を口に運ぶガルティアに少年は気づいたように目を見開いた。
「あ、ありがとうガルティア！」
「別に何もしてねえよ。それでもお礼がしたきゃ飯でも――」
ガルティアがぶっきらぼうにそう言おうとした瞬間――
「――――敵襲――っ!!!!」
見張り台にいる者の声が集落に響き渡った。
「女子供は室内に隠れろ！　魔軍が来るぞ!!」
「男達は町を守れ！　兵は既に戦場に向かっている！」
大声で飛び交う非常事態を意味する語句で、集落がざわつく中、ガルティアは頭を掻いた。
「おー、来たか。今日は早いな」
何とも軽い様子で言うガルティアに少年が不安がる。
「ガ、ガルティア……」
「心配すんな小僧。ちょっと食い足りないのが不安だけどな。さて――」
「――こんなところで何を油を売っておるガルティア!!」
ガルティアの言葉を遮ったのは背を丸めた老人だった。
その者の肩書を少年が呟く。
「ちょ、長老……」
「じっさまか。どうした？」
「どうしたじゃあるまい!!　今日は町の外で待機じゃと言うたじゃろうが!!!」
怒り心頭の様子であるムシ使いの長老にガルティアは決まりが悪そうにする。
「いや、腹が減ったからちょっと戻ってきただけさ。食い終わったら戻ろうかと……」
「朝から食い散らかしといて何が戻ってきたじゃ！」
まったく、と長老は苛立ちが収まらない様子でガルティアを睨む。

「それもこれもお前がさっさと魔軍を退けんから……」
「おいおい無茶いうなよ。向こうの数が多すぎるんだ。これでもよくやってる方だぜ？」
「それでも何とかするのがお前の仕事じゃ！」
獣の王と呼ばれる一番の戦士であり、町の食料を一番に消費する大食らいのガルティアの責任なのだ。そう長老は言う。
「……それを言われちゃ立つ瀬がないな。ま、仕事はこなすさ」
「ふん！　なら、さっさといけ！」
「へいへい……」
やれやれと言わんばかりに立ち上がるガルティア。長老はいつも大体こんな感じだ。慣れたものであり特に思うところもなく準備をする。
愛用の剣を手に取りながら、ついでとばかりに少年に向き直る。
「小僧もお家に帰りな。ちょっくら奴さん追い返してくるからよ」
「ガルティア！　早くせんか！」
「……行った方がいいんじゃない？」
「……だな。やれやれ、本当にせっかちなじっさまだ」
そう言って今度こそガルティアはその場を後にし、戦場に向かっていった。ガルティアが町を立体的に動いて最短で飛び回るのを見送る。
その場には少年と長老だけが残った。
「……お主もガルティアにあまり関わるな。邪魔になる」
「は、はい。ごめんなさい……」
「ふん……！」
最後まで苛立ちながら鼻を鳴らすと、長老は去っていった。
少年は苦々しい気持ちになりながらも戦場に向かったガルティアを思う。
「ガルティア……」
今にも戦場の音が風に運ばれてきそうな町の中。
少年はその場から立ち去った。

――ムシ使いの集落、北の荒野

乾燥した大地では両軍が既に激しい戦闘を行っていた。

「進め進め――!! 今日こそこの土地を、奴らの血を魔王様に捧げるのだ!!」

攻勢を仕掛けるのは魔軍。

魔物将軍は声を張り上げ、部下を激励する。

魔王様からこの地の攻略を任されてきて既に数年。この地にいる魔軍の中では古参の魔物将軍は自身の作戦の是非を見返す。

策という程のものでもないが。ただ、兵を2つに分けてひたすら連日襲撃し続けるだけだ。

兵の数ではこちらが圧倒的に上。故に一日毎に攻める軍を分けて相手に休む暇を与えない作戦だ。

そうしているのには理由があった。これも単純な理由、奴らは人間の中でも格段に強いから。

最初は全軍で攻め込み、数で押し潰そうとしたが奴らのその強さ、特異性に少なくない被害を受け、痛い目を見た。

何せ相手の兵の多くは魔物兵と互角以上に持ち込み、中には魔物隊長や魔物将軍を倒せる人材が居り、それどころか魔人すら倒してしまった人間がいるのだ。その時は兵達の戦意を立て直すのに苦労した。

バカ正直に力技で勝てるという考えはこの時に捨てた。幸い、奴らは食事を満足に取れなければ力が大きく落ちる。出来る限り補給の暇を与えず、疲労を蓄積させる方がいいと踏んだ。

今の数倍の兵力を持って包囲すれば流石に倒せるだろうが、魔軍の戦場はここだけではない。それだけの人数をここに集めてしまっては他の戦場に支障をきたすかもしれないし、魔王様に泣きつくような情けない真似は出来ない。

一応、この地ではそれなりの被害が出るため定期的に援軍が送られてくるが、派遣されてくる将兵は何もわかっていない。それも仕方のない事ではある。人間など、本来は脆弱な生き物。ここの奴らが例外

なだけだ。
奴らには気をつけろ、と言って聞かせてみてもやはり心の何処かに慢心があるのか犠牲は減らない。
毎日鬱屈たる日々だが、悪いことばかりではない。
聞けば、今日か明日には援軍が送られてくるらしい。それも魔人と一緒に。
更に聞けばその魔人は新しい魔人四天王に選ばれる程の実力者で、魔王様直々に魔軍に関わる魔軍参謀という大任を任せられたらしい。
聞けば聞くほど頼もしい限りだが、出来れば少し、成果を報告出来るようにはしておきたい。今日の戦場はどうなるか。
前線は意外と膠着状態だ。
今日はひょっとすれば――
「で、伝令！」
「――どうした！」
魔物兵が駆け寄って報告してくる。どうやら焦っているようだが、まさか……。
「さ、左翼で……敵が……」
「いいから早く言え！　左翼で何があった!!」
「左翼で、多くの魔物兵がやられています！　その中には魔物隊長も何体か……」
「ちっ！　ええい、さてはまたいつものパターンか!?　ちょっと待ってろ！　策を考える！」
「えっ!?　どのような状態かまだ……」
「大体分かる！　誘われたところをアレで一網打尽だろう！」
魔物将軍は前線での被害を受け、対応を考え始めた。

――戦場左翼。
そこでは魔軍にとっての悪夢が広がっていた。
「な、何なんだよこれ――!!??」
魔物兵は自身の身体に起きた変化に絶叫する。身体が溶け始めて

いるのだ。
　そういったおかしな症状は彼だけではない。
「痛ぇ――！　く、苦しい――死ぬ……っ」
「身体が痺れて動かねぇ……！」
「うおおおっ！　あっちにお花畑が見えるぞぉ――！」
　症状は様々。彼らが受けたものは即ち――
「喰らえっ！」
「ぎゃあああっ!?　痛ぇ――っ!?」
　――ムシ使いが使う猛毒であった。
　魔物兵達は何故か敗走していくムシ使いの兵を追撃しようとしたところで気づく。地面に毒が撒かれているのだ。
　それに気づけば今度はムシ使い達が反転し、毒の追い打ち。そしてそのまま突撃してくる。
　その地面には猛毒が撒かれている筈だが――ムシ使いに毒は効かない。
　彼らは魔物よりも遥かに高い耐性と抵抗力、そして自己再生能力を持っているため普通の人間が触れただけで死ぬような猛毒ですらピリッとする程度にしか感じない。
　故に毒を戦場で撒き散らすような戦術が使えた。
　だが、中にはムシ使いと同じように毒に耐性を持った魔物もいる。
「死ねえっ！」
　手に持った斧をムシ使いに振り下ろす。
　するとムシ使いは突如、身体の動きを止めて構える。
「――ふんっ！」
「な、なっ……!?」
　魔物兵が振るった斧がムシ使いの肌に触れた途端、硬いものにぶち当たった時のように弾かれる。
「隙ありっ！」
「ぎゃああっ!?　あちい――っ!?」
　その隙を突いた他のムシ使いが放つ炎に焼かれた。
　ムシ使いは入れたムシによって様々な能力が行使出来る。毒、硬質

化、火炎放射、飛行、探知等――それは様々でありそれらの能力を戦場にいるムシ使いは最低四種類は会得している。
　ムシ使いは入れるムシの数で実力が決まる。四匹で一人前のムシ使いと認められるのだ。当然、兵達はその中から選ばれている。
「くそっ、何なんだこいつらは――!?」
「がふっ――!」
　この状況に毒づきながら何とかムシ使いを倒す魔物隊長。
　それを見たムシ使い達が大声で仲間に呼びかける。
「おい！　仲間がやられたぞ！　囲め――!」
「ぐぅ……人間如きが――っ!!」
　何人かのムシ使いに攻撃され、魔物隊長が激怒したように剣を振り回して何人かを吹き飛ばす。
「強いぞこいつ――!」
「応援を呼べ――っ!!」
　多勢で魔物隊長を仕留めようとするムシ使いの兵に魔物隊長は苛ついた。
「ええい！　どれだけ呼んでも返り討ちにしてやる――!」
「――おお、そうか。んじゃ行くぞ」
「――え？　ガハッ――」
　突如、現れたムシ使いの剣を腹に突きこまれて魔物隊長は絶命する。
「よっと」
　死んだ魔物隊長の腹から彼が剣を抜く。その剣は赤く、刀身に骨のようなギザギザが付いた細身の長剣だった。それを振るうのは集落の長である青年。最強のムシ使いである獣の王。
　その姿にムシ使い側の兵が沸き上がる。
「ガルティアが来たぞ――!!」
「よし、遅れを取るな！　続け――!!」
　逆にその一方で反対側、ガルティアを知る魔物兵はその姿に身体を震わせる。
「ひぃいっ!?　あいつ、前に魔人を倒した奴じゃねぇか!!」

「化け物じゃねぇか!?」
「こ、殺される――」
口々に怖気づいたような言葉を吐き、戦意を半ば喪失させる。
「おし、敵さんびびってるな。突っ込むぞ」
「おおおおおおおおおおおおおおおおおっっっっ!!!」
ガルティアが先頭切って敵陣に向かっていき、背後から兵達が追随した。
左翼は完全にガルティアの――ムシ使い達の独壇場だった。

スラルの命令

――一方その頃

荒野に一つの集団があった。

魔物兵が列をなして歩みを進める。数にして三個軍、六万の軍勢である。

心なしか魔物兵達は張り切っているようにも見え、熱く乾燥した大地をむしろ嬉々として行く。

その中心にはいつものように魔軍の指揮を担当する魔物将軍に魔物隊長。そして――

「――暑いな。まだ着かねぇのか？」

「はっ、もうじき南方司令部に到着いたします」

「……もうじきってどれくらいだ？」

「……後、３０分程でしょうか」

「……」

近くに控えていた魔物将軍に具体的な時間を聞いてげんなりしているのは金色の髪に蒼の剣を持つ魔人。

魔物兵らが張り切る原因となっている魔人四天王にして魔軍参謀、レオンハルトだ。

魔王城から軍勢と共に出立して数日。

大陸東方から人間の身では強行軍に近い速度でここまでやってきたのはいいが、レオンハルトはその気温の高さにまいっていた。

……身体は丈夫な筈なんだがな、くそっ。

レオンハルトは言うまでもなく魔人である。生物としてある程度耐性が強まっており、この程度の暑さで健康を害するような事はない。

だが、気分は別の話だ。レオンハルトは大陸東北部の温暖な地方出身。この暑さに慣れず少なくない汗を掻いていた。

スラルの奴……こんな仕事押し付けやがって。帰ったら覚えてろよ

レオンハルトの主であるスラルは今、この場にいなかった。

元々魔王城からあまり離れることが少ないスラルは今も快適な部屋でゆったりとした時間を過ごしているのだろう。そう考えるとちょっとイラッとする。それくらいレオンハルトはこの暑さを不愉快に感じていた。

せめてもうちょっと涼しければ心に余裕が出来るのだが。そう考えたところで行動に移す。

「……ちょっとうし車で涼んでくる」

「はっ、かしこまりました。何かあればお呼びいたします」

魔物将軍はこのサボタージュ宣言にも律儀に応じてみせる。このような姿を見せては威厳がなくなるのではないかと思うが、今の所そんな様子はない。

レオンハルトは遠慮なく後方で物資を運んでいるうし車の元に向かう。

すると輸送隊を指揮する魔物隊長が気づいて近づいてきた。

「これはレオンハルト様。なにか御用でしょうか？」

「ちょっとうし車の中で休む」

そう言ってレオンハルトがうし車の中の一つに近づく。

「お、お待ちを！」

「あ？」

「ひっ……」

中に入ろうと荷車の入り口に手をかけたところで魔物隊長に止められてしまう。

暑さで苛ついているレオンハルトの声に身体をビクリとさせたが、それでもなお制止の言葉を掛ける。

「そ、そのうし車はちょっと……いや、かなりマズいと言いますか……」

「はぁ？　何でだ？」

「あ、ええと……そ、そう！　そのうし車にはちょっと危ない物が入っていますのでレオンハルト様がお休みになるのには相応しくないかと！」

「危ない物って何だよ」

「それは……あっ、糞です！」
「糞？　敵にでも投げつけんのか？」
「そうです！　それはそれは臭うので休むには適してないのです！
ささ、他のうし車に……」
「……糞がある割には全然臭わねぇんだが」
「うっ……それは……」
「……？」
　レオンハルトは魔物隊長を訝しげに見る。どうにも怪しい。嘘をついているような感じだ。
　それにさっきから今思いついたかのように咄嗟にその場しのぎを口にしているような……。
　このうし車で休ませようとしないのは何故なのか。
　……見ちまえばいいか。
「……ちょっと確認するぞ」
「ああっ！　お待ちを!!」
　魔物隊長が必死に止めようとしているが、魔人であるレオンハルトには逆らえない。そのまま入り口に手をかけて中を覗くと――
「――あっ」
「――！」
　レオンハルトと中にいた少女の目が合った。
　ここには居ないはずの彼女にレオンハルトは一時呆然とする。
　しかし、次第にその姿を脳が理解していくと――
「……なぁ？」
「なっ、なに？」
「……何でここにいる」
「え、えっと……」
　ジトーっと視線を浴びせるレオンハルトに、少女は目を逸らしてあたふたとしていたが、やがてその状況を誤魔化そうとしたのか、はたまた隠れていることがバレて気まずい空気を霧散させようとしたのか――
「――き……来ちゃった……」

と何故かはにかんで見せた。
「……」
その上目遣いでいたずらっぽく誤魔化そうとする姿が妙に似合っていて。だからこそレオンハルトはイラッとする。
レオンハルトはそのままその苛立ちを抑えようとせずに手を伸ばし、少女の頬を引っ張った。
「――ふんっ」
「い、いひゃい！　いっ――ちょ、ちょっと痛いじゃない！　何するのよ！」
「お前が何してんだ――ッ!!」
レオンハルトはその少女――魔王スラルに怒声を浴びせた。

スラルが隠れていたおかげでそのままうし車で休む気も起きず、スラルを連れて俺は陣の中央に戻ってきていた。
「こ、これは魔王様――何故ここに……？」
魔物将軍が恭しく膝を折り、その巨体を小さくさせてそれを問う。
魔王の姿を見た魔物兵がざわつくが、魔物隊長らが周囲に目配せすると直ぐに沈黙する。
「ん、そうね……」
そう呟いてスラルが横に立つ俺をちらりと見上げる。明らかに困っている。
自分で蒔いた種くらい自分で回収して欲しいものだが……俺は内心溜息をつくと一歩前に出た。
「――魔王様はお前たちの働きを見にやってきた」
「！　それはどういう……」
魔物将軍を皮切りに疑問が伝播する。
「別に悪い意味はない。ただ……この戦いは俺達の手で終止符を打たれる事を魔王様は確信している」
「……我々の手で？」
「ああ。戦いが長引いている事は魔王様も当然ご存知だ。だからこそ

これだけ大規模な援軍を用意し、戦いを終結させる事にした。そして、その勝利の美酒を共に分かち合おうとやって来た」
おお……！　と魔物兵から感嘆の声が漏れる。おそらく戦いに勝てる事が確実ということで略奪でも楽しみにしているんだろう。
魔物兵が沸き上がったタイミングで俺はスラルに顔を向ける。そうですよね？　という同意、パフォーマンスだ。
「……そうよ」
「は、はぁ……そうですか。畏まりました」
魔物将軍は釈然としていないようだったが、疑問を追及することはない。
そもそも魔軍のトップである魔王が視察に来ても何も問題がないからだ。兵にしたって喜びこそすれ嫌がることはない――多分。怖い上司ならともかく、スラルだしなぁ。プレッシャーもそこまでないだろう。
とりあえず適当でも建前を置いておけば十分だ。本音が下らなそうだしな。
「では、魔王様。行軍を再開しても？」
「……ええ、構わないわ」
「……では、その通りに。魔物将軍」
「はっ。……行軍再開――！」
魔物将軍の号令で魔物兵が一斉に動き出す。
「……後で教えてもらうからな」
「ん……はぁ、仕方ないわね」
小声でスラルと短いやり取りを済ませ、俺達魔軍は再び南方の司令部に向かって進んだのだった。

そうして更に進んでいき――俺達は魔軍の陣地にたどり着いた。
「……お待ちしておりました。魔王様、レオンハルト様」
早速、スラルと共に司令部に入ると魔物将軍が恭しく膝を突く。
俺はそれに頷くと直ぐに声を掛けた。

「お前がここの責任者でいいんだな？」
「はっ、僭越ながら私がここの軍のまとめ役を務めさせて頂いております」
「なら、早速戦況を教えてくれ」
「はい、ではこちらに」
　魔物将軍はそうして俺に椅子を勧めてきた。続いてスラルの方を向くと、
「魔王様もどうぞ」
「ん、ありがとう。……それと私は何か口出しするつもりはないから気にせず進めて」
「畏まりました。……難しいですがそのように」
　魔王の自分を無視していい、という命令に一応頷きを返すと、魔物将軍はテーブルに広げられたこの辺りの大きな地図を見て、戦況の説明を始めた。
「現在、我々はここ、この陣地より南方にあるムシ使いの集落へ攻勢を続けております」
　魔物将軍は大きな手でここと、ここ。とそれぞれの拠点を指差す。
「敵と交戦するのはその間のここ。見晴らしのいい荒野で、敵の数はおよそ一万」
「……一応聞いてはいたが、随分と少ないんだな」
「はい。敵との兵力差は倍以上。……ですが情けない事に、我々は奴らに敗走し続けております」
「……そうか」
　ここに来る前に事前情報で聞いてはいたが、やはりここの戦況は魔軍が劣勢のようだ。
　魔物将軍の声音からも少し覇気が下がる。
「やっぱ強えのか？　ムシ使いは」
「ええ、奴らの能力はとても厄介でして。炎を出したり硬くなったりと魔物顔負けの多彩さです」
「……面倒な奴らだな」
「その中でも特に厄介なのが毒でして」

「そういやあいつらは毒効かないんだったか？」
「よくご存知で。連中は生物が触れただけで死んでしまう程の猛毒でもぴくりともしないようです。それを向こうは利用しており……」
「利用？」
「奴らは戦場に毒を撒き散らすのです。毒が効かないので乱戦になっても味方に構わず毒を浴びせてきますし、追撃もまともに出来ません」
「……それはキツいな。ほんとに微塵も効かないんだな？」
「はい。一度こちらも奴らが知らないであろう猛毒を投げつけてみたのですが……連中、喜んで口にしていました」
「マジかよ……」
ムシ使い。
大食らいでムシを身体に入れる事で多彩な能力を使う人間か。
強いだろうとは思っていたが、ここまで魔軍を苦戦させる程とは思いもよらなかった。
様々な能力を戦術に利用してくるのは対応しにくいだろう。魔物将軍も困り果てている様子が目に浮かぶ。
それにしても毒か……
「……スラルの料理も毒みたいなもんだよな。投げつけてみるか？」
「し、失礼ね!!　そこまで酷くないんだからっ!!」
「……」
「あっ」
俺の言葉に反応したスラルが憤慨したように立ち上がるも、それを見た魔物将軍が目を丸くして固まる。
魔物将軍はまさか魔王がそんな反応をするとは思わなかったのだろう。スラルはそれに気づいて頬を染めると、
「……な、何でもないわ。続けて」
「は、はぁ……？　……では、続けます」
何事もなかったかのように座り直した。
魔物将軍は我に返ったように俺とスラルを交互に見るも、見間違いだと思ったのか勝手に納得したのかは分からないが同じく何事もな

かったかのように続けた。
「クク……」
「……っ、後で覚えてなさいよ」
俺が含み笑いをスラルに向けると、羞恥で頬を染めたスラルが睨んでくる。なるほど、これは面白い。
今度から何かあったらこういう風にからかってやろう。やり過ぎれば威厳が無くなるため、俺の職務にも影響が出る諸刃の剣だが。
俺は今後のスラルの弄り方を一度脳の片隅に仕舞うと、改めて魔物将軍の話に耳を傾けた。
「そしてそれに加えて最も危険なのが――」
「あー、ガルティアだったか。魔人を倒したっていう」
「……その通りです。ムシ使いの長である奴との戦闘での被害は馬鹿になりません。先程も奴に他の魔物将軍を狩られ、敗走してしまいました」
「人間なのに無茶苦茶だな――って、さっき戦ったのか？」
俺は人間時代の自分を思い出していたが、耳に聞こえた気になる魔物将軍の言葉を確認する。
「はい。つい2時間前までは南の荒野で戦闘していました」
「ふぅん……」
俺は目を瞑ると、腕を組んで椅子に背中を深く預けた。
考える。どうやって相手に勝利するか。どうすれば相手の戦術に対応出来るのか。
……いや、そんな直ぐには思いつかないが。俺は凄腕軍師って訳じゃないしな。
かといって自信がない訳でもない。魔人じゃない時から集落の人間使って部隊指揮、もとい戦術モドキのような事はやっていた。それ故に向こうの作戦の有用性も理解出来る。要するに俺もやってた首刈り作戦だ。
魔軍は魔物将軍が組織の要。倒されれば魔軍の秩序は崩壊する。
向こうは毒だなんだと色々やってはいるが、結局の所それは撹乱の手段でしかない。幾ら魔物兵を倒したところで魔物将軍を倒さない

事には魔軍は戦い続ける事が出来る。魔物兵を皆殺しにでもすればその限りではないが、人間と魔物では戦える兵の数に圧倒的な差がある。そんな事が出来る人間の軍隊がいれば見てみたいものだ。
やはり魔軍を倒すには魔物将軍や魔人などの大物を取って敗走させるしかない。向こうもそれは百も承知の筈。
……なら、結局そういう事だな。
俺は目を開いて言った。
「――よし、今行くか」
「……はっ？」
間の抜けた声を出す魔物将軍に俺は説明する。
「二時間前に戦ったばっかなんだろ？　連れてきた援軍で戦えば向こうも疲労してるだろうし、そこそこ戦果出るだろ」
「！　それは確かに……奇襲にもなりますし、他にも――」
「ああ、別に説明しなくていい。後は魔物将軍と相談してくれ。俺よりもお前達の方がそういうのは得意だろ。待ってるから出来るだけ早くな」
「は……はっ！　直ちに！」
俺の言葉で作戦の長所に気づいた魔物将軍は直ぐ様駆け出して、司令部を後にした。やっぱ魔物将軍って、頭の回転早いよな。俺よりも。発言が役に立ったと自慢したいが、敵に敗北してメンタルが若干弱ってた魔物将軍も通常なら援軍が来た時に提案していただろう。援軍を率いてきた魔物将軍達もそれを提案しようと色々話あってるかもしれない。魔軍参謀っていらねぇな。
……さて、後の問題はスラルの命令だな。
「……レオンハルト、ちゃんとわかってる？」
魔物将軍がいなくなり、二人きりになった司令部でスラルは念を押してくる。
俺は苦虫を噛み潰した表情で、
「ああ、わかってる。めちゃくちゃ面倒だけどな。お前の命令が無ければこんな戦い、直ぐに終わるっていうのによ」
「うん、わかってる。でも……お願い。駄目だったらそれでもいいか

ら」
「……」
スラルの懇願するような声色に俺は何も言えなくなる。
……まったく。こいつは魔人に命令する時、いつもそんな表情してんじゃねぇだろうな。
俺は頭を掻いて立ち上がる。見上げている自らの主に俺は苦笑。
「それが正しいのかは俺にはわかんねぇけどよ――それでもお前が頼むなら叶えてやるのが俺だ」
「――っ！　レオンハルト……」
「隠れて付いてきた理由も聞こうと思ったがやめだ。あっさり終わらせてやるからちゃんと俺の活躍を見とけ。上手く行けば俺の時みたいに一時間足らずで撤収だ」
「う、うん！　お願いねっ……！」
「はっ……」
スラルの笑みを見て満足した俺は司令部を出ていく。
さて、俺の主の為に遊んでもらうぜ――ガルティア。

やるべき事

ムシ使いの集落。その外周部。
先刻の魔軍との戦いで勝利を収めたムシ使いの兵達は労いを兼ねた補給を行っていた。
ムシ使いは通常の人間の数倍は食事を取る一族。常に魔軍の警戒を行っている彼らもこういった休息の際に集落から運んできた食料を一心不乱に口にしていた。
「おー今日の雑炊も出汁が利いてて美味えな。給仕係はいい仕事してやがる。こういう時の食事には最適だな」
そして他のムシ使いと同じく料理を口にかっ込んでいくのは獣の王ガルティア。
相変わらずの味の批評もそこそこに彼は食事を取りながら思考する。
……余裕がねぇな。
ガルティアは周囲の兵――いや、集落の現状をそう評する。
兵達は魔軍を今日も追い返す事が出来て高揚している者がほとんどだが、全体を見てみるとちらほらと下を向いて陰鬱とした表情の兵がいた。
これから時間が経つにつれて更に半分の兵はああいった状態になるだろう――現実を思い出して。
――彼らは皆一様にとある思いを抱いていた。
それは、この戦いがいつ終わるのか、ということだ。
魔軍がこの地域を侵略しようと攻めてきてもう十年以上経つ。
最初は魔軍相手に勝利を収め続けていて皆が感じていた。この戦争には勝てる。魔物が何するものぞ、怖れる事はない。
しかしその状態が一年、二年、五年と経ったらどうか。戦争が始まった当初と同じ思いを今も抱けるのか。
――答えは否である。今の兵達は常に不安を内心に抱えていた。
いくら魔物達を追い返しても、数を減らしても、魔軍は諦めなかった。数がある程度減ればまた援軍を送ってくる。

彼らは魔軍を舐めていたのだ。奴らの数を把握出来ていなかった。
自分達の仲間はこの地域にいる精々数万という数だが、魔物の数はそれこそ世界中に存在する。極論を言うなら魔軍と戦うという事はそれら全てを敵に回す可能性があるということ。総力戦など行われた日にはすり潰されてしまうだろう。
故に魔軍相手に使える戦術――いや、戦略は一つ。彼らの旗印である魔人、そして魔王を倒すことだ。それだけがこの戦争に勝利する一番の方法。
しかし、それが可能なのかと聞かれれば皆首を傾げるだろう。
……やるしかねえけどな。
ガルティアは、集落最強のムシ使いである。獣の王の役目は集落を守ること――それだけだ。他の道はない。それにガルティアは魔軍を倒すことこそを難しいが、勝利する事も不可能だとも思っていない。いや、思っていたと言うべきか……。
魔人なら倒せた。彼らも絶対無敵というわけでもないらしい。自分なら倒せる。なら魔王がここに来てくれさえすれば――
唯一の勝ち筋がそれだ。そしてそれ故の首刈り作戦。
ひたすらに将を叩いて奥にいる奴を引っ張り出す。しかしそれも難しくなってきていた。
それは兵の士気もそうだが、ムシ使いにとっては何よりも物資、食料の問題があった。
これだけ長く戦いが続けば当然、食料等の物資もそれだけ消費する。普段から食料を溜め込んでいるムシ使いの集落だが、それは沢山食べるからこそ。ムシを使って戦い続ければそれ以上に消費するし備蓄も無くなっていく。集落内の人々はまだ気づいていない。長老達がそれを知る者達に緘口令を敷いているからである。だが見えない所で影響は出ている。兵達の食事も少しずつ減っている。
実のところガルティアも普段どおりに見えてムシを飢えさせない程度に食事量を減らしていた。それでも常人より遥かに多いので気づかれないだけ。
……限界、か？

残された時間は多くない。このまま行けば魔物兵に殺されるより餓死するのが先だろう。早く魔王を殺さなければならない。しかし肝心の魔王は戦場に出てくる気配がない。
ガルティアはままならない現状を表に出すことはせず未だに食事が出来る事に感謝しつつ、飯を口に運んでいた――そんな時だ。
「――て、敵襲だ――!!??」
「!?」
周りの兵達がその声を聞いて飛び上がりそうな程に驚愕する。ガルティアも内心驚いていた。
自身の中にいる仲間に聞いてみると確かに、範囲内に幾つもの反応が現れた。
「……随分と早いな。一日に二回、か」
ガルティアは考える。先程あれだけ被害を与えてやったのに再度の襲撃。
おそらくは援軍だろう。昨日か今日の時点で送られてきたに違いない。
「……奴さんもやるなぁ――おい！」
「えっ、ガルティアさん……？」
兵達に聞こえるように声を出す。直ぐに彼らの視線はこちらを見ていた。皆、顔には疲労の色がよく見える。
ガルティアは皆に不安を与えないように笑みを見せた。
「出来るだけ持ちこたえろ。俺が突っ込む」
「で、でも……」
「……俺達も」
「いや、いい。いつも通り――いや、いつも以上に防御に徹しろ。適当にちょっかい掛けたらひたすら逃げ回れ」
兵達にとっては自分が唯一の希望だ。ガルティアはそれを強く自覚している。自分がやるべき事も。
「なぁに適当に魔物将軍ぶっ叩けば尻尾巻いて逃げ帰んだろ。そしたらちょっと追い回して俺達も飯食いに帰ろうぜ」
ガルティアの軽いが自信を感じさせる言葉に兵達の目に生気が戻

る。
「……ああ、そうだな！　そうしよう！」
「頼むぞ！」
「魔軍に目に物見せてやる！」
兵達の士気が高まっていくのを感じながらガルティアはムシ達に謝る。
「……お前らにも苦労をかけるな」
『――――！』
――気にするな。ガルティアの体内にいる何十匹ものムシはそう言っていた。
「へっ……よし、行くぜ」
「おお――――っ!!!」
ガルティアはそうして兵達と共に戦場へ向かった。

一時間後、再び北の荒野にて魔軍とムシ使いの軍がぶつかっていた。
魔軍の数はいつもより少し多い三個軍。六万の軍勢。それに加えて――
「ひゃっはあああ――!!　死ねぇ――!!」
「男は殺されろ――!!　女は犯させろ――!!」
「がっ!?　くそっ、威勢だけはいっちょ前だな！　これでも喰らえっ!!」
「ぎゃあああっ!?　身体が痛ぇ――!?」
「おらおらおらぁ――！　俺には当たってねぇぞクソ人間――っ!!」
「なら炎でも味わいなっ！」
「ぐあぁぁぁっ!?　熱い！　熱いぃ――!!」
戦場の推移、状況は先程と変わりない。
魔軍はいつもより数こそ多いもののそれでもムシ使い達の多彩な能力にその命を散らしていた。
ガルティアは魔物隊長を倒した所で異変を感じ取った。

「……妙だな」
戦いはいつも通り進んでおり、ムシ使いの優勢。疲労の色が濃いのによくやってくれてるものだ。
しかし、だ。やられているにしては魔物の士気が高すぎる。
その原因はなんだ？
魔物の強さこそ変わりない。数もいつもより少し多いだけ。
ならそれを束ねる者か？　ガルティアがその可能性を鑑みた時だ。
「――！　ちっ――！」
魔物将軍を狙って敵陣を突破していたガルティアは不意に自分の身体を反転させ、後方に向かって走る。
何故、彼は急に進路を変えたのか。それは味方の陣地が魔物に突破されたからだ。
だが、何故それが遠くに離れていても分かるのか。それはムシ使いであるからに他ならない。
ガルティアの体内にいるムシの中には、広範囲に向けて生物を探知する事が出来るレーダーのようなムシがいる。その感覚がガルティアに告げたのだ。味方の陣地に大勢の魔物が入り込んでいる。
仲間のムシ使いが次々に殺され、反応を消失させていく様子をガルティアは感じていた。味方も奮戦しているようだが、それでも敵の方が上手なのか次々と味方が死んでいく。
……まさか。
ガルティアは最高速で駆けながら思う。味方が死んでいく中で不謹慎ではあるが。
――とうとう当たりを引いたか？
ガルティアが途中、魔物兵を適当に倒しながら進んでいく。
そして味方の陣地に辿り着いた時――それはいた。
「――――ようやく来たか」
「――！　へぇ……！」
周囲の、少し前までは生きていたムシ使いであったものの中心にそれは立っていた。
――得物は……あの剣、か。

ガルティアは味方の死体、そして奴が持つ長く蒼い剣を見て、そう結論付ける。ムシ使い達は皆、綺麗に首を落とされて死んでいた。
おそらく皆、自分が死んだ事にすら気づかずに逝ったのだろう。それくらい鮮やかなやり口。
自らも剣士であるガルティアにはその技術の高さに気づいた。
その男はこちらを待っていたかのように――いや、事実待っていたのだろう。掛けられた言葉もそうだが、表情がそう物語っていた。
全身を黒を基調にした見たことのない服で揃えた金髪の男、その赤い双眸がこちらに向けられる。
その身から溢れる圧倒的存在感。身体周りに漂う細い線のようなもの――可視化される程のオーラ。
それにガルティアは見覚えがあった。だが、それよりも感じる強さは上。故に確認を込めて、普段どおりの軽い口調で尋ねる。
「……一応聞きたいんだが、魔王か？　魔人か？」
「……魔人レオンハルトだ。俺も一応聞くが、お前がガルティアでいいんだな？」
「おう、俺がガルティアだ。よろしくな。……しかし、魔王じゃねぇのか……」
「……スラ――魔王様に何か用でもあるのか？」
「スラ？　いや、魔王を倒せばこの戦いも終わるかと思ったんだが……」
「……魔王を倒す気でいたのか？」
「やっぱ無理か？　魔人なら倒せたからいけるかと思ったんだが」
「……人間の身では無理だな。差がありすぎる」
「ふぅん――まるで人間だった頃があるみたいな言い方だな？」
「……ただの例えだろう。お前と比べてみただけだ」
「いいや、違うな。魔人なら元は何かしらの生物だろ。お前は見た目だけなら人間っぽいし……それにレオンハルトって名前も聞き覚えがある。ここよりずっと東の集落の長だったか？」
「……」
ガルティアの確信を持った言葉に沈黙する。

レオンハルトはそれを聞いて考え込んだが、直ぐに観念したかのように短く舌打ちした。
「……チッ、知ってたのかよ」
「名前だけな。うちの集落と同じくらい魔軍相手に善戦してるって聞いたもんで……まさか魔人になってるとは思っちゃいなかったが。やっぱ魔軍の方が快適かい？」
「……どっちもどっちだ。それよりいいのか、戦わなくて。前線は突破したからな、早く俺を殺さないと味方が魔物にめちゃくちゃにされるぞ」
「いや、勿論戦うさ。……なんつうか随分と喋りやすくて思わず話が弾んじまった。お前とは気が合いそうだな」
「……ハッ、馬鹿言うなよ。人間と魔人だぜ？」
「……違いねぇな。お前が何を考えて魔軍に付いたのかも気になるんだがその時間もねぇか」
「……俺を殺せたら教えてやる」
「……殺したら聞けないだろ？」
「……じゃあどうする」
「……俺が死んだらあの世で教えてくれよ」
「――ハハッ、冴えてるな。それはいい」
レオンハルトはガルティアの言葉にニヤリと笑い、その長く蒼い剣を真っ直ぐに構えた。戦意に呼応して赤い瞳が煌めき、身体から魔人としてのオーラと剣気が立ち上る。
「でも生憎と俺にはやる事があってな。死ぬ訳にはいかねぇ。ちょっと遊んでもらうぜ？」
「――はは っ」
その挑発めいた言葉にガルティアも同じように笑うと、その骨の装飾が付いた赤い剣を構えた。彼の戦意に応えるようにガルティアの中のムシ達が一斉に戦闘状態に入る。
「奇遇だな。俺にもやる事がある。異存はねぇさ」
それはまるで長年の友人であるかのような軽快なやり取りだった。第三者が見ても彼らが初めて会ったばかりの敵同士であるとは到底

思えないだろう。出会い方が違えば彼らは友人を超えて親友となっていたかもしれない。
だが、彼らにはお互いにやる事があった。
ガルティアは目の前の魔人を倒し、いずれ魔王を倒し集落を守るため。
レオンハルトは目の前の人間と戦い、自らの主の命令を遂行するため。
お互いに元は集落の王、獣の王と剣の王。人間と元人間の魔人。
しかし彼らの道は平行線であり、決して交わることはない――少なくとも今のままでは。
二人はお互いに視線を交わすとどちらともなく同じ言葉を相手に放った。
「いくぜ？」
その言葉を切っ掛けに二人は衝突した。

獣の王

魔人レオンハルトと獣の王ガルティア。
両者の最初のぶつかり合い。それは当然魔人であるレオンハルトに軍配が上がった。
「ふっ――――！」
「――っ！」
レオンハルトの持つ魔剣――オル＝フェイルが人間ではありえない程の速度でガルティアを狙って振られる。
ガルティアはそれを何とか自らが持つ長剣で防いだが、魔人の恐るべき膂力を完璧に受け流す事は出来ず、身体が流れる。
ガルティアは決して剣が不得意な訳ではない。むしろかなりの腕を持つ天才である。自分より強い剣士には出会った事がなかったほどだ。仮に彼がムシ使いでなくてもガルティアは集落で一番の戦士であった事だろう。
そのガルティアが剣技で押される。それは人間と魔人という生物としての格の差も当然存在する。
――しかしそれよりも大きな理由があった。
たとえガルティアが天才でも、レオンハルトは剣術において最早伝説。これからの歴史でレオンハルトに剣で並ぶ者は現れないかもしれない程の規格外の剣の腕前だ。
その才能の差をガルティアは知らない。しかし剣士としてその事実を本能で感じていた。
「――ちっ！　こりゃあ剣だけじゃキツいな……！」
「ククッ……！　なら諦めてもいいんだぜ――ッ！」
レオンハルトはその剣を本能で、深い部分で理解して振るう。魔人となり剣の才能に目覚めた彼は剣を強い相手に振るう事に魔人としての血、本能が最も強く呼応する。
剣に触れる事の嬉しさ。そしてそれで相手を斬る事にこの上ない喜びを感じて、顔には楽しそうな笑みが浮かんでいる。

その剣をその身で感じ取るガルティアは、これは剣だけで相手するのは馬鹿らしいとあっさり諦める。彼は剣の才能こそあるが、それを自分の一番としていない。ガルティアの本領はそれではないのだ。
「はっ！　言っただろ！　剣だけじゃキツいってな――ッ!!」
「ッ――!?」
突如、ガルティアの身体から炎が吹き出る。剣で鍔迫り合いを演じていたレオンハルトに炎が襲いかかった。
間髪入れず、ガルティアはムシによる攻撃を続ける。
「お前ら、頼むぜ――!!」
『――!!!!』
ガルティアの中にいるムシ達が一斉にその意思をガルティアに伝えた。
次の瞬間、レオンハルトに細い糸が絡みつく。
「な、んだこりゃ……!?」
身体に絡みついて動きを阻害しようとする糸を、レオンハルトは腕で断ち切ろうとする。
しかしその糸は粘着性と弾力性が強く、魔人としての膂力を持つレオンハルトですら容易に抜け出す事が出来ない。煩わしく思い、レオンハルトが剣で糸を切断しようとするが――その隙はガルティアが攻撃するには十分な隙だった。
「喰らいな――」
「――ッッ!!」
ガルティアの身体からムシが大量にその力を発揮する。
毒針、炎、カッター、触手、酸弾、レーザー、爆弾――その他多くの攻撃がレオンハルトに降りかかり、その殆どを受けた。
爆弾により一時的に辺りに煙が上がる中、ガルティアはそこで攻撃をやめることなくそのまま煙の中に突っ込み――そして飛んできた斬撃をムシの能力で防御した。
しかし盾は斬撃を完全に防ぎきる事が出来ずにガルティアの身体に薄い傷を刻んでいた。
「――ちっ、おいおい……ガードタイプのムシ１０匹も合わせた盾

だってのに傷が出来るって何だそりゃ。反則だろ」
「――テメェに言われたくねぇよ」
煙が晴れると、そこには多少の傷と服に汚れが付いたレオンハルトが出てきた。糸による拘束は爆弾と炎によって既に焼ききれている。
レオンハルトはガルティアの攻撃で出来た傷を親指で撫でながら言い返す。
「確かムシ使いってのは１０匹以上躰にムシを入れると殆どの奴が死ぬって聞いたが……テメェには当て嵌まらないみたいだな？」
「これでも最強のムシ使いで通ってるんだ。ムシの数は自慢でな。今は４８匹だ」
「……よくもまあそんなに増やそうと思ったな」
「……家族の数は多い方がいいだろ？」
「呆れるな……だが、魔人を倒したってのも納得だ」
「へっ、だろ？」
ガルティアが自慢げに自分のムシ達について語る。彼にとってムシは大切な家族なのだ。
そう、レオンハルトが剣でこの先、並ぶもののいない程の才能の持ち主なら――ガルティアの才能はムシ使いであること。
一般的に４匹で一人前のムシ使いとされ、増やしたとしても２、３匹程度。１０匹を超えるムシ使いは片手の指で足りる程しかいない。
しかしガルティアはそれを大いに上回る４８匹。それでもまだいけるような口ぶりである。
これがガルティアが最強のムシ使い、獣の王と呼ばれる所以である。
この先多くのムシ使いが誕生しても、ガルティアを超える者は現れないだろう。彼は歴史に名を残すであろう伝説のムシ使いなのだ。
レオンハルトにとっての剣、それはガルティアにとってのムシだった。お互いにこの先現れないであろう伝説の剣士と伝説のムシ使い――こんなところでも二人は何処か似通っていた。
「――ククッ」
それを感じ取ったのかレオンハルトは思わず声を漏らす。

彼はガルティアの強さを認めていた。人類最強はガルティアかもしれない、と。
レオンハルトの剣の才能がここまで飛躍したのは魔人となってからだ。その時ならガルティアとの剣の腕比べは互角程度であっただろう。それに加えてムシ使いとしての実力。
こいつは強い。少なくとも人間であった時の自分より――。
そんな思いをレオンハルトは抱いていた。そして強い喜びが沸き起こる。
それを何とか抑えようとしながらも、彼は口端を歪めながらガルティアを見据えた。
「――なら、いいよな？」
「……あ？　何がだ――って、ああ、やっぱりいい。何がいいのか分かった」
「へぇ……じゃあ当ててみろよ」
「出すんだろ――――本気を」
「……クッ、クハハッ」
それを言い当てられレオンハルトが声を出して笑う。その笑いは――ともすれば友人が言った事を本当に可笑しそうに笑う姿のようだった。
「ほんとに分かってるとは驚きだ。く、ククっ……！　俺達マジで気が合うのかもな？」
「……実は当てずっぽうだったって言ったらどうする？」
「クハハハハ!!　笑わせんなよ！」
レオンハルトは本当に楽しそうに笑った。ここまで笑ったのは生まれて初めてかもしれない。仮にだが――もし主の存在がなければ、レオンハルトはガルティア側に、ムシ使いの集落に寝返ったかもしれない。それくらい気が合う事を自分でも認めた。彼の事を二番目に気に入っていた。
しかし、とレオンハルトは主を思い剣を握る。自分はあいつに逆らえないし、逆らいたくない。命令は絶対だ。
そして今回は、更に自分の意思も込めてその命令を遂行すると誓

う。それが魔王スラルと――魔人レオンハルトの願いだからだ。
「――よし！　なら改めて言わなくていいな？　こっからは手加減無しでボコボコにしてやるからな？　あっさり死んでくれるなよ？」
「抜かせ。こっちの台詞だ。……お前ら気張れよ！　こっからが本番だ――！」
『――――!!!!』
「クハハッ！　精々気をつけな――ッ!!」
先程よりも激戦となり得るであろう伝説同士の対決。
その対決の火蓋が切られた。

レオンハルトとガルティアが戦いを再開した頃――
戦場では変化が訪れていた。
「おら死ねや――！」
「ぐふ……！」
「自慢の毒はどうしたぁっ!?　俺らにも浴びせてみろよ――！」
「く、無念……」
次々と前線を突破した魔物兵がムシ使い達を容赦なく殺していく。
ガルティアの言う通りに防御に徹していたムシ使い達。いつもならムシ使い達が疲れているからといってここまでやられたりはしない。毒を戦場である荒野に――敵と味方が争いあう境界線上の大地に予めばら撒いているムシ使い達なのだ。魔物兵も容易にそれを乗り越える事は出来ず、その殆どが毒を喰らって息絶え、運良く毒を喰らわなかった者達も反転したムシ使い達にやられてしまう。事実、二時間前の戦場では毒の大地である前線を突破する事が出来ず、多くの魔物兵が毒の大地の上に倒れた。
そう――上に倒れたのである。
魔軍はその上を――味方の屍の山を足場に毒の大地を乗り越えていた。
「進め進め――!!　奴らの血を魔王様とレオンハルト様、この地で散っていった同胞に捧げろ――!!」

「おおおおおおおおおおっっっ――!!!」
魔物将軍の号令で次々と魔物兵が味方の屍を踏みしめ、ムシ使いの陣に侵入していく。無論、最初に突撃を敢行した魔物兵達はムシ使いの妨害で命を落とした。――しかしその数も多くはない。
その最初に魔物兵の死体を足場に敵陣に突っ込んでいったのが、魔人レオンハルトだ。ムシ使いの妨害もあっさりと突破し、そのムシ使いの多くを斬り捨てる。
ムシ使いが魔人の登場に――そして味方が容赦なく虐殺されていく事に混乱する。その隙を逃さず魔物兵達は屍を乗り越えていった。
これが魔物将軍達が出立の直前に考えついた作戦だ。普通なら到底実行出来ないような策。それが現在、この上ない程相手には嵌っていた。
前を進む魔物兵が死んでもそれは更に魔物兵が進む道の補強となる。目の前で死んでいった味方の上を容赦なく踏み越え、魔物兵達はその数に物を言わせて進んでいった。
二時間前にここで戦闘を行っていたから。魔物兵の士気がここまで高かったから。レオンハルトが最初の突撃を担当したから。幾つもの条件が揃ってクリアされた作戦である。
総勢六万の軍勢が次々と前線を突破し、ムシ使い達を蹂躙していく。こうなれば幾ら屈強なムシ使いといえどもジリ貧だ。
頼みの綱であるガルティアも今は頼れない。知ってか知らずか魔人を相手にしているのだ。そのような余裕はないだろう。
魔軍がムシ使い達を全滅させる。後は時間の問題であった。

そして、レオンハルトとガルティアの戦いも佳境を迎えていた。
「クハハハハッッッ――! ほら、気をつけろ! 今振るぞ!」
「ぐッ――! おら――っ!」
「おお……! いいじゃねぇか! おら、次はこっちだ! 振るぞ――!」
「チッ……この剣馬鹿が……!」

――優勢なのは魔人レオンハルトであった。
レオンハルトは既にその剣技で幾つもの傷をガルティアに負わせていた。幾つもの斬り傷によってガルティアの褐色の肉体には赤い線が走っている。
対するガルティアも負けてはいない。様々なムシの能力でレオンハルトに手傷を負わせていた。中にはムシとの連携でレオンハルトに切り傷を付けることすら出来ており、更には毒で多少なりとも体力は削れている筈だった。
しかし戦いが長引くに連れて、どんどんその差が如実に現れ始めていた。それは――人間と魔人の差。
ガルティアが疲労と傷による出血で体力が奪われ、動きが鈍くなっていく中。レオンハルトは傷こそ負っているものの動きは鈍らず――むしろ戦いが長引いて動きが良くなっていった。
魔人の無尽蔵にも思える体力。それとレオンハルトの剣技の成長が著しい所為であった。
――こいつまだ速くなんのかよ……！
ガルティアは内心毒づくが、それもその筈。彼は剣の才能が開花してまだ間もない。故にその深淵をまだ全て理解する事が出来ていなかった。レオンハルトはまだまだこれからなのである。
彼の成長は剣を振ることで――それも強い相手ならなお良く成長していく。
言うならばガルティアの存在が皮肉にもレオンハルトを成長させていた。人間でありながらレオンハルトに肉薄する存在。それに魔人の本能が、彼の才能が、呼応して技術を高めている。身体能力すら高くなっているように見えた。
それに比べてガルティアは何処まで行っても人間だ。ムシ使いとしての才能こそ他に類を見ないレベルだが――目の前の魔人相手では未だ荷が重い。
若くして魔人四天王になったのは伊達ではない。ガルティアはそれを知らないが、レオンハルトが魔人の中で弱い方とも思えなかった。少なくとも以前に倒した魔人とは比べ物にならない程に強い。

だが、レオンハルト側も同じような事を思っていた。ガルティアは強い。人間としては最高に。
まさか本当にここまで粘られるとは思っていなかった。思わずうっかり殺しそうになるのを抑えないといけない程に。
魔人としての本能は目の前の人間を斬り殺せ、と訴えている。だが、それを侵す事はしない。それでは意味がない。本能で戦いながらも理性でそれを俯瞰している。それがレオンハルトをレオンハルト足らしめている理由なら尚の事。
総じて、お互いに感じているのはこのままでは埒が明かないということだ。
ガルティアは時間、それと自身の体力の限界から。
レオンハルトは主の目的の為に。
「――――！」
「――――！」
剣がぶつかり合い、それを反動にお互いに距離を取る。最初に口を開いたのはレオンハルト。
「――あー……楽しんだ。最高にいい時間だったぜ。お前は強い、それは認めてやる。でも――――そろそろ終わりにするぞ」
一転、冷たい表情でそれを宣告する。そう宣言したのなら絶対に成し遂げる。そう感じさせるような意思の強さがその冷たさに込められているように感じた。
「――異存はねぇ」
対するガルティアも短く。それでいて同じようにこの戦いを次の一合で終わらせると自分に誓った。絶対に勝たなくてはならない。意識を全て魔人レオンハルトに集中させる。その一挙手一投足を見逃さないように。
「――――これで終わりだ」
「――――っ!!」
ガルティアが魔人相手だけに注力していた事。そしてそれが――決着に水を差す事態を引き起こした。
「――ッ！」

先に気づいたのはレオンハルト。今まさに、自分が放てる最高の一撃を繰り出そうとしていたが、それを咄嗟に停止させる。そしてその原因がガルティアの背後から現れた。
「――――ガルティア！」
「なっ――――小僧?!」
ガルティアが驚きで目を見開く。声を掛けてきたのは集落に住むムシ使いの少年――それもガルティアがよく接する少年であった。
彼の半分程の身長しかない少年はガルティアの全身の傷を見て痛ましいものを見るように顔を顰めさせるも、それで躊躇することなく声を掛けた。
「ガルティア大丈夫？　僕、回復のムシが居るからこれで――」
「っ!!　――馬鹿野郎が!!!」
「――！」
ガルティアが少年の頬を平手で叩く。
「が、ガルティア……？」
何故叩かれたのか、それが分かっていないかのようにガルティアを見上げる。その目には疑問の色が浮かんでいてそれがガルティアを余計に苛立たせた。
「俺がそんな事されて喜ぶとでも思ったか――！」
「ひっ……！」
「ああくそ……こんな事ならもっとよく言っとけばよかったぜ……！」
ガルティアは少年の目から見て――いや、集落の人間が誰も見たことない程、怒気を身体から立ち上らせている。いつも気さくで、細かい事には拘らないさっぱりとした性格のガルティアには珍しい事だった。
ガルティアは頭をがりがりと掻いて言いたいことが纏まらない様子であったが、それでも少年に言いつける。
「……いいか？　集落の長としての命令だ、しばらく謹慎だ。家の中で大人しくしてろ」
「っ！　な、なんで……僕はガルティアの役に立ちたくて……」

「そういうのが一番迷惑だっつうんだよ……いいから帰れ」
「で、でも……」
「分からねぇならはっきり言うぞ小僧――――お前が戦場で役に立てる事は一つもねぇ」
「――――っっ!!!」
ガルティアの厳しい言葉に少年は身を震わせたが、ガルティアはそれを見てもなおきつく言明した。
「小僧が来ても足手まといなだけだ。わかったのなら――」
「……あ、ああー……お取り込み中悪いんだがいいか？」
そのやり取りを黙ってみていたレオンハルトが伺うように声を掛ける。気を使っているのがガルティアには分かる、魔人なのに律儀な奴だと思った。
「すまねぇな。これはこっちの落ち度だ。決着は小僧が帰ったら――」
「いや、そういう問題じゃねぇ――もうとっくに終わっちまってたみたいだ」
「……そりゃどういう――」
意味だ、と言いかけてガルティアは気づいた。レオンハルトの背後から近づいてくる大勢の影。
レーダーで周辺を調べると、戦場に残った味方はほぼいない。集落に逃げようとしている者達がいるくらいだ。
――それが意味する事は一つしかない。
やがて大軍がレオンハルトのすぐ近くまでやってくると、その中から腹に球体がある大きなシルエットの魔物がやってくる。
それはレオンハルトに向かって膝を突くと、ガルティアにとっての絶望を伝えた。
「――――レオンハルト様。こちらは作戦完了。ムシ使いの軍勢をほぼ駆逐致しました」
「……そうか。ご苦労」
「はっ！　後はそちらの二人だけです」
「くっ……」

その報告にガルティアは自分達の負けを悟る。兵達はおそらく大部分が殺されただろう。逃げ切れた連中もどれだけいるかは分からないがもう身体も心も満身創痍だろう。

後はどれだけ逃げ切れるか、そういう戦いだ。

瞬時にそれを計算し、ガルティアは直ぐに周囲を確認する。前方には大勢の魔物と魔人。背後にはそれを見て怯えている少年。少年を連れて逃げるのは確定。魔物相手なら逃げ切れる。しかし目の前の魔人を撒く事は難しい。

如何にして逃げるか、そんな思いを手助けしたのはその意思を邪魔する筈の魔人だった。

「ああ、悪いんだがな……追撃は無しだ」

「はっ？　しかし、今なら集落を落とす事が……」

「後でやっても変わんねぇだろ。どの道もう戦う力は残ってないしな。もうじき日暮れだし、兵もずっと行軍して休まずに戦って疲れてんだろ。後は明日の朝一でもいいんじゃねぇか？」

「は、はぁ……ですが――」

「ていうかお前、俺の姿見て言ってんのか？　あ？　そこの人間が馬鹿みたいに強かった所為で傷負って疲れたんだよ。あれなら魔人を倒したっていうのも納得だ。もうじき殺れるだろうけどよ。なんならお前が相手にしてみるか？」

レオンハルトが億劫そうな態度でガルティアを指差す。魔物将軍は二人の姿と周囲の状況を見て戦いの余波を感じ取ったのか、心底嫌がる様に首を振った。

「い、いえいえ、遠慮しておきます。レオンハルト様の獲物を横取りする訳にはいきませんし……では、出撃は明日の朝に致しましょうか」

「はい決定。そら、撤収だ」

「はっ！　撤収――!!　司令部に帰投する!!」

その言葉に魔物兵からは少なくない不満が出たが魔物将軍が一言、「レオンハルト様の命令だ!!」と言うと静まり返った。

レオンハルトはそれを見て満足そうに頷くと、ガルティア達の方に振り返り声を掛けた。

「という事だから帰っていい。ああ、背後から襲ったりはするなよ。流石にそれは抑えられないし抑える気もないからな」
「……なら、そうさせてもらうからな。行くぞ、小僧」
「……うん」
「ああ、いや、ガルティアはちょっと待て。言いたい事がある」
ガルティアが下を向いたままの少年に声を掛けて帰ろうとするも、レオンハルトは少し慌てたように呼び止めた。これにはガルティアも訝しげに眉を顰める。
「ああ？　なんだよ？　……小僧はちょっと離れてろ」
「……？」
少年がガルティアから少し離れると、同時にレオンハルトもガルティアに近寄った。そして口を開く。
「――――――」
「――――――！」
レオンハルトが何かをガルティアに耳打ちするとガルティアの目が一度大きく見開き、そして口を噤ませた。そしてレオンハルトが去り際に何かを言い残すと、ガルティアは表情を固くしたまま少年の元へ。
「……行くぞ」
「……う、うん」
少年はムシの能力で音を拾い、最後に辛うじて聞こえたレオンハルトの言葉を頭でその意味を考えるように反復した。いや、言葉の意味は分かる。しかしそれをどうしてガルティアに言うのかが分からなかった。
――――待ってるぞ、ってどういう意味なんだろう……。
それを理解する事は、少年には出来なかった。

ガルティア

日も落ち、夜の帳が下ちてしばらくした頃。
ムシ使いの集落の奥にある集会所。集落の有力者が会議に使うこの場所では、重苦しい空気が漂っていた。
「――どうしてくれるんじゃガルティア!!」
「……」
そこではムシ使いの長老が長であるガルティアに怒声を浴びせていた。
ガルティアはそれを黙って聞いている。表情も全く動かず、どれだけ非難を受けても眉一つ動かさなかった。
その態度に長老の苛立ちも募っていく。
「こら！　聞いておるのか!?　お前がやられなければ――」
「長老!!」
意を決したように集まっていた有力者の一人が声を上げ、説教を続けようとしていた長老を遮る。
「……今はガルティアを責めてる場合じゃない。問題は――」
「……ふん、これからどうするかであろう。分かっとるわい」
有力者の言葉か、それとも現状を思い出したのか、とにかく少し頭が冷えた長老は有力者の言葉を引き継ぐ。
長老は最後にガルティアを一瞥すると、鼻を鳴らして皆に向き直った。
「時間もない。早急に集落として決定しなければならんな」
「はい、その通りです。……ガルティアもそれで構わないな」
「……ああ」
有力者の一人がガルティアに対して確認を取る。こうなった責任は勿論彼にあるだろうが、それとは関係ない。彼は普段からガルティアを立てようとしてくれている人物だった。
しかしガルティアの方は言葉少なく頷くだけ。快活な明るい性格のガルティアには珍しいことだった。

集まった有力者達は、さすがのガルティアもこうなった事に責任を感じているのだろう、と考え、それを咎める者はいなかった。
「それでは決めましょうか。案は2つ、即ち――戦うか、逃げるか」
議長を務める男の言葉にまた別の男が机を叩いて立ち上がる。彼は頭に血が上った様子で言い放つ。
「戦うに決まってるだろう!! 兵はまだ残っている！ ムシ使いはまだ大勢いる！ 集落の中から兵を募れば……」
「……何を言っているんですか？ 冗談じゃない。逃げる一択でしょう。大体新しく兵を集めた所で魔軍に勝てるとも思えませんが？」
「ガルティアもまだいる！ 俺だって戦ってやるさ！ お前は町を捨てるって言うのか!?」
「町よりも大事な物があるでしょう！ ……それにどの道、食料の備蓄ももう底を尽きています。兵がいたとしてももう戦えません」
「っ！ それは……」
徹底抗戦を主張している男は、反対側に座る眼鏡を掛けたムシ使いの男に反論を受け、言葉が詰まる。
見れば他の有力者も逃げる方に傾いており、しきりに頷いていた。
「……くっ、でもよ……」
男は諦めたくはないと思った。ここは自分達の故郷。そこを捨てたくはない。しかし彼にはどうすればいいのかわからなかった。
悔しそうに身体を震わせる彼に長老が声を掛ける。
「お前の気持ちはわかる。しかし戦う事は出来んだろう。今はもう逃げて集落の皆の被害をどれだけ少なく抑えられるか。それを考えるのじゃ」
「……はい」
長老に説得され、重々しい肯定を返す。有力者達は決まったか、と一様に頷いた。
――即ち逃げること。後はどうやって逃げるか。一度撤退したとはいえ魔軍の哨戒は健在だろう。逃げようと動きを見せれば直ぐ様追撃してくるかもしれない。
それに何処に逃げればいいのかも分からないままだ。

苦悶の表情を浮かべながら、しかしこの厳しい現実に抗おうと思考を続ける。
それを見ていたのか見ていなかったのか――立ち上がったのはやはり。
「――――悪い、ちょっと席を外す」
「なっ……ガルティア！　何処に行くんじゃ!?　座れ!!　今は大事な――」
「……すぐ戻ってくるさ」
集落の長であるガルティア。長老の制止の言葉も聞かずにずかずかと入り口から外に出ていった。
周囲の有力者達はその行動に目を丸くするが、誰も歩みを止めることをしない。
その目が強い意思を秘めた物だったからだ。
「ぐぬぬ……！」
長老はガルティアの有無を言わせない態度に歯噛みする。これでは会議を進められない。仕方なく長老は有力者達に宣言した。
「……ガルティアが戻ってくるまでは一旦休止じゃ。儂も少し出てくる」
去り際に長老がそう言うと有力者達はお互いの目を見合わせ、少し迷った後に頷くと少しずつその場から退席した。こんな時間だが大切な人にでも会いに行こうか、とそんな事を思ってしまう。
――どの道、今日が最後の日になるかもしれない。

――まったく、ガルティアめ……あの態度はなんじゃ！
外の空気を吸いに夜の集落を練り歩く長老は先程のガルティアの態度に憤慨していた。
そもそも奴が魔軍を退けていれば、ここまで悪い状況にはなっていなかった――そんな事を考えながら。
長老の頭の中ではあと半年は戦える計算であった。食料に関してはもう少しだけなら節約すれば賄える筈だ。その際には集落の人々

にはそれを通達し、遵守させなければいけないのが忍びないが。
もう少し耐えていればじきに魔王が出てくる筈。実際、逃げ延びてきた兵の証言ではとてつもなく強い魔人が出てきたと報告があった。それをガルティアが倒していれば次は魔王だったかもしれない。
……しかしそれはもう詮無き事だ。ガルティアは敵の魔人にぼろぼろにやられ、挙句の果てに見逃されてきたという。ガルティアなら戦えない事もないだろうが、それでも力は万全ではないだろう。その状態ですら最強のムシ使いである事に疑いようもないのだが。
なら逃げる手段を考えなければならない。だが、どうやって逃げる？
数十人程度ならバレずにこの辺りから逃げ出す事も出来るかもしれないが、実際はこの集落の人々全員。約二万もの人々だ。大規模な逃走になるだろう。集落を放棄することを住民に伝えればそれだけで騒ぎになる。荷物を纏めて訓練も受けたことのない一般人、女子供も合わせた大軍での大移動に魔軍が気づかない筈がない。
十中八九は魔軍の警戒網に捕まる。逃げようとしている事が伝われば魔人が軍を率いて追いかけてくるだろう。既に戦う力は残ってない。多少の抵抗は出来ても魔軍と接敵すればお終いだ。
なら魔軍に気づかれないようにしなければならないのだが――いや、気づくのを遅らせるだけでも構わない。
……だが、そんな方法は思いつかない。運良く魔軍の陣地でボヤ騒ぎでも起きればいいのだが――
「――！」
そこまで考えて一つの案が思い浮かんだ。悪魔の考えだった。
――ガルティアにそれをやらせればいい。奴一人なら魔軍の陣地に忍び込み騒ぎを起こす事も可能だろう。その間に集落の皆で逃げてしまえばいい。
非道な作戦だが、集落の人間を救う為には仕方のない事だ。奴一人と他の皆。少数と多数なら少数を斬り捨てるのもやむ無し。
しかしそれを実行してしまえばガルティアは死ぬだろう。いや、問題はそこじゃない。そもそもガルティアがこれを了承するのか？

奴が何を考えているのか自分には分からない。昔からそうだった。どんな時も軽薄なあの態度を崩さないし、のらりくらりとはぐらかすのも上手い。

それに自分はずっと奴に辛く接してきた。そんな自分の言わば死んでこいという命令を聞くだろうか――否、聞くわけがない。

どんなに普段は他人に優しい人物でもいざとなれば自分を優先する。こんなのはガルティアに限った話じゃない、当たり前の事だ。

ならばどうすればいい。ガルティアに殿を、その身を呈して一人で魔軍を足止めしてもらうにはどうしたら……。

「む……？　あやつは……」

そんな時、長老は人影を見つけた。

子供だ。見覚えもある。ガルティアによく付き纏っている少年。

そんな彼が下を向きながら誰もいない夜道をとぼとぼと歩いていた。

「ふん……哀れだな」

確かあの子供は両親が魔軍との戦争で亡くなった孤児だ。どうやら親戚もいないらしい。身内の繋がりが広いムシ使いの中では珍しい事だ。

それで唯一、死んだ両親と仲が良かったガルティアに付きまとう。ガルティアの方も悪いようにはしていないよう感じた。

「……」

長老の中である思いが芽生えていく。それは地獄に落ちるような考え。

戦士であり集落の長という立場も責任もある奴ならまだしも、何の罪もない子供にもそんな役目を負わせるのか――？

……だが、幸いにも少年に家族はいない。いなくなっても悲しむものはいない。いたとしても最小限で済む。

ガルティアと少年。たった二人で集落の人間全員を救えるなら――

長老は意を決し、少年に背後から近づいた。怯えさせないよう、怖がらせないよう、出来るだけ優しく、声をかける。

「――――」
そして虚偽の真実を語り始めた。

夜もすっかり更けた頃。
荒野の中心に築かれた魔軍司令部。そこには二つの魔の存在がいた。
この戦いの立役者である魔人レオンハルト。彼は魔王スラルを目の前に膝を――両方とも床に突いていた。
「――それで、何か言い分はある？」
「……ない、です」
正座である。
レオンハルトは自身の行いを反省させられていた。
……いや、確かに俺が悪いんだけどよ。
ムシ使いとの、ガルティアの戦いには勝った。いや、勝ってしまった。
その原因ははっきりとしている。自分があまりにも戦いを楽しみすぎた所為だ。
標的であるガルティアは中々に話しやすい……いや、気の合う奴だった。それにめちゃくちゃ強かった。
剣技も中々の腕前だったし、ムシ使いとしては想像を絶する腕前。正直傷を負うつもりは全く無かったのだが、ムシの多彩な攻撃とガルティアとの息の合った連携攻撃に何度もしてやられた。
そしてそれがあまりにも唆って、興が乗りすぎてしまった。
どうにも剣を持って強い奴と対峙するとちょーーっとだけやり過ぎる傾向があるみたいだ。実に気持ちいいし楽しいし、本能が刺激されるのだが、理性で制御出来ているのは確かな筈だ。
でも、あとちょっと。もうちょっと。後五分だけ。と少しずつ誘惑に押されて、戦いが長引いてしまった。
途中、ムシ使いのガキが乱入してきてガルティアが躾のような事をしているのを空気を読んで眺めていたら、戦闘が終わってしまってい

た。
あの時は内心、めちゃくちゃ焦った。このまま集落を落としましょう、ってな空気でどうしようかと思ったが魔物将軍には咄嗟に適当な尤もらしい屁理屈にわがまま。そして恫喝であの場を切り抜けた。俺、クソ上司過ぎる。
そして俺は上司に正座させられていた。
目の前には椅子に座って膝を組み、こちらを見下すスラル。
「……そういえば一時間で撤収とか言ってたわね。もう夜だけど」
「……い、言ってたな」
目を逸らす。誰だ、そんな事言ったやつ。俺はそんな奴知らない。
「……あっさり終わらなかったなぁ」
「……そういう時もある」
勝負は時の運って言うだろ？
「……活躍、見たかったなぁ」
「ぐはぁっ」
スラルは少し残念そうにぼやいてみせる。俺は精神に傷を負った。
くそっ！　なんで俺はあんな恥ずかしい事言ったんだ！
俺は気恥ずかしくなりつつもスラルに言い訳を伝えた。
「……一応、最後に伝えたから見込みはあると思うんだが……」
「！　そうなの？」
「ああ、ガルティアの性格なら来ると思うぜ」
「……ん、それもそうね」
スラルはそれを聞くと納得したように気を弛緩させた。
もう怒ってはいないようだ。俺もおそるおそる立ち上がるが、何も言われなかった。
――だが、けじめはつけないとな。
「悪かったな。確かにやり過ぎた。これでもし来なければどうにでもしてくれ」
俺はスラルに改めて謝罪する。命令を遂行出来なかったら好きにしろ。そういう意味を込めて言ったが、スラルは首を振った。
「何もしないわよ。……あ、でもせっかくだから料理の練習に付き

合ってもらおうかな？」
「おま――っ!?」
俺はその言葉に絶句する。それだけはありえない。
しかも練習って事は何度も味見しなきゃなんねぇんだよな？　――あの料理を何度も。
俺はふっと息を吐くと己の運命を悟った。
「――死んだな」
「だから失礼!!　そんなに酷くならないわよ!!」
料理を貶されて怒ったスラルはふん、とそっぽを向いた。あの料理はしょうがねぇだろ。
そうやっていつも通り軽快なやり取りを交わしていると――外から声が掛けられた。
「――魔王様、レオンハルト様。少々よろしいですか？」
その声には聞き覚えがある。おそらくはここの責任者である魔物将軍だ。
「……魔物将軍？」
「……いいな？」
「ん」
「よし、とりあえず入れ」
一応トップであるスラルに確認を取ると魔物将軍に入室するように促す。
すると「失礼します」と一声掛けてから予想通り魔物将軍が司令部に現れた。
魔物将軍は椅子に座る魔王スラルとその隣に立つ俺に向かって膝を突くと、両者からの言葉を待つ。スラルは俺に目配せ。どうやらやり取りに関与するつもりはないみたいだ。
なら、と俺は魔物将軍の頭上に声を掛ける。
「楽にしていい。それよりも何かあったか？」
「はっ、それがですね……その」
魔物将軍はいつものはきはきとした物言いではなく、少しどう言えばいいのか迷っている様子だった。

俺はそれを訝しげに思う。
「？　良いから言ってみな。別に余程の事じゃなければ怒ったりしねぇよ」
「は、はっ！　では僭越ながら申し上げると……侵入者、のようなものを見つけました」
「！」
その言葉にスラルの肩がピクリと動く。まさか、と俺も思ったが直ぐに魔物将軍のおかしな言に気づく。
「……ようなものってのはどういう意味だ？　起こった事を最初からありのままに話してみろ」
「はっ、……最初に気づいたのは魔物隊長と数体の魔物兵でして」
何でも勝ちが見えた戦いであるため、明日の略奪でどうするかを肴に酒を飲んでいたという。それは俺が許可した。
どの道持ってきた物資は直に戦いが終わって必要無くなるだろうし、また持って帰るのも面倒だろう。少しくらいなら勝利の美酒として振る舞いガス抜きでもさせてやろうと思った訳だ。
それに魔物兵が酔いつぶれたとしても俺は一向に構わなかった。
「何処に行こうと言う訳でもなく陣内を適当に歩いていたそうです。そしたら陣内のテントの陰にこれが寝ていました」
「これ、ってのは？」
「今、連れてこさせます……おい」
「はっ、入室しても？」
「？　……許可する」
司令部に入ってきたのは魔物隊長だった。そしてその肩にはとあるものを乗っけている。
近づいてきてはっきりとその姿が目に入る。
「――子供？」
「――そうだな。しかもそいつは……」
やり取りに口を挟まないと言っていたスラルが思わず声に出す。
俺もそれに同意した。
そう、その子供に俺は見覚えがあったのだ。緑色の髪に褐色の肌、

その肌に刻まれた刺青。
ガルティアとの戦いの最中に水を差したムシ使いの少年。
その彼が魔物隊長の肩の上で寝息を立てていた。
何でガキが、それも魔軍の陣地に。
「……捨て子？」
スラルが小声で呟く。……そんな訳ないだろうが。何処の親が魔軍の陣地に子供を捨てるんだ？　マジだとしたらそいつは馬鹿かキ○ガイだ。
だが、内心否定はしたものの、何でこんなところで子供が寝ているのか見当もつかない。マジで捨て子だったらどうしよう。
「お伝えするまでもないかと思いましたが、少し不可解でしたので一応報告しに来たのですが……レオンハルト様でも分かりませんか？」
「ああ？　……いや、ちょっと……どういう事だ？　というかお前らも考えろ」
「は、はっ！」
その意味が分からず司令部にいる魔軍の面々は揃って首を傾げて困惑した。

――ムシ使いの集落。
住民は寝静まる時間帯であり、道行く人は誰もいなかった。昼間はあれだけ賑わっていた出店も夜中に慣れば当然、人も品物もなにもない。
「……」
集落の中心にある広場。そこにある大きな岩の上にガルティアはいた。
辺りを照らすのは月明かりだけ。しかし、それだけで十分だと思った。
夜になると小さい頃からガルティアは人気のいなくなったこの広場でムシ達と過ごした。この岩の上はその当時から気にいっていたベストスポットだ。

ガルティアが物心ついた当時、既に両親はいなかった。母親は自分が生まれてまもなく魔物に襲われて死亡し、父親は殺された母親の敵を取ろうと自分の許容量を超えたムシを躰に入れて〝なれの果て〟となった。

過剰にムシを寄生させたムシ使いはムシに人格と肉体を破壊されてしまうらしい。それが、なれの果て。なれの果ては人間ではない。心が壊れてしまった怪物であり、殺すことだけが唯一の救いなのだ。だから父親もムシ使い達にそうやって殺されたのだろう。

その事についても、両親がいなかった事についてもガルティアは悲しみを感じた事はない。

残念には感じていた。生きていたらもっと楽しかっただろう。

だが、死んでしまったのだから仕方がない。それよりもガルティアが親に感じるのは自分をこの世に生み出して――そしてムシに会わせてくれた事についての感謝だ。

子供の時はいつもムシと遊んでいたものだ。勿論、ムシ使いの友達がいなかった訳じゃない。だが、子供は残酷だ。普通とは違う――両親がいないガルティアに子供達は冷たく当たった。その上で一応友達がいたのだから自分は恵まれているのだろう。

「……そういやあの出店で盗み食いした時は怒られたなぁ。覚えてるか？」

『――！』

ガルティアの体内にいるムシが反応する。その声にガルティアはからからと笑った。

「ああ……ははっ。そういやそうだったな。お前が糸で品物引っ張ってよ、そのまま飛んで逃げようとしたら店の親父に撃ち落とされて真っ逆さまだ。ありゃあ楽しかったなあ」

『――！』

「笑い事じゃないってか？　いや、笑い事だろ。大人になったらあの親父、あの時の事忘れてるんだもんなぁ。今やったら思い出さねえかな」

『――――』

「ははっ……そうだな。色んな事があったな……」
ガルティアは過去をムシ達と懐かしむ。彼らがいるからこそ退屈しなかった。
しかし、不意にガルティアは思う。もし自分がムシ使いじゃなければどうだっただろうかと。
ムシ使いじゃない普通の人間で、何処にでも居る普通の人間の子供だったとしたら。
……やっぱやめだ。
ガルティアはその思考を放棄する。そんな事を考えても意味がない。
だが、全くの無意味でもなかった。
ムシ使いとして生まれたからこそ。ムシと出会えたからこそ。この集落で過ごしたからこそ。今のガルティアがあるのだ。
ガルティアはそこまで考えて立ち上がった。
「答えは決まってるよな」
『――――!!』
「あぁ、わかってる。着いてくるんだろ？　悪いが頼むぜ」
『――――!』
「へっ……それこそ今更か」
ガルティアはムシ達との語らいを終えて意思を固めると、広場を後にしようとする。
――だが、それは突然の来訪者に止められた。
「――ガルティア!!」
「あ……？」
聞き覚えのある大声に振り向くと、そこには長老。どうやら慌ててきたようで少し汗を掻いている。
ガルティアはちょうどいい、と思った。
最後にこの集落の人間に聞いてもらえるなら、それは誰でもよかった。
「……なぁ、じっさま。俺――――」
「あやつが！　お前がよくしてる子供が攫われた!!」

「――――んだと？」
長老の耳を疑う言葉にガルティアの表情が固まる。それを見た長老がまくし立てるように続ける。
「どうやら町の周囲に近づいてきてた魔物兵が、偶然外に出ていた少年を捕まえていったらしい。見かけた住民が教えてくれおったわ……」
「……」
「だからお願いじゃ！　助けにいってくれ!!　こんな事を頼めるのはお前しか……」
長老は涙ながらにガルティアにしがみつきそれを訴える。
子供を魔軍の陣地に助けにいってくれと。
ガルティアはそれを見て、一つだけ確認する。
「なぁ、じっさま――それ、本当の話か？」
「勿論じゃ！　早くしてくれ!!　早くせねばあの子供が魔物兵に殺されてしまう!!」
「……」
ガルティアはしばらく、考え込むように長老を黙って見続けていた。
「ど、どうしたんじゃガルティア……？」
真面目な表情で黙り込むガルティアを見て長老の勢いが落ちる。
数秒程、黙って長老に視線を送っていたガルティアは――――
「――――そうか。なら助けにいかねぇとな」
ふと自分から緊張を解すように気を抜いた。
その笑みは普段のガルティアの様子と全く変わりない。長老はほっ、と息をついた。
「うむ。ならば直ぐに向かってくれ」
「ああ、そうするかな」
長老の言の葉の通り、ガルティアは改めてその場から立ち去ろうと歩みを再開した。
そして最後に、後ろを振り返らずにこう告げた。
「――――じゃあな」

「む……うむ、気をつけての」
ガルティアのその言葉は誰にも届かなかった。

――それから一刻後。
魔軍の陣地内ではすっかりと魔物兵達が就寝していた。
無論、見張りの兵達は起きてはいる。
陣の入り口に立つ魔物兵は、同じく見張りに立つ魔物兵に眠そうに話しかけた。
「……なぁ……見張りの交代時間まだかな？」
「おいおい、まだ三十分も経ってないぞ？」
「だってよ……今日はずっと動きっぱなしで疲れてんだし……眠くもなるだろ？」
「……気持ちはわかるけどな」
「それによ……見張っててても敵なんか来ねぇだろ？　戦える奴らは全員ぶっ殺したんだし」
「ああ――って、いや。そういえばまだめちゃくちゃ強い奴が残ってるんじゃなかったか？」
「……いや、来ねえだろ。ここ何処だと思ってんだ？　魔軍の陣地だぞ？　こんなところに一人で来たら、そいつは馬鹿だな。来たら俺が殺してやるよ」
「――そんじゃ相手してもらうぜ？」
「いいぜ――って、あ？」
突如、魔物兵の身体が誰かに切り裂かれた。血飛沫が辺りに飛び散る。
何が起こったかもわからず魔物兵は絶命しただろう。それを目の当たりにした魔物兵はぎょっと驚く。
「っ!?　て、敵――」
再び、声を上げる事無く魔物兵が殺される。
「な――んで――」
あっさりとその命を終えた魔物兵はそんな言葉を残す。

襲撃者はそれを耳にして鼻で笑い飛ばす。
「何で……ってそんなもん決まってるだろ」
襲撃者である獣の王、ガルティアは剣に突いた血を払いながら奥に進んだ。
「――自分の為だ」
「て、敵襲――!!」
「あぁ――？」
「何だと!!」
そんな報告が突然、魔軍司令部に届けられた。
ムシ使いの子供を前にあれも違う、これも違う、と考え込んでいたレオンハルトはそこに来て、とある可能性を感じ取った。
――もしそうなら……
まさかの可能性だが、もしそうならとんでもなく救いのない話だ。それこそ自分など可愛く見える程に。
周囲の魔物将軍がその報告を聞いて立ち上がったが――もう遅い。
レオンハルトの感覚はそれを鋭敏に感じ取っていた。
既に近くまで来ている。そんな事を内心思った時だ。
魔軍司令部の扉が勢いよく開かれた。
ずかずかと遠慮なく入ってきたその人物は――
「――よう、待たせたな」
ガルティアだった。
身体に幾つもの傷を負いながらもいつもの軽い調子で挨拶してきたガルティアに司令部が騒然とする。
「貴様！　どうやってここまで――」
「たった一人で来やがったのか!?　ええい、俺が相手に――」
「……いや、いい。ちょっと黙ってろ」
魔物将軍と魔物隊長が興奮して立ち上がる中、レオンハルトはそれを言葉に魔人としての威圧感を込めて押し留めた。
「れ、レオンハルト様……？」
「そんなに怯えるな。説明するだけだからよ」

「説明、ですか……？」
「……」
魔物将軍らが疑問を呈する中、レオンハルトはその真実を口にした。少しだけ歪められた真実を。
レオンハルトがガルティアに視線を合わせる。
「……そいつは魔人になりに来たんだよ」
「なっ――!?」
「馬鹿な……！」
「ちなみに魔王様の許可も取ってある」
「そ、そうなのですか……!?」
「……!?」
魔物将軍と魔物隊長が――魔物隊長など口をパクパクさせて驚いていた。十年以上戦ってきたこの人間が魔人になるとは到底信じきれない様子だ。思わずガルティアに視線を向ける。
「ま、そうだな」
だが、当人であるガルティアはあっさりとそれを認めてみせる。とてもこれから人間を裏切り、魔軍に付くとは思えないほどに淡々としている。
「そこの魔人様に勧誘を受けてな。気が合うもんで寝返ってみることにしたんだ。という訳でお前らよろしくな」
「え、ええ――!?」
「レオンハルト様！　頭大丈夫なんですかこの人間!?」
挙句の果てにはよろしくと挨拶をしてくるガルティアに魔物将軍達はどっちが魔物なのかわからなくなる。
そんな中、レオンハルトは少しだけ強い視線でガルティアを射抜く。
「挨拶はいいんだけどよ――順序ってもんがあるんじゃねぇか？」
「――っ！」
レオンハルトがそう注意するとその奥の簡易的な玉座に座る存在が威を発した。
先程まで騒いでいた魔物将軍や魔物隊長も膝を突いて畏まる。

魔物にとって――いや、世界中の生物の支配者ともいえる絶対的な存在――魔王スラルだ。
スラルはガルティアに視線と意識を向けると、それだけでガルティアの身体に重圧が掛かる。
ガルティアはそれを感じ取り、納得した。なるほど、これは確かに魔王だ。
魔人など可愛く見える程の存在感に、しかしガルティアは面白いものを見たと言わんばかりに笑みを深める。
「ははっ、なるほどこれが魔王――いや、魔王様か。名前を聞いても？」
「……スラルよ」
「スラル……よし覚えたぜ。それじゃ早速魔人にしてもらう――その前に、だ」
ガルティアが突然、深刻な顔でスラルに視線を合わせる。
先に聞きたい事がある、とガルティアの表情はそう言っていた。
横目で一瞬だけ魔物将軍を見たガルティアは直ぐに視線を戻すと確認した。返答次第ではこの場で雌雄を決する事も辞さない。その意思を持って――
「――わかってる、ってことでいいんだよな？」
「……ええ、当然よ」
「……？」
魔物将軍達はその問いかけの意味が分からず疑問符を頭に浮かべる。
だがそんな彼らを置いてけぼりに話は進んでいく。ガルティアは魔王からの返答を頭の中でしばらく反復するように黙していたが、ふっ、と笑うとその意思を改めて決めた。
「なら良かった。それじゃあこれからは仲間、でいいのか？」
「……お前、随分とあっさり裏切るな」
「うじうじ悩んでも仕方ないだろ？」
「そりゃあそうだが――」
「っ！　ガルティア――！」

レオンハルトとガルティアが会話の最中。
突如、横槍を入れた者がいた。それは魔軍の陣地にて眠っていたムシ使いの少年だった。
それを見て魔物隊長がげっ、と声を上げる。
「こいつ――いつの間に起きてやがる！　魔王様、レオンハルト様すみません。今すぐ黙らせますので……」
「おおっ、小僧じゃねぇか！」
「うおっ!?」
魔物隊長が行動するよりも早く、ガルティアはその少年に駆け寄った。
そして少年の身体に傷がないことを確認すると安心したようで少年の無事に喜んだ。
「もしかしたら既に死んでるって可能性も考えてたが……とにかく無事で良かったぜ。なぁ、レオンハルト。こいつは――」
「――うるさいっ!!　この裏切り者!!」
「――――！」
ガルティアが意気揚々とレオンハルトに声を掛けた直後、少年は――涙ながらにガルティアにきつい言葉を浴びせた。
「……」
その光景に司令部は水を打ったように静かになった。ガルティアも表情が固まったまま動かない。
そんな中、先に動いたのは少年だった。ガルティアの手を払うと涙で赤くなった瞳で彼を睨みつける。
「長老に聞いたんだ！　ガルティアが魔物に寝返ろうとしてるって！」
「――小僧……それは」
「最初は嘘だと思った……！　でも僕は聞いたんだ……！」
「……何をだ？」
「……あっちの魔人とガルティアが別れ際に何かを喋ってて……気になってムシで音を拾ってみたんだ。そしたら……『待ってるぞ』って魔人が……」

「――チッ……くそっ、間抜けか俺は……！」
レオンハルトが舌打ちし、小声で自分への悪態をつく。あの時、二人と少年との距離は離れていた。到底話が聞こえるような距離じゃない。周りに聞き耳を立てる者がいないか最新の注意を払っていた筈だったが、少年には聞かれていたのだ。
レオンハルトに少年が持っているムシの能力など知りようがない。言っても詮無き事だ。
だがそれでもレオンハルトは自分を殴りたい気持ちでいっぱいだった。これから起きる――最悪の展開を予感して。
「ガルティアは裏切ったんだ……僕を、集落の皆を、パパとママの事だって……！」
「っ！　……小僧の両親、だと？　何のことだ？」
「とぼけるなっ!!　ガルティアが殺したんだろ――僕の両親を!!」
「――――!?」
思いもよらない言葉を浴びせられ、雷に打たれたかのような衝撃がガルティアを貫く。
「足手まといだったんだろっ!?　それで魔物の盾に使ったんだって！
それを知らずに僕は僕は――――っ!!」
少年は家族のようなものと思っていたガルティアに裏切られたという怒りと悲しみで狂乱しているようであった。身寄りのない幼い子供にとってムシを除けば唯一の肉親のような存在。心の拠り所に裏切られた。
しかもそれが仇とも知らずに自分はのうのうと彼を慕って今まで生きてきたのだ。無理もない話である――それが本当の事ならば。
ガルティアは少年の様子を見て、頭が冷えていくのを感じた。
――なぜ、こうなったのか。いや、原因はわかっている。起きたことは仕方がない。時間は元には戻らない。
なら、どうする――？
「おい、ガキ。いい加減に――」
その光景が見るに耐えなくなったレオンハルトは少年を止めようとして――ガルティアの声でかき消された。

「ははっ!!　よく知ってるじゃねえか!!」
「――!?」
　突然様子が豹変したガルティアに不意をつかれたように驚く。少年に向かっていつものように笑いかけたが、そこから飛び出たのは普段とは全くの別物。
「なら隠す必要はねぇな。そうさ、お前の言ってる通りで間違いねえ。俺はお前の両親を殺した――正確には見殺しにした、だな」
「っ――!」
「話聞いてたんなら魔人になる事も聞いてるんだろ？　弱っちい人間には呆れ果てちまってな。俺がいないと戦えない集落の奴らにはほとほと愛想が尽きたんだ。だから寝返ることにした」
　様子は普段と変わらないのに口から聞こえる言葉は彼が絶対に言わないような言葉ばかり。しかし、少年は段々と唇をわなわなと震わせていた。それを嘘だと判断できる思考を少年はもう持っていなかった。
「魔軍の方が楽できそうでいいしな。お前もそう思うだろ？　なんならお前も魔軍に――」
「黙れえええええええええ――――!!!」
　少年の大声が司令部に響き渡り、二度目の静寂がその場を支配する。
　先程とは打って変わって先に動いたのはガルティアだった。彼は冷たい目で少年を見る。
「……そうかよ。それじゃあ――」
　寝てもらうぜ、と。ガルティアは少年に襲いかかった。
「っ！　――ガ、ルティア……」
　ガルティアのスピードに少年が対応出来る筈もなく少年はあっさりとガルティアの毒――睡眠毒を受けて眠らされてしまった。身体から力が抜けて倒れ込む少年の身体を受け止めたガルティアは、少年が完全に寝ている事を確認するとほっとしたように笑った。
「……全く、最後まで苦労かけさせるぜ。――レオンハルト！」
「……ああ、わかってる。おい」

「――え、あ、はいっ！」
呆然と状況を見守っていた魔物隊長だったが、レオンハルトに目を向けられると我に返る。
処分を任されるのだろうとそう思っていた魔物隊長の考えはまたしても裏切られることとなる。
「そのガキを集落の近くまで送ってやれ」
「はっ！　……はっ？」
聞き間違いかと思い魔物隊長が間の抜けた声を出してしまう。送り返す？　子供を？
一度だけ確認してみようと魔物隊長は伺いの言葉を掛けた。
「あの……よろしいので？」
「途中で殺したりすんじゃねぇぞ。もしちょっとでも傷を付けたのがわかったら……」
「わかったら……？」
「――俺が斬り殺してやる。わかったらさっさと行け！」
「はは、はい――!!　直ちに――!!」
眠ったままのムシ使いの少年をガルティアから素早く受け取ると魔物隊長はレオンハルトから逃げるように司令部を去っていった。
レオンハルトはそのままついでとばかりに魔物将軍にも声を掛けた。
「……お前もちょっと出とけ。これからこの人間――ガルティアを魔王様が魔人にする。司令部には誰も近づけるな」
「……はっ！　畏まりました！」
短いながらもレオンハルトと接して逆らわない方がいい事を理解した魔物将軍は、盲目的にその命令に従うため司令部から退出した。
司令部にはレオンハルトとガルティア、それにスラルだけが残る。
レオンハルトとスラルは何処か意気消沈とした様子であり、暗い表情を隠せていない。
そんな彼らにガルティアが声を掛ける。
「手間掛けさせて悪いな。やっぱ身辺整理ってのはごたごたするものなんだな……」

「……良かったのか？」
「あ？　良かったもなにもお前が魔人になれって言ってきたんだろうが」
「――そうじゃねぇ！　あそこまで悪者になる必要なかったんじゃねぇかって聞いてんだ!!」
「あー……そっちの話か」
　ガルティアはレオンハルトとスラルを見て魔物らしくないなと笑う。
「お前らがそこまで落ち込む必要はないだろ？」
「……っ！　テメェは平気なのかよ!!　あれだけ言えばテメェの噂は集落中に真実として広まる！　そしたら魔軍に寝返った卑怯者として全員から蔑まれる事になるんだぞ!!」
「つってもそれは事実だしなぁ。否定する事も――」
「テメェは集落を救ったんだろうが――!!」
　そう。それが真実であった。
　ガルティアが魔人になり、魔王に忠誠を誓う条件。
　レオンハルトがガルティアに出した条件。
　スラルがレオンハルトに命令したこと。
　――ガルティアはスラルの命令を受けたレオンハルトから集落から手を引くことを条件に出され、それを承諾し魔人となりスラルに忠誠を誓う。
　これが今回の顛末であった。
　順を追って見ていこう。スラルは魔軍を追い返している強い人間の存在に興味を持ち、それを魔人としようと思った。――レオンハルトと同じ様に。
　その大本の理由こそ不明だが――今はそれは重要ではない。大事なのはスラルがガルティアを魔人にするために集落から手を引く事を条件に考えていた。そしてそれをレオンハルトには伝えていたこと。
　レオンハルトはその命令を遂行するために、ガルティアを狙った。無論、殺してしまわないように注意を払いながら。……残念ながらそ

の時点で命令を遂行する事は出来なかったが。
　そして咄嗟に魔軍を撤退させ、去り際に「魔人になり魔王スラルに忠誠を誓うなら魔軍はムシ使いの集落から手を引く」ということを伝えた。そしてその時に最後にレオンハルトが放った「待ってるぞ」という言葉だけが聞き取られてしまっていた。仮にだが、その時交わされた言葉を全て少年が聞き取っていたのならば、すれ違いは起こらなかっただろう。
　そして追い詰められた長老は少年に言葉巧みにガルティアが魔軍に寝返る、という嘘のような真実を偶然にも言い当て、それを教えた。そしてショックを受けている最中にムシで少年を眠らせると、ムシ使いに魔軍の陣地近くまで運ばせた。ちなみにこの時に少年を運んだムシ使いは既に死んでいる。帰り際に魔物兵に見つかり殺されたのか、それとも――
「じっさまも馬鹿だよなぁ……そんな事しなくても俺は望んでここに来たっていうのに」
　ガルティアは自ら魔人になり集落を救うことを望んだ。集落を救うためならガルティアは命をかけられた。
　もし長老が正直に、集落の皆が逃げるための時間を稼ぐために死んでくれと、そう頼んだのならガルティアは喜んで自分の命を差し出しただろう。
「小僧も……俺があいつの両親を、あいつらを殺す訳ないんだけどな……」
　あくまでもガルティアは、淡々と心中を吐露する。
　ガルティアと少年の両親は幼い頃からの親友であり幼馴染であった。子供の時からいつも一緒にいた大切な親友達。
　大人になっても、親友二人が結婚しても、その関係だけは変わらなかった。しかしその関係は唐突に終わりを迎える。二人が戦場で死んだからだ。その時はさすがのガルティアも堪えた。一日中何を食べても美味しく感じなかった。ムシ達もそんなガルティアを感じ取ってか元気がなかった。
　だが、ガルティアには親友に託されたものがあった。二人の子供で

ある少年の事だ。
ガルティアは出来る限りは少年に構ってやった。元々面倒見の良い性分である。二人はすぐに打ち解けた。
しかしそんな親友の忘れ形見にも嫌われてしまっただろうなとガルティアは内心せせら笑う。
「ははっ……全くしょうがない奴らだ」
だが、ガルティアはあくまでやれやれだと笑う。これだけの事が起きても彼には悲しみに包まれた様子がなかった。
「何でだ……！」
そんなガルティアの態度にレオンハルトが憤る。心の奥底にある疑問。それを絞り出すように宙に乗せる。
「集落を救ったんだろ……！　他人の為に戦い続けたんだろ……！　ならもっと報われてもいいんじゃねぇのか……!?　なんでそれで嫌われなくちゃならねぇんだ……！」
「レオンハルト……」
「お前……」
スラルが痛ましいものを見るように表情を曇らせ、ガルティアもその様子を見てある程度、その苦悩を察する。
レオンハルトにとってガルティアへの今の仕打ちは過去の自分そのものだった。
彼が戦場に出るようになった切っ掛け。それは他でもない、自分の周囲の大切な人を、故郷を守りたかったからだ。
決して良い子であったとはいえない自分のような子供を周囲は温かく接してくれた。それを少しでも返したいと思い、魔物との戦いに出た。全員とは言わない。自分の力で少しでも手助けが出来たら――そんな事を照れくさく思いながらも認めていたものだ。
そしてその願いは叶えられたのだ――自分を犠牲にするという形で。
守った筈の人々から化け物と呼ばれ蔑まれる日々。何故、自分はこうも報われないのだろう、ほんの少しだけでもいいのに。誰も自分を必要としていない。必要とされているのは強さだけ。なら自分は何

のために戦っているのだ――？
「ガルティア……テメェは何でそうやって笑ってられる!! 自分が守った筈の連中から嫌われてんだぞ!? どうしてだ、どうして嫌いにならねぇんだ――！」
それは自分への問いであるようにも感じた。
――魔人になる際に集落の人間だけは見逃してくれと魔王に頭を下げた――自分への答えが出ない問い。
「……ははっ、なるほどな。それはだな――」
ガルティアはそれをあっさりと、いとも簡単に告げる。自分にとって当然の事だと。
「――向こうに嫌われたからって、こっちまで嫌い返さなくちゃならんって理屈はないだろ？」
「――――！」
目から鱗が落ちたかのようにレオンハルトはそれに気付かされる。
ガルティアにとっては当たり前の事で今更言うべき事でもないこと。しかし、何となく目の前の魔人に応えたくなって告げた言葉だった。
「自分でも本当は気づいてるだろ？ 嫌われようが構わないじゃねぇか。それでも為になるなら喜ぶべきだ」
「……く、くははっ」
レオンハルトは思わず白い歯を見せて笑った。
ガルティアの言葉に笑ったのか、それとも自分の馬鹿っぷりに笑ったのか。とにかくレオンハルトの表情からは憑き物が落ちたようで彼はひとしきり笑うと普段通りの顔に戻っていた。
「――ああ、理解した。まぁ理解したけどな。俺はお前程マゾには成れねぇな。やっぱり少しくらいは好かれたいし」
「ああ？ お前、そこは同意しとけよ。空気的に。つうかマゾってお前……いや、いいけどな」
「……いいのかよ。前は気が合いそうって言ったけど大らか過ぎて地味に気をもみそうだな……」
「そういうお前はちょっと神経質気味だろ。無駄に気にしすぎて大変

そうだ」
「……魔人になって直ぐに魔人四天王と魔軍参謀に就任させられたらストレスも溜まるっての」
「へぇーお前そんな偉かったのか。あ、そういや魔軍って食事関連はどうしてんだ？　そこの所詳しく――」
「ああ――っ!!　ちょっと黙って!!　ストップ!!」
　レオンハルトとガルティアの掛け合いに耐えきれなくなったのかスラルが大声で叫ぶ。実際、このままだと延々と話続けてただろう。スラルの判断は的確だった。
「なんで私を蚊帳の外に勝手に仲良くなってるのよ！」
「怒るとこそこかよ……」
　呆れたようにスラルを見るレオンハルト。それを見てガルティアは、
「……なぁ、俺が思ってた魔王と随分とイメージが違うんだが本当にこいつ魔王か？」
「正真正銘の魔王様だ。まぁ確かにこのままうだうだやってるってのもな。おいスラル、さっさとガルティアを魔人に――」
「魔王の私に命令するな――っ!!!!」
「……退屈はしなさそうだな」

――その日、魔軍に新たな魔人が加わった。
魔人ガルティア。ムシ使いという人間の一族に生まれた魔人。
そして魔王スラルが作った二体目の魔人であり――心優しき獣の王である。

使徒と魔軍の食糧事情

――魔王城

魔王スラルが建てた巨大な城であり魔軍の拠点。

故にこの城には魔王や魔人だけでなく多数の魔物兵が詰めていた。

この城に出入りする魔物は魔軍の幹部である魔物将軍や一部の魔物隊長を除けば警備を務める魔物兵。

魔王の居城を守る魔物兵のエリートであり人気の職場――という訳ではない。

魔王や魔人は皆個性的な人物ばかりで、突然の無茶振りや機嫌を損ねた日には命を取られかれない。

しかし、それでも警備隊に入りたがる魔物兵は大勢いた。

その殆どが魔人に近づく事で自分も美味い汁を吸えるという下心がある訳だが、それだけではない。もっと大切な――生きるために必要な切実な理由があった。

それは――食、である。

「なぁ、今日お前何食べる？」

「俺はとりあえずうっぴーの気分だな。お前は？」

「俺はカワズガケかな。ぬるぬるしたのが好きでなぁ……」

城務めの魔物兵は同じく休憩に入った魔物兵と料理談義に花を咲かせながら食堂へと向かっていた。

食堂。魔王スラルが部下の魔物もちゃんとご飯が食べられるようにと作らせた場所である。

魔物達が魔王城の食事を楽しみにしている理由は簡単で、魔物社会は人間社会ほど食文化が発達していないからだ。

だがそれは必然でもある。料理をするような魔物が殆ど存在しないからだ。

中には特定の料理だけを作る魔物もいるのだがそれ以外の料理は基本食べる機会がない。

人間の集落を襲ったついでに作らせて食べるくらいだ。中にはわざわざそれを楽しみにしている魔物もいる。

食べるものは基本的に収穫出来る食べ物などをそのまま食べるか、精々焼くくらいである。
故に城詰めの魔物兵にとって食事の時間は一日で最も楽しみな時間であった。
――そして、そんな貴重な憩いの場が現在、奪われようとしていた。
「……」
「んぐ……がりごり……お、このうろろーんいけるな、独特で悪くない。こっちのネギネギポーンも食感がたまんねぇ。香ばしい匂いが食欲を誘うな」
食堂の中央。
そこには二人の魔人が向かい合うように腰を落ち着けていた。
「ガルティア様、どんだけ食べるつもりなんだ……？」
「十人前なんてとっくに超えてるよな……あれ」
「というかレオンハルト様にあんだけ睨まれてよく普通に食べれるな……」
食事を取っていたのは、ついこの間に魔人になったムシ使いの男――魔人ガルティア。
そして食事を取るガルティアを眉間に皺を寄せながらその赤い双眸で睨む――魔人レオンハルト。
二人の魔人が食堂の中央に居座ってから、魔物達は食堂の端っこで肩身の狭い思いをしながら食事を取っていた。
自分達の上司、魔物社会の支配者達が食事を取っているのだ。休まるわけないだろう。
魔物兵達は味もわからないまま早急に食事を口に詰め込むと逃げるように食堂から出ていく。
「魔物も結構いい物食ってんだな。おっとここの卵やきは甘口か、いいねえ」
「……ガルティア」
「いくらうにも美味え。舌の上で旨味が踊ってやがる――と、おお悪い。何の話だったか？」
「――テメエ、どれだけ食うつもりだ――!?」

レオンハルトの大声が食堂に響いて反響した。それを視線を向けずに聞いた魔物兵が内心で大いに頷く。
それはガルティアが魔人になってから誰もが皆思っていた事であった。
「毎日毎日馬鹿みたいに食い散らかしやがって……！」
「おいおい残さず全部食べてるだろうが」
「そういう意味じゃねぇッ!!　ったく……」
「あー……でもしょうがねえだろ。魔人になってこんな身体になっちまったし。それに、こいつらを飢えさせる訳にはいかないからな」
「……そうだが限度ってもんが……」
レオンハルトはガルティアのお腹に視線を移す。そしてそこにぽっかりと空いている大きな穴と、その穴から顔を出し首を傾げる異形の少女を見る。
「――？」
「……チッ」
何で見詰められているのかわからないのか、首を傾げる彼女。レオンハルトはそれを見ると、舌打ちをして黙り込んだ。
――まさか、ガルティア達の食事量がこれ程とはな……。

――それは十日前の事。
ガルティアを魔人化させたスラルは直ぐに魔軍へ撤退命令を出した。
魔物将軍達は困惑していたが、魔王に言われては否応もない。魔物兵達は略奪出来ない事を残念がっていたが帰投の準備を始めた。魔王に逆らえる訳がないのだからその点はいい。
問題はガルティアが魔人になった時の変化である。
ガルティアは見た目こそ大きく変わる事はなかった――ある二つの点を除いて。
魔人になった彼のお腹にはぽっかりと大きな穴が空いていたのだ。
中身も何も見えず、そこに見えるのは真っ黒な空洞だけ。

しかし特に行動に支障が無さそうだったのでガルティアは気にしていない様だった。
そんな時、自分とスラルが釈然としない表情を浮かべていると中から三体の異形が出てきた。人間の身体に他の生物の特徴がある異形。
そしてそんな存在がガルティアに抱きついたのだ。三体とも。捕食でもしようとしているのかと思ったがどうやら違うらしく、身体を擦り寄せて、どこか喜んでいるようだった。
ガルティアはそれを見て、何かに気づいたように驚いた表情を見せると、直ぐに同じ様に喜んだ。三体の異形を見て驚く自分達にガルティアは紹介した、「俺のムシ達だ」と。
まさかこれが？　と自分は首を傾げたがスラルはなにかに気づいたように顔を強張らせてこう言った。
――使徒化してる。
使徒。
それは魔王にとっての魔人のような存在だ。
魔人は自分の血を他の生物に分け与えて、血の契約を交わすことによりその生物を使徒――自身専用の下僕にすることが出来る。
そして使徒になった生物は魔人化と同じ様に不老になり能力が強化される。外見の変化は使徒化の副作用のようなものであるらしい。他にも魔人が使徒を作ると魔人の血が薄くなる為、力がほんの少し弱まってしまう等、様々なメリットとデメリットが存在するが、重要な部分はそこではない。
問題は何故、ガルティアの躰の中にいたムシ達はガルティアと血の契約を行っていないのにもかかわらず、使徒になったのか。
これにはおそらくムシ使いとしての特性が影響したのでは、とスラルは語った。
ムシには本来、魂が存在しない。自我を持たない為に何かを考える事も感じたりする事もない本能で生きる生物なのだ。
しかし、ムシ使いのムシは人間や魔物と同じ様に自ら考え、言葉を発する事が出来る。意思があるのだ。
これはムシ使いとムシの魂が融合することによって宿主の魂の影

響を受けたムシに魂――人格が発生するというのだ。
そこから考えると、ガルティアの魔人化はその躰の中にいるムシに影響を与えたのではないか、そして沢山いた筈のムシが全て使徒になったのではなく、三体になったのはガルティアの力、魔人の血のキャパシティを大きく超えること。そしてムシ達が自ら望んだ末に――ガルティアのムシは使徒になり、同時に三体の存在に生まれ変わったのではないか――これがスラルの出した仮説だ。
しかし、そんな事を聞いてもガルティアは「ほーぅお」と関心したような声を出しただけで使徒化の原理やどうしてこうなったのかについてはあまり興味が湧かない様子である。
ガルティアはよくわからないがこれからもムシ達と一緒なら良かったと笑った。重要なのはそこだけだと。
生まれ変わったのなら名前を付けなくちゃな、とガルティアは三体の使徒をじっと見つめると順番に名前を付けはじめた。
長い黒髪を持った少女の上半身に下半身は蜘蛛の姿の使徒――ラウネア。
褐色の肌に白い髪、発達した白い猿の手と足を持った使徒――タルゴ。
淡いピンクの髪にとりのような翼と足の容姿が特徴の使徒――サメザン。
やけにあっさりと名前が決まった事について聞いてみたが、ガルティアは特に考えずに思い浮かんだ名前を付けたらしい。
――別に何だって良いだろ？　悪い名前じゃなければな。
ガルティアはそう言って使徒達の頭を撫で回した。使徒たちも嬉しそうだった。
その飾らないガルティアの性格とムシとの絆に思わず自分もスラルも笑ってしまった。これは敵わねぇな、と。
そうして自分達、魔軍は魔王城に帰っていった。新しい同胞と共に――
――
……と、そんないい話では終わらなかった。

話がまとまり、帰りの準備を終えた出立前、ガルティアはこう言った。

――腹が減った。

……それからが地獄の始まりだった。

ムシ使いがよく食べるのは重々承知だった。それにガルティアは色々あって魔人化したばかり。疲労もあるだろう。

幸いにもこの地に持ってきた物資の中には食料が沢山ある。この地の魔軍が備蓄していた食料も。戦いも一日で終わったのだし持って帰るのも手間だ。少しくらいなら大丈夫だろう。

……そう思っていた俺が馬鹿だったのだ。

ガルティアは食べた。食べ続けた。魔王城へ帰投中。何日も。ひたすらに。自分達が持ってきた食料を。

そしてガルティアは全て食べ尽くしてしまったのだ。その時、魔軍参謀でありこの行軍の責任者である自分は頭を抱えた。ありえない、魔物六万体分の食料だぞ……！

魔人となったガルティアの食事量を舐めていた。本人は普段よりいっぱい食べられるようになったと喜んでいたが冗談じゃなかった。これだけお腹が空いてたのも魔人化したばかりの今だけで、多分後は落ち着くだろ、とか何とか言ってたがそれはいい。いや、よくないが。それでも問題は今なのだ。

魔王城に着くまで予定では後一日ある。それまでの食料をどうするか。緊急会議を行い、集めた魔物将軍達と一緒に自分は頭を抱えた。

そして結局、約六万の軍勢を総動員して周辺で食料を集めることになった。題して「自分が食べる分は自分の手で得る」作戦である。魔王直属の軍勢がこんな馬鹿みたいな事をしてると人間に知られたら大笑いされるだろう。いや、下手したら同じ魔軍の同胞からも何をやってるんだと呆れられるかもしれない。

結局六万体分の食料を集めるのは不可能で、自分達はそこそこ飢えた状態で魔王城に帰還した。

一日だけで良かった。これが二日以上なら本当に地獄であっただ

ろう。魔人である自分や魔王であるスラルは食べなくても死ぬ事はないがそれでも精神的にくる物がある。というかガルティアも我慢しろ。

そんなこんなでやっと魔王城でゆっくりと出来る。そう思っていた。

――事態はまだ終わっていなかった。

一つは魔王城ですらガルティアはその食事量で少しずつ備蓄を減らしているということ。近い内に食料の安定供給先を一つくらい確保しなければならない。一応、今のガルティアの食事量ならまだしばらくは賄いきれるので少しは時間がある。

実際、少しだけ食事量も落ち着いていた。それでも百人前以上は軽く食べるのだから恐ろしい事には違いないが。

二つ目は、単純に苦情が自分の所までやってくるのだ。魔王城ではコックを拐ってきた人間の料理人にやらせている。良くない事には違いないが、料理人には身の安全の保証とそれなりの待遇を与えているので最初は怯えていたが今では割と満足しているらしい。そんな料理人から遠回りに苦情が来た。

料理人からそれを管理、担当している魔物隊長に、更にその上司である魔物将軍に、そして魔軍参謀である自分のところに。何でもガルティアが来てから休む暇が無い、とのことだ。

ガルティアは殆ど一日中料理を食べ続けるのでそれだけの時間コック達は働かなくてはならない。そのため、眠る時間以外はずっと働いているのだという。

ここで、「ふん、人間の言うことなど知ったことか。お前らは奴隷なんだから死ぬまで働け」と言うことは簡単だが、それで困るのは自分達だ。

コックに倒れられれば料理を作る人材がいなくなる。料理が食べれなくなるのは困るし、新しく人間を拐ってくるのも手間なのだ。そのため、この事を魔物将軍はとても言い辛そうに自分に報告してきた。

これは早急に解決しなくてはならない。故に新しく人間のコック

を拐って来いと魔物将軍に命令したのはいいが、それだけじゃそろそろ腹の内が収まらない。
そして一言だけでも言ってやろうとガルティアに会いに来た。
……だが。
「おいおい、また難しい事考えてるみたいだな。たまにはメシでも食いながらゆっくりしたらどうだ？　ほら、こっちのこかとりすの姿揚げ、美味いぞ？」
「……はぁ、よこせ」
「ほいよ」
俺はガルティアから渡された料理を口に運ぶ。
噛みしめると香ばしい香りが広がり、ジューシーな肉汁が口の中で溢れる。
「……こかとりすはやっぱ美味えな。それにこれ、事前に肉をタレを漬け込んでるな。下味がしっかりしてる」
「おっ、わかるか。コックはいい仕事してるよな」
「確かにな。人間の頃に食ってたものより美味え。幾らでも食べられそうだ」
「なら、今度食べ比べでもしてみるか？」
「……出来るか馬鹿が」
「ははっ、残念だ」
素っ気なく断られてもガルティアは特に気にした様子もない。再び近くにあった皿を持ち上げ食事を再開した。
……まぁ、いいか。
たまにはここでゆっくりとするのも悪くない。仕事の事ばっかり考えるのもなんだし。
自分も何か頼もう、と思ったその時だ。
食堂に入ってきた一体の魔物兵が近づいてくる。
俺のところに真っ直ぐ向かってきた魔物兵は緊張した様子で話しかけてきた。
「れ、レオンハルト様――と、ガルティア様、お食事中すみません」
「俺の事は気にしなくていいぜー」

「どうした？」
ガルティアが食べながらそう口にし、相変わらず器用だな、と考えながら魔物兵の言葉を待つ。
「その、ですね……カミーラ様がお部屋でお待ちです」
「……は？　何だそりゃ」
待ってる、と言われてもそんな予定はない。それを聞いたガルティアが茶化す。
「ひゅー、やるな。美人と部屋で逢引か」
「もしそうならこんな所で男と駄弁ってねぇんだよ。第一、あのカミーラが男と逢引するのなんて想像出来るか？」
「……つまんねぇな」
「うるせぇ、黙ってろ」
余談だが、ガルティアは既にカミーラと会っている。というか俺の時と同じ様に挨拶は済ませた。
カミーラは相変わらずというか、気さくで接しやすいガルティアに対しても素っ気ない対応だった。
それにしても約束ねぇ……って、ん……約束……？
「――あ」
その時、俺の脳みそに電流が走る。
――貸しだ。
約束あるじゃねぇか！
俺は直ぐ様立ち上がるとガルティアと魔物兵に声を掛ける。
「ちょっと行ってくる――お前も連絡ご苦労だった」
「おお、良い報告待ってるぜ」
「は、ははっ！」
俺はガルティアと魔物兵の返答を聞いて食堂の出口に向かう。
……さて、何をやらされるか。
そして食堂から出ると、急いでカミーラの部屋に向かって足早に歩を進めた。

カミーラの命令

「……俺だ、入るぞ」

ノックを二回し、部屋の外から声を掛け、扉に手を掛ける。

部屋に入ってまず目に飛び込んでくるのは、自分の部屋よりも少しだけ豪奢な部屋の作り。家具やインテリアには宝石をあしらった物が使われており、埃も全く見当たらない清潔さ。

生活感があまり見えてこないくらいには整っている。おそらく定期的に掃除させているのだろうが、ここの部屋の担当はいつもえらく緊張しているだろうなと思う。

そしてそんな部屋の中心。格式張ったそれなりの大きさの椅子に座っていたのは当然、この部屋の主。

「……遅い、な」

「……色々と用事があってな。悪い」

自分と同じ魔人四天王にしてプラチナドラゴンの魔人――カミーラだ。

彼女はその美しい容貌と黄金の眼をこちらに向けて嫌味をチクリ。だが、特別怒っているようには感じない。

「……座ってもいいか？」

「……好きにするといい」

カミーラに了承を得ると丸いテーブルの正面、彼女と向かい合うような形で腰を落ち着ける。そして座り心地のいい椅子の感触にびっくり。なんで同じ魔人四天王なのにこうも自分の部屋と違うのか改めて疑問を感じる。

しかしそれは後で考える事にする。俺は軽く息を吐いて、カミーラに口を開いた。

「……それで、どういった用件――いや、違うか。命令の内容を聞いてもいいか？」

俺は普段より少しだけ物腰を柔らかくそう尋ねる。

――やっぱり、こいつの相手は緊張するな……。

魔人になって魔物社会にはそこそこ慣れたつもりだ。部下に命令

する事も慣れたし、他の魔人とも――まぁ、仲がいいとは言えないが普通に話す事が出来る。
だが、カミーラだけは別だ。
ケイブリスに言わせれば同じ魔人四天王でどちらも畏れ多い、との事だがとんでもない。
同じ魔人四天王といっても自分はまだ魔人になったばかりの新参者。年齢もまだまだ人間と変わりない。
しかしカミーラは既に千年以上を生きている。そこには上級魔人としての圧倒的な格があるように感じられた。
それにこちらは相手の同胞である仲間の魔人――ギリウムを決闘で殺している。こうやってカミーラの命令を聞こうとするのもその件に対する謝罪としてカミーラに出された条件の様なものだからだ。
そんな相手に普段とまったく同じ様に接するのは、少なくとも今の自分には出来そうもない。何を考えているのかもよくわからないのが更にそれを増長させている。
「……」
「……」
故に、こうやって目蓋を閉じたまま無言でいられるととても困る。
何か考えているのだろうからこちらから催促するのもよくない。しかしじっと待っているのも居心地が悪い。
「……」
長い。長過ぎる。お前まさか命令の内容考えてなかったんじゃないだろうな。それとも寝てるのか？　いい加減黙ってるのが苦しくなってきたぞ。
何か適当な事でも考えて時間を潰すか……そういやずっとこうやって目を閉じたままだとキス待ちにも見えなくもない。いきなりキスしてやったらどうなるだろうか。頬を染めて初心な反応を返すのか、それとも何をするんだと怒って突き飛ばしてくるか……十中八九後者だろうな。
こういうやばい思考ってたまにあるんだよな。ここで何の脈絡もなくいきなり殴ったら相手はどんな反応をするんだろう、みたいなア

レだ。
そんな馬鹿みたいな思考をして暇を潰さなきゃならないくらい、カミーラは長考していた。
「……色々、考えたが……」
「ああ」
カミーラが目を開いてゆっくりと喋り始める。
これでようやく話がすすむな、と内心ほっとする。
しかし、カミーラから告げられた言葉に、俺は呆気にとられる事になった。
「……使徒を、作ろうと思う」
「――は？」
「手伝え」
「……ん？」
カミーラの言葉の意味が分からず思わず間抜けな声を上げてしまう――どういう事だ？
何故、使徒を作ることと自分への命令が関係する？　手伝えって事は自分に使徒になれって言ってる訳ではないだろう。そもそも魔人なのだから無理だ。そんな事はカミーラもわかってるだろう。
「……ああ、なるほど」
俺は自然と思い浮かんだ答えをカミーラに告げる。
「使徒になる奴――使徒候補を探すのを手伝えばいいのか？」
「……そうだ」
やはり、か。俺は得心する。
だが、拭いきれてない疑問もあるのでこの際だから流れで聞いてみる事にした。答えてくれるのかは知らないが。
「一応、何で使徒を作ろうと思ったか聞いてもいいか？　目的がわかっていた方が候補も絞りやすい」
「……それは、だな」
理由を添えて質問してみると、どうやら答えてくれるようだ。思ったよりも素直だな。
カミーラは一度視線を横に逸らしたが、直ぐに視線を合わせて口を

開いた。
「……お前の所為だ」
「あ……？　俺の所為？」
「……お前が……私に、仕事を回してくるからだ」
「？　回しちゃまずかったか？」
カミーラの答えに俺は首を傾げる。確かに自分はカミーラに仕事を回している――と言っても他の魔人と同じ様に魔軍の人間侵攻部隊の総司令官を任せているだけだ。
それも実際の実務は魔物将軍が殆ど行ってる筈なので魔人は好きなように戦うだけ。一応の指示も出せるが出さなくてもいい。とっても楽な仕事だ。変わってほしいくらいには。
「……何故、私が……動かねばならない……？」
「ああ……？　いや、大体は魔物将軍に任せればいいだろ？」
「魔物将軍は、弱い上に……役に立たない……」
おい。なんて事言うんだ。
強さは個人の見解によるが別に弱くはないだろう。そりゃあ魔人に比べたら弱いかもしれないが、そもそも比べる事がおかしい。
おそらく自分の機微を察してくれないからそう言っている――と信じたい。じゃないと必死にカミーラの為に働いている魔物将軍の立場がない。可哀想。
そんな思いも微塵も感じていないだろう。更にカミーラはこう口にした。
「私は……働きたくない……」
「おい」
思わずツッコミを声に出してしまう。
堂々としたニート宣言に俺は絶句するしかない。
「故に……使徒を、作る……理解したか……？」
「……ああ」
どうしよう。この堕落魔人、めちゃくちゃ殴りてぇ。
あまりにも怠惰過ぎる。理由も態度も。
それが許されるような環境で育ってきたのかもしれんが、これは

ちょっとどうなんだと疑問を呈したい。誇り高いドラゴンの姫がこんな怠け者でいいのか？

従いたくないな……だが、俺は従わなければならない。同胞を殺した謝意を示す為にも貸しを返済する為にもやらなければならない。

しょうがない。カミーラの為にも探してやるか、と意思を固めていると予想に反してカミーラが立ち上がった。

「では……ゆくぞ……」

「あれ？　お前も来るのか？」

てっきり俺だけに任せるのかと思ったのだが。

「変なのを、連れてこられては……困る。使徒になる者は……自分で……見定める……」

「……そうか……なら、さっさと行くか」

カミーラははっきりとした意思を持ってそう口にした。俺も後に続く。

……なんか良いこと言ってるようだが、自分がサボる為に動いてるんだよな……。

怠惰な癖に、そういう時だけは自分から積極的に動くカミーラに釈然としない思いを抱えながら、俺達は魔王城を後にした。

――ルドラサウム大陸西部。

大勢の魔物達がいるその場所は――魔の領域と呼ばれていた。

多くの魔物が辺りを闊歩し、厳しい環境にさらされるその場所は、他の地域よりも危険であり、力無き物が生きる事を許されない弱肉強食の世界だ。

魔王城から遠く離れたこの地域は、魔物達ですらその全容を未だに把握していない。まさしく前人未到の地なのだ。

そんな魔の領域の土地を、レオンハルトとカミーラは二人で歩いていた。

「この辺りはもう全然わかんねぇな……カミーラは知ってんのか？」

「……」

周囲を見渡しながら先を行くレオンハルトに、カミーラは無言で首を振るだけ。
……反応があるだけマシ、か。
相変わらずの無口、無表情っぷりを発揮するカミーラに、レオンハルトはそう評しながら探索を続ける。
周囲には人間の生息地では見ないような動植物に紫掛かった不気味な曇り空。まさしく魔の領域と呼ぶべき光景が広がっている。
だが、魔物達は自分達に近づいてこない。それどころか何かを察して気配すら見せない。
魔人という絶大な力を持つ支配者層の前では魔の領域に住む強い魔物達も避けて通るしかない。こういった強い存在を避ける事も、生き残るために必要な能力なのだ。
しかし自分達にとっては都合が悪い。
なにせ使徒を探しに来ているのだから生物と会わなければいつまで経っても終わらない。
それに会えたとしてもカミーラが気にいるかどうかも分からない。出来れば数撃ちゃ当たると言わんばかりにどんどん候補を見つけ出したいものなのだが。
因みに、城を出る時に魔軍に所属する魔物から選んだらどうか、と聞いてみたが返事すらしてくれなかった。既に飼いならされた存在には興味がないのだろうか。
なら、どういった奴を使徒にしたいのか聞いてみることに。
「なぁ、どういった見た目がいいかとかあるか？」
「……容姿は……醜くない者がいい……」
「なるほど。それじゃあ性格はどうだ？」
「……私に……心から……忠誠を誓える者……後は」
「何だ？」
「……下心が、あり過ぎる者は……嫌いだ……」
「……なるほど」
「それと……男……」
「……ああ」

カミーラの使徒に求める条件を大体聞いて満足する。まとめるとこういう事だ。
性別は男、容姿はイケメンで下心は無く、無条件でカミーラに忠誠を誓う者。
……そんな奴いるのか？
あまりにも都合が良すぎる存在だ。そんな相手をこの魔の領域で探す。魔物は基本的に我が強いから中々に難しい条件だ。いや、人間にもそんな奴いなさそうだが。
「俺、帰れるのか……？」
下手したらずっとこうやって魔物界を練り歩く事になるんじゃないかと危機感を抱く。
「……？　何をしている……行くぞ」
「……わかってる――って、おい！」
呆然としている俺に声を掛け、カミーラは宙に浮かんで、さっさと進んでいってしまう。さすがはドラゴン。当然のように飛行出来るか。
しかしあまり勝手に進むのは勘弁してほしい。
この辺りは魔軍の報告にもない未知のエリアだ。何があるかも想像つかない。カミーラ相手に万が一など起こりえないだろうが、警戒しておくに越したことはないだろう。
「ああ、ああ……あんな先まで行きやがって。しょうがねぇな」
俺は魔の領域特有の馬鹿でかい木の枝に向かって跳躍すると、そのまま次の木の枝に向かって跳び上がり、カミーラを追いかける。
魔人の身体能力ならこれくらいは何の問題もない。むしろ余裕があるくらいだ。
そして、どうやらこの辺りは山になっているようで、斜面に立った木々を登るように跳躍していく。
前方を行くカミーラを何とか視線に捉えながら山を登っていくと、カミーラがとある岩山の上に降り立った。どうやらその先の景色を見ているらしい様子。
それから少ししてこちらもカミーラに追いつくと、カミーラの隣に

駆け寄った。
「……」
「はぁ、やっと追いついたか」
どうやら山の頂上に着いたようだ。よっぽど眺めが良いのだろう。
俺も同じ様にその先の景色を眺めようとする。
「何を見て――」
そしてその先にある物を見て――息を呑んだ。
「これは……」
開けた山の麓。
そこにそびえ立つのは――巨大な星のようにも見える大きなそれ。
雲まで届きそうな程の全長を誇る、ドームのような丸い形のそれに
俺は見覚えがあった。
それは魔物界では馴染みの深いものだ。
「ツリー都市、か……」
魔の領域特有の――巨大な樹木がそこにはあった。

七星

ツリー都市。
それはその名の通り、魔の領域における魔物の都市。人間界で言うところの集落だ。
何故そう呼ばれるのか。それはこの巨大樹木の特徴に由来する。
見た目は巨大な星のような球体であり、中は空洞となっているこの植物。その周辺では沢山の資源や食料が取れるのだ。
理由は不明。しかし魔物達はこの樹木の恩恵にあやかろうとその中に町を作った。
これがツリー都市と呼ばれる所以である。
実際、魔軍の勢力下には幾つかのツリー都市があるのだが、このツリー都市はまだ魔軍では発見出来ていない新しいツリー都市となる。
その中をレオンハルトとカミーラは探索していた。
ここがツリー都市であるなら沢山の魔物がいるであろうという判断によるものである。
だが、
「びっくりするくらい誰もいねぇな……」
「……」
辺りには魔物が一匹も見当たらなかった。
レオンハルトの言葉にカミーラは答えなかったものの、その表情には同じ疑問の色が見える。
……魔物がいた痕跡はあるんだがな。
そもそもちゃんと町並みが作られている時点で魔物がここに住んでいた事は確実だ。本当に誰にも見つかっていないのなら中身は空洞で何もないはずである。
因みにツリー都市の内部はどういう原理か、外の光を通す性質を持つため中は明るい。それでいて樹木が雨や自然災害などからも守ってくれるという住むには絶好の条件が揃っている。
「もうちょっと奥に進んでみるか……カミーラ――って、おい！」

見ればまたしてもさっさと先に進んでいくカミーラ。
……協調性が無さすぎる。
しょうがなくカミーラの後ろをついて行く。もう、こうしておいた方がいいだろう。　じっとしてるならともかく結構真面目に探索してくれているみたいだし。これでも一応、見て調べる事は出来る。
そしてそのままカミーラと共にどんどん奥に進んでいく。
すると徐々に、町の風景が変わってきた。
それを目にしたカミーラの眉をぴくりと動く。
「……壊れて……いや、壊されているな」
「ああ……酷い有様だな」
そう、俺達の視線の先――既に周囲の町は何者かに破壊されたかのような廃墟になっていた。建物の崩落、倒壊、焼け落ちた跡に何かが這いずり回ったような痕跡など。
そしてこれらは自然に風化する事ではありえない現象だ。
「……」
「……」
俺とカミーラの間で少しだけ緊張が走る。それは何故か。
それは奥に進んでいく中で、その破壊の跡がどんどん新しくなっていくからである。もしもこれを引き起こした原因が今もいるとするならば――この先に、それがいる。
とは言ってもお互いに特に不安がっている訳ではない。
この先にこの破壊をもたらした存在がいるとしても――そんなものはどうとでも出来る。この場にいるのは魔人――それも上級魔人の証ともいえる魔人四天王の名を冠する二人だ。これでどうにか出来ないような存在なら、それは世界の危機に他ならない。
故にお互いに好奇心からその先へと臆さず進み続けると――それは聞こえた。
『――――!!』
「！」
「来たか……！」
とてつもない声量の鳴き声。それと共に空から巨大な影が現れた。

だが、次に見せたその姿に俺は目を見開く。
「おい……こいつは――」
輝くような白い鱗と腹部は鮮やかな翡翠色。
長い体躯には四本の手足とその先にあるのは鋭い爪。頭部には二本の角、そして牙。
二つの青い双眸がこちらを発見し、威嚇するように唸り声を響かせている。
かつては地上で世界の覇権を握っていた第二世代メインプレイヤー。
その生物の名を俺は口にした。
「ドラゴンじゃねぇか――!!」
『――!!』
そしてそのドラゴンは咆哮を上げて、俺達に襲いかかってきた。

「――!」
――この野郎！　狙いは俺かよッ！
俺は咄嗟に魔剣を引き抜き、飛びかかるように襲ってきたドラゴンの爪を弾く。
そのまま少し距離を置き、ドラゴンを観察する。
……なんというか、自分はつくづくドラゴンと縁があるようだ。
この短い期間に、魔人になったものも含めて三体ものドラゴンと関わってしまうとは幸運なのか不運なのか。普通の人間なら出会ったらまず死ぬであろうからやっぱり不幸なのだろうな。
『――!!』
爪を弾いた俺に怒り狂ったのかドラゴンが爪で連続攻撃を仕掛けてくる。
右前足でこちらを切り裂こうと襲ってくる爪、同じく左前足の爪、噛み付こうと首を伸ばしてくるのを下がりながらのステップで回避する。
一度、魔人とはいえドラゴンと戦っているからだろうか――攻撃が

前より読みやすい――という事はない。
以前戦ったのは人の形をしていた訳で攻撃も読みやすかったのだが、今回は完全なる四足歩行のドラゴン。むしろ攻撃は読みにくい。だが、速度自体は魔人のそれに及ぶものではないので避けることが出来るだけ。
……さて、しかしどうしたものか。倒すことは難しくない。
だが近くには同じドラゴンであったカミーラがいる。彼女の前で前回のように同胞を殺してはそれこそ二の舞だ。何のために謝罪したのかわからなくなる。
故にカミーラに指示でも仰ごうかと視線を向ける。
そこには、
「……そうか、お前は……いや、お前も……」
「……カミーラ？」
少し様子がおかしい。
カミーラはドラゴンをじっと、何か思い当たったような――憐憫の情を浮かべている。そんな気がした。
ドラゴンの攻撃を避けながらカミーラの様子を窺うが、ドラゴンも攻撃を全て避けられて黙っているほど愚かではない。
何かを吸い込むように首を上げて仰け反る、力を溜め込む動作。それはドラゴンの十八番ともいえる攻撃方法だ。
「――ッ！」
……ブレスか――！
俺が身を翻して横っ飛びすると、その直後に白い熱量をもった光線が俺がいた場所を通過した。
『――――!!!』
咆哮を上げながら背後の町をそのブレスをもってして焼き尽くすドラゴン。やはりと言うべきか、このツリー都市から魔物がいなくなった理由がこいつだろう。
町を襲い続けるドラゴンが自分達の手に余る存在だと知り、都市を放棄した。もっと色々深い理由や細かい理由があったのかもしれないがあまり興味もない。そもそもこのドラゴンが何故こんな場所で

暴れているのかも――
「……レオンハルト」
「ああ？」
俺が対応を決めかねているとカミーラが俺の名前を呼んだ。というかいつの間にか近くまできていた。
「どうしたんだ？　いや、というか俺も聞きたいんだが、アレをどうするか――」
「決めたぞ」
「？　何をだ？」
「……あれを、私の使徒にする」
「……え？　マジで言ってるのか、それ」
「約定を果たせ」
カミーラは上級魔人として、上に立つ者としての風格を保ってそれを命令する。
俺は思わず嫌というか、ちょっと微妙な表情を浮かべてしまう。いやだって、あのドラゴンなんか正気を失ったように暴れ狂ってるし……そもそもあれがカミーラに忠誠を誓うのを想像できない。
だが、カミーラがあれがいいって言うならしょうがない。じゃじゃ馬が好きなんだろうか。気分はペットを飼いたいとねだってくる娘に渋々ながら頷くお父さんである。
「……あれでいいんだな？」
「……二度は言わんぞ……？」
「はいはい、俺が悪かった。ならどうすりゃいい？」
「正気を取り戻せ……多少痛い目に合わせても許す」
「つまり正気に戻るまでボコれって事だな……ククッ……んじゃやるか」
「……殺すなよ」
「……殺さねぇよ？　やるってそういう意味じゃねぇ」
「……不安だな……」
「……それじゃ行ってくるが……お前、俺を何だと思ってるんだ？」

「……」
おい、目を逸らすな。
……いや、何となく言いたい事は理解出来るが、それは誤解だと言わせてほしい。
俺はちょっと剣を振るのが好きなだけ。それ以外は普通の魔人だ。
そりゃあ強い奴の相手は楽しくなるし、ちょーーっとだけ斬り殺したくなってくるが、誰彼構わず殺すほどクレイジーになったつもりはない。そういう本能は理性で制御出来ている――ガルティアのときは失敗したが。
まぁ、何はともあれ命令を遂行するか。カミーラが誤解してるままなのが気になるところではあるのだが。
俺は何だか解せない気分になりながらも気持ちを切り替えて、ドラゴンに向かっていった。

カミーラはレオンハルトがドラゴンに向かっていくところを少し不安に思いながらも見送った。
……あれだけ念を押せばいいだろう。
レオンハルトは結構危ない魔人だとカミーラは認識していた。
普段の態度や性格はぶっきらぼうでありながらも寛容で仕事だけは真面目にこなすという印象。鬱陶しく思っていた魔人ギリウムを、同胞を殺して悪い、と素直に謝ってくるくらいには性格も悪くない。今も素直に命令をこなそうとしている。
しかしこれが戦闘になれば印象が大きく変わる。
紅い瞳は爛々と輝き、相手を見据えて離さず、口端には隠しきれない笑みと喜悦の感情が垣間見え、挑発とも取れるような言動を取りながら相手を斬り刻んでいき、相手への興味がなくなれば一転して冷たい表情に視線、気を漂わせて即死させる――決闘で見せたあの光景はまだ記憶に新しい。
それにどうやら先日連れてきた新しい魔人――ガルティアもレオンハルトと戦場で一騎打ちをしたらしく、その時も同じ様に燃えるよ

うな気と楽しそうな笑みを浮かべていたらしい。
配下の魔物将軍や魔物隊長、魔物兵達もそれを噂して畏怖してるそうだ。普段の態度こそそれなりに接しやすく寛容だが、それに甘えすぎて彼の怒りを買えば斬り殺されるのではないかと。
同じ魔人ですら警戒しているらしい。それもそうだろう、魔人は皆あの決闘を、レオンハルトの変化を目の当たりにしているのだから。故に少し距離を置いているらしい。
ケイブリスなどは積極的に近づいては媚を売り、「俺は魔人四天王にして魔軍参謀であらせられるレオンハルト様の一番の子分だ！」と周囲に喧伝している。誰も信じてはいないようだが。
とにかくレオンハルトは魔軍内で、仕事には真面目で、部下にもある程度寛容だが、決闘や一騎打ち大好き魔人として知られていた。
故にカミーラも使徒にする予定の者を殺されないか不安に思ったのだ。一応大丈夫だとは思う。
正面ではレオンハルトがドラゴンと楽しそうに戦っている。
「おいおい！　ドラゴンってのはこんなもんなのか!?　クハッ、さっさと正気に戻んねぇと傷が増えてくぜ？」
『――――!!!』
レオンハルトに身体を傷つけられドラゴンが咆哮を上げる。
……危なくなれば止めるか。
さすがに心配だが、レオンハルトに頼るしかないため視線は離さないまま見守るしかない。
自分でやれればいいのだが、今回に限ってはカミーラの心が拒否した。他の生物であるならカミーラ自ら相手をしてやっても良かっただろう。
――その相手がかつての出来事で傷つき、心を狂わせている同胞でなければ。

「おいおい……さっきまでの威勢はどうしたよ？　それとも、もう終わりでいいのか？」

『――！』

目の前の小さな生物に自分の身体が刻まれていくのを感じた。

身体が重い。息が震え、死をだんだん身近に感じる。

まさかこんなところで終わるのか。彼は戦い続けながらも無意識に自身の半生を思い返していた。

自分はドラゴン種の一つであるネフライトドラゴンという一族に生まれた。ネフライトドラゴンは大陸の東側に住む美しい容姿を持つ一族。自分としてはこれが当たり前なのだからそう言われても困るだけなのだが。

生来の真面目な性分からか、ドラゴンとしての常識からか、自分はそれなりに戦えるようにと鍛え続けた。戦いがあった時は自ら率先して戦いに志願した。

そうしていくと自分はそれなりに強くなった。そしてそれなりに周りから認められた。

他のドラゴン種ならここで満足しただろうか、それともまだ上を目指し続けるのだろうか。

だが、自分はその時に……いや、少し前からこう思ったのだ――――こんなものか、と。

自分が戦い続ける理由、それはドラゴン種として生まれたことによる義務感からであった。

ドラゴンは誇り高く正々堂々、何より強い事が尊ばれる。臆病であったり、弱い者、小賢しい策を弄するような卑怯者は他のドラゴン種からは蔑まれる。

自分は別にそういう者がいてもいいのでは、別に無理して戦わなくても良いのではないかと思ったが、数少ないそういった者達はやはり臆病者と罵られていた。

やはりドラゴン種らしく行動せねばならないのだろう。だが、そこに自分の意思は皆無だった。別に鍛えるのも戦うのもやらなくても構わない。処世術の一貫として何となくやっている事に過ぎない。自分から戦いに行く理由なんてそれだけしかない。

だが、ある日の事。仲間のドラゴンに何気なく聞いてみたのだ。何

のために戦っているのか、と。
するとこう返ってきた――いずれは王となり、カミーラ様を手に入れるためだと。
あぁ、やっぱりそんなものか、と思った。実のところこういった者は少なくないどころか、殆どのドラゴンがそれを目標にしていた。
それはドラゴン種において雌が生まれなくなり、最後の一匹として生まれたのがカミーラ様であるからだ。自分はそう分析していた。
無論、存在は知っている。生ける王冠であるカミーラ様。現在はドラゴン王マギーホアに所有される者。
だがそれを知っていても雌への興味はあまりなかった為、特に興味を抱かなかったのだ。
でも、自分はその時に思った。
よく考えてみれば自分はカミーラ様の姿を見たことがない。見たこともないのにそれを理解した気でいるのはどうかとも思い、見に行ってみることにした。
ともすれば意思が希薄な自分も、他のドラゴンのようにカミーラ様を欲しがるようになるかもしれない。心からそう思えれば演じなくてもすむし気楽だ。何も感じなくても特に失うものはない。
故に、マギーホアに決闘を挑みにいった。その時に自分は初めてその存在を目の当たりにした。その感情を、その時に思った事はこうだ。
――なんと……お美しい方だ……。
普通のドラゴン種とは違うその初めて見る姿に、目を奪われてしまう。自分の心が初めて動いた気がした。
マギーホアとの決闘にあっさり負けてしまったあとも、カミーラ様を見た衝撃は忘れられなかった。
しかしながら他のドラゴンと同じ様にカミーラ様を手に入れようとは思わなかった。恋慕ではない。ではこれは何だ？
あの時の自分は、その感情を何と形容したら分からなかった物だが……今ならそれが理解る。
それは――崇拝。

カミーラ様はこの世に生まれ落ちた奇跡のような存在。あれほど美しい方はそうはいないだろう。
カミーラ様の為なら戦ってもいい――否、戦いたい。
自分はその時、初めて自分でやりたい事が、意思が出来たのだ。
それからの毎日は以前よりも張りが出てきたように感じた。顔や行動に出ることはない。しかし以前と同じことをやってもカミーラ様の為になるのだと思うと気力が湧いてきた。
それからも色々あったが、自分は自分なりに懸命に生きてきたと思う。魔王となったアベルがカミーラ様を浚い、ラストウォーが起こっても、戦争には率先して戦った。魔人になったというカミーラ様だが、そんな事は些細な問題だ。あの方が生きて戻ってきただけで自分は嬉しかったし、そのために戦えた事を誇りに感じていた。
だが、そんな自分も含めてドラゴン種は転機を迎えた――天使によるドラゴン狩りだ。
――これは、なんだ？　何が起こっている――？
自分はひたすらに抵抗して逃げ回った。仲間たちはどんどんとその屍を晒し、数を減らしていく。戦っては、逃げ、戦っては、逃げる、という事を気が遠くなるほど繰り返した時。
――自分は一人、生き延びていた。
周囲にはもはや誰もいない。同胞は？　友人は？　家族は？　マギーホア様は？　そしてカミーラ様は――。
失意の底に沈み、何故こうなったのかを思考するも答えは出ない。何が悪かったのだろう。自分達は何故滅びなければいけなかったのか――考えても考えても答えは出ない。
答えの出ない問いを考える事に疲れた自分は、その捌け口に周囲の生物を利用した。
矮小な生物を一方的に殺戮し続ける。最初は楽しいものだった。しかしそれも長くは続かなかった。だんだんと何も感じなくなり、無意識に暴れまわった。
そして気がつけば――狂っていた。
もう何も考えられない。考える必要もない。生きている理由がな

い。
そして今、とうとう自分の番が来たと思った。
目の前で自分と戦う、小さい生物。しかし自分よりも遥かに強い存在。彼が自分にとっての死神だろう。
「とりあえず、動けなくなってもらうからな――いくぞ」
『――！』
突然、冷たい表情で宣告しこちらに向かって凄まじい速度で一閃――迎撃は間に合わない。
『――ッッッッ!!!!』
苦悶の雄叫びが自分の口から漏れる。
自分は斬られたのか？　身体が地面に倒れ伏す。
身体の感覚はある。真っ二つになってはいないようだ。
しかし、動けないのだからじきに殺されるだろう。だが、構わない。
自分はもう疲れた。そろそろ休ませてもらおう。
悔いが残っているとすれば自分は一度もカミーラ様と話した事がないということか。
……未だに憶えていられるだけでも幸運だろう。
そう考える。あとは自分を殺す者の顔を見せてもらおう。ドラゴン種としての無意識な礼儀がそうさせた。
その視界に金髪の男性が映る。そしてその後ろから女性が近寄ってくる。
そして――彼は、その存在にようやく気づいた。
あのお姿は――
『か、カミーラ様……？』
自分が長年、崇拝し続けた存在が目の前に立っていた。
『か、カミーラ様……？』
「うおっ、喋った」
突然、ドラゴンの口から聞こえた言葉に驚くレオンハルト。
しかしそれには反応せず、ドラゴンはカミーラに視線を送り続け

た。
『生きて、いたのですね……』
「……お互いにな」
ドラゴンは信じられないような面持ちだったが、カミーラが返答すると安堵の表情を浮かべた。
『最後に、貴方様が生きていた……事がわかって……私は、幸運です……』
その言葉は真に、心から出た発言だった。
これで思い残すことはない。そういう意味が込められた発言に、待ったをかける者がいた。
カミーラである。
「……お前は、私に忠誠を誓っているのか……？」
『は、は……どういうことです……？』
「どうなんだ……？」
カミーラはあくまでも冷たい毅然とした様子でそれを問う。
忠誠を誓うなら使徒にしてやる――そんな愚かな言葉をカミーラは吐かない。
そんな言葉で忠誠を誓う程度の忠義なら必要ない。カミーラの視線はそう物語っているようだった。
『……』
彼は考える。どう返すべきかを。
しかし自分はもう長くない。ならば最後に心中を吐露しても構わないだろう。カミーラに殺されるのなら本望だと、そう思って。
『……初めて貴方様の姿を拝見した時から……ずっと畏敬の念を感じておりました……』
「そうか……名前は？」
『……！』
カミーラに名前を聞かれる名誉。それを最後に得ることが出来た。
それに感謝しながら彼は自分の名を告げる。
『……七星、と申します。カミーラ様』
「七星、か……」

その名前を吟味するようにしばらく噛み締めるカミーラ。
だが、不意にその手が伸ばされる。
『カミーラ様……？』
何を、という言葉は口から出なかった。
その前にカミーラが命じたからだ。
「ならば七星……お前に命じる――私の使徒になれ」
『！』
その言葉と同時に七星の首にその美しい口元を近づけると――その歯を首元に突き立てた。
『ぐっ……！　な、にが……！』
その瞬間、七星の身に変化が起こる。
光が七星の巨大な体躯を包む。そしてその中では姿が作り変えられていき、だんだんと人間に近い姿へと変わっていった。
魔人に力の一部、魔人の血を分け与えられてその魔人専属の下僕である使徒になる契約。
それは、この世界ではこう呼ばれていた。
――血の契約。
「すげぇ、な……」
それを初めて目の辺りにしたレオンハルトも呆然と立ち尽くしてしまう。
光が収まった時、そこにいたのは――長髪の男性だった。
「この姿は……」
黒い長髪に左手に藍色の珠を持った足首までを覆う翡翠色の長衣を纏った薄い糸目の男性。
まだ何が起こったのか戸惑っている様子であり、自身の体をしげしげと眺めている。
レオンハルトはそれを見て、一応の説明をしておこうか、と七星に声をかけた。
「お前は魔人カミーラの使徒になったんだよ」
「あなたは先程の……」
七星がレオンハルトの姿に気づく。自分を一方的に傷つけた強者

の存在。
しかし、七星はそれよりもその言葉の内容を聞いて思考する。
「魔人の使徒……そういうことですか」
自分に何が起こったのか納得した七星に、今度はカミーラが声を掛ける。
「不満か……？」
「……いえ、カミーラ様の為に働けるのであれば光栄に思います」
「おいおい……」
直ぐ様カミーラに傅く七星を見て、レオンハルトが呆れたような表情で言う。
「よくもまぁ直ぐに納得出来るな？」
「あなたも使徒……いえ、魔人ですか？」
「ああ、よくわかったな。魔人レオンハルトだ」
「なるほど。レオンハルト様、私としては、カミーラ様の為に働けるのであれば例え使徒になろうと構わないのです」
「へぇ……生きがいみたいなもんか？　それとも崇拝でもしてんのか？」
「そういうことですね」
「くくっ……」
七星の当然という態度にカミーラも薄く笑う。
そしてそのまま来た道を引き返そうと振り返った。
「くくっ……ならば帰るぞ……七星……」
「はい、カミーラ様」
既に主従として完成した振る舞いの七星はカミーラの背後を恭しく付いていった。
呆気にとられたような表情のレオンハルトだけがそこに取り残される。
「いや、崇拝って……冗談だったんだがマジかよ……」
――この日、カミーラに使徒が出来た。
ネフライトドラゴンの使徒、七星である。

「――っつう事があってな」
「ふうん……いいんじゃねえか？　貸しは返せたんだろう？」
カミーラとの使徒探し、そして七星という使徒を見つけて帰ってきた翌日。
魔王城の食堂で食事を取っていたガルティアに、俺はその顛末を話していた。
「まぁな。俺的にも収穫はあったし」
「収穫ね……食い物か？」
「そうだったとしてもお前には言わねぇ」
「何でだよ」
「自分の胸に――いや、腹に聞け」
「……そーかよ。しゃあねえなあ……おっ、このカレーマカロロ、シチューと餃子のハーモニーがたまんねえな。外側のうどんも悪くねえ」
俺が梃子でも教えてくれないだろうと感じ取ったのか、気にせず食事を再開するガルティア。
……まぁ、当たってるんだけどな。
俺は探索から帰還すると直ぐに直近の魔物将軍を呼び出し、新発見したツリー都市の位置を教えた。後日、魔軍を向かわせてその土地を支配下に置くことを決定。
帰り際にちゃんと確認もしてみたが、ツリーの周辺には沢山の果物や野菜などの食料があった。
これで少しは食料の備蓄にも余裕が出来るだろう。心配事が一気に無くなり、少し気楽になった。
後、もうひとつ良いことがある。それは、
「……レオンハルト様。ここにいましたか」
「おお、七星か」
「へぇ……こいつが噂の」
「お初にお目にかかりますガルティア様。カミーラ様の使徒の七星です。以後お見知りおきを」

「おお……随分と真面目そうな使徒だな。まあ、よろしくな」
「はい。よろしくお願いします」
　食堂に入ってきた七星が丁寧にガルティアに挨拶する。表情が全然変わらないが、おそらくそういった個性というか癖だろう。喜怒哀楽自体はあるようだし。
　それよりもだ。俺はおそらく用事があるであろう七星に話しかける。
「何か用か？」
「はい。カミーラ様の軍における先月の物資消費量と損害を纏めた書類を持ってきました」
「おお……！　さすがだ……」
「……？　なぜ感心しているのでしょうか？」
　七星は当たり前の事をしているのになぜ？　という疑問を浮かべているようだ。
　そう、これが当たり前なんだ。どいつもこいつも仕事は部下やこっちに丸投げしてくるようなクズ共ばかり。
　それに比べて七星は働き者で、魔王城に着いたその日からカミーラの秘書のように魔軍の仕事をこなしてくれている。いやまぁ、逆に言えばカミーラは働いていない訳だが……働く人材が増えただけでも俺にとっては御の字。
「ああ、それとカミーラ様から伝言です」
「あ？」
　喜んでいた内心が突如、水を差されたように静まり返る。
　カミーラからの伝言？　何だそれは。
　それにどことなく嫌な響きだ。まさかな……。
「また何かあれば呼ぶ、そうです」
「……あ？」
「私の使徒をあれだけ傷つけたのだから貸しだ、とも」
　……いやいやいや。
「そ、それは横暴じゃねぇか？　そもそもあれは仕方のない事だったし……七星も別に怒ってないだろ？」

「……確かに私は別に構いませんが……カミーラ様の言うことですので」
あれ、実はちょっと怒ってるか？
確かに手も足も出ないくらいボコボコにしてやったが……殺してないしまず先に襲ってきたのがこいつだったしなぁ……。ちょっとは悪いかもしれんが、それでまた貸しだと？　カミーラのやつ、ニートの癖に生意気な……。
「ははっ、美人に好かれてよかったじゃねえか」
「テメェは黙ってろガルティア！　くっ……また面倒が……！」
「ま、まぁ、確かに……カミーラ様も嫌ってはないようですが……」
「変なフォローはいらねぇんだよ七星！」
「レオンハルト様！　今日は僕、レオンハルト様が好きなこかとりすを取って――」
「黙れケイブリス！　さっさと厨房に持ってけ！」
「ひぃぃ!?　す、すみませんでしたぁ――ッ!?」
――結局、カミーラの貸しを返した筈の俺は、再び貸しを作ってしまい、また苦労する羽目になるのだった。

魔王の料理2

「スラル、入るぞ？」
「ええ、入って」
とある日の事。
俺はスラルに呼ばれて彼女の私室を訪ねた。
ノックを二回、そして部屋に入っていいか了承を得ると、俺は早速用件を聞いた。
「今日は何の――」
「ガルティアの歓迎会の準備をするわ」
「じゃあな俺は忙しい他のやつに頼んでくれ！」
俺は早口でまくし立てると逃げるように部屋から出た。
そして直ぐ様この場から離れる為に逃走。
「待ちなさい――っ！」
「ぐおっ――!?」
後ろから追いかけてきたスラルに服を掴まれる。さすがは魔王と言うべきか、まさか一瞬で捕捉されるとは……。
俺はそのまま腰にしがみついて来たスラルに必死の形相で叫ぶ。
「くそっ！　離せ、離してくれ！　俺は忙しいんだ！」
「ちょ、ちょっとくらい別に良いでしょ？」
「じゃあ聞くが、俺に何をさせるつもりだ!?」
「えっと、それは……料理の練習――」
「ほら見ろ！　案の定じゃねぇか！　俺はそれが嫌なんだよ!!」
「大丈夫！　今回はちゃんと復習もしたし、味見してもらうだけでいいから！」
「何となく想像がつくんだよ!!　くそっ、誰か助けてくれ――!!」
「ああもう！　喚かないの！」
魔王城で俺の助けを求める声が木霊したが、助けてくれる者は誰もいなかった。

「――いいか？　絶対に変な物入れるなよ？」
「……別に前の時も変なことは一切してないんだけどなぁ……」
結局、スラルに引きずられるようにして厨房まで連れて行かれた俺は、念入りに注意を促す。
どうせやるならとことん監視、徹底的な教育を施してやる。
「というか、レオンハルトって料理出来るの？　あんまりイメージ湧かないけど……」
「人を見た目だけで判断するな」
こいつもこいつで失礼だな。毒料理を作る魔王様には言われたくない。
「物心ついた頃には両親はいなかったしな。大抵のことは一人でやってきたし、料理もそれなりには出来る」
「へぇ……意外ね」
「少なくともお前よりは出来るからな」
別に好きでやってた訳じゃないが生きる為には必要な事だった。別に野菜や果物を直接食べたり、肉を焼いて食うだけでも良かったが、集落のガキ共が親の料理を自慢してくるのもうざかったので、半ば意地で憶えてやった。今考えればガキ共に悪意は無かったんだろうが当時の俺はそれを苦々しく思ってたしな。
子供の頃は訓練以外にやることもなかったし、近所の料理上手の人達に聞きに行ったりしてハマってた時期もある。戦場に出始めてからは面倒になってやらなくなったし、王になってからはもっとやらなくなったけどな。
とにかく、俺はスラルに食材の山を前にして宣言する。
「やると決めたからには徹底的にやる。中途半端はない。どこの厨房でもやっていける立派な料理人にしてやる」
「……そうね、どうせなら極めてみせるわ！」
「その意気だ。まずは手本を見せてやるからよく見てろ」
「わかったわ！」
スラルも自分の料理があれだけ酷かった事を悔しく感じていたの

だろう、瞳にはやってみせるという強い意思を感じる。なら、俺もそれに出来る限りは応えてやる。
それに、ガルティアも大変だっただろうしな。あいつに苦労を強いたのはある意味俺でもある。少しくらい労ってやってもいいだろう。それに、歓迎会で俺の時の二の舞を味わわせるのもどうかと思う。
ガルティアの歓迎会は四時間後。それまでにグルメなあいつを唸らせる料理を作らせて度肝を抜いてやる。
さて、お料理の時間だ。

「――これで完成だな」
「ん……美味しそうね」
……そして幾つかの工程を経て――俺はへんでろぱを作り上げた。
家庭料理ではあるもののそこそこ豪勢な料理であり、子供の誕生日やお祝いごとの日なんかにはよくこれが食卓に並ぶらしい。
というのも食材が高級な物ばかりなので少し敷居が高い料理なのだ。
かくいう俺も、ヒララレモンなんかは俺の住んでた地域には生えておらず、ミリンレモンを代用品として加えていたものだ。
スラルは俺が作ったへんでろぱをスプーンを使ってゆっくり口に運ぶ。
「んっ！　美味しいわ……！」
「まぁ、こんなもんだ」
顔を綻ばせるスラルを見て、俺は少し自慢気に頷く。
「料理なんてのは基本さえ押さえとけば多少のミスがあっても極端に不味くなったりはしないからな……じゃあ、次はお前の番だ」
「う……わかってるわ」
少し不安そうに調理台の前に立ったスラルは、先程俺がやったのと同じ様に調理を始める。
その動作は淀みなく、手際が悪いということもない。

まぁ、だがそれは予想していた事でもある。
前回のスラルの料理には特に見た目や香りに問題があるようには見えなかった。スラルの認識が間違っていなければ手順に大きな間違いはない筈である。
「えっと……次は、ほらの切り身を適当な分だけ入れて……」
スラルの奴も同じ失敗は繰り返したくないのだろう、分かっていても細心の注意を払って確認しながら作業を進めていく。
――そしてへんでろぱが完成した。
「……うん、へんでろぱだな」
「一応、ちゃんと確認しながら作ってみたけど……」
「ああ、俺もちゃんと見てたがおかしな点は一つもなかった」
やはり俺の思い過ごしだろうか。この前の料理はやはり事故か何かで起こってしまった悲劇であり、偶然の産物。
俺が作ったへんでろぱと比べてみても違いは殆どない。強いていうなら俺の方が少し大雑把に作ったくらいだ。スラルの方は分量なども出来るだけ正確にしていたので味も基本に収まっている筈である。
……なら、何故俺のスプーンを握る手はこんなにも震えているのだろうか。
「レオンハルト……？」
「あ、ああ……大丈夫だ」
スラルの奴が不安そうな表情で俺を見る。そうだ、スラルを、スラルを見ていた俺を信じろ。
この震えは、あれだ。おそらく錯覚。前回の苦しみを脳が憶えているのだ。
いわゆる条件反射という奴だ。似たような経験をしたことで震えているだけ。そうに違いない。
「よし、いくぞ――」
俺は一気にへんでろぱを掬ったスプーンを口に含んだ。
……ん、うん？　あれ、思ったより食べれ――――
――俺は意識を飛ばした。

「……はっ」
「ちょっと大丈夫？」
気がつけばスラルが俺の肩を掴んで軽く揺り動かしていた。
……もしかして俺は気を失っていたのか？
俺は恐ろしい物を見るようにへんでろぱに視線を移す。
「……なぁ、スラル。ちょっとお前も食べてみてくれ」
「へ？」
「俺には味の批評が難しすぎる」
「えぇ……？　まぁ、いいけど……」
スラルが何気なくへんでろぱを口に含む。
「……？　何かしらこの味――――」
そう言いかけてスラルの口が、いや、身体全体が突然固まった。
「お、おい。スラル？」
表情も全く動かなくなったスラルに、俺は心配になって声を掛ける。
「……はっ」
「おおっ、動いた」
数秒経った後、スラルが再起動したように正気を取り戻した。
なるほど、俺もこんな感じになっていたのか。
「あれ……？　私、どうしたの？」
内心で納得していると、スラルが何が起こったのかわからず挙動不審になっているようなので、それを嗜める。
「気絶してたみたいだな、まぁ、俺もそうだったんだが……」
「……つまり、駄目だったって事？」
「そうなる――と、言いたいがそうとも言い切れない」
俺は目に見えて落ち込んでいたスラルに曖昧な返答をする。別に慰めている訳ではなく、ちゃんとした理由がある。
「え、どういうこと？　不味いんだから失敗でしょ？」
だが、スラルはマズいんだから失敗だと断定する。どうやら気づいていないようだ。

俺は少し深刻な顔で、ならば、と聞いてみる。
「いいか、スラル。お前はこれを不味いと言うが……どこがどう不味いんだ？」
「それはだって……えっと……その」
スラルが言葉に詰まったようにしどろもどろになる。そう、スラルの料理を食べるとそのようになってしまう。
「どう不味いのか説明出来なくないか？」
「……!?　そ、そうね。言われてみれば何が不味いのかわからないわ……」
こういう事である。スラルの料理を食べて、不味い、と思ったような気がするが……肝心の味についてが何一つわからない。というか途中で意識が無くなってしまったのでそれを判断出来ないのだ。
「ひょっとしたら俺達が憶えてないだけで美味しいのかもしれない……美味しさを感じる前に気絶するというだけだ」
「……それって悪化してない？　そもそもそれじゃ美味しいとも言えないような……」
「極論、そういう可能性もあるというだけだ。どっちにしても、この料理が論外だということには変わらんが」
「……くっ、やっぱり駄目なのね」
スラルが悔しそうに歯噛みする。今度こそはという思いが水泡に帰したのだ、無理もない。
……しかし、一体理由はなんだ？　俺はちょっと本腰を入れて考えてみることにした。
料理の手順に問題はなかった。材料も俺と同じ物を使っているのだから問題なし。鍋や包丁、まな板などの調理器具も同様だ。調理に使った場所も同じ場所。
……駄目だ、わからねぇ。後は互いの技量くらいなものだが――
……ん？　ひょっとしたらそういう可能性もあるか？
俺は一つ思いついた事をスラルに向かって口にした。
「なぁ、スラル。ちょっと自分の指舐めてみろ」
「えっ……それに何の意味があるの？」

「……いや、ひょっとしたらお前の指から毒でも出てるんじゃないかと」
「あるわけないでしょっ!?」
スラルが憤慨したように叫ぶ。そして俺の方に手を突き出す。何だ、この手は――ぐっ!?
「ほら、毒なんてないでしょ！　失礼ね！」
「――ッ！　へめぇ……！」
あろうことか俺の口の中に指を突っ込んできたスラル。いや、お前……よく人の口に躊躇いなく指突っ込めるな。
まぁ俺が言った事が発端ではあるが――少しからかってやるか。
俺は舌でスラルの指を少しだけ舐めてやる。
「ひぅっ！」
「んっ」
そんなにくすぐったかったのかスラルの口から甲高い声が厨房に響く。そして手を引っ込めて俺の口の中から直ぐ様脱出してしまう。
頬を少し染めてこちらを咎めるように睨むスラルに、俺はいけしゃあしゃあと口にする。
「毒はねぇみたいだな、良かったなスラル」
「っ！　そ、そうね！　安心したわ！」
必死に取り繕おうとしているスラルを見て、俺は少しだけ気分を良くすると気を取り直して食材を手に取る。
「まぁ、時間もないしとりあえず片っ端から試してみるか。念のために俺も作るからよ」
「それもそうね……」
仕方ない、とスラルは嘆息する。不安要素だらけだが、ガルティアの歓迎会を行わない訳にもいかないだろう。
それに俺としては少し悪趣味かもしれないが、ガルティアがスラルの料理を食べてどんな反応をするのかも見てみたい。前にスラルの料理は毒みたいなもの、と冗談で言ってみたが耐性の高いムシ使いならこの衝撃に耐えられるのか。もしくはノックアウトしてしまうのか。興味がないといえば嘘になる。

そうして俺達は、本格的にガルティアの歓迎会の準備を進めた。

「邪魔するぜ――って、おお、こいつは――！」
「よう、ガルティア」
「ん、来たわね」
スラルの部屋に料理を並べてガルティアが来るのを待つ事少し。やってきたガルティアは部屋のテーブルに所狭しと並べられた料理の数々を見て、喜んだように笑う。
スラルはそんなガルティアを見て、俺の時と同じ様に微笑を浮かべて歓迎した。
「ちょっと遅れちゃったけど、今日はガルティアの歓迎会だから二人で沢山の料理を用意したわ。……だからその、沢山食べてね？」
「おお、勿論だ。ありがとよ」
「あ、でも無理して食べなくてもいいから！」
「あん？　どういう意味だ？」
「あ、あー、気にするな。料理が冷めちまうといけねぇしさっさと食べようぜ」
「……それもそうだな。いやあ、美味しそうで楽しみだ」
スラルのどっちつかずの言葉に訝しげに思った様子のガルティアだが、咄嗟に料理を勧めてフォローする。
「それにしても……魔軍っていうか魔王が歓迎会なんて想像してなかったな。嬉しいけどよ」
「……ああ、俺の時もスラルが開いてくれたぜ」
「へぇ、そうなのか。やっぱスラルは魔王らしくねえなあ」
「……別に大したことじゃないし……こそばゆいからあんまり褒めないでよ」
照れたように視線を外すスラル。それを見て笑う俺とガルティア。
……これで料理の心配がなければ良い話で終わるんだけどな……。
今回も見た目、香りは完璧なスラルの料理。製法も問題なかった。だからこそ食べてみるまでわからない。ひょっとしたら美味しい可

能性もあるが、その可能性はかなり低いだろう。何故なら俺の右手が震えているから。
ガルティアは料理を前にして鼻歌交じりで席につく。どうやら本当に料理を楽しみにしているようだ。見た目は完璧だからな。そう思うのも無理はない。
いざとなったら俺が作った料理もあるからそっちをやるか。幾ら何でも、意識を飛ばすような料理を残さず食べさせるほど俺も鬼ではない。駄目なら駄目で構わない。とりあえず食べさせてみる。死にはしないだろうから大丈夫だろう。
……見方を変えなくても、これ人体実験みたいなものだな。
「それじゃあ……手を合わせて……いただきます！」
「！」
「！」
行儀よく手を合わせて、食事の挨拶を済ませたガルティアはさっそく近くにあった料理を手に取る。俺達は緊張の面持ちでそれを見ていた
「まずは、このイカカレーでも食べるかな。香ばしい匂いがして美味そうだ」
ガルティアがスプーンを手に取り、イカカレーを躊躇いなく口に運ぶ。
さて、どうなることか。
「……」
ガルティアがイカカレーを口にした途端、ガルティアの動きが凍りついたように固まった。
「ああ……やっぱり駄目だったか……」
「……美味い」
「……は？」
ん？　今こいつなんていった……え、美味い？
そんなまさか、と俺が血相を変えた瞬間、ガルティアは大声で叫んだ。
「うまあああああああああい!!!」

「え、本当!?」
思わずスラルも喜ぶ。作った本人ですら本当に美味しい可能性は考えてなかったのだろう。
ガルティアはなおもスラルが作ったイカカレーにがっつきながら料理を褒め称える。
「ああ……美味え！　何だこの美味さは……これはどっちが作ったんだ？」
「わ、私だけど……」
「スラル！　お前はひょっとして魔王じゃなくて世界一の料理人だったりしないか？」
「ええっ!?」
「そこまでか……」
あまりにもべた褒め、そしてとても美味そうに食べるガルティアを見て、俺も料理を手にとって見る。
よく考えてみれば今までのがおかしかった。材料や手順も合ってるのだから不味くなる筈がないのだ。ならばこれがスラルの本当の実力なのだろう。
スラルを見ると、とうとう料理が成功して喜んでいるようだった。……ったく、そんな腕があるなら俺の時に成功させろよな。
何にせよ上手くいったようで良かった。俺も手伝ったかいがある。
「それじゃあ、俺達も頂くか」
「ええ、そうね」
そうして俺とスラルは料理を口に運んだ。
その瞬間――
「――ッッッ!!??」
目の前が真っ白になる。
身体の中から何かが抜け出るような感覚。
浮遊感を感じて、下を見るとそこには自分の肉体がある。
――俺は幽体離脱を体験していた。
「――――っ！」

俺はそれを終えて、意識を覚醒させる。
何だったんだ今のは……。
どうやら横にいるスラルも俺と同じ様な現象を体験したのか、自分の身体を見渡して異常がないかチェックしている。
また謎の現象が起きたんだな……ってそんな事考えてる場合じゃねぇ！
「ガルティア！　ちょっと止まれ！」
「ああ？　どうかしたか？」
「その料理はもうやめとけ！　身体がどうなるかわかんねぇぞ！」
「そうよ！　もう食べなくてもいいから！」
遅れて気を取り直したスラルと、一緒になってガルティアを止める。
だが、ガルティアはそれを聞いて嫌そうな顔になる。
「えー……それはヤボだろ。こんなに美味いのに食べるなってか？……あっ、いやお前らの分も無くなるからか。悪い悪い、こんなに美味いんだから取られたくねえのか」
「いや、いらねぇよ!?」
「えっ……どうなってるの？」
スラルが困惑した様子でガルティアを見る。俺にもわからん。
どうにも本気で美味いと思って食べているガルティアに俺は戸惑いつつも質問する。
「お前、何で大丈夫なんだ……？」
「ああ？　それは美味すぎて大丈夫かって意味か？　……あ、これはお前が作った料理だな。スラルの料理に比べたら平凡な味だ。こっちから食べてもいいか？」
「喧嘩売ってんのかテメェ!!」
「わーっ！　ストップ!!」
怒った俺の身体をスラルが後ろから羽交い締めにして止める。
「もうガルティア。レオンハルトの料理もちゃんと食べてよ」
「えー……でも、こっちのに比べたらなあ……差がありすぎて食いにくい」

スラルの注意にガルティアは不満そうに俺の料理を酷評する。
「くそっ……この味音痴め。スラルの料理なんて食えたもんじゃねぇだろ」
「うっ、酷いけど私も同意……なんだけど」
俺の言葉にスラルが軽く落ち込む。だが、何か言いたいことがあるのか、ガルティアに近づくと手に持っていた料理を取り上げる。
「あっ！　おいっ……」
「……スラル？」
ガルティアと俺がスラルの行動に疑問を抱いていると、スラルは少しだけ咎めるような口調でガルティアに視線を向ける。
「ガルティア、レオンハルトだって頑張って作ったんだから美味しく感じなくてもちゃんと食べて」
「……でもなあ」
「でもじゃない」
スラルはピシャリと言い放つ。それはどこか有無を言わせないような迫力があった。
そしてガルティアを諭すように、スラルは続ける。
「人が一生懸命作った物を、ガルティアは蔑ろにするの？」
「う……それは……」
「どうなの？　レオンハルトは貴方の歓迎会の為に仕事を抜け出してまで私の料理を手伝って、自分も料理を作ってくれたのよ？　それをこっちの方が美味しいからっていらないって突き返すの？」
「……そ、うか。そうだな……」
スラルの言葉に少し考え込むように口を噤んでいたガルティアだが、やがて結論が出たのか普段とは少し違った――自嘲するように一度笑うと、真剣な表情で頭を下げてきた。
「スラル……いや、レオンハルト……すまん」
「……俺は別に気にしてないんだがな……お前も軽い冗談だったんだろ？」
「それでもだ。俺は料理と、それを作ってくれたお前を侮辱した」
そう言うと、ガルティアは一つの皿を手にとった。先程、ガルティ

アがスラルの料理と比べた一品。それを口に運ぶと味わうようにしてから飲み込む。
「んぐ……このチキンバンバン。少し香辛料が利いてるな。お前のアレンジか？」
「ああ、俺が故郷で自分好みに作って食べてた味だ。……気に入らねぇか？」
「いいや……なるほどな。確かに何度も試行錯誤したような味わいだ。美味いな、もっと貰うぜ」
「はっ、いらねぇんじゃなかったのか？」
俺はニヤリと笑い、敢えて意地悪い事を言う。
だがガルティアは、そんな言葉にも不快に思うこと無く苦笑してみせた
「全部食べるさ。どれもこれもお前らが一生懸命作ったんだろ？　そう考えると美味しさも倍増だ」
「……好きにしろ」
……全くクサイ事言いやがって。
俺がぶっきらぼうに言い放つと、スラルは場の空気を変えるように手をパンパンと叩いた。
「それじゃあ、再開しましょ。ガルティア、足りなかったら言ってね。また作りに行くから」
「おお、確かに足りなくなりそうだな……今のうちに作っといた方がいいんじゃねえか？」
「そう？　じゃあちょっと行ってくるわ。レオンハルト、よろしくね」
「ああ」
スラルが上機嫌な様子で、自分の私室から出ていく。
部屋には俺とガルティアだけが取り残された。
すると、ガルティアは何か得心した様な表情で俺に視線を向けてくる。
それがとても煩わしく感じ、俺は眉を顰めてガルティアを睨む。
「……何だよ」
「いや……お前がスラルに付いていく理由が少しだけわかった気がし

てな」
「……別にそんなもんねぇよ。怒られて頭おかしくなったか？」
「あー……そういや本気で怒られるなんて何年振りだろうな」
「ふん……」
俺は可笑しそうに食べ物を口に運びながら笑うガルティアを見ながら、自分が作った料理を食す。
俺達はしばらく、無言で料理を食べ続けたが、直ぐに沈黙に耐えきれなくなって何時も通り適当な話をした。そして、途中で戻ってきたスラルが混ざると、また仲良くなってると怒るスラルを見て、俺達は苦笑するのだった。

二人の約束

――ＳＳ１００年　１２月某日
ルドラサウム大陸東部。
魔軍の本拠地である魔王城の一室。
そこには魔軍を運営する幹部達の会議が行われていた。
「では、この地域の増員は見送るという事でよろしいですか？」
それに参加している一体の魔物将軍は内心、恐々としながらも自分の職務を全うしていた。
彼が会話しているのは上座に座る一体の魔人。
「……いいんじゃねぇか？　最早放って置いても虫の息みたいだし。それよりも戦後の統治関係に関する報告を指揮官に纏めさせて送らせろ」
「はっ、ではそのように」
命令を告げたその男に魔物将軍は畏まったように了承する。
それもその筈、一見すると人間に見えるその男は魔物社会の支配者階級といえる魔人の中でも更に格上。
魔人四天王の一角にして魔軍参謀である――魔人レオンハルトなのだから。
彼はいつものようにその鋭く紅い双眸を別の魔物将軍に移すと、ぶっきらぼうに催促をする。
「次の議題は？」
「いえ、今ので今日の議題は終わりです。お疲れ様でした」
「……そうか」
議長を務めていた魔物将軍がそう言うと、少しだけレオンハルトの圧力が弱まる。職務に区切りがついて気を張っていたのだろうか。どことなく表情も和らぐ。
「俺は部屋に戻る。何かあれば訪ねてこい」
「はっ、お疲れ様でした！」
会議室にいる他の魔物将軍達も一斉に退室していくレオンハルトにお疲れ様でした、と挨拶をしていく。レオンハルトは片手を上げて

ひらひらと手を振ってそれに応えるとさっさと部屋を出ていった。
すると、会議室の空気が弛緩したものに変わる。
先程、最後に報告を行った魔物将軍がその黄色い巨体を椅子に沈め、糸が切れたように溜息を吐いた。
「ふぅ……さすがに緊張した」
「何だ、レオンハルト様に会うの初めてだったのか？」
別の魔物将軍が椅子に座り込んで疲れた様子の魔物将軍に話しかける。彼は魔王城に詰めている魔物将軍であり、レオンハルトが魔人として連れてこられた日から彼の事を知っている――魔軍の中ではそれなりに彼と接する機会が多い者だった。
「人間出身の魔人だから、と舐めない方がいい。あからさまな態度を取って怒りを買えば庇いきれないしな」
「……痛感したよ。やはり魔人四天王と魔軍参謀を兼任するようなお方は違うな。カミーラ様と何ら変わりないじゃないか」
「普通に接していれば寛容で意見も聞いてくれるし、指示も的確だ。上司としてはカミーラ様よりもよっぽど仕事がしやすくて助かる」
「ふむ、なるほど。そういえばカミーラ様といえば使徒をお作りになったと聞いたが、そっちの方はどうなのだ？」
「ああ、七星様の事だな。七星様も仕事で一緒になるが、言葉少ないカミーラ様の代わりに指示や事務をこなしてくれている。優秀な方だ」
「ほう……ならばついでにガルティア様についても聞いてもいいか？」
「ガルティア様は……いつも何か食べているな」
「……それだけか？」
「いや、戦いになると頼りになるし、大らかで悪い性格ではないが……如何せん、近くにいるとこちらの腹が減ってしまってな……」
「あー……それは大変そうだな」
「まぁ、ガルティア様に限らずここは魔人の御歴々と接する事がやりがいのような部分があるからな。ところで――」
会議室では、仕事を終えた魔物将軍達の情報交換の場となっていた。普段は戦況についての軽い相談や、上司か部下の愚痴。最近では

ここ一年で魔軍に加入した者達の噂や情報。七星やガルティア、ガルティアの使徒達。そして一番多いのは何かと話題が尽きない上に、一番仕事で接する事があるレオンハルトの事であった。

――そしてそんなレオンハルトは、魔王城の廊下を心ここにあらずといった様子で歩いていた。

「……」

魔軍参謀になってそこそこの年月が経ち、仕事にも慣れてきた。

魔人としての生活も馴染んできたし、関係の悪い者も殆どいない。順風満帆な魔人生活を送っているのだが、彼には一つわからない事があった。

魔軍の仕事をこなしていく中で、何度も思った事だが幾ら考えても答えが出ない。

「……行くか」

俺はそう呟くと自分の部屋とは逆の方向に足を向けた。

そこに向かうに連れて魔物兵の姿はだんだんと少なくなっていく。

それもそうだろう、彼が向かった先にあるのはこの魔王城の持ち主でもある支配者の部屋。

その扉の前に着いた俺は、ノックを二回鳴らして部屋の主に呼びかけた。

「スラル、入ってもいいか？」

すると中から「んー」といった気の抜けた返事がくる。それを聞いて軽く嘆息すると、扉に手を掛けた。

中にいたのは机に向かって何かを書いている――魔王スラル。

こちらが入ってきたのに気づくと、横目で確認してそっけなく告げた。

「ちょっとだけ待ってて、すぐ終わるから」

「……ああ」

手を休めないままそういったスラルは、再び書き物に集中しはじめた。テーブルの上には他にも本や紙の束が積まれており、時折それら

を確認しながら作業を進めている。
俺はそんなスラルの言葉通り、待たせてもらおうと近くのソファーに腰掛けた。
室内にはスラルがペンを走らせる音だけが響く。そんな時間が数分続いた後、スラルはペンを置いて立ち上がると俺から見て、正面のソファーに思いっきり寝転がった。
「はあああああふあああああ……終わったぁ……」
ぐでーっとソファーの上で背筋を伸ばすスラル。魔王の出していい声じゃない。随分と気の抜けた様子に俺は呆れたように思った事を口に出す。
「とても魔王とは思えない姿だな……魔物将軍辺りが見たら卒倒しそうだ」
「んー……レオンハルトにしか見せないからいい」
「……」
何気なく言ったスラルの言葉にギョッとする。しかしスラルは気にした様子もなく、クッションを抱いてごろごろし始める。
……こいつ、たまに天然でとんでもない事言いやがるな……。
意味合い的にはそういう意味に取られかねない。というかそういう事だったりするのか？
「あっ、ガルティアも大丈夫かな？」
「……」
「いたっ、ちょっと。何でクッション投げるのよ」
「……何となくだ」
「？」
スラルがわからないと言わんばかりに首を傾げる。
前言撤回だ。スラルに限ってそういう意図はない。信頼してるという意味でしかないだろう。
一瞬でも馬鹿な事を考えてしまった俺は、それよりもと気を取り直したようにスラルに尋ねた。
「そういえば何を書いてたんだ？」
「ん、えっと……あれは本よ」

ソファーに改めて座り直して、簡潔に答えるスラル。本、か。そういえば前から疑問だった事を思い出す。
「そういえばこの部屋、本が沢山あるな」
「一応集めてきたのもあるけど……殆どは私が書いたの」
「お前が？」
「ええ。新しい知識なんかを忘れないようにって始めた事なんだけど、なんか癖になっちゃって……」
そう言って少し照れるように視線を逸らすスラル。自分で書いていたというのが恥ずかしいのだろうか。
しかし、同時に納得する。本というのは珍しい物だからだ。
世間では、まだこれだけの本はお目にかかれない。そもそも本を書く人が少ないし、いても少数。昔から現存する本の殆どは権力者達が所有しているのみ、それも学術書くらいしかない。それゆえに本はまだ民衆には馴染みのない物なのだ。
精々、わかった事を紙にまとめておくとか、日記をつけるくらいのものである。
それだけ貴重な本が本棚にずらりと並んでいる。なるほど、殆どはスラル自身が書いたものだったんだな。それならこの数にも納得である。
「なるほど……魔王の癖に勉強熱心なんだな」
「……ん、ちょっとね」
「？　煮え切らないな」
「そ、そんな事より！　なんか用があったんじゃないの!?」
「ああ？　いや、まぁ……」
スラルに急かされて、少し戸惑う。本くらいで何恥ずかしがってんだ？
「……ま、いいか。今度俺にも本読ませろよ。こう見えても本は好きでな」
「う、うん。それは構わないけど……用ってそれだけ？」
「ああ、用はまた別だ」
俺はあくまでも何気なく、その質問をスラルにぶつけた。

「お前が、魔王様が――人間を支配しようとしないのはどうしてかと思ってよ」
「――――」
その言葉にスラルが凍りつく。
一瞬の静寂。俺は天井を見上げながらスラルが落ち着くのを待つ。そして数秒後、スラルはわかりやすい程に気を取り直していた。
「……何のこと？　質問の意味がわからない。私は魔王なんだから――」
「気づかないとでも思ったのか？」
「だから……」
「俺は魔軍参謀だぞ。いわば一番魔軍の動きを把握してなきゃおかしいし、魔軍の勝利の為に動かなきゃならない立場だ」
「……」
「結論から言うけどな――魔軍はもう人間をいつでも滅ぼせる」
その言葉にスラルが黙る。俺は天井に向けていた視線を顔ごとスラルに向ける。
「正確には約数か月。魔軍を効率的に動かして、今ある戦力をきちんと動員すれば滅ぼせる、が正しいけどな」
人間は未だ各地の集落毎に戦っていて、魔軍に匹敵するような大きな集まりはない。なのに、魔軍と人類の戦争――いや、紛争は長いこと続いているのだ。
戦力差は圧倒的、そもそも拮抗している事がおかしいのだ。
個人の強さや兵力差は圧倒的なのだから、それで押しつぶしてしまえばいいのだ。
なのに魔軍は戦力を逐次投入したり、魔人を派遣することも滅多にしない。随分と悠長な事だ。
決定的なのは俺や魔物将軍が出した筈の指示、もう少しで人間の集落を攻め落とせるといった場所の指示を捻じ曲げて、魔軍を撤退させたりするくらいだ。もしその魔王の命令による撤退指示が無ければ攻め落とせていた地域が何箇所か存在する。
俺はその事をスラルに突きつける。

「俺やガルティアの時もそうだったが……明らかに人間に手心を加えてる。まるで人間を滅ぼさないように――いや、まるで人間が――」
「――ごめん」
「――！」
俺の言葉を唐突な謝罪で遮るスラル。それに思わず面食らってしまう。
下を向くスラルの表情はとても辛そうで、悲しそうで、今にも泣きそうな顔をしていた。
……ああ、またやっちまった。
俺が間違いを悟った時、それでも前を向こうと、俺に何かを語ろうと口を開こうとしているスラル。
そんな彼女に俺は――
「……その、私ね――」
「――悪い」
「――えっ……？」
今度はスラルが面食らう番だった。
俺の突然の謝罪に気が抜けたような顔をスラルに、俺は出来る限り普段どおりに言う。
「自分から聞いといてなんだけどな……お前にそんな顔させるくらいなら聞きたくねぇよ」
「――っ！　でも……」
「だから今のは無しだ。……というか答えを聞いたところでやる事は変わんねぇしな」
「……それはどういう意味……？」
言ってる事がまるでわからないという風に見上げてくるスラルに、俺は自分の意思をはっきりと伝えてやる。
「お前が望むなら、それが何であれ応えてやるのが俺の役目だ」
「――！」
「別に誰の味方しようと構わねぇんだよ。俺がそれを聞きたかったのは……その、お前の口からちゃんと望みを聞いて納得したかったからだ」

「……」
「だからもういい。お前の望みは現状維持って事でいいんだろ？
……はっ、それなら精々いたずらにかき回してやるさ。現場の兵には恨まれそうだがな」
俺は途中で何だか気恥ずかしくなり、誤魔化すように鼻で笑ってやる。実際魔王の命令っていうお墨付きがあれば誰も文句は言わない、言えないので問題はないだろう。
「……ぷっ、ふふっ」
そっぽを向きながらそう言ってやると、スラルが何故か面白いものを見たかのように笑う。何が可笑しいんだか。
「……レオンハルト、ありがとね」
「……気にするな。もうわがままには慣れたしな」
「あっ、酷い」
「事実だろうが」
「ん、そうかもね」
「認めやがった……」
「あはは……」
少し茶化してやると、俺達の間でいつものような会話が交わされる。
その会話はまるで魔王と魔人の話す内容とは思えない。何の内容も無い会話。人間同士の他愛もない会話の様だ。しかしこれが不思議とリラックスした気持ちになってしまう。
「ねえ、そっち行っていい？」
「はぁ？　何でだよ」
「答えは聞いてないから」
「ちょっ、おいおい……」
スラルは言うだけ言ってソファーから立ち上がると、俺の制止を無視して俺の隣に座った。
「えへへ……」
身長差から俺の事をニコニコと笑顔で見上げてくるスラル。
……まったく、こいつは。

俺は苦笑しながら、隣のスラルに軽口を叩いてやる。
「前から思ってたんだが……お前って子供みたいだな」
「え？」
「年下にしか見えねぇ。本当は俺より７０近く年上なのにな」
「っ!?　失礼っ！　そういう事は言わないの！　マナーよ！」
何がマナーだ。普段から部屋に引きこもってる奴がよく言う。
「魔王や魔人は不老なんだから歳取らないの！　永遠の若さって奴よ！」
「いや、そうだが……精神年齢は……」
「それにそういう事言ったら自分の首絞める事になるわよ！　１００年や２００年したらレオンハルトだってお爺ちゃんじゃない！」
俺は直ぐ様掌を返してやる。
「……うん、やっぱ不老の俺達からすると１００歳くらいなら１０代……いや、赤ん坊みたいなもんだな。千年以上生きてる奴とかもいるくらいだし」
「そういうことよ。私達はまだまだ若いんだからね」
「……納得した」
さすがにそう言われるとちょっと抵抗があるので訂正したが、ケイブリスやカミーラはその辺りの事どう思ってるんだろうな……カミーラに聞いたら殺されそうだから聞かないけど。
俺なんかまだ３０年も生きてない上に、魔人になって１年も経ってないのだ。千年以上生きるなんて想像がつかない。
「ね、ねぇ、レオンハルト」
「ん？」
「……１００年後も２００年後も、それから先もずっと……私についてきてね」
スラルが言ったそれは、いつの日か、魔人になった時に言われた言葉だ。あの時と同じ様に少し迷いながらもそう口にしたスラルを見て、俺は思わず苦笑してしまう。
……まったくしょうがない奴だな。
それを聞いて俺は思い出す。魔人になった日の事。忠誠を誓う条

件に故郷を助けてもらった事。
あの恩があるからこそ、俺はスラルについていこうと、命令を忠実に守ろうと思っていた。
だが、よくよく考えればそれは違う。俺は魔人になってから充実していたんだ。
人間の頃よりも楽しく、何より自分らしく生きられることを嬉しく思っていた。
人間からしたら決して良い存在ではないし、良い行いをしているとはいえないだろう。
だが、それでも俺はこの日々をこいつに――スラルに貰ったんだ。
「……ああ」
だから俺がこいつについていく理由は一つだ。
「当たり前だろ。俺はお前の――魔人なんだからよ」
「――――うん、お願いね」
お前と一緒に――俺を必要としてくれたお前に応える為に、俺はお前についていく。
肩に身体を預けてくるスラルの安心したような声と重みを感じながら――俺は再びそう誓った。

金髪灼眼の魔人

――ＳＳ３００年

第三世代メインプレイヤーである人間の時代であり、魔王スラルの治世が始まって３００年。

人類は未だ魔軍の脅威に脅かされていた。

だが彼らも３００年の間、全くの進歩が無かった訳ではなかった。

その最たる事、それは約１００年前に起こった――国家の誕生である。

この頃になると魔軍の脅威はほぼ全ての集落が知ることとなっていた。魔軍が散発的に、勝利して支配する為ではなく、まるで人間を苦しめるような侵攻を何度も繰り返していたからだ。

魔軍は人間に勝利すると適度な略奪、暴行を行って十分に楽しんだら去っていく。それが人間達には周知の事実となっていた。それから暫くの間、その地域の集落に魔軍は攻めてこない。集落の復興には都合の良い事この上ない為、当初は魔軍は撤退したのではないかと喜んでいた。

だがそれがぬか喜びだと分かったのは復興が終わり、平和な日常が戻ってきた頃。魔軍はそれを見計らっていたかのように再び攻めてきた。復興を終えた集落は再度、魔軍との戦争の日々を送ることになる。

そして再び人間側が敗北した時――惨劇が集落に降りかかった。

男は魔物に遊び感覚で殺される。女は性奴隷として魔物の欲望の捌け口にされる。そうしてしばらく愉しめば、魔軍は人間を解放して去っていった。

それが何度か繰り返された時、少なくない人間が思った。

このままでは魔軍には勝てない。もっと多くの戦力で立ち向かわなければ人間はいつまで経っても魔物の玩具のままだと。

最初に声を上げたのは大陸東にあるとある集落。この集落はどういう訳か、魔軍の被害に遭わないどころか、いつからか一切魔軍が寄り付かない事で有名だった。故郷が魔軍の被害に遭い、心体傷ついた

多くの人がそこに辿り着き平和な日常を送る。一種の安全地帯、人間にとっての理想郷としてもその名は轟いていた。
このまま何もしないで大人しくしていれば平和を謳歌する事が出来る。
しかし当時の王はそれを良しとしなかった。
周辺の集落を併合してより大きな集落――人類史上初の国家を建国した。
更にはそれをお手本とし、幾つかの国が生まれた。人類はより沢山の人々と団結して力を合わせることで強大な力を持つ魔軍に対抗しようとしたのである。
だが、現実はそう甘くはない。多少戦力差を縮める事が出来ても、それでも強力な魔人に率いられた魔軍の侵攻を防ぐことは出来なかった。
しかし全く無意味ということもない。これにより魔軍との戦いは、少なくとも一方的にあっさりと負けてしまう程ではなくなった。
未だ魔軍の脅威は健在。中ではそれに絶望した人間達が神という架空の存在を作り上げ、祈りを捧げる風習があった地域では、何の因果か爆発的にその数を増やしていった。
宗教の起こり、その始まりであり――後のＡＬ教と呼ばれる宗教団体の前進組織である。
彼らもまた各地に信者を増やして、魔軍へ抵抗を続ける国々に協力したといわれている。
文化や技術も、魔軍に比較的襲われにくい地域、国を中心に発達し続けており、人間という種の多様性が段々と発揮されている。
世界は未だ黎明期。混沌とした世界で各地の人間は必死に今を生きていた。

――とある戦場
「今日も甚振ってやるぜ人間様よぉ――っ!!」
「ぐあああっ――!」

「おのれ魔物め！　返り討ちだ！」
「がふっ……ぐ……人間如き……がっ……！」
怒号と共に武器が、弓が、魔法が飛び交い血飛沫が舞う。
人間のある国と魔軍との戦い。これまでに何度か繰り返され、人間側の軍は魔軍を幾度か追い返していた国境沿いでの戦闘。人間側は自国の地である事の有利、これまで何度も魔軍と戦ってきたことによる経験によりそれを行えていた。
だが今日の戦い、どちらが勝っているかは一目瞭然であり、その原因もはっきりしていた。
「死ね――っ！」
「――おおっと」
「がぁ……はっ……」
「くたばれ化け物――!!」
「へっ、気合入ってるな――っと」
「ごふっ……はぁ、はぁ……ちくしょう……っ！」
次々と人間の兵士が褐色の男に向かっていってはその屍を晒す。一見只の人間に見えるその男は、しかし近くでその存在を感じるとそうでない事がすぐにわかる。
そう、彼は魔軍の旗頭であり、魔王の忠実なる下僕である――魔人。
「ようし、俺達も突っ込むぞ！　野郎ども、気合入れてついてこい！」
「おぉ――!!　ガルティア様に続け――!!!」
「お前らも頼むぜ」
「――!!」
部下に檄を飛ばして剣を振るうのは――魔人ガルティア。
緑髪に刺青を入れた褐色の肌の中心には大きな穴。そこから出てくるのは彼の大切な使徒達。
「うわっ!?　何だこの糸！　と、取れねぇ!?」
「う、腕が腹から……ぐわっ!!」
「なっ!?　あれはとり、か？　飛び上がって……くそっ！　届かねぇっ！」
三体の使徒。ラウネア、タルゴ、サメザン。ガルティアが人間時代

から共にする戦友であり家族。ムシ使いの魔人であるガルティアの戦闘をサポートする使徒達は戦意に呼応して的確な連携をこなしてくる。その連携はとてもではないが人間では対応できないほどである。

更には赤い蛮刀――ハワイアンソードを使った剣の腕もかなりの実力であり、ガルティアの突撃によって多くの人間が蹴散らされていく。

そしてガルティアに付いていく魔物兵達も魔人の戦い振りにその勢いを増していく。

「……」

「ふはは！　人間如きがガルティア様に敵うわけないだろう!!　進め――！　……って、あれ？　どうかしましたかガルティア様？」

突然、戦場のど真ん中で立ち止まったガルティアに部隊の指揮を執っていた魔物将軍が戸惑ったように声を掛ける。まさか何処か怪我をしたのか――魔物将軍が近くに寄る。

そしてガルティアは懐から何かを取り出そうと手を伸ばした。

「悪い。腹減った……肉一本食べてからでも良いか？」

ガルティアが軽い口調と共に懐からこぶし大よりも大きい骨付き肉を何本も取り出す。

魔物将軍は想像を裏切られ思わず叫んだ。

「ガルティア様！　それは一本と言いませぬ！　せめて一本だけにしてください！」

「固いこと言うなよ……んぐ、もぐ……おお、塩加減が絶妙だぜ、この肉。これなら冷めてても美味い。ほれ、お前も一口」

「んぐっ!?　ぐぐっ……ごくっ……むっ、確かに美味いですが……」

「だろ？　もうちょっと食べてこうぜ」

「……いえ！　折角ですがそういう訳には参りません！　作戦通りに動かねばなりませんので！」

「ちっ、惜しいな」

「あの方のご命令ですので」

魔物将軍のてこでも動かない様子を見て、ガルティアが軽く惜しみ

つつ肉を収めると、それを受け入れて再び戦意を高める。さすがのガルティアも同胞にキツく厳命されていれば動かざるを得ない。
「しゃあねぇな。それじゃあ突っ込むか……よし、メシ前の腹ごなしだ野郎ども！」
「はい――者共！　ガルティア様の突撃に続け――!!」
「おおおお――――!!!」
「勝ってメシをたらふく食うぞ――！」
「おおおおおおおおおおおおおお――!!」
ガルティアと魔物将軍の号令で魔物兵が士気を高める。それにぶつかった兵士たちは容赦なくその命を散らしていった。

そして一方その頃。
人間と接敵する前線。その少し後方の部隊は、戦場の魔軍に指示を送る――魔軍の本陣であった。
その中心で魔物兵が次々と戦場の報告を持ってくる。情報の伝達速度は勝敗に大きく作用する。故に密な連絡を取り合う事を指揮官は厳命していた。
今も魔物兵の報告を聞いた魔物将軍が意見を仰ごうと口を開く。
「ガルティア様の部隊が敵陣で立ち往生。そしてその後に再び突撃……？　一体何があったのでしょうか？」
「不測の事態であるのならば確認次第こちらも前線を押し上げますか？　こちらの優勢ではありますが、優勢の時点で策を取るほうが……」
「それよりも――」
「――いや、いい」
「！」
議論が飛び交っていたその場が、水を打ったように静まり返る。そして次なる言葉を聞き漏らさないように五感をその人物へと集中させる。
そして彼はここにはいない同僚に呆れるよう、息を吐いて言葉を繋

げた。
「……ガルティアの事だ、どうせ腹が減ったとか言って摘み食いでもしたんだろ。まったくアイツは……」
「は、はぁ……左様ですか」
「……なれば如何しましょう？」
少し苛立ったような様子の彼に、一体の魔物将軍は臆せず意見を尋ねる。長年彼の下で働いてきた、今更これくらいで躊躇う事はない。
そんな曖昧な問いに彼は視線をあらぬ方向に向けながら億劫そうに答えた。
「……いつも通りでいい。ガルティア軍が敵陣を突破するまでは防御重視で適当にやってろ」
「はっ、畏まりました」
古参の魔物将軍が恭しく敬礼する。その場にいる殆どの魔物将軍が特に疑問を持っていないようであった。
しかし一体の魔物将軍が一歩、前に進み出る。
「……しかしこちらも同様に突撃を行えば早く決着を着けれるのではないでしょうか？」
「――――」
「っ！」
その発言にじろりと視線を向けた彼。その威圧感ともいえる無言の圧に魔物将軍は耐えかねて一歩後退る。気づけば他の魔物将軍からも視線を集めている。だが周囲に慌てた様子はない。
その理由を考える前に、意見を出した魔物将軍が思考を中断させた。彼がその問いに答えたから。
「……それだと被害が増えるだろ」
「っ！　は、それはそうですが……」
それでも微々たる違いでしかない――という言葉を魔物将軍は飲み込んだ。所詮は人間の軍、昔よりは数も武器も戦術も進歩しているとはいえ、魔物兵に及ぶものではない。多少の被害が増えても突撃してしまえばそれで押しつぶせるのではないか、という考えだ。
しかしその考えは直ぐに覆された。

「早く終わらせる必要もないしな」
「……そ、それはどういう――」
「いいか？」
「っ！　は、はい」
　再び口を開きかけた魔物将軍の言葉を彼が牽制するように止めさせる。
　彼の視線を受けて返事を返した魔物将軍は、ゆっくりと周知させるように語り始めた彼の言葉を聞いた。
「作戦は聞いてるよな。……俺達の戦術はいわゆる斜線陣からの敵陣突破、及びに崩壊……まぁ、分かってたら対応策なんて幾らでもあるような作戦だ」
「はっ、勿論です。しかし、その……」
「お前の言いたい事はわかる。ここの陣形が間延びしすぎてるって話だろ？　密集陣形にしては横に広いし、横陣にしては狭い中途半端な陣形。これじゃあこっちも前線を突破されるかもしれない。そんな事するくらいならさっさとこっちも突撃して敵を押し潰せって事だな」
「！」
　彼はすんなりと魔物将軍の考えを言ってみせる。
　そしてそれを肯定しながらも言葉を繋げた。
「お前の考えは間違ってないけどな。……俺の狙いは違う」
　狙いが違う、なら狙いとは一体――そういう疑問を頭に浮かべる魔物将軍。彼はそんな様子を見てか鷹揚に説明を続けた。
「まず大前提だが、魔物兵の突撃を止めれる人間の部隊は今の所存在しないな。数が何倍にも多いならともかく。それに突撃する部隊は魔人が率いてる。可哀想な事に単純な突撃だろうが、斜線陣で片翼からの突撃だろうが向こうは敗北は必至なのさ。……ここまではいいな？」
「……はっ」
　こくり、と魔物将軍が頷くのを見てから彼は繋げた。
「このまま待ってればガルティアが敵陣突破を果たして敵陣は崩壊。

そしたら俺達は向こうと連携、挟み込んでお終い。向こうの敗北は時間の問題な訳だ」
　無論、これで成功するならそれで構わない、と彼はそれを受け入れる。だがそう言うなら当然、説明に続きがある。
「なら逆に考えろ。向こうが勝つにはどうしたらいい？」
「それは……」
　魔物将軍は突然振られた質問に少し思考してから答える。
「……指揮官である我々を倒す事でしょうか」
「ああ、その通りだ。これだけは何年経っても変わらないな」
　正解を言い渡す彼。魔軍の弱点はその特性上、どれだけ時間を重ねても変わることがない。
　即ち、敵の頭――魔物将軍や魔人を倒し、魔物兵の統制を乱すことにある。
　その事実に満足そうに頷いた彼は、魔物将軍から視線を切り、それを前線に向けた。
「向こうも馬鹿じゃない。そんな事は百も承知だ。さっさと敵の首級を挙げたい状況だ。……なら、今この状態はどう思う？」
「は、この状況……？」
「こんな風に兵が間延びして中央が前線に近い位置にあったらどうなるかってことだ」
「……それは……いや、まさか」
　魔物将軍の優れた頭脳がそれを導き出す。まさか、この方はその為に――。
　――そう考えた直後、背後で悲鳴が聞こえた。
「ぎゃあ――っ!?」
「くそっ、このにんげ――ぐぅっ!!」
　魔物兵達が何者かに、いや、おそらく人間だろう。人間にその命を散らしていた。
　そしてその人間はこちらの中央にまで最低限の歩みのまま突撃してきた。
「――見つけた！」

「！」
その人間を一目見て、魔物将軍は悟った。――おそらくは人間の軍の主力。
大柄な体格、鍛え上げられた肉体を包む甲冑。そして手に構えるのは普通の倍のサイズを誇る大剣。その大剣でここに来るまで魔物兵を屠っていったのだろう、血が滴っている。
その人間はこちらをぐるりと視線だけで見渡す、そしてある一点で止まると低い声で話しかけた。
「魔物将軍と――貴様が魔人だな」
「……」
その視線の先にいるのは魔物将軍と言葉を交わしていた金髪灼眼の男である魔人。
彼はその言葉を聞いているのかいないのか、反応しないまま上から下までその人間を値踏みするように見ていた。
そして人間も見られている事に気づきながらも、それを無視して剣を突きつけた。
「貴様をここで屠り、祖国に平和を齎す……！　いざ、尋常に――」
「……あー、こりゃ駄目だな」
「何……？」
人間が訝しげに眉を顰める。そんな人間を見て魔人はつまらなさそうに頭を掻いた。
「ここ数年じゃ一番弱いな。これじゃ楽しめそうにねぇ」
「何だと……！」
実力を侮辱する発言に、人間が激昂する。怒りで熱くなって突撃してしまいそうになるが、そこは何とか踏みとどまり、視線で抗議するように彼を睨んだ。
だが彼はその視線を気にも留めず、冷めた様子で口を開く。
「……ま、一応確認しとくか。お前が向こうの指揮官で良いんだな？」
「……そうだ」
「よし、なら選ばせてやる。今直ぐ捕虜になるか、それとも魔軍に寝返るか。どっちがいい？」

自身の愛国心を馬鹿にされた様に感じて叫ぶように返答をぶつける。
「ふ、ふざけるなっ！　私は貴様を殺して――」
「ああ、わかった。なら三つ目の選択肢だ――俺と決闘だな」
その単語は、騎士にとって馴染みの深い言葉であり、相手にとって縁遠い言葉だった。
故に、意味がわからずその言葉をそっくりそのまま返してしまう。
「決闘、だと……？」
「そうだ――魔物将軍！」
「はっ！」
魔人に呼ばれて前に進み出てきたのは一体の魔物将軍。彼の側近ともいえる一体。
そんな魔物将軍は懐からとある物を取り出しながら、人間に向かって告げた。
「ルールを告げさせてもらう」
「……ルール？」
これまた魔物とは縁遠い言葉であり頭に疑問符が浮かぶ。
「黙って聞くがいい。まず、一つ――決闘は三分以内にとある条件を満たした者を勝者とする」
「条件……いや、そもそも決闘など……」
「何だ受けねぇのか？　なら全員で襲いかかって終いだな」
「……」
主である魔人の言葉に一斉に反応した周囲の魔物将軍達が戦意を昂ぶらせる。――予想以上に敵将の数が多い。これは苦戦させられるかもしれない。ならば、と騎士は決断した。
「……受けよう」
「おーけー、それじゃ条件はやっぱ俺から言ってやる。悪いな、魔物将軍。……お前の勝利条件は三分以内に俺に傷を負わせること――以上だ」
「なっ……！　それは……」
あまりにもこちらに有利過ぎる条件に絶句する人間。そして一瞬

の後、怒りが湧き上がってくる。
　そしてそれを逆撫でするように彼は言葉を続けた。
「お前の実力じゃ勝負になんねぇだろうしな。因みに俺の勝利条件はお前を殺すこと、もしくはお前が降参すること。もし俺が負けたら俺の軍は引かせてやる。それでお前が負けてもペナルティは無し。ま、首でも晒して戦意を挫かせるくらいはするけどな」
「……後悔するぞ」
「させてくれるなら願ったりだな。因みにお互い以外に危害を加えるのは禁止だ」
「……なるほど」
　怒りでどうにかなりそうではあったものの、人間側からしたらあまりにも好条件。魔人に傷を付けるだけで魔軍は撤退。負けても自分が死ぬだけ。無論、自分が死ねば部隊は動揺するだろうがこのまま戦闘を続けても敗北するのは同じこと。ならば命をかけるだけの価値はあった。
「後は特にねぇな。やめるなら今の内ってくらいか」
「……いや、構わない。すぐに始めよう」
「せっかちだな……じゃあやるか――おい」
「はっ！」
　騎士はその大剣を彼に向かって構える。それを見て呆れたように苦笑する魔人は、魔物将軍に指示する。
「では、立ち会いは自分が。そして時間はこちらの砂時計で計らせてもらいます。両者、異存は？」
「ありません」
「ねぇな」
「では――始め!!」
　魔物将軍の掛け声、そして砂時計を反転させる。それと同時に騎士はその大剣を構えたまま魔人の懐に入り込む。そのスピードは人間にしては中々のもの。
　そして騎士は大剣を振り下ろそうとしながら、分析する。
……奴の武器はおそらく背中の長剣か。さて、どうくる――？

相手の一挙手一投足を見逃さぬように集中、そして大剣を相手の頭上目掛けて振り下ろした。
だが、
「――！」
大剣はその勢いのまま大きく空振り。躱された、不味い、奴はどこに――
そうして辺りを見渡そうとして――それを中断させられた。
なぜなら、
「……やっぱりこんなもんか」
「――なっ!?」
――奴が、目の前に、一歩も動かず立っていたから。
「くっ……！」
咄嗟に目の前に向かって大剣を横薙ぎ――しかし、躱される。
その勢いを利用して反対から袈裟斬り――だが、躱される。
角度を変えてフェイントを入れる、その上での逆袈裟――またしても、躱される。
魔人は一歩も動かず、その全ての動きを見切って躱していた。
「くっ……はっ……何で……！」
焦ったように剣を振り続ける。何故だ、何故通用しない。
自分が今まで、文字通り今日まで一生かけて鍛え続けてきた剣技が全く魔人相手には通用していない。少しずつ焦りと戦慄によって汗が身体から吹き出してくる。
そんな人間を見て、魔人はどこか憐れむような視線を向けた。
「……だから言ったのによ。お前じゃ俺に敵わねぇ。俺を熱く、楽しませることは出来ねぇってな」
「戯言を……！」
「……何でもいいが、気づいてるか？　もう後半分――いや、一分くらいしかねぇぞ？」
「――!!」
横目で魔物将軍が反転させた砂時計を見ると、確かに砂は三分の二を越えようとしていた。

「何もしねぇのはアレなんでな……残り三秒になったら抜く。それまでによく考えろ」
「っ……うおおおおお――っ！」
連撃。大剣を目の前の魔人に息を整える暇もない程、間髪入れずに打ち込んでいく。だが魔人はそれを顔色一つ変えずに丁寧に躱していく。未だ空気以外の抵抗を大剣には感じられなかった。
そして時間が過ぎていく。五秒――十秒――十五秒――二十秒――。
時間が進むのと比例して自身の鼓動がどんどん強く、そして早く脈打つ。激しい動きによるもの、それだけではない。
剣を振りながら確信していた。自分はその時が来れば――残り三十秒。
その瞬間に、自分は死ぬ。目の前の魔人には敵わない。彼に一瞬で殺される未来が、何故か鮮明に浮かび上がる。
時間が進むに連れて、魔人の視線はどんどん冷たくなっていく。三十秒――三十五秒――四十秒――四十五秒。
残り十二秒。
戦いはたったの三分。それだけの時間を動く事、騎士にとって容易であるはずのそれが行うことができない。
汗が大量に吹き出て、身体が震える。それは魔人による強烈な威圧感と、死が目に見えて近づいてきていることからの精神的重圧だ。
残り、十、九、八、七、六、五。
「う、うあぁぁぁぁあああああああああっっ――!!」
残り五秒を切った時、騎士はその手に持った誇りさえも投げ捨ててみっともなく逃げ出した。
その背中を見て、魔人が――
「――終わりだ」
「――――！」
剣を振った。
そして一瞬の後。騎士の頭だけが地面に転がる。
それを見て、魔物将軍が声を上げた。

「――――レオンハルト様の勝利」
「……ふん」
魔物将軍の言葉に着ていたコートに付いた僅かな血を手で拭う。
そして死体になった騎士、その首級に近づくとその兜を外して顔を確認する。
「……やっぱ女だったか」
そう言って彼は何を思ったか少しの間その顔をじっと見ていたが、視線を切るとその首を持って近くで控えていた魔物隊長に手渡す。
「いつも通り適当に宣伝させろ」
「はっ、直ぐに」
魔物隊長はその言葉を受けて前線に走っていった。おそらく数分足らずで決着がつくだろう。
彼らの、彼女の、敗因は――敵対する魔人に、魔人四天王にして魔軍参謀である金髪灼眼の魔人――レオンハルトの存在がある事を見抜けなかったこと。
レオンハルトは少しだけ気を抜いて、一体の魔物将軍に話しかける。先程、レオンハルトに意見を申した一体だ。
「これの為だ」
「……それはつまり」
「相手の心を折った方が早いし、こっちの被害も少なく終わるだろ。だから向こうから仕掛けやすくしてやってるだけだ」
そう。レオンハルトの作戦とは魔物将軍や自分がいる本陣に敵の主力を誘い込み、それを力技で潰してしまう作戦だ。そのための前線は間延びした密集陣形、不完全な斜線陣。敵の雑兵だけを前面で食い止め、実力のある人間だけを誘い込む為の振るいにかける陣だ。
無論、その前の戦闘で決着がつくならそれはそれで構わない。ガルティアが敵陣突破を果たして挟み込んで倒せるならそれでいい。
だが、魔物将軍は疑問に思う。一つだけ不可思議な部分があるのだ。
「……あの、前衛は――」
「ああ、後は俺の趣味だ」

「……は？」
疑問を投げかけようとしたところ、その発言で固まってしまう。それを見て、レオンハルトは不敵に笑ってみせた。
「強い奴とやり合うのは楽しいからな。その為に前線は薄くしてある――わかったな？」
「は、はっ！　わかりました！」
「なら、いい。お前もそろそろ部隊の指揮に戻れ」
「はっ！　ではそのように！」
魔物将軍を解散させると、レオンハルトは息を吐く。
今の言葉は半分は本当で、半分は別の理由があったからだ。
「頭が良い奴を丸め込むのも面倒だな……今更か」
前線を薄くしてこのような作戦を取る理由。強い人間をおびき寄せる為だけなら魔物将軍と自分が一箇所に固まるだけでもいい。強い奴は前線を固くしようが何をしようが必ず辿り着く。それは自分が一番よく知ってる。
なのにそうするのは魔軍の被害を少なくするだけでなく――人間の被害を考えていたから。
そのために、敵将の首を取って戦意を喪失させる。そして後に適当に追い返す。拠点を攻め落とせば部下に適当にガス抜きさせて解放。
魔軍における二律背反の体現者。それが魔人レオンハルトの現在の生き方。
だが、それも苦ではない。レオンハルトは剣を収めると指示を魔物将軍に任せて奥にあるテントに引っ込む。もう雌雄は決してる。後は部下に任せても問題ない。
故に彼は一冊の本を手に取ると、それを開いた。
「さて……帰る前に読み終わらねぇと。読み終わったかって何度も聞いてきてうるさいしなぁ……」
レオンハルトは暫くの間、外の喧騒を聞きながら彼女から借りたその本を読み始めた。

レオンハルトの悩み

――ルドラサウム大陸東部
そこには二百年以上前に作られた魔軍の本拠地がある。
世界の支配者である魔王の居城――魔王城だ。
そんな魔王城の一階廊下に二人の人影が見える。だが、人ではない。この魔王城にいるのはコックなどの一部の働き手を除けば人の形をした魔に属する者達。
歩みを進めながら何やら会話をしている二人――彼らは魔人だった。
「ガルティア……お前は何回言えば戦闘中の摘み食いをやめるんだ？
あれだけ行軍中も軍議中も食べてただろうが」
「しょうがねえだろ。腹が減っちまったんだから」
「少しは我慢しろって言ってんだよ」
「えー……それなら言うが、お前は人斬りたい時に斬るの我慢できるのか？」
「人を辻斬りみたいに言うんじゃねぇ！　我慢出来るし、そもそも斬りたくて斬ってる訳じゃねぇんだよ！」
「そうか？　なら今のは例えは無しだ。メシ行こうぜ」
「お前、全然人の話聞いてねぇな……」
魔人レオンハルトと魔人ガルティア。
戦場帰りの二人の魔人が言い争うように声を交わしていた――怒っているのは一人だけだが。
「だから――あ？」
「――お」
そんな彼らだが、廊下の端で視界に映ったものを見て同時に声を上げる。
それは二人を見つけるとやや早歩きでこちらに駆け寄ってくる。
それは誰かというと――
「レオンハルト、ガルティア。お帰りなさい」

「……ああ、ただいま。スラル」
「おう、ただいま」
彼らが帰宅の挨拶を交わした人物。白髪に灼眼で理知的な印象を持つ少女。
――それは魔王スラルに他ならない。
そんな彼女が笑顔で挨拶を言ってきたのを見て、何かに気づいた様にレオンハルトが目ざとく口を開く。
「お前……ひょっとしてちょっと前からここで待ってたのか？」
「あん？　そうなのか？」
ガルティアもそれを聞いて質問を重ねる。
それに対してスラルは少し恥ずかしそうにしながら、
「べ、別にいいでしょ。今日帰ってくるって聞いてたしそろそろかなって。というか何でわかったの？」
レオンハルトに素朴な疑問を返すスラル。問われたレオンハルトは軽く息を吐く。
「……勘、だ」
「え？　勘？」
スラルが目を丸くする。そんな彼女の姿にちょっと面白かったのかレオンハルトが小さく笑みを浮かべる。
「何となくそうかもしれないと思ったからな。鎌を掛けてみた」
「……も、もう何よそれ！」
誂うような言葉にスラルがむっとしてレオンハルトを見上げる。こうやってレオンハルトがスラルを誂うことはもう珍しいことではなくなっていた。
ガルティアがそれを聞いて思い返すように、
「そういえばレオンハルトは最近、妙に気配に鋭かったりするからな……実は勘じゃねえかもな」
「どこまで俺を化け物にする気だ……それはもう気配察知じゃなくて未来予知かなんかだろ。それにレーダー持ってるお前に言われたくねぇ」
「ははっ、悪いな。最近の活躍してるお前ならあり得るかと思った」

「へぇ、レオンハルトってばやっぱり活躍してるんだ」
「……ん、いや……まぁ」
「？　どうしたの？」
　レオンハルトの活躍を喜んだスラルであったが、当の本人が煮え切らない様子であることを見て首を傾げる。
「なんだ、悩みでもあるのか？」
　それにガルティアも乗っかる。流れは既にレオンハルトの悩みを聞くことになっていた。まだあるとも言っていないのに。
「……いや、別に大したことじゃねぇよ」
　そう言いながらもレオンハルトの表情は眉間に皺が寄っている。彼はちょっとだけ言うべきかを悩んでいたが、スラルとガルティアへの信頼故か、それとも本当に大したことないのか、それをすんなりと口にした。
「最近、戦いが面倒――ああ、面倒……ではないか。何というか――刺激が足りなくてな」
「し、刺激？」
「どういう事だ？」
　スラルとガルティアが揃って疑問の言葉を口に出す。そして続くレオンハルトの説明を耳にした。
「敵と戦闘になったり一騎打ちしたりすると、相手が弱くて前みたいに燃えないっていうか……楽しくなくてな。部隊指揮なんかに徹してる時はむしろ集中してるから気にならないんだがな」
　レオンハルトはそれを真剣に説明する。
「剣を振るのは楽しいが、相手が弱いと直ぐに終わっちまう。かといって意味もなく剣を振りたくもないし一方的な虐殺なんか趣味じゃねぇ。……最近一番楽しかったのが敵の凄腕軍師と軍略勝負して追い詰められた時と、二十年前にカミーラと半ば冗談でじゃれ合った時くらいなんだ。あの時はちょっとお互い本気になりかけて危なかった」
「確かにあの時は……って、待って。えっ、そういう悩み？」
「あー……これは重症だな」

スラルとガルティアが呆れたように息を吐く。そしてスラルが少し困ったように苦笑する。
「……もう、レオンハルト。貴方が剣を振るのが好きなのはわかってるけど、そういう考えは程々にしなきゃ駄目よ？」
「少しはわからんでもないが、戦いなんだからそういうものだろ？強すぎればそうなるしな」
「重々承知だよ。仕事は真剣にやるしそういうのを求めんのは相手と止むを得ず直接やり合う時だけだ。……だけど、その時が大体不完全燃焼っつうか……」
「他の事で発散したら？」
スラルのそんな提案に直ぐ様、返答が来る。
「もうやってる。戦いの時以外はあんまり考えなくてすむから効果はある……って、思い出した。この本面白かったぜ」
「ほんと!?　ねぇ、どこが面白かった？」
「タエとカナコの仲直りのシーンが良かったな。月並みだがタエの啖呵は痺れた」
「あっ、私もあのシーン好き。しかもその前にケイとも話し合った場所だから余計に映えるのよね」
「俺的にはケイとマオの殴り合いも良かった。それに――」
「あー……悪いんだが、それ長くなりそうなら先に食堂行っても良いか？　腹が減っちまった」
ガルティアが盛り上がりかけた二人の会話に水を差す。少しだけバツが悪そうに頭を掻いていた。そして同じく少しだけ決まりの悪そうにした二人。
「あっ、ごめんね？　今度料理作ってあげるか――」
「よし、待ってるから今作ってくれ！」
「えっ、今から!?」
「現金な奴だな……」
レオンハルトは一旦、区切ると気を取り直して二人に告げる。
「とりあえず俺はもうちょっと仕事残ってるから、何にせよ先に行っててくれ。スラル、本の話はまた後でな」

「あ、うん！」
「おお、なら食堂に――いや、スラルの料理を食べるなら部屋の方がいいのか？」
「え、本当に今作るの？」
スラルとガルティアに別れを告げ、その場を後にするレオンハルト。彼としてももう少し駄弁っていたい気持ちもないでもなかったが、それは後ででも出来る事だ。今は遠征帰りで仕事がそれなりに多い。
だが、これが終われば時間も出来るだろう。
それにさっきは刺激が足りないとは言ったが、こういった日々があるからか特にストレスは溜まっていなかった。
「……面倒だがさっさとやるか」
そう言ってレオンハルトは面倒そうにしながらも軽く笑みを浮かべ、仕事を片付ける為に私室に向かった。

一足早く自室に戻って仕事をしていたレオンハルトだが、少し小休止がてら部屋を後にして食堂にでも向かおうとした時のことだ。
前方の廊下から一組の男女が歩いてくる。お互いにそれに気づいた時、最初に話しかけてきたのは女性の後ろに控えていた長髪の男だった。
「これはレオンハルト様。遠征から戻られたのですね」
「七星、それに――カミーラ」
「……レオンハルト、か」
お互いに視線を合わせて名前を呼ぶ。自分と同じ魔人四天王の一角――プラチナドラゴンの魔人、カミーラ。
その美貌でかつて多くのドラゴン種を惑わした絶世の美女が、その視線で自分を貫く。
しかし特に用事も思いつかなかったレオンハルトはその場を後にしようとして――カミーラに止められた。
「そういえば……」

「？　なんだ？」
　カミーラがゆっくりと口を開く。ここ二百年程で多少活動的に動くことも増えたカミーラだが、それでもその泰然とした態度は変わらない。何か用があるのだろう、レオンハルトは返答を待つ。
「……お前、私が狙っていた獲物を……横取りしたか……？」
「獲物？」
「レオンハルト様、数年前に戦った赤い髪の人間です」
「……あー、いたなそんな奴」
　レオンハルトは七星から告げられた特徴で思い出す。確かに数年前、カミーラと一緒に出た戦場でやたらと逃げるのが上手い男がいた。遊撃部隊を指揮していたその男は、人間にしては上位の実力と優秀な頭脳、そして類まれなる運によってまんまと俺とカミーラの軍から逃げおおせた。自分はその時こそ直接対峙しなかったが、カミーラはその人間をいたく気にいって自らの手で狩ろうと息巻いてた筈だ。
　だが、
「……悪いな、カミーラ。ちょっと前に偶然そいつの部隊を見つけてな――作戦に邪魔だったから潰しちまった」
「――！」
「――っ！　っと！」
　瞬間、カミーラの爪が高速で伸びて両者の間で激突する。甲高い音が廊下に鳴り響く。レオンハルトが背中の魔剣オル＝フェイルを引き抜き、カミーラの爪を弾いたのだ。
　レオンハルトは攻撃してきたカミーラにやれやれと言わんばかりに肩をすくめる。
「おいおい、危ないだろうが。お前とやり合ったら半殺しにされそうだし、城が壊れるし、何よりスラルにも怒られそうだからやめてくれ。……俺が悪かった。また埋め合わせはさせてもらう」
　飄々とそう言うレオンハルト。しかし間違ってはいない。こんなところで魔人四天王の二人がやり合えば周囲も只ではすまない上、身内でやり合うのは魔王であるスラルに禁止されている。――特にレオンハルトとカミーラは。

「……ふん」
その謝罪を聞いて気分が少し収まったのか、カミーラが怒気を鎮める。
それもあるが、大きな理由はそこではないようであった。彼女の瞳はレオンハルトの表情をじっと見て――そして口を弓形に変化させた。
「……よく言う、一瞬だが……随分と楽しそうだったな……？　そんなに私と踊りたかったのか……？　くくっ……」
「……なに、美人と踊れるなら光栄だからな。そりゃテンションも上がる」
「くっ……くくく……随分と欲求不満のようだな……」
「カミーラ様……」
レオンハルトの内面を見通したかのように、そしてその感情に見に覚えがあるのか、カミーラが面白そうに笑う。七星はそんな彼女の楽しそうな様子を見て、ほんの少し困惑する。
カミーラはそのまま言葉を続けた。
「お前の悩みは、わからないでもない……せっかくだ……いつもの礼に、助言をやろう……」
「……カミーラが俺の為に何かしようとする日が来るとはな。明日は雪か？」
「なに、世話になった礼と思え……」
「……」
レオンハルトは茶化しながらも、その目は真剣そのものだ。カミーラの言葉を聞き漏らさないように意識を傾けているようである。
カミーラは未だ口元に微笑を残しながら助言を口にする。
「長く生きると……退屈が何よりの毒となる……その内慣れる上、私はそれも、嫌いではないがな……」
その言葉は妙に含蓄のある様にレオンハルトは聞こえた。黙って先を待つ。カミーラも程なくしてそれを続ける。
「そして……ほんの少し、変化を加えるだけで……日常は非日常となる」

「……変化っつってもな」
「簡単なことだ……お前の場合は……そうだな……使徒でも作ったらどうだ……？」
「……使徒を？　それは……」
レオンハルトが眉をひそめる。全く予想していなかった単語だったからだ。
使徒。自らの血を分けて作り出す魔人の忠実なる下僕。その特性から長い年月を使徒と共に過ごすことになる。
カミーラにとっての七星。ガルティアにとってのラウネア、タルゴ、サメザンなどがそうだ。
その使徒を自分が作る――？
レオンハルトは想像がつかなかった。それで現状に満足出来るとも思えない。
そんな思いが顔に出ていたのかカミーラがそれを指摘する。
「不満そうだな……なに、作ってみると案外、悪くないものだぞ……？」
「カミーラ様……」
その言葉にカミーラの使徒である七星が嬉しそうな声色で主の名前を呟く。忠義が認められたような気持ちなのだろう。カミーラはそんな七星の様子を見てか、レオンハルトのだんまりを決め込んだ表情を見てか、軽く鼻で笑ってみせると、歩みを再開した。
「私はもう行く……精々、考えることだな……」
「はっ、参りましょう。……レオンハルト様、ではまた」
「……ああ」
別れの挨拶を告げ、二人の主従はレオンハルトを通り過ぎると、そのまま去っていった。
廊下に一人残されたレオンハルトは、しばらく何かを考えるようにそこに佇んでいた。

遅めの夕食を終え、仕事を片付けると、辺りはすっかり暗くなって

いた。
魔王城の中こそ、ランプなどの照明設備のおかげでそれなりに明るいが窓の外は暗闇。
「……行くか」
レオンハルトは少し考えて、自分の部屋を後にした。向かう先は最早、日課となっている魔王――スラルの私室だ。
ノックをして、中にいる主に呼びかけると、直ぐに返事が返ってくる。
それを聞いてから扉に手を掛けた。
「おう、来たぞ。スラル」
「……ちょっと来るの遅い」
少しだけ拗ねたようにそっぽを向くスラルを見て、嘆息する
……こいつは、全然変わんねぇなぁ……。
相変わらずの魔王らしくない態度を見てそう思う。俺はいつものようにスラルの隣に腰掛けると、弁明するために口を開いた。
「仕事が溜まってたからしゃあねぇだろ。むしろ俺としてはよく今日中に終わったな、と自分を褒めたいところだ」
「……それはそうかもしれないけど……んー」
スラルはその言葉に少し思案顔になる。そして何回目かになる提案を出した。
「遅い時は私の部屋で仕事――」
「駄目だ」
俺はそれをすげなく却下する。本当に何回目だろう、と頭を抱える。
「お前と俺が一緒に仕事すると周囲の目が無かったら脱線しまくるだろうが……一度、一緒にやって口論から夜通しボードゲーム大会になったの忘れたのか？」
「うっ……でも、あれはあの時だけ――」
「その次は確か読んでた本の続きが気になってお互いに推理し続けたな。朝まで」
「……」

「その次はお前が――」
「――べ、別の話にしましょ！」
恥ずかしいことを蒸し返されそうになり、慌てたようにスラルが話を遮る。俺はやっと収まったか、と息を吐いた。
スラルは俺が部屋に来るのが遅かったり、来ない日があるとちょっと拗ねる。まぁ、週に一回か二回くらいならそこまで言ってこないが、今日みたいな遠征でしばらく会ってない日なんかがあるとそれが顕著だ。
スラルは誤魔化そうと何かを話そうとして、思い出したかのように口を開いた。
「さっきガルティアからもちょっと聞いたけど、今回の遠征は大丈夫だった？」
「……いつも通りだな。敵将討ち取って適当に追い返して解散。あれだけ叩けばしばらくは戦えねぇだろ」
「ん、わかった。怪我は無かった……よね？」
「……無いな」
「……やっぱり戦うの嫌いになった？」
スラルが心配そうに俺を見上げる。俺はその問いに首を振った。
「戦うのが嫌いになった訳じゃねぇ。……ただ、あまりにも単純作業になってきたからな。楽っちゃ楽なんだがそればっかりだと張り合いが無いっていうか……」
「んー……あまり気が進まないけど……カミーラやガルティアと模擬戦でもする？　本気は駄目だけど」
「……いや、いい。あんまり周囲に迷惑掛けるのもな」
「……わかった。じゃあ何かあったら遠慮なく言って！　出来る限り融通するから！」
「魔王様の融通か。それは魅力的だな。何でも手に入りそうだ」
「でしょ？」
その場に穏やかな空気が流れる。毎度お馴染みの他愛もない話。ガルティアが居ればもっと騒がしくなる。
こういった変わらないやり取りは嫌いじゃないんだけどな……。

本当にこの性分はどうしたものか――そう考え、昼間カミーラに言われた事を唐突に思い出す。
そして何となくスラルにも聞いてみようとそれを口にした。
「……そういや、ちょっと手に入れようか迷ってるものはあるな」
「え、何？　教えて？」
「使徒を作ってみようかと思ってな」
「あー使徒ね。それなら――って、ええ!?」
スラルが俺の言葉に驚愕する。何でそんなに驚くんだろうか。
「……俺が使徒を作ろうとするのってそんなに意外か？」
「う、うん。興味ないのかと思ってた……だって、百年くらい前に……」
「ああ、そういえばいたな。俺の使徒になりたいって言ってた奴」
俺は記憶を掘り起こす。確かにそんな事があった。
あれはとある人間の女だ。それなりに強くて、何かがあったのか人間に恨みがあるので、魔軍に入りたい。使徒にしてほしいと態々一度魔軍に捕まってまで言ってきた奴がいた。
復讐心が高すぎるのと、俺自身があんまり乗り気じゃなかったのもあってその時は断って解放してやった。あの時は今ほど退屈してなかったのもあるしな。
それを思い出して俺は苦い表情を浮かべる。
「あの時はどうかと思ったけどな。今は……ちょっとくらいなら考えてもいいかと思ったんだが」
「……うーん。ま、良いんじゃない？」
スラルが意外にもあっさりと肯定する。身内を大切にするスラルは嫌がりそうだと思ったからだ。
俺はその疑問を口に出す。
「なんだ、いいのか？　とんでもない極悪人や魔物を使徒にするかもしれねぇぞ？」
「ん、それはないかな。レオンハルトのこと信じてるし」
スラルは何ともなしにそう言う。その表情は一点の曇りもない様子。

「レオンハルトが認めた子なら、きっと良い子だと思うし……私も仲良くなれそう」
「……スラル」
「だから、もしそういう機会があってレオンハルトがこれって思う子がいたら使徒にしてあげて」
その言葉に、俺は心の中の靄が少し晴れたように感じた。
そして苦笑する。こういう部分があるからこいつは侮れない。
「……そうだな。そういうのも賑やかでいいかもな」
「もし出来たら歓迎会開いてあげないとね」
「しまった、それがあったか……」
「ちょ、ちょっと！　それは失礼よ！　私だって少しは……」
上達してるってか？　ありえない。未だにガルティアしか喜ばない毒料理を食べさせるなんて正気じゃない。
「……魔人でさえ気絶するんだぜ？　スラルの料理食べたら、俺の使徒死なねぇかな……？」
「そこまでいかないわよ！　……多分」
二人揃って言葉尻が弱くなる。今から使徒になる奴が可哀想になってきた。
……でもまぁ、少しは気が楽になったな。
そのうち、そういう奴が現れたら使徒にする。今後はそういう人材を探すことも趣味になるのだろうか。
俺はその日、スラルの言葉、そして未来の使徒を思ってか、ぐっすりと寝ることが出来た。

――朝。
カーテンの隙間から朝日が差し込んでくる。それに気づいた俺は飛び起きた。
「やべぇ……寝すぎた」
別にいついつまでに起きるとかいうそういう決まりもないのだが、今の時間は普段なら既に朝食を食べ終えて仕事をこなしている時間

だ。作戦行動中や会議の予定なんかがあると問題だが、今日はそんな予定もない。
そう考えると少しはゆっくりしてもいいかと開き直る。これだけ眠るって事は昨日は色々あって疲れたんだろう。悩みやら使徒やらの話もスラルと話して気が楽になったのかもしれない。
「たまにはこういう日も悪くねぇな……」
そう言って俺はいつものコートに袖を通すと、部屋の扉を開けた。
すると――
「――おはようございます!! レオンハルト様!!」
「あ――?」
扉を開けた瞬間、俺に向かって元気のいい挨拶が聞こえてくる。しまった、誰か訪ねて来てたのか。
十中八九、仕事の事だろう。朝から申し訳ない事をした。
俺はその腰を九十度曲げて挨拶する少女に、声を掛けようとする――ん? そういえば見覚えのない奴だな。
じっと視線を向けながら考えていると、その少女は上体を起こして大きな声で発言した。
「――先日の話を耳にして参上致しました! 私を――」
そして一息で、
「私を――レオンハルト様の使徒にしてください!!」
「……え?」
俺はそれを聞いて、凍ったように動きを止めてしまった。
――幾ら何でも急過ぎねぇか……?
朝のひと時に、突然に、レオンハルトにとっての転機は訪れた。

使徒候補

「――で、お前は何だ？　というか何でその事を知ってる？」
とりあえず玄関先――というか廊下で話すのも何なのでその少女を部屋に迎え入れてやる。
だがその少女は部屋に入るなり辺りを見渡しては、
「さすがは魔人四天王の一席を敷くレオンハルト様のお部屋……高級感がいいですわね。ベッドもふかふかですわ」
「……」
何故か部屋を品定めしていた。
俺はそんな興味深そうに部屋を眺める少女にもう一度声を掛ける。
このままでは一向に話が進みそうに無いしな。
「……あー……なんだ、その、ちょっと自己紹介してくれねぇか？」
「あっと、失礼。思わず目移りしてしまいましたわ。では改めまして――」
ビシッと手を前に出してポーズを取る少女。
「わたくし、これからレオンハルト様の使徒になる予定の女の子モンスター、バトルノートと申します！　以後お見知りおきを！」
「……」
「ふっ……決まりましたわ……」
俺はポーズを決めて満足そうにする少女を見て、げんなりする。
……最初に使徒に立候補してきた奴がこれかぁ……。
何というか個性的な性格をしているのが一目見てわかる。
それに俺は一つの疑問が頭に浮かび上がる。こいつは自分の事を女の子モンスターのバトルノートと言った。
女の子モンスター。
その名が示す通り、見た目は完全に人間の可愛らしい女の子に見えるのだが歴とした魔物の一種。それぞれ種類によって特殊な能力を持っている。

男の子モンスターと繁殖して新たな魔物を生み出す事が出来る。因みにだが、男の子モンスターの方は人間の見た目をしてる奴はほぼ存在しない。世間一般で見られる大方の魔物が男の子モンスターと呼ばれている。

さて、そこはいい。俺も魔人だ。こいつが女の子モンスターだということは理解出来る。

問題は次の発言。バトルノート。

バトルノートっていうのは強さよりも知能に長けた女の子モンスターであり、戦術眼、作戦指揮能力、部隊指揮能力、など集団行動を得意とする。

秘書能力も高くその特性から魔軍でも魔物将軍の補佐や参謀として多くのバトルノートが働いており、自分ともよく関わる馴染みの深い女の子モンスターだ。

だが、よく知っているからこそおかしな点がわかる。

バトルノートっていうのは黒を基調にした軍服とドレスを掛け合わせたような服装に長い薄紫の髪が特徴だ。

しかし、こいつの服はともかく、髪は……。

俺はそれを口に出す。

「……お前、バトルノートじゃなくてコマンダーじゃ――」

「バトルノートです」

間髪入れず俺の言葉を遮る。バトルノート（仮）。

俺は別の切り口からそれを攻めてみる。

「……バトルノートってそんなに髪短くないんだが……」

「これは切りましたの！　わたくしのアイデンティティですわ！」

「……」

俺は無言でそいつの頭を見る。本当か？　女の子モンスターって散髪出来るんだろうか。

女の子モンスターは見た目が種類によってほぼ同一で、服装なんかも身体の一部と同じ扱いで、破いたり脱がす事が出来ても時間が経てば生えてくる――らしい。俺は見たことないから知らん。

そしてコマンダーというのはバトルノートの下位種であり、バトル

ノートの髪を短くした見た目をしている。下位種なのでバトルノートほど能力は高くなかった筈だ。
　さて、こいつはどっちだろうか――と思ったがそれより先に聞きたい事が一つある。俺は訝しげな表情でそれを口にした。
「まぁ、お前がバトルノートかコマンダーかは置いておくとして……お前、何で俺が使徒を作ろうとしてるの知ってる？　それは昨日決めたばかりのことなんだが」
「それくらい当然の事ですわ。わたくしはレオンハルト様ファンクラブの会長を務めていますから」
「――は？」
　今、何気に聞き捨てならないというか信じられない単語が聞こえたんだが。
「……え、ファンクラブなんてあるのか？」
「ありますわ。わたくしが半年程前に設立しましたの」
　胸に手を当てて自慢気に話すバトルノート。こいつが作ったのかよ、と思うがまぁ、会長ならそうか。
　俺はその会長様にちょっと気になって質問を重ねる。
「……ちなみにどれくらいいるんだ？　ファンクラブの会員は」
「現在会員数４７名。その殆どがレオンハルト様と関わりがあるバトルノートやコマンダー、後は近接攻撃系を得意とする女の子モンスターで占められていますわ。最近は七星様やガルティア様のファンクラブと日夜しのぎを削っていますの」
「それは多いのか……？　いや、というより七星やガルティアにもファンクラブがあるのか」
「それなりですわ。魔軍には女の子モンスターはそれほど多くはありませんし。ですがこの程度では満足しません、もっと数を増やしてみせます」
「……さよか」
　そう宣言するバトルノートに否定も肯定も出来ず、生返事を返す。ガルティアや七星はこの事知ってんのかな……。
　というか女の子モンスターもミーハーというか何というか。面子

がわかり易すぎる。こう言うとあれだが、自分でも自分の容姿は悪くないとは思っている。喧伝するのもアホらしいし、謙遜するのも嫌味だから特に口には出さないが。

俺はそんな事を考えながらも、使徒の件が流出した原因を一つ思い当たる。というかそれしかない。

そしてその結論を勿体ぶらずにさっさと口にする。

「……昨日のカミーラとの会話でも聞いて来たって事でいいか？」

「さすがはレオンハルト様！　慧眼お見事ですわ！　推察通り、廊下でカミーラ様との会話を偶然そこを通りがかったわたくしが耳にしましたの！　そして居ても立ってもいられず参上致しました次第ですわ！　ふふふ、自分の強運が怖いですわね……」

これは運命、と髪を掻き上げてニヒルに微笑んで見せる彼女。何か大袈裟というか目立ちたがり屋なんだろうか。作戦指揮を担当する女の子モンスターなのに随分と馬鹿っぽいのは何でだろうな。ちなみに他のバトルノートはこんなんじゃない。もっと落ち着いた性格をしてる。

「……あー」

俺はどうしようか頭を掻きながら考える。

使徒を作ろうと決めたのは間違いないが、こいつでいいのか？

なんか残念そうなんだよな。いや、魔人の俺相手にここまで物怖じしないのはポイント高いか。長く生きてると、そして魔人ともなると対等に話せる奴が少なくてな。少しばかり溜息をつきたくなる時もある。ゆえにこういうタイプは嫌いじゃない。

そして今のところ裏があるようにも見えない。というよりこれが演技だったら末恐ろしい。

バトルノートなのかコマンダーなのかという疑問はあるが、そんなのは究極どっちでもいい。別に種族で使徒を決める気もないしな。

人格面はまだ分析が足りないだろうが仮に及第点だとしよう。後は役に立つかどうかと俺との相性か。

そこで一つ、大事な事を聞いてないのを思い出しそれを質問する。

「お前は、何で俺の使徒になろうと思ったんだ？」

そう、これを聞かなきゃ始まらない。
俺は視線で彼女を強く射抜くように向ける。これでも魔人になってそれなりだ。威圧感はそれ相応にあるだろう。
「よくぞ聞いてくれましたわ！」
しかし彼女はその重圧を微塵も感じていないのか、先程までと同じ様に声を張り上げた。
「それを話すにはまずレオンハルト様の魅力について語らなければなりませんわね！」
そう言って彼女は言葉を繋げた。
「レオンハルト様は魔人四天王を敷くに相応しい高い実力を持ち、魔軍参謀に魔王様直々に抜擢されるほど頭脳も明晰。魔人のお歴々の中では接しやすいと評判で、容姿もかなり優れています。そんな魔人の中の魔人であるレオンハルト様に――」
次々とこそばゆくなるような発言を連発してくる彼女。
そして次に自分に手を当て、ふふん、と自慢気に口を開いた。
「頭脳も優秀で容姿にも優れており、バトルノートの中では戦闘力に定評があるわたくしが使徒になれば敵はいませんわ！　だからレオンハルト様――」
こちらに向かって一通り自分のアピールをした彼女は、最後にこう締めくくった。
「わたくしをあなたの使徒にしてくださいませ!!」
「……そうか」
俺はその言葉を一通り聞き終えると、言いたい事、というかツッコミを飲み込んでから声を発する。
やや鋭い視線を彼女に向けながら、俺はあえて厳しい言葉を告げた。
「ま、熱意は伝わったけどな。――魔人の、俺の使徒になるってどういう事かちゃんと理解してるんだろうな？」
俺はそれをきちんと口に出して説明する。分かってなければ困るしな。
「基本的に使徒は魔人に絶対服従だ。俺がお前にどんな事をしよう

が、奴隷のように扱おうがそれには逆らえねぇ。俺が死ぬまで――いや、死んで魔血魂になったとしても俺のために働く」
血の契約を交わした使徒に対して魔人は、魔王と同じ様に命令権を持つ。命令しなければ特に不利益はないものの、絶対服従を命令されればその全てに従わざるを得ない。
そしてその呪縛は主である魔人が魔血魂になっても続く。魔人は死んで魔血魂になっても新たな依代に宿らせる事で復活することが出来る。その依代を使徒が主の為に探さなければならない。
それは一種の本能でもある。自分の中にある主の血がそうさせる習性のようなもの。仮に魔血魂を上書きして新たな魔人が誕生しても使徒はその魔人に仕えなければならない。
それに魔人と使徒は、長い時を一緒に過ごすことになる一種の運命共同体。生半可な者を選ぶ訳にはいかない
ゆえに、魔人は使徒に自分との相性。そして――忠義を求める。
「お前は俺に絶対の忠誠を誓えるのか？」
「誓えますわ！」
しかしこちらの忠告を聞いた後でも彼女は即答する。
「……」
暫しの間、視線を送り続ける。それは脅し、最後通牒だ。――少しでも迷いがあるなら、覚悟がないならここで引き返せ。視線はそう物語っているようだった。
しかし視線の先にある彼女の表情には迷いが見えない。ともすれば何も考えていないようにも見えるし、とっくに覚悟は決まっているようにも見える。さて、これは――。
ややあって、俺は自分からその瞳を閉じて息を吐いた。室内の空気が少し弛緩する。
「……なら、テストをさせてもらう」
「受けて立ちますわ！　その内容は教えて下さいまし！」
ぶれずにそう不敵に答えてくる。どっちだ？　本物なのか、只何も考えていないのか。
俺はテストの内容を簡潔に説明してやる。

「簡単な事だ。今日一日限定の下級使徒にしてやるから、俺と行動を共にして俺の役に立ってみな」
下級使徒とは魔人と血の契約を交わしていない、単純に忠誠を誓っただけの存在をそう呼ぶ。
ちなみに下級使徒ですら魔軍での地位は魔物将軍より上だ。使徒は魔人の側近だからな。
「レオンハルト様の役に立てばいいのですね！　わかりましたわ！」
「……俺は詳しく指示しねぇからな。簡単な行き先や行動しか伝えない。後は自分で考えて行動しろ」
「勿論ですわ！　ふふん、これでも考えるのは得意ですの。そして行動派でもありますわ」
自信満々に胸を張る彼女。よっぽどの自信家って感じだが。
俺はその発言に触れずに立ち上がる。そして彼女に一言だけ告げた。
「それじゃ行くぞ」
「かしこまりましたわ！」
俺が部屋から出ようとしているのを見て、扉にささっと近づくと先に開けてくれる。
「どうぞ！」
「……ああ」
……とりあえず元気はいいな。
俺は彼女が開けた扉からありがたく外に出ると、今日の行動について思考を巡らせた。

部屋を出ると、そういえばまだ起きて何も食べてない事を思い出す。部屋で食べる事も出来るが、今日はあいつにも会わせてみるかと思い、彼女に食堂に行くことを伝えてみたのだが、
「食堂ですわね！　なら、わたくしが先導致しますわ！」
「……ああ、頼む」
場所は当然知っているが、そういう意味じゃないだろう。従者とい

うのは主と一緒に歩く時、前で先導するか後ろからついていくかのどちらかで歩く。
何となく前を選んだのは性格なんだろうなと内心、勝手に当たりをつける。
「ふん、ふふん、ふーん」
前を歩く彼女はとても上機嫌な様子であり、鼻歌を歌っていることからそれがよくわかる。それにとても自慢げな表情をしているであろう。後ろからでも容易に想像がつくほどその足取りは軽い。もう少しテンションが上がればスキップになってしまいそうな程だ。
そんな彼女の後ろ姿を眺めながら歩くこと少し。食堂に辿り着いた。
そして中には案の定と言うべきか、そいつがいた。
「……ん、このオホホウフフのてんぷら美味いな。サクサクした食感とほのかな甘味が絶品だ」
魔人ガルティア。
２００年程の付き合いとなる友人が席に腰掛けていた。
テーブルの上には所狭しと置かれた料理の数々。魔王城にいる時は変わることのない光景だ。
さすがに朝食には少し遅い時間であるためか、他に人はいないようだ。まぁ、都合はいいか。
「おっと、ようやく来た――ん？」
ガルティアが食堂に入ってきた俺達に気づいて視線を向ける。すると当然、俺の前を歩く彼女にも気づいた。
俺は最初に声を掛けさせるのもなんなので、先に挨拶しておくかと思い先に口を開く。
「ようガルティア」
「おお、今日は遅かったな。そっちの女は？」
「こいつは――」
「お初にお目にかかりますわ！　ガルティア様！」
俺が紹介してやろうと手を差し向ける前に、彼女は目の前に一歩進み出る。

「わたくし、レオンハルト様の使徒――に、なる予定のバトルノートですわ！　以後お見知りおきを！」
「……ん、おお。よろしくな」
魔人相手にも実に堂々とした自己紹介だったが、ガルティアは特に驚いた様子もなく普通に返した。まぁ、ガルティアだしな。
「レオンハルトの使徒、か」
しかしそのガルティアも少なからず気になったのか、軽い口調で訪ねてくる。
「どういう風の吹き回しなんだ？　以前は作る気が無いみたいなこと言ってただろ」
「いや、ちょっとばかし思うところがあってな。まだ確定じゃないが」
「直ぐに確定させてみせますわ！　……それはそうとレオンハルト様、朝食は何になさいますの？」
威勢良く宣言しつつ、彼女は何を食べるか聞いてきた。
だが、ここでも俺は突き放してみる。
「お前に任せる」
「かしこまりましたわ。少々お待ちを！」
そういって小走りで厨房へとメニューを伝えにいく彼女。距離が離れていく。
それを見計らって俺はガルティアに話しかけた。
「……で、ガルティアはどう思う？」
「どうって……あの使徒候補の事か？」
「ああ、お前の主観、第一印象でいい。ちょっと聞かせてくれ」
「あー……そうだな」
ガルティアは食事を取る手を休めず、首をひねって思案顔になる。そして程なくして結論を出した。
「まあ、いいんじゃねえか？」
「……随分あっさりと認めるな」
俺としては少しでも何か不安点でも出してくれれば色々と捗るのだが。
そんな俺の心の内を汲み取ったのか、ガルティアが続ける。

「俺がごちゃごちゃ言ってもしょうがないしな。それにお前がこうやって試すくらい認めたんなら大丈夫だろ」
「……だが」
「昔から言ってるが、お前って考えすぎるところあるからなあ。少しは好きにしてみろよ。お前の使徒なんだから誰にも注文付けられる筋合いはねえだろ？」
「……」
ガルティアの言葉に今度は俺が思案顔になる。やはりこいつの観察眼は侮れないし、核心を突いてくる。それは痛いほどに。
だが、それを聞いてすんなりと決めれるほどでもない。俺はしばし思考を巡らせる。
そして十分後。
彼女がトレイを運んで戻ってきた。
「お待たせしましたわ、レオンハルト様！　さぁ、どうぞ！」
「料理と一緒に戻ってくるって事は――」
「ええ、手伝いましたわ。とはいってもコックに指示しただけですが」
どうやらバトルノートらしい手伝いをしたらしいがそれは高確率で邪魔になるような気がする。とはいえ、自分で考えて行動しろ、と言った手前注意する訳にもいかない。
とりあえず俺は何を持ってきたかを――
「――！」
見て、驚愕する。
何故ならそこには――全て、俺の好物で占められていたからだ。
俺は彼女に顔を向ける。そのまま自慢気に胸を張っていた彼女に質問した。
「……お前、知ってたのか？」
「当然ですわ！　レオンハルト様の好物は主に、こかとりす、焼き肉そうめん、うなぎ、青ネギ、後は辛い味付けが好きで、ご飯かパンかならご飯派、そして朝食にはまふまふを欠かさない。全てリサーチ済みですのよ！」
確かに合ってる。朝食としては若干重いような気もしなくもない

が、これくらいなら問題ない。
俺は試しに一口、まふまふを摘んでみる。
「……っ！　味付けが……いつもと違う？」
コックがいつも作るまふまふの味と今日のまふまふの味が若干だが変わっている。
いや、だがこれは、
「まふまふに関してはもう少し素材の味が楽しめるよう塩分を調整させていただきましたわ。おそらくレオンハルト様はこちらの方がお好きだと思うのですが……どうでしょう？」
「いや、確かに悪くない……」
「おお、そっちも美味そうだな。ちょっと貰っていいか？」
「お前は自分の食ってろ」
「えー……」
残念そうな声を出すガルティアを尻目に俺は朝食を取る。横目で彼女を覗き見ると、物凄いドヤ顔で胸を張っていた。
料理の味も大体が俺の好みに合致している。おそらくコックに指示を出したというのはこれの事だろう。
……こいつ、ひょっとして有能なのか……？
俺はそんな疑いをかけながら朝食を美味しく完食した。

朝食を終え、部屋に戻ってきた俺はバトルノートに次に取る行動を指示した。
「……それじゃ次は書類仕事でも手伝ってもらうか」
「お任せあれ！　レオンハルト様の為なら何枚でもこなしてみせますわ！」
やはりと言うべきか自信満々に了承する彼女。だが確かにバトルノート……かはわからないが、バトルノートだと言うのならこういった仕事は本分であり適職だろう。それは例えコマンダーであったとしても変わらない。
精々、本領を発揮してもらうか。

俺は机に重ねていた何枚かの書類を彼女に手渡す。すると少し気勢を落として、
「……随分と少ないですわ」
「昨日の内に殆ど終わらせちまったからな。今はこれだけだ」
「……遠征帰りでお疲れだというのにこの迅速な仕事振り……さすがはレオンハルト様ですわ！　私も使徒として見習わなくてはなりませんわね！」
「まだ使徒じゃねぇけどな」
「今直ぐ取り掛かりますわ！」
どうやら俺の言葉は聞こえてないらしい。それとも聞こえていてアピールしようとしているのか……どっちでもいいか。
ともあれ、書類をテーブルに置くとソファーに腰を掛けさっそく目を通し始めた。そんな姿を見て、俺は俺で自分の机に腰掛ける。
……でも確かに、使徒にこういった仕事を任せることが出来るのは助かるな。
昔からそれこそカミーラのとこの七星の仕事振りを羨ましく思っていたものだ。
それに俺は魔軍参謀という肩書の所為で仕事も多い。これでもし使徒と一緒に仕事が出来るなら自分の時間もそれなりに出来るだろう。
「レオンハルト様」
「あ？　どうした？」
気がつけば一枚の書類を持ってきている彼女の姿。
「ここなんですが……」
「？　ん、これがどうかしたか？」
分からないところでもあるのかと書類を見てみる。しかし予想に反してそれは特別難しいものじゃなかった。
とある戦地から物資を送ってほしいという旨の書類。要は補給するから了承をくれって書類だ。
こんなのサインするだけ――ああ、そうか。さすがに俺のサインが必要な書類をまだ正式な使徒になってないこいつに書かせるのもよ

くねぇな。なんだ気が利くじゃないか。
内容も問題ないようだし、サインしてやるかと思ったところで、それは止められた。
「待ってくださいまし、レオンハルト様」
「あん？」
「こちらの書類にサインするのは待ってほしいのですわ」
と、そんな事を彼女から言われる。俺は思わず眉をひそめる。
「……理由を言ってみろ」
まさか、何の理由も無しに言ってる訳じゃないだろう。故にそう問う。
彼女は相変わらずはきはきとしたお嬢様口調で説明をはじめた。
「はい。こちらの戦地ですが、どうやら珍しいことに魔軍の劣勢が続いているみたいですわね」
「……そうだな」
それは彼女の言う通りだ。劣勢のまま戦いが長引いているからこそ支給した物資が無くなったのだろう。
正直、しばらくしたらこの戦地から魔軍は撤退させようかと考えていた。今は魔軍の戦域は大分広がってしまっている。幾つかの国からは手を引いて少し消費と被害を抑えようと思っていた頃だ。こういうのが出来るのは魔軍ならではだな。人間同士の戦争なら追い打ちを掛けて領土まで攻め込んでくるかもしれないが、魔軍の支配地域にわざわざ自分から喧嘩を売りにくるような馬鹿はいない。戦力差は圧倒的なのだからそんなことをすれば待っているのは破滅だ。
それはともかく、いちいちここを攻める理由はない。お互いの被害は出来る限りは少なくしたいからな。だから負けているのならばそれを口実に撤退でもさせようかと思った。個人的には魔軍を追い返す程の何かがあるのだろうから興味を惹かれるが……。
しかし彼女は何故補給を止めさせるのか。まさか今の時点で撤退でも進言してくれればいいがそれはないだろう。
そんな俺の考えはやはり当たっていた。

「なので援軍を送りましょう」
「……ああ」
そっちのパターンか。まあ、勝つためならその意見はご尤もだな。
「物資と一緒に援軍をここから送れってことか」
「いえ、違いますわ」
なんだ、じゃあ別の所からか？
俺の思考と同じ言葉を彼女は口にする。
「この隣の国を攻めてる部隊を三分の一程度こちらに送りましょう。そちらの方は余裕があるみたいですので」
「……まあ、悪くない手だな」
「それにこの地を落とせば結構な物資が手に入る筈ですわ」
「……ん？」
俺はその言葉を聞いて、その場所をよく思い返してみる。確かここは、
「魔軍の被害をまだ一度も受けてない国だな、そういえば」
「その通りですわ！　その恵まれた立地と距離から一度も侵略された事もなく、戦争も近年までは一度も無かった大穀倉地帯！　ここをいつもの様にいたずらに被害を与えるのではなく完全に支配下に置いてしまえば魔軍はこれまで以上に潤ってパワーアップですわ！」
「それもそうかもな」
確かに物資は多いほうが良いに決まってる。安定した供給先が手に入るならそれもありな選択肢だ。
「そして物資が更に潤沢になり、手が空いた部隊で次は隣の国を二方面――いえ、三方面から攻めてしまいましょう！」
「それもまぁ……」
確かにそうすればあっさりと落とせるかもな。なんだか雲行きが怪しくなってきたが。
「そして更に！　隣の大国に攻め入るのですわ！　力を蓄えられると厄介ですしさっさと先制攻撃するに限りますわ！」
「……」
あれ？　だんだんと話のスケールがでかくなってきたな。出来れ

ばその国を攻めるのは個人的にやめてほしいんだがな。
「戦いは最初の攻撃で徹底的に叩くに限りますわ！　攻撃は最大の防御とも言いますし！」
「……攻撃するのが好きなのか？」
「大好きですわ！　攻勢、突撃、奇襲、水際作戦！　防御なんて性に合わないので――あっ」
勢いのまま目をキラキラさせて語ろうとしていたが、失言だと感じたのか短く声が漏れる。
「えっと、防御もいいかと思いますが、その……攻撃の方が、その……」
「……いや、いいけどよ。俺も攻める方が好きだしな」
「！」
俺がそう言うと顔をパァァァっと輝かせた。わかりやすい反応だ。
「そ、そうですわよね！　……あ、でも敵を嵌める為に敢えて防御するのは好きですわ！　相手が罠に嵌った瞬間が堪りませんの！　絡め手って奴ですわね！」
「……そうだな」
確かにその気持ちはわかるんだがな、俺は内心でちょっと別の疑いが浮かび上がる。
……こいつ、根は良い子かもしれんが危ないやつなのでは？
攻撃や絡め手について熱く語り続ける彼女を見て、俺はそう感じた。
ちなみに、書類仕事はあまり捗らなかった。

レオンハルトの使徒

使徒候補であるバトルノートっぽい何かが随分と攻撃的な行動を好むことがわかってしばらく。
昼食を食べ終え、とある場所へ向かおうと外に出た俺達はある奴と遭遇した。
「……」
「おや、レオンハルト様」
カミーラと七星。
俺と同じ魔人四天王であるドラゴン魔人とその主従。
ある意味でこの状況を作り出した元凶でもある。言うまでもなく昨日のカミーラの発言の事だ。
カミーラはその切れ長の瞳で一瞬、俺の前を歩く彼女を見てから俺に視線を移して口を開いた。
「……昨日の今日で、早速か……随分と、手の早いことだな……？」
「……うるせぇな。別にいいだろ」
確かに自分から見ても急なのでちょっとバツが悪い。彼女の意見にすぐ流されてしまったからだろうか。
「……レオンハルト様、挨拶しても？」
と、少しだけ落ち着いた声色で俺に一度、確認を取ってきた。
さすがにカミーラ相手は緊張するのだろう。ガルティアの時は自分からいってたからな。
「ま、いいだろ」
否定してやることもない。カミーラも一応は待ってくれているのだから聞く気はあるのだろうし、許可を出してやる。
「……では、お初にお目にかかりますカミーラ様！」
緊張しているのかと思ったが、俺やガルティアに対してと同じトーンで声を張り上げた。随分と肝が据わってるな。
「わたくし、レオンハルト様の使徒――を内定してる女の子モンスター、バトルノートと申しますわ！　以後お見知りおきを！」
「……」

だがそこはカミーラ。彼女をじっと見つめるのみで返事もなにもない。カミーラはお世辞にも女性に優しいとはいえないしな。こんなもんだろう。
さて、挨拶を済ませたしさっさと次の目的地に――
「そして！　七星様！」
と思ったのだが彼女はビシッと指を指して言葉を続けた。その先にはカミーラの使徒である長髪糸目の男――七星。
「……私に何かご用ですか？」
「大有りですわ！」
冷静に問い返す七星に対し、彼女は威勢良く口を開く。
「わたくしは魔物界一の完璧使徒……を目指しますので、それを達成するに当たって最大のライバルがあなたなのですのよ！」
「……別に完璧という事はありませんが」
「今はまだ正式な使徒ではないので勝負も何もありませんが、使徒になった暁にはどちらが主に尽くせるか決着を付けて差し上げますわ！　首を洗って待ってなさい！」
「……え、ええ」
……七星が凄い困った顔をしてる。これはかなり珍しい。時折こちらをちらちら見てくるのはどう対応していいのか助けを求めてるのだろうか。このまま放置してみたらどうなるか少し気になる。
しかしそれを止めた者がいた。いや、止めざるを得なかったというべきか。
「……くっ……くくっ……」
静まり返った廊下に笑い声が響く。カミーラだ。
「か、カミーラ様……？」
「おいおい……」
「？」
七星と一緒に困惑の表情を浮かべる。そしてカミーラが笑ってるのを見たバトルノートはきょとんとしている。カミーラお前、最近笑いの沸点低くないか？　前からツボはわかりにくかったが。
カミーラは含み笑いを続けながら、七星に視線を向ける。

「くくっ……七星……目を付けられてしまったな……？」
「は、はい。そうですねカミーラ様」
「負けないよう、頑張らねばならんな……？　くくっ……」
「が、頑張ります」
　主から声を掛けられた七星だが、いつもより狼狽えている様子。それに比例してカミーラは可笑しそうに笑っている。
「……レオンハルト」
「ああ？」
　今度はこちらに声を掛けてきた。飛び火しないだろうな。今更怒ることはないと思うが。
「……愉快な使徒を、見つけたようだな……くくっ……」
「……お、おう」
「……私は、部屋に戻る……」
「……はい。カミーラ様」
　そう言ってカミーラは含み笑いを続けながらこの場から立ち去る。七星はそれに追随していったが、未だに時折笑うカミーラに内心、困惑しているのだろう。少し挙動がおかしかった。
　なんかカミーラの印象、昔と変わったな――と思ったが最初に会話した時もあんな風に笑ってたな。案外変わらないのかもしれない。
　残されたバトルノートはそれを見て、何を思ったか不思議そうに首を傾げた。
「カミーラ様って案外笑い上戸なのですね。わたくし、恥ずかしながらもっと怖いお方だと思っていましたわ」
「間違ってはねぇけどな……」
　多分だが、あの笑いは面白い動きをする下等生物を見つけたような反応な気がする。あいつ、馬鹿で突拍子もない事をする人間とか好きだからな……にしても笑いの沸点が低いと思う。
　俺達は気を取り直して当初の予定通り目的地へと足を進めた。

　次に俺達がやってきたのは魔王城から少し離れた丘。

「……この辺りでいいか」
俺は周囲を見渡し、魔物兵の気配が無い事を確認するとそこで立ち止まった。
後ろから付いてきていたバトルノートは、きょろきょろと辺りを見渡す。ここで何をするんだろうという表情を浮かべている。
そしてその疑問を素直に口に出した。
「レオンハルト様？　こんな人気のない場所で一体何を――はっ！」
何かに思い当たったように息を呑む彼女。そんな彼女に俺は感心したようにふっと鼻で笑う。
「気づいたか……なら覚悟を決めてもらうぞ」
「あっ……いえ、そんな……」
彼女は何故か、俺の言葉に頬に手を当てもじもじと身体をくねらせる。俺はその反応を不可解に思い、眉を寄せる。
「……？　今更怖じ気付いたのか？　こうなる覚悟はしていただろう」
「そ、それはそうなのですが……いきなり外というのは……その、レベルが高いのですわ」
……こいつは何を言ってるんだ？　レベルに中も外も変わらんだろうが。レベル差があり過ぎる事を心配するのはしょうがないけどな。
「室内がよかったのか？　出来なくもないが……被害が広がるだろ？
周りに迷惑掛けたくねぇしな」
「ひ、被害!?　そ、それも周りに迷惑がかかるほどとは……さすがはレオンハルト様……」
ごくり、と唾を飲み込む彼女。魔人の強さをあまりわかっていないのだろうか。本気で戦えば壁とか壊れて洒落にならない被害が出るしな。
「……そもそも普通は外だろう」
「ええっ!?　外が普通ですの!?」
「何をそんなに驚いてんだ……」
「あ、いえ……は、恥ずかしながら、あの、その、わたくし……け、経

験がなくて……」
「はぁ？」
恥ずかしそうにそう告白する彼女。
え、なんだこいつ。女の子モンスターとはいえ魔物なのに戦ったことないとか嘘だろ？　というか魔軍に所属してるのにな……指揮しかしたことないんだろうか。
しかし、戦うのが初めてなら確かに躊躇するだろう。俺も初めて魔物と戦った時は怖かったような憶えがある。
「あ、あの……お聞きしてもよろしいですか……？」
「？　何だ、言ってみろ」
「レオンハルト様はその……経験はどれくらいお有りになりますの……？」
「……あー……そうだな……」
中々に難しい質問だな。だがまぁ……。
俺はその質問に少し考えて、答えてやる。
「……数えたことないからわかんねぇな」
「数えきれないほどっ!?」
彼女がその言葉に戦慄したように飛び上がる。だが、すぐに興味津々といった様子で言葉を続けた。
「あ、あの、ちなみに今までどんな方と……？」
「そうだな……」
俺はその問いを受け、今までの戦いの記憶を引っ張り出す。鮮明に思い出せるのは……
「最近だとカミーラだな。あいつとやり合うのは楽しかった」
「か、カミーラ様、ですか……そのような関係でしたのね……意外ですわ」
「後は、ガルティアとか……」
「ガガガ、ガルティア様!?」
「……そこまで驚くか？」
これまでで一番大きい声量で叫ぶ彼女。そんなに意外だったんだろうか。まぁ、仲はいいから意外に見えるんだろう。

「他には……七星とメガラスとは最初に出会った時に襲われてな」
「お、襲われっ!?」
「あの時は大変だったな……今考えると笑い話でしかないが」
「……男と謎の生物に襲われ……心中お察し致しますわ」
「？　まぁな」
　何故か憐れむような視線を向けられる。そこまで同情してくれなくてもいいんだがな。言った通り気にしてない。
「……じゃあ、そろそろ始めるか」
「……は、はい。わたくしも覚悟を決めますわ……」
　彼女はそう言って深呼吸をして息を整えると、顔を赤らめながら俺の顔を見上げた。
「そ、その、最初は、キスからお願いいたしますわ」
「ああ、キスからだな。よし――――ん？」
　あれ、何かこの状況にそぐわない単語が聞こえたような。
　聞き間違いじゃなければこいつキスって言ったか？
「……お前、今なんて言った？」
「えっ……そ、そんなこと、もう一度わたくしの口から、言わせるおつもりですの？　レオンハルト様のいけず……」
　頬に手を当てて顔を振るバトルノート。
　……こいつ、何か勘違いしてないか？
　俺は確認の為に一応もう一度はっきりと口にする。
「……おまえ、俺と何をするつもりだ？」
「それは、その――……え、エッチなこと……あっ、そういえば服は脱いだほうがよろしいですか？　それともレオンハルト様手ずから……」
「……実力を試す為に戦おうと思ったんだが……」
「わ、わたくしと戦う――――えっ、戦う？」
「……」
　その言葉に呆気にとられたように聞き返してくる彼女を見て、俺は今までの会話の齟齬を悟った。

「お、お恥ずかしいところをお見せしましたわ……」
「もういい、蒸し返すな……」
俺達はお互いに誤解を解き終えると、どちらともなく息を吐いた。
それにしても周囲に誰もいない場所を選んでおいてよかったと俺は自分の行動にほっとする。こんな会話を誰かに聞かれようもんなら俺の評判が地に落ちる。
カミーラはまだしもガルティアやメガラスと――ぐっ、想像すると気持ち悪くなってきた。
精神的に傷を負い、疲労が溜まる。もう今日はやめて今度にしようかとも思ったが、せっかくここまで来たのだ。
それに面倒はさっさと終わらせるに限る。
「そんじゃ改めて試験の説明するけどな」
「はい！　お願いいたしますわ！」
彼女の方も気持ちを切り替えて元気よく返事をしてくる。この切り替えの速さは見習いたいところだな。
「俺にどんな方法でもいいから攻撃を当ててみろ――以上だ」
「攻撃を当てる……傷をつける必要はないということですわね」
鋭いな。先程から思ってはいたがやはり頭の回転は速いようだ。
「ああ、それでいい。そんじゃ早速始めだ」
俺は手で音を鳴らして開始の合図とすると、早速突っ込んできた。
「先手必勝ですわ！」
懐から指揮棒を取り出して俺にむかって振り下ろしてくるバトルノート。
――そんじゃちょっと遊んでやるか。

「でや――っ！」
「……」
「あうっ！　くっ、まだまだ……！」
攻撃を絶えず繰り出してくるバトルノートを見切っては躱し、時には転がし、ひたすらに捌き続ける。もう一時間は経っただろうか。時

間制限を付けとけばよかったかと今更思い直す。
だがいくら攻撃してこようと俺には当たらないだろう。ただの女の子モンスターであり戦闘はそこまで得意じゃないバトルノートと魔人である俺とじゃ実力は天と地ほどの差がある。
通常のバトルノートより実力はあると息巻いていたが、俺にはいまいち違いが分からない。普通のバトルノートの戦闘を見たことがないっていうのも理由の一つだが、実力が離れすぎるのが大きな理由だな。
俺はこのままでは無理かもな、と思いながら声を掛ける。
「……まだ諦めないか？」
「嫌ですわ！　まだ続けます！」
「……そうか」
「くっ！」
そう言って攻撃を仕掛けてきた彼女をもう一度こかしてやる。でもまぁ、時間制限を付けなかったのは俺が悪いし、気が済むまで付き合ってやるか。

「はぁ……はぁ……っ！」
三時間後。
未だに試しは続いていた。
既に息も絶え絶えな様子の彼女に、俺は何度目かわからない降参を促す。
「そろそろ終わりにしないか？」
「い、嫌ですわ……！」
「……はぁ」
未だに強い視線でそれを拒否してくる。どうやら諦める気はさらさらないらしい。これじゃ予定してたテストも出来そうにないな。これを最後に回せば良かったか。しかし、夜の間に出かけるのは避けたかったしな。

……もうすぐ日没か。
俺は軽い気持ちで空を見上げて、少し後悔していた。

五時間後。
夕日が俺達のいる丘を照らして長い影を作る。
俺がバトルノートに課した試験は――未だに続いていた。
「……はぁ……うぐ……」
「……」
何度も俺に地面にこかされ、いなされた結果、服はボロボロに汚れ、身体には汗が張り付いている。呼吸を整えて何とか立ち上がるもその攻撃に最初の方の勢いは既に無く、もはや俺でなくても躱すのは容易なほど。
直接攻撃を加えた訳ではないので外傷はないだろうが、それでも疲労で満身創痍の筈。
しかし、その目は未だ強い意思を持ち続けていた。
俺はそれを見て、埒が明かないなと声をかける。
「……随分と持ったな。それだけ動けるなら確かに悪くないかもな」
「……お褒めに、預かり……光栄ですわ」
まだ口が利けるのも大したものだ。根性は人一倍強いのかもしれない。
ゆえに、俺はある一つの提案をしてやる。
「もうじき日が落ちて視界も悪くなる。お前のその体力に免じて降参してもそれだけで落とすことはしねぇ――だから、諦めろ」
それに元々、土台無理な条件ではある。俺はもう何十年かはこういった決闘で傷を負ったことがない。最後に俺に傷をつけたのはカミーラとガルティアなどの魔人のみ。それ以外からの傷は一切ないのだ。
だから、逃げ道を作ってやる。こいつの根性は大したもんだ。もう半分合格したようなものだし、ここで潰れてしまっても困る。
――しかし彼女は、

「お断り、ですわ……！」
またしてもそれを、断固として断った。その瞳には強い意思が根強く残っている。
その時、俺は初めてこいつに本当の意味で興味を持つ。
こいつの中に一定の何かがあるように見えたからだ。
「……どうしてだ？」
俺はその疑問を淡々と口にする。
「別に諦めても使徒になれない訳じゃねぇ。なのに何故そこまで意地になるんだ？」
「それだと……認められませんわ……」
彼女はその質問に、言葉を途切れさせながらもしっかりと俺に向けて答えをぶつける。
「諦めたら……レオンハルト、様に……認められません、から」
「……それが使徒になるのと何の関係がある？」
「大有りです……！」
そうやって息も絶え絶えになりながら彼女はそれを口にした。
「……レオンハルト様に、認められたからこそ……認められたいからこそ……わたくしは、あなたの使徒になろうと思ったんですわ」

――数年前。
とある陣地に怒声が響き渡った。
「なんてことをしてくれる貴様！」
「……ごめんなさい」
大きな身体を震わせて怒りを露わにするのは一体の魔物将軍。彼は目の前で縮こまるようにして謝る一体のコマンダーに、なおも大声で怒鳴りつけた。
「我々の作戦を無視して独断専行しおって！　一歩間違えれば失敗していたのかもしれんのだぞ！　貴様は私の首を飛ばす気か!?」
「ごめんなさい……」
「謝って済むと思ったら大間違いだ！　くそっ、冷や冷やさせおって

……」
魔物将軍はぶつぶつと呟き、怒りを少しだけ収めるとコマンダーをじろりと睨みつける。
「しばらく謹慎を命じる！　精々頭を冷やすんだな！」
「は、はい。申し訳ございませんわ……」
「ふん……次はないぞ」
そうして注意を告げると魔物将軍はその場から離れた。
コマンダーだけがその場に残ると彼女は、他の兵が出撃していく中一人、陣に残って待機する。
――魔軍に属する女の子モンスター、コマンダーである彼女は自分の考える作戦に絶対の自信を持っていた。
それは多かれ少なかれ、自身の戦術眼を誇るバトルノートやコマンダーにはよくある考えではある。
しかし、彼女の場合、その考えの殆どが攻撃に傾倒していた。
ゆえに撤退や消極的な作戦行動を好まず、自分で考えた攻勢に出る策を考えてそれを実行した。
そういった才があることは確かだった。ゆえにそれがなまじ上手くいってしまう。
だが軍隊にとって命令違反は重罪。それをしてしまえば組織は立ち行かなくなる。成功すればいいという問題でもないのだ。
今回も、彼女の部隊は密集陣形のまま敵の攻撃を食い止める役目だった。しかし少しでも敵に打撃を与えようと一度引いてから攻勢に参加した。
戦果はそれなりにあった。だが、それは決して許されることではない。彼女が抜けた穴から敵の一部が侵入し、本陣まで突破されたのだ。彼女は魔物将軍にこっぴどく叱られた。
彼女はテントの陰で座り込みながら、表情をしかめる。
――面白くない、楽しくない、つまらない。
彼女は常に心に鬱憤を抱えていた。
彼女はコマンダーとしてもかなり浮いた存在だった。才能はバトルノートに最も近い。しかし彼女はそれだけの才能を持っていた為

か、生来の性格ゆえか言葉を選ばずに意見を述べる――いってしまえば少し図々しい性格だった。
それは周りのコマンダーや上位種のバトルノート、魔物隊長や魔物将軍相手でも変わらない。少しでもこっちの方がいいと考えればそれを強く推す。
だが、そんな態度が癪に障るのであろう。一定の実力は評価されながらも彼女は冷遇された。それが彼女のプライドをいたく傷つけた。
何故、自分より劣った者に冷遇されなければならないのだ。周りよりよっぽど自分のほうが実力も上、実績もある。なのに何故認められないのか。
その理由はわかっていた。どうすればいいかもわかる。だが、それは自分を曲げることになる。それは許容できない。
だからこの寂しさはなくならない。これは自分を貫き通すなら一生ついて回るものなのだ。
故に、諦めた――そんな時だ。
「――お前、こんなとこで何やってんだ？」
「――っ！」
背後から突然、声を掛けられて振り向き――その相手を見て悲鳴を上げそうになった。それもその筈、相手は魔軍に所属する者なら誰もが知っている者。
魔人レオンハルト。
魔人四天王の一角にして魔軍参謀を務める魔人。今回の攻略部隊の司令官でもある存在だった。
どうやら彼は本陣に残っていたらしい、そして偶然、コマンダーの姿を見かけて何となく声を掛けた。
「一人でこんなとこで隠れて……いや、いいんだけどな」
「いいんですか……？」
部隊から離れている自分を見て注意されるのかと思ったが、何故か許される。そしてそれが意外で素の返答を返してしまった。
それが彼にとっても意外だったのか、一瞬目を丸くして驚かれる。しまった、失礼だっただろうか。

「……ま、いいんじゃねぇか？　少なくとも俺に何か言う権利は――」
「……あるような……」
「……あるけどな。だが目くじらを立てることでもねぇだろ。今日は機嫌が良いんだ」
そういって彼は思い出したように口端を上げた。
「……何か良いことでもあったのですか？」
それが気になって何気なく問いを投げかける。地位が圧倒的に低い自分の質問にも彼は素直に答えた。
「いや、さっきの戦いでどっかの部隊が戦列を離れたらしいんだが……」
「！」
心臓がドキリと跳ねる。おそらく自分が指揮していた部隊だ。
まさかその事を注意されるのか。この魔人はそれをわかっていて話しかけに来たのか。ひょっとして自分は処分されるのか――。
そんな心配は彼の楽しそうな声色で直ぐに覆された。
「そっから入ってきた敵が向こうの指揮官でよ。こっちまでやってきたおかげで結構楽しめた上に、指揮官がいなくなったから戦況が大分優勢になってな」
「え……」
「それでこうやって後は部下に任せてゆっくり出来てるっつう訳だ」
「……」
まさかの話だった。
偶然にも自分がやった事で戦いが有利になっていたとは、それでこの方はこれだけ喜んでいるらしい。偶然とはいえ随分と運が良い。
少しだけ救われたような気持ちになった。というか命令違反や本陣に敵が来るのを喜んだり、やはりこの方は戦うのが好きなのだろうか。噂はよく聞こえてくるものの、魔軍参謀を務めているくらいなのだからもっと厳格な方だと思っていた。
だがしかし、彼は魔人だ。自分の好きなように行動しても咎められることのない立場。それでいて周りから畏怖される。正直羨ましく思う。

「……レオンハルト様は悩みとかありますか？」
ふと、そんな疑問が口に出た。魔人にも自分と同じ様な悩みがあるのだろうか。あるなら聞いてみたい。
彼は特に考える素振りも見せずにそれに即答した。
「そういう事聞いてくるって事は悩みでもあんのか？」
「えっ」
思わぬ反撃を喰らい、言葉に詰まる。よっぽど落ち込んでいる様に見えるのだろうか。
「何かあるなら言ってみな。……言わなくてもいいが」
「……」
そして更に言葉を重ねられる。
自分は彼の言葉に、少しだけ迷い――ややあってそれを口にした。
「その、周りに認められるにはどうしたらいいでしょうか……？」
「なんだ、認められたいのか？」
「……」
当然だ。自分の働きを認められるというのは集団行動をするコマンダーとして生きがいにも等しい。それが自分の本分であるなら尚更。そこを否定されたら存在価値がない。
しかし彼はそんな事を知ってか知らずか、
「そう言うって事は認められないように感じてるんだろうが……ま、少なくとも俺は認めてるぜ」
「……え？」
思わず間の抜けた声を上げてしまう。そして同時に表情には疑問の色が浮かんでいるだろう、それを見たのか彼が続ける。
「お前みたいな優秀な部下に俺は助けられてるからな……さっきの独断専行した部隊を指揮してたのお前だろ？」
「っ!?」
「その反応だとやっぱそうか。ま、深くは聞かねぇけどよ、お前のおかげで助かった。独断専行はちょっと困るが……」
彼はこちらの反応でそれを当ててみせる。やはり報告が行っていたのだろう。魔物将軍が謹慎させてることを告げたのかもしれない。

それを知った上でお礼を言ってくる目の前の魔人。彼はこちらを見て苦笑した。
「お前は優秀みたいだし、同じ失敗は繰り返さないだろ？」
「えっ！　あっ、それは勿論……」
その言葉にしどろもどろになって答える。同じ失敗はないが、似たような失敗はあるとはとてもではないがいえない。
「俺はお前みたいな実力があって向上心がある奴が好きだしな。そういう奴は大いに認めてるぜ」
「……」
「ま、あと助言をくれてやるとするなら優秀な奴ってのは多かれ少なかれ周囲から叩かれる。それは残酷だがよくあることだ。全員から好かれる事は難しい。だから――」
彼は一度、言葉を区切って一言。
「――自分を認めてくれる大切な存在を、一人でもいいから作れ」
「――――」
「そうそう上手くいくかはわかんねぇけどな。自分から行動するだけじゃなくて巡り合わせが悪いと出来ねぇし」
自分が言葉を呑む中、そう言いながら彼は立ち上がる。
「そういう存在が一個でもあると全然変わってくるぜ。なにせ芯が出来る――と、言いたいことはそれだけだ」
言いたいことは全て言ったと、彼は立ち去っていった。
後に残されたのは自分一人。
彼の言葉を一人反復する。
「――自分を認めてくれる大切な存在」
言葉にするとそれはありきたりな綺麗事。
しかしその言葉は、確かな熱を持って自分の中で留まり続けた。

――故に、彼女は諦めない。
諦めたら、認められなければ――彼女はそれを手に入れることが出来ないから。

彼女の願いはたった一つ。
自分が認めた大切な存在に、自分の事を認めさせること。
そのために彼女は今までの自分を一新する勢いで自分を高め続けた。あの時言われた綺麗事を信じて。
故に彼女が立ち上がるのだ。彼に本当の意味で認められるために。
「わたくしは……情けなんかじゃなく……本気でわたくしのことを認めさせてみせますわ……！」
「……」
レオンハルトは意思を持って立ち上がる彼女を見て、言葉にできない何かを感じ取る。
がむしゃらにそれを掴み取ろうとする強い思い。自分などよりよっぽど心の強さを感じる。
「本気で認めさせる……か」
レオンハルトは思う。かつての人間時代。そして今まで。
――自分はここまで何かを得ようと本気になったことがあっただろうか。
自分は与えられた側の存在だ。今でもそう思っている。もし巡り合わせが少しでも悪ければ、自分は今ここにはいないだろう。必死に戦ったことはあるかもしれない。しかしそれは既に持っているものを守るために戦っただけに過ぎない。
レオンハルトはそれ故に、彼女の事が眩しく見えた。
……最後に本気になったのっていつだったっけな。
なまじ強くなって、欲しいものをそれなりに手に入れた自分はひょっとすればこれから先も本気を出すことはないかもしれない。
だが、こいつがいれば――
レオンハルトはそれを思い、彼女に声をかけてみることにした。
「……お前は、俺に忠誠を誓えるか？」
「……誓えますわ」
一度既に行った質問、故に彼女にとってそれは愚問であった。
「もし、俺が死んで魔血魂になったらどうする？」
「レオンハルト様を、復活させる為に最善を尽くしますわ……！」

彼女にとってその問いは全て愚問でしかない。
「もし、俺が魔軍を裏切って人間についたらどうする？」
「レオンハルト様についていきますわ……！」
彼女は既に誰と共に行くかを決めているから。
道は既に決まっている。彼女の瞳にはそう物語っていた。
レオンハルトはその覚悟を確かに受け取った。
「――なら、認めさせてみろ」
「――！」
レオンハルトは魔剣オル＝フェイルを背中から引き抜くと、それを水平に構えた。
「次の攻防でほんの一瞬だけ、本気を出してやる。一応即死させないように気をつけるが――」
そしてレオンハルトは何年か何十年か振りに自身の全力を引き出す。
魔人としての絶対的な存在感とオーラ、剣気が目に見えるほどに周囲に浮かび上がる。構えを取ることすら久しぶりだ。
強者ではない。しかし本気を出すに値する存在であると認める。
「――うっかり死ぬんじゃねぇぞ」
「望むところですわ……！」
既に満身創痍で疲労困憊。相手は魔人の中でも上位の実力者である魔人四天王。勝ち目は限りなくゼロ。しかし勝負を逃げることはしない。
彼女は目の前の相手に認められるため。
レオンハルトはその彼女の覚悟に応えるため。
最後の試しが行われた。
「――！」
レオンハルトに向かって先に突撃してくる。その速度は魔人に比べたら止まって見えるほど遅い。
しかし油断はしない。本気を出すと決めたのだからその一挙手一投足を見逃さないように集中する。
そしてレオンハルトの視覚が彼女の行動を捉えた。

右手に持った指揮棒を振り下ろす――その中心部から何かが飛び出てくる。
――仕込み針か！
目に見えない程の極小の針がレオンハルトに向かって飛んでくる。受けたところでダメージは皆無。しかし攻撃を当てることが勝利条件であるのならそれは問題ない。
レオンハルトはそれを目で見て上半身を撚ることで回避する。
そして指揮棒が振り下ろされるが――レオンハルトは間合いに入った彼女を、
「――――」
「――ぁ――」
容赦なく剣で振り抜いた。
即死しないように傷は浅く、腹に向かって魔剣で斬り裂く。
同時に血飛沫が飛び散る。
――こんなもんか。
レオンハルトが彼女に視線を向ける。
それはどういった感情なのかわからない。落胆なのか称賛なのか。
だがそんなレオンハルトとは対照的に、彼女の瞳は――死んでいなかった。
彼女は袖の中に仕込んだ最後の策を作動させる。
それは彼女のスカートの中から地面に向かって落ちた。レオンハルトはその物体を何とか判別する。それは、
……ぷちハニーか。
それは大量の爆発物質が詰まった危険物。
衝撃を受けるとその瞬間、膨張して爆発する。
「――――！」
その瞬間、二人は強烈な爆発に巻き込まれた。

夕日が照らす丘の上で煙が立ち込める。
少しずつ煙が晴れる中、そこにいたのは、

「――げほっ……あー、煙い」
彼女を抱きかかえているレオンハルトだ。煙をまともに吸った所為か咳を零している。
そんな彼を見て、コマンダーは、
「――わたくしの、勝ち、ですわね」
「……ああ、そうだな」
腕の中でそう勝ち誇った。
レオンハルトの服は確かに煙と爆風で薄汚れており、確かに攻撃が当たっていた。
あの爆発の中、彼女を助ける為にレオンハルトは咄嗟に彼女を抱きかかえて、その場から飛び退いた。
しかし爆風を完全に躱しきることが出来ずに攻撃を喰らってしまっていたのだ。
そんな無茶苦茶な方法にレオンハルトは呆れるしかない。
「というかお前、普段からあんなの持ち歩いてて危なくねぇか？」
「ご心配なく……有事の際だけですわ」
そう言って彼女は不敵に笑う。
「わたくしにとっては今日が最大の有事でしたから……」
「……はっ、そうかよ――それじゃ早速済ませちまうか」
思わず同じ様に笑ってしまうレオンハルト。しかし彼女は腹を掻っ捌かれて大惨事どころじゃないので早速と言わんばかりに言葉を続けた。
「まどろっこしいのはなしだ――覚悟はいいな？」
「ええ、とっくに」
レオンハルトの真剣な表情での問いに彼女が答えた。
そして、レオンハルトは彼女の首に自らの口を近づけた。
――血の契約。
レオンハルトの血が彼女の中に与えられる。
同時に彼女の身体が光り輝き、その身体を再生、構築していく。
その光が収まった瞬間、そこに立っていたのは――
「――これが、新しいわたし……」

服装は黒を基調にしたものから半分ほど蒼を基調とした服に変わっている。
髪はレオンハルトと同じ金髪、そして髪を黒い髪飾りで左右に結んでいる――所謂ツインテール。
身体的成長はほんの少し、顔つきはより快活な印象。
「あー、結構変わったな」
レオンハルトが関心したように自らの使徒になった彼女の容姿を眺める。金髪なのは自分の影響だろうかと考えてしまう。
「それじゃ……後は名前でも決めるか？」
「！　是非！　是非お願いします！　レオンハルト様！　わたしに名前をください！」
「落ち着け。というかお前、若干口調が変わってないか？」
「大丈夫です！　おそらく以前の口調に一時的に戻っているだけですわよ！　早くお願いします！」
「口調が全然安定してねぇな……しかし、名前か」
彼女が興奮したように目を輝かせる姿を見て、レオンハルトは思案する。
約一分ほど、彼女に期待した顔で熱い視線を受けていたレオンハルトはやがて決心したように名前を告げた。
お前の名前は――――

忠誠心

「なるほど、外出されたのだな？」
魔王城正門入り口。
大きな球体を腹に埋め込んだ黄色の魔物、魔物将軍が書類を手に訪れていた。
正門を警備している魔物兵に再度聞き返すも、やはり返ってきた言葉は、
「へい、レオンハルト様はコマンダーを連れてここを通っていきました」
「ふむ……」
上官である魔物将軍へ丁寧に言葉を紡ぐ魔物兵。彼が見た限りでは魔物将軍の探し人であるレオンハルトは五時間以上前に外に出て以来、まだ帰ってきてきていないのだという。
魔物将軍は困ったように息を吐いて唸る。
「出来れば報告だけでもしておきたかったが……」
魔物将軍が持ってきた書類は、急ぎというほど緊急の案件でもないがかといって後回しにしていいほどでもない書類だった。
出来る事ならば今日か明日には済ませておきたい。しかし魔物将軍の間が悪かったのかレオンハルトは外出中であり、しばらく帰ってきていないのだという。
辺りはすっかり夜。だが他の魔人の方々ならともかくレオンハルトは夜に報告にいったところで機嫌を悪くしたり断ったりするほど狭量ではない。故にもう少し待ってから報告しても構わないのだが。
「……明日に回すか」
それにあの方が外出して長い時間帰ってこないという事はそれほど重要な用件なのだろう。今から帰ってきて報告しても暇ではないのかもしれない。明日の朝一でも構わないだろう。
魔物将軍がそうしようと決めて踵を返そうとした時――
「あっ！」

「む、どうした――」
魔物兵が声を上げたのを聞いて何事かと立ち止まる。
すると視線の先、とある男女が魔王城に向かって真っ直ぐ歩いてきていた。
その姿を魔軍に所属する、特に関わりの深い魔物将軍が見間違える筈はない。魔人レオンハルトだ。
しかし、もう一人の方は誰なのだろう。見た目は金髪の女性。雰囲気からして人間ではなく魔物――女の子モンスターなのだろうが、あいった容姿の女の子モンスターがいただろうか？
魔物将軍が首を傾げていると、二人が近づいてきた。向こうもこちらに気づいたらしい。
レオンハルトが魔物将軍に視線を向ける。
十分に近づいてきたタイミングで魔物将軍は声を掛けた。
「お帰りなさいませ、レオンハルト様」
「ああ。こんなところでどうした？」
レオンハルトは魔物将軍の挨拶に短く反応すると、用事でもあるのかと尋ねてくれる。
少し迷ったが報告を後回しにするのも良くないだろう。魔物将軍は書類を差し出した。
「いえ、少々込み入った書類がありまして。レオンハルト様をお探ししていたところです」
「それは悪いな。長いこと出てたし、待たせただろ？」
「いえ、今ちょうど報告に行こうとしたところですのでお気になさらず」
レオンハルトの軽い謝罪にこちらも気遣いで答える。いちいち待ってましたと言うわけがない。
それを知ってか知らずか、レオンハルトは納得したように頷いた。
「ならさっそく部屋で検討させてもらうか――おい」
「はい」
レオンハルトが呼びかけると隣にいた金髪の美少女が短い返事と共に前に進み出る。

そして魔物将軍に向かって堂々と話しかけてきた。
「その書類、わたくしが受け取りますわ」
「……？　失礼ですが、あなたは？」
魔物将軍が思わず眉を寄せる。レオンハルトに渡す書類を受け取る目の間で代わりに受け取る彼女はいったい？
そしてそんな疑問に彼女は堂々と胸を張って答えた。
「よくぞ聞いてくれました！　わたくしはこちらの魔人、レオンハルト様の使徒――」
魔物将軍や魔物兵の前で彼女はビシッとポーズを決めた。
「――魔物界一の完璧使徒、キャロルと申します！　以後お見知りおきを！」
「!!」
「れ、レオンハルト様の使徒……!?」
魔物将軍とそれを聞いていた魔物兵が仰天する。
言葉も出ないほどにその事実に驚かざるを得ない。確かに目の前のキャロルと名乗った彼女は自分達と同じ紛れもない魔の者。しかし使徒。それもレオンハルトの使徒ともなれば魔軍でも自分達の上司に他ならない。
「ふふん……決まりましたわ……」
しかし、何故だろう。少しばかり、いやかなり残念――いや、厄介そうな匂いがする。
驚きのあまりに動けないでいると、レオンハルトが頭を抱えながら溜息をつく。
「……ま、そういうわけだ。これからはよく関わる事になるだろうからよろしくしてやれ」
「は、は……畏まりました」
確かにレオンハルトの言う通り。彼の使徒であるというのなら否応もない。魔物社会において使徒は魔人の側近であり自分達よりも上位の存在なのだ。
ゆえにもう一度キャロルに視線を向ける。
「わたくしは……レオンハルト様の使徒！　レオンハルト様の使徒

キャロル！　なんていい響きでしょう……！　ええ、何度でも言いたくなりますわ……魔人四天王にして魔軍参謀であるレオンハルト様の使徒キャロル……もっとも良い呼び方は何かしら……一番良い言葉を考えないと……」
「……」
「悪いが頼むぞ」
「……ええ」
レオンハルトにそう言われはしたものの、キラキラと天を仰ぎながら使徒であることを口に出し続けるキャロルに魔物将軍は内心に渦巻く不安を隠せなかった。

――その情報はすぐに城内に広まった。
「おい、聞いたか。レオンハルト様が使徒をお作りになったらしいぜ」
「マジか……怖くない方ならいいなぁ……」
「レオンハルト様に使徒が出来た、か……接しやすい方だといいのだが」
「魔人や使徒の方々は癖が強いからな」
「しかしレオンハルト様の使徒なら優秀に違いない」
魔物将軍や魔物隊長、末端の魔物兵にまで情報と噂が拡散され、憶測も飛び交う。新たな魔人や使徒の話題というのは魔軍に属する彼らにとっては最も重要であり、場合によっては死活問題になりかねないのだ。
なにせ何が好みで何が嫌いか、もし凶暴な性格なら機嫌を害しただけで殺されることもある。ゆえにその情報は自身の進退に大きく関わる。
故に皆がその使徒を一目みようと考える。
しかし野次馬のように集まるわけにもいかない。廊下で通りがかるのを待つか、仕事で関わりが出来るのを待つしか無い。
だが、それを偶然目にすることも出来た者もいる。
「お、おいっ、来たぞ……」

「おお、あれがレオンハルト様の使徒か……」
廊下で駄弁っていた何体かの魔物兵や魔物隊長、魔物将軍がそれを目撃して静まり返る。
前方からゆっくりと歩いてくるのは魔人レオンハルト。そしてその半歩後ろを歩くのは、レオンハルトの使徒キャロル。
「――ふふん……」
彼女が廊下の真ん中を堂々と歩いている。それはもう堂々とし過ぎるくらいには。
見ればどことなく自身に満ちた表情――とても自慢気な表情で歩みを進めながら時折、その左右に縛った黄金の髪の片方をふぁさっ……とかき上げる。
その後ろを歩くレオンハルトがどこか――とても面倒くさそうな表情をしているのは気のせいだろうか。
「あー、でもレオンハルト様いいなあ……あんな風に美少女を使徒に出来るなんて……俺も女の子モンスターの彼女欲しい……」
「わかる。戦争で人間めちゃくちゃにするのも楽しいけどそればっかりだとなぁ……」
そんな何処か対照的な様子に見える主従を魔物兵達はどこか羨望に満ちた視線で見詰めていた。

しばらくの間、歩き続けると周囲から気配が少なくなっていく。
なぜならこの辺りのフロアは魔人四天王の部屋が並び、更に少し先に進めば魔王の部屋。魔軍の重鎮が多く居るフロアなのだ。
魔人レオンハルトは自分の部屋に使徒であるキャロルと共に入室すると、彼女に改めて目を向ける。
「あぁ……レオンハルト様の使徒となったわたくしが皆さんの視線を独り占めに……さすがはレオンハルト様、話題性も他の追随を許しませんのね……！」
未だに自分の名前を呟きながらトリップした様子のキャロルを見て胡乱な感情を抱く。

「……お前、頭大丈夫か？」
思わずそう声を掛けるも、
「頭……はっ!?　髪の色もレオンハルト様と同じ輝くような黄金……！　こんなところまで一緒だなんて……さすがはレオンハルト様。髪すらも自分の色に染めてしまうとは……！　わたくしをこれ以上喜ばせてどうするおつもりですか……！」
「俺が決めた訳じゃねぇけどな」
しかしそんな言葉も聞こえていないのか、分けられた自分の髪を抱きしめていやんいやんと身体を振るキャロル。
……すげぇ、鬱陶しいな。
キャロルを見てそんな感想を抱いてしまうレオンハルト。正確には好かれているのは悪い気はしないものの、その表現が大袈裟なので反応に困るので面倒というのが正しい。
まあ今は願いが叶って昂ぶってるだけ、そのうち落ち着くことだろう、とレオンハルトは考えを放棄する。
それに先に説明しておかなければならない。レオンハルトは真剣な声色で彼女を呼ぶ。
「――キャロル」
「はい！　あなたのキャロルですレオンハルト様！　如何なさいましたか！」
「……もうちょっとで客が来るからな。覚悟しとけ」
「了解ですわ！　おもてなしの準備をしなければ……！　紅茶とお茶菓子と……あっ、そういえばご夕食がまだですわね。レオンハルト様！　ご夕食はどう致しましょう!?」
そのテンションはもう基本なのだろうか、もはやつっこむ事を諦めてレオンハルトは返答する。
「落ち着けキャロル。夕飯は……準備、準備……し、しなくていいぞ」
「……？　わかりましたわ」
主のおかしな様子にキャロルが違和感を憶えながらも頷く。
レオンハルトは条件反射で震える自分の手を抑えながら気を取り直して言葉を続ける。

「……それでまぁ、客が来る前に色々と話す事がある」
「何でしょう？」
「簡単なことだ。俺がよく人間の指揮官と決闘をする理由だな」
「？　相手の士気を挫くため……もしくはレオンハルト様が単純にお好きだからではありませんの？」
　キャロルがこともなげにそれを口にする。元コマンダーというだけはあるだろう。レオンハルトはそれに頷きつつも表情を崩さない。
「それも間違ってねぇけどな。特に後半の理由は。それすらも過程でしかない」
「でしたらその理由は何でしょう？」
「……」
　レオンハルトは一度、息を吐いて目を閉じる。それは自分への最後の確認作業だ。
　今までそれを命じた一人以外にはひた隠しにしてきたその理由。それを今から自分の使徒にとはいえ口にするのだ。
　だが、これくらいもいえなくては使徒を作った意味がない。心も休まらないだろう。
　レオンハルトは決心する。あの時の誓いは嘘じゃないとキャロルを信用して、それを口にした。
「それは――人間を滅ぼさないようにするためだ」
　言った。いくら魔王の命令の望みとはいえ魔軍に所属する者にとっては背信行為ともいえるそれを口にした。
　レオンハルトはなおも続ける。
「人間の被害を出来るだけ減らすため、俺は相手の指揮官だけを殺して残りは適当に追い返してる。部下や他のやつに違和感を抱かれないよう適度に侵略しては略奪を許して終わった後は解放。そしてしばらくその地域は襲わずに別の場所に戦場を移す。これを繰り返してる」
　全てを説明してやる。元が人間ですらない女の子モンスターである彼女はどう思うだろうか。
「俺が人間の実力者、指揮官を殺す理由がそれだ。強い奴と戦いた

いってのも嘘じゃねぇがな……」
全てを言い終え、レオンハルトは自分の使徒であるキャロルの顔を見ようと目を見開く。
すると、
「……なんだ、そういうことでしたのね。なら、わたくしもレオンハルト様の目的に沿うように頑張りますわ！」
先程と全く変わらない様子でそう意気込んだ。
レオンハルトはそんな彼女を見て、眉を寄せてしまう。
「……それだけか？」
「えっ？」
「……人間を助けている事について何とも思わないのか？」
「うーん……そうですわね……」
キャロルはその言葉を聞いて、主が求めていることを理解したのか少し思案するような顔になるが、やがて表情を戻して返答を告げた。
「ちょびっとだけ驚いたかもしれません。でも人間とか魔軍とかよりもレオンハルト様の方が大事ですので問題ないですわ」
「……」
「あの時の誓いは嘘じゃありません。レオンハルト様が人間につくというならわたくしもついていきますし、レオンハルト様の望みの為なら何でもしますわ」
そうはっきりと口にする。その言葉はあまりにも真っ直ぐであの時の言葉に嘘がないことが理解出来る。レオンハルトはそんなキャロルの言葉をじっと聞いていた。
「あっ、でも、その……一つだけお願いが」
「……なんだ？」
キャロルは少し言いづらそうに目を逸らして恥ずかしがる。
だが、それだけは言っておきたかったのかレオンハルトに向かって自身のお願いを口にした。
「その……わたくしがレオンハルト様のお役に立てたり、喜ばせることができたら……ほ、褒めて欲しいです！」
「……そんだけか？」

そんなことでいいのかとレオンハルトは呆気にとられる。だが、キャロルにとっては大事な事であるらしく、こくこくと頷いていた。
「そ、それがいいです……レオンハルト様に褒めてもらうことが、わたくしのし、幸せですから……」
「……」
そんな恥ずかしい事をしっかりと口にしたキャロル。それをしっかりと耳にしたレオンハルトはしばらく無言のまま、なにやら呆然としているようだった。
だが、それを理解して呑み込むと、
「……ハッ、なるほどな」
短く笑って、キャロルの目前まで近づく。
「れ、レオンハルト様？」
「――褒めりゃいいんだな？」
そう言ってキャロルの頭に手を伸ばした。
「――っっっ!?」
キャロルの身体がビクンッと跳ねる。
「こんな感じでどうだ？」
レオンハルトがその手でキャロルの頭をわしゃわしゃと撫で回す。その事実に数秒遅れて気づいたキャロルは、
「――あ、あ、う、これ、レオ、ン、ハルト、さまぁ……！」
何やら顔を真っ赤にして声を震わせた。
そんな姿を見てもレオンハルトはまだそれを続ける。
「なんだ、そんなにいいのか？　そんじゃもうちょっとだけな」
「あ、やっ、こ、これ良い……」
更に撫でて、撫で回す。するとどんどんキャロルの目がとろん、と細まりうっとりとし始める。
しかし数秒して、レオンハルトが手を頭から離そうとするとキャロルは惜しくなったのかもう一度自身の頭を突き出した。
「も、もっと……」
「ああ？　……しゃあねぇな」
「っ……んっ……」

レオンハルトが再度頭に触れるとまたしてもピクリと方が動く。今度は覚悟していた為か動きは大きくない。
「ま、今日は特別だ。こうなったら幾らでも褒めて撫で回してやる」
「んんっ、はぁっ、あ、ありが、とう、ございま、す……」
顔を惚気させてうっとりとしながらも何かに耐えているキャロルの様子をレオンハルトは何となく察した。
だが、その上でレオンハルトは使徒の要望に応えて撫で回し続ける。
自分の隠し事を喋っても全く疑わずに忠義を示してきたのを嬉しく感じたのは確かだ。そしてキャロルが今、何を楽しんでいるかも分かる。だが、今日くらいは好きにさせてやろうと敢えてそれに乗った。
「何か要望があるなら聞いてやるがどうする？」
「っ、あっ……ほ、ほめ、て」
「あーっと、褒めて、か？」
「み、耳、もと、で……ほ、褒めて、下さいっ……」
「……はぁ、見上げた忠義だな。全くよ」
レオンハルトはそう言いながらも自分の中の嗜虐心に若干の火が灯るのを感じていた。
だが、要望は何だと聞いたのは自分だ。故にその欲張りに本気で応えてやるためにレオンハルトはキャロルの頭をぐいっと引き込み、耳元に顔を寄せる。
「れっ、レオンハルト様ぁ……」
「――――さすがは俺の使徒だ。よくやったな、キャロル」
「っっっっっ――――――!!」
息を吹きかけるように、耳元で囁くように褒めてやると面白いくらいにキャロルが震えたのがレオンハルトにはわかった。
そして最早立っていることが辛くなったのか重心がふらりと蹌踉ける。
「おっと」
それを咄嗟に支えてやる。

「れ、れおんはると、さまぁ……」
するとキャロルはそのままレオンハルトの胸に顔を埋めるようにして擦りつけた。
レオンハルトはそんな虚ろな彼女の姿を見て、呆れるように目を細める。
「……こいつ、俺のこと好きすぎねぇか……？」
小声でそう言わざるを得ない。我ながら末恐ろしい程の乱れっぷりだ。もはやそういう才能があるのではとレオンハルトが思ってしまうほどには。
だがご褒美はこんなところだろうとレオンハルトが息を吐く。これ以上はもはやそういう事でしかない。別にそれをやってやっても構わないのだが、そういう気分でもない。レオンハルトは今日新たな発見をした。自分に全幅の忠義を示されるのがあれほど嬉しいことだとは思わなかった。２００年以上生きてきて初めての経験だ。故にそれに報いてやろうと思ったのである。
レオンハルトは胸に張り付いたままのキャロルをどうしようかと部屋を見渡しながら思った。きっとスラルもこんな気持ちで――――
「……まさか、な」
レオンハルトはそこで嫌な予感を感じて扉の方向を見る。幾ら何でもそこまで悪いタイミングはないだろう。少しばかりキャロルを介抱して立ち直らせたら――
「――レオンハルト居る？」
「――!?」
その時、ノックの音と共に扉の外から声が聞こえる。それはレオンハルトにとって何度も聞いた声。
魔王スラル。キャロルの歓迎会の準備の為に厨房で料理を作ってる筈の自分の主。
――馬鹿な、早すぎる……！
レオンハルト達が城に帰ってきた段階で魔物兵に伝えるように命令したはずだ。歓迎会、と伝えてほしいと。スラルならこういえば昨

日の今日な事もあって自分が使徒を作ったのだと理解してくれるだろうと思い、そう伝えさせた。こう見えて付き合いも長くツーカーの仲だ。伝達ミスはないはずだが情報に齟齬が――いや、先に返事が先か。

「……どうしたんだ、スラル。少し早くないか？」

「ちょうど昼から料理の練習してたから。開けてくれる？」

「……ちょ、ちょっと待ってくれ」

「？　わかった」

レオンハルトは心の中で叫んだ。

――なんで今日に限って料理の練習なんかしてんだっ!?

それに料理の練習なんかしたところでスラルの料理は必殺料理でしかない。これは２００年間変わらない伝統。それを洗礼として食させるのが歓迎会みたいなものなのだ。一応それを終えたら残りは普通の料理を食べるのだが。

とそこまで考え、昨日の今日だからこそ料理の練習をしてるのではないかとレオンハルトが推察する。昨日、使徒が出来たら歓迎会、という会話をしたから久々に気合を入れて練習を始めたのだろう。なんて間が悪いのだ。

「……とりあえずこっちが先か。おい、キャロル」

「レオンハルト様ぁ……」

レオンハルトが声を掛けるも、聞こえていないのかうっとりとした表情ですりすりと顔を頭を擦りつけてくるキャロル。

「惚けてんじゃねぇ、とりあえず離れろ」

「嫌ですわぁ……このまま」

「そんな場合じゃ――」

「レオンハルトー？　もういい？」

「な……もう少し待ってくれ」

「もう少しと言わず今直ぐベッドに……」

「お前に言ってんじゃねぇよ!!」

「え……レオンハルト？」

「え、あ……おう」

「……大丈夫？　なんか様子が変だけど」
「いや、そんなことは――」
「レオンハルト様……服を――」
「おい、脱がそうとしてんじゃねぇこの色ボケ使徒！」
「えっ、脱ぐ!?」
「だああっ、くそっ！」
最早パニックである。
レオンハルトは、抱きついたまま離れないキャロルを引き剥がそうとするが、中々しぶとい。
というか自分は何故こんなに慌てているのだろうかとレオンハルトは思う。いっそもう見られても構わないのではないかと。そもそも自分が誰かと変な事をしていたところで文句を言われる筋合いはないのだ。
いっそ開き直って見せつけてやろうかと思う。他の奴ならそうしたかもしれない。
だが、その相手がスラルだと出来れば避けたい。故に早く――
「……レオンハルト？」
「ッ!?」
気がつけば。ガチャリという扉の音と共に、スラルが部屋に入ってきていた。
そしてスラルは二人の顔、魔人とその魔人に抱きついている使徒を交互に見る。
すると、
「――レオンハルト？　何やってるの？」
「……こ、これはだな」
スラルが威圧感を露わに自分を見つめる。その表情は無表情だが、そこには咎めるような謎の意味が込められているようにレオンハルトには感じた。
いや、何かしらの言い訳をしようと、レオンハルトは頭を回転させる。
そして、

「ちょっとさっきまで模擬戦をやっててな――」
「――ん、レオンハルト様。誰と――っ!?」
無理めな言い訳をしようとしていたレオンハルトだが、抱きついていたキャロルがようやく会話に気づき、振り返ると直ぐ様離れた。
そして、慌てたように膝を突き臣下の礼を取る。
「ま、魔王様……何のご用でしょうか!」
やはり一般の魔物、馴染みのない者からすれば魔王は畏怖すべき存在なのだろう。カミーラにすら臆さなかったキャロルですら緊張が目に見える。
「……貴方は?」
スラルがレオンハルトに向けていた威圧感をそのままキャロルにぶつける。
「は、はい。レオンハルト様の使徒になったキャロルと申します。以後お見知りおきを、魔王様」
「……ふぅん、そうなんだ」
慇懃に頭を垂れるキャロル。そしてレオンハルトの使徒という言葉。それを聞いてスラルはほんの少し威圧感を抑えると、キャロルに向かって頭上から命令する。
「さっきまでレオンハルトと何をしてたの?」
「……ええと……その」
キャロルがちらっと横目でレオンハルトを見る。そして主が必死に送ってくるアイコンタクトに迷っていたが、それを正直に話した。
「れ、レオンハルト様に褒めてもらっていました」
「……褒める?」
スラルが呆気にとられたような表情になる。そしてキャロルは続けた。
「はい、レオンハルト様に頭を撫でてもらいました」
「……へ、へぇ、そうなんだ」
レオンハルトは内心ガッツポーズをする。確かに言葉にすればそれだけのことだ。それに何の問題もない。
抱きついていたのはちょっとおかしいかもしれないが、自分の使徒

と抱き合うくらいなら親愛というか褒める延長線上と言い張れる。
勝利確定の音楽がレオンハルトの脳内で流れる。
だが、キャロルの説明はそれで終わりではなかった。
「そ、それで……あ、あの、わたくし……レオンハルト様に褒められて……い」
「……い？」
スラルが思わず聞き返す。
レオンハルトも内心でそれをやめろと叫ぶ。
――おい、こいつ何言おうとしてんだ……!?
だが、それは伝わらない。
「い……い、いや、あのそうじゃなくて……か、感じてしまったのです！」
「……――――っ!?」
顔を真っ赤にしながら叫ぶキャロルにスラルが数秒固まった後に言葉の意味を理解する。
そしてキャロルと同じ様に顔がのぼせた様に顔を赤くしたスラルが戸惑いながらキャロルに聞く。
「えっ、か、感じてって……え、その、褒められただけで……？」
「は、はい、魔王様。レオンハルト様の撫で方は、それはもう、その……良くて」
「……そ、そうなんだ」
キャロルの批評にごくりと喉を鳴らすスラル。そしてちらちらとレオンハルトの方を見る。
いたたまれなくなったレオンハルトは妙な空気になったこの空間を少しでも壊すために呟く。
「……見てんじゃねぇよ」
「あっ……くっ、うぅぅ……！」
レオンハルトと目があったスラルは何故か恥ずかしくなり唸り声を上げると、
「……ちょ、ちょっと……落ち着いてくる……直ぐ戻るから」
「……あ、ああ」

と小声で振り絞るように言うと、ゆっくりと部屋の外へと退出した。
そして部屋に残されたのはレオンハルトとキャロルの主従二人。
キャロルは二人きりになった部屋の中で自分の今の気持ちをレオンハルトに教えた。
「……レオンハルト様……恥ずかしいですわ……」
「……安心しろ……俺もだ」
微妙な気持ちに苛まれた三人が完全に落ち着くのには短くない時間を要し、結局歓迎会は後日に回された。
――ちなみにスラルが作った必殺料理は、この後ガルティアが美味しくいただきました。

魔人ケイブリス

――ルドラサウム大陸

この世界に存在する数多の生き物。

その頂点に立つ魔王と魔人。

他の生物はこれらに比べれば圧倒的に脆弱であり、彼らに敵う生物は少なくともこの世には存在しない。

故に彼らを縛るものは何もない。そんな暴虐の化身が魔王と魔人。

だが、どんなものにも例外というのがあると云われるように。

魔人にもその例外的存在がいた。

「……よしっ、誰もいねぇな」

きょろきょろと周囲を見渡し、隠れるようにしながら細心の注意を払いながら行動する丸い生物がいた。

彼はこう見えても魔人である。それも只の魔人ではない。

「かふっ……ふぅ、鍛錬の後の干し肉は最高だなぁ……かふかふ」

魔王城の厨房からくすねた干し肉に齧りつくこの魔人。

彼は今から三千年程前に初代魔王ククルククルによって最初に魔人にされた存在。

第一世代メインプレイヤー、丸い者の一種族であるリスの魔人――ケイブリス。

最古にして最弱の魔人であった。

そのため、ケイブリスは魔人の中では不遇の扱いを受けている。

彼は最弱である為に仲間の魔人からも軽んじられ、虐められている。それこそ昔から、仲間の魔人が増える度にそれこそ何体もの魔人から何度も。

魔人でありながら、大して強くならず他の生物にすら負けるケイブリスは魔人の恥晒しとされていた。それは彼自身もわかっていて、必死に逃げ潜み、強い相手には媚びへつらいながら生きてきた。

しかしケイブリスは強くなる為に努力を続けていた。毎日、自分よりも弱い存在を倒したり、鍛錬を重ねたり。それで本当に強くなれるのかはわからないが、ケイブリス自身は微弱ではあるが確かな成長を

感じていた。
だがそれでも最弱な事には変わりない。故に、今までどおり逃げ隠れしながらへこへこしながら生きる毎日を送っていた。
しかしそれでもケイブリスは最近、少しは生きやすく感じていた。その存在を思い、彼は内心でほくそ笑む。
「最近はあまり虐められないし……ほんとレオンハルト様様だぜ、ぐぁはは」
そう、彼が最近生きやすく感じている理由が魔人レオンハルト。
二百年前に魔王スラルが作った最初の人間の魔人。そして魔人四天王の一角にして魔軍参謀である魔人だ。その強さはケイブリスよりも遥かに高みにいて、魔人の中では限りなく一、二を争う存在である。
ケイブリスは最初にレオンハルトに会った時、いつものように媚びへつらった。あなたの一番のファンであり、子分であると。他の魔人ならそっけない態度を取られて見向きもされない、寧ろ機嫌を損ねる場合もあるが、レオンハルトは他の魔人みたいに自分を虐めない。それどころか他の魔人に接するように対等に扱ってくれてるような気もする。内心はどう思っているかはわからないが。
ゆえに、自分が子分だと言っても否定も肯定しない。だが、ケイブリスはそれで良かった。別に本気で子分になりたい訳ではないからだ。
レオンハルトが積極的に断らなかった所為か、他の魔人が少しだけレオンハルトの顔を窺うようになった。多くの魔人はレオンハルトの事を目の上のたんこぶのように思っている。魔王様のお気に入りであり、実力も自分達より上。戦いになれば決闘で魔人ギリウムを殺した時のように好戦的になり、それでいて魔人四天王にして魔軍参謀という立場により逆らう事も難しい。
ケイブリスはそんなレオンハルトを隠れ蓑にした。魔人同士の集まりがある時はレオンハルトの側に傅き、何かあればレオンハルト様に呼ばれているので、といって逃げたり、こちらを内心では舐め腐っている魔物将軍や魔物隊長にもレオンハルトの名前を出せば面白い

程に顔色が変わる。
　三千年程生きてきた中で、今が一番過ごしやすい。鍛錬もある程度は安全に出来るし、レオンハルトに普段から物をあげているお陰なのか、多少の融通は利かしてくれる。
「まったく、ちょろい奴だぜ」
「誰がちょろいんだ？」
「そりゃあ……」
　ケイブリスは突然話しかけてきた存在に動きが凍ったように止まる。
　金髪灼眼、魔剣を携えた魔人、レオンハルトがそこにいた。
「れ、レオンハルト様っ!?　い、いいいつからそこに……？」
「ああ？　今通りがかったところだが」
「……そ、そうなんですね」
　どうやら聞かれてはいなかったらしい。ケイブリスはほっとして汗を拭う。
　そしていつも通りに媚びるように口調を変化させて尋ねた。
「それで僕に何かご用ですか？　な、何かあれば出来る限りはお手伝いさせて頂きます、はい」
「いや、ちょっと使徒を探してただけだから気にしなくていい。呼び止めて悪かったな」
「……あ、ああ、いえいえ、そういうことでしたら気にしないでください！」
　ケイブリスはレオンハルトの言葉にそういえば、と思い当たった。
　先日、この魔人レオンハルトは使徒を作った。キャロルとかいう女の使徒だ。
　ケイブリスは思う。
　――けっ、使徒なんざ作りやがって……お強い魔人様は良いご身分だな？
　使徒というのは血の契約によって自分の力を分けて作るもの。それはほんの僅かに自分の力を落とすことになる。だが多くの魔人にとって使徒を作ることによって落ちる力はほんの誤差程度の話でし

かない。
勿論、多くの使徒を作れば話は別だ。基本、多数の使徒を作れば作るほど、魔人や使徒の力はその分落ち、支配力も弱まるという。魔人の血が薄まるからだ。
ケイブリスにとってそれはありえない。自分の力を分けるという、自分で自分を弱くする行為などできない。また、そんな余裕もない。
――まぁ、強くなったら使徒を作るのも少しは考えるかもしれねぇけどよぉ……。
少なくとも今の状況では使徒を作ることは考えられない。
ゆえにケイブリスは腹の中でレオンハルトに対する妬みを感じたが、今更この程度で揺らぐ精神は持ち合わせていない。
極めて下手にケイブリスは対応する。
「もし見かけたらお伝えします！　僕はレオンハルト様の子分ですからね！　へへっ……」
「……ま、そうだな。俺はもう行くが、見かけたら教えてくれ」
「はい！　わかりました！」
レオンハルトは特に含むところなく自然にそう言うと、はきはきと了承するケイブリスを尻目にその場から立ち去った。
「……行ったか」
そしてレオンハルトの姿が完全に見えなくなったのを見計らってケイブリスは小声で呟く。その上で内心でレオンハルトに毒づく。
――いちいち探すわけねぇだろうが。ぐふふ……！
当然、おべっかを使ってそう言っただけ。態々、使徒を探すことなどしない。偶然見かけたらその限りではないかもしれないが、点数稼ぎの為に。
だが、十分にレオンハルトへの点数は稼いでいる。普段から物を送ったりしているのは伊達ではないのだ。
「……鍛錬でも続けっか」
ケイブリスは再び自分を高める為の行動に出ようとした――そんな時だ。
「――おい」

「へっ？」
　ケイブリスは再びの声掛けに間の抜けた声を出す。また、レオンハルトか。何かいい忘れたことでもあって戻ってきたのだろうか。そう思ったケイブリスの予想は覆された。
「あっ……ど、どどどうしたんですかお二方？」
「よう、ケイブリス」
「相変わらずみたいですね」
　ケイブリスは咄嗟にへこへこと二人の魔人に向かって頭を下げながら口を利いた。しかし彼らはケイブリスのことを冷めた目で見下すだけ。
　最古の魔人であるケイブリスは当然二人の事は知っている。前魔王アベルの時代に魔人になった二人の魔人。そして普段からケイブリスを虐めている魔人でもある。
　故にこの後行われるのは――いつもの事でしかない。
「こんなところで突っ立てんじゃねえよっ、おらっ」
「――っ、かはっ――」
　一体の魔人が足を振り抜くとケイブリスの身体に衝撃が走る。
　そしてボールのように地面を転がり、やがて勢いを失い停止する。
　それを見てケイブリスを蹴った魔人は可笑しそうに笑った。
「かかっ、相変わらず魔人と思えねぇ。弱すぎるな」
「ですねぇ……」
「う、ぐ……」
　それに同意するように呟くもう一体の魔人はそれを鑑賞するように眺めていた。
　ケイブリスはその痛みに耐えるようにしても蹲る。しかし魔人にとって今の蹴りはほんの軽い、攻撃ともいえない程度の力加減。それですらケイブリスにとっては立派な暴力となる。それが彼らにとって愉快であるのだろう。二体の魔人は楽しそうな感情を覗かせる。
「悪いなケイブリス。俺ら最近鬱憤が溜まっててよぉ。お前の親分のレオンハルトの奴のせいでな」
「まぁ、それも嘘でしょうけどね」

「っ！　……あ、う……！」
そう言いながら軽い調子で二体の魔人はケイブリスを痛めつける。
ケイブリスは痛みに何とか耐えながらもその発言で事情を理解した。
この二体の魔人はレオンハルトに特に反抗的な魔人であった。魔人になってすぐに魔人四天王になり魔軍参謀となった魔王のお気に入りであるレオンハルト。その立場は他の魔人に比べて圧倒的に上位。そして実力も遥かに上。しかもその立場を使ってあれをしろ、これをしろと命令される。
そしてこの魔人達はそれが気に入らない。二体は典型的な魔人であった。自己中心的で暴力的で遊び半分で他の生物を嬲り、殺してしまう。要は自分の好きなように生きたい連中だ。
そのためレオンハルトの存在は目の上のたんこぶでしかない。逆らうことは出来ず、渋々従うしかないとはいえその仲は険悪であり、レオンハルトの地位が高いことやカミーラやガルティアといった魔人とも仲が良い事もあり、反抗的な彼らは肩身の狭い思いをしていた。
そしてそのストレスの捌け口の一つにケイブリスが選ばれたのであろう。珍しいことでもない。
――クソが……八つ当たりじゃねぇか……！
内心毒づくもそれを口にすることは出来ない。言えば自分の命が危うくなるかもしれない。だから只々耐え続ける。今までもそうしてきた。
それにケイブリスを虐める魔人は彼のことなど眼中にないのだ。適当に罵り、時にはこうして痛めつけて満足すれば去っていく。故にこうやって耐えることが最善の選択なのだ。ケイブリスはそれを確信していた。
だが、
「う……っ、かふっ……」
「ケイブリスはほんと良く飛ぶなぁ。蹴りがいがあるぜ」
未だに魔人はケイブリスをなぶり続ける。終わりがまだ訪れない。

――そ、そろそろ、やべぇ、な……止めねぇと。
もしこのまま続けられたら近い内に死んでしまうかも知れない。その祈りが届いたのかそれを鑑賞していた魔人がもう一体の魔人に声を掛ける。
「そろそろ死んでしまうのでは？」
「……ぁ……ふ……」
そうだ、早くやめてくれ。半殺しにしたんだ。これだけやれば気が済んだだろ。だから止めろ。
床に横たわるケイブリスが内心で叫ぶ。
しかし、次に聞こえてきた言葉はケイブリスを狂乱させるには十分だった。
「死んだら死んだで大丈夫だろ？」
「――――!?」
魔人の口からいとも簡単に吐かれるその言葉。それはとても軽い調子であり、ケイブリスを全く眼中に入れてないことがわかる。
「これだけ弱ぇんだから死んでもそこらの人間にやられましたとか、気づいたら死んでましたとでも言やぁいいだろ。死んでも誰も困らねぇし」
「……それもそうですか」
そしてあっさりともう一体の魔人も納得する。二体の魔人は悪意というよりは本当にそう思っている様子だった。ケイブリスが死んでも別に誰も困らない。魔王や他の魔人も咎めることはないだろうと。
――は？　おい……それで終わりか……？
あまりにも呆気ない。只の気まぐれで自身の命を摘み取ろうと――いや、自身の命など生きてようが死んでようがどっちでもいいと。
――俺様……もしかして、死ぬのか？
瞬間、それを理解したケイブリスが心の中で狂乱する。
――いいい、いやだいやだいやだ！　死ぬのだけは絶対に……！
どんな屈辱にも耐えるケイブリスだが、それだけは認められない。故に、ケイブリスは傷を負い、痛みに震える身体と口を必死に動かす。

「……う、ぐ、ご、ごめんなさ――」
謝罪の言葉を口に出し、同時にその場から這いつくばるようにして逃走を試みる。
だが、
「……あ？　何だって？」
「――っあ……！」
その言葉は届かず、再び魔人にボールのように蹴り転がされる。
「何か言いましたか？」
「どうせいつものおべっかだろ。おいケイブリス！」
「……ぁ……」
ケイブリスは最早口を開く体力すらも尽きかけていた。そしてそれを見た魔人は少し面倒そうな表情になる。
「あーあ、やりすぎちまったか？　これ、どうする？」
「放っておけば死にそうですし、治すのも面倒ですね」
「んー、じゃあ一応殺しとくか」
一応殺す。そんな屈辱的な発言をケイブリスは聞いた。
――や、やめろ……！　俺様は三千年も耐えてきたんだぞ！　こんなところで……！
そうして魔人がケイブリスを踏み潰そうと足を上げる。これが降ろされた時、ケイブリスは死ぬだろう。
――ち、ちくしょう……こんなとこでゴミみたいに……！
ケイブリスは自分の死を半ば悟った。
三千年生きた魔人の命を遊び半分で摘み取ろうと、魔人が足に力を入れる。
しかし、蹴りを喰らったのはケイブリスではなかった。
「っ――――がっ!?」
突如、魔人が顔に衝撃を受けて苦悶の声を上げて仰け反ったように吹き飛ぶ。
「一体何が――っ……!?」
「ああっ!?　何処の誰だ――って……」
もう一体の魔人が突如現れた乱入者に視線を向けて――青ざめる。

そして何とか体勢を立て直して、怒りを露わに声を上げて自身を攻撃した相手を確認しようとして――目を見開いた。
そしてケイブリスも自身の命を何とかこの世に繋ぎ止めた人物を見た。
それは見間違える筈もない金髪灼眼の男。
前面を閉めずに着ている黒いコート。背中に背負った蒼の魔剣。
「――まさかこんな現場に遭遇するとはな」
魔人四天王と魔軍参謀を戴く魔人――レオンハルト。
彼らにとって因縁ある魔人がそこにいた。

「……レオンハルト――様、ですか」
「てめぇ！　レオンハルト!!　何のつもりだ!!」
幾分か落ち着いた方の魔人がレオンハルトを見て一歩後退る。
しかし、もう一体の魔人は不機嫌さを隠そうとせず怒声を浴びせた。元より関係はあまり良くないうえ、攻撃を加えられ完全に頭に血が上っていた。
そんな魔人の様子を見たレオンハルトは無表情のまま目を細めると、その紅い双眸で彼らを睨んだ。
「お前らこそどういうつもりだ？　仲間の魔人を殺すことは禁止してるはずだが」
「……はっ！　そいつは悪かったな。そいつは魔人ともいえねぇくらい弱っちい奴だからよぉ。殺しても問題ないかと思ってたぜ！」
可笑しそうに笑って開き直る魔人。それに便乗するようにもう一体の魔人が口を開く。
「レオンハルト様。レオンハルト様がそうやって魔人を殺すことを禁止する理由は、魔軍の戦力をいたずらに減らさないようにするためですよね？」
「……」
口を噤んだまま、眉をひそめるレオンハルト。その質問に対する返答はどうやらないようだった。だがそれでも魔人は続ける。

「続けます……しかしそれなら戦力にならないような弱者なら別に殺しても構わないということではないですか――そこのケイブリスのように」
「そうだぜ！　そこの雑魚がいなくなっても誰も困らねぇ！　寧ろ邪魔だ！　だから代わりに殺してやろうと思ってよ！」
――く、クソが……好き放題言いやがって……！
ケイブリスは開き直って殺しても構わないなどという魔人二人に激しい憤りを感じた。何が出来るという訳ではないが。
だが、ケイブリスは少しだけ安堵していた。レオンハルトが二人を止めたからだ。
何故かはわからない。おそらく規則だからとかそういう理由だろうとは思ったが、理由は何でもいい。今のケイブリスにとってレオンハルトは唯一の希望なのだ。
「そもそも弱ぇ奴を甚振って何が悪い！　強い奴が弱い奴を支配するのは当然だろうが！」
「……それも同意ですね。そもそもレオンハルト様はどうしてケイブリスなどを助けるのでしょうか？　そいつはレオンハルト様の威光を笠に着た臆病者でしかありません。レオンハルト様も疎ましく思っているのでは？」
「……」
だが、未だに二体の魔人は口々に言い訳を続ける。それはおそらく日頃の鬱憤が溜まっていることも関係しているのだろう。レオンハルトに言い含められ、欲求を制限される日々は暴虐の魔人にとってはストレスなのである。
故にそれを次々に吐き出した。レオンハルトはしばらく黙ってそれを聞いていたが――
「それに――」
「――ククク……」
「あん？」
レオンハルトの口端に笑みが溢れ、二体の魔人の思考が一瞬止まる。

そして、
「ククク、クハハハハッ――――！」
「!?」
堪えきれないといった様子でレオンハルトが腹を抱えて笑う。普段から冷静な態度のレオンハルトの珍しい姿に三体の魔人は今度こそ呆気にとられる。
「ハハハハハッ！　お、お前ら、笑わせんなよ……ク、ククク……！」
「な、何だと……？」
その理由がお前らにあると笑うレオンハルトに訝しげな視線を向ける魔人。
「はー……ここ百年で一番笑ったかもな……ククク……」
そしてレオンハルトは一通り笑い続けると、一度息を整えて落ち着いた。
だがその口元には笑みを残したままであった。
「お前ら、話が面倒くせぇんだよ」
「はぁ？」
「……どういうことです？」
疑問を口にする魔人達に、そのままの表情でレオンハルトは吐き捨てるようにそれを告げる。
「お前らさっきから随分と言い訳じみたことを威勢良くぺちゃくちゃ言ってやがるがよ……要はこう言いたいんだろ？」
一息で、その本心を言い当ててみせる。
「――あなたの事が怖いんです。許してください――ってな」
「ああっ!?」
「……何を」
二体の魔人がそれぞれ違った反応を見せる。だが、気持ちは一緒であった。侮辱にも挑発にも似たその言葉に対し抗議するように反論する。
「……誰がてめぇなんかにビビるかっ！」
「……そうですね。それは的外れな――」
「何だ、違うのか？　だったら長々と言い訳なんざしてないで無視し

て立ち去るか、魔人らしく力で黙らせたらどうだ？」
「っ、それは……お前に合わせてやってんだよ！」
「……それだと組織としての体裁が」
痛いところを突かれた二体の魔人が、表情を歪める。そしてその後者の言葉にレオンハルトは噛み付く。
「おいおい、さっき組織としての体裁を無視しようとした奴が言うことじゃねぇな」
「……っ」
今度こそそれを言った魔人が黙る。しかしもう一方の魔人はそれを認めなかった。
「……それはこいつが弱いから悪いんだよっ！」
最早言い訳にもなっていない子供のような反論を魔人はレオンハルトにぶつける。しかしそれに再び噛み付くかと思いきやレオンハルトは、
「……そうだ。お前、良いこと言ったな？　これで俺も面倒が無くなった」
「……はぁ？」
「っ……！」
何故か肯定してみせる。その言葉に頭の回る方の魔人は嫌な予感がして顔を顰める。
そしてその予感は当たっていた。レオンハルトがやや鋭い視線で二人を見やり続ける。
「本当は弱い者虐めなんてつまんねぇ事してるお前らを適当に説き伏せて解散するつもりだったんだがよ？　クク……お前らのお陰で良い大義名分が見つかった」
「あ……大義名分……？」
「れ、レオンハルト様……」
二体の魔人が戸惑う中、レオンハルトの威圧感がどんどんと高まり、それが赤いオーラとなって現れる。その赤い双眸が爛々と煌めき、レオンハルトの表情に喜悦が混じる。
「ククッ、お前らの言い分じゃ弱い奴には何してもいいんだよな？

ならそういうことだ。……後、悪いなケイブリス」
「――っ!?」
――お、俺様――っ!?
その視線を突如向けられたケイブリスは身が凍るような思いだった。
だが、笑みを浮かべながらもその言葉は謝罪。レオンハルトはこう続けた。
「しばらくそのままで我慢してもらうぜ。ちょっとこいつらに躾も兼ねた……俺の退屈しのぎに付き合ってもらわないとならねぇからなぁ――ッ!!」
「――っ、て、てめぇ……!」
「――れ、レオンハルト様……!」
レオンハルトはその戦意を完全に解放する。二体の魔人がそれに当てられ戦慄し、冷や汗が身体から湧き出る。
今直ぐこの場から立ち去れ、と本能が警告するが――それはもう遅い。
「二対一ならハンデは十分だろ。――精々俺を楽しませてみろッ!!」
上級魔人、魔人四天王の名に恥じない暴威が二体の魔人に襲いかかった。

――すげぇ……な。
魔人ケイブリスは床に横たわりながらも、その戦いを間近で見ていた。
魔人レオンハルトと二体の魔人の戦い。
魔人同士の戦いともなれば常人にはまともに視認することは不可能だ。それは最弱の魔人であるケイブリスにも当てはまるかのように思えた。
だが、ケイブリスはこの世で最強の存在を見たことがある。その戦い振りも。
その存在こそがケイブリスを作った初代魔王ククルククル。全長

４．７キロの巨体を誇る丸い者の王でもあった魔王。それから三千年様々な戦いを見てきたケイブリス。
だからかも知れないが感覚という部分で如何にこの戦闘が凄まじいが感じることが出来た。
「おらおらッ！　どうした!!　もっと気張れ!!　そんなんじゃうっかり殺しちまうだろうが!!」
「がぁぁあっ!?」
「ぐ、ぐ――っっ!!」
レオンハルトが動く度に魔人が吹き飛ばされ、壁や床に転がる。そして僅かな振動。
魔王城は決して脆い訳ではない。だが、魔人の戦闘の余波に完璧に耐えられるほど頑丈というわけではなかった。
戦いは二対一でありながらもレオンハルトが圧倒的に二体の魔人を叩き潰している。
それにおそらく何度もレオンハルトは手心を加えているのだろう。ケイブリスだけじゃない。魔人は皆知っているし、魔軍の中でもそれなりの地位にいる者にとっては有名。
魔剣オル＝フェイル。あれの斬れ味は正に魔剣と呼ぶに相応しいものであり、まともに喰らえば魔人の肉体ですら真っ二つにしてしまう程だ。
そんな剣での攻撃を何度も喰らっていて、未だに身体の欠損は一度もなく切り傷や打ち身に留まっているのは、偏にレオンハルトが手加減しているからであろう。
そして実際に戦っている二体の魔人は、それをもっとよくわかっているはずだ。自分達は既に何回も殺されている。レオンハルトにその気があればとっくに死んでいる、と。
故に、だんだんと戦意が萎んでいくのがわかった。
しかしレオンハルトは先程言っていた通り――躾を兼ねているのか、もしくはもっと楽しみたいのか、全然やめる気がないように見える。
だが、戦いの余波で、魔王城が騒がしくなると、当然この場所にも

誰かが駆けつけてくる。
「な、レオンハルト様が戦ってる!?」
「こっちにケイブリス様が倒れてるぞ!?」
「早くメイドさんを呼べ！　虫の息だぞ！」
「お、おやめくださいレオンハルト様!!」
「誰か魔王様かカミーラ様を呼べ――!!」
「レオンハルト様の楽しそうな笑顔……素敵ですわ……！」
「キャロル様!?　見惚れてないで止めて下さい!!」
魔軍に所属する者達が少しずつ集まり、騒ぎになっていく。ケイブリスはその過程で助けられながらも、その戦いをずっと見続けていた。
それは何故か、ケイブリスにはわからない。ケイブリスは薄れゆく意識の中、ずっと昔にこれと似た感情を抱いた覚えがあるような気がした。
――ああ、俺様もいつかは……。
ケイブリスはそれをついに自覚することは出来なかった。

後日。自らの私室でレオンハルトは項垂れていた。
「ちっ、スラルの奴……あそこまで怒らなくてもいいのによ」
「わたくしとしては格好いいレオンハルト様が見れて幸せでしたわ。紅茶をどうぞ」
「ああ、さんきゅーな」
あの後、レオンハルトは二体の魔人を殺さない程度に叩き潰した。そしてその事でスラルにこっぴどく絞られた。
レオンハルトは振り返る。そもそも最初はああするつもりもなかった。
自分の使徒であるキャロルを城内で探していた最中に何やら人気のない端の通路でケイブリスを見つけ、何気なく話しかけた。その後、普通に別れたのだがその後に会った魔物将軍に、先程ケイブリスと話したエリア辺りで見たという目撃情報があったという報告が

あったので、もう一度その先に向かったらいつも自分に突っかかってくる魔人二体がケイブリスを虐めている現場に遭遇した。
別に正義感というものは自分にはそこまでないと思っている。だが助けないほど薄情でもない。
故に助けたのだが、すると魔人達が口々に色々と言い訳を重ねてきたのを見てだんだんと可笑しくなってしまい、変にテンションが上がってしまったのだ。こちらとしてもあの魔人達には日頃から面倒を感じていたので、魔人らしく力でボコボコにしてしまった。
正直ケイブリスを虐めていたとはいえ、あそこまでやる事は無かったかもしれない。だがまぁ、ケイブリスには日頃からやたらと物を貰っているので少しはそれに応えてやらないと駄目だろう。ギブアンドテイクは付き合いをするにあたって重要な要素だ。相手をボコボコにする理由になっていない。
多分だが、やはり原因は欲求不満だとレオンハルトは分析する。
使徒が出来て少しは気分が楽にはなったが、そっちの方は解決できてる訳じゃない。強い奴と戦いたい欲求がついに爆発したという感じだろう。今回ので発散出来たので、またしばらくは大丈夫かもしれないが。
レオンハルトは、キャロルが淹れてくれた紅茶を飲むと、気分を変えるように息を吐いた。
「やっぱ定期的にガス抜きしなきゃ駄目だな……趣味でも増やすか」
「読書だけでは駄目ですの？」
「読書は悪くないが内向的だからな。次はアクティブな趣味が良さそうだな」
「アクティブな趣味……」
キャロルが言葉を反復した。
レオンハルトとしては体を動かすような趣味があれば少しは欲求を解消出来るだろうか、という考えである。
「……はい！」
キャロルが元気よく手を上げた。レオンハルトはそれに反応してやる。

「なんだ？　言ってみろ」
「わたくしにいい考えがありますわ！」
「……いや、それを言えって言ってるんだけどな」
レオンハルトは呆れたように目を細めてキャロルを見る。
それを受けてキャロルは再び口を開いてその考えを述べた。
「えっとですね。それは――」

迷宮と魔王の料理3

――大陸北部

「……」

石造りの通路の入り口に立ち止まり、その先をやや鋭い視線で見つめるのは魔人レオンハルト。

彼はしばらくの間、その通路をじっと見ていたがやがて視線を隣にいる少女に移した。

レオンハルトの隣にいる少女は、彼の使徒であるキャロル。彼女はレオンハルトの視線を何かしらの催促だと受け取ったのか、笑みを浮かべると腕を振り上げた。

「――では、迷宮の攻略を開始しますわ！」

そう高らかに宣言した。

通路内にキャロルの高い声が反響して聞こえてくる。レオンハルトはそれを聞くと顔を天井に向けて嘆息した。

「俺はなんでこんなところにいるんだろうな……」

「レオンハルト様がわたくしの意見を聞いてくださったからですわ！」

「……いや、そうなんだけどな。迷宮って行ったことなかったしよ」

レオンハルトが今いるこの場所は、とある遺跡の地下にある迷宮。主の新しい趣味を作るに当たってキャロルが考えついたのが、迷宮探索であった。

迷宮。

それは大陸各地に点在するいわゆるダンジョンである。

洞窟や遺跡など様々な形のものが存在するが、それらに共通するのが多くの魔物が徘徊し、多数の罠が設置された危険地帯であること、お宝が眠っているトレジャースポットであること。

冒険や腕試し、お宝探しにはもってこいのロマンの塊なのだ。

「ここでなら危険な魔物も沢山いますから、レオンハルト様の欲求不満も解消出来る筈ですわ！」

「……最初は俺もそう思ったんだが――」

キャロルはそう強く力説する。
だが、レオンハルトは疑問の余地が浮かんでしまった為、それに異を唱えた。
「……よく考えてみたら俺らって迷宮にいる側の存在じゃねぇか？」
「……」
レオンハルトの意見を受け、キャロルがピタリと動きを止める。
「一番危険な魔物って明らかに俺達なんだが……ここの魔物は戦ってくれんのか……？」
「だ、大丈夫ですわ！　……多分」
キャロルが自信なさげにぼそりと付け加える。確かによくよく考えてみれば魔人や使徒も一応は魔に属する者達。それも圧倒的な強者だ。迷宮の奥で待ち構えているボス的存在である。
本当に凶暴で好戦的な魔物ならともかく普通の魔物は逃げるのではという疑問を覚える。
「俺らが住んでる魔王城なんか見ようによっては世界一危険な迷宮な気がするんだが……」
「……言われてみれば……」
多くの魔物兵が常時城を固めており何体もの魔物隊長や魔物将軍も詰めている。多数の使徒や魔人が徘徊し、極めつけは魔王が座する城。確かに人間目線だと一番危険な迷宮に間違いない。
故に今更そこいらの迷宮に入ったところでこれ以上の危険があるのだろうか。自分の考えに自信を持つキャロルもこれには首を傾げる。そして戸惑いがちに、
「……え、えっと、ではどうしましょうか……」
「……」
「……あっ！　良いこと思いつきましたわ！」
「……一応言ってみろ」
主の無言の視線を受けて、キャロルが閃いたように声を上げる。
あまり期待は出来ないが、という枕詞を口の中に留めてレオンハルトはそれを促す。
するとキャロルはほんの少し顔を赤らめ、

「最初の意見はどうでしょう……わたくしならいつでも準備は出来てますし……見ようによっては初めてのお出かけなので、ここで初めてを迎えるというのも……」
途中からトリップし始めたキャロルを見て、レオンハルトは多少イラッとしたのか眉間を指で抑える。
――こいつ、マジで犯してやろうか……。
危ない考えが脳裏に浮かぶが、それをしてもキャロルを喜ばせるだけなのが容易に想像が付いたのでその考えを振り払う。
レオンハルトは一度軽く息を入れると、気を取り直してキャロルに声を掛けた。
「……ま、折角来たしな。来たことなかったのはマジだし、一応行くぞ」
「あっ、はい！　かしこまりましたわ！」
「……それに良い機会かもしれねぇな」
レオンハルトの言葉に気合を入れなおすキャロル。それを見てレオンハルトは一つ、ある試みを思いつき口に出した。
「何がですの？」
きょとんと首を傾げるキャロルにレオンハルトは提案する。
「もし魔物と戦うことになったら最初はお前一人で戦え」
「わたくし一人で、ですか？」
「そうだ。使徒になってからのお前がどれだけできるか確かめる必要がある」
そう。レオンハルトはキャロルの腕試しに迷宮探索が使えると考えた。
使徒になる前に実力を試しはしたが、使徒になってからの実力はまだ確認していない。主としては使徒の正確な力量を把握しておかなければ何を任せることが出来るのかも分からないし、無茶な仕事を任せてしまい失敗してしまうこともあるだろう。
それらを避ける為にも今の内にもう一度試してやろうと、レオンハルトはキャロルに視線を浴びせる。
「……わかりましたわ！　レオンハルト様の使徒となり更に完璧に

なったわたくしの実力を、レオンハルト様にお見せしますの！」
　キャロルはレオンハルトの視線を、期待に満ちた視線と受け取ったのだろう、ビシッとポーズを取って自信のある表情でそう叫ぶ。
「ああ、頑張れ」
「頑張りますわ！　頑張ってレオンハルト様に褒めてもらいますのよ……！」
　――不安だな……。
　キャロルの締まりのない笑みを見て、レオンハルトはやや胡乱な表情で息を吐くのだった。

「やぁっ――！」
「オオ――ッ!?」
　キャロルの掛け声と共に、影が交錯したかと思うと、悲痛なヤンキーの叫び声が響く。
　ヤンキーは褐色の筋肉質な人型の男の子モンスターであり、魔物の中では割とポピュラーだ。そのヤンキーがキャロルの手に持った剣に切り裂かれて倒れる。
「これでこの階層も終わりか。呆気ねぇな」
「レオンハルト様！　経験食パン落としましたわ！」
「食べろ、貴重な経験値だ」
「わかりましたわ！　もしゃもしゃ……」
　モンスターが落としたアイテム――食べたら経験値が入る経験食パンを拾ったキャロルがレオンハルトの命令で、それを口に含む。それを視界の端で見ながら俺は、床に血溜まりと共に転がった魔物達を思い返す。
　イカマン、るろんた、アカメ、ハニー、ミートボール、おかゆフィーバーなど、様々な種類のモンスターの屍が通路内に転がっている。
　レオンハルトはここまでのキャロルの戦い振りを見てある程度の力量を計った。

そうして分かったのは、その辺の魔物に負けるほど弱くはないということ。
使徒になって手に入れた得物――腰に掛けた小さい銃のようなものと細い形状の剣。
コマンダーであった頃とは違い、それらを武器にして戦ったキャロルだが、以前は指揮棒以外は使えなかったそれらが使えるようにはなっていた。
そしてその事にキャロルは喜んでいた。特に剣は「レオンハルト様と同じ武器ですわ！」とやたら喜んで振り回していた。危ないのでやめさせたが。
そしてレオンハルトが見たところ、使えるには使えるのだが――何というか、使えないから使えるようになったくらいであり、剣の腕自体はまだ未熟ではあった。
どちらかというと銃のような物の方が腕は良いくらいだ。引き金を引くと弾が発射されるそれは魔物の身体を撃ち抜くには十分な威力であり、大いに活躍していたように見える。
それにこの銃、何発撃っても弾が無くならない。というより弾が何処に入っていて、何処から供給されるのかわからない。不可思議ではあるが、女の子モンスターのチハなんかも無限に弾を撃てるので同じ様な原理なのだろう。そこは気にしないでおく。
総評するなら弱くはないが、まだ強くもない――と言ったところだろう。ここまでに倒した魔物達はどれもあまり強くない。レオンハルトを含む多くの魔人はこれらを一瞬で肉塊に変えることが出来る。戦闘力に定評のある使徒――七星などなら多数の魔物を相手取っても歯牙にもかけずに倒すことが出来るだろう。
欲を言うならもう少し強くなってほしいところだ。レオンハルトは経験食パンを食べ終わったキャロルに視線を向ける。
視線に気づいたキャロルが胸を張って自慢気な声を出した。
「レオンハルト様！　わたくしの実力はどうでしたか!?」
「……ま、一応及第点ってとこか」
「ほんとですの――」

「だが」
レオンハルトは喜びかけたキャロルに釘を刺すように鋭い声を出す。
「――これくらいで満足してもらっちゃ困るな。俺を喜ばせたいならもっと強くなれ。元コマンダーだからとか言い訳は聞かねぇからな？」
個人戦闘力はそこまでじゃないコマンダーの使徒にしてはそれなりに使える、というだけ。レオンハルトとしては自分の使徒なのだからそれなりの戦闘力では困る。これでもそれなりに立場がある魔人なのだ。故に期待はしているがもっと高みを目指せと発破をかける。
「……当然ですわ！　わたくしは魔物界一の完璧使徒！　レオンハルト様の使徒ですのよ！　まだまだ強くなりますわ！」
「それでいい……ほら、さっき拾ったダボラベベとまんが肉だ。食え」
「はい！　いただきます！　ガリ……むしゃむしゃ……！」
経験値と体力が上がる食べ物を下賜されて、それを勢いよく食べる自分の使徒を見てレオンハルトが苦笑する。向上心だけは一級品の様だ。
――ふむ、使徒を育ててみるのも面白いかもな。
キャロルを見てそんな事を思うレオンハルト。使徒になり寿命も無くなったし、限界も伸びたことだろう。それにどうやらそれなりに頑丈でもあるようだ。長い時間を掛けて訓練を施せば面白い成長を遂げる可能性は十分ある。
――今度、剣の振り方を教えて……いや、先に基礎体力か。延々と走らせるか？　それとも崖登りでも――。
「……？　何故か悪寒が走りましたわ」
周囲に魔物でもいるのだろうかとキャロルがきょろきょろと辺りを見渡しながら不思議そうに首を傾げる。その原因が自らの敬愛する主にあるとは微塵も思ってもいないようだ。
レオンハルトは表情を真面目なものに戻すと、立ち上がってキャロルに指示する。
「そろそろ行くぞ」

「了解ですわ！」
そうして二人は迷宮の奥に進んでいった。

その後も順調に迷宮を進んでいくレオンハルトとキャロルは――
「レオンハルト様！　これはどうでしょう！」
「ん……おお、これは結構良い剣だな」
時には宝箱から出たアイテムに一喜一憂し――
「れ、レオンハルト様～……」
「見事に引っかかったな……先に回復しとけ」
迷宮に設置された多数のトラップに引っかかったり――
「な、何ですのこの触手――!?」
「カースAか、珍しいな……どいてろキャロル。こいつは俺が相手する」
「うぅ……屈辱ですわ……！」
一つの町を滅ぼせるほど危険な魔物と遭遇してレオンハルトが出張ったり、そんなこんなで二時間程。
二人は迷宮の最奥にまで辿り着いた。

「やりましたわ――！」
「ここが終点か」
迷宮の奥にいた大型モンスターを倒すと、それなりの大きさの空間に辿り着く。何時間も迷宮に潜って戦い続けてそれなりに疲労があるかと思ったが、キャロルはそんな疲れを微塵も感じさせず部屋の中心にあるそれに駆け寄った。
「レオンハルト様！　宝箱ですわ！　それもとても豪華な！」
「確かに豪華だな」
キャロルが指し示した宝箱。ここまで幾つかの宝箱を見つけて沢山のアイテムをゲットしたが、その中でも一番大きく、綺羅びやかな装飾が付いた宝箱はキャロルの言う通りとても豪華だ。

否応にも中身を想像してしまう。一体どんなレアな一品が入っているのか。レオンハルトは早速それに手を掛けた。
「とりあえず開けてみるか……っと」
そう呟きながら多少の期待を込めて宝箱を開く。するとそこには

――

「これは――」
「金！　金で出来てますわ――！」
キャロルがそれを見て叫ぶ。レオンハルトはゆっくりとそれを持ち上げて、品定めするように全体を眺めた。
「黄金の……像、でいいんだよな」
レオンハルトが胡乱な目でそれをしげしげと眺める。
だが何故、黄金の像に疑わしい目を向けるのか。それは黄金像の形が奇妙だったからに他ならない。
いわゆるひょうたん型とでも言うのだろうか。黄金で出来たひょうたん型の像。黄金なので価値はあるのだろうが、どうしてこのような形なのかよく分からない。どうせ黄金で作るならもっと良い形があるだろう。
――ま、いいか
しかしまぁ、宝の価値などわからない自分が寸評をしてもしょうがない。帰ってスラルにでもあげて聞いてみるか、とレオンハルトはその像をしまうと一度息を入れた。
そしてそんなレオンハルトの様子を見たのか、キャロルが少し心配そうな表情を浮かべる。彼女は言い辛そうにしながらもレオンハルトに尋ねようと口を開いた。
「あ、あの……レオンハルト様？」
「……何だ？」
キャロルの窺うような表情にレオンハルトは疑問符を頭に浮かべる。しかし表情を変えないレオンハルトにますます不安になったのかキャロルが落ち込んだ様な声色で、
「その、やはり迷宮探索は楽しくなかったでしょうか……？」
「……はぁ？」

「レオンハルト様の欲求不満を解消できずに申し訳ありません……」
分かりやすくしゅんと下を向いて気を落とすキャロル。彼女にとっては主であるレオンハルトが楽しめるかが重要であった。強い相手と戦いたくなる欲求を解消するための趣味。そのために次善とはいえ迷宮探索を提案したのである。
しかし迷宮の奥に到達しても表情をあまり変えない主の姿を見て失敗したのだろうと思い込み項垂れる。
そんな自分の心配をする使徒にレオンハルトはそれを察してか、息を吐くとややあって苦笑。
そして自分の考えをキャロルに告げた。
「……ま、確かに戦闘は退屈だったけどよ」
「そ、そうなんですね……」
その言葉を聞いて更にキャロルが沈んだ様に声を落とす。
しかし、
「だが、探索は悪くない。気が向いたら行くのもいいかもな」
「――！」
レオンハルトの正直な気持ちにキャロルが目を剥いて驚く。実際、レオンハルトはこうやって未知の場所に行くのも悪くないと感じていた。戦い自体はそれなりでも刺激が少ないわけではない。罠に気を張ったり、宝を見つけたり、珍しい物を見たりするのはそれなりに新鮮な体験を楽しめる。もう一度行っても全然構わないし、簡単には飽きないだろうという考えに至る。故に悪くないと評した。
「ま、よくやったなキャロル」
「あ……！」
故にレオンハルトはキャロルの頭を撫でて褒めてやる。するとキャロルの表情が一転して安心しきった様に変化する。そして嬉しさに身を震わせた。
「ありがとうございます、レオンハルト様……また、褒めて頂いて……んっ」
「おっと」
「あ……」

キャロルの顔色が赤くなったのを見たレオンハルトが頭から手を離す。キャロルが名残惜しそうに離れていく手を視線で追いかけた。
分かりやすく落胆する使徒にレオンハルトは肩を竦めて説明してやろうと口を開く。
「今日はこれだけだ。今から戻んなきゃなんねぇし、これから用事があるしな」
「そうですか……」
「……言っておくが、お前にも関係ある用事だからな？」
「あっ、そうなのですね。一体何を為さるのですか？」
レオンハルトの言葉に自分も手伝う事になるのだろうと適当に当たりを付けたキャロルが気持ちを切り替えて質問する。使徒として、主に褒めてもらえないからといつまでも落ち込んでいるのはよろしくない、そんな気持ちがあるのだろう。
しかし、レオンハルトはそんなキャロルの気持ちとはそぐわないであろうこの後の用事を告げた。
「この前のリベンジ――お前の歓迎会だ」

キャロルの歓迎会。
レオンハルトとキャロルは迷宮から魔王城に帰ると、身支度を整えてからその場所に向かった。
前回はレオンハルトの部屋で行う予定だったが、今回の歓迎会の場所は魔王スラルの私室であった。
二人が扉を開けて部屋に入ると、中にはスラルとガルティアが既に待っていた。
「あ、いらっしゃいレオンハルト！　それにキャロルちゃんも」
「おー……本当に使徒になったんだな」
口々に出迎えの言葉を口に出すスラルとガルティア。スラルは嬉しそうにこちらに駆け寄り、ガルティアは椅子に腰掛け肉を頬張りながらも、感心したように視線を向ける。
「お招きありがとうございますわ、魔王様」

「ううん、気にしないで。後そんなにかしこまらなくてもいいからね」
「そうなのですか……？」
「言う通りにしとけ」
　スラルがもう少し砕けてもいいとキャロルに言うと、キャロルは自らの主を見上げて確認を取った。やはり魔物のトップである魔王にいきなり馴れ馴れしくは出来ないだろう。そこはしょうがない。
　しかしややあって主の許可も得たキャロルは、
「わかりましたわ！　よろしくおねがいしますスラル様！」
「ん、よろしくね」
　いつもどおりのテンションでスラルと挨拶を交わした。物怖じしない性格がそうさせるのか、スラルの雰囲気がそうさせるのかわからないが、仲良く出来そうで何よりだ。
　レオンハルトはお喋りを始めた二人を視界の端で見届けながらもガルティアに近づき声を掛ける。
　いつもの事ではあるが、持ち込んだ肉を次々と口に運ぶガルティアに呆れた表情を浮かべる。
「お前、一応食事前だってのによく……いや、今更か」
「スラルの料理が食えると思うといつもより腹が減るからな」
「……俺は逆だ。先程からお腹や手が震えてる。最早身体が拒否しちまう……」
「へぇ、勿体無いな」
「そう思うのはお前だけだ……」
　レオンハルトが既に並べられている料理の数々を見て、顔を青ざめさせる。逆にガルティアは今にも待ちきれないといった様子で手に持った肉をがつがつと食していた。
　この中に幾つかスラルの料理がある。それがレオンハルトには感覚で理解出来る。料理を目の前にすると身体が拒否反応を起こす所為だ。
　だが、ガルティアはそんなレオンハルトの言葉を受けると、キャロルの方に視線を移した。
「でも、お前の使徒はまだ分かんねぇぜ？　美味しいって言うかもだ」

「ありえねぇな。魔人が気絶するレベルの必殺料理だ。美味しい不味いの次元じゃねぇ」
「俺とお前しか食ってないし分かんねえだろ？」
「いや、わかる……これは最早武器だ。敵に食わせたら確実に戦闘不能に出来る。今すぐに実戦配備しても通用するぞ」
「……刺激が強くて美味いんだけどなあ」
「それが気絶するほどの刺激じゃなければ美味いかもな」
ガルティアが首をひねりながら料理の数々を眺めているのを見てレオンハルトは思う。やはりスラルの料理の話題に限ってはガルティアとは話が全然噛み合わない。ムシ使いの魔人の味覚はレオンハルトには理解し難かった。
「……それじゃ、そろそろ始めよっか。皆座って」
「かしこまりましたわ！」
スラルがそう言って椅子に着席するように促す。
既に腰を落ち着けているガルティアも含めて全員が着席すると、スラルはキャロルに声を掛けた。
その声色、表情は少し緊張している様子。自分でも大丈夫なのかと心配している様だ。
「その、キャロルちゃん？　好きに食べていいけど、いつでも食べ終えていいからね？」
「……？　わかりましたわ」
訳の分からない注意を受けて、しかしキャロルは了承する。傍から見れば悪魔の契約に見えてくるようだ。何せ目の前に並んでいるのは常人の意識を破壊する魔王の料理。
「どれも美味しそうですの」
「……」
しかしそんな事を知らないキャロルは目の前の料理を眺めて目を輝かせる。これが見た目通りの出来栄えなら感動する気持ちも分かる、とレオンハルトは使徒に同情する。自分も最初はそんな気持ちだったと。
キャロルはテーブルに並んだ豪勢な料理の数々に目移りしていた

ようだったが、やがて一つの料理を手にとった。
「このコロッケからいただきます。レオンハルト様もどうですか？」
「……い、いや、俺は遠慮する。先に食べてくれ」
「そうですの……わかりましたわ」
キャロルが少し残念そうに落ち込み、直ぐに立ち直る。レオンハルトは仄かな罪悪感を感じる。
彼女が手にとったコロッケ。香ばしいお肉とじゃがいもの揚げた匂いが食欲を唆り、見た目からでもそのサクサク感、ほくほく感が分かるようだ。
レオンハルトも本来は結構好きな料理である。しかし擬態しているであろうことは想像に難くない。故に使徒の申し出を断る。
断られたキャロルは、コロッケを食器で口に運ぶと――
「んっ……」
それを齧って口の中に入れた。
「……」
「……」
「……」
三人が固唾を呑んで見守る中、キャロルはそれをゆっくりと咀嚼し、
「あら、これは……――――っっっ!!」
不意に、キャロルの言葉が詰まり、動きが止まった。
「……」
「お、おい。大丈夫か？」
目を剥いた状態で時が止まったかのように動かないキャロルにレオンハルトが心配そうに声を掛ける。
だが、
「……」
「あれ、反応がないわね……」
「美味すぎて絶句したか？」
「黙ってろガルティア。……しかし本当に動きがないな」
未だに全く反応がないキャロルを皆が顔を見合わせる。スラルな

どだんだんと不安になっておろおろし始めた。
レオンハルトは何となく、嫌な予感がしてキャロルに近づくと肩を動かしてみる。
「……」
それでも動かない。
故に試しに手をキャロルの顔の前に持っていきある事を調べた。
すると――
「……スラル、ヒーリングだ」
「え……え？　それって……もしかして」
レオンハルトがぼそりと告げた。
スラルがまさか、と不安そうにその言葉の真意を確認するように問い返す。レオンハルトは血相を変えて叫んだ。
「――息してねぇ！　スラル！　早く回復魔法を!!」
「う、うわあああああ!?　私の料理、そこまでいっちゃった――!?」
スラルはその言葉を受けて慌ててキャロルに近づくと、自身の料理にショックを受けながらも全力で神魔法を連発する。
「心臓は動いてるからまだ間に合う！　起きろキャロル!!」
「ごごごめんなさいキャロルちゃん!!　早く起きて!!」
涙目で謝りながら回復を続けるスラルと、肩を揺さぶって声を掛け続けるレオンハルト。和やかな歓迎会は一瞬で阿鼻叫喚の有様に変化した。
そんな彼らを見て、ガルティアは目の前の料理を口に運んだ。ガルティアの口の中に刺激が広がる。
「……こんなに美味いのになあ」
ガルティアの惜しむような声色の呟きはこの場の誰にも届かなかった。
――この後、程なくして気がついたキャロルは身体にこそ異常は無かったものの、料理を食べた記憶だけが抜け落ちており、レオンハルトとスラルを戦慄させた。
同時にスラルの料理は魔人以下には耐えられない事が分かり、今後は練習でも魔人以外に食させる事は禁じられたのであった。

犠牲

大陸中央部。
一面の草原と豊かで肥沃な大地が広がるその地域に一つの村があった。
木々で出来た小さな家が幾つも並び、その周囲には沢山の畑が存在する。現在は収穫期なのだろう、大人達は汗水垂らしながらも畑で野菜や果物を手に取り喜び、その周りでは小さな子供達が手や膝を土色に変えるほど元気よく走って遊び回る。
この村は平和そのものであった。
「あはは！　逃げろー！」
「きゃーっ！」
「急ぎすぎて転ぶなよー」
「今年は随分と豊作だな」
「今夜は何を作ろうかしらね」
それは人々の会話からも見て取れた。表情には暗いものがほとんど無く、皆がのんびりと暮らしているように見えた。
「……」
そんな長閑な村の風景を見つめる一人の女性がいた。村を一望出来る小高い丘の上で女性は無言でそれらを眺める。
その口元には確かな笑みが浮かんでいる。しかしそれと同時に何処か憂いを帯びた印象の表情でもあった。彼女が何を思っているのかは分からない。だが、何処か近寄り難い雰囲気を醸し出していた。
しかし、そんな雰囲気を無視してその女性に声を掛けるものもいた。
「あれ、こんなところで何してるの？」
その女性に背後から声を掛けたのも同じ女性だった。しかしその女性はほんの少しお腹が膨らんでおり、全体的なシルエットは細身であることから妊婦であることが見て取れた。
そんな年若い妊婦の明るい声かけに女性は応じた。
「……ん、特に何も。ただ、平和だなーって」

先程まで近寄り難い雰囲気を出していた女性だったが、喋るとその雰囲気を霧散させて柔らかく対応する。
「……？　平和なのは良いことでしょ？」
「いや、まあ、そうなんだけどね」
「えぇ～？　じゃ何でそんな顔してるの？」
二人の会話、特に妊婦の方には遠慮があまり見られず親しい仲なのだろう。明け透けに疑問をぶつける。妊婦から見て、女性の表情は普段どおりに見えていつもと違っているように見えたのだ。
その質問に女性は再び表情を固くして答える。
「……あたしってここにいてもいいのかなーって」
膝に頬杖をついて何気なくそう口にする女性。そしてもう一つの手でふいに耳を撫でる。その箇所や、そこだけでなく――彼女は普通の人間とは違った容姿をしていた。
長い耳と額にある赤い宝石。それだけならここにはいない別の種族ともいえるのだが、それらが特徴の種族ともまた違う――長い黒髪。彼女はいかなる理由からか普通とは違った存在であった。故に世界中を旅しては移住を繰り返している一匹狼のような生活をしているのだ。
それを何となく察しているのか、それとも知らずか、とにかく妊婦はそんな彼女に苦笑するように答える。
「いいんじゃない？　村の人達も受け入れてくれてるし。それとも居心地でも悪いの？」
「受け入れてくれたのは感謝してるし、居心地も悪くないけど……」
「……今日は一段とめんどくさいなぁ」
何だか煮え切らない様子の女性に、妊婦が呆れたように頭を抱える。彼女がこんな風になるのは一度や二度じゃない。どうにも抱え込んでいる何かがとても大きいのか、それとも単純に気分の問題か、はたまた両方なのだろう。彼女はこういう風に時折悩んではしばらく雲隠れをする事が多い。一年くらい前にも同じような悩みを口にして数ヶ月別の場所に行っていたりしたようだ。それ以外にも何か用事があるのか慌てて何処かへ行ってしまったり、何も言わずにいな

くなったりと放浪癖のような何かかと妊婦は思っていた。
だがこれは知らない事だが、女性はこの村の滞在期間が今の所二番目に長い。ほとんどの場所はちょっと住んだら直ぐに移住する。例外は一番目の場所とこの村だけ。これらはいなくなっても時たま帰ってくる。
それは偏に自身を受け入れてくれて、それだけ思い入れがある場所だからだろう。妊婦やここの村人との付き合いはもう五年近くになっていた。
故にこういう時の対処法を妊婦は知っている。背後から彼女に近づくとその頭目掛けて、
「……ていっ」
「いたっ！」
少し強めにチョップを脳天にぶち込んだ。
「ちょっと！　何すんのさ！」
「だって面倒なんだもん」
「面倒って……」
軽く不満顔で怒ってみせる女性。しかし妊婦はあくまでも緩く対応した。
「居ていいって言ってるんだからいいの。別に行かなきゃならない理由もないんでしょ？」
「……そりゃあ、今はないけど」
「ん、じゃあ行く意味ないじゃん。居ちゃ駄目になったり、行かなきゃならない理由が出来たら出ていったら？」
「それは、そうかもだけど……」
なおも煮え切らない彼女に、妊婦が強い口調で言葉を続ける。
「だけど、とかなし！　行くなら行く！　行かないなら行かない！
はいお終い！」
「……」
妊婦の有無を言わせない態度に女性がぽかんと口を開けて固まる。
まるでこちらの事情なんてお構いなしのその強気な言葉に何だか可笑しくなったのだろう、ややあって、

「……ぷっ」
小さく吹き出した。
そしてそのまま笑みを浮かべる。
「くっ、あはははは……！　本当にね！　いつもこっちの事情はお構いなしだけどそんなこと言っていいの？　実は酷なこと言ってるかもだけど」
「だって私その理由知らないし。聞いてほしいなら聞くけど、話す気もないんでしょ？　だったら正直にこう言うしかないじゃん」
「そりゃそうだ、あはは！」
「まーた、妙に笑いのツボ入っちゃってるし……」
先程とは打って変わって可笑しそうに声を上げて笑う女性の姿に妊婦は呆れたのかやや冷めた視線を送る。だが、そんなところも彼女らしい、と納得すると気を取り直して用事を告げた。
「ま、何でもいいけど今日は家に食べに来てよ。今年最初の収穫だし、腕によりをかけて作るからさ」
「へぇ、それは期待しても良さそうだね」
「当然。料理で旦那を捕まえたようなもんだからね。やっぱ男は胃袋から攻めるに限るわー」
「あはは……それじゃあ後でお邪魔しようかな」
「はい、後でいらっしゃい」
気がつけば二人の間の空気はいつもと同じ様に透き通っていた。
この時まで、この村は平和そのものであり、多くの人が穏やかに暮らしていたのだった。

人類のとある国家の勢力圏に魔軍が侵入したのは約二時間ほど前だった。
草原を覆い尽くすほどの多くの魔物兵がその大地を征く。
数にしておよそ――二十万。
魔軍の単位にして十個軍の大軍勢の襲来に、国は総力を上げてそれを撃退せしめんと多くの兵を動員した。

大陸中原に領土を広げるこの大国は肥沃な土地と強力な軍隊を保有しており、近年では魔軍を完全に撃退した事例すらある。しかしこの規模の侵攻は今までに例を見ない。国を主導する首脳陣もこれには青ざめた。だが逃げるわけにもいかない。今ある兵の殆どを動員する、その数およそ二十万。それらを国境に向かわせ魔軍を追い返すための戦争が始まった。

――だが、彼らは忘れていた。そして改めて実感した。

彼らはわずか一週間で魔軍に敗北したのだ。

開戦当初は少なからず拮抗していた。多少押されていたものの魔軍相手でもこれなら持ち堪えられると兵達は希望を持った。

しかし、それは粉々に打ち砕かれた。他ならぬ魔人の存在によって。

魔人レオンハルト。

彼が戦場に出てくると流れは直ぐに変わった。

単身敵陣に深く切り込むと多くの指揮官を一騎打ちで屠っていった。麾下の兵達が動揺する中、レオンハルトは手心を加えることなくほぼ全ての指揮官を斬り捨て、最後には敵陣の後方にいる将軍をも討ち取った。

そしてこれが勝敗を決定づける要素となった。軍全体に上手く指示が伝わらず、用兵に長けた人物もいなくなり、軍としての秩序を保てなくなった。敗北を悟り、士気が地に落ちた兵達は次々と逃亡した。残った兵達は当然、魔軍に殺された。

最早、国に対抗する力はない。後はどれだけ被害を減らせるか――そういう戦いになったのだ。

戦闘を終えた魔軍の陣地では明るい雰囲気が漂っていた。

「ふはは！　圧倒的じゃないか我々の軍は!!」

「うむ。これ程短期間で決着がつくとはな。大国と聞いてはいたが所詮は人間ということか」

魔物将軍達が次々と陣の中央に集まり、勝利を称え合う。

それもその筈、本来ここでの戦闘は二週間程で終了すると魔物将軍達は計画していた。数の上では同値ではあるが魔物と人間では地力が違う。最初は拮抗してもその差が徐々にはっきりと現れ人間はその数を減らしていくだろう。そう考えていた。

だが魔軍にとっては良い意味で予想を裏切られた。人間の精神が遥かに脆弱であったこと。それが一つ。

そしてそれを引き起こした存在を彼らは褒め称える。

「レオンハルト様！　お疲れ様でした！」

「お疲れ様でした!!」

「――ああ」

本陣にゆっくりとその彼――魔人レオンハルトがその姿を現した。前線からちょうど戻ってきたところなのだろう。闘気が若干まだ漏れ出ており、表情は固いまま口少なく返事をする。

魔物隊長以下、魔物兵などはその凄みに気圧されたのかごくりとつばを飲み込む。この方が味方であって良かった、そう思わざるを得ない。もし敵であったのならここに居並ぶ魔軍の幹部は皆、首を落とされているだろう。

側近である魔物将軍はその働きによる結果を言葉にしようと口を開いた。

「レオンハルト様。現在敵兵の多くは統制を失い、散り散りになって逃げ惑っているようです」

「……やはりまだ残る者はいるか」

「はい。レオンハルト様の活躍によって敵将はもう残っていない筈ですが……やはりこれほどの大軍となると気骨があるものは未だ戦い続けていますね。街も近いですし」

「……そうか」

レオンハルトはそこで一度息を吐くと目を瞑る。そしてしばしの沈黙。

魔物将軍はそれを急かさず待った。レオンハルトは何かの作戦や決断をする時にはこうして考え込むように目を瞑ることが多い。実際に思案を行っているのだと魔物将軍は経験から予測していた。こ

の後には必ず何かの指示が来る。自分はそれを実行出来るように待命するのみ。
やがてレオンハルトの目蓋がゆっくりと開かれると魔物将軍にその命令を下した。
「逃げるなら好きにさせろ。残るなら――殺せ」
「はっ！　伝令！」
その命令を聞いた魔物将軍が近くの魔物兵に前線への指示を伝える。
今戦場にいる敵を殲滅しろ、と。
レオンハルトはその声を黙って――何処か噛みしめるように聞いていた。

――まったく……ままならないな。
レオンハルトは戦闘を終えて陣に戻ってくると、疲れたように息を吐いた。
体力的に疲れているわけではない。精神的に疲労する戦いだった。
魔物将軍が口にしたように、レオンハルトは敵の確認出来るだけ全ての指揮官を殺して回った。
それは偏に犠牲を減らす為であったが……敵が多すぎるのが問題だった。
何せ二十万対二十万の大軍での戦いだ。いつものように座していては敵将が自分のところにやってくる確率は極めて低いし、時間もかかる。その間にも被害は増え続けるのだ。
故に自分から打って出ることにした。
単身敵陣に入り込み、最小限の立ちふさがる敵兵を斬り捨てながら敵将を目指した。そして一騎打ちを仕掛けて首を落とせば息つく暇もなく次の標的を探して戦場を駆け巡る。
もはや討ち取った敵将は途中から数えていない。二百は超えているだろうということしか分からない。
一週間の戦闘でこれだけの将を討ち取ったかいがあったのか半数

程度の敵兵は逃げていっただろう。
だが残り半数は一週間でその数を減らし、そして残った少なくない兵も今なお戦場に残り続けている。
そしてそれを聞いて非情な決断を下した。
これ以上の犠牲を減らすことは出来ない。今戦場に残り続けている兵達にはこれだけやっても戦い続ける理由が、矜持があるのだろう。そしてよく訓練されているのが今回の戦闘でわかった。
そんな彼らが逃げることはない。ここで逃げれば多くの人々が魔物に蹂躙されてしまう。その中には愛する家族や友がいるのだろう。それを守ろうとする意思を砕くことは出来ない。
……切り替えるか。
レオンハルトは戦闘で昂ぶっていた気を落ち着かせると、周囲に目を向けた。現在周りにいるのは前線を指揮している者を除いた数名の魔物将軍や魔物隊長。皆、口々に今後の進軍案や拠点にする場所について話している。
そこでレオンハルトは気づいた。そういえば見当たらない奴がいる。
「……そういえばキャロルは何処にいる。姿が見えないが」
「キャロル様……そういえば見当たりませんね」
側近の魔物将軍に聞いてみるが彼も今気づいたようだ。周囲を見渡していないことを確認すると別の魔物将軍にも視線で言外に聞いてみる。
その意を汲み取ったその場にいる魔物将軍らは次々と情報を口にする。
「さっきまではここにいた筈ですが……」
「何か地図を見て唸ってなかったか？」
「自分が見た時はレオンハルト様の名前を呼びながら何やら悶えていました」
不確かな情報ばかりが口々にレオンハルトにもたらされる。レオンハルトは自分の使徒を思い頭を抱えた。
「何やってんだあいつ……」

「お呼びですか――!!　レオンハルト様――!!」
「!」
そんな時、前線の方向から高い声が聞こえてきた。キャロルの声だ。
そして少し遅れて本陣に飛び込むように走ってきたのは他でもない金髪ツインテールの使徒。
快活な印象を受ける顔をこちらに向けてくるとビシッとポーズを決めた。
「レオンハルト様の忠実たる下僕、魔物界一の完璧使徒キャロル！
レオンハルト様の役に立つ為に情報を仕入れてきましたわ!!」
「……」
その場の空気が凍る。魔物将軍らが絶句する中、レオンハルトは多少の恥ずかしさを何とか抑えると、溜息混じりにキャロルに声を掛けた。
「……色々聞きたいことはあるが、それは一先ず置いておく。役に立つ情報ってのは何だ？」
「はい！　この地に置く魔軍の拠点候補についての情報ですわ！」
「拠点について……だと？」
「はい！」
レオンハルトの問いに再度頷き返したキャロルは中央に広げられたテーブルに近づくとその上の地図を手で示した。
「予定ではこの先にある街を占拠する予定でしたが、それよりも近く立地も完璧な場所を見つけましたの！」
キャロルがそう豪語すると居並ぶ魔物将軍らも興味を抱いて自然と中央に集まる。
最初に声を上げたのは側近の魔物将軍だ。
「……確かに拠点にする予定の街は些か遠いですが……ここより近い街や集落はなかったはずです」
魔物将軍の言葉に周囲も同意する。事前の調べでは長期の拠点に出来そうな場所はこの先の街しかない。
そしてそれはレオンハルトがこの地に大規模で攻め込まざるを得

なかった理由でもある。魔軍はこの場所、この地域に拠点を置きたいのだ。
そもそもの発端はこの地を領土とした国にある。
大陸中原のこの場所は大陸の交通の要所であり、軍事的な要所でもある。魔軍でも各戦地に軍を送る際や物資を運ぶ際にはこの地を通っていた。
大陸南方に行くには言わずもがな、北方との間にはバラオ山脈という東部と北部を分ける大きな山脈がありそこを通ることは不可能とは言わないまでも何かと不便だ。
そしてそんな要所である地をこの地域に根付く国家が国力に物を言わせて領土としたのだ。これに魔軍が激怒した。
人間の分際で自分達が使っていたその要所の権利を主張した。
それも横取りのような形で。
見逃してやっていたというのに調子に乗りおって。
取り返すべきだ。
これらの声が多くの魔物将軍達からレオンハルトに寄せられた。そしてこれをとうとう無視出来なくなった。
最初は抑えていた。幸いと言っていいのかこの地を領土とされはしたものの街などは無かったし、勝手に通っても実質的な被害は何もない。まさか勝手に通ったからと言って魔軍に抗議文を送ってくるほど相手も馬鹿ではない。
それを抑えきれなくなったのはやはり先日の戦闘が切っ掛けだろう。
他の国と同じく定期的な侵攻を北側から行っていたのだが、この国家は精強な兵と強力な軍隊を保有しており、魔軍も攻めきれないでいた。
レオンハルトも拮抗して粘っているならば、これ幸いと敢えて放置していたが……それが良くなかったのかもしれない。
有ろう事かこの国の軍隊は北方にある魔軍の陣地に大規模な襲撃を掛けてこれを殲滅してしまった。
相手の強さが予想より上だったか、それと魔人がいなかったのも原

因だろうか。とにかくこの出来事は魔軍の逆鱗に触れてしまった。
　そして最終的には折れざるを得なかった。だがレオンハルトはそれでも国を滅ぼすことはせず、要所に拠点を置けば後は適度に兵を残して撤退しようと考えている。戦う力は今回で削ぎ落としたし、相手も流石に懲りたであろう。後は他の地域と同様の戦略を実行するだけだ。
　レオンハルトはそれを思い、眉をひそめる。他の魔物将軍などには拠点を作ることだけで留めているが、これらの考えは全て使徒であるキャロルには伝えてある。
　目的はこの作戦を遂行するに当たって、犠牲を少なくすることだ。街を拠点にする際、少なからず住民は犠牲になるが出来る限り殺戮を控えさせて他の地域のように略奪や陵辱に留めさせれば死者自体は抑えられる。人間を出来るだけ滅ぼさないようにするにはこれしかない。
　だが犠牲をより少なくできる場所が見つかったのだろうか。
　キャロルは魔物将軍らが注目する中、それを自慢気に話し始めた。
「ふふん、それがありますのよ。ちゃんと街で調べてきましたから間違いないですわ」
「……待て、街だと？　お前街に行ってきたのか？」
　レオンハルトは聞き捨てならない言葉を聞いた為、それを改めて確認する。
　キャロルはこちらに向かって胸を張って答えた。
「はい！　わたくしの容姿なら人間に紛れ込めるかと思ってひとっ走り行ってきましたわ！」
「……つまりお前のその情報は現地民から直接聞いてきたってことか」
「その通りですレオンハルト様！」
　レオンハルトはその行動力に呆れ返る。とんだ諜報員もいたものだ。バレたらどうするつもりだったのか。そもそも行動が自由過ぎるとか色々言いたいことはあるもののここに限っては呑み込む。先に成果を確認してからでも遅くない。もし悪い結果になれば帰った

後でめちゃくちゃに扱いてやろう。
「それで……その場所はどこにある？」
「はい！　ここですわ！」
　地図のとある一点を指差してキャロルは説明する。
「ここに小さな村があるそうです！　ここなら人口も少ないですし、住民の多くは取れた作物を街に卸して生活しているそうですわ！」
「……なるほどな」
　その途中の言葉にレオンハルトは反応する。勿論表情や態度にはおくびにも出さない。
　確かに立地も街に比べて都合がいい上に、人口が少ないときた。ここであれば街を占拠するよりかは被害も少ないし、抵抗も少ないであろう。街から遠く離れた場所というのも悪くない。距離が近ければ拠点を作った後に小競り合いも増えて犠牲も大きくなる。
　考えれば考える程、都合のいい場所だ。魔物将軍らも犠牲云々は考えてはいなくても街よりもさらに交通的要所に近いこの場所を口々に検討しあう。
　しかし深く検討させればより楽しめるであろう街を推す意見も出るだろう。レオンハルトは今の流れが続いている内に決断しようと口を開く。
「……キャロル、魔物将軍」
「はい！」
「はっ」
　呼びかけに返事を返す忠臣達にレオンハルトは命令を下した。
「予定を変更する。戦闘が終わり次第この村に進軍するぞ」
「かしこまりましたわ！」
「……仰せのままに」
「はっ！　了解致しました！」
　恭しく了解する二体を目にした他の魔物将軍もそれに倣って頷きを返す。
　レオンハルトは命令を了承して動き始める周囲から視線を切ると、地図の一点、村があるという場所を見つめる。

そして誰にも聞こえない程度の声量で、
「……悪く思うなよ」
顔も知らない住民を思って一度だけ謝罪した。

謎の女性

平和な村にその報が届いたのは間もなく夕刻に差し掛かろうという時間帯。
村の入口に一人の男が現れた。その血に濡れた姿を見て村人がギョッとする。
「う……ぐ……」
「なっ!? お、おいアンタ! 大丈夫か!?」
「兵士、か? 酷い怪我だが……とにかく治療を!」
血相を変えて兵士を助けようと動く村人。日常では見ないレベルの怪我人にその場は少しあたふたと浮き足立つ。共通するのはとにかく治療をしようという動き。
しかしそれに待ったをかけたのは当人であるはずの兵士だった。彼は震える声を必死に絞り出してそれを伝える。そのために彼は瀕死の身体に鞭を打ち、ここまで辿り着いたのだ。
「に、げろ……」
「え?」
「逃げ、ろ……! 魔、物が……魔軍が来る――」
「え……お、おい!」
その言葉を最後に兵士の身体から力が抜けた。村に一人だけいる神魔法の使い手がやって来て診療するも彼は既に息絶えていた。人が死ぬところをまじまじと見た村人は一時騒然とするが、それに拍車をかけたのは彼の最後の言葉だった。
「魔軍が、来る……?」
「魔軍って、大勢の魔物だよな……色んな所で暴れまわってるっていう……」
村人もその言葉の意味は知っていた。だが、あまりにも普段の日常とかけ離れた単語であった所為か、事実を認識するのが少し遅れた。
空気が一瞬凍りつき、その次の瞬間に一気に沸騰した。
「ななな、何だって……!?」
「本当にここに魔軍が来るの!?」

「ど、どうすればいいんだ……このままここにいたらこの兵士みたいに殺されちまうんじゃ……」
「とりあえず逃げないと……！」
「皆、落ち着いて！　一体どうしたの!?」
騒ぎ立つ皆を見てやって来たのか黒髪の女性が一喝する。村人はその女性に青ざめた表情で叫ぶように告げた。
「は、ハンティさん！　魔軍が！　魔物がここに来るって……！　国の兵士が教えに来たんだ!!」
「っ！　魔軍が!?　まさかっ……！」
「あっ!?」
黒髪の女性――ハンティと呼ばれた女性が慌てたように表情を変えると、突然その場から消えてしまった。村人は急に消えたハンティを探して周囲を見渡すがどこにもいない。一瞬でこの場からいなくなってしまった。
「ハンティさんが消えた……」
頼れる人がいなくなってしまい、パニックになるかと思った次の瞬間、ハンティは再び村人が集まる中心に現れた。
それに気づいた村人がまたすぐに駆け寄る。
「あっ！　ハンティさん！　今のは一体――」
「皆早く逃げて！　今すぐ!!」
「えっ？」
ハンティは血気迫る様子でそれをその場にいる全員に周知した。
「もうすぐ近くまで来てる！　三十分もしない内に魔軍が来るよ！」
「え、あ……」
その言葉に今度こそ村人の顔から血の気が引いた。
切迫した身の危険が直ぐそこまで来ている。どこか危機感を捉えきれていなかった村人たちも兵の死体と女性の必死の形相に恐怖と危険を感じ取った。
「ま、魔軍が……！　魔軍が来るぞ!!」
「逃げろ！　殺されちまうぞ！」
「で、でもどこに逃げれば……！」

「とにかく街へ向かって！　全員で集まってる時間はないから急いで！」
「は、はい！　ハンティさんは……」
　男は必死に指示を出すハンティに問おうとしてそれを止められた。先に答えを言われたからだ。
「後は村長の指示に従って動いて！　あたしはちょっと時間稼ぎしてくるから頼んだよ！」
「はい！　……あれ？」
　男が頷いた瞬間、ハンティはまたしても瞬時にその場からいなくなる。どういう事だ、と疑問が浮かぶがそれを考えている時間はない。男はその報を村人に伝える為に走り出した。

　二十万近くの大軍。その数は当初よりも減っているものの未だ大地を埋め尽くすほどの数が村に向かって進軍していた。
　その先頭集団を行く魔物兵達は余裕の表情で村へと急ぐ。仲間の魔物兵と共にこの後の行動についての会話で盛り上がっている様子だ。
「へへっ、久しぶりに人間の町を襲えるな」
「町じゃなくて村らしいぞ？　人もそこまで多くないんだとか」
「えぇ……それじゃあんまり楽しめそうにないな」
「俺は女がいればいいけどなぁ……でも、今回はこれだけの人数だし、いても順番待ちが長そうだ」
「俺達はまだマシだろ。後ろの方の奴らなんて順番が回ってくる頃には殆ど壊れちまってるだろうしな」
「ぎゃはははは！　違いねぇ！」
「お前達、気持ちはわかるが少し気を引き締めろ。そういうのは村を占拠し終わってからだ」
「へーい！」
　魔物隊長が軽く諌めるもその声色からは喜色の感情が抜けていない。それも致し方ないことだろう。多くの魔物兵にとって人間の町

を襲うことは魔軍にいて最も楽しい時間だからだ。殺戮、略奪、陵辱などのこれらは野良で過ごしていては味わえない。魔軍に所属しているからこそ楽しめる娯楽なのだ。その証拠に魔物隊長も部下に注意しながらも占拠し終えたら何をしようかと思案せざるを得ない。

しかし仕事を忠実にこなさなければそれすらも取り上げられる可能性もある。レオンハルト様は魔人の中でも特に職務に厳しいお方だ。逸って失敗をしてしまえば目も当てられない。

故に警戒は怠らない。先の戦闘で人間の軍は叩き潰したものの、残党や予備兵力を隠し持ってる可能性はゼロではないのだ。

――悲鳴が聞こえたのはそんな時だった。

「ぎゃあああああっ!?」

「な、何だこいつ――ぐぁあ!?」

ふいに右方向からつんざくような雷鳴と同時に魔物兵の悲鳴が聞こえた。魔物隊長は急いで部下に確認を取る。

「何があった!」

程なくして魔物兵が大慌てで魔物隊長に報告する。

「魔法が飛んできた模様です!」

「魔法……人間の兵がまだ残っていたか。相手の数は?」

「いえ、それが……どうやら一人のようです」

「……一人だと?」

魔物隊長はその言葉を疑った。胡乱な視線で魔物兵を見る。

「一人ならさっさと押し潰せ。魔法使いは確かに厄介だが詠唱後に囲んでしまえば――」

「それじゃ試してみる?」

「ん……んん!? 貴様、どこから――ぐぅっ!?」

魔物隊長は突然目の前に現れた黒髪の女性に目を丸くして驚くも、女性がその手に持った剣で胴を切り裂かれた。

「た、隊長!?」

「こ、こいつ急に現れたぞ!」

魔物兵は自分達の隊長を殺されて狼狽える。それを行ったのは何の前触れもなく魔軍の中心に現れた一人の女性。魔物兵達がそれを

見て口を開く。
「……でも、結構いい女だぞ」
「この数なら勝てるんじゃねぇか？　隊長が殺されたって言っても不意打ちだし、こっちは二万人も残ってる」
「誰か将軍か他の隊長に伝えた方がいいんじゃないか？」
「全員でやっちまおうぜ。そんで犯しちまおう」
　口々に魔物兵達が下卑た言葉を連発し始める。魔物隊長が殺されてその場の魔物兵達は足並みこそ揃っていないもののそれなりの威勢の良さを見せる。それを聞いていた女性は顔を顰めながら詠唱を終えると、
「……ったく、魔物ってのは下品で嫌になるね！　電磁結界！」
「ぎゃあああああああああっ!?」
　女性を中心に高電圧の結界が広がりその場にいた魔物兵達は一瞬の硬直の後、焼けたように黒ずんで倒れていく。電磁結界。雷属性魔法の中級呪文であり広範囲の射程が特徴の魔法だ。しかし中級とはいってもまだまだ珍しい魔法使いに範囲外にいた魔物兵らも戦慄した。
「ひぃっ!?　こ、こいつ強いぞ――！」
「に、逃げて将軍に――」
　その場から離脱しようとする魔物兵。
「逃さないよ！　雷撃！」
「がああああああ――っ!?」
　しかし続けざまに放たれた雷によって背面を貫かれる。その場は泡を食ったようにパニックになった。
「何事だ！」
　だが、その騒ぎを駆けつけてきたのだろう。大軍の奥から別の魔物隊長が現れる。魔物兵は女を指差して伝えたが――それは叶わない。
「あの女です！　あの女が――ぎゃあっ!?」
「なっ――くっ、魔法使いか！　お前ら、詠唱後を狙え！」
「おおおおおっ！　なら今だ!!」
　魔物隊長は報告しようとした魔物兵が雷に打たれて殺されたこと

で、瞬時に状況を理解する。魔法使いの魔法は強力かつ回避不能ではあるが、次弾を撃つまでに隙がある。それを周囲の魔物兵に向かって指示した。
指揮を執る魔物隊長がやって来た事で魔物兵の動きに組織的なものが復活する。魔法を撃った直後の女性に魔物兵が殺到した。
魔物兵が腕を振り上げて女を襲おうとする。
だが――
「――――」
「なっ！　消えた!?」
「一体どこへ――ぐへっ！」
その場から消え去った女性は魔物兵の背後に現れると剣を薙ぐように振るい魔物兵を絶命させる。そしてその場で釘付けにするかのように剣を突きつけて叫んだ。
「悪いけど、しばらく遊んでもらうよ！」
「ひぃっ、た、隊長……！」
「くっ、何だこいつは……ええい！　お前は今すぐ将軍に知らせてこい！　残りは全員で掛かるぞ！　所詮は女一人だ!!」
「う、うおおおおおおぉぉぉぉぉぉ――!!」
得体の知れない強さと迫力を持つ女性に気圧されるも、数の優位は揺るぎない。故に報告を急がせながらもこの場で倒してしまおうと激励しつつ支持を出す。
魔軍の先遣隊とたった一人の謎の女性。本来なら女性の勝ち目がない筈の戦いは、予想に反して魔軍の劣勢から始まった。

――その報告を聞いた時、レオンハルトは自分の耳を疑った。
「先遣隊がやられた……？　どういうことだ。詳しく説明しろ」
魔軍の本隊。その中心でゆっくりと行軍を指揮していたレオンハルトは怪訝そうな顔で報告してきた部下に尋ねる。
「は、はっ！　どうやらとある女性に魔物将軍が殺されたそうです。

魔物兵はその殆どが逃げ惑い、残った魔物隊長が何とか数百名程をまとめて戻ってきました、が……先鋒を任せていた軍は壊滅致しました」
　魔物将軍は出来る限り冷静にそれを述べたが、そう見えて動揺しているようであり信じられないという思いが声色から漏れ出てしまっている。
　レオンハルトはその事実らしい言葉に内心驚く。まさかまだ兵が残っていたのかと。だが続く質問でその想像は裏切られた。
「相手の規模は？」
「……おそらく、一人」
「一人か。だがおそらくっていうのは何だ？」
　レオンハルトはまたしても驚かされる。それだけの少ない人数で二万の魔軍の軍勢に攻め込みそれを崩壊せしめたというのは十分感嘆に値する。
　しかしおそらく一人とはどういうことなのだろう。それだけの少人数なら数がはっきりしないのはおかしい。
　それについても魔物将軍は説明した。
「報告によれば敵は単身で突撃してきたそうなのですが……それだと説明がつかないことがありまして」
「……続けろ」
「はい。何でもその女性は目の前に現れたと思って襲いかかっても、次の瞬間には別の場所で戦っているそうです」
「はぁ？　それは何だ？　瞬間移動でもしてるって言いたいのか？」
「私もにわかには信じられないですが……報告に来た魔物隊長が揃って証言しているようでして」
「……なるほどな」
　思わず馬鹿馬鹿しいとぞんざいな声色で問い返してしまったが、魔物将軍が言うにはこの証言は共通したものらしい。レオンハルトは思考を巡らせる。
　とにかく軍を一つ減らされたのは確かで、どうやらそれを単身で成し遂げるくらいの強者がいることも確か。その事実にレオンハルト

は興味を抱く。そうであるならもう一度部隊を分けるのは愚策でしかない。故にあっさりと方針を固めた。
「このまま向かうぞ」
「……良いのですか？」
　魔物将軍がその是非を問う。レオンハルトはそれを淡々と説明してやった。
「ただ強いだけってんなら俺が出ればいい。瞬間移動が本当なら対策の仕様がない。少なくとも今の所はな。……それに村ももう近いんだろ、キャロル？」
「あ、はい！　もう目と鼻の先ですわ！　十分もすれば見えてくるかと！」
　後ろに控えていたキャロルに尋ねると元気よく返事がくる。それを聞いてレオンハルトは満足そうに頷いた。
「部隊を分ける方が危険だからな。このまま進め。ただ、警戒だけは怠るなよ？　その女を発見したら戦わずに俺のところまで報告させるよう全軍に徹底させろ」
「……はっ、ではそのように」
「レオンハルト様の為にその女性を見つけ出せば……ふふ」
　疚しい事でも企んでいるのか頬に手を当てて陶酔したような表情になるキャロル。
「……キャロル、お前は大人しくしてろ」
「……はぁい、わかりましたわー……」
　様子がおかしい使徒に不安になってきたので名指しで釘を刺しておく。少し不満そうな表情を浮かべたキャロルだったが、自分のやや強い声色に渋々了承した。
　レオンハルトはそのまま魔物将軍にその後の指示もついでに伝えておく。
「村に着いたら普段どおり、村の中を探索して住民を一箇所に集めろ。俺の指示があるまで魔物兵には一切の手を出す事を禁じる。それだけは徹底させろ」
「はっ、わかっております」

人間の町を制圧した時のやり方は既に多くの魔物将軍は把握している。これまでに何度も続けてきたからだ。一部の魔人が率いる魔軍などではやり過ぎるきらいがあるものの、ことレオンハルトが指揮する場合にはこれらの指示を無視する輩は殆どいない。これを破ればどうなるかを知っているからだ。

だが、最終的に行うことは他の魔人と変わりない。レオンハルトがやるのはある程度の選別と、死者を減らすことだけだ。これらは魔軍を指揮するに当たって最低限必要な事である。最近ではレオンハルトと多く関わる個体を中心に、軍人志向で高潔な性格の者や、武人肌で戦いを好んでそれら以外には興味が薄い魔物将軍や魔物隊長も増えてきてはいるものの、まだまだそういった層は多数存在するのだ。

そこまで考えるとレオンハルトは村を前にして気分を変える。次に考えるのは魔軍を単身で潰した女のこと。

――それにしても女か。今回の遠征は色々憂鬱だったが……最後に少し楽しめるかもな。

まだ見ぬ強者に多少の期待感を抱くレオンハルト。

そして彼が率いる魔軍は程なくして村に辿り着き、その光景を目にすることとなった。

――もぬけの殻となった村の光景を。

「……」

レオンハルトは辺りをぐるりと見渡した。

村を魔軍の制圧下に置くことには成功した。キャロルが言っていた通り小さな村ではあるものの住居の数にしては敷地自体は予想よりもかなり広い。土地の多くを畑や裏手にある森で占めている所為だろう。

だが流石に約二十万いる魔物兵を全て村の中に収容出来るほどではない。その大部分は村の周囲を囲むように固めさせ、哨戒に当たらせている。今だ残党や例の女性が襲ってこないとも限らないからだ。

そして魔物兵の大部分がいないとはいえ、村の中では魔物兵達によ

る捜索が始まっており、それを魔物隊長が指揮している。彼らにとっては後の楽しみを得る重要な行為。その作業に手抜きは見られないものの何処か焦りの色が見える。
やがて捜索を一通り終えたのか一体の魔物隊長が近寄ってくる。現在レオンハルトは村の中心であろうそれなりの広さがある広場にキャロルと先の戦闘で失った一体を除く九体の魔物将軍と共に報告を待っていた。簡易的な司令部をここに設定したのである。
そこに近づいてきた魔物隊長はやはり焦ったような声色で、
「だ、駄目です！　人っ子一人見つかりません！」
と報告した。それを聞いた魔物将軍達は唸る。
側近の魔物将軍はレオンハルトに向かって自分の考えを告げるため口を開いた。
「……やられましたな。おそらく襲ってきた女性というのは村人を逃がす為に時間を稼いだに違いありません」
「……ま、だろうな」
周辺の報告も予め聞いていたレオンハルトらはそれに頷く。戦争が始まって直ぐに疎開したにしてはおかしな部分がある。それを口にしたのは背後に控えるキャロルだ。彼女は相も変わらず自信たっぷりに口を開く。
「生活感残りまくりですわね。農具や収穫物もそのまま放置されてますし、慌てて逃げていったようですわ！」
そう言って無駄にドヤ顔を見せつけるキャロル。レオンハルトにだけかと思いきや何故か魔物将軍にも。彼女はどうやら魔物将軍にも自らの働きを自慢したいようである。おそらく自分がコマンダーの時からレオンハルトの側近を務める魔物将軍らを勝手にライバル視しているのだろう。そして説明を受けた魔物将軍は反応に困り
「さ、さすがですキャロル様……」と若干狼狽えつつキャロルを称賛したが、そんなこと言われなくても魔物将軍達にも分かっていた。
「一応、裏手の森も捜索隊を回していますが……この分だと期待薄でしょうね」
そして今度は別の魔物将軍が意見を述べる。やはり村人は全員逃

げ去ってしまったようだ。
レオンハルトはその事を考え、しかし魔物将軍らに方針を改めて伝える為に口を開く。
「……仕方ない。哨戒には引き続き当たらせるがこのまま拠点の設置に移行するぞ」
魔物将軍らはそれに頷きを返す。どうやら意見は同じらしい。しかしそれを聞いていた魔物兵や魔物隊長らは落胆ぶりが垣間見える。広場に司令部を置いているので割と丸聞こえなのである。
だが、今回に限ってはある意味知らしめるのも悪くはない。
というのもレオンハルトとしては村人に逃げてもらうのは都合がいい。こうやって全員が逃げてくれたおかげで気の進まない行為を無理にやらなくても済むからだ。
魔物兵としても人がいないならそういった暴行も行いようがない。こちらが許可するしない以前の問題だ。諦めざるを得ないだろう。
――戦えないのは少し残念だけどな……ま、こうなるならいいさ。
魔軍を襲った見知らぬ女性に内心――複雑な心持ちであるが感謝する。個人的には楽しみを裏切られたような気持ちはあるものの背に腹は代えられない。結果犠牲を減らせたのならばそれは最善だったのだろう。
レオンハルトは思わず息を吐いた。これで肩の荷が下りる。後は拠点を設置し終えて帰還するだけだ。難しいことや気を揉むようなことは何もない。
「魔物兵を工事に当たらせろ。まずは資材を――」
レオンハルトが肩の力を抜いてそう口にした時――その声は聞こえた。
「――ちょっと！　離しなさいよ!!」
裏手の森に続く農道。その方向から女性の声が響く。周囲のキャロルや魔物将軍達も気づいただろう。その方向に一斉に目を向けると魔物隊長に縄で縛られた二人の人間がいた。
その内の一人である女性はもうひとりの少女を庇うように魔物隊長に勇ましく怒声を浴びせている。

「私だけ連れていけばいいでしょ！　この娘は解放して！」
「う……お、お姉ちゃん、どうしよう……」
「ええい！　黙れ黙れ!!　先程からうるさいぞ貴様！」
「解放したら黙ってあげるわよ！」
「ちっ……だが、その減らず口も何処まで聞けるか見ものだな。――レオンハルト様！」
「……！」
　広場に近づいてくると女性はこちらに気がついたのだろう。居並ぶ面々を見て戦慄したのだろうか、その間に魔物隊長が膝を突いて礼をする。
「この様な場所であるのでもうお分かりでしょうが改めて失礼致します。逃げ遅れた村人を二人連れてきました」
「……キャロル」
「はい！　魔物隊長、その二人を近くまで連れてきなさいな」
「はっ！」
「あっ、ちょっと……！」
　レオンハルトの意を汲み取ったキャロルが許可を出し、魔物隊長が二人を連れて中心まで歩いてくる。女性は抵抗してじたばたするも魔物隊長の膂力には及ばない。
　そして魔物将軍の内一体が声を出した。
「人がまだ残っていたか……だが、二人ではな」
　落胆の色を覗かせる魔物将軍に魔物隊長は意見を述べる。
「それもそうなのですが、この二人に逃げた先を聞いてみてはどうでしょう？　それさえ分かれば人間の足ですし、今から追いつくことも……」
「はぁ!?　言う訳ないでしょ！　馬鹿じゃないの!?」
「くっ、黙ってろ！　ど、どうですレオンハルト様。もしこの二人の尋問を任せてもらえれば直ぐにでも吐かせてみせますが……へへ」
「……お、お姉ちゃん……！」
「な、なっ……この外道！　私だけならともかくこの娘は関係ないでしょ！　子供は解放しなさいよ！」

ぬめりつく様な口調と視線がそこにはあった。少女の方の呼び方からしておそらく姉妹かそれに近い二人。少女の方は若干幼く女性の方は少しお腹が膨らんでいるものの彼女らの容姿はそれなりに整っていた。そして何をされるのか理解したであろう女性が抗議の声を上げるも誰もそれには反応しない。魔物隊長が下卑た視線を向けるだけだ。

魔物将軍達はそれを見て多少呆れる。彼らの目から見ても何を期待しているのか丸わかりである。そして魔物隊長の声に落ち着いた声で反応したのはレオンハルトではなく使徒であるキャロル。

「……レオンハルト様、どうしましょう？」

そう言ってレオンハルトに判断を仰ぐ。魔物将軍らも同様だ。何を狙っているのかは丸わかりだが、実際に発見してきたのは魔物隊長なので彼の手柄でもある。そうでなくてもその判断はレオンハルトが下すべきなのだ。

レオンハルトはそこで初めて二人に向かって声を掛けることにした。

「……ふむ、二人か」

「お、お姉、ちゃん……」

数を確認するだけの意味のない言葉。姉の名を涙目で呼ぶ妹だが、レオンハルトに視線向けられると恐怖したのかぶるぶると震えている。それも致し方ないことだろう。レオンハルトという上級魔人、魔人四天王に臆せずにいられるのは魔物でも厳しい。戦う心得もないただの人間に耐えられる筈もない。

しかしそれを受けてなお女はレオンハルトに向かって声を上げた。

「っ！　くっ……あ、あんたが魔人ね！　ねぇ、あんた！　親玉なら恥ずかしくないの!?　こんな子供にまで手をかけようとするなんて最悪よ！　この変態！」

「！」

「っ!?」

その言動に一同が凍りつく。声を発せたのも驚きだが、それよりもその態度の方が問題だ。魔人に無礼な態度を取るなど魔物でも殺さ

れてもおかしくない所業である。正気を疑う所業だ。魔物将軍らも戦慄する。
それに最初に声を発せたのは魔物隊長だ。
「な、ななっ、貴様！　レオンハルト様になんて口を……!?」
「きゃっ！」
魔物隊長が地面に女性を引き倒し、膝を突かせる。レオンハルトはそれをじっと見ていた。
そして女性の代わりに謝るように魔物隊長は処遇を提案した。
「……」
「申し訳ありませんレオンハルト様。この人間、どうやら躾が行き届いていないようで……尋問がてら礼儀を教育してやるはどうでしょう？　もし、レオンハルト様のお望みならば――」
と、そこまで続けた所でレオンハルトは短く判断を下した。
「――魔物隊長」
「っ！　はっ！」
レオンハルトという上位者の声に魔物隊長が口を閉じて平服する。下される命令に自分が期待する行為があると信じて。
「そいつらは俺が預かる。ご苦労だったな」
「はっ！　……え？」
レオンハルトの言葉に耳を疑う魔物隊長。一瞬の沈黙がその場を支配する。それに驚いたのは魔物将軍らも同じだったが間の抜けた声を出してしまうような愚は犯さない。
現に使徒であるキャロルはその言葉に耳ざとく反応した。
「魔物隊長？　何やら不満そうですけど……レオンハルト様の判断に何か異論でも？」
「！　い、いえ、ありません！」
その声には普段のキャロルとは違う剣呑な色が混じっている。主の判断に異を唱える輩は許せないと言外に語っているようだ――実際にはもうちょっと別の理由も混じっているのだが。
レオンハルトは周囲をぐるりと見渡すと村の奥に一軒家があるのを見つけてそれを視線で指す。

「魔物将軍、俺はあの大きな家を使う。キャロルはそこの二人をあの家に連れて行け」
そう言って魔物将軍、そしてキャロルに視線を向けたレオンハルト。滞在先に一番大きな家を使うと魔人が決めた。
それに対して返す言葉は了承しか持ち得ていない。
「はっ！　畏まりました！」
「……畏まりましたわ」
何故かキャロルだけ少し不貞腐れているような釈然としない表情を浮かべている。だが命令を聞かないという選択肢はないのだろう、魔物隊長が持っていた二人の縄をさっと手に取ると、さっさと終わらせようと言わんばかりに早足で歩き始めた。
「はいはい、じゃあ行きますわよー……」
「ちょ、ちょっと勝手に決めつけて――って痛い痛い！　引っ張らないでよ！」
「……」
少女の方は幾分さっきより大人しくなっている様だが、女性の方はキャロルに威勢良く文句を浴びせていた。先に行くキャロルを見やりながらレオンハルトは振り返り、魔物将軍にやや鋭い視線で命令を下す。
「……拠点の設置を始めろ。俺はしばらく休む」
「ははっ、直ぐに取り掛かります。今日はお疲れ様でした」
「ああ」
魔物将軍らの挨拶を受けるとレオンハルトは一際大きい家に向かって歩を進める。少し前にはずかずかと歩くキャロルとそれについていく二人の人間。
彼女らを見て、レオンハルトは小声でその内心を吐露した。
「……まだ肩の荷は下ろせそうにないか」
後を思うと何となくそんな予感がする。レオンハルトは沈んだ気分を吐き出す為に、人知れず息を吐いた。

交渉

草原の中、とある一団が一つの目的を持って駆けていく。
老若男女様々なその集団は焦りを滲ませたような表情で必死に近くの町まで向かっていた。
最初は絶体絶命かと思われた村人、直ぐそこまで迫っている魔軍に蹂躙されると思われたがそれはぎりぎりのところで回避された。
村に居候中のとある女性によって。
そしてもう少しで町に辿り着こうというところでその女性は突如村人の前に現れた。
「皆、大丈夫？」
「あ、ハンティさん！」
その黒髪の女性、ハンティ・カラーは村人の姿を見て不安を幾分か解消された。
その手に持った剣や衣服にはところどころ赤い斑点が付着していることから先程まで戦っていたことが容易に想像がつく。
荒事に縁がない村人でもそれは同様だろう。村人はその姿を見て心配そうに駆け寄っていく。
「ハンティさん、ありがとう。怪我はない？」
「ハンティのおかげで助かった！」
そういった声が村人から掛けられ、ハンティはほっとしたように息を吐いて笑う。
「あたしは全然平気だよ。それよりもこの分なら全員無事そうだしよかったよかった」
先程まで魔軍相手に大立ち回りを演じたハンティはその苦労を微塵も感じさせないように歯を見せて笑う。
実際、魔物兵など歯牙にも掛けない強さを持つハンティだが、それでも二万の軍勢を相手にするのはそれなりに大変な事であった。それにただ倒すだけでなく時間もかけなくてはならない。村人が逃げる距離を稼ぐには出来る限りその場に釘付けにする必要があったのだ。

結果、それを達成出来た。村人は助かったはずなのだが――様子がおかしいのに気づいたのはその時だった。
「……ハンティさん、その……」
「？　どうしたの？」
「……」
ハンティの言葉に村人たちは顔を俯かせ、目を伏せるなど様々な反応を見せる。ハンティが首をひねる。彼らの表情に助かったという歓喜の色や先程ハンティが姿を見せた時の安堵の色は鳴りを潜めた。それどころか悔やむような表情を見せる。
「ハンティ」
「村長……？」
ハンティが怪訝に眉をひそめるのと同時に村人の中から一人の老人が進み出てきた。ハンティも当然知っている。村の村長だ。疲労が強く顔に現れいつもより老け込んでいるように見える。このような事態になったのなら無理もないことではあるが。
村長はハンティの前まで来ると最初に頭を下げた。
「先にお礼を言わせてほしい。――ありがとう、ハンティ。お主がいなければ村の皆は魔物に殺されておったじゃろう」
「……お礼なんていいよ。あたしを受け入れてくれた恩を返しただけさ」
「それでもじゃ。助けられたことには変わりない……感謝する」
「……うん、わかった」
ハンティからすればこの村は故郷を除けば最も思い出深く大切な場所だ。それを守ることはハンティにおって当然のこと。だが、その思いを受け取らないことも出来ない。ハンティは感謝の言葉を受け取る。
そして村長は頭を上げて、ハンティと視線を合わせる。何故かその表情は暗いままだ。
「……その上で、気に病まないで聞いてほしい」
「……？　気に病まないでって――もしかして」
村長の言葉にハンティが目を瞠目させる。嫌な予感がして訳の分

からない焦燥感が胸を満たす。
　そしてそれは的中してしまう。
「二人……儂の孫娘二人は――まだ村に残っておる。おそらくじゃが魔軍に捕まってしまったじゃろう……」
「――っ!?　どうして――」
「……村の者の話だと裏手の森に行っていた妹を呼びに向かったらしい」
「くっ――今すぐ助けに――」
「！　待ってくれハンティ!!」
　それを聞いた瞬間、ハンティは踵を返そうとして――村長の叫ぶような声に止められる。村長は深い悲しみを必死に抑え込んでいるような辛い表情を浮かべていた。
「ハンティ、お主がどれほど強いかは儂らにはわからない……じゃが魔軍に捕まった二人を助けに行くことは無謀に過ぎる。もしかしたら既に……この世にはいないかもしれんのじゃぞ。その上儂らを救ってくれたお主をこれ以上死地に送るわけにはいかん……」
「……」
　震えるような声でそう絞り出した村長は断腸の思いでそれを告げたのだろう。今にも泣きそうな表情を浮かべている。自分の孫娘二人、それも一人は新しい命がお腹に宿っているのだ。それが既に失われているかもしれない。そう考えるだけで身が引き裂かれるような思いだろう。
「ハンティ……」
「あんたは……」
　そしてもう一人。村人の中から進み出てきたのはハンティも良く知るその青年。
　村長の孫娘でハンティの友人である彼女の夫であった。その足取りは重い。
　彼も村長と同じく悔恨、そして絶望の表情を浮かべている。
「無事な訳ないんだ……そりゃ本音では助けてほしいし、生きていると信じたい。でも、そんな筈ないんだ。魔物に襲われたら……ひょっ

としたら死ぬより酷い目にあってるのかもしれない」
「……」
ハンティはそれをじっと聞いていた。青年は後悔しているのだろう。自分も一緒に残っていれば良かったのかもしれない。一刻一秒の猶予も無かったとはいえそれを言い訳には出来ない。どうしようもなく自分の無力さと不運を呪っているはずだ。
まだ割り切れてはいないのだろう、行かないでほしいとは言わないもののハンティに死地に行ってほしくないという思いもあるのか青年はただ悔やみ続ける。
だが、それを感じた上でハンティは答えを出した。
「――ごめん」
「！」
突然の謝罪に村人が瞠目する。そして続く言葉を聞いた。
「気持ちは受け取るよ。でも……あたしは助けに行く」
「……っ、それは……！」
ハンティの決意に満ちた表情に何も言えなくなる。それはそういう思いがゼロではないからこそだろう。助かるならその方が良いに決まってる。どれだけ可能性が低くとも。それでも村人は自分達の無力さを嘆き、ハンティは迷わずそれを選びとった。
「安心しな、必ず助けて戻ってくるから。それに――」
ハンティは立ち去る瞬間、敢えて表情を一変させた。村人を安心させるように自信に満ちた表情で、
「――あたし、これでも結構強いんだから」
そう言い残してハンティはその場から一瞬でいなくなった。

広場から少し離れた場所に建つ一軒家は中々の広さだった。
ここいらの家の中では一番大きい。おそらくは村長か、村の有力者の住む家なのだろうとレオンハルトは当たりをつける。
室内には大きめのテーブルに八脚の椅子。炊事場には山程の食材が積まれている。食事の準備でもしていたのだろうか、切られた野菜

やお肉などその痕跡が見られる。
外から見て分かってはいたが二階もあるようで、玄関のすぐ近くには階段があった。
他にも幾つかの部屋があるがおそらくは寝室も兼ねた個人の部屋だろう。室内の様子から少なくとも四人以上がここに住んでいたようだった。
これなら滞在中不便することはないだろう、レオンハルトは適当な椅子を引き寄せてそこに座った。
そしてテーブルを背もたれにして床に座る二人の人間に視線を移す。
「さて……」
「くっ……！」
「お、お姉ちゃん……」
レオンハルトの視線を受けて怯えの色を見せる二人。少女は完全に怖がっているだけだが、女性の方は気丈にもこちらを睨みつけていた。
そしてこちらの声に反応したのはキャロルだった。二人の少女の傍らに立ち、レオンハルトに向かって指示を乞う。
「レオンハルト様、この二人どうしましょう？」
「……今、考えてる」
キャロルの質問に顎に手を当てながらそう答える。それを聞いていた女性はそこで何を思ったのか、どこか覚悟を決めたように深刻な表情になるとレオンハルトに向けて口を開いた。
「……ちょっと交渉しない？」
「……あ？」
「っ……！」
思考の外から思いもよらない言葉を掛けられ言葉にならない声が漏れる。
それに威圧感を感じたのだろうか、女性はぴくりと怯みを見せるもそれを何とか振り払い、レオンハルトと視線を合わせた。
「私があんたの奴隷になる。その代りに妹は解放してちょうだい」

「そんな……！　駄目だよお姉ちゃん！」
「あんたは黙ってなさい。それで……どう？」
　そう問われるもレオンハルトは返事を出さない。正確にはまだそれを理解仕切ってない。こいつは何を言ってるんだ、自分の状況を分かってるのだろうかとレオンハルトは軽く混乱する。
　そしてそんな中、キャロルが憤った様子で女性に敵意をぶつける。
「ちょっとあなた！　さっきから黙ってればレオンハルト様に失礼ですわよ！　立場を弁えなさい！」
「下っ端には聞いてない」
「し、下っ端ですってっ!?　こ、この魔物界一の完璧使徒であるわたくしに向かって下っ端！　……こ、この！　言わせておけば……！」
　キャロルがその言葉に腰の銃を引き抜く。そこでようやくレオンハルトは一度息を入れてから口を開いた。
「キャロル、やめろ」
「っ！　れ、レオンハルト様……でもこの人間――」
「俺の目的を忘れたか？」
「！　いいえ、忘れておりませんわ！」
「ならわかるな？　……悪いがちょっと黙ってろ、俺が話す」
「はい！　畏まりましたわ！」
　女性の無礼な態度に憤っていた様子のキャロルだったが、レオンハルトが言い聞かせてやるとすぐに銃を収めてピシッと不動を貫く。忠誠心は高いがそれ故に暴走しやすいのが玉にキズだ。良いところでもあるから直させようとも思わない。たまにレオンハルトが注意してやればすぐに覚える。それで済む話だ。
　レオンハルトはキャロルへの注意を終えると、改めて女性に視線を移す。未だにその瞳に揺らぎは見えない。その様子に少し興味を抱く。
　――少し試してやるか。
　レオンハルトはそう考え言葉を発した。
「……交渉と言ったな。キャロルじゃないがお前、自分の立場が分かっているのか？」

「何でもするわ。これでも要領は悪くないと自負してる」
「そうじゃない。交渉に臨める状態じゃないと言ってる。俺は今、お前達二人の生殺与奪を握ってる。何をしようが自由だ」
「……子供を奴隷にしても役に立たないでしょ」
「……はっ」
　その言葉にレオンハルトは思わず鼻で笑ってしまう。随分と純粋な考えだ。いっそ羨ましく思ってしまうほどに。
「とんだ世間知らずだな。言っておくが魔物にとって人間の楽しみ方は奴隷にするだけじゃない。意味もなく苦しめ、殺したりすることだって方法の一つだ」
「……っ、何それ……最っ低……！」
「……ああ、同感だ。それで話を戻すがな」
　女性はそれを想像したのか軽蔑するようにそう吐き捨てた。レオンハルトは感情を少し揺れ動かされながらも目の前の人間に対して続ける。
「交渉に臨める状態じゃないが、そこまで言うなら交渉だとしようか。お前が俺に提供できる材料は何だ？」
「それは……私が――」
「言っておくが謂わばお前達の所有権は今俺が保持してる状態だ。例えお前達二人が奴隷になると決めようがそれは交渉材料にはならない」
「そんなの無茶苦茶じゃない！」
「――無茶苦茶でもそれが現実だ」
「っ……」
　レオンハルトが視線に圧を乗せて言い切る。魔人に臆せず話せるのは凄いが、これはキツいだろう。体験した身として理解出来るが、魔人を目の前にすると生物としての格の差をはっきりと突きつけられるのだ。本能が魔人に対して恐怖し、逃げろ、従え、命乞いをしろと頭に訴える。戦いを知らない人間はそれに屈するしかない。
　レオンハルトは内心息を吐く。そろそろ限界か、と。
　魔人相手にここまで対等に話せる胆力は見事だ。故にそろそろ重

圧から解放してやろうと力を抜いた。そんな時だ。
「――っ！　この……人間舐めんなっ!!」
「えっ――ぎゃんっ!?」
「！」
女性が横に立っていたキャロルに立ち上がりざまに頭突きを見舞い、それが顎に当たって苦しそうな声を上げる。
縄が解けていたのか、だがどうやってとレオンハルトが疑問に思うが、それがキャロルの首元に突き付けられてすぐに正解を導き出す。
小型のナイフ。キャロルの首に当てられているのはそれだ。隠し持っていたのだろうと推測出来るがよくバレなかったものだ、魔物隊長も女性ということで油断したか、功に目が眩んだか、はたまた両方か。
レオンハルトはその一連の流れをじっと見詰めていると、女性がキャロルを人質にするようにしながら口を開く。
「油断したわね。こっちの、確か使徒だっけ？　魔人にとっては大切な部下なんでしょ」
「舌噛みまひたわ……」
「……」
首に突き付けられたナイフではなく、噛んだ舌を気にするキャロルにレオンハルトは内心呆れる。緊張感が無さすぎる。
だが、女性にとっては生きるか死ぬかの瀬戸際なのだろう。強い口調でこちらに語りかける。
「これで形勢逆転ね。傷つけられたくなかったら逃しなさい。そしたら解放してあげるわ」
脅迫の言葉も随分と優しい。それに正直だ。そこは嘘でも殺すと言わなければならない場面だろうに。
レオンハルトはそこで大きく息を吐いた。そして肩を竦める。
「……キャロル、戻ってこい」
「ひゃいっ（はい）！　はひこはいひはひは（畏まりましたわ）！」
「きゃっ――あっ!?」
「お姉ちゃんっ!?」

レオンハルトが命令するとまだ舌が痛いのか言葉になってない了承を返してキャロルが動いた。
女性のナイフを持つ手を掴んで返すと、そのままくるりと背後に回って腕を決める。
当然のことだが、ただの人間である女性に使徒であるキャロルを抑え込める筈がない。魔人を除けば魔物の中でもトップクラスの実力を持つのが使徒。まだまだ使徒になって日が浅いキャロルでもその身体能力は魔物将軍を凌駕する。魔物隊長に抑え込まれていた彼女たちが敵うはずがない。見た目が人間に近いと勘違いする気持ちはわからないでもないが。
「形勢逆転、か？」
「ぐっ……この……！　なんて力……！」
「ふふん！　けいへいひゃくへんふぇふわ（形勢逆転ですわ）！」
「……キャロル、多分もう治ってるぞ。普通に喋れ」
「え？　あっ！　本当ですわ！」
緊張感の欠片もない自分の使徒に溜息が出る。そろそろ話をまとめてやらないとキャロルがぽんこつになってしまいそうだ。レオンハルトは処遇を決定するため口を開く。
「……そろそろいいだろ。お前達二人の処遇を教えてやる」
「！　い、妹には手を出さないで！」
「う、うぅ……！」
その言葉に姉妹の肩がびくりと震える。先程の言葉を思い出しているのだろう。一体どんなことをされるのか恐怖しているに違いない。そんな事はないのだが。
レオンハルトは鋭い視線を二人に浴びせながら……そういえば先に確認しなければならないことを思い出す。
「――と、その前に聞きたいんだが……お前ら料理は出来るか？」
「……へ」
「……？」
その言葉が予想外だったのか、唖然とする姉妹。レオンハルトは再度質問を重ねる。大事なことだ。

「料理は出来るか？」
「……え、えっと出来るけど……妹もお手伝いくらいなら……」
「……うん」
姉にちらっと視線を向けられ妹もこくりと頷く。
それなら問題なさそうだ。レオンハルトはその返答に満足して処遇を口にした。
「なら料理でも作ってくれ」
「は、え、ええ……は……？」
どうやら理解が追いついていないのか、声を漏らし続ける女性にレオンハルトは首をかしげる。
「……どうした。出来ないのか？」
「え、あ、いや……出来るけど……それって一生？」
「そんな訳あるか。心配しなくても頃合いを見て町まで無事に帰してやる。遅くても夜中までには帰れるだろう……キャロル、出来るな？」
「お任せ下さいレオンハルト様！　人間の町への潜入方法はマスターしましたのよ！」
「……」
信じられないと言った面持ちで顔を見合わせる姉妹。そして胡乱な表情でレオンハルトを見た。
「……油断させるつもり？」
「そう思うのも無理はないがな。元よりお前らをどうこうするつもりはない」
「レオンハルト様の慈悲に感謝しなさい！　他の魔人ならこうはいきませんわよ！」
「そ、そうなんだ……」
どう反応していいか困っている女性を無視してレオンハルトはキャロルに視線を向ける。
「キャロル、もう一人の縄も解いてやれ」
「はい！　さっさっさーっと」
その言葉通りさっと縄を解いてみせるキャロル。自由になった少

女は戸惑いながらも姉の方に駆け寄り、レオンハルトとキャロルの間に視線を彷徨わせる。
「あ、ありがとう……？」
「ああ」
　お礼を言ってくる少女にレオンハルトは応答すると、そのまま視線を姉の方に滑らせる。
「とりあえず今日の所は頼む。今は魔軍に周囲を固めさせてるからな。逃がしようがない」
「……え、ええ」
「本当ならわたくしが作って差し上げたいのに……」
「お前は知識はあっても腕は並じゃねぇか。ガルティアじゃねぇが最近は出来る限り美味いものが食いたいんだよ……アイツの所為でな……」
「むぅ……残念ですわ」
「……」
　レオンハルトとキャロルの会話を耳にして開いた口が塞がらない様子の女性。そんな姉とは対照的に妹の方はそんな魔人と使徒を見ると、
「……なんだか人間みたい……」
「……え、ええ……そうね」
　レオンハルトはその言葉を魔人の聴覚で拾っていたが敢えて無視する。そんなことを態々言ってやる義理はない。だが、そんな主の意図も空気も見抜けなかった使徒、キャロルはそれを耳で拾い反応する。
「ふふん！　知りませんの？　レオンハルト様は元々――」
「――キャロル、余計なことを言うな」
「えっ……あっ、申し訳ありません!!」
「ったく……」
　レオンハルトの鋭い検のある声に注意され、キャロルが直ぐに頭を下げる。その様子にやれやれと言わんばかりに眉を揉むレオンハルト。

更にはその言葉でおおよそを察せたのか女性は少しバツが悪そうにしながらも、聞かずにはいられなかったのだろう。
「えっと……元人間なの？」
「……チッ、さあな」
やはり分かってしまうか、とレオンハルトは舌打ちする。否定も肯定もしなかったが、その態度は言外にそうだったと認めているようなものだ。
急に居心地が悪くなったように感じたが、向こうは逆に親近感でも湧いたのだろうか更に話しかけてくる
「人間が嫌いになったから魔人になったの？」
「……そういうんじゃねぇよ」
「じゃあどうして？」
「……色々あるんだよ」
「ふーん……じゃあどうやって魔人になるの？」
「しつけぇ！　何でそんなこと言わなきゃなんねぇんだ！」
根掘り葉掘り聞こうとしてくる女性に思わず声を荒げてしまう。なんだこの女は、図々しいにも程がある。
しかしレオンハルトがそう軽く怒鳴っても女性はなおも口を開くのをやめようとしなかった。
「あ、いやー……魔人と話せる機会って貴重かなーと。話も通じそうだし色々聞きたくて……」
「お、お姉ちゃん……やめなよ……怒ってるよ……？」
「あはは……あ、じゃあ一個だけ聞いていい、かな？」
「……何だ」
妹ですら姉の馴れ馴れしさに困っているのか、腕を引いて制止させようとするもそれを止める意思は見られない。それを見てると毒気が抜かれるような気がしてくる。魔人相手の口の利き方といい頭のネジが二、三本抜けてるんじゃないかこの女。
レオンハルトが心底呆れた視線を向けるも、それを無視して女はほんの少しだけ真面目な声色で、
「……どうして私達を見逃そうとしてくれるのかな？」

そう聞いてきた。レオンハルトはその質問と女性の視線から目を逸らす。そして少しの思案の後、ゆっくりと答えた。
「……ただの、気まぐれだ」
「……そっか」
ただの気分というレオンハルトの答えに女性は何処か温かく頷いた。その反応にレオンハルトは言いようのない感情を感じた。正直言って居心地が悪い。レオンハルトは付き合ってられないと言わんばかりに立ち上がる。
「……ふん、そういや魔物将軍に言い忘れてたことがあったな。ちょっと出る」
「あっ！　わたくしも！」
「いや、いい。そいつら見張ってろ」
「畏まりましたわ！　いってらっしゃいませ！」
「……」
レオンハルトは出迎えをするキャロルに混じって背後から浴びせられる視線に鬱陶しさを感じる。何を感謝しているのだろうか、助けるのは事実かもしれないが、こうやって人間を虐げているのもレオンハルトだということを忘れたのか。元人間だからと急に親しみでも覚えたつもりか。
そして何よりもそれを分かってもらえて嬉しがった自分に何よりも腹が立つ。
「チッ……」
レオンハルトは家の外に出ると再度舌打ちをした。顔も苦々しげに歪む。こんな顔を他のやつに見せる訳にはいかない。それで苛立ちを吐き出すと、レオンハルトは魔物将軍が集まる広場に近づいた。
先程とは変わって広場や村のあちこちでは魔物兵が資材を集めて作業を開始している。仕事が早い。それに大勢いるなら好都合だ。レオンハルトは魔物将軍に声を掛ける。
「順調か？」
「む、これはレオンハルト様」
「ああ、礼は不要だ。作業を続けろ。今後は作業中に礼を欠いても不

問とする」
「……ご配慮感謝します」
礼を取ろうとする魔物将軍や周囲に向かってそれを止めさせる。レオンハルトが来る度に作業を止めていては仕事にならないし、こちらも迂闊に出歩けない。効率が悪くなってはこちらも困るのだ。
その気遣いに魔物将軍が軽く頭を下げる。
レオンハルトは周囲に顔を向けながら魔物将軍に再度話しかける。
「……ちゃんとやってるようだな」
「それは勿論。今は資材を運んでいるところです。……それよりもレオンハルト様は何か御用が？」
「……何故用があると分かった？」
「いえ、お休みに入ったばかりなので……直ぐに出てくるということは何か用事でもあるのかと愚考したまでです。違っていたならお恥ずかしい限りですが……」
「……なるほどな」
レオンハルトは内心、感嘆しながら納得する。そして魔物将軍の優秀さに舌を巻く。
確かに用はあるが……それは本音ではそうでも、建前はそうじゃない。単純に世間話をしに来たのだ――二人を逃がすための布石として。
故にレオンハルトは少し口端を上げながら魔物将軍の問いに答える。
「残念ながら外れだ。いや、ちょっと昂ぶっちまってな。悪いんだが麻袋を用意してくれ」
「麻袋ですか……？　失礼ですが一体何を――」
レオンハルトはその問いに被せるように答えてやる。
「さっきの女二人――もう壊しちまったからな。家の中臭くてかなわねぇしキャロルに外に捨てさせようと思ったんだが……」
「！　そうでしたか……では、すぐに用意させます。――おい！」
それを聞いた魔物将軍がほんの僅かに驚いたように見えたが、冷静に対処した。頭の回転が速い為かこういう部分も極めて優秀なのが

魔物将軍だ。近くの魔物兵を直ぐに呼びつける。
魔物兵は慌ててそれに答えた。
「は、はい！」
「聞いていたな？　今すぐ麻袋を持ってこい」
「了解です！」
魔物兵が麻袋を取りに走って広場から去っていく。そんな中、レオンハルトは周囲を観察していた。
作業を続けながらも今の言葉は聞こえていたのだろう、魔物兵を中心に多少のざわつきが伺えるが、少しでも反応を見せようとしたものは同僚か上司である魔物隊長に小突かれたり視線で、言外に黙らされる。
それほどレオンハルトが戦場以外で人間を直接殺すのは珍しいことなのだ。ましてや先程の言い方だとそういう意図で楽しんだようにも聞こえる。そんな事は一度も聞いたことがない筈だ。
故に側近の魔物将軍ですら驚いた。下に仕えて長い彼ですらそんなレオンハルトは見たことがない。
どうやら狙いは上手くいったようで良かったとレオンハルトは周囲の反応に満足する。
「麻袋を受け取ったらまた戻る。後、緊急の要件以外で家に近づくんじゃねぇぞ」
「はっ、畏まりました」
レオンハルトは最後にそう言いつける。内心、布石を打ち終わったと安堵する。
後は飯食って詰め込んで町まで送るだけ。これで二人を無事に帰してやることが出来る。
レオンハルトは麻袋を受け取るとそれを説明するためさっさと家に戻ることにした。

「分かっちゃいたけど魔物兵の数が多すぎる……！」
黒髪の女性、ハンティ・カラーは周囲の魔物兵の隙間を縫うように

移動を続けていた。
しかしそれは明らかに普通の光景とは違っていた。赤く色を反転させたような空間は歪みを表しているのか中々に形容し難い。
そして何より、普段と違うのは――周囲全ての時が止まっていること。
太陽も空も雲も生き物、魔物兵でさえも止まっている。
その止まった時の世界で動けるのはハンティ・カラーただ一人のみ。
これこそが彼女の魔法、その最高峰である瞬間移動魔法の正体であった。
そしてこの場所はアドミラル空間と呼ばれる異空間。彼女は現実世界からこの位相が少しずれた空間に移動し、そこから行きたい場所まで直接自分の足で歩き、そこから現実空間に戻ることで瞬間移動を実現させているのである。
とてつもない能力の魔法であることには間違いないが、それでも万能ではない。幾つかのデメリットや条件が存在する。
その一つがハンティを悩ませている。魔物兵が村の周囲を固めているだけでなく、村の中にまで死角が存在しないほど魔物兵がいる為だ。彼らを直接どかしたりこの空間から攻撃して倒すことは出来ない。
これが条件の一つ。この空間からはあらゆる物体に干渉することが出来ない。
アドミラル空間は現実と位相がずれており、同時に時が止まった世界である。この空間から現実のものを動かすことは不可能であるため、ハンティが魔物兵に気付かれないように現実に着地するためには何とか死角を見つけてそこから出なければならない。
同時に屋内に入ることも出来ない。扉や窓が開いていれば別だが、残念ながらほぼ全ての家の扉が閉じられていた。
「捕まってる二人もここからじゃ見つからない……やっぱり一度何処かで出ないとね……」
そうして止まった村の中の死角を探すこと少し、ようやく死角を見

つけることが出来た。民家の陰にある樽が開いてる。
「ここに入ってから出る、か……よし」
そこでハンティは空間から脱出して現実空間に戻る。世界の色が元に戻った。
「大丈夫……みたいだね」
ハンティは樽の中からこっそりと外を覗きながら呟く。だが、肝心なのはここからだ。
何せ、まだ二人の場所すら分からない。分かってさえいれば多少は強引に突破することも出来なくはない。とある理由から二人を連れて帰る際には瞬間移動は使えないので、魔物兵を撒くのは不可能に近い。それは村の周囲が魔物兵で固まってる時点で分かってはいたことだが……出来れば先に二人の姿を確認しておきたかった。
だが、こうなっては仕方ない。やはり騒ぎを起こしながらどさくさに紛れて二人を回収するしかないだろう。ある程度魔物兵の警備に穴を開けなければ外に出ることすら出来ないのだから。
「よし……！」
そうしてハンティは覚悟を決めた。詠唱を始める。狙うはここから一番近い一体の魔物将軍と、その周囲で何やら作業をしている魔物隊長や魔物兵。初撃で混乱を起こすのが狙いだ。
ハンティは意を決して樽の中から飛び出した。

魔人レオンハルト

突如、つんざくような轟音が村の中に響き渡った。
家の中で姉妹が作った食事を取っていたレオンハルトはその音を耳にして眉をひそめる。
音を聞いたのは当然、村に居た誰も彼もであった。レオンハルトの後ろに控えていたキャロルも、料理を作り終えて洗い物をしている姉妹もその音に飛び跳ねるように驚く。
「な、何っ!? 何の音!?」
「レオンハルト様! 今の音は――」
「ああ、分かってる」
レオンハルトは極めて落ち着いた様子でキャロルに答える。そして外から聞こえる喧騒と空気を五感で感じ取って自分の考えを口にした。
「資材が倒れた――とか日常で出る音じゃねぇな。空気もピリッとしてるし……何か異常が起きたか」
「異常?」
「ま、十中八九襲撃……戦闘が始まったな。村の中にまで及ぶってことは例の奴か?」
姉の声に素直に答えながらレオンハルトはテーブルに並んだ料理を口にする。うはぁんという桃りんごを使った高級デザート。これが最後の一口であった。その味と食感を口の中で楽しみつつ、レオンハルトは思考する。
そして直ぐに結論が出る。レオンハルトはうはぁんをよく噛んでから呑み込むと未だ浮ついた様子の姉妹に声を掛け、キャロルに視線を配った。
「今がチャンスだな――キャロル」
「……はい! わかりましたわ! さあ、こちらにどうぞ!」
「えっ、何!?」
レオンハルトの意を少しの間で汲み取ったキャロルはその通りに行動する。居間の隅に置いていた麻袋を手に取ると、その中を開いて

姉妹を誘導した。
　しかし姉妹は先程説明したにも関わらず急な展開に付いていけてない様子だ。仕方ない、とレオンハルトは椅子から立ち上がり、準備をしながらもしまいにお別れを告げるために口を開く。
「騒ぎが起こったならちょうどいいってことだ。これなら外もてんやわんやだろ。この隙に逃げるといい――っても自分の足じゃなくキャロルに運ばれる訳だが」
「えっ――」
　その説明を聞いて女性の口から出たのは純粋な驚きとややあっての心配の色。レオンハルトはその様子を訝しげに見やるが、その後に更におかしな発言が飛び出した。
「……えっと、大丈夫なの？」
「……何がだ」
「あ、いや、その……戦いって危なくない？　怪我とかしちゃうかもだし、部下がいるならそっちに任せとけば――」
「――いい加減にしろ」
「っ！」
　その言葉にレオンハルトは頭がほんの一瞬沸騰するのを感じた。すぐにそれは収まるものの湧いて出た言葉は止められない。その感情に任せて頭にある考えを宙に乗せる。
「そろそろその馴れ馴れしい口を閉じろ。魔人相手に人間如きが友達にでもなれたつもりか？」
「……」
「良い機会だからはっきりと言っとくがな――」
　レオンハルトは内心の苛立ちを叩きつけるようにそれを口にする。いい大人でもう妊婦の癖に未だ夢見がちな子供のような事をのたまう女に突きつけるように語る。
「――人間と魔物は相容れない。別の生き物なんだよ。例えそれが元人間だろうが、その現実は変わらない」
　それが現実、この世界で変わることのない真実なのだとレオンハルトは言う。魔物は、魔人は人間を苦しめる為に存在する。いかなる理

由があろうともそれがある限り、何千年経とうが真に人間と魔人は相容れることはない。それがこの世の理なのだ。
そしてそれが仕方のない事だったとしても、魔人となり人間を苦しめる限り、それは糾弾されるべき罪でしかない。魔人はどこまでいっても魔人なのだ。魔王の忠実なる配下であり強大な力を持つ暴虐の存在。それはレオンハルトも例外ではない。
どれだけ偉そうなことを言っても。
他の魔人や魔物を嗜め、人間の被害を減らすために動いていようと。
大切なモノの為に多くの人間を苦しめ、その手にかける死神であり、強い相手と戦うことを望む修羅――それがレオンハルトだ。
レオンハルトの生き方は断じて認められていいものではない。それは自分がよく分かっていた。理解った上でこの道を選び取ったのだ。
故に――逃げ道を作るわけにはいかない。
許すわけにはいかない。
他ならぬ自分への戒めの為に、レオンハルトは女の振る舞いを否定した。
その強い拒絶の意思は殆ど物理的な圧力となって現れていた。煮えくり返った感情はいつの間にか冷え切っており、底冷えするような視線がその紅い双眸から女に突き刺さる。心の弱い人間であれば死んでしまう程強烈な視線だ。上級魔人としての力を覗かせた圧倒的な格の差。
それを受けた女の反応を、レオンハルトは見た。
女はゆっくりと口を開き、
「――そんなことないんじゃない？」
と、驚くほどあっさりと。
軽い様子で否定してみせた。
「――――っ！」

女性の目の前で金髪灼眼の魔人がその双眸を見開き驚愕する。それを見て女性は続ける。それほど驚くことか、と思いながらも口を開いて、自分の思ったことを話す。
「こうやって話が出来るんだし、十分相容れると思うけど。今はまだ考えてることとか分かんないし理解出来てないかもしれないけど……話したり、接していけば多分それも分かってくるでしょ？」
「っ！　何言ってやがんだテメェは……！」
目の前の魔人、レオンハルトがその言葉を圧力と共に乗せて私にぶつけてくる。
普通の人間であれば恐怖し、ともすれば倒れてしまいかねないその視線。
しかしそれを受けても私は何とも無かった。思うことと言えば、
――あー、またそれかー……。
とこれくらいだ。というのにも理由がある。
それは目の前の魔人と似た一人の友人の話だ。私はそれを思い出すように目の前の彼に聞かせようと口を開く。
「いやね？　昔、五年くらい前かな。私、暴漢に襲われちゃってさ」
何となく村を出て町に行こうと外を出歩いた時の事だ。
「すんごく怖くて助けてーってなるじゃん？　でも人通りは全く無かったし、もう助からないかなーって思ったその時に……本当に助けが来たんだよね」
そう、それが何処からともなく現れて私を助けた初めての人間以外の友達。
「綺麗で長い黒髪と……ちょっと人と違う部分がある女性でね。よくわからない何かを使って私を助けてくれたんだ、それでお礼でもしようかと村に誘ったんだけどね」
あの時の彼女は今とはとても違っていた。
「何故かなに喋っても暗ーい返事しか返ってこなくてさ。一人で居る時も話しかけるなオーラというか近づいちゃいけないような雰囲気出してて村の人も不安……いや、違うか。あの時は怖がってたんだよね」

普通の人と違う容姿を持つ得体の知れない人物。それを不安に思うのも無理ないことだ。
「私にとっては恩人だったから無碍に出来なかったし、よく話しかけてたけど……正直言えば私もその時は怖がってたかな……」
それに話してあんまり面白くなさそうだったし、迷惑なのかなとも思った。自分としても恩人に不快な思いをさせるのも忍びない。放っておいて欲しいならそうしてあげる方がいいのかもしれない。
だが、ある時からその関係は変化した。
それは、
「――でも、ある時ね。何だか彼女、一人で頭抱えて震えてる時があって。様子がおかしいって思ったから近づいて見たの。そしたら凄い形相で怒鳴られてさ」
あの時言ってた言葉は形容し難いものだった。逃げて、だったか。それとも助けて、だったか。はたまた別の言葉か。とにかく何かを抱えて怯えている事だけは分かった。
「直ぐに正気に戻ったんだけど……私こういう性格だから気になっちゃって。聞いてみたんだ。『どうしたの？』って。今考えると凄い曖昧な質問かなって思うけど」
そうしたら彼女は俯いた表情でこう答えた。
「そしたらまた暗ーい表情で『あたしは人と違うから』って答えたんだけど」
正直、それがどういう意味だったのかは理解出来ていない。ただ一つわかったのは――
「それ聞いて私――『ああ、この人、だからあんなに他人の事拒絶してたのかな』って心の中で思って」
本当は違うかも知れない。ただ自分の心にすとん、とそれが落ちてきた。そして納得してしまった。
今までの雰囲気も全部、「自分はこんなに人と違う変で嫌な奴だから近づくな」ってそういう風に見えてしまった。
――そしてその時の彼女と目の前の魔人の態度に既視感を感じるのだ。

やはり思う。人間じゃなくても、親友も彼も――人間と同じ心を持ってるのだと。
故に語りかける。彼女とはわかりあえたから、あなたともわかりあえると。
「それからはもう遠慮せずにがんがん話しかけていって……まぁ、そのせいでたまに喧嘩することもあったけど……向こうも遠慮しなくなってきて、だんだん仲良くなってね――今では親友になっちゃった」
「……」
魔人はそれをただ黙って聞いていた。その表情からは何を考えているかわからない。
ただ、先程までの怖い雰囲気は多少鳴りを潜めているように見えた。
……少し語りすぎたかな？
バツが悪くなり誤魔化すように笑ってしまう。
「あ、えーとね。それで何が言いたいかって言うと……人間でもそうじゃない人にも色々いるっていうかさ。人間に悪い人だっているし、逆にそうじゃなくても良い人もいるんだってこと。だから、あなたも魔人だからって――」
「――キャロル」
「……え？　……あ、はい！」
レオンハルトはふいにその言葉を遮るように自分の使徒を呼んだ。あまりにも急で空気を壊すようなタイミングの発言にキャロルでさえ反応が遅れる。
その表情も声も、何の感情も見いだせない。そんな様子でレオンハルトは義務的に命令する。
「そろそろ、俺は行く。二人を連れてけ」
「か、畏まりましたわ！　えっと、じゃあ……」
麻袋を持ったまま戸惑ったように姉妹を見るキャロル。そして扉の方へ振り向き、こちらを見ようとしないレオンハルト。そんな様子を見て、言葉を遮られた女性は――苦笑した。

そしてそのまま苦笑交じりで口を再度開く。
「……そっか。それじゃ行こっか。ほら」
「あ……うん」
姉に促されて一緒に麻袋に入ると、そのまま姉が妹を抱えるように麻袋の中に座る。
そして、
「――ありがとね、レオンハルト。ほら、あんたも」
「っ、うん……ありがと、ね……」
「――――」
返事こそ、いや、反応こそ一切見せなかったものの、彼女はレオンハルトが聞いていることを感じ取っていた。
何故ならその反応を彼女は知っていたから。
「……連れてけ」
「あ、はい。それじゃ行きますわよ」
キャロルが主の命令を受けて麻袋の口を閉める。そしてそれを抱えるようにして持ち上げた。そして、裏口に向かったキャロルは、
「では……行ってきますわ」
「……ああ」
いつもと違う様子の主を置いていくことに不安を覚えながら、やがて後ろ髪を引かれつつも、その場を後にした。
「……」
レオンハルトはそのまま玄関から外に出ようと扉を開けようとし――暫く、ほんの少しの間だけ、後ろを振り向くも――そこに誰もいない事を確認し、外に出た。

村の中は、既に戦場と化していた。
大勢の魔物兵が村の中を行き交い、たった一人の侵入者と応戦する。
「くそっ！　何処へ消えた!!」
「あっちです！　屋根の上――ぐあっ!?」

「ぐぅっ！　居たぞ！　魔物兵！　身を固めつつ包囲の輪を狭めろ！」
魔物隊長以上は不用意に近づくな!!　隙を見せればやられるぞ！」
「向こうは一人だが、こっちは十八万だぞ！　いずれは押し切れる！」
「お前達が待望の女だ！　仕留めた奴は最初にやらせてやるぞ!!」
「うおおおおおおおおおぉぉぉおお――っっっ！」
魔物将軍の激励を受けて、魔物兵が指示通りに動き始める。
そしてその中心、自分を捕まえようとする魔物兵を魔法や剣で仕留め、時には瞬間移動で逃げながらもハンティ・カラーは孤軍奮闘を見せていた。
「ちっ……しつこい……！」
何体かの魔物隊長や魔物将軍を最初の混乱の内に仕留めたはいいが、態勢を立て直されると的確な指示で徐々に際どい攻撃が増えてくる。
そして何より数が問題だ。倒しても倒してもキリがない。幾らかは倒して包囲に穴を開けないと逃げることが出来ないため、ある程度は倒さなければならないのだが、それでもこれじゃジリ貧だ。
未だ二人を見つけることも出来ていない。何処かの屋内にいるとは思われるのだが、未だ正解を引き当てることが出来ずにいる。
「次はあの家……！」
焦りで額を汗が濡らす中、次の目標である家の屋根に飛び乗ろうと跳躍する。
そんな時だ。
「――!?」
身体は勝手に反応した。
しかしそれはハンティの知覚能力をもってしてもいきなりの一撃だった。
眼下から同じく飛び込んできた影が打撃を見舞い、それを何とか防御する。
だが、それでも衝撃は殺しきれず空中から地面に落とされる。咄嗟に体勢を立て直して立ち上がると、声が掛けられた。
「――随分と暴れてくれたみたいだな」

「！　あんたは……」
ハンティがその容姿を見て内心、舌打ちを零したくなるような苛立ちと焦りを覚えた。
その造形は人間そのもの、金色の髪に整った顔立ち、その紅く鋭い双眸が印象深い男。身体を覆うような黒いコートのような服を着たその男の雰囲気は――明らかに人ならざるものであることがわかる。
そしてその正体を、周囲を固める魔物兵、魔物将軍が口にする。
「――レオンハルト様！」
魔物将軍が傅く存在、それは魔軍の中でも極一部。
ハンティ・カラーはそれを引き当ててしまった。
「魔人か……！」

レオンハルトは目の前の女性の姿を冷えきった感情で見詰めた。
浮かぶ思いは――既知感。何処かで見たという思いだ。それを思い出そうとして、しかしレオンハルトは現在の自分がそういう気持ちになれない事を自覚した。
目の前の女は魔軍相手に獅子奮迅の活躍を見せた強者。それを目の前にしてもどこか上の空であるレオンハルト。その原因は先程の女との問答にあった。
だが、それにどうにか頭を振って隅に追いやると、女に話しかける。
「……それで、魔人に会ってしまった訳だが……どうする？　大人しく投降するなら命は助けてやるが」
もっとも命以外は覚悟してもらわないといけないだろうが――とレオンハルトは続ける。
周囲の魔物兵はこの一週間戦い続け、今日も女一人に翻弄され随分と鬱憤が溜まっているだろう。ガス抜きも行っていない十八万の軍勢だ。輪姦せば本当に壊れてしまうかもしれない。
それを思ってか、それとも元々そういう気が無かったのか、目の前の女は気丈な表情で、
「……それは出来ないね」

「……そうか」
断った。
レオンハルトは、それを聞いて残念に思う。了承していれば助けてやったのに、と。
彼にしては珍しい事だが、ここまで魔軍と事を構えた相手ではあるものの、レオンハルトは今日に限っては助けてやろうと考えていた。魔物兵の相手も本当に程々に、もしくは先程のように自分が気にいったとでも言って強引に連れ去ってもいい。適当に相手をしたら無傷で帰してやろうとも思っていた。
そう考えるのはやはり気が乗らないからだろう。上の空であることもそうだが、今は殺しをする気分じゃないというのが大きい。
本当に珍しい事なのだ。幸いにも強者を目の前にした時の昂ぶりも、今は訪れていない。故に穏便に帰してやろうと、そう思っていたのだが――
「ということはやるしかないな」
「……そうみたいね」
こちらの言葉に女が反応を返す。その体勢は明らかに臨戦態勢のそれだ。
そしてそんな対応の彼女に声を上げたのは周囲を囲む魔物兵だった。
「おい、あの女やる気みたいだぜ」
「ははは！　馬鹿な女だな！　勝てると思ってんのかぁ？」
「レオンハルト様は魔人の中でも格が違う魔人四天王！　そして魔軍参謀であるお方だ！　人間如きが勝てるかよ！」
「今なら五体満足で快楽の世界に連れてってやるぜ？　ぎゃははは！」
「……魔人四天王、そんな大物が……」
女は魔物兵の下卑た声の一部に反応した。そうしてこちらへの警戒を更に上げたように感じる。
レオンハルトは周囲の部下の声に呆れた表情を取りながらも、それに同意するように自然体で話しかける。

「そんな大したもんでもないけどな……だがまぁ、降参してくれた方が楽なのは事実だ」
「冗談じゃない……まだ目的も……」
「ん……目的？」
レオンハルトがその言葉に眉をひそめた、そんな時だ。
周囲の魔物兵からこんな声が耳に届く。
「レオンハルト様に逆らうと滅茶苦茶にされるぜぇ！　さっきの生意気な女みてぇになぁ！」
「っ！」
多くの声に紛れて聞こえたその言葉に、レオンハルトは反応しなかった。だが目の前の女は別だった。
「まさか……！」
青ざめた顔色で目を見開き、唇がわなわなと震えている。明らかにショックを受けている様子だ。
そしてそれを見てレオンハルトも遅れてそれがどういう意味を持つのかを察する。
……まずいな。
レオンハルトは相手の目的を想像して、どうするべきか迷う。もしこれが想像通りであったとするのなら自分がやった事は相手の目的に沿っていても、同時に相手の行動を無駄にしてしまったのやもしれない。そしてそれを相手に伝えることも出来ない。周囲の目がこちらの邪魔になって――
「……一つ、聞きたいんだけど」
「っ！　……何だ？」
レオンハルトは思考の途中で相手から声を掛けられ、それを中断せざるを得なくなる。
そしてその想像通りの質問が相手の口から投げかけられた。
「二人……女性が二人残っていたはずだけど――どうしたの？」
「……」
その質問にレオンハルトは一瞬固まり、そして息を吐く――やはりそういうことか、と。

そして同時に自分の不運を呪った。レオンハルトは周囲を目線を変えずに観察する。
当たり前だが、周囲には魔物兵が自分達二人を見守っている。女に攻撃を加えないのは自分がいるからだろう。信頼されているとも言っていい。自分ならこの女を殺し、もしくは無力化し自分達の前で地べたに這いつくばらせてくれるだろうと。
レオンハルトは目の前の黒髪の女性を視線を合わせ続ける。
そしてそのまま正直に、それを口にした。
「あの二人なら――もうここにはいない」
「――――!」
瞬間、目の前から女が消えたのをレオンハルトは見た。

ハンティ・カラーは頭が一瞬で沸きたつのを感じて、そしてその衝動に身を任せた。
瞬間移動――アドミラル空間へ身を躍らせ、魔人の眼前まで駆けると。
その剣を振り下ろしながら現実へと戻った。
「――!?」
魔人が驚愕に目を見開き、そしてその背の剣を引き抜いた。こちらの剣がぎりぎりの所で防御される。蒼く細長い剣だ。
速い、とハンティは思った。反応速度も純粋な速度も自分よりも当然速い。
相手は魔人。やはり純粋な身体能力では及ばない。膂力も当然向こうの方が上だろう。
だが、とハンティは剣を再び斬り結び、相手に防御されながらも強く睨む。そして思うのは自分の友人である人間の女性とその妹。
二人共、人と違う自分を受け入れてくれた大切な人だ。人間でない自分を――。
ハンティ・カラーは人間ではない。その正体はカラーと呼ばれる女性の一族――というだけでない。

現存するカラーは全て人間の一種。亜人種と呼ばれる種類に過ぎないが、ハンティ・カラーの生まれはその一つ前。

――第二世代メインプレイヤー、ドラゴン種の中の一種であるドラゴンカラー。それがハンティ・カラーの正体。

それが何故今は人の姿を取っているのか。それはハンティ自身にも分からない。

ハンティに分かるのは、ドラゴン種が天使に狩られたこと。それに伴いドラゴンカラーが処分されたこと。その中でハンティだけが生き残り、その姿を人に変えられたこと――それだけだ。

その時からハンティは他の者とは違う何かになった。寿命を超えても死なない、怪我を負っても通常よりも速い速度で再生する。青い髪のヒューマンカラーの中にあって唯一の黒髪のカラー。

後に伝説の黒髪カラーと呼ばれる存在。それがハンティ・カラーなのだ。

最初は、仲間が死んでいった悲しみと自分だけが生き残った絶望に苛まれていた。

――いや、正確には今も時たま思い出すのだ。そして思い出して恐怖する。後に立ち直り怯える。なぜ仲間たちは死んでいったのか、なぜ自分だけが生き残ったのか、生き残った自分は何者なのか、自分は生きていていいのか、人と関わっていいのか、自分といることでまた同じことが起こったら――。

考え始めると止まらない。客観的に見れば被害妄想なのだろうか。しかしそれがどうしても振り払えない。

ハンティは人と関わることを怖れた。一度は一人で生きていけばいいと思った。それなら少しは楽になる。怯えなくてすむのだ。

そして幸運なことに自分は強かった。一人で生きていけるだけの強さを自分は持っていたのだ。この瞬間移動魔法も強さを求めていた時に得ることが出来た高度な魔法。

しかし、一人で生きることは断念せざるを得なかった。その切っ掛けが親友となった人間の女性だ。

出会いは単純、暴漢に襲われていた彼女を自分が助け、そのお礼に

と村に誘われたこと。
程々に歓待を受けて、何泊かすれば立ち去ろうと考えていた。しかしそれは彼女の人柄に阻止された。
馴れ馴れしいともいえるその遠慮もしない態度に、ハンティは苛立った。
最初は何度も喧嘩した。だが怒り疲れて言うことがなくなれば彼女は向こうから歩み寄り食事にでも誘ってきた。気がつけばその会話に明るいものが混じり始めた。それは自分に起こった変化であった。
だんだんと悩んでいるのが馬鹿らしくなり、ハンティは自ら行動するようになった。故郷に帰っても上手くいくようになったし、最初は怖がっていた村の人も自分を受け入れてくれた。
なんだ、こんなに簡単な事だったのか。ハンティは今までの自分の行動が馬鹿らしくなるのを感じ、前より前向きになった。過去を忘れることは出来ないけど、未来を見ることが出来るようになった。
その自分にとって大きな進歩を生み出してくれた恩人。その恩人が――。
目の前の魔人――魔人レオンハルトに殺された。
それは自分にとって許せない。故に――
「あんたには――報いを受けてもらうよ!!」
ハンティは叫びと共に、もう一度瞬間移動を発動させた。
同時に詠唱を開始する。
相手の後方に回り距離を取る。放つのは自分にとって最強の攻撃魔法。
その準備を終え、ハンティは現実に降り立った。
「――!」
前方の魔人が消えた自分を探して、周囲を索敵するが――遅い。
「――雷神雷光!!」
雷撃系の最上級魔法。
魔人を中心に広範囲に雷の雨が、轟音と共に降り注いだ。
「なっ!?　総員退避――!!」

「うわあああああぁぁ――!?」
それは周囲の魔物兵までも巻き添えにして全てを焼き付くすべく稲光が疾走った。
地面に雷光が落ち、土煙が舞い、地面が黒ずむ。数多の魔物兵もその雷に貫かれて黒く変色してその身を地面に倒れ伏す。
何とか範囲から逃れた魔物兵達、その中にいる魔物将軍が中心に向かって叫ぶ。
「レオンハルト様――!?」
その相手は魔人。雷の雨、その中心にいるであろう魔人の姿は見えない。雷の光と宙に舞う土煙が魔人の姿を覆い尽くす。
そして、その雷が徐々に収束していく。
土煙が晴れていき、そこにいたのは、
「――――」
地面に倒れ伏した――魔人の姿。
「れ、レオンハルト様!!」
「……」
魔物将軍が魔人を案じて叫ぶ。周囲の生き残った魔物兵も動揺しているようだった。なにせ魔人が倒れているなどありえない事態だ。それが魔人四天王に名を連ねるほどの魔人ならなおさら。
しかし、ハンティはそれを目で確認し、ほんの少し眉をひそめた。何故ならハンティの視線の先、魔人の身体がピクリ、と動いたから。
そして次の瞬間。
「――っ!」
がばっと魔人の身体が起き上がった。腕を支えにして立ち上がる。
魔物兵がどよめく中、魔人は完全に直立すると、顔を俯かせたまま――
「ク、ククッ……」
口端を歪めて、
「ククク……クハッ、クハハハハッ――!!」
高笑いがその場に響き渡る。
「……」

顔を押さえて笑い続ける魔人に誰も動かない――否、動けない。
それほど彼から醸し出す雰囲気、そしてその存在感がだんだんと増しており、それに恐怖していたから。
やがて、魔人はその笑みを止めると髪を片手で一度掻き上げるように顔を上げて、こちらを見た。
その表情は先程と全く違うものであった。魔人の口から言葉が放たれる。
その笑みと共に、
「――効いたぜ。随分とな」
魔人レオンハルトはその本性を露わにした。

魔人レオンハルトは雷撃の雨を受けて、頭がすっきりしていくのを感じた。
先程までの悩みが嘘のように軽くなったのだ。
レオンハルトは先程の人間との会話を思い出していた。
――こうやって十分に話せるのだから分かりあえる。
――人間にも良い人と悪い人がいる。
――逆にそうじゃなくても良い人もいる。
その言葉が先程までのレオンハルトを悩ませていた。
正直に言えば、レオンハルトはその言葉を半ば肯定していたのだ。
……ああ、その通りだ。
それを聞いた時の別れ際、レオンハルトは自分が彼女達と共に笑いあい、魔物の脅威に立ち向かう自分を幻視した。
仮に――もし仮にレオンハルトがかつて住んでいた集落に彼女のような存在がいれば、自分は今も人間として魔物と戦っていたかもしれない。
だが、それはもしもの話。レオンハルトに大切なものを与えた存在は人間ではなかった。
そしてそれ故に彼は魔人になり、彼女に忠誠を誓った。
それ故に彼女の望みを叶える為に自ら率先して動いた。

――だが、その覚悟が少し足りなかったのかもしれない。
レオンハルトはここに至って彼女の言葉を認めて、二律背反な自分の在り方に苦悩した。
それは何故なのか、自分で分かっている。やはり自分は人間を意味もなく苦しめるような行為が好きになれないからだ。
もし主がそれを望んだならここまで悩むことはしなかったかもしれない。嫌ではあっても大切な主がそれを望むなら自分は修羅になれる。自分がそういった行為が好きであるならば悩まなかっただろう、実際に強い相手と戦うことは好きだからこそそこまで悩むことはない。どうやって発散しようか悩むことはあるが。
結局の所――覚悟、それとエゴが足りなかったのだ。
自分でそう決めたのなら貫き通すべきだ。それが出来ていたのならば彼女の問答に素直に頷いた上で否定することも出来た。あの様に醜態を晒すことはなかった。
目的の為なら人間を殺す。それ以外では殺さない。良い人間もいるし、良い魔物だっている。結局はそれだけの事に悩んでいる。
しかし、レオンハルトはその悩みを思い、それを悟った。
――ああ、だが……結局俺はこれからも悩むんだろうな……。
例え目的があったとしても自分は小さな罪悪感を完全に消し去ることは出来ないだろう。故に、この想いは一生ついて回るものであることを悟った。
そして自分にとってのもう一つの真実を理解した。それは今、高揚感に包まれてようやく分かったこと。
それは――戦うこと。
幼い頃から苦悩を続けていた自分にとって戦う時はそれを忘れられる時間であった。
戦っている間だけは、自分の欲望を満たしている時だけは、悩みも何もない純粋な自分を出せる。
冷静沈着で目的の為に絶対の意思を持つ氷の如き自分。
欲望に燃えてそれを満たした純粋で熱い炎の如き自分。
これこそが二律背反の魔人、レオンハルトの――魔人としての本質

だ。
　それを理解し受け入れて、レオンハルトはそれを気づかせた切っ掛けとなり、そして辛うじて思い出せた相手を見た。
「人間に傷を付けられるのは何年――いや、何十年振りだ……？」
「……」
　女は答えない。ずっとこちらに警戒の色を見せたままいつでも動けるように臨戦態勢を取っている。それをどうにか動かしたくて、レオンハルトは口を開く。
「いや、人間じゃなかったか？」
「――っ！　何を……！」
　その表情がようやく変化する。笑えてくる。それだと図星だと言ってるようなものだ。
「ククッ、悪い悪い。カラーは亜人種だったな」
「あんたは、一体……」
　訝しげにこちらを見てくる女に答えながらも逆に問い返してやろうと口を開く。
「魔人レオンハルトだ。さっき聞いただろ？　というか俺よりもそっちの名前が聞きたいんだがな。ほら、教えてくれよ」
「……ハンティ・カラー」
「はぁ、なるほど。いい名前じゃねぇか」
「……」
「……おいおい、だんまりは傷つくな」
　素直に答えた女――ハンティを褒めてやるも反応は返ってこない。
　ならしょうがないか、とレオンハルトはハンティを見つめながら魔剣オル＝フェイルを構える。
「まぁいい。さっきまではやる気なかったけどよ――こっからは遊んでやる」
「っ！　こ、れは……！」
　レオンハルトの魔人としてのオーラ、そして剣気が紅い奔流となって立ち昇る。上級魔人としてのその存在感と圧力はもはや暴力的であり、殆ど物理的な圧となって周囲に重く伸し掛かる。

それに当てられたハンティはそのプレッシャーがキツくてしょうがないのか、汗を流しながらそれに耐える。
「ああ、後一応言っとくがな――テメェが悪いんだぜ？　恨むんなら自分の間の悪さを恨むんだな」
「……どういう意味よ……！」
ハンティが気丈に質問を返してくるが、勿論レオンハルトに答える気はなかった。
先程まではどうしようか悩んでいたのに、目の前の相手があんまりにも唆るせいでその気も失せた。勘違いだなんだのは最早どうでもいい。
結果目的は達成してるんだから構わないだろう――自分が滅茶苦茶になってもな。
レオンハルトは邪魔者を消すために身体を横に向けて声を出す。
「何でもいいんだよ――おい、魔物将軍！」
「！　は、はい！」
「巻き込まれたくなかったら村の外で遊んでろ！　ちょっと今の俺は加減が利かねぇからな……！」
「か、畏まりました！　総員、レオンハルト様の邪魔にならぬように撤退！」
「は、はい!!」
いつもの魔物将軍に命令すると、瞬時にそれを実行に移す。魔物兵も同様でありそれはまるで逃げていくようだった。
それを笑いながら見送ると、今度こそレオンハルトはハンティに向き直る。
「待たせたな。もうお前も我慢出来ないだろ？」
「……別に。こっちはあんたにお灸を据えてやるだけさ……！」
そう言いながらもハンティはレオンハルトへの戦意を高めていく。現存する唯一のドラゴンカラーであるハンティの戦士としての圧は通常の人間の比ではない。数百年生きた伝説の黒髪カラーは伊達ではない。
「ククッ、そんなに怯えるなよ。可愛い奴だな。可愛すぎて――壊し

ちまいたいくらいだ」
「っ！　この変態魔人が……！」
だが、その上を容易に上回るのが魔人レオンハルト。ドラゴンカラーなど比ではないその圧は比較することさえ馬鹿らしい。若くして魔人四天王の一角を与えられ魔軍参謀の席に座る上級魔人。その圧倒的な差を相手に叩きつける。
そしてレオンハルトは敢えて自然体で片手で魔剣を垂らすように持ちながら、片手で相手を挑発するように手を前に出した。
「――掛かってこいよ、ハンティ・カラー。仇討ちすんだろ？　魔人様の手を煩わせんじゃねぇ」
「――その余裕、後悔させてやるよ!!」
最後の言葉と同時に、二人の人ならざるものは激突した。

達人の境地

最初に攻撃を行ったのはハンティだった。
瞬間移動を発動し、空間が赤く歪み、周囲の時が止まる。
「――――」
しかしハンティの動きだけは止まらない。そのまま駆け出す動きを取りながら右手に構えていた剣を両の手で握り、それを勢いのまま全力で振り下ろす。
振り下ろす先は当然、動きを止めたまま笑みを浮かべている魔人レオンハルト。だが、このまま剣を当ててもそれは傷を与えることも衝撃を与えることも出来ない。
故にハンティはその瞬間に瞬間移動を終了させる。
「――っ!!」
世界が元に戻るのと同時にレオンハルトの視線がこちらを向く。一瞬で移動し、剣が振り下ろされる。
その初動は誰も知覚出来ない。出処の見えない不可視の一撃に近いものだ。通常の人間であれば必殺に十分足りうる一撃だった。
しかし、
「いいセンスしてるじゃねぇか！」
前方でレオンハルトが動いた。それを異常な反応速度で察知し、同時に右手に持った魔剣でハンティの斬撃の軌跡に重なるように振るう。
金属を打ち合せる音が響き、弾かれた。
そして身体が流れる。レオンハルトの膂力が得物を通して伝わり、ハンティの身体を押したのだ。
「ふざけた力……！」
「瞬間移動使ってるテメェが言うんじゃねぇよ……！」
そのままレオンハルトが一歩足を前に踏み出し、そのままハンティの胴を狙うように返す手で剣を薙ぐ。
ハンティはそれを何とか剣で防御するも、左に流されていた身体が左からの攻撃を受けて今度が強引に右に引き戻される。

それは単純な二連撃に過ぎない。剣に心得がある者なら簡単にそれを見舞う事が出来る。
しかしこれを魔人が放つだけで、
「剣が――」
ハンティは握った剣が弾き飛ばされる程の揺さぶりを受けた。その原因は明らかだ。
――速く、重い。
魔人の身体能力から容赦なく放たれる剣撃は、単純な仕掛けであってもそれを必殺のものとする。たった二発、右、左、と剣を受けただけで手が痺れて得物を振り落としそうになる。並の実力では一合目で弾き飛ばされているだろう。
だが、その連撃は単純。故に続きがきた。
「そら次だッ！」
「……！　く――」
三回目の斬撃。それが今度は袈裟斬りで、ハンティの空いた胸辺りを狙う軌道で放たれる。
そこでハンティは迷わず瞬間移動を発動させた。そして今度は相手の右側、剣が当たらない場所に移動して解除しつつ、
「――そこ！」
「……！」
今度は横からの一撃を振るう。レオンハルトの右手は前方、先程までハンティが居た位置を狙って力を入れている。
しかしハンティはレオンハルトの右側にいる。内側に力を入れていた腕を、急に逆方向に入れることは人としての構造を取っている限り不可能に近い。これを防ごうとするのならまた、振り終わった後で腕を返すか、そのまま回転するように剣を振るしかない。
それはハンティの一撃が防がれるまで時間的余裕が一瞬生じるということ。故に自信を持って放たれた一撃。
レオンハルトがどういった行動を取るか、ハンティはそれを注視していた。
やはり躱すか、そう思われた動きは突如予想外の動きを見せる。

「しゃらくせぇ!!」
「――!?」
ハンティの剣が防御される。しかし打ち合ったのは刃ではない。
レオンハルトが持つ魔剣、その柄の部分だ。そしてその動きをハンティは見ていた。
……強引に腕を止めて、そのまま柄で合わせてきた……!
しかしその動きにはとてつもない精密性が要求される。相手の剣を柄で防御する。これは言うほど簡単なことではないのだ。
剣士の端くれであるハンティはそれを知っていた。これを行おうとするなら相当の膂力、そして瞬時の判断力、精密性、その全てが無いと成功し得ない防御。
それを成功させた目の前の魔人に、ハンティは一つの事実を認識した。
それは、
「随分と剣が達者みたいだね……!」
相手の剣の腕がこちらを遥かに凌駕する――達人であるということ。
「ハッ、分かるのか!」
ハンティの視線の先、レオンハルトが嬉しそうな声を村に響き渡らせた。
その手に持つ魔剣でハンティを弾き飛ばし、自然体で構えながら、
「ということは、テメェも剣士の端くれってことだな……」
だが、とレオンハルトはそこで言葉を区切る。そして同時にその剣を無造作に振るう。
振るった先にあったのは風に運ばれて飛んでいた葉っぱ。
それは空中で一瞬動きを止めるも、次の瞬間、
「――俺にはどうせ敵わねぇ」
葉っぱが二つに分かれた。しかしそれは葉の中心で両断された訳ではない。
見た目からは二つに増えたように見えるそれは明らかに、葉を薄くスライスするように両断した結果、引き起こされたものだ。

とんでもない技量にハンティは目を見開き、舌を巻かざるを得ない。自分には到底出来ないことだ。
解るか？　とレオンハルトは剣を振るい、周辺にある様々なものを両断していく。
「今まで沢山の剣士、戦士と死合ってきた。どいつもこいつも人間にしては中々やる奴らだったさ。一流の実力を持つ奴らも何人もいた」
振るう刃で断ち切るのは地面に転がる石、草木、風に吹かれる葉に花びら。それらを寸分違わず同じ幅で斬っていく。
絶技とも呼べる技を、彼は息を吐くように次々と見せつけていく。
「だが、身体能力の差を抜きにしても、誰も俺と並ぶ相手はいなかった。それで俺は自覚した。俺はもう剣の達人、それも他に敵う奴がいねぇほどの圧倒的な達人だ」
語る間にも、レオンハルトの周囲には切断されたものがどんどん数を増していく。一度斬ったものさえ、もう一度、今度は更に小さく斬ってしまう。
「それでいつだったか……俺はとある見込みのある相手に決闘の中で稽古を付けてやったんだ。ひょっとすれば俺の技を見て、もしくは自分に降りかかる危機に反応して、覚醒するんじゃねぇかなって思ってな」
俺と同じように、という枕詞を付けてレオンハルトは言う。
「だが……何年経ってもそれほどの相手が現れることはなかった。どいつもこいつも俺の剣技に膝を屈して死んでいく。張り合いがなくてしょうがねぇんだ……」
「……自慢話は他所でやったら？　あたしに言われても困るんだけど」
実に残念そうにそういうレオンハルトをハンティはばっさりと切り捨てた。そんな事はどうだっていい。魔人の悩みなんてこっちは知ったこっちゃないのだ、と。
だが、レオンハルトはそれに異を唱える。――いや、関係がある、と。
「テメェにもこれからそれを味わわせてやる。俺が鍛え続けた二百余

年。そしてなお成長を続ける俺の剣技を体感させてやる。そっちは剣でも魔法でも何でも使って耐え続けろ。長引けば長引くほど貴重なもんが見れるかもしんねぇぞ？」
「……上等よ」
どちらにせよハンティは目の前の魔人を倒す気でいる。逃げるという選択肢はない。
しかし、だ。現実問題倒そうとするのならば苦労するだろう。それを成す為には幾つもの試行錯誤が必要である。
ハンティは魔人が剣を構えるのを見て、方針をある程度定めた。
そして足に力を入れ、後方に跳ぶと詠唱を開始した。
「雷撃！」
「――！」
レオンハルトが反応する中、ハンティの魔法が放たれた。
――徹底的な魔法戦。それがハンティの決めた方針。
先程の数合の打ち合いで、近接距離で戦うのは悪手だと分かった。
それに、思う。ハンティが得意なのはそもそも魔法なのだ。
瞬間移動を始めとする高度な魔法の数々。そしてカラーの種族特性でもある高い魔力。それらの長所を使わなければ魔人には勝てない。
そして、もう一つ理由がある。それは、
「魔法なら避けられないでしょ！」
魔法の特性。魔法は回避することが出来ない。相手がどんなに速かろうと魔法は相手を追尾するのだ。そのため詠唱を完成させ一度放てば、少なからず相手にダメージを負わせることが出来る。それが魔人であってもだ。
本来なら魔法は詠唱の隙や連発出来ないことが弱点となる。しかしそれはことハンティに限っては当て嵌まらない。
何故ならハンティには瞬間移動の魔法があるからだ。ハンティはその隙を最小限に抑えることが出来る。
そして逃げ続ければ相手に距離を詰められることはなく、向こうの攻撃は届かない。そのためいつかは倒せる――筈だ。

そのために放った最初の雷撃。雷属性の魔法でも初歩程度の魔法ではあるが、その速度は魔法の中でも高い。
故にその軌跡をハンティは目で追った。
だが、
「それがどうした――ッ!!」
「!」
レオンハルトに直撃する筈だった雷撃。しかしその予想は外れた。
視線の先、彼がその手に握る魔剣をその軌道上に振るったその結果――雷が二つに分かれた。
魔法を剣で弾く――いや、斬る。魔人がやったのはそういうことだ。
しかも速度に特化した雷系魔法を、だ。それを行ったレオンハルトは楽しげに口を開く。
「ほらほら、もっと撃ってこいよ!」
「くっ、化け物め……!」
距離を詰めようとしてくるレオンハルトに対し、バックステップと瞬間移動を駆使して距離を取るハンティ。
そして下がりながらも魔法を詠唱して、それをレオンハルトに放ち続ける。
……とにかく近づかせない!
両手を常に動かし詠唱を終えると、雷が雷鳴と共に宙を走りレオンハルトに殺到する。しかしそれを魔剣を振り、
「どうした!? そんなんじゃ俺を討ち取るなんざ百年経っても出来ねえぞ……!!」
雷を斬り裂く。驚くべき反応速度、そして判断力だ。
おそらく雷が完全に見えている訳ではないだろうとハンティはそのからくりに当たりをつける。
彼が見ているのはこちらの魔法のタイミングとそれを放つこちらの手の動き。
どれだけ速かろうと最終的に到達するのは自分自身。ならばその軌道に寸分違わず刃を乗せれば雷を斬ることが出来る。故に見るべ

きはタイミングと雷の始点――そういう理屈だろう。
しかし理屈で解っていても出来るかどうかはまた別。やはり目の前の魔人は正しく化け物である。
……だったら……！
「――――」
ハンティは瞬間移動魔法を発動させ移動を開始する。
向かったのはとある民家の裏。そして魔法を詠唱を始めて、瞬間移動を解除する。
「――！」
同時に魔法を発動させる。時が動き出す中、民家を貫くように雷をレオンハルトに放つ。
タイミングと始点を目視させなければいい。それを狙って撃たれた雷は、
「！　おおっ……！」
ギリギリの所でレオンハルトに弾かれた。
しかし惜しかった。それを証明するかのようにレオンハルトは楽しげに口端を上げて、
「今のは中々良かったぜ……！」
しかしそれを取り合わず、ハンティは連打した。
魔法を撃っては止め、撃っては止める。結果擬似的な連続魔法が村に吹き荒れる。
瞬間移動を使えるハンティだからこそ、使える手段。それを存分に戦闘に活かす。
稲光が村を連続で照らす中、雷の雨を防ぎ続けるレオンハルトの声が響く。
それは激しい動きとは裏腹に、落ち着いた声色であった。
「……なるほど、テメェの作戦が分かったぜ。遠距離戦、それと持久戦に持ち込もうってことか」
レオンハルトは雷を防ぎながら民家の影に隠れながら移動を続けるハンティを見た。
位置は既にバレている。しかしハンティはそれ故に疑問が浮かん

だ。
……なんで近づいてこない……？
相手の技量なら魔法を斬り裂きながらも足を進めることが出来るはずだ。事実、先程まではそうしていた。
だが今は、その場に立ち止まってしまっている。
こちらに有利であることは間違いない。しかしそれは相手も分かっている筈。なら何故それを許すのか――。
思考の中、その当人であるレオンハルトは言葉を続けた。
「確かに剣士にしてみれば遠距離戦はどうしようもねぇもんなぁ……。近づかなきゃ剣は当たらねぇ。俺も悩んだもんだ――昔はな」
その言葉と共に、レオンハルトは剣気を膨れ上がらせる。
「なぁ、ハンティ・カラー……飛ぶ斬撃って知ってるか――」
「……!!」
その時、ハンティは背筋が凍るような感覚を味わい、その感覚に従い身を翻した。
そしてその直後、
「――――」
レオンハルトが空を斬った。

レオンハルトが魔剣オル＝フェイルを振るった。
横一文字に断たれ、宙を見えない斬撃が擦過する。
直後、民家に衝撃が走った。
音もなく放たれたそれは民家を真横に分かち、徐々に支えを失った木材が崩れ落ちていく。
そして破壊はそれだけで収まらず、背後の木々も断ち切った。切り株だけを残して木が倒れていく。
しかしそのどれもが無駄な破壊ではない。その斬撃の後は綺麗に上だけを切り取ったように残り、下側にはヒビ一つ入っていないのだ。
そして――たった今遠距離から放たれたそれは今後の剣士の常識

を根本から覆してしまう一太刀。
剣から衝撃波を放つ――それを更に昇華させたレオンハルトのいわゆる真空波とも呼ぶべき必殺技。しかし、彼にとっては然程大したことのない技の一つでしかないそれは――。
今後、古今東西の剣士が目指す境地の一つであった。

「滅茶苦茶な……」
その結果をハンティが得られたのは殆ど偶然だった。
突如自分の身を襲った悪寒に従い、地面に伏せるように身を投げ打ったのだ。
縦の動きを得ることが出来たのはハンティの戦士としての勘としか言いようがない。もし、ほんの少しでも判断を迷ったり、横の動きでそれを避けようとしていたならハンティの身体は周りの建物や木々のように断たれていただろう。
そしてそれを起こした魔人、レオンハルトは自慢気に口角を上げる。
「どうだ、面白いだろ？　遠距離対策に斬撃を飛ばす――剣士のロマンって奴だ。これ出来た時はテンション上がってな。流石に自分でも天才だと思ったぜ」
そんなことを馴れ馴れしく宣うレオンハルトにハンティは眉をひそめながら応対した。
「……うるさいんだよ、この剣馬鹿」
そっけなく言葉を返すハンティ。しかし内心は舌を巻かざるを得ない。
斬撃を飛ばすなんて思いついても普通はやらない、もしくは出来ない。
しかし眼前の魔人はそれをいともたやすく行う。常人が一生を懸けて生み出すもの。多くの人が足踏みしているところをこの男は軽く超えていく。
それは偏に魔人という生物の力と永遠の寿命があるからこそかも

しれないが、それでも才能なしには習得出来ないのは確かだ。
ハンティが冷や汗をかく中、レオンハルトは冷たい言葉を浴びせられそれでも可笑しそうに笑っていた。
「そんなに邪険にするなよ。テメェにとっても朗報だぜ、これは」
そして無造作に剣を横に振るう。すると少しの間をおいて遠くに転がっていた資材が真っ二つに分かれた。
それにハンティは危険を感じた。何しろ溜めがない。普通に剣を振るうようにこの魔人は斬撃を飛ばした。それが意味することは作戦の崩壊。それをレオンハルトは告げる。
「もう逃げなくていいぜ、――どこにいても同じだからなぁ!!」
「っ……!」
その言葉と共にレオンハルトが剣を振り回す。
もはや距離の概念、遠距離であることの優位性はこの場に於いては無くなった。今も、相手が刃を宙に乗せる度にその軌道上にあった物が分かれる。それを視界に収めながらハンティはそれを回避する為に瞬間移動を行い、その身を斬撃の反対側に移動させる。
レオンハルトがそれに気づき、背後に振り返ると喜悦に満ちた表情を向けてきた。
「そういや、まだそれがあったな……!」
レオンハルトが叫び、ハンティに向かって突撃してくる。
そしてその際により激しく白刃の軌跡が宙を描いていくのだが、
「きっついね……!」
ハンティはもはや回避を余儀なくされた。攻撃の暇などない、逃げざるを得ない状況に追い込まれたのだ。
正確には攻撃を、魔法を打ち込んでもそれを防御するのと同時に攻撃が飛んでくるのだ。魔法を斬り裂くのとこちらへの攻撃を一刀で行う。するとこちらは攻撃直後だというのにカウンター気味で飛んでくる斬撃を回避しなければならない。それは至難の技であり、攻撃の暇を失くすには十分であった。
更には先程レオンハルトがこちらの攻撃の初動を見切っていたように、今度はハンティがレオンハルトの刃の始まりを捉えなければな

らなかった。
彼は言った。どこにいても同じだ、と。しかしそれは近距離での向こうの有利が無くなった訳ではない。近づけば近づく程相手の有利となり、間合いに入ってしまえば自分は対処出来ない。
そのためレオンハルトの斬撃の挙動を見切って回避しながらも、自分は近づいてはいけない。自分はそういう窮地に陥ったのだ。
ハンティは思案した、いや、思案せざるを得なかった。
当初の作戦は完全に崩壊した。遠距離での魔法戦はレオンハルトに通用しない。しかしだからといって近距離は論外。一合か二合は持つかもしれない。しかしそれ以上をこちらが望んだ時、訪れるのは敗北だ。
ならばどうする。このまま逃げ続けては意味がない。勝つことは出来ない。
ひたすらに躱し続ける。どのタイミングで、どういう仕掛けで攻撃を行うか――ハンティは瞬間移動を行い、アドミラル空間に身を飛ばした。
「ふぅ……」
そして一度息を整える。ハンティがレオンハルトの運動量について行けるのはこれも理由の一つ。この空間にいる限りは時間は経過しない。
故にいくらでも休息が取れる。その気になれば睡眠を取ることだって可能なのだ。それ故に持久戦に勝機を望んでいたのだが、それは叶いそうにない。しかし諦める訳にもいかない。
ハンティは背後から攻撃を行える位置まで移動し、魔法を詠唱すると現実に戻り――そこで恐ろしいものを見た。
「――！」
現実に戻った瞬間、ハンティの少し真横を斬撃が通過した。吹き荒れる風がハンティの黒髪を揺らす。
「い、今のは……っ！」
ハンティは目を見開いた。馬鹿な、早すぎる。こちらが瞬間移動を解いた瞬間に攻撃が飛んできた。それが意味するところをレオンハ

ルトは残念そうに苦笑しながら口にした。
「外れたか。……でも、だんだん分かってきたぜ……！」
ハンティはその言葉に反応せざるを得なかった。
「分かったって……」
「ああ？」
青ざめた様子で呟くように発した言葉に、レオンハルトは鋭い目を訝しげに細めながらも鼻で笑い飛ばした。
「何を驚いてやがる。――ただ予測しただけなのによ。あれだけぽんぽんと瞬間移動見せられたら次にどこに行くか、パターンは大体掴めてくる。攻撃を避けてるのはランダムじゃなくてあくまでもお前自身だしな。……要は見えないほど超速い相手ってだけだ」
レオンハルトは言う。いともあっさりとそれを口にする。
「もうちょい修正が必要みたいだけどな。だが、こう言い換えてもいいぜ。……お前の動きを俺が完全に見切った時――」
その時が、
「――お前の最後だ」
自分の終わりなのだと。

ドラゴンカラー

「はぁ、ふぅ……」

無人の草原を行く一体の影があった。

青い改造軍服を着た金髪ツインテールの少女。

魔人レオンハルトの使徒キャロルである。

彼女は親愛なる主、レオンハルトの命令に従い、その背に背負った麻袋を必死に町まで運んでいる最中だった。

そしてようやく、

「着きましたわ――！」

人間の町へと辿り着いた。

眼前にはそれなりの高さがある建物、外側には町を囲むように外壁が築かれている。

キャロルはここに来るまでの苦労を思い出した。

村を抜け出す際はまだ良かった。魔物兵は襲撃者の対応で浮足立っており、とてもではないがこちらを気にしたりする余裕はなかった。レオンハルトの発言も効果的だったのだろう。キャロルが麻袋を持っていても事情を知っている魔物兵は納得した様子でこちらを見送っていた。

ただ、途中魔物兵らがひそひそと小声でレオンハルトのことを「ソロ」だの「早撃ち」だの噂していたのはどういうことだろうか。よく聞こえなかったもののレオンハルト様ファンクラブの会長として今度調査しなければと頭に記憶しておく。レオンハルトのことは使徒であるキャロルにとって何よりも優先されるべきものだし、自分でも優先したいと思う。

そして、それだけに心配なこともあるが――

「――――！」

「――あら」

気がつけばこちらの声が聞こえたのか背負った麻袋からくぐもった声が聞こえた。

おそらく出してほしいのだろう。キャロルはその要望に応えるた

めに、麻袋を地面に置くと縛っている紐を解いて口を開けた。
すると中から人間の姉妹が、
「うーん……気持ち悪い……」
「うぇぇ……」
口元を手で押さえながら出てきた。顔は少し青くなっている。それを見てキャロルは「ああ」と二人の様子を察した。
だが、勘違いかもしれない。一応二人に確認を取ろうと口を開くと、
「酔ってますの？」
「あ、当たり前でしょ……あんなに揺らして、うぷっ」
やはりそういうことらしい。
確かに麻袋を運ぶ際、上口からぶら下げるように持っていた為、道中結構揺れていたかもしれない。それに思い返してみると途中何度も今のようにえずいていた気もする。
……軟弱ですわねぇ。
キャロルは人間の弱さに半ば呆れる。自分ならばその程度で酔うことなどないだろう。そういった揺れを味わったことがないのが癪だが、完璧な使徒である自分が酔って吐き気を催すことなどあるはずがない。
……帰ったら魔物兵に頼んで試しに揺らしてもらいましょうか。
頭の中に予定を一つ入れておく。未経験、というのは完璧を自称する自分にとっては中々に屈辱的だ。人に経験の有無を聞かれて答えられないというのも恥ずかしい。特にレオンハルトに聞かれて失望されるのは嫌だし、もし七星に経験があったら自分は負けたことになる。
細かいことだが重要なことだ。レオンハルトが今後どんな要求をしてもそれに応えられるように備える。完璧使徒とはそうでなくてはならない。
考えていると早く主に戻りたいという思いが強くなる。だが、まずは主の命令を遂行してからだ。
「……しょうがないですわね。町に入ったら水を取ってきますわ」

「ううっ……お願い……」
「……」
最早それを我慢して口数が少なくなってしまった姉妹を見てキャロルは息を吐く。
レオンハルトの命令は二人を無事に町まで送り届けること。今のままでは完全に無事とは言い難い。万全な状態で送り出してこそそれを完全にこなしたことになる。人間二人がどうなろうとキャロルにとっては構わないが、レオンハルトが望むならしょうがない。それにレオンハルトは元人間。やはり他の生物よりは扱いは良くするべきだろう。
そんなことを考えながらキャロルは町の入り口へ向かって足を踏み出すと、
「……キャロルさん」
「……何ですの？」
不意に声を掛けられる。また何かあったのだろうかと反応した。
すると気持ち悪そうにしながらも、
「色々とありがとうね……」
「！」
と、何でもないことのように軽くお礼を言った。
事実、大したことではないのだろう。一言そう口にすると妹の手を繋ぎながらゆっくりと歩みを再開し町へと向かっていく。
それを追いかけながらキャロルは少し考えてしまう。
……人間に感謝されるのも、初めての経験ですわね……。
一応魔物であるキャロルにとって人間は下等種族でしかないはずだが、少なくとも悪い気はしない。故に少し複雑ではある。
しかしこれもレオンハルトの使徒である自分にとってこれからも経験していくかもしれないことなのだ。だからこれもレオンハルトの影響なのだろう。そう考えると喜ばしいことである。
そしてキャロルは不意に村で戦っているであろうレオンハルトの事を思い呟いた。
「レオンハルト様、今頃、どうしてるんでしょうか……」

戦いは続いていた。
戦場である村は既に村としての体をなしていなかった。
おおよそ全ての民家が縦に、横に、斜めに、あるいは細切れになり崩れ落ちている。周囲の木々は根こそぎ伐採されたように切り落とされており、魔軍が運び込んだ資材も既に原型を留めていない。
そんな中、まともな形を保っているのはこの惨状を引き起こした魔人、レオンハルトと。
「はぁ、はぁ……！」
それに相対するハンティ・カラーの二人だけだった。
息も絶え絶えな様相のハンティにレオンハルトが笑う。
「まだ勝ちを捨てないのは立派だな」
「っ……く」
ハンティは震える足でもう何度目かになるレオンハルトの斬撃を回避した。もはや周辺に障害物は存在しない。斬撃が空を斬り、風が吹く。
……どう、すれば……。
ハンティは焦点の合わなくなってきた視界で相手の動きを見定め、熱に浮かされたように重くなった身体を必死に動かす。
徐々にこちらの動きを向こうが見切りはじめた結果。全身のいたるところに細かい切り傷を負わされている。身体に芯はなく、強く力を入れなければ今すぐにでも立てなくなる。
確実に動きが鈍くなっているのを自覚していた。
そんな自分に対して相手は動きが悪くなるどころか、どんどん良くなっているようにも見える。
瞬間移動への対処も初めは何十回に一回しか成功していなかったが、今では数回に一回は危ない攻撃がこちらに飛んでくる。
既に圧倒的な力を持つ存在が徐々に成長してこちらとの差をどんどん広げていく。
当初の作戦であった持久戦もこの様子ならどちらにせよ失敗して

いたかもしれない。
動きも思考も止めることができない。そんな中、レオンハルトが口を開いた。
「そろそろわかったぜ――」
「――！」
ハンティはその言葉の瞬間、斬撃を避けようとして瞬間移動を使った。使ってしまった。
――今、なんて言った――？
今、相手から放たれた言葉は何だ。
わかった、と言ったのか。なら、その言葉が意味するのは。
「っ……！」
突如、ハンティの身体に怖気が走った。時が止まった空間で立ち尽くす。それはとある疑問の所為。
斬撃を躱して――どこへ行けばいい？
今の言葉が本当であるのならば。瞬間移動を解いた瞬間に訪れるのは紛れもない自分の――死。
ハンティは自分の判断が信じられなくなり、迷った。
そして、
「――――」
ややあって瞬間移動を解いた。その瞬間――
「見えたぞ……！」
「――っ」
ハンティはその行動を見ていた。
レオンハルトが瞬間移動直前まで振るっていた剣を返すように、今度は逆袈裟に振るう。
視界が遅く、ゆっくりに感じられる中、宙に刃が滑り、
「――ぁ」
ハンティの身に衝撃が走った。

村の中の音が止んだ。

あらゆる物が斬撃の餌食になり地面に転がる中、唯一立つのは――魔人レオンハルト。
その視界の先。地面に転がるのは腹に大きな傷を負ったハンティ・カラー。しかし、彼女の身体は分かたれてはいない、
それを見てレオンハルトは息を吐く。
……終わったか。
終わってしまった、と思う。
レオンハルトは最後の一撃、その瞬間にハンティが取った行動が見えていた。
こちらの斬撃に対し、ぎりぎりのところで――いや、正確に言うなら既に斬撃が腹を通過する瞬間に――反応したハンティはそれを何とか躱したのだろう。
ひょっとすれば瞬間移動を使ったのかもしれない。だが、結局は、
……俺の勝ちか……。
そこで残念な気持ちを覚えてしまうのは無論、負ける方がいいというわけではない。魔人四天王として、魔軍参謀として。そして何よりも魔王の配下として。自分が負けることは許されないし、そのつもりもない。
この口惜しさと言うべき感情は、楽しかった戦いが終わってしまったことにより生じた結果だ。
相手の息はまだある。しかしもう立ち上がれないだろう、致命傷だ。
このまま放っておいてもあるいはハンティ・カラーであるならば生き残る可能性は高い。だが、少なくとも今はもう戦えない。
出来ればもう少し楽しみたかった。ダメージを負わされたのは魔人を除けば本当に二百年近くなかった。それほどの相手だ。瞬間移動も素晴らしかった。動きが読めたとはいえそれは完全ではない。半分は勘に近いものがあった。
しかしそれでも当たった。その結果は自分が勝ち取った結果。偶然でも勘でも実力でもそれは変わらない自分の勝利だ。
熱くなっていた気分が徐々に冷静に冷めていく。それを感じなが

らレオンハルトは背を向けた。
「悪いこと、したな……」
そう呟いた時、レオンハルトの耳に音が聞こえた。
背を向きかけた状態でレオンハルトは視界の隅にそれを見た。立ち上がる彼女の姿。
――戦いはまだ終わっていなかった。

ハンティは薄れゆく意識の中で、それを解放した。
自分にとっての業。その象徴とも呼べる姿を。
――額にあるクリスタルが縦に開いた。
――その瞳は吊り上がり獣の如く変化した。
――爪はより鋭利になり。
――全身に鱗が浮き上がった。
ヒューマンカラーではありえないその醜い姿は、本来この時代に存在しえないはずのもの。
……使う、からね……！
それは誰に対してのものなのかは分からない。しかしそうしなければいけない気がした。
身体が動く。そして立ち上がる。
ハンティは今の姿となってから、初めてその真の力を引き出した。
その姿を初めて、目の前の魔人に晒した。
――ドラゴンカラーとしての真の姿を。

「これは……！」
レオンハルトはそれを目撃した。
視界の中、確かに戦闘不能にしたはずの相手が立ち上がっている。
そしてその姿はつい先程とはまるで異なっていた。
……これが、ドラゴンカラー。いや、ハンティ・カラーの真の姿……！

全身に鱗、爪が鋭く伸び、額のクリスタルは第三の目のように見開かれ、その顔は凶相と化している。
人の形をしながらもドラゴンとしての姿を持ったどちらともつかない歪な存在。しかもその結果、あることがハンティの身体に起きていた。
それを見てレオンハルトは驚愕し、笑みを浮かべた。
……傷が一時的に塞がってやがる……！
先程こちらが負わせた傷を鱗が覆い隠している。その傷は無くなったわけではなく、今も鱗の間に赤い線が見えているものの結果的に止血されていた。
人間ではありえないその醜い姿に、しかしレオンハルトは、
「最っ高に唆るじゃねぇか……！」
それを称賛した。再び身体に熱いものが宿る。
まだ相手は立っている。未だ向こうの不利であることは変わらない。体力が回復したわけでも疲労がなくなったわけでもない。精々傷が塞がっただけ。状況は好転していない。
だが、まだ戦える。まだ楽しめる。
自分とやり合ってここまで持ち堪え、しかしそこでは終わらせないというのだ。
レオンハルトは嬉しくなり、相手に呼びかけたくなった。それを躊躇しない。
「まだ戦うんだな……？」
自分の敗北はないだろう。そこは変わらない。
「まだ楽しんでいいんだな……？」
「ぐ、ぐぅう……！」
真の姿を晒し、凶暴化したハンティが未だこちらを睨む。戦意はまだある。その意思はまだ死んでない。
それなら、
「ああ、ああ！　そうだ！　もっとやり合おうぜ……！」
……ここからは待ったなしだ……!!
レオンハルトはその身を前方に躍らせた。ハンティがそれを迎え

撃つ。
戦場に二つの影が交差した。

村が再び戦場と化した。
見晴らしの良くなった村の広場の中心で、レオンハルトはハンティにその剣を振り下ろす。
魔剣オル＝フェイル。その斬れ味とレオンハルト自身の剣技が組み合わさった斬撃は常に必殺のそれに近い。生身であるなら容赦なく両断してしまうほどのその斬撃は、しかし生身に防御された。
レオンハルトはその結果を齎したものを見る。それは自分にとっても縁があるもの。
「ドラゴン種の爪か……！」
オル＝フェイルの刃がハンティの鋭利になった爪に防がれる。これの強度をレオンハルトはよく知っている。
始まりはとあるドラゴン魔人。その次はネフライトドラゴンの使徒、七星。
そして自分と同じ魔人四天王であるプラチナドラゴンの魔人――カミーラ。
今挙げた全員とレオンハルトは戦い、そしてその鋭い爪に自慢の剣を防がれたのだ。今と同じように。
……そうそう、この爪が厄介なんだよなぁ!!
このドラゴン種の爪の強靭さに、レオンハルトは悔しさと喜びを覚える。
悔しさは何度やってもこの爪を斬ることは出来なかったという思い。しかしそれは同時にいつまでも打ち合ってられるということに他ならない。
ドラゴン種とやるのは身体能力、肉体の強度は勿論、しぶとさも相まってとても楽しい濃密な時間を過ごせるのだ。
特にカミーラは最高だった。カミーラの強さは中毒になりそうなほどに唆る。思い出したら滾ってくる。帰ったらカミーラとやり合

うか――
「ガぁッ――！」
「っ……おっと！」
少し上の空になってしまったか、相手はその隙を見逃さず爪を振ってきた。それを見て、まるで咎められているように感じてしまうレオンハルト。
「嫉妬すんなよ。心配しなくてもお前もちゃんと可愛がってやる」
「……ッ！」
ハンティの動きが激しくなった。その動作には勢いがあり、何となくだが怒りが窺える。
……ふむ、今のは俺が悪いな。
さすがに決闘の最中に別の相手のことを考えるなど失礼にもほどがある。自分でもそれをやられたら怒る。今目の前にいるのは自分なのだ。最中は目の前の相手に集中すべきだろう。
ならば、とレオンハルトは力を入れる。相手の膂力はかなり強くなっているようだが、それでもこちらの方が勝っているようだ。速さも同様だ。それならば以前と同じ連撃で崩せるだろうとレオンハルトは上下からの二連撃を放つ。
しかし、
「――――」
「っ……！　テメ――」
直後、レオンハルトは防御を選択した。攻撃を行ったはずの自分が、なぜ今は防御をさせられたのか。
それは先程と同様でありながら、凶暴化したハンティではもう使うことが出来ないと、勝手に思い込んでしまった手段であった。
目の前から一瞬で消え去り、別の場所に現れるその魔法は――
「――まだ瞬間移動を使うのか……！」
すでにレオンハルトが見切ったはずの魔法だった。
ハンティ・カラーは騒ぎ立つ心を必死に制御していた。

……落ち着け、落ち着かないと……！

ドラゴンカラーとしての真の姿を見せたこと。それには複雑な思いがある。しかしそれでもこんなところで終わるわけにはいかない。故に仕方のないことではあるが。

ドラゴン種としての血が騒ぐのだ。

目の前の強者を、本能の赴くままに喰らってしまえ、と。

しかし、それはできない。膂力も速度も向こうの方が上であるし、耐久力もおそらくそうだろう。少しだけ差が縮まり、近接距離でも多少戦えるようになったとはいえ、力任せの戦いは通用しない。

なら、やることは決まっている。

ドラゴン種としての力を振るいながらも頭は冷静に。ドラゴン種としての考えを素直に実行する。

そうしてハンティは瞬間移動を使った。

視線の先、レオンハルトが剣を振り上げて次の行動に移ろうとしている。

次に起こすのは回避であって回避じゃない。

攻撃だ。

位置はそこまで変えず、最小限攻撃を躱せる距離に移動し、そのまま足を振るう。

……くらっときな！

「――ッ!!」

瞬間移動を解いた瞬間。向こうの攻撃があらぬ方向に向かって振るわれる。それはおそらく相手の予想が外れた結果。そしてのその結果にレオンハルトが一瞬驚いたように目を丸くし、そしてすぐに笑みに変化した。

「やるじゃねぇか……！」

打撃をレオンハルトの腹にぶち込んだ。

爪先に手応えを感じたと同時、レオンハルトの身体がくの字に折れ曲がろうとして、しかし踏みとどまる。ハンティはそれに内心で沸いた。

……やっと一発目！

魔法以外ではようやく攻撃がちゃんと当たった。その事実に喜びもするが、それよりも、やっと、という思いの方が強い。
後、何発当てれば目の前の魔人を倒せるのか。それを考えると嫌気が差してくる。
それなら今は稼ぎ時だ。レオンハルトはそのダメージか、もしくは予想が外れた驚きの所為なのか、身体を怯ませている。
動きはない。
ハンティは動きを激しいものにした。瞬間移動を連続で発動させながら、
「――オォッ――!!」
打撃を連続で叩き込んだ。

レオンハルトはその戦闘に手応えを感じ始めていた。
眼前ではドラゴンカラーとしての姿を解放したハンティがその爪を、拳を、足を連続的に振るっている。そしてそれに押されてしまっている。
それは何故か。理由はある。それは、
……動きの始点だけを狙い始めたのか。
それを冷静にレオンハルトは分析する。
相手は瞬間移動を再度使い始めてきた。しかしそれは先程までの防御や回避に使うような消極的な使い方じゃない。
あくまでも攻撃。攻撃を当てるためにこちらの動きの始点だけを見切っている。
それも徹底的なインファイトでだ。
「――ッ」
「――――!」
今もこちらの剣を振る、腕を先に抑えられた。その力はさっきまでとは格段に強くなっている。速さも同じだ。
だがそれだけではこちらの攻撃を受け止めることはできない。
しかしそれが力を入れる瞬間に止められればどうだろう。

剣を振ろうと腕に力を込めて、それが発揮されるまでには必ずズレが生じる。それは肉体の構造上、強い力で動こうとすれば必ず起きうることだ。

その隙間だけを瞬間移動で見切って狙い打つ。

剣を振ろうと力を込めるとその出掛かりが潰される。そもそも剣を振らせない。

剣が押されてこちらはその手を引き戻すしかない。

だが、再度力を込めるとそこも潰される。

レオンハルトは思う。瞬間移動というのは攻撃でこそ活きるものだ、と。

なにせこちらからはその始点が見えない。動いた瞬間に反応しようとするが、それも本当のギリギリのところで、しかもその出掛かりを潰されるのであればこちらは動けない。

更にはドラゴンカラーとしての力を解放したのが原因か、向こうの動きが急に変化している。動きの癖が変わったと言うべきか。

これではまた振り出しだ。もう一度瞬間移動の癖を完全に読み切らなければならない。読み切ったとしてこのパターンから抜け出さなくてはならない。

……なるほどなぁ……。

レオンハルトは内心、感嘆の思いをハンティに抱く。これは世界中でただ一人。瞬間移動を使えるハンティにしか出来ない戦闘方法だ。

まさかこのような封じ方があるとは考えもしなかった。なるほど、動き始めを捉えてそれを叩く。これならどれだけ速かろうが意味がない。その力が完全に発揮されないからだ。

何故なら動きというのは０から徐々に上がっていくもの。１００パーセント力を発揮するにはどんな達人でも一瞬のラグが存在する。

それが人間としての限界だ。

それを理解し、レオンハルトは内心息を吐く。

……どうするか……。

攻撃は最大の防御。それを地でいく相手への対処を思案する。

再度敵の動きの癖を見抜くのか。それとも——また一歩先に進む

か。
「――ク」
笑みが思わず零れてしまう。あまりにも馬鹿馬鹿しい問いだったから。
そしてレオンハルトは迷わずそれを選択した。
何故なら自分は人間じゃない――魔人なのだ。
故にレオンハルトは動きを止めなかった。変えたのは自分の内側だけ。肉体の動きを意識することに全力を注ぐ。
笑うしかない。
この状況を正面から打倒出来るようになること。それは、
――自分のさらなる成長に他ならないから。

急成長

ハンティ・カラーはひたすらに、只ひたすらに相手へ打撃を打ち込んでいた。
視界の中ではレオンハルトが剣を振ろうと力を込めていたが、そこに間髪入れず瞬間移動を発動、そして動きを入れて解除する。
「……！」
相手の動きが止まり、引き戻される。そしてこちらがまた一歩、足を進める。そして更に攻撃で押し込む。
戦闘は今の所、ハンティの優勢となっていた。既に打撃を何発も当てることに成功しており、着実にダメージを蓄積させている。
ハンティは思う。これは奇跡のような状況だ、と。
相手は魔人。それも魔人四天王。今はこちらが押していても何れは修正してくるだろう。魔人の身体能力に頼るだけの相手ではないのだ。そこには確かな技術が存在する。
故に、ハンティは今の状況に違和感を覚える。
今もこちらの爪と剣が打ち合い、火花を散らす。そこに感じる手応えは、
……剣筋が鈍った……？
腕に伝わるレオンハルトの剣が軽くなっている。先程まで感じていた魔人の絶大な膂力が格段に落ちて、もはや自分と拮抗してしまうほどに。
その隙を見逃さず、再びの攻撃、そして初動の差し止めに移るも、
「……ッ！」
今も、その勢いを殺されるどころか弾かれたように押されていった。やはり間違いないだろう。
レオンハルトの動きが格段に悪くなっていることを、ハンティは一つの事実として認識した。
しかし、それが何故かはハンティには見当がつかない。
ダメージを負い、ここまでの戦いで疲労したという線は薄いだろ

う。レオンハルトは魔人だ。その圧倒的地力の高さは他の生物の追随を許さない。
しかも相手は紛れもない剣の達人。それも戦闘の最中に動きが洗練されていき、こちらとの差を広げていくほどの成長力を秘めた発展途上の達人である。
その成長が止まるどころか、劣化している。
もはや剣筋はあやふやで、一合ごとに力の配分やその速度が違ってきていた。その分隙がうまれて、それはこちらの攻撃チャンスとなる。
……さっきまでと比べたら別人だね。
そう思ってしまうほどレオンハルトはその剣を不確かなものとしていた。その動きには基本すら定かではないものが混じっている。それこそ別人。もしくは今から別の剣技を習おうとしているかのような練習の動き。
それどころか体捌きすらおかしくなっている様にも見えた。
不可解な疑問に、しかしハンティは考えるのをやめた。
相手が弱くなったのなら好都合なのだ。なにせ勝利する確率が高まる。自分の勝ちが見えてくる。
それなら、
「オォ……!!」
ハンティはドラゴンカラーとしての力を振り絞り、その動きを加速させた。
瞬間移動を加えながら、相手の動きを捉えて攻撃を打ち込んでいく。連打が加速し、幾つもの衝撃が相手を押していく。そしてその結果にハンティは希望を見る。
「……」
レオンハルトはこちらをじっと見詰めながらも剣を振りそれを止められながらも無言で打撃を受け止める。先程までの饒舌振りが嘘のようだ。
やはり、対応出来ていない。今なら仕留めきれるかもしれない。
ハンティはそこに勝機を見出し、レオンハルトの首目掛けて爪を振

るい、
「――っ!?」
空を切ってしまう。完全に直撃のタイミングであったはずの攻撃を躱されて目を見開く。
その視界の先、レオンハルトはどのような行動を取るのかそれを捉えようとして、
「――――」
魔人が消えた。
そして直後に、声が聞こえた。それはこの戦いの中で聞き慣れてしまったもので、
「――できた」
「……!?」
その音の方向を拾った瞬間、ハンティはその場から全力で離れる。そして下がりながらもレオンハルトの姿を確認しようと視線を向けた。彼がいた場所は、
「……」
ハンティが先程まで居た場所。
その真後ろだった。

レオンハルトはその瞬間、自分の動きを自覚した。
「――ククッ……」
笑みが口から漏れ出てしまう。それほどの愉悦が頭を支配する。
レオンハルトはその感覚を覚えた。それを戦闘中に学習した。
剣を振ること――だけではない。
腕も、足も、手も、肘も、膝も、肩も、腰も、腹も、背中も、胸も、首も、指先一本一本のその先まで。身体の動かし方を一つ一つ意識し、全身を制御すること。それだけに集中した。
それは途方もない作業であり、同時に至難を極めた。
なにせ今まで無意識に動かしていたものを根本から改めなければならない。手探りで行ったそれは力配分や筋肉を狂わせ、剣は軽くな

り、足元も覚束ない。相手の攻撃をくらうのは必然であり、幾つもの手傷を負った。
失敗すれば身体は震え、あらぬ方向に力を入れてしまう。失敗すれば剣は弾かれ、攻撃が直撃する。
しかし一つ一つ、丁寧に修正していく。意識して行動して、それを身体に覚えさせていく。
そしてそれが――全て終わった。
レオンハルトはそうして一つの事実を認識した。
……身体の動かし方に関してはこれが極限かもな。
肉体の動かし方について、これ以上のものは存在しえない。そういう確信を得た。
そして同時に、レオンハルトは相手に感謝する。
自分が成長したのは紛れもないハンティ・カラーのおかげだろう。もし平常時にこれを習得しようと訓練をしていたら果たしてどれだけの時間がかかったか分からない。それがこの短時間で終えることが出来たのは強者との戦いの結果だ。
……これだから強い相手と戦うのはやめられねぇ。
しかし、レオンハルトはこうも思う。こうなってしまっては最早相手にならない、と。
瞬間移動に対応しようとした結果の成長であるのだからそうなるのは自明の理だし、自業自得だ。しかしそれでもレオンハルトは自身の成長に一抹の寂寥感を覚えてしまうのだ。
後はもう勝負を終えるだけ。なら自分を成長させてくれた相手へ、せめてもの礼儀としてそれを存分に見せつけてやるだけだ。
レオンハルトは相手にそれを告げた。
「……気をつけろよ。今、動くからな――」
「――！」
ハンティがその声に反応してこちらの動きを注視した、その瞬間、
「――――」
レオンハルトの動きから全ての無駄が消えた。

ハンティ・カラーはその動きを見ていた、はずだった。
視界の中、レオンハルトが動きを見せるその瞬間、
「――――」
レオンハルトが目の前に立っていた。
「――!?」
ハンティは急いでそこから退避するため、咄嗟に瞬間移動を使った。
そしてその場から移動し、呆然と今の動きを分析しようとする。しかし、
……今、いったい何が……？
気がつけばレオンハルトが目の前に立っていた。距離は離れていた、おおよそ１０メートルくらいだろうか。
そこから一瞬で目の前までの移動。それが出来る方法をハンティは知っている。だが、
……瞬間移動の筈はない……。
そんなわけがない。相手はここまで一度も魔法を使っていないし、それを隠していた素振りもない。よしんば使えたとしても瞬間移動が使えるほどの魔法使いには見えない。言いたくはないがこの魔法には才能が必要だ。並の魔法の才能があったとしてもこれを使うことはできないだろう。
なら、見間違いなのか、とハンティは十分に距離をとって瞬間移動をした。そして視界の先でレオンハルトがこちらを見ると、
「――逃げてんじゃねぇよ」
「――ッ!?」
またレオンハルトが目の前に現れた。
……分からない、分からない……！
ハンティはその動きを確実に捉えていた。瞬き一つしていないのだ。
それなのに、動きが捉えられない。
レオンハルトが動いた瞬間、そして動きを終えた瞬間。それだけし

か見えない。
それはまるで自分の瞬間移動を見ているようだった。動きの始点は見える。しかしその瞬間、途中をすっ飛ばして終点に到達している。間の動きは無くなってしまったかのように。
ハンティはその事実に激しい悪寒を覚える。嫌な汗が全身からにじみ出る。本能が目の前の魔人に全力で警鐘を鳴らしている。
そんな中、眼前のレオンハルトが口を開く。
「……何が何だかわからねぇって顔だな」
こちらを見下ろしながらの表情は苦笑。どこか憐れむような視線だ。
「わからねぇならどうしようもないな。一応瞬間移動ではない、とだけ言っとく」
そうしてレオンハルトは再び、動きを取った。そして口を開くと、
「――ほら、見極めてみろ」
「――ッ……!?」
突然、衝撃が身体を走り抜けた。
見ればレオンハルトの蹴りがこちらの腹に突き刺さっている。
……今のは……!
苦悶の表情を浮かべながらもハンティはその結果に瞬間移動でないことを確信する。
そして同時に、もっとどうしようもない絶望と言うべき現実を突き付けられた。
それは、
……初速が存在しない……!

レオンハルトはハンティを蹴り飛ばし、それを視線だけで追いかけた。
魔人の脚力で吹き飛ばされたハンティは宙に浮いたかと思うと地面を擦過しながら転がっていき、やがて動きを止める。
それを見て、レオンハルトは瞬間移動を完全に攻略したことを確認

した。
それどころか一定以下の相手は余計自分に歯が立たなくなった。そのからくりをレオンハルトは思う。
……最初から全速力を出すだけで大分変わっちまうな。
レオンハルトは身体の動きから全ての無駄を省き、肉体を完全に掌握することに成功した。
そしてその結果、力を最初から全力で発揮させることが出来るようになった。
ゼロから徐々に力が伝わっていくという通常のそれをすっ飛ばしてゼロからいきなり全力まで力を伝える――それも一切の無駄なく。
動きの途中が見えないのは爆発的な瞬発力、加速の結果でしかない。実際速度自体はそこまで上がっていないのだ。
問題は最初から魔人としての全速力を弾き出せるということ。果たしてそれが見える人間がどれだけいるだろうか。
慣れれば見えるかもしれないし、元よりこの速度域で戦闘を行えるものなら――例えば同じ魔人であるなら目視は可能だろう。だが、強くなったのは間違いない。それ故に今後の事を考えると、
……また苦労しそうだな……。
強くなる度に相手側に求める強さも比例して上がってしまう。今後これ以上強い相手を探さなければならないのは中々にキツいし、それを思うと憂鬱になる。今でさえ苦悩しているというのに。
溜息をつきたくなる気持ちを抑えてレオンハルトは地面に伏したハンティを見る。すると、
「――――!」
突然、地面に倒れていたハンティが消えて気配が後方に移った。それを後から動いて、
「もう意味ねぇよ」
「ガッ――!?」
ハンティの首を左手で掴み取る。初速で最大の速度を出せるようになり、このような後出しでも迎撃は間に合う。もう動きの始めを捉えようと意味はない。最初から魔人としての全力の力が加わってい

るのだ。ハンティにそれを弾き返すような膂力はない。
良い戦法だっただけにそれを打倒した達成感はある。だが、
……こいつも強いんだけどなぁ……楽しかったのになぁ……。
レオンハルトは心がどんどん冷めていくような気持ちを覚えながらもそのまま右手に持った魔剣で、
「――――ァ」
ハンティの腹を突き刺した。瞬間、
「――――!!!」
声にならない叫びが村中にに響き渡り、レオンハルトは目を伏せた。
「終わった、か――」
その声には寂寥感が滲み出ていた。

「あぁ……っ……か……」
「……」
レオンハルトは地面に夥しい量の血を零しながらも未だ苦しんでいるハンティを見ていた。既に致命傷、常人であればショック死してもおかしくない傷だ。
それだというのに、
「……驚いたな、まだ生きてるのか」
どうやらハンティ・カラーの生命力は予想以上らしい。それともドラゴンカラーとしての生命力だろうか、はたまた両方か。
レオンハルトは瀕死の状態でありながらももがき続けるハンティをじっと見詰める。
そんな時だ。
「……これで終わりなのか」
ふとこう思う。勿体無いな、と。
その思いがどこから来たのかは分からない。しかし、それを考えてしまった。決闘を行った後だというのに何を今更とも思う。
だが、それでも、と思う。こいつをここで殺してしまっていいのか、

と。
レオンハルトは先程の戦いを振り返る。今まで戦ってきた中でもこのハンティ・カラーという存在は極上のものだ。
瞬間移動という唯一無二に限りなく近い魔法を使い、自分にここまでの傷を負わせ、更には自身を成長にまで導いた。そんな存在は今まで皆無に近い。少なくとも魔人以外だと初めてだ。
もしかしたら次にここまでの存在が現れるのは１００年か２００年。もしくはもっと先かもしれない。
……そこまで自分は我慢出来るのか……？
自問自答を行い、直ぐ様頭を振る。嫌だ、と。
耐えられないわけではない。自分には大切な存在も立場もある。そういった機会がないからといって死ぬようなことはない。生き続けるだろう。
嫌だ、と思うのは個人的な感情であり欲望。強い相手と戦いたいという自分の望みの一つ。
そしてレオンハルトは更に思う。ハンティ・カラーはそもそも人間ですらない。永遠に生き続けるドラゴンカラーであるはずだ。
ならばその成長も期待出来る。全盛期が精々２、３０年しかない人間と違ってそれを殆ど永久的に実力を維持出来る。
考えれば考えるほどレオンハルトは勿体無いという思いが強くなっていた。どうにかしてこいつを生かしておけないか、と。
しかし、とレオンハルトはハンティの身体の傷を見て顔を顰める。この傷では助からない。
自分には神魔法は使えない。医療の知識はない。それらを持つ人物はこの場にはいない。
さすがに遅すぎたのかもしれない。だが、仕方がないのだ。強い相手と戦ってる最中はどうしても熱くなってしまい、楽しみを優先してしまう。目的があるなら冷静にも――
「――――あ」
そこでふと、レオンハルトの脳裏にとある考えがよぎる。
それは悪魔の考えであった。

だが、とレオンハルトはよく思案する。その方法ならハンティを助けることは出来る。どれだけ傷を負っていようと関係ない。
しかし同時にとある代償を払わせることになる。
……どうする。
レオンハルトは考える。自身の欲望と代償を天秤に掛けて計算する。
先程のハンティとの戦いはとても楽しいものだった。それが味わえるのなら――
「――ッ」
レオンハルトは自身の血が熱くなるのを感じた。心臓が強く脈打ち、本能が欲望を求めて身体を熱くする。
それは地面に横たわるハンティ・カラーを見れば見るほど強くなっているように感じた。
「……」
やがて。
レオンハルトは答えを出して、死に体のハンティに近づく。
その表情に、とある一つの感情の色を、覗かせながら――

ハンティ・カラー

戦闘が終わり、ハンティ・カラーは希薄な意識の中で死を感じていた。

もはや声は出ない。先程まで感じていた身体の震えや熱、痛み、疲労。肉体の感覚は何もかも失ってしまっていた。

苦しみは何一つ感じない。しかし、それでも自覚できることはある。それは、

……ああ、これが死ぬってこと……。

今、自分が感じているもの。これが死ぬということなのだと。

かつての仲間達や親友、今まで出会ってきた生き物が例外なく迎えた死。自分には決して訪れることはないと感じていたそれが訪れようとしているのだ。

……は、はは……何とも呆気ない、ね……。

心の中で自嘲するように笑い、そのような感想を覚えながらハンティは心の中で謝罪する。

それは仲間の分まで生きることが出来なかったという過去のものと。

親友の仇を取ることが出来なかった自分への情けなさ。

その両方だ。

だが、ハンティはこうも思う。自分はこうなることを心の何処かで望んでいたのかもしれない、と。

仲間達がいなくなり、自分だけが生き残った時も。人間達や、他の生物が死んでいく時も。自分だけが生き残る度にそれを何故自分が迎えられないのか。そう悩まない日はなかった。

それを今、迎えるわけなのだが。

……ああ、なるほど。

ハンティはそれを目前にしてそれを理解した。

今まで死んでいったものたちが感じていった感情を、ハンティは過不足無く完全に理解したのだ。

心が震えるのを自覚しながらも、そのストレートな感情を内心で口

にする。
……怖い、ね。
その感情は紛れもない恐怖。自分がどこに行ってしまうのか、そもそも今自分はどこにいるのか。それすらもわからなくなりそうな深淵をハンティは感じた。
並の精神なら発狂しかねないだろうこの感覚。仲間たちはこれを感じていたのだと納得する。
そして、理解して納得したがゆえに――その後に感じる思いも一緒であった。
……死にたくないな……。
何のこともない。他の人とは違うはずの自分でもここにきて湧いた願望は単純かつ明快なそれだ。
故に後悔、そして反省する。一体自分の何が悪かったのか、と。
やはり魔人と戦うのは無謀であるというのがまず大きいかもしれない。人間じゃないのに人間と関わるのが悪かったのか。大人しく一人で引きこもっていればよかったのか。
それとも仲間が死んでいった時に自分も――
……ああ、これじゃ堂々巡りだね。
その思考をふいに中断する。これでは結局それ以外の道がないみたいではないかと。
……あたしの生には、何の意味もないってことかな……。
ハンティは結局、絶望した。諦めた。もう考えることすら面倒だ。
故に意識を、生を手放そうとハンティは闇に落ちた。
――そんな時だ。身体に熱を感じたのは。
「――――っっっ!!」
突然、何かが身体に入り込んだ。
……こ、れは……なに、が……!?
身体の感覚が突然復活した。
痛みや熱を再び感じて、耐え難いその感覚に苦しむ。
同時に全身の血管が破れてしまいそうなほどに何かが暴れ狂い、自分の身体が弄り回されるような異物感を感じて、ハンティはその場で

もがいた。
そして、
「――――」
ハンティは強い光を感じた。
それは自分の身体を中心にした光であり、ハンティ自身を輝かせながら周囲に撒き散る。
しかしそれが徐々に収まっていき、再び瞳を開いた時。
「――え……？」
ハンティはその場に立ち尽くしていた。

ハンティは自分の身に起きた変化に戸惑いを隠せなかった。
身体は驚くほど軽くなっている。傷が治り、疲労がかき消えている。
「何が……？」
先程まで死に体であった自分が五体満足で起き上がっている。どこもおかしい部分はない。
それどころか万全であった状態よりも力が漲っているのを感じる。まるで生まれ変わってしまったように。
まさか本当に生まれ変わってしまったのだろうか、とそのように考えてしまう。それほどの異常事態だ。
ハンティは思う。自分は死んだはずだ、と。
親友の仇を取るために魔人と戦い、無残に敗北したのだ。こっ酷くやられてしまったのはつい先程の話。さすがの自分でも腹に剣をぶっ刺されては生きていられない。そこまで不死身染みてはいない。
そして周囲を確認しようとして、
「どうやら無事みたいだな？」
「！」
目の前から声が聞こえた。落ち着いた声色だ。その存在にハンティは気づいた。
金髪灼眼の男、魔人レオンハルトだ。つい先程まで自分と戦い、自

分を殺したはずの元凶。その魔人を前にハンティは、
「――ああ、逃げるのはやめろ。大事な話がある」
「っ！　なっ……!?」
瞬間移動でその場から立ち去ろうとして、止められた。いや違う、自分で止めた。
……身体が動かない……！
レオンハルトの言葉を耳にした瞬間、身体が縫い留められたように動けなくなった。瞬間移動どころの話ではない。足すら動かない。
そしてもう一つ。ハンティは奇妙な感覚を覚えていた。上手く言葉にできないが、
……この男に従わないといけないような……。
そのような感覚に囚われる。意思は魔人に屈しないと言っている。それは変わらない。
だが、本能がそれを拒否しようとしている。目の前の魔人に逆らうのは愚かである、とそういう理解があるのだ。
一体これは何なのだ。いや、それよりも。
ハンティは逃げるのを半ば諦めつつ口を開いた。
「その話って……」
「ああ、先に結論だけ言うが――」
そうしてレオンハルトはあっさりと答えた。
「――お前を俺の使徒にした」
その言葉にハンティはすぐに反応することが出来なかった。
ややあってようやく紡がれた言葉も、
「――は？」
という疑問符しかない。
使徒。一体何を言っているのだろうか。その言葉の意味、知識を頭の中から引っ張り出して、考え吟味し、そしてはっと気づく。
どうして傷が治ったのか、力が漲るのか。そして、この男に逆らってはいけないと本能が訴えかけるのは、
「あたしを使徒にしたって言うのか……！」
「……そう言っただろうが」

混乱するのも仕方ないがな、とレオンハルトは半ば憤るこちらに説明を続ける。それはこちらの知識にもあるもので、
「あのままだとお前は死んでたからな。どうにかそれを治すには血の契約を行い――」
「っ！　そんなことはどうでもいい!!」
ハンティは眉を吊り上げて声を上げた。
長年生きてきた賜物か、そんなことはハンティも知っていた。
魔王が他の生物を魔人にする際、そして魔人が他の生物を使徒にする時。その生物の肉体や元々持っていた力が強化され、不老を得る。
この魔人はそれを利用して自分を治したのだろう。それはいい。いや、よくはないが、それよりも肝心なのは、
「何であたしを使徒にしたっ!?」
そう叫ぶ。重要な疑問はそこだけしかない。だが、眼前の魔人、レオンハルトは、
「……そうだな」
軽く息を吐いて頷いた。まるでその質問が来るのをわかっていたような素振りである。
いや、事実分かっていたのだろう。彼が為した行為はそれだけのことだ。故に淡々としながらも口は滑らかに動く。
「お前との戦闘があまりにも楽しかったからな。ここで殺すのが惜しくなった。……というのが理由になるか」
言葉の意味は解る。しかし、
「そんなことで……あたしを使徒に……」
「重ねて言うなら使徒にすることで半永久的に戦うことができるし、さらなる成長を促すことも可能になるからな。単純に力も強化されるし、俺にとっては良い事ずくめだ」
「……」
その理由にハンティは絶句するしかない。
つまりこの魔人は自分と戦うためだけに、その相手に血を分け与え、自らの忠実な下僕であるはずの使徒にしたと、そういうことだ。
……どうしようもない戦闘狂……。

そう思わざるを得ない。理由ははっきり言って論外。今は幾分か冷静なように見えるが、余韻が残っているのかまだ少し戦意が漏れ出ている。自分を使徒にしたことでぶり返したのかもしれない。

しかし、ハンティは自分の運命を呪った。そして改めて事実を認識する。使徒になってしまったのは事実だ。

……従うしかない、かな……。

はっきり言ってもはやどうしようもない。一度使徒になってしまえばその関係はもう覆せない。仮に主となる魔人を殺したところで、自分が使徒でなくなるわけでもないのだ。

それに魔人には使徒に対する絶対命令権がある。どれだけ嫌な命令を強要されても拒否することは出来ない。ハンティはもう既に詰んでいるのだ。

人間や親しい人を殺せという命令にも従わなければならない。それが友人の仇となる者の命令だろうと。

……ごめん。

もういなくなってしまった友人に心の中で謝罪する。そしてハンティはある種の決意を持って、目の前の魔人、レオンハルトを見た。

「……それで、あたしは――」

どうすればいい、と続けようとした。

だが、

「ああ、好きに生きろ」

「好きに――」

……自分は好きに生きなければ――。

……ん？

ハンティは自分の耳を疑った。聞き間違いだろうか、レオンハルトの口から、魔人らしからぬ言葉が告げられたのは。

しかし、それは勘違いや聞き間違いなどではなかった。動きを止めて混乱するこちらに対してレオンハルトは続ける。

「お前は自由にさせた方が伸びそうだしな。特に強制することはない。……あ、でもまったく会わないのは困るから一ヶ月に一回俺に顔を見せに来い」

「え……は？」
「別に人間の味方しても構わないが、正体をバラすのは避けろ。俺にとってもお前にとっても都合が悪い――ああ、そうだ」
一度言葉を区切り、レオンハルトは告げた。
「人間で思い出したけどな。お前が助けに来た二人、別に死んでないぞ。今頃俺の使徒が五体満足のまま町まで送り届けてるはずだ」
「……は？」
ハンティはその言葉を今度こそ理解出来なかった。
だが、それを何とか飲み込んで口を開く。戸惑いの色は消えず、頭を抱えながら、
「……え、んん？　それは……」
再度、疑問の言葉を呟く。
「……何？　あの二人……生きてるの？」
「……信じられないなら瞬間移動でも使って確認してこい。一番近くの町にいるはずだ」
「……ちょ、ちょっと待って」
そう言うとハンティはその場から消えた。

「――おえぇぇぇぇ……！」
町の角で姉妹の姉の方は壁に手を付きながら口から胃の中の物を吐き出していた。
「……まさか本当に吐くとは思ってもいませんでしたわ……」
「お姉ちゃん……汚い……」
それを見たキャロルと妹が軽く引きながら姉を見やる。
その言葉が耳に届いたのだろう、姉は一旦それを止めてから憤るように弁解した。
「うぷ……し、仕方ないでしょ！　こちとら妊婦よ！　つわりと酔いで二重の吐き気が倍率ドンなのよ!?　そのキツさと言ったら――うっ、また……」
途中でまたしても吐き気が襲ってきたのだろう、姉が壁に手をつい

た。二人が嫌そうな顔になる。
「もう吐かないでよお姉ちゃん……もらっちゃう」
「……何だかわたくしまで気持ち悪くなってきましたわ……」
姉の嘔吐に妹だけでなく使徒のキャロルにすら「もらいゲ〇」の魔の手が襲う。恐るべしもらい〇ロ。
キャロルが口元を手で抑えて顔を青くして、
「――あら……？」
キャロルがそれに気づいた。嘔吐を続ける姉の背後に女性が現れている。
いつの間に、と思うのもつかの間。その女性は姉に声を掛ける。
「……ねぇ」
「オロロロロ……――うっ？」
嘔吐が一瞬収まり反応する。それは彼女にとっての親友であるハンティ・カラーであった。
姉はそれに気づき、
「は、ハンティじゃない……ちょうど良かった。……背中、擦ってくれる……？　また吐き気が……」
「……」
気持ち悪そうに背中を差す妊婦にハンティは心底呆れた視線を向ける。
そしてややあって腕を振り上げる。その手は平手の形で、
「……何で生きてんのよ――っ!!」
「痛あ――!?」
背中を思いっきりぶっ叩いた。

レオンハルトは目の前に突然現れた存在に目を向けた。
自分の使徒になったハンティだ。確認を終えて戻ってきたのだろう。こちらから声を掛ける。そしてその表情を見て、
「……ん、戻ってき――どうした？」
「……何よ……？　別に……何でも……ないんだけど……」

「何かあったようにしか見えないんだがな……」
確認に行く前と違って随分と沈んだ様子のハンティに眉をひそめざるを得ない。
そして、まさか、とレオンハルトはある可能性に気づきそれを口にした。
「……まさかとは思うが、いなかったのか？」
「……いいや、二人とも元気だったよ……元気すぎるくらいにね……はぁ……」
……その割には凄い落ち込みようだな……。
ひょっとして実は二人を助けに来た訳ではなかったのだろうか。本当は仲が悪いのかもしれない、とレオンハルトはハンティを見て、その可能性を模索する。なにせ今も「あたしは何のために……」とか、「あのゲロ女のせいで……」とかぶつぶつと虚ろな目で呟いているのでその可能性も無くはない。仲が悪くなくても喧嘩中という可能性もある。ゲロ女とはどういうことなのかいまいち何があったのか予想出来ない。
そんなことを考えているとハンティがその視線をこちらに向けてきた。
「……というかアンタも先に教えてくれれば……」
「……あ、ああ。それに関しては悪かったな。俺にも立場ってものがあってな……。あの場ではああ言うしかなかった上に熱くなるとそれ以外を疎かにしがちでな」
「……そう」
「……」
責めるようなハンティの視線から目を逸らす。レオンハルトは急にバツが悪くなるのを感じた。
……まぁ、悪いのは俺だが……。
にしてもそれ以上の何かをハンティから感じる。やるせなさというかそんな感情だろうか。確かに実は二人が生きていたというのは今まで戦ってきた彼女にとって徒労でしかない。それに関しては責任がある。

しかし、そこで使徒にしたことを謝るほど耄碌はしてない。それなら最初からやるなって話だ。
レオンハルトはそこで軽く息を入れた。気まずい空気ではあるが、自分から話をしようと思っての事だ。そうして口を開き、
「……ま、何にせよ――」
「……わかったよ」
「……何？」
言葉を続けようとして突如ハンティに遮られた。どうやら立ち直ったらしい。
そして言われた言葉は了承を意味する語句であり、
「なったものは仕方ないし……一応、納得する。……まだ完全に信用した訳じゃないけどね」
「……それならいいが」
「……それに――」
ハンティはそこで一息入れ、言葉を送った。
「――あの二人から聞くにどうやら訳ありみたいだしね」
「……！」
レオンハルトは表情を固くする。反射的に表情を崩さないように努めた結果だ。
そしてそれを言うべきか、悩み、
「……その内、教えてやる」
「ふぅん……？」
ハンティはその様子から何かを読み取ろうとし、しかし途中で諦めたように表情を弛緩させた。おそらく何も読み取れなかったか、もしくは読み取れたが確証を得られなかったのか、レオンハルトには分からない。
そしてやや投げやりな様子で、
「……ま、それじゃあたしはもう行っていいんだよね？　命令は？　一ヶ月毎に顔見せるだけ？」
「……そうだな。今の所はそれだけだ。俺は基本的に魔王城にいるから一ヶ月経ったら訪ねてこい。別の場所にいる場合は日を改めるか、

どうにかして探せ。後は勝手にしろ」
「うわっ、適当……はぁ、その方が気楽でいいけどさ」
ハンティはそう言うと、億劫そうにレオンハルトを見て、
「……それじゃ、不本意だけどよろしく。……レオンハルト様？」
「……何か気持ち悪いな。魔物兵の前以外では普通に呼べ。そんな機会あるか知らねぇけどな」
「……そうする。自分で言ってて鳥肌立っちゃったし」
嫌そうにしながらも挨拶したハンティはようやくそこで苦笑ながらも笑みを見せ、
「――それじゃあね」
「……ああ、精々強くなれ」
最後にそう言葉を交わし、彼女はその場から消えた。

レオンハルトの目の前から瞬間移動を使い、ハンティは再び町へ戻った。
人々が行き交う中、一応目立たないように人通りの少ない陰で口を開く。
「あー、すっきりした。というかハンティ？　いきなり叩くなんて酷いじゃない。私が妊婦ってこと忘れてない？」
「いや……それはごめん。ちょっとさすがにやるせなくてついカッとなってね……」
会話の相手は、親友である彼女だ。先程のことを持ち出してこちらをからかう彼女に言い訳をしながらも謝る。妹の方は一緒にいた金髪の女の子と水を取りにいったらしい。もしかしたらあれがレオンハルトの言っていた使徒なのだろうか。それなら挨拶した方がいいのだろうか、いや、それともお礼が先だろうか。そう考えていると、
「それで、どうだったの？」
「え？」
彼女からそう問われる。質問の意味が分からない。なので首を傾げてみるも、

「いや、え、じゃなしに。あの魔人の人、レオンハルトさんと会ってきたんでしょ？」
「……あー……」
「良い人――じゃないか、良い魔人だったでしょ？」
そう再度問われては意味を把握せざるをえない。そして視線を逸らす。
……と、言われてもね……。
ハンティは少し考え、自分の正直な気持ちを口にした。
「……よくわからなかったかな」
「えぇ……何それ」
その返答に不満そうな表情を浮かべる彼女。ハンティはそれに構わず考えながら言葉を紡ぎ出す。
「いや、確かに普通の魔人じゃなかったし、物凄い悪人ってわけじゃないだろうけどさ。……ちょっと話しただけだし。まだ分かんないかな」
「……そっかぁ」
「納得した？」
「一応ね」
彼女は一応納得した、とそう頷くと、しかしいい笑顔を崩さない。
一体何を思っているのか、視線で言外に聞く。
その返答は実に彼女らしいものだった。
「これからも会うんなら、これから話して分かっていけばいいかなって。私にも色々話聞かせてね？」
「！　……あんたは変わらないというか何というか……」
難しく考えている自分が馬鹿なんじゃないかと思えてくるほどのお気楽さだ。
しかし彼女には自分が使徒になったと教えてもやっぱり何も変わることがない。レオンハルトには素性を教えるなと言われたが、彼女なら問題ないだろう。こう見えて誰彼構わず言いふらすような性格じゃないし。
ハンティは少しだけ気が楽になり、目尻を下げる。

「とりあえずこれからもよろしくね。町に住むなら会いに行くのはちょっと工夫しなきゃいけないかもだけど」
「あっ！　そんなこと言ってまた音沙汰無くなったりしたら駄目だからね。ちゃんと出産の日も立ち会って貰うから！」
「はいはい。分かってるよ」
ハンティは以前と変わらないやり取りに笑みを零しながら応えた。
そしてふと思う。こういった思いが出来るのも、お互いが生きてるおかげなのだと。
それは当たり前の事実だが、ほんの僅か足を踏み外すだけで崩れる日常なのだと。
もしここに攻めてきた魔人がレオンハルトでなければ、自分も彼女もここにはいなかったかもしれない。
だが、レオンハルトがいなければ、自分は使徒になることもなかったかもしれない。そんな不満はあるものの、
……ま、この分だけは感謝してやってもいいかもね。
いずれ自分と彼女は別れることになる。それは使徒になる以前と何も変わらない、元より永遠の寿命を持つハンティの宿命だ。
――しかしその別れが不本意なものにならなかった。
ほんの少し、その分だけ――ハンティは自分の主となる魔人に感謝した。

「……ふん」
レオンハルトはハンティが立ち去った場所をしばらく見ていた。
だが、やがて視線を切ると踵を返し、
……まさか二人目の使徒がこういった形で出来るとはな……。
ふとそんな思いを抱く。
唯一のドラゴンカラー。その生き残りであるハンティ・カラー。
そして、おそらく――この世界の重要人物である彼女。
その彼女を使徒にしたことに、後悔はない。それが何を齎すのか。
――そんなことは知ったことではない。

レオンハルトが考えるのはこれからの自分の事。ハンティがいることによって自分に生じる結果を思い、口元に笑みを作った。
退屈はしなさそうだ、とそういう予感を感じ、レオンハルトはその場を後にしようとして、
「――！」
突如、何かに気づいたように目を見開かせた。レオンハルトの端正な顔立ちが眉根を中心に歪み、深刻な顔つきを見せる。それは彼が見せる、今日一番のシビアな表情だ。
レオンハルトはその紅い双眸で周囲を見渡す。心臓がどくどくと強く脈打ち、額から冷や汗が流れる。
周囲には何もない。村の建物も。持ってきた資材も。生い茂る木々も。
そしてその惨状を見て――レオンハルトは天を仰いだ。
「……拠点、どうしよう」
バラバラの廃墟と化した村の中心で、レオンハルトは膝を屈するしかなかった。
――この日、レオンハルトに二人目の使徒、ハンティ・カラーが出来た。

不機嫌な魔王

大陸中央の戦争から一週間が経過した。
窓から差し込む日差しが室内を明るく照らしている。そこに映るのは書類を手に取り何やら作業をしている三人。そしてその内の一人、金髪灼眼の男が非常に面倒そうな顔で口を開いた。
「……終わんねぇ」
「……今日は珍しく愚痴が多いようですね。こちらの書類は終わりました」
「……ああ」
諌めるようにというよりは、本当に珍しいものを見るようにカミーラの使徒である七星が書類を差し出しながら言う。その愚痴の持ち主であるのはこの部屋の主であり、上司でもある魔人レオンハルト。彼に頼まれて仕事の手伝いに来ていた七星なのだが、いつもと比べて様子が変だ。それも主従揃って――。
そこで七星は反対側の椅子に腰掛けているもう一人の金髪の少女を見た。
「むぅ……あの女……次に会ったら……」
レオンハルトの使徒キャロル。いつも七星に何かと突っかかってくるはた迷惑な使徒なのだが、それも今日は、
……大人しい……いや、別のことで頭がいっぱいといったところでしょうか。
なにやら不満そうにぶつぶつと呟いている様子のキャロル。その口から漏れ聞こえるのは「あの女」という語句が一番多い。
そして、二人の様子と手元の書類。聞こえてくる噂。それらを鑑みてみると、やはり原因は、
「……その」
「……あ？」
「……何ですの？」
七星の次ぐ言葉に、二人の主従は視線をこちらに向けてきた。その表情にはどちらも憂い顔を覗かせている。

これは藪蛇かもしれない、と七星は半ばそう思いながらも結局は言葉を口にした。
「……お聞きしたいのですが……やはりお二人が荒れていらっしゃるのは――レオンハルト様の新しい使徒が原因ですか？」
「……いや、俺は――」
「――その通りですわっっっ！」
その質問に大声を上げて肯定したのは使徒であるキャロルだった。今、主の言葉を思いっきり遮っていたがいいのだろうか。それに気づく余裕もないのだろうか。
キャロルは拳に怒りを込めているのか、ギリギリと震えるほど握りながら、
「わたくしと同じ偉大なるレオンハルト様の使徒になったというのに！　先輩であるこのわたくしに挨拶の一つもないとは！　使徒の風上にも置けませんわ！」
そう力説する。
そしてそんな使徒の様子を補足しようと口を開いたのが、彼女の主であるレオンハルトだ。億劫そうな表情は変わっていないが、
「……こいつは一週間前からこんな感じだから無視していいぞ」
「……な、なるほど」
「その煮え切らない返事は何ですの七星！　同じ使徒たるものマナーは大事にしなければなりませんわ！　あなたもそう思いますわよね!?」
「!?　いや、その……」
レオンハルトの言葉に頷いた七星だが、キャロルからの流れ弾を受けた。酷いとばっちりに頭が痛くなる。こうなったら中々収まらないことを七星は知っている。レオンハルトが止めてくれればいいのだが、何故かは知らないが自分と絡んでいる時は滅多な事では止めてくれないため、期待は出来ないだろう。
やはり適当に話を合わせて落ち着かせるしかない。七星は頭を抱えながらも、少し考え、
「……確かにそうなのですが」

「そうでしょう！」
七星は一度言葉を区切って、言いづらそうににしながらも、
「……そういったマナーを大事にしている使徒なんて数えるほどしかいない気がするのですが……」
「……！」
疑問を呈した。キャロルが目を見開いて、そのまま固まる。言われてみて今気づいた、といった反応だ。
実際七星から見ても他の使徒がマナーを考えているとは考えづらい。魔物界はそもそも年功序列ではなく実力主義である訳だし、今いる使徒はマイペースな者が多い。キャロルも含めて。
むしろそういった礼儀は魔物将軍らが一番良くできているのではないかと思っている。彼らは上司には当然気を使うし、部下にも厳しいながらも配慮している。
「……ぐぬぬ……」
そしてキャロルも程なくしてその結論に達したのだろう。歯噛みするように表情を歪ませ、不意にキッとこちらを睨みつけてきた。
「わたくしを言い負かすなんて……。この借りは高くつきますわよ！」
「えっ」
理不尽な因縁をつけられて困惑する七星に、キャロルはむしろ落ち着いた様子で考えを口にする。
「……よく考えてみればわたくしの後輩ということはわたくしにとっては味方。そして七星の敵であるということですわ。挨拶がないのは頂けませんが、それは後から教育すればいいことですし」
「……なぜそこで私が敵に……」
何故かレオンハルトの使徒は七星にとって敵ということになるらしく、キャロルが得心したという風に首を縦に振る。余計なことをしてしまったような気がするが、忘れよう。キャロルに対しては全部相手にしていたらキリがない。相手にしなさすぎるとそれはそれで面倒になるのだが。
ともかく七星は問題を先送りにして、もう一つの疑問を口にした。

「……それで、レオンハルト様は――」
「俺は単純に仕事が失敗したからな……それの皺寄せに参ってるってのが大きい」
七星の問いに息を入れながら答えるレオンハルト。
それは七星が書類から推察した通りであり、そもそも仕事の手伝いに駆り出された原因でもあった。
七星は頭の中で、書類と魔物将軍らから聞いた情報をまとめる。
……確か戦闘の余波で運んだ資材が殆ど壊れてしまったとお聞きしましたが……
レオンハルトが魔軍を率いて大陸中央の人類国家に戦争を仕掛けたのはつい先日のことであり、その戦争に魔軍は完全勝利を果たした。しかし戦略目標を達成仕切れたとはいえない。
その目的は二つ。その地を領土とした人類国家への制裁。これは問題なく達成出来た。
しかしもう一つの目的。地勢的な要所であるその地に拠点を置くことは失敗した。
その失敗した原因というのが今七星が言ったように戦闘の余波であるらしい。詳細はあまり伝わっていないものの、レオンハルトが敵との戦闘で暴れた結果そうなったという。
それを耳にした時、七星は珍しいと思ったと同時に、他の多くの者達と同じ感想を抱いた。
――恐ろしい、と。
そもそもレオンハルトはただ戦闘に出ても周囲に被害を出すことは少ない。人間との戦争では他の多くの魔人のように暴れまわるようなことはせず、本陣で指示に専念し、自分に挑みに来た人間だけを相手にするのだ。その際も周囲の被害を考えて動く。
そしてそんなレオンハルトが、そこまでの被害を出すということは、それだけレオンハルトが本気になったということだろう。七星はそれを何度か目撃している。七星自身が過去に体感しているし、自らの主であるカミーラとレオンハルトが戯れにやり合った際に何度か。
それを思い出すと背筋が寒くなるが、同時にある事実が浮かび上

がってくる。
それは、
……レオンハルト様の相手がそれだけ強かったということ。
そう。レオンハルトは雑魚相手に本気になることはない。普段はむしろ冷めているし、相手に配慮もみせる。レオンハルトは戦う相手を、そして力を見せる相手を選ぶのだ。相手が強くなければ周囲に被害が出るほど暴れはしない。
そしてそれともう一つの情報を七星は思い出す。
先程キャロルも頷いていた――レオンハルトの新しい使徒が出来たという情報。
詳細は不明。未だ姿は見えないし、どんな相手なのかは分からない。分かるのはそれが事実であるらしいこと。そして使徒が出来たのはその事件の直後であったということ。
七星は率直に考え、その予想に達した。
そのレオンハルトと戦った相手こそが――新しい使徒であると。
レオンハルトが使徒にしてもいいと認めるほどの人材。彼の基準は分からないものの生半可な相手を認めるはずもないし、それほどの人材が沢山いるとも思えない。
故に直近の出来事であるそれが絡んでいると七星は思った。
だが、もっとも、
……だからどうという訳でもないのですが。
様子がおかしいので推察してみたが、それが合っていたところで何もない。中々姿を見せないのはどういう訳なんだろう、というくらいだが、他所の魔人と使徒の関係に口を挟むのはお門違いだ。
レオンハルトはその新しい使徒のことを殆ど誰にも話していないと聞いて、何気なく話題に上げてみたものの特に否定もしていないことから別段含むところはないのだろう。
故に七星は頭を切り替えて、レオンハルトの話に耳を傾ける。
すると、
「まぁ、後は……使徒を作って帰ってきてからか。最近、スラルの機嫌が微妙でな」

別の部分から使徒の話だけでなく、思わぬところに話が繋がった。
……魔王様が？
思わぬ大物の話だ。使徒の話ならともかく、魔王の話など一使徒でしかない七星には荷が重い。だが、相槌くらいは返さねばと口を開く。
「魔王様の機嫌が……？」
「ああ、これが終わったらこの後もちょっとご機嫌取りに行く予定でな……」
そう言ってレオンハルトは溜息をついた。

レオンハルトは仕事を終えていつもの様に魔王スラルの私室に来ていた。
殆ど日課となっているその訪問に、しかしスラルは、
「……ふーん、来たんだ」
部屋に入ってきたレオンハルトを椅子に腰掛けたまま横目で見てそう呟く。その態度に歓迎されていないのかとレオンハルトが頭を掻く。
「あー……出直した方がいいか？」
と半ば踵を返しながら言うと、
「……居たら駄目とは言ってない」
視線を逸しながらこちらを引き止めてくる。しかしそう言いながらも素っ気ない態度は崩れない。なのでレオンハルトとしても悩むところだが、暫し間をおいて扉から手を離す。
「……そうか」
頷いていつもの定位置であるソファーに座る。
いつもならここでスラルも作業を止めてソファーに移動してくるのだが、今日は違うようで、
「……」
机に座ったまま、作業というか何か調べ物を続ける。
スラルはその日の殆どを、酷い時は一日中部屋に引きこもってい

る。やることは様々だが、基本的には調べ物をしていたり、本を書いていたり、何やらよく解らない実験をしている。
今は何をしているのだろうか、とレオンハルトが机の上に目を向けると、見覚えのある物が見えた。
なのでそこから会話を繋げようと口を開く。
「……その黄金像、気にいったのか？」
そう。スラルが今調べているのは、以前レオンハルトがキャロルとの迷宮探索で見つけた黄金像だ。あの後、スラルにプレゼントしたのはいいのだが、変な形なので微妙そうな顔を浮かべていたのを憶えている。
しかし今はその黄金像を真剣に調べているのでどうしたのかと思ったのだが、
「……き、気にいってないけど」
とそっぽを向いた。レオンハルトは前言を撤回する。よく見たら全然真剣じゃない。
よくよく視界を凝らして観察していると、さっきから上の空でこちらをチラチラと見たり、文字を書いてるようで手を適当に動かしているだけだったり、調べ物をしている振りをしてることが分かる。
「……」
レオンハルトはそのスラルの態度を見て、呆れたように息を吐く。
……いい加減、鬱陶しいな……。
この態度がずっと続くのも面倒だ。今日はマシな方だが、ここ最近は部屋にいる間ずっと返事を返さなかったり、不機嫌だったりする。
なのでその腹立たしさを解消するため、レオンハルトは最近覚えた技術を使ってイタズラを実行することにした。
「……！」
スラルがこちらをちらっと見た後、顔を引き戻しこっちを見ていないタイミングでスラルの背後まで一瞬で移動する。
レオンハルトがハンティとの戦いで覚えた体捌きだ。力に無駄がなく、音もなく背後に移動したレオンハルトはスラルの脇腹に両手を伸ばし、

「――くらえっ！」
「えっ――きゃあっ!?　あっ、ちょっ、あはははっ！」
いきなり背後から襲ってきたレオンハルトにびっくりしたのか、ビクリと身体を跳ねさせ硬直した一瞬を見逃さずスラルの脇腹をこちょこちょとくすぐる。
「あっ、あはっ、ちょ、レオ、ンっ、ハルト……！」
すると面白いくらい簡単に笑いはじめたが、同時に椅子から立ち上がり身体を逃がそうと抵抗を試みている。それを見てレオンハルトはすかさず行動した。
……はっ、そうはさせるか！
レオンハルトはスラルの脇腹をくすぐりながらも一瞬だけ掴み、そのまま足を動かしてスラルを抱えるようにしながら一瞬でベッドの脇に移動し、そこにスラルを背中から抑えつけた。
「あはははっ！　くっ、ふふ、ち、ちょっと、なっ、何で、こっ、んっ、なことするの！」
「お前がよくわかんねぇ態度ばっか取るからだよ!!」
「あっ！　や、やめ……あっ、んんんっ！　く、くすぐったい……！」
ベッドの上で完全に抑えつけられながら悶えるスラルを容赦なく、くすぐっていく。抑え込むコツは肉体の可動域である関節を固めることだ。
だが、さすがは魔王と言うべきかくすぐられて固められたこの状態でも逃げられそうになるのは肉体の性能が根本的に違うからだろう。力は出せない筈なのだが、少しでも身体を緩めれば危ない。
「あふっ……くぅ……」
それに反応が少し悪くなったのをレオンハルトは感じる。最初はあれだけ笑っていたのに今は声を漏らすだけで、そこまで笑ってはいない。
なら、とレオンハルトはアプローチを変えることにした。
「随分と我慢強いみたいだが、こっちはどうだ？」
「えっ……あっ――」
そこに触れた瞬間、スラルの反応が一変した。

レオンハルトはその反応に口端を上げる中、スラルが顔を青ざめさせた次の瞬間、
「あはははははははっっ！　あっ、だっ駄目！　わ、脇はやめっ！　あはっ、あはははははははははっ――」
これまで以上にスラルが笑い転げた。
首を振り回し、涙目で声を上げて笑うスラルの反応に満足するレオンハルト。
だが手を休ませはしない。身体を暴れさせるスラルを必死で抑えつけながら脇に伸ばした手でくすぐりを続ける。
「おらおら、どうした！　そんなに脇がいいのか!?」
「や、やめっ、脇は……あっ、は、あはははははははは！」
「よく聞こえんなぁ！　脇がいいって言ったのか？」
「ちがっ、あふっ……んんっ！　あ、あれ……んんっ、ちょ、や、やめ……」
「ははははっ、俺の溜まった鬱憤を晴らしてやる！」
「あんっ、くっ、わか、わかったから……ほんとに、やっ、やめ、何か変……んんっっ！」
「ああ？」
それでもくすぐりを続けるレオンハルトだったが、スラルの反応がだんだんとおかしくなってきたのを見て眉をひそめる。
……んん？　くすぐりすぎておかしくなっちまったか？
先程までただ笑っているだけだったのに、今は違った様子を見せている。
言葉にするのは難しいが、顔は赤らみ、その声には何やら別の感覚に耐えているような色が見受けられる。
「あっ、やっ、これっ……だ、駄目っ。これ、駄目なっ、んっ、やつぅ……！」
「……」
レオンハルトはその感じに見覚えがあった。
……まさか、そういうアレか？
いや、でもただのくすぐりだぞ？　とレオンハルトは頭を振るが、

スラルの様子はそういうアレに見えてしょうがない。一度意識した所為もあるだろうし、ベッドの上というのもある。壁や床は固いし良くないと思ってベッドにしたのが裏目に出てしまった。
やはり、もうこれは、
「っ……レオンっ、ハルトぉ……」
……駄目なやつだ……！
甘い声で名前を呼んでくるスラルに、レオンハルトは急にいたたまれない気持ちになった。
そして、少し考えた後、そっと手を離した。
「あっ……」
スラルが声を漏らす。これが安堵の声なのか、残念の声なのかレオンハルトには判断がつかない。バツが悪くなり頭を掻くと、どちらであっても問題ないように、
「あ、あー……わ、悪いな。やりすぎた」
「んっ……はぁ……」
と謝っておいた。
スラルはその謝罪を聞いていたのだろうが、息を整えながら未だベッドから起き上がらないのでこれも判断出来ない。どちらであっても良いようにスラルが落ち着くまで声を出すのは控える。
暫しの静寂、スラルの息遣いだけが部屋に響き、落ち着かない時間を過ごすレオンハルト。しかしややあって、スラルがようやく息を整えたのか、しかしベッドに倒れたまま、
「……レオンハルト」
「……な、なんだ？」
何を言われるのか、緊張の面持ちで待ち構える。
だがスラルは何やら慌てた様な声色になると、
「……ちょ、ちょっと、部屋からで、出てくれない？」
「？　……ああ、わかった。悪かったな」
「い、いいから……私も最近は態度悪かったし……そ、それより早く出てって」
「お、おう……それじゃあな」

ベッドから起き上がらないスラルと、そのままの状態でやり取りを交わす。レオンハルトはその様子をおかしくは思ったものの、それを推察しないように努めながらそっと部屋から出ていく。

「……」

部屋の外に出ると、自分の右手とスラルの部屋を交互に訝しげな表情で見て呟く。

「……これは、俺がアレなのかスラルがアレなのか……。どっちだ……？」

そして結局、スラルが何故不機嫌だったのかは分からないままだった。

一ヶ月目

ルドラサウム大陸東部。
魔軍の本拠地が近いその場所は近寄りがたい地域として知られていた。
その原因たる魔王城。多くの魔物、使徒、魔人、そして魔王が住まうその城が一望できる小高い丘に一つの影があった。
黒いレオタードの様なボディスーツを着た女性の影だ。
「――あれが、魔王城……」
そのフォルムは人間のもの。しかし長い耳と額の赤いクリスタル、そして種族特徴にない長い黒髪が女性の特異さを際立たせている。
事実――彼女は人間ではない。
それは以前からでもあるし、現在でもそうだ。
しかし、既に立派な人外の身であったとしても少々身が固くなるのは避けられない、と女性は思う。
「気は乗らないけど……」
それはここに来るまでに何度も思った。幾ら主となった者の命令であったとしても魔軍の本拠地である魔王城を訪れるのは気乗りしない。未だ感覚は人間――ではなくとも、敵であるという意識が抜けきれてないからだ。
……このままバックレたら駄目――だよね……。
そう自問自答してみるも結局、答えは「行く」一択。そうなる理由は唯一と言っていい主の命令であるからか、それとも女性の性根の問題か、はたまた両方か。さすがに「行かない」というのは不義理だと考えてしまうのである。
彼女は魔王城をもう一度、見やる。そして一息。
「――よし」
最後に呼吸を行い、覚悟を決めると女性は身を宙に躍らせた。
次の瞬間。突然かき消えてしまった様に、女性はその場にはいなかった。

とある一室がある。魔王城二階、特に魔軍の実行部隊の幹部である魔物将軍や魔物隊長が出入りするフロアだ。
そこにある一室。長方形の部屋の中には同じく長方形の長いテーブルに、何脚もの椅子が置かれている。そこにいるのは何体もの大きく丸い影に、二人の人影。
会議室。そう呼ばれている部屋には横側に魔物将軍らがずらりと居並び、目の前に置かれた書類を時折眺めながら、一人に視線を送る。
その視線の先は唯一の上座。長方形のテーブルの短い辺の一角を占拠するように腰掛けている人影。
しかし彼は人ではない。元が人であった面影は残っており、事実として容姿は人間のそれ。
だが、魔物将軍を遥かに超えるその存在感がそれを否定する。
金髪の美丈夫、男性として整った美貌を持つ彼だが、その鋭い紅い双眸から放たれる視線に、未だ慣れていない数体の魔物将軍はその巨体を縮こまらせる。
魔物としても高い実力をもつ魔物将軍が畏怖する存在。それは――魔人に他ならない。
その魔人が側にいるもう一人の人影に声を掛ける。それは魔人と同じく金髪の女性だが、その彼女も人間ではない。魔人の忠実な下僕である使徒である。
「――キャロル」
「畏まりましたわ、レオンハルト様。――それでは皆様、次の書類を。次は南方方面軍、第七軍からの要請書類ですわ。担当の魔物将軍は？」
「はっ、私です」
魔人四天王、この場では魔軍参謀としての任に就く魔人レオンハルト。その使徒であるキャロルの声を受けて一体の魔物将軍が挙手と共に声を上げた。
魔物将軍は上座に腕を組んで座る魔人レオンハルトに顔を向けて、説明の為に口を開いた。

「先日、この地で抵抗を続ける人間の軍、並びに都市の制圧に成功。現在略奪を行っているとの報告が来たのですが……戦闘での被害が甚大であった為、物資を一度に運ぶことが難しいとの事。なので追加の部隊を送ってほしいとの事であります」
言い切り、返答を待つ。その時だ。
ほんの些細な事であるが、レオンハルトが一瞬、眉を顰めた。そして視線を逸し、ややあって、
「……悪いんだが、席を外すぞ」
「えっ？」
その言葉に魔物将軍が呆気にとられてしまう。他の魔人ならいざしらず、職務に真面目な事で知られるレオンハルトが途中退席することなど滅多にないことだ。
今の議題に何か問題でもあったのだろうか、それを言葉に出す前にレオンハルトが席を立ちながら、
「用事が出来た。結果は俺も後で確認するから会議はお前達で進めてくれ。……行くぞ、キャロル」
「？　……はい！　畏まりましたわ！」
そう言ってレオンハルトはキャロルを連れ立って部屋を出ていってしまった。キャロルもその行動に疑問を抱いたようだが、主の命令を優先したのだろう。直ぐ様ついて行ってしまった。
「……はっ、了解しました。お疲れ様です」
そんな中、レオンハルトの側近である魔物将軍が了承、そして頭を下げると、呆気にとられて固まっていた魔物将軍らもちょっとずつ我に返り口々に「お疲れ様です！」と声を掛ける。レオンハルトとの付き合いが長い個体ほど、早くに正気に戻っている気がした。
部屋からレオンハルトとキャロルが出ていくと、一瞬の間を置いてとある魔物将軍がその場を纏めようと口を開く。
「……では、続けるか。議長は私がやろう。えー、先程の要請だが――」
言葉を発したのはレオンハルトの側近であり、付き合いが一番長い魔物将軍だ。彼は何事もなかったかのように議長を引き受け、流れる

ように会議を引き継ぐ。
それに戸惑ったのは先程、要請を出した魔物将軍だ。
「え……？」
魔物将軍はそのまま普通に会議が始まった事に困惑する。何故そんなに動じていないのか。もしかして自分がよく知らないだけで、レオンハルトが途中退席するのはよくある事なのだろうか。
そんな疑問に包まれた魔物将軍を隣りにいた魔物将軍が小声で、
「……気持ちはわかるが会議に集中しろ」
「！　あ、ああ……済まない」
諌められて意識をその場に戻す。注意してくれた魔物将軍に謝意を示そうとちらりと視線をよこすと、更に続けて、
「……レオンハルト様がああ言うって事はきっと余程の用事があったのだろうさ」
「……な、なるほど」
と、おそらくこの場の魔物将軍らの気持ちを代弁して教えてくれた。
レオンハルトの事を良く知る者達が多いこの場の魔物将軍らは、レオンハルトの事を信頼している。故にそう考えて即座に命令に従った。彼が会議を退席する程の事であるならそれは仕方のないことであるのだ、と。
そもそも会議に絶対出なければいけないということもないのだ。後で確認すればそれで済む話である。事実、レオンハルトはそうするとも言っていたし、きっと確認をして問題があればその場で修正するだろう。
故に魔物将軍らが今やるべきなのは後でレオンハルトの手を煩わせないように会議に集中すること。
戸惑っていた魔物将軍達もレオンハルト麾下の魔物将軍らに引っ張られ、その会議は順調に進行していった。
魔物将軍らが会議を続ける中、当のレオンハルトは――

「よし、よく来たなハンティ！　早速やるぞ！　どこでやる!?　……もうここでもいいか！　よしやるぞ！」
「い、いきなり!?」
部屋にやって来た自らの使徒を迎えて、戦いを迫っていた。
そう、レオンハルトを訪ねてやって来たのは、一ヶ月前、例の戦争、そしてとある村で死闘を繰り広げたドラゴンカラーの女性であるハンティ・カラー。
レオンハルトの二人目の使徒である彼女だった。
「あーもう！　ちょっと待ちなって！」
「ああ？」
がっついてくるレオンハルトを押しのけるようにハンティが叫ぶ。
そのあまりにも高いテンションにハンティは戸惑っていた。今日が約束の一ヶ月であるのはそうだが、まずは色々と言いたいことがある。
そもそも再会からして、
「……というかアンタさ。何であたしが窓の外にいるってわかったの？　窓でも叩いて気づいてもらおうかと思ってたのに」
「ああ、それか」
レオンハルトがあっさりと言う。
「ここ数日、そろそろ一ヶ月ってことで研ぎ澄ましてたからな。お前の気配っていうか、血か？　使徒だからか近くにいるなって予感を感じて、気配を探っていったんだが……案の定だったな」
「……もう、アンタの化け物っぷりにはツッコまない方が良さそうだね」
そう言ってニヤリと笑うレオンハルトにハンティが諦めたように息を吐く。堂々と中に入るのもアレなので、瞬間移動を駆使しながらどうにかレオンハルトを探していたのだが、まさか彼の方から気配を察知されるとは思ってもいなかった。
こんな事で勝てるのだろうか、と思う。いや、勝てる気はしないが、戦う以上は勝つ気でやらなくてはという気持ちの問題なのだが。
そんな時だ。もう一人から声を掛けられたのは。

「――ちょっとあなた!!」
「へ？」
不意にレオンハルトの後ろに控えていた少女が声を上げる。
それはハンティにとっても見覚えのある金髪ツインテールであり、思い出したような表情で声を出す。
「あー、この間の。やっぱり使徒だったんだ」
「そうですわ！　わたくしはレオンハルト様の第一使徒にして完璧使徒！　そしてあなたにとって先輩使徒であるキャロルですのよ！」
「使徒強調しすぎだろ……」
レオンハルトがキャロルの主張がやたら激しい自己紹介に呆れながら小声で言う。だが、それに反応せずキャロルがハンティの目の前までやってくる。
そしてビシッとハンティを指を指して続けた。
「あなたに言いたいことがあります！」
「え、あたしに？」
ハンティが指を指されて目を丸くする。何やら憤慨した様子のキャロルだが、自分が何かしたのだろうか、と頭に疑問符を浮かべる中、キャロルが更に続けて、
「――同じ使徒として、先輩であるわたくしに挨拶の一つもないのは失礼ですわ！」
と、大声でハンティのマナーを指摘した。
「……し、失礼？」
「そうですわ！　同じレオンハルト様の使徒たるものとして挨拶は大事でしてよ！　そんなんじゃ魔物社会で苦労してしまいます！」
その言葉にハンティがレオンハルトに視線を移す。小声で、
「……魔物社会って礼儀に厳しいの？」
「いや、まぁ……自分より上位の奴にはそれなりの態度で接するが……礼儀やマナーに厳しい訳じゃないな……多分気にしてるのはキャロルくらいだ」
質問に同じ様に小声で返すレオンハルト。ひそひそと話をする二人が見えていないのか、キャロルはそれに構わず表情とポーズを変化

させた。腕を組んで表情を和らげると、ハンティに向かって胸を張る。
「……ですが、魔物社会初心者に最初から完璧を求めるほどわたくしは厳しくありません。わたくしは超優しいので今挨拶すれば許して差し上げますわ」
そう言って、ふふん、と自慢気に笑うキャロル。それを見てハンティは、
……えっと、とりあえず挨拶しろってこと？
よくわからないが、そうしなければ話が進まない気がする。それに確かに同じ使徒ならこれからもよく関わることになるだろう。何となくだが悪いやつじゃなさそうだし。
そう考え、ハンティはその催促に従って礼をする。
「……よろしくお願いね。えー、キャロル先輩？」
「！」
ちょっと戯けながら、挨拶する。すると目を見開かせて、何やらトリップしたように頬に手を当て、
「せ、先輩……！　このわたくしがとうとう先輩……！　いい響きで――ハッ!?」
「……」
「……」
と声を震わせて何やら喜ぶ。そんなに先輩と言われた事が嬉しいのだろうか。
ハンティやレオンハルトが半目でそれを見ていることに気づいたのか。誤魔化すように咳払いをしながら、
「んんっ！　よ、呼び捨てで構いませんわ。同じ使徒仲間ですので。……気を取り直して、と。これからよろしくお願いしますわ！　一緒に七星を倒して完璧使徒の座を手にしますわよ！」
「七星……？　……うーん、まぁ、とにかくよろしくねキャロル」
「……一応言っとくが七星は敵じゃないからな」
レオンハルトがそう注意するも、既にキャロルは打倒七星を掲げてハンティを巻き込もうとしていた。

「それじゃ、早速やり合うか」
「いや、だから……もうちょっと、こう、他にあるでしょ」
キャロルとの使徒同士の挨拶を終えて開口一番、そう口にしたレオンハルトに再びハンティがつっこむ。
……相変わらず戦闘狂というか。
どれだけ自分と戦いたいのか。いや、それが目的で使徒にしたとはいえこうもがっつかれるとハンティとしても呆れざるを得ない。一応自分の使徒との一ヶ月振りの再会なら普通はもっと近況を聞いたりするものじゃないのだろうか。普通の魔人と使徒の関係を知らない自分が言うのもなんだが。
それに自分としても使徒になって色々と困ったことというか、言いたいことはある。そんな思いから聞いた言葉に、レオンハルトは、
「別にない――あ、いや、あるな」
「あっ、あるんだ」
それに否定の言葉を返そうとしていたレオンハルトだったが、言い掛けて思い出したように逆の言葉を紡いだ。
それにちょっとだけ安心するハンティ。さすがに会ってすぐやり合いましょう、は何とも言えない気分になる。
だが、その後に告げられた用事に、ハンティは絶句することになった。
「スラル――魔王がお前と会いたいって言ってたが」
「……は？」
思わぬ名前が聞こえてハンティが眉根を寄せて疑問の声を出す。
魔王。魔軍の――魔物の親玉である大陸の支配者。
その存在が自分に会いたいと言っている。
ハンティは頭を抱えた。
……ええ……いや、魔王って……いや、そりゃ当然いるだろうけど……。
ハンティがいるのは魔王城。そして自分は既に使徒。加えて主は

魔人の中でも上位の魔人四天王と魔軍参謀という役職に就いている。レオンハルトと魔王は当然会ったことあるだろうし、よく関わる相手なのだろう。

だが、魔王と会うというのは結構キツいものがある。いや、使徒なのだから二重の意味で断れないのだが、軽い気持ちでが他に何かないのか、と聞いたら魔王が出てくるというのは嫌でも自分の今いる立場を思い出させてくれる。

ハンティはげんなりしつつも、レオンハルトに尋ねる。

「……それって絶対会わないと駄目――だよね……」

「……ま、そうだな。それもそうだし、お前の危惧は何となくわかるんだが――」

レオンハルトはハンティの様子を見て、ああ、とその不安の理由を推察したのか言葉を掛ける。

一度、吐息をついて苦笑すると、

「魔王スラルは――お前が考えているような恐ろしい存在じゃないからな」

「……」

ハンティの不安を払拭するようにそれを否定してみせた。

そのレオンハルトの言葉に深い信頼のような何かが見て取れる。まだ二回しか接していないハンティですらそれがわかった。

そして更には横にいたキャロルが胸に手を当てて、

「スラル様はお優しい方ですから大丈夫ですわ！　この間もわたくしにおすすめと言って、本を貸してくれましたのよ！」

「……全然想像付かないんだけど」

使徒であるキャロルですら全く心配していない様子だ。

ハンティとしては魔物の親玉ということで、化け物のようなイメージしか湧かないのだが。貸してくれた本と聞いても読んだだけで寄生されるような魔本なんじゃないかと想像するくらいには魔王という存在に対するイメージは悪い。

だが、こうも二人が念を押すように言ってくるってことは少なくとも魔人や使徒には優しいのだろうか。あまり会いたくはなかったが、

全く興味がない訳ではない。
何せ魔王スラルという存在は謎に包まれている。何処かの戦場で出てきたという話も聞かないし、それどころか魔王についての話は全く伝わってこない。噂も殆どなく、あっても魔王というイメージに沿うものしか聞かない。
本当は一体どんな人物なのか、ハンティが魔王のイメージについて思案していると、
「それじゃどっちから済ませる？」
「――へ？」
不意にレオンハルトがそんな事を聞いてくる。間の抜けた声を上げてしまったハンティにレオンハルトは指を二本立てて、
「俺とやり合うのが先か、魔王と会うのが先か。……俺としては先にやり合うのをお勧めするが」
「……うわぁ」
レオンハルトが不敵な笑みを見せてそう言う。その選択をハンティに委ねてはいるが、身体から立ち昇るオーラが戦意と一緒に漏れ出していた。明らかに、先にやろうぜ、と言外にも言っているようだ。
そしてその言葉に、正直に嫌そうな声を出してしまうハンティ。
やっぱり来なければ良かったかもしれない、そう思いながらも結局どちらもこなすことは避けられない。先を選ぶだけで後にしたら無くなる訳じゃない。
……あーもう！　やってやろうじゃない！
ハンティは一度溜息を吐くと、覚悟を決めた。半ばやけくそ気味な気がするが、それでもここまで来たのだから四の五の言ってられない。
ハンティはその選択を告げた。
「……それじゃ先に――」
「……はっ」
その選択にレオンハルトは笑みで答えた。

同胞

「……」

キャロルはレオンハルトとハンティの戦いを観戦していた。

自分は今、魔王城から離れた平野でぶつかり合う主と使徒、両者の戦いを距離をとって眺めている。中庭でやることも出来たが、騒ぎになるのもまずいので必然的にここまで来よう、とそういう判断をレオンハルトが下したからだ。

だが、キャロルは思う。――なんだこの戦いは、と。

それは戦う理由が分からないということではない。レオンハルトが先月の戦争の最中にハンティに目を付け、彼女と定期的に戦う為に使徒にした、という理由をキャロルは聞いていたし納得もしている。納得と言っても主が決めたことなら否応もないのだが。

しかし分からなかったのは、ハンティがレオンハルトを楽しませる程強いのか、その真偽だ。

確かにレオンハルトは前回彼女と戦って、それを楽しんだ。それは事実だし、キャロルとしても主が楽しめたのなら幸いだ。それはいい。

だが、それでもなお疑っていた。

キャロルは主のスペックを改めて確認する。

主は魔人だ。それもただの魔人ではない。魔人四天王に選ばれるほどの実力者であり、魔軍参謀を務めるほど知略にも優れている上級魔人。その上、優しくて、人望があって、格好良くて、戦闘大好きで、でも読書を中心にインドアな趣味も好きで、普段は冷静なのに、戦ってる時ははしゃいでいて、またそのギャップが――

……っと、そうじゃありませんわ。

思考を中断する。少し脱線しかけてしまった。

とにかく、レオンハルトは魔人としての実力は一、二を争うほどに高いのだ。

そんなレオンハルトを、使徒になったとはいえ二度目の戦いで楽しませる事が本当に出来るのか――そんな疑問をキャロルは抱いてい

た。
だがそれも、この戦いが始まるまでであったが。
「……あっ」
キャロルの視線の先で、ハンティが消えて、そして再び別の場所に現れる。
それはまさに瞬間移動。高度な魔法だというそれを駆使してハンティが仕掛けるのをキャロルは見た。
それを相手にするレオンハルトの口元には、笑みが浮かんでいて、
「……むう」
キャロルは胸にもやもやとしたものが湧き上がってくるのを感じて、頬を膨らませる。
そう感じたのは眼前の戦いはそろそろ決着がつく――そんな頃合いであった。

レオンハルトは戦っていた。
相手は一ヶ月前と同じ、そして一ヶ月後も戦う予定の自らの使徒、ハンティだ。その戦闘の基点となるのはやはり、瞬間移動であり、今も自ら周囲を回るように移動しながらその手に持った剣で攻撃を加えてくる。
それだけなら一ヶ月前と変わらない。だが、確実に変わっていることが幾つかある。その理由はやはりと言うべきか、
……使徒化の影響で身体能力が上がってやがるな！
速度や力、その他の肉体の性能が根こそぎ引き上げられている。喜ばしいことだ。
何故なら戦闘において筋力をはじめとする肉体の能力は基礎となるべきものだ。どれだけの技術を持っていたとしても、使い手の膂力が貧弱では効果は得られないし、一度剣を振っただけでバテてしまうような体力では戦えないどころか、技を教えることも出来ないだろう。
故に戦い方を教える際には、まずは最初に体力作りなどの体作りを

徹底させる。力が無ければ大きな成果は得られないから。
実際、魔軍が人間を圧倒出来るのは魔物の身体能力が人間より圧倒的に高いからだ。個体にもよるが魔物の力は人間の大人に比べても明らかに上であり、魔物兵ならその差は平均して二倍の強さを持つ。そして使徒や魔人ならその差は更に広がる。
そのため魔人は強大なのだ。並の魔人ですら人間は束になっても相手にならない。それが上級魔人、カミーラやレオンハルトなら尚の事だ。
相手が普通の人間なら適当にぶん殴るだけでどの部位であっても死ぬだろうし、力に任せて引っ張るだけで手足を引き千切ることが出来る。逆に人間が一撃で絶命してしまうような攻撃を何十発受けようが死ぬことはないし、大きな傷が出来たとしても致命傷で無い限りは高い再生力で回復してしまう。無論、それなりの時間は掛かるが人間や他の生物よりは遥かに早い時間で傷が塞がる。
そのため、レオンハルトの相手に求めるハードルは高い。生半可な相手では戦闘にならないからだ。
しかし目の前の相手、ハンティは違う。使徒になって更に身体能力を上げたことにより、こちらとの差が縮まっている。――これがどれだけ愉快なことであるか。
魔人になって強さを求めることで周囲との差を広げてきた。追いすがる者は少なく、今では満足に戦える者は数える程しかいない。
そんな自分を追いかけてくる者が現れた。無理やりそうさせたのだし、これからの年月でどうなるかは分からない。その力量は未だ脅威ではなく、今もこちらが手加減をしている形ではある。だが、
「やっぱお前やるなぁ……見込みあるぜ」
「……お褒めに預かりどうも！」
その将来性を口に出してわかりやすく褒めてみたが、その返答は上段からの振り下ろしだった。攻撃と共にぶつけられる感情と戦意が心地良い。
既に幾つかの攻防を経て息が上がっている様子のハンティだが、その目は死んでいない。隙あらば一撃入れてやろうという意思を感じ

る。
「――！」
そしてその通り、動きがきた。
瞬間移動を終えて出てきた先は、こちらの右後ろ。それもかなり距離が近く脇の下に近い位置だ。
そしてこちらの右手を狙った動き。その狙いにレオンハルトは気づいた。
……俺の剣を狙ってんのか！
なるほど。確かに殺し合いじゃない以上、決着はどちらかが動けなくなるか降参するなどして負けを認めるかといったところだろう。得物を奪い、あるいは落とさせるというのは負けではないもののこちらのプライドを大いに傷つける。それを格上相手に成したならさぞ痛快だろう。思わず笑ってしまう。
だが、
「剣士が剣を落とされたら恥だよなぁっ！」
「――っ！」
それを早い段階で気づいてしまったが故に、逆に仕掛けてやる。レオンハルトは強引に身を捻った。回転するように身を動かし、ハンティの一撃を空かすと、
「っ！　躱され――」
「貰ったぜ……！」
空いた左手でハンティの右手首を掴んでやった。

ハンティは右手首をレオンハルトに掴まれた。
「ぐ……！」
持ち上げられ、そのまま吊るされる。どうやら得物を狙った仕掛けは見抜かれていたのか、即座に対処されてしまった。レオンハルトが顔をこちらに向け意地の悪い笑みを浮かべてくる。
「……さて、捕まって動けなくなっちまったな？」
腕を掴まれてしまっては瞬間移動で逃げることも出来ない。瞬間

移動を行っている間、他のモノを動かすことは出来ないのだ。故にハンティは軽く息を入れると、
「……降参」
　左手を軽く挙げ、降参を宣言する。ここいらが潮時だろう。この状態では何をしても向こうの方が速く、対応されてしまう。だからもう終わり、そう示したつもりであったが、
「……？　ちょっと、離してくれない？」
　未だレオンハルトはこちらの手を離さず、腕を挙げて宙吊り状態を維持している。一体どうしたというのか、眉を顰めて再度離してもらうよう言うも、彼は良い笑みで、
「ま、降参は構わねぇが……負けたなら罰ゲームが必要だよな――？」
「……は？」
　そんなことを言った。
　何を、と思った瞬間。
「今日は何も考えてないし、用意もしてないしな……このまま怪我しない程度に力でも込めるか。よし、いくぞ――」
「え、いや――」
　左腕を魔人の力で握られ、ハンティは苦しんだ。
「痛たたたたたたた!!　ちょ、痛い痛い！　これ洒落になんないんだけど……!?」
「大丈夫だ。怪我どころか痣にもならん。……前に試したしな」
「試したって……！」
　ハンティが苦悶の表情で疑問を口にする中、離れて戦いを観戦していたキャロルが遠くを見るような目で、
「あー……それ、痛いんですのよねぇ……ご愁傷様ですわ」
「いやいや、これ折れる！　骨折れるって！」
　ハンティが宙でじたばたと暴れるも魔人の握力からは逃げ出せないようで、抵抗虚しく罰ゲームを喰らい続ける。
　そして数秒後、ようやくレオンハルトの手から力が抜け、ハンティは地面に降ろされた。
「痛ぅ……この馬鹿力め……」

ハンティが恨みがましい目でレオンハルトを見る。その視線にもレオンハルトはどこ吹く風といった様子だ。さて、と一言置いてその手に持った魔剣をしまうと、腕を組んでそのままの表情で、
「よし、それじゃ反省会だな」
「……まだ自分の使徒が痛がってるのが見えないのかなあー？」
笑顔でそう言われるが、流れが早すぎる上に、扱いが酷いため、青筋を立てながらこちらも笑顔で使徒であることを強調する。自分の使徒を戦闘でボコボコにした挙げ句、負けたら罰ゲームを施行し、そのまま休憩も無しに反省会は幾ら何でも酷くないだろうか。甘やかせ、とまでは言わないが、少しくらい優しく扱ってもバチは当たらない筈。
しかしレオンハルトはそれを無視して言葉を続けた。
「それでだ。先に疑問なんだが……お前、なんか前と比べて随分と剣の腕が上がったな？　剣筋が前とは大違いだったぞ」
「……あー」
不意に予想していた質問が来て頭を掻く。ほんの一瞬だけ言うべきか迷うももう半ばバレているし、この先もこうやって模擬戦をするなら隠し通せるものでもない。
ハンティは半目でレオンハルトを見た。
「……それ、多分だけどアンタの所為、かな」
「はぁ？」
まだ意味が分かっていないレオンハルトに単刀直入に意味を伝えてやろうとハンティはそれを告げた。
「――使徒になってから急に剣の腕が上がったから。おそらく使徒化が原因でしょ、これ」

レオンハルトはハンティから告げられた言葉に一応の得心をする。納得した理由は明確だ。そういったケースを幾つか知っているから。
その一つにレオンハルトは目を向ける。

「……そういやキャロルも急に剣が使えるようになってたな」
「あ、はい。その通りですわ」
こちらの言葉に素直に肯定するキャロル。一体目の使徒がまずそれである。以前迷宮に一緒に潜った時に確認したし、それは間違いない。
更には、
「俺も……思い返してみれば魔人になってから剣の腕が上がっていったな」
顎に手を当て、二百年前の魔人化した際の記憶を辿りながら言う。古い記憶ではあるが、印象深い出来事だった為か覚えていた。
それを聞いてハンティも同じ様に納得したようで、
「それならやっぱレオンハルトの血の影響ってことかな……剣が上達する――剣馬鹿の血？」
「……酷い名前を付けるな」
「わたくしとしてはレオンハルト様と同じ武器が使えて喜ばしい限りですわ！」
キャロルだけが深く考えずに喜ぶ。だがまぁ、今の所は事実そうなったというくらいで、本当に関係があるのかは分からないし、深く考えなくていいのかもしれない。
それに、そういった才能を持っていても気をつけなければいけないことがある。
それをちゃんと伝えるために、レオンハルトはハンティだけでなく、キャロルにも視線を向けた。少し真面目な声色と表情で告げる。
「ま、それはいいがな。だからといって鍛えるのを止めたりするなよ。どんな才能も鍛錬を怠れば意味を成さないからな」
「わかってますわ！」
「……まぁ、やるだけはやるよ」
二人の使徒からそれぞれ返事が返ってくる。キャロルは相変わらず元気いっぱいだが、ハンティの方は何やら釈然としない様子ながらも渋々頷く。
……大方俺の影響で剣の才能に目覚めるのが複雑なんだろうな。

レオンハルトはハンティの内心を予想する。どこまで的を得ているかは分からないが、大きく外れているということもないだろう。やはりハンティはまだまだ自分が使徒だという感覚が薄そうだ。経緯が経緯な上、まだ一ヶ月しか経っていないのだからしょうがないのだが。

レオンハルトはそれを思い、口の中で言葉を作る。――それを促すにはこの後の用事がちょうどいいかもしれない、と。

回避できないならさっさと済ませる方がハンティとしても助かるだろう。故にレオンハルトは一息入れる。ここからも彼女にとっては大変な事だ。

「それじゃ、反省会は戻りながらやるぞ」

「……それはいいんだけどさ。戻るってことはやっぱり――」

ハンティが嫌そうに顔を顰めてこちらに確認を取る。やっぱり、という言葉の先は簡単に読める。

故にレオンハルトは彼女が期待しているであろうことを言ってやった。

「そりゃあ魔王城に、だな。魔王との対面が残ってるし」

「ですわ！」

「……はぁ、やっぱそうだよねぇ……」

笑顔で言う自分と、意味もなくとりあえず合いの手を入れたキャロルの二人を見て、ハンティは自分の身を憂うように表情を暗くした。

そうして、三人は再び魔王城に帰ってきた。

だが、この表現は約一名にとっては正しくないと思う。

――まだ、二度目になるハンティ・カラーにとっては。

「――で、こっちが食堂になっていますわ。いつも城に詰める魔物兵が多く利用してるのでお昼時は結構込みますが、大体は皆の方から気を使って席を開けてくれます。それがあるので使徒以上はお部屋で取ることを推奨されてますわ」

「……うん」

「ここのコックは腕がいいからな。待遇が良いからか向上心はあるし、自分から望んで仕事をしてくれるから助かってる」
「……そうなんだ」
ハンティは頷きを返す。キャロルとレオンハルト。二人の解説はありがたいものの、それよりも気になることがある所為で集中出来ないでいた。その理由が、
……はぁ、すっごい見られてる。
周囲で警備をしている魔物兵達からの視線。
自分が物珍しいからか、一緒にいる二人が大物だからか。とにかく視線が自分に集中しているのである。
正直落ち着かないのでさっさと案内を終えてほしい。
こんなことなら、魔王城についた途端にキャロルが、自分に魔王城の案内をしてあげたいとレオンハルトに提案したのを差し止めていれば良かった。一応レオンハルトもこちらに確認は取っていたのだし。
キャロルが善意で言ってくれていたのがわかったので了承したが、よく考えればこうなる事は分かりきっていたので明らかにこちらのミスだ。
今からでもやめてもらおうか、キャロルには悪いがさっさと魔王に会いにいって用事を済ませれば帰れるのだし。
……うん、そうしよう。そうと決まれば早速――
ハンティは前を歩くキャロルに声を掛けようとし、
「次はこっちですわ！」
「あっ――ちょっと待って」
廊下の角を曲がるキャロルを追いかける。何とも慌ただしい子だ。
ハンティも廊下の角を曲がった。と、同時にキャロルの声が響いた。
「――あら、カミーラ様。どうもですの。……そして、出ましたわね七星！」
「……ん？」
キャロルの口から聞こえた名称にどこか聞き覚えがあり、疑問符を

頭に浮かべてしまう。しかしそれを思い出すより先に、相手を目にする方が速い。――ハンティの不幸はそれに気づけなかったことだった。

角を曲がり、そこにいたのは二人の男女。そのうち前に立つ伏せた目が印象的な男性がキャロルを見て疲れたように嘆息した。

「……はぁ、キャロル。いい加減その……ライバル扱いはやめてほしいのですが」

「駄目ですわ！　わたくしが魔物界一の完璧使徒になるためにはあなたに勝たなくてはなりませんので！」

「それなら私の負けでも別に――おや」

「……」

そのおそらく七星と呼ばれた男性の目がこちらに移る。そして遅れてやってきたであろう背後の人物にも気づいて、声を掛ける。

「――レオンハルト様も居りましたか」

「ん、七星か。それにカミーラ」

レオンハルトが慇懃に礼をする七星、そして奥にいる女性の名前を呼ぶ。

……まさか。

その名にハンティはようやく思い至る。そしてその間に奥にいる女性が一歩、静かな身のこなしで前に出てきた。

「――――」

その女性は、全体的に暗い色を纏っていた。

ダークブラウン色のドレスに身を包んだ長身の女性だ。レオンハルトと比べてもほぼ同じ身長。しかし驚くべきはそんなところではない。

その頭部には角が生えており、背には大きな翼、長い耳、それらは彼女の身から発せられる圧倒的な存在感と共に、彼女が人間でない事を表している。プラチナブロンドの長い髪と整った顔立ち、女性的なスタイル。全てにおいてその美貌は人間ではありえない程に隔絶としていた。

その彼女が、口を開き、

「レオンハルトとキャロル。それと――」
「！」
彼女の黄金の瞳がハンティを映す。そして、目が合ってしまった。
ハンティは内心、背筋が凍る思いだった。
何故なら――彼女の全てに見覚えがあるからだ。
それはハンティだから、という訳ではない。きっと同じ種族なら誰であってもそうであっただろう。
そんな彼女は、ハンティをじっと、約五秒近く凝視すると、
「――お前は、誰だ？」
「っ――！」
その圧と共に疑問を投げかけられた。そしてその威圧感に、やはり、とも思う。
生まれついての上位者。その役割こそ複雑であるもののそこは変わらない。
その名を、その存在を――ハンティは思い出した。
……カミーラ。
魔人四天王の一角、プラチナドラゴンの魔人、カミーラ。
かつて同胞達が求めた生ける王冠が、昔の記憶のままの姿でそこにいた。

追及

魔王城の一角、かつての同胞との再会は、微動だにせずに続いていた。

目の前の魔人、カミーラから視線を向けられ続けるハンティ。圧を感じてこちらも視線を逸らせない。

ハンティは自らの迂闊さを呪った

……魔人になったってのは聞いてたし、そりゃ遭遇もするか……！

なにせここは魔王城。魔人になったカミーラが出歩いていても何も不思議はない。

そしてハンティは改めてそれを思い出す。カミーラは自分達、ドラゴン種にとっては特別な存在だと。

ドラゴン種に生まれた最後の雌にして、決闘で勝ち残った最も強いドラゴン王だけが所有出来る生ける王冠。ドラゴンカラーである自分はその事を知っている。彼女が魔王アベルに連れ去られて魔人になったということもだ。

魔人カミーラは生まれついての上位者。それを知識としても知っているし、実際に目の前にしてみてもそれは正しい。魔人になって強化されたであろうプラチナドラゴンの姫が発する圧力は、間違いなく今を生きるドラゴン種の頂点に他ならない。

そしてそこから導き出される結論は、

……怒らせたら、まずい……。

カミーラは今もこちらに視線を浴びせ続け、返答を待っている。その問いの意味は何だろうかとハンティは思案する。一つ、思い浮かぶのは、

……あたしの正体に感づいた……？

今、自分の姿はヒューマンカラーのものだ。黒髪であることやクリスタルの形などの差異はあるものの、少なくともドラゴンカラーとは到底思えない姿だ。

その上で気づいてしまうものなのか。だが、同族であるからこそ感じ取れるものもあるのかもしれない。

「……」
ハンティは迷う。それを言うべきか、それとも隠すべきか。
完全に気づいているのなら言うべきだろうが、確証を持てていないのなら隠し通すべきだ。自分としてもあまりこの事を人には言いたくない。
そろそろ答えを出さねばいけない。誰も声を発しないまま時間だけが過ぎていく。絶対的な上位者の問いには誰も口を挟めない。
「……あたしは――っ」
何かを言おうとして――言い淀んでしまう。カミーラの視線が鋭くなったように感じる。
この場の絶対的な上位者からの質問に、他の二人は口を挟むことが出来ずに口を噤んでいる。だが、
「――こいつは俺の使徒だ」
「！」
こちらの横に並ぶ声が来る。レオンハルトだった。
上位者からの問答に口を挟めるのは同じ立場であるレオンハルトだけだ。それを受けたカミーラが視線をハンティからレオンハルトに移して再び問う。
「……使徒、だと？」
「ああ、名前はハンティ。見ての通り、カラー出身だ」
カミーラの圧を感じる視線にレオンハルトは極めて普通に答える。
その答えにカミーラが眉根を寄せた。
「……カラーは皆、青髪の筈だが？」
「――っ」
その言葉に、ハンティは身を固くする。反応に出さないように努めるが、やはりバレているのかとも思い表情が動いてしまったかもしれない。
その問いに何と返せばいいのか、再び迷う中、レオンハルトはあっさりとした様子で、
「……ん、これのことか。これは使徒化の影響だな」
「……それで髪が？」

「珍しいことじゃないだろ。キャロルだって髪が金色に変わったし、場合によってはもっと大きな変化もあり得る。こいつもそうってだけだ。――そうだろ？」
「！　ええ……そう、です」
「……」
　レオンハルトから差し向けられた使徒化の影響という言葉に敬語で乗っかるハンティだが、カミーラの訝しげな視線は変化しない。未だレオンハルトを睨むように見続け、それに対しレオンハルトはその圧を涼しい顔で受け流す。
　ハンティはそれを緊張の面持ちで待っていた。ほか二人の使徒も妙な緊張感に動けないし、動かない。
　……どうなる……？
　その答えは咄嗟のものにしてはよく出来ていると思う。使徒化による容姿の変化、というのは魔物界や特に魔人や使徒の中では常識に近いものであり、別段おかしな話でもない。
　これなら逃げ切れる、追及を避けれる。そんな願いが届いたのかやあってカミーラが、
「……ふん、レオンハルト」
「……何だ？」
　その圧を和らげた。鼻を鳴らして再度口を開く。しかしその表情には笑みが浮かんでいて、
「――また随分と面白いのを使徒にしたようだな？」
　そう言ってレオンハルトを見る。
「見込みがあると思ってな。……まぁ、あまり怖がらせないでくれ。お前の圧力は中々にキツい」
　今度はやや困ったように息を吐き、レオンハルトが答える。その言葉はこちらを案じたものだろうか、それとも自分もキツいと思った為か。
　そんなレオンハルトの言葉に、カミーラは目を細める。
「……お前が言えたことか」
「……普段の俺は大したことないだろう」

「……ふん、いけしゃあしゃあと、よく言う……」
……ん？　何か今……。
ハンティがそのやり取りと空気に違和感を感じる。
しかし何がおかしいのかは分からない。そのやり取りはレオンハルトの戦闘時の事を指して、カミーラがツッコミを入れたように聞こえる。しかしそうではないようにも聞こえるような――。
「――ハンティ、だったか……？」
「！　は、はい」
思考を中断せざる得なくなる。カミーラに声を掛けられた為だ。
ハンティが固い表情で見上げる中、その黄金の瞳がこちらを映す。
そして、
「……精々頑張るといい」
「……えっ……あ、はい」
思わぬ無難な言葉を掛けられ、ハンティが戸惑いながら。そして何とか返事をする。直後に彼女の視線がハンティから切れた。
「……行くぞ、七星」
「……畏まりました」
と、それを聞いてカミーラは興味を失ったようにさっさとこちらの横を通り過ぎていってしまう。呼びかけられた使徒、七星はそれを恭しく了承すると、去り際に顔を向け、
「では、レオンハルト様。失礼します」
「ああ」
「そちらの、ハンティ、でしたか。同じ使徒としてよろしくお願いします」
「……ん、そうだね。よろしく」
レオンハルト、そしてハンティ、と視線を移し挨拶をしてきた。一瞬迷うも、無難に挨拶を返す。
そして最後に自分の横にいたキャロルが、あっ、と気を取り直したように短く声を上げ、
「ごめんあそばせ、ですわカミーラ様！　七星は首を洗って待ってなさい！　わたくしとその後輩がいずれけちょんけちょんにしてやり

ますわ！」
「いつの間に2対1に……!?」
「い、いや、あたしにそんな気は……」
「くくっ……キャロル。七星を倒せるよう、頑張るといい……くっ、くくっ……」
「勿論ですわ！　近い内に七星をギャフンと言わせてみせますので！　楽しみにまっていて下さい、カミーラ様！」
「七星がぎゃふんと……くっ、くくくっ、……それは是非、見てみたいものだな……」
「か、カミーラ様まで……お戯れを……と、とにかく失礼します」
「応援ありがとうございますわー！　カミーラ様ー！」
七星が驚愕してハンティを見るも、その場を後にしようとしていたカミーラの含み笑いによって気勢を削がれる。そしてそのまま逃げるようにカミーラを追いかけ、急いで去っていった。キャロルがカミーラに大きく手をぶんぶんと振って別れを告げている。
その光景にハンティは目を丸くして呆然としてしまう。
……あのカミーラが、笑ってる……!?　というか今のやり取りは何なの!?
正直自分が知ってるカミーラのイメージにそぐわない。いや、彼女のことをそこまで知ってる訳ではないのだが、ああいったおふざけは嫌いそうな印象だったのだ。
しかしハンティの印象は他所に、隣のレオンハルトがぼそりと、
「最後はいつものカミーラだったな……」
「えっ、今のが!?」
「ああ、アイツは笑いのツボが行方不明だからな。それと基本的に同性が嫌いなのに、キャロルを妙に気にいってる節がある」
「カミーラ様は女性にキツいという噂は聞きますが、そんな事ないと思いますの。会う度に笑ってますし、何かと優しいのでわたくしは好きですわ！」
「それはお前にだけだ」
「え、えぇ……」

困惑してしまうハンティだが、二人の話を聞くに思ったよりも愉快な性格らしい。何というか、自分が思い描いていたカミーラ像がガタガタと音を立てて崩れ落ちていくようだ。

だがそんなことよりも問題がある、とハンティは頭を振る。それは、

……最初のアレは気づいた訳じゃなかった……？

黒髪のカラーが珍しかったから聞いてみただけなのだろうか。それともそうじゃないかと思っていたが、レオンハルトの答えに納得して引き下がったのか。一体どっちなのか。もしくは別の――

「……俺達もそろそろ行くぞ」

「了解ですわー！」

「！　ん、そうだね」

レオンハルトがさっさとその場を立ち去ろうと声を上げたので、キャロルと自分も付いていく。今度は自然とレオンハルトが先導するような形となった。

前を歩くレオンハルトを見て、ハンティはふと思う。それは先程のカミーラとのやり取りに関係することだ。

……レオンハルトは、あたしの正体に気づいてるみたいだけど……。

以前にも少し思ったことだ。レオンハルトには自分の真の姿とも言うべきドラゴンカラーの力を解放した姿を見せているのは確かな事だ。

しかしあれはドラゴンカラー本来の姿ではない。本来はちゃんとしたドラゴン種と同じような姿であり、既にいかなる理由か、人間種の姿となったハンティには取ることの出来ない姿なのだ。

それにドラゴンカラーという種は５００年以上前に絶滅している。元は人間であるレオンハルトにはドラゴンカラーの姿どころか存在も知らない筈なのだ。それなのに、何故自分がドラゴンカラーだとわかったのか。それが分からない。

カミーラの追及は逃れたが、代わりにそんな謎が残った。だが、ハンティは、

……でも、今はいいかな。
その思考を今は放棄することにした。どんな理由であれ、レオンハルトのおかげでカミーラの追及から逃れることが出来たのは確かだ。
なら、自分も主のことを詮索するのはよそう――少なくとも今くらいは。
ハンティは大人しくレオンハルトの後ろを付いていくことにした。

レオンハルト達から少し離れた魔王城の一角で、思考する女性の影がある。
「……」
魔人カミーラだ。その背後には使徒である七星。
歩みを止めることはなく、そんな彼女に付き従うように七星は黙って後ろを歩く。
よく出来た使徒だと思う。七星を使徒にしてからというもの、彼は周りの事によく気が付き、あらゆる事を補佐してくれる。面倒な事は命令するまでもなく代わりにこなしてくれたりもする。
単純な戦闘力も申し分なく、頭もいい。非の打ち所がない使徒だ。
……キャロルのことは苦手のようだがな……。
レオンハルトの使徒であるキャロル。何かと七星を目の敵にして勝負を挑んだり、勝手に勝ち負けを決めたりとしており、普段からも何かと落ち着きがない賑やかな使徒である。
カミーラとしてはキャロルは珍妙かつ可笑しな、見ていて飽きない故に戯れるにはちょうどいい愛玩動物といったところで嫌いではないのだが、七星は彼女の対応に四苦八苦しており、それもまた面白い。
「くくっ……」
「……カミーラ様？」
七星が不思議そうにこちらを見てくるので、それに返事をしてやる。
「……今度からは2対1だな……？」
「……そうですね」

こういった話題だといつも淀みない返事を返す七星が言い淀むように返事が遅れる。それは愉快ではあるが、一応釘を刺すように言っておかねば。
「まさか、負ける……とは言うまいな……？」
「……エエ、ソウデスネ」
「……？　ならいい、が」
何故か七星の表情が死人のようになった気がする。声も棒読みのように聞こえたが――まぁ、了承はしているのだし、指摘するほどのことでもないだろう。カミーラは再び思考の海に潜る。
使徒同士のじゃれ合い、そこから思い出されるのは、
……先程の者は……。
レオンハルトの新たな使徒である黒髪のカラー、ハンティと名乗った女。
カミーラはあれを見た時、奇妙な感覚を感じた。あれは、
……同胞の匂い。
そしてその感覚はおそらく間違いではないと判断し、ドラゴンカラーの生き残りではないかと推察した。
カミーラは思い出す。ドラゴンカラーは、自分達ドラゴン種の中でも最も早くに絶滅した種族だ。その理由は不明だが、その後直ぐにあの忌まわしき天使が現れ始めたので、同じ様に天使に狩られたのではないかというのが可能性としては高い。
生き残りがいるというのもドラゴンカラーに関しては聞いたこともなかったが、いたとしても不思議はない。だがまぁ、興味は湧いたので直接問いを投げかけた。
だが、ハンティは答えることが出来ずだんまり。挙句の果てにはレオンハルトが口を挟んできた。別に使徒であるハンティを主であるレオンハルトが庇うことに不思議はないのだ。それ自体は構わない。カミーラが解せないのは、
……レオンハルト……何故、それを隠す……？
ハンティを只のカラー。つまりヒューマンカラーだと言い張った事。ドラゴンカラーであることを隠す理由が分からない。

おそらくだが、何か深い理由があるのだろうとは察することは出来た。それはあのレオンハルトの圧の強さでわかった。

……レオンハルトめ。私にだけ圧力を掛けてきおって……圧が強いなどよく言えたものだ……。

他の者は多分だが気づいていないだろう。レオンハルトが自分に向かって視線、そして一緒に圧を乗せてきたことを。

そしてあの紅い眼は言外にこう言っていた――「詮索するな」と。

そういった意味を込められたその視線に、カミーラは少し悩んだが、結局は引き下がった。別にその事実を白日の下に晒さなければいけないという程でもない。七星は気づいていないようだったが、それもいいだろう。

カミーラとしては隠されたことが多少、気に障るというくらいだ。それもレオンハルトの顔に免じて許してやろう。

……自分の主に感謝するんだな……。

カミーラは元同胞であり、今は魔人の使徒になったハンティを思い、軽く息を入れた。

ハンティと魔王の料理４

「――さて、心の準備はいいか？」
「……一応」
ハンティはレオンハルトの言葉に渋々と頷いた。
……とうとう、魔王とご対面か……。
内心で呟くも暗いものが混じってしまうのは気の所為ではないだろう。
ハンティはレオンハルトとキャロル、そしてその背後にある扉を見る。
レオンハルトに連れられてきたこの場所に三人以外の気配はない。少し離れたところに警備の魔物兵や女の子モンスターのメイドさんがいるくらいだ。
それはこのフロアに魔王の部屋があるからに他ならない。先程案内してもらった食堂近辺のフロアと違って、私用で訪れる魔物は一人としておらず、全員が何らかの仕事をこなしている。
いるとすれば、それは自分達くらいのものだが、これも魔王がハンティに会いたいと言った為であるから、命令を聞くということになる。ならばこれも、ある意味仕事のようなものだ。
「よし、ならいくぞ」
ハンティが思考する中、レオンハルトが扉をノックする。そして、少し声のトーンを落とし、
「……俺だ、スラル。使徒を連れてきたんだが、入っていいか？」
と魔王の名を呼ぶ。そしてその態度に密かに驚く。レオンハルトが魔王相手に、何とも気安い口調であったからだ。
だが、少し間をおいて中から返事がきた。
「――入って」
「！」
その声は、女性のものだった。ハンティの眉が思わずぴくりと動く。
そしてレオンハルトがドアノブに手を掛け、躊躇なく扉を開いた。

そこに入っていくレオンハルトにキャロルと一緒に付いていく。
「失礼しますわ！」
「……失礼します」
彼女に倣って挨拶しつつ、室内に入る。
ぱっと見た感じは普通の部屋だ、魔王の部屋というだけあって、それなりに豪奢で調度品もそこそこではあるが、本が好きなのか大きい本棚に本がぎっしりと詰まっている以外は極めて普通。
そんな部屋の主、魔王がとうとうハンティの目の前に姿を現した。
「いらっしゃい。ん……貴方がハンティね？」
「――――」
ハンティは魔王の姿を視線に捉え、絶句。
言葉は口が詰まって出なかったし、出なくてよかった。何故なら、目の前にいる魔王スラルの姿は、
……えっ、こんな少女が魔王……？
は？　という思いが真っ先に湧き上がる。その間にレオンハルトが淡々と、
「ああ、そうだ。こいつが俺の新しい使徒だ」
「わたくしの後輩でもありますわ！」
「……ふーん」
キャロルの自慢するような声を聞いて、魔王が半目になりながらこちらをじろじろと眺める。視線が上から下まで動き、何やら見定められているような感覚を覚える。だが、
……さすがの存在感……なんだけど。
何処か違和感を感じた。見た目は人間の少女のようだが、そこはやはり魔王と言うべきか、魔人のそれを数倍にした様な凄まじい存在感と重圧ではある。
しかしそこに恐怖というものを不思議と感じないのだ。
例えるなら、先程のカミーラ。彼女のプレッシャーたるはそうそうたるものであった。
なら目の前の魔王は？
威圧は感じるものの何というか、そこに覚えた感情は――強いて言

えば、バツが悪いである。それに魔王の表情も、こちらを責めるようで、
「……何かないの？」
「……おい、ハンティ」
「――あっ」
と、魔王、そしてレオンハルトに軽く注意されてハンティは我に返る。レオンハルトが、何やってんだ……、と小声で嘆いている。キャロルからは「落ち着いて挨拶すれば大丈夫ですわよ」と励まされた。
そう、言われた通りまずは挨拶だ。それすら抜けているとはよっぽどである。注意したくもなるだろう。ハンティは内心で自分の失敗を恥ずかしく思いながらも、表では丁寧にゆっくりと頭を下げた。
「……お初にお目にかかります魔王様。レオンハルト様の使徒、ハンティ・カラーと申します」
そしてちらりと魔王を見上げてみると、機嫌はどうか、と。
魔王がニコリと笑みを見せてくれる。故にハンティは安心した。
「……ふーん……そうなんだ。私は、レオンハルトの、主のスラルだけど」
「？　は、はい」
今、言葉のアクセントがおかしかった様な気がする。何気に言葉尻もよく分からない。しかし、一使徒風情が天下の魔王様にそんな細かい事を指摘出来るわけないので頷いたが、自分の頭には疑問符が浮かんでいた。
だが、それにツッコミを入れたのは、
「……何だその変な自己紹介。急に頭でも悪くなったのか？」
「ちょっと!?　その言い方はないでしょ！　失礼よ！」
レオンハルトだった。魔王が言う通り、随分な言い草である。だが、それを言われても彼はやめるつもりはないようで、言葉を続ける。
「それに、ハンティはしょうがないにしても、なんかお前の方まで固くなってないか？」
「っ！　そ、そんなことはないけど」
「……そうか？」

「そうよ。……ハンティも、そんなに固くならなくていいからね？
もっと普通に喋っても大丈夫だから」
「えっ、あー……」
不思議そうに魔王スラルを見るレオンハルト。だが、魔王はそれを否定すると取り繕うようにわたわたとしながらこちらに話しかけてきた。思わぬ言葉にどうしたものかと視線を右上に逸らす。
魔物の親玉にして世界の支配者である魔王との謁見にしては、
……相手、魔王なんだけど……思ったよりも緊張感ないなぁ……。
目の前でこちらを見上げる少女の姿に、そんなことを思ってしまう。確かにレオンハルトが言っていたように、自分が想像していた魔王像とは全然違っていた。
忠誠の証に人間の血でも求められるかも、とか冗談半分、本気半分で想像していたのだが。
だが、結局は――
「……なら、お言葉に甘えさせてもらう――けど、いいかな？」
「うん、堅苦しいの嫌いだから」
魔王の言葉に、あ、許された、と安堵する。恐る恐る顔色を窺いながら言ってみたが、本当に大丈夫そうである。少なくとも表には不機嫌な色は全然見えない。
むしろこちらに気を使っているようであり、今もソファーを手で示しながら、
「それじゃ皆、こっち座って。今、お茶淹れるから――」
「あ、はい」
と普通にもてなそうとしてくれる。
そしてそれを、
「――待て」
何故かレオンハルトが止めた。急にシリアスな顔と声色で、スラルの手を握る。
それにスラルがビクッとした。
「え、な、何？　きゅ、急に手なんか握って……い、いきなり来るとびっくりするんだけど――」

「お茶を淹れるのはやめてくれ」
「……えっ？」
何かと思えばお茶を淹れるのを止めさせたらしい。スラルが疑問符を頭に浮かべる。
だがそれを無視しながら、レオンハルトはこちらに顔を向け、
「キャロル、代わりに淹れろ」
「畏まりましたわ！　ささ、お茶はわたくしが淹れますのでスラル様はこちらに。ハンティも」
「あ、ちょっと……！」
「？　それじゃあ……」
キャロルがレオンハルトの言葉を受け、少し強引にスラルを引っ張って席に着かせる。そしてこっちにも言葉を掛けてきた。またしても微妙な違和感を感じるが、主にそういった雑務を代わり出るのは不自然ではない。なので深く考えずにソファーに腰掛けた。眼前から声が聞こえた。
「……レオンハルトの馬鹿……お茶くらい大丈夫なのに……！」
「えっ？」
「えっ？　……あ、いや、その……何でも無いから気にしないで……」
「そうだ、気にするなハンティ。お前は大丈夫だ」
「……？　わかった」
あはは……、と取り繕うような笑みを浮かべるスラルに首を傾げる。何だかよくわからないがこの状況が少し不満を感じているのだろうか。横目でレオンハルトを恨みがましく見つめるスラル。しかしそれすらも受け流しながらレオンハルトも席に座ろうと移動した。
その動きと同時。
「――スラル様ー！　レオンハルト様ー！　茶器が見当たりませんわー！」
と部屋の奥から声が聞こえた。二人を呼ぶキャロルの大きな声だ。
そしてそれに反応したのも、二人だ。両者とも立ち上がり、
「えっと、茶器は――」
「いいからお前は大人しく座ってろ！　キャロル！　茶器は――」

「むっ」
　その強めの制止に少しイラッとしたのかスラルが不満顔になる。言い返すように、
「場所教えに行く位いいじゃない。レオンハルトこそ座ってて」
「いや、駄目だ。俺が行くから座ってろ」
「……部屋の主は私なんだから」
「主なら大人しく部下に任せてろ」
　スラルがそのまま向かおうとするのをレオンハルトが止めた。何故か口喧嘩のようになっている。微妙に雲行きが怪しくなってきた。
　……え、何これ、どういう状況？
　ハンティが困惑する中、スラルはレオンハルトから視線を切り、
「……ふーんだ。私は魔王なんだから魔人の言うことなんか聞かなくていいもん」
「なっ――」
　ぷいっとそっぽを向き、そのままキャロルの方に足を進めた。それに絶句するレオンハルトだったが、それも一瞬だけだ。直ぐ様、スラルに追い縋り、
「……チッ！　わかったわかった。なら俺も見てるからな」
「……そこまで慎重にならなくても」
「余計な事はするなよ。茶器にも一切触れるな。何が起こるかわかったもんじゃない」
「人を危険物みたいに……」
　そう言ってぶつぶつと文句を口にするスラルと一緒に部屋の奥に引っ込んでいった。
　ハンティはそれを見て、唖然とする。その場にはハンティだけが取り残されてしまった。それ自体は構わないのだが――色々と不可解であり、今日何度目かになる溜息と共に生じた感想は、
　……うん、とりあえず仲は良さそうだけど……。
　何というか、つくづく魔王と魔人に相応しいやりとりではない。主と従者にしては結構――いや、かなり距離が近いのだ。
　まるで家族や恋人、兄妹や親友同士のような関係に見えてしまうく

らいには。少なくとも仕事だけ、魔王と魔人というだけの関係ではないだろう。
「……はぁ……ちょっと疲れた」
溜息と共にちょっとした弱音を吐き出す。今日一日だけで色々とイベントが目白押しだった所為か、体力的にも精神的にも結構きている。ここ百年では一番キツい日かもしれない。目尻を揉みながらそれを考える。
……でもまぁ、最悪ではなかったのかな。
これからも一ヶ月毎に、レオンハルトが居る場合は魔王城を訪れることになるだろう。それをこなしていく上で避けきれないものを今日である程度消化出来たのは良かったかもしれない。
カミーラとスラル。ドラゴン種の生ける王冠と魔物の長である魔王。この二人との邂逅以上に気を揉む出会いはこの世界には無いんじゃないだろうか。この世界で最上級にヤバい二人だろう。どんな立場でどんなシチュエーションかにもよるが、少なくとも普通の人間からすると最悪に違いない。
……あたしがドラゴンカラーで、使徒だったからかもしれないけど。理由もなく危害を加えられるような事は無さそうだね……。
ハンティとしてはそれに尽きる。実際に出会ってみた感じ、二人共そこまで悪い感じではなかったのが不幸中の幸いなのだ。
「これからは思ったより楽出来そうかな……？」
しかしそれでも気疲れした。ハンティは三人が近くにいないこの間だけでも、多少気を抜くことにした。一背もたれに背中を預ける。さすがに魔王の私室に置いてあるだけあって良いソファーで、座り心地は良い。
続けて今度は視線を下げる。そこにあるのは黒を基調にした色彩の長方形のテーブル。これも中々の物なのだろうな、と何となく眺めていると、
「……ん、これは」
テーブルに一つ、何やら丸い、何かを包んだ袋のようなものが無造作に転がっていた。ハンティはそれを手に取り中を開いてみる。中

には親指サイズの黒くて丸い物体。それだけなら何か怪しいものだが、その匂いからハンティは正体に気づいた。
……チョコレート、だね。
甘い匂いでそれに気づく。最初はゴミが落ちているのかと思ったが、気づいてみればお菓子を包む袋である事がわかる。
何故、一つだけ。しかもこんな無造作に置かれていたのかは分からないが、片付け忘れだったりするのかもしれない。あの魔王ならソファーに寝転がってお菓子を摘んでいても違和感がない為、浮かんだ想像だが、あながち間違って無さそうだ。
そこで、ハンティはちょっと魔が差す。
……食べようかな。
これが大切な物に見えなかった故にそんな考えが真っ先に出る。本来なら、戻ってきた時に差し出す方がいいのだろうが、隠れてお菓子を食べていたことがバレてレオンハルトに怒られる――というのはさすがに行き過ぎた考えだが。
「……何か、妙に美味しそう……」
どことなく変な魅力が、このチョコレートから漂っているような気がする。それが食べようと思った原因だろうか、大した物じゃないだろうし、食べても問題ない。そしてそもそもバレもしないんじゃないかと思ってしまう。
「――んっ」
ハンティはやがて、その魅力に抗えず、それを口にした。
甘味が舌の上で広がり、身体に刺激を感じた。その瞬間。
「お待たせしましたわ！」
「――！」
キャロルの声に身体がビクッと跳ねて強ばる。キャロルの手には茶器とカップを乗せたトレーがある。
そして続いてレオンハルトとスラルも戻ってきた。
「……何でお茶淹れるくらいでこんなに苦労しなくちゃならねぇんだ……」
「あ、あはは……ご、ごめんってば……」

何があったのか、レオンハルトがげんなりと肩を落としており、スラルが気恥ずかしそうに謝っていた。
……あれ、このタイミングまずくない？
ハンティが、あ、と思った瞬間、キャロルの視線がこちらを捉えた。そして不思議そうに首を傾げ、
「……？　ハンティは何を食べていますの？」
「あっ、これは――」
やってしまった、とハンティが視線を逸らすと、
「!?　は、ハンティ!!」
「！」
突如、慌てたようにレオンハルトがハンティに詰め寄ってくる。そして肩をガシッと掴んで、
「お前、何を食べた!?　まさかこの部屋にある物を食べたんじゃ……！」
「っ!?　あ、その……ご、ごめん……！」
ああ、あれは食べてはいけないものだったのか、と後悔するももう遅い。レオンハルトが必死に肩を揺さぶってくると、
「――身体は大丈夫か!?」
「――へ？」
何故か身体を心配される。
更には小走りでスラルがやって来て、心配そうな表情で、
「――い、意識はある？」
「――えっ？」
と聞いてきた。ハンティは二連続で来た謎の質問に間の抜けた声を出すしかない。
何故そんな事を聞くのかは分からないが、身体も大丈夫だし、意識もある。なので二人の様子に面食らいながらも、
「大丈夫、だけど……？」
「……」
「……」
それを聞いた二人が黙ってしまう。そして小声で何かを相談し始

めた。
……え、どうしたの……？
ハンティは黙ってそれを待つしか無かった。

レオンハルトは眉間を指で揉みながら、疑念に満ちた表情で呟く。
「食べたのはスラルの料理じゃないのか……？」
「多分、いや、きっとそうよ。私の料理を食べて無事な訳が――って自分で言ってて凹む……」
「……ああ、うん。わかったから落ち着け。……ハンティはとりあえず大丈夫そうだが……じゃあ、こいつは何を食べたんだ……？」
スラルが落ち込んでしまう中、新たな疑問がレオンハルトの中に浮上する。
だが、不意にそれは解消された。キャロルがハンティの手元を見て、先程の「何を食べてるか」という自身の質問を自らで推理する。
「……その包み紙から察するに――お菓子ですわね！」
「……うん、チョコレートだよ。テーブルの上に一つだけ置かれてて……あー、ごめんなさい」
「いや、それは良いんだが……」
テーブルの上にあったチョコレートを食べた。そう告げて申し訳なさそうに謝るハンティ。が、それ自体は別にいい。問題は――
「――あっ」
そのフレーズに反応する者がいた。
スラルだ。故に嫌な予感がする。
「……スラル？」
「な、なに……なんでもないけど……？」
改めて顔を向けると視線を逸らされる。何でもないならそんな気まずそうな表情にはならないだろう。
レオンハルトは確認を取ろうと恐る恐ると口を開く。
「……おい……まさかとは思うが……」
スラルが視線を逸しながらも観念したように。

「……えっと……その……昨日、作っちゃった……」
「……マジ、か……」
作った、というその発言に絶望し、レオンハルトは頭を抱える。しかし、それを見たハンティが、
「あの、本当にごめん。そこまでの物だとは思わなくて……」
と、再び謝ってきた。何を勘違いしているのか、毒物を食べさせてしまったのだからむしろこっちが謝りたい気分だ。
……あれ、でもこいつ……？
レオンハルトはハンティをまじまじと見つめる。その様子は申し訳なさそうではあるものの、以前と変わりない。
それを見て、あれ、と疑問を覚える。
……こいつ、スラルの料理を食べたのに何で平気なんだ……!?
スラルの料理は必殺料理だ。理由は不明で、見た目も香りも普通だが、食べれば何が起こるか分からない。しかし最低でもとてつもない衝撃が全身を襲い、他にも失神、幽体離脱、一時的に瞳孔が開いたり、呼吸が止まったりする。
以前、使徒であるキャロルが食べた時は命の危機だった為、魔人以外の喫食を禁止した。自分などはよく練習に突き合わされて地獄を見ている。
「レオンハルト……」
苦い経験を思い出していると、スラルが不安そうに声をかけてきた。ハンティをちらちらと見て様子を窺ってる辺り、自分と同じ様な疑問に行き着いたのだろう。
「……スラル、そのチョコレートまだ残ってるか？」
「残ってるけど……え、食べるの？」
何故かちょっと嬉しそうだ。何で喜んでんだよ、とツッコミを入れそうになるも、レオンハルトはその様子に呆れて息を吐きながらも答えてやる。
「……一応、確認しないとな。もしかしたら本当に大丈夫かもしれん」
「っ！　――すぐ持ってくる！」
スラルが一瞬、希望を見つけたように顔を輝かせ、しかし気を引き

締めるように真剣な表情に戻る。そして目的の物を取りに駆けていった。
「……一体どうしたのよ」
「ですわねぇ……とりあえず、お茶淹れときますわ」
ハンティとキャロル、二人の使徒が不思議そうにこちらを見ていた。ハンティはまだよく分からないが、キャロルは以前とんでもない目にあったのだが、料理の副作用なのかその記憶を忘れてしまっているので事態の深刻さが分かっていないようで、お茶を淹れ始める。
……だが、助かる。お茶でも飲んで落ち着いて――
「――持ってきたわ！」
スラルが戻ってきた。
「……速いな」
「重要な事だから！　はい、これ！」
「……ああ」
スラルが興奮したようにチョコレートを俺に差し出す。それを手に取り眺める。
……ちょっと心の準備が欲しかったんだがなぁ……。
見た目はチョコレートだ。微かな甘い香りもチョコレート。
しかし、見た目や作り方に問題がないのはいつもの事だ。問題は変な刺激や症状が出ないこと。味も二の次だ。
だが、今回ばかりは少しだけ安心出来る要素がある。ハンティが食べて平気なら、大丈夫なのでは、という希望が。
唯一スラルの料理を好むガルティアには毒に強い耐性を持つムシ使いの魔人ということであんまり当てにならないが、ハンティは違う。ならば今回こそは大丈夫かもしれない。
スラルも隣でハラハラしているのかじっとこちらを見つめる。スラルにとっても念願ともいえる自身の料理の改善。それが叶うかもしれないと固唾を呑んでいるのだろう。
――よし、いくか。
「――ん」
一口サイズのチョコレートを口に放り込む。そのまま舌で確認す

る。そして、
「ど、どう？」
「……味はチョコレート、だな……」
「嘘!? やった――!!」
スラルが跳び上がって大喜びする。
「？　……よくわかりませんが、おめでとうございますわ！」
「おめでとう……？」
「うわぁぁん！　ありがとうーー!!」
「え、ええっ……!? ほんとに何が……？」
使徒たちに祝われちょっと涙ぐみながらお礼を言うスラル。スラルに手を掴まれ若干混乱してるハンティを見ながら、レオンハルトはチョコレートを味わう。
……しかし、おいおい……マジかよ……。
咀嚼してみても特に問題は見つからない。食感もチョコだし、味もチョコだ。信じられない出来事だが、本当に大丈夫みたいだ。
……でもまぁ、良かったな。
あれだけ料理の練習に付き合った身としては少し肩の荷が下り気分だ。まだチョコレートだけなので、全てが改善したとは言えないが、一種類だけでも大きな進歩だ。なにせ今まではまともに食べられるのが一つも無かった訳だし。
そんな事を考えてる内にチョコレートを食べ終わる。そして、
「……うん、やっぱ普通のチョコレ――」
不意に、意識が反転した。

――ん、ここは……？
気がつけば辺り一面、真っ白な空間にいた。
自分以外は全てが白に染まった空間。そこに自分は立っている。
――俺の身に何が起こった……？
身体の感覚はあるものの、それだけだ。真っ白な空間にただ居るだけ。

自分が何者かも分からなければ、一体何故ここにいるかも分からない。
しかし、とても心地良い空間であることは確かだ。このまま空間と同化し、消えてしまっても構わない程に。
そんな時だ。頭上から一筋の光が差した。そこから声が聞こえてくる。
『――――』
――な、何だ？
男とも女とも、老人とも子供ともつかない声が耳に届く。
……一体誰なんだ……？
その正体をその誰かに問う。
『――――』
――！
その答えが頭上から聞こえた。
そしてそちらを見上げ、その答えに身を震わせる。
なるほど、理解した。
片膝を突き、両手を合わせる。その動作は自然と出た。
何故ならそう、この声の持ち主こそが――
「神よ――」
――神なのだ。

「――はっ!?」
突如、レオンハルトはその意識を覚醒させる。そして身を起こすと、
「レオンハルト!!」
「ん、お前ら……」
「気がついたのね……よかった……」
「急に倒れたのでびっくりしましたわ……」
スラルやキャロルが酷く心配した様子で胸を撫で下ろす。
「……それで、何があったのさ」

ハンティが訝しげにそんな事を聞いてくる。返答は直ぐには出てこなかった。
「いや……急に意識が無くなって……何かヤバい何かと言葉を交わしたような……」
「……はぁ？」
ハンティが眉をひそめる。その気持ちは分かるが、しかし、そうとしか言いようがないのだ。
何か、見てはいけないような何かと対峙した覚えが――いや、やめよう。思い出すと頭がおかしくなりそうだ。
そんなことより、とレオンハルトはさっきまでの状況を思い出しすと、ハンティに顔を向けて疑問を言葉にする。
「ハンティ……お前、あのチョコ食べたのに何も無かったのか？」
「た、確かに……何で平気なの？」
「皆さんチョコお嫌いでしたの？」
脳天気な質問を重ねるキャロルは無視して、スラルと二人でハンティに視線で問う。その質問が来ると思ってもいなかったのか。え？　と一瞬驚くと、少し考えた後に、
「うーん……味はただのチョコに――あ、いや、確かにちょっと変な味はしたかも」
「味の批評を求めてる訳じゃないんだが……それと味だけを言うならその変な味とやらは感じなかったな。むしろ美味しかった」
「そんな事言われても――って、そういえば……」
困ったように頭を掻いていたハンティだったが、何かを思い出したように声を上げた。そしてややあって、決まりの悪そうな表情になると、
「……あー、関係あるかわかんないけど、そういえばあたし、よく味音痴とか言われるかな……その所為かもね」
「……そんな事でスラルの料理を無効化出来るのか……」
レオンハルトはそれを聞いて微妙な顔になる。そしてスラルも顔を俯かせた。
「気にしないで……元はといえば私の料理が悪いんだし……はぁ、

やっぱ駄目なのかな……」
「……なんかごめん」
「あっ、ううん。気にしないで、いつもの事だから……」
謝罪するハンティにスラルが気を使って苦笑する。ははは、とハンティが若干乾いた笑いを響かせる。
そんな中、キャロルはじっとその話を聞いていて、何を思ったのか、
「……うーん、やっぱりよくわかりませんので、わたくしもそのチョコを頂いても――」
「「絶対駄目（だ）!!」」
「……あ、あはは……賑やかだね」
ハンティこれから先が思いやられるといった様に溜息を吐いて、頭を抱える。
――これからの使徒生活は、少なくとも退屈はしなさそうであった。

酒宴計画

ある日のこと。
レオンハルトは自分の部屋で書類を整理していた。そんな時だ。
「――レオンハルト様！」
「……キャロルか、どうした？」
いつもの様に使徒のキャロルが大声で名前を呼んでくる。最初はちょっとうるさい気もしたが、慣れてからはそこまで気にならなくなった。書類に目を通しながら返事を返す。
するとキャロルは、そのままの勢いで、
「――酒宴を開きましょう!!」
「……」
とそんな事を提案してきた。
何ともまた突拍子もない提案に書類をこなすレオンハルトの手が止まり、暫しの間無言になる。しかしそれを噛み砕いて頭に落とし込むと、ややあって落ち着いた口調で、
「……いきなりだな。一応聞くが、理由は？」
「はい！　士気を上げるためですわ！」
「……」
キャロルが堂々と迷いなく理由を口にする。その発言にレオンハルトの眉がぴくりと動いた。
故に先を促す。
「……続けろ」
「はい！　近頃、仕事が忙しくて魔物兵や一部の魔物隊長や魔物将軍の鬱憤が溜まってるみたいですの！　略奪も満足に行えてないとボヤいていましたし、ここらでその不満を解消しておかないと、次の戦いに支障をきたす可能性がありますわ！」
「……それで、酒、か」
「そうですの！　お酒はレオンハルト様が仰る『ガス抜き』にぴったりですし、適当に飲み食いしてバカ騒ぎさせてればある程度不満は解消されますの！　なのでまさにうってつけですわ！」

「……」
レオンハルトはキャロルの説明を吟味する。思い返すのは、
……確かに、最近は大きな戦いもなく、小競り合いばかりをさせてるからな……。
細々とした戦いは多くあるものの、都市を占拠するほどの戦果を上げている訳ではない。そのため、魔物兵が期待する略奪や暴行は行えていないのが現状だ。こうなってくると魔物兵のやる気が格段に落ちてくる。
更には魔物隊長以上の幹部達も、細かい仕事が沢山あって大変だろう。レオンハルトの軍は、彼自身が魔軍参謀であることから、普段でも魔軍の中で一番忙しい部隊なのだ。故に関わる仕事は多岐にわたり、戦いは勿論だが、普段は魔王城で戦略会議や各部隊、各部署についての意見、採決を行ったりする。
そして細かい仕事が増えると、その分書類の量も増えて面倒なのだ。ストレスも溜まるだろう。
そんな現状でのその提案。それは大いに賛同出来る。
……出来る、が。
レオンハルトは自身の思いを抱えつつも、キャロルの提案を現実のものにするため、口を開く。
「……ま、それはいいだろう。……それで、細かい案は考えてきてるんだろうな？」
「勿論ですわ！　日程、会場、食事、酒、その他諸々まで全部考えて来ましたの！　ささ、どうぞ！」
「やけに準備がいいな……」
自慢気な表情で数枚の紙を差し出してくるキャロルを、胡乱な目で見ながらもそれを受け取る。
そして目を通す。そこには酒宴を開くに当たっての計画が書かれてある。
それを一枚、二枚、と隅々までチェックしながら読んでいく。ある項目で手が止まりながらも、順調に読み進めていった。
「……なるほどな、悪くない」

「！　ふふん、当然ですわ！」
　その全てをレオンハルトは読み終わる。書類の束を机に置くと、胸を反らして自信満々な様子のキャロルに視線を戻し、
「……だが、一つだけ聞きたいんだが――」
「？　何でしょうか？　……ひょっとして何か不備が？」
　その言葉にキャロルが首を傾げる。自分の計画書に余程自信があったのだろうが、それよりも主を信頼しているのだろう、真っ先に自分の失敗を疑っているようで、少し不安そうな表情になる。
　しかし、それを責めることはしない。レオンハルトは一度息を吐き、
　……これはちゃんと言ってやらないとな。
　レオンハルトはキャロルに言ってやった。書類の束から一枚の紙を抜き出し、その一項目を指差して、
「――これ、俺も参加するのか……？」
「……」
　レオンハルトの質問に、キャロルが口を噤む。
　だが、ややあってこちらを窺うように、
「え、えっと……レオンハルト様？　ひょっとして、その日は何か予定がありますの？　だとしたら申し訳ありませんわ。使徒として、主の予定を把握していないなんて――」
「違う、そうじゃない」
　レオンハルトはその言葉をばっさりと切り捨てる。そんな事を言いたいんじゃないし、ちゃんと予定は空いている。この日は数少ない休みの日であり、キャロルのスケジュール管理は完璧だ。
　じゃあ、何が言いたいのかと言うと――
「キャロル、お前は大事な事をわかってない」
「！　だ、大事な事、ですの……？」
「――そうだ、とても大事な事だ。特に酒宴なんかでは一番気をつけないといけない部分だ……」
「そ、それほどに……！」
　レオンハルトの言葉に、キャロルはごくり、と喉を鳴らす。それほ

どまでに主の表情には、これまで見たことのないレベルの深刻な顔が浮かんでいたからだ。
故に、戦慄しているのだろう。自分がそんな重大な事を忘れていることに。キャロルの表情が、言外にそう言っている。
レオンハルトは言ってやった。唇を噛み締め、机に拳を軽く叩きつけ――
「――上司がいると、部下が楽しめねぇだろうが……！」
「……はい？」
思わぬ言葉にキャロルが、返事をしながらも疑問符を頭に浮かべる。
レオンハルトは続けた。
「会場を魔物兵だけの場と、魔物隊長以上の幹部だけの場の二つに分けるのはいい。魔物将軍なんかがいると魔物兵達も楽しめねぇだろうしな。迷惑が掛からない場所を選べば騒ぎすぎても問題ない」
「……えっ？」
「――だが、幹部だけの席の方に俺がいるのはどういう訳だ……！魔人なんていたらあいつらも萎縮して酒どころじゃねぇだろうが……！」
「あ、あの……レオンハルト様？」
「飲み会の席に地位の高い上司がいること程、鬱陶しいことねぇ……！　挨拶して酒を注いで……その上聞きたくもないクソくだらねぇ話や愚痴を延々と聞かされなきゃならねぇ。接待も大概にしろってんだ……！」
「飲みかっ……えっ？」
「そもそも最初の乾杯はビールってのも気に入らねぇし、その後も皆辛くてキツい酒ばっか頼みやがる……こっちがカクテルなんざ頼もうもんなら、『女みたい』とか言いやがってよ……！　こっちは金払ってんだ！　好きな酒飲んだっていいだろうが！　俺は辛い食べ物は好きだが、酒は甘くて飲みやすいのが好きなんだよ！　そんなに辛いもんが飲みてぇならタバスコでも飲んでろ！　そんで翌日以降、地獄を見ろ！」

「……あ、レオンハルト様は甘い酒が好きなんですわね。メモメモ……了解ですわ。ちゃんとそちらも取り揃えておきますわね」
揃えとけ！　とレオンハルトが声を上げる。キャロルがメモ用紙を取り出す中、熱が籠もった様子で続ける。
「そんでようやく帰れると思ったら二次会、三次会だ！　耳にクソが溜まりそうな歌聞かされてようやく解放されると思ったら、挙げ句、締めのラーメンだぁ!?　ラーメンは俺も好きだが、テメェみたいな給料泥棒に食わすラーメンなんてねぇんだよ！　家帰ってチ〇毛でも啜ってろ！」
「ラーメンもお好き、と……。因みにどんな女性がタイプですの？」
「ヤるだけならスタイルの良い女がいいが、付き合うならそこには拘らねぇ！　寧ろ性格の方が重要だ！　仕事から遅く帰っても起きて出迎えてくれるような優しい女ならいいし、料理が出来るなら尚良い！」
「ふむふむ、小柄な女性はタイプではないと？」
「いや、昔は――って、あ……？」
と、不意にレオンハルトの動きが止まる。こめかみに手を押し当て、我に返ったように落ち着く。
そしてキャロルにやや鋭い視線を向け、
「……お前、何か余計な事まで聞いてこなかったか？」
「……き、聞いてませんわー。何のことですの？」
手を後ろに回して視線を逸らすキャロルを訝しむレオンハルト。そして先程の自分を省みる。
……何か、熱くなっちまったな。
よくわからない事を口走ってしまっただけでなく、何だか余計な事まで言ってしまった気がする。
レオンハルトは一度息を吐いて、とにかく、と前置きして意見を纏めた。
「酒宴に俺が参加するのはあまりよろしくないな」
「……仰っしゃりたいことは何となく分かりましたが、わたくしも含めて魔物将軍達はそこまで気にしないと思いますわ。むしろレオン

ハルト様とお酒を酌み交わしたいという者は多いかと」
「どうだかな……」
客観的に考えても魔人と酒の席を一緒したい、とは思わないような気がする。
そんな考えが透けて見えたのか、キャロルはそんな不安を払拭しようと明るい声で、
「大丈夫ですわ！　……それに、忘れていませんか、レオンハルト様！」
「ん、何がだ？」
「これですわ！」
キャロルが答えた。服のポケットから何やらカードのような物を取り出し、レオンハルトに突きつける。
「――レオンハルト様ファンクラブの会員証ですの！　レオンハルト様の部下にはレオンハルト様のファンがいますのよ！　そんな我々が！　レオンハルト様とお酒を一緒にしたくない、訳がありませんわ！」
「あ、あー……そんなのあったな。そういえば」
レオンハルトが思い出したように、カードをまじまじと見る。キャロルが自分の使徒に立候補しに来た時、ファンクラブの会長を務めていると、確かに言っていた。
……会員証なんてあったのか……。
その証拠と言うべきそのカードには、レオンハルト様ファンクラブ会員証、キャロルの名前、そして『Ｎｏ．１』と書いてある。
レオンハルトはそのカードから視線を移し、キャロルに向かって胡乱な表情のまま疑問を口にした。
「……ちなみに、今は何名くらいいるんだ？」
「今は１０８名ですわ！」
「多いな……というか前より増えてないか？」
「ふふん！　これもレオンハルト様の魅力と、わたくしの統率力のおかげですわ！」
腰に手を当て自慢気に胸を反らすキャロル。そして、カードをポ

ケットにしまうと今度は頭を下げてお願いした。
「良い機会ですのでファンクラブの子達も呼びたいと思いますの！
レオンハルト様！　是非、参加をお願いしますわ！」
「……しかしだな……」
　あまり気乗りはしない。ファンはともかくとしても、魔物将軍らには気を使わせることになりそうなのがレオンハルトの二の足を踏ませる。
　これが自分の為の催しならともかく、目的は部下のガス抜き、リフレッシュするためにあるのだ。そこに魔人である自分が行くのもな、と思っていたらまた言葉が来た。
「お願いしますわ！　レオンハルト様のお好きなものもちゃんと取り揃えておきますので！」
「いや、ちゃんと他の奴の事も考えてやらないとだな……」
「それは勿論ですわ！　あ、それと、ファンクラブの娘達はいつでもオーケーですわ！」
「……いつでもオーケー？　どういう意味だ？」
「あっ、それはその……」
　レオンハルトが聞き返すと、何故かキャロルがもじもじとし始める。
　こういう時は妙に嫌な予感を感じるのだが、その例に漏れたのか判断に難しい言葉がキャロルから来た。
「わ、わたくしも含めて！　ファンクラブの皆はいつでもお持ち帰りオーケーという意味ですわ！」
「……あー」
　レオンハルトはその言葉の意味を正しく理解し、何とも言えない言葉を上げた。そしてその事を思い、頭を抱える。
……ああ、いや、うん……どうしたものか……。
　確かにそういうのは嫌いではないし、悪い気はしない。
　このところ忙しい上に、自分から口説くようなタイプでもないのでそういった行為はすっかりご無沙汰だ。据え膳を出してくれるのは有り難いような気もする。

それにここまでお願いされれば一度くらいは参加してもいいかな、という気にさせられる。全員ではないだろうが、部下の魔物将軍らには慕われているような気もするし、世話にもなっているので偶にはこちらから労ってやるのもいいのかもしれない。
しかし、だ。このタイミングでは頷けない。何故なら、
……ここで頷いたらまるでそれが目的みたいだな……。
興味がない訳ではないが――魔人四天王、そして魔軍参謀としてそれなりの威厳を保たなければならない自分としては、強くイメージを損なうような事は出来ない。
レオンハルトは額に手を当て、しばらく思案に吹けると、やがて結論が出たのか口を開き、
「……悪いが――」
この場では断ろう。それで後から参加すればいいだろう、と思い紡いた音は、
「――お望みなら全員！　全員持ち帰っても構いませんわ!!」
「ことわ――全員？」
そんな言葉に遮られた。レオンハルトは全員という言葉を確認するように心の中で反復する。
……全員、全員か……それは１０８人全員ってことか……？
そんな事が可能なのか、と自分で自分に疑問を呈する。体力とか時間とか場所とか色んな問題があるように感じるが。
だが、その言葉を補足するようにキャロルは続けた。思考が一時的に止められる。
「１０８対１ですわ！　男のロマンですのよ！　こんな事をしても許されるのはレオンハルト様くらいですわ！」
「……だが」
「ファンクラブは女の子モンスターだらけなので可愛い子しかいませんのよ！」
「……しかしな」
「それに皆レオンハルト様の事が好きなのですから何も問題ありませんわ！」

「……」
そんなに参加して欲しいのか、必死のプレゼンを続けるキャロル。
やがてレオンハルトも二の句が継げなくなり、最終的には完全に口を閉じる。
数秒にも数十秒にも思える時間の後、レオンハルトはその重たい口をようやく開いた。
「……か、考えさせてもらう」
「！　本当ですの!?」
キャロルが顔を輝かせて聞き返す。レオンハルトは机の上で腕を組み、顔を俯かせながら、
「……考えるだけだ。いいか、行くとは言ってないからな。……でも、一応予定は入れとけ。後で行くとなった時に困るからな……ちゃんと食事と酒も用意しとけよ」
「濃い口の料理から甘いお酒、締めのラーメンまでばっちり用意しておきますわ！」
「そうだ、それでいい……後、ついでに幾つか部屋を取っとけ。酔い潰れる奴も出るかもしれないしな……うん」
「畏まりましたわ！　万事抜かり無く済ませておきます！」
「……行くとは言ってないからな？」
「はい！　……あ、そういえばレオンハルト様。この日はハンティさんが来る日ですが――」
「ずらせ」
「はい、連絡しておきますわ。――さて、これから忙しくなりますわー！」
レオンハルトは、張り切った様子で酒宴の計画を進めようとしているキャロルを尻目に息を吐いた。
……あれ、何だか酒が飲みたくなってきたな……酒宴があるならちょうどいいかもなー……。
書類を再びこなしながら、レオンハルトはしばらくの間、心の中でそう言い聞かせ続けた。
――1時間後、結局レオンハルトは酒宴に参加する旨をキャロルに

伝えた。

酒宴

レオンハルトとキャロルの提案を受けて、酒宴を計画した数日後。
魔王城に駐在してるレオンハルト軍では口々にその事について話していた。
「酒宴の話、聞いたか？」
「ああ、レオンハルト様も太っ腹だよな」
「おそらく兵の慰労も兼ねているのだろうな……」
「それに今回はレオンハルト様も参加するとのことだしな」
「あの方に仕えて長いが、お酒を嗜むところは見たことがないな……」
「そういえばそうだな。……もしかして下戸じゃ――」
「おい、滅多なことは言うもんじゃないぞ。まだそうと決まった訳ではないのだし……」
「……お前はお堅いなぁ。ま、無礼講とのことだし、折角の機会だ。俺はレオンハルト様の武勇伝でも聞いてみるかな」
「うーむ……あの方は滅多な事で怒らないとは思うが……それに甘えて失礼な態度を取るのも……」
「……確かに考えてみると他の魔人相手だとまずいことになりそうだな――ん？」
「……！」
魔物将軍が不意に後ろに振り向く。その様子にもう一体の魔物将軍が疑問を口にした。
「どうした？」
「いや……何かの気配を感じたんだが……気の所為か？」
「気配？　……ふむ」
同じ様に後ろに振り向き、更に周囲を確認するようにぐるりと見回す。見晴らしのいい魔王城の廊下、周囲には銅像があるくらいであり、生き物の存在は見当たらなかった。
「……特に誰もいないな」
「勘違いしてしまったか」
「……まぁ、いいか。そろそろ仕事に戻ろう」

「……？　ああ、そうだな。酒宴の為にも仕事をこなすか」
二体の魔物将軍はそう言って、廊下の先に進んでいった。何故かその内の一体の魔物将軍は頻りに背後を気にしているようであったが、やはり何もいない。
そして、彼らが廊下の角を曲がった後。
「……」
ひょこっと銅像の後ろから、蜘蛛の足を持つ黒髪の少女が顔を覗かせた。
彼女は魔物将軍達が進んでいった先をしばらくの間、じーっと無表情のまま見詰めていたが、やがて、
「……」
壁、そして天井と伝い、彼女はその場から蜘蛛のような動きで立ち去っていった。

――それから約2週間後。
魔王城近くの丘陵地帯に陣幕で仕切られた一帯があった。
既に日は暮れ、夜の帳が下りてきた頃、しかしその一帯は明かりに照らされていた。
その原因は、会場に設けられた多数の篝火であり、数多の魔物兵達がその明かりを目指している。姿は一定、しかし誰も彼もがレオンハルト軍所属の者達であり、明るい声を上げながら続々と会場入りをしている。
そしてその列は一つ、しかし入り口は二つに分かれていた。
一つは魔物兵用の大型宴会場で、もう一つがそれ以上の士官、魔物将軍や魔物隊長が集まる会場の二つだ。魔物兵の会場は一応のお目付け役として一体の魔物将軍と数体の魔物隊長が交代で見張ることになってはいるものの、それでも大いに盛り上がっているようだった。
なにせ食べ放題飲み放題。会場には大勢の人間と魔物の料理人が多数の食材と一緒にスタンバイしており、足りなくなった料理を作り

続けることになっている。今日の日の為に持ってきた食材と酒は全て消費しても構わないのだ。魔物兵のテンションは鰻登りである。
そして、雑多な盛り上がりを見せる魔物兵達とは別の会場である、幹部用の会場。
魔物兵らのそれとは一線を画する高級感溢れるテーブルや椅子。そして所狭しと並べられた料理と高級酒も含めた幾つもの酒。
そしてそれらを囲むように多くの魔物将軍、魔物隊長。そして例外たる女の子モンスターらの集団が並んでおり、皆は一様にとある一点を見詰めていた。
そこは所謂、上座と呼ばれる部分の横に設けられた簡易ステージの様な場所。そこには金髪ツインテールの少女が立っていた。
「――それでは僭越ながらわたくし、レオンハルト様の第一の使徒にして魔物界一の完璧使徒であるキャロルが、レオンハルト様の代わりに乾杯の音頭を取らせていただきますわ！」
キャロルが妙にキレの良いポーズと共にそう言うと、ややあって会場からまばらな拍手が返ってきた。少し緊張している様子なのはキャロルの何とも言えないポーズの所為――ではなく、とある存在の所為だろう。その存在からの視線を受けながらキャロルが続ける。
「ありがとうございますわ！　ええ、では次に、この酒宴が開かれることとなったのは――」
「――キャロル」
その声は上座から聞こえた。落ち着いた、そして決して大きいとは言えない声であるのに、その声は不思議と会場の皆の耳に届く。
そして当然、キャロルはその声の持ち主に即座に反応した。
「何でしょうかレオンハルト様！」
「……そういう挨拶はしなくていい。さっさと乾杯の音頭を取れ」
「畏まりましたわ！　では、皆様！　グラスの準備はよろしいですの？　よろしくなくてもレオンハルト様の命令ですので即座に乾杯しますわ！　乾杯!!」
皆が「ええっ!?」、と慌てたようにグラスやジョッキを持ち、それらを打ち付けあった。

そんな自分の使徒が起こした光景を見て、この酒宴の主催者ということになっている魔人、レオンハルトが呆れたように頭を抱えてシャンパンの入ったグラスを掲げた。
「……はぁ、乾杯」
レオンハルトの溜息とともに、酒宴は始まった。
――始まったのだが。
「……」
「では、レオンハルト様、わたくし達も乾杯を――っと、どうかしましたか？」
レオンハルトは酒宴が始まると、キャロルの声を無視して直ぐ様立ち上がり、真っ直ぐにとあるテーブルに向かう。
幾つもの料理が並べられたそのテーブルだ。
だが、他のテーブルと違い、そこの料理だけ、何故か少しずつ減っているのをレオンハルトは見逃さなかった。
故に、テーブルクロスを捲り上げる。するとそこには、
「お前、何やってんだ……？」
「……！」
もぐもぐと料理を食べているガルティアの使徒――ラウネアがいた。

「……」
「……」
レオンハルトはラウネアと睨み合うように視線を合わせ続ける。
責めるように見続けるレオンハルトと何を考えているか分からないラウネア。その間に割って入ってきたのは、キャロルだった。
「あら、ラウネアさんじゃありませんの。奇遇ですわね」
「……」
キャロルの言葉に顔を向けることだけで答えるラウネアだが、レオンハルトの方は視線を逸らさない。そのままの態勢で目の前のラウネアに詰問するように、

「……ラウネア。何を食べてるんだ？」
「……」
ラウネアが首をふるふると横に動かす。その手に持った料理と、口元がリスのように膨らんでなければ信じていたかもしれない。
「……なら、それは？」
当然、指摘させてもらう。すると、
「……！」
「相変わらず良い食べっぷりですわねぇ……」
口の中の物を飲み込み、直ぐ様手に持った料理も食べていく。キャロルの言う通り、主のガルティアに似て凄まじい食べっぷりだ。だが、後数口といったところで、
「……」
ぽいっ、と食べかけの料理を捨てるように地面に置いた。そして両手をこちらに差し出してくる。
「おい、残すなよ？」
「……」
「それとは別に、もっと食べたいみたいですわね。ラウネアさんはよくこうやって食事を置いて、別の物を食べますし」
「……はぁ」
レオンハルトはお願いしてくるようにこちらを見上げてくるラウネアを見て息を吐き、そして一言。
「……好きにしろ」
「……！」
心なしか、常に無表情のラウネアの表情が輝いたように見えた。そのままこちらに頭を下げて、ぺこりとお辞儀をしてくる。
どうやらお礼を言ってるようだ。気にするな、とこちらも言外に視線だけで答えてやると、それが伝わったのかは分からないが、テーブルの下から出てきて料理を取りにいってしまった。
それを見たキャロルが背後からこちらを窺うように、
「……えっと……良かったんですの？」
「ああ、ラウネアだけなら問題ないだろ。食料にはかなり余裕がある

しな」
「……いえ、あの……そうではなくて……」
「？」
キャロルがとても言い辛そうに言葉を濁す。レオンハルトは疑問符を頭に浮かべた。
……何か問題でもあるのか？
部外者が入り込んでしまったのを危惧しているのだろうか。確かに、うちの軍だけの酒宴に部外者が入ってくるのはあまり好ましくないかもしれない。だが、だからといって追い出してしまうのも角が立つ。自分が怒ってそんなことをしてしまえば空気が悪くなるだろうし、そもそもファンクラブとかいう連中が参加してる時点で今更とも言える。
今日の日の為に、態々大量の食料を放出したかいがあってラウネア一匹混じったところで問題はないだろう。ガルティアがいる訳でも

「……！」
そこで突如、レオンハルトを謎の悪寒が襲う。その直後、キャロルから言葉が来た。
「……レオンハルト様。その、後ろをご覧になった方が早いかと……」
とても自分の口から言うのは憚られる、そんな思いが声色から感じられる。そしてそれに比例してとんでもなく嫌な予感を感じた。
……いやいや、まさか、な……。
正直、背後を振り向くのが怖い。だが、何だか知った気配が背後で動いているのがわかってしまい、その予感がだんだんと確信に変わっていく。
もはやこうやって確認を取らないことすら無意味な気がする。
故に、レオンハルトはキャロルの提案に従い、ゆっくりと背後を振り返った。そこには案の定と言うべきか――
「ズルズル……ん、この皿うどん、美味いな。餡が絶品だ」
「……」
「あ、こら、ラウネア。食事を中途半端に残すな。いつも言ってるだろ

？」
レオンハルトの視線の先には、予想通り褐色の肌を持つムシ使いの魔人――ガルティアがそこにいた。レオンハルトは頭を抱える。
……マジで言ってんのか……。
「……おい」
「ん？」
レオンハルトはそのガルティアに声を掛けた。というか声を掛けざるを得なかった。ラウネアに注意をしていたガルティアだが、聞こえたこちらの声と姿に反応する。
「おお、レオンハルト。どうかしたか？　こっちの皿うどん美味いぞ、食うか？」
「……いや、先に何でお前がいるのか聞いていいか？」
相変わらず過ぎる相手にレオンハルトはその嫌な予感が見事的中したことを確認した。直ぐに怒鳴ったりはせず落ち着いた様子でガルティアに問いかける。しかし、こめかみあたりに怒りが現れるのを隠すことは出来ない。レオンハルトの苛立ちの混じった視線と表情にガルティアは笑みを見せ、
「いや、ラウネアが今日この場所で宴会があるって教えてくれてな。そんで居ても立ってもいられなくて来ちまった」
「……！」
ラウネアが自分の手柄だ、と言わんばかりに腕を組んでいたので、衝動的に叩きたくなるもそこを何とか抑えつつ、ガルティアへの質問を続けた。
「……一応、この催しはうちの軍だけのものなんだが、そこについては聞かなかったのか？」
「ん、そうなのか？　そりゃあ悪かったな。ま、邪魔はしねぇし、量も抑えるから勘弁してくれ。――つーわけだからお前ら、俺の事は気にしなくていいぜー」
「！」
ガルティアがこの会話に聞き耳を立てていたであろう魔物将軍達に聞こえるよう、少し大きめの声でそれを告げた。返事こそ返ってこ

なかったが、魔物将軍達が困惑しているのが見て取れた為、レオンハルトは溜息を漏らした。
……だが、言っていてもしょうがない。
レオンハルトはガルティアの食事量を考え、目眩を覚えそうになるも、額に手を当てながら疲れたように、
「……なら、信じるからな。飽くまでも優先するのはうちの部下だ。その分まで食べるなよ」
「お？」
「……何だよ？」
ガルティアが何故かこちらを見て、意外そうな表情を返してくる。その反応こそよくわからなかったのでレオンハルトは訝しげに問い返す。すると、大したことじゃないが、と前置きしつつガルティアが、
「……意外だと思ってよ。てっきり追い出されるかと」
「……そんなことしたら空気が悪くなるだろうが」
周囲が盛り下がるような事は出来る限りしたくない。そういった思いがレオンハルトの中にあった、と。ガルティアはその発言に納得したように頷き、
「なるほどなあ。相変わらず色々考えてるみたいだ」
「うるせぇな、黙って食ってろよ。……あ、お前が自主的に出てってくれるなら大歓迎だぜ？」
「おっと、それは勘弁だな。これでも楽しみにしてたんだ」
「ふん……俺は色々と回ってくるが……いつも通りに食ってるとこ見たら関係なく追い出すからな」
「はいはい。……そんじゃゆっくりと摘んでいくかな。偶には酒でも飲むか」
「……よし、行くぞ。キャロル」
「あ、はい！」
珍しく酒を吟味し始めたガルティアを尻目に、レオンハルトはキャロルに声を掛けながらその場を後にする。
遅れてレオンハルトの斜め後ろに並んできたキャロルだが、それと同時にこちらを見上げて、

「レオンハルト様はガルティア様と仲が良いですわよね」
「あぁ？　今のやり取り見てよくそんな事思ったな？」
　不意にそんな事を行ってくるキャロルに、レオンハルトは眉をひそめる。だが、それとは真逆にキャロルは笑みを浮かべたまま、
「だってレオンハルト様、ガルティア様と話す時は荒っぽい口調が多いですが、いつも楽しそうに見えますの！」
「……あー」
　レオンハルトは急にバツが悪くなったように頭を掻く。言葉にならない声を出しながらも、
　……面倒くせぇ話題だな……。
　とても億劫そうに表情を歪める。そして他の人からそんな事を言われると微妙に気恥ずかしいのは何故か、とそんな事を考えてしまう。こんなこと答えなくても構わないのだが、
　……今日は酒の席だしなぁ……。
　今日の催しの意味を考えると、少しくらいは口を滑らせても構わないか、と思う。使徒の言葉ということもあるのだし。
　故に使徒からの問いかけに似た言葉に、ややあってレオンハルトは、
「……ま、境遇も似てるしな。単純に馬が合うってところか」
　そう答えた。だが、
「……何かずるいですわ！」
「……何でだよ」
　何が不満なのか、突然声を大にしてそんな事を言うキャロル。その理由を彼女は叫んだ。
「わたくしもレオンハルト様ともっと仲良くなりたいですの！」
「仲良く……いや、もう結構仲良いだろ」
　キャロルの言葉をやんわりと否定する。レオンハルトとしては魔人と使徒の関係として考えても良好な関係を築けていると思うのだが、どうやら彼女は違うらしい。口を尖らせて不満そうな表情になり、
「そうですが……むぅ、わたくしとしてはもっと濃い関係に……」

「……」
途中からそんな事をごにょごにょと口の中で反復するキャロルに、レオンハルトは目蓋を抑えて呆れ果てる。ある意味いつも通り。目的が全然ぶれていない。そしてよく考えると、
……ん？　こいつ、ひょっとしてこの酒宴を開いたのも、あんな事を言ったのも……。
レオンハルトは背後でぶつぶつと何かを呟くキャロルと、遠巻きにこちらに視線を送るファンクラブの子達を思う。そして何となくこれに至った経緯と背景を察するも、
……いや、うむ、ちょっと考えないようにしておくか……。
少なくとも今はやめておこう。レオンハルトはその思考を一旦脳の片隅に放置することにして、目的の場所に向かうことにした。

レオンハルト軍の酒宴が始まった――その同時刻。
会場から少し離れた場所で、一つの小柄な影が空から舞い降りた。
「……」
暗闇の中では空から注ぐ月明かり、少し遠くにある大量の篝火、そしてその存在が持つ煌めく紅い瞳だけが周囲を照らしていた。
そしてその存在は人間の形をしていた。それも少女のものだ。
しかし、その存在感と威圧感は人間のものに非ず。ましてや人間の少女という脆弱極まりない存在ではない事は明らかであり、この世界でもこれ以上の存在感を放つものは他にいないのではないかと思ってしまう程だ。
そして更に言うなら、その圧は普段のものよりも格段に増していた。その存在を知るものが見れば、普段よりも高まったその重圧に怯えるか、もしくは困惑するかもしれない。
だが、それほどまでに彼女は感情を昂ぶらせていたのだろう。今も、明かりの方を見詰めながら、腕をぷるぷると震えさせ、
「……レオンハルト……！」
その名を呼ぶ。その声は明らかに憤りの感情が覗いていた。

そう、彼女がこうまで憤るのは名前の彼の所為であり、もっと言うなら自分に黙ってそんな事を行っている事についてであり、それに伴って複雑な思いが湧き上がり――

「私に黙ってるなんて……絶対許さないんだから……!!」

その彼女の怒りに周囲が物理的に震えた。

怒りの矛先は――魔人レオンハルト。

彼女はそれを彼に伝える為、その身を宙に躍らせた。

――どんな方法であっても、それを伝える。

彼女の表情はその決意に満ちていた。

「――――!?」

突如、レオンハルトの身体がぶるりと震え、背後を振り返る。キャロルは突然の主の行動に反応して首をかしげる。

「レオンハルト様？　どうかしましたの？　急に後ろを向いて……」

「いや、何か今、悪寒が……」

「風邪気味ですの？　そういう時はネギがいいと聞きますわ！」

「魔人は病気にならない……と思うんだが」

「そうですの？」

「ああ……まぁ、気の所為だろう」

レオンハルトは急に自身を襲った正体不明の悪寒に震えるも、特に何事も無かったので直ぐにそれを忘れた。

とある魔物将軍の評価

とある一体の魔物将軍はレオンハルトが各席を回っているのを遠目に見ていた。

周囲はそれなりに盛り上がっているように感じる。魔物兵らがやるようなバカ騒ぎはしないものの、当初より幾分か空気が軽くなっており、明るい様子で談笑しつつ、この日のために用意された沢山の料理や酒に舌鼓を打つ。

無論、そうなっている原因は、視線の先にレオンハルトの存在が大きいだろう。今も別の魔物将軍に酒を注いでおり、魔物将軍は恐縮するように畏まっているものの、レオンハルトが幾分軽い様子で接してくるので対応に困ってはいる。

だが、嫌そうではなかった。魔物将軍はレオンハルトの振る舞いを見て確信する。

……やはり気を使っておられるのだな……。

レオンハルトという魔人について、自分はかなり熟知している方だと思う。なにしろ彼が魔軍参謀になって間もない頃から、彼の麾下で働いているのだ。まだまだ不明瞭な部分もあるものの、そういう自負はあった。

そしてその長年の記憶と経験から、レオンハルトは魔人の中ではかなり良識のある存在だと魔物将軍は思っていた。ある意味、変わっているとも言っていい。

魔人という存在は、魔軍、魔物にとって絶対の存在であり、魔王の意思に反しなければ基本的には何をしようと許される。文句を言えるのも同じ魔人くらいであり、故にもっと傍若無人に振る舞ってもいいはずなのだ。事実他の魔人にはそういった方が多い。

しかしレオンハルトは部下に気を使ってこのような宴を自ら開催し、今もテーブルを周りながら酒を注いで周り、気軽に話しかけ、好きに楽しめ、という風に念を押している。そして、それを観察していると、

「……レオンハルト様」

「ん、お前か。悪いが邪魔していってもいいか？」
「はっ、どうぞ」
一言断ってこちらのテーブルに近づいてきたレオンハルトに一も二もなく頷く。とうとう自分の番が来たか、と内心で呟いた。
するとレオンハルトはこちらの返事に苦笑を見せる。返答が少し硬かっただろうか、ボトルを掲げてきて、
「……それじゃ、ほら」
「！　……いただきます」
グラスを差し出して、レオンハルトに酒を注いでもらう。分かっていても多少緊張してしまうのは、この行動が普段の彼にあまり見られない行動だからだろうか。普段は――というより仕事の時の彼は泰然自若、という言葉が似合う、正に魔軍参謀に相応しいお方なのだ。同時に仕事に対しては実直で有無を言わせないような厳しさも併せ持つ。部下にも規律を求めるが決して横暴ではなく、部下からの提言を採用する寛容さもある。それでいて魔人としての強さは魔人四天王の座に就くほどだ。
統率力、知略、武力、その全てに優れたお方だ。欠点らしい欠点は強い敵を見つけると熱くなってしまわれる事だが、それでも頭は回っており、部下に退避するように命令する程度の冷静さは残っている。それに魔人自ら敵を倒すことは兵の鼓舞にもなる為、十分許容範囲である。
……やはりとんでもないお方だな……。
改めて確認してみても末恐ろしいほど完璧な方。そんな彼の部下であることは魔物将軍にとっての誇りである。
だが、同時に畏れ多くも感じる。尊敬し、畏怖しているが故に緊張してしまうのは避けられない。
……いかんな。
これではレオンハルトがこの酒宴を開催した意味がない。彼の意図を正しく汲み取ったのはいいが、他ならぬ自分がその意図に反してしまうのはよろしくないし、恥ずべきことだ。
故に魔物将軍はその緊張を緩和する為にもグラスに注がれた酒を

一気に飲み干した。すると、
「……いい飲みっぷりだな。ほら」
「……ええ、まぁ……その、恐縮です」
ふっ、とレオンハルトが軽く笑い、もう一度酒を注いでくれる。
そして今度はレオンハルトも手に持っていた自分のグラスに酒を注ごうとしていた。魔物将軍はそれを見て即座に止めるように、
「あっ、では次は自分が――」
「おう、悪いな――んっ」
いえ、と短く否定しレオンハルトのグラスに酒を注ぐ。すると今度はレオンハルトが先程の魔物将軍のようにグラスに入った酒を一気に飲み干した。それを見て魔物将軍は目を丸くする。
「――ぷはっ！　これ、結構効くな……って、どうした？」
「……あ、いえ……」
こちらの驚いた様子を見て、疑問符を頭に浮かべたレオンハルトに、魔物将軍は少し悩むも、言葉を選んでその答えとなる疑問を口にした。
「……レオンハルト様がお酒を嗜まれるのは珍しいな、と思いまして……」
「あー……」
レオンハルトはその言葉に何とも言えない声を出した。少しバツが悪そうにしながら、
「戦いが終わっても俺は基本的に飲まないからな……というより普段もあまり飲まないな」
「飲めない、という風にも見えませんが……差し支えなければ理由をお聞きしても？」
魔物将軍が見る限り、レオンハルトは酒宴が始まってからもそれなりに飲んでいるように見えたし、今も普段よりはフランクではあるものの平然としている。酷く酔っているわけではなさそうだ。
「ああ、それはだな……」
少し不躾な質問だが、レオンハルトは特に気にした様子もなく口を開いた。

「――仕事中だからだ」
「……え？」
その言葉に少なくない驚きの感情を覚える。呆然とするこちらに構わずレオンハルトは続ける。
「俺は基本的に一年中毎日、殆どの時間が仕事だからな。仕事中に酒を飲むのはちょっとな……駄目だろ？」
「へ？　――あ、そうですね……」
レオンハルトの問いかけに魔物将軍は我に返る。それほどの衝撃だった。
魔物将軍はレオンハルトのその認識を頭の中で噛み砕いてみる。
しかしそれでも足りないので、理解するための言葉を口にした。
「……休憩時間ならよろしいのでは？」
「確かに食事時や就寝前、後は遠征時は合間の空き時間なんかはあるけどな」
「……その合間に飲むのは駄目なのですか？」
「……？」
レオンハルトは不思議そうに首を捻る。そして当然といった様子で、
「……それだと急の仕事が入った時に酒が残るかもしれないだろ」
「そ、それは……っ」
そう言い切った。それに魔物将軍は言葉を詰まらせる。
だが、持ち直して改めて言い直す。
「確かにそうですが……僭越ながら言わせてもらうと……酒が多少残っていても誰も気にしないかと」
魔物将軍はそう確信する。というかその基準なら部下の魔物兵や魔物隊長の殆ど。そして同僚の魔物将軍ですらもそれを犯してしまっている。
魔物将軍はそれを思い起こす。そもそも魔軍ではそういった規律はあまり重視されない。
陣地での待機中に酒を飲んでいたら、敵が近づいてきたのでそのまま出撃。なんてことはざらにある。酷い時は敵から略奪した酒をそ

の場で飲み干し、そのまま戦う兵もいるくらいだ。
　それで泥酔して大きな失敗をしたり、上位の存在の気に障れば処分されるし、それが原因で死んでも自己責任。命令を聞けるほどの理性があり、なくても敵を倒せればそれで構わないのだ。命令違反を許すわけではないが、魔軍では実力と結果が重視されやすい。
　故に誰も気にしない。というか自分達がやっているのにそれを注意する馬鹿はいないだろう。ましてや相手は魔人だ。泥酔していたところでそれを咎めるものはいない。レオンハルトもそれは承知の筈だ。
　だがレオンハルトは魔物将軍の質問に、少し真面目な顔になると、
「それだと示しがつかない」
　いいか、とレオンハルトは前置きする。
「俺は魔軍参謀だ。謂わば魔軍の全権を任されてる存在な訳だ。当然、魔軍に属する全ての魔物、使徒、魔人が俺の一挙手一投足に注目する」
「……確かに、そうかもしれません」
　レオンハルトの真剣な声色に魔物将軍の身が反射的に引き締まる。元からその気はないが、この話を聞き逃してはならないような気がした。レオンハルトが続ける。
「仮に俺が毎日酒を浴びるように飲み、仕事も放棄するような奴ならどうだ？　そんな奴が魔軍参謀だったら心配になるし、俺がやってるって事で部下が同じように怠慢になるかもしれないだろ？」
　その言葉に魔物将軍静かに頷く。同意を得たのを確認し、レオンハルトも頷いた。
「そして俺が全権を握ってるって事は失敗も俺の責任になる。全部が全部そうじゃないかもしれないが、少なくとも俺が指揮を執ったものは疑いようもなく俺の責任だ」
　だから、と。
「休憩中だろうが酒を飲んで判断を鈍らせるようなことは出来ない。俺はお前らの命を預かってるんだからな」
「……なるほど」

魔物将軍は得心した。そしてその言葉に深い感嘆を覚えた。
やはりこの方は上に立つべきお方だ。その姿勢、心意気には脱帽するしかない。
……自分も見習わなければな……。
そう思い、レオンハルトに再度視線を寄越した。すると再び彼が口を開き、
「――というのはどうだ？」
「……へ？」
納得したところでの不意打ちのような言葉に、思わず間の抜けた声を出してしまう魔物将軍。残った思考が疑問を寿ぐ。
「えっ……それは、どういう意味で……？」
「……いや、偶には上司らしく有り難い話でも授けてやろうと思ってな」
「……」
レオンハルトは口端を上げて、白い歯を見せるように笑う。
魔物将軍は気が抜けたように息を漏らした。どうやら煙に巻かれたようだ。
「……そういうことでしたか……」
「あ、でもな――」
少し残念に感じて声を落とす。しかしまた言葉が来た。
……今度は何を……？
魔物将軍が疑問をとともに顔を向ける中、レオンハルトがグラスを見ながら、
「――こういう口実がないと飲めないってのは一応、本当だ」
「それは……ん？」
一体どういう意味なのか、それを思考するより先にレオンハルトが言葉を繋げて、
「気にしなくていい。……こういう酒宴は俺にとってもありがたいってだけだ」
「……それ、は……」
そう言ってグラスを傾けた。

魔物将軍はようやく胸のつかえが取れたような、得心した気持ちだった。それでいて化かされたような気分もある。
……このお方には敵わんな。
レオンハルトの振る舞いに苦笑してしまう。
だが、それで終わりではなかった。レオンハルトがグラスを口から離すと、気を取り直したようにして、
「ああ、それついでに聞きたいんだが」
「？　何でしょうか？」
さっきよりも落ち着いた心持ちでレオンハルトの質問を待つ。
「……こういうの、迷惑じゃないか？」
「迷惑、ですか？」
言葉の意味が分からず問い返す。レオンハルトは少し表情を落とし、
「俺が――魔人がいると緊張するだろ？　こんな風に付き合わせるのもどうかと思ってな……」
と、そんな事を言った。その気遣いに魔物将軍は嘆息してしまう。
気遣いもここまでくると何とも行き過ぎたものを感じてしまう。嫌な気はしないものの、
「……レオンハルト様」
言っておこう、と魔物将軍は自分の思いを伝えた。
「もう少し、自分本意に行動してもよいのでは――」
「――その通りですわ!!」
「おおっ!?」
突然、言葉の終わり際に高い声が割って入ってきた。
金髪ツインテールの少女、魔物将軍の上司にしてレオンハルトの使徒であるキャロルだ。
魔物将軍の言葉に同意するような声を上げたキャロルにレオンハルトが呆れた目を向ける。
「……急にどうした？　というかその通りって――」
「レオンハルト様にはもっと自分のやりたいようにやってもらいたい――という意味ですわ！」

魔物将軍の言葉を引き継ぐように、改めて言い直す――というより横取りしたような形だが。
……うーむ、相変わらず嫌われてるような……。
魔物将軍はキャロルの行動に肩を竦める。彼女からは何かと目の敵にされているような気がするのだ。
だが、考えていることは同じな様なので別にいいか、とだんまりを決め込む。するとレオンハルトが、
「……いや、俺は結構好き勝手やってるつもりだがな。強い相手と戦う時や、他にも――」
「もっと好きにしてもいいのですわ！　いいですか――」
キャロルが語気を強めて、言う。
「レオンハルト様よりも偉い存在はスラル様しかいないのですから、構いませんのよ！　誰にも文句は言われませんわ！」
「……でもなぁ」
「というか文句を言うような不逞の輩はレオンハルト様の使徒であるわたくしが黙らせますわ！」
そう言って胸を張るキャロル。
魔物将軍にとっても、そこまで極端ではないが概ね同意見だ。なので援護しようと声を上げる。
「そうですね、我々としても――」
「魔物将軍はちょっと黙ってくださいます!?」
「……はい」
がるる、とまるでわんわんのように威嚇をするキャロル。一応上司である使徒の言葉に魔物将軍は従うしかない。解せない気持ちを抱えながらも素直に頷く。
レオンハルトもやれやれと言ったように肩を竦める。
「……まぁ、それはいいが、用事とやらは終わったのか？　後、皿寄越せ」
「あ、はい！　どうぞ！」
どうやらキャロルは用事があり、少し離れていたらしい。持っていた皿をレオンハルトに渡す。

レオンハルトが料理に手を伸ばす中、キャロルが最初の質問に答えた。
「とりあえず準備は終えましたので、そろそろファンクラブの方に顔を出して頂いてもよろしいですの」
「……ファンクラブ？」
「……！」
あまり聞き慣れてない言葉に、魔物将軍が反復してしまう。
そしてそれに反応したのはキャロルではなく、レオンハルトだった。身体をビクリと反応させると、
「あ、あー……そうだったな。そろそろ行くか。……邪魔したな、魔物将軍」
「？　……いえ、とんでもないです。良い時間を過ごせました」
挨拶を交わし、レオンハルトが席から立ち去っていく。キャロルがそれに追従するが、去り際にこちらを見て、ふふん、と何やらドヤ顔のような表情を向けてきたのはちょっとよくわからない。
その行き先を見て魔物将軍は先程聞いた言葉の正体に気づく。
……ああ、あの女の子モンスターの集団か。
何故、この会場にいるのかとも思ったがレオンハルトやキャロルが見咎めるようなことはせず、普通にスルーしていたので誰も指摘しなかったが、どうやらあれがレオンハルトのファンクラブであるようだ。
魔人のファン、というのは何ともおかしな感じだが、
「……ある意味、自分もファンなのかもしれないな……」
魔物将軍は今度試しに自分も入れないかキャロルに聞いてみようと思いつつ、断固として断られる光景が目に浮かび苦笑した。

レオンハルトは、囲まれていた。
周囲にいるのは様々な見た目を持つ少女の群れ。魔軍に所属する女の子モンスター達だ。
その数、実に――１０８名。種類は様々だが、彼女達は皆、同じ目

的を持っている者達である。それは、
「きゃーーー!!　レオンハルト様がこんなに近くに!!」
「レオンハルト様ー!　サイン下さい!!」
「生レオンハルト様を拝めるなんて……!　もう死んでもいいかも……!」
「……」
全員が、レオンハルトファンクラブの会員であるということだ。そしてその騒がれている当人はというと、
……本当にいるのか……。
その彼女達を、レオンハルトは何とも腑に落ちないような雰囲気で見ていた。キャロルから聞いてはいたが、やはり心の何処かで信じきれていなかったのだろう。会場に着いて女の子モンスター達の群れが集まっているのを目撃した時は目を丸くしてしまった。
そしてその中心たる会長、レオンハルトの使徒であるキャロルが、
「みなさーん!　お静かにー!　皆さんを見て、レオンハルト様が困ってますわー!」
少し曖昧だが、的確にこちらの内心を言い当てるキャロル。そしてその指示通り、少しずつ声は収まっていった。
……一応、統率は取れてるみたいだな……。
どうやら会長としてちゃんと彼女たちをまとめきれているようだが、正直言うとそこに関しても半信半疑だった。元コマンダーというだけはある。それによくよく考えてみれば彼女たちも普段は魔軍に所属しているのだから命令を聞くのには慣れているのだろうと、レオンハルトは適当に当たりをつける。
そして完全に静かになると再びキャロルが口を開き、
「それでは皆さん!　打ち合わせ通り、これからレオンハルト様をもてなしますわよー!」
おー!　と女の子モンスター達が声を上げる。その反応にキャロルは満足そうに頷いた。
「では、『レオンハルト様を良い気分にさせて全員お持ち帰りされちゃいましょう作戦』――開始!!」

「何だその作戦名は……」
レオンハルトは思わずツッコミを入れてしまう。というかそんなバレバレの作戦名を思いっきり口にしているがいいのだろうか。
だが、そのツッコミを置いてけぼりにして、周囲の女の子モンスター達はキャロルの号令に従い、レオンハルトをもてなくすべく動き始めた。

接待

「おい……見ろよ、あれ……」
「ああ、凄いな……」
会場にいる魔物隊長達はその光景を遠目に眺めていた。
視界の先、上座に設けられた座席に座るのはこの酒宴を開いた張本人たる魔人レオンハルト。
そしてその周囲にいるのは約百名ほどの――
「はい、レオンハルト様。あーん、してください！」
「グラスが空いているようなのでお注ぎいたしますね。それとも……口移しがよろしいですか？」
「あーん、ずるいずるい！　次は私の番！」
女の子モンスター達だった。
彼女たちはレオンハルトに擦り寄り、様々な方法でアピールしていた。
「流石はレオンハルト様だな……」
「ああ、羨ましいな……」
魔物隊長達が唸る。彼らもれっきとした男であり、ああいった所謂ハーレム状態には羨望を覚える。
しかし魔物隊長以上ともなると野心はあるが、魔物兵以上に頭が回るのであまり現実的でないことが直ぐにわかる。そのため次に口から出るのは溜息であった。
「やっぱレオンハルト様程の上級魔人じゃないと無理そうだよなぁ」
「レオンハルト様、実力だけじゃなく実績もあるし、しかも容姿も良いからな。そりゃ好かれるだろうよ」
「……確かに。あそこまでいけば何やっても許されるんだろうな」
「まぁ、女を犯すだけなら遠征先で出来るから、そっちで我慢してようぜ」
魔物隊長が同僚を慰めるように肩を叩く。実際問題、自分達は恵まれている方なのだ。
レオンハルト軍はその名の通り、魔人レオンハルトが率いている。

それが何を意味するか、魔物隊長以上で気づいていない者はいないし、下手すれば魔物兵ですら気づいている自明の理。
それは――魔軍の中で最も負ける可能性が低い軍がレオンハルトの部隊であるということだ。
なにせレオンハルトは魔人四天王。かなりの武闘派で剣の達人である彼はそれ相応の実力を持っており、人間に負ける可能性など皆無に近い。
しかもそれだけでなく、彼は魔軍参謀でもある。魔軍全体の指揮官でもあるレオンハルトは自分の部隊を持ちながらも全軍を動かせるし、それを動かせるだけの知性も兼ね備えている。
そんなレオンハルトが自ら軍を率いて戦う時の勝率は１００パーセント。戦略目標を達成出来なかったことはあるが、こと戦闘に限れば全ての戦いに勝利している。それには勿論、彼の麾下で戦う自分達の貢献も多少はあるだろう。多くの転戦を繰り返す自分達は魔軍の中でも精鋭だという自負があるが――やはりそれが誰のおかげかといわれるとレオンハルトのおかげとしか言えない。
故に、戦闘後の楽しみは基本的に保証されているようなものなのだ。負けることがないのだからそれはほぼ確実。無論、失敗を犯してそれを取り上げられたり、何らかの理由でそれを味わえないこともある。
しかしそれでも負けて死ぬよりはマシな上、その辺りも考えてくれているのか、レオンハルトも憂さ晴らしの機会を与えてくれたりする――今回のように。
実際、魔物兵も最近はそのことに対して愚痴を漏らしていたものだが今回の酒宴でマシになるだろう。魔物兵は単純だ。こうして好きなだけ飲み食いさせれば、また士気も上がるに違いない。
魔物隊長はそのことを思いながら酒を呷る。ボトルを持って直接口に付ける――所謂ラッパ飲みである。
そして、ボトルから口を離した時だ。
「――――」
「――お？」

「――ん？」
突如、二体の魔物隊長の目の前を小柄な影が横切った。
マントをしているもののシルエットから見るにその影はおそらく女性であるだろう。その手には魔物隊長らと同じく酒のボトルを持っている。
また、レオンハルトが呼んだ女の子モンスターかと一瞬思ったそれは、彼女の顔を見て即座に覆された。
「――!? な、な……！」
「え――えっ!?」
信じられない姿に、思わず二度見するも、魔軍に所属する者が、その顔を見間違えるはずもない。魔物隊長らは揃って唖然とし、気を取り直したところでも今度は酷く狼狽する。それほどの衝撃だった。
思考が上手く定まらないが、強いていうなら彼らの思いは、何故こんなところに、と言ったところである。
その彼女は、ふらふらと千鳥足でありながらも確実にその方向に向かっていく――レオンハルトらがいるところへ。
魔物隊長は彼女が少し離れていったところで、ようやく恐る恐る口を開いた。
「い、今のって……！」
「……あ、ああ……間違いない――」
魔物隊長は酔いが急激に冷めていくのを感じながら、その名を口にした。
「――魔王様だ」

「はい、レオンハルト様ー。次はお刺身ですよー」
「ん、あ――」
……んー、何というか……。
レオンハルトは隣に座った女の子モンスターに刺し身を口に運んで貰いながら考えていた。
それなりに酒も周り、いつもより緩い思考の中、今の状況を考える。

……ハーレムだなぁ……。
この状況を名付けるならそれ以外にないだろう。レオンハルトは周囲を目線だけで見渡す。
どこを見ても目に映るのは女性だ。自身のファンクラブの女の子モンスターが自分を囲むようにしている為だろう。
彼女たちの歓待を受けはじめてそれなりの時間が経ったが、レオンハルトは受け入れ始めていた。
大所帯である為、代わり番こで自分に侍る者が入れ替わり、身体を擦り寄せながら思い思いに接待をしてくる。正直、最初は少し堅い対応だった気がするが、今はそうではない。レオンハルトは両隣に座っていた女の子モンスターの肩を軽く引き寄せる。
「きゃっ、レオンハルト様に抱きしめて……！」
「んんっ……大胆ですね……」
腕の中に二体を抱き寄せてやると、彼女たちの女の子らしい香りが広がり、すべすべで熱を持った感触が自分の身体に押し付けられる。そして顔を赤くする彼女たちに向かって、軽く笑みを浮かべながら、
「……お前達も可愛いな」
「っ！　あ、ありがとう……ございます……嬉しいですっ……」
「レオンハルト様にそのように褒めてもらえるなんて……きょ、恐縮です……！」
褒めてやると、より一層頬が紅潮し、身体を押し付けてきた。更には背後、そして前からも、
「……いいなぁ。ねぇねぇレオンハルト様、私はどう？」
「レオンハルト様ー！　私も構ってー！」
背後から首に腕を回して思いっきり抱きついて胸をぐいぐいと押し付けてくる子と、膝に座って背中や臀部を擦りつけてくる子。前者は拗ねたように、後者は無邪気に、こちらにアピールしてくる。
レオンハルトはその二体に対しても、
「……二人とも可愛くて魅力的だ」
「んっ、そうかな……」
「えへへ、ありがとうございまーす」

褒めるとそれぞれ別の反応を見せてくれる。喜んでいるのは同じだが。
レオンハルトは四体の女の子モンスター達を侍らせながら、もはや普通に楽しんでいた。というのも、
……なんというか……妙に懐かしい……。
レオンハルトは古い記憶を思い出す。そういえば人間の王であった時代は毎日のようにこんな感じで遊んでいたなぁ、と。
人間だった時の自分はいつも女遊びに興じていた。戦いと訓練の時間以外はいつも部屋に女中を呼んでは楽しんでおり、普段の苛立ちを発散するにはちょうどいい手段だった。
少し落ち着いてしまうのはその時の経験がある為であるが、昔とは違う部分もあった。それは、
……こいつらは本当に俺を慕ってるみたいだな。
レオンハルトはファンクラブの子達の瞳や何気ない行動からそれを何となく感じ取っており、それが今、素直に楽しめてる理由でもあった。
今となっては少し曖昧だが、昔自分に侍っていた女性達は、皆、眼の中に怯えや打算のようなものが見えたような気がする。それを否定はしないし、だからこそ気兼ねなく楽しめた側面もあった。だが、そんな彼女達を何処か鬱屈に感じていたのは確かだ。レオンハルトは今の方が好ましいといえる。
そしてあと一つ、楽しむ理由があるとすれば、
……さすがに昂ぶってきた。
単純に気持ちよく、気分がいい――という過去を振り返ってみたことが台無しになるような理由である。
だが待て、とレオンハルトは酔いの回った頭で思考する。
正直、これはしょうがないのではなかろうか、と。
レオンハルトは男だ。そして数百年を生きた魔人だ。
そしてそれだけの歳月を過ごしてくるにあたって、性欲のコントロールくらいは出来ていた。そりゃ若い時は常に頭がピンク色な時期もあったし、今でも不意にむらっと来てしまうことはある。だが、

普段から忙しいこともあり、一々女を口説いてどうにかしようと思うことは無かった。
しかしだ。それでも言わせてもらうが自分は男なのである。そんな男がだ。
例え数百年生きて精神が成熟したとしても、自分のことを慕う１０８人の美少女達に変わり代わりに纏わりつかれ、何とも思わない訳がない。断言させてもらう。
簡単に言うなら――
……あー、くっそ……！　めちゃくちゃムラムラする……！
ということである。要は興奮していた。
ぶっちゃけレオンハルトは先程からもうやる気満々であった。誰から先にしようか品定めをし始めているし、ぶっちゃけ下半身が大変なことになっている。そしてさっきから膝に座ってる子に当たってる筈なのだが――
「……？　どうしたの、レオンハルト様？」
「……いや、何でも無い」
……こいつ……気づいてないのか……!?
妙に子供っぽい性格だが、この催しに参加してるということはこの後何をするか理解している筈。ならばこの股間の剣を知らないわけがない、とレオンハルトは確信する。
……ならこの行動は確信犯か……！
レオンハルトは急に目の前の無邪気な態度が怖ろしく見える。要するに無知を気取った小悪魔系なのだろう。どうりでさっきから妙に下半身を擦りつけてくるわけだ。気づいてないと思って及び腰になっていた自分が情けなく感じる。そういうキャラであるならこちらから斬りつけて突き上げてやったものの。命拾いしたな。
……いかん、思考が馬鹿になりはじめた……。
レオンハルトはそれを自覚していたが、しかし衝動が収まる訳ではない。
ならばそろそろ行くべきか、とレオンハルトは判断する。
魔物将軍や魔物隊長の目があるこの会場で、性的なことをするのは

憚られるし、悟られるのも避けたい。手遅れかもしれないのだが。
もうさっさと部屋に言って自分の剣の王としての本性を解放して、股間のオル＝フェイルを彼女たちに向かって存分に使ってやるのがいいのではないだろうか。彼女たちもそれを望んでいるだし。
……そうと決まれば。
レオンハルトは近くにいる彼女を呼びつけた。その相手は、
「――キャロル」
「はい！　レオンハルト様！　何でございましょう！」
自らの使徒、キャロルを呼ぶ。いつも通り良い返事だ。
ならばこちらもいつも通りの態度で命令をする。レオンハルトは小走りで近づいてきたキャロルに視線を向け、
「そろそろ――」
いくぞ、と伝えようとした瞬間。
「――レオンハルト……」
「!?」
不意に、声が聞こえてレオンハルトは、はっとする。
……まさか……!?
その声量はそれほど大きなものではなかったが、何故かよく聞こえた。
そしてその声はレオンハルトにとってかなり聞き覚えのある声であった。
自分を呼ぶ声、それを発した人物は直ぐに現れた。
「っ!?」
「あ、貴方様は……！」
周囲のファンクラブはその姿を目撃し、自然と道を開け、膝を突く。そうするのが当然の相手だった。
その開けた道から、ふらふらとした足取りで小柄の少女が見えた。
白髪灼眼の少女、その姿にレオンハルトは息を呑む。
顔を俯かせながらやってくる彼女はまるで幽鬼のようだった。その覚束ない足取りがそれを加速させている。
その只ならぬ様子に誰も声を上げることが出来ないでいたが、唯一

それに反応する者がいた。
キャロルだ。
それを見かけると、いつものように明るい声で、
「あ――スラル様！」
「!!」
その少女――魔王スラルに話しかけた。皆が驚愕し目を見開く中、その言葉にスラルが反応した。
「んん、キャロル……？」
「はい！　レオンハルト様第一の使徒にして魔物界一の完璧使徒、キャロルですわ！」
「……レオンハルトは……？」
「レオンハルト様ならそこにいますわ」
口上を無視して質問をするスラルにキャロルはごく普通に対応し、レオンハルトの方を手で差し向けた。
「……レオンハルト」
「っ……な、何だ？」
何故か物凄い悪寒を感じて、声が震える。
レオンハルトが恐怖する中、スラルが顔をがばっと上げると、
「なんで私に黙って――」
彼女は、
「私に黙って――――酒宴なんて開いてるのよっ!!」
「……あ？」
涙目で言った。レオンハルトが唖然とする。よく見ると、手には酒瓶が握られており顔が赤く染まっている。
「私だけ仲間外れなんて寂しいじゃない！　ばちゅとして――」
そして地味に、罰、を噛んでいた。レオンハルトがまた別の意味で驚く中、スラルは叫んだ。
「――私を……全力で、もてなしなさい!!」
「……」
それを見ていた皆が静まり返る。無言で、隣の者や周囲の者に視線を送りながら同じことを思った。

……これ、どうなるんだ……!?

「ほらぁ、早くー……レオンハルトはこっちでー、他は適当に。……やらないとお仕置きだからね！」

――彼女は、明らかに酔っていた。

酔いどれスラル

「ここ、私の席ー！」
「っ……そ、そうか……」
レオンハルトは自身の膝の上に飛び乗ってきては、にこにことするスラルに困惑しながら相槌を返す。
もてなせ、と酔った様子で命令した彼女は周囲の魔物などお構いなしにレオンハルトに自らの世話をさせようとしていた。顔は赤く、ろれつは回ってない、その様子はまさしくへべれけ状態だ。おそらく手に持った酒瓶を道中飲んできたのだろう。中の液体は既に半分ほど減っているのが見えた。
……というか、何でここに……！
レオンハルトはそう疑問する。故に聞いてみた。小声で、
「……何でここにいるんだ」
「んー……レオンハルトがいるって聞いてしかも酒宴開くって言うから……来ちゃったぁ」
いたずらっぽく首を傾げながら言うスラル、そのことに対する感想は一旦頭の隅に置いておく。思うのは、
……バレちまってたのか……！
この酒宴はレオンハルト軍だけのものであり、一応そのことを口外するのは禁止させていた。だが、なにしろ大規模なものであり、他の部署にも影響があることから知れ渡るのはしょうがない。人の、魔物兵達の口に戸を立てるのは難しいのだ。
それでもスラルに関しては、基本的に部屋に引き篭もっていることが多い上、外に出る時も自分を連れることが殆どであるため、バレずに済むかと思っていたが――どうやらその認識は甘かったらしい。レオンハルトは酔いが覚めてきた頭で考える。
このままじゃ酒宴が台無しになってしまう。そして、この後の予定も無くなったも同然だろう。レオンハルトとしても、スラルには何となくバレたくないことだ。
……でも、バレてはないみたいだな。

レオンハルトの周囲には未だ女の子モンスター達がいるのだが、スラルはその存在に気づいていないのか、もしくは気づいてはいるが何をしていたか、これから何をしようとしていたのか知らないのか、あまり気にした様子はない。
であるなら、そちらは置いといても構わないだろう。自分が気にするべきは、この酒宴をどうするか。
レオンハルトは周囲を見渡す。先程までは魔物将軍や魔物隊長達が思い思いに楽しんでいたこの会場は、魔王が来たことによってどうしていいのかわからない様子。戸惑った様に、遠巻きにこちらを見ていた。このままではお開きになってしまうだろう。
確かにいい時間かもしれないが、彼らはまだまだ楽しみたいに違いない。今回の酒宴は、朝まで飲んでも構わないとしている。翌日の仕事に関しては触れなくても構わない。他の軍から人員を回すことになっているし、緊急の要件であっても自分だけが動けば済む話だ。
有り体に言えば彼らは明日、休みであり、翌日を気にしなくていいほど楽しむつもりで来たはずだ。ならばそうさせてあげたいところ。
そのためにはどうするか。一番良いのはスラルに帰ってもらうことだが、その期待は薄い。
「……魔王様」
「んー、なにー？」
レオンハルトは一応、ダメ元で聞いてみることにした。余所行き用の口調で、
「そろそろ夜も更けてきました故、城に帰りま――」
「いやっ！　私も楽しみたい！」
すげなく却下される。やはり今すぐに帰るのは無理そうだ。スラルはまるで駄々っ子の様に、
「宴はまだまだこれからなんだから！　ほらっ、私を楽しませなさいっ！」
「……それは」
その言葉に周囲がざわつく。楽しませろ、とはまた結構な無茶振りだ。しかし魔王の命令となれば聞くしかない。レオンハルトは嘆息

する。
……仕方ない。少し気分を良くしてから帰ってもらうか。
ならば、とレオンハルトは行動に起こす。まずはどのような事をすればいいのか、詳細に聞くため、口を開いた。
「どのように楽しませれば？」
「んくっ、んくっ……はぁ、そうねー……」
スラルは酒瓶をラッパ飲みして、息を吐くと、身体を左右に揺らしながら考え込む。レオンハルトはそれを見て、
……酔い潰した方が手っ取り早いか？
そんな考えが頭を過り、しかし即座に棄却する。これ以上酔って更に酷い状態になる危険性があるからだ。それに、スラルがどれだけ酒に強いかもわからないので、時間がかかるかもしれない。レオンハルトの記憶の中でもスラルが酒を飲んでいるところは見たことがない。これが初だ。なので、そこまで強くはないとは思うが、それだけに何が起こるか予想が付かない。
なのでやはり、適当に楽しませて帰ってもらおう。そう決めてスラルの言葉を待っていると、
「レオンハルト～」
呼びつけられた。反応しようとして、
「ぎゅってして」
「はい、畏まりまし……た……？」
頷き、それを即座に実行しようとしていたところでおかしな、信じられないような命令を下されたことに気づく。
……俺の聞き間違いか？　今、ぎゅってしてと言われたような……。
聞き間違いでなければ随分と魔王としての威厳が無くなりそうな命令だ。いや、元よりスラルに対する魔王らしさ、など求めてないし、そんなのは存在しない事はわかってる。
だとしても、今の発言は何だろうか。ぎゅっとして、という意味はおそらくだが、抱きしめてほしい、という意味だろう。それ以外の意味はあまり思いつかない。

しかしレオンハルトが知らないだけでまた別の意味でもあるのかもしれない。レオンハルトは再び確認の意味を込めて、
「……ぎゅっとして、というのは――」
「？　抱きしめてって意味だけど？」
何でそんなことを聞いてくるのかわからない、といった風に首を傾げるスラルにレオンハルトは真顔になる。
……マジで言ってんのか……！
さすがにそれを即座に実行するのは些かハードルが高いのではないだろうか、と思う。しかし、
「それは……」
「嫌なの？」
「嫌なわけでは……」
「それじゃあ早くして。ちゃんと、ぎゅうぅぅって、してね？」
念を押すように催促されてしまう。これでは逃げようがない。
周囲には未だ、魔物将軍や魔物隊長、自身のファンである女の子モンスター達が固唾を呑んで見守っている。正直、誰か助けてほしいのだが、魔王と魔人のやりとりに口を挟むなど、一魔物でしかない彼らには難しいだろう。
ならば、とレオンハルトは決断した。腕を前に回し、膝の上に座るスラルを、
「っ――」
抱きしめた。それを見た周囲から「おお……！」という声が漏れる。何を唸ってるんだ、とレオンハルトは周囲を見て半目になる。
そんな中、熱を持った小柄な身体が自分の腕の中に完全に収まる。体格差があるためだ。自分はそれなりに長身だが、スラルは女性としては小柄で華奢な体格。致し方ないことではあるが、スラルはそれを、
「んんーー……！　あったかーい……しばらくこの状態ね？」
「……はい」
大層お気に召したようで、顔に笑みを作り頬を手で抑えて喜んだ。そしてこの状態の継続を願う。レオンハルトは勿論、それに頷くしか

ない。
……まあ、これはいい。いや、よくないが、言っててもしょうがない。――問題は次だ。
レオンハルトは半ば諦めながらそれを受け入れる。問題を解決する為に、ある程度自分の身を削るのは仕方ないのだ。彼女を楽しませる為にはある程度我慢しようと覚悟を決める。ここからが本番なのだ。
まだ最初の質問の答えは返ってきていない。その答えのいかんによっては更に身を削ることに――
「あ、そうだ」
「！　思いつきましたか？」
不意に、スラルが閃いたように声を上げたので、それを促す。簡単な命令であれば良いのだが。
そうして告げられた言葉は、
「――面白いことして笑わせて？」
「――――」
その言葉に、レオンハルトは言葉を失くす。自分だけじゃなく、周囲の魔物達も皆、その発言に唖然とし――そして、少しの間を置いて心の中で叫んだ。
……む、無茶振りだあ――!?

レオンハルトは大いに慌てた。返ってきた答えが想定を遥かに越えてきたからだ。それは、
……まさかの自由だと……!?
ふざけやがって、とレオンハルトは憤った。単純なあれしろ、これしろ、という命令を下してくれれば楽なものを、まさかの、面白いことをしろ、なんて言うハードルの高い命令をされてしまった。
ぶっちゃけ、こういった自由裁量が高すぎるお題は、正直一番難易度が高い、とレオンハルトは思う。
何かをしろ、という命令は、それでスベってもそれは相手側の無茶

振りであるため、こちらに責任が降りかかり難いものだ。その場合、場には、まぁしょうがないよ、的な空気が流れるものである。
しかしそれがこちらの自由、何をしてもいい、となった時、難易度は急激に跳ね上がる。
そもそもが無茶ぶりであり、準備期間がないことは同じでも、自分自身のセンスが問われるからだ。
仮にそれでスベると、本来はそういった無茶振りが悪い筈なのに、自分で考えてそれを行ったという責任を急に負わされるのである。
結果、そいつはまるで面白くない奴、のような評価が下されるのである。
そもそも断ればいい、だなんて答えは通用しない。これは全部、それを受けざるを得ない状況での話であり、今まさにその状況でもあるからだ。魔王の命令に逆らえる奴など存在しない。少なくとも衆人環視の中では不可能だ。二人きりとかならレオンハルトやガルティアなど、一部の魔人に限って可能ではあるが。故に、
……よりにもよってそれか……一体どうすれば……！
レオンハルトはそれを思い悩む。何をすればスラルを笑わせることが出来るのか、と深く悩む。
そんな時、さらなる追い打ちをレオンハルトはくらった。
「もう……まだー？」
「いや、その……もうちょっと――」
「早く面白いことして、魔王の命令だからねっ」
と、その瞬間。
「――――っ!!」
自分の身体が強制的に動いた。それはまさかの、やつだった。経験したことはないのだが、魔人の本能がそれを理解する。
レオンハルトは内心、その事実に絶叫した。
……こんな下らねぇことに初めての絶対命令権使ってんじゃねぇ――!!
そう、レオンハルトが自分の意思に反して行動を起こす理由。それは、魔王が魔人に対して持つ絶対命令権が発動したからに他ならな

い。
魔人が魔王に逆らえない理由の一つであるこれは、文字通り、魔王の命令を魔人に強制出来る能力である。
その効力は絶大であるものの、発動にははっきりと意思を込める必要があるため、今までレオンハルトはスラルにこれを使われたことがなかった。
それを今、使われたのだ。酔った勢いで、面白いことをさせる為だけに。誠に遺憾である。
レオンハルトは肉体を必死に制御しようとしながらも、しかしそれは難しく、
「ぐ、ぐぐぐ……！」
やがて、座ったまま、その命令を実行しようと行動した。
「――い、一発ギャグ、やります……！」
その言葉に驚愕したのは周囲の魔物達であった。辺りが少しざわつく。
「わーい、楽しみー！」
「れ、レオンハルト様が一発ギャグ、だと……!?」
「想像出来ん……一体何をするんだ……？」
「レオンハルト様の新しい一面が見られるなんて……」
「レオンハルト様のギャグ……貴重ですわー！　メモの用意を――」
どうやら楽しみにしているのは命令したスラルを除くと、記録するためにメモを用意しているキャロルやファンクラブの子達くらいだった。いや、無理でも助けろよ！　とレオンハルトが呑気に記録しようとしているキャロルに憤慨する。後でお仕置きしてやろうと思う。
そして、更には、
「――おお、騒がしいと思ったらレオンハルトにスラルが――って、何してんだ、あいつら……」
今まで食事を取っていたのだろう、ガルティアがその光景を見て近づいてきた。レオンハルトは内心、助けてくれ、と叫ぶ。
魔王の命令なのでその願いは無茶なのだが、それ以前に、

「……なんか面白そうだから放っとくか」
……!?　ガルティアてめぇぇぇぇぇ――!!
薄情にも見過ごされてしまった。後で絶対殴ろうと心に誓う。
そして遂に、レオンハルトは行動を起こした。
スラル、ガルティア、キャロル、魔物将軍、魔物隊長、ファンクラブ。皆が注目する中、レオンハルトは
「……あ、それ飲んじゃ駄目だぞ」
「あっ」
レオンハルトがスラルの酒瓶を不意に取り上げた。そして、
「ちょっと、返してよ」
「駄目だ。何故ならな――」
言った。
「――夜にお酒は避けナイト、駄目だからな……」
滑った。
「……」
辺りがしん、と静まり返る。
今日一の静けさだ。気の所為か、風の音も止み、気温も少し下がったような気がする。
そしてややあってスラルが、
「……レオンハルト、面白くなーい」
とどめを刺された。
……クソがあぁぁぁぁ――!!　スラル、お前……後で絶対、泣かす……泣かす……!!
レオンハルトは目元を抑え、顔を俯かせた。スラルを泣かせるとは誓ったが、先にこっちが泣きそうだ。しかも周囲では、それを何となく察したのか、多少落ち着きを取り戻すと、まばらな拍手と共に、
「ま、まぁ……自分は嫌いではないな、うん……酒、と避ける。夜と夜を意味する、ナイトを掛けたのだろう……面白いかはともかく、上手いといえば上手いのだし……」
「一発ギャグというかただの駄洒落ですがね……」
「……レオンハルト、お前……面白いことやれって命令されて最初に

出てきたのがそれなのか……？　ある意味すげぇな……」
「レオンハルト様、格好いいけどユーモアのセンスはあんまりかぁ……」
「ふふっ……あ、でも、この空気込みで考えるとちょっと面白いかも……」
「レオンハルト様ー！　スベってますが、それはそれで成立してるので大丈夫ですのよ！」
……フォローするなあ――！　それはそれで傷つく！
レオンハルトは自分のイメージから、表立っては思いを叫ばず内心でそれを嘆く。たった今、イメージが崩れてしまったので意味がないような気もするのだが。
そしてこちらが精神に傷を負う中、その原因たる邪智暴虐の少女は、
「んー、レオンハルトの所為で盛り下がっちゃったなぁ……」
……だ、誰のせいだと思ってんだ――!?
スラルの無慈悲な言葉に、顔を赤くする。だんだん泣きたくなってきた。もしくは忘れたい。既に酔いからは覚めかけているが、後でもう一度、これを忘れるためだけに酒を飲みまくってやろう、と心に誓う。
そんな中、
「……レオンハルト様」
キャロルが近づいてくる。そして、サラッと自然に、
「後で皆で慰めますので大丈夫ですわ」
「キャロル……」
とそう言ってくれた。どうやら後で傷を癒やしてくれるらしい、レオンハルトはほんの少し感動を覚えた。
どうやら持つべきものは使徒、そして自らを慕ってくれるファンの子達のようだ。自分の失敗を慰めてくれる存在ほど、ありがたいものはない。
だが、
「……慰める？　なら、私もー」

「――！」
その言葉に、スラルが反応する。一瞬、背筋に冷たい物が走った。
しかし、
……だ、大丈夫か……。
その自然な様子から、そういった事とはバレていないようだ。レオンハルトは安堵する。
しかし、レオンハルトは忘れていた。
こういうときに空気が読めないというか、余計な事をしでかすのが――
「あっ、スラル様。慰めるというのは普通の意味じゃないので、出来れば今回は――」
「……普通の意味？　どういうこと？」
レオンハルトの使徒、キャロルだ。彼女はスラルの訝しげな口調に、少し恥ずかしそうにしながらも、さらりと答えた。
「あ、それはですね……後でレオンハルト様ファンクラブの全員でレオンハルト様に抱いてもらおうかと……」
「あっ、馬鹿お前――」
レオンハルトが咄嗟に止めようとするも、
「……は？　抱く……？」
「っ――！」
――時すでに遅し。
スラルの表情が真面目なものに変わる。
そして素直なキャロルは普段どおりの様子で、
「はい！　レオンハルト様から了承を得ましたし……なので全員お持ち帰りされてしまおうかと……！」
嬉しそうにそう告げた。すると、
「……」
スラルが無言となった。そしてゆっくりと、レオンハルトの方に顔を向ける。
「……ねえ、レオンハルト？」
「！　な、何でしょうか……？」

レオンハルトは声を震わせながら返事をする。気がつけば、先程の軽い雰囲気が消え、重苦しい雰囲気が周囲を襲っていた。
それはスラルが普段、親しい者以外と会う時に作る顔――即ち、
「――今の話、本当なの？」
魔王としての顔を、顕現させていた。
その重圧と存在感に、息苦しさを感じるのは気の所為ではない。大陸最強の存在としての圧は、他の全ての生物を凌駕し、魔人や使徒、魔物であっても畏怖を抱かせる。
そしてその圧は現在、一人の存在に、視線とともに差し向けられている。
……あれ……これ、まずくないか……？
その存在こそ、魔王スラルの側近である魔人レオンハルトに他ならない。彼女はいかなる理由からか、その言葉に激高し責めるような視線でレオンハルトを射抜く。
レオンハルトもその理由が微妙に分からないままに、その只ならぬ様子に対し恐怖した。しかし、質問には答えねばならないだろう、とレオンハルトは狼狽えながらも、
「い、いや、まぁ……ほ、本当、だったり……？」
機嫌を窺うようにそう答えるも、
「……そう」
スラルの視線に剣呑なものが混じった。次の瞬間、
「レオンハルトの――」
一息。魔王スラルはその力を解放した。
「馬鹿ぁ――――!!」
「っ――ぐおぉぉぉ――っ!?」
その力の奔流に、レオンハルトが吹き飛ばされる。
空気が振動し、周囲を小刻みに揺らす中、魔物将軍や魔物隊長達は魔王が力を解放するところも、レオンハルトが吹き飛ばされるのも目撃していたが、彼らは魔王の威圧にその場から動くことが出来なかった。
それは魔物として本能だろう。魔王という絶対者がいる中、下手に

刺激すれば自分達も危ういのでは、という考えであった。
後、心の中で妙な打算もあった。レオンハルトがある程度お仕置きを受ければ直ぐに収まるのでは、という考えである。
前々からの噂と先程のやりとりを見る限り、魔王とレオンハルトはそういう仲なのではないか、と。そして、そうであるならばレオンハルトが悪いのだろうし、滅多なことにはならないんじゃないか、と。
そのため、彼らは傍観することに徹していた。心の中でレオンハルトに謝罪と憐れみを向けて、やっぱり危ないので少し下がりながら。
――そして、魔物将軍達が一種の処世術を行う中、魔王の怒りを買ってしまったレオンハルトは、
「っ、うおぉっ!?」
自分に向かって放たれる魔法を必死に切り払っていた。いつでも肌身離さず身につけている魔剣オル＝フェイルを抜き放ち、スラルの魔法から逃げ回る。
……ちょ、こい、っ……！　滅茶苦茶かよ……!!
レオンハルトはスラルの魔法に驚愕する。長い付き合いだが、彼女が戦うところは見たことが無かったものの、偶に魔法の研究をしてるところを目撃していたことから魔法が得意なのは知っていた。
それでも驚くのは、その威力や精度、速度などを見て、魔王ともなればここまでの強い魔法が放てるのか、とそういった驚きだ。
先程から見たことない魔法を、今まで見た中で最大の威力で放ってくるスラルに、レオンハルトは必死になる。当たり前なのだが魔人では魔王の実力には敵わないということなのだろう。しかしそれでも必死に防ぎ続ける。
だが、それも長くは続かない様だった。
「……レオンハルトの――」
「……っ！　おい、スラル！　それは――」
気づけば、スラルの周囲に、幾つもの魔法陣が折り重なったように描かれている。そしてそこに、大量の魔力が集中していき、大気を震わせている。
それは魔法の知識が無くとも、見るだけでとんでもない大技を放と

うとしているのがわかるほどであり、その目標は明らかにレオンハルトであり――故に彼は叫んだ。
「それは洒落にならな――」
「あほ――――!!」
スラルがレオンハルトを罵倒すると共に、白の一線が放たれた。
その莫大な光の光線は、宙を突っ走り、真っ直ぐとレオンハルトの元に向かい、
「ぎゃぁぁぁ

酒宴から三日後。
レオンハルトの部屋にはとある人物がやって来ていた。
「……えっと、今日は決闘の日、だったはずだけど――」
魔人レオンハルトの使徒、ハンティ・カラーだ。
主であるレオンハルト。その命令を受けたキャロルから一ヶ月に一度の約束の日程を三日後にずらし、会いに来ていた彼女は、その部屋の主を見て、何とも言えない表情で呟いた。
「あー……一応聞くけど――やる？」
「――やらねぇよっ!!　見りゃわかんだろ!!」
レオンハルトはベッドで全身を包帯まみれにしながら、憤った様子でそう叫んだ。そんな彼の傍らには、更に二人の少女がおり、
「――ごめん！　ほんっとーにごめんなさい！」
「本当に危ないところでしたわ……見つけた時にはぴくりとも動かなかったですし……」
ひたすらに謝りながらヒーリングを掛け続けるスラルと、珍しく冷や汗をかいて胸を撫で下ろすキャロルに、ハンティは呆れかえり、肩を竦める。
「……何があったのやら……」
「……聞くな。聞いたら後悔するぞ」
レオンハルトはそう言って、全身の痛みに耐えながら三日前の事を思い出し、身体を震わせながら、二つのことを決意した。
一つは、
……もう絶対に……酒宴には参加しねぇ……。
そして二つ目は――スラルには酒を飲ませないようにすること。
レオンハルトが酒の席に若干のトラウマを覚えた――そんな日であった。

夜の王

――ＳＳ４２０年

人間が国家を築き、数百年。

人類社会は確立されてきていた。

未だ大陸の半分は魔物達のものであることには変わりなく、魔軍の脅威と戦い続けていることにも変わりはない。

しかし、その生活は確実に慣れが生じ始めていた。それはひとえに、魔軍との戦争が領土を接している国が主であり、大攻勢も滅多にない為であった。

全体的に見ても半分か、それより少ない程度の国家。主に大陸東部から南部に掛けてその傾向が強まっており、魔軍の被害もあまりなく、ある程度の平和を謳歌していた。

――だが、誰かが言った。人間は欲深い生き物である、と。

余裕が出来ればそれ以上を求めてしまうのが人間なのだと。

それは人間の本能であり、仕方のないことなのだ。故に、権力者達は動き出した。

この時代になると、魔軍の脅威をあまり受けていない国家を中心に、あることが本格化してきたのである。

それは、人類同士での奪い合いだった。

彼らが欲しがるものは様々であり、人、物、土地、金、食料、権益、あらゆるものを求めて争う。

最初は、交渉し、お互いの欲しがる物を手に入れる為、妥協点を探り合いを続けた。

しかし、話し合いが決裂すると、後に残る手段は――奪うこと。

即ち――人類国家同士の戦争である。

魔軍が攻めてこないことを良いことに、奪われる側から奪う側へと。様々な大義名分を引っさげて。

欲に従い、人間達は自ら争いはじめたのだった。

――大陸中央部。
大陸の中心にそびえ立つ世界最高峰の山、翔竜山。それを取り囲むように広がる大森林地帯があった。その景色は辺り一面が緑。人の手が入った形跡は殆どない、原生の森林そのもの。方向感覚を狂わせ、一度迷い込めば二度と出られないともいわれている。
だが、そんな森に、今は二種類の人影があった。一つは、
「進め――!!」
「うおおおおぉぉぉおおおおおおっっっ!!」
無骨な鉄の鎧を身に着け、剣を掲げる人間の男の姿。彼らはこの大森林から南に位置する王国の兵士達であり、この森の豊富な資源を狙って攻め入ってきた軍隊だ。
隊長らしき者の号令に従い、兵達は木々を切り分ける様に進んでいく。その瞳には、一様にもう一つの人影を映していた。
そのもう一つの人影が、
「――弓隊、放てぇ――っ!!」
「ぐぅっ!?」
「ぎゃあっ!」
森の奥から女性の声が響き、その一瞬の後に矢の雨が降り注いだ。少なくない兵達が、鎧の隙間を縫うように放たれた矢の犠牲となり、苦悶の声を周囲に響かせる。しかし、やられた兵の数は少なくはないが、多くもない。全体から見れば軽微でしかないのだ。この森林地帯の制圧を任された隊長は、それを思い、森の奥に見えた女性の影に向かって声を上げる。
「前方にいるぞ!! 突撃ぃ――っ!!」
「くっ……まずい。――少し下がるぞ!」
「は、はいっ!」
大勢の人間の兵が被害に構わず突撃してくるのを見て、女性は歯噛みしたように後退するように部下に命令を下す。そんな彼女達の姿を発見した人間の兵士達は、戦闘で昂ぶっているのか喜色が混じったような声で、
「ようやく見つけたぞっ! 今度はこっちの番だぜぇ!」

「あんだけ弓で攻撃してくれたんだから分かってるよなぁっ！　後で覚悟するんだな！」
「ははは、他の奴みたいに慰み者にしてやるぞぉっ！」
「……っ！」
その言葉に、女性が怯えの色を見せる。それは部下達も同じだった。
何故なら、彼女の部隊、兵士たちを撃退しようとしている女性達は、この森に住むもう一つの人影であり、そして純粋な人間種ではないからだ。
長い耳に額の赤や青のクリスタル、水色の髪を持つ女性だけの亜人種――カラーと呼ばれる種族である。
そしてこの森林地帯は彼女たち、カラーが住む土地であり、大規模な集落がある場所なのだ。
故に当然、ここを攻めてくる人間がいるならば戦わざるを得なかった。彼女たちは必死に弓を構え、足を動かす。
戦いは現在、一進一退の状況が続いている。カラーは生まれつき、高い魔力を持ち、弓を得意とする種族であり、それらと彼女たち特有である森の把握能力と土地勘を駆使した戦術で、人間達には数で劣るものの、その高い能力。つまり、質の面で何とか拮抗していたのだ。
だがそれでも、彼女たちが怯える理由。カラーの部隊は戦いながら後退するも、人間の兵にやられて捕まってしまった仲間を見る。
そこでは、
「いやあああああぁぁぁっっ!?」
「やめてぇっ！　離してよぉっ!!」
「へへ、苦労させやがって……！　ちょっと一発抜かせてもらうからな……！」
「ふっ……くっ！　はぁ、はぁ……やっぱ戦場でヤるのはたまんねぇなぁっ……！」
――多くのカラーの娘たちが、人間の兵士たちから暴行を受けていた。
それは、戦争の中では珍しくない光景だ。戦争の最中に捕虜になっ

た女性や、占領した街の女性などは暴行、強姦されるのが、もはや常習化されている。それは、女性も一種の戦利品として扱われる為であり、兵達の戦う理由としても愛国心や金、名誉といったものが重視するも、略奪や暴行を期待して戦うものも多い。

それらは魔軍などでよく見られることで、魔物兵の蛮行は有名だが、人間の軍隊でもこれらは兵達の報酬としているのは周知の事実であった。国としても表立って言うわけでも、与えられるわけでもないが、はっきりと禁止にすることはせず、それは事実としてあるものだった。指揮官も基本的にはそれを黙認するし、むしろ率先して参加することも多い。

それに言うまでもないが軍隊というのは、男所帯である。

更に言うなら権力者も男で占められているし、これは強姦とは直接の関係はないが、平民の間でも、男と女、どちらが立場が高いか、といわれると男であった。

それは、人間が生まれてから未だ変わっていないこと。徐々に変わってきてはいるものの、まだまだ力が全ての時代では、狩りや戦いを担当していた男の方が立場は高く、それに比べて弱い女の立場は低かった。

そういった背景からだろうか、この光景は数百年前から見られる――戦争の付き物であった。

故に男だらけの兵達にとっての幸運は、カラーが見目麗しい女性だけの種族であることで、カラーにとっての不幸は、自分達が女性だけの種族であることだった。

――未だ、その隠された効果は知られずとも、カラーは男にとって恰好の餌であった。

もっともカラーの方も、人間の男を見下す傾向があるのは確かだが、今この場においてはあまり関係ないだろう。

「いやぁ……、もうやめてぇ……抜いてよぉ……」

「痛いよぉ……！　誰か助けて……！」

気づけば彼女たちの額のクリスタルが、赤から青に変わっていた。カラーの額のクリスタルは通常は赤色だが、処女を失うと色を青へと

変化させる。
「っ……最高の戦争だぜ……！　戦いは面倒だけど、これがあるからやめられねぇんだよなぁっ！」
「魔軍なんかと戦うより、こっちの方が断然いいよな……くぅ……！」
兵士たちは若干、声を震わせながら、カラーの娘たちを犯し続ける。戦闘の合間であるため、時間は限られてるが、相手の撤退をある程度追い回し、前進すると、このように息抜きの時間が回ってくる。それが兵達の士気の高さに繋がっていた。
兵達はカラーの娘を犯し、順番待ちをしながらも思う。辺りはもう暗くなってきたし、時間がくれば少し休んでから今度は陣を張るため、隊長から号令がかかるだろう。夜の森での行動は集団であっても危険であるため、今日の仕事はほぼ終わりではあるが、兵達の時間制限はそれまでだ。強姦などという非道を行ってはいても、彼らは立派な国の軍隊である。上官の命令には逆らわないし、規律は守る。
なので、彼らはその時間の中でめいっぱい愉しもうと強姦を続けた。
そんな時だった。
「やっと俺の番か……そんじゃやっちまうか」
「いやぁ……もう無理ぃ……」
カラーの娘が身体を白い液体で汚され、目が虚ろな状態になっている。
そんな彼女に一人の兵士が近づき、
「へへ、悪く思うなよ。捕まったお前らが悪いんだからな……そいじゃ、ちょっと失礼して――」
そう下卑た声で、下半身を下ろそうとした時、
「――あ……？」
突如、辺りに霧が立ち込めてきた。そして、
「――――ぐ」
「……え……？」
カラーの娘の目の前にいた兵士が、突如、血を吐いて絶命した。
その腹には何かに刺された後がある。そして更に、

「ぐあああああ――!?」
「な、何だ!?　何が――ぐっ……」
「気をつけろっ!!　何かが襲ってきてるぞ!!」
　次々と兵士が断末魔を上げ、もしくは静かに音もなく地面に倒れ、死体になっていく。
　兵達が半ばパニックになる中、そこでようやく、兵士の一人が、辺りを見渡し、上を見上げたところで、
「！　――いたぞ！　上だ！」
　その叫び声に、兵達が上を見上げる。そこには、
「――――気づかれたか」
　木々の隙間、闇夜に浮かぶ月を背にして枝の上に、見知らぬカラーの女性が立っていた。
　その姿に、兵士たちは思わず見惚れてしまう。
　それは赤いクリスタルと短めの水色の髪を持った、カラー特有の衣装とは少し違った白と黒の衣装をまとった美しい女性だ。整った顔立ちだが、その表情は無に近く、真一文字に結ばれた口と、冷たい視線をこちらに向けてきている。
　見る限り女性にしては長身であり、その肢体はとても女性らしい魅力に満ちていた。服の上からでもわかる豊かな胸元やくびれた腰とその曲線が悩ましく、ここまで多くの見目麗しいカラーを見た兵達ですら驚く、非の打ち所がない絶世の美女。そんな女性がたった一人で目の前に現れたことに、兵達は少しの安堵と期待を抱いた。
「……はっ、なんだ、一人じゃねぇか。驚かせやがって」
「てっきり大勢で襲ってきたのかと思ったぜ」
　安堵は相手が一人であるということ。そして、
「おい、姉ちゃん！　たった一人でこんなとこ来たら危ないぜぇ？　何されるかわかんねぇしなぁ？」
「仲間の仇討ちかぁ？　それとも、混ざりに来たのかっ！」
「そうじゃなくてもやっちまうけどな！」
　ぎゃはははは！　と小馬鹿にするように声を上げて笑う兵達。
　期待は今彼らが言った様に――極上の獲物がやってきたことによ

るものだ。
　その下卑た視線と舌舐めずりに、しかし彼女は冷たい様子で、
「……ふん、下衆め」
　鼻を鳴らしてそう吐き捨てる。その視線は心の底から兵達を軽蔑しきっていた。
　ともすれば完全に見下したような様子で、彼女は一度息を吐いた。
「それに、敵を目の前にして随分と呑気なものだ」
「……あ？」
　兵達が、疑問符を頭に浮かべる。彼らの返事を待たず、彼女が続けて、
「私は――お前達を殺しにきたのだぞ？」
「――っ!?」
「っ――！」
　突如、彼女は静かな殺気を兵達に叩きつけた。とてつもない悪寒を感じ、彼らの身体が凍ったように固まる。
　そしてその殺気の強さと、視線と共に浴びせられる圧力に戦慄した。兵達が二の句を継げないでいる中、唯一隊長だけが、ふっとある噂を思い出し、口を開く。
「……お、お前、まさか――」
　だが、
「……悪いが、これ以上言葉を交わす必要性を感じないな」
　そう言って彼女は、詠唱を行うと、
「――ダークミスト」
　聞いたことのない魔法と共に、襲いかかってきた。魔法が発動され、周囲の霧が黒くなり、辺りを包み込む。
　その結果、彼らの視界は真っ暗となり、兵達の視界を奪った。
「な、何だ――!?」
「何も見えねぇぞ！　一体どこに――」
　兵達が暗闇で混乱する中、聞こえるのは、
「ぐっ――」
「どうすればいいの――」

「お、落ち着け！　相手は一人だぞ！　まずは距離を――」
変なタイミングで言葉を切る、兵達の声と、何かが地面に倒れる音。
それは何が起こっているかを知らせるには、十分であり、その事実に兵達は恐怖した。闇の中で彼女の声が聞こえた気がした。
「私の同胞に手に掛けた罪――その命で償って貰おう」
と。
その瞬間、兵達は狂乱した。
「に、逃げろ！　こんな暗闇じゃ戦うこと、も――」
「う、うあああああっ！　く、来るなら来、い……」
「もう駄目だ……もう死ぬ、し、か……」
一目散に逃げ惑う者がいる。彼らは他の人や木にぶつかって満足に動けなくなった。その部分を狙い打たれて、屍を晒した。
辺り構わず武器を振り回す者がいる。彼らは周囲にいる味方を次々と斬り裂いていき、やがて自分も他の兵士に斬り裂かれた。
わけもわからず只々動揺してその場から動けなく者がいる。彼らは気がつけば殺されていった。
……何だ、これは……！
隊長は絶望する。向こうは見えているのだろうか、味方の声がどんどんと少なくなっていくのを感じてそう思う。それとも実はもう逃げていたり、偶然こちらの攻撃が当たって死んでしまっていたりするのだろうか。それすらも分からない。
視界を封じられた不利は覆しようがなく、こちらは何も出来ないまま殺されていく。その惨状を耳と背筋に走る悪寒で感じながら、隊長は思い出していた。
――夜にカラーの集落に攻め入ってはいけない。
何故なら、そこには王がいるから。
多くの魔法を使い、夜においては最強とも噂されるカラーの王。
その名は、
「夜の王――ケッセルリンク」
隊長はその名を最後に呟き、意識を飛ばした。

二人の使徒

大陸東部。

魔軍の本拠地である魔王城からほど近い場所になだらかな丘がある。

温暖な気候で豊かな大地であるこの一帯を、気持ちの良い陽光が照らしながら爽やかな風が吹き抜け草を揺らす。多くの魔物が生息する場所とは思えない穏やかな風景だった。

そんな中、林を抜けた先にある一角。高台となった丘の上の広場では、この場には不自然な、激しい音が響いていた。

鳥類の鳴き声とは別に鳴る音は金属音や、爆発音。それなりの頻度で雷鳴まで聞こえてくる始末であった。

そして、この音が戦闘音だと知っている者がいた。金髪灼眼のその男は周囲の生物とはひときわ抜きん出た存在感を放ちながら、その戦闘を実際に眺めていた。

男の視線の先、金色の髪を二つに束ねた青い改造軍服を着た少女と、長い黒髪と長耳、赤いクリスタルを額に持つレオタード風のボディスーツを着た女性がその身を振り回し、戦闘音を鳴らしていた。

少女の方は押してはいるものの苦戦しているようで、それが表情や態度にも表れており、その証拠に息を乱していた。

しかし、対する女性の方に息が乱れた様子はなく、まだまだ余裕があるようであり、必死に攻撃してくる少女の剣撃や銃撃を躱し、時には捌いている。

そして遂に、疲労がピークに達したのか少女の足がふらついた。その隙を逃さず女性が攻撃に移るため懐に飛び込む。

そのタイミングで男の声がその場に響いた。

「――そこまで！」

その声は終了の合図。故に攻撃を加えようとしていた女性はその動きをピタリと止め、その手に持った剣を収めると少し離れて息を吐いた。

そして少女の方は来る攻撃に備えていたが、しかし受けることも躱

すことも出来ないので覚悟を決めていたのだが、その声に助けられる形となった。そのまま地面に座り込みそうになるも、足に力を入れて何とか踏みとどまっている。
男は余裕のある女性と、余裕がなく足をぶるぶると震えさせている少女。対照的な二人に対し、続けてこう言った。
「ハンティの勝ちだな。……二人共しばらく休憩していいぞ」
「ん、了解」
男の言葉にハンティと呼ばれた女性が軽く頷き、水分補給用の水筒を取るためにその場から一瞬で移動する。そして水筒を二つ取ったハンティは、今度は歩いて少女の近くまで移動すると、
「――ほら、キャロル」
未だその場から動かない少女に向かって水筒を差し出した。
すると、
「……また――」
差し出された水筒に手を付けず、キャロルと呼ばれた少女は小さな声で一度呟き。
そのまま、その憤りを空に向かってぶつけた。
「――また負けてしまいましたわ――っ!!」
叫んだ。
男が半目になり、ハンティが苦笑いを浮かべる。
大声で叫び終わったキャロルが、今度は息を整えると男に向かって、
「レオンハルト様！　なぜわたくしは勝てませんの!?」
そんな質問をぶつける。
それをぶつけられた魔人、レオンハルトは自らの使徒の言葉にこう返答した。
「……弱いから、だな……」
「――はうっ！」
主の無慈悲な返答に、キャロルが衝撃を受けたようにふらつき、倒れそうになる――も、また踏みとどまる。
そんな主と先輩のやり取りを見て、もう一体の使徒であるハンティ

は呆れたように
「……ど直球すぎ」
自らの主に容赦ないツッコミを入れた。

魔人レオンハルトは自らの使徒、ハンティの言葉を受けて微妙な顔になった。
そして続けて視線を浴びせ続けて言外に訴えかけてくる。もっと別の事を言え、と。
ハンティの問いの視線を受け、レオンハルトはやや考え、そして答えを出した。要は事実を正確に言えばいいのだと。
故に未だ足をぷるぷると震えさせるキャロルに向かって、
「そうだな。それは適切じゃないな……もっと別の理由があった」
「！　それは何ですのっ!?」
ああ、それは、と。
「――お前の方がハンティより弱いからだ」
「はうあっ！」
キャロルの足から力が抜け、膝を突く。ハンティが
「言い方変えろって意味じゃないから!?　というか変わってないし!!」
今度は物理的にツッコミを受けた。

「……すまん、間違えた。ハンティが強いから、だな。キャロルは弱くない」
「最初からそう――って、あたしが言ったら何か嫌味みたいだね……」
ハンティはそう言って少しバツが悪そうに頬を掻く。レオンハルトがそれに対して補足するように、
「でも事実だ。だから、キャロル。あんま落ち込むなよ」
使徒に対しての慰めの言葉を送った。
「むぅ……落ち込んではいませんが……普通に悔しいですわ……！」

レオンハルトの声に反応したキャロルが言葉通りとても悔しそうな表情になる。草の上に腰を落ち着け、ハンティから渡された水筒で喉を潤す。中身は近くの山で汲んできた澄みきった水であり、レオンハルトが気に入り、ハンティが汲んできたものだ。

それを飲み終わり一息つくキャロルだが、それでもその悔しさは収まらないようであり、拳を握りしめる。

「七星に勝てないのも悔しいですがっ!!　手加減したハンティさんに勝てないのもムカつきますわ！」

そう言って、キャロルはぐぬぬ、と歯噛みする。よっぽど悔しいようだ。特にこの場にいないカミーラの使徒、七星を持ち出す辺りにそれが現れている。キャロルにとっての目の敵というか、ライバルであるからだ。

それを聞いたレオンハルトが、またか、といつもの如く始まったキャロルの負けず嫌いに言葉を送る。

「因みに、誰が一番ムカつく？」

「七星!!　と、わたくし自身！　――ですが今はハンティさんもムカつきますわ！　何でそんなに強いんですの!?」

「ええっ!?　結局あたしも!?」

「……というか、一番を聞いたんだがな……結局全員なのか」

それとも自分も含めて全員に同じくらい憤慨しているのだろうか、とレオンハルトが適当な事を考える。

そんな中、ハンティはキャロルに不満顔を向けられ、ええ……、と困惑する。本気で怒りを向けられてるわけではない、いつもの負けず嫌いと向上心から出た疑問。いわゆる反省会のようなものだ。大体怒ってる時は、レオンハルトの事で誰かに怒るか、不甲斐ない自分に対してか、もしくは七星にだけである。

しかし言わずにはいられないのだろう、キャロルが頬を膨らませながらハンティを見上げ、

「……いつまで経っても瞬間移動禁止で防御重視のハンデ付きのハンティに勝てないなんて、先輩として不甲斐ないですわ……！　そこのところ、後輩としてはどう思いますのっ!?」

「い、いや……それはまぁ……」
ハンティが言い辛いのか、少し言葉の間を空ける。そしてレオンハルトをちらりと横目で見る。
それはそのルールを提案したのが、レオンハルトだからだ。彼はいつからか始まったこの使徒同士の模擬戦に対し、ハンティにそれらの制限を付けた。
ハンティの代名詞とも言える魔法、瞬間移動。これの禁止と、積極的な攻撃を禁止させる防御重視の二つである。
それは二人にはっきりとした実力差があるため、勝負を成立させる為に設けられたものだが、キャロルはこれに不満ではあるが、ハンティの方が強いのは理解していた為、渋々ではあったが納得していた。
だがいつまでも勝てないのは確かにイライラするだろう。ただでさえキャロルは向上心が強く、負けず嫌いなのだ。魔物界一の完璧使徒、といつも名乗っているのは伊達ではない。
それを知っているからか、ハンティはレオンハルトからキャロルに視線を戻すと、その質問に返答するため口を開いた。
「……と言っても結構やり辛くなってるけどね。銃は相変わらず面倒だし、剣の方も良くなってるし……正直、弱くはないと思うんだけど」
「でも、勝てないのは……むぅ～……」
「うーん……」
分かっているがむくれてしまうキャロルにハンティは悩む。そして自分が発した言葉を振り返り、自分が強い、と自ら言っているようなものだということを自覚する。
だが、同時にハンティは思う。そう言わざるを得ないんだよね、と。
実際のところ、キャロルは弱くない。人間相手には当然だが圧勝出来るし、魔物将軍といった魔物のエリート相手にも勝つことは出来る。使徒というのは伊達ではないのだ。
しかし使徒としては中の上といったところだろう。直接対決してるのはハンティや七星くらいだが、それらには負けてしまう。
理由は、細かい部分を言えばきりがないが、大きな理由を言うと、個

人の資質や種族だろうとしか言えない。当然だが、個人の資質はそれぞれ違うし、同じ使徒でも元の種族は違うのだ。
七星は元ネフライトドラゴンの使徒。ハンティは元カラー、ということになってるドラゴンカラーの使徒であり、絶対というわけでもないが、普通の人間が使徒になるよりは高い能力、特にドラゴン種特有の高い身体能力や、カラーの特徴である高い魔力を持ち、それらを使徒化によって強化されている。
それに対してキャロルは元コマンダー。上位種であるバトルノートにこそ及ばないものの、高い知能と作戦指揮能力を持つ女の子モンスターであり、戦闘はどちらかというと不得手だ。
それにしてはキャロルは頑張っている方なのだが、
「……あたしも一緒に強くなっちゃってるしねぇ……」
とそんな事を息を漏らしながら言う。それに反応したのはレオンハルトだ。口元に小さく吊り上げて笑みの形を作ると、ハンティに視線を向け、
「ハンティも言うようになったな。それなら俺も期待していいのか？」
「うっ」
嫌そうな顔になるハンティ。藪蛇だったか、と余計なことを言った自分の口に少し後悔する。そんな様子を見てか、レオンハルトが戦意を軽く発しながら、
「それに、随分と余裕そうだ。……もう一回やるか？」
「……」
ハンティは半目でレオンハルトを見る。さっきやったじゃん、という言葉は飲み込み、一度無言になる。
だが、
「……いいよ、やろう」
「お？」
了承したこちらに向かってレオンハルトが意外そうな顔を向ける。そのままどこか関心するような目つきで、
「……まさか、了承するとはな。マジでやる気か？」

「……いや、あんたが言ったんでしょうが。あたしは別にやりたくないんだけど？」
ハンティがチクリとそう指摘する。まるで自分が戦いを望んでいるようで少し遺憾だった。
しかしレオンハルトはその言葉を受けても、依然としてハンティを興味深そうな視線を寄越していた。
そしてその表情がふっと、和らぐ。同時に戦意もかき消え、
「悪いな、冗談だったんだが……ま、今日はやめとくか」
「うわっ、珍し……レオンハルトが戦いを拒否するなんて……」
ハンティの若干引き気味の言葉に、そうかもな、とレオンハルトが同意する。しかし別に言いたいことはあるようで、そのまま続けて、
「……お前も、随分と慣れたよな……」
「は？」
しみじみとそんなことを言うレオンハルトに、怪訝そうな表情になるハンティ。その言葉の意味を考える、その前にレオンハルトからの追加の言葉が来た。
「いや、お前も使徒としての生活に慣れてきたか、と思ってな」
「……あー」
言われた言葉の意味を今度は理解する。
だが、それ故に少し微妙そうに顔をしかめるハンティだったが、自分でも思うところがあるのだろう。少し間を置いて出た返答は、
「まぁ……もう１２０年も経ってるしね。嫌でも慣れてきたよ」
肩を竦めて、思い出すように言った。

ハンティは思い出す。実際色々とあったからね、と。
１２０年前、ハンティ・カラーは、魔人レオンハルトとの戦いの末、彼の使徒になった。
だが意外にも彼は、使徒に対して特に束縛することもなく、ハンティに自由を言い渡した。自分が使徒であることを自覚し、行動するなら何をやっても構わない。ただし、一ヶ月に一回、戦うために顔を

見せろ、と。
それを渋々了承――するしかないのだが了承して、ハンティは使徒生活をスタートさせた。
人間の町で暮らす傍ら、一ヶ月に一度は魔王城に向かい、同じレオンハルトの使徒であるキャロルや、色々と複雑な縁がある魔人カミーラ。そして当初の想像していた印象と違っていた魔王スラル。他にも様々な魔軍の面々と顔を合わせたものだが、中でもキツかったのは、
……模擬戦は神経使うんだよね……。
約束のレオンハルトとの一月に一度ある模擬戦。
毎回会う度にこれを行い、ボコボコに叩きのめされるのは中々にくるものがある。いつの間にか、それを見ていたキャロルが参加するようになり、キャロルとも戦うようになったのだが。
これをほぼ休まずに続けた結果、ハンティは少しずつだが、以前よりも確実に強くなってはいた。
というより、強くならざるを得ないと言うべきか。レオンハルトの方がたまにとんでもない技を思いついてそれをこちらに向かって遠慮なく試してくるのだが、これがまた辛い。
さすがに模擬戦であるためか、瀕死になるほどの重症を負わせたりはしてこないが、それなりの痛手は負わせてくるし、何より体力的にも精神的にも疲れるのだ。
そして鬱憤が溜まっていくので、それを模擬戦でレオンハルトにぶつける為、それなりに良い連携を思いついては彼にお見舞いしてやる。これで多少は鬱憤は晴れるのだが――それはそれで向こうも戦闘狂発動して滅茶苦茶モードに入るので結局はボコボコにされてしまうのでどうしようもない。
良いこともないわけでもないのだが、それもハンティとしてはちょっとした悩みのタネである。なにせ――
……段々慣れてきちゃってるのが……。
そのことにハンティは内心、腑に落ちないような、微妙な感情を抱く。

というのも彼女自身、この模擬戦に慣れた結果。レオンハルトに対し、目にもの見せてやろうと多少意地になっている面があるからだ。
そのため、先程もレオンハルトの問いに了承してしまい、そのことを意外に思われただろうが、ハンティとしても改めて考えると微妙な気分になる。自分も彼のように戦闘狂になりかけていないだろうか、と。
……いや、こうやって考えれるんだから大丈夫かな……。
ハンティは頭を振って、それを否定する。使徒化の影響で多少好戦的になるのはしょうがないかもしれないが、自分はレオンハルトのような戦闘狂ではない。相手に傷を付けられてテンション上げるような変態ではないのだ。
「慣れたのはいいけど……何か複雑だね」
「……そう言うな」
ハンティが手に持っていた水筒を適当に弄びながら言うと、レオンハルトがやんわりと嗜めてきた。そして今度は彼の方が多少気落ちしたように目頭を押さえ、
「お前が慣れてきたおかげで俺としても助かってるからな。……特に仕事を手伝ってくれるのが本当に助かる」
「ああ、うん。まぁ、あれはね……」
ハンティは思い返して、それに頷く。
それを地面に座って聞いていたキャロルは、とっくに立ち直ったのか、普段の様子で思い出したようにハンティを見上げる。
「そういえば、いつからかハンティさんも手伝いに来てましたわね。それに伴って来る頻度も増えましたの」
「……いや、何か仕事大変そうだったし、それを手伝いに来てるだけなんだけどね」
月一の約束以上に来てるのはそういった理由があるのだ、とハンティが言葉に意味を込めて話す。そしてそれを補足するようにレオンハルトも、
「俺は大体いつも仕事が溜まってるからな……それでも楽になった方だが」

とそう言ったので、ハンティは表には出さないが頷く。実際ハンティはその場面を目撃したのだ。
いつだったか、ハンティが月一の約束通り、魔王城のレオンハルトの私室を訪れると、そこには大量の書類に囲まれて、忙殺されている彼の姿があった。
必死にそれをこなしていくレオンハルトの姿を見て、何となく手伝い始めたのだ。一応、使徒である自分が主の仕事をただ見ているだけというのもアレだし、という理由で。
魔軍の仕事を手伝うことには抵抗があったのも事実だが、心境の変化もあり、一応書類くらいなら、と受け入れた。その心境についてはハンティの悩みのタネではあるものの、
……ま、主を慮るくらいならいいかな。
とそんな腹づもりで納得するハンティ。そのついでに軽く提案してみるのは、
「……たまには休みでも取ったら？」
とそんな言葉。言葉の裏にあるのは、今のような小さな休みだけでなく、連休を取れば、という意味だ。
だが、ハンティからの珍しい気遣いにレオンハルトは頭を振り、
「気持ちは有り難いが無理だな。俺がいないと仕事が回らない――ことはないが、滞ってしまう」
それに、と。
「この後もスラルに呼ばれてて。しかも――仕事の事でだ」
と真面目な顔になるレオンハルト。それを聞いたハンティ、そしてキャロルが首を傾げ、
「……仕事？　あの子が？　……やっぱ何だかんだ言っても一応、魔王様なんだね」
「スラル様がレオンハルト様を呼ぶのはいつもの事ですが……仕事で呼ぶのは珍しいですわね……」
「……お前ら失礼だぞ」
魔王だというのに仕事をしない穀潰し扱いをされていることに、レオンハルトがげんなりとする。しかしその注意には勢いがなく妙に

小声だ。彼も同様のことを思っているのだろうが自身の立場もあり、何とも言えないのだろう。魔人は大変だね、とハンティが内心同情する。そして同時に納得の色を浮かべて、
「ああ……だから模擬戦断ったのね」
「……確かに、それもあるが。……なければ喜んで受けてたみたいに言うな。一応、俺はお前を気遣ってだな……」
「いや、でも予定がなければ何だかんだ受けてたでしょ？」
「……実際、スラルが俺に直接仕事を頼むのは――」
「あ、流した」
「レオンハルト様はスルースキルも一流ですわね」
都合の悪いことを流した主を、ハンティが半目で見る。そしてキャロルがズレた褒め方をしていた。
それらを全部無視して、レオンハルトは魔王城の方向に身体を向けて、こちらに背を向けた。行くぞ、という合図だが、同時にバツが悪いので逃げようとしているようにも見える。
そんな中、レオンハルトが先程の言葉から繋げて、
「……仕事を頼むのは珍しいからな。一体何を頼んでくるのか……」
「……」
独り言のように呟いて、帰路についた。
その道中、ハンティはしばらくの間、レオンハルトの背中を半目で見続けていたが、彼が答えることは無かった。

休暇

魔王城で最も近寄りがたい場所である魔王スラルの私室。
そこには現在、四つの影があった。
一つは、ソファーに腰掛けて足を組み、前方を真っ直ぐと見据えたこの城の主である少女――魔王スラル。
残りは、模擬戦を終えてやってきた魔人レオンハルトとその使徒二人。キャロルとハンティ。レオンハルトだけがスラルの向かいのソファーに座り、使徒二人はその後ろに控える形でそこにいた。
普段であるなら、使徒らも椅子に腰掛け、お茶を楽しんだりするのだが、そうしないのはこれが一応職務上のやり取りであるからだ。
つまり、スラルは魔王として。レオンハルトは魔人四天王、そして魔軍参謀として。その立場で交わされるやり取りなのだ。
そうであっても雰囲気は、スラルの私室であるため緩いものだが、形式上はそうしろ、とレオンハルトに言われてのことであるため、使徒達はそれに従った。
故に、今告げられた命令にも二人は口を挟まない。少なくとも求められたり、そういった空気にならない限りは。
部屋の中に静寂が広がる中、最初に言葉を発したのはレオンハルトだ。彼はつい今しがた言われたことで、表情を険しいものに変えている。その表情には、未だその言葉を飲み込めずにいるようで、どうにも信じきれていない様子だ。その確認も兼ねてか、レオンハルトが、
「……悪い、もう一度言ってくれるか？」
再度、聞き返す。その言葉を受けたスラルは一息。
少し呆れるような色を含みつつも、もう一度魔王としての命令を言い渡した。
その内容は、
「……魔人レオンハルト。貴方に――」
「……」
「――休暇を言い渡します」
「……ッッッ!?」

レオンハルトがその内容に絶句する。
「……」
「……レオンハルト様の顔が、あまり見たことない表情になってますわ……」
「どれどれ――うわっ、ほんとだ。よっぽど驚いて……というか、予想してなかったんだろうね……」
使徒二人がレオンハルトを横からちらりと見るも、その表情は驚きのあまり唖然としている様子であり、口を開いたまま呆けたように固まっていた。
ハンティの言う通り、休暇、というのはレオンハルトの頭に全く無かったようで、しばらくそのままの状態であったが、
「……まさか――」
やがて、ふと何かに気づいたかのように表情を変化させると、顔を青ざめさせて不安そうにスラルを見る。そして震える声で、
「――俺は……クビ、なのか……？」
「……え？」
予想外の言葉に、今度はスラルの方が呆気にとられる番だった。
レオンハルトはその場から立ち上がると急に頭を抱えて、
「休暇を与えるっていうのは、とどのつまり遠回しな解雇通告だろう……!?　くっ、俺の一体何が悪かったんだ……？」
そう言って、更にはぶつぶつと、アレが悪かったのか、それともアレか？　と唐突に自分の行動を振り返り始めた。それを見たスラルがややあって我に返ると、若干狼狽しながら、
「ち、違うからっ！　クビになんてしないから、ね？　ちょっと落ち着いて……！」
「そ……そうか？　……それなら良かった。俺の早とちりか……」
スラルの必死の否定に、レオンハルトがほっと胸を撫で下ろした。再びソファーに腰を下ろす。
「何でそうなるんだか……」
「レオンハルト様がクビになるなんてありえませんわ！」
「……いや、悪い……あまりにも休暇って言葉が予想外過ぎてな……」

二人の使徒がレオンハルトに言葉を浴びせる。あまりの豹変ぶりに驚いたためだが、レオンハルトはその理由が、休暇という言葉にある、と言い訳した。
それを聞いて、うっ、と声を出すスラル。そのまま窺うようにレオンハルトを見上げて、
「……えっと……そんなに休みが意外だったの……？」
レオンハルトは迷いなく頷く。
「ああ。なにせ俺が魔軍参謀になって３００年以上経つが、まとまった休みは一度も取ったことがないし、月に一日くらい休むことはあるが、それも何か理由がある時くらいで――」
言葉がそこで止まる。そして再び何かに気づいたように口元に手をやると、
「……冷静に考えると俺、働きすぎじゃないか……？　いったいどんだけ働いたんだ……？」
「あ、計算しましょうか？」
「……頼む」
お任せ下さい、とキャロルがどこからかそろばんを取り出すと、ひーふーみー、と声を上げながら数え始めた。そろばんを弾く音が部屋の中に響く。
「えー、月に１度がお休みと仮定するなら、１年の内、３５３日働いてることになりますわ。これが３２０年。これを掛けると、つまり――」
そろばんが結果を弾き出す。答えは、
「１１万２９６０日働いてることになりますわ！」
「……」
キャロルの明るい声とは対照的に、他の三人は微妙な表情を浮かべて黙り込んでしまう。しかし、キャロルはそのまま続けて、
「城で働いてる魔物将軍ですら戦争時でなければ普段は週休二日ですし、わたくしですら週に一日はお休みを貰ってますの！」
キャロルが嬉しそうに言う。というのも、これはレオンハルトが魔軍参謀になってから決めたことだからだ。それまでの魔軍では、休

み、という概念が無かったからだ。
上位者の命令があれば動くが、普段は好き勝手に過ごしてる魔人や魔物兵やなどはともかく、魔物隊長や魔物将軍などは休みが存在せず軍が動いていれば毎日のように働いていた。当時のレオンハルトは、それがあまりにも酷い待遇だと感じたため、最低でも週に一日、出来れば週に二日は休むように命令した。
ちなみに一番酷いのは、使徒だ。使徒は魔人の下僕であるため、主のお世話の為に毎日のように働いている。そして、大半の使徒は主である魔人に高い忠誠心を持っている。つまり、好きでやっているのでそれを苦には感じないのだ。
実際キャロルは、休日であってもレオンハルトの世話や手伝いをしてくるし、他の魔人の使徒も同様。好きなことをしていい、と命令すれば主の為になることをし出すのだ。なので使徒に関しては殆ど諦められていた。
そんな事情はお構いなしにキャロルは誇らしげに、
「レオンハルト様は魔物界一の働き者ということになりますわ！……まぁ、わたくしとしてはもっとスラル様やカミーラ様のようにぐーたらしてもよろしいと思いますが……」
「うっ！」
悪気はないのだろう、キャロルの何気ない言葉にスラルが傷ついた様に胸を抑える。名前を挙げられてはいないもののハンティも顔を顰めさせ、
「……何だか月に一度しか来てないのが恥ずかしくなってきた。因みにだけど、えー……カミーラ、様は一体どんな――」
未だに少し苦手なカミーラの名前をぎこちなく挙げたハンティ。その意を汲み取ったキャロルが再び悪気のない様子で、返答した。
「カミーラ様は基本的に毎日気ままに過ごしてますわ。一日中部屋でごろごろしたり、綺麗なものを眺めたり、意味もなく城の中を徘徊したりしてるそうですの。それに食事や仕事といった大体の行動を七星に任せているそうなので、カミーラ様が盛んに動くのは戦いの時くらいらしいですわ。動いてる時よりも動いてない時間の方が圧倒的

に多いですのっ」
　笑顔で言う。
「レオンハルト様が魔物界一の働き者なら、カミーラ様は魔物界一の怠け者ですわね！　……あれ？　これって何だか悪口になってる気が――」
「確実に悪口だからっ!!」
　ハンティがツッコミを入れた。

　魔人四天王、カミーラの私室では、唐突にカミーラが胸を抑えて苦しんだ。
「っ……」
「か、カミーラ様!?　いったいどうしたのですかっ!?」
「……なんでもない」
　カミーラは唐突にやってきた精神的苦痛に眉をひそめる。
　そして何を思ったのか、ややあって、
「……今日は、出かけるか」
「え……あ、はい。お供致します」
「それも遠くに、だ」
「……良いのではないでしょうか？」
　主の何故か問いかけるような強調の言葉に、七星は疑問符を浮かべた。

「……うーん、でも、わたくし。カミーラ様のああいった振る舞いは、女王か何かの様で余裕があってとても尊敬してますわ。なので悪口を言ったわけではありませんのよ？」
　キャロルが自分の内心を言い表し、釈明する。カミーラに聞かれてなくて良かった、と皆が安堵した。
「……とにかく、レオンハルトは働きすぎだし、休みを取ること。……まぁ、私のせいなんだけどね……」

「……いや、それはいいんだが……あんま引きずるなよ……？」
「うぅ……私は別にごろごろしてる訳じゃないし……研究してるだけだし……確かに外には出ないし、たまには怠けてお菓子食べて寝てる時もあるけど、決してそれだけじゃ……」
キャロルの言葉を引きずっているのか、スラルがうつむきがちに、自虐を織り交ぜてそう言う。正直、魔王なのだから好きにすればいいのでは、とレオンハルトが思う。
……しかしまぁ、どうするかな。
休みを取る。それも一日だけという話ではなく、何日も。そのことを一度、真面目に考えてみる。だが頭に思い浮かんでくるのは、不安な事ばかり。
「……本当に俺が休んでも大丈夫なのか……？」
それをそのまま口にする。するとスラルが両手を握りしめ、意を決したように、
「――大丈夫！　レオンハルトがいない間は私も働くからっ！」
「わたくしも働きますわ！　レオンハルト様の役に立ってみせますの！」
続けてキャロルが威勢良く声を上げた。
更にハンティがやれやれ、と言わんばかりに肩を竦めて、
「……ま、しょうがないか。あたしも手伝うよ」
「……」
ハンティまでもが手伝いを名乗り出たことにレオンハルトは内心驚く。そして視線で、いいのか、と問うも、
「普段任せっきりにしてるしね……こういう時くらいはやるよ」
「……そうか」
レオンハルトはその言葉を聞いて軽く息を吐く。
未だ不安は無くならないものの、ここまで言われれば嫌でもその気になってくる。その気持ちも嬉しいものであるのだし、彼女たちの為にも休みを取るのはやぶさかではない。
なら、とレオンハルトは結論を出した。
「……そこまで言うなら甘えさせてもらうか」

と休むことを受け入れた。
「うん、たっぷりと休んでね。私も頑張るからっ」
「魔軍の運営はわたくしに任せて、ゆっくりと羽根を伸ばして下さい！　レオンハルト様！」
「……ということらしいからね。あたしもそれなりに頑張るよ」
「……ああ、ありがとう」
三人の言葉を受け、レオンハルトは感謝する。
実際、少しくらいなら自分が抜けても大丈夫だろう、と思いもするが、それよりも彼女たちの気持ちを無碍にはしたくないな、と思ったことが休むことを決めた大きな理由だ。
それに、一日以上の休みは本当に久しぶりなので、休むともなればやりたいこともなくはない。
レオンハルトが休みのことを考え始めていると、ハンティが軽く、
「それで、休みの間は何するつもり？」
休みの予定について聞いてくる。その流れでスラルやキャロルも、
「あっ、それもそうよね。やることないなら折角だし本でも貸してあげようか？」
「レオンハルト様！　お部屋でゆっくりとするならお世話はわたくしにお任せ下さい！　お仕事中だろうと直ぐに飛んでいきますわ！」
「ん……いや、そうだな。今まさにそのことについて考えてたんだが――」
レオンハルトが少し考え込む。
確かに、部屋で一日中、本でも読みながらゆっくりとカミーラのようにだらけるのもいいだろう、と。普段は動きっぱなしだし、リラックスするならその方がいいのかもしれない。
だが、と。レオンハルトは休日の予定について一つ、別の答えを出す。それは、
「……ちょっと一人で、旅にでも出てくるか」
「旅？」
「えっ、城から離れるの？」
「……あっ、そういえば言ってましたわね！」

旅、という言葉に皆が首を傾げる。だが、キャロルだけがすぐに得心したように手を叩き、スラルやハンティが彼女を見やる。
キャロルは思い出すように続けて、
「以前に、一人で観光でもしながら色んな場所を見てみたい、と。独り言のように呟いていたのを憶えてますわ！」
レオンハルトが目を丸くする。そういえば言ったことがあったか、と思い返してみるも上手く思い出せない。ここ１２０年くらいの記憶なんだろうが、相変わらず自分に関することはよく憶えているなぁ、とレオンハルトが感心する。
「ま、そういうことだな。要は武者修行や観光がてら、旅行にでも行こうかな、と」
「あれ？　でも、レオンハルトって、魔軍の遠征でよく色んな場所に行ってるんじゃ……？」
ハンティが純粋な疑問を口にしてくるが、レオンハルトはその質問に、いや、と即答した。
「それは仕事で行ってるのであって、私用で行くのとはまた違う。部下の目があるとそれを気にして、羽も伸ばせないしな。その上――」
レオンハルトが言葉を一旦区切って、
「――魔軍の遠征だと町や道中なんかは割と滅茶苦茶に汚れるからな。観光地も見れたもんじゃない」
「あー……なるほどね」
ハンティが嫌そうな顔で納得する。どうやらわかってくれた様だ。
「……そっか。なら、楽しんできてね？」
少し残念そうな、笑顔を浮かべてスラルがそう言ってくれる。それが多少気になるが、
「あ、お土産はちゃんと持って帰ってきて。楽しみにしてるから忘れたら怒るからね？」
「……言われなくてもちゃんといつも持って帰ってきてるだろうが。忘れねぇよ」
その言葉で微妙な顔になる。魔軍の遠征や迷宮探索に行った時に大体お土産を持っていくのだが、スラルはそれを地味に楽しみにして

る節があった。
　それが分かってる為、元々何かをもって帰って来ようかと考えていたのだが、正面から言われると期待が重い気がするから不思議だ。
　だが、大体何をあげてもスラルは喜ぶのでそこまで心配する必要もないが。
　と、そんなことを考えているとキャロルから、
「レオンハルト様、行きたい場所は決まってますの？　決まっていないのでしたら、不詳、この魔物界一の観光案内人キャロルがおすすめの場所を幾つか選出致しますが……」
「ああ、それなんだが……」
　確かに、キャロルはその容姿が人間に近いので遠征の時も、たまに人間の町へ行って偵察したり、お土産を買ってきたりするのがお決まりとなっている。なので、今回に限ってはその名乗りは間違ってないかもしれない。今のところ、魔軍の中で人間の町に一番詳しいのはキャロルなのだろうし。
　それはそれで良さそうだが、レオンハルトは、
「最初に行きたい場所は決まっててな」
「あっ、そうですの……」
　キャロルが残念そうに肩を落とす。なので付け加えて、
「……一応、後でお前のおすすめの場所も教えてくれ。そっちも寄るかもしれないしな」
「！　はい！　畏まりましたわ！」
　キャロルが即座に復活する。こういうわかりやすいところが彼女の良いところだ。
　レオンハルトは、いつの間にか近くに寄ってきていたキャロルを気まぐれに撫でてやる。またしてもわかりやすく喜びに震える中、スラルが質問を引き継ぐように、
「それで、結局どこに行くの？」
　と、聞いてきた。
「それは――」
　レオンハルトはその場所を三人に教えてやった。

その場所とは――

「世界最高峰の山――翔竜山だ」

レオンハルトの休暇

スラルや使徒達に行き先を伝えた翌日。
レオンハルトは休暇を迎え、魔王城から旅立つところであった。
城の前には見送りに来てくれた――
「いってらっしゃい。ちゃんとお土産買ってきてよね？」
「お土産はメシでよろしく」
「レオンハルト様！　後はわたくしにお任せ下さい！　立派に役目を勤め上げて見せますわ！」
「……」
魔王スラルに魔人ガルティア。そしてキャロルとハンティの使徒二人。
いつもの面子が集まってきていた。
レオンハルトはその光景にやや呆れながら、
「ガキじゃねぇんだから雁首揃えて見送りとか……」
「む、別にいいでしょ。しばらく離れるんだし……」
「遠征の時とかよく離れてるだろうが」
「そうだけど……」
荷袋を肩に担ぎながら言うレオンハルトの前、素っ気ない態度にスラルが少し不満顔になる。
そして、その横にいた褐色の男、ガルティアが相変わらずの様子で肉を口に掻っ込みながら、器用に喋り始めた。
「ま、たまにはいいんじゃねぇか？　記念すべきお前の初休暇だろ。……んっ、これ美味いなぁ。お前も朝飯代わりの肉、いるか？」
「つってもこの面子だと目立つだろうが。……ほら、くれよ」
ガルティアから肉を勧められ、そういえば朝飯を食べてないことを思い出したレオンハルトは、珍しくそれを所望する。
「おお、マジで食うのか。そんじゃあ――」
ガルティアが軽く驚き、肉を持つ手を掲げると、
「――あーげた」
「……あ？」

「よし、約束通り上げたからな……んぐんぐ、この肉美味くてな。油が少なくて朝方でも食べやすい。――ん？　レオンハルト。その手はどうしたんだ？」
「……ちょっと出かける前にお前のことボコるわ……！」
「わー!?　ストップストップ!!　こんなとこで暴れちゃ駄目！」
レオンハルトが半ば剣に手を掛けていたところをスラルが慌てて止める。
それを見たガルティアがからからと笑いながら、
「ははっ、悪い悪い。どうにもまた面倒な事考えてるみたいだったからな。緊張をほぐしてやろうかと」
「ほらっ、ガルティアもこう言ってるんだから。抑えて抑えて」
「ちっ……」
なんなんだよ、と舌打ちをしながら興奮を抑える。スラルに言われてはそうせざるを得ないし、その理由にも自覚があった為だ。
そして自分の右側、キャロルもその理由を聞いていたのだろう、首を傾げながらこちらを見上げて、
「レオンハルト様？　どうかしましたか？」
「ん……いや、まぁ、な……」
曖昧な質問に、しかしレオンハルトは微妙な表情でそれを肯定した。
何と言っていいものか、と額を抑えながら息を吐くと、
「……行く直前になってまた不安になってきてな……。俺がいない間に問題が起こったりしたらと思うと……」
「……もう、またその心配？」
スラルが半目になる。呆れているような生暖かいような、何というか駄目な子を見るような目で言う。いや、自分でもいい加減にしろ、と思うレオンハルトだが、どうにも考えてしまうのだ。
自分がいない間の対応や引き継ぎなどもちゃんと昨日の内にキャロルや魔物将軍に話しておいたし、大きな戦いがあるわけでもないのだから問題はない。そう、何も心配はいらないと頭では理解しているのだが……。

……俺、大丈夫か？　働きすぎて一種の病気みたいになってないか、これ。
と今度は自分に対しても妙な心配をしてしまう。やはり今の内に休暇を取って良かったのかもしれない。働きすぎると休んだ際に不安が募ってしまう。幸いにもそれを自覚できるのだから軽度のそれだろうが。
……切り替えないとな。
折角の休暇なのだ。やりたいこともあるのだから気分をもっと明るいものにしようとレオンハルトは改善に努める。
「……でもまぁ、言っててもしょうがないしな。切り替える」
「そうして。……はぁ、何だか私の方が心配になってきたなぁ……」
「あー……うん、悪いな」
不安そうに嘆息するスラルに軽く謝る。あまり考えすぎるのもよくないな、と嫌でも思わされてしまうレオンハルト。
……そろそろ行くか。
あまり長いこと立ち話をするのもよくない。しかもこんな場所では余計に目立つわけだし。
故にレオンハルトは軽く息を入れると、皆に向かって、
「――それじゃ、行ってくる」
「いってらっしゃいませ！　レオンハルト様!!」
「おー、適当に楽しんでこい」
「……ん、あー……いってらっしゃい」
キャロルは元気よく、ガルティアは軽い調子で、そしてあまり話に入ってこず、何とも取り繕った表情を浮かべているハンティが挨拶を返すと、
「……レオンハルトっ」
「……？」
スラルが一歩前に出てくる。改まって名前を呼び、さらには微妙にそわそわとした様子にレオンハルトが疑問符を頭に浮かべる。普通に別れの挨拶をするだけなのだが、何を言うのだろうかと。
「えっ、と、その……っ」

言葉が出ないのか、何度か声を出そうとして取りやめる。というのを繰り返す。何を言うべきか迷っているのだろうか。しかし、最終的には少し遠慮気味に微笑を浮かべると、
「き……気をつけて楽しんできてね？」
「……」
と、時間を掛けた挙げ句、スラルはそう口にした。
そしてその言葉とスラルが悩んだ意味を、ふっと理解し、レオンハルトは肩を竦める。
……しょうがないやつだな……。
自分が言えたものではないが、その気づかいの仕方は心にしこりが残るだろう。
無論、気持ちはわかる。故にレオンハルトは口を開き、
「……スラル」
望んでいるであろう言葉を口にした。
「……出来るだけ早く帰ってくる」
「――っ！」
スラルが目を見開かせて驚く。
そしてどうやら当たっていたようであり、呆気にとられて固まっているスラル。だが、
「……ん」
レオンハルトがじっと視線を合わせながら笑みを浮かべているのを感じてその言葉を飲み込むと、今度は先程とは違う、ちゃんとした笑顔でやりとりを交わす。
「――いってらっしゃい！　レオンハルト！」
「――ああ、行ってくる」
レオンハルトはスラルのその表情に、不安が完全に払拭されたことを確信し、彼女達に背を向ける。そして思うのは先程の言葉の意味だ。
……言いたくても言えなかったんだろうな……。
そう。彼女は自分に対し、早く帰ってきてね、と彼女はそう言いたかったに違いない。

だが今まで長いこと働いてきて休暇も満足に取れていない自分が、ようやく取れた自分の時間。それに水を差すようなことは出来なかったのだろう。
故に出た言葉が、気をつけて楽しんできてね、だ。
何ともまぁ、優しい彼女らしい言葉である。おかげで肩の荷が下りた気分だが。
レオンハルトは魔王城を背に、どんどんと足を進めて距離を離していく。もう自分の声は彼女たちに――彼女には聞こえないだろう。
故に、レオンハルトは言葉をそのまま宙に放った。
「――全く、たかが休暇だって言うのに、大袈裟なやつだな……」
その声色は、言葉に反して温かさを含んでおり、
「……早めに戻ってやるかな」
レオンハルトはスラルのことを思い、そうして普段よりも軽い足取り旅路へと向かっていく。
先程までの緊張や不安は、綺麗さっぱりと無くなっていた。

――レオンハルトの休暇、〇日目。とある家にて。

――前略、スラル様へ。
新緑が眩しい――些か眩しすぎる季節となりましたが、いかがお過ごしでしょうか？　因みに私は元気です。
さて、先日はいたらぬ私に休暇を与えて下さりありがとうございました。おかげさまで充実した余暇を堪能しております。
……えー、何だか面倒、そして余裕が無くなってきたのでこの話し方やめます。手紙の正式な書き方なんてうろ覚えだし、そもそも誰に言うでもないのですが。
……というわけで、レオンハルトだ。魔人四天王、魔軍参謀を拝命

している。
さて、あまりにも状況が意味不明過ぎて狂乱してしまったが、状況を整理しよう。
自分は今、休暇で魔王城を離れている。実に３２０年振りのまとまった自分だけの時間だ。そして、その休暇を利用して旅行に出かけたわけだが。
……いや、うん。実に良い休暇を過ごしていると思う。これに至った経緯は諸説あるだろうが、今の状況は少なくとも世界の半分の生き物が羨ましく思うのではなかろうか。
徐ろに辺りを見渡す。自分が今、寝泊まりしている場所は木造の一軒家だ。と言っても内装は質素で手狭。簡易的な台所や何とか使える程度のボロボロの机と椅子。生活感どころか人が住んでた痕跡すら無いような埃被った室内。その他にも生活に必要最低限のものしかない家。さらに言うなら立地はどこにあるのかもわからない一面の森の中。
正直掘っ立て小屋よりはマシ、といった程度の家である。
幸いなのはベッドだけはあることか。一人用の小さなベッドとシーツ、後は申し訳程度の毛布しかないが、これもないよりはマシである。
……今のところ、全くもって羨ましい部分はないし、良い休暇とも言えないが問題はそこではない。
自分は今、その一人用のベッドの上で枕側を背もたれにして座っている。部屋の中には塩気がないもののそこそこにいい香りがする――って、熱っ！
「――っ！」
レオンハルトが思わず咳き込む。
すると――
「――だ、大丈夫か？」
目の前からこちらを心配する声が聞こえてくる。ハスキーで、しかし聴きやすい、女の声だ。
それもその筈、視界の中にいるのは紛れもない女性。しかも飛び切

りの美女だ。
そしてその美女は顔をしかめさせたこちらを見て、
「……やはり、私の料理は口に合わなかっただろうか……？」
と落ち込み気味に発言する。その手元には小さな器に入った煮込み料理とスプーンがあった。
レオンハルトはそんな女性の言葉を否定するように、
「い、いや、そんなことない。少し熱くて戸惑っただけだ」
「……それなら良いのだが……ん……」
そう言って胸を撫で下ろす美女。そして何かを考えるように言葉を止めると、何を思ったか、
「……こ、こういう時は――」
「ん？」
彼女が手元に持った料理をスプーンで掬うと、それを自らの口元に持っていき、
「ふー、ふー……」
と息を吹きかけた。
熱い、と言ったのでおそらく料理を冷ましてくれているのだろう。
故に次に取る行動は先程と同じ、
「こ、これくらいでいいか……よし」
料理の入ったスプーンをこちらの口元にぎこちない様子で持っていき、
「あ、あ～ん……」
「……」
恥ずかしそうに顔を赤らめながら、そう声にだした。
やはり何度やろうと恥ずかしいものは恥ずかしいらしい。だが、それを受けるこちらは、
「……あーん」
こちらが恥ずかしがってもしょうがないので、普通にそれを口に含む。程々の暑さの料理が口の中で広がる。その料理を味わいながら、レオンハルトは、
「ん……どうだ……？」

それを受け渡す為に彼女が前に屈んだ際、その豊かに膨らんだ胸元を見てしまい、
……スラルやキャロルには無いもんなぁ。
とそんな失礼なことを思い出してしまう。自分の周りにいる女性はこの辺が足りてないよな、と。スラルは言うに及ばず、キャロルやハンティも持たざるものであり、男として視界的には少し寂しいものだ。持ってるのはカミーラくらいのものだが、あれはあからさまに見ると殺されそうなので基本的に視線は向けない。
とそこでレオンハルトは余計な思考から脱出すると、その料理の味を少し考えてから、
「……やっぱ悪くないな。料理を殆ど作ったことないんだろ？　それにしては上出来だ」
「う、うむ……頑張った、が……そ、その……」
「……？　どうした？」
何故か、どんどんと顔を赤くする彼女に、レオンハルトは様子がおかしいな、と視線を合わせにいく。
すると、
「あ、その、だな……」
どうやら言ってくれるようなので、レオンハルトは催促するようなことはせずに彼女の言葉を待つ。ややあって、視線を逸しながら、
「あ……あまり見ないでほしいんだ。その……」
彼女はちらちらとこっちを見ながら、
「……き、君に見られると……恥ずかしい」
「……」
と、そんな事を言ってきた。
その彼女の様子は何というか、意識しているのがバレバレであり、気恥ずかしい様な何とも言えない気分にさせられる。レオンハルトは天井を見上げて今の状況を思う。
クールな印象の大人びた巨乳美女に、満更でもない様子で献身的にお世話をされている。
……何だ、これは……夢か？　夢なのか？

随分と都合の良い展開に一瞬、自分の認識を疑ってしまうレオンハルトだが、五感から来る情報から今起こっていることは間違いなく現実であり、断じて自分の夢や妄想ではないことがわかる。
ならばどうするか、と考えてみるも幾ら自問自答を繰り返してもその結論は変わらない。
――まだ、ここにいるしかない。
今はまだここから去ることは出来ない。故に、しばらくはこの状況に甘んじるしかないのだ。レオンハルトは口を開いて三口目を食べさせてもらいながら改めてそう決心する。
だが、それでもやはり思うのは、
……何でこんなことに……。
レオンハルトはそれを思い起こして内心憂鬱になる。
自分は何故、こんな場所で、目の前にいる彼女――
「あ、あ～ん……」
「……あーん」
――夜の王、ケッセルリンクとイチャイチャと同棲生活を送っているんだろうか。
それを思い、レオンハルトは内心で嘆息し、
……すまん、スラル。早く帰るとは言ったが……色々あって……まだ、帰れそうにない……。
魔王城からほど遠いその場所で、レオンハルトは心の中でスラルに侘びた。
――巨乳美女とイチャイチャしてるけど怒らないでね？　と――

カラーの集落

――レオンハルトの休暇、三日目。大陸中央部にて。

緑の大地を行く一人の影がある。

黒を基調にした一張羅を着た、背の高い金髪灼眼の男。見た目は人間のもの、しかしその存在感と内に秘める力は普通の人間を遥かに超えるもの。

「ふん、ふ～ん……んぐんぐ」

魔人レオンハルトだ。

魔王城を出立してから三日目。普通よりも少し早い程度の軽い足取りで草原を歩くレオンハルトは、機嫌が良さそうに鼻歌を歌っており、時折手元に持った袋から食べ物を取り出して摘んでいる。

ここまでご機嫌なレオンハルトは珍しい。彼を良く知る部下などが見れば、強い相手でも見つけたのか、と適当に予想して戦闘に巻き込まれないように一目散に逃げていってしまうだろう。

しかし今のレオンハルトは別にスイッチが入って、高揚してるわけではない。間違いなく普段通りの彼である。

故に珍しい。単純に浮かれているというのは。

まるでピクニックに行く子供である。ともすればスキップでもしてしまいそうな程だ。

その理由はやはり、

「長閑だなぁ……」

レオンハルトはそう言って手元の袋から再び、食べ物を取り出しながら、

「休暇様様だな……魔人でも普通に買えたのは有り難いし……おっ、このカレーマカロロ美味いな」

と、同僚の魔人のようなことを言いながら休暇を軽く賛美した。

――とどのつまり、魔人レオンハルトは休暇というものに浮かれているのだろう。

最初は目的地に行って適当に見て回ったら直ぐに帰ろうと考えて

いたくらいのレオンハルトだが、いざ旅に出てみれば自分一人の時間というのに嵌ってしまっていた。
普段、レオンハルトは魔人四天王、そして魔軍参謀という要職に就いている。その立場上、上司である魔王、同僚の魔人、部下の魔物将軍や魔物隊長や魔物兵。常に自分の傍にいる使徒など、多くの魔物に囲まれて過ごしている。
その生活は常に他の者の目があり、行動は縛られているも同然、何をするにも他者に与える影響を考えて動かなければならない。
それが嫌というわけではない。これでもレオンハルトは普段の生活にそれなりに満足していた。時には苦労することもあれどそれに不満はない。
だが、一度その責務や周囲の目から解放されてみると、
「気楽だな……」
その解放感が思いの外、良いものだと嫌でも理解してしまった。
誰の目も憚ることもなく、一人で好きなことをする。
レオンハルトは思い返す。考えてみればこうやって完全に一人になるのはいつ振りだろうか、と。
おそらくは３００年以上前。レオンハルトがまだ人間だった頃、それも王になる前の子供の時以来かもしれない。
集落の外れから剣を持ってよく出かけた記憶を思い出す。強くなる為や、食事の為に狩りに出たというのが大半を占めるものの、少なからず冒険心のようなものがあったのは事実だ。
今の状況はその頃を思い出すもので、
「――お」
と、レオンハルトは目の前に見えたものに思考を中断させた。
丘を登った先、広大な草原の先に見える大森林。そしてその中心にそびえ立つのは、
「……翔竜山、か」
世界最高峰の山、翔竜山。
レオンハルトの目的地であった。

レオンハルトはそれを前に、純粋な感嘆をおぼえた。
……やっぱデカいなぁ……。
無論、見かけること自体は初めてというわけではない。魔軍での遠征時に、遠くにあるこれを見かけたことはある。
それはひとえに翔竜山が大きすぎるためであり、それがレオンハルトが感想をおぼえる理由ともなっている。
レオンハルトは少し顔を上げて山頂を見ようとするも、
「――――」
見えなかった。
何故ならその途中を雲が覆っているためだ。
翔竜山は雲を突き抜けて存在した。その山頂は雲の上にあるのだ。
故に見えない。そこを見るためには実際に登るしかない。
だが、と、レオンハルトは思う。この翔竜山という山を登りきった者は未だ存在し得ないという事実に。
聞いた話によると冒険者などがよく挑戦するらしいが、達成者はいないという。
その前人未到の山を一度は近くで見てみたい、と、レオンハルトは思った。
そして実際に見てみると、考えるのはやはりと言うべきか――
……やっぱり、我慢は無理だな。
聞くところによると、あの山には多くの危険なモンスターが生息するらしい。その中にはドラゴンも多数存在し、多くの宝が眠っているという。
その他にも嘘か本当か分からないような噂の数々。
レオンハルトとしてもそれらには大いに興味がある。特に前者。自分を満足させられるような存在がそうそういるとも思えないが、もしかしたら、という思いもある、
そして、それを置いておいても男なら一度は誰もが憧れるだろう――世界一という、その偉業に。
それに挑戦しないなど男としてはありえない。

故に、レオンハルトはその山へと向かった。
――翔竜山の登頂、未だ誰も成しえていない――その偉業に挑戦するために。

一方、その頃。
翔竜山の麓、大森林地帯。
人類のどの国家にも属さないこの地域は、しかしとある存在の集落があった。
森の中を曲がりくねって通る河川。それに沿うように作られた町がある。
「……」
その町の入り口に一人の女性の影が見えた。彼女が帰ってきたことによって、日常を過ごしていた集落の者達が一気に活気づく。
そこにいる者達は皆、容姿の優れた女性であり、長い耳と額にクリスタルを持つ種族。
ここは、亜人種――カラーの集落であった。
「――あ、ケッセルリンク様！」
「お帰りなさいませ、ケッセルリンク様！」
「人間との戦い、お疲れ様でした！」
「……うむ」
その女性、ケッセルリンクは出迎えてくれる自分の同胞達の言葉に軽く頷くことで返答とする。そして足早にその場から離れるように、
「……すまない、直ぐに行かなくてならないんだ。通してくれないか？」
「あ、ごめんなさいっ」
ケッセルリンクの言葉に、カラーの娘達が一斉に道を開ける。その開けた道をケッセルリンクは通って行くも、
「きゃーっ！　ケッセルリンク様ー!!　こっち向いてー！」
「お疲れ様でしたー！」
「ケッセルリンク様が居ればこの集落も安泰ですねっ！」

その際にも戦いを終えて帰ってきたケッセルリンクを讃える声が次々と両側から聞こえてくる。その歓声は鳴り止まないが、それもその筈だ。
彼女は夜の王。カラー最強の女傑とも称されるケッセルリンクなのだ。
カラーの集落ではまさしく英雄的扱いを受けているケッセルリンクは、人間との戦いにおいて最も頼りになる存在であり、その大人びた美貌からも村の少女達の憧れでもあった。
「……」
だが、周囲の黄色い声援に対して彼女は冷ややかに軽く手を挙げるだけで答える。その盛り上がりに反比例するようにケッセルリンクのテンションは低い様子だった。さらに言うならば随分と、淡々としたようにそれを行っており、義務的とも事務的ともいえる対応の仕方であった。
しかし、これにも慣れている。ケッセルリンクは一つの溜息も漏らすことなく、人混みを抜けると真っ先にその場所へ向かう。
目的地はカラーの集落の奥。比較的賑やかな中心部とは少し離れた場所にある、一際大きな建物だ。
何度かカラーの娘達に囲まれながらも、そこに到着したケッセルリンクは以前と同じように建物の入り口にある門を開き、その先に進むと、
「……私だ」
「――！」
声を掛けながら戸を二回、軽くノックする。すると、何やら中で慌てたようにバタバタと音が鳴った後に、
「お、お帰りなさいませ、ケッセルリンク様」
中から眼鏡を掛けたカラーの少女が息を切らしながら出てきた。女性としては高い長身を持つケッセルリンクよりも少し小さいくらいの背丈であり、肉体は成熟しているものの、その顔立ちや雰囲気には幼いものが混じる。
そんな少女の挨拶にケッセルリンクは眉をぴくりと動かしたもの

の、
「……ただいま」
少しの間を置いて、普通の挨拶を返した。その際、ケッセルリンクは息を漏らしてしまう。
「ささ、ケッセルリンク様。中へどうぞっ」
「……」
少女に先導されるようにケッセルリンクは建物の中に招き入れられる。
中はそれなりの広さと多少の生活感のある部屋であり、キッチンやベッド、戸棚などの生活に必要な物が一通り揃っている。しかしそれでいて、事務机なども置かれており、その上には何枚もの書類が山積みになっている。
それをちらっと、横目で見たケッセルリンクに、タイミングよく先を行く少女から、
「あはは……散らかっていてすみません……」
「……構わない」
軽く笑みを交えて謝罪する少女にケッセルリンクは気にしなくていい、とそう思う。何せここはカラーの集落、その長が使う邸宅であるからだ。カラーの長はこの場所で、執務と生活を行う。多少、書類が散らばっていたところで別に構わないだろう。
ケッセルリンクは書類から視線を逸らすと、室内に置かれていたテーブル。その下座に腰掛けた。応接用に、と置かれたものであるが、外から訪れる客などいないためか、使用された形跡が殆どない。少なくとも外客への用途で使われたことは皆無である。
なのでちょうどいいだろう、とケッセルリンクはそこに腰掛けたのだが、それに待ったを掛けた者がいた。
「あ、ケッセルリンク様。そこは下座ですよ。こちらの上座に――」
「……」
少女がそう言って、上座を進めてくる。その対応にケッセルリンクは今度こそ溜息を吐いた。
そして一息つくと、頭を抱えながら、

「……そこはもう私の席ではないだろう」
「……で、でも――」
「でも、ではない」
「うっ……」
　ケッセルリンクの指摘に自覚があるのか、少女がバツが悪そうな表情を浮かべる。その様子に多少、辟易とした感情を覚えつつ、ケッセルリンクは彼女に視線を合わせながら、
「……カラーの長はもう私ではない。他ならぬ君だ、ペール」
「……うぅ」
　そう。現在のカラーの集落の長は――夜の王ケッセルリンクではない。
　目の前にいる少女、ペール・カラーこそが、
「き、厳しいですよう……ケッセルリンク様ぁ……」
　現在のカラーの長であった。

「……ふぅ、全く君は……とりあえず、座ったらどうかね？」
「はい、座ります！　頼りなくてすみません！」
　ケッセルリンクは瞼を閉じ、額に手を当てる。眼前には勢いよく椅子に腰掛け、本で顔を隠しながら、こちらに頭を下げ続ける少女がいる。自分に怒られたとでも思ったのだろう、別に怒っているわけではないのだが、それを言っても、
「謝らなくていい。私は、立場を明確にしておこうと思っただけで――」
「物分りが悪くてごめんなさい！」
「……」
　と、こんな調子だ。更に続く言葉は、いつも通りだろう。その予想通りの言葉が来た。
「あのう……やっぱり、ケッセルリンク様が長であった方が良いのでは……？」
「……私はすでに隠居した身だ」

「で、でも、人間との戦いもありますし……ケッセルリンク様が以前のように長を務めていた方が、民も安心するかと……」
「……」
弱気から出た集落の長を固辞するような言葉。だが、彼女の言い分はある意味間違っていない。故にその言葉はケッセルリンクの頭を悩ませる。
こんな気弱な少女だが、れっきとしたカラーの集落の長なのだ。
故に、立場を今一度明確にすること、そして、それを言って聞かせるためケッセルリンクは口を開いた。
「……確かにそうかもしれないな」
ケッセルリンクは一度頷いてみせる。実際、それは事実であるからだ。
現在、カラーの集落はこの森の豊富な資源を目的とした人間の国家に侵略を受け、戦争状態にある。
日夜、森に向かって進撃してくる人間の軍団とこちらのカラーの戦士団が激しくぶつかり合っている。その戦況はぎりぎりのところで拮抗している、一進一退の予断を許さない状況だ。
そんな中、先代の長である自分は率先して戦っている。それは自分が圧倒的な実力を持つカラー最強の戦士であり、以前よりこの集落を襲う人間達と戦ってきた実績があるからだ。
それ自体は構わない、とケッセルリンクは戦うことを否定はしない。隠居はしているものの、集落の危機であるなら戦うべきだし、現在の長から戦え、と命令されたなら集落に属するものとして戦うべきだと思う。
そして自分が戦うことで士気が上がるのならそれもいいだろう。長に戻るというのも集落のことを思えば悪くない選択肢だ。
それをしたくない個人的な理由もあるものの、そちらはまだ我慢できる。さほど重要なことではない。
問題は別にある。それを改めて口にしようとする前に、ペールが先に声を上げた。
「なら、やっぱりケッセルリンク様が長に……」

出てきた言葉は先程と同じ、こちらに長を譲る、というそんな頼りない言葉。
故に、ケッセルリンクはそれを遮るように、
「――駄目だ」
「っ……」
鋭い拒絶の声に、ペールが身体を跳ねさせる。ケッセルリンクは出来るだけ厳しくなりすぎないように、それでいて優しすぎないように努めて声を出す。
「確かに、私が長になれば士気も上がるだろう。力ある者に頼ること。その選択自体は長として恥ずべきものではない。だが――」
分かっているだろう、とケッセルリンクは彼女に再度言い聞かせる。
今日まで何度も告げた事実を、ケッセルリンクは神妙な様子で言葉にした。
「――私はもう、長くない」
「！　そ、それは……」
その言葉にペールの表情が泣きそうな、それでいて絶望したような、暗い表情に変化する。
しかし、事実だ。とケッセルリンクはそれを口にするのを止めない。
「私はもう百年以上生きている。もうじき〝変化の時〟が訪れるだろう」
変化の時。それはカラーという種族にとっては常識だ。
カラーには老衰、そして寿命が存在しない。
比較的、人間よりも早く時を経て成長するカラーだが、生物として理想的な状態になると成長が止まり、以後はその姿、いわゆる成体のまま一生を過ごすことになる。
だが、カラーにも人間でいう寿命に近いものがある。それが変化の時だ。
カラーは今までの行いに応じて、天使か悪魔に転生するという特性を持ち、それをカラーは変化の時と呼び、一般的な寿命としている。

それが訪れるまでの年数は個人差があるものの、大体９０年以上。
およそ１００年生きる頃には殆どのカラーが変化の時を迎え、良い行いの者は天使に、悪い行いの者は悪魔に転生するのだ。
そしてケッセルリンクはもう１００を越えているのだ。
残された時間は決して多くはない。故にケッセルリンクは真剣な声色でそれを伝える。
「生きている内に戦えるだけ戦わせ、使い潰すならそれでも構わない。しかし――」
自分は今この時にすら変化の時が来てもおかしくないのだ。それこそ戦いの最中にそれが来ても不思議ではない。そんな存在に頼りきってしまうのは危険だ、とケッセルリンクは警鐘を鳴らす。
「私がいなくなっても戦いは続くだろう。その時、君は、君たちはどうする？　座して死を待つか？」
「そ、そんなことは――！」
「なら、もう少し自覚と。そして、自信を持ちたまえ。私はそうならない為に選択したのだし――」
それに、
「私は――自ら足掻こうともしない者を助けるようなことはしない」
「……！」
長であった頃はその限りではないが、とケッセルリンクは暗に長として責任を仄めかしながらそう言った。そんな自分の矜持でもある厳しい言葉にペールはさらに顔を暗くしてしまう。
……乗り越えてほしいものだが……。
臆病なのはしょうがない。しかし彼女ならば、とケッセルリンクは信じる。
ケッセルリンクは９０を越えた頃には、次の長の任命を行った。その時になってからでは遅いだろう、と。
そして選んだのが目の前にいるカラーの少女、ペール・カラー。
次に長になるのは思慮深く、広い考えを持つ者がいいだろう、と考えて選んだのが彼女。
それは現在の状況は非常に難しいこと。そして、ケッセルリンク自

身が凝り固まった考えの持ち主であるからこそだ。
カラーという一族は生きるに難しい、とケッセルリンクは思う。
世に蔓延る多くは魔物と人間であり、一応亜人ではあっても純粋な人間ではなく、特殊な生態を持つカラーは人間の庇護を受けにくい存在だ。
そのため、カラーは今まで魔軍にも人類国家にも属することなく自らの生活圏を守るため独立して戦ってきた。
幸いにもカラーは生まれつき高い魔力と人間に比べて比較的高い才能を持つ。さらには老いが存在しないことで成体になれば変化の時を迎えるまでは全員が全盛期の状態で戦うことが出来る。
だが、人間には数で敵わず。魔軍には数と質、両方で敵わない。彼らは強い欲望の権化であり、いつの時代でもカラーは虐げられる存在だ。
特に人間の男というのは劣悪極まりない愚かな存在であり、女性を性欲の捌け口か道具のようにしか思ってない輩が大多数を占める。
そんな、かの勢力と同等以上に戦い、なおかつ生き残るためにはそれ相応の何かが必要である。
自分はそれを見い出すことが出来なかった。恭順することも考えられず、戦う以外の選択肢を持たなかった。
幸いにも自分には逆境を跳ね除けるだけの力があり、それをこなすことが出来たもののこれからはそうはいかないだろう。
彼女はカラーの中でも知識が豊富で視野も広い。そういった複雑な状況に対応出来るだけの下地を持っている。
後は少しの度胸と自信だけ。しかし自分の存在がその成長を妨げている、とケッセルリンクは思っていた。
……良い機会かもしれないな。
ケッセルリンクは話の流れで、それを考える。元より、そろそろだと思っていた頃だ。
一度息を入れ、未だ俯いているペールを見る。そして一度だけ心の中で彼女に謝ると、そのまま考えていたことを口にする。
「……私に頼る時代は終わりにしよう」

「け、ケッセルリンク様……？」
ケッセルリンクは立ち上がる。自分を見上げるペールを突き放すように、
「今この時を境に――私は戦場に出ることをやめよう」
「――!?」
ペールの表情が驚愕に染まる。無論、本当に危ない時、例えばこの集落まで敵が襲撃してくるようなことがあればケッセルリンクも戦うだろう、その時にまだケッセルリンクがこの世に存在していればの話だが。
しかしそれをわざわざ口にはしない。それを言ってしまっては同じことだ。彼女たちは自分に頼り続ける。
彼女の表情に少々の罪悪感を覚えつつもケッセルリンクは言葉を続けて、
「私を恨んでくれても構わない。厳しいようだが……君も含めた集落の皆も、私がいては成長しない」
だから、
「私は舞台から降りよう。これからは君たちの力で奮起したまえ」
そう言ってケッセルリンクは踵を返す。
だが、やはりと言うべきか、背後からは、
「そ、そんな――！　ま、待って下さい！　行かないで下さいケッセルリンク様!!」
必死に追いすがるような声が聞こえてくる。それに構わずケッセルリンクは歩みを進めた。
「わ、私には無理ですよう……！」
「……」
震える声が耳に届く。おそらく、実際に身体も震えているのかもしれない。
戸を開き、外に出る前にケッセルリンクは一度立ち止まる。
最後に彼女に言葉を掛けよう。それこそが自分がカラーの長として、そして前任者として彼女に出来る最後の手向けなのだ、と。
その意味を込めて、ケッセルリンクは彼女に告げた。

「君なら出来る」
「――っ」
「再度言う――私が選んだのだ。自信を持て」
励ましの言葉を宙に放ち、微笑を浮かべると、背後に自身の後継となる少女を置き去りに、ケッセルリンクはその場から立ち去った。
たった一人、その場に残されたペールは俯いたままであり、
「わ、私は……」
その表情を窺い知ることは出来なかった。

大森林の戦い

――レオンハルトの休暇四日目。大森林地帯にて。

森の中はざわめいていた。

空は晴れており、昼の陽光が木々の隙間から森のあちこちを照らしている。

その下で、音を鳴らし動く者達がいた。

魔物ではない。人間の男達だ。

彼らは大森林より南に位置する王国の戦士団であり、誰も彼もがその身に鉄製の鎧と剣を装備し、何やら慌ただしい様子で右に左に動いている。

そんな中でいて、動きが少ない者達がいた。

陣の中央、周囲の兵士達よりも豪奢な鎧を着込んだ男達。彼らは各部隊を指揮する隊長達であり、その顔つきや落着き様からも歴戦の兵士であることは明らかであった。

そしてその中でいて、更に一人。屈強な兵士たちの中にいて更に大きい男がいた。

筋骨隆々、といった言葉が相応しいごつい身体を持つ大男は、その身体に見合った分厚い鎧を着て、どっしりと岩の上に腰掛けていた。

そしてその目が森の奥を見据えている。何が見えるというわけでもない。

ただその瞳は、これからのことを期待しているように見えた。

大男は我慢出来なかった。故に、近くにいる兵に声を掛ける。

「――おうい!! そろそろ準備は終わったかあっ!!?」

大きな身体に見合うデカい声。ともすればその場にいる全員に聞こえてしまいかねないのではないか、と近くにいる隊長達が錯覚してしまうほどだ。

その声に反応したのはほぼ全員だったが、その中の一人だけが代表して前に進み出た。

「後、ほんの少しお待ち下さい！　アーノルド戦士長！」
アーノルド、と呼ばれた大男がその彫りの深い顔を声の方向に向ける。そして再度、大きな声で、
「ほんの少しってどれくらいだあ!?」
「時間にして――おそらく、後１０分もすれば出撃出来るかと！」
隊長の言葉に、アーノルドは頷いた。
「おうっ!!　最初からそう言えバカ野郎！」
「はっ！　申し訳ありません！　アーノルド戦士長閣下！」
敬礼し、謝罪をする隊長にアーノルドは再び大きく頷く。
そして膝をぱんと叩くと、今度は兵に向かって、
「１０分なら時間はあるな！　ようし、お前っ！」
「へっ？　じ、自分でありますか!?」
おう、とアーノルドが笑みで答える。突然の指名に狼狽える兵士に構わず、アーノルドはその馬鹿でかい声で手を上げると、指を三本だけ指し示して、
「――酒！　セックス！　そんで決闘！　俺がやるのはどれがいいか選べ!!」
「……ええっと」
上官の言葉でありながら思わずもごもごとしてしまう兵士。しかし周囲に咎めるような雰囲気はなく、代わりに、また始まった、と言わんばかりの呆れるような視線が見える。
それに気づいていないのか、気にしていないのか、そのどちらでもありそうなアーノルドが更に続けて、
「酒なら今直ぐ酒樽を持ってこい！　セックスなら捕まえてた女を連れてこい！　決闘なら――」
そこで一度だけ言葉を溜め、その背からはみ出していた大きな得物を掴んだ。
大柄なアーノルドと同等の大きさを誇る戦斧。それを掴み、
「――この俺と戦えい!!」
「っ――」
その戦意を身体から周囲に発散させるように飛ばした。歴戦の兵

達が身体をぶるりと震わせる。自分達よりも遥かに強い強者のオーラとも言うべき闘気に身震いを抑えきれないのだ。
そしてそれを一身に向けられた兵は、
「あ……うっ……！」
どうしていいかわからず、言葉を詰まらせた。頭では理解している。早く答えねば、と。
選択は実質二択。決闘だけは避けたい。故に酒かセックス。そう答えればいいだけの話なのだが、中々に声が出ない。
そうこうしている内に視界の中のアーノルドがじれったいのか眉をひそめ始めた。まずい、今直ぐ言わねば、と決意したその瞬間――
「さ、さ――」
「――遅おい!!　もう面倒だ!!　全部やるぞ!!!」
と、声を張り上げ、そう宣言した。兵士が呆気に取られる中、アーノルドは再び、別の者達に顔と指を向け、
「お前は酒樽を持ってこい!!　そんでお前は女を連れてこい!!」
「は、はっ！」
「か、かしこまりました！」
指を突き付けられて一瞬ビクッとした兵達であったが、とばっちりは受けたくないのだろう。直ぐ様了解の返事を返し、命令通りそれらを持ってくるため、逃げるようにその場を後にした。
そしてアーノルドが立ち上がる。兵士の前まで近づき、
「ようし！　お前は俺とやり合うぞ!!」
「!?　そ、それは……」
勘弁してくれ、と言わんばかりに表情を歪める兵士。しかし断れるはずもない。
結果、アワアワとしながらも剣を構えるしかないのだが、アーノルドはそれを見て口を大きく開き、
「がはははははっ!!　心配するな！　死ぬまではやらん!!　適当に暴れて動けなくなったら後方に回してやる!!　それでいいなっ!?」
「は、はい……！」
その言葉に兵が少しだけ安堵の息を漏らす。だが、

「まあ当たりどころが悪かったら死ぬから防御はちゃんとしろよ！
がははははははっ!!」
「え、ええっ!?　そ、そんなぁ……!?」
　そんなの出来るはずもない。思わず情けない声を出してしまうが、
それも致し方ないだろう。
　助けを求めて、周囲に視線を巡らせるも、
「戦士長ー！　出撃までには全部終わらせてくださいよー？」
「戦いは一瞬で終わるだろうし、酒が一番時間かかりそうっすねー」
「ははははっ！　そうだな！　戦士長は早漏だし、セックスは直ぐ終わ
るだろうしな！」
　古参の隊長達はこちらを遠巻きに眺めながら、呑気に笑い合ってい
た。出撃前だというのに酒瓶を取り出して、それらを呷っているの
は、酒の肴にでもするつもりなのだろうか。
　その声を受けアーノルドは豪快に笑う。
「がはははははっ！　問題ない！　全部直ぐに終わらせてやる!!
酒もセックスも決闘も――」
　そして一息、戦斧を振り回し、
「――カラーとの戦いもな！　お前ら、今日中に制圧して終わらせん
ぞ!!　ウォーミングアップ、ちゃんと済ませとけ!!」
「応――!!」
　アーノルドの号令に誰も彼もが声を上げた。
　彼らは王国戦士団の主力部隊。
　昨日までの前衛部隊とは桁違いの練度を誇る精鋭であり、
「がはははははははははっ!!!　今日も楽しいことがあるといいな
あっ!!!」
　それをまとめる彼――アーノルド・ホーガン。
　王国最強の戦士である彼とその部隊がカラーの集落に襲いかかろ
うとしていた。

「……なんかうるせぇな」

突如、森が震えたような感覚を得た魔人レオンハルトは眉をひそめてそう呟いた。
翔竜山に向かうため、それを囲うように位置する大森林地帯に少し前に足を踏み入れた彼は、ひたすらに足を進めて森の中を行く。
しかし、木々の隙間から時折見える翔竜山を目印にしながらも一旦立ち止まる。そうして背後を軽く振り返り、
「……ひょっとしてさっきいた人間の部隊か？」
そうして思うのは、先程、森に入る前に見た光景。
大勢の人間達が、集団で森を出入りし、何やら物々しい雰囲気を醸し出していた。
……十中八九、軍だろうな。
その装備もさることながら、雰囲気から、レオンハルトは彼らが人間の部隊で、それもこの森を攻めることを目的としていることを察する。
魔軍参謀として普段は魔軍を統括し、指揮する立場にあるレオンハルトは経験や知識からそれが分かった。
単純にこの森が人間の支配地域ではないこともそうだが、それよりもレオンハルトは彼らの士気の高さに注目した。遠目にみた限りでも、迅速で活気のある動きであり、そこらの雑兵ですら高い士気を保っていた。
レオンハルトは思う。軍という組織は守りよりも攻めで活気づくものだと。
やはりどんな者でも自分達の命や生活圏が脅かされるよりは、攻めて脅かす側に回った方がいいと考えるだろう。
それは生き物としての本能に近いものがある。
どんなに綺麗事を述べようが、人は他者から何かを奪うことを好む一面がある。人間の残虐性というやつだ。
勿論、守ることで生存本能や防衛本能が働き士気が増すこともあるが、それは比較的、長続きしないものだ。どんな屈強な精神をもつ人物も、戦いが長引けば当初にあった高い意気は薄れてくる。一般の兵達など言うまでもない。

指揮官は防衛戦の際、士気を保つのに苦労するものだ。
それに比べると攻勢は士気を保つのにあまり苦労しない。
数や相手、その後の報酬などの条件を整えてやれば、簡単に士気が上がってしまうのだ。
どんなに疲れていようと、優勢であれば士気は保たれる。何を優勢とするかは状況によって様々だが、攻めと守り、というのはそれをはっきりと二分させる分かりやすい指標の一つなのだ。
そして今いる人間の軍勢は、それがはっきりと現れているように見える。
高揚した現場の雰囲気と肌がひりつくような、張り詰めた空気。
まさしくレオンハルトの知る――戦場のものだ。
「……」
故に、レオンハルトは一瞬迷う。どうするべきか、と。
この森に攻め入るということは、まず間違いなく相手はカラーである。この森林地帯を治めているのはカラーなのだからそれは当然。
そして自分は、そんなカラーと縁がない――わけでもない。
他ならぬ自分の使徒――ハンティがカラー出身であるからだ。その縁から、レオンハルトは魔軍参謀として、魔軍をカラーの集落に攻め入らせたことはここ１００年では皆無だ。
まあ元々、戦線を広げるのも面倒な上、人間との戦闘で部下が満足するなら、わざわざ亜人種にまで手を出すことはない、と考えていたので元よりあまり手を出していない地域なのだが。
それにいつだったか、とある魔物将軍がカラーの森を攻めたいというので許可を出して、魔軍の一個軍くらいがカラーの集落に攻め入ったことがあった。
だが、魔軍はあっさりとカラー達に追い返されてしまっていた。魔人がいなかったとはいえ、それほどまでにあっさり負けるとは思ってなかったため、少なからず驚いた覚えがある。というか今にして思えば、
……ハンティが追い返したんじゃねぇか……？
使徒になる以前のハンティがいたなら一個軍くらい追い返される

のも不自然ではない。
でもその場合、全く報告が上がってこなかったのが気になるが――
……ま、いいか。
レオンハルトはその考えを頭から消す。そんな過ぎ去ったことよりも重要な、考えなければならないことがある。
そう思い、思案するレオンハルトだが、
……手を出す……のも違うか。
考えるのは即ち――戦場への参戦。
使徒との縁からカラーに味方し、人間を追い払う選択。それを考え、しかし、直ぐ様それも振り払う。
……休暇中に戦争に参加するってのもアレだが……それよりも加担する理由が薄いな。
レオンハルトは現在、休暇中。魔軍参謀としての仕事をしているわけではないが、それでも魔人としての立場はある。理由なく一応亜人種であるカラーに味方するのはあまりよろしくない。
せめて直接、ハンティに頼まれたり、ちゃんとしたメリットがあるなら快く参戦してやるのだが――如何せん、それがない。
それに、だ。まだ負けると決まったわけではない。
人間の軍、その数は中々のものであったが、レオンハルトが見る限り、戦いは一日では終わらないだろう。
ならば、と。レオンハルトは再び歩みを再開した。本来の目的である翔竜山に向かうためだ。
……ま、帰り際に危なそうならそれとなく助けてやるか……。
と、考えレオンハルトは先を急いだ。もう森に入って結構な時間が経っているし、そろそろ同じ景色を見るのも億劫になってきた。
……というか、本当に面倒だな。この森。ちゃんと山の方に向かってるはずなんだが……。
まさか迷子にはならないだろう、とレオンハルトは苦笑しつつ森の奥に向かっていこうとして、
「――お」
「……」

森の中で、宝箱だんごを見つけた。
地面から肌色の手と顔が生えたような魔物の一種。その手には宝箱を抱えているレアモンスター。
それを目撃しレオンハルトは何気なく、剣を振るう。だが、
「……！」
「あっ」
逃げられる。不意に振るった斬撃は木を根本から斬り落とした。
レオンハルトは息を吐く。宝箱だんごはその回避力と素早さが特徴のモンスターなのだ。
宝箱を狙って倒そうとする冒険者が後を絶たないが、生半可な腕では攻撃を当てることすらできない。
……にしてもあの宝箱だんご、やるな。
真面目にやっていないとはいえ、自分の攻撃を躱すとは中々の強――素早い個体なのかもしれない。
「……今はいいか」
レオンハルトはその場を後にする。逃げていった宝箱だんごを追いかけることも出来なくはないが、そこまでするほど興味があるというわけではない。
なので再び翔竜山に向かって足を動かす。宝箱だんごのことは綺麗サッパリ忘れることにした。

――1時間後。
「……おかしいな。いつまで進んでも辿り着かない」
レオンハルトは森の中で首をひねっていた。
距離的にはもう森を抜けてもおかしくないはずなのだが、未だに景色は森の中。しかも同じ景色をぐるぐると回っている気もしてきた。
そのことを思い、レオンハルトはある可能性を鑑みる。
……まさか、な。
だがそれはないだろう。いくら森の中が迷いやすいといっても、いい大人、どころか３００年以上生きた魔人である自分が森の中で――

レオンハルトは頭を振り、再び歩みを進める。きっともう少し進めば森を抜けるだろう。
と、振り向くと、
「……」
またいた。宝箱だんごだ。
先程と同じ個体だろうか、感情は見えないがどことなく驚いているように見える。
レオンハルトは徐ろに剣を振り抜いた。
「……！」
躱される。斬撃は近くにあった岩を両断した。
そして、宝箱だんごがじっとこちらを見てくる。黒い目と口がこちらに視線を寄越し、
「……」
目を細め、身体を揺らした。少しイラッとする。
……いや、待て。落ち着け。
レオンハルトは息を吐いて、苛立ちを収める。あんなものにムキになってどうする。
今、大事なのは森を抜けることだ。攻撃を躱されたくらいで一々――
……ん、そういえばコイツ、さっきも会ったな……。
だとするなら、今の仕草は、
「……」
……いや、やめよう。そうであったとしてもくだらんことだ。
例え自分が宝箱だんご如きにそう思われて馬鹿にされていたとしても詮無きことだ。
……無視だ、無視。
レオンハルトは宝箱だんごを横目にちらりと見てから、再び森の中を進んでいった。

侵攻は一方的な突撃から始まった。

大森林地帯を横一列になり、厚みのある白の戦士達が突っ走る。彼らは同程度の距離を保ち、森の中で見失わないようにしながらカラーの集落を半包囲するようにしていた。
その数、実に――五万の軍勢。
後方に数千の予備兵力と補給部隊を残し、その他全ての人員を森に投入した、全身全霊の力押しだ。
先頭、前線を行く隊長が声を張り上げる。
「進め――!!」
その声に従い、兵士たちが前進していく。
だが、それを許さない者達がいた。
「あぐっ――」
兵の一人が突如、前方から飛来した矢に頭を撃ち抜かれて即死する。
それを境に多くの矢、魔法が兵達に襲いかかる。
森の奥、木々の隙間から人間を狙い定める者達がいた。
「狙い撃て！　これ以上、人間を森に侵入させるな！」
「はい――!!」
水色の髪と長耳を持つ女性の集団。
カラーの戦士団だ。
彼女たちは弓を携え、そうでない者達も魔法を詠唱し、人間達の前進を食い止める。そうして少なくない数を討ち取ることに成功するも、先頭集団にて生き残った者達と後続が継ぎ目なく進んでくる。先頭にいる隊長が、
「構わず進み続けろ!!　弓も魔法も一度放てば直ぐには放てん！」
そのまま速度を落とさずに進む。
だが、隊長の言葉とは裏腹に、弓や魔法は途絶えることはない。
その理由は当然のものだった。
視界の奥、見えるか見えないかギリギリの距離でカラー達が並んでいる、横一列に並んだそれは、今まさに矢と魔法を撃ち込んできた集団だ。
しかし、彼女たちは一旦、それを終えると後ろに下がる。

それと同時に別の集団が前に出てくる。隊長と思わしき女性の声が響いた。
「第二部隊下がれ！　次、第三部隊前へ！」
「はいっ!!」
カラーの防衛隊隊長。その声に従い、集団が統制を守ったまま前後が入れ替わる。
そして弓を番え、魔法の詠唱を始める。一団がそれを終えたのと同時に、カラーは声を張り上げた。
「撃て――っ!!」
「――!!」
その声とともに、森の間を矢が、魔法が、人間の兵に向かって飛び交っていく。少なくない犠牲と共に、生き残った兵達が思わず言葉を吐いた。
「くっ……！　あんな正確に狙ってきやがって……！」
木々の隙間を縫うようにして飛来するそれらに人間達は驚愕する。
だが、彼女達、カラーの戦士にとってこれらは当然。生まれた時からこの森に生きるカラーには、自然の木々は障害物とならない。
「――がっ!?」
突如、別の方向からも弓が飛んでくる。
木々の上に潜む、カラーの遊撃隊の仕業だ。
彼女たちは木の枝を足場に、森の中を地面にいるのと同じ様に滑らかに移動する。それを確認し、苦悶の表情を浮かべながら隊長や兵達が声を上げた。
「ちっ、どうにも数が多い……！」
隊長はそのことを思い、苦々しい表情と共に、それを推察する。
ここ数日の交戦よりも明らかに数が多い。それは飛来する矢や魔法の数。更には入れ替わりを可能にしていることからわかる。
「向こうも正念場だからか、数を掛けてきやがったな……！」
隊長の言葉は正しく、返答は絶え間なく襲ってくる攻撃で答えられた。少しまずいな、と隊長はひとりごちる。
数を頼りにした力押しの戦術だが、これらはカラーの部隊には有効

な手立てであった。
何しろ向こうの主な戦力は弓と魔法。どちらも連続して放つことが難しいものである。
それだけに命中率は、特に魔法の方は躱すことが出来ないため、一度は受けることが前提となるのだが、これらの問題は数を揃えて突撃を敢行することで無理やりではあるが、解決することが出来ると考えられていた。
そもそも魔法使い相手は一度攻撃を受けて、その間に近づくのが一番の対処法なのである。そして一度の魔法で一人までしか殺せないのなら、二人で突撃すればいい、とそういう考えだ。
そのため数で勝てているうちは、こちらの優勢が続く。前線の士気の低下だけが懸念事項だが、少なくとも今のうちはまだ瓦解するようなことはない。
考えてみてもやはりやることは変わらない。故に隊長は、前に進み出ながら再び声を張り上げようとし――
「――が!?」
突如、衝撃とともに、自分を含めた数十人が吹き飛ばされた。
その閃光から何が来たのかはわかる。おそらく魔法。それも初歩の魔法ではない中級以上の魔法を食らったのだ。
視界の先、微かに見えるのは一人のカラー。帽子を被り長い杖を持つその彼女がやったのだろう。
そしてややあって、再びそのカラーによる魔法が人間達を襲う。
「――ら、ライトビーム!」
その魔法を発動したのは、人間達にはあまり知られていない人物であった。
現カラーの集落の長。ペール・カラーだ。
……きゃー!? めちゃくちゃ見られてますよー!?
ペールは森の奥から向けられてくる視線に内心、慌てふためいていた。

今自分は、無我夢中でひたすら魔法を放ち続けている。それに伴い注目を浴びていたのだ。
しかもそれは敵だけではない。周囲、味方のカラーの戦士団からもそれとない意識が向けられてきている。
魔法を放つ度に向けられるそれらの注目に、ペールは身震いした。
……こ、これが戦場……！
集落を守る戦士団の皆や、尊敬する先代の長であるケッセルリンクが常に立ち向かっていたその場所。
そこに自分が立っている。あの情けなく、弱気で、内気な自分がだ。
その現実に、場違いではないか、と不安になるがどうやらそうではないらしい。
今も周囲の仲間からは、意外、とも、興奮、とも思える感情が不確かながらペールに向けられている。その感覚を自分は初めて味わった。それを何というかは知っている。それは、
……き、期待されてるんですよね……。
期待。それは自分に最も縁がないと思っていたものだ。
おそらく戦場に出て皆の役に立ったからだと思う、と考えペールはそれを理解する。今自分は、
……長として、皆の役に立ててるのかな……？
詠唱を終え、魔法を放ち、軽く息を入れながらそう思う。もしそうなら、それはやはり、昨日のケッセルリンクからの言葉のおかげなのだろう。
ケッセルリンクに頼りきりなのは、自分が一番わかっていた。集落の皆がケッセルリンクの方を尊敬し、頼りにしていることも。
だが、自分には自信がなかった。わかっていてもそれを皆に言うことなんて出来なかったし、ケッセルリンク無しで集落をまとめ、人間を追い返すことが出来るとも思っていなかった。
だから甘えた。問題を先送りにした。ケッセルリンクがいる間は大丈夫だろう。彼女がいなくなってからでも遅くはない、と。
でもそれは間違いなのだ。それも理解している。
……それからじゃ遅いんだよね……。

自分は最低だ。なにせそれを全て理解していながら、昨日ケッセルリンクが戦いに出ない、と自分達を突き放すような発言をして、ようやく動き始めたのだから。
もう助けてはくれない、とわかってから問題に対処しはじめた。それは長としての怠慢でしかなく、
……やっぱり私って駄目だなぁ……。
そう思う。
でも、それだからこそ、別の思いもある。
それは今、戦場に出たからこそわかったことで、
……こんな最低な私でも、役に立てるんだ……。
それは単純な事実だ。自分は普通のカラーと比べても魔法を得意としている。
そしてそれは、戦場では大きな意味を持てる。純粋な戦力としてだ。
故に、皆が自分に期待する。今、この場所にいないケッセルリンクではなく、ペール・カラーを頼りにする。
簡単なことだったんだな、とペールはケッセルリンクの言葉の意味をようやく呑み込む。
自分なら出来る、というのは事実を言っていたのだ。無論、ケッセルリンクは自分に期待し、信頼していたのも嘘ではないだろう。だが、彼女はこうなることをわかっていたのだろう。だからこそ昨日の発言だ。
なら、自信を持て、というのは、
……私の心の持ちようで、いつでもこう出来たってことだよね。
自分がもっと前にこうやって行動を起こしていれば、自分は長としてもっと皆に認められ、違った状況になっていたのかもしれない。
「ああ……」
やはり、自分は馬鹿だなぁ、と敵に向かって魔法を放ちながらペールは思う。
こうやって一つ一つ、積み重ねていけばよかったのだ。それが自信となり、認められることに繋がるのだと。今の今まで気づけなかっ

た。
……今からでも間に合うかな……。
そうあってほしいと思う。
そうするために、ペールは震える声で周囲に向かって声を出す。
「……み、皆さん」
その声に、カラーの戦士団は戦うことを止めずに耳を傾ける。
「……私が、大きいのを撃ち込みます。皆さんも、苦しいかもしれませんが続いてください」
言う。
「――お願いします」
と、ペールは嘆願するような言葉を投げかけた。
それは命令ではない。今なお未熟者である自分には、命令はおこがましいことだ、とそう感じたからだ。
その思いが通じたのか、彼女たちは一斉に頷き、
「――了解」
と応答した。続く言葉は隊長からだ。
息を吸い、その思いに殉じる為の指示を口にした。
「――皆！　長の命令に従って！　一斉に行くわよ!!」
「はいっ!!」
「……！」
その応答に、ペールの身体が震える。普段から震えることは多いが、怯えからくるものではない。
ペールは、その心に従い、魔法を詠唱し、
「――ホワイトレーザー!!」
それを発動した。光の線が煌めきながら敵の中央に向かっていき、
「――放てぇ!!」
同時に、カラー達の魔法が敵集団に向かって幾重にも降り注いだ。
轟音とともに、人間達が吹き飛ばされていく。その数は少なくとも数百単位。全体から見れば少ない数だが、それは間違いなく、カラー達の反撃の狼煙と成り得る一撃であった。
だが、そんな時だ。

「……!?」
不意に、土煙の中から震えが来た。
と、同時に木が破砕したような音とともに倒れる。
そちらにカラー達が視線を向けた直後、そこから声が来た。野太い男の声で、
「――ああ!? 前線に出た直後に集中砲火ってどうなってんだあ!?」
馬鹿でかい声とともに影が現れる。それは二メートルを有に超える大柄な影だ。
そしてそれと同じくらいの大きさを持つ、巨大な得物を持ち、
「というかめちゃくちゃ痛えじゃねえか!! くそっ、ふざけやがって!!」
それは両側に刃が付いた戦斧であり、男はそれを振り回すと、
「覚悟は出来てんだろうなあ!? てめえら全員ぶっ殺してやる!!!」
目の前にあった木に、その一撃をぶち込んだ。

――その頃。
「……」
「……」
レオンハルトは宝箱だんごと再び対峙していた。
景色は同じ。距離は変わらず。
……ああ、これはアレか……。
レオンハルトはことここに至って、自分がどんな状況に陥っているか理解する。
それを冷静に受け止めようとしたその時、
「……」
宝箱だんごがこちらを見て、へっ、と笑ったのを見て、
「――――」
――レオンハルトは頭が沸騰するのを感じた。

迷子

森林地帯での戦闘は、カラーの一斉魔法攻撃により一時的な優勢を得るはずであった。

しかしそれは、突如飛び込んできた相手に止められた。

……い、一体何が……!?

ペールは視線を森の奥に向ける。そこには自分の身長の二倍近い大きさを持つ影が手に持った戦斧で木を割り砕くように折った者がいた。それは、

「森ってのは狭苦しくて面倒だな!!」

……え、嘘!? 人間!?

視界に映ったのは人間の頭だ。姿形も人間のそれだが、その身体の大きさからペールは、

……きょ、巨人族かデカントかと思った……!

今はもう殆ど存在しない種族とそれから生まれたとされるモンスターを思い浮かべていた。人間にしてはかなり大柄でそう思わざるをえないのだが。

そんな巨体の人間が木を薙ぎ倒すと、憤っているような声で、

「おらお前ら! チンタラやってねえで俺に続け!!」

「……了解!!」

指示の一喝に混乱しかけていた兵士たちの目に再び統一された意思が宿る。声を上げ、再度こちらに向かって前進を開始する。

それを見て、ペールは気づいた。

「――あ、あの大きい人を狙ってください……!」

「はいっ!」

即座に頷く声と、実行する音が聞こえたのは、彼女らも同じ考えに至ったからだろう。それは、

……あの人が向こうの頭……!

そういった思いだ。豪奢な鎧や見た目から想像出来るその戦闘力。兵達が即座に従ったその動き。その全てからあの男が人間の軍の指

揮官だということを推測する。
そしてそれを取り除けば戦いが有利になる。ならば取る行動はそれだ。
その考えに従い、カラーの戦士団は一斉に、その大男を狙って矢と魔法を放った。
「――エンジェルカッター！」
ペールもそれに加わるため、大男に向かって魔法を発動する。
光の刃を加えた幾つもの魔法が木々の隙間を縫って、かの者に殺到した。
そして、
「――――！」
視界の先、大男に魔法が直撃した。
……当たった！
魔法は回避不能の特性を持つ。故に当たるのは必然。しかし直撃させることが出来たのは良い結果だ。防御か何かするのだと思っていたというのもある。凄腕の戦士であるなら魔法を弾いたりすることも可能だということをペールは知識の上でだが、知っていた。
だが、その時だった。視界の奥でとある動きを見た。
……え？
そして驚きを得る。と同時に耳に声が届いた。
「――ああっ!? そんなもん効くかあっ!!」
「う、嘘っ!?」
爆煙や、光の奔流の中から出てきた大男に驚愕の表情を浮かべる。
確かに魔法は直撃した筈だ。なのに、彼の鎧は多少の汚れや傷はあれど、肝心の大男にはダメージを与えた様子が見えない。
自分を含めたカラーの戦士団が驚く中、こちらを確認した大男が声を上げた。
「俺あ魔法が大嫌いなんだよ!! だからなあ……」
空いた左手で自身の胸を叩き、金属音が鳴る。それは鎧を指しているもので、
「陛下に無理言って魔法耐性がバカ高い鎧を貰ったんだよ!! これを

装備してから楽になったぜ!!」
「……っ！」
そんなこちらにとって都合が悪いものを偶然敵が装備してるとは、何とも運が悪い。思わず顔を歪めるペールだが、相手は止まってくれない。今も視界の先で大男が自慢気にしながらも、
「つっても痛いもんは痛いけどな!!　でもまあこれがある限り魔法使いは敵じゃねえ。つまり――」
大男が戦斧を構え、
「――俺は無敵!!　最強ってことなんだよ!!!」
突っ込んでくる。
「……っ、矢を放て！」
先に反応した隊長が部下に指示を飛ばし、今度は矢を飛ばす。
魔法が効かないというなら物理攻撃。それは至極当然の帰結であったが、
「おおおおおおおおおおおぉぉぉ――!!」
大男が戦斧を振り回し、矢をその刃と、衝撃によって吹き飛ばす。
そしてそれによって起こる結果はそれだけじゃなかった。
「この木も、邪魔邪魔邪魔あ――!!」
唸りを上げ、戦斧が振られる度に木々が次々と薙ぎ倒されていく。その結果にペールは戦慄した。
……む、無茶苦茶ですよぅ……！
かの巨体にとってこの木々の間隔は手狭なのはわかる。だが、だからといって立ち塞がる木を倒しながら進もうなどと普通するだろうか。
しかもその動きは巨体に反して高速のもの。周囲の兵士たちを置き去りに、どんどんこちらとの距離を縮めてくる。
そして、
「がはは……！　ようやく顔がちゃんと見えたぜえ――!!」
「……ペール様！　後退を！」
「――っ！」
隊長から掛けられる必死の言葉、それを聞いた直後。

「はっ！　遅えんだよ馬鹿が！　死ねえ――!!」
「――！　がっ――」
「きゃあああああぁぁ――!?」
　跳躍するようにこちらに急激に速度を上げて突っ込んできた大男がとうとうこちらと接敵する。幾人かのカラーをその戦斧を横薙ぎに振り回す。直撃を受けたカラー達が嫌な音を立てて吹き飛ばされ、直撃しなかったカラー達も戦斧の一振りによる衝撃で吹き飛ばされる。
「あ、あ……!?」
　運良く、その直撃を免れた側の存在だったペールはその光景を見て愕然とした。自分の目の前で、味方が殺される。それは彼女にとって初めての目撃したものであり、
「う……っ……！」
　胸の奥からすえた何かがせり上がってくる。それを何とか我慢しながら、ペールはその原因となった相手を視界に映した。
「がはははははっ!!　弱い弱い!!」
「あうっ……！」
「かっ……くふっ……」
　視界の先で起こっているのは――蹂躙だ。
　味方は未だ戦い続けているものの、大男の攻撃の連続に、その範囲にいた味方が容赦なく屠られていく。
　しかし最悪はまだ訪れていない。それが来たのは、今だった。
「――おおおおおぉぉ!!　戦士長に続けぇ――!!」
「カラーを打ち倒せ――！」
　遅れてやって来た人間の兵達。彼らの雄叫びにペールが絶望の表情になる。
「あ、ああ……！」
　地面に座り込み、身体を震わせる。
　違う、戦わなきゃ、と頭では理解するも、身体が動いてくれない。
　……動け、動いて……！
　それは初めての戦場、初めて目の当たりにする死に、身が竦んだ結

果であった。
そして、
「――お？」
「――!!」
遂に、大男と目が合ってしまう。
その瞬間、ぞくりと背筋に悪寒が走る。死の予感を身体が無意識に感じたのだ。
そして皮肉にも、その死の予感を感じたことで、ペールの身体は一時的にだが、動いた。
「――ら、ライト！」
「――！」
動いたのは口と手。光の初級魔法を発動し、それを相手にぶつける。
閃光が走り、周囲を煌めかせるも、その攻撃が先程の相手に通じるはずもない。故に結果は必然で、
「がはははは!! んなもん効くかあ!!」
呆気なく弾かれ、笑い飛ばされる。そして多くの味方を屠った巨体が自分の方に向かって高速で迫る。
……あ、駄目なんだ……。
そこでペールは悟ってしまう。目の前に迫りくる大男は自分とはレベルの違う相手なのだと。
自分はカラーの長であり、向こうもおそらくだが、敵の指揮官。立場でいうなら上に立つ者ということは共通している。
しかし、自分と向こうでは格が違うのだ。なにせ自分は今まで引き篭もってばかりで、碌に戦ってこなかった情けない上役。
そして相手は、きっと今までかなりの数の戦いを経験してきた百戦錬磨の戦士。毎日のように自分を高め、誰かの役に立ってきた者。
こちらで例えるならケッセルリンクのようなもの。幾千もの死線をくぐり抜けてきた――いわゆる英雄のような者達。
そんな彼らに凡人である自分は敵わない。立ち塞がっても道端の石ころのように簡単にあしらわれてしまうだけ。

……長として、役に立たないといけないのに……！
だが、ペールは迫りくる巨大な敵を目の前に、震える手で杖を握りながら思う――まだ死にたくない、と。
せっかく、自分は長として集落の皆の役に立ちたい、と思った頃なのだ。それがこんなところで終わるなんて嫌だ、と。
「おらおらおらあ!!　死ねえ――!!」
「――――！」
しかし現実は非常だ。どうしようもなく。この世界では弱者はあっさりと死ぬ。打撃の暴風を前に、ペールはそれを苦々しくも悟った。
生まれ持った才能、生まれ持った強者に、弱者は敵わない。
……わ、私は……駄目な人でしたね……。
死を目前とし、ペールは自らの生を省みて、後悔をした。
もし、もっと経験を、研鑽を積んで、成長していれば結果は変わったのかもしれない。もっと何かを成せたのかもしれない。
……ごめんなさい……ごめんなさい、皆……ごめんなさい、ケッセルリンク様……！
何も成せなかった。そんな自分を情けなく思い、ペールは心の中で謝罪をした。
そして自分の終わりを受け入れた。そんな時だ。
不意に、森に轟音が響いた。
「――!?」
そして遅れて衝撃が来る。
「何だ――うおっ!?」
「――！」
そして地面が揺れた。
「地震か……!?」
「皆、姿勢を低くしろ……！」
人間の兵達も、カラーの戦士達も、一瞬、戦いを中断せざるを得ない。そんな衝撃。
それは地震のようで、また少し違う何かだった。

森の奥から響き渡る、重低音。地面に何かを叩きつけたかのようなそんな震え。
……これは一体……？
森の生き物がざわめき立つのをペールは感じた。翼のある者は空に飛び立ち、地に足つける者は必死に逃げ惑い、隠れ潜む。
まるで森全体が何かに怯えているようで――
「――」
と、そんなことを考えていた時。
ようやく震えが止まった。
「お、収まったか……？」
誰も彼もが、一瞬、敵も味方も忘れ安堵したように息をつく。
だが、それはほんの短い一時で、直ぐ様戦いが再開されようとした時。
――それは来た。
「――!?」
突如、轟音が間近で聞こえた。先程よりも近い距離だ。
……ち、近いというより……！
ペールが嫌な予感を感じたその瞬間。
「――――！」
地面に衝撃が走り――周囲を巻き込んだ破壊が生まれた。

その破壊は突然のものだった。
森林地帯の上空。数十メートルかそれ以上。軌道上、空中を巻き込んだそれは、宙を斬り裂き、次いで木々を斬り裂いた。
そして最後に、
「――――ッ!!」
それが地面に到達する。
そこで止まるかと思われた衝撃は、さらなる破壊を呼んだ。
地面を断ち割り、土飛沫が上がる。
衝撃波によって周囲の地面、木々は少なくない揺れを生み、近くに

あるものは吹き飛んだ。
それは偶然、森林地帯で戦闘を行っていた両軍をも巻き込み、
「――――!?」
人間もカラーも、等しく運の悪い者達が衝撃でその場から吹き飛んだ。
それを引き起こすのは人間ではありえない。
衝撃が走った直後、森の奥から一つの影が現れる。
それは人間の男の容姿をしていた。ダークグレーの一張羅を来た金髪の美丈夫。
「……」
その右手には長く蒼い剣が握られており、圧倒的な存在感とともに周囲を見渡している。瞳は朱く、鋭いもので、その視線を目撃した者は、彼が周囲に発する赤いオーラと息が止まってしまうような重圧に戦慄をおぼえる。
何よりもその表情は、迫力に満ち溢れていた。
彼は眉根をひそめながら辺りを見渡し、何かを探しているようだった。その顔は真剣そのもの。触れれば即座に激発してしまいかねないような、そんな雰囲気だ。
「……ッ!」
そして彼の視線が、一点を捉える。
多くの者は男が何を探しているかうかがい知ることは出来なかったが、偶然、彼と同じものを目撃したものがいた。
一人の人間の兵士だ。彼は偶然、目の前に現れた存在に、目を丸くする。
「あ――宝箱だんご……」
条件反射気味に兵士がそう呟いた瞬間。
男の表情が変化し、口を開いて絶叫した。
「――そこかあああああああァァァ!!!」
その咆哮ともいえる声とともに、男がその手に持った剣を振るう。
そして、再び森を激震させた衝撃が周囲を襲った。
――人間やカラーを遥かに凌駕し、英雄すら屠るこの世界の絶対的

強者。
――魔人が戦場に出現した。

「ぎゃあああああああぁぁぁぁあ――っっっ!?」
人間の兵が吹き飛ばされ、衝撃が周囲に走る中、ペールは同じ様に悲鳴を上げていた。
「きゃあああああああ――!?」
……な、何なんですかこれ!?
ペールは頭上から来る風と衝撃、そして土から頭を守りつつしゃがみこんでいた。混乱した頭でそれを考察してみるも、地震、雷、竜巻などの自然現象に、今の状況と一致するものは存在しないことがわかり直ぐに断念する。本の知識も当てにならないものだ。
なら、ドラゴンでも降りてきたのだろうか。確かに翔竜山には多くのドラゴンが生息する。上空からブレスでも撃たれたのか。意外と間違ってはいなさそうな考察に、ペールはそうかも、と頷くもそんな場合ではない。
だが、そんな中、声が聞こえた。それは人間の声で、
「――ごらぁッ!! どこいきやがった!?」
「ぴっ!?」
近くから聞こえてきた怒声に身体をビクッと跳ねさせ、思わず変な声を上げてしまう。
そんな中、林を掻き分けながらペールの前に現れたのは、
……人間……の、男……?
見た目は人間のそれ。高めの身長に、金髪の髪。鋭い赤い目。そして整った顔立ち。結構タイプ。って、そうじゃない。
ペールは男の容姿を見て人間である、と断定しかけたが、その雰囲気に違和感も彼女は畏怖を覚えてしまう。人間ではありえないその存在感は、ペールが知る中で最も強いケッセルリンクや先程の大男を数倍濃くしたようであり、異彩を放っていた。
しかしそうであるなら人間以外であるなら該当する種族は少ない

がと考え、
「また逃げたか……？　くそっ、どこまでもコケにしやがって……！
俺は迷子じゃねぇぞカスだんご野郎ッ!!」
「ま、迷子……？」
言葉が聞こえた。迷子とはどういうことだろう。目の前の相手にはあまり似つかわしくない言葉にペールが思わず声に出す。
すると、男がこちらに振り向き、
「誰が迷子だぁ!?　俺は迷子じゃねぇ!!」
「ひぃっ!?」
その圧力がこちらに向けられ、ペールは命の危機を感じて、反射的に頭を下げた。
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!　そうですよね！　迷子じゃありませんよねっ!!」
「ああ、その通りだ！　分かれば――」
と、そこで男は一度言葉を止める。
そして、こちらをまじまじと見つめ、
「……お前、カラーか」
「は、はいっ！　そうですがなにかっ!?」
「……ってことは――げっ」
男が周囲を見て、嫌な予感が当たったと言わんばかりに表情を歪める。
近く、周辺には先程の衝撃で吹き飛んだ人間達が身体を打ち付けて、地面で呻いている。全員ではないにしろ死屍累々の有様だ。原因は不明だが、そのおかげで自分は助かったともいえる。
この惨状を見て何か思うことがあるのだろうか。それともこの人も巻き込まれて――
「……人間とカラーを吹き飛ばしちまったのか……」
「……へ？」
さり気なくとんでもない言葉が彼の口から放たれ、ペールは間の抜けた声を出す。
……吹き飛ばした？　……この人が？

まさか、と思う。だが、目の前の彼は微妙な表情でバツが悪いといった様子で頭を掻いている。どうにも本当のような態度だ。
しかももう一つ気になるのは、人間とカラーを、という言葉。
それは自分が人間なら出てこない言葉じゃないだろうか。人間なら他の人を人間とは呼ばないだろう。
そんな事を考えていると、その対象である目の前の彼は、何やら思案するように、顎に手を当てながら、
「……さっさとここから離れないと――あ、いや待て」
「……？」
立ち去りかけていた彼の視線が再びこちらを捉えてきた。何やら思いとどまったような反応にペールは首を傾げる。
そして彼はこんなことを聞いてきた。
「……お前、この森詳しいか？」
「……え？」
「いや、何というかな。あの山――翔竜山の行き方を教えてほしいんだが……」
ペールはその言葉に目を丸くした。いまいち意味がわからない。何故なら
……えっ……山に向かって真っ直ぐ行けばいいのでは……？
と、思うがよく考えてみればこの森は迷いやすいのも確か。多少、方向音痴気味かもしれないが、森を知らないのであれば迷子になるのも致し方ない。
ややあってペールは答えを彼に伝えた。
「え、えっと……つまり迷子になってしま――」
「――迷子じゃない」
その言葉は被せ気味に止められた。
彼は視線を明後日の方向に向けながら、
「そう、決して迷子じゃない……ちょっと、ほんの少し、道に迷ってしまっただけだ……！」
「……あ、そうなんですねー」
「分かってくれたか」

「……翔竜山に行きたいなら、山を見ながら真っ直ぐ進めばいいのではないでしょうか？」
「それは無理だ」
「……」
迷子だ、とペールは確信した。無言のまま笑顔を浮かべてみせる。
そんなこちらの表情に何を思ったか、彼は、
「……出来れば道案内を頼みたいんだが……」
「……ええっ……それは……」
別の要求を提示してくる。そのお願いに困った顔になるペール。
道案内なら可能だ。引きこもり気味ではあるが、腐ってもこの森に生きるカラーの端くれ。森の歩き方は熟知しているし、たまに薬草を採取しに行くことだってある。たまに。
なのでそれは難しい頼みではない――今の状況がなければ。
故に断ろう、とペールはそれを口にしようとした。
「……それはちょっと――」
だが、そんな自分の言葉はまたしても、遮られることとなった。
「がはははははははは――っ!!!」
「っ！」
「うおっ、うるさいな」
馬鹿でかい大声とともに、林の中から大男が飛び出してきた。彼とともに耳を抑えながら、目の前に現れた男に視線を移す。そして気づくのは、
……さ、さっきの巨人男!?
普通の人間の倍近い身体の巨体に岩のようなごつごつとした肉体。そしてそれを覆う鎧と手に持った戦斧。間違いない、先程まで戦っていた人間の指揮官だ。どうやら向こうも無事だったらしく、馬鹿笑いしながら身体を見せつける。
「よくわからんが、耐えてやったぞ！　この俺があんな衝撃程度でくたばるか!!」
「……暑苦しいな」
彼の言葉に内心で同意する。

だが、そんな悠長にしてる場合ではなかったようで、
「ようし！　戦いを再開するか!!　死ねえ――!!!」
「ひぃっ!?　きゅ、急すぎ――」
あまりにも性急な突撃に、ペールは為す術がない。この距離と相手の速度だと、効くかどうかはともかく、魔法の詠唱も間に合わないし、相手の攻撃を捌いたり、躱したりするような体術はペールには備わってない。
……こ、こんな出落ち気味に死にたくないですよぉ――!?
心の準備も出来ていないため、情けなく涙目になってしまうが、相手は止まらない。岩石のような巨体がペールに向かって迫りゆく。
万事休す、とペールが瞳を瞑った。
だが、
「……あ、あれ？」
いつまで経っても予想される衝撃が来ない。あの速度ならもうとっくに死んでいてもおかしくないのだが、
……もしかして気づかない間に死にました？
それなら僥倖かもしれない。痛みもなく死ねたのだから、
……いやいやいや、とペールは頭を振った。そんなはずがない。身体の感覚は未だ確かに存在する。五感は健在だ。
なら、なぜいつまで経っても来ないのか、それを確認するべく、ペールは瞼を開くと、
「……ったく。面倒な奴らだな……」
「――!?」
視界の中、金髪の彼が大男の振るったであろう戦斧を手で掴み取り、抑えていた。大男は必死の形相で力を込めている様子だが、戦斧は全く動かず、相当の力の差があることが窺える。
だが、その体格差は明らかに大男の方が有利に見える。彼も背が高く、よく見れば体つきもそれなりに鍛えているのか、しっかりしている様だが、大男の巨体には敵うべくもないはず。
しかし現実では彼の方が大男を抑えている。それを相手もおかしく思ったのか、大男が、

「く、くそっ!!　何故動かんのだ!?　ぐぐぐ――!!!」
顔が赤くなるほど力を込めてている様子だが、てこでも動かない。
それを億劫そうに眺めている彼が、
「……おい、カラーの」
「――え、あっ、私ですか……？」
不意に首だけで振り返り、横目でこちらを見てくる彼に、びっくりした様に反応するペール。よそ見して大丈夫なのだろうか。
だが、その心配は無用の様で、その表情には全く苦しそうな様子は見えない。身体も全く動いていないことから、力を入れているのかどうかも不明である。
そしてそんな彼が、
「――取り引きだ」
「……へっ？」
またしても間の抜けた表情で返すペールに、彼は構わず話を続けた。
「俺がこいつらを何とかしてやる。その代り、お前は俺を翔竜山まで案内しろ」
「……え、それは――」
どういう取り引きなのか、釣り合っているのか、そもそも可能なのか。そんな言葉が頭に思い浮かぶものの、戸惑いがまだ大きいのか、ペールの口からは具体的な言葉が出ない。
それを考えている間に、彼はこちらに鋭い目を向けて、
「……どうする？　出来れば頷いてほしいんだが……」
「えっ、あっ、は、はい……」
その困ったような表情に、ペールは反射的に頷いてしまう。彼の口端が少しだけ上がる。
「――決まりだな」
それを了承と受け取ったのか彼も頷きを返し、再び正面を向く。
――それが行動の始まりだった。
彼は、目の前の大男を下から視線で射抜くと、
「……というわけだ。悪いが邪魔させてもらうぞ――」

「何を――ぐうっ!?」
不意に、彼が目の前からかき消えたように見えた次の瞬間。
彼は大男の懐に飛び込むと、助走を付けて足を背後に振り上げ、
「本来なら真面目に相手してやってもいいんだが……生憎と今は休暇中なんでな。殺しは無しだ。だから――」
それを思い切り大男の腹にぶち込み、
「――とりあえず消えろ」
そのまま上に向かって大男を蹴り上げた。
「がああああああああぁぁぁ――――!?」
とんでもない衝撃が大男を襲ったのか、一瞬の硬直の後、大声を上げながら、相手が上空に吹き飛んだ。そのまま彼は森を横断するように飛んでいき、
「せ、戦士長――!?」
それを見ていた兵士たちの叫び虚しく、森の奥に消えて見えなくなった。
……え、ええ……!? 何今の!?
あまりに衝撃な光景を目の当たりにして、ペールが引き気味に驚く。周囲のそれを見ていた者達も同様に、呆然としたように口をあんぐりと開けている。
そしてそんな反応を引き出した張本人である金髪の彼は、軽く息を入れて、自らの足に視線を移すと、
「……結構重かったが、何とかなったな……」
と、呟いた。ペールは内心でツッコミを入れる。
……お、重いで済んじゃうんだ……。
流石にそれは人間やめてる気がする、と思ったのもつかの間、再び彼は予想外の行動に出た。
大男を蹴り飛ばした足を確認し終えると、こちらに振り返り、すたすたと真っ直ぐ歩いてくる。
……こ、今度はなに……?
内心、怯えながら彼の行動を見守っていると、彼が目の前にやって来る。

そして、こちらに向かって屈み込むと、
「――っと」
「――――」
こちらの足の下と背中に手を差し入れ、すっと自然な動作で持ち上げた。
……えっ。
あまりにも自然過ぎるスムーズな動作に、戸惑いも置き去りにしてそれを理解する。横向きに、こちらを抱っこするその抱き方は、
……お、お姫様抱っこ――!?
それは女の子の夢の一つ。男に縁がないカラーで、しかも引きこもりのペールにとっては憧れであっても、一生縁がないと思っていたはずのもの。それを唐突に叶えられてしまい、
……お、おち、落ち着いて私。こ、こんなの只の抱っこみたいなもので――
心を落ち着かせようとそう言い聞かせる。だが、彼はこちらに顔を向けると、
「悪いが、このまま適当に蹴散らしながら向かわせてもらうからな。我慢してくれ」
「……ひゃい」
……無理無理無理――っ!!　落ち着くなんて無理ですよぉ――!!
彼の顔が近い、というか身体とかも当たってるし、距離も全体的に近すぎる。男に免疫力ゼロのカラーにとってこの仕打ちは厳しすぎる。そう分析するペール。
もう何なのだ、この人は、と何気なくペールは声に出す。
「あ、貴方は何者ですか……!?　人間じゃないんですか……!?」
それは先程から頭にちらついていた純粋な疑問。最初の衝撃だったり、発言だったり、あの強そうな人を簡単にあしらったり、自然にお姫様抱っこをしたりするようなのが、普通の人間であるはずがない、とペールは断言する。
そしてそんな質問に彼は、
「……あー、まあ、名乗っても問題ないか」

何とも言えない声を出しながらも、
「……俺はレオンハルト――魔人だ」
「――――えっ」
魔人。と、名前の後にそんな単語が聞こえ、ペールは、もう本日何度目かの表情を浮かべた。
それは呆気に取られたような、あまりの驚きに言葉を失ってしまった表情であり、
「因みにお前の名前はなんて言うんだ？」
「……」
そんなことはお構いなしに質問を返してくる彼、もとい、レオンハルトに、ペールは顔を赤くしながらも、
「……ペール・カラー」
「ペールだな。わかった」
素直に名前を教えた。頷きを返すレオンハルトの顔を見ながら、ペールは不意に自らの尊敬する人を思い出す。そんなかのお方に語りかけるように、
……ごめんなさいケッセルリンク様……私の初めてのお姫様抱っこの相手は魔人でした……。
と、事実を報告した。
「……後、結構速度出すからな。しっかり掴まってろよ」
「……はい」
こくり、と頷き、ペールは素直にレオンハルトの首に手を回す。言うとおり、しっかりと彼に掴まって揺れが収まる中彼女は、
……でも、案外悪くないです……。
と、満更でもないように息を漏らすのだった。

翔竜山

――カラーの集落。

その外れにある小さな一軒家。そこには現在、とある大物が住んでいた。

日の当たる部屋にて、大きなチェアに腰掛けて本を読む女性。その姿、女性として完成に近い魅力を持つ彼女はごく普通の行動であっても絵になる存在で、周囲には不思議と落ち着いた空気が流れていた。

「……」

その彼女こそ、カラーの集落の先代の長。夜の王――ケッセルリンクである。

そしてここは彼女が長を辞してから住み始めた家。現在の彼女の住居がそこだった。

建物や人が殆ど見られないことから周囲に音は少なく、物静かな場所が好きなケッセルリンクが自らこの場所を指定して作らせたのがこの家だ。そのため、彼女にとってはもっとも落ち着いた気持ちになれる場所であった。

だが、

「……ふう」

ケッセルリンクは息を吐き、読んでいた本を閉じる。その表情には微妙な色が見え隠れしていた。その理由は、

……戦いはどうなっただろうか……。

額を抑えてそれを思う。ケッセルリンクは人間との戦いの結果を思い不安を感じていた。

昨日、自分からペールに厳しい言葉をかけ、もう戦いには出ないと表明したのにも関わらず情けない限りだ。結局はこのように心配してしまうのは、彼女と集落の皆のことを信じきれていないのだろう。自分の内心を分析しながら同時に戒める。

他ならぬ自分が言ったことなのだ。信じないでいてどうする。ましてや今からでも戦いに参戦しようか、などと考えるのはおこがましい。

だが、それでいて一つ希望もある。というのもこうやって自分が今、この場所でゆっくりと穏やかな時間を過ごせているということは、少なくとも致命的な結果にはまだなっていないということだろう。

戦闘は未だ続いているのだろうが、集落にまで敵の進撃を許すことにはなっていない。それだけでも戦いに不慣れなペールにとっては上々だろう。指揮官が不安定だとそれは下にも大きな影響を与える。伝播されるものは少なくない。それこそ部下にまで不安を覚えさせ、致命的な失敗をしてしまうこともある。

だが今日を乗り越えれば成長もするだろう。それを少しずつこなしていくことでそれを実感してくれれば後は何をしなくても前へ進んでくれるだろう。

その時は、自分も集落の一員として戦うのも悪くない。まだその時がきていなければだが。

と、そんなことを考えていると、

「――ケッセルリンク様ぁー!!」

「……む……？」

外から人の気配と音を感じて数秒後、こちらの名前を呼ぶ声が外から聞こえてきた。

ケッセルリンクは直ぐに部屋から出ると、玄関の戸を開き訪問者を迎える。案の定、そこには同胞であるカラーの少女がいた。

「……どうかしたのか？」

「ケッセルリンク様！　あの、そのっ……大変なんです！」

と、おそらく伝令を任された少女が焦ったようにそう言う。どうにも的を得ない説明だが、その焦燥感に嫌な考えが脳裏によぎる。

まさか、と思いつつケッセルリンクは真剣な声色で尋ねた。

「……戦闘はどうなった？　まさか――負けたのかね？」

「あっ、いえ！　戦いには勝ちましたし、人間の部隊は撤退しています」

ただ……、と少女はそこで言いづらそうに表情を歪めた。勝利の報を聞いて安堵しかけたケッセルリンクだが、直前でそれを引き戻され

る。
　再度口に出すのはそれを促す言葉で、
「なら一体何が？」
　戦いには勝利したが言い辛いことがある、と聞いてケッセルリンクが最悪の想像を頭に思い浮かべる。戦いの結果で引き起こされる悲劇など想像に難くない。
　……まさか、ペールが……。
　それは親しい者に何かがあったということ。それを思い、身を硬くしながら言葉を待つ。
　少女はケッセルリンクの再度の問いに、ややあって口を開いた。
「その……ペール様が――」
　その言葉に身を跳ねさせる。やはり嫌な予感が当たってしまったのか、と絶望しかけ――
「――男の人に拐われていきました」
「！」
　ケッセルリンクは目を見開かせながら思う。最悪、ではないが良い知らせでもない。生きているなら助け出せるのだ。
　まさしく不幸中の幸いと言うべきだろう。ケッセルリンクはそのことを思いながらも、取り乱したりするようなことはせず、一度頷き、
「……そうか。……人間の、兵士に拐われていったのかね？」
　と詳細を聞くために声を出した。
　だがその問いを再度、裏切られることになるとは、ケッセルリンクは夢にも思っていなかった。
「あ、いえ、聞いた話によればどうやら魔人のようです」
「……魔人？」
　予想外のものが話に登場し、ケッセルリンクは僅かに眉をひそめる。
　一体どういうことなのか、何故急に魔人が出てくるのか、そんな疑問を浮かべ、次ぐ声が出ないケッセルリンクに、少女の口から詳細が語られた。
「はい。その、私達が戦っていたら、突然の地震とともに戦場に現れて

……人間を蹴り飛ばしたと思ったらペール様を、その、えー……か、抱えて、そのままの状態で次々と人間を蹴り飛ばしながら戦場から去っていきました」
「……」
ケッセルリンクは言葉を失くす。驚き、というより意味が分からないからだ。
ややあって、頭にそれを落とし込み、吟味する。そしてまず行うのは確認で、
「……すまない。よくわからなかったのだが……蹴り飛ばしたというのは？」
「人間です。人間を木を越す勢いで蹴り飛ばしてました」
「……そうか」
再度の返答を聞いてもよくわからないが、それが本当であるなら滅茶苦茶な話で人間には到底不可能。魔人であるなら確かに説明はつくのだが、蹴り飛ばす意味がわからない。
……人間を苦しめにきたのか？
魔人は暴虐の存在。人間に暴力を振るうこと自体はおかしくないが、それにしては生ぬるいように感じるし、男の魔人だというならカラーを狙わないのも不可解だ。
しかし常識外れの存在の考えを読むことは難しいだろう。ケッセルリンクはその疑問を頭の隅にしまい込む。魔人の考えはこの際後回しだ。今重要なのは、
「……拐っていった、ということだが……。何処に行ったかはわかるかね？」
「あ、はい。おそらく翔竜山ではないかと追跡中の隊からの報告が……ただ、魔人の足取りがあまりにも速く、正確には追いきれていませんが――」
「――いや、充分だ」
頷きを返し、ケッセルリンクは扉から外に出る。
そして家の戸を閉めると、足早に歩き始めた。突然、動き始めた元長の反応に少女が若干の戸惑いを見せる。

「け、ケッセルリンク様？　一体何を――」
「決まっている――」
少女の声に即座に答える。必要最低限の事は聞き終えた。ならば次は行動に移す番だ。
その答えは今、ケッセルリンクが出来ること。ケッセルリンクがそれを行うのに最も可能性が高く、それでいて彼女の信条に則ったもの。自分の言葉に従い、行動と責任を果たした彼女を守ること。
ケッセルリンクは強い意思を込めて、それを口にした。
「――彼女を、助けにいくつもりだ」
――魔人から囚われの少女を助けるため、ケッセルリンクは今一度、その力を振るうことを決めた。

「――ら、ライトビーム！」
「――！」
詠唱を終え魔法を発動すると杖の先から光の光線が放出されて大型の影を飲み込んだ。
魔法の直撃を受けた大きな巨人のような魔物――ギガントが断末魔を上げた。大きな音を立てて地に伏す魔物と、それを為したカラーの少女――ペール。
それを見ていた魔人レオンハルトは、感心するような表情で声を上げた。
「へぇ、ギガントを一撃か。お前、中々やるな」
「え、えへへ……大したことないですよぅ」
未だに腕の中にいるペールを褒め称える。そしてどうやら満更でもないのかもじもじとしながらペールは照れていた。レオンハルトは倒れたギガントを横目に見ながら足を進め、
「いや、これなら俺は登頂に専念出来る。雑魚は任せたぞ、ペール」
「あっ、はい！　私に任せてください！」
気合を入れるように杖をぎゅっと握りしめるペールに、レオンハルトが、ふっ、と軽く笑みを零す。

……思わぬ拾い物だな。
この辺りの地理に明るいだけではなく、魔法の腕も長けている少女。迷子――ではなく、少し道に迷いそれを宝箱だんごに煽られ怒りのまま剣を振るった挙げ句、更にはそれで人間とカラーの戦争に介入してしてしまった時はどうなることかと思ったが、結果、良い同行者が出来たのでよしとする。――あの宝箱だんごは絶対許さないが。次に見かけたら殺す。レオンハルトは再び湧きかけた憤りを抑えながらペールの魔法の実力を見て、
……これは楽出来そうだな、
と、楽観を覚える。こちらの腕は彼女を抱えていることで動かせない。宣言通り雑魚は任せて、ペールでどうにも出来ないような相手が出たら彼女を降ろして自分で戦うとしよう。
それまではこのまま登るとするか、そう考えレオンハルトは足を進めた。
だが、
「――って、そうじゃありません!!」
「おっ」
笑顔のまま何やら固まっていた様子のペールだが、不意に大きな声を上げる。どうやらこちらに言ってるようだ、とレオンハルトは耳を傾けると、
「何で普通にパーティ組んじゃってるんですか私!? 任せてください、とか言っちゃってますよぅ!?」
「……そっちかよ」
全力でツッコミを入れるペールに、レオンハルトはツッコミを呟く。
「てっきり一緒に登ってることを指摘するのかと思ったが……」
「そう! それもですよ!」
ペールは大いに頷く。テンション高いなぁ、と感心する中、ペールは上を指差した。
そこにはひたすら上に伸びる壁のような岩肌があった。その正体を、彼女は叫ぶ。

「何で私まで翔竜山に来てるんですか――っ!?」
二人がいる場所は、レオンハルトの目的地であるそれ。
ペールが指差した先、そこにはほぼ垂直に近い断崖絶壁が雲の上まで続いた細長い塔のような山。
世界最高峰の山――翔竜山。
その山麓に当たる崖の上でペールは絶叫した。
それを最も間近で聞いていたレオンハルトは、微妙そうな表情で視線を逸しながら、
「あー……うん、まあ……成り行きだ」
「な、成り行きって……」
その返答が予想外だったかのようにペールが愕然とする。しかしレオンハルトとしてはそうとしか言えないので、微妙に申し訳なく思いつつも視線を逸し続けて誤魔化すしかない。
……本当は山の手前で下ろすつもりだったんだがな……。
何となくまた道に迷いそう予感がしたので、山をちょっと登ったところまでは道案内をしてもらうことにした。別に自信がないわけではなく、あくまでも念の為だ。
それで結局はここまで来てしまったわけだ。もうすぐで山の中腹に差し掛かってしまう。
さてどうするか、とレオンハルトが思案する中、ペールが息を吐きながら、
「……ま、まぁ、別にいいですけど……」
「……いいのか？」
レオンハルトが目を丸くする。別にここで降りていってもいいのだが、という言葉は口にする前にペールによって言う意味を失った。
彼女は視線でこちらをチラチラと見ながら、指をつんつんと付き合わせる。
「み、道案内というか……取り引き？　を受けちゃったのは確かですし……人間を追い払ってもらったのは助かりました……まぁ、やり方はちょっとアレでしたけど……」
「アレ？」

「に、人間をボールみたいに蹴り飛ばしまくってましたよね？　し、しかも私を抱えながら……か、軽くホラーでしたよう……」
ああ、あれか、とレオンハルトは得心したように頷く。
ペールとの取り引きを交わした直後、レオンハルトは指揮官らしき人物をひたすらに蹴り飛ばした。数がそれなりにいるようだったので、お得意の首刈り作戦を無殺生でやろうとしたのだ。
鎧の色が違ったりしてわかりやすくて助かったり、やっぱりわからないので適当に身体のでかい奴を集団に向かって蹴り飛ばしてダウンさせたりした。
そしてその時のことを思い出しているのか、腕の中で若干震えているペールを見て、レオンハルトはバツが悪そうな表情で、
「……一応殺さないようにと思ってやったんだがな……斬るよりはマシじゃないか？」
「……生きてるんでしょうか……？　百メートルも飛ばされたら大体死ぬ気がします……」
「……」
そう言われると自信がなくなってくるから困る。
人間をやめて久しいし、感覚が麻痺してきたのかもしれない。ここ百年、戦ってきた相手は一部の魔人やキャロルやハンティの使徒二人。後は人間の指揮官くらいで雑兵は適度にやらないといけない時は戦うというよりは適当に蹴散らしてるだけなので何とも言えない。
……でもまぁ、ハンティ――はともかく、キャロルですら強めの打撃は耐えるしな。最初の奴以外は相当弱めにやったから大丈夫だろう。
手加減ってのは難しいなぁ、と思いつつその旨を簡潔にペールに伝える。
「……指揮官連中はそれなりに鍛えてるだろうしな。生きてるだろ」
そう断じる。
ともあれ、大凡の指揮官は文字通り蹴散らしたし、そうでなくても怪我人だらけだ。撤退していくのも確認したししばらくは問題ない

だろう。
　これでようやく目的を果たせる、とレオンハルトは思う。腕の中のペールも、
「……と、とにかく。道案内くらいなら全然問題ないですよ。……見晴らしのいい山でまで道案内が必要なのかは疑問ですけど……」
「そうか……」
　協力します、とそう言ってくれている。その誠意というか親切心にレオンハルトは感嘆する。後半は聞こえない。
　その気持ちに答えるべくレオンハルトは上を見上げて、決意する。
「――なら、行くか……！」
「は、はい。行きましょう」
　そう。当初の目的通り――
「――登山、頑張るぞ！」
「が、頑張ります……！」
　翔竜山の制覇。それを目指すため、声を出して道案内役のペールと共に意気込む。
　レオンハルトはそうして再び、ペールの指示に従いながら山道を進み始めた。
　――なお、このあと状況に流されてか、登山という言葉の意味がそのまんまだと気づいていなかったペールが一度それに気づき絶叫するも、結局うやむやになり一緒に進むことになるのだった。

魔軍参謀がいない日

大陸に生きる人類種の生活を脅かし全ての敵となる存在である魔物。そして実際に大きな脅威となり、数と力で以って人間を襲う魔軍。

そんな彼らの本拠地が魔王城であり、多くの魔物兵や魔物隊長、魔物将軍が詰め、使徒と魔人、そして魔王が御わす場所。

しかしその場所には現在、魔軍のキーマンである男の影が無かった。

魔人四天王の一角を敷き、魔軍参謀という要職に就く金髪灼眼の魔人――レオンハルトのことだ。

それもただいない、というわけではないし問題にもならない。魔王城にいないだけなら魔軍の遠征の際に何度もあることだし、特別珍しいことでもないからだ。

しかし今回の不在は意味が違う。なにせレオンハルトが魔人となってから初めての長期休暇なのだ。それはつまり、彼が暫くの間、何の仕事にも関わっておらず、どこにいるのかも一部の者を除いてわからない。また居場所がわかったとしても彼を頼りにすることはできない。

そして普段から様々なことに関わっているレオンハルトがいないということで、少なからず影響が出ていた。

しかし中には――

「カミーラ様。本日のご予定は如何が致しましょうか？」

「……いつも通りでよい」

「畏まりました。私は幾つかの仕事をこなしておきますので何かあればお呼びください」

普段と全く変わることなく日常を過ごすとある元ドラゴン種の主従や――

「チッ……レオンハルトがいないんじゃあ少し気をつけねぇとな……かふかふ」

レオンハルトがいない時はいつもよりも慎重に行動するようにし

ているリスの魔人がいたりしていた。
だが、そんな中でもレオンハルト不在の影響が最もある場所が二箇所存在した。

魔王城二階、会議室。
そこでは多くの魔物将軍による会議が行われていた。
長方形の机の上座、その直ぐ横には進行役を務める黒髪の女性が幾つもの書類を手に持っており、それを上から順に読み上げていく。
「――それじゃ、次の議題は……ん……戦略目標についての請願書か。担当の魔物将軍は？」
「はっ、私です」
「ん、それじゃどうぞ」
進行役の言葉を受け、一体の魔物将軍が挙手をする。そのまま彼女に促されると、少しだけ手元の書類を確認して、上座を見据える。
そして部屋全体に聞こえるほどの声量で、彼は意見を具申した。
「昨今の人間界の情勢は、繁栄著しくどうにも調子づいている様子。特に、我々魔軍と交戦を行っていない国家を中心に勢力を拡大させ、人間同士で戦争を行う始末であります」
最初に述べた前置きに、ふむ、と頷く声が出るも、周囲の魔物将軍らは古参の者を中心にこの請願が何を要求するものかを一瞬で理解した。
そしてその予想通りの言葉が魔物将軍から放たれる。彼は上座に座る金髪の少女に向かって強い意思を込めた言葉をぶつける。
「我々魔軍を無視してそのようなことをするなど言語道断。世界の支配者は我々魔物なのです。故に――」
彼はあくまでも淡々とした様子で言う。表面上は。
「――ここは調子に乗っている人間国家に鉄槌を下してやるべきでしょう。……つきましてはその任を私の軍にお任せ頂ければとお願い申し上げます」
「……」

その言葉に多くの魔物将軍らは、やはりそういう魂胆か、と予想が当たっていたことを確信するとともに、半ば呆れながら意見を出した魔物将軍に対して鼻白む。

だが、実のところこの手の要請は数多くあるのだ。魔物というのは基本的に、良く言えば好戦的、悪く言えば野蛮であり、特に魔軍に所属する者などはその傾向が強い。それでいて人間を虐げて良い思いをしたいといった欲も強く、人間の町を攻めたい、と思う魔物は数多く存在するのだ。

この場に多く出席するレオンハルト閥の魔物将軍達ですらそういった思いがないとは言えない。ただ彼ら場合はその種族特性上、頭が回ること、そして組織の規律や部下の統制を重視するため、ある程度の自制心や理性が働くので我慢が出来る。

なのでその点は別に構わない。彼らが気にいらない理由は、敢えてその要請を、レオンハルトが休暇でいない間に出してきたことだ。

魔軍の実働、その実質的なトップがレオンハルトであり、何か要望があれば彼を通す必要がある。

しかし彼はこういった要請には滅法厳しく、納得するに足る理由やメリットがなければ基本的には通らないと見ていいし、そもそも彼に意見を述べるのも結構な重圧が掛かる。

私欲に則った意見や疚しい動機は即座に見抜かれてしまっているのではないか。そう思うほどの強い視線がレオンハルトから向けられるのだ。

彼に直接意見をぶつけるのは憚られる。なので今を狙ってきたのだろう。ましてや今この場の責任者はこの方なのだ。

魔物将軍達はその要請に、どう答えるのか、上座に座る人物に注目する。そこに座する彼女は金髪ツインテールの少女であり、

「……」

魔人レオンハルトの使徒――キャロルだった。

魔軍参謀であり、本来のその席の持ち主である主に代わって、代理を任されたキャロルはその席に座って議長の役割を果たしている。

普段は快活で純粋な性格であり、主であるレオンハルトを心から慕

うキャロルは、仕事には忠実だが、どうにも緊張感に欠けるような、気が抜けるような振る舞いをすることもあって、使徒にしてはあまり緊張しない相手だ。

なのでレオンハルト相手では言いにくいことも言いやすいし、ともすれば意見も通しやすいかもしれない。そんな目論見もあって魔物将軍は満を持して、意見を出したのだが、

「……」

彼女は、未だぴくりとも動かなかった。腕を組み、瞳を閉じたまま微動だにしない。その要請を耳にしたというのに、キャロルは考え込んだようにそのままの状態で居続けていた。

普段の彼女ではありえない振る舞い。普段であれば即座に声を上げそうなキャロル。

しかし今のその様子は、彼女の主であるレオンハルトのように、その意見をじっと思案しているように見えた。

そこでようやく、おや？　と魔物将軍達がキャロルの様子を見て期待する。

これはもしかするともしかするかもしれない。キャロルがレオンハルト張りの思慮深さを発揮し、魔物将軍の要望を却下してくれるのやも、と。

要望を出した側である魔物将軍も、普段とは違った様子のキャロルに胸騒ぎを覚える。

キャロルの次の発言の如何によって決まる。緊迫した空気の中、魔物将軍達はその発言を待った。

が――

「……」

一向に口を開く気配がない。一体どういうことなのか。思案を重ねるのは良いことかもしれないが、それにしては些か長過ぎる気がする。それほどまでに迷っていることや、何か思うところがあるなら一度それを口にしてもよいところだ。この場には要望を出した魔物将軍以外にも多数の魔物将軍がいる。口に出すことで考えがまとまる可能性もあるのだ。

……だが、どれだけ待ってもキャロルは動かない。こうなっては他の者が声を掛けたりするところだが、この空気では最初に声を出すのは少し憚られるところだ。

「……キャロル？」

そんな中、声を掛ける役目を果たしてくれたのは、進行役を務めている一人の女性。

魔人レオンハルトのもうひとりの使徒――ハンティであった。

彼女がこの場にいるのは珍しい――どころか初めてのことであった。

何でも彼女は、他の魔人の使徒と違い、その殆どの時間を主であるレオンハルトから離れて過ごしているらしい。そのため魔軍に所属するほとんどの者が彼女を知らず、レオンハルトと多く関わる魔物将軍達ですら見かけたことは殆どない。それほど姿を見せるのは珍しい人物だ。

その実態には謎が多く、おそらくはレオンハルトからの命令で何かの任務に就いており、そのためあまり姿を見せないのでは、というのがレオンハルト麾下の魔物将軍達の見解だ。

しかし珍しいからといって舐めている者はほぼ皆無だ。と、いうのもハンティはレオンハルトにその強さを見込まれて使徒にされたらしく、実際にレオンハルトに師事しているらしい。

そのためか、妙に貫禄があり、魔物の中でもそれなりの強さをもつ魔物将軍達から見ても、その佇まいには全く隙がない。それもあってハンティは、それ相応の畏怖を集めているのだが――今この状況においては、あまり重要ではない。

今この場で重要なのは、その立場。ハンティがキャロルと同じ使徒であるということだ。

幾らキャロルが普段は緊張感の欠片もないような立ち振る舞いであったとしても、彼女は使徒なのだ。そして魔物社会は縦社会。その立場が魔物将軍達より上位の存在であり、実力すらも上の相手。そんな相手の気に障るようなことは出来ない。キャロルに限ってないことだとは思うが――万が一、相手に不快に思われたら殺されるかもし

れないのだ。
　そうでなくとも立場は弁えるべきだ。そういった組織の規律を、レオンハルト麾下の魔物将軍達はよく知っていたし、常日頃から遵守してもいる。
　レオンハルトが下の者に寛大であっても、自分達がそれに甘えて度が過ぎた振る舞いをしてはならないし、その逆も然りだ。弱者であっても立場が上なら敬意を払い、立場が下であっても実力があれば敬意を払う。規律的で軍人然とした個体や、好戦的で武人然とした個体が多くを占めるレオンハルト麾下の魔物将軍。彼らの信条がそれであった。
　――と、大袈裟な矜持を持ち出したところだが、実のところ古参の魔物将軍達であればキャロルに声を掛けるくらいはごく普通に可能なのだ。
　ただまあ、同じ使徒であるハンティが声を掛けてくれるのであればいいだろう、という程度のことでしかない。
　と、魔物将軍らが見守る中、ハンティはキャロルに近づく。そしてもう一度、
「キャロル？」
　と、声を掛けると――
「……すぴー」
　――不意に、寝息を立て始めた。
「……っ！」
「ぐ……！」
　その信じられない光景に、レオンハルト麾下の魔物将軍達は揃って声を上げそうになり――しかし、それを鋼の意志で抑えた。これほどツッコミどころ満載の醜態を見せられてもその相手は自分達の上役である使徒なのだ。これが部下や同僚であるなら容赦なくその横っ面をぶっ叩いて目を覚まさせてやるのだが、相手は部下ではない。
「……ふにゃ……レオンハルト様……それは駄目、ですわ……すぴー」
　キャロルが寝言を漏らし、締まりのない笑みを浮かべた寝顔を見せる。

今すぐその一本だけハネてるアホ毛を引っこ抜きたい衝動に駆られるもそれを自粛する。もしくは大声でツッコミたいところだが、それも抑える。
魔物将軍達は思う。自分達は規律あるレオンハルト麾下の魔物将軍なのだ。その自負と誇りを捨てはしない。
……だが、レオンハルトがこの場にいれば、もしくはこの光景を見れば、容赦なくぶっ叩け、とも言いそうな気がする。妙にノリがいい時があるからあの御方は不思議だ。
一体どうするか、魔物将軍達が自問自答を行っていると不意に動いた影があった。
「……はぁ」
ハンティだ。彼女はそんな幸せそうな寝顔を見せるキャロルを見て、溜息をつく。
そして次の瞬間、目を見開くとキャロルに向かって手を向け、
「――なぁに寝てんのさっ!? 雷撃!!」
「きゃふんっ!?」
雷の魔法を浴びせた。雷の衝撃と痛みがキャロルの全身に一瞬で行き渡ったのだろう。妙な声を上げながら飛び上がるようにして目を覚ました。
「――あれ? 皆さんお揃いのようで。おはようございますわっ!」
「おはようございますわ、じゃない。何会議中に寝てんの」
「……あら? そうでしたか? そうだとしたら……寝顔が見られてしまい恥ずかしいですわ……」
キャロルがしゅんと項垂れるのを見てハンティが、まったく、と呆れるように頭を抱える。同時に魔物将軍達は安堵したように息をついた。
穏便に収拾がついて何よりだ。ツッコミを入れるのもどうやら避けられそうである。自分達にとってキャロルは上司なのだ。如何に恥ずかしいことをしようと――
「……あれ? でも会議中だというのにレオンハルト様がいませんわ。ということは……これは夢ですわね! そうと決まればレオン

ハルト様の部屋でレオンハルト様召喚してあんなことやこんなことを……きゃんっ！　レオンハルト様、恥ずかしいですわ！」
「恥ずかしいのはその頭の中身だ!!!」
身体をくねくねと悶えさせるキャロルに、敬語すら忘れ、魔物将軍達は言葉を合わせた。

会議室で魔軍の重鎮とレオンハルトの使徒たちが会議をしている頃。
いつもと違う光景を見せる部屋がもう一つあった。
魔王城一階――厨房。
普段は魔王城の食堂にやってくる多くの魔物達の為に食事を作り続けるコック達の戦場であり聖域。外から連れてこられた人間の料理人である彼らは待遇面での融通もあってそれなりの誇りをもって働いているのだ。
だが、今現在、その彼らの姿は見られなかった。
お昼のピークも過ぎているとはいえ、食堂に誰も来ないというわけではない。そのため本当なら今の時間も交代で休憩を取るとはいえ、数人は待機しているのが常であった。
しかし今日に限ってはその習慣も破られる。食堂も今の時間に限り誰も入れないように封鎖されていた。
このようなことをしては魔物兵からの不満が噴出するように思える。実際、食堂にやってきた魔物兵らは入れないことに一度は憤ったように声を荒げる。
だが、扉の張り紙に書かれた注意書きを見るとその怒りは直ぐに収まり、仕方ないか、と諦めの言葉を口々に言いながらも素直に去っていった。
そこに書かれていたのは厨房で働く人間のコックや、魔王城に詰めている魔物兵や魔物隊長、魔物将軍。そして使徒。さらにはあの魔人ですら諦めさせる言葉が書いてあった。
こんなことが出来る相手は限られている。それどころか、世界に一

人しかいないだろう。
そう。扉の張り紙には、簡潔な一文でこう書かれていた。
――『魔王様使用中』と。

厨房の中央にある調理台には、所狭しに料理が並んでいた。
その料理はどれも完璧な見た目と香りをしており、その光景は食欲を唆るものであった。
――見た目だけなら。
何しろ厨房に立ち、ひたすらに料理を作り続けているのは何を隠そう、この城の主人であり世界の支配者でもある魔王。
「……」
――必殺料理人、スラルだった。
普段はただの魔王でしかない白髪灼眼の少女であるスラル。やることと言えば部屋に引きこもり、せこせことよくわからない研究を続け、新しい魔法や何かを発見してはそれを本に書き続けるか、気にいった部下を部屋に呼ぶことくらい。後は部屋でごろごろとしながらお菓子を食べながら小説を読んではそれに影響されて痛い設定や名前を紙に書いてはそれを妄想しながら悦に入る毎日。
そんなスラルだが、一度厨房に立ち、可愛らしいエプロンを身に着け、包丁とおたまを手に取れば、その料理は――必殺必中。
手順通り、手際よく、ともすれば普通に作ってるだけで何の面白みもない材料と調理手順から出来る料理は摩訶不思議。
見た目と香りは完璧だが、それを口に含めばそこには未知の味が広がっており、天に昇る心地が味わえる。※直喩。
常人が食べれば発汗、目眩、発熱、手足のしびれ、痙攣、気絶を起こすが、魔人であれば問題ない。※問題しかない。
それこそが必殺料理人スラル。その真髄。彼女が作る必殺料理は言葉や文字で表すことことは不可能なので、一度食べてみてほしい。そしていつもその練習に付き合わされる俺の苦しみと、それを美味しそうに食べるガルティアの異常さを実感してみてほしい。

――とある魔人Ｌの手記より。

「……」

ラウネアが厨房に隠されていたその手記を見つけて持ってきたので、何となくそれを見ていたムシ使いの魔人――ガルティアは、それを閉じると再び料理に向き直った。

そして口にするのは料理とその感想。

「こんなに美味いのになぁ……。あいつ、見られないと思って無茶苦茶書きやがるな……」

これを書いた奴に心当たりがありすぎるガルティア。というかバレバレである、とガルティアは苦笑する。

……どう考えてもレオンハルトだろ、これ。

そもそもスラルの料理を食べたことのある者は限られているし、それを食べて何とか平気なのは自分とレオンハルト。そしてその使徒のハンティくらいだ。レオンハルトは慣れただけで相変わらず苦しんでいるのだが。

さらに言うなら料理の練習に付き合っているのはレオンハルトだけなので奴以外はありえないのだ。自分は料理を振る舞われることはあっても料理の練習に付き合ったことはない。レオンハルト曰く、「お前の評価は参考にならん」とのことだ。

しかしこの手記はおそらく素面では書いていないだろう。ところどころ字が乱れているところを見るにスラルの料理を食べた後、おかしくなった状態で書いたのがこれだろうな、と、ガルティアは推測した。そしてさらに思うのは、これをスラルに見せたらどうなるだろう、とそんな嫌がらせを一瞬思いつくが――

「……やめとくか。帰ってきた時にまた前の時みたいに死にかけたらマズいしな」

「ガルティア？　何か言った？」

「っと……何でもねぇさ。それよりじゃんじゃん持ってきてくれ」

「？　それならいいけど……」

と、不意にこちらの声に反応したスラルに、ガルティアは手記を隠しながら自然に追い返す。再び調理に戻ったスラルにガルティアは、

……あっぶねー……急に振り向くのは無しだろ。
と、先程まで黙々と料理を作り続けていたスラルに内心で軽い文句をつける。
そして自分の腹を叩き、
「おーい、ラウネアー」
「……？」
ひょこ、と腹に空いた大きな穴から顔を出すガルティアの使徒ラウネア。そんな彼女にガルティアは手記を差し出し、
「ほらこれ、元あった場所に戻してきな」
「……」
ラウネアはその手記を手に取ると、言いつけ通り腹から這い出ると、そのまま壁を伝って向かっていった。これで多分、大丈夫だろう。
……まぁ、あいつも今頃楽しんでるだろうしな。こういうのは野暮ってもんだ
ガルティアは普段から働き詰めのレオンハルトを思う。あいつの久々の休暇らしいしなぁ、と。
さっきのを見られていたら、休暇から帰ってきた時にまた休暇になりそうだった。ガルティアとしても、普段から自由にさせてもらってる分、代わりに働いている友人を労うくらいの甲斐性はある。
なのでガルティアとしてもレオンハルトが休みを取るのは良いことだと思う。好きなことをする時間くらいあってもいいだろう。
でもなぁ、とガルティアはもう一つの不安要素を思って微妙な顔になる。
……このままでもマズそうなんだよなぁ……。
それは今も料理を作り続けるスラルのことだった。
レオンハルトがいなくなってまだ４日程。最低でも後３日は帰ってこない。
今は特筆しておかしな様子はない。たまにぼーっとしていて、心ここにあらずといった感じになるくらいだ。後は毎日のように料理を振る舞ってくれるくらいだ。
ガルティアにとって、スラルの料理が食べれるのは嬉しいことだ

が、同時に不安もある。
それは、3日後。そしてそれ以上、レオンハルトが帰ってくるのが遅くなった時に、スラルが面倒くさい状態になるだろうということ。
そしてこのままスラルの料理を食べ続けたら舌が彼女の料理の刺激に慣れてしまい、他の料理が味気なくなりそうだという自分に対する不安。その二つだ。
だが、それを考えながらもガルティアは楽観的に構えてもいた。
スラルのことは3日後以降にそうなってから考えればいいし、料理のこともまだしばらくは大丈夫だろう。
それに、レオンハルトのことだ。出立前にああ言ったってことは最低限の日数で帰ってくるつもりだろう。ガルティアはレオンハルトの性格もよく知っていた。
……あいつはそういった約束は破らねぇしな。
故にそこまで心配していない。思うのは一つだけ。
ガルティアは遠くで休暇を楽しんでいるであろうレオンハルトに向けて言うように小声で、
「……ま、俺の舌が肥えない内に帰ってくればいいぜ」
「……また、何か言った？」
「いや、何でもねぇよ。……へへっ、じゃあ食うか」
完成した料理の山を前に首を傾げるスラルを見て、ガルティアは一応、
……それまでは俺が面倒見ないとだなぁ……。
と、3日後以降を思い、ほんの少し憂鬱となった。

ドラゴン

「――へぇ、お前カラーの長だったのか。道理で結構やるわけだ」
「そ、それほどでもないですよう？　私より強い人はいますし……毎日お仕事は大変だし……」
翔竜山を昇り続ける魔人レオンハルトと、その腕に抱えられながら道案内役を務めるペール・カラー。
ただ無言で登り続けるというのも味気ないからか、レオンハルトが盛んにペールに話しかけており、ペールの方も無難に言葉を返している。
魔人とカラー。つい先程会ったばかりの二人の会話は思ったよりも弾んでいた。
そして話題はペールの長としての仕事の話に移る。彼女が長だということをつい今しがた知ったばかりのレオンハルトは溜息を漏らすペールに同意するように頷きを返し、
「あー確かに。大勢の人をまとめるのは大変だわな。書類なんかの細かい作業もだが、何より色んなやつと関わることになる」
「そ、そうなんですよ！　私、知らない人と話すのが苦手でいつも失敗しちゃうんです……！」
その言葉に大いに理解出来る部分があったのだろう、ペールにしては珍しく、興奮したように声を上げて、ぶんぶんと首を縦に振って同意を示す。
だがそれを見てレオンハルトは頭に浮かんだ疑問を何気なく口にした。
「？　でもお前、今こうやって結構話せてるじゃねぇか」
俺、一応魔人なんだが、とレオンハルトが言外に魔人と普通に話せるなら問題ないのではないかと疑問を呈す。
しかしそれを受けたペールは少しもごもごとしながら視線を逸し、
「そ、それは、そ、その……れ、れ、レオンハルト、さんが、は、話しやすいから……だと、私は思います……」
「……そうか」

腕の中でもじもじとしながらそう言うペールに、レオンハルトは短い言葉だけで返答した。
そしてペールの態度を見て思うのは、
……妙に反応がいいな……。
と、そういう思いだ。
何せ自分は魔人なのだ。それも魔人四天王、魔軍参謀を務める大物。自らそれを言うのは何とも恥ずかしいが、それは事実で、配下の魔物や使徒。同僚の魔人からもそう見られているという自覚はある。
そして周囲はそんな自分に対して畏怖を持つものだ。聞けば自分は普通にしていても結構な威圧感があるらしく、気軽に話しかけるのは憚られる存在であるらしい。
……俺の立場からすると良いことなんだがな。
魔軍をまとめる立場のレオンハルトからしてみれば、それは周囲に舐められていないということであり、威厳を保っているということ。
そしてそんな現実がある中でペールの、話しやすい、という評。それは微妙に頷けないものが、レオンハルトにはあった。
……でも、妙に好意的なんだよな……。
魔物ですら話しかけるのを戸惑うなら、人間種は余計にそう感じるはずだ。
それとも年頃の女性というのはそういうものなんだろうか。
ふと気になってレオンハルトは聞いてみた。
「ペール」
「は、はい？　何でしょうか？」
急に名前を呼ばれて戸惑ったのだろう、ペールが疑問符を頭に浮かべる。
そしてレオンハルトは自らの疑問を何気なく口にした。
「お前、俺のことどう思ってんだ？」
「――――」
その言葉にペールは動作を停止した。

声も出ず、表情も固まってしまったペールは、内心でまず驚愕を得た。
そして次に連続で来たのは、既知からの興奮。
レオンハルトから来たその問い。その意味を、ペールは知識の中から掘り起こし、心の中で絶叫した。
……きゃ、きゃーーーっ!? こ、これ! この展開知ってます!
私、知ってますよ!
男性から投げかけられる自己評価の問いは、概ね一つの意味を有している。それは、
……わ、私のことが気になってるってことですよね!?
つまりそれは、レオンハルトが、自分への思いを打ち明けてきたにも等しい行為なのだ。
何しろこういった展開はペールがよく読む小説の中で、時に男性側から女性側から、異性へのアプローチとして使われている。
……ど、どどどどうすれば!? な、なんて答えるのがいいんでしょうか……!?
どう返答するかをペールは考え、動揺しつつも胸が躍っていた。
それを自覚すると顔がどんどんと熱くなっていき、心臓が強く脈打つ。
ある意味それが答えではあるが、ペールは戸惑いながらも、さすがに出会って一日の男性とそういう関係になるのはどうだろうと思いもする。
だが、と。ペールは自らの種族を思い、それを考慮する。
男性と接する機会があまりないのがカラーという種族である。
それはカラー全体が、人間を見下すような傾向に多い、ということや、そもそも今回の戦争のように人間の男性に狙われやすいということも関係する。普通の関係を、持つことが難しいのがカラーという一族なのだ。
故にカラーは子孫を残す際にも、外から人間の男を捕まえてきて、性行為だけを行う性奴隷として使い、一定の子供を身籠ると解放する、という方法を取っているのだが。

しかし中には、森の外に出て人間の男と普通に恋愛をして、関係を持ちクリスタルの色を青にして帰ってくるカラーも存在する。
そういったカラーは、いわゆる不良であり、集落の中では少し浮いた存在として苦言を呈されることも多いのだが、
……わ、私にはわかります……！　そういった掟は建前！　そして、嫉妬ですよね……！
ペールはそういったカラー達の嫌味や皮肉を、嫉妬心によるものだと確信していた。
何しろ自分もそうであったのだ。なのでそういった外で男性と関係をカラーを羨ましがる気持ちは大いに理解出来る。
そう、要は羨ましいの一言に尽きるのだ。幾ら人間を見下しがちとはいえ、カラーは女性だけの一族であり、男性との恋愛に憧れを持ってしまうのは致し方ないことなのだ。
だが、カラーの中にははその一生を同性だけで過ごし、男性経験がないままカラーとして一生を終え、変化の時を迎えるものも多く、男性経験があってもそれは性奴隷に抱かれて相手をしただけであったり、人間に無理やり襲われたというものが殆どで、外で恋愛をして男性経験を積んできた者など、仮にカラー１００人いれば数人ほどしかいない。
そのため、そういったカラーへの羨望と嫉妬を込めて、不良と呼ばれ、そういったことをするのは推奨されていない。
つまるところ、「抜け駆けすんじゃねぇぞ？」と、そういうことだ。
実際ペールも外から帰ってくる青いクリスタルの、そしてどこか余裕が出来て大人びたような同胞を見る度に、リア充爆発しろ！　と言わんばかりにライトレーザーをぶち込み、長としての権限を存分に使って村八分にしてやろう――と、そういう妄想をしながら鬱屈とした思いを抱え、部屋に戻って恋愛小説を読みながら自分を慰める日々を送り、こう思ったものだ――「自分にはこういった経験、一生出来ないんだろうなぁ……」、と。
だが、そうではなかった。
……ま、まさかの逆告白ですよ……！

根暗で引きこもりがちな自分がだ。しかも相手は自分好みの超イケメン。話してみた感じ性格も悪くないし、おまけに滅茶苦茶強い。人間ではなく魔人ではあるが、そこは大して気にならない。
ここにきてペールは、不良になる子達の気持ちが大いに理解出来た。物凄く恥ずかしいのは確かだが、こうやって真面目に告白されてはそうなるのもやぶさかではない。
……し、しかたありませんよねー？　い、いえ、私だっていきなりは困りますけどー、彼がどうしてもって言うからー……えへへ……！
過去に外から帰ってきたカラー達のように嬉し恥ずかし、といった感じで赤くなった頬に手を当てて目を伏せるペール。そして決意した。
「……？」
「……きゃ、きゃー……」
返答が返ってこないことを訝しげに思っているのか首を傾げるレオンハルトをちらりと見上げるも、思わず恥ずかしくなり小声で叫びながら顔を両手で隠す。不安に思っているところも良いかもしれない。
よし、とペールは意を決して深呼吸する。思うのは集落の皆に対する言い訳で、
……しょ、しょうがないですよぅ。だ、だって、ここ子供も作らないといけませんし……！　し、子孫繁栄は長として大いに貢献しなければならないのですっ！
だから、これはしょうがないことなのだと。ペールはレオンハルトを受け入れる言葉を返そうと口を開いた。
上空から風を感じたのは、そんな時だった。

「え、えへへー……」
「……」
……聞き方、間違えたか？
レオンハルトは未だトリップしたようにだらしない笑みを浮かべ

るペールに、自らの間違いを疑った。
固まって動かなくなったと、思ったら今度は顔を酷く赤くして震えて顔を抑えたと思ったら、次はこれだ。
高山病なども疑うべきだろうかとも思うも、体調が悪いわけではないらしい。
……まぁ、そのうち元に戻るだろう。
レオンハルトは一旦、それを放棄する。魔人の自分のことをどう思うか、なんて魔人に聞かれても答えにくいのも事実だ。きっと今はその答えを吟味しているのだろう――と思うことにする。とてもそうは見えないのは知らん。
ペールのことは少し置いておいて、レオンハルトは周囲を見渡しながら思う。
……大分、来たなぁ……。
周囲には霧のような低い位置の雲が漂っており、道も少しずつ険しくなってきていた。足場はしっかりとしているもの、周辺は崖が多数存在し、足を滑らせればさすがのレオンハルトでもただではすまないかもしれないし、加えて魔物の強さも上がってきている。と、いってもそれに関しては特に問題ない程度だ。レオンハルトは言わずもがな、ペールでも手に負えるレベルである。
……しかし、本当に高いな。
見上げた先、頂上は遥か上であり、雲に覆われて見えないまま。世界最高峰は伊達じゃないな、と不敵な笑みを漏らす。
それでも半分はいっただろうか、とレオンハルトが思案した時だ。
「……？」
レオンハルトは上空に風を感じ、少し遅れて気配を感じた。首をひねり空を見上げる。
すると、
「――――！」
レオンハルトは上空に影を見つけた。
翼をもった大きな影。それはこの翔竜山に多数生息する強大な種族。

それを確認し、レオンハルトは迷いなく、後方の壁際にペールを放り投げた。
「――悪い、ペール！」
「……あ、あの私――って、きゃんっ!?」
声を掛けてすぐであったため、対応出来なかったのだろう。ペールが地面を転がって壁にぶつかった気配がした。それでも受け身は取れているだろうし、これを食らうよりはマシだろう。我慢してもらうしかない。
レオンハルトがペールを放り投げた直後、上空からの風が直接的な暴威となって襲いかかってきた。
「――！」
レオンハルトは咄嗟にオル＝フェイルを引き抜き、それを左右に断つことで衝撃から逃れる。
そして高速でこちらの足場に、影が着地した。
その影は人のものではない。カラーのような亜人種でもなく、魔物ともまた違う。
かつて世界を席巻した翼ある一族。それは、
「ドラゴン……！」
『――――!!』
レオンハルトがその名を口にした瞬間、緑色の鱗を持つドラゴンが咆哮を上げた。
その全長は5メートルを越える巨体。ドラゴン種としては一般的な大きさのものだ。
だが、レオンハルトはドラゴンが目の前に現れたことに対し、不敵な笑みを浮かべた。
「ようやくお出ましって訳か……！」
ここからはドラゴン種の住まう土地。そういうことだろう。
この緑竜――ＧＲドラゴンはその先鋒といったところか。それを思い、レオンハルトは肩を鳴らして剣を構えると、
……ここからが本番だな……！
今後現れるドラゴン種に対する期待。――そして宣戦布告の意味

を込め、その魔剣による斬撃を緑竜に見舞った。

――その頃。

「――何やら騒がしいな」

翔竜山下層で、足を進めていたカラーの元長。

魔人に拐われてしまった現長、ペール・カラーを助けにきたケッセルリンクは、上空を見上げて呟いた。

遠く、空から耳に届くのは轟音と咆哮。それの正体を正確に、ケッセルリンクは推察する。

……ドラゴンが暴れているのか？

翔竜山に多くのドラゴン種が住んでいるというのはカラーにとっては有名な話である。なのでこれがドラゴンのものであるというのは直ぐにわかった。

しかし、問題はドラゴンの相手の方だ。

彼らは人間を越える強大さを持ち、並の者では相手にならない。

そして状況的にドラゴンと戦っているのは――おそらく、自分が追っている相手で間違いないだろう。

「……魔人」

その存在を思い、ケッセルリンクは胸に不安が渦巻くのを感じていた。

魔王の下僕である強大な魔人。その強さはドラゴン種の比ではないと聞く。何の目的かは知らないが、今頃その魔人がドラゴンを蹂躙しているところだろう。

そんな魔人を相手取り、ケッセルリンクはペールを救出しなければならないのだ。しかし、

「……それが私に出来るのか……？」

そんな弱音を吐露してしまう。ケッセルリンクにしては珍しいことだった。

だが、それほど勝算が薄いのは事実だった。ドラゴンが魔人を倒してくれれば楽かもしれないが、それは期待出来ない。一般的なドラゴ

ン種では魔人に敵わないだろう。噂に聞く八大精霊竜、四大聖竜といった存在なら魔人に匹敵するかもしれないが、見たこともない噂に縋ることはできないし、自分が行く前に魔人がやられてしまえば、魔人と一緒にいると思われるペールにも危険が及ぶだろう。

それを思うとケッセルリンクは足に力が入ってしまう。

「……急がねば」

そうなる前に魔人に追いつかねばならないし、やはり魔人は自分の力で打倒しなくてはならないだろう。

それにドラゴンについても不安要素がある。

それはカラーに伝わるとある噂だ。

ドラゴン種が多く生息する翔竜山。その頂上に到達したものは未だおらず、どのようになっているかは全くの不明。

しかし、その頂上には、嘘か真か――最強のドラゴンが今なおそこに君臨するのだという。

故にドラゴンを刺激してはならない。何せその最強のドラゴンは、――かつて魔王すらもその力で排することに成功した、この世界の最強生物なのだから。

――そこは、この世界で最も高い場所であった。

最も天に近いその大地の名は、翔竜山。

世界で最も高く、前人未踏の大地がこの場所だ。そこから見上げる先には一面の雲が広がっており、そのさきには世界の端が垣間見える。

日差しを遮る物は何もなく、陽光が辺りを照らし、どこまでも澄み渡った空。

それをただ眺めるのは――

「……」

一匹の猫、であった。しかしただの猫ではない。

それは人間大の大きさと赤いタキシードに身を包んだおおよそ猫とは思えない、ともすれば魔物と勘違いしてしまいかねない生き物で

あった。
普段は世界中を放浪しており、迷宮などの様々な場所に現れては、ひょうきんな口調で冒険者に難問を出題する不可思議かつ陽気な存在。
しかし今の彼には、そういった面影は全く見えなかった。
「……」
彼はじっと虚空を見続けて微動だにしない。
だが、周囲は違った。突如、空からとある巨大な影が現れる。
天を裂き飛翔するのは、白い輝きをもつ巨大なドラゴンだった。
通常のドラゴン種の十倍以上の巨躯を持つそのドラゴンは頂上に降り立つことはなく、器用にもそのままの状態で宙に留まり、大地に立つ猫に声を掛ける。
『――珍しい気配を感じて来てみれば……本当に珍しい顔に出くわしたな』
「……」
巨大なドラゴンがその巨躯に見合った声で、しかしゆっくりと語りかける。
対する猫は無言のまま、表情をぴくりとも動かさず全くの反応を返さない。
しかし巨竜はそれを別段不快に思うことはない。元より返事など期待していないのだ。故にそのまま一方的に言葉を続ける。
『……口を開く価値もないか？　それもそうかもしれんがな』
「……」
『何せ俺達ドラゴン種は……世界に追いやられた負け組だものな。今更、惨めな敗者には興味も沸かないだろうよ』
その声色からは、言葉の悲壮さから想像する悲しみの色は少ない。むしろ明るささえ滲ませてそれを口にする。それほどの時を得てしまったのか、はたまた別の感情の動きからか。それはわからない。
しかしそこで巨竜は言葉を区切った。次に一方的に報告するのは、
『……ま、それはいい。それより俺達の住処にまた脅威が現れたが……どうする？　どうにも滅茶苦茶強いみたいで、今も同胞が随分と

やられているみたいだが』
「……」
『興味なしか。もう数も随分と少ないというのに、薄情なやつだな、まったく……』
しかし巨竜の方も、はは、と乾いた笑いを声に出す。どこか自嘲するように
『……だが、未だこんな場所にいる俺も似たようなものだな』
「……」
そのような自虐にも責めるような言葉は吐かない。巨竜はそれを一抹の寂しさを覚えつつもそれを口にしない。
僅かに体躯を下に向けると、
『――でも、俺は行くぞ』
そう宣言する。顔を天に向けて巨竜は、
『自身の強さの自信や誇りが砕かれ、多くの同胞を失っても――こんな時に戦おうと思うくらいには同胞への親しみが残ってるものでな』
口にするのは彼への皮肉と、そしてやはり自嘲の響き。
そこで巨竜はその顔を再び彼に向け、
『――俺を哀れだと思うか？』
「……」
問いかけた。
反応はない。しかし続ける。
『哀れかもしれないし、何の意味もないかもしれない』
言葉を続ける。
『だが、俺達ドラゴンというのはそういうものだろう。戦いで負けて死んでも、それが勇敢であったのならそれを誉れとする』
口にするのはドラゴン種としての生き方。およそ千年以上昔から変わらないドラゴン種の誇り。
『……こうやって隠れ潜んで生きている今がそうとは言い難いけどな。はは、今ならアベルのヤツとも仲良くなれそうだ』
「……それはない」
お、と巨竜が声を上げた。僅かではあるが、返答を口にした旧友に

顔を向ける。
『ふっ、悪いな。さすがにアイツの話題は禁句か？』
「……」
しかし再び口を固く閉ざし、反応をなくしてしまう彼に、巨竜はやれやれと言わんばかりに息を吐き、
『だがまぁ、お前には悪いけどな。……最後に声が聞けてよかった。初めてアベルのヤツに感謝したい気分だ』
そう言って翼を動かし、身体の向きを変える。
その巨躯を眼下に向けて動かすと、
『それじゃ、俺は行くぞ』
声を真剣なものに変えて巨竜は言葉を紡ぐ。
『戦う以上は負ける気はない。自分で言うのもなんだが、俺にもドラゴンとして……四大聖竜としての意地があるからな……。だが、例え勝っても会うのはこれが最後だ』
故に、巨竜は最後の言葉を彼に放つ。かつての友であり、最も偉大な同胞であった自分達の王に対する言葉を、
『――じゃあな。適当するのも大概にしろよ』
「……」
返答が来ないことを最後に確認し、巨竜はその身を眼下に躍らせた。
雲を掻き分け、ぐんぐんと加速していく白の巨体は、直ぐにその身を見えなくした。
そして翔竜山の頂上には、彼だけが残される。
「……」
彼の名前は――ＫＤ。
かつてのドラゴン種の偉大なる王であり、世捨て人としてその力を奮わなくなったもの。
残された彼は何を思っているのか――その口は未だ黙したままであり、何かを語ることはなかった。

四大聖竜

夕暮れの中、立ち尽くす影がある。
「……一先ず、こんなもんか」
魔人レオンハルトだ。彼は息を入れて周囲を見渡す。
登れば登るほど、険しさを増していく翔竜山の山道で、平地となった広場のような場所で、レオンハルトは先程まで襲いかかってくるドラゴン種達と戦っていた。
その戦闘の結果として、周辺には多くのドラゴンの死骸が残っている。
「れ、レオンハルトさーん？　終わりましたか――って、うわぁ……容赦ない……」
同行者であるペールが岩の影から顔を覗かせると、周囲を見て震えた声を出した。
戦闘に巻き込まれないように隠れて縮こまっていたカラーの長に、レオンハルトは身体を向けた。
「今のところはこれで終わりだ。また襲ってこないとも限らないが」
「そ、そうですか……微妙に安心し切れませんね、うぅ……」
肩を落としてこちらに近づいてくるペール。そして周りにあるドラゴンの骸をきょろきょろと首を回して眺める。そして感心するような声色で、
「そ、それにしてもドラゴンってまだこんなにいたんですね。私、初めて見ましたよぅ……！」
「森に住んでいたら結構見そうなもんだが、違うのか」
地面に幾つか散らばったドラゴンの鱗を触っては、硬いとか重いとか、感想を言ってはしゃぐペールにレオンハルトは尋ねる。
「ど、ドラゴンは翔竜山の山頂付近にしかいないらしいです。下に降りてくることは滅多にないので……ひ、引きこもりの私は見たことありませんでした……」
「……引きこもりは別にいいんじゃないか？」

「うぅ……励ましてくれてありがとうございます……」
自分で言っといて落ち込むペールに、慰めの言葉を掛けるレオンハルト。こういう面倒なところが多少、誰かに似てるな、と思いながら、
「しかし……なるほどな。普通の人はドラゴンをあまり見ないんだな……」
「で、ですねぇ。よく山でしか取れない植物なんか取りに行く人達も、殆ど見たことないらしいです」
ふむ、と彼女の言葉に得心する。しかしそれと同時に、内心で思うのは、
……俺はよく関わるんだけどなぁ……。
そんな釈然としない思い。レオンハルトは今まで関わってきたドラゴンを思い返してみる。
最初に戦ったドラゴン魔人の、ギリ――ギリ……ぎ、ギリアム。そしてプラチナドラゴンの魔人であるカミーラに、ネフライトドラゴンの七星。後はハンティがドラゴン・カラーだったか、と、レオンハルトは脳内で一通り自分の知り合いを並べてみる。
そう考えてみるとドラゴンとは結構関わっている気がするも、生きてきた年数的にはそうでもないのかも、とも思う。３００年近く生きて四体ならそうでもないように感じる。今日だけでそれを大幅に更新してしまったのだが。
「そ、それにしてもレオンハルトさんは強いんですねっ……！　ドラゴン相手にここまで一方的だなんて……さ、さすがです……！」
「ん？　ああ、まあな」
と、ドラゴンについて考えていたらペールから急に褒められる。両手をぐっと握ってどうにも興奮した様子だ。
そんな彼女の賛辞を受けて、レオンハルトは軽い様子で、
「知り合いに何体か、も――ドラゴンがいるからな。正直、ドラゴン相手の戦闘は慣れちまった」
「し、知り合いにドラゴンがいるんですかっ!?」
驚いたように目を丸くするペールに頷きを返す。
彼女はそこで息を大きく吐くと、

「はぁ～……凄いんですね……。れ、レオンハルトさんなら、もし伝説のドラゴンが現れても勝っちゃいそうです……」
と、そんなことを言ってこちらを見上げてくる。
レオンハルトはその発言に、眉をひそめた。
「……伝説のドラゴン？」
「あっ、えっと……伝説のドラゴンって言うのは過去にいたとされる滅茶苦茶強いドラゴンのことです」
こちらのオウム返しに、それを知らないのだろうとペールが気を利かせて説明してくれる。彼女は指を順繰りに立てながら、解説するように、
「ふ、文献では、かつてのドラゴンの時代には、最強のドラゴン王と、それに付き従う強大な力を持ったドラゴンが複数存在したようです」
そこでペールは指を立てて、
「四大聖竜に八大精霊竜っていう存在がいて、ドラゴン同士の戦争では大いに活躍したそうです。今はもうその殆どが存在しないらしいですが……」
「なるほど……詳しいんだな？」
「あ、はいっ。カラーの集落には長しか閲覧することのできない古い記録が載った書物があるので……」
「……そんなことを俺に教えてよかったのか？」
「……れ、レ、レオンハルトさんならいいかなって……」
「……そうか」
なぜそこでどもる、と思ったがそれは置いておく。考えるのは彼女に教えてもらった、その貴重な古代の記録の話。
……四大聖竜に八大精霊竜ねぇ……戦ったら楽しそうだけどな。
と、その強さに期待を抱くレオンハルト。
強大なドラゴン種の中にあってそう謳われる存在なら、その実力は強大であろうことは、容易に想像がつく。もし戦えばそれなりに満足感を得られるであろうことも。
そしてそんな強いドラゴンが、今はもういなくなってしまったことに、レオンハルトは残念を感じざるを得ない。ひょっとすれば一体や

二体くらいは生き残っているのかもしれないが、期待は薄いだろう。
だが、貴重な情報であることには変わりない。
「……教えてくれてありがとうな」
「っ！　い、いいいえっ！　い、いいんですよっ！　レレレオンハルトさんなら何でも教えますのでっ！」
……こいつ、大丈夫か？
緊張したように声を震わせまくるペールに、さすがに心配になるレオンハルト。しかし体調が悪いわけではなさそうだけどなぁ、と疑問に思いつつ、
……ま、もし出会ったらやってみるか。
と、まだ見ぬドラゴンに思いを馳せる。それこそ帰ったらカミーラや七星に聞いてみるのも悪くないかもしれない。教えてくれるかは微妙だし、この上ないくらい嫌そうな顔になるのは予想がつくから、無理かもしれないが。
「……お喋りはこんなところにしとくか。そろそろ――」
先に進むぞ、と言葉を紡ごうとしたレオンハルトは。
「――っ!?」
不意に気配を感じ、それを中断する。
「あ、レオンハルトさんっ――って、きゃあっ!?」
声を掛ける間すらなく、レオンハルトはペールの服の襟首を掴んで後方に放り投げる。
次の瞬間、空から光の奔流がレオンハルトを襲った。
「ぐ、おおぉ――！」
直撃を受ける刹那、レオンハルトは何とかオル＝フェイルを引き抜きそれを切断することに成功する。
しかしそれは今まで受けたものの中でも、
……重い……！　ふざけた威力だ……！
斬り裂くことは出来たものの、気を抜けば一瞬で剣が弾き飛ばされてしまうほどの衝撃。そして力を入れてなお、こちらと拮抗する勢いにレオンハルトは苦悶の声を漏らす。分かたれたそれが、地面を抉り、破壊を撒き散らした。

そしてややあってそれが収まると、レオンハルトはその来訪を目の当たりにした。
「こいつは……！」
風を切り裂くような音とともに、大きな影がレオンハルト達がいる翔竜山の大地に着地する。
それはドラゴン――であったが、その大きさは今まで襲ってきたドラゴン達と一線を画していた。
体長はおそらく五十メートル以上。その巨竜は輝く白の鱗を持ち、太陽の光を浴びて煌めいている。
……馬鹿でかいな……！
レオンハルトは思う。まさか当たりか？　と。
小山と見紛うほどの巨体に、しかし笑みを浮かべてしまうレオンハルト。向こうからすればこちらは随分とちっぽけに見えることだろう。
そんなちっぽけなこちらに、巨大な顔を向けて白竜は声を出した。
「――ふん、ただの人間ではないだろうと思っていたが、その気配……魔人だな？」
静かな声だった。理性と知性を感じさせるそんな声。しかし同時に、その声からは力強さを感じる。そしてレオンハルトはその言葉に驚いた。なにせ会話ができるドラゴン、という存在が初めてであったからだ。
レオンハルトは一瞬ぎょっとするも、直ぐに気を取り直してこちらも声を出す。
「ああ、魔人レオンハルトだ。――お前は？」
簡潔に名乗り、問い返す。
すると相手も名乗った。
「ダイヤモンドドラゴンのライゼン。そして一応だが――四大聖竜を名乗らせて貰っている」
「へぇ……？」
思ったよりも普通に会話ができる。それどころか言わなくても構わない情報までわざわざ教えてくれた。

そらに倣い、レオンハルトは笑みで答える。
「奇遇だな。俺も魔人四天王と魔軍参謀を名乗らせて貰ってる。一応、立場的には似たようなもんだな？」
「……そうか」
巨竜が頷きを返す。
そして、
「ならば言わせて貰おう、魔人レオンハルトよ。――貴様、よくも我らの土地に侵入して多くの同胞を屠ってくれたな？」
瞬間、ドラゴンの暴威がレオンハルトに重圧となって襲いかかる。
今までのドラゴンとは比べ物にならない、強大な圧力。それは、ドラゴンの中のドラゴン。本当の強者であることをこちらに分からせるには充分な威圧だ。並の人間ならこれだけで戦意を喪失し、意識を失ってもおかしくない。
……なるほどな。四大聖竜ってのは嘘じゃないみたいだ。
しかしレオンハルトも普通の存在ではない。現在の世界の支配者たる魔人であり、魔人四天王の一角である彼は、この程度の威圧では怯まない。
「それは悪かったな。俺はこの山を制覇しに来たもんでな。お前の同胞については……わかるだろ？　向こうが喧嘩を仕掛けてきたからやっただけだ」
だから、と。レオンハルトは不遜に言葉を送る。
「俺は山を登りに来ただけだ。――だからお前が退いてくれるなら見逃してやってもいいぜ？」
「――――」
一瞬、ライゼンが言葉を失くす。目を丸くし、魔人とはいえ不遜にも、自分を見逃す、という上からの物言いに思考が固まった。
だが、それをすぐに飲み込み理解すると、口元を僅かに開いた。
それは笑みと呼ばれるものであり、
「――笑わせてくれる。そのような気もない癖に。……貴様こそ、今すぐ山を降りるというなら見逃してやってもいいが？」
レオンハルトは肩を竦めた。

「冗談抜かせ。お前の方こそ、見逃す気はさらさらないんだろ？」
「――然り。よくわかってるようだな」
ならば、と。ライゼンが前屈姿勢となる。
「ならば言わなくてもわかるだろう。――俺と死合って貰うが、構わんな？」
ああ、と。レオンハルトが頷き、剣を構える。
「――こっちの台詞だ。俺の剣の錆にしてやる」
お互いが戦闘態勢を取り向き合う。
――両者の激突は、一瞬の出来事だった。

魔人とドラゴン。その激突は、大地を揺らし、大気を震わせた。
強大な力を持つ両者の最初のぶつかり合い。その結果は、ライゼンに軍配が上がった。
……ぐっ、何だ今のは……!?
レオンハルトが自分の斬撃による突撃を返され、吹き飛ばされる。ライゼンの体当たりによるものだ。
五十メートル級の巨体と質量を持った突撃を喰らったのなら、サイズと質量で劣るこちらが押される。その理屈はわかる。
だが、レオンハルトが驚いたのはそんな部分ではない。
高速で後方に下がっていく視界の中、レオンハルトは相手の動きを見て戦闘に対処しながら、その理解に努める。
「っ！」
足を地面に擦過させ、後方に下がっていくのを無理矢理に止めると、レオンハルトは足に力を込めた。
再度、ライゼンに向かって跳ぶように正面から突っ込む。視界の先、相手は四本の足を動かし、こちらに対処しようと動きを入れる。その動きが、レオンハルトには一瞬、ぶれて見えた。
「そんだけの巨体の癖に、随分と身軽だな……！」
「貴様こそ、それだけの矮小な身体で随分な膂力だな……！」
お互いに賛辞の言葉を送る。

獣のような瞬発力を持つ巨体に、レオンハルトは袈裟に斬るような軌道で首元を狙う。先程の結果で起きた疑問を確認するためだ。
レオンハルトが持つ魔剣、オル＝フェイルがライゼンの首元に迫る。レオンハルトは思う。例えドラゴン種であっても、この魔剣の斬れ味からは逃れられないと。
事実、ここまで戦ってきたドラゴンは、この剣に首を落とされ、その身を貫き続けてきた。これに対抗出来るのはドラゴンが持つ鋭く強靭な爪のみ。
そしてそんなドラゴン種の爪よりも、この魔剣オル＝フェイルは、鋭さでも頑強さでも負けてはいないと確信していた。自分の得物に絶対の自信を持つレオンハルト。ならばこそ、相手も自慢の爪で対抗してくる、と。
――そう思っていた。
オル＝フェイルの刃先がライゼンの首元に迫る中、相手が取った行動は、
「――――！」
首を捻りながら、自身の頭でそれを受け止めることであった。
「っ――!?」
その結果に、レオンハルトが驚きながらも宙で剣を振り続ける。重力に従い剣を、頭や顎に当て、そのまま足元に振るうも、
「――――」
その光り輝く鱗に一切の切り傷を付けることは叶わなかった。
レオンハルトは地面に着地すると一度下がり、相手を睨むように見ると、憤ったように声を絞り出す。
「テメェ……随分とふざけた身体してるじゃねぇか……！」
最初の斬撃、それを肌でそのまま弾き返された記憶。そして今起こった現実を見て、レオンハルトは相手の特性を理解した。
「その鱗――ダイヤって訳か……！」
「ふ、フフ……然りだ」
その問いに鷹揚に頷く声があった。
ライゼンだ。彼はその身を軽く振り、斬撃が当たった場所を痒みか

何かであるように掻きながら、
「俺の鱗は特別でな。悪いが斬撃は一切通さない」
息を吐いて、彼はレオンハルトを見やる。その瞳は平坦なものであり、自分を傷つけることが出来ないと物語っているようであった。
「残念だな。剣士じゃなければ良い勝負が出来たかもしれないんだが――剣士じゃ俺には勝てないしな……」
だから、と。彼は宣告する。
「抵抗するな、なんて言うほど俺は厳しくないぞ。だから精々足掻くんだな――直ぐにやられないように」

魔王城の一室、他の部屋よりも豪奢な部屋があった。
魔人四天王――プラチナドラゴンの魔人カミーラの部屋だ。
そしてその部屋の主であるカミーラは、締め切られた密室の中で椅子に座って手元を覗いている。そして輝いた刃物のようなもので何やら手元を弄っていた。
主の行動に、部屋で職務を行っていたカミーラの使徒、七星が反応する。
「……カミーラ様。爪のお手入れですか？」
「……そうだ」
そう短く返答するカミーラの視線は、自らの手元に向けたままであり、長く伸びた綺麗な爪を特注の刃物で整えているところであった。
七星の言葉の裏には、「よければ自分がやりますが」という意味が込められているのだが、それに反応しない当たり、カミーラの真剣さが窺えるかもしれない。
しかし彼女はほんの少し――カミーラのことを良く知る者しかわからない程度に眉をひそめると、少し面倒そうな声色で、
「……レオンハルトと戦うと爪が痛むからな……」
「……なるほど、理解しました」
七星はその心境を正確に理解し、言葉を発した。
「あの剣……確かオル＝フェイルと言いましたか。あれは随分と硬い

ですからね……」
七星がそれを受けた時の記憶を思い出したのか、自分の指を軽く抑えて顔を青くする。それをちらりと横目で見ながら、カミーラは思い返した。
……アレは面倒よな……。
あの魔剣の斬れ味は、強靭かつ頑強な肉体をもつドラゴン種であっても脅威であり、こちらの爪以外では、その斬撃を受け止めることは出来ない。例え自分であってもあの剣を肉体に直接食らってしまえば、無傷ではすまないだろう。
カミーラはたまにその剣を使うレオンハルトと戦うが故に、その爪の手入れを行っているのである。戦闘が終わるとほんの少しではあるが、爪が欠けたり、形が曲がったりとするのがカミーラの悩みのタネだ。
……あれほど硬いものはそうはあるまいな……。
と、思いつつもカミーラの脳裏には、それに唯一匹敵するであろう個人の存在を思い浮かべていた。
――かつての同胞、四大聖竜の一角であるダイヤモンドドラゴンのライゼン。
かの男の鱗の頑強性、そして耐性の高さをカミーラは思う。
……あれの硬さは同胞の中でも異常であったからな……。
ドラゴンという種において最硬の者がライゼンという男だ。
彼はダイヤモンドドラゴンと呼ばれるドラゴンであり、その鱗はその名の通りダイヤモンドの特性を持つ。
特に斬撃に対する強い耐性を持ち、その類の傷を付けられたことは今までに皆無。あのマギーホアやアベルですら、爪や牙による攻撃は意味を成さなかった。
その他にも多くの魔法に対する耐性を持ち、幾つかの現象には吸収や反射の特性すら持つ。
一応弱点も存在するのだが、それがあってなお耐久性を中心にした実力は圧巻。
防御においては隙がほぼ無く、かの肉体に傷を付けることは叶わ

ず、攻撃においてもあの巨体と最硬の身体はぶつかるだけで、絶大な威力を発揮する。
そしてそんなライゼンは、普段は冷静かつ落ち着いた、懐の深さを見せる男であり、実力のあるドラゴン種においては珍しく、自分の力を誇示しない男であった。
しかし一度戦闘に、特に興が乗る相手との戦闘となれば自分の身を省みないほど、高揚しながら戦う癖があり周りに被害を出してしまう為、よくマギーホアや他の四大聖竜に怒られていた。
と、そこまで考え、カミーラはふと別の人物を思い浮かべる。よく考えてみれば、
……レオンハルトに少し似ているな。
色々と性格に共通点があることに気づく。だからどうというわけでもないが。
しかし性格は似ていても、相性は最悪であろうな、とも思う。
あの二人が戦うことはないだろうが、四大聖竜の中でもし生き残っている者がいるとするならライゼンが可能性としては一番高いかもしれない。
レオンハルトは現在、長期の休暇を取って翔竜山に行っているらしいが――
……まさか、な……。
それこそあり得ぬ事だ、とカミーラはその考えを取って捨てる。過去を思い出してあり得ぬ妄想をするなど、愚かな行為でしかない。
カミーラはそう切り捨て、再び爪を整える作業に没頭することにした。

ライゼン

レオンハルトは斬撃を振るっていた。
戦闘は激化しており、先程からただひたすらに、自分が鍛え続けてきた剣の腕を巨大なドラゴン、ライゼンに向かって振るう。
「――ッ！」
今も息を切って力を入れると、白く輝いた体表に刃を打ち付ける。
身を捻りながら存分に力と体重が乗った斬撃は、しかし、火花と堅音をもって弾かれる。
その甲殻には一切の傷が付いておらず、レオンハルトは攻撃の手番を終えた。
瞬間、竜がその身を動かした。四本の足でステップを踏み、その場で回るようにして巨大な白色が視界に迫る。その正体をレオンハルトは即座に判別した。
……尻尾か！
五十メートル級のドラゴンの尾は、当然こちらの何倍にも長く大きい。そしてそれだけのリーチを持ちながらもしなやかに動いた白銀の尾がこちらを振り払うかのように叩きつけられる。
判断は一瞬。真正面からの防御を不利と断じ、即座に回避を行うために方向転換。屈むようにしながらライゼンの足元を潜り抜けて反対側に回ると、そのまま竜の下側に剣を振るう。
その心を、ライゼンは正しく察して声に出した。
「下側ならどうにかなるとでも思ったか!?」
「――！」
言葉通り、オル＝フェイルの刃が弾かれる。そして言葉とともにライゼンの前足が迫ってきた。
その先にあるのは、鋭さと煌めきを放つ爪。こちらの刃と同じ結果をもたらすドラゴンの武器だ。
身を翻し、竜の下側から離脱すると、彼の前足が地面に突き刺さり、僅かに断裂した。巨体の体重が乗った一撃に地面が揺れる。
レオンハルトはその攻防の結果を見て、苦虫を噛み潰したような表

情で声を放った。
「まいったぜ……全然斬れねぇ。それとも、俺の技量か得物の問題か？」
「いや、そうじゃないと思うが」
対するライゼンは唸りを上げながらも、余裕を見せた声で語る。
「貴様の技量は見る限り大したもんだと思うし、得物の硬さも申し分ない。鈍らじゃあ身体に打ち付けた途端折れてしまうしな。……ただ、俺の身体が硬すぎるだけだ――」
見ろ、とそこでライゼンは自分の前足を掲げてみせた。レオンハルトが視線を向ける中、ライゼンはその足の先の爪をもう一つの足に向かって器用に叩きつけてみせる。
鈍い金属音が鳴り、火花が飛び散るも、その鱗には傷一つない。その結果を見せて、ライゼンは息を吐いた。
「ご覧の通り、自傷すら無理でな。肌から血を流したことは皆無なんだ」
その響きに残念の色を感じ、レオンハルトは訝しむ。何しろそのダイヤの身体はこちらにとって天敵も良いところだし、同じドラゴン種にとっても厄介な代物だろう。
「……別にいいじゃねぇか。つまりお前は無敵ってことなんだろ？」
いやいや、とライゼンは首を小さく振って否定してみせた。
「別に負けたことだってあるし、痛みや傷を全く負ったことがないわけじゃないぞ？　……でもまぁ、無敵ってのは辛いものでな……」
そう言ってライゼンは頭を上げて、思い返すように続けた。
「何しろ、正面からただぶつかれば大概の相手は為す術もなく敗れていくからな……ドラゴンにとっては真っ向勝負で勝利する、ってのは称賛されるべきものだが、俺個人としては面白くない」
その言葉になるほど、とレオンハルトは頷く。このドラゴンはつまり、
「つまりお前は、戦いを楽しみたいのか」
「然りだ。戦う相手は強く、梃子摺る方がいい。それこそ、俺を傷つけるくらいには強くあってほしいな」

即座に応答する声が届く。それを聞いてレオンハルトは笑みを浮かべざるを得なかった。
「違いねぇ。強い相手との戦いは心躍るもんなぁ」
「ああ。人間――ではないか。魔人にしてはわかってるな。それが闘争の極意というやつだ」
「……ま、それなら良かったな」
「？」
言葉の意味がわからなかったのだろう、ライゼンが疑問の色を瞳に覗かせる。それを補足してやるように、台詞を繋げた。
「俺が今日、お前に、敗北を教えてやるってことだ。それくらい強い相手と戦えるなら本望だろ？」
「む……」
紡がれた言葉が多少意外だったのか、ライゼンが言葉を詰まらせる。
しかしややあって、口を開けると、
「フ、違いないな。……ただ、勘違いしてるようだが――」
再び足を前に進めて、ライゼンは咆哮とともに言葉を放った。
「――俺は負けることは別に好きではないぞ!!」
「――それは俺も同じだ!!」
交差する言葉とともに、ライゼンが駆け出してきた。

……さて、そうは言ったもののどうするか……！
レオンハルトは内心で相手への対抗策を考えていた。
戦いは継続しながら、一つ一つ試していく。レオンハルトはまず、その場から動かず斬撃を連続で放った。
遠距離にまで届く、真空波。斬撃を飛ばしてライゼンに攻撃を加える。
「むっ、これは……！」
ライゼンの瞳が驚きで見開かれる。不可視かつ高速の斬撃が、遠距離でありながら自身の身体に襲いかかることに戸惑いを感じている

のだろう。
しかし、それを理解してなお、ライゼンは笑みを見せる。
「フフ……面白い！　飛ぶ斬撃など初めてみたぞ！」
「ちっ……そういう褒め言葉は傷を付けた時にでも取っときなッ！」
楽しそうに言うライゼンは飛来する斬撃を食らいながらも、それに構わず高速で前進してくる。
その身体には傷一つ付いておらず、勢いが殺されるようなこともない。その事実にレオンハルトは軽く舌打ちを重ねた。
こちらが剣を振り、斬撃を飛ばす中、ライゼンはその身を加速させた。
「それもそうだな。ならば、もっと楽しませてみせろ！」
「――ッ！」
巨竜が迫り寄ってくる。
その巨体から想像出来ない速度と瞬発力は圧巻であり、周囲に暴風とも呼べる大気の圧力を発生させながら、こちらに向かって突撃してくる。
それを見て回避の動きを取ろうとする。
しかしそうすると、相手は前に進む足を刻んで方向転換を行ってくる。こちらに攻撃を当てる為に再修正を行ってきたのだ。
……身軽だとは思ったが小回りも利くのか！
レオンハルトはその足捌きを見て、感嘆を得る。
今まで戦ってきたドラゴンに見られるような直線的な、力に任せた戦いではない。
この動きには、今までの戦いや修練で積み重ねてきたであろう確かな技術が見て取れる。
つまり敵は、強大な力を持ちながらも技術を駆使してくる相手ということだ。
単にドラゴン、というだけではない。彼は鍛え上げられた戦士なのだ。
そしてその分の厄介さが、こちらには降りかかるわけだが、
……つくづくインチキくさい相手だな……！

並の者が太刀打ち出来ない純粋な力を持ちながらも、技術の上でも並の者を駆逐するほどの実力を持つとは、おのれ四大聖竜。各所から、「お前が言うな」という声が聞こえてくる気がしたがそれには気づかない。

レオンハルトはやはり、試すべきか、と方針を決める。

相手が技術を以って戦うなら、こちらも技術、そして工夫を以って戦うのみだ。

故に、レオンハルトは足を踏み込んだ。

初速から全速を出す身体の動き。魔人の力を使った爆発的な瞬発力によってレオンハルトの身体が消えたように映る。

「――！」

ライゼンが驚愕する中、レオンハルトは再び彼の懐に潜り込んだ。

そして顔を見上げると狙いを付ける。

視界の先には巨大なドラゴンの煌めく鱗。その中の一つを見つけると、レオンハルトは跳躍し、

……食らえ……!!

右手に持った魔剣を逆手持ちに変える。かなりの長さを持つ長刀であるため、あまり推奨出来ず、使い方には工夫かつ繊細な動きが必要な持ち方であるが、今はそれはいい。

レオンハルトは即座にそれを行った。逆手持ちした右手から飛び出した柄。それをライゼンの顎にある一枚の鱗に向かって、

……落ちろ、逆鱗……!!

杭を打つように、打撃を逆鱗に突き立てた。

ライゼンは、相手の動きを称賛した。

……見事だ！

視界の中から、一瞬でかき消えた魔人に対しての評価を上昇させる。その動きは常時では捉えられないことはない速度だが、ゼロからの最高速となると話が違う。速度というのは慣れるもので、視界は騙されるものだからだ。

先程の飛ぶ斬撃も合わせて考えるに、相手の技術は自分よりも上であろう。ドラゴンと魔人、人の形をした相手とはやることも身体の動かし方も違うがゆえに、比べるものではないかもしれないがそれは事実だ。

加えて戦闘時の的確な判断も兼ね備えている。一流の戦士だ。

ライゼンは思う。確かに、自分の弱点はこの喉元にある一枚の逆鱗であるな、と。

この部分はドラゴンにとって、生理的な嫌悪感を示すのと同時に、自分にとっては逆さになっているということが弱点となる。

それに加えて、斬撃ではなく打撃を選択するセンスも見事。通常であればこの身を地に伏すに値する一撃であっただろう。

だが、今はそうではない。

そのことを思いながら、ライゼンは重力に従い、眼下に落下する魔人を見る。

痛みはある。だが、傷はない。

しかし、だ。的確に放たれたその一撃に称賛を贈ろう。故にライゼンは口を開いた。

口の奥に光が溜まっていく。それはこの世で最も有名なドラゴンの武器。

――ドラゴンブレス。

……これをどう対応する……？

一瞬の間を置いて、ライゼンはそれを眼下に放った。

レオンハルトはブレスを察知して、足を動かした。

後方への回避をしながらも、意識はそこにはない。先程の結果について言いたいことがある。

故にレオンハルトは、それを我慢せず憤りとともに告げた。

「テメェ！　ダイヤなら衝撃に弱いはずじゃねぇのかよ!?　傷一つついてないじゃねぇか!!」

と、レオンハルトは自身の知識と目の前の現実が合致していないこ

とを叫んだ。
そしてその答えに対し、ライゼンはブレスを吐きながら、
「――無論、痛い」
と、言った。
レオンハルトは即座のツッコミを入れる。
「いや、痛いじゃなくて割れろよ！　砕けろよ!!　ちゃんと物理に則れ!!」
「そう言われてもな……割れないものはしょうがないだろう」
多分、とライゼンは前置きし、
「昔馴染みが確か言っていたのは、えー……俺の鱗はダイヤではあるが……あー……鉱物？　じゃなくて……えっと、構造上はダイヤに似てるんだが、細かい粒子が云々かんぬんで――あー……うん、よくわからんし忘れた。もういいだろう」
「自分の身体なのに適当かよテメェ!!」
バーカバーカ、と、ツッコミ代わりに斬撃を飛ばしてくるのをダイヤの鱗で弾き返すライゼン。彼は、む、と表情を顰めさせると視線をレオンハルトに向け、
「……そう言うなら貴様が説明してみろ！　なぜダイヤが割れやすいのかをな！」
はっ、とレオンハルトは鼻で笑う。簡単なことだ、と。レオンハルトは頭の中の知識を引っ張り出し、
「……それはだな――えー……ダイヤモンドは硬さは優れてるんだが、何か確か、構造上的欠陥があるとか何とかで、あー……靭性？　がうんたらかんたらで――とにかく、衝撃に弱くて割れやすいとか――」
ふっ、とライゼンはレオンハルトの説明に鼻で笑う。それ見たことか、と言わんばかりに顔を指し、
「貴様も言えてないではないか!!」
アーホアーホ、とツッコミ代わりにドラゴンブレスを放つもその手に持った魔剣で縦に斬り裂くレオンハルト。後ろの岩山が崩れ、周囲に被害が出る中、レオンハルトはこめかみをひくつかせながら反論す

る。
「自分の身体のことを説明できないお前よりはマシだ！」
「それの何が悪い！　貴様も自分の身体のことを全て一から十まで説明出来るのか!?　出来まい！　ほうら、論破した――!!」
「ぐ……！」
その言葉にたじろいでしまうレオンハルト。まさかドラゴンにそんなことを言われるとは思っていなかった。だが、問題は残っている。
……でも打撃が通じねぇのは予想外だ……！
ご丁寧に逆鱗を狙ってやったというのに。これが駄目だと、また何かを考えなくてはいけない。
次策を用意するか、考えなしに突っ込むかを考えていた、そんな時だ。
レオンハルトは後方で起きたそれを察知して、眉をひそめた。
「――！　ちっ……！」
「む……？」
不意に背後に向かって駆け出す。
ライゼンが訝しげな視線を送る中、背後で起きる崩落に向かっていったレオンハルトは、
「そういやこいつの事、忘れてた……！」
と、地面に倒れていたカラーの少女をその速度のまま拾っていく。
戦闘前にドラゴンブレスの被害から遠ざけようと放り投げたペールだった。崩落に巻き込まれそうになっていた彼女は、いかなる理由か、気を失っていた。
……ああ、くそ……！　こいつへの被害を考えなきゃならんのか……！
抱えて戦うのは流石に無理があるので、何処かに置いておかなければならない。
だが、それには目の前の相手が邪魔だ。レオンハルトは振り向き、こちらを見つめるライゼンを見て表情を固くする。
なればどうするか。しかしそれは直ぐに解決された。

「あー……お前の女か？」
「！　いや、俺の女ってわけじゃ……」
突然そんなことを聞いてくるライゼンに、若干戸惑いつつ否定する。
だが、相手は何を思ったのか、ふむ、と得心したように頷きを入れると、
「――いいぞ。適当に隠してこい」
「あ……？」
どういう風の吹き回しか、ライゼンがそんなことを言う。そして続けてやれやれという様子で、
「女ならしょうがない。決闘に別の奴を――特に女を巻き込むなんて恥だからな」
どしり、と地面に座るライゼン。そして頭をしゃくり、行け、と道を示し、
「――ここで待つ。隠し終わったら戻ってこい」
「……」
レオンハルトは相手のその物分りの良さに一瞬悩む。罠か、と。後ろを向いた瞬間に攻撃を仕掛けてくるのではないか、と。しかし直ぐに、
……それはないな。
と、頭を振ってその考えを一蹴する。戦いの中で剣と言葉を交わせば多少だがわかることもある。こいつはそんなことをする奴じゃないと。
それに万が一、攻撃を受けてもこの距離なら対処出来る自信もある。
ならば、とレオンハルトは軽く頷きを入れた。
「……わかった。直ぐに戻る」
「ああ。ちゃんと安全なところに連れてってやるんだな。少しくらいなら待ってやる」
と、言葉を交わし、レオンハルトは背後に振り向くと、ペールを抱えて山道を引き返した。

「さっさと戻んねぇとな……」
レオンハルトは翔竜山の山道を引き返しながら、周囲を散策する。
腕には相変わらず、もはや定位置となったペールが気を失った状態で抱えられている。
ライゼンとの戦いの邪魔になるから、と彼女を安全な場所に置いておこうとしているわけだが、
……安全な場所ね……どっか洞穴とかないか？
魔物やドラゴンは大概殺しながらやってきたから数は多くない。しかしだからと言って襲ってこないとも限らないのだ。適当な魔物を脅しつけて見張らせる、というのも現実的ではない。魔人の威を見てその場では従うかもしれないが、自分が離れた途端、こちらの目がないと思って暴行を加えて逃げる可能性もあるからだ。
ならば結局はどこかの洞穴か、岩陰に置いておくしかない、とそう考えたところで、
「――お」
視界の先に人が入れそうな程の大きさの穴を見つける。
当たりか、とレオンハルトはその穴に近づき、軽く中を見渡すと、
……洞窟、じゃないな。横穴って感じか。
深さは殆どなく、どこかに繋がっているという訳ではない。入って数メートルも歩けば行き止まりだ。
だが本格的な洞窟だと魔物が彷徨いているだろうし、こっちの方が都合が良い。レオンハルトはペールを洞穴に寝かせようとし、寸前で止める。
よく見ると、何故か中は泥濘んでおり、そのまま寝かせると泥で汚れてしまう。
……一応、何か敷いた方がいいか？
と、気を利かせてみるも、
……いや、何も持ってないからいいか。
それに気づいて諦めかける。自分の服は一応これ一つしかない大

事な物であるし、戦闘の際には欠かせないものだ。主に防御面で。
しかし、そこでペールの着ている服を視界に映す。
ペールの着ている服は、よく見てみると上からローブのようなものを羽織り、中に二重か三重に着込んでいるようであった。
どうりで運んでいる最中、ごわごわとして持ちにくかった筈だ。
そしてそれを見て、レオンハルトは思いつく。
……これ脱がして下に敷くか。
一応脱がして下に敷けば、そのまま着ているよりは厚みが重なりマシになるだろう。
故にレオンハルトはペールの服に手を掛ける。あまり良いこととは言えないが、全裸に剥くわけではないのだし、不可抗力だろう。
そんな考えでペールの服を下から上に上げて脱がせていく。まずは一着。
こうやって脱がせていると子供の世話をしているみたいだなぁ、と二着。
脱がせてみて、やはりかなり厚みのある服を着込んでたんだな、と三着。
三着目を脱がせて、肌着に近いカラーの衣装のようなものが出てきたところで、一息を入れる。とりあえずこんなところか、と。
そして厚みのあった服を脱ぎ捨てたペールの姿を見て、
「！　……こいつ……」
ある一点に目が止まる。
それは規則正しく上下するペールの身体。その上半身に付いている盛り上がった二つの山。
それを見て、レオンハルトは呟いた。
「でかい、な……」
――胸である。
レオンハルトの視界の先、ペールの呼吸に合わせて上下する二つの巨乳があった。
……こんなものを隠し持っていたのか……。
着痩せ、という言葉が頭に浮かぶ。脱げば凄い、という言葉も。

もしかしてこれを隠すために厚めの服を着ていたのではないだろうか、と思ってしまうほどの大きさだ。話してみた感じ、引っ込み思案な性格のようだったし、どこまで的を得ているかはわからないが、意外と外れてないかもしれない。

しかし惜しいな、とレオンハルトは唸る。

こんなことなら抱きかかえている時にもうちょっと感触を楽しむべきだった。そうすれば山登りも捗っただろう。二重の意味で。

「……行くか」

しかし考えていてもしょうがない。とりあえずさっさと戻ろう、と、レオンハルトは最後に二つの山を拝むと、服を地面に敷いてその上にペールを寝かせる。寝相が悪くなければこれで問題ないだろう。

そして横穴を後にしながら、レオンハルトは思う。

……それにしてもでかかったな……。

なにせ自分の周りじゃ巨乳成分が少ないからか、その分、尊さと有り難みを感じる。

そして、うむ、と納得を入れる。やはり男としては大きいのに限る、と。

別に貧乳も嫌いではないが、情事の際の楽しさはやはり大きい方が色々と楽しいものだ。

しかしこれを表立って言うわけにはいかない。これを魔王城や周囲に誰かがいる環境で言うと、貧乳の僻みが発生してこちらに襲いかかってくるのだ。特にスラルなんかはよくカミーラとかの数少ない巨乳を見ては壁に蹴り入れていた。この場合の壁はスラルのことではない。

……やっぱ巨乳だな、うん。

と、レオンハルトは改めて思いを馳せる。決闘が終わって登頂し終えたらダメ元でペールに頼み込んでみようか。多分ドン引きされるだろうな、と馬鹿なことを考えながら横穴から出ると、

「――ん？」

「――お？」

お互いに気配を感じて、その方向に目を向ける。下層から登ってき

たのであろう、山道の下りから進んできたのは、長い耳を持つカラーの女性であった。
視線が合わさり、お互いの姿を確認する。こちらの尋常ならざる存在感を感じ取ったのか、相手の女性はこちらを見て険しい表情になると、
「――ようやく、見つけた……」
「……」
と、睨みを利かせてきた。
そんな中、レオンハルトは視界の中にある物を見つけ、その偶然を見て驚愕した。
女性の上半身、そこに付いている盛り上がりを見て、
――二人目の巨乳、だと……!?
夕陽が沈んでいく中のその出会いに、レオンハルトは内心、椅子から立ち上がるような思いを感じた。

危機感

日の落ちた翔竜山の一角で、両者は向かい合っていた。
横穴から這い出てきたレオンハルトの正面、下層に続く山道を塞ぐように女が立っている。
女性としては長身の、カラーの女だ。
そんな彼女の容姿、言葉にレオンハルトは反応せざるを得なかった。なにせ、
……巨乳美女が俺を探していた……？
見つけた、と言うなら探していたということだろう。それは当然の帰結だ。
しかし目の前の美女にレオンハルトは心当たりがない。そもそもカラーの知り合いはハンティとペールを除けば皆無なわけだし、関わりも――
……あ、もしかすると……。
と、レオンハルトが一つ、彼女の目的に察しが付いた時と、彼女が口を開いたのはほぼ同時だった。彼女はこちらの姿を見て眉を顰めながら、
「……その尋常ならざる気配、魔人とお見受けするが如何か？」
「！　あ、ああ……魔人レオンハルトだ」
返すこちらは少し戸惑いつつも、相手の問いに同意し簡潔に名乗る。
すると向こうは頷きを入れた。しかし警戒の色が強い。いつでも動けるように、何らかの手段を取れるように身体から戦意が出ているのが見て取れる。そんな様子のまま彼女は一方的に続けた。
「私はケッセルリンク。見ての通りカラーだ。こちらへは攫われた同胞を取り戻すべく参上した」
どうにも気取った口調だが、別に気にはならない。というよりもべつの部分が気になっていたからなのだが。
それを気にしつつもレオンハルトは、ああ、と彼女の目的を理解する。彼女が言う同胞はというのは、

……後ろの横穴に寝かせたペールのことか。
確かによくよく考えてみれば、ペールには了解を取ったものの他のカラーには何もそのことを伝えてはいなかった。なので魔人に攫われたと思い、こちらを追いかけてきてもしょうがないことだろう。
差し詰め自分は、王を拐い何かを企んでいる悪人、といったところか。
レオンハルトはそのことに辟易としながら息を吐く。そして後ろを顎でしゃくりながら、
「……ああ、それなら後ろで寝てるが――」
連れてくならさっさと連れてけ、と。そう言おうとした言葉が止まる。
レオンハルトは後ろの横穴で寝てるペールの、今の姿を思い返した。そういえばつい先程、彼女の服を脱がしたところであり、
……このまま見せると勘違いされるんじゃねぇか……？
とそんな危惧を抱く。
ならばどうするべきか。正直、ここまで来たならもう流石に道案内してもらわなくとも山頂までは辿り着けるだろうし、彼女の安全を考えるなら連れて行ってもらうのがいい。
だが、今彼女の姿を見せると勘違いされ襲われるやもしれない。別に襲われても構わないのだが、その場合は話が更にややこしくなりそうで――。
「その後ろの洞穴にいると？」
「……ああ、いや、そうなんだが――」
何と言うべきか。迷った挙げ句、
「つ、連れ帰ってもいいが、今は待て。ちょっとやることがあってな……」
「……どういう事だ」
「……とにかく、少し待てば返してやる。――だから待て。お前も、俺と戦いたくはないだろ？」
「……」
とそんな無茶苦茶な言い分でゴリ押した。

当然だがケッセルリンクはこちらを訝しむように表情を固くする。
だが、相手はどうやら理知的な人物のようで、魔人相手でも普通に会話をしてくれる人物のようだ。ならば分かってくれるだろう。魔人と戦うリスクを負うくらいなら、ほんの少し待った方がいいのではないかと。
そういう意図があっての言葉だったのだが、ケッセルリンクはそれを聞いて目を据わらせると、
「――ならば無理やりにでも、取り戻させてもらう」
――ダークミスト。
とそんな魔法を唱えて、彼女は敵意を向けてきた。
「……あ？」
いや、ちょっと待て。何でそうなる？
レオンハルトが戸惑う中、周囲が黒の霧で覆われていく。
そしてほぼ同時に、遠い空。夕日が完全に沈みきり、辺りに夜の帳が下りる。
周囲が闇に覆われていく中で、レオンハルトはケッセルリンクの声を聞いた。
「……ちょうどいい時間帯だ。天はどうやら私の味方らしいな……」
何言ってんだ、この巨乳。話聞けよ。
その思いをぶつけようと口を開く。
「おい！　待て！　俺は戦う気は――」
と口に出したところで、気づく。自分とその周囲を一緒に飲み込んでいく闇。
……視界が全く利かねぇだと……？
視界封じか、と魔法の正体に見当を付ける。他の効果は今の所見受けられない。
そんなことを思ったところで、
「――っ！　ちっ！」
突如、音もなく振るわれる攻撃を剣で弾く。
こちらの身体を狙っての攻撃。それも打ち合わせた手応えから察するにおそらく剣だろう。

「……！」
そしてこちらが防御出来たことがそんなに不思議だったのか、相手が驚きに絶句した――ような気がする。あくまで勘だが。
……というか全然口を利かないし、音を出さないって事は、それでバレるってのがわかったのか？
相手の考えを推察し、口端を釣り上げる。なるほど、中々悪くない。
「――ハッ、なるほどな！　俺が、視界に頼り切りの三流剣士じゃねえことを直ぐに見抜いてきたか！　だから音を――って」
と、そこまで言ってからはっと我に返る。危うく戦ってしまうところだった、と。
落ち着け。ここで戦ってしまえば本末転倒だし、そもそもこちらには先約があるのだ。あまり時間を掛けるのよくない。
しからば、自分はどうするのか。頭の中で考えをまとめてみる。
まず、ペールの今の姿を相手に見られてはいけない。見られて何か良からぬことを――ってな感じで襲われる。
ケッセルリンクと戦うのもよくない。別に戦う理由もないし、巨乳美女を虐めるなんて男の風上にもおけない。
そして時間を掛けてライゼンを待たすのもよくない。だが、最悪これは別にいいかな、と思う。少しくらい待つ、とライゼンも言っていたことだし。
これらを全て満たして、円満に事態を収拾する方法。
……いや、うん……それしか、ないか……。
その答えを瞬時に導き出したレオンハルトは少し憚られるものの、それを口にした。
「――おい、聞いてくれ！」
「――――」
闇の中にいるであろう彼女はこちらを警戒している為、答えない。
だが、それでも構わない。耳に聴こえているのならそれでいいのだ。
レオンハルトはそのまま続けて、
「いいか！　俺は、ペールの安全を確保するために！　あの横穴に

ペールを隠しておくことにしたんだ！」
どこにいるのか分からない為、大声でそう説明する。
勿論剣は収め、戦意は出さない。戦う意思はないと喧伝するようにそれらの圧は霧散させる。
するとその甲斐あってか、闇の中から声が聴こえてきた。
「……どういうことだ？」
……釣れた！
レオンハルトは相手が耳を傾ける様子を取ったところで内心ガッツポーズを取る。
この機会を逃す手はない。レオンハルトは意を決した。
こちらが取る方法、それは即ち――
「俺はこの山を制覇するためにやってきたんだが――」
――誤解されるのを承知の上で、包み隠さず事情を素直に話すことだ。

「――なるほど」
レオンハルトが事情を説明し終えると、ケッセルリンクは闇の中で頷きを返してくれた。
未だ魔法は解いてくれないものの、戦意は殆どかき消えており、今からまた戦うことはないと思われる。これ以上話がこじれなければ、だが。
「……どうだ、わかってくれたか？」
「……つまり、君は――」
ケッセルリンクが闇の向こうで言葉をまとめる。
「――休暇で山を登りに来たものの森で迷子になり、宝箱だんごに煽られたのでそれを追いかけている内に人間とカラーの戦いにうっかり迷い込み、せっかくだから森に詳しいカラーに道案内を頼もうと偶然そこにいたペールに人間を追い返す代わりに道案内をして欲しいと取り引きを交わし、それをペールが受諾したことで人間を追い返した後に山を登ったはいいものの、ドラゴンとの戦いで気絶してしまっ

た彼女を安全な場所に隠しておくためにあの横穴にペールを隠してある、と？」
「お、おう……一気に言い切ったな……だが、事実だ」
「……正直――」
ケッセルリンクはそこで考えるように言葉を区切ると、ややあって、
「――到底信じきれるものではないな」
「……」
「というかそれが本当だとしたら」
「……だとしたら、何だ？」
一息で、
「率直に言うが……君は馬鹿か？」
「……」
一蹴されてしまい、沈黙する。
黙りこくるこちらに対し、ケッセルリンクは続けて、
「山を登りに来た。それはいいとしよう。森で迷子になるのもしょうがないかもしれない。カラーに案内を頼むのもわかる」
だが、と。
「道案内なら山の手前で下ろせば良かっただろう」
「……そ、それはだな……」
言えない。山ですら道に迷う気がしたなんて言えない。色々と承知の上で事情を説明したが、それでもまだプライドは残ってる。その残りのプライドを守るためにも、その事実は断固として隠し通したい。
前置きの言葉を放ったものの、黙秘するレオンハルトに対し、ケッセルリンクはじっと闇の中からこちらを見詰めていたようであり、
「……ふー……」
「お……？」
やがて長い息とともに闇が晴れていく。
とは言っても視界に映るのは夜の景色であるのだが、それでも真っ暗な闇の中にいたこともあってやたらと明るく感じる。

レオンハルトがその変化に表情を緩和させる。すると見えてきた視界の先、ケッセルリンクは疲れたように頭を抱えており、
「……まぁ、確認すればわかることだ」
今は判断を保留にする、とケッセルリンクは言う。
だが、
「――あ、あのう……？」
「……！」
「っ！　ペール……！」
不意に、レオンハルトの背後から呼びかけられる声がある。
横穴からそっと覗き見るように声を掛けてきたペールだ。
話の渦中にあった当人の登場に、レオンハルトはほっと息をついて安堵する。
……これで俺の身の潔白が証明される……！
やはり正直に話すのが一番。誤解や勘違いはそういうところから生まれるのだ。
そんな思いを抱くこちらの視界、ケッセルリンクはもはや自分を無視してペールに駆け寄る。
「大丈夫か……？」
「ケッセルリンク様……」
するとペールはケッセルリンクを見て首を――横に振った。
そしてあろうことか、顔を赤らめた状態でこちらにチラチラと視線を寄越しつつ、とんでもないことを宣言した。
「わ、私……私――お、大人の階段を登ってしまったみたいです……！」
「――――」
「――――」
ペールのその発言に、その場の空気が一瞬にして凍りつく。
そしてケッセルリンクの動きが止まるのを見てレオンハルトは、
……おい！　話が違えぞ!!　というか何でそうなる!?
若干嫌な予感を察知していたため、少し早く気を持ち直す。
ペールを睨もうと視線を向けようとし、

「――話が違うようだが？」
と、ケッセルリンクの敵意の顔がこちらを振り向き、先に彼女に対応する羽目になる。
レオンハルトは慌てたようにしながらも直ぐに叫んだ。
「待て待て、早とちりするな！　よく見ろ！　クリスタルは赤色のまんまだろうが!!」
「む――それは……確かに」
ペールを指差して言うと、ケッセルリンクも遅れて確認して頷きを得る。
そう、カラーは額に赤いクリスタルを持つ種族だが、処女を失うとそのクリスタルは青に変化するのだ。レオンハルトはそのことを知っており、ケッセルリンクも、自身がカラーであるから絶対に知っている筈なのだが、爆弾発言によってそこまで気が配らなかったのであろう。
そして、その言葉が聞こえていたペールはそこで驚きを入れ、
「えっ……まだ赤色ってことは――」
自分の額が見えない為、今その事実を知らされたペールは再び顔を赤くし、
「――ほ、ほほ本番以外をしたんですね……！」
「……おい」
「違ぇよ！」
ケッセルリンクの顔が再びこちらを向いたので即座に否定をする。
そしてそのまま視線をずらしてペールに牽制するように、
「おい、お前は誤解してるからな。俺は何もやってない」
「で、でも、服を脱がされていましたし……」
「……と、言っているが――」
「……あ、あれはお前が汚れないようにしただけだ」
「よ、汚れるようなことをしたんですね……！」
「してねぇよ！」
再び否定を返すもこのままじゃ埒が明かない。というか妙に嬉しそうなのが気になってしまう。

「……とにかく、大事は無いんだな？」
「だ、大事はありますけど……女の子にとっての――」
「……もうお願いだから黙ってくれ」
「……大丈夫……そうだな」
　ケッセルリンクがまとめてくれるのをペールがまたややこしい発言をするので、もう疲れたと言わんばかりに力無く呟いたレオンハルト。ケッセルリンクもペールが元気そうなのを見て、何故か抑える側に回ってるのが救いか。完全に立場が逆転してしまっている。
　――異変を感じたのはそんな時だった。
「――ん？」
　女二人が話し合ってる最中に違和感を感じて何気なく周囲を見渡す。
　……何だ今のは。
　何となく嫌な予感を感じて視線を鋭くするも周囲には何もない。
　一瞬、視界が動いた気がしたのは気のせいだったか、と二人に向き直った直後のことだ。
　上から音と振動が響いてきた。なので上を見上げながらも一応、
「……おい、もう少しこっちに来い」
「？　何ですか？」
　ペールが首を傾げて尋ねてくる。ケッセルリンクが若干訝しんできたが、それを考慮してレオンハルトは簡潔に事実を伝えた。
「――落石だ。その辺でも当たらないとは思うがもうちょっと寄っとけ」
「あ、はい！」
「……ふむ」
　こちらの言葉に二人が従ってくれる。近づきすぎると警戒されるか、と思いレオンハルトも少し距離を置いて壁際から離れると、ややあって、
　――轟音とともに岩石が落ちてきた。
「きゃっ!?　ほ、本当に落ちてきました……」
「……ペール。もう少し耳を鍛えたほうがいい。さすがに落ちる直前

に気づくのは危なっかしいというか……」
十メートル前後のそれなりの大きさの岩石の落下によって地面が揺れる。
そしてそれを途中まで察知出来ていなかったであろうペールに、ケッセルリンクが苦言を呈する。
「あ、あはは……な、何のことですか？　私は数秒前には気づいてましたよ？」
「ふー……全く」
バレバレの嘘を吐くペールにケッセルリンクが息を吐いて眉根を抑える。どうにも苦労している様子というか、何となく二人の関係性や力関係が見えてくる。
差し詰め前長と現長。先程聞いたケッセルリンクという名前と少しだけ垣間見えた実力から察するに、おそらくだが、
……こいつが夜の王、だろうな……。
と頭の中で当たりをつける。だからどうという訳ではないが、
……仕事でなくてよかった。
休暇中ではなく、仕事中に出会っていたのなら面倒なことになっていただろう、ということだ。尤も、それには魔軍がカラーの集落を襲っていなければならないため、最近ではあまり意味のない仮定ではある。
その一方で、微妙に戦ってみたいと思う部分もあり、
……おっと。そういえば戦いと言えば楽しみがあったな。
戦いという単語で、上層に残してきたドラゴンを思い出す。
四大聖竜のライゼン。彼との決闘は中断している最中であった、と。
ペールの問題も、ケッセルリンクが来たことで片付いたことだし、そろそろ行かせてもらうか。
夜なのはちょっと面倒だが戦いにはそこまで支障が出ないだろう。そう思いレオンハルトは声を掛けようとした。
次の瞬間。
「――っ!?」

――地面が激震した。
「きゃあぁぁ!? な、なんです!?」
「地震か……!」
「いや、これは――!」
大地が揺れているわけではない、と。それを言う前に、
「――!」
地面に亀裂が走り、足場が崩れ落ちた。

レオンハルトは断裂した地面による浮遊感を得ながらも、冷静にそれを見ていた。
地面であった岩場は幾重にも砕かれ大小様々な破片となって落ちていく。
突然の出来事ではあるが、事が起きた後であれば原因は推測出来る。おそらくは、
……あの落石が切っ掛けか……?
あれだけで崩れ落ちるとは思ってはいないが、それ以外に原因は見当たらない。
いや、もしかすると一つ上の層でのライゼンとの戦いの余波によるものかもしれない。お互いに周囲の被害など考えていなかったので周囲への被害は極小――というわけにはいかなかったからだ。
確かな原因は不明だが、起こってしまったならしょうがない。レオンハルトは思う。
自分は今、宙に落ちる瓦礫の一つに乗ったままだ。
しかし今なら上に跳躍すれば問題ない。見たところ自分たちがいた層は半分から断裂しており、未だ大地は健在だ。
なら、と足に力を込めた時。
耳に声が聞こえてきた。
「きゃあああああぁぁ――!?」
「くっ――!」
「!」

レオンハルトはその方向に顔を向けた。
眼下、山の破片に紛れて二人の女性が抱き合ったまま宙に投げ出されていた。
ペールは叫び声を上げて半ばパニックになっているようだが、ケッセルリンクは幾分か気を持っており、周囲に目配せしながら対処の方法を探している。
レオンハルトはその様子を見て、手汗が滲み出るのを感じた。
しかしその半面、頭は冷静にこの後の結果を弾き出す。あのまま――いや、このまま落ちれば、
……間違いなく助からねぇ……！
眼下の二人を見て思う。ケッセルリンクはカラーにしてはかなりの実力を持つが、宙に投げ出された状態で何かを出来るとは思えない。それは彼女の焦りに満ちた表情を見れば明らかだ。そしてパニック状態のペールは論外。彼女が悪いというわけではないが、飛行でも出来ない限りどうにもならないだろう。
そして見えてくる結果は――地上まで真っ逆さまだ。翔竜山は細長い塔のような山だ。途中、山の急斜面や段差に転がり落ちることも考えられるが、それは何の慰めにもならないだろう。この高さなら魔人である自分とて、どうなるか分からない。人間やカラーなら死は確実だ。
――なら、どうするのか。
そんな問いに、冷静な自分はこう答えた。――見殺しにする、と。
今日、そしてついさっき出会ったばかりの二人を、命を危険に晒してまで助ける義理はない。いくら休暇中だとしてもだ。
故にレオンハルトはほんの数瞬。一瞬の猶予も殆どない状況下では長い時間、そのこと考え、
……残念だが――。
と結論を出そうとした。眼下にいる二人に視線を向け、レオンハルトは下を見なければ良かった、と後悔した。
なぜなら――
「――！」

「っ……！」
――落下中のケッセルリンクと目があってしまったから。
彼女の瞳はどこか諦観の念を持ちながらも、こんな状況であっても意思を感じさせており、ペールの身体をしっかりと掴んだままでいた。――自身の身体を下側に向けながら。
レオンハルトは息を吐く。
……おいおい、何考えてやがる……そんなんで助かるわけねぇだろうが。
考えてることは、わかる。自分を下側にして衝撃を少しでも緩和しようとしているのだろう。
しかしそんなのが通用するのは精々数十メートルの話だ。こんな高所でそれが通用するわけがない。
……そういうのはファンタジーだろうがよ。ましてや人間やカラー程度の力なんかじゃ……。
レオンハルトはそう断じる。そう冷静に分析する。そして一つの仮定を思い浮かべる。
――自分ならどうだ？
頭は危険信号を鳴らし続ける。早く上に跳べ、やがて間に合わなくなるぞ、と。
幾ら何でも無茶もいいところ。危険が大きすぎる。
故に、レオンハルトは瓦礫の上で姿勢制御を行った。
心の中で思う。
……そんなことは、馬鹿のすることだ。
そう。無茶苦茶。道理を弁えていない身の程知らずの所業。自分の力を越えることを行う馬鹿。
故に――レオンハルトは跳躍した。
――下に向かって。
「はぁ……嫌になるな、全く――」
自分はこんなに馬鹿だったのか、と頭を抱える。
今何が起こっているのか理解しているのだろうか。地上数千メートルからの飛び降りだぞ。

どう考えても無茶。
だが、
「――クク」
――どうにも笑えてくるのはどうしてだ？
レオンハルトは風と身体に来る抵抗を感じながら、宙で落下している二人に高速で追いつき、二人を抱え込んだ。
「なっ――!?」
「――よう！　大丈夫か！」
風の音が喧しいため大声で叫ぶように声を掛ける。驚愕したケッセルリンクの顔が近くにある。ペールはどうやら気を失っているようだ。よく気を失う奴だな、と思いながら、
「何故ここにいる!!　君は死ぬ気かっ!?」
ケッセルリンクがこちらと同じ様に叫ぶように問うてくる。
なのでレオンハルトはそこで良い顔を浮かべてやった。
不敵な笑みで表情を飾りながら、
「決まってんだろ――助けに来たんだよ――!!」
「っ！　助ける義理なんてないだろうに！」
ケッセルリンクは続けて、
「君は初対面の、今日会ったばかりの縁のない者の為に命を捨てるというのか!?」
「初対面の縁のない奴の為に動くってのも悪くない気分だぜ!!」
ハイになってるだけかもだけどな！　とレオンハルトは笑う。
ケッセルリンクは更に戸惑いを大きくしつつ、
「――っ！　助ける理由がない!!」
と言った。
なので軽く答えてやる。
「男が女を助けるのに理由はないんだよ！」
「――――！」
ケッセルリンクが絶句する。
ふん、そこまで驚くことかよ、と鼻で笑いながらもレオンハルトは更に口を開き、

「――それに何か勘違いしてるな！」
「な、何を……！」
先程より声量が小さくなったが、かろうじて聞こえる。
レオンハルトは続けて言ってやった。その思い違いを。
「俺は死ぬ気はないし、お前らも死なせねぇ」
「っ、だが――」
どうするのか、と言おうとするケッセルリンクの言葉を、レオンハルトは注意してやった。
「いいから少し目を閉じて歯を食いしばってろ！　ちょっと色々やってみるが、痛みと衝撃はそれなりに来るだろうからな！」
「そんなことで――」
「いいから黙ってやれ！　そうしてりゃ――」
それなら、
「――俺の力で救ってやる」
「――――」
俺は強く断言する。
ケッセルリンクはその発言に、暫しの間目を丸くして言葉を失くしていたようであったが、
「――わ」
「あ？」
口を開いたのだけしか分からない。故に問い返すと、
「わ、わかった……任せる」
そう言って目を瞑った。
なんとか耳に届いたその言葉に、レオンハルトは気合いを入れ直す。
「――よし、任せとけ！」
風を巻き、浮遊感を感じながら、レオンハルトは高速で落下する自分を自覚した。そして思うのは、自分への自信と、
……さて、それじゃこの窮地に色々と成長させてもらうとするか……!!
――成長と危機感。そしてそれへの期待と喜びだ。

レオンハルトは肉体を完全に動かせるように集中しながら、宣戦布告をする。
……高所何千メートルから落ちたくらいでこの俺が死ぬ？　ククク、何の冗談だそりゃあ……。
相手はこの翔竜山という山と、高所からの落下という現象自体。それくらいで死ぬ自分なら願い下げだ、とそう自分に言い聞かせ、レオンハルトは笑みを深くした。
……精々、俺に危機感を味わわせてみろ。そうすりゃあ――
後に待っている喜びと全ての感情に身を震わせながら、レオンハルトは二人を抱いて翔竜山から落ちていった。

だんご殺し

夜の中に佇む、大きな影があった。
翔竜山の上層部分。広場となった大地にその巨体を落ち着けていたのは、ダイヤモンドドラゴンのライゼンだ。日が落ちてなお煌めく白の身体を彼は爪で引っかく。
そして下層に続く道をちらっと見て、こう思った。
……遅いな……。
先程まで戦っていた相手である魔人、レオンハルトが未だ戻ってこないことに息をつく。
決闘の最中に女が危険が迫っていたため、それを助けたレオンハルトを慮り、安全な場所へと連れて行くことを許した。
しかし、だ。
……身体が疼いてしょうがないな。
その原因を、ライゼンは朧気ながらに自覚していた。
なにせ四百年振りの戦い。一対一の決闘としては千年振りのものである。
その相手が魔人、それも強大な力を持つ相手とあれば、戦闘を是とするドラゴン種としては滾らないわけがない。
だがそれも、時間が経ってしまえばそれに比例して萎えてしまうものだ。そして代わりに思い出すのは、
……随分と平和な時代になったな……。
昔と今を比べてそう思う。無論、人間と魔軍の戦争らしきものがあるのは風のうわさで聞き及んでいる。彼らにとっては平和とは程遠い時代だろう。
しかし、自分達――ドラゴン種にとっては何もない時代だ。
人間や魔物からも畏れられ、避けられるドラゴンという強大な種族。
今は数を激減させ、生き残った者達もその殆どが理性や自我を失った。
そんな自分達だが、過去には充実した時代があったものだ。

……もう二千年くらい経つのか。
ライゼンは過去を思い返す。遥か昔のことだ、と。
自分達、ドラゴン種はこの世に根を下ろした時からとある敵と戦い続けていた。
――魔王ククルククル。
全長４．７キロという途轍もない巨体を持ったかの魔王と、ドラゴン種は、永きに渡る闘争を続けていた。
自分が生まれた時には既に戦端は開かれており、自分も大いに戦ったものだ。ドラゴン種の中でもそれなりの巨体を持つ自分も、かの魔王の前では豆粒のようなものであり、当時は随分と圧倒されたものだ。
だが、そんな戦いも終わりを告げる。後に魔王となる――アベルという若者の手によって。
ククルククルにとどめを刺したアベルは、その返り血を浴びたことで魔王となったのだ。
当時、それに気づいた者はいなかった。アベルは急激にその力を増していたものの、無名の、ともすれば臆病者として多少噂になる程度の若者であった彼の変化は、戦いの中で成長したものとして受け入れられていたのだ。
そして、戦いが決着したものの今度は以前からあった深刻な問題が火種となり、新たな戦いは始まった。
現存する唯一の雌――生ける王冠であるカミーラの奪い合いである。
以前より、ドラゴン種には雌が生まれなくなった。寿命が存在しないドラゴンにとって、繁殖は絶対のものではないにしろ、その存在は貴重、というレベルに留まらない。正しく王冠――唯一無二の存在が彼女であった。
決闘によって決められたドラゴン種で最も強い存在である王だけがそれを勝ち取れる。そうして以前より幾つものドラゴンによる玉座の交代が行われた。
そして、最強のドラゴン王がその座に長年座り続けていた。

ドラゴン王マギーホア。ライゼンにとっても旧知である彼によって、カミーラは独占されていた。
そんなマギーホアに、アベルは決闘するまでもなく彼の強さを察知したのだろう。強くなった自分でさえ、戦えばどうなるかは分からない。その正確な心の内は定かではないが――とにかく、彼は不正な手段に出た。
カミーラを強奪し、彼女を魔人にすることで自分の傍に置いたのだ。
これが火種となり、後にラストウォーと呼ばれる戦争が勃発した。
ドラゴン王マギーホアと自分を含む四大聖竜、八大精霊竜に、正統な誇りを持った従来のドラゴン族。
そして魔王アベルと二十四体の魔人と大勢の魔物。そして少数ではあるが、魔王に付き従ったドラゴン族。
両勢力による大戦は熾烈を極め、多くの者達が犠牲となった。
戦いは終始、ドラゴン側の優勢であり多くの魔人を屠ることに成功したが、やはりマギーホアに迫る実力を持つ魔王アベルの力は桁違いであり、こちらも多くのドラゴンを屠られた。
しかしそれも、最後にはマギーホアがアベルに勝利することで、戦争は終結した。
敗れた魔王アベルに生きたまま杭を打ち付け、暗い牢獄に幽閉し、ドラゴンはマギーホアを国王とした大陸統一国家――トロンを建国した。
永きに渡った闘争の連鎖は打ち切られ、ドラゴン種には恒久的な繁栄と平和が訪れる、と多くの者が確信していた。
しかし、その僅か一年後。
とある存在によって、その幻想は打ち砕かれた。
その日の事は今でも憶えている。誰かが最初に、空を見上げて言った。
――天使だ、と。
白い羽と頭の上に輪っかがある女性体の存在。古くから伝説として語り継がれていた存在が突如、自分達に牙を剥いたのだ。

そうして世界中で、天使によるドラゴン狩りは始まった。
マギーホアを中心として多くのドラゴンが抵抗し、少なくない手傷は負わせたが、こちらも多くのドラゴンが狩られていき、最後には軍団を形成することすら出来ず、散り散りばらばらになって逃げた。逃げるしかなかった。
そして気がつけば、世界は人類――人間と呼ばれる者達の時代となっていた。
そんな中で、生き残ってしまった自分は――
「……む」
不意に、下の方で音が聞こえ、思考を中断する。
振動とその程度から察するに、おそらくは崩落。この山に住んでいればそこそこ起こることであり、ドラゴンにとっては問題にもならないこと。しかし、
……巻き込まれてはないだろうな……？
あの小さい人間種にとっては規模の大きい現象に映るのだろうし、その被害も出かねない。故にそんな心配をするが、
……まぁ、巻き込まれたとしてもあの魔人がいれば問題ないか。
戦ってその力量を確かめた身としては、この程度の事は問題ないと断ずる。
というかそうでなくては困る。あの魔人には期待しているのだ。
少し遅いが、女を安全な場所に連れて行くまで待つ、と言ったのはこちらなのだし、文句はない。夜も遅いし、麓の森まで連れて行ってやってるのかもしれない。
しかし、そうだとすると決着は明日になるやもしれないな。
そう思い、ライゼンは何気なく夜の空を見上げた。
空には昔と変わらず、大きな月が夜の大地を微かに照らしている。
それを肌で感じ取り、
「奴は俺に、終わりをくれるのだろうか――」
夜天の空に問うも、それに答えるものは何もなかった。

夜の森。翔竜山にほど近い麓の森林地帯。
長を追跡していたカラーの戦士団や、同じく森に消えていった戦士長などの隊長格を探す人間の戦士団も、既に自分達の拠点に戻っている。
活動を開始しているのは一部の夜行性の生き物や魔物達。しかしそんな中、一体の魔物がその場にいた。
「……」
地面から砂のような色の顔と手が生え、その手に宝箱を抱える魔物。宝箱だんごである。
この場に冒険者や迷子の剣術魔人がいれば即座に倒そうと躍起になるだろう。そんな彼は森の奥地で休んでいるところであった。
生き物の気配が周囲に少ないそんな場所を選んで何をするでもなく佇む宝箱だんご。
そんな彼の知覚に、上空からの音が届いた。
空から響く風をかき分けるような音は、おそらく落下音。そして着地点はこの場所。
それを即座に察知した宝箱だんごは余裕を持ってその場から少し距離を置いて、上を見上げる。その数瞬後、
「――――！」
木の枝がばきばきと折れる音が響き、何かが地面に落下した。
落下の瞬間、不自然な音が鳴り響いたが、直ぐに地面が振動する。
衝撃で木々が揺らめき、葉を落とす中、宝箱だんごはその中心にあるものを見た。
それは人間の形をした三人であった。しかしそれは人間ではない。
この森に多く生息するカラー。それが二人、気を失ったように動かない。
そしてもう一人、二人を抱え、血塗れになりながら立ち上がる影。
その存在に、宝箱だんごは見覚えがあった。
「――ク、ククク、クハハハ……」
――魔人レオンハルトだ。
ゆらゆらと幽鬼が如く笑みを浮かべて立ち上がった彼は、昼間に宝

箱だんごが遭遇しておちょくった魔人であり、その相手が機嫌良さそうに笑い声を上げている。
彼はふらふらとしていたが、一度カラー二人を地面に下ろすと、その身体を調べて問題がないことに確認する。
そして周囲を見渡し、
「――あ？」
目が合った。
ゾクリとするような目だ。
宝箱だんごを見つけたレオンハルトは、少しの間こちらの存在に面食らっていたようだが、直ぐに気を取り直して不敵な笑みを浮かべると、紅くなった瞳を爛々と煌めかせて言った。
「ハッ、昼間振りじゃねぇか！　おいおい、どうしたよこんなところで？」
「……」
口が利ける種族ではない。そしそんなことは分かっている筈なのに、レオンハルトは気軽に話しかけてくる。そもそも同一個体であるかもわからない筈なのに、こちらが昼間に会った個体だと確信している。そんな様子に不気味な物を感じつつ、宝箱だんごはじっとしていた。
「ちなみに俺は今、色々と掴んだところでな……クク……見ての通り機嫌が良いんだ。テメェはムカつくが、今なら許してやるから失せな。血まみれで身体中が痛くてしょうがねぇし――あ、いや」
と、そこでレオンハルトは一度言葉を止めた。何かを思いついた、といった様子だ。
顎に手を当てて、宝箱だんごをまじまじとニヤついた視線で見てくる。そして何を思ったか剣を抜き、
「――せっかくだし、お前に試してやるか。回避力が自慢なんだろ？」
「……」
レオンハルトが剣を八相に構える。しかし宝箱だんごは未だ動きを見せない。
確実にこちらを狙いを定めている。ならば先に動いて逃げた方が

良いとは思われそうだが、そうではない。
宝箱だんごは種族としての特性か、個体としての才覚故か、攻撃の躱し方を心得ていた。
その尋常ではない素早さは勿論だが、攻撃を躱すにはその意を読んで的確に動くことが重要なのだ。
相手の意識がどこを見ているか、どういう狙いを持って放たれるのか。その動作と意思を集中して読み取り、その瞬間に動くことで攻撃を躱す。回避が不可能という特性を持つ魔法で無ければ避けきれる自信が、この宝箱だんごにはあったし、それだけの実績を持っていた。今まで人間だろうが魔物だろうがドラゴンだろうが、例え魔人であっても、攻撃を受けたことはない。その自負があるからこそ、宝箱だんごは余裕を持って普段どおりに、ただじっとしている。
そしてそんな中、レオンハルトが口を開いた。
「――躱してみろ」
それを境に、レオンハルトの表情から笑みが消え、氷のような冷たい殺気を発する。彼は集中したようにこちらを射抜くように見詰めており、剣を構えたまま微動だにしない。攻撃の瞬間を見計らっているのだろう。
「……」
対する宝箱だんごもじっと相手を見たまま動かない。攻撃の意を見計らっているのはこちらも同じ。
ただ、昼間とは違い相手は正真正銘の本気のようだ。故に宝箱だんごも本気で構える。泰然自若、自然のまま相対し、彼の攻撃を待ち構える。
冷たい風が夜の森を吹き抜ける。時間が止まったかのように両者とも動きはない。
しかし、それは終わりを告げた。それを宝箱だんごは察知した。
「――！」
レオンハルトが動く。その兆しを見たコンマ数秒後に、彼は実際に動いた。
剣を上部から振り下ろして縦に斬る動き。間違いない。その動作

を見抜いた宝箱だんごは瞬間、自分も右に動く。
だが、動き出しは同時に近かった。速い、と宝箱だんごは思った。昼間に受けた剣の倍以上の速度。やはり魔人の本気は伊達ではないのだろう。
しかし、このタイミングなら躱せる。自分の速度でもギリギリのラインではあるが、一度躱してしまえば後は勝ちだ。二度目の攻撃の間に、自分は遠くに逃げる。
宝箱だんごにとっての勝負は攻撃を躱し、生き延びること。その結果こそが最上なのだ。
だからこそそれを求めにいく。レオンハルトの縦斬りが、こちらの視界にはゆっくりに見えながら飛んでくる。
対する自分は既にその攻撃の線からズレている。
――勝った。
宝箱だんごはそう確信し、迷わず右に直進した。
だが、
「――――!?」
不意に、風が、斬撃が、自分の身を襲った。
ゆっくりと自分の身体が上下に分かたれる中、宝箱だんごは疑問した。
――何故……？
自分は確かに攻撃を躱した筈。その挙動は確かに縦切りで、剣の軌道は確実に縦の線。
なら何故、自分は――横からの一撃を食らっているのだ？
死にゆく一瞬の間、宝箱だんごは地面に残った剣の擦過痕を見た。そして気づいた。
――剣、痕が、二つ……？
地面に刻み込んだ縦斬りの痕に加えて、周囲の葉や枝を斬り裂いた横切りの痕がある。
ならば、連続で縦、横、と剣を振るったのか？
否だ。攻撃は確かに、一度のものであった。
――何故……？

宝箱だんごは最後まで、そのからくりに気づけないままその命を終えた。

「……」

宝箱だんごを真っ二つに斬り捨てたレオンハルトはその宝箱には目もくれず、剣を握る自分の手を見た。

周囲には地面に寝かせたケッセルリンクとペール。宝箱だんごが残した宝箱。そして自分が為した斬撃の結果である抉れた地面と木の枝。

それを見て、レオンハルトは喜悦の感情が胸に湧き上がるのを感じた。

「全く、最高だな……！」

ククッ、と笑みが溢れてしまうのを抑えられない。頭の中で繰り返し再生される先程の剣技とその手応え。

それから派生して湧いてくる新しいアイデアの数々に頭がパンクしそうだ。

「堪んねぇな……！」

今すぐそれらを試してみたい。

そして自分をもっと高めたい。

そして強い相手を斬りたい。

そんな思いがレオンハルトの内に溢れる。

だが――

「ぐっ――がはっ！」

口の中から出てきた血を吐き出す。

一度それを自覚してしまえば、痛みと出血で意識は朦朧としてくる。

レオンハルトは血に濡れた頭を抱えながら、

「そんな、場合じゃねぇな……」

ふらふらとしながら地面に寝かせた二人の元に行き、彼女達を抱え込む。

「どこか、身を隠せる場所は――」
レオンハルトが歩き始める。夜の森で意識が無い状態のまま倒れるのは幾ら何でも危険過ぎる。自分の意識がもし途切れれば誰も対処する者はいなくなる。その状態で魔物に襲われたら終わりなのだ。
そのため何処か隠れる場所を探さなくてはならない。もしくはこの二人のどちらかが起きるまでは意識を保っていなければならないのだ。
「くっ、成長の、代償が、はぁ……はぁ……キツすぎる、ぜ。まったく、よぉ……」
息が乱れ、視界がぼやける。
レオンハルトは瀕死の身体にムチを打つように、二人を抱えながら夜の森を歩き続けた。

――レオンハルトの休暇、五日目。とある場所。
希薄な意識の中ではあるが、彼女は意識を覚醒させた。
……な、んだ……？
身体が痛い。この痛みは何だろうか、とケッセルリンクは内心で疑問する。
自分は一体、何をしたのか。寝違えた、とかそんな程度の話ではないと思う。この痛みの強さは、戦闘の結果により負傷したものとほぼ同一。
おそらくは打ち身や骨折だろう。しかし怪我の程度は軽いような気がする。あくまで痛みから逆算したものであり、ちゃんと見てみないことにはわからないが。
しかしそうであるなら、自分は寝る前に何かをしたのであろう。戦闘か事故か。何をしたのかはわからないが危険な事を。
それを思い返そうとし、ケッセルリンクは二つの顔が頭に浮かんだ。
一つは、自分と同じカラーであり後継者としてケッセルリンクが選んだ気弱な少女。

……ペール……いや、そうか……。
そう。確か自分は魔人に拐われたペールを取り戻しに翔竜山に向かった。
そして山を登っていった先で、もう一つの顔に出会ったのだ。
……魔人、レオン、ハルト……。
ペールを拐っていった張本人である男の魔人。
そう。確か彼と出会い、話を聞いたところ、どうやら不埒な目的で彼女を拐ったわけではないということであり、ペールも無事であったことから一応ではあるが信用した。
そしてその後で地面が崩れ落ち、
……ああ、そうだ。助けに来たのだったな……。
宙に飛ばされた自分とペールを助けるために、レオンハルトが二人を抱きかかえた。そうして自分は彼に何故助けるのかを問い、
……あれは、実に小気味良い答えだったな……。
男が女を助けるのは当然、と。自信に満ちた言葉とともにそう言われたのだった。
正直、男というのは欲望に目が眩んだ醜い愚か者だらけという印象であったケッセルリンクだが、その答えは実に面白いものであった。思わず目を見張って、戸惑ってしまうほどに。
……世の中、ああいった男ばかりなら……。
心からそう思う。レオンハルトのように、女を助けるのが当たり前と、当たり前のように口にして、それを実行出来る者が多数ならどれほど救われることか。
そこでケッセルリンクは自分の身体のもう一つの異変に気づく。
それは、
……どうにも熱くなってしまうな。
身体が火照っているような感覚がする。それに胸の鼓動が若干いつもより早い。怪我の影響だろうか、とケッセルリンクが不思議に思っていたところで、
「っ――」
呻くような声が耳に届き、ケッセルリンクは覚醒した。

その身をゆっくりと起こそうとし、
「……くっ……」
痛みで表情を顰めてしまう。
やはりと言うべきか、どうやら怪我をしているようであり、さっと確認しただけでも幾つかの骨が折れているのが確認出来る。そして血で服が少し濡れているものの、外傷がないようだ。
負傷の具合を確認し、起き上がれない程ではないと判断すると、右手を支えに身体を起き上がらせ周囲を見渡す。
「……ここは――」
そこは木造の一室であった。
家にも見えるが、そこには生活感が無く、椅子や机には埃が被っている。
窓から差す陽光と、木々が生い茂った周囲の景色を見るにどうやら森に建てられた一軒家らしい。
そして自分が寝ている隣には、
「ペール……」
一人用のベッド、その直ぐ横にペールが寝ていた。
自分と同じ様に彼女の身体を確認するも、命に関わるような怪我はないようだ。それどころか怪我も殆どないところを見るに、彼女は頑丈なのか、それとも運が良かったのか。
しかし何にせよ、
「無事に山を降りられたのか……」
翔竜山からの落下。それに何らかの形で耐えきったということだろう。
自分は最初の衝撃で直ぐに気絶してしまったようであり、よく憶えていない。
だがそうであるなら、
……レオンハルトはどこに……？
状況的に彼が助けたはずだ。ならば近くに彼もいないと不自然である。
ケッセルリンクはベッドから身を起こし、家の中を散策する。

といってもそれは直ぐに終わった。大きな部屋が一つ。後は台所やトイレなどの生活に必要最低限のものしかない。
だが、一つ気になるものが散見された。それは、
「この血は……」
家の床に血痕が幾つも落ちており染みとなっている。それは家の外に繋がっており、
「……っ」
まさか、と思い早足で玄関の戸を開くと、声が掛けられた。
それは聞き覚えのある男の声で、
「――ん……起、きた、のか……」
「――！　レオンハルト……！」
声が聞こえたのは戸を開いて直ぐ横の場所。
家の壁にもたれ掛かるようにして、レオンハルトは血まみれの姿で座っていた。
その痛ましい姿にケッセルリンクは駆け寄り、身体の状態を確認する。
しかし詳しく見るまでもなく、彼の身体は重傷であった。
「な、なぜこんな――」
「あ、ああ……いや、自業自得、みたいなもんでな……」
レオンハルトは意識が朦朧としているのだろう。ケッセルリンクの問いにうつらな様子で、
「落ちてる、最中に……色々、と……試した、結果、だ……。空中ジャンプ、とか……出来たら、楽だったんだがな……」
本気なのか冗談なのかわからないような事を言うも今の状況では笑えない。この傷は自分達を助けた為に出来たものなのだろう。ケッセルリンクはそんな彼の傷を見て、
「わかったから答えなくていい……！　とりあえず傷の手当を……！」
彼女にしては珍しく、少し焦ったような様子で声を震わせている。
一先ず彼を家の中に入れるべきだろうか、とケッセルリンクがその通りに彼を抱えようと手を伸ばす。

それを見てレオンハルトは、
「……大丈夫、そうなら……任せる、ぞ……？　ちょっと、疲れた、しな……」
「ああ……！　わかったから休んでいてくれ……！」
ケッセルリンクはレオンハルトに肩を貸すような形で家の中に戻ると、程なくして目覚めたペールとともに彼の手当の為に奔走した。

丸いもの

「――なあ」
「どうしたライゼン？」
「……いつになったら、戦いって終わるのかね？」
「あぁ？　そんなの……あのデカブツが死ぬか、俺達が死ぬまでだろ」
「……どっちかが死ぬまでか」
「何だよ、不満なのか？」
「……お前はどうなんだ？」
「俺？　俺はまぁ……勝てないだろうけどな。でも一矢報いてやるぜ！」
「……死にに、行くのか？」
「はは、そりゃあそうだろ！　俺の死に様をちゃんと見とけよライゼン！」
「……」
「って、どうした？　今日のお前何か変だぞ。……まさか臆病風に吹かれたってわけじゃないだろうな？　あのライゼンともあろうものが。アベルの馬鹿じゃあるまいしよ」
「……いや、戦いは怖くねぇよ」
「……？　じゃあ、いいじゃねぇか。お前、滅茶苦茶強いし。戦いが終わったら王に決闘挑みに行くんだろ？」
「……そのつもりだが。何を笑ってるんだ？」
「ははっ、痛快じゃねぇか。俺たちのライゼンが、出世するんだ。一兵卒から隊長。隊長から軍団長。軍団長から将軍と来て、今度は国王だ！　一番偉い奴になれるかもしんねぇんだぜ、お前！」
「……俺は、別に――」
「じゃあ、もっとテンション上げろよ！　あのカミーラ様を頂けるかもしれねぇんだ。これで俺達部族も安泰だな！」
「よせ、不敬だぞ」
「……相変わらず堅いなーお前は。……あ、堅いってもお前の鱗の事じゃねぇからな？」

「わかってるから一々言わなくていい。――そろそろ時間だな」
「お、待ってました！　へへっ、指示をくれよライゼン！　皆、戦いたくてうずうずしてんだ！」
「……お前達は……」
「？　何だ？」
「……いや、何でも無い。――この俺に続け!!　ドラゴンこそがこの世界の覇者だと、あのデカブツに教えてやるぞ!!」
「応――!!」

気がつけば、ベッドの上だった。
「……っ……」
レオンハルトは身体中から感じる熱を持ったような痛みに顔を顰め、思わず呻いてしまう。
そして完全に意識を覚醒させ目を見開くと、直ぐ様声を掛けられた。
「っ！　気がついたか……！」
「お前は……」
すぐ近く、こちらの顔を覗き込むような態勢で顔が見える。見覚えのある顔だ。
長い耳に短い水色の髪を持った、気品を感じさせる美女。レオンハルトは未だぼやけた様子でその名を呼んだ。
「ケッセルリンクか……一体ここは――ぐっ」
「！　起き上がらない方がいい。まだ傷も塞がりきっていないからな……」
起き上がろうとすると痛みが全身を走った。こちらの苦悶の表情を見てケッセルリンクがそれをそっと押し留めようとする。
だが、
「いや……起き上がるくらいなら大丈夫だ……っと」
「あっ……」

そう言って身を起こし、脇に手を当てる。そして直ぐに肉体の損傷箇所を調べる。
心臓、肺を始めとする重要な臓器の損傷は皆無に感じるが、外傷と骨折が酷いのが感覚からも感じ取れる。幸いなのは腕や足などの骨はそこまで酷い骨折ではない、ということ。動かそうとする度に痛みが走るものの動かすのに支障はない。
肋骨なんかは何本折れているかはわからないが、臓器には刺さって――いるな。これは胃辺りだろうか。
……やっぱ重傷だな……。
動かそうと思えば無理やり動かせないこともないが、身体能力は激減しているだろう。仮に今から普通に戦闘を行っても半分の力も出せない。全力を出そうとするなら命に関わる。
レオンハルトは自身の身体を見やる。全身の至るところから出血もしていた筈だが、それは包帯と何かの薬だろうか、それによって適切に止血、処置されている。おそらくこれは、
「……治療してくれたのか？　よく薬や包帯があったな？」
「……うむ、薬は森でペールが取ってきた薬草で、包帯はこの家にあったものを使わせてもらった」
「なるほどな……」
ケッセルリンクの説明を聞いて、レオンハルトは自分の身体に巻かれた白い物と、ヒリヒリとしながらも痛みを多少和らげている何かの正体に得心する。
そして今この場にペールがいないのは、森に薬草を取りに行っているのだろう。
しかし薬草はそれでいいのだが、
「……この家の主はいるのか？」
レオンハルトは気になってそう質問する。自分が昨晩に森を歩いて見つけた時には、意識が朦朧としていてそんなことを考えている暇がなかった。
二人をベッドに寝かせたら、直ぐに外に出て魔物の警戒の為に番をしていたのだが、今思えば非常事態であったとはいえれっきとした問

題行動である。
なので家主がいるなら一応お礼と謝罪を言っておいた方がいいか、と思ったのだが。
しかしこちらの質問にケッセルリンクは首を振った。
「おそらくはいないだろう……少なくとも今は」
「……昔はいたってことか」
ああ、とケッセルリンクが頷く。確かに家の中は生活に必要なものはあるが、放置されていたのか埃っぽく、どうにも生活感が見受けられない。しかし、家があるのなら誰かが住んでいた。もしくは誰かが建てたのだから人の手が入っているのは確かだろう。レオンハルトも頷く。
そしてケッセルリンクは説明を続けて、
「君が寝ている最中にペールと簡単に調べたところ、ここは森の西側のようだ。周辺にカラーの集落は無く、生き物の気配も少ない。この一帯は魔物が多数存在する場所なのだが……どうやらここは穴場のような場所らしいな。おそらくだが――」
ケッセルリンクは自分の見解を口にする。
「――過去に集落の生活に合わなかったカラーが住んでいたのだろう」
「……どういうことだ？」
レオンハルトは再び補足を求める。そう言うからには理由があるのだろう。ケッセルリンクやペールが知っている、カラーの事情や情報を、こちらは殆ど知らない。
故に視線とともに投げた問いを、ケッセルリンクは素直に答えてくれた。
「……何、単純な消去法だ。この森は人間が住むには適していない。しかし、森に点在する既存の集落からは遠すぎる。カラーでありながら集団の生活に合わなくなった者が住むにはちょうどいい場所だ」
「……そういうものか？」
「ああ。……それから後もう一つ。これが大きな理由なのだが――」
ケッセルリンクはそこで一度言葉を区切る。

何か思うところがあるのか、こちらから少し視線を逸らした。
……何だ？
それを訝しむように見たレオンハルトだが、それを考えるより先にケッセルリンクは口を開いた。
「……人間なら死んでも骨が残るが――カラーなら残らない。故にその痕跡がないのならカラーの方が可能性が高いと思ったんだ……」
「ああ……それって確か……変化の時、だったか？」
「……その通りだ」
ケッセルリンクが頷くのを見て、そういえば聞いたことがあるな、とレオンハルトは思考を巡らせる。
確かカラーはある程度の年数を生きると、それまでの行いで天使か悪魔のどちらかになるという。不老のカラーにとっての寿命がこれに当たるという話だ。
誰から聞いたんだったかな、と記憶を引っ張り出すも思い出せない。多分、ハンティなのだろうが。
……しかしそれなら納得だな。
レオンハルトはその思考を止めて内心で頷く。確かに道中にも人間の痕跡は無かったように思える。歩いた時に出来る獣道どころか、死臭や人間の骨も見当たらなかった。
この家の周囲に魔物が少ないというのなら、死因も少なくなる。病気か老衰か。何にせよ魔物に丸ごと食べられた、とかじゃなければ骨は残っているはずだろう。勿論断定は出来ないが。
人間がこんな森の奥に隠れ住むよりは、カラーが住んでいたと考える方が自然という話だ。
それでも、一人でどうやって家を建てたのか。誰かに作らせたのか。などの疑問は出てくるが、そこまで来るとちょっと分からない。そいつが建築技術を持っていた可能性もゼロではない訳だし。
……だが、まぁ……いいか。
とりあえず運が良かった。日頃の行いの良さが出たか？　などと内心嘯いてみる。
しかしそれよりも――

「……あー……その……なんだ」
「？　どうかしたのかね？　何か必要な物があるなら持ってくるが」
いや、そうじゃない。と、レオンハルトは言外に首を振って否定してみせる。
そして目を合わせながら、
「……治療してくれて助かった。ありがとうな」
「！」
と、お礼を言った。痛む身体に構わず軽く頭を下げる。
ケッセルリンクは面食らったように目を丸くしていたが、ややあって真剣な表情になると、
「……いや、むしろお礼を言うのはこちらの方だ」
と、ケッセルリンクは椅子から立ち上がるとこちらを真っ直ぐ見つめると、
「ペールから改めて詳しい話を聞いて、君の話に嘘がないことがわかった――」
「あ……おいっ」
こちらの制止にも構わずケッセルリンクがゆっくりと腰を曲げて、頭を下げる。
そして続けて、
「……我々の集落を救ってもらい……そして私とペールの命を助けてもらったこと。――感謝する」
さらに、
「そんな私や集落の皆の恩人に、勘違いから矛を向けてしまったことは私にとって慚愧に堪えない。――本当にすまなかった。私に出来ることがあれば何でも言ってほしい」
「……」
そう言ってケッセルリンクはベッドに腰掛けるレオンハルトに向かって、頭を下げ続けた。
その立ち上がりから謝意を示すまでの一連の動作は洗練されており、その口上も合わせて見惚れるような優雅さであった。
しかし唯一それを崩すものがあったとするならば、彼女が未だ頭を

下げ続けていることであろう。レオンハルトの声を待っているのか、彼女は身じろぎ一つせず、体勢を維持している。
だがそれも、心からの思いの表れだろう。それも含めて美しく見えてしまう。第三者がそれを見ていたのなら、まるで絵画やお伽噺に出てくる一場面の様だと評するのかもしれない。
そんなケッセルリンクの感謝と謝罪を、レオンハルトは受け止めていたのだが、
「……」
じっと、彼女がこちらに向かって頭を下げているのを、レオンハルトはきちんと見ていた。
……真面目な女だな。
正直、そこまでしなくてもいいんじゃないか、とレオンハルトは思う。
自分がカラーを救ったと言っても、それは取り引きの内容であったからだ。その後の行動も、勘違いされてもしょうがないことであったのだから気にしていない。
加えて命を助けたのは確かかもしれないが、それも半分は自分の為だ。自分の成長の為に彼女達を利用したに過ぎない。
そしてこちらも現在進行系で怪我の治療などお世話になっているのだから、差し引きゼロみたいなものだろう。
ただ、その上でも、
……悪い気はしないけどな……。
魔物以外からの感謝はあまり受けたことがない為、どうにも面映く感じてしまう。嬉しいには、嬉しいのだが、頭を下げられ続けるのも居心地が悪い気がする。
なのでレオンハルトは頭を上げるように言おうと、口を開こうとし、
「――!?」
そこで気づいた。気づいてしまった。
レオンハルトの視線の先、ケッセルリンクが頭を下げる姿がある。ベッドから身を起こしたように座るこちらに向かって腰を直角に曲

げた、実に綺麗な姿勢だ。鍛えているのだろう、でなくばここまでの長時間はキツいはずだ。
そしてベッドに座るこちらの目線の高さと、女性にしては長身なケッセルリンクが腰を曲げた頭と身体の位置はほぼ同じ。ケッセルリンクの頭が少し下だろうか、という位置だ。
つまり何が言いたいのかと言うと、
――おっぱいだ。
レオンハルトの目線の先、ケッセルリンクが前傾姿勢のようになった上半身には胸がある。
それも只の胸ではない。巨乳だ。
しかも只の巨乳ではない。服の隙間から覗く深い谷間だ。
……おお……！　これ、は……中々の……！
レオンハルトは巨乳を思う。この場合の胸は普通に見るよりも趣があると。
胸というのは柔らかいものだ。しかしそれでありながら弾力があり、元に戻ろうとする力がある。だが、身体の体勢によって胸というのは形を変えるのだ。重力によって。
前傾姿勢によって巨乳は真下に下がる。巨乳自体に重量があるからだ。
しかしそうでありながらも完全には垂れ下がらない。弾力があり、形を整えようとするからだ。
その結果、普通よりもたわわ感がアップした素晴らしい谷間がここに完成する。
これは元に戻ろうとする巨乳本来の力と、世界法則である重力がひしめき合い、生み出された結晶のようなもの。
この世に生み出された楽園の果実。それを目の当たりにしたレオンハルトは顎に手を当ててそれを吟味するように真剣な眼差しで見続ける。
そしてケッセルリンクは先程、出来ることがあれば何でも言ってほしい、と言っていたな、とレオンハルトは思い出す。
……うーん、このまま眺めるのもいいが、出来ることならもっと

色々と――。
レオンハルトは頭を振る。自分は何をやっているんだ、と。ここまで美しい謝意の示し方に下品な考え方を持ち込んでしまった。
いや、これくらいでいいだろう。充分堪能出来たことだし。そろそろ声を掛けて、
「……ふう」
息を吐いて気持ちを切り替える。そんな時だった。
「……た、ただいまで――って、れ、レオンハルトさん!!　気がついたんですね！」
「っ！　ぺ、ぺールか……」
不意に家の戸が開けられ、身体がビクリと跳ねる。
外から帰ってきたのはレオンハルトが助けたもう一人のカラー少女、ペールだった。
……外の気配に気づかないほど、集中しちまってた……。
その事に微妙な気持ちを憶えるも、なんとか気を取り直す。
彼女の手には小さな籠が抱えられており、そこには幾つかの草花が積まれている。どうやら薬草を摘みに行っていたのだろう。
「良かったぁー……！　薬草、沢山取ってきた甲斐がありました――って、ケッセルリンク様？　何をやってるんです？」
未だ頭を下げ続けるケッセルリンク。それに気づいたペールが声を不思議そうに声を掛ける。
なので、ここでこちらが声を掛けて自然な形で終わらせよう、とレオンハルトは画策する。少々、いや、かなり残念だが。
「いや、これは――」
そうしてレオンハルトが声を掛けようとした時。それを遮る声が聞こえた。
「……ちょうど良かったペール。君も、レオンハルトに何か言うことがあるのだろう？」
「えっ、えっと……？」
「……私は今、レオンハルトに諸々の事についての感謝と謝意を示しているところだ」

「え、あ、それって……」
「……」
そう言って、ケッセルリンクは再び無言となった。
これ以上語ると、強制することになってしまう。ケッセルリンクはそれを望まないのだろう。人に言われてそれを示しても、それは当人が心から示したことにはならないから。おそらくはそんなところ。
ペールはそれを聞いて、少しの間呆然としていたが、すぐに立ち直ると、意を決したように表情を真剣なものに変化させた。
「……」
「ペ、ペール？」
レオンハルトが戸惑う。ペールは薬草の入った籠を机の上にそっと置くと、こちらにすたすたと近づいてきて、ケッセルリンクに並ぶ。
まさか、と期待に胸が高鳴る中、ペールは頭を下げ、
「――れ、レオンハルトさん！　その……助けてくれてありがとうございました！」
感謝とともに、前傾姿勢になった。レオンハルトは思わず内心で叫ぶ。
……おっぱいが二つになったあ――!?
いや、この場合は四つと言うべきか？　とレオンハルトは自分でツッコミを入れる。
――レオンハルトはこの後、一分近くに渡ってそれを見届けたのであった。

無自覚な想い

レオンハルトは、二人の提案を聞いて考え込んでいた。
それは、
「――怪我がある程度治るまでここで泊まる、か……」
暫くの間この家を拠点にするという、そんな提案だ。
そしてレオンハルトの復唱するように呟いた言葉に反応する声があった。
「ああ。君の身体は……はっきり言って重傷だ。本来なら動くこともままならない程に。……そうだな、ペール？」
「は、はい。普通の方なら全治数ヶ月はかかる……と、思います。レオンハルトさんは、その……魔人なので傷の治りも速いとは思いますけど……」
「まぁ、それはそうだが……」
ケッセルリンクの説明を引き継いで語るペールに、レオンハルトは何とも言えない様な表情で同意する。
自分の傷を詳しく見てくれたのはペールだ。なんでも、書物を読むことが趣味らしく医術書に関しても、知識が少しあるらしい。なので診断が曖昧なのは仕方ない。少しでも知識があるなら有り難いことだ。それに、
……魔人の回復力は、普通の人間の尺度には当て嵌まらないしな。
普通の人間なら死んでしまうような傷や、回復に長い時間がかかるような傷も。魔人であるなら耐えられるし、その回復速度も、人間の何十倍も速い。
しかしそうであっても、この傷の深さだと満足に動けるまで最低でも数日は掛かってしまうし、これでは色々と待たせる羽目になってしまう。その事実が業腹だが、それは認める他ない。
だから、という訳ではないがレオンハルトは続けて言った。
「……確かに回復にはそれなりに掛かるかもな。でも、お前らまで付き合う必要はないぞ？　多少動くだけなら問題ないから一人でも何とかなる。お前らだけ先に帰っても――」

「いや、それは無理だ」
こちらの言葉を、バッサリと切るケッセルリンク。
レオンハルトは目を細めて疑問した。
「……どういうことだ？　俺はともかく、お前らは大した怪我じゃないんだろ？」
ケッセルリンクはそこで、ふっ、と笑うと自分の手を肩の位置まで上げて首を振る。
「確かに動くだけなら問題ない。しかし、ここから我々の集落までは距離があり、道中に多くの魔物と遭遇することになるだろう。満足に戦えない私とペールでは、そこまで辿り着くのは困難と言わざるを得ない」
「そ、そうなんです！」
「……」
その言葉に同調して、両手を胸の前でぐっと握るペール。腕に押された胸が強調される。そうじゃない。
レオンハルトは視線だけを動かし、二人を見やる。言外に、疑いの視線を向けていた。
だが、
「……それに、私達の為に怪我を負った君を置いていくなど、こちらの気が済まない」
「そうです！　なのでお世話をさせて下さい！」
真剣な、強い意志を秘めた目でそう言われてしまう。
レオンハルトは、それを見て胡乱な視線を解くと、息を吐いてぼそりと、
「……好きにしろ」
「！　……では、しばらくはここを拠点にするとしよう。……ペール」
「ま、任せて下さい！」
そう言った。
了承を得て露骨に気合を入れ始めた二人に、レオンハルトは肩を竦めるしかない。
……はぁ、どう考えても後者が本音なのがバレバレなんだけどな

……。
どうやらこの二人、どうあっても自分を看病したいらしい。恩だの、何だのを魔人に覚えるとか大丈夫か、こいつら。
しかし、それを許してしまう自分も充分甘いのだろう。と、レオンハルトは微妙な感情で二人を見た。
「そ、それじゃあ、早速食事にしましょう！　さっき、薬草を取りに行くついでに色々と食べられる物を取ってきました！」
自慢気に机の上に置いていた籠から野草や果物を取り出すペール。
それを見て思わず感心したように口から出るのは、
「大したもんだな……」
「こ、これでも一応カラーなので……森には詳しいんです。えへへ……と、とりあえず、これでお料理作ってきますね」
「ああ、悪いが頼む」
褒められて照れているのか、ペールが逃げるように台所に向かっていった。そんな彼女にレオンハルトは、なるほどな、と得心する。
常人が迷う森で、こうも簡単に食料を集めてくるとは、流石はカラーと言ったところだろう。自分も、狩りなんかは得意だが、今は難しいだろう。
しかし彼女達が居れば食料なんかには困らないのかもしれないな、と少し気持ちが楽になる。
食べなくても死ぬことはないにしろ、一人だと面倒なことになっていたかもしれない。そんなことを思いながら、
「あいつ、料理も出来るんだな。――お前はどうなんだ？」
「……私か？」
残ったケッセルリンクに軽く話しかけてみる。
しかし返ってきた言葉は、確認するような言葉だ。お前しかいないだろ、というツッコミが脳裏に浮かんだのでその通りに、
「いや、お前しかいないだろ？」
「ん……それもそうだ……」
ケッセルリンクの表情が急に強ばる。
しかし硬い顔、というよりは、どことなく困っている様な表情にも

見えなくもない。出会って間もないものの、凛然とした表情の彼女にしては珍しいな、という思いを抱く。
……緊張でもしてるのか？
と、単純にそんな考えが浮かぶもそんな先程までは普通に喋っていた訳だしなぁ、と否定する。
そうして思考を巡らせながら言葉を待っていると、やがてぎこちない様子で、
「……料理、は……まぁ、まぁ……だ」
「……そうか」
何でそこで区切った？　という思いが浮かぶも口には出さない。そしてやはり、と続けて思うのは、
……緊張してるってことでいいのか？
二回目のそれだ。でもだとしたらどうすればいいだろうか。
何とか緊張を解してやりたくはある。こちらとしても二人きりで居心地が悪いのは避けたいところだ。
窓から差し込む夕陽を感じながら、レオンハルトはゆっくりと思考を巡らせた。

ケッセルリンクは戸惑っていた。
椅子に腰掛けるこちらの眼前、ベッドに腰掛けるレオンハルトと二人だけになった。話がまとまり、ペールが料理を作りにいった為だ。
そして彼に話しかけられたのだが、
……ど、どうすれば……？
話しかけてきた意味は何となくわかる。気を使ってくれているのだろう。
その軽い感じは、これからも気軽にしてほしいという相手からのメッセージとも言える。こういった気づかいは、長であった頃に自分も行った覚えがあるのでよくわかる。
立場が上の相手に対して、下の者達は話しかけにくいものだ。それは、自分なんかが気軽に話しかけていいのか。邪魔になってしまわな

いか、などの様々な思いがあるためだ。例え会話がしたくても、それによって伴う失礼を畏れている。
しかし上位の者から気軽に話しかけることで、会話は容易になる。
下の者はそれに答えるだけでいいし、相手側から出されたお題に、〝あ、この程度なら話題にしてもいいんだ〟と気づかせる事が出来る。
そして今のこの場合、レオンハルトは気遣われる立場なのだ。
実際、こちらとしても様々な思いからそうしたい、と思っている。彼は命の恩人であり、そのために自分の身を削ったのだ。その行為には報いるべきだし、報いたい。
だが、彼はそれに気づいているのだろう。しかしこちらに配慮してそれを口には出さず、気軽に話しかけることによってこちらを気づかう。
そして同時に、その気遣われる立場というのを受け入れてくれたのだ。
やはり出来た人だな、と思う。気づかせてしまったのは申し訳ないが、ならばこの場に至って出来ることは、それをこちらも受けて入れてやることなのだ。ケッセルリンクはそうしたいと思っている。
――だが、何故かそれが出来ない。
今も彼の質問に対して、迷った挙げ句、
……う、嘘をついてしまった……！
ケッセルリンクは内心、頭を抱える思いだ。
なにせ自分は、料理など殆どしたことがないのだから。
昔から料理は周りの者に任せていたし、長を辞めた今でも、人を雇って作らせているのだ。
……痛恨の極みだ……！
それはあまり良い行いとは言えない。ましてや恩人に嘘をつくなどありえないことだ。
しかし、ケッセルリンクはそうしてしまった。その理由も、何となくではあるがわかる。
おそらくだが、レオンハルトと二人きりになってから、妙に緊張し

ているのが原因だろう。心拍数が上がり、顔が熱いのだ。
そして先程の彼の問いに対し、自分はこう思ったのだ。
……料理が出来ない、などと……思われたくない。
故に咄嗟に嘘をついてしまった。
どうにも自分はおかしくなってしまっているらしい。落ち着かなければ。
ケッセルリンクは息を入れて、自分を戒める。今、白状してしまおう。そうしようと決意を秘めた。そんな時だ。
「……それなら、明日にでも食べさせてくれ」
「……えっ？」
と、レオンハルトから何気なく言葉が投げかけられた。
彼の紅い瞳がこちらを向いている。気がつけば自分は視線を逸してしまっていた。なので再び彼と目を合わせると、
……う、あ――。
まただ。胸の鼓動が大きくなる。そして思考が定まらなくなる。
早く答えなければ。いや、違う。嘘を白状しなければ。さっきのは嘘で、実は料理なんで微塵も出来ないと――
「……わ、わかった」
――気づけば頷いていた。
「魔人も食べるのと食べないのとじゃあ治りの早さが全然違うからな。きちんと食べれるのはありがたい」
「そ、そうか……」
再びぎこちない頷きをして視線を逸しながら、ケッセルリンクは思った。
……言い出せなかった……！
何故だ、と思う。自分で自分を制御出来ない。だがその一方で、
……食べたいと言うなら食べさせてあげなければ……！
という使命を帯びたように意気込む自分もいた。
なのでまぁ、料理については明日までに隙を見てペールに教えてもらおうと誓う。嘘じゃなくしてしまえばいいのだ。と、そんな言い訳をして。

「ああ、そういえばあったらで良いんだが、肉も欲しいな」
「に、肉か……分かった」
了承する。
狩りに出なければならないのだが、それくらいなら可能だ。この森には多くの生き物、魔物が生息する。自分なら魔物と戦っても後れを取ることはないだろう。
そんなことを考えていたら、レオンハルトが苦笑して再び口を開く。
「俺の身体が大丈夫そうなら、狩りにでも行くんだけどな。狩りは得意なんだ」
「……そうなのか」
それを聞いて一瞬、魔人でも狩りに行くことがあるのか、と口から出そうになったが、それを心の中だけに押し留める。
そういった事情を詮索するのはよくないことだ。
しかし、ケッセルリンクは迷う。それならばどんな話をすればいいのだろうか、と。
いや、本来なら迷うことはないはずだ。何気ない世間話をすればいい。自分はそういった交流能力は高くないが、それくらいなら出来る筈。
しかし、
「……」
口を開こうとして、言葉が出ない。
何を話せばいいのかわからないからだ。矛盾しているが、していない。彼に対してどんな話題を出すのがいいのかで、悩んでしまうのだ。
先程のお礼と謝罪、そして今後の事についてなど、言わなければならない事については普通に言えるのだが、それ以外の自由な言葉となると選択が難しい。
……わ、私はこんなにも口下手だったか……？
これではまるで知らない人と話す時のペール――いや、それよりも酷い。引っ込み思案で人見知りの彼女でさえ、彼とはちゃんと会話が

出来ている。ならば自分も出来ない筈はないのだが。
そう思っていたら、
「……いや、俺もかなり昔……子供の時なんかは一人で狩りに行ってたんだ。食い扶持は自分で探さなきゃならなかったからな」
彼から言葉が来た。
しかもそれは、先程の言葉についての〝裏〟にあるもので。
「……そう、なのか」
ケッセルリンクは内心項垂れた様に言葉を返す。
言わせてしまった、と思った。彼にとっては何てこと無いことかもしれないが、それでも魔人の過去と言うのは、
……言い難い話ではないだろうか……。
そう推測する。ましてや今の言葉からすると。やはり彼は元々は人間で、しかも親といった存在も――
「……何故、魔人に――」
「……あ？」
気がつけば、言葉は口から漏れ出ていた。
「――っ！　す、すまない。何でも無いんだ……」
「……」
咄嗟に失言を取り繕う。
何てデリカシーがないことを、と自分を恥じる。
軽々しく踏み入って良い話題ではないことは明らかだ。彼の呆然とした表情からもそれが窺える。
彼の様な良識ある人物が、どうして魔人になったのか。そんな疑問で頭がいっぱいになってしまった。しかしだからといって、それを口にすることの迂闊さが分からない自分ではあるまい。
ケッセルリンクは再び頭を下げようとした。先程から失敗してばかりだ。命の恩人である彼に面目が立たない。
「そ、その……私――」
「――俺は王だった」
不意に、レオンハルトは言った。
「――え……？」

思わぬ語句に、今度はこちらが呆気にとられる。
そしてそれを補足するように、
「王と言っても国みたいな大規模なものじゃなく、小さい集落を幾つか纏めた長って感じだけどな。剣の王なんて呼ばれてたんだが……さすがに知らねぇよな」
「い、いや……それよりも――」
「あ、一応だが、誰かに言い触らすのはやめろよ。知り合いにどっかから知られるのは面倒だし、改めて話したことは誰にも無いからな」
「それは……」
彼のそんな軽い声色を耳にして、言葉に詰まってしまう。
口に出すべきは、否定の言葉だ。そんなことを言わせるのはどうなのだ、という気を使った言葉。
しかし、その理性に反して心は、
「……わかった」
彼の事情を知ろうとしていた。
「よし。まぁ、飯が出来るまでの暇つぶしみたいなもんだからあんま真面目に聞かなくてもいいからな」
と、そんな頷くことの出来ない前置きを置いて、レオンハルトは語り始めた。
「んと……とりあえず、俺はとある人間の集落の王だったんだ。王になった理由は、集落で一番強かったからだな。その集落は俺が生まれた時からずっと魔軍と戦ってて、王の仕事は先頭切って戦うことだった」
レオンハルトは左手を枕にして、ベッドの背後にある壁にもたれかかる。
右手で前髪を弄りながら思い出すように上を見る彼の言葉に、ケッセルリンクは頷いた。彼女にとっても理解出来ることだったからだ。その頃から魔軍は人間を襲っていたということ。
そして彼は、自分の集落を、仲間を守っていたということだろう。当然の話だった。
だが、

「――その頃の俺は、集落の人間が嫌いでな」
「え……？」
予想していなかった言葉に、唖然とする。
そんなこちらの様子を見ていた彼は、それが面白かったのか、いたずらが成功したかのように口端を上げた。
「意外か？　でもまぁ、事実だ」
意外だ。しかしそうは言わない。
代わりに問いを投げる。
「……それは、何故？」
レオンハルトはあっさりと答えた。
「ま、色々あるが……一番の理由は、俺が強すぎた所為か」
「……強くあったから……？」
「俺は集落の人間の中じゃ、圧倒的に強かったからな。集落の人間に化け物扱いされてたんだ。ほぼ全ての人間が、俺を避けて、怯え、おべっかを使い、利用する。恵まれた生活はしていたが、満たされた気は一度もしなかったな。そんな生活に、毎日苦悩してた」
「それは……」
何とも報われないことだ、と心で思う。
仲間の為に戦い続け、しかしその彼らから冷たい扱いを受ける不条理。
それを受けていた張本人は、実に面白い思い出を語るように笑みを浮かべた。
「それである時、魔軍との戦いに出たら魔人に出会って――負けた。あの時はさすがに死んだかと思ったんだが、どうにか生きながらえてな」
何故なら、と。
「今の魔王――スラルの奴に魔人にさせられたんだ。どうにも俺が欲しかったらしい」
「！」
魔王。この大陸の支配者であり、魔軍の頂点に立つ暴君。
その恐怖の存在の名前が出たことに、ケッセルリンクは表情が強ば

る。
構わず、レオンハルトは続けた。
「その時にこう言われた。忠誠を誓え――って」
だから、と。
「これ幸いと思ってな。集落の人間を裏切ってやることにしたんだ。あの生活にも嫌気が差していたしな」
「……」
そうなるのも当然だろう。
人間に虐げられていたのなら、人間の為に戦う義理もない。故に裏切って魔物に与するのも当然。
ましてや既に魔人となった身なら、魔王に逆らえる筈もない。
……しかし……。
その選択を残念に思ってしまう。彼の思いは当然かもしれないが、同時にそうあってほしくなかったという思いが胸に生まれる。
ケッセルリンクが少し気落ちする中、レオンハルトは、
「で、まぁ……忠誠を誓う条件に言ってやった」
それは何だろうか。
代わりに集落を滅ぼすことだろうか。
色々と想像を巡らせる。その答えは、
「――俺の集落から手を引けってな」
「……は」
想像とは真逆の言葉が来た。
「それでその条件をスラルが飲んでな。俺は魔人としての生活を続け、今なお集落は無事って訳だ。……まあ、今となっては集落って規模じゃないんだが――」
「い、いや、待ってくれ」
話を続けようとしたレオンハルトを止める。
彼は首を傾げて、
「どうした？　……ひょっとして、少し分かりにくかったか？」
「そうではない。何故――」
ケッセルリンクは言い辛いものを覚えながらも言う。ここまで聞

いておいて今更な気づかいだ。
一息で、
「――嫌いな人間のいる集落を救ったのだ？」
言う。
ケッセルリンクは確信していた。
きっとそこに彼の根幹がある。彼が魔人となり、今のような人格を得た芯。重要な物が存在するのだと。
そして、自分はそれを――
「教えてほしい」
知りたい、と。ケッセルリンクは願った。
その大本の理由を自覚しないまま。
そして、その問いを受けたレオンハルトは、
「……別に美談でも何でもないんだがな……」
頭を掻いて、バツが悪そうにしながら、言う。
それは、
「……結局のところ、アレは俺が悪かったのさ」
「……悪い……か。原因は君にあったと？」
ああ、とレオンハルトが頷きを入れる。
「俺は王と呼ばれる人間だった。だがその立場を、俺は戦うことでしか示せなかった。ずっと民の事を考えている、とか言い訳をして、あいつらに目を向けることをしなかったんだ」
「目を向けるしか……？」
「そうだ。俺は自分の内に目を向けるばかりで、俺を怯える奴らの気持ちを慮ることはしなかった。――俺はお前らの為に戦ってやってるんだから、報われて当然だ。だからもっと良くしろ。と、心の中だけで思っていたんだ。仮にも王と呼ばれる人間が……！」
レオンハルトは過去の自分を思い出して、少し熱が入っているのか、吐き捨てるような強い口調になる。
そして苦虫を噛み潰したような表情で、
「良くしてもらいたいのなら、自分の行動を改めて怯えられないように立ち回ればいい。もしくは、その気持ちを口で伝えるか、命令して

しまえばいい。何も言わないで心の内が伝わるなんて、ガキの戯言だ。王どころか人間としても救えない」
「……」
そうやって自分を恥じる彼に、何も言えなくなる。
だが、こちらの相槌が無くても彼はそれを続けた。
「結局俺は、仁君にも暴君にも成れなかった中途半端な王だった。……今考えると本当に笑えるぜ。やろうと思えば俺は、政治を牛耳る長老達を殺して、本当の意味で王になることも出来た。強引でも何でも、そうやって導いてやれば、少数でも本当の意味で俺を必要として、慕う奴らは現れる。それを俺は、面倒くさいという理由で避けた。王の責任から逃げたんだ」
レオンハルトの表情が侮蔑するようなものに変わる。
だがその対象は自分なのだろう。彼は、そんな語りを聴かせてしまったこちらに対し、目を向けると、
「……悪いな。少し、熱くなったか」
「……謝らないでほしい。聞いたのは私なのだから」
ケッセルリンクはそう否定する。
それに何も否定することはない。結局のところ、彼は、
「……つまり、集落を救ったのは――」
「……今にして思うと、だけどな。俺は魔軍参謀っていう職に就いてるからよく地図を見る。だから、嫌でも向き合うんだ。あいつらを見逃すのは、生まれ故郷を見捨てて魔人についた贖罪なんだとよ」
「数百年も残っている集落……か」
「今は王国だけどな。魔軍と一切戦争をしないからか、随分と馬鹿でかい裕福な国になってるぜ。人間の国じゃ一番の大国かもな。結構な事だな」
結構な事だ、と言う割に彼の顔色は優れない。複雑な思いがあるのだろう。
ケッセルリンクはそんなレオンハルトの姿を見て、
「……君は、いや、貴方は――」
言う。何を言うのか、と呼び方を変えたこちらに、訝しげな視線を

向けるレオンハルトに、
「――優しい人なのだな」
「……は？」
レオンハルトが何を言っているのか、と言わんばかりに疑問符を浮かべる。
ようやくこちらの言葉で、表情を歪ませられたな、と思いながらレオンハルトの言葉を迎える。
彼は立ち直ると、半目で息を吐き、
「……今の話のどこに優しい要素があったんだ？」
「……なら、聞くが」
ケッセルリンクは問う。おそらく、覆い隠している彼の芯を、
「その集落を救うと口にした貴方の思いは、本当にそれだけかね？」
「……」
レオンハルトが無言になる。重ねて問う。
「本心では彼らのことを救いたいと思っていたのでは？」
「……」
レオンハルトが視線を逸した。彼の本音を暴く。
「あまり良い奴だと思われたくないから、敢えて悪い部分だけを抽出して伝えている……なんてことは――」
「……違ぇよ」
レオンハルトがそっぽを向いて否定する。
そんな彼の様子に、微笑を浮かべる。その行動が、意地っ張りな子供の様で微笑ましくなってしまうからだ。
そして得心する。彼は、
……何と言うか……気づかいが下手だな。
自分が言えたことではないだろうが、そう思う。
先程の結論に加えるのなら、彼はきっと、自分を大した奴じゃない、と思わせようとしていたのだろう。
そして真面目な人物なのだろう。こちらが尋ねてしまった問いに、真摯に答えつつも、自分の良いところについては覆い隠そうとした。
それは彼の気質なのかもしれない。自分の話を客観視してしまい、

その中にあった良いところについては自分の口から言うのを憚られる、と言ったところだろうか。
……しかし、やはり魔人らしくない人だな。
どこまで的を得ているのかは不明ではあるが、こちらに気を使い、普通は躊躇するような話を平気で話し、その上で更に気を遣わせないように綺麗なオチを避けたであろうことは事実だ。
良識や寛容さ、優しさを持ち合わせ、それでいて責任感があり、自分へは厳しい理性ある人物。その上であの時のような、頼もしい姿も見せ――。
考えてみると彼は、魔人どころか人間の男らしくもない。
……いや、寧ろこれが男らしいということなのだろうか……。
男という存在に、悪いイメージしか持っていなかったが、彼は随分とそれからかけ離れている。
そんな彼に再び話掛けてみる。何となく、もっと彼の話や、声が聞きたくなったからだ。
「……それにしても、魔軍に属しながら人間に与するというのは……その、大丈夫なのか？」
「……ああ。スラルがそもそも……寛大だからな。あいつは別に人間を苦しめることを喜ぶ奴じゃない。というか魔王らしくもないな。ただの引きこもりのお嬢様って感じだ」
「……そうなのか？」
「ああ。あいつはいつも俺に仕事を任せっきりで自分は部屋に引きこもり、研究したり本を書いたり読んだり、甘いお菓子食いながらごろごろするだけの――って、これちょっと駄目な奴だな……。改めて言うが、絶対誰かに言うなよ？」
「ああ、約束しよう」
「……お前、口堅そうだし大丈夫か。まぁ、スラルは本当に魔王っぽくなくてな。毎日夜になったら俺を部屋に呼んで遊んだり、本の感想を言い合ったり、適当に話をしたりするんだ。俺だけじゃなく、俺の使徒やガルティアっていう魔人も呼んだりしてな」
「魔王が……俄には信じ難いが、貴方がそう言うならそうなのだろう

な」
　まるでそこらにいる普通の子供のような人物像。確かに彼が言うように、元来の魔王のイメージとは程遠い。
　しかし、先程の集落を見逃していることから考えるに、そういうのもあり得るのだろう。
　そして何より、彼が魔王の話になってから急にいきいきとし始めた。きっと今の彼は、
「……それに楽しそうだ」
「ん？　ああ、まぁ……」
「そんな魔王ならば貴方が魔軍に付いたのも頷ける」
「……ああ……まぁ……」
　レオンハルトはそこで言葉を濁した。しかしそれは認めるのが癪、といったもののようで、
「……あいつは……俺がいないと駄目だからな」
「……それほど頼りないのか？」
「いや、そうじゃないんだが……」
　煮え切らない様子で、視線を右往左往させるレオンハルト。
　どうにも答えにくい質問なのか、迷っているような色が表情に出ている。
　しかしややあって、
「……俺が、あいつを――」
　と、そこでレオンハルトは言葉を止めた。
　そして、
「……いや、うん。何だ……俺があいつの為に戦いたいって思っただけだ」
「……なるほど」
　何故か言い直したのが気になるが、そういうことらしい。
　ケッセルリンクはこの場でそれを深く考えることはせず、それを素直に受け止めると、
「色々と、貴重な話だな」
「……喋りすぎたか。もっかい言っとくが、絶対誰にも言うなよ」

「ふふ……ああ、わかっているさ」
微笑を浮かべて了承する。
彼はそこで息を入れて、気を取り直してようにこちらを見る。そして、
「……俺ばかりは癪だな。問題なければそっちの話も聞いていいか？」
「！　……私の話か？」
ドキッと、鼓動が跳ねる感覚を得る。
当初より砕けてきたのか、彼は幾分か、気安い口調で、
「少しくらいいいだろ。カラーの長の話なんて聞ける機会、あんまりないからな」
「そ、それは……」
自分の話、となると戸惑ってしまう。そこでケッセルリンクは気づいた。
先程まで、随分とスムーズに会話をこなせていたというのに、
……ま、また緊張がぶり返してきた……!?
再び彼の視線を意識し、顔が熱くなってくる。
ケッセルリンクは迷った挙げ句、彼の問いに対して、
「……す、少しだけなら」
小さい声で頷いた。
「お、それじゃあ聞かせてもらうからな」
レオンハルトが口端を歪めて、笑みとなった顔をこちらに向けてくるのを見て、ケッセルリンクは思考をフルに回転させた。
――彼が退屈しないような、面白い話を考える為に。

台所。
一人用の狭い家の中で、レオンハルトとケッセルリンクがいる部屋とは程近い場所にペールはいた。
時刻の頃は、夕方から既に夜に変わっている。料理もとっくに作り終わり、持っていくだけなのだが……彼女はとある理由から動けない

でいた。
一つは、部屋の雰囲気があまりにもシリアス。そして楽しそうになったりと、常に入りにくい雰囲気を醸し出している為。
そしてもう一つは――
「ケッセルリンク様……」
自分の尊敬する人物の変化に、顔を赤くして整理している為だ。
「まさか……ケッセルリンク様までレオンハルトさんの事を――」
頭を抱えたペールの言葉は、部屋で語らう二人には届かなかった。

秘めた想い

「――おい！　何をしてる!?」
「……ああ？　チッ……何だ、将軍ですか？　どうかしました？」
「どうかしましたじゃないだろう！　お前、まさか全員殺したのか!?」
「……いやいや、待って下さいよ。俺、別に殺したくて殺したわけじゃありませんよ？」
「何だと……？」
「いやぁ、将軍も知ってるでしょう？　俺、虐められてたじゃないですか。こいつらに。――腰抜けだ、ドラゴンの面汚しだ。……なーんて言われて」
「……それは」
「それで今日も、いつもの様に虐めてきたので……ちょっと決闘をしたまでです。こいつらが言うドラゴンの誇りとやらに則ってね」
「……だから、殺したのか？」
「ええ、当然でしょう。やらなきゃ俺も命が危なかったんですから」
「……同胞だぞ。それに、これまで一緒に戦ってきた。同じ部隊の仲間――」
「――黙れよ、偽善者が」
「……！」
「ここまで見て見ぬ振りをしておいて。仲間、だなんて言うんですかぁ、ライゼン将軍？」
「……」
「おや、だんまりですかぁ？　……まぁ、別にそこまで怒ってないからいいですけどね」
「……すまない」
「チッ……いえいえ！　謝らないで下さいよ！　こちらも口が過ぎましたし……それに俺、ライゼン将軍のことは尊敬してるんですから！」
「……しかし俺は――」

「いいんですいいんです！　ライゼン将軍の立場もわかっていますから、ね……ひひ」
「……お前……変わったな」
「？　変わった？　確かに身体も大きくなりましたし、強くもなりましたけど……何が変わったって言うんです？」
「……魔王討伐の戦功を認められなかったからか？」
「……別に？　どうとも思ってませんが？」
「だが……周囲が認めていなくても、俺は認めているからな？」
「……あー、はいはい。そうですかありがとうございます。……もう行ってもいいですか？」
「……お前なら――」
「？　何でしょうか？」
「――強くなったお前なら、きっといつか……マギーホアに勝てると思うぞ」
「……それはどうですかねぇ……確かに王の座は色々と魅力的ですがね……」
「……いや、お前なら出来るさ。何せここまで伸びたんだ。頑張れよ」
「……んー、まぁ、ライゼン将軍が、応援、してくれるなら勝てるかもしれませんよ？」
「俺が応援すれば？」
「ええ、そうです。俺のことを、ちゃんと応援してくれますか？　ライゼン将軍？　友人のマギーホア様じゃなくて、一部下でしかない俺のことをちゃーんと応援して、邪魔しないというのなら……その夢も叶うかもしれません。――如何でしょう？」
「……ああ、勿論だ。部隊の皆は仲間だと思っているし……お前の方を応援してやるさ」
「……そうですか、それは良かった。これで安心して挑めますよ」
「……ああ、信じているさ――アベル」
「俺も信じていますよ、ライゼン将軍――くひひ……」

夜の森。
満天の星空が木々の間から垣間見えるその場所に、一つの家があった。
その家は、普段は家主が帰ってこない空き家も当然の場所であったが、今は三つの人影が住んでいた。
そして、そこに住むことになった発端である魔人レオンハルトは――

「……」
「……」
――現在、ベッドの上で女性二人に挟まれるような形で寝ていた。
レオンハルトはその状況に何とも言えない感情を覚えつつも、
……何というか……本当、何なんだろうな、この状況は……。
現在の状況を思う。ベッドに寝そべる自分の身体は左向きだ。そして自分から見て前に、ケッセルリンク。後ろにペールがそれぞれ横になっており、二人ともこちらに背を向けている。
そしてレオンハルトは自らの感覚で二人の気配や息遣いの様子を察して、未だ二人が寝ていないことがわかっていた。寝付きが悪い可能性もあるが、今に至っては違うだろう。
その答えを、レオンハルトは内心で言い当てた。
……恥ずかしいならやめとけって、あれほど言ったのによ。
つい先程の出来事を思い出し、レオンハルトは息を吐くような思いを覚えた。

レオンハルトはつい三十分前まで、とてもリラックスしていた。
ペールが作った料理も、多少胃が痛かったものの、食べ終えて、薬草を身体に塗るなどして引き続き治療を受けた。
その際、何故か二人の視線というか手付きがぎこちなかったものの特に問題なくそれを終えたのだ。
しかし問題は夜。時刻は既に十時を回った、というところで、
「――そろそろ、寝る時間だな……」

「ん、そうだな」
「あ、はい。お休みしますか？」
その言葉に二人が頷いたのを見て、レオンハルトは身を起こす。
少しばかりの痛みが身体に走るが、それを気にしないようにしながらベッドの脇から立ち上がると、
「れ、レオンハルトさん？　どうかしたんですか？」
「……何か必要な物があれば取ってくるが？」
こちらの行動を見て驚いたのか、二人が少し慌てたように引き止めてくる。
随分と熱心に看病してくれてるな、というのを感じながら、
「……いや、ベッドを空けないとお前らが寝れないだろ？」
「……え、あ、は、はい？」
「……いや、それは……」
レオンハルトの言葉にペールは戸惑ったように首を傾げ、ケッセルリンクは意味を理解したのか、眉を下げて言い淀む。
そして続けて説明するように、
「俺は魔人だから寝なくても問題はない。お前達が二人でベッドを使え。俺はそこらで適当に――」
「――だ、駄目です！」
「――駄目だ」
「は……」
言葉を遮るように、強い口調でそれを否定してきた二人に戸惑う。
だが、
「……貴方は怪我をしている。それを放っておいて自分だけベッドで寝ることなど、私には出来ないな」
「そ、そうです！　それに、寝なくてもいいって言ってもそれは平常時の筈です！　ちゃんと睡眠を取ったほうが回復も早いんですよっ！」
「……と、言われてもな……」
二人の言葉を聞いて、レオンハルトは困ったように息を吐く。そして背後のベッドを指差しながら、
「ベッドは一つしかないぞ？　おまけに狭いしな」

ベッドの大きさは大人一人が寝る分には一応問題ないが、そこに二人や三人が並んで寝ることは厳しい。
いや、厳密に言えば出来ないこともないのだろうが、それだとかなり密着して入らなければならない為、少々よろしくないだろう。
なのでそういう提案をしたのだが、二人は納得出来ないようであり、おまけに、
「ならば私達が別の……床にでも寝ればいい。それなら解決だ」
そんな事を言う始末だ。なのでこちらも言わせてもらう。
「馬鹿言うな。女二人床に寝かせて、自分だけベッドで寝るとか俺は何様だ？」
「命の恩人様だ」
「……そうだとしても俺の居心地が悪いんだがな」
「それは私も同じだ。負傷の身である貴方を差し置いて寝るのは居心地が悪い。どうか我慢してくれ」
……こ、こいつ……さては、意外と頑固だな……!?
俄然とそう言い切るケッセルリンクの瞳には、意地でも引かない、といった強い意思を感じる。使う場面を間違えてる気がする。ベッドくらいで意地になるのはどうなんだ。
……しかし、どうするか……。
こいつが折れないと寝かせることが出来ないが、自分としても折れたくはない。
そしてこういう時、いつもの連中なら楽なのになあ、と思う。ガルティアみたいな男だったら問答無用で叩き出すし、カミーラ相手なら差し出すし、向こうも遠慮なく占拠するだろう。キャロルやハンティなら床で寝かせようが一緒に寝ようが別に構わないし、喜んで差し出してくるだろう。ハンティは違うか。
スラルなら……まぁ、なんとかなるだろうな。何となくそんな予感がする。
と、そんな事を考えながら案を模索していると、不意に声が上げられた。
「……あ、あの！」

「あ？」
「どうかしたかね？」
意を決したようにそれなりの声量を出したのはペールだ。レオンハルトとケッセルリンクの視線が、ペールに向けられる。
ペールは視線を浴びて一瞬だけ怯むも、直ぐに深呼吸をして気を持ち直す。そして恐る恐ると、
「――さ、三人一緒に寝るのはどうですか……？」
と、こちらを見上げて様子を窺うようにそう言った。
レオンハルトは半目になる。そして若干呆れた様に額に手を当て、
「……いや、お前……それはねえだろ」
「な、何でですかっ？」
どうにも舞い上がっているのか、妙に勢いよく聞いてくるペールに、レオンハルトは息をつき、それを理解するように努めた後に、その見解を声に出した。
「……まぁ、そういう提案するってことは、お前は俺と同じベッドで寝ても構わないってことだな？」
「は……はい……！」
「……それはいいとしてもだ。ケッセルリンクのこともちゃんと考えろ」
そう。仮にペールが構わなくてもケッセルリンクの了承を得なければ駄目だろう。
そしてそんなケッセルリンクに視線を移してみれば、案の定固まっていたため、彼女を手で指し示しながら、
「……」
「ほら見ろ。お前の突拍子もない提案で、ケッセルリンクが呆れて声も出ないようだ――」
「――わない」
「……あ？」
と、不意に小声が聞こえた。
聞こえにくかったのと、信じられない言葉だった気がしたため聞き返す。

しかし、
「……今、なんて――」
「……か」
「か？」
レオンハルトが復唱する中、ケッセルリンクは何故かこちらから目を逸らすと、微妙に顔を赤くしながら間を開けて、
「……か、構わない……と、言ったんだ……」
「……そ、そういうことですっ」
「……」
ペールまでもが今度は顔を赤くしながら焦ったように言う。レオンハルトは無言。そして表情を作らないまま頭を抱えて瞼を閉じると、
「……好きにしてくれ」
考え込んだ末に、彼女の提案に乗ることにした。

――そうして、今に至る訳である。
更に言うならこの体勢も、
……色々と考えた結果何だよな……。
寝る前にベッドの配置を決めたのだ。
まず、身体が一番大きい自分が中央に陣取り、左右に二人を配置する。
その際に全員が横向きに寝ることで、スペースを出来るだけ確保する。仰向けやうつ伏せで寝ようとすると横に並べた時に自分の身体に押されるように左右の二人がベッドからはみ出る為、必然的に身体が重ねることになってしまう。
簡単に言えば、二人が自分の身体に身を寄せることで不可能ではないのだが、それは色々と駄目だろう。
なのでこういった全員が横向きで寝る形になっている訳だ。
レオンハルトはその感想を思う。それは単純明快で、
……ま、そりゃあ女の匂いや感触がくるよなぁ……。

こちらの鼻孔をくすぐる二人の髪の匂いや、身体の感触を感じてそう思う。
二人とも背を向けているため、自分にとって一番好きな感触はこないものの、それでも有り体に言ってかなり気持ちがいい。
……こういう時、小説なんかに出てくる不自然なくらい初心な男だったら慌てふためくんだろうなぁ……。
読んだ本の登場人物、主に主人公になぞらえてそんな事を考える。
しかし、そうはならんだろ。と、取り留めのない意見が浮かんでしまう。
レオンハルトは持論を頭の中に展開する。そもそも男ってのはこういった状況で慌てふためくことはない、と。
男性が女性の身体に興味を抱く頃。おおよそ十四、五くらいからだろうか。
はっきり言おう。――その頃の男は猿である、と。
性に目覚めながら、性の経験が無い。ないしは浅い男の頭の中は、特殊な環境や目的を持って育った、などの条件がない限り、ピンク色なのだ。
まぁ、初心は初心と言っていいだろう。しかし、彼らはそういった経験を貪欲に愉しもうとするものだ。
こういった状況になれば、おそらく八割の男性は性欲に流される。性の誘惑に勝てる男性は、あまり多くはない。
だが、それも性の経験があり、慣れているのなら、もしくは興味が薄いのなら誘惑にも勝ちやすいだろう。
一定の年齢を重ね、そういった経験を順調に積み重ねていったのならば、理性も働くし、性を知っているが故に、性欲に負けることもない。
故にこういったスケベシチュエーションで、慌てふためく人種というのは、現実にはあまりいないのではないか、という持論だ。
現実に聞いたことも見たこともない為、そう思うのかも知れないが。なのでそういった純粋な男が居れば逆に見てみたいな、とレオンハルトは思う。その時は喜んでこの持論を破却しようと。

さて、ならば自分はどちらなのかと言うと、
……俺は楽しみたい派ではあるけどなぁ……。
ただ、幾分か女性というものを知っているのと、そこそこの年を重ねているため動揺することはないが、状況の範囲内で楽しむくらいの余裕は持ち合わせているつもりだ。
なのでこの状況はむしろ気持ちいい分、ぐっすりと眠れそうだ。実際人肌、異性を抱いて寝るのはリラックス効果があると思う。
城でもたまに、キャロルがベッドに潜り込んでくるが、時たま黙認して抱き枕にしてやってるのだが、大人しい時のキャロルは実に抱き枕に最適だ。
ただ、うるさい時は騒がしく、というか妙に体温が高くて熱いので、ベッドから蹴り出す。何か犬みたいな奴だな。
そして思うのは、
……というか、こいつらは落ち着いて寝られるんだろうな……？
緊張して睡眠が取れない、とかならちょっと問題だ。
レオンハルトは二人が今、どんな思いなのだろうか、と何となく疑問を持ちながら二人の体温を感じて安らいでいた。

……う、う、うあああああ――!?　わ、わわ私、男のひ、人と一緒に寝ちゃってますよ――っ!?
ペールは内心、狼狽えまくっていた。
背中には、同じくレオンハルトの背中がぴったりと張り付いていて熱を感じる。
彼女は、自ら提案したことながら、とんでもないことをしでかしてしまったと思った。
それもこれも、
……う、うぅ……け、ケッセルリンク様と、い、一応自分の為にやったこととはいえ、流石に大胆すぎじゃ――。
ペールは自分の想いと、尊敬するケッセルリンクの事を考えてそうした。

それは確信に近い思いを、彼女に憶えた為であった。それは、
――ケッセルリンクは、レオンハルトに対し、自分と同じ想いを抱いているのだということ。
彼女のぎこちない様子や、会話を見聞きしていれば、それは明らかであった。
しかし、同じ相手を――という部分に対して、別に含むところはない。相手が尊敬する人物ということもあるが、カラー的には、同じ男性を共有するのは決して珍しいことではないからだ。
なのでケッセルリンクを応援することは問題ない。何なら協力しようと思うくらいだが、
……け、ケッセルリンク様、多分、私よりも初心な気がするんですよね……。
彼との会話での狼狽えっぷりは、自分の比じゃない気がする。それでも、表面上はぎりぎりのところで取り繕っているのはさすがと言うべきなのだが。
しかしそんな彼女に何かを期待するのも厳しいだろう。向こうは男性ド素人なのだ。
自分は一応、書物でこういった恋愛模様はよく知ってるし、一応彼と過ごした時間も数時間程度ではあるが、長い。少なくとも百年間男性経験がない前長よりはマシだろう。決して馬鹿にしているわけじゃない、うん。
……で、でも、どうしよう……。
しかしペールは手詰まりを感じていた。
というのも、背中に感じるレオンハルトは、美女二人（自画自賛）に挟まれているのにも関わらず、
……すごいなぁ……全然落ち着いてる……。
書物の中では、こういった状況に陥った男性は狼狽えがちなんですけどねぇ、という思いを抱く。やはり書物と現実は違うのだろうか。
……というか、ちょっと体勢キツいです……落ちそう……。
元々一人用のベッドに三人で寝ている為、足や手の先がはみ出るのは仕方ないのかもしれない。

だが、そこで気づく。よく考えてみれば自分は、
……そういえば私、いつも左を向いて寝ていたんでした……。
しかし今は右を向いて寝ている。なのでちょっとばかり違和感を感じてしまう。
どうしたものか。と、そんなことを思っていたのだが、
「……！」
不意に、ペールは天啓が舞い降りる。
というか別に最初からそうすれば良かったのではないか、とも思う。
……いや、でも……それは慣れる為にも必要でしたし……。
なのでそのやり方は間違ってない。しかしここからは、
……よし。
ペールは少し迷ったが、それを決めた。
というか、単純に寝づらいですし、とそんな事を考えながら身を動かして、反転させると、
……え、えいっ。
ベッドから落ちないように、レオンハルトの背に身を寄せた。

……お、おおおっぱいが来た——!?
レオンハルトは狼狽えた。
こちらの背中で身じろぎしたかと思えば、背中に押し寄せられる質量と熱の塊。
それが自分の背中で押し潰され、形を変えている。
まごうことなき巨乳だ。素晴らしいものだ。
しかし、だ。レオンハルトは頭を抱え、
……お、落ち着け……落ち着け俺……！　今ここで何かを——もとい、ナニかを行う訳にはいかない……！
出会って一日で即同衾＆合体では、さすがによろしくないだろう。
貞操感なんてものはどうでもいいにしろ、無理やりは好きじゃない。
問題がズレているような気がしたが、とりあえず落ち着くことにし

よう。そう、平常心だ。
自分はこの背中の巨乳――そう、その枕を背にして寝るのだと思えばいい。そうやって素直に楽しめば何とも思わない筈だ。
レオンハルトはそう言い聞かせ、一度落ち着いた。

……な、ななな、何だ……!?　レオンハルトが急に……!?
ケッセルリンクは、ベッドの中で男と一緒に寝ることに身悶えていた。
背後、何故かレオンハルトが身体をビクッと動かしたことで、振動がこちらの背中に伝わり、
……お、男の身体が……こうも熱く、堅いものだったとは……!
およそ百年を生きてきたが、初めて知ったことだ。
というより自分は、こういった知識や経験については皆無であることに今更ながら気づく。
男性についての生態については見て知ったつもりでいたが、触れ合ったことはないし、そうしたいと思ったことは無かった。
しかしこうしてみると、彼の身体の熱や堅さが妙に心地よく、その上で、
……も、もっと触れ合ってみたくなるのは……一体、何故だろうか……。
そんなことを思ってしまう。先程から、彼の熱が移ってしまったのか、身体は熱く、鼓動はとても早い。
そして自分の考えが、どうにもはしたない考えのような気がして顔を両手で覆ってしまう。男性と少し触れ合っただけで、更に興味を抱くとは、
……ひょっとして……私は、不埒な女だったのか……!?
と、そんな危惧を抱いてしまうのだ。
そうでないとしたら――
……あ――。
ケッセルリンクはそこで、ある可能性に気づいた。

自分や、そういった異性に興味を抱く女性を客観視し、分析した結果だ。集落のカラーがよくそういった想いに駆られることもある。
だが、そんなことがまさか。
よりにもよって自分に？
そんなことを考え、ケッセルリンクは、
……確かめなくては……。
自分の内面を見抜く為に、行動に出ようとした。
やはり手っ取り早いのは何であろう、と考え、出てきたのは、
「……」
ケッセルリンクは身体を動かした。
それは、レオンハルトに背中を向ける自分の身を、前面に向ける為であり、
……ん、こ、これでいいか……。
ケッセルリンクはレオンハルトと向い合せになる。
彼の胸に顔を預けるような形となり、
……い、いかん。物凄く、凄まじく……恥ずかしいぞ、これは……！
確かめる為とはいえ自分は何をやっているのだろうか。
しかし、ここまで来たのなら引き返す道はない。
故にケッセルリンクは顔をそっと上げて、彼の顔を見上げる。
そこには、
「――――」
「……ぁ」
レオンハルトがいた。
暗い部屋の中ではあるが、夜目は利くほうである。その暗闇の中で、
……綺麗な、顔だな……。
金色の滑らかな髪がある。鋭く紅い双眸は閉じられており、その鳴りを潜めている。顔の造形は整っており、男らしさがありながらも、美しさもある。
視線を下に移動させれば、彼の肉体がある。女性にしては長身の自

分よりも大きい背丈だが、身体は全体的に細身だ。しかししっかりと鍛え上げられているのは、筋肉の付き方や身体を触った時の硬さで大いに理解出来る。彼は剣士であるから、おそらく余計な筋肉は付けていない、もしくは付けないようにしているのだろう。肉体美と機能美が共存した良い身体だと思う。

そして彼の身体には、包帯が巻かれており、そこには傷がある。

……この傷が、この身体が、私達を――私を、守ったのか……。

そんな事を想い、彼の身体に身を寄せる。少し動いたような気がした。しかしそれでも構わず、身を寄せ、

……ああ、そうか。これが――。

ケッセルリンクはレオンハルトの身体に抱きつくように身を寄せて、自分の内心を理解した。

この身が焦がれるような、愛おしくなるようなこの気持ちが、

――恋、か。

ここに至って、ケッセルリンクは全てを理解した。

顔が熱くなるのも、鼓動が早くなるのも、思考が定まらなくなるのも、全部――レオンハルトのことを思っていたからなのだと。そしてそれを自覚すると、

……ああ……なるほど……これはマズい、な。

ケッセルリンクは彼の首元に顔を埋めて恍惚したように息をついてしまう。

恋心を理解してしまった瞬間、それに溺れてしまいそうな感覚に頭が支配される。

集落を出ていく、そして帰ってくるカラー達はこんな想いを抱いていたのか。道理で、熱っぽくなり、視野が狭くなるわけだ。これから抜け出すのは至難の業で、

……いや、しかし……抜け出す必要は……。

今までの考えが一新されそうな程に甘美だ。そんなことを考えてしまう程には。

別にカラーは恋愛を禁止されている訳ではないのだし、別にそういった関係になっても構わない筈だ。

そうなるには当然、相手の許可が必要となる訳だが、
……あ――？
と、ふとそこで、ケッセルリンクは気づく。
半ば、自覚した勢いから、どうやって彼の気を引こうか、などと考えてしまっていたところで自分の進退に気づいたのだ。
それは、
……私、には……そういった時間はもうない……。
自分は、既に長を辞し、後は変化の時を待つのみの隠居人。
彼と関係を深める時間はもう殆ど残っていないのだ。今この瞬間にも、自分は自分で無くなる可能性があり、それを思うと、
……それは……嫌、だな……。
と、自然にそう思い、彼の身に強く身体を寄せてしまう。
今までは、いつそうなっても構わないと思っていたのに、こうなると急に未練が湧いてくるのだから度し難い。
しかし現実問題、それは必ずやってくるもので、自分が幸いを得る為には色々と条件が厳しい。
だから、
……ふっ、私は情けないな……。
ケッセルリンクは思う。
自分は百年も生きておきながらも男性を――いや、恋愛の一つも知らないで達観していたのだから。
知ったつもりであったが、実は知らない事だらけであったのだ。これほど滑稽な事はあるまい。
されど、
……せめて少しの間だけでも……悔いのないようにしたいものだな……。
ケッセルリンクはそうして愛しい人の首元に顔を埋めると、そっと口を寄せて想いを呟いた。
……お、おおおっぱいが増えたああ――!!

レオンハルトは慌てふためいていた。
背後からの巨乳に耐えて、そろそろ慣れたと思った頃に今度は前面から抱きつくように巨乳が来た。
背中と同じ現象が、こちらの上半身で起きるのだが、
……こ、こいつ、何で身じろぎしてやがるんだ……？
抱きついてきたのは百歩譲っていいとしても、その動きのおかげで、巨乳がどんどんと押し付けられて辛い。
――具体的に言うなら血が集まり、腰を引かなくてはいけないくらいには。
レオンハルトは自分の身を呪った。
……ここまでしておいて、何もしちゃいけないんだよなあ……くそっ、どういうつもりだこいつら……！
一瞬、マジで襲ってやろうかと思うが、その考えはすぐに切って捨てる。
しかし幾ら何でも生殺しだ。せっかく好物が目の前――どころか後方にもあるのに食べてはいけない、とはどんな拷問だろうか。
レオンハルトはしばらくの間、前後からの巨乳の飽和攻撃に耐えることとなり、睡眠時間をかなり減らすことになった。

企み

「――アベル！　アベル!!　どういうつもりだ!?」
「あ～……うっせぇな……！　見りゃわかるでしょうがライゼン将軍！」
「わからないから聞いている!!　お前が何故、行方不明のカミーラ様を連れているんだ!?　しかもその軍勢は――」
「だぁからぁ――見りゃ分かんだろうがよぉっ!!　俺は出ていくんだよ！　この国からなぁっ!!」
「――っ！　何故だ!?　何故、そんなことを――！」
「……何故、ねぇ……じゃあ、ライゼン将軍は何故だと思いますぅ？」
「……何？」
「俺が、この国を、ドラゴンを裏切る理由ですよ！　まさか、気付きもしなかったんですかぁ？」
「……そ、それは――」
「……あー……もし気づいたのなら戻ってもいいっすよー」
「！」
「ちゃんと気づいてくれたのなら……こいつら解散させて、自らマギーホア様に謝りに行きます。許しては貰えないでしょうがね」
「……アベル。お前は――」
「……」
「お前は――――皆に、認めてもらなかったことが――いや……この国の在り方が嫌になったのか!?」
「！」
「ドラゴンの、好戦的で、正々堂々という旗を掲げ、正面からの力比べや自ら命を捨てるようなやり方が是とされ、お前のような戦いに頭を使うようなやり方は否定され、蔑まれる。そんな社会が嫌になったんだろう!?」
「……それは……それを、何故、ライゼン将軍が？　貴方は四大聖竜で、マギーホア様の友人で――」
「……俺も、ドラゴンの在り方に疑問を憶えたことがない訳ではない。

……いや、違うな。確かに疑問を憶えているからだ。憶えているだろう？　あの、魔王――お前が倒したククルククルとの戦いを」
「……はい」
「ドラゴンはどれだけ強大な相手でも正面から戦いを挑む。それも喜んでだ。喜んで皆、死にに行く。正面からバカ正直に、だ」
「……そうでしたね」
「ああ。俺も戦いは好きだ。強い相手に燃える気持ちもわかる。……だが、力の差を弁えず、思考を放棄してただ突っ込むことは戦いでもなんでもない――只の自殺だ」
「……」
「俺は、それが嫌いだった。俺は仲間が好きなんだ。守りたいと思ったから戦いに参加したんだ。俺のこの巨体が、堅い鱗が、強さが。同胞を救う手立てになるならこれほど嬉しいことはない。だが――」
「……それは、叶いませんよね？」
「……ああ、その通りだ。普通の魔物との戦いならいざ知らず、魔王との戦いでは俺の巨体や堅い鱗では全員を守るには無理がある。守れても精々周囲にいる連中だけ。殆どのドラゴンはあの魔王に羽虫のようにはたき落とされ、無残に命を落とす」
「……そんな光景ばかりでしたね？　まぁ、俺には縁のない戦い方でしたけど……」
「……正直、お前のように隠れ潜んで隙を見て攻撃を繰り返してくれた方が遥かに助かる。そんなお前が、あの魔王にとどめを刺した時は、救われたような気分になったよ」
「……なるほど、同じ様な気持ちを抱いていた、と？」
「……そうだ。俺は、他のドラゴンのその考え方を――いや、視野を広く持ってほしかった。戦いで死ぬ、納得の行く戦いで死ねるなら俺も文句はない。寿命がないドラゴンにとって、終わりは納得のいく戦いで死ぬことだ。しかし、あの戦いで死んでいったドラゴンの中には、何の太刀打ちも出来ず、何も思うところもなく死んでいった同胞が数多くいる。傲慢かもしれないが、俺にはそれが許せなかった……」
「……確かに、傲慢ですね」

「だろ？　……まぁ、だから俺は、マギーホアに敗れた時、あいつの言葉を聞いて――」
「……でも、叶えられますよ」
「……何？」
「簡単なことです。今生きるドラゴンの体現者。ドラゴンの王を倒せばいいんですよ」
「――！　そ、それは――」
「ええ、ライゼン将軍の友人――ドラゴン王、マギーホアを打ち倒し、王になること。それがこの世を変える方法です」
「……だから、軍勢を引き連れて……？」
「そうです！　ライゼン将軍！　俺は、この世界を変えたいんですよ!!」
「世界を……」
「ええ！　ドラゴンが今のような価値観に支配されない世界！　俺の様に頭を使った、そんなことだけで見下されているドラゴンが救われる世界です！」
「……」
「……そこで、ライゼン将軍！　俺と組みませんか!?」
「……お前と、組む？」
「はい！　俺とライゼン将軍が組めば、マギーホア様や他の四大聖竜が牛耳る今の世界を支配し、新たなる秩序を築くことが出来るかもしれません！　貴方が仰る、仲間のドラゴンが無為に死ななくても良い世界だって作れます!!」
「……だが、それは一対一ではなく――」
「ライゼン将軍!!　チャンスは今しかないんです!!　他の四大聖竜もおらず、居城にマギーホア様しかいない、今が好機なんですよ!?　今のままではドラゴンは一生このままです！　……いえ、もっと酷くなるでしょう!!　だから、その前に――」
「……」
「――俺と、理想の世界を作り上げましょう!!」
「……すまない」

「……そ、そんな……ライゼン将軍……？」
「……悪いが、それは出来ない。あいつを裏切り、闇討ちするような真似は」
「……なら、俺は――」
「……ああ。そうだな……だが、俺も一緒に謝りに行く。カミーラ様を拐った罪は重いだろうが、どうにか命は助けて貰うように頼んでみよう。ある意味、俺も同罪の様なものだ。それにアイツは結構物分りが良くて――」
「……なら、ライゼン将軍。最後に一つ、お願いがあるのですが――」
「……お願い？　それは何だ？　言ってみろ」
「ええ。――貴方の手で、俺を連れて行って下さい。ライゼン将軍に連れて行ってもらえるのなら、悔いはありません」
「……わかった」
「……ライゼン将軍」
「……何だ、アベル？」
「……貴方が、上司で良かったですよ」
「……ああ。俺も、お前が部下で良かったよ」
「ええ、本当に……」
「……？　アベル――」
「本当に――――お前みたいな間抜けが上司で助かったぜッ――!!!」
「――がっ!?　あ、アベル!?」
「馬ぁ鹿が――!!　間抜けかテメェはよぉ！　おらおら！　テメェらも今のうちにやっちまえ!!」
「ぐっ――!!」
「チッ……流石に硬ぇな……テメェらは足止めしとけよ!!　俺様はちょっくら行くところがあるからなぁ!!」
「あ、アベル――！　お前――!?」
「あぁ!?　うっせぇぞ気軽に話しかけてきてんじゃねぇぞバーカ!!
今の俺は魔王様だぜ？」
「魔王だと――!?」
「ああ、そうさ！　俺こそが、世界の支配者たる魔王だ!!　その好意を

無碍にしたお前は、もういらねぇんだよ!!」
「アベル……ぐっ！」
「せっかく魔人にでもしてやろうと思ったのによぉ！　――おらおら
どうしたぁっ!?　随分と痛そうじゃねぇか！　ギャハハハッッ!!」
「っ……！」
「よぉーしよし。テメェら、ちゃんと足止めしてろよぉ？　そいつは
油断ならねぇからな。細心の注意を払え。そんで――メガラス！」
「……」
「テメェだけは俺に付いてこい！　いざとなったら使ってやるからな
!!」
「ア、ベル……！　お前……！」
「それじゃあな、ライゼン将軍？　テメェは随分と利用価値があった
ぜぇ？　道化としてな！　――お前は……皆に認めて貰えない、く
ふっ、こと、がって、ギャハハハッッ!!　笑わせんじゃねよバーカ!!」
「あ、アベル……！　お前……!!」
「心配しなくてもぉ、ライゼン将軍の理想の世界はぁ、俺が作ってあげ
まちゅよぉ？　――俺だけに都合が良い世界をなぁ――!!　ギャア
ハハハハ――」
「――ま、待て……！　アベル……！　アベル――!!」

――レオンハルトの休暇、六日目。とある一軒家にて。

早朝。
窓から差し込む淡い日差しを浴びて、レオンハルトは覚醒した。
「……ねむ」
少し寝ぼけながらそう呟く。未だ頭は完全に回っていないが、それ
でも思い出すのは、
……昨日はあんま眠れなかったからな……。
魔人は睡眠をしなくても死なないとはいえ、眠ったなら眠ったで気
だるさというのも感じるものだ。故に若干の眠気が残っているのは

致し方ない。
まさかここまで悩ませてくるとは。昨夜は不覚をとったと、そう思う。
何故なら三人で寝ることとなったからだ。そしてこちらを挟む二人の身体には、
……とんでもない物が付いてた訳で……。
そしてどういう訳か、最初は二人とも背中を向けてきていたのに、途中からこちらに向き直って抱きつくようになっていたのだ。
しかもその巨乳をこちらにぐいぐいと押し付けながらだ。
そんなことをされれば少なからず悶々としてしまうのが男というものだろう。実際途中までは、そのせいでどうしたものか、と悩んでいたのだ。
しかし途中からはまた別の理由で眠れなくなって――
「――起きたのか？」
「――！」
レオンハルトが身を捩りながら瞼を開けると、それに気づいたような声が脇から聞こえてきた。
既にベッドには自分一人。ならば声の在所は必然的にそれ以外だろう、と部屋のスペースの方向に顔を向ける。
「……おはよう」
「ああ、おはよう」
そこには案の定、ケッセルリンクがいた。彼女はベッドの脇に置かれた椅子に座り、微笑を浮かべて挨拶を返してくる。
「今ペールが朝食を作っている。今のうちに包帯を取り替えよう」
「あ、ああ……」
そう言われては断るべくもない。
レオンハルトは彼女の様子に若干の違和感を覚えつつも身を起こしてベッドの脇に座る。
すると彼女は、同じ様にベッドの脇に――自分の隣に替えの包帯を座って座った。
「……じゃあ、頼んだぞ」

「任せてほしい」
身体に巻かれた包帯に手を伸ばし、丁寧に外していくケッセルリンク。
その作業はとてもスムーズで、レオンハルトも安心して任せていられるのだが、
「……驚くべき、回復力だな」
「ん、……あ、ああ。魔人だからな」
考え事をしていると、自分の傷の状態を見て驚いたような気配が背中から感じられる。
実際驚いているのだろう。ケッセルリンクの視線の先、包帯を取ったレオンハルトの肌の傷は既に止血されており、もうどこにも出血した部分はない。
だが、
「傷が完全に塞がった、とまではいかないし、身体の内側についてはまだまだだが……それでも、いつもより治るのが早い」
「……そうなのか？」
「ああ。普段はもう少しかかる筈だが……これも、お前達の看病のおかげだろうな」
「！　そ、そうか……」
上擦った声が背後から聞こえる。実際、薬草などの効果もあるだろうし、食事や睡眠も無関係ではないのだからそれは事実だろう。
ケッセルリンクはその言葉を聞きながら、包帯を外し終えると、
「――それなら良かった」
嬉しそうな声色でそう言って、新しい包帯を巻き始めた。
その動作は淀みがない。だが、
……っ、なんだか、昨日までと全然違うな……。
レオンハルトは謎の違和感を感じていた。だだそれは悪い意味ではない。良い意味で違っていたからこそ、レオンハルトは困惑する。
包帯を巻くその手つきは昨日までと違って、どこか労るようでありながらも――慈しみを、感じる気がする。
有り体に言って、丁寧過ぎるのだ。

勿論それは悪いことではないのだが、こちらにとってはこそばゆい気分になってしまい、どうにもやりづらい。
更に時折、
「……この、身体が――」
小声で言葉をつぶやき、背中をじっと眺めている様な視線を感じる。
いや、言葉を憚らずに表現するなら――うっとりとした様に見ている様に感じた。
「……」
明らかに昨日とは違う様子のケッセルリンクに包帯を替えてもらいながら、結局レオンハルトはそれを指摘することはしなかった。

朝食の後。
ケッセルリンクはペールに呼び出されて、家の外に来ていた。
「それで、話とは何かね？」
「……え、ええっと……その……」
何故か言い難そうにするペールに首を傾げてしまう。
「……出来ればで構わないが、何か用があるのなら早めに済ませよう。彼から長く離れるのは好ましくない」
「……ケッセルリンク様」
「？　どうかしたのか？」
当たり前のことを言っただけのつもりだったが、ペールが半目で名前を呼んできたので疑問符を浮かべてしまう。こちらとしては、レオンハルトの容態も考えると、彼を一人にするのがよくない、という意味を込めて言ったつもりだ。
勿論、彼から離れたくないというのも事実ではある。
しかしそれは、バレてはいないだろう。故にケッセルリンクは、素知らぬ顔で続けてそれを口にしようとしたところで、
「――レオンハルトさんのこと――好きですよね？」
「……」

言葉を失った。同時に心臓が跳ねる。
ケッセルリンクは動きを止めた状態で考えた。
……な、何故……それがバレた……!?
勿論、動揺していることはおくびにも出さずに思考する。
その気持ちは、昨日の夜にようやく自覚したことだ。起床してからまだ数時間程度しか経っていないのに露見する道理はない。
しかしそう言われてしまったのでは致し方ない。嘘は好きではないが、何か誤魔化すような発言で本心を覆い隠すべきか。そう思い、ペールに視線を向ける。
「……」
だが、ペールの顔はそのことを確信しているのか、半目のままじーっとただこちらを見ている。
思わず目を逸らしたくなるが、ここで目を逸らしてしまえばそれを認めているようなものだ。なので黙した状態で考える。ここから何か逆転するような一手は、
「……好きですよね？」
「あっ……い、いや、その……それは」
詰められるように再度問いかけられ、言葉に詰まってしまう。奇妙な圧力を感じ、後退ってしまったのは気の所為ではないだろう。
ペールはこちらの目を見て話す。
「……好きじゃないんですか？」
「……ど、どうだろうか」
「……じゃあ、嫌いなんですか？」
「き、嫌いではない」
「……なるほど」
ペールが腕を組み、考えるような仕草を見せたところで、ケッセルリンクは安堵する。
……このまま否定していれば、何とか誤魔化せそうだ……。
そんな思惑は直ぐに打ち砕かれた。
「……じゃあ、レオンハルトさんに、『好きでも嫌いでもない』って、言ってきてもいいですか？」

「それは駄目だ」
「……」
「……あ、いや、今のは――」
思わず否定してしまった。
そしてすぐにペールが、ずいっと近づいてきて、
「好きなんですよね？」
「……」
と、言ってきた。普段に比べて随分と押しが強い彼女の様子に気圧される。
そして自分から、視線を逸してしまったところで――ケッセルリンクは息を吐いた。
言い訳の仕様もあるが、もうここに至っては、
「……そうだな」
認める他あるまい。
「――私は……彼のことが好きだとも」
言った。自覚したばかりの自分の気持ちを。
昨晩、彼と同じ寝所で寝た時に、それに気づいたのだ。
しかし、だ。その想いは秘めていたものであり、
「……ペール。君は、どうしてそれに気づけたのだ？　私自身でさえ、芽吹いたことに気づいたのは昨日の事であったのに――」
秘密が露見してしまった理由は、どこにあるのか。それを尋ねる。
何せこちらの隠蔽は完璧な筈であり――
「……えっと、言い難いんですが……バレバレでしたよ？」
「……えっ」
予想外の言葉が来た。
思わず間の抜けた声で応答してしまう。
そんな中、ペールは動きを止めたこちらに追い打ちを掛けるように、やや呆れた様に続けて、
「……私が目覚めた時からレオンハルトさんの寝顔をじーっと、しかも、うっとりしながら見詰めてましたよね？」
「……それ、は――」

確かにそうだ。眠っている彼の顔を見てみたくて、態々早起きしてみた。
しかしこっそりと、ただ見ていただけのつもりだったのだが、気づかれていたのか。眠っている彼の顔は相変わらず綺麗であり、それでいて妙に可愛く感じて撫でたくなってしまったが、それはさすがに気づかれると思い自重した。
「私が料理を作っている間も、とっても優しい手つきで包帯を替えてましたよね。まるで花の手入れをしてるみたいに」
「あ、あぁ……」
あれも、良い時間だった。
包帯を取った彼の身体は男らしく鍛えられたもので、その肌には無数の傷があった。その傷が、自分も守ってくれたのかと思うと、心の内に愛しさが溢れてしまい、その背に抱きついてしまいたくなる衝動を堪えるのに必死だった。
「極めつけに、食事の時、レオンハルトさんが食べてる様子を、自分の食事の手も忘れて見詰めてましたよね？　微笑を浮かべながら嬉しそうに。……あ、あれはさすがにどうかと思います。レオンハルトさん、物凄く食べ難そうにしてましたよ？」
「！　き、気づかれてしまっていたのか……！」
それは不覚だ。しかし仕方ない事なのだ。
彼が料理を美味しそうに食べているところを見ると、心が温まってしまい口元が緩んでしまいそうになる。あれでも抑えていたのだが、それで彼に迷惑を掛けてしまっていたのなら申し訳ない。
それに料理といえば昨日、彼に手料理を食べさせることを了承していたことを思い出す。後でペールに聞かなくては。
ペールは、そんな諸々の理由と、それに対する言い訳を思っているケッセルリンクに向かって容赦なく言い放つ。
「あ、あれだけの行動を見せられたらさすがにわかりますよ。ケッセルリンク様はわかり易すぎです……！」
「――っ、くっ……!?」
そこまで言われてしまってはぐうの音も出ない。苦悶の声を上げ

て、ペールを見る。
……全てお見通し、というわけか……。
「……はぁ……そ、それともう一つ、大きな理由がありましてですね――」
ペールは狼狽えるこちらに向かって更に続ける。一度、ならず二度、三度、息を入れる。何やら意思を固めているようなそんな動作だ。
ケッセルリンクが疑問に思った数秒後、ペールはもじもじとした様子でこちらを見上げると、
「――わ、私も……れ、れれレオンハルトさんのことが……す、好きですから……！」
「っ――!?」
そんな告白に絶句する。
まさか、という思いが驚きと衝撃を以って身体中を駆け巡る。
しかしペールの恥ずかしがるような、顔を赤くした様子を見れば、それが真実だと直ぐにわかる。彼女の反応はまるで、恋する乙女そのもので――
……っ！　……なるほど……そういうことか……！
ペールの言っている意味がようやく理解出来る。そして同時に、先程の自分がどのように見えていたかも理解する。
即ち、
「――ふっ、理解したよペール」
「け、ケッセルリンク様……」
彼女は、
「――私と、同じ男を好きになった、ということか……」
そう言い切った。
同じ想いを抱いた――即ち同志、とも言うべき存在に、ケッセルリンクは視線を送る。
彼女の表情は、
「……」
自分と同じ様に、笑みを浮かべていた。

ペールは内心、困惑していた。
にっこりと、尊敬する人物に笑顔を浮かべつつ思うのは、
……？　今、私が言ったことを、もう一回言っただけだよね……？
こちらの告白は単純にそれを打ち明ける意味もあったが、同じ男性を好きになったからこそ、そちらの想いが理解出来た、という意味を込めたつもりだ。
だからこそ、返答にはその正答が来るはずなのだが、ケッセルリンクはこちらが言った告白を、別の言い方で言い直しただけ。
……意味は理解してくれているのかな……？
動揺していたため、言葉足らず、もしくは選択ミスを犯しただけであり理解ってくれてるのならそれでいいんだけど、と彼女を窺うよう見上げてみる。すると、
「……ふっ、致し方ないことだな」
「……と、言うと？」
聞き返してみるとケッセルリンクは頬に手を当てて顔を赤くしながら、
「彼は――レオンハルトは、魅力的な男だ」
と彼女は真剣な声色で、一息つくと、
「彼は、私が今まで見てきた男性とは違う――本当の男だ。魔人でありながら人を慈しむ心を持ち、強力な力を持ちながらも、それを守る為に振るうことが出来る。理知的で合理的、しかし時には熱い感情を覗かせ、とても頼りがいのある姿を見せてくれる。これほど素晴らしい内面を持ちながら、外面はその心が現れているのか、と思うほど――」
……う、うわぁ……！　これは……！
ペールは眼前のケッセルリンクの語りを黙って見聞きした。
彼女の言うことは理解出来る。レオンハルトの良いところを口々に出しているのだろう。
それはこちらとしても大いに同意できることであり、それに賛同して恋バナ的に盛り上がっても構わない。カラーの新旧長で、そういう

ことを語り合うのも良いことだろう。
だがこれを外から見て、よく考えていると、とある事実がわかるのだ。それは、
……こ、これって……好きなところを言ってるようなものですよね……！
こうして聞いていると、ケッセルリンクが如何にレオンハルトのことが好きか。そして、どんなところが好きかが把握出来る。
ケッセルリンクは妙に熱っぽく、詩でも唄うかのようにそれを口にし続ける。聞こえるレオンハルトの好きな部分は自分も概ね同意出来るところで、だからこそ聞いていて恥ずかしい気分になる。
まるで自分の内心を打ち明けられている様だ。
……と、というかこれ、レオンハルトさんに聞こえていませんよね……？
一応家の外とはいえ、普通の声のトーンで喋っては聞こえる可能性もある。少し心配になったペールはケッセルリンクに向かって口を開く。
「……け、ケッセルリンク様……！」
「――ん、どうかしたかね？」
家の方を指差し、小声で、
「そ、そんなに大きい声だと、レオンハルトさんに聞こえちゃいますよー……！」
言う。すると、
「……っっっ!?」
そのことに今更気がついたのか、顔がどんどんと赤くなっていく。
そしてこちらに背を向けると、
「……ど、どうやら語りすぎたようだな……」
物凄く小さい声でそんなことを言った。顔を見られたくないのだろう。手で顔を隠しているも、その耳は真っ赤になっている。可愛い。
……うわー、うわー……どうしよう、すっごく顔見たい……！
いつもクールで表情を変えないケッセルリンクのレアな表情。そ

のギャップたるや女性の自分から見ても凄まじい破壊力だ。
正直、この様子をレオンハルトに見せるのが、一番早い近道な気がするも、さすがにそれは可哀想な気がする。自分も結構やばいのに、この人、羞恥で死んじゃいそうな気がする。あ、カラーだから変化の時か。
と、そんな馬鹿なことを考えつつ、ケッセルリンクの肩をちょんちょんと叩く。普段なら動じることもなくさっと振り向くのに、今はビクッと身体を震わせておそるおそるこちらに振り向くのだから、恋とは怖ろしい。
「……何かね？」
幾分か表情を普段のものに戻したケッセルリンクがそう言う。少し残念に思いつつも、口を開き、
「えっと、その……それでですね……ケッセルリンク様にご提案なんですが……」
「……提案？　それは一体……」
不思議そうに問い返してくるケッセルリンクに、ペールは言った。
二人でそれを成就させる為に――
「私達二人で、レオンハルトさんを――お、落としませんか？」
そんな提案を、思い切って口にした。

知らぬが仏

「……」
「こんなところにいたのか、ライゼンよ」
「……マギーホア」
「随分と長い間、黄昏ているようだが……お前だけだぞ？　戦争が終わったというのに、そんなに複雑そうな顔になっているのは」
「……はぁ、別にいいだろ。少し忙しくて疲れてるだけだ」
「……まだ奴の事を気にかけているのか？」
「……別に」
「奴は大罪人だ。どれだけの被害が、奴によって齎されたか……決して許される事ではない」
「……わかってるよ。もう未練はない」
「なら、少しは明るい顔をしたらどうだ」
「それくらい好きにさせろよ。というか、暗い顔をしてるのは俺だけじゃないだろう？　他の奴に言えよ」
「お前はデカいから特別目立つのだ」
「差別じゃねぇか」
「特別だろう。お前のその身体には、世話になった奴も大勢いるだろうに」
「……なぁ、マギーホア」
「何だ？」
「……これで、戦いは終わったんだよな……」
「……そうだな。大陸も統一し、魔王も打ち倒した。――戦いは終わったのだ。他ならぬ私達の手で、な」
「……ようやく、か」
「……不服か？」
「いや……また死に場所を見失っちまったか。と思ってな」
「馬鹿を言え。お前は私に従うと言っただろう。私が健在な内は従ってもらうぞ」
「寿命ないんだから一生じゃねぇか。ふざけんなよ」

「はっはっは！　まぁ、そう言うな。私が王でなくなったり、隠居した時には自由にするといい。――勿論、私に挑みかかってきても構わんぞ？」
「……まぁ、なら期待しないで待っておくか」
「しばらくは、戦もないだろうからゆっくりしても構わんぞ」
「とか言いながらどうせ、仕事でもあるんだろ？　今度は何だ？」
「大したことではないがな。……ちょっと調査を任されてほしい」
「……了解。直ぐに向かうさ。場所は？」
「場所は――」

「……はぁ」
レオンハルトは吐息をした。
……あいつら、随分と遅いな……。
二人揃って家を出てから既に結構な時間が経っており、既に陽は真上にある。三時間くらいは経っているだろう。
家の外に、一人がいる気配はあるもののそちらはあまり動いておらず、もう一方は気配を感じ取れない。少し離れているのだろうか、とそんなことを思いもする。自分は未だベッドの上から微動だにしておらず、
……剣でも振るか……？
あまりにも暇過ぎるので軽く身体を動かしてしまおうかとも思う。いくら怪我をしているとはいえ、長いこと身体を動かしていないと自分の腕が鈍ってしまうやもしれない。定期的な修練は欠かせないものだ。
それに、先日覚えたばかりの技も試してみたい。感覚をちゃんと掴んでおくことは大事であるし、
……少しくらいなら動いても大丈夫だろ。
と、レオンハルトはベッドの上から降りようとしたところで、家の戸が開いた。
「た、ただいまです」

「……ただいま」
ケッセルリンクとペール。二人のカラーが挨拶とともに帰ってきた。それを見て動きを止める。
そして浮かせかけた身をベッドに戻しながら二人に顔を向け、
「……遅かったが、何かあったのか？」
「あっ、ええとですね……遅かったのは……その」
言った途端、ペールがしどろもどろになる。
しかしケッセルリンクの方が前に出てくると、
「……すまない。これを取りに行っていた」
「！　それは――」
レオンハルトはケッセルリンクが手に持ったものを見て目を見開く。それは血の様な濃い赤色の塊で、
「肉だな……」
「ああ、しか肉だ。少し離れて狩ってきた。……そ、その――」
そう言ってケッセルリンクは一度言い淀んだ様に間を取る。
彼女の頬に朱色が差し、こちらから視線を逸らすと、
「――昨日、肉が食べたいと言っていたから……」
「……ああ、なるほどな」
レオンハルトは得心する。彼女は昨日の自分の発言をしっかり憶えていてくれたのだと。
……妙に遅かったのは狩りにも行っていたからか……。
そうであるなら時間が掛かるのも頷ける。森にはそういった食べられる生物は数多いだろうが、狩りは一筋縄ではいかないのが常なのだ。
野生の生物は、他の生物の気配に敏感で逃げ足も速く、普通の人はかなり苦労する。
彼女ほど強ければ狩ることは問題ないだろうが、強すぎると余計に獲物が隠れ潜んだりするので、逆に見つけるまでに時間がかかるのだ。
それに見たところ、解体も外で行ってきたようであり、
「……悪いな。俺の為に態々取ってきてもらって」

そのことについて軽く謝罪を入れる。するとケッセルリンクは首を振り、
「大したことではない。……これで貴方が元気になるのなら……」
「そ、そうですっ。レオンハルトさんの為なら、な、何だってしますよ！」
「……そうか」
後の言葉がどんどんと小声になっていくケッセルリンクに対し、ペールは勢いづいたように声を上げる。その嬉しい言葉に、レオンハルトは特に反応を入れることはせず、再びケッセルリンクに視線を移すと、
「……なら、ケッセルリンクが昼食を作ってくれるのか？」
その問いに対し、ケッセルリンクはまず、ああ、と頷いた。そしてこちらをまっすぐ見て、
「……そ、その……」
「ん？」
自分が疑問の声を上げる中、ケッセルリンクは一息で、
「……貴方のために作るから……」
「……」
と恥ずかしそうに言葉を告げてきた。
思わず無言になってしまう。だが、だんまりも気まずいだろう。ケッセルリンクの言葉を理解し、返す言葉を放つ。
「……ああ、楽しみに待ってる」
「――っ！」
するとケッセルリンクは一度ビクッと身体を反応させると、直後、黙ったまま台所の方に行ってしまった。
微妙などうとも取れそうな反応を見たペールが、あぁ……！　と、何やら感動したように声を出している。こいつはこいつでどうにかなりそうだ、と思いながら、残った彼女に声を掛ける。
「お前は手伝わなくていいのか？」
「あ、はい。……今日の料理はケッセルリンク様が作ると意気込んでおられましたし……。そ、それに……しょ、食事が出来るのを待つ間

……わ、私がレオンハルトさんの、お、お世話というかお相手をしたいと思って……」
いいですか？　とペールは再度の言葉を吐かずに、こちらを見て言外に選択を委ねてきた。
ほんの一瞬だけ思考しかけるも、レオンハルトは直ぐに答えを出した。
「……好きにすればいい」
「わ、わかりました……。し、します。好きに――」
ペールが、ケッセルリンク程ではないにしろ、顔を赤くしてベッドの脇――自分の隣に腰掛けたのを見て、レオンハルトは片目を閉じながら、
……どうするかな。
彼女達について、複雑な思いを感じていた。

ケッセルリンクは台所で自分の心臓の鼓動を感じていた。
壁に背中を預けて胸に手を当てれば、普段よりも強く早く、脈打っており、
……い、今のは……まずかった。
本当にまずい、と思う。しかし悪い意味ではない。
良すぎてまずかったのだ。
ケッセルリンクはレオンハルトに料理を作ると声を掛けただけで、恥ずかしさで身悶えしそうになったというのに、それに追い打ちを掛けるように、楽しみに待ってる、と言葉を掛けられた。
その彼の苦笑したような表情と優しい言葉を聞いただけで、顔から火が出そうな程熱くなってしまい、おかしな反応をする前に、慌てて台所に避難したのだ。
……あれは、反則だな……。
ただ声を掛けるだけでこちらの気持ちを上げてくるなど、とんでもない破壊力だ。
それとも、自分に耐性が無さすぎるだけだろうか、と思いもする。

このような感情は初めてであるわけで、このような試みも初めてなのだ。
とはいえ、ケッセルリンクは一度気を取り直す。それよりもやることがあるのだ。
……彼の為に、料理を作らなければ……。
約束したのだ。彼に手料理を食べさせると。肉が食べたいとも言っていたので、ペールとの話の後、直ぐに狩りに出かけた。狩りもほぼ初めてであったために、少し不安ではあったが無事に狩ることが出来たのは僥倖だったが、問題はここからだ。
何せ自分は料理を作ったことがない。生まれて初めてのちゃんとした料理を彼に振る舞わなくてはならない。
……一応、ペールに基本は教わってきたが……。
手に持ったしかの肉を調理場に置きながらケッセルリンクは教わったことを思い出す。
とりあえず、焼くこととしっかり味を付けること。そして工夫をしないこと。これを守ってさえいれば、大丈夫らしい、と。他ならぬ、料理上手なペールがそう言ったのだ。ならば後はその通りにするだけだろう。
……彼に、美味しい料理を食べさせる。そして――。
先にあるものを願って決意する。
右手に包丁。左手にはおたまを持つ。料理をする体勢を整え、
……いざ……！
そうしてケッセルリンクは、しか肉に挑みかかった。

ペールは、レオンハルトを前に意気込んでいた。
……さ、さぁ……やりますよ……！
ケッセルリンクが料理を作り終えるまで、今は自分がアピールする時間だ。どれくらいの時間が掛かるかは知らないが、おそらく十分から三十分程度だろう。
それまでに、自分とケッセルリンク、二人の良いところを知っても

らったり、色々と押しを掛けたりしなければならない。
　というのもケッセルリンクには外で様々なアドバイスを送ったが、それを全て実践出来るとはペールは思っていないのだ。彼女はかなり初心で純真であり、男性に詳しいとは言えない。いや、自分も詳しいとは言えないかもしれないが、彼女よりは知ってると思う。
　だがケッセルリンクの場合は、純真であるが故に真っ直ぐなアピールが出来るという長所もある。
　それならば自分の強みは何か、ペールはそれをしっかりと理解していた。
　……私には、本で得た知識があります……！
　自分が今まで読んだ本の中には、恋愛を書いた物語も数多く存在する。
　その内容は多岐にわたるが、中には男を落とすテクニックを紹介するような本もあるのだ。
　……今こそ、それを実践する時ですよ……！
　自分はこの日のために、引き篭もって本を読み漁っていたに違いない。
　ペールは、横に座るレオンハルトに笑顔を向ける。
　そして本の内容を思い出す。まずは、
　……私達にぴったりな本がありますよ……！　『気になる金髪イケメンを落とす方法』……！
　著者は聖天美少女王レノラス先生。昨今発達したばかりの文学界隈では有名な方だ。ここ数百年で本が市井に出回る様になったのはこの人のおかげだと噂されている人物であり、誰も姿を見たことがない伝説の作家。
　そのペンネームは痛々しいが、内容はそこまで悪くない。というか当たり外れが激しい作家なのだが、この本は当たりの方だ。ペールも何回も読んだ為、大体の内容は暗記している。その本によれば、
「れ、レオンハルトさん？」
「何だ？」
「……レオンハルトさんは――」

言う。本の内容の通りに、
「――わ、私のこと、そしてケッセルリンク様の事を、どう思いますか!?」
「……は？」
レオンハルトがよくわからない、と言わんばかりに口を開ける。しかしここで戸惑ってはいけない。ペールは果敢に続けて、
「私とケッセルリンク様に、どんな印象を抱いているのかを、教えて下さい……！」
「……どんな印象、か……」
眉をひそめながらも直ぐに理解してくれたのか、顎に手を当てて考え込む仕草を見せるレオンハルト。
彼は言葉を呟きながら、
「……いや、まぁ……色々あるが……ん。あっ――ああ、いや、そうだな」
レオンハルトが何かを思いついたのだろう。視線を顔ごと、こちらに向けてくると、
「……全体的なことは会って間もないからまだ分からない。だから具体的に、お前達のどういった部分についての印象について聞きたいか、教えてくれ。そうしたら答える」
「え、あ……そ、そうですね……」
逆に問われ、考える。
言っていることは言葉遊びのようだが、理解る。
彼は、真面目にそれを捉えたのだろう。私達と出会ったばかりなので私達のことを知らないからこそ、どう思っているかは答えられない、ということだ。それはつまり、
……あれ？　よくわかりませんね……？
こちらの質問の意図としては、レオンハルトにそういった質問を投げかけることで、こちらを意識させるのと同時に、どういう部分を好ましく思っているのか、または、考えたくはないが、嫌いな部分があれば、それを聞ければいい、というそんな思いだ。
しかしその目論見は破綻した。なら、

……普通に好ましい部分を彼の口から並べてくれれば良かったんですけど……こうなったら仕方ないですね。
予想していた流れとは違うが、彼に自分達のことを聞けることには間違いないのだ。
直接的な事を聞けば、告白になってしまいかねない。今はそういった時間帯ではないわけだし、
……今は、遠回しに攻めて――いえ、調べていきましょう！
こうなったら一つ一つ聞いていけばいいのだ。自分達を様々な部分を彼がどう思っているのか。
なのでまずは、外せない問題について聞くとしよう。多少恥ずかしいが、
「れ、レオンハルトさん……」
ペールはレオンハルトの距離を少し詰める。よく見えるように、頭を上げて、
「わ、私やケッセルリンク様に付いている――これについてはどう思いますか……？」
「――――」
言った直後に沈黙が生まれた。レオンハルトが固まったのだ。
それもそうだろう。こちらが示したのは、カラーとしては外せないものであり、女にとって重要なものを表し、普通の人類種でないことを示すものなのだ。
そう、ペールやケッセルリンクの額に付いている、未だ赤い宝石――カラーの証であり、清らかな乙女であることを示す赤のクリスタル。
そうであるという事実に自信を持って、
「で、出来れば答えて下さい……！」
そうしてペールは、レオンハルトに回答権を渡した。

レオンハルトは固まっていた。
自分の横にはペールがおり、自分達の印象について聞いてきたとこ

ろである。
それについて自分は、出会ったばかりなので自分でも分からない。だから具体的に問いかけてくれ、と若干逃げるように返したのだが。
すると彼女はあろうことか、こちらの腕にその胸部を押し当て、聞いてきたのだ。――これが、好きか？　と。
レオンハルトは内心で叫んだ。
……急に何言ってんだこいつ!?
普通、男女の機微でそんな身体の下的なことを真っ先に聞くか!?
と、頭を抱える。
せっかく気を使っていたというのに、そんな直球な質問が来るとは夢にも思っていなかった。もしかしたらケッセルリンクはともかく、ペールの方は肉食なのかもしれない。このド直球振りはそうだろう。
そして自分はなんて答えればいいのか――いや、そもそも答えていいのか。悩み、レオンハルトは確認を取る。口をゆっくりと動かし、
「……それについて、俺がどう思っているかを答えろと？」
「は、はい。出来れば、お願いします……大事なことですので」
ペールが羞恥を感じているような顔で念を押してくる。
……マジか……。
レオンハルトは約一分前の自分の行動に後悔する。質問をはぐらかそうと逃げた結果、まさかそんなデリケートな話を打ち明ける羽目になるとは、思いもしなかった。
しかし、具体的に言ってくれれば答える、と言ったのは自分だ。なら答えなければならない。二度もはぐらかすのはさすがに酷いし、それをしたところで更に酷い質問をされたら目も当てられない。
なのでレオンハルトは腹を括った。そして自分の腕に当たる特盛の感触を感じながら、
「……いや……まぁ……大きい、な……」
「……へ？」
素直に言った。が、何故か首を傾げられてしまう。
どういうことだろう。まさか間違っていたのだろうか、と不安になる。

だが、彼女は不思議そうにこちらを見上げると、
「……そ、そうなんですか？　気にしたこともありませんでした……」
「そ、そうなのか……」
「はい。というかケッセルリンク様も、他のカラーも、皆同じくらいの大きさかと……」
「は、はぁっ!?　マジか!?」
「！　え、えぇ……多分……」
ペールがびっくりしながらも、頷いてくれる。それを聞いてレオンハルトは、
……え？　カラーって皆巨乳なのか……？　だとしたら――って、待て待て！　森で見た他のカラーは明らかに小さかったぞ！
一瞬、巨乳美少女だらけの里を想像して、移住を検討しかけたが、よく考えてみればそれはない。というかうちの使徒もカラーだが、全然大きくはないことを忘れていた。
驚かせやがって、と冷や汗をかいていると、ペールがこちらを窺うように、
「……で、でも……レオンハルトさんが言うなら、少し大きいのかもしれませんね」
少しじゃねぇよ。かなり大きいよ。
レオンハルトがそう思ったところで届かないらしい。悲しい認識の違いだ。
それで、とペールは改めて問いかけてきた。
「け、結局……こ、こっちの方が良い、ですか……？　そ、それとも、こんなのが付いてるカラーはき、嫌いですか……？」
……な、なんだその質問!?　巨乳が嫌いか、ってことか!?
そこまで卑下しなくてもいいのに……、とレオンハルトは何故か巨乳をこんなの扱いするペールに悲しくなる。
だが、彼女にも悩みがあるのかもしれない。巨乳は色々と面倒も多いらしいしな、とレオンハルトは理解に努める。
しかし、例えそうだとしても、譲れないものがあった。レオンハルトは言う。

「――俺は、これくらいの方が好きだ」
「――――！」
思わず、真面目な声色で言ってしまう。仕事時に部下に命令を下す時よりも真面目かもしれない。ペールの目が見開いているのは、これ、どういう反応だろうか、と不安になるものの、
「……というか、それで差別まではしないけどな。それでも好みだけで言えば……俺はお前らの方が好ましい。――これで、いいか？」
本心を口にする。実際、乳は乳なのだ。そこに貴賤はない。
レオンハルトは思う。こういった好みの問題は難しいものなのだ、と。
世の中には、貧乳が好きなものや、尻派や足派、指が好き、などの身体の部位系から、ロリや熟女などの年齢系、メイドやガーターベルトなどのコスチューム系や、シチュエーションでも分けられる。
そこには男達それぞれの拘りの世界があるだろう。決して相容れない、理解し難い世界だってあるかもしれない。
だが、そこに掛ける情熱は同じなのだ。皆同じ想いを抱いて、それを探求しているはずだ。
そう。大事なのは全てにリスペクトを持つこと。
そして――自分の好きなものに誇りをもつことだ。
自分は巨乳好きだ。しかし貧乳が嫌いなわけではなく、他のパーツが嫌いなわけでもないし、好きな服装やシチュエーションだって当然ある。
故に、そこで争い合う必要はない。優先順位はあれど、差別されることはないのだ。
だから、と、レオンハルトはペールに微笑を向けて、
「――誇りを持ち、胸を張れ。お前は、卑下されるような存在じゃない」
励ました。そして、
「――――」
彼女が言葉を失った。

ペールは、身が震えるような感覚を憶えた。
そこまで重いこととは捉えてはいない。ぶっちゃけると清らかな女の方が好きなのか、と、本に乗っていた、男は初心な女性の方が好きだ、というのが彼に当て嵌まるのか確かめる為。
そして人種の差は気にしないのか、というのを聞くために、額のクリスタルを見せたのだが、
……この方は――。
とても、ズルい。
軽い気持ちで聞いたことを、こんな不意打ちで返されてしまっては、もう何も言えない。
結局、彼のことは聞けない。いや、わかったのは、彼がそんな些細なことは気にしない男性であることだ。
ペールはその気持ちのまま、行動を移した。
「……レオンハルトさん……！」
彼の腕に抱きつくように身をギュッと寄せる。拒まれたりしないだろうか、迷惑じゃないだろうか、などと考える余裕はない。
彼に認められた。たったそれだけで、自分の行動を止められない程に想いが溢れてしまったのだ。
ペールは思う。彼は自分の事を深く知っている訳ではないだろう、と。
カラーのことも、ペール自身のことも、詳しく知っている上で、認めた訳ではない。その言葉は何気ないものでしかないのだ。
故に彼は本当に、自分の好みを言っただけなのだろう。
だがそれでも、
……私はとても、嬉しく感じてしまいました……。
ペールは彼の温もりを感じながら、そっと口を開く。内容は事後承諾を取るもので、
「……レオンハルトさん……」
「――どうした？」
「……しばらく、このままでもいいですか？」

そう言うと、レオンハルトは息を吐き、
「……好きにしろ」
と、相変わらずそっけない言葉で、それを許してくれた。
……じゃあ、好きにしますね……？
ペールは抱きつく力を強めつつ、ケッセルリンクが帰ってくるまで、その体勢で居続けた。

レオンハルトは、抱きついてきたペールを見て混乱していた。
……巨乳を褒めたら抱きつかれた……!?
何だこれは、堪能しろってことか、と馬鹿なことを考えてしまうくらいには、ぐいぐいと押し付けられてくる。
だが、その一方で別の思考も行われていた。それは、
……こいつ――いや、こいつら、か……マジで俺のことを――
信じられないような気持ちでいっぱいであった。
だが、今のペールや、ケッセルリンクの様子を見ていると、それは本当の様であり、
……まったく……魔人相手によくやるな……。
レオンハルトは息を入れながらも自分から指摘したり行動することはなく、見守ることにした。

変化

――十分後。

「……」

レオンハルトは、目の前に出てきた料理を見て固まっていた。

視線の先、ケッセルリンクが器を差し出してきている。彼女の表情は赤くなっているが、それがこんな料理を出してしまった自分へのものなのか、それとも別の要因なのかは分からない。

しかし前者の思いは少なからずあるようである。今もこちらを見ては申し訳なさそうに顔を俯かせながら、

「……そ、その……見た目が悪くてすまない」

「……あー……」

間違いなく同意なのだが、同意しづらい言葉が来る。

ケッセルリンクが自分で言う通り、器に入った料理の見た目は少々、いや、かなりよろしくない。

器の中には、白と赤が混じったようなとろみの付いた液体。そしてそこに真っ赤な島の如く鎮座するのは、彼女が取ってきたしか肉。その周囲には野草や何かの固形物であろう色鮮やかな物体がぷかぷかと浮いており、その料理の不気味さを際立たせている。

……ぶっちゃけゲ――うん……アレにしか見えねぇな。

例のアレに入った肉の塊。名付けるならしか肉の例のアレ煮込みと言ったところだろうか。

だが思ったことを直接口に出すのは憚られる。何と答えたらいいものか。

そして自分と同じ思いを抱いたのか、ペールが口を開く。彼女は先程とは違い自分の隣ではなく、ケッセルリンクと同じ様に脇にある椅子に腰掛けている。料理を見ながら、

「ま、まぁ見た目は少しアレですけど、料理で一番大事なのは味ですから！　味！　た、食べてみないとわかりませんよ！」

と、そんな擁護をする。正直嫌な予感しかしないものの、レオンハルトはそれに乗っかっておこうと一応頷きを入れ、

「……そうだな。ほら、ちょっと寄越せ」
「あっ……」
ケッセルリンクの手から器をひったくるように奪う。
距離が近くなったことで何処かで嗅いだことのある匂いが鼻孔をくすぐる。その匂いに顔をしかめそうになりながらもそれを我慢して無表情を貫くと、ケッセルリンクは戸惑いの色を見せた。
その表情の意味はわかる。それは、
……食べてはほしいけど、無理はしてほしくない――ってか？
レオンハルトは内心で息をつきたくなる。自分で持ってきておいてどんな言い草だよ、と思いもする。
しかし女というのはズルい。こうやって自分の為に何かをしてくれる。そういった理由を持ち出されてしまっては、受け止める他ない。
故にレオンハルトは更に半ば浸かったスプーンを握る。そして肉と一緒に液体を掬って口元に持っていくと、
「――んっ」
それを口に含んだ。

ケッセルリンクは恥、というのを感じた。
生まれて初めての手料理。それに挑戦したはいいが、その出来栄えは散々な物になった。
勿論、言いつけは守った――と思う。肉にはちゃんと火を通した筈だし、味もしっかり付けた。工夫も殆どしなくていいらしい、煮込み料理の選択も間違っていないように感じる。
だが結果は伴なっていない。そして更に度し難いのが、
……何故、私はそれを持ってきてしまったのだろうか……。
自分でそれを理解っているのに、その上でレオンハルトに料理を見せたことだ。
よくない物が出来た、と何となく理解っていながらそれを食べさせようとしていること。それは何故だろうか。

料理が出来ると嘯いてしまった、自分への見栄の為だろうか。それとも、
……彼に、自分の作った料理を食べてほしいからだろうか。
そうして彼が喜んでくれたら幸いだ。
しかしこんなもので彼が満足出来る筈もない。これでは醜態を晒しに来ただけだ。
「――なるほどな」
「！」
レオンハルトが声を上げた。
料理を口に含み、それを丁寧に咀嚼する。それをまるで味わうように、瞳を閉じながら言った言葉に、ケッセルリンクは恐怖した。
一体どんなことを言うのか。こき下ろされてしまうのか、料理の腕を偽っていたことにがっかりされるだろうか、失望されてしまうのか。そんな思いが心の内に渦巻いていく。
そんな中、彼は言った。こちらを見て、
「基本は出来てるな」

料理をじっくりと味わった結果、出した結論をレオンハルトは、はっきりと口にした。
「味はちゃんとついてる。肉の焼き加減も……ちょっと、レア気味だが問題ない」
肉の味は少し濃いめで、血生臭い。おそらくは血抜きを怠ったためだろう。
そして汁に混じった赤はおそらく血。故に苦味はかなり濃い。
そもそもしか肉には脂が殆どなく、赤身のあっさりとした美味さが売りの食材だ。
焼き方も自分はレアが好きなのでそれはまだいい。生焼けでも食えないことはないのだから。
……問題は――。
レオンハルトは同僚のグルメ魔人――ガルティアの様に料理の批評をする。スプーンで煮込みが入った器をかき混ぜながら、

「他の具材は幾つかの野草と、野菜を細かく切った物だな？」
「……ああ。肉だけでは、味気ないかと思って……」
少し放心状態のケッセルリンクが頷いたのを見て、レオンハルトは続けた。
煮込みに入っているのは血抜きをしていない生焼けしか肉に、数種類の野草と野菜。
だが、これだけでは不味くならない、とレオンハルトは思う。原因はこの白く濁った液体にある、と。
レオンハルトはそれの正体を口にした瞬間に察した。
それは、
「――牛乳、だな」
それに驚いたのは、ペールだった。
「えっ、牛乳入れたんですか!?　……あっ、だから白いんですね……」
「……俺としては牛乳があったことが驚きなんだがな……。まぁ、それはいい」
確認を兼ねてその汁を改めて口に含む。
すると何とも言えない甘味、苦味、えぐみが混ざったような味が舌の上に広がる。
――はっきり言って、美味しくない。
だが、牛乳煮込みという料理自体は存在する。クリーミーな甘さが美味しい料理だ。
ではなぜ、これがそうなっていないのか。それは、
……本当に牛乳だけで煮込んだんだろうな……こっちには味が……というか本当にただの牛乳だな。
本来、牛乳を使用した煮込み料理というのは、他にも白ワインであったりバターであったり、塩胡椒であったり、それらで味付けして作るものだ。
しかし、それらの調味料が全て存在する訳ではないのだからそれをやりようもない。ペールの料理を食べた感じ、塩胡椒くらいはありそうな味ではあったが、
……だから味付けは血抜きされていないしか肉と、野草と野菜から

出る出汁だけか。血の味がダイレクトにきてるしな……。
この生臭さと甘味の正体は牛乳と血が混ざりあった結果だろう。それにしか肉の苦味が合わさってなんとも言えない味になっている。
普通の人が食べれば吐き出すかもしれないな、と思いながらもレオンハルトはそれを口にする。
というかこれくらいは自分にとって、なんともない。なにせ、
……スラルの料理に比べたら……な……。
こちらは月一以上のペースで必殺料理の練習に付き合っているのだ。もはやこのくらいの料理を口にしたところで何とも思わない。美味しくはないな、と冷静に判断出来るのだからマシだ。
その上で、更に思うのは、
……栄養価が高い食材ばかり使いやがって。
と、そんな思いだ。
それはケッセルリンクの気づかいなのだろう。
故に、だ。レオンハルトは結論を出す。料理を口にしながら、ケッセルリンクを見て、
「栄養価は高いし、火も一応通されてるからな。普通に食える。……血抜きが出来てないのと、味に多少問題はあるかもしれないが――」
だが、それは、
「――これから気をつければいい。次も楽しみにしてるぞ」
「――――」
ケッセルリンクが瞳を見開いた。
驚きを得たような表情の彼女は、少し間を置いた後、表情を変化させて悔恨の色を滲ませると、
「……すまない。私は、貴方に嘘をついてしまった」
と。それは、
「……私は、料理は出来ない。それを真面目に取り組んだのは今日が初めてだ」
頭を下げるケッセルリンクを見て、息をついて言う。
「……ま、食べた時点でわかったけどな。それは別にいい。味はともかく、俺の身体には必要な物が揃っている訳だしな。作ってくれただ

けでありがたい」
「……そう、か」
こちらが苦笑気味にそう言うと、ケッセルリンクはぼーっとこちらを見つめてくる。
その視線は妙に熱っぽく潤んだ目をしており、先程よりも更に頬を赤く染めていた。
「……」
それを見て、視線を横に移動させてみると、そこにはペールがおり、彼女の方も妙にニコニコとしながらこちらを見つめていた。その表情は恍惚としておりながらも、期待の色が垣間見える。その意味を今一度考え、レオンハルトは、
……覚悟、決めるか……。
意識を定める。今までの二人の行動やペールの話から、それは明らかなのだ。
腹を括ったレオンハルトは一度食事の手を止めると真剣な表情で、
「……二人とも――」
二人の視線を受け止めながら、
「――後で……夜にでも話をしよう」
その内容は、
「俺の今後と――お前らの気持ちについての話だ」
彼女達の気持ちを受け止める為のものであった。

夜の森で聞こえたのは怒号であった。
月明かりが照らす中、大木を背に地面に座る大男を兵達が囲むようにして並んでいる。
それは、人間の集団であった。
兵達の表情は強張っており、大男の怒声をひたすらに黙したまま聞き続けている。夜の森で騒ぐと魔物が、など言える勇気を持つものはいない。
それを気にした様子もなく、大男は叫んだ。

「――あんの――くそったれがあ――――!!!!」
人間の大男。この地を攻める戦士団の戦士長――アーノルドは憤怒した。
「もう少しだったというのに!!　あの魔人のせいで!!　攻略がまた最初からだと!!??」
アーノルドの全身は包帯塗れになっている。
それはつい二日前、カラーとの戦闘中に突如現れた魔人に負わされた傷であった。
後少しでカラーを蹂躙出来るというところで、彼が率いる戦士団、それも隊長格の連中はほぼ全員が蹴り飛ばされ、高所からの落下を味わった。
木々が衝撃を和らげて命を拾う者達もいれば、レベルが低い者などを中心に最初の蹴りだけで死んでしまった者もいる。
そして隊長格の殆どが戦線を離脱したことによって兵達は統制が取れなくなり撤退したのであった。
だが運良く生き延びていた隊長達を中心に、蹴り飛ばされた仲間の捜索に当たり、先程ようやく戦士長であるアーノルドを見つけたところなのだ。
しかし彼は、怪我をしていながらも、そこに嘆いたり苦しむことはせず、魔人に何も出来ずあしらわれてしまったことに激怒していた。
そんな彼に声など掛ければ、八つ当たり気味に殴られるかもしれない。そのため彼らは皆だんまり状態のまま、立ち尽くしていた。
だが、その無為な時間は唐突に終わった。兵達の中から一人の男が進み出てくる。
彼こそが、運良く魔人に蹴られずに済んだ隊長の一人。彼はアーノルドの正面まで歩みを進めると、堂々と声を掛けた。
「……それで、どうしましょうか、戦士長?」
「ああ!?　どうするって何がだ!?」
アーノルドの視線が男を捉える。その瞳は赤く充血しており、彼の怒りの程を思わせる。兵達が一歩、後退りした。
だがそれに臆することなく、男は冷静に続ける。極めて平然とした

様子で、
「戦士団を撤退させますか？」
「撤退だと!?」
　はい、と男は続ける。
「既にある程度の人員の救出と確認は済ませています。それに……理由は不明ですが、相手に魔人がいるとわかった今、森の制圧にはかなりの苦戦が予想されるかと」
「だから撤退しろってかあ!?」
　どん、と衝撃がその場に走る。アーノルドが大木に拳を打ち付けた為だ。
　葉がひらひらと舞い落ちてくる中、更に大声で、
「冗談抜かせ!!　この俺様が逃げるだと!?　そんなことはありえねえ!!　俺様は世界で最強なんだ!!　例え魔人相手だろうが、次はぶっ殺すだけだ!!」
「……ならば、戦いを続けるということで？」
　アーノルドは男の言葉に一も二もなく頷いた。
「当然だ!!　次は勝つ!!」
　それを聞いた男は、そこで少し間を置いて、ようやく表情を変化させた。
　彼の口元が釣り上がる。
「戦士長ならそう仰ると思っていました。ならば準備を始めましょう」
「……あ？　準備だあ？」
　ええ、と男は頷きを入れる。ようやく冷静さが戻ってきた戦士長を見ながら、
「多くの指揮官がやられてしまったことと、部隊を再編している途中なので時間が必要です。戦士長の身体も万全とはいきませんし……」
「ああ!?　俺様なら問題ないぞ!!」
「はい、わかっています。それでも兵の再編には最低でも3日はかかりますのでどちらにせよ大規模な人員は動かせません。なので戦士長は、それまでゆっくりとしていて下さい。戦士長が大丈夫でも周り

が動けないので」
「……それなら、まぁ、いいが」
若干不服そうにしながらも渋々頷くアーノルド。やはり彼も本心では傷が気になるし、回復を待ちたいだろう。それを見抜いての言葉だ。男はアーノルドが了承したのを見て、更に台詞を繋げた。
「であれば早く駐屯地に戻りましょう」
「言われなくてもわかっておるわ!! よし、ならばさっさと戻るぞ!!」
がははは、と笑って立ち上がった戦士長は兵士たちがその場から退くのも待たず、ずかずかと早足で歩いていった。
兵士たちが戸惑う中、男は、
「お前達も、隊長に付いていって差し上げろ。私は少し、この辺も調べてから行く」
「は、はっ！ 夜の森は危険ですので、早めにお戻り下さい！」
そう言って兵士たちは、アーノルドを追いかけ夜の森を引き返しはじめた。
足音がどんどんと遠ざかっていき、やがて、
「……」
周囲に人の気配がなくなる。
その場にいるのは男一人。彼は、誰もいなくなった森で一人跪くと、
「――神よ。これでよろしいのですか？」
その場で祈りを捧げた。
そこには誰もいない。しかし彼はその様な事を虚空に尋ねて、膝を突き続ける。
数分か数十分か、彼はその場で祈りを続けたが、周囲や彼には何の変化も起こらない。
男はそこでようやく立ち上がると、懐に手を伸ばす。
「……今日も聞こえない」
そうして取り出すのは、一冊の書物。
彼や、彼らにとっての教典が書かれている大切な物。
男は百年程前に出来たばかりのとある宗教組織に身を置く信者で

あった。
「ああ、神よ。なぜ私に言葉を授けてくださらないのか……」
彼は書物を開いて、酔ってしまったかのようにふらふらとしながらそう独り言を呟く。
「……争いが足りないのでしょうか……」
常人では何を言っているのか、理解出来ない言葉を、彼は宙に乗せ続ける。
しかし彼は、自分で言った言葉に納得したのか、本を閉じて懐に戻すと、天に祈りを捧げるように手を組み、
「……ならばこの戦いの結果を、神への供物としましょう」
そう言って、男はふらふらとしながらその場から立ち去っていった。

――レオンハルトの休暇、九日目。魔王城。

魔王城の城壁の上に男が座っていた。
人ではない尋常ならざる存在感を持った生物。
褐色の肌に緑色の髪を持った、腹に大穴が空いた魔人、ガルティアだ。
「……あーーー……この冷やしシチュー美味いなあ……」
彼は外でありながらも食事をその場に広げて、料理を貪り食っていた。
だが、普段よりも料理へ集中していないのか、料理についての批評はそこまで行なってはいない。
「……」
ガルティアの視線は魔王城の門から先の平野を見据え続けている。彼の注意はそこと背後にあった。
料理を口に運びながら正面に目線を合わせ続け、背後、魔王城からの気配にも注視し続ける。
前者は、ガルティアの友人でもある男を待っている為だ。

魔人レオンハルト。現在の魔軍にとっての最重要人物ともいえる存在。
彼は9日前から休暇を取って城を離れていた。
魔人四天王にして魔軍参謀でもある彼の職務は、どの魔人よりも忙しなく働いている。故にその休暇には皆が納得であり、快く送り出したものだ。
しかしガルティアは思う。あいつは何だかんだ気にする奴だからな、と。
休暇を取りはしたが、出発前にやり取りを交わしたこともあって、割と直ぐに帰ってくるのではないか、と思っていた。
目的も翔竜山に登ってくるだけだろうし、早ければ5日くらいで帰ってくるか、と何となく予想していたものなのだが。
「あいつ……遅いなあ……」
しかしガルティアの予想は外れ、既に9日目に突入してしまった。故にそんな呟きが漏れる。
だが、ガルティアが待っている訳ではないのだ。正直自分としては、何日離れていようが別に大丈夫だろう、と楽観的に構えてられる。好きにすればいい、と。
しかし背後の事を考えるとそういう訳にはいかない。今も、背後の気配が大きく膨れ上がり、
「つと、そろそろ面倒なことになりそうだな」
それを察知したガルティアは直ぐ様立ち上がった。料理を手に持ってそれを飲み干すように口にかっ込む。
「……ごっそさんっと。んじゃ、行くか」
ガルティアは空になった器を持って城壁の上から飛び降りると、一目散にその場に向かった。内心では帰りが遅い友人に対して、
……ったく……お前がいないと色々と面倒だよな。……そろそろ動くか？
軽く悪態をつきながら、ガルティアは向かっていった。
――自らの主でもある魔王――スラルの部屋に。

スラルの不安

魔人ガルティアは面倒さを感じていた。
それというのも目の前の部屋から漏れ出ている音の所為だろう。魔王城の部屋の壁はそれなりに厚く、更にこの部屋に限ってはスラル自身が防音を施していると聞いたことがある。なのでガルティアにも聞こえている訳ではないのだが、体内のムシ達は別だ。
ムシが部屋の中から微かな振動を感じると、主であるガルティアに教えてくれるため、その面倒さを感じてしまっているのだ。
「……なーんか、今日も荒れてそうだよなあ……」
ぼやきつつも、だが、とガルティアは部屋のドアに手をかける。人間、割り切りが大事だ、と。
放っておいたら症状が悪化するのは今までの経験から察しが付く。時間が経てば経つほど、面倒さが増していくのだ。ならさっさとしてしまったほうがいい。
そう思いガルティアは部屋に入った。軽く声を上げながら、
「……邪魔するぜー？　っと、スラル。今日は――」
「――うわあああああああんっ!!　寂しいよぉレオンハルト――っ!!」
部屋に入って聞こえた第一声は、それだった。少女の声が部屋中に響き渡る。
そしてその声は視界の奥、部屋にあるベッドの上から聞こえた。ベッドの上でごろごろと転がりながら、枕を抱えている白髪の少女――魔王スラルの姿がある。
「……うぅ……何で帰ってこないのよぉ……！」
「……」
枕に顔を埋めてまるで駄々っ子のように顔や身体を振って声を上げるスラル。
それを見たガルティアはどういった反応をするべきか迷うも、
「……あー」

「っ！　レオンハ――」
声を出したところでスラルが勢いよく身を起こしてこちらに振り向く。
だが、その途中で言葉が止まる。目が合った。
半ばまで聞こえた名前から察するにあいつが帰ってきたと思ったのだろう。期待を裏切ってしまったようである。
ガルティアはそれを理解し、微妙な表情で、
「……アレなところ見ちまって悪いな」
「あ、いや……これは違――」
「分かってる。分かってるぜ。何も言わなくていい」
ガルティアは頷いて手を上げた。親指を上げて、歯を見せて笑いながら、
「そういうことにしておくさ。――まさかお前が、あいつの名前を叫びながら真っ昼間からハッスルしてるとは思わなかったぜ」
じゃ、とガルティアは気を利かせて部屋から退出しようとした。
と、そこでスラルが顔を真っ赤にして、
「ち、ちち違うからっ!!　何勘違いしてるのよ!?」
「了解だ。わかってる。――黙ってりゃいいんだろ？」
「だからそうじゃな――って逃げるなこらあ――!?」
ガルティアは素早い動きでその場から立ち去った。

「痛つつ……相変わらずお前は手加減が下手だよなあ」
「ガルティアが変な事言うからでしょ……もう」
逃げたものの結局捕まってしまったガルティアは再度スラルの部屋で彼女と向かい合っていた。
ソファーに膝を抱えて座るスラルを見てガルティアは心の中で、
……今日も情緒不安定だなぁ……。
と、しみじみに思ってしまう。レオンハルトが長期間離れている時の恒例行事だからだ。
スラルはレオンハルトと一週間以上顔を合わせていないと、普段と

違う様子を見せる。
そして見せる顔も様々で、今のように部屋で拗ねていたり、妙におかしなテンションで研究をしていたり、酷い時は息が詰まるような雰囲気を醸し出していて、城に住む魔物達が自分達の身を案じて気を揉む程なのである。魔王らしいといえばそうなのだが。
しかし自分やレオンハルトの使徒達など、仲が良い者と会っている時は比較的落ち着いているので、こうやって定期的に顔を突き合わせている。
酷いのはそれらの人物が誰もいない時であり、他の魔物から聞いた話によるととても恐ろしく近寄りがたい雰囲気を出しているらしい。見たことがないので分からないが、人間時に初めて会った時のような、魔王らしい感じでも出しているのだろうと適当に当たりをつける。
だが、今日は、
……まだマシな方か？
一見そう見えるが確証はない。レオンハルトじゃないのだ。見ただけでスラルの機嫌を察することは出来ない。
故にいつも様にガルティアは話しかける。
「それで今日は暇か？　暇ならメシ作ってくれ」
「……ごめん、今日はやめとく」
膝に顔を埋めたまま断わってきた。ガルティアは続けて、
「何か研究でもするのか？」
「そういう訳じゃないけど……今日は……」
そう言って声が尻すぼみになっていくスラル。やはり落ち込んでいるのだろう。テンションもかなり低い。
ガルティアはそこで一息入れた。溜息に近いものだ。そうして頭を掻きながら、
「……それじゃあどうするかなあ」
「……」
応答がない。いつもなら、何かしらの返答は来るものだが、それすらもないとなると重傷かもしれない。

何と言おうか迷っていると、その間に声が来た。スラルのものだ。
彼女は小さく独り言のような声量で、
「……ねぇ、ガルティア？」
「お、どうした？」
声が来たので反応をする。何と言うのだろう。それを考えるより早く彼女は、
「レオンハルト……何かあったのかな……？」
と、不安そうにそう言った。
ガルティアの動きが一瞬だけ止まる。だが、直ぐに気を取り直して息をつくと、
「何かあったってどういう意味だ？」
「……その……何か危ない目にあって……帰りたくても帰れなくなってたり……」
その追加の言葉にガルティアは得心した。つまり、
「怪我とかしてんじゃないかってことか？」
「……うん」
スラルが頷いたのを見て、ガルティアは考えようとして――やめた。考えるまでもないからだ。
はは、と笑いが口から漏れ、
「あいつが怪我か……そんな状況ならむしろ楽しんでそうだけどな。強い奴と戦ってるってことだろうし」
「……笑い事じゃないんだけど」
半目で睨まれる。まずかっただろうか。
だがこれは正直に思うことだ。なのでガルティアは率直に考えを述べる。暗い様子のスラルに軽い調子で、
「危ない目に合ってる可能性はなくはないだろうが……まあ、ねえだろ」
「……何で？　怪我してるかもしれないじゃん」
頬を膨らまして不満そうに言うスラルに言ってやる。簡単なことだ。
「アイツに帰れない程の傷を負わせられる奴がいるとは思えねえ」

「……」
スラルが無言になる。反論は来ない。それについては自分でもわかっているのだろう。
「同じ魔人とかならあり得なくもないけどな。カミーラとか……後はお前くらいか。人間や普通の魔物じゃ束になっても勝てないだろ？」
「……それはそうかもだけど……」
「なら心配しなくてもいいだろ。どうせ数日もすればひょっこりと帰って――」
「――そうだけど！」
そこでスラルは顔を上げた。どうにも反論があるらしい。ムキになったように大声で、
「レオンハルトでも危ない相手はいるもん！　怪獣とかトッポスとか……他にもドラゴン王や四大聖竜とか生きてるか分かんないけど居たら危ないし、それに他にも――」
「……へぇ、そんなに強い奴がいるのか。初耳だな」
「……あ」
感心したように声を上げると、スラルがまずいことを言ったとそんな様子で固まる。
どれも聞き覚えのない名前だな、と思っているとスラルが少し慌てた様に、
「ちょ、ちょっと……今の無し。今のは忘れて」
「と、言っても覚えちまったもんはしょうがないだろ？」
「……ならレオンハルトにだけは絶対言わないで。……もし、レオンハルトがそれを知ったら……」
こちらに向かって強く念を押しながらも、想像して不安そうな声を出すスラルに、ガルティアはややあって納得した。なるほど、と。確かにレオンハルトが知ればどうなるか、容易に想像がつくからだ。
「確かに、アイツが知ったら真っ先に挑みに行きそうだな。なら黙っとくか」
「……そういうこと。あんまり危ない目にあってほしくないし……」
別にこちらとしては、レオンハルトが戦いたいなら戦えばいいと思

うし、問われたら普通に答えるのだが、他ならぬスラルのお願いなら聞いてやるか、とそれを憶えておく。アイツとしても、スラルの為だと言ったら何も言わないだろうしな。

……でもまあ、そういう奴らも一応いるんだな。

少しだけ聞いたその名前。それだけではどんな奴なのかは想像付かないものの、スラルが不安に思うくらいには強い存在だということだろう。

そういうことなら怪我をして帰れなくなってる可能性もあるか、とガルティアは考えを改める。

と言っても、それを口に出すとスラルがまた荒れそうなので言わない。なので頭の中だけでそれを思考する。

……でも確かに、アイツにしては遅いんだよな……。

ガルティアはレオンハルトの性格を思い出す。前に自分で言っていた筈だ。あいつは、時間や約束を守らない相手が嫌いなのだ、と。

結構昔に話した可能性もあるので、詳しい内容はあまり思い出せないが、確か、過去に約束をすっぽかされまくったことがあって、それが嫌いで自分はそれらを守るようにしたとか何とか。

そして部下はそれをよく知っている様で、レオンハルトの軍では、命令や時間は絶対に守るように魔物将軍らが尽力しているらしい。彼らがいう規律を遵守するとはここから来ているらしい。レオンハルトも、わざとじゃなければ怒ったりすることはないのだが、それに甘える訳にはいかないということだろう。上司に似たのか、随分と真面目な連中だと思う。

そんなレオンハルトが、早く帰る、と言ったのならやはり早く帰ってくるのだろう。それこそある程度用事を終えたら直ぐにでもだ。

実際は休暇なのだし、日にちも指定していないのだから少し遅れたところで問題ない筈だが、あのレオンハルトは何もないけど休めるなら休んでおこう、とか考えるタイプじゃない。真面目ちゃんだからな、と。

そういう訳で只単に気が乗らないから帰ってこないだけ、というのはありえないだろう。何か理由があるに違いない。

偶然強いやつに出会って未だに戦ってるとかならあり得るかもしれない。レオンハルトは戦いとなると熱くなるしな。もしくは事故とか――まぁ、これはないか。

……考えてもわかんねぇな。

ガルティアはそれらを推察してみようとしたが、結局答えは出ない。ふと気になってスラルの方をちらりと見てみると、

「……はぁ……レオンハルト、何してるんだろう……」

また膝を抱えていじけ始めていた。

だが、確かに何をしているのだろう。それが分かればスラルも元に戻るのだろうが、それが分からないことには――

「――よし」

ガルティアはそこで膝を叩いた。そしてスラルに視線をやると、何気ない様子で、

「そんじゃ、様子見がてら遊びに行くか」

「……えっ」

何を、と訳がわからないのか、驚いた表情を見せるスラルに、ガルティアは言った。

「行き先はわかってるんだ。そんなに心配なら確かめに行こうぜ」

「えっ、……は？」

そしたら解決だ、と妙案を思いついてしまったガルティアが、はは、と笑う。

そこでようやくガルティアの言を頭に落とし込んだのか、スラルが膝を崩しながら戸惑った様に、

「え、行くの？　レオンハルトのところに？」

そう確認を取ってくる。ガルティアは頷いた。

「おお。別に行っちゃ駄目ってことねぇだろう。ほら、準備しようぜ」

「……だ、駄目よ。そんなの迷惑だし……レオンハルトは休暇中なんだからゆっくりさせてあげなくちゃ……」

スラルが足を進めながら言う。手は何か赤い魔法の板の様な物を叩いており、それを動かして何かをしている様だ。その様子は明らかに、

「……よく分かんねぇけど、行く気満々じゃねぇか」
「……そうよ。最初からそうすれば良かったのよ。なら、早速準備しなくちゃ……ええと、魔軍はどれくらい連れてけばいいかな……。最近、レオンハルトに任せっきりだからあまり分からないのよね。……とりあえず１００万くらいあれば何か遭っても大丈夫でしょう。それで今いる魔人を全員招集して――」
「って、おいおい。それはやめとけ」
不穏というか物騒な事を言っていたので慌てて止める。
スラルがこちらに顔だけ振り向き、
「え、どうして？　レオンハルトが危ない目に遭ってるならこれくらい連れて行かないと……」
「魔軍を動員したら完全に仕事だろ。それに大騒ぎになっちまう。それはアイツも望まねぇと思うぜ？」
「……でも、もし何かあったら――」
心配性、という言葉が頭に浮かぶ。スラルは魔王の癖に妙に臆病なんだよな、とも。ガルティアは内心思う。
……何かあったら、ってのは二重の意味だな。多分。
純粋にレオンハルトを心配する意味と、自分の身の危険を考えているのだろう。
レオンハルトが居る時は、あまりそういった心配もすることはないのだが、今はそうではない。なので普段は表に出ていない不安が噴出するのだろう。彼が居れば守ってもらえる、とそういうことだ。
だがそうだとするとだ。これを解消しようとするなら、
……ガラじゃないんだけどな。
内心で嘆息する。そしてスラルを見て言った。
「……ま、安心しとけ。何かあっても俺が何とかしてやるよ」
「ガルティア……」
スラルがこちらを見上げてくる。似合わない、というのを自覚しながらも、
「アイツと比べたら力不足かもだけどな。一応俺も、お前に忠誠を誓った魔人だ」

だから、アイツがいない間くらいは、
「ちゃんと守ってやるよ。レオンハルトと合流するまでになりそうだけどな」
「……！」
スラルが驚いたように目を見開く。そしてそれを呑み込むと、
「……うん……そうだよね。……わかった、頼りにするね？」
「そうしな。もっとも、そういった事が起きるかは――」
微妙だが、と続けようとした時だ。
ばん、と扉が勢いよく開け放たれた。そして同時に高い声とともにとある人物が入ってくる。それは、
「――話は聞かせていただきましたわ！　そういうことならわたくし達も付いていきますの！」
「ちょ、ちょっとキャロル！　いきなり入るのは失礼だからやめなって！」
二つに結った金色の髪を靡かせてポーズを決めてそう言ったのは、魔人レオンハルトの使徒、キャロルだった。
そして後からもうひとりの使徒、ハンティが慌てて入室してくる。スラルがそんな二人、正確にはキャロルの登場と発言に対して目を丸くして、
「……聞いたって……この部屋防音してあるんだけど……」
だよな、とガルティアが頷く。だがキャロルは驚くスラルに向かって胸を張ると、
「わたくし、レオンハルト様のお話なら聞き逃すことはありませんの！」
「そんな無茶苦茶な……結構高度な魔法使ってるのに……」
「使徒として当然の事ですわ！　聞こうと思えば、半径１００メートル以内ならどんな場所でも聞くことが出来ます！」
「あたし、そんな特殊能力持ってないんだけど……」
「精進が足りませんわねハンティさん。もっと魔物界一の完璧使徒であるわたくしを見習うといいですわ、ふふん」
「……いや、うん……凄いのは確かなんだけどね……見習えるのかな、

それ」
「私の魔法……」
　キャロルの自慢にスラルとハンティがげんなりとする。スラルは魔法が破られてショックといった感じだが。
　とりあえずガルティアは気になったことを聞いてみた。
「なんだ、お前らも来るのか？」
「当然ですわガルティア様！　わたくしもハンティさんも、そろそろレオンハルト様が恋しくなってきたところですし――」
「それはないけど……まぁ、色々と気になることはあるかな」
「――と、言うことですので宜しければわたくし達もお供させて頂ければと思いますの！」
　いつも通り元気よくそうお願いするキャロルと、言葉通り何かを気にしているのか、複雑な表情でそう口にするハンティ。そんな二人の使徒の提案に、ガルティアは頷いた。
「なるほどなぁ……俺は別にいいぜ」
「……いや、私も別にいいけど……ただ、その間の仕事は……」
　スラルが言いにくそうにしながらもそう発言する。確かに避けては通れない問題だ。
　だが、それは問題ない、と。
「ご安心下さいスラル様！　こんな事もあろうかと！　既に今ある書類や重要な案件は終わらせましたし、切迫した戦況もないので急ぎの仕事も多分しばらくありませんわ！　あってもレオンハルト様の方が大事ですし待たせておきましょう！」
「というか全員休みでいいな。翔竜山行って様子見て戻ってくるだけなら3日かかんねぇし。何かあっても他の奴が何とかするだろ」
　自慢気な表情で言うキャロルと、軽い調子のガルティア。そんな二人を見て、まずハンティが複雑かつ微妙な表情で、
「……ここ百年で思い知ったけど……魔軍って、意外と緩いというか軽いというか……これでよくまとまってるよね……」
「いや、その……」
　そして同じくスラルも微妙な表情になる。ハンティの中のレオン

ハルトの評価が地味に上がってる気がした。
　そんな二人に構うことなく、キャロルは手を前に突き出してポーズを取ると、
「では、早速準備を始めましょう！　……と、思わせて殆ど終わっていますが！　流石わたくし……！　七星には出来ないスマートな芸当ですわ……！」
「おお、そういや持っていくメシの準備しなきゃな。ちょっと食堂行ってくる」
「ご安心を！　それも既にコックに言い含めておきましたわ！　後十分もすれば全員の分の弁当を持ってきてくれる筈ですの！　……こんな事もあろうかと!!」
「おっ、なんだ、手際が良いな」
「ふふん！　レオンハルト様の使徒であるならこれくらい当然ですわ！　ほらハンティさん！　先輩の凄いところですわよ！　もっと褒め称えて下さいな！」
「……はいはい、すごいすごい」
「……そんなに褒められると照れますわー！」
　急に賑やかになった部屋の中で、スラルはぼそりと呟いた。
「……なんかこっちの方が不安になってきたかも……」
「頼もしいだろ？」
「……まぁ」
　頼もしいのは間違いないだろうが、別の意味で不安になる、とスラルの表情はそう言っていた。しかし、その様子は、
　……少しは、らしくなったか？
　いつものスラルに戻った様だ。ガルティアは軽く笑みを浮かべて少しだけ安堵の息を入れた。
　――そして一時間後。
　魔王や魔人、使徒を含んだ四人は、レオンハルトが向かったという翔竜山を目指して魔王城から出立した。

十日振りの再会

――レオンハルトの休暇、十日目。

「――ほお、凄ぇ森だな」

視界一杯に広がる森を見て、ガルティアは感嘆の声を上げた。

……ここまで広い森は初めてだな。

ガルティアの出身地は大陸南方であり、気候は乾燥している。森もない訳ではないが、それよりも圧倒的に荒野が多い。故に珍しく感じるのだ。

そして物珍しさを感じているのは自分だけではないようだ。横を通り過ぎるキャロル。続いて並ぶようにスラルが来て、

「辺り一面、木、林、森……樹木だらけですわー！」

「うーん、分かってはいたけど森かぁ……。森って視界悪いのよね……探知魔法多めに置いとかなきゃ……」

元気いっぱいで今にも走り回っていきそうなキャロルとは正反対に、スラルは何やらぶつぶつと呟きながら、魔法を発動しまくっている。わかりやすくアウトドア派とインドア派だな、とそう思う。

しかし続けて別の反応を見せる者がいる。残った一人、ハンティ・カラーは森をしげしげと見つめて、

「……？　何かいつもと違う……？」

そう言って訝しげに眉をひそめた。

ガルティアは深く考えずに声を掛ける。

「そういやお前さんにとっては故郷になるのか？　元々はカラーなんだろ？」

「……ん、そうだけど……しばらく離れてたから……」

「……ふーん？」

微妙にやりづらそうに答えるハンティ。その反応に首をひねりつつ、

……何だ、気を使ってんのか？　それとも……。

今更確認することでもなかったかな、と思い直す。この大森林地帯

が大勢のカラーが住む一帯であることはそれなりに周知された情報だ。実際ここまで来るのにも自然とハンティが先導してくれていたので、それは間違いないのだろう。
だが、その代りに気になるのは周囲を訝しむ彼女の様子であり、
「……あら、ハンティさん？　どうかしましたの？」
「……いや、別に何でもないけどさ」
「……？　なら早速進みましょう！　ハンティさん、道案内お願いしますわ！」
「……了解。それじゃ適当に付いてきて」
キャロルの言葉を受けたハンティが先行する。後の三人はそれに付いていくような形だ。
ただその足取りは軽く、周囲を警戒した様子はない――というのもこちらのムシによるレーダーや、スラルの探知魔法があるのでそちらに気を回さなくてもいいという判断だろう。それなりに信頼はしてくれているようだ。
それにこの森に住む魔物くらいならどうとでもなるというのもある。魔王と魔人に使徒の一行だ。普通の魔物は出会ったとしても一目散に逃げてしまうだろう。
そんな事を考えながら何となく周辺を見回す。顔を上に向けてみれば、木々の隙間から細長い塔のような山が見える。
……あれが、翔竜山か。近くで見るとやっぱデカいなあ……。
レオンハルトはあれに登ろうとしているのか。なるほど、気持ちは分からんでもない。世界一の山、前人未踏の境地。そういったことに全くの興味がないといえば嘘になる。
と言っても、自分にとっては美味しいメシの方が興味が湧くので、休暇を取って何処かに行くとすれば世界の名産を食べ歩いて行く感じになるだろう。結構色々なものを食べてきたが、まだまだ知らない食材も多いし、人間の食文化の発達から未知の料理も増えているという。そういった物を発掘するのも――
……考えてたら腹減ってきたな。
道すがら、大量に持ってきた弁当を食べながらここまで来たが、そ

れでも腹が空くのはしょうがない。腹の中のムシ達もお腹が空いた、と言っているようだ。
なのでガルティアは前を行くハンティに向かって声を掛けることにした。
「なあ、腹が減ったんだが、何かないか？」
そう言うと、隣にいるスラルが呆れた目になった。こちらに振り返ったハンティも半目になり、
「何かって……いや、自分の弁当は？」
「もう食べちまった」
「えぇ……」
困惑した表情を浮かべるハンティ。
しかし無いものはしょうがない。いや、肉くらいならまだ持っているがこれはつまみ用だしな、と。
それに、
「せっかくの機会だし、この森でしか食べれない物とかねぇのか？」
「なに普通に楽しもうとしてるのよ!?」
スラルが声を上げる。それをいなしつつ、
「いや……山を登るなら弁当は欠かせねぇだろ？　量も心許ないし、一日で見つかるとも限ら――おっ、今のうちに数日分の食料を準備しとくのがいいんじゃないか？」
「絶対今思いついたでしょ！　その理由！」
「ピクニックみたいですわー」
と言っても腹が減ったのだからしょうがない。我ながら良い理由だと思う。それも間違いではないことだし。
そのやり取りを見ていたハンティが息を吐く。そして口を開くと、
「……といっても、この森でしか食べれない物なんて――」
ハンティが間を空ける。そして微妙な表情で、
「……無いことも無いけど……」
「よし、それを食おう」
「この森でしか食べれない物……それって一体何ですの？」
キャロルが聞きたかったことを尋ねてくれる。

ハンティはこちらを見て言った。
「食べれないっていうか採れないものだけどね。――わさびって言うんだけど」
「へぇ、食べたことないな。どんな食材なんだ？」
「わたくしもありませんわ！」
「私も名前だけしか――って、いつの間にかそういう流れになってる……」
スラルが落ち込んでいるのを尻目に、ハンティはそのわさびとやらの説明を始めた。
「ええと……茎をすり下ろしたものを料理に使ったり、葉を揚げたり漬けたりして食べたりとかするかな。一応、ここ以外じゃ見たことない食材だけど……」
「ほう、いいな。味はどうなんだ？」
その質問にハンティは首を捻りつつ答えた。
「あー……美味しい？　と思うよ。甘いような辛いようなよく分かんない味だけど、皆結構食べてるし……って、何その顔」
ハンティの説明に、他の三人が微妙な顔になる。そうして同じく微妙な声色で、
「そういえばハンティさん、味覚音痴でしたわね……」
「ああ、うん……聞いた俺が悪かったな」
「でも、皆食べてるなら普通の味なのかな……？」
「……味音痴で悪かったね」
三人の辛辣な評価にハンティが息をついてぼやく。
しかし説明は為になっただろう。ガルティアは興味津々といった様に笑みを浮かべ、
「だが、俄然その味に興味が湧いてきた。さっそく食べに行こう」
「……あー、それなんだけど」
ハンティはそこで言い淀む。そして少し考えてから発言した。
「わさびの殆どはそこらに生えてる訳じゃなくて、畑で栽培してるからね。集落に行かないと採れないから……」
ああ、と皆が言わんとしてることを瞬時に理解した。スラルが皆の

思いを代弁するように発言する。
「なるほどね。私達じゃ入れない……というか入ったら騒ぎになるわね」
　そういうことだ。魔王と魔人と使徒。そんな集団が亜人種に属するカラーの集落なんかに行ったら大騒ぎになるだろう。ただでさえカラーは排他的な一族だと聞く。人間に近い容姿であっても行くのは難しい。唯一それを解決出来そうなのはハンティだが、彼女は何故かそれを避けているようで、
「……ま、そういうことだね。だからちょっと難しいかな」
　少し申し訳なさそうに言う。ガルティアは呻いた。
「くっ、美味が近くにあるというのに……！」
「いや、うん……悪いね」
　ハンティが軽く謝る。そして気を取り直そうとするように、
「……森の西側に行けば無くはないけど……そんな暇もないし、そこらで適当に野草や動物を狩って――」
　と、言った瞬間だ。
　すかさずガルティアは声を上げた。
「――そこに行くぞ！」
「……へ？」
　ハンティが間の抜けた声を出す。
　そこに畳み掛けるようにガルティアが続けた。
「そこに行けば美味があるんだろう？　ならついでに寄ろうぜ！」
「えっ、いやでも……」
　ハンティが戸惑ったようにスラルの方を見る。一番立場が高く、決定権がある魔王に伺いを立てている様だ。
　しかしスラルはそれを受けて、頭を抱えると、呆れた声で、
「……なんか食事の話題が出た時からこうなる予感がしたのよね……」
　そして一息。間を置いてから、
「……少しくらいならいいわ」
「……」

と了承した。
そしてハンティが無言になる。どことなく気が乗らない様子なのは気の所為だろうか。同じ事を思ったのか、キャロルが首を傾げて、
「ハンティさん？　どうかしましたの？　それならそれで構わな――はっ!?」
そこで息を呑むキャロル。
一瞬固まった後に感動したように声を震わせて、
「まさか……レオンハルト様の事を心配して……！　そんなにも探索が遅れるのが嫌なのですね！　それならわたくしも――」
「……いや、違うから」
きっぱりと否定するハンティ。キャロルがショックを受けたように白目になる。
だがそこで諦めたのか、頭を抱えながら大きく息を吐くと、渋々といった様子で、
「……なら、行こうか」
「お」
ガルティアが期待の声を出す。
だが彼女は気が進まない様子だ。なので顔を少し真面目なものにして、
「本当に嫌なら別にいいぜ？」
「……うーん……そういう訳じゃないんだけど……そこなら色々と調達出来るかもだし……」
ならいいじゃないか、と思うも、ハンティが顎に手を当てて考え込んだので口を挟むのをやめる。
しかし彼女は途中、良い機会かな、などと呟くと、気持ちを切り替えるようにさっぱりとした表情で、
「――そこ、私の家があるんだ」
と、それを打ち明けた。

森の中にぽつんと建つ古い一軒家。

そこは数日前よりも幾分か綺麗になっていた。
部屋の中は掃除が行き届いており、少し前までは埃だらけであった場所と同じ部屋とは思えない。
そんな家に、本来の持ち主はいない。最初に見たときの様子から少なくとも数年か、数十年は放置されていた様であり、家主はここに帰ってきていないことが伺えた。
しかし数日前よりその家には、とある三人が住み着いていた。
その家の中にある一人用のベッドの上に、金色の髪を持つ格好のいい男がいた。
この家に一時的に住んでいる魔人――レオンハルトである。彼はベッドの上で優雅に寛いでいた。
気を失ってしまうほどの大怪我を負った魔人は、その様子をもう殆ど感じさせない程には回復していた。
そんなレオンハルトの横、いや上には――
「あっ、ふっ……レオンハルト……！」
「あぁっ、んっ……レオンハルトさん……！」
その回復に大いに貢献してくれた二人のカラーの女性――ケッセルリンクとペールがいた。
彼女達はレオンハルトに覆い被さるように身体を密着させており、顔を紅潮とさせて何やら喘いでいる。
更には三人とも衣服を身に着けておらず、ベッドの上は扇情的な光景が広がっていた。
そんな中、レオンハルトは色々としながら身体の調子を確認していた。
……そろそろ、治ってきたな……。
手を握ったり開いたりと動かしながら思う。自分の身体の事はよくわかっているのだ。身体を少し動かしてみれば自分の肉体の状態が何となく確認出来る。殆ど完治しているだろう、と。
故に明日にはここを発つ事になる。なので、この極楽な状況も今日までの事だ。
レオンハルトが行動を起こせば彼女達は悩ましい声で鳴く。吐息

混じりで、
「んっ……レオンハルトさん、元気になってきましたね……」
「……そうだな。だが、それはどっちの意味だ？」
「……どっちもです……」
ペールがうっとりとした様子で答える。
それを見たケッセルリンクが続けて、
「なら、そろそろか……？」
ああ、とレオンハルトは頷いた。オル＝フェイルをケッセルリンクが磨いてくれる。刃が二つの球に囲まれて心地よいものを感じながら今度はペールを引き寄せると、
「……その話は、明日だな。明日にはここを――んんっ」
不意に、こちらの顔が柔らかいもので包まれ口を塞がれてしまう。身を乗り出してきたペールの所為だった。彼女は顔を抱きかかえながら言う。
「……その先は言わないで下さいね？」
「……」
レオンハルトはその言葉にこくりと頷く。その意味が分かったからだ。
そして返礼代わりに手と口を動かした。
「あんっ……もうっ、レオンハルトさん……甘えん坊、ですね。そんなに、あっ、好きなんですか……？」
「……」
言葉は返さない。愚問であるし、そもそも喋れない。
そんな状況の中、先程の言葉が聞こえていたのか下の方からケッセルリンクの声が聞こえてくる。
その内容は、
「……私には、後悔はない。レオンハルト……貴方のおかげで……」
「……そうか」
今度は言葉を返した。それなら良かった、と内心で安堵する。
それが伝わったのか、ケッセルリンクの動きが激しくなった。同時にペールもこちらに口を落としてくる。

血が高まるのを感じて、レオンハルトはそれを我慢せず自然なものに任せた。
「んっ……レオンハルト……」
「あぁ……レオンハルトさん……」
二人が恍惚の表情を浮かべる。
だが、それで終わりではない。レオンハルトは収まらない昂りを自覚しながら、二人を抱き寄せることにした。
そして囁くように言う。
「……なら、たくさん感じろ」
敢えて言葉足らず、そして遠回しにそれを告げる。それを言うな、と釘を差されたばかりだからだ。
意味は通じていなくても構わない。だが二人には通じていたようであり、彼女達は顔に唇を落としてくると、
「ああ……感じさせてくれ」
「レオンハルトさんも……ちゃんと感じてくださいね？」
と、微笑を浮かべてそう言った。それを見たレオンハルトは息を吐く。
……全くこいつらは……。
どう考えても楽しませてもらっているのは自分の方なのに、まるでしてもらっているという風に捉えているのがタチが悪い。確かにそれは事実かもしれないが、こういう時は良くも悪くも男の方に比重が偏る筈だ。
なのでレオンハルトはその心の内を少し曝け出してみることにした。不敵な笑みを浮かべて言う。
「――真面目なのはこんくらいにしとくか。あまり時間もないし、精々楽しませてもらうぞ……」
「んっ、来てくれ……」
「楽しんで下さい……」
しかし二人はそう言って自分を受け止めるだけだった。自分達のスタンスを曲げるつもりはないようである。それを見て、
……やり難い。

彼女達の好意的な解釈に、レオンハルトはむず痒いものを感じる。自分が都合の良い事をしているだけだというのに、二人はそれに心から感謝している。そしてこの僅かな時間を全力で謳歌しようとしてくれているのだろう。二人の行動の節々から、それは窺える。

……なら、俺も最後まで突き通すか。

彼女達の思いを遂げさせてやる――そういう思いではなく、レオンハルトは彼女達を全力で好きにすることにした。その行動が、二人にとって一番の幸いになるだろうしな、と。

レオンハルトは彼女達に向かってオル＝フェイルを突き刺した。

家の中で、二人の艶やかな声が響き、三人は暫しの間、淫蕩に耽ったのであった。

……やっぱやめとけば良かったかなぁ。

ハンティ・カラーは、自らの失言を少し後悔していた。

森を歩くこと数時間。現在、レオンハルト捜索隊の四人は森の西部にあるハンティの家を目指していた。

こちらの背後には、周囲の林を警戒し続ける魔王スラル。新たな食材に胸を躍らせているのかワクワクした様子の魔人ガルティア。そして、

「――ハンティさん？　まだ着きませんの？」

「……もうちょっとかな」

何も考えていない様子の使徒キャロル。その三人がついてきていた。

三人は口々に話を続けており、

「わさびか……まずはそのまま食ってみるか。その後で別の食い方も試してみよう」

「美味しかったら少し持ち帰りましょう！　レオンハルト様に食べていただくのですわ！」

「……そういえば、ガルティア程じゃないけどレオンハルトも食に結構拘るのよね……意外とわさびを食べに来てたりして……」

色々と好き勝手に話す三人を見て思わず半目になる。緊張感があまりにも無い。まるで本当にピクニックにでも来ているかのようだ。そして思うのは、

……本当に家に帰ることになるなんてね……。

先程キャロルに言った通り、もうすぐでかつて自分が住んでいた家に辿り着く。元々、集落にも家にも立ち寄るつもりはなかったのだ。レオンハルトが翔竜山に行くと聞いた時から何となく嫌な予感がしたので、一応確かめに来てみただけであり、用事を済ませたらさっさと帰るつもりでいた。

なので集落のある南側ではなく、東側から森に入るように誘導したのだ。

しかし結局、ガルティアがわさびを食べたいなんて言うもんだから、適当に話を流そうとしたらその際の発言を拾われて自分の家に向かうことになってしまった。

実際、家の近くには天然のわさびが採れる場所がある。そういった場所は森の中でも少なく、唯一憶えている場所がそこなのだ。

それにあの辺りは魔物も少なく、代わりにしかなどの動物が多く、食料の調達にも最適だし、家の中にはまだ使える保存食や調味料が残っていた気がするし――

……考えれば考えるほど、家に寄るのが最善っぽいのが何とも……。

腑に落ちない気持ちになりながらも、歩みを進める。

集落に寄るのは面子的に無理だしねぇ、とも思いながら、

「……？」

森の中にあった痕跡を見つけ、ハンティは疑問符を頭に浮かべる。

――まただ、と。

先程森に足を踏み入れた時にも思ったが、どうにも人が通った痕跡が多いように感じる。今も、地面には微かに踏み慣らされた跡が残っていた。

……ここらはあまり人は通らない筈だけど……。

南部や東部は人間の冒険者などもよく通るので、人の痕跡があって

もおかしいことではないが、西側や北側は魔物の数も多く、強さもそれなりであるため、人が来ることは殆どない。
そこまで気にする必要もないが、
……まさか、レオンハルトが通ってたりして……。
なんてことも思う。流石にないだろうが、人では考えにくくても魔人であるなら危険はないようなものだ。その可能性もなくはない。
しかし翔竜山の登山ルートは基本的に南東方向が登りも緩やかでよく知られている。カラーが薬草などを取りに登る際も、大体はこのルートを使うものだ。
他の場所からも登れないことはないだろうが、中層辺りから一本道となる山道に合流するまでは急斜面なのであまり適していない。
そもそも森に入って真っ直ぐ翔竜山に向かえば大体そのルートになるのだ。迷子になったりすれば話は別だろうが、森に住むカラーでなくとも、ちゃんと目印に従って歩けば迷うことはない。
故にありえないと断じ、そんなところで、
「――着いた」
「お？」
視界の先、緩やかな斜面に沿ったように小さい沢がある。岩に苔が生えており、湿り気が多いことがわかる。
水の流れる音が響く中、ハンティは適当に辺りを見回すと、
……あの辺りかな。
白い花が咲く一帯を見つけて近づいていく。そして、その植物を根本の方から採取し、
「……ほら」
「おっ、ひょっとしてこれが……」
ひょいひょいとガルティアに向かって軽く投げ渡していく。それを受け取りながら口元を釣り上げるガルティアにハンティは頷いた。
「それがわさびだね。その泥がついた部分を水で洗って」
「おお！　やっと来たか！　よし、任せろ！」
そうやって指示を飛ばすと、ようやくお目当ての物にありつけた喜びか、張り切って沢の水に近づいていくガルティア。

それを隣で見ていたスラルも関心を向けて、
「初めて見るなぁ……一応メモしとこ」
そう言ってどこからか取り出した紙とペンで、さらさらと何かを書き始める。
そして一番騒がしいのが、
「サカナが一杯いますわー！　ハンティさん！　こちらも捕まえますのよ！」
「……うん、好きにして」
好きにしますわ！　とじゃぶじゃぶと水の中に足を踏み入れるキャロルを半目で見る。そんなに騒いだら捕まらない気がするけどなぁ、と思いながらこちらも何となく何本かわさびを摘んでいく。
すると後ろから声が聞こえた。
「よぉし！　洗ったぜ！　なぁ、ハンティ！　これ、このまま食べてもいいのか？」
「一応、全部食べられるよ」
「ならいただくか。おい、スラル。一緒に食べようぜ。ほら、お前の分」
「え、このまま食べるの？　ちょっと怖いんだけど……」
「最初は生で食べてこそだろ。素材の味を楽しまなくちゃな。お前も、料理の探求には必要不可欠だぜ？」
「……まぁ、いいけど」
「わたくしも食べますわー！」
……賑やかだね。
背後で大騒ぎする三人を尻目に適度にわさびを取り終えると、苦笑する。
こうやって見ると魔王や魔人に使徒。人間を苦しめる魔の存在にはとても思えない。それどころか、人間よりも――
「……」
何となく、ハンティはその場から離れてみた。
森の中を移動して、ある場所を目指す。瞬間移動を使い、この沢より程近い場所にある家を目指す。

距離は短く、時間にして一瞬、ハンティの中でもほんの少しの時間で、それは見つかった。
「……懐かしい」
思わず口に出る。
森の中にあって開けた場所。眼の前には、木造の一軒家が建っていた。
ハンティは思う。ここに住んでいたのはいつ頃だっただろうか、と。
……確か、人間になって少しした後だっけ。
自分がドラゴン・カラーから、ヒューマン・カラーになって数年後。当時親交のあったとあるカラーにお願いして建ててもらったのだ。
あの頃は色々と辛く、集団で生きる気になれなかった為、集落より遠く離れたこの場所でひっそりと隠れ住むつもりで家を建てた。
結局直ぐに何かを求めて森を後にして旅立ったのだが、それでもたまに帰ってはいた。しかし帰ってくると妙な感傷を感じてしまうため、あまり好きではなかったのを憶えている。
だが、今はどうだろうか、とハンティは思う。今はそんな感傷を思い出すのだろうか。
……今は、立ち位置がよくわからないしね。
今の自分はドラゴン・カラーどころか、カラーですらないのだ。魔人の使徒。それが今のハンティの確かな肩書。
だが、それでいて人間とともに住み、時には味方をする不思議な立ち位置だ。どっちつかずとも言う。それは偏に、人間を苦しめる魔人や魔物が嫌いであったからだが、
……今は微妙だよね。
それがよくわからない。いや、大体の魔物が嫌いなのは間違いないと思う。彼らの殆どは野蛮で暴力的で、人間を虐げることをどうとも思わない連中ばかりなのだ。
しかし、そうとは限らないことも知っている。他ならぬ、自分の主や、親交のある人物達がそうだ。それはここ百年で思い知った。
微妙に常識の通じない、個性的な人物ばかりだが、彼らは人間と変

わらずちゃんと物を考える理性や知性があり、喜びや悲しみといった感情があり、人を気づかえる心がある。
数日前、レオンハルトの仕事を手伝いに魔王城にいる際も、他の魔物将軍や魔物隊長はあまり慣れていない仕事をするこちらを気遣っていたのだ。一般の魔物ですらそういったことが出来る。
なら、人間と魔物の違いは――
「――――っ」
そこでハンティは考えを無理矢理打ち切った。これ以上思考を巡らせると嫌な考えに行き着いてしまいそうであったからだ。
……切り替えよう。
と、そこでハンティは家を見てみることにした。これ以上妙な考えをする危険性もあるが、どっちにしろ家から使えるものは持っていこうと思っていたのだ。遅かれ早かれ入らざるを得ない。
故に、ハンティは家に近づいた。近づけば近づく程、変わっていないことがわか――
……あれ、ちょっと綺麗になってるような……？
首を傾げながら家の外装を眺める。もっと埃っぽくなっているかと思ったが、窓は思ったよりも綺麗で、扉も、
「……？　とりあえず、入ってみようかな……」
と、戸を開いた。
――ハンティ・カラーの不幸はそこだった。
彼女は感傷や直前までの思考で気を抜いており、その気配に気づかなかったのだ。
故にハンティは、自分の家の扉を開き――それを目にした。
自分のベッドの上で行われていた光景を。
「ああっ、レオンハルト……」
「も、もう……今は食事中ですよ？　こっちを食べてください……」
「ああ、ちゃんとそっちも食べる。でも今は――――ん？」
「――――」
「……あ？」
それを目にして、ハンティは凍りついたように固まった。

同時に男が気がついて、きょとんと顔を硬直させる。
お互いの目が合って、その正体を確認する。
「え、あ……お、お前……何でここに……え？」
突然の来訪者に混乱している金髪の男。その両側に二人のカラーを侍らせた全裸の男。
それを見て、ハンティは、
「――ひ」
手を動かした。それはハンティが得意とする魔法の詠唱であり、
「……え、ちょっと待――」
「――人の家で、何やってんのよ――っっっ!?」
「ぐおおおおおおお――っ!?」
そう言って、ハンティは自分のベッドの上でカラー二人と情事に耽っていた探し人である主――魔人レオンハルトに雷撃を浴びせた。

魔人レオンハルトは突然の来訪者からの雷撃を、とっさにオル＝フェイルを手にとって弾いた。
こちらを見て顔を真っ赤にして、羞恥と怒りが折り混ざったような表情を浮かべる自らの使徒に声を掛けた。
「おい、ハンティ!!　なんでお前がここにいる!?」
「うるさい馬鹿!!　死ねっ!!」
「うおっ！」
雷撃を再び放ってきたので、後ろに被害が出ないように弾き飛ばす。家具に被害が出るのは許して欲しい。というか、
「ここ、お前の家なのか!?」
「……そうよ！　そして死になさい!!」
……ぐっ、話が通じない……！
瞬間移動を駆使しての高速詠唱と、出だしが見えない剣技を防ぐ。自分の教育の結果か、かなりの練度をもった攻撃に思わず感心しそうになるもそんな場合じゃない。
……一旦、取り押さえるか……！

このままでは埒が明かない。ハンティがここにいる理由を聞くためにも、ここは手っ取り早く取り押さえさせて貰おう。
それに、身体の調子を試すのにも丁度いいしな、と、そう思いレオンハルトは前進した。
「――悪いが、取り押さえさせて貰うぜ……！」
「！　くっ、来るな……!?」
「お……」
床を踏みしめ、初速から最高速の踏み込みで近づく。
だが、昔のハンティであればそこで終わりであったが、一月に一度の対決で鍛えられているハンティだ。流石に向こうも瞬間移動を駆使してそれを躱す。
ハンティが外に脱出したのを見て、こちらもそれを追いかけた。逃しはしない、と。
……良い機会だから試してやるか……！
レオンハルトは森に逃げようとするハンティを見据えて、剣に力を込めた。そうして集中を入れ、右に逃げようとする彼女に、
「――これはどうよっ!?」
「――なっ!?」
斬撃を振るい、ハンティの逃走したかったであろう場所を予測してピンポイントで潰す。それが同時に潰されたことで、ハンティが慌てる。流石に予想外であったようだ。
そしてその隙を逃す手はない。すかさず踏み込んでハンティの懐に入ると、
「おらっ！」
「っ――あっ!?」
足を引っ掛け、腕を引っ張り地面に転ばせる。そして直ぐ様剣を手放すと、両腕を抑えて固めに入った。
「よし、もう逃げられねぇぜ……！」
「え、あ……ちょ、やめっ……！」
ハンティの表情に怯えと羞恥の色が混じる。なんか微妙に過剰な反応だな、と思いつつ、レオンハルトは声を作った。

「さて、それじゃあ……お前が何でここにいるか――」
「――なに、ひてるの？」
「――ッッッ!?」
その声が聞こえてきた瞬間、レオンハルトは背筋を震わせた。
全身の毛穴から汗が吹き出るように感じ、鳥肌が立つ。
ハンティを抑えながら、妙に滑舌の悪い聞き慣れた声の方向に首を向ける。
するとそこには、
「……す、スラル……？」
「……」
――ここにはいないはずの、レオンハルトの主――魔王スラルが呆然とした様子で立っていた。
レオンハルトはそれを確認した瞬間、ハンティを取り押さえるのをやめ、直ぐ様立ち上がる。
そして震える声で、
「な、何で、お前がここに……？」
「……っ!?」
何故かこちらを見て身体を震わせるスラル。
顔は赤く、視線は下を見ている。何故、と思う間もなく、
「ひ、ひひからふくひて……！」
「……は？」
訳の分からない言語で声を掛けられる。
彼女は顔を赤くした状態のままである、良く見れば口元も赤くなっているようで、
「――レオンハフトさまぁ――！」
「……あ……キャロルか？」
突然、スラルの背後から見覚えのある金髪ツインテが走ってきたのを見て、レオンハルトはそれを即座に察知する。
そしてキャロルである証拠に、こちらに名前を呼ばれた彼女が元気よく手と声を上げた。
「はひ！　レオンハフト様の使徒、ヒャロルでふわ！」

「……それはいいんだが……お前ら、呪われでもしたのか？　変な喋り方になってるぞ？」
「あ、それはこのわさびの所為でふわ！　そのまま食べたら辛くてしょうがないでふの！　だんだんマシにはなっへきましたが……」
「わさび……ああ、それか」
よく見ればキャロルの手元に緑色の植物が握られている。
……そういえば昨日、俺も食べたな……。
近くでわさびが採れたらしく、ケッセルリンクとペールが二人でそれを使った料理を作ってくれた。それはとても美味しかったのだが、昨日の思い出ともなると後ろから二人にいたずらした思い出の方が色濃く――
「それよりレオンハフト様！」
「あ、どうした？」
いつもの調子で名前を呼んでくるキャロルに答える。こういう時は何かしらの用件があるのだ。くだらない用件もあるが、結構細かいことにも気づいてくれるので意外と役に立っている。
そんなキャロルは、ほんの少し顔を赤らめながら、珍しく言い辛そうにして、
「そ、その……レオンハルト様。……服は、どこにありますの？」
「……服？」
「はい。レオンハルト様の……その、ご立派な剣が、野ざらしに……」
「はぁ？　何を――――」
と、そこで気づいた。
レオンハルトは自分の全身を見て、今更ながら身体にいつも感じる衣服の感覚がないことに気づいた。
……え、あ……そういえば、さっきまで全裸で色々と……。
顔を青ざめさせる。下を見れば、自分の長剣が臨戦状態のままであり、その影には、
「……こ、この……変態……！」
「……」
怒りと羞恥が混ざった状態のハンティが目を背けていた。

そして、前方。キャロルの横のスラルを見ると、
「は、ふ……！」
未だわさびの刺激で口元が回らない様子のスラルが顔を両手で隠し――いや、指の隙間からこちらを見ており、
「れ、れほんはふほの……へんたい……」
「……」
何故か変態だけばっちりと聞き取れた。レオンハルトは真顔になりながら状況を把握する。
……そうか、なるほどな……。
どうしてハンティが逃げたのか、スラルが顔を赤くして、指の隙間からがっつりと下半身に視線を送っているのかを理解し、レオンハルトは空を見上げた。
そして、ふっ、と微笑を浮かべて、
……わさびって……辛いもんな……。
と、現実逃避気味になりながら、服を取りに戻ることにした。

一方その頃。
「……このわさび、つーんとした刺激からくる辛味が堪んねぇな。色々な料理に合いそうだ……！」
ガルティアは新しい食材であるわさびの味に感動していた。

真相

「――それで、レオンハルトは、こんなところで、何をしてるのかなー？」

「……」

魔人レオンハルトは、地面に座した状態で責められていた。

家に戻り、服を着て、二人にも服を着るように言い、外に出たレオンハルトを待ち受けていたのは、酷く据わった目をしたスラルであった。

口元にこそ笑っているものの、目が全く笑ってない。何故そんな表情になるのか、と疑問を抱く。

……スラルにはまだ、バレてはいない筈――

と、そう思って視線を横に向けてみれば、まだ多少顔を赤くして、苦虫を噛み潰したような表情をしているハンティの姿。

それを見て、レオンハルトは察した。

……アイツ……チクりやがったな……！

先程家に入ってきた時に色々とやっているところを目撃されてしまった。そしてこちらが家に戻っている隙にスラルに報告したのだろう。こちらの痛い部分を知っている奴だ、抜け目のない。

やはり知らなかったとはいえ、彼女のベッドの上で励みまくったのはマズかったか。後で謝ろう、とそう思う。

しかしそれよりも先にスラルに呼び止められてしまったので、こちらを何とかする方が先決だ。

と言っても、今の自分には取れる手段はあんまりない。正座でスラルの追及を受け続けるくらいしか……というか、この状態のスラルに下手に言い返したら折角怪我がほぼ完治したのに、また怪我人に戻りかねない。なので、じっとスラルの言葉を待つ。見上げた先、こちらを腕を組んで見下すスラルが、

「ねぇ、レオンハルト。……貴方、ここに何しに来たんだっけ……？」

「……しょ、翔竜山に登りに……」

「……そうよね。私も確かにそう聞いた。――なのに」
そう言ってこちらと目線を合わせてくる。笑顔が消え、真顔に戻る。そして、
「――どうしてこんなところにいるのかな？」
「い、いやそれは……迷子になって……」
小声で言い難い事を言うも思わず顔を背けてしまう。だがそれでもスラルの追及は止まらず、
「……迷子だとしても、こんなところでゆっくりしてる暇ないわよね？　カラーもいるんだし、普通に抜け出せるでしょ？」
「何だレオンハルト。お前、迷子になっちまってたのか？　ははっ、随分と方向音痴なんだな」
「ガルティア、テメェ――」
「――今話してるのは私なんだけど？」
「ぐ……！」
茶々を入れてきたガルティアに立ち上がりかけるも、スラルの圧力の籠もった言葉に止まらざるを得なくなる。ガルティアは後で殴る。こいつらがここに来たのもガルティアが発端だったと言うし、色々と散々だ。原因は自分ではあるが。
しかし、
「あ、あの、それは……」
おずおずと声を上げる者がいた。気弱そうなカラーの長、ペールだ。彼女はケッセルリンクとともにその話を少し離れた距離で聞いていた。
そして黙っていられなくなったのだろう。魔王相手に果敢に、
「――何よ……？」
「あ、いえ、その……レオンハルトさんは凄い重傷で――」
「……そんなことわかってるんだけど」
「あ、そうですよねすみませんでした黙ります！」
……ペール――!?
スラルに視線と圧を向けられた瞬間早口で謝ると、その視線から逃げるようにケッセルリンクの影に隠れてしまった。やはり魔王相手

にいきなり反論するのは難しいか。魔人でも怖いくらいだから仕方ない。
ひょっとしたら少しは怒りを沈静化出来るかな、と思ったが焼け石に水のようだ。表情こそ普段に近いものの、その圧力は全然収まっていない。
というかわかってるって――
「……とにかく、何でこうなったのかちゃんと説明して」
「……それは――」
何でこうなったのか。その意味は何となくではあるがわかる。
しかしそれを説明するのはあまりよろしくない。少なくともこの場では避けたいことだ。ならばどうするべきか、とそう考えていると視界の中のとある人物が動いた。それは、
「……はっ！　わかりましたわレオンハルト様！」
なにかに気づいたように顔をはっとさせるのは、レオンハルトの使徒、キャロルだった。彼女のそんな声にその場にいる者達が視線を集める。
……何か嫌な予感が……。
わかった、というからには何かに気づいたのだろう。キャロルは真面目な顔をして、
「山を登る、というのは隠喩だったのですのね！　だから巨乳が二人も……お見逸れしましたわ！　流石はレオンハルト様！」
「んな訳あるかっ!!」
滅茶苦茶なことを言った。謂れのない疑いがかけられる前に叫ぶようにツッコミを入れる。
だが、
「……ふ～ん。登山ってそういう意味だったんだ……」
「信じるなっ!?　俺は単純に翔竜山を登りに来ただけだっつうの！
それで途中、ドラゴンと決闘してたら色々あって山から落ちて――」
「……ドラゴンと決闘？」
その単語に反応したのはハンティだった。眉を立て、胡乱な表情で疑問を出す。その問いに、レオンハルトは頷いた。

「ああ。確か……四大聖竜とかいう――」
「し、四大聖竜!?」
「え、本当に……？」
　ハンティが驚愕の表情を浮かべ、スラルはまさか、といった表情でこちらを見る。ハンティが驚く意味は分かるが、スラルの方はどういう意味だろう。レオンハルトは続く言葉を得る為に頷いて補足する。
「本当だ。ライゼンっていう鱗がダイヤモンドになってる奴なんだが……数日前に戦って――今は一応休戦中だ」
「名前と種族まで……」
「……」
　言葉少なげだが具体的な情報を答えたことで少しは信用されたのだろう。ハンティと、特にスラルの圧が和らぐ。その代り無言で微妙な表情を浮かべた。こちらがその意味を測りかねていると、
「へぇ、まさかマジにそうなってるとはな。城でスラルが――」
「っ！　ガルティア!!」
「――っと、そうだった。悪い、今の無しな」
「はぁ……？」
　図らずもそれに答えてくれたガルティアだったが、スラルが怒ったように名前を呼ぶと直ぐ様それを訂正して言葉を噤む。意味が分からず困惑する中、気を取り直したスラルがこちらを再度見て、
「……まぁ、それは分かったけど。そっちの二人と一緒にいた理由がまだなんだけど？」
　スラルがカラーの二人を指差して言う。ひぃ、とペールが再びケッセルリンクの影に身を隠した。ケッセルリンクは動じていない。
　……魔王の圧力に怯まないのも流石だな。
　胸だけじゃなく肝も大きいのだろうか。スラルとは大違――あ、こういう思考はよろしくない。何故ならスラルはこういったことに対しては何かの能力じゃないかと疑うほど鋭く――
「――ねぇ、今変な事考えてない……？」
「っ!?　か、考えてない……」
　……案の定かよ!?　こいつマジかっ!?

もはや読心レベルの鋭さじゃないだろうか、と疑いを掛ける。そういった魔法でも使ってる可能性を、半ば本気で検討しはじめるも、そこで気づいたことがあった。それは、

……ああ？　いつもなら、ここで何かしらで痛めつけられる羽目になるんだが……。

今日は、追及が随分と緩い。普段であれば、自分が何かをしてしまった時は、大なり小なり魔法が飛んでくるのがお決まりだ。こちらとしても先程からそれを警戒半分、覚悟半分で気を張っているのだが、一向にそれは来ない。

……これは一体どういう……？

レオンハルトはその意味を思案して、内心で首を傾げる。単純に機嫌の問題の可能性もある。というかそれが濃厚だが、一応考えざるを得ない。彼女のことなら尚更だ。

だが、そんな時に動きがあった。スラルではない。

「――失礼、少しいいだろうか？」

「……！」

凛とした声がその場に響く。

それは先程からずっと黙りこくっていたカラーの先代長。夜の王、ケッセルリンクだった。彼女は一言断りを入れながら、距離を詰める為か少し前に出る。後ろに隠れていたペールが若干困惑する中、ケッセルリンクは再度声を出した。

その対象は、

「……何よ？」

スラルだった。彼女に向かって顔を見据えると、ケッセルリンクはある程度距離を詰めたところで立ち止まり、

「話に割り込んでしまって申し訳ない。しかし、彼の話であれば私が大いに関係するだろう。故に――」

ケッセルリンクは言う。スラルに向かって優雅に一礼してみせながら、

「――二人きりで、話がしたいのだが……構わないだろうか。――魔の王よ」

「――！」
その言葉に驚いたのは、その場にいる誰も彼もだった。
ケッセルリンクが一対一で話をしたいと言った相手は、彼女が自分で言った通り、魔物の首領である魔王。普通であれば恐怖するべき存在に対話を持ちかけたのだ。もっとも、ペール以外の者達はスラルの性格を知っていたが、それでも魔王にそういった干渉をするのは並大抵のことではない。
しかも今のスラルはご機嫌斜め。いつもより程度が低いとはいえ怒っているのだ。その危険性は高いだろう。命の危機となるかもしれない。
そしてその提案にどう答えるのかはスラル次第。周囲の者達は妙な緊張感の中、スラルの返答を黙して待つしかない。
だが、
「……」
「……」
スラルとケッセルリンクはじっと真剣な表情でお互いの目を合わせ続ける。二人とも微動だにしていない。
その時間は不思議な程長かった。まるで目で会話でもしているのかと見紛う程であり――
「……ん」
そしてその沈黙は破られる。提案を受けた側であるスラルによって。
彼女の口から意味のない声が漏れた。そしてその後、彼女は軽く息を入れて、その場に蔓延していた圧を和らげるとケッセルリンクに向かって、
「――わかったわ。二人で話しましょう。……どこで話すの？」
「――感謝します。……では、こちらに」
そのやり取りを持って、二人の女性の相対は一旦終わった。そしてケッセルリンクに先導されて、スラルは歩みを進める。皆が固唾を呑んでそれを見送る中、離れ際にスラルが、
「……レオンハルト」

「あ、……ああ。何だスラル？」
こちらをちらりと見て、
「……ちゃんと、そこで待ってて。聞き耳なんて立てちゃ駄目だからね――他の皆も」
「……わかった」
レオンハルトが頷いたのとほぼ同時に、周囲の皆がそれぞれ了承の声を上げる。ペールだけはおろおろとしていたが、口を挟める筈もなく、それに頷くしかない。
「……ん、ならいいかな」
最後にそう言って、スラルはケッセルリンクの後に付いていった。
そうして二人が入っていったのは――レオンハルト達がお世話になった一軒家であった。

スラルがケッセルリンクの提案を受けて家の中に消えていくと、残された他の皆はレオンハルトも含めて少し距離を取った。
聞き耳を立てるな、という命令に従う形だ。魔人の聴力は人間を越えるものである。なので念の為という訳だ。
そうして家が見える場所ではあるが、聞き耳が立てられないくらいの位置に移動し終えた時、ようやく空気が弛緩した。
そして最初に声を上げたのは、ハンティだった。彼女は二人が入っていった家を見て一言、
「……あれ、私の家なんだけどなぁ……」
腑に落ちない様子なのか、半目でぼそりと呟く。
それを聞いたガルティアが顎に手を当てて笑みを浮かべ、
「なら、断れば良かったんじゃないか？」
「あの空気で断れる訳ないでしょうが……!?」
「ははっ、そりゃあそうだ」
そう言ってお気楽に笑うガルティアに、憤慨していたハンティがげんなりと肩を落とす。
そして今度はレオンハルトが、

「……あ、そうだ。悪かったな、ハンティ。お前の家、勝手に使っちまった。特にベッドは――」
「……どうしよう。今までで一番殺意高まったかもしんない。今なら模擬戦でいいとこまでやれそう……！」
「いや、それは無理だろ。殺意くらいで実力が大幅に高まるなら苦労しない。少なくとも肉体的や技術的には何の意味もないしな。というか、それでいいところまで出来るなら普段からそうして――」
「真面目に答えるな!!　アンタ謝る気あるの!?　――雷撃!!」
「おっと」
　ハンティが怒りのツッコミとともに雷の魔法を放つも、レオンハルトは剣で飛んできた雷を軽く弾く。するとハンティが眉を立てて、
「ぐっ……ムカつく……！　こういう時まで躱して……！」
「……まぁ落ち着け。侘びの印に、城に帰ったら新しいベッドやるから」
「城のベッドは綺麗だけどね……！」
　そのツッコミはどうなんだ？　とハンティ以外の皆が思う。
　だがそんな中、ハンティの様子を見て申し訳なくなったのか、ペールが怯えたように、
「え、えっと……その……ベッド、使っちゃってごめんなさい」
「あ、……ああ、その、そっちが謝らなくてもいいよ。悪いのはあの馬鹿だし……」
　妙にぎこちない様子でハンティがペールの謝罪を受け取る。そしてレオンハルトの方を見て悪態をつく。
　そんな中、当人はというと、
「ガルティア……お前、さっきはよくも俺を馬鹿に……キャロルも余計な事言いやがって……」
「申し訳ありませんレオンハルト様！　わたくし的には褒めたつもりだったのですが裏目に出ましたわ！」
「別にいいじゃねぇか。んぐ……それより、このわさび、つーんとして美味いぜ？　一本食うか？」
「……お前、わさびを生で食ってんのか。……まさかスラルやキャロ

ルにも勧めたのか？」
「そうだが何か問題あったか？」
「わさびは生で食うもんじゃねぇぞ。普通料理の味付けや薬味に使うもんだ」
「ん、お前もわさびの事知ってたか。食べたのか？」
「昨日わさび料理を食ったし、大体は知ってるつもりだ。……個人的にはサカナの刺し身を食う際に醤油に溶かして食うのが美味いが……」
「おお、そうなのか!?　なら帰ったら早速――いや、そういやサカナが近くにいたな。それ捌いて食うか！」
「ああ、確か近くに沢があったな……そういや俺も、昼飯食べそこねたんだったか」
「ならちょうどいいだろ？　ちょっと取ってこようぜ」
「……まぁ、数分も掛からんだろうしいいか。じゃあ行くぞ」
「へへ、そうこなくっちゃな」
「わたくしもお供致しますわー！」
そんなやり取りをして、三人は近くの沢に向かっていった。それを見てペールは、
……なんか仲良さそう……。
先程も見てて思ったが、魔人や使徒のやり取りには見えない。
今はいないが、さっきまでは魔王もいたというのに、そのやり取りからは何処か信頼や親しみが感じられた。彼が怒られている時ですら、それは感じ取れ、なおかつ今も、
「離れるなって言われたばかりなのに……しょうがない奴ら……」
横目でハンティと呼ばれた女性を見てみれば、その口ぶりの割りに表情は穏やかに見える。苦笑混じりで、呆れているといった感じだが、その態度には親しみのようなものが見える。
そしてもう一つ、ペールには気づいたことがあった。隣にいるハンティを見て、
……この人、もしかしなくても――始祖様、だよね……？
額の赤いクリスタルと、長い黒髪。そしてこの森に住んでいたこと

といい、噂に聞く黒髪のカラーではないだろうか、と。
確か数代前の時代では、カラーの集落にも偶に訪れていた筈だが、
……何で、魔人と一緒にいるんだろう……？
純粋な疑問として思う。聞いた話によると黒髪のカラーは人間の集落を移り住み、各地を放浪しているという話だった筈だが、何か事情でもあるのだろうか、と。
しかしそう思う一方で、
……でも、何もなくても良いよね。
事情が無かろうと、彼らのような人と一緒にいるのは構わないだろう、とも思う。本来なら、魔人と一緒にいることはどうなのか、と長として思わなければ、場合によっては問い質さなければならないのかもしれない。
……でも、今の始祖様は――
そう、話で聞くよりも、今の方が、
「……楽しそうだなぁ……」
「……え？　何？」
「っ！　……い、いえ、その……」
思わず声に出してしまった。ハンティが首を傾げるのを見て、ペールは狼狽する。
何か、言ったほうがいいだろうか。しかしあまり追及するのもよくない気がする。そういうのされたくないっぽい雰囲気は出しているし。
……な、なら……。
迷った挙げ句、ペールは言葉を作った。おずおずとしながらも自分の言葉で、
「――し、始祖様」
「――――」
その言葉にピクッと眉を動かした気がする。ほんの少し空気が固まるも、それに構わずペールは、
「そ、その……お、お家を、使わせていただき、ありがとうございました……！」

と、お礼を言った。
それを受けたハンティは、ほんの一瞬、目を見開くも、直ぐに気を取り直して、
「……あはは、気にしないでいいよ。一応、同ぞ――仲間だしね」
「……？　は、はい。それでもありがとうございます」
一瞬何かを言い直したがそこまで気にすること無く進める。頭を下げたこちらに向かってハンティは眉尻を下げて、
「というか……気づくの遅かったね？　あんたも、さっきのケッセルリンクっていう子も。直ぐ突っ込まれるかと思った」
「あ、い、いえその……ちょっと急展開過ぎてですね……まさか魔王が出てくるとは思わなくて……」
「あ、それもそうか」
そう言って笑みを見せてくれるハンティにペールは縮こまりながらもやり取りを交わす。しかし始祖様ともなれば当然だろう。自分達カラーにとって彼女は畏まって然るべき存在だ。
だが、思ったよりも、
……親しみやすい方です。
話してみれば結構気さくな人だ。レオンハルトに出会って話をした時も思ったが、凄い人ほど、やっぱ器が大きいというか、優しいのかもしれない。自分も一応、長なんだからそうなればなぁ……。
そんなことを思っていると、
「……そうだ。せっかくだから聞きたいんだけど」
「あ……はい。何でしょう？」
不意にハンティに話しかけられる。
彼女は少し目を真剣な物に変えてこちらを見ると、
「ペールと、ケッセルリンクはさ……どうして――レオンハルトと、そういう関係になったの？」
「！　そ、それは……」
不意の質問に、言葉を詰まらせる。そして遠回しではあるが、そういった質問に顔を赤くしてしまう。ハンティはこちらの額に付く青いクリスタルに視線を送っているようであり、それについて尋ねてい

るのは明らかなのだ。
そういえば、とペールは思う。先程のハンティの家で自分達は、
……始祖様に見られてしまったんでした……！
思いっきり、行為の最中を目撃されていた。と、言っても、食事をしながらの軽いイチャつきみたいな感じだったので、ディープでがっつりな方ではないが……いや、ライトでも駄目なのだが。
ペールが内心で羞恥を感じていると、ハンティの方も微妙に言い難いのか、少しぎこちない様子で、
「……んー……まぁ、嫌そうじゃないから無理矢理、とかじゃなさそうだし……そんなに心配はしてないけど……一応、何でかなーと思ってね。答えたくないならそれでもいいけど」
頭を掻きながらそう言う。気遣ってくれているのが一目で分かった。
なのでこちらも答えようと口を回す。レオンハルトは隠そうとしていたが、その意味は何となく分かるのだ。そして言ったほうが、彼にとっては良いのだ、ということも。
故にペールは、ハンティの問いに対して答えた。頭の中で言葉を選びながらも、
「え、えっとですね……レオンハルトさんとそういう事になったのは……わ、私とケッセルリンク様が、か、彼の事を思って――」
そして、
「――わ、私が……彼に、喋ったんです」
「？　それは、想いを告げたってこと？」
「……違います。それはレオンハルトさんが気づいて……私は――」
否定した上で言う。その内容は、
「――ケッセルリンク様の寿命が、もう尽きかけている、と」

ケッセルリンク

森の中に佇む一軒家。レオンハルト達が十日に渡って寝泊まりしたハンティの家にて、ケッセルリンクとスラルは向かい合っていた。
室内に入り、扉を閉める。そうして密室状態を作り上げたところで、ケッセルリンクはスラルに向かって言葉を発した。
「――ここでよろしいでしょうか？」
「……そうね。でも一応――」
場所に関しての了承を取ると、スラルは手を軽く動かして光と音を発した。おそらく何かの魔法の発動だろう、とケッセルリンクもそれなりに魔法の腕に覚えがある。故にそれに気づいた。
「――これで防音は完璧……だと思うから、問題ないわね」
「……そのようですね」
ケッセルリンクは眼の前のスラルの行動に目を見張る。それは、興味深い、という思いがこもった視線で、
……この御方が……魔王、か……。
やはり今更ながら自分が思い描いていた魔王のイメージとはかけ離れているな、と思う。レオンハルトから少しではあるが話は聞いたので、前よりは乖離していない。しかしそれでも、
……魔王がこの様な少女だとは思わなかったな。
視界に映る魔王――スラルの姿は、低い。女性としては長身であると自覚する自分と比べるのは適していないが、それでも小柄で、可憐という言葉が似合う少女だ。
これが自分よりも年上で、世界を恐怖と暴力で支配しようとする魔物の長とは思えない。――そう思ってしまうのは、レオンハルトから聞いた話と、見た目の印象。そして、先程のやりとりにあるだろう。
そしてそれが、ケッセルリンクが、スラルに二人きりでの話を望んだ理由でもあった。
「……それで？　私に何の話があるのかしら――夜の王」
「！」

突然の呼び名に驚いてしまう。自分がそう呼ばれていることは知っていたが、まさか魔王のような大物まで知っているとは、と。
ケッセルリンクは驚きを最小限に留めつつ、スラルの問いに丁寧に答えた。
「……はい。先程の話の真実について、お教えしようかと」
「真実……ね」
スラルがその言葉を聞いて表情を少し曇らせる。驚いてはいないのはある程度予想していたのだろう。
しかし彼女は直ぐに気を取り直して表情を戻すと、こちらに視線をやって、
「それは、レオンハルトとのことよね？」
はい、と頷きを入れる。するとスラルは目を細めて、
「ふ～ん……どうせ、どっちかが言い寄ったとかでしょ……ま、どっちでもいいけど……」
口を尖らせてそう言う。微妙に拗ねているように見えるのは気の所為だろうか。言葉の割には興味津々にも見える。
急に前髪を弄り始めたスラルに対し、ケッセルリンクは真相を話そうと、口を開いた。
「その答えで言うなら……レオンハルトの方から。しかしそれは、ある意味で私の所為です」
「……」
無言で耳を傾けているスラル。レオンハルトの方から、と言った時に一瞬足が動きかけていたが、結局その場から動かなかったことを見るに、聞く気はあるのだろう、と話を続けることを決める。
ケッセルリンクは、極めて落ち着いた声で、
「……レオンハルトは、私に……情けを掛けたのです」
と、真実を話した。スラルの視線が怪訝な、それでいて興味の色に変わる。
「……情けってどういうこと？」
「簡単な事です。彼は、私と、ペールの想いに気づいた。そして同時に――私の寿命が近い事を知った」

「寿命……ひょっとして、〝変化の時〟のこと？」
はい、と頷く。自分で言うことは辛いことだ。寿命の事ではなく、情けを掛けられたという事実を。自分は情けない顔をしていないだろうか、と不安になる。
だが、スラルは今の所は気づいていないのか、顎に手を当てて思い出すように、
「変化の時。不老であるカラーに必ず訪れる寿命のようなものね。それまでの行いで天使か悪魔かに転生する――で合ってたかしら」
「……その通りです」
内心で少し感嘆する。どうやらスラルは聡明な様だ。先程の魔法といい、カラー以外では知る由もない筈の知識といい、それが窺える。
説明の手間が省けたことに感謝しつつ、ケッセルリンクは続けた。
「私はもう百年程生きています。故に、いつ変化の時が訪れてもおかしくない」
「……それを、レオンハルトが知っちゃったってこと？」
はい、と頷く。おそらく、それを教えたのはペールだろうな、と当たりをつける。自分で言った憶えはないし、それを知っている人物も限られている。その中で唯一、レオンハルトと面識があるのがペールだ。その動機も何となく分かる。
彼女の心積もりが何となく理解出来るが故に、その事自体は言わない。彼女を危険に晒すことはしない、とケッセルリンクは意思を確かに、言葉を続けた。
「彼は、私達に言った――怪我が治るまでの間、という条件を条件付きでなら私達の想いを受け止める、と。……そうしたのは、いつ寿命が訪れてもおかしくない私の事を考えてでしょう」
「……」
「出会ったばかりでは当然だが……彼の想いは私に向いていなかった。しかし、最後の情けに――」
「――ちょっといい？」
「！　……ええ、どうぞ」
と、不意にきたスラルの声に、言葉を譲る。

そうしたのは、概ね事情は説明したというのもあるが、それよりも彼女の圧力が高まったからだ。
有無を言わせない埒外の重圧に、怯んでしまう。しかしそれに耐えながらスラルの言葉を神妙に待つ。
彼女は、こちらを見て息をつくと、そのまま目を細めた状態で言う。
「……なんか黙って聞いていたら、レオンハルトが同情で貴方と関係を持った風に聞こえるけど――そうとは限らないでしょ」
「……しかし、出会ったばかりの私を――」
「そんなの、関係ない」
「……」
スラルの強い言葉に口を閉じてしまう。彼女はどこか憤ったような、それでいて呆れているような、そんな口調で、
「……貴方、レオンハルトの事分かってない」
スラルは言う。
「確かに、会ったばかりでそんなには知らないし思い入れもないかもしれない。でも、レオンハルトは同情でそんなことはしない。そうするってことは少なくとも……気に入ってるってこと」
だから、と。スラルは確信と、とある感情を持った瞳で、
「レオンハルトはそんなこと……しない。じゃないと――」
スラルはそこで言葉を止めた。その声はほんの少し震えており、何かの感情を覗かせている。
ケッセルリンクがそれを察するのは充分だった。今の様子と先ほどのやり取りからその正体に感づく。
そしてそれを、言葉にして宙に乗せた。
「貴方は彼のことを――大切に想っているのですね」
「！　は、はぁ？　何を……そんなこと……」
「……それに、優しい人だ」
スラルの表情がわかりやすく変化し、紅い瞳が揺れ動く中、ケッセルリンクは先程のやり取りを見て、自分が思ったことを口にした。それは、
「先程、レオンハルトを責めている時……ずっと彼のことを心配して

いたのでは？」
「……何を、根拠に……」
「私は普段の貴方を知りません。なので根拠は無いにも等しいのですが……強いて言えば、勘、でしょうか」
「……」
女としての勘。そんな事を口にするとは私も変わったものだな、と心から思う。そんな不確かなものを理由に口を開くとは、と。
しかしそれは当たっているのだろう、スラルの目が更に揺れ動く。ケッセルリンクは続けてそう思った根拠を口にする。それはやり取りを見た感想であり、
「先程の貴方の表情は、レオンハルトに怒っているようでいて……その瞳には彼を労るような、悲しみの色が垣間見えた気がしました」
これも勘。そうであるように見えた、というだけのこと。
だが実際、彼女の表情はこれ以上ないという程に動じていた。ならばそういうことなのだろう。
ケッセルリンクは敢えてその先は言葉にしない。彼女はとっくに分かっている筈だし、こちらもそれに確信を得た。なら後は、
「……私の話したかった――いえ、言いたかったことはこれで終わりです」
後はお好きに、と微笑を携えて相手に主導権を渡す。
――これで、覚悟は決まった。
「……なるほどね――」
「っ！」
その瞬間、スラルの存在感が膨れ上がった。魔王としての重圧がこちらに向かって叩きつけられ、表情を歪める。
「――言いたいことはそれだけ。……なら、もうどうなっても良いと、そういうことね？」
「はい。貴方の大切な人を危険な目に合わせ、なおかつ、不義理を働いた行為――」
その代償として、
「――私の、命を以て償いましょう」

……やっぱり、そういうことね。
スラルは、眼前で膝を突いたケッセルリンクに対し、複雑な感情を抱いていた。
彼女のことは情報としては知っている。カラーの元長で、夜の王。人間種としてはかなりの実力を持つ存在だ。
そんな相手は今、自分に命を差し出す。と、言っている。その事に対し、スラルは自分の血が沸き立つ感覚を覚えたが、それを一歩手前で抑えつつ、残った冷静な頭でそれを考える。思ったことは、
「……貴方、最初からそうするつもりだったでしょ」
はい、と頷きが来る。こちらとの話し合いがどうなろうとも、最終的にはそうするつもりだったと、そういうことだ。
その上で、追加の言葉が耳に届く。それは、
「貴方達が現れた時点で、私自身のけじめとしてそうしようと、心から決めていました」
そんな潔い言葉だ。どうにも彼女は気取ったところがあるのか、その言葉には一切の淀みがなく、妙に様になっている。それを同じ女性として、微妙な感情を覚えつつも、気になる部分は別のところだ。スラルはそれを指摘する。
「……でも貴方は、もうちょっとで変化の時を迎えるんでしょ？　そんな貴方が命を差し出すといっても――」
価値はあまりない、と言外にそう告げる。何となく彼女の考えが読めてきたからだ。
「加えてそうであるからこそ、二人で話し合いたかったんでしょ。もう一人も一緒だと貴方が命を差し出すことを止めようとするでしょうし、それで向こうもそういう話になったら――」
「……」
その先は、言わなくてもわかるだろう。事実、ケッセルリンクはほんの少しではあるが眉を動かした。
彼女は未だこちらの重圧を受けながらも、息を入れる。そして白状

するかのように口を開いた。
「……確かに、そうですね。私一人であるなら危険に陥っても構わない、とそう思いました」
お見逸れしました、とケッセルリンクが頭を下げる。彼女の謝意を受けてスラルは心が冷えるのを感じた。何ということもない。元長としては当然の判断だ。しかしそうであったとしてもスラルには理解出来ない。
「……それを承知の上で、私に正直に打ち明けたと？　殺されると分かっていて？」
「はい」
即座の頷きに解せない思いが浮かぶ。
……何よそれ。
スラルは相手の判断を理解出来ない。
思うのは、変化の時というカラー特有の寿命のこと。
先程は価値がないとそう言いはしたものの、そうではないとスラルは考える。
何故なら、変化の時は、個人としての死とはいえないから。
その時が来れば、天使か悪魔かに転生する――それは死ではないだろう。個人の性格や記憶がちょっとでも残っているなら、そんなのは死ではない。微塵も怖くない筈だ。
しかし、殺されるのであればカラーであってもそれは完全な死だ。個人というものが消えてしまう。この差は大きい。何故そんなものを選び取るのか。前者の方が圧倒的にマシな筈だ。なのに彼女は、
「どうして……」
躊躇なく、そんな選択を、
「何で……」
そう簡単に、
「わからない……」
選び取ることが出来るのか。
「何でそんなあっさりと、命を捨てられるのよ……!?」
理解出来ないし、したくない。そんなものは。

震えを自覚しながらも止められない。
殺してくれ、なんて言わないでほしい。そんなことを言われたら、自分は――
「――答えなさいッ!!」
「!?　――ぐっ！」
ケッセルリンクの首を捕まえて問いを投げる。早く答えろ。でないと――
「早く――」
――本当に、殺してしまう。

ケッセルリンクは首を絞められ苦悶の表情で眼前の少女の表情を見た。
憤りや悲しみ、恐怖と愉悦。笑みを浮かべながらも震えている魔王の様子は、こちらを瞠目させるには充分で、
……彼女は――。
首を絞められながらも間近で見ることで、何となくその葛藤を理解する。
その腕の力は、魔王にしては弱々しく、思ったよりも簡単に口を開くことが出来た。話し合いは終わっていない、とそういうことだ。ケッセルリンクは魔王に問いを投げかける。
「……貴方、は……殺すことが、怖いの、かね……？」
「――――」
返答は沈黙。しかしその表情は雄弁だ。問いを続ける。
「貴方、は……死ぬのが、怖い、の、かね……？」
「――――」
再び沈黙。しかし今度は動きが来た。首を振る動きを見る。重ねて問う。
「貴方、は……それ、が、理解、出来な、い……？」
「――――うよ」
今度は声が来た。同意の声だ。それに内心で頷きを入れる。

……なるほど、理解した……。
問いを重ねて新たな確信を得た。ならば答えよう、とケッセルリンクは口を開いた。
「……私、は――」
それは、
「――貴方になら、構わないと……そう思ったのだ」
「――！」
スラルの目が丸くなり、腕の力が緩む。そうして喋りやすくなったところで、ケッセルリンクは想いを口にした。
「彼が、心から信頼する者の手によって、裁かれるならば……悪いことにはならない、と思った」
「信、頼……？」
ああ、と頷く。誰かはこの場において言わなくてもいい。お互いに理解しているから。
なので告げる言葉は想いだけで良い。眼の前の少女に向かって、それを口にするだけだ。
「貴方に会ったことはなくても、彼とは少なからず言葉を交わした。……それで、審判を預けるには充分だった」
彼との約束から、その内容は言えない。しかし、それでも伝えられる事はある。
「実際に会って……それは確信に変わった。貴方なら、ペールや他のカラーに手を出すことはない、と」
「……殺される、のに……？」
言う。信頼や打算も全て引っくるめた正直な気持ちだ。彼女をその苦しみから、一時でも解放するには、それを正直に言うこと。それが最善だと信じて。
ケッセルリンクは微笑を浮かべた。
「そうだとしても、貴方なら――ひと思いにやってくれる」
「――――」
「私は最後に……女として身に余るほどの幸いを得た。その代償が死であったとしても悔いはない」

だから、
「……どうか気に病まないでほしい。他ならぬ私自身が、この結末を望んだのだ」
故にこれは救いなのだ、貴方の罪ではない、と。ケッセルリンクは今度こそ自らを差し出した。仮に彼女が怒りに狂って、こちらに死よりも生温い責め苦を味わわせたとしても構わない。全てを受け入れる、と。
そうして、数秒とも数十秒とも思える間が訪れた。ケッセルリンクはもはや語ることはない。後は裁きに身を任せるのみ。
スラルは暫くの間、黙ってこちらを見つめ続けていた。彼女は、答えを得たのだろうか。それは納得に値するものだろうか。ケッセルリンクの心にはそんな思いが浮かぶ。
そんな中、スラルは動いた。ケッセルリンクを見据えて、告げる。
「――本当に、どうなってもいいのね？」
「……ご随意に」
迷いはない。既にこの身は自分の物ではないのだ。例えあらゆる苦しみを得て、どのようなことを強要されようとも、自分はその審判を受け入れる。その想いには一点の曇りもない。
そうして言った言葉に、スラルは応答した。わかった、とそう言って頷きを入れる。
その彼女の審判の言葉を、ケッセルリンクは聞き逃すことなく耳にした。
「なら私に――忠誠を誓える？」
「！」
思わず顔を上げる。予想外の言葉だ。
……それは……いや、まさか……！
意味を半ば理解しかける前に、目の前の魔王はこちらを見て続く言葉を放った。
それは――
「――夜の王、ケッセルリンク。……貴方には、魔人になってもらうわ」

――魔に属するものへの勧誘であった。

なぜ、という思いが身体を強張らせる。
ケッセルリンクは未だ衝撃から抜け出せないまま、言葉を捻り出すように、それを口にした。
「何故……？」
辿々しい、簡潔な問い。しかしスラルはそれを聞いて淡々と、
「何故、ね……そんなことを聞かないで欲しかったんだけど……」
そう言って視線を少し逸らす。しかし直ぐにそれを戻してこちらを見据えると、彼女は少し言い辛そうにしながらも、
「……貴方、どうなってもいいんでしょ？　なら、殺すより、その方が……その、罰になるし」
「……」
ケッセルリンクは無言でそれを聞く。殺すよりは罰になる、と。なるほど。確かに、そうかもしれない。
……私は、死ぬことを望んでいるからな。だが――。
しかしその上で疑問もある。確信に近いものだ。それを口にする。
「……私を殺すことは出来ないと？」
「……勘違いしないで。その方が、私にとって利になるからだし……」
それに、とスラルは言葉を作った。目を軽く開きながら、
「本当に悪いと思ってるなら……私に尽くせるでしょ？　それとも、その謝意は嘘なの？　魔人なんかにはなれない？」
「……」
そう言葉を告げるスラルの様子をケッセルリンクは見た。視線の端で、彼女の小さな手が映り、
……ああ、なるほど。
彼女の手が、微かに震えているのを見て、ケッセルリンクは彼女の心を感じ取る。それは、
……怯えているのか……。
魔王が何故、と普通なら思うが、短いながらも言葉を交わしたこと

で、その反応にはさほど驚きはなかった。
要するに、スラルという魔王は、ただの少女なのだ。
それも特別臆病な――人に拒絶されることにすら恐怖を覚えて、人を殺すことに躊躇し、そして大切なものがある、只の少女。
そしてようやく、レオンハルトが言っていた言葉の意味も理解した。これなら彼が、彼女の為に戦いたいと思うのも頷ける。
ケッセルリンクは一度だけ考える。どうするべきか、ではない。――自分はどうなるのか、と。
そうなるということは、今までの生活や関係を捨てることになるが、それは問題ない。自分はどの道、カラーではいられなくなる身だ。支障はない。
魔に属するなら人間と敵対することになるだろう。その点も問題はない。元より人間、特に男の人間は快く思っていない。
……しかし。
一つだけ、思うことはある。それだけ聞かせてもらいたい、とケッセルリンクは疑問を口にした。
「私を……彼への想いを抱える私を、麾下に加えると？」
その問いに、スラルは若干表情を歪ませた。しかし、
「……それは、保留にするわ。私も……色々と思うことはあるし……」
言葉を濁しながらも撤回はしなかったスラルはそのまま続けて、
「……で、どうするの？　私に忠誠を誓える？」
言った。その言葉にケッセルリンクは、心を決めて、応答した、
「――わかりました」
そうして片膝を突き、胸に手を当てた。スラルに頭を下げて、
「私は、貴方に忠誠を誓いましょう」
「……そう」
その誓いに、スラルは短く応答した。そして片膝を突くこちらに一歩近づくと、
「――信じるからね」
と、スラルは自分の指先から、血を垂らすと、

「――――」
――ケッセルリンクにそれを与えた。

沢でサカナを取りに行って、直ぐに戻ってきたレオンハルト達は、即座にそれを察知した。
直前まで談笑していた皆の口が止まり、表情が真剣なものに変わる。それを見て、ペールが、
「え、な、何ですか、これ……？」
何が何だか分からず、困惑した言葉を上げる。
そんな中、レオンハルトはガルティアの言葉を耳にした。
「……これはやばくねぇか？」
「……どうだろうな」
レオンハルトは息をつきながら、それを感じ取る。ハンティの家に視線をやり、続く言葉は、
「感情は昂ぶってるみたいだが……気配は二つある」
「……なら、問題ねえか。よし、サカナ食おうぜ」
「……でも、この気配は――」
切り替えが早すぎるガルティアに呆れつつも、レオンハルトは家の中から感じる気配に、首を捻る。
一つは、スラル。そしてもう一つはケッセルリンク。その筈だが、
……何だ、この濃さは。力が膨れ上がって――
まさか、と思う。しかしそれは確信には至らない。根拠がないからだ。
しかし自分の勘は、それを訴えている。その感覚に妙なものを感じつつも、レオンハルトは家を注視し続けた。
そんな時だ。
「――あ」
ふと、誰かが声を漏らした。ハンティの家の扉が開いたからだ。
それに気づいた面々は、一斉に視線をその場所に向ける。話し合いはどうなったのか、と。

皆が興味を向ける中、魔人、そして使徒の面々は、その気配に気づいた。
――知らない気配がある、と。
そしてその後に、家の中から、人影が出てきた。その小柄な影は皆が知る人物。
「……」
魔王スラル。彼女が出てきたことに驚きはない。魔王の気配は、魔人にとっては最も色濃く感じるものだ。その場からいなくなれば直ぐに気づく。
だが、問題はその背後。もう一つの、魔の気配だ。その正体を皆は何となく察して、
「お、こりゃあマジか？」
「え、嘘、本当に……？」
「……なるほど、理解しましたわ！」
「……」
口々にそう言う。表情や言葉は違うものの、皆に共通するのは驚きであり、まさかそうなるとは、という思いを一様に言葉にした。
そして、もうひとりの気配が姿を現す。
強くなった存在感。その持ち主が家の中から出てきたことに、皆は目を見張った。
「……皆に紹介するわね」
そして、スラルは、自分の横に並んだ女性を手で示して言葉にする。
「新しく魔人になった――」
その先にいるのは、皆が先程見た人物の姿だ。
青い髪に額の青いクリスタル。女性らしさを持つその均整の取れた肉体。容姿は大きく変わらない。瞳が赤く変化しているくらいだ。
しかし、その服装は黒い貴族のような衣装に変わっており、周囲に漂うオーラとともに妖しい気配を醸し出している。
そんな、新たな魔人となった彼女の名は、
「――ケッセルリンクよ」
「――よろしく頼む」

皆の視線を受けながら、堂々とケッセルリンクは礼を行なった。
――直後、カラーや元カラーの叫びが森に木霊したのは、言うまでもない。

最後の休暇日

「はぁ……はぁ……生き残りは、どれだけいる……？」
「……残りは、ここにいる者達だけのようだな……」
「くそっ……！　何なんだ、あの天使は……!?　俺達に、何の恨みがあるというのだ……！」
「……ライゼン。頼みがある」
「……何だ？」
「ここにいる者達を引き連れて――逃げてほしい」
「なっ……冗談抜かせ！　お前一人で戦うつもりか!?」
「然りだ。あの天使連中、数も強さも尋常ではない。一般兵レベルでは、足手まといに――」
「ふざけるな！　だったら俺も戦う!!　俺なら足手まといにはならないだろう!?」
「……それは駄目だ。お前がいなくなっては、ここにいる者達を守る者がいなくなる」
「それは……だが……！」
「……四大聖竜も、残りはお前だけだ。お前にしか、任せられない頼みだ」
「……俺に生き恥を晒せと言うのか？」
「そうだ。ドラゴン種の未来を、お前に託す」
「……わかった。ただ、お前も――」
「案ずるな。――俺も、必ず帰ってくるとも」
「……それならいい。絶対に負けるなよ」
「……ああ。お前も、最後まで守りきってみせろ」

ハンティの家の前でスラルが新たな魔人を紹介するのを、レオンハルトは耳にした。
眼前、小柄なスラルの横には、優雅に一礼するケッセルリンクの姿があり、

……何で、そうなるんだよ。
魔人化をした事実に頭を抱える。本当に、どうしてそうなるのか。
二人きりで話し合う。その意味を、レオンハルトは薄々察していた。こちらが話したことに対する補足や、認識の違いを埋める。ケッセルリンクが自分なりの事実を伝えにいったのだろう、と。
もっとも、こちらの狙いが上手くいっているのなら、スラルはそこまで厳しく追求しないだろうと思っていた。そして代わりに、終わった後の自分へのお仕置きが強烈になる。キツいが致し方ない。
だが、予想に反してスラルはケッセルリンクを魔人にした。
……いったい、どんな話をしたんだ……？
ケッセルリンクの魔人化という事実に、頭痛が起こる。それくらい不可思議なことだ。
額を抑えつつ、レオンハルトは視線をケッセルリンク、そして、スラルにやる。
「……何があったのかは聞かないが、お前はそれでいいのか？」
「ああ、問題ないとも」
「……これでいいのよ」
声を掛けると、ケッセルリンクが微笑とともに返事をしてくれる。だが反対に、スラルは若干口を尖らせている。こちらを半目で睨むように、
「……レオンハルト」
「……何だ？」
「……馬鹿。帰ったら、お仕置きだからね」
「……マジか……」
名前を呼ばれ、不貞腐れたようになるスラル。やはりまだ怒っているのだろうか、お仕置きが確定してしまい、憂鬱な思いが浮かぶ。帰りたくない。
というか今度は何をされるのだろう。魔法か、体罰か。それとも、必殺料理か。どれをとってもキツいものだが最後のだけはやめてほしい。
だが、スラルは言う。

「……帰ったら、言うこと……聞いてもらうから」
「？　……ああ、わかった」
そっぽを向いた状態でそう言うスラルに違和感を覚えつつも頷く。声が微妙に震えているような気がする。
……なんか、ナイーブになってないか……？
元々気分がころころ変わるスラルだが、今はちょっぴり沈んでいるように見える。やはり気分を害してしまったのだろうか。
それなら、
「……ま、好きに何でも命令してくれ。帰るのが遅くなったのは俺が悪い。無断で仕事を休んだってことだしな。帰ったら、馬車馬のように働いてやるよ」
頭を掻きながら侘びも兼ねてそう言う。実際、休みすぎたという認識はこちらにもあった。
しかしスラルはその言葉を受け、ちらりとこちらを見ると、今度こそ唇を完全に尖らせ、
「……レオンハルトの馬鹿」
「え？　スラル？」
「……ふーんだ」
一言、罵倒すると無視するようにぷいっとそっぽを向いてしまった。
こちらが困惑する中、隣にいたケッセルリンクが視線をこちらに寄越して、
「レオンハルト。あまり主を困らせるのはよくないぞ」
「いや、これは……」
「レオンハルトが悪いな」
「……レオンハルトが悪いね」
……ぐっ、こいつら……！
こちらの抗議を無視して流れるようにガルティアやハンティが便乗してきた。というかケッセルリンクまで敵側になってるような気がする。
今の言葉の何が駄目だったのか、いまいちわからない。だが、軽く

肩を落とすこちらの横。キャロルとペールが来て、
「大丈夫ですわ！　例えレオンハルト様が悪くても、わたくしはついていきますので！　悪人上等ですの！」
「え、ええっと……元気だして下さい」
「お前ら……」
　励ましてくれる二人に少し感動する。やはり持つべきものは使徒と巨乳。前者はフォローしているのか微妙なので巨乳しか残らない気がするものの。
　……とはいえ、事態は収まったか。
　色々とやらかしてしまった感はあるものの、一応争いは収束した。帰ったらお仕置きが待っているもののそれは脳の片隅に追いやっておく。
　問題はこれからなのだ。視線の先、一通りこちらへの責めを終えた場の空気の中、ガルティアが軽い様子で発言した。
「……それで、これからどうすんだ？　レオンハルトも見つけて、新入りも迎えたし、メシ食って帰るか？」
　結局メシは食うんだな……、と皆が思う中、レオンハルトは真っ先に口を開く。
　それは、こちらにまだやり残したことがあるからで、
「……もう一回、翔竜山を登ろうと思ってたんだが――」
「駄目」
　スラルの声が横から飛んだ。皆の視線が集まる。
「レオンハルト、四大聖竜に負けたんでしょ。それなのにもう一回登るとか……無謀だから駄目」
　その言葉に周囲から、「あー」と理解の声が飛ぶ。その中のひとり、ガルティアがこちらを見て、
「そういやお前、怪我したんだっけか。だったらやめといた方がいいんじゃねぇか？」
　あ？　とレオンハルトは微妙な認識の齟齬に声を上げて疑問する。しかしどういう理解を得ているのかわかったのでそれを訂正しようと声を続けた。

「……いや、怪我をしたのは本当だが、四大聖竜には負けてねぇぞ」
「そうなのか？」
「えっ？」
ガルティアの疑問とほぼ同時にスラルが間の抜けた声を上げる。ケッセルリンクを一瞬見て、次に顔をこちらに向ける。
そしてハンティが半目になり、
「……よくわからないけど、じゃあ四大聖竜からは逃げてきたの？」
「いや、戦いにペールが巻き込まれそうだったからな。『被害が出ない場所まで逃して、後で再戦な』って感じで別れた」
「えっ!?　は、話せるの!?」
「――――」
ハンティが驚愕に声を上擦らせる。スラルも目を見開いていた。
「……普通に話せたどころか、今まで会ったドラゴンの中で一番話が通じたぞ。あのライゼンとかいうやつ」
今頃、待ちぼうけ食らってるんだろうなぁ、と悪いことをした気分になりながら思い出す様に言う。
疑問の気配と驚きは健在で、スラルの表情は、先程までの不機嫌な顔つきから、真面目な研究時の顔に変化している。もはやこちらへの怒りを忘れたように、ぶつぶつと呟く。途中までは小声で、
「……ドラゴンの殆どは凶暴化してまともに口は聞けない筈だけど……。それなら、レオンハルトはどうして怪我をしたの？　魔法で身体の中調べたけど、瀕死に見えたし……」
……んなことしてたのかよ。
魔法使いって滅茶苦茶だな、と思う。スラルが特別なのかもしれないが。
とはいえ、とレオンハルトはその問いに答える。これは隠さなくてもいいだろう、と正直に、
「ケッセルリンクと会った帰り道で山が崩れて、二人が落ちていったから……まぁ、助けようと思って俺も飛び降りてな。落下中に色々試した結果、二人は助けられたが、俺の身体はボロボロになって――って、どうしたんだ？」

見ると、周囲の空気が妙なものになっている。ケッセルリンクやペールは違うが、他の皆は、こちらを若干引き気味で見ており、
「……お前、とうとう戦闘のし過ぎで馬鹿になっちまったのか？　死ぬだろ、普通」
「……むしろ何で生きてんのよ。いや……人を助けたのはいいことだけど……」
「ま、まぁ、レオンハルト様がそのくらいで死ぬ筈がないってことですわ！　メモしておきますの！」
「……ヒーリング」
「俺を化け物みたいに言うんじゃねぇよ……」
スラルの無言のヒーリングで、僅かな傷まで回復してもらう。有り難い。だが代わりに心の傷を負った気がするのは気の所為か。
釈然としないものを感じながらも、改めて心を決めて言う。
「……とにかく、俺はそいつとの再戦の約束があるんだ。だから――」
と、スラルに向き合って、
「――頼む。俺にもう一日だけ、休暇をくれ」
「……」
頼んだ。スラルが無言でこちらに視線を向けている。レオンハルトは自覚していた。これは、
……俺の我儘だな。
スラルが、他の皆も連れて、ここまで迎えに来た意味は分かる。心配させていたことも。
ならば、これ以上を望むのなら改めて頼まなければならない。自分のやりたい事と、相手に掛ける不安を、了承してもらわなければ。
……断られたら――それはもう、しょうがねぇな。
ライゼンには悪いが、再戦は叶わない、とそういうことだ。そうあってほしくはないが、スラルの性格的に難しい頼みな気はする。どうにか許してくれないものか。
レオンハルトは頭を下げて頼み込んだ。そして、スラルが口を開く。ややあって、溜息をつくと、
「……わかった」

「……！」
聞こえた言葉は了承。故に心に喜びが生まれる。
しかし、それは次の瞬間、ほんの少し驚きと困惑が混じった。
「それじゃ、皆で行きましょ」
「……皆で？」
言葉をそのまま返す。
しかし応答は周囲から来た。
「お、結局行くのか？　なら、今度は山の幸だな」
「……あの、あたしはあまり行きたくないんだけど……」
「何を言ってますのハンティさん！　世界一の山に登るという偉業を達成したのなら、わたくしの目標とする完璧使徒に一歩近づきますのよ！　ならやるしかありませんわ！」
ハンティが行きたくなさそうに溜息をつくも、キャロルが発破を掛ける。ガルティアは相変わらずだ。そんな盛り上がりを見た、ペールがおずおずとケッセルリンクに伺うように、
「あ、あの……私も行っていいですか？」
「……ペール。君はそろそろ集落に一度戻った方が――」
「な、なら見に行った後で行きます！　だから送って下さい！」
ペールが必死になってケッセルリンクに頼み込む。ちらりとスラルを見ているが、さすがに魔王に直接それを言うのは憚られるのだろうか。ケッセルリンクがスラルに向き直り、
「……ということなのですがどうしましょう？」
「貴方はどうしたいの？」
一度確認を取ったが、スラルに聞かれてケッセルリンクは一瞬沈黙する。そして、
「……私としてはどちらでも。ただ、集落までは危険ですので、出来ればお送りさせて頂ければ……」
「……なるほどね」
答えを聞いてスラルが頷く。そしてややあって、
「……まぁ、一緒に行くだけなら構わないけど……その代り、貴方が面倒見て」

「感謝します。……ということだ、ペール」
「あっ、は、はい。ありがとう、ございます……！」
ペールが恐る恐るといった感じでスラルにお礼を言う。スラルはそれを見てぼそりと小声で、
「別に……レオンハルトを助けた礼はこれでチャラだし……」
「え、えっ？　何でしょう……？」
なんでもない、とスラルは再びそっぽを向いた。そうなるとペールには何も聞けない。首を傾げながら引き下がる。
レオンハルトはそのタイミングで、スラルに近づいた。そして半信半疑のまま、
「……本当にいいのか？」
「……何？　連れて行きたくないってこと？　それじゃ――」
「ペールのことじゃない。……本当に翔竜山に、もう一度行っていいのか？」
自分で言っといて何だが、戦いに行くのだ。登頂はもはやついでとなってしまっている。それはスラルも理解している筈なのだが。
しかしスラルは得心したように一度頷くと、頬を染めながら視線を逸して、
「……別に、レオンハルトの為じゃないから。私にも、一応目的があるし……それが気になるから行くだけ。勘違いしないでよね」
「……そうか」
妙に顔をもごもごとしているが、何なんだろう。目的も気になるが、そっちの方が気になってしまう。
……でもまぁ、許してくれたのは確かだ。
レオンハルトは苦笑しながら、そのことに対して感謝しようと口を開いた。
「何にしても、ありがとな。……後、色々とすまん」
「――！」
バツが悪くもあったので謝る。するとスラルが身体を反応させるも、腕を組んだまま身体を反対側に向けた。
「ふ、ふんっ。そんな簡単に許さないんだから……ちゃんとお仕置き

は受けないと駄目だし……」
「ああ、わかってる。悪かった」
「……それならいいけど」
そっぽを向いたままではあるも、スラルから暫定的に許しを得る。
それを見て、レオンハルトは改めて思う。
……やっぱこいつ、魔王らしくないな。
容姿や仕草だけではない。こんな風にあっさりと許してくれるところは、普通の人間より、よっぽど人が出来ているのかもしれない。人が良いのか、甘いのか、優しいのか、判断は別れるところではあるが、
……それが良いところだよな。
レオンハルトはスラルの傍らにいるケッセルリンクにも視線を向ける。新たに魔人となった仲間。しかし突然にそうなった者に、どう声を掛けていいか悩む。
だが、そうやって迷っているとケッセルリンクの方から声が来た。
「……レオンハルト。――私は、後悔していない」
と、不意の言葉に表情が固まる。そして何かを返そうとして迷った挙げ句、
「……意味が、わからないな。何でそれを俺に言う？」
「……何、全てを自分の責任だと思われるのは心外だからな。そう思っているのではないかとね」
「……」
言葉を返すことは出来ない。しかし向こうは続けて、
「これは、私が望んだことだよ。その結果でしかない」
それに、とケッセルリンクは口元に笑みを浮かべ、
「皆のやりとりを見る限り――存外、賑やかで楽しそうだ」
「……そう、か」
レオンハルトはそこでようやく、息を吐き出す。そして心の中に、言葉を作った。
――それなら良かった、と。

森の中で、多くの人間の集団が列をなしていた。
誰も彼もが武器を持ち、開始を一様に待つ中、異様な巨躯を持つ者が姿を現す。
全身を覆う鎧を装着した大男の名は、アーノルド・ホーガン。
この戦士団の長である戦士長であり、最強の戦士だ。
その傍らには、平均的な背丈を持つ一人の男が並ぶ。隊長の鎧を着た男だ。
殆どの隊長格が、魔人に負傷、ないしは死亡させられた中で唯一、彼だけは無傷でその場にいた。
そしてその時がやってくる。アーノルドが声を上げたのだ。
「ようし!!　貴様ら――」
言葉は単純なものでいい。準備を終え、傷も癒えた。兵達の心には、今度こそ、勝利を取る、と闘志がある。
それを呻り、最後に火を点ける言葉を、戦士長は皆に届くように告げた。
「――戦闘を……蹂躙を始めろ――!!!」
「うおおおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉ――!!!」
咆哮にも似た大声とともに皆が剣を掲げて打ち合せる。金属音が森の中に鳴り響く。
戦士達の意思は一つに統一され、それは一斉に襲いかかった。
それを見て、密かに笑みを浮かべるは唯一人。
懐に、一冊の本を隠し持った男の姿で、
「――神よ。ご照覧あれ」
――これよりこの緑の大地を、真っ赤な血で染め上げて見せましょう。
そうして人間の戦士団は、再びカラーの集落を目指して進撃を始めた。
「ん……」

世界一の標高を誇る翔竜山。その上層に差し掛かる部分の広い岩場で、巨竜は身を起こした。
日光がその身を照らし、輝いているのを感じながら、ライゼンは意識を戻し、
……何やら、長い夢を見ていたようだな……。
しかし自分にとっては珍しいことではない。
なにせ夢というのは、記憶や経験によって引き起こされるもの。二千年を生きた自分にとって、それらは膨大で際限がない。その殆どが戦いに関するものなのは、ドラゴン種にとっては誉れなのだろうが。
「……ついつい寝すぎてしまう」
体内時間では、十時間以上の睡眠を取ってしまった、と判断を寄越してくる。それが確かなら今の日数は、
「六日目、か……」
そろそろ一週間。今日で決闘を中断してからそれだけの日数が経ったということになる。故にライゼンは思う。
あのレオンハルトとかいう人間の魔人はいつになったら戻ってくるのだろうか、と。
ドラゴン種にとって、この日数は大した時間ではない。しかし女を帰して戻ってくるには余りある時間の筈だ。
……それとも、人間にとってはこれくらいが普通なのか？
人間のことをそこまで知らない為、そうも思う。しかし話をしたところ、感覚はそこまでズレていない気もした。
とりあえず戻ってきたら真っ先に文句でも言ってやろう。挨拶代わりにブレスをお見舞いしてやる。でも、あの魔人はそれをまたしても剣で斬るんだろうなぁ。変態め。
だが一方で、もう戻ってこないのかもしれないとも思う。
何しろ相手の剣はこちらに通じなかった。こちらの攻撃も、未だ満足に当てることは出来ていないが時間の問題だろう。戦いはこちらの有利の筈だ。そうであるなら、
……逃げるのも、一つの選択か。
不利を悟り、勝機がないと感じたのなら、迷わず逃走するのも賢い

選択だろう。ドラゴン種にとっては浸透していない考えだが、人間にとっては普通の考えに違いない。来ないことも充分に考えられる。
「アイツとの戦いは、面白かったがな……」
しかし現れないのでは戦えない。そうなると、
「……」
どうしようもない絶望が心の隅に湧き上がるのを感じる。
それと同時に考えることが億劫になり、全力で暴れ出したくなる。
頭が狂ってしまいそうな闇を抑えつけて、正気を保ちながらライゼンは吐息した。そうして思うのは、
……俺は、いつ終わる？
何回も、幾度となく、二千年に渡って問い続けてきた問いを再度思い浮かべる。
千年前まで、その答えはあった。
しかし今は、その答えは失われてしまった。ならば新しい答えを出すしかない。
だが、
「どうすればいい……」
分からない。
問いを宙に放っても、答える者は周りにいない。皆すべからく、散っていってしまったのだ。
戦いの中で死ねることが出来ないのなら、終わるには狂う以外にどんな方法があるのか。
どうすれば、自分の生に意味を持たせられるのか。
どれだけ考えても、最終的に行き着くのは、何の捻りもないドラゴン種の普遍的な考えしかない。
「後一日……」
もう縋れるものは、それくらいしかない。
もしそれで終わりを迎えることが出来ないのなら、最早魔王に突撃するくらいしか出来ることはないだろう。
そしてそれでも無理であれば――
「早く、来い……！」

――その先は、考えたくもなかった。

――レオンハルトの休暇が始まって十日目。

翔竜山の麓の大森林では、人間の戦士団による攻勢が再び始まり、カラーの集落はそれを迎撃しようと同じく戦士団を配置した。

魔王の一行は集落への移動を開始し、二千年を生きる巨竜はその時を待ち続ける。

そうして、最後の一日が始まった。

立ち位置

カラーの集落を目指して木々の下を歩く一行。その前列にて、ハンティはやり難いものを感じていた。
周囲、並ぶ順番は適当だ。先頭に道案内も兼ねて新しく魔人となったケッセルリンクがおり、中心には一応護衛しやすい様にとスラルがいる。それだけを決めて集団は歩いていた。
既に日は落ちかけており、茜色の日差しが木々の隙間から降り掛かる。それなりの距離を進む間、やはり時間というのはそこそこ掛かるもので、無言という訳にはいかない。
集まればそれなりの会話がある自分達だが、今は新入りともいえるケッセルリンクがいる。なので話題は当然、自己紹介も兼ねながら、彼女の話題となる訳で、
「へぇ、お前が夜の王なのか。道理で強そうな訳だ」
「それほどでもない」
ガルティアが言葉を送る先、先頭を歩くケッセルリンクはある程度の余裕をもって会話に興じている。再び声が来ても、
「でもそれなりに戦ってきたんだろ？」
「同胞の為に戦ってきたというだけのこと。降りかかる火の粉は、払わねばならないのだから」
「ほぉ、なるほどな。格好いいねぇ」
その堂々とした態度で応答し、それを見たガルティアがからからと笑う。初対面の魔人であっても戸惑わず平然と出来るその胆力は感心せざるを得ない。
……動じまくってたあたしって、ひょっとして情けない？
そういう疑いが浮かぶも直ぐにそれを消す。どう考えてもこちらが普通で、あっちがおかしい。それは視界の端で、ケッセルリンクとレオンハルトの間を行き来して人見知りのような感じになっているペールを見ても明らかであり、
……普通、魔人相手だと警戒するよねぇ……。

その気持ちが理解る分、ペールに同情してしまう。会話に入りたそうにしているのは、レオンハルトに懸想しているからだろうか。今もガルティアが出す話題に反応して、
「夜の王って言うからには、夜に戦うのが得意なんだろ？」
「あ、う……」
「……そうだな。魔法の関係上、夜に戦う方が力が発揮出来る」
何かを話そうとして小声で呻くだけになっている。元々引っ込み思案なのか、コミュニケーションが苦手のようだ。助けてやりたいとも思う反面、話に加わるとこちらの話題になりそうなのであんまり行動を起こしたくないとも思う。少し薄情だろうか。しかし、そんなことを考えていると、視界の横で、
「きゃっ――って、あれ、レオンハルトさん……？」
「っと、気をつけろよ、ペール」
「あ……は、はい……ありがとう、ございます……」
小石か何かに躓いたのか、転けそうになるペールを、レオンハルトが身体を支えることで助ける。抱きとめられる形になったペールは、頬を染めてお礼を言った。それを見たスラルが足を上げて、
「……あ、足が滑っちゃったー」
「痛っ――!?」
レオンハルトの足を思い切り踏みつけた。その動きは明らかにわざとであり、
……何やってんだか……。
一連の流れに溜息が出る。あれくらいでときめくペールもアレだし、スラルもスラルだ。でも悪いのはレオンハルト。ベッド汚されたし。今度何かしらで仕返ししてやろう。
と、考えていると今度は逆側から声が来た。キャロルの声だ。しかもそれは、こちらを含むもので、
「そういえば、ケッセルリンク様とハンティさんは同じカラーですわよね？　面識とか、あったりしませんの？」
……げ。
面倒な質問が来た。あまり答えたくないなぁ、と思う。しかしケッ

セルリンクの方が顔を横にやると、視線がこちらに向けられた。そして、
「いや、面識はない」
「……そうだね」
案の定、ケッセルリンクの方が答えたので便乗しておく。話の流れが危ういがこれはしょうがないし、いいだろう。ケッセルリンクが面識がないと言ったのは有り難い上に、事実だ。
しかし、ペールが知っていた事から、自分の事は知っているのだろう。自分が所謂、始祖と呼ばれていること。その事について突っ込まれるのかもしれない。すると芋づる式に、
……あたしが、ドラゴン・カラーだっていうことが、バレるかもしれない。
実際、この面子だけにならバレてもいいかな、とも思う。だがその事を知るのは今の所、レオンハルトのみ。他の面子はこちらのことを普通のカラーだと思っているだろう。ずっと隠していた種族的な部分を明かすのは、やはり躊躇してしまう。
ひょっとしたらスラルは知ってるかもしれないが、確証はない。後はカミーラもそんな感じだ。
明かさないのであれば、適当に、寿命が長かったとかなんとかで言い訳すればいい。
……どうしようかな。
色々と考えたが、結局はケッセルリンクの答えによるだろうな、と半ば諦めながら、ハンティはそれを耳にした。
ガルティアの、思い返すような声で、
「あー、そういやハンティは始祖様なんだっけか？」
「……うん、そうだ――」
……あれ？
今、おかしくなかっただろうか。いや、明らかにおかしい。
何故、ガルティアがそのことを――
「ならケッセルリンクも知ってはいるのか？」
「無論だ。カラーにとっては重要な祖先で、知らぬ者はいないとも。

……そういえば、始祖様は何故――」
「ちょ、ちょっと待った……！」
話題が流れてしまいそうになったので慌てて止める。見れば皆がこちらに注目していた。その顔つきは軽い疑問の表情が見えている。空気は軽く、ハンティが突然慌て始めたこと対するもののようだ。始祖様発言は、それこそ流されており、
……え、ひょっとして……皆知ってる？
そんな感じがする。だが、一応確かめなくては、とハンティは言葉を作った。
「……あたしがそう呼ばれてるのって、皆知ってたっけ……？」
聞く。すると発言した張本人であるガルティアが頷き、
「おお、さっき出発前にそこのペールって嬢ちゃんから教えてもらったぞ」
「あ、はい。そうですね。先程、お教えしました」
「……」
……原因はアンタか――!?
あっさりとそう言うペールに絶句する。そして他の面々も、
「そういえばハンティさんは、その時、家の中に荷物を取りに行っていて居ませんでしたわね。親切なペールさんが教えてくれたのですわ！」
「……俺は前から知ってたが……」
「……私も、実は前から知ってたりして……」
何で教えてくれなかったんですの？　と、目を輝かせて言うキャロルや、バツが悪そうに指を突き合わせて、苦笑いするスラルを見て、ハンティは頭痛がした。
ドラゴンカラーだということまでは知られていないにしろ、あっさり知られすぎ――というかペールがあっさり教えすぎな気がする。眼前、こちらに近寄ってきたペールが、小声で、
「し、始祖様。私、頑張って皆さんに始祖様の武勇伝をいっぱい教えておきましたよ……！　これで一目置かれる筈なので、頑張って下さいね……！」

と、親指を立てて励ましてきた。衝動的にその指を関節とは逆側に曲げたくなる。暴力的な思考だが、使徒になった影響だと思うことにする。決してイラッとしたからではない。気分を落ち着けながら沈んだ声で、

「……頑張るよ」

「？　始祖様、何だか元気がなくなってますが大丈夫ですか？」

……誰の所為だと……！

ペールの言葉が、こちらを煽っているように聞こえるのは気の所為だろう。衝動的に雷撃を放ちたくなるも、そこはぐっと堪えて、しばらく放っておいてほしい、と苦笑しながらペールを遠ざける。

疲れたのでしばらくは精神的な傷を癒やすための回復期間だ。これ以上連続で傷を負えば、割と本気で暴れたくなってしまう。

しかし、

「それで一つ聞きたいのだが……始祖様はレオンハルトの使徒だというが、いったいどのような経緯でそうなったのだ？」

ケッセルリンクがこちらの話題を再度出してくる。おそらく先程、自分が止める直前に尋ねようとしていたことなのだろう。一瞬、答えた方がいいかな、と思うも、ケッセルリンクもレオンハルトに聞いているようだし、彼が適当に答えるだろう。なのでそちらに任せようと、だんまりを決め込もうとし、

「ケッセルリンク様、それはわたくしがお答え致しますわ！　ええとですね……確かハンティさんが、偶然出会ったレオンハルト様に憧れて、使徒にしてほしいと懇願――」

「全っ然、違うんだけど!?」

過去が捏造されそうになっていたのでやむを得ず大声で否定した。なんて恐ろしい。あまりにも堂々と嘘をつくので止めるのが遅れてしまった。

しかしキャロルは、違いましたか？　と言わんばかりに首を傾げている。何故そうなるのかと思うも、よくよく思い出してみれば彼女はその時、現場にいなかった。なので認識の齟齬があるのは仕方ないか――って、そんなわけない。

ハンティが疲れを感じながらもそれを全力で否定した後、それを見ていたケッセルリンクは、
「……ふっ、なるほど」
何かを理解したのか、不意に暖かく、微笑ましいものを見るような笑みを浮かべると、
「始祖様も、良い時間を過ごされてきたようだ……」
……その目、節穴？
今のやりとりを見てどうしてそう思ったのか、本気で理解に苦しむ。
もう気を使うのやめようかな、と考える。さっきから空気を読みすぎるばかり、自分ばかり苦労している気がするし、よくよく考えたらいつもこんな感じだ。
キャロルみたいに――までとはいかないが、少しくらいぶっちゃけた方が楽なのかもしれない。なので次からはそう出来るように努力しよう。
手始めに、使徒になった理由を訂正しようと、ハンティは口を開こうとした。
その時だ。
「――おい」
ガルティアが、不意に声を掛けた。軽い声じゃない。真面目な声で、表情で、それを伝える。
「誰か来るぞ」

それに真っ先に気づいたのはガルティアだった。
体内のムシによるレーダーは、先程から自分を中心に周囲を索敵し続けている。ある程度の距離にいる生物の情報は、余さずガルティアに伝えられた。
ガルティアの声を聞いた直後、続いて気づいたのは探知魔法を常に発動させているスラル。
少し遅れて、気配を察知したレオンハルト。次にケッセルリンクに

ハンティ。かなり遅れてキャロルが気づく。
ペールは茂みをかき分けるような音が聞こえた段階で気づいたが、その時には、影は近くまで来ていた。
森の中から、人が飛び出してくる。それは、長い青髪を持った、カラーの少女であり、
「はぁ……はぁ……ここま、で、逃げれば……!?」
息を切らして、その場に出てきた少女は、目の前にいた集団を見て言葉を失った。
人間――の形をした何か。人間とは圧倒的に存在感の違う集団が、人の形をして立っている。それを見て、少女は思った。ここまでか、と。しかし、その中にいる知った顔には、気が動転していたこともあって気づかなかった。
諦めきった少女の前に、その知った顔が前に進み出る。現カラーの長であるペールと、前長であるケッセルリンクだ。
「大丈夫か?」
「あ……」
ケッセルリンクが屈んで声を掛けると、そこでようやくカラーの少女は見知った存在に気づいた。そして驚きと安堵が入り混じった表情になる。
今度はペールが慌てたように、
「な、何があったんですか!?」
「ペ、ペール様に……ケッセルリンク様……」
名前を呼ぶカラーの服は、ところどころ破れており、肌を傷つけ、幾つかの血の線が走っている。それを見て、皆が嫌な予感を感じる中、少女は震える声で言った。
「に、人間、が……人間が……攻めて来ました……!!」

その言葉に真っ先に反応したのは、ハンティだった。
彼女は眉を立てた顔になると、直ぐ様、
「――っ!」

その場からかき消えようとした。ハンティの得意魔法である瞬間移動だ。しかし、
「――待て、ハンティ」
「！」
横から鋭い声が飛んできた。魔人レオンハルトだ。普段はなぁなぁで済ませた上下関係とはいえ、主の有無を言わせない迫力の声に、ハンティの動きが止まる。
しかし一瞬の怯みが起きても、意思までは変わらない。彼女は憤った様に抗議する。
「早く行かないと、集落が……！」
「落ち着け。――まずは状況を聞いてからだ。……ケッセルリンク」
レオンハルトが呼びかける声に反応して、ケッセルリンクが顔を上げる。そして、
「集落までは後どれくらいだ？」
「……十分も進めば外周部に辿り着く」
なるほど、とレオンハルトが頷きを入れた。そして次に見るのはガルティアだ。視線を横に向け、
「ガルティア」
「……んー、こっからじゃさすがに何も分かんねぇな。もうちょっと近づかないとな」
名前を呼ばれたことで、自分に何を求めているかを理解したガルティアは、聞きたいであろう答えを口にする。
まだ何も分からない、という答えではあるがレオンハルトにはそれで良かったのか、再び頷くと、今度は傍らにいるスラルに聞いた。
ただし今度は、上位者に聞くという意味で、
「ということだがスラル。……どうする？」
「……そうね……」
スラルが考えるように目を細めて顎に手を当てる。そのやり取りを見てハンティやケッセルリンクはようやく気づいた。
今、行われているのは、魔軍として、方針を決めるための、即席の会議だ。人間とカラーの戦争。それを避けて通るのか、介入するの

か、その瀬戸際なのだと。
皆の顔が急に引き締まったのはそういうことだろう。どちらになろうとも、その覚悟は既にあるのだ。
そしてその判断は、スラルに一任されている。それを感じ取り、ハンティはどうするべきか、と思考を巡らせた。
……スラルは、戦いは好きじゃない。なら選び取られるのは――。
戦いに関与するのを嫌うスラルだ。理由が無ければそうなるのは必然。その舵を、反対側に切らせようとするならば意見を具申しなければならない。
だが、一方で、
……あたしは、一体誰の味方だ？
カラーを助ける為に、瞬時に人間を殺す判断をして、魔王にどう言えば、望み通りになるかを計算し始めた自分に、嫌気と迷いが生じる。
カラー、人間、魔物。そのどれもに背信を帯びているような感覚。自分の立ち位置が分からない。
もし己が、一人であるなら、助けたいものだけを助ければいいのかもしれない。弱い者が虐げられるのが嫌いなのは、性分だ。
しかし今の自分は、魔人の使徒という明確な立場がある。上下関係は曖昧で、やりたくないことはやらなくていい、とその命令に甘んじてきた。魔軍の仕事に、殆ど関わってこなかった自分が、どの面下げて魔軍の方針に口を出せるというのか。
「……」
結果、ハンティは歯を噛み締めながらも沈黙した。判断を委ねたのだ。
願わくば、その命令を下してほしい。スラルは非情な魔王ではないはずだ。それを信じて。
そして考えがまとまったのか、冷静にスラルが答える。静かな声で、
「――魔軍としては、動かない」
「――」
その言葉を聞いたハンティの顔が、絶望に染まる。見ればケッセル

リンクも表情を顰めさせているだろう。
　そんな中、スラルは続けた。
「人間の国同士の戦争に、魔軍として関わると面倒なことになる。だから魔軍としては動かない。――それでいい？」
　了解の意が、レオンハルトやガルティア、キャロルから発せられる。遅れてケッセルリンクも頷いた。ハンティも黙ってそれを受け止める。
　だが、
「でも――」
「……？」
　スラルはなおも続けた。一体何を、と顔を上げるハンティが聞く。それは、
「今は……プライベートだから。レオンハルト、ガルティア、ケッセルリンク。そしてその使徒に、私用で動く許可を出すわ」
　つまり、
「自由時間ってこと。……これでいいかな、レオンハルト？」
「ああ、良い判断だ」
　スラルがレオンハルトに尋ねる。そして彼が頷くと、ガルティアも肩を捲りながら笑みを見せ、
「よし、そんじゃ腹ごなしに暴れるか。なあ、レオンハルト。どっちが多く片付けられるか勝負しようぜ」
「別にいいぞ。俺はペールとの取り引きを果たせなかった義務もあるからな。今回は本気でやる」
「おお、珍しいな。雑兵相手にマジか。ならキツいかもな……」
　と、盛り上がる魔人二人。しかし残されたもう一体の魔人が声を上げた。
「……スラル様」
「ん、何？」
　軽い調子で応じるスラルに、ケッセルリンクは疑問を尋ねた。
「……良いのですか？」
　曖昧な、短い言葉での質問。しかし、それでも意味は伝わる。

スラルが、息を入れた。そして苦笑して、
「いいのよ。……元々、そこの二人はやるつもりだったみたいだし……私としても、後味が悪いのはちょっと、ね」
そう言うと、レオンハルトとガルティアが応じた。先にガルティアが、
「なぁに、敵ならともかく、味方の味方くらいは助けても構わねぇさ」
「最早恒例行事みたいなものだからな……俺達としても文句はない。自分達を否定することになるしな」
「それは……」
二人の言にケッセルリンクが軽い驚きを入れる。その言葉の意味は理解るものだ。
そしてそれを見るハンティの傍ら、別の声がきた。それはいつも騒がしい金髪の高い声で、
「ハンティさん！　これは、レオンハルト様に良いところを見せるチャンスですわ！　七星を越える為にも頑張りますわよ！」
「そ、そうだね……」
全く振れない態度のキャロルに戸惑いながらも返事をする。戦いであっても、本当にいつも変わらない。それは、彼女だけでなく、
「……あはは、変わらないな……」
周囲の者達を見てそう思う。ハンティが決意を顕にする中、同じ様にケッセルリンクが、目を丸くしていた表情を元に戻すと、その目を伏せて、
「……慈悲深い判断に、感謝します。スラル様」
「べ、別にいいけど……」
一礼を受けたスラルが少し戸惑いながらも、感謝を受け取る。それを見届けたレオンハルトは、周囲に聞こえる声で、
「それじゃ、戦場の場所まで案内してもらうか。そこで登山前の軽い運動だ」
「あ、は、はい……！　分かりました……！」
視線を受けたペールが頷く。そして皆を見て、
「み、皆さん……ありがとうございます……！」

深々と礼をした。しかし、その声には応じない。
今から行うのはあくまで、偶然の出来事だ。偶然、魔人達のピクニックの道中に、人間がいたから蹴散らすだけ。
そしてそれは、その通りとなるだろう。
その未来を感じ取ったハンティの眼前で、スラルは配下の魔人達に命令を下した。
「――行きなさい」
了承の声が上がると、その一行は、戦場を目指して直進した。

王達の戦い

戦いは、数で勝る人間側の優勢であった。
戦士長アーノルドが率いる王国の戦士団はカラーの集落を正面にした横隊を作り、その広さを持って攻め立てていた。
対するカラーの戦士団は数で劣りながらも何とか同じ様に弧にも似た広い列を形成して、前進してくる人間たちを弓と魔法で迎撃する。
しかしそれも長くは続かない。戦場が広くなったことで、数の利がより強く表れ始めたからだ。
局所的には上手く迎撃出来ている戦地もあるが、集落に続く前面を全てカバーしようとするには、圧倒的に数が足りない。その多くは人間達の攻勢に押されて徐々に数を減らしながら後退していく。
個人能力の高いカラーの精鋭達で構成された遊撃隊などが木々の上から人間たちを上手く仕留めているものの、それも人間達の取った作戦によって阻害されてしまっていた。
それは、
「くっ……森を火で……！　何てことを！」
木をところどころ燃やしながら進む兵達を、カラーの戦士は強く睨んだ。
彼らはその手に松明を持っており、それを投げつけて森を燃やしている。本来は、陽が沈みゆく夜の森を進む為の明かりであるそれは今、カラーへの攻撃手段として使われていた。
炎が木々に燃え移ったことで自分達で照らす必要もなくなり、更には闇夜に紛れようとしていたカラー達もその作戦を潰される。
それを見たカラーの戦士達は皆一様に焦りを顔に滲ませていた。
戦力比は明らかにこちらの不利、地の利は炎によって徐々に潰されている。
その上敵の前線には止めることの出来ない人間の怪物――アーノルドがその戦斧を振るっている。
かの者を止めることの出来る可能性があるケッセルリンクはここ

にはおらず、長であるペールも未だに帰ってきていない。魔人に拐われて以降、居場所が分からないのだ。
――このままでは……！
その先は口にするのも憚られる。しかし、徐々に感じる死の気配が恐怖となって身体を震わせる。
集落に辿り着かせてはならない。それを心に留めて何とか戦い続ける。
しかしそれもいつまで続くことか。
「――いたぞ！　カラーだ!!」
「ぐっ……!?」
木々の隙間から紛れて人間を狙い撃っていたカラーも、面となって進んでくる人間達に捕捉されてしまう。
そして声とともに数十の人間が殺到した。誰も彼もが自分を殺し、もしくは傷つけて捕まえ、犯そうとして目がギラついている。
戦場での人間は悪魔だとカラーは知っていた。その野蛮さは魔物と大差ないものだ。
捕まれば自分は死よりも酷い仕打ちを受ける。その前に逃げるべきか、それとも自決するべきか――
それを決断しようとしていたカラーは、しかし、それを実行できなかった。
何故なら、横から衝撃が来たからで、
「ぎゃあああ――!?」
「な、何だっ!?」
「っ!?」
カラーが見たのは、人間に襲いかかった目に見えない衝撃の波だった。空気と木々、ついでに幾人かの人間を斬り裂いたそれは、驚愕に目を見開くには充分であった。
一体何が、と人間もカラーも等しくその現象の発生に足が止まる。しかし幾人かは、その現象に心当たりがあった。
これは、数日前の戦いでもあった――
既視感を覚えた一部の者達がそれを完全に思い出すまでに、とある

カラーはそれを知覚した。
　耳に聞こえるのは、こちらに歩いてくる数人の足音と声で、
「それ荒っぽいなあ。カラーまで巻き込むんじゃねぇか？」
「ちゃんと計算してやってるから大丈夫だ。――多分」
「レオンハルト。当たってはないようだが気をつけてくれ」
「……当たってたら怒るからね」
「……わかってるよ。お前らの同胞を傷つけはしない」
「レオンハルト様がそんな計算ミスをする筈ありませんわ！」
　徐々に近づいてくる人影。その数は六人の男女。肌の色や髪の色、姿形に差異があるその者達は、その誰もが人間を遥かに越える存在感とオーラを放っており、戦場に悠然と侵入してきた。
　その中心にいるのは白い髪の少女であり、その少女が声を上げる。
「……それで、どう動くの？　レオンハルトが決めて」
「とりあえず、適当に散開して敵を蹴散らすぞ。ないとは思うが、万が一を考えて二人一組になれ」
「振り分けはどうするんだ？」
　指示を出す金髪灼眼の男が、
「適当でも問題はないが……一応均等にするぞ。――まず、ガルティアとハンティ」
「おう」
「ん、了解」
「次に……ケッセルリンクにはスラルを任せたいんだが……構わないか？」
「……ああ、構わないとも」
「スラルもいいか？」
「……いいけど。私の見てない間に変なことしないでよ？」
「しねぇよ。というか変なことって何だ……。最後は――」
「わたくしと、レオンハルト様ですわねっ!!」
「……そういうことだ」
　金髪の男がそう言うと、その集団は意思を統一させた様に見えた。
　そして、

「それじゃあ、終わったら適当に落ち合うぞ。――じゃあな」
「あ、待って下さいレオンハルト様――!!」
そう言って、金髪の男はその場から瞬時にかき消えたように移動する。それを見た金色の髪の少女が騒がしい声で、おそらくその方向に向かって追いかける。
「……あたし達も」
「おお。そんじゃ、後でな」
黒髪のカラーがその場から一瞬で消えると、褐色の肌で腹に大きな穴が空いた男は爪の間から糸を出して木々の間を飛ぶように移動した。
「――では、スラル様。我々も」
「ええ、行くわよ」
最後に青いクリスタルを持つカラーの美女が飛び跳ねて木の上に移動すると、白髪灼眼の一際大きな存在感を放つ少女が魔法で宙に浮いて飛んでいく。
その集団を偶然にも目撃したカラーは、驚きと混乱で目を瞬きさせた。
「今いたの……ケッセルリンク様と、始祖様……?」
その疑問は宙にだけ響いて消えた。

直後、戦場のあらゆる場所で、人間を蹴散らしながらとある存在達が移動する。
そして運良く、その存在に声を掛ける余裕があった者達がいた。数秒後、あるいは次の瞬間には絶命する彼らであったが、その人間の兵士達は、確実にその存在の名を聞いた。
口調はそれぞれ違うものの、同一の事をその存在達は答えた。それは、
――魔人である、と。
魔人。そしてその使徒が戦場に現れたことを、人間やカラー達は知ることとなった。

最初に戦場で暴れ始めたのは、魔人レオンハルトだった。
彼は責任感をもって事に当たる。仕事ではないがそうするだけの理由があったのだ。それは、
……あの時、俺が上手くやるなり、殺し尽くすなりしていればな……。
数日前に行なったペールとの取り引き。道案内をしてもらう代わりに人間を追い返すという約定を、レオンハルトは完璧にこなす事が出来ていなかった。
いつも通りに指揮官だけを潰してまわれば、大軍を動かすことは出来ず人間たちも諦めて帰ると思っていたのだが、見通しが甘かった。人間達はそれでもなお、再攻勢を掛けてきたのだ。
その背景は知らないし、理由は不明だ。何か特別な事情があったのかもしれない。
だがそれは言い訳にならない。失敗したのは事実だ。
故に、レオンハルトは今回に限り、自分への枷を解放する。
即ち――雑魚相手への殺戮の解禁。
弱い者いじめや一方的な虐殺を好まないレオンハルトであるが、必要に迫られた場合は別だ。
そして、今はその時である。
「――おい、お前ら」
「――っ!? な、な、何だ貴様は……!?」
身の丈以上を誇る魔剣、オル＝フェイルを威嚇するように構え、睨むように見る。
それだけで人間達は寒気を感じたように、声や身体を震わせて表情を歪ませる。ただでさえ弱そうなのに、戦意さえも萎んでいくのを見て息が漏れる。
……雑魚はこれだからな……。
少し力を見せるどころか、姿を見せただけでこれでは戦いにならない。

レオンハルトが強くなればなるほど、こういった表情を人間は見せるようになった。
戦場で鍛えた兵士なのだから、戦う意思は何とかあるのだろう。それでもマシな方だ。普通の人間は、魔人という存在に気づいた時点で怯えて、絶望するだけとなる。
戦意があるだけで大分マシだが、それだけでは自分と戦えない。自分が楽しめない。
しかし今はそれを我慢しよう。冷静な声で告げる。
「今この森では、俺達魔人がピクニックしてる最中でな……」
「ぴ、ピクニック……？」
意味が分からないと言わんばかりに目を泳がせる兵士。そんな彼らを目を細めて見ながら、
「その邪魔になるからお前らを殺そうと思う」
「――――」
兵士達が一様に言葉を失う。
さすがにこの理由は酷いか、と思うも訂正はしない。固まる彼らを無視して言いたいことだけを言う。
「剣を構える時間くらいはくれてやる。恨むんなら、自分達の間の悪さを恨め」
「な、な、な――」
兵士が声を震わせる。そして憤ったのか顔を怒りに染めると、剣を構え、
「ふ、ふざけ――」
「えいやっ！」
その怒声は、完全に発声する前に横から振られた剣に止められた。
兵士の首が、血飛沫を上げながら綺麗に飛ぶ。
兵達の顔が青く染まる中、それを引き起こした自らの使徒、キャロルは細剣に付いた血を払いながら、
「あ、完全に構える前にやってしまいましたわ……！　申し訳ありませんレオンハルト様！」
「……いや、いいぞ。ギリギリセーフだ」

「それなら良かったですの――よいしょ」
そう言うとキャロルは安堵したように胸を撫で下ろし、気を取り直した様子でその死体に近づくと、屈んでそれを調べて、
「……あれ？　レオンハルト様ー！　アイテム落ちませんでしたわー！」
首を傾げた後、そんな報告を上げてきた。
それは自分のとある趣味の際によく見られる光景であり、レオンハルトは半目で、
「……キャロル。迷宮のモンスターじゃないんだからアイテムは落ちないぞ」
「あっ……それもそうですの。残念ですわー……」
仕方ない、とキャロルは少し肩を落とす。しかしそれは一秒程度で、再び切り替えたように顔を上げると、
「それなら剣の練習に致しますわ！　こんな感じで――」
「ぐぎゃっ!?」
適当に振った剣の先に兵士が当たり、その頬が斬り裂かれる。それを行いながらもキャロルはレオンハルトの方を振り向き、
「レオンハルト様ー？　剣の振り方はこんな感じでよろしかったですのー？」
「ひっ、ぎゃあっ!?」
と、剣をぶんぶんと振って兵士達を殺していくのを見て、レオンハルトは息を吐いた。
そして剣を構えると、
「違うぞキャロル。剣を振る時は……もう少しこう――全身を使って順序よく力を伝えて――ッ!!」
剣を八相に構えて、それを振り下ろす。
すると、前方に向かって大気と剣の衝撃が走った。
「あ――」
木々と一緒に人間を断つと、彼らは何が起こったか分からないまま地面に倒れ伏した。
そして剣を自然体で右手に持ち、

「――こんな感じだ」
とキャロルに示してみせる。所謂お手本という奴だ。
「相変わらずレオンハルト様は凄いですわ！　わたくしも精進致します！」
「ああ、頑張れ」
そう言うと、再び兵士達を正面に見据える。
彼らの顔は、恐怖で更に歪んでいる。
そんな兵達を見ながら、レオンハルトはキャロルに向かって告げた。
「――なら、そろそろやるぞ」
「はい！　畏まりましたわ!!」
「ひ――」
それを皮切りにして、蹂躙は始まった。
「う、うわあああ――!?　逃げろ――っ!!」
「あ、こらっ！　逃げちゃ駄目ですのよ！」
経験値が逃げてしまいますわ！　とキャロルは左手の銃も抜き放ちながら追いかけていった。
レオンハルトは逃げようとする兵士を斬撃を飛ばして斬り裂きながら、キャロルを見て思う。
今彼女は、逃げているとはいえ人間の兵士を簡単に屠っており、
……こいつも、昔に比べたら成長したな。
使徒にした当初は、普通の人間よりは強いが、魔物将軍と同じか良くてもそれよりちょっと上程度の実力しか無く、使徒の中ではあんまり強い方ではなかった。
それも今は、人間の兵を簡単に作業感覚で片付ける程度には成長しており、
……ふむ、やっぱ伸びしろはあるな。これからも育ててやるか。
成長速度は高い訳でもないし、強いと言っても使徒の中ではまだまだではあるが、向上心は高いので成長も見込める。それを再確認出来たことは意義があるだろう。最近はハンティと戦わせてばかりで人間と直接戦わせることは少なかったので、キャロルにとっては有り難

いのかもしれない。
願わくば、もう少し強い人間とやらせてみたいが、
……そういえば、あの強そうなデカブツはいるのか？
ふと数日前に出会った、人間にしては中々の実力を持っていそうな大男がいたことを思い出す。あの時は蹴り飛ばして離脱させたが、生きている可能性は高いだろう。
それにおそらく、そいつがこの人間達の軍の中で一番偉いだろう。再度の攻勢を行なってきたのだから、そいつがいる可能性は高い。
……なら、そいつを見つけて殺せば――
少しは、戦いが楽になるかもな、とレオンハルトは周囲の雑兵をキャロルと一緒に殺しながら、当たりが見つかることを祈るのだった。

「はぁ……っ、はぁ……！」
「逃げんなよー、嬢ちゃん……！」
とあるカラーの少女は、人間の兵士達に追いかけられて息を切らしていた。
心臓が強く脈打ち、恐怖で足が竦む。
彼女はカラーの戦士団に入ったばかりの少女であった。
魔法の才能があった彼女は、その才能を少しでも集落の為に役立てたいと思い、戦士団に志願したのだ。
憧れのあの方の様に、人間達から同胞を守る為に戦場に出ようと覚悟を決めた。どんなに苦しい思いをしても、仲間を守る為なら耐え忍んで見せると決意した。
――しかし、その覚悟は甘かったと言わざるを得ないだろう。少女は、戦場を知らなかった。
血潮が飛び散り、悲鳴と怒号が行き交う、戦場の強すぎる闇を少女は初めて味わった。
味方が目の前で死ぬところを見た時――いや、敵の死体を見た時も、少女は吐き気が止まらなかった。

胃の中のものを全て吐き出し、それにようやく慣れた頃、敵はもう間近に迫っていて、
「あ、うぅ……！」
少女は、ただ逃げ出した。
そして、追い詰められていた。
「さぁて、少し楽しませてもらうぜ……！」
「ははは、じっとしてたら直ぐ終わるからな。暴れんじゃねぇぞ」
人間の男たちの手が少女に迫る。そして少女は自分の浅はかさを思い知る。
自分なんかが戦場に出たことが間違いだったのだろう。自分なんかが仲間の為に何か出来ると思い上がってしまったのが間違いだったのだろう。自分なんかが、あの人の様になれるなんて夢を見なければ――
涙で滲んだ視界の中で、少女は男達の下卑た表情を目撃した。
だが、
「――待ってもらおうか」
不意に、少女の背後から声が来た。
それは彼女が見知った存在に酷似した女性の声で、
「――あ？　お前は……」
兵士が、突然音もなく現れた存在に疑問の表情を見せる。
しかしそれを見る前に、
「――っ!?」
衝撃が腕に来た。瞬間だ。男が呻いた声を上げるが、一体何が起こったのか、誰にも分からない。
最初に気づいたのは衝撃を受けた男だった。少女に伸ばそうとしていた手を見て、
「あ――俺、の……腕、が……」
「……捜し物は、これかね――」
と、女性が姿を見せた。それは、青いクリスタルを持つカラーの女性。
ケッセルリンクだった。少女も知る人物の到来。その登場は、手に

とあるモノを持っての登場だった。
指し示すケッセルリンクの手が徐ろに投げ捨てたのは――切り落とされた男の腕だった。
「あ、あああぁぁ――っ!?」
気づいた瞬間、凄まじい痛みが男の全身を駆け巡ったのであろう。悲鳴が森の中に木霊する。
しかしケッセルリンクはそれを無視して少女に近づくと、気遣うような声で、
「大丈夫かね？」
「あ……」
ケッセルリンクが身体をさっと見て、少女の傷を確認する。大きな傷こそないものの、戦場で出来た幾つかの傷が少女の身体に痛々しく刻まれており、
「怪我をしているようだな……今すぐ下がって治療を――」
『……いいわ、私が治す』
「っ!?」
森の何処かから、女性と思わしき別の声が聞こえてきた。そして少女の身体が光ると、
「え、治った……」
少女は唖然としてしまう。言葉通り、自分の身体の傷が治っていたからだ。
察するに、今のは神魔法――ヒーリングか何かだろうか。その答えは分からないが、ケッセルリンクが声を上げ、
「……感謝します」
とお礼を、おそらく声の主に言ったことで、その隠れている女性が治療したことは分かった。
だが感謝を受けた女性と思わしき存在は、
『別にいいわ。それよりも、早く終わらせましょ。頼んだわよ』
「ええ、承りました」
ケッセルリンクに命令を下した。それを素直に聞こうしているケッセルリンクに、声の主は何者なのか、という疑問を抱く。

人間の兵士に改めて向き直ったケッセルリンクは、少女を背に庇うように堂々と立ちながら告げる。
「悪いが容赦はしない。残らず死んでもらうが――構わないな？」
鋭い視線と声が男達を射抜いた。男達が震え上がる。
しかしそれを堪えて、彼らは叫んだ。
「ふ、ふざけるな！　死んでもらうだと!?　テメェ一人で何が出来るっつうんだよ!!」
「……少なくとも――」
ケッセルリンクが答える。静かな殺気を漂わせて、
「――君達を殺すくらいは出来るつもりだが？」
そう言うと、周囲が暗くなった。
否、そんな生易しい次元ではない。
「なっ――これは……!?」
驚きの声を兵士達が上げるのは、周囲に起こった変化の所為だ。
自分達がいる周囲の森の空間の全てが、闇に覆われ始めた。
夜の暗闇――ではない。兵士達は手に松明を持っており、更には森に燃え移った火も残っている。
しかしそれは意味を成さない。
光を受け付けない完全なる暗闇が完成し、一寸先も見えない視界の中で、兵士達はどうすればいいのか狼狽えていた。
そこに、ケッセルリンクの声が響く。
「君達は、罪深い」
闇の中で、ケッセルリンクが告げる。
「君達は、私の大事なものを傷つけた」
それは罪人に罪状を言い渡している様であったし、事実そうなのだろう。彼女の声には、一切の慈悲を見せない、とそんな意思が表れているように聞こえる。
「故に――この〝アモルの闇〟の中で、無様に死んでいくがいい！」
アモルの闇。
ケッセルリンクが魔人と化して手に入れた幾つかの能力の内の一つを以って、その場を蹂躙し始めた。

視界を潰された兵士達は、徐々にパニック状態になっていた。
それは、悲鳴の所為だろう。
次々と聞こえる仲間の兵士の断末魔は、闇の中でケッセルリンクが自分達を殺す為に動いている証拠だ。それを感じ取り武器を振り回せば、仲間の兵士の苦しむ声が響く。同士討ちだ。
逃げ出すことも戦うことも出来ない闇夜の中で、人間達は次々とその数を減らしていった。

「食らいな――雷神雷光!!」
「がぁあああああっ――!?」
ハンティの気合のこもった声とともに、人間の兵達に落雷の雨が降り注ぐ。
雷属性の最上級魔法というだけあって、その威力と範囲は絶大だ。多くの人間が雷に焼かれて絶命していく。
それを見たガルティアは感心するように顎を手で撫でながら、
……へぇ、やっぱ気合入ってんなぁ。
ハンティが、この戦闘へ掛ける思いを感じ取る。
やはり同族を守るための戦いともなれば、熱くなるのは道理だろう。
それは使徒や魔人でもそうだ。なにせ自分がそうだし、あのレオンハルトも、新入りのケッセルリンクもそんな想いはある。
かつてそういった理由で戦ってきたことがある為、ガルティアにとっては大いに理解出来ることだった。
そして新しく仲間となる人物の同胞。それを守るために戦うのも良いことだろう、と。
スラルがケッセルリンクを魔人にしたということは、身内のようなものだろう。彼女は自分達のような直接作った魔人とその使徒には優しいし、距離の近い関係を望むが、他の存在には排他的だ。閉じ籠もっていると言ってもいい。
しかし良心はあるので見捨てることは出来ないし、ある程度の責任

は果たそうとする。その結果が今の状況な訳で、
……人助けの為に戦うのは久しぶりだな。
ある意味では、魔軍で戦うことも人助けなのだが、それとはまた違う。
もっと直接的なものだ。
これだけ直接的に人を助けるのは人間の時以来かもしれない。そう考えると、やはりこちらにも気合いが入る。
普段は戦いに意味はあまり求めない自分だが、こういう時くらい気張ってもいいだろう。レオンハルトと勝負もしている訳だし、そろそろ本腰入れてやるか。そろそろハンティも気合い入りすぎて遠くに行ってしまいそうだ。
だが、その前に、と。
「……腹が減っちまったな」
自分と、身体の中の使徒達が食事を求めている。
普段の食事量に比べてかなり少ない為だろう。昼間にサカナとわさびを沢山食べたが、今はもうお腹のムシが鳴いてしまうくらいには空腹だ。
なので、おやつに持ってきていた肉でも食べようか、と懐に手を伸ばした時、眼前に現れたのは、
「何だあ!?　貴様らあ――!!!」
とてつもなくデカい大声と、人間としてはかなりゴツくデカい身体に鎧を着込んだ大男。
彼が森の奥から走ってくる。そしてこちらを見つけると全力で走ってきて、
「誰だあ!?　答えやがれ――!!!」
「うおっ、元気がいい人間だな。……俺はガルティア。魔人だ」
ガルティアは簡潔にそう答えてやる。どう見ても他の一般兵士とは格が違う強さに見える。
まさか、と思うこちらの内心を考えてか、その大男は大声で、その答えを直ぐに答えてくれた。
「俺様は世界最強の戦士、アーノルド・ホーガン戦士長様だ!!!」

そして同じ様に馬鹿でかい戦斧を持っていない左手でこちらを指差し、
「魔人!!　貴様は、このアーノルド様の伝説の礎になってもらうからな!!　がははははっ!!」
「……ふ～ん。なるほどな」
ガルティアはその言葉を聞いて頷く。そして内心で言葉を作るのは、友人の魔人への謝罪。
……悪いな、レオンハルト。どうやら俺が、当たりを引いたみたいだ。
口元に相変わらずの軽い笑みを浮かべながら、ガルティアは戦いの準備を始めた。

グルメ魔人の怒り

カラーの集落。その外周部。
集落を防衛する戦士団の後詰として簡易的な救護用天幕を置くそこでは、指揮用の陣幕があった。
中では先程帰ってきたばかりの気弱な長――ペール・カラーの言葉をそこにいる伝令用のカラーと防衛隊の隊長が聞いていた。その内容に目を見開き、声を張り上げる。
「――い、一体どういうことですか、ペール様!?」
叫ぶのは問い返しの言葉。それに対し、ペールははっきりとこう言った。
「魔人を援護するように、人間を攻撃して下さい！」
魔人を援護、という言葉に反応したのは防衛隊の隊長だけではなかった。
周囲に居るカラー達も、その言葉に驚いてどよめきがあちらこちらで起こる。
「に、人間どころか魔人まで来るなんて……！」
「終わりよ！　カラーの集落は終わり……！」
「で、でも、人間だけを襲ってるらしいからこのまま追っ払ってくれるかも……？」
「今は人間と戦ってるが、いつこちらに襲いかかってくるか……」
騒ぐ者や絶望する者もいるが、その多くは疑念を抱いている様子だった。幸いにもカラーに危害を加える様子がないことは、伝令から報告が上がっている。
しかしそれを信じていいものか。カラー達の胸の内はそれだった。
だがペールは、改めて落ち着いた言葉で諭すように言う。
「……あの魔人達は、この森に遊びに来ただけみたいです」
「遊びに……？　そういえば、ペール様は、あの魔人達と話したのですか？　その、連れ去られ際に」
と言うのは、集落の防衛隊長だ。そのことを思い返す様に言った彼

女の問いに、ペールは頷きを入れる。
「はい。何でも、翔竜山に観光に来たけど人間が邪魔なので追っ払うそうです」
ペールの説明にカラー達が再びどよめく。聞こえる声から分かるのは、まだ少し疑っているということ。そのことにペールはままならない思いを感じた。
……一応、本当のこと言ってるんですけど……やっぱり不安ですよね……。
魔人と聞いて怯えや疑念を憶えるのは致し方ない。自分も臆病なのでその気持ちは分かる。魔人の悪名高さはよく知られているものだ。外界との関わりをあまり持たないカラーの間でも、世間では恐怖の存在として君臨していることを知っている。この森に攻め入ってきたことこそないが、やはりそういった印象は拭えないものだ。
実際に魔人――レオンハルトの人となりを知ったペールは怖い印象は薄れて、もはや好印象しか感じないがそれを知らない周囲のカラー達の反応たるや落着きの足りないこと。
……レオンハルトさんが良い人ってこと、私くらいしか知らないんですよね……。
そう考えると微妙に優越感が湧いてくるから不思議だ。よく考えてみると周囲のカラー達は、いわゆる魔人処女のようなもの。魔人経験者の私に敵うはずもない。
……は、初めて勝った気分に……！
リア充カラー達への心の余裕が出てきたところで、ペールは堂々と魔人を信じさせる為の理由付けを言うことにした。
未経験者への導きは先達者の務めだ。ペールは寛大にそれを教える。
「……魔人は人間にしか危害を加える気はありませんし、とても紳士的ですよ！　私がこうやって無事に帰ってきたことがその証拠です！」
ふふん、と胸に手を当てて余裕の笑み。王者の風格。それを自覚して彼女達の反応を見渡す。

しかし、
「……」
周囲のカラー達はぽかん、と口をあんぐりと空けて固まっていた。
その反応を見て、ペールは自分の失敗を悟る。
……う、うわあああああっ!? 私ってば、空気が読めない子みたいになってますよー!?
そういえば子供の時から自分は、しばしば周りにこういった反応をさせてしまう事があった。それがトラウマで、自分は家の中に引き篭もるようになったのだ。今の状況は、昔と同じで、
「……そ、そういえば、ペール様の額……」
と、誰かが呟いた。皆の視線がペールの額に集まる。
「あっ、青くなってる……」
「ということは……」
皆が何かを察したような表情になる。微妙に頬を染めてこちらを見るのは、額が赤いクリスタルの者達であり、額の青いものは少し冷静になってそれを見た。見られたペールは頬が熱くなるのを感じ、
「そ、そうですっ! 私は魔人の中に、こ、恋人がいますからっ! なので集落を守ってくれるようにおねだりしましたっ!」
「そ、そそっ、そうなのですかっ!?」
カラーの防衛隊長がどもりながら言う。あ、この反応処女ですね、と直ぐに察する。クリスタルも赤いし。
周囲の者達も、クリスタルが赤い者を中心に狼狽えているように見える。カラーは額を見れば直ぐに察することが出来るのが弱点ですねぇ、としみじみ思う。
ともかく流れが来てる。なのでペールはそこに畳み掛けるように再度、防衛隊長の声に応えるように、
「ええ、私の恋人は金髪のイケメンです。彼は信用出来ますし、彼が他の者達も大丈夫だ、と言ってくれました。……因みに、ケッセルリンク様もその方を信頼して想いを寄せてますので安心してください」
「け、ケッセルリンク様も!?」
今度は自分の時よりも大きい反応が帰ってくる。少し悔しいが、こ

れが影響力の差だろう。幾分か冷静だった者達も、
「そういえば、ケッセルリンク様もクリスタルが青くなっていたと報告が……」
「魔人と一緒にいるところを見たという者もいるし……」
「魔人が、協力してくれているのか……」
と、口々に良い反応を見せてくれている。
疑念はほぼ解消された。その手応えを感じて、ペールは改めて配下に命令した。
「わかってくれましたね。さぁ早く、前線の者に伝えて下さい。――魔人は味方だと」
「りょ、了解しました!!」
命令を受けた伝令役が、前線へと走っていく。
それを満足そうに見ながらも、ペールは安堵の息をもらす。
これで戦いも楽になるはず、長としての役目が遅れた分をほんの少しは取り戻せただろうか。
しかしまだ出来ることはあるだろう。指示を終えたら、自分も前線に向かおう、とそれを決意した時、横から言葉が来た。
「あ、あの……ペール様」
「どうしましたか？」
見ると、頬を赤く染めたカラーの少女がおずおずと近くにきた。伝令役の少女だ。クリスタルが赤い。
再び勝ち星を得ながらもペールは長としての対応をする。だが、
「わ、私……先程前線を回ってきた時に、その、魔人の方達をお見かけしたのですが……」
「あっ、そうなんですね。お仕事ご苦労さまです」
得心する。彼女は魔人についての情報を皆に伝えてくれたものだろう。ちゃんと役目を果たしてくれていることに感謝する。
「い、いえそれほどでもっ。……ただ、一つお願いが」
「？　何でしょうか？」
少女は、意を決した様に、
「あの、方達の――特に、男性の方のお名前をお教えいただけないで

しょうか……!?」
「……名前を？」
はい、と恥ずかしそうに頷く。
そして周囲の者達までもが聞き耳を立てるようにその場に立ち止まった。それを見て、ペールは察する。
……ははぁ、なるほどなるほどなるほどぉ……！
ニヤついてしまいそうになるのをぐっと堪えながらも、ペールは頷いて名前を教えることにした。
「……ええとですね。まず、金髪のイケメンの方が――」

「――レオンハルト様……！」
「……あ？」
戦場で一通りの敵を斬り捨てたところで、レオンハルトは背後から聞こえてきた女性の声に振り向く。
そういう風に呼ぶ奴はキャロルくらいなので、キャロルかと思いかけるが、こちらの少し前で人間の死体を漁って装飾品を剥ぎ取っているので違う。
一体誰だ、と森の中を見渡してみると、遠くにカラーの集団が見えた。
彼女達は弓を装備しているところや、戦場慣れしている雰囲気から、おそらくはカラーの戦士達だろう。そういえば先程からちらちらと人間と戦っていたな、と思い返す。弓や魔法が時折人間に打ち込まれていたのは彼女達の仕業だろう。
ただ、少しくらいこちらに飛んできてもおかしくないな、と思っていたのに、その予想に反して一つもこちらを狙ってこなかった。
その理由を、レオンハルトは彼女達の様子を見て何となく察した。
視界の奥、カラーの少女達がこちらと目が合ったことに対して、
「きゃ、きゃっ……目が合っちゃった……！」
「良い男ね……！」
「私、手振ってみようかな……」

何やら色めき立っている。そのことにレオンハルトは呆れ返る。
……戦場だってのに緊張感無さすぎだろ……。
距離は遠いがどういった視線を向けられているのかは分かる。ファンクラブで慣れているし、別に構わないが戦場でそうなるのはどうなんだろう。
そしてその原因は、先に集落に帰ったペールの仕業だろう。多分ではあるが、あの緊張感の無さというか色ボケ具合が似ている気がする。
というかカラーがそういう種族なのだろうか。あのケッセルリンクでさえ、最初に出会った時と今では印象がまるで変わるのだし。色ボケはカラーの種族特性。持ちネタなのだろうか、と考える。
しかしキャロルもたまにこちらの行動に対して、感激したり見惚れる時があるから断定は出来ないな、とレオンハルトは息をついてカラー達から視線を切る。
周囲を見渡して、適当に気配を探ってみても、分かる範囲に生き物の気配は感じない。
……ここいらの人間は大概斬ったか。
面倒だったと、そういう感想が最初に出てくるのは責任感が足りないだろうか。
取り引きを果たす為に久しぶりに多くの人間を殺したが、やはり感慨は何もない。
これが戦場とは無縁の一般人や、女子供であれば良心も痛むだろうし、自分が楽しめる程の強者であれば高揚していただろう。
しかし戦場への覚悟が不十分な兵士をどれだけ殺しても、それは作業でしかない。
幾つもの戦争に関わって、必要以上に犠牲を減らすやり方で指揮を執っている為か、たまにそういった思いを感じる時がある。
スラルは人間の犠牲を必要以上に望まないが、彼女が何も言わないということはこれは必要なことなのだろう――そう自分が思っているのも理由としては大きいだろうか。
……本当は、もっと真摯に向き合ってやった方がいいんだろうけど

な。……それは無理そうだ。
せめてこちらを倒すという意思が存分に感じられれば雑兵であろうと、戦士として扱ってやるのだが、如何せん、こいつらは只の略奪者でしか無かった。
敵わない相手と見ればなりふり構わず、仲間を見捨てて逃げる。そんな賢しらな臆病者を戦士とは言わない。生き延びる為の選択としてならば間違ってないが、
……全く、人間の質も落ちたな。
かつて自分が指揮していた人間の兵士達はここまで酷くなかった、と思うのは思い出補正というやつだろうか。しかし、さすがに魔人が現れたからといって悲鳴を上げながら周囲の仲間を押しのけてまで逃げようとするのは情けなく感じる。
……それとも、俺はそんなに怖いか？
他の魔人に比べたら見た目も人間なのだから恐ろしくはないと思うが、最初の口上と威圧が良くなかったのか。効きすぎてしまったのだろう。
ふと気になって聞いてみる。声の先は使徒であるキャロルだ。片手に装飾品を沢山抱えながら死体を漁り続けるキャロルにレオンハルトは尋ねた。
「……キャロル。俺って怖いか？」
「怖い、ですの？」
キャロルがその問いに首を傾げた。そして顎に手を当てて考えた後に、
「レオンハルト様は強さもカッコ良さも魔人一ですわ！　だから人間や魔物が畏敬の念を感じても致し方なしですの！　そんなあらゆる事に秀でたレオンハルト様と、その使徒が合わされば――」
「……愚問だったな。わかった、もういいぞ」
「はい！　疑いようのない事実ですわ！」
自信を持って言い切るキャロルに頭を抱える。キャロルに聞いた俺が馬鹿だった、と内心でそう思うレオンハルト。
そうして休憩がてら何となくその場でキャロルの死体漁りを待っ

ていると、不意にキャロルがこちらにぱっと振り向き、
「そういえばレオンハルト様！　わたくしも聞きたいことがありますの！」
「……いいぞ。言ってみろ」
　ぴしっと手を挙げて言うので、それを許可する。
　ありがとうございます！　と元気よく感謝して、キャロルは質問を告げてきた。
「わたくしとしては嬉しい限りなのですが……どういった理由でこの分け方になったのでしょう？」
「ああ、それか」
　レオンハルトはその質問に答える。簡単な事だ、と。背後の木に何となく背中を預けながら、
「戦力を出来るだけ均等にする為と――後は、消去法だ」
「消去法、ですの？」
　ああ、と頷く。続ける言葉は説明であり、
「まず、スラルは戦わない。だから魔人と組ませようと思った」
　魔王であるスラルだが、彼女が戦うことが好きではなく、戦いたくないと思っていることは理解していた為、戦力としては数えていない。なので次に強い魔人と組ませることは確定していた。
「そして、探知魔法を持つスラルと、ムシのレーダーで索敵が出来るガルティアは組ませない。後で合流する際も支障をきたすしな」
「あー、なるほどですの」
　ふむふむ、と納得したようにキャロルが頷く。
　しかしややあって、
「ですが、それならレオンハルト様と組んでも良かったのでは？」
　その疑問をレオンハルトは即座に否定した。
「いや、それだけはない」
　何故なら、とレオンハルトは理由を言おうとして、一度言葉を止めた。
　そして思う。よく考えたらこれは言えない気がする。その理由とは、

……キャロルと他の二人を組ませるのは……ちょっと……。
激しく不安になる。
自分がスラルと組んだとして、残りはガルティアとケッセルリンク。そしてキャロルとハンティ。
ガルティアとハンティは特に問題ない。というかハンティ自体が誰と組んでも問題ない。それなりに常識人なので誰とでも合わせられるだろう。ケッセルリンクともカラー同士なので問題ないだろうし。
しかし問題はキャロルだ、と思う。
キャロルとケッセルリンクは未知数過ぎて組ませにくいし、キャロルとガルティアは……もう不安でしょうがない。本当に戦場のど真ん中でピクニックを始めかねない二人だ。
なので自分が引き受けるのが一番安心出来る組み合わせという訳だ。ガルティアとスラルは先程の理由で除外。そして残った組み合わせがこれしかなかった。
ケッセルリンクとスラルもどうだろうと、一瞬思ったがケッセルリンクも魔人となってかなり強くなっているように感じたし、スラルも了承してくれたから問題ないだろう。出会いはアレだが、魔人化した存在なのだから仲良くはしたいだろうし、この機会に少しでも打ち解けてくれれば、自分の心労もなくなり――
……って、これじゃ本当にピクニックみたいだな……。
遊びに行く時のそれだろうと頭を抱える。
考えを戻す。しかしどうしたものか、と。キャロルにこれを言うのは憚られる。何か上手い理由付けは――
「！　そう、何故ならな――」
ふと思いついた考えを瞬時に口にする。それは、
「――キャロルは……俺が見ていた方が力を発揮出来ると思っていたからな」
「！」
キャロルが目を見開く。そして徐々にその表情が喜びのそれに変化し、

「……理解しましたわ。わたくしに期待を掛けてくれているのですね、レオンハルト様……！」
感激したという風に拳を握り、喜びに打ち震える。
……いや、まぁ、嘘じゃないしな。別にいいだろう。力も確認出来たのだし……。
キャロルが喜んでいるので、構わないか、とレオンハルトは考えをそこで打ち切る。眼の前ではキャロルが幸せそうに自分の身体を腕で抱くように交差させながら、
「ああ……レオンハルト様の期待を一身に受けるわたくし……！　幸せですわー……！」
「……」
頭の中がお花畑になったのだろう。キャロルが、笑いながらそこらを適当にステップして回る。そこが死体だらけじゃなければ見れなくはないんだがな。これじゃシリアルキラーだ、と思う一方で、足元が汚れるのでやめさせようかとも悩む。しかし結局はそれを眺めつつも、息をつくだけに留めて、レオンハルトは声を掛けた。
「……そろそろ行くか。もうここいらに兵はいないし、探しにいくぞ」
「――了解ですわっ!!　期待に応えて見せますのよ!!」
力が漲っているのか、直ぐに駆け出したキャロルを見て、レオンハルトもその場を後にした。一つ、心残りがあるとすれば、
……結局、デカブツはいなかったな。別の場所にいるのか？
だとしたらケッセルリンクか、もしくはガルティアかハンティが相手にしているのかもしれない。ほんの少し試してやりたくもあったが。
どちらにしろ、自分が行く頃には死んでるだろうなぁ、と予想し、レオンハルトはその人間への興味を無くした。

夜の森で、二つの影がぶつかり合っていた。
戦場の真ん中で得物をぶつけ合う二人の男だ。一人は大柄で筋肉質な人間――戦士長、アーノルド・ホーガン。彼は全身を覆う鎧を身

に付け、その身を越える戦斧を振り回して戦っている。
そしてもう一人は、褐色の肌に緑色の髪を持つ魔人――ガルティアだ。その手にはギザギザの骨のような刀身がついた細身の剣がある。それを振るい、大男の肌に傷を付けていた。
しかしそれだけではない。時折、ガルティアが放つ攻撃は、爆弾、レーザー、毒、糸など様々であり、それらの攻撃が効果的に効いていた。鎧が意外に頑丈であるため、継ぎ目や薄いところを狙わないとならないからだ。正面からぶち当てれば貫けなくもないかもしれないが、それは出来ていない。というのも意外とこの人間、
「ぐ、はぁ……ムシ使いの魔人が……厄介な奴めぇ……！」
「ひゅー、こりゃすげぇ。兄さん、人間にしてはやるな」
鍔迫り合いをしながらガルティアが口笛を吹く。そこそこ剣に力を込めているのだが、向こうは何とか踏みとどまっている。その事実がこちらを感嘆させる。
……力が強い……なんてレベルじゃねぇな。こいつ、本当に人間か？
まだ本気ではないとはいえ、魔人と力比べをして拮抗出来ている時点で充分おかしい。規格外だ。自分の力を正確に理解しているからこそ、凄さがわかる。
こちらの剣に付いてこれている事実も、感嘆に値する。ガルティアの剣はレオンハルトにこそ敵わないものの、魔人の中では上位であり紛れもない達人だ。それを防げているのならこの人間も達人なのだろう。世界最強の戦士、というのもあながちホラじゃないかもしれない。――人間の中では、という但し書きは付くが。
……このまま押してりゃ勝てるな。
ガルティアは眼前の大男を見て思う。相手に余裕がない、と。
既に幾つかの傷を負い、こちらの剣に付き合った結果、体力もなくなってきているのだろう、先程から呼吸が乱れている。そしてムシによる攻撃には、やはり対応出来ていない。ムシ使いを知っている様子ではあったのだが、詳しく知っている訳ではないのか。
もしかしたら、南の方から来たのかもな、とガルティアは当たりを

つける。もっとも、だからどうという訳でもないのだが。
そして、余裕がない向こうに対して、こちらは結構な余裕がある。いや、別の意味では余裕はないが、戦況的にはこちらが優勢だ。
いつの間にか遠くに離れ、兵士を次々と倒しているハンティは、こちらに戻ってこない。というか周囲に自分達以外の人影はない。きっとハンティは出来るだけ人間を倒そうとひたすら追撃を掛けているのだろう。瞬間移動があるから逃げ切れないだろうなぁ、可哀想に、とほんの少しだけ同情してやる。戦場が悪かった、と諦めてほしい。
……あー、というかしまった。これじゃあ多分、レオンハルトとの勝負は負けだな。
この男に時間を取られすぎた、と思う。今からじゃ間に合わない。それともこの男を仕留めて、獲物のデカさで俺の勝ちだ、と言い張るか。さすがにみっともねぇなあ……。
そんなことを思っていると、ガルティアは腹のムシが鳴るのを感じた。
……腹減ったな……。
なのでガルティアはこう言った。戦斧を弾き、数歩分距離を取ると、相手に向かって、
「――悪い。メシにしてもいいか？」
「……は、はぁ？」
呆気にとられた様に口を開いたのを見て、ガルティアは続ける。
いやな、と。
「昼メシ食べてから何も口にしてなくてな。俺も、俺のムシ達も、腹が減ってしょうがないんだ」
「……だ、だからって何を食うつもりだっ!?」
「大丈夫だ。ちゃんと持ってきてる」
そう言うと、懐から骨付き肉を数本取り出した。城の料理人が作った自信作だ。冷めても美味いのがミソだな、とガルティアは自慢気にそれを見せる。
「悪いが、これ食うまで少し待ってくれないか？　許してくれるんな

ら兄さんにも少し分けてやるぜ？」
「……」
アーノルドが無言になる。考えているのだろうか、やはり戦闘中にこれはさすがに失礼すぎたか。
しかしこのままじゃムシ達が飢えて可哀想だしなぁ、と思う。許してくれないなら食べるのは難しいか。命を助けてやる、と交渉してもいいが、さすがに親玉を逃がすのはどうなのか。自分はともかく、ケッセルリンクやハンティは絶対逃しそうにない。
だが、
「……いいぜ」
「お、本当か？」
ああ、と相手が頷く。助かった、話が分かる兄さんで良かったぜ。
そんな風にガルティアは感謝しつつ、相手を見た。アーノルドがこちらを見て笑みを浮かべている。
「ああ、俺様も腹が減ったしな。ほら、俺にもその美味そうな肉をくれよ」
と手招きしてくる。ガルティアは感心しながら近づいた。
「おお、この肉の良さが分かるか？　これはな、下味から工夫してるんだ。塩胡椒の加減が絶妙で――」
「ああ、よぉーくわかるぜぇ……」
そうしてガルティアは肉を差し出した。アーノルドが手を出して受け取ろうとした瞬間。
「お前の――アホさ加減がな!!」
「!?」
不意に、アーノルドが戦斧を振るった。
その手に差し出した肉ごと、ガルティアに攻撃をぶち当てる。
衝撃とともにガルティアが吹き飛び、木に背中を打ち付けた。
それを見て、アーノルドが大口を開けた。
「がはははははっ!!　バァカ!!　誰がそんな薄汚い肉なんかいるか!!　俺様は屋敷に帰ったらもっと美味いもん食うんだよ!!」
がははは、と馬鹿笑いをするアーノルド。

木に背中を預けるガルティアに向かって戦斧を構え直した。
だが、
「……」
ガルティアは俯いた状態で、アーノルドに見向きもしない。
その視線の先は、地面に落ちた肉であり、
「……」
――彼の中で、何かが切れた瞬間だった。
「がはははははっ！　貴様を殺して、適当に帰らせてもらうからなあ!!」
「……テメェ……」
高笑いをするアーノルドに、ガルティアがようやく視線を向ける。
先程までの笑みは無くなっている。そして、
「がはは――おおっと!!」
アーノルドがその場でふらつく。彼には理由が分からない。
だが、確実に周囲が変化していく。その異変に、異音に、彼は気づかなかった。
ガルティアが声を上げる。
「食べ物を……大事にしない奴は……」
彼には珍しい震えたような声。紛れもない、とある感情の発露だ。
それは、怒りだった。
「――生かしておかねぇ」
「……あ？　――うおおっ!?」
瞬間。ガルティアの腹の大穴が異変を起こした。
そこに周囲のものが吸い込まれていったのである。
「な、なんだこれはあ――っ!?」
アーノルドが地面にしがみつく中、ガルティアの腹は周囲のものを次々と吸い込んでいく。
強い引力で、木々から落ちる葉や枝から地面に落ちた人間の死体まで、あらゆるものを吸引していく。
そして最後に、
「が、ぐ、がああああああ――!?」

とうとう、引力に負けたアーノルドがガルティアの腹に向かって吸い込まれていく。
その最後に、彼はガルティアの静かな声を聞いた。
「……今日は、お前を食ってやる」
そうしてアーノルドは腹に吸い込まれ、その場には影も形もなくなってしまった。

ケッセルリンクは周囲の人間の掃討を終えると、移動しながら隠れていたスラルとの会話に興じていた。
その内容は、
「魔人には、横暴な者は少ないのですか？」
というものである。それにスラルは不思議そうに答えた。
「？　そんなことないわよ。基本的には荒っぽい性格の方が多いし。何でそう思ったの？」
「……レオンハルトだけなら彼が特別なのかと思いましたが、次に会ったガルティアも、随分と懐の大きい人物に見えましたので……」
その言葉に、スラルは納得した。なるほど、出会ったサンプルが今の所皆そういう人物なら、そう思うのも無理はない。
特にガルティアは、
「まぁ、ガルティアは特別人が良いから。失礼なことされても基本的には笑って流すか、気にしなかったりだしね……」
他の魔人に何を言われても、全く気にした様子は窺えない。常に同じ様な態度で接するガルティアは、魔人の中では評価が別れるところだが、部下や女の子には好かれるタイプだ。
そしてケッセルリンクは印象良く見えたらしい。道中に話をした彼女は、それを思い返すように続ける。
「確かに、彼は細かい事を気にしない性格に見えました。後ろ向きな感情などとは無縁にも。……怒ったり悲しんだりしたことはあるのですか？」
「それはな――あ、怒ることはあるかな」

スラルが思い出した様に言う。滅多にあることじゃないのだが。
それにほんの少し、興味を抱いたのだろう。ケッセルリンクが思案するように目を細めた後、ややあって、
「……想像付きません」
そう言った。スラルは真面目に考え込むケッセルリンクを、少し面白いと感じながら、問いに答えようと口を開いた。
「――食べ物を粗末にした時かな」
顔を向けて言うと、ケッセルリンクの表情が驚きでほんの少し動いた。しかしすぐに納得したように頷くと、
「ふむ、なるほど。そういえばムシ使いでしたか。大食らいで有名な」
「そう。加えて、ガルティアはかなりのグルメなの。城だと――いえ、今日は持ってきた食料も少ないから大人しいけど、普段は外にいる時も常に何かを食べていて、それを批評してるの」
でもマズい食事とかでは怒らないのよね、とスラルはガルティアの様子を思い出す。なにせ、自分の食事も、
……いや、あれはガルティアに言わせれば美味しいのよね。考えたら凹むけど……。
気分が沈む。ガルティアが美味しいと言ってくれること自体は嬉しいのだけど、実際はかなり酷いものだし、素直に喜べない。
どうせなら、魔人だけに美味しい、とかなら良かったのに。それならレオンハルトも――
と、そこでスラルは首を振った。思考が脱線した、と。
閑話休題だ。それはともかく、ガルティアはグルメで、食べ物を凄く大事にしている。だからこそ、
「……いつだったかな。ガルティアが食事してる時に、その食べ物を目の前でぶち撒けた人間がいたの。それも、わざとじゃないならともかく、故意にやったからガルティアが怒ってね」
言う。その時ガルティアが起こした行動は、
「その人間を、食べちゃったの」
「……人間、を？」
そ、とスラルは頷く。しかしこれだけ言うと怖い話のオチみたいだ

なぁ、とか余計なことを考えながら、
「といっても、口から食べた訳でも、調理して丁寧に食べた訳でもないけどね」
「……ならどうやって」
「あのお腹に吸い込んだの」
「――――」
今度こそケッセルリンクが言葉を失う。荒唐無稽な話だからしょうがないだろうか。
しかし事実だ。その事実をケッセルリンクに伝えておく。
「ガルティアが魔人化した際に、得た能力がそれよ。お腹に何でも吸い込めるの。人間だろうと無機物だろうと、本当に何でもね」
「魔人化した際の、能力ですか……」
ケッセルリンクが得心したように考え込むのは、彼女も幾つか変化があったからだろう。実際、ケッセルリンクに発現した能力は魔人の中でもかなり多い。逆に、全く何も変わらない者もいるが、その多くは元になった種族や、個人の精神性が影響するものだ。
ガルティアはムシ使いの魔人。彼の場合は、ムシ――使徒が暮らす肉体と、沢山の食事を両立させる結果なのか、と仮説を唱える。
しかしガルティアのあの腹に関しては、あまり理解らない。それに関することを、ケッセルリンクは質問してくれた。
「しかし、あのお腹の空洞はどこに繋がっているのでしょうか？」
「……それが分からないのよね」
少なくとも、外からじゃ何も分からない。彼の身体を調べても、他の身体の機能は正常だ。
おかしいのは、胃だけが彼の身体に見当たらないこと。そして食べ物から得たエネルギーが、きちんと彼の身体に還元されていること。
今の所、理解るのはこれだけだ。理解出来ないのは悔しいが、これ以上調べようとするなら彼の腹に入ってみるしかないが、戻れるかどうかがわからないので試せない。危険すぎるのだ。使徒が出入りしているとはいえ、使徒達が腹の中から何かを持って戻ってきたことはない筈なので、それは出来ないのではないかと見ている。ラウネアな

どは、食べ物を取っておく癖があるようだし。
ただ、それを知っていて、一つ言えることは、
「とりあえず、ないとは思うけど食事を粗末にしちゃ駄目よ」
「……承知しました」
ケッセルリンクが真剣な面持ちで頷く。ガルティアも、さすがに自分やレオンハルトなど親交のある者を吸い込まないとは思うが、万が一も有り得る。元々そんなことはしないが、一応言い含めておいた方がいいだろう、と思った。
……ほんと、あのお腹、どうなってるのかしら。
知らないことの一つであるガルティアの腹。誰か行って調べてきてくれないかなぁ、と呑気に思うスラルであった。
――その同時刻。ガルティアの腹に吸い込まれた、一人の人間がいたとは知らずに。

戦士長の最後

沈んでいた意識が、何かの刺激を受けて浮上する。
魔人の不意の吸い込みを受けたアーノルドはそこで瞳を開けて、周囲を確認しようとして何も見えないことに気がついた。
「な、んだ……ここは……？」
呻くように声を出すのは寝起きだからという訳ではなく、身体に感じる刺激の所為だ。
身体中が痛い。それも血を流したような直接的なものではなく、ヒリヒリと身体が焼けるような痛みだ。その痛みに声を上げそうになるのを、歯を食いしばりながら我慢し、アーノルドは何とかその場から立ち上がった。
足元の感触は妙にぶよぶよとしている。それと何か濡れた感触も。
自分はどうなったのか、まさかあの魔人に食べられたのだろうか。
「そんな訳ねえ……！」
憤るように言うが、根拠がないこともない。この空間は、妙に広いように感じるからだ。あの魔人の腹がこんなに広い訳がないのだ。自分より小さかったのだし。
とにかく周囲を確認しようと思い、アーノルドは明かりが何もないことに気づく。
「あ……？　俺様の、装備が……！」
いや、それどころか、鎧や戦斧まで無くなっていることにアーノルドは気づいた。
……あの魔人!!　俺様から装備まで奪いやがったのか!!
怒りで拳が震える。やはり生かしておかない。ここを出たらぎったんぎったんにぶち殺してやる。
そう決意し、アーノルドは周囲を照らすことにした。
当てはある。天才の自分には詮無きことだ。
「ライト!!」
光属性の魔法を発動して周囲を照らす。
世界最強の戦士である自分は、魔法くらい造作もないのだ。臆病者

が使う魔法なんかに頼りたくないし、頼らないでも充分最強だから使わないだけだ。今でも、これくらいは出来る。
ともあれ、自分の天才っぷりは一旦置いて、周囲を確認する。しかしそこで、
「っ!?　が……っ!!」
背後から打撃が加えられた。後頭部が打ち付けられ、足がぐらつく。
身体中の痛みで随分とキツいが、これくらいでは倒れない。故に襲撃者を拳で倒そうと背後に振り向く。
だが、
「！　な、なん――!?」
今度は頭上から何かが振ってきた。白く薄い線のようなもの。
それが自分の身体と口元に巻き付いてきた為、声が止められる。
……ぐっ、くそがっ!!
おそらくは糸か何かだろう。先程の魔人も糸を使っていたし、間違いない。アーノルドは、それを自慢の力で引き千切ってやろうと試みた。
しかし力を込めても、何やら弾力性と粘つきがあるその糸を千切ることが出来ない。かなりの強度があるようだった。もがいていく内に、糸が次々と身体に巻き付いていく。
「――っ！　――っ!!」
声を出そうとしても口の中でくぐもった音が鳴るのみ。糸が幾重にも重なって口元を覆っているためだ。
アーノルドは再び地面に引き倒される。足まで糸で巻かれては立っていられないのだ。
そして、アーノルドは、これらを引き起こした存在を視界に捉えた。
そこにいたのは、
「……」
「……」
「……」
三体の異形の存在だった。

……な、なんだこいつらは……！

目を見開いてその異形の姿を確認する。

天井から降り立ったのは、下半身が蜘蛛となっている黒髪の少女だ。先程の糸はおそらくこいつの仕業だろう。その表情は仏頂面のままぴくりとも動かず、ただじっとこちらを見つめている。

壁に手足で掴まっているのは、両手両足がサルボボの様になった白髪で黒い肌の少女。口元の牙を剥いてこちらを睨むように見ている。

そして宙を飛ぶのは、手足がとりの桃色の髪の少女。翼でばさばさとはためかせながら滞空し、何を考えているか分からない視線で、こちらを射抜いている。

――それぞれ、ラウネア、タルゴ、サメザン。アーノルドは知る由もないが、彼女達は魔人ガルティアの使徒であり、多くのムシの集合体であった。

三体とも服などは着ておらず、その肌を露出させているのだが、明らかな異形っぷりに性的興奮は湧かない。やはり化け物は化け物でしかないのだ。

そんなことを考えていると、一体の異形がアーノルドに近づいた。サルボボのような異形だ。

一体何を、と思うより先に、サルボボはこちらの顔を掴むと、

「――キシャアアアアアアア!!」

「――ッ!?　――!!」

地面に叩きつけた。その際に、顔を上から押さえつけ、ぐりぐりと擦り付ける。顔面に激痛が走った。

……ガ、ッ……、顔が、顔が、熱いいいいい――!!

顔が濡れ、焼けるような激痛が顔中に広がる。

これは何だ。この顔の皮膚が溶けるような感覚は。

まさか、本当に胃酸なのか。皮肉にも正解を引き当ててしまっているアーノルドに、次なる痛みが待ち受ける。

近づいてきたのは、蜘蛛の下半身を持つ異形。それが足元に近づいてくると、下半身の蜘蛛の口を広げて、

「……！」

「っ――！」
足に牙を突き刺した。痛みが走るが、それだけなら我慢出来た。それだけなら。
次の瞬間。足に何かが入ってくるような感覚を得た後、アーノルドは絶叫を止められなかった。
「――っ!? っ！ っ!! っっっ!!」
激痛が、足元から全身に走った。
その痛みは、足が内側から溶かされているかのような、痛覚に直接酸を塗り込むかのような耐え難い痛みに、頭の中が真っ白になる。
だが、地獄はそこで終わりではなかった。
今度は、とりの手足をもつ異形が、こちらの身体に直接降りてきた。そしてその口で、
「ピィイイイイ!!」
「――――!!」
身体のあちこちを啄み始めた。
全身の肉が、少しずつ千切り取られ、目の前で口に含んでいく。それを見て、アーノルドはようやく異形が何をしているか、これから何をするかを悟った。
……こいつ、ら……俺様を、食べるつもりか……っ!?
それが分かった瞬間、アーノルドは絶叫するようにしながら全身をじたばたと動かした。恐怖と激痛で頭がおかしくなりそうになりながら、必死の形相でそこから抜け出したい、と足掻く。
しかし糸は解けず、異形達も自分を離さない。こうしてる間にも拷問のような食事は続けられ、
「……」
「――――!?」
今度は蜘蛛の異形が足を千切った。鍛え上げられ、岩のように硬いと自慢だった筋肉を物ともせず、いとも簡単に。まるで柔らかくなってしまったかのようだが、そんなことを考える余裕は、今のアーノルドにない。相変わらずの全身の激痛と、新たに足がちぎられた感覚に絶叫しながら蜘蛛の行動を視界に映す。それを食べるつもりか、と本

能に近い部分でそれを認識していたアーノルドだったが、予想に反して、
「……」
蜘蛛は自分の足だったものを蜘蛛の糸で包み込むと、それをそこらにぽいっと投げ捨てるように置いた。
食べないのか、と思ったがそうではない。視界の中では、他の異形も、食事をゆっくりと間を持って進めていた。サルボボは、身体から肉を毟りとる様に。
とりは身体の肉を少しずつ啄むように。
そして蜘蛛は、それを保存食にし始めた。
その行動に、アーノルドは自分の未来を理解する。
こいつらは自分を食べる。しかも一思いに殺るのではなく、ゆっくりと味わうようにして。
長い時間を掛けて異形の餌になるのだ。全身を少しずつ溶かされ、啄まれ、毟られ、激痛を味わいながら自分の身体が徐々に欠損して、異形の腹の中に収まっていくのを目撃する。
そんな未来に、アーノルドは泣き喚くように声を振り絞る。
だが口元からはくぐもった声が聞こえるだけ。誰にもその声は届かない。
いや、届く者はいた。周囲の異形達だ。
蜘蛛の異形が、再び足元、今度はもう一本の足先に近づき、蜘蛛の口を広げる。
……やめろ!! やめてくれ!! 俺様が悪かった!!
必死に制止と謝罪を繰り返すも、蜘蛛は容赦なく、先程のように身体の中に何かを注入する。地獄とも思える激痛が全身を襲うと、もはやアーノルドは子供のように内心で泣き叫んだ。
……いやだあああああ!! 死にたくない!! 死にたくない!!
一体どこで間違えたのか。何故自分のような英雄が死ななければならないのか。英雄とは最後まで活躍し、幸せで終わる筈なのに。
国では英雄と呼ばれ、国王や国の重鎮も、国どころか、周辺国の中でも最強の自分に、一目置かざるを得ない。

国王を除けば国で一番デカい城に、美味い料理。莫大な財産。美女だらけのハーレム。ありとあらゆるものを、自分は持っているのだ。
それがこのような場所で、異形の餌として拷問を受けながら死ぬ。誰にも知られないままひっそりと。
その事実に、頭が発狂する。
……あああああああっ!! 嫌だあああああ!!
お願いだからやめてくれ！ 神様！ 助けてくれ！ もう何もいらないから！ 誰でもいいから！ 命だけは――
――そうして戦士長、アーノルド・ホーガンはゆっくりとこの空間の中で死を迎えた。

夜。大森林の入り口部分。
戦士団の駐屯地があるその場所に、少ない数の兵士がいた。
彼らは千人足らずの予備兵力であり、本隊がカラーの集落の占領を終えて帰ってくるのを待ち続けていた。
兵士達は楽観していたのだ。カラーに、自分達が負ける筈がない、と。
なんていっても王国最精鋭の戦士団。周辺諸国最強の戦士長までついているのだ。負けるはずもない。
先日は運悪く魔人と遭遇してしまったみたいだが、カラーだけなら恐れるに足らず。
そう信じていたのだ。
駐屯地に――黒髪のカラーが現れるまでは。
突然現れたそいつは、入り口の兵士を雷で焼き殺すと、集まってきた兵達を睨みながら告げた。その内容は、
「――あんた達の本隊は、全員もういないよ。……戦士長も含めてね」
それは、と誰かが呻くように呟く。言葉の意味は理解出来るが、とうてい信じられることではない。
負けて帰ってきたにしても、伝令の一人も来ないのはおかしいだろう、と。

どうせはったりだ、やっちまおうぜ、と言葉が上がる。しかしその瞬間、
「……やるなら構わないよ。全員、きっちり殺してやるから」
ぞっとするような冷えた声が、黒髪のカラーから放たれる。背筋が凍るような、というのは言い得て妙だろう。何故なら彼女は、声を上げた兵士の背後に瞬時に移動すると、その首を斬り捨てたのだから。
誰もが何が起こったかわからず、固まったように動かない。そんな中、カラーは見下すように言った。
「ふん、帰りたいなら帰るといいさ。こっちも万を相手にするのは疲れたしね。――ただし」
そこでカラーの女は言った。その赤くなった瞳を凶悪に煌めかせ、兵達を射抜きながら、
「――次、また来るようなら容赦はしない。地獄を見せてやるから覚悟するんだね……！」
「――――」
言葉を失なったのは、そこでもう戦意が失せたからだ。相手の殺気を受けた時点で、少しでも訓練を受けている兵士達は分かった。
この女には敵わない、と。下手に何かを言えば、気分を害せば次の瞬間にでも殺される、と。
先の戦いで魔人すら目撃していない予備兵達は、彼女が魔人なのではないかと疑う程に恐れていた。よく思い返してみれば、魔人は男だったと報告が上がってる筈なのに、それを思い出す余裕すらない。
それほどに彼女の敵意、殺気、そして死臭が凄まじかったのだ。
故に、兵達は一様に首を縦に振る。死にたくないという一身で。
その場の代表であり――もはやこの森に来た兵の中で、唯一の隊長がおそるおそる言った。
「……わ、わかった。味方を確認次第、直ぐに本国に帰還しよう」
「……はぁ」
その言葉に、彼女は溜息をついた。もしや理解してしまったのか。一応森に入った味方の有無を確認して事に当たろう、と。
だが撤退する際には、一応死体の確認もいる。装備などの遺品を、

国で待つ家族に届けてやることも、生き残った兵士の責務だからだ。
そのためこの言葉は間違ってない。そもアーノルド戦士長や、他の隊長が生き残っているなら、確認も取らなくてはならない。
そのことを理解してくれたのか、彼女は息をついた後に低い声で続けた。
「……その言葉、忘れないようにしな。少しでも森に深入りするようなら、敵と見做すからね」
「りょ、了解した。肝に銘じておこう」
こくりと息を呑んで頷くと、それを最後に黒髪のカラーは消えた。
文字通り、視界から、その場から。こちらの背後を取ったように消えてしまったのだ。
「……ど、どうします、隊長……？」
声の方向を身体ごと見ると、不安そうにした兵士が指示を聞いてきていた。先程の殺気に当てられているのだろう。隊長は、極めて冷静な声で言う。
「……言葉通りだ。味方の死体を確認次第、本国へ帰還する。夜中ではあるが一大事だ。全員起こして事に当たれ」
「……はっ、ではそのように」
命令を受けた兵士が周囲のテントに向かっていく。それを見て、隊長は動いた。
呟く独り言は、誰にも聞こえないくらいの小声で、
「ああ、神よ。申し訳ありません。カラーの血を捧げることに失敗してしまいました……！」
懐にある本をぐっと握りしめて言う。
折角、昔に聞こえた神の言葉と同じ様に、血を捧げようと思ったのに。
そうすれば信仰が認められて、再び神の声が聞こえると思ったのに。
失敗してしまったらそれは無理だ。今回は諦めるしかないだろう。
だが、
「次こそは……再び血を……！」

捧げてみせる。全ては人間の為だ。
神は人間を救済するもの。魔物に支配された人類を救う為に、神は我々に使命をお与えになったのだ。
そのためならば、自分達はどんなことでもしてみせる。この命に変えても。
そうして、世界初の宗教組織の信者は仕事を果たす為に動き始めた。
「――ふふ、ご苦労さま。中々面白かったわよ」
――ここではないどこかで、彼に対する言葉が、掛けられているとも知らずに。
「……今回は成功だけど、このやり方は効率が悪いわね。指示を伝えても大きなことは出来ないし……」
その声の主は悩む。自らの仕事について。
もっとも効率の良い手段を模索していた。
「やっぱもっと影響力を増やさないと駄目ね。後、一々不適当な相手に声を掛けるのも非効率だわ」
影響力を増やすにはどうすればいいだろう。やはり最初はちゃんとした名前を付けることからだろうか。出ないと影響力が高まらないだろう。とりあえずあの人間はもういらないな。影響力皆無だし、指示を微妙に勘違いしている。その結果、目的を達成出来たのはとても愉快ではあるが。
その存在は、数秒考えて、そして喜色を含んだ声で言った。
「……そうね。――ＡＬ教なんて、どうかしら」
なにせ、私の組織だからね、と最後に音を発し、その存在は声を止めた。
――世界初の宗教組織が、本当の意味で、その産声を上げようとしていた。

「――ただいま」
「ん……戻ってきたか、ハンティ」

夜の森、翔竜山に近い一角にて、レオンハルトは声の方向に振り向いた。
他にも集まった面々が、瞬時にその場に現れたハンティに視線を向ける。一度別れた全員が無事人間の殲滅を終えて、その場に揃っていた。
レオンハルトはハンティに返事をすると、続けて確認するように声を向ける。
「ちゃんと伝えたか？」
「言われた通り、頭も含めた全員が死んだ……って、脅してきたよ」
「そうか……ご苦労だった」
ん、と素っ気なく返事をするハンティ。一仕事終えたことへの疲労、そして仲間の為の戦いが終わったことへの精神的圧迫から解放されたのであろう。ハンティが目を伏せて大きく息をついている。
……多分、問題ないだろう。
レオンハルトは内心で仕事の完遂による満足を多少得る。まだ完全に撤退した訳ではないが、それも時間の問題だろう、と。
しかし、それに水を差す者がいた。ガルティアだ。彼は首を捻りながら浮かんだであろう疑問をそのまま口にする。
「何で全員やらないで一部は見逃すんだ？　殺した方が安全だろう。手間も掛からないしな」
器用に肉に噛りつきながら言うガルティアを横目で見る。そして淡々と、
「生き残りが一人もいなければ、真偽が分からなくなる。そうすれば、この森は再び襲われる。予備兵は国元に、何が起こったかを知らせる役割がある」
一種の示威行為。相手にそれを分からせるのだ。次にこの森を攻めたらどうなるかわかってんだろうな？　と脅している。
生き残りが一人もいないのは、それはそれで恐怖だが、それだと本当にカラーや魔人にやられたのかと疑問が残る。人間は愚かで、自分の信じたいことを信じる傾向にある。現実味が無さすぎる現象に対しては、警戒心が薄いのだ。

ましてや魔軍の脅威を実際に味わったことのない国の偉い奴らは、何かの間違いだろう、と再び森を攻めさせるかもしれない。証言を行うものがいないのなら尚更だ。

とにかくこれで、数年か数十年は稼げるだろう。場合によってはもっとだ。その間に、カラーも再び盛り返すだろうし、その頃には一々手を出さなくても、自力で人間を追い返せる様になるかもしれない。元々人間よりは強い種族だ。

そんなもんか、と納得するガルティアに、しかしレオンハルトは厳しい視線を浴びせた。

「……というか、お前が向こうの指揮官の首を残していればもっと効果的だったんだがな」

「あー……それは悪いな。ついカッとなってよ。腹も減ってたし」

バツが悪そうに頭を掻くガルティアに、視線が集まる。とくにケッセルリンクなんかは目を細めて、何かを考えるように見ているし、スラルやハンティは何が起こったかを想像して呆れ返っている。キャロルは……ガルティアを見ているようで、飛んでいた蝶を目で追いかけていた。

「それで、今日はどうするの？　もう夜も遅いけど……」

早々にガルティアから視線を切ったスラルが、こちらを見て尋ねてくる。予想していた質問に、予め決めていた答えを、口から出す。少し言い難いが、

「……このまま、山に入ろうと思うんだが……どうだ？」

「え、今から？」

態々夜の山に挑むのか、と言外にそう問うてくる。こちらとしてもどうだろう、と思うが、そうしたい理由もある。それを聞かせる為に、レオンハルトは続けた。断られたら困るな、と思いながら、

「ああ。これ以上、アイツを待たせる訳にはいかないからな」

言った言葉に義務感がある。決闘を約束した相手へのものだ。それを違える訳にはいかないのだ、とレオンハルトは半ば説得するように言う。

しかし、スラルは半目でこちらを見ると、

「……もう何日も遅れてるんだから数時間くらい誤差でしょ」
「ぐっ……！」
痛いところを突かれて胸が痛くなる。確かにそれもそうだ、と微妙に納得してしまう自分が悔しい。
更に皆が口々と、
「えー……俺、腹減ったんだけどな……一旦食事休憩にしないか？」
「夜の山登りとか、普通に考えたらないでしょ。馬鹿なの？」
「レオンハルト様は、敢えて危険な方をお選びになるのですね！　そのマゾさに感服致しましたわ！」
「……まぁ、私は夜でも構わないが……」
「……」
思いっきり文句を言われて心が折れかける。ケッセルリンクのフォローが胸に染みるな……。
と、内心に傷を負うも、それでも、とレオンハルトは言葉を尽くす。言う言葉はスラルの質問の答えになるもので、
「……それでも、俺がそれに甘える訳にはいかない。行けるなら行くべきだ」
これまでのはあくまでも怪我の療養と、自分で決めた取り引きの時間だった。かのドラゴンとも、女性を安全な場所に、と約束したものだ。
だからそのやるべきことが終わったのならば――ただ行くのみ。そう思い、思いのままに言う。
「約束した。――だから、ついてきてくれ」
と、言うのは我儘だろうか。だが、一人でも行く、と言わないだけ狡さは使ってないと思う。そうすれば付いて来ざるを得ないのだ。特にスラルが嫌がる。それに付け込むのはよくない。
あくまでも、決定権はスラルにある。故に、お願いするような形で言った。
答えを待つ。
そしてスラルが息を吐いた。そしてこちらを責めるように見上げて、

「……今回だけだからね」
「！」
許しを得た。同時に、周囲も動く。
準備の動きだ。魔王がそう決めたのならば従う。それもあるが、皆は最初からそうなることが分かっていたように、
「しゃあねぇ。山の幸でも取って食べるか。夜行性の獲物もそこそこいるだろ」
「はぁ……ま、どの道集落に寝泊まりする訳にもいかないしね……さっさと終わらせて帰るしかないか……」
「わたくしとしては、カラーにレオンハルト様の武勇伝をお伝えするのを楽しみにしていたのですが、レオンハルト様が言うなら致し方なし、ですわ！」
「……そういえば戦闘中。妙に騒いでいたな。集落で何かあったのだろうか……」
……こいつら、最初からわかってたのに、俺を責めてたのか……。
そういう思いがある。だが、それはじゃれ合いのようなもので、我儘を言うこちらに対するちょっとした罰なのだろう。だからそれを甘んじて受けながら、レオンハルトは決意する。
ここまでお膳立てしてもらったのだ。こうなったら必ず勝って、全員で山の頂を目指そうと。
そう思っていると、
「――ま、待って下さいよー!!」
と、人影がきた。
森の中からこちらに向かって走ってきたのは、見覚えのあるカラーの少女。
ペールだった。彼女は息を切らしながらも必死に声を上げて、
「わ、私も！　私も付いていきます!!」
そう言って眼の前まできたペールを皆が見る。
そして代表するようにケッセルリンクが声を掛けた。
「……ペール。君は戦後の後処理などで忙しいのではないのかね？」
うっ、とその言葉に呻くペール。痛いところを突かれたと表情が歪

む。
　しかし表情を元に戻す。少し慌てたように、
「は、はい。だから一通りの指示はしてきました！　だから一日くらいは大丈夫な筈です……！」
　両手を胸の前に出して言う。その胸を見てスラルから若干の敵意が漏れたのは気の所為だろう。気の所為と思わせてほしい。
　だから、とペールは自分達に向かって頭を下げた。
「い、一緒に行かせて下さい……！」
　一日だけでいいので、という言葉にレオンハルトはスラルを見た。
　そして彼女は、ペールをちらりと見て今度こそ頭を抱えながら、大きな息を吐いて、
「……わかったわよ。好きにして」
「ほ、本当ですか!?」
　ペールが驚愕で頭を上げてスラルを見る。再度の承諾の意味を示す頷きがきたことで、ペールはお礼を言うと、
「あ、ありがとうございます！　――では、行きましょう！」
「……おお？」
　と、不意にこちらに身を寄せてきた。腕を組むようにして胸を押し付けてくる。肘が谷間に挟まれて心地よい感触を感じた瞬間、スラルの目がきっと見開かれ、殺気がきた。
「ちょ、ちょっと!!　好きにしてとは言ったけど、そこまでは許してないわよ！　離れなさい!!」
　憤った様子のスラルの言葉に、ペールは直ぐ様怯えて離れるかと思ったが、ペールはより一層こちらに身を寄せてくると、スラルに向けて、
「……な、何でですかぁー？　わ、私は夜の山が怖いから、レオンハルトさんに守ってもらおうと思っただけですしーおすしー。いいですよね、レオンハルトさん？」
「あ？　いや、まぁ……」
　こちらを見上げて確認を取ってきたので、勢いに押されて曖昧に頷く。すると、再びスラルの方を見て笑顔で、

「レオンハルトさんからの了承は得ましたのでいいですよね。ふふん。ささ、どうぞ皆様お先に。私は足が遅いので、レオンハルトさんとゆっくり後ろから付いていきますから」
更に距離を近づけてきたペールを見て、周囲が距離を取る。何故かというとスラルが笑みで額に青筋を浮かばせていたからで、
「……へぇー、なるほどねー……。――どうやら死にたいようね」
「!?　おい馬鹿やめろ!!」
スラルが魔法陣を出したのを見て必死に叫ぶ。俺ごと吹き飛ばす気か、と。
片腕に抱きつくペールは、しかしそれを見て身体を一瞬ビクリとさせるが、こちらに向かって、
「きゃ、きゃー！　レオンハルトさん守って下さい!!　このままじゃレオンハルトさんも怪我をしてしまいます!!」
「っ……！　この……！」
その言葉にスラルが魔法を止めた。そして水を得た魚のようにペールがまくし立てる。
「だ、駄目ですよーぅ？　レオンハルトさんは怪我が治ったばかりですから酷いことしちゃ駄目なんですぅー。……ということで、レオンハルトさん、行きましょう。私を抱きかかえて下さい」
「……いや、お前……」
今度は首に腕を回してきた。なんかこいつ、性格変わってないだろうか、と胡乱な視線で見る。妙に大胆になったような気がする。
それを見たスラルが、魔法を止めたが、今度は怒ったようにこちらに向かってきて、
「この……言わせておけば……！　離れなさいよっ!!」
「うおっ!?」
拳を振り上げたのでそれを回避する。構えも何もかもが無茶苦茶だが、魔王のパンチだ。当たったら大変なことになる。というか普通に命の危険を感じた。躱したこちらを見て、スラルが叫ぶ。
「こらっ、レオンハルト！　何躱してるのよ！」
「当たったら怪我じゃすまないだろうが！　とにかく落ち着け！」

「きゃーん！　レオンハルトさん、怖いですー！」
「……っ！　これが落ち着いてられるかー!!」
「うおおおおっ!?」
　スラルが向かってきたので、その場から逃げる。山の方向に駆け出すと、背後からスラルの声が、
「こらーっ！　待ちなさいレオンハルト!!　そこの女、殺せないでしょうが!!」
「そもそも殺そうとするなよっ!?」
　スラルが追いかけてくるので逃げる。そんなこちらの耳に、ケッセルリンクの声がかろうじて聞こえた。
　こちらのやり取りと、ペールに視線を向けて、ぽつりと呟く。
「……ふっ、ペール。逞しくなったな」
「あれでいいのか……」
「あっ、元々そういう子って訳じゃないんだ……」
　珍しくガルティアがツッコミを入れるくらいにはおかしい。げんなりとしたハンティの横で、キャロルがこちらに向かって手を振ってきた。
「レオンハルト様ー！　追いかけっこならわたくしも混ぜてほしいですのー!!」
「正気かお前!?」
　自分の使徒のお気楽ぶりに驚愕する。混ざりたいなら混ざってみろ、と思うが、混ざらせたら生命が危ういので拒否する。キャロルが残念そうになるのを尻目に見ながら、レオンハルトは冷や汗をかいて思った。
　……ライゼンと戦う前にまた怪我とか勘弁だぞ……！
　結局、しばらくスラルとの追いかけっこは続いたが、埒が明かないと感じたハンティがレオンハルトを捕まえると、ペールは引き剥がされ、皆の説得を受けたスラルから命の危険がない適度かつ、鮮烈なお仕置きを受けていた。
　魔法って怖ろしいな、と皆が感じ、改めてスラルだけは怒らせないようにしようと、固く誓った瞬間であった。

剣の畢竟

――レオンハルトの休暇、十一日目。
ライゼンは、ただそこで待ち続けていた。
満天の星空の下、ライゼンは時折上を見上げたり、下に続く坂道を見たりと視線を行き来させる。
手持ち無沙汰な理由は、眠れないからだろう。
……さすがに寝すぎたか。それとも……期待しすぎたか。
どちらにしろ、かなりの時間を待ったには違いない。
何しろ千年ぶりに行われる決闘。
そして、自分が終わるかもしれない時間だ。
ただそれだけを待ち続けてきた。それだけに縋って生き続けてきた。
しかしだ、来なければ何の意味もない。
臆病風に吹かれて逃げたが、はたまた別の理由か。
とにかく、これ以上は待てない。待つのは夜明けまでと、ライゼンはそう決めていた。
夜が明ければ自分は、終わりを求めて再び彷徨うだろう。
この広くて狭い世界で、悠久に近い時を彷徨う。
そうして――いずれは狂うのかもしれない。他の同胞達の様に。
ライゼンはかつての仲間達が狂っていくのを幾度となく見てきた。
自分がそうならない理由は分からない。ただ、そうなってはいけない気がしただけだ。今もその思いはある。
だがそれも、奴が来なければ直に折れるだろう。そんな確信にも似た予感がある。
……そうは、なりたくないものだな……。
そこで不安や悲しみ、後悔を抱くのは精神的に弱くなった証だろうか。ドラゴンに寿命や老いは存在しないが、心が老いてしまったのかもしれない。
これでは、マギーホアのことを笑えないな、と過去の友人を思い出しながらライゼンは、

「……お」
そこで音が聞こえた。
下方、山道の下の方から聞こえる音だ。そこから複数の人の声が聞こえる。
複数人の足音もだ。その事実に、ライゼンは疑念を抱いた。
……一人ではないのか？
何しろ決闘を一度止めた理由が、女を巻き込ませない為だった筈だ。そのために魔人レオンハルトは、一度下山していった。
ならばこそ、また別の者を連れてくる道理はない。
……それとも、女の方が心変わりしたのか？
もしくは立会人を呼んだとか、はたまた勝てないと解り、一緒に戦ってくれる仲間を呼んだか。
そんな様々な思考が頭に浮かぶ。
……まぁ、一人くらい増えても構わんか。
それくらいなら強者の余裕として受け入れてやろう。誇りと言い換えてもいい。いつの時代も、相応の実力者相手に敵わないとしれば、弱者は群れるものだ。
特に人類は群れるのが得意だと聞く。そうなってもおかしくはあるまい。
ならば鷹揚に受け入れるのみだ。それで納得のいく終わりが得られるのであればそれでも構わない。それに、
……あの魔人が一緒に戦うというのなら、それは相応の理由があるものだろう。
なにしろあの魔人は、強い相手と戦うことが好きな戦闘狂だ。ドラゴンと大差ない程の。ならば一人でやりたがるだろう、と憶えのある思考から根拠を示す。
故に、来るなら来い、とそういうことだ。
そうして身を起こし、坂道の下から来る影に視線を向ける。すると、
「――着いたか」
「――――！」

視界に最初に飛び込んできたのは、やはり金髪灼眼の男――レオンハルト。
自然と口角が釣り上がる。喜色の感情が胸に湧き上がる。
来たのならば構わない、一人二人なら見物人だろうがなんだろうが許可しよう。少しテンションを上げて、ライゼンは視界でそれを見た。
そして次に見えてきたのが、
「……うわっ!? ほ、本当にいるのね……!」
「どれどれ……? うおっ、確かにデカいし、強そうだな……」
「あれが……伝説に聞く四大聖竜か。ふむ、凄まじい力を感じるな」
「でっっっっかくて、強そうですのー!! レオンハルト様!! アレ、家で飼いましょう!」
「す、捨てわんわんみたいに言ったら怒っちゃうんじゃ……あ、あはは、私は何も言ってないですからねー? やるなら、私とレオンハルト様は除いてくれれば……」
「……ライゼン……」
「……」
ライゼンは、ぞろぞろと広場に来た連中を見ると、唖然として固まった。
数にして七人。その誰も彼もが、強力な力を持っているのか、大きな存在感を放って――いや、よく見れば数日前に見たカラーもいるから、あれはそこまで強くない。それと、金色の髪の少女もそこまでではないだろう。
だが他の連中は確かな実力がある。特に白髪の少女。あれは桁違いだ。
今まで見てきた強い相手――マギーホアやアベルには劣るが、間違いなくそのレベルにいる存在だ。あれはもしやすると、そういった存在なのだろうか。
……それに――って、いや待て、そうじゃないだろう。
もっと大きな疑問が、ツッコミどころがある、と思考を止めるライゼン。

故にそれを口にするべく、ライゼンは声を放った。声を掛ける相手は、前に進み出てきたレオンハルトだ。
「……来たか」
「ああ。……悪いな、遅くなっちまって」
ああ、うん、とライゼンは半目になる気持ちを抑える。それはそうだが、問題はそこじゃない。
故に低い声で、
「……それは構わん。ちゃんと来たことには変わらない。だが――」
そこでライゼンは、言葉を区切って言った。一息で、
「――幾ら何でも多すぎだ!!」
声とともに、苛立ちとツッコミを兼ねたドラゴンブレスを、レオンハルトに向けて放った。

「レオンハルト!?」
「大丈夫だ、スラル！」
心配の声を背後から浴びせるスラルに、レオンハルトは安心させるように返事をした。
この程度は以前もじゃれ合いとして行なったものだ。
今回も、そこまで強いものじゃない。故にそれを説明する。
「これくらいのブレス、弾けばいい！」
故にそうした。細長い身の丈を越える直剣――オル＝フェイルを引き抜いて、光線型のブレスに合わせる。
それを両断するように弾くと、
「こんな感じで――あ」
レオンハルトは、そこで己の失敗を悟った。しかし自分への被害があったわけではない。ちゃんとブレスは弾いた。
だが、その軌道が背後のスラル達に向かうものであり、
「――!?」
ブレスが、彼女達に直撃した。

土煙が辺りに舞う中、魔法の光で辺りを照らすスラルが、やがて映った。
その周囲には、他の皆もいる。それを見て、レオンハルトは安心したように息を吐いて、
「……良かった、無事か」
「こらぁ――!? 無事か、じゃないわよ! 貴方、私のこと殺す気なの!?」
見れば、スラルが手を前に出して、魔法バリアを幾重にも張りながら怒っている。ガルティアが珍しく驚いた表情で、
「あっぶねー……普通に気抜いてた。スラルがいなかったら吹き飛ばされてたかもな」
「……一応身構えてはいたが、躱すだけで精一杯だな。大丈夫ですか、スラル様?」
ケッセルリンクも安堵の息を吐きながら言う。彼女は、目の前のスラルの身を案じて声を掛けた。すると冷や汗をかいたスラルが、
「大丈夫だけど、やっぱあのドラゴン桁違いね……バリアが全部剥がされちゃったし……もっと沢山張っておかないと……」
「あ、助かります。バリアマシマシでお願いしますね」
「……貴方だけ、ちょっとここから離れてみない?」
「な、何でですか!?」
ペールが、スラルの厳しい言葉にたじろぐ。まだ気にしているのだろう。そんなやり取りを全て無視して、お気楽な様子のキャロルが手を振ってきた。片手を口に合わせ、
「レオンハルト様ー! こちらは大丈夫ですので、頑張って下さいましー! 応援してますわー!」
……あいつら、呑気だな……というか気が散る……。
背後で色々と会話を交わす皆を感じる。何だか、キャロルが地面に可愛らしい柄のシートを敷き始めた。そこにガルティアがメシを広げて――って、本当にピクニックする気か?
静かなのはハンティくらいだ、とレオンハルトは出来る限り背後を

無視することに決めて、眼前の巨大なドラゴン――ライゼンを見る。
すると相手が答えた。ちらりをこっちの背後を見て、
「……何なんだあいつらは。というか、どうして人が増える？」
「……悪いな。アレはうちの使徒と魔人と魔王だ。無視してくれ。戦いは俺一人でやる」
魔王、という言葉でライゼンがぴくりとするも、しかし直ぐに視線を切った。言わない方が良かっただろうか、脅迫みたいになったかもしれん。
だがその心配は杞憂のようで、ライゼンが厳かな声で言う。
「……なるほどな。まぁ、とやかくは言わん。戦いに来ただけで充分だ」
そこでレオンハルトは、ライゼンが微妙に安堵しているような雰囲気を見て、眉をひそめる。
問う言葉を口から、
「どうした？　妙に安心してるみたいだが……」
「っと、気にするな。こっちの話だ……」
……？　一体なんだ……？
妙な違和感を感じる。ライゼンから感じる圧の中に、別の思いが隠れているような――そんな気がするのだ。
しかしそれが何かまでは分からない。戦意は感じる。だが、
「――では、行くぞ」
「――！　ああ」
考えていると言葉が来た。開始の宣言。それに応じる。
剣を正面に構えて剣先を向けると、ライゼンの戦意ともいうべき威圧が爆発的に高まった。
そして言葉を作る。それは同時に近いが、相手が先で、こちらが後だ。故に応じる形になるのは、
「直ぐに死ぬなよ」
「悪いが、最初から手加減は抜きだ」
言葉は違えど、言いたいことは一緒だ。
次の瞬間、お互いはお互いに向かって駆けた。

ライゼンは四肢に力を込めた。
全身が、前の魔人に向かって行く。その奥からは、注目がこちらに向けられているが、
……それを気にしている余裕はない！
奥には複数の強者の匂い。そしてその中でも最たる存在である魔王がいる。
そんな存在に見られながらの決闘だ。気にならないといえば嘘になるが、それをすれば目の前の相手に失礼だ。
故に集中する。気にするべきは目の前の魔人のみ。そして最初の攻撃が来た。
「――！」
こちらに低く駆けてくる魔人が、徐ろに剣を振った。
距離はまだ遠い、故に来るのは以前にも見た、
「斬撃か！」
それも遠距離から飛んでくるもの。それがこちらの顔に当たって微かな衝撃を伝えてくる。当然切り傷はない。
このダイヤの鱗に、その手の攻撃は通用しない。
なのでそれは無視した。ただ真っ直ぐに相手に向かう。
「効かないと理解ってるだろ……！」
変わらず斬撃を浴びせてくる魔人に、それじゃ拍子抜けだ、という意味を込めて言葉を浴びせる。
ライゼンは思う。自分を倒すには、斬撃では無理だ、と。
厳密には絶対に無理というわけではないのだが、それは正攻法ではないし、タイミングも難しい。
倒そうとするなら別の方法を取った方が手っ取り早いのだ。一部の魔法であれば手っ取り早いが、相手の魔人は魔法が使えない様だし、
……こちらの有利だな……！
相変わらずそれは変わらない。だが、相手にも変化はあった。

視界の中で、魔人が身体を左右に振っている。それは緩急織り交ぜたフェイントだ。
相手も馬鹿正直に突っ込んでくる訳ではない。技術をもって、こちらの目を騙そうとしてくる。それは人の足を使った細やかな動きであり、
……鬱陶しい……！
身体のサイズの所為だろうか、相手の動きがやけに細かく見える。それを完全に視界で捉えようとするのは、出来なくはないが面倒なことだ。
ライゼンは何とかそれを捉えて、右足を振った。魔人を爪で引き裂く、あるいは踏み潰すような軌道で振るう。
だが、
「――当たらねぇよッ！」
魔人が、一歩だけ加速して、その足の範囲から逃れた。その動きは、……最高速を、隠していたか……！
通常の速度を少しだけ落とし、以前にも見た瞬間的な加速でその場からかき消える。常に最高速ではその行動は使えない。
それが緩急というものだ。しかしこの魔人は、その幅が広い。
しかも徐々に加速していくものでない為、一瞬で相手はそこから消えたように見える。事実、相手はそれくらいの速度なのだ。
目を慣れさせない、そんな方法まで使ってくる相手に、ライゼンは応えた。剣を横から、足に向かって振るう魔人に、
「効かないと言ってるだろうが……！」
再度言葉とともに足を振るう。今度は左足だ。
しかし今度は外れても力を込め、
「おお……！」
「っ！」
そのまま身を低くして前進した。
ほんの少しだけ逃げようとする魔人を、そのまま追いかけるような形で駆ける。体当たりの形だ。
その攻撃に、魔人が一瞬焦ったのか、目を見開いて離脱しようとす

る。こちらもそれを追いかけ、
……最高速ではそこまで変わらんぞ！
軌道を修正して、足をぶち当てた。しかし、
「当たらねぇって言ってるだろうがッ！」
「――!?」
と、更に加速して攻撃から逃れた。それは、
「まだ上があるか……！　最高速を隠していたな!?」
再度の思いを言葉にする。ほんの僅かだが、先程よりも速い。
つまり魔人は、こちらよりも半歩ではなく、一歩分速い、とそういうことだ。
人の身で――いや、魔人の身で、速さだけとはいえ、こちらを越えてくる身体能力。そして圧倒的な技術。
その事実に、認識を一段階上げる。攻撃を当てるには骨が折れそうだと。
しかし相手もこちらを傷つける術をまだ得ていない。なら、
「だが、まだこちらの優勢よ……！」
「それは、どうだろうな!?」
魔人が叫ぶと、緩急を織り交ぜて斬撃を振るいつつ、視界での移動を繰り返した。

……何よアレ、反則じゃない……!?
ダイヤモンドドラゴンという種のドラゴンを見たスラルは、その戦闘を見て驚く。
レオンハルトから聞いて半信半疑であったが、その四大聖竜だというドラゴンは、
「普通に知性もあって技術もあるなんて……！」
「ん？　そういえばそうだな。ドラゴンって普通に話せるのか」
「ああ、私もドラゴンが人語を解するところは初めて見た」
ガルティアが不思議そうに言う。それに同意するのはケッセルリンクだ。翔竜山麓の森で暮らすカラーにとって、ドラゴンは全く遠い

存在という訳ではないのだろう。興味深そうにライゼンと言うらしいドラゴンを見ている。
実際、自分も知性あるドラゴンは初めて見る。魔人化や、使徒化したドラゴンは除いてだ。
こちらの背後では、先程ついてきたペールがドラゴンを見て泡を食っており、その鱗を遠目に見て、
「あ、あれってひょっとして、全部ダイヤですかね!? だとしたら……」
言いたい意味は分かる。それに答えたのは、山に登り始めてから言葉少なくなったハンティだ。彼女は、ドラゴンを見つめながら低い声で淡々と、
「……斬撃なんかは効かない。効くのは一部の魔法のみ。だからレオンハルトにとっては相性が悪いね」
その言葉に皆がハンティに注目した。戦いを見続けながらも、ガルティアが軽く尋ねる。
「? お前、あのドラゴンの事知ってるのか?」
「……ちょっとだけ」
へぇ、と感心するに唸るガルティア。しかしスラルは、その理由に見当がついていた。
それをこの場で言うことはしない。だが、ハンティ自らそれを匂わせる発言をしたことは、何か意味があるのだろうか。
実はそれほど気にしていないのか、心の内は不明だ。
ただ、彼女の視線と表情には、何かが込められているのだろう。目を細めて、じっと見続けている。
スラルは彼女の解説に内心で同意した。あれが全部ダイヤモンドなら、
「……レオンハルト」
不安な声が漏れる。心に迷いが生じる。
今から止めるべきか、加勢するべきか。その判断に揺れる。万が一でも、レオンハルトを失いたくない。
それが劣勢だというなら止めるべきだ。

だが、
「……皆様、大丈夫ですわ！」
そこで大きく声を上げたのは、レオンハルトの使徒であるキャロルだ。
彼女は一切の不安を感じていない瞳で、自慢気に胸を張る。そして続けた。
「レオンハルト様には何らかの勝機があるはずですの！」
「そ、そうなんですか……？」
半信半疑といった様子でペールが問う。
しかしキャロルは大きく頷くと、
「勿論ですわ！　顔を見ていれば分かりますもの」
言って、キャロルは前方で戦闘を続けるレオンハルトをキラキラとした眼差しで視線を送る。釣られて皆がレオンハルトの顔を見る。
するとそこには、不敵というべき笑みが浮かんでおり、
「あの顔は、レオンハルト様が楽しんでいる。そして何かを試そうとしている時の顔ですの！」
言って、キャロルが声を上擦らせた。視線の先では、ドラゴンの攻撃を躱したレオンハルトが、笑みを濃くして、
「ほら！　来ますわよ！　レオンハルト様が何かをやりますわ！」

……やっぱり、硬いな……！
レオンハルトは、その事実に喜悦と苦々しい感情が合わさった様な気持ちであった。
剣を、眼の前のライゼンの身体を両断する気持ちで振るうも、それは呆気なく弾かれる。
その隙を見逃すことなく、ライゼンは腕をこちらに向かって振るう。あるいは踏み潰すつもりで振られるそれを、足に力を込めることで回避を行えば、
「逃さん……！」
「――！」

それを追尾するかのように顔を向け、頭突きを行なってくる。
咄嗟に剣を横に構えて防御。ライゼンの頭の鱗と、こちらの魔剣がぶつかり合い、火花と甲高い金属音を鳴らす。
腕が軋みを上げるのは、ドラゴンの膂力と体重を完全に受け止めきれない証拠だ。そして質量と速さの分、それは強くなる。
足で踏ん張ろうとして、途中で剣を弾く軌道に切り替える。やはり力では勝てないか、と思い、残念と未熟を感じる。
技術と速度をもってその場から離脱すると、向こうから声が来た。
「その程度か!?」
逃げてばかりでは勝てんぞ、と叫ぶライゼンにほんの僅かの違和感。しかし気にするべくもない程のものだ。挑発と受け取り、レオンハルトは眉を立てる。そして彼の顔を見据え、
「安心しな！　今からとっておきを見せてやる！」
「ならば見せてみろ!!」
言葉とともに突進が来た。対するこちらは剣を正眼に構える。
白の巨躯が、その大きさではあり得ない程の速度で距離を詰めてきた。それを両目で見つめ、
……集中しろ。
意識を目の前の事象と、自分の内側に向ける。やることは明確だ。
相手の取る行動は分かる。突進、それも先程と似た、正面からの頭突きによる攻撃だ。
それだけで、自分は大きなダメージを負う。戦闘不能になる訳ではないが、あのダイヤの鱗とあれほどの巨体だ。威力は理解している。
その上で、一瞬だけ上回る。技術をもって巨体を制す。
視界の中、こちらの予想通りにライゼンの額が近づいてきた。ゆっくりとそれが来る。
そうして当たる瞬間、レオンハルトは行動を起こした。
剣先で、ライゼンの頭を下から上に受け流すように滑らせた。
「――!?」
攻撃が空を穿ったことで、ライゼンの動きが一瞬止まる。
こちらを見失ったのか、体勢を立て直しながらこちらを視界で捉え

ようとする。
だが、このままでは数瞬後に見つかるだろう。こちらがいるのは、彼の顎の下、足元に近い場所だ。
故にその前に、
――決める。
意識は自分の剣とその標的のみだ。
狙う場所は、彼の顎の下にある逆鱗。ドラゴンが身体の中で、触れられる事を最も嫌がる場所。
やるべきは、数日前に習得した剣の畢竟。剣理の到達点の一つ。
確実に攻撃を通すための一手。レオンハルトはそれを振るった。
連撃、連斬。――それらは一瞬の内に行われる。
……一瞬、連斬――
「――――」
――剣が、二つに別れた。
瞬間。逆鱗に膨大な衝撃が走った。

ドラゴンが悲鳴を上げた。
それを聞いた皆は、しかし、驚きを別のところに向ける。
驚愕はレオンハルトが振るった剣技に対して。しかし本当の意味でそれに絶句したのは、一定のレベルに達している者達だ。
その一人であるハンティは、目を見開きながら、疑問の声を聞いた。
隣、同じ様に無言でいたガルティアが、言う。確認を取るように、
「……なあ、お前ら。今の見えたか？」
「……見えた、けど――」
言う。自分が見た認識を正しく言葉にする。
「――見えなかった」
「……だよな」
「……」
更に隣のケッセルリンクは無言で頷いている。彼女も今のを見たらしい。

そして無言になる皆を訝しく思ったのか、ペールが声を掛けてくる。
「み、皆さんどうしたんですか？　それに、見えたのに見えなかったって……」
どういう意味なのか、その問いに正確に答えられる者はいない。皆が何と言うべきかと、口を噤む。
だが、やがてそれに答えたのはスラルだった。彼女は今起きたことを見たまんま、真剣な顔つきで口にする。
「……今、レオンハルトは斬撃を二つ、あのドラゴンに放ったわ」
言語化されたそれに、しかしペールはへぇ～、と間の抜けた感心するような声を出す。そして興奮したように、
「今の一瞬で二回斬ってたんですね！　レオンハルトさん、凄いです……！」
「――そんな可愛いものじゃない」
だがそれを、スラルは即座に否定する。いや、厳密に言えば否定ではない。
寧ろペールの言は肯定するものだ。一瞬で二回の攻撃。それは正しい。別段驚くような事でもない。レオンハルトなら一瞬で二回どころか何回も剣を振る。
それが剣を振った数と比例するなら――それはあり得る。
だが、
「レオンハルトは、今、一回しか剣を振ってない。――振ってない、はず……」
「？　ど、どういう事です？」
ええ、とスラルが頷いた。
「つまりこういうことよ。――剣を一回しか振ってないのに、その間に二回の斬撃が出た」
「……え？　何ですかそれ？」
ペールがようやくその意味を朧気ながら理解し、不思議そうに首を傾げる。
それに、と説明を引き継いだのはガルティアだ。

「しかも全く間がなかったな。一撃目と二撃目の間は」
「二つの斬撃が出たのは全くの同時で、しかもそれぞれ軌道は別。……それを一度の振りで行った」
ケッセルリンクが言う。ようやく皆がそれを呑み込み、口が回り始めたのだ。
その説明を聞いていたペールが仰天したように、
「そ、そんなの滅茶苦茶じゃないですか!?」
「おお。確かに滅茶苦茶だな。……ったく、アイツ……どんなからくりだ？　見応えはあるが、あんなの模擬戦でやられたらたまったもんじゃねえぞ」
ガルティアが笑みで肉を噛りながら言う。それにハンティは小声で、
「いや、あれは――」
からくりも何もない、と。そう思った瞬間だ。
悲鳴を上げていたライゼンに異変が起こり、皆が意識を集中させた。
それは、
「血が……！」
ライゼンの口元から、少しではあるが、血が流れ出てきた。
それは一つの事実を意味する。彼の特性を知っているハンティにすればあり得ない事だが、
「あのライゼンに、ダメージを与えた……」
最硬とも称される四大聖竜の一角を上回る。
その証明でもあった。

ライゼンは、数百年振りに、傷を負ったことを自覚した。
外部からのものではない。しかしそれは、紛れもない、
……俺に、攻撃を通した……!?
一瞬の攻防、その末に起こったことをライゼンはぎりぎりの所で知覚に成功していた。

しかし既に攻撃を放つところで、回避は間に合わない。魔人が逆鱗を狙っていることも把握していたが、それが通るとは思っていなかった。
だが事実として攻撃は通った。
――否、無理矢理に通された。
攻撃の瞬間、こちらの顎下にとてつもない衝撃が伝わってきたのだ。
それは、今まで自分に痛みと傷を通してきた相手――マギーホアやアベルに匹敵するものではないが、確かにその入り口に立つものだ。
この鱗をもっても吸収しきれない衝撃。それが内部を傷つけた。
ライゼンは、眼下の魔人に声を送った。既にこちらの反撃を警戒して距離を取った魔人に、解せない思いを込めて、
「貴様……！　一体何をした……!?」
応答は口端を吊り上げたことから始まった。不敵な笑みで、魔人は答える。
「ハッ、理解らなかったか？　俺の今の攻撃が！」
「……衝撃を通してきたことは分かる！　しかし、それをどうやって成した!?」
言う。自分が見た先程の剣撃は、
「二撃だ……！　この俺の逆鱗に、一瞬で――いや、全くの同時に攻撃を加えたな！　どういうからくりだ!?」
答えを求めるものではない。戦いの最中に、敵がその種明かしをするとは限らない。
しかし、言わざるを得ない。今の攻撃は、二千年を生きた自分にとっても、理解不能なものだ。
だが魔人は、その剣を下に向かって、調子を確かめるかのように振るうと、その答えを口にした。
自分だけではない。奴の背後にいる者達もそれを耳にするべく注視している。
そんな中、魔人は言った。軽い様子で、
「――知らねぇよ」

と。
その気の抜けるような発言に、その場にいる者が絶句する。例外は魔人に向かって熱い眼差しを送る金髪の少女だけだ。
周囲の反応を全て無視して、魔人は続ける。
「俺は単純に、テメェに攻撃を通す方法を考えた結果。更に凄い技を開発しなきゃな、と思っただけだ。その結果――」
と、魔人は言葉を繋げた。
「一回で二回斬れるようになった。だから、それを重ねるようにお前を斬ろうとしただけだ。……結局、斬れてないのが不満だけどな」
馬鹿な、と思う。その理屈は滅茶苦茶だ。通らない。
それは人間の動きではない。痛みに耐えながら、心に浮かんだ憤りを口にする。
「そんな阿呆な話があるか化け物め！　一度に二度斬るなど、物理法則を無視してるではないか!!　ちゃんと物理に則れ！」
視界の奥の方から数名の頷きが見える。その後押しを受けながら、ライゼンは文句をつけた。滅茶苦茶な奴め、ブレスを食らえ、と。
しかし魔人はそれに反論して、ブレスを剣で弾きながら、
「物理に則ってないのはテメェも同じだろうが！　それを言うなら、ダイヤの鱗なのに衝撃で砕けないお前の方がおかしいんだよ！　お前が言うなって奴だ！　ほうら、論破した――!!」
「ぐっ……貴様ぁ……！」
あほあほー、と挑発をしてくる魔人にライゼンは怒りを憶える。やり返された形だ。
どっちもどっち、という言葉が浮かぶ。因果応報、という言葉も。
……しかし、これは……。
ライゼンは、相手の攻撃に脅威を憶える。鱗は、外傷を防げても中に伝わる衝撃までは完全に殺せない。
それを、体捌きや当たる場所によって軽減して、ダメージを負わないことは出来るが、顎下の逆鱗などではそれも難しい。まだもう一つの弱点こそ知られてはいないものの、それも時間の問題だ。
つまり魔人はこちらを倒すには充分な方法を手に入れたというこ

とだ。
数百年振りの明確な痛みはかなり効く。顎下の骨が一部砕かれただろうか。これを受け続けるのはよくない。
それはつまるところ――
「――さて、どうする？」
「――！」
ライゼンは、魔人の声を受けた。それは自分の考えていたことと同じで、
「攻撃を通せるようになった俺と、攻撃を未だに当てられないお前。その差は大きいぜ？」
「……」
沈黙する。しかし内心で頷きを得る。その通りだ、と。
あの同時斬り、それを何度も受ければ自分は死ぬだろう。内部の重要な箇所への傷を負って。
あるいは同じところに当て続ければ鱗が砕けるかもしれない。魔人が二撃どころかそれ以上が出来たとしたら、それで斬れるかもしれない。
そしてあるいは、もっと分かりやすい弱点をもって、打倒される。
故に、だ。相手が言う意味は、
「お前は強い。けど、もう終わりだ。……だから――」
それは、
「負けを認めろ。そうすれば、殺さないでおいてやる」
「！」
不遜にも、降伏しろ、と告げてきた。
魔人とはいえ、元人間の身で、ドラゴンに対して。
ライゼンは、その意味を考え可笑しくなる。半分は自嘲のように、
……確かにな。その方が利口だ。
負けを悟れば、自ら降伏し、命を拾う。それも選択の一つだ。
ドラゴンの考え方からしても、決闘の際に命を捨てる必要はないものだ。
強者とみれば膝を折る。自分がそうしてもいいと思える相手なら

ば、そういった選択を取ることは恥ではない。
また、勝者から敗者に、その実力を認められて、殺すのは惜しいと言われることもある。
何となくだが、この魔人はそう言っているのではないだろうか。
強いからこそ、拮抗するほどの勝負を演じられるからこそ、今ここで殺すよりは生かしておきたい、と。戦士として口にする。
……それも、いいかもな。だが――。
ライゼンはそれを内心で、否、と答える。
しかしそれは、誇りからくるものではない。その理由は、
――俺は、死にたいんだ。
狂う前に。意識を持ったまま。――仲間達の元に還りたい。
情けない、女々しい理由だが、それが真実、本音の気持ちだ。
……俺も、老いたか……。
二千年。その年月を生きて、ここまで腑抜けたか、と自嘲の笑みを浮かべる。
これでは過去に嫌っていたドラゴン種の考え方と同じ――いや、それよりも質が悪い。
誇りも何もなく、ただ死ぬことで救われようとするなど、恥以外のなにものでもない。同胞に知られれば、心底軽蔑されるだろう。
ただ、その同胞ももういない。口を利けるものは皆無だ。
なら、それも――
「……俺は――」
戦いを続ける。そしてそこで死ぬ。
先程までは、戦いの中で死にたいと思っていた。今もそれは変わらない。
だが、負ける為に戦おうとする自分に嫌気が差した。
しかしそれに抗おうとする気力は、過去の闇に囚われる。
この場を死地とする、とライゼンはそういった思いをもって、口を開こうとした瞬間だ。
しかし、魔人が声を飛ばした。
「――待て」

待て、とこちらの言葉を制止してきた。その紅い瞳は、こちらを強く注視しており、
……一体何だと言うのだ……？
疑念を抱く中、魔人は息をつき、
「ようやく、違和感の正体に気がついた。さっきから――いや、本当は数日前にもあったのか。戦意の中に何か別の思いがある気がしたんだがな」
「……それは」
魔人が頷く。強く、こちらを責めるように眉を立てて言う。
「自覚してるのか？　……なら、聞かせてもらうが――」
それは、
「――お前、何でそんなに死にたがってるんだ？」
――こちらの確信を突く言葉であった。

生きる意味

スラルは、レオンハルトが問う言葉に疑問した。
「あのドラゴンが死にたがってる……？」
どういうこと、と言葉を作る前に声が来た。
ライゼンのものだ。
彼は口から軽い息を吐く。それは観念したかのような声色で、
「……知っているか？」
と、レオンハルトに声を送る。それは彼だけではない。
まるでこちらにも問うような思いを感じる。こちらが視線を向けると、ドラゴンは夜空を見上げた。
「かつてこの空には、無数のドラゴンが飛び回っていたんだ。……それはもう賑やかでな。この山にいると色んな噂が聞こえてくるんだ。やれ、どこの一族の誰と誰がぶつかっただの、喧嘩しただのな。今でいう人類くらいの数が世界中にいたんだ」
「――――」
その言葉に息を呑んだのは自分だ。しかし自分以外の者達も、その言葉に驚き、目を見開いている。
意味は分かる。それが何を指すのかも。
ドラゴンはその通りの言葉を宙に滑らせた。懐かしむような表情で言うそれは、しかし、憂いを帯びたものに変化し、
「……だが、今ではその数を減らした。残っている者は少なく、残った者も皆例外なく心を閉ざし……凶暴化した。今じゃ、魔物と同類扱いされてるらしいな」
信じられるか？　と半笑いでの問いに答えたのは、ペールだった。
彼女は、戸惑いの表情で言葉を作る。
「え、ドラゴンって皆、知性を持つ存在だったんですか？　あ、貴方が特別というわけではなくて……」
「……そうさ。同胞は皆、軒並み狂っていった。この山に残ってるドラゴンも、昔は随分とお喋りだったんだぜ？　俺なんかよりも頭の良

い奴も多かったしな」
答えるドラゴンには、先程までの圧倒的な存在感は感じない。そこにいるのは、生きることに疲れた一体のドラゴンでしかない。
「……伝説では、四大聖竜と八大精霊竜。そして、ドラゴン王がいたと聞いているが……」
次に問いを投げたのはケッセルリンクだ。
しかしドラゴンはあっさりと、
「……さぁな。俺以外の四大聖竜は皆死んだが、八大精霊竜の方は生死不明だ。……ま、生きてたとしても狂ってるだろうがな」
「……なら、ドラゴン王はどうなったの？」
聞きたいと思った。自分にとっては重要な事、それを尋ねる。
その問いに、ドラゴンは笑い、
「アイツは……もうこの世を捨てたよ」
告げられた答えは曖昧なものだった。
「それは、どういう――」
「この世界で、姿を現すことはないだろうな」
再度の答えも意味を計りかねるもの。
しかしドラゴンは、そんなことはいいさ、と質問を止め、
「大事なのは、もうこの世でかつての姿、ありのままに生きるドラゴンは俺だけってことだ」
ドラゴンが語る。その色は悲しみを帯びて、
「……最初の質問の答えだ。確かに俺は、死にたがってる。――生きることに疲れたのさ」
「――――」
その言葉に震えたのは、隣にいるハンティだ。しかしそれに気づかないまま、ドラゴンは続ける。
「俺は今まで、戦って戦って――二千年近くを生きてきた。そしてその多くは、仲間とともにあった。苦しいことは沢山あったが、それに耐えることが出来たのは――そこに縁があったからだ」
仲間を守る為に、他者を害し続けた、とドラゴンは語る。そこには確かな、二千年分の重みがあり、

「同胞がいなくなって約四百年。俺の生きてきた時間からすれば大した時間じゃない。……だが、二千年を生きていたとしても……それをたった一人で生きるには――四百年は長すぎる」
心が軋み、悲鳴を上げ続けている、と。ドラゴンは言う。
ならばせめて、と。
「俺は、終わりがほしい。だが、俺はこの身体の所為で自殺も出来ない。仲間を守ることが出来なかった俺の身体は……俺の命だけは頑なに守り続けるんだ」
と、そこでドラゴンは再びレオンハルトを見た。
自嘲を告げながらも、魔人に頼むこと。それは、
「故に頼む。この俺と死合い――そして、俺を殺してくれ」
一息。
「――もう、一人は御免だ」
「――――」
告げた言葉に、静寂が発生した。
それは、二千年を生きるドラゴンの、心情の吐露だった。
……レオンハルト。
スラルはその問いを掛けられたレオンハルトの背中を見た。
彼がどういった答えを出すのかを見る為だ。
しかし、彼はその場で立ち止まったまま微動だにしない。
スラルは思う。かのドラゴン――ライゼンの想いは理解出来ない、と。
死にたい、なんて思う心情など到底理解出来ないし、したくもない。死こそが、最大の地獄なのだ。
そして、死が最大の地獄でなくなる環境など――それこそ地獄だ。
だがライゼンは、今まさにその状態に置かれているのだろう。
故に死を選択した。――死ぬことによって、救われようとしているのだ。
しかし、スラルはその上で思う。
そんなのは、悲しすぎる、と。
そんな風に終わりを求める姿は、痛々しくて見ていられないと。

そんな終わりは、見たくないと。
そう思った。だからこそ、答えを告げるレオンハルトを見た。
悪いのは彼らじゃない。悪かったのは世界の方だ。
人の時代に生きる者として、それを疎ましく思った自分が、そう思うのは、そう告げるのは、憚られる。
あるいは、ハンティなら何かの答えを出せるかもしれない。
だがそれはなく、視線の先でレオンハルトが動いた。
彼は眼前のライゼンの顔を見上げると、はっきりとした口調で答えた。
それは、
「――ふざけんな」
明確な拒絶だった。

「――何故だ!?」
ライゼンは激高した。
その先に待つ未来を、絶望を考え、怒りが沸騰する。
普段は閉じている口も開いて、咆哮するように声を上げる。
「貴様は約束した筈だ！　この俺に敗北を与えると！　それは嘘だったのか!?」
それは断じて許されん。いや、許さない。
ようやく見えた終わりを奪われることは看過できない。
「俺は既にここを、この場所を、死地と定めた！　かつて世界の中心であったこの場所を!!　我らが生きたこの場所を!!」
ライゼンは思い出す。
この翔竜山は、我らが作った国である大陸統一国家トロン。その中心地であった場所だと。
見るがいい！　とライゼンは山の外壁を尾で思い切り叩く。
「――っ!?」
振動とともに、岩で覆い隠されていた広い洞窟が姿を現す。
奴らが驚愕するそれは、

「かつてこの山をくり抜いて作った洞穴の数々は、多くの同胞が暮らし、また隠れ潜んだ場所だ！」
自然とともに生きるドラゴンは、このような山の洞窟や森の中を始めとした、自然の中に巣を作り暮らしていく。
そしてここは、そんな中でも大規模な場所だ。ここに多くの群れが暮らし、天変地異が起こってからはこの場所に隠れて生き延びようと足掻いた。
今を生きる者達は知らないであろう地獄を、同胞達は目撃して、その末に逃げたのだ。
そしてこの場所は、自分にとっても大事な場所である。それは、
「我らは約束したのだ！　仲間を守ると！　守り切り、ここで再会を果たすと！」
あの日もこんな夜だった。
そして彼らは、こんな俺に後を託して、死んでいったのだ。
「しかし俺は、多くの同胞を託されたのにも関わらず、何者も守りきれずに全てを失ったのだ……!!」
誰も彼もが、自分なんかに期待を掛け、その所為で命と心を失った。
……俺は、同胞の闇を払うことが出来なかった……！
次々と狂っていく仲間達を、ただ眺めていることしか出来なかった。
「そんな俺が、ただ一人生き残るなんて間違っている……！」
そう。生き延びるべきは彼らであった。自分は彼らを守るために命を尽くすべきだった。
ククルククルとの戦いの時も、ラストウォーの時も、天変地異の時も。
同族と部下、それ以外の同胞。八大精霊竜や、他の四大聖竜。マギーホアや、あのアベルも、自分は守れなかった。
彼らの屍の上に生き続ける自分は、
「こんな俺がのうのうと生きているなど……生き恥以外の何物でも――」
「――おい」

「――――」
その声は、やけに大きく聞こえた。
声量としては大した大きさではない。自分の声の何分の一もない、普通の声量。
しかしその声には、有無を言わせない響きがあった。
その声は、
「――今、なんて言った？」
憤っていた。

レオンハルトは、黙ってライゼンの語りを聞いていた。
死にたがっている。その理由は理解した。
簡単に言えば――仲間がもういない。孤独は嫌だ。こんな自分が生きている価値はない。
故に、戦いの中で死にたいから殺してくれ、と、そういうことだ。
理解は出来る。同情もしよう。戦いの中で死にたいというなら結果的にそうしてもいい。
だが、最後の言葉は看過できない。
今の話を聞いていたからこそ、それは許容出来ず、そして、分かることがある。
それは、
「生き恥、だと……？」
こいつは、今、自分が生きていることを間違いだと言った。
ただ生き恥を晒しているだけだと言ったのだ。
「テメェは……」
こいつは、
「仲間の代わりに生き延びた自分が――間違いだったと、そう言うのか……!?」
「――――」
ライゼンが瞳を見開いた。
説教は趣味ではない。人生相談も得意ではない。そもそも相手の

方が長生きだ。
しかし言わざるを得ない。
言わなければ、彼の言う者達が――否定されてしまうから。
それを分からせる為の言葉を、レオンハルトは尽くす。
「俺には、お前の過去の出来事を見てきた訳じゃないが――」
言う。それは、
「仲間が死んだのはお前の所為なのか？　敵と戦った結果じゃないのか？　お前は……力を尽くさなかったのか？」
「……違う!!　違う、が――」
ライゼンはそこで言葉を止めると、ややあって声を絞り出す。
「俺が、他の同胞の代わりに生き延びたのは事実だ……！」
「……」
レオンハルトは内心でそれを察する。何となく理解出来るのは、
……守りきれなかったことを……ずっと悔やんでいる、か……。
自分は詳しい状況は知らない。だから本当に、他のドラゴンが死んだ何割かはこいつの所為だというのも、ひょっとしたらあり得るのかもしれない。
だが、その上で分かることがある。
先程、ライゼンが自分で言っていたことだ。それを告げる為に、言葉を続ける。
「……確かにそうかもな。俺は、それを実際に見てきた訳じゃない」
「！　ならば……！」
「ただな――お前が言っていることに一つ、確かに間違いだと言えることがある」
「っ、なんだと……！」
ライゼンの瞳が怒りに燃える。
しかしそれに水を打つように、レオンハルトは告げた。
「……お前が生き延びたのは、間違いじゃないってことだ」
「――！」
ライゼンの瞳が揺れる。
そこで意味を更に告げる。

それは、話に出たかつての同胞の話で、
「お前は、仲間に後を託されたんだろ？　ならそれは、仲間がお前に――生き延びて欲しかったんじゃないのか？」
「！　そ、れは……」
思う。
もし、これほどの男が、厳しい戦いの中にいたのならば、
「お前なら、自分が死んだ後を任せられると……そう思っていた筈だ」
「……俺に？」
ああ、と頷く。
もしそうであったのなら、
「なら、今お前が生き延びているのは、その思惑が達成されたということだろ。――それを生き恥って言うなら、お前はかつての仲間達を侮辱してる」
「――！　お、俺が――」
ライゼンが震える。今言った事は、彼に効く言葉だろう。
声を震わせて、
「俺、が……仲間達を、侮辱しているのか……その価値を貶めているというのか……！　誇り高きドラゴン種のことを……!?」
「そうだ。……なにせ、今のお前の様子や言動を見ていても、誇り高きドラゴンだとは到底思えねぇ。ただの耄碌した爺だ。――今生きてるドラゴンも、例え狂わずに意識があっても、そんな情けない感じなんだろ？」
「貴様ッ!!」
ライゼンが吠えた。
その言動は許さぬ、と。確かなドラゴンの畏怖を見せつけて怒る。
「それは違う！　同胞は皆、誇り高い戦士であったのだ！　その言葉を取り消せッ!!　さもなくば貴様を八つ裂きにして――」
「だったら――」
言葉を一度止める。
……それなら、
「そんな風に恐ろしく、格好いい強い所を見せてろ。かつてのドラゴ

ンと、今を生きるドラゴンが、お前なら大丈夫だと託した――謂わばドラゴンの代表だろうが」
「――――」
「そんなお前が、そんな情けない有様でどうする？　今の人間の夢を壊す気か？　俺達人間――俺らは元だが、その認識でも、ドラゴンってのは強大で怖ろしい――伝説の存在なんだがな」
　後ろを指して言う。そこには、元人類であった多くの者が、
「……ま、俺の集落でもドラゴンの伝承は多かったな。飛べるムシと炎を吐けるムシを入れてる奴は、飛びながら火吐いて、ドラゴンごっこなんてやってたもんだ」
「……カラーの間ではドラゴンは身近だ。しかし、山に入る際もドラゴンを刺激するな、と子供の頃から教えられてきたものだ。――そうだな、ペール」
「あっ、はい。私も子供の時からドラゴンの記録が残った文献を見てて、世の中にはこんな怖い存在がいるんだなーって、思ってました」
「……ドラゴンは、人間が生まれて間もない頃から畏怖されて、多くの伝説になってたわ。――それこそまだ魔物なんかより、よっぽど知名度があった」
「ドラゴン、大好きですわ！　超強くて恰好良くて――あ、七星は違いますし、レオンハルト様の方が大好きという枕詞は付きますが！」
　ドラゴンという存在についての思いを、次々に口にする。
　その全てに共通する――怖れがあり、強大な印象がある伝説の存在が、ドラゴンだ。
　かくいう自分も、
「俺も、ドラゴン退治はガキの頃からの憧れだったからな。ある程度強くなってからも、ドラゴンは俺を楽しませてくれたし……四大聖竜の話を聞いた時はわくわくした。その強さに期待してな」
「……」
　ライゼンは無言でそれを聞いている。何を考えているのかは分からない。
　しかしそこで更に言葉を尽くそうとして、レオンハルトは気づい

た。
「……それにな。お前も――あ、いや、その前にまだ言いたい事がある奴がいるみたいだ」
「……？　何、を――」
ライゼンが疑問符を浮かべて視線を向けた先。そこにいた存在に注視し、竜の瞳が大きく見開かれる。
「その、気配は……」
震える言葉の理由。それは、
「……」
――過去に滅びた筈の同胞。その気配だった。

「……その」
ライゼンは、その同胞の言葉を黙って聞きながらも、その一族を思い出す。
確証はない。しかし、黒髪の、額に紅いクリスタルを持つ女から思い浮かぶ存在は、
……ドラゴン・カラー……！
かつて滅びた筈のドラゴン種の一つ。
その生き残りは、誰一人としていないと思っていた。
本当に彼女がそうなのだろうか。魔の気配の色があることから、元ということなのだろうか。それなら人化していることも頷けるが……。
と、考えていた矢先、彼女が言葉を作った。
辿々しい様子で言うのは、
「あたしは……アンタが生き残ってて、嬉しく思うよ」
「――――」
「……だから――」
聞く。その同胞の言葉は、一度区切られ、
「死にたいなんて、言わないでほしい。――月並みだけど、生きてたら良いこともあるから……」

聞こえた言葉に、ライゼンは彼女の背後の者達を見る。
そういえば、彼女は彼ら魔の者と一緒に来た。
そして彼女自身もそうなった。
理由は不明だ。しかし、その様子は、
「……そうか」
「……ん、そうだよ」
――不幸ではないように思えた。
……新たな出会いと、幸いを得たか……同胞よ。
その姿に、光景に、何か熱いものが流れてくる。
彼女の背後では、姿形もバラバラで、人類の別氏族と思われる魔の者達が、驚きつつも暖かく見守っており、
「……少しは分かったか？」
「！　貴様……」
声を掛けてきたのは、眼前の魔人、レオンハルトだ。
彼は再びこちらに向かって、しかし、苦笑混じりの表情で、
「お前は望まれてここにいるんだろ。――そして、お前自身も何かを残そうとして、今日まで生き延びた――と、そう思うんだが……どうだ？」
「それは……」
どうだろう、と考える。
自分は、二千年の時を。ドラゴンが滅びて、人類の時代となった今日までを――どうして生き延びてきたのか。
何のために今日まで耐えてきたのか。その意味は――
――そういえば。
過去の約束。それは、
――ドラゴン種の未来を、お前に託す。
……マギーホア。
既にこの世を見限った大いなるドラゴン王にして我が友。
そして自分が戦う際に決めた原初の誓い。
かつての部下が裏切った際に、改めて誓ったこと。
――仲間を守る。そして、理想の世界を作る。

しかしそれらは、全て過去のものとなってしまった。
自分達ドラゴンが、かつて先住民であった丸い者と、彼らの王であった魔王ククルククルを滅ぼし、新しい国を作った。
しかし理想だと信じた筈のその国は滅び、守ると誓ったはずの同胞は亡くなり、数少ない残った者達も、その心すらも失ってしまった。
そして今の世界では、人類と呼ばれる新しい生命が世界を席巻している。
自分達の生きていた世界はもう何処にもない。
――その上で、今の自分に出来ることは何だ？
今の世界に生きる自分に、出来ることは何だ。
「……俺は、何も守れなかった。守るべきものもおらず、世界にある程度の平和が甦った時、自分は死に場所を失った筈だった」
だが、
「しかし貴様がこの山に、我らの土地に足を踏み入れた時、こう思ったのだ――〝死に場所を見つけた〟、と」
「――そこだ」
「む……」
不意に、魔人が口を挟んできた。
我が意を得たり、と言わんばかりに笑みを浮かべた魔人は、調子の良い様子で、
「俺が最初から言いたかった本音はそれだ。なあ、ライゼン。俺は別に、命を懸けることを否定してる訳じゃねぇ」
「……死を望むこと自体は、許さない訳ではないと？」
魔人が首を振った。その意味は、
「違うだろうが。命を懸けるってのは、最初から負ける気で挑むことじゃねぇ。――死ぬ気で勝つ、そういうことだろ」
「……死ぬ気で、勝つ……」
ああ、と魔人が頷く。
「お前が同胞を守る為に戦う時、そこには命に代えても守るとか、死力を尽くして勝つ、とか、そう思ってた筈だ。こんなのは基本だろう――最初から負ける気で戦う奴を、戦士とは言わねぇ」

こんな基本を忘れてんじゃねぇ、と魔人は毒づく。
「俺はそんな腑抜けと戦いに来た訳じゃない。俺と戦って死にたいなら――お前も俺を殺す気で来い」
それは、
「俺に見せてみろ。二千年もの間を戦い続け、そして生き延びたドラゴンの本気を俺に見せろ。それとも――」
瞬間。心地よい殺気を、威圧とともにぶつけられ、
「――俺じゃあ力不足か!? 本気になるには値しないか!?」
「――――」
「答えろ、ライゼン……!!」
全身が震えた。
それは怖気からくるものではない。
それは歓喜だ。
ドラゴンとして、身体に刻まれた本能。
武者震いだ。
それは己が、全霊をもって戦う程の強者と、相見えたということだ。
……思い出したぞ。
この感覚だ。
戦う種族としての感覚。
遥かな昔。自分達は、この感覚をもって、戦いに出たのだ。
本物の強敵。自分の全存在を懸けて敵を狩りに征く。そんなドラゴンの思いだ。
しかし自分の場合は、背負うものの大きさから、いつしかそれが怖れへと変わっていき、
……耄碌したな。
本当にそう思う。
ドラゴンとして、最低限の戦いの流儀を忘れてしまうとは。
仲間を失うのが怖かった。忘れ去られるのが怖かった。
戦うのは怖くなかった。
――言い訳は出来ない。
それらを忘れて、終わりを求めた。新たな答えを欲した。

そんな尤もらしい理由で逃げ続けた。
……俺は、馬鹿だな……。
仲間から馬鹿だ馬鹿だ、と言われ続けてきたが、それは間違いではなかったらしい。
しかし、そんな馬鹿な己でも、やれることはまだ残っている。
終わりが欲しいなら勝ち取ろう。答えを欲するなら見つけてみせよう。
生き残ったドラゴンとして、我らの意地を見せよう。
故に、ライゼンは言葉を放った。
「――魔人レオンハルトよ」
「……ああ」
声の先は不遜にも、我らがドラゴン種に喧嘩を売ってきた魔人。
新たな世界の覇者――人類の頂きに近い者だ。
「すまない。先程までの俺はどうかしていた」
「ああ、そうだな」
――故に相手にとって不足はない。
「その詫びといっては何だが……本気で相手をしよう」
「ああ……」
――かつての仲間達が生きたこの場所で戦おう。
「ここが俺の墓場となるか。それとも貴様の墓場となるか、勝負だ」
「ああ……！」
――そして失意の中で狂い、あるいは死んでいった全てのドラゴンに捧げよう。
「――大陸統一国家トロン、西部方面軍将軍。そして、四大聖竜の一角――ライゼン」
「――魔軍参謀。魔人四天王の一角――レオンハルト」
――今を生きる全ての者達に見せつけよう。
……ただ一体の……！　ドラゴンとしての意地を……！
「参る……!!」
「来い……!!」
――かつての世界の覇者の姿を――!!

そしてライゼンはたった一体のドラゴンとして、敵を狩りにいった。

竜の唄

ライゼンは走った。
四肢に全力を込め、獲物を狩りに行く。
唸りを上げながら突撃を掛けるその姿はまるで獣の様だ。
だが構わない。
なにせ千年振りの決闘だ。
かつての自分達は、今のように全力で、獲物を狩りに行ったのだ。
どんな弱者であっても全霊をもって命の奪い合いを行なった。
古き良き、闘争の時代。失われたものも数多くあろう。
だがこれだけは、どれだけ時が経とうと失われることはない。
己の全存在を懸けての闘争。生き延びる為の本能。強者と戦える歓喜。
その全てが己の血を沸き立たせる。
相手は魔人最強。それほどの相手ならば、
……全力を出さねばドラゴンの名が泣こうぞ……！
思い、走った。
己の武器はこの全身。通常のドラゴンを大きく上回る巨体と最硬の鱗。全身が武器なのだ。
ならば当たるだけでいい。当たれば相手は傷を負う。
視界で相手の姿を捉えた。眼前、魔人が、その身を越える長刀を構えている。
……来るか……！
魔人が笑みを作った。剣を動かし、
「もう一度、食らって貰うぜ……！」
「――ッ！」
言って剣が来た。
一度の剣の振りで二撃。こちらを害する必殺の剣だ。
それが左右から、己の口元で重ねる軌道をもって放たれる。
かなりの速度。回避は難しい。今から首を反らせば多少はずらせるか、というところ。

「ッ！　おお……!!」
だが、ライゼンはそれでも行った。
衝撃が、痛みを伴って顎下を襲う。口元から血が流れる。
しかしそれと引き換えに、
「食らって貰うぞ……！」
「――!?」
魔人が目を見開いた。
痛みで速度を落とすことはしない。少しでも怯むことはしない。
故にもう遅い。
視界の中で、魔人が正面から当たった。

……まさか、全く怯まないとはな……！
レオンハルトは宙に吹き飛びながら、相手を称賛した。
寸分違わずとまではいかないが、同じ箇所にダメージを負うような場所に剣を振るった。
結果、血は流したがドラゴンは止まらず、こちらへの突撃を敢行した。
痛みに少しでも反応し怯んでいたのならばまだ躱す余裕はあった。
しかしそれは出来ず、その段階は過ぎた。かろうじて剣で防御するも体勢不十分であれば容易くこちらは吹き飛ばされる。
故に次に考えるべきは体勢を立て直すこと。身体の痛みを感じながら視線を回す。
吹き飛ぶ先、岩があった。巨大な岩だ。その大きさはもはや岩というより、小山のよう。
ライゼンの体躯と同じくらいの岩石を確認し、レオンハルトはそこに足の裏を向けた。
そこを壁のように使い、岩を蹴ることで推進力を得る。
そしてドラゴンの巨躯を越える、もしくは横に逸れる形で剣を振るう。
それを実行しようと空中での体勢変更に成功した時、レオンハルト

は正面を見て、そこで動きを見た。
こちらに向かって駆けていたドラゴンが、一瞬止まったのだ。
……いや、止まったというより……これは……。
四肢を地に固めて、こちらを見据える。それは足に力を溜めているように見えた。
その想像どおり、いや、想像以上の事が起こった。
ドラゴンが四肢を大地から離す。
しかしそれは、先程までに見た、ただ駆ける動きではない。
四本の足を同時に離し、獣の様に宙に跳ぶ。
それは五十メートル級の巨体で行う、
「跳びかかりだと……!?」
大地が巨竜の全力を受け、足跡がつく。
そうして巨体が浮き上がり、莫大な瞬発力をもって襲いかかる。
それは瞬間的に先程までの戦闘速度を越えている。
ドラゴンの動きに狙いを悟ったレオンハルトは叫んだ。
「俺を岩に叩きつける気かッ！」
「然りだ……！」
瞬間、巨大な岩に足を付けたこちらに追いついたドラゴンが、
「――――!!」
自分の巨体とともに岩を巻き込むようにして、体当たりを仕掛けてきた。

岩石が砕け、衝撃が音となって周囲に伝わる。
ライゼンは再度の痛みを受けながらも、足を動かし続けた。
眼前、直ぐの距離に、こちらの体当たりを剣で防御し続ける魔人がいる。
しかし正面を防御しても、岩と挟むように衝撃を与えた結果により、魔人は表情を歪めている。
痛み、そして傷を負ったのだろう。
その事実に口端の歪みを自覚した。だが、

「まだまだ行くぞ……！」
攻撃の手は休めない。
岩石を砕き、視界が開けた先、今度はこの山の斜面がある。
天上へと続く、大いなる我らが故郷。その山の側面に向かって、魔人を押すように駆ける。今度は砕くことは出来ないだろう。
しかし、魔人に痛みを負わせるには充分だ。
その狙いを理解したのか、魔人が声を上げる。笑みを携えて、
「山にぶち当たる気だな!?」
それは疑問の声だ。
「テメェ、痛くねぇってのか……！」
無論、痛くない訳ではない。
突撃の際に、魔人の剣を受けた。こちらも脆くはないにしろ、特別衝撃に強くないのは明白だ。
しかし、ライゼンはそこで笑みが漏れるのを抑えられない。
それは、
「だからどうしたと言うのだ……！」
「！」
言う。それはドラゴンの太古からの矜持だ。
「戦いこそが我らが誉れだ……！」
戦いは名誉を得る機会。
「傷こそが我らの勲章だ……！」
傷は武勲の数を示すもの。
「そして痛みは、戦士を高揚させるもの!!」
なればこそ、
「戦いを止める理由にはならん……！」
「……！」
魔人が息を呑んだ。
そう。千年振りの、決闘だ。名誉を得る重要な機会なのだ。
全力を出せる相手を見つけたのだ。
「貴様は違うのか……!?」
問いを投げた。愚問と言うべき問いだ。

再び吹き飛ばされる魔人が、笑みを濃くして、剣の振りとともに答えた。
「――違わねぇ……！」
「なら」
ライゼンは言った。
衝撃とともに痛みが襲う。それを受けながら笑みを浮かべ、
「もっとだ……もっと強く、打ち込んでこい……！」
叫ぶ。動きは止めないままに、ライゼンは好敵手への、己の気持ちを伝える。
「そんなものでは、俺を倒すには足りんぞ……！」
この程度の痛みや傷では止まらない。それを証明するかのように、
「貴様の本気を見せてみろ!!」
言い返しの言葉とともに、ライゼンは激突した。

翔竜山に、巨大なドラゴンが激突する。
しかしそれは、微かな衝撃を周囲に伝えるのみ。
世界一の山は、その程度ではびくともしない。
そして、その山の側面に叩きつけられたレオンハルトは、
「――ク」
傷を負い、痛みを感じながら、
「クハハ……」
己の血に濡れながら、
「クハハハハハハ――!!」
ただ歓喜に満ち溢れていた。
レオンハルトは思い返す。これほど愉快なのは、いつ振りだろうか、と。
魔人となって約三百年。これほどの強敵がいたか、と。
剣を振っても死なない相手はいつ振りか。
……いや、初めてか……？
対峙する巨大なドラゴン――ライゼンは、こちらの剣に耐えきる。

このような剣では死なん、と。
もっと強く打ち込んでこい。本気を出せ。
そう言ったのだ。
「それをしても、あっさり死ぬことはねぇ、と。そう言うんだな……？」
なら、我慢する必要はない。
三百年生きて、ようやく本気でやっても問題ない相手を見つけたのだ。
ようやく俺は、挑戦者となれるのだ。
そしてその果てに、
「俺は、お前を……越えていいんだな……！」
言って剣を振る。
眼前まで距離詰めてきたドラゴンは、それを受けながらも応じた。
「越えてみるがいい！　越えられるものならな……！」
「……わかった」
改めて、気合いが入る。
血が通っていく。
魔人と、人間の血だ。
その血が、強大なドラゴンを前にして――熱く沸き立つ。
「なら、付き合って貰うぜ……！」
「応とも……！」
レオンハルトの魔剣オル＝フェイルと、ライゼンの鱗が激突し、火花を散らす。
その鍔迫り合いにも似た拮抗、それが離れた瞬間、
「――――」
戦闘は止まらなくなった。

ライゼンは加速した。
もはや激突や魔人の攻撃は止まる理由にならない。
ある程度の傷なら、

……押し切れる！
衝撃を通す魔人の攻撃、内部に傷を蓄積させても、直ぐに倒れることはない。
寧ろ、意地でも我慢してみせると思う。
ならば依然不利なのは向こうの方だ。相手は身体が特別硬い訳ではない。
身体を穿てば傷を負う。
故に攻撃を行なった。四足に力を込め、相手に飛び掛かる。
しかし、上から踏み潰す形の攻撃の先に、魔人はおらず、
……回避したか！
手応えがない。ならば躱されたと思うのは道理。
ライゼンは気配に従って左を見た。視線の先には、瞬間的に移動した魔人がこちらの足に向かって剣を振るう所で、
「まずは、足を潰させて貰うぜ……！」
言って衝撃が足に来た。左後ろ足。その中心を穿つ同時の斬撃に、
「ッ……！」
痛みで声を上げることはしない。
しかし身体の構造から一瞬の揺るぎが起こる。止めようのないものだ。
だが対応は可能。ライゼンはその通りに行動を起こした。
こちらの後ろにあるもので、回転するように魔人に叩きつける。
それは、
「ドラゴンの動かせる部位は一つではないぞ……！」
白く長い尾だ。
その尾はしなやかさを持ちながらも鱗は身体と同じ。身体の一部ということだ。
それを地面を往く魔人を叩きつけた。
しかし、
「躱したか……！」
「躱せるからな……！」
視線の先でレオンハルトが走っていた。

こちらの後ろに回ろうとする挙動。そして元に戻しかけていた尾を、
「こっちはどうだ!?」
「ッ！」
今度は尾に衝撃がきた。衝撃を逃がそうと尾を動かそうとするも、その二撃は尾を挟み込むように放たれたもので、回避も衝撃緩和も行えない。
痛みを感じる中、魔人がその結果に舌を打ち、
「足や尻尾なら、細いから斬れると思ったのによ……！」
まだ斬ることを諦めていないような発言をする。
いや、事実諦めてはいないのだろう。魔人の表情は、本気の残念が垣間見える。
こちらに未だ外傷を与えていない、そんな未熟を恥じているのだろう。
……随分と、意識が高いものだ……！
己の鱗は斬撃に対しては無敵と言っていい硬度を誇る。故にその試みは無謀だ。出来る筈もない。
しかし、
「……笑わないとも……！」
その行動を、無駄と一笑に付すことはしない。
無駄と切り捨てることはしない。
ドラゴンに挑む。そして打ち倒す。未だ到達し得ない頂きを目指す者を、笑う者がどこにおろうか。
それでも笑う者には、笑わせておけばよい。
強大な力に挑む英雄に、ドラゴンは敬意を払い、全力でそれを叩き潰そう。
「挑むがいい。何度でも……！　その尽くを弾き飛ばして見せよう！」
「後で吠え面かくんじゃねぇぞ……！」
良い闘志がぶつけられる。
その言葉とともに魔人が大地を駆けた。

正面から来るものではない。距離を取りながら、こちらの背後を取ろうとする動き。
「後ろは取らせんぞ！」
故にこちらも駆けた。
ターンし、相手に背後を取らせないように回る動きをもって走った。

地面を走るレオンハルトは、相手の身体捌きを見た。
その巨大さを持ちながら速度を持つ。その上、小回りの利くステップを踏んだ動き。
それは、容易くこちらに追従する。
……一歩の大きさがキツいな。
人間大の大きさしかないこちらの歩幅と、通常のドラゴンの十倍近い大きさを持つライゼンでは、一歩で進める距離が違う。
それにこちらは、若干跳ぶように足を動かすことで、一足で距離を取れる。しかしそれは相手も同じで、
……来るか！
視界の端で、ドラゴンが動きを見せた。
回るように動いていたそれを、加速させたのだ。ドラゴンの身体が、その場から動かないまま回る。
そして起こす結果は、その後ろに付いている尾でこちらを横から払うこと。
対応方法は単純だった。
その尾の攻撃を、剣で上に向かってかち上げる様に受け流した。
だが、
「――！」
再び、加速を付けて同じ方向から尾が飛んでくる。
……なんだ!?
それを払い、レオンハルトはそれを引き起こしたライゼンを見る。
方法は直ぐに理解った。

ドラゴンが、その場で回転を続けている。高速の回転は尾を追いかける様に続いており、
……二回転……！
思った瞬間。尾が来た。回転で加速し、威力が上がったもので、
「吹き飛べ！」
その言葉通りに、こちらの身体が払われた。
まるでムチのような攻撃方法だ。それでいて威力、速度ともにムチの比ではない。
宙に飛ばされ、山の側面に再び近づく自分に、ドラゴンは顔を向け、口を開いた。
それはブレスの予備動作で、力を溜めたドラゴンが、宙にいるこちら目掛けてブレスを吐く。
「っ……！」
それを剣で弾いて、後ろに逸らすと、山の側面がブレスで穿たれた。
衝撃と轟音。それとともに、山の上側が一部、崩落する。
舌を打ち、落ちてくる大小様々な岩石。そのうち最も巨大な岩石を斬撃で一刀両断する。安全を確保し、その上でドラゴンの姿を探した。
そして、
「おお……！」
ドラゴンの姿が間近に見えた。
ブレスとほぼ同時に駆けてきたのだろう。
間に落ちてくる、そして元からあった岩や何もかもをその鱗で破壊しながら、突っ込んでくる。
身体に落ちてくる岩も物ともしない。かのドラゴンの歩みを止めるものは存在しない。
故にレオンハルトは行動を決めた。正面、体勢を低くして突っ込んでくるドラゴンの上部に跳ぶと、
「これはどうよ……！」
「……!?」
レオンハルトは口端を吊り上げた。ドラゴンが戸惑った様子が見

える。
それだけでは収まらず、声に上げた。それは、
「俺の身体の上に……！」
突撃してきたドラゴンを跳び越えるようにしながら、ドラゴンの身体に掴まった。

「貴様……！」
声が漏れる。しかし怒りではない。
その大胆不敵な行動への称賛だ。
魔人は今、こちらの背の翼、そこの出っ張りを掴むようにして身体に乗っている。
一見距離が近く、危険に思えるその行動は、しかし、こちらの行動を阻害するものだ。
それは何故かと言うと、
……ドラゴンは、背中に手が届かん……！
ドラゴン種は身体の骨格上、手足の可動域は広くない為、人間のように背中に手を伸ばすことは出来ない。
そのため、このように背中に張り付かれては攻撃が出来ないのだ。背後にいるものに攻撃を仕掛けるのとは訳が違う。それなら振り向けば良いのだから。
つまり、
……振り落とさなければ、攻撃手段はない……！
故にライゼンは、背に捕まる魔人を落とす手段を講じた。
眼前にある我が故郷たる翔竜山。その側面に向かって駆け、
……潰れろ……！
思い切り背中を、岩肌に叩きつけた。
瞬間、衝撃と振動が来て、再び壁が削れる。
「む……！」
そして気づく。背中にあった感触が無くなっていることに。
ならば、

……奴はどこに行った!?
視界で確かめようと左側を見るも、壁側にはいない。
なら、と気配で探った先、
「――気づくのが遅え」
「――!?」
悪寒がした。下方だ。
魔人は再び、こちらの顎下に移動しており、
……これを狙って……!!
その場から退避しようとするも――遅い。
その前に、魔人の声が耳に届いた。
「もう一度食らえッ!!」
魔人が逆鱗に、再度の剣撃を見舞った。
同じ箇所への痛み、しかもそれは、先程よりも強いもの。
その正体を、激痛に苛まれながら、ライゼンは悟った。
……同時三撃……!
敵は更に強大となった。

レオンハルトは、激闘に己の成長を実感した。
相手が気づいているかは分からない。不意打ちに近いものであったからだ。見えていたかどうかは微妙だと、客観的にはそう思う。
しかし、それでも相手は見ているという確信があった。確証はない。ただの勘でしかない不確かなものだ。
だが気づいているだろう。見ていなくても傷の具合で分かる筈だ。
見上げた先、ドラゴンが悲鳴を上げている。痛みに吠えた口先から血が流れ、顔を振ったことで辺りに血が零れる。しかし、それでもなお、
……まだ倒れねぇか!
確実にダメージは与えている。特に頭部へ与えている衝撃は、かなり深刻なものの筈だ。
それはドラゴンの様子を見ても明らかで、痛みに耐える姿勢を見せ

ていたのにも関わらず、悲鳴を上げていることから間違いないだろう。
だが倒れていない。まだ戦える。ならば戦いを止める理由にはならない。故に剣を構え、
「……もう一回行くぞ！」
再度の同時斬撃を、逆鱗にお見舞いしようと跳び上がった。
しかしそこで、
「っ、おおお……！」
「――！」
ドラゴンが、その瞳をこちらに向けた。赤く、充血した獣の如き瞳。その視線に射抜かれた瞬間、とてつもない悪寒が、自分を襲う。戦う者にとって、嫌な感じの予感だ。
それは危険を察知した時に感じるもの、それと同時に、妙な行動をドラゴンが見せた。
赤く血に染まった口元。閉じられたままのそこから、光の奔流が漏れる。それは、ドラゴン種が例外なく持つ強力な武器の一つ。
それを口を閉じた状態で、行おうとしている。
……口を閉じたまま、ブレスだと!?　馬鹿か!?
何の冗談だ、と思う。そんなことをすれば自滅するのではないか。故に声を送った。そんな終わりは許さないと、
「何を……！」
「フ……さすがに知らんか」
こちらの問いにライゼンが薄く笑みを作る。そして思いを馳せるように、
「我らドラゴン種には強力な特性を持つ一族が一部存在する。魔法を反射するもの、傷を受ける度に強くなるもの。それらは様々だ。――そして俺も、ある一つの特性を持つ」
ライゼンが笑みで言う。その身体は光り輝いており、
「……伝導超過。ある種の攻撃を受けた際に発動するものだ。――そしてそれは、自分の攻撃でも発動出来る」
ドラゴンが背中の翼を広げて立ち上がる。

そしてブレスを放つと、
「――――！」
ドラゴンが、その身に色を帯びて、吠えた。

「あれ、は……！」
遠目で戦いを見ていたハンティが、光を帯びて咆哮を上げたドラゴンを見て、声を震わせる。
その様子を見たスラルは、同じ様に驚きながらも質問をハンティに飛ばした。
「知ってるの？」
「……知ってる。聞いた話だけど」
その言葉に皆が注目する。視線を浴びながらも、ハンティはドラゴンから目を離さずに言った。
「伝導超過。ライゼンに耐性のある一部の攻撃を受けた際に、一時的に自身の強化をする特性」
「……一部の攻撃、ですの？」
キャロルが首を傾げる。ハンティは簡潔にそれらを上げていった。
「雷属性や光属性。そして炎属性。これらの魔法や、それに類する攻撃」
「……それって――」
そう、とスラルの言葉にハンティが頷いた。説明を理解する。つまり、それに値する攻撃といえば、
「ブレスとかも対象になる。――ライゼンは、ドラゴン種のブレスすらも無効化して強化に使う」
そして、
「それは、自分のブレスでも可能ってこと……ね」

レオンハルトは立ち尽くした状態で、ドラゴンを見上げた。
視界を埋めるほど巨大なドラゴンが今、熱を帯びて身体を発光させ

ている。
それから目を離せない。それほどに、
……すごい、な……。
眼の前の力を持った存在に圧倒される。
見惚れていると表してもいい。
戦闘中に気を抜くなど戦士としてあるまじき事だ。
だが無理だ。これほどの存在を前にして敬意を覚えない訳がない。
在りし日の想像、伝説のドラゴンとしての姿を体現しているかの様だ。その姿は、夜の中にあって輝いており、一種の荘厳ささえ感じる。
そんな中、ドラゴンは声を発した。
「――待たせたな」
「……いや」
そうか、とドラゴンが鷹揚に頷く。そしてこちらを見て、
「これが、今俺が出せる全力だ」
「なるほどな」
つまり、今からが、もう、
「――いいな？」
「ああ」
――最後の戦いだ。
レオンハルトは、息を入れる。高揚しすぎて武者震いが来る。
……これと戦えるのか――いや、戦ったのか……。
今からも戦える。これを越えるチャンスがある。
ならば、その機会を逃す手はない。
四肢に力が漲る。
相手も、こちらも、無傷ではない。幾つもの傷を負い、血を流している。
しかしその表情に苦悶のものはなし。
もはや痛みさえ忘れて、不敵に口端を歪めて見合う。
剣を正面に構える。竜が姿勢を低くした。
足で地面を蹴り出す。竜も地面を蹴り出した。
裂帛の気合いを持って、竜に向かって声を上げる。竜が魔人に雄叫

びを上げ、己を誇示した。
そして一瞬。
魔人とドラゴンはぶつかり合った。

ライゼンは、飛び込んだ。
音を置き去りに、敵に向かって駆けた。
既にこちらの身体能力は、先程までの比ではない。
魔人の全てを上回ったのだ。それほどに、この強化の度合いは凄まじい。
故に、魔人はこちらの身体とぶつかり合い、結果吹き飛ばされた。
相手の行動は適切なものであったが、こちらは膂力で無理矢理、己の攻撃を押し通したのだ。
魔人は吹き飛ばされたが、直ぐに立て直し、地面に足を付けると、そのまま動きを入れた。
その際に、こちらの眼を狙った斬撃、それとともに射抜くような視線を感じる。
……良い闘志だ。
鋭い眼から放たれる圧力は、今まで戦ってきた同胞とも何ら遜色ないものであり、こちらを威圧するには充分なものだ。
故に、それに応えるために、速度を上げた。
もはや自分は誰にも止められない。そして、止めさせない。我が突撃は正面から全てを打ち砕き、勝利するもの。
技術をもって戦うのもいい。小細工や搦め手も否定しない。
だが至上とするのは真っ向からの力比べだ。己と相手。どちらの力が勝っているか。これに燃えないものはいない。これこそが男児の本懐だ。逃げれば男が廃る。
そして思う。これほどの本気を出したのはいつ振りか、と。
それは、
「――――!」
しかし、答えを出す前に動きが来た。

魔人の走る動き。こちらを見据えたまま横に行く動きだ。
何を、とは思わない。それよりも先に潰すだけだ。
行く。
速度は最大。四肢をもって魔人を狩る。
そうして振られた右足は、
「――む」
しかし空振りした。
そして右足が地面に着地する。瞬間、
「ッ!?」
右足の先にあった大地が踏み抜けた。足が埋まり、視線を向けた。
まさか、
「……地面を剣で穿ったのか！」
そのまま高速でこちらに近づいてくる魔人に、声を放った。

レオンハルトは、ドラゴンが右足で地面を踏み抜いたのを見て、小細工が成ったことを確信した。
予め、同時斬りで自分がいた足元に亀裂を入れ、そこを踏み抜かせたのだ。
……ここは絶対の足場じゃねぇぞ……！
何しろ数日前に崩落に巻き込まれた身だ。自分からではあるが。
山道の外側に近ければ近いほど、崩壊の可能性は高い。翔竜山全体からすれば本当に極僅か。これほどのドラゴンが暴れても外側に出っ張った山道が崩れないのは流石と評するしかない。
そして、これで一時的にではあるがドラゴンの動きが止まった。それが重要だ。
レオンハルトは高速でドラゴンの顎下に近寄ると、
「ほら、もう一回だ!!」
逆鱗にもう何度目かの同時斬撃を見舞った。
一瞬で行われる斬撃は三つ。
それは寸分違わず逆鱗を穿ち、衝撃を内部に浸透させた。

再びドラゴンが咆哮を上げたのを見て、
「そろそろ斬れろ！　もしくは砕けろ!!」
声を浴びせた。しかしその先で、
「まだ、砕けん……！」
右足を引き抜いたドラゴンが叫ぶ。
「砕けるのは貴様だ……！」
再度右足が、こちらを振り抜こうとした。
それは先にある鋭い爪で斬り裂こうともするもので、
「――剣の勝負なら負けねぇよッ!!」
「！」
剣で右足を逸した。地面に右足が着地し、山道を揺らす。
それに対し、ドラゴンは吠えた。
例え、鱗に頼る戦いを得意としていても、
「爪の扱いに劣る訳ではないぞッ！」
今度は左の爪だ。
それを弾き逸し、
「爪の扱いには慣れてんだよ……！　ドラゴンとの戦いには慣れてるもんでなぁ！」
「だとしても――」
ドラゴンが姿勢を高くした。そして勢いをつけて踏み潰すかのように、
「お前が今まで戦ってきたどんなドラゴンよりも……俺の方が強いぞ!!」
ドラゴンがラッシュを掛けた。

ドラゴンが連打の攻撃を行なったところで、地面が鳴動するのをケッセルリンクは感じた。
大地が軋むのを感じ、
「まずい。山道が崩れるぞ……！」
「うお、マジか。ちょっと移動しねぇとな」

声に反応したガルティアを始め、皆が山側、洞窟に近い場所に移動を開始する。
その際も揺れを感じ、それに怯えたペールが、
「きゃー!? ま、また落ちるのは嫌ですよ―!?」
「……落ちてみたら? レオンハルトが助けてくれるかもしれないし」
「いや、戦ってるから無理ですよね!?」
スラルの辛辣な提案に勢いよく振り向くペール。なおも喚き続けるも、その気持ちは理解出来る。
……これは、既に経験済みだ。
故に余震の察知は完璧だ。以前と違い、魔人の身体能力をもってすれば復帰も可能かもしれないが、巻き込まれないことに越したことはない。
そしてその感覚を信じるなら、
「もって、後数秒……」
ケッセルリンクが呟いたその数瞬後。
皆の視線の先、レオンハルトとライゼンがお互いの刃をぶつけ合う大地で、
「――!」
崩落が起きた。

ライゼンは、自分と魔人の戦いの結果、山道が落ちるのを感じていた。
ここまでの衝撃を与えてしまっていたか、と驚きこそすれ問題とならない。
何故なら己はドラゴン。背中の翼は飾りではないのだ。
しかし、飛行が出来る自分と違って、相手の魔人はただ落ちるのみだろう。
……どうするつもりだ!?
疑問を得たまま、爪を振り下ろす。そして声を掛けた。

「貴様！　このまま落ちるつもりか!?」
問う。すると魔人は笑みで答えた。
「――それがどうした？」
「――――」
こちらが絶句する先、魔人はこちらの爪を下から剣で受け流しながら言葉を放った。
「痛みも傷も、何もかも――俺達が戦いを止める理由にはならねぇ!!」
「――――！」
告げられた台詞に震えが来た。
心地よいものだ。口端が緩むのを抑えられない。
応えたい、そう思いライゼンは言葉を作った。
「ああ、ああ！　そうとも！　我らの決闘は止まらん！　誰にも止めさせん!!」
その覚悟はあるのだ。
例え大地が砕け、戦う場所が、時代が、何もかもが変わろうと。
……戦いは終わらない!!
この命ある限り、我ら誇り高きドラゴン種は戦い続ける。
何故なら、生きることは戦うことだからだ。
もはや何者かに怖れて、戦うことをやめたりはせぬ。
その躊躇を捨て去り、ライゼンは力を溜めた。
「――っ！」
視線の先で魔人が目を見開く。さすがに気づくだろう。
……さて、これはどうする！
至近距離からのブレス。それも伝導超過により強化されたものだ。先程とは一線を画する威力を持つ。幾ら魔人とはいえ、直撃を食らえば消し炭になる程のものだ。
対応を誤れば即死。そうでなくても山道は粉々に砕け散り、足場を失くす。
……さあ、対応してみせろ！
力を溜め終えると、最後に爪での一撃を放ち、飛び上がると同時に、
「――――!!」

白い奔流を、魔人目掛けてお見舞いした。

山道が崩壊する。
四大聖竜の一角、ライゼンの伝導超過によるブレスの結果だ。
ライゼンは飛び上がり、背の翼を広げて羽ばたいた。
そして眼下、自身が起こした結果を見る。
山道を貫通し、翔竜山の一部に穴を開けた。
しかし、副次的な被害を受けて落下していく岩石の中に、魔人はおらず、
……どこへ消えた!?
死んだ、とは思っていない。あの魔人ならどうにかして生き残っている筈。
視界を回して、人影を探す。
すると頭上を見上げたところで、視界の端に人が映った。
「……あれは」
金髪に黒い服を着た魔人の後ろ姿。
やはり生き残っていたか、と息を鳴らす。
だが、
「……どこへ行くつもりだ?」
不可思議な行動に眉をひそめる。
視界の奥、魔人が翔竜山の外壁をひたすらに駆け上がっていく。
先程までいた広場すら越えて、ただ上に昇っていく。
……山頂まで行くつもりか?
いや、そんな筈はない。あの魔人が戦いから逃げる訳がないのは既に分かっている。
ならば何か狙いがあると思うのが戦う者としての思考だ。それを思案し、
……いいや、やめだ。
翼を羽ばたかせ、魔人の元まで一直線に向かう。
ややこしい探り合いは性に合わない。そんなのはドラゴンの戦い

ではない。
ドラゴンであるなら、
……例えどのような狙いがあろうとも、正面から打ち砕くのみ！
故にライゼンは行った。
空を往く速度は、先程よりも速い。
そのため魔人との距離はどんどんと詰まっていき、
「追いつくぞ……！」
高度を上げていく。
そして、それが差し迫った時、ライゼンは相手の行動を見た。
外壁を昇っていく魔人が振り返り、こちらを見据えると、
「――なっ!?」
こちらに向かって、真っ直ぐに突撃してきた。
それは、山の外壁から、空を飛ぶこちらに向かって跳躍するもの。
その無謀さを悟り、ライゼンは叫んだ。相手の狙いは、
「馬鹿なッ!? 空で戦おうというのか!?」
そんなことをしても未来は見えている筈だ。
このまま攻撃を加えることに成功したとしても、その後、翼を持たない相手は地面に向かって墜落する。
そもそも、こちらが攻撃を受ける保証もない。
こちらは空中でも自由に動きが取れるのだ。ならば、躱してしまえば、相手はただ墜ちるのみで、
……否。
自分の考えに、しかし、自分でそれを否と断じる。
その理由は、
――天空の覇者が、そんな選択を選ぶものか……ッ!!
我らドラゴンは誇り高き戦士の種族。空での戦いを挑むというなら、
……正面から受けるとも!!
熱い思いをもって、ライゼンは行った。
こちらに向かって跳んでくる魔人に向かって、我が意を口にする。
「空は我らがドラゴンの領域！ 何人たりとも侵させはせんぞッ!!」

遠くへ、どこまでも聞こえるように、咆哮を上げる。全ての仲間達に届くように。
そしてこれが、
……俺達の――
最後の攻防だ。

ライゼンは全てを思い出していた。
正面、魔人はこちらに向かって上段から剣を振り下ろそうとしている。
それを頭の鱗で迎撃する。
魔人が頭上を越え、こちらに剣を当てる反動で上に昇った。
なるほど、と思う。技術が必要だが、その様にすれば墜落は免れる。
……ああ、決闘というのは……こんなにも心地よいものだったか……。
思う。心の底から。
これほどの戦いを、今の時代になってから味わえるとは思わなかった。
だからこそ、一つの残念を感じる。感じたのは、
……お前ら、どこにいるんだよ……。
この戦いを眺めることの出来ない戦士達よ。
――何故、この場所にいない？
忘れてしまったのか、同胞。
自分達の姿を。誇り高く、強大な己の在り方を。
世界に居場所がないからか？　大切な仲間が消えてしまったからか？
――ならば、己がそのよすがとなろう。
――俺達ドラゴンは、こんなにも熱くて雄々しい生き物だったと……この世に刻みつけるのだ。
見ろ。その姿を焼きつけろ。
――人類よ。同胞よ。魔物よ。ここにはいない者達よ。そして、マ

ギーホアよ……！
旧友よ。己の姿を見ろ。
――見ているか？　俺は今、全霊をもって戦っているぞ……！
そして周りを見ろ。己を見ろ。
――これを見ても、未だ狂えないでいる俺は哀れか？　孤独に戦う俺は無価値なのか？
俺達が生きた世界は、まだそこにあるぞ。
――この熱く滾る戦いを見ても、何も感じないのか――!!
どこまでも遠く。遠くに聞こえるように。
ライゼンは、咆哮する。
俺達の生きてきた時間は、無駄じゃないのだと。
俺達が残してきたものは、まだそこにあるのだと。
俺達はまだ、忘れられていないのだと。
一体のドラゴンは吠える。
――哀れだろうと……！　何の意味が無かろうと……！　俺は意思をもって戦うとも！
哀れなんかではない。意味が無いなどと言わせない。
俺達が行きてきた時代を、無かったことにはさせない。
それを永遠を生きる眼の前の存在達に見届けさせよう。
今を生きる全てのものの伝説としよう。
故に、ドラゴンは空に昇った。
勇敢にも、天空での決着を望んだ魔人を連れて。
その額の先に、剣を合わせ続ける人を連れて。
この胸を焦がすほどの熱い気持ちを、昂りを、全てを持って、どこまでも昇ってゆく。
――ああ、身体が大きくて良かった。
――この光り輝く鱗を生まれ持ってきて良かった。
これなら遠くまで見えるだろう。この空の下にある同胞達にも見えやすいだろう。
それでも見えないと言うなら、
――俺の声を、聞いてくれ。

精一杯、叫ぶから。

翔竜山。
その上層部から中層部にかけてある幾つかの巣穴に隠れ潜むドラゴン達がいた。
彼らは誰も彼もが、心を狂わせた者達。
過去の悲劇に潰され、未来を諦めた者達だ。
そんな彼らの瞳には何も映らない。
彼らの耳には、どんな言葉も響かない。
何を感じても、心は動かない。
彼らの眼の前で起きる事象は全て、意味を持たない。
だが、

「――――」

不意に、音が聞こえた。
懐かしい音だ。
知っている気もするし、知らない気もする。そんな音だ。
良く聞いてみた。
音は、空から聞こえていた。
夜空の向こう、遥か頭上の先に、光がある。
夜の中にあって、輝くそれは星のような、仲間の姿だった。
そして音は、声だった。
どこか悲しい響きのある、しかし、それでいて、前向きな声だ。
そして気づけば、

「――――」

ドラゴン達は、何か熱いものが頬を伝うのを感じた。
その意味はわからない。理解出来ない。
この流れ出るものも、何故そうなるのかも。
分からない。
だが、空を、あの仲間を見ていると、

「――――！」

何かを伝えないといけない気がした。
故に、声を送ろう。
天に向かって唄おう。
「――――！」
――そうしたいと、不思議とそう思ったから。

とある城では、ある者達が不意に動きを止めたところだった。
そろそろ夜明けといった時間である。普段ならこんな時間に目覚めることはない。
しかし今日は目覚めた。理由は分からない。
そして今は、
「――七星。窓を開けろ」
「……はっ」
竜の従者は主の命令を聞いた。
しかし聞く前から、何故かそうしなければいけない気がした。
そうして見るのは西の空。
理由は分からない。ただの気まぐれ、そういう気分だっただけかもしれない。
でも、
「……」
「……」
今は何故か、西の空を見なければいけない気がした。
故に二人の竜の主従は、しばらくの間、黙って空の向こうを見続けた。

翔竜山の山道。
山道の一部が崩落し、竜が昇っていくのを見た魔の者達は、
「これは……」
宙に響く竜の声を聞いた。

幾重にも重なって聴こえる音は、どこか不思議な響きをもって、聴くものに何かを伝える。
それは、
「何だか……唄ってるみたい」
竜の唄だった。
そして気がつけば、
「……ごめん」
ハンティ・カラーは顔を、表情を隠すように俯いており、
「聴いてあげて……」
ハンティの言葉に、皆はそちらを見るようなことはしなかった。
ただ、空を見上げて、
「……言わなくても、聴こえてる」
「……うむ」
ガルティアの言葉と、ケッセルリンクの頷きに、誰もが頷いた。
そして、
「……ありがとう」
ハンティはそれだけ言って、再び空を見上げた。

ライゼンは、声を聞いた。
「――――」
ライゼンは、唄を聴いた。
「――――」
まさか、と思った。
このような事は今までに一度もないことだった。
だが、
……ああ、わかってるとも。
意味は伝わった。
故に、己も唄おう。
そして皆の期待に応えよう。
今度こそは間違えない。

雲を突き抜け、天空に出る。
そこでライゼンは、額の先で圧力を受け続ける魔人を見た。
そして、声を送った。
「行くぞ」
声とともに、ライゼンは急ブレーキを掛け、魔人を遥か頭上に吹き飛ばした。
それはしばらく上に向かって昇っていったが、やがて、重力に従って墜ちてくる。
魔人は姿勢を制御し、こちらを見据えた。
ライゼンは力を込める。
「決着をつける……！」
口内に溜めるのは、己の最大の攻撃。
生涯でただ一度。そして、今までの自分を越える――最大のブレスだ。
「――――!!」
それを魔人に向けて放つ。
白の奔流が夜明けが迫る空を震わせ、轟音とともに一直線に、魔人に向かう。
魔人は、その蒼く長い剣を、ただ振り下ろした。
「おおお……!!」
こちらのブレスを、真正面から縦に斬り裂いていく。
墜ちるだけの向こうに、静止する術はない。
ならばこれが勝負だ。逃げる手段はないし、逃げる気はない。
「――――!!!!」
こちらも力を振り絞る。
全てを破壊する、大いなるドラゴンの武器だ。
しかしその白は、やがて、光を背に浴びた蒼に分かたれ、
「――っ！」
魔人が白の奔流を断ち切り、眼前まで迫る。
そして、剣に全力を込めて、
「おおおおおおおおおおおお――ッッッ!!」

最後の攻防の先、ライゼンは自身の白と、魔人の蒼が合わさる瞬間を見た。
「ああ……」
――二千年。待ったかいがあった。
空には日が昇る。
その景色だけは、
――いつまで経っても……変わらないな……。
世界と今を生きる者達、全てを照らす――
「夜明けだ」

伝説

遥か上空から、影が墜ちる。
朝の光を浴びながら雲を突き抜け、地上へと落下していく。
竜の周辺には、白の破片と赤い飛沫が弾けて空を舞っている。
それは魔人が、こちらの口元から先を斬り裂いた結果だ。
こちらのブレスを斬り裂いた魔人は、その勢いを全く緩めないまま開いた口元に剣を当てたのだ。
口元、身体の中までは外面のダイヤの鱗はない。そこには攻撃が通るものだ。
そのため己はいつ何時もそれに気を配っていたもの。口を開くのはブレスの時のみ。そうしていれば相手が口元を狙う隙も生まれない。
だが魔人はそこに剣を合わせた。途中までは同時斬撃にてこちらの装甲を断つはずだったそれは、その一太刀が内側から外部への破壊を選んだ。結果、鱗は欠けて、
……俺の、負けか……。
致命の傷を負った。未だ終わりが訪れるには時間がかかるものの、身体は満足に動かない。伝導超過も切れた。戦う力は残ってないのだ。
もう少し熱い戦いを味わいたかったが、最後の攻防の結果だ。悔いはない。
しかし、一つ懸念があるとすれば、それは勝者の扱いだろう。
……このまま彼奴を墜落死させる訳にはいかぬ。
幾ら魔人とはいえ傷を負い、血を流した相手が、落下の衝撃に耐えられるとは思えない。空にある魔人はこちらのブレスを受けた結果か、身体を投げ出すのみで何かをしようとしていない。
……ならば。
ライゼンは力を振り絞った。
己は既に満身創痍の身。満足に空を飛ぶことは出来ない。
しかしながら翼を広げ、滑空することは出来るものだ。ならばこの

身は勝者が生き残る為の一助となろう。
身体を捻り、翼で落下速度を抑制しながら背に魔人の身体を乗せると、翔竜山の上層。先程までの戦場である広場に方向を変える。
そこならば、魔人の仲間もいる。凱旋にはちょうどいいだろう。
だが、
「何の、つもりだ……？」
背にある魔人が、身体を起こそうと身じろぎをした。その声には疑問の色がある。何故助けるのか、とそういうことだろう。
ライゼンは、魔人の問いに答えた。
「……戦いの勝者を、むざむざ死なせる訳にはいかん」
「……それ、は」
魔人は決まりの悪そうに言葉を詰まらせた。
しかしそれが放たれる前に、ライゼンは声を上げた。
「言いたいこともあろう……」
だが、と。
「まずは生き延びるといい。文句なら、後で受け付けよう」
「……」
そう意思を込めて言うと、魔人は黙りこくった。
その沈黙は肯定。身体の上での身じろぎがなくなったのを確認する。そして、
「では、落ちるなよ」
と、ライゼンは背に魔人を乗せて、途中何度もふらつきながらも、先程の広場まで舞い戻った。

空の上から巨大なドラゴンが降り立つと、スラルは近寄っていった。
勝負の結果、倒れ伏したドラゴンと、その背から投げ出されて地面に転がったレオンハルトがいる。どちらも傷を作り、血を流した姿であり、息を乱していた。そんな姿が見ていられず、直ぐ様ヒーリングを掛けようと声を上げた。

「レオンハルト！」
「やめろ、スラル……！」
しかしレオンハルトは、それを差し止めた。負傷と疲労で身体に力が入らないのか、時間を掛けてゆっくりと立ち上がる。足元が覚束ない様子であったが、踏ん張るように身体の揺らぎを止める。
そして向こうの方でも、ハンティがドラゴンに声を掛けた。
「ライゼン……！」
心配し、駆け寄る声。だがドラゴンは血に濡れる口元から声を作り、
「同胞か……」
視線をハンティに向け、小さく口端を歪めると、
「どうだ、同胞よ。俺の戦いを見ていたか？　俺は立派に戦い抜けていたか？　あの日見た同胞の姿に……俺は追いつけていたか？」
「……ああ、勿論さ……！」
はは、と告げられた言葉にドラゴンは笑った。そして視線を仲間であった彼女から切ると、それをこちらに向けてくる。
正確には、傍らにいるレオンハルトを見るものであり、
「――ならばよし」
悔いはない、とドラゴンは言う。
そしてレオンハルトに真っ直ぐ声を送った。
「この勝負、貴様の勝ちだ。――ゆえに」
ドラゴンは一度言葉を区切った上で、目を細めながら言い切った。
「俺はもう動けん。戦う力もない。このまま緩やかに死に向かうだろう。だからその前に――」
言う。それは、
「決闘の勝者であるそちらから、引導を渡してほしい」
言った言葉に皆が息を呑む。その意味は分かる。つまり、
「とどめをさせ」
彼の終わりの時間だ。

ハンティは迷った。
戦いを終えたライゼンの言葉に、その瞳を揺らしながら思う。
……これで、いいの……？
眼の前で仲間が死を願っている。
ただの死ではない。決闘の末に果たされる、誇りある死だ。
だが、確かに終わろうとしている。失われようとしている。
まだ治療を受ければ生きていられるかもしれないのに。
生きてほしい。生き続けて、これからも示してほしい。
言いたい。しかしそれを、本人が望んでいない。本人は、満足ある終わりを得ようとしているのだ。
ならそれを告げることは正しいのだろうか。そこに迷いが生じる。
……あたし、は……。
きっと今の自分は酷い顔をしているだろう。ただでさえ目元が赤くなっているのだ。
ふと、応じる先を見た。ライゼンと視線を交わし合うレオンハルトの方をだ。
彼はどんな答えを出すのだろうか。それを見る為だ。
彼は戦士だ。一月に一度の付き合いだが、それでももう出会ってから１２０年だ。彼の性格はそれなりに知っている。
しかしそれでもどのような答えを出すのかは分からない。レオンハルトの表情は眉一つ動かない。口は噤んだままだ。
だが、やがて動いた。ライゼンに近づく動きだ。ゆっくりだが確かに一歩ずつ、満身創痍の仲間に近づく動きで、
「――なら、そうするぞ」
レオンハルトの言葉に背筋が凍った。剣を振り上げる動きを止めようと思った。
しかし動かない。仲間がとても満足そうだったから。そうされることを望んでいるようだったから。
だからこそ、ハンティは、主の剣を止めることが出来ず、
「――ッ！」
視線の先で振り下ろされた結果を、見ることしか出来なかった。

甲高い金属音が鳴り、レオンハルトは、その結果を見て、大きな息を吐いた。そして、
「――やっぱり……まだ斬れねぇか……」
「！」
その悔しそうな、それでいて嬉しそうな響きが宙に飛ぶ。彼は口元を苦笑の形に作り直し、
「この勝負、引き分けだ」

レオンハルトは、自身の剣の不甲斐なさの結果を見た。
右手を戻す先、握られた剣で、ドラゴンの殺すつもりで首元に放った一刀は、しかし呆気なく弾かれ、
……俺も、まだまだだな。
最後の攻防を思い出す。そして告げる相手は、地に伏した状態のドラゴン。
彼に向かって言葉を送る。それは、
「お前はもう戦えず、俺もお前を殺す力はない。――今だけじゃない。さっきもだ」
「それは……」
ドラゴンが逡巡する様子を見せる。思い当たる節があるのだろう。当然だ。
先程の空での攻防。こちらは相手に賭けざるを得なかった。
上空から落ちる力に頼っての全力の振り下ろし。それをもってなお、鱗を少し砕くので精一杯だった。
こちらがずっと狙っていた、斬る、という行為には程遠い。倒すことが出来たのは、斬撃をドラゴンの口から通し、内部から外側に斬り裂いた結果である。
それは相手が空での戦いに付き合ってくれる前提であり、更には運にも賭け、小細工を弄することでしか倒せなかった。
視線に映ったドラゴンが声を作った。同じことを思ったのだろうか、静かな声で、

「……しかし、それでも立っているのは貴様で、地に伏しているのは俺だ。ならば勝者は――」
「ああ。――わかってる」
それも含めての勝負だ、と言われればそこまでだ。
……だが、それでも俺は――
「なあ、ライゼン」
故に告げてやろう。一方的な言葉を、
「お前は、縁が無くなったから死にたくなったと、そう言ったな？」
「……ああ」
静かに、ドラゴンが応じた。なら、言葉を尽くそう。
「なら、俺とも約束だ」
「何だと……？」
ドラゴンが言葉を溢した。怒ってはいない。ならば構わないだろう。そうでなくても躊躇いはしないが、
「俺はいずれ、お前を斬る」
「――――」
告げられた言葉に、ドラゴンが目を見張った。
言う。自分の想いを、
「真正面から、堂々と、その身体に切り傷を作ってやる」
強くなる。この大いなるドラゴンに負けないように。この剣が届くまで。
だから、
「また、やるぞ」
こうすれば、
「それまではその命、預けておく。――だから生きろ」
生きる理由が増えるだろうと、そう願って。

ライゼンは、ある事を思い出していた。
昔の、遥か昔の話だ。かつて自分は今の様に、戦った相手からの言葉を受けたのだ。

それは、
――なぜ、お前は……死にたがっているのだ？
あの頃も自分は、仲間の死に苦悩し、己の在り方を見失いかけていた。
――ならば私と約束をしよう。
そんな自分を救うように、彼は言葉を掛けてくれた。
――私がいずれ、お前を正面から打ち倒す。
自分を失うのは惜しいと、縁を作ってくれた。
――それまでは、私の友となってくれ。
己の在り方を形作ったそんな存在だ。
思えばそこから生き方を学んだものだ。
幾つもの戦いを奴とともに乗り越え、様々なものを得たのだ。
そして今、二度目の言葉が来た。
一度目と違い、不器用で乱暴な言葉で告げられる。
しかし、それゆえの誤魔化しのない正直な気持ちだ。
だからこそ感じ入るものもある。
故に、ライゼンはそれに応えた。
新たな縁を得る約束に答えるため、言葉を作る。
「……なるほど、良い返しだ」
一本取られた、とそう思う。
こちらは二千年を生きるドラゴンだというのに、それを越える物言いをした魔人に苦笑する。
だから、こちらもやり返してやろう、とそんな思いで視線を送り、
「――断る」
「……あ？」
言った言葉に魔人が眉を立てた。他の者が息を呑む姿が見える。
特に隣の同胞は大きく目を見開いている。
その様子に仕返しが成ったと確信すると、再び声を放った。
それは、
「死ぬような約束は出来ん。だが――」
言う。

「また、やろう」
「！」
魔人が目を見開く。
しかしやがてその意味を理解すると、肩を竦めて苦笑する。
再びこちらと視線を交わすと、彼は声を送ってきた。
「……ああ、またやるぞ」
魔人が声を上げる。その口端を吊り上げた表情は、
……良い笑みだ。
戦う者の純粋な笑み。こちらとの再戦を楽しみにしているかのようなその喜びに、ライゼンは苦笑する。
……まったく。
ドラゴンとの再戦を喜ばれてしまってはこちらの立つ瀬がない。お株を奪われた気分だ。それはこちらの十八番だというのに。
しかし、そんな奴だからこそ、それを成したのだ。
ならば、賛辞を送ろう。
「――今ここに、伝説は成った」
それがドラゴンの役目だ。
誇り高き強者に打ち勝った英雄に、我らは褒美を与えよう。
彼は、我らとの戦いに打ち勝ち、その上で縁を結んだのだ。
何もかもを越えて、救われたのだ。
故に恩義も兼ねて、閉口している勝者に、視線で先を促す。
その先は我らの故郷。大いなる頂きへの道だ。
「行け」
そこを見に来たのだろう、と。
かつての世界の覇者。その一角を越えたのだ。資格は充分。
「世界の頂きを見てこい。――そこが、俺達の生きた世界の光景だ」

その言葉を受けたレオンハルトが、最初に聞いたのは背後からの声だった。
「俺は辞退するぜ」

「……ガルティア」
言ったのはガルティアだ。しかしその思いは、皆が共通するものようで、
「さすがに見に行けねえよ。ここまでされちゃあな」
「……そうか？　……いや、そうか」
疑問した言葉を、自分で納得することで取り消す。
これは自分が勝ち得た報酬のようなもの、と皆が感じているのだろう。
とはいえ、
「……でもまあ、一人で行くのがアレなら、誰か一人くらい連れてけよ。怪我で倒れられてもこまるしな」
「……ああ、そうだな」
だったら、とレオンハルトは視線を傍らにいる存在に向けた。
そして手を差し出し、
「行くぞ、スラル」
「え……私？」
何故か戸惑うスラルに息を吐く。
お前以外だと困るだろうが、とそんな思いで、
「いいから来い。お前じゃないと駄目だ」
「え、あっ……うん。わかった。でも、ちょっと待って」
言葉を詰まらせながらも了承したスラルが、手をかざす。
その先は未だ地に伏した状態のライゼンの方であり、
「――――」
宙に響く音が発生し、ライゼンの身体を魔法の光が包む。
それはスラルの使う神魔法。回復魔法の光であり、
「ん、これでいいかな……」
ある程度の回数、魔法を掛けるとスラルはぎこちない様子でライゼンに声を掛けた。
「……帰ってきたら、その、……また魔法を掛けるから。それまで我慢して」
「……感謝する。魔王よ」

治療の礼を告げるライゼンに、しかし、スラルは、言葉を濁らせ、
「それと……その、後で――」
「了解した」
「えっ？」
用を聞く前に頷きの言葉を返したライゼンに、スラルが間の抜けた声を出して彼を見る。
しかしライゼンは、それでも頷きの言葉を再度掛けて、
「わかっているとも。……何か聞きたいことでもあるのだろう？　戦いの前から視線は感じていたし、二千年を生きるドラゴンを前にしたのだ」
分かっていた、と言う。そうなのか、とスラルを見るも、それが図星だったのか驚いているようで、
「……ん、そんな感じ」
「ならば先に行くがいい。疑問には戻ってきた時にでも答えよう」
「……わかった」
スラルはライゼンの言葉に納得すると、再びこちらまで寄ってきた。そして、
「行こ」
「ああ」
スラルがこちらを見上げて言った。それに答えると足を山道の方に向ける。スラルも横に付いてきた。
背後にいる者達に後で合流しようと、声を掛けると、レオンハルトはスラルと並んで、山道を行った。

ケッセルリンクは、先を行く二人を見た。
並んで行く二人。片方は忠誠を誓った存在で、片方は初めて愛した存在だ。
そんな二人は、それが当然ともいうように並んで山道を行くもので、
……敵わないな。

そう思う。しかし不思議と哀しみはない、と思う。
元から理解していたことだったからだろうか。
だが今も気持ちは変わらない。その光景を見ても色褪せてはいない。
それは何処か、惜しむ気持ちがありながらも、
……私は、それでもよいと望んでいるのか……？
元より期間を過ぎれば終わる関係だった筈だ。
しかし予想と反して終わりは来ず、自分には新たな道を提示された。
魔人となり、これからも彼らと関わっていく、そんな道だ。
その道の始まりに、彼と竜の戦いを見た。想像を絶する力と力のぶつかり合い。しかしそこに想いがある。何かを為そうという想いが。
それを見て思う。自分は、
「私は、これで良いのだろうか……」
想いは声となって宙に漏れ出る。
そしてそれに反応したものがいた。
「物思いにでも耽ってんのか？」
褐色の肌を持つ男。魔人ガルティアだ。
彼の表情は先程までと変わらない小さい笑みを携えたものであった。
態々少し離れた自分に話しかけにきたということは何か言いたいことでもあるのだろうか。
「……ああ、そうだな。色々と悩んでいる」
「……ま、しょうがない。あんな戦い見た後だとな。俺も、思う所はある」
「……それは」
何か、と言おうとして止める。そこまで深入りしていいものか、と。
彼の表情は笑みを携えながらも雰囲気は真面目なものだ。食事を摂る手も止まったまま。まだ短い付き合いだが、それが珍しいことは分かる。だから、
……やはり彼も言いたいことがあるのだろう。

あの戦いとやり取りを見て、何となく話したくなったのかもしれない。
ならば、とケッセルリンクはまず自分から口にした。
一つ、先程の事とは別に思うのは、
「かの竜を見て私は……何を残せているかと。そしてこれから何を為すものかと。そんな悩みが浮かんだ」
「そうなのか」
「ああ。……そちらはどう思う？　あの戦いを見て」
「……俺は」
聞くと、ガルティアの声が止まった。口元から笑みの形が消え、何かを考えるように押し黙る。
しかしややあって、笑みを元に戻さないまま、ガルティアは言った。
「……あのドラゴンは、受け継いだ方なのかって、思ったな」
「受け継ぐ方？」
ああ、とガルティアが頷く。その上で、
「俺は託してきた方だ。俺だけじゃない。レオンハルトやお前も、多分そうだろ？」
「……確かにそうかもしれないな」
言われたことを何となく理解する。
自分はカラーの長で、やるべきことを精一杯こなして、生き抜いてきたものだ。
そしてその培ったものは、全て次の者に――ペールに引き継がせた。
自分が託してきた方で、ペールが受け継いだ方、と彼の言い方で言うならそういうことだろう。
……ならば。
思う。レオンハルトの話は既に聞いている。
そして今の話から、ガルティアの事情も何となく察せる。
つまり彼らも、後に残る者達に全てを託して、こちら側に来たのだと。
そしてこちら側で、新たに生き抜く覚悟を決めたのだと。

……ならばあの竜は、
考えていると、ガルティアから再び言葉が来た。考えていたことと一致するものだ。
「それであのドラゴンは受け継いで、生き抜いてきたのはいいが……受け継ぐ先が無くてああなったんじゃねえか……なんてまあ、柄にもなく難しいことを考えちまったよ」
と、ガルティアはそこで空を見上げた。
そこにいたであろう多くのドラゴンを空想しているのだろうか。その目は何となくではあるが、過去を見ているようで、
「……あのドラゴンは俺達と何ら変わらねえ。ただほんの少し、不運があったんだろうなってな」
「……竜も人も何ら変わないと？」
さてな、とガルティアはそこで笑みを作り、懐から肉を取り出した。そして、ただ、と言葉を作り、
「俺は自分のやってきたことに後悔はしてない。色々あったが、それは仕方のないことだったしな。……でも、ああしておけば、と思うことはある。過去を変えらんねえのは分かってるし考えてもしょうがないから、そういうもんだ、で流すけどな」
続ける。彼の腹から出てきた蜘蛛の足が彼の肌を撫でた。それを彼は、優しく撫で付けながら、
「だが、微妙に諦めてたのも事実だ。別に今の生活に不満がある訳じゃねえし、むしろレオンハルトやスラルには感謝してる。だがまあ、本当に偶にだが……色々と思っちまうんだな、これが」
捨ててきた筈なんだが、とガルティアは言う。そこには確かな、過去の想いが垣間見える。それを大切にしてきたことも。何かがあったことも。
だがそれも、今日で色々と吹っ切れた、と。
「今の戦いを見て何となくだが、生き抜かないとな、って思った。だからまー……これまでも好きに生きてきたが、これからも好きに生きてみようと――再確認したのさ」
「生き抜くことの大切さを学んだと？」

言うとガルティアは笑う。そして茶化すように、
「そんな真面目なもんじゃねえさ。ただ、後悔も何もかも終えて、決心がついたってだけだ。……だからまあ」
一度言葉を区切って、ガルティアは肉に齧りつくと、見上げた視線をこちらに向けて、
「お前もお前で、好きに生きればいいんじゃねえか？　なんかレオンハルトと同じで考えすぎる面倒な性格っぽいしな」
「……別にそういうことはない」
そうか？　とガルティアが聞き返す。違うならそれでもいい、とそんな態度だ。
……まったく、この男は……。
随分と適当というか、細かいことを考えない男のようだ。先程までの考えは、やはり珍しいことなのだろう。
しかし、こちらの悩みを見抜いていたのも事実だ。
気配りの出来る男なのだろう、とそう思う。
……でも、そうか。
今のやり取りでほんの少しだけ、仲間の事が理解出来た。自分の悩みを理解出来た。
故にケッセルリンクは言葉を作った。言うべきことがある。それは、
「言っておくが」
「お？」
前置きを置いて言う。
自分の想いは、
「私は確かに面倒かもしれないが――これでも一途な女でね」
そう。私は面倒なのだろう。
だから、
……この想いだけは、いつまでも捨てずにいよう。
想いが実るかどうかは分からない。やはり許されないことかもしれない。
しかしそれでもいい。何故なら、

……私は今、好きに生きぬいていく覚悟を決めたのだから。
何があっても、後悔はしない。

新しい縁

風が吹いた。
雲の上、翔竜山の山道を行く二人の男女がいる。
男の方は傷だらけで、血を流していたが、それを見かねた女の方の治療を進み出るも拒否される。
心配そうに男を見上げていた女は、しかし、息をつくと、彼を支えるように寄り添った。
そして言う。女の方が呆れた様子で、
「……もしかして、私を連れて来たのってこのため？」
こうやって支える為か、というか治療してもらう為に呼んだのではないか、と言外に問うたつもりの言葉だ。
しかし男は首を傾げ、
「？　違うが、どうした？」
「……ん、そう」
「……一体何なんだ」
知らない、と言わんばかりにそっぽを向く。本当はわかっていたが。
答えを聞くのは怖いからやめよう、と女は思った。答えを知らなければ、その本当のところは分からない。どちらの可能性があるものだ。今はその方がいい。可能性を残す方が精神的にも余裕が出る。
なので静かに無視して歩き続ける。
そうして十分近く歩いたところで、
「――お」
「――あ」
同時に、二人は短い声を上げた。二人してそれが視界に入ったからだ。
何も遮るものがない場所。最も天に近い、この世で最も高い場所。
翔竜山の――山頂だ。

「……すげぇ、な」
「……ええ、すごい」
視界に広がる景色に、レオンハルトはただ呻くように感嘆を上げた。横に並ぶスラルも同じだ。
そうせざるを得なかった。目を見開きながら、その先を見つめ続ける。
どこまでも続く、果てしない雲海。
その先には光がある。朝日が昇り、その下の雲の絨毯を、陽光が赤く照らしている。
絶景。その言葉に相応しい光景だ。
「これが、ドラゴンの生きた……世界の光景か」
ゆっくりと呟く。先程聞いた言葉を。
それにスラルは同意した。その上でこう言った。
「……きっとこの景色は……空を自由に往くドラゴンにとっても、特別なものだったのね」
「……ああ」
頷く。そうであったのだろう、と。
この空はドラゴンが生きる故郷の景色だ。
彼らはこの空の中で生き、また地上にも行きながら、最後にはこの空に還ってくるのだろう。
そしてこの空の下では、
「……俺達が生きる世界でもあるんだな」
「……そうね」
雲海の下、地上では人類や魔物。それら様々な生物の営みがあるのだろう。
そこにはドラゴンだっている。
今は空を往くことが無くなったとしても、確かにそこにあるのだ。
冷えた空気も、痛みも、何もかもが気にならない。
そうしてじっとしたまま、スラルとともにこの光景を目に焼き付ける。
だが、ややあって、

「――少し、いいか？」
「！」
不意に、背後から声が掛けられた。知っている声ではない。
突然の来訪者、その存在を感じ取って振り向く。
スラルが、警戒して後ろに一歩下がりながらも、その姿を見て疑問するように言った。
「……猫？」
そこには、赤いタキシードを着た、人間大の猫が立っていた。
魔物か、と思ったが力は感じない。少し警戒を緩めながらも対峙し続ける。
すると猫の方が口を開いた。
「すまないな。無粋だと思ったが、言いたいことを言ったら消えるので許してほしい」
丁寧で落ち着いた口調だ。故に不気味だ。
魔人と魔王。その存在を前にして、この落着き様。普通の生き物であれば怯えて逃げ惑う筈のそれは、全く恐怖の色を見せないまま、こちらを見詰めている。
「……お前は何者だ？」
言った。聞かざるを得ない。
しかし、猫は一言だけで答えた。それは、
「私はこの世を捨てた者」
「この世を捨てた……？」
スラルが疑問するように反復する。それに対し、猫は鷹揚に頷いた。
「左様。故に何もしない。……声を掛けたのは、お礼を言うためだ」
お礼？　と疑問する前に、猫は頭を下げた。そして何かを想う声で、
「――我が友を救ってくれたこと。感謝する」
言葉に息を呑む。友とは誰のことだ、という疑問も。
だがレオンハルトは、そこではっと思い当たるものがあった。線が繋がるような、そんな感覚を憶える。

そう、友とは、
「この借りはいずれ、何らかの形で返そう。――では、さらばだ」
「あっ、おい!?」
しかしそれを言う前に、猫は跳躍した。そして崖から飛び降り、
「下に……!」
スラルが驚愕する先、雲海を突き抜けて墜ちていく猫を見る。
通常の猫ではありえない跳躍力。そしておそらく、あの猫は無事であろう。
その理由を思い、レオンハルトは驚いたままのスラルに声を掛けた。
「……大丈夫だろ。慌てた様子も無かったしな」
「一体何だったの……?」
その問いには少し悩んでから、答えを出した。
あれは、
「ただの猫だろ。――この世を捨てた、な」
ただ、随分と大きな友人がいるようだが、それを晒す無粋はしない。
今はとても良い気分なのだ。これを壊すことはしたくない。
「……もしかして――」
スラルが少し間を置いて、何かに気づく。だがそれを差し止める様に、レオンハルトは言った。
「それはいいだろ。あいつは、ただ礼を言いに来ただけだ」
「……そう、ね。うん……確かに」
何かを考えていたスラルであったが、しかし自分で納得したように頷く。
そしてこちらを見上げると、
「少なくとも今は……良い気分だからね」
「ああ、そうだ」
そうしてお互いで見合って小さく笑みを見せる。
そこで一度視線を切り、再びその景色を見つめる。
不意に、スラルが言った。
「ねぇ、レオンハルト」

「何だ」
彼女が言う。その景色と、その先にあるものを見詰めながら、
「私ね、実は……この世界のこと、あんまり好きじゃなかったの」
「……そうか」
応じる。自分の思いは、
「俺も、そうだったよ」
世界が嫌いだった。自分も同じだ。
スラルは続ける。
「この世には、理不尽が多くて、どうにもならないことが多くて、どれだけ考えても答えが出ないことが沢山あって。そんな世界が嫌いだった」
応じる。自分も、
「ああ、そうだな」
嫌なことも、哀しいことも、後悔することも、どうにもならないことも沢山ある。
だが、それでも、
「今は……どうなんだ？」
聞く。ならば今は、
「ええ。……そうね」
答える。こちらを見上げて視線を合わせる。
そして、スラルは言った。その表情を、良いものに変化させて、
「今は――少しだけ好き」
「――――」
笑顔で言った。
不意のその表情に固まり、息を呑む。そして思い出す。
初めて出会った時の、不安で、今にも泣いてしまいそうな表情を。
……ああ、そうか。
その時から、自分はそのために戦っていたのだ。
自分と同じ様に、そして自分以上に不安を抱えたこの少女を、
「……ああ」
言う。余分なことは考えない。

何故なら、自分も同じ気持ちであり、
「俺も――少しだけ好きだ」
「……そう」
そして、スラルは笑った。
「――なら、よかった」
そう、良かった。
彼女を、ようやく笑顔に出来た。
それだけで今は、
「ああ……本当によかった」
自分は笑顔になれる。
これからも戦える。
なら、これからも自分はそうしよう。
彼女と、彼女の好きなもののために頑張ろう。
「……なら、もうちょっと見ていこうぜ」
「えっ、あ――」
彼女の手を掴み、引き寄せる。そして少しでも、この景色を、夢を、見せよう。
「あ、危なくない？」
「ああ、危ないな。でも大丈夫だ」
そうして、少しでも彼女と世界を好きになれたなら、
「俺がここにいるから」
そうしたらまた、歩いていけると――そう思うから。

空を行く者がいる。
その大きな影は、緑の大地を往き、その背に幾つかの影を乗せていく。
そうして彼らは、帰るべき場所に辿り着いた。
そこで言う。レオンハルトは、自らの帰るべき場所に降り立ちながら、
「……まさか、お前が送ってくれるとはな」

「空の旅、楽しかったですわー！」
キャロルが顔を向けた先、大きな白のドラゴンが言った。
彼は短く笑うと、
「なに、貴様の住む場所を見ておこうと思ってな。居場所くらいは知っておかねば再戦も何もない。貴様は忙しいのだろう？」
「……ま、そうだな。助かった。でも、かなり騒ぎになってそうだな……どう説明するか……」
レオンハルトが視線を魔王城に向けると、そこでは見張りの魔物兵が巨大なドラゴンの姿を確認して右往左往していた。何かをしてくるというのは無さそうだが、それでも色々と聞かれるだろう。自分達の姿も見えていることだし。
「……キャロル。先に戻って説明してこい」
「畏まりましたわ！　ひとっ走り行ってきますの！」
そう言うとキャロルは言葉通り、真っ直ぐと魔王城に向かっていった。相変わらず勢いがある。
そこでスラルはライゼンの前に進み出た。そして後ろの皆に、
「それじゃ、その、少し話があるから、貴方達は時間を潰しておいてくれる？」
「わかった。……こっちもこっちで、色々と話がありそうだしな」
とレオンハルトが言う先は、ここまで見送りに来たペールが、ケッセルリンクと何かを話している。彼もそちらに向かうのだろう。
そしてガルティアは、
「俺も先に城に戻ってるぜ。腹減りすぎて死にそうだしな」
おお、とレオンハルト軽く頷くと、ガルティアはさっさと行ってしまった。彼らしい軽い別れだ。既に色々と済ませた、とそういうことだろう。
そしてガルティアが行くのを確認したレオンハルトが、こちらにも手を挙げて少し離れる。
そのタイミングで、ライゼンは声を掛けてきた。
「……して、聞きたいこととは？」
「ええ、そうね」

一度頷くと、一応防音魔法を掛けておく。
そして巨大なドラゴン――ライゼンの目を見て言う。
自分の疑問は、
「貴方は――魔王アベルが、何処でどうやって死んだのか、知っている？」
「――――」
言った言葉に目を見開いた。しかし直ぐに気を取り直すと、
「アベルのことか……疑問に応えようと言った身ではあるが、一つこちらからも聞きたい。――何故そのことを知りたがる？」
「……私にとって大切なことだからよ」
「……」
言うと竜は考え込むように沈黙した。
しかしややあって口を開くと、
「同じ魔王として、思うところがあるのか？」
「……」
思うところは当然ある。
しかしそれは、出来れば答えたくないものだ。
そんなこちらの考えを見通したのか、やがてドラゴンが、息を吐くと、
「……そうか。ならば良い。知ってることを話そう」
そして前置きしつつ、ドラゴンは言った。
「奴が率いる魔軍と、我らドラゴンの戦いが終えた後、我らの王は地下深くにアベルを幽閉した。瀕死の奴に杭を打ち付けてな」
「それは何処？」
ああ、とドラゴンが頷いた。それは、
「――奈落。そう呼ばれている場所だ」
「奈落……」
こちらがそう呟くと、続けてドラゴンが言う。
「そして死因は……申し訳ないが、俺にも分からん。衰弱死したのか、それとも――」
「……誰かに殺されたのか」

引き継いだ様に言うとドラゴンがこちらを射抜くような視線を向けてきた。
その上で、彼は何かを思い出すように、
「どうやらそちらは、何が起こったか知っているようだな？」
「……少しは」
知っている。ドラゴン種が何に滅ぼされたのか。何故滅ぼされたのかを、こちらは知っている。
その真実はとても残酷で、何より救いのないものだ。口にするのは憚られる、とかそんなレベルの話じゃない。
こんなことは誰にも言えない。ましてや実際に被害を受けた者には、
「……知っているとも」
「！」
だが、ドラゴンは不意に頷いた。知っている、と。
それは一体、
「どうして……」
「何、ただの又聞きだ。……俺の古い友からのな」
ドラゴンはかつて起こった事を語る。その響きには沈痛な響きがあり、
「俺はかつて友に頼まれ、ある調査に出かけた。そして、その調査結果を友に伝えた。すると友は、部下を誰一人引き連れず、一人でその場所に向かったよ」
「……その場所は？」
「……言うことは出来ん。だが、その場所に向かい帰ってきた友は――疲弊し、心底絶望した様子でこう言ったよ」
ドラゴンが声を作る。それは、
「〝この世には何の救いもない〟と」
分かるだろう？　とドラゴンは言う。その上で、彼は忠告するように言った。
「心優しき魔王よ。行動には注意することだ」
「注意は……してるつもり」

「それでもだ、気をつけろ。いいか――」
ドラゴンが言葉を区切る。少し語気を強めて、彼は必死に忠告する。
「今ある世界は、いつまでも続くものではないのだ。それを忘れるな」
そこには保障は何もない。何か一つ間違えれば、気分を損ねれば、一瞬で崩れ去る砂上の楼閣。
……そんなことは。
手を強く握りしめる。そこに何かを、己の憤りを込めながら、
「そんなことはわかってる……！」
そう、そんなことはとっくの昔から知っている。この世に救いなんてないことも。
だけど、
「でも、それでも……！　私は……！」
それでも、どうしても――
「もうよい」
「っ！」
労るようなそんな声に、俯いていた顔を上げる。
そこには確かな、憐憫の表情があり、
「何となくだが……そちらの気持ちは分かった。何に苦しんでいるのかも」
「……」
「……ドラゴン種にとって、その感情は忌避されるもの。しかし、俺はその大切さを知っている」
だからというわけではないが、と。
「間違え続けた俺が言えることではないかもしれんが……一人で抱え込むな」
「……何を」
こんなこと誰にも言えることではないのだ。故にそれは論外、そんな思いをもってドラゴンを睨みつけるも、
「困った時は誰かに相談するのが良いだろう。それが出来る者達が、そちらにはいるではないか」

……それは。
その言葉に何も言えなくなる。なにせ眼の前のドラゴンには、そういった者が今までおらず、ここまで来たのだ。
それに比べれば、自分は恵まれているのかもしれない。しかし、だ。
だからこそ、苦しむことだってある。
大切な人がいるからこそ、負担をかけたくない、と、そう思ってしまう。行動を起こして、何かがあったらどうしよう、と後悔したくない気持ちがある。
……でも。
そこで、ふと疑問に思ったことがあった。この眼の前にいるドラゴンは、
「……何故、そこまで言ってくれるの？」
どうしてそこまで親身に答えてくれるのか、それが何となく気になった。
そして、
「どうしてそこまで出来るの？」
しかしその問いに、ドラゴンはふっ、と笑うことで答えた。
「俺も、もう何かを躊躇って後悔はしたくないのだ」
言うとドラゴンは背の翼を広げた。
そしてゆっくりと空に浮き上がりながら、最後に口を開くと、
「俺はこれからもドラゴンとして生き続ける。例え何があろうと、だ」
「貴方は――」
言う。最後の疑問だ。
「……怖くないの？」
「無論、怖い」
だが、と。
「生き抜いた先での終わりであるなら怖くはない」
言う。
「そういう覚悟を決めたのだ」
とドラゴンは羽ばたいた。
帰っていくのだろう。自らの場所に。

そのことに対する寂しさと、疑問に答えてくれたという想いを、全部ひっくるめて、スラルはお礼を告げた。
「――色々とありがとう」
ドラゴンが笑った。その表情は生き生きとしたものであり、
「まずは生き抜いてみよ。そうして生きた先で、初めて見えるものもある。――結果は後からついてくるものだ」
そうして竜は、空へと昇っていった。

スラルがライゼンとの話をしている間。
レオンハルトはペールの言葉を聞いていた。
それは、こちらに対する想いを告げるものであり、
「レオンハルトさん……そ、その……色々と、ありがとうございます」
「ああ、気にするな」
と、軽く返す。しかし向こうはそうはいかないようで、首を振ると、少し声を荒げて、
「気にします！　集落を救われて、命を助けられて、女にしてもらって、また救ってもらって、と、色々と恩がありますから！」
「お、おう……」
その勢いに気圧される。どうにも興奮しているようだ。
本当に気にしなくていいんだがな、と思う。だがやはり恩を受けた側であるなら、それも難しいだろう。
だからそれを受け取ろうと、言葉を作った。それに苦笑しつつ、
「わかった。なら――」
「はい。なので――」
そこでペールは良い笑顔を向けてきた。
ニコニコとこちらを見て、ずいっと近寄ってくると、その勢いのまま、
「私を使徒に――」
「ペール」
「あ、ちょっ！」

横から手が伸びてきて、ペールを吊り上げた。
それはケッセルリンクの、ペールを注意するためのものである。
ペールがじたばたとする中、ケッセルリンクはそれを見て頭を抱えると、
「君には、長としての仕事があるだろう」
「いや、わかってますけどー……何となく言っておきたいじゃないですか」
不真腐れたように頬を膨らませるペール。性格変わったな……、と二人で半目になる。
呆れながらもケッセルリンクが、ペールを引っ張っていた手を離すと、再び地面に降りたペールは、気を取り直した様に、
「でもまぁ、しょうがないです。私は、カラーの長ですからね。普通に帰りますよ」
でも、と。ペールはこちらに向かって近寄ってくると、
「えいっ」
「っ！」
こちらに思い切り抱きついてきた。

ペールは、レオンハルトの熱を感じようとした。
そしてこちらの熱を、彼に与えようと思った。何故なら、
……もう会えませんから。
おそらくそうであろう、とペールは思う。
彼は魔人であり、魔軍の仕事があり、こちらはこちらで、カラーの長としての仕事がある。
お互いの距離は遠く、会おうとしても中々会えない。
それはひょっとしたら、今生の別れになるかもしれなくて、
……嫌です。
それを思うと、彼に回した腕に力が込もる。
彼と離れたくない、そんな想いで、自分の身体を彼にめいいっぱい擦り付ける。心の隅で、おっぱいで心変わりしてくれないかな、とか

不埒な事を考えながらも、悲しみは消えない。
……レオンハルトさん。
想えば想うほど、悲しみが心を占めていく。目元から何かが零れる。
それを隠すように、彼の胸に顔を埋めた。
顔を彼の胸に擦り付けるようにする。何も言えなくなる。
だが、そこで彼は、
「……全くしょうがないな」
……え？
不意にレオンハルトがこちらの顔、正確には顎に手をやり、それを持ち上げた。
いわゆる顎クイ、確かそう呼ばれているものであり、
「ちょっとだけ、延長だ」
「んっ!?」
と、苦笑しながら、こちらの口元に唇を落としてきた。
柔らかい感触を覚える。愛しい人の突然のそれに、頭が沸騰しそうになる。
しかしそれを楽しもうと頭が理解する前に、感触は離れていき、
「――これでお終いだ」
「あ……」
彼の言葉に眉根を下げる。
今ので本当に終わってしまった、と。そういうことだ。
残念を感じる。最後にそれをしてもらったのは嬉しいことだが、
……別れの挨拶ってことですよね……。
なら自分は、それに笑顔で、悔いも残さずに去らなければならないのだろう。普通はそうだ。そうしなければならない。
しかし自分の心には、先程の想いがまだ消えておらず、
……どうすれば、この気持ちは――。
と、そんなことを考える。しかしそこでレオンハルトは、
「次に会う時は、立派なカラーの長になって会いに来いよ」
「……え？」

軽く告げられた言葉に、間の抜けた声を出してしまう。恥ずかしい。
だがそうなるのも無理はない。今、この人は、
「……会うって……」
また会うと、そう言ったのだ。
「会っても、いいんですか……？」
聞く。聞きたい。そして確かめさせてほしい。
もう一度言ってほしい。会いたい、と。
こちらが見上げると、彼は身体を離し、しかし、こちらの頭に手を乗せて、
「ああ、会いに来い。立派なカラーの長になってな」
集落を放ったらかしにするのはやめろよ、とこちらの頭を撫でる。
……それは。
思う。それは大変なことだと、
カラーの集落には、色々と苦労がある。問題がある。解決しないといけないものは沢山あるのだ。
それを終えて、会いに来い、とそう言うのだ。
それを為すためにには、かなりの努力が必要かもしれない。ともすればケッセルリンク様よりも。
だが、それでも縁は消えてないということだ。それをする限りは、縁は無くならないということだ。
なら、とペールはレオンハルトに言った。
「……私、頑張ります」
涙を裾で拭って言う。
自分の決意を表明する。
「頑張って……とにかく頑張って……集落をもっともっと良くしていきます」
集落と仲間の為に頑張る。我ながらこんな動機でやる気を出すのは不純かもしれない。
でも、それを補って余りある発展をすれば、許してくれるだろうか。
「皆の為に頑張ります……！」

今よりももっと知識を付ける必要があるだろう。知らない人ともちゃんと話せる様にならないといけない。そのためには性格も変えていかなければいけない。
戦う必要だってあるだろう。ケッセルリンク様のように、皆の先頭に立って、仲間を守る為に戦う必要があるだろう。
弱い自分を、部屋の中で引き篭もり続けた自分とは、今日で決別だ。
明日からはもっと強い自分になる。明後日には、明日よりも強い自分になる。
そうしていつか、胸を張って自分を誇れるようになったら、
「そうして立派なカラーになったら――」
また、いつか、
「また、会いましょう……！」
ああ、とレオンハルトが頷いた。
「またな」
「――はい！」
また会える。悲しむことはないのだ。
なにせ――自分の人生はまだまだこれからで、沢山の機会があるのだから。

ドラゴンは空を往く。
その下に広大な大地と様々な生物がいる。
そしてその中に、ふと、ある姿を見つけた。
長く黒い髪をもった、かつての同胞の姿だ。
その姿は、先程までとは違い、身体の表面に自分達と同じものを持っており、こちらに向かって挨拶をしている。
返事をしようと、ライゼンは咆哮した。
……ああ、また会おう。
いずれまた会える、と。そう誓ったのだ。
ならば会えるだろう。これから先、何があろうとも。
ああ、忘れないとも。

この先も俺は、示し続けよう。
ドラゴンとしての生き様を。かつてそこにあった仲間の姿を。
全てが無くなった訳ではないのだ。
この世界にまだ同胞はいる。声を上げることが出来る。その存在を示すことが出来る。
俺達が生きた世界はまだそこにあるのだ。
だからまた生き抜いて、示し続ける。
思い出した誇りと、新たな生き方で示し続ける。
そうしてまた、俺のことを見つけたのなら。
声を掛けてくれ。
そうして新しい縁を作ろう。切れた縁を結び直そう。
そして昔のように、ただ下らないバカ話にでも興じよう。
話す内容なんかなくてもいい。
誰が強いとか、人間がどうとか、愚痴だって構わない。馬が合わなければ喧嘩をしよう。
昔話でもいいさ。悲しくなりそうだけどな。励ますくらいはしてやれる。
……俺か？　俺は話すことがあるぜ。
最近出来たばかりの――新しい強敵（とも）の話だ。
「……お前ら、好きだろ。そういう話――」
ドラゴンはそうして満足を感じ、空に昇った。
何故なら約束したから。
千年振りに答えを知ったから。
楽しみな明日を得たから。
――新しい縁を、俺達は結んだから。

レオンハルトの宣言

ルドラサウム大陸。
人類を筆頭に多くの種族が暮らすこの大陸。その半分は人類のものではあるが、もう半分は魔物達のものである。
正確には魔王とそれに付き従う魔人達のものである。
そしてその魔王の意を受けて動く、忠実にして恐怖の軍隊――魔軍。
人類の敵にして絶対の戦力を誇る魔軍。その本拠地こそ、魔王と多くの魔人、使徒が住まう城、魔王城であった。
魔王城。謁見の間。
荘厳という言葉に相応しいその広間には現在、魔軍の重鎮が集められていた。
下手側、入り口に近い端には魔軍を実際に動かす指揮官である魔物将軍とそれに付き従う副官の魔物隊長。
魔物の中でもエリートである彼らだが、その上手、玉座に近い場所にはより相応しい者達がそこにいる。
魔人だ。
魔王に直接血を分け与えられた彼ら支配者達は、通常の魔物とは隔絶した存在感と実力を誇る。人間は疎か、魔物であっても逆らうことは許されない。逆らうことは死を意味するからだ。
その魔人に血を分け与えられた下僕、使徒にしても同様だ。彼らは主たる魔人の横に控えて大人しくしているが、その実力はやはり通常の魔物を凌ぐもの。迂闊なことは出来ない。
その中でも、特に注目を集める魔人達がいた。
「……」
一人は、多くの魔人の中にあって特に異形といえる魔人。
昆虫が人の形を取ったらこのような容姿になるだろうか。茶色のまだら模様のある細身の身体に、白の外骨格がその上部を覆っている。白の細長い手足。背中にはフォースウイングと呼ばれる白の器官が伸びており、腰には速度を高める丸い加給圧力器が備わり、肩の

関節から前面にはこれまた昆虫を思わせる二本の鍬形が伸びている。そして頭部を覆う兜の様な頭。顔に当たる空洞には、目の部分に赤い光が灯るのみだ。

彼は外の世界から来た宇宙人、〝ホルス〟の魔人――メガラス。

最速の魔人として多くのドラゴンを屠ってきた歴戦の戦士は、何も語ることなく、ただそこで立ち尽くしていた。

そして次に目立っているのが、

「はぐんぐ……お、おお！　この肉、わさびで味付けしてやがるな！　くぅ、この風味と甘さ、後からくるつんとした辛味が肉の旨味を引き立ててやがる。良い味だ」

その手に持った骨付き肉を食べて批評を続ける魔人。

細身だがよく鍛えられた肉体。その上半身は装飾を幾つか身に着けるのみで他には何も着ておらず、褐色の肌とその肌に刻み付けられた独特の文様が身体中に張り巡らされている。短めで癖のついた緑色の髪の下、額部分には片目を隠す額当てがあり、その精悍な顔立ちを整えていた。

そして腹の部分には、真っ黒く大きな穴があり、そこから大きな蜘蛛、猿、鳥の手足が覗いており、時折彼の肌を撫で付けたり、引っ込んだりして蠢いていた。

彼は人間の中でも特異な能力を持つ〝ムシ使い〟の魔人――ガルティア。

魔人になる前には多くのムシ使いが暮らす集落で獣の王と呼ばれた名高い戦士は、誰にも憚ることもなく、その手に持った骨付き肉を、最近嵌っているわさびが使われていることを褒めながら味わっていた。ムシ使いである彼は、常人の何十倍もの食事を一日に摂る大食いかつグルメ魔人として有名なのだ。

そして彼ら、通常の魔人が並ぶより少し前の位置。そこには今のところ最も畏怖される魔人がいた。

「……遅い、な」

「はい、カミーラ様。もう少しかと思われます」

その場に悠然と佇み、傍らの使徒に愚痴を零す魔人。

紺青を基調にしたドレスに身を包んだ長身の美女。その肢体は女性として完成されており、細長い指に綺麗に整えられた長い爪。長い足。それでいて肉付きの良い太腿。艶めかしい曲線を描いた腰つき。豊満な胸元。腰の下まで伸びる滑らかなプラチナブロンドの髪。美しい顔立ちはまるで女神の様で、その足先から頭の天辺に至るまで一片の隙も見当たらない。その頭部にはドラゴンを思わせる二本の白金の角。背中には同じくドラゴンを思わせる黒の翼。

彼女はドラゴンの生ける王冠と云われていた〝プラチナドラゴン〟の魔人――カミーラ。

魔人の中でもトップの実力を持つ魔人四天王の一角を敷く上級魔人である。

黄金の瞳をもつ眼は細められており、時折傍らにいる自らの従者であるネフライトドラゴンの使徒――七星に愚痴や取り留めのない話をして暇を持て余している。

特に目立つのはこの三人だろう。だが、それとは正反対に、

「カ、カカ――さん、やっぱいいよなぁ……」

魔人の中にあって誰からも注目されない魔人がいた。

その容姿は一言で言うなら毛玉であり、毛玉に二本の角と手足、ついでに目や口を付けただけの生き物。

彼は寿命のない魔人や使徒の中でも最年長の〝リス〟の魔人――ケイブリス。

しかしその実力は三千年近く生きてなお魔人の中で最底辺。他の魔人達の様な圧倒的な存在感も無く、ただ隅っこで待ち続けていた。

因みにケイブリスは、最近ようやくちょっと力が付いた様な気がする、と自分で自分を褒め称えていた。具体的には普通の魔物には負けないくらいである。

しかしそれでも魔人としては未だ最弱なことには変わりがないので直ぐに落ち込んだ。

その他の魔人達もいずれも気ままにその時を待ち続けている。だらけて寝そべる様な事はないものの、適当に他の魔人や自らの使徒に声を掛けたり、カミーラに視線を向けていたり、ただ黙って立ってい

たりと様々だ。
概ね全ての魔人と使徒が謁見の間に揃う中、そこに足を踏み入れた者がいた。
「ふんふ～ん――っと、失礼致しますわー」
部屋に入ってきたのは金髪をツインテールにした美少女。
下半身部分のレオタードや蒼い軍服風の衣装。腰に銃と剣をぶら下げたベルトを身に着けた、特徴的な明るい印象を持つ彼女は、とある魔人の従者、女の子モンスター、〝コマンダー〟の使徒――キャロル。
彼女がご機嫌な様子で入室してきたことで、その場にいる者達に緊張が走る。原因はキャロルではない。
彼女が来たということは、準備が整ったということ。キャロルの主である魔人と、自分達の支配者がやって来るということ。それを予見したことによる緊張感だ。
そしてその予想は外れることなく、キャロルが扉を大きく開くと、
「――！」
その先からやって来た者達、その気配を感じ取って、居並ぶ者達が一斉に片膝を突く。
先頭に立つ白髪灼眼の少女。小柄で可愛らしい容貌とは裏腹に、豪奢で威厳ある魔王の衣装に身を包んだ彼女は、この場で最も偉い存在だ。
彼ら魔に属する者達の王。そしてこの大陸の絶対支配者である魔王スラルがそこにいた。
彼女を前にすればどんな魔物もその存在感と本能から膝を突かざるを得ないだろう。
しかし理由はそれだけではない。
彼女の背後、並んだ二人の魔人の内、一方の男の存在もこの緊張感を生み出す理由であることは否定出来なかった。
「――――」
玉座まで歩く魔王スラルの背後に付き従う魔人。
男性としてはそれなりに高めの身長。しかし大柄な者も多い魔物

の中では、その身長は特別際立った大きさではない。カミーラと同程度であることからそれは明らかだろう。
しかしその存在感と圧力の大きさは全く比例していない。
剣士として全く無駄のない細身かつ鍛えられた肉体。その身体を包むのは、朱の縦ラインが入ったダークグレー色の長いコートだ。前面を締めずに着たその下には真紅のシャツと黒に近い藍色のスラックス。輝くような金髪と女性受けが良さそうな整った顔立ちだが、その鋭い目つきと赤い瞳が威圧感を感じさせている。
そしてその背には彼の身の丈を越える刃を持つ長剣、魔剣オル＝フェイルがあった。
彼は魔物界一の剣士である〝人間〟の魔人――レオンハルト。
魔人四天王の一角にして、魔軍を取り仕切る魔軍参謀。魔王スラルが初めて作った魔人である。
人間時代は幾つかの集落を治めていた、剣の王と呼ばれた剣の達人であり、その逸話には事欠かない。
普段はその的確な指示を以て魔軍に勝利をもたらす冷静かつ良識のある彼は、しかし、魔軍の中で大いに畏怖されている。
というのも彼は強い相手との戦闘に目がない戦闘狂であるからだ。
笑いながらとても楽しそうに戦う彼の姿や逸話は魔軍の中でかなり有名で、魔人になって直ぐに笑いながら魔人を斬り殺して魔血魂を初期化したり、カミーラと定期的に戦っては城を破壊したり、自分の使徒を試験と称してボコボコにしたり、ムカついたからという理由で魔人二人を相手に一方的に半殺しにしたり、魔軍の遠征先で拠点の設備や資材が細切れになるほど凄惨な戦いで後の使徒を瀕死にしたり、それでも足りないので定期的に使徒をボコボコにしているらしい。
しかも最近では休暇中に、実は生きていた四大聖竜の一体を倒して配下にしたという。
前魔王の時代にドラゴンとの戦争を経験した魔人達はこれを聞いた時、殆どの者が顔が引き攣らせた。四大聖竜がどれほどの化け物か知っている為である。
そして思った――〝もうアイツに反抗的な態度取るのやめよ……

〃、と。少なくとも表向きにはそうしておかなければ命が危ない。
代わりに魔物将軍や魔軍に属する魔物達の評価がまた上がった。とある情報筋に拠ればある会に入会する者達が増えたという。
魔王の寵愛を受けているという噂の魔人は、スラルの背後に付き従って玉座の横に並ぶ。
そしてスラルが玉座に腰を掛けると、
「面を上げなさい」
その短い言葉を受け、居並ぶ者達が立ち上がる。
それを確認してスラルは続けた。
「ん……それじゃあここからは私に代わってレオンハルトに説明してもらうから。――レオンハルト」
「はっ」
主の命を受けたレオンハルトが短い言葉とともに一歩前に出る。その動作は淀みなく自然なものだ。
「皆忙しい中集まってくれてご苦労。事前に通達があったとおり、今日は新しい魔人のお披露目となる」
忙しい中集まってくれて、という言葉に一部の魔人が眉根を動かす。一番忙しいのは明らかにレオンハルトであるのに、それを言うとは皮肉か何かだろうか、と。
しかし表情を動かしたのは一瞬。そのかいあってか、レオンハルトは気づいていない様子で続けた。
「だがその前に、何か魔王様に報告することがある者がいればそれを先に済ませよう。――何かあるか？」
告げられた言葉に沈黙。何もない、ということだ。
もっともレオンハルトに報告することなら多くあるのだが、それは魔物将軍達が後から仕事で告げることなので特に声は上がらない。
少しの間を置いて、誰からも声が上がらないことを確認したレオンハルトは、
「……では早速紹介に移る。こちらにいるのが――」
そして顔と視線を少し横に動かして指し示す。
「新しい魔人――ケッセルリンクだ」

「……よろしくお願いする」
レオンハルトに紹介され、そこで優雅に一礼するケッセルリンク。
そこでようやく、居並ぶ者達は彼女を注視した。
「ほう……」
感嘆の声を漏らしたのは誰なのか。あるいはここにいる多くの者達の心の声なのかもしれない。
一言で言えば――絶世の美女だ。
元種族はカラー。長い耳と額にある青いクリスタルが居並ぶ者達の判断を決定づける。
そしてカラーといえば美女だらけの種族だ。その例に漏れず、彼女もかなりの美貌を持っているのが一目で分かる。均整の取れた身体つきは、出るとこは出ていて、引っ込むとこは引っ込んでいる。男性のみならず女性すら羨むほどのスタイルだ。そしてその肉体を彩るのは肩から胸の谷間を大胆にもさらけ出した黒と白の貴族風の衣装。そして首元のチョーカーと赤い手袋。その衣服全体が不思議と、彼女が元からもつ気品を更に高めている。
クールな印象を持つ顔つきは天使か悪魔か、はたまたそれらを内包したかの様な純然な魅力をはらんでいる。
そしてその実力も、居並ぶ者達が何となく感じ取れる限りでも高めであることが窺えた。
実際に彼女はカラーの元長、夜の王であり、その実力は並の魔人を凌ぐのだがそれはまだ知られていない。
今彼らに分かる事は、只者ではない、ということくらいである。
そうして新たな魔人、ケッセルリンクの事を皆が目にして何かを感じ取った頃、レオンハルトが皆を見渡しながら再び口を開いた。
「そして通達することがある。彼女、ケッセルリンクは――」
一度、そこで言葉を区切り、レオンハルトは言った。
「――新たな、魔人四天王だ」
「――!?」
その言葉に驚いたのは一部の例外を除いた、謁見の間にいる者達全員であった。声こそ誰も上げていないが、それでも多くの者が目を見

開き、身じろぎしたことで驚愕した雰囲気が謁見の間を満たす。あのカミーラでさえ目を細くしてケッセルリンクを値踏みしていた。
そして、
「……そ、その、よろしいですか？」
やがておずおずと手を挙げて沈黙を破った、とある一人の魔人に室内にいる者達の注目が集まる。その瞬間、ざわつきが収まり、重苦しい雰囲気がその場を満たす。嵐の前の静けさ、と言うべきものだ。
そして発言には当然、魔王から代理を任されたレオンハルトが応答することになる。
「何だ？　文句でもあるのか？」
「え、ええ、いや、あの……も、文句と言うべきほどではないのですが……」
レオンハルトがその鋭い目つきを魔人に向けると、更に萎縮してしまったのか言葉を濁し始めた。それも当然である。
何故ならこの状況に、魔人達は憶えがあるのだから。決定に異を唱えてしまったばっかりにレオンハルトに惨殺された愚かな魔人との一件。
それを脳裏にちらつかせながら、魔人は揉み手をしながら意見を言った。
「その……そこのケッセルリンク――様は、魔人四天王を任せられる程お強いのでしょうか……？」
慎重に、言葉を選んで言うと、レオンハルトはその鋭い目を更に細めて、
「……実力は俺が保証する」
「さ、左様ですか……」
「……ふん、それでも文句があるなら戦ってみるか？」
瞬間、魔人が首を振って引き下がった。
「い、いえいえ、それには及びませんよ。は、はは……」
「そうか」
及び腰で愛想笑いを浮かべる魔人だったが、それに対する非難するような視線はない。むしろよく健闘した、と彼を讃える意味をもった

視線が向けられる。
　レオンハルトを怖れずに聞くべき疑問を聞いたのだから上出来だろう、と。戦うことを辞退したのもしょうがない。
　何故ならあの時の様になるかもしれないからだ。ケッセルリンクは魔人になりたてだが、弱いという保証は何処にもない。むしろレオンハルトの時より分かりやすい存在感を示していることから弱い可能性は低いし、何よりレオンハルトが実力を保証する、と言ったのだ。この場で魔王を除けば一二を争う実力を持つ魔人の言葉だ。それは実力を重んじる魔物社会にとって何よりも重い。
　これに異を唱えることが出来るとすれば、同じ魔人四天王のカミーラくらいだろう。彼女の発言力はレオンハルトと同等だ。
　しかし彼女は僅かに目を細めてケッセルリンクに視線を寄越すのみで口を開こうとはしない。故に、
「では決まりだな。ケッセルリンクは今この時から新しい魔人四天王だ」
　レオンハルトの口から決定が告げられる。魔物将軍らから了解を示す短い声が発せられた。謁見の間を見渡してそれを確認したレオンハルトはそこでスラルに向き直る。そして、
「これでよいですか、スラル様」
「……上出来よ。でも――」
　そこでスラルは言葉を止めてレオンハルトに笑顔を向ける。何らかの意味を持った表情。それを彼に向かって見せた後、眼下の者達に視線を移す。
　そして再び言葉を続けた。
「まだ言うことがあるわ」
「？　それは……」
　聞かされていない、そんな疑問符が頭に浮かんだレオンハルトを無視してスラルは言った。
「レオンハルトは今日から――魔人筆頭になるの」
「――――」
　その言葉に絶句したのは、レオンハルトだけだった。

他の者達は驚いてはいるようだが先程のケッセルリンクの時のようにざわついた気配は見せない。彼がそうなることに魔物将軍以下にとっては異論はない。魔人からも疑問視する声は上がらない。というか納得せざるを得ない。

彼の実力が並では収まらないことはよく知っているし、魔王のお気に入りであることも明白。そして、地位が上がるといっても元から魔人四天王と魔軍参謀を兼任するレオンハルトは、元から魔軍の最高位の様なものだ。否定する意味もない。

なので誰からも否定する声は出ないのだが、

「――そう、ですか」

レオンハルトが短く言葉を呟くと、背後に振り向いて再び謁見の間を見渡した。

そして、

「誰か、文句のある者はいるか？」

静まり返る。

静寂。その言葉に相応しい静けさが謁見の間を支配する。文句などあろう筈もないし、あったとしても言いたくない。言ったら物理的に首が飛ぶだろう。もしくは身体が上と下、あるいは左右に別れる。ここでそんな事を言う奴はただの自殺志願者だ。

しかしレオンハルトはそこで何故か眉を立て、皆を睨みつけるように見た。重圧が込もった視線が彼らを射抜く。

「……本当にないのか？」

沈黙。

確認の言葉に無言で答えた一同だが、すると何故かレオンハルトの圧力が高まる。そして再び、

「おい、お前ら。……何か文句があるだろう？」

「っ!?」

そこでとある魔人に紅い双眸を向けるレオンハルト。

先程のケッセルリンクの件で意見を言った魔人だ。急にそれを振られて焦りが汗となって顔に滲む。

「い、いえ、文句など……」

レオンハルトの圧力が更に高まる。
「本当か？　魔人筆頭だぞ？　魔人の最高位だ。俺がその座に就くことに対して、何一つ文句がないと？」
あるんだろ？　とでも言いたげな威圧的な視線に、魔人達、そしてその場にいる者達の殆どがその裏の意味に気づいた。
――まさか、それを口実に斬り殺すつもりか、と。
何度も聞き返してくることから、文句を言ってもらいたいのは明らか。しかし魔人筆頭という絶対の地位を拒否したがる筈もない。
ならばその理由は、文句を言った対象を合法的に斬るために違いない。
レオンハルトはあれでも規律を重んじる。理由もなく誰かに危害を加えることは殆ど無い。
しかし彼は戦闘狂。強い相手を斬ることに喜びを感じる変態だ。故にその理由は大いに有り得る。
ならば反抗的な奴をこれに乗じて一戦交えようと思ってもおかしくない。それに気づいた時、話しかけられた魔人は声を上げていた。
「ま、まさか！　滅相もありません！　む、むしろ賛成です！」
別に賛成という程でもないがこう言っておくのが確実、と魔人は全力でレオンハルトの思惑から逃れようとした。おべっかを使ったのである。この手のすり寄りはケイブリスの十八番だが、他の魔人にも出来ないことはない。何しろ魔物社会は完全実力主義の縦社会。上位の者の反感を買えば即座に殺されてもおかしくない世界だ。ある程度の理性や分別は弁えているのである。
なおそれを最も得意とするケイブリスは今、他の魔人の危機にほくそ笑んでいた。一人、二人くらい死んでくれたら立ち回りも楽になる。自分を虐める魔人ならなお良い。故に心の中でレオンハルトを応援していた。
だが、
「……そうか」
レオンハルトが残念そうに納得したのを見て、魔人がほっと息をつく。そしてやはり、残念そうにするということは自分を斬りたかった

のだろうと考えが当たっていたことを再確認した。
しかし、
「……ならお前はどうだ？」
「っ!?」
今度は別の魔人に声を掛けるレオンハルト。自分に白羽の矢が立てられ、ぎょっとした魔人は即座に応答した。
「も、文句など、あろう筈がございません！」
「……そうか。なら――」
次に声を掛ける者を見定めるレオンハルトに、魔人達はこう思った。
――こ、こいつ……何が何でも誰かを斬り殺すつもりかっ!?
だとしたら冗談じゃない。一斉に目を背けて自分に当たらない様にと神に願う。
そしてレオンハルトの視線がある魔人に向けられた。その対象は、
「カミーラ。お前はどうだ？」
「……」
――ま、まさかのカミーラ様!?
魔人達が卒倒する。レオンハルトが選んだ相手はカミーラだった。
そして疑問が浮かぶ。何しろカミーラとレオンハルトの関係は悪くなかった筈だ。他の魔人から声を掛けられても基本は無視のカミーラだが、レオンハルトとは時折会話しているところを見受けられる。
それだけでなく、レオンハルトとたまに戦っている時がある。しかも特別嫌がっている訳でもない。まさか斬られたがっている訳でもあるまいし。
しかしカミーラは、レオンハルトと視線を合わせると、
「特にない。……ただ」
「ただ、何だ？」
「――後で話がある」
と、言外に拒否は許さない、といった強い視線で言った。それを受けたレオンハルトは少し考えるように眉をひそめたが、やがて、

「……わかった。後で時間を作ろう」
そう言うと、カミーラの瞳が閉じられる。言いたいことは言った、と。そういうことだろう。そのやり取りに奇妙なものを感じた周囲の者達だが、結局は何もなかったことに安堵する。レオンハルトも諦めたのか、軽く息を吐くと、
「……では、これで決定とする。俺は今日から……魔人筆頭だ……はぁ……」
低いトーンの声で心底不満そうに言うと、魔人達は引きながらこう思った。
――そんなに斬りたかったのか……。
やはりレオンハルトは危険人物だと、再確認した集まりであった。

「――ふっっっっっざけんじゃねぇぞッ!!!」
集まりを終え、自身の部屋に戻ってきたレオンハルトが開口一番口にしたのはそんな憤りの言葉だった。
レオンハルトは先程の謁見の間での集まりを思う。
今日の目的は予めスラルから知らされていた、ケッセルリンクの紹介、並びに魔人四天王就任を伝える為だ。その事は事前に集まった者達にも伝えてある。新しい魔人の紹介という形で。
ケッセルリンクを魔人四天王に就けることには、スラルが決定した。自分としては時期尚早、ケッセルリンクが苦労しそうなので反対したが、スラルが譲らないことと、ケッセルリンク自身が構わないと了承したことで、渋々頷いた。
だが以前の、自分の時のようになったら面倒だ。だからそうならない様に押し通そうと予想される反対意見に備えて幾つか納得させる為の言葉を用意した。
殆ど使うことなく無為に終わってしまったが、先程言った〝力は自分が保証する〟という自分の発言力を利用したものから、〝どうせ支配されるなら美人の方がいいだろ?〟といった様な一見冗談にも聴こえるものまで。なので肩透かしを食らってしまった形だ。

しかしスラルの次の発言。自分にも隠していた今日から魔人筆頭になるというものは、看過出来なかった。
故に意見を尋ねた。というか何かしらの反対はあるものと思っていた。魔物将軍とかはともかく、魔人達からはそんなに好かれていないことは分かっていたからだ。
なので反対意見を引き出してそれに賛同、納得する形でスラルを説得しようと思っていた。
しかしどれだけ聞こうが魔人達は首を横に振る。それどころか賛成してしまう始末だ。
「面倒くせぇ……」
部屋の中で愚痴を呟く。すると背後で紅茶を淹れながらキャロルが、
「レオンハルト様は魔人筆頭になりたくありませんの？」
きょとん、と首を傾げながら不思議そうに言う。
「魔人筆頭になったら今以上に忙しくなっちまうだろうが……」
「そうですか？　今と変わらない気もしますの」
何せ、とキャロルはカップをトレイに乗せながら、
「元よりレオンハルト様は魔軍の仕事を殆ど全部こなしていますわ。それは魔人筆頭になっても多分変わりありませんの」
「……あ」
キャロルの言葉にはっとする。
……確かに、俺の仕事量は今と変わらないんじゃ……？
称号が変わり、偉くはなるが、元から同じ魔人四天王のカミーラにも指示を出している身だ。ならそれは、
「あんま変わんねぇのか……」
「むしろよくなる可能性もありますわ！　ケッセルリンク様が魔人四天王になりましたし、そちらにも仕事を回すことが出来ますの！」
「おお……！」
確かにそうだ。怠惰であまり仕事をしないカミーラと違って、ケッセルリンクは真面目だ。カラーの長をやっていたことから責任感もあるだろうし、書類仕事や統率力にも期待が持てる。

「言われてみれば、今よりもっと魔軍の運営が良くなる可能性がある
な……」
「ですわー！　日々成長を続ける完璧使徒のわたくしもいますの！」
　キャロルの言葉を聞きながら頭の中で計算を始める。名実ともに
トップになったことで色々と恩恵もある上、魔人四天王として空いた
穴もケッセルリンクが埋めてくれる。
　考えていると良いことだらけな気がしてきた。少し機嫌が良くな
る。
「ククク……悪くないな。よく言ったキャロル。褒めてやる」
「っ！　褒められましたの!!　ありがとうございますわ、レオンハル
ト様！」
　軽く頭を撫でてやると嬉しそうに頬を緩ませるキャロル。しばら
くそれを続けながら、次に取るべき行動を考える。そもそも予定があ
るのだ。今日は、
「スラルの準備が出来たら歓迎会だからな……それまでに用事を済ま
せるか」
「えへへへ、何をですの～……？」
　すっかり顔をふやけさせたキャロルに、レオンハルトは言った。
「さっき聞いただろう。カミーラとの話を先に済ませる。歓迎会まで
時間があるからな」
「か、畏まりましたぁ……レオンハルト様ぁ……」
　……おっと、そろそろ止めとくか。
　これ以上続けると発情して正気に戻るまで使い物にならなくなる。
レオンハルトは、瞳をとろんとさせ、顔を紅潮させたキャロルから手
を離すと、淹れたばかりの紅茶を手に取りながらカミーラの話を予想
し始めた。

二人の女魔人

紅茶を飲んで僅かな一服を終えると、レオンハルトはキャロルとともに部屋を出た。

そして早速カミーラを訪ねようと右を見ると、

「――あ」

「……」

ちょうど良く部屋から出てくるカミーラの姿が見えた。その後ろからは使徒の七星の姿もある。

お互いに扉を閉めるのを使徒に任せる。カミーラがこちらに気づいて目が合ったので、そのまま彼女の方に進み出ると、

「……さっき振りだな。ちょうど、部屋を訪ねようと思ってたところなんだが――」

言外に、どちらかの部屋で話すか、と聞いたつもりなのだが、カミーラは短く、

「ここでも構わぬ」

「ならいいが」

と言ったのでこちらも頷く。確かに周囲に人影はないし、そもそもこの一帯に誰かが近づくことは少ない。用事でもない限り。魔人四天王の部屋があるここに来る者は少ないのだ。

なのでここで話をしても構わないだろう。内容にもよるが、

……多分、あのことだろうな……。

先程、部屋の中で何気なく予想してみたが、思いつくのはあの件くらいしかない。全く別の話の可能性もあるが、とカミーラの要件を考えながらも、こちらから、

「それで、話ってのは何だ？」

「……聞きたいことがある」

話を切り出すと、カミーラは少し目を細めて、

「――四大聖竜。……ライゼンのことだ」

「……ああ」

告げられた内容に、やはり、と内心で頷く。そしてカミーラだけで

なく、その傍らにいる七星までもが、無言のままこちらを注視しているような気配があり、それについても、
……やっぱ、同じドラゴンだと気になるのかね。
と、そんな感想を抱く。元、ではあるが今となっては数少ない生き残り同士であるし、四大聖竜ほどの大物となればその名は当然知っているのだろう。
というより、カミーラに関しては既知の間柄な可能性もある。有名だから知っているだけかもしれないが、名前を出してきたというのもあるし、
……ともあれ、答えてやるか。
カミーラや七星は真面目に話を聞きたがっている様だし、ちゃんとした事実を伝えてやろうと心を構える。するとカミーラは続けて具体的な質問を告げた。
「お前が、あのライゼンと戦い勝利し……配下に加えたというのは、本当か……？」
レオンハルトはその質問に、微妙に気怠げに答えた。
「……いや、それは違うな。戦いはしたが引き分けになったし、城まで送ってもらったのもアイツの親切心からだ。再戦の約束もしたしな」
「……引き分け」
「ああ。何処で、勝利した、なんて尾ひれが付いたのか知らねぇが、勝ってはない」
迷惑な話だ、と思う。勝ってもない相手に勝ったと、そんなデマが流されるのは一戦士として恥ずかしい。組織的に見れば、上に立つ自分の実力を喧伝するのは兵の士気や自身の求心力を高める面で効果的だが、様々な相手から信頼を培っている現在にしてみれば、真実が別のところから露見すれば、逆に信用を落とすことになりかねない。なので戦士としても、合理的な理由としても、聞かれれば嘘を答える気はないのだ。
もっとも後者の理由よりは、前者の〝戦士〟として、という理由の方が大きいが。後者はそこまで気にしなくても問題ない。
なので真実を誇張せずありのままに伝える。補足するように、

「アイツは傷を負って戦う力は残ってなかったし、俺の方もアイツにとどめを刺す力はなかった。だからお互いにまた戦うことにして別れた――ってところか」
「……」
　言うとカミーラの目が細まった。
　だがいつもより、その趣というか、意味合いが違うように見える。薄く息を吐きながら、珍しく感情の見える声で、カミーラは言った。
「あれと引き分け……そして、再戦の約束をした、か……」
　そして何かを考え込むように黙ってしまった。
　……何かあるのか？
　その様子が微妙に気になってしまい、今度はこちらから声を掛け、
「カミーラは……それから七星も、アイツと知り合いなのか？」
「……」
「いえ、その……」
　主のカミーラの話を邪魔しないように無言で控えていた七星だったが、カミーラに伺いを立てるように彼女に視線を向けると、主は沈黙したまま顎を軽く上げることでその返答とした。
　多分だが、話してもよい、ということだろう。その証拠に七星が頷きを入れて、
「……畏まりました。……と、言っても私はそれほど知己という程でもありません。所属も違いましたので……」
「所属……そういやアイツ、西部方面軍将軍とか言ってたな。お前は別の軍だったのか？」
　思い出して口に出すと、七星が再度頷いた。
「ええ。私は東部方面軍、別の四大聖竜のお方に付き従ってましたから。それほど交流がある訳ではありません。ただ、何度かお話をする機会はありましたが――」
　そこで七星は思い返すように間を置いて、そして言葉を選ぶように言った。
「……その時の印象を、率直に仰るなら……その、伝え聞く逸話にしては……あまりドラゴンらしくない方だと思いました」

「……へぇ、なるほどな」
随分と興味深い内容だ。あのライゼンがそんな印象を持たれていたとは。
しかしこちらの興味とは裏腹に、七星はそこまで話すと再び口を噤んだ。
だがそれと入れ替わるように口を開いたのは、カミーラだ。
「あれは……変わり者であったからな……」
「変わり者、ね……」
カミーラの言葉を考えるように呟く。
話を統合すると、ドラゴンらしくない変わり者だったということらしい。何をもってドラゴンらしくないのかが、こちらには解りかねるが、ドラゴンの価値観的にはそうなのだろう。
……今度会ったらそのことを聞いてみるか？
などと冗談半分に考えていると、カミーラがこちらに視線を向けて、
「……少し、お前に似ているな」
「……あ？」
不意に予想外の言葉が飛んできた。
……どの辺りがだ？　いや、それよりも……。
レオンハルトは声を作った。少し眉根をひそめながら、
「……それは褒め言葉か？　それとも貶してんのか？」
「……さてな」
「おい」
目線を逸したカミーラに軽い責めの視線を向ける。しかし問いかけの答えは返ってこず、
……こいつ、俺のこと何だと思ってやがる……？
変わってる、ということは変人、もしくは変態ということか。しかし自分はそこまで落ちたつもりはないし、ただの魔人でしかない筈だ。
だが、
「……ふん、まあ良い。聞きたいことは聞い――」

と、カミーラが声を出し、踵を返そうとしている最中、こちらの背後から音が聴こえた。
それは扉を空ける音であり、誰かが廊下に足を踏み入れた音でもある。
それを感じて背後に視線をやると、
「……お」
「む……」
奥の部屋からケッセルリンクが出てくるところであった。それを見て、
……ああ、そういやケッセルリンクも隣の部屋になったんだったな……。
それを思い出す。新しく魔人四天王となった彼女に与える部屋として、そこを選んだのだ。この一角の部屋ならば何処でも好きなところを選んでいいと伝えたところ、自分の隣を迷わず選んだのは、何か意味があってのことかと邪推しそうになるが、そこは気にしないでおく。
だからケッセルリンクとばったり出会うのは不自然ではない。この後、彼女の方も自分と同じ用事があるのだし、部屋を出る理由もある。
そして出会ったのなら一言、声を掛けもするだろう。ケッセルリンクはこちらに近づいてくると、
「レオンハルト」
「ケッセルリンクか。どうだ、部屋の心地は？」
話の流れとして聞いてみる。すると微笑を携え、
「快適だ。私には勿体無いくらいだとも」
「まぁ、一人で使うには広いだろうが、何といっても魔人四天王だからな。そこは慣れてくれ」
狭すぎるよりはいいだろ？　と冗談半分に笑みで答える。
「ふっ、それもそうだな。しかし手持ち無沙汰でね。そちらを訪ねようと思っていたところなのだが――」
そこでケッセルリンクは、背後のカミーラに視線を向ける。そし

て、再度こちらを見ると、
「取り込み中かね？」
「いや、もう終わったところだが……」
言う。確かカミーラはケッセルリンクが来る前、聞きたいことは聞いた、と言い掛けていた。ならば話は終わりだろう。そういった認識で返答する。
するとケッセルリンクは頷いてこちらと並ぶと、カミーラに身体を向けて、
「そうか。……ならば挨拶をしても――」
「失せろ」
「……む」
と。カミーラが不意に鋭い声を放った。
そして、鋭いのは声だけではない。ケッセルリンクを睨むように目を細めると、
「貴様と話すことは何もない。……それに」
そこでカミーラはこちらを見る。何を、と戸惑う中、彼女は、
「まだ話は終わっていない。貴様如きが、口を挟むな」
「……ん？」
頭の上に疑問符が浮かぶ。カミーラの言った言葉の所為だ。
なので聞き返すように、
「……おい、さっき、聞きたいことは聞いた――」
「お前は黙っていろ」
「って……」
鋭い言葉で黙らされる。そう言う最中も、カミーラはケッセルリンクを威圧しており、
……そういや、カミーラって……。
一つ、理由に心当たりが浮かぶ。それを内心で言葉にする前に、ケッセルリンクがそれに反応した。こちらをちらりと見て、
「……ふむ。話は終えたと彼は言っているが、聞き間違いかね？」
「……貴様に、説明する義理はない。さっさと消えろ」
ケッセルリンクはそこで眉をひそめる。厳しい言葉を浴びせられ

続けているのだ。当然だろう。彼女はカミーラに視線を合わせると、吐息し、
「……女の魔人同士として、出来れば仲良くしたいのだが」
「虫酸が走る。私の気が変わらぬ内に消えろ」
「……では、そうしよう。――レオンハルト」
「――あ……ああ」
あまりにも不穏な雰囲気だったので口を挟めずにいたが、不意に声が掛けられ反応する。そして続けて、
「話は終わったのだろう？　ならばそろそろ――」
「待て。話は終わっていない」
カミーラが声を飛ばすと、ケッセルリンクが目を細めて、
「彼の言葉を、何故そちらが決める？」
「ふん……私が終わっていないと、そう言っているのだ。なら終わっていない」
「……横暴ではないかね？　彼には彼の意思がある」
「っ……貴様如きが、私の話に口を挟むな……！　八つ裂きにされたくなければ散れ……！」
「同じ立場だ。なら口を挟む権利はあろう。それに……脅しとは感心しないな」
「貴様如きが同じ立場だと……？　ふん、笑わせるな……」
「確かに私は新参者ではあるが、事実は事実だ。笑いたいなら笑えばいい」
「――っ、そのうるさい口を引き裂いてやろうか……！」
「――実力行使か。しかし、彼のために引き下がる訳にはいかないな」
言い合いが段々と酷くなり、両者の圧力が増していく。それを見て、
……いつの間に、一触即発の空気が出来上がってる……。
ピリピリとした空気を肌で感じるのだが、こいつらは何で喧嘩しようとしてるのだろう、と頭を抱える。
カミーラは女嫌いだから何となく理解る。しかしケッセルリンクは、

……いや、早計だな。そうとは限らない。
と、半ば現実逃避的な回答先送りをしていると、カミーラがこちらをちらりと見て、
「……ふん、どうにも噛み付いてくると思ったが……貴様、レオンハルトに惚れているな……？」
と、こちらからはコメントし辛い発言がケッセルリンクに飛んだ。
しかしそれに、ケッセルリンクは少し怯みながらも、
「……そうだな。それがどうした？」
憚ることなくそれを認める。何だか居づらくなってきた。しかし自分がいなくなると廊下で魔人四天王同士の戦いが勃発しそうなので迂闊に離れられない。口を挟むことも憚られる。
そんな中、カミーラはケッセルリンクの答えに対し、
「ふっ、何……貴様の様な女に惚れられる、レオンハルトが可哀想だと思ってな……」
口を薄い弓の形にし、嘲笑で答えた。
……いや、それは言い過ぎだろ。
と、思い、さすがに一言くらい言っておこうか、と口を開こうとした時、横のケッセルリンクが眉を立て、
「――何だと？」
先程まではまだ落ち着いていたケッセルリンクの怒気が膨れ上がる。その様子を面白がったのか、カミーラが笑みのままで煽るように、
「もう一度言ってやろうか……？　貴様の様な――」
「――黙れ」
「！」
カミーラの言葉を差し止めるように、ケッセルリンクの声が飛ぶ。彼女には珍しい強い言葉だ。それを聞いたカミーラは、一瞬怯んだものの、こちらも怒気を膨れ上がらせ、
「……聞き間違いか？　この私に、ふざけた口を利い――」
「もう一度聞きたいなら言ってみせようか。――黙れ、と、そう言ったのだ」

「っ！　き、貴様……！」
カミーラの表情が怒りに変化する。さり気なくフェードアウトしよう――じゃなくて、いつでも止められるようにさり気なく間に入っておく。
……この状況、どう宥めれば……！
口を挟みにくいから、と黙って聞いていたらこれだ。ちょっと助けてほしい。助けを求めて何気なく、背後のキャロルが何をしているか見てみると、
「……何だか長くなりそうですわね。七星、暇なので勝負ですわ！手っ取り早く勝ち負けを決める指相撲で勝負しましょう！」
「……は？　え、いや、そのような事をしてる場合では……」
「勝負から逃げる気ですの？　そんなことは許しませんわ！」
「……確かに、逃げたいですが……色んな意味で」
心の中で七星に激しく同意する。今直ぐこの場から逃げたい。というかキャロルはよくこんな状況で平然としてられるな……。
使徒に対する評価を上げながら、レオンハルトは眼前の二人を見る。両者睨み合った状態のまま、敵意をぶつけている状態だ。
もう現実逃避にキャロルを見習って、別のことでも考えるか、と思う。巨乳の事とか。眼の前に二つもあるし。と、馬鹿なことを考えていると、ケッセルリンクがカミーラに言葉を放った。
「……先程から妙に噛み付いてくるが……そちらはレオンハルトの何なのかね？」
「レオンハルトの……？」
と、聞いた。その質問に不意を突かれたのか、カミーラが少し言葉を詰まらせる。
そして少し考えた末、カミーラは、はっきりとこう答えた。
「……私は、レオンハルトの――相手を務めてやっている」
言った。すると、ケッセルリンクが目を見開いて、
「――な、に……？」
絶句した。そのやり取りを見て、レオンハルトは、
……帰りてぇ……。

まだやり取りが続きそうな気配を感じて、現実逃避を始めた。

ケッセルリンクは相手の言葉に驚愕を得た。
眼前、女の魔人がいる。確かカミーラという者。そしてレオンハルトの、
……私と同じだというのか……！
しかも相手を務めてやる、という言葉から察するにレオンハルトから頼まれたことなのだろう。その部分に少し引っかかってしまうのは女として負けた気がするからだろうか。
いや、しかしそうと決まった訳ではない。ケッセルリンクは対抗するように言葉を発した。
「……私も、レオンハルトの……相手、を務めている……！」
「……貴様が？」
胡乱な目でこちらを見るカミーラ。そしてしばらく、何やら値踏みするように眺めると、ややあって、ふっ、と笑い、
「貴様如きでは相手にならんだろう……」
「っ、何だと……」
それは聞き捨てならない。故に聞き返す様に、
「そちらは、相手になると……？」
「……当たり前だ。私はもう、何度も相手をしている。それこそ数百年前からな……」
「なっ……」
……それほど昔からの関係であったと言うのか……。
しかも何度も、だ。こちらは精々数日。いや、密度なら負けてない、と思いたいが、それも確証はない。
だが、こちらに追い打ちを掛けるように、カミーラは、
「貴様では実力が足りん。ほらを吹くな」
「！　ほらではない……！」
事実を言う。ここまで言われては黙っているわけにはいかないと、
「実力、は足りないかもしれないが……私は、数日間に……何度もやり

合った仲だ……」
頬が熱くなる。はしたない、という言葉が頭に浮かぶ。
しかしカミーラはそれにも余裕を見せると、
「どうせ一方的に嬲られただけであろう……」
「……そんなことは」
ある。だが、最後の方は色々と教わったことを活かし、こちらからも――
……っ、それより……！
ケッセルリンクは言う。ならば、
「そちらはどうなのだ……？」
「ふっ……私は、対等にやり合っているぞ……」
お前とはレベルが違う、とカミーラはこちらを見下す。
その格の差を言い聞かせるように、口々と、
「昔は、こちらが主導権を握っていた」
「……レオンハルトよりも上であったと……!?」
……なら、レオンハルトのあの技巧は、この女で鍛えられて……！
「何度もやり合い……少し癪だが、差を縮められたがな……この間など、胸に傷を付けられ……」
「胸に――」
その発言を聞いて、カミーラの胸を見る。大きいものだ。ともすれば自分より。そして、それに傷、ということは――
……あ、アレの隠語か……？　確かに、アレは少し恥ずかしいからな……。
レオンハルトは胸が好きだし、おそらくカミーラにも同じ様に色々としたのだろう。少し複雑ではあるが致し方ない、とカミーラの言葉を続けて聞くと、
「周囲に被害が出るからな……よく禁止されることもあるが……」
「周囲、に……被害……」
それほど激しいというのか……。
思わずつばを飲み込んでしまう。自分達の時でさえ、中々に激しいものだったのに、レオンハルトはあれでも抑えていたと言うのか。禁

止されるなどよっぽどだろう。
というか、
「……まさか、とは思うが――外でやっているのか……？」
「……外だが、それがどうした……」
当然、といった様子で答えられ、妙な敗北感が胸に落ちる。
……それくらいやらなければ、駄目だと言うのか……。
幾ら何でもやりすぎではないだろうか、と思う。いや、しかし、レオンハルトがそれを望んでいるなら、
……望んでいたとして、それを躊躇なく行えるのか……？
少なくとも自分はまだ難しい。最低限心の準備がいる。しかし、相手にとってはそれが当然で、今更躊躇することではない。それほど関係が深いのだろう。
……っ、私の負けか……。
自分はまだまだ浅い、とそういうことだ。率直に言って悔しく思う。
だが、
「……レオンハルト」
「……あ、何だ？」
視線を向ける。そして決意する。
宣言するように、
「私も、貴方を満足させるように頑張る……頑張りたい」
「……？　ああ、それで？」
だから、と、ケッセルリンクは息を入れた。少し勇気がいるが、それを振り払うように、彼を真っ直ぐ見て、
「今度……色々と、教えてほしい……」
言葉尻がだんだん小さくなってしまうのは許してほしい。恥ずかしいのだ。
顔が熱くなり、目を合わせるのが辛くなってくる。しかし強い意思で見つめ続ける。
するとやがて、レオンハルトは額を手で抑えながら、
「……いいぞ」

「！　そ、そうか……」
　了承を得たことに安堵の息をつく。断られたらどうしよう、と不安に思っていた。カミーラがいるからもういい、なんて言われたらさすがにショックを受ける。しかしそうはならず、それどころか、
「……まぁ、お前はお前だし、誰かと比べなくてもいいだろ」
「……そうか？」
「ああ。お前は結構唆る相手だ。だからいつでも挑みに来い」
　と、励ます言葉まで掛けてくれる。しかもいつでも来い、と。
「レオンハルト……」
　そんな単純な言葉で嬉しくなってしまうのは、惚れた弱みと言うのだろうか。しかしそうであったとしても気にならない。じっと彼の顔を見続けていると、やがて彼はこちらから視線を切って、カミーラを見ると、
「……とりあえず、今回はケッセルリンクの負けってことで見逃せ。というか、間違っても手出すなよ？」
「……ふん。そいつが分を弁えればの話だ」
「そうじゃなくてもだ。俺もそうなれば放っておかねぇし、出てくるのは俺だけじゃねぇぞ」
「ふん……」
　レオンハルトが言い含めると、カミーラがそっぽを向きながらも理解の色を見せる。それを確認して、レオンハルトは頷くと、
「それで話が途中だったか……悪いがこの後、俺もこいつもスラル様に呼ばれてるから今度でもいいか？」
「……好きにしろ」
　言うとカミーラは踵を返してそのまま立ち去っていく。それを追いかけるように、長髪の男がこちらに挨拶しながらも、
「……それでは、失礼します。レオンハルト様、ケッセルリンク様」
　ああ、とレオンハルトが頷きを入れたので、こちらも黙って頷く。するとその男、おそらく使徒は、カミーラの後に付いていった。
　そしてそれを見たキャロルが、
「指相撲……負けてしまいましたわ……」

何やら落ち込んでいた。それをレオンハルトが呆れた目で見ながら、
「とりあえず……二人とも行くぞ。ちょっと早いが問題ないだろうしな」
「はーい、ですわー……」
「……ああ」
レオンハルトがカミーラ達とは逆方向に歩き始めたので、それに続く。確かこの後は、レオンハルトが言っていたようにスラル様に呼ばれていた筈だ。
……しかし、カミーラか……。
背後に消えていった同じ魔人四天王である魔人を思い返しながら決意する。それは、
……今は及ばないようだが……いずれは追いついてみせよう……。
女として、負けたままではいられない。それを払拭することを心に決め、ケッセルリンクは愛しい人に続いた。

……何だったのだ、あの狼狽え様は……？
カミーラは、廊下を歩きながら先程のやり取りを不思議そうに思い返していた。
魔人四天王として女が紹介された時から微妙に気に食わなかったが、こちらの話に横槍を入れてきたことで、それは跳ね上がった。なので立場を弁えさせてやろうと思い威圧、そして挑発したのだが、
……途中から、明らかに気色が変わったな……。
そう、確かレオンハルトの相手を務める関係だと、自分が言った時からだ。どのような関係かを聞かれ、友人という訳でもないし、知り合いや同僚というほど薄くもない。だからあれが適切かと思ったのだが、相手は妙にそこを気にしており、
……レオンハルトの相手を務められることに嫉妬していたのか……？
レオンハルトに惚れているのは認めていた。ならば戦いの面でも

同じ位置に立ちたい、とそういうことだろうか。
もしそうだとしたら、それは難しいだろう。それは自分であっても怪しいことだ。
何故なら、
……ライゼン、あのライゼンと引き分けたか……。
レオンハルトの話を聞いて思う。
数日前に休暇を終えたレオンハルトが、他の者達と一緒にライゼンに乗って帰ってきた、と聞いた時は耳を疑ったものだ。しかし多くの者の話を聞く限り、それは事実で、
……生きているとは思わなかったが……。
可能性としてはライゼンが一番高いと思っていた。だが、全員死んでいるのが妥当だろうとも。
だが現実奴は生きていて、しかもレオンハルトと戦い引き分けた。そのことを思うと、妙に心がざわつく。
何しろ奴は四大聖竜の中でも最強。多くの魔人を打ち倒してきた男だ。その恐怖を、今を生きている魔人達も憶えていて、だからこそレオンハルトに恐怖するのだろう。それを思うと、
……仮に私がやっても、勝てる、か……？
微妙なところだ。少なくとも確証はない。
ならばレオンハルトは既にこちらを越えてしまっているのではないか、と思う。本気で戦うことはないのだから、それを確かめる術はない。しかし心の方は、
……それを、認めてよいのか……？
分からない。プライドが刺激されるのは確かだが、嫌かと言われるとそうでもない。
複雑な気分なのだ。ライゼンという見知った同胞が生きていたことも、それとレオンハルトが引き分けたことも、レオンハルトが自分を越えたかもしれないということも。
故に、レオンハルトには頼もうとしていた。もし連絡が取れるならば、
……一度、本気で相見えてみるのも一興か……。

それが無理でも奴と同程度のレオンハルト相手であれば構わない。久方振りに闘争心が刺激されるのだ。
それは、自分の本気がどの程度か、確かめてみたいという思いもあり、
……私は、プラチナドラゴンの〝魔人〟。魔人四天王のカミーラだ……。
籠の中の鳥であった昔とは違う。ドラゴンとして、魔人として、その本能が強敵を望むのだ。
「くく……」
思わず笑みを漏らしながら、カミーラは自身の愉悦に身を任せるのだった。

ケッセルリンクと魔王の料理５

「それで、ケッセルリンク様！　ケッセルリンク様のご趣味は何ですの!?」
「私は……そうだな。花を愛でることが好きだな」
「花！　いいですわよね！　綺麗ですし、色々実用性もあって。中には食べられる物もあったりしますの！」
「ああ、意外と良い味してるの多いよな。量は物足りないけどよ」
「……それ、何か違えだろ……」
レオンハルトは談笑を続けるケッセルリンクやガルティア達の会話が脱線し始めたのを半目で見て息を吐いた。
今日はケッセルリンクの歓迎会であり、いつもの面子にケッセルリンクを加えた全員でスラルの部屋に集まることとなった。
主賓であるケッセルリンクも快く受け入れ、交流を楽しんでいるように見える。その様子におかしいところはない。
なら、
……さっきのは何だったんだ……？
先程、部屋に来る前。ケッセルリンクとカミーラのやり取りを思い出して疑問を感じる。
急に様子が変わってこちらの相手を務めているというカミーラに対抗し始めたのは何なのか。ケッセルリンクの話も身に覚えのないことばかりであったし、微妙にズレていたようにも思える。どこかで似たようなやり取りを行なった憶えも微かにあるのだが思い出せないし、ケッセルリンクがこちらに決意を表明してきたのでそれを受け入れたが、どうにも違和感は拭えない。だが、
……ケッセルリンクが相手をしてくれるってんなら、愉しみが増えるな……。
今後への期待が高まり、心の中で笑みを浮かべる。何しろ相手が増えるのだ。定期的にやっているハンティも良くなってきているが、やはり魔人の相手はより愉しめる。今まではカミーラやガルティア以外にはいなかったし、これからは、

「……ちょっと」
「――っ、あ？」
急に横から声が飛んでくる。その際に腹を突かれたので何かと思えば、それはこちらを半目で見上げるスラルで、
「何だスラルか」
「何だ、じゃないわよ。黙ったまますっごい悪い顔して」
「……あー……」
どうやら顔に出てしまっていたらしい。今後の戦いについて考え過ぎた様だ。
しかしそれを言うと、またスラルに小言を言われてしまうだろう。周りの被害を考えろとか色々。だから黙って頭を掻いていたのだが、スラルは腰に手を当てて軽く息を吐くと、
「どうせ、『ケッセルリンクと戦えるのが愉しみだな……！』――とか考えてたんでしょうけど」
「……それは俺の真似か？　似てないからやめとけよ」
妙に気取った笑みで言うスラルにやめるように言う。ちょっとムカつくしな。
しかしスラルはこちらをしたり顔で見上げて、
「似てるもん。というか、考えの方を否定しないってことは合ってるんでしょ。違う？」
「……さあな。そんなことより、そろそろ準備するぞ」
「あっ、誤魔化した」
その発言は無視する。そのことでスラルは度々こちらを弄ろうとしてきたが、やがて手を動かして作業を再開する。
そしてしばらく二人で歓迎会の準備を勧めていると、問題のブツが出来上がった。それは、
「……前から疑問に思ってたんだが」
「……な、何？」
言う。出来上がったスラルの料理を前にして、不安そうなスラルに、
「明らかにマズいと分かっている料理を歓迎会で食わせるのは、歓迎

でも何でもないんじゃねぇか……？　ただの嫌がらせだろ。新人イビリ的な」
「うっ……そ、それは……。で、でもっ、食べてみてからじゃないと分からないし……！　食べてみたら案外、普通にマズいだけだったり……」
「自分でも信じきれてねぇのか……」
弁護になっていないスラルの言い分に頭を抱える。しかし、彼女が言うことにも一理ある訳で、
「……ま、いいだろ。とりあえず食ってやる」
「お、お願いね……！」
まるで死地に向かう気分でおたまを手に取る。毎度ながらこの瞬間は慣れない。ぶっちゃけ、戦いよりこっちの方が圧倒的に辛い。しかし、それでも覚悟を決めると、
「――いざ」
手の震えを抑えながら、鍋の中のシチューを掬い、口に運んだ。
――瞬間。
「――――」
味覚に何かを感じた途端、異形の者に出会ってしまったかの様な悪寒を感じる。
そして景色はそのままに、眼の前に何か形容出来ない謎の存在が現れた。
「――――」
その存在は何事かを口にしているが、それを理解することは出来ない。只々、その声は酷く耳障りで、頭の中が掻き回される様な不快感を与えてくる。
その容姿もこの世に現界してはいけないような異形のもので、見ているだけで狂気に陥りそうな恐ろしさがある。
だが、
……この程度か。
これくらいは慣れたもの。故にその異形を手で払うと、直ぐにそれはかき消えた。

眼の前には、先程までと変わらない景色が広がっており、
「――なるほど」
「ど、どうだった？」
スラルが心配して水を渡してくる。それを手に取りながら身体の調子を確かめると、
「……気絶の時間は短い。その間は軽い幻覚を見るくらいか。刺激もそこまでじゃないし、後遺症も起こらない」
必殺料理で起こった現象を説明していく。水を含み、空いた手でシチューをかき混ぜながら、
「これくらいなら慣れてなくても重大な事態にはならないだろ。これでいいんじゃねぇか？」
「そ、そう。……何だか、レオンハルトも段々ガルティアみたいになってきた様な――」
「……いや、お前の練習に付き合ってるから慣れただけで、キツいもんはキツいけどな」
そう言っておたまを置く。実際これくらいであれば気絶すらしない時もあるから慣れてはいるのだろう。軽度のものに限ってだが。スラルの料理に付き合っていると、結構な頻度で、
……これより数段ヤバいのがあるからな……それに比べたら全然マシだ。
たまにマジで死ぬんじゃないかと疑うレベルのが混じっているから怖い。そして、そういうのに限ってガルティアが絶賛する。やはりアイツの味覚は狂ってるな、と思いながら、
「とにかく、これならケッセルリンクに食わせてもいいだろ。さっさと持ってくぞ」
「……うん、そうね。恒例だもんね」
「嫌な恒例だな……」
と、言いながら他の料理も含めたワゴンを押してケッセルリンク達が座っているテーブルまで運んでいく。因みに他の料理は全部自分が作った。スラルの練習に長年付き合っている所為か、こっちの料理の腕が上がっているのは皮肉か何かか。

……スラルの腕が上がってほしいんだがな。
上がる、というより、治す、が正しい気もする。ともあれ料理を持っていくと、
「お、来たか」
「レオンハルト様！　わたくし、ちゃんとケッセルリンク様を楽しませましたわ！　褒めてほしいですの！」
「はいはい、後でな。とりあえず並べるの手伝え」
「畏まりましたわ！」
言いながらキャロルと一緒に料理をテーブルに並べていく。次々と並べられていく料理の数々に、ケッセルリンクが、
「私の為にこれほどのものを……感謝します、スラル様」
「……えっ、あ、そうね。感謝しなさい……」
はい、と微笑を浮かべながら頷くケッセルリンクにスラルが狼狽えている。何せ今から必殺料理を食わせるのだから感謝されるとは思っていなかったのだろう。無理ない話だ。
二人のやり取りを見ていると、ケッセルリンクはやがて、こちらにも顔を向け、
「レオンハルトも、ありがとう。わざわざ私の為に……」
「ああ、気にするな。俺も久々に料理が出来て良い息抜きになったしな。存分に味わってくれ」
「そう、か。レオンハルトの、手料理か……」
お礼を言ってきたケッセルリンクに料理を並べながら軽く返事を返すと、彼女は並んだ料理を眺めて、
「う、む。そうだな、とても嬉しい。味わって食べることにしよう……」
「……ちゃんと、私の料理から食べてね？　ケッセルリンク？」
「はい、勿論です」
スラルがニコニコと笑顔を浮かべながら、シチューを鍋ごとケッセルリンクの前に置いた。急に乗り気になったな、と思いながら、料理を並べ終えたので席に着き、
「それじゃ、始めるか――と」

言った時、不意に扉を叩く音が室内に鳴り響く。
それを耳にしたキャロルが立ち上がり、
「わたくしが開けてきますわ！」
と、勢いよく扉に向かっていく。スラルも誰も、それを止めることはしない。
何故ならこの時間にやって来るのは、おそらく皆が知る人物で、
「――っと、ごめん。遅れた？」
「今から始まるところですわ！」
キャロルが迎え入れた先、その姿を見てケッセルリンクがほんの少し驚いた様に、
「始祖様まで、来てくれたのですね……」
「やっほ、ケッセルリンク――じゃなくて、ケッセルリンク様、になるのかな」
部屋に入ってきた使徒――ハンティが軽く手を挙げて挨拶する。
しかしその言葉に引っかかったケッセルリンクは、少し迷った様に、
「どうでしょう……呼び捨てで、いや、しかし、カラーにとって始祖様は――」
「うーん、でもあたし使徒だし、ケッセルリンク様は魔人なんだから、敬称は付けた方がいいんじゃない？」
軽く戯けた様に言うハンティを見て、ケッセルリンクは少し参った様に、
「……お戯れを。魔人と使徒という関係上、そうせねばならないのは理解してますが、まだ自分の中で整理が出来ておらず――」
「あはは、ごめんごめん。あたしは好きに呼ぶから好きに呼んでいいよ――って、あたしが許すのも変か。それじゃ、好きにしてもいいかな？」
「……はい。それで宜しいかと」
「ん、じゃあそれで」
言って歯を見せて笑うハンティに、ケッセルリンクも笑みで答える。それを見て思うのは、
……こいつ、ちょっと変わったか？

自分の使徒を見て思う。どうにも以前と比べても妙に元気がいいというか明るいというか、何かが吹っ切れた様に感じる。そのことが気になり、何となく声を掛けた。
「……にしてもギリギリだな。もう少し早く来てれば仕事を手伝わせるなり、軽く手合わせするなりしてやったのによ」
「なら、この時間に来て正解だね」
言って普通に返すハンティ。その気安い様子は、以前の様なぎこちない感じはなく、
……心の整理でも付いたか？
何せ色々あった。心境の変化があってもおかしくないだろう。そうでなくても単純に慣れた可能性もある。
ともあれ、
「……どういう意味だそりゃあ。……ま、早く座れ。せっかくの料理が冷めちまう」
「お、良いこと言ったぜレオンハルト。早く食わないとメシが冷めちまう。だから早く――」
「こんな感じで待ちきれない馬鹿がいるから早くしてくれ」
「そうした方が良さそうだね……」
ガルティアが饒舌になったのを見て、苦笑したハンティが席に着く。
そこでようやく、
「さて、それじゃ始めるぞ。ケッセルリンクの歓迎会。――でもまぁ、堅いもんは無しだ。ケッセルリンクが料理に口を付けたら後は好きにやる。そんな感じだからケッセルリンクも堅くなるなよ？」
「ああ……そうしよう」
ケッセルリンクが嬉しそうに頷く。どうやら軽く感動しているようだが、少し不憫になってくる。何故なら、
……この後、必殺料理を口にするんだよな……。
良い空気を完全に壊しにいってる気がする。同じことを思ったのか、ハンティが小声でスラルに、
「……ねぇ、アレ、いいの？　多分例の料理だよね？」

「で、でも、アレは、ある意味歓迎の儀式的な何かの様な何かで……」
「……いや、まぁ、あたし的にはよく分からないから何とも言えないけどさ」
「全部俺にくれねえかなあ……」
「何の話ですの？」
……良いよな。あの苦しみが分からない連中は……！
自分とスラル以外は呑気に構えている辺り、ここの連中のおかしさがよく理解る。キャロルは忘れてるだけだから、酷いのはガルティアとハンティだが。にしても解せないが。
ケッセルリンクはどちら側だろうな、と思いつつ、彼女が皿に手を伸ばすのを見た。スラルの必殺シチューを皿に分け、それを自分の前に置く。そしてスプーンに手を伸ばすと、
「では――頂こう」
優雅に、それでいて食器の音を一切立てずに、シチューを掬うと、それを口に、
「ん……」
含んだ。皆が固唾を呑んで見守る。
どんな結果になるか。興味はそこだ。
ゆっくりと味わうように数秒。そこでケッセルリンクは、不意に、
「――――」
動きをぴたりと止めた。身体どころか口も一切動いていない。それを見て、
……だ、駄目だったか……!?
いつでも助けられる様に身構える。気絶したら即座に動くつもりだ。隣のスラルも魔法で回復の準備をしている。
そんな中、ケッセルリンクは、しばらく止まっていた。
だが、
「――ん」
……動いた!?
突如として動きを再開させたケッセルリンクが、再びゆっくりと口を動かし始める。

それを見て、信じられないような気持ちになった。
……まさか、こいつもガルティアか、もしくはハンティと同類なのか……!?
そうだとしたら嫌だ。こちらが異常みたいで。
しかし現実、ケッセルリンクはゆっくりと咀嚼を続け、
「……ふぅ」
とうとう、それを飲み込んだ。
まさか、という想いで見つめ続ける。こちらが驚愕していると、ケッセルリンクは一度スプーンを置き、備え付けてあったナプキンで口元を拭いた。
そして、
「――スラル様」
「な、なにっ!? お、美味しかった!?」
無事に料理を口にしたケッセルリンクに驚きすぎたのか、スラルが酷く混乱した様子で返事をする。
しかし、その返しにケッセルリンクは首を振ると、
「いえ、その、言い難いのですが――」
そこで一度、言葉を区切り、スラルに告げた。
「私、実は――猫舌でして」
「……えっ?」
ですから、と。
「熱いものが苦手で、味が分からないのです。せっかく作って下さったスラル様には申し訳ないですが――」
そこで申し訳無さそうに頭を下げるケッセルリンクに、スラルは焦ったように対応した。
「え、あ、いや、そ、それなら仕方ないわよね! うん! 別の物を食べて! これはガルティアに食べさせるから!」
「極上の美味が棚ぼたで俺の元に!? なら、遠慮なく食べるぜ!!」
ガルティアがスラルに渡された鍋を勢いよくかっ込み始める。それを見たケッセルリンクが、
「っ……」

と、口元を抑えたのを偶然目にし、レオンハルトはそれに気づいた。
……こいつ、もしかして……。
思う。しかしそれが正しいのかは分からない。
なのでそれを確認しようと、レオンハルトは適当な皿を取ってケッセルリンクに、
「……なぁ、ケッセルリンク。こっちの料理はどうだ？」
「……うむ。美味しそうだが……それ、は。どちらが作ったものかね？」
勿論、自分が作ったものだ。しかし、
「――スラル」
「っ！」
ピクッ、と肩が震えた。それを見て確信しながら、
「――ではなく、俺の作った料理だ。自信作だから食べてくれ」
「そ、うか。なら頂こう」
「……なら？」
「っ、言葉の綾だ……」
言って、食器を手に取る。そして再びゆっくりと、こちらが作った料理を口にすると、
「――あ」
ケッセルリンクの目が驚きに見開かれる。そして口元を綻ばせ、
「美味、しいな。うむ……本当に美味しい……」
それをゆっくりだが、着実にどんどんと口にしていく。
その目元は若干、潤んでおり、その様子はやはり、
……ああ、こいつ……我慢してたんだな……。
おそらくスラルに恥をかかせないように必死に我慢して必殺料理に耐えたのだろう。
そして猫舌という嘘をついて、シチューを拒否したのだ。そして美味いものを食べて感動、という感じだろうか。
そうでなくとも、少なくとも猫舌が嘘なのはわかるのでほぼ確信に近い。何故なら、
「ああ……美味しいな……これなら、いくらでも食べられる……」

……今食べてるそれ、熱々のグラタンなんだけどな……。
本当に猫舌なら食べられない筈のそれを、めちゃくちゃ普通に食べてるケッセルリンクだが、それに気づかないくらい余裕がないのだろう。普通なら、勧められた段階で拒否する筈だ。
しかしその健闘を称え、敢えて指摘してやることはせず、レオンハルトはケッセルリンクに口直しの料理を勧め続けた。

夜。
ケッセルリンクの歓迎会も終わり、皆が部屋からいなくなった頃。室内には二人の女性の影があった。
それは、この部屋の主であるスラルと、新しく身内となったケッセルリンクの二人である。いつもこの時間に呼んでいるレオンハルトはおらず、今日は部屋には来ないように言ってある。防音魔法も今日に限っては重ねがけしてある。
それらの状況を整え、スラルはケッセルリンクとの会話に望んでいた。
「――それで、どうかな……？」
スラルが不安そうに彼女に聞く。それにケッセルリンクは応え、
「――ええ、私で宜しければ、幾らでも力になります」
微笑で言った。
するとスラルは顔を綻ばせ、
「それじゃ、協力よろしくね。――あ、それだけって訳じゃなく、普通に仲良くしていいからね？　女子会みたいなのやりたいし……」
「ふっ、分かっています。私を許してくれた恩と、ここにいることを許してくれた恩は忘れません」
「……いや、だから……うん、それだけじゃないから――って言ってるんだけどね……」
スラルが微妙な表情で言うと、ケッセルリンクは気を取り直した様に優しい表情になると、
「ですが……スラル様はそのままでも大丈夫なのではないかと。私か

ら見ても、かなり大切に想われている様に思います」
「そ、そうかな……」
言われた言葉に、スラルが照れたように顔を少し赤くし、身体をもじもじとさせる。
それに気を良くしたのか、満更でもなさそうに、それでいて窺うようにケッセルリンクを見上げると、
「で、でも、一応色々相談したいから……聞いてもらっても良い？私、夜更かしだから、長くなるかもだけど……」
「ええ、大丈夫です」
何せ、
「――夜は得意ですので」

魔法

ある日のこと。
ケッセルリンクが魔人となり魔軍に合流して数日。彼女の働きもあって多少の時間を捻出出来るようになった魔人筆頭兼魔軍参謀のレオンハルトは、自身の部屋に彼女達を呼んでいた。
「――わざわざ呼んだのは他でもない」
レオンハルトが真剣な顔つきで視線を動かす先、三人の女性がいる。
魔王スラル、魔人ケッセルリンク、使徒ハンティの三人である。彼女達はレオンハルトの呼びつけに応じ、思い思いの場所でそれを聞いた。因みにキャロルはレオンハルトの背後で書類仕事を継続させている。
いつもの面子の中ではガルティアがいない。レオンハルト以外は女性だらけであるが、何もその理由で呼んだ訳でもないのだ。
かなり真摯な様子で、レオンハルトは言った。
それは、
「――俺に、魔法を教えてくれ……！」
「……」
聞こえた言葉に部屋の中が静寂に包まれる。
そして全員で顔を見合わせた後に、彼女達は微妙な表情になると、少しして動きが再開された。
最初に言葉を発したハンティを皮切りに、
「あー……紅茶美味しいね……キャロルってば、淹れるの上手くなった？」
「えっ、本当ですの？　それほどでもありませんわ！」
「茶葉の良さもそうだけど淹れる人の腕前で味って変わるわよね」
「確かに、良い風味だな……」
「ふふん！　また一歩、完璧使徒に近づきましたわ！」
紅茶を味わう三人がキャロルを褒めたことで、書類を進めていた手が止まる。褒められたことで自慢気に胸を張っている為だ。

それはいいのだが、
「……おい、聞こえてたか？　魔法を教えてほしいんだが……」
念の為、というように再度の頼みを告げる。
するとまたしても彼女達はお互いに視線を見合わせる。そして微妙な表情を浮かべる。
しかし、今度は応対が来た。皆を代表する様に、スラルがレオンハルトを呆れた様に見る。
「……レオンハルト。貴方――」
言う。息を吐きながら、
「これ以上強くなってどうするつもりなのよ……」
「ほんとそれ」
「……いや、その……」
スラルの言葉にハンティが半目で同意する。ケッセルリンクは気遣っているのか、少し遠慮気味に言葉を噤んだ。
そんな中、軽く眉を立てながらレオンハルトは反論した。
「別にいいだろうが、強くなっても。だから俺のことを心底駄目な奴を見る目で見るなよ」
「……心底駄目な人を見てるからしょうがないよね」
「どういう意味だ、そりゃあ……」
何故か駄目人間的扱いを受けてしまい、レオンハルトが眉間に皺を寄せる。しかしハンティはそれに答えずに紅茶を口に運ぶ。代わりに答えたのは、カップから口を離したスラルで、
「……あのね。レオンハルトは魔法なんか覚えなくても充分強いし、戦えるでしょう？　剣の腕はもう世界一と言っていいんだし。今更魔法なんて覚えてどうしようって言うのよ」
肩を竦めて言う。
だが、レオンハルトはその軽い質問に表情を険しくして、
「……倒さなくちゃならねぇ奴がいてな……」
「えっ、なにそれ？」
予想外の事を聞いたのか、スラルがきょとんと表情を不思議そうなものに変化させる。同じ様にケッセルリンクも、

「レオンハルトが魔法を覚えてまで倒したい……いや、それほどの力を持った相手がいると？」
ああ、とレオンハルトは質問に頷いた。
そして言う。先程よりも皆が少し真面目に注目する中、
「それはな――」
レオンハルトが声を震わせながら、その名前を口にした。
「……トロールだ」
その名に、一度は空気が凍る。皆が呆気にとられた様に表情を止める。
なにしろ、レオンハルトが倒したい、と態々口にする相手だ。想像が付かないが、とんでもない相手なのだろうと思っていた。
しかし予想に反して、それは皆が知る相手――ただのモンスターだった。そのギャップで動きを止めてしまったのだ。
だが、少ししてそれを頭に落とし込み、理解し、思い出すと、皆が一斉に、
「――あー、なるほど」
と、得心した様に頷いた。皆が空気を弛緩させ、納得の表情を作る中、しかし、レオンハルトは汗を滲ませながら拳を握り、
「……あれほど怖ろしいモンスターは他にいねぇ……俺はアイツを越える為に、魔法を覚えなくちゃならねぇんだ……！」
「いや、うん……そりゃあそうだろうね……」
歯を噛み締め、心底悔しそうな表情で言うレオンハルトに、ハンティが半目で言う。温度差が著しい状態だ。
なにせ、とハンティは前置きを入れてそれを説明した。
「トロールって……物理攻撃禁止してくるしね」
「私は直接見たことないけど……確か一定範囲内の物理禁止効果を持つモンスターよね。対に魔法を禁止するゴブリンがいるし」
スラルが顎に手を当て、思い出す様に説明を補足する。
ケッセルリンクが、
「つまり……レオンハルトは何処かでそれに出くわしたと？」
尋ねるように言うと、レオンハルトは頭を抱えながら首を縦に振っ

た。
「その通りだ……この間、迷宮で出くわしたんだが……俺は奴を相手に、逃げることしか出来なかった……」
「あの時は怖かったですわー……」
「……そりゃあご愁傷様だね」
　同じ様に顔を俯かせるキャロル。迷宮に行く際は大体一緒なので、魔法が使えない二人では逃げることしか出来なかったのである。
　だから、と言うように、レオンハルトは立ち上がった。
「俺はアイツを倒す為に魔法を覚える……いや、覚えなくちゃならねぇ……！」
　その時の悔しさを思い出してか、レオンハルトが熱意をもって三人を見る。
　そして床に膝を付くと、
「だから頼む！　俺に、魔法を教えてくれ……！」
「あ、ちょっと……！」
　スラルが制止しようとするも、それより早く、レオンハルトはスラルに縋り付き、何度も頼み込む。
「頼む……！　俺は、トロールを倒す為に魔法を――」
「ちょ、ちょっと!?　離し、あっ、ちょ……も、もうっ！　わ、わかったから離してっ！」
「！　本当か!?」
　レオンハルトが顔を輝かせる中、スラルは少し頬を染めながら、視線を逸し、
「ま、魔法、教えればいいんでしょ。別にいいわよ……難しいことじゃないし……」
「おお……なら――」
「――ただし」
　早速、と、教えてもらおうとしたレオンハルトだが、その前にスラルの声が飛ぶ。
　そして目を細めて言い聞かせる様に、彼の顔の前に指を立てると、
「ちゃんと、私の言うことを聞くことっ！　それが条件よ！」

「あ……ああ！　わかったぜ……！」
少し気圧されるも、即座に理解して了承するレオンハルトに周囲は、
「……まぁ、それならあたしは気が向いたらでいいかな。面倒だし」
「基本はスラル様に任せるが――私であればいつでも協力しよう」
ハンティは渋々と、ケッセルリンクは快く引き受けてくれる。
それを見て、胸に湧き上がるものを感じつつ、レオンハルトは張り切って立ち上がった。
「よし、なら早速外に出て――」
「それじゃ――はい。まずはこれ読んで」
「……あ？」
不意に、目の前に差し出された本を見て、レオンハルトは間の抜けた声を上げた。
何処からか取り出したのか、スラルがその本をレオンハルトに握らせながら、
「これ全部読んで、理解したらまた次の本上げるから。解らないところがあったら聞いて」
「……いや、それより、これは――」
「何って……魔法理論の本だけど。ちゃんと初級編だし……どうしたの？」
「……いや、何でもない」
スラルが不思議そうに首を傾げる。さも当然、といった有様だ。
それを見たハンティが、面白いものを見たように意地悪い顔を浮かべ、レオンハルトに声を飛ばした。
「言っとくけど、魔法はちゃんと理論とかの知識をちゃんと覚えないと駄目だからね？　実践はそれを大体覚えて、魔力の使い方とかも全部覚えてからだから、精々頑張って」
「レオンハルト……その、頑張ってほしい」
「……じょ、上等だ……！」
二人の言葉を受けて、レオンハルトは本を受け取りつつも威勢よく、

「こんなもん、一週間で……いや、三日で覚えてやる……！　そして……あのクソトロールを消し飛ばしてやる……！」
「わたくしも一緒にお勉強しますわー！」
レオンハルトが拳を握りしめて宣言するのに合わせて、キャロルも立ち上がってそれに追随する。
「が、頑張ってね……？」
妙に燃え上がった二人の主従を見て、スラルは苦笑混じりに、応援の言葉を告げた。
――こうして、レオンハルトの魔法習得の修行は始まった。

魔法。
それはこの世界に古くから伝わる奇跡の技術である。
身体の中で生み出される特殊なエネルギー、魔力を用いて様々な現象を起こす魔法は、個人の才能によって結果が変動する。
才能が無いものは知識を理解し、どれだけの研鑽を積んでも、魔法を発動することは出来ない。魔法を使うには最低限の才能と知識が必要不可欠と云われている。
また、魔法には幾つかの系統、属性が存在し、個人によって系統の向き不向き、すなわち適正が存在する。しかし他の系統を使えないという事はない。
魔法の中で基本とされる系統、攻撃魔法には五つの属性がある。
火、氷、雷、光、闇、の五大属性である。
まずはこれらの属性から一つを選び、前述の魔力変換の法を用いながら――
「――なるほどな」
「レオンハルト様ー！　早く次のページ捲ってほしいですの！」
「……もう一冊貰ってこい」
――レオンハルトは暫くの間、スラルから貰った本を読み、魔法の勉強に没頭した。
「おや、レオンハルト様。こんなところで一体何を？」

「……勉強中だ」
仕事の合間に、本を読み――
「レオンハルト。お前、メシ時に何やってんだ？」
「話しかけるな。今は暗記中だ」
食事中にも、理論を頭に詰め込み――
「身体の内側に意識を向けて……」
「ぐっ！　ちょっと！　戦ってる最中まで勉強されるのはムカつくんだけど……!?」
「ん……ああ、悪いな。戦ってる最中にも使えなきゃ意味がねぇし、良い練習になると思ってな。良いハンデになってるし、今なら一本取れるかもしれねぇな？」
「くっ……その余裕、後悔させてやるよ……！」
模擬戦の最中にも、余裕があれば魔力を動かす練習を行ったりと、ひたすらに魔法の習得に余力を注ぎ込んだ。
そして、思ったよりも早く――その時は来た。

「――待たせたな」
「……」
魔人レオンハルトの言葉の先、相手は何も言わず、自然体で立っていた。
それは魔物だ。トロールという名の魔物が迷宮の一区画にただ立ち尽くしている。レオンハルトが以前に訪れた迷宮がこの場所であった。
なので、おそらくは同個体。しかしただの魔物である筈のトロールは、魔人を目の前にしても臆した様子もなく対峙している。
それを見て、レオンハルトは不敵な笑みを浮かべた。
「ふん、さすがだな。この俺を前にしても全く動じない。俺如き、相手にならねぇってか？」
「……」
トロールは答えない。しかしそれにも構わず、レオンハルトは笑み

で一方的に話しかける。
「ま、そりゃそうか。何せ俺の攻撃はお前に通じねぇ。どう足掻いたって俺じゃお前に勝てない。それが事実だ――」
軽く自嘲する様に顔に手を当てる。顔半分を手で隠しながら苦笑。
しかしそこで、レオンハルトは目を見開いて相手を睨みつけた。
「――以前の俺ならな」
言葉とともに戦意を放出する。未だトロールは動かない。この程度は脅威ではない、とこちらを嘲笑っているかの様だ。
――だが、それでもいい。
何故なら自分は敗北者で、挑戦者だからだ。眼の前の相手に対し、尻尾を巻いて逃げ出した弱者。それでしかない。
魔人であろうと、魔人筆頭であろうと、そんな立場は戦いにおいて何の意味も持たない。相手が人間だろうと魔物だろうと、重要なのは一つ。それを思い、レオンハルトは言葉を紡ぐ。
「この一ヶ月――お前を越える為だけに練り上げてきた。お前より、強くなる為に……！」
そう。重要なのは――どちらが強いか。その一点だけ。
戦いにおけるシンプルかつ究極な要素。それを戦いで相手に証明するのだ。
その為に、今日この日はやって来た。以前に敗北した相手にリベンジする為に、
「ク、ククク……！　お前という壁を、乗り越えさせてもらうぜ……！」
「……！」
相手が戦闘態勢を取る。それに合わせてこちらも構えを取った。
剣は構えない。今この時に限っては必要ない。ただ両掌を相手に見せる様に、軽く腕を開くことで構えとし、レオンハルトは歓喜する。
「ハハハッ!!　見ろ！　これがお前を倒す為に、俺が習得した技だ……！」
レオンハルトはそこで、右手を前に出した。
相手に手を向け、口にするのは、この一ヶ月の修行で手に入れた――自分の新たな強さ。

それを轟かせる様に、レオンハルトは技名を叫んだ。口端を歪ませ、
「――炎の矢ァ!!」
「――!?」
レオンハルトの掌の先から、炎の塊が飛び出す。
トロールが驚いて見る先、燃え盛る火炎――という程でもない拳大の炎がトロールに向かう。驚いて避けようと試みるも、
「クハハ、逃げようとしても無駄だ！　魔法は絶対命中なんだぜ……！」
「――！」
言葉通り、炎の矢はトロールを追従し、
「燃えろォ!!」
そのまま頭に直撃する。
炎がトロールを一瞬にして灰に――とまではいかないが、そこそこの火力で焼かれると、
「――」
バタリ、とトロールは迷宮の床に倒れ伏し、屍となった。
それを確認したレオンハルトは、
「……ク」
その喜悦を抑え切れないとばかりに、顔を抑えた後、
「ク、クハハハハハハ――!!　見たかお前ら!!」
「はい！　ちゃんと見てましたわ！　レオンハルト様!!」
「……」
高笑いしながら背後にいる者達に呼びかけた。キャロル、スラル、ハンティ、ケッセルリンク。魔法の教えを乞うた日にいた者達がそこにいたが、返事をしたのはキャロルのみで、後は皆、一様に微妙そうな表情を浮かべている。
しかし、そんなことはお構い無しに、レオンハルトはキャロルに呼びかけ、
「見てたかキャロル！　俺は、俺は魔法で、魔法を使い……とうとう奴を越えたぞ……!!」

「おめでとうございますわ！　凄いですの！　さすがはレオンハルト様ですわー！」
「ハハッ！　そんなに褒めるなキャロル！」
キャロルが、どこからかざるを取り出し、紙吹雪を巻きながらレオンハルトの周囲を回りつつ、
「レオンハルト様は剣だけでなく魔法まで天才ですのー！　魔物界一ですわ！　世界一ですわー!!　もっと、魔法を拝見したいですわー！」
「そこまで言うならしょうがねぇ！　ほら、見てろ！　――炎の矢!!」
壁に向かって炎の矢を撃ち込むレオンハルト。それを見たキャロルが再び色めきだった。
「凄いですわ！　もっと見たいですの！」
「ククク、しょうがねぇなあ！　――炎の矢!!」
「さすがはレオンハルト様ですわー！」
レオンハルトが気を良くしてまたしても壁に炎の矢を撃ち込むと、周囲で、やいのやいの、と紙吹雪を巻いてキャロルが盛り上がる。そんな二人の主従を遠巻きに眺めて、同じ主従であるハンティは半目で溜息を吐いた。
「たかが炎の矢一つ使えただけで盛り上がり過ぎでしょ……」
「初めて魔法を使えて嬉しいのかな……？　あんなに喜ぶなんて……」
「実際、覚えるのは早かったですが……」
魔法を使える三人が、口々にレオンハルト達の盛り上がり様を分析する。
このところ、ずっと魔法の勉強と練習をしていたレオンハルトが、ようやく覚えた唯一の魔法が、炎属性の初歩魔法――炎の矢だった。
攻撃魔法の中では最も簡単と言ってもいい魔法で、魔軍でも多くの者が使えるし、使わない。何故ならもっと威力の高い魔法を使うから。魔法に心得がある者なら少なくとも火爆破くらいは使えるということ。
しかし、とスラルはレオンハルトが魔法を撃ち続けるところを見

て、呟くように言った。
「まぁでも、あの炎の矢……威力は結構高いかな……？　才能も魔力も結構あるし……このままちゃんと勉強と訓練続けたら、良い感じになりそう」
「……あんまり強くなられると模擬戦が辛いんだけどなぁ……」
ハンティが頭を抱える。近接戦闘ですらキツいのに、魔法まで使われたら面倒過ぎる、というのがありありと見て取れる様だ。
「しかし、レオンハルトはあの真空波斬撃も使えますし、遠距離の攻撃手段としてはそこまで重宝しないのでは？」
「いやまぁ、そうなんだけどね。でも魔法は魔法で絶対命中するから、途中でどうにか打ち消さないといけないし、レオンハルトの速度ならあたしがやってるみたいに魔法を撃ってからそれに追いついて同時攻撃とかされそうで……瞬間移動で躱せばいけるけど、安直なのは読まれるし……それなら――」
疑問したケッセルリンクに応答しながら、今から今後の戦術を、あーでもないこーでもない、と考えるハンティ。どうにも順応してる彼女を見て、ケッセルリンクは微笑しながら、
「……ですが、あれだけ喜んでくれたのなら教えた甲斐がありましたね、スラル様」
「……確かに、ちょっと可愛いかも……」
複雑そうに頬を染めるスラルの視線の先では、未だにレオンハルトとキャロルが先程のテンションを維持した状態で、
「よし、キャロル！　このまま迷宮の魔物を俺の魔法で一掃するからな！　俺に続け！」
「はい、レオンハルト様！　わたくしは何処までも付いていきますわー!!」
と、迷宮の奥に進んで行ってしまった。
それを見て、ケッセルリンクは苦笑し、
「もうしばらく付き合いましょうか」
「そうね。一応、師匠な訳だし……それじゃ――って」
スラルがハンティを呼びかけようと顔を向けるも、

「レオンハルトが魔法を今後も使う場合、それは牽制に限られる筈。本命に見せかけることもあるかもだけど、こっちは瞬間移動で発動した瞬間に逃げればいいから、こちらを追いかけてくる魔法は有効打にならない。範囲系も逃れればいいし……やっぱり問題はあの破茶滅茶剣技の方で――」
「……まだ思案している様ですね」
「……なんかハンティまでバトルマニアになってない……？」
「レオンハルトの影響でしょうか……」
二人が疑問する間も、ハンティはレオンハルトとの戦闘分析に集中していた。少ししてそれに気づいたハンティがとても恥ずかしそうにしながらも二人に謝り、レオンハルトには秘密にするようにと言い含めながら、三人はレオンハルト達を追いかけるのであった。
――それから、レオンハルトの日々の日課や訓練に、魔法が加わった。

握手会と進化

魔王城の一室。
普段は誰も使うことのない客室に、しかし、今は使用者がいた。
魔軍の指揮官を務めるモンスター、魔物将軍だった。
「はぁ……身体が重いな……よっこらせっと」
魔物将軍は、通常よりも二回り以上も大きい身体を椅子に沈め、身体を休める。この部屋は魔王城で働く女の子モンスター、メイドさんに体調が優れない旨を伝えて、一時的に使わせてもらっているのだ。
巨体を椅子に沈め、息を吐く。そして思うのは、
……最近、調子が悪い事が続く……そろそろ限界なのだろうか……。
ここ一ヶ月の身体の不調に憂鬱になるも、それでいて、どこか達観した気持ちになる。
というのも、いつ寿命を迎えてもおかしくないからだ。
魔物将軍というモンスターは、魔物の中では長命の種だ。その寿命は大体百年以上。十年前後で死んでしまう女の子モンスターや、他の多くの魔物と比べても長生きなのである。
そんな中、自分は既に二百年近くを生きている。魔物どころか魔物将軍としても異常であり、同じ頃に生まれた同僚達は皆、とうの昔に亡くなっている。他の同僚は皆自分より若いものしかおらず、魔軍の中でも一番のベテランとして敬われていた。
しかしそれは偏に、長生きだからという訳ではないだろう。それは、
「レオンハルト様の、おかげだろうな……」
思うのは、自分の上司にして、己が最も尊敬する魔人のこと。
生まれた頃から、今まで、魔軍参謀である彼の下で働き続けたことが、評価に繋がっているのだろうと、魔物将軍は確信する。
実際、レオンハルトの下でなければ、ここまでの躍進は遂げていなかった。仕事の実績をひたすらに積み上げ、尊敬するお方の一助になれるよう己を高め続けたからこそ、ここまで生きてこられたのだ。

……だが、それももう終わりか。
身体の不調は、おそらく寿命が近いということを示唆しているのだろう。これ以上は働くことは難しい。
しかし、自分の死期を悟り、思い浮かぶのは寂しさと誇らしさだ。
生きようと足掻くならば、彼の使徒にしてもらえないかとダメ元で頼んでみる方法もあるが、
……それでは、生き恥となるやもしれん。
また、使徒となったところでかのお方の役に立てるかどうかは解らない。ただいたずらに力を減少させるだけかもしれない。
ならばこの満足感を得たまま朽ち果てるのが最良だ。
魔物将軍は天井を見上げ、安らかな気持ちで言葉を紡いだ。
「……願わくば、次も……あの御方の下で戦いたいものだな……」
それが彼の、魔物将軍としての最期の言葉となった。

魔王城の中庭にて、レオンハルトはその光景に眉をひそめた。
傍らにいた使徒、キャロルに向かって生まれた疑問を呟く。
「――で、キャロル。これは一体どういうことだ？」
「ふふん、これはですね――」
キャロルは自慢気に、両手を広げながらその光景を示して称賛した。
多くの魔物、その大部分は女の子モンスターで構成された列が、幾重にも重なってそれを待ち続けている。視線のほぼ全ては、レオンハルトに向けられており、手を振ったり、声を上げていたりする者も多い。
そんな彼女達にも宣言するように、キャロルは腕を振り上げ、その催しの名を高らかに告げた。
「レオンハルト様ファンクラブによる――魔人筆頭就任記念イベントですわー!!」
いぇーい！　と、キャロルの言葉に合わせて歓声を上げる者達を眺め、レオンハルトは頭を抱えながら息を吐いた。

「……俺に何をやらせる気だ？」
「握手会がありますので、それだけお願いしますわ！」
「……ああ」
全く悪びれもせずお願いしてくるキャロルを見て、頭痛がしてくるが、それでも渋々と頷く。
というかより頷かざるを得ないと言うべきか。ここにいる者達は自分のファンで、一応はお祝いの為に来てくれたのだろう。事前に告知もされて今日という日を楽しみにしていた筈だ。そこで自分が帰ってしまったら、
……盛り上がりに水を差すのもよくないか。
白けるどころの騒ぎではないし、急ではあるが参加を決める。
それによく考えてみれば嫌というわけでもない。
ここに集まっているのは自分のことを好ましく思っているファンなのだし、そこまで好いてくれているなら嫌な気はしない。好意に応えるくらいの器量はあるつもりだ。
故に否定するほどでもない。なので、精々快くそれを果たしてやろうと思う。
と、レオンハルトが決意を固めていると、キャロルが周囲の女の子モンスター達と円を組んで話し合っており、
「あなた達は列整理、そちらはグッズ頒布。他の方達はわたくしと共にレオンハルト様の護衛と、会場内の警備ですわ！」
「了解です！」
……思ったよりちゃんと仕切ってるな……。ってか、グッズ……？
おそらくファンクラブの会員の女の子モンスターだろう。彼女達に向かって会長のキャロルがてきぱきと指示を与えている。そんな中、グッズという気になる単語が聞こえたので、レオンハルトは何気なく後ろに積まれている箱を覗いた。
そこには、
「っ！　これは……俺、か？」
視界に映るそれは、様々な物だった。
多くは小物、バッジであったり、本の栞であったりだが、大きい物

となると洋服や本などがある。随分と雑多な豊富さだが、それには統一性があり、目的を見失っていない。その全てには、自分を模したイラストが描かれているからだ。
「レオンハルト様！」
何とも言えない気持ちが湧き上がりながらも、それを眺めていたこちらの元に、指示を終えたキャロルが近づいてくる。
一応、聞いておかねばならない、とそんな思いで、
「……キャロル。これ……お前が作ったのか？」
「あっ、グッズですわね！」
こちらが物を指で差しながら問いかけると、キャロルはやはり自慢するようにグッズを手に取りながら、
「ふふん！　これらはわたくしやレオンハルト様ファンクラブの会員――同好の士達が作った物ですわ！　わたくしは主に、洋服や寝具を作ってますの！」
「お、おお……」
出された物にどう反応するべきか迷い、呻いた声を出す。自分の顔が書かれた服はまだしも、
……この折りたたまれたものは――寝具、だよな……。しかも、抱いて使うタイプの……。
いわゆる抱き枕的な物があることに戦慄しながらも、それを呑み込む。精神にいきなり重い一撃を食らってしまったが、嫌悪感とかはないので大丈夫だろう。圧倒されただけだ。なので気を取り直してキャロルの説明に耳を傾けるも、
「こちらの本は、女の子モンスターのスケッチさんが描きましたの！」
「が、頑張りました……！　あ、握手してもらっていいですか……!?」
「……なるほどな。別にいいが」
キャロルが紹介する様に一歩横にずれると、その後ろからベレー帽を被った女の子モンスター、スケッチがこちらに向かって頭を下げ、手を差し出してくる。
もう一方の腕で巨大な鉛筆を抱えている彼女達は、絵を描くことでそこから〝らくがき獣〟と呼ばれる疑似生命体を作って戦わせる魔

物だ。
　しかし、その絵の腕は――率直に言って下手だと聞いていたが、この本に描かれたイラストはかなり上手い。
　まさか上位種か突然変異体じゃないだろうかと疑いを掛けていると、そのスケッチが握手終えて、
「あの……良かったらこのスケッチ帳にサインしてくれませんか……？」
「……ああ、いいぞ」
　了承し、スケッチ帳を受け取るとそこに適当なサインをする。普通に名前を乱雑に書いただけだが、
「あ、あああありがとうございます……！　宝物にします！」
「ん……良かったな」
　大事そうにスケッチ帳を抱えるスケッチを見て、〝いや、元から大事な物だろ、種族的に〟。という言葉が浮かぶもそれを心の中に留めて、彼女を見送った。そして何となく、自分のイラストが描かれた本に視線をやり、
　……喜ぶべきなんだろうが……読むのは何か怖いな。
　ただのイラスト集であれば良いが、もっと濃いものである可能性も捨てきれない。なのでここは放置が安定だろう。彼女達の聖域を崩すのは無粋だ。
　そうしてグッズへの対応を決めていると、キャロルが明るい声を上げた。
「レオンハルト様！　始まりますのでこちらの机の前でスタンバイをお願いしますの！」
「……ああ、わかった」
　その言葉と示す方向に従って、横向きに置かれた机の前に立つ。
　するとやはりと言うべきか、始まりを予感したファンクラブの子達がこちらに注目した。視線を一身に受けながら、レオンハルトは、
　……まぁ、たまにはいいだろう。
　精々イメージを損なわない様に対応してやるか、と少しのやる気を持って握手会に望んだ。

だが――
「……何やってんだ、お前？」
「っ!?　だ、誰の事を言ってるの――ですか!?」
「……」
勢い込んでやって来る女の子モンスター達を次々に捌き、握手会を順調にこなしていたレオンハルトの前に、突如として現れた謎の人物。
シルクハットを頭に被り、全身を隠すように纏った真っ黒な長コート。そして白い手袋と手元には何故か白のステッキが握られており、加えて目元を隠す銀色のマスクを被った怪しい白髪の少女。その正体を、レオンハルトは口にした。
「……いや、お前……スラ――」
「わ、私は通りすがりの天才美少女作家、レノラスよ！　断じてスラなんとかではないわ！」
ばさっ、とコートを翻しながら言うスラなんとか、もといレノラス。
何処かで見たことがありすぎる見た目と声、そして気配に半目になってしまう。
こちらの動きが止まったことで微妙に緊張しているらしいスラ――じゃなくてレノラスに、レオンハルトは何気なく話しかけた。
「……レノラス」
「な、何かね？　この私に質問とは、あまり感心しないぞっ！」
何キャラだよ、というツッコミをかろうじて呑み込み、
「……お前には関係ないんだが、ついさっきここに来る前に小腹が空いて、ここの主が好きなチーズケーキを全部食べちまったんだが――」
「えっ、嘘!?　後でおやつに食べようと楽しみにしてたのに！　レオンハルトの馬鹿!!」
「……」
「――あっ。い、いや、そういうことをしてはい、いけないよ、うん……

君の主が悲しんでしまうからね？　本当に食べてしまったのなら……直ちに新しいケーキを買って主に詫びるといい。その際にはちゃんと誠意をもって、主の要求に何でも応え――」

……仮面剥ぎ取るか、目の前でこいつのお菓子食べてやろうか。そしたらどんな反応するんだろうな……。

というかつまみ出していいだろうか。目的が解らないし、なんかイラッとくる。

下手くそな変装と演技にそんなことを考えながら、レオンハルトは大きく息を吐き、

「……それで、握手すればいいのか？」

「えっ。あ、ああ、そうね……そうだった」

本当に何しに来たのか、というかそのレノラスはどういう設定なんだ。ここ魔王城なんだが、女の子モンスターとでも言い張るつもりなのか、などと面倒さを感じながら、

「ん」

「ん……」

彼女の手を取った。握手くらい、いつでも出来るだろうにな、と思いつつ握手を終えると、

「ど、どうも」

「……ああ」

と、頭を軽く下げ、こちらから離れていった。

……本当に何しに来たんだ……。

意味不明なスラルの――ではなく、レノラスの行動に不可解を感じていると、今度は、

「――レオンハルト」

「あ？　……って、今度はお前かよ」

次の順番に現れた相手は、ケッセルリンクだった。

先程、意味不明な変装でやって来た彼女と違い、ケッセルリンクはいつも通りの恰好で来ていた。なので周囲は微妙に緊張している。レオンハルトは胡乱な視線を彼女に浴びせた。

「……何しに来たんだ？」

「む？」
　ケッセルリンクが首を傾げる。何を言っているのか解らない、といった感じなので、再度、疑問を正確に口にしようとする。自分で言うのもこそばゆいが、
「ここは俺のファンのイベントらしいが、お前まで俺と握手しに来たのか？」
「……ああ、なるほど」
　ケッセルリンクがこちらの質問の中身を正確に読み取ったのか、頷く動きを見せる。
　しかし、彼女は微笑を浮かべると、
「何、聞けばファンというのは、その対象を好ましく思っているものなのだろう？」
「……ま、そうだな」
　ならば、と。
「私は君のファンで相違ない。何故なら私は、レオンハルトを愛しているのだからね」
「っ――」
　堂々とこっ恥ずかしいことを言うケッセルリンクを、思わず目を細めてしまう。軽く睨んでしまうような形になっただろうか。
　……やり難いな。
　素直というか純粋というか、真っ直ぐな言葉を突きつけられると、どうにもやり難い。嫌な気持ちになる訳ではないが、妙に気恥ずかしいのだ。
　おまけにケッセルリンクは美人で気品がある所為か、それが妙に様になっているから困る。それを聞いていた近くの女の子モンスターが恥ずかしがるくらいには似合っているのだ。
　なので、
「……ほら、さっさと握手していけ」
「うむ、そうだな」
　もうさっさと進めてしまった方がこの空気は和らぐだろう、と自然に手を差し出す。

そうして差し出した手を、ケッセルリンクが握り、数秒の握手を終える。すると、
「うむ、やはり君の手はいいな」
「……ああ」
面と向かって言われても困る。肯定も否定も出来ない曖昧な返事をすると、ケッセルリンクはこちらに笑いかけてから去っていった。
……まったく。
面倒な奴らだ、と息を入れる。今の二人だけじゃない。ここに集まった全員のことだ。
容姿が悪くないことは自覚しているが、そこまで人気になるほどかと聞かれれば自分では首を傾げざるを得ない。そもそも人間時代は――半分以上は自分の所為とはいえ、ろくにモテなかった男だ。言い寄ってくる女は腐る程いたが、その瞳には己ではなく、目先の欲望が映っていたものだ。
しかし、今は違う。今、ここに集まってる連中は、どいつもこいつも程度の差はあれど、その瞳に己を映しており、
……しょうがない奴らだな……。
好意を向けてくる者達を想い苦笑する。
彼女達が自分に向けてくる想いと、同じ様な想いを彼女達に感じながら、
「……俺も、随分とちょろくなったな」
と、彼女達の想いを受け入れつつ、レオンハルトは再び継続して、握手会に臨んだ。
「……でも、そろそろ終わりか……？」
列も大分捌けてきた。もうこれを終えた後は、運営をしている子達にサービスでもすればいいだろう。
そう考え、レオンハルトは次にやって来た者に目を向けて、
「――あ？」
「……」
その巨体に唖然とした。
そこにいたのは、身長3メートル程の魔物だ。

中心に身体の大部分を占める巨大な球体を持ち、その中に人間の顔の様なものが浮かんでいる。背中には幾つかの触腕ともいえる部位が伸びており、身体の上部は頭部ごと銀の鎧のようなものに覆われ、魔物らしい青の腕と足が生えている。
容姿が、魔物将軍に酷似したその魔物は、レオンハルトを見ると、
「――レオンハルト様……」
膝を付き、見上げ仰ぐ様に、
「私は……恥ずかしながら、進化して舞い戻りましたぞ……！」
「……」
レオンハルトが無言で眼の前の魔物を見る。そして、顎に手を当て、額に手を当て、眉間を揉みほぐすと、ややあってから、
「――誰だお前？」
「……」
「あ、知り合いじゃありませんのね」
魔物が無言となった。見覚えのない巨大な魔物に、キャロルまでも首を傾げる。
そんな中、腕を広げて魔物は叫んだ。
「わ、私です！　魔物将軍――リーですよ!!」
「リー……って、あ？　リー将軍か？」
「あの宿敵の仲間ですの!?」
言われた言葉にほっと息を付く魔物。キャロルに警戒されているのを気にしつつも、
「宿敵といわれると複雑ですが……その通りです。レオンハルト様麾下の魔物将軍、リーです」
こんな姿では解らないのも無理ありませんか、と笑う魔物は、どうやら長らく側近として働いていたリー将軍らしい。
だが、
「お前……随分とデカくなったな……というかどうなったんだ？」
「勝手にイメチェンするなですわ！」
「イメチェンしたくてした訳ではないのですが……」
相変わらず辛辣なキャロルにも慣れているのか、落ち着いて対応し

ているところから、間違いないように思える。そして軽く息を吐きながら、リー将軍は説明した。
「実は今日が、私の寿命の様でして……先程部屋の中でそれを迎えそうになったのですが――」
「……なったのですが？」
はい、と頷き、
「意識が無くなる瞬間、私の身体が急激に発光し……気づいた時にはこの姿となっていました」
「……なるほど、意味が解らないな……」
何一つ解らない不思議現象に眉間に皺が寄るが、キャロルはそれよりも気になるというか憤慨しているのか、
「よく解りませんが、強くなってるっぽいのがズルいですわー！」
「そっちかよ……だが、確かに力は感じるな」
感じる限り、魔物将軍であった頃よりも格段に力が増している様に思える。それこそ、使徒を越え、魔人に迫る程だ。その自覚はあるのか、リー将軍も拳を握り、
「ええ、確かに力は漲っています。何と言いますか――」
と、言葉に迷った時だ。
不意に横から、声が飛んできた。
「多分それは……進化ね」
声の先に全員で振り向くと、そこには先程の怪しい少女が立っていた。
その手に大量の袋を抱えた彼女を見て、キャロルが、
「スラル様！　進化とはどういう事ですの!?」
「きゃ、キャロル君？　わ、私はスラルではなく、レノラスだ。間違えないでくれるかな？」
「分かりましたスラル様！　これからはレノラス様と呼びますの！」
「……ともかく」
……あ、今諦めたなこいつ。
レオンハルトが内心でスラルの心情を察すると、彼女はそのまま説明を続けた。

「魔物にたまに起こる進化現象だと思うわ。数例だけど、魔物隊長から魔物将軍に進化する現象が確認されてるし……本来、魔物将軍は単独の種族で、魔物隊長以下は特殊なスーツを着てるだけの別種だから昇進はあり得ない筈なんだけどね」
「……なら魔王様。私は――」
「だからレノラスだってば!!」
「……レノラス様。私はどうなったのでしょう？」
もう諦めたらいいのに。どうせ全員にバレてるしな、と半目になる。
スラルはそこでごほん、と気を取り直した様に咳払いすると、
「魔物将軍からの進化だから……さしずめ、魔物大将軍とか？　新種だからそんな感じでいいかと思われるわ」
「魔物大将軍……」
リー将軍が自分の身体を見てその単語を反復する。どうやらまだ信じきれてないようだ。
だから、という訳ではないが、彼に向かって、
「ま、いいんじゃねぇか？　この分だと能力も向上して強くなったんだろ？」
「レオンハルト様……しかし、私などが魔物大将軍になっても良いのでしょうか？」
疑問するリー将軍に、
「なっても良いとか通り越してもうなってんだろ。だったらその力があるってことだ。適当にその地位を設けるから、今まで以上に頑張れ」
何せ、
「俺も魔人筆頭になったし、俺の側近としちゃあ文句はない。――期待してるぜ、魔物大将軍？」
「――！　は、はい!!」
リー大将軍が良い返事をするのを見て、レオンハルトは口元に笑みを零した。彼の大きくなった背中を軽く叩き、
「それじゃ昇進祝いに、イベントが終わったら食事でも取るか？　今

後の指揮系統とか仕事の分担についての相談でもしながらよ」
「是非お願いします!!」
身体は大きくなっても、性格は変わっていないらしい。こちらに向かって頭を下げる大将軍を見つつ、仕切り直すように、レオンハルトは声を上げた。
「それじゃ、続きを――」
「あ、レオンハルト様」
と、大将軍が声を掛けてきた。先程よりも軽い様子で、
「私も、握手宜しいですか？」
「……お前もファンだったのか？」
「当然ですとも」
「……はぁ、しょうがねぇな。ほらよ」
感謝します、と巨大な魔物の手を握る、というより握られながら、レオンハルトは呆れるようにリーを見た。
……魔物将軍の頃から妙に忠誠心の高い奴だったが……。
ファンクラブに入っているとは思ってもいなかった。そんなことを考えながら握手を終えると、
「――むぅー！　偉くなったからって調子に乗ったら駄目ですのよ！」
「……え、いや、別に調子に乗ってなど――」
「レオンハルト様の一番の側近はわたくしですからね！　付き合いが少し長いからと言って、調子に乗るのは駄目ですわ！」
「い、痛っ――って、そんなに痛くないな……って、だからって銃を抜くのはやめてください！　キャロル様！」
「問答無用ですわー!!」
「原因はそれか……」
キャロルが大将軍となったリーに蹴りを入れるのを見ながら、彼女が何かと将軍を目の敵にする理由を知り息を吐く。
……確かにこいつが俺のところに来て、大分経つからな。
確かキャロルよりも長い付き合いの筈だ。それでキャロルはやたらと突っかかるのだろう。

どちらも大切な部下であることには変わりないけどな、と内心で言葉を作り、レオンハルトは再びファンとの握手に応じた。

そして、一方。

「ふ、ふぅ……何とかバレずにすんだわね。グッズ貰ってるところ見られるの恥ずかしいし、変装しといて良かったわ……！」

「……明らかにバレていたかと」

ケッセルリンクの小声の指摘に気づかず、通りすがりの天才美少女作家、聖天美少女王レノラスは、レオンハルトグッズが大量に入った袋を握りしめ、ほくほくと満足そうな顔で城に帰っていった。

奈落の王

天に最も遠き場所。
この世の深淵、地下深くまで続くその地。巨大な穴。
光すら届かぬ、暗く遠いその闇の底に、足を踏み入れた者達がいた。
『はるか昔、この世界には3つの弓があった。～Ｈａｒｕｋａ　ｍｕｋａｓｈｉ・Ｋｏｎｏｓｅｋａｉｎｉｈａ　ｍｉｔｔｕｎｏｙｕｍｉｇａａｔｔａ～』
「……あ？」
「え、何？」
魔王スラルと、魔人レオンハルト。
彼らの仲間である魔人と使徒を含めた大所帯だ。
突然聞こえてきた謎の語りに皆が何となく足を止めて周囲を見渡す。
その間も、語りは続く。
『神が作りし聖弓ヤンクー。～Ｋａｍｉｇａ　ｔｓｕｋｕｒｉｓｈｉ　Ｓｅｉｋｙｕｕ　Ｙａｎｋｕ―～』
「おお、何か語り始めたな」
「ふむ、音を反響させているようだが……」
ガルティアとケッセルリンクが反応する。
だが、
『悪魔が作りし魔弓ギノード。～Ａｋｕｍａｇａ　ｔｓｕｋｕｒｉｓｈｉ　Ｍａｋｙｕｕ　Ｇｉｎｏ―ｄｏ～』
「……とりあえず聞いてみるか」
「聞くんだ……」
「こんなこともあろうかとお菓子を用意してありますの！　さあ、皆様どうぞ！」
『精霊の王が作りし神弓カリス。～Ｓｅｉｒｅｉｎｏｏｕｇａ　ｔｓｕｋｕｒｉｓｈｉ　Ｓｈｉｎｋｙｕｕ　Ｋａｒｉｓｕ～』
レオンハルトの言葉にキャロルが動いた。皆に何処からか取り出したサクサクするお菓子を手渡すと、皆が聞く体勢を取る。ハンティ

が微妙に嫌そうにしているものの、結局、彼女もお菓子を手にとった。
　その間も、謎の語りは続いており、
『これらは神話戦争の折、切り札の兵器として使用されることは無かったが、魔弓ギノードだけが別であった』
「ああ、そういう系統の話か。痛々しい単語ばっか出てくる系の」
「どんな話になるのかな……」
「……主、楽しんでませんか？」
「スラルはああいうの好きだからなあ……俺らの獣の王とか夜の王とかの呼び名も、気に入ってよく本に書いてるらしいぜ」
　期待出来ないといったように眉をひそめるレオンハルトとは対照的に、何やらうずうずとし始めたスラルに、周囲が半目になる。
『戦争が膠着した際、1匹の悪魔が、とある神、フィアーに向けてその弓の力を解き放つ』
「……何か長そうだし、眠くなりそうだね」
「ハンティさん！　最初の数行で読むのをやめてしまうのは駄目ですのよ！　どんな本も導入部分は我慢しろ、とか、三巻辺りから面白くなるから、とか、酷い時は、このシリーズは十巻以降が本番、とか擁護されるのをよく見ますの！　まぁ、そういうのに限って大したことなかったりしますけど！」
「フォローになってねえな」
「キャロルによく本を読ませるんだが、こいつの感想は色々とストレートでな……よく作家に手紙を送っては、相手を凹ませてるらしい」
「……あれ、結構落ち込むのよね……」
　何故かスラルが顔を俯かせる。
　一行は雑談しつつ、時折菓子を摘みながら、その語りを話半分に聞き続ける。
『弓に貫かれたフィアーはその姿を醜く変貌させ、広がり、巨大化し、感覚を失い、自律する力を失う』
「……急に死んだ？」
「導入で衝撃的な展開を起こすのは悪くないけどな」

「へえ、そういうもんか……お、このカラカラ焼き。ちょっと甘辛風だな。この甘じょっぱさはクセになる」
「こういうお菓子はあまり口にしないが……ふむ、悪くないものだな」
　カリカリしたお菓子をガルティアが批評し、ケッセルリンクもそれに舌鼓を打つ。
『そのなれの果てが、現在の〝奈落〟という空間であると言われている』
「超展開ですわ」
「それを最初に説明しちまったら謎も何もないな。それとも、本筋には絡まないのか？」
「魔弓ギノードには闇の力があるのね……神を自壊させるほどの狂気の力が……！」
「……きっとお前も、その弓に貫かれたんだな……」
「レオンハルト……さすがに厳しくないかね？」
　レオンハルトのスラルへの辛辣な言葉に、ケッセルリンクが軽く注意する。
　もっとも、スラルは気づいていない様だったが、
『奈落』
　語りは続く。
『――この世のどこかにあるとされる世界』
「いや、ここだろ」
　というスラルを除いた皆のツッコミが、言い方は違えど合わさった瞬間であった。
『世界の闇を一手に引き受ける別の世界』
「……どう見ても別の世界じゃないけどね。割とすぐに着いたし」
『この世から苦しみが消えることはないとされている、その原因がある』
「カリッ、ん……こっちのカキピーもいけるな。カキの微かなピリ辛具合と、ピーの塩辛さが絶妙にマッチしてる」
「あっ、おい。カキだけ俺に寄越せ。ピーはいらねぇからな」
「レオンハルト様はカキだけ食べる派ですものね。……はい、どうぞ

ですわ」
　キャロルからカキピーのカキだけを貰うレオンハルト。
『その原因とは、奈落に発生する破壊の闇』
「……ふむ、そうなると、ここは破壊の空間ということになるな」
『奈落そのものとなった神、フィアーが世界への憎しみとして放つ闇』
「それどころか神の体内ってことになるね。……あ、そっちのクッキーちょうだい」
「どうぞ、始祖様」
　ありがと、とケッセルリンクに軽くお礼を言うハンティ。
『その破壊の闇は奈落に生まれ、奈落にて世界を呪いながら生きる』
「しかし……こう甘じょっぱいものばっか食べてると飲み物が欲しくなるな。――キャロル」
「はいですの！　各種飲み物は揃えていますので、お好きなものをお取り下さいませ！」
「完璧だ、キャロル」
　レオンハルトがキャロルを褒め称える中、皆に飲み物が配られた。
完全に無視である。
『その為に世界からは苦痛が消えない』
「まあ、世界を脅かしてるのって、俺達魔軍とか魔人だよな」
「微妙に笑えない魔人ジョークはやめろ。気分が盛り下がる」
　ガルティアの何気ない発言に、レオンハルトが嫌そうに顔を顰めさせた。本当の事でも改めて言われると何とも言えない気分にさせられる。
『それらは蠢き、命を食らい、生を貪る』
「……何が言いたいのか分かんなくなってきたね」
『破壊の闇は常に流動し、奈落を巡る』
「安心しろ、ハンティ。最初からそうだしな」
『その全てを支配する王がいた』
「……お。でも、何か動きがありそうだぜ？」
「ん？」
　ガルティアが示す先に皆が注目する。

距離の離れた台座の様な場所に、何かが昇ってきた。
『奈落の王』
語りとともに、大柄な魔物が姿を現す。
『その姿を一目見て、生き延びた者はいない』
スラルは言った。
「結構良い語りね」
「えっ」
皆が一様に声を上げる中、しかし、気を取り直した様にレオンハルトは遠くに見える魔物を視界に捉えた。
そこにいたのは、蝙蝠の様な頭部をもち、金の鎧を身に着けた二足歩行の魔物。ドラゴンナイトに酷似したその魔物を見て、レオンハルトは目を細めると、
『――奈落の王が、禍々しいオーラを発している』
「何か思ったより弱そうなのが出てきたな……」
はぁ、と息を吐いて再びお菓子に手を伸ばし始めた。
その様子をみて、ガルティアが珍しいものを見るような表情で、
『我、奈落の王』
「何だ、やらないのか？」
「唆らねぇな。奈落の王って聞いて期待してたんだが……ま、今回はパスだ」
左手をひらひらとさせて右手で摘んだお菓子を齧るレオンハルト。
そして周囲の者が誰も動こうとしないまま、お菓子の時間は続く。
背景では先程から魔物が声を上げており、
『我に敵うものナシ。我を殺すものナシ』
「何か言っていますがどうしますの、レオンハルト様？」
「襲いかかってきたら迎撃だな。それまでは放置でいいだろ、スラルも聞き入ってるしな。……つーわけでまだしばらくゆっくりしてるか」
「畏まりましたわー！」
『……我、奈落の王』
微妙に感情が現れ始めた語りを背景に、魔人の一行はお菓子を貪り

続ける。
　そんな中、
『……世界を破滅へと導くもの也！』
「……そういえば気になってたんだけど」
「あ？　どうした？」
　ハンティが疑問をもった表情でレオンハルトを見る。その視線は、彼の背中に向けられており、
『破壊の闇の力。全てを滅す。全てを無へ。全てを混沌へ――』
「いつもの剣が無いじゃん。確か、オル＝フェイルだっけ？」
「ああ、なるほど。お前はそういえば知らなかったか――」
　と、その疑問に納得の表情を浮かべたレオンハルトが、徐ろに右手に動きを入れた。
　それは宙に手を伸ばすかのような、動きで、
「――剣ならここだ」
「！」
　ハンティが目を見開く。
　それはレオンハルトの右手が、空間から何かを引き抜くような動きを見せたことで生じたものだ。
　重低音を軽く響かせながら、全体を引き抜き、レオンハルトが掲げたのは、彼が持つ魔剣、オル＝フェイルだった。その結果に、ハンティは目を細め、
「……いつの間にそんな事を」
「いや、何か魔法を覚えてしばらくしてからか、妙にこいつの活きが良くてな。鋭さが増した気がしたんだ」
「……それで？」
　ああ、とレオンハルトは頷き、
「……朝起きたら出来るようになってた。さすがに呆気に取られたんで、スラルに見せに行ったんだが――」
　言うと、スラルが説明を引き継ぐように声を出した。
　その瞳は、未だ奈落の王を名乗る魔物に向けられているものの、
「前から魔剣という割に特殊な力がないことが気になってたんだけ

ど、改めて調べてみたら、どうにも持ち主との相性や、実力に合わせて力が増していくみたい。それで色々と出来るようになったらしいんだけど、その内の一つが、剣を空間に収納――というより、空間を鞘として持ち運び出来るようにしたって感じね……！」
『我、憤怒。我、教え。我、世界。我、混沌』
「ま、こんな感じでな」
「……なるほどね」
レオンハルトが掲げて握る魔剣が、力を込めることで一瞬でかき消えたり、再出現したりと不可思議な現象を起こす。
その瞬間が見たいのか、スラルも剣が引き抜かれる瞬間だけは、視線をレオンハルトに移す。どうにもその空間から剣を引き抜く、という行為に、心擽られるのであろう。
それを気にしてもいないようにレオンハルトが、息を入れ、
「……ま、座る時や壁を背もたれにする時に気を遣わなくて済むから楽だけどな。もう慣れたが、気がついたら斬れてるなんてザラにあったもんだ」
「ふぅん……他には何かあるの？」
『絶望が故に破壊、歴史が故に煩悩、我、全てを無に帰す』
「ああ、あるぞ。といってもこれの延長線上みたいで、大したことじゃねぇが――」
「！」
レオンハルトが言うと、再び動きを入れた。
それは、軽く、そして適当に魔剣を放り投げる動作で、
「こうやって投げた後に――」
と、魔剣はそれなりの速度を保って空間の奥、台座の方に飛んでいった。
それは、奈落の王を名乗る魔物へと一直線に向かい、
『不義に鉄槌――』
「……あ」
誰かが声を上げた。
その場に死の匂いが充満する。

『――ッ!?』
魔剣が、奈落の王の身体をあっさりと貫く。
奈落の王が倒れ、魔剣がそのまま奥に飛んでいくかと思われた矢先、
「っと」
レオンハルトは魔剣をその手に持っていた。
そして引き起こした結果に、微妙な表情を浮かべつつ、
「……こんな感じで、勝手に手元に戻ってくる」
「……さすがにドン引きなんだけど。いや、剣の方じゃなくて」
同じく微妙な表情を浮かべるハンティ。他の者達も一様に、うわぁ……、と声を上げており、
『安らかな生に苦痛を……!』
「なんかさっきより感情が籠もってるな」
『苦しみの果てに混沌を……!』
「……思うに、あまりにも唐突過ぎたので戸惑っているのではないか？」
ガルティアとケッセルリンクの両名が冷静に分析する中、スラルがレオンハルトの服を掴んで揺さぶり、
「ちょ、ちょっと！　何いきなり殺してるのよ！　色々聞いた後に引き入れようと思ってたのにっ！」
「い、いやぁ……悪い。何か適当に投げたらマジで当たっちまって……」
顔を背けながらバツが悪そうに乾いた笑いを漏らすレオンハルト。
そう、元々ここに来たのは、スラルが奈落という場所の調査をしに行きたいといったからだ。
どうにもここには奈落の王と呼ばれる強大な存在がいるらしく、未知の場所であるため護衛も兼ねて付いてきた。彼女の目的の一つには、奈落の王も含まれていたのである。
その際に、いつもの面子も付いて来ることになったのだが、
『……奈落の王』
幾分か、テンションが下がった様に語りを続ける。

『……世界を』
明らかにやる気がない。
『……滅ぼすー』
抑揚も適当になってきた。
『ものー』
棒読みである。
『也』
言う。
『苦痛があらんことを』
最期だけほんの少しやる気を取り戻し、奈落の王は倒れた。
身体から血を流し、倒れる魔物を見て、レオンハルトは小声で言った。
「……よ、よし、調査を再開するか……」
「……」
微妙な空気がその場を支配する。レオンハルト至上主義のキャロルも、空気を読んで声を上げず、動作だけで何やらジェスチャーを送っている。
そんな中、不意にガルティアが、
「……まあ、一応、そこにいる奴らにも聞いてみるか？」
と、示す先、物陰から何かが飛び出してきた。
「あいやーっ！」
「奈落にその住人の非切な叫びが響き渡る」
それは、
「……ハニー、か」
レオンハルトがその正体を呟く。
ハニー。
その名の通り、埴輪状の不思議な生物だ。
その正体は未だ不明で、第二世代モンスターとも、亜人種とも噂されているそれは、分類的には一応、魔物と区別されていた。
しかし魔物の中では珍しく、独自の生態を持ち、人類や多種族との共存関係を持つ種族である。その多くのハニー達が人間の町でも生

活し、受け入れられているのだ。
一方で野良で生活し、人間を襲うハニーや、魔軍に所属し、普段は魔物兵として働くハニーもいる。人間の共通通貨である〝ＧＯＬＤ〟を製造しているのもハニーであり、その種類も多種多様。
かなり謎の多い生命体である彼らは、賑やかで活気のある種族である。今の様に、
「どうしよ、初めての開演だったのにーっ！」
「狼狽が奈落の闇を掻き回し、新たな災いの糧を探す」
「……ふむ、どうやらハニー達が声を出していたようだな」
ハニーの手に握られたマイクを見て、ケッセルリンクが言う。
ハニーは気ままで、軽いおふざけやごっこ遊びが好きな種族なのである。
故に納得は出来るものの、
「影武者がやられたけど、どうしよーっ！」
「……影武者？」
その単語にハンティが目を細める。
同じ様に他の者達もその会話に耳を傾けようと、彼らに注目する。
すると、ハニー達は後退りし、
「こういう時は、王様に任せなきゃーっ！　王様ーっ！」
「愚かなる魔の者達よ、真の奈落の王を見るがいい……！」
一体の語り口調のハニーが言う。彼らは奥の通路に逃げ込みながら、
「真の恐怖を、今ここに教えてやろう。～Ｓｈｉｎｎｏｋｙｏｕｈｕｗｏ　ｉｍａｋｏｋｏｎｉ　ｏｓｈｉｅｔｅｙａｒｏｕ～」
「真の奈落の王ですの？　後、さっきから二回言うの鬱陶しいですわ」
「……それはともかく。そんな存在がどこに――」
ハニーが一目散に逃げていった先。そちらに視線を向けていたハンティは、そこで言葉を止めた。
止めざるを得なかった。
「……」
その存在は、通路の奥からゆったりとした動きで現れた。

禍々しいオーラを放って現れたその存在に、皆が目を見開く。
「……へぇ？」
レオンハルトの口端が吊り上がる。先程の魔物と違い、関心を寄せるその存在は、
「あれは、ハニーの……」
姿を現した真の奈落の王。その容姿に近く、元となった種族をケッセルリンクが言う。
そして、その正体は、
「――ハニーの、魔人か……？」

そこにいた魔人は、奇妙な外見をしていた。
４メートル程の巨体。その全身は赤く、複数のハニーを継ぎ合わせて人形にした筋肉質な肉体。身体の表面には、ぷちハニーと思わしき小さなハニーがくっついており、その右手にはドリルのように螺旋を描いた槍を持っている。
身体の中心、鳩尾辺りには〝マ〟という文字が書かれており、身体に幾つか空いているハニーの目と口の空洞からは篝火のような碧い光が漏れ出している。
顔の部分に当たるハニーは、怒ったような穴の形をしており、凶悪ハニーという種を連想させる。
その名を、ハニーは呼んだ。
「ますぞぇ様ーっ！　後はよろしくお願いしまーすっ！」
「……」
ますぞえと呼ばれた彼の返答は沈黙。肯定も否定もない。
しかしその名を知ることは出来た。
スラルが驚きに声を震わせながら、
「まさか……こんなところに魔人がいるなんて……！」
「スラルも知らないのか、へぇ……ハニーの魔人なんていたんだな」
ガルティアが感心するように顎を撫で擦る。
その動きと同時。

前に一歩進み出たのは、やはり、
「ますぞえ、ねぇ……」
レオンハルトだった。
名前を呼ぶ響きに、喜悦の色が混じる。
それは表情にも表れており、彼はそのまま足を止めず、真っ直ぐとますぞえの元に歩いていく。明らかに剣呑とした雰囲気、その原因を、皆は一様に感じ取り、理解していた。
魔人ますぞえ。
その身体から放たれる存在感は、上級魔人として申し分のない程。
レオンハルトの御眼鏡に適う存在であった。
「クク、ちゃんといるんじゃねぇか、奈落の王」
「……」
ますぞえは何も答えない。
ただじっとしたままである。レオンハルトを見ているかどうかも解らない。
しかし緊迫した雰囲気が周囲に満ちるのを感じ取り、スラルは声を上げた。
「ちょ、ちょっと！　最初は話し合い――」
「分かってる。ただ、やる気みたいだからな。ちょいと遊んでやるだけだ。そう、ちょっとだけな、クク……！」
「絶対分かってないでしょーっ!?」
スラルが叫びが奈落に木霊する中、レオンハルトは笑みとともに、戦意をますぞえにぶつけた。
「ほら、そっちもやる気なんだろ？　話をする気もねえみたいだし――」
言う。左手で手招きし、
「まずはかかってきな。――話はそれからだッ！」
「……！」
ますぞえが禍々しいオーラを放ちながら、レオンハルトに襲いかかった。

真・奈落の王

最初の動きは、左腕からだった。
それはレオンハルトが、最近覚え始めた戦闘手段の一つであり、相手の特性を確認するためのものである。
剣の持ち手である右手ではなく、左手を前に出す。その動きとともに、レオンハルトは行動を声に出した。
「まずは確認だ！　――炎の矢！」
左手の先から、魔法の炎が放たれる。
拳大の炎は、魔法の絶対命中の法則に従い、そうでなくとも真っ直ぐにますぞえに向かって飛んだ。
しかしその結果は、火を見るより明らかであった。
「……！」
ますぞえが前に進む動きの中で、炎の矢を確認した。
それは真っ直ぐに、顔を狙って放たれたものであり、初歩の魔術、そして魔人といえどもあまり食らいたくはないものだ。
だが、
「……！」
炎の矢は、ますぞえの顔に直撃し、しかし、何の衝撃も熱さも感じていない様に、構わず足を動かした。
「……ハッ、やっぱりか……！」
レオンハルトが確認を終えたことで短く笑う。彼が最近覚えたばかりの魔法だが、
――ますぞえに限って、それは通用しない。
正確に言うなら、ますぞえの元種族にとってだ。その名を、レオンハルトは勢いよく口にした。
「ハニーの〝絶対魔法防御〟は健在だな！」
「うわっ……やっぱりあるんだ……まぁ、そりゃそうよね、ハニーだし……」

視界の奥で開始されたレオンハルトとますぞえによる戦闘。その最初に起こった攻防の結果に、スラルは嫌そうに顔をしかめさせた。
と、いうのも、
「――うふふ、ますぞえ様に……いえ、私達ハニーに魔法をぶつけるなんて、無謀ですね」
「……誰？　って――」
スラルは、不意にやってきた声を見て再び微妙な顔になった。
奈落と呼ばれる一角、その物陰から女の様な声が響き、そして三体の影が現れた。
「またハニーか」
「それも女性の……確か、ハニ子だっけ。後ろのは――」
ガルティアが菓子を口に含みながら言うと、ハンティがそれを補足する。
しかし、前に進み出てきたピンク色のハニーは、ハニーの女性種族、ハニ子であることは解っても、背後の二体については知識がない様で、言葉を迷わせる。
その迷いを察知したのか、ハニ子はこちらの前まで来ると、礼をするように身体を反らして挨拶をした。
「ふふ、申し遅れました魔王様。そして魔人の方々。私はハニ子。そして後ろのは――」
「ヒュー、お初にお目にかかります」
「ドロドロー、お初にお目にかかります」
ハニ子が二体を紹介しようとすると、二体はそれに先んじて声を上げた。その姿は、
……ゴーストハニー？
スラルの知識をして、断定出来ない存在。文献でしか見たことがないそのハニーを見る。
こちらから見て右側、宙に浮く赤黒い身体のハニーがそこにいる。
左側には青白い身体のハニー。そのどちらも身体はところどころヒビが入り、また欠けており、その様相は少し不気味だ。
そして額の部分に三角頭巾を巻いた二体のハニーは、こちらに一礼

すると同時の声で、
「私は、ますぞえ様の第一使徒であるブラッドであります！」
「私は、ますぞえ様の第一使徒であるピットでございます！」
「……」
　言った言葉に皆が沈黙。使徒、という言葉に多少の意外はあるも、それよりも彼らがお互いに向き合い、
「こらピット。魔王様を困惑させる気かい？　第一使徒は私だろう？」
「そちらこそ何を言っているのかなブラッド。第一使徒は私だろう？」
「どちらが第一使徒ですの？」
　キャロルが首を傾げて聞く。すると二体の使徒が己を指差し、
「この溢れんばかりのイケメンの私が第一使徒で――」
「この溢れ出すダンディズムの私が第一使徒で――」
　そして相手を指して、
「こっちのブサイクが第二使徒だ」
「こっちのブサメンが第二使徒だ」
　言葉にお互いが顔を見合わせる。そして、
「割れろブラッド！」
「くたばれピット！」
　お互いで殴り合いを始めた。それを見ていたハニ子が、うふ、と笑い、
「この二人はいつもこうなのでお気になさらずに」
「あ、うん……」
　何とも言えない気分で頷く。まさか身体に傷があるのはその喧嘩の所為だろうかと、くだらない説が頭に浮かぶが、それを直ぐに打ち消す。考える時間が無駄だ。
　それよりも、
「貴方達はあのますぞえに仕えている……ってことでいいの？」
　前方で始まった戦いを横目に聞く。すると同じく、身体を半身にして同じ方を向いたハニ子が、

「そのような感じです。――あら、ますぞえ様ったら、あんなにはしゃいで……今日は機嫌が良かったのに……」
「……あのますぞえって喋るの？」
意思疎通が取れていそうなハニ子にそれを尋ねる。どうにも意思が希薄に感じられたからだ。
その質問に、ハニ子は首――というか身体を少し下に反らし、
「全く喋りませんが、私だけは何となく言ってることが分かります。他のハニー達は何も感じ取れないのですが……うふふ、私がいると嬉しそうにするんですよ？」
「そ、そうなんだ……」
やはりハニーにも男女の機微があるのだろう。あまり興味はないが。
それに機嫌が良さそうにも見えない。悪いのかも解らない。どうにも読めない魔人だが、その強さは、
……ハニーって面倒なのよね。魔法効かないし……。
ハニーの魔人。ますぞえの強さは、魔人の中でもかなり上位だろう、とスラルは見立てる。
特に魔法を主軸に戦うものでは、勝ち目は薄いのではないだろうか。ハニーが持つ〝絶対魔法防御〟特性は、あらゆる魔法を、その極端に高い魔法抵抗値で無効化してしまうものだ。
故に魔法使いにとっては天敵である。彼らを倒すには、必然的に物理攻撃に限られるが、
……それが魔人となると、結構厄介よね。
無論、魔王である自分やレオンハルトの様な上級魔人の身体能力があればどうにでもなるだろう。
魔人としての、何かがなければだが――
「あっ、ますぞえ様が攻撃に移りますね」
「！」
ハニ子の言葉の先、そちらでは確かに、魔法が本当に効かないのかの実験を終えたレオンハルトに向かって、ますぞえが力を溜めるように腰を落とした。身を低くし、そして身体を起こした瞬間、ますぞえ

の身体の中の光が増大した。
それはハニーという種における、最も有名かつ十八番ともいえる攻撃。それは、
「ハニーフラッシュ……！」
「うふ、いいえ魔王様。ますぞえフラッシュですわ。効果は一緒で、絶対命中の衝撃を放つものですが、その回数と――」
スラルの声に、ハニ子が訂正した。同時に眼前で、
「威力は、普通のハニーフラッシュとは比べ物になりませんから」
瞬間。
ますぞえのお腹の口から、M字状の光が、衝撃となって射出された。

奈落と呼ばれる地下空間。
人間の魔人、レオンハルトが、ハニーの魔人、ますぞえとの戦闘を行なっている。
そしてM字状の光の衝撃に対して、レオンハルトは反応した。
……！　そういや、ハニーフラッシュは魔法と同じだったな……！
魔法と同じ、絶対命中の攻撃。それだけではなく、ハニーフラッシュはどんなに堅い相手にも、必ずダメージを負わせる技としても有名だ。
しかしそんな技も、魔人にとっては障害にならない。普通のハニーであれば、ダメージは微々たるものだし、大抵はその前に倒せるだろう。
だが目の前に来たそれは、魔人の力によるものだ。当然、威力はその比ではないだろうが、
「――いいぜ！　食らってやるッ!!」
躱せない。そして魔法と違い、弾くことも斬ることも出来ない。
それなら受ける覚悟を決めるのみだ。ダメージは食らうだろう。
だが、と。レオンハルトはそこで剣を振るい、
「そっちにも食らってもらうぜ……！」
「……！」

言って剣を横薙ぎに振るった。
それは斬撃であり、風を斬り、宙を往くものだ。飛来する見えない刃と、光の衝撃が交差する。
瞬間。
「グ……ッ！」
「……！」
お互いは、相手の力によって吹き飛ばされた。

「相変わらず容赦ねえなあ……相手が脆くて真っ二つになったらどうすんだ？」
そのレオンハルトが取った行動を、ガルティアは堅焼きのせんべいを食べながら確認した。
それは単純明快だ。
攻撃を躱せない、食らうと判断した時点で、防御や受け身ではなく、食らいながらの攻撃を選択する。ただ食らって吹き飛ぶよりはマシという判断だろう。
理解はある。ガルティアとて戦士だ。その判断とて行う時は行うだろう。
しかし、未知の攻撃に対し、それを瞬時に選択するのは、
……戦闘狂だからだよなあ。
同じ戦士であるからこそ、その選択の難しさが理解る。その異常さも。
普通、戦いというのは、自分が殺されないように相手を殺すものだ。色々と条件や己の持つ力によって戦い方は変わるだろうが、究極、その条件だけは前提としてある。
故に防御というのは重要だ。躱すことも含めて、相手の攻撃を食らわないことは、遠からず己の勝利に繋がる。
何しろ戦いが長引けば、体力は減っていくし、傷を負えば、痛みで集中は途切れやすくなる。血を流せばさらに削られていき、どんどんと不利になっていくのだ。

こちらの攻撃を通しながら、なおかつ相手の攻撃は通させない。それが基本となる。
しかし、レオンハルトの様な戦闘狂にとって、その判断基準は若干狂う。何故なら、彼にとって戦いや傷とは、
……愉しみそのものと、愉しみを増やす為のスパイス……ってところか。
そのことを思い、ガルティアは笑う。相変わらず変態だなあ、と。
普通、傷を負うことは嫌がるものだ。未知の攻撃であれば、食らってしまうと理解しても、それをどうにか軽減させようと防御を試みたり、受け身を考える。攻撃を受けることを直ぐ様許容し、相手に傷を負わせることを優先するのは、もうそれは変態だろう。合理的な判断だといわれればそれまでだが、その割り切りが、常人には中々どうして難しい。
生き残ることを優先しがちだからな、と理解する。それも正しい判断なのだ。
なにせ常人はそうせねば死ぬ。痛い目にあって敗北する。
だが、レオンハルトの様な戦いのことばかり考えている奴らは、そういった判断をした上で、それを対処し、最終的には、
……生き延びて、勝ちを拾っちまうんだよなあ……。
そこが戦闘狂たる所以だと思う。故に、そうでないものが勝ちを拾うのは苦労させられる。価値観が違うし、戦いに費やす時間が違うからだ。
レオンハルトも、趣味を増やしたり、仕事に没頭したりと、色々と考えているのだが、性根のところで、戦いを愉しむ部分は変わらないのだろう。
……さて、見立てではどう考えてもレオンハルトだが――。
お互いに吹き飛ばされ、再度立ち上がる魔人二人を見て、ガルティアはそれを肴にお菓子を食べる。完全に観戦しちまってるな、と感じながら、
「止めるなら、早めに止めたほうがいいと思うけどな……」
一応、危惧することを呟きながら、戦闘の再開を見た。

吹き飛ばされたレオンハルトは、壁に激突しながらも、直ぐに立ち上がって相手を確認した。
腹の方に、鈍い痛みがある。あの光を喰らった結果だ。それも一発だけじゃなく三発ほど。
連続で撃てるのは反則だよなぁ、と思いつつ、
「それじゃ、こっちもやらせてもらうぜ！」
「……！」
煙が晴れ、胸に多少の傷を作ったますぞえがこちらに駆けてくる。やはりまだ戦えるか、と喜びを感じながら、
「これは耐えられるか？」
剣を振る。その動きは一刀でありながら、二刀。一刀の軌跡でありながら二刀目が同時に振るわれる奇跡の剣撃。
それを両側から重ねるように、レオンハルトは剣を振った。
「……!?」
ますぞえが、驚いたような気配を見せる。表情は動かず、声も出ていないがそんな雰囲気があるのだ。
一刀目は右手の螺旋状の槍で防ぐことに成功するも、二刀目は防げない。故に出来たのは、身体を捩りながら斬撃を浅く済ませようとするのみだが、
「ハハッ、どうした！　逃げるだけかよ!?」
守勢に回るというならこちらも攻めさせてもらう。
連続での剣の振りを、上下左右、様々な角度から撃ち込んだ。
「……！」
「オラオラどうしたッ！　やりかえしてみろよ！」
槍で何とかガードを行うますぞえだが、捌ききれない剣が、身体に傷を負わせる。思うのは、
……こいつの身体、意外と硬いじゃねぇか……！
剣の先から伝わる手応えは、少し鈍く、抵抗感が感じられるものだ。
ハニーの身体であるなら、その肉体は陶器のもので、弾力があって

割れやすいもの。
しかしそれを何倍にも硬くし、弾力を強くした肉体は、やはり魔人というだけはあるものだ。弱点といわれる打撃であっても、これだと苦労するだろう。
だがこちらは剣士。斬撃が主体だ。相性は悪くない。
まぁ、それもどうでもいいことだが、と、レオンハルトは再びの同時斬撃を行おうとした。
「おら、もう一度行くぞ……！」
「……！」
と、こちらが動きを見せた瞬間、相手も動きを見せた。
それは、ハニーフラッシュとは違う、右手を使った別の光のものだった。
すると不意に、
「!?」
身体が重くなり、剣を振る腕が止まった。
……何だ!?
同時斬撃が放てない。いや、放とうとすることが出来ない。
理解不能の何かをされた。そんな認識を覚えた瞬間だ。
「……！」
前から動きが来た。
剣を振るえないこちらの隙を付いて、ますぞえが右手の槍を振り下ろしてきたのだ。

「！　急に動きが止まった……？」
ケッセルリンクは、レオンハルトの動きを見てそう口にした。
前方、攻勢に回っていた筈の彼の動きが、不意に停止したのだ。
しかし、身体そのものは止まっていない。彼の動きは健在だ。
その現象は、まるで、
「何かをしようとして止められた……？」
「うふふ、その通りです」

こちらの言った言葉に、ハニ子の応える声が来た。
ケッセルリンクは、戦闘から目を離さないままに、正面のハニ子に疑問をぶつけた。
「その通りとは？」
「はい、あれはますぞえ様が使う、〝差し押さえ〟という技です。その効果は、相手が使える技や魔法、スキル、行動を一時的に封印するもの」
「……なら、あれは――」
はい、とハニ子が頷いた。
「おそらく、何かをしようとして、その行動を〝差し押さえ〟られたのでしょう。ふふ、流石はますぞえ様です」

……ふざけた事しやがる……！
レオンハルトは、ますぞえの槍の一撃を咄嗟に防御しながら、内心で悪態をついた。
こちらの同時斬撃が放てない。おそらくは何かされたのだろう。直前の光が怪しい。
しかし理解していてもどうすることも出来ない、幸いにも他の行動が取れたことで防御はできたが、
「……っ、面倒な位置に……！」
「……！」
咄嗟の防御の結果を見る。
こちらの魔剣が、相手の螺旋状の槍、その斜めから挟まるように突き抜けている。
それを力で抑えられ、剣を動かすことが出来ない。
だが、それを見たレオンハルトは一瞬で行動の判断を下す。絡め取られた形の剣を、
「ハハッ、そんなんで俺を抑えられると思うんじゃねぇぞ！」
「……!?」
躊躇なく手放した。そのまま跳躍し、ますぞえの顔面目掛けて、

「食らっとけ！」
力を込めた蹴りを、横っ面にお見舞いした。
「……！」
衝撃を受けたますぞえの身体が揺らぐ。そして宙から落下する間に、
「来い！」
螺旋の槍に抑え込まれた筈のオル＝フェイルを手元に戻す。手元を離れて勝手に戻ってくる魔剣の特性を利用した形だ。
……無防備な身体に、一撃刻んでやる……！
故にそのまま、空いた身体に剣を振り下ろしてやろうと、その準備を終えた時。
不意にそれを見た。
「――あ？」
衝撃を受けて、揺らいだますぞえの身体。その上半身から生えている小さなハニーの物体がぼとぼとと剥がれ落ちる。
その物体は全て、爆発物で有名な〝ぷちハニー〟であり、
「……ッ！」
「……！」
火薬の破裂。その轟音が奈落に鳴り響く。
宙で身動き出来ないレオンハルトは、地面に落ちた大量のぷちハニーの爆発に、ますぞえとともに巻き込まれたのだ。

大量のぷちハニーが弾け飛び、轟音とともに周囲が一瞬明るくなる。
レオンハルトとますぞえが、黒煙に飲み込まれたのを見て、スラルが叫んだ。
「レオンハルト……!?」
「た、大量のぷちハニー？」
ハンティが引き攣った顔で疑問の言葉を投げる。
すると、喧嘩から立ち直った二人の使徒、ブラッドとピットが向き

直ってきた。
「ええ、ますぞえ様の身体から生えてくるあれは、全部ぷちハニーであります」
「ええ、ぷちハニーというのは、ますぞえ様の身体からしか生えてきません」
「えぇ……それじゃ、世間に出回るぷちハニーは……」
はい、と頷いた言葉と、それに続く言葉は二体同時のものだった。
「――私達が世間に卸しています」
「あんたらの仕業か!?」
「いやはや……ますぞえ様の身体から生えてくるものもぎもぎして売るだけで、結構な収入でしてね？　金のなる木を手にした気分ですよ、ははは っ」
「恐縮です……最初は出来心だったのですが、結構需要もあってお金になるので定期的に売ってしまおうかと。さすがはますぞえ様です。これからもついていきます……！」
「あんたらそれでも使徒かっ!?」
言わざるを得ない。おおよそ使徒らしからぬ行動を許されてるハンティであっても、主の身体から生えたものを売って収入を得るのはどうかと思う。
というか、ぷちハニーが魔人の身体から生まれたものというのは、あまりにも衝撃の事実だ。頭が痛くなる。
そんな中、キャロルが前に出て、
「ということは、わたくしがいつも贔屓にしてる取引先の元締めですのね！　いつもお世話になってますの！　キャロルですわ！」
「おや、キャロル様でしたか。いつもご贔屓にしていただきありがとうございます。こうして出会えたのも何かの縁。割引クーポンを差し上げます」
「ぷちハニー１０個お買い上げ頂くごとに、一割の値下げとおまけに２個程付いてきます。大口取引先様限定のサービスですので、これからも何卒」
「超お得ですわ！　この場で使いますの！　とりあえず３０個程！」

「では、今から収穫してきますので、少々お待ちを……」
「この場で買うなあ――!!」
「始祖様、少し落ち着いて……」
平然と取引を始めた三体の使徒を、息を切らしながらも何とかとっちめる。残念そうに肩を落とすキャロルや、舌打ちする埴輪使徒が煩わしい。
そんな中、ガルティアが軽い調子で言った。
「つうかレオンハルト、大丈夫なのか？」
と、同時。
煙が晴れ、そこには、
「――ク、ククク……」
黒ずみながらも、赤い瞳を爛々に輝かせ、笑みを深くするレオンハルトがいた。
その変容に、思い当たる一行は、あ、と声を上げ、
……まったく。
よくそれを目にする機会のあるハンティは、頭を掻きながら、
「あ、あー……あれ、完全に入ったね。早く止めた方がいいと思うけど……」
「……レオンハルト！」
その視線を受けたスラルが、彼に向かって叫んだ。

「ハハッ――」
魔人レオンハルトは、大量のぷちハニーの衝撃を受けながらも、その場にしっかりと立っていた。
感じるのは喜悦。湧き上がる衝動。身体がぞくぞくと震える。
左手で前髪を掻き上げながら、
「なるほどな……大した能力だ。引き出しの多さも面白れぇ……！」
思う言葉は口に出る。
相手の能力は多彩。ハニー特有の絶対魔法防御。回避不能、絶対に

攻撃が通るハニーフラッシュ。身体から生えてくる大量のぷちハニーは、迂闊に攻撃出来ない厄介さがある。
「身体能力も良い……身体は硬ぇし、パワーは予想以上だ。それでいて鈍くねぇし、技術だってある……」
手加減していたとはいえ、容易に剣を通さない肉体はよく出来ている。力はこちらに拮抗する程。
加えてあの螺旋の槍も中々に面白い。
「お前になら……試してもいいかもな……？」
右手に持った魔剣オル＝フェイルを強く握り、疑問を飛ばす。
実力は上級魔人として申し分ない。故に、
「なあ、オル＝フェイル……？」
自らの持つ魔剣に力を込め、語り掛ける。当然、返答はない。
しかし、何となくだが、剣も応えてくれる気がした。
その力を引き出す為にも、
「ハハ、なら――」
レオンハルトは構えを取り、本気を出す。
身体から上級魔人としての闘気と、達人としての剣気が混ざりあった赤黒いオーラが迸る。
それを全て、眼前の魔人――戦闘態勢に入ったますぞえにぶつけるように、
「ここからは本気だ……クク、精々愉しませてくれよなぁッ!!」
「……！」
と、剣を振り上げた。
叫ぶのは、心に浮かんだ、力の言葉だ。
その予兆を感じ取り、魔剣の刀身が煌めき、
「――」
言葉を口にしようとした、その時。
背後から、力を持った大声が飛んだ。
「こらあ――！　いい加減、戦いをやめなさいっ!!」
「ッ!?　スラ――っ！」
「！」

声を上げることは出来なかった。
その前に、身体に強制的な力が加わったからだ。スラルの言葉を聞いた途端、それが来た。その正体を、レオンハルトは、当然の如く知っている。
……絶対命令権か……！
魔王が持つ、魔人への強権。命令を強制的に従わせるその力を使われたのだ。
それを使われるのは二回目だが、この感覚は憶えている。
同時に、熱くなっていた頭が、だんたんと冷静になってきたところで、
「……レオンハルトー？」
「っ!? あ、す、スラル……！」
眼の前に、スラルが立っていた。笑顔を浮かべている。
しかし、その全身からは、怒気が立ち昇っており、
「ねぇ、レオンハルト……？」
「あ、ああ……な、何だ……？」
声が思わず震えた。
それはスラルの怒りと、その怒りの原因を頭で飲み込めてきたからだ。冷静な頭が、先程までの自分の行動を客観視して、何をしようとしていたかを理解する。
そして、理解したからこそ、レオンハルトは声を上げた。
「い、いや、その……ちゃんと手加減するつもりで――」
「――正座」
「あ、いや……だから――」
「正座!!」
「は、はっ!!」
「……」
スラルの一喝に、膝を叩きつける勢いで正座の体勢を取る。
絶対命令権なのだろうか、隣では、ついさっきまで戦っていたますぞえまでも同じ様に正座していた。
それを目にしたスラルは、腕を組んで、こちらを見下すと、

「……レオンハルト。レオンハルトは何でいつも――」
と、説教を始めた。
……ああ、これ、長くなるな……。
自分が問題を起こした時の、いつものパターンとなったことで、レオンハルトはようやく、自分のしでかしたことを反省するのだった。

魔人ますぞえ

魔人ますぞえはその光景を見ていた。
視界の中に、先程まで戦っていた魔人が正座の状態で魔王に怒られている。その様相はますぞえにとっても恐ろしいもので、同じ様に縮こまって難から逃れようとする。
周囲ではその魔人、レオンハルトが怒られているのを茶化す他の魔人や使徒もおり、それにこちらの使徒達も加わっている。ハニ子も一緒だ。
「……」
しかしそれを見ても、ますぞえは思考を動かさない。
それはますぞえが魔人になってからずっと変わらないもの。何故そうなったのかは、正確なところ解らない。
だが、確かに原因はある。
かつてのことだ。
ますぞえはある日突然、魔人となった。
原因はもはや憶えてないし、思い出すこともない。彼が認識しており、唯一重要な事柄は、己が魔人になったという事実だけだ。
魔人となってからの日々も殆ど憶えていない。思い出すこともしない。
ただ気がつけば、この奈落という何もない空間に己は存在し、そしてハニーであった頃とは比べ物にならない強大な力を己は持っていた。
そしてその強大な魔人の力が原因で、他の多くのハニーから孤立した。
それを寂しく思ったかどうかは解らない。だが気がつけば、何かの気まぐれでよくわからない使徒を作り、馴染みのハニ子が出来た。
しかしそれでも、己は何かを考える必要はなかった。
強大な力を持つ自分は、何かを考えたり、その力を振るうことはしなくても良い。殆どのものは、自分を見た途端、戦う前に逃げていくし、戦ったとしてもそれは一瞬で終わるものだ。考える必要はない。

故に、ますぞえは思う。己が生きる理由はない、と。
この奈落という空間の中で、ただじっとしているだけで良い。
だって、何もせずとも生きていられるのだから。何かをする理由はないし、しても何も意味はないのだから。
だが、
「――レオンハルト。貴方は魔人筆頭なのよ？　その魔人筆頭が、出会ったばかりの魔人を、問答無用でボコボコにしようとするなんて何考えてるの？　可哀想とか思わないの？」
「……そ、それは……こいつも戦う気みたいだったし、話をする気もないみたいだったから――」
「今はおとなしいじゃない。レオンハルトが怖がらせるから襲ってきたんじゃないの？」
「……おとなしいのは多分、お前を怖がって――」
「――何か言った……？」
「何も言ってないですっ！」
「……」
怖い。
魔王とは、こんなに怖いものだったのか。
この魔人だってそうだ。
己と同じ魔人と会うのは初めてだったが、その相手は強大な力を持つ己を越えた力を持った存在。それとの戦闘は、思考を回さざるを得ないものだ。でなければ死んでいた可能性もある。それくらい強い存在。
それほどの存在を怯えさせる魔王は、それよりも怖い存在なのだ。
しかし、どうしてか、
「……」
ほんの少しだけ感情が動くのを、ますぞえは感じた。
「――と言うわけで、調査するから皆は待機ね。……レオンハルトはしばらく正座で」

「了解」
「……ああ」
一通りの説教を終えたスラルは皆に待機を命じると、そのまま何かの魔法を発動して調査に入る。それを見ていたレオンハルトは、
……待機ってことは、一人で調査出来るんだな。
手分けして何かを探す、とかではなく、スラルは一人で調査することにした。よく解らないが、魔法で何とか出来るのだろう。便利なものだ。最近、魔法を学び始めた自分としても興味がないでもないが、
……今は、正座に耐える時だ……。
故に余裕はない。何で、正座とは足が痺れるのだろうな、と思う。鍛えていても辛いことに変わりはないのだ。
その間、何気なく周囲を、横を見る。そこには、
「……」
ついさっきまで戦っていた魔人、ますぞえがおり、
……こいつ、改めてみてもよく解んねぇな……。
その表情は動かないし、喋ることも一切ない。感情が動いているかも怪しい。一応、意思くらいは微かにあると思うが、それも確認のしようがない。
……そういえば、引き入れるとか言ってたな……。
影武者を自分が誤って殺した時、スラルが言っていたのがそれだ。色々と聞いた後に引き入れると。
だが、奈落の王の正体は魔人であった訳だし、その関係で魔王の命令は絶対なのだから逆らえない――というよりは逆らわないとは思う。魔に属する者であれば、本能が自然と膝を突かせるのを選ばせる。それが魔王だ。故に引き入れるのは難しくない。
しかし、このますぞえに限っては言うことを聞くかどうかは微妙なところだ。
絶対命令権を使えば否応はないが、それをスラルは良しとしない。
……さっき使われたばかりだが、これは例外だしな……。
人に嫌がることを強制するようなことはしないのだ。少なくとも平常時は。

なので断られるかもな、とも思う。
しかしそれを承知の上で、魔軍参謀として一応、
「……おい、ますぞえ」
呼びかけてみた。しかし、
「……」
返事はない。それどころかこちらに反応したのかも解らない。
だが、それでも構わず、
「お前、うちまで付いて来るか？」
「……」
続けて聞く。今度は、ほんの少し反応した気がした。
といっても、こちらを見た――様な気がするだけだ。本当にそうかは解らない。
しかし、それを代弁するように、ピンク色のハニーが、
「うふ、確か、レオンハルト様でしたか？　そんなことを言っても、ますぞえ様は……あら？」
「……」
「？　どうした？　お前、ますぞえの言ってることが分かるんだろ？
一体なんて――」
「……迷ってらっしゃるわ」
「あ？」
「お？」
その言葉に、周囲の者達も注目した。
勧誘に迷っている、そんな言葉により驚いたのはハニ子と、二人の使徒で、
「……本当に珍しい。ますぞえ様ったら、少し乗り気だわ」
「ま、まさかですか。もう長いことこの奈落で引きこもり続けたますぞえ様が、ついに表舞台に姿を現すと？」
「ほ、本当ですか。一切何もすることもなく自堕落な生活を送り続けたますぞえ様が、ついにお動きになられると？」
アンビリーバボー！　と、二体の使徒が声を上げた。うるさい使徒だなぁ、と思いながら、

「……そんなに珍しいのか？　というか、このますぞえはいつからここにいる？」
　気になって聞いてみると、二人の使徒は声を揃えて、
「解りません。少なくとも私達が第一使徒として仕えはじめた頃には、既に魔人として今と変わらない強さでありましたので……」
「……なら、あんた達はいつから使徒になったの？」
　と、聞いたのはハンティだ。その質問に、二人の使徒は頷きを入れ、
「私が使徒になったのは……確か三百年ほど前だったかと」
「なら私は、四百年ほど前だったかと」
「あっ！　汚いぞピット！」
「早いもの勝ちだ、のろまなブラッド……！」
　言って殴り合いを始める使徒二体。それを呆れながら眺めるも、続けてハンティが、
「……とりあえず、三百年くらいから前にはいたってことね。ま、ハニーは古い生き物だし、それもあるかな……」
　息を吐きながら言う。その言になるほど、と頷く。
　……ま、スラルが魔人にした訳じゃねぇし、十中八九、前魔王ってことになるのか……？
　となると自分よりも遥かに年上なのだろうか、と考えていると、またしてもますぞえの二体の使徒、そのうちの一体が、ハンティに声をかけ、
「時にお嬢さん。そこの馬鹿な第二使徒など放っておいて、私とデートにでも行きませんか？　美味しいハニワそばのお店を最近見つけましてね。ハニログで星５の評判のお店です」
「はぁ……？」
　意味不明、と言わんばかりにハンティが呆れたように閉口する。
　しかしその誘いに反応したもう一体の使徒が、
「黙れ味覚障害。あのお店に評価付けたのお前だけだったじゃないか。お嬢さん、そこの第二使徒なんて無視して、私の見つけたぷちハニー料理専門店にでも行きませんか？　毎日行列必至のお店ですよ！」

と、喧嘩を売った。再び、
「フッ、笑わせるなピット。お前の下品な面を見ながら食事を取るなどお嬢さんが可哀想だ。ということでお嬢さん、私と小洒落たバーにでも――」
「黙っていろブラッド。お前の汚い顔を見ながら酒など飲めるか。気持ち悪くて吐き気がするだろう。なのでお嬢さん、私とやらしいホテルにでも――」
お互いに顔を見合わせ、同時に殴り合う。
「くたばれ第二使徒め……！」
「……どっちも死んでくれないかな……」
「ハンティさん？　彼らはもう死んでますのよ？」
そうだった……、とハンティが頭を抱える。現実の理不尽さを嘆いているのだろう。
そしてキャロルの指摘を聞いた使徒達が殴り合いを止め、ハンティを見ると、彼女を煽るように、
「ぷぷっ、お嬢さん。私達はもう死んでましゅよ～？」
「ゴーストに何を言ってるんでしゅかぁ～？」
「ぶっ殺す……！」
「あいやーっ!?」
ハンティがゴーストハニーの使徒二人を剣で殴り始めたのを見て、レオンハルトは吐息しつつ、
「……とにかく、どうするんだ？」
「……」
ますぞえの身体がほんの少し動いた。
そして、ハニ子を見ると、
「……あら……本当に……？」
「……」
「ええ、わかりました」
「……ますぞえは何て言ってるんだ？」
ぶっちゃけ本当にやり取りが成立しているのか、傍目には解らない。一人で適当に頷いているだけに見える。

だが、ハニ子に確認を取ってみると、
「どうやら……行ってみてから決めるそうです」
「行ってみて？」
はい、とハニ子が頷きを入れ、ますぞえを半身で見ると、
「とりあえず、そちらが住んでいる魔王城に行ってから判断すると……本当に珍しい……いえ、初めてのことです。ますぞえ様が、奈落から動こうとするなんて……」
どうやら本当に珍しいのか、ハニ子はかなり驚いているようだった。所詮ハニーなので、表情はそこまで読み取れないが、声でそんな感じであることが分かる。
しかし、それなら、
「……それじゃあ、スラルの調査が終わったら付いて来るのか？」
「……」
「そうする……とのことです」
……意外とあっさりだな。
このハニ子や二体の使徒の様子から察するに、もっと苦労するかと思われたがあっさりと決まってしまった。いや、判断は保留なのだからまだ解らないが。
なら後は、
……スラルの調査待ちだな……。
早くしてほしいものだ。早くしてくれないと、
「……足が……」
段々と痺れがやって来たのを感じ、レオンハルトは表情をしかめた。

……何の痕跡もないわね。
スラルは、魔法で奈落の調査を行なっていた。
主に調べるのは、魔に関する気配。次に死体や遺物。後は細かな異常を見つけようとしているのだが、その成果は芳しくない。おかしなところが全く見つからないのだ。魔に関する気配も、ますぞえの物く

らいしか無く、
……駄目ね。外れ。
そこでスラルは、吐息とともに魔法を切った。やはり何も見つからない。
さすがに死体までは期待していなかったが、何らかの痕跡くらいは見つかると思っていた。何せ魔王に関するものなのだし、そうでなくとも形跡が何一つ無いのも不自然だ。
逆に、ここまで何もないとなると、別の可能性が浮上してくる。
まず、あり得ないだろうが、
……今も生きてるか……もしくは、綺麗さっぱり消されたか。
自然死であれば痕跡がないのは不自然。ならば何らかの関与があって、痕跡が消されたというのが、可能性としては高い。
問題は、それが誰、という部分だが、
「……やっぱり――」
スラルは懐から、徐ろにある物を取り出してそれを見つめた。
それは、ひまわりの形をした黄金の像であり、
「……」
しばらくの間、それを黙って見続ける。
彼が迷宮に行って拾ってきた物や、私が直接見つけた物。
同じ様な物が、手元には既に存在し、
「……はぁ」
スラルはそれを再び懐に戻した。そして息を吐いて緊張を鎮め、
……まぁ、とりあえず、今はいいかな……。
それよりも、今は優先すべき事柄がある。こっちは後回しだ。
故に、調査を終えたスラルは皆のところに戻り、
「――ん、終わったから帰るわよ」
と、言った。皆、思い思いに暇を潰していたが、その声に反応して帰り支度を始める。
そんな中、未だ律儀に正座を続ける彼に近づくと、
「ほら、レオンハルト。行きましょ」
「あ、ああ……」

膝を震わせながら立ち上がるレオンハルト。その表情は苦悶に満ちており、傍から見ても辛そうだ。相当痺れが来ているのだろう。
何となく、それが面白かったので、彼の足をちょんと触ると、
「――ッ!? お前……!」
「あっ、ごめん」
表情を歪ませ、勢いよく顔を向けてきたので軽く謝る。
そして苦笑しながら、彼に尋ねるのは、
「――それで、ますぞえは？」
「ん、ああ……とりあえず付いて来るってよ。うちに定住するかは保留だ」
「……そ、ありがとね」
当然の様に聞いていてくれたレオンハルトにお礼を言う。やっぱりお仕置きの最中でも、気を利かせてくれる様だ。
……私、人見知りだしね……。
魔王ではあるが、あまり人に命令したりするのは得意じゃない。やる時はやるが、あまり気が進まないのだ。自分がますぞえにそれを聞いたら、命令の様になってしまいそうだし。
なのでよくやってくれたと思う。レオンハルトの横にいるますぞえが立ち上がったのを見て、
「それじゃあ、ますぞえも。行こっか。何かあれば遠慮せずに言ってね？」
「……」
微かに、こっちを見た気がする。何となくだが。何を言っていて、どんな感情を抱いているかは解らないものの、
……否定、ではないかな……？
と、そんな風に感じながら、スラルは皆とともに魔王城に帰還した。

「――と、言うわけで、一時的に魔王城に滞在する魔人ますぞえだ。あまりちょっかいは掛けるなよ？」
「……」

「……え？」
「ま、また強そうな魔人が……」
謁見の間で、突然紹介された巨大な、ハニーの魔人の姿に、魔軍に属する者達は困惑した。ケイブリスなどは、巨大で威圧感のある魔人の姿に後退りする。
何の挨拶もない無言の魔人に、緊迫した空気が流れるも、一方で、その空気を破壊するように、
「うふふ、ハニ子です。よろしくお願いしますね、皆様方」
「ヒュー、私が第一使徒のブラッドです。こっちの馬鹿は第二使徒のピット」
「ドロドロー、私が第一使徒のピットです。こっちの阿呆は第二使徒のブラッド」
「死ねえーー！」
「あいやーっ！」
「……何なんだアイツら……」
パリーン、と二体の使徒が殴り合いを始めて割れるのを見て、周囲が困惑を重ねる。
そして、
「……」
「あら……ますぞえ様……楽しそう……？」
「……」
ハニ子の疑問に、魔人ますぞえは、微かに身体を動かすのみであった。
――魔人ますぞえと、使徒のブラッドとピット。そしてハニ子が、しばらく魔王城に滞在することとなった。

「……ところでピット。ここには女性の方も多いですし……どうでしょう、ここはスカート覗きポイントを一緒に捜索するというのは……ふふふ」
「……よい提案ですねブラッド。ここなら階段も多そうですし、部屋

も多いですから幽体の我々にとって沢山のおパンツポイントが見つかるでしょう……ふふふ」
「もし本当にやったら、殺すからね……？」
「使徒仲間が増えましたわー！」
　呑気なキャロルの横で、人知れずハンティの苦労が増えた瞬間でもあった。

デート計画会議

レオンハルトは、自分の部屋で昼食休憩を取っていた。
仕事が忙しい時や食堂まで行くのが面倒な時などは、自分の部屋まで食事を運ばせている。
つまり、大体いつもの事だ。こういったことが許されることが、幹部待遇である魔人の良いところだろう。
「――では、頂くか」
「はい、頂きますですわー！」
隣の机で同じ様に昼食休憩を取るキャロルと一緒に手を合わせて挨拶を行う。
今日の昼食は、大陸東産のそばに、こかとりすやイカマン、オホホウフフなど数種類の具材で使った天麩羅。薬味としてネギと胡麻、そしてレオンハルトが特に好む大根おろし、そして先日に幾つか取ってきたカラーの森原産のわさびが乗せられている。
レオンハルトは早速、箸でそばをつゆに浸して啜った。すると、
……相変わらず、良い仕事をしているな。
濃いつゆの味と、そばの風味を味わう。そのまま天麩羅にも箸を伸ばしながら思うのは、魔王城に常駐するコックの腕だ。
食事は人間のコックが作っているのだが、それがかなりの腕前なのだ。新しい食材を持っていけば、新しい料理や、既存の料理にアレンジを加えて別の味を生み出す上、要望にも限りなく応えてくれる。
今持ち上げたこかとりすの天麩羅も、自分が要望したものだ。サクサクして、ジューシー。旨味が衣の中にしっかりつまっているが、そば用なのか油は少量で味も主張しすぎない。上品な味だ。こかとりす好きの自分も大いに満足させる一品である。
……ふぅ、やっぱり仕事中の安らぎといえばこの時間だな……。
一日の大半の時間を仕事で占めている自分にとって、仕事中の食事は息抜きと楽しみとなるものだ。
特に誰とも関わらない状態で、静かに食事を取るのが素晴らしい。賑やかなのも嫌いではないが、一日に一回くらいは落ち着いた時間を

取りたい。隣で、「美味しいですわー！」と声を上げているキャロルもいるが、これは許容範囲としておく。美味そうに食べてるし、汚い食べ方をしている訳でもないし。

と、レオンハルトは再び食事の手を進める。今度は薬味を摘み、それをつゆに落としながら、

「――ん？」

「あら？」

と、不意に、部屋のドアがノックされた。

使徒と二人揃って疑問の声を上げるのは、それが食事休憩中であるからだ。

同じ様に、城で仕事をこなす魔物将軍や魔物隊長にも食事休憩はあるし、自分達が食事休憩を取っていることは知っている。というか、食事の時間を中断させられるのはあまり好きではないので、緊急や急ぎの要件でなければ食事を終えるまでは訪ねてくるなと命じてある。いつでも来ていいとなると、食事を取れる時間が無くなってしまうのだ。もし来てしまったら仕事を優先せざるを得ない。自分には、魔軍参謀としての責任があるのだし。

故に、誰かが来たということは何か用事があるのだ。それも急ぎの。故にキャロルは立ち上がり、来客を迎えようと扉を開ける。自分も、一度箸を置いて迎える準備を終えると、

「今出ますわー……って、あら？　ケッセルリンク様ではありませんの！」

「ああ、食事中にすまないな」

「……ケッセルリンクか。別にいいから気にするな。何か要件があるんだろ？」

訪ねてきたのは、魔人四天王の一人であるカラーの魔人、ケッセルリンク。彼女は入室してそうそうに食事中に訪れたことを軽く詫びると、こちらに視線を向けて、

「うむ……実は――」

ケッセルリンクはそこで言葉を一度区切る。

そして簡潔に一言、

「次の休みの日に――主とお出かけしてほしいのだが」
「……あ？」
告げられたお願いに、あんぐりと口を開けてしまう。
それくらい、よく分からない言葉だった。
……主……って、スラルだよな……あいつとお出かけ？
それを何故ケッセルリンクが言うのかも解らないし、どうしてそんなことを頼むのかも解らない。故に確認の意味も込めて、
「……スラルと、俺が……出かけるのか？　というかどこに？」
「その通りだ。スラル様から伝言を任されてな。どこに行くのかは任せる。それと――」
頷きを入れて質問に答えると、しかし、ケッセルリンクは再び言葉を止め、今度は少し頬を赤くした。
そして微妙に言いづらそうな様子で、更に衝撃的なことを口走った。
それは、
「――これは……スラル様からの……で、デートのお誘いだ……」
「……」
今度こそ、思考が固まる。
そんなことを態々言いに来たのか、と食事を再開しようとしていた腕も止まり、そばがつゆの中に落ちる。
そしてしばしの間、頭で理解することが出来なかったが、やがて何とかそれを呑み込むと、
「……はぁ？」
……俺と、スラルが、デート？
「……マジで言ってるのか？」
こちらの言葉に、ケッセルリンクはただ一言。
「そうだ」
「……マジか……」
レオンハルトは事実を認識すると、思わず息を呑み、何となく天井を見上げた。
思うのは、

……それはつまり……いや、でも――。
上手く頭が回らない。更に言うなら、混乱してるとも言える。
その原因は彼女にもあるもので、自分にもあるものだ。その原因を思うと、どうにも顔が熱くなってくる。
しかしどれだけ悩んでも、確実に、
……次の……つまり一ヶ月後の休みに……アイツとデート、か……どうするべきだ……？
レオンハルトは、それに付き合わざるを得ないし、どうするかを考えなければいけなかった。

「……では、失礼する」
「あ、ケッセルリンク様！　さようならですわー！」
「……どうする……？　どうすれば……」
要件を言い終えたケッセルリンクは、元気よく見送りをしてくれるキャロルに微笑で応え、そのまま部屋の外に出た。レオンハルトの方はどうやら、その余裕がなくなった様であり、頭を抱えたまま色々と呟いている。
だが、了承はしてくれた様なので構わないだろう。長居する訳にもいかない。故にそのまま、隣にある自分の部屋まで戻り、扉を閉める。
すると、
「――ど、どうだった……？」
早速、不安そうにこちらを見上げる主――スラルがそこにいた。
結果が気になって仕方がないのだろう、こちらが返事を返すより早く、
「もしかして……こ、断られたり――」
「いえ、大丈夫です。――快く受け入れてくれました」
「っ！　ほんと!?」
答えを教えると目を見開いて再度の確認を取ってくる。どちらも二度聞いてくる辺りが似ているな、と微笑しながら、
「ええ。どういったデートにするか、かなり悩んでいました。彼も気

にかけているのでしょう」
「ふ、ふぅ～ん？　そっかぁ……」
　彼の状態を詳細に伝え聞かせると、主は少しそっけない冷静な態度で偽るも、顔のにやけが隠せておらず、やがてどんどんと笑みが深くなり、最終的には、
「もうっ、レオンハルトったら……ほんとしょうがないんだから……えへへ……」
　顔に両手を当て、嬉しさが溢れ出してしまったかのように、もじもじとし始めた。
　断られると思っていたのもあって、嬉しさもひとしおなのだろう。しかし、ケッセルリンクに言わせてみれば、
　……主の頼みや誘いを、レオンハルトが断るはずがないと思うのだが……。
　断られた時にショックだし、そもそも直接言いに行くのが恥ずかしい、とのことなので代理を引き受けたが、前者の可能性は皆無に等しい。後者に至っては、その時が来れば更に恥ずかしいと思うのだがどうする気だろう。
　と、冷静に考えてみたが、ケッセルリンクとて、
　……これが私であったとしたら……。
　冷静でいられるかは微妙なところだ。自分ははっきりと想いを伝えているので、その部分についての恥ずかしさはそこまで大きくないかもしれないが、彼と二人きりで出かけるとなると、それは中々心躍るもので、
「……楽しみですね」
「うんっ！　レオンハルト、どこに連れてってくれるんだろ……」
「当日までのお楽しみかと」
　そうだよねー、と、スラルはるんるんと鼻歌を歌いながらスキップし始めた。
　……やはり、勧めてみて正解だったか……？
　本当に只の少女の様に喜ぶ主を見ていると、自分のことの様に嬉しくなる。主も満足している様だ。

後の問題は当日。実際にレオンハルトがどんなことをするかという部分で、
……まぁ、レオンハルトなら大丈夫だろう。彼は、落ち着いて物事を進められる男だ。
加えて女性にも優しい、紳士的な男だ。きっちり主をエスコートして、そして満足させてくれるだろう。
ケッセルリンクはそのことを、微塵も疑っていなかった。

「――会議だ!! 今から今度の休日に俺が魔王様を連れて行く場所を今直ぐ考えろ!! どんなことをするかもだ!! 採用されたやつには俺が褒美を与える!! だが、何も思いつかない奴には休日に地獄のトレーニングを味合わせる! 喜べ! 魔人も即魔血魂間違いなしの昇天メニューだ! どうだ、気合いが入っただろ!? じゃあスタート――!!」
「畏まりました! でしたらまず――」
「レオンハルト様!? 恐れながら展開が早すぎます!!」
「というか仕事の話をするのでは!?」
会議室を使い、キャロルや魔物大将軍のリー。加えて麾下の主要な魔物将軍も集めたレオンハルトは、部下全員にそれを宣言した。
しかしキャロルは直ぐ様理解して提案をしたのに対して、大将軍に将軍たちは戸惑っていた。皆を代表して、大将軍リーが手を挙げ、
「魔王様と出かける場所を決めるとは、一体どういうことですか？……もしや、次はどこを攻めるかという暗喩では……！」
おお、と魔物将軍が唸るも、それを即座に、
「違う! ただのデート的なやつだ! 遊びに行く場所を考えろ!!」
「え、ええっ!?」
「し、仕事は……？」
「魔王様の命令以上に重要な仕事なんてねぇだろうが!!」
「うっ、それは確かに……」
その答えに納得の色を見せる魔物将軍達。しかし普段と気色が違

いすぎる議題と、レオンハルトの様子に及び腰となる。
だが、そんな中、
「……う、うむ。遊びに行く……つまり、楽しませる場所を考えればよろしいのですね？」
大将軍リーが気を落ち着かせる様に咳払いをしてから、冷静に質問する。どうやら気持ちを切り替えた様だ。
やはり年長は違うな、と思いつつ、レオンハルトはその疑問に対し笑みを見せ、
「その通りだ！　冴えてるな！」
「あ、ありがとうございます。でしたら――」
と、レオンハルトの賛辞を丁寧に受け取りつつ、提案を口にしようとした時だ。
「むっ、……わたくしにいい考えがありますわ!!」
「あっ、ちょっ――」
大将軍リーの言葉にかぶせる様に大声を出しながら、キャロルが手を挙げる。邪魔をされてしまった大将軍が声を上げようとするも、キャロルが押しのけるように前に出て、強引に、
「スラル様は本がお好きなので、人間の町の図書館に行ってみてはどうでしょう!?」
言い切った。なるほど、確かにスラルは本が好きだ。毎日読み耽っているし、詳細は知らないが自分でも本を書き残すほど。
しかしそれは、
「――却下だ！　というか俺達が人間の町に入ったらそれどころじゃねえだろ!!」
「あっ、それもそうですの……」
言われて気づいたキャロルがしゅんとする。
確かに、自分やスラルは、見た目こそほぼ人間ではあるが、その存在感やオーラが違いすぎる。特にスラル。自分はまだ、気配を隠してみれば何とかなるかもしれないが、魔王であるスラルはそうはいかない。この城の者や身内は慣れていて感覚が麻痺しているが、普通の人間がスラルと遭遇したら、普通は卒倒する。そんな状態ではスラルも

楽しめない。
なので却下だ。しかし、次に大将軍リーが手を挙げると、
「……では、占領下の町を使うのはどうでしょう？　それなら人払いも容易ですし、気兼ねなく町を使えますが……」
「……悪くはない。――が、却下だ」
「それは……」
大将軍や将軍達が疑問の色を見せる。それも当然だろう。
占領下の町なら、魔物であっても気兼ねなく使える。確かにそうかもしれないし、一見悪くない提案だ。しかし、
……それも結局、スラルがそれどころじゃなくなっちまう。
そう。人間を襲うことを、あまり快く思っていないスラルに、人間が虐げられた痕跡を見せるのは彼女を複雑な気分にさせるだろう。
だが、それを口にはしない。代わりに別の理由を言う。それは、
「占領下の町とは言っても遠すぎる。魔王様は遠征を好まないし、出来れば近場の方が都合がいいからな」
「ああ、なるほど。それもそうですね」
「ふふん、却下されましたね……！　これで一勝一敗。ですが私の方が勝ち点は多いですわ！」
いつの間にか勝ち点制に!?　と大将軍が絶句するも、こんなのはいつもの事だ。ライバル同士でお互いを高め合うのは良いことだし、放置。独り相撲にも見えるが気の所為だろう、多分。
それよりも、
「他に何かないか！」
「……でしたら、近くの野原でピクニックなどはどうでしょう？」
とある魔物将軍が挙手しながら言った。それは、
「……今の所一番良いな！　その案は候補として一旦保留！」
「あ、ありがとうございます！」
「まさか、思わぬ伏兵が……！　くっ……！」
キャロルが魔物将軍を睨む。しかし、魔物将軍はさっと目を逸らすことで逃げた。トレーニング回避確定と、褒美に一歩近づいたことで魔物将軍も強気になっているのだろうか。飴と鞭はやはり効果的だ

な、と自分の采配は間違っていないことを確信する。
　そして続いても、魔物将軍から、
「はい！　ここは敢えて、城の中で何かサプライズを用意して楽しませるのはどうでしょう!?」
「それは最終手段だ！　俺としてはそれを選びたいが、魔王様はあくまでも出かけることを望んでいる！　なので保留！」
「くっ……わかりました」
　魔物将軍が苦悶の声とともに引き下がる。すると再び、別の将軍が勢いよく、
「では、ピクニックよりも更にアウトドアな方向で行きましょう！　外でバーベキューなどをして楽しんでは!?」
「おお！　悪くない、悪くないぞ！　確かに目的もなくただピクニックするよりは良いかもしれない！　保留！」
「ありがとうございます！」
「き、貴様……！　私のピクニック案を潰したな……!?」
「馬鹿め……！　魔物社会は実力主義だからな……お前より私の案が優れていただけのこと……！」
　何やら魔物将軍達が火花を散らしている。競い合うのは良いことだ、とそれを流すと、更に、今度は大将軍が、
「……ですが魔王様はもうちょっと落ち着いた雰囲気が好みかもしれません。ここは外で釣りをしたり、花畑で花を摘んでみたり、最後は丘で星空を眺めて過ごすなど、ゆっくり落ち着いた楽しみを提供しては？」
「……おお！　確かに良い案だ！　その方が魔王様も楽しめるかもな……！」
　確かに良い案だ。それに感心して候補に加えると、将軍達とキャロルが、
「リー様！　私達の案を奪わないでください！」
「しかも、同時に複数の案を……!?　くっ、これが将軍と大将軍の差なのか……!?」
「ぐぬぬ……小癪ですわ……！　さすがは七星と並ぶわたくしのライ

バル……！」
「……悪く思うな。これも会議だ。私は案を出しているに過ぎん」
極めて落ち着いた物言いで言い返す大将軍に、ぐぬぬと歯を食いしばるキャロルと将軍達。
それを確認すると、周囲を見渡しながら、
「もうないか!? ないなら――」
「はい！」
発案を打ち切ろうとした時、キャロルが挙手をした。
故に彼女を見て、それを許可する。
「よし、何だ！」
「はい！ わたくしが提案するのは――」
そこでキャロルは一息。気合いを入れて、それを発案した。
「スラル様とレオンハルト様専用のデートコースを、今から作成しましょう!!」
……それは――って、ん？
「……デートコースを、作成……？」
「んん……？」
その言葉に自分だけでなく、将軍達も首を傾げてその言葉の意味を考える。作成とはどういうことだろうか、と。
その沈黙を受けてなお、キャロルは手応えを感じているのか、胸を張って自信に満ちた表情になると、
「こうみえて、わたくしは人間の町によく出入りしますわ！ なので、お決まりの娯楽や、どういったものが好まれるかを熟知していますの！」
「……それで？」
「はい！ つまり、その知識を活かして、デートに最適な施設を作り上げてしまえばいいのですわ！ 具体的には、劇場であったり、塔のような高い景色が見渡せる場所であったり、食事の屋台や、ちょっとした娯楽施設などなど――」
と、キャロルは、自分が知る限りの人間の娯楽を羅列していった。
それを、将軍達とともに聞き入る。

だが、レオンハルトとしてもそれは、
……そういった普通のデートが難しそうだから悩んだんだけどな……。
そう。最初はそれを考えた。考えたが、人間の町に行く訳にもいかないし、魔物の町などにそういった施設はない。
しかしお出かけを楽しみにしているであろうスラルに、普通のデートを提供しては男として恥だ。なので魔物将軍達を集めていい案を募ろうとしたものの、
……それは最初から無理だと――
故に諦めていたのだが、
「作る、か……」
そのことを思案する。
次の休みの日まで、一ヶ月近くある。その期間と、魔軍の資材、そして魔物兵による人海戦術を使えば、
「……いける、のか……？」
半信半疑で呟く。
すると議場の皆がこちらに視線を向けており、
「どうでしょうか、レオンハルト様！」
「……」
キャロルが言い切った後に確認を求めてくる。そのことを考え、
……確かに、ピクニックやアウトドアでもいいだろうが――
と、レオンハルトはしばらく目を閉じて思案する。そして、ある事を思い、決定打を見つけると、勢いよく机を叩いて、
「――よし、それで行くぞ！」
「ええっ!?」
「わーい！　わたくしの勝ちですわー!!」
決定を告げると、キャロルが飛び跳ねて喜び、将軍達が驚きの声を上げる。
その中で、比較的冷静な大将軍が、こちらを向いて、
「し、しかし、本当に作れるのですか？　色んな意味で……」
うんうん、と将軍達が頷いている。しかしそれを跳ね返すように、

「……いや、いける！　確かにギリギリだが、この軍の人員を使って今から取り組めば……何とか出来る気がするぞ！」
「ほ、本当に大丈夫ですか？」
　大将軍が重ねて問う。しかしそれに答えたのは、キャロルで、
「あら、自信がありませんの？　それはいけませんわ！　わたくし達は魔軍一の精鋭たるレオンハルト様の軍ですのよ！　貴方も大将軍なら、もっと自信を持つのですわ!!」
「し、しかし……」
「わたくし達を誰だと思ってますの！　やれば出来る！　為せば成る！　レオンハルト様に仕えるわたくし達の辞書に、不可能という文字はありませんわー！」
「……」
　キャロルが勢いで言うと、大将軍リーは沈黙してしまう。
　しかし、ややあって顔を上げると、
「……了解しました。ならば、今直ぐ計画を煮詰めましょう」
「だ、大将軍閣下!?」
　リー大将軍の言葉に将軍達が戸惑いの声を上げる。だがそこで、リー大将軍は彼らに落ち着いた、しかし熱さが垣間見える声で、
「ここまで言われて引き下がっては、無敗を冠する我が軍の名が泣こうぞ……！　任務を任せられたのなら、レオンハルト様の名誉にかけて、それを完遂するのみ……！」
「よく言いましたわ！　それでこそわたくしのライバルですの！」
「……リー様……」
「大将軍閣下……」
　将軍達が大将軍の言葉を受けて、その瞳に熱が籠もっていく。そのやり取りを一通り眺め、
　……微妙に大事になった気がするが……まぁ、いいだろう。
　うちの軍は任務を絶対に遂行させる優秀な指揮官が多い。後、戦闘狂と堅い奴も。これも個性だろうか、一体誰に似たのかと思いながら、
「――では、これより作戦を開始する！　各員、作戦遂行の為に、奮励

努力せよ!!」
「畏まりましたわ！」
「承りました！」
「おお……！」
魔軍参謀として真面目な号令を掛け、キャロル、大将軍、将軍達とで気合いの声を上げる。それを満足そうに眺めて、
……一ヶ月後。それまでが勝負だ……！
レオンハルトは当初の悩みも忘れ、謎の使命感と責任感で、絶対に成功させると息巻いた。
――こうして、魔軍最精鋭の軍団であるレオンハルト軍は、一ヶ月後の〝デート〟の為の任務に、全力で取り組むこととなった。

二人の関係

魔王城、スラルの私室では二人の男女が無言で過ごしていた。
魔王スラルと、魔人レオンハルトだ。彼らはお互いにソファに座った状態でそれぞれ別の本を開いている。二人の間に会話はない。というのも、
「……」
「……」
――気まずい。
レオンハルトは本に目を通しながらも、スラルの方を気にしていた。ケッセルリンク経由でデートに誘われ、そのための準備に時間を費やす。それはいいのだが、
……よくよく考えたら当日まで、こんな感じで過ごさなきゃならねぇのか……！
内心頭を抱える。よく考えなくても解る事だ。
自分は殆ど毎日の様にスラルの部屋を訪ねている。仕事で忙しすぎる日や、遠征中は当然それはないが、出来る限りは行くことにしているのだ。
故にこうなることは必然だった。スラルがデートに誘ってきた段階でこうなることは。彼女の方も解っている筈だと思ったが、先程から視線をチラチラと本と自分の方に行き来させているところを見るに、彼女にとっても想定外だったのだろう。最初に気づけ。
……ほんと、どういうつもりだ……？
解る様で解らない。彼女がどうしようとしているのか。
それも一ヶ月後になれば解るのだろうか。しかしながら、今は、
「……ん」
「っ！」
わざとらしく本を閉じて、伸びをすると、スラルも解りやすく肩をビクッとさせて反応した。
そんな彼女に向かって視線を逸しながら、

「……あー……今日は仕事も溜まってるからこの辺で戻るかな……」
と、あくまでも軽めに言う。何も気にしてないと言った風に。
するとスラルが本から顔を上げるも、視線を斜め上に向けて、
「そ、そう。仕事ならしょうがないわね……」
「ああ……仕事だからな」
「仕事だもんね……」
会話がぎこちない。いつもならここから会話が二転三転して、部屋を出るのに延長が設けられるのだが今日はそういうのを言い出す空気でもないし、自分としても言い辛いものがある。
何とも言えない沈黙の時間が数秒続くが、その空気を強引に振り払うように声を出す。
「……それじゃあな」
「！　ま、待って！」
「……何だ？」
と、部屋を後にしようとしたところで慌てたようなスラルの声。何故引き止めたのか、よく解らないまま一応振り返ると、
「……そ、その……あの……」
「……」
視線を斜め下に向けながら、迷っているのか口をもごもごとさせながら身体を揺らすスラル。
その様子に何とも形容しがたいむずがゆい気持ちになる。そんな彼女を見ているとこっちまで恥ずかしいというか、戸惑ってしまうというか、今直ぐここから離れたくなるが、
「……れ、レオンハルト……あ、あのね……」
スラルはやがて、戸惑いつつもこちらを見上げて、
「……デート――楽しみに、してるから……」
「――――」
その言葉を聞いた瞬間、身体の何かが駆け巡った。
ドクン、と鼓動が跳ね、身動きが止まる。しかし、
「よ、要件はそれだけ！　じゃあおやすみ！」
「……あ、ああ……」

顔を真っ赤にしたスラルがこちらを部屋から追い出す勢いで言ったので、こちらはそれに従う様にゆっくりと外に出る。
扉が閉まり、そこから何気なく数歩歩いて部屋から遠ざかる。殆ど無意識の行動だ。
しかしそこで、壁に背を預ける。そして自分の胸に手を当ててみると、
……早い、な……。
何がとは言わない。ただ、それは強く、早くなっている。
身体が熱く、転げ回りたくなるような衝動が、胸の内で暴れ狂う。
頭の中では、先程の彼女の言葉、表情、仕草を詳細にイメージし、それを反復しており、
「……スラル」
意味もなく、名前を呟く。すると胸の内の衝動が強くなり、耐えきれず頭を右手で抑える。
そして前髪に指を通しながら掻き上げ、同時に上を見上げる。
仕事があるのは本当で、早く行かなければならない。少なくとも理性はそれを訴えているのだが、
「……スラル」
本能では、彼女のことを思っており、
……何だろうな……。
強く思う。先程の彼女を思い浮かべる。
その感想は、
「……可愛いかったな……」
と、言ってしまい、
「――っ！」
……今、口に出したか!?
言ってからどうしようもなく恥ずかしい気持ちが湧き上がる。周りに誰もいないとはいえ、こんなところで先程の様な、
「……っ、ああ、クソ……！」
頭を掻き毟るように手を動かすと、自分への悪態をついて鬱憤を晴らす、

しかし先程の想いは消えておらず、
「くっ、とにかく、今は仕事に行くか……」
そうすればこのむず痒く恥ずかしい気持ちも収まるだろう、と、レオンハルトはその場を後にした。

――現場は既に、戦場と化していた。
「急げ急げ！　どれだけ必要になるか解らんからな！　とりあえず片っ端から運べ!!」
「図面は出来る限り早く、そして正確に引くように！　とりあえず何にでも使えそうな建物から作りますわよ！」
「この一帯は整地、ここここは一旦掘り起こせ！　細かい部分は現場担当者の魔物隊長に伝えてある！」
「は、はいっ！」
夜が深くなる頃。
篝火で辺りを照らしながらレオンハルト軍の面々が作業を行なっている。
その数――およそ２０万。
常駐するレオンハルト軍の全軍が集結し、平原での作業を開始していた。
レオンハルトの使徒であるキャロルによる発案から、どれを採用するかの会議に数時間。その間に魔物兵を招集し、それぞれの担当者を決めたら直ぐに平原に出て作業開始。
その多くは資材班、設計班、土木班に別れ、建築作業は先に骨組みだけを作らせ、整地を終えた場所から順次建てていく。その際に資材だけは常に運び続け、それらを司令部が纏めて指示を出していく。
作業は一日中行うが、それぞれの担当班を更に三つの組に分けて一日八時間の交代制で作業をさせる。人間を越える体力をもつ魔物達なら一週間くらいであれば徹夜で作業することも不可能ではないが、それが一ヶ月となるとさすがに無茶であるし、作業効率も落ちる。そもそもレオンハルト軍ではそういった休息はしっかり取らせなけれ

ばならないことが決まっている。率いるレオンハルト自身がそういったことに厳しいからだ。
魔物将軍以上は魔物兵以上に働き詰めになるだろうが、それくらいで弱音を上げる者など将軍の中には存在しないし、任務となれば使命感に燃えて全力を尽くすのみ。どんなことであろうとだ。
そして最後に、完成予想図は人間の町で特に印象に残った部分を組み合わせて、華やかなものにするつもりだ。その図面はキャロルが書いている。どうにも記憶力が良いのか、町の外観を憶えているだけに飽き足らず、普段から様々な物づくりに挑戦していることから妙な素養があるらしい。
そんな中、作業現場に到着したレオンハルトは、
「――やってるみたいだな」
「あ、レオンハルト様！　こっちですのー！」
紙束を左手に持って指示を出していたキャロルが手を振ってこっちに来てほしいと示してくる。レオンハルトがそれに従って正面まで行くと、
「では恐縮ですが、早速こちらの石をこの形に斬ってほしいですの！」
「ああ」
キャロルが指し示す場所には、魔物兵達が運んできた巨大な岩が鎮座していた。
その岩を、レオンハルトは魔剣で指示通りに斬っていき、石材を作っていく。柱や建物の土台に使うものや、木だけでは限界がある建築物の資材となるものだ。
使徒の指示を受けて、魔人自らが作業をする奇妙な光景だが、これはレオンハルト自身が望んだことなので問題はない。
むしろ魔人自らが作業に参加していることで、周囲の空気が引き締まる。
魔物兵にしてみれば多少面倒な作業だが、魔王様の為に、魔人筆頭が直々に命令したことだ。それに否応はない上、ここに出来る施設は、完成したら自分達も使わせて貰えるとのことで気合いが入っていた。良くも悪くも単純なのである。

そんなこんなで作業は夜通し行われ、時折交代が入りながらも延々と行われた。
レオンハルトとキャロルは通常の魔軍の業務もあったが、魔人や使徒は休息を必要としない。故に一ヶ月の間は、ずっと起きていることになるが問題は無かった。
作業は順調、ところどころ問題が起きることもあるが、逐次修正を入れながら改善していく。人間よりも膂力のある魔物兵らは、力仕事に於いて多いに役に立ち、完成までのノルマを着実にこなしていった。
その間、問題といえばレオンハルトの内心くらいなもので、その他については問題ない。
時折、協力者を集めて予行演習を行いつつも、肝心の本番の計画も練っていき、
――そして。
一ヶ月の準備期間。それを終えたレオンハルト達の前には、
「――終・わ・り！　ましたわー!!」
「――ああ、完成だ……！」
――町が完成していた。
朝日が昇る中、完成した町を目の当たりにしたレオンハルト軍の者達は、達成感と感動から声を上げる。
近く、やってきた大将軍リーが、感嘆を滲ませた声色で、
「やりましたね、レオンハルト様……！」
「……ああ、やったぞ……！　俺達は、やり遂げた……！」
「やりましたのー！　最強ですのー！」
「うおおおおおおおお!!　俺達の町だ――!!」
同じく達成感に包まれていたのでお互いに手を叩いて喜びを分かち合う。キャロルも混ざってハイタッチをしつつ、将軍達もハイな様子で雄叫びを上げる。
「レオンハルト様、打ち上げをしましょう！　完成記念ですわ！」
「ああ、それはいいな！　準備した食材も余っているし、このまま――」

と、言ったところで、レオンハルトは我に返り、
「いや、それは今日という日を終えてからだ！　終わった後、記念の宴会を開くぞ!!」
そう。今日はデート当日の朝。
お昼に時間を指定しているので、今から準備しなければならない。作業は基本的に滞りなく進んではいたが完成はギリギリであった。
なので打ち上げはおあずけ。とはいえ、レオンハルトのその言葉に、魔物兵達は、
「おおおおおおお!!　夜には宴会だ――!!」
「豪遊してやるぜえ――!!」
単純に喜んでいたので問題ないだろう。
その気を引き締めるように、将軍達が号令を掛け、
「では、役割がある者達は持ち場につけ！　何もない者は夜まで休憩だ！」
「今日が終わればお前らの大好きな宴会だぞ！　ここの施設も使い放題だ！」
「はっ！　了解しました!!」
その言葉で魔物兵達が散っていく。それを目にしながら、大将軍が続けてこう言った。
「それでは、レオンハルト様。後は本番を成功させるだけです。――ご武運を！」
「ああ……お前も、ご苦労だったな……！」
「いえ、やりがいのある任務でしたので、苦労はありません！」
「……ふっ、そうか」
その言葉に笑ってしまう。真面目な奴め、と軽く小突きながら、レオンハルトはしかし内心を引き締め、
……とはいえ、ここからが俺にとっての本番だからな……！
色々と不安要素は自分の中にあるものの、ここまでやって失敗したではここまで作業をしてくれた部下達に申し訳が立たない。故に、
「何としても、成功させてやる……」
何をもって成功とするかはよく解らないが、とりあえず楽しませて

やれば問題ない。
手段と目的が入れ替わっている気がするが、スラルを楽しませる目的は見失っていないのだ。
そうして正午１２時。
レオンハルトとスラルの決戦の火蓋が、切って落とされた。

魔王城から北側。今まで何もなかった平地には、一つの町が出来上がっていた。
外壁で囲まれた建造物の群れ。町の入口から一本の線で繋がる大通りには、様々な出店が立っている。その出店では、様々な料理を提供しており、既に店の用意を終えた魔物兵達が待ち構えている。
大きな噴水と時計塔のある広場には、キャロルが人間の町を見て参考にしたお洒落かつ重厚な建築物が建ち並び、町の景観を整える。
大通りにある施設はどれも大規模なものであり、演劇場やコロッセオ、何やら遺跡のような建築物まで様々である。普通の家らしきものや、倉庫らしき物も多数存在するも、その殆どは娯楽の為のものであり、延いては魔王を楽しませる為に作られたものだ。
そんな中、町の中心である噴水広場には、一人の少女がいた。
魔王スラルだ。
彼女はその場所で待ち合わせする様に言われてやってきたのだが、一ヶ月で作られた大規模な町の姿に、驚きで口を開けながらここまでやって来ていた。
デートの緊張も忘れ、それに見入っていたスラルだったが、今は少しだけ落ち着いて噴水の縁に腰を落ち着けている。
しかし落ち着くと、それはそれで緊張がぶり返してきたので、今度は違う意味で頭を悩ませていたが、何となく前を見て、それに気づいた。
周囲には、店を構える魔物兵の姿があるが、意図的にスラルの方を見ない様に、そして近づかない様にしているのだが、そんなスラルに近づく者がいた。

それは、ダークグレーのコートを着た金髪灼眼の男。
彼はスラルが気づいたことにも臆さず、彼女の前まで確かな歩みで近づいていくと、一言、
「――悪い、待ったか？」
「……う、ううん。今来たところ」
スラルが戸惑いがちに言葉を交わす。ここしばらく、あまり言葉も交わすことなく、部屋に来ることもあまりなかったので、お互いに久々といった感じだ。
そのため、彼の姿を見てかなりドキッとしたスラルだが、それを加速させる様にレオンハルトは手を差し出し、
「……それじゃ、行くぞ」
「あっ……そ、そ、そうね……！」
自然にこちらの手を握ってくる。その瞬間、スラルの内心は荒れ狂った。

……あ、あああああ⁉　手握られちゃったあああああああ⁉　いや、普通だけど!!　したことないわけじゃないけど!!　な、何か駄目かも――!!
レオンハルトの行動に狂乱したスラルは、平常心のつもりで素っ気なく対応しようと努力しながら、彼を思う。
そもそも、
……というか、で、デートの為に町を作るって馬鹿なの？　こ、こんな、私の為にこんな……。
いや、嬉しい。嬉しいが馬鹿だと思う。どこの誰が魔軍最精鋭の軍団をデートの為の街づくりに投入するのか。
確かに、ケッセルリンクへの相談からデートに誘うことになったのは良いが、後から考えてみるとどこに行くの、どこに行けるの？　となったものだ。近くにデートスポットの様な町がある訳でもないし、観光出来る様な物珍しい場所もない。
なので色々と考えた結果、ピクニック的な感じになるのかな、と

思っていた。それもまあ、雰囲気出そうな上、落ち着けそうなので結構いいかも、と考えていたが、
……まさかここまで斜め上の用意をしてくるなんて……！
やっぱ馬鹿だ。嬉しいけど。嬉しいけど後で文句を言おう。言いたくはないけど誰かが言わないと駄目な気がする。
そんなことを考えていると、
「……ん、あー……スラル？」
「……ふぇっ？」
「……だ、大丈夫！　大丈夫か？」
「あ、だ、大丈夫だから、な、何!?」
急に話しかけられたことで変な声を出してしまう。急に体温が上がった気がするが、それを取り繕う様に声を上げる。今、明らかに変な人になっていないだろうか、と不安になるも、レオンハルトはそこまで気にした様子もなく、頷き、
「その、だな。今日は俺がこの町を案内したいんだが、それでもいいか？　いや、お前が見て回りたいって言うなら好きにしてもいいが、出来れば俺が色々と……エスコートしたいんだが……あ、いや、されるのが嫌なら――」
「……？　う、うん。それでいいけど……」
何だかそのままエンドレスに続きそうだったので直ぐに了承する。この町の事を知ってる訳じゃないし、彼にも彼の考えがあると思う。それ即ち、
……れ、レオンハルトが、エスコートしてくれる……！
と、内心で反復するとそれだけでニヤけそうになるから困る。それを隠す為に顔を背けるが、変な感じになっていないだろうか。今日は色々と気合いも入れてきたので、変な感じに思われたくないのだ。
しかし、
「っ、……スラル？」
「な、何……？」
名前で呼んできたので返事をする。すると、
「……今日の、お前――」

「え、何？」
今度は少し不安になりつつ聞き返す。今日のお前変だな、とか言われるのではないか、と疑心な気持ちでレオンハルトの方を向くと、同時に、
「……か、かわいい、な……」
「……へ？」
今、何と言ったのだろうか。
耳に聞こえてきた彼の小さな声は、
……可愛いって……言った……？
まさか、と思う。しかし耳に届いたのは確かにそんな言葉で、鼓動が滅茶苦茶早くなってるから多分それは本当に言ったことで、更にはレオンハルトの方も言った途端、こっちから顔を逸して表情を見えなくしてるし、段々と彼と繋いだ手が熱く――
「――あ」
そうして、かろうじて出た言葉は、
「……ありがとう……」
「……あ、ああ」
お互いに顔を背けながら言い合う。顔が見れない。というか、
……頷いたってことは、本当に言ったってこと……。
あのレオンハルトが、私のことを。
仕事や戦いのことばっかり考えてるレオンハルトが、私のことを。
巨乳好きで、ちょっと真面目だけど馬鹿で、可愛いところがあって、何だかんだ頼もしくて格好いいレオンハルトが、私のことを。
そう思うと、
「～～～っ!!」
顔が熱くなる。というか叫びだしたくなる。多分だが、自分でも顔が赤くなっているのが解る気がする。それも、
……い、いきなりそんな事言うのは……ず、ずるい……！
彼の所為だ。
デートが始まっていきなりそんなことを言うなんて何を考えているのだろうか。今まで一回もそんなこと言ってきたこともないのに。

よりにもよってこんな時にだ。
やっぱり文句が言いたい。嬉しいけど。何で急に嬉しいことばかりやってくるのか。
……ヤバイかも。ちょっとこんな調子じゃ、普通に出来ない……！
レオンハルトに変だと思われるかもしれない。考えがループした気がする。でも、変じゃなくて可愛いって言ってくれた訳で、
「……はぁ、スラル」
「！　な、何!?」
また考えの途中に声を掛けられたので、つい大声で返してしまう。
しかし彼は、息を吐いて、何を思ったのか、少し落ち着いた様子で、
「……とりあえず、今日はお前と楽しもうと思う」
「……う、うん」
嬉しいので目を逸らしてしまう。だが、彼はそれでも構わず、だから、と台詞を続けると、
「少しだけ、落ち着いてやることにする。じゃないと埒があかなそうだしな……だから、お前も、出来るだけ素直に楽しんでくれ」
「――！」
「俺も、出来るだけそうするようにする。――と、そういうことだ」
言うと再び彼は顔を背ける。
しかし先程までとは違い、顔を反対に向けるのではなく、正面を向いたものだ。
それは彼の意思を表しており、
……それは。
思う。彼は、こちらから顔を背けることをやめるのだと。
それはつまり、
……私と、向き合った上で……一緒に楽しんでくれる……。
多分そういうことだ。
となると、彼の言うこちらもそうしろと言うのは、
……私も、彼と向き合って……。
その上で同じ様に楽しめ、とそういうことだ。
彼も私も、どこかそういった事を避けていた節がある。それは自分

でも解っていた。
きっと彼も、同じ様なことを思ったのだろう。そこから進むことを避けていたと。
ならばその発言は、今までの関係からの脱却を示唆するものだ。
そこから逃げない。遠慮しない。その上で楽しみ、自分の中の気持ちに決着をつける。
……覚悟を決めなきゃ……。
改めて思う。元より今日はそのつもりで来たし、そのつもりで今日のことを計画したのだ。
だから、その一歩だ。
勇気を出して自分の想いに踏み込む。その一歩として、
「……レオンハルト」
「……何だ？」
言って、返事は行動で起こす。
それは、こちらの右手を握る彼の手を改めて繋ぎ直すもので、
「……で、デートなら、こういう繋ぎ方の方が良いかなって……」
「――――」
彼の指とこちらの指を、絡ませる様にして改めて手を繋ぐ。
すると一気に距離が近くなった様な気がして、
「……ま、そうだな……ただ――」
言う。多分同じ事を思った。
それは、
「恥ずかしいな、これ……」
「うん、凄く恥ずかしい……」
手の感触が、距離が近くて恥ずかしい。思わず手汗が滲んできそうで恥ずかしい。
だけど、
「……このまま行こっか」
「……そうするか」
――恥ずかしいけど、嫌じゃない。
そう思って、レオンハルトは自分を引っ張っていった。

私は彼についていった。
新しい関係を始める一歩として。
「――ま、今日は色々と楽しませてやるよ」
「――ええ、色々と楽しませてね？」
――二人で、初めてのデートを楽しもう。

初めてのデート

二人が最初に訪れたのは、町の中心となる大通り。
そこに立ち並ぶ屋台を目的に、レオンハルトはスラルの手を引いて先導する。
屋台では主に食べ物を提供しており、焼き物系の料理から甘味を中心としたデザート系、喉を潤すためのジュースやお酒を提供している場所もある。
特に焼き物系の料理の香ばしい匂いが漂っており、食欲をそそる。実際、屋台を担当している魔物兵や女の子モンスターもそれらの料理を偶に摘んでいた。
二人は手を繋いでそれらを眺めていたが、不意にレオンハルトが彼女の方を見て、
「――で、だ。まずは腹ごしらえでもするか。昼時だしな。――何か食べたいものはあるか？」
「うーん……色々ありすぎて悩むのよね……。というか、よくここまでの種類を用意したわね……」
後の返答の言葉に、微妙に呆れた表情を見せたスラルだが、レオンハルトは、ああ、と言葉を返し、
「思いつくものはほぼ全部揃えた。今は屋台で提供出来るものだけだが、普通のお店も作ってある。城のコックがメニュー開発から店員への教育まで色々と尽力してくれたからな」
「ほんとに多いわよね……」
串焼き肉、イカマン焼き、じゃんぼふらんく、アカメフルト、焼きそば、お好み焼き、たこやき焼き、カレーマカロロ、ポップコーン、ハンバーガー、リンゴアメ、ホットケーキ、アイスクリームなどなど。屋台の看板に書かれたものと店先にある物を見て、スラルが感心したように言う。
レオンハルトはそこで何気なく提案した。
「とりあえず、色々摘んでみるか？」
「そんなに食べれるかなぁ……？」

「少しだけ食えばいいだろ。残りは俺が食う」
「あっ、それならいいかも」
「なら決まりだな。――そんじゃあ、まずは……」
　適当な屋台に近づいていく。言った通り、色々と摘ませる為にとりあえず目についたものを頼んでいくのだが、その際にお店を担当する魔物兵や女の子モンスターとやり取りをする訳で、
「たこやき焼き一つだ」
「はっ！　こちらをどうぞ！　レオンハルト様！」
「……ああ」
　普通より大盛りで渡されたり、
「適当なドリンクを二つ頼む」
「あっ、はい！　それでしたら、こちらのカップル専用ドリンクなどはいかがですか？」
「……持ち運びにくいから普通ので頼む」
　身に覚えのないサービスを勧められたり、
「アイスクリームは、色々と種類があるが――」
「どうしよう……どれも美味しそうだけど、種類が多くてさすがに全部は……。ダブルで頼むとしても精々二つくらいだし、そもそも途中で溶け――あ、でも氷魔法で冷やし続けたらなんとかなるかな？」
「あ、あの……どうなさいます？」
「……悪いが少し待ってくれ」
　甘味の時だけスラルが本気となり、店員をしていた女の子モンスターのフローズンを困らせたりと色々あった。
　だが大体１０種類くらいを手に抱え、そろそろいいか、と近くのベンチに二人で腰掛けた。
　そしてそれを食べるのだが、
「ん、美味いな」
「そ、そうね……美味しい……」
　食事を始め、二人で屋台の料理に舌鼓を打つ。実際にメニュー選びに立ち会ったレオンハルトとしても、
……屋台で、しかも魔物兵や女の子モンスターに作らせる以上、味

が落ちたり、ばらつきが出るかと思ったが……ちゃんと問題のないクオリティだな。
無論、普段から料理を作ることを仕事にしているコックに比べたら味は落ちるのかもしれない。だがそれも問題のない範囲に仕上がっている。環境の要因か、むしろ美味しく感じるほどだ。
だが、一方で気になることもある。それは、
……どうしたんだ……？
スラルの方は微妙に心ここにあらず、といった感じだ。美味しいと言ってくれてはいるが、それよりも気になることがある様に見えた。
故に彼女の様子を見て対応を考える。我儘を言えば、せっかく手塩にかけて作らせた料理なのだから、味わって食べてほしい。その方がこちらとしても嬉しいし、部下も報われるというものだ。
それとも口に合わなかっただろうか、と心配になる。
何と声を掛けようか、迷っていたそんな時だ。
「――れ、レオンハルトっ！」
「っ、な、何だ？」
急に声を掛けられて軽く驚く。
反応してスラルの方を見ると、眼の前にスプーンが合った。
何事か、とよく見てみると、その上にはアイスクリームが掬われており、それを差し出すスラルがこちらを見上げて、
「……あ、あ～ん……」
「っ!?」
突然の行動に目を見開いて驚愕する。
……これは……！
いや、解る。いわゆる異性への〝あ～ん〟というやつだ。異性に食事を食べさせ、時には食べさせてもらう行動。それをスラルがやってきた。
そのことに対して妙に緊張してしまう。〝あ～ん〟自体は既知のもの。初見ではないし、体験したことだってある。
人間の時には毎日の様にしてもらっていたし、ファンクラブの子にもやってもらったことがある。更には、ケッセルリンクやペールから

も看病の際にやってもらった。
だが、これほど緊張は初めてのものだった。
「……ほ、ほら、早く……た、食べて？」
「っ！　あ、ああ……」
いつまでもそれを口にしない自分に焦れたのか、スラルが急かしてくる。しかしその顔は紅潮しており、視線を合わせたり逸したりと、向こうも緊張している様だ。早く食べねばなるまい、スラルも不安なのだ。こちらが受け入れてくれるかどうかで。彼女はをガッカリさせる訳にはいかないし、自分としても嫌じゃない。
故に、
「……あ、あ～ん」
と、口を開けて声を出した。
あ～ん、と、スラルの方も再度スプーンをこちらに口の前まで差し出すと、
「……んっ」
「どう？　お、美味しい？」
「……美味しい」
レオンハルトはそう答えた。だが、
……味、あんまり解かんねぇな……。
端的に言うなら、それどころじゃない、とそういうことだ。甘さは感じるが、それくらいで、
「……良かった。それじゃあ……その、次は――」
「え？」
次、という言葉に疑問の声を出す。するとスラルは口を開け、
「……あ、あ～ん……」
同じ様に催促してきた。
……俺もやれってか……!?
やるべきことは解る。内心で疑問こそあるが、それを意外にも直ぐに呑み込み、同じ様にアイスを差し出すと、
「……ほら、あ～ん」
「んっ――」

スラルの口がこちらのスプーンを含んだ。
アイスは直ぐに彼女の口に取られ、スプーンの上には何もなくなる。そして先程のように聞いてみた。
「……どうだ？」
「……そうね……」
スラルが言う。
「……すごい、甘いね……このアイス」
「……あ、ああ。そう、かもな……」
お互いに感想を言い合う。
しかしそれは、アイスの感想というより――
「……あ、あー……とりあえず食べきったし、そろそろ次行くか？」
「そ、そうねっ。次は――」
不意に恥ずかしくなったのでそう言うと、スラルがこちらの言葉に同調して立ち上がる。
「それじゃあ――って、ん？」
「え、あれ……」
だがそんな時、ある物が目に止まった。
それは、とある遊戯の出店の先にいた、
「ますぞえ？」
「ますぞえだな……」
「……」
魔人ますぞえが、何故か出店で遊んでいた。

その遊戯は難しかった。
破れてしまった網を見て、それを実感する。
「……」
「あー……また失敗してしまいましたね、ますぞえ様」
ハニ子が残念そうに言う。
そんな中、店主である魔物兵に手を差し出し、
「も、もう一度ですか……？」

「……」
「もう一度やるそうです」
何やら怯えていた魔物兵だったが、ハニ子の言葉にまた網をくれる。
それを手の部分にくっつけ、それを水に付ける。
水槽の中にある水、そこに浮いているのは幾つもの丸い球だ。
スーパーボールと言うらしい。そしてこの店は、スーパーボール掬い屋？　と言うらしい。
先程からそれを挑戦し続ける。何やら町が出来たというので、何となく来てみたが、そこにあるよく解らないものに興味を持ったのだ。
しかし、実際に掬おうとするとやはり破れてしまう。これでもう十回は越えただろう。
再び網を貰おうと手を差し出した、そんな時、背後から声を掛けられた。
「よう」
「何やってるの？」
「……」
「あら、魔王様にレオンハルト様」
ハニ子が対応する。やって来た彼らは不思議そうにしつつも、レオンハルトの方が、
「スーパーボール掬い……確かにあったな……キャロルが発案者だったが、まさかますぞえがそれに興味を持つとはな」
「うふ、ますぞえ様、意地になってしまって。先程からずっと挑戦し続けてるのですが、一つも取れなくて」
「そんなに難しいの？」
「いや……ん、まあ……やってみたらどうだ？」
「そうしようかな……で、どうすればいいの？」
魔王が聞く。魔物兵が網を渡しながら、
「は、はいっ。これを使って水の中にあるスーパーボールを掬って、この桶に入れてくだされば結構です。ただ、網は水に付けると破れやすくなるのでご注意を」

「ふーん……なるほどね。それじゃあ、早速――」
と、魔王が隣に来た。何となくそれを見る。
彼女は網を何やら調べていたが、それを終えると網を水の表面、ボールの横に付け、
「――ひょいっと」
「お」
「あら」
「……」
早速一つ掬ってしまった。
その手に持った網は破れておらず、
「うふ、魔王様。お上手ですね。もしかして経験が？」
「ないわ。ただこれ、あんまり強度高くなさそうだし、出来るだけ表面の物を、接着面近くで掬ったら何とかなるかなって……」
「……スラルって、昔からインドアな遊びは得意だよな。これは判定が微妙だが……」
「べ、別にいいでしょっ！」
「……」
それを聞いて、同じ様にもう一度挑戦する。
網を水面に付け、ボールを掬う。しかし、
「……」
またしても破れてしまった。
その横で、魔王は何個かを掬っていたが、
「――あっ、破れた」
とうとう網が破れた。
しかし桶には幾つものボールがあり、
「おめでとうございます！　掬ったものはプレゼント致しますのでお持ち帰りください！」
「あ、そうなんだ。ありがと」
いえいえ、と魔物兵が畏まる。
水を切りながらそれを手に持った魔王は、しかし、
「……でもこれ、どうするの？」

「滅茶苦茶跳ねる」
言って魔王がそれを地面に落とすと、それが落とした高さと近いところまでまで跳ね、
「ほんとだ……これ、ゴム？」
「確かそうだ。どっから仕入れてきたのか知らないが、子供に人気らしい」
「……子供……」
「うふ、でも確かに面白いですね――って、あら？」
「……」
ハニ子に、それを見ていたことに気づかれる。
そして、
「ますぞえ様も気に入りましたか？」
「……」
だがそれは、掬わねければ手に入らない。
と、思っていた矢先のことだ。
「……いる？」
「……」
魔王が、こちらにスーパーボールを差し出してくれていた。
それを見て、迷い、しかし頷き、
「どうやら欲しいみたいです」
「ん、じゃあ上げる」
ハニ子の言葉を聞いた魔王が、こちらの手に小さなスーパーボールを乗せてくれた。
何となく、それをじっと見つめ、離してみると、
「……」
スーパーボールが、ポーン、と高く跳ねた。
それをどうにかキャッチして、何となくもう一度手放す。すると、
「……」
再び跳ねた。
それを見ていた皆が、
「気に入った、のか……？」

「うふ、どうやら楽しんでいるみたいですね」
「……」
それを聞きながらも何度も跳ねさせる。
単純だが不思議と飽きないものだ。そうやって跳ねさせていると、
それをくれた魔王はこちらを見て、
「……そ、楽しんでくれるなら上げて良かったかな」
と、微笑で言った。そのままレオンハルトの方に戻ると、手をつないで、
「それじゃ、またね」
「ま、適当に楽しんでくれ。暴れたりしなければ好きにしていいからな」
「お二方ともありがとうございます。――うふ、デート、楽しんでくださいね」
ハニ子が言うと、二人は少し顔を赤くしてその場から足早に去っていった。
それを見たハニ子が口に手を当て、
「うふふ、微笑ましいですね」
「……」
「あら、やっぱり気に入りましたか？」
そういう訳じゃないとは思う。ただちょっと面白いだけ。
しかし、
「……」
手の中の小さなスーパーボールを何となく見る。
それは、他者から貰った初めての物だ。
下らない筈の子供の遊び道具。それは理解している。
だが、その上で、
「……うふ。やっぱり、気に入ったんですね」
「……」
少しは大事にしてみようかと、何気なく思うますぞえであった。

「次は――ここ？」
「ああ」
ますぞぉとの何気ない遭遇の後、二人は大きな建物の前にいた。
中に入ると、そこは幾つもの客席がある巨大なホールであり、その前面には舞台が配置されている。それを見て、スラルがまず連想したのは、
「……劇場？」
「ああ。着いたらすぐ始まる。座るぞ」
レオンハルトが短く答え、手を引いて客席の真ん中まで連れて行ってくれる。
二人でその席に腰掛けながら、スラルは周囲を見渡し、
……劇場……何か見世物でもするのかしら……？
演劇か何かだろうか、と思う。知識の中のものでしかないが、人間の間、特に王族や貴族の中で流行っているのが、こういった場所で行われる舞台劇だと言う。
後は音楽、楽器の演奏であったり、歌であったり、娯楽は盛んなのだ。
どれもこれも、数百年前までには無かったものだ。町を見ていても思ったが、人間の文化の発展が感じられる。
しかし、やはり知識だけだ。どれも直接目にしたり、耳にしたことはない。
自分は魔王で、魔王城に引き篭もっているからだ。
だが、
「――っ！」
不意に音が来た。
幾つもの音の響き。低音の音を基点に、高音の音が幾つも重なり、それらは劇場内を反響して、こちらに音を届ける。主旋律となるのは笛の音だが、その印象はほんの僅かに弱い。
と感じた時だ。
「――その町は　多くの音が鳴り響く町」
「！」

声が通った。
女性の声だ。少しハスキーなその声は、綺麗で不思議な響きを持つが、
……この声。
しかし、聞いたことのある声であり、
「朝日が照らす　鳥のさえずりが響く」
その時だ。
舞台に作り物の背景が現れた。
それは人が暮らす建物を模したものであり、幾つもの人を模した背景が現れる。
しかしその中にあって、唯一、形ある確かなものがあった。
それは女性にしては長身の、青い髪の美女。その名は、
「……ケッセルリンク？」
思わず名前を呟く。
だが、
「風抜ける　鐘が鳴る　人の音が響く」
当人は反応しなかった。
ただ、息を吸い、声を上げて歌い始めた。手を挙げて、動きも入れて、胸に手を当て、演じるように歌う。
「――上手いだろ？」
「！　う、うん……」
不意に、横から声が来た。レオンハルトだ。
彼は正面を見たまま、苦笑混じりに、
「これをやるってなった時に、ケッセルリンクにそれを頼んだんだがな。似合うんじゃねぇかと思って。そしたら――まぁ、こんな感じで、予想以上だった」
「……確かに、凄い様になってる」
言う間もケッセルリンクは舞台上を舞い、歌い続ける。
「私の物語は　この町で始まる　私が生まれ育った　この故郷の町で」
曲が厳かなものから軽快なものに変わっていく。声が高く響く。

感情の色が響くいい声だ。
「一度は見て欲しい　私達の町を　そこに映る　不可思議な光景を」
その引き込まれる声を聞く。
ケッセルリンクはそこで、声を更に上げた。
「永久に続く　魔の始まり　我らが理想郷を」
「っ！」
歌の響きが長く続いた後、舞台の袖から幾人もの魔物や女の子モンスターが出てくる。
舞台が始まるのだろう。それを感じ取りながら、スラルはそれを見つめる。
「……とりあえず、ここではただ見入ってくれ。今日の為に滅茶苦茶練習したみたいだからな」
「今日の為に……」
それは、
「劇なんて見るの初めてだろ？　お前も、俺も。そのためにやってくれた。なら、絶対楽しめる――と思う」
「――――」
劇を見たことがない自分の為に、これを準備した。
彼も見たことがないと言う。だが彼も、己の為ではなく、それはきっと、自分の為で――
「……ま、でも他の奴は素人だし、脚本もありきたりだ。だから感想は甘口で頼むぜ？」
「……何よそれ」
そこで、思う、とか、最後にハードルを下げてくる辺りが彼らしい。
でも、それもまた、
「……ふふ、じゃあちゃんと見て、評価してあげる。これでも脚本にはうるさいからね」
言って、手を伸ばし彼の手を握る。
彼はそれに軽く驚いた様だったが、すぐに気を取り直したのか、苦笑して、
「……お手柔らかにな」

「……うん」
頷く。
しかし批評は難しいかもしれない。何故なら、
……私の為にやってくれたことだもんね。そんなの……嬉しくて、話の良し悪しなんて、解んなくなる……。
距離を詰めたくなり、彼の肩にそっと頭を乗せると、本格的に劇が始まった。

スラルの一撃

「それで、どうだ？」
「面白かった。話もそうだけど、特にケッセルリンクの演技が上手過ぎて見入っちゃった」
「確かにな。今回限りって話だったが、またやってもらうのもいいかもな。それこそ毎週の様に」
「レオンハルトの頼みなら断らないとは思うけど……すごく困った顔になりそう」
演劇を観覧し終えた二人は、劇場を後にしながら劇の感想を言い合っていた。
素人の作ったものとは思えないほどの出来栄えであり、特にケッセルリンクのそれはその道でこれからもやっていけそうな程に卓越しており、二人を驚かせた。
終わった後、こちらにお辞儀しながらも、少し恥ずかしそうにしていたがそれでも堂々たる振る舞いで舞台を後にしていたものだ。
……後で、お礼言わなきゃ。
スラルは思う。元より、今こうやって彼とデート出来ているのは、ケッセルリンクのおかげなのだ。
しかもそれだけに飽き足らず、先程の劇のようにデートの為に協力してくれる彼女には頭が下がる想いだ。ケッセルリンクには色々と複雑な気持ちもあるが、それがあってなお感謝の気持ちが湧き上がる。
このような楽しい時間を過ごせるきっかけを作ってくれた。それだけで以前のことを許して、さらにお釣りが出るほど。
そんなことを思っていると、
「次はここだ」
「！」
と、レオンハルトが手を引いて案内する先、次の目的地がある。
それは、スラルの知識があってなお、よく解らないもので、
「……？　これは……」

視線の先にあるのは、屋外の広場だ。
長方形の充分な広さがある広場で、周囲を石の壁と柵で囲ってある不思議な空間。
その広場には地面に書かれた線と、その中心にある身体の半分ほどの網で仕切られた陣があり、それらは重なることなく個別で広場に並べられている。
それを見て、頭の中にある知識を引っ張り出す。
……ここまでのを見る限り、これも人間の文化。それも最近のものよね……？
思案する。スラルは最近の文化や知識であっても、貪欲に仕入れているので、レオンハルト達が知っていて自分が知らないということはない。
ただ、実際に見たことがないものも多いので、その部分で彼らに劣る。なので言われれば解るかもしれないが、言われなければ少し時間がかかる。
だが、
……ん？　あれは――ボール？
その広場にあるものを観察していると、その隅に、籠に大量に入った黄色いボールが見える。
しかしそれは、先程のスーパーボール程小さくはなく、掌サイズのものだ。
例えるなら、りんごよりは多少小さい程度、といったところか。それが広場には転がっており、
「――あ」
と、不意に、頭に降りてきたものがあった。
それは知識が実際の光景に追いついたものであり、やはりスラルも知っているものだった。
故に、スラルは答えを口にする。
レオンハルトに向かって疑問するように、
「これ……確か――テニス、だっけ……？」
ああ、とレオンハルトが頷いた先、いつの間にか近くに来ていた魔

物兵から、とある物を受け取る。
それは、網の付いた柄であり、いわゆる〝ラケット〟と呼ばれる物であった。
「次は、遊戯の時間だ」
「あ、やっぱり……」
ほんの少し気が進まない気持ちになってしまうのは、申し訳ないが許してほしい。
何故なら、この遊戯は身体を動かすものであり、しかも相手は魔人の中でも特にそういう運動に長けたレオンハルトで、
「……私、こういうの苦手だから……レオンハルトの相手になるか微妙なんだけど」
その不安を口にする。しかし、レオンハルトはそれを受けてこちらに笑みを見せると、
「大丈夫だ。俺は味方だからな」
「え？　じゃあ、相手は――」
聞く。確かテニスという遊戯には相手が必要なのだ。
レオンハルトが味方になるなら、必然的にそれが求められることとなる。
誰、と疑問を口にしようとした時、スラルは奥から広場に入ってくる人影を見た。
それは真っ直ぐこちらに歩いてきている。
レオンハルトがそれを差し示し、
「相手は用意してある。俺達の相手は――」
と、レオンハルトが言う前に、人影が声を上げた。
その正面にいるのは、見覚えのある三つの影。その面子は、
「――わたくし達が御相手致しますわ！」
「……そうなるかな」
「……まさかこんなことになるとは」
キャロルとハンティに七星。そして、
「……」
プラチナブロンドの髪を持つ美女。その名をスラルは声に出した。

「――か、カミーラ？」
魔人四天王の一角、プラチナドラゴンの魔人であるカミーラだった。

テニス。
それは人間の貴族の間で嗜まれる遊戯である。
身体を動かす運動であり、小さな球を使った球技であるテニスは、一対一、もしくは二対二で行われ、ラケットと呼ばれる反発性のある糸目を張った柄を使って、ボールを相手のコートに入るよう打ち合う。
スラルの知識にあるのがそれだ。細かいルールも存在するが、今この場に於いては、それよりも気になることがある。
眼の前にいる、こういったことに参加しそうにない者の存在だ。
……レオンハルトが呼んだってことよね……？
本当に大丈夫なのか、という意味も込めてレオンハルトを見上げる。だが、
「……何でカミーラが」
……ええっ!?　知らなかったの!?
レオンハルトが戸惑った表情でカミーラを見る。しかしそれに答えたのは、彼の使徒であるキャロルで、
「わたくしが急遽お願い致しましたわ！」
「……ガルティアはどうした？」
胸を張って言うキャロルにレオンハルトが再度問う。カミーラを連れてこれたこと自体には指摘しない。多分、キャロルにツッコミを入れること自体無駄だろうと悟った。
それよりも――どうやら本来はガルティアが来る予定だったようだ。彼の姿がないことを訝しんだレオンハルトだが、キャロルはあっさりと、
「ガルティア様なら、屋台のメシを制覇してくるって言ってから帰ってきませんの。だから代役をカミーラ様に頼みましたわ！」

「……」
……あ、レオンハルトが〝どうしてよりによってカミーラなんだ……〟って頭抱えてる。確かにわかるけど。
しかしキャロルの方は特に他意はないのだろう。良かれと思って誘ったに違いない。その証拠に、レオンハルトに対して、咄嗟のフォローを行なったことを褒めて、と胸を張っている。
そんな様子を見たレオンハルトは息を吐きながら、今度はカミーラに視線を移し、
「……カミーラはいいのか？　というか、何をやるか解ってるのか？」
確かに解ってなさそうだ。しかし、カミーラは、その問いに息を入れると、
「……暇つぶしだ。少しだけ、付き合ってやる」
「……そうか」
……あ、諦めた。
レオンハルトが顔を抑える。溜息をつきながらキャロルの方を見ると、気を取り直した様に声を掛け、
「それじゃ、とりあえず始めるか」
「はい！　審判、実況、解説はわたくしと七星が担当致しますわ！」
「何で私が……」
「むっ、ちゃんとやらないと駄目ですのよ！　わたくしに勝ったのですから、テニスの熟練者と見做されますわ！」
「確かに勝ちましたが……お互いに始めて三日しか経ってないですよね……？」
「さあ、始めますわよ！」
言葉を無視された七星が、心なしか疲れたような表情で俯いた。だが、すぐに気を取り直して前を向く。切り替えが早い。やはりもう、慣れているのだろうか。言ってもしょうがないと悟ってるのかもしれない。主は止めてくれないし。
……というかキャロル。さっきはわたくし達が相手に――って言ってたけど、審判なんだ……。
それを思い、乾いた笑いが出る。キャロルはコートを挟んだこちら

と相手を見て言った。
「これより、レオンハルト様・スラル様ペア対――カミーラ様・ハンティさんペアによる試合を始めますわ！」
その言葉に従い、四人が配置につく。
最中、レオンハルトがこちらを見て、
「……ま、遊びだから適当にやればいい。初めてだしな」
「う、うん……頑張ってみるね」
運動はあまり得意ではないが、せっかくレオンハルトが用意してくれたものだ。
それにこちらとしても初めての遊戯であり、楽しみな気持ちがない訳ではない。やはり未知の体験というのは不安もあるが、楽しみでもあるものだ。
……よし、やり方は頭に入ってるし……頑張ろ。
ラケットを握り、気合いを入れるように手を胸の前に出して意気込む。
相手はどうなのだろう、と前を見てみると、そこには、
「……」
「……ええっと……が、頑張りましょう……？」
「……」
ハンティがペアとなったカミーラに気を使うように話しかけてる姿が見えた。
……うわぁ……あっちの方が大変そうだなぁ……。
急遽、ガルティアではなく、カミーラと組む羽目になったハンティはかなりやり辛そうだ。
それはひとえに、ハンティの境遇が関係しているのだろうが、やはりカミーラにはもうバレているのだろうか。自分達には、翔竜山の一件で、直接言及こそしなかったものの、半ば公然の秘密となっている。ハンティもそこら辺の事情を気負うこともあまりなくなっているし、多分だが、聞かれたら普通に答えてくれるだろう。それくらいの信頼関係はあると思う。
しかしそれでも、カミーラは特別だ。ドラゴンにとっては。本人の

性格も相まってやり難いことこの上ない筈。
心の準備も何もなくペアを組むことになったハンティに同情しつつ、スラルは前を見た。
こちらの背後、斜め後ろの場所にはレオンハルトがいる。
そしてこちらの前方、ネットと呼ばれる仕切りを挟んだ先。斜め前にカミーラがおり、レオンハルトの対角線上となる位置にハンティがいる。
それはルールに基づいたものだ。ネット脇にいるキャロルが、
「さあ、最初のサーブはレオンハルト様からですの！　いったいどのような素晴らしいサーブを放つのでしょうか!?」
「素晴らしいのは確定なんですね……とはいえ、レシーブはハンティですか……」
そう。テニスはサーブを打つ方と返す方、つまり最初のレシーブを行う人が決まっている為、このような形になる。
最初のサーブはレオンハルトで、返すのはハンティと、そういうことだ。
「それじゃあ、行くぞ――」
レオンハルトが、球を頭上にトスした。そして右手を振りかぶると、
「――っ！」
球が消えた。
「!?」
ハンティがそのサーブに目を見開き、追いすがろうとするも間に合わず、球が後ろに転がっていく。
それを見て、満足そうにレオンハルトが、
「まずは一点だな」
口端を釣り上げる笑みを見せた。
……何か嫌な予感が……！
何というか、何だろう。これ、ちゃんとしたテニスになるんだろうか、とそんな危惧を抱いた。

「おいおい、サーブくらい返せよ。ラリーが続かないだろうが」
「ふざけっ――！」
言って、再び高速の球が来た。
今度は内側に向かうものであり、ギリギリで追いつくも、
「くっ……！」
それを返すことは出来ない。ラケットに当たるだけで、それは見当違いの方向に飛んでいく。
二点目を取られたところで、ハンティは叫んだ。
「ラリー続けたいんなら、本気出してんじゃないよ!!」
「ん？　別に本気でも何でもないんだが……ふっ、そうか。お前には本気に感じるのか」
……ムカつく……！
歯を噛みしめる。何というか、模擬戦の時と同じようなやり取りだ。
実際こちらを煽ってくるような事はよくある。それは自分のやる気を出させようとしているのだと、長年の経験から判断出来るが、理解していたとしてもムカつくものはムカつくのだ。
……そっちがその気なら……！
魔人として力を使ってくるというなら、こちらも己の力を使って対抗するしかない。
「それじゃ、行くぞ――」
再び、レオンハルトがサーブに入る。左手で球を浮かせ、右手に持ったラケットで、それを弾く。
……来た！
高速の球が飛来するより早く、ハンティは魔法を人知れず発動した。
それを使って予測される球の軌跡に移動すると、それを解除し、
「――ここ……！」
「なっ――!?」
レオンハルトのサーブを返球した。

目を見開いて驚くレオンハルトが、その球を追いかけ、再びラケットを振るう。
しかしそこでも魔法を発動して移動すると、
「ほいっ」
「っ！」
球がネットを越えた瞬間に、それを相手のコートに向かって叩き落とした。
転がっていく球を見て、レオンハルトの方を見ると、
「これで、一点返したね……」
「……瞬間移動使ってんじゃねえ――！」
怒ったようにツッコミの言葉を入れていた。

「汚えぞ！　魔法使うなんてありかよ！」
「だって、こうでもしなきゃ勝負になんないし。でもまあ、使われたら負けちゃうからやめてくださいって言うなら、やめてもいいけど？」
ハンティが意地の悪い笑みで言う。それを見て眉根を寄せたレオンハルトが、
「……上等だ」
言って再びトスを上げた。
そして先程までよりも力を込めたように、
「本気で行くぜ――！」
「っ！」
サーブを放った。
それは先程よりも高速のもので、打った瞬間にはコートに打球音が鳴る程である、
しかしハンティも瞬間移動でそこに先回りし、
「返せない球じゃない！」
球をコートの反対側に返す。
するとレオンハルトは足を踏み込み、全速力を初速から発揮し、それに追いついた。

「そっちのもな！」
と球を返す。
すると、だ。
「っ、あ――」
ハンティの動きが止まる。
何故なら、球の行先が、
「……」
カミーラの方に向かったからだ。
「おおっと、ここでとうとう球がカミーラ様の元に！　記念すべき初ショットになりますわー！」
「カミーラ様！　そこです！」
キャロルが実況する。さすがに七星も、主の初ショットとなれば高揚するのか、手を握って声援を上げた。そんな中、カミーラはラケットを無造作に振ると、
「……!!」
球が一瞬でかき消えた。
魔人の膂力で放たれるショット。それも魔人四天王に名を連ねるほどの上級魔人のそれだ。レオンハルトと同じ様に球が消えてもおかしくはない。
だが、その球は、コート内ではなく、コートの横に飛んでいき、
「――!?　カミ――」
「あ」
七星の横腹に思い切り突き刺さった。彼の身体が、球の衝撃で吹き飛び、壁にぶち当たる。
壁にヒビが割れ、そのまま壁の一部が陥没した。
それを見ていた皆は、唖然した様に固まる。
だが、キャロルだけは笛を吹き、
「――レオンハルト様チームに1ポイント！」
点数が入った。
瞬間、レオンハルトはキャロルを見て叫んだ。
「言ってる場合かっ!?」

「えっ？」
キャロルが首を傾げる中、壁にぶち当たって地面に倒れ込んだ七星は、しかし何とか立ち上がろうとしながら、
「ぐっ、おおぉ……！　か、カミーラ様……ラケットの面の、向きには、ご注意を……はぁ、はぁ……」
「……悪い」
さしものカミーラも、思わず使徒を傷つけてしまったことでバツが悪くなったのか、小声ではあるが素直に謝る。
レオンハルトもそれを見て息をつき、
「……とりあえず、後一点でこのゲームは取れるな……」
「やっぱり、嫌な予感しかしないんだけど……」
スラルが呟く中、レオンハルトが再びサーブの構えを取る。
そしてそれを放つと、
「――行くぞ！」
「っ、来い――!?」
ハンティが目を見開く。
球が速いから、ではない。いや、速いことに変わりはないのだが、それよりもおかしいことが目の前で起きた。
それは、
「何と、レオンハルト様が放ったサーブが、二つに別れましたわ――！」
真っ二つに分かたれた球が飛来する中、レオンハルトはキメ顔で言った。
「――俺に、斬れないものはない」
「だからって、球を斬るなあ――！」
ハンティは瞬間移動で、両方の球を拾いながら叫んだ。

スラルは眼の前の光景を見て、簡潔に思った。
……何これ。
「ぐっ……これくらい……あたしにだって……！」

「はっ！　そんなスマッシュじゃ俺の足元にも及ばねぇ！　これが本当の、スマッシュだ――!!」
「……段々と、慣れてきたぞ……！」
コートの中で、球が高速で行き交う。
その球は、時折二つに別れたり、それを瞬間移動で拾ったり、意味のわからない曲げ方をしたり、球が壁や地面にめり込んだりと、凄まじい戦いを演じている。
そしてそれを眺めて、強く感じることが一つある。それは、
……多分だけど、これ――テニスじゃない気がする……！
普通のテニスで人が吹っ飛んだり球が消えたりするなど、まずないだろう。これは多分、テニスに似た何かだ、そうに違いない。
それともうひとつ、スラルには不満というか釈然としないことが一つあった。自分の持つラケットを見詰めながら、
……まだ一回も、ボールに触れてない……。
ラリーが滅茶苦茶すぎてボールに触れることすら出来ない。レオンハルトやカミーラが魔人としての身体能力にものを言わせた凄まじいショットを打っているためだ。
ハンティの方もやたらと上手く、瞬間移動と華麗なラケット捌きで、レオンハルトのボールを何とか返し続けていた。
そしてスラルは、そのラリーを見るのみだ。どうせなら、一度くらいはラケットにボールを当ててみたいと思うのだが。
と、思った矢先、
「くっ……！」
「！」
ハンティが打ち損じたボールが、高く跳ね上がった。
それはふわりと、曲線を描いてこちらに落ちてくるもので、
……チャンス！
つい数秒前までほとんど呆れていたが、実際にボールが飛んでくるとちょっとテンションが上がるのは単純過ぎるだろうか。しかし、一度くらいは打ってみたい。ひょっとしたら、面白いかもしれないし。
そう思い、ラケットを振りかぶる。

「――やっ」
短い声とともに、ラケットを振ってボールを飛ばした。
瞬間。
「あっ」
「――!?　まっ――ぐおおおおおおおっ!?」
ボールは一瞬で、光を伴いながら弾け飛んだ。
超高速のそれは、コート内ではなく、七星の方に飛んでいき、彼を吹き飛ばす。
しかし球は彼にめり込み、勢いは衰えず、そのまま壁に激突し、爆発したような轟音とともに壁を破壊する。
「が、はっ……わ、わた、しが……一体、なに、を――」
七星はクレーター状となった壁にめり込み、白目を剥いて気絶した。
それを無言で目の当たりにした周囲の者達は、その惨状に絶句する。
そんな中、キャロルが笛を吹き、
「……スラル様の勝ちですわ」
「……い、異議なし」
「し、七星が……」
ハンティとカミーラが末恐ろしいものを見たように声を震わせる。
とんでもないことをしてしまったが、故意ではないことを説明しようと声を上げる。
「ちょ、いや、違うの！　わざとじゃなくて――」
「さすがだな……あれほどの球がさすがに打てん。対戦相手を殺す殺人スマッシュ……いや、魔王の一撃だな……これが必殺技か……」
「わー！　だから違うってば――!!」
必死に弁解しようとするも、背後に近づいてきてそう言ったレオンハルトに、スラルは涙目で叫んだ。
「これが、テニス……いえ、スラル様の〝照日須（テニス）〟ですのね……！」
「変な名前付けないで――!?」
こうして初めてのテニスは終わった。

一方その頃。
「はぐ、もぐ……ん、やっぱここの屋台のメシ、いけるなぁ。ソースの味が利いてて美味え。そんじゃあ、次は――」
と、ガルティアは用事を忘れて、大通りで屋台をはしごしまくっていた。

二人の想い

夕日に照らされた町がある。
そこはレオンハルトが、スラルとのデートの為に自軍を総動員させて作った魔物の町だ。
その中心にある噴水広場。大通りに連なり、待ち合わせにも使われたその場所に、再び二人の人影があった。
スラルは噴水の側にあるベンチに座ると、大きく伸びをしながら、
「んー……！　本当に色々あったなぁ……この町」
「疲れたか？」
レオンハルトが聞く。ここまでほぼ全ての施設を回らせたのだ。さすがに忙しなかっただろうか、と少し不安になる。
しかしスラルは首を横に振りながら、苦笑をレオンハルトに向け、
「疲れてはないわ。ただ、色々と目移りしてはしゃぎすぎたかも。――楽しかったから」
「ん……そうか。それなら良かった」
「うん、とっても良かった。レオンハルトと、頑張ってくれた皆には感謝しないとね」
「ああ、それは同感だ。後で褒美をやらないとな」
軽く笑みを入れて言うレオンハルト。実際、この後はこの町を使った宴会の許可を出してあるので、おそらく朝までどんちゃん騒ぎだろう。それが褒美と言えなくもないが、気持ち的にはもっと褒美を与えてもいいくらいだ。
他の、付き合ってくれたケッセルリンクやカミーラ達には、何かお礼しようと心に決める。
デートは上手くいっているし、最初の様なぎこちなさも無くなってきた。
筈だったが、
「……」
「……」
何故かそこで会話が途切れてしまう。

いや、お互いに、何となくではあるが要因は解っている。
そろそろ日も落ちて、暗くなってくる頃合い。町の中も殆ど見て回った。
なら、そろそろお開きにするか、と。そんな雰囲気を感じ取っているのだ。
しかしレオンハルトとしても不思議と、もうちょっと一緒にいたい様な、そんな気持ちが湧き上がってきている。
ならどうするか。とりあえず適当に話を長引かせてその間に考えようか、などと、
「……あー……そういえば、さっきの――」
「れ……レオンハルトっ！」
そう思い、声を掛けたところで、スラルに差し止められる。
彼女は近くに見える、背の高い大理石の建物を指差し、
「あ、あれは何？　あれは行ってないよねっ！　私、あそこに行きたい！」
「ん……ああ、あれか……あれは……んん……」
「いいからっ！　ほら、早くっ！」
レオンハルトが歯切れの悪い様子で唸る。
だがスラルは、そんなレオンハルトをせっつき、強引に手を引いて連れて行かせようとする。その態度に折れたのか、何ともいえない表情で迷っていたレオンハルトが、やがて小さく息を吐くと、
「……なら行くが――最初に言っておくぞ」
「な、何？　急に改まって……」
真剣な表情で、少し気圧された様子のスラルに言うのは、ある種の宣言であり、予防線だ。
それは、
「行くと決めたのはお前だからな――」
「えっ……それはどういう……？」
スラルは、その言葉に、若干不安になりながらも付いていき――そして直ぐにその理由を知ることになった。

そこは、広い高さのある空間だった。
全体を大理石で作った一面の白の空間は、とあるもので更にその白さが増している。
視界を軽く塞ぐ形で発生しているものの正体は――湯気だ。
空間の中心にある熱いお湯の入った槽や、床から発生する白い湯気。それらが存在する場所の名は、
――大浴場。
「……」
スラルは、その浴場の一室、着替え用に区切られたスペースで、未だ躊躇をしていた。
それもそのはず、今から行うのは、
……れ、レオンハルトと……こ……混浴……！
まさか、まさかの事態だ。
まさかデートを引き伸ばす為の時間稼ぎに咄嗟に指を指して行きたいと言ってみただけの場所が、公衆浴場であったとは夢にも思わなかった。
この状況もそう。まさかのレオンハルトとの混浴。羞恥でどうにかなりそうな時間。
しかしその一方で、どこか期待のようなものを感じる自分もいて、結局ここまで来てしまった。
いつもの服を脱ぎ、用意されていた白い湯着を身に着けると、スラルは自分の身体をしげしげと眺める。
……おかしなところ、ないよね……？
ある意味で〝無い〟が、そういう意味ではない。
湯着を着ているとはいえ、レオンハルトに身体を見られるのだ。なら念入りにチェックしておきたいと思うのが乙女心だろう。
「というか……普通に恥ずかしいなぁ……」
裸ではないにしろ、湯着は腕や太腿など、それなりに露出がある上、身体のラインが出る。それはもう、殆ど見せている様なものであり、彼に中身を予測されてしまい――

「……やめよ。これ以上考えるともっと恥ずかしくなるし……」
そうすれば入れなくなってしまう。来たいと言ったのはこちらなのだ。急にやっぱやめる、と言うのも何だか嫌な感じだろう。
「……よし」
スラルは手をぐっと握り、覚悟を決めた。
浴場へと繋がる戸を開き、そこに足を踏み入れる。
すると早速、
「――！　ん、来たか……遅かったな」
「っ!?　れ、レオンハルト……！」
何でここに――ではない。当たり前だ。
ここは混浴で、貸し切りで、今まさにレオンハルトと一緒に来たところなのだから。決意もした。彼がいても動じない。いつも通り接しようと。
しかし、だ。一つ言わせてもらうとしたら、
……な、何よそれ!?　ほ、ほ、殆ど裸じゃない！
レオンハルトが着ている湯着。男性用であるそれは、下だけを隠すものであり、上半身に関しては裸だ。彼の肉体か惜しげもなく晒されており、
「……まぁ……とりあえず……て、適当に身体洗って、入ったらどうだ？」
「そ、そうね……そうする」
言ってささっと端の方に移動する。半分逃げる様に、撤退した形だ。意味は一緒。精神的に結構きてるので許してほしい。
そうして浴槽とは別の、お湯の出る湯口の湯と、石鹸を手に取りながら、身体を洗っていく。この際に、何気に湯着をはだけなければいけないので、結局背後に注意しながらも内心では彼のことを考えていた。
……レオンハルトの身体……すごい……！
何がどう、という訳ではないが、とにかくすごい。
身長が結構ある彼の身体は、女性の自分より当然大きいし逞しい。服を着ていると割と細身に見える彼だが、その実、中身はかなり鍛え

られており、まさしく、無駄のない理想的な筋肉が備えられている。機能美の様なものを感じるのだ。おそらくは剣術、自分の戦いに最適な形を取っているのだろうと推測出来るが、この高鳴りはそういう意味に加えて、彼だからという要因が強い気がする。というか間違いなくそうだ。

頭の中が、先程見た彼の身体の記憶と、そこから連想される様々な想いで一杯になる。まだ湯に浸かっていないのに、身体が熱くなってきた。

と、そんなことを延々考えている間に身体を洗い終えてしまう。いつもよりかなり早く終わってしまったのは、別のことを考えながら手だけは高速で動かしていたからだろうか、と思う。

……い、一応、念入りに洗って……ん、大丈夫、の筈……。

再び自分の身体を確認する。問題がなさそうだと頭で理解すれば、とうとう、

「……それ、じゃあ……は、入るからね……」

「……ああ」

レオンハルトの場所まで戻り、声を掛けながら湯に足を浸からせる。

お湯の温かさを感じながら、徐々に身体も沈めていくと、

「……熱く、ないか？」

「う、うん。大丈夫」

こちらを見て気づかいを掛けてくれるレオンハルトに振り向きつつ、問題ないことを告げる。

そして人ひとり分くらいの距離を開けて、そのまま浴槽の縁にもたれかかった。

思うのは、

「いい湯……」

と、思わず口に出る。それくらい心地よいものだ。

城にも浴室はあるが、それに勝るとも劣らない。むしろこちらの方が熱く、心地良い気さえしてくる。

それはレオンハルトも同感なのか、

「そうだな。城のも悪くないが、俺はこっちの方が好きかもしれん」
「そう、かも……というか、よくこんな大規模なお風呂作れたわね……？」
「……元々作る気は無かったんだけどな。ここには別の何かを建てるつもりで、他の場所と同じ様に地面を掘らせていたんだが、どこかの馬鹿が滅茶苦茶深い穴を掘りまくって、ふざけんなって元に戻させようとしたら……そこから温泉が湧き出た」
「え、ええ……なにその幸運……？」
怪我の功名と言うべきだろうか、失敗から生まれた温泉だということとか。そのおかげでこうやって気持ちよくなれるのだから良いことではある。
しかしレオンハルトとしてもそれは悩みのタネの様であり、縁に肘をかけながら、上を見ると、
「結果的に成功、良い結果を引き起こしたからな。俺としても何も言えなくなった……」
「あはは……まぁ、確かに感謝したいくらいね。……ほんと、この町はすごいなぁ……」
本心からそう言う。正直デートに誘うと決めてから一ヶ月で、ここまでの物が出来るとは思ってもいなかった。
掌でお湯を掬いながら、彼を見て、
「……本当に、ありがとね。レオンハルト」
「……気にするな。やれることをやっただけだ」
お礼の言葉は素っ気なく受け取る。それが当然だ、という態度で。
それを見て、
……そう、だよね……レオンハルトにとっては当然のことだし……。
ほんの少し、ほの暗い気持ちになる。
彼は魔人で、自分は魔王。そんな相手からの誘いだ。当然、やれるだけのことはやるだろう。
勿論、そういう仕事の様な気持ちで用意してくれた訳じゃないのは分かる。ここまでのデートでも、彼は本当にこちらのことを思って

やってくれたのは伝わった。
しかしそれは、自分の求めるものではない、と思う。大切にされているのは理解出来るのだ。その一方で、
……私はきっと……女性としては見られてないんだろうなぁ……。
諦観にも似たそんな考えが浮かぶ。
大切にはされていても、女性として見てもらえていない。そう思う理由は幾つもあった。
自分はどこまでいっても彼の上司である魔王だし、そういう素振りは全く見せないし、レオンハルトの好みからしても、自分は外れてるだろう。
きっとこの後も、風呂から上がれば解散することになる。
デートは終了。楽しい時間は終わりなのだ。
今も、こちらは胸が強く高鳴ってしょうがないのに、彼は全く動じず、普段どおり冷静な態度を貫いている。いつもより距離が近く、薄着の自分がここにいるのに。
「……」
思い、何となく距離を詰めてみる。
人ひとり分の距離を、限りなくゼロにしようと徐々に距離を近づける。彼の身体が近くなり、心臓がバクバクと強く脈動する。
……もうちょっと、もうちょっとだけ……。
未練がましく、彼に近づいていき、そして身を寄せる。
すると反応が来た。
「……っ、スラル……」
彼がこちらに気づき、身体を一瞬だけ震えさせた。
やはり、
「……ごめん……その……こうさせて」
「――っ」
自分をそういった対象で見てくれないのだろう、と。
彼の腕に身を寄せ、顔を見上げる。
そこには、レオンハルトの軽く驚いた様な、こらえるような表情があり、こんなことをしてくる自分を受け入れ、我慢してくれてるのだ

と、そう思った。
だが、
「〜〜〜っ！　スラル！」
「えっ、あ、はい！」
急に大声で名前を呼ばれ、規則正しい返事をしてしまう。
そしてレオンハルトは立ち上がり、湯から身体を上げると、そのまま素早い動きでこちらに背を向け、
「……先に出る。出る……が――」
そのままこちらをちらりと見て、
「……この後……お前の部屋に、行っていいか？」
「――えっ？」
不意の言葉に心を跳ねさせる。
いや、部屋に彼が来るくらい、日常茶飯事だ。別段驚くようなことではない。
しかし、このデートからの流れで、態々部屋に行くことを確認してくるのは、
……まさか、だよね……？
期待のようなものが、心を揺さぶってくる。そして口は自然と、
「……う……うん……別にいいけど……」
と、部屋への来訪を了承していた。
言うと彼は、再び正面を向いて、
「……じゃあ、ここを出たら直ぐに向かうからな。……お前も、あまり長く浸かりすぎるなよ」
「わ、わかった……」
返事を聞くと、そのまま浴場を出ていってしまう。
心が落ち着かない。彼の言葉は、いったいどういう意図でのことなのかと頭が回り、それに合わせて鼓動が早くなる、
だが、何にせよ、
「……私も出ようかな」
さっとその身を湯から上げ、スラルは脱衣所まで小走りで向かった。

――そして、レオンハルトとスラルは日の落ちた夜の町から出ると、真っ直ぐに魔王城のスラルの私室まで行く。
道中、会話はない。
だがその足取りは、急ぎすぎというくらいに早く、レオンハルトの表情は仕事の時の様に真剣で、不思議な程であった。
そして、部屋に着くと、
「……スラル」
「な、何……？」
薄暗い部屋の中で、レオンハルトは名前を呼ぶ。
スラルが彼の顔を見上げて聞く体勢を取ると、
「……今日のデートは……あー……どうだ？」
と、何やらぎこちない様子で聞いてきた。
彼の様子がおかしいのが気になるが、問いには答えなければならない。
なのでスラルは、自然と思ったことを口にする。
「……そうね。――とっても楽しかった、かな」
そう、楽しかった。
彼との初めてのデート。ドキドキして胸がいっぱいになる。そして安らぎを得られた時間。
「初めての体験ばかりで、それを貴方と一緒にすることが出来て」
魔王である自分では、到底体験出来ないであろうことをさせてもらった。
「……夢みたいな……時間だった」
だけど。
足りないものがある。
実現出来ないことがある。
それを思い、
……あ、だめ……。
涙がこぼれそうになる。

それは、楽しい時間が終わるというのもそうだが、どこか悔しさが滲み出たもので、
「……だから……ありがとう」
としか言えない。
それ以上を口にすることは、怖くて出来ない。
彼に想い自分の想いを告げることは、迷惑になるかもしれなくて、拒絶されるかもしれなくて。
そして、
「今日は、楽しかった――」
何も言うことが出来ない――臆病な自分が嫌いだ。
それを理解っていて、なお何も出来ない臆病な自分が嫌になる。
だからこそ、
……夢は終わり。
臆病な自分に、これ以上のことが出来るはずも、起こるはずもない。と、そういうことだ。彼に向かって、必死に笑みを向ける。
しかし、これが中々難しい。笑おうとしているのに、今日を綺麗に終われるようにしようと、そう思っているのに、
「あ、れ……？」
それに反して、目元からは涙の粒が溢れ、
「っ……ごめん……何だか急に……！」
目元を拭ってそれを拭き取る。
しかし涙が溢れるのは止まらず、
「ごめん……なさい……」
彼に向かって謝る。こんな終わり方にしてごめんなさいと。
これでは彼も、どうしていいか解らないだろう。彼を困らせてしまっている。
そんな自分がまた嫌いで、再び彼に謝ろうと顔を見上げる。
だが、
「……スラル」
不意に名前が呼ばれた。
彼の瞳が、こちらをまっすぐに見詰めている。その上で、彼は言葉

を続け、
「俺は――お前の泣き顔が嫌いだ」
「――っ」
告げられた言葉にまた泣きそうになる。
彼に嫌い、と言われただけで胸が急激に苦しくなる。
しかし、
「だから……お前には笑っていてほしい」
と、言って、彼は距離を詰めてきた。
「何……を……」
「……いいから、じっとしてろ」
そして彼は、こちらの顎に手を伸ばし、上を向けさせると、
「――――」
「んっ――!?」
唇を、重ねられた。
……え、あ……嘘……。
彼の感触が、唇から伝わってくる。どうにも現実味のない感触が。
しかも初めてであるからよく解らないものだ。
しかしそれは今、現実として自分の身に降り掛かっており、心がかき乱される。
ようやくそれを現実と認識しはじめた頃、しかし唇は離れていき、
「……どう、して……?」
出てくる言葉はそんなものだ。疑問が先に来る。
何故なら彼は、自分をそういう対象として見ていないようで、
「何で……そ、の……口に……」
キス。という言葉は出せなかった。
しかし意味は伝わったのだろう。彼は軽く息を入れながら、目を細めると、
「……分からないか？　なら、もう一度するぞ？」
「っ！」
その言葉に反応してしまう。
だがそれは当然、嫌、という意味ではなくて、

「……何で、私にしてくれるの……？」
聞く。しかし、
「――んっ！」
再び唇を重ねられる。
今度は感触をしっかりと感じられた。熱く柔らかい感触だ。
それはすごく、心地よいものであったが、それもまた離れていき、
「……分からないなら、もう一度するって言っただろ」
「っ……ん……そんな……だって……」
言う。それは内心の不安の吐露であり、
「私のこと……女の子として見てないでしょ？　私、小さいし……ケッセルリンクやあのカラーの子みたいに、大きくもないし……色々と面倒で――」
しかも、
「私、魔王なのに……」
「……んなの、関係あるか」
だが、そんな言葉はばっさりと切り捨てられる。
レオンハルトは少し強い口調で、
「俺は別に……魔王としてのお前を想ってる訳じゃねえ」
「で、でも――んんっ」
またしても唇を重ねられる。
今度は彼の腕がこちらの背に回って、深く抱きしめられながらのものだ。彼のしっかりとした熱く堅い身体に、己の身を包まれ、唇の感触を伝えられる。
そしてさらには、お腹の辺りに押し上げられるような熱を感じ、
……あっ……これって……。
それを認識した途端、下腹の辺りが締め付けられるような、そんな熱が感じられる。
彼はまた顔を離すと、抱きしめたままで、
「確かに、俺の好みとは外れてるかもな。……だが、それも関係ねぇ。まだ分からないか？」
「それ、は……」

言外に、もう一度するぞ、と言われている。
その言葉に顔がまた熱くなるのを感じながら、
「……まだ、分からない。だから――んっ」
という言葉は、再び口で黙らされた。
今度は、彼の舌が口内に侵入してくる。舌と舌が絡み合い、口を強く吸われる。
彼の腕はこちらの背中を撫で回し、時折後頭部や頬、腰の辺りを撫でながらこちらの身を内側に引き込んでくる。
全身で彼を感じて、
……んっ、レオンハルト、レオンハルトっ……！
やはり、誤魔化せない、
心の中で自分の想いを、はっきりと言葉にする。
それは、
――レオンハルト……好きっ、大好きっ……！
長年のその想いを強くぶつける様に、彼の身体に強く抱きつき、擦りつく様に身を寄せる。もっと近く、もっと近く、彼を感じたい、感じさせてほしい、と。彼の好意を感じる様に、自分の好意を感じ取れる様に、彼の首に手を回した。

想いを感じさせる。
レオンハルトは、抱きしめたスラルにひたすら、自分の想いをぶつけていた。
彼女の小さい身体に手を回し、キスを落とし続ける。
……やめられねぇ……。
思う。このようなキス。今まで幾らでもしてきた、と。
昔は、気持ちいいと思う以上のものはなかった。ただの、性欲を解消する手段の一つでしかなかった。
しかしそれは、好意を向けられることで、全然違うということが理解った。それが以前までの話。それだけでも心地良いものであったが、今回のは、

……あぁ……これは――何だ？
今まで自分が行なってきたキスとは、レベルが違う。
興奮が湯水の様に溢れてきて、冷静でいられない。余裕がなくなったのは、先程の風呂に入る時からだが、キスをしてからというもの、心臓が強く脈打ち、血が熱く滾っている。
情けないと思う。彼女の泣き顔を見て、それを止めたいと、こうしたいと思ってやったことだが、彼女を気遣う余裕が無くなってきている。
気がつけば自分の手は、彼女の身体を撫で回している。服の上からでも感じられるすべすべで柔らかな女の子の感触に、熱がどんどんと高まっていく。
お互いに息も絶え絶えになりながら、深くキスをすると、スラルがこちらに縋り付いてきて、
「レオ、ン、ハルトぉ……！」
「――――っ！」
熱っぽく名前を呼んできたことで、更に興奮が加速する。
駄目だ、これ以上は本当に止められなくなる、と。そこで一度、息継ぎするように口を離す。
お互いの口から出た一本の粘液の線が、伸びては落ちる。お互いに息を入れながら、
「はぁ、はぁ……悪い。もう、抑えられそうにない……」
言う。何とも情けない宣言だ。
ギリギリのところで理性を留めおきながら、こちらを見上げるスラルの肩を掴み、
「……お前を、抱いても……いいか……？」
それを何とか口にする。それだけで、喉が乾いていくようだ。これで拒否されたらどうすればいいだろう、と思う。
だが、スラルは顔を下に向け、ちらちらとこちらに視線を向けながら、
「……いい、よ」
「……！　スラル……」

「レオンハルトのここも……すごいことになってるし……」
「っ……！」
不意打ち気味に、スラルがこちらの膨らみを撫で擦ってくる。甘く緩やかな快感にたまらない気持ちにさせられるが、それをぐっと堪えて、彼女の言葉を聞く。
「私のこと……ちゃんと、女の子として想ってくれてるんだよね……」
「ああ……そうなるな……」
「だったら……いいよ」
だから、と。
「レオンハルト、私を――抱いて……」
「！　～～～っ！　スラル……!!」
「あっ……れ……レオンハルト――」
上目遣いで恥ずかしそうに、〝抱いて〟と、口にするスラルの言葉。その瞬間が理性の最期であり、内から溢れる衝動のままに、彼女をベッドに押し倒した。

そして、デートは終わった。
町ではレオンハルト軍の者達が宴会を開いて、酒と食事を楽しみ、それにガルティアやケッセルリンクなどの縁のある者達が参加し、さらなる盛り上がりを見せる。
――だが二人の時間は、まだまだ終わっておらず、宴会と同じく夜通し続けられることとなった。

事後

ケッセルリンクの朝は、夜の延長線上にあるものだ。
カラーの長であった頃から基本、夜型の生活を送っていたため、大体は朝方になって寝ることとなる。
それも最近になっては少しばかりの改善を行なっているのは、他の皆との時間を合わせるためだ。
魔軍参謀であるレオンハルトが回してくる仕事は、いつ行なってもよいが、やはり他の者が寝静まった夜中だと不都合も多い。
そして何より、身内との交流が理由としては大きい。ケッセルリンクとしても、主やレオンハルトなど、親交深い者達との縁は大事にしたいものだ。
しかし、活動時間を日中に変えたとはいえ、夜の方が得意なことには依然変わりない。
ゆえに朝まで続く宴会であっても、特に支障はない。魔人となって睡眠を必要としなくなったが、それを差し引いても楽なものだ。
……随分と、賑やかな時間だったな。
周囲、町の広場や先の大通りなど、様々な場所で魔物兵や女の子モンスターが地面に寝転がっている。その殆どがレオンハルト軍と彼のファンクラブの面々だと聞いたが、噂を聞いてやってきた他の魔物もおり、皆一緒になって馬鹿騒ぎを行なっていた。
だがそんな彼らも、今は酔いつぶれて、または睡魔に負けてしまっている。残っているのは、ほんのごく一部の魔物と、睡眠を必要としない魔人や使徒のみである。
しかしその者達も酒で完全に出来上がっている者が殆どだ。一番酷いのはレオンハルトの使徒であるキャロルであり、
「次はこのお酒ですわー！　七星、飲み比べ致しますわよ！　負けた方は次のお酒を一気飲みということで！　勝ったら二杯いってもらいますわ！」
「……もうやめませんか？　さっきから飲みすぎで発言が滅茶苦茶に

――」
「お黙りなさい！　七星の癖に！　勝ち逃げは許しませんわよ！
あ、こら魔物将軍！　それはわたくしが育てたお肉ですわ！　風穴開けますわよ!?」
言葉とともに発砲し、魔物将軍が悲鳴を上げる。ついでに通りすがりのますぞえの使徒、ブラッドとピットが流れ弾を食らい、そちらも悲鳴を上げる。容赦がないというか、レオンハルトというストッパーがいない所為か、かなり暴れているようだ。
それを見ながらグラスを傾け、ワインを少し口に含む。お酒特有のアルコールと、葡萄の香り、味を楽しみ、
……うむ、たまにはお酒も悪くないな。
カラー時代は殆ど飲むことはなかったものだ。長の仕事が忙しかったのと、個人的にもそこまで飲むのが好きという訳でもなかった為だが、今日は皆、宴会ではしゃいでおり雰囲気的に飲む感じであった為、皆に合わせた形だ。
そして今日という日に限っては、ケッセルリンクも少し飲みたい気分であった。それは、
……主とレオンハルトは……上手くいってるだろうか……。
この町を作る原因ともなった、二人のデートの結果を思う。
聞く限り、雰囲気も悪くなく、それどころか甘い雰囲気を醸し出していた、と二人を見た女の子モンスターや魔物兵は証言しているし、夜には二人で城に帰っていったというから、おそらくは上手くいったのだろう。
そうなると、自分が主と相談して計画した今回のデートは、完全に目論見通りにいったと言えるだろう。主の想いは成就し、レオンハルトもそれを受け入れた。喜ばしいことだ。
ただ、ほんの少しだけ、頭の片隅で思うのは、
……私が相手であっても……彼は今回の様に色々と画策してくれたのだろうか……？
おそらくそうしてくれると思う。だが、確信にまでは至らない。
自分は主ほど関係を深めていないのだ。ある意味では先を行く感

じにはなったが、想いの強さでは主が上だろう。
ならばレオンハルトは、自分とデートをするとなったらどういった事をしてくれたのか、と気になってくる。今回の様に、色んな場所を見て回り、楽しい時間を提供してくれるのだろうか。最後にはあの時の様に、身体を求め――
……っと、少し、思考が行き過ぎたな……。
少し酔ってしまったのかもしれない。グラスを置いて息を入れる。
だが、それを考えてしまう程、未だに自分が彼を想っているのは確かだ。
と、そんなことを考えていたら、こちらに歩いてくるガルティアとハンティを見かけ、
「あっ、こんなところにいたんだ」
と、言ったハンティに対し会釈する。レオンハルトの使徒であるのだから畏まる必要はないのだが、カラーにとっての関係でいうと、ハンティは始祖様だ。どうもその辺の切り替えが出来てないな、と思いながら、
「始祖様の方は……随分と盛り上がってましたね」
「まぁ、キャロルに強引に誘われて飲み比べしてたからね。他の使徒や魔物将軍らも混じえての大勢で。最初は良かったんだけど、途中から酔ったラウネアが魔物兵を糸で絡め取ったり、その魔物兵をタルゴが奪っていったり、最後にはサメザンが運んでいって、全員で囲んで救出したのはいいけど、キャロルが何回も暴れてそれを七星が止めたり、ちょっと色々あって疲れたから様子見がてら休憩しにきた」
どうやら色々あった様だ。軽く吐息する始祖様には、確かな気疲れが見える。しかし一方で、
「ですが、飲み比べをしていた割には、酔っていない様ですが……」
そう疑問すると、ああ、と一つ頷き、始祖様が答える。
「あたし、どれだけ飲んでも酔わないからね。こっちもそうみたいだけど」
言ってガルティアの方に視線を移すと、それに気づいたガルティアが、手元の肉を噛りながら、

「ん？　ああ、確かに俺は酔わないが……代わりにムシ達が酔っちまうからなあ。それもあってあまり飲まねえようにしてる」
飲みすぎると周囲に迷惑がかかるからな、とガルティアは言って代わりに食べ物をどんどんと口にしていく。ムシ使いは毒も効かないというし、そういうものなのだろう。始祖様の方はよく解らないが。
ともあれ、彼らは同じテーブルに座ると、何気なく口を開き、
「それにしても……ようやくって感じだな。アイツら」
「あー……確かに」
「……ふむ」
ガルティアが言った言葉に始祖様とともに頷く。曖昧な言葉だが、意味は通じる。
レオンハルトと主の事だ。やはり二人も、昔からそれを見てきたのだろう。ゆえに思うところがあるのか、ガルティアは珍しく溜息を吐きながら、
「俺が魔人になった頃から大分仲良さそうだったけどよ。どうにもそういう関係じゃなさそうで不思議に思ったもんだ。口にこそ出したことねえが、〝こいつら、いつになったらそういう関係になるんだ？〟って、疑問してた身としちゃあさすがに感慨深いものがあるな」
３００年以上掛かるとは思ってもなかったけどな、とガルティア。
ハンティも思い出すようにテーブルに肘をかけ、頬杖をつきながら、
「確かに……最初に会った時から魔王と魔人の関係には見えなかったしね。普通に恋人かと思った」
「やはりそうなのですね」
同意して思う。昔からあの二人は、確かな関係を築いていながらも、その先に進むことはなかったのだろう。長年変わらない関係を維持してきた二人だが、おそらくは自分とのことが切っ掛けでお互いに〝先〟を意識することとなった。
それはやはり、喜ぶべきことで、
「……変わりそうですね。色々と」
「いや、変わんねえだろ。どうせ細かいことで喧嘩しそうだしな」

「……まあ、ちょっとは変わるかもだけど、大きくは変わらないんじゃない？」
と、そこに関しては意見が違うらしい。はっきりと男女の関係になったことで、色々と変化が起きると思っているのだが。自分の時の様に。
しかしよく考えてみると、昔から想い合っていたことは変わらないので、確かに変わらないかもしれないし、ほんの少し、気持ちが真っ直ぐ向くようになるだけで表向きにはあまり変わらないかもしれない。どの意見も的を得ている気がしてくる。
ただ、一つだけ願うのは、
……これからも、あの二人が幸いであれば……。
そしていつまで経っても、この賑やかで楽しい日々が続けばいいと、そんな願いが心に浮かんだ。

朝の日差しが昇り、数時間。
魔王城にある豪奢な一室、自らの部屋のベッドで、スラルは意識を半ば覚醒させた。
……ふぁえ……？
まだ微睡み気味というか、寝ぼけている最中のスラルは、普段とは違う感触があることに気がついた。
ふかふかのベッドが下にあることは変わらない。毛布だって被ってる。
しかし枕は硬く、毛布以外にも何かが自分の身の一部に被っている。
邪魔にも思えなそうなそれは、しかし、温かく、とても心地よいもので、
……んん……すごい、落ち着く……。
確かに硬いが、むしろそれがいい。まるで今までに幾度となく妄想した、彼の身体の様で、
「……ん……？」

そこでふと、脳裏に過るものがあった。
それは彼と自分が、ベッドの上でまぐあう記憶であり、夢かと見紛うものだ。
普段であれば、彼が夢に出てくる時は控えめに言ってかなりハッピーで、最低でも一時間はベッドから出ないほどのイベントだ。
だが今日のそれは、まさしく現実感満載で、感触もやけに鮮明に思い出せる。それどころか、今も自分の中に入れられてる感覚が残って、
……ん、んん？
そこでようやく思い始めた。なんだかおかしい、と。
いくらなんでもリアル過ぎる。この硬い感触は一体……と、疑問する。
おもむろに、ゆっくりと瞼を開く。何があるのか、と確認しようと思った自分はそこで、
「……」
かなり近い距離にいた、レオンハルトの姿を見て、意識を覚醒させた。
……れ、れれ、レオンハルト……!?
何で彼がここに。これは夢か。しかも裸で。これは夢か。と、数回繰り返したところでようやく思い出す。自分は昨晩、
……そう、だ。夢じゃないんだ……。
完全に現実であることを理解する。
デートの終わりに部屋に帰って、彼に何度もキスされて、彼の方から誘ってきたのだ。
しかもその後は、一回だけじゃなく数えきれないくらい何度も行い、結局朝までそれが続いた。
だからお互いに裸であり、異物感が微かに残っており、彼に抱きしめられている。そのうえ枕は彼の腕枕であり、
……ほ、ほんとにしちゃったんだ……!
改めて、彼の顔を見上げて思う。自分は、彼の首元に抱きとめられている形だ。視界には彼の寝顔があり、それもまた起こったことを意

識させる。
なるほど、やたら気持ちいいというか、心地良いのはこれだったか、と得心する。そして理解すると、
「……えいっ」
何となく、衝動のままに彼の身体に身を寄せてみる。すると背筋が震え、
……あっ、これいいかも……。
全身が彼に包まれているように感じる。
思わず彼の硬い胸板に顔を埋め、それどころか擦り付けるようにぐりぐりとすると、彼の匂いや感触や、その全てが感じられ、
「〜〜〜っ、レオンハルト……！」
名前を呼びながら彼を堪能する。だが、
「――どうした？」
「――っ！」
不意に頭上から声が聞こえ、身体をびくりと跳ねさせる。
そっと顔を上げると、やはりと言うべきか、
「……起きてたの？」
「ん……いや、今起きた」
その言葉にほっと安堵する。どうやら直前の恥ずかしい行動は見られてないようだ。まぁ、更に恥ずかしいことはクリアしたので今更な気もするが、これは精神衛生上よろしくない。絶対からかわれるし。
だからという訳ではないが、適当な話題を投げかける。
「……レオンハルトって、朝弱かったっけ？」
「……いや、どーだろうな……疲労が溜まってる時は、少し寝すぎる時もあるが……」
と、言う彼は、まだ少し寝ぼけているようだ。ちょっと可愛い。
口端が笑みの形になるのを自覚していると、彼は続けて、
「お前が激しすぎたから、疲れたんだな……」
「なっ――」
言葉が止まる。頬が熱くなりながらも、それを否定しようと言葉を

作る。
「は、激しかったのは私じゃなくて、レオンハルトの方でしょっ……！」
馬鹿、と軽く悪態をつくも、彼はまったく堪えていないようで、口の端を片方だけ釣り上げ、
「そうだったか？　俺の記憶だと、最後の方はお前も結構責めてきてた様な……」
うっ、と短い声を上げるのは、それに身に覚えがあるからだ。
確かに最後の方はそういうこともあったかもしれない。だが基本的には、レオンハルトが色々とやってきて、
「うぅ……」
恥ずかしくなって毛布で顔の半分を隠す。
そしてそれを誤魔化すように、
「……というか、もう多分お昼だけど、仕事は行かなくていいの……？」
話を変えるように言う。しかし言ってから、
……行ってほしくないなぁ。
と思い、顔を俯かせる。もう少し、この空気というか彼と過ごしていたい。有り体に言えばイチャイチャしていたい。
しかし彼は魔人筆頭にして魔軍参謀。彼がいなければ色々と困る者がいる。他ならぬ自分が与えた役目だが、少し後悔してしまう。
わがままだよね、と思いつつ追加の言葉は送らないで、彼の返答を待つ。目線だけで彼の様子を窺うと、彼は不意に動きを入れた。
「――いや」
「あっ……」
こちらの身を抱きしめるように引き寄せ、顔を寄せてくる。そして、続く言葉は、耳を疑う発言だった。
「今日は……行きたくない。――だから休む」
レオンハルトは思う。仕事に行きたくないと思ったのは久しぶり

だな、と。
昔、それこそ人間の頃はしょっちゅうだったが、魔人になってからはそういうことは無くなったものだ。自分の役目は理解しているし、むしろやらなければという使命感や、責任感。望むべくしてやっているという自覚があるし、楽しく思う時すらある。
だが今日は、ちょっと行きたくない。その理由を隠すこと無く、レオンハルトは口にした。
「……お前が可愛すぎて、ちょっと離れられないな……」
「可愛っ――あっ、ちょっとお……」
スラルの身体を抱きしめ、その感触を堪能する。
先程の反応もそうだし、今もそうだし、昨晩も思ったことだが、ちょっと色々と堪らないというか抑えきれない。
……何でこんなにも、心地良いんだろうな……。
あまりにも甘美で、麻薬の様な中毒性がある。それは身体の部分も当然あるが、心の部分でも満たされるのが大きい。
「お前って、肌すべすべだよな……」
「んっ、そ、そう……？」
ああ、と頷きながら彼女の身体に手を這わせる。
小柄なスラルの身体は、抱きしめるとやはり小さいが、女の子らしい柔らかな肌の感触を伝えてくれる。
白く滑らかな肌だが、触るとふにふにしてて気持ちいい。
背中を擦り、腰を撫で付け、臀部を軽く揉み解し、彼女の身体を改めて味わう。昨晩から朝方まで何度も念入りに堪能したが、一向に飽きがこないし、来る気がしない。
そのまま身を引き寄せながら、顔を寄せていく。
「あっ、ふぁ……んん……」
唇を、スラルの耳、頬、首など色んな場所に落とすと、その度にくすぐったそうに身体を捩る。甘い快感を感じているのか、吐息を漏らす辺りも可愛い。
最後には唇同士を合わせながら顔を離すと、スラルがこちらを見上げ、頬を赤らめながら少し困った様な表情で、

「も、もう……えっちなんだから……本当に、今日は行かないの……？」
「ああ……今日はもう少し、お前を――愛したい」
「！　そ、そうなんだ……」
　今日一日くらいなら許してくれるだろ、と言うと、恥ずかしそうに、しかし嬉しそうにスラルが笑みになっていく。
　そして視線を迷わせながら、こちらを上目遣いで見ると、
「……私も……愛されたい、かな……」
「……そうか」
　告げられた言葉にオル＝フェイルが漲っていくのを自覚する。
　スラルがそれに気づき、耳まで赤くなると、少し慌てたように、
「あっ……ちょ、ちょっと……それはまだ駄目だからね？　身体も気怠いし……だから大きくしちゃダメだから、ね？」
　言って注意するように魔剣をつんつんして弄ってくるも、それは逆効果すぎる。一層肥大化したそれを押し付けながら、
「と言っても治まりそうにないからな。お前に鎮めてもらうしかない」
「な、なに格好いい声でえっちなこと言ってるのよっ！　って、うわっ……ほんとにすごいことになってる……」
　イチャイチャしたいだけなのに……、とスラルが呟きながらそれを触って確認する。
　それを感じながら、息を吐き、改めて言うのは、
「……ま、それでもいいけどな」
「え、いいの……？」
「……何でお前が残念そうにしてるんだ？」
「ち、違うからっ。レオンハルトが辛いかなーって思って心配しただけっ！」
「……まぁ、それはどっちでもいいが」
　よくない、と言うスラルを無視して、言う言葉は、
「……これから、何度だって出来るだろ？」
「――――」

いつだっては無理かもしれないが、仕事もあるし。
だが、
「俺は何度だって、お前とこうしていたいし、昨日みたいなデートもしたい。だから、急がなくてもいい……って、思ったからな」
別に肉体的な繋がりがなくたって構わない。彼女と心を通わせることが出来るのなら。
だから、とスラルを抱きしめ、
「あっ……」
「――こうしてるだけで、俺は満たされる」
大切な人が腕の中にいる。これに代わるものなどない。

スラルは、言われた言葉に胸を跳ねさせた。
身体がぶるりと震える。
それは、想いが実ったと、実感した瞬間であり、
「……レオンハルト」
言う。自分の想いも。
「私も……こうしてるだけで、すごく満たされる」
「スラル……」
お互いに目を合わせ、恥ずかしそうに軽く笑みをみせる。
同じだね、と告げながら、しかし、
「……でも、今はちょっと駄目かも」
「！　……どうしてだ？」
レオンハルトが少しだけ顔を曇らせる。
彼を安心させるように、身を寄せると、
「だって……今の言葉で、私の方が……その、してあげたくなっちゃうというか……」
「お前……」
はしたないことを言いながら、彼のそれに手を伸ばす。
さすがにいやらしすぎるだろうか。そして、恥ずかしいのも確かだが、それよりも、レオンハルトに何かしてあげたいと思う気持ちの方

が勝っている。
だが、唯一不安に思うのは、
「……それとも、自分からこんなこと言う子は――嫌い……？」
言う。すると彼は、一瞬驚いた後、こう言ってくれた。
「……嫌いじゃねぇよ。そんなお前も――」
「レオンハルト――」
お互いに気持ちを伝え合い、口づけをする。
デートの翌日だ。後一日くらいは、二人だけで過ごすのを許してほしい、と後で皆に何と説明するかを話しながら、ベッドの上で彼と二人でイチャつきあった。

海

ルドラサウム大陸。
その大陸の外周部分は断崖絶壁となっており、そこから落ちて生きていたものはいない。
しかし、１０年に一度、〝満ち潮〟と呼ばれる現象が発生する。
普段は〝シナ海〟と呼ばれる大陸南の大河から流れるものがそう呼ばれる。
だがこの時に限っては、大陸の周りにそれが現れるのだ。
この大陸に住む者は、それをこう呼んでいた。

海。
一面に広がる大量の水。広大な海。どこまでも続くと錯覚させるような水平線。
まさしく大海と呼ぶべきものが、視界に広がっていた。
空からは明るく、熱い日差しが降りそそぎ、正面からは時折、爽やかな海風が吹いてくる。足元には白い砂浜が広がり、そこからは熱が伝わってくる。
その場所に並び立つのは、人ではない魔の集団であった。その中から、一人、金髪ツインテールの少女が前に足を踏み出すと、両腕を振り上げながら力を溜めるようにして、
「――うーーーみーーーーでーーーーすーーーーわーーーーーー!!」
いつも明るく元気で忙しない魔人レオンハルトの使徒、キャロルは普段よりも輪にかけた大声で叫ぶ。
だが、その横、彼女の主人であるレオンハルトは、キャロルを見て息を吐くと注意するように声を掛けた。
「違うぞ、キャロル。こういう時は、〝バカヤロー〟って叫ぶのがお決まりだ」
「そうなのですか!?　なら――バカヤローーーーーーですわーーーー!!」
「……何、そのへんてこなお決まり」

キャロルの隣にいたハンティが半目で横を見る。
やり取りを見て、苦笑を浮かべたのはレオンハルトの隣にいた魔王スラルで、
「まぁ、はしゃぎたくなる気持ちも分からないでもないかな……？」
「ええ。私達は皆、海は初めてですしね」
「だな。海にはまだ見知らぬ美味がありそうだ」
相変わらずだな……、といった感じで、皆がガルティアを見る。スラルに同意したケッセルリンクの更に横。そちらには巨体を持つ魔人、ますぞえとその使徒達がおり、
「うふふ、ほらますぞえ様。海に着きましたよ。すごいですね？」
「……」
「ふむ、この日差しでは日に焼けてしまいそうですね……ここは第一使徒である私、ブラッド特製のハニー専用日焼け止めクリームを塗っておきましょう」
「それなら第一使徒である私、ピット特製のハニー専用日焼け止めクリーム・改を塗っておきましょう」
貴様……！　とお互いに殴り合いを始めた使徒二人。霊体だから焼けないだろ、という指摘を呑み込み、レオンハルトは咳払いを一つ入れると、
「……ともあれ――初の海水浴の始まりだな」
その言葉を皮切りに、魔軍の面々による史上初の海水浴が始まった。

レオンハルトは波打ち際に向かっていく何名かを見て、息を入れた。
満ち潮の影響で出来た海に遊びに来た、と現状はそんな感じである。キャロルが発案し、自分が許可を出したのだが、思うことは、
「……最近、遊んでばっかな気がするな……」
「……いいんじゃない？　その方が平和だし」
と、言うのはいつの間にかパラソルの下で寛いでいるスラルだ。そ

れを見て、釈然としない気分になったので指摘の言葉を作る。それは、
「お前、こんな時まで本持ち込んで引き篭もる気か？　こういう時くらい日差しを浴びたらどうだ。――後、水着似合ってるぞ」
「だって私、泳げないし……って、なんか今ついでに褒められた？」
　そんなついでみたいに言わないでよ、というスラルに目を向け、
「何だ、もう一度言ってほしいのか？」
「……は、恥ずかしいから今はいい……」
　どっちだよ、という言葉が喉まで出掛かる。恥ずかしがり屋なのはいつものことだな、と思いつつ、
　……それにしても、水着、似合ってるな……。
　スラルの姿を見て感嘆を得る。彼女の身に着けているものは、最近作られたばかりの水着というべき代物であり、その名の通り、水に入っても大丈夫な服である。
　しかし、それは結構露出のあるもので、何とも妙な感覚を覚える。
　胸の部分をフリルの付いた水色のトップで隠し、下は同じ色のパンツの様な、飾りにスカートの様なものが付いた物だ。
　一応、上から服を羽織っているが、それも含めて似合っていると言えるだろう。
　だが、水着だけで言うと、
「レオンハルト。何か、手伝うことはあるか？」
「ん、ああ……」
　荷物を前に唸っていたこちらに、ケッセルリンクが近づいてくる。
　その姿は、スラルよりも更に露出が高い、黒のビキニ――と呼ぶ代物らしい。キャロルが色々と解説していた。海水浴の企画といい、妙な部分で才能があるな、と感心する。
　ともあれ、ケッセルリンクの肢体が水着で大事な部分を隠しながらも、魅力的に見せられている。特に、深い胸の谷間が素晴らしいもので、
「……レオンハルト。そ、その……」
「っ！」

と、しばらくじっと見詰めていたことに気がつく。正面で、ケッセルリンクが腕を掻き抱く様にしながら恥ずかしそうに視線を逸すと、
「そんなに見られると、恥ずかしいのだが……」
「……悪い。似合ってたからな」
「あ、いや、見てもいいのだが……その――恥ずかしいだけで……」
素直に謝るも、それは別に構わないと言われる。
だが、背後から声が飛んできた。
「……何、困らせてるの？」
「！　す、スラル……」
妙なプレッシャーを感じながら首だけで振り返ると、ニコニコと笑みをこちらに向けたスラルがそこにいた。魔王の圧力をこちらにぶつけながら、しかし、ややあって拗ねた様に、
「……レオンハルトの馬鹿。巨乳好き」
ふん、と小さく呟き、再び本に視線を戻した。耳に届いてはいるので、何とも言えない気分になる。
嫉妬ではあるのだろうが、ケッセルリンクに対しては判定が微妙というか、グレーゾーンに入っているというか、お目溢しなのだろう。確かに、こちらとしても複雑な気分だし、ケッセルリンクの方も少し戸惑い気味なのだろう。皆が、どういう関係なのか理解しているが故に、妙な空気が生まれる。男であるこちらの自業自得だ。
とりあえず、
「……それじゃあ、そこの鉄板とテーブルを並べておいてくれ」
「……うむ、了解した」
言って、直ぐに動いてくれるケッセルリンク。彼女としても、妙な空気を払拭したかったのだろう。単に恥ずかしかっただけかもしれないが。
そしてその間に、自分は少し、波打ち際まで進む。
足元の砂の感触を感じながら近づくのは、自分の使徒達の元で、
「……はぁ、何だろうな。お前達の姿を見ると落ち着く……特にハンティ」
「別に褒められたいとは思ってないけど、何かムカつくなぁ……」

眉を顰めたハンティに対し、キャロルの方が顔を向け、
「違いますわよ、ハンティさん。落ち着く、ということは、それだけ慣れ親しんでいるということですわ！　つまり、わたくし達が一番、水着を着こなしているということですの……！」
「ああ、そうだ。よく気づいたなー。似合ってるぞーキャロル」
「え、えへへー、それほどでもありませんわー」
「明らかに棒読みな気がするんだけど騙されてない？」
褒められて喜ぶキャロルに、ハンティが目を細めながら言う。そんな捻くれた使徒に対し、軽く笑みを見せると、
「いや、そんなことない。俺は正直だからな。お前もちゃんと似合ってるぞ」
「……別に嬉しくないなぁ」
心底微妙な顔になるハンティ。やはり捻くれてるな、と思うが、同時に新鮮な反応だとも思う。自分の周りの女性は、褒めると普通に嬉しそうにするからな。嫌がられるというのは中々ない。
……似合っているのは確かなんだがな。
キャロルは、青のトップスに下はパレオという布を巻いた水着で、ハンティは上はタンクトップ型のもので、下はホットパンツの様なものを履いている。機能性を重視しているのだろう。
「……ま、それはいい。とりあえず、遊びも兼ねた訓練をするぞ。――キャロル」
「はい！　準備は出来てますわー！」
と、呼ばれたキャロルが砂浜にあるものを置く。それを見たハンティは、気を取り直して普段の顔に戻ると、
「――それで、あのスイカを使って何させるつもり？」
「何だ、ハンティ。知らないのか？　今からやるのは――」
キャロルが横から細長い白い布を渡してくるのを受け取りながら言う。それは、
「スイカ割りだ」
「ですわ！」
「……スイカ割り？」

ハンティが首を傾げる。
「ルールは簡単だ。この白い布で視界を隠し、何も見えない様にする。その状態で得物を使い、あの砂浜に置かれたスイカを仕留めろ」
「ああ、そういう……」
説明を聞いて理解したのか、ハンティが納得の色を見せる。彼女が思っている通り、これは視界に頼らない感覚を身に着ける訓練だ。
スイカと呼ばれるムシを仕留め、ついでに中の甘くてシャリシャリしたものを食べれる状態にする。そんな画期的な遊びだ。
「まずは――キャロル。お前がやってみろ」
「畏まりましたわ！」
言うと同時、既に目元を覆ったキャロルが、細剣を片手に前に進み出る。
そしてそのまま前に進み、
「レオンハルト様から習ったわたくしの心眼、とくとご覧あれ……！」
「……そんなの教えたの？」
「教えてないけどな……」
ハンティとともに軽く諦めの息を吐く。何となく、駄目そうだ、と。
一応、結果はどうなるか解らないのでちゃんと見るが、キャロルはやがて見当違いの方向に足を進め、
「とぉ――！」
と、砂浜を穿った。
当然、そこにスイカの姿は無く、
「……失敗だな。キャロル、戻ってこい！」
「くっ、不覚ですわ……！」
悔しそうに歯噛みするキャロル。真面目にやっているし、本気で悔しがっているのが良いところだ。実力はまだまだだが。
「それじゃ、次はハンティだ」
「わたくしの仇を取って下さいな、ハンティさん」
「仇って……まぁ、やれるだけやってみるけど……」
言いながらキャロルから布を受け取るハンティ。目元を覆うように布を頭に巻くと、自分の得物であるシンプルな剣を取り出し、

「……」
……おっ、キャロルよりは合ってるな。
見当違い、という程ではない。少しずつ、手探りの様に歩みを進めるハンティは、しかし確実に近づいている。
だが、
「確か……この辺り！」
声とともに剣を振り下ろす。
その位置は、確かにスイカのあった場所で間違いないが、
「……残念、失敗だな。スイカはもっとあっちだ」
「えっ……何で……って、ああ、そりゃそうだよね」
一瞬、何故そんな遠くにスイカが移動しているのか、と驚いたハンティだったが、彼女が自分で気づいた通り、これは当たり前のことだ。
何故ならスイカは、四つの足があるムシの一種であり、
「生きてるからな。そりゃ動くに決まってる。スイカがあった場所を記憶して振るのは、あまり得策じゃないな」
「意外と難しい……」
「むむ……どうすれば……」
使徒二人が首をひねって唸る。攻略法を考えているのだろうか、悩むのは良いことだな、と思っていると、
「何やってるの？」
「何かの訓練か？」
「ん、あれは……スイカか。甘くて美味いよな」
「……」
と、皆が集まってきた。
行なっていることを簡単に説明する。
「スイカ割りだ。視界を封じたままスイカを仕留める訓練だが……何だ、誰かやってみるか？」
「いや、出来る訳ないでしょ。探知魔法使っていいならやるけど。もしくは魔法」
「それだと意味ねぇだろ」
スラルの発言にツッコミを入れておく。すると今度はガルティア

が、
「なら範囲攻撃か」
「そういう趣旨じゃねぇんだけどな……」
駄目か、とガルティアが別段残念そうでもなく引き下がる。いつもの様に軽い気持ちで言ったのだろう。
皆が攻略法を出していく中、ケッセルリンクがこちらを見て、
「視界を封じたまま、か。なるほど、レオンハルトなら容易だな……」
「……まぁな」
特に否定することでもないので頷く。事実、ケッセルリンクにはその場面を見せているが故、その発言が出たと思われる。
しかし他の面子は、こちらを見て半目になると、
「……あー、レオンハルトなら出来るだろうな。変態だし」
「レオンハルトだもんね……」
「……」
「お前ら、俺のことを何だと思ってやがる……」
酷い言い草だ。ガルティアの使徒達までも、砂浜に文字で〝へんたい〟と書いている辺り、理不尽さを感じないでもない。
しかしまあ、
「……手本を見せてやる」
言って布を頭に巻く。目元を隠すようにしてしっかりと結ぶと、オル＝フェイルを宙から引き抜き、
「――そこだ」
その場から動かず、軽く剣を振って、気配を感じた場所に斬撃を飛ばす。
気配が消失したことから、おそらく成功したのは解るが、一応、布を外して確認すると、
「っと、どうやら成功したみたいだな――って、なんだお前ら、その顔は」
真っ二つにしたスイカを確認して振り返ると、そこには真顔になった面々が、
「何だろう、これに違和感を感じないんだけど、私の感覚がおかしいの

かな……？」
「レオンハルトならしょうがないが、普通はどう足掻いても出来ねえからな。こっちの感覚が麻痺してるってことだ」
「……どうしよう。あたし、今の見て言われるまで――〝別に普通じゃん、何かおかしなとこある？〟　って思っちゃったんだけど……しかも対抗心で、ちょっとやる気出しかけてた……」
「始祖様は一月に一度戦っているのですから仕方ないかと。……しかし、やはりレオンハルトはすごいな……」
「レオンハルト様！　レオンハルト様がすごすぎるだけですので、周りから異常に思われても気にすることないですわ！　一番異常ということは、特別ということですのよ！」
「……納得いかねぇ」
　何でこんな化け物みたいな扱いをされなくてはいけないのか。たかがこれくらいで。魔人という力を持つ種なのだから、これくらい出来てもおかしくないだろう。
　ケッセルリンクとキャロルのフォローが身に染みる。後者は微妙に引っかかるが。
　釈然としない気持ちを抱えながらオル＝フェイルを空間に戻すと、布をハンティに渡しながら、
「とりあえず、しばらくやってろ。……俺は、準備をしてくる」
「準備？」
　聞き返してくるハンティに、ああ、と応じる。ケッセルリンクが並べてくれた鉄板を見て、
「バーベキューの準備だ」
　ひゅー、と、おそらくガルティア辺りの口笛が鳴ったのを耳にして、レオンハルトはそちらに戻っていった。

　食事は、レオンハルトが担当することとなっていた。
　いつもなら城のコックや、調理担当の者がやることであるが、今日のバカンスには自分達しか来ていない。

さすがにこんなことに軍を動員するのは――と、少し前にデートの為に町を作らせたことは棚に上げて思う。あれは魔物にとっても有意義なものとなったし、ノーカンだ。

ともかく、城には軍を残してきている。こちらが不在の間の采配は魔物大将軍のリーが行なってくれているし、最高責任者は魔人四天王のカミーラだ。問題はないだろう。

本当はカミーラも誘ってみたのだが、今回は気分じゃなかった様でパスされた。それを少し残念に思うくらいには、関係は深まっているのだろうか、と思う。キャロルも残念そうに落ち込んでいたし。逆にハンティなんかはほっとしていた。やはり気まずさは抜けていないのだろう。

とりあえず、そんなこんなで、レオンハルトは大量に持ってきた食材の調理を始めていた。

肉や野菜を食べやすい形で切り分けて大皿に盛っておく。

……ま、調理っていうか、準備だよな。今は。

バーベキューなので食べながら順次作っていく感じだ。他の料理もとりあえず肉と野菜をある程度消費してから頃合いを見て作る。大食らいのガルティアがいるので、それなりの量を持ってきてはいるが、それでも消費速度としてはそれなりだろう。さすがのガルティアも人の分が無くなるまで食うことはしない。本人はよく、使徒のタルゴと取り合いをしているが近しい関係で程々であればいいのだろう。

ともあれ今やるのは直ぐに焼いて食べれる様に準備することと、後は肉用のタレを作ることくらいだ。せっかくなので、城の料理長にレシピを聞いて、自分で作ることにした。

ボウルに調味料を入れて作業を進める。焼きそばとかの炒めものは後で直ぐ作れるように材料をまとめて置いておく。

後は、海の幸に関してだが、

「……」

「では、ますぞえ様。身体のぷちハニーをちょっと貰いますよ。そしてこれを――」

「ますぞえ様からもぎとったぷちハニーを海に投げ入れます。すると

――」
ブラッドとピットが、海の中にぷちハニーを強く投げ込む。すると瞬間、轟音とともに水柱が巻き上がり、
「うふ、色々浮き上がってきましたね」
「ほぉ、これは便利だな。それじゃ回収してくぞ」
「……！」
「キシャアアア！」
「ピイィイイ！」
ガルティアとその使徒達が、浮き上がってきたサカナと思わしき生き物を拾っていく。ラウネアは砂浜から糸で、タルゴはガルティアとともに水の中に入り、サメザンは空から、それぞれ回収していく。
……色々と大雑把な取り方だな。
別に構わないが、自分の身体から生えたぷちハニーを使われてますぞえはどう思っているのだろう。特に抵抗もなく好きにさせているみたいなので問題はないとは思う。
……ま、仲良くやってるようだし、良いか。
だが、ますぞえがいることで魔軍でもぷちハニーの運用が盛んになった。というか、あの使徒達が直接営業を掛けてきた。その際にしっかりとした金銭を要求されたのだが、結果有用であることには間違いないので、断りきれず、結果数百個単位で注文する羽目になった。キャロルが滅茶苦茶喜んでいたが、ああいう危険物が好きなのだろうか。武器としては有用だが、取り扱いは注意しなくてはいけないし、アレ一つで容易に人が死ぬので頻繁には使わないようには言っておいた。工事する時なんかには重宝するもので、大将軍も含めたうちの軍で運用法が活発に議論されている。先日も町を作る際にお世話になった。
と、こんな時ですら仕事の事を考えてしまう自分に苦笑しながら準備を進めていく。すると、
「――レオンハルトっ」
軽い足取りで、スラルが声を掛けてくる。顔だけで振り向き、
「どうした？　飯には少し早いが」

「……えっと、別に用はないんだけど」
と、こちらの隣まで近寄ってくる。そして見上げてきて、
「ちょっと、レオンハルトと過ごしたいなーって」
「ん……そうか」
はにかみながら言うスラルに軽く応答する。
最近、というかデートを行なった次の日辺りから、結構甘えてくる様な、ストレートに接してくることが多い。外でやると茶化されるからあまりベタベタされると困るのだが、
……強くは言えねぇな。
と思うのは、満更でもないからだろうな、と自分の想いを自覚する。毎晩一緒に過ごしているというのに、それでもなお一緒にいたくなるというのは、一種の恋愛脳というか、馬鹿になってる様な気もする。しかしそれも含めて嫌ではなく、
「えへへ、楽しいね」
「そうか？　それならキャロルを褒めてやれ。企画したのはアイツだからな」
と、浜辺でハンティとともに悪戦苦闘しているキャロルを指して言う。そろそろ、好きに遊んで良い、と許可を出してもいいかな、と思いつつスラルの言葉を聞く。
「うん、キャロルには後でお礼言わなきゃ。後、皆にもね。……あ、そういえば」
何かを思い出したかの様にスラルが言う。
「ケッセルリンクのこと、どう思ってる？　後、キャロルもかな……？」
「それは……」
言葉に詰まる。意味が理解出来たからだ。思わず眉間に皺が寄ってしまう。
スラルはそんなこちらの表情を見て、苦笑すると、
「別に責めてる訳じゃないの。ただ……その二人辺りはレオンハルトのこと、好きだろうし、レオンハルトはどう思ってるのかなって」
キャロルの方はちょっと好きのレベルが違うけど、と笑うスラル。

言った通り責めている訳ではない様だ。
……どうだろうな。
考える。好きか嫌いか。そのどちらかで言うなら、迷うまでもなく好きだ。そこは疑う余地もない。
だが、好きというだけなら他の者達にも当て嵌まる。その中で、スラルの言う意味に該当する人物はと言うと、
……二人……いや、三人――ということになるのか……？
スラルを除いて思うのはそれだけだ。ただこれは、またレベルが違うといえる。
ケッセルリンクやペールの想いに応えた時、自分はこれだけ心地良いと思ったことは初めてだと思った。他者に真っ直ぐに愛されたのは初めてであったからだ、とその時は思った。
しかし更に上があると気づいてしまった。
だがその上で、他の者の想いが消えた訳ではなく、
「……好き、ではあるんだろうな」
と、考えた末に、正直に口にした。思ったことを、
「ただ、何というかな……多分俺は、好かれるのが好きなのか、どうも好かれると甘くなっちまう……気がする。応えたくなるというか、こっちも大切に想ってしまう。それも好きといえば好きなんだろう。ただ――」
言う。いつの間にか、調理の手は止まり、
「一番大切なものを、見つけちまったからな」
「それって……」
「……ま、そういうことだな。だから言うなら――好きなやつはそれなりにいるけど、一番は別だ――って、自分で言っててクズみたいだな……」
「まぁ、そこに関しては否定できないかもだけど……」
でも、と。
「別にいいよ」
「あ……？　いいよって――」
だから、とスラルが再度の言葉を作る。

「別に、ケッセルリンクとかキャロルとかだったら……別に好きでもいいし、それに応えてもいいよってこと」
「それは……どうなんだ？」
疑問を尋ねる。スラルは、少し考える様に顎に手を当て、
「んー……まぁ、ね。ケッセルリンクとかキャロルなら、私としても大切だと思ってるし……」
勿論、そこらの適当な人ならムカつくけど、と。
しかしそこで、あ、と声を上げ、
「だから、ガルティアとかでもいいよ？」
「――馬鹿か⁉　真面目なトーンで何言ってやがる⁉」
あはは、ごめんごめん、と謝るスラルに頭を抱える。そういえば、最近ガルティアと一緒にいると、一部の女の子モンスターが妙な視線で見てくることを、何故か思い出す。その時は、妙な悪寒を感じたものだ。
しかしそれを一旦忘れ、気を取り直すと、スラルは表情を戻し、
「……あのカラー、ペールも悪い人じゃないのは、何となく解るし……もし今後、彼女がこっちに来るようなら迎えてあげてもいい。ただ――」
と、そこで言葉を区切り、ややあってから、
「私、わがままだからそれでも皆との時間も大切にしたいし、ケッセルリンクやキャロル。ガルティアや他の皆も。幸せになってほしいな、って思うの。でも……その上で、一番は私だし、優先するのも私にしてほしいかなって思っちゃう。……我儘、だよね？」
「っ……」
自嘲するように笑うスラルに、一瞬、言葉が詰まる。
そして行動を起こした。
「……スラル。目、瞑れ」
「えっ……うん――っ」
目を瞑ったすぐ後に、そのままスラルの口にキスをする。
もう何度もして、慣れた筈のそれは、甘い感覚を未だに覚えさせてくる。

そして数秒して、口を離すと、
「……我儘で良いだろ」
「えっ？」
呆気に取られた様に口を開けたままのスラルに言う。その意味は、
「俺は、お前の我儘なら何だって応えてやる。そう誓って……俺は今、ここにいる」
「でも、それだと負担が……」
「そんなの関係ねぇな。というか、負担にならねぇ。お前が大切なものは俺にだって大切なものだ。お前が、他の皆も全員、幸せにしてほしいって言うなら、言葉通り全員幸せにしてやるよ」
「――――」
「それで……アイツらが幸せになる方法を見つけたり、大切な者が出来たって言うなら、俺が全力で手助けしてやる。アイツらの大切な奴らだって、俺にとっては大切なものになるからな」
「……その理屈だと、とんでもない数になっちゃうんじゃ……」
「望むならそうしてやる。……ま、現実だとそれしようと思ったらそれ以外を犠牲にする羽目になりそうだが……それは今更だし、厳しくても諦めねぇよ」
「それは、そうかもだけど……」
魔軍と魔物、そんな人間の敵という種に属している以上、限界はある。
だがそうだとしても、それ以上を目指すことは諦めない。
敢えて、スラルに向かって笑いかける。
「しかも、今更だな。今までに何度だってそういうことしてきたじゃねぇか。魔軍を操りながら、仲間を増やして、救いたい奴は救って、犠牲を減らしてきた。お前は魔王だが、今まで少なからず、今いる奴らと、その大切な奴らを救ってきた。――それは全部、お前のおかげなんだぜ？」
「それは……レオンハルトが」
「その俺を、魔人にしたのはどこの誰だ？　お前だろ。じゃあ少なくとも半分はお前の功績だな」

「――――」
言い切る。スラルを軽く抱きしめながら、頭を撫で、
「お前は俺に、幸せを与えてくれた。他の奴らにだって、少なからず救いを与えた。俺はそんなお前が〝好き〟で、他の奴らも好きで、そんな大切な奴らが沢山いるここが好きなんだ。そのためなら、何だって出来る」
言う。だから、
「ありがとうな」
「っ……！」
言った言葉に、スラルが反応を見せた。
それは、
「……レオンハルト……！」
涙だった。

言われた言葉に、スラルは湧き上がるものを抑えきれなかった。
目の端から涙が流れるのを自覚し、それを隠すように彼の胸に顔を埋める。
しかしそれでも嗚咽は隠しきれない。
「私……私、も……好き……！」
「ああ」
言う。言えるうちに、
「レオンハルトも、他の皆も、この場所も、全部大切で……」
だから、
「私、これからも頑張る……！　頑張る、から――」
「ああ」
言いたいことを、
「ずっと、一緒にいて……！」
「ああ――」
彼が笑みを見せる。こちらに額をくっつけながら、
「当たり前だろ。――ずっと一緒だ」

「っ！　レオン、ハルト……！」
我慢は出来なかった。
少し屈んだ彼の首に顔を埋めて涙を流す。そして決意する。
……もう、泣かない。
昔のように、一人で泣くことはない。
だから決意する。
大好きな人と、大切な人を、大切な場所を守り切れる様に。
力になれる様に。
もう震えて引き篭もるだけの自分にはならない。
彼にだけ、それを押し付けることはしない。
だから、
「ずっと、一緒だからね……約束……！」
「ああ、約束だ――」
いつまでも一緒にいてほしい、と。最愛の人と、再び約束を結んだ。

聖女の子モンスター

魔物界。
大陸の北半分を主な領土とするそこに、一つの町があった。
そこは魔物が住む町だ。
しかし、大陸西側に見られるようなツリー都市、自然を利用した町ではなく、人工的な面影が垣間見える町だ。
実際に人間の国にある様々な建造物や美しい物、娯楽などを参考にして作られたその町は現在、魔物界一の人気スポットであり、多くの魔物がその町を一目見ようと訪れる観光都市にもなっていた。
この町は魔人筆頭である魔人、レオンハルトが作らせたことから〝レオンハルト・シティ〟と名付けられ、魔物達の憩いの場となっている。
そこを訪れる目的の一つに、〝デート〟があった。
お洒落かつ賑やか、そしてどことなくロマン溢れる町の造りは、女の子モンスターにも人気で、なおかつデートに最適の場所である。そのため、他の多くの男の子モンスターが、意中の女の子モンスターの求愛の為、もしくは出会いを求めて訪れるのだ。
この町が出来てから、魔物の繁殖率が増えていることからもその人気ぶりは窺える。
そんな中、
「――ふーん？」
「――へぇ……」
「――わぁ……！」
「……」
この町の噂を耳にした、四体の女の子モンスターがいた。
彼女達は、それぞれ別々に町に到着すると、その外観と雰囲気を見て感嘆の息を漏らす。
そこにいるのは、全て魔物。で、あるのに、町の雰囲気に剣呑なものは皆無だ。
ここならば己の使命は果たせる――と思っているのは実は少なく、

目的もバラバラな四体は、何はともあれその町に足を踏み入れた。

「……あー……生き返る……」

その日、魔人レオンハルトは魔軍の遠征を終えて、町を訪れていた。

目的地は大通りにある大浴場。そこを貸し切り状態にして、レオンハルトは一人ゆっくりと湯に浸かる。大きく息を漏らしながら声を出し、思うのは、

……こういう時間は、貴重だな……。

一人で風呂に入ることなど最近はほとんど無い為、余計にそう思ってしまう。

大体はスラルと一緒に入るか、キャロルが背中を流すだ何だと言って一緒に入ってくるかの二択だ。

別にそれも悪くはないのだが、たまにはこうして一人でゆっくりしたくなる。

故にこの大浴場を貸し切りにして、今はゆっくりと過ごしている。大浴場は町でも人気のスポットであるため、少し悪い気もするが、一時間足らずで出る上、町の名前に自分の名前を使うことを許可したのだから許してほしい。

と、言うのも、町の名前をどうするか、と部下に案を募らせた際に、満場一致でレオンハルトという名前が相応しいと言われた。かなり困惑し、有り体に言えば嫌だったのだが、部下は是非そうするべきと盛り上がっていた為、渋々認めてやった。自分の権威をひけらかす様であまり好きじゃないが、権威を高める手段としては有用である、と頭の中でメリットを弾き出してみたものの、別にこれ以上権力を高めてもしょうがない、というか既に魔人としては最高位の権力があるのだからあまり意味はない、と、そこまで考えたが、それを言い出すとせっかく納得し掛けていた自分の判断に疑問が生じる為、考えるのを止める。

溜息を漏らしながら、

「……ま、今更考えてもしょうがないな……」

決まったものはしょうがない。受け入れよう。
幸いにも、しばらくは大きな仕事はないだろうし、少なくとも今日一日はゆっくり出来る。
足を伸ばし、浴槽の縁にもたれかかりながら、
「それにしても……やっぱりいい湯だな……これは……」
「んゆ……いい湯……眠くなる……」
「ああ……気持ちよくて眠りたくなってくるな」
「……すぴー」
「おいこら、風呂の中で眠るな。溺れたらどうする――って」
そこで気づく。
隣に、見知らぬ金髪ツインテの女の子がいた。身長１３０センチほどの小さな体躯。子供の様な見た目のそれは、気持ちよさそうに風呂に浸かっており、
「……お前、誰だ？」
そもそも何処から入ってきた？　と、聞く。するとその少女は、眠そうな表情のまま、
「んー……セラクロラス……」
「セラクロラス、か。気配からして人間じゃなさそうだが……女の子モンスターか？」
「そう……」
どうやら女の子モンスターが迷い込んできたらしい。しかし、
……こいつ、俺に気づかれず、ここまで侵入したのか？　だとしたら大したもんだが……。
と、少し感心してしまう。風呂で気を抜いていたとはいえ、誰かが入ってきたのなら気配で察せられるし、そもそも入り口は魔物兵が見張っている。
……変異種か？　それとも……。
このような女の子モンスターは見たことがない。ならば、レアな存在かと思案してみるも、
「……レオンハルト、元気……？」
「ん……？　ああ、元気だが……それがどうした？」

よく分からない質問をされてしまう。それを聞いてどうするのか、と聞き返すも、
「んぁ……元気なら……いい……」
「……？　よく分からない奴だな……」
だが、特に害は無さそうだ。精神も子供っぽい様だし放置でも構わないだろう。貸し切りを終えて、開放する際にでも外に出すか、入りたいのであれば入らせておけばいい。
と、思い、再び湯に肩を浸からせたのだが、
「ふにゃー……レオンハルトー……」
「……何だ？」
またしても話しかけてくる。一応、魔人だというのに微塵も怯えた様子が見えないのは肝が据わっているのだろうか、というか、
「……俺、名乗ったか？」
「……んゆ、前から、知ってる……」
「知ってる……ん、いや、そうか」
よく考えなくても、自分の名前は色々と有名だ。魔軍の中でもそうだし、人間の間でも知り渡っていると聞く。
ならば名前くらい知っていてもおかしくないか、と思ったところで、衝撃の発言が来た。それは、
「……子作り、する？」
「……は？」
……子作り？
何だ、それは、と困惑する。いや、意味は当然分かる。分かるが、
「……俺とお前が？」
「ん……前も、してくれた」
「……は、はぁ？」
前も、という言葉にさらに困惑を重ねる。当たり前だが見に覚えのない事である。
そもそも、と、セラクロラスの身体を見て検討する。
「……いや、入らないだろ」
「ふに、頑張ればいける……」

「んー……キツい気がするんだが……」
まじまじと観察しながら首を捻る。
普通に怪我しそうだが、身体が丈夫であればいけるのだろうか。女の子モンスターだと言うし。しかし、だ。
「……だめ？」
「駄目っていうかな。そもそも何でしたがるんだ？」
「……本能？」
「……本能？」
そっくりそのまま聞き返すと、セラクロラスは眠そうにしながらも頷き、
「んゆ、レオンハルトなら……元気な子供、生まれる……」
「その確信は一体どこから……」
と、そろそろ頭が痛くなってきた頃。
入り口の方から声が聞こえた。
「うわっ、何だお前!?　今はレオンハルト様の入浴中だぞ!!」
「大丈夫。確認したらすぐに帰るから」
「い、いやいやいや！　駄目に決まってるだろう!?」
「……？　あ、そっか。お風呂なら服も脱がないと駄目ね。――よいしょっと」
「そういうことじゃ――って、いきなり脱ぐなあ――!?　って、ああ、そっちは!!」
と、騒がしいやり取りが聞こえてくる。一方は魔物兵だが、もう一方は女の声であり、
「……お邪魔します」
「あ？」
と、声とともに、入り口が開けられ、外から女が入ってきた。
今度は、赤いロングヘアーの美人だ。長身で均整の取れた身体つきをしている。こっちの方が好みだな。
とか思っていると、視線がこちらを捉えた。
「――あ、セラ」
「んにゅ……べーちゃんだ……」

どうやら知り合いであるらしい。風呂に浸かったまま、彼女の姿を見て言うセラクロラス。その状態を見て、相手は真顔のまま、
「べー、と呼ぶのはやめてって言ってるでしょ。それと……こんなところで魔人と何をしてるの？」
「んー……子作り」
「してねぇよ！」
誤解を招きそうな言葉を即座に訂正する。
しかし、赤い髪の女は、軽く息を吐いて、
「魔人と、ねぇ……確かに魔人相手でも孕むでしょうけど、出来れば純粋な魔物相手の方が……」
「んゆ……でも、前は、出来た」
「……前って何だ、前って。やってねぇよ」
訂正する。しかし、女は、
「前……なるほど、そういうことね」
何か勝手に理解した様に頷くと、
「……作ったことないし、一回くらい試してみるのもありかしら」
「んゆ？　……べーもする……？」
「……とりあえず、今は保留で」
「……おい、何勝手に話を進めてる。知り合いならこいつ連れて帰れ。魔物兵には俺の知り合いだって言っとくからよ」
「べーも、一緒に入る……？」
「……そうね。せっかく来たし……」
「いや、帰れよ！　耳付いてんのか!?」
言うと、相手は首を傾げ、
「え、でも……ここは公衆浴場だって」
「今は、俺の貸し切りなんだよっ！」
「ふにゃ……でも、レオンハルトは、入っていいって……」
「言ってねぇよ!?　さっきから捏造してんな！」
「……仲良さそうね」
「節穴ぁ!!　どこを見てそう思うんだ、ああっ!?」
「にゅう……レオンハルト。髪、洗って」

「洗う前に入ったのかテメェ！　くそっ、さっさとそこに座れ!!」
「……仲良いの？」
「良くねぇよ!!」
　石鹸でわしゃわしゃと泡を立てながら、レオンハルトは浴場に声を響かせた。

「……聖女の子モンスター？」
「そう。私やセラはそういった存在なのよ」
「んにゅー……」
　結局、再び浴槽に浸かりながら、レオンハルトはベゼルアイと名乗る女の話を聞いた。
　それは、彼女達が〝聖女の子モンスター〟なる存在であるという話で、
「後二人……四体の聖女の子モンスターがいるんだけど、私達の使命は、まぁ、有り体に言えば生んで増やすことなの」
「……繁殖ってことか？」
「ただの繁殖じゃないわ。私達はあらゆる種族と交配して、新しいモンスターを生み出すことが出来るのよ」
「……なるほどな」
　だから子作りだの何だのと言ってきたのか、と、得心する。
　こちらが頷いたのを見て、ベゼルアイは言葉を続けた。
「因みに、さっきセラが言っていたことは、多分嘘じゃないわよ」
「？　さっき言ってたこと？」
　ええ、とベゼルアイは頷き、
「貴方と子作りしたこと」
「……は？」
　再度、思考が停止する。そんなこちらに構わず、ベゼルアイは、
「私達はそれぞれ、司る能力があるのだけど、セラクロラスの場合は〝時〟なの。時のセラクロラス」
「……時」

だから、と言うように、
「セラは未来や過去が曖昧なの。精神が行ったり来たりしているらしいから」
「……つまりそれは――」
こちらの言葉を代弁する様に、ベゼルアイが、
「多分、未来でそういうことをしてきたのよ」
「……マジか」
「マジよ」
躊躇なく、そんな未来を突きつけられ、頭を抱える。
……未来の俺は一体何をやってるんだ……ロリコンにでもなったのか……？
確かに、最近はスラルのおかげで小さいのも悪くないな、と思えてきたが、さすがにこれは小さすぎやしないだろうか。いくら何でも鬼畜過ぎる気がする。あ、でも頑張ればいけると言っていたのだから、身体は無事なのだろう。ならば問題ないのか。
「……いや、駄目だろう」
「別にいいと思うけど。こっちは生むのが仕事だし」
「にゅー……」
「……よくやったもんだな、未来の俺……」
まだ半信半疑ではあるが、本気でそう思う。
というか、いくらスラルから他の人とのそういったことが半ば許されたとはいえ、さすがにどうかと思う。こいつ連れてスラルのところに行き、こいつとヤったから、と言ったら、スラルどころかケッセルリンクからも愛想を尽かされそうな気がする。どれくらい未来なのか知らないが、よくスラルは許してくれたもんだ、と、ある意味で感心する。
だが、
「……とりあえず、それはいいとして……何でここに来た？」
「男を探すため」
また簡潔な返答が来た。実に分かりやすい。
「つまり……この町に出会いを求めてきたってことか？」

「そういうこと。……まぁ、そのついでに、他の三体の気配もしたから、久し振りに会っておこうと思って。気配を辿っていったら、ここだったのよ」
「なるほどな……って、他の二体もいるのか……」
そう考えると何だか嫌な予感がしてくるのはどうしてだろう。こいつらの滅茶苦茶っぷりを見た所為か。
と、そこで、何となく疑問が降って湧いた。それは、
「……因みに、お前はどんな能力を持ってるんだ？」
「力よ」
「力？」
「そのまんまよ。〝力〟のベゼルアイ。力には自信があるわ」
「……それはどの程度だ？」
言うと、そうねぇ……、と、思案する様に辺りを見渡す。
そして何かを思いついた様にこちらを向いて、ベゼルアイは言った。
「……三分もあれば、この大浴場を平らに出来るわ」
「……それは凄いのか？」
微妙ね……、とベゼルアイが真顔で言う。どうやら上手い物差しが見つからなかったようだ。
しかし、だ。力と言われると興味が湧いてくる。なので軽く、
「それじゃ試しに――俺を全力で殴ってみてくれないか？」
言った言葉に、ベゼルアイは一瞬固まり、しかし気を取り直すと、
「……マゾ？」
「違うわ。……心配しなくても大丈夫だ。これでも魔人の中では強い方だからな。――ほら、ここ殴ってみろ」
言って、掌を見せるように軽く腕を上げる。手をひらひらとさせて、ここに撃て、と示すと、ベゼルアイは目を細め、
「……本当にいいの？」
「大丈夫だ」
「……なら」
声とともに、ベゼルアイは軽く腕を振りかぶった。そして、

「ベゼルアイぱーんち」
「――！」
瞬間、掌に衝撃が伝わる。
空気が振動で震え、湯船にまで波及するほどの力が伝わるが、足に力を込めて、浴槽の中で何とか踏ん張る。
しかしそれでも、足が引きずられる様に少し後退してしまう。それほどの力を受けたことで、掌には多少の傷みを感じる。
少し面白くなって、口の端が上がるのを自覚しながら、ベゼルアイの方を向くと、
「……へぇ、悪くないな。普段から素手で戦ってるのか？」
「急に悪い顔になったわね……。普段は、素手と大剣を使ってるわ」
「ほぅ……」
剣、という言葉に反応してしまうのは剣士の性だろうか。どうしても昂ぶるものを感じてしまう。故に、軽い気持ちで、
「どうだ？　この後、軽く一戦――」
「……さすがに魔人と戦ったらどうなるか解らないし、遠慮しておくわ」
「……そうか。それは残念だ。気が向いたらいつでも声を掛けてくれ」
言って、再び湯船に浸かる。そそるものはあったのだが、嫌というなら仕方ない。今は捨て置こう。
と、思考した時、二つの面で思いつくことがあった。それは、
「……そういえば、他にも聖女の子モンスターが来てるんだったか？」
「ええ、そうよ」
ふむ、と頷き、頭の中に浮き出たある提案を喉に作る。それは、
「会いに行くって言ってたな。――俺もついて行っていいか？」
「……いいんじゃない？」
と、予想に反してあっさりと承諾したベゼルアイに意外を覚える。なので確認を取るように、
「いいのか？」
「いいも何も、ここ、貴方の町でしょ？　なら断れないわ」

「……ま、そうかもだが……」
それに、とベゼルアイはこちらの横を指差し、
「セラもなんだか懐いてるし」
「んにゅー……？」
「……お前、またいつの間に」
気がつけば隣にいたセラクロラスに眉をひそめる。どうにも神出鬼没というか、気配を察知できない。何気に怖ろしいな、と思いながら、ベゼルアイの言葉を聞く。
「それに、いざとなったら強い魔物とか紹介してもらえそうだしね。あなた、魔軍参謀なんでしょ？」
「よく知ってるな……」
「有名よ？　〝決闘魔人〟とか、〝金髪灼眼の魔剣士〟とか、〝ドラゴンスレイヤー〟とか〝魔物界一のイケメン〟とか、異名が沢山……」
「……何だその呼び名は」
ええ、とベゼルアイは頷き、その出本を告げた。
「この町のパンフレットに書いてあったわ」
……絶対、キャロルだな……！
内心、悶絶する思いで頭を悩ませる。後で訂正するように命令しておこう。
こちらがそんなことを考えていると、ベゼルアイは湯船から上がりながら、
「それじゃ、ガイドよろしくね。レオンハルト君」
「……それはいいが、何故、君付けなんだ？」
「？　だって年下よね？」
「……そうか」
「んにゅ……」
結局、それを訂正することもなく、レオンハルトは変人な二人――ベゼルアイとセラクロラスに付いていき、町にいるであろう聖女の子モンスターを探しに外に出た。

聖女の子モンスター2

「――それで、最初はどこを探すか……だな。その二体が行きそうな場所とかはあるのか？」

レオンハルトは二体の聖女の子モンスター、ベゼルアイとセラクロラスと一緒に大浴場から出ると、見張りの魔物兵への説明と、貸し切りの終了を告げてから、二体に問うた。

町の中はそれなりに賑やかで、魔物の往来が多い。当然、魔人であるこちらへの注目もあるが、皆遠巻きに視線を寄越すか、避ける様にその場を後にするかの二択の反応を見せる。

魔人が来ることもあるこの町、そもそも己が管理しているだけあってか、普通の魔物よりは魔人に慣れているとはいえ、やはりその反応には畏怖が見える。時折、うちの軍の所属だと思われる魔物隊長らが敬礼してくるのを手で制しながら、ベゼルアイに視線を向けると、彼女は考え込む様に右手を顎に当てる。

「そうね……」

「ふぁ……」

因みに服装は、ベゼルアイが赤と黒のロングドレス。セラクロラスは首元から伸びる幅広のリボンのみ、という危うい格好だ。

だがこちらにとって一番目につくのは、ベゼルアイが左手で肩に乗せる様に持つ大剣の方だ。その身の丈を越える程の長さを持つ大剣は、先程見せた彼女のパワーを持って振れば、相当の威力が出るだろう。願わくば、それを受けてみたいものだが、今は無理だろう。本人にやる気がない様だし、無理矢理襲う気もない。

そんなことを考えながら、ベゼルアイの返答を待つ。セラクロラスには、こう言っては何だが、良い答えは返ってこなさそうだ、と思う。聞かれても眠そうに欠伸をするのみなので解らないのだろう、と、そんなことを考えていると、ややあってベゼルアイが、

「……甘いものが食べたいわ」

と、告げてきた。それに反応しつつ、甘いものを置いてる店を頭の中に思い浮かべ、

「甘いもの、か。――って、ん？　それは残りの二体がいそうな場所でいいんだよな？」
「……私が食べたいのよ」
「……お前な」
　何言ってんだこいつ、という目でベゼルアイを見る。真面目に考えていたのが勿体無い。
　だが、そんな視線を受けても、ベゼルアイは至って真面目な顔で、
「と言っても、いそうな場所とかちょっと解らないのよね」
「……じゃあ、どうするんだ？」
「気配を探ることは出来るから、地道に町を回るしかないわね……というわけだから、まずは甘いものを食べにいきましょう」
「……セラクロラスは何かないのか？」
　半ば諦めながらも、一応何かあるかもしれない、という思いでセラクロラスに尋ねる。しかし、
「ん……甘いもの、食べる……」
「お前もか……」
「あら、知らないの？　女の子は甘いものが好きなのよ」
「……よく知ってるし、改めて思い知らされた気分だ。……なら、こっちだ」
「話が解るわね」
　微笑を浮かべたベゼルアイと、相も変わらず眠そうなセラクロラスを連れて大通りを道沿いに歩いていく。甘いものの店なら大通りに沢山並んでいるので、その中からお気に入りの店に連れていけばいいだろう。
　しかしその際に、いつもの事であるが、
「……これは……」
「……言いたいことは理解るから言わなくてもいいぞ」
「まるで王様みたい」
「言うなって言っただろうが……」
「にゅ……すごーい……」
　大通りを歩いていくこちらの周囲には、魔物達がいなくなってい

た。
　正確には、こちらが歩く道を確保する様に、皆が端の方に逸れている。まるで王様や、軍の凱旋の様に。それを見て、溜息が漏れるのを自覚しながら、
「有名過ぎるのも困ったもんだな……一応、大袈裟に騒ぐなって命令は遵守してるみたいだが……」
「慕われてていいじゃない。魔人ってもっと怖れられてるのかと思ってたわ」
「慕われてるだけならな……っと、着いたぞ」
　そんなやり取りを交わしていると、目的の店に辿り着いた。
　大通りの角にある、お洒落な外観のお店だ。そこは女の子モンスターの集団や、女の子モンスターと男の子モンスターのペアで行列の出来るお店であり、この町有数のデザート専門店である。
　店に近づいたことで、多少のざわつきを感じながらもそれを無視し、パラソルが差してあるテラス席の元へ行く。すると、ベゼルアイが首を傾げて質問をしてきた。
「……？　行列が出来るくらい満席なのに、何故ここだけ空いてるのかしら？」
「ああ、ここは魔軍の重鎮だけが使える専用席だ。一般の席に混じると、客の空気が凍りつくからな」
　なるほどね、とベゼルアイが得心した様に頷くと、店員がやって来る。それは女の子モンスターであり、
「れ、レオンハルト様！　ようこそいらっしゃいましたっ！　お望みでしたら、貸し切りにしても――」
「畏まらなくていい。それより、適当にオススメを見繕ってくれ」
「う、承りましたっ！　直ちにお持ちします!!」
　注文を適当に済ませると、殆ど駆け足で店員が厨房に走っていった。
　やはり、緊張してしまうのは致し方ないか、と思いつつ、品が届くのを待つ。先に店員が、ドリンクだけをトレイに乗せて戻ってくる。
「お待たせしました！　トロピカルフルーツジュースです！」

ありがとう、と軽くお礼を言って受け取ると、いえいえいえ、と物凄い勢いで畏まりながら離れていく店員。もう少し、落ち着いた方がいいと思うけどな、と内心で言葉にしつつ、ベゼルアイとセラクロラスの感想を待つ。すると、
「ん……美味しいわね」
「おいしー……」
「そうだろう。俺がよく飲むやつだからな」
果物を使ったジュースは、自分がよく好んで飲むものの一つだ。店の方が覚えていてそれを出したということは直ぐに解った。だからどうという訳でもないが。
しかし、本当に美味しいのか、それをごくごくと飲んでいく二人。もしかして初めて飲んだのだろうか。しかしそれも、
……魔物であればそうだろうな。
人間の町であれば、こういった物は少なからず存在するものだが、魔物であるなら手を加えた料理や飲み物など口にする機会はない。聖女の子モンスターと言えども魔物であることには違いないのだ。口にしたことが無かったのだろう。
魔物兵であれば、良いものを食べたり飲んだりすることは多いのだがな。それを目当てに魔軍に入っている者も多いのだし。
と、こちらもジュースを口にしながら、何となく二人を眺めていると、不意にベゼルアイの方が、
「そういえば、この町だとお金が必要なのかしら？　お店とかがあるくらいだし」
「いや、必要ない」
その質問に首を振って答える。すると、また新たな疑問が浮かんできた様で、
「……じゃあ全部、タダで提供してるの？」
「言ってしまえばそうだな……だが、だからと言って無制限に好き放題出来る訳じゃないぞ」
一息。テーブルを指でとんとんと叩きながら、レオンハルトは言う。

「ここで暮らせるのは魔軍に所属している者に限るからな。それ以外の者は店によって制限がある」
「制限？」
　ああ、と頷きを入れ、
「例えば、この店の様な飲食店であれば、一人につきこちらで定めた一人前以上を頼むことは出来ない。それ以上を求めるのなら魔軍に入るか、代わりの対価を支払うか――」
「お待たせしました！　スペシャルケーキセットです！」
　と、話の途中だが注文の品がやってきた。
　幾つかのケーキが乗った皿が三つ、それぞれの前に置かれる。それを見てベゼルアイが、
「……それで、話の続きは……」
　そうやって催促しながら、しかし、視線は皿の上に釘付けの彼女を見て、息が漏れる。
「……とりあえず先に食え。話は後からでもいいだろ」
「……そうするわ」
「ふぁ……あまーい」
「……セラ。先に食べるなんてずるいじゃない」
「美味しい……」
　もう既に食べ始めているセラクロラスを横目で責めるように見たベゼルアイだったが、直ぐに自分の皿に視線を戻すと、備え付けのフォークを手に取り、ゆっくりとケーキを口に運んだ。そして、
「どうだ、美味いか？」
「……」
　しかしその質問に、ベゼルアイは無言のまま固まる。
　……口に合わなかったのか？
　という予想は、すぐに覆された。ややあって、ベゼルアイの身体が動くと、
「――――！」
　ケーキを物凄い勢いで食べ始めた。それなりの個数があったケーキセットは数秒足らずでベゼルアイの口に消えていき、あっという間

に空になる。
　すると、フォークを未だ手にした状態で、こちらを見て一言。
「……おかわりを貰える？」
「気に入ったんだな……。一応、一品限りなんだが――」
　と、続く言葉を放つ前に、ベゼルアイの言葉が飛んできた。それは、
「――魔軍に入るわ」
「あ？」
　短く呟いたベゼルアイに胡乱な視線を向ける。しかし続けて、
「私、今日からここに住むから。だからもう一品――」
「……いや、甘いものに釣られるなよ」
　軽くツッコミを入れるも、ベゼルアイの表情は本気だ。よっぽど甘いものに飢えていたのだろう。レオンハルトは半目になるのを自覚しつつも、息を入れて、気を取り直し、
「……それはそれでありがたいが……別に入らなくても、今は俺と一緒だから好きなだけ食べてもいいぞ」
「……それは本当？」
　その問いに頷きながら店員を呼び止める。そして、
「一通り、この店にある物を持ってこい」
　畏まりました！　という元気な声とともに、店員が下がっていく。
　そのやり取りを呆けた顔で見ていたベゼルアイは、ぽつりと、
「……レオンハルト君って神なの？」
「……甘いもの奢っただけで信仰を得るのは初めての経験だな……俺のも食べるか？」
　皿を差し出しながら言う。するとベゼルアイはまたしても固まり、
「……やっぱり、甘いものの神なの？」
「甘味だけに神ってか？」
「……」
　滑った。ベゼルアイの視線が痛い。思ったことを何となく言ってしまったが、軽率な行いだったと後悔する。
　……おかしいな……ウケると思ったんだが……お菓子だけに。
　とりあえず滑ったことを挽回しようと咳払いをしつつ、

「……好きなだけ食べてくれ」
「そうするわ」
「んゆ、私も……」
好きにしろ、と手を払うようにして許可を出すと、二体の、特にベゼルアイの瞳が爛々と輝き始めた。こちらが差し出した皿のケーキを食べつつ、語尾に〝♪〟が付きそうな程、うっきうきな様子で、
「美味しいわ……」
と、至福の表情で食べ続ける。それを見ながら、
……随分と沢山食べるな……。
今日の分が無くなりそうな勢いだ。
だが、そうは言っても問題はないだろう。食材は定期的に町に運んでいるのだし、と楽観的に構える。
実際、先程は制限がどうのとは言ったが、魔物達が好きなだけ食べまくっても食料については問題ない。
魔物界には、ツリー都市――世界樹と呼ばれる木が幾つもあるからだ。
人間とは違い、魔物達が飢えることのない理由が世界樹だ。あの木は資源が豊富で、取っても取っても生えてくる程の生産性がある。
魔軍が問題なく運用出来ているのもあの木のおかげだ。魔軍の最大動員数は数百万以上あるが、その数を賄えるだけの補給が出来るのは世界樹のおかげである。この町に住む魔物くらいであれば問題にはならない。
ただ、輸送する手間はそれなりに掛かる。魔軍の半分はその補給の為に動員しているといっても過言ではない。重要度はかなり高いのだ。
この町に百万単位の魔物が住んでいるのならまだしも、たかが数十万程度が食っちゃ寝しようが、何の問題にもならない。そもそも一人、ありえないほどの大食らいを抱えているのだ。それに比べれば――と、思ったところで、
「――ん？」
不意に、大通りの方がざわつき始めた。

集団に沿う様に、不安や怯えなどの感情は伝播する。それを感じ取り、眉をひそめていると、横からベゼルアイの声が飛んできた。
「……あら、いるわね」
「あ？　いるって……」
「聖女の子モンスター」
簡潔に、ベゼルアイはそう答えた。運ばれてくるケーキを口にしながら合間合間で喋る。
「この気配は――んぐ、ウェンリーナーね」
「ん……うぇーちゃん……」
セラクロラスもゆっくりと頷く。なら、と、こちらは立ち上がりつつ、
「それじゃ、連れてくるか。お前らはここで待ってろ」
「あら、いいの？」
「いいのも何も、ケーキが途中だろ。ケーキにフォーク刺したまま立とうとするな」
「……本能には逆らえないわ」
「……それじゃ、行ってくるぞ」
ええ、お願いね、と言いながらケーキを口に運ぶベゼルアイに半ば呆れつつも、レオンハルトは大通りに出ていった。

レオンハルトが最初に耳にしたのは、何体かの魔物達の声だった。
「お願いします！　俺と、子供を作って下さい！」
そこに集まっているのは全て、男の子モンスターであった。
数体の男の子モンスター。それも身体が大きく、一般の魔物と比べてもかなりの強さを持つ魔物が並んで、それぞれお願いをしている。
「俺の子を孕んで下さい！」
「いや、ここは俺の種で！」
と、そのお願いは全てこのようなものである。
そしてそうお願いするからには、当然、中心にいるのは一体の女の子モンスターであった。

「ええっと……その、どうしよう……？」
しかしそれは、ただの女の子モンスターではない。
ウェーブのかかった長い緑髪。そして、頭と手首に白いリボンを付けるのみの全裸の美少女。
聖女の子モンスターの内の一体――〝命〟のウェンリーナーがそこにいた。
「う～……誰にしたら……」
彼女は男の子モンスター達に囲まれ、それぞれに子を産んでくれと頼まれて困っていた。
ウェンリーナーとしても、魔物が集まるこの町に来たのは、一応はそれを果たす為である。しかし、優しくお人好しな彼女は、誰とすればいいのかを決めかねていた。
その間にも、男の子モンスター達はどんどんとヒートアップしていく。
「おい！　彼女、困ってるだろ！　お前達は下がってろ！」
「ああ!?　そういうならまずはテメェが下がれ！」
「そうだ！　抜け駆けしようったってそうはいかねぇ！」
「うるせぇ！　彼女だってテメェらみたいな弱っちい精子で孕まされるのはまっぴらごめんだろうよ！」
「この俺が弱いだと!?　だったら見せてやんよぉ！」
「あ、あの……喧嘩しないで――」
「上等だこら!!　ならテメェら全員ぶっ殺して、意地でも勝ち取ってやるよ！」
ウェンリーナーの言葉は、既に頭に血が上り始めた魔物達には届かない。お互いに睨み合って、戦闘態勢を取りながら、
「なら、最後まで生き残った奴が手に入れるってことでいいな!?」
「ああ！　それが手っ取り早い！」
言って、男の子モンスター達は戦いを始めようとした。
「死ねぇ――!!」
だが、それはすんでのところで止められることとなる。
横から割り込んできた影によって攻撃が受け止められ、

「――お前ら、その辺にしておけ」
「ああ!? なん、だ、てめ……ぇ……」
文句を言おうとした男の子モンスターだったが、その姿を見て声が尻すぼみに小さくなっていく。周囲の魔物達も、その姿を見て驚きに息を呑んだ。
そして一体の男の子モンスターが、その名をゆっくりと呼んだ。それは、
「れ、レオンハルト様……」
「……この町での喧嘩は禁止していた筈だが？」
魔人レオンハルト。
魔人筆頭であり魔軍参謀。そしてこの町の管理者である彼を知らない魔物は、この町に存在しない。
圧倒的上位者の登場に、男の子モンスター達は揃って口をぱくぱくとさせる。自分達が何をしでかしていたのかを、ようやく理解し、冷や汗をかいていく。
そんな中、レオンハルトはその鋭い目つきを更に細め、赤い瞳で彼らを射抜くように見る。
「……少しくらいのいざこざが起きるのは理解出来るし、許容しよう。魔物の闘争本能を否定はしない。……だが、本気の喧嘩を、それもこの町でしようってんなら――」
と、レオンハルトは彼らを威圧する様に軽くオーラを滲ませ、
「俺が相手になってやる。……それが嫌ならさっさと散れ」
「は――ははは いっ！ すみませんでしたぁ――!!」
レオンハルトの睨みを込めた言葉に、男の子モンスターは揃ってその場から逃げ出した。
実力自慢の彼らだが、魔人に勝てると思うほど命知らずではない。それも相手は、魔人の中でも最高位の魔人筆頭にして、武闘派、戦闘狂として知られるレオンハルトだ。その彼が収める町のルールを破った時点で、問答無用で殺されてもおかしくはない。許してもらえるだけでも僥倖だ、と魔物達は思っていた。
一部、レオンハルト軍に所属している者達はその騒ぎを見て、さす

がはレオンハルト様だ……！　と、感動を露わにしているが、声を掛ける様なことはしない。かのお方が現在、遠征後のお休みであることは周知の事だし、そうでなくても一魔物兵程の身分では声を掛けることも畏れ多いのだ。
　そのレオンハルトは、男の子モンスター達が去っていくのを確認すると、その原因となった少女を見て、声を掛ける。
「……お前が、ウェンリーナーだな？」
「――あっ、うん……」
　自身の名を呼ばれ、ウェンリーナーは気づいた様に頷く。急な出来事に意識が追いついていなかったのだ。
　目の前にやってきたレオンハルトは、ウェンリーナーの手を取ると、
「えっ、あの……」
「俺と一緒に来てくれるか？」
「それって……」
　その言葉に、ウェンリーナーは考える。つまりそれは、
　……子作りしたいってこと……？
　おそらくそういうことだろう。そうに違いない。
　故にレオンハルトと呼ばれていた彼を見ながら、ほんの少し考える。
　目つきは鋭いが、よく見てみると優しそうで、かっこいい人だ。それに実際助けてくれたし、他に言ってくる魔物もいない。
　断る理由はない。むしろ良いとさえ思える。なら、
「……うんっ！　よろしくねっ」
「……？　ああ、よろしくな」
　手を取り、その腕に抱きつきながら笑いかけた。

　……何だ、急にどうした……？
　随分と距離感の近い奴だな、とレオンハルトは内心、首を傾げていた。

後、見た目が全裸なのが何とも言えない。魔物の中には全裸の奴もそれなりにいるので、そこまで気にする必要はないし、慣れているのだが、こうやって並んで歩いているのは絵面的にあまりよろしくない。

しかしまあ、少しの距離なのだからいいだろう、と軽い気持ちで考え、先程のお店まで歩いていく。途中、ウェンリーナーはこちらを見上げて、

「どこに行くの？」

と、聞いてきたので、あっさりと、

「ケーキ屋だ」

「ケーキ屋？」

やはり知らないのか、首を傾げるウェンリーナーに、続く言葉を放った。

「甘いお菓子を食べれる場所だ」

「あっ、じゃあデートなんだ。わーい」

「いや、デートって言うか……」

「えへへー、デート初めてだから嬉しいなー。ありがとー」

「……まぁ、いいか」

きゃっきゃっと、嬉しそうにはしゃいでいるウェンリーナーを見て、別にいいか、と喉まで出かかっていた訂正の言葉を引っ込める。

無邪気な奴だな、とそんな感想を抱いていると、直ぐにお店に辿り着き、

「ここだ」

「わぁ～……甘くて美味しそうな匂い……！」

「……好きなだけ食っていいぞ。……とりあえず、席に――って」

ウェンリーナーを連れて、ベゼルアイとセラクロラスがいる席に戻ると、そこには、

「おいっ！　どれだけ食べてやがる⁉」

「……えっ？」

テーブルには、山盛りにお皿が積まれており、ベゼルアイの姿を隠していた。その影から、ベゼルアイがひょっこりと顔を出すと、

「あら、戻ってきたのね。ちゃんとウェーも連れて」
「あっ、おべーちゃん！」
「おべーちゃんって呼び方はやめてほしいんだけど……とにかく、久し振りね」
「むー、それを言うならおべーちゃんだって、ウェーって呼ぶのやめてよ。可愛くないよぉ」
「嫌よ、気に入ったもの」
　久し振りの再開なのか、手を取り合って喜ぶ二体。それを見て、何となく責める気も失せたので、席に着きながら、
「仲良いんだな……」
「んゆ……うぇーちゃん……久し振り……」
「ああっ？　いつの間に……」
　不意に膝の上に乗ってきたセラクロラスに内心驚愕する。本気で気配が、というか、触れられるまで気づかなかった。そのことに戦慄しながらも、しかし相手は和やかに、
「あー、せらちゃんも久し振りー！　元気してたー？」
「……元気……ふわぁ」
「えへへ、眠そうなせらちゃん見るのも久し振りだねー」
「……俺の膝で寝るなよ」
「すぴー……」
　聞いちゃいねぇ……、と頭を抱える。というか三体になってまた賑やかというか収拾が付かなくなってきた。身内で慣れてるとはいえ、こいつらも個性が強すぎる。
　だが、ウェンリーナーはそこで首を傾げると、
「あれ？　そういえば、おべーちゃん達は何でレオちゃんと一緒にいるの？」
「……そのレオちゃんってのは俺のことか？」
「うんっ、可愛いからいいよねっ」
　よくねぇ、と言いかけたが、どうせ言っても直さない気がする。先程のベゼルアイとのやり取りを鑑みるに。なので無駄な労力だと諦めていると、続けてウェンリーナーが、

「あっ、もしかして私と一緒で、おべーちゃん達もレオちゃんと子供作るの？」
……ん？　俺の聞き間違いか？　とんでもない事を言っている様な……。
改めて耳を澄ますと、更に続けて、恥ずかしそうなウェンリーナーが、
「私はさっき、レオちゃんに誘われたところだけど……」
「いや待て！　どこでそんな話になった!?」
やはり話が変な方向に行きそうだったので、今度は全力で指摘する。
しかしウェンリーナーは首を傾げ、
「？　だって、レオちゃんが子作りしようって誘ってきて……」
「あら、大胆なのね」
……捏造だ……！
あまりにも急激な展開に戦慄を覚える。というか、周囲で聞き耳を立てる店員や客が、今の話を聞いてざわついているのは気の所為じゃないだろう。
このままじゃ変な噂が流れて大変な事になる。どうにか訂正しておこうと、思案していると、
「それで、おべーちゃんとせらちゃんもするの？」
「……私は保留中」
「んゆ……もうした」
「あっ、もうしたんだ。さすがせらちゃん」
「してねぇよっ!!　誤解を招く様な事を言うな！」
ひそひそとし始めた周囲の反応に本格的にマズいものを感じる。
だが、セラクロラスは首を傾げてこちらを見上げると、
「……したよ……？」
「そりゃあ未来の話なんだろ!?　した、じゃなくて、これからするって話だ!!」
「ひそひそ」
「ひそひそ」

「――って、だから誤解を招くことを言うんじゃねぇ!!」
「今のは自滅じゃない」
「仲良いんだね～」
……もはやつっこむ気にもならねぇ。
これで最後の聖女の子モンスターまで揃ったらどうなるのか、と、何となく嫌な予感を感じてしまう。今からでも抜けてしまおうか……と、思うレオンハルトだったが、放っておいたら更に面倒な事になりそうな気配を感じたので、結局ウェンリーナーも加えて改めて三体にケーキを食べさせた後、聖女の子モンスター探しは続行されることとなった。

聖女の子モンスター3

ウェンリーナーを連れて戻ってきたレオンハルトは、しばらくして己の瞼を揉みながら、半ば呆れる様にして店を出た。
視線を三体の聖女の子モンスターに向けて、
「……お前ら、ほんとに好きなだけ食べやがったな……」
「甘いものなら幾らでも入るわ」
「すぴー……」
「お腹いっぱーい。えへへ、ありがとねー」
こちらの言葉に三者三様の反応を見せる聖女の子モンスター達。セラクロラスが寝かけて地面に倒れ込みそうなところを支えながらも、肩をすくめて言葉を送った。偶然にも一体は見つかったのだ。そうなると次は当然、
「何にせよ、後一体か。一応聞くが、行きそうな場所とかは……」
と、残りの一体の所在、その予測を尋ねる。しかしベゼルアイを筆頭に、
「解らないわ」
「んにゅ……知らない……」
「えとえと、解らない、かな。ごめんねっ」
「……そうか」
そんなところだろうと思ったが、落胆は隠しきれない。どうするかな、と思案を巡らせていると、ベゼルアイが声を放ってきた。
「一つだけ言えることがあるとすれば――」
「……それは何だ？」
聞く。一拍置いて、ベゼルアイが質問に答えた。それは、
「……ハウセスナースが一番、騒ぎを起こしそうってことね」
「……お前らの中で一番？」
「ええ、そうね」
「……頭が痛くなってきた」
額を抑えながら文字通り頭を抱える。この面子の中で一番の問題児。そう言われて気分が悪くならない為政者はいないだろう。それ

がそれなりの力を持つ聖女の子モンスターだと言うなら尚更。
　こちらが頭を抑えたのを見て心配そうに、大丈夫？　と、近寄ってくるウェンリーナーに応答しながら、レオンハルトは息を吐いて、頭から手を離すと、
「……とりあえず、一通り見て回るか。問題児であると言うならある意味、それだけ騒ぎが起こって見つけやすいということだしな」
「ポジティブね」
「そうじゃないとやってられん」
　悲観的過ぎると心労が半端ないことになるからな、と言葉を作る。実際、魔軍参謀なんて要職に就いていると気苦労も多いので、ポジティブな気持ちでいないとやってられないのだ。
　最悪は想定しつつ、その上で後ろ向きになりすぎないのが基本だな。もっとも、それが結構難しいのだが。と、レオンハルトは何となく己の職務における重要な要素を思いつつ、最後の聖女の子モンスターを探しに歩みを進める。
「――まずは広場にでも行ってみるか」
　さすがに、いきなりそこで見つかることはないだろうが、主要施設であればどこに行くにもそこを経由した方が良いだろう。そんな考えのもと、まずは町の中心たる噴水広場に向かった。

　――しかし、レオンハルトはそれを見た。
「ああ……あなたってば……なんて素敵なの……」
　町の中心である噴水広場。
　景観も良く、どの道にも繋がり、その上わかりやすい場所にあることから、普段から多くの魔物の待ち合わせに使われるその場所は、しかし、今は噴水前に一人を残すだけとなっている。
　他の多くの魔物は、遠巻きから中心にいる美少女を眺める。しかしそれは、彼女の容姿が良いから――という訳ではない。
「結婚してくれる？」
　その少女は、もじもじと身体を揺らしながら、熱っぽい視線で宙に

語り掛ける。
　しかし、それに応える者はおらず、しばしの沈黙がその場に流れる。少女は応答が来ないことを理解すると、頬に手を当て、
「あなたったら、ほんとに無口なのね……でも、そんなところも素敵……」
　うっとりとしながら息を漏らす。彼女が求愛している相手、それは、
「……レオンハルト――」
　ではなく、
「――シティさん。……ほんと、素敵な名前ね……」
　この町そのものだった。
　そんな彼女を遠巻きに眺める、町の主は、
「……おい」
「……何？」
　傍らのベゼルアイに向かって問う。視線はそのままで、
「まさかとは思うが……アレじゃないだろうな……？」
　と、指を指しながら言う。
　その先には、噴水広場の前で町に――周囲に語り掛ける青いショートヘアの美少女……否、変態がいた。
　見た目だけなら美少女に間違いないだろう。レオンハルトとしても、それを認めるのはやぶさかではない。
　だが、町に向かって愛を囁いている奴が最後の聖女の子モンスターだとはあまり認めたくはなかった。
　レオンハルトは半ば諦めつつも、一応確認の意味を込めてベゼルアイを見る。しかし、無情にも、
「……ええ」
　と、頷き、
「あれが、ハウセスナースよ。〝地〟のハウセスナース」
「うん、おハウちゃんだねっ」
「ふわぁ……はーちゃんだ……」
「……」

レオンハルトは再度、視線を噴水広場の方に向ける。
するとそこでは、出店で貰ったであろう料理を広げたハウセスナースが、
「はい、あなた。あなたの作った料理を一緒に食べましょ。食べさせてあげるね。あ～ん」
と、地面に向かって料理を差し出していた。べちゃり、と料理が地面に落ちる。
それを見て、
「どう？　美味しい？」
当たり前だが、地面は何も答えない。
しかしハウセスナースは何やら勝手に納得したように、うん、と頷くと、
「無口だけど、美味しいのは伝わってくるわ」
「……あれは、狂人か何かか？　病んでる様にしか見えないんだが……」
「……ハウは惚れっぽいのよ」
「惚れっぽい？」
ええ、とベゼルアイが頷く。表情に少し呆れの色を見せながら、
「些細な切っ掛けがあれば、何にでも惚れるの。人間、男の子モンスター、ムシ、山とか川とか、とにかく何にでも」
「……つまりなんだ。それが今回はこの町だったってことか？」
「おそらく、そういうことね」
「……馬鹿なのか？　実るわけないだろう」
その辺のこと解ってんのか？　と尋ねる。意思のある奴や生き物ならともかく、人工物や自然のものに恋しても応えてくれるはずもない。
こちらの質問にベゼルアイは一度言葉を区切りながらも、答えた。
「分かってる――はずなんだけど、どうしてか直らないのよね」
「おハウちゃん、変わってないなぁ」
「……変わって、ない」
どうやら昔からあんな感じだった様だ。とても微妙な表情になっ

てしまう。再び、視線を戻すと、
「ふふ、あなたの身体大きくて熱くて、とっても硬いわ……」
「石だものね。日が当たって暖かいわ」
「完全にやばい奴じゃねぇか……」
　石で舗装された地面にうつ伏せになり、頬を擦り付けるハウセスナースを見て顔をしかめさせる。ぶっちゃけ近寄りたくないというか、関わり合いになりたくないレベルのヤバさだ。周囲もそのヤバさを感じ取って距離を取っていく、
　このままでは広場が使いものにならなくなるな、と割りと本気で対応を考えていると、広場に向かって声を飛ばす者達がいた。それは、
「いたぞ！　通報にあった変質者だ！」
　魔物隊長と数体の魔物兵。この町の警邏を担当している者だろう。この町の運営には、レオンハルト軍の者を使っているので、当然それが解る。
　おそらく、町の誰かから報告が上がったのだろう。魔物隊長は魔物兵を引き連れてハウセスナースに近づいていく。すると、
「！　何よ、あんた達！　私とレオンハルトシティ様の邪魔しないでくれる!!」
「……？　貴様、何を言っている！」
　訳が分からない、と言わんばかりに声を浴びせる魔物隊長に、ハウセスナースは大声で答えた。地面から身を起こし、両手で自分と、町を指し示しながら、
「私はこの町――レオンハルトシティ様と結婚するの！　だから邪魔しないで！」
「き、貴様、狂っているのか!?　まるで意味が分からんぞ!!」
　心の中で全力で魔物隊長に同意する。言っていることが欠片も理解出来ない。いや、理解することを脳が拒む、というのが正解か。それくらい意味が分からない。
　だが、ハウセスナースはそんな魔物隊長の言葉にも全く怯まず、堂々と胸を張り、
「狂っているといえば狂っているわ！　狂おしいほどに愛し合ってい

るのよ！」
「……た、隊長。この女、完全にヤバい奴です……早く捕まえましょう」
「そ、そうだな……こんな奴を野放しにしていてはレオンハルト様に申し訳が立たない」
　職務に真面目なのだろう。ヤバい奴相手にも実直に仕事をこなそうとする魔物隊長の評価を上げる。内心で感心していると、横のベゼルアイが真顔で、
「なんか不審者として捕らえられそうだけど……捕まったらどうなるのかしら？」
「どんなことをしたのかにもよるが……あの程度なら牢屋で一日放置か、数日間、町で労働させられるくらいだな」
「……じゃあいいのかしら」
　……いや、助けろよ。俺が思うのも何だが。
　正直悩みどころだ。自分が出ていって一声掛ければ直ぐにでも対処出来るが、その代りに己がアレと対峙することとなる。興味本位で聖女の子モンスターに関わったことを少し後悔してしまうが、しかし、興味があるのもまた事実で。
　……行く、か……。
　気が乗らないが、どうやら腹をくくるしかない様だ。そうして足を一歩踏み出した時、
「邪魔よ！」
「う、うわあああああ!?」
「ぐおっ!?　こ、こいつ、強いぞ……！」
　ハウセスナースが手に持ったハンマーで地面を叩くと、地面が隆起して魔物兵を吹き飛ばす。もしかしなくてもあれが彼女の能力なのだろう。大地を操る力。
　しかし、惚れていた相手を叩いて操っていることにもなるのだがいいのだろうか、とそんなことが気になってしまう。
　とにかく、魔物兵が犠牲になる前に止めてやろう、と前に出た。
　その時だ。不意に、耳に聞き覚えのある声が響いた。

「――お待ちなさいな！」
その声は、上方向から聞こえた。こちらからは前方となるその場所、周囲の者達が視線を向け、
「だ、誰?!」
ハウセスナースが叫ぶ。その先は広場の中心。噴水の上部にある足場だ。
陽光を背に、金髪の少女が眼下を見下ろす。そして、ハウセスナースの言葉に応じた。
「誰、と聞きましたね！　ならばお答えしますわっ！」
ぴしっ、とポーズを取り、少女は口上を述べた。
「わたくしはこの町を統べる魔人……レオンハルト様の第一使徒にして、魔物界一の完璧使徒。そう、わたくしこそが――」
とうっ、と、そこで少女は跳躍した。
もう聞かなくていいかな、とレオンハルトが思う中、見知った少女は広場に降り立ち、ハウセスナースと対峙する。右手を身体の前で交差させるように、斜めに構えると、彼女は高らかに名乗った。
「優雅にして華麗なレオンハルト様の第一使徒――キャロルですわっ!!　以後、お見知りおきを!!」
「……あれが使徒なの？」
「いや、まぁ……あれでも結構良いところがあってだな……」
「へぇ、面白そうな子ね」
「まぁ……」
ベゼルアイの言葉に若干のフォロー入れながら渋々と頷く。いや、派手好きで落着きが足りないところもあるが、純粋で向上心のある良い子なんだ。なんだけど、なぁ……、と、なぜだか溜息が漏れてしまう。
そうしてレオンハルトが半目になる中、ハウセスナースはキャロルに向かって、
「……何？　あんたまで邪魔する気？」
「ふふん、当然ですわ。この町、レオンハルトシティの管理を任されているわたくしには、その義務がありますのよ」

「管理……はっ、まさか――」
ハウセスナースがはっと気づいた様に目を見開かせる。その言葉にキャロルは、胸を張り、
「気が付きましたわね！　そう！　このわたくしは、この町の――」
と、そこでキャロルは右腕に身に着けた腕章を見せつける様に半身になる。
そこに書かれていた語句を、キャロルは告げた。
「――町長、ですの！　つまり、あなたが愛するこの町の、謂わば保護者の様なものですわ！」
つまり、と。
「この町と結婚するなんて言語道断ですが……それでもしたいのであればこのわたくしを認めさせることですわね！」
「――っ！」
ハウセスナースが衝撃を受けた様に身を仰け反らせる。
だが、歯を食いしばってキャロルを射抜く様に見ると、啖呵を切る様に、
「じょ、上等よ！　私の愛をあんたに教えてあげるわ！」
「その挑戦、受けて立ちますわ！」
熱が入り、盛り上がる二人。
そのやり取りを見て一歩後ろに下がると、それを見たベゼルアイがこちらに視線をやり、
「……で、どうするの？　行く？」
「……保留だ。様子を見よう」
本音では、今すぐ帰りたい、と思いつつ、レオンハルトはその場で様子を窺うことにした。

沈黙が、噴水広場に生まれていた。
通報を受けてやって来た魔物隊長達も、周囲の野次馬達も、それに紛れて何となく隠れるレオンハルトと聖女の子モンスター達も、皆がそれを遠巻きに眺める。

視線の先には、町の管理者である使徒、キャロルと、その町と結婚するという聖女の子モンスター、ハウセスナースが対峙し、お互いに睨み合っていた。
そして最初に発言したのは、ハウセスナースの方だった。彼女は、眼前のキャロルに向かって大声を放つ。
「町長――いや、お母さん！　この町は、私が貰っていくわよ！」
「……何気にとんでもないこと言ってるわね、あの子ったら。ある意味侵略宣言というか、宣戦布告になってるじゃない」
ベゼルアイの指摘に内心で同意するレオンハルト。何気に危ない発言だよな、と思う。
対して、その発言を受けたキャロルは
「この町は渡しませんわ！」
と、真っ向から対立する。再びベゼルアイが真顔で、
「……これってあれよね。〝お父さん、娘さんを僕に下さい〟ってやつ。性別は逆だけど、本で見たことがあるわ」
「性別どころか、相手は無機物というか土地というか、よく解んねぇけどな……」
「んにゅ……地元愛……？」
「一番近いのはそれかもな……別にアイツの地元じゃないが……」
「えーっと、郷土愛、かなぁ？」
ああ、それか、とウェンリーナーの言葉に得心しかけるも、どうもしっくりこない。町を愛するって字面だけだとそこまでおかしくないのだが、それが結婚したいほど、となると急に狂人度が跳ね上がるから不思議だ。
先に割って入らなくて良かった、と己の幸運に感謝しつつ、レオンハルトは言葉を続けるキャロルを見た。ハウセスナース相手に胸を張り、一歩も引かない様子を見せながら、
「それに、この町と結婚するとあなたは言いますが、その相手のことをどれだけ知っていますの？」
「っ、それ、は……」
言葉を詰まらせるハウセスナースに、いいですか？　と、キャロル

は前置きし、
「この町を作ったレオンハルト様のこと、町を作るに至った経緯、町の面積、どんな施設がどれだけ有って、どれだけの人数が住んでいるか――レオンハルト様のことを全く知らないあなたが、レオンハルト様の町と結婚するなんて、笑止千万ですわ！」
「そ、それは……そ、そう！　これから知っていくのよ！」
ハウセスナースの苦しい言葉に、ふ、と笑みを浮かべたキャロルは言い聞かせる様に、
「大体、町とはどの範囲までを指しますの？　定義は？　この町には多くの魔物が暮らしていますが、それも含めて町と言えますのよ。それこそ上は魔王様から下は魔物兵まで、関係者は魔軍に沢山いますし、物資はそれ以上に多いですが、それらも全部含めて結婚すると、あなたは言いますの？」
「くっ……！」
ハウセスナースがキャロルの怒涛の指摘を受けて気圧された様に一歩下がる。その様子を見て、
「すげぇ……キャロルが論理的に喋ってる……というか、まともに見えてくるな」
「あの子のキャラが解らないから何とも言えないけど酷い言い草ね……。でも、ハウの滅茶苦茶さには勝てないようだけど」
「お前も充分酷いけどな」
何というか、いつの間にか身内の変人度やアホっぽさで勝負する方向にシフトしてないだろうか。確かにその点で言えばキャロルはハウセスナースに負けてる気もする。
だが、キャロルはキャロルでこちらが絡むと滅茶苦茶になるからなぁ、と何となく不安な面持ちで見ていると、案の定、キャロルが、
「それに……例え、その定義を決め、町のことを知り尽くそうとも、レオンハルト様の許可がなければその様な事、断じて許されませんの！
町と結婚するということは、レオンハルト様と結婚するのも同義――何故なら、この町の全てはレオンハルト様のもの！　当然、レオンハルト様の許可が必要ですわ！」

さあ、と、キャロルは通る声で言った。レオンハルトは何だか嫌な予感を感じながら、
「――皆様、刮目しなさい！　最強最高の魔人、レオンハルト様の登場ですわ!!　」
「……えっ」
と、不意にこちらがいる方向に振り向き、キャロルは紹介する様に掌で広げて示してきた。間の抜けた声を出してしまう中、キャロルの声と手の方向から、周囲の者達が一斉にこちらに振り向く。気づいていなかった魔物隊長や他の魔物達がぎょっと目を見開き、こちらの名を呼んだ。
「れ、レオンハルト様……！　いつの間に……！」
畏怖の視線とともに傅く魔物隊長と魔物兵達。その他、大勢の注目を浴びていることを自覚しながら、レオンハルトはキャロルの声を聞いた。
「――どうぞこちらへ！」
「気づかれてたみたいね……。呼ばれてるけど、どうするの？」
「……あの馬鹿……」
横から飛んできたベゼルアイの声には小声で答える。よくよく考えてみると、
「迂闊だった……あのキャロルが、俺が近くにいるのに気づかないわけがない……！」
直ぐに気がついて駆け寄ってこなかった時点でおかしいと思うべきだった。こちらを察知する能力だけは誰よりも優れているしな。ガルティアのレーダーや、スラルの探知魔法にすら勝るほど。改めて考えると、やはり異常だな……。
ともあれ、既に注目を浴びて呼ばれているのだ。無視するわけにもいかないだろう。なので腹をくくりつつ、そっと前に出ていく。
一歩ずつ、確かな歩みで噴水の前まで行くと、ハウセスナースが驚愕の面持ちでこちらを見やり、
「あ、あんたが……」
「……ああ、そうだ。お前の想像通り――」

と、冷静に威厳を乗せた声で言うと、ハウセスナースは言った。声を震わせ、
「――お、お父さん……！」
「そう、この俺がお前が愛する町の父――」
って、
「んなわけあるかあッ!?」
「あ、ノリツッコミ」
「レオンハルト様はギャグセンスも一流ですわね……！」
背後からベゼルアイの半目と、キャロルの尊敬の眼差しを受けながら、ハウセスナースと向き合う。会話に真面目に付き合うと、こっちの威厳溢れるイメージが崩れていきそうだ。なので言いたいことだけ言って終わらせよう、と、レオンハルトは決意し、
「……お前が、ハウセスナースだな」
「相変わらず変なものに惚れてるのね、ハウ」
「おハウちゃん！　久し振りー！」
「……はーちゃん、変わってない」
ベゼルアイ、ウェンリーナー、セラクロラスがそれぞれハウセスナースに、再会の言葉を掛ける。それを聞いたハウセスナースは驚き、
「なっ……べー！　ウェー！　セラ！　皆揃って……というか、その呼び方やめてよ！」
「そっちこそ、べー、と呼ぶのはやめてって言ってるでしょ」
「そうだよ～……ウェーって、うぇ～って感じで可愛くない……」
「ふぁ……私は、どっちでも……」
「……お前ら、いつもこんな会話してるのか？」
割りとそうね、と、言うベゼルアイと他の二体の頷きを見て、レオンハルトは呆れた様に息を吐く。呼び方くらい何だって言いだろ、と内心で言ってみる。実際に声に出すと面倒そうなので言うことはしない。
とりあえず、せっかくの再会のところ悪いが、言うべきことだけ言ってしまおうと、ハウセスナースに向かって、

「おい、ハウセスナース」
「な、何よ……？」
　ちょっと怯えているのはどういう心境なのだろうか。最近、意外とこちらを畏れないものが多いので新鮮に見える。特に聖女の子モンスターだと。少し苛めてるみたいで悪い気もするが、直ぐに終わるから許してほしい。
　と、思いつつ、レオンハルトは言葉を発した。
「……悪いが、この町とお前が結婚することは出来ない。――諦めてくれ」
「……っ」
　自分でも本当は解ってるんだろ？　と、言外に訴えながら、
「そもそも性別がないし、生き物でもない。例えそれがあったとしても、結婚を許可することは出来ない。だから――」
「……う」
　そしてさらに説得の言葉を続けようとした時、不意に、ハウセスナースが顔を俯かせると、
「……あ、来るわね」
　背後のベゼルアイの、来る、という言葉に疑問を覚えた。その瞬間、言葉通りにとある現象が起きた。それは、
「――びぇーーーーーーん!!　ま、また、振られたあーーーー!!」
　――号泣だった。
「……あ？」
　目元から滝の様な涙を流し、泣き叫ぶハウセスナースに絶句していると、ベゼルアイが顔を抑え、
「ハウは、振られたら大体こんな感じで泣くのよね。――だから言ってるでしょ、ハウ。好きになる相手はちゃんと選びなさい。せめて生き物じゃないと、報われるわけないでしょ？」
「え、えら、選んだもん！　ちゃんと、選んだもん！　うわぁぁああああーーーーん!!」
「選んでこれなら尚更悪いわ。……そろそろ、ふられ記録も７０００回越えたかしら」

「ひぐ、ぐすっ……ま、まだ６９９９９回だもん！　びえぇぇぇぇーーーーん!!」
「……それでもすごいな」
　涙と鼻水でぐしょぐしょになっているハウセスナースに感嘆を覚える。今回の様なそもそも叶うはずのないものを除いたとしても、それだけふられるというのは一種の才能じゃないだろうか。
　しかしそれも、言えば泣くのが更に酷くなるのは目に見えているので言いはしない。
　どうしたものかな、と考えていると、背後から駆け寄ってきたキャロルが、
「レオンハルト様、どうしましょう？　一応、不審者として通報はされていますが……しょっぴきますの？」
「やめたれ。泣きっ面に蜂にもほどがあるだろう。……しかし、ここで泣き続けられるのも困るな……」
「レオちゃん、どうするの？」
　レオちゃん!?　と、初めて聞く呼び方に驚くキャロルを捨て置いて、レオンハルトは思案する。このままだとどうせ、女の子モンスターを泣かせた魔人レオンハルト、みたいな感じで噂が流れるだろう。ゴシップというのは、得てして詳しい事情までは伝わらないものだ。それを払拭するならば、上から塗り替える必要が出てくる。となると――
「……ふむ。おい、ハウセスナース」
「ふぇ……な、何よぉ……？」
　レオンハルトは考えた末の案を、ハウセスナースに提示した。
「せっかくだ。俺が恋の――そう、お見合い相手でも見つけてやろうか？」
「へ……？」
「どういうこと？」
　こちらの提案に、ハウセスナースだけでなくベゼルアイや他の者達も視線を向けてくる。一応、全員に説明するように、言葉を生んだ。それは、

「俺はこう見えて顔が広いからな。魔軍の中から良さそうな男を見繕ってやる。その中から適当に選んでみないか？　お前も、相手を探しに来たんだろう？」
「……」
　ハウセスナースが一旦泣き止む。ふむ、反応は悪くない。もう一押しだな、と。
「お前が好きなこの町の住人だっているぞ。その中から選んでも構わない。……まぁ、もちろん相手の同意もあるし、お互いに強制はしないけどな」
「……」
「もし、直ぐに気が進まないと言うなら、ほとぼりが冷めるまでこの町に住んでも構わない。早ければ良いってものでもないからな」
　と、レオンハルトはそこで一旦溜めを作る。そして、
「――どうだ？　お前の好きだったこの町で、新しい恋を見つけてみないか？」
「――――」
　まるでそういった本のキャッチコピー。煽り文の様な謳い文句を、レオンハルトは告げた。しかし、考えるのは自分へ利することであり、
　……と、まあ、ここまで言っとけば充分だろ。泣き止んだみたいだし、恩も作れる。上手く行けば、ベゼルアイと揃って俺と戦ってくれるかもな。
　聖女の子モンスターが問題を起こさない様に。そして、聖女の子モンスターの強さを見込んで探索に加わったレオンハルトだったが、とりあえず目標は達成出来そうなので安堵する。
　一先ず、大きな騒ぎは起こらなかった。戦いの方は、セラクロラスとウェンリーナーは戦闘系じゃなさそうだが、ベゼルアイとハウセスナースに関しては結構楽しめそうだ。
　仮にそれが出来なくても、まぁ、いいだろう。少し残念ではあるが、親交を持っておけば何か役に立つかもしれない。
　と、極めて政治的かつ打算だらけの案を企てる。俺も、随分と悪に

なったなぁ……と、昔と比べてしみじみとしつつも、悪いようにはしないのだからいいだろう、と、自分を納得させる。
……さて、返答は？
ハウセスナースに軽く手を差し伸べながら待ち続ける。よく考えれば、この状況も美談みたいで良いかもな。噂を払拭するいい材料になるだろう。メリットだらけだな。とりあえず、了承したらリー大将軍でも紹介してやるか。強さ的にも人格的にも問題ないだろう。
そんなことを考えていると、不意に後ろからベゼルアイが、
「……レオンハルト君。忘れたの？」
「……あ？　何がだ？」
一体自分が何を忘れたのか、と、怪訝な顔をしてみせると、ベゼルアイは溜息付きで、こう言った。
「……そういう切っ掛けを作ると駄目だって」
瞬間。前から、
「……素敵」
「えっ」
ハウセスナースの口から放たれた声に耳を疑う。まさか、
「あ、あの……レオンハルト――様」
「……何だ？」
急に様付けで呼んできたことで、嫌な予感が確信に変わりつつも、その先を聞く。
するとやはりと言うべきか、ハウセスナースは熱っぽい視線をこちらに向け、
「その、それは……結構です。だってもう……新しい恋を見つけましたから――」
と、言う。それは、
「レオンハルト様――結婚してください」
「……あ」
……やっぱりかーーー!?
がしっと、手を握られたところで、レオンハルトは内心の叫びを作りつつ、横から飛んできたキャロルの声を聞いた。

「何を言っていますの!!　駄目駄目駄目駄目っ！　駄目に決まっていますわ!!　レオンハルト様は独占禁止！　ファンクラブの戒律と、町のルールで決まっていますのよっ!!　ちゃんとパンフレットを熟読しなさいな！」
……そんなことまで決まってんのか。ファンクラブはともかく、パンフレットにまで書くのはやめろ。
後で絶対パンフレットを精査して校正してやる、と決意する中、キャロルは憤った様に、
「そして愛されたいのであれば、ファンクラブに入るなりしてからしっかりとポイントを溜めることですわ！　そうすれば、レオンハルト様と触れ合える場に参加出来――」
「あ、じゃあ使徒にしてくれる？　あなた……」
「い、いや、それは――」
「人の話は最後まで聞きなさいっ!!」
キャロルがぜーぜー、と息を吐きながら言う。あのキャロルが押されてることに戦慄しつつ、今度はベゼルアイが、
「……まあ何となくこうなるんじゃないかとは思ってたけど。でも、惚れるのはともかく、使徒になるのは駄目よ。幾ら私達でも、孕めなくなるかもしれないし」
そういう問題じゃないだろ、と内心でツッコミを入れるも、ハウセスナースは不満そうにしながらも、渋々と、
「えー……そんなの解らないじゃない、出来るかもしれないし……」
「解らないから駄目なのよ」
「……じゃあ一先ず、結婚だけで我慢する」
「だ・か・ら！　それは駄目って言ってますのよ――!!」
「何よ、また邪魔する気!?　今度は容赦しないわよ!!」
キャロルとハウセスナースが再び睨み合いを始める。今度はキャロルの方も、がるるる、と威嚇する様に眉を立てているのを見て、
「……」
「えっと……レオちゃん、大丈夫？」
「んにゅ……寝る……？」

「……寝る、か。それもありかもな……」
更にまずくなった現状に現実逃避を考える。一先ず、行うことは、
「……おい、魔物隊長」
「は……はっ、何でしょうか……？」
近くにいた警邏担当の魔物隊長を呼びつけ、レオンハルトは命令した。その内容は、
「……町の住人も含めた魔軍全軍に今回の出来事を隠し、代わりに別の噂を流せ」
「はっ、それはどういう……？」
ああ、と、頷き、
「……町に求婚する不審者が現れたと」
「……畏まりました」
はぁ、と息を吐いて、頭を抱える。
後ろではベゼルアイが、
「……とりあえず、良さそうな町だししばらく滞在しましょうか。手続きとかいる？」
「え、あっ、はい。でしたらパンフレットに同梱の申請書に必要事項を記入の上、大通りにある役所に持っていき、そこで住民票に登録を――って、どさくさに紛れて何書いてますの！　あなたにはまだ話が残ってますのよ!?」
「うるさいわね。私はもうここに住むって決めたのよ!!」
ぎゃーぎゃーと、喧嘩する二人から視線を切り、レオンハルトは視線を空に向けると、
……何だろうな、いらないもんを抱え込んだ気がする……。
と、頭痛を覚えながら、一先ずはこれ以上の騒ぎが起こらない様に空に祈った。

――だが、
「……レオンハルト。また、誰かに惚れられたんだって……？」
「い、いや……た、ただの女の子モンスターだから……よくある事だろ

？」
「……ふーん……とりあえず、イラッとしたから雷魔法で良い？　雷撃辺りで」
「おいっ!?　お前の魔法は常人とはレベルが違――」
と、どこからか噂を聞きつけたスラルのイライラが収まるまで、レオンハルトは軽い魔法を受け続ける羽目になった。

運命の決まった日

魔人レオンハルトの使徒、キャロルは至福の時を迎えていた。
場所は親愛なる主の私室。そのベッドの上だ。ふかふかのベッドに仰向けになり、見上げるのは当然、魔人レオンハルトだ。
そして時刻は夜。いつもであれば就寝する時間だ。その時間にキャロルが主のベッドにいること自体は、別段珍しいことではない。
最近、スラル様と結ばれるまでは殆ど毎日の様に、主のベッドに潜り込んで寝ていたものだ。そこでただ寝るだけでも充分幸せだが、やはりそれ以上を望むべく身体を押し付けたり、それとなく誘ってみたりといろんな手段を取ってきたが、手を出されることはなかった。
しかし、どういう風の吹き回しか、とうとう主が自分に手を出してきた。やはりこちらの愛が届いたのか。それともただの気まぐれか、理由は解らない。しかし理由が何であれ、
「ん、ふぅ……幸せですわぁ……」
「……そうか」
「んっ……」
こちらの言葉に、レオンハルト様はぶっきらぼうに返しながらも頭を撫でてくれる。主の掌の感触を頭で堪能するこの時間が、キャロルは大好きであった。
もとより主に尽くすことが使徒の使命であるし、主の為に働くことがキャロルにとっての生きがいであり、喜びである。対価があろうが無かろうが、それは変わらない。
しかしこうやって褒められることは何よりも代えがたい褒美だと思うし、主の寵愛を受けることはキャロルにとって望外の喜びだ。念願が叶ったともいえる。
長年の願いが叶った今思うことは、これが今日一日だけのことじゃないと願うことと、これが夢オチでないことを祈ることであった。

「――んへへ……レオンハルトしゃまぁ……そこは……」
「……今日は寝言が凄いな……」
自室のベッドの上で横になるレオンハルトは、幸せそうな表情で眠るキャロルを見て、やれやれといった面持ちで呟いた。
普段から一緒に寝ることはそれなりに多いが、妄想でトリップすることはあっても、寝言はそこまで多くないと認識している。うるさい時は一人で勝手に盛り上がり、毛布に包まってごそごそとしている時だ。そういう時は追い出すのだが、今日に関しては、
「……ま、しょうがねぇのか……」
裸で肌をさらけ出した状態のキャロルに毛布を被せてやる。溜息をつきながら、
「にしても……いくらイキ過ぎたからって、主を放って先に眠るのはどうなんだ、なあ？」
半目で責める様に呟く。一応、普段であれば喋りかけた時点で起きるのだが、これで起きない辺り、よっぽどだったのであろう。忠誠心が高すぎるのも考えものだな。
おかげでこっちは不完全燃焼だ、と心の中で軽い悪態をつきながら、レオンハルトは裸のままベッドから出る。時刻はもう朝方だし、水でも飲んで落ち着こうと立ち上がりながら、
「全く、苦労させるな……」
と、レオンハルトは苦笑しながらも、全くそうは思ってない声色で言った。

その少し前。
「――ん……もうこんな時間」
スラルは、久し振りに一人となった自室のベッドで起床したところであった。
レオンハルトと一緒に夜を共にするようになり、結構な時間が経った。おかげで夜、寂しさや不安に思うことは殆ど無くなり、幸せな時間が増えた。

しかしその分、彼の時間を奪ってしまう形にはなる。他の身内との交流も大切なのだ。それは、レオンハルトにとっても、自分にとっても。だから二人きりで過ごすのは、必然的に夜が多くなる。しかしそれでも、

……たまには、時間を作ってあげないとね。

そうでないと、ケッセルリンクやキャロルが報われないし、レオンハルトだって、たまには一人の時間が欲しいだろう。一人の時間を作らせると、高確率で新しい女性を誑かしているのが癪だが。この間も聖女の子モンスター全員と知り合いになっていたし、油断も隙もない。確かに自分以外ともそういう関係になったりするのを一応許した。許しはしたが……だからといってそうポンポンと増やされても困る。もっとゆっくりと時間を掛けて、こちらにもそれとなく知らせてほしい。こちらとしても心の整理が必要なのだ。一人くらいならともかく、いきなり四人はやはりムカつくし。

やっぱり、もうちょっとお仕置きしておいた方が良かったかな、と少しだけ思う。ただ一方で、自慢の彼が色んな人に好かれているというのは、ちょっとした優越感を感じないでもないから不思議だ。げに恐ろしき女心。人気なのは嬉しいが、モテすぎているのはそれはそれでイライラさせられるのだ。色々と矛盾してる気がする。

ただ、

「昔に比べたら……全然、今の方がいい」

しみじみとそう思う。そしてその事に、心が暖かくなるのだ。

――自分が魔王になった当初、自分の周りには誰もいなかった。

いや、いるにはいた。――ただ、それは自分と同じ人間ではない。魔に属する者達だけ。

厳密に言えば自分は魔王になったのだから、彼らの仲間といえるかもしれない。

だが、魔人と呼ばれる者達は、〝人〟という字が入っていても、元が人間の者は皆無であった。

その全てが、ドラゴンや魔物が出身の魔人や使徒。多くの魔物達。彼らは自分に傅いてはいるが、だからといって仲間とは思えなかっ

た。
隙を見せたら殺されるのではないか。寝首をかかれるのではないか。そんな不安が頭から消えず、自分は百年間、魔王を演じ続けた。その裏で孤独と不安に苛まれ続けた。
私は求めた。自分の味方を。だから探した。強い人間を。――そして見つけた。
剣の王と呼ばれる人間。ただの人間でありながら、魔軍を何度も撃退している強い人間だ。
私は準備を整え、その彼の治める集落に向かった。
そして魔人の中で唯一マシな方だと思えたメガラスに命令し、その人間と戦わせた。
結果は人間の負け。しかし、その強さは可能性を感じさせるものであった。
性格に問題は無さそうだし、才能はある。後、容姿の査定も……無かったと言えば嘘になる。だって、どうせ味方にするなら格好いい方がいいし。
ともあれ、そこで私は瀕死の人間に語りかけ約定を交わし、彼を魔人にした。
私が初めて作った魔人――レオンハルトだ。
あの日の事は今でも鮮明に憶えている。彼は戸惑いつつも、改めて私に忠誠を誓った。自分が生まれ育った集落の安堵と引き換えに。
自分を化け物扱いしていた集落の人間を助けるなんて理解出来ない、と思っていた。
しかし彼はそうした。そして自分も少し理解した。彼が優しい人なのだと。
少なくとも他の多くの魔人の様に、暴虐の限りを尽くすことを、好む様な者ではないのだと。
そして自分と同じ、元〝人間〟。それだけでも、自分の心は少し安らいだ。
それからは色んな事があった。
彼が決闘を望み、とある魔人を斬り殺した。今思えば、あの頃から

戦闘狂だった。
初めて自分の料理を人に振る舞った。自分の料理があんなに酷いことを初めて知った。
新しい仲間の勧誘をレオンハルトに頼んだ。ガルティアという、大食らいでさっぱりとした人間が仲間になった。意外と個性のある、彼のムシ達も付いてきた。
レオンハルトに、人間を滅ぼさないでほしいと頼んだ。口にはしてないが、それを悟られた。彼はそれを引き受けてくれた。彼に必要以上の苦労を掛けさせることになってしまった。
レオンハルトに使徒が出来た。キャロルと言う、とても明るく賑やかな子だ。落着きが足りないところもあるが、屈託のない良い子だと思う。
また使徒が出来た。今度はドラゴン・カラーの使徒、ハンティ・カラー。後から聞いた経緯は滅茶苦茶であったが、今ではそれを受け入れて、それなりに楽しくやっている。快活で、情に厚い人だ。
初めての長期休暇を、レオンハルトに与えた。するとカラーの女性二人と関係を持っていた。解せない。そのうちの一人、ケッセルリンクを魔人にした。元々夜の王は仲間にしようか悩んでいたのもあったし、渡りに船ではあった。レオンハルトと関係を持っていたのでおしゃかにしてやろうかと思ったが、彼女と実際に話して結局は魔人にすることにした。今思えばこの判断は正解だったと思う。
しかしその後で、伝説の四大聖竜とレオンハルトが戦った。実力は伯仲しており、かなり心配だったが、一応はレオンハルトの勝利で終わり、二人で翔竜山の頂上の景色を見た。
奈落に調査に向かった先で奈落の王と呼ばれる魔人、ますぞゑを連れて帰ってきた。ついでにハニ子と使徒二体がついてきた。ますぞえは意外とユニークだと思う。後、たぶん寂しがりやっぽい。
レオンハルトと二人でデートをして、そして……結ばれた。さすがに町を一つ作るのはどうかと思う。後、初めては痛いと聞いていたが、それどころじゃなかった。薄々察してはいたが、レオンハルトは……色々とヤバい。今は慣れてしまったが、喜んでいいのか判断に困

る。
海に行って、キャロルやケッセルリンクのこともあるから、と、軽い許可を出してみれば、四体の聖女の子モンスターを町に住まわせていた。これからどうなるかは未知数。ただの友人になるのか、それとも……。本当にレオンハルトのことが好きで、レオンハルトもそれに応えるなら許してやってもいい。それまでは何とも言えないが、とりあえずレオンハルトに嫌味を言ってしまうことになるかも。悪いのはレオンハルトの方なんだからね、と。
他にも、色々なことがあった。レオンハルトがカミーラと戦って城を破壊したり、一緒にお酒を飲んだり、魔法を皆で教えたり、ファンクラブのイベントがあったり、遊んだり、ご飯を一緒にしたり、叱ったり、誂われたり、楽しんだりして、過ごしてきた。
そこには大勢の仲間がいた。いつの間にか人間に拘らなくなっていた。いつだって誰かがいたのだ。
寂しさや不安は、いつの間にか無くなっていた。
そのとても賑やかで幸せな時間は、これからも続いていく。続かせる。
誰かといる幸せを知ってしまった。もう孤独には戻れないし戻りたくない。誰一人として、失わせたくない。
――今あるこの世界は、いつまでも続くものじゃない。いつ消えてもおかしくないのだ。
私はそれを知っている。だから、その運命を破壊する。その第一歩として――
「……よし」
手元に、四つの鍵を用意し、意気込む様に声を出す。
準備は万端。例え道中、何が起きても大丈夫なように様々なものを用意しておく。
今は夜明け前。今から行けば、昼頃には向こうに着くだろう。
スムーズにいけば、直ぐにでも帰ってこられる。転移魔法陣は問題なく発動する。
今日はレオンハルトも忙しいし、出来れば皆が気づく前に帰って来

たいところだ。そこでお披露目しよう。
「私、頑張るからね――」
気合いを入れ直す様に頬をぱしっと叩くと、スラルは人知れず、魔王城から出立した。

「――？　何だ……？」
仕事中。レオンハルトは違和感を憶えた。頭を押さえ、眉間に皺を寄せる。それを見たキャロルが首を傾げながら尋ねる。
「レオンハルト様？　どうかいたしましたの？」
「……いや、ちょっと頭痛がしただけだ。気にするな」
本当はそれだけではない。妙な動悸というか、胸騒ぎを覚えたが、心配させない様に軽く手を振って大丈夫なところをアピールする。
しかし、
「それは大変ですわ、レオンハルト様！　頭痛を治す為に、わたくしの身体を――」
「……調子に乗るな」
「あうっ」
馬鹿なことを言い掛けていたので、近づいてきていたキャロルの頭を軽くはたく。短い声を上げたキャロルに、レオンハルトは溜息付きで、
「頭痛と何の関係があるんだ、それは。ったく……今は仕事中だぞ」
「うぅ、申し訳ありません、レオンハルト様。確かに、今日はケッセルリンク様とのお約束があるのでしたね。それはわたくしが野暮でしたわ……」
「……確かにそうだが、それは関係ないだろ。別に約束が無かったら良いという訳でもなしに……」
微妙な表情で頷きつつも、やんわりと否定しておく。というか、
「……もし、その約束がハウセスナースとかだったら――」
「阻止！　全力で阻止ですわっ!!　あの方はルールを破るばかりか、レオンハルト様にまで迷惑を掛けて……！　そんなのは言語道断、あ

りえませんのよ！　ただ、レオンハルト様の邪魔をする訳にはいかないので、レオンハルト様の残弾数を、ここで全て放出してもらうことになりますが……」

「それは、邪魔になってる様な気がするんだが……」

しかし、ハウセスナースには困っているのは確かだ。あいつがこちらに惚れてからというもの、どこでも構わずアプローチを仕掛けてくる……と、最初は思ったのだが、それよりも大胆というか滅茶苦茶な行動に出てきた。

『あなた……その、ここが私達の新しい新居で――』

と、そんなことを言いながら、魔王城地下に作った迷宮に自分を監禁しようとしたのだ。地のハウセスナースの力は伊達ではなく、それはものの数十分で作られたものだ。

そのことにキャロルが怒って、迷宮攻略隊――ケッセルリンクやガルティアなどの魔人を中心にした部隊で攻め入ろうとしたが、その前にあっさりと自分は脱出した。さすがに聖女の子モンスターとはいえ、あの程度であれば逃げるのは容易だ。

惚れるのは相手の勝手だし、別に悪い気は――しない……う、む、多分しないが、迷惑を掛けられるのは困る。だから去り際に、

『俺のことを好いてくれてるのは嬉しいが、本当に好きだと言うならもっとやるべきことがあるだろう』

と、半分本音、半分振られてもいいや、という雑な考えで言ったのだが、後日。迷宮を改良したハウセスナースが、

『あなた……迷宮と、あなたの部屋を繋げてみたんだけど……どう？』

そうじゃない。

別に住む場所が不服だったから迷宮から出ていった訳じゃないのだ。

その時点でちょっと頭が痛くなってきたのだが、とりあえず、〝この程度では、無理だ。もっとどうするべきか考えろ〟と、時間を稼ごうとした。問題の先送りとも言う。それが目下の悩みだ。マジでどうするか、アイツ……。

後は、カミーラからの要請で、〝城が欲しい〟と、言われたので、

じゃあ四天王用の城でも建てるか？　と、冗談半分に言ってみたのだが、スラルが何故かそれに賛成し、魔人四天王にこれから城を与えようか、みたいな案が上がり、現在協議中だ。どこに建てるか、とか魔軍は常駐させるのか、など色んな問題がある。こっちは仕事の悩みだ。ちなみに、ケッセルリンクはいらない、と言っているので、どうなるかは未定だ。欲しいやつだけにやってもいいかな、と。

そんなこんなで色々と考えることがあるが、レオンハルトとしては少し憂鬱だが、それでも頑張ろうと思える気力は湧く。他ならぬ、スラルや身内の為だ。そのためならいくらでも苦労を背負い込んでやる。魔軍参謀にして、魔人筆頭である自分の働きが、身内の未来に直結するのだ。

今のままでも安泰ではあるが、万が一もある。有事の際に、常に最悪を想定しておくことは必ず活きてくる。ゆえに最近は、仕事と平行して、数千年に渡る魔軍維持の方案を思案している。戦力の増強や、領地の拡大、生産力の向上。人間を滅ぼさないための大義名分や、その方策まで。場合によっては人間側にも工作し、より確実なマッチポンプを行うのも辞さない。全ては、スラルと身内の幸せ。魔物と人間を可能な限り繁栄させるためだ。そのためなら自分は何でもする覚悟だ。

あまりにも壮大で話がでかくなりすぎな気もするが、挑戦する価値はある。支えてくれる仲間も多い。何とかなるだろう。だが、

「……少し根を詰めすぎたか……？」

それで身体の調子をおかしくしては意味がない。魔人は病気などとは無縁と聞くが、身体の不調自体は起こりうる。気をつけねば、スラルを悲しませることなるだろうしな。

「むぅ……レオンハルト様ー……あの方に甘くするのは、出来れば……むぅ……」

「ん？　ああ、悪い。確かにそうだな。考えておく」

それより仕事を再開するぞ、と、言うと、キャロルは渋々頷いた。

……なんだ、少し甘えんぼうになった気がするな。

おそらく昨日、というか今日の影響だろうが、それもまた新たな一

面を見れたようでいいか、と、レオンハルトは仕事に戻っていった。
後で報告がてらスラルの顔でも見に行くか、と、そう思いながら。
――その日のことをレオンハルトは、一生涯忘れることが出来ないだろう。

――とある遺跡。
――四つの黄金像を台座に置くことで、神の扉が開く。
――ここではないどこかに住まう、神と出会うための道筋。
――その扉に入っていく者が、今日この日に、現れた。
「……」
――白髪灼眼の魔王は神に出会い、ある願いを口にする。それは、
「――――」
ある者達の運命を決定づける――運命の日であった。

その願いは

ここではないどこか。

そこには神と呼ばれる存在が、多数存在する。

〝神域〟と呼ばれる幾つかの空間の内、多くの天使やレベル神、その他の多くの高階級の神々が住まう〝天界〟がある。神には階級が存在し、役割や職務内容によっての差異はあるが、基本は〝天界〟で一級神、二級神といった上級神の命令を受け、仕事をこなしている。

しかしそれとはまた別に、とある場所が存在する。

そこは神の扉を通らなければ行けない場所。世界に配置された四つの黄金像を集めることでしか到達出来ない場所。

そこに住まうのは、この世界の絶対者であり、全ての始まりでもある創造神と三柱の神である。

創造神を除いた、その三柱の神を、〝三超神〟と呼称する。

そのうちの一柱。魔王と魔物、その基幹を作った神がいた。

それは、黄金色の甲殻類に似た六脚をもった、ヒトデとも蜘蛛ともつかない巨大な体躯をしていた。

自分に会いに来た者の願いを一つだけ叶える――そんな趣味を持つ神。

現在の世界の生態系を作り上げた張本人――三超神、プランナーである。

そんな彼――性別は存在しないが、便宜上彼と呼称する――彼は先程、とある願いを叶えたところであった。

謁見者は、今代の魔王。他ならぬ、自らの手で選んだ人間の少女であった魔王だ。

その叡智から、自らに直接会いに来るという偉業を成し遂げた。幾ら魔王という強大な力を持った存在とはいえ、それは喜ぶべきことだ。

ゆえに願いを叶える。その方が面白そうだから。しかし、

「――う～む……」

その願いは、プランナーを以ってして、考えさせられた。

何しろそれは、今後の世界のバランスを左右する願いであったからだ。
プランナーは世界のバランスを取ること。それを重視する。ゆえに願いを叶える際、バランスを取るために相手の意図を曲解させることが多い。それは自分の趣味趣向も入っていないとは言えないものだが――。
さて、今回のそれはどうしたものか。
だが、プランナーは考え、考えた末に――願いをそのまま叶えてやることにした。
プランナーには珍しく、願いを曲解させないまま、願いをそのまま叶えてやったのだ。
結果、魔王という存在のスペックを見誤り、寿命というものが出来てしまったが……まあ、問題ないだろう、と。
それでも千年はあるのだし、それが終われば次の適当なやつが魔王になれば良い。バランスが取れるならそれでいいのだ。
そういう意味では、今代の魔王は優れている。メインプレイヤーである人類と、敵対者である魔物。その両方を生かさず殺さず、戦いだけは継続させ、苦しみを持続させ、飽きが来ない様にしている。
ただ、年々少しずつ、人類への比重が高くなっている気がする。それは魔物、正確には魔人側の要因もあるが、人間が思ったより食い下がってくる所為だ。
愚かな存在として、別の三超神に作られた人類は、これまで作られたメインプレイヤーの中で、史上最低として作られた存在だ。頭も悪く、精神も野蛮。身体も強くなく、寿命も短い。そのくせ野蛮で利己的。過去から学ぶことの出来ない欠陥だらけの存在。
しかし繁殖力は高く、遺伝子を受け継ぐ際に全てを受け継がせず、ワザと１０万分の１の確率で失敗し、ランダム性を有した状態で生まれてくる人類という種は、丸いものやドラゴンなどというつまらない存在と違い、信じられないほどの多様性を生み出した。
結果、最も愚かだが、最も面白い存在となっている。中々に飽きが来ない面白い存在だ。

しかし弱い存在として作られたのが人類だ。それが魔物はともかく、魔人までも脅かす様になってはバランスが保たれない。
ゆえに願いは叶えられた。魔人も、そして魔王も、殺されない様に。
こうしておけばバランスは保たれるだろう。我ながら良い采配だ、と思う。
しかし、ほんの少しだけ強すぎたかもしれない。
一方的になりすぎるのはそれはそれで面白くないのだ。バランスが保たれない。
「――どうするかな……」
プランナーは再び悩む。世界のバランスを取るために。
人類側にも何か、手段を用意するのがベターか。そんなことを考えつつも、地上を観察し、プランナーは思考の渦に沈んでいった。

「――――っ！」
瞬間。
鼓動を打ったのは、魔人の誰も彼もだった。
誰も彼もが、自らの胸を押さえて顔をしかめさせる。
魔王城の片隅で鍛錬後の干し肉を齧っていたケイブリスも。
自室で宝石を眺め、使徒の七星と話をしていたカミーラも。
戦場に出て、ただ命令の限り戦い続けていたメガラスも。
食堂でいつもの様に大量の料理に舌鼓を打っていたガルティアも。
自室でこの後の約束に備えて姿見を覗いていたケッセルリンクも。
城の中庭で、ハニ子や使徒達とぼーっとしていたますぞぉも。
そして、自室にて仕事をこなしていたレオンハルトも。
その他多くの魔人達が、身体に起こった変化に戸惑いを見せた。
何が起きたのか、それは解らない。
しかし、己に備わったであろうそれは、自分達にとって悪いものではない、と、本能で感じていた。――ただ一人を除いて。
この日、魔人という存在に備わった新たな力。多くの人間を苦しめるその力。その名を――

魔人レオンハルトは、自らの鼓動を打ったそれが来た瞬間。背筋が凍る様な感覚を得た。
「ぐっ、な、んだ……？」
「だ、大丈夫ですの⁉　レオンハルト様⁉」
心配して駆け寄ってきたキャロルに応答する余裕もなく、レオンハルトは眉間に皺を寄せ、自らに起こったであろう変化に戸惑いを見せる。
胸を押さえたまま蹲る。しかし、痛み、というか、違和感は一瞬だけ。身体は正常であるはずだ。
なのに、
……何だ、この身体の不調は……！
とてつもない頭痛が起こり、心臓は強く脈打つ。指先は震え、身体から汗が吹き出る。
同時に、心に焦燥感が巻き起こる。酷く強いものだ。
身体の内側から自分を衝き動かそうとする。その衝動はまるで、
……何だこの……何かとてつもない失敗をしてしまったかの様な感覚は……。
そして同時に、この身体に起こった違和感に、何やら既視感を覚える。
この正体が、何なのか。自分は知っているという、そんな感覚。しかし、それを詳しく探ろうと頭を回転させてみると、
「っ！　ぐ、あぁぁ……⁉」
「レオンハルト様っ⁉」
頭痛がさらに強くなる。床に膝を突き、頭を抑えて蹲るこちらを、キャロルが支える。
その間も、頭痛は続く。悪寒が強くなる。思い出そうとすればするほど。
まるで、思い出すことを拒否しようとしているかの様に、己の身体が悲鳴を上げている。

思い出してしまえば、きっと自分は耐えられない。
ゆえにこれは、防衛本能なのだろう。
思い出してしまった後に訪れる――強い後悔と、心の傷を防ぐための自己防衛だ。
頭の片隅でそんな直感を覚え、頭痛が続く中、しかしレオンハルトは立ち上がった。
そして、次に口から出たのは、本能によるものだった。それをキャロルに告げる。
「――スラルは、どこだ？」
「――えっ？」
不意の質問に、さしものキャロルも間の抜けた声を出す。しかしそれに構わず、再度レオンハルトは語気を荒げ、
「スラルはどこにいったッ!?」
「す、スラル様、ですか？　え、と。その、多分、お部屋におられるかと……そ、それより、身体の具合は――」
「――っ！　どけっ!!」
「きゃっ!?」
なおも身体の調子を窺ってくるキャロルが煩わしくなり、レオンハルトは彼女を押しのけながら部屋を飛び出る。このようなことをしてる場合ではない。
一刻も早く、スラルの姿を確認しなければ、安心出来ない。それを本能で感じ取っていたレオンハルトは、半ば駆ける様にスラルの私室に向かう。
部屋まではそれほど掛からずに着いた。部屋の前で警備を行う魔物兵が、レオンハルトの必死な形相を見てぎょっとする。
「れ、レオンハルト様？　スラ――」
「いいからどけッ！　緊急事態だ!!」
「えっ、あっ、はいっ！」
その言葉に魔物兵は直ぐ様飛び退いた。元より、レオンハルトは殆ど自由にスラルの私室への出入りしているし、止める相手ではないし、止められる相手でもない。

飛び退いた魔物兵に一切視線を寄越すことなく、レオンハルトは扉に手を掛けた。ノックをする時間も煩わしい。
「スラル――」
と、部屋に足を踏み入れながら名を呼ぶと、
「――えっ？」
「！」
ちょうど、部屋に描かれた魔法陣の様なものが発光し、その中心からスラルの姿が現れるところであった。
それを見て、ようやくレオンハルトは少しだけ心が落ち着くのを自覚する。彼女に駆け寄り、
「大丈夫か、スラル！」
「えっ、う、うん……大丈夫、だけど……きゃっ――」
彼女の身体を抱きしめる。
ちゃんと、ここにいる。それを認識し、
「……良かった……」
「レオンハルト……」
身体を抱きしめて安堵する、その姿を見たスラルは心配を掛けてしまった、といった風に表情を少し歪ませた。
そしてややあって、
「うん……ごめんね。黙って出て。ちょっと、用事があって外に出ていたの」
「ああっ……何でも良い。お前が無事なら何でも……」
それは本心であった。
先程まで自分の内側を突き動かしていた焦燥感が収まっていくのを感じる。
しかし、落ち着いていくと、こいつはどこに行っていたんだ、という疑問が新たに生じる。自分に黙って外に出やがって。一応、魔王なんだから自覚くらいしろよ、と、
「……何しに行ってたんだ？」
「あ、そうね。その説明をしなくちゃ――」
と、身体を離して、スラルは笑みを向けてくる。そして自分の身体

を指し示す様に両手を広げ、
「私、ちょっと変わったんだけど……気づいた？」
「あ？　何だ、急に……髪、切った？」
「そういうベタなのじゃなくて……その、何か感じない？」
「って、言われてもな……ん？」
　そんなの知るかよ、と思いながら一応は考えようとしたところで、レオンハルトの感覚がそれを感じ取った。スラルをまじまじと見詰めると、
「……お前……少し、強くなったか……？」
「えへへ……強くなったって言うか、新しい力を得たというか、だけどねっ」
「……それは――」
　嬉しそうに喋るスラルに、レオンハルトは何故だか妙な悪寒が過るのを感じた。
　再び頭痛が起こり、脈が少しずつ早くなる。
　まただ、という思いを得ながらも、レオンハルトはスラルの返答を待った。聞かなければならない。しかし、聞きたくない、と、妙な本能を覚えながら、
「えっと、何というか……魔王と魔人は無敵になったの」
「……無敵……」
　ええ、とスラルは頷きを入れて、その先に続く言葉を放った。
　引き金となるその言葉を――
「簡単に言うと、それ以外の生物からの攻撃を一切受けなくなるというか、無効化する結界が常に張られるの。言うなら――〝無敵結界〟、ね」
「無敵、結界――」
　だから、と、
「だから、死ななくなるし、誰にも殺せない。一生、傍にいられるようになるの」
「……あ、ああ……」
「……レオンハルト？」

スラルがこちらを見て、少し驚いた様に首を傾げる。しかし、直ぐに気を取り直したのか、困った様に苦笑し、
「……もうっ、泣くほど嬉しかったの？」
「泣、く……？」
と、そこでレオンハルトはようやく、自分の頬に流れているものに気づいた。
涙だ。涙が、つーっと目元から流れている。
頬をなぞり、それを確認する様に、指先を見ていると、
――駄目だ。
「これからは、私も頑張るからね」
「……」
「結構色々考えたんだけど、人間相手にはこれまで通りに程々でいいし、問題は私達が生き残ることで――」
「――それは駄目だ」
「……えっ？」
スラルは、疑問の表情を見せた。
しかしレオンハルトは続けた。
「それじゃあ、駄目なんだ……スラル……」
「ど、どうして？　死ななくなったんだから――」
――違う。
「スラル……違う。――死んじまうんだ……」
――スラルが死ぬ。
「……どういうこと……？」
「無敵結界は……その代償に、寿命が出来るんだ……魔王としての寿命が……」
「っ！」
スラルの驚きを他所に、レオンハルトは口から述べていく。
「その寿命は千年。だが……お前は――」
――それより早くに――
「――えっ、あ……ちょ、ちょっと！　レオンハルト!?」
「……」

その言葉を最後に、レオンハルトは気を失い、床に倒れ込んだ。
焦った様にこちらに駆け寄ってくるスラルの声を聞きながら、レオンハルトはほんの少し、運命を思い出した。
残酷な運命と、その結末を。

――その日、世界では変化が起こった。
これからの人類と魔物。その戦いを左右する、決定的な変化が、魔王によって齎された。その名を――
――〝無敵結界〟という。

その原因は

――ＳＳ４５０年。

魔王スラルの願いによって、ある変化が起きた後の世界。

そこでは、

「――ははは！　どうした、カス人間共!!」

「がぁぁッ――!?」

魔人による蹂躙が加速していた。

その原因は、魔王と魔人にもたらされた新たに備わった力の所為である。

それを以って、魔人は戦場で暴れ回る。

「てめぇらの攻撃なんざ効かねえんだよ!!」

「一体、何が――ぐっ!?」

その正体は、無敵結界。

魔王と魔人以外の生物からの、あらゆる攻撃を無効化する。文字通り無敵の結界だ。

これにより人類は対抗手段を失い、魔人の脅威はより確かなものとなった。これから先、魔人の代名詞となる無敵結界の存在は、人類を絶望させるには充分であり、魔軍と戦っている人類国家は大きく勢力を削がれ、壊滅的な被害を受ける国もあった。

人間が絶望する中、反対に魔軍の士気は大いに高まった。

ただでさえ強かった魔人の強さが絶対的なものとなり、魔物兵は大いに沸き立つこととなる。しかもそれが、魔王によってもたらされたものと知ると、多くの魔人、使徒、魔物将軍以下、魔軍に属する者達は魔王を褒め称え、畏怖をより一層高めた。

無敵の魔王と魔人。それに付いていく自分達に負けはない。

これから魔物の黄金時代がやってくる。そのことを疑うものはいなかった。

そして、それを観察していた三超神――プランナーは、

「……強すぎたかな……」

自らが引き起こした結果に、不満足を感じていた。

魔王と魔人が無敵になり、より活発に人間を苦しめる様になった。それはいい。そのことに上は喜んでいるし、他の神々も歓迎している。

しかしバランスを何よりも重んじるプランナーとしては、この状態は看過出来ない。

魔王は頂点。魔人はその下で、魔物、人間と続く社会構造。それはより確かなものになった。

だが、絶対の絶対、無敵というのは面白くない。それでは予定調和でしかない。展開が解りきってる劇ほど、つまらないものはないのだ。

ならばどうするか。これがまた難しい。

メインプレイヤーである人間が、魔軍との闘争に勝ち、魔王と魔人を完全に駆逐されるようなことがあっては困る。それではドラゴンの二の舞だ。

勝ってもらっては困るが、負けと決まっているのも面白くない。これではバランスが取れない。

「人間側にも、何か用意するか」

それこそ、ピンチにだけ颯爽と現れ活躍する、主人公の様な存在。そんな存在が人間に居ればいい。

常に強くても困る。故に時間制限付き。それも力は段階的に強くなるようにする。

例えば、メインプレイヤーがどれだけ死んだか。それを境に力を解放させる。

魔人が強すぎてメインプレイヤーが絶滅させられるのも困るのだ。その事態を避ける為の保険にもなるだろう。

一人くらい無茶苦茶なやつがいれば面白くなりそうだし、バランスも取れる。

戦いでは劣勢がチャンスに変わり、何があっても絶対に死なず、普段は不運だが肝心なところで幸運になり、レベルは都合よく下がらない。限定的な時にしか使えない伝説の剣を持ち、異性にモテモテな――

「――勇者。そう、勇者だ」
勇者を作ろう。言うなら勇者システムか。
今挙げたことを特性とし、人間の中に一人、常に勇者が現れる様にする。
しかし、不安もある。それは、
「人間は馬鹿だからな」
そう。例え勇者であっても、人間である以上はこちらが望む動きをしてくれるとは限らない。愚かすぎて動きが読みづらいのが困るのだ。それが良いとも言えるのだが、とにかく何か対策が必要だ。
と、プランナーは少し悩み、考えた末に、
「――コーラス００２４」
とある神を召喚した。
勇者を補佐し、言葉巧みに操り、こちらが望む舞台装置としての勇者を全うさせるための存在。
配下の神にそれを行わせておけば良い。そしてしばらくは様子見だ。
魔王と魔人の無敵結界。そして勇者システム。中々良い塩梅だ。これぞバランスの極地。完璧な仕事振りと云えよう。
ハーモニットの性悪や、ローベン・パーンの様な無能とは違うのだ。仕事と趣味をバランス良く兼ねるのが良い。
「しばらくは安心して見ていられそうだな」
少なくとも魔王の寿命が切れるまでの５５０年。それまでは仕事もないだろう。
ゆえに今しばらく地上の観察を続けようと、三超神プランナーはここではないどこかで楽観的になっていた。

魔王城。
魔王スラルが無敵結界を手に入れてしばらく。
城の前で悩み続ける影があった。
心ここにあらずといった様に城門を行ったり来たりとし続ける少

女を見て、片方の少女は声を掛けた。
「――それで、いつまでそうしてるつもり？」
「うっ、だって……」
ベゼルアイは、同じ聖女の子モンスターであるハウセスナースを見て呆れた様に尋ねた。
結構前から、ハウセスナースは城の前で右往左往している。ちなみに、数日前は少し離れた場所でうろうろしていた。
原因は、ハウセスナースの７００００回目の失恋予定相手の魔人。彼に惚れたハウセスナースだが、肝心の相手が色々と大変で、
「……いつもの様に拉致監禁しないの？」
「……うるさいわね。私だって空気くらい読むわよ……」
あら、とベゼルアイは感心の声を上げた。
てっきりいつものハウセスナースなら相手の事情など関係無しに突撃して振られると思っていたのだが。成長したのだろうか。いや、単純にそれどころじゃないシリアスな様子だから踏みとどまっているだけだろう。
まあそれでも良いが、
「……ハウ、忘れてない？」
「……何がよ？」
どうやら本気で忘れている様だ。全くどうしようもない。自分達の存在意義。謂わば使命だというのに。
ならば思い出させようと、ベゼルアイは言葉を作った。それは、
「もうすぐ発情期でしょう？　彼が無理なら、別の相手にしてもらう羽目になるけど……どうするの？」
「……」
ハウセスナースの顔が真顔になる。あ、完全に忘れてたな、と内心で呆れていると、
「――完全に忘れてたあーー!?」
「はぁ……」
頭を抱えて叫ぶ仲間の姿に息が漏れる。
……しかしまあ、どうしたのかしらね。

せっかくだし種でも貰ってから旅立とうかと思っていたのだが、この分ではしばらく無理そうだ。その間にこちらも発情期が来るだろうし、今の内に強い魔物でも見つけておこうか、と思う。
「紹介を頼みたいけど……それも無理かしら」
大人しく自分の足で探そうと、ベゼルアイは喚くハウセスナースを引きずりながら町に戻っていった。

「ぐふふ、ぐふ、ぐふふふ……」
魔王城の片隅。
日課の鍛錬を終えた魔人ケイブリスは、丸い身体を跳ねさせご機嫌な様子で城の中を歩いていた。
いつもは警戒に警戒を重ねて、隅っこをこそこそと隠れるように移動するのだが、ここ最近は、気持ち堂々と城の中を闊歩していた。それでも警戒しているのには変わりないが。
しかし、ケイブリスがここまでご機嫌なのには当然理由がある。それは、
「無敵結界……！　ようやく俺様の時代が近づいてきたぜ……！」
実際には来てない。ただ、一歩近づいたのは確かだ。
無敵結界という魔王と魔人以外の攻撃を無効化する特性が魔人に備わったことで、ケイブリスの安全は少しだけ確保された。魔人にへこへこしなければいけないのは変わりないが、少なくとも使徒や魔物、人間に怯える必要はあまりない。
それでも強い相手なら結局倒せないし、万が一もあるので近づきたくもないが、やはり安全になったのは確かだ。
ゆえに少しだけ上機嫌。干し肉を齧る速度も上がるというものだ。
だが、一方で不安がないこともない。それは、最近この城で感じられるオーラの所為であり、
「……何でイライラしてんだろうなぁ……？」
おかげで擦り寄りたくても近づきにくくてしょうがない。ケイブリスの本能が訴える。今、下手に奴に近づいたら死んでしまってもお

かしくない、と。
　そのため上階や、よく人が通る場所には近づかない。少なくともこの気配というか怒気の様なものが消えるまでは。
「あー、面倒くせぇぜ……」
　ケイブリスは隅っこで干し肉を噛りながら、我らが魔人筆頭の気配を感じて、鬱陶しそうに声を震わせた。

　その頃。
　魔王城二階にある魔軍の会議室では、会議が行われていた。
　と、言っても、会議とは名ばかりの報告会だ。魔物将軍達は一同に会し、上司である魔軍参謀に成果を発表する。
　両側には使徒である金髪ツインテールの少女、キャロルと、魔物大将軍であるリーが、普段よりも緊張した面持ちで会議に臨んでいる。
　魔物将軍が最後の報告を終えると、上司である金髪灼眼の魔人――レオンハルトは表情を歪ませ、
「――何故見つからねぇッ!?」
「っ――」
　苛立ちを隠そうともせず、怒鳴りを上げた。
　身が竦む様な一喝に魔物将軍達が身体をびくりと揺らすも、彼はこちらに向かって怒っている訳ではなく、まるで独り言の様に、
「何故だ……何故黄金像が見つからねぇ……！　領内の迷宮はくまなく探させた筈だ……！」
　手元には一つの、ひょうたん型の黄金像。それを睨みつけながら歯を噛み締める。その瞳は、仇を見ているかの様に怒りに染まっており、身体から溢れる怒気がオーラとなって目に見えていた。
　なおもレオンハルトは続ける。
「……人間の領内にあるのか……？　いや、それとも奴らが何か細工を――ぐっ！」
　と、不意にレオンハルトが目元を押さえながら苦悶の声を上げる。キャロルが近づき、

「レオンハルト様……！」
身体を支えると、レオンハルトは痛みに耐えるかの様に荒い息を吐きながら、
「ぐっ、はぁ……はぁ……！　っ、大丈夫、だ……離れろ……」
「っ……はい……」
何かを言いたそうに表情を一瞬歪めたキャロルであったが、しかし主の命令に従い再び傍に控える。
大将軍や他の将軍達も、その様子を沈痛な面持ちで見詰めていた。
それはここ最近、正確には魔人が無敵結界を手に入れてからというもの、レオンハルトの癖となったものだ。
その日、レオンハルトは気を失い、丸一日寝込んだという。城中が大騒ぎであり、魔王スラルや使徒のキャロル。魔人ケッセルリンクやレオンハルト閥の魔物将軍達も気が気でなかった。
しかし、一日経ってレオンハルトが目を覚ますと、レオンハルトは時折、頭痛を訴える様になった。そして両日中に部下に対してとある命令を下した。それが、
『四つの黄金像を集めろ……！』
というものであった。
それからレオンハルト軍は各地に軍を派遣し、迷宮を中心にその黄金像探しに苦心している。
理由は解らない。それとなく大将軍や他の将軍が質問したが、その度にレオンハルトは睨みつける様に目を細めて相手を見ると、
『お前達が、知る必要はない』
それだけを答える。
しかしながら、レオンハルトがここまで言うのだからそれは本当に知る必要のないことなのだろう。疑念を感じないでもないが、彼の言うことであれば必要なことなのだ、と。
魔軍参謀として、魔人四天王として、魔人筆頭として。今まで数多の信頼を培ってきたレオンハルトの人望は、理由を教えずとも配下を動かすには充分であり、皆は今なおそのために動き続けている。
だがその頑張りも虚しく、成果は芳しくない。レオンハルトの使徒

であるハンティが見つけてきた一つだけが、今は手元にある。それを肌身離さずに持ち歩いているというレオンハルトは、時間が経つに連れて頭痛の頻度も高くなり、段々と苛立ちが大きくなってきていた。
　そのことを思い、大将軍は彼に傅くと、
「……申し訳ありません。我々が不甲斐ないばかりに――」
「っ、うるせぇ……謝る必要はねぇだろうが……！」
「……」
　その言葉に大将軍リーは、無言のまま頭を下げる。
　しかしレオンハルトは、それで何かが切れたのか、腹から絞り出す様に声を引き出した。その内容は、
「くそが……やはり……！」
「っ！　レオンハルト様、どちらへ……!?」
　突然、部屋を退出しようとするレオンハルトに慌てて魔物将軍らが引き止める。
　すると一度舌打ちし、頭を掻きながら、
「決まってんだろ……！　俺も探しに行くんだよ……!!」
「そ、それは……お待ち下さい！」
「うるせぇ!!　止めんじゃねぇよッ!!」
「ぐ……！」
　しかし必死の制止も虚しく、レオンハルトは部屋を出ていってしまう。
　この様なことも多くなっていた。
　レオンハルトは時が立つに連れて、自らも迷宮に赴いて黄金像探しに尽力した。
　その様子はまさに修羅であり、鬼の如き様相であった。頭痛に耐えながらも立ち塞がる魔物を尽く斬り殺し、血に塗れながらそれを探し求めるレオンハルトの姿は、いっそ痛々しさすら感じられた。実際にキャロルやケッセルリンクが止めに入らなければ、レオンハルトは今なお各地を彷徨っていただろう。
　睡眠や食事もほぼ取ることはなく、常に動き続ける。黄金像の為に。黄金像で何をするのかは知らないが、その血気迫る表情から、尋

常ではない事態であることは周りにも理解できた。
しかしそれを知る者はいない。あの日から、同じ様に部屋に籠もり続けているという魔王スラルを除いては。
今のレオンハルトには、無敵結界で浮かれている魔人ですら近寄らない。無敵結界で機嫌を良くし、レオンハルトに話しかけたとある魔人は、あわや死亡する一歩手前まで、レオンハルトにやられてしまった。止められるのは、一部の仲の良い身内ともいえる間柄だけ。しかしそれすらも厭わず、レオンハルトは突き進む様になっている。
結局、レオンハルトの部下である魔軍の者達は彼を信じて従うしかなかった。

豪奢な部屋の中。そこに一人の少女がいる。
一人で暮らすには充分な部屋の広さ、しかしそこは今、数多の本が散らばり、雑多な内装を見せていた。
それは机に近づく程積み重なり、散らかり具合が酷くなっていく。
その中心に、部屋の主である魔王スラルはいた。
「……」
彼女は今、研究を行なっていた。
それ自体はいつものことだ。珍しいことではない。
しかし現在行われているのは、自身が願ったことと、それよって起こった結果を確かめる為のもので、
「これを……」
スラルは、特殊な素材で出来た透明な容器に自らの血を入れる。それは幾度となく繰り返されたのか、机には赤い点が染みた紙が何枚も重なり、その上には研究の結果であろう、複雑な式や、魔法陣、論文が書かれていた。
そして再び、スラルが血を容器に入れると、それに反応して魔法陣が光を発した。
宙に現れた半透明の赤い板の様な枠を見詰めながら、同時に何かを打ち込んでいく。

そうして算出された結果に、スラルは何度目かになる溜息付きで、眉をひそめさせた。
……やっぱり。何度やっても容量を大幅に越えてる。これだと……。
魔王の無敵結界。その代償について、あの神は何も言っていなかった。何もなしに願いを叶えさせるほど、甘くはない、とそういうことだろうか。
何にせよ、算出された魔王の寿命。そのシステムは約千年。それを過ぎれば魔王の血に飲まれて消滅する。
しかし自分の場合は、
「……そういうこと、か……」
レオンハルトがあの時言っていたことは当たっていた。
魔王の寿命は千年。しかし自分の場合は、より早く訪れる。
原因は無敵結界という新たな力の容量が、魔王の血のスペックを大幅に越えたから。それに耐えきれないため、半分程の寿命で自分は死ぬ。
それを防ぐには――
「……駄目、ね。どれも難しいってレベルじゃない」
無敵結界という力を排除することも、力を正常に作動させることも出来ない。神由来の、魔王という根幹の力に作用するものだ。これに手を加えられるのなら、自分を魔王じゃなくしてしまった方が手っ取り早いだろう。それも難しいものだが。
血の継承を行なって魔王じゃなくなったところで、寿命が増える訳ではないし、何より候補者を探すのは至難を極める。興味本位で出会った人間の技能ＬＶを確認してはいるが、自分と同じそれを持ったものは今までに出会った事がない。
やはり無理だ。方法はどこかにあるのかも知れないが、これ以上の知識となると今まで以上に手探りとなってしまうし、膨大な時間が必要だ。それこそ、神に教えを乞わなければいけないだろう。もっとも、神が信用ならないことは今回ではっきりと理解ったが、それを理解するのが少し遅かったといえる。

「……レオンハルトは、これを知っていた……」
そのことに、疑問を覚える。
レオンハルトは、無敵結界という名称を聞いた途端。それがもたらす結果を言い当てたのだ。知るはずがないことを。
何故だ、と思う。しかし考えても解らない。無敵結界というのは、神があの時初めて作り上げた権能だ。仮に神や魔王について完全に理解していたとしても、新しく作られたことを知っているはずはない。
ならば予言。未来予知か。これが近い様にも思えるが、だとしたらどうして、あの時初めてそれを口にしたのか。それが解った時点で口にすればいいのに。
あの時初めて予言した、とは考えづらい。レオンハルトはあの時、驚いていた様にも見えた。まるで今思い出したかの様に――
「……思い出す……ね……」
もしそうだとしたら一応だが辻褄は合う。予め知っていた。過去に何かが有って。未来からやって来た。夢の世界で見た。
色々と推測――いや、憶測は立てれるが確証はない。
事実は、レオンハルトがそれを言い当てたこと。
そしておそらくそれを思い出した、と思われること。
知っていて隠していた、というのはありえない。自分の目から見ても、レオンハルトは自分のことを想っている様に見えた。今も何やら焦燥感に駆られた様に、黄金像を探し求めているという。つまりそれで何が出来るのかも知って――いや、思い出したということであり、
「……そろそろ、行こうかな」
研究は終わりだ。ならば後は、行く末を決めるだけ。
自分がこれから、どのような道を行くのか。どこを終着点とするのか。
そして――何を残していくのか。
――俺は、全てを忘れたかった。

生まれた時、俺には別の記憶があった。
不確かな自我を持ちながら、別の魂の記憶がある。それが嫌で嫌で仕方なかった。
俺は俺だ。極東の島国の、何たら何某とかいう変な名前の男ではない。
自我が確かになり、物心がついてくると、その思いはますます強くなった。
確かにその記憶があるが故に便利なこともある。しかし、知っているからこそ絶望することもある。
その知識があるおかげで、俺はこの世界に何の救いもないことを早々に知った。
人間という種に生まれた自分は、遠からず絶望することとなる。
何故なら人類とは、そのために作られた存在であるから。この世界は、創造神の退屈を紛らわすためのおもちゃ箱だ。箱庭ともいえる。その中で、人間が苦しみ足掻き、しかし失意の中で無惨に殺されていくのを眺めているのだ。
その敵として作られた魔王と魔人。その強さもよく知っている。人間が勝てるはずがないということも。
そしてやはり、それを知っているが故に俺は苦しむ。
このような知識があって良いことなんて何もない。知らなければ世界に絶望することも、俺という存在に悩むこともない。
俺は俺という存在で、この世界に生まれた確固たる個人――レオンハルト・〇〇〇〇だ。人間としての名は捨てて久しいが、魔人になろうともそれは変わらない。
――分かるか？　俺は、俺なんだ。
俺という個人が、そうでないと歪められるほど、屈辱なことはない。
この知識が無ければ――俺は何者だ？　という答えの出ない問いに悩まなくて済むんだ。
俺が俺という個人でない――その証明となる知識を使うのなんざ、本当は真っ平御免なんだ。使わないで済むならそれに越したことはない。

人間から魔人となり目的を得て、誰からも愛されることのなかった俺が愛され、生きがいを得た。沢山の身内に囲まれ、幸いを得た。
だからそんな知識は必要ない。こんな記憶はいらない。今までそう思っていた。
――なのに、何故今更……思い出したくないことを思い出したのか。
理由は簡単だった。愛する人が、危機に陥ったから。
それを切っ掛けに、俺は目が覚めると同時にその古い記憶の一部を思い出した。
無敵結界。それに関する知識だ。
全てを思い出した訳ではない。故に解決方法は限られている。関連して別の知識を思い出そうとすれば、頭が割れてしまうと錯覚するほどの強い頭痛に見舞われる。
だから、知識の中にある黄金像を使うことを思いついた。
無敵結界が神によってもたらされたものならば、それを何とか出来るのも神しかいない。
否、正確には、それしか縋れるものがない。
思い出した範囲で導き出せる解決方法がこれしかなかった。
しかし、一つだけでも見つけらたのなら僥倖ともいえる。
ゆえに俺は命令した――黄金像を探せ、と。
そして今なお、探し続けている。時折訪れる頭痛に耐えながら。
そうしなくてはならない。そうしなければ、早くしなければ、スラルは――。
事態は一刻を争うのだ。寝てる暇なんてないし、食事を取ってる暇もない。人間であれば絶対に必要なそれらが無くても、魔人の身であれば問題ない。問題があるとすれば頭痛と、時間が経てば経つほどに沸き起こる苛立ちだけだ。
もはやそれを制御出来るほどの余裕はない。それをふとした時に自覚しながらも、俺はそれを止めることが出来ないでいた。

「――何だと？」
レオンハルトは城の廊下で、正面に立ち塞がる相手を睨みつけた。
相手の姿は異形。白い体躯を持つ昆虫の様な外見の魔人で、
「……止まれ」
短くそう告げてくるのは――魔人メガラス。
かつてレオンハルトが人間だった時代。唯一戦ったことがあるホルスの魔人だ。
しかしその寡黙っぷりから、魔人の間でも不気味がられており、敬遠される存在であった。
そんなメガラスが、自分の前に立ち塞がった。その事実に、レオンハルトはおかしくなり、
「……ハッ、今までどんなに声を掛けようが一度たりとも返事をしなかったお前が、こういう時はしゃしゃり出てくるのか？」
「……」
メガラスは何も答えない。しかしこの沈黙は、肯定の色を見せたものである。
今まで、レオンハルトはメガラスに度々話しかけていた。それは仕事のことから、他愛もないもの、模擬戦のお誘いまで。しかし一度も答えることはなく、今この時を迎えた。
その背後には、レオンハルトにやられボロボロとなった魔人が気絶している。それを守る様に飛び出してきたメガラスは、短く要件を伝える。
「……引け」
「あ？」
「……八つ当たりはやめろ」
いつになく饒舌なメガラス。しかしその発言に、レオンハルトは眉を立てた。
「……八つ当たりだと……？」
「……」
レオンハルトは聞き返す様に呟くも、メガラスは答えない。
そして事実、確かにそういうことでもあった。

やたらと上機嫌で、無敵結界をもたらしたスラルを褒め称えていた魔人を見て、レオンハルトは気がつけば剣を抜いていた。
魔人の制止と健闘も虚しく、レオンハルトにやられてしまった魔人は、しかし、すんでのところでメガラスが飛び込んできたことで、一生を得た。
それを、レオンハルトは頭で理解した。
理解したのだが、
「……ふん、そうか。それは悪かったな……」
鼻を鳴らして謝ってみせるレオンハルト。
しかし、その戦意は消えておらず、
「だがよ……お前の言う通り……俺は今、少しイライラしてるんだ」
だから、
「こうやって割り込んできたんだ。覚悟は出来てるんだろ？　――なら、少し俺に付き合ってくれるよな？」
「……っ！」
その一撃を躱せたのは、メガラスがメガラスであったからだ。
常人が一歩を動く間に、大きく後退してみせたその動きに、レオンハルトは口元を弓形に変化させる。
「……クク、さすがだ。最速の魔人は伊達じゃねえな」
「……やる気か」
魔剣オル＝フェイル。レオンハルトの代名詞ともいえる魔剣。
身の丈を超えるほどの長い刀身を向けて、レオンハルトは歯を見せながら、
「いいだろ？　――思えば、お前とやるのは俺が人間の時に世話になって以来だからな」
「……」
メガラスが無言で戦闘態勢に入る。あの時とは違う。
レオンハルトの実力は、既にメガラスよりも上だ。メガラス自身が、それを感じ取っている。
しかし、だからといって負ける気もない、と。メガラスは全身で訴えている様であった。

ホルスの戦士として、心構えは出来ている。それを見たレオンハルトは、やはり笑みを濃くし、闘気を滾らせ、
「ハハッ！　いいじゃねぇかッ！　中々に滾る！　なら、お礼参りさせてもらうぜ――ッ!!」
「――！」
その言葉とともに、レオンハルトはメガラスは、お互いに一歩、足を踏み出した。
刹那。
二人の姿はかき消え、高速の戦闘は開始された。

数百年振りの再戦

食堂にて昼食を取っていた魔人ガルティアは、心ここにあらずといった様相で上階の激震を聞いた。
その響きの正体は解る。ここ最近、時たまに起きるこの現象を引き起こしているのは、
……レオンハルトか。
ガルティアの友人ともいえる魔人。
そのレオンハルトは無敵結界を得た日に倒れ、それからというもの、よく解らない黄金像集めに精を出している。
懸ける熱量は異常であり、失敗が続く苛立ちから、魔人相手に戦いを挑むことが多くなっている。
それ自体は珍しいことではないが、レオンハルトの様子に違和感を憶えるのも確かだ。
普段であれば――いや、あのレオンハルトが冷静さを失うほどのことが、起きている。それは何かは解らない。しかし、何となくではあるが、
……身内の誰かか……やっぱスラルに何かあったか。
確証は無いが、そうではないかと思う。
スラルに何かが起きた。ないし、何かが起きる。というのなら、レオンハルトがあれだけ取り乱しているのにも納得がいく。それだけ大切に想っているからだ。
ゆえに自分も、よく解らないが黄金像集めとやらに度々出かけている。成果は出ていないが。
……何もないならその方がいいな。
ひょっとしたらこれはレオンハルトの暴走であり、大したことなかったりするのかもしれないが、それはそれでいい。ただの笑い話になるだけだ。
しかし、そうでないのなら――
「……うーーーむ。どうすっかな……」

首をひねりながら考えるもいい考えは浮かばない。そもそも何が起こっているのかも、レオンハルトの考えも、スラルの考えも、何も分からないからだ。
自分に出来るのは今の所、言われたことをやるくらい。後は、何かを求められた際に動いてやれる様にしておくくらいだ。
「……まあ、なるようにしかならねえだろ。――おっと」
そうしてガルティアは料理を口元に運んだが、そこで再び、上階からの激震が来た。振動が伝わりテーブルが揺れる。持ち上げていた汁物料理が零れそうになるのを、バランスを取ることで回避する。上を見上げ、
「レオンハルトのやつ、今回は激しいな。よっぽどノッてるみたいだ」
あんまり被害が大きくなるようなら止めねえとな、と、軽くそう思い、ガルティアは食事を再開させた。

魔王城の廊下では、音が鳴っていた。
何かと何かがぶつかり合い、金属音が鳴り、風を起こし、周囲に傷を作りながら響かせていく。
常人では、まともに可視することすら出来ない戦闘。それを行なっているのは二体の魔人だった。
一際大きく金属音が鳴ると、それとほぼ同時に魔人レオンハルトの姿が現れる。
しかし風は止まない。未だ空間の中には、高速で飛び続ける魔人の姿がある。
「――ッ」
不意にレオンハルトが、横薙ぎに魔剣を振るうと、何かに当たった音がしながらも再び風が吹く。その手応えを感じ取って、レオンハルトは笑みで言った。
「――さすがだな。目で追いきれねぇ……！」
「――――」
返答は攻撃で行われた。

高速の見えない攻撃が、背後からレオンハルトを襲う。それを行なっているのは最速の魔人であるメガラスだ。
その攻撃速度は、魔人となったレオンハルトを以ってして完全に捉えきることが出来ないもの。しかし、以前と違い、
「もっとも、為す術無くやられた昔に比べれば上出来か？　俺も成長したもんだな」
ク、と笑う声を響かせながら、レオンハルトは言う。メガラスの動きを気配と動きの読み。そして勘で捉えながら目を細めると、
「さて、それじゃあ数百年振りに攻略させて貰うか。胸貸してもらうぜ、最速の魔人さんよぉ!!」

魔人メガラスは、レオンハルトが声を上げたのを空中で聴いた。
数瞬後に斬撃が宙を擦過してこちらを狙ってくるのを余裕をもって躱す。再び攻撃に出ながら、
「――そこかッ！」
「――――！」
しかし斜め後ろから行なった高速の攻撃は、レオンハルトによって防がれ、さらには同時の反撃を行なってくる。
それを回避しながら、
……やはり、速いな。
レオンハルトの速度。その中でも剣を振る速度に限ればこちらと同等以上の速さを持つ。
そのため、高速の攻撃を行なっても、察知されたところで防御が間に合い、セットとして反撃が飛んでくる。
メガラスは自身の速度を思い、その事実に感嘆を得る。
自分は、自他共に認める最速の魔人だ。速さに対する自負、挟持がある。
ただのホルスであった頃より、速さに憧れと重きを置いていた自分は、魔人となってその速さを更に極めた。
その速度は最高速にして音速の約三倍。これを超える者は世界に

一匹しか存在しえない。
魔人であろうと自分の姿を捉えきることは至難の技であり、人間や他の生物では為す術無いほどの速度。
相手の攻撃は掠りもせず、常に有利な位置を取り、相手の傍を通過するだけで、音速によって巻き起こされた衝撃と風が、大気の圧となって相手に叩きつけられる。直接ぶつかれば、その威力は絶大だ。自身の膂力は魔人の中でも強い方ではないが、速度はそれを補える。
超音速で移動することによる負荷は問題とならない。
魔人となった際に自身の身体は、音速を超える速度を手に入れるのとともに、それに耐えうる身体に変容した。
白い外骨格がその最たるものだ。硬さには自信がある。速さの次にではあるが。
そんな圧倒的な速度を持つこちらに、相手は反応した。
魔人レオンハルト。魔人筆頭、魔軍参謀である人間の魔人だ
最初の出会いは、魔王スラルの命令を受けたことが切っ掛けだ。命令を受け、その通りに実力を試した。
結果はこちらの勝ちであったが、手加減していたとはいえこちらの速度に僅かながらでも反応してみせた人間に、実力に問題は無し、と魔王スラルに告げたことで、結果的にレオンハルトは魔人となった。
こちらは関わりを持つことを避けたが、仲間想いで、冷静かつ優秀な戦士であったはずだ。それは魔人になった際の取引もそうだし、普段のレオンハルトを見ていればそれは理解る。
他の魔人と比べても、レオンハルトとその仲間といえる魔人達は、正直に言えば好感触だと言っていい。嫌いではない。
だが、
……何故、こうも苛立っている？
それが分からない。
自分達魔人が無敵結界を手に入れた日より、レオンハルトは様子がおかしくなった。
以前のレオンハルトであれば、戦士として、自分より明らかに劣る者を死ぬ直前まで追い詰めるようなことはしなかったはずだ。

それも何の理由もなく。それは、自分と同じ戦士として許されることではない。
また同じ魔人が一方的に殺されるところを、見て見ぬ振りで通すのは戦士としての矜持に反する。
ゆえに行く。止める。
メガラスは再加速を掛けた。腰の加速器が音を響かせる。
正面にレオンハルトを捉える。そのまま攻撃の突撃を行おうとしたところで、
「――っ!?」
メガラスは咄嗟の判断による回避を行なった。
それは後方へと加速する様に逃げる軌道だ。そうせざるを得ない。
回避を選択した己の判断は正しかったと、直ぐに理解出来る。眼前、三つの斬撃の内、縦の一つにより穿たれた床がある。他の二つは、左右から挟み込む形であった。避けるには後方しかない。
回避に成功したこちらを見てレオンハルトが口端を釣り上げる。軽く感心するような息を漏らしながら、
「へぇ、やっぱさすがだな。これを回避するとは。――ならよ、これはどうだ?」
と、レオンハルトは剣を持っていない左手を翳すように前に出した。
するとそこから光が発生する。魔力光だ。
ゆえに声とともに発生するのは、
「――炎の矢!」
「……!」
回避不能の魔法の矢である。
……なるほど。
メガラスは相手の狙いを理解して得心する。
確かに魔法であれば必中の特性がある。範囲系や直線の魔法でないのなら、魔法はこちらを追尾してくる。
炎の矢くらいであれば威力はそこまでではない。しかし、攻撃を受けたことによる硬直は一瞬だが起こる。すると隙が出来たこととな

り、相手は攻撃を当てられる。
だが、
……そんな手が通用するものか……！
メガラスは行動した。
速度を上げ、壁際に移動する。
当然、魔法はこちらを追尾するが、敢えて速度を落としながら、こちらに当たる直前で、
「――――！」
メガラスは再加速を行い、一気に壁際から駆け抜けた。
瞬間、背後で炎の矢が壁に激突した。

「へぇ……!?」
レオンハルトは、メガラスが起こした行動を目撃した。
こちらが放った炎の矢に対して、メガラスは壁際まで逃げると、
……加速で、強引に振り切ったのか……！
確かに魔法は絶対命中するという特性がある。
しかし範囲系の火爆破などであれば回避は難しくない。直線にくるレーザーの様な攻撃も同様だ。
それ以外の追尾する特性を持つ魔法。しかしその魔法の速度を、メガラスは越えてきた。
考えてみれば当たり前の話だ。仮にどこまでも追いかけていく仕様であっても、メガラスの足を止めない限り、魔法は目標に追い付けず、その機動力に揺さぶられて自壊する。
なにせ前に進む間に背後に回っている様な相手だ。そこまで急激な方向転換は出来ない。
魔法を食らわないための抜け道はそれなりに存在するのだ。ゆえに剣と同じ。それを当てる為に牽制やフェイントなどの伏線を張り、考えて放たなければ、どれだけ強力な魔法も効果的にはなり得ない。
そのことを再確認したレオンハルトは、やはり剣を再度構える。
軽い気持ちで魔法を放ってみたが、あまり効果はない。火爆破やそ

れ以外の魔法も、ただ放つだけでは意味を成さないだろう。
それに、やはり剣で攻略したいものだ。自分は剣士。剣を振るう者だ。戦いには剣を使うのが好きだ。そう思い、
……ああ……やっぱ、戦いはいいな。
気づけば頭痛も引き始めている。苛立ちも今だけは気にならない。
確か昔も、自分はこの様にして息抜きを行なっていたものだ。
世界への恨み辛み。周囲の環境。自分の境遇。自己の所在。
それらに対する憤りを、戦うことで発散していたのだ。
自分は、この世界に生まれた一つの個だ、という自負がある。
しかし、俺はこんな世界は嫌だ、と心では否定している。
その願いは、圧倒的に矛盾している。
こんな救いのない世界はいらない。ここは俺が生きる世界だ。
――この矛盾を解決する方法は何だ？
世界を認めること？　自己を曲げること？
――違う。
――それは、
「……ああ」
――なるほど。そうか。
「簡単な事だ……」
レオンハルトは、魔剣オル＝フェイルを掲げ力を込める。
掛ける言葉は、同情のものだ。
「お前も、世界を壊してぇんだな……？」
そう。矛盾しない解決方法がそれだ。すなわち、
――己を曲げず、しかし、今の世界を壊す。
「ハハッ……何だ。最初からそうすりゃ良かったんじゃねぇか……」
出来るか、出来ないか。そんなことはどうだっていい。
ただ世界に、己の怒りをぶつける。その後のことは後から考えればいい。
だから、
「――――」
今は思う存分、暴れてしまえばよい。

「っ……!?」
メガラスは、眼前で起きた現象に驚愕を感じた。
レオンハルトが右手に持つ魔剣。その刀身から、光が漏れ出している。
しかしその光は、輝かしくも、禍々しさを感じさせるものだ。
剣気が溢れ、大気を震わせる。
何かが収束していく様な音が鳴り響き、実際に刀身は時間が経つにつれて光量を増していく。
……危険だ！
メガラスの戦士としての勘が告げた。
あれを放たれれば、自分は負ける。否、負けるだけで済むのかも疑問だ。
身体を消し飛ばされてしまっても不思議ではない。回避は可能かもしれないが、その確証はないし、本能が危険を訴え続けている。
「――っ!!」
ゆえにメガラスは駆けた。
やれることは、あの輝きが放たれる前に、レオンハルトを無力化すること。剣を弾き飛ばすことでもいい。
時間は問題でない。メガラスであれば、レオンハルトに到達するまでの時間は一秒も経たないものだ。
しかし、それが出来るかどうかは解らない。判断する前に、メガラスは前に出た。
同時、レオンハルトは声を出した。
その音は妙にゆっくりに感じられ、
「オル――」
「っ……！」
間に合うか。否、間に合わせる。
メガラスは加速を掛けた。
ハイスピード。

魔人メガラス、最速の攻撃である必殺技。
その結果が出る前に、
「――レオンハルトっ!!」
「――ッ！」
「……！」
二人は別の声を聞いた。メガラスは、その正体に直ぐ様気づく。
……魔王スラル。
白い髪に赤い瞳。人間の少女に見える魔王が、強張った顔つきで廊下の先に立っている。
その姿を見て、呼びつけられた本人であるレオンハルトは、振るわれる半ばであった剣を止め、
「す、スラル……」
震えた声で彼女の名前を呼ぶ。
対するスラルは、かつかつと、戦闘の余波でぼろぼろになった床を真っ直ぐに歩いて、レオンハルトの元に向かっていく。
その様子を、レオンハルトは俯き、悲痛な面持ちで見詰めていた。まるで親に叱られる、と怯える子供の様だ。
「……レオンハルト」
やがて、スラルはレオンハルトの直ぐ目の前、手を伸ばせば触れることの出来る距離まで行くと、彼を見上げ、
「……っ」
ビクつくレオンハルトの手を取り、
「色々やっちゃったみたいだけど……とりあえず、来て」
「な、にを……？」
というレオンハルトの問いに、スラルは怒りではなく、苦笑の表情で、
「――お話。一緒にお話したいの」
だから、と。
「いつもみたいに、私の部屋で」
「……あ、ああ……」
ただ頷くことしか出来ないレオンハルト。彼が魔剣を空間に収め

たのを確認すると、スラルはメガラスの方に視線を向け、
「……ごめんね。迷惑掛けて。しばらく休んでていいから、この惨状をどうにかしてもらうよう適当な魔物将軍に言っといてくれる？」
「……」
「ん、ありがとね。それじゃ、私達は行くから」
その言葉に頷いたのを見てお礼を言ったスラルは、レオンハルトの手を引いて廊下の奥に消えていった。

スラルの選択

レオンハルトはスラルに手を引かれて、そのまま彼女の私室まで連れて行かれた。

道中の会話はあまりない。時折、スラルの方が軽くこちらに振り向き、

「もうっ、レオンハルト？　ちゃんとご飯食べてないんでしょ。いくら忙しくても、ちゃんと食べないと駄目よ」

「……あ、ああ。そうだな」

と、何気ないことを言っては、レオンハルトが頷く。それだけの会話が行われる。

他にも、やれ寝ないのはよくない、だの、あまり根を詰めすぎるのはよくない、だの、色々と注意喚起を行なってくるのだが、その全てにレオンハルトは頷くしかない。

そもそも、レオンハルトとしてはそんなスラルの様子に不可思議を感じ、いっそ不気味に見えてしまっていた。彼女の様子は、至って普通、普段どおりであり、何も含むところがないように見える。

……何故だ……？

怒ることも、悲しむことも、失望することもしない。彼女の口から出てくるのは軽く注意する言葉だけ。しかも、全く関係のないことだ。

それとも自室に着いてから、その辺りを口にしてくれるのだろうか。いや、そうに違いない。こんな誰が通るかもわからない場所で話すことではないだろう。

しかし、

「さ、入って。散らかってるけど……き、気にしちゃ駄目よ？　色々と見られたらまずいものもあるし……」

そう言いながらスラルは自分の手を引いてベッドの縁まで行くと、そこに自分を座らせた。その隣にスラルも腰を下ろす。部屋の中は彼女が言う様に散らかっている。その多くが本棚から抜き出されたであろう本の山だ。薄暗い部屋の中で、明かりは殆ど灯っていない。

自分達がいるところだけを照らして、スラルはこちらを見上げる。
「それで、何でまたメガラスと戦ってたの？」
「……それは……」
　続く言葉が出てこないこちらに対し、スラルは仕方ないと言わんばかりの苦笑を浮かべ、
「まぁ、どうせいつもの戦うの大好き病が発症したんでしょうけど。少しは抑えないと駄目よ？」
「……」
　またしても軽く注意するだけの言葉。これくらいであればいつものことだ。
　何故――
「ちょっとレオンハルト？　聞いてるの？　私としては、戦ってるところも好きだからいいけど、周りのことも考えて――」
「――何でだ？」
「……え？」
　気づけば、言葉を放っていた。
　心の内にある疑念を叫ぶようにして言葉にする。それは、
「何故俺を責めねぇ!?」
「……責める？」
　スラルが疑問する様に首を傾げる。それに応答する言葉は、重ねられた疑問であり、
「何故何も聞かない!?　色々と聞くことがあるはずだ！　なのに、何でそんないつも通りでいられる!?」
　怒ることが、悲しむことが、絶対にあるはずだ。何故なら、
「お前がこうなることを、俺は言い当てたんだぞ！　だったら聞くことがあるだろう!?　責めることが、怒ることが、悲しむことがあるだろう!?　何故変わらない様子で俺と接することが出来る!?　何故――」
　そこで言葉は一度止まった。心が頭が、それを口にすることを拒否する。
　しかし構わず言った。それは、

「何故……俺のことを、嫌いにならねぇ……？」
「――――」
「嫌いになっても、おかしくねぇはずだ……！」
再度の言葉を浴びせる。
自分がしでかしてしまったことの大きさ。それを思い、レオンハルトは声を荒げる。震えた声で、
「俺は――」
「……レオンハルトっ」
「っ……!?」
突如、声が遮られる。それはスラルが起こした行動の所為だ。
続く言葉を放とうとしたこちらに対し、スラルは名前を呼びかけながら、
「――好き、好きっ。大好き。レオンハルト、好き」
「っ、スラ――っ、お前、っ、何を――」
こちらの身体に飛び込み、幾度となくキスを落としてくる。
……何だ、一体……!?
彼女の急すぎる行動に頭が混乱を極める。
好き、と何度も声に出し、何度も口を離しながらのキス。それがしばらく続く。
戸惑いの極地にいながらも、レオンハルトはやがてそれを受け入れざるを得なくなっていく。止めようとしてもスラルは止まってくれない。乱暴に押しのけることも出来ない。そもそも力は向こうの方が上だ。
ゆえに黙ってそれを受け止め続ける。段々と身体が熱くなり、互いの紅い瞳が虚ろに、熱くなっていくと、
「――んぅ……」
「っ、はぁ……！」
そこでようやく、スラルは口を離した。
お互いに呼吸を整えながら気持ちを落ち着けていく。
そんな中スラルは、身体の上に跨ったままこちらを見上げ、
「……どう？　わかった？」

「……何がだ……？」
訳が分からず言うと、スラルは軽く呆れるように息を吐きながらも答えを言う。
「私が、レオンハルトのことを好きだってこと」
「……だが、俺は――」
「……知ってたんでしょ？」
「――――」
続く言葉にレオンハルトは息を呑む。スラルはやはり、笑みのままで、
「でもそれを忘れていて、私の言葉を聞いてから、それを思い出した。――違う？」
「……そうだ」
的確に言い当てられ頷くしかない。それを皮切りに、こちらも言葉を尽くす。
懺悔をするように、
「知っていたんだ……！　なのに、俺はそれを思い出せない。こうなった今でさえ、俺は思い出せないんだ。思い出そうとしているはずだが、思い出すのを拒否しているようにも思える……！　俺は一体、何者なんだ……!?」
「……そんなの簡単でしょ」
と、スラルはそんな心中の吐露にさえ、微笑で答える。
こちらの頬をその小さな手で撫でながら、
「レオンハルトはレオンハルト。この世界に生まれた人間で、とっても強い魔人で、剣が好きで、戦うのが好きで、仕事に真面目で厳しいところがあって、でも優しいところもあって、格好良くて――」
そして、
「世界一大切な――私の大好きな人。それが貴方」
「――――」
愛おしそうに、視線を合わせながら想いを言葉にされる。
だが、と声に出そうとして、言葉にできないこちらを慈しむ様に見ながら、

「欠点も含めて、全部好き。知らないはずのことを知ってたって、貴方が大切なことには変わらない。多分それは、他の人も同じ」
「っ、他の人も……？」
頷きが返ってくる。他の人とは、
「ガルティア。ケッセルリンク。キャロルやハンティ。他の人達も、貴方が何者だろうと、仮にとんでもない秘密があったとしても、築き上げてきた関係は変わらない。私は貴方が大切で、レオンハルトっていう貴方個人に、皆は色んな想いを抱えているの。それだけは変わらない」
「……」
レオンハルトは、内心で疑念が渦巻いていた。
……何でだ？
何故自分は、いや、スラルは、
……そこまで理解しておいて、自分を愛せる？
それとも理解が足りていないのか。ならば言おう。
「……俺はもしかしたら、この世界の人間じゃないかもしれない」
そうではないと思いたい。しかしそういう可能性――否、そういう解釈も出来る。
しかし、
「……そうなんだ。それってよく解らないけど、前世とかそういう話？　それとも、生まれたときに異世界から来たとか？」
「……前者だ。生まれた時から、別の知るはずもない知識や記憶があった」
「ふーん……」
しかし、それを打ち明けたというのに、反応が薄い。ただ、そうだったんだ、という理解以外に感情が見えない。
何故だ、という疑念を抱く前に、スラルは言葉を口にした。
「……私、ひょっとしたら人間じゃないかもしれない」
「……は？」
不意の発言に今度はこちらの思考が固まる。
スラルは台詞を続けた。

「正確には、人間の時の記憶がないってことになるのかな。気がついた時には〝人間の魔王〟としてこの世界にいた。それが私」
正直なところよく解らない、と、スラルは呟く。
「だから本当は人間じゃないかもしれないし、記憶が無くなってるだけで、本当は普通の親がいる人間の子供だったのかもしれない。……でも――」
と、そこでスラルはほんの少し、顔を俯かせ、
「私は……最初から孤独だった。自分と縁がある者は、周りに誰もいなかった。自分が人間だったとは理解していても、人間の時の記憶がないなら、生まれた時から魔王だとしても同じことよね」
「それ、は……」
スラルの悩みを理解する。人間の時の記憶がない。
それは自分が何者であるかというルーツが解らないということに他ならない。最初の記憶は魔王であった時のもの。ならば人間であったと理解していても、実感として己は魔王でしかなく、
「ずっと人間になりたかったの。魔王になんてなりたくなかった。――でも、私は生まれたときから魔王だった」
「……」
記憶がある自分と、記憶がないスラル。
正反対であっても抱える悩みは同じだ。
……自分は何者なのか。
だが、
「もっとも、今はそこまで思い悩んでるわけじゃないけどね。……それで、聞きたいんだけど……」
と、スラルはその悩みを一蹴し、こちらに目を向けて問いを投げた。
それは、
「――これを聞いて私のこと、嫌いになった？　他の人がこれを聞いたら、嫌いになるかな？」
「――！」
レオンハルトは鼓動を跳ね上げた。それは、気付き、と、否定によるもので、

「嫌いになんてならねぇ!!」
そんなわけがない。ありえない。この程度で嫌いになるはずがない。
そしてそれは、相手も同じことで、
「……わかった？　そんなことはどうだっていいの――って、私も最近思ったことなんだけどね」
「……ああ。わかった。わかったよ――痛いくらいに」
しかし、だからこそ、心にくるものもある。
それは自分がしでかしたことだ。
「……俺は、お前を助けたい。ずっと一緒にいたい。だから――」
「あ、そのことなんだけどね」
と、再びスラルはこちらの言葉を遮るように言った。
軽い様子で言うその態度に、少しだけ期待する。もしかして、何か方法があるのかもしれない、と。
だが、その期待は直ぐに裏切られた。
「私がこれから先……死ぬまで――私は普段どおり、貴方達と過ごしたい」
「なっ――」
反射的に出た声は、しかし言葉にならず、一度止まる。一息、落ち着いて改めて声に出すのは、
「っ、それは駄目だ。いや、それは嫌だ。何でそんなことを……そんな――」
「……ごめんね？」
「っ……」
一声でこちらの言葉を、結果的に封じる形になったスラルは、そのまま続けて理由を口にした。
「方法は確かにあるかもしれない。でも、その僅かな可能性に賭けて皆を苦しませた上、残りの時間を怯え、不安のまま過ごすより……貴方達と幸せに暮らしたいの」
「――――」
言葉は口に出なかった。考え直す様に説得する言葉も、只々嫌だ、

と自分の内心を吐露するような言葉も。
何故なら、スラルの表情は、既に決めているように穏やかで、
「ごめんね。……でも、５０年って結構長いのよ？　日数だと１８２５０日もあるんだから。何度だってキス出来るし、デートにだって何回もいける。皆と遊びにもいける。それだけの時間、幸せでいられる。普通の人間なら、大往生よね」
だから、と。
「――お願い」
「っ……！」
……ずるい……。
レオンハルトはそう思う。
本当にずるい。何もかもが。
「……ずるい」
「……うん」
「……お前にそんなこと言われたら……俺は嫌でも従うしかない。そんなこと聞いちまったら――」
「ごめん。でも、レオンハルトも出来れば私と楽しんでほしい。じゃないと、私も素直に楽しめないから」
本当にずるい。そして、度し難い。
だが、
「……難しい、ことを、言ってくれるな……。お前が死ぬことを受け入れて、その上で普段どおり過ごせってか……？」
「……ごめんね。自分勝手で」
「ああ、本当にな……」
と、レオンハルトは乾いた笑いを洩らしながら、
「……５０年。５０年、か……」
「短い時間よね。――魔人にしては」
「……ああ、そうだな。――人間としては、長い時間だ」
「……私、これからはもっと皆と関わっていきたいな」
「……なるほど。確かに、素直なお前は可愛かったぜ」
「……ありがと」

「……」
レオンハルトは、スラルが首に手を回してくるのを黙って受け入れた。
その温もりが、とても心地よくて、愛しくて、心が満たされているのに。
――何故、こんなにも胸が痛いのか。

――それからしばらくして、レオンハルトは黄金像の探索中止を言い渡した。

皆が寝静まった頃。
スラルは、不意に目を覚ました。
「ん……」
ベッドの上。隣には、裸のまま泥の様に眠るレオンハルトの姿がある。
やはりよっぽど疲労が溜まっていたのだろう。体力的にも精神的にも。こうやって身を起こしたところで、普段であれば早々に気配を察して起きるのだが、そういった様子は皆無だ。
「……レオンハルト……」
彼の頭を撫で付けながら、名前を呼ぶ。
今日決めたこと。その判断は、レオンハルトの精神を大いに摩耗させてしまっただろう。それは理解している。
しかしそれでも、このまま助かる方法を探し続けるよりはマシなものだ。それは不可能に近い。少なくとも５０年という短い時間で新しい方法を探すのが無理だ。黄金像も、もはや当てに出来るものではない。
このまま彼らが無理に助けようと足掻き、失意の果てに沈むよりは、受け入れて最期の時までを幸せに暮らすほうが良い。心の整理を付けることだって出来る。

そういう意味で、レオンハルトの発言は救いだった。あのままいけば、自分はわけもわからず命を落とし、残されたレオンハルト達にも深く消えない傷を残していただろう。
だが、傷を付けることは同じかもしれない。何せ、幾ら心の整理が付いていようと、５０年後には、彼らは残されることとなり、それからの時を生きていく。
……そのとき、レオンハルトは――
どんな選択を取るのか。半ば確信に近いものを感じていると、
「……んゆ……」
「……っ!?」
不意に、現れた存在に息が詰まる。
侵入者、一体どこから……、と思考を回した瞬間、その目に映る存在が知ったものであることに気づく。
それは、
「……貴方……確か、セラクロラス……？」
「うん、そう」
金髪ツインテールの、常に眠そうにしている少女。
それは、聖女の子モンスターのセラクロラスだった。
知識の上では知っている。時のセラクロラス。レオンハルトに懐いていることも。そのためか、時折どこからともなく現れ絡んでくるのだと、レオンハルトは言っていた。
会って言葉を交わしたことはないが、遠目に見たことはある。その時は、近づくとすぐに逃げてしまっていたが。
そんなセラクロラスが、何をしに来たのか。やはりレオンハルトに会いに来たのだろうか。出来れば帰ってほしいのだが、と、スラルは思ったところで、
「……スラル、これ……」
「え、私に？」
レオンハルトに用があるなら今は帰ってもらおうと思ったのだが、セラクロラスが用があるのは、どうやら自分の様であり、こちらにむかって何かを差し出してくる。

それは白い、何の変哲もない手紙であった。それを受け取ると、
「……約束だから」
「……約束？」
「んじゃ、またね……」
「あ、ちょっと」
こちらが呼び止める前に、セラクロラスはどこかに消えてしまった。神出鬼没とは聞いていたが、瞬きしてる間に消えてしまうほどとは、色々とおかしくないだろうか。本当に時でも操っていそうな不条理を感じる。
「……何だったのかしら」
と、疑問を感じながら渡された手紙をまじまじと見詰める。トラップ的なものが仕込まれてたりしないだろうか、と一応魔法で調べるも、特におかしなところは見当たらない。
「……ラブレターだったりして」
とか、ありえない――いや、レオンハルト相手だとしたら普通にありえそうなことを呟く。自分で言っといて何だが微妙な気分になる。だとしたら、普通こっちに渡さないでしょ、当てつけか何か？
そんなことを思いながら便箋を開いて中身を見る。そこには、
「……え、これって――」
スラルはその日、眠ることが出来なかった。

ＳＳ５００年

――それからしばらく、レオンハルト達は穏やかな日々を過ごした。
荒れていたことを周囲に謝り、表面上はいつも通りに戻ったレオンハルト。
しかし近しい者達から見ると、その様子は空元気に映り、元気がないことを尋ねてみても、
『……別に、俺はいつも通りだ』
と、答える。
一方でスラルの方は普段にも増して活発になった。
自ら率先してレオンハルトや他の者を誘って行動した。
ガルティアと新しい食材を使った料理を振る舞ったり、逆に食べてみたり。
ケッセルリンクと中庭にお花を植えて、それを育てたり。
キャロルが知らないレオンハルトの昔話を教えてあげたり。
ハンティと魔法やドラゴンのことについて語り合ったり。
ますぞゑとハニ子と遊んでみたり。
ラウネアに新しいリボンをプレゼントしたり。
タルゴに食べ物を配ってみたり。
サメザンに捕まって空を飛んでみたり。
ブラッドとピットの第一使徒決定戦を開いてみたり。
同時に何故かキャロルと七星の対決を判定することになったり。
あまり話しかけていなかった他の魔人――メガラスやカミーラ、ケイブリスなどにも話しかけてみたり。
何故かいなくなっていた聖女の子モンスターをもう一度探してみて、しかし一部しか再会出来なかったり。
毎年、季節ごとのイベントも行い、記念日を祝った。
毎日の様に遊んだり、何かに挑戦したりして楽しんだ。
そしてその隣には常に、レオンハルトの姿があった。
デートに行くことも多く、食事や風呂、寝るときなども殆ど一緒

だった。
お互いにべったりであったが、ケッセルリンクやキャロルは不満を漏らさなかった。
それはレオンハルトの様子に、どうにも違和感があったからだ。
楽しんではいても、何かに耐えているような感覚が拭えなかったからだ。
しかしスラルの方はほんの少し、一人になる時間があった。
レオンハルトは仕事の時も殆どスラルと一緒にいるようになった。
だがその間、スラルは何かの研究を進めていた。
何をしているかは解らないし、教えてくれない。聞いても〝これは必要なことだから〟、と言うだけだ。
数十年間。スラルとその身内は、穏やかで楽しい日々を過ごした。
不安は何もない。ただ幸せな日々を。
しかし、ある日。スラルは皆を集めてそれを教えた。
『私には寿命がある』
そんなことを打ち明けられた。
ショックで殆どの者が二の句を継げない中、スラルは淡々と事実を口にする。
ＳＳ５００年頃。その時に、自分は死ぬ。
だから心の整理をしてほしい、と。
そこでようやく、皆はスラルとレオンハルトの様子を察した。
二人はそれを知っていたからこそ、様子が変わったのだと。
レオンハルトがあの時荒れていたのは、これが原因なのだと。
どうにもならないのか、と静かに尋ねるガルティアの問いに首を振ったスラルを見て、皆はこの時ようやく理解した。
この日々はいつまでも続くものではない、と。言葉には出来ずとも、それを本能で察した。
だからこそ、今を精一杯生きようとしているのだと、理解した。
結局、皆はスラルの願いを汲むことにした。
誰よりも悲しい想いをしている、誰よりも異を唱えたいであろうレオンハルトが、それを汲んでいる。

そのことに皆は何も言えなかった。
――そうしてまた、時間は過ぎていく。
幾つもの季節が過ぎ去り、年を重ねた。
その間も、幸いな日々を過ごし続けた。
そして――ＳＳ５００年。
季節は冬。良く晴れた日のこと。
とうとうその日はやってきた。

その日。
スラルはレオンハルトの元を離れ、幾人かの元へ顔を見せた。
一人ずつ。その最期の言葉を掛けに行ったのだ。

魔王城の食堂にいたムシ使いの魔人、ガルティアはスラルと言葉を交わし合った。
それが終わり、彼女が立ち去っていく。別のやつにも顔を見せに行くのだろう。
ガルティアはしばらく、そこで食事を取っていた。
「……」
無言のまま食事を摂っていく。
ムシ使いにとって、ムシを飢えさせるわけにはいかない。ムシは大切な家族だ。家族を飢えさせるわけにはいかないだろう。
同時に、食事には敬意を払う。
それがガルティアの挟持だ。だが、
「……参ったな」
ガルティアは息を吐いて、ぽつりと言葉を漏らす。
「……何を食べても味が解かんねえのは……これで二度目か」
一度目は、人間時代の親友が無くなった時だ。その時は随分と堪えた。
そして今は、

「……最初は、ただの取り引きだったんだけどな……」
思えば魔人になったのは自分が治める多くのムシ使いが暮らす集落。故郷と仲間、家族を守りたかったからだ。
仲間になったのは義理に近いもの。本来、魔物に思い入れはないし、見ようによっては仇ともいえるものだ。しかし、
「……悲しいな」
気づけば、腹の中からムシ達が声を掛けてきている。慰めてくれているのだ。
それに応えながら、ガルティアは声を作る。味のしない料理を口にしながら、
「――家族を失うってのは、悲しいもんだ」
言葉とともに、家族への別れを思った。

中庭にて佇むカラーの魔人、ケッセルリンクは立ち去っていく主の姿を見て耐えきれないものを感じていた。
しかしどうすることも出来ない。そうすることを主は望んでいない。
ならば遮ってはいけない。ここで声を上げたところで、主を困らせるだけだ。
これから、別の者にも言葉を尽くす必要がある。その中にはきっと、自分の愛しい人も。
それを想えば、深い悲しみにあっても引き止めることは出来ない。
「……私は、貴女に救われました」
想い人である彼に手を出し、それでもなおこちらを許し、魔人として傍にいることを許した。
「……死を待つのみだった私に、新たな道を示してくれました」
その道は魔人という見ようによっては修羅の道だ。しかし、それによって、
「……私は、新たな幸いを得ました」
貴女が作る賑やかで楽しい列に、自分を加えてくれた。

その恩は、一生を懸けても報いるべきもの。ゆえに、
「主の頼み、確かに承りました。……承りました」
だから、
「――今だけは、主の為に今しばらく、涙を流すことを、お許しください……」
震える声でそう言って、ケッセルリンクは花畑の前で蹲った。

城の外に出ていたハニーの魔人、ますぞえはひたすらに歩みを進めていた。
その後ろから付いてくるのは、ハニ子と使徒のブラッドとピット。
魔王との話を聞き終えたますぞえは、直ぐ様移動を開始した。その理由は、
「……奈落に帰る、ですか？」
「……」
頷く。すると、ブラッドとピットが同時の声で、
「……寂しくなりますね」
言う。ますぞえは何も答えない。
ただ、その手には、
「！　ますぞえ様、それ……」
ハニ子が気づく。ますぞえの手にあったのは、
「む？　確か、スーパーボール、でしたか？」
「……」
いつかの屋台で貰った何の変哲もないスーパーボールだ。
しかしそれは五十年以上経った所為か黒ずみ、ぼろぼろになっている。
ますぞえは何も感じない。
生きる理由もない。ただじっとしているのみでいい。
これからは再び奈落にて、時間を潰すだけの日々が続くだろう。
だが、ほんの少しだけ、残していくには惜しかった、とそんな想いを得ながら、

「……え？　ますぞえ様。今なんと？」
ますぞえはこれからのことを、ハニ子に教えた。それは、
「……いつか、本気を出して――世界を滅ぼす？」
「……」
その時が来ればそうしよう、と、魔人ますぞえは何となくそう思って奈落に帰っていった。

魔王城の廊下を重い足取りで歩くのは、レオンハルトの使徒であるキャロルだ。
彼女は同じく、使徒であるハンティとともにスラルの言葉を聞き、その後、頼まれた要件を済ませるために歩いていた。ハンティの方はまた別の用事があるらしい。
そうして歩いていると、廊下の向こうから、
「……キャロル、ですか」
「……あ、七星ですの」
ばったりと、彼女がライバルにしているカミーラの使徒、七星と出会う。
七星はキャロルを見て、ほんの少し眉を動かした。そして今度は何を言われるのかと身構える。
彼女が七星に勝負を挑むのは、もはや日常茶飯事となっていた。七星としては少しならともかく、毎回、それも様々な種目での対決は、精神的に疲れるので、悩みのタネではある。
しかし主であるカミーラからも、出来る限り受ける様に言われているため、断るに断れない。何だか面白がってる節があるのだ。
ゆえに、七星は廊下で立ち止まった。しかし、
「……では、失礼しますの」
「……え？　あ、はい」
短く挨拶を告げて通り過ぎていくキャロルに、思わず呆気にとられる七星。
しかもその姿に、いつもの威勢の良さは無く、ただただ気落ちした

様子だ。
それを見て、
「……何だか、調子が狂いますね」
声に出してみるも既にキャロルは自分が来た方向に向かい、こちらに振り向こうともしない。おそらく、大事な用があると推測出来る。だが、
「……微妙な気分になりますね」
と、七星は初めてみたキャロルの悲しんだ表情を見て、何ともいえない気分になったのだった。

レオンハルトは、急いでいた。
冬の寒空の下、確かな陽光が照らす草原の上を全力で駆けていく。
理由は簡単だ。
先程、部屋で呆然としていたところに、キャロルが自分を呼びに来た。
曰く――『東の崖で待ってる』、と。
そう伝言を頼まれたと。
それを聞いた瞬間、レオンハルトは駆け出していた。
窓から飛び出す様に外に出ると、一目散に東を目指す。
場所は解る。一度、皆で出かけた場所だろう。ここからならそれほどかからない。
しかしそれと急がないことは別だ。
時間はもう少ない。この間にも最期を迎えてしまう可能性がある。
だから急ぐ。これ以上ないほどに。
草原を過ぎ、丘を越えると、その先には崖が見えてくる。
するとそこには、
「――レオンハルト……」
「スラル……」
自分のもっとも大切で、愛しい少女――スラルがそこにいて、
「……スラル……!」

駆け寄った。足に力が入る。
「……駄目ね。会ったら、やっぱり我慢できない」
こちらの顔を見てスラルが言った。駆け寄ったこちらの胸に、スラルが飛び込んでくる。
「レオンハルト……！」
「スラル……！」
強く抱きしめる。
離さない、と、それを伝えるように強く抱きしめる。
腕の中には彼女がいる。世界で一番大切な存在だ。
だが、残された時間は多くない。それを感じているのか、スラルは胸に顔を埋めながら、
「……レオンハルト。聞いてくれる？」
「……ああ」
レオンハルトは頷く。頷くしかない。
スラルはそれを聞くと、そのまま話し始めた。
「……私、もう時間がないの」
「……ああ」
「ここまでありがとね。お願い、聞いてくれて」
「……ああ」
「おかげで――とっても楽しかった」
「……ああ、それは良かった」
「……だから、もういいよ」
「……」
「もう、いいよ――」
「っ……！」
その言葉を耳にした瞬間、俺は心から溢れる想いを抑えなかった。
「……スラルっ……！」
言う。目から零れるものに構わず、
「もうどうしようもねぇのか……!?」
「……うん、どうしようもないの」
「何で……何でだ……!?」

俺はようやく手に入れたのに。
「何で、それを手放さなくちゃならない!!」
「……それは、私が望んだから」
スラルが言う。
「レオンハルトのせいじゃない」
何故なら、
「私はきっと……何もなくても、こうなってた」
例え俺がいなくとも、
「自分の安全を考えて、これを望んでた。……こうなったのは、私のせいなの」
だから、と。
「自分を責めないで」
「そんな、の……」
責めるに決まってる。
俺は何とか出来たんだ。
だが、
「聞いて、レオンハルト」
ああ、聞く。聞くからいなくならないでくれ。
「私、幸せだった。人間になれない私が、せめて人間らしいことが出来たの」
俺だって幸せだった。お前に出逢うことで、俺は俺らしくなれた。
「愛されて、愛することを知ったの」
俺もそうだ。初めて、愛することを知った。
「私って酷いんだから、貴方やガルティア、ケッセルリンクも……皆、自分だけの味方が欲しくて、魔人にしたのよ?」
俺だって酷いさ。俺が自分を曲げなかったから、お前はいなくなるんだ。
「ん、もうちょっとで……お別れかな……」
嫌だ。やめてくれ。別れたくない。
「私ね……死ぬのは怖くないの……怖いのは……残された貴方の事を思うこと」

ああ、そう思うなら置いていかないでくれ。
「貴方が私を失った後、どうにかなっちゃうんじゃないかって……あはは……そう思うのは、自意識過剰かな？」
違う。自意識過剰なんかじゃない……！
俺には耐えられない。お前がいない世界で生きるなんて……！
「私は貴方に会えて……レオンハルトと過ごせて……大切な人がいっぱい出来て、幸せだった……あなたたちがいない世界なんて、考えられない」
俺もだ。お前に会って大切なものがいっぱい出来た。だから、
「貴方達と出会って……世界って……とっても素敵よね……って、そう思う様になったの」
俺もお前と出会えて、世界が好きになった。でも、いなくなったらまた嫌いになっちまう。
だから――
「だから――生きて、貴方は貴方らしく……自分に正直に生きて……大切なものを、人を、沢山作って、それと一緒に、精一杯生きて……」
「っ！　おれ、は……お前、の、ことが――」
「……駄目――」
「――っ」
不意に、スラルの唇が、俺の口を塞いだ。
そっと唇が触れ合い、やがてゆっくりと離れていく。
そして、
「その先は、言っちゃ駄目……言ったら……」
想いを口にするのは駄目だ、とスラルは言う。
なら、
「お前は、お前は……！　どう思ってるんだよっ……！」
聞く。
スラルは、涙でぐしょぐしょに濡れた俺の顔を見詰めると、
「――私、は……貴方のことが……――」
と、その瞬間、レオンハルトは目の前で起こった出来事を見た。
「あ……？」

腕の中の感触が、唐突に消え去り、紅い血となって空に浮かんでいくのを――
それは、
「ああ……！」
スラルが、
「……っ、ふざけんな……！」
消えて、
「ふざけんじゃねえっ……!!」
拳を握り、地面を叩く。
「ようやく見つけたんだ……！」
大切なものを。なのに、
「何で、何で消えちまうんだよ……！」
何故、
「俺を、置いていくんだよ……！」
ずっと一緒にいたかった。
「くそっ……こんなの、ありかよ……！」
一緒にいたかったんだ……！
「――!!」
俯き、何にも憚ることなく、レオンハルトは一人、崖の上で慟哭した。

スラルは、薄れいく意識の中でそれを見ていた。
眼下、愛しい人が泣いている。自分がいなくなったことに対し泣いているのだ。
……ごめんね。
謝る言葉を内心に生む。
死を望んだのは自分だ。
まさか自分がそれを望むなんて、と思う。しかし、
……ああ、なるほど。
ようやくそれが理解った。

何故死を望むのか。以前にも聞いたことがある。
その時は、その心境が理解出来なかったが、今は違う。
自分はこれまで色んなものを得てきた。
大切な人が沢山出来て、彼らのことを深く知って、好きになった。
その彼らは今、私がいなくなることに悲しんでくれている。
……なるほどね……。
自分がいなくなってほしくない。いなくなったら悲しい。
そうやって思われるくらいの生き方を、自分はしてきたのだ。
彼らの中に自分を刻み、様々なものを残してきたのだ。引きこもりの少女の散り際にしては上等だろう。
だけど、
……まだ、終わりじゃない。
自分はここでいなくなるが、世界はまだまだ続いていく。
……貴方達の思い通りになんてさせない。
自分がいなくなったことを、神はどう思っているだろうか。
悲しむ、笑う、怒る、焦る――否、きっとどうでもいいのだろう。
世界なんてどうだっていい。そこに住む連中なんて、替えがきく玩具でしかない。そう思っているのだろう。
遅かれ早かれ、世界は壊される。その中身をひっくり返される。
自分の生きた、そして、愛する者達がいる世界だ。そんなことは赦さない。
……いずれ私が引きこもり続けた意味を、貴方達に教えてあげるんだから。
そうして自分が残してきたものは、神の力に比べれば塵芥の如き存在かもしれない。
されど、自分の大切な人達は……とってもしぶといのよ、と。
……覚悟しなさい。最後に勝つのは――私達よ。
その言葉を最期に、スラルの意識は消えていった。

その日、第三代魔王スラルは、魔王の血に飲まれて消えた。

在任期間は５００年。魔軍の基礎を作り上げた彼女は、臆病で博識。

そして――歴代で最も愛された――そんな魔王であった。

託されたもの

魔王城は、混乱の極地にあった。
それは、魔人筆頭であるレオンハルトが告げたとある訃報によるもの。その内容は、
――魔王スラルの死。
そのことを告げられた魔物将軍以下、多くの魔物兵は、一時騒然とした状態になった。
目に見えて士気が落ち、逃げ出す者達すら出てくる騒ぎであったが、魔物大将軍リーを中心としたレオンハルト軍の者達が何とかそれをまとめ上げ、事態をある程度ではあるが、収拾することに成功した。
だがその中に魔人――レオンハルトの姿は無かった。

そんな風に、魔王の死に魔軍が騒然とする中、とある場所で驚愕を得ていたものがいた。
それは、ここではないどこかにいるヒトデのような蜘蛛のような神で、
「……は？」
いつもの様に地上を俯瞰で観察し、時を過ごしていた三超神、プランナーは、魔王が消失したことに唖然とする。
しかもその理由が、
「魔王の血の、容量不足か……」
容量が大きすぎる無敵結界を搭載したことによって、寿命が千年となっていた魔王が、その半分である五百年で、血に飲まれて消えてしまった。
それはプランナーにとっても計算外の出来事である。
直ぐ様、無敵結界に改良を加えなければならないが、それは問題ない。既に要領が掴んでいる。大した作業ではない。
それよりも問題は、
「次の魔王をどうするか……」

そっちの方が重要だ。
何せ魔王が地上にいないということは、自分が築き上げた至上のバランスが崩れるということでもある。
それは看過できない。バランスは何よりも重要だ。
しかし、だからといって適当なものを魔王にするわけにはいかない。それこそバランスが崩れる。
「ううむ」
悩む。
前魔王はバランス感覚に優れていたが、些か魔王らしくはなかった。
もっともそれは、魔王の血に完全に適合していたからだが、また同じでは芸がない。
もう少し残忍な魔王の方がウケは良い気がする。
後は偉そうな奴がよい。それこそ、魔の王らしくなる気がする。
しかし人間個人のことはそんなに知らないからな。だとすれば、
「人類管理局――女神ＡＬＩＣＥ辺りに選別させるか」
その中から良さそうなのを選ぶとしよう。プランナーはそう考え、女神ＡＬＩＣＥを呼びつけることにした。

――魔王城。
その一階では、魔物将軍や魔物隊長らが右往左往としていた。
殆どが同じ姿を持つ彼らだが、今共通しているのは、困ったような表情であり、焦りを滲ませた声だった。
そこに通りがかったのは、緑の髪に褐色の肌を持つ魔人で、
「……こんなところで集まって、何やってるんだ？」
「あ、ガルティア様！」
「す、すみません。色々と立て込んでまして……」
上司である魔人に声を掛けられ、恐縮しつつも頭を下げる。その手には大量の紙束、もしくは何かの指令や要項が纏められている一枚の紙を持っており、

「あー……どたばたしてるのか。そいつは悪かった」
「い、いえ、ガルティア様が謝らずとも結構です」
忙しさを察して軽く謝るも、魔物将軍が畏まる。
その様子に、どうにも疲れの色が見えたことから、ガルティアは気になって、
「やっぱ忙しいのか？」
軽い気持ちで尋ねてみる。
すると魔物将軍は、少し迷う素振りを見せて他の者と顔を見合わせるも、言うことを決めたのかややあって低い声で、
「……はい。魔王様がお亡くなりになられ、魔物兵の混乱が酷く……大将軍閣下が動いてくださってますが、それでも全てが収まったわけではありませんし……せめて、レオンハルト様が動いてくだされば助かるのですが」
「……なるほどな」
聞く限り、やはりレオンハルトは魔軍の業務に関わっていないらしい。
そも彼女が亡くなり、レオンハルトが城に帰ってきてからというもの、ガルティアでさえ未だ顔を見ていないのだ。
それはひとえに、気を使った結果であるが――
「……よし、わかった」
「……？　何がでしょうか？」
決まってんだろ、と、ガルティアは肩をならしつつ、軽い笑みを見せて言う。
「ちょっくら部屋まで行って、レオンハルトに会ってくる」
と、ガルティアは軽い足取りで、レオンハルトの部屋がある上階に向かっていった。

――しかし、
「……お通しできませんわ」
「おお……」

目の前にあるレオンハルトの私室。
その前に立ち塞がるように立ち尽くすキャロルに、ガルティアは止められた。
横には、同じ様にレオンハルトに会いに来たであろうケッセルリンクがおり、通せない、と言い張るキャロルに向かって声を作る。
「……どうしてかね？」
「……レオンハルト様は、誰にもお会いにならないそうですの。ですから、通せません」
「それは、俺達もか？」
返ってきた答えに、引き継ぐような問いを投げる。それは暗に、自分達の間柄なら構わないのではないか、という意味を込めたものだ。
しかし、キャロルは首を振り、
「……レオンハルト様は、〝誰も通すな〟、と、そう言いましたわ……」
「……ふぅん？」
ガルティアは首を撚る。
閉じ籠もっている理由は、推測で、大まかではあるが解る。ようは塞ぎ込んでいるのだろう。仕事が手に付かず、誰にも会いたくない、という気持ちも、まあ、分からないでもない。
だが、疑問もある。それは、
「それは、いつまでだ？」
「……」
今度は口を噤ませたキャロル。
沈黙の意味はおそらく、キャロルにも分からない。もしくは、
「……いつまでも、閉じこもるつもりか？」
「……それは……」
キャロルが片腕の震えを止める様にもう片方の手で抑える。
二の句を継げないでいた彼女に、今度はケッセルリンク聞いた。
「……もしや、使徒の立ち入りも禁じているのか？」
「……そうなのか？」
重ねて問う。しかし今度も首を振り、
「……一応、わたくしだけは、入室を許可されてます。……ですが」

と、キャロルはそこで言葉を区切った。
見れば唇が震え、今にも泣きそうな表情をしている。
そこから出てくる言葉は、こちらの想像を超える言葉であった。
「……レオンハルト様は、もう……何かをして、生きるということを諦めましたの」
「――――」
告げられた言葉にケッセルリンクが絶句した。キャロルが続けて、
「誰とも関わらず、ただ……ただ、このまま、緩やかな死を選ぶ……と、そう仰っていましたわ……」
「……」
言われた言葉に、ガルティアは一瞬固まった。
……何だそれは？
レオンハルトが、死にたがっている、と、つまりはそういうことだ。
理由は解る。スラルを失ったショックだろう。
そう思うのも無理ないかもしれない。冷静な頭ではそう思う。
だがそれは、
「何を、ふざけたことを……」
憤りが胸の内に広がって、溢れてくる。
それは言葉となって口から出るものだ。
「死にたいだと……？」
そんなことを、そんな世迷い言を、口にするのか。
それだけは、そんなことだけは、
……許されねえ。
「っ……おい、キャロル。今直ぐそこをどきな」
「……ガルティア様？　それは――」
「いいからどけ。――でないと、怪我するぞ」
「ガルティア？　何を……」
ケッセルリンクの疑問の声を無視し、ガルティアはキャロルの横の壁に向かって、
「――出てきやがれ！　レオンハルト!!」
魔人の脚力をもって、思い切り蹴り抜いた。

破砕音とともに、壁が部屋の向こうに崩れる。それを見て、
……ちゃんと、ぶち抜けたな。
壁の向こうに部屋の内装が見える。それを確認すると、頷き、
「よし、じゃあ入るぞ」
「……あ、ああ。そうするとしよう……」
ケッセルリンクが若干狼狽えつつも後に続く。それを見て、口を開けたまま固まっていたキャロルが、再起動し、
「な、な、な……何をしてますのガルティア様――!?」
……お、ようやくいつもの調子に戻ったようだ。
叫ぶように声を上げるキャロルに元気が戻ったか、ならば良し、と感心する。
そんなキャロルは部屋に入っていくこちらに声を上げ、
「だ、駄目ですわよ！　レオンハルト様の命令が――」
「――いや、いい」
と、続く言葉を止めた者がいた。
それは部屋の中から聞こえたもので、
「……何だ、ちゃんといるじゃねえか。返事ぐらいしろ」
「……レオンハルト……」
部屋に入ったケッセルリンクと二人で、部屋の主の姿を確認する。
そんな中、律儀にドアの方を開けて部屋に戻ったキャロルが主に向かって、
「レオンハルト様!?　それは――」
「……いい、キャロル。いつかは、無理矢理にでも入ってくるだろうしな……それが早まっただけだ……」
「っ、畏まりましたわ……」
主に言われて引き下がるキャロル。その傍らに控える形だ。
ガルティアは、そのベッドの上で上半身だけを起こしている友人の姿を見た。
目は虚ろで、生気のない顔でこちらを見るのは当然、魔人レオンハルトであり、彼は覇気のない声で尋ねてきた。
「……それで、何の用だ……？」

「……ちょっと言いたいことがあってな。邪魔するぜ」
「……そうか。お前の方は……？」
視線だけでケッセルリンクを見るレオンハルト。その様子に少しだけたじろいたケッセルリンクであったが、迷った挙げ句、
「……私は、貴方が心配で……」
「……そうか……」
と、口だけでレオンハルトは言った。身体の動きはない。
その姿は、完全に無気力状態であり、何も見ていない様であった。
心配だ、と言って来たケッセルリンクから直ぐに視線を外す。しかしこちらを向くでもなく、レオンハルトはただ虚空を見詰めながら声を出す。ゆっくりと低い声で、
「……俺には、用はない。言いたいことを言ったら、出ていくといい……」
「っ、レオンハルト……！」
ケッセルリンクが悲痛な表情で名前を呼ぶ。
それを一瞥すらせず、レオンハルトは無言で待ち続ける。
それは、こちらの言葉を待っているのだろう。で、しかもそれに反応する気もない。入室を許可したのは、言った様にいつかは起こることだから。後、義理もあるかもしれない。
ガルティアは思う。確かに、言いたいことがあって来た、とそう言った。
だが、
「……一つ、先に聞くがよ」
「……」
無視。しかし聞いてはいる気配は感じる。
ゆえに構わず、
「お前が死ぬ気だっていうのは本当か？」
聞かざるを得ないことを聞く。
その問いにレオンハルトは、こちらを一瞥し、
「……ああ、そうだ」
「……！」

答えた。
その答えに頭が沸騰するのを感じながらも、続く言葉を聞く。
それは、
「……俺はもう、何もする気もない……」
何故なら、
「こんな……こんな、あいつのいない世界で、生き続けるなんて、無理なんだよ……」
だから、
「俺はもう……ここで終わりでいい」
「……テメェは……」
ガルティアは告げられた言葉に怒りを覚えた。
死にたい理由は理解る。言っている意味も理解る。
だが、看過出来るものではない。
ゆえに、
「……気が変わった」
ガルティアは言って、レオンハルトのもとに歩き、近づいていく。
そして拳を強く握りしめると、
「――口だけじゃ終わらせねえ」
「――っ!?」
その拳で、レオンハルトの顔を思い切り殴った。
レオンハルトの身体がベッドから吹き飛び、壁に激突してそこで止まる。
衝撃を受けて息が口から漏れ出たレオンハルトだが、しかし大したダメージは受けていない。
それは魔人としての、レオンハルトの体力の所為だ。
だが、何が起きたのかを理解し、しかし意味が理解出来ていないレオンハルトはこちらを見上げ、
「……何を……」
と、問いかけてくる。
それにガルティアはこう答えた。
答えになってない言葉で、

「死ぬって言ったな、お前……ふざけたこと言ってんじゃねえぞ!!」
そう。ふざけている。死ぬということはありえない。
それはアイツの願いを踏みにじっている。
だからこれは、
「お前は、アイツに生きろって、そう言われたんじゃねえのか!?」
アイツの拳だ。

レオンハルトは正面のガルティアを見て、言葉を聞いていた。
こちらに向かって数歩を踏み出すと、左手で胸倉を掴まれて持ち上げられる。そのまま右手を振り被り、
「さっさと目を覚ませ……!」
「っ……!」
殴る。今度は左手で掴まれているので吹き飛ばない。
だが代わりに、ケッセルリンクが声を上げ、
「ガルティア!」
「止めるんじゃねえよケッセルリンク……!」
制止の言葉に聞く耳を持たず、こちらを睨みつける様に見るガルティアは続けて、
「弱音を吐こうが、無気力になろうが、それは別に構わねえ！　だけどな、死ぬことだけは許さねえぞレオンハルト！」
「……何でだ……？」
「あぁ!?」
怒るガルティアを前に、声を漏らした。
それは単純な疑問と、内心の吐露だ。
「この理不尽な世界で……生きようとすることが、どうして出来る……？　アイツは――」
そうスラルは、
「世界を好きだ、と、そう言ったんだ。その上で……理不尽に死んでいった」
この世界に善意も希望もない。あるのは底なしの悪意と絶望だけ

だ。
自分達はおもちゃだ。面白ければ弄ばれ、飽きれば捨てられる。
あいつがいるなら、それでも我慢は出来ただろう。しかも、
「俺は……何も出来なかった……あいつを守れなかった」
自分の在り方を守るばかり、あいつを救うチャンスをふいにした。
そんな自分に価値はない。意味はない。
だったら、
「そんな俺が……のうのうと生き続けるなんて……そんなことは――」
「――黙りやがれ!!」
「っ……」
続く言葉は、ガルティアの怒声によって止められた。
再度、こちらを強く睨みつけると、語気を荒げてこう言った。
「お前、アイツが俺に……俺に最後、なんて声を掛けたか教えてやろうか!?」
それは、と思う。
スラルが最期の日に、一人ずつ話をしに行っていたのは解る。レオンハルトは一時も離れたくなかったが、身内への最後の言葉だ。送り出すしかなかった。
ガルティアにスラルが何を伝えたのか、疑問が湧くこちらに向かって、ガルティアは続けた。
それは、
「〝レオンハルトのこと、お願い〟――そう言ったんだ！」
「――――」
分かるか？　とガルティアが言う。その意味は、
「あいつは自分が死ぬ最後まで、お前のことを心配してた。自分がいなくなった後のお前のことをな――」
「……スラル……」
名前を呟くこちらに、ガルティアは言う。お前もそうだったんじゃないのか？　と、
「なのに死ぬだと？　生きる理由がないだと？　馬鹿言ってんじゃね

え!!　やることなら、あるだろうが……！」
　それは、
「生きろって言われたんだろ!?　何かを頼まれたはずだ！　――だったらそれをやれ！　死にに行くんじゃねえ、生きに行け！　そうじゃねえと、犬死にだろうが!!」
「俺、は……」
「……それでも死にたいって言うんなら――」
　と、ガルティアは拳を振り上げて力を込める。
「俺が殺してやる!!」
「――っ」
　どうなんだ、と怒りを込めた拳がこちらの頬を撃ち抜く。
　痛みを感じながら、レオンハルトはガルティアの声を聞いた。
「答えろ！　テメェはどうする!?」
「……」
　問われる。自分の意思を。これからどうするかを。
　……俺は……。
　自分自身に問う。このまま何もせず、何も残さず死んでいくのか。
　何かを成しに、生きに行くのか。
「俺は……」
　その問いに答える前に、レオンハルトは横からの声を聞いた。
「……色々と、盛り上がってるみたいだね」
　その声は、聞き覚えのあるものだ。
　声の飛んできた方向、扉の方を見やる。するとそこにはやはり、
「……ハンティ……か……」
「……かなり酷い有様だね」
　レオンハルトの使徒であるハンティが、こちらを呆れた様な表情で見詰めていた。
　部屋にいる皆が視線を向ける中、声を上げたのは同じ使徒であるキャロルで、
「ハンティさん！　一体どこに行ってましたの!?　わたくし、心配して……」

「ああ、ごめんね。ちょっとやることがあってさ。――そこのご主人様のために」
告げた言葉に、疑念を抱いたのは誰も彼もだ。目を細めて、あるいは眉間にしわを寄せてハンティを見る。
そんな中、ハンティはレオンハルトに視線を向けると、
「……ちょっと、最後の方だけ聞こえたけど……レオンハルト。あんた……死にたがってるんだって？」
「……」
答えない。しかし無言のこちらを見て息を吐いたハンティは、少し険のある目つきで言う。
「……随分と勝手よね。あんた、あたしと戦うために、あたしを使徒にした癖に、自分だけ先に行こうってわけ？」
ふざけた話、とハンティは短く断じる。
眉を立てながら、
「ほんと、ふざけんなって話よ。勝手に使徒にして、あれだけ戦わせてやる気を出させといて、飽きたらさよなら、なんて……そんな話は通らない。――そう思うでしょ？」
「……？」
と、不意にハンティがこちらではなく肩口に声を乗せた。それは別の誰かに問うような言葉であり、レオンハルトの内に疑念を生じさせる。
だが、次の瞬間。彼女の背後から声が聞こえ、レオンハルトは少し目を見開かせる。
それは、
「――全くですよ。私をあれだけ本気にさせといて。再会して直ぐにさよならなんて嫌ですよう？」
現れたのは、長く青い髪を持つ、長耳の女性だった。
頭に白い帽子を被り、気品ある緩やかなローブに身を包んだ美少女が、その手に大きな杖。そして青いクリスタルを額に持った、そんな相手だ。
その姿を見て、驚いた様に声を上げたのは、ケッセルリンクだ。

彼女の名前を、ケッセルリンクは知っている。皆が知っている。彼女は、
「――ペール……！」
「はい、お久しぶりですケッセルリンク様、レオンハルトさん。そして皆さん」
現カラーの長――ペール・カラー。
八十年前。カラーの森を訪れたレオンハルトと縁を結んだ少女。
その登場に、レオンハルトも唖然として彼女を見る。
ペールの方も、レオンハルトに視線を合わせ、微笑を浮かべると、
「……レオンハルトさん。私、変われましたよ」
「ペール……」
その姿は確かにペールだ。
しかし記憶にある彼女よりも堂々と、そして立ち振舞に余裕が見える。
力も増している様だ。
「レオンハルトさんのおかげで、変われました」
「……そう、みたいだな……」
見違えた、と、素直にそう思う。
見た目はそこまで変わってないはずなのに、随分と綺麗になった。
振る舞いの変化も、きっと今まで必死に頑張り、経験を積んできた成果だろう。カラーの長として。
「レオンハルトさんのために頑張って……変わったんです。立派なカラーの長として、再会するために」
「……そう、だったな……」
自分がそう言ったのだ。別れる彼女を勇気づけるため。
そして自分も、また会いたい、と、そう思って、
「私、頑張りました」
ペールは言う。あの出会いと、言葉を糧に頑張ってきたと。
「カラーの集落は発展しましたよ。人も増えて、畑も増やして、設備を整えて、自分達だけでも集落を守れるくらい、強くなりました。後継者だって育てましたし、私だって、今では集落一の戦士――というか

魔法使いですけど、強くなったんですよ？」
　どうですか？　と、少し自慢気な様子でペールは胸を張る。
「私、ちゃんと立派なカラーになれました。少なくとも、自分を好きになれるくらいには」
　なのに、と。
「そんな風に、死ぬなんて言われると……私困ります。確かに……その、スラルさんが亡くなったのは……私も、悲しいです……」
　でも、
「レオンハルトさんまでいなくなったら……私は……私達は、困ります……！　悲しいです……！」
　だから、と。
「お願いですから、そんなこと言わないでください……！」
「っ、ペール……」
　そう言って頭を下げるペールに、レオンハルトは二の句を継げなくなる。
　だが、言葉はそこで終わりではなかった。
　背後から聴こえる別の声によって、
「――そうだぞ。貴様、何を腑抜けたことを言っている？」
「……！」
　その声は、大きくも威厳ある、しかし、どこか親しみやすさが混じる声だった。
　声は背後、外から聞こえる。
　レオンハルトが振り向くと、突如、窓を無理矢理突き破る様に、白く輝く爪が突き立てられた。
　視界に入ってきたその腕、いや、全身は全て――ダイヤモンドで出来ていた。
　その姿を、やはりレオンハルトは知っている。その誇り高くも屈強な種族の中にあって、さらに強いその存在を。
　５０メートルほどの巨体。顔だけをこちらに覗かせ、声を送ってきたのは、
「……ライ、ゼン……か……！」

「久し振りだな、強敵(とも)よ――」
大いなるドラゴン。四大聖竜の一角――ダイヤモンドドラゴンのライゼンが、そこにいた。

ライゼンは、室内で膝をつくレオンハルトの姿を見て目を細めた。
その姿はかつて、自分と戦い勝利した魔人の姿とはまるで違う。
生気がなく、虚ろなその瞳は、自分が認めた戦士の姿ではない。
しかしその見苦しい姿は見覚えのあるものだ。他人事ではない
ならば、声を送ろう。あの時の様に。
「……あの心優しき魔王は、逝ってしまったようだな……」
城の中にその気配は感じない。すでに失われてしまっている。
「願わくば、再び言葉を交わしてみたかったが……それも叶わぬか」
世界に絶望を与えるはずの魔王だというのに、不思議な雰囲気を持つ少女だった。
らしからぬ優しさを持ち、これだけの人物に慕われているのだ。自分としても、素直に惜しい、と、そう思う。
だが、
「俺は、魔王の死に際を、実際に見てきたわけではないが……」
ゆえに解らない。此奴等の気持ちは。言葉を掛けられたわけではないのだ。
だがそれでも、
「ただ――俺から一つだけ、言えることがある」
「……なんだと……？」
レオンハルトの瞳が疑問に揺れる。
分からないというなら教えてやろう。それは、
「貴様が生きていくことは、間違いではないということだ」
「――――」
レオンハルトの瞳が見開かれる。
この言葉を憶えているだろうか。
「貴様は、あの少女に何かを託されたのだろう？　貴様に――生き延

びてほしかったのではないのか？」
「それは……その、言葉は……」
憶えているか。そう、今口に出している言葉は、
……かつて、貴様が俺に言った言葉だ。
死にたがっていた自分を救った。そんな言葉だ。
「貴様が死を選ぶことは、死んでいったあの少女を侮辱することとなる」
「俺、が……」
そうとも。
かつてお前の言葉に救われた。
託されたものを思い出せ。その強さをみせてみろ。生き抜いてくれ、と。
そうして自分は、戦いの果てに救いを得たのだ。
……ならば救おう。
今度は自分が言葉を掛けてやる。思い出させてやる。
「そうだ。今の貴様の姿を見ていても、到底俺を地に付けた存在だとは思えん。死を選ぼうとするなど……貴様、俺との約束を破る気か？
あの少女の想いを踏みにじるというのか？　――なら、あの少女はまさしく犬死にだ。何の価値もない」
「っ、テメェ……！」
レオンハルトが眉を立てる。
その言動は許さない、と。確かな魔人の畏怖を見せて怒る。
「アイツに価値がないだと……？　その言葉を取り消せッ!!　今直ぐ真っ二つにしてや――」
「ならば――」
言葉を止める。一息で、
……ならば、
「少女が託した、その生き様を見せつけろ。生き抜いてみせろ。そんな情けない有り様では、あの少女が報われん」
「――――」
懐かしい状況だ。

あの時、自分はこの様に見えていたのだろう。随分と情けないものだ。
……気づくがいい。
お前には、まだ残っているものがあるはずだ。
「……それに、貴様は望まれているはずだ」
「何、を――」
後ろを指して言う。
そこにはいた存在に視線を移す中、ライゼンは言葉を作った。
「生きることを」
「……レオンハルト、様……」
そこには、声を震わせて立ち尽くす。
「……キャロル……？」
レオンハルトの、使徒の姿があった。

レオンハルトは、目の前にゆっくりと歩いてきたキャロルを見る。
その顔は俯いたままで、身体を震わせている。
しかしそれでも確かな歩みで眼前までやってくると、彼女はこちらを見上げてきた。
そして震えた声で言うのは、
「レオンハルト、様……もし、もし……死ぬと仰るなら――」
キャロルは告げた。
「わたくしを先に、殺してから逝ってください……！」
「――――」
告げられた言葉は想像を越えるもの。動揺は隠せず、息を呑んでしまう。
しかしそれでも何とか声を絞り出す。
「何、を……言ってる？　そんなこと、出来るわけが――」
「わたくしは！」
と、不意にキャロルが叫ぶように言った。
驚きで言葉を止め、彼女を見る。キャロルは、

……泣いて、いるのか……？
床に、雫が落ちる。それはまごうことなき涙で、キャロルの目元から零れ落ちたものだ。
「わたくしは……レオンハルト様がいなくなるなんて、耐えられません……！」
だから、と。キャロルは顔を上げ、こちらを潤んだ目で見詰めながら言う。
「ですから、死ぬというなら……わたくしを、どうか殺してください……！」
目元を真っ赤に腫らしながらキャロルは懇願する。
「それ、が……っ……無理、なら……っ！」
次々と流れ落ちる涙。声が震え、鼻を啜るキャロルを、レオンハルトは黙って呆然とした様に見詰める。
「お願い、です、から……っ、生き、てっ、生きて、ください……レオンハルト様……！」
「っ……」
手を伸ばし、こちらに縋り付くように服を掴んでくる。
身を前に折り、顔を歪めて、
「ご自愛、くださ、いっ……レっ、オン、ハルト……さま……!!」
その言葉を最後に、キャロルは堰を切ったように泣き崩れ、
「い、嫌っ、嫌です……！　レオン、ハルト様……う、うえええぇん……！」
「キャ、ロル……」
まるで子供の様に。
縋り付いて泣き崩れるキャロル。
嫌だ、死ぬなんて言わないでほしい、と懇願している。
それを、ただ見ていると、
「……私も、同じ気持ちだ」
「ケッセルリンク……」
ケッセルリンクが、一歩前に出てくる。
その表情は、哀しみを堪えているのか、動かさない様に耐えている。

「……スラル様が亡くなり、レオンハルトまでもいなくなってしまったら……私は、どうすればいい？」
静かな声で、ケッセルリンクは問いを投げる。
答えの出せない問いだ。そんなことは分からない。
だが、
「情けない話だが……私はどうしていいか解らない。今でさえ……どうすれば良いのか迷っているとも……」
解らない。だが、
「しかし……生き抜いていかなければならない。これだけは確かだろう、レオンハルト」
「……」
「私は、レオンハルトに生きてほしい。生きて……ともにこの先に進んでほしい」
そして、
「私を、私達を……導いてほしい……！」
「――」
レオンハルトは何か――言葉にできない何かを感じた。
その正体は解らない。ただ、一つだけ確かなのは、
「……分かっただろう」
「……ライゼン……」
再びライゼンが声を発する。周囲を見渡し、
「貴様が生きることを望むものが大勢いる。まだ、大切なものが残っている。これは――貴様の生きる理由にならないのか？　――それに、だ」
と、ライゼンは一息ついて、強調する様に言った。
「生きていれば、新しい縁も出来る。生き続ければ、縁を繋げられる。生きる理由が増える」
ゆえに、
「――生きろ」
お前には、その価値がある、と。レオンハルトは確かに想いを受け取った。

……俺は。
自分は、何を思って、何を考えていたのだろう。
スラルが亡くなって、この世界で生きる意味なんてない、とそう思っていた。
……馬鹿なこと、言いやがって。
言うにことかいて死にたいとまできたもんだ。
情けなくて涙が出そうになる。
……スラルは俺になんて言った？
自分に生きてほしい、と、そう願った。
それが最後の頼みだ。彼女の望みだ。
……俺は、あいつの願いを叶えると、そう誓ったはずだ。
悲しくて辛くて、何もしたくない。
そんなことは関係ない。そんなことは許されない。
……例え、あいつがいなくても。
そこで、レオンハルトは周囲を見る。
そこには、ガルティアやケッセルリンク。キャロルやハンティ。わざわざ駆けつけてくれたペールやライゼンまでもがいる。
ここにいないだけで、縁を結んだ奴らだっているだろう。どこかで想ってくれているかもしれない。
そんな奴らが、大切ではないのか？
……そんなわけないだろうが……！
レオンハルトは、目の前を見る。
そこには、自分の身体に縋り付いて泣き続ける使徒がいる。
泣いているのだ。そんなことは、
「……キャロル」
まだ泣き続けている。しょうがない。
「キャロル」
「うっ、な、なん、なんでしょう、か……？」
ようやくこちらを見る。

彼女に視線を合わせる。そして、手を伸ばす。
……こいつは、これが好きだもんな……。
と、
「あ……」
キャロルが声を上げる。
頭の上に置かれたこちらの手を感じて、疑問の色を見せてくる。
「キャロル」
「あ……はい……」
言う。感謝の気持ちを。
「――ありがとうな」
「――っ！」
おかげで目が覚めた。気付かされた。
それは、他の者達のおかげでもある。
「……おい、ガルティア」
「……何だ？」
最初に叱責してくれた友人に声を掛ける。告げる頼みは、
「――俺を、もう一度殴れ」
「……」
それを聞いたガルティアは、一瞬ぽかんと表情を固まらせたが、やがて、
「……へっ、そうか。でも、もういいだろ」
「……あ？」
ガルティアは言う。口端を釣り上げた笑みで、
「もう十分、いつものお前らしいぜ」
「……はっ、そうかよ」
言われた言葉におかしくなる。苦笑して、
「悪かったな。手間かけさせて」
「いいってことよ」
お互いに笑みを向けあう。こいつとは、短い言葉でも通じ合える。
それ以上は必要ない。
「お前達にも……情けないところ、見せちまったな……」

そうやって皆を見渡す。すると最初に反応したのは、
「全くだよね」
「ハンティ……そういえば、わざわざ二人を呼んできてくれたんだよな？」
「……別に。ただ、そんな様子だとこっちの調子が狂うからね。――それに」
と、ハンティは同じ様に苦笑し、
「主人を気遣うくらい、使徒なら普通でしょ？」
「……ああ、そうだな」
全く。随分と頼りになる使徒だ。
これからも、よろしく頼むぜ？
「ライゼンも、よく来てくれた」
「……まあ、強敵（とも）が不甲斐ないのはつまらんからな」
「確かにそうだな。……でもお前、部屋壊しすぎだ。後でその分働いてもらうからな」
「なっ!?　貴様、そこは普通スルーするものだろう!!」
「安心しろ。――まけといてやる」
「ぐぅ……！　貴様、憶えていろ……！」
まあ、冗談だけどな。それでも了承してくれている辺り、随分と律儀だ。
お前の言葉、随分と胸に響いたぜ。
「ペールも……随分と立派になったな。見違えたぞ」
「あ、ありがとうございます！　なら、早速で悪いんですけど、後で寝室にでも――」
「……いいぞ」
「えっ!?　あ、いや、その……半分冗談だったんですけどー……」
「半分は本気なんだろ？　俺は別に構わん。してほしいってんならしてやる」
「わ、わあー……！　超展開ですよ……！　い、いえ、是非お願いしたいんですが、私も久し振り過ぎて準備が……そう！　下着！　勝負下着履いてくるので、それまで待ってください！」

「……お前、変わったなぁ……」
随分とはっちゃけた性格になった。
だが、ほんと立派になったな。誰が見ても、立派なカラーの長だ。
「……ケッセルリンク」
「……ああ」
「俺は、これからも生きる。生きて、お前たちを導いてやる」
「ああ」
「だから、しっかりと付いてこい」
「……ありがとう」
ケッセルリンクが、安堵したように微笑を浮かべる。
ほんと、お前みたいな良い女が俺に惚れてるなんて不思議でしょうがねえ。
これからも、よろしく頼む。
「……さて、それじゃあ、俺は少し行く。お前らは適当にしてろ」
「お？　どこに行くんだ？」
ガルティアが首を捻って聞いてくる。
レオンハルトは、一息。
「――ちょっと、あいつのところにな」

そこは主のいない部屋だった。
豪奢だが、実用性を重視した部屋で、沢山の本が並べられた棚が目に入る、そんな部屋。
それでいて可愛らしいデザインの小物が並んでいるのは、やはり、部屋の主の趣味だろう。
「……当たり前だが、そのまんまだな……」
その部屋に、魔人レオンハルトは足を踏み入れた。
部屋を一通り見回し、何となく歩いてみる。
「あの日のままだ……」
ベッドは乱れたまま。椅子は引かれ、クッションの位置は彼女がいつも座る位置に置かれている。

……思えば、俺の生活はここが中心だった。
目を閉じれば、今にも彼女の姿が目に浮かぶ。それぐらいの年月をここで過ごした。
『レオンハルト。この本、一緒に読まない？』
あいつは本が好きで、よく色んな本を貸してきたな。
一緒に読むのはペースが違うし面倒だから、って言ってるのに結局は何度も一緒に読んだものだ。
『レオンハルト……料理、作ってみたんだけど……』
料理が大好きなやつだった。
結局、最後まで不可思議な味は変わらなかったな。もう食べられないと思うと、恋しくなってくる。もっと食べてやれば良かった。
『レオンハルト？　ちょっと試してほしいことがあるんだけど、いいかな？』
あいつはいつも色んなことを研究していたな。
随分と熱心で、色んなことを知っていた。もっとそれに付き合ってやれば、こうはならなかったのかもな。
『レオンハルト……ぎゅってして？』
あいつは随分と甘えたがりというか、イチャイチャしたがるやつだった。
抱きしめられるのが好きだって言ってたな。俺も、お前を抱きしめるのが大好きだった。
『レオンハルト！』
あいつの笑顔が俺は――いや、皆大好きだったんだ。
お前の笑顔はいつだって俺達を幸せにしてくれた。
あいつは俺に、沢山のものを与えてくれた。
この世界で楽しく過ごすことが出来たのは、やっぱりお前のおかげってのが大きいよ。
本当にありがとうな。
「……ん、これは……」
ふと、机の上に一冊の本が置いてあるのに気づく。
その上には白い手紙が二通置かれており、

「……まさか」
その手紙と本を手に取る。
中身は、
「……俺宛の」
その内の一つ、自分宛ての手紙を開く。
そこには、
――レオンハルトへ　もし、全てを忘れて過ごしたいなら、この手紙は読まずに処分してください。
「……どういう、意味だ……？」
全てを忘れて過ごしたい？
意味が解らない。しかし、
「……」
そんなことはありえない。
忘れるなんてありえない。
ゆえに、読まないという選択肢はないのだ。
「一体何が……」
レオンハルトは、手紙を開く。すると、
「――っ!?　なんだ!?」
瞬間、手紙が発光し、何かを発生させた。
それに見覚えはある。この光は、
「魔法か……？」
魔法の光だ。
その光は、レオンハルトを包んでいくと、
「――っ！　ぐっ……うああ……!!」
一瞬の激痛が、全身を走っていく。
痛みに呻きが漏れるが、それは一瞬のことであり、直ぐ様気を取り直すと、
「――何だ、これは……？」
レオンハルトは、驚愕に身を震わせる。
それは予想だにしていなかった事態で、
「……これは……いや、そういうことなのか……？」

疑念を抱きながらも推測をする。
「なら、この手紙と本は――」
二つを手に取りながら、レオンハルトはやはり手紙を読み進める。
そこには、レオンハルトが推測したことと、それほどかけ離れていないことが書かれており、
「――っ」
気がつけば、歯を食いしばり、手紙をくしゃりと握りしめていた。
憤りが胸の内を占めそうになる。しかし、彼女のことを思い落ち着いて、
「……そうか。これを――いや、これが託されたことか……」
理解する。何を頼まれ、何をするべきかを。
これからの自分が取るべき道を。
「……なるほどな。最初から、救いなんてなかったわけだ……」
そして、選ぶことの出来る道は、これしかない。
ならば、
「――いいぜ」
自分は全てを懸けてでもその道を行く。
「やりきってやる。他ならぬ……お前のためだ」
そして、それだけじゃない。これは、
「俺の意思で、やり遂げる」
既に俺が決めたことだ。俺が望むことだ。
思う。スラルのことだ。
彼女がいたこの部屋を眺め、レオンハルトは内心に言葉を作る。
――みっともなく泣き腫らしちまって、すまなかったな……スラル。
でも、もう泣かない。泣くのはこれで最後だ。
――俺は……これからどれだけの長い時を、お前のいない時間を、過ごすんだろうな……？
それはとても長い旅路になるだろう。厳しいものになるだろう。
だが、
――お前が言うなら……いや、違うな。俺は、俺の意思で生きてや

る。
いつか道半ばで倒れてしまうかもしれない。
それでも、
――大切なものを沢山、お前が羨ましがるくらい作ってやるさ。お前は嫉妬するかもだけどな。
お前は、大切なものがたくさん出来て幸せだったんだろうな。
俺も……お前という一番大切なものが出来て、幸せだったぜ。
――それで、もう後悔はしない。また悩んでうじうじするかもしれねぇけど。それでも足掻いて答えを出し続ける。
大切なものは全部守ってやる。そのためなら良いことも悪いことも、望んでやってやるさ。魔人らしくな。
ひょっとしたらお前に怒られるような事もするかもしれない。でも、そういうお叱りは後からだな。全部終わってから言ってくれ。
――俺は、自分の大切なものは全部守ってやる。俺はお前の魔人なんだ。これくらいはやらないとな。
俺は進み続ける。もう振り返らねぇからな、しっかりと俺のこと――そこで見ててくれ。
「だから――」
だから、もし全部終わったら――その上でもしも、会えたのなら、
「あの時、聞かせてくれなかった言葉を……聞かせてもらうからな――」

アコンカの花は世界中に咲き誇り、次の魔王の名を告げる。
次の魔王の名は――ナイチサ。
古き時代が幕を閉じる。新たな時代が幕を開ける。
古きものから託されたものを胸に、魔人レオンハルトは新しき時代の入り口に立つ。
「――卿は……」
「はっ――」
たとえどれほどの困難が待ち受けようとも、いつか必ず。

「お迎えにあがりました。魔王――ナイチサ様」
いつか必ず――取り戻してみせるから。

ＮＣ期
魔王ナイチサ

――ある男の話をしよう。
その男はとある王国の貴族として生を受けた。
爵位こそ低いが、王族にも縁のある由緒ある家柄であり、それなりの発言力を有した家柄であった。
領民にも慕われ、善政を為す。貴族の義務を率先して為す――正に貴族の中の貴族。
そんな当主である父と、縁ある貴族の元から嫁いできた母。その二人の間に生まれたのが彼だった。
長男として生まれた男は、両親の期待を一身に受けた。
両親は我が子に家を継がせるつもりで厳しい教育を施す。しかしそれでいて愛情もしっかりと注いだ。
夫婦仲は円満で、直ぐに弟や妹も生まれた。親子仲も良好。兄弟間で当主の座を求めて争うようなこともない。この時代の貴族には珍しく権力闘争とは無縁で、何も含むところのない幸せな家庭を築いていた。
だが男の家には――珍しい教えがあった。
といっても、単純なものだ。ある宗教を信仰していたのである。
ＡＬ教。５０年ほど前に出来たばかりの新興宗教だ。
二代前の当主であった祖父の影響から、その家族は生まれた時からＡＬ教の信者であったのだ。
他の貴族から嫁いできた母もどうやら同じで、元よりＡＬ教の信者であったらしい。
ゆえに、幼い頃から何度も聞かされてきた。――神はあなたを見守っている、と。
――率直に言って、到底信じられるものではなかった。
しかし男は神の存在に半信半疑でありながらも、その教えをきちんと守った。毎日の祈りを欠かすことはなかったし、聖書をそらで言え

るようになるまで憶えた。
ただ肝心の信仰心は芽生えることなく、ただ両親が、家族が信仰しているから何となくで教えを守っているだけ。男は小さい頃から優秀であり、そんなことを打ち明ければ角が立つだけというのは解っていたのだ。
だがそれが変わったのは、十歳の誕生日のことであった。
男は家族から盛大に祝われた。普段から大人しい理知的な子供であった男も、その日は子供らしさを見せて大いに騒いだ。
しかし騒ぎすぎた所為か、それとも連日の疲れが溜まっていたのか。とにかくいつもよりも比較的早い時間に眠りこけてしまったのだ。
気がつくと、男は目を覚ましていた。
辺りは真っ暗。夜中である。どうやら早く寝た所為で目が覚めてしまったのだろう。再び眠りにつこうかと思ったが、中々眠れない。
ゆえに何となく魔が差して、男は夜の屋敷を探検した。
そこで見たのだ――神の存在を。
それは一冊の古ぼけた本。祖父が集めた本が並ぶ書斎で、偶然見つけたものだ。
その本を開き、ある一説を口にした時――男は美しい女神の声を聞いた。
『――あら？』
それは意味のない言葉だった。
『……間違えたわ』
何を間違えたのか。そう尋ねる前に、女神の声は聞こえなくなった。
もう一度本を開いてみよう。そう思ったが、手元に会った本はいつの間にか消えて無くなっていた。
しかし、男の心に火を付けるには十分だった。
神はいる。確かに存在する。この教えは間違いでは無かった。
――次の日から、男は熱心に善行を積み始めた。
聖書を持ち歩き、周りの人に困ったことはないかと聞いて回った。

周囲の人間は、男の様子に首を傾げたが、１０歳の誕生日を迎えたばかりであることから、ようやく当主としての自覚が出てきたのかと思い、気に留めることはなかった。
男がそういった行動に出たのは単純な理由だ。即ち――神に会いたい。
もう一度神に会いたい。そして、自らの行いを褒め称えてほしい。
神が存在すると解った。神の教えが本物であることも。
ならばそれは絶対の価値観だ。従うのが正しい。神は絶対なのだ。両親や王様なんかよりもよっぽど偉いのだ。その教えに従わずしてなんとする？
男は今まで両親の教えに従い、良き当主となれる様に努力してきたが、その日からは周囲に人間が驚くほどの成長を見せた。
しっかりとした知識と教養を身に付け、礼儀作法も完璧。実務能力も申し分ない。困った人を見れば率先して助けようとする。
まさに両親が期待していた通り――いや、それを越えるほどの者に成長した。もういつ当主の座を譲っても問題ない。そう思えるほどに。
しかし、周囲の喜びとは裏腹に、男の内心は荒れ狂っていた。
――おかしい。何故、顕れない。
男は神に会いたかった。神にもう一度会いたくて、教えを守っていた。
教育を受ける傍ら、熱心に教会にも通っていた。だが一向に会える気配はない。
やはり死後でないと駄目なのだろうか。それとも、さらなる善行を積み上げねばならないのか。
男は諦めかけた。神に会えないというのなら教えを守る意味もない。いっそ真逆のことをして神罰でも――
――男は、はっとした。
その方法があったと。
神の倫理で言うなら、人を困らせ、悪行を為すことは神罰に値する。
それならば、形は違えど神に会えるのではないか。

そう思い、男はその日から、悪行を為した。
初めは小さなことから。物を隠したり、嘘をついたり。最初は可愛いものであった。全てはバレずに行う。
何故なら、人にバレてしまえば裁かれる。糾弾される。人の手によって。それは男が求める神罰ではない。
何人が知りえない。介在の余地すらない状態で悪行を続けなければ、神罰は訪れない。そうしていれば訪れるはずだ。
何故なら――――神は我々を見守っている。どれだけ秘密を隠していようと、必ず暴かれるのだ。
ゆえにこの行為が最善だ。その考えのもと、男の悪行はだんだんと激しさを増していった。
周りの動物やムシを傷つけ――殺した。これでは駄目か。
当主を継ぎ、王都に出向く傍ら、そこにいた年老いた浮浪者を殺した。夜に人気がない路上で寝ているところを刃物で一突き。初めての殺人であった。
その時に初めて気づいたこともあった。男はその悪行を為して――笑みを浮かべていたのである。
不可思議な事だ。自分の心が理解出来ない。
ゆえにもう一度殺した。やはり笑ってしまう。
だから殺した。今度は少し近しい人物。その方がより非道な行いだろうと思い殺した。知り合いを殺した感想は、面白いだった。
次はもっと近しい者を望み、友人を殺した。やはり笑えてくる。
次はもっと近しい者だ。しかしそれ以上となると、後は血縁者くらいだ。
そのため、男は両親を旅行に誘い、事故に見せかけて――殺した。死体は魔物の巣に捨ててきた。感情が昂ぶる。
弟と妹を殺した。弟は拷問して殺した。妹は犯しながら殺した。何たる悪行。背筋が震えてくる。
男は結婚した。以前より決まっていた許嫁。幼馴染との婚姻だった。
なので妻の両親を殺した。さすがに他の貴族相手への殺人は危な

い橋を渡ってしまったと後悔する。初めて疑われた。幸いにも自分の人柄を信じ切っている家臣や領民。そして何より、妻の弁護により難を逃れた。以後は気をつけようと思う。

だから屋敷の離れに地下室を作り、以後はそこでのみ悪行を行うことにした。表では善行を為す。領地を経営し、領民を助け、家臣を労い、妻と子供を愛した。

裏では悪行を為す。適当な人間を他所から連れてきて殺した。その日々は今までに比べれば味気ないものであったが、両親や弟妹を殺した以上、これ以上の悪行は中々に思いつかないし、大掛かりなものはさすがにバレる。バレてしまっては意味がないのだ。

――いや、まだ一つだけ残っているな。

男は悪魔的な考えを思いついた。しかしそれは、鬼畜の中の鬼畜といえるだろう。

妻と娘。気立てが良く、おっとりとしながらも芯の強い良妻と、年頃でやんちゃだが、女の子らしいところもあるませた娘。

どちらも確かに愛している。裏では鬼畜外道の所業を行なっていても、男が妻子に向ける感情は、正しく愛だった。

――だから殺した。さすがに手が震えた。妻を殺す時もそうだったが、何より、幼い娘の首を絞め殺している最中のあの目が忘れられない。あの自分を信じ切った曇りなき眼が、どうして？　なんで？　と疑問を訴えかける娘を殺していくのは、さすがに堪えたものだ。初めて悲しみという感情を憶えた。声は出せなかったし、涙も出た。

そして、ふと、どんな表情をしているのかと鏡を覗いてみると――

――そこには、〝悪魔〟がいた。

悪魔の如き笑顔を浮かべた――自分の姿だ。

そして理解する。

もうとっくの昔に、己の箍は外れている。悪行を悪行と理解しながら、それに愉悦を感じる人間となっているのだと。

いや、あるいはもう――人ではないのかもしれない。

そんな思いを感じながら、男は妻子を弔った。

家臣や領民は、周囲の人間が根こそぎ死んでいった男を最初、怪し

みはしたが、それ以上に憐れみを憶えたのだろう。疑いを掛けるものはいなかった。
やるべきことはやり尽くした。そんな時、ある噂を聞いた。
人類を苦しめる魔物の軍勢、魔軍。その指導者である魔王が死んだ。そんな噂だ。
その真偽は解らない。しかし男は、魔王に神罰が下ったのだと思った。
そして絶望した。やはりそれほどの悪行を積み重ねなければ、神罰は訪れないのか、と。これまでの行いは間違いだったのかと。
多くを犠牲にし、積み上げてきた悪行は何の意味も成さないのか。
そう絶望していた時――
――神は顕れた。
神は言う――お前は面白い。次の魔王になるがいい。
その言葉は直ぐには飲み込めなかった。
面白い？
次の魔王になれ？
それはとどのつまり――
「――フ、フフフ……」
気づけば、笑いがこみ上げていた。
「フハ、フハハハ、フハハハハハッ!!」
自分を見て神罰ではなく、面白いと断じる。その価値観。
世の中を苦しめる魔王を、神の手で任命する。その不条理。
「――私は、悪ではない」
そう。悪ではない。
悪であって悪ではないのだ。何故なら、
「神が――世界が、悪なのだ」
――神が望んでいたのは、悪行であったのだ！
ならば我が行いは、この世界において正義なのだろう。
今までの行いは間違いで無かったのだ。
悪徳に満ちた世界。糾弾されるべきものが糾弾されず、祝福を与えられる世界。

――何たる救いのない世界！　この世は地獄であったのか！
「ならば――余は魔王となろう」
この世界を余さず照らす光となろう。
「この世の価値観に従い、悪行を為そう」
世界に愛を、人々に祝福を与えよう。
「神よ、ご照覧あれ」
神々の御心のままに。人々に神の愛を感じさせよう。
「余は余の正義に従い、人間を苦しませてご覧に入れましょう――」

――ＮＣ１年
新たなる魔王ナイチサの誕生は、全世界に瞬く間に告げられた。
大陸中央に位置するとある村。
そこで行われていたのは――殺戮だ。
「ぎゃはははは!!　おら死ねー!!」
「おらおら！　せいぜい楽しませろよ!!」
数時間前まで、長閑で平和だったその村は、魔軍の襲来によって地獄に叩き落とされた。
建物は中にいた人ごと火に焼かれ、畑や小屋まで燃え移って被害を広げていく。
人々が逃げ惑う中、魔物兵達はそれを追いかけて殺していく。
男は殺され、女は犯してから殺される。力なき人間に、抗う術はない。
だが、そんな中、
「――っ、おお！」
「が、あッ……」
身体に鎧を身に着けた男が、魔物兵を斬り伏せる。
傍らはこの村の住人と思われる二人の姉妹が怯えた表情で身を寄せ合っている。
男は切羽詰まった様に声だけで、
「さあ、こっちだ！」

「は、はいっ……！」
二人を先導して走り出す。
男はたまたまこの村を訪れていた冒険者であった。
突如、魔軍の襲撃にあったこの村の住人を助けるために奮戦する男であったが、一人で旅が出来るほど実力を持つ彼でも、多勢に無勢。
魔物兵に打ち勝つことは出来ても、全ての村人を救うことは出来ない。
ゆえに偶然近くにいた人――姉妹を連れて、村から脱出しようとしているところであった。
「おいっ、いたぞ！　あの男だ！」
「女だ！　俺にやらせろー！」
「くっ……！」
背後からは多くの魔物兵がこちらを追いかけてきている。
一人だけなら逃げ切れないことはないが、二人を連れて、となると厳しいかもしれない。
だがもうすぐ村の出口に差し掛かる。そこまでは姉妹の体力も持つ――と、信じたい。
そこで二人を守りながら一暴れし、村を脱出しよう。
「もうすぐ出口だ！　頑張ってくれ！」
「はっ、はっ……は、はい……！」
励ます様に声を掛け、村の出口に急ぐ。息を乱しながらも、何とか返事をする姉妹に頷き、男は手を背後に向けた。
「――火爆破！」
「がっ!?」
「あちいいっ!?」
「く、くそっ！　追え追えー！」
魔法の炎、爆発を魔物兵の集団。その真ん中に撃ち込む。何体かの魔物兵がその身を炎に焼かれる中、三人は振り返ることなく走り抜けた。
ここを抜ければ街道に出られる。三人の心に少しの希望が芽生えた。

そうして角を曲がり、村の出口まで差し掛かった時、
――三人は、絶望を目の当たりにした。
「っ！」
「ああ……」
「う、あ……！」
呻く姉妹の声が煩く聞こえる。
心臓の音が、微かに吹く風の音が、遠くで響く悲鳴や笑い声が、酷く遠くに聞こえる。
村の出入り口。そこに布陣している赤、青、緑の魔物兵。それを指揮する魔物隊長。
しかし、彼らが絶望したのは、
「――ほう、生き残りがいたか」
「……そのようですね」
その中心にいる――二つの存在。
「な、んだ……あれ、は……？」
男は、震える唇から何とか疑問の声を絞り出す。
握った剣が手元から落ちてしまいそうになる。身体の震えが抑えきれない。心臓が痛いほどに早く脈打つ。全身から汗が吹き出てくる。漏らしてしまいそうだ。
「……っ、……っ」
横の姉妹に至っては既に腰を抜かした様に座り込み、股間を濡らしていく。声は出ない。
「……ふむ、逃げてくれねば狩りが出来ないのだがな。卿はどう思う？」
「ご随意に。……強いて言うなら、普通に殺されては如何でしょう？」
「それでは芸がない」
「……左様ですか」
二体の化け物が会話を行なっている。見た目は人間のものだ。
黒いマントを身にまとった白い肌の男がいる。その服装も相まってどこかの貴族の様に見える男だが、その存在感は人外のもの。
仮に絶望を形作ったなら、その男の様になるだろう。男がその場に

いるだけで、周囲の景色は暗く禍々しいものに変容する。魔物兵らが傅き、もう一人の――金髪の男も畏まっているところを見るに、あの男はおそらくだが――
「せっかくの人狩りだ。楽しまねば損だぞ？」
「……何分、初めてのことですのでご容赦を。仕事以外で弱者を殺すことがあまりないもので、生憎と慣れておりません」
「ふむ、強者であれば喜んで殺すということか。弱者を殺すのは気が進まぬか？」
「弱者は……殺しがいがありませんので」
「なるほど、分からなくもないな。幾度もの戦場を駆け抜けてきたであろう卿では、脆弱な人間を殺すことはもはや作業となろう。娯楽として楽しめないのも道理であろうな。ふむ……で、あれば……娯楽の何たるかを知らない者に、それを教えるのも上に立つ者の役目か」
「……魔王様にお任せ致します」
「左様か。では――手本を見せよう」
――間違いない。魔王だ。
金髪の男から放たれた言葉に、顔を青ざめさせる。
しかも、魔王ともう一人の男――おそらくは魔人――は、こちらにゆっくりと歩みを進めてくる。
身動きは取れない。身体が固まってしまった様に動かない。
あまりの恐ろしさに身が竦んでしまっている。
戦うことは出来ない。挑めば一瞬にして殺される。戦いにすらならないだろう。
かといって逃げることも出来ない。目の前の化け物二人から逃げることは不可能に近いし、後方から追いかけてきた魔物兵は魔王の姿を見てか、道の真ん中で傅いたままだ。
状況は完全に詰んでいる。そんな中、魔王はゆっくりと顔を動かし、三人を眺めると、
「――少し、余興をしよう」
声は出ない。しかし疑問の表情を浮かべる。姉妹も同様だ。
魔王はこちらを見下ろしたまま右手を上げ、指を一本立てると、

「一人だ。一人だけ助けてやろう。魔王の名に懸けて選ばれた一人には救いを与える。その者はお前達で選ぶがよい」
「……！」
——出来るわけがないっ!!
冒険者は内心で叫ぶ。随分と悪趣味な余興だった。
一人だけ助かる。それを選ぶことは至難だ。
何せ、二人は姉妹。一人が助かってももう一人は死ぬ。
かといって自分が助かることとなれば、二人とも死ぬ。
悪魔の選択だ。選べるわけがない。
だが、その予想に反して、
「——わ、わた、しを……」
「っ!?」
「あ……？」
不意に、横からか細い声が響いた。
それは姉妹の——姉の方から聞こえた言葉であり、
「お、ねえ……ちゃん……？」
妹の方が、何が起こったかまだ理解していないという様な表情で姉を呼ぶ。
しかし姉は、妹の声に反応することなく、
「わたし、を、たすけて……ください……！」
「ふむ、見たところ姉妹の様だが……妹を見捨ててよいのか？」
「い、いいから……！」
「っ！　おねえ、ちゃん……！」
ようやく理解したのか、妹は歯を食いしばりながら姉の名を呼ぶ。
そこには先程までと違い、悲しみと——怨嗟の色が混じっており、
「っ……や、やめろ……！」
そこで冒険者は、剣を構えた。
このままではどうせ死ぬ。ならばせめて、
「俺は、どうなっても良い……！　二人を解放しろ……！」
「……」
啖呵を切る。それを聞いたはずの魔王はしかし無言のままであり、

「ど、どうした？　こないのか魔王……！　こないなら――」
「――死ね」
瞬間、魔王が短い言葉とともに無造作に手を振りかざした。
凄まじい衝撃が大気を震わせ、冒険者の身体が瞬時に肉片となり周囲に飛び散る。姉妹の顔や服に付着したそれは、まぎれもない男の破片であり、
「あ……あ……」
「うっ――」
吐き気を催し、地面に蹲る姉妹。それを一瞥することなく、魔王は鼻を鳴らし、
「人間如きが、余に生意気な口を……」
苛立ちを隠そうとせず表情を一瞬だけ歪めるも、しかし気を取り直した様に冷静になり、
「……失敗したな。余としたことが、激情に駆られ普通に殺してしまうとは」
己の行動を悔やむように息を吐く。その様子には確かな後悔が見て取れた。
「――だがまあ、二人は残っている。ならばあの男を救いとし、この二人を殺すか」
「っ……」
魔王の言葉に姉妹が再び怯えたように息を呑む。傍らの魔人は声を飛ばした。
「……一人は――ああ、いや……なるほど。元よりそうするつもりでしたか」
「……？」
姉妹が疑問符を頭に浮かべる。何を言っているのか。一人は助けるつもりだと言っていたはずでは。
だが魔王はそこで笑みを浮かべると、魔人に向かって満足気に、
「気づいたか。そう、選ばれた一人は約束通り助けてやるつもりだった。普通の死という救いをもってな。そしてそれを見た残りが、絶望する様でも見届けてやろうとでも思ったのだが――結果的に中途半

端となってしまった」
「……」
　余興は失敗だな、と魔王はさほど残念そうでもなく呟く。傍らの魔人は何を答えるでもなく能面のような表情でそれを聞いていた。
「しかし後始末はせねばな。――ふむ、ではここまで付いてきた余の家臣に褒美でも取らせようか。――レオンハルト」
「はっ」
　名を呼ばれた魔人が胸元に片手を当て、頭を下げる。その頭上から、魔王の声が飛んだ。
「どちらか好きな方を選んで良い。卿にやろう――犯して殺せ。残った方は兵達にやることにする」
「おお……！」
　魔王の言葉に歓喜の声を漏らす魔物隊長と魔物兵達。村を襲う隊ではなく、魔王の共回りとして着いてきた功が報われた瞬間であった。その姉妹はどちらも美少女といって申し分ない。妹の方は少し幼いが、どちらであっても自分達を喜ばせ、良い悲鳴を上げるであろう。魔物兵達の視線が、姉妹を視姦するように見つめられる。
「……有り難き幸せ。それでしたら――」
「……！」
「っ……！」
　しかし順番は、魔人が先だ。そのことに不満を持つ者はいない。
　他ならぬ魔王の命令であるというのもそうだが、かの魔人はそれに準ずる支配者だ。力も実績も、何もかもで敵わないし、魔物兵達はそれを認め畏怖している。先に選ぶのは道理だ。
　そんな中、姉妹は近づいてきた魔人――黒と赤のコートを着た金髪灼眼の男の姿を見上げる。
　見た目は人間――それもかなり容姿の整った美丈夫だ。その目の鋭さと、隠しきれない存在感が見るものを圧倒させるが、それがあってなお魅力的に映る。
　無論、恐怖を覚えないわけではないが、それでも異形の魔物にやられるくらいなら――と、考えるのは当然の帰結であった。

「あ、あの……」
姉の方が声を出す。助かろうとしていた。
縋り付くように魔人の足元に近づき、顔を見上げる。その紅い瞳がこちらを射抜いた。
ゆっくりと口が開かれる。魔人は軽く息を入れ、
「……では、そちらの妹の方を頂ければ」
「なっ……!?」
「っ……！」
姉が目を見開き、妹が魔人を仰ぎ見る。
姉の方は、驚きと、妹を選ぶわけがないという驚愕から思わず声を上げる。妹も、何故自分を選ぶのか、と同じ意味の驚きで魔人を見上げた。
二人の心境を知る由もなく、魔王が頷いた。
「では、そちらは兵達にやろう。好きに使うとよい」
「うおおおお……!!」
「あ、有り難き幸せ！」
魔物兵がたまらず声を上げ、魔物隊長が傅いて感謝を告げる。それに応えることはなくすでに用は済んだ、と言わんばかりに魔王がその場を後にする。それを見て魔人が、
「魔王様、供は――」
「む？　……ああ、そうだな。では付いて参れ。卿も、兵に混じってやるには立場があろう。持ち帰ることを許す」
「はっ、感謝します」
「っ……！」
魔人が地面に蹲っていた妹を持ち上げて抱える。そしてそのまま魔王に付いていった。
しばらくして距離が空き、その姿が見えなくなると、魔物兵達は一斉に、
「……うひょおおおお!!　俺が一番だーー!!」
「おいおいずるいぞ！　俺が一番に！」
「ひぃっ……やめ――」

興奮した声を上げながら、姉に向かっていく。姉の制止もむなしく、最初に辿り着いた魔物兵に服を剥ぎ取られた。
次々と魔物兵達が押し合いへし合いの中で手が伸びて、彼女の身体を蹂躙していく。
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁ!? やめ、助け――」
「ははは、思った通りいい声で鳴きやがるぜ！」
「心配しなくとも、俺達がたっくさん快楽与えてやるからよ！ 感謝しな！」
魔物達が性器を取り出しながら下卑た笑いを上げる。見かねた魔物隊長が、
「おおい、お前ら。ちゃんと順番守れよー。後から来た奴らはちゃんと列を作って並べー」
「へへっ、わかってますよ隊長！ 押さない、逸らない、死なせない、の、〝お・は・し〟でしょ？」
「順番は大事だし、簡単に壊したら後から来たやつが困るしな！ それより、隊長は先にやらないんですかい？」
「おお、俺は後からがいい。汚されたところを見ると興奮するからな。――そんじゃお前ら、ルールを守って愉しくやっちまえー！」
「へーい！」
「後、魔王様とレオンハルト様への感謝を忘れるなよー」
「はーい！ ナイチサ様ばんざーい!! レオンハルト様ばんざーい!!」
魔物隊長の号令を聞いて、魔物兵達が自分達の支配者である二人の名を高らかに挙げ、感謝を捧げる。
新しい魔王となった暴虐の化身――ナイチサ。
前時代より魔軍を率いてきた魔人筆頭兼魔軍参謀――レオンハルト。
その二人が築く新たな時代の到来を予感し、魔物兵達は村中に幾つもの悲鳴を響かせてみせた。
「……」
「――どうした、レオンハルトよ。気になることでもあるのか？」

「……いえ、何でも。ただ――村の中は、随分と臭いそうだな、と」
「……フフ、確かに。人間の死臭と魔物の性臭。それらが混ざりあった臭いは酷いであろうな」
「ええ、あの場に入れば、臭いが移ってしまうでしょう。城に帰還致しますか？」
「うむ、力を試す為の遠征は中々に収穫があった。一先ず帰るとしよう」
「はっ」
魔王ナイチサは自分の言葉を聞いて、さっそく部隊に指示を出し始めたその働きに満足そうに頷く。
レオンハルトを始めとした強大な力を持った魔人達に、その彼らが率いる魔軍。悪行を為すための環境は中々に悪くない。
これならば下等な人間を殺し続けることが出来るだろう。
――余はこの世界に、屍山血河を築いてみせよう。
神が楽しめるように、ゆっくりと、徐々に。
その悪行こそがこの世の正義であると――そう確信して。
魔王ナイチサは、世界に君臨した。
「……」
その背後に続く魔人レオンハルトは――ただ黙って、その背中を見つめ続けていた。

レオンハルトの城

大陸北半分は魔軍の領土である。
その多くは町など何も無く、西側にあるツリー都市を除けば魔軍の駐屯地があるだけの土地だ。
しかし、魔軍の中心ともいえる魔王城。
そこから少し北に離れたその場所は、数少ない魔物界の街だ。
総面積は三十平方キロメートルにも及ぶ、大規模都市――レオンハルトシティである。
その特徴は、人間社会にある文化を真似た文化的な建築にある。
町全体を囲む城壁。東西南北にある四つの門を潜り抜けると――そこは魔物がひしめき合う魔物の街だ。
舗装された道。十分な広さを誇る大通りには、幾つもの出店が建ち並び、そこで作られた料理の匂いが香ばしく、道行く魔物に食欲をそそらせる。
そして魔物界ではそれこそ珍しい、多くの娯楽施設が建ち並び、劇場は常に満員御礼。大衆浴場に入っていくものは後を絶たず、魔軍の高級将校といえる魔物将軍や魔物隊長に人気の高級サロン、テニス場など。
文化的な生活を送れるこの町は、魔物にとって一種のブームとなっていた。その住民はほぼ全て、この街を造った魔人の部下である魔物兵達であるが、観光や軽い遊び目的で訪れる魔物も増えてきている。街のルールを守らず、問題を起こす魔物もいなくはないが、その多くはやはり、この街を統べる魔人に恐れをなしているのか、街の警邏をしている魔軍の部隊を見れば直ぐに大人しくなってしまう。
そして、大通りに続いた街の中心には噴水広場が存在し、そこから更に奥には、大きな城が見えてくる。赤色で構成されたその城は、やはりこの街を統べる者の城。
およそ八十年前に、己の権威と力を集約し、とある目的からこの街を造らせた大いなる魔人の城だ。街に住む魔物兵にとっては珍しいものではないが、それでも最近の建物であるそれは、街を訪れた魔物

達の観光の名所ともなっている。城の周囲には人工的に造られた湖が存在し、その中心に浮かぶ様に立つその城は、関係者以外は城に延びる唯一の道、その手前で止められることとなる。しかしその手前である噴水広場では観光気分の魔物達が、
「おお……！　あれが、噂の〝紅魔城〟か……！」
「すげー……俺もあんな城に住んでみてえなぁ……」
などと感想を言い合っている。そんな時、
「っ！　あれは……！」
大通りがざわつきはじめる。見れば魔物達が大通りの端に寄りはじめ道を開けている。そんな中で押された魔物兵が苛立った様に、
「っと、おい！　押すなよ馬鹿！」
「馬鹿はお前だ！　よく見ろ！　どかなきゃどうなっても知らねぇぞ！」
「えっ……あ、もしかして――」
魔物兵が何かに気づいた様に大通りの中心に視線を向ける。
そこを通るのは、一体の魔物将軍と魔物隊長に率いられた数十の魔物兵。そして中心にいるのは――おそらく人間の少女――を抱きかかえた、一人の男だ。
姿が統一された魔軍の中で、姿形が違うのは基本的に使徒以上しかありえない。
そしてこの街に――いや、魔軍に所属する者達で、その金髪灼眼の魔人の姿を知らない者はいない。そう彼こそが、
「――魔人レオンハルト様だ……」
「ああ……相変わらずすげぇ迫力だな……」
魔物達が息を呑む。騒がしかった大通りが少しばかり静かとなるが、そのざわめきは隠しきれない。
しかしそれらを気にすることなく、かの魔人は真っ直ぐと前だけを向いて城への道を進んでいく。
大通りを抜け、噴水広場を通る。そして城の敷地に差し掛かると、警備をしていた二体の魔物隊長が敬礼を取り、
「お帰りなさいませ、レオンハルト様！」

「――ご苦労」
短い労いの言葉を受け、魔物隊長達の心に光栄を感じる。一瞬の一瞥であったが、確かな視線を向けながらの礼は、他の魔人ではあり得ぬことだ。そんな相手が、自分達の上司であることに誇らしさ、そして身が引き締まる思いを得る。ただの警備であっても手は抜けないと、そう思っていると、
「……お前達はここまでで良い。通常任務に戻れ」
「はっ！　了解しました！　第三分隊、これより通常任務に戻ります！　――お疲れ様でした！」
魔物将軍の敬礼に合わせて魔物兵達が敬礼を行う。それを見て頷いた魔人は、そのまま振り返ることなく自らの城へと帰還した。
正門が開き、室内へと入ると、そこにいたのは、女の子モンスターの集団であった。
通常魔物兵の様に姿を統一していない彼女達は一斉に頭を下げて、
「お帰りなさいませっ、レオンハルト様！」
「……ああ、今帰った。――キャロル達はいるか？」
「はい。今は執務室にて仕事を為さっているかと。お呼びいたしますか？」
いい、と短くそれに返答する魔人レオンハルト。返答を受けた一体の女の子モンスターは、左様ですか、と頷きながらもこちらの背後に付く。数体の女の子モンスターも一緒だ。
やはり種類がバラバラな彼女達は、レオンハルトの使徒が指揮する親衛隊の隊員であり、答えたのはその親衛隊の幹部を務める女の子モンスター達だ。
それぞれ――ソードマスター、バルキリー、最強魔女の三体の女の子モンスター。彼女達がレオンハルトの周囲を護衛する様に布陣を取る。城内での移動だというのに仰々しいほどに。しかし本人たちは至って真面目に職務を遂行している。手を抜くことなどあり得ないのだ。
やがて、彼女達を連れながらも執務室まで辿り着く。その前で、
「ここまでで良い。ご苦労だったな」

と、レオンハルトが言えば、親衛隊の三人は揃って礼を取る。それを見てからレオンハルトは――気づかれぬ様に溜息を一つ零し、そして女の子を抱えながらも器用に執務室のドアを開いた。
中に入り、背後で扉が閉まる。室内では、
「――レオンハルト様！　お帰りなさいませ！」
「出迎え出来なくてごめんなさいっ！」
と、二体の使徒がこちらを出迎えてくれる。
金髪の髪をツインテールに結い、内側が白いレオタードになった青い改造軍服。腰には剣と銃、両方を収められるホルスターを身に着けた、快活な印象の美少女が元気よく挨拶し、もう一体、薄紫色のストレートロングの髪、前髪からは青いクリスタルが覗き、白いレオタードと黒の外套だけを羽織ったスタイルの良い美少女が、わたわたと謝りながら出迎えてくる。その二体を見たレオンハルトは、先程とは違い隠すことなく大きく溜息を吐くと二人の名前を呼んだ。
「……キャロル、ペール。お前ら、何やってたんだ？」
「あっ、それはですね――」
「これですわ！」
じゃん、と効果音が聞こえてくる様に二人がある者を取り出す。
それは表紙にレオンハルトの顔がデカデカと描かれた。
「レオンハルト様オンリーの最新画集の編集が、とうとう終わりましたの！　これで次のイベントには間に合いますわ！」
「私が書いた特典小説付きですよ！　しかもちょっとエッチなやつ！
これはバカ売れ間違いなしです！　金取りませんけどね！」
「……」
いえーい、とハイタッチしながら完成を喜ぶ二体の使徒を見て、今日一番の微妙な表情を浮かべるレオンハルト。自分の画集を見せられてどんな反応を返せと？　といった風に内心で言葉を作るレオンハルトだったが、無言のままそれらを飲み込む。
しかし途中で、あ、と何かを思い出した様に動きを止めたペールが、しかし再起動すると、そのままレオンハルトに向かってきて、
「ああっ、忘れてました！　あのですね、レオンハルト様。画集の最後

にレオンハルト様のインタビュー記事を載せようと思ってたんですけど、それが終わってなくて、質問に一個答えてくれるだけでいいんですけどね、ええ。ファンクラブの間で一つ、殺到してる質問があるんですよう。出来ればでいいので、答えてくれませんか？」
「……一応言ってみろ」
「ありがとうございます！　では――〝レオンハルト様の使徒の方々は、三人ともレオタードを着ていますが、あれはレオンハルト様の趣味ですか？　もしそうなら、私もレオタードを着るので、ほにゃらら〟――ってな感じですね。あ、これは私も気になってたんですよう。私も使徒化したらフェチ度高そうというか一歩間違えなくても変態みたいな格好になってましたし。まあ涼しいしレオンハルト様の趣味だとしたらそれで良いんですけどね。レオンハルト様はやっぱり、こういう大事なところを隠しつつも、微妙に露出が高い服装が好きなんですか？　あ、後はどういったタイプの女の子が好きですか、っていうのも多かったですけど、これは解りきってますよね。レオンハルト様は巨乳好きですし！　つまり私が一番好みのタイプってわけですよう！　使徒になってサイズアップしましたし、レオンハルト様趣味のレオタードも完備！　……って、そういえばおかえりの挨拶がまだでした。ごめんなさい、とりあえず……おっぱい揉みます？」
「……色々と言いたいことはあるが……」
眉間に皺を寄せて顔を少し引き攣らせるレオンハルト。それを見たキャロルが怒った様に、
「何を言ってますのペールさん！　レオンハルト様は巨乳好きではありませんの！」
「でも、キャロル先輩も、使徒になった際にサイズアップしたって聞きましたよーーう？　それはレオンハルト様が無意識にそれを願っていたのではないですかあーー？」
「うっ、それは……」
痛いところを突かれた、といった風にキャロルが怯む。その間に、レオンハルトは無言で女の子をソファーに寝かせに行く。
ペールがキャロルに指を突きつけ、

「ふふん、もうないですか？　第一、ケッセルリンク様だって巨乳ですよう？　これを崩せませすかねぇ？」
「ぐぬぬ……ち、違いますわ！　レオンハルト様はその……ちょっと柔らかいところが好きなだけですの！」
　キャロルが反論する。その間、レオンハルトは棚から毛布と訓練に使う木刀を取り出し、毛布を女の子にかぶせて二人の元に戻る。
　キャロルが続けて、
「レオンハルト様はお尻も好きですわ！　何故なら、レオンハルト様はレオタード好き！　そのレオタードには、お尻が強調されますの！」
「……確かに、それはあるでしょう。しかし……大事なものを忘れてますよう？」
「っ！　それは一体何ですの!?」
　驚くキャロルを前に、ペールは不敵に笑みを浮かべる。右手の人差し指で自分の股間、そのサイド部分をなぞりながら。その間、レオンハルトは木刀を構え、弱めに、同時斬撃の構えを取ると、
「レオタードには、もうひとつのフェチ要素があるんですよう？　それは、この鼠径部のライン――」
「――いい加減にしろ!!!!　この色ボケ使徒が!!」
「あいたあ――!?」
「ひいんっ、ですの――!?」
　叫びとともに同時斬撃を二人の尻に叩き込むと、二人は窓の外に放り出された。

「――うわっ!?　何か飛んできた!?」
　窓の外から部屋を訪ねようとしていたもう一体の使徒ハンティは、窓を突き破って出てきた二人に驚き避けたが、それが身内の二人だと解ると直ぐ様、瞬間移動を用いて拾いに行った。

「――それで、何で二人が飛んできたのさ……？」
「気にするな。ちょっとしたおしおきだ」
「痛いですわ……」
「うう、酷いですよう……」
　執務室に使徒二人を連れて戻ってきたハンティは、微妙な顔で二人を見る。二人とも、叩かれた尻擦りながら呻いている。自業自得だ。ハンティが息を吐き、
「まぁ、何があったかは聞かないけどさ……」
「あ、それはですね始祖様。レオンハルト様の趣味がレ――」
「――もう一発いっとくか？」
「――モネード！　レモネードがお好きで最近よく飲んでるのを見かけますねってな感じですよう！　あはは……」
「……？　レモネードが好きなの？」
「人並みだ」
　ええ……？　と疑問を浮かべるハンティに安堵しながら、ペールを軽く睨む。彼女は苦笑いを浮かべており、
　……はあ、いや、良いんだけどな……。
　三人目の自分の使徒になった少女、ペールを見て思う。
　元カラーの長であるペール・カラー。彼女は数ヶ月前、レオンハルトの使徒になった。
　長の仕事は引き継ぎ終わり、後は寿命を待つのみとなったというペールがそれを持ちかけてきたのだ。その際、〝変化の時〟が訪れそうになったのでギリギリのところで慌てて使徒にしてやったりという一悶着があったが、概ね問題ない。元々、求められれば応じるつもりであった。
　しかしまあ、八十年前に会ったっきりで変わったなあ、とか何となく感じていたが、ペールは結構――いや、かなり逞しくなっていた。
　カラーの時からその感じは垣間見えていたが、かなり肝が太くなっている。喜ぶべきことだ。以前は引っ込み思案というか内気な部分がある少女だった。それが元気に、そして自信を持てるようになったのはいいことだ。

元より引きこもりがちで本ばかり読んでいたという彼女は、さらに知識を蓄え、魔法が得意なカラーの中でも一番の魔法使いになっていた。これも喜ぶべきこと。

そしてカラーの長として培った実務能力の高さ。これが一番ありがたい。書類仕事から部下の指揮までそつなくこなしてくれる上に、キャロルの様に癖がない。能力自体はキャロルの方が優れているが、ペールはペールでその知識と経験から様々な案を出してくれる。頭の回転も早い。

使徒になって強化された実力や能力。それらも歓迎するべきことだ。優秀である――が、しかし、性格的な癖はついた。

……明るい――というか、はっちゃけ気味。ぶっちゃけ言うならこいつは――変態、だな……。

頭の中がピンク色過ぎる。オブラートに包まないで言うならエロい。そんなやつになっていた。

今思うとカラー時代から片鱗は見えていたが、それを輪にかけて酷くなってる。それもそういう時だけならまだしも、仕事中や何か切っ掛けがあれば平然と性的な何かを口走ったり、求めてきたり、酷い時は勝手に興奮したりと、始末が悪い。自分に自信を持っている所為か、妙に自慢気なのも何とも言えない。それに関してはキャロルもそうなのだが。

そして叱ろうにも仕事だけはきっちりこなすので怒りにくい。せいぜい外ではやめろと軽く注意するくらいだ。この間は、書類に書かれていた〝会議〟という文字を見て勝手に興奮していた。何故か問うと、〝快技する、って聞くとエロい必殺技みたいですよねぇ……〟とかしみじみと言っていたので殴った。因みにおしおきする場合も高確率で興奮する。どうすればいいんだ。

……大人しいよりはいいのかもしれんが。

気が抜けるというか救われてる部分もあるので強く直せとも言えない。第一、こうなったのはこちらに原因がある。責任というか認めてやらねばならないだろう。

と、一通りペールについての所感を思ったところで、レオンハルト

は改めて言葉を発した。
「……とりあえず先に一つ、前々から思ってたことを言いたいんだが……」
「何でしょう？　あちらにいる可愛い娘の話ですか？」
ペールの言葉に、それもある、と頷く。だがそれは後からだ。先に言うのは、
「……あの仰々しい出迎えはやめないか？」
「あー……」
ハンティだけが、理解したように声を上げてくれる。しかし残り二人は、
「それはよろしくありませんわ、レオンハルト様！　ここはレオンハルト様の街ですのよ！　皆でレオンハルト様を出迎え、称えるのは当然ですわ！」
「そうですよう。それに、住民はほとんどが麾下の魔物兵ですから、レオンハルト様を敬わない様に、なんて言っても無駄です」
キャロルとペールがそれは嫌、と、無理、と言う。ある意味分かりやすい。キャロルの意見はこの街に住む何割かの部下は本気でそう思ってるだろうし、ペールのそれは道理である。魔人に畏怖するな、なんて言うのは魔物社会に於いて難しい。人間の国で王族、ないしは街を治める大貴族を崇めるなと言っても畏れ多くて出来ないだろう。本心がどうであれだ。しかし、
「そうは言うがな。これだと俺の権威が高まり過ぎだ」
「まあ、同情はするけど、魔人筆頭だし魔軍参謀だし、偉いのは確かなんだから別にいいんじゃない？」
ハンティが気軽にそう言う。だが、そうじゃない。
「他の魔人への気遣いじゃない。魔王に対して不敬と取られかねん。こっちの方が出迎えが豪華なんだぞ？　魔王城だと出迎えはあっても魔物隊長らの対応一つとっても礼儀が完璧ではないやつもいるしな」
おかげで城に勤務するうちの軍以外の魔物将軍、魔物隊長を対象にマナー講習会を開く羽目になった。講師はうちの魔物将軍、たまに魔

物大将軍であるリーが務める。
「……そこまで気にする必要あるの？」
「ナイチサは立場や礼儀を重んじる。注意しておいて損はない」
そう。問題は魔王の方だ。
魔物社会では魔王が絶対の存在。人間社会でいう道理は通用しない。どんなに横暴な言いがかりであっても魔王が言えばそれは通る。叶わないことなんてないのだ。
「魔王ナイチサ……か……大丈夫なの？」
「幸いにも俺は気に入られてる節がある。立場もあるしな。だが、お前らは間違っても話しかけるなよ？　接触も可能な限り避けろ。向こうから話しかけられた場合は――」
「忠義を示しながらも、おべっかを使うな。――ですわね！」
「もう何度も聞きましたし、一度会ってますから大丈夫だとは思いますけどねー」
使徒達の言葉に頷く。ナイチサに関しては、接してみた限りだとその対応が正解だ。
「ふーん……まあ、あたしは話したことないけど、そんなんで気に入られるの？」
ハンティが半信半疑といった様子で聞いてくる。その答えは肯定で、
「……権力者ってのはな。往々にして擦り寄りが嫌いなんだよ。心が籠もってない褒め言葉な、つまりおせじなんかも、よっぽどの間抜けじゃなければすぐに嘘だと解る。その手の擦り寄りにはうんざりしてるだろうし、自分の言葉に同調するだけの奴はいらない。……無能であればそれでもいいんだがな」
だが、と、レオンハルトは改めて使徒達に言い含める。
「ナイチサは残忍だが――無能ではない。理知的で物の道理をよく弁えているし、良いものは良いと認められる確かな目と、立場が下の者の意見であってもそれを認めるだけの度量だってある。印象としては優秀な貴族、ないしは王族だな」
「えーっと、それはつまり……？」

ペールが疑問する様に苦笑を向けてきたので、レオンハルトは答えた。
「極めて厄介だな。意味不明な命令を下されないだけ助かるが、一々気を使わなきゃならん。本心をある程度仄めかすことで気に入られた節はあるし、何なら善意や親切心すら感じられる」
「それは良いことなのでは？」
キャロルが言うが、それには首を振る。ソファーに寝かせた少女を首で示し、
「……善意で犯し殺せって言われちゃたまったもんじゃないな」
「っ……！」
「わぁー……すっごい魔王っぽいですよう……」
ハンティが眉を立てる横で、ペールがうわぁ、と表情をげんなりとさせる。レオンハルトは息を吐き、
「部下のガス抜きでそれを許可してきたことは何回もあるが、それを強制されるのは初めての経験だな……さて、どうせこの後、感想を聞かれるんだろうが、何て答えるか……」
「本当にやる気――は無さそうだけど……どうするつもり？」
「保護でもしますの？」
「んー、でも、命令聞かないとまずいんじゃ……」
使徒達の言葉、最後のペールの言に、レオンハルトは否定で返す。
それは、
「大丈夫だ。とりあえずはここで保護する」
「え、でも……」
「大丈夫なんだよ。ナイチサはわざわざ一人の人間に安否を気にかける奴じゃない。悪い意味でな。だから俺が嘘をつき通せば一先ずは大丈夫だ」
それに、仮にバレても自分がそれ以外で忠義を示している限り、ナイチサはどうもしないだろう。こちらの気質をナイチサは理解している。やつは犯して殺せと言ったが、褒美だとも言った。受け取ったものをどうしようが構わないということだろう。捕まえた兎を部下に与え、それを可哀想だからと隠して逃したところで咎めるはずもな

い。少し残念には思うかもしれないがな。
命令だ、と言われていればやるしかなかったが、そうでないのならどうとでもなる。勿論、嘘をつく以上は注意しなければならないが、
「さて……どうするかな。どう答えたらそれっぽいか……」
「あ、良いこと思いつきました！　私が嫌がる女性の役をやりますので、レオンハルト様が私を襲えば解決ですよう！」
「なっ、ずるいですわよ！　わたくしも――」
「えー？　キャロル先輩はレオンハルト様に襲われて嫌がる演技なんて出来ないんじゃ……」
「……勿論出来ませんが、それは愛と忠義と気合いで何とかしてみせますわ！」
「……何でシチュエーションプレイすることになってるんだ」
「命令は犯して殺せ、だから無理だと思うけど」
ハンティが呆れた様に言う。同意だ。レオンハルト頭を抱えながらも肩を鳴らし、
「――まあ、何とかなるだろ。とりあえず、そいつが起きたら優しくしてやれ。俺はまた城に戻らなきゃならねえしな」
仕事はまだ終わってない。一先ず、少女を匿うために連れてきただけだ。この城も中々に役に立つ。魔人筆頭は城で勤務することが多いが、わざわざ街の増築ついでに城を建てたのは息抜きする空間と、こういうことの為でもある。キャロルが城の外壁を全部赤色で発注して、紅魔城とか言われた時には張り倒そうかと思ったが、住めば都だ。快適だしこれでも構わんだろう。
「というわけでだ。あいつに乗せてって貰うか」
「あ、じゃあ呼びますね――っと、あ、いました！」
レオンハルトが言うと、ペールは執務室の窓を開いて眼下に向かって叫ぶ。そこは広めの中庭であった。ペールが腕を振って、
「――ライゼンさーん！　レオンハルト様が、魔王城まで乗せてって欲しいそうですよーーーう！」
「――またか!?」
言って顔を覗かせてきたのは、四大聖竜。ダイヤモンドドラゴンの

ライゼンだ。彼は勢いよく顔を上げ、
「レオンハルトよ、貴様最近、俺を便利な乗り物だと思ってるのではあるまいな!?」
「思って――ない、な。というか、嫌なら断ればいいだろ」
「ぐっ、確かにそうだが……」
ライゼンが顔を顰めさせる。視線は、横のペールに向かっており、
「えー、友達なんだからいいじゃないですかぁ。ライゼンさんも暇ですよねえ？」
「そ、それはだな……しかし――」
「私とライゼンさんの仲じゃないですか！　お願いします！　また今度焼き肉パーティしますから！」
「……というわけだ！」
「……前々から思ってたが、お前、妙に甘いよな――女に」
「ええい！　仕方なかろう！　女の言うことは出来るだけ聞かねばならんのだ!!」
ライゼンが威勢よく情けないことを言う。ペールが補足するように、口元を手で抑えたしたり顔で、
「ライゼンさん、優しいですからねー。８０年くらい、ずっと話し相手になってましたし。わざわざ麓まで降りてきてまで」
「き、貴様!!　それは言うなとあれほど――ぐぅ！　とにかく、行くぞ！」
「お、おう。じゃあ行くか……」
このままここにいるとライゼンの秘密がどんどん暴露されそうだし、窓に手を掛けてそこから飛び降りる。そのままライゼンの背中に着地する。そのまま翼を羽ばたかせて上昇しはじめた。
眼下から、キャロル達の、いってらっしゃい、という言葉を耳にし、レオンハルトはライゼンに乗って再び魔王城へと戻っていった。

野望

魔物界の空の下、ライゼンに乗って魔王城に向かうレオンハルトが、呆れた様に呟いた。
「……何でお前まで付いてきてるんだ？」
「あはは、いや、レオンハルト様は魔人筆頭なのに、使徒の一人くらい付いてないとこう……威厳というか、他の魔人に舐められるかなあって……」
と、誤魔化すように笑みを浮かべるレオンハルトの使徒、ペールの姿がそこにある。
レオンハルトはその様子を見て一息吐くと、
「……それで、本音は？」
「レオンハルト様は魔王城だと一人でお仕事することになりますし、お仕事手伝いがてらお世話をしてあげようっていう善意ですよう？」
「お前が言うと、どうも別の意味に聞こえて困るな……」
「えっ、合ってますよう？」
「……そんな暇はないと思うぞ」
「ええー、手早く済ませれば終わりますよう。何なら今ここで――」
「貴様ら！　人の身体の上で変な話をするな!!」
ライゼンが下から抗議の声を上げてくる。ペールがやはり残念そうに表情を変える中、ライゼンは続けて、
「それより、もうすぐ着くからな。準備――といっても何もないだろうが、準備しておけ」
「ああ、悪いな」
「ライゼンさん、ありがとうございますね」
「……ふん、俺は先に帰っているからなっ！　帰りは送らんぞ！」
と言って怒ってみせるが、たまに帰宅途中の自分たちを空から見かけると、声を掛けてきてついでに送ってくれたりすることがよくある。なので苦笑するしかない。
「……まあとにかくだ。俺はナイチサの部屋に行かないとならねえし、その後何をさせられるかも分からん。だから俺の部屋で大人しく

してろよ」
「はーい、わかりました！」
ペールが明るく返事をしたのを見て頷くと、レオンハルトは眼下の魔王城を見下ろし呟いた。
「さて、次は何をやらされるか……」

魔王の居城である魔王城。
ＳＳ期に建築されたその城は未だ変わらず健在のままその場所にそびえ立つ。
それどころか、禍々しさを増したその城に住まうのは当然、この大陸の新たなる支配者だ。
その支配者の住まう部屋に、魔人レオンハルトは訪れていた。
「――お呼びでしょうか、ナイチサ様」
「うむ、よく来たなレオンハルトよ」
「はっ」
慇懃に腰を折り曲げて礼をしてみせると、ナイチサは、座れ、と視線だけでそれを促した。
お言葉に甘えて失礼します、と一言入れながらレオンハルトが腰を落ち着けると、ナイチサは手元のグラスにワインを注ぎながら、
「飲むか？」
「いえ、職務中ですので……それより、お注ぎ致しましょうか？」
「よい。それよりも……堅いな、卿は。少しは余裕を保たねば、下の者の息が休まらぬぞ？　もっとも卿は、あえてそうすることによって規律を守らせているのだろうがな。下の者の目がないのであれば少しは構うまい」
「……参りましたね、まさか見抜かれてしまうとは思いませんでした。では、一杯だけ」
「世辞が上手いな、卿は。どれ、余自ら注いでやろう」
「はっ、ありがとうございます」
言うとナイチサがもうひとつのグラスを渡してきたので、それを両

手で受け取る。グラスの四分の一まで注がれた真っ赤なワインを手に取ると、頂きます、と一言述べてそれを口にする。芳醇な香りと味わいを舌先で味わい、ゆっくりと喉を通らせる。
「美味いか？」
「……はい。ですがこれは――少し……いえ、あまり熟成されていないようですね。深みが少ないです。これはこれで飲みやすいですが」
味の批評を正直に口にすると、ナイチサは感心したように息を入れ、
「ふむ、さすがに卿は解るか」
「は……」
声だけで疑問を匂わせる。しかし返答が来ないことで、レオンハルトはその言葉の意味を考える。少し思案し、導き出した答えは、
「……他の者――魔人にも飲ませたのですか？」
「余の家臣だ。一度、腹を割って話をしてみたいと思うのは不思議ではあるまい。それが長きを生きた魔人であれば余としても興味を覚えるところである。……だが――」
そこでナイチサは肩をすくめ、軽く息を吐く。既に質問の意味を察していたレオンハルトは、その意味を口にする。
「……結果は芳しくなかったと？」
「然りだ。どいつもこいつも余を恐れ、顔色を窺うのみで気づけたものは片手の指にも満たない。気づいていても口にするのは憚られたか、もしくは気づけぬほど味覚が鈍いのか……どちらにせよ、なっておらんな」
「……なるほど、そういうことでしたか……。因みに、私以外で気づけたのは――」
「卿以外であれば、魔人四天王であるカミーラとケッセルリンク、そしてガルティアのみだ。先に上げた二名は日頃から良いものを口にしているのであろうな、直ぐに気づいた。――だが、より驚いたのは後者。そのガルティアに至っては熟成期間まで当てられてしまったからな。貪食だと聞いて期待はしていなかったが、あの味覚は余よりもよっぽど優れている」

「ガルティアであれば仕方ないでしょうね。彼は魔人一のグルメですから。――して、答えは……」
ガルティアの評に頷いたナイチサは、答え合わせを求めたレオンハルトに対し、小さく笑みを浮かべると、
「――三ヶ月」
「！　それは――」
その期間には覚えがある。答えを、ナイチサは面白そうに口にした。
「気づいたか。そう、このワインは余と同じだ。まだ生まれて三ヶ月しか経っていない粗末なもの」
解るか？　と、ナイチサは再度聞いて、しかし答えを自ら口にした。
「――これが今の余だ。飲みやすく安直な味。大衆には好まれるが深みはなく、その味を知るものからすれば粗悪品だと切って捨てられるだけのもの。余にはこれだけの価値しかない」
「……僭越ながら申し上げても？」
構わん、と言うナイチサに頭を下げながらレオンハルトは口を開く。
「私如きが上から言うのは畏れ多いですが……主はよくやっているかと。ワインに例えるのならば、熟成されて三ヶ月の品。味が安直であることは当たり前のことであります」
「……確かにそうかもしれぬがな。卿の助言や采配によって作られたこの環境は、魔王としての余を熟成させるのに十二分のものだ。この部屋も、わざわざ新調したのであろう？」
レオンハルトは頷く。当然のことだ、と、そういう想いで、
「……はい。前魔王の手垢が付いた部屋など、現魔王であるナイチサ様には相応しくないかと思い、その全てを新調させて頂きました。本来であれば、この城も建て直すべきでしょうが……」
「そこまでせずともよい。そこまでせずとも、卿の忠義は十分に伝わっている。……それで、話を戻すがな」
と、ナイチサは陰に隠していた別のボトルを取り出してみせる。レオンハルトは目を細め、

「そのワインは――」
「正解者にはこちらを下賜している。まずは受け取るがいい」
言って新しいグラスを取り出すと、それをこちらに寄越してくる。再び手酌されるそれを受け取ると一礼。そして手元のグラスを口元に近づけると、レオンハルトはそれに気づいた。
香りから違う。おそらくではあるが、年代物のそれだろう。そのことを察すると、グラスを傾けてゆっくりと口に含む。予想していた味よりを少しばかり越えた深みある味わいを口の中で楽しむと、液体を喉に流し込む。そして口を開き、
「……驚きましたね。これはまさかですが、百年ものでは？」
「数百年以上を生きる卿らからすれば珍しくはない一品だ。しかし……先程のと比べると違いがはっきりと解るであろう？」
「はい、直前に飲んでいるので、より違いがわかりますね」
ワインをそこまで嗜まないレオンハルトでも、その違いははっきりと理解出来る。自分が知る数十年もののワインよりも深く芳醇な味わい。
しかし、だ。ナイチサはワインを魔王に例えている。敢えて安物と超高級品を比べて出してきたのは、意味があることなのだろう。それは、
「余は、こうなりたいのだ」
ナイチサが言う。手の中のグラス。中に入った液体を眺めながら、
「味の違いが解らない大衆。誰が飲んでも違いがはっきりと理解出来る――そんな魔王に、余はなりたい」
それはナイチサの思想。彼が思い描く理想の魔王像。
ナイチサの視線の先、真っ赤な液体の中には自分の姿が映っているのだろう。その先にあるものも。
「今のままでは代わり映えしない。余である意味がない。以前となんら変わらない恐怖を、人間は抱くだろう」
なおもナイチサは語る。それでは意味がないのだ、と。
「余は余の爪痕を残す。その悪行を以って、人間を殺戮する。それが魔王となった余の使命であるからだ」

しかし、と、ナイチサは言葉を区切った。
「余にはまだ、それが出来ない。勝手が解らない。慣れていない。未だ手探り状態であるのだ。悪行など、人間の時に散々やってきたというのにだ」
「……ナイチサ様は――」
言う。それは聞かねばならない問いだ。
これからの方針にも影響する問いを、レオンハルトはナイチサに投げかけた。
「人間を滅ぼすおつもりなのですか？」
「……そのつもりはない。ゆえに、基本は卿に任せる。人間に適度に苦しみを味わわせていれば……しかし、時には何か、いや、大きな事を起こす必要があろう」
ナイチサはそこでグラスから目を離し、視線をレオンハルトに移す。そして、続けてこう命令した。それは、
「魔王とは、恐怖と絶望の権化でなければならん。ゆえに命じる、魔人レオンハルトよ――。一年以内に、人間の国。それも大国と呼ばれるものを一国滅ぼせ」
「……はっ、畏まりました」
レオンハルトはその命令を了承する。含む所がないわけではないが、その程度でのことで意思が揺らぐことはない。
国を滅ぼす程度であれば何度だってやってきた。その規模が大きくなるだけのこと。その覚悟はとうに終わっている。
元より逆らえるはずもないが、と心で思い、レオンハルトは続くナイチサの言葉を聞いた。それは、
「その戦いには余自身も出る。余の活躍の場を作り、余という魔王の恐怖を人間共に刻み込む。……それと、その戦いには余の供を連れていきたい」
「供、ですか？」
レオンハルトが聞き返す。供、という言葉の意味。しかしそれは、直ぐに理解出来た。
「魔王としての力で、試していないことが一つあるだろう。今日は、そ

れを試しに行こうと思うのだが、構わんな？」
「……魔人、ですか」
言うとナイチサは笑みを浮かべた。
「然りだ。余自身の血を分け与え、忠実なる配下――魔人を作る。卿は余の最も信頼出来る家臣。他の魔人も余の家臣であることに違いはないが……誰もが古参のものだ。直参の家臣がいないのは少し寂しくてな」
「……なるほど」
新たな魔人の作成。それを執り行うというナイチサの言に頷く。理解を得たことを見て取ったナイチサは続けて言う。
「余の血を分けるのだ。余自らが人材を探し、それを選別したい。その供をせよ」
「そういうことでしたら直ぐに。私の麾下の魔物隊長、一部隊を連れて行きましょう。大部隊だと動きが鈍くなるため、探索には向かないでしょうし」
「それで構わん。フフフ……今日は記念すべき良い日になりそうだな……」
ナイチサは上機嫌な様子でグラスを弄び、中の液体を揺らす。レオンハルトに視線を向け、
「では、前祝いといこうか。――余はいずれ、魔王としての爪痕をこの世界に刻み込んでみせよう。これが、余の野望だ」
「……ではその野望の一助となれるよう、最善を尽くします」
チリン、とグラスをあわせる音が部屋の中に響く。
魔王と魔人筆頭は同時に真っ赤な液体を飲み干し、新たな治世を為すことを誓った。
その心は、当人だけにしか知りえないものだった。

――それは、突然の出来事であった。
彼は魔物であった。それも炎カッパという珍しい魔物。
赤い皮膚を持ち、水ではなく火を好む魔物であり、頭の皿には常に

火が灯っている。
戦う際には炎を操り、時には全身から炎を吹き出させるその魔物は、魔物を討伐する冒険者の間でも厄介な魔物として認識されていた。
彼自身も、炎カッパとしてとある火山で生まれ、迷宮や荒野を渡り歩きながら他の魔物との生存競争を行なっていた。道中、何度も人間に襲われながらも、相手を焼き殺して、魔物としての生を謳歌する。
彼は自惚れていた。魔物として、自分に敵うものはそうそういないだろう、と。
なにせそんな相手に遭遇したことがない。気に入らないものは焼き殺してきた。大勢ともなれば難しいが、それでも一対一であれば殆どの魔物に勝てる。
だが彼は、世界の広さを知らなかった。
彼は誰も恐れることはないと思っていたのだ――その時までは。
――突如、彼の前に魔物の集団が現れた。
緑や青、赤といった同じ姿をした魔物の集団。
それは噂に聞く魔物兵。魔軍に所属する魔物達だ。
誰かに恭順して生きるということをしたことがない彼は、魔物兵という存在を半ば見下していたものだ。
だが、その存在を見て考えを改める。
「――ふむ、レオンハルトよ。あれは何だ？」
「――はい。あれは……おそらくですが、炎カッパかと。珍しい魔物ですがどうしますか？」
目の前に出ずる絶望。力の権化がそこにいた。
魔物の本能が、それを理解した。
あれが――魔王。そして、魔人。
魔物という種における王にして、大陸の支配者達。その圧倒的な力の差を肌で感じ取った彼は、気づけば彼らを仰ぎ見ていた。
――ああ、己はなんと愚かであったのだ。
魔物社会は、実力主義の縦社会。力こそが正義だ。
強いものが上で、弱いものが下。それを理解させされる。

戦うことは無意味だ。戦意すら湧いてこない。魔王とは、仰ぎ見るべきもの。ただの魔物でしかない己はただ地面に膝を突き、運命を委ねるしかない。
魔王と魔人が近づいてくる。死を覚悟した。
「……其の者、面を上げよ」
声が来た。身体が潰れてしまいそうな重圧が視線とともに己の身体を圧迫する。
だが、彼は、
「……は、はっ……！」
声を絞り出し、何とかその命令に従った。
魔王の眉が動く。
「……ほう？　声を出せた者は初めてだな」
「最初の合格者ですか……」
魔王の言葉を聞いて、魔人までもが視線を己に向けてくる。
その鋭い視線に身が竦みそうになる。魔王に比べれば軽いのだろうが、それでもただの魔物にとってはどちらも変わらない辛いものだ。
魔王は頭上から言葉を続ける。
「……では聞こう。貴様は、余の配下になる気はあるか？」
配下。その言葉を聞いて最初に思い浮かべたのは、周囲の魔物兵の存在。
有象無象と同じに扱われる。本来であれば激昂するべきこと。しかし、
「……は、い……あなた、様、に……忠誠、を……誓い、ま、す……！」
否応のないものだ。しかしそうではない。
彼は、自らの意思で忠誠を誓った。誓ってもいいと思ったのだ。
これほどに恐ろしく、強大な存在であれば、その列に加わって暴れるのも悪くない。
きっとかの御方は己を満足させてくれる場を与えてくれるだろう。
ゆえにそう言った。誓った。
――それが、彼の運命の瞬間だった。

「……良かろう。では、余の臣下の列に加わるがいい――」
「――――」
何を、という言葉は出なかった。
魔王が近づき、その爪を首に突き立てる。
そこから、何かが入り込み、
「お……あ……っ！」
身体の中で何かが暴れ狂う。何かが自分の身体を作り変える。
激痛とともにそれは行われ、己の身体が光に包まれる。永遠にも感じられたその苦痛の中を耐え抜き、気がつくとそこには、
「――あ……？」
生まれ変わった自分がそこに立っていた。
人間に近い、黒い手。それを広げながら自分の姿を眺める。
黒の衣服と全身を多い隠せる赤のマント。おそらく人に近い何かになったであろう自分を見て、魔王が感心したように息を鳴らす。
「どうやら成功のようだな。しかしこれは……中々に面白い現象だ」
「……新しい魔人の誕生ですね」
魔人、という言葉を耳にする。それはつまり、
「……私は……魔人になったのでしょうか……？」
聞かなくても理解る。全身から漲る力が、それを自覚させる。
以前の自分が塵屑としか思えないほどの力。それを思いながら答えを待つ。
すると魔王はこちらを見下ろし、
「然り。卿は魔人――余の家臣となったのだ」
「お、おお……！」
感動で身が打ち震える。
配下に加えてくださるだけでなく、新たな力まで授けてくれるとは。
自分を生まれ変わらせた大いなる魔の王に平服する。
だが、
「して、名はなんと言う？」
「！　……名、ですか……」

質問には答えられなかった。
当たり前のことだ。名前などない。ただの魔物であった自分には。
それを、魔王の傍らにいる魔人は伝えた。
「ナイチサ様。通常の魔物には名が在りません」
「む、そうか。……ならば、余が新たな名を授けてやる必要があろうな……ふむ……」
ナイチサ、と呼ばれた魔王。自分が仕えるべき御方の答えを待つ。
この御方に名付けられる。それほどの栄誉を賜るのだ。膝を突き、静かにそれを待つ。
やがて、魔王様は口を開いた。
「――ザビエル」
「！」
それが、それこそが。生まれ変わった己の、
「それが卿の名前だ」
「――はっ、これより私は……！　ザビエル、そう名乗らせて頂きます……！」
「うむ。魔人ザビエルよ。これより余に忠誠を誓い、余の悪行の一助と為るがいい」
「ははっ！　私はあなた様に忠誠を誓います……！」
元より、そういったことは望むべくことだ。
魔人となり、力が溢れてくる。誰かを殺したくて、苦しめたくてしょうがない。
それをこの御方は望んでいる。躊躇う必要はどこにもない。
望外の喜びを得た彼――魔人ザビエルは、心より魔王ナイチサに忠誠を誓う。満足そうに頷いた魔王は、
「では、これより余の城に帰還する。付いて参れ」
「ははっ！　どこまでも付いて参ります！」
「レオンハルトよ。しばらくの間、ザビエルに色々と教えてやるが良い。委細を卿に任せる」
「……畏まりました」
命令を受けて恭しく一礼を行なったレオンハルトと呼ばれる魔人

は、それを終えると近くの魔物隊長に指示を出す。部隊が一斉に移動を開始する中、新たな魔人ザビエルは、二人の後ろに付いて、その軍勢に加わった。

その際、ザビエルはおそらく側近であろう魔人、レオンハルトに視線を向けると、

――いずれは我も、あの位置まで上り詰めてやろうぞ……！

魔王ナイチサという己が忠誠を誓った相手。その側近の椅子にいずれは座る。それを野望とし、ザビエルは心を燃やした。

魔人ザビエル

さて、とレオンハルトは視線を背後の男に向けた。

魔王城、主である魔王ナイチサを部屋まで送り届けた後、城内を軽く案内しつつ空いている部屋に男を連れて行く。それを終えたところだ。

男は魔王ナイチサが最初に作り上げた魔人――ザビエルであり、炎カッパの魔人だ。

真っ赤な外套と、主のものを彷彿とさせる黒衣を身に着け、腰には一本の剣をぶら下げている。白い目と口周りの髭、逆だった黒の髪先は赤い炎となっており、炎カッパという種族を感じさせるものだ。そんな新しい魔人を見て思うのは、

……任された仕事はこなさないとな。

突然に行うこととなったナイチサの魔人作成。そして一年以内に大国を滅ぼすこと。魔人ザビエルの教育。

二つ目が大仕事ではあるが、新しい魔人の教育を任せられるというのは、おそらく今後も起こりうることだと予想出来る。正直、新人教育など他に投げてしまいたいが、それだと問題が起こるだろう。おそらく、であるが。

しかし愚痴を言ってもしょうがない。やらなければならないことはきっちりとやる。ゆえにレオンハルトはザビエルに向けて声を飛ばした。

「――ここまでで、何か分からないことはあるか？」

「……いえ」

短く答えるザビエル。その視線は、先程からずっと、こちらを捉えている。その視線の正体をレオンハルトは察した。

……値踏みしてるな。

こちらから発せられるオーラ。体捌き、呼吸の仕方、視線の配り方。見ることで相手の強さをある程度感じられる。熟達した者であれば感情の動きや何を考えているかも予測出来るものだ。それでザビエルは、こちらをずっと探っている。

もっとも、それはこちらも同じだ。ザビエルがこちらを探っているのが解る。それを相手に悟られるのは、まだまだ青い証拠だ。
……それとも、わざとそうすることで反応を探ってるのか？
だとしたら中々に強かな奴だが、さて、
「そうか。ならば今日からこの部屋に住むといい。欲しいものがあれば魔物兵かメイドさんに頼め」
「……御配慮に感謝します」
頭を下げてみせるザビエル。それに頷き、
「なら俺は行く。仕事が溜まっているからな。何かあれば執務室を訪ねてこい。いないことも多いがな。――最後に、何か入り用の物があればここで聞いてやるが？」
「は……では、僭越ながら一つ――いえ、二つほど、お願いしても？」
「言ってみろ」
ありがとうございます、とザビエルが再度頭を下げる。そして顔を上げると、
「その前に……レオンハルト様は、魔軍の全権を魔王ナイチサ様より預かっておられるのですよね？」
「……ああ。そうだが、それが？」
ザビエルの質問に肯定する。基本的に、魔軍の指揮権は魔人筆頭兼魔軍参謀の自分にある。
戦略的な指標であればナイチサが命じてくるが、平時は自分が魔軍を動かす。何か大きな動きを取る場合は許可を取る必要こそあるだろうが、細かい運営には口出ししてこないだろう。軍事については門外漢だと言っていた。そしてそれは、より優れている者に任せればよい、とも。王の仕事は方針を決め、それを下に命じること。全てを自分で行い、下の仕事を奪ってしまうのは、あまり宜しいことではない。
……ナイチサであればこなしてしまうのだろうがな。
と、レオンハルトはそこまで考え、ザビエルの言葉を待った。次に来たのは、
「左様ですか。でしたら私に――魔軍の一個軍。それをお預け頂きたい」

「……ほう？」
告げられた言葉に眉が動く。
魔軍の一個軍が欲しい。それは難しくない。そもそも、今いる魔人にはそれぞれ軍を任せている。自分やカミーラなどの上級魔人であれば、数十万の魔軍を独立して動かしているし、最弱と名高いケイブリスでさえ、一個軍二万を任せている。特に動かしている様子もないが。
なのでザビエルに一個軍を任せることは問題ない。というか、言われなくてもそのうち任せていた。他ならぬナイチサの魔人だからと忖度するつもりはないが、だからといって邪険に扱うつもりもない。その権利は平等に与えられるべきだ。
問題があるとすれば、何故今直ぐに言ってきたのか、ということだけ。
ゆえにレオンハルトは目を細め、
「……それは別に構わんがな。だが一応、理由を聞いておこうか」
「……ナイチサ様の役に立つためです」
と、ザビエルはこちらを真っ直ぐに見て続けた。
「ナイチサ様を喜ばせるため。かの御方の悪行の一助となれる様、邁進、努力するため、早い内から軍の扱いに慣れておきたい。その思いで、軍を欲します」
「……なるほどな。だがそれこそ、魔人としての生に慣れてからでも良かったんだがな」
「なればこそ、より早く慣れるために魔軍の将としての仕事をこなしたいと思います」
「……道理だな。分かった、一個軍をお前に任せる」
「ははっ……感謝します」
平服するザビエル。その魔王への忠誠心は確かなようだ。
しかしその是が非でも軍を欲しがる目の奥に少し危険なものを感じたが、結局は遅いか早いかの差でしかない上、他の、ただ軍を引き連れて暴れたいだけの魔人に比べればマシだろう。すぐに軍を与えることを決める。

後は、
「それで、あと一つは？」
「はい。こちらは物ではありません」
と、ザビエルはこちらを見上げて言う。それは、
「魔人としての力を振るう機会――それを与えて頂きたく思います」
「力を振るう……機会だと？」
はっ、とザビエルが肯定の声を出す。しかしその意味は分からず、
「……分からんな。そんなのは好きにすればいいだろう。一々俺の許可など取らなくても、そこらで適当に――」
「――いえ、許可が必要です」
かぶせる様に言ってきたザビエルの言葉に眉をひそめる。その目の奥には、戦意の様なものが見え隠れしており、
……もしや……。
レオンハルトが脳裏に浮かんだその意味。ザビエルは、それと同じことを願った。
それは、
「魔人としての力を振るう相手に――レオンハルト様を指名したい」

ザビエルは、眼前の魔人に向かって願いを告げた。
魔人レオンハルト。その相手はその願いを聞いて表情を真顔に戻しており、
「……それは、俺と戦いたい、と……そういうことか？」
「そういうことです」
ザビエルは即座に答えた。それを願う理由、それは単純だ。
一つは、魔人としての力を試すこと。理由として口に出したものだ。
無論、試してみたいのは本当のことである。魔人になって内から溢れ出してくる力を、誰かに向けてみたい。
そして――出来ればだが、殺したい。その相手に、レオンハルトを選んだ。

魔人筆頭という魔王に次ぐ地位を持ち、魔軍参謀という魔軍の実質的な総大将ともいえる地位を持つ魔人。それに成り代われるなら、これほど愉快なことはないだろう。
実力は計れない。こちらに実力を悟らせないそれは見事なものだ。簡単にはいかないかもしれない。
しかし、自分の得た力が負けるとも思っていない。それほど、自分の力は向上した。その自覚がある。
そして仮に負けても、物差しにはなる。自分の力がどの程度なのか。それを知ることが出来る。
仮に勝てるならそれでよし。負けても模擬戦である以上は殺されることはないだろう。そう思い、ザビエルはレオンハルトに笑みを向け、
「出来れば、胸をお貸し頂きたく思います。魔人筆頭であるレオンハルト様の――」
「――ク」
そこで、ザビエルは見た。
レオンハルトが左手で顔を抑えて隠し、短い声を上げた。
それは一瞬の笑み。ザビエルは、手の隙間から見えたレオンハルトの表情を笑みだと断じた。
何を、と思った瞬間、レオンハルトは顔から手を離す。
そこには笑みはなく、代わりに、
「――ザビエル。……お前に一つ、教え忘れていたことがあったな」
「……何でしょう。それは――っ!?」
一瞬。ザビエルは何かを知覚した。
驚愕を出したのは、レオンハルトから発せられる――冷たい殺気と、
「……俺はさっき、色々と言ったがな。ここでのルールは究極、一つしかない」
それは、
「――強者を、怒らせないことだ」
「――――」

そこには、冷たい表情があった。
こちらを見下した絶対零度の視線が、冷たい闘気とともにこちらを押し潰してくる。
背筋が凍るような思いを得ながら、ザビエルはレオンハルトの言葉を聞いた。
いいか、と。
「魔物社会に、人間社会にあるような法律なんてものはない。あるのは強者が定めたルールだけだ」
即ち、
「魔王という絶対者の存在。その命令こそが至上だ。それが一番上にあるものであり、それを俺は、お前らは守らなくちゃならないし、決して怒らせてはいけない。――そうだな？」
首を縦に振ることだけで頷く。声が出せない。
首元に刃を突きつけられているような感覚を得ながら、レオンハルトの声を聞き続ける。
「なら、次に守らないといけないルールはなんだ？　次に怒らせてはいけない奴は誰だ？」
と、問う言葉を放つ。
しかし答えを待たず、レオンハルトは答えた。それは、
「それは――自分より強い奴だ。お前より強い相手のルールを、お前は守る。そして怒らせないことだ」
理解る。つまりそれは、
「魔物社会において、相手の強さを見誤り、無謀にも相手を怒らせてしまった間抜け。そいつに訪れる運命は……お前もよく知ってるだろう？」
知っている。自分もやってきたことだ。
それが身に降りかかる。レオンハルトはこちらに近づき、
「ザビエル。お前もそれを――身をもって味わいたいのか？」
「……い、え……」
否定する。否定しなければならなかった。
レオンハルトはこちらを見て鼻を鳴らすと、その冷たい殺気を弛緩

させ、
「今のは聞かなかったことにしてやる。魔人になった以上、その行動は自由だ。魔王様の命令内であれば何をしても構わんが……間抜けになりたくなければ、精々気をつけるんだな」
「……はっ……」
声は何とか出た。喉を鳴らし、ゆっくりと頭を垂れる。それを見て、
「俺はもう行く。一個軍は明日までにくれてやる。担当の魔物将軍が挨拶に来るだろうから、後は好きにしろ」
「はっ……感謝します……」
と、レオンハルトは背中を向けて部屋を後にしようとする。
だが、
「……ああ、それとな。魔物兵かメイドさんに言って部屋を変えてもらうといい」
「は……それは……」
どういう意味なのか、それを言う前に、レオンハルトは扉を開けながら、
「今のが見える様になったら、相手をしてやってもいいがな……。じゃあな、何かあれば追って伝える」
「……かしこまりました」
最後にそう言って、レオンハルトは部屋から出ていく。
部屋の中に弛緩した通常の空気が戻る。随分と息がしやすい。しかし、
……さすがに無謀であったか……。
最高位の魔人。その実力は確かな様だ。今はまだ届かない。力が足りない。奴は優秀だ。力だけではない。その統率力、洞察力、知力など様々なことにおいて高い能力を持っている。
ナイチサ様の側近であるのも頷ける。力を付ければ、奴と肩を並べることにもなろうな。
「……そういえば」
と、最後に言っていたことを思い出す。

部屋を変えろ、とはどういう意味だろうか。何もおかしなところはないはず。
「どういう――」
そう思い、振り返ったところで、ザビエルはそれを見た。
「これ、は……」
部屋の中にある寝具などの家具。
それらが真っ二つに両断されていた。
「いつの間に……何をしたのだ……」
近づいて触れてみるとやはり斬れている。人為的なものであることは明らかだ。
だが、レオンハルトの手には何もなかった。剣士であっても、剣がなければ何かを斬ることは出来ない。
……仮に刃物を隠しもっていたとして、どのタイミングで抜いた？
思い返す。おそらく最後の言葉はこれを指したものだろう。
思い返し――ザビエルは、脳裏に一つのことが過る。思い当たるものだ。
「あの時か……？」
おそらく、ではあるが、それらしきものを知覚はした。
しかし確証が持てるほど確かなものではない。
それは力の差があるということ。ならば、
「……やはり、自分の力の程度を知らなければな……」
足を踏み出す。外へと行くものだ。
外には、何体かの魔人らしきものの気配がした。一先ずは、そこへ向かう。
「ふふ……さて、我の力は如何ほどのものか……」
自らの力を試す。その目的を持って、魔人ザビエルは部屋を出た。

「――それで、新しい魔人さんはどうだったんですか？」
と、ペールの台詞を受けて、レオンハルトは少し考えた後にこう言った。

「……まだ解んねぇな。礼儀正しくはあるが……」
「じゃあ良い人ですか？」
「悪い人だ」
即答する。それだけは確信を持って言えることだ。
しかし、
「だからと言って対応に差を付けるなよ」
「分かってますよう。これでも、カラーの集落を治めてきた身ですし。どれだけアレな人でも営業スマイルは欠かしません！」
拳を握って自慢気に言うペール。別に笑顔で対応しろとは言ってないが、悪いことではないのでスルーしておく。
しかしペールは、そこでぴょんっと跳ねる様にこちらの腕を取ると、
「でも、好きな人には贔屓しちゃいますよう？」
そう言って上目遣いを向けてくる。
その際に胸を腕にぐいぐいと押し付けるサービス付きだ。別にそれくらいなら気持ちいいし、私人としては好きにしろと言ってやりたいが、
「……城の中でそういうスキンシップはやめろ。俺のイメージが崩れる」
「あんっ」
腕を振り解く。自分が上級魔人として、上に立つ者として想像されているイメージを崩してやるのはあまりよろしくない。畏怖されてるくらいがちょうどいいのだ。私人としての顔を見せるのも、親しみやすさを出す意味で有用な手法だが、そういったことは自分の直属の部下の前でだけでいい。信頼されている、と思うからだ。相手との距離を縮めたいなら、他の人に見せない顔を見せるのが肝である。
また、仕事中に自分の使徒といちゃついてるのもよろしくない。なので、振り払ったのだが、ペールはめげずに、
「ええー……ちょっとくらい良いじゃないですかぁ。硬すぎますよう。ちょっとくらい息抜きしないと……だからちょっと、そこの部屋で抜いていきませんか？」

「……そういえば魔王様にも言われたな。そんなに俺は硬いか？」
「まさかのスルー、いけずですねぇ……でもまあ、レオンハルト様は硬いですよう？　下の方も――」
「こらこらこら。触ろうとするな」
「ああっ、レオンハルト様の隠された剣が……」
ぱしっと、ペールの手をはたき落とす。何を馬鹿なことを言ってるんだ、この痴女は。
とにかく、
「……仕事中に硬くなるのは癖みたいなものだからな。まあ、プライベートであれば緩めているし、それはうちの部下は知ってるからそれでいいだろ」
「……仕事中に硬――」
「天丼はやめろ」
もっと別のネタをもってこい――ではなく、そもそも下ネタを振ってくるのはやめてほしい。肩の力が抜けてしまう。
……もしや、そういう目的が？
と、思い、傍らのペールに視線を向けてみるも、
「ええ～、このネタ禁止ですか……？　うーん、だったら――」
……ないな。
真面目に下ネタを考え始めるペールに呆れた目を向ける。こいつは何を目指しているのか。解せない。
と、そんな風に頭を抱えていると、
「――レオンハルト」
「――お」
正面から見知った顔、見知った声が耳に届いた。
水色の髪、青いクリスタルが額にある美女。その魔人の名を、ペールが呼ぶ。
「あ、ケッセルリンク様っ」
「おっと……ペールも一緒か」
ケッセルリンクに気づいたペールが、彼女に抱きつく。ペールを受け止めたケッセルリンクは微笑を浮かべて彼女の頭を撫でる。

……微笑ましくなる光景だな。
やはり、元カラー同士。それもカラーの長を務めていた先代という間柄である二人だ。とても仲が良い。魔人と使徒になってもその関係は変わらないのだ。
「えへ～……ケッセルリンク様、今日は何をしてたんですか？」
「今日は……魔王様に呼ばれて軽い話をしたな。その後はずっと部屋にいたが、二人は？」
「新しい魔人の案内を終えて帰るところだ」
「私は部屋で仕事してましたっ！」
「！　そうか。なら――」
と、こちらの答えを聞いたケッセルリンクが一瞬だけ顔を綻ばせて、しかし眉を困ったように寄せる。
顔を下に向け、遠慮がちにこちらを見ると、
「その、だな……レオンハルト。今日は――」
「……ああ、いいぞ。俺ももう帰るからな。一緒に来るか？」
「！　あ、ああ……！　それなら……」
顔を赤くしながら嬉しそうにするケッセルリンク。そしてこちらの手を取ってくる。
先導するように歩き始めたケッセルリンクに、苦笑しつつ、
「おいおい……慌てるなよ。急がなくてももう帰るんだからな」
「そうですよう。ケッセルリンク様、今日は泊まるんですよね？だったら今日はずっと一緒ですし、レオンハルト様は逃げませんよー？」
「あっ……」
こちらの言葉を受けたケッセルリンクの頬が、かぁ……と赤く染まる。
そして少し慌てたように、
「それもそうだな……す、すまない。気が逸ってしまい……」
「大丈夫ですよう、ケッセルリンク様！　今のケッセルリンク様、とっても可愛いですから問題ないですっ。レオンハルト様もそう思いますよね？」

「ん……まあ、そうだな」
ペールに話を振られたのでそれを肯定してやると、ケッセルリンクはこちらに背を向けた。
そして背中越しに、
「あ、ありがとう……」
おそらく、背中を向けたのは顔を見られたくないからだろうな、と予想しつつ、レオンハルトは息を入れる。
思うのは、とある不安と、しかし頼られて嬉しく思う気持ちだ。それらを心に置きながら、レオンハルトは、
「……それじゃ、一緒に帰るぞ」
極めて優しい声音でケッセルリンクに言う。彼女がそれに頷いたのを見て、
……こいつの心も、どうにかしてやらねぇとな……。
もっとも、一朝一夕でどうにかなることでもないが、少しでもその手助けが出来れば良い。
そんなことを考えながら、レオンハルトは帰路についた。
しかし道中、
「今日は三人で、いっぱい楽しみましょうね！」
「あっ……」
「――だからそういうことを言うんじゃねぇ！」
周りに人がいる状況でそんなことを言う使徒の頭に手刀を入れ、レオンハルトは改めて帰路についた。

――その頃、レオンハルトの城。執務室。
「……はっ、仲間外れの気配がしますわ！」
何かを察知したレオンハルトの使徒であるキャロルは、急いでそれを回避するべく入り口まで向かった。

営みと不安

夜。
室内を明かりで照らされた広い空間がある。
備え付けられたテーブルと椅子が並ぶそこは、高級感溢れるお店だ。
レオンハルトシティにあるその店は、料理と酒を楽しめるレストランであり、魔軍の重鎮だけが入ることが出来る高級店でもある。
その個室に足を踏み入れたのは、大柄な魔物達だ。その前に立つものが声を上げる。
「予約していたものだが」
「はい、お待ちしておりました。大将軍閣下。――どうぞこちらへ」
うむ、と頷いたのは、大柄な魔物将軍よりも一回りほど大きい魔物大将軍、リーだ。
彼は連れの二体の魔物将軍。そして一体の魔物隊長とともに、店員の女の子モンスターの導きに従って席に着く。魔物のサイズに合わせた、大きなテーブルだ。同じく大きめの椅子に腰掛けると、下座に座った魔物隊長が辺りを見渡し、
「すごい……こんなとこ、初めて入りましたよ」
感嘆の声を上げる。彼はレオンハルト軍麾下の魔物隊長。同席する魔物将軍の紹介で連れてこられた者であった。
ゆえに本来ならここに入ることは出来ない。何故なら、
「はは、そうかそうか。まあ驚くのも無理はない。ここは魔物将軍以上でないと入れないからな」
「自分が初めて入った時は魔物将軍だったが、それでも驚いたものだ」
と、魔物将軍らは言う。その声に仕事の時のような厳しいものはなく、幾分か和らいだ気のいいものだ。
それに続くように魔物大将軍リーが魔物隊長に目を向け、
「うむ、魔物隊長。お前も、将軍になったのなら来る機会はあるだろう。慣れておくといい」
「あ、ありがとうございます！」

魔物隊長は頭を下げてお礼を言う。大将軍は硬くならなくて良い、と言ってくださるがとんでもない。自分は目を掛けられているのだ。
眼前にいる魔物大将軍リー。彼は魔人や使徒を除けば魔軍の最高位、通常の魔物が望む最高の地位にいる御方だ。
魔物隊長までは特殊なスーツを着ることで出世していくことになるが、そこからは種として進化が必要となる。隊長から将軍になる事例は幾つか見受けられるし、とある方法で将軍になる方法も存在する。
だが何体かいる魔物大将軍の中で、今の所、将軍から大将軍になったのはリーだけだ。
彼は魔軍最精鋭のレオンハルト軍の最古参の魔物であり、レオンハルト軍やこの街の運営にも携わっており、レオンハルト様の懐刀のような存在である。
使徒並の信頼を受けるこの御方に、目を掛けられた。それは出世を期待されているということでもある。
勿論、魔物社会は実力主義で、特にレオンハルト軍では他の軍で行われるような袖の下などは通用しない。純粋な能力主義である。
なので出世が決まったわけではない。他にも優秀な魔物隊長は大勢いる。なので気を抜くわけにはいかない。
心を締め直し、魔物隊長は上司達の話に耳を傾けた。運ばれてきた食前酒を皆で口にしながら、
「最近、調子はどうなんだ？」
「いやお前、同じ軍なんだから調子も何も、解るだろう。特に問題はない。ですよね、大将軍閣下？」
「そうだな……まぁ、私としてはこの間、とうとうキャロル様に果たし状なるものを渡されたのだが……誰か上手い逃れ方を知らないか？」
皆が一斉に目を逸らす。リー大将軍が息を吐いた。立場が高く、上の者との距離が近いとこんな苦労もあるのか。覚えておこう。
と、思っていると、最初に話を振った魔物将軍が気を取り直して、
「いや、そういう意味じゃなくてだな。お前、最近嫁増やしたんだろ？」

そう聞くと、質問を投げかけられた魔物将軍は合点がいったのか、
ああ、と頷き、
「そっちも問題ないな、概ね。ただ……うちの新しい嫁、ちょーちんなんだが、家に帰ると大体、明かり消した暗い部屋で隠れてるんだ。そんで頭の光灯して、こっちを誘ってくるんだが、すると殴られる。殴って襲いたいんだと。でもそんくらいだと全然効かないのが嫌なのか、いつも部屋でパンチの練習してる。たまに物を壊すときもあるから正直やめてほしいんだが……それ以外は問題ない」
「……問題あるじゃないか」
「……うるさいな。お前のとこはどうなんだよ。確か、バトルノートだったか？」
少しムッとしつつ魔物将軍が相手の魔物将軍に聞き返す。するとバツが悪そうに頭を掻き、
「あー……いや、うん。問題ないぞ。……ただ、仕事場が一緒の所為か、家に帰った後、その日の作戦行動とか自分の指揮に小言を言ってくるんだ。やれあれが駄目だの、あそこはこうだの。何か、嫁にする前は従順だったし強く言えたのに、嫁にしてからというもの逆らえなくてな……俺、上司なのに……」
「お、おう……苦労してるんだな……」
その姿に哀愁が漂っているのを見て、その場の者達が微妙な表情を浮かべる。聞いた魔物将軍は空気を変える様に、今度は魔物隊長に目を向け、
「……そうだ。お前のとこはどうなんだ？」
「あ、ええっと……」
急に話を振られたことで少し戸惑うも、やがて思い返しながら、
「一応、います。その、幼馴染の、きゃんきゃんでして……」
「おお、いいじゃないか。それで、どんな感じなんだ？」
「問題があったりするのか？」
いつの間にか復活した魔物将軍も混ざりつつ、重ねて問われる。答えなくてはならない。しかし、
「そう言われましても……うちは普通です。普通に仲良くしてますよ

？」
正直に言うと魔物将軍達は二人で肩を落とすと息を吐き、
「……何だろうな、こっちの方が恵まれてるはずなのに、普通に羨ましく思えるのは……」
「……癖のある嫁だと苦労するよなぁ……」
「は、はぁ……別に普通のつもりですが……」
それが良いんだよ、と言われる。何がだ、と思う。しかしそこで気になったのは、
「……ああ、その……大将軍閣下は、どうなのです？」
「む……」
黙って酒を飲んでいたリー大将軍に話を振る。すると彼は渋い顔になる。
それを見た魔物将軍は、大将軍に向かって声を飛ばした。
「そういえば、リー様は一人もいないんでしたっけ？」
「いい加減、誰かしら作ったらどうです。リー様なら選り取り見取りでしょう？」
「……しかしだなぁ……」
と、唸るリー大将軍に、魔物隊長は意外な気持ちになる。
……大将軍閣下なら、一人どころか二人以上いても全然おかしくないのに……。
そう言うのも、それがレオンハルト軍で、この街では普通のことだからだ。
魔物界では最先端の、そして最もお洒落で安全な街といわれるここは、魔物界で屈指の人気を誇る。多くの女の子モンスターが訪れるのだ。
ゆえにこの街は半ば、出会いの街であり、人気のデートスポットとしても名高い場所でもある。
そんな中、この街に住み、魔軍最精鋭の軍で働く自分達は――はっきり言って、普通の魔物よりもモテる。
自分達はこの街の生活に慣れきってる。作られた屋根の下で暮らし、充実した仕事を行い、休日には同僚や部下と街に繰り出したり、そ

こらでお茶をしに行く。文化的かつ、優雅な生活である。他の野ざらしで暮らすような魔物と比べれば雲泥の差だ。
これを当たり前としている自分達の姿が、他の魔物よりもモテる理由の一因だ。
そしてもう一つに、こちらは魔物として当たり前のこと。強さがある。
魔軍で最も優れた軍の名に恥じないよう、自分達はそうあろうと努めている。任務や仕事の数も多く、大変なことも多いが、ゆえに成長出来る。ゆえに通常の魔物兵であっても他の魔物兵よりもモテる。
もはや、レオンハルト軍に所属し、この街に住んでいるというのは一種のステータスだ。
魔物兵達もそれを知ってか、出世するために人一倍熱を上げる者も少なくない。
何しろモテるだけではない。魔物隊長であればより良い生活を送ることが出来る。魔物将軍であればそれよりも更に上、魔物社会では極僅か、一握りのエリートだ。
魔物大将軍ともなれば、それは推して知るべし。そんなリーは、あまり欲がないのか、嫁も取らず、何かを欲することがない。
何故、という思いが浮かび、大将軍に視線を向けると、少し困ったように、
「……興味がないわけではないが……それよりも、今は仕事が大事でな……」
「……お硬いですねぇ……」
魔物将軍が半ば呆れるように言う。すると大将軍は顔をしかめ、
「いや、ちゃんと抜くべきとこは抜いている。こうやって、部下を連れて食事に行ったり、風呂や劇場に連れて行ってるだろう？」
「いや、ありがたいですけど、そこにもうちょっと彩りを加えるのも悪くないのでは？　ほら、レオンハルト様だって言ってたじゃないですか。良い人はいないのか、って。尊敬するレオンハルト様が推奨してるんですから、大将軍閣下も率先してそれに倣うのが宜しいのでは？」

「ううむ……それは確かに、そうかも知れないが……」
そうやって理屈を、というか、レオンハルトの名を出されると弱いのだろう。リーが迷うように顎に手を当てる。もう一体の魔物将軍が引き継ぐように、
「レオンハルト様みたいにハーレムでも作ったら、大将軍閣下にも、レオンハルト様みたいな深みが出るかもしれませんな」
「むっ、それは……一考の余地が……」
……そこで揺らぐのか……。
魔物隊長は内心でそう思ったが、見れば将軍達も苦笑を浮かべている。どうやら同じ気持ちらしい。
大将軍閣下に良い人が出来ればいいのだが、それはこの分ではまだまだ掛かりそうだ。それにしても、
……レオンハルト様か。どんな生活送ってるんだろうなぁ……。
魔物隊長は軍に所属してまだ短いし、城の中に入ったことがないのでそれは解らない。
だが、魔人筆頭ともなれば、それはもう優雅な生活を送っているであろうことは想像に難くない。ありとあらゆることが出来るはずだ。
……自分も、将軍くらいには成れるように頑張るか……。
思い、魔物隊長は料理と酒に舌鼓を打ち、リーを説得するための言葉を考え始めた。

レオンハルトの城。
その城壁を全て赤で染めた、魔人筆頭の居城。
その一階にあるとある部屋の名は――大浴場。
風呂好きのレオンハルトが、この街から湧き出た温泉を城の地下まで引き、作らせた部屋がそれだった。
街にある大衆浴場と比べても大差ない広さと、それを上回る豪華さを誇る大浴場。そこでレオンハルトは、
「――レオンハルト……その、どう、だ……？」
「――お加減は、いかがですか～？」

「んっ、ちゅ……ん……れほんはふほはま……」
ケッセルリンクとペール、そしてキャロル。三人に、身体を洗ってもらっていた。
風呂場であるため、誰もが生まれたままの姿でそこにいる。浴場に備え付けられた浴室用の椅子に座り、イチャつきながら身体を洗ってもらっているのだ。
残念ながら、キャロルだけは剣を磨くのに夢中になっているようだが、それでも申し分ない。剣だって、重要なものだ。それを率先して磨いてくれるキャロルは、忠臣にほかならないだろう。
レオンハルトは三人を見て、多幸感を思った。
正面、ケッセルリンクがその身を寄せてくる。
「レオンハルト……」
うっとりとした表情でこちらを見るケッセルリンク。その身体つきに目が釘付けになる。
女性にしては長身のその肢体は、白砂のように綺麗であり、女性らしさと美の結晶だ。
もっちりとしたお尻のライン、くびれた腰つき、たわわに実った果実。その先には、ツンと上を向いた桜色の乳首があり、
「んっ……」
こちらの胸に抱きついてくる。
その双丘がむっちりと押し付けられ、形を変え、先端のそれが柔らかさと弾力の中でこちらの乳首と合わさり、こり、と刺激してくる。
彼女の表情は、真っ赤に染まっており、吐息を漏らしている。思うのは、
「ケッセルリンクは……綺麗だな」
「あ……」
ケッセルリンクの顔がさらに赤くなる。しかし視線を逸らさず、その瞳をうるうるとさせており、
……ほんと、綺麗だな。
魔人四天王の一角である上級魔人、ケッセルリンク。
普段はクールな表情を張り付けた美人で、高嶺の花、といった印象

の強い彼女。
そんな彼女が、自分には好意の込もった熱い視線を向けて、身体を洗ってくれるという。
そのことに悦びを感じざるを得ない。手を伸ばし、
「それじゃ、頼むな」
「あっ……わかった……んっ……」
右手を彼女の尻に回し、こちらに引き寄せる。密着感が高まる中、五指で尻を撫で回していると、
「私も、洗いますねー？」
「ん……頼む」
今度は、舌をちろり、と出した自らの使徒ペールがそう言って、泡の付いた身体を寄せてきた。
使徒になり、容姿に変化があったペールだが、童顔で可愛らしい顔つきは変わってない。
しかしそれでいながら、身体つきはいやらし過ぎるほどにいやらしい。
きゅっと締まったお尻に、細い腰つき、そしてたっぷりと実った爆乳。その先にある淡い色の、陥没したそれごと、
「えーい」
気の抜ける声とともに押し付けられる。
使徒になって大きくなったそれは、つぶれて形を広げ、たっぷりと胸に押し付けられる。
するとペールはこちらを見上げ、
「今日も、たっぷりサービスしますね？　レオンハルト様の仕事の疲れを癒せるように」
楽しそうに上半身を左右に揺らし、こちらの肌にむにゅんむにゅんと胸を滑らせてくる。
なので、と、
「いつでも、私達にストレスを吐き出してくださいねっ」
「……風呂場では、身体を洗うだけのはずなんだがな」
言いながらも、それだけで終わらないことは分かってる。ゆえに

ペールの尻にも手を伸ばし、
「あんっ、触られちゃいましたよう……！」
五指を突き立て、こちらに引き寄せる。ペールは嫌がる台詞を言いながらも、声色は悦んでおり、腰を揺らしてむしろ押し付けてくる。そして、
「それじゃ、いつも通り洗っちゃいましょうか、ケッセルリンク様」
「わかった……」
と、ペールの言葉を合図に、二人が動き始める。
上半身に並んだ四つの山が、スポンジとなってこちらの身体を洗い始める。
中身の詰まったたぷたぷのそれが柔らかく形を変えながら身体の上をなぞる。下に向かって移動し、こちらの太腿に、それぞれ彼女たちが跨ると、ぷにぷにした感触に気持ちよさを感じる。
下まで到達すると、今度は上に戻ってくる。こちらの胸板を再び撫でながら、二人が上がってくると、首元を過ぎて、
「っ――」
顔が挟まれる。
両側から押し寄せる柔らかいスポンジの感触が気持ちいい。二人の細い腰を抱きよせて、四つのもちたぷを顔で味わっていると、
「んっ、んっ、んっ――」
と、剣を必死に磨き上げているキャロルと目が合った。
凛々しい顔つきをしている彼女は、熱に浮かされた様に四つん這いで剣を磨き上げ、腰を揺らしている。
ぷりんとした桃尻を左右に揺らしてこちらの目を楽しませながら剣を磨く。上から見ると腰のラインが艶かしい。
熱が入りすぎて、掌サイズに膨らんでいるその先が、ぴんぴんに立っている。それでいながら、愛情たっぷりに首を振り、こちらを見上げてくる視線に嬉しくなり、応えたくなる。
ゆえに、顔が解放された時に、
「キャロル、偉いぞ」
「っ!!」

と、褒めてやる。剣を磨くスピードが増した。
それが嬉しくなり、溜まっていたストレスが発散されそうになる。
二人の体洗いもそれを助けてくれる。
レオンハルトはそれを我慢せずに発散した。
「んんっ――！」
キャロルが磨きすぎて熱くなった剣を、喉を鳴らして受け止めてくれる。それを心地よく思いながら、
「あっ……」
ケッセルリンクがそれを察して声を上げる。剣を見て、同じくペールが、
「あー、もうですかぁ？　本当に溜まってたんですね、ストレス」
からかうように言ってきたので、二人の胸を今度は掴みながら、
「いや、まだまだ溜まってるからな。まだまだ存分に発散してやる」
重たく詰まったそれを弄び、やる気を出していると、眼下で、
「……レオンハルト、さまぁ……んんっ！」
再びキャロルが、右手で剣を磨き始めた。今度は、左手で自分の股ぐらに手を伸ばしながらで、
「完全に、スイッチ入っちゃってますねぇ……じゃあ、私も本気出しますよう」
ペールが剣の元に移動し、それを胸で包み込みながら目を細める。
キャロルが、押しのけられ、
「ん……ずるいですわ……ペールさん……！」
「ええー、次は私の番ですよう。キャロル先輩は、上に行ってください」
「……しょうがありませんわね……んっ、レオンハルト、様……！」
ペールが自慢の双丘を揺らし、剣に乳圧を掛けながら言う。埋もれたそれを見て不満そうだったキャロルだが、上に来るのも魅力的だったのだろう、勢いよく抱きついてくるのを受け止める。聞いて思うのは、
……こっちも本気出さないとな。だが……。
と、反対側のケッセルリンクを見る。そこには、こちらに縋り付く

ように抱きつく彼女の姿があり、
「んっ……レオン、ハルト……！」
興奮しながら身体を押し付けてくる。それはいい。
だが、その瞳の中には、やはりとある感情が見え、
……問題はこっちだよな。
と、内心で言葉を作り、レオンハルトはケッセルリンクに声を掛けた。それは、
「ほら、今日も可愛がってやる。だから――安心しろ」
「っ、はっ……んんっ！」
ケッセルリンクの身体を弄る。再び抱きつく力が強くなるのを感じながら、
……さて、どうするか。
方法を思案しつつ、レオンハルトは三人と風呂を楽しんだ。

――私は、怖い。
そして、悲しい。
未だに、思い出すと悲しくなる。
これからを思うと怖くなる。
皆は既に前を向いているのに、自分だけが引きずっている。
自分だけが、先に進むのを恐れている。
だが、彼を感じている時だけはそれを忘れられる。忘れさせてくれる。
罪悪感はある。彼を逃避のためにに使っているという罪悪感だ。
勿論、嫌な訳じゃない。それは幸せなことだ。
しかし、だからこそだ。
その多幸感だけが、自分を苦しみから解放する。
胸に刺さった棘の痛みを、感じないでいられる。
この棘が無くなるのはいつになるのだろうか。
ともすれば一生刺さったままかもしれない。
しかし、抜くことは悪いことかもしれない。

だから私は――このままでいい。
現状をただ維持できれば、それで――。

「――ん……」
ケッセルリンクは、緩やかに意識を覚醒させた。
身体が少し重い。理由は解る。昨夜の所為だ。
慣れてきたとはいえ、少々激しく、長時間のそれは体力を使う。戦いのそれとは違う、別の体力が。
……水を……。
と、ケッセルリンクは身体を起こそうとした。すると、
「――おっ……起きたのか。身体は大丈夫か？」
不意に、横から声が飛んできた。レオンハルトの声だ。
彼の腕枕で寝ていたのだから当然である。自分が何も着ていないことも。レオンハルトが何も着ていないことも。その横にキャロルが寝ていて、ペールのものと思われる毛布の膨らみがあることも。当然のことだ。
「ん、少し怠さがあるが……まあ、問題ない……」
なんとなく、そのまま彼の身に身体を寄せる。
彼の身体は安心するのだ。硬く逞しい男の身体。自分の好きな者の体温。それを感じて息を漏らす。
それを見て、苦笑を浮かべたレオンハルトは、
「それならいいけどな。……ここのところ、俺が城に帰る時はほぼ毎日来てるから、ちょっと不安になった」
「……そう、か」
諌められたような感じを覚えて少し落ち込む。というのもそれは事実だからだ。
レオンハルトは仕事が忙しく、魔王城で丸一日を過ごすことも多い。それは、いつ魔王に呼ばれるかわからないためでもある。魔王や魔人、使徒は睡眠が必要ないが、それゆえに、一日中を起きて過ごす者もいる。魔王も寝ずに起きていることがあるらしく、そういう時の

ことも兼ねてレオンハルトは城に居続けることがある。
それは仕方のないことだ。だが、
「……私が来るのは、迷惑か……？」
「そんなことはない」
ズルいことを言ってしまった、と言った瞬間に後悔したが、レオンハルトは即座に否定してくれる。それだけで嬉しくなるのだから、彼はズルいと思う。
しかし彼は続けて、でもな、と、区切ると、
「……その、だな。そろそろ、お前の城を作りたいんだが――」
「――っ」
言われる。それは、これまでに何度か聞いた言葉だ。
身を固くしてしまう。次に言われるのは、やはり、
「お前は魔人四天王だ。だから、その役目を……出来れば果たしてほしい。城が嫌なら屋敷くらいでも――」
「……」
無言で、彼の身体を抱きしめる。それは意思表示だ。
嫌、とは言えない。だが、頷きたくもない。それゆえの、ずるいやり方。
彼に察してもらう。そのやり方をもって意思を伝える。
今まで何度か合ったことだ。魔人四天王である自分にそれを与えるという案は。しかし、いらないというなら別にいいか、と最初は彼も考え、それに納得した。
しかし、段々とそれに気づき、敢えてレオンハルトはそうしないか、と諭してきている。
ゆえに続く言葉も同じ。変わらないものだ。それは、
「……そんなに、寂しいか？」
「……」
無言で身体に縋り付く。肯定の証だ。
「……いつでも来ていいんだぞ。お前は、俺の女だ。拒む理由はない。だから――」
力を込める。嫌だ、と。

それを感じ取ったレオンハルトは、諦めたのか息を一度吐く。
しかしそれは間違いで、
「……色々、考えたんだがな」
と、レオンハルトは言葉を続けた。
「お前は、一緒にいてくれる、大切な奴がほしいんだろ？」
「……」
頷く。それは貴方や、見知った者達のことだ。
だから傍にいてほしい。いなくならないでほしい。
そう思い、彼を感じる。頭上から聞こえてくる声は止まず、
「……なら、一つ、提案があるんだが――」
と、言う。それは、
「ケッセルリンク。お前――使徒を作れ」
「――――」
今までとは違う、そんな提案だった。

「使徒を……？」
ああ、と、レオンハルトはケッセルリンクの言葉に頷きを返す。
自分が提案したことだ。彼女の寂しさ、言いようのない不安を埋めるための案。
それを、レオンハルトは説明する。
「大切な存在。他ならぬお前と一緒にいてくれる存在を作るんだ」
「……それは」
出来るのか、と問うてくる。それは半信半疑だ。
今まで大切な出会いを得てきたからこそ、これからもそれを得られると思う心と、大切すぎる存在が出来たからこそ、そんなのは出来ようがないと思う心。その二つが彼女の心を揺らしているのだろう。
その比重を、片方に向けようと、レオンハルトは言葉を尽くそうとする。
「……俺はな、ケッセルリンク。昔から色々と悩みがあった」
悩みがあるという。言いながら、彼女とは反対の方に顔を向ける

と、
「……でも、その大体は――俺の使徒達が解決してくれたんだ」
「んにゅ……レオン、ハルト……様……」
すやすやと気持ちよさそうに眠るキャロルの頭を撫でる。
自分はそうだった。元は悩みを解決するために使徒を作った。
だが、
「思えば、最初から見どころのある奴だった。どいつもこいつも、何だかんだ言いながら俺の役に立とうとしてくれてる」
「……それに、救われたのか？」
頷く。勿論だ。それだけではないが、その要因は極めて大きい。
キャロルやハンティにペール。皆俺に付き従ってくれている。ハンティだけは事情が異なったが、それでも、いつしか大切な奴の一人になり、
「……そう。いつしかこいつらも、大切な奴らになっていた。こんな俺にすら、付いてきてくれる奴らがいる」
だから、
「お前に出来ないはずがない」
「……」
確信をもって言う。ケッセルリンクに付き従ってくれる使徒は、必ず現れると。
ゆえに、
「少しだけ、探してみないか？　外に出て、人と会って、何か切っ掛けがあればそれは現れる。大切にしたいとお前が欲するやつ。お前に付き従いたいと思うやつ。どっちかは解らないが、必ずどっちかは見つかる」
「……そう、だろうか……」
言う。彼女の頭を撫でながら、
「ああ、必ずだ。俺を信じろ。今は、自分に見つかるのか、と思っていてもいい。お前が信頼する俺を信じて、それを試してみろ」
「……なら」
と、ケッセルリンクはややあって、ゆっくりと顔を上げる。

そしてこちらと視線を合わせ、
「……貴方がそう言うなら……少しだけ、やってみる……」
「！　ああ、そうだ。やってみろ。絶対見つかる」
戸惑いながらも肯定してくれたケッセルリンクを抱きしめてやる。
安心させるように、彼女の背中に腕を回し、
「大丈夫だ。何かあれば、俺も必ず協力する」
「……わかった。そうしよう」
少しだけ落ち着いたのか、ケッセルリンクが普段通りに戻る。それを見て、少しだけ胸を撫で下ろし、
……これで、少しはこいつの不安が取り除かれれば……。
思う。これについては自分にも、責任がないとは言えない。
なので、色々と忙しい自分だが、何かあれば助けになってやろう。
そう思い、レオンハルトはしばらく、彼女を抱きしめ続けた。

とある王国と大将軍会議

大陸東部。

人類圏にあるその王国は、最も歴史があり、それでいて最も美しいと謳われる人間の覇権国家であった。

歴史ある荘厳な建造物が立ち並ぶ、街の通りを行く人々の顔に、不安の表情はない。それは国が豊かであるという至極当たり前の理由もあるが、それだけではない。他の国の民とは違い、その国はある心配とは無縁に生きているがゆえのことだ。

それは――魔軍の存在。

多くの人類国家が恐れる、人に仇なす魔軍の脅威。その殆どの国が、一度は国を滅茶苦茶にされた歴史を持つ。

しかしこの国は領地を魔軍の勢力圏と接していながら、魔軍が全く攻めてこない国として有名だった。

最後に魔軍が攻めてきたのは、国の黎明期――四百年程前のことである。それ以降、魔軍は一切この国には手出しをしてこないのだ。

ゆえにこの国は昔から、世界で最も安全な国として名高く、その噂を聞きつけた多くの人がこの国に移住したことで、過去に国を立ち上げ、発展させてきた歴史がある。

他の国が魔物の対策で頭を悩ませ、その甲斐虚しく国を滅茶苦茶にされる中、この国では順調に発展を続け、いつしか覇権国家となっていた。

魔軍に労力を割く必要がなく、街を壊されることもないため、歴史ある街並みを残しながらも街を綺羅びやかにしていく。人と物が途切れることなく集まり、国を裕福にしていく中、当然のように他国との外交でも常に優位に立っている。

定期的に侵略してくる魔軍との戦いとその復興で余裕がない他国は、物資をこの国から買い付けることも多い。そのことも、この国をさらに富ませていくのだ。

他国の足元を見ながら物資を高く売りつけ、その富でさらに国を豊かにしていく。魔軍が他の国を襲う度、それは延々と続き、終わるこ

とのない富の循環をこの国にもたらす。
王国の首都にある宮殿。その中にある謁見の間では、今も他国から来た使者が歯を食いしばりながらも必死の形相で頭を下げる。
「何卒、何卒お願い申し上げます……！　このままだと、我が国の民は餓死してしまいます……！　それだけは……！」
その声は悲痛に溢れていた。
かの国はつい先日攻勢を仕掛けてきた魔軍の虐殺と掠奪によってボロボロであり、国の民は数十万規模の難民で溢れかえっている。食事も満足に取れず、次々と餓死者が出ている。それを、この国に住む者も知っているはずだ。
しかし玉座に腰をかけるこの国の国王は、眼前の使者を冷たく見下ろしながら、それを突っ撥ねる。
「ふん、そんなことは知らんな。餓死者を出したくないのであれば、出し惜しみせず金を払えばよかろうて」
その言葉に使者は声を跳ね上げた。
「し、しかし！　適正価格の倍など、我が国では払うことが……！」
「ならば他の国に頼むのだな」
「ぐっ……それは……」
使者が苦悶の声を上げる。それが出来れば苦労はしない。
どこの国も自分の国で手いっぱいで、それほど余裕があるわけではないのだ。だからこの国で買い付けるしかない。それを、国王は知っているのだろう。
足元を見られている。その事実に頭が煮え滾り、目の前の男を殴りつけてしまいたくなるが、衝動のままにそれを行なってしまえば、我が国は終わりだ。
交渉の余地すらない。その現実を認識しながら、使者はしばらく黙り込む。
すると、国王が息を吐き、
「……こちらも忙しいのだがな。何もないなら私は行くが――」
と、立ち上がってみせる。交渉は終わりだ、と。それを見た使者は慌てて声を飛ばした。

「お待ち下さいっ！」
「ん？　どうした？　払う気になったのか？」
首を傾げながらわざとらしく煽ってくる国王。使者は喉元まで出かかった文句を、ぐっと呑み込み、代わりに別の言葉を絞り出す。頭を下げ、
「……払わせて、いただきます……」
「ほう、そうか」
国王がその言葉を聞いて髭を撫で付けながら優しそうな笑みを浮かべる。
「うむうむ、ならば任せておくがよい。すぐに物資を届けようではないか。何、無辜の民が失われるのは私としても心が痛む」
「……ありがとうございます……」
「よいよい。金は払うのであろう？　それならばいいのだ。我が国も、財政に余裕があるわけではないからな。助け合いがしたくとも最低限金を取る必要がある。致し方ないのだ」
――どこがだ……！
財政に余裕がない、と国王は言う。全身を質の良い色彩豊かな服で包み、手の指に幾つもの宝石がついた指輪を嵌めた爺がそう言うのを見て、使者は内心で激昂した。ここに来るまでに幾つもの街を見た。どの街も裕福で、この王都、そして宮殿に至っては壁や床の材質から調度品、メイドの服一つに至るまで、その全てが高価なものが使われている。どれも一級品だ。この状態のどこが金がないというのか、問い詰めてみたいほどに。
だが、背に腹は代えられない。民の命に代えられるものはないのだ。そう思い、使者は謁見の間から立ち去っていった。
「……」
それを、じっと黙って見つめていたのは、国王の隣に並んだ亜麻色の髪の少女だった。
綺羅びやかなドレスに身に着けた翡翠色の瞳をもつ美しい娘。
彼女の名は――シャロン。
この国の第一王女である。

そんな彼女は笑顔を顔に張り付けたまま、立ち去っていく使者を黙って見送る。
やがて、謁見の間から使者が退出すると、シャロンは隣の父に声を掛けた。
「……良いのですか、お父様」
「別に構わぬだろう。ただでくれてやる義理はないのだし、適正の倍とは言ってもそれはギリギリ払えるだけの値段だ」
そう、国王はそれを計算した上で、その金額を提示した。
あまり釣り上げすぎると、物資を渡し、復興がなったとしても国が傾いてしまう可能性がある。
そうなればこれ以上金を搾り取ることが出来なくなるのだ。生かさず殺さずが肝要。そう理解した上での国王の言葉。
しかしシャロンは首を振り、
「……いえ、それではなくて……先の……」
「……ああ。あの身の程知らずか」
シャロンの言いづらそうに濁した言葉で、国王は何を言いたいのかを察する。
それは、この交渉の前に訪れた輩のことで、
「ふん、どうもこうも、あり得ぬわ。あの程度の国と婚姻を結ばせるなど、全く釣り合っておらんのだ。お前も嫌だろう？」
「……私は……でも……」
口ごもってしまうシャロン。確かに結婚したいとまでは思わない。
だが、先の相手――隣国との縁談を蹴ったのが良いことかと言われるとそれも微妙なところだ。
何せ相手は、
「……ふん、お前が何を心配しているかは分かるがな。それはいらぬ心配だ」
と、国王は鼻を鳴らして、不敵な笑みを浮かべる。皿に乗せられた幾つもの果物の中から一つを手に取り、それを噛りながら、
「戦争になったとしても、まず負けはない。潤沢な資金に物資、そして他の国とは違い、消耗することなく残っている我が軍に掛かればな」

確かに、それは事実であった。
他の国は魔軍との戦争で血を流すことを強いられ続けている。
そんな中、この国は被害を一切被ることがないので、国の兵士も、精鋭だけを集めた騎士団も、全て万全の状態で揃っているのだ。
負けるはずはない。それはわかる。
「……でも、戦争は……」
戦争は、したくない。
それはなんとなく悲しいことだから。
だが、だからといって結婚も、
「……ふふ、だがなシャロンよ。戦争にはならんぞ」
「え……？」
不意に、父の笑い声が響く。
戦争にはならないというその根拠がわからない。そのため疑問符を頭に浮かべるシャロン。
その答えは、父の曖昧な言葉で答えられた。
「知ってるはずだ。この国は、守られていると」
「！　それは……」
言われた言葉に、まさか、という思いを得る。
父の言葉の裏にある意味。それは確かに知っている。
それは秘匿され、しかし噂として流れているものだ。それは、
――この国は、魔軍と通じている。
魔軍の被害を受けないこの国に対してまことしやかに語られる、そんな噂。
しかしそれは間違いで、事実はまた少し違う。
この国の王族、そして重鎮は、その事実を知っている。
他国に知られ攻撃の材料とされることを恐れ、歴史の闇に葬った人物。
この国の礎を築いた始祖にして、しかし、人々に忘れ去られた救国の英雄。
その存在を思い、国王はほくそ笑む。
「戦争にはならん。ならないとも。我が国が戦うまでもないからな」

「……」
愉快そうに笑う父の姿を見て、シャロンは黙りこくる。
確かに、それならば不安を覚える必要はない。この国は安全だ。
だから、この胸騒ぎは気の所為だ。そうに違いない。
そうしてシャロンは考えることをやめて、早速行動を取り始めた父を黙って見続けた。

レオンハルトシティにある大きな屋敷のような建物。
それは街に設けられた大規模な魔軍の司令部であり、そこにある会議室は、魔軍の重鎮が集まる広い部屋だった。
室内には続々と大柄な魔物――魔物将軍が入室してくる。その中でもさらに一際大きい魔物が、魔軍の最高幹部である魔物大将軍だ。
魔人や使徒を除けば最高位の存在。魔物将軍を越える頭脳を持ち、数十万規模の魔物兵を動かすことが可能で、無敵結界や特殊な能力を加味しない単純な戦闘力では下位魔人にも相当する。そんな限りなく支配者に近いその魔物が椅子に腰掛け、それぞれ正方形に並べられたテーブルの辺の真ん中に並ぶ。一体、二体、三体、四体。そうして彼らが揃うと、一体の魔物大将軍が声を上げた。
「――では、これより会議を始める」
そう宣告するのは、魔物大将軍リー。
レオンハルト軍を主に担当する魔物大将軍である彼が会議の始まりを告げる。
今から行われるのは各軍との折衝、意見を求め、各軍の動きを調整するためのものだ。
大きな議題は、すでに彼の上司である魔人筆頭兼魔軍参謀である魔人レオンハルトによって伝えられている。
その内容は、
「先日、魔王様からレオンハルト様に勅命が下った。長くとも一年以内に、人間の大国を滅ぼすこと。この命令に伴い、各種情報を精査した上で意見を募りたい」

その話題に、議場がにわかにざわつく。
魔王が代替わりして最初の大規模攻勢が行われる。それをどうするか決めようと言うのだ。
実際は意見を幾つか出し、それを上に伝えて確認を取ることとなるだろうが、それでも重要な仕事だ。
手柄を立てるチャンスでもある。ゆえに立ち上がる者が出てくるのは必然だった。
「なら、一番に出向くのは俺の軍だ」
リー大将軍の正面、一体の魔物大将軍が立ち上がる。
そのことに白い目を向けたのは、右手側にいた魔物大将軍で、
「……コウウ、貴様……話を聞いていたのか？　情報精査の上で意見を出せと言っているのだ。順番決めの話はしていない……！」
「聞いた上で言ってるに決まってる。そんなことも分からないのか、ヴラド」
「貴様……！　それは私を侮辱しているのか……！」
強く睨みつけるのは、右側に座る魔物大将軍ヴラド。
カミーラ軍の指揮を担当している魔物大将軍であり、その手には刺々しい針が生えている。後は何故か、前のテーブルに四角い容器に入った肉が置いてある。
それを口にしているのを見て、コウウ、と呼ばれた魔物大将軍が腕を組みつつ声を上げる。
彼は独立した軍を率いている魔物大将軍であり、上役の魔人がいない。
というのも手柄を全て自分ものにしたがる悪癖があるため、それを拒否してくるのだ。
そんな彼がヴラドに向かって文句を言う。
「俺の軍でやった方が早いし、絶対に勝てるからな。当たり前のことだ。……というかお前！　何を会議中に肉食ってる!?　お前の方が無礼だぞ!!」
「何だと!?」
ヴラドががたっと音を立てて立ち上がる。その手には串に刺さっ

た茶色の肉があり、香ばしい匂いを辺りに漂わせている。それを掲げ、
「貴様、よほど物を知らぬと見える……よく見ろ！　これはただの肉ではない、串焼き肉だ……！」
「一緒だ馬鹿！　死ね！」
「ふん、カミーラ様の城から急いでやってきたのでお昼を食べていないのだ。だから手早く摂れるようそこにあった出店で貰ってきた。うむ……これはいいな……味も美味いが、〝串焼き〟というのが特に良い……。おい、お前、今すぐ走って私のために串焼き肉をもう少し貰ってくるのだ。いいな？」
「え、あ、はい！　直ちに！」
「話聞けよ馬鹿!!」
　コウウが怒ってテーブルを叩く。配下の魔物将軍を出店に向かわせたブラドは、そこで白けた顔をコウウに向け、
「騒々しいな、粛清されたいのか？　騒いでも貴様にはやらんぞ」
「……いらねえよ!!　死ね!!」
　コウウがちょっと間を開けて返答する。ちょっと食べたかったんだな……、と議場にいる魔物将軍らの意見が内心で一致した。
　同僚二体のやり取りを見て溜息を吐いた大将軍リーは、そこで左手側に目を向け、
「……うむ、まあそれは置いといてだ……何かないか、バルカ大将軍」
「……」
　一度も言葉を発しないもう一体の大将軍に声を掛ける。
　彼は魔物大将軍バルカ。
　ケッセルリンク軍の指揮を担当する魔物大将軍であり、リー大将軍にとっては馴染みの深い相手である。
　というのも、各魔物大将軍はそれぞれ上役の魔人とともに各地に散らばっているのだが、彼の上司であるケッセルリンクは、未だこの地に留まったままだ。
　そのためリー大将軍としてはよく関わる相手なので色々とやりやすい。騒ぎを起こす他の二体に比べればだが、

「……おい、バルカ大将軍？」
「……む、何か？」
今まで気づきもしなかったのか、議場に来て初めて顔を上げたバルカ。
その視線の先で見つめていた物を見て、やはりリーが息を漏らす。
「……その、何だ……会議中に一人チェスはどうかと思うぞ……？」
「……しかしだ、リー。もうすぐで新しい手筋――いや、革新的な戦法が見つかるところで……」
「悪いが、後でやってくれ。私も付き合うから」
「……仕方ないな……」
渋々とチェス盤を片付けてくれるバルカ。マイペース過ぎて頭が痛くなる。
リーは気を取り直して、仕事を進めようと議場に声を通す。
「……本題に戻るぞ。大国程度の国であれば数は限られているが、その中でもどこが一番適当か。まずはそれを考えよう」
普段よりも大きな戦いとなる。どこを相手にしてもまず負けることはあり得ないが、兵の消耗は少ない方がいいし、楽出来るのならその方が良い。
リーはまず自分の考えを言ってみせた。
「私が思うに……この国など、距離も近く、兵士も弱いので適当だと思うのだが」
テーブルの中央に広げられた地図を指して言う。他の大将軍もそれを目にし、
「相手が弱いとイライラするから却下だ。どうせなら強いところがいいだろ。俺にかかれば殲滅も簡単だ」
不敵にそう言ったのはコウウだ。自分が負けるとは微塵を思っていない傲慢な彼は、別の国を指し、
「ここなんかどうだ？　城も砦も結構硬い上に、土地も悪くない。ここを俺に任せれば――」
「貴様、また侵略した土地を全部自分のものにする気か？」
呆れた様にヴラドが言う。まだ串焼き肉を食べて口元を汚してい

るが、そこには突っ込まず、コウウが睨む視線を向けながら、
「……何だ、悪いかよ？」
「悪いにきまっている。貴様が侵略して得た物は、まず魔王様、延いては魔人の御歴々のものだ。我々はその後で褒賞としてそれを受け取るのだ。自分が奪ったから全部自分のとはならんだろう、貴様は野蛮人か？　少しは大将軍らしい品格を身に付けたまえ」
「ぐっ……んなこと分かってる……！」
「分かっているのなら、暴れたい殺したい奪いたい、とそんな理由だけで動くのはやめてほしいものだな。全く……こちらはカミーラ様への献上品の選別で忙しいというのに……」
「……お前だって串刺しがしたいくせによ……」
「私のは趣味だ。ちゃんと言われた仕事をこなした上で、余裕のある時だけ楽しんでいるし、許可も取っている。だから問題はない」
「っ……クソが……」
尊大な態度を取るヴラドに言い含められ、コウウが小さく悪態をつく。
コウウは大将軍の中で唯一、後ろ盾となる魔人がいない。他の三体はそれぞれ魔人四天王、そして魔人筆頭の下で動いているため、その上からの命令を実行する以上、行動を制限されることはない。
魔王や他の上級魔人にでも言われれば従うが、その場合も話を付けるのは上の魔人同士だ。命令を下した相手がより上の方が優先されるし、同格であれば話し合いをする。各軍で方針が揉めた場合はそのような形になるのだ。
ゆえに立場上は同じ地位にいる大将軍であるが、その序列ははっきりと定まっている。
まずは魔人筆頭、レオンハルトの麾下につくリーが若干上。次に魔人四天王の麾下であるヴラドとバルカが同格。その下にコウウだ。
それはひとえに、コウウが上役を欲しがらないことと、そもそも同格の存在がいないことが原因だろう。魔人四天王の席には未だ二つの空席がある。そこに誰かが座り、コウウがその下に就くことを望めるのなら彼の鬱憤も晴れるのだろうが……今考えても詮無き話だ。

「とはいえ、私はどこでも構わぬ。大国であるのなら人も物も揃っているだろうし、戦略的に合理的な場所を選ぶのが良いな」
うむ、とヴラドの言葉にリーが頷く。それが良いだろう。
魔王からの命令で一年以内に国を滅ぼせ、というからには求められているのは速やかに血を流させること。容易い場所であることに越したことはない。
「……楽にやるなら良い場所があるぞ」
そこでリーは左から飛んできた声に顔を向けた。
バルカが地図を指差し、
「この国か、この国が良いだろう」
「ふむ……む、そこは……」
とある国を差されてリーが眉根を寄せる。
その二つの国、その一方は魔軍に於いて暗黙の了解とされている場所であり、
「……そこは、攻めても良いのか？」
ヴラドも疑問を呈する。まだ数年と生きていない彼でも、そこがアンタッチャブルであることは理解している。
かくいうリーも、何となくでしかその事情を知らない。明確に聞いたことはないからだ。
ただ上から――〝そこには手を出すな〟、と言われたことはある。かなり昔、自分が魔物将軍であった頃の話であるが、よく覚えている。
その時の様子が有無を言わせないような、そんな剣呑なものを帯びた様子であることも。
だから、ではないが、リーは質問した。
「……解らないが……ただ、バルカ。何故この二つの国なのだ？」
「それは簡単だ」
バルカがその理由を言う。それは、
「この二つの国の間で――どうやら戦争の準備があるという」
「！」
驚愕の気配が議場を支配する。
まず来るのは、何故、という思いだ。その通りに口に出そうとする。

しかしその前に当のバルカから続きがきた。
「今朝方、前線に出していた工作員がその情報を持ち帰ってくれたのだ。……最近、ある理由から人間の国を調べていたのだが、それがこういう方向で作用してくれるとは……さすが私だな」
自画自賛をするバルカに何とも言えない顔を浮かべてしまう。
ある理由というのが気になるが、その情報が確かなら、彼が言いたいのはつまり、
「……負けた方――いや、勝った方を攻めるのか……」
「そう。そういうことだ。大国同士でぶつかり合い、勝って疲弊した方に攻め込む。勝利した方はより大きくなるだろうからな。巨大な国家ではあるが、戦争の後であれば楽に倒せるだろう。血も多く流れる。上手く殲滅してしまえば、両国にあった何もかもが手に入る。戦略的にも悪くない場所だ」
「ふむ……」
バルカの提案に皆が考え込む。悪くはない案だ。
決着の仕方にもよるだろうが、途中で停戦するなどして痛み分けで終わるにせよ、それなりに疲弊することは避けられないだろう。人間の大国同士で戦争することは滅多にないのでそこは適当に弱い国を選べばいいとも思っていたが、これから起きるというなら話は別。これが一番楽に終わりそうだ。
しかし、その作戦を実行するに当たって、問題がある。
「……ということで、リー大将軍には聞いてきて貰えると助かるのだが」
「む、むぅ……そうだな……」
窺いを立てなければならない。自分の上役に。
話せば分かってくれる相手ではあるが、昔を思い出すと気が引ける。
しかしそんなことは露と知らず、バルカは頼んでくる。この片方の国が、こちらの上司である――
「レオンハルト様に――この国に手を出しても良いのかと」
魔人レオンハルト。その故郷であるという――そんな噂を知らず

に。

葛藤

「夜分遅くに失礼致します、レオンハルト様」
「――何、ちょうど俺も一息ついたところだ。別に構わない」
魔物大将軍同士での会議を終えたリーは、その足でレオンハルトの城へと直接向かった。
夜の帳もとっくに下りきった刻限だというのに、魔人レオンハルトは快く自分を執務室へと迎え入れてくれる。
時間を考えれば眉をひそめられてもおかしくない。睡眠を必要としない魔人や使徒であっても、夜の時間はプライベートなものだという暗黙の了解がある。勿論、個人にもよるし、夜に呼びつけられたのならこちらは何をおいても駆けつけねばならないが、それは魔人という絶対の支配者階級を象徴するものだ。どんな横暴も許される。
それを考えるなら、魔人レオンハルトという存在は部下にとって非常にやりやすくもあり、同時に恐縮させられる相手である。何しろ、……魔人の最高位である御方が、我々を気遣ってくれるのだからな。
明らかな無理難題を出すこともなく、軍務の上での失敗も、それが怠慢によるものでなければ怒りを見せることもない。冷静に受け止めながらも、こちらを労ってくれる時すらある。
そもそも、ただの魔物でしかない部下と仕事外で付き合おうとする魔人というのが圧倒的に少数派だ。
他の魔人の方々は、自らの使徒と同格の魔人以外には線を引いている。支配し、顎で使うのは当たり前。格下どころか下等とも言っていい他の生物の気を慮る必要はない。魔物からしても、これは当たり前の価値観だ。圧倒的な力を持つ魔人には畏怖をもって接し、頭を垂れる。叛意を持つのは烏滸がましいし、やっても無駄だ。魔人に、魔人以外のあらゆる攻撃を無効化する無敵結界が備わってからはさらにそれが顕著になったと感じる。だが、
「それより、会議を終えてすぐに来たと聞いた。報告ついでに食事でも取っていくといい」

「は、しかし……」
「遠慮するな。……というより、お前がこの部屋に来る間に用意しておくよう言っておいたからな。諦めて食っていけ」
「……ご気遣いありがとうございます」
気にするな、と何でもないように言うレオンハルト。彼の表情は真顔そのもので、本当にどうとも思っていないのだろう。ただ、訪ねてきた配下に城自慢の料理を振る舞うだけ。この城の料理人は魔王城の厨房を担当していた人間の料理人が同じく料理人であった女性と関係を持ち、結果出来た子供に親が料理人としての教育を施し、それを働かせているらしい。通常は人間の料理人を連れてくるか、一部の料理が上手い魔物、もしくは女の子モンスターに任せるのが通例だが、そのような背景で出来た人間の子供を、異例ではあるがレオンハルト様、そして先代の魔王様が認め、試験的に人間の家族をこの城に住み込みで働かせているという。実際、リー大将軍や他の魔物将軍が城を訪れた際に何度か口にしたことあるが、魔王城で食べるものと遜色ない味であったので経過は良好だろう。ゆえに食事をここで摂れるというのは、その気遣いも合わせて嬉しいものだ。なのに、
……自分はこれから……その気遣いを踏みにじるようなことを、せねばならないのか……。
仕事とはいえ気が重い。それがおそらく、レオンハルトの触れてはならない部分だと半ば確信しているがゆえに。
尊敬の念を抱く主に向かって唾を吐きかけるような行為だ。理解っていてやらなければならないのだから余計に質が悪い。
無論気にならないといえば嘘になるが、それよりも罪悪感の方が圧倒的に勝る。
しかしいずれは口に出さなくてはならない。黙りこくるこちらに対して、レオンハルトは急かすことなく黙って報告を待っている。空気が重い、と感じるのはおそらく自分だけだろう。レオンハルトは軽い様子でカップの中に入った紅茶を口にしながら、通常と全く変わらない雰囲気を醸し出している。
せめて使徒である御三方の誰かしらがいればいいのだが、こういう

時に限って誰もいない。珍しいことだ。何か用事でもあるのだろうか。

……だが、いなくて良かったかもしれん。話題を考えると……。

使徒の方々が知っているかどうかは解らないが、そのどちらであってもこの後の気まずさには変わりない。

やはり、さっさと言うべきだろう。言わねばならないのなら躊躇っていてもしょうがない。

「その、ご報告の件――あ、いや、議題に上がっていた戦略目標に関する件なのですが……」

「ああ。もう決まったのか」

「……はい。一応選択肢が幾つか……ただ、そのことで少し、ご許可と言いますか、お尋ねしたいことがありまして……」

「……？　ああ、別に構わない。話せ」

さすがに前置きが長い上に、様子がおかしいことを悟ったのだろう。レオンハルトが僅かに眉をひそめる。そのことに緊張が高まるも、

……ええい、ままよ！

リーは意を決してそれを口にした。

「今更口にするのは憚られるのですが……その、戦略目標の大国に……例の国が挙がってまして――」

「――何？」

言うと、やはりというべきか彼の表情が強張った。

レオンハルトは少し――部下であるから手心を加えているのか――魔人としての剣呑な気を見せながら聞いてくる。

「……どういう訳だ？　あそこは――いや、その前に理由をきかせろ」

「は、はっ……その、バルカ大将軍の提案で、例の国が、隣国との開戦を間近に控えているとの情報が……」

「……続けろ」

「はい、その上で、両国の戦争後、勝利した方の大国に攻め込めば、戦いの後で疲弊した国を、楽に落とせるだろうと……そのような経緯で、この二国が戦略目標として上がっております」

「……なるほどな」
リーは静かに目を細めているレオンハルトの表情に、身体が強張るのを自覚する。
しかし最後まで魔物大将軍としての職務を全うするべく、言葉を尽くした。
「……地理、兵の質、得られるもの、その他様々な情報を精査した結果、大将軍らと会議に参加していた魔物将軍一同、有用と判断した次第であります」
「……」
言った。言い切った。
レオンハルトは険しい表情のまま黙り、顎に手を当てている。考え込んでいるのだろうか。
しかし、
「……ふー……そうか」
と、吐息一つで表情を戻し、落ち着いた様子を見せたレオンハルトはそのまま告げてくる。
「……理由は理解した。その有用性もな」
「……では……？」
ああ、と、レオンハルトが一つ頷いてみせる。
「一日だけ考える。明後日までには答えを出そう」
「一日、ですか……」
口に出してから、その声に少しばかりの落胆の色が混じったことを後悔する。
「……不服か？」
「！　い、いえ！　そんなことは決して！」
やや鋭い視線で短い声を飛ばしてくるレオンハルトに、慌てて否定を返す。
しかしレオンハルトは、すぐに表情を戻すと、目蓋を指で揉み解しながら息を吐き、
「……悪いな」
「え？」

不意の謝罪に間の抜けた声を出してしまうも、レオンハルトは気にした様子なく、
「少し整理したくてな。明日一日考えて、それで結論を出そう」
「は、はっ！　畏まりました！　では――」
「ああ、書類はそこに置け。目を通しておく。今日のところは食事を摂ってから帰るといい」
「……了解しました。……その、レオンハルト様は――」
「……何だ？」
「……あ、いえ、何でもありません」
続く質問は喉元までいって、しかし口に出せなかった。腰を上げ、立ち上がると深々と頭を下げ、
「では、失礼致します」
「ああ」
同じ様に立ち上がり、目線を切りながら応答するレオンハルトに再び頭を下げて退出する。
部屋から出る前、最後に見えたのは背中を向けて窓の外を見るレオンハルトの姿であり、
……やはり……そういうことなのだろうか……。
思ったよりあっさりとそれを飲み込んでくれはしたが、微妙に葛藤があるような気もする。
作戦の判断に一日二日程度の時間を置くのは無いことではない。難しいものであれば再び会議をすることもある。今回はレオンハルト自身、会議に出席していなかったので、書類を確認しながら判断する時間も必要だろう。
しかし数百年間、魔軍参謀として冷静かつ優れた判断を見せてきた魔人レオンハルトにしては、合理的な判断以外の感情が、垣間見えた気がした。

その日、魔人レオンハルトは何をするでもなく、執務室で一夜を過ごした。

食事も睡眠も夜の営みも、その日は気分が乗らない、考えたいことがあるからと拒否し、執務室でひたすらに考え込む。
キャロルやペールは軽い心配と疑問を覚えながらもそれを了承し、しかし明るい様子で世話をしようとしてきたが、それをやんわりと拒否する。起きているのは構わない。何かあれば呼ぶから待機していろ、と命令を出して。主が起きているのに寝ることも出来ないだろう。そんな使徒としての立場もあるだろうし、何より、心配しなくていいから寝ていろ、部屋には入ってくるな、と言えばあからさま過ぎる。余計に心配をかけるだろう。
なので余裕をもってそう使徒に命令を出した。ケッセルリンクは数日前に城を出たのでここにはいない。今頃、試行錯誤しているのだろうか。そっちの心配もあるが、彼女なら必ず良い方向に向かってくれるだろう。何かあれば助けにはなるがそこまで心配はしていない。問題は自分の方で、
「……どうするかな……」
レオンハルトは、執務室のソファに腰掛け、足を組みながら額に右手を当てて考え込む。
こうやって考え込むことは最近になってからはそこまで珍しいことではない。色々有り、体制が変わってからは考えることも多いのだ。
しかし、それは長くても一時間程度。大体は数分から数十分程度の時間だ。夜が明けるまで考え込むというのはない。
それはやはり、故郷のことであるからだろう。
テーブルの上に置かれた地図、そして大将軍が置いていった会議の報告書を眺めながらレオンハルトは思う。
視線の中心には、地図。魔軍の領土に隣接する巨大な国家が記されてる。
人間の国家としては最古。そして最大の領土を持つ覇権国家。それを見てレオンハルトは、ふっ、と鼻で笑うと、
「まさか、ここまでデカくなるとはな……わからねぇもんだ」
自分が魔人になる際に、手出しをさせないことを条件に出した。

契約は結ばれ、その集落は今日に至るまで魔軍は一切の手出しをしていない。
その恩恵があったおかげなのか、国を興し、発展を遂げてきた故郷。そこにはやはり、複雑な思いがある。
しかし、だ。そこが何物にも変えられない大切なものかと聞かれれば、それは違うと答える。
あれは自分にとって最後の責任。王として最後まで民を導けなかった責任と、自分が生まれ、育った場所を守るという義理と恩を返すため。
そして、良心によるものだった。
今ある自分の大切なものに比べれば大して価値のないもの。
今ある立場を考えれば、迷うことなく切り捨てるべきもの。
ましてや合理的な判断付きである。自分の心を納得させるだけの材料はとっくに揃っているのだ。
なのに、結論が出せない。
「……」
目の前にある書類を見詰める。
それはいわゆる――作戦許可書だ。
昨日に大将軍一同が纏めたもの。
戦争をする二つの大国に対して漁夫の利を狙い、果てはその全てを血に染めてしまおうという――そんな命令を出すもの。
無論、魔軍としては珍しいことではない。人間の国に攻め入ることなど今この時ですら世界のあちこちで起こっていることだ。
強いて言うなら、普段は完全に国を滅ぼすことはせず、ある程度の被害を与え終えれば、即時撤退。
数ヶ月から長くて数年。その地に居座り、魔軍としての脅威を与えつつその地にあるものを搾取する。
虐殺や掠奪については各軍の裁量に一任されるが、国が壊滅するほど致命的な傷を負わせることは許可されていない。脅威を与え続けることが重要なのだ。小国であれば数十年に何度かは滅ぼすこともあるが、魔軍が撤退し、そこに出来た空白地帯は時が経てば再びどこ

かの国が取り込むか、新しい国が興る。それほど問題にはならない。
しかし、今回は事情が違う。今回は、魔王ナイチサの勅命。初めての大規模攻勢だ。
新たな魔王の恐怖を人類に刻みつけるため、大国を血に染める。
ゆえに今回は完全に滅ぼす。目的はこの地に地獄を作ることだ。
理解は出来る。私人として虐殺は趣味ではないし、別に人間を進んで苦しめようとは思わない。助けられるのなら助けるだろう。
だが魔軍参謀として、魔人の最高位である魔人筆頭としては、この作戦が合理的なものであると既に認めている。
魔人として、この命令は絶対。自分も了承したものだ。
だから後は、この書類にサインを入れるだけ。そうするべきのはず。
今まで何度だってやってきたし、覚悟はしていた。今更この程度で躊躇することはない。
「……くそ」
なのに――ペンが動かせない。
頭では理解しているというのに。
故郷など、今更何の価値もないはずなのに。
自分には未だ、故郷を血に染めたくないと感じるだけの思い入れが、残っているとでも言うのか。
「どうする……？」
再びペンを置いて考え込むも出てくるのは同じ結論。
こうするのが一番楽に命令を遂行出来るという結論。
苦労する方を選ぶはずもない。
何せ、それで犠牲になるのは自分の部下達だ。
負けることはないが、戦争をする以上、犠牲は必ず出る。そこは躊躇いを覚えない。シビアだが、戦う以上はどちらも死ぬ。戦士としての心構えであり、当然のことだ。
しかし責任ある立場として、下の者たちを動かす以上。戦争をする以上は最善の結果が出るように動く。
それこそが、上に立つ者の責務だ。

敵に情けをかけた結果、味方に被害を出すなど笑い話にもならない。
それでもエゴを出すというのなら、堂々と恥じることなくそれを行うべきだ。分かった上で本能のまま、やりたいことをやるというのも、上に立つ者に許された権利。
そこに後ろめたい気持ちを覚えてはいけない。堂々とエゴを通してこそ、下の者達が浮かばれる。
だから自分に付いてくる者達が大勢いる。自分に従いたいと頭を垂れる者達がいるのだ。
魔王の配下として、大勢を支配する魔人として、そのバランスさこそが肝要。事実、ここまで結果を出せているから、自分はここにいる。
その自分の経験と判断が、これに署名すべきだと訴えている。
乗り越えろ。必要な犠牲だ。こんなことはこれからも腐るほどある。こんなことで一々逡巡するな。たかが、過去の故郷である、という一点だけで、周りを不幸にする必要はない。
その一点。その一点が――
「――レオンハルト様――！」
「――あ？」
と、不意に扉から音が聞こえた。
それは扉をノックする音と、外側から聞こえる声――キャロルのものだ。
「どうした？」
「はい、レオンハルト様にお手紙が着てますの！」
「手紙？　……とにかく入ってこい」
レオンハルトは怪訝な顔をしながらも、キャロルを部屋に招き入れる。
「失礼致しますわ！　おはようございます、レオンハルト様！」
「ああ、おはよう。で、それが手紙か？」
キャロルの手に握られた白い封筒に視線を向けて言う。キャロルが朝だからか、普段よりも元気よく声を上げ、
「はい！　お手紙ですの！　街の魔物兵が見つけて届けてくれました

わ！」
「……街の？」
「はい！　何でも、その魔物兵は前線から来た別の魔物兵から渡されたそうですわ！」
魔物兵からの手紙。そう判断するがぶっちゃけ意味が分からない。
というか、
「誰から、とは言ってなかったのか？」
「それが言ってなかったようですの！　ただ、宛名がレオンハルト様だったので慌てて持ってきたそうですわ！」
「……よく分かんねぇな。――とりあえず」
レオンハルトは胡乱な物を見るような視線を向けつつも、とりあえず便箋を開いた。
……随分と上質な紙だな。
ひょっとしてケッセルリンク。もしくはカミーラからだろうか。
いや、大穴でナイチサという可能性もなくはない。こういう貴族的な回りくどいやり取りも好きそうだ。
そんなことを考えながら手紙を開く。すると、
「――――」
そこに書かれていた文面に、目を疑う。
キャロルが首を傾げて、
「レオンハルト様？　誰からでしたの？」
「……」
「レオンハルト様？」
キャロルの声にも反応出来ず、ただ無言で手紙に目を通し続けた。
しかし、やがてその全てに目を通すと、
「――ざけんじゃねぇぞ」
「え？」
小声で悪態をつく。
そして立ち上がると、
「――少し出てくる」
「はい！　……って、どこにですの？」

「……ちょっと、手紙の送り主のところにな」
安心しろ、と。
「すぐに戻る」
「！　……はい！　いってらっしゃいませ！」
「ああ」
キャロルがこちらの表情を見て一瞬何かを察するも、その上で快く送り出してくれる。そのことをありがたく思いつつ、レオンハルトは執務室の窓を開いて中庭に飛び降りた。
その手には彼の憤りを形にしたように、ぐしゃり、と握り潰した手紙があった。

草原を行く一人の影がある。
それは額の青いクリスタルと長耳が特徴的な美人であった。
広々とした大地を進みながら、魔人四天王の一角――ケッセルリンクは息を入れる。
「……もうこんなところまで来たのか……」
地図を見ながら疲れたように言うも、実際に疲れたわけではない。体力的には余裕あるものである。
だが、精神的には少し疲労を感じる気がする。
……もう三日も経つな。
レオンハルトに励まされ、その翌日に城を出てから三日。ケッセルリンクは目的を持って彷徨っていた。
それは自分で納得してのことであったが、それでも一人で来たことに対する新鮮さと不安がある。一人旅など、一度としてしたことがない。
いつも誰かしらと一緒であったからだ。プライベートであれば身内がいるし、仕事であれば魔軍の面々がいる。
しかし今は完全な一人。これがレオンハルトと二人とかであれば楽しいのだろうが、一人だと、
「……寂しいな」

やはり誰かといることに慣れた所為か、一人だと心に穴が空いた様だ。
ただでさえ、最近はレオンハルトの城に泊まってばかりであったので余計にそう思う。あの城と、街の賑やかさが懐かしい。
「……はぁ……」
らしくもない溜息を吐いたその時だ。正面から声が聞こえたのは、
「――こんなところで、何をしているのですか。ケッセルリンク様」
「む……」
見ると、突然その場に現れた黒い髪の女性が、膝を突いた状態で声を掛けてくる。
その口調は、おおよそらしからぬ丁寧なものであり、
「旅に出たとは聞きましたが、そのように溜息を漏らしていると――」
「……始祖様に敬語を使われると、やはりむず痒いですね」
「――あ、やっぱり？」
と、そこで立ち上がったのは、ケッセルリンクとしても馴染みある元カラーの女性。
レオンハルトの使徒であるハンティだ。彼女は、先程の自分の様子が可笑しかったのか、歯を見せて笑い、
「いや、あたしの立場としてはこれが正しいはずなのに、敬語を使ってみると変な顔されるんだよね」
「私としても、慣れねばいけないのですが……未だペールともども、始祖様と呼んでしまう始末で」
「まあ……他の魔物がいる時じゃなければいいとは言われてるけどさ。正直、主の魔人に対しては結構フランクな使徒もいるっぽいし、レオンハルトにだけは普通でいいかなって思うんだけど、どう？」
「ふむ……。しかし、様付けだけはしている様な……」
「じゃあ――〝レオンハルト様、パン買ってきて〟、みたいな感じでどう？」
「……パシリですか」
「面白いでしょ？」
冗談めかして言うハンティの姿に、自然と笑みが溢れる。

実際にやったら周りの魔物兵らは卒倒するのだろうな、と思いながら、
「フッ、中々に面白いですね、それは」
「まぁ、実際にやったら物凄い反応返ってきそうだけど――って、そうだ。忘れる前に……はいこれ」
途中で何かを思い出した様に、懐に持っていた布を渡してくるハンティ。
それを手に取りながら、
「……これは？」
「フード。様子見ついでに、持ってなかったら渡しておこうと思って」
「……必要なのですか？」
疑問に思ったので言うと、ものすごい微妙な表情を返される。溜息付きで、
「……いやいやいや、そのまんま人間の街入ったら怪しまれるから。存在感あるし、そもそも見た目カラーだし。あんまり目立ちたくないでしょ？」
確かに、と納得する。
何となく大人しくしてれば大丈夫だろうと思っていたが、冷静になって考えてみるとこっちのほうが確実だ。ありがたく受け取らせてもらう。
「感謝します。始祖様」
「いいって。……それより、使徒見つけるんだって？」
と、ハンティがこの旅の目的を口に出してくる。
ケッセルリンクは頷き、
「……はい。少し思うところがあるので、探してみようかと」
「んー……まぁ、頑張ってね。……というか、どうせ使徒になるならそっちの方が良かったなぁ……」
「……それは……何とも……」
「あ、いや、冗談だけどね。とっくに納得してるし」
微妙な気持ちを察してくれたのか直ぐ様冗談だと言うハンティ。
そして気を取り直して、

「ま、何もないとは思うけど気をつけてね。ここをもうちょっと行ったら人間の国に入るから」
「はい。わざわざありがとうございます」
頭を下げてお礼を言う。顔を上げると、ハンティは苦笑しており、
「……こうやって畏まられるのに慣れてるあたしの所為でもあるのかなぁ……」
「……それも何とも言えませんが」
だよね、と納得するハンティに微笑を向ける。しかし、
……もうすぐ人間の国か。
考えてみればカラー時代も森から出たことがなかったため、プライベートで立ち寄るのはこれが初となる。どこかに良い使徒候補が見つかってくれればいいのだが。
そう思い、ケッセルリンクはハンティと別れ、人間の国に足を踏み入れた。

変わらない故郷

王国の首都。大理石やガラス、金や銀、赤く染色された高級繊維で出来た絨毯など、数々の調度品が並ぶ豪奢な宮殿。
その中にある執務室の一つに、国王と姫はいた。
周囲には、宮殿を警備する王国騎士団の精鋭があり、短い髭と小太りの身体を持つ王国大臣。細身ながらも鍛えられた体躯に、整った容姿を持つ王国騎士団団長。カールされた髭にパーマされた髪を持つ中年である公爵家当主と、錚々たる面子が揃っていた。
そんな中にあって、国王である父の隣に腰掛ける第一王女――シャロンはただ黙ってその話を聞いていた。
「――陛下。やはり、国内の緊張が高まっているようです」
「そのようだな」
そう声に出したのは大臣。頷く父の反応を見ながらも、その語りは続き、
「市井にも、戦争の気運が高まっていることに気づくものはいますからな。耳聡い商人や冒険者などは既に戦争に合わせて金を稼ごうと入国するものが多いそうです」
「ふっ、何とも良い事だな」
戦争になれば物資を売りつける商人や、各地で転戦を繰り返している冒険者という名の傭兵はいい稼ぎ時だろう。しかし、真に潤うのはこの国である、と父はほくそ笑む。
「物資を今の内に買い叩いている商人は大損をこくでしょうなぁ。戦争が起こらないと知った時の彼らの表情が楽しみでなりません」
と、揉み手しながら言ったのは公爵。その声に待ったを掛けたのは騎士団団長であった。
「しかし……それもかの者が来なければ――」
「来るとも」
遮るように言った父の言葉に、騎士団長が言葉を止める。続けて言うのはその手に古ぼけた書物を握った父で、
「かの魔人は来る。奴はこの国を守るために、魔人へと身を移したの

だからな。祖国の危機を聞いて駆けつけないわけがなかろうて」
奴が来れば我々の勝利だ、という父の機嫌は良い。しかしその言葉に思うところがあるのか、騎士団長は、ですが、と前置きを入れつつ、
「かの魔人がいなくとも、我が勇猛たる騎士団がいれば――」
「無論、我が国なら勝てるであろうな。……だがまあ、楽に済むならそれに越したことはないであろう？」
「……はい」
言って気勢が落ちる騎士団長を見て、父は口を開けて笑う。
「はっはっは！　何、そう落ち込むでない。そのような顔をしていては女達も悲しむであろう？」
「……そう、ですな」
同意を返した騎士団長だが、その表情は芳しくない。整った容姿と王国最強の武勇を誇る彼は、父から選りすぐりの美女たちを送られている。女達、とはそのことを言っているのだろう。
もっとも、この国で要職に就く者達の間では珍しいことではない。比喩ではなく、金を浴びるほどに持っている王家では、自分達だけではなく、仕える者達にも過剰なまでの贅沢をさせる。妻ではない愛人が複数人もいるのは珍しいことではないし、宝石や貴重な品々、望むのなら人間さえも手に入れることが出来る。金で買えないものはない、とは父や大臣の弁だ。
第一王女である自分もその恩恵を受けているからあまり強くは言えないが、さすがにどうなのだろうと思うことがある。結局は口に出すことなく終わるのだが。
微笑を浮かべ、思考を回す間も話は続いている。父は大臣、そして公爵に顔を向け、
「しかしまあ、念には念を入れておかなければな。大臣よ、歓待の用意は済ませておろうな？」
「はい、それは勿論。最高級の食材と最高の料理人、現金から換金出来る宝石などの金品、国内国外問わず集めた珍しい品々、１０代から３０代までのありとあらゆる美女、美少女を集めました。貢物はこれ以上ないというほどに用意しております」

「私も、微力ながら用意させて頂きました」
「うむうむ、それでよい。祖先が消し去ったとはいえ、始祖の英雄を迎えるのだからな、失礼があってはならんぞ」
「心得ております」
　大臣や公爵の言を聞いて満足そうに頷く父の顔は、優しげだが黒い。このような手法は父――いや、祖父も得意としていた。下の者からは力と財力を背景に搾取し、見所のある者には惜しげもなく金を使う。一見、聞こえの良いことではあるが、その際に犠牲になる者達を思うと素直には喜べない。
「だがまあ、早めに来てくれれば良いのだがな。……一応、二通目をしたためておくか」
　と、父がメイドに声を掛けようとした時だ。シャロンはある反応を感じた。
　最初に感じたのは、微かな揺れ。次に見たのは、騎士団長が目を剥いてその銀の直剣に手を掛けたところ。
　次に聞いたのは、
「――な、何だ!?」
　父や大臣、公爵が宮殿の激震を感じて声を上げた。
　地震か!?　と慌てる複数人の警備の騎士を騎士団長が落ち着かせ、父の身体を支える。
　しかし揺れは次第に収まっていく。
　代わりに聞こえたのは、外から聞こえる人の叫びで、
「だ、団長っ!!」
「何事だ!?」
　執務室の扉から飛び込む様に入ってきたのは、部屋の外を警備していたであろう騎士の一人。
　ノックもなく入ってきた騎士に、しかし緊急時であることからか咎める声はない。騎士団長が直ぐ様事態の把握に動く。騎士は叫ぶ様に、
「そ、外に――宮殿の外に！」
「落ち着け！　宮殿の外に何が――」

と、騎士団長がバルコニーに続く半透明のガラスから外を眺め、しかし絶句した。
同じ様にそちらに目を向けた父や他の者もそれを見て目を見開く。
そこにいたのは、
「――――」
ドラゴンだ。
宮殿の敷地内、広大な中庭に降り立とうとする白のドラゴンの姿がある。
しかも伝え聞く通常ドラゴン――数メートルのサイズのそれとは違い、そのドラゴンはその十倍はありそうな巨体、そして光り輝く白の鱗を持つ。
まるでお伽噺の絵本から飛び出してきたような白の巨竜の上に立っていたのは、同じ様に伝説の存在であった。
「あれ、は……」
声を震わせる。間違いない、と。この国の王族、古くからそれを伝え聞く重臣であるならその姿を見間違う筈もない。
「お――おおおおお!?」
父が興奮したように声を張り上げ、バルコニーへと身を乗り出させる。
ドラゴンの上にいたのは、黄金の髪に赤い瞳を持つ一人の男だ。
「……」
冷たい瞳でこちらを見下ろす、人ならざる気配を持つ者。
黒と赤が入り混じったその長衣を身に纏った、眉目秀麗という言葉に相応しい男。
しかしその鋭い瞳だけが、見る者を威圧させる。
その全てが伝え聞く通り。
人類最強の剣士と謳われ、魔軍を幾度となく撃退し、この国に平和と繁栄を齎した始祖の英雄。
その代償として魔へとその身を落としたその男の名は、
「剣の王――レオンハルト」
または――魔人レオンハルト。

その姿を見て、国王である父は興奮したように言う。
「ふ、ははははは!!　見ろ、お前達!!　来たぞ来たぞ来たぞ!!」
シャロンは父の声を遠いものに感じながら、国の始祖を仰ぎ見る。
その瞳はとても冷たいものであり、
「ははははっはははは!!　勝ちだ!!　我が国の勝利だぞ!!」
父が言う勝利を本当にもたらして、いや、そもそもこの国を想っているのか疑問に思ってしまう。
そんな中、父は周囲に向かって言い放った。
「こうしてはおられん!!　お前達、今すぐ歓待の準備をせよ!!」
「は、はっ!　直ちに!」
「何としても協力させるぞ!!　はは、ははははは!!」
しばらく、父は中庭に降り立つドラゴンと魔人を見て笑い声を宮殿に響かせた。

昼前の日差しの下、宮殿の中にある応接間でこの国の国王である男は客人を迎えていた。
長いテーブルには数々の料理が並べられる。給仕達は料理を運ぶ際、自分の正面にいる男を見て一瞬、身体を硬直させる。
そこに腕を組んだ状態で座っているのは、
「……」
――魔人レオンハルト。
元人間、この国の始祖ともいえる魔人であり、圧倒的な存在感と鋭い目を持つ美丈夫。
その黄金の髪も、鋭い瞳も、先祖代々から伝わるこの書物に記された通りであり、
……よくぞ、来てくれた……!
と、柄にもなく内心で感動してしまう。
しかし目的は彼にそれを飲ませること。既に手紙を読んでここに来た以上、それは確定だろうが用心しておくに越したことはない。
国王はにこやかな笑みを向けながら、テーブルに並べられた料理を

指し、
「我が国自慢の最高級の食材と最高の料理人が作った絶品料理です。ささ、お召し上がりください」
「……ふん」
ただ鼻を鳴らすだけの応答を見せた魔人に、しかし国王は苛立ちを見せない。
彼が無愛想であったという記述は確認している。気難しい人物なのだろう。苛立ってはいないはずだ。
「はは、しかしレオンハルト殿なら既に食しているかもしれぬな。何せ我が国出身の魔人。しかもあの剣の王だ。贅の限りはとうに味わっておりましょう」
「……」
魔人がこちらを一瞥する。しかしすぐに視線を料理に戻すと、目の前にあった料理を、食器を使って一口。
「……随分と、良い物を食べているようだな」
言われた言葉に一瞬戸惑うも、直ぐ様褒められていることを理解する。
「勿論ですとも！　我が国は人類最大の――いえ、最高の国家です！　ここには何でもありますぞ！」
「……よく喋るな」
お喋りは嫌いか、と思うも魔人は懐から白い紙を取り出し、
「……まあいい。この手紙の件だが――」
「お読みになられましたかな？」
「……この手紙、どうやって俺の元まで届けさせた？」
問われた言葉に、国王は簡潔に答えた。
「冒険者を雇って、届けさせました。どうにも魔物界に潜入する際によく使われる方法があるらしいのですよ。しかし、それでも危険は伴うので高い金を払いましたが……まあ、その甲斐はあったというものです」
「……そうか」
言うと魔人は、考え込むように黙り込んでしまう。その方法とやら

を考え込んでいるのだろうか。それとも、手紙の内容について考え込んでいるのか。このままでも上手くはいきそうだが、

……念には念を、か。

国王はそこで用意しておいたそれを差し出すこととした。

「……では、わざわざ来てくださったレオンハルト殿のために、私から贈り物があります。少ないですが、お納めください」

ぱんぱん、と手を叩いてそれを呼び出す。すると部屋の扉から、十人以上の見目麗しい少女達が姿を表し、レオンハルトの傍に並ぶ。

それを確認してから、国王は声を飛ばした。

「国内外から集めた、選りすぐりの女です。どうぞ、持ち帰ってください。――お前達、挨拶しろ」

「よろしくおねがいします！」

揃って頭を下げる。その際に、胸元の果実が揺れ動く。

「……」

魔人は、その頭を下げ、胸元から深い谷間を覗かせた女達を見て目を細める。それを確認して国王は、手応えを感じた。

……どうだ、そそるだろう？　お前の好みはわかっているのだ。

祖先の遺した手記であるこの書物には、剣の王、レオンハルトがどの様なものを好み、どのようにして飼いならしたかも詳細に書かれている。

レオンハルトは戦いと女遊びに明け暮れていたが、取り分け巨乳の女が好みであり、宮殿には数十人もの巨乳美少女を用意した――と記されている。

ゆえに今日の為に国王は用意させた。国内外から多少強引に。

というのも金や食料に困った民は腐るほどいるので、少し金をちらつかせてやれば、娘を売るものなどごまんといる。なんなら自ら進んで志願するものもいるくらいだ。生きる術を持たない女は、その身を売ってでも生きようとする。それが貴族や高貴な人物の元であれば少し身体を売るだけでいい暮らしが送れるのだ。

今回は魔人相手であり、金を多く、少し無理矢理な形で徴収したものもいるが――まあ、許容範囲であろう。国の為だ。我慢して魔人の

贄となってもらう。
「さあ、何をしておる。レオンハルト殿に奉仕せぬか」
「っ……はい。失礼します……」
躊躇しているようだったので軽く睨みながら催促してやると、やがて少女達は動き始めた。
ためらいがちに魔人の身体に触れようとする。やはり恐怖があるか。何人かは手が震えている。しかし何人かは意を決して魔人にゆっくりと身体を押し付けた。豊満な胸が押し当てられるところを確認し、
「お気に召しましたかな？」
「……」
魔人は無言のまま、何の反応も返さない。
しかし悪くは思われてないだろう。瞳を閉じたままの魔人に向かって話を進める。
「……ではですね。手紙の内容のことなのですが――よろしいですか？」
「……隣国を滅ぼせと？」
国王は大きく頷いた。
「左様です。手紙にも書きました通り、現在我が国は、隣国との開戦を控えておりましてな」
それは事実。結婚を断られたから、などとふざけた大義を掲げて攻め込んでこようとしている。
馬鹿な国だ。こちらには切り札があるというのに。
「しかし国民を危険に晒すなど、言語道断でありましょう？　そこですね、レオンハルト殿には魔軍を率いてかの国を滅ぼしてほしいのですが……」
「……滅ぼして……どうする？」
「かの国が滅びれば、我が国はさらなる繁栄がもたらされるでしょう。それは、レオンハルト殿とて望むところのはず」
「……だから？」
だから。そう、国王は言ってやった。

「一緒に我々の愛する故郷を守り、この地に偉大な国を残し――共に歴史に名を残しましょう!!」
「――――」
魔人が絶句するのを、国王は見た。
それは、驚愕。それも喜びから来るはずのもので、
「……クク」
響いた含み笑いはそれを意味するはず。
「クク、クハハハ、ハハハハハハ……」
その笑い声は、こちらに同調したもののはず。
――そのはずだ。
「クハハハハハハ――ッ!!」
口端を歪めた高笑い。
それを聞いた者達は何事かと、眉をひそめさせる。
女達も、不意に笑いはじめた魔人の姿に動きを止める。
顔を抑えてひたすらに笑い続ける。その笑みは止まらず、
「クク……腹が痛ぇ……どこまで笑わせる気だお前ら……!」
「な……何……?」
その異様な雰囲気に満足に言葉を紡げない。
だが魔人はそれにも構わずひとりでに語り続ける。
「何も変わってねぇ……何も、何一つ……やり口も中身も……四百年経とうが何一つ変わってねぇな、クク……」
魔人は頭上を見上げながら言う。宮殿を見渡しながら、
「外面がどれだけよくなろうが……中身は四百年前のまま……いや、退化してるのかもな……」
その姿は、笑いながらも、どこか嘆きの感情が垣間見え、
「俺は、こんな国を守ったのか……俺がアイツとともに守り続けた国は……ここまで落ちたのか……」
そして何より、
「懐かしすぎて涙が出そうだ……ああ、ほんとによ……情けなくて、笑えてくるぜ……!」
その表情に、怒りが見えた。

「テメェら……俺をどこまで舐め腐れば気が済む」
なあ、と、
「聞いてんのか、ああ――ッ!?」
「――――ッ!!」
瞬間。
魔人の身体からとてつもない濃度の殺気が放出され、周囲の者達は顔を青くさせた。思わず、警備の騎士達が剣に手を掛ける。女達はその場にへたり込んだ。
「……はっ、こんな時代遅れの国が……よくここまで――いや、俺の所為か」
周囲を一瞥することなく独り言を呟いた魔人に対し、国王は何とか声を絞り出した。
「い、一体、何を……？」
「あ？　決まってるだろうが」
と、魔人はつまらなそうなものを見るような目で、
「――帰る」
「は……は？」
意味が分からず間の抜けた声を上げる。
しかし魔人は再度の声で、
「もう俺は、この国から手を引く。人間の国同士の戦争も……俺達との戦争も、自力で何とかするんだな」
その言葉を頭で理解するのに要した時間は、一瞬では済まなかった。
国から手を引く。人間との戦争。そして、俺達との戦争を自力で。
それはつまり、
「――!?　お、お待ちを!!」
国王は気づいた瞬間、必死に声を張り上げ魔人を呼び止めた。
「見捨てるのですか!?　我が国を！　あなたの故郷を！　歴史に名を残すチャンスなのですぞ!!」
「はっ、歴史に名を残すね……」
魔人はそれを聞いて、鼻白むと、

「今更何を言ってやがる。この俺を、自国の歴史から抹消したのは他ならねぇ――お前達の祖先だろうが」
喜べ、と、魔人は笑う。
「その歴史が〝真実〟になるだけだ。この国と、俺――魔軍は何の関係もねぇってことだ」
言って立ち上がる魔人。その足は、扉の方に向かっており、
「でもまあ、良かったな。お前の方は歴史に残ると思うぜ？　――この国の、最後の王様としてな」
「――な、な、な……！」
国王はそれを聞いて声を震わせた。
そして考える。どうすれば魔人を引き止められるのかを。
しかしそれは思い浮かばず、ゆっくりと扉に足を進める魔人を止めるため、講じた手段は、
「な、何をしておるお前達!!　今すぐそいつを引き留めよ!!」
「っ、は、はいっ……！」
怯えながらも、騎士達が剣を抜いて扉に立ち塞がる。その中には騎士団長もおり、
「今すぐ、席にお戻りください……！」
「……ほう？」
しかしそこで魔人は、何かに気づいたように目を向けた。
それは、騎士団長が持つ銀の直剣。我が国の宝剣であり、
「懐かしい剣を持ってるな」
「っ……これは……私の誇りです……」
「……ふん、本当にそうならいいがな。……しかしお前ら、なってねぇな。四百年戦争も碌にやってないと、こんなにも情けなくなるのか？」
魔人は騎士達を見てそう評する。
確かに、騎士達は訓練で見るそれとは違い、魔人を目の前にした重圧からか、死の恐怖で足が竦んでいる。騎士団長でさえ、気勢がいつもより衰えており、
「魔人を目にしただけでこのざまか。言っとくが、お前ら以外のどの

国も、この程度は珍しくともなんともない。魔軍と戦い、ときに魔人と相対するのはよくあることだ」
　こんなことはよくあることだ、と魔人は冷めた視線で騎士達を見下す。騎士達は声を出すことすら出来ない。立って、剣を構えるだけで精一杯。しかも剣の構えも酷いものだ。
　その中で、騎士団長だけが一応形にはなっており、
「我が国の、騎士達を……馬鹿にするな……！」
「つまらない意地だな。……だがまあ、お前ら分かってるのか？　剣を抜いたってことは、もういつ襲いかかられても文句は言えねぇぞ？」
「――――」
　と、瞬間だ。
　騎士達の動きが止まった。
　騎士団長だけが何が起こったのか、と疑問を頭に浮かべて警戒している。
　そして、
「――弱いな」
　という声とともに、
「……っ、あ……！」
　騎士達の首がするりと落ちていく。
　それを、部下達が一瞬で殺された場面を、騎士団長は、呆然と見ていた。
　その切り口は鮮やかで、寸分違わず同じところを斬られている。
　しかし、魔人は剣を手にしていない。
　いつ斬ったのか、それは戦闘を生業とするはずの騎士団長でもどうやら見えておらず、
「ひっ、あ……」
　圧倒的な格の差を目の当たりにし、腰を抜かしてしまう有り様だ。
　それを魔人は、心底冷たい視線で見下ろしていた。
　だがやがて、その視線をこちらに向けると、
「全く……どこまでも俺を苛つかせるのが得意な奴らだな」

いいか、と。
「ここで滅ぼさないだけ、ありがたいと思え。しかもその上で準備だってさせてやるんだ。むしろ感謝してほしいものだな」
言う。もはやその言葉に声も出せない。
声を出せば殺される。その予感がある。重圧が胸を圧迫して声を出すことが出来ない。
「お前達が隣国と戦争している間は、手を出さない。せいぜい頭を使って考えるんだな――」
と、そこでレオンハルトは踵を返そうとし、しかし、床に座り込む女達を見て、
「そういえばいたな。……まあいい。心から付いて来たいって言うなら許してやるが？」
何ら期待もしていない表情で、魔人は言う。
その通り、魔人の凶行と威圧に身を竦ませる女達は言葉を発しようとしない。金に目が眩んだ者達も、さすがに生の魔人を前に付いていく勇気がある者はいないだろう。
だが、
「――っ……」
「！　ほう……？」
やがて、声が出ずとも、ゆっくりと手を挙げる少女がいた。
魔人はそれを見て感心したように、
「中々に見所がある奴もいるな。ふむ、付いて来るか？」
「……！」
こくり、と頷きを見せる少女。それを見て笑みを浮かべると、
「ならば自分の足で付いてこい。付いてこれないのなら置いていく」
言って、魔人は踵を返しはじめた。それを見た少女は傍らの良く似た少女に何とか肩を貸し、
「い、くよ……」
「……」
声を上げることも出来ない――確か姉妹の妹の――少女に手を貸しながら、ゆっくりとだが魔人の後に続こうとする。血迷ったとしか

思えない。あの怖ろしい魔人に自ら付いていくなど、ただの自殺行為だ。ただ死が待っているだけだろう。
だが、声を掛けることはしないし出来ない。あんな女どもはもはやどうでもいい。声を掛けて死にたくはない。
そして魔人は扉に手を掛ける。
「……ん？」
「あ……！」
しかし、扉の先には人が一人。
しかもそれは、国王がよく知る人物であり、
「……お前は……」
「あ、あ……」
第一王女であるシャロン。彼女が怯えた表情で床に腰を落としていた。
……部屋にいろと言っておいたはずだが……あの馬鹿娘め……！
おそらくは覗き見していたのだろう。王家に伝わる剣の王の話は子供の頃からの語り草だ。興味が湧いたのであろう。
それがこんなことになるとは。自業自得だと思う。
だが、
「……名前は？」
「え……？」
何故かじっとシャロンの顔を見つめていた魔人は、不意に名前を聞いた。
その問いに、シャロンは戸惑いがちに、
「……しゃ、シャロン……です……」
答えた。それを耳にした魔人は、少し動きを止めたが、
「……そうか」
ややあって、再び視線を切って足を踏み出す。
その際、
「……精々、気をつけるんだな」
「……？」
そんな言葉を残し、魔人は去っていった。

魔人レオンハルトは、ライゼンに乗って空を行きながら、暫くの間無言であった。
背後には、連れてきた人間の少女二人がいる。見る限りどうやら姉妹のようだ。
姉妹という存在に縁があるよな、と思いながらも考えるのはそれじゃない。
先程、立ち去る際に見た王女の事で、
「……」
「……考え事か？」
「ん……」
眼下からライゼンが話しかけてくる。それに反応しつつ、
「まあ、な。……それより悪かったな。こんなことに付き合わせて」
「構わん。大切なことだったのだろう？　ならば付き合うのもやぶさかでない」
その言に笑みが漏れる。いつもこんな風に言うが、
「お前、結構付き合い良いよな」
「……勘違いするでないわ！　強敵が調子を崩してはつまらぬからな！　協力してやったまでのこと！」
ふん、とそっぽを向くライゼンに苦笑する。何だかんだ言って付き合ってくれるんだよな、と。そして思考を戻し、
……シャロン、か……。
レオンハルトは最後に見たあの少女の姿を記憶から引き出しつつ、息を吐いた。内心で作る言葉は、
……悪く思うなよ。
もうあの国に、躊躇う理由はない。
戦争が起きたのも、国家間での横暴な振る舞いが理由の様な上、民への扱いも悪いなんてものじゃない。
一部の農村を奴隷のようにこき使い、それによって得た食料を他国に高値で売りつける。

得た金でやることは強引な引き抜きや、賄賂などの数々。さらには国民への金貸しも行っている。
首都や中央の主要な都市に住む民は裕福な生活を送っているが、地方民――元は別の国であり、併合された地方の扱いは奴隷もいいところで、強引に働かせながらも税を払えない民に金を貸すことでそれを支払わせ、最終的に年頃の娘は金で売られ、その得た金すら税で徴収する。
ここに来る前に調べたところ、真っ黒だ。救えない。しかもこれを、都市に住む上級国民は当然だと思っている節もある。
……皮肉なものだな。俺が守ったものを、他ならぬ俺が滅ぼすことになるとは……。
そうして魔人レオンハルトは、二人の姉妹を連れて城に帰還した。
そして直ぐに――執務室に置かれていた作戦許可書にサインをし、魔物大将軍らに発令した。
――その一週間後、両国は戦争状態に突入した。

終戦と開戦準備

王国騎士にとって、その日は悪夢の一言に尽きた。

我らが王国、大陸に二つとない覇権国家である我が母国は、突然の戦火を強いられたのだ。

開闢以来、王国が王国となる前も合わせれば実に４００年振りの戦争。その原因である隣国の大義名分は、第一王女との婚姻を断られたから、というもの。

その大義名分は馬鹿馬鹿しいの一言に尽きる。それは建前であり、今まで王国への恨み辛みが募った結果に過ぎない。上層部の判断はそうだった。

そして、この時点で国内の誰も彼もが、思ったことだろう。――負けるわけがない、と。

勿論、隣国の国力も侮れたものではない。しかしそれ以上に、王国の国力が圧倒的だった。

単純に領土を比較しても二倍以上。国民の数もそれ以上。物資も潤沢、それこそ他国に売るほどにある。さらにいえば、魔軍との戦争を頻繁に行っている隣国と比べ、王国は前述のように四百年以来となる。

兵の数は――いや、全てにおいて、余力は有り余っていた。やはり負けるはずがない。

しかし、蓋を開けてみれば、

――蹂躙であった。

王国が、ではない。隣国が、だ。

圧倒的な数的優位を誇り、開戦したその戦争は、初戦から隣国の圧勝であった。

その理由は？　と聞かれれば、こう答える他ない。

個の質、そして何より――経験であると。

王国の兵は、戦争を知らなさすぎた。

最初にその恐怖を感じ取ったのは、隣国の兵が、必死の形相で突撃を掛けてきた時。

「うおおおおお!!　突撃イィ――ッ!!」
「ひっ……あ……!」
そこは死と隣合わせの地獄。
血で血を洗う闘争の中心。この世界では日常的に行われていること。
戦場の空気を初めて感じた王国の兵達は、揃いも揃って使い物にならなかった。
一丸となり、決死の覚悟で突撃してくる隣国の兵を見て、一兵士から将兵に至るまで、その気迫に呑まれたのだ。
訓練は受けてきた。戦いのやり方は知っている。レベルだって上げた。
しかし、戦争は誰に教えられることでもない。いや、幾ら教えたところで、実戦が欠落したそれは机上の空論でしかない。
数年単位での戦争を経験し、数十年もの間、幾度もの戦いを乗り越えてきたベテランがいる隣国と、四百年間、一度の戦争も経験してこなかった王国では、文字通りレベルが違ったのだ。
皮肉にも、圧倒的な国力と、その裏にある事情を背景に行ってきた外交政策の――その良し悪しは別として――結果が、実戦経験が皆無であるという、絶望的な結果をもたらしたのだ。
王国の兵はパニックとなり、戦場から逃げ出そうとする者で後が立たなかった。
残った兵も、初めて経験する戦場の空気に当てられ、体を震わせ、嘔吐し、やがて屍を晒す。
本当の戦いを経験してこなかった彼らはそこで初めて戦いを経験し、結果、死という高すぎる授業料をもってその地を去ることとなる。
そうして王国は、初戦に敗北した。
あるいは、その時点で敗北していた。
大半の兵を失い、物資を奪われ、国土を次々と踏み荒らされていくのを、上層部も含めた国民は、黙って見ていることしか出来なかった。
数十万の国民が殺され、首都を包囲されたその時。
王国は敗北を認めた。

だが、その際に犠牲になった者がいる。
戦犯として、その矢面に立たされたのは、他でもない。
隣国が攻め入る原因となった第一王女――シャロンであった。

王国首都。
戦火にこそ包まれなかったその街だが、普段とは違い、陰鬱とした雰囲気が街中を覆っている。
その中心である宮殿には、他国の兵士が出入りしており、時折、荷車を使って何かを運んでいく。その中身の殆どはお金であり、王家が貯蔵している金庫から奪ったものだ。
それ以外でも、貴族の屋敷、街中で公然と掠奪や暴行が行われていた。
だが、隣国の軍をまとめる指揮官が街に着くと、ひとまずそれは取り止められた。
その日を持って、王国は王国でなくなる。代わりに隣国の一部となる。
国の重鎮や王族は揃って捕虜となり、牢屋の中で沙汰を待つのみ。
しかし国民感情に配慮し、第一王女だけが牢屋ではなく、外に出されることとなった。
それは戦争終結前に、国王が言ったとある発言が原因である。それが、
――第一王女が結婚を断らなければ、こうはならなかった。
国王は、隣国からの婚姻の申し出を断ったのは、シャロンの独断であったと供述した。
自分はそれを受けるつもりだったのに、シャロンがどうしても嫌だと言うので泣く泣く断ったのだと、訴えたのだ。
そしてその訴えに、王国の重鎮達も同調した。
自分達の説得に耳を貸さず、取り付く島もなかった。結婚なんてしたくない、と駄々をこねていたと。
無論、それは事実ではない。

シャロンが結婚に乗り気でなかったのは事実だが、隣国からの申し出を、釣り合わないから、という理由で断ったのは国王を中心とする国の重鎮達だ。
しかし例え真実がそうであっても、多くの民はそれを信じた。
シャロンは違う、そうではない、と何度も訴えたが、父である国王に叩かれ、嘘つき呼ばわりされた。その際の演技が迫真に迫るものであったのと、国民には善政を敷いていた国王の言葉というのもあり、それは真実とされたのだ。
かくして第一王女シャロンは、必死の反論も虚しく、ボロ布を身に纏い、手枷、重し付きの足枷を付けられ、王国首都であった街の広場で、〝晒し刑〟に処され、後に〝火あぶりの刑〟に処されることに決まった。
「……」
シャロンは、それを受けながらずっと思っていた。
何故、こんなことになったのか。
どうして、自分がこんな目に合わなければいけないのか。
「お前のせいでどれだけの人が死んだと思ってる?!」
道行く人から石を投げられた。違う、私のせいじゃない。
「しかも我が身可愛さに嘘までついて……この嘘つき王女!!」
殴られ、蹴られながら、嘘つき呼ばわりされた。嘘なんてついていないのに。
「へっ、国王様に申し訳ねぇと思わねぇのかよ……！　ほら、謝れ！」
大勢の男から暴行を受けながら、謝罪を強要される。謝る。謝るからもうやめて。
数日間。晒し刑は継続して行われた。
死なない程度に暴力を受け、身体に性臭がこびり付くほどに暴行を受けた。体の感覚がだんだんと無くなり、何かを考えることが億劫になった頃。シャロンは広場の中心にて磔にされる。
衆人観衆に見世物にされる中、火は灯され、足元から徐々に炎が燃え盛る。
煙で喉が、身体の内側が苦しい。熱さはまだそれほど感じない。

炎の中で、シャロンはただ自分の運命を嘆く。
どこから間違っていたのか、何が駄目だったのか、理解が及ばないまま、シャロンはゆっくりと意識を薄れさせていった。

――そして、
「……」
一国の姫が国民に怨嗟の声を浴びせられ燃やされる、その光景をじっと見詰めている者がいた。
フードを被った長身の女性の名は、ケッセルリンク。
人間の国を偶然訪れていた彼女は、何を思ったのかゆっくりとその姫に近づいていく。そして、
……酷いな。
近くで彼女の姿を見るも、目を背けたくなるような惨状に眉をひそめる。
このような光景はカラー時代。そして魔人となってからも見たことのある物であったが、この少女のそれは負けず劣らず酷い。
きっと何もかもに裏切られ、絶望した。でなければ、このような虚ろな目にはならないだろうと。
そしてケッセルリンクは半ば反射的に、心の中でつぶやく。
……助ける、か……。
あまりにも酷い仕打ちを目撃し、助けてやりたいと思う気持ちが先行するも、そこで一歩思い留まる。
助けはしたい。だが、この傷では炎の中から救ったところで既に満身創痍。助かるはずもない。
それでも助けるというなら、方法は無くもない。一つだけあるその方法を使えば助けることは出来る。しかし、
……彼女は、私の傍にいてくれる者になりうるのか。
寂しさを少しでも埋めるため。その目的の為に、わざわざ人間の国にやってきたのだ。それを、こんなところで、しかも彼女の意思も聞かずに決めてしまっていいのかと。

しかしこうしている間にも、彼女の命は刻一刻と終わりに近づいている。
なら、やはり、
「……私は……」
彼女が、自分の傍にいてくれようとするのかは分からない。
だがそれよりも先に、自分は彼女を、
「……」
と、思った瞬間、ケッセルリンクはその身を動かした。
磔にされた彼女を、一瞬にして炎の中から救い、人混みの中から退散する。処刑対象であった少女がいなくなったことで広場が騒然とするが、魔人四天王に名を連ねる魔人、ケッセルリンクの速度を、目で追える者はその場にはいなかった。

「――レオンハルト様ー？」
「……どうした？」
不意に使徒であるペールに声を掛けられ、魔人レオンハルトは瞳を見開いた。
そこは人類と魔物の世界の境界線。その手前にある丘であり、遠く見える街や村では火の手が上がっているのが見える。レオンハルトが故郷を見限ったこと――は、これに於いては関係ない。ただの人間同士の戦争の結果、故郷は隣国との戦争で、完膚なきまでに叩き潰されただけのこと。
それを眺めていたのを知ったペールは、少し微妙そうな表情で、
「ええと……あの、あっさりと負けちゃいましたね？」
「……そうだな」
本当にな、と思う。だがそれは、
「ひとえに弱すぎるせいだ」
「ですかねー」
ペールがあっさりと同意する。しかしレオンハルトの心の内では、別のことを考えていて、

……だが弱くなった原因は俺にある。
例え自分がここで助けていたとしても、これほどまでに弱く、愚かな国であれば遅かれ早かれ滅んでいただろう。しかもそれはきっと、自分がこの国を救った時から決まっていたことだ。どこから間違っていたのか、と問われればそこになるのだろう。その事に、どうにもやるせない感情を覚えながら、レオンハルトは鼻を鳴らす。
「……それで、ケッセルリンクとは連絡が付いたのか？」
「あ、そうなんです、そのことでお話があってですね」
と、ペールは予め報告しようとしていたであろうそれを、主に向かって言う。
「人間の街から出てきたケッセルリンク様を、工作員のライカンスロープが見つけたらしいのですが……それが、なんと――」
そこでペールはレオンハルトを驚かせようと、一瞬の溜めを作った後に、
「――ケッセルリンク様が、とうとう使徒を作ったそうなんです!!」
言った。その事実に、レオンハルトはほんの少し目を細め、
「……そうか」
「……あれ？　あんまり驚かないんですね？」
問われ、レオンハルトは息を入れる。再び遠くの街を見ながら、
「いや、驚いてるといえば驚いてる。ただまあ……使徒が出来るような気はしてたからな。ようやく来たか、って思うだけだ」
「まあそうかもですけど。……でも、どんな人か、とか気になりません？」
その言葉にレオンハルトは僅かに笑みを浮かべると、
「何、直に分かる。予想しても意味はない」
「そりゃーそうですけどー……なんか今日のレオンハルト様はちょっとシリアス気味ですね？」
「大きな作戦の前だからな」
そんなもんですか、と言うペールに、内心で言葉を作る。それは言ったこととは別の意味の言葉で、
……故郷が滅びたんだからな。感傷的にもなる。

しかもその要因の一つは、確実に自分のせいでもある。
起きる悲劇を敢えて見逃した、というのも後味の悪さの原因だ。
しかしケッセルリンクが使徒を作ったことは良いことだ。それがこのタイミングであることもちょうど良く、
「……それより、ケッセルリンクには伝えたか？」
「あ、はい。帰投命令は伝えたとのことです」
ペールの簡潔な答えに、レオンハルトは頷く。
「よし。なら、ケッセルリンクが帰って来次第、軍を動かすぞ。各軍に通達しておけ」
「畏まりました！」
言って、レオンハルトは背後に振り返る。
丘の下。魔物界側の大地には、群があった。
大地を埋め尽くすほどの、魔物兵の群れ。
それはまさしく、魔物の軍である魔軍。
その数実に――百万以上。
通常、人間の国を攻め入る時に使う軍勢の五倍以上の数がそこにいた。
彼らは作戦の開始を間近に控え、数日前から国境線での待機を命じられている。
しかもそこには、魔軍に所属する全ての魔人が参陣し、その使徒も揃っている。当然、魔物大将軍らも一緒だ。
そして極めつけは、
「――ふむ、ここにいたか」
「！　――はっ」
声を聞いた瞬間、レオンハルトは片膝を突く。使徒であるペールも無言で同じ行動を取る。
魔人筆頭兼魔軍参謀であるレオンハルトが、畏まるような相手は、この世に一人しかいない。
魔王ナイチサ。この世の絶対支配者にして絶望の体現者が、そこにいた。
ナイチサは丘の向こうに見える人間の街を一瞥すると、レオンハル

トに視線を向け、
「どうやら、卿らが考えた作戦、その前段階が終わったようだが……」
「はい。王国側の敗北に終わりました」
魔王の問いに、レオンハルトは簡潔に答える。
するとナイチサは顎に手を当てて、何かを思うように、
「……ふむ、ならば開戦も――」
「はっ、直に。ケッセルリンクが帰投し次第、二国――いえ、一国の領土に全軍で攻め込みます。その際には、ナイチサ様からも一言、号令を掛けてもらえればと思いますが……」
「構わん。家臣を激励するのも王の役目だ。……ところで、レオンハルトよ」
「何でしょうか？」
話を変えるように間を置いての質問に、レオンハルトは普段どおり応じる。
だがその質問は、普段どおり、というには些か踏み込んだ質問で、
「かの王国……卿の故郷だと聞いていたが、何か思うところはないのか？」
「！　それは……」
予想だにしない質問に、レオンハルトが一瞬怯む。
しかし直ぐ様気を取り直したレオンハルトに、ナイチサは再度、
「どうなのだ？　かつての祖国を滅ぼした感想は」
「……そうですね……」
問われ、レオンハルトは少し考える。
故郷が滅びた感想。それに感じる正直な想いは、
「……滅んで当然、といったところでしょうか」
「……ほう？」
その言葉にナイチサの表情に喜悦の色が混じる。心なしか、声にも。興味を持った証左だ。
変化に気づいたレオンハルトだが、そのまま続けて、
「何であれ人の上に立とうするならば、そこに〝力〟がなければ成り立ちません」

「国に力が無かったから滅んだ。至極真っ当な論理だな」
「かの国は外面だけは立派でしたが……その中身は酷いものでした」
さらに言えば、その外面すら自分との約定に支えられたものに過ぎない。そのような他力でしか成り立たない国であれば滅びるのが必然だ。
そう、だからこそ、
「……しかしお言葉ですが」
「む？」
レオンハルトは改めて発言する。
自分の意志を告げるように、
「祖国を滅ぼした感想を聞くのは、些か早すぎるかと。なにせ――これから滅ぼすのですから」
「……フ、フフ、なるほどな」
言うとナイチサは面白いものを見たというように笑う。
こちらの言に得心したのだろう、何度もそれを噛みしめるように笑みとともに頷くと、
「フフフ、なるほど……確かに早すぎたようだ。――ならばレオンハルトよ」
ナイチサはひとしきり笑うと、居住まいを正し、レオンハルトに向かって告げる。
それは滅びの宣告であり、魔王の命令であった。
「改めて命令する。かの国を完膚なきまでに滅ぼし、絶望を与えよ」
「……その命令、しかと承りました」
その言葉を最後に、ナイチサは踵を返し、陣へと戻っていった。
膝を突き、魔王への忠誠を示しながら、レオンハルトは心で思う。
それは、
……釘を刺されたか。
先程の発言の意味はそれだろう。こちらへの牽制であり、念の為に再度の命令を告げたが、どうやらその忠誠は認められたようで、しかし、疑問が残る。
……ナイチサは……どこで俺の話を聞いた？

かの国が魔軍に攻められていないことには気づけても、そこに自分が関係していることは見抜き様がないはずだ。
正確に言うなら、確信が持てないはず。仮に他の魔人や魔物将軍に話を聞いたとしても、自分が意図的に国を攻めないようにしている、と気づいたとしても、その理由が何なのかまでは分からない。
真実を知っているのは、今となってはガルティアやケッセルリンクのみ。絶対命令権で聞き出したのか、それとも――と、
……ん、いや……もしや……。
レオンハルトはそこで、あることに気づいて、そして眉間に皺を寄せる。そのことに気づけなかった自分に軽く苛立ちを覚えながら、
……しまったな。ただの鎌かけか……。
ナイチサは気づいてなどいない。
ただ、会話の中で何となく、そうではないのか？　と、言ってみただけだ。そしてそのことを、自分はただ普通に肯定して返した。気づくと途端に頭が痛くなる。
故郷を滅ぼすことへの感傷や、別の事に考えが言っていたこともそうだし、何より立ち回りとして、魔王に対して極力嘘をつかないようにしていたこともあって、そこに行きつけなかった。
……とはいえ、失態だな。
結果的にそれはナイチサへの忠誠を見せることとなり良い方に転がったが、これが別の部分で破滅に繋がるとも限らない。余裕が無かったから、なんて言い訳を死んでからしても遅いし意味がないのだ。
自分には目的がある。こんなところで躓いてはいられない。そのために、ナイチサへの忠誠を示している。その上で、自分の都合の良いように動く。
そのための一つは先程無事に成った。脳裏に浮かぶ一人の少女を思い浮かべながら、レオンハルトはそのことを改めて心に刻みつけると、
「……さて、ならば命令通りに動くとするか」
命令に反した行動を取るわけにはいかない。レオンハルトは立ち

上がり、背後のペールとともに丘を下りながら、
「開戦準備だ。ケッセルリンクが戻り次第動けるよう、最終確認を行うぞ」
「はい、了解です！」
人間の国を滅ぼすための行動を取り始めた。

光あれ

人類と魔物の境界線。
その魔物側の陣地にて準備が進む中、シャロンは薄れていた意識を徐々に覚醒させていった。
……ん……私、は……？
どうなったのだ、と思う。自分は確か、王国の首都であった街の広場にて、火あぶりに掛けられ、後は苦しみの中で死んでいくだけのはずだ。
それなのに今は痛みも苦しみも何もなく、ただ通常の肉体がある。健康そのものどころか、
……普段よりも、力が漲るような……。
生命力に溢れていると感じる。
しかし何がなんだか分からない。
ひょっとしたらここは死後の世界か何かで、自分は死んだからこそ、苦しみから解放されたという可能性もある。
しかし何にせよ、意識ははっきりとしている。ゆえにシャロンは自分がどのような状況に置かれているか確認しようと、ゆっくりと目蓋を見開いた。
するとそこには、
「……気がついたかね？」
「え……？」
眼前に、青髪の美女がいる。
長い耳と青いクリスタルを持つ美女であり、シャロンの知識の中にある、カラーと呼ばれる種族に合致するもの。しかしそれでいながら、通常の人間種を越えた存在感を放つものだ。
そんな存在が目の前でこちらを覗き込んでいた。ゆっくりと身体を起こしながら口にするのは、
「私は……どうなって……？」
周囲を見れば何やら天幕のような、仕切られた空間の中であることが分かる。おそらくは外だろう。地面があり、風が入ってくることか

らそうだと推定する。
そして美女は、こちらの問いに対して簡潔に、
「……君は――私の使徒になった」
「使、徒……」
そうだ、と美女は頷く。少し申し訳なさそうな表情で、
「私の名はケッセルリンク。魔人だ。訳あって人間の街にいたところ、火あぶりにかけられていた君に血を与えて使徒にした」
理解出来るかね？　と、聞いてくるケッセルリンクと名乗った美女の問いに、ゆっくりと頷く。
信じられないことだが知識の通りであるならば、使徒とは魔人から血を与えられた下僕のようなものだったはず。人間の国において魔人ほど恐れられてはいないが、全く警戒されてないわけではない。使徒がいるということは、魔人の関与が考えられる上、その戦闘力も魔物の中では強い方だと聞く。
そんな存在に、自分がなったと言われ、頭が混乱してくる。
しかし思うのは、
「……私の命を……救ったのですか……」
「……」
その言葉には直ぐに反応を返さず、軽く目を細めただけのケッセルリンクだったが、やがて軽く息を吐きながら口を開くと、
「……結果的にはそうなったのかもしれないな」
しかし、と、ケッセルリンクは一度言葉を区切り、
「その代償に君は人間を止め、私の使徒になった」
事実だけを述べるように、ケッセルリンクは淡々とそう口にする。
言いながら、彼女は天幕の外へと向かい、
「……私はこれから用事がある。君はここで身体を休めていなさい」
「え、あ……でも……」
「その間、君は身の振り方を考えるといい。――では」
「あ――」
何かを言うより早く、ケッセルリンクは天幕の外に出ていってしまった。

ちらりと見えた外の光景は、何やら緑や青の服を着た何かが居り、
……魔物の巣か何かかしら……？
魔人がいて、おそらく魔物がいるということは、ここは話で聞く魔物界なのだろうか。
そして自分は、使徒になり、魔物界という未開の地での生活をすることになるのだろうか。
それが良いのか悪いのか、もはやシャロンには考えられない。しかし唯一思うのは、
……どの道、人間の中に私の居場所は……。
であるならば、それをただ受け入れるしかないのかもしれない。
幾つもの不安、そして諦観した想いを抱え、シャロンは天幕の中でじっとしていた。

昼の曇り空の下。
その下で、人間の軍と魔軍は、互いに境界線を挟んで布陣していた。
人間側がそれに気づいたのはついこの間のことだ。
元々、魔軍に動きがある、との情報は噂程度ではあるが入っていた。
しかしその程度のことは人間側の、特に魔物界と領地を接している国からすればいつものことであり、来るとしてもこれほど大規模なものは来ないと推定されていた。
だから魔物界を見張る国境警備の部隊からの報告が上がった時、その国は王国との戦争を終え、占領と掠奪を繰り返していた軍を再び招集し、布陣を展開させた。
実際に目にしてみると、前例にないほどの大軍――地平を埋め尽くすほどの魔物の軍勢が、魔物界に見える。
あれほどの大軍を相手に、自分達は勝てるのかと不安を覚える。
しかしやらなければならない。勝てずとも、しぶとく食い下がらなければならない。
実際、魔軍と戦争をする人間の国の軍隊の役目は、基本的に遅滞戦闘――時間稼ぎを行い、国の民を逃がすか、血を流させ消耗させるこ

とで、戦後に行われるであろう掠奪の被害を抑えるかの二択しかない。
魔軍は軍隊を蹴散らし、人間の都市を占領すると、しばらくの間そこに居座り、ひたすらに暴虐を重ねる。そこにいる人間を半ば奴隷のように扱い、好きに楽しむのだ。
そしてある程度の期間が経てば、街にある物資などを奪って去っていく。これが数百年続く魔軍の行動。決まった法則のようなものだ。
魔軍との戦争を頻繁に行う国々では、このことは周知の事実。勿論、鵜呑みにして負けることを許容することは出来ないが、完全に滅ぼされないようにするためにも、例え勝てずとも戦闘の意義はあるものである。
ゆえに負けられない。そんな思いを兵達は抱え、開戦に備えていた。
見たところ、魔軍の準備は既に完了している。攻めてくるのも時間の問題だろう。
人間達は国を、民を、家族を、隣人を、守るため、心に強い意思を持って、その場に立ち続けた。

曇天の魔物界。
その広い大地の上で、黒と赤のコートを着た金髪灼眼の魔人は、最終確認を終えて軽く息を入れたところだった。
「よう、レオンハルト」
「ん……ガルティアか」
不意に背後から声を掛けられる。
軽く腕を上げて挨拶をするのは、褐色の肌に緑髪、腹に大きな穴が空いた魔人、ガルティアだ。
レオンハルトの友人でもあるガルティアは、いつものように手に数本の骨付き肉を持ち、それを口にしながら器用に喋っていた。
「ここまで大規模になると準備も大変そうだな」
「……そうだな。準備を魔物将軍に任せて飯食ってるお前の百倍は忙

しい」
「いや、出来なくもねえぜ？　ただ、魔物将軍に任せたほうがいいだろ？　能力的に」
「……そうなんだよな……」
こっちは命令とか方針だけ決めればいいだろ、と言うガルティアに溜息とともに同意する。
実際、部隊指揮や作戦立案だけならその能力に特化した魔物将軍や副官の魔物隊長やバトルノートなんかに任せたほうがいい。魔人の役割は他を寄せ付けない圧倒的な戦闘力と、その存在による軍全体の鼓舞、士気を保つことにある。加えて方針を決めること、最低限これが出来ればいい。
本来、細かな部隊の指揮や、将軍達との調整などは行わなくてもいいのだ。命令を丸投げしていれば後はそれに合わせて配下が動いてくれる。
しかし、レオンハルトに限ってはそれを否と言う。何故なら、
「……でもまあ、これが俺の仕事、俺だけに任せられた役割だからな」
ゆえに愚痴を吐くことはあっても、この仕事を投げ出すつもりはないし、誰にも渡す気はない。
この魔軍参謀という席は自分だけに与えられたものだ。その仕事は自分の誇りであり、大切なものの一つである。だから、
「〝魔軍参謀〟としての仕事を、俺はただこなすだけだ。……何か言ってくれるなよ？」
「お前が納得してんならいいさ」
いいのか、と言外に問うてきたガルティアの視線に先んじて答えを返す。
こちらの事情を知っているガルティアにしてみれば、聞いておきたかったことだろう。この戦争をやる上では。
だが職務としても、私人の情としても、守ってやる必要はないのだ。何も罪のない弱者を相手にすることは、思う所もある。しかしそれは、
「……レオンハルト」

「どうした、ハンティ？」
見れば、ハンティが瞬間的にその場に現れ声を掛けてきていた。その声は低く、表情は強張っている。
理由は分かる。次に来る言葉も、おそらくは、
「……あたしは――」
「――駄目だ。お前も参加しろ」
機先を制して、拒否する。
ハンティの声が止まり、目を見開かれる。当たっていたのだろう。ややあって、驚きつつも少し声を落とし、
「……本当にこんなことを……」
「ああ、当然だ。魔王様の命令は――全力出撃。配下の魔人は全員集結、その使徒も例外ではない。……分かるだろ？」
「……分かる、けど……」
他ならぬ魔人筆頭兼魔軍参謀の自分がそれを破るわけにはいかない。そのため、今回の戦争にはハンティも参加するように言っておいた。
だが、人間を殺す――しかも一方的に、虐殺するのは気が進まないようで、
……仕方ないな。
主として、やらなければならないだろう。ハンティに視線を向け、
「……いいか、これは命令だ」
「っ！　それは――」
「否応はない。お前は一片の慈悲も容赦もせず、人間を殺せ」
命令、と言われ、ハンティの表情に苦悶のそれが混じる。使徒であるハンティにとって、主である自分の命令は絶対だ。それを破るわけにはいかない。
それに、
「……この戦いの目的は、魔軍の全力をもって大国を滅ぼし、そこにいる人間を苦しませることにある」
「それが一体……！」
ハンティが眉を立てる。言い聞かせるように、つまり、と、

「分からないか？　人間を苦しませることが目的だ。殺す、というのは手段の一つ……最終的な行為でしかない」
「――――」
気づいたように、ハンティが言葉を失わせる。
殺すことが最後。その意味はよく分かるだろう。
……殺すことが救いとなる。
人間の軍は、当然大勢を戦闘で殺すことになるだろうが、戦う力を持たない民衆に関しては率先的に殺すことはしない。男は拷問、遊びの末に殺され、女は気が遠くなるような期間――それこそ壊れるまで犯されることになるだろう。それを止めることも、やめることも出来ない。ならば救いは、
「理解したか？」
「……」
短い言葉でそれを問う。
地獄を味わった上で殺される未来が確定しているのなら、痛みも苦しみもなく、一瞬にして殺してやることこそが救いとなる。
魔王の命令というのは運命、確定した未来だ。物理的に不可能な命令以外であれば、発言したことは必ず叶う。叶えさせられる。数人や、もしかしたら数十人くらいなら救えるかもしれないが、それ以上となると今は不可能なのだ。
ならば、
「っ……分かったよ」
歯を食いしばり、自分の無力さに憤りを感じていたハンティが、しかし、ふっと力を抜いて小さな声で頷く。
こちらを強い意思のある目で見ると、
「……でも、それはあたしの意思で行うから。そんな逃げは――あんたの命令が無くたって……」
「……そうか」
それならば言うことはない。
命令を言い訳にしたくないのだろう。どこまでも真面目で律儀、そして情の強い使徒だ。そんなハンティに虐殺を強いることになった

自分に不甲斐ないものを感じるが、これ以上上手い言い方が見つからない。
色々とフォローしてやらないとな、と思っていると、
「……そろそろ集まってきたな」
「みたいだな」
ガルティアとともに視線を向ければ続々と、魔人達が布陣した軍の先頭に集まっていく。その後ろには使徒が付いてきたりもしており、
「レオンハルト様！」
「終わりましたよ！」
こちらにも、軍の調整をしていたキャロルとペールが集まってくる。その後ろからは大柄の影、魔物大将軍もやってきており、
「レオンハルト様、我々もそろそろ……」
「ああ」
リー大将軍の言葉に頷く。そして背後を見やると、
「行くぞ、ガルティア。キャロル、ハンティ、ペールは後ろから付いてこい」
「おお」
「畏まりましたわ！」
「……了解」
「それじゃあ早く行きましょう！」
呼びかけられた４人がそれぞれ応答するのを聞いて、レオンハルトは自分達も集合するべく足を向けた。

布陣した魔軍の前方の大地に、歩いてくる者達がいる。
まばらに歩いてくるその者達は、目的地は同じであり、その誰も彼もが、
「……お、おい、見ろよ」
一体の魔物兵が隣の同僚の腕を肘で突いて言った。
「――魔人だ」
そう。その誰も彼もが、魔物達の、大陸の支配者達である魔人だ。

２４体しかいない魔人の殆どが、軍と、配下である使徒を連れてこの場に集結している。
その中でも特に注目されるのは、魔人の存在感の中にあって更に上を行く者達、いわゆる上級魔人と呼ばれる面々だ。
魔人筆頭に魔人四天王、その席に名を連ねる者達は、魔人すらその存在に自然と道を開け、遠巻きに意識をする。
四天王の席は未だ二つは空席であるため、その場にいる者は三人と、その使徒達。その中で最も位の高い魔人筆頭兼魔軍参謀である魔人――レオンハルトが声を掛ける。
「久し振りだな、カミーラ」
「……レオンハルト、か」
相手はプラチナブロンドの髪を持つ絶世の美女。
ドラゴン娘のような角や翼をもった女は魔人四天王であるカミーラ。彼女はレオンハルトの姿を視界に収めると、静かな声で、
「……ついこの間、会ったばかりだ」
「……ん？　ああ、まあ城を作る時に会いに行ったからな。三ヶ月ぶりってところか」
以前は頻繁に顔を合わしていたから久し振りに感じるが、魔人の感覚でいえば久し振り、というほどでもない。それを理解したレオンハルトは訂正しつつ、今度はもう一人の方を見て、
「ケッセルリンクも……大丈夫だったか？」
「……ああ」
短く応答するのは、こちらも美しい女性だ。
水色の髪に長耳、青いクリスタルを持つ女性は、魔人四天王の一人であるケッセルリンク。彼女は、彼女の感覚として久し振りであるレオンハルトを見て、息を入れると、
「これが終わったら、紹介することになるかもしれない」
「……そうか」
レオンハルトはそれを聞いて、何やら思う所があるのか一瞬目を細めるも、しかし微笑を浮かべて頷き、
「楽しみにしてる」

「……ああ」
ケッセルリンクもそれに応答する。だが、それを見ていたカミーラが鼻を鳴らし、
「……ふん、相変わらず、色気づいているようだな……」
「……仮にそうだとして、それの何が悪い？」
軽く嘲笑するようなカミーラの表情に、ケッセルリンクが目を細めて応対する。
その返しにカミーラは笑みを噛み殺しながら、
「く……何、こんな場所でまでそうなるとは……随分とはしたない女だと思ってな……」
「……普通に会話していただけだ」
どうかな……、とカミーラが小馬鹿にしたように言う。美少女や美女。特にケッセルリンクのような気位の高い相手が嫌いなカミーラは、ことあるごとにケッセルリンクに噛み付く。ケッセルリンクもそれに真面目に相手をする。その雰囲気はいつもピリピリとしており、魔人ですら近づくのを躊躇われるものだ。
そして一番げんなりしているのは、大体仲裁する羽目になるレオンハルトで、
「……お前ら――」
そこまでにしておけ、と声を掛けようかと思った時、不意に別の声がきた。
「これはこれは、お揃いのようで……」
その声に三人が目を向ける。
上級魔人の会話に割り込んでくる。その度胸ある、一種の肝試しのような行為を行ってきたのは、赤い外套を身にまとった逆立つ炎の髪が特徴的な男で、
「ザビエルか」
「……どうも、レオンハルト様」
丁寧に、頭を下げてみせるのは、魔人ザビエル。
魔王ナイチサが最初に作った魔人であり、どうにも評判の悪い魔人だ。

魔人らしく頻繁に軍を動かし人間を苦しめているらしく、魔人から見れば働き者の魔人。
しかし同時に、多くの魔人に傲慢な振る舞いを行い、一部の魔人は新参者である魔人ザビエルを痛めつけてやろうと戦闘を行ったが、噂だと、ザビエルが勝ったことにより、下級魔人からは特に避けられているという。
真偽は分からないが、魔人になって日が浅い内からどんどん力を付けている魔人であることは確かである。そんなザビエルは、魔人のトップ3にまで声を掛けていった。
そのことに周囲の者達が身を固くさせる。
レオンハルトはその鋭い視線をザビエルに向けると、
「何か用か？」
「いえ、用はありません。……ただ、せっかくですので上級魔人の方々との会話に混ざっておこうかと……」
言ってカミーラとケッセルリンクにも視線を向ける。ケッセルリンクは無言でザビエルを計っているのだろうが、カミーラは剣呑な声で、
「……誰だ、貴様は……？」
軽く威圧しながらそれを問う。
挨拶も無しに知らない魔人が話しかけてきたことに軽い不愉快を覚えたのだろう。カミーラはプライドが高い。幾ら城に籠もってザビエルに会ったことがなかったとしても、それは挨拶をしに来ないザビエルが悪いのであって、自分は悪くないのだと考える、
ゆえにそうなるのも必然で、カミーラは重圧をザビエルにぶつけるも、
「……ふふ、いえ、申し遅れました。我は魔人ザビエル。ナイチサ様に作られた魔人です」
軽く笑みを浮かべて言うザビエルに、カミーラは訝しげな視線を送る。
何が可笑しいのか、と思う。それはレオンハルトやケッセルリンクも同じだ。

そしてレオンハルトからしてみれば、一人称が〝私〟ではなく〝我〟になっているのも引っかかる。敬語ではあるのだから突っ込むほどではないのだが、
「まあ、挨拶はしておこうかと。何せ――」
しかし、その後にザビエルが言った言葉は、レオンハルトをして眉をひそめるものだった。
「いずれ我も――皆様と同じ位置に立つのですから」
「……」
その言葉の意味を理解し、そして同時に眉をひそめる。レオンハルトもカミーラもケッセルリンクも。
皆と同じ位置に立つ。それは上級魔人という意味を越えて、魔人四天王の席に着くのは自分だ、と傲慢にも現魔人四天王の前で言い放ったのだ。
勿論、席はまだ二つ空いているので、誰かを落とすこともないし、可能性だってある。
だがあまりにも傲慢な物言いに、三人とも――それだけではなく、背後にいる使徒が主への不快な物言いに苛立ちを感じたのか、何も言わずとも不満を雰囲気に出し、さらに後ろに控えていた魔物大将軍達は馬鹿を見るような、白けた想いを内心に覚える。
そしてさらに表情を歪ませたのは、遠巻きにそれを聞いていた他の多くの魔人たちであり、嫌悪感の混ざった目をザビエルに向ける。
自分達を差し置いて何を、という思いだ。魔人四天王は魔人の中でも一握りの実力者だけが座れる特別な席。それを新参の魔人がそうなると言い張るのは、同じ魔人からしてみれば嘲笑を通り越して不快だ。
レオンハルトのような化物であればともかく、そんなことはほぼありえない。
だが、一部のザビエルと戦った魔人。そして声を掛けられた三人は、
「では、我はこれで……」
去って魔人が並ぶ列に戻っていくザビエルを見て、内心、同じよう

に評した。
――ありえないことではない、と。
その証拠にザビエルは、すでに多くの魔人の実力を、おそらく越えているだろうというのが、三人が下した評価だ。
ゆえに可能性はある。だが、それとは別に、
「ふん……不愉快だな……」
「なんとも……傲慢不遜な男だな……」
「……」
その態度に嫌な感じを覚えざるを得ない。カミーラは分かりやすく嫌悪を見せ、ケッセルリンクは真顔ではあるが、その在り方を遠回しに良くないものだ、と評した。
ただ一人、レオンハルトだけが何も言わず、ザビエルを射抜くように見ただけでありどう思っているのかは分からない。
しかしザビエルから視線を切り、正面に身体を向ける。
それはある気配を察知したからであり、
「――！」
多くの者達が、それに合わせて地面に膝を突いた。
魔物兵から魔人まで、全ての魔に属する者達が頭を垂れる。そんな存在は一人しかいない。
「――皆、集まっているようだな」
全てを見下ろす絶対の王。
魔王ナイチサが、眼下に並ぶ魔人、使徒、魔物達の前に、姿を現した。

「ナイチサ様」
その場にいる全ての魔物、魔軍を代表して、魔人筆頭であるレオンハルトがナイチサに先を促す。
「うむ」
その意味を正しく受け取り、ナイチサは丘の上から声を上げた。
「――余は、魔王だ」

その言葉を、魔軍に所属する全ての者達が耳にする。
誰も口を挟めない。挟むことは許されないし、そうしようとも思わない。
ただ黙って、静かに王の言葉を聞くのみ。
「卿ら――魔物達の王であり、大陸の支配者。この世にある全てのものは余の手中にある」
魔王とは大陸において絶対の存在。
人間、亜人、ドラゴン、魔物、この世に生きる者の上に立つ最強にして唯一の存在。
「故に、余から卿らに対し、言葉を送ろう」
言う。それは、
「――光あれ、と」
その言葉は、魔物に似つかわしくないものだ。
魔物とは闇であり、影のものである。そんなイメージが人間の間にはある。
しかしナイチサは、それに敢えて、否、と言う。
「余はこの世に生きる者達に、二つの意味で光を与えよう」
それは、
「余に従う全ての魔物に対する自由と繁栄の光と――」
もう一つは、
「人間達に対する恐怖、苦しみ、痛み――絶望の光だ」
ゆえに命令しよう、と。
「卿ら、余の下で、存分に光を得るがいい」
その方法は、
「卿らが人間に光を与え、同時に祝福の光を得るのだ」
魔王の名の元に、人間を虐げろ。
さすれば祝福は与えられん。
それを、ナイチサは事実として知っている。嘘ではない。この世の光とは、そういうことなのだ。
ゆえに確信をもってそれを告げられる。魔物達よ、人間を苦しめろ。人間よ、血を流せ。

その先に光はある。この世の正義はそこにある。
「一点の曇りなき正義がここにある」
それを為せ。
その第一歩として、
「かの大国を相手に、卿らの力を存分に見せつけろ。かの国に対し、卿らは何をやっても構わない」
魔物達が気勢が高まる。
「やりたいことは幾らでもあろう？　魔王の名において許す。人間共に絶望と死の光を与えてやれ」
その昂りを、狂気を、欲望を、人間相手に発散しろ。
その愉悦は正しい。何も間違っていないのだ。
ナイチサはマントを翻し、その手を掲げる。すると雲の隙間から、
「お、おお……！」
光が差し込む。
まるで本当に祝福を受けているかの如く、魔物達が光に照らされる。
そしてその中心、より照らされているのは魔王であるナイチサである。
魔王として、光の権能を持つナイチサだけのそれは、魔物達にそれが善であり、正しいという楔を心に植え付ける。
さあ、とナイチサは腕を前に出す。
「余の忠実なる家臣、配下達よ――」
我慢はしなくていい。存分に、
「――死の数を競え」
魔王の言葉に、魔物達が一斉に空を見上げて咆哮した。
――そうして魔王ナイチサによる初めての大規模な戦争が、今ここに始まった。

蹂躙

戦闘は、一方的なものから始まった。
魔軍の大軍が、人間の軍に向かって突っ走る。緑、青、赤、といった魔物兵。姿形がバラバラな魔物達は、このスーツを着ることによって戦い方や戦闘力がある程度は均一化される。
それでも人間の兵の倍以上は強い。その突撃を、鎧と盾を持った人間の兵が受け止めようと身体を固める。
盾の隙間からは槍が突き出ており、密集陣形となって魔物兵を待ち構えた。
「ヒャッハー！　殺してやるぜぇーー!!」
「突撃突撃――!!」
その硬い陣形を見ても魔物兵は止まろうとしない。
魔軍の先鋒は血気盛んな、いかにも魔物といった性格の者達で構成された部隊。新兵とも言っていい。
しかし魔物は生まれて一日で成体になる種族。それからしばらくは親の元で過ごすが、それでも戦う生き物であることには変わりない。
さらに彼らの軍を率いる魔人。その存在が彼らの勢いを後押しする。
「人間共よ……我の炎に焼かれて死ぬがいい……！」
その言葉とともに、炎を纏って先頭集団に現れたのは魔人ザビエル。
炎カッパの魔人であり、ナイチサに魔人化された者の中でも色んな意味で目立つ人物。
彼はこの戦いにてナイチサの役に立つため、人間をより多く殺せるようにと先鋒に志願した。魔物の中にあって目立つその存在に人間の兵達の身が怯む。
「く、来るぞ……！　魔人だ……！」
しかし逃げはしない。逃げれば後ろにいる者達が、友人が、家族が、隣人が死ぬ。

そのために時間を稼ぐ。より多くの魔物を倒す。その使命を胸に、兵士達は身を寄せ合いながら盾と槍を構える。
しかし、
「無駄だ……！」
無駄という言葉とともにザビエルが手を広げる。
同時に彼の身体から炎が立ち昇る。
最初の一撃にぶつけるのは魔人となり、更に強化されたザビエルの炎。その中でも一際凶悪で、同僚の魔人を倒した必殺技――
「――〝黒の炎〟よ……！」
その名の通り、黒き炎が燃え上がり、人間の部隊に津波のように襲いかかる。
「っ――!?　あ、あああああああああっっっ――!?」
分厚い盾を物ともせず、集団を黒の炎が包んだ瞬間、人間達の悲鳴が周囲に響き渡る。
その火力はザビエルが使う炎の中でも格段に高い。しかしそれでいて、
「あぁぁぁ熱い熱い熱いいいいいいいぃ!?」
「焼かれ、あああああぁぁ……!!」
楽に死なせない。その結果を見て、ザビエルは口端に笑みを浮かべる。
「ふふ、どうだ、我の炎の味は……？　格別であろう……？」
脆弱な人間であっても即死をさせない黒の炎によって人間達が次々と焼かれていく。密集陣形を取っていた前陣の部隊は、燃え広がる黒の炎に対し、被害を免れるためにその陣形を崩していく。
そこに突っ込む魔人ザビエルは、腰に差した刀を抜き放つ。そこには炎が纏わせてあり、
「邪魔だな。逝ね……！」
立ち塞がる人間の兵を炎を纏った剣で焼き斬っていく。
しかし多くを炎で焼くのみで無視して進み続けるザビエルだが、その後ろに続く魔物兵達が炎による混乱で狼狽える人間達にその手に持った斧を振り下ろしていく。

「おらおら邪魔だぁーー!!」
「ははは、くたばれ人間共!!」
「がっ――!」
「ぐ、え……!」
短い悲鳴を上げて殺されていく人間達。対応しようにも陣を破って暴れる魔人の猛攻を止めることが出来ない。魔法などで遠距離から攻撃しても、
「効かんな……」
「ぐっ……!」
魔人の身体に触れる直前でかき消える。
それは〝無敵結界〟。
魔人の周囲を覆うように張られる魔人の技能であり、同じ魔人や魔王でなければ突破できない絶対の防御だ。
人間では突破することは不可能に近い。その間にも、ザビエルは黒の炎と炎の剣にて人間を殺戮していく。
「我は、こんなところで止まってる暇はないのだ……!」
魔王の命に従い、魔王を楽しませ、そして自らも楽しむ。その末に魔王の傍に控えるため、野望を胸にザビエルは軍を率いて人間に向かっていった。
「……」
それを遠目に眺めていたのは、魔軍の先頭の軍を指揮する魔物大将軍、コウウであった。
彼が何を思うのかは分からない。ただ何となく、目を引かれたというだけのこと。
その間にも、戦闘は続く。続いて抜け出てきたのは、
「――」
人間には視認できない白の何か。
それは当然だろう。何故なら彼は強大な力を持つ魔人の中にあって最速の魔人。
「な、何だ、何が起こってるんだ!?」
「わ、分かりません!! 気がついたら吹き飛ばされ――」

と、言った人間の兵士は次の瞬間、白の突撃を受けて吹き飛ばされた。
「……」
仲間にすら感情を見せず、常に無言で誰とも関わろうとしない孤高にして最速の魔人――メガラス。
宇宙人ホルスの魔人である彼は今日も命令に従い、戦場にて一人戦い続ける。
ただ速さを用いて当たるだけの攻撃は、しかし、当たるだけで十分であり、メガラスが突撃するだけで人間の集団は吹き飛ぶ。
速さというのはそれだけで武器。音速の三倍近くに達する速度は近くを通過するだけで、大気の圧力が人間を叩く。白い外骨格の身体に当たれば、人間は四散する。
その全ては自分の身に何が起こったのかわからず身体が吹き飛ばされ、あるいは即死する。
そんなメガラスが突撃を敢行する中、同じ様に部隊を率いて突っ込んできたのは、
「さぁて、野郎共！　腹ごなしの時間だ！」
ギザギザの刃がついたハワイアンソードという剣を持ち、率いる部隊に声を掛けた魔人。
ムシ使いの魔人ガルティアは、その腹からムシ達――使徒の手足を覗かせながら人間達に向かっていった。
その能力は、魔人一の多彩な能力であり、
「行くぜ！」
「っ、何だぁーー!?」
ガルティアの指。その爪の間から糸が伸びて、人間達を捕まえる。
その間に剣を振るい、あるいは火炎放射や爆弾、レーザーを身体から放つ。
人間の兵がその餌食になる中、一人の人間が近づき剣を振るおうとするも、
「キシャアアアアアアアアア――!!」
「なに――がっ!?」

腹の中から出てきた猿の手に殴り飛ばされる。そのまま別の人間を掴み、握り潰すそれは、使徒のタルゴ。
その間、ガルティアは腹から出てきたもう一体の翼が生えた使徒、
「サメザン！」
「ピィイイ！」
サメザンに捕まれ、空に浮き上がる。
そのまま上から人間に空襲をかける傍ら、戦意に呼応してか腹の中から出てきた蜘蛛の下半身を持つ少女が、
「……」
倒れた人間をむしゃむしゃと食べようとして、
「……」
ぽいっ、と途中で投げ捨て、
「あ、こら、ラウネア。食べるなら残しちゃ駄目だって言ってるでしょ！」
「……」
使徒であるラウネアが主人であるガルティアに怒られしょんぼりする。
しょうがなく人間を連れて腹の中に戻り、真面目に戦い続けるガルティアと三体の使徒。連携攻撃と手数の多さから人間達は対応出来ていない。
そんな中、とある魔人は地道に戦っていた。
「へへ……今の内にレベル上げレベル上げ……！」
「何だ、こいつ――ぎゃっ!?」
その手に持った小さな剣を人間に振り下ろし、淡々と作業のように人間を殺していくのは、丸い身体を持ったリスの魔人。
最弱の魔人として名高い魔人――ケイブリス。
最近ようやく最弱を抜け出せそうな彼は、無敵結界があることからほんの少しリラックスしながら戦場にて戦っていた。
「味方側にあぶねぇ奴が多いけどな……これにだけ気をつければ美味い狩り場だぜ、ぐふふ……」
特にザビエルとかいう奴は危ないから近づかないでおこうと注意

する。
あんな炎に包まれたら自分などひとたまりもない。ケイブリスは身の程というのを知っているのだ。強い者相手には決して逆らわず、媚びへつらう。それを信条とするケイブリスにしてみれば、ザビエルがレオンハルトやカミーラ、ケッセルリンクに生意気な口を利いたというのは、
「馬鹿なやつだよなぁ……」
特にレオンハルトだ。
レオンハルトに突っかかって殺されたり、半殺しにされた魔人を知らないがゆえの行動だろう。やはり新参はなってない。危機意識が足りないな、と思いながら戦っていると、
「あっ、う、噂をすれば……」
ケイブリスが声を落としながら、それでいてどもる。
多くの魔人達が部隊を率いて戦闘に参加するが、その中でも大規模な軍が戦場にて蹂躙を開始する。
それを率いる魔人は、魔人の中でも桁が違う強さを持つ、
「カカカ、カミーラさん……いいなぁ……」
魔人四天王のお出ましであった。

「ふはははは!!　さあ、進め進め!!　今日は串刺しし放題だぞ！」
「了解です！　ヴラド様！」
通常の魔物兵と違い、先端が尖った槍を持った兵達が魔物大将軍の指示に従い、その槍を人間達に突き刺していく。
腹を、胸を、腕を、頭を、串刺しにされて死んでいく人間達の姿を見て興奮したように、カミーラ軍を率いる魔物大将軍ヴラドが腕を振り上げる。
「いいぞいいぞ……！　くぅぅ～最高だっ!!　私も、指揮がなければ参加するのだが……！」
しかしそれは叶わない。
その釘を刺すように声を出したのは、長衣に身を包んだ痩躯の男で

あり、
「駄目ですよ、ヴラド大将軍。これからカミーラ様が狩りに出ますので、貴方には待機していただかないと」
「分かっておりますとも、七星様……！　この興奮は、戦後に思う存分発散します……！」
「……なら良いですが」
ネフライトドラゴンの使徒、七星は薄い目をヴラドに向けて息を入れる。
その背後からやって来たのは、
「……出るぞ」
「お供します」
「はっ、いってらっしゃいませ、カミーラ様！」
隔絶した存在感と圧力を持つその魔人は、上級魔人にして、魔人四天王の一角に座るプラチナドラゴンの魔人。
魔人カミーラ。彼女の出撃に、カミーラ軍は沸く。
滅多に戦闘に参加することはないカミーラだが、魔王の勅命とあらば参加は必然。淡々とではあるが、狩りを実行しようと宙に浮く。
「……」
無言の圧とともに、行われたのは、文字通り〝狩り〟であった。
「ぎゃあっ!?」
「ぐえっ!?」
「うあああっ!?」
「ばっ――!?」
一斉に、人間達が白い何かに身を貫かれる。
それはカミーラの指から伸びた十本の爪だ。
ドラゴン種の鋭さを持ちながら、変幻自在に動き伸びる十本の爪は、人間達を次々と貫き、あっさりと殺していく。
カミーラのそれは未だ戯れに近い攻撃であり、本気には程遠いものだ。
しかしそうであっても人間に対応することは難しく、慰み程度の攻撃で簡単に死んでいく。

力の差は歴然だった。その間にも、同じく供に出た七星も、その身を巨大な、翡翠色のドラゴンに姿を変え、
「死になさい」
口からブレスを吐き、人間を焼いていく。
その身を動かし、爪で、尾で、人間を吹き飛ばしながら、傍らのカミーラはぼそりと、
「……弱い上に……数が多くて面倒だな……」
つまらなそうに呟くと、その手を眼下の人間の集団に向ける。
そこには黒い光が集まっており、
「っ!? な、何か来るぞおおおぉぉ――!?」
人間の指揮官の声も虚しく、
「――消えろ」
黒の奔流が放たれる。
それはドラゴン種のブレスであり、カミーラが使う特性の、〝闇のブレス〟。
極太の黒は、凄まじい圧力をもって人間の身を呑み込み、文字通り消滅させるものであり、
「……少しは、少なくなったか……」
直撃を食らった人間の集団は、誰一人として残っていなかった。
絶望に震える人間達をつまらなさそうに見ながら、カミーラは少し遠くから聞こえる声に耳を傾け、
「……しかし、あの女に負けるのは……癪だな……」
言って、少しではあるがやる気を出すか、とカミーラは軍を引き連れて直進を始めた。

カミーラ軍とは反対方向。
その戦場では、辺り一面を黒の霧が包んでいた。
「い、いったい何だこれは……!」
「ぐっ、外に出て――」
霧に包まれた人間の集団は、霧から出ようと足を進めようとする。

しかし外側には、
「囲んで、動きを止めろ」
「はっ！」
ケッセルリンク軍を預かる魔物大将軍バルカ。その指揮によって、魔物兵達は霧を囲むように厚みを持って並んでいる。
おかげで人間の兵達はこの霧から出ることが出来ない。
魔軍が押されたように後退したために誘い込まれた結果が、この包囲網と黒の霧だ。
さらに、一瞬視界に映ったはずの魔人はどこにもおらず、
「くそ、どこに……？」
その問いに反応したのは、霧であった。
「……私はここだ」
女の声が、霧の中から聞こえる。
それを霧に包まれた人間の兵達、全員が耳にした。
驚愕をもって周囲を見渡すも魔人はどこにもいない。
しかし魔人四天王の一角、カラーの魔人であるケッセルリンクは確かにそこにいる。
その霧こそが、
「……この霧が私だ」
それは〝ミストモード〟。
その黒の霧が、ケッセルリンク自身である。ゆえにどこからでも攻撃出来、あらゆる攻撃を半減させるそれは、しかし、
「とはいえ、夜ではないからな。完全ではないが……」
夜に真価を発揮するケッセルリンクは、昼だと多少、力が落ちる。
そうであっても、人間を倒すには十分の力が、上級魔人であるケッセルリンクにはある。それをもって、
「……せめてもの慈悲に、早めに終わらせよう……」
霧の中からの攻撃を、人間達に向かってお見舞いした。
薙ぎ払われ、魔法を撃たれる人間達が、狂乱に陥る。
「こんなの……！　どうやって戦えば……!?」
「に、逃げ――」

逃げようとする兵士も出てくるが、それは周囲の魔物兵達がそうさせない。
魔物大将軍バルカは、ふふ、と満足そうに笑みを浮かべ、
「無駄だよ。ここは既に殺し場だ。私特製の包囲殲滅陣をじっくりと味わうがいい……！」
敵陣中央を引き込み、その間に両翼を突撃させ包囲して殲滅する戦術はバルカの得意技だ。それにケッセルリンクの技も加えた完全なる戦術。もはや為す術無く殺されていくだけの人間に、ケッセルリンクは何を思うでもなく淡々と人間を殺していく。
彼女も魔人である以上、戦いから逃れることは出来ない。虐殺は趣味ではないが、戦争の上で殺すなら役目として行える。
同じくバルカも、どちらかというと自分の戦術を試して人間を倒せればそれでいいので、特にそういったことには興味が薄い。ゆえに戦いは淡々と進んでいく。
「私の演出は完璧だな……！　十全に、ケッセルリンク様を活かすことが出来ている……！」
「……」
微妙に温度差はあるが、仕事をする上での相性は問題ない。ケッセルリンク軍は、極めて効率的に人間を殲滅していった。

そして、ここに魔軍最精鋭の軍が参陣する。
「――ふん、随分と暴れてるな……」
「そのようですな」
戦場の光景を見て、その最高位の魔人は鼻を鳴らす。
軍を預かる魔物大将軍リーの同意を受けながら特に視線を注目させるのは、先鋒として出ている魔人ザビエルの軍であり、
「嬲り殺しか」
「黒い炎ですわー！」
「っ……」
「うっわ……えぐいですねー……」

同じく言葉に同意する三人の女性。それは彼の使徒だ。
魔人筆頭兼魔軍参謀。魔軍のＮｏ．２である金髪灼眼の魔人。
世界最強の剣士である人間の魔人――レオンハルト。
その使徒であるキャロル、ハンティ、ペール。
そして最精鋭と呼ばれるレオンハルト軍を率いる魔物大将軍リー。
彼らがレオンハルト軍を構成する者達。その彼らの会話を、魔物将軍以下、魔物兵達は身動き一つ取らず命令を待っている。
魔人レオンハルトは、ちらりと、彼らを見てその規律に問題ないことを確認すると、
「……そろそろ始めるか」
「はっ。――全員傾注！　これより、レオンハルト様より訓示を賜る！」
「はっ！」
ざっ、と音を立ててレオンハルトに向き直る魔物兵達を見て、レオンハルトは頷く。徹底的に統率され、規律に満ちた集団はそれだけで芸術ともいえる。
中身が我の強い魔物とは思えないほどの集団行動を取れるのは、ひとえに大将軍やレオンハルトの統率力、伝統的に守られてきたその誇りと自負のおかげだ。
レオンハルトは前に一歩出ると、
「……ではお前達。これより、俺たちは戦闘に参加する」
その通る声は、不思議と軍全体に響き渡る。
皆が聞いているのを感じ取りながら、レオンハルトは声を上げた。
「既に戦闘は始まっているが……お前達、あれを見てどう思う？」
その問いに答える者はいない。しかし、誰しもが似たような答えを思い浮かべる。
それは、
「――見るに堪えない。少しは戦争が出来るようだが、本物のそれとは格が違う。……それをお前達は知っているはずだ」
敵も、味方でさえも、本物とは程遠い、と、レオンハルトは言う。声に上げずとも、この軍に所属して少しでも経つ者達ならそれを知って

いた。答えは、
「本物の戦争が出来る者達――それがお前達だ」
レオンハルトは確信を持って言う。
一種の士気向上、激励であるが、それは半ば事実である。
集団行動、単純な戦闘力、部隊運用など全ての面において、この軍は魔軍一であるという確信がある。それは他の軍と比べたときに如実に現れるものだ。
それを、彼らは皆自覚している。
ゆえに言う。
「今回はそれを見せつける絶好の機会だ。本物の戦争を、連中に教えてやるぞ！」
「はっ！」
声を上げる。
「一番戦争が上手いのは誰だ!?」
魔物兵達が一斉に、
「我々、レオンハルト軍です！」
「もっとも勇猛であり、規律ある魔軍最精鋭の軍は!?」
一斉に声を上げる。
「我々、レオンハルト軍です……！」
レオンハルトは言う。
「いいか！　求められているのは勝利だ！　その勝利に一番貢献出来るのはお前達だ！」
ゆえに、
「最高の戦果を期待する。――総員、指揮官の指示に従い、任務を遂行しろ！」
「はっ！」
レオンハルト軍の全員が声を上げ、その手に持った得物を手に掲げる。
「我らに勝利を……！　レオンハルト様に栄光を……！」
最も戦争を経験している魔軍最精鋭の軍隊。
その牙が、とうとう人間に襲いかかった。

その軍の動きは、他とは明らかに違っていた。
相対した人間の兵士達は戦慄する。
「ちくしょう!? なんなんだあいつらは……!」
声を上げて、戦っていた人間の兵士は、次の瞬間に速やかに殺された。
魔物兵達が、一糸乱れぬ動きをもって人間に襲いかかる。
魔物隊長が声を上げ、
「常に二体一で当たれ! 数の優位を活かせ!」
魔物将軍が自分の軍に、
「足を止めるな! 進み続けろ! より早く、効率的に敵を殺せ!!」
そして全体を統括する魔物大将軍リーが、
「目的は速やかな敵軍の撃破、並びに街の占領! 各員、任務遂行に当たり奮励努力せよ!」
「はっ!」
魔物兵が声を上げる。
戦闘は常に行われ、魔物兵達は規律ある行動を取りながらも軽口を行う。
「さあ、もっと俺達と踊ろうぜ……!」
「逃げるなよ! ダンスは苦手か……!?」
「ははは っ! マンハントのお時間だ……!」
言い回しが特徴的な彼らは、魔軍の中でも最も文化的な生活を送る者達でもあり、規律と戦闘を好み、文化を愛する者達だ。
早い話が、集団行動の取れる戦闘狂。戦争屋であり、彼らは戦場を好みながらも、極めて事務的にそれをこなしていく。戦争の花は自分達であり、最後に勝つのも自分達だ。命令に従い、一片の容赦もせず、誰よりも多くの戦果を手にする。勝利者だけが全てを手に入れられることを、彼らは経験から知っていた。
魔軍最精鋭であるレオンハルト軍は常勝不敗であり、同時に負けることは許されない。

集団戦闘において彼らが負けるということは、最後の砦が陥落するも同義である。そのことを彼らは、胸に刻んでいた。
そのために、同志達と協力し戦う。スタンドプレーを行うのは実力のある上の者達に任せればいい。そう、あのような、
「さぁて、始めますわよ！　準備はよろしくて!?」
金髪ツインテールの少女。コマンダーの使徒であるキャロルは、背後に控えさせた親衛隊と、隣にいる同僚に声を掛けた。
背後から応答が響く中、肌を刺すような雰囲気を醸し出しているのは、黒髪を持つ長耳、赤のクリスタルを額にもつ女性、
「……いつでも」
ドラゴンカラーの使徒、ハンティ。
彼女は据わりきった視線を人間に向け、準備運動をするように腕を伸ばす。
それを見たのは、ハンティとは反対側に立つ薄紫色の髪を持つスタイルの良い少女で、
「あー……そういえば使徒になってからの実戦は初めてですねぇ……模擬戦なら何回かやりましたけど」
しみじみと言うのは、青いクリスタルを持つカラーの使徒、ペール。
その言葉にキャロルはぴしゃり、と。
「そんな弱きではいけませんわ、ペールさん！　わたくし達は魔物界一の最高使徒と――その後輩ですのよ！　戦果は当然、少なくとも使徒の中では一番でなくては！」
「あ、はい。キャロル先輩。始祖様も、頑張りましょうね」
キラキラとそう言うキャロルに、ペールが軽く流すようにハンティに声を掛ける。
ハンティが頷いたのを見て、キャロルは声を上げ、
「では……突撃、ですわ――!!」
「……！」
「それじゃ、いきますよう……！」
瞬間、使徒達は動いた。
まず最初に見えたのは、そこから瞬間的に消えるハンティであり、

「――」
「なっ――」
「えっ……が――」
「っ……！」
単騎で人間に向かって突撃するハンティは、彼女だけが使う魔法――瞬間移動を使って次々と人間を屠っていく。
その速さは圧倒的であり、下手な魔人よりも早く、そして、
「おお……！　あれがハンティ様の戦闘か……！」
「な、なんとお強い……！」
何より――強い。
それこそ、下級魔人に迫るのでは、と考えてしまうほどの強さ。
数百年、レオンハルトと模擬戦を続けたのは伊達ではない。その魔法の腕や身体捌きも卓越しており、
「……悪いけど、死んでもらうから……！」
そう言って戦い続けるハンティは、使徒最強といっても過言ではないほどの戦闘力を誇っていた。
それを見て、感心したような声を出すのは、
「はえ～……始祖様ってば、やっぱり強いですよう……これは私も頑張らないとですねぇ」
言って、身を躍らせたペールは、人間の集団を前に、魔法を発動させる。
しかしそれは普通の魔法ではない。
空間から出てくるそれは、薄い身体を持った可愛らしく、ファンシーな姿を持った生命体。
召喚魔法で召喚されるそれは、
「――それじゃ幻獣ちゃん。張り切ってやっていきますよう！」
「――！」
デフォルメされた兎の影のような存在は、幻獣であり、ペールが使っている魔法は幻獣魔法。
使徒化によって得た召喚の力で使う新たな戦闘方法だ。
ペールの声に反応して、召喚された数十以上の幻獣は人間の集団に

向かっていく。
「うあっ、来るな！」
　言って剣を振る人間の兵。その剣の軌道は、確かに幻獣に当たるものだ。
　しかし、
「なっ、すり抜け――」
　幻獣には当たらず、そのまま幻獣たちの体当たりを受ける。
　ペールはいたずらっぽく笑みを浮かべ、
「無駄ですよう？　幻獣ちゃんに通常の攻撃手段は一切効きませんからっ」
「な、んだ、それは……！」
　反則的な性能のそれに兵士が憤りの声を上げるも、ペールは手を横に振り、
「いやいや、絶対に倒せないわけじゃないんだからチートって言わないでくださいよう？　レオンハルト様は倒せましたし、頑張ってくださいね？」
　言いながら、ペールは幻獣に命令を下す。
　通常の攻撃を無効化する幻獣の攻撃に、人間の兵達はやられていく。
　それらを見たキャロルは、
「……んもぉーー!!　ハンティさんもペールさんも！　わたくしを差し置いて活躍するなんてずるいですわ！　早くわたくし達もいきますわよ！」
「は、はいっ！」
　親衛隊の女の子モンスター達が、走り出したキャロルに続く。
　猪突猛進といった様子で全力で走るキャロルは、右手に剣、左手に銃を、それぞれ腰のホルスターから抜き放ち、
「とうっ！」
「っ――」
　何とも緊張感が抜けるような声とともに、その銃の引き金を引く。
　発射された弾は、兵士の頭を撃ち抜き、即死させてしまう。そして、

「そこっ、そこっ、そこー!」
次々と人間を撃ち殺していくキャロル。
彼女がもっとも得意とするのが、人間の間では未知の武器とされているこの銃の腕前だ。
寸分違わず、とまでは言わないが、狙った的に確実に当てるほどの技量を誇るそれは銃の攻撃速度もあって回避困難な武器であり、模擬戦を頻繁に行うハンティも厄介だと評した代物である。
反面、剣の方はあまり上達していないが、牽制くらいにはなるし、人間相手であれば身体能力でごり押せないこともない。
彼女は親衛隊に指示を与えながら、戦闘を行っていく。
指揮能力だけで言えば使徒の中でも随一であるキャロルの最近の役目が、専らこれだ。
親衛隊を遊撃として率いて戦闘や任務をこなす。サポートを必要としない場合はそれを行うのだ。
それでいて軍を動かすことだって出来る。ゆえに何だかんだ言って重用されるキャロルであった。

そして三体の使徒を中心に、レオンハルト軍の面々は凄まじい速度で敵を倒し、他の部隊に抜く勢いで進んでいった。
しばらくして、序盤の戦闘が終わりかけ、街が見えてくると、
「……リー」
「はっ」
今まで軍や使徒達の活躍を見届けていた魔人レオンハルトが、傍らのリーに声を掛けた。
その内容を、周囲の魔物兵達も察しながら、その声を聞いた。それはやはり、
「――俺も出る」
「はっ、ご武運を」
「指揮は任せたぞ」
言って、リーが頷くのを見届けたレオンハルトは、不意に手を前に

出す。
そこには何もない。しかし、途中から手は空間の中に隠れ、
「出番だ――〝オル＝フェイル〟」
その空間の中から、レオンハルトが何かを掴み取り、徐々に引き抜いていく。
が、とも、ぎ、ともつんざくような音とともに引き抜かれたのは、青い刀身を持つ長剣。
刀身は少し細く、長さは身の丈を越えるほど。
それはレオンハルトが先代の魔王から賜った〝魔剣オル＝フェイル〟。
レオンハルトの得物であるそれがその身を晒したのは、かなり久し振りのことだ。レオンハルト軍の者、魔物兵などは初めて目にした者すらいる。
そして久し振りに目にした者もいる。そこに共通する魔剣の感想は、
「なんという、禍々しさ……」
底知れない恐ろしさを感じる。
レオンハルトの剣気と同じく冷え切り、静かな魔剣は、しかしどこか抑えているような不気味さと荒々しさを感じる。
その得物をレオンハルトは右手に握り、
「――行くぞ」
告げた言葉通り、レオンハルトは戦場に向かって駆けた。

戦場にいる誰も彼も。
人間も魔物も、魔人も。その登場には息を呑んだ。
魔人四天王が戦場に出て少し。これ以上はないと思っていた人間達の前に、
「――――」
それを上回る魔人が現れたのだ。
魔人の最高位である魔人レオンハルト。

彼の登場に魔物兵達は沸き立つ。
そんな中、その姿を見た魔人ザビエルは、
「……あれが、奴の得物……」
初めて目にするレオンハルトの剣に注目する。
ザビエルは彼の剣を見たことがなかった。謎の見えない斬撃を威嚇として放たれはしたが、それを見切ることは出来なかったためだ。
そしてさらに言えば、レオンハルトの戦闘を見るのも初めてであり、
「……ふ、ふふ……見させてもらうぞ……！」
魔人筆頭の戦闘。その一端を垣間見る。
ザビエルは黒の炎で人間達を焼いて苦しめながら、レオンハルトに視線を向けた。
だが、
「……ふん」
レオンハルトは本気を出す気はなかった。
戦闘は行うが、本気を見せることはない。
それを見せるだけの相手でもないし、何より大勢にそれを見られるのは不都合になりかねない。
しかしだからといって、手を抜きすぎるのも誠意を欠く。
命令に従っているというポーズくらいはせめて見せなければならない。
ゆえにレオンハルトは、身内にしか見せたことのない技を幾つか解放することを決める。
その心構えとともに、レオンハルトは身を動かした。
最初に行うのは、前方の人間達に向かって剣を横薙ぎに振る、
「何を――」
「え――」
離れた場所にいる人間達の首が、一刀で寸分違わず斬り落とされる。
それは真空波。
いわゆる飛ぶ斬撃であり、それを持って人間を斬り殺していく。

レオンハルトにとって、遠距離の不利は存在しない。
魔法以上の射程をもつ斬撃は、目に見える場所にその剣を届かせる。
そのまま瞬間的に駆け、一気に前線に出ていくレオンハルトの視界に映ったのは、
「あああああぁぁっっ――!!」
ザビエルの黒い炎に焼かれて苦しむ人間達の姿だった。
「……」
それを見て、レオンハルトは考える。
如何にして殺してやるか、を。そして、ザビエルに対する意味をもった何かを。
舐められないように、そして一思いに殺すのに効率のいいものは何か、それを考え、条件に合致するのは、
「……燃えろ」
剣ではなく、魔法だった。
しかもそれは、炎属性。ザビエルの使うものと同じもの。
左手を、構えたレオンハルトにザビエルが疑問の声を上げる。
「何を――」
と、次の瞬間、レオンハルトは必殺技を放った。
左手に力を溜めて、魔法の発動光と同時に現れた紅の炎弾を放つ。
「――〝プロミネンス〟ッ!!」
その紅炎は、レオンハルトの手から離れ、黒の炎で苦しむ人間達の中心に着弾する。
すると、
「――――」
紅の火柱が立ち昇り、熱風と炎の勢いで周囲にあるものを焼き尽くす。
その火力は凄まじく、紅炎の熱が周囲の温度を上昇させ、巻き込まれた者達――ザビエルの黒い炎で苦しんでいた人間を一瞬で焼き尽くして絶命させる。
「何……!」

ザビエルはレオンハルトが放った炎。その結果に驚きの声を上げた。
火力であれば同等であり、用途が違うから一概には比べられない。劣っているわけではない。
しかし、炎に特化した自分と同等レベルの炎。オリジナルの魔法。必殺技を出したというのが問題で、
「まだ引き出しがあると言うのか……！」
レオンハルトは剣士であり、使うのなら剣の奥義。必殺技を持っていることは推測される。
しかし魔法でもそれなりの腕を持っているらしいが、それが必殺技を使えるほどとは思っていなかった。
剣だけではない。レオンハルトの底知れない実力が垣間見えた瞬間であった。
驚愕に目を見引くザビエルの姿を遠目に、目的が成ったことを確認したレオンハルトはザビエルを無視してひたすら前に向かう。
続く先は街。
城壁が街の周囲を囲むそこは、多くの兵士が戦闘をおこなっており、その城門を通らせまい、と人間が奮戦をしていた。
レオンハルトの目的はその街を最初に占拠すること。ゆえにそこに向かっていくのは必然であり、魔物兵達や人間らは揃ってその登場に声を上げた。
「急げ！　城門を閉めろ!!」
「ぐっ、急げ……！」
魔物将軍が兵達に急かすが、人間の行動の方が早い。
ゆっくりと城門が閉まり、外の侵入を遮断する。城門前に人間の兵士が残っているが、それを代償としたのだろう。背に腹は代えられない。街に侵入されるよりはマシなのだ。
しかし、
「――どいてろ……！」
「レオンハルト様……！　何を――」
言った瞬間、レオンハルトは城門前に辿り着くと、魔剣を縦に振り

下ろした。
結果起こるのは、
「っ!? ま、まさか……! じょ、城門が……!?」
「お、おおおおっ!?」
同じ意味で驚く人間側と魔物側。
まさか、と思った通り、レオンハルトが剣を振り下ろして衝撃が走った刹那、城門はゆっくりと縦に分かれ、
「! た、退避――!!」
ゆっくりと分かたれた城門が、街の中に向かって倒れていく。
大きな音を立て、地面から煙が立ち上る中、人間達は外から侵入してくる魔人レオンハルトを見た。
それは彼らにとっての絶望。死神であり、同時に救いでもあった。
レオンハルトは魔剣をゆっくりと構え、
「……悪いがこの街の人間は、全員俺に斬られてもらう」
言って、レオンハルトは剣を振った。
一度の振りだけで数十人以上が一斉に即死する。
そのことに戦慄を覚える兵士達だが、そこに加えて、
「……ん、先にいたのね」
魔人の横に黒髪の女性まで現れる。
瞬間移動を駆使して、多くの人間を殺したハンティだ。彼女はレオンハルトの姿を見た後、何の感情も持たない瞳で人間達に視線を移す。
そこには覚悟と意思があった。レオンハルトはそれを確認し、ゆえに敢えて言った。
「……ちょうどいい。手伝え」
「……言われなくても」
レオンハルトとハンティがその手に持った剣を構える。
「あ……う……」
「ひぃ……!」
怯えながらも街を守ろうとする兵士達に一切の慈悲も容赦もせず、
「――次」

「……」
レオンハルト達は街に死を振りまいた。

魔軍は僅か数時間で布陣していた人間の軍をほとんど壊滅状態にした。
幾つもの屍が横たわり、大地が赤く染まっていく。悲鳴と嘆きが共鳴して奏でられる交響曲に、それを下した魔王ナイチサは酔いしれる。
「フフフ、フハハハハハ!! ああ、良いぞ……!」
心底楽しそうに、嬉しそうに、ナイチサは愉快であると笑う。
これを求めていた。これを為そうとしていた。
これこそが、魔王である自分が作る世の中を象徴する光景だ。
理想郷、その一端が目の前に広がっている。
この世の価値観でいう正義。光。善。目の前にあるのはそれだ。
きっと天上の存在も喜んでいるだろう。
そこでナイチサは、少し勿体無いものを感じ、自らも跳び上がった。
自分も参加したい。自分も彼らに光を与えたい。光を浴びたい。
光あれ。その一心でナイチサは声を上げる。
「さあ……余も、卿らに光を与えようではないか……!」
跳び上がったナイチサは、眼下に見える人間の軍勢に向かってそれを放つべく、光を発生させた。
巨大な光球。それをナイチサは頭上に出現させる。
「この光は、卿らに与える祝福の光であるぞ……!」
膨れ上がっていく光球は、やがて数十メートル。百メートル近い大きさとなって周囲を眩く照らす。
「余の光を見よ……!」
手を振り落ろし、巨大な光球が地面に向かって音を立てながら墜ちていく。
「余が作る世界の光景を見よ……!」
光が闇を飲み込んでいく。

「余の家臣を見ろ……！」
その光球に飲み込まれたものは、光球が発する熱量に焼き尽くされて消える。
逃げ遅れた兵士が苦悶の悲鳴を上げながら融けていくのを見た。
人間達は必死に逃げるも、光球はその場にいる人間達を例外なく飲み込んでいく。
「余を見ろ……！」
天を仰ぎながら、ナイチサは地上の人間達に祝福の光を落とす。
「余は――魔王であるぞ……!!」
そうして、光球は人間の軍勢を呑み込み、大地に激突する。
瞬間、
「――――」
もはや悲鳴が悲鳴とならないほどの甲高い音とともに、光球はその場にあるものを焼き尽くした。
救いと破滅の光。
それを最後に――戦争は終わった。

使徒シャロン

ＮＣ１年。
人類史上初の国家であり、最大の王国は魔王ナイチサ率いる魔軍に滅ぼされた。
魔人レオンハルト以下多くの魔人が参加して猛威を振るったこの戦争は、魔王ナイチサと魔人達の強さと恐怖を改めて人類に刻み込んだ。
そして後に最も戦争が多かったといわれる時代の最初の大きな戦争であり、これから先のＮＣ期という時代を表すものでもあった。

戦争を終え、麾下の軍に戦後の統治、支配を任せた魔人達は一度、魔物界に戻っていった。
自陣の天幕に戻ってきたケッセルリンクは、そこに寝かせていた彼女にその意志を聞く。
「……いいのかね？」
確認するように問う。無論、今更な確認であり、この問いは無意味だ。
しかし、シャロンは粛々と頷きを入れ、
「はい。私は……ケッセルリンク様に命を救われました。その恩――というわけではありませんが、お仕えしたいと、そう思います」
「……そうか」
その言葉に何も言うことは出来ない。こちらがやったことだ。
身勝手な話だが、使徒になったとはいえこちらから離れ、人間の世界で暮らす選択肢も無くはない。それとなくその道も促した。
だがシャロンが首を振り、
「それに……もう、人間の世界に未練はありませんので……」
「……」
その意味は分かる。
彼女は自分が見かけた時でさえ、同じ人間、それも自国民から凄惨

な仕打ちを受けていたし、それだけではなく、そもそも帰るべき国は既にない。
他ならぬ自分達が滅ぼしたのだ。
今頃は、戦争に勝った隣国も、負けた王国も、平等に魔物によって苦しめられているだろう。仮に王国が勝っていようと、この結果は変わらなかった。そのことに無常を感じつつも、ケッセルリンクは息を吐いてそれを受け入れた。
「わかった。――では、シャロン。これから君を、正式に私の使徒として扱う。色々と大変なこともあるだろうが、頑張ってくれ」
「……はい。その、よろしく、お願いします……」
ぺこり、と頭を下げるシャロン。人に仕えることに――王女であったのだから当然だが――慣れていないのか、挨拶もぎこちないものだ。
そのうち慣れてくれれば良いと思う。自分に対して失礼なのは気にならないが、他の魔人相手であれば気をつけた方が良いことも確かだ。
いざとなれば魔人四天王である自分が睨めば大抵は黙らせられるかもしれないが、それでは無用な敵を作ってしまう。傷つけようとするならそれを厭わないが、出来れば避けたいものだ。
どちらにせよしばらくは彼女を見守る必要があるだろう、と、ケッセルリンクは主として、穏やかな声に努めて命令した。
「……では行こう。付いてくるといい」
「……はい、ケッセルリンク様……その……」
だが、頷きはしたものの、シャロンは何か言いたいことがあるのか、迷うような素振りを見せる。
なので振り向きつつ、
「どうかしたかね？」
「いえ……その、不躾なお願いかもしれませんが……」
一応こちらを立てようとしているのだろう。しかし距離感を計りかねているのか、どこまで言っていいのか迷っている様子だ。
「……言ってみなさい。他にも、何かあるのなら遠慮なく口にすると

いい。私は気にしない」
「……あ、ありがとうございます。でしたら、一つお願いが――」
シャロンがお願いを口にする。
その内容にケッセルリンクは一瞬息を止めたが、すぐに得心すると、
「……わかった。元より紹介する予定ではあったからな……こちらから頼んでみよう」
「……お願いします」
再びシャロンが頭を下げた後、ケッセルリンクは彼女を連れて帰路についた。

魔王城謁見の間。
長く広いその室内の中では、玉座に座る者と、それに向き合い膝を突く者の二種類の者が存在した。
入り口から続く赤い絨毯の先、装飾の付いた玉座に座るのは、白い肌を持つ貴族風の男――魔王ナイチサ。
そして床に膝を突いて言葉を待つのは、逆立つ炎の髪を持った男――魔人ザビエル。
後もうひとりは金髪灼眼の魔人――レオンハルトがいるも、彼は無言のまま微動だにせず、両者の会話を耳にしていた。
ナイチサは、傍目から見ても上機嫌な様子で口を開く。
「先の戦争で――ザビエルよ。卿は多くの街、人間をその炎で焼き殺したようだな？」
「ははっ、その通りでございます……」
膝を突いたまま主の言葉に肯定を入れるザビエル。
実際に、ザビエルは今回の戦いにおいて先陣を切り、万を越える人間をその手で殺し、苦しめてやった。そのことはザビエル自身も満足のいくものであった。そのはず。現に主であるナイチサも、うむ、と頷き、
「良い働き振りであるぞ。誉めて遣わす」

「はっ、恐悦至極に存じます」
お褒めの言葉を賜り、ザビエルの心に充実したものが来る。
しかし、それに酔いしれることが出来るのも、短い間のことだった。
正面、ナイチサの視線がザビエルの横、レオンハルトに向けられる。
同じ様に膝を突いた状態のレオンハルトに対し、ナイチサは口端を上げ、
「そして――レオンハルト。やはり、卿の戦果が一番であったな」
「……そのようです」
誉められ、しかしレオンハルトは続く言葉で謙遜する。
「ですがそれは、私の部下達の健闘の結果であります。私などよりも、ザビエル他、多くの魔人達の働きを褒めるべきでしょう」
「っ……」
その謙遜の言葉に、ザビエルは主に気づかれないように歯を噛み、ナイチサは面白そうに笑った。
「ふはは！　何を言う！　卿一人でどれだけの街を落としたか、自覚していない訳ではあるまい！　確かに、卿の軍――特に使徒は際立った活躍をしていたと聞くが、その中にあって卿はこちらから見ても大した戦い振りであったぞ！　正に獅子奮迅、という言葉に相応しいものだ……！」
「……光栄であります」
短く、それでいてナイチサが喜ぶ語句にて応答するレオンハルト。ナイチサはほんの少し落ち着きつつも機嫌よく続け、
「フ、謙遜が過ぎるのが卿の悪いところだな。一番の功労者がそうであると周囲は困ってしまうぞ。――ザビエルもそう思うであろう？」
「……はっ、そう思います」
話を振られ、内心の屈辱を抑えつつ静かに答える。手柄を奪われたような錯覚、そして劣等感をザビエルは感じていた。
そんなザビエルの心を知らず、ナイチサはなおもレオンハルトに声を掛ける。
「もう少し誇るのも悪くないであろう。……ふむ、そうだ。何か欲しいものはあるか？　あれば褒美として取らせよう」

好きなものを言うがよい、とナイチサは褒美を問う。
問われたレオンハルトは少し考え、
「そうですね……」
ややあって、
「……今は特に、何も思いつきませんな」
「……卿は欲が無いな」
残念そうにナイチサは言う。レオンハルトは首を振り、
「申し訳ありません。今は戦後のことで頭がいっぱいでして……何か思いつけば、改めて何かを賜われればと思うのですが、構いませんか？」
「なるほど、それなら致し方あるまいな。何かあれば申し付けると良いぞ」
ありがとうございます、とレオンハルトが感謝を告げる。頷いたナイチサはそこで立ち上がると、眼下の二体に対して言った。
「では、卿らはもう行ってよい。余も少し休ませてもらう」
「はっ」
「……わかりました」
終了を告げる言葉に否応なく頷く。大扉からナイチサが去っていくのを見届けると、レオンハルトとザビエルも立ち上がり、
「……では」
「ああ――」
ザビエルが短く別れを告げると、レオンハルトはさっさと扉の外に向かっていく。
その際、三体の使徒が迎えるように近づいてくると、
「……終わった？」
「ああ、帰るぞ」
黒髪の女に応答する。金髪の女と、薄紫色の髪の女が、
「畏まりましたわー！」
「はぁ、疲れましたねー。色々と実りもありましたけど……」
レオンハルトの背後に付き、口々に声を掛けながら帰路につく。
その姿をザビエルはじっと見詰め、

……レオンハルトめ……。
自分の遥か上に立つ魔人の存在に歯噛みする。
最初の出会いで分かっていたつもりであったが、どうやら奴はこちらの目算よりも上にいるようだ。
今回の戦争でレオンハルトの手腕、そして実力を垣間見たことで、それははっきりとした。主からの信頼もかなり高い。
それに、
……あの三体の使徒……そして、奴の軍も相当の練度だ……。
本人の実力だけではない。血を分け与えられた使徒の強さも一級品であり、配下の軍勢までレオンハルトの影響が色濃く出ている。
奴を越えるならばそこも避けては通れない。有象無象の雑魚はどうでも良いが、実力ある部下の存在は必要不可欠だ。
……使徒に自分の軍勢……そちらも用意せねばな。
差し当たっては使徒か。軍勢は今の自分が望んだところで直ぐに手に入るものでもない。
「厳選せねば、な……」
己の血を分けた使徒が弱いはずはないだろうが、それでもより能力のある者の方が、使徒になった時の力は上だろう。
ザビエルはさっそく候補を野に出て厳選するため、城の外へ出ることにした。

「――到・着、ですわー！」
「あー、我が家……じゃないですけど、城に帰ってきましたよう」
「……はぁ」
レオンハルトの城に帰宅した三体の使徒は、帰るなり弛緩した雰囲気で声を上げる。
正確には二体がそうなだけで、ハンティに関しては少し疲れたような息を漏らすだけだが。
何はともあれ、しばらくぶりに帰ってきたのだ。レオンハルトとしても気を入れていたので、疲労は当然ある。

軽く肩を鳴らしレオンハルトは言った。
「……とりあえず、お前らも休んでいいぞ。夜も遅いしな」
時刻は既に夜中。街も静まり返る時間帯である。
明かりを付け、未だ喧騒に包まれた場所もないこともないが、そういう場所は平時から夜通し騒げるような場所だ。城の周囲は静かである。
ゆえに寝るように言った。だが、
「あ、そ、そうですね！　今日はちょっと色々ありますし……」
「わたくし達は色々とやってからお休みしたいと思いますわ！」
「……何かあるのか？」
何か含むところのあるような態度にレオンハルトが疑問する。
するとペールが、どこか誤魔化すように手をワタワタとさせて笑みを浮かべた。
「えっとですね……ほら、レオンハルト様が連れてきた人間！　あの子達の教育をしないといけないので！」
「……ああ」
そういえばいたな、と思い出す。
数人ほど、城に連れ帰った人間。彼女たちの世話を、一番人間に近いペールに任せたのだ。
というのもこの城で働きたいと言うので、仕方ないことではある。だが、時間は夜中であり、睡眠の必要のない自分達と違い、普通の人間は寝ている時間だ。
「……こんな夜中に教育するのか？　寝てるだろ」
「準備があるんですよう！」
「……そうか」
「というか、いつの間に増えたんだ……」
ハンティが半目でこちらを見る。責めるわけではないが、肩を竦めて言う彼女の目は、〝どうせ、また女の子でも引っ掛けてきたんだろ？〟と、言われているような気がする。
事実、連れ帰ってきたのは全員少女なので何も言えない。無言でその追求を躱す。

なんと言ったものかな……、と答えに迷っていると、不意に耳に声が届いた。
「――レオンハルト」
「っと、ケッセルリンクか」
既に城に帰ってきたのだろう、知った声が聞こえ、レオンハルトはそちらに振り返る。
だが、そこにいたのは、
「……夜分遅くにすまない。だが、少し話があるんだが……構わないか？」
「……別に構わないが……」
と、レオンハルトは視線の先にいるケッセルリンクを見る。
同じ様に使徒達もそちらを見るも、そこにいたもう一人の方に視線を向けており、目を見張っている。
やがて、レオンハルトもそちらに視線を移動させながら言う。声はケッセルリンクに向け、
「……だが話があるのは……どうやらそっちみたいだな？」
「……ああ。彼女――私の使徒になったシャロンが、レオンハルトに話があると言ってきてな……」
「……」
ケッセルリンクの傍らにいる者。
亜麻色の髪を持つ少女の存在に、レオンハルトや使徒達は注目する。
使徒になった、シャロンという少女は、こちらに向かって窺うように頭を下げる。どうにも慣れていない仕草だ。
レオンハルトはその理由に見当が付くが、他は分からないようで、
「ケッセルリンク様の使徒ですのね。ならば挨拶をしておきますわ！
わたくしはレオンハルト様の第一使徒にして、完璧使徒であるキャロルですの！　お見知り置きを！」
「あー……ケッセルリンクも使徒作ったんだね……。まあ、とにかくよろしく。あたしはハンティね。一応、こっちの使徒」
「私はペールですよう！　レオンハルト様の使徒にして、ケッセルリ

ンク様の後輩ですので、よろしくお願いしますね！」
「え、あ、はい……シャロン、です。よろしくお願いします……」
ぎこちなく礼をするシャロンをこちらの使徒がそれぞれ迎えているが、どう接していいか分からず、戸惑っているようだ。
そんな中、レオンハルトは目を細めてシャロンを見ると、
「……俺に、話があるんだったな……」
「え、あ……」
出会うのは二度目。目が合った彼女はこちらを見て少し気勢を下げる。
使徒になったとはいえ、主以外の魔人に遠慮なく接するのは難しいだろう。彼女の場合はそれだけじゃないだろうが。
何はともあれ、
「……なら、そこの空いている部屋で話すか。お前達は外に出てろ」
言って、先に扉を開けて室内に向かう。外に出てろ、と言われた使徒達。そしてケッセルリンクは動かない。シャロンだけが、ゆっくりと、こちらの後ろに付いてきたのを見て、
……さて、面倒ではあるが……。
どうにもやり難いものを感じながら、レオンハルトはシャロンとの話し合いに臨んだ。

……いい部屋ね……。
シャロンは、ケッセルリンクに連れられてやって来たその城の一室の感想を思った。
魔人レオンハルトの城。その外装、内装は立派な造りであり、王族として暮らしてきたシャロンから見ても凄さが伺える。
それに城だけではない。ここに来る途中に見た街も、立派なものであった。
それこそ、自分の国のそれより――
「……それで、何が聞きたい？」
「え――」

不意に掛けられた言葉にシャロンは言葉を詰まらせる。
考え事をしていたというのもあるが、それよりも、
「あの……どうして、私が、聞きたいことがあると……？」
話をしたいとしか言ってないはずだ。
しかしレオンハルトは椅子に腰掛けながら何でもないように、
「あの国の関係者なら、何か聞きたいことでもあるんじゃないかと思っただけだ」
「……そう、ですよね」
話こそしなかったものの、宮殿で一度顔を合わせているのだ。こちらがかの国の王女であったことは分かっているだろう。
なら遠慮することはないのかもしれない。最初に会った時と、先程城で使徒と話している時とでは、随分と雰囲気が違っていた。
今も、宮殿で父と話している時よりは、あまり威圧感を感じない。
ひょっとしたら話しやすくしてくれてるのだろうか、と思いつつ、シャロンは口を開いた。
「……なぜ、国を――」
「――見捨てたのか」
言葉は被せるように、やって来た。
正面、足を組み、片目を開いて言うレオンハルトの姿がある。
彼はそのまま続けて、
「なぜ国を滅ぼしたのか。どうしてあんな目に合ったのか。――大体こんなところか」
合ってるだろ？　と言外に問うてくるレオンハルトの視線に、シャロンは唖然とすることしか出来ない。
それが当たっていたから。どうしてあんな目に、とまで聞くつもりはなかったものの、それが頭の隅にないと言えば嘘になるもので、
「……」
肯定も否定も出来ずに沈黙する。
だが彼にとってはわかりやすすぎる反応だったようで、鼻を鳴らすと、
「……まあいい。答えてやる」

簡単な事だ、とレオンハルトは言う。
そのまま一息、
「あの国が、お前が、お前達が――弱かったからだ」
「弱かった、から……」
弱さ故に滅びた。そうなった、と、レオンハルトは言う。
その表情は、少し憐れみの色が混じっており、
「そうだ。……お前なら、多少は昔を知っているかもしれないが……俺の時代ですら、お前達は弱かった」
「……」
弱かった、と言われ、しかし理解が及ぶ。
過去、王国では魔物と戦うのを一番強い人間と兵士に任せ、それを飼い慣らすことに苦心していたと言う。政を取り仕切っていた祖先達は、王とは名ばかりの傀儡を挿げ替え続け、自分達は実質的な支配者として権力を握っていたと。
しかしそれは、目の前の王の時代で終わった。目の前の王は言う。
「戦いを俺に任せっきりにした。俺が魔人になり、集落に手を出させないようにした際も、お前達は俺の存在を隠蔽し、別の奴を王に仕立て上げたそうだな」
実際に見てきたのだろう、レオンハルトの言葉は確信に満ちている。
その上で、彼は言うのだ。だが、と、
「まあそれはいい。強いやつに戦いを任せるのは自然なことだ。――問題は平和になったその後も、俺に甘えて胡座をかいていたことだな」
「甘えて……」
「俺が勝手にやったことだがな……。しかし、ないとは言えないだろう？」
確かに。国は長年、魔軍との戦争がないこと。そのことで相対的に繁栄を築き、他国よりも優位な立場になった。
そして今なら分かる。甘える、というのは、彼の庇護を受けたまま何もしてこなかったからだと。

……いつそれが、無くなるかも分からないのに……。
自分達は思考停止していた。それを彼は、甘え、と呼んでいるのだろう。
彼は言う。続けて、だが、と、
「俺がその要因であることは事実だ。……だから、恨みたいなら恨むといい」
「恨む……ですか……」
レオンハルトは頷く。どこか自嘲するように、
「俺があの国の運命を……お前の運命を変えることが出来たのは事実だ。あの様子ではいつか来る滅びは必然だったかもしれないが、それでもそれを遅らせることは出来たし、お前を救ってやることも出来た」
やりようはあった、と彼は言う。だが、
「俺は――己の意志でそれを選んだ。お前達を、俺の故郷を滅ぼす道をな」
ゆえに恨め。呪え。
己の意思でやったのだから恨む筋合いがある。それは、
……そうなのかもしれない。
あの時の痛みを。あの時の苦しみを。自分は憶えている。
父や家族に裏切られ、自国の民に責任を取らされ、暴虐の限りを尽くされた悪夢のような日々を。
その発端となった彼を恨む。それが楽なのかもしれない。他ならぬ彼がそうしてもいい、と言っているのだ。
しかし、
「……一つ」
言う。
「一つ……聞かせてください」
「……何だ？」
それは、あの時の言葉。
伝えられたこと。
それを、シャロンは尋ねる。

「あの時」
宮殿で出くわした時、
「貴方は何故――」
私を見て、
「気をつけろと。……そう言って下さったのですか……？」
「……」
レオンハルトが無言となる。
何を考えているのか分からない。
しかし、やがて口を開くと、
「……ただの気まぐれ――」
「私を見て、何を思ったのですか？」
その答えを嘘と断じ、流そうとした彼の言葉を止める。
そんなはずがないのだ。目の前の魔人は、確かにあの時、
「じっと私を見てましたよね……？」
しかもその時の彼の表情は、確かに驚いていた。
目を見開き、こちらの名前を聞いて、忠告をした。
その真意は、
「……一体、どうしてですか？」
「……」
再び沈黙する。
こちらから目を逸らし、眉間に皺を寄せる彼の顔を、じっと見つめ続ける。
そこに何を見たのか、それを教えて貰おうとして、
「……昔――」
やがて、レオンハルトは深い息を吐いて、声を出した。
「お前が、俺の昔の知り合いに似ていたからな……だから何となく、注意してやろうと……そう思っただけだ……」
「……そう、ですか」
シャロンはその答えを聞いて、ようやく得心する。
心のつかえが取れたようだ。ゆえに、
「――国を、祖先を代表して……お礼を」

注意してくれたことと。今まで守ってくれた恩義を、その感謝を伝えようと、シャロンは胸に手を当てた。
レオンハルトが、何を、といった表情でこちらを見る。
それに構わず、
「我が故郷と民を、今まで守ってくださり……ありがとうございました」
礼を言う。
それは、王家に代々伝えられる歴史書。
そこに記された――始祖の英雄に向けられたほんの少しの感謝の言葉を、シャロンは代わりに告げた。
「剣の王……レオンハルト――」
「やめろ」
強い、有無を言わせない口調で、レオンハルトは言葉を止めた。
目を細め、
「……感謝するのはいい。だが、その名を出すな。人間の名はとうに捨てた。……今の俺は……魔人、レオンハルトだ」
その言葉に、譲れないものを感じたシャロンは、しばらくして頷き、
「……分かりました。では感謝を。――ありがとうございます、魔人レオンハルト様」
「……ああ」
深く頭を下げると、その頭上から先程よりも低い声が聞こえた。
頭を上げると、微妙な、苦虫を噛み潰したような表情のレオンハルトがおり、彼が続けて、
「……その名は誰にも教えるなよ」
「はい。わかりました、レオンハルト様」
「……ならいい」
どうやら名前を知られるのがそれほどに嫌らしい。
しかしそれは、あの本を見れば誰もが知れることであり、
……どこにあるかもわからないのよね……。
国は滅んだ。父や家族も、おそらくは生きてはいないだろう。
ゆえにあの本も失われてしまったのだろうか。少し残念に思う。

王家の人間にとって、剣の王の伝説が記されたあの本は子供の頃から何度も繰り返しに読む、人気の書物だ。
かくいう自分も、それを穴が空くほど目を通したものだ。
だから、というわけではないが、シャロンは少し気になり、
「……話は終わりなのですが……」
「……何だ、まだ何かあるのか？」
はい、と頷く。書物の内容を思い出し、
「王家に伝わる話なのですが……レオンハルト様は、その……」
「？　何だ？」
少し口にするのは憚られるが、言った。
「……胸の大きな女性が好きで――」
「……あ？」
「宮殿に大勢の胸の大きな美少女を集めていたとか……」
言うと、レオンハルトは固まった。
反応から察するに本当のことなのだろうか。ややあって、
「……それが、伝わってるのか？」
「……はい。レオンハルト様のことが記された書物がありましたので……父も、それを読んだからあの時に……」
思い返すように言うと、レオンハルトは急に頭を抱え、
「っ……そういえばそうだ……何で狙ったように巨乳ばかりだったのかと思えば……」
くっ、とレオンハルトは苦悶の声を漏らし、
「……その本は……持ってないんだよな？」
「はい。どこにあるかは、ちょっと……その、わかりません……」
「……そうか」
レオンハルトは頷きはしたが、小声で、〝探して処分するか……〟と本気で悩んでいる。どうやら知られたくないことだったようだ。
想像していたよりも親しみやすい人物なのだろうか。
しかし、何はともあれ、
「……では、これからも顔を合わせると思いますので……」
「ん、ああ。……よろしくな」

「はい。よろしくお願いします」
立ち上がり挨拶を交わしあう。
やはりどこか親しみやすさを感じつつ、シャロンは部屋を後にし、ケッセルリンクの元に戻っていった。

その後。
部屋に一人残されたレオンハルトは、
「……全く……」
大きく溜息を吐きながら、ソファの背もたれに大きく身体を預ける。
そうして思うのは、シャロンという少女のことで、
……驚かされたな。
二重の意味で、シャロンには驚かされた。
おかげで出会った時、思わず表情を乱してしまい、それを理由に突っ込まれてしまったのだ。
不意打ち気味だったとはいえ、あれは失敗だ。何がどうというわけでもないが。
……似ていたな……。
古い記憶にある人間時代の知り合い。
その容姿と瓜二つであったシャロンは、人間時代を思い出してどうにもやりにくさを感じる。
そしてそれは、ある一つの可能性を示唆するもので、
「……まさか、な……」
考えてみるが、ありえないはずだ。
いや、極僅かだが無くはない。それを信じたくないだけだ。
何故なら、もしそうだとすれば、彼女は――
「……いや……やめておくか……」
しかしそこで、レオンハルトはそのことについて考えるのを止める。
そうだったとしても意味のないことだ。何かが変わるわけでもな

い。
わざわざ掘り返すことのことじゃないのだ。
自分は魔人レオンハルトで、彼女は魔人ケッセルリンクの使徒シャロン。
元同郷というだけであり、それ以上の関係はない。
これから仲良くなるのか、どうなるのかはまだ分からないが――
「……まぁ……気にかけてやるか……」
親しい魔人。ケッセルリンクという身内の使徒である彼女は、これからは身内となる。
ゆえに少しは気にしてやるくらいなら、バチは当たらないだろうと思い――レオンハルトはソファの上でゆっくりと目を閉じた。

一方、とある部屋では、
「――っ、遂に……！　最高の品が……わたくしの手に……！」
「ほほう……これはこれは……！」
レオンハルトの使徒であるキャロルとペールは、割り当てられた自室のベッドに並べた品々を見て、感動を分かち合っていた。
そこにあるのは、今回の戦争のどさくさで拾ってきた戦利品。
それも、主に関係する一品ばかりだ。
キャロルは、恐る恐る、震える手でゆっくりと銀色の直剣を手に取り、感極まったような様子でそれを抱く。
「ああ……!!　これが、これこそが……人間時代のレオンハルト様が使っていた剣……！　ま、まさに至高の逸品ですわぁ……！」
「ファンクラブ会員であれば誰もが欲しがる超プレミアな品々ですよう……！　――ん？」
激レアなレオンハルトグッズを前に、夜中だというのにテンションが鰻登りの二人。
しかしそこでペールは、とある古ぼけた書物を見つける。
「これ、は……もしや……！」
「？　あっ、それは……確か、レオンハルト様の故郷の貴重な歴史が

乗っているとか何とかの本らしいですわ！　変な爺が拾ったらしいのですが、拾っただけの癖に高値でふっかけてきた挙げ句、こちらが難色を示したのを見てどんどんと値引きしだしたんですのよ！」
「……それで、買ったんですか？」
「なんか価値がないと言われてるみたいでムカついたのと、こちらが背を向けた途端襲いかかってきたので、身体に直接、言い値分のＧＯＬＤを詰めて差し上げましたわ！」
ふんす、と胸を張って言うキャロル。ペールとしては普段なら〝うわ、どんなグロ画像ですかそれ？〟とツッコミを入れるところだが、今はそれどころじゃない。
ペールはゆっくりとページを開いて中身を確認すると、内容と、その価値をキャロルに伝える。
「キャロル先輩……これ、とんでもない一品ですよう……！」
「……マジですの？」
「……とりあえず、見てみてください……！」
おずおずと手渡されるその一冊の本。
それを目にし、内容を理解していくと――徐々にキャロルの手が震え、
「……まさか、まさかですの、ペールさん……!?」
「そのまさかですよう……！」
二人は顔を見合わせて、同時に声を上げた。
「レオンハルト様の――」
――二人の品評会は、夜が更け、朝日が昇っても続いたという。

魔法生物の誕生

ＮＣ１ＸＸ年。
魔王ナイチサの治世が大陸に訪れ百年程。
人類は魔軍との戦争を強いられ続けていた。
人間の倍以上はいると思われる魔物兵も問題であったが、特に恐れられていたのはやはり魔人と魔王だ。
通常の魔物とは桁違いの戦闘力を持ち、あらゆる攻撃を通さない無敵結界を持つ魔人の侵攻。
そしてそれを越える魔王の凶行に、人間は怯え続けた。
――そんな時代に、一人の研究者がいた。
とある国家に招かれた魔法研究者は、魔法の腕もさる事ながら、人間の間では並ぶもののいない魔法具作成者――〝付与師〟であった。
彼女はこの時代、まだ浸透しているとは言い難い魔法という技術に一石を投じた。
そも魔法を学ぶには、魔法使いに師事し教えを請うことが一般的であり、代々伝わる魔法使いの一族や、多くの魔法使いが所属する軍にでも入らなければ、魔法を学ぶことは難しかった。
しかし彼女はとある一冊の本に出会い、魔法の道を志した。
それは人間の間には出回っていない珍しい魔法の本であり、人間の生活には未だ使われていない、〝魔法製品〟の作成方法が記された貴重な本であった。
付与、という魔法を物に込めて作られる魔法製品の作成に、彼女は夢中になった。
それは人間の技術では実用化するに難しいものであったが、幸いにも彼女には才能があった。
普及、量産するような魔法製品こそ実用させることは出来なかったものの、それよりもさらに高度である〝魔法具〟の作成に成功した。
炎の魔法を込めることによって作られる炎の杖など、使おうと思えば魔法使いでなくても使える魔法具の誕生によって、彼女は一躍有名人になった。

一部の貴族、王族の生活に使う魔法具などを発明し、彼女は一代で財を成したのだ。
そんな時、彼女は国からとある依頼を受けた。
魔軍に対抗するため、武器となる魔法具の作成を頼まれたのである。
魔軍の存在は当然、彼女も知っていた。人間を苦しめる魔物の軍隊。
その脅威から人類を救うべく、彼女の研究は始まった。
だが彼女は直ぐに、壁にぶつかることになる。
強力な魔法具を作成し、それで魔物を倒すことは出来る。通常の魔物であれば敵ではない。
しかし――魔人と魔王は別だ。
人間とは隔絶した力を持つ魔人の強さは、彼女の予測を大幅に越えており、どれだけ強力な魔法具を作っても、彼らに傷一つ負わせることが出来なかったのである。
無敵結界の壁。人間では絶対に越えられない種族としての壁に、彼女は当たってしまったのである。

その研究所は、陽の当たらない森の中にひっそりと建っていた。
持ち主が陽光、自然の光を嫌ったためであり、建てる際に人気がないこの場所をわざわざ指定して作らせたものである。
それゆえにやはりと言うべきか、室内は薄暗く、人っ子一人すらいない。
掃除や手入れをする使用人でも雇えばよいのに、それすらも横着しているせいか、室内は埃まみれであり、何だか分からない物体で溢れている。
足の踏み場もないほどに散らかったその室内の中で、唯一生活感のあるスペースに、その持ち主はいた。
「――あぁーー……あの貴族、ちょーうざい……」
悪態をつくその影は、小柄だった。

魔女帽子を被った小柄で細身の少女が、研究室の床、毛布などを敷き詰めたスペースにて寝転がっている。
腰まで届く緑色の髪はぼさぼさで手入れが行き届いておらず、度重なる夜更かしのせいか目の下には隈が目立ってしまい、その不機嫌そうな顔と相まって可愛らしいと評することの出来る顔も台無しになっている。
「何度も何度も、催促しやがって……死ねばいいのに……」
可愛らしい声から放たれるその毒や、殆ど外に出ない所為で白くなった肌や、もうとっくに大人どころか既に数回結婚をして子供まで生んでいるのに、不摂生がたたって成長していない所為か子供のように見られる彼女。
「私を誰だと思ってる……天才魔法研究者……ガウガウ様だぞ……！」
彼女こそが、魔法研究の第一人者にして、稀代の天才付与師――ガウガウ・ケスチナ。その人だった。
彼女はお湯で戻すことで食べられるインスタントラーメンなる食べ物の蓋を開きながら、ひたすらに呪詛を呟き続ける。
「ずるずる……言われなくても……ずる……もうすぐ出来るっていつも言ってるのに……ずるずる……あのカス共……」
手軽で簡単に作れるが、栄養価が偏るインスタントラーメンと、知的飲料と呼ばれるドクペーダッパーを飲んで喉を潤す。
彼女の食事は基本的に手軽に食べられる冷凍食品かお菓子である。極度の面倒くさがりであるガウガウは研究所に籠もりながらこういった不健康な生活を繰り返している。
これが原因で家族に逃げられたことすらあるのだ。といっても、結婚相手はガウガウの資産や魔法具を目的とする男ばかりであり、まともな人物であったとは言い難く、唯一腹を痛めて生んだ息子と、その血を与えた夫はやはりどこかに逃げ出してしまった。
今となっては親交があるのは親戚のツラニツラという人物くらいのもので、友達どころか知り合い程度の人物すら存在しない。
「ずる……ふぅ、今に見てろ……いつか私の偉大な魔法具に……感謝

する日が来る……」
しかしそのことをあまり気にしていないガウガウは、マイペースに食事を摂り終えると、そのまま少し移動して広いテーブルの前に座った。
そこにあるのは幾つもの魔法具。どれも一つ売るだけで屋敷が一つ買ってお釣りが来るほど高価な物であり、ガウガウの魔法研究の結晶であった。
傍らにいつも持ち歩いている一冊の本を置くと、ガウガウはいつものように研究を開始する。
しかし今日の研究はいつもと違うものだ。
「くくく……今日は、特別な日になる……くく」
それを示すようにガウガウの表情に笑みが表れる。くつくつと含み笑いを暗い部屋に響かせながら、ガウガウは一つの物体を手に取った。
それは――宝石であった。
紫色の輝く宝石。しかしその形状は丸く、中心に赤いものが混じっている特殊なもの。
その宝石こそがガウガウが考えた魔法具研究。その集大成となる魔法具だ。
「昨日で、術式は全て組み込んだ……後は……最後の魔力を込めるのみ……！」
ゆっくりと宝石に魔力を込めていくガウガウ。思うのはこの魔法具のことだ。
魔軍に対抗するための魔法具の作成を、莫大な報酬とともに依頼されたガウガウが導き出した結論。それは、
「人の手で……魔王は決して倒せない……」
人間の力ではどれだけの魔法具を使っても、魔王はおろか魔人を倒すことは出来ないということだ。
人の身で魔物を、あるいは使徒までなら倒すことが出来る。
しかしだ。例えどれだけの魔物を倒しても、魔人を倒さねば。最終的には魔王を倒さなくては人間に未来はないことは一目瞭然。

魔物を滅ぼし尽くすことは現実的ではないが、仮にそれを為したとしても魔王一人で充分、人間は滅ぼされる。
かなり貴重な資料――魔王の力を見たという人間が書き出した資料によれば、魔王は魔法一つで数千、数万の人間を殺すことも可能であるという。
そんなことが出来る化け物を倒すなど、人間に出来るはずもないし、同じように数万を殺せる魔法具など、ガウガウにも作れない。捻った条件、方法を使えば可能かもしれないが、問題はそこではない。
問題は、人の手ではどうやっても勝てない、ということ。
「なら……話は簡単……」
人の手で勝てないのならば――人以外の、より強い者の力を使えばいい。
この世に人より強いものなどごまんといる。
亜人種、魔物、巨大生物、伝説の武器、ドラゴンなど、人の手に負えないものは沢山あるのだ。
コンセプトは、寄生と思考。生物、非生物問わずあらゆるものに寄生して操りつつ、その力を高めていく。
さらに自ら思考して自律行動を取ることによって効率良く寄生先を見極め、同時に戦うことを可能にした。
「自動魔法具……いえ、魔法生物――」
そう。これから誕生するのはただの魔法具ではない。
究極の――生きた魔法具。魔法生命体。
「くく……さあ、生まれなさい――」
ガウガウが最後の魔力を宝石に込める。
眩い光が薄暗い部屋を照らし、増幅して目視出来ないほどの光量が発生する。
その中心にある魔法生物の名を、ガウガウは叫んだ。
「究極の魔法生命体――レッドアイ……！」
言葉とともに甲高い音と魔力光が発生し、周囲をその圧力で吹き飛ばす。
机の資料、魔法具、ガウガウまでも吹き飛ばし、轟音を響かせた室

内。
しかしやがて光は収まり、ガウガウも魔法具の山から身を起こし、机に目を向ける。
そしてそこにあった物を見て――ガウガウは感情を爆発させた。
「く、くくく……！　完成だ……!!」
「――――」
そこにいたのは、僅か２０センチほどの小さな球体。
紫色の球は、その周囲から触手のようなものを伸ばして宙に浮いており、中心には一本の線がある。
線はゆっくりと見開かれ、赤い眼球を露出させた。
そして赤い瞳はぎょろぎょろと動き、そしてガウガウを見つけると、
「――イエス。マスター」
無機質な声を放ち、
「ミーにオーダーを、プリーズ」
「お、おお……！」
魔法生物レッドアイ。
その完成に、柄にもなくガウガウは身を震わせて歓喜した。
とうとう自分は、ここまで至った。
これならば、魔王にだって勝てる。
力を、魔力を高め、より強い存在へと寄生を繰り返し、最終的にはそうなる。
そんなものを生み出した自分は神か何かだろうか、と。
普段はやらないような論理的ではない思考をしてしまうくらいには、ガウガウははしゃいでいた。
彼女はゆっくりと、レッドアイに命令を下す。
「それじゃあ、レッドアイ……その使命に従い、行動を開始しなさい……！」
「――イエス」
その瞬間が、レッドアイという存在の始まりであった。

魔王城。
人類の敵である魔軍の本拠地であるそこでは、悲鳴が響いていた。
人間の、ではない。魔人のものである。
城の一角にて、一体の魔人が床にその身を伏せ、それをもう一体の魔人が踏みつける。
逆立つ炎の髪を持つ男性。その魔人は、魔人に向かって愉悦した声を掛ける。
「どうした？　我に灸を据えるのではなかったのか……？」
「はぁ、はぁ……やめて、くれ……ザビエル……」
一体の魔人は、自分を踏みつける魔人ザビエルを見上げて制止を呼びかける。
しかしザビエルはそこで一度止まり、
「……ザビエル？　ふむ、人に物を頼む時の態度ではないな……ふん」
「が、あああああっ……！」
ザビエルの足が魔人の肩を踏み潰す勢いで振り下ろされ、骨が砕けるような音が鳴る。
魔人は慌てて声を上げた。
「ザビエル様……！　やめてください……っ！」
このままでは殺される。そう思った魔人は恥も外聞も捨ててザビエルに懇願する。
「……ふむ、聞こえないな。聞こえたか、猿？」
「……」
ザビエルが自分の横に声を向ける。
肩に乗っていた小さなサルボボ。黒いマントを首から巻いた猿は、魔人ザビエルの第一使徒である藤吉郎。
藤吉郎は主であるザビエルの言葉に首を振り、聞こえなかった、という風にポーズを取る。それを見たザビエルは笑い、
「ふふ、やはり聞こえなかったか。では、もう少し痛めつけるとしよう」
「そんな――あああぁ……！」

ぐっと足に力を込めて魔人の骨を砕いていく。
痛みに表情を歪め、悲鳴が城の廊下に木霊する中、ザビエルの背後にいる他の三体はそれぞれ口々にそれを見て、
「ザビエル様、たたたた楽しそうだすな」
黒い肌をした顔のデカい男。
ブザイクと形容出来る長衣の男は魔人ザビエルの使徒――魔導。
人間の手の骨が先端に付いた杖を持つ魔導は、どもったような特徴的な口調で楽しそうなザビエルを評する。
「タノシソウ、ワタシモ、ヤリタイ……」
その評に同意し、自らもそれに混じりたいと言うのは全裸に近い格好をした女。
紫に近い青色の髪を持ち、右腕には金色の巨大な手甲を身に着け、左手には青色の折れ曲がった刀を持っている。
刀に血を滴らせた状態で笑みを浮かべる彼女は使徒――式部。
人を殺すことを好み、３６時間に一度は殺さないと知能が低下して見境なく殺すようになる殺人狂いの彼女は、魔人にすらその欲を向けている。
「ふっ、まあ身の程も弁えずザビエル様に突っかかったのだ。やられて当然だろう」
そして冷静に説明するのは、白い肌を持った福耳の大男だ。
和装に身を包み、その手に巨大な銃のようなものを持つ男は使徒――煉獄。
常にザビエルの傍に付き従い、様々な活動を行っている煉獄は、今も周囲に気を配っている。
彼らは魔人ザビエルが作った使徒達であり、実務、能力、戦闘に優れた者達である。
後もう一体、存在するのだが今は離れて行動しており、魔王城にその姿はない。
代わりに、その廊下を覗き見する存在がいた。
「――な、なんでよりによって俺様の部屋の前で……！　ぐぐぐ……！」

廊下の角からザビエルは他の魔人を踏み潰している光景を見るのは魔人ケイブリス。
彼は日課の鍛錬を終えて自分に割り当てられた部屋に帰ろうとしたところ、部屋の前の廊下で遊んでいるザビエル達を見つけ、
「これじゃあ帰れねぇな……隠れ家にでも行くか……？」
少しずつ強くなっているとはいえザビエルみたいな危険かつ強大な魔人の前を横切る勇気は、ケイブリスにはない。特にザビエルは最近、他の魔人相手によくこういった暴力を振るっているので特に危険な相手だ。
そもそも現魔王ナイチサが作った魔人は凶悪で危険な人物が多いため、そのおかげでケイブリスは最近、眠れない日々が続いている。
おそらく今日も眠れないだろう。そう思い、しかししょうがないことだと諦めて踵を返そうとしたケイブリスだが、
「――誰かと思えば……ケイブリス――様ですか」
「っ!?」
気づけば、ザビエルの使徒、煉獄にその身を発見されてしまった。
ケイブリスは驚き、身を怯ませるも逃げることが出来ない。
ともすれば無敵結界もあるし、目の前の使徒には勝てる可能性はある。最近はようやくだが、下級の魔人くらいまで力は付いていると思うからだ。
だが、近寄ってきた魔人の方が問題で、
「ほう……こんなところで何をしている。ケイブリス」
魔人ザビエルが、ゆっくりと近づいてきた。
他の三体の使徒を連れてケイブリスの前まで歩いてくると、小さな身体を持つケイブリスを見下ろす。
ケイブリスはその問いに必死に頭を下げた。
「い、いえいえ！　何もしてないですよザビエル様！　……強いて言うなら、ザビエル様の強さを見て尊敬の眼差しを送っていました！」
「……」
「……それより、何かしてほしいことは無いですかザビエル様！　僕、何でもやってきますよ！　へっ、へへ……」

「……ふん、そうか」
媚びへつらうケイブリスの姿を見て、滑稽に見えたか、哀れにでも映ったのかザビエルの視線が見下しきった冷たいものとなる。
ならば、と声を出し、
「我の為に、レオンハルトを襲ってこい……とでも言えば、お前は従うのか？」
「へ……」
言われた言葉にケイブリスが絶句する。
いくらなんでもそれは、
「どうした？　出来ぬのか？」
再度問われ、ケイブリスは冷や汗を掻きながら必死に弁解しようと試みる。
「い、いえ、その……ぼ、僕には荷が重いと言いますか……」
「では、何でもするというのは嘘ということか……？」
「っ……そ、そうではなく……！」
ザビエルの圧力が視線とともに叩きつけられる。
未だケイブリスの遥か上をいく上級魔人としての存在感。力を重圧としてぶつけられ、苦悶の声を漏らす。
それだけで動けなくなってしまった脆弱なケイブリスという存在に、ザビエルは息を吐き、
「……戦うことが出来ぬと言うなら……精々レオンハルトの――」
「――俺がどうしたって？」
「……！」
ふっ、と、ケイブリスに叩きつけられていた重圧が収まる。
奥から聞こえてきた声。同時に現れた存在に、ザビエルとその使徒は身を硬くして待ち構えた。
今話題に出していた魔人。魔人筆頭兼魔軍参謀であるレオンハルトが、冷たい目でこちらを睨んでいたからだ。
ザビエルはケイブリスを無視し、レオンハルトに向き直る。
「……いえ、レオンハルト様。我は特に何も。ただの世間話をしていただけでして……」

「……ふん」
レオンハルトの目が細まる。
鋭い目が奥、倒れた魔人と、近くのケイブリスに移り、最後にザビエルに戻す。
「随分と手荒な世間話だな？」
「……少し口論になってしまったので。そういういざこざは珍しいことではないでしょう？」
「……わざわざ使徒に見張らせてまでか？」
その言葉に反応したのはザビエルではなく、実際に周囲を見張っていた煉獄であった。
彼はザビエルの傍らに付きつつ、レオンハルトに向かって、
「……お言葉ですが――」
「――黙れ」
「っ――ぐっ、っ……！」
レオンハルトの圧力が、煉獄に、正確には使徒達に叩きつけられる。
その赤い瞳に射抜かれるように視線を向けられた煉獄は、その巨体をしゃがみ込ませ、自然とレオンハルトに膝を突くような体勢になる。
「――誰がお前に発言を求めた？　煉獄、俺はザビエルに聞いてるんだ。お前は黙っていろ」
「は、は……」
その言葉に平服するしかない煉獄。
見れば他の使徒達も脂汗をかいている。使徒の中では高い実力を持つザビエルの使徒達だが、それでも魔人筆頭という魔人の最高位から殺気をぶつけられて平気でいられるほどではない。そこには隔絶した格の差と、実力差が横たわっている。
ザビエルのもう一体の使徒であれば少しは食い下がれるだろうが、他の使徒では不可能に近い。使徒達の苦しみを感じ取ってか、ザビエルが口を開き、
「……少し内緒話をしておりましたので、使徒に見張らせておりました」

「……下手くそな言い訳だな……」
冷めきった声で言うレオンハルトの視線が、ザビエルを射抜く。
そのまま脅すように、
「ザビエル。最近のお前の行動は目に余るな……」
ここ百年で更に実力を高めていたザビエルだが、それに比例してかその傲慢さを隠さなくなっていた。
自分に逆らうやつは魔人ですら平気で暴力を振るう。殺しこそしないのは魔王であるナイチサへの忠義があるからだろう。しかし城の中でここまでやられると魔人を統率するレオンハルトの立場からすると迷惑でしかなく、
「少し大人しくしていろ。でないと――俺もお前と、世間話をせざるを得ないが？」
脅しをかけて黙らせる。レオンハルトは魔人達を従わせるためによく使う手法だ。
百年前であればザビエルも、その圧に従っていただろう。
だが、今は違う。
「……遠慮しておきます。ただでは済みそうにありませんし……」
「……」
ザビエルが引いた。
言葉こそ丁寧だが、それに怯むことなく、頭も下げない。
もはや脅し如きで怯むほど、ザビエルは弱くないことの証左であった。それを感じ取り、レオンハルトの眉間に皺が寄る。そして、息を入れると、
「……ふん。留意しておけ」
ややあって、その場の空気が弛緩する。
レオンハルトが殺気を収めたからだ。同時に使徒達も息を整え、ケイブリスも立ち上がる。立ち上がったケイブリスにレオンハルトは視線を向け、
「……大丈夫か？」
「！　そ、それはもう――じゃなくて、別に何もありませんでしたよ……あはは……」

その場にレオンハルトとザビエルという二人の強者がいることで、ケイブリスの態度もどっち付かずのものとなる。一応、あとでザビエルに報復されないように何もないとは言いつつ、レオンハルトの背中に隠れたケイブリスは、レオンハルトの肩に手を置いて肩揉みしつつ、
「それはそうと、レオンハルト様は何か用事でも？　何もなければこのケイブリス、レオンハルト様の為に貢ぎ物を用意させて頂きたいです！」
「ん……それはありがたいが……これからナイチサ様の元に向かう予定でな」
「そ、そうでしたか！　ならこんな僕の相手をしている暇はありませんね！　残念ですが諦めます！　お勤め、ご苦労さまです！」
「……」
レオンハルトの周囲を回り、正面にて頭を下げたケイブリスを、ザビエルが白い目で見る。強い相手に媚びへつらうのはいつもの事だが、最強の魔人相手ともなるとそのやり方も卑屈に過ぎる。
逆に数少ないケイブリスよりも弱い存在には、どうにも横暴な振る舞いが見られる、という噂もあるが、圧倒的強者であるレオンハルトやザビエルにはそれを見ることが出来なかった。
とはいえ、レオンハルトは慣れているのか、ケイブリスのおべっかを軽く息を入れるだけで受け止め、その上で立ち去りながら、肩に手を置いてやると、
「……まあその後でなら時間を作ろう」
「……え、あ、はい！　分かりました！」
ほんの一瞬、〝あ、マジで？〟と、顔を驚かせたケイブリスだがそこは流石なもので直ぐ様頷いてみせる。
じゃあな、と後ろ向きに手を振るレオンハルトに頭を下げつつ、見えなくなるまで見送ると、
「……ふぅー……」
汗を腕で拭い、大きく息を吐く。
そして今度はザビエルの方を向いて、

「あ、ではザビエル様！　また何かあればお申し付け下さいね！　では！」
と、言って凄い勢いで立ち去っていった。その変わり身というか誰にでも媚びるケイブリスの姿を見て、ザビエルの表情が微妙なものになる。
「……哀れな奴よ、ケイブリス……」
「すすすすごく媚びてただすね……」
「……ナサケナイ……」
「……全くですな……」
ザビエルとザビエルの使徒達も、その場を後にしていった。

使徒二人

全てが整った部屋がある。
調度品、装飾、家具。その全てが主の好みに合わせた最適なものであり、特注で作らせた価値のある品の数々だ。
その一つ、小さくまとまった丸いテーブル。そこにある椅子に腰掛けた主は、さっそくその声を家臣に飛ばした。
「――卿にしては少し遅かったな？　時間を的確に守る卿には珍しい。何かあったのか？」
気品ある声と口調。
その持ち主は魔王ナイチサ。その人であり、彼はテーブルに数冊の本を置き、そのうちの一冊を目を通しながらグラスに入った真っ赤なワインを口にし、遅かった、と訪問してきた家臣を迎えた。
しかしその声色に咎めるような色はない。むしろ物珍しさから軽く興味を湧かせるもので、本から顔を上げて家臣の顔を見る。
家臣は軽く首を振った。丁寧な口調で、
「申し訳ありません。……道中で少し」
「ふむ、喧嘩でも売られたか？」
「些細なことです。部下を諌めることも仕事の内ですので」
それは当然のことで主が慮る必要はない。きっぱりと言い切った家臣の名はレオンハルト。
魔人筆頭と魔軍参謀を務める魔軍のＮｏ．２。魔人の最高位である金髪灼眼の美丈夫であり、魔王ナイチサの忠実なる家臣だ。
紛れもない忠臣。その発言にナイチサは機嫌を悪くすることもなく、左様か、と短く一言で頷いた後、グラスを置いて目を向けると、
「真面目だな。たまには魔人らしく、力で叩き潰してしまえば良いのではないか？」
「……言って聞かせることが出来ず、無闇に暴力を振るうのは上に立つ者としては下の下。無能を自ら喧伝するようなものかと」
ほう、と納得しかけたナイチサに対し、レオンハルトはそれに、と言葉を区切った。

「本当にどうしようも無い相手……気に障った相手には容赦はしませんのでご心配なく」
「……なるほど」
と、ナイチサは告げられた理由に微笑を浮かべる。面白そうにレオンハルトを見て言うのは、
「そういえば卿にも、魔人らしさがあるのを失念していたな。――その僅かに溢れる戦意の名残りが、その証左であるか」
「……申し訳ありません。昂りを抑えきれず……」
謝罪し、頭を下げようとするレオンハルトにナイチサは掌を上げ、
「よい、構わぬ。察するに、やり過ぎないように自己を律しているのであろう？　規律を重んじる卿にしてみれば余の城で暴れる魔人は目障りに映るだろう。余の持ち物を傷つけないように配慮しているというのであれば、多少昂りを表に出したくらいで何を怒る必要があろうか」
「……寛大なお言葉に感謝を」
「うむ。……とはいえ、そこまで気にする必要もないのだぞ？　卿は余のためによく働いてくれている。魔人らしく欲望に忠実に動いたところで咎めることはない」
それこそ、余が作った魔人達のように。と、ナイチサは頬杖をついて本題を思う。
同時にそれを察したレオンハルトは慇懃に返しながらも思考を回し、
「その時は、やり過ぎないように注意しましょう。……して、今日は――」
ああ、とナイチサは頷く。そして口に出したのは、
「通達した通り。――魔人四天王の空いた二つの椅子に、そろそろ誰かを座らせてやろうと思ってな。卿の意見を聞こうと思ったのだ」
「……左様ですか」
レオンハルトはナイチサの言葉を聞いて、そのことを思う。

魔人四天王。今更確認するまでもなく、魔軍の、魔人の中でも特に強大な力を持つものが敷く称号の一つだ。
現在、その椅子に座るのは魔人カミーラに、魔人ケッセルリンクの二名のみであり、過去を遡っても四天王になったことがあるのは自分くらいしかいない。
やはりそれ相応の力――上級魔人と誰しもが認めるほどの実力が無ければその席に座ることは許されない。例え実力がない者が座っても、四天王としては認められないだろう。嫉妬から襲撃を受けることもないとは言えないのだし、最低限他の魔人と戦っても負けない実力が無ければならないもので、
……とは言ってもだ。候補は……。
ナイチサの質問を待つ。聞かれるのは、現在いる魔人についてで、
「余が作った魔人で、卿から見て見どころのある者はいるか？」
その質問に、レオンハルトは軽く息を入れてから答えた。それは、厳しいことを言う前の前置きだ。
正直に答える。口を開き、
「……率直に申しまして……殆どが並か、並以下。暴れるだけしか脳のない凡百の魔人ばかりです」
「……そうか」
残念であり、同時に納得するその応答の意味が、レオンハルトにはよく分かる。
……それなりに吟味して魔人にしたはずだがな。
これまでに何度か、ナイチサは魔人化を行ってきた。
遠征し、面白そうな相手や、見どころのありそうな相手を魔人にしていたし、それはこちらの目から見ても適当なものであったと納得がいく。
しかし結果だけを見てみれば落第もいいところである。
作られた魔人の多くは凶暴で暴れることが大好きな魔人らしい魔人ばかりであるが、実力が伴っておらず、人間相手には無敵結界や魔人の能力の高さもあって無双出来るが、魔人の中では別段強くもないし、特筆すべきことも特に無い。

正直に言って、つまらない奴ばかりだ。こちらから見てもそうなのだから、ナイチサの落胆も相当だろう。
そしてだからこそ、その中にあって目立つのは、
「……ですが」
唯一見どころのある魔人が一体だけ存在する。
その存在を思い、形容し難い感情を覚えつつも、レオンハルトはその名を口にした。
「ザビエル。――あれだけは、他の魔人よりも上等なものだと言えます」
「……ふむ、やはりそこに落ち着くか……」
ナイチサも、内心それを予想していたのだろう。告げられた言葉に驚きはない。
だが確認が必要なのだろう。拘りの強いナイチサは、魔人四天王にも格を求めているのか、吟味を重ねようとこちらに問いかける。
「卿の目から見ても、ザビエルは適しているか？」
なのであくまでも率直に、レオンハルトは評価を口にする。
「はい。ザビエルは趣向こそ他の魔人と変わりないように見えますが、そこには確かな、ナイチサ様への忠義があります」
それは事実。不思議なことにあの傲慢なザビエルは、魔王への忠義だけは異様に高い。
自分を魔人にしてくれた恩なのか、それとも魔物としての本能か。もしくは圧倒的な力を持つ者への崇拝か、何かは分からないが確かな忠誠心を持っている。
恐れから魔王に従っている者とは違うし、他にも、
「他の考え足らずな魔人とは違い、ザビエルは知恵が回ります。また、統率力、指揮にも優れており、集団を操る術に長けております」
「他の四天王よりもか？」
頷く。そこは仕方のない部分で、
「多くの魔人は、個人としての武勇と、支配者としての畏怖が、魔物兵の士気を高めるのに役立ってはおりますが、指揮能力自体は、そこまで高いものでもありません。カミーラやケッセルリンクも並の魔人

よりは優れてはいますし、それで何が問題ということでもありませんが……能力があるのは悪いことではないかと」
「確かに、それは美点だな」
ナイチサが納得したように頷く。実際、魔人の指揮能力はそこまで重要ではない。
大軍を指揮するなら魔物大将軍や魔物将軍に任せればいいのだ。魔人の役目は精々、方針を決める程度でいい。謂わば貴族と、仕える将軍の関係に近いだろうか。軍事の細かいところは将軍に任せ、貴族は諸々の方針や、上がってきた方策から良いのを選び取る。
人間と違うのは、その貴族、魔人こそが最大戦力であるということか。ゆえに立場も圧倒的に高い。
自分のようなのは例外なのだ。ともすれば、将軍や魔軍の戦略を無視して動きかねない魔人に、上位の魔人からの命令という楔を打つ役目。魔人と魔軍、全体の指揮、調整を行う魔軍参謀の職務ゆえのものだ。他の魔人は、あまり細かいことを考えなくてもよい。
だがそれでも、出来るに越したことはない。下を使うことに慣れているカミーラやケッセルリンク。戦場での指揮が上手いガルティアなどは、やはり戦果も多く、犠牲も少ない。上と下の齟齬が少ないからだろう。
それらと比べてもザビエルの統率力は高いし、そして何より、
「ですが何よりも、ザビエルは他の魔人と比べて――」
言う。ザビエルの最も特筆すべき長所は、
「――圧倒的に強い」
それこそ、己の食指が動くくらいには。
ゆえに言う。ザビエルを、魔人四天王に推すために、
「並の魔人は勿論、カミーラやケッセルリンクと比べても遜色ない戦闘力を持っています。それは上級魔人として、魔人四天王の席に座るに相応しいものかと、私は愚考します」
言って、
「なるほど――理解した」
ナイチサがグラスを置いて、正面から声を出すのを、レオンハルト

は聞いた。それは、正式な辞令となるもので、
「では――ザビエルを、魔人四天王に任命する。そのための告知は――」
「大々的な発表は後にやるとして、簡易的な通達はお任せを。本人へは、私よりもナイチサ様から伝えた方がよいかと」
「ん？　……それは何故だ？」
　ええ、とレオンハルトは応答した。それは、
「その方が喜ぶでしょう」
「……左様か。卿が言うのならそうなのだろうな。では、そうしよう」
　話がまとまる。もう一つの席についてはやはり保留にすることになった。だがまあ、
　……あー……終わった。話が拗れなくて良かったな……。
　ここでどれだけ利点があり、相応しかろうが、魔王がごねたらそれは実現しない。ザビエルの四天王就任は自分としても通したかったところだ。また傲慢さに磨きがかかり、面倒事も増えるかもだが、同時に楽になる可能性もあり、
　……ま、とりあえず大きな仕事は終わりか。
　細かなものは残っているが、大きなものはこれだけだった。なのでしばらくは楽出来るだろう。帰ったら何をしようかな、と珍しく楽しい気分になる。
　だが、
「……時にレオンハルトよ。卿に頼みたいことがあってな」
「……何でしょう？」
　は？　とは言わなかったし、おくびにも出さなかった。短い楽しみだったな、と切なくなるも、切り替えてナイチサの命令を耳にする。
　それは、
「また魔人を作ろうと思うのだが……もう普通の存在には飽きてな」
「……なるほど。それで、私に何を？」
　全然なるほどじゃなかったが、合わせておく。並か並以下の魔人しか出来ないことに嫌気が差したことは察せられるが、普通の存在じゃないというと、嫌な予感がする。

そしてその予感は的中した。ナイチサが、ああ、とこちらの質問に頷き、
「気色の違う……有り体に言えば、珍しい存在を見つけて捕まえてほしい。――それを魔人にする」
「……ナイチサ様は――」
「余は少し飽きた。ゆえ、卿に任せるのが一番だと思ってな。目利きもそれなりに出来るであろう？」
頼むぞ、と機嫌良く言われ、何も言えなくなる。
本音を言えば死ぬほど面倒なので断りたいところだが、断れるはずもない。返答は、一つ。胸に手を当てて、頭を下げると、
「……承りました。このレオンハルト、主がご満足頂けるよう全力を尽くしましょう」
騎士のように、頼もしさと忠義を見せた返答を行う。しかし、
……珍しい存在か……どうするかな……。
当てが無さすぎることに内心が不安になってしまっていた。

影のある部屋は城の中にあった。
時刻は昼過ぎ。場所は魔物界でも珍しい街――レオンハルトシティの中心部。
レオンハルトの城の一角。一階部分にある部屋だ。
そこは幾つもの本棚と、魔法陣、水晶などの魔法に関連するものがある部屋だ。
テーブルには魔法具や魔法の媒体が並べられ、室内の温度は同じく魔法具によって整えられている。機能的でありながらも、それなりに片付けられた部屋は、しかし、一つのテーブルだけ物が散乱している。
そのテーブルの前に、黒髪の女性はいた。
「……えっと……ここをこうして……っと……」
魔人レオンハルトの使徒であるハンティは、その工房とも研究室ともいえる部屋で作業を行っていた。
事実、そこはハンティの部屋であった。

といっても生活のための私室ではなく、仕事用に近い部屋だ。
その部屋は呼ぶ相手によって名称が異なるが、公称としては――魔法研究室。
使徒どころか魔人と比べても右に出る者がいない魔法の才能を持つハンティに用意された魔法具工房。彼女のために用意されたアトリエであり、実験室でもあるそこはレオンハルトの城の中でも重要な部屋の一つであった。
「……こっちはこれでいいか。それじゃ次は……」
その中でハンティは、暇があれば魔法の研究を行っている。
主であるレオンハルトに頼まれたのが切っ掛けではあるが、やってみると才能がある所為で妙にやりがいがあるのがハンティの悩みであり、しかし考えると色々と面倒なので考えないようにしている。
様々な素材、危険薬物などを扱う関係上、最初に作った防護の白衣を身に着け、ハンティは研究を進める。
ちなみにハンティには瞬間移動があるので危険も何もないのだが、レオンハルトに何故か、白衣を推され、何故か琴線に触れたのかキャロルやペールまでもがその方が良い、との理由で白衣を着ている。
「……あー……あたし、何やってんだろ……」
ふと我に返り気怠げな表情を浮かべるも、作業だけは真面目にてきぱきとこなしていくのは性根というか基質なのだろうか。
まさか主のワーカーホリックが移ったか、と思うも、その自覚があってなおサボることはせずしっかりと頼まれたことは投げ出さずにこなすのだからどうかと思う。
区切りのいいところまで作業を終えると、一息入れようかと身体を伸ばす。机に置かれたコーヒーに口を付け、ぬるくなってることに表情を歪め、入れ直そうかと考えていると、
「また何か作っておるのか」
「ん、まあね」
外から声が聞こえ、ハンティは窓を開けつつその声に反応する。
中庭に繋がる窓から視界に映ったのは、白の巨体を持つドラゴンだ。元同胞でもある彼の言葉を聞く。

「何とも珍妙な物ばかりだな……俺には何が何だか解らぬ……」
「あー、まあそうかも。便利な物も多いけど、失敗作というか、変な物も散らかってるからね」
「アレも、酔狂というか変な奴だな……あ、だが、あのばーべきゅーこんろなる物は良いものだったぞ。持ち運びが出来、いつでも肉が焼けるからな！」
「……それは良かったね」
半目で焼き肉が食えることを喜ぶ元同胞――ライゼンを見るハンティ。
ブレスで焼けないこともないが、加減が難しく黒焦げにしてしまうことが多いライゼンのため、というわけではないが、火の魔法を込めていつでも食材を焼くことの出来る魔法具を作ってみたのだが、ライゼンはそれをやけに気に入ったのか毎日のように獲物を狩ってきては中庭で焼き肉をしている。ぶっちゃけ、ここで食うなら厨房でやってもらえるのだからあまり意味はない。
……本人が満足してるならいいけどさ……。
正直、それでいいのか、と問いたい。何がとは言わないが、色々と退化してないだろうか。プライド的な何かが。
自分としても賑やかなのはいいが、何だかなー、と思わざるを得ない。
「……ま、いいや。あたしはコーヒー入れるけど、ライゼンも飲む？」
「あの苦い奴だろう？　苦いのは好かんから俺はいらん。……甘いのなら貰うが」
「……じゃあミルクと砂糖を大量に入れるよ」
「うむ。それなら飲むぞ」
ミルクはたっぷりで頼む、というライゼンにやはり釈然としないものを感じながら、部屋に備え付けの器材を使ってコーヒーを入れる。
ぶっちゃけ身体のサイズ的にそんなに飲んだ気がしないと思うのだが、それでもわざわざ飲むと言う辺り、実は結構気に入ってるんじゃないだろうかという疑いがある。
そんなことを考えていると、不意に城の内側の方から音が響いた。

それは扉をノックする音で、
「ん、どうぞ」
一声掛けて入室を促す。すると勢いよく入ってきたのは、
「し、失礼しますハンティ様……！」
額に汗を掻いたメイド。それは女の子モンスターではなく、人間のメイドだ。
レオンハルトが時たま拾ってくる人間の少女、その一人でありハンティも見知った相手であり、
……あ、何か嫌な予感。
焦ってこちらに知らせてくるということは厄介事でもあったのだろう。そんな予想を立ててしまい、外れてくれ、と内心で祈りつつ声を掛ける。
「どうしたのさ。そんなに慌てて」
「は、はい！　あ、あの……言い辛いのですが……」
と、メイドは一旦言葉を区切り、おそるおそるとこちらを窺うように、
「ま、また例の――」
と耳に届いた瞬間、ハンティは嫌な予感が当たったことに溜息を漏らす。
だが嘆いてもしょうがないので、先を促そうと声を出し、
「……場所は？」
「は、はい。イベント会場です……！」
イベント会場。その語句を聞いてさらにハンティのテンションが下がる。
正直放っておきたいのだが、頼まれている以上は役目を放置することは出来ない。
ハンティは頭を抱えつつもコーヒーを入れる手を止めると、窓の外のライゼンに向かって、
「……ごめん、ライゼン！　ちょっと行ってくる！」
「毎度ながら大変そうだな……俺も手伝うか？」
「いや、あんたが出てったら余計に騒ぎになるから」

「……そうか」
心なしかしょんぼりと肩を落とすライゼン。いや、そんなことで落ち込まれても。
まあ珍しい手伝いの申し出だったのだし、後でフォローしようか、と心に決め、ハンティは気持ちを切り替え、
「それじゃあ後でね！」
瞬間移動を使い、騒ぎが起こったと報告のあったイベント会場に向かった。

ハンティが移動を行い、やって来たのは街の中にある広い倉庫のような場所。
そこはよく、あるイベントが行われる場所であり、今も魔物――主に女の子モンスターが集まり、長蛇の列を作っている。
そこに姿を現すと、こちらに気づいた女の子モンスター達が色めき立ち、
「あっ、ハンティ様よ！」
「ほんとだ！　ハンティ様ー！」
黄色い声とともに手を振ってくれる。それに微妙な表情を浮かべながら、
「はいはい。今は忙しいからねー」
慣れた様子でそれを制しつつ、辺りを見渡すと、
「は、ハンティ様！」
「ん、警備担当の魔物隊長？」
「はっ、本日の警備を担当させて頂いております。オットーと申します」
頷き名乗るのを見てハンティは話を進めた。
「ご苦労さま。それで、騒ぎは――って、あたしを呼ぶってことはどうせあいつだろうけど……」
「……その通りです。我々ではどうすることも出来ないので……」
「まあしょうがないよ。それで、場所は？」

力なく肩を落とす魔物隊長を励ましつつ、その場所を問うと、魔物隊長は顔を上げ、
「は、西ブロック、第一倉庫です」
「ん、わかった。それじゃ――」
と、ハンティは再び瞬間移動を行い移動を行った。
時が止まり、赤く反転した空間――アドミラル空間の中を歩き、言われた場所に向かうと、
「……うわ、やっぱいる……」
人混みに混ざろうとする見知った姿を見て、ハンティはげんなりする。
何度も確認して分かってはいたが、やはり実物を見ると面倒さが湧いてくるから不思議だ。
しかし戸惑っていても仕方ないので、ハンティは瞬間移動を解くと、そのままその影に向かって、
「――何やってんのさっ！」
「っ！　おおっ!?」
剣を振り下ろすも、その男は手に持った長物でそれを防ぐ。
お互いの力がぶつかり合い、人混みの間にぽっかりと出来た空間に着地する。
その小麦色に焼けた肌を持つ筋肉質かつ、整った容姿を持つ男。
ところどころに白の毛皮のようなものが伸びる相手は、明らかな人外であり、こちらの剣を防いだのは長い煙管であり、そこからは赤い炎が吹き出ている。
それは彼の口から吹き出たものだ。彼は怒りを滲ませたように赤い目を青く輝かせつつ、こちらに怒声を飛ばす。
「誰かと思えばまたハンティか！　おいお前！　何で毎回襲ってきやがる!?　同じ使徒の間柄でもただじゃおかねぇぞ！」
「あたしだって好き好んで襲ってるわけじゃないっての！　戯骸、あんたは出禁だっていつも言ってるのに性懲りもなく……！」
ハンティが睨む相手の名は――戯骸。
魔人ザビエルの使徒であり、ハンティとはよく顔を合わせる相手で

ある。
使徒でありながら魔人と同程度の戦闘力を持つ厄介な相手であり、並の使徒では抑えることも難しく、その実力の高さから専ら、同じく魔人と同程度の戦闘力を持つと云われるハンティが駆り出される。
その戯骸は煙管から炎を吹き出させつつ、問いに対し憤りの声を上げる。
「俺がここにいるのは当然のことだ！　何度も言ってるだろ！　俺はな――」
と、戯骸が懐から一枚のカードを取り出して、掲げるようにそれを突きつけると、
「お前の主――レオンハルト様ファンクラブの一員だからな！」
「……いや、知ってるけどさ……」
ハンティは嫌そうな表情で言う。戯骸が怒り、
「ああ⁉　じゃあ何で俺の邪魔をする⁉　ファンクラブに入ってる俺がイベントに参加するのは当然だろうが!!」
「……それ以前に、街の警備から出禁にされてるでしょうが。それにあんた――」
ハンティは頭を抱えながら、当たり前のことを口にした。それは、戯骸の厄介な趣味のことで、
「……男でしょ？」
「ハッ、俺は男だぜ！　……だから何だってんだ⁉」
いい笑顔で戯骸はそれがどうした、と堂々と言う。
そう戯骸は――男が好きなのである。
有り体に言えば――ホモ。
ゆえに彼は、魔人レオンハルトのファンクラブに所属し、イベントにも定期的に参加している。
「俺は純粋にレオンハルト様のファンなんでな！　お前になんと言われようがイベントには参加するぜ！」
「……はぁ……」
……ほんと、あたし何やってんだろ……。
魔法研究とか模擬戦はまだしも、定期的に主の代わりにホモと戦う

生活に、辟易としつつも、役目はこなそうと剣を構えた。

使徒戯骸

ハンティと戯骸がイベント会場で対峙する少し前、レオンハルトは魔王城から用を終えて帰宅するところであった。

ザビエルが新しく魔人四天王に就任することはナイチサが本人に伝えた後で周知させることにし、自分は次の仕事のことを考える。通常のものではなく、先程ナイチサより直々に頼まれたことで、

……珍しい相手つってもな……そんなもん簡単に見つかるかよ。

新しく魔人にする相手の選別。しかも普通じゃない気色の違う相手と言われて頭を悩ませる。

全く思い浮かばないわけではないが、それを見つけることはまた別問題だ。正直、厳しい仕事である。

しかしやらないわけにはいかないため、どうにかあのわがまま魔王の満足に足る相手を見つけなくてはならない。信頼されるというのも良いことばかりではないな、と微妙な気分になっていると、

「……レオンハルト」

不意に名前を呼ばれ、そちらを向く。聞き覚えのある女の声だ。

脳内にその相手を想像しながら視線を向ければ、やはりと言うべきか予想した相手がそこに立っており、レオンハルトは息を入れた。

「カミーラか……」

「……」

「どうも、レオンハルト様」

それとカミーラの使徒である七星。無言の主に代わって頭を下げて挨拶をしてくれる。

そのままどこかへ行くのかと思ったが、わざわざ話しかけた上に立ち止まった主従を見て、また予感を感じる。

というのも、カミーラが自分から話しかけてくる時は大体何か用事がある時だと長年の経験で分かりきっている。世間話をしないこともないが、そういう時は雰囲気と第一声で分かる。〝レオンハルトか……〟、など、先に七星が話しかけて来る時は用もなく偶然会った時

だ。今は呼びかけてきたので用事があるのだろう、と思いその通りに声を出す。
「何か用でもあるのか？」
「……これから、お前の城に行こうとしていたところだ……」
「……はぁ？」
予想を超えた言葉に疑問が口から出てくる。
……カミーラが、俺の城に？
聞き間違いだろうか、そんなこと今まで一度も無かったのに、どういう風の吹き回しか。一応の確認として、
「……お前が、俺の城に来るのか……？」
「……そう言っている」
どうやら聞き間違いではないらしい。すると次は、
「……何をしに来るんだ？　生憎、俺の城には美少年や宝石は――あ、宝石はあるか。とにかく、お前の好むような場所じゃないぞ？」
「……お前は、私を何だと思っている……？」
カミーラの圧が心なしか増し、細まった瞳に射抜かれたように感じる。マズい。微妙に怒らせてしまったようだ。カミーラは続けて、
「それに……随分と嫌そうだな……？」
「い、いや……そういうわけじゃなくてな。別に遊びに来るなら好きにすればいいが……」
言うと、カミーラは怒気を収め、ふん、と鼻を鳴らすと、
「……当たり前だ。何故私が、お前の了解を取らねばならん……」
……いや、俺の城だから了解は必要だが……。
行きたい時に行く、というカミーラの態度はわがまま娘そのものというか、ガキ大将的な何かを感じる。有無を言わせない辺りが特に。
どうもカミーラは昔、こちらが魔人になったばかりの関係性というか、借りやら何やらの所為か、どうも昔のままの上からの物言いをしてくる。一応、自分は魔人筆頭で既にカミーラより上の立場ではあるのだが。
……個人的には別に良いけどな……だが、一応言ったほうがいいのか……？

私的には、上からの物言いをされても特に気にならない。自分も昔の関係や立場、カミーラの方が上だという感覚が抜けきってないのだろう。
だが個人的にはそれで良くても、魔人筆頭として立場や周囲の目を考えると言ったほうがいいのかと思う。ケッセルリンクはともかく、今度四天王になるザビエルもどうせ傲慢な態度を取ってくるのは目に見えてるが、同じく四天王のカミーラが魔人筆頭である自分に不遜な物言いをすれば、カミーラ自身の立場が悪くなりかねない。
もっとも、カミーラはそんなこと気にしないだろうし、ザビエルのように誰彼構わずちょっかいを掛けるようなタイプではない。我関せず、というタイプだ。
考えてみると問題はないのかもしれない。それに、
……注意するにしても言い方を考えないと、関係に亀裂が入りそうだしな……。
結果、何もしないことを決める。幸いにも上からと言っても横暴ではないし、仲も悪くない。周りも分かってくれてると思う。
そして思考を戻し、一応問う。視線を合わせ、
「……まぁいいんだが……どんな風の吹き回しだ？」
「……別に……そろそろ、一度会っておこうと思っただけだ」
「会う？」
聞き返すと、カミーラは静かに言った。
「……ライゼン」
「……ああ、そういうことか」
「お前の城に、いるのだろう？」
告げられた名前に得心する。
四大聖竜であるライゼンはカミーラの元と同じ、ドラゴンであり、顔見知りの間柄であるらしい。会いに来るのもおかしな話じゃないだろう。
それなら、と応答する。頷き、
「確かにいるな。……何だ、じゃあ何も用意しなくていいな」
「……用意？」

問われた言葉に即答する。その意味は、
「ああ。お前が来るなら、一応食事やら何やら用意させないとな、とか思ってたが、会ってすぐ帰るならいらないだろ？」
正直安心した。いや、料理に関してはカミーラ相手でも満足に足る出来の物を出せる自信はあるが、城にいるのがもれなく女性だらけなので機嫌を悪くされそうなのだ。
ゆえに滞在が短いに越したことはない。カミーラが嫌いそうなの多いしな……、と確認しつつも頷く。ともあれその心配はなくなったのだし、何も問題は、
「……いる」
「……いるのか？」
カミーラは頷き、命令する。
「用意しろ」
「……ああ」
結局用意しなくてはならないらしい。溜息が漏れそうになるのをぎりぎりで止める。でもまあ、
……給仕を全部キャロルやハンティにやらせるか。それなら大丈夫だろ。
愛玩動物的なお気に入りのキャロルと、元同胞のハンティ相手ならカミーラも機嫌を悪くしたりしないだろう。それなら城に来て食事を摂るくらい問題ない。仲が悪いわけではないしな。
だが、
……何だろうな……この妙な悪寒は……。
カミーラを連れて帰宅しようとしたところで、何故か背筋がぞっとする感覚を覚えつつ、レオンハルトは足を城の外に向けた。

「――お前にも分かるだろう！　俺の愛が……！」
「――ホモの気持ちなんて分かるか!?」
煙管を剣で弾きつつ、ハンティは戯骸の問いを叫ぶように否定した。

イベント会場として使用された倉庫の前。人垣がこちらを囲むように遠巻きに眺めている。そこにはレオンハルトのファンである多くの女の子モンスターがおり、
「は、ハンティ様と戯骸様が戦ってる……！　これは一体……!?」
「あら貴方、イベント参加は初めて？」
「え、あ、初めてですけど……どうして分かったんですか!?」
「ふふ、常連ならハンティ様と戯骸様の戦いを目撃して驚くはずはないからね。いつものことだし」
「風物詩ですよね」
「むしろこれを楽しみにしてる子もいるもんね。レアな使徒同士の戦いだし」
「きゃー！　ハンティ様ー！　頑張ってー!!」
「戯骸様も頑張ってくださーい！」
「な、なるほど……！」
……なるほど、じゃないっての！
戦いを観戦している周囲に呆れと軽い戦慄を覚える。こちらが剣や魔法を使い、戯骸が煙管や炎で戦闘する中、不意に意識を外側に向けると、
「あー、軽食ー、軽食はいかがっすかー！　レオンハルト様が大好きなこかとりすの唐揚げもありますよー！　今ならレオンハルト様グッズが付いてきまーす！」
「飲み物もありますよー」
「食事摂るなあ――!?」
完全に見世物と化しているのを感じ、ハンティは思わず叫んだ。
……くっ、もうさっさと戦いを終わらせよう……！
思い、再び正面を見るも、
「あれ……？」
戯骸がいない。どこに、と周囲を見渡すと、売店の前に、
「唐揚げ一つくれ！」
「はい！　こちら、唐揚げと、特典のレオンハルト様カードです！」
「おお！　この絵柄、堪んねぇなぁ！」

「何買ってんのよ!?」
唐揚げを貰って喜ぶ戯骸の姿があった。レオンハルトが描かれたカードを手に持ち、唐揚げを口に入れ、
「……いやいやいや！　共食いでしょ、それ!?」
「ん？　ああ、いや、問題ねぇよ。とりは同種類じゃなけりゃ結構食うんだぜ？　ってか、俺使徒だし」
「あ、そうなんだ――って、納得するわけないでしょうが！　そもそも戦闘中に食べてんじゃないわよ!!」
そういうのはグルメで大食いの魔人一人で充分だ。
改めて思い出してみると、そういえばマイペースなところが似てる気がする、と共通項を思いながらハンティは表情を苦々しく歪めた。真面目に相手をすると疲れるのはいつものことで、
「そんなことより見ろよこのカード！　流し目が良い感じだぜ、ハハハ！」
「あ、ハンティ様も唐揚げ一つどうですか！」
「いるかっ！」
拒否するも、戯骸や売り子が、ええ……、と引き気味に見てくるのがムカつく。こっちが空気読めてないみたいな扱いが納得いかない。
もう全員吹き飛ばしたら解決なんじゃ、と、危険な思考をし始めたところで、人垣から声が聞こえた。それはよく通る高い声で、
「そこまでですわ!!」
「はいはーい！　どいてくださいねー！」
とうっ、とスペースに着地した金髪ツインテールの少女と、にこやかに人垣を掻き分けながらやってきた薄紫の髪の少女に、ハンティは頭が痛くなってくる。
やって来たのは一応仲間だ。そう、仲間で、
「もうっ、ハンティさんに戯骸さん！　喧嘩しちゃ駄目ですのよ！今は楽しいイベントの時間ですし、マナー違反はよくありませんわ！」
その腕に、〝ファンクラブ会長〟の腕章を付け、運営委員であることを示す証明カードを首から下げたハンティの使徒仲間、キャロルが

こちらに指を突きつけて注意してくる。声を上げ、
「二人共、仲良く参加してくださいな！」
「そうです！　というか、早くしないと限定グッズは無くなっちゃいますよう？」
　同じくレオンハルトの使徒であるペールが、人差し指を立てて言う。すると戯骸が、はっ、としたように、
「うおっ、俺としたことが熱くなって忘れてた！　騒ぎにしちまってすまねぇな、会長！」
「良いんですのよ！　レオンハルト様を想うあまり、熱くなるのは誰もが通る道ですわ！　――さあ、お行きなさい！」
「おおっ！　並び直してくるぜ！」
「始祖様も、早く並び直した方が良いですよ！　完売も近いですから！」
「いや違うから!?　というか行かせようとするな!!」
　キャロルとペールが戯骸を行かせようとしていたのを何とか呼び止める。続けて剣を突きつけ、
「そいつ出禁でしょ！　とっ捕まえるから抑えて！」
「かーっ！　この分からず屋め！　確かに俺は街の方は出禁かもしれねぇが、イベントに出てはいけねぇとまでは言われてねぇぜ!?」
「そうですわよハンティさん！　戯骸さんはレオンハルト様の魅力をよく分かってらっしゃる真のファンですわ！　それを傷つけようというなら、いくらわたくしの後輩であるハンティさんでも許しませんわ！」
「他のザビエル様の使徒はアレですけど、戯骸さんはとっても良い人ですよう？　顔もブサイクじゃありませんし、よく相談にも乗ってくれます！　そんな戯骸さんを追い出すなんてあんまりです始祖様！」
「あんたらどっちの味方だ!?」
　ホームの筈なのにものすごいアウェー感を感じる。
　しかし味方であるはずのキャロルは、ふぅ、と吐息をつくり、肩を竦めて、
「当然、レオンハルト様の味方ですわ。そして、レオンハルト様に味方

する者の味方ですの。つまり、この会場にいるレオンハルト様ファンの味方であり……えーと、ハンティさんはファンクラブに入っていなくて……ん？　もしかして敵ですの!?」
「もうちょっと考えてから喋れ!!」
あたし使徒なんだけど!?　と叫ぶとキャロルは納得したように頷いた。敵じゃなくて良かった、という感じである。解せない。
次に戯骸を見て、
「じゃあザビエル様の使徒である戯骸さんは敵ですの!?」
「俺はレオンハルト様のファンだ！」
「……なら味方ですわね！」
「だから考えてから喋んなさいって!!」
ザビエルとその使徒には注意しろって言われてるでしょうに、キャロルは同志フィルターがかかってる所為か戯骸相手には警戒が緩い。というかバグってる。ペールの方は苦笑気味なので分かってて悪ノリしてるのだろう。あれ、こっちの方が質が悪い気がする。
何故か自分が一番、命令を忠実に守ってることにおかしなものを感じつつ、ハンティは言った。最終手段だ。
「……あの本のこと、レオンハルトに言いつけるよ？」
「――――」
言った瞬間、キャロルとペールが固まった。
例の本のことは、この二人が唯一レオンハルトに隠していることだ。
というのもレオンハルトがどうやら探しているらしい上、もし見つけたら処分しようとしているらしい。命令されたわけではないので確定でもないが、もし持っていることが知れればレオンハルトグッズを集めている二人からすれば、レオンハルトの意思とはいえ出来れば持ち続けたい物であり、
「……戯骸さん！　駄目ですわよ！」
「そうです！　今日のところは帰ってください！」
「……ああん!?　急にどうした!?」
二人の態度が急変したことで戯骸が訝しむ。

しかし二人はなおも本を守りたいが故に、戯骸を押して、
「また今度ですわ！　とりあえず、グッズは全部差し上げますの！」
「なので今日のところは何卒……！」
「お、おお……まぁ、そこまで言うならな。目当てのグッズも貰えるし……今日のところは帰るか」
少し残念そうにしながらも、グッズは貰えるとしった戯骸が渋々頷く。キャロルとペールは申し訳なさそうに謝り、
「事情があるので……その、申し訳ありませんわ。ファンクラブの会長として謝罪しますの」
「ごめんなさい、戯骸さん！」
「ん、まぁいいってことよ。お前らも、使徒としての立場があらあな。その代わり、次のイベントも頼むぜ？」
ハハ、と気さくに気にするな、と笑いかける戯骸。ハンティはそれを微妙な表情で見る。何というか、
……戯骸って、あのザビエルの使徒と思えないほど良い奴なんだよね……ホモだけど。
主の魔人ザビエルやその使徒は皆、人間や周囲の生き物を玩具程度にしか捉えておらず、傲慢さやその趣味も相まって嫌な感じしかしないが、戯骸だけはそうではない。
キャロルやペールも気を許してしまうほどの好青年だ。ホモだけど。多分、二人は戯骸がレオンハルトのファンという部分も大きいのだろうが、ハンティとしても個人的に嫌っているわけじゃない。レオンハルトも悪くは思ってないはずだ。ホモじゃなければ。それだけが苦手としてる理由だろう。
……とりあえず、大人しく帰るならもういいかな。
今日はそこまで面倒が無くて良かった。戯骸と戦うとこちらとしても疲れる。
と、不意に視線を向けると、向こうもこちらを見ており、
「ハンティもまたな」
「……あたし的には、もう駆り出されるのはごめんなんだけどね」
「ハハ、そりゃ悪い。だがお前とやり合うのは悪くねぇからな。イベ

ントに参加するのもやめるつもりもねぇし、また顔を合わせることになるだろうぜ？」
楽しそうにそう言う戯骸に微妙な気持ちになる。何というか、
「……確かに、どうせあんたとは顔を合わせることになるだろうね」
「おお。それに――」
と、戯骸は言って、何故か言葉を止めた。
ハンティはその様子に妙なものを感じて眉をひそめる。
「それに、何さ？」
「……いや、何でもねぇ。――そんじゃまたな」
「……はいよ」
踵を返し、後ろ手に手を振る戯骸に言葉だけで応じつつ、ハンティは妙な予感を感じた。
それはおそらく、戯骸が感じたものと同じだろう。
……面倒だね。
戯骸の背中に視線を送りつつ、ハンティは息を吐き、その予感が当たらないことを祈った。

「……何だろうなぁ」
キャロルとペールからグッズを受け取り、大人しく帰路につく戯骸は、キセルから炎を吹き出させながら、感じた予感に首を捻る。
主であるザビエルからの命令というか期待もそうだが、それとはまた別に、戯骸はそれを予感し、笑みを浮かべる。
魔人レオンハルトの使徒であるハンティ。彼女は、一使徒でありながら魔人に近い実力を持つ――最強の使徒、と噂される存在だ。
そして自分も、最近はそれに似た噂を立てられることが多く、それと同時に、別の話題が魔軍の間では上がるようになってきた。
それは、
「最強、ねぇ……」
そんなものに興味はない。ないが――、
「……へっ、お前と競い合うなら悪くねぇかもな」

戯骸は口端を軽く吊り上げ、いつか雌雄を決することになることを予感しながら、主の元に戻るべく身体を浮き上がらせた。

その大型の魔物は、目の前の不思議な魔物を倒し、大きく息を吐いた。

大陸西の森。多くの魔物が暮らすその場所にいて、見たことのない挙動をする不審な魔物に、大型の魔物は疑問符を浮かべる。

何というか、魔物の動きをしながらも魔物らしくなかったと言うべきか。

どうにも野生というか本能に乏しい戦い方であり、それでいながら身体の傷に反応しようとしない。深い傷を付けても痛みを感じた様子はなく、悲鳴も上げない。

しかも魔法だけは妙に達者であった。その大型魔物の記憶では、この魔物は魔法を使えなかった気がする。

しかし、だ。もう殺した。殺したのだから考える必要はない。

知能が高くないその魔物は、縄張りを荒らすその魔物を殺したことで満足し、その場を後にしようとする。

その瞬間だった。身体に、紫色の何かが纏わりついたのは。

「――ッ!?」

大型の魔物は突如として身体に纏わりついてきた何かに驚き、必死に振り払おうと身を動かす。

よく見ればそれは、先程の魔物の一部であった物であり、

「――新しいボディ」

声が聞こえた。無機質な声だ。

それは紫色の触手の中心、目玉のようなそれから聞こえたもので、

「パラサイト、パラサイトします」

赤い眼球を持つ目玉が、こちらを覗いている。

その光景と言葉を最後に、大型の魔物の意識は途切れた。

カミーラとライゼン

夕暮れ時の街の中、レオンハルトの城には客が来ていた。
それはレオンハルトとは最も古い付き合いの一人である魔人、カミーラである。
そんなカミーラだが、今日は初めてレオンハルトの住居にお邪魔した。
全体が赤で塗られた城に入り、女の子モンスターの親衛隊や、人間のメイド――美少女ばかりで胸元が空けられたメイド服を着た、カミーラからすれば少し眉をひそめるようなお出迎えを受け、しかしレオンハルトがそれを察してか解散させ、案内を自ら引き受けた。一部、人間の男がいないこともないが、結構な歳の料理長や、小さな子どもがいるのみなのでカミーラの案内には適さない。
ゆえにレオンハルトはカミーラを先導するように前を歩き、中庭へと連れて行った。
そこは広い庭園、そして平面の広場が広がっている。
たまに麾下の魔物将軍や魔物隊長を招いて食事会、宴会、バーベキューなどのパーティを行うこともあるのだ。
そんな広場の中心に、巨大なドラゴンはいた。
彼には敵わないものの、同じく大きなコンロを横に置き、その前で薄紫色の髪の美少女が茶色い塊を焼いている。少女の方はその焼き加減を確かめつつ、頷くと、それを空中に放り投げ、
「――ほーら、ライゼンさん！　焼き立ての最高級お肉ですよう！」
「！　待っておったぞ……！」
使徒の力で宙に放り投げられた巨大な肉にそのドラゴン、ライゼンは口で受け止めるように齧り付く。
「はむむぐはむ！　んん、このレア気味の肉がなんとも……！」
「美味しいですか？」
「うむ！　ペールよ！　次だ！　次を焼いてくれ！」
巨大なドラゴンに相応しい巨大な尾を地面にばしんっと叩きながら肉を催促するライゼンに、ペールはそれを呷るように笑い、

「くふ、食いしん坊さんですねぇ、ライゼンさんは。ほーら、次のお肉も焼けますよーう？　肉汁と油がたっぷりですよーう？」
「むううう！　そのような誘惑まで……！　ぐうう、負けん、負けんぞおおおお……！」
「料理長特製の各種調味料もありますからねー。新作もあるそうですよー？」
「うおおお……！　ま、待ちきれん！　早く、早く俺に肉を……！」
　香ばしい肉の匂いに興奮して、ライゼンの息が荒くなる。数秒保たず、肉の誘惑に負けてしまったライゼンを遠くから見る者達がいた。
　それは、レオンハルトと、客人として案内されたカミーラ、それに七星の三人で、
「……」
「……お、おい、カミーラ。大丈夫か？」
「カミーラ様……？」
　ライゼンを見て真顔のまま固まったカミーラに、レオンハルトと七星がその様子を窺う。そしてその表情を見ていると、
「……凄い珍しい顔になってるが本当に大丈夫か……？」
　表すなら、〝うわぁ……〟って感じだ。貴重なカミーラのげんなり顔。それを目の当たりにし、面白いを通り越して心配になるレオンハルト。それに七星が小声で、
「……さすがのカミーラ様も、あのライゼン様のあのような姿は予想外だったようですね……」
　そう言う七星も驚いてはいるのか、その薄い目を見開いている。直ぐに気を取り直したのか、目を閉じたのは流石ではあるが。
　しかしカミーラはショックから抜け出せないのか、しばらくそのままで、
「……」
　不意に起動し、すたすたとライゼン達がいる方向へ歩みを進めた。
　そして少しの距離が保てるほどに近づくと、ライゼンを見上げ、
「……ライゼン」
「あっ、カミーラ様……」

「むう、この味も中々――ん？」
肉を食わせていたペールが先に気づく。遅れて声の方向に振り向いたライゼンは、眼下のカミーラを見てしばらく固まると、
「……カミーラさ――」
と、敬称を入れようとして、しかし首を振ると、
「……いや、カミーラ……か。うむ……久し振りだな……」
「……」
ぎこちない様子で話しかけるライゼン。しかしカミーラは無言のまま応えない。
その応対にライゼンは戸惑い、しかし続けて声を掛ける。
「……千五百年振り、くらいか？　お互い、無事で――」
「……置け……」
「む？　すまん、今何と言った？」
声が小さかったのか、ライゼンが聞き返す。そのままの状態で。
それに苛ついたカミーラは、眉を立て、普段よりも大きな声を、中庭に響かせた。
「貴様……まずは、その肉を置け……!!」
「……あ」
肉に齧り付いたままであったライゼンが、ようやくそれに気づく。
間の抜けた声を上げる巨大なドラゴンに、カミーラの怒気が襲いかかった。

「……すまんな。少し、見苦しいところを見せた」
「……」
ライゼンの謝罪を、カミーラは無言で受け止めた。
主の傍らにいる七星も身を固くしている。それはカミーラの怒気もそうだったが、それよりも目の前にいるドラゴンとの対峙に気を揉んでいるためだ。
「……では、改めて――久し振りだな、カミーラ」
「……ふん」

元プラチナドラゴン――ドラゴン種の生ける王冠であった魔人カミーラ。
そして立場的にカミーラに仕えるような位置にいた四大聖竜の一角、ダイヤモンドドラゴンのライゼン。その二人の千年以上振りになる再会に、にわかにその事情を知る者達が緊張する。
特に七星と、レオンハルトの傍らに近寄ってきた黒髪の使徒――ハンティは息を潜め、
「……何、この状況？」
「ん、戻ってきたかハンティ。……どこに行っていたんだ？」
ハンティは少し溜めて、目的を口にした。
「……ちょっと、あんたが出禁にした奴の相手をね」
「……それは、ご苦労だったな……」
レオンハルトの顔がやけに嫌そうに歪み、こちらを労ってくれる。相手にすると疲れるのはよく分かっているのだろう。分かっているのなら仕事を減らしてほしいところだ。
だがそれよりも今は、目前で対峙するドラゴン達の方が重要で、
「で？　これ何？」
「……カミーラがライゼンに会いたいって言うから連れてきただけだ」
「……ただで済む気がしないんだけど」
「……奇遇だな。俺もそう思う」
……思うなら止めなさいよ！
と内心で思いはしたが、カミーラが言って聞くような相手でないことは十分承知なので心に留める。
その間も向こうに動きはない。カミーラも無言のままだ。
ただ、ライゼンの方が動いた。首を下、視線をカミーラからその横の七星に向け、
「――む？　そちらも同胞の気配がするが……お前は？」
「え、あ……」
七星が珍しく戸惑った様子を見せる。傍らのカミーラは何も言わない。その代わりというわけではないが、七星は咳払いをして、

「……私は、カミーラ様の使徒の七星と申します。元、ネフライトドラゴンでありまして……」
「ネフライトドラゴンの七星か。あー……ひょっとして所属は東か？　緑爺のとこの」
ライゼンが思い出すように言う。東、と言うと東部方面軍のことだろう。大陸統一国家トロンの区分で、東・西・南・北の四つに分けられ、それぞれに将軍として四大聖竜が指揮を執っている。
東といえばハンティの記憶だと、エメラルドドラゴンの四大聖竜が担当していたはずだ。何故緑爺なのかは会ったことがないので解らないが、七星はそれに頷き、
「はい。東部方面軍に所属していました。……もしや覚えておいでで？」
「一度だけ副官か何かで付いてきた小僧だろう？　つまらなそうな顔で、それ以上につまらなそうな受け答えをしてたからよく覚えている」
「……そんなにも、昔の私はつまらなそうでしたか？」
七星が窺うように聞く。ライゼンはそれに苦笑しつつ、
「ああ、どうにも生きづらそうに見えた。だが今は……それなりに充実しているようだな。良き出会いに恵まれたか」
「！　……はい。そのようです」
七星が思わず畏まる。ライゼンもそれを見て鷹揚に頷くが、これは昔の癖だろう。
ハンティとしても忘れがちというか、ここでのライゼンの振る舞いのせいもあって忘れるが、本来、ライゼンはドラゴンにとって雲の上の者に近い。
四大聖竜最強にして古参のドラゴンである彼はドラゴン王の次、特別な立場にあったカミーラを除いて上から二番目の地位にあった。
普通のドラゴン相手からは敬られるような存在なのである。元カラーの使徒に餌付けされているが、これでも立派な地位にあったドラゴンなのだ。見ているとそれを思い出す。
カミーラも昔のそれを知ってか、七星を咎めるようなことはしな

い。強いものに畏敬の念を抱くのもドラゴンの本能の一つだ。魔人や使徒になったからといってそれを忘れはしない。ああ見えてカミーラは同族に甘いとも聞く。最近、ほんの少しだがそれを感じるようになってきた。極たまにだが話しかけてくるし。普通は使徒如きに声を掛けることはしない。

……そう考えると、キャロルってどれだけ気に入られてるんだか……。

呆れつつも、なにげに凄い気がする、と先輩使徒のお気楽な顔を思い浮かべつつ、再び二体の対峙に意識を向けると、

「……そういうお前は……」

カミーラが声を発した。ライゼンが再びカミーラに視線を向ける。

しかし続く声は来ず、ライゼンは疑問符を頭に浮かべ、

「？　俺がどうした？」

「……何でもない。それよりも、だ――」

カミーラが普段どおり、ゆっくりと、泰然とした物腰でライゼンに告げた。

「ライゼン……お前も、私の――使徒になるがいい」

「……！」

その言葉を中庭で聞いていた誰も彼もが程度の差はあれど驚きを見せる。ハンティも内心で驚愕し、

……ライゼンを使徒に……!?

まさか最初からそのつもりでやって来たのだろうか。それとも気まぐれか。カミーラならどちらもあり得る。

だがそれを聞いて心配というより、〝ああ確かに。ライゼンが使徒になったら滅茶苦茶強いだろうなぁ〟とか思うのは、バトル脳に支配されてないだろうか。これも主の影響だと誤魔化すことにする。

そんな中で、カミーラは続けての言葉を告げた。それは再度の確認である短いもので、

「……どうだ……？」

「……」

それに対し、ライゼンは無言でカミーラに視線を合わせる。

そしてややあって、あっさりと、
「――断る」
その誘いを拒否した。続く表情で目を細め、さらにきっぱりと言い張る。
「使徒になることは出来ん」

拒否の言葉をかつての同胞にぶつけ、ライゼンは軽く息詰めた。
眼前のこちらを使徒になれと誘ってきた相手、カミーラは目を弓形に変え、
「……何故だ？」
「ん？　いや……」
……何故、と言われてもな……。
正直、嫌だからとしか言いようがないから困る。使徒とか凄いこき使われそうだし、と言うのもある。
だが、それよりも根本のところで無理である原因を、ライゼンはゆっくりと息を吐きつつ言った。
「……俺は、ドラゴンのままでいたいんだよ」
それは己の拘りだ。
ドラゴンのまま、ドラゴンとしての生を続けること。それが理由。
誇りと呼べるほど大層なものではない。一度は粉々に砕かれたものであるしな。だが代わりに、
「約束をしたのだ」
「……約束？」
ああ、と頷く。それは、
「古い友と、新しき強敵（とも）。その両方とな」
後を任せられ、その先を望まれた。
「俺はドラゴンとしての自分を――世界に示し続ける」
「……それに拘ることに、何の意味がある……？」
カミーラがこちらの言葉に反論するように言う。
「……哀れでしか、ないだろう」

「……フッ、哀れか……」
その言葉に可笑しなものを感じる。
ゆえに言った。
「――それで良い」
「……は……？」
間の抜けた声を出したカミーラに再度言ってやる。恥じること無く、
「それで良いんだ。俺を、ドラゴンとしての俺を見た感想が何であっても」
何故なら、
「そこには想いがあるからな。情けないだの哀れだの思ったってことは、そいつには理想のドラゴン像があるわけだ」
かつてのドラゴンを知っているのか、もしくはどこかで見たのか。
しかし何であれ、自分を見てそれを思い出したのなら、それは救いだ。
「俺を見て、ドラゴンという存在を思い出して――あるいは記憶して貰えればいいのだ」
きっとその先に、ドラゴンの明日はある。
忘れ去るのではない。次に繋ぐのだ。
そのために生きる。ドラゴンとして。
「俺は、俺と縁を結んだ奴らが誇らしく思えるような生き方をする」
だから、
「ドラゴンを止めることだけは出来ない。――悪いな」
「……そうか」
カミーラがゆっくりと息を吐く。そしてこちらを見ると、
「……随分と、変わったな……」
「そうか？　……そうかもな。だが、俺から言わせればお前の方が変わったように見える」
「……私が……？」
どうやら自覚がないのか、カミーラは眉をひそめて疑問を呟く。
笑みが湧くのを自覚しつつ、ライゼンはその感じたことを告げてや

ろうと、
「ああ。昔はもっと……こう言ってはなんだが、死人のような表情をしていた」
「……」
「だが今は、昔よりも活力に溢れている」
「……そうか」
頷く。否定はしない辺り、自分でも少しは分かっているのだろうか。しかしまあ、
……カミーラが魔人化したのは、かえって良かったのかもな……。
今となってはそう思う。当時、自分も含めて殆どのドラゴン種はカミーラが攫われ、魔人となったことに怒ったものだが、
……その鎖から解き放たれたことだけでも、喜ぶべきだろうな……。
生ける王冠と言えば聞こえはいいが、その実、道具のようなものだ。子を為すため。己の強さを示すため。その権威の象徴として使われていただけであり、そこには個人の自由は何もなかった。
それが無くなった今は昔と比べて、格段に過ごしやすいだろう。
かつての部下に、また一つ感謝することが増えたな、と思う。だがそこで不意に思い出し、
「まあ、ゆえに使徒になるのは断らせてもらうが……」
そこで周囲の気配を探る。首を振って視界でも確認する。
しかしその気配はどこにも無く、
「……それはいい。元より、気まぐれだ。……だが、今度は何をしている……？」
気まぐれ、と言ったカミーラに、お前なぁ……と、微妙な気分になりつつも言う。
「少し思い出したのだが……魔人化した同胞がまだいただろう？」
「……誰のことを言っている……？」
何を言っているのか分からない、といったようにカミーラが小首を傾げる。あれ、と思いつつ、
「確かいただろう。名前は――あー……そう、ギリウムだったか」

「……」
ど忘れしていたその名前を何とか思い出し口に出すと、それを耳にしたカミーラが形容し難い微妙な表情を浮かべ、何故か遠くでレオンハルトが肩をぴくっと動かした。他の者は皆、七星やハンティでさえ思い出そうとするように顔をしかめている。
おかしい、魔人化してたはずだが、と思うも、記憶違いの可能性も鑑みて、一応口に出してみる。
「……いないのか？　あいつ、俺の元部下で裏切って魔人化したと思ったら決闘とかいって闇討ちしてきたからボコボコにしてやったの憶えてるからいたはずだが……その後も決闘とかいって人気のない場所に呼び出してきたのに平気ですっぽかしたり色々やらかしたり……それにカミーラに執着してた気がするから近くにいると思ったんだが……？」
「……アレは殺されたぞ」
「む、死んでいたか……」
色々とダメな奴だったがそれでも昔の部下だけに少し残念だ。もう一度会ったら今度はこっちから決闘仕掛けてやろうと思ったのに。
……しかし殺されたのか。一体誰に……？
と疑問を浮かべていると、カミーラは視線を別の所に向け、
「……レオンハルトに」
「……え？」
その声を上げたのはレオンハルトの隣にいるハンティや他の者達だ。当人であるレオンハルトは明後日の方向を向いてバツが悪そうにしている。
「あんた……仲間の魔人まで殺したの？　それはさすがに……」
「……それには事情があってだな……」
レオンハルトが弁解しようとする中、カミーラは続けて、
「……しかも、魔人になってすぐに殺していたな……笑いながら」
「……あんた、本当に何やってんの？」
「レオンハルト様……それはどうかと思いますよう？」
「……まあ、私も出会い頭に半殺しにされましたしね」

「引くな！　何度も言うが事情があったんだよ!!」
「レオンハルト様は、魔人になってすぐにドラゴンの魔人であるギリウムを殺した……メモメモ。噂は本当だったということですの。また武勇伝が増えましたわー！」
「メモるな！」
いつの間にか中庭に入ってきたキャロルが手帳にそれを書き写しながら満足そうに頷く。レオンハルトとしては何とも言えない思い出なのか、苦々しい表情で言い訳を繰り返している。
そしてそれに、カミーラが追い打ちを掛けるようにそのときの状況を説明しており、
……楽しんでないか？
その様子が僅かだが楽しそうに見える。それを見て、ライゼンは得心した。
「……なるほどな」
カミーラもまた、出会いによって少しだけではあるが変わったのだろう。
それも良い変化に見える。少なくとも昔よりはずっと良いもので、
……俺よりもずっと先に、新しい生き方を得ていたのだな。
年上振って色々と言っていたのが恥ずかしく思える。
しかしそれもまた、そう言えるだけの余裕を得たということであり、
「……ここは良い場所だな」
それを作ってくれた存在に内心で感謝を告げた。

「……ところで、これからバーベキューをするところであったのだが、カミーラも食べていくのか？」
「……お前は本当にそれでいいのか……？」
「む？　肉はとても良いものだぞ。なあペールよ」
「あ、はい。最高級のお肉を取り揃えてます。今日は熟成肉の出来が良いらしくて」

「おお！　聞いたかカミーラ！　今日のは当たりだぞ！　熟成肉は美味いからな！　カミーラも好きだろう、肉！」
「……」
「カミーラ様が今までに見たこと無いレア表情になってますわ！」
「……それ、さっきも見たけどな」
このあと、珍しくカミーラも交えて、滅茶苦茶肉を焼いた。

寄生

朝の冷えた空気が満ちる城の中庭。
その広場の前に、幾人かの影が集まっていた。大きな影が一つあり、それに背を向けるように城の主が数人と向き合うように立っている。
その影――魔人レオンハルトは、周囲に告げるように声を飛ばした。
「そろそろ行くか。――準備はいいな？」
こちらを注視し、言葉に頷く数人を見て返すように頷く。しかし納得していない者もいるようで、
「……はぁーい」
不貞腐れたように気の抜けた返事をするのは使徒であるペールだ。彼女は周囲の他のメンバーを見て、口を尖らせる。
「むぅー、私だけお留守番なんてずるいですよー」
「……仕方ないだろ。全員連れていけば指示を出す者がいなくなる。最低でも一人は残ってもらわないとな」
連れて行って問題ないならレオンハルトとしても連れて行くことにやぶさかではない。贔屓してるわけではないのだ。
ただ、今回の任務の内容に適したメンバーが、ペールを除いた三人であったというだけのこと。
だが分かってはいても感情的には受け止めきれないのか、ペールが他の二人に声を掛ける。キャロル、それにハンティに目を向け、
「ならどっちか代わってくださいよ。キャロル先輩はともかく、始祖様はどっちかと言えば残りたいですよね？」
「……そりゃあそうだけどさ」
「ふふん、わたくしのことをよく理解っていますねペールさん。答えは――絶対にノー！　ですわ！」
ハンティが軽く息を吐きながら呆れ、キャロルが腕でバツ印を作って得意気な表情で拒否する。それを見て早々にキャロルの説得を諦めたペールだったが、視線を向けた先、ハンティも続けて口を開くと、

「一応命令だし……それに、あたし的にもそろそろ外に出ときたいから……」
「そ、そんな……！」
ごめんね、と手で謝罪のポーズを取りながらバツが悪そうにするハンティ。
実際、ハンティはここのところ研究室に籠もりっきりであったため、外に出たかったのは本音だろうし、レオンハルトとしても理由はちゃんとある。それは、
「悪いな、ペール。少人数で、しかも探索となると、冒険に慣れた二人の方が都合が良い」
「それは分かってますけどー……」
唸るペールにレオンハルトは息を入れてさらに言葉を尽くす。それに、
「城で指示を出すならお前が一番適任だ。ハンティは全てを把握してるわけじゃないし、キャロルは問題ないが……一人にしておくのはちょっとな」
告げた理由を聞いて、ハンティが肩を竦めた。同時にキャロルも胸を張り、
「レオンハルト様がそんなにわたくしを求めている……これはわたくしの時代が来ましたわね！」
「確かに、一人で手を回すのはちょっとね。出来なくはないかもだけど……これ以上手を広げると際限なく仕事が増えそうだし……」
乾いた笑いを浮かべながらハンティが言う。どうやら仕事を増やされるのが嫌らしい。
だがそれは置いておくとしても、今回はやはり単独行動もこなせる二人を連れていきたい。ペールも出来なくはないだろうが、やはり二人の方が熟達している。特にキャロルは意外にも、ハンティよりもそういった行動に長けている。迷宮や街に一人で行かせてもかなりスムーズに帰ってくるのだ。しっかり収穫も取ってくる。
なのでそれを考えての人選だ。なにせ今回は明確な〝何をすればいい〟、という任務ではなく手探りのものなのだ。それは、

「ともかく、今回は珍しい生物を見つける任務だ。ペールは……また今度の機会だな」
「……約束ですよう？」
埋め合わせはしてもらいますからね、というペールに頷きを入れつつ、
「任せたぞ、ペール。――それじゃあ、行くか」
ペールの返事と、キャロルとハンティの応答を聞きつつ、レオンハルトは背後の方向に身体を向ける。
そこには、大型のドラゴンであるライゼンがおり、
「……別に構わないのだが、当たり前のように俺も行くことになってるのはおかしくないか？」
「ああ？　お前が来てから毎日、どれだけの食費が掛かってると思ってる。運んでもらうくらいいいだろ」
「む、むぅ……それは……」
そんな言葉を飛ばすと、ライゼンが詰まったように口をもごもごとさせる。そこを突かれると弱いのだろう。何も言えなくなったライゼンを皆が半目で見る。といっても、
……まあ、居座るのを許してるこっちもこっちだが……。
確か最初に乗り物として使ったのは、ペールだったはずだ。それからライゼンに乗っていくのが便利過ぎてよくそれを頼むようになった。
まあそれで美味い飯が食えてウィンウィン的な関係なので別にいいだろう。いても問題はないのだし。
ともあれ、そろそろ行くか、とレオンハルトは改めて声を飛ばした。軽く跳躍し、ライゼンの背に飛び乗りつつ、
「ほら、さっさと行くぞ。お前達も乗り込め」
「畏まりましたわ！」
「はいよ」
二人も跳躍し、ライゼンの背に飛び乗る。それを確認したライゼンは身を低く沈め、飛び上がろうと事前の動作を行う。そしてやけになった声で、

「ええい！　もうとにかく行くぞ！」
「お土産、よろしくお願いしますねー！」
「ああ、大人しく待ってろ」
　手を振り、ちゃっかりとお土産を要求しつつも見送るペールに手を振り返す。
　そうしてライゼンは飛び上がり、翼を羽ばたかせながら上昇していく。
　高度を上げ、滑空をし出すと、しばらくしてその身は街からは見えなくなった。

　木々の影の下を、小柄な人間が駆けていた。
「はぁ……はぁ……！　くっ、あの馬鹿……私を放ってどこに……！」
　疑問を口にしながら、森の中を、腐葉土の上を、植物の枝や蔦を掻き分けながら走る。
　その人間は緑の長いぼさぼさとした髪の女性だった。
　少女にしか見えないほどに小柄で童顔のその女性は、自分を置いていった道具に悪態をつきながら足を動かし続ける。
　森に入ってはぐれてからしばらく、女性の背後からは獣の唸り声のようなものが聞こえる。
　それは魔物のものであり、女性は先程から数体の魔物に追いかけられることを繰り返していた。
　途中何度か攻撃を加えて数体は倒せたものの、まだ一体は残ってこちらを追いかけてきている。一網打尽に出来れば、もしくは例の物とはぐれていなければこんな魔物に梃子摺るはずはないのだが、女性の体力の無さが災いしてか、未だに解決には至っていない。
「くそっ……この私に……肉体労働をさせるとは……無礼者め……！」
　荒い息を吐き出しながら、額に流れた汗を拭う。そして懐に手を伸ばし、充分に距離をとったところで振り返ると、
「これでも食らえ……！」

「――――!?」
懐に入れておいたのは単なるぷちハニー。
しかし単純かつ威力の高い爆発物であるそれは、魔物にぶつかり衝撃を与えると、轟音を周囲に響かせながら火花を散らした。
森の中で爆発の衝撃が木々を揺らし、魔物を吹き飛ばす。
それを確認したところで、ようやく女性は呼吸を整えた。
「何とか……なったか……」
転けそうになる足に力を入れ、何とか大きな木の根本に座り込むと、腰に手を伸ばし、水筒を手に取る。手に取ろうとしたところで、
「……ん?」
そこには何も無かった。いや、ベルトはちゃんとある。
しかし水筒をぶらさげてあるはずの場所には何もない。反対側にも手を伸ばしてみるもそれは同じ。水筒はどこにもなく、
「まさか、落とした……?」
おそらく魔物に追いかけられ、走ってる最中になにかの拍子で落としてしまったのだろう。そうでなくとも、水筒がないことは確実で、
「……あーもうっ!」
水分補給すら出来ないことに苛立ち、拳を地面に叩きつけるも、枝や葉の先が当たって痛い。後悔する。そもそも身体を動かすことには慣れていないもので、
「うぅ……何なんだよ……ぐす」
少し泣きそうになるのを我慢して鼻をすする。腹も減ってきたが、しかし手元には腹を満たすものは何もない。とっくに全て食べ尽くしてしまった。
やはり慣れないことはするものじゃない。偉業を成し、勢いで外に出てきてしまったが、やはり自分は家でじっとしているべきだった。アレを生み出して結構経ったが、まさかアレがあんなにキチガイになるなんて思いもしなかったのだ。そうでなければ、獲物を見つけて突っ走っていくなどしないはずで、
「ぐぅぅ……見つけて帰ったら……今度こそ引きこもってやる……!」

やはり何もせずに大人しく家に帰ったほうが良いと思う。アレも自分には従順な上、結構力を付けてきたので自分が付いていかなくても大丈夫だろう。
どうにか合流できれば力に任せて森から安全に抜け出せそうだが、自分一人だと厳しい。体力的に。ならばじっとして、見つけてもらうのを待つのがいい気もして、
「どうしようかな……」
女性の疑問するような呟きに、反応する者はいなかった。
だが、
「……ひっ……」
不意に、茂みから音が聞こえた。葉が擦れた音だ。
それは即ち、何かがこちらに近づいてきているということで、
「……」
女性は息を殺してそれを待つ。
木の陰に隠れながら覗き見るようにして待つのは、それがはぐれた相手であればという希望を持ってのことだ。
しかし、やがて茂みから現れた相手は、
「……！」
金髪の、一人の男だった。
一瞬人間と見紛い、安堵の息を漏らそうとして、しかしすぐに理解する。
あれは人間じゃない。
その身から溢れる存在感が、雰囲気が、人間のそれを遥かに凌駕している。
そのことに女性は驚き、頭に浮かぶ存在であることを察し、直ぐ様木の陰に身を戻す。
間違いなく、あれは――
「……何故こんなところに子供が――」
「きゃあああああああぁぁぁ――!?」
背後から声を掛けられ、女性は悲鳴を上げた。
極度の緊張状態、加えてその存在に見つかったことで生じた衝撃

に、女性の身体はふらっと揺れて、
「……あぁ――」
「……おい、大丈夫か？」
と言う男の呼びかけ虚しく、女性の意識は暗転した。

魔人レオンハルトは、森で見かけた子供が気絶したのを見て眉間に皺を寄せた。
「……びっくりしすぎて気を失ったのか？」
子供とはいえビビりすぎじゃないだろうか。怖がらせた憶えもないのだが。
木の幹に身体を倒した緑髪の少女を見て、溜息を吐く。背後からキャロルとハンティが追いついて来て、
「レオンハルト様ー？　何だか、凄い悲鳴が聞こえましたが、一体……」
「……何それ？　また厄介事？」
二人の視線が、その少女に向く。キャロルはともかく、ハンティは半目で呆れ顔になり、こちらを責めるように見てくる。レオンハルトはそれに反論しようと口を開き、
「……子供を見つけたから声を掛けただけだ。……そしたら悲鳴を上げて気絶した」
ありのままに起こったことを説明する。するとキャロルは納得したように頷き、顎に手を当てると、
「なるほど。確かに、レオンハルト様を急に見たら驚きのあまり気絶してもおかしくありませんわね。それほど偉大で尊い御方ですし……」
「……単に魔人を見てびっくりしただけだと思うけど」
ハンティが即座にツッコミを入れた。レオンハルトとしてもそれに同意だ。幾ら何でも見ただけで気絶は驚きすぎだとは思うが。
しかし、
「どうするか……」

偶然にも見つけた少女の扱いに困る。というのも、
「まぁ、置いていくのもちょっとね……魔物に襲われるかもだし」
「ならまた連れて帰りますの？」
「それもちょっとな……」
どんな事情でこの人気のない森に一人でいるのかは知らないが、気絶したまま放置するのも、いきなり城に連れて帰るのも微妙な対応だ。
かといって他に選択肢も少なく、
「……とりあえず連れて行くか。後で適当に街に送り返せばいいだろ。キャロル」
「お任せあれですわ！」
キャロルが少女を持ち上げ、そのまま右肩に乗せるように運ぶ。どうでもいいがその運び方はどうなんだ、と思わなくもない。
任務というか仕事が優先だ。帰るまでに目覚めてくれればいいが、そうでないと少し難儀である。
とりあえず少女のことを後回しにし、レオンハルト達は再び森の中を進み始めた。

一方、その頃。
「……暇だな」
開けた森の窪地に、白の巨竜――ライゼンの姿はあった。
彼はレオンハルト達を乗せてこの森に降り立つと、その場で待機することになった。遠くからでも目立つので、集合場所にも便利だという。まあそれはいいが、
「暇だ……」
結局のところそれだ。
それにどうにも時間が掛かりそうである。
場所をここに決めた理由が全員、勘や何となく、と言われてはそう思わざるを得ない。いい加減にも程があるというもの。
しかし待つこと自体は本来、苦手ではない。長き時を生きるドラゴ

ンにとって一日や二日はそれほど長い時間ではないのだ。
だがそれも、ここ最近の生活を思うと長く感じてしまう。城だと誰かしらが話し相手になってくれるのであまり暇はないのだ。
キャロルやハンティ、ペールといったレオンハルトの使徒達だけでなく、中庭の手入れをしているメイドとも、最近はよく話す。向こうからしてもドラゴンといった存在は物珍しいのだろう。色々と興味を引くのか、話題は尽きないもので、そうでいながらも世間話というか、取り留めのない普通の会話をしたりもする。
特に食事の内容を教えてくれたりするのは一日の楽しみだ。あの城の料理はどれも美味いからな。量が物足りない時もあるが、食べなくても飢えて死ぬようなことはないのでそれほど問題ではない。足りなければ肉を食えばいいのだし。
ともあれ、充実した生活をしているのに間違いはない。ゆえに暇な時間というのは前よりも退屈に感じるもので、
「……狩りにでも行くか……？」
ふとそんなことを口に出す。食事用に肉を取ってくるのも悪くない。
そんな時だ。不意に、気配を感じたのは。
「む……？」
微かに感じる気配は、同胞のそれであり、ライゼンは首をその方向に向ける。
こちらに近づいてくるその気配。まさか同胞がこちらに気づき、近づいてくるのか。
そうであれば嬉しいものだし、この退屈も紛らわすことが出来る。そう思い、待ち構えていると、
「――――」
「お……」
森の中から、一匹のドラゴンが現れた。
まさしく同胞の姿だ。やはりこちらに気づいて近寄ってきたのだろう。
「ふむ、懐かしいな。お前は――」

と親しげに声を飛ばした時、ドラゴンは行動を起こした。
「――！」
こちらの不意を突くように、その鋭い爪を振るってきたのである。
直前でそれに気づいたが、ライゼンはそれに何の行動も起こさなかった。
強いて言うなら、訝しげにドラゴンを見ながら、軽く腕を前に出しただけ。そこに爪が振るわれるも、
「……何をする？」
爪はあっけなく弾かれる。
ダイヤモンドドラゴンであるライゼンの鱗は、斬撃の類は一切通さない。例えドラゴン種の鋭い爪であろうが、魔人の剣撃であっても、皮膚に傷を付けることは不可能に近いものである。
ゆえに一切のダメージを受けず、同胞の行動を軽く注意する。ひょっとしたら狂って意識がない状態なのか、と思っていると、
「――オ～……ファンタスティッ～ク……」
「む？」
声が聞こえた。無機質な、しかしどこか狂気を孕んだ声が、同胞から聞こえてくる。
視線を向けて注意深く観察してみると、ドラゴンの周囲に紫の触手が纏わりついており、加えてその中心には赤い瞳を持った目玉があった。
声はおそらく、そこから聞こえてくる者で、
「今までにみた中で最高のボディ。これは、ミーの新しいボディに相応しい……」
「……一体何を――」
新しいボディ。
その意味を計りかね、ライゼンは目を細めてドラゴンを注意深く視界に収める。
だがドラゴンはそのまま身を動かし、
「私の主、ガウガウさんの為に――ユーのボディをゲットね！」
赤い瞳が煌めき、ドラゴンが戦闘態勢に入った。

「いわゆるひとつの――キル・あなた！」
「……何なのだ、こいつは……？」
摩訶不思議過ぎる存在に、ライゼンは同じく戦闘態勢に入る。向かってくるというのであれば相手せざるを得ない。
「……よく解らんが、やると言うのであれば相手になろう」
とりあえず倒してから話を聞けばいいか、とライゼンはその身を動かした。

――しかし、勝負は一瞬でついた。
「オー……ベリーストローング……」
「……本当に何なのだ……？」
ドラゴンが戦いを仕掛けてきはしたが、爪や牙による攻撃も、ブレスによる攻撃も、何故か使ってきた魔法による攻撃も、ライゼンのダイヤの身体を傷つけることは敵わなかった。
相も変わらず変な口調で喋るそれに、ライゼンは目を向ける。
……もしや、この目玉が本体なのか？
確証はないが、どうにもそんな気がする。
ドラゴンは正気を失っている者が殆どなので、ちょっと気が狂っておかしくなっただけの変な奴だという線も捨てきれないが、どうも声は目玉の方から聞こえてきているようで、
「……うーむ」
どうするべきかを迷う。
本当にこの目玉が本体なのだとしたら、同胞は操られているということになるのか。そうだとすればライゼンとしても看過出来ないことであり、
「とりあえず、引っ剥がしてみるか……ん？」
もし目玉が剥がれて正気に戻るようであればそういうことなのだろう。
自分の大きな手では難しいが、試せることは試してみようと、手を伸ばしたところで、ライゼンは気づいた。

「あの目玉がいない……？」
同胞の身体に付いていた目玉がどこかに消えている。
小さすぎて見落としたか、と辺りを見渡したところで、
「――っ！」
身体に何かが纏わりついてくる感覚を感じ、ライゼンは眼下に首を向けた。
そこには、同胞に纏わりついていた紫の触手が、自分の身体に巻き付いてきているところで、
「よりストロングなドラゴンボディ、ゲーット……！」
「ぐっ……何だ貴様……!?　何をする……！」
またしても目玉の無機質な声を耳に聞いたライゼンは、激しく抵抗しながらも、その触手が徐々に距離を近づけてくるのを見た。

ガウガウ・ケスチナ

森の中での探索は数時間に及んだ。
一帯の森を全て調べ尽くすには至らないが、その三分の一ほどを調べ終えたところでレオンハルトは傾き始めた日を見ると、背後からついてくる二人に向かって、
「――そろそろ戻るぞ」
と、声を飛ばす。するとこちらを見ていたハンティは頷いたが、何かを見つけたのか茂みでごそごそとしているキャロルが、遅れて立ち上がり、
「レオンハルト様ー！　珍しい貝を見つけましたわー！」
肩に少女を乗せたキャロルが左手を掲げてそう報告してくる。掌の上には、キラキラ光る黒色の貝があり、
「……貝なんて見つけてどうする。まさか生きた貝じゃあるまいしな」
モンスターの古代種の貝は、現在では殆ど絶滅しており、その死骸が貝殻として残るのみである。生きた貝であれば多少は珍しいが、それでも全く見ないという程でもない。
なので呆れつつキャロルを嗜めたのだが、キャロルは声を大きくして、
「レオンハルト様！　お言葉ですがこれは珍しい貝ですの！　おそらくこれは……鋼鉄黒飴貝ですわ！」
「……それは凄いのか？」
「好事家やコレクターの間では超レアな貝だと、この前読んだ貝図鑑に書いてありましたわ！」
そうなのか、とキャロルの言葉を聞いて改めて貝を見てみる。隣からハンティも視線を向け、
「……確かに綺麗だけどさ。目的は生き物でしょ」
「まあ捨てるなとは言わんが……とりあえずしまっとけ。珍しいなら持ち帰って貰ってもいいぞ」
「ありがとうございますの！　大事にしますわ！」

了承したキャロルが懐から取り出した透明なケースに、その何たら貝を入れる。持ち帰ってコレクションにでもするのだろう。キャロルが探索で珍しいものを拾ったり買ったりしてくるのは珍しいことじゃない。聞くところによればキャロルの部屋には色々と珍しい品が保管されているらしい。物集めが半ば趣味になっているが、別に構わない。こちらも迷宮で色々と見つける時もあるが、自分の場合は武器や実用性のある物の方が多く、趣味的な珍しい品は適当に城の宝物庫に入れてしまうか、誰かに上げてしまう。それで喜んでくれるなら安いものだ。

「……よし。それじゃ戻るぞ」

「了解」

「帰還ですわー！」

元来た道に引き返す。一日目はそこまで収穫が無かったが、最初から直ぐに見つかるとも思っていない。

……ナイチサが興味を持つほどの珍しい生物など、一日やそこらで見つかるはずもないからな。

それこそ一年や二年では済まず、数年か十年以上かかる可能性だってある。

しかし魔王や魔人の感覚でいえば人間でいう数年など、少しくらい長期間であっても問題ない。なのでゆっくりと探索を進めてもいいが、あまりこの作業に時間を取られるのも億劫な上、長過ぎればナイチサに小言を言われるかもしれないので出来る限り早めに終わらせるつもりだ。

とはいえ一年くらいは掛かるか、とも見ているが。なので焦ることなく、レオンハルトはライゼンがいる森の窪地まで戻っていった。

――だが途中、異変を感じ取り、レオンハルト達は身を固くした。

「――今のは」

そろそろ着く頃かと思っていた矢先、森に衝撃が走った。

凄まじい音が鳴り響き、宙を駆ける衝撃の波が木々の間を抜けてこ

ちらに風を寄越してくる。
　それを感じて思うのは、
「……ライゼンに何かあったか？」
「迷い込んできた魔物と戦闘してる可能性がありますわ！」
　キャロルが言った通り、そういった可能性が高い。しかしそうだとしても、
「……こんな周囲に被害が及ぶほどの相手……？」
　ハンティが訝しげに目を細めて言う。レオンハルトとしてもそれには同意だ。
　魔物と戦ったとして、これほどの衝撃を周囲に届かせるほどの攻撃を、ライゼンが放ったにしろ、魔物が放ったにしろ、それは相手が強大であるということに他ならない。
　ライゼンであればそこいらの魔物は難なく征することが出来るだろうし、そうでないのだとしたら、
「大丈夫だとは思うが……少し急ぐか」
「了解ですわ！」
「先行って見てくるよ」
　二人がその言葉に頷くのを見て、レオンハルトは足に力を込めた。
　ハンティがその場から消えるのを確認するまでもなく、木々の間を、先程の数倍以上のペースで跳ぶように駆け抜けていく。キャロルが後ろから付いてくるが、それよりも少し早いペースだ。
　すると一分も経たず、レオンハルトは窪地に到着する。ハンティが先に到着しており、その背中が見えるが、こちらもその隣に並び、その光景を目の当たりにする。
　そこには、白の巨大なドラゴンの姿と、紫の目玉のような何かがあり、
「――はぁ……全く、梃子摺らせおって――む、遅かったなお前達」
「ノ、ノーーー!?　ミーの身体からどくするね！　ドラゴン！」
「……何やってんだ？」
　地面においたその手に挟むように触手を掴んだライゼンが、疲れたような表情でそこにいた。

触手の中心にいるその赤い瞳の目玉は、黒焦げになりながらも必死にじたばたと暴れており、
「……そいつは……」
「ん、これか？」
レオンハルトが目を向けて思わず疑問の声を呟く中、ライゼンは首を向け、考えるように頭を捻った末に、
「……よく解らんが捕まえた」
「……その説明じゃ分かんないっての」
ハンティが真顔で言う。言われたライゼンの方は、しかしなぁ、と微妙に困った様子を出しつつもやがて迷いながらも状況を説明しようと口を開いた。
「いやな？　同胞が襲いかかってきたと思ったら身体にこれが付いてて、こちらにも襲いかかってきおったから、ちょっと本気を出して新技でぶっ飛ばしてから捕まえたのだ」
「……だから周りの木が消し炭になってるのか？」
「如何にも」
如何にも、じゃねぇよ。
見れば周囲、窪地の周りにあった木が円形に伐採されたように無くなっている。
地面も軽く抉れ、焦げ付いている辺り新しい技とやらの凄まじさが窺えるが、それを聞くような無粋はしない。少なくとも自分が聞くわけにはいかない。
ゆえにその話題をスルーすることにし、代わりに目を向けるのは、その件の目玉であり、
「……ふぅ、やっと追いつきましたわ。って、あら？　何か変な目玉がいますの」
どうしたものか、と思っていると追いついてきたキャロルが目玉を見て首を傾げる。そして新しく現れた存在に反応したのか、じたばたしていた目玉がキャロルの姿を捉えると、
「！　何故ミーのマスターがここに!?」
……ミーのマスター？

その言葉に疑問を覚えつつも、声の先であるキャロルに視線を移す。キャロルもその言葉が自分の方に向けられたことだと気づいたのか、若干戸惑いつつも、
「……よく分かりませんが、わたくしがマスターだったとは……」
違うだろ、と思いつつ、目玉の言葉を聞くと、
「ノー！　ユーが抱えているヒューマン！」
「ミーの？」
「ユーよ！　あなた、ユー！」
よく分からない会話を展開させるキャロルと目玉。それを皆が半目で見つつ、
「……で、それどうするの？」
「解放するのは危ないので捕まえていたが、どうするかは俺も迷っていてな」
ハンティの問いに答えたライゼンは、眼下でキャロルと言い争いを続ける目玉を見て息を吐く。それを聞いたレオンハルトは顎に手を当てると、
「……」
「……レオンハルト？」
「……ん、そうだな……」
ハンティの問いがくるまで少し考え込むと、ややあって低い声で、
「……連れて帰る」
「――えっ、それにするの？」
「珍しい生物には違いない」
再度の疑問の言葉が来る頃には、レオンハルトの答えは決まりきっていた。ゆえにレオンハルトは目玉を捕まえるライゼンと、言い争いを続けるキャロルに声を飛ばす。
「とりあえずその目玉は俺が持つ。抵抗出来ないよう触手を纏めるから、しばらくそのままにしておいてくれ」
「それはいいが……ううむ……」
何とも言えないような微妙な表情を浮かべるライゼン。未だ目玉を見て考え込んでいるようだ。

それを無視し、次にキャロルに声を掛けた。
「キャロル、帰り支度をするぞ。後、そいつにはあまり近寄るな」
「イエス！　オーケーね、レオンハルト様！　ミーは帰り支度を始めますのよ！」
「……口調が移ってるよ、キャロル」
「はっ……！　ミーとしたことが……」
頭が痛くなるような会話をしていたので、頭を抱えつつも、さっさと済ませようとライゼンの左手に近づき、触手を丁寧に一本一本抑えながら縛っていく。その間も、目玉はじたばたとしており、
「ノー！　ノーーー！　ユーら、ミーと、ガウガウさんを離しなさい!!」
「……ガウガウ？」
聞き慣れない名前に眉をひそめると、目玉は、はい！　と普通に返事をして、
「ガウガウさんは私を作った偉大な創造者！　傷つけるするは――ミーが死をプレゼント・フォー・ユー！」
「……そうか」
その言葉に納得がいく。察するに、あの森で見つけた子供がこれを作った創造者である人間だということだ。目玉はその未だに目を覚まさない少女を主と認めているのか、物騒な言葉を言いつつも少女の身を案じている。そこに不可思議なものを感じつつも、レオンハルトは目玉を縛りつつ、
「……なるほどな……」
「何を納得してるか!?　ミーを解放しないとユーをダイ！　キル・あなた、するね！」
「出来るもんならやってみろ――ふん」
「の、ノォーーー!?」
触手を丁寧に縛り、目玉を丸め終えると、それを軽く地面に叩きつける。ちょっと黙らせようと思ったのだがうるさいだけだ。そのことに辟易としながらも作業を終えたことに一息つくと、こちらを見ていたキャロルが目玉を見て興味深そうに、

「何か良い感じの球になりましたわ！　テニスすると楽しそうですの！」
「打ちにくそうだからやめた方がいいと思うけど……まあ触手を棒に括り付けて練習用とかなら出来なくもないかな」
「こらこら遊具として見るな。とりあえず帰るぞ。――ライゼン」
「――ん、ああ……そうだな」
目玉を見て遊び道具の用途を模索しはじめた使徒達を注意し、ライゼンに、帰るぞ、と声を掛ける。
しばらく何かを考えていたライゼンだったが、こちらの声に頷くと飛び乗りやすいように身を低く屈めてくれた。
そうしてレオンハルト達は、謎の目玉と、一人の少女を連れて魔物界に帰還していった。

朝日の昇る時間。
静かで広いその部屋、しっかりと整えられたふかふかのベッドの上でガウガウ・ケスチナは目を覚ました。
白い布団を跳ね上げ、
「……っ、ここは……？」
完全に思考が回っていない状態ではあるが、ゆっくりと状況を理解していく。
まず自分の部屋、屋敷ではない。自分の生活スペースである研究室は物で散乱しているし、こんなに綺麗ではない。自分で言うのも何だが、ここの倍は散らかっている。間違いなく知らない誰かの部屋だ。
次に何故ここにいるのかだが、起きる前の状況を思い出す。
確か自分はレッドアイを連れて魔物の森に向かい、そこでアレとはぐれた。そして一人森で彷徨い歩き、魔物に追いかけられ爆走し、木の陰で疲労し、休んでいたはずだ。
そこに魔人と思われる者が現れ――記憶はそこで止まっている。
「まさか……」
ガウガウの心に最初に浮かんだ言葉。それは、

……魔人の家？
魔人に攫われた、と考えるか。記憶がそこで止まっているならそれは当然の帰結である。
だがそれなら、こんなに丁重に扱われているのに説明が付かない。牢屋にでも入れられているならともかく、見る限り、かなり上等な部屋だ。
それとも通りすがりの誰かが魔人から自分を助けて、屋敷に連れ込んだのか。これだと丁重に扱われるのに納得がいくが、通りすがりの人間が魔人に勝てるのか、という疑問が湧いてくる。これも微妙な線だろう、と、しかしそこで、
……考えても意味はないな。聞いたほうが早いし。
思考を無駄と断じ、身を完全に起こしながら周囲を見る。誰かがいるなら聞いたほうがいい。
ここまで丁重に扱われてるのだからいきなり殺されることはないだろう。ないよね。ないと信じたい。
だんだん不安になってベッドに潜り込みたくなってきたが、ここで現実逃避、もとい引きこもっても意味はない。生き残るために魔人に媚びを売る方法でも考えようかな……、と考えていると、不意に扉が開き、
「――起きていたか」
「!?　は、はははいっ！」
そこから室内に入室してきた人物を見て、ベッドから飛び跳ねるように起き、正座してベッドの上に着地する。何故なら、
……さ、さっきの魔人……!?
いや、予想していたことだが、本当に現実になるとやはりテンパる。
何しろ魔人を見るのは初めてだ。金髪の鋭い赤い目をしたイケメンだが、その内に秘められてるであろう力に凄まじいものを感じる。
見た目が化け物でないだけ運がいいのか、悪いのか、魔人を初めて見た自分には判断がつかない。もう少しサンプルが欲しいところだ。いや、やっぱいらない。魔人とたくさん出会いたくないし。
とか考えていると、

「……そこまで怯えるな。害を加えるつもりはない」
「……へ……」
「俺がお前を城に連れてきたのは、森で一人行き倒れていたから……気まぐれで拾っただけだ」
という信じていいのか分からないが、良い人なのかと勘違いさせるようなことを言う魔人。
警戒心が微妙に下ってしまうが、不可抗力だろう。そもそも抵抗したところで何も出来ないだろうし。
ならば、素直に聞きたいことを聞いてみようと、ガウガウはゆっくりと口を開き、
「……し、城？」
「ああ。ここは俺の城だ――と、まだ名乗っていたなかったな。俺の名はレオンハルトだ」
レオンハルト、という名前に肩をビクリとさせたがこれも不可抗力だろう。
魔人レオンハルトといえば人間の間で調べた魔人の資料の中でも、最初に挙げられる名前だ。
目撃情報こそ多くはないが、魔人の中でも最高位の実力者、つまり最も危険な魔人の一人であるのだ。
街や国を一人で落とした、という情報もあり、どの魔人にもいえることだが、見かけたら逃げるのが最善と云われる。それと真偽不明だが、決闘を申し込めば苦しまずに死ねる、もしくは生き残れる、という噂もあるが、それこそ確かなものが少ないので情報としては不十分だ。つまり取れる行動は多くなく、
「……私は……ガウガウ・ケスチナ……だ……」
名乗られたので名乗り返す。普段なら天才魔法研究者だと声高々に言うのだが――
……いや、むしろ言った方がいいのか……？
その方が利用価値があるとかで生き残れる可能性がある。危険な奴と思われて殺される可能性は――そこまで高くないだろう。魔人の技術は人間のそれより高いと聞くし。

「……魔法具を作ってる……研究者で……その……」
「……そうなのか。その歳で大したものだな」
「……え？」
その歳で、と言われ思わず首を傾げてしまう。自分はもう二十――うん歳だが、研究者としては高くはないが、そう言われるほどでもないもので、
……あ、こいつ……私のこと、子供だと思ってるな……！
直ぐに結論が出た。よくあることだ。背丈や顔で判断されるのは。そのことに苛立ちを微妙に覚えつつも、しかし都合が良いことに気づき、ガウガウは、
「……う、うん。わたし、こどもだからー。まほうぐいっぱいつくって、おとなにほめられたんだー……」
生き残るために子供の演技を初めた。ある程度良識のありそうな目の前の魔人なら、さすがにいたいけな幼女を殺すことはしないだろう。自分で言ってて悲しくなるが、そこを堪えて、
「だから、魔人の……お、おおお兄ちゃんっ。わ、わたしを、お家に帰してくれる？」
……うあああああ！　恥ずかしいいいいぃ……！
言った。微妙にどもったが、可愛らしい少女を演じて言った。
心の中で死ぬほど悶えるが、しかしそれを聞いた魔人は、眉を少し動かし目を細めると、
「……急にどうした？」
「……な、なんでもないよ？　と、とりあえず、わたしお腹空いたなー……？」
……素で返されたあーー!!　ちくしょーーー!!
この天才魔法研究者であるガウガウ様がここまでしたというのに、魔人はこちらを心配するかのような目で見ている。クソが、理解ってもそこは乗るべきだろ。ロリが嫌いなのか!?　と、そこまで言うとやはり心にダメージを負う。これでも経産婦なんだけどな、と微妙に苦い思い出を思い出しつつ魔人の言葉を待っていると、
「……まぁ、元より食事は摂らせるつもりだったから構わないが……

それより先に、言わねばならないことがある」
「いわねばならないこと？」
言われ、何だろう、と考えるより先に、魔人はそれを口にした。
「……森にいた魔道具――のようなものがいただろう」
「え、レッドアイを見つけ――って」
思わず普通に口にしてしまったところで、しまった、という思いを抱える。あのキチガイの製作者だと知れたらどんな目に合わされるか。知っているということは攻撃されてるだろうし、あのキマった言動も聞いているだろう。
自分相手には普通なのだが、と思っていると、魔人は続けて、
「……そのレッドアイだが――」
と、魔人はそこで一息、間をおくと、
「――魔人になった」
「――――」
と、衝撃の発言をぶち込んできた。
思わず、絶句し、思考が停止する。
……え……レッドアイが……魔人に……。
自分の生み出した魔道具が、魔人になった。
その言葉は直ぐには受け入れきれない。
だがなおも魔人は続ける。軽く息を吐きながら、
「……魔王様の命令でな、珍しいものを魔人にしようと、捕まえたレッドアイを献上したのだが……それをえらく気に入ってしまってな」
と、言いつつ、魔人はそこでこちらを真っ直ぐ見詰めると、
「――だが、そんな言い訳が通用するとも、しようとも思っていない。俺は俺の意思と目的で、お前の物であったレッドアイを、魔王様に献上した。お前に話したのは説明の義務を果たしたのみ。ゆえに……俺に何を思うも自由だ」
と言外に、恨むなら好きにしろ、と告げてくる。
確かに恨み節をぶちまけたい気分だが、それよりも先に、研究者としての疑問が頭に湧く。それは、
……魔人になっても、私に従順であるのか……？　暗示は有効か

……？
問題はそこだ。もしそれが活きているのなら、さして問題はない可能性がある。むしろ性能向上した分だけ得だ。
だが、活きていないのであればアレは己が予想した通り、人類の災厄になるだろう。元々、その危険性を感じて暗示を掛けたのだ。
しかし暗示すら効いていないなら、問題は自分が死んだ後であり、
「……それで、どうする？」
「……」
今考え中だから話しかけるな、といつもの調子で言いそうになったが、それを呑み込んで代わりに別の言葉を口にする。意味を問う言葉で、
「……どうするって？」
「お前を送り届ける準備はある」
つまり、帰ってもいい、ということだ。それは朗報である。
さっさと引きこもって自堕落な生活を送りたいと思っていたところだ。外に出て危険な目に合うのは御免で、
「……そうだな」
しかし、一応責任を果たしてからじゃないと研究者としても、生みの親としても落第だ。
ゆえに言う言葉は、それではなく、
「……レッドアイに、会わせてくれ」
それを確認しないことには、どうするも何もない。
「会ってから、決める」
「……そうか。分かった」
危険、という言葉を呑み込んだであろう魔人は、こちらの言葉に頷き、
「……ならば付いてこい。食事を摂った後、魔王城にお前を連れて行ってやる」
「……っ」
魔王城、という言葉に身が竦むが、それを武者震いと自己暗示しつつ、溜まった唾を飲み込む。そして軽く笑みを浮かべてみせ、

「……食事は……手早く摂れるカップラーメンとかで、いいよ」
「……駄目だ。栄養不足気味に見えるし、ここまで長い間倒れていたのもその所為だろう。ちゃんとした物を作らせてあるからしっかり食べろ」
「……ちぇっ」
小煩い母親の様なことを言う魔人に口を尖らせつつ、ガウガウはその背を追いかけた。

魔人レッドアイ

魔王城の一角は血に染まっていた。
そこは城の廊下に当たる場所であり、魔物兵の往来もそれなりにある場所であるが、今はその殆どを死体としている。
それを引き起こした存在は、奇妙かつ不気味な存在だった。
廊下の中央、平たい茸のような傘と複雑な模様が描かれたローブを着る魔物兵がいる。
〝魔素漢〟と呼ばれる魔物兵であり、各種魔法を扱える特殊な魔物兵であり、魔軍にも部隊が導入されている歴とした仲間だ。
だが、
「ギャアアアアァ！　ああ、あ、アッ、ぐ、ああっ、うあああぁぁぁぁぁぁぁぁッ!?」
「――――」
その魔素漢は、周囲にいる仲間である魔物兵を魔法で傷つけていく。それは通常の魔素漢が放てる魔法の威力を遥かに越えており、遊び半分の攻撃であってもやがて魔物兵達を無惨な死骸へと変えていく。
原因は一体の魔人であった。
「んっんー、このストロングな魔力……」
魔素漢の体に、紫の触手を使って張り付く丸い宝石がある。中心は目玉のようになっており、そこから赤い瞳をぎょろぎょろと動かし、魔物兵の悲鳴を聞いて瞳を輝かせるのは、
「魔人になってミーの魔法の威力も以前より格段にパワーアップ！
ユーらは、ミーの新たなパワーの実験体になる！　クケケケケケ！」
機械的で狂気に満ちた甲高い笑い声を上げながら、生者を殺していくのは魔王ナイチサが新たに作った魔人。
――魔人レッドアイ。宝石の魔人である。
寄生能力と高い魔力が込められた宝石であるレッドアイは、その寄生能力をもって魔素漢に取り付き、周囲の魔物兵を魔力で吹き飛ばしていた。

「あ、あ……」
そんな中、腰を抜かして床にへたり込む魔物兵がいた。
視界では仲間達が狂気の魔人によって殺されている。
数秒後には自分も死体になることは容易に想像出来た。
「クケケ！　ユーら、ダイ！　キル・あなた！」
「ひっ……!?」
そしてとうとう、自分の番が来た。
レッドアイの冷たい瞳が魔物兵を捉える。
魔法の詠唱を始めたレッドアイに怯え、逃げることすら叶わず、魔物兵は自分の死をそこで幻視した。
その瞬間だ。
「――やめろ、レッドアイ」
「っ！」
背後から飛んできた声に、魔物兵の身がビクリとする。
凄まじい気配を感じ、それが徐々に近づいてくる。魔物兵のすぐ近くまで気配は迫ると、その横を通って前に進み出る。
現れたのは魔物兵が知る者と、知らない者だった。
二人を見たレッドアイが魔法の詠唱を止めて、
「お、オー……？」
疑問するような考えるような声を上げる。首を捻るように本体が動き、
「ユーらは……どこの誰さんか？　伊藤さん家のみち子ちゃん？」
「……忘れたか？　魔人レオンハルトだ。お前をここに連れてきた魔人……と言えば分かるか？」
「レッドアイ……」
「魔人と……」
魔人筆頭であるレオンハルトと、その隣に付く緑髪の少女を見て、レッドアイの動きが止まる。
しばらくの間、その場に静寂が訪れた。誰も口を開かない。生き残った魔物兵もその場から離れようとそそくさと移動を始めた。
するとややあって、

「……オオ」
何かに気づいたような声を、レッドアイは上げて、
「オー！　ユーはあの時のベリーストロングな魔人！　そしてユーは――」
レオンハルトのことを思い出したレッドアイ。その瞳が次に緑髪の少女に向けられ、
「ミーを作った創造者！　偉大なるガウガウさん！」
「！」
その事実を憶えていたことに、レッドアイの製作者であるガウガウ・ケスチナは僅かながら光明を見出す。レッドアイはテンションを更に上げて、一方的に喋り始める。
「ユーら感謝！　感謝よ！　特にユーがここに連れてきてくれたおかげでミーは魔人になりベリー強くなった！　おかげでミーはベリーハッピー。ルンルン気分っちゅうやつよ！」
クケケケケ、と笑い声を上げるレッドアイは、本体をくねくねと動かし、強くなったことを喜ぶ。
それはガウガウが設定したレッドアイの行動原理の一つ。
自らを高める。強くなること。
魔王を倒すためにどこまでも強くなれるように思考を設定した。
ゆえに魔人になってもそこは変わらないのか。ともかくレッドアイの性格はそこまで変わってないように見える。
ともすれば、とガウガウが思うのも無理はないだろう。
「……レッドアイ」
「オー？」
ガウガウはレッドアイに声を掛ける。
確認するように、そうであってくれ、と願いを込めて、
「……私は……レッドアイにとっての……何？」
「……ミーにとって？」
こくり、と頷くガウガウ。レオンハルトは隣で無言のまま見守っている。
すぐに動けるように警戒は怠らず、その鋭い双眸でレッドアイを観

察し続ける。
その間、レッドアイは考えるようにまた動きを止める。
そして、
「……ガウガウさんは――」
ゆっくりと結論を導き始める。
「……ミーのマスター」
「！」
その言葉を聞いてガウガウの表情が緩む。
生みの親であるという認識はまだ残っていた。ならば命令権も。
と、思っていたが、
「……でも」
と、
「――もういらない」
「――――」
無機質なレッドアイの結論を聞いて、ガウガウが言葉を失う。
瞬間、レッドアイは箍が外れたように再び、
「ク、クケ、クケケケケ！　そう！　ガウガウさんはもうミーにとってナッシン！　必要ない！」
その言葉通り、レッドアイは魔法を詠唱し、その矛先を主人であったガウガウに向ける。
レオンハルトが目を細めて迎撃の構えを取る。既にその道は断たれた、とレオンハルトは認識していた。
だが、
「……っ、私を攻撃してもいいのかっ!?」
ガウガウはすぐさま立ち直り、レッドアイに鋭い声を飛ばす。
「私が死ねば、レッドアイ！　お前も死ぬ！　魔人になってもそれは変わらないぞ！」
それはガウガウが、おかしくなりはじめたレッドアイに掛けた暗示。
〝ガウガウ・ケスチナが死ねばレッドアイも死ぬ〟――という魔法を掛けられたという、暗示を掛けたのだ。

その条件を満たせばレッドアイは自己崩壊を始める。それから逃れることは出来ない。
ゆえに堂々と、ガウガウはレッドアイに対峙する。
傷つけることは出来はしない、と、その自信をもって。
しかし、それすらも、
「……それなら問題ナッシン」
「何!?」
レッドアイは何でもないことのように言う。どういうことだ、とガウガウが目を見開く中、レッドアイは続けて、
「ガウガウさんが死んでも、その血を受け継いだ者が生きてる限り――ミーは死なない。ガウガウさんには息子がいる」
「っ、お前……!」
その時点でガウガウは察した。
自分の暗示が、捻じ曲げられていることを。
暗示の対象をガウガウ個人から、ガウガウの血筋が絶えることへと変更したのだ。
ゆえに、ガウガウにも解る。それは、
「私を殺して……息子を――いや、私の血を……」
「そういうこと！　ガウガウさんの息子――バウバウさんを捕まえて、適当にベイビー産ませて残すすれば、ミーは死なない！」
「……っ、なんて非効率的な……」
レッドアイが出した結論に、ガウガウが小声で苦悶の声を漏らす。
血が絶えない限り死なない、という風に変更を加えたとしても、その血が絶えたと認識すれば自己崩壊することに変わりはない。
その正しく命綱と言うべきガウガウの子孫を、一人ずつ受け継がせるのみで、いらない方は殺すなど、危険にも程がある。
この瞬間、バウバウが死んでいたらどうするつもりなのか、と思うも、条件は認識すること。どこかで生きている、とレッドアイが感じる限り、自己崩壊は起きない。
そういう意味では見つかった方がいいのかもしれない。
だがそれは、息子に自らの業を継がせてしまうということで、

「……くっ」
ガウガウは迷う。どうするべきか。
暗示をこれ以上掛け直すことは出来ない。ゆえに取れる方策も多くはない。
暗示の齟齬を教えるか、そもそも解いてしまうか。それなら息子に背負わせることもない。
だが代わりに、レッドアイを倒すことは難しくなる。
魔人になったレッドアイは、当初のガウガウが危惧するよりも強大な災厄となって人類を苦しめるだろう。
見ず知らずの他人などどうでもいいガウガウではあるが、自分の作った魔道具が災厄となって人類を苦しめるなど、付与師としては不名誉極まりない。
だがこのままにしておけば、遠からず自分や、息子も死ぬだろう。
レッドアイの狂った思考に、もしも、とか、保険、などを考えるのは無駄だろう。息子を死なないまでも痛めつけるだろうし、子供が出来たら親は用済みと考えて直ぐに殺してしまうかもしれない。現に今、息子がいるから、とガウガウ自身が殺されそうになっているのだから。
そしてもう一つ、ガウガウの迷いの原因は、
「ミーはフォーエバー強くなる！　より強いボディを得て、魔力を高め、最強になる！　これこそがミーの、メイクドラーマー！」
「……ちっ」
ともかくどうするか、ガウガウは舌打ちを一つし、思考を回す。
まずこの場から生還する方法を考えなければならないが、それには戦闘は避けられないことで、
「……魔法は疲れるから嫌なんだけどな……そうも言ってられないか……！」
そもそも人間である自分では無敵結界の壁を突破出来ない。
ゆえに普通にやっても無駄に終わる可能性は高いが、それ以上に可能性の高い方法は無いと、
「――おい」

「っ！」
「！」
思っていたのだが、
「な、なに……？」
隣から凄まじい圧力を感じる。
それは魔人となったレッドアイを遥かに上回るもので、
……こ、こいつ……やっぱり……滅茶苦茶強い？
魔人レオンハルト。魔人筆頭。魔軍参謀。
最強の魔人とも名高い魔人が、その殺気を声とともにレッドアイに向けて放つ。
「……こいつは俺の客人だ」
「オ、オー……」
一歩前に出て、レッドアイを睨みつける。気圧されたレッドアイが一歩下がる。
「これだけの魔物兵を殺した挙げ句、俺の客人まで殺そうって言うなら――お前を殺すぞ、レッドアイ」
「……」
レッドアイが沈黙する。
デジタルな思考のレッドアイは実力差を計っているのだろうか、余計な声を出すことなく、じっとその赤い瞳でレオンハルトを見つめている。
魔人同士の睨み合いの最中、先に声を出したのはレオンハルトで、
「……それにな、お前の論には間違いがある」
「？」
レッドアイが疑問符を浮かべる。同じくガウガウもその言葉に疑念を抱くも、
……まさか。
気づく。何を言おうとしているのかを。
しかし魔人の圧力に押され、それを止めることは出来ず、
「ガウガウの血がある限り死なないなら……お前は死ぬことはないだろう」

「???　どういうことか？」
　レッドアイがそれに耳を傾ける。純粋な疑問を感じたのだろう、それを確認してレオンハルトは、いいか？　と続けた。
「ガウガウの血と同じ血を持つ人間など、それこそ腐るほどいるし、放っておいても腐るほど出来る。親戚、兄妹、家族などガウガウの血縁。それはこれからもどんどん増えるだろう。それぞれが様々な場所、相手と子供を作る」
「……つまり」
　レッドアイの問いに、レオンハルトは頷いた。つまり、
「お前がガウガウの血筋に拘る必要はない」
「……オ」
　レッドアイの思考が一度止まり、しかし再起動して声を上げる。
　その声は、
「オオオオオオォォオオ!?」
　歓喜の声だった。
「それはつまり、ミーはもう無敵っちゅうことか？　好きなだけキル・あなたしていいか？」
「……とりあえず、魔物兵をいたずらに殺すのはやめろ」
　魔人筆頭兼魔軍参謀としてレオンハルトは注意する。
　しかしなおもレッドアイはご機嫌な様子で、
「クケケケケケ！　ＯＫ！　ＯＫ！　モンスターはいたずらにキルしない！」
　無機物ではあるが、喜びの感情を発露させて、レッドアイは言う。
　寄生している魔素漢が小躍りするほど、歓喜を露わにするレッドアイにガウガウは何を思うのか、無言でそれを見つめ続け、
「……」
「ん……？　ああ」
　レオンハルトのコートをクイクイと引っ張る。
　それで何かを察したレオンハルトは軽く息を入れながらレッドアイに目を向けると、
「レッドアイ。お前も魔人になったのなら最低限魔王様と俺の命令に

は従ってもらうぞ？　後、こいつには手を出すな」
「ＯＫ、ＯＫ！　オーダーには従う！　強いものに従うのは魔人の摂理！　とっても自然な結論！　そして……そっちに関してはもうどうでもいいね！　クケケケケ！」
「っ……」
　冷たい瞳で、それと評され、ガウガウの表情が僅かに歪む。しかしすぐに口を一文字に結び、
「……」
「ああ、わかった。――ならばレッドアイ、追って指示を出す。魔王城からあまり離れることなく待機しておけ」
「オオ！　オオッ！　ミーはフリーーーーダム！　ミーはリリーーーース！　呪縛から解放された！　これこそ、メイクドラーマーーーー！　グヒャ、ゲヒャアヒャヒャ！」
「……ふん」
　聞こえていないのか狂ったように笑い声を上げるレッドアイを尻目に、レオンハルトはガウガウに袖を引かれながらその場を後にした。

「――それで、どうする？」
「……」
　レオンハルトの城。その一室に戻り、再度の問いを投げかけたレオンハルトは無言の応答をするガウガウを見た。
　魔王城にて彼女が作ったレッドアイを見て、やり取りを行った。それから城に戻ってくるまで、ずっとガウガウは何かを考えるように、真剣な表情で押し黙ったままであり、
「……さっきも言ったが、これは俺の意思でやったことだ」
「……」
「そして、詫びるつもりも毛頭ない」
　そんなことを言っても、ガウガウはまだ口を開かず、沈黙したままだ。何を考えているのかは、レオンハルトには解らない。

ただ一つ、予想出来るとすれば、レッドアイのことを考えているであろうということだけであり、
「……レッドアイは魔人になり、お前の制御下を離れた」
それが現実だ。ナイチサの命令が元とはいえ、自分が引き起こしたことでもある。
特に後の結果は、自分が口にしなければ起こらなかっただろう。ゆえに、
「これからは魔人として……まぁ、あの性格も災いし、人間を苦しめるだろうが、お前が気を揉む必要はない。ましてや責任を負うこともな」
確かに製作者はガウガウかもしれないが、
「レッドアイは既に一個の自我が芽生えている。ゆえに自分の意思でそれを為す」
だからお前は関係ない。そう言外で言うように、
「……もう帰っても大丈夫だろうが……念の為、しばらくはここにいると良い。ああは言ったが、レッドアイがお前を狙ってこないとも限らないからな。帰る際はちゃんと送り届けてやるから――」
「――研究するか」
「……何？」
不意に、何かを思いついたように顔を上げたガウガウが言ったのは、研究するか、という短い言葉。
そうしてガウガウは、座っていたソファーの前にあるテーブルに、どこからか取り出した紙を置くと、そこにペンを使って何かを書き込んでいき、
「んー……どんなアプローチでやればいいかな……とはいえ、魔人となった魔道具なんて前例が全く無いし、そもそも私自身、幾ら天才とはいえそんなことやったこともないからな。……うん、やっぱり手探りでやるしかないか……」
「……おい」
「というか一番の問題は時間だな……私が生きてる間に終わる気がしないぞ、これ……まず長生きする方法でも考えた方が良いような

……」
「……おい」
「……何だ？　今色々考えてるから話しかけるなよ」
ブツブツと色々呟やいていたガウガウが、不機嫌そうな表情をこちらに向けてくる。
何となく、これが素なのか、と思いつつ、レオンハルトは疑問を口にした。
「……お前は何をするつもりなんだ？」
「……はぁ？　そんなの、決まってるだろ。解らないとか、馬鹿なの？」
「……すまないが解らない。教えてくれ」
はぁ、と深い溜息を吐いて馬鹿を見るような目を向けるガウガウに、釈然としないものを感じつつ答えを待つ。ガウガウは、仕方ないなぁ、と言いながらソファーの上に立つと、
「……レッドアイを、正常に戻す」
「……は？」
予想もしていなかった言葉にレオンハルトが間の抜けた声を思わず漏らすも、それに一切構うことなくガウガウは話を進めようと続け、
「魔人化してバグったのか、頭がおかしくなってたけど、思考はデジタルのままだ。ならバグを直してやれば少なくとも私の言うことは聞くようになるだろ、多分。魔人化前も狂ってたが、私には従順だったし。だから――」
「……少し待て。一旦整理する」
「はぁ？　こんなことも理解出来ないとか、頭の出来悪いのか？」
半目でこちらを見てくるガウガウ。どうでもいいが、ソファの上に立ってるのに目線がこちらとあまり変わらないのは馬鹿にしていいのだろうか。
そして、こちらが魔人であることを忘れてないだろうか。ずけずけと物言いをしてくるガウガウに頭を抱えつつも、頭の中を整理し、
「つまり……お前は、あの狂ったレッドアイを元に戻すつもりか？」

答えを言う。するとまたしても、はぁ？　と、
「そう言ってるだろ。何で分からないの？　馬鹿なの？　死ぬの――」
「……いい加減にしろよ、この合法ロリ」
「ひっ!?」
軽く威圧しつつ言うと、ガウガウはソファの後ろに隠れ、魔女帽子を被った頭を陰から少し出しながら、
「な、何だっ！　子供を苛めるなんて大人げないぞ！　このロリ――あ、嘘、嘘だから睨むのやめて……」
「……はぁ」
息を吐き、半ば呆れるように威圧を止める。どうにも気が抜ける相手だ。
気を取り直して、レオンハルトは質問を続ける。恐る恐るとソファの前に戻ってきたガウガウを見て。今度はちゃんと座った。
「……元に戻すとは、魔人を止めさせるということか？」
「……違うけど。何でそんな勿体無いことしなくちゃいけないの？」
ガウガウは少しだけ抑えながらも説明する。それは、
「最初はやばいと思ったけど、よくよく考えたら強くなったのは良いことだし、直さなくてもいいじゃん。魔人を止めさせる方法とか何となく無さそうだし」
それよりも、とガウガウは、魔道具、とデカデカと書かれた紙をぱしっとペンで叩き、
「魔道具に改良を加えるだけなら無理、とは言い切れない。あのまま私の言うことを聞くようになったら……それこそ、私が最強。くく……」
くつくつ、と暗い笑みを浮かべるガウガウを見て、レオンハルトは微妙な表情になってしまう。
……こいつ……どんな思考をしてやがる……？
レッドアイを作っただけあって優秀だとは思っていたが、性格の方も少し問題があるようだ。
あの状態のレッドアイを受け入れ、そのまま手中に収めるつもりと

は、さすがに変人というか狂人に過ぎる。だが、
「……まぁいい。それなら――ここで研究するか？」
「……えっ……」
　見どころはある。ゆえにそんな提案を口にしたのだが、
「……」
「……何故俺から距離を取る？」
　何故かガウガウはソファから離れて遠巻きにこちらをチラチラと見てくる。微妙に顔を赤くしつつ、警戒するような瞳で言うのは、
「……私を手篭めにする気？」
「あ？」
「わざわざそんなことを言うなんて……体目当てとしか思えない……しかも、そう思うってことはロリコンってことで……いや、でもイケメンだと許せそうだから世の中って不条理……」
　どうやらあらぬ誤解を受けているようなので、レオンハルトはそれを訂正しようと目蓋を揉み解しながら、
「……言っておくが、そういった意図はないからな？」
「……本当か？　一切、ロリに欲情しないと誓えるのか？」
「……」
「お、おいっ！　何でそこで無言になる!?　まさか本当にロリコンなのか!?」
「……いや、悪い。気にしないでくれ」
　少し思うところがあった所為で無言になってしまったが、気を取り直すように咳払いをすると、
「とにかく、俺にそんな意図はない」
「少し不安になるが……なら、何でそんな提案をする？」
　お互いにメリットが無いだろう？　と言うガウガウの思考は、やはり研究者然としている。こういったタイプにははっきりとメリットを提示してやれば良いだろう、とレオンハルトは口を開いた。
「俺の城で研究する限り、お前は時間を気にする必要はなくなる。何しろ――この城の中では歳を取らないからな」
「？　それはどういう……」

首を傾げるガウガウに、レオンハルトはあっさりとそれを口にした。
「――〝永久保護魔法〟。聞いたことはあるか？」

「……永久、保護魔法……」
ガウガウはレオンハルトからその魔法の詳細を耳にした。
「そうだ。この城全体にその魔法が掛けられており、中にいる人間や生き物はその影響下にある。効果はさっき行った通り」
魔法研究者として高名であるガウガウでも聞いたことのない魔法。その効果は先程も聞いた通り、
「この魔法の影響下にいる者は、成長時間が止まる。つまり――歳を取らない」
「それは……」
凄まじい効果の魔法だ。
確かにそれがあれば懸念していた時間の問題はクリア出来る。
手探り状態でそれを研究するには数百年か、あるいは千年以上の時間が必要かもしれないと思っていたところだ。
場合によっては魔人か使徒になる必要もあるかと考えていたが、それも必要なくなる。
その効果に唖然とするこちらを見て、目の前の魔人レオンハルトは軽く笑みを浮かべつつ、
「とはいえ、俺や俺の使徒達に意味はないがな。だが、この城にいる人間や魔物、今ここにいるお前も成長時間は止まっている」
「成長が止まる……」
……何だか嫌な響きだな……。
成長に悩んできたこちらとしては微妙に嫌なフレーズだ。しかしそれが有益であることは認めざるを得ない。
「……本当なのか？」
「現に、ここで働いている一部の人間――料理人やメイドは既に百年以上、変わらない姿で生きている」

とはいえ、と、
「あくまで城にいる間だけだ。外にいる間は時間も普通に流れる。だから成長したければ外に出ていればいいし……現に城で生まれた子供などは外の街で暮らして貰っている。出たいのならいつ出ても構わないからな」
「……なるほど」
確かに、生まれた赤ん坊が全く成長しないのは困るだろう。
だがそれ以外はメリットしかない魔法だ。寿命による死を回避出来るなら、
……あれ？　普通に最高じゃ……？
いつまでも引きこもり続けることが出来る。少々特殊だが、永遠の命を得たようなものだ。
それに毎日研究をしつつも、ぐーたらして、掃除とか生活のあれこれもここならメイドとかがやってくれるだろうし、外に出なくてもいい。出なくて困ることは何もないのだ。
一つ気になるのは、魔人や使徒やおそらくいるであろう魔物と関わりを持たないといけなさそうな事だが、それもこのロリコン魔人を盾にすれば回避出来るだろう。
考えれば考えるほどその提案を受けたほうが良いことが解るが、一応細々とした気になることもある。
ゆえに目の前の魔人の顔色を窺うように、
「……えーと、元いた研究室から荷物を持ってきたいんだけど……」
「使いを出してやるから好きにしろ」
「……部屋は陽の当たらない角が良くて……」
「ちょうど良いな。研究室は内側の隅にある。陽も殆ど当たらない場所だ」
「……食事は……」
「毎日好きな料理を頼むといい。家のは腕がいいからな。お菓子だろうが何だろうが作ってもらえるぞ」
「――ひゃっほう！」
……やった！　引きこもり生活万歳！

勝った。人生の勝ち組来た。それを確信する。
三食昼寝おやつ付きで、永遠の命も付いてくる上、よくよく考えてみれば最高位の魔人の城とかいうのは、世界で一番安全な場所な気がする。
「……ただし、俺にも協力してもらうからな」
「……ええ……あ、はい」
「……露骨に残念そうな顔をするな。協力と言っても、精々魔道具を作ったり、研究してもらうだけだ」
「……まぁ、それなら」
それくらいであればいつもやっているから構わない。
研究が色々と利用されたとしても、そもそも付与師として作った魔道具を有効活用してもらうのは後世に名を残す為に重要な事だ。
魔道具に自分の名を名付けて、それを後世に残すことを目指すのが付与師の一般的な目標なのだ。
だから、
……まぁ、ちゃんと直してやらないとな。
自分が作った魔道具の事を思う。
……あんな奴でも、私の製作物(こども)だ。
それがバグった状態のまま、狂気に支配されるのは――可哀想だ。
既にこちらのことを見ていないとしても、製作者(おや)として面倒は見てやらないといけない。
どんなに人に迷惑を掛けたとしても、作った自分だけは愛してやるのが、自分の付与師としての誇りだ。
どれだけ自堕落に生き、人の道を外れたとしても、それ一つだけは、守らないといけないだろう。
いい加減な自分の中にある唯一の意地だ。それを為すため、ガウガウはあくまでも軽く、決意する。
「……言っとくけど私、凄いぐーたら引きこもりながらやるけど……それでもいいんだな？」
「……フッ、安心しろ」
城の主である魔人は言う。良い笑みで、

「引きこもりは嫌いじゃないからな」
「……そう」
なら、
「……のんびりやりますかねっと」
天才魔法研究者にして付与師である私の研究を。

――と、思っていたのだが、
「……えーと、よ、よろしく？」
「……一人じゃないのか」
「え？　ああ、一応ここはあたしの研究室ってことになってるんだけど……まぁ、これからは二人のってことになるのかな。とにかく、よろしくね」
「……はぁ」
黒髪の、カラーのような見た目をした使徒、ハンティと名乗った女性が苦笑しつつ手を差し出してくるのを、ガウガウはげんなりとしながら見た。
……そもそもその……白衣？　の下にレオタードって……変態っぽいな……。
白衣は格好いいからいいが、下に着る服がレオタードとかだと何故だか解らないが、変態か痴女に見える。
これもあの魔人レオンハルトの趣味なのだろうか、と思う。
そのうち私も妙にフェチ的な衣装を着せられるのかな……、と思いつつ、ガウガウ・ケスチナは差し出された手を握った。

トッポス

ある年のある日のこと。
魔人レオンハルトはその話を聞いた。
「――西の森で魔物が殺されてる？」
魔王城にある会議室。
その話を出してきたのは、集まってきていた魔人カミーラの使徒である七星と、カミーラ軍の魔物大将軍であるヴラドだ。
彼らはレオンハルトの確認の言葉に頷くと、口々にその話を続ける。
「ええ。元々そういう噂はあったのですが……」
「……つい先日、西の魔物の森近くに作った駐屯地が一日で壊滅的被害を受けました」
口に出しづらいのか、大将軍であるヴラドは沈痛な面持ちでそれを口にする。
そして対応に追われていたのだろう、疲労の色が濃く、先程からしきりに息を吐いている。
そんな相手に追い打ちをかけるようであれだが、聞くべきことは聞かなくてはならない。レオンハルトは彼らに目を向け、
「……魔人はいなかったのか？」
「……いえ、いたのですが――」
そこでヴラドは今度こそ言葉を止める。それほどに憚られることなのか。
レオンハルトがにわかにそれを察していると、ヴラドの言葉を引き継ぐように七星が口を開き、
「……いましたが、それでも敗走したそうです」
「……魔人が負けたのか？」
思わず目を細めて問う。それほどに信じられない事だった。
強大な実力と各種能力。無敵結界という絶対の防御を持つ魔人が負けるということは、通常では考えられない事態だ。

だが七星とヴラドの様子は真剣そのもので冗談を言っているような雰囲気ではない。その迫真振りが、真実であることを強調する。
「無敵結界があるので傷は無かったそうですが……逆に傷をつけることも出来なかったそうです」
「そして今なお、その魔物は森を徘徊し魔物を屠り続けている様子で……それで、その……カミーラ様にどうにか出来ないかとご相談したのですが……」
「……それで？」
何となく、答えを察しながらレオンハルトが先を促す。
すると七星が軽く頭を下げながら、
「……レオンハルト様に任せるように、と……」
「……なので、如何でしょうか……？」
「なるほどな……」
溜息を漏らしながら状況を理解する。
つまりこの二人は普通の魔人ではどうにも出来ない相手に、カミーラへの出陣を願い出たのだが、気まぐれか何かで断られ、代わりに自分へと白羽の矢を立ててここにやって来たと、
……全く……カミーラのやつは……！
あいつ、ひょっとして面倒なことは全部こちらに任せれば解決してくれるとでも思ってるんじゃないだろうな。生憎自分は便利屋でも何でも屋でも無いんだぞ。
と、内心苛立ちを募らせるも、カミーラにそれを言っても聞かないであろうことは分かってる。今更だ。
それに今回は仕事の事であるだけマシだ。なので頭を抱えつつも、こちらとカミーラの間で板挟みになってる可哀想な二人を見て、
「……分かった。俺が出る」
問題の解決の為に動くことを決めたのだった。

「――というわけで、今日はある魔物退治だ」
「……それは分かりましたけどー」

空の上で、レオンハルトは自分の使徒であるペールにその旨を説明した。
しかし何故か、行くと決まった時からペールは不満そうに軽く頬を膨らませており、むーむーと唸っている。
そんなペールは、半目でこちらを見ると拗ねたように口を尖らせ、
「……もうちょっと、ピクニック的な平和なのが良かったのに。こういうヤバそうな時は私とか、運が無いですよう」
「……言っておくが、一応仕事だからな？」
「分かってますよー……」
注意しておくも、あからさまにテンションが落ちているペール。
そもそもこの間、一人だけ留守番だったので今回は連れていってやろうと思ったのだが、どうやらお気に召さないらしい。
レオンハルトは一応フォローしてやろうと、軽く息を吐いてから、
「だが今回、お前は何もしなくていい」
「えっ？」
いいんですか、と半信半疑で聞いてくるペールに再度強調するように頷く。それに、
「というより、動いてもらっては困る。何しろ、魔人でも倒せないような奴が相手だからな」
「？　じゃあ何で私を連れてきたんですか？」
という至極尤もな問いに、レオンハルトは笑みで、こう告げた。
「……少し長くなるかもしれないからな。生活する上での世話は全部お前に任せる」
「！」
その言葉を耳にしたペールが、意味を正しく受け取り、目を見開かせると、ややあって顔を綻ばせて、
「……もうっ！　レオンハルト様ってばー、そういうことなら最初に言ってくださいよう。それなら大歓迎というかー、ここまで不機嫌オーラ出したのが損じゃないですかっ」
言ってペールは忙しなく、顔をニヤけさせながらこちらに近づいて身を寄せてくる。これだけで掌を返したように喜ぶ自分の使徒に呆

れつつも、頭を撫でてやり、
「……だが、あくまでも仕事が優先だからな。空いてる時間があれば相手してやる」
「はーい！　了解ですよ！　炊事洗濯お料理。そして夜のお世話まで……このペールにお任せあれ！」
ぐっ、と拳を握り、得意気な笑顔を浮かべるペールに苦笑していると、下から、
「――もうすぐ着くが……もう何度も言っているが、身体の上で猥談をするな」
「……悪いな。家の色ボケ使徒のせいだ」
「えっ、私ですか!?　違いますよう、私は普通の話してます。レオンハルト様やライゼンさんがエロいから、エロい話に聞こえてくるんですよ？　何、もといナニを想像してるんですかぁーーー？」
「……ライゼン。これ、落とすから拾うなよ？」
「うむ、了解した」
「え、いや、ちょっ、な、ななな何をする気ですか!?　たまに訓練とか言って迷宮に潜らされたりはしますけど、高所落下訓練は駄目ですよ!?　普通に死ねますし！」
こちらのやり取りと、実際に首根っこを掴んできたことにわたわたと慌てはじめたペールに、レオンハルトとライゼンは二人で首を捻り、
「？　俺は落ちても大丈夫だけどな」
「？　落ちるくらいなら特に問題は無かろう」
「じ、人外と一緒にしないでください！　常人はこの高さから落ちたら死にますよう!?」
いや、お前も一応人外だろ……、と二人でツッコミの声を作りつつ、ライゼンは徐々に高度を下ろし、魔物の森に降り立った。

魔物の森。
大陸西側。位置的にはカラーの森から少し南西にいった場所に広

がる森林地帯である。
多くの魔物がひしめき合うこの場所は、一応ではあるが魔軍の支配地域であり、最近は〝ミダラナツリー〟と呼ばれる場所にツリー都市を築き、カミーラの城が建てられ、カミーラ軍もそこに駐留している。
その森の中で、突如として地鳴りが起こった。
「――――」
それは、大柄な何かが魔物を踏み潰し、その凄まじい脚力で地面を震脚するような形で揺らしたものだ。
踏み潰された魔物はその重量もあってか粉々に踏み潰されてしまい、地面には赤い血が流れるのみで魔物の影も形もない。跡形もなく踏み潰されてしまったのだ。
しかしそれでもその影は止まることはない。次なる魔物を見つけると大柄な身体に似合わない凄まじい速度で近づき、魔物を殴りつける。それだけで魔物は吹き飛び、全身の骨や身体を粉々にされて息絶える。
彼は魔物にとっての死神であった。
生まれてからずっと、この森を彷徨い歩き、ただ魔物を狩り続けることに生を費やす。
彼の親も、その親も、そしてこれから生まれてくるであろう子供も、そうやって魔物を狩ることに生涯を懸けて生きていくのだ。
その存在の名前は、
「――お前がトッポスか」
「！」
トッポス。そう呼んだのは、一体の魔人であった。
鋭い双眸でその魔物、トッポスを睨みつけるのは、魔人レオンハルト。
魔人の最高位である魔人筆頭であり、魔軍を統括、指揮する魔軍参謀である彼は、トッポスの前に進み出て声を掛けた。
「……なるほど。デカいし、強そうだな。これなら――」
と、口に続けようとした時、トッポスは徐ろに腕を振った。
「――っ！」

体長3メートルから4メートルほどの巨体。筋肉質なその腕から放たれるパンチは、それだけで大気を震わせ、魔人を吹き飛ばす。
無敵結界という絶対防御があり、傷こそは無くても関係ない。岩をも粉々に砕く破壊力。その衝撃で、レオンハルトは吹き飛び、木々を薙ぎ倒しながら転がった。
それを上空から見ていた使徒が心配して声を上げるも、
「――ク、ククク、やるじゃねぇか……」
それが既に聞こえていないのか、レオンハルトは顔を抑えながらゆっくりと立ち上がる。
「なるほどな……こりゃあ良い……」
トッポスを見るその表情には、既に喜悦の色が混じっており、
「テメェみたいな化け物相手なら……俺も久々に楽しめそうだ……！」
「……！」
しかしトッポスはそれを聞くことなく再び拳を振るい、
「おおっと！」
しかし躱される。
後ろに向かって跳び、再び距離を取ったレオンハルトは、その行動にも笑い混じりに、
「ククク、おいおい、つれねぇなあ？　いきなり仕掛けてくるとはよぉ……」
「……」
トッポスは口を開かない。
だがレオンハルトの方はそのやり取りそのものを楽しんでいるのか、なおも口端を歪めながら、肩を竦め、
「……つまんねぇ御託が聞きたくねえか？」
それならよ、と低い声で、
「そろそろおっ始めるか。――〝オル＝フェイル〟！」
名を呼びながら空間から身の丈ほどある蒼の魔剣を引き抜き、レオンハルトはそれを自然に構える。
全身から魔人の闘気、達人としての剣気。その二つが混ざりあい赤

いオーラが陽炎のように揺らめき、地面や木々を揺らし、地の底で蠢くような音がその場に響き渡る。
レオンハルトの赤い瞳が煌めき、トッポスを映すと、
「――今の俺がどこまで出来るか……試させてもらおうかッ!!」
「――ヒアウィゴー!」
戦意を滾らせ、仕掛けるのは大陸の支配者である魔人の中にあって最強と称される魔人――レオンハルト。
甲高い声で喋り、迎え撃つは第二世代モンスター。世界に一体だけ存在する最強の生物――トッポス。
後に天災ともうたわれるその戦いは、大地の激震とともに始まった。

大地はひび割れ、森は薙ぎ倒され、岩山を破壊しながらその戦いは続く。
「クハハ、これはどうだッ!」
レオンハルトが魔剣を薙ぐように振るい、宙を走る斬撃を振るうと、
「……!」
トッポスは周囲の木々が真っ二つになるほどの斬撃を身体で受け止め、そのまま直進して拳を振るう。
「食らいなッ!」
レオンハルトが足に力を込め、瞬時にトッポスの懐に潜り込むと、そのまま同時斬撃を三つ、腹から胸にかけて叩き込む。
しかしそれでもトッポスは、身体に薄い切り傷を作るのみで、足を振り上げてレオンハルトを蹴り飛ばそうとする。それを剣で防御し、刀身の腹を滑らせるようにして受け流したレオンハルトは身を弾き、トッポスの背中に回ると再び全力の斬撃でトッポスを吹き飛ばす。
剣と拳がぶつかり合えば、衝撃の余波で地面が割れ、遠くにあるものが斬れ落ちるような戦い。
必然的に周囲にいたはずの生物は全て、その場から逃げるように離

れている。
　そんな中、ライゼンの背に乗ったまま上空で主が戦うのを見ていたペールは、軽く引き気味に、
「……えー……何か急にバケモンバトル始まったんですけど、ペールちゃん、これ、どうしたらいいですかね……」
「……大人しく見ていれば良いのではないか？」
「いやまぁ、そうなんですけど――って、うわっ!?　急に岩が飛んで……!?」
　巨大な岩が上空に跳ね上がってきたのを見てペールが驚愕の声を上げる。
　しかしそれを見たライゼンは、飛んできた岩に向かって首を上げると、
「……ふんっ！」
　叩き落とすように頭突きをして岩を砕いた。おおっ、とペールが驚き、
「……それにしても、レオンハルト様のあの戦闘狂状態、久し振りに見ましたねぇ……うわぁ、超楽しそう……」
「……確かに楽しそうだな」
　二人が見る先、木々が薙ぎ倒され更地というか荒地になっていく地面で、レオンハルトは口を大開きにして笑っている。
　既に戦闘が始まって数時間経つが、ずっとあの状態だ。疲れないのかな、とペールが素朴な疑問を抱いていると、
「……うむ、本当に楽しそうだな……」
　不意にライゼンが、再度の呟きをし、
「……ううむ……」
　何やらうずうずとし始めた。ペールが半目でライゼンの顔の方をじっと見る。
「……」
「……なぁ、ペールよ」
「……何ですか？」
　うむ……、とライゼンは前置きし、言いづらそうに小声で、

「その、だな……混じってきても――」
「駄目ですっ!!」
食い気味で、ペールはそれを止めた。
ライゼンはその答えに残念そうに息を吐くと、
「……もう少し考えてくれても良いのではないか？」
「駄目に決まってます！　そうなったら私を守る人――もといドラゴンがいなくなるじゃないですか！」
「それなら、背中に乗ったままでも構わんが」
「もっと駄目です!!　何を寝ぼけたこと言ってるんですか!?　あんなとこに混ざったら一瞬であの岩みたいに粉々にされる自信ありますよ私！」
「むぅ、しかしだな……」
断固として拒否するペールに、しかしドラゴンとしての血が騒ぐのか、ライゼンがなおも食い下がろうとする。よっぽど戦いたいらしい。
だが、ペールはべしべしとライゼンの背中を叩きながら、
「それに！　あのままでもやばいのに、あそこにライゼンさんまで混ざったらいよいよ森が無くなっちゃいますよう！」
「……もういっそのこと全部更地にしてしまうのはどうだ？　それなら俺も手伝えるぞ」
「アホなこと言わないでくださいっ！　自然を何だと思ってるんですか!?」
全くもう、と、ペールがぷんぷんと怒り腕を組む。
ライゼンも渋々ながら、未だに残念そうに、そして羨ましそうに戦闘の模様を見ているが、一応頷き、滞空を維持する。
だが途中、ペールは何かに気づいたように、
「……この戦い、いつ終わるんでしょう？」
「む？　んん、そうだな。両者体力も気力も有り余り、しかも傷も殆ど付いておらんからな……」
うむ、と、ライゼンは頷き、
「少なくとも、一日や二日では終わらないことは確かだ」

「……なるほど。ということは――」
と、ペールは頬に人差し指を当て、ん？　と眉をひそめると、
「……あれ？　私とレオンハルト様のエロエロな生活は？」
「……エロエロはさておくとして、んっ、とりあえず、あの様子では夜通し続きそうだな」
「……つまり」
つまり、
「――結局、台無しになったってことじゃないですかあ!?」
頭を抱え、白目を剥くペールの叫びが、魔物の森上空に木霊した。

――その戦いはライゼンの言う通り、一日や二日では終わらなかった。
三日、四日、五日、六日……一週間が経過しても戦いは終わらない。
「ハーハッハッハッ！　さぁ、もっと俺を愉しませろッ!!」
「……！」
無尽蔵の体力と耐久力を持つトッポスに、同じく魔人として桁違いの体力を持つレオンハルト。
その戦いは一向に止まる様子がなく、昼夜問わず一日中続けられた。
一週間が過ぎ、二週間が経っても戦いは終わらず、森の一部が完全に更地になった。
二週間が過ぎ、三週間が経つと、山の一部が抉れていた。
そして一ヶ月が経つと、
「――それで、まだ戦ってるの？」
「戦ってますねぇ……」
「ううむ、混ざりたい……」
途中、何度か帰ったりしていたペールとライゼンだが、そのうち様子を見に来たハンティやキャロルなども一緒に、その戦闘を観察していた。
既に戦闘をしているその地の環境は滅茶苦茶になっているが、それ

でもなお戦闘は続いており、
「レオンハルト様ー！　頑張って下さいましー！」
メガホンを片手に応援をしているキャロルの視線の先で、レオンハルトはトッポスに剣を振るう。
もう何十どころか、何百、千を越える刃を叩き込んだが、未だにトッポスの身体には小さい切り傷以外の傷が出来ない。
だが、やがて、とうとう、
「――あ」
誰かが、もしくは複数人が、あ、と声を漏らした。
皆が注目する視線の中心。レオンハルトとトッポスの戦闘の決着がたった今着いたのだ。
ゆっくりと、トッポスの巨体が地面に落ちていき、
「……！」
重低音と振動を響かせて、地面に倒れた。
それを遠くから見て、
「あれ？　レオンハルト勝った？」
「勝ったっぽいですけど……何か急に倒れましたね、あの大きいの」
ハンティが薄めで確認するように言うと、ペールも同意する。そんな中、キャロルだけは疑ってないようで、
「レオンハルト様の勝ちですわ！　ほら、ライゼンさん！　早くレオンハルト様の元に！」
「お、おお……そうだな」
キャロルの言葉に頷いたライゼンが、翼を羽ばたかせてレオンハルトの近くに降り立っていく。既に更地になった中心地に難なく着陸すると、皆は一斉にライゼンの背から降りて、
「レオンハルト様！　おめでとうございますわ！」
「最後、何やったの？」
「やーーーーっと、終わりましたね……。と、それじゃあ早く帰りましょう！　私、ぶっちゃけ言って疲れました！」
無言でトッポスを見続けるレオンハルトに近づき、声を掛ける。
しかし何やら様子がおかしいようで、

「……あー、納得いかねぇ……」
「へ？」
レオンハルトが不機嫌そうな声で呟く。
その言葉に疑問し、首を傾げる中で、キャロルが代表して、
「何が納得いきませんでしたの、レオンハルト様？」
「……斬れなかった」
と、レオンハルトはキャロルの質問にまず短く答え、
「殺すつもりだったが……気絶させることしか出来なかった」
続けてそう説明した。
悔しそうな表情で言ったレオンハルトに、ハンティは呆れ顔でトッポスを指差しながら
「……いやまあ、倒せたならいいんじゃない？　それ、とんでもない化け物っぽいし」
「……いや駄目だ。斬れなかったからな。良くて引き分けか……」
そこで大きく息を吐くレオンハルト。一ヶ月の戦いで蓄積した疲労や、熱くなった頭を冷ますように、魔剣を空間に収めながら、
「……とりあえず、役目は最低限果たした。だがトッポスの行動範囲に施設を置くと被害が馬鹿にならないだろう。建設予定の駐屯地は取り止めだ、キャロル」
「はい、了解しましたわ。それと、お水です」
「ああ」
手帳にそれを書き込み、同時に懐から取り出した水筒をレオンハルトに差し出す。
水筒を受け取り、即座にそれを喉に流し込んでいくレオンハルトは、水分補給を行いつつ、
「トッポスを普通に相手にするのは得策じゃないな。――俺みたいな戦いたい奴ならともかく」
「つまり馬鹿以外は戦うなってこと？」
ハンティが軽くからかうように言うと、レオンハルトは頷きを返し、
「ああ、そうだな。ハンティももう少し強くなったら戦うといい。

……というか戦わせてやるから覚悟しとけ」
「はぁっ!?　ちょっと、それは勘弁……」
「あー……疲れたし腹減ったな。帰ったら少し休むか……？」
「レオンハルト様、その……言い辛いのですが……」
　ハンティを無視し、ライゼンの方に向かって歩くレオンハルトは頭を掻きながらキャロルが眉を落とした表情を見て、
「……どうせ仕事が溜まってるんだろ？　分かってる。まぁ、休むのは一日だけだな。とりあえず、頭にだけ入れておくから道中で報告しろ」
「……はい！　レオンハルト様が少しでも休めるように迅速に報告しますわ！」
「……じゃあ、帰ったら色々とお世話しますね！」
　レオンハルトの両側に付いた使徒二人。
　そして無視された挙げ句後々にとんでもない試練が課せられること知って呆然とするハンティに、ライゼンが首を向けると、
「うむ、実は俺も今度戦ってみようと思うのだが……どれだけ早く倒せるか競争でもするか？」
「するか!!」
　ハンティのツッコミが響き、レオンハルト達は帰路に就いた。

　――その少し後、
「……」
　むくり、と徐ろに起き上がったトッポスは、
「……」
　軽く身体の土を手で払うと、周囲を見渡し、そして森の方に、何事も無かったかのように歩き去っていった。
　そうしてしばらくすると、再びトッポスに襲われた魔物の悲鳴が森の中に響き渡った。

使徒パレロア

自分のことをよく知ってもらえるのは、基本的に良いことだと、レオンハルトは理解していた。

何故ならそれは、こちらへの興味があり、理解を深めていることに他ならないからだ。よく知ってくれているが故に、交流も深まりやすい。

しかし、敵対者に自分の情報を知られすぎると不利になるように、それが良いことばかりとは限らないし、何より全てが明け透けだと、精神的な負担も大きい。人は誰しも秘密を抱えて生きるものなのだ。それは精神の安定にも繋がる。

そう、俺が何故こんなことを思っているのかと言うと、やはり精神が不安定だからだ。

端的に言って、解せない。何故こんなにも、自分のことを――それも不特定多数の人物に知られているのか。

ただ有名だからというだけでは説明出来ない。何故ならその中には、自分がただの一度も口にしたことのない情報も紛れているのだから。

身内の者なら別にいい。古い付き合いである魔人――ガルティアが料理を指して、〝お前、これ好物だろ？〟と言ってくるのは、当然何度も食事を一緒にしたのだから知ってるだろうし、ケッセルリンクが、〝レオンハルトならこうすると思っていた〟と言うのもこちらの思考をよく理解して信頼してくれているのだ。別に構わない。

使徒である三人や、長い付き合いである魔物大将軍が趣味を理解しているのも別に普通だ。実際に自分のことをよく近くで見ていたのだから好物や趣味に関して知っていてもおかしくない。

親衛隊やメイドが知っているのも――まぁ、いいとしよう。何故、的確にこちらの好みやツボを押さえた奉仕をしてくるのか解せないが、それも誰かが気づいて情報共有が為されているだけかもしれない。

だが、全く関係ない――とまでは言わないが、プライベートな付き

合いをしてる訳ではない魔人達や、そこらの赤の他人からも、〝レオンハルト様は女好きだが、その中でも特に……〟とか何とか言われているのは意味が解らない。
仕舞いにはこの間、ナイチサから、
『レオンハルト。日頃からよく働いている卿に余からの褒美だ。受け取るがよい』
と、好みの女がダース単位で下賜されたのはさすがに唖然として返事がぎこちなくなってしまった。
何がどうなったら魔王にまで情報が渡るのか、考えた。考えた末に、結論を出した。
それは、
「――誰かが俺の詳細な情報を各所に流しているんじゃないかと思うんだが……そこのところお前はどう思う？　シャロン」
「……なるほど、そういうことでしたか」
自分の城の中庭で、傘で影を作ったテーブルにて、お茶会の準備を進めていたのは、ケッセルリンクの使徒であるシャロンだ。
彼女は既に席に着いているこちらに対し、自分に何故そういう話をしてきたのかを正しく理解して頷く。それは、
「私が、レオンハルト様の情報を沢山知っているから……だから私が情報を流していると、そう仰っているのですね」
「ないとは思ってる。一応確認したいだけだ。お前、例の本で知った情報は誰にも喋ってないよな？」
例の本。それは、レオンハルトの人間時代のことが記された手記のことであり、レオンハルトの故郷と縁のあるシャロンだけが知っているはずのものだ。
そこには、前にシャロンに聞いた限りでも、自分の趣味趣向が記されていたという。なので、知識的にあり得るのはシャロンなのだが、
「はい。私は誓って、あの本の内容を人に教えたことはありません。存在を教えたことも皆無です」
「……まぁ、そうだろうな。お前が、人の秘密や恥ずかしいことをべらべらと口にするとは思えない」

ありがとうございます、と微笑でお辞儀をするシャロンに、レオンハルトは軽く息を吐いて頭を悩ませた。
……知っていたとしても、性格的にはない。
不義をするような柄じゃないだろうし、更に言うなら今ここでそれはないと誓ってくれた。
ただ一個気になることがあるとすれば、それなりに生きてきて中々強かになった気がするということ。
メイドの仕事も慣れたのだろう、その動作には淀みがない。やっていれば慣れるものだからそれはいい。実際、家の城のメイド達も、年数が経つにつれ同じ様に慣れている。
だがシャロンの場合、それとちょっと違うのは、基本的に笑顔を崩さないというか、慣れすぎているということだ。
個性なのだろうか、どうもシャロンの笑顔は内側を読ませてくれない。何百年と生きれば、それだけ人と接してきたこともあり、表情や仕草で相手の感情の動きや、嘘をついているかどうかが解ったりする。条件が揃ったり、未熟な相手であれば考えていることだって手に取るように解るものだ。
逆も然りで、心を隠すことも上手になったりするのだが――シャロンはそれが抜群に上手い。
笑顔で常に口調が丁寧でも目だけが笑ってない時がある。逆に言えば、そういう時は含みがあると解るので、まだまだとも言えるが、それでもそれ以上は読ませてくれない。
今も、じっと視線を向けていたこちらに対し、気づいて振り向くと、
「……どうかしましたか？」
にこっ、と笑顔を向けてくる。
これがどうにも牽制に見えてくるのはさすがに深読みしすぎだろうが、何か隠してそうな感じもするようで、
「……いや、何でもない」
確証も無いしこれ以上突っ込んでも無駄だろうとシャロンに向けていた視線を外す。
シャロンは、そうですか、と頷き、しかし、

「今日は私の後輩の紹介もありますから、あまり他の事に気を取られないでくださいね？」
「ん、あ、ああ……」
……あれ、ちょっと怒ってるのか？
微笑を浮かべているものの、その言葉の裏には棘があるように聞こえる。というか、普段はそういう注意をしてこない。同郷ということと、親しいケッセルリンクの使徒というのもあって普段から他の魔人の使徒よりもよく話す間柄だが、それも相まってやり辛さみたいなのを感じる。何というか、注意されても言い返せない。
苦労を掛けた負い目があるせいか、もしくは似ているせいだろう。年頃の妹や、もっと別の何かに叱責されてるような微妙な感情になる。
……このことを考えるのはやめよう。
考えれば考えるほどやりにくさが増していく。ゆえに吐息一つで気持ちを切り替え、居住まいを正すと、レオンハルトは普段どおりに、
「……一応、こっちにも紹介する奴がいるんだが……」
「そうなんですね。……また胸の大きい子ですか？」
「違うわ。というかまたって言うほどそればっかりじゃないだろ。精々、三人に二人程度だ」
「……充分に、また、だと思いますけど？」
「……それでも、今回は違う」
また少し笑顔が怖くなったシャロンに弁明する。今回は違う、と言うとシャロンの笑顔が少し収まり、
「どういう子ですか？」
「見た目は子供だが、実は結構な大人で、魔法研究者をしている引きこもりの女」
「……よく分かりません」
だろうな、と頷く。端的に説明したのだがそれだけだと意味不明だろう。
「見れば分かる。……というか、ちょっと遅いな……」
普段から一緒に研究してるハンティに迎えに行かせたし、研究室か

ら中庭には直ぐに出られるのだからそんなに時間は掛からないはずだが。
駄々でも捏ねているのだろうか、と思っていると、シャロンはすっと別の方向を見て、
「……こちらはもう準備出来ました。ケッセルリンク様も直に来られます」
「みたいだな」
遠く、見知った顔がこちらに歩いてくるのを見て頷く。
……そろそろお茶会か。疑問は解消されてないが、今はとりあえずいいだろう。
また事情が微妙な相手が来るだろうし、こっちが怖い顔をしていたら緊張するだろう、と、レオンハルトは新たな身内を迎えることにした。

私は、紆余曲折を経て、魔物社会に足を踏み入れることになった。
爵位も高くない普通の貴族の家に生まれ、魔物に怯えることも、生活に苦しいこともない裕福な暮らしをしていた。
お見合いで結婚することになったのも、別に普通。貴族の家では珍しくないことだ。
たまに相手の見た目や性格が嫌だとか、別に好きな人がいるとかで騒ぎを起こす者もいたが、幸いにも自分は嫌でもなかった。
相手は高名な魔法研究者。研究の成果が国に認められて爵位を与えられた人だが、人柄も見た目も悪くなく、そういう相手も元からいない。特に断る理由はない上、貴族の子女とはそういうものだと理解していたのでそれを普通に受け入れた。
最初は価値観の違いから苦労することもあったが、それでも妻として夫を理解することに努め、よく尽くした。
幸いにも双子の子宝にも恵まれ、夫一人と娘二人の幸せな家庭を築いていたはずだった。
ここまで順風満帆な人生。大きな苦難や苦労を経験することもな

く、大きな出来事があった訳でもない。山も谷もない小さな幸せだが、今の世の中では充分に幸せといえるものだったのだ。
――あの日までは。
私の幸せを奪ったのは、魔王でも魔人でも、魔物でも何でもない人間だった。
ある日、滅多にない所用で一人、外に出ていた私が家に帰ってくると、娘達の姿が見えない。
夫が見ているはずだと娘達の様子を見ようと、研究室に向かった。
魔法研究者である夫は屋敷の離れに研究室を設けていた。いつも日がな一日中、酷い時は数日間そこに籠もったままの時もある。
だがこれが仕事であるのだから特に文句はない。昔ならともかく。夫に尽くすのが貴族の妻の役目だ。
そうして研究室の扉を開いた。
そこには夫がいた。そして夫の前には――二体の化け物がいた。
声を上げた。怯え、何をしているのかと聞こうとしたところで、気づいた。
その二体の化け物が、こちらに縋りつこうとしている。
肉癌だらけの化け物。それに娘達の面影を見た。
気づいたところで、夫は高揚したように語り始める。
それは娘達で、魔法研究の為の礎になっただの色々と難しいことを言っていたので詳しくは解らない。
しかし確かなのは、夫が、娘達二人を魔法の実験体にしたということで。
――気づけば、自分の手は動いていた。
近くにあった何か固い物を手に取り、夫の頭目掛けて力いっぱい振り下ろした。
そして夫は、頭から血を流して死んでいた。夫を殺してしまったのだ。
殺人を、しかも夫を殺してしまった私は、町にはいられないと、見るも無惨な姿になった娘二人を連れて町を飛び出した。
こんな姿になっても二人は私の娘だ。手放すわけにはいかない。

だが、他の人は違った。
化け物のような見た目の子供を見て、どの町でも、どんな土地でも、自分達は迫害された。
そうして人里を離れ、山小屋での生活まで追い詰められた。
しかしそれでも、娘達を見捨てはしないと、そこで生きることを決めた。
一ヶ月後、娘達は死んだ。
自然死だった。
そこで私は、もう諦めた。
全てを失い、もはや生きる気力も無くなった私は、人類圏を抜けて魔物界に足を踏み入れた。
その森で魔物に食い殺されよう。そして娘達と同じ場所に行こう。
そう思って、何を考えるでもなく歩いていたところで、
『――こんなところで、何をしているのかね？』
私は不思議な人と出会った。
水色の髪と青いクリスタルを額にもった美女。
人ならざる存在感を放つ――即ち魔人。
こちらの事情を静かに聞いてくれた魔人は、その上で殺してほしいと頼む私にこう言った。
『新しい生き方を、試してみないかね？』
死ぬのはそれを試してからでも言いだろう、と、ケッセルリンクと名乗る魔人はそう諭してきた。
私は迷い、やり取りを交わした上で、結局はそれを受け入れた。
人間の町で生きることは出来ない、と言うこちらに対し、ケッセルリンクは血の契約を行うことでそれを受け入れた。
かくして私は、魔人ケッセルリンクの使徒――パレロアとして、新しい生き方を始めることとなった。
人に仕えるという仕事をするのは初めてではあったが、第一使徒であるシャロンに教えられ、それを学んでいる。
そうしてしばらくして、ケッセルリンク様は仰られた。
〝君を、親しい者達に紹介する〟――と。

魔人、それも魔人四天王という魔人の中でも上位の存在であるケッセルリンク様には、親しい者達がいるという。
しかもその中には、魔人筆頭、そして魔軍参謀である魔人レオンハルトという者もおり、彼も含めた親しい者達で行うお茶会で、私の顔見せをするのだと言う。
とんでもないことになってしまい、私は不安になった。
何しろ魔人レオンハルトといえばかなり有名な魔人だ。人間の間でも魔人の間でも畏れられるような存在。私でも知っているレベルの魔人。
シャロンが言うには、ケッセルリンク様とはただならぬ関係だから大丈夫だと言うが、それでも不安にはなる。
かと言って出席しないという選択肢はあり得ないので、失礼しないように気をつけようと、覚悟を決めてお茶会に参加した。
参加したのだが――
「いやだあああああああ！　私は、絶対に外に出ないぞおおおおおっ!!」
お茶会が行われるという城の中庭。室内に繋がる窓の縁に掴まり、声を上げる緑の髪をした子供がいた。
多分だが、おそらく人間。使徒になったせいか、人間とそうでない者の区別がつく。
なので、外側から声を掛けるのは、魔の者。おそらくは、使徒で、
「何でですの、ガウガウさん！　外はこんなにも晴れていますし、絶好のお茶会日和ですわ！」
「日差し嫌い！　日陰大好き！　私は外が大嫌いで、家の中が大好きなの！」
「でもガウガウさん！　今からやるのは楽しい楽しいお茶会ですよう！　ほら、お菓子もいっぱいありますよー？」
「ならお菓子だけくれ！　魔人だらけのお茶会なんて楽しいわけないだろ！」
「……もう面倒だから無理やり引っ張っていくけど、いいよね？」
「え、あ、ちょっ、ハンティ、それは酷くない？　やめ――うあああ

ああ!?」
　ハンティと呼ばれた黒髪の女性が、ガウガウと呼ばれた子の襟首を掴まえて無理やり窓から引き剥がす。
　そのままにゃんにゃんでも運ぶようにこちらに向かって歩いてきたので、
「ケッセルリンク様……」
「……何かね？」
　席に座っていたケッセルリンクに小声で、
「この城、人間の子供までいるのですか……？」
　言う。すると、返事を返したのはケッセルリンク様ではなくその子供の方で、
「むっ、おい！　聞こえたぞそこのメイド！」
「！」
　どうやら聞こえてしまったらしい。抱えられながら、子供が怒ったように指をさしてくる。
　これはこちらが悪い。子供は、子供扱いされるのが嫌いなのだ。なので、
「……ごめんなさい。そうよね、子供じゃないわよね？」
「ん、分かればいいが……」
　むすっとして腕を組む子供の機嫌をあやすように、パレロアは笑みで、
「もうお姉ちゃんよね？」
「そうそう、もうお姉ちゃん何だから、お手伝いだって出来るんだよー……って、誰がお姉ちゃんだ!?」
　途中まで機嫌良さそうだった子供が、不意に憤ったようにツッコミの言葉を上げる。
　何が駄目だったのだろう、と思っていると、子供は衝撃の言葉を告げてきた。それは、
「私はこれでも立派な大人で――子供だって産んだことあるんだぞ!!」
「……ええっ!?」

思わず驚いてしまうが、同じようにそれを聞いていた何名かが声を上げたので感覚的には間違いないだろう。
こんな小さな子――いや、女性が、実は大人で、子供も産んだことがあるというのは、
……大丈夫だったの……？
これだけ小さいと色々と大変だろうと、経験的にアレな考えが最初に浮かんでしまうが、さすがに聞くわけにはいかない。デリカシーが無さすぎる質問だ。
だが、同じような疑問を、先程から席に座って、何故か普通の料理を次々に平らげていくガルティアという魔人が、ふーん、と顔を上げると、
「そんだけ小さくても産めるのか。すげぇなあ」
と、何でもないような軽い調子で言った。
その発言にやはり目を向けたガウガウは、ガルティアに向かって、
「失礼だぞお前!!」
「ああ？」
「――と、思ったけど何でもありません！　ごめんなさい魔人様あーーー!!」
魔人に強い口調を使ってしまったことに気づいて直ぐに平謝りするガウガウに、ええ……、と皆が半目になる。
しかしガルティアの方は気にしていないようで、その言葉の後、
「ん、ああ、褒め言葉のつもりだったんだが……気に障っちまったか。悪いな――ほれ」
「えっ、何？」
ガルティアがテーブルの上から、料理を一つ差し出す。そして、
「これやるよ。それでチャラにしてくれ」
「っ！　ま、魔人様……！」
許してもらったどころか料理までくれたことにガウガウが感動する。
そしてハンティの手から解放され、そのままガルティアの前に、すっ、と膝を突くと、

「魔人様、私めを使徒に――」
「こらこらこらこら」
魔人レオンハルト他、ハンティなど何名かのツッコミの言葉が入る。
幾ら何でもちょろすぎだろう、とおそらく全員の意見が一致したところで、ガウガウは小声で、
「……ちっ、駄目かぁ。もういっそ使徒になればいいんじゃねって一瞬思ったけど、よくよく考えてみれば使徒になったら言いなりになっちゃうもんな……引きこもり出来なくなるし、それは駄目だ」
「……勝手に自己完結してる？」
「……何でもいいから座れ。紹介する前から濃いやり取りをするな」
「えー……んじゃあ、おかしがなくなるまでで……」
と、ハンティとレオンハルト。おそらく真面目であろう二人の言葉を聞いて、ガウガウが渋々ながらに席に着く。
そこでようやく、魔人レオンハルトは抱えていた頭から手を話し、大きく息を吐くと、
「――というわけで、俺の城の研究室で働くことになったガウガウだ。よろしくしてやってくれ」
「……しなくていいんだけどなー……」
「……」
「ひっ！　ちょ、睨むの反対！」
ギロッ、とレオンハルトが鋭い目で射抜くようにガウガウを見たことで、彼女が怯えた声を上げる。
そして軽く息を吐きながら、気乗りはしないといったように、ガウガウが、
「……ガウガウ・ケスチナです。よろしくおねがいしまーす」
棒読みで言った。凄い態度というかどう考えても失礼過ぎる。そう思っていたのだが、
「……ふっ、面白い娘だな」
「おお、よろしくな」
……あれ、意外と好感触？

微笑を浮かべたケッセルリンクと、軽い様子で返事を返すガルティアに、パレロアは釈然としないものを覚える。
礼儀とか色んなものを無視するのは如何なものだろう。注意しようかとも思ったが、主が許しているので何も言うことは出来ず、
「……こちらは新しく私の使徒になったパレロアだ」
「……よろしくお願いします。皆様方」
結局自分の番になり、当たり障りのない挨拶をしてお辞儀をする。先程と同じように、ガルティアの応答が来て、次にレオンハルトの方が、
「レオンハルトだ。よろしく、パレロア」
「はい、存じております。よろしくお願いしますね」
「……ん、存じている？　ケッセルリンクやシャロンから聞いていたか？」
「あ、いえ、そうではなく……」
少し迷ったが、正直なところを口にすることにした。
「人間の時から、色々と有名であらせられましたので……」
「……そうか。まあ、悪評は多いだろうがな」
と、言われたのでパレロアは、いえ、と否定して、
「……確かに、悪評もありますが……良い評判といいますか、噂もありました」
「……例えば？」
例えば、そう。あの本のことで、
「レオンハルト様がモデルだと噂される本がありましたので……」
「……」
言うとレオンハルトが無言のまま固まる。
何か気に障ってしまっただろうか、と思うも、そうではないようで、
「……はぁ？　何だそれは？」
「……ご存知ないのですか？」
ともすれば魔人や魔物が出した本ではないかと疑われていたが、この様子だとそうではないのだろうか。
レオンハルトは眉間に皺を寄せて、こちらを見ると、

「……なんて名前の本だ？」
「はい。確か――」
言わない理由もないので言う。タイトルは、
「〝剣王伝〟……確かそんな名前だったかと」

――〝剣王伝〟。
それは一人の人間の剣士が魔物と戦い続け、やがて王となり、様々な偉業を成し遂げていく英雄譚である。
初版は僅か百冊程だが、市井に出回り、それは瞬く間に広まった。
著者も出本も何もかもが不明なその本は、英雄を求める人々に好まれ、写本すら出回る人気っぷりである。
だが、貴族以上の情報を知る者達は、その本を見てこう思った。
――あれ？　この本の主人公……ある魔人に似てね？
金髪灼眼で、世界最強の剣士となる主人公。
様々な伝説が画かれたその内容と、ある魔人の伝説が類似していることに気づいた。
そんな噂が流れ、しかし魔人を書いた本が出回り人気になってもらっても困る。
しかし内容が面白いのも事実なので、幾つかの国では、それを元に主人公を変えてみたり、少しオマージュした物語を書いてみたり、子供向けの童話にしてみたりと、工夫してそれを改善した。
結果、様々な国や地域で、細部や解釈が違ったりする〝剣王伝〟と呼ばれる物語は増えた。
子供にも読まれるようになったので、剣士を志す子が増え、国としては戦力が増えて喜ばしいこととなった他、オリジナルの原本はマニアや読書家の間では高値で取り引きされるものになった。
「――と、こんな感じの内容です」
「……なるほど、な……」
ケッセルリンクの新しい使徒である茶色い髪の女性、パレロアにその内容を聞いたレオンハルトは、本気で頭が痛くなってきて、頭を押

さえる。
隣、ガルティアが、へぇ、と感心するように顎に手をやり、
「そんな面白いことになってるとは、知らなかったぜ。本は読まねえからな」
「……レオンハルトは知らなかったのか？」
ケッセルリンクの問いに首を振る。そう、本は読むのだが、
……最近は忙しくて新しい本は見てないし、集めてなかったからな……。
城の中に、元々持っていた蔵書を含め様々な本を集めた図書館があるのだが、新体制になってのゴタゴタや、仕事や色んなことで気を張ったりやることが多くて中々時間が取れないでいた。
以前は一日に一回は、少しでも必ず読んでいたのだが、まあ、それはいいだろう。
問題はその本のことで、
「……しかも、まだ続いてるのか？」
「はい。新刊が最近出たと聞きました。何でも、巨大生物を倒す話で――」
「――俺のことか？」
「ど、ドラゴンの話は以前の話にありましたから、おそらく違うかと……」
「むぅ、そうか。やはり伝説とは語り継がれていくものなのだなぁ……」
「……」
急にしゃしゃり出てきたと思ったらしみじみとそんなことを言うライゼンを睨みつける。
……というか、巨大生物？
それは、
「……ははぁ、なるほどな……」
何となく、理解した。
それがどこから出回っているのかを。
ゆえに、レオンハルトは背後で、こそこそと動く使徒に向かって、

「――なあ、ペール」
「ひっ……な、なんですか、レオンハルト様！」
短い悲鳴を上げて、しかし即座に誤魔化すように直立し、声を上げたペールに、笑顔を向けてやる。
「……俺の本、出してるか？」
「……だ、出してないです」
視線を逸して、汗を掻きながら言うペールに、笑みのままで続けて、
「……そうか。トッポスの話、ご苦労だったな？」
「それほどでもー……あったり、なかったり？」
「……正直に言ったら許してやる」
「……本当に？」
「……本当だ」
ニィ、と笑みを浮かべて言ってやる。
するとペールは泣き叫ぶように、
「そ、それ、絶対後で怒る人が言うことじゃないですかあ!! 嫌ですよう!!」
「大丈夫だ、ペール。俺は怒ってないし、冷静だ。そう正直に言ったら……ああ、そうだ。この間言ってた高所落下訓練でもやるか」
「許してない！ 許してないですよう!?」
「はは、やったなペール。もっと強くなれるぞ。だから――さっさと持ってるもん出しやがれ」
「ひぃっ!?」
自分でもびっくりするくらいドスの利いた声が出て、ペールがビクッとする。
「俺としたことが……よくよく考えてみればあのメイド服のデザインといい、メイドの教育といい、思い返せば怪しいことだらけだ。とりあえず、家探しだな。キャロル、ハンティ。そいつ抑えとけ」
「……了解ですわ」
「……はいよ」
ガシッと、ペールの両側をキャロルとハンティが掴む。取り押さえられたペールは二人に対し、

「え、あの、は、離して！　離してくださいよう！　というかキャロル先輩は――」
「……申し訳ありませんわ、ペールさん！　わたくし、やはりレオンハルト様に不義理をするわけにはまいりませんの！」
「え、まさか……！」
　と、ペールが驚愕の表情でキャロルを見る中、ハンティに後を任せると、
「レオンハルト様ー!!　申し訳ありません！　わたくしもその存在を知っておりましたわ！　罰は後で何なりと！　しかし今は、本の在り処までレオンハルト様をご案内したいのですが――」
「……おお、キャロルは良い子だな。その正直さに免じて、知っていたことは不問にしてやろう。――というか、他にも知っていた奴は沢山いそうだしな」
「……」
　シャロンに視線を送ってみると、にっこりと笑顔で返される。嘘はついていません、と言ったところか。本の在り処は知っていたが、シャロン自身が教えた訳でも、中身を口にしたわけではない。それなら言葉に間違いはない。
　仕方のない奴だ、と思うが、とりあえずそれはいい。情報を元にした伝記が出回ってることも保留。というかどうにもならない。
　なので今は、原本を確保することが最優先で、
「……一先ず、ケリは着きそうだな」
「あ、あの……私は……？」
「……とりあえず適当に罰を与えてやるから覚悟しとけ」
「う、うわあああああん!?　私はただ、レオンハルト様の良いところを知ってもらおうとしただけなのにーーー!?」
　……頼んでないんだけどな。
　だが、悪気は無かったようなので罰は軽くしておいてやろう。身になるやつがいいな。それならむしろ感謝されるだろう。
　その後、キャロルに案内してもらい原本を確保し、それを禁書指定

にして封印したところで、個人情報流出の元は断った。
……もう色んな奴が知ったから意味ないけどな……。
しばらく、溜息は止まらなかった。

その後、
「もぐむぐ、お菓子美味しい……これいける……！」
「ほう？　どれどれ……ん、確かに美味いな。お茶とマッチするように出来てやがる」
新人の紹介も兼ねたお茶会の場にはガウガウとガルティアがお菓子を口に詰め込み、お菓子の批評をしており、
「……少なくとも、とても賑やかみたいね……」
パレロアは最終的にそう評して、お茶会はつつがなく終了した。

東部超大型地震

――ＮＣ３２１年。
朝の始まりの時間。日が射し込む晴れた日。
行動を開始するのは何も人間だけではない。
魔物界の街――レオンハルトシティも朝の動きが始まっていた。
鐘が一定のリズムで鳴り響き、朝の到来を告げると、徐々に住人が目を覚まし始める。
街の多くは一般居住区に住む魔物兵で次に多いのが街で働く魔物、主に女の子モンスター達であり、特に街で働く魔物の朝は早い。
店先だけでなく、道先までを、箒を持って掃除をする女の子モンスターがいる。掃除が好きな魔物、メイドさんだ。
鼻歌を歌いながら掃除をするメイドさんに、数体の魔物兵を連れた魔物隊長が近づく。今日の警邏を担当する魔物隊長とその部隊。魔物隊長を視界に映したメイドさんは視線を上げて挨拶をする。
「あっ、おはようございます！」
「お、おはよう！」
自然に挨拶をしたメイドさんに対し、魔物隊長の方はどこかぎこちなく挨拶をした。背後の魔物兵達が視線を強くするも、メイドさんは気にした様子なく、お辞儀をして、
「警備、毎日大変ですね。お疲れ様です」
「いや、それほどでも……そちらこそ、掃除を頑張っているではないか」
「私は掃除が好きですからっ」
「っ……そうか」
「はいっ！」
気の利いた会話が出来ない無骨な魔物隊長に対し、一切嫌な顔をすることなくメイドさんは笑顔を向けている。
しかし、魔物隊長の背後にいた魔物兵達は、隊長の対応に息を吐き、小声で、
「……おいおい、あんな毒にも薬にもならない会話をいつまで続ける

つもりなんだ？」
「あれじゃあいつまで経っても口説き落とすなんて無理そうだな……」
「担当区域から微妙に外れてまで会話しに来てるのにな……」
魔物隊長がメイドさんに対し、好意を抱いているのは部隊の間では公然の秘密であり、わざわざ仕事中に声を掛けに行くくらいはアプローチをしているのだが、そのやり方がまどろっこしすぎて魔物兵達はやきもきする。
と言っても、この街では珍しいことではない。
この部隊に限らず、魔軍の中でも最も女の子モンスターが多いこの街では、こういった光景はよく見られるものだ。
中には、今日一日休暇なのだろう。朝っぱらから逢引するカップルが見受けられたりする。
彼らは店が開いていくのを見ると、それぞれお気に入りの、またはふらっと適当な店に入って朝の食事を始める。食事を外で済ませることが出来るのはこの街の特色だ。
他の軍であれば一斉に食事を取らされるか、好きな物を自分で採ってくるしかなかったりする。それこそ魔王城や、上級魔人の方々の城に勤めでもしなければ、好きな食事を好きなだけ、とはいかないものだ。
この街は恵まれている。魔軍に新しく入ってすぐ気づくことだ。
ゆえに、街の主への感謝や敬意も高いレベルで維持されており、街の中央、噴水広場から繋がる大きな橋のような道を行った先にある赤い城――通称、紅魔城と呼ばれる城を見上げる。
今頃、城の中も朝の行動が始まっているのだろう、と。

その城の中で、ふらふらと歩く小柄な影があった。
城の中をメイドさんが行き交い、親衛隊が警備している。そんな中を、構わず歩く人間の姿だ。
「うっ、あー……もう朝かぁ……」

窓から射し込む光を浴びて、鬱陶しそうに目を細めて手でガードするのはガウガウ・ケスチナ。
ある理由からこの城で魔法の研究をしている人間である。
緑色のボサボサの髪を左右に振りながら、おぼつかない足取りで城の廊下を歩く彼女は、これでも肉体的には２０代後半。実年齢は既に１００歳を越えた大人である。
同僚の人外が掛けた永久保護魔法という魔法の効果により、この城にいる者は肉体年齢が止まっている。
ゆえに百年経とうが二百年経とうが、この城の中にいる限りは、それこそ永久に生きることが出来るのだ。現に、城に住む人間のメイド達は、既に３００歳を越えてる者もいるという。
そしてその魔法はガウガウにとっても都合が良いものである。研究には長い期間が必要なのだ。自堕落に生きるにも最適なこの城を、ガウガウはそれなりに気に入っていた。
だが、面倒なことが全くないというわけではなく、
「――ガウガウ様。おはようございます」
「ひっ!?」
いきなり目の前に現れた女の姿に、ガウガウが短い悲鳴とともに後退る。
しかし知った顔であったことに、安心――ではあるが、代わりにげんなりした表情を見せつつ、
「……おはよう。メイド長さん」
「メイド長、で結構で御座います、ガウガウ様」
そう言って柔和な笑みを向けてくるのは、メイド姿の美女だった。
長く白い髪に凛とした、それでいて艶やかさを覗かせるそのメイドは、フリルが少し多いメイド服に身を包んでいる。
正にメイドさん、といった格好と仕草だ。
だが、他のメイドと同じく胸元が開けられた服で、そこから溢れそうな胸、深い谷間を覗かせていなければ、ガウガウも恨みがましい視線を向けることはないだろう。
そんなメイドさんの名前は、その名の通りで、

「……だって、それが名前じゃん。名前で呼ばない方が失礼だし」
「私が良いと言っているから良いのですよ、ガウガウ様」
「まぁ、何でもいいけどね……」
何でもよくありません、と笑顔で、しかし言うべきことはしっかりと言う彼女の名前は――〝メイド長さん〟。
女の子モンスターのメイドさんの突然変異体であるらしい、この城のメイド長だ。
この城にいる全てのメイドを統括しており、城の運営の責任者である。その完璧な仕事振りから、街のメイドさんからも完璧メイド、バトルメイド、メイド師匠、メイド・オブ・メイド、など様々な愛称で親しまれている。
ガウガウも日頃からお世話になっている相手であり、同時に何かと口うるさい相手でもある。
ゆえに矛先を逸らすため、ガウガウは適当に日常会話を口から出した。
「あー……メイド長は、今日も掃除？　毎日飽きないよねぇ」
「掃除はメイドさんにとって種族的にも基礎業務となるものです。生きがいにも等しいものですから飽きることなどありません」
「ほんと、よくやるなぁ……私だったら一時間保たない自信がある」
掃除が苦手どころか、やる気すらしないガウガウにとっては正反対だ。そもそも散らかってる方がちょっと落ち着くまである。綺麗なのも嫌いではないのだが、雑多な感じが、自分の空間って感じで好みなのだ。
それを知ってから知らずか、メイド長さんはにっこりと笑みを深めて、
「部屋はともかく、ガウガウ様はもう少し手入れしてはどうですか？
今日も、まだお風呂に入っていないようですね？」
「……何で分かるのさ……!?」
「メイドですから」
「理由になってないぞっ!?」
にこり、と笑みを浮かべてくるメイド長に戦慄するガウガウ。ず

いっと、一歩近づいてきたメイド長はそのままガウガウに顔を近づけ、
「……よろしければ、私が入れて差し上げましょうか？」
「い、嫌だ！　というか、何で私ばっかり洗おうとする!?　変態城主だけでいいだろ!!」
「ガウガウ様は洗いがいがありますので。……それと、ご主人様のことをそんな風に呼ぶのは感心しませ――あら？」
　不意に、言葉の途中で何かに気づいたように顔を上げたメイド長に、ガウガウが疑問符を頭に浮かべる。
「？　ど、どうしたの？」
　疑問のままに聞いてみると、メイド長さんは居住まいを正して、
「どうやら、ご主人様が起床なされるようですね」
「だから何で分かるの!?」
「メイドですから。ご主人様のことは何でも。ご主人様の為に尽くし、お世話をし、奉仕する。そして幸せになって頂くことがメイドの、そして私の幸せですので」
「えぇ……」
　軽く引き気味になるもメイド長さんは至って本気、冗談を言っている気配はない。
　他人に従いたくないし、人の世話とかも面倒すぎてやりたくない、と思っているガウガウとは反対過ぎる性格だ。種族的なそれもあるのだろうが、色々と違う。特に身体とか、
「……このおっぱいメイドめ……」
「本望です。ご主人様は大きな胸が好みですので、大きいに越したことはありません」
　その余裕っぷりもムカつく。持つものは持たざる者の気持ちが解らないのだろう。被害妄想かも知れないが、心なしか胸が揺れたのはこちらへの挑発行為なのだろうか。いやまあ違うだろうが。
　それでもイラッとするのは避けられないが、いつもの事でもある。ゆえにさっさと立ち去って夢の世界に旅立とうとその場を後にしようとする。

と、そこで、
「――！　ガウガウ様！」
「え、何、急に!?」
突如、メイド長さんが何かを察知したようにこちらの身を抱いた。顔が胸に埋まる。ムカつく。
だが、そんなことを考えている場合ではない事態が次の瞬間起こった。
「っ、うあああぁぁぁあ!?」
「っ……！」
瞬間、大地の下から震動が走った。
岩かなにかがぶつかり、何かが割れてしまったかのような瞬間的な揺れ。それは瞬間的に響いたものの、続いていくように大地が揺れ、その場に立っていられないほどのそれが来る。
轟音とともに起こったのは――大地震であった。

地震が起こり、街全体が揺れていた。
朝の動きを行っていた魔物達はその酷い揺れに例外なくしゃがみ込む。それは使徒や魔人ですら例外ではなく、レオンハルトですら立っていられないほどの大地震だ。
それは街だけでなく、大陸全体に響くものであった。
東側において、その揺れは特に酷く、魔物の街だけでなく人間の街も酷い揺れにさらされ、様々な物が倒れていく。
その原因は大地の、大陸の下にあった。

ルドラサウム大陸。宙に浮かぶその広大な大地を支えているのは、大陸の下にいる〝聖獣〟と呼ばれる存在だ。
四聖獣と呼ばれる超巨大生物である聖獣は、天地創造の時からずっと重力を制御しながら、大陸を背に乗せて、一切身動きを取ること無く支えている。
そんな四聖獣とは別に、一体の聖獣が存在した。

大陸を支えるために生み出された聖獣だが、その聖獣は怠け者で放浪癖があった。
八つの首を持つ白の蛇、その聖獣の名を――オロチと呼ぶ。
聖獣オロチはふらふらと飛び回っていたが、その日その巨大な身体を大陸にぶつけてしまった。
大陸南東部に激突したオロチは、大地震を引き起こしてしまう。
だが、事態はそれで収まらなかった。
オロチと激突した大陸南東。その大陸の一部が割れ欠けてしまった。
大陸全体は、四聖獣が動かず支えているため問題ない。
しかし、割れ欠けた大陸の一部は支えるものを失い、そのまま下に落ちていくと思われたが――そうはならなかった。
「――――！」
聖獣オロチはその身体を、割れ欠けた大陸にめり込ませてしまっていた。
オロチは暴れた。大陸から逃げ出そうと暴れた。
だが、どうやっても逃れることは出来なかった。
衝撃により剥がれた大陸に完全にめり込んでしまったオロチは、やがて暴れることをやめてその場に留まった。
その大陸はオロチの力により、下に落ちることを免れ、そのまま浮き続けた。
浮遊大陸。島国。日出づる国。
東部超大型地震により生まれた――後に、〝ＪＡＰＡＮ〟と呼ばれることになる島国の誕生である。

「……収まったか」
自分の部屋で、その揺れが収まるのを耐え忍んでいた魔人レオンハルトは、揺れが収まると誰に言うでもなく息を吐き、呟いた。
室内の物は崩れて床に散らばっているが、怪我はない。無敵結界があるというのもあるが、何かが落ちてくるようなこともなかった為

だ。
だがこの分だと、他の者達はどうなっているか解らない。これだけの地震だ。物もそうだが、多くの被害が出ているだろう。
城の中や街の方、魔軍の勢力圏での被害状況を早急に調べなくてはならない。
「……さすがに参るな」
散らかってる部屋を見てこれから片付けに奔走しなくてはならないと思うと、さすがに頭が痛い。思ったことを口に出すと、少し遅れて、
「――ご主人様」
音もなく、部屋に入ってきたメイド長は、静かに声を掛けてくる。
「ノックもせずに入室する無礼をお許しください」
「非常事態だ。別に構わない。それより、被害状況は解るか？」
こんな時でも礼儀を気にして頭を下げるメイド長さんを手で制して、被害状況を問う。すると淀みのない返事とともに、
「はい。城内の物が多数散乱し、一部は壊れているものもありますが、大きな物は無事のようです。それと、城にいる者に致命的な怪我を負ったものは皆無です。一部のメイドが、軽い打ち身をしたくらいで御座います」
頷く。大きな怪我人がいないことは朗報だ。
だが落ち着いてもいられない。即座に動く必要がある。ゆえにレオンハルトは身支度を済ませつつ、メイド長さんに向かって、
「その者達は一応ヒーリングを掛けた上で安静にさせろ。そして、直ぐに来るとは思うが使徒達とリー大将軍を呼んで街の被害状況を調べるとともに、怪我人の救助に当たらせておけ。後の事は、キャロルとリーに任せる。何かあればハンティに連絡させろ」
「承りました。ご主人様はどちらに？」
窓を開け放ちながら言う。それは、
「俺は直ぐに魔王城に向かう。全軍の被害状況を調べるとともに指揮、対応に取り掛からねばならないし、魔王様に報告もしなければならないからな。――ライゼン！」

大声で中庭にいるであろうドラゴンを呼ぶと、即座の応答が来た。
「レオンハルトか。うむ、すごい揺れであったが、どうやら無事のようだな」
「地震如きで俺がどうにかなるとでも？　それより至急、城に向かいたい。悪いが頼む」
「……まあ、仕方あるまい。早く乗れ」
ああ、悪いな、ともう一度だけ言葉を送りつつ、窓の縁に足を掛けてライゼンの背に飛び乗る。その瞬間、部屋の方から、
「レオンハルト様ー！　ご無事ですのー!?」
金髪ツインテールの見慣れた姿が騒がしく入ってくるのを見て息を入れる。大丈夫だとは思っていたが、かなり元気そうだ。ライゼンの背から声を飛ばす。
「キャロル！　俺は城に向かう！　お前は城と街の指揮に当たれ！」
「！　畏まりましたわー！　どうかお気をつけてー！」
手を振るキャロルに手を振り返すと、ライゼンが翼を羽ばたかせて高度を上げていく。
空に向かって急上昇し、雲に近づくと、ライゼンが、
「……！　おい、レオンハルトよ！　あれは……！」
「……大陸から離れてるな」
ライゼンが首を向けた先、南東の遠い地平の先に、島のようなものが見える。
大陸から離れ、宙に浮いている大陸。その存在を見て、レオンハルトは、
「……興味深いが、今は地震の対応の方が先決だ。城に向かうぞ」
「！　ああ、まあそうだろうが……貴様、妙に落ち着いているな？」
驚いていないのか？　と問うてくるライゼンにレオンハルトはふっ、と笑うと、
「これでも充分驚いているさ」
「……そうは見えんが……うむ、大陸が割れるなど初めて見たぞ……」
島の方を見て唸るライゼンを見て、レオンハルトは内心、かなり感情が昂ぶっていた。

不謹慎な話だが、あの浮島を見て、心が揺れ動かされてしまう。それも良い方に。

……あまり良くないな。

自分でも言ったことだが、今は地震の対応、そちらに目を向けることが先決だ。あの浮島に思考を巡らせる時ではない。

だがそう自覚してはいても、心が動かされる感覚は止まらない。それを必死に抑えつつ、レオンハルトは後ろ髪を引かれながらも、魔王城へと向かっていった。

JAPAN

――浮遊大陸。

東部超大型地震という人類史において未曾有の大災害。

それによって大陸から切り離され、東の空に浮いたその浮島。

大陸では地震による被害で人類も魔軍も、等しく復興に動く中、その島の上でも幾つものの動きが生まれていた。

極東の端側とはいえ、その上に住んでいた人間の数はかなりの数になる。

そして震源地でもあるその島は地震による被害が最も大きい地でもあった。

既にあった建物は全て倒壊し、多くの死傷者が出た。

復興するのにも大陸から切り離されたことで物資の供給を受けられないその地でも、やがて一からとなる復興が始まった。

それは復興というより、創造であった。

大陸から孤立し、その島の中で生きるしかない人々の生活は苦難を極めた。

その大地の下では未だ聖獣オロチが定期的にその巨体を動かし、地震が起こる地では大陸にいた頃のような石造りの建物を建築しても、建てた傍から崩れてしまう。

ゆえにその島では、耐震性に優れた木造建築が主流となっていった。

それに山岳地帯や森などの自然が多いその場所では、木々の方が手に入りやすい。人々は地震の後でも変わらず立っている樹木を見て、木造による建築を選んだとも言われている。

他にもこの地では、大陸で主に使われている言語とは違う、辺境の言語が主に使われており、その島ではその言語が公用語となったという。

大陸からの孤立によってその極東に住む人々は徐々に新しい生活、文化を興していった。

だがやはり、困難も多い。この頃、その島で脅威となった災害は主

に三つ。
一つは、聖獣オロチが身体を動かすことによって起こる地震。
そして一つは、〝妖怪〟と呼ばれる存在。
想いや情念が形となり、生物の形となった妖怪だが、その見た目、種は魔物のように千差万別であり、かわいい悪戯の様なものから、人を喰うものまで、様々な形で人を襲った。
そして最後の一つ、更に大きな問題となったのは――〝鬼〟。
鬼とは、太古の昔より存在する男だけの種族である。
赤や青などの色で染められた筋肉質で大きな身体と、福耳や尻尾。
そして何より、額に生えた角が特徴的な種族であり、その役割は神々が管理する〝地獄〟と呼ばれる死者の世界で、魂を浄化することだ。
獄卒として働く彼らは、自我が強く暴れん坊であるが、基本は地獄から出ることはせず、地獄で真面目に働いている。
だが聖獣オロチによって引き起こされた大地震によって、それは一変した。
理由は大陸から引き離された衝撃と、地獄の管理者である女神。
「……やってしまった」
身体の下側は丸見えの特殊な装束に身を包み、長く紫の髪を靡かせるのは第二級神――アマテラス。
彼女は頻りに眉間に皺を寄せながら、その事態を憂いていた。それは、
「鬼達が地上に……」
大量の鬼が、地上に出て暴れていた。
その原因はアマテラスにある。
大本は聖獣オロチによる大地震ではあるが、その結果引き起こされた衝撃にて、アマテラスはミスを起こした。
地上、浮島と地獄を繋いでいる地獄穴を開いてしまったのだ。
結果、地上に鬼達が這い出していった。
自我や欲望が強く、暴れることが好きな鬼達は喜々として地上に出て人間を襲っている。
ただでさえ地震と妖怪によって大変なこの島の住人に、酷いことを

してしまった。
自分のミスによるものだ。泣きっ面に蜂。あんまりである。
しかし地獄に繋がる穴を閉じることは出来ない。
「悪いことをしたな……」
さすがに責任を感じる。ゆえにアマテラスは考えた。
何かお詫びをするべきではないか、と。
自分のミスによって苦難に陥っているのだから、少しは何か謝罪を込めて贈り物をしてやるのが筋であろう。
考えてみるとそれが良いことな気がした。
「だが、何を与えるか……」
贈り物はしっかりと考えなければならない。必要ないものを送っても邪魔になるだけだろう。
この島で必要なものは、
「……食べ物」
まずはそれだろう。
神々に必要はないが、人間や地上で生きる生物には必要なものだ。
今、この島に住む〝日本人〟という人種は食べ物に困っているらしい。
ならばそれを与えよう。せっかくだから美味しくてまだ知られてない物がいいだろうな、と、
「まずは、味噌だな……」
美味しいから味噌にしておこう。美味しいのだから喜ぶだろう。
だが、
「味噌だけでは足りないか……？」
食料はそれでいいとしても、他に必要なものがある気がする。
それは、
「……統治者がおらぬな……」
そう。現在、この島国には統治者がいない。
人間の間、いや、魔物や他の生物、集団が出来ればそこには王が生まれる。
集団を導くための存在。文明を破壊されたこの島ではそういった

ものがない。
ならば、
「それを作るための、宝でも作るか……」
それを手に入れて王になれば、能力が上がり、民を絶対服従させるようなシステム。
とりあえずそれを三つほど。三種の神器として作り、システムとしては王よりも強そうな……帝、帝になるシステム。
帝システムで良いか、と、それを作成することを決める。
素質が無ければ力の絶大さによって死ぬ可能性もあるが、それはしょうがない。神々の力を道具に込めるのだ。そのくらいは耐えてしかるべきだろう。
「後は……橋でも作ってやればよかろう……」
大陸と行き来出来なくなるのは可哀想だし。浮島と大陸の間に神の力で橋を架けよう。
このくらいであれお詫びとして充分だと思う。
ならば早速取り掛かろうと、アマテラスは青白い光を発して、そのための作業に取り掛かった。
それは――ＮＣ４４０年の話であった。
一夜にして出現した〝天満橋〟と呼ばれる巨大かつ綺羅びやかな橋が、大陸と島を繋いだ。
帝システム。帝ソード、帝リング、帝ハチマキからなる三種の神器を集めたものが帝となるシステムが生まれた。
新たなる食べ物、味噌が日本人に伝わった。
そして、
「……怒られた……」
アマテラスは上司の一級神に、〝勝手なことをするな〟と怒られてしまい、顔をほんの少し俯かせた。
かくして独自の文化を育みつつも、大陸との交流が生まれたその島国――
――〝ＪＡＰＡＮ〟が誕生した。

ＪＡＰＡＮ。
その中に〝死国〟と呼ばれる土地がある。
何故、そう呼ばれているかはその土地に足を踏み入れてみれば一目瞭然である。
そこでは、
「あーはっはっは！　地上だ！　人間だ！　雌だ！」
「ガハハハハ！　オレ、雌欲シイ！　酒欲シイ！」
「ウヘヘヘヘ！　暴れるの楽しい！　もっと暴れるぞぉ……！」
地獄から出てきた鬼達の住処となっていた。
地上に出てきた彼ら鬼達は、欲望のために暴れまくる。
酒を飲むために人から酒を奪い、セックスするために女を攫う。ただ意味もなく暴れたいから暴れる。
我が強く、欲望に正直な鬼達は地上で好き放題していた。
人間達はそれに抗えない。
抗っても容易に殺されてしまうからだ。
戦い、暴れることを好む鬼達は腕力に優れ、生命力に溢れており、人間よりも遥かに強い。
それに倒したとして、地獄の穴が開く限り、鬼達はいくらでもそこから這い出てくる。
未だ対抗する術もなく、ＪＡＰＡＮでは鬼達の被害が後を絶たなかった。
そんな鬼達の中で、
「ハァーッハッハッハッ！　今日も大量だな！」
豪快な大声を上げて収穫物の中心で酒を呷る一際大きな黒い鬼がいた。
赤や青という色が一般的な鬼という種族の中にあって、黒鬼は一際強力な力を持つ鬼である。
彼は黒鬼――レキシントン。
この鬼の集団の頭であり、地上に出てきた鬼の中でも特に暴れている札付きの鬼であった。

そんなレキシントンに向かって、鬼達は声を上げる。
「親父！　俺、もう我慢出来ねぇ……！」
「早ク酒ヲ！　女ヲ！」
「ハハハハ！　ようし、阿呆ども！　宴だアアァァアアアアアアアアアア!!」
オオ……！　と、鬼達が声を上げる。
それを合図に皆は一斉に酒を呷り始め、乱痴気騒ぎが始まった。
人里から攫ってきた女たちを輪姦し、食料を口に詰め込み、あちらこちらで飲み比べを始める。
女を巡って、または些細な事で殴り合いを始めた鬼二体を、周囲の鬼達が笑いながら囃し立て、それを肴に酒を飲む。
これが鬼達の日常であった。
地獄で真面目に働く鬼達でも、その本質は酒、女、喧嘩が大好きな乱暴者である。
地上への穴が開いたことによって、最早それらの欲望を我慢することなく、鬼達は好き放題しまくる。
「ハッハッハッ！　どうしたどうした！　儂をもっと気持ちよくせんか！」
「あっ、グっ、アア……!!」
その鬼達の中にあって、レキシントンはやはり一際豪快にそれらを楽しむ。
攫ってきた女達を組み伏せ、腰を振りながら文字通り、酒を浴びるように飲む。貧弱な人間、それも雌に、黒鬼たるレキシントンの力に抗えるものはいない。
力に任せた強引な性行為に苦悶の声を上げながら、女達は耐えるしかない。
「お前達は運がいいな！　儂の相手を仕れるなど光栄だぞ！　何せ、他の鬼共は馬鹿ばかりで、直ぐに壊してしまうからな！」
「あっ、酷ぇっすよ、親父！」
「ハハハハ！　だが事実だろう！」
「違いねぇ！　ギャハハハハハ！」

「ア……ウ……」
生気を失った瞳で、真っ裸のまま白濡れになった女達は馬鹿笑いをする鬼達を見る。
そこには救いがない。
まさにここが、地獄であった。
鬼達がいて、好き放題暴れるこの場所こそが、地上の地獄。
攫われた女達は例外なくそれを確信していた。
鬼達も、自分達こそが地上で最強。地獄の体現者であると疑っていなかった。
だが、
「ギャアアアアアアッ!?」
突如、宴の場には似つかわしくない野太い悲鳴が響き渡った。
「ッ!? ナンダァ!?」
「ああ……?」
周囲の鬼達が驚きの声を上げる中、レキシントンは首を捻り、疑問符を頭に浮かべる。
鬼の悲鳴。それを聞いてまず思い浮かべたのは、強い人間による襲撃。
人間は鬼に比べて弱いが、中には強い者もいる。
ゆえにそういった強者達が攫われた者を奪還しようと、もしくは自分達を退治せんとやって来る。
今までにもそういうことはあった。
「おう! どうやら客人のようだ!」
強者の到来に喜び、レキシントンは笑う。
だが、まだ自分が出るまでもない。
いつものように鬼達が順番に相手にし、それを肴に楽しむこととなるだろう。
人間は一体や二体の鬼を倒すことは出来ても、それ以上となれば苦しくなる。
中にはそれを為す強者がいるかもしれないが、その時はレキシントンのような強い鬼が相手にすればいい。

自分達は無敵なのだ。誰にも止めることが出来ない。
――そう思っていた。
「――酷い匂いだな」
「――ッ!?」
瞬間、鬼達の顔色が一瞬で変わった。
鬼達の宴の場に姿を見せた二つの存在。そこから放たれる圧倒的かつ禍々しい存在感に、鬼達は気圧されたのだ。
現れた一人、白い肌をした人間の男のような見た目をした化け物が呟いた声に反応したのは、また化け物。金髪灼眼の男であった。
「酒と性の臭いでしょう。これを見る限り鬼達は魔物以上にそういった事が好きなようです」
「噂以上であるな。……とはいえ少々多すぎる上に、醜くて見るに堪えんな。――レオンハルトよ」
「はっ」
レオンハルトと呼ばれた男が恭しく化け物に傅く。
化け物は命じた。
「少々で構わぬ。――間引け」
「畏まりました」
瞬間、鬼達はそれを見た。
「――え、ア……？」
「オオ……？」
周囲の景色が反転し、間の抜けた声を出す鬼達。
それは、首を飛ばされた鬼が見た景色であった。
そしてそれを見ていた他の鬼達も、次々と同じように首を落とされ、頭を分かれ、命を終えていく。殆どの鬼は何が起こったのか理解出来なかった。
ただ、圧倒的な暴力の塊が、抗うことすら許さず、鬼達に死を与えていく。
いつの間に引き抜いたのか、その手に身の丈を超える剣を持った魔人。強い鬼達を一方的に殺すその存在を、レキシントンは不意に思い出した。

まだ地獄にいた時、噂で聞いた存在。
地上に蔓延る魔物。それらを支配する強大な魔人と、さらにその魔人の上に君臨する魔王。
彼らこそが地上での、真の地獄の体現者。
周囲を鬼達の血と死体で赤く染めた魔人は、ある程度数を減らすと、魔王に向き直り、
「……この程度で宜しいでしょうか？　ナイチサ様」
「うむ。相変わらず卿の剣技は素晴らしいな。極まった技術は見る者に一種の美すら感じさせると言うが、卿の剣技は正に芸術だ」
「勿体なきお言葉、光栄で御座います」
とんでもないことを仕出かしてくれた化け物と、それを更に超える化け物。
黒鬼、レキシントンがそこで覚えた感情は、
「……くくく、ハハハ」
仲間が死んだことによる悲しみではなく、
「ハァーッハッハッハッ！」
自分を超える圧倒的強者が現れたことによる歓喜であった。
挑むことが馬鹿らしくなるほどの相手は初めてであり、どうにも笑えてくる。
急に笑い始めたレキシントンを、周囲の鬼達や、化け物二人が訝しむが、レキシントンは構うことなく、
「……全く、敵わんのぅ！」
「お、親父？」
レキシントンは自らの得物である巨大な棍棒を握ると、化け物二体に視線を合わせ、
「血が疼きよるわい！」
レキシントンは声を張り上げる。
「おう！　悪いが、挑ませてもらうぞ！」
「……ほう？」
「……」
声を差し向けられた化け物は反応を見せる。興味深そうに声を出

した――魔王と、その鋭い瞳で射抜くようにこちらを見てきた魔人に、レキシントンは更に血が滾っていくのを感じた。
「儂の名はレキシントン！　儂は間違いなく死ぬだろうが、最後に儂の力がどこまで通じるか試させてもらおうぞ！　――構わぬか!?」
名乗りを上げて、問いを投げかける。
しかしそれを聞いているのかいないのか、傍らの魔人が魔王の名を呼ぶ。
「……ナイチサ様」
「ふむ、敵わぬとみてなお挑むか。余の家臣にはいないタイプだな。強いて言うなら、卿が近いか。卿はどう思う？」
「……鬼達の中でも、かなり実力のある個体のようですし、素養は充分かと」
「左様か」
魔王と魔人のやり取りは、魔王の頷きをもって終了する。
こちらを無視して行われるやり取りに、レキシントンは笑みを深め、棍棒を肩に担ぐように構えて走り出す。
「ハハハハ！　何を話しているか分からんが、死に目に遭わせてもらうぞ！　オオオオオォォッ！」
レキシントンが死を覚悟して、その棍棒を魔王に向かって振り下ろす。
最後にこれだけ強大な存在に挑め、死ねたのなら本望である。
その想いを込めて振るわれた棍棒は、しかし、手前の魔人によって止められ、
「……腕力も、申し分ありません。下手な魔人よりも強いかと」
「卿がそう言うならそうなのだろうな。――ならばそうしよう」
言って、魔王がレキシントンに近づいていく。
近づけば近づくほど増していくそのオーラに、レキシントンは嬉しさで身震いしながら、
「……うむ、実に小気味良い。これほどの強者相手に死ねるとはな」
「どうやら、覚悟は終わっているようだな」
「おう。文句ないわい」

愉快そうに笑うレキシントン。
魔人に身体を押さえられた。力を入れてもびくともしない。ゆえにもはや死を待つのみ。
そして期待したその通りに、魔王の手がゆっくりとレキシントンに近づいていき、
「良かろう。では――」
そしてレキシントンは、鬼としての生をそこで終えることとなった。

魔人レキシントン

銀を基調にした広い室内がある。
そこはレオンハルトの城の中にある厨房だ。
食品を保存しておくための冷凍庫から、食材の下処理を行うための調理台。大きな竈から、火を発生させる魔道具などありとあらゆる設備が整った場所だ。
普段は料理長を始め、大勢の料理人が働くその厨房に、魔人レオンハルトはいた。
「……」
火を起こし、水を入れた鍋の前で真剣な様子で佇むレオンハルトを、背後から見るのは何人かの見知った者達だ。
「レオンハルト様、すっごい真剣な表情で料理してますね……」
「……やはり珍しいのですか？」
使徒ペールの言葉を聞いて問いを掛けたのはケッセルリンクの使徒であるパレロアだ。
魔人が料理をするなど珍しいのだろう、とそう思い聞いたことだが、しかしペールは、あー、と考えるように首を傾げ、
「んー……昔は料理してたみたいですけど、確かに最近はあまりしてなかったですねぇ。たまーにやりますし、普通に出来ますよう？」
「そうなのですか……。そういえば、ケッセルリンク様もたまに料理をしてますけど、魔人の方々は料理をするのがお好きなのかしら……」
「……それはまた別のアレですねー。愛というか献身というか……」
「？」
言うとなにか思い当たることがあったのか、ペールの表情が変化した。うんうん、と頻りに頷いている。
しかし、と、話題を変えようとペールが、
「あの浮島……ＪＡＰＡＮ？　から帰ってきて暇が出来たと思ったらすぐに厨房に立つなんて、よっぽど美味しいものでも手に入ったんでしょう」

何しろ料理長を含め、並み居る料理人に任せず、自ら試そうとするくらいだ。
と、そう思っているとレオンハルトが動いた。
「……」
煮え立ったお湯を見て、調理台に置いてあった壺を手に取り、そこからおたまを使って何かを掬いだす。それは茶色い、そして嗅ぎ慣れない匂いのするもので、
「……？　見たこと無い食材ですね。何でしょう、あれは」
「ちょっと私にも解らないですねぇ……」
「だが、悪くない匂いだ。楽しみだなあ」
と、急に話に入ってきた存在に目を向ける。そこにいたのは、やはりと言うべきか、新しい食材と聞いてやって来た美食家、魔人ガルティアだ。
急に入ってきた魔人に、パレロアは一礼するが、ペールの方はもう慣れているのか、軽く会釈して会話を繋げる。その食材のことで、
「やっぱり、ガルティア様も知らないものなんですか？」
「おお、全く知らねえな。だからこそ新たな美味に胸が躍るな」
「本当に未知の食材なんですね……」
パレロアが少し不安そうに言う。
ここにいるのは料理を作ること、そして食べることに長けた三人だ。
ペールは料理が出来るし、パレロアもケッセルリンクの食事を担当している。そしてガルティアに至っては魔人一のグルメ。古今東西、あらゆる料理を食べ尽くし、年間何十万食もの料理を食べている。
だが食の世界において、新たな食材、料理の発掘は難しい。成功するとも限らないものだ。新しい食材を試してみたら、その食材は生物にとって毒だった、ということもあり得る。
といっても、ガルティアやレオンハルトといった魔人はそれくらいでどうにかなるはずもない。ガルティアに至っては毒料理ですら平気で食べてしまうのだから。
三人が固唾を呑んで見守る中、レオンハルトはその食材をお湯に入

れて何やら溶かしはじめた。その動作には全くの迷いも、淀みもない。
まるで何千、何万と繰り返した行程のように、レオンハルトはその食材をお湯に溶かし続ける。
そして、それが溶け切るとおたまで軽くかき混ぜ、少量を掬い、小皿に入れてそれを口に含んだ。
すると、
「……！」
レオンハルトの鋭い目が見開かれる。
そしてもう一度、その鍋に入った汁をおたまで掬い、小皿に入れて口に含み、
「〜〜〜っ！」
何やら右手を振って、感動しているように見える。
そのリアクションは美味しいのだろうか、と思っているとレオンハルトは不意に、
「――そう、これだ！　この味だ！」
声を上げた。
そして背後に振り返ると、
「料理長！　料理長はいるか!?」
料理長を呼ぶ。しかし、その場に料理長はおらず、代わりに別の声が来た。
「レオンハルト様」
「ん、メイド長か。料理長はどうした？」
いつの間にやって来たのか、そこにはレオンハルトの城のメイド長であるメイド長さんがいた。
柔和な笑みを主に向けながら、音もなく厨房に入ってきたその腕前に、パレロアは戦慄する。他の二人はもう慣れきったのか、軽く目を向けるだけだ。何故？　と聞いても、〝メイドですから〟という答えしか返ってこないのだから聞くだけ無駄ではある。普通のメイドはそんな超人的な動きは出来ないはずなのに。
そんなメイド長さんはレオンハルトの問いかけに淀み無く答えた。

「料理長は休暇を取っています。レオンハルト様が厨房をお使いになるから、と休ませていましたが……よろしければ、お呼びしましょうか？」
「そういえばそうだったか。ならいい。後でこの食材を使った料理を研究しておくように言っておけ。それと――」
と、そこでレオンハルトは鍋に入った茶色い汁を見せて、
「この料理を、俺の朝食に出せ」
「畏まりました。それはレオンハルト様がＪＡＰＡＮより持ち帰ってきた味噌という食べ物ですね」
「――味噌汁だ」
「味噌汁……で御座いますか。了解しました」
「ああ、頼むぞ」
言うと、メイド長さんが一礼する。しかし、そこで話は終わらず、
「レオンハルト様。料理中に申し訳ありませんが一つ、報告があるのですが……」
「何だ？」
はい、とメイド長さんが頷く。少し表情を真面目なものに戻し、
「城門にいつもの方々がいらっしゃっています」
「……またか」
「はい、またです」
その報告を聞いて、レオンハルトの表情が歪む。珍しく露骨に舌打ちをしつつ、心底面倒臭そうな表情を浮かべたレオンハルトは頭を抱えながら、
「……俺が出向く」
「お手数をおかけして申し訳ありません」
構わない、とレオンハルトが短く言う。そのまま厨房を後にしようとしたところで、ガルティアが、
「レオンハルト。もしかして、またアイツか？」
「……ああ、そうだ」
「大変そうだな。――それよりそこの味噌汁という料理、食べていいか？」

「……一杯だけだからな。材料の味噌がまだまだ少ないし」
「えー……まあいいけどよ。じゃあ頂くか」
おお、と軽いやり取りを交わし、今度こそレオンハルトが厨房を出ていく。
だが、使徒であるペールは追いかけて、
「お供しますね」
「いや、いい。適当に相手したら戻ってくる」
「……わかりました。気をつけてくださいね？」
「ああ」
心配の言葉を告げると、今度こそレオンハルトは客が来ているという城門に向かっていった。

レオンハルトの城。
その赤い城門の前では、城の外周を警備する魔物隊長がたじろいでいた。
目の前にいるその巨体に圧倒されながら、顔を窺うように、しかし職務に忠実に、それを告げる。
「で、ですから、事前に約束がない方は、お通し出来ないと……」
「ああ？　そんなもの、知るか。レオンハルトは城の中にいるんだろう？」
「居りますが……その、お呼びしているのでしばしお待ちを。魔人――レキシントン様」
「……ちっ、まどろっこしいわ」
舌打ちをするその魔人はレキシントン。
魔王ナイチサによって魔人化された鬼の魔人であり、ＪＡＰＡＮ遠征でナイチサが得た収穫の一つであった。
鬼であった頃よりも大きく、筋肉に包まれた肉体と、太くてクドイ顔。立派な角と、髭を生やしたその魔人は、巨大な二対の棍棒を背負っている。
周囲には数十体の鬼達がいるが、彼らはＪＡＰＡＮから連れてきた

レキシントンの配下だ。レキシントンが魔人になった際に、彼らもレキシントンに付いて来ることとなり、そのまま魔軍に合流した。
魔物兵とは違い、特殊スーツを着ることもなく、着の身着のままでいる赤や青の鬼達は、レキシントンが地面にどかっと座ったのを見て同じく座りだす。
それを見た魔物隊長は胡乱な視線を向けて、
「な、何を為さるつもりですか？」
「ああ？　決まってるだろう。ただ待つのはつまらんし退屈だからな。ちょいと酒盛りをするだけだ」
「なっ!?　だ、駄目です！　レオンハルト様の城の前で酒盛りなど――」
「――ああん？」
「っ……」
レキシントンに重圧の伴った視線を向けられ、圧倒されるように怯み、二の句が継げなくなる魔物隊長。
そうして黙り込んだ魔物隊長から視線を逸し、レキシントン達は酒盛りを始めた。
鬼達。そしてそれを率いるレキシントンはいつもこのような感じだ。どこだろうと酒を飲む。飲むだけなら良いが、周りの迷惑を考えずどんちゃん騒ぎをするのだから質が悪い。
しかし魔人であるレキシントンに文句を言えるものは少なく、いつも決まってやって来るのは、
「――人の城の前で宴会とは、良い身分になったものだなレキシントン」
「！　来たか、レオンハルト！」
「レオンハルト様……！」
レキシントンと魔物隊長が揃って名前を呼ぶ。
この赤い城の主、魔人レオンハルト。魔人筆頭、魔軍参謀を務め、規律を重んじるレオンハルトが、レキシントンと鬼達に鋭い視線を浴びせる。
それだけで息苦しさを感じるが、レキシントンは構わず立ち上が

り、二本の巨大な棍棒――グレイ・レディと、レディ・レックスを握ると、笑いながら、
「――ハハハハ！　今日こそは相手してもらうぞ！」
「――！」
　棍棒をレオンハルト目掛けて振り下ろす。レオンハルトは目を細め、同じく空間から魔剣オル＝フェイルを取り出すと、レキシントンの攻撃を受け止める。
「うおおおっ!?」
「相変ワラズ、スゲェ激突ダ……！」
　レオンハルトの剣とレキシントンの棍棒がぶつかり合い、その衝撃が波となって周囲を打ち付ける。
　鬼の魔人であるレキシントンのパワーは新参であっても魔人の中で随一。重たい棍棒を振る度に風が巻き起こり、地面を打ち付ければ陥没してしまう。
　だがその攻撃を、レオンハルトは軽く捌く。時には軽い動きで左右に避け、時にはその棍棒による一撃を剣で受け止める。圧倒的な膂力を持つレキシントンの攻撃を、同じく力で受け止めつつ、レオンハルトは息を吐いて、
「……何度も言っているが、お前の相手をする気はない」
「儂にはある！　お前は強い！　喧嘩を売るには申し分ない相手だ！」
　大気を無理やりぶち抜くように、音を立てて棍棒が右、左、と振られレオンハルトに打ち付けようとするも、それは敵わない。
「顔を見かける度に殴りかかってくるのはやめてほしいものだがな……。それと、城を訪ねてくるな。迷惑だ」
「ハーハッハッハッ！　そう思うなら儂と一戦交えろ！　いつも避けてばかりではつまらんぞ！」
　レキシントンが魔人になってからというもの、彼は毎日のようにレオンハルトに喧嘩を売りにきている。
　そのことにレオンハルトは辟易としており、最近の頭痛の種である。

他の魔人を相手するように威圧しても、レキシントンは言うことを聞くどころか、余計に戦意を滾らせて襲いかかってくる。
それを適当にはぐらかすように、攻撃を捌き、適当に避けてから撒くのがお決まりだったのだが、最近はそれに業を煮やしたのか城にまで訪ねてくるようになってしまった。
しかもその度にレキシントンや配下の鬼達が街で問題を起こすので、城を警邏している部隊が困っているらしい。最強の魔人として名高いレオンハルトの名前を出しても引かないレキシントンは魔人の中でも異端である。
だがレキシントンは言う。だからこそだと。
レオンハルトはそんなレキシントンを見て剣を振りながら、
「……余計な戦いをする気はない」
あくまでも冷静な言葉を告げる。
しかしレキシントンはそれを聞いて可笑しいことを聞いた、と言うように笑い、
「ハハハ！　嘘をつけ！　お前からは儂と同じ匂いがするぞ！　戦いに飢えた修羅の匂いがな！」
「……」
その言葉に、レオンハルトが僅かに眉を動かす。なおもレキシントンは続け、
「本当は戦いたくてしょうがないはずだ！　そら、その本性を儂に見せてみろ!!」
戦いをする気はないなどと笑わせるな、とレキシントンは言う。
その言葉に、レオンハルトは大きく息を吐いた。そして、
「――随分と力が強いな……」
「あ？」
ぼそり、とレオンハルトは呟いた。
魔剣でレキシントンの攻撃を正面から受け止め、そして避けながら呟く。
「力があり、速度があり、勢いと、確かな技術。戦いを躊躇しない精神性もある」

「ハハ、誉めても何も出んぞ！」
「だが――」
言う。喜ぶレキシントンに水を差すように、
「――それだけだ」
「うおっ!?」
レキシントンの身体が流れる。
棍棒を受け止めたレオンハルトが、瞬間、力を流すようにその場から消えた。
力を込める寸前だったレキシントンは力の行き場を失い、前のめりになるが、それで倒れるような間抜けは晒さない。
足に力を込めて踏みとどまると、戦闘の勘に従い、後方へと回すように右の棍棒を振る。
しかし、
「まだまだ下手くそだな、お前は」
「っ！　空振ったか！」
言葉通りに空を切った。
だが棍棒はもう一つある。左の棍棒を叩き込もうと、斜めから触ろうと手に力を込めるが、
「……隙だらけだ」
「ぐっ……!?」
それを読んでいたのか、足の関節に向けて蹴撃を叩き込んでくる。
体勢が僅かに崩れ、棍棒がレオンハルトの頭上を空振る。
二本の棍棒が至近で躱され、次にレキシントンが顔を向けた時には、
「――っ！」
眼前に、煌めく刃の切っ先が突きつけられていた。
咄嗟に動きを止めたところで、レオンハルトは冷たい殺気を漂わせながら、
「……これで解っただろう。この程度で、俺の相手は務まらん」
「……」
「お、親父……」

無言でその言葉を耳にするレキシントンに、周囲の鬼達が戸惑った声を上げる。
まさか殺してしまうのか、と思ってしまうほどレオンハルトの表情は冷たい。動けば頭を貫かれるだろう。
それを見て、まだ敵わぬと思ったのか、レキシントンは大きく息を吐くと、
「……儂の負けだ」
「ふん……」
それを聞き届けたところでレオンハルトは魔剣を収める。消えたように空間に収納された。
「この街で好き勝手することは許さん。分かったな？」
「……ちっ、しょうがないのお……」
渋々とそれを了承したレキシントンを見て、ようやくレオンハルトの殺気が落ち着く。
そうしてレオンハルトは踵を返し、
「ならさっさと帰れ。俺は忙しい」
「おう。今日は帰る」
お前達、帰るぞ、と鬼に呼びかけると、レキシントンは棍棒を担ぎ直して言葉通り帰っていった。
しかし、声が聞こえなくなった辺りで、心配になった鬼がレキシントンに話しかけると、
「親父、大丈夫ですかい――」
「――ハーッハッハッハッ！」
急に笑いだした。そして手元の酒を呷ると、
「今日は完敗だが、次はそうはいかんぞ!!」
「ええっ!?　でも、来るなって……」
「阿呆が！　好き勝手するな、と言われただけで、来るな、とは言われておらんし、ましてや、挑むな、とも言われておらんわ！」
「……ソレデ良インデスカイ？」
「なぁに、それ以外の言うことは聞いてやるわい。儂より強いのだからな。だが、挑むのはやめん！」

「さ、さすが親父……」
「でもまた負けたら……」
不安な言葉を口にする鬼に、レキシントンは、阿呆、と罵り、
「その方が張り合いがあるわい！　そのためにも、まずは戦いに出て鍛えないとな。酒飲んでセックスしたら、早速出るぞ！」
「へい、親父！」
「何処マデモ、付イテイキマス！」
「ハーッハッハッハッ！」
鬼達はレキシントンの馬鹿笑いに続いて笑い声を上げながら、街を後にした。

そして、レキシントンを退けたレオンハルトの方はと言うと、
……あのクソ鬼が……折角の味噌汁試食を邪魔しやがって……！
邪魔をされたことに悪態をつきながら城に戻っていく。
だが、そうでなくてもレキシントンという魔人は色々と面倒な相手だ。
ナイチサがＪＡＰＡＮに遠征に行きたいというのを聞いて、真っ先に志願したレオンハルトだったが、そのＪＡＰＡＮで見かけた珍しい生物、鬼をナイチサが見に行きたいと言い出したことで、今魔軍にいるのが魔人レキシントンと配下の鬼達だ。
元々、新しい大陸なら見どころある生物がいるだろうと、そういった目的であることは理解していたが、足を踏み入れたＪＡＰＡＮの死国という土地で見かけた一体の黒鬼をナイチサが気に入り、魔人化した。
その性格は、噂で聞く鬼のイメージそのままといった感じで、それを更に豪快な性格にしたのがレキシントンという魔人。
酒・戦・セックスを好み、好き放題するレキシントンは魔人の中でも分かりやすい部類だが、それゆえに面倒なことも多い。
今回、軽く制してやったので言うことは聞くだろうが、他の魔人の言うことを聞くような性格ではない。かといって無闇矢鱈に暴れる

ような奴でもないが。それこそ、味方の魔人相手でも容赦なく制裁を加えるザビエルよりはマシだろう。
ただ誰相手でもへりくだることがないうえに、色々と下品なので一部の魔人からは避けられている。特にカミーラやケッセルリンク。逆に、そうでもない魔人からは何とも思われてないようだが。
そして、レオンハルトとしては、
……まあ、見どころはあるがな……。
下品で粗暴な上、迷惑を掛けてくるので面倒だが、性格だけなら嫌いではない。
あの調子なら、またそのうち勝負を仕掛けてくるのだろうな、とレオンハルトは半ば諦めながら再び厨房に戻っていった。
そんなことより味噌を堪能しようと、そう思い、
「……あ、悪い。美味すぎて全部食っちまった」
「……ガルティア……テメェ……！」
その日、久し振りにガルティアと模擬戦をすることとなった。

とある姉弟と昼食

その少年の朝は早い。
少年自身はどちらかと言うと朝が弱い方で、朝日が昇っても汚れた毛布で顔を隠し、睡眠を貪ろうとする。
しかしそれを、姉が許さない。
「――起きて、パイアール」
「ん……姉さん……」
パイアール、と呼ばれた少年は姉のルートの声によってようやく意識を覚醒させる。
手で目元を擦り合わせながらゆっくりと身体を起こすと、パイアールは世界で一番美しいと思う姉の姿を見た。
「おはよう、姉さん……」
「おはよう、パイアール。もうすぐ朝食が出来るから、顔を洗って大人しく待っててね？」
「はぁい……」
寝所である部屋から見える小さなキッチンの前で鍋の中を掻き混ぜるルートの後ろ姿を見て、パイアールは家の外に出た。
家は一軒家、と言えば聞こえは良いが、実際はぼろ小屋だ。
大きな町の貧民街。石造りの小さな家に、パイアール・アリは、姉のルート・アリとともに身を寄せ合って暮らしていた。
家の外に出て少し歩くと、周辺の住民と共同で使ってる井戸が見えてくる。朝であるため、人はそれなり。順番を待って井戸の水を汲むと、それを手に家まで戻った。
ただ、小さな子どもでしかない自分にとって、桶一杯に入った水は重く、
「はぁ……この作業、仕方ないけど嫌になるな……どうにか出来ないかな……」
楽が出来るような何かを作るのもいいかもしれない。それなら自分もそうだが、何より姉の負担が減るだろう。
「あら、水を汲んできてくれたの？　ありがとうパイアール。偉いわ

ね」
「あっ、うん！」
家に戻ってくると、桶の水をまた大きな桶に移し替える自分を見て、姉は柔らかな笑みを浮かべて褒めてくれる。
既に食事は出来上がっているのか、木皿にそれを盛り付け、木のテーブルにそれらを並べられていた。二人は席に着くと、
「それじゃ、頂きましょう」
「はい、姉さん」
朝食を摂る。
内容は、黒くて固いパンと、野草や麦が入った煮込みスープの二つだけ。貧乏である我が家ではこの食事が一般的な朝食となる。
だが周りの家にはもっと貧乏で酷い食事を摂る家もあるのだからこれでもマシな方だろう。
姉はとても綺麗だ。本来ならそんな短い単純で陳腐な言葉で姉の良さが表わせるはずもないが、それ以外に適切な言葉は見つからないほどに綺麗だ。
頭が良く、物腰やわらかで、近所でも評判のいい姉は、農民や猟師の人からおすそ分けをもらうことがある。なのでもっと良い野菜や、お肉だってたまに食べられるのだからマシどころか恵まれているのかもしれない。
だが、その際にそいつらの目が明らかに姉を狙った獣になっているので油断ならない。下心が丸出しな猿共から姉を守るため、自分が傍についていないといけないのだ。
そのためにも栄養補給は大事である。この後は姉を悪い虫から守るべく、新しい武器を開発するところだ。
なので手早く摂りたいが、それはそれとして姉の作った料理を流し込むように食べることなど出来ない。ゆっくりと味わいながら食べる。姉からも、よく噛んで食べるように言われているし。
「ごちそうさま！　今日も美味しかったよ、姉さん！」
「ふふ、そう？　そう思ってくれたならいいのだけれど……」
食べ終えて姉にお礼を言うと、少し喜んでくれたがすぐに陰が落ち

る。
「ごめんね。本当は、もっと良いものを毎日食べさせてあげたいのだけど……」
「そんなことないって！　これでも充分だよ、姉さん！」
そう、これでも充分なのだ。姉は充分に頑張ってくれている。
実の親はとっくに蒸発しているのに、姉は自分を放り出すことなく一人で育ててくれているのだ。お金を稼ぎ、家事を一人で行い、基礎的な教養を自分に授けてくれた。
そんな姉の愛情だけが、自分を育ててくれたのだ。だから気に病む必要はどこにもない。そのためにも、
「大丈夫！　僕が何とかするから！」
「……ありがとう、パイアール。そうよね、パイアールは難しいもの沢山作れるものね」
「うん、色々作って、姉さんを楽させてみせるから！」
姉を悪い虫から守るための武器もそうだが、頭の中には他にも色々な物の構想が降りてきている。それらを作って利用するなり、売るなりすれば生活も楽になるだろう。
安心させるように姉に笑みを向けると、姉はこちらの頭を撫でてくれて、
「でも、無理しないでね？　後、危ないこともしちゃ駄目よ？　お世話になった人に迷惑を掛けたり――」
「わ、分かってるよ！　誰にも迷惑なんて掛けてないからっ！」
「……そう。それならいいのだけど……」
少し焦った。もう少しで怒られるところだった。姉に近づく男を排除するための武器を作ってる、なんて言ったら怒られてしまうに決まってる。
それはそれでご褒美ではあるが、本気で怒った時はやはり怖い。真顔のままずっと付いてきて、こちらが改めるまでそれを続けてくるのだ。
ただその後の許された時が嬉しいというかあれなので、怒られたかったりもするのだが。

しかし今は早く物を完成させることを優先するべきだろう。
全ては姉のために。
その想いをもって、パイアールという少年は自らが持つ才能を目覚めさせていった。
この世の誰も理解することの出来ない――〝科学〟という名の才能を。

レオンハルトの城。
通称、紅魔城と呼ばれる一階部分に、食堂はあった。
魔人レオンハルトが食事を摂る際、他の使徒や住人が食事を摂る際などに使われるその部屋は絨毯から長方形のテーブル、調度品まで全てが一流の品で出来ている。
そのテーブルの上座に、レオンハルトはいた。当然、食事を摂りに来たのだが、普段は執務室など部屋で摂ることも多く、特に昼食時は食堂に来ることは殆どない。
しかし仕事で忙しい中、それでも食堂にやって来るだけの理由がそこにはあった。
レオンハルトは、給仕のメイドが運んできたワゴンと、その上に乗っている料理に視線を向ける。香ばしい匂いがこの時点で鼻孔をくすぐるが、その料理が目の前に運ばれてきた時、レオンハルトは目を見開いてそれを見た。
その中心、小さい鍋の中にあるのはきつね色のそれだ。
カラッと揚げられた厚切りのカツ。それが茶色いソースの中に浮かんでいる。それは即ち、先日手に入れたばかりの食材だ。それをふんだんに使い、煮込まれたカツと、その横には半熟でトロトロになった卵。そしてカツの上には、刻まれたネギが彩りを豊かにしている。
それを主菜としながらも、他の物も負けてはいない。先日作った味噌汁。カツオと昆布、そして料理長が特選した食材で出汁を取ったという特製味噌汁。真っ白に輝く豆腐に薬味と醤油だけを合わせた冷奴。野菜の御浸しと、炊きたてのお米がそれらを引き立てる。

レオンハルトは料理名をメイドより告げられると一言、〝頂きます〟と短く声に出し、箸を使ってそのカツを掴んだ。
肉厚たっぷりのそれを齧ると、サクッという音とともに肉汁が溢れ、味噌の香りが吹き抜ける。舌の上で爆発する味覚の暴力を抑えるべく次に米を口に入れると、これまたいい具合に合う。濃い味付けの味噌カツと、米が抜群に合う。
それを味わい、レオンハルトは言った。
「――美味い」
それ以外に言葉が見つからない。
野菜のおひたしの上品な味を楽しみながら、和食と、新しい食材である味噌のポテンシャルの高さを改めて理解する。
そうしていると、横から、
「何だこれ！　美味っ!?　めちゃくちゃご飯進むんですけど!?」
と言ったのは、ボサボサの緑髪と子供のような背丈を持つ魔法研究者、ガウガウ・ケスチナだ。
彼女はレオンハルトと同じようにそれを口にすると、目を見開いてご飯を掻っ込みはじめる。それを見たレオンハルトは、ふっ、と得意気に笑うと、
「美味いだろう。これが、味噌カツ煮だ……！」
「何でそこで作ってもいない奴が得意気になるのか全然解んないけど、とにかくうまあー！」
「……」
ガウガウの言葉に無言になってしまうも、美味しいことには変わりない。
さほど苛立ちもせず、レオンハルトも味噌カツ煮定食に舌鼓を打つと、途中でガウガウに向かって、
「いいか、ガウガウ。良い食べ方を教えてやろう。この味噌カツ煮は、この横の半熟卵で更に進化する」
「な、なにっ!?　どういうことだ！」
「この卵を箸で割り、カツと一緒に食べるんだ。そうしたら……」
「そうしたら……？」

「更に美味くなる」
　言って、そのように食べてみせる。予想通り、卵のまろやかさが加わって旨味がさらに引き立てられた。
　ごくり、とツバを飲み込み、ガウガウが同じように箸で半熟卵を割り、黄身とソースが混ざり合う。その上でカツを口に含むと、
「う、うんめーーー!?　何だこれ!?　天才か!?」
「ははは、そうだろう。よく味わって食べるがいい」
　言いながらレオンハルトも食事を進める。やはり美味い。味噌汁の方もいい味が出ており、
「わざわざ人間の国に商人に扮した工作員を送り、ＪＡＰＡＮとの交易を結ばせて味噌を手に入れたかいがあったな……」
「各種食材も手に入って料理長も喜んでいましたよ」
　そうだろうな、とメイド長さんの声に頷く。料理長は料理への拘りは凄まじいものがあるし、新しい食材を手に入れて狂喜乱舞するのも容易に想像がつく。
　だがその結果、これほどに美味い料理を作ってくれるのだからさすがだ。
「料理長も良い仕事してるな……」
「料理長に伝えておきます」
　そうしてくれ、とメイド長さんに頼み視線を戻すと、何故かガウガウが微妙な表情をしていた。
　何か苦手な物でもあったのか、と思うもどうやら違うようで、
「……そういえば、料理長ってどんな人なんだ?　料理用の魔法具作ったりしてあげてるのに、一度も見たことないんだが……」
　思いついたように疑問を口にするガウガウ。それを聞いてレオンハルトやメイド長さん、周囲のメイドは、あー、と声を出して、
「料理が上手い人だ」
「とても拘りの強い人です」
「個性的な人です」
「……全然分からん」
　それぞれの人物評を聞いて、しかしよく解らないとぼやくガウガウ

だが、それに対しレオンハルトは、
「興味があるなら会ってみればいいだろう。まあ――」
そこで一息、間を置いてガウガウから目を逸らすと、
「……どうなっても知らんが」
「えっ」
ぼそっと呟いた言葉にガウガウが短い声を上げる。
どうなっても知らない。その意味が分からず周囲に目を向けてみるもメイドからは曖昧な笑みで視線を逸らされ、メイド長さんに至ってはニコニコと笑顔を浮かべるのみだ。
「えっ、何その反応、気になるんだけど!?」
「だから気になるなら会ってみればいいだろ。……どうなっても知らんが」
「いやだからその後ろの言葉が怖いんだけど!? ほんとにどんな人なんだ!?」
「そうですね……」
メイド長さんが少し考えるように間を置いて答えてくれる。それは、
「とても良い人ですよ。会ってみては如何ですか? ……どうなっても知りませんが」
「だから後ろのそれいらない!! 後ろの文言が無ければ普通に会えたのに!!」
ツッコミを入れるように叫ぶガウガウに、メイド長さんは曖昧な笑みを浮かべるのみでそれ以上は何も答えてくれない。
その間に、レオンハルトは食べ終わり、軽くテーブルのナプキンで口元を拭うと、
「……さて、俺は仕事に戻る。お前も、研究頑張れよ」
「では私も仕事に。ガウガウ様、何かあればメイドに申し付け下さい」
「えっ、あっ、ちょっと――」
引き留めようと手を伸ばすがそれも虚しく、レオンハルトもメイド長さんも食堂から出ていってしまった。
その場に残ったのはガウガウと数人のメイドだけ。それを自覚し

たガウガウは、静寂に包まれた食堂の中で拳を握ると、
「……ぐぬぬ、気になる。気になるけど……一人だとちょっと怖いぞ……」
「……会いに行っては如何でしょう？　まあ……どうなっても私は責任を持ちませんが……」
「おいこら一般メイドォ!!　お前まで私をおちょくる気か!?」
文句を言うも、曖昧な笑みで頭を下げられる。ここのメイドは平気で百年以上生きてるのも多いから性格的に手強くてガウガウは苦手だ。胸も大きい人ばかりだし。部屋の掃除もそうだが、特に風呂に入っていないと、無理やり入らせようとメイド達が追いかけてくる。
その中でもメイド長さんはどこに逃げても瞬間移動でもしてるのか、ってツッコミたくなるくらい行く先々で先回りして待っている。
そんなヤベー奴らがたくさんいる城の料理長がよく考えれば普通な奴な訳ない。
「これは、調べてみる必要があるな……」
「……研究しないのかよっ」
メイドが無表情のままツッコミを入れてきたが気にしない。
ガウガウは料理を食べ終えると、まずは情報を調べてみようと食堂を後にした。

料理長

その少年――パイアールは、家の中で作業を行っていた。
箱に敷き詰めていた様々な部品となるもの、ゴミ捨て場や町の色んな場所から拾ったそれらを工具や色んなものを使いながら組み合わせる。
姉さんは家事を済ませているが、それが一通り終わると外に出るので、それまでに工程を終わらせたいものだ。
……うーん、こっちはもうちょっと効率良く出来そうだな……。
機械、と呼んでいるそれらの発明品は、様々なことに応用が利きそうだ。
その中で、お金を稼ごうとするならやはり武器にするのが手っ取り早いだろう。
なにせ世の中は魔物で溢れかえっているし、どこの国も魔軍との戦争で疲弊しているのだと言う。幸いにもこの町に魔物が押し寄せてきたことはないけど、それでも人の不安は消えない。
ゆえに人は兵士や武器――つまり武力を求める。
……僕の開発するものは、武力を与えられる。
それが存在するというのなら、国はこぞってそれらを欲しがるだろう。生き死にの問題であるから金に糸目は付けない。一つ作るだけで大儲け出来るのだ。そうすれば生活も楽になって、姉さんも楽が出来るし、他の猿に施しを受ける必要もなくなる。
……姉さんは、僕が助ける……。
最愛の姉さんのためなら、なんだって出来る。そういった想いで、手を動かす。
しかし、
「――っ、けほっ……」
「！　姉さん！　大丈夫!?」
不意に、姉さんが咳をして苦しそうに胸を抑えたのを見て、機械を放り出して姉さんの元に駆け寄る。
「大丈夫よ……ちょっと、咳が出ただけだから……」

「ううん！　何があるか解らないんだからちゃんとしなきゃ駄目だよ！　ほら、今日は医者に行こう？」
おそらくは風邪だろうけど、万が一でも大きな病気の可能性があれば用心するに越したことはない。姉さんの手を引っ張って病院に行くように促す。
すると困ったように笑みを浮かべて、
「もうっ、パイアールったら大袈裟なんだから……わかったわ。今日はお医者さんのところに行きましょう。少し違和感もあるし……」
「それは大変だよ！　なら早く行こう！　すぐに支度して！」
急いで準備をする。機械なんか開発してる場合じゃない。
「心配してくれてありがとう、パイアール。でも、大丈夫だからね。ゆっくり行きましょう」
「……だって、姉さんが病気だと思うと、居ても立ってもいられなくて……」
「まだ分からないでしょ？　もう……」
少し慌てすぎた。姉さんに呆れたように注意される。
だが、医者に行くのは確定してるようで、姉さんは準備を進める。
……何もなければいいけど……。
そう思って、姉さんとともに医者に行き――僕は唖然とした。
姉さんは病を患っていた。それは、
――不治の病。カスケード。
放って置くと手足が痺れ、咳が酷くなり、内臓を死滅させる死病。
――姉さんが生まれてから２０年と９４日。
――僕の孤独な戦いが始まった日だった。

「――というわけで、料理長ってどんな人なんだ？」
「……出会うなりにそれ？　まあいいけど……」
食堂から研究室に戻ったガウガウは、外から帰ってきたのか、室内にいたハンティにさっそく声を掛けた。
魔法の研究を一緒にする同僚なので、ガウガウにとって一番よく話

す間柄だ。使徒だけど、割りと常識人なのと、数少ない貧乳なのがポイント高い。他の奴らは異常者か、巨乳ばかりだからだ。
そんなハンティは白衣を着たまま椅子に座り、カツサンドを食べている。メイドに申し付ければ好きなものを部屋まで届けてくれるからだ。普段はガウガウもそうしている。
……というか、そのカツサンドも美味そうだな……じゅるり。
食べたばかりだというのによだれが出そうになる。ここの料理は美味すぎて悩ましいものだ。それでも、夜中にはカップラーメンをこそこそと食べるのだが。夜中に食うと妙に美味いのもあってやめられない。クセになっているのだ。
そして、ハンティはカツサンドを飲み込むと、軽く半目になりながら、
「ていうか研究はしなくていいの？」
「料理長がどんな人間なのか気になってしょうがない。これじゃあ研究も手に付かないからな」
「……なら会いに行けばいいのに」
「いきなり会いに行くのは怖いだろっ！　しかも、なんかヤバそうな人らしいし！」
そこのところもはっきりさせておきたい。なので尋ねるとハンティは、ああ、と得心したように頷き、
「確かに……色々とアレだからね……」
「いやだからアレって何!?」
「……いや、うん……料理は凄い人だよ。ただ……あたしはちょっと苦手かな……」
こめかみを押さえて息を吐くハンティ。その様子から見るに、やはりヤバい人の予感がする。
「……あたしよりもキャロルかペールの方が色々と知ってるから聞いてきたら？　……ちょっと理解したくないし……」
「……え～、あの二人かぁ……」
ちょっと面倒だ。騒がしいというか異常者だし。
しかし背に腹は代えられない。ならばそうしようかとハンティに

お礼を言って部屋を後にしようすると、
「――わたくし達を！」
「――呼びましたね!?」
先に扉が開け放たれ、外から件の二人が勢いよく入室してくる。
ビシッと二人揃ってポーズを取る二人に、ガウガウは半目と溜息付きで一言、
「……やっぱり聞くのやめようかな……」
「……というか何で呼ばれたのがわかったのさ？」
ハンティが問うと、キャロルとペールは得意気な笑みを浮かべ、
「レオンハルト様に教えてもらいましたの！」
「ガウガウさんが料理長のことを深く知りたいらしいので教えて差し上げるように言われたので！　出張サービスです！」
「何でも聞くとよろしいですわ！」
胸を張って言う二人。キャロルはともかく、ペールの方は胸が揺れたので帰ってほしい。せっかく貧乳率１００パーセントだったのに、それが薄まってしまった。
だが、知っているというなら利用してやろうとガウガウは口を開く。
「……じゃあ聞くけど、料理長ってどんな人なんだ？」
具体的に頼む、と付け加えると、まずキャロルが、いいでしょう、と、
「料理長はとても凄い人間ですわ。まずは、そうですわね――料理で人が倒せますわ」
「……は？」
ちょっとよく解らない言葉が聞こえた。
……料理で人を倒す？
ちょっと意味が解らない。考えても解らない。
しかし冗談を言っているような雰囲気ではなく、ハンティは目を逸らしているし、続けてペールも、
「倒せるのもそうですけど、本気を出したら料理を食べさせて相手を脱がせることが出来るんですよう」
「脱がす!?　変態なのか……!?」

「いえ、あくまで料理を食べた相手が美味しすぎて悶絶して、自主的に自然に脱ぐだけです」
どっちにしろ変態だろ……！　と、思うも、それだけで異常な噂は止まらなかった。
今度はキャロルが、
「あと、御本人も美味しいものを食べたらすごいリアクションを見せてくれますわ！　口や目からビーム出したり……」
「ビーム!?」
「本当に凄いんですよう？　〝うまあああああい！　美味すぎるぞおおおおお！〟　とか叫んで目と口からビームと言いますか、白色破壊光線を出すんです。あれは必見ですね」
「目と口から白色破壊光線……!?　それ絶対化け物だろ!!　人間じゃない!!」
むしろ人間であってほしくない。頭の中でとんでもない化け物がシェフハットを被って料理をしているところを想像してしまう。
「いえ、確かに人間ですわ！　下手な人間や魔物よりもお強いですけど！」
「ちなみに、私よりも古株なんですよ？　この城が建てられた時からいますし、それ以前は魔王城で料理をしていたらしいので」
「え、えぇ……？」
聞けば聞くほど常識から逸脱した話が湧いて出てくる。
噂を聞いてからちょっと会いに行ってみようかと思っていたが、段々怖くなってきた。そうやって戦慄していると、横からハンティが補足するように、
「……ちなみに、料理長は17代目……くらいだっけ？　先祖代々、それこそ魔王城が出来てから約千年、ずっと魔軍で料理人として働いてきた一族だよ」
「へ、へぇ……」
そんな変態化け物一族の末裔がこの城の中に住んでるのかと思うとガウガウは微妙な気分になる。
しかし、不意にキャロルとペールが、ガシッ、とこちらの両腕を掴

むと、
「では、それを踏まえた上で――早速会いに行きますわよ！」
「へっ？」
「今はお昼過ぎですし、そこまで忙しくないでしょうからちょうどいいですよ！」
「え、あっ、ちょっと……心の準備が……！」
二人に抱えられてしまったので抗議するようにじたばたと抵抗するも、使徒の力を振り解けるはずがない。
なので助けを求めるように同僚に向かって、
「た、助けてハンティ！」
「……さぁて……あたしも、そろそろ仕事しないとなー」
「あっ、こら！　一人だけ逃げるな！　この薄情者!!」
よっぽど自分も巻き込まれたくなかったのか、同僚を見捨てたハンティに抗議する。しかし聞こえていない振りなのか、口笛を吹きながら明後日の方向を見ている。後で覚えてろよ、と報復を誓うも、自分の身体は悲しいかな、使徒二人に連れてかれ、研究室を後にする。
「ちょっ、だから心の準備――!?」

――ミシュラン一族。
それは代々魔軍の料理番を務める人間の一族の名である。
その成り立ちは古く、先代の魔王の治世。
その最初期、魔王城が建てられた際に外から人間を攫い、料理をさせていたのが始まりであり、その中にいた一人の人間が、ミシュランという一人の男である。
初代ミシュランと後世にて呼ばれたこの男は、優れた料理の才能を持ち、魔王城の厨房を預かっていた料理人の中ですぐに頭角を現し、魔王直々に料理長に任命された。その後、他の料理人の監督、教育を行い魔軍の食を担ってきたミシュランは魔王だけでなく、魔人カミーラや魔人レオンハルトといった上級魔人の舌を唸らせ、あの魔物界一のグルメ魔人、ガルティアにも最高の料理人だと認められた。

ミシュランは魔王城の中で同じく連れてこられた女性の料理人と付き合い、子を成すと、その子供にも料理人としての教育を施した。
そしてその子供が育ち、立派な料理人になると同じように子を成して出来た孫に親子揃って料理人としての教育を施し、その子も立派な料理人となった。やがてミシュランが老衰によって亡くなると、彼が書いたレシピと使っていた器具、ミシュランという名前とともにそれは子供に受け継がれる。
そうして何代もの間、魔王城の料理長として君臨したミシュラン一族は、レオンハルトシティで出される多くの出店のメニュー作りに携わり、やがて魔王が代わるのとともに、魔人レオンハルトに召し抱えられ、そのまま料理長として働いている。
幾人かいるミシュランの一族は、魔王城や魔人カミーラの城などに別れて、それぞれの場所で料理長を努めているが、その中でもミシュランの名を冠し、名誉総料理長、〝料理の帝王〟とも呼ばれる男こそが、紅魔城料理長である――
「――貴様あああああああ!!　何だこの料理はあああああああああああ?」
「ひいっ!?　も、申し訳ありません料理長!!」
厨房にて他の料理人を怒鳴りつけるのは、先祖代々伝わる大包丁とフライパン、歴代のミシュランが開発、発見した千を超える料理が記されたレシピ帳を手に持ち、仮面で顔の上半分を隠した筋骨隆々の大男。
彼こそがミシュラン一族の現総代――ガストロノミー・ミシュラン。
約五百年、永久保護魔法によって生き長らえながらレオンハルトの城で料理長として働く男である。
魔物と見紛うほどの肉体を持つ大男は、実際に超人的な身体能力を持ち、特に耐久力は人間とは思えないほど高く、下手な人間や魔物より強い。若い頃に未知なる食材を探し求めて世界を旅した結果らしい。先祖代々伝わる大包丁は普通の包丁では捌けないほどに固い生物や巨大な生物を捌くためのもの。ミシュランの名を継ぐためには

この大包丁を自由自在に操る必要があるらしい。破天荒な性格で、料理に対する拘りは異常ともいえるほどで、どんなに些細なミスも許さない。
料理界のマエストロ。千のレシピを持つ料理人。化け物。様々な通り名で呼ばれる料理長は厨房全体に聞こえるどころか、壁を貫いてしまいそうなほどの音量で声を上げる。
「料理とはあああああッ!! 材料! 器具! 技術! それら全てを使い、己の心――即ち愛でもって作る究極の美!」
膨れ上がった筋肉によってピッチピチになったコックコートと異様に長いコック帽子を被った料理長は厨房で叫ぶ。
「相手への思いやりなくして料理とは云わず! 相手への思いやりこそが料理の真髄! だというのに貴様は――」
「は、はっ、一体何が駄目で――」
「火にかける時間が長ああああああああああああいッ! 長過ぎる! ライゼン様へお出しする肉はレアだと言っているだろうが!!」
「……どうやら指導中みたいですね」
「声を掛けては悪いので、しばらく待つのが吉ですわ」
「ちょ、超怖いんだけど……!?」
厨房の入り口にて中を覗き見る三人の姿がある。キャロルとペールの両名につれてこられたガウガウは、2メートルを優に超える料理長を見て震えていた。
三人が観察の姿勢に入ると、怒鳴られた料理人である男は料理長に向かって恐る恐ると、
「で、ですから……その、レアにしたつもりでしたが……」
「違うわ馬鹿者め!! 火入れが4秒も長ああああい!! いいか!? ライゼン様はドラゴンなのだ! 通常のレアの肉よりもほんの少し血が滴るくらいが好みなのだぞ!!」
「な、なるほど……」
言い方は迫力があってアレだが言ってることは納得のいくものだったので、料理人が頷く。すると料理長は調理台に置かれていた特大の肉を片手で持つと、

「いいか!?　しっかりと見ていろよ……!!」
そう言って巨大な肉を鉄板に置く。そして、声を上げ、
「フハハハハハハ!!　この肉め……!　焼き殺してやる……!!」
「いや、もう死んでるだろ!?」
思わずツッコミの声を上げてしまう。
すると、何人かがこちらに気づいたが、肉を焼くことに集中しているのか料理長は気づかない。そして、
「フハハハハ!!　そう、このタイミングだ!!　このタイミングで肉を――む？」
「――え、あ……」
すると、教えていたはずの料理人が余所見をしているのを見て、拳を震わせると、
「貴様ああああああ!!　何を余所見しているかあああああああ!?」
「ひっ!?　も、申し訳ありません!!」
「お前も美味しくしてやろうか!?」
「ご、ごごごごめんなさい……!!」
巨大な包丁を手にとって凄む料理長に料理人が震える。確かに、あれは怖い。美味しくしてやろうか、ってなんだよ。調理されてしまうのか？
と、ガウガウが思っていると、不意に料理長と、
「――む？」
「――あ」
目が合った。そして、
「……貴様はあああああああ!!」
「う、うわあああああああ!?　勝手に入ってごめんなさーーーいっ!?」
自分も美味しくされてしまうのか、と恐怖する。しかし、
「何故子供が入って……まさか貴様――」
言う。こちらを見下ろし、
「腹が減ったのか!?」
「……へ？」
蹲るこちらに対し、そんなことを言う料理長。

涙目で見上げると、さらに身体を震わせて、
「うおおおおお……!!　何ということだ……!　腹が減って涙を流すほどとは……!!」
「え、あの、ちが――」
「レオンハルト様に厨房を任された身として……!!　腹を空かせた者を出してしまうなど、顔向けが出来ん!!」
うおおおお……!　と声を上げながら涙を流しはじめた料理長。
そして調理場に向かいながら、
「待っていろ幼き少女よ……!!　直ぐに美味しくて温かいお料理をお出しするからなあああああああ!!」
言って調理台に並べられた食材を適当に手に取り始める。
そうして手に持った巨大なフライパンをコンロに掛けると、目にも止まらぬ速度で調理を始め、
「――完成だ!　ＪＡＰＡＮから届いた新しい食材を使った――和風チャーハン!!」
「ふ、あ……」
皿に盛り付けられた料理を目の前に差し出され、香ばしい匂いが漂う。
先程食事は摂ったはずなのに、食欲が湧いてくるから不思議だ。そんな自分に、料理長は高笑いをしながら、
「さあ頂くが良い少女よ!!　鰹と梅が絶品だぞ!!」
「うっ、ごくり……じゃ、じゃあ……いただきます」
差し出された皿を受け取り、れんげでそれを掬って口にする。
「お、美味しい……!　はぐもぐ……!」
「フハハハハハ!!　そうだろうそうだろう!!　沢山食べるがいい少女よ!!」
「うんま……!」
もはや料理長など気にならず、料理をひたすらに口に運ぶ。そうしていると背後から、
「ちょっと、ずるいですよガウガウさん!」
「わたくしも食べたいですわー!」

厨房に二人が入ってくる。それを見た料理長が、
「おお……キャロル様にペール様!! どうされましたか!?」
深くお辞儀をしてみせる。意外と礼儀正しい。料理にぱくつきながらやり取りを見ていると、キャロルが、
「ガウガウさんが料理長に会いたいというので連れてきたのですが、やって来たらわたくしもお腹が空いてしまいましたわ！」
「私もですよう！」
「フハハハハハハ！ それはそれは!! 直ぐにお作り――む? ガウガウさんと言うと――」
途中でその名前に気がついたのか、首を傾げる料理長。ペールがこちらを指さして、
「そこの方がガウガウさんですよ」
「……おおっ!! そうでしたか!!!」
「へっ、な、何!?」
急に料理長がこちらにも頭を下げてくる。歯を見せて笑いながら、
「料理のための魔道具を提供してくださり、いつもありがとうございます!!!」
「あ、あー……いやまあ……頼まれたし……」
「……ぐうううううう!! 何とお優しいのだ!! こうなれば、ガウガウ様のために夕飯は腕によりをかけて新料理を出して差し上げねば!!」
「わたくしにも何かくださいな！」
「私もほしいですよう！」
キャロルとペールが再度注文すると、料理長は高笑いして、
「フハハハハハハ！ ご注文承りました!! 直ちにご用意させていただきます!!」
休むこと無く料理を再開する。
幾つもの行程を同時に進めながらもその動作に乱れやミスは一つもない。大鍋を力強く掻き混ぜながら、
「そうだ、もっと良い出汁を……旨味を出すがいい……！ じっくり煮込んでやる……！」

「……言い方は怖いが、よく聞けば普通のことを言ってるんだな……」
「そうですね。まあ先程言ったことは全部事実ですけど、親切で優しい人ですよ？」
「お腹を空かせてる人を放っておけない人なのですわ！」
……あれ？　この人、滅茶苦茶良い人なんじゃ……？
それどころかこの城に住む人の中でもぶっちぎりに人格者な可能性が出てきた。見た目や口調が威圧的で、多少人間離れしてるだけなのではと、
「……いやでも、先程のが事実だったら全然まともじゃないような……」
「……まあ料理長強いですからねぇ。この間、間違ってライゼンさんの尻尾に吹き飛ばされてましたけどピンピンしてましたし」
「城の使用人の中では、料理長とメイド長の二大巨頭だと言われていますわ！」
「フハハハハハ!!　キャロル様！　和風出汁で作った海鮮あんかけ焼きそばお待ちしました！」
「フハハハハハ!!　ペール様には旬の野菜たっぷりホイコーローです！」
「ありがとうございますわ！」
「お野菜たっぷりで美味しそうですね」
「……料理の上手い化け物か？」
会話の間に入って、キャロルとペールにそれぞれ料理を手渡す料理長を見て呟く。というか今、料理長が二人に……分身というか残像が見えたぞ。
料理長の動きにげんなりしていると、またしても背後から、
「お呼びでしょうか、ガウガウ様」
「!?　め、メイド長……!?」
急に現れたメイド長さんに身体をびくん、と震わせる。笑顔を向けてこっちもこっちで化け物なのか、と思っていると、こちらを通り過ぎて、
「料理長。今日は夕食にケッセルリンク様も来られるそうですから、

そのつもりで準備をお願いしますね」
「了解したメイド長!! フハハハハハ！ 食材共よ、今日は大忙しだぞ!! 切り刻んでやる……!!」
「ではそのように。それでは皆様方、お仕事があるので失礼致します」
やり取りを交わし終わると、メイド長さんがお辞儀をした後、直ぐにその場から立ち去る。
それを見て、ガウガウは大きく息を吐くと、
「……うん……人間も魔物も……中にはおかしな人はいるよね……」
「ガウガウさんが悟ったような目をしてますわ」
「許容範囲を超えたんですね……」
「もう突っ込んだら負けな気がして……」
しみじみと言う。
そしてハンティや皆が言っていた意味が分からなくもない。どうもされなかったが、それでも個性的過ぎる人物だ。
……良い人だけど、関わると疲れるから必要以上に関わるのはやめよ……。
ガウガウはとりあえず食事を食べ終えると、そそくさと厨房から出ていった。

パワードスーツ

――ＮＣ４６Ｘ年。
とある地域でのこと。
「あーーー……今日も暇ですねぇ……」
「そうだな……」
そこは人類圏の土地を占領する形で置かれた魔軍の駐屯地だ。
その司令部にて、魔物隊長と魔物将軍は気の抜けた会話をする。
何故か、と問われれば魔物隊長が言った通り、することがあまりないから、としか言いようがない。この駐屯地は重要拠点ではないのだ。
人類と魔軍は常に戦争を行っている。だが、その全てが攻勢に出ているわけではないし、中には待機を命じられている軍もある。それがここだ。
人類を完全に滅ぼすことはよしとされていない。ゆえに他の軍や方針との兼ね合いも合って占領だけして待機をしている軍は少なからず存在する。
「……酒でも飲むか？」
「……いや、将軍。もう飲んでるじゃないですか」
「飲まなきゃやってられん」
そう言って魔物将軍はボトルに入った酒を呷っていく。
大きな軍ともなれば魔人が付いてくるが、この待機を命じられている駐屯地に、魔人が来るはずもない。ゆえに好き放題は出来るが、待機命令が解除されるまで、軍勢を動かすことは許されない。
例外は不測の事態。人間側から攻め込んでくるようなことがなければ軍を動かすことはない。そうなってしまえば攻勢の大義名分も立つし、遅れて作戦許可ももらえるので良いこと尽くめなのだが、
「人間……さすがに攻めてこないよなぁ……こないかなぁ」
「ど田舎国家にど田舎の町。……さすがにこないでしょうねぇ……」
「そうだよな……はぁ」
思わず溜息が漏れる。

そろそろ人間から奪った食料などの物資も、女などの嗜好品も使い切ってしまった。部下達も鬱憤が溜まっているだろう。
ここらで一度、鬱憤の解消も兼ねた攻勢に出て、物資の補給――掠奪行為等を行いたいところだ。
しかし魔軍が占領した土地にわざわざ攻め込んでくるなど大国でも中々に無いことだ。余力が有り、重要拠点であれば攻め込んできてもおかしくはないが、こんなど田舎の土地を、わざわざ取り返すために攻め込んでくるはずもない。
そろそろ参謀本部――魔王城に勤めている連中や大将軍に要請を送ってみようか。あの御方であれば聞き届けてくれるやもしれぬし。
などと考えていると、
「――しょ、将軍閣下！」
「む……？」
突如として司令部に転がり込んでくる魔物兵。何か報告があるのか、慌てているように見える。
「どうした？　急に入ってくるなど無礼ではあるが……まあとりあえず話せ」
「は、はっ！　申し訳ありません！　ですがその……」
と、魔物兵は一旦間を置いて、念願のその言葉を告げた。
「に、人間らしき軍勢が攻めてきました！」
「！　おおっ！」
「それは本当か!?」
その報告に魔物隊長も声を上げ、魔物将軍も思わず椅子から立ち上がりながら聞き返す。
しかしそこで気になる単語があり、
「……ん？　人間らしき、とはどういう意味だ？　人間ではないのか？」
「それは……な、何やら見慣れない恰好を――装備をしていたので……」
「……？　よく分からんがまあよい。とにかく軍勢を纏めて出るぞ。――魔物隊長」

「はっ、直ちに行います」
うむ、と頷き魔物将軍は早速司令部を出た。
久方振りの戦争に魔物将軍は内心で歓喜する。
よもや攻め込んでくるはずもない、とか何とか考えている時にそれが来るとは、よっぽど日頃の行いが良かったのだろうか。
これで鬱憤も晴らせるし、物資も補給出来る。また暴れられるのだ。何もかもいい事尽くめ。人間如きに負けるはずもないが、気合を入れて事に臨む。
――実際に人間の軍勢を見て、戦ってみるまで、魔物将軍はそう思っていた。
「――な、何だアレはっ!?」
「わ、分かりません！」
その恰好――装備は見たこともないものであった。
全身を覆うような装甲。金属らしきもので出来たそれは、よく見ると複雑怪奇な線や部品で組み立てられており、魔物には理解出来ない代物だった。
そんなものは虚仮威しに過ぎん、と一当てしてみたところで後悔する。
魔物兵の攻撃は、その硬い装甲に阻まれて届かない。そして向こうのパワーは、人間とは思えないほど、魔物と拮抗するほどに強い。
「は……はは！　本当に効かねえ！　――よし、このまま押し潰せー！」
「おおっ!!」
それを身に着けた人間達の力強い声が聞こえる。それに対し、
「ひ、ひぃっ!?　な、なんなんだよこいつら!!」
「ど、どうしたら――ぐぎゃっ!?」
魔物兵達は人間達の見慣れぬ装備、こちらの攻撃が効かないこともあって恐慌状態に陥る。
やがて、魔物隊長らや魔物将軍が関節を狙うことを思いつくが、時すでに遅し。すでに軍勢は人間達の勢いの強さもあって崩壊していた。

こちらも人間を倒すことに成功しているが、失った士気は元に戻らない。次々に魔物隊長らが討ち取られ、最終的には、
「く、くそっ！　こんなことが……こんなこと、が……」
とうとう魔物将軍まで討ち取られる。
それを皮切りにして、残った魔物兵達は逃げていった。
戦いに勝利した人間達は揃って勝鬨を上げる。
「すげぇ！　俺たち、魔軍に勝っちまった!!」
「ああ！　勝ったんだ！　魔軍を追い払った！」
「この〝パワードスーツ〟！　これさえあれば魔軍なんて目じゃないぞ！」
と、そのパワードスーツの性能と魔物に勝利したことにに喜ぶ人間達。その人間達の前に、
「……皆、よく戦ったね」
同じく、一つのパワードスーツに乗った少年が人間の集団に向かって声を掛ける。
それを見た人間達は一様に尊敬の眼差しを送り、
「おおっ！　パイアール様！　あなたの言う通りでした！」
「これなら戦えます！」
「魔軍を蹴散らしてやりましょう！」
威勢の良い言葉を上げる人間達。それに対し、パイアールと呼ばれた少年は冷静な表情のまま告げる。
「うん。皆の戦いは良かった。だけど、魔軍との戦いはこれで終わりじゃない。町に戻って準備を進めよう。この戦いの結果を知って、仲間になる人も増えるだろうしね」
「畏まりました、パイアール様！」
「俺達、パイアール様に付いていきます！」
「パイアール様万歳！」
そうして、新たな自分達の指導者を褒め称え、人間達は町に帰還していく。
だが一人、遅れて町に戻っていくパイアールは、人の目が無くなると大きく溜息を吐き、

「……ふん、単純馬鹿の扱いは楽だけど、接してると頭が悪くなりそうだ」
鼻を鳴らし、自分に付き従う人間達の悪態をつく。
そう言いながらも手が常に動いており、遠隔操作型の機械を手に、作業を進めている。
「やっぱり、こんな田舎だと小物しかいないよね。もう少し規模を大きくして損害を与えないと、魔人も出てこないかな……」
そうしなければいけないことは理解しているが、それでも圧倒的に時間が足りない。
迅速にそれを行いたいところだが、何事にも順序というものがある。今は獲物が網に掛かるのを待つのみだ。
「姉さん……僕は、姉さんの為に……」
パイアールはそう呟き、町に戻っていった。
この日を切っ掛けに、人間に新たな勢力が生まれた。
無敵の鎧を用い、魔軍に対抗する新たな国家の誕生。
その首魁は、一人の少年だったという。

――魔王城。
そこは世界の支配者である魔王の居城であり、人類を苦しめる魔軍の本拠地である。
当然、そこには多くの魔人達が存在する。
とある一体の魔人も、魔王城に滞在する魔人の内の一体だった。
「……クソッ」
彼は舌打ちをして悪態を呟く。
彼はＮＣ期――魔王ナイチサに血を分け与えられて魔人になった者達の内の一人だった。
魔王ナイチサに見どころがあると認められて魔人になった。選ばれた存在なのだ。
魔人というのは大勢の魔物でひしめき合う魔軍の中でも隔絶した立場を持つ存在だ。

あらゆる生物からの攻撃を完全に無効化する無敵結界を持ち、他を叩き潰す圧倒的な力を持つ。魔人に逆らえる存在は魔王を除けば存在せず、自由であり、魔人を縛るものは存在しない。

十数体しか存在しない魔人達は、世界の支配者なのだ。何をやっても許される。

飯をかっ喰らい、女を好きなだけ犯し、気分で無意味な暴力を行っても、ムカつくやつを殺しても罪に問われることはない。好き放題していいのだ。それは幸福の極地であると、魔人になる前は確信していた。

だが、そうではない。魔人にも、慮らなければいけないことは存在する。

それは――他の魔人の存在。

何者にも縛られず自由な魔人だが、それは格下に限ったことである。実力がモノを言う魔物界において、同格以上ともいえる他の魔人は気にかけるべき相手となる。

人間や魔物相手ではいかなる攻撃も食らうことのない魔人だが、同じ魔人相手では無敵結界は通用しない。単純な実力勝負となる。

そして自分より強い相手ともなれば、その対応には注意を払わなければならない。魔王相手と似たようなものだ。

対応を間違えれば、相手を怒らせてしまえば殺されてしまう。

魔人になって数百年経っても、その上には大勢の魔人達がいる上、その多くは古株の魔人達。ケイブリスなどは例外で、そこまで強くないのだが、生きてきた年数が長い魔人達は、やはりそれだけ実力がある。

メガラスやガルティアなどの一般魔人もそうだが、魔人四天王という上級魔人の証ともいえる席に着くカミーラやケッセルリンクが代表的だろう。

そして若くても資質や日々の戦闘によって実力を上げる者達もいる。若い魔人――魔王ナイチサによって作られた魔人の中でも格付けはあるものだ。

その頂点が魔人四天王であるザビエルだろう。傲慢で嫌な奴で、口

を開けば毎回こちらを見下してくるので心底死んでほしいが、実力は本物だ。後はレッドアイやレキシントンなど。キチガイだったり、滅茶苦茶だったりする奴らだが実力的にはそいつらが抜け出ている。
だが、そんな並み居る魔人達の中でも頂点の実力を持つ魔人が、今目の前にいる魔人だろう。
「……俺に何の用だ？」
「は……」
礼をして、その魔人に謝意を示す。
椅子に座したまま、机の上の書類に目を通しながら応対するのは――魔人レオンハルト。
魔人筆頭という魔人の最高位であり、魔軍を動かす魔軍参謀という席に着く強大な魔人だ。
黒と赤を基調にしたコートと服を身に着け、金色の髪と赤い瞳を持つ魔人は、その鋭い威圧的な視線を書類に向けたままであり、こちらへの興味を示さない。
その傍らには奴の使徒であるキャロルが控えている。そちらも書類を確認するように目を通しているようだ。
そんな中で、こちらは声を発した。
「その、今日は自分のために時間を作ってくださり――」
「……前置きはいい。さっさと話せ」
「っ……失礼しました」
鋭い視線が一瞬、こちらに向けられると、それだけで身体が竦む。
魔人はレオンハルトのこの目が苦手だった。威圧的でこちらを見下しているかのようなその視線。嘘や気に食わないことを言えば、即座に見抜かれてしまいそうな圧力に逆らうことが出来ない。
頭を下げて続きを口にする。その内容はお願いであり、
「お願いがあるのですが……その、率直に言いますが、前線に出る許可が欲しいのです」
「……それくらいであれば好きにするといい。一々俺に会いに来てまでお願いすることじゃないな。……他に何がある？」
「……さすがのご慧眼、恐れ入ります。実は希望したい戦場があるの

ですが……」
「ほう？　言ってみろ」
　感謝します、とお礼を言ってから口にする。
「この間、魔軍の駐屯地が新しく出来た人間の勢力に敗走したと聞きました。ですので、そこを希望したいのですが……」
「……ふん。耳が早いな」
　レオンハルトの視線がこちらを完全に射抜く。それに身体がビクッと跳ねるが、それを抑えて魔人はその許可を待つ。
　このようなお願いをした理由は単純だ。それは、強くなるため。
　戦いの場に出て、自分を強くしていずれは上級魔人、そして、残り一席となった魔人四天王の座につくこと。
　それが魔人の野望だった。それほどに強くなれば魔王様や眼の前の魔人筆頭はともかく、他の魔人に気を使わなくてもよくなる。あのうざったいザビエルに怯える必要もなくなるし、カミーラやケッセルリンクとも対等に話せる。
　そのためにはまず強くなること。その近道は、より強い相手と戦って勝つことだ。
　魔人がいなかったとはいえ魔軍を敗走させるほどの人間であればそれも捗る。こちらには無敵結界という絶対の盾があるのだから仮に魔人に匹敵するほどに強い存在相手でも負けはない。人間相手なら容易に蹂躙出来る。
　ゆえにお願いをした。他の魔人が派遣されたり、目をつける前に、最高位の魔人のお墨付きさえあれば他の魔人が手を出してくることも、おそらくは無いだろう。
　その頼みに、レオンハルトは考えるように眉間に皺を寄せていたが、ややあって返答を寄越した。
「……いいだろう」
「！　ありがとうございます！」
　叶った。思わず本心でお礼を口にしてしまう。
　そんなこちらに対しレオンハルトは淡々と、
「軍勢を引き連れて早速向かうと良い。相手は人間にしてはかなりの

脅威だ。滅ぼしてしまっても構わん」
「はっ、ご期待に添えるよう努力したいと思います」
「……なら行け。追って許可書は出しておく」
はっ、と頷き執務室から退出する。
そしてほくそ笑んだ。やはり真っ先にやってきてよかった。美味い狩り場を、他の魔人に渡すわけにはいかない。
魔人はさっそく軍とともに出立するため、城を後にした。

魔王城の執務室では、その魔人が退出したのを見て使徒であるキャロルが主に声を掛けていた。
「やる気満々って感じでしたわー！　ですがレオンハルト様、よろしかったので？」
「……自分から行きたいと志願したのだから別に構わん。選ぶ手間が省けただけのことだ。お前が言ったように、やる気も充分のようだしな」
少し間を置いて、レオンハルトが答える。その答えにキャロルは得心したように頷き、
「なるほどですの！　誰を派遣するかで迷ってらっしゃったのは、やる気がある者を見分けるため……ということですわね！」
感服致しました、と尊敬の念を送ってくるキャロルに、レオンハルトは息を一つ吐いて、
「……ああ、そうだな」
自分の判断に間違いがないことを確信しつつ、再び書類に目を通し始めるのだった。

魔人パイアール

無敵の鎧――パワードスーツを用いる人類の新勢力と魔軍の戦いは人類側の圧勝が続いていた。

数を増やし、新たな兵器である遠隔操作型の機械兵器まで開発したその小さな王国は急激に戦線を拡大していく中で、魔軍側は幾つかの軍勢が敗走し、少なくない被害を出す。

だが、それもとうとう終わりだと、とある魔人は確信していた。

魔人に率いられる魔物の軍勢。これに勝てる軍隊は存在しない。

無敵結界という真に無敵の防御を用い、人間を遥かに超える力を持つ魔人の強さは、パワードスーツなど問題にせず、通常の人間相手と同じように、彼らを吹き飛ばしていく。

魔人も魔物も、こちらの勝利を確信していたのだ。後は蹂躙するのみだと、そう思っていた。

「――――」

その魔人は突如、意識を回復させた。

寝ていたのか、と思うも、最後に見た景色と現状が一致しない。確か、自分は人間の軍勢を蹴散らしている最中だったはずであった。だがその途中、誘い込まれた敵の本陣にて何かを食らった。――記憶はそこで途切れている。

現状を理解していないが、一先ずは身を起こしてみようと考えながら、しかし、

「……!?」

身体が固まったように動かない。

指一本動かせず、視界も真っ暗闇のままだ。

一体自分の身に何が起こっているのか、どういった状況に陥っているのか。

そんなことを考えていると、不意に声が響いた。それは、

『――実験開始』

無機質な声だった。

しかしそれと同時に、

「っ!?　～～～～～!!」
不意に、身体に違和感が走った。
頭が、脳が揺らされるような、不快な感覚。
気持ち悪い。今すぐにでも吐いてしまいそうだ。
しかし口を抑えつけられた状態ではそれも叶わず、拷問のような時間は続く。頭の中が掻き回されるような感覚を感じながら、しかし魔人が心に浮かんだ言葉は、
――無敵結界はどうした？
という簡潔な疑問だ。
あらゆる攻撃を無効化する絶対の盾。それがあるはずなのに、何故自分は謎の攻撃を受けているのか。そもそも、何故身動きが取れず、何故自分はこうなっているのか、何もかもが解らない。
そうしている間にも、身体を弄り回されるかのような感覚と、拷問は続く。
無限に続くかと思われたその苦しみは、しかし、ある一点を越えた時に終わる。
だが、
「――――」
その瞬間、魔人は自分の身体から何かが抜け落ちる感覚を受け、糸が切れたかのように意識を失った。

「……実験成功」
その魔人だったものを見て、その少年――パイアールは淡々と実験の成功と終了を告げる。
彼は半透明の仕切られた長い窓の向こうから、室内にいる魔人に科学的なアプローチを仕掛けていたのだ。
手元にある機械を操作し、パイアールはその生物から出た赤い塊を壁から伸びた遠隔操作型のアームで取り出すと、今度は別の機械――何やら筒のような兵器を飛び出させると、スイッチを一つ。
「――――処分、と」

その筒から弾が一発。それが魔人であった生物の頭を撃ち抜き、あっさりと絶命させる。
生体反応が消えたのをきっちりと確認すると、パイアールは軽く息を吐き、
「……案外、魔人っていうのも呆気ないな」
機械のアームが持ってきた小さな赤い珠を見て呟く。それは、
「これが――魔血魂、か」
魔血魂。
それは魔人が魔人たる所以であり、魔王から分け与えられた力の源である。
パイアールはそれを、科学的な方法を用いて魔人の身体から摘出したのだ。結果、魔人は魔人でなくなりあっさりとパイアールの兵器に殺された。
それはただの人間が、無敵結界を持つ魔人を殺したという偉業の達成であるのだが、そんな偉大な事を成しても、パイアールの表情には喜びのそれは一つも浮かばない。
しかし内心では一応ではあるが、一つの区切りだ、と感情が僅かに動いていた。
……やっとか。
それほど年数は経っていないのに、とても長く感じた。
馬鹿な人間達を率いて、魔人と戦った理由がこれにある。魔血魂を取り込むことで、魔人になれるのだ。
そう、パイアールは――魔人になるため、魔軍と戦っていたのだ。
魔軍にいる魔人をサンプルとして捉え、魔血魂を摘出するために、大勢の人間を率いていた。
だが、その魔人になるという大本の理由は別にある。
何故魔人になりたいのか、それはパイアールの背後にあった。そこには、
「姉さん……」
パイアールの実の姉――ルート・アリが眠っていた。
……姉さんは眠っていても綺麗だ。

あの日、姉が巷で流行していた死の病、カスケードに掛かった後。
余命が三ヶ月となった頃からパイアールの発明した冷凍睡眠装置により、姉はこうやって眠っている。
それは肉体を保存して死なないようにするためだ。パイアールの目的は徹頭徹尾、最愛の姉を助けることにある。
不治の病であるカスケードに、対処法は存在しない。
その研究に長い時間が要るとみたパイアールは老化も寿命も存在しない魔人になることで解決しようと試みた。少しでも時間を稼ぐ必要があるのだ。そのために、魔人の身体はうってつけのものだ。
「姉さん……姉さんは僕が絶対に助けるから……」
美しく眠る姉を見て呟く。
掌の魔血魂。これを飲めば自分は人間で無くなる。
本来なら実験も行わず、こんな不確定かつ不安要素がありすぎることを行いたくはない。
だが、姉のため。
姉を助けるためであるなら、パイアールはその禁忌の領域に容易に足を踏み入れることが出来る。
「――んっ」
パイアールは徐ろに、掌の魔血魂を口に含み、飲み込んだ。
瞬間、
「！　っ、あ、く、あぁっ……！」
全身に激痛。身体の中で何かが暴れ、肉体を作り変えていくような感覚を覚える。
その痛みと苦しみは、口から声にならない呻きを発するが、やがて、光とともにそれは収まっていくと、
「――――あ、ああ……」
痛みが収まると、パイアールは自分の肉体を確認するように手を動かす。
容姿にそこまで変化はないが、力が漲っている。
先程までの人間であった自分の肉体と明らかに違う、隔絶した力に、軽い全能感すら感じる。

なるほど、これなら魔人が人間を見下すのも納得かもしれない。それほどまでにスペックに差がある。
「これで時間は稼げた……」
こうなってしまえば、最早人間を率いて戦う必要もない。
全ての兵器群を纏めてここを引き払うとしよう。残された人間達がどうなろうと知ったことじゃない。行き先は魔物界の適当な場所でいいだろう。
姉さんが生まれてから２６年と１２２日。
――今日、僕は人間をやめた。
そうして人間の少年パイアールは、新たに魔人パイアールとしての生をはじめた。
魔人としての生活もそうだが、ここからの実験は色々と未知数ではあるが、それには微塵の後悔もない。
その目的は、人間であった頃より変わらないのだ。
――全ては姉を助けるため。
魔人パイアールはそのためだけに、自らの科学の才能を発揮していく。
そのためなら――魔人相手でも容赦はしない。

「――無敵結界のことを教えてほしい、だと？」
「やっぱり駄目か？」
自分の城でいつも通り仕事を行っていた魔人レオンハルトは、部屋に入ってくるなり尋ねてきたガウガウの言葉に眉をひそめる。
こちらの表情を見たガウガウは真顔のまま駄目か、と再度問うてくる。そういう意味で表情を変えたわけではない。
では何故かと言うと、
「駄目と言うかだな……俺としては研究を始めて遠からずそこに行き着いて俺のところに来ると思っていたんだが。それがあまりにも遅すぎるせいで忘れていた」
「つまり……今更聞きに来たのかよ！　――ってことですわね！」

こちらの言いたいことをキャロルが補足してくれる。
加えて言うなら、今まで何をしていたんだ、というのもある。ガウガウがこの城に住み着いてもう結構な年数が経っているのにだ。
ガウガウの目的であるレッドアイのためには、魔人について調べることが必要不可欠であり、遠からずやって来ると思っていた。
だがそれを問うと、ガウガウはバツが悪そうに目を逸らし、誤魔化すような愛想笑いとともに頬を掻いて、
「いやー……その―……この城の居心地が良すぎて、ね？　引きこもるのに最適と言うか……これも、料理が美味しすぎるのと、メイドの世話が完璧過ぎるのが悪い！　私は悪くないぞっ！」
「責任転嫁と逆ギレが凄いな……」
「見事なダメ人間ですわ……！」
途中から声を大にして環境が悪いと叫びはじめたガウガウに白い目を向ける。思わずキャロルが感心してしまうほどだ。
「け、研究には頭を休ませる時間も必要だし、私は天才だからいいんだ！　それにそっちが魔法具を要求してくるのも原因なんだぞ！」
「……確かに、それはそうだが」
ほら見ろ！　私は悪くない！　と、急に活き活きとし始めてこちらを責めてくる引きこもりに目眩を覚える。それにしても研究が遅くないだろうか、と。
……だが、やる気を出したなら応えてやらないとだな。
やる気を出した時に乗せてやらないと、こういう奴はすぐに理由を付けてサボろうとする。なので息一つで居住まいと気を取り直すと、それに答えてやろうと口を開いた。
「無敵結界か……先に聞くが、これのことをどこまで知っている？」
手を挙げて、そこにあるであろうものを指して言う。するとガウガウも顎に手を当てると、真面目な、研究者の顔を見せて答えた。
「魔人の持つあらゆる攻撃を無効化する、魔人の表面に張られている結界だな。同じ魔人や魔王の攻撃でなければそれを突破することは出来ない。だが、衝撃まで無くなるわけではない……と言ったところか」

「そうだ。攻撃は無効化するが、衝撃まで無くなるわけじゃない。概ね正解だな」
「……それくらい常識だ」
褒めてやったのだが少しムスッとした表情になるガウガウ。概ね、が引っかかったのだろうか。
だがそれを今から教えてやるのだ、とレオンハルトは無敵結界についての説明を行う。
「この無敵結界のおかげで、魔人の脅威は以前のそれよりも高まった。どれだけ強い人間がいても、魔人に傷を付けることは叶わなくなったからな」
言う。自分にとっては常識のことだ。しかし、ガウガウは不意に疑問を帯びた険しい顔になると、
「ん？　以前のそれよりって……無敵結界は魔人について回るものじゃないのか？　昔は無かったというのか？」
「……それは……」
予想してなかった問いに、淀み無く答えようとして、しかし言葉に詰まる。
だがガウガウは首を傾げ、こちらへの問いを継続し、
「……？　無敵結界は後から付いた能力なのか？　だとしたら、誰かは知らんが余計なことを――」
「――ガウガウさんっ!!」
「ふぇっ!?」
不意に、大声でそれを制止したのは後ろに控えていたキャロルだった。
珍しいキャロルの怒声に、ガウガウが身体を跳ねさせて驚く。
「それ以上を口にすることは――」
「ひっ、わ、私、なんかマズいこと言ったか……!?」
その剣幕に怯えたように後ろに下がるガウガウ。それを、
「やめろ、キャロル」
「っ、レオンハルト様……ですが……」
「いや、良い。俺は大丈夫だ。気にしてない」

「……はい。出過ぎた真似をして申し訳ありませんでした」
表情を歪ませたキャロルを宥めるように落ち着かせる。するとややあって頭を下げて謝ったが、こちらの為を思っての行動だ。叱ることはない。
軽く頭を撫でてやると、落ち着いたのか、今度はガウガウを見て頭を下げる。
「ガウガウさんも、怖がらせてしまい申し訳ありませんわ……」
「……よく解んないけど、なんか私に非がありそうだし、いいんじゃないか。……それと、私は別に怖がってなんかないぞっ！」
強がるように威勢の良い言葉を吐くガウガウ。いつもどおりの空気に戻ったところで、レオンハルトは気を取り直して話を続けた。
「先程の問いに答えるが、無敵結界は魔人に元から持っていた能力ではない。……だが、既に備わってしまった以上、それを無くすことは出来ないからな。知ったところであまり意味はない事実だ」
なるほど、と頷くガウガウ。そう、これは歴史的には意味のある事実かも知れないが、最早魔人に身に付いてしまったものである以上、今を生きる者にとっては意味のないことだ。
「無敵結界はその名の通り、無敵の盾だ。――だが、穴がないわけではない」
「まさか弱点でもあるのか？」
弱点、というほどでもない。だが、穴は確かに存在する。
無敵の力が作用しないもの。それは、
「先程言った衝撃もそうだが、直接傷を負わせるものではないものは無敵結界で弾けない。粘着地面などの拘束系の魔法などがそうだな」
「……なら、精神系の魔法も食らうのか？」
レオンハルトは頷く。さすがにガウガウの頭の回転は早い。
「ああ、精神面に作用するものは無敵結界で弾けない。それと――」
更に重要なことがある。レオンハルトは前置きしつつ、意思を念じてから言う。
「ガウガウ。俺の手を殴ってみろ」
「は……？」

聞こえた言葉が解らない、といった面持ちでガウガウが間の抜けた声を上げる。すると間を置いて、
「いやいやいや!? 殴ったら結界に弾かれるだろ！ 痛いのは嫌だぞ！」
「大丈夫だ。痛くない。騙されたと思って殴ってみろ。攻撃する意思をちゃんと込めてな」
「本当だろうな……？」
ほら、と掌を上げて差し出すように見せる。
胡乱な目でこちらを見ていたガウガウだが、迷った挙げ句少し近づいて、腕を振りかぶると、
「ていっ！」
「ん」
パシッ、と軽い音が室内に鳴り響く。
ガウガウほどの力であれば傷は付かないが、それは確かに攻撃の意思を込めたもので、
「あれ……？ 当たった……どういうことだ？」
疑問を呟くガウガウに答えを教えてやる。当たり前のことだ、と。
それは、
「無敵結界は、魔人の意思で無効化することが出来る。もう一度張り直すこともな」
もう一度殴ってみろ、と手を差し出す。
嫌な予感がしたのだろう、顔をしかめたガウガウであったが好奇心に負けたのか、もう一度腕を振りかぶると、
「〜〜〜っ!? 痛ったあああああーーー!?」
パンチが手に当たる直前で、結界に阻まれ、キィン！ と音を立てる。
痛そうですわ……、とキャロルが小さく呟く中、固いものを殴ってしまったかのような痛みに、ガウガウが声を上げて悶絶する。表情を歪ませ、手を抑えるガウガウに向かって、
「こういうことだ」
「こういうことだ――じゃない！ 滅茶苦茶痛いじゃないか！ うう

……天才の柔肌に傷が……」
恨みがましい目でこちらを見上げてくる。別に傷にはなってないと思うが。
「つまり――無敵結界は絶対の力ではない、ということだ」
「……まあ搦め手で突破出来なくもないかもしれないが……それでも充分脅威だぞ」
改めて確認したのか、ガウガウが難しい顔になる。それもそうだろう。
ガウガウの目的であるレッドアイは魔人だ。当然、無敵結界が邪魔になってくるだろう。
だが、
「……確かに脅威ではある。だが魔人が真に脅威なのは、他を圧倒する純粋な力だ」
無敵結界が無ければ魔人を倒せる、とは限らない。無敵結界を突破するのはあくまで大前提。
だが殆どの魔人は無敵結界を過信している。それほどに強力かつ解りやすい力だ。無理もない。
しかし、だ。それでは危ないとレオンハルトは警鐘を鳴らす。
無敵結界を絶対の力だと過信し慢心する魔人は、思考をそこで止め、予想外のことに対して対応出来ず、いつか痛い目を見るかもしれない。
そうでなくても魔人同士や例外的な相手であれば素の実力がモノを言うのだ。それは人間にも言えることで、
「無敵結界をどうにか突破するのは良いが、ゴールはそこではないし、それだけで勝てるほど魔人は甘くない。……魔人をどうにかしようと思うなら、思考を止めないことだ」
「……まぁ、確かに。無敵結界が無くなったところで勝てる気は全然しないけど……そっちは特に」
「当たり前ですわ！　レオンハルト様は元から完璧でしたの！　有象無象が敵うはずありませんわ！」
半目をこちらに向けて、心底面倒そうな顔で言うガウガウと、声を

大にして褒め称えてくるキャロルに、レオンハルトは軽く口端を歪める。
「フッ、とにかく研究は支援してやるから頑張れ」
「へーい。まぁ、ぼちぼちやりますかね……」
そうして無敵結界についての講義は一先ず終わった。
そんなところで、部屋のノックとともに入室してくる者がいる。それは、こちらの使徒で、
「失礼しますね、レオンハルト様。報告に来ましたよー。あ、ガウガウさんもどうもです」
軽く挨拶しつつ薄紫色の髪の靡かせてペールが入ってくる。ガウガウからそちらに顔を向けて、
「報告か。何かあったのか？」
「えーとですね。つい先日の件なんですけど。例の人間の勢力はあっさりと滅びたそうです」
簡潔に報告したペールにキャロルが、あら、と声を上げる。それはキャロルも知ってる案件で、
「物凄く強いって聞いてましたのに、魔人の方を派遣するだけで壊滅しましたの」
「一夜で終わっちゃったらしいですよう？」
「……ほんとにあっさりですわね」
呆気にとられたというか、想像以上に対したことなかったことにキャロルが肩を竦める。しかしペールはそこで苦笑いし、
「そうなんですけどね。ですがその……問題が起きたそうで」
問題？　と首を傾げるキャロルにペールは頷き、問題を口にした。
「派遣した魔人さん――人間に捕まってから行方知れずになっちゃったそうです」
「……」
部屋の中に静寂が訪れる。
捕まった、というのもそうだが、行方知れずになったというのも問題で。
「……そうか……」

レオンハルトは軽く息を吐いた。そして、
「なら、ちゃんと対処しないとな……」
重い腰を上げ、その問題の解決に乗り出すことにした。

科学兵器

その建物は丘の上に建っていた。
魔物界の北部に広がる荒野、その丘の上に建つ長い建物。見たことのない材質で出来たそれは、三階建てほどの高さだが、横幅、奥行きが結構ある。
そんな建物の前に立つのは、鋭い眼光を持つ魔人筆頭の姿で、
「こんなところに……しかもそれなりに大きいな……」
魔人レオンハルトは、それを眺めながら感心したような声色で言う。
行方不明どころか生死すら定かでない魔人の捜索に出たが、ここ数週間はずっと足取りを追っていた。
担当の魔物将軍や連れ去られるところを目撃していた魔物隊長に話を伺い、滅ぼした人間の勢力、その跡地を調べさせるなどして時間を使ったのだ。
そんな中、魔物界で何やら見たこと無い機械を見たという情報が入り、捜索を魔物界に移したところ――この建物が見つかった。
それは報告で聞いた無敵の鎧だの、謎の機械の材質に似たものである。当然だが、連れ攫われたという魔人にこういった物を作る能力はない。レオンハルトもよく知っている。故に、
……十中八九、もう死んでいるな。
おそらく生きてはいないだろうという予測を立てる。生きていたとしても五体満足というわけにはいかないだろうな、と。
それに人間界を避けて魔物界に拠点を移したことからも考えて、おそらくはこの建物の主、人間の勢力の首魁であった者が魔人に成り代わったのだろう。
人間にはあまり知られていないことではあるが、魔人は死んだ際、魔血魂という赤い球体の状態になる。これを他の生物に飲ませると、波長などの問題もあって難しいが、魔人が宿主の身体を乗っ取り復活するのだ。
しかし宿主の精神力が魔人を上回った場合、その魔人を上書きする

形で宿主が新たな魔人となる。その場合、元々の魔人は完全に消去されることになる。魔人にとっての完全な死だ。
「……」
それを思い、レオンハルトは大きく息を吐く。とりあえず確かめねばなるまい。
仇討ちをしようなどとは思わない。が、新しく魔人になった者がいるのならやることは別にある。
さて、とレオンハルトは言葉を作り、
「行くか……」
その建物へ入っていった。

魔物界に新たに建てた研究所の主――魔人パイアールは、侵入者用の警報が室内に鳴り響いたのを聞いて、モニターに目を向けた。
「……またか。鬱陶しいな」
この研究所が物珍しいのか、魔物界に住居を移してからというもの、度々魔物が侵入してくる。その度に殺しているおかげで最近は魔物が侵入してくるケースも減ったのだが、また性懲りもなく来たのだろう。
そう思ったのだが、研究所内を監視するモニターに映っていたのは、
「……人間？　……いや、こいつは……」
黄金の髪に赤く鋭い瞳をした人間の男らしき姿をした奴が周囲を注意深く見渡している。それを人間と思った自分の判断を直ぐ様否定する。
何故なら、その雰囲気はモニター越しでも理解るほどの圧力を感じることと、その容姿を見て情報と一致するものがあったからだ。それは、
「魔人……確か、そうだ。魔人レオンハルトか……」
魔人を掴まえるために人間を率いていた際、当然魔人の各種情報は集めている。

その殆どが未確定な不確かなものであったり、そもそも情報が無かったりと難航したものだが、明らかに危険と解る何体かの要注意魔人をリストアップした。

その内の一体が、魔人レオンハルト。元人間。剣士。魔人筆頭。魔軍参謀。純粋な危険度や遭遇率はそこまで高くない上、出会ったところで即座に殺しにかかってくるような危険な魔人ではないと聞くが、その実力は魔人の中でも随一であり、それだけで手に負えない可能性のある魔人だ。

だが女好きで、特に巨乳が好みであり、巨乳の娘を差し出せば遭遇しても見逃してくれるという情報もある。この魔人をモデルにした本も存在するらしく、遭遇率の低さや際立って暴れまわってるわけではないにも関わらず知名度の高い魔人だ。特に歴史家からは人類史と魔物史における重要な魔人として考察され、剣士と剣士を志す人間からは目標にされていることから特に知名度がある。

パイアールとしては微塵も興味は湧かないが、子供の頃に姉さんが読んでくれた童話の一つに、こいつを元にした話があったはずだ。いかにも英雄願望のある野蛮な戦士や、考え足らずで幼稚な子供が好きそうな話であったが、姉さんが読み聞かせてくれたから何とか読めた。姉に感謝しろ。

「……僕の研究所に、一体何の用が……いや、それよりもどう対応する……？」

そんな大物がやって来ているのが現実だ。攫った魔人の安否でも確かめに来たのだろうか。そんなことを考えている間にも、魔人はどんどんと奥に進んできている。

……倒せるかな……？

一番いいのは殺害。もしくは撃退して帰ってもらうことだ。姉がいるこの研究所から立ち退くにしても姉を連れて逃げる時間はない。

しかし失敗。その上で怒らせてしまった場合、魔人になったとはいえ戦闘力で確実に劣る自分は即座に殺されてしまうだろう。魔人になってから確かめたが、基礎的な身体能力は向上していても、捕らえた魔人と比べて弱いものであった。せいぜい魔法が強くなった程度。

なので魔法バリアを常に張るようにしている。無敵結界では衝撃を殺せないため、非力で直接戦う技術を持ってない自分では万が一攻撃を受けた際に吹き飛ばされ、機械が壊れてしまう可能性がある。
「はぁ……面倒だけど、とりあえず試してみよう」
元から設置してあるトラップを起動させる形でどうにか出来ないか試してみよう。それならば突破され、失敗に終わるようでも言い逃れが出来る。魔物社会や魔人同士の関係がどんなものかは未知数に近いが、同じ魔人であれば膝を突くことで少なくとも殺されはしない――はずだ。
魔人レオンハルトであれば巨乳の娘を捕まえて献上する、とでも言えばどうにかなるかもしれないし、情報を精査する限りでは話が通じない相手でも無さそうだ。
「考えつく手段は一通り取れるよう、頭に入れておくか」
手元の機械を操作し、トラップを起動させるとパイアールはモニターに映る魔人をしばしの間、観察することにした。
上位の魔人の戦闘力を測るための、良い指標になるかもしれない、と。

その建物の中は、やはり他では見ない材質のものが使われていた。ところどころで鉄のような金属のようなものも使われている。しかし、大部分はそれよりも固く、それでいて柔軟な滑らかなもので床や壁、天井などは固められている。
歩く度に、床から聞こえる足音だけが室内で反響する。レオンハルトは周りを見ながら、
……凄い施設だな。
短期間で人手を使うことなくこれだけの施設を作れるほどの技術力。それもハンティやガウガウが作るような魔法の物ではない。純粋な技術――科学と呼ぶべきもので出来ているのだ。
口元を抑え、観察しながら長い廊下を行き、また室内に入る。とりあえず一階から順番に見ていこうと思っていると、

「――！」
不意に、背後の扉がガシャン、という音を立てた。
数枚の扉が折り重なり、最後に電子音が鳴り響かせて扉を施錠される。それを見た後、今度は前方に顔を向けると、
「これは……」
壁がスライドし、中から小さな筒のような機械が大量に飛び出してきた。
キャロルの銃に似たそれ、それよりも大型なものであるそれが、銃口をこちらに向けてくる。次の瞬間、
「――――」
連続する火薬の音とともに、鉛の弾が幾つも発射された。

パイアールはモニターに映る魔人と、その部屋のトラップが起動する瞬間を見ていた。
それは遠隔操作型の機械兵器。火薬と機構、それによる圧力で金属弾を高速で射出する殺傷兵器だ。並の人間であればこれだけで充分である。
しかしそれなりに鍛えた者、特に無敵結界を擁する魔人に傷を付けることは出来ない。重要なのは、それが着弾した時に起きる衝撃の方だ。
「絶え間ない衝撃を与えれば動けなくなる――はずだけど、力で突破されちゃうかな」
上級魔人であればそれは致し方ないかもしれない。少しでも動きを止めてくれれば御の字、と言ったところだろう。
だが、
「……は？」
パイアールは、モニターに映ったその映像を、もっと言えば自分の目を疑った。
視界の中に映る魔人は、その射撃に対し、左右に動いて躱す。それだけでも脅威だが、それだけでなく、

「何だあれは……剣？」
手には何も持っていなかったはずだが、気がつけば右手に魔人の身の丈を越えるほどの剣がある。
それを用い、魔人は飛んできた銃弾を真っ二つに両断していた。
「ああ、そういえば剣士だったね。しかし、これは凄いな……」
失念していたが魔人レオンハルトは剣士だ。剣が見当たらなかったので忘れていたが、おそらくは魔人か剣の特殊能力かなにかで隠していたのだろう。
人間のある程度強い戦士でも、防御したり、剣で切り払ったりは出来るが、飛んでくる弾を全て、寸分の狂いもなく斬るというのは常人に出来ることではない。並外れた剣の腕、技術が必要だろう。
「うーん、この分だと他の仕掛けも効かなそうだな……」
早くも、自分の仕掛けたトラップは通用しないのではないかとそういった予測を立ててしまうパイアールだが、とりあえず映像を見続けることにした。

弾幕を掻い潜り、レオンハルトは魔剣オル＝フェイルを振るい、その機械を両断した。
機能を停止した機械の残骸を見て思うのは、感嘆といった感情で、
「なるほど……悪くないな」
自分にとってはお遊びのようなものだが、体の調子を確かめるための軽い訓練としては悪くない。先制して即座に機械を斬ることも出来たが好奇心に負けてそれを堪能してしまった。
思わず口元が歪むのを自覚しながら、レオンハルトは先に進む。
「さて、次はどんな仕掛けを見せてくれるのか……」
戯れに付き合ってやろうと思う。
次なる玩具の登場を楽しみにしていると、突如、再び扉が閉ざされた。
そして今度は天井に穴が開くとともに、そこから流れ込んでくるものがある。飛沫を上げて落ちてくるそれは、

「……水か」
天井から激流が落ちてくる。大量の水はどんどんと室内を見たし、足元を水没させていく。
その狙いはすぐに解った。
……なるほど。確かに、魔人であっても大量の水で呼吸を封じれば溺れる。
内的要因や自然に依るものは無敵結界で防げない。勿論、それが人為的な魔法や個人の何らかの能力での攻撃であれば防げるが、これはただ単純に水を落としているだけで、目的は窒息、溺れさせることでの仮死状態を狙っているのだろう。
「しかし……これはつまらんな」
レオンハルトは壁に向かって無造作に剣を振る。斬撃によって出来た切れこみ。そこは綺麗にくり抜かれ、壁に穴を開けるもので、
……対処が容易過ぎる。
どうやら隣はすぐ外であったようで、水が外に流れ落ちていく。後で溜まった水を排出するためだろう。そうでなくとも上階に上がればいい。ある程度力を持った魔人であればこの程度は無理やりに突破出来るものだ。
出来ればもっと面白い手段を取ってほしいがそれを望むのも酷だろうか、と思う。これでも魔人への対策としては悪くない方だ。
そんなことを思っていると、
「――何だ？」
コロン、と天井から落ちてくる球体。
手のひらサイズのそれが落ちてきた。
爆弾か？　と、その場で立ち止まり観察する。その程度でダメージを追うはずもないことは向こうも解っているだろう。
ならば何かしらの狙いがあるのか、と思考を回していると、
「――ッ!?」
不意にそれが爆発した。
しかし、そこから発生したのは火薬ではなく、
……光と音か……！

何も見えないし聞こえない。視覚と聴覚を潰された上、ふらついてしまうような感覚も感じる。
確かに、これは有効な手段だ。認めざるを得ない。無敵結界は五感によるものは排除しないのだ。攻撃と判定されないものでの攻撃、というのは良い発想だ。
無論、この程度で死ぬことはないが、魔人の動きを止めるに充分な上、この間に取れる行動もある。現に今、自分は未だ回復せず、視覚と聴覚による判断を封じられている。
だが、
「――――！」
レオンハルトは徐ろに剣を振った。
すると手応えを感じて、
……今のは当たったな。また機械か？
確かにちょっと苦しいし、無機物の気配を探るのは難しい。
しかし、この程度であれば経験と勘でどうにでもなる。他の魔人であれば無差別に暴れるだけでも問題ないし、目標を確実に捉える魔法などを使えば問題にならない。無敵結界を過信し、狼狽えるものであればどうなるかは解らないが、結果がこの現状だろう。衝撃、窒息、光や音、攻撃と判断されず身体に影響を与える手段を幾つか組み合わせれば、若輩の魔人一体くらい、捕らえることは容易いということだ。
「全く……」
この程度で死ぬなら今回の件が無くとも勝手に死んでいただろう。魔人というのは強大な力を持ってはいるが、決して万能ではない。
人間とて馬鹿ではないのだ。弱いなりに、いや、魔人や魔物に比べて弱いからこそ、様々な手段を講じようとしてくる。搦め手で来るのは最初から解っているのだから、それらを出来る限り予想し、不測の事態が起きても動じず、冷静に正面から、力をもって叩き潰せば魔人が人間に殺されることはない。しかし、
「言うは易し、か……」
それが難しいことも理解している。
回復してきた視界で正面を見ると、再び歩みを再開した。

「……こいつは化け物か？　あり得ない……」
モニターを見ていたパイアールは、呆れるように呟いた。
光と音を使用し、対象の視覚、聴覚を奪い、一時的に気を失わせることすら出来る閃光弾。これを使って件の魔人は捕らえることが出来た。
しかしこの魔人はそれを食らって倒れないどころか、目と耳を封じられているというのに的確に反撃すらしてきた。
「……お手上げだね」
さすがにここまで出来るならどうしようもない。パワードスーツも魔人に対してはあまり効果的ではない。上級魔人であればこの程度は意味がないという結果は得られた。もっとも、前のサンプルと比べて開きがあり過ぎる気もするものだが。
……とにかく魔人の力を上方修正しておこう。
もしかしたら並の魔人にとってこの程度は造作もないのかもしれない。前の魔人は底辺だったのやもしれない。確かにあっさりと捕らえることが出来て拍子抜けしたものだったが。
そしてこれ以上、執拗に抵抗して怒らせるようなことがあれば本当に殺されかねない。だが、
「まあもっとも、それはないとは思うけど……」
なにせこいつはトラップを食らっている最中、視覚と聴覚を奪われた状態で――口元を歪め笑っていたのだから。
こういった危険や戦闘を好むのだろう。ゆえにこれらの兵器を提供すればいいし、もっと言えば交渉の材料に出来るかもしれない。
パイアールには微塵も理解出来ない趣向ではある。手元の機械を操作して各種トラップと扉のロックを解除すると、魔人との対面に備えることにした。

魔人になった理由

幾つかの部屋を通って、それから二階に上がったレオンハルトは長い廊下を抜けて、その部屋に入室した。
あれから何のトラップも障害もない。無駄だと悟ったのだろうが、些か拍子抜けだ。
そんな思いを持って部屋の扉を開けると、中には一人の少年が立っていた。
中は研究室、研究所内を映した映像とその手前に様々な機械。実験台と思われる低めの台や半透明の窓で仕切られた別室が覗けるようになっている。
「……よく来たね、魔人――レオンハルト」
そう言ってこちらを出迎えたのは身長１４０センチ程の小柄な少年だった。
片目を前髪で隠した髪型で、肌は白い。肉体的には華奢で筋力も戦う者のそれではないが、子供と考えれば栄養が足りておらず、少し成長しきれてないといったくらいか。元は貧乏だったのかもしれない。
そして何よりも重要なのは、少年から感じる気配。それは魔に属する者であれば一目で判別出来るもので、
「……やはり、新しい魔人か」
「そういうことになるかな。魔人の魔血魂を飲んで魔人になったからね」
やはりか、とレオンハルトは得心する。
少年の口調は淡々としており、こちらを観察するような目でこちらを見ている。そんな少年に、レオンハルトは問いを投げた。
「お前の名は？」
「パイアール」
短く、名前だけをパイアールは答えた。人間が魔人になった際、姓の方を名乗らなくなるのは自分にも覚えがある。つまり、人間社会との決別を意味するものだ。
ゆえにそこを殊更追求する必要はない。それよりも、先に言ってお

きたいことがある。
　それはここまで来る際に体験した科学の物のことであり、
「パイアール。お前の玩具は中々に楽しめたぞ。無敵結界の対策、人間にしてはよく考えたものだ。今はもう魔人だが」
「……一応言うけど、あれは侵入してくる野良の魔物を排除するためのトラップであって、僕に敵意や翻意はないよ」
　その物言いに、レオンハルトは僅かに目を細める。
　……ふむ、俺を警戒しているな。
　おそらくは魔人を倒したことで報復に来た、という可能性を疑っているのだろう。
　なのでそれを払拭してやろうとレオンハルトは声を掛けた。
「随分と警戒しているようだが……魔人を殺したからといって俺がお前に報復することはない。お前が未だ人間であれば話は別だったがな」
「……僕としてはその言葉が嘘じゃないことを祈るしかないかな」
　祈るなんて死んでもごめんだけど、と後に添えたパイアールはどうやら神を信じていない、ないしはあまり好んでいないようだ。
　優れた科学者、研究者であり、頭も良い。豊富な知恵を持つ者にありがちな思想である。理路整然としたものでなければ信用出来ないのだろう。
　だがとにかく、報復する気はない。人間であれば魔軍として潰しにかからねばならないが、魔人になったのならその理由もない。それに、
「……はっきり言って、その魔人と俺は親しくとも何ともないからな。その必要性を感じない」
　これが身内や、いなくなって困る相手であれば対応は変わっていただろうが、その魔人はその二つに該当しない魔人だ。ゆえに、新しい魔人が生まれたのならむしろ歓迎しよう。
「それに、魔人を倒して魔血魂を手に入れたのなら手段はどうあれ、お前はその魔人よりも強者だ。より強い者が上の立場を持つことは魔物社会では当たり前の事であり、そうであるなら魔人筆頭として、強

い魔人の誕生を歓迎しない理由はない」
「……ふーん、なるほどね。それは理解したよ。でも、それなら何しに来たのさ？」
「……俺がここに来た理由は二つ。一つは――」
「魔人の安否を確認するため……ってところかな。じゃあもう一つは？」
「……やはり頭は回るようだな。正解だ」
こちらに先んじて言うパイアールに正解を言い渡す。頭脳の優秀さはここの発明品を見る限り、折り紙付きだが、頭の回転の速さ、という意味でもこちらの上を行くかもしれない。分野が違うので一概には言えないが、単純な頭の良さであれば敵わないだろう。
そんなパイアールが言うように、理由の一つはそれで正解だ。かの魔人が生きているにせよ死んでいるにせよ、その確認は必須。魔人は貴重な戦力なのだ。
だがそれは、パイアールが魔人になったのを確認した時点で達成された。
ならばもう一つはと言うと、
「――確認だ」
「……確認？」
ああ、と頷く。それは逃れられないことだ。
「人間を率い、優れた科学力を持って魔人を倒した。そんなお前が、何故魔人になったのか――」
言う。何故、と、
「教えてもらおうか？」

魔人パイアールは、その問いにどう答えるべきか、思考を回した。
眼前、手を伸ばせば届く距離に魔人レオンハルトがいる。彼の鋭い視線がこちらを見下す。部屋に近づいてきた時点でその存在感は感じていた。同じ部屋にいる今、モニター越しで見るそれを何倍にも濃くした存在感がこちらの肩を重くするが、細まった視線に乗せられる

圧力はそれだけで格の違いを理解らせられるようで、
……魔人になって正解だったな。人間であればこれだけで膝を折っていたかもしれない。
報復を避けられたのも合わせて、結果的に全てが上手くいっている。
だがこの問いに上手く答えられなければ全て無に帰す可能性もあるのだ。考えざるを得ない。
言いたいことは解る。要は向こうも翻意を疑っているのだ。
この問い自体は何気ないものだが、この魔人はその答えで見えるであろうこちらの焦りや感情の動き、嘘を見抜くつもりだろう。
何しろ向こうからすれば、自分は人間を率いて魔軍と戦っていた勢力の首魁。魔人になって他の魔人を倒す可能性もゼロではない。
勿論望んで魔人になったのだからその可能性は低いと思われるが、立場上は聞かざるを得ないのだろう。
……どうする？　本当の事を言うのはあり得ないけど。
魔人になった理由は勿論姉さんのこと。しかし、それを教えるわけにはいかないし、教える気はさらさらない。
ならば嘘をつくか、しかしそれも危険な行為だ。この魔人はその嘘を見抜いてくる可能性がある。
本当のことも、嘘を言うことも出来ない。それなら、とパイアールは口を開いた。
「……人間の身では、研究が捗らないからね」
「……研究？」
頷く。パイアールが出した答えは誤魔化すことだった。
「人間の時間は有限だけど、魔人の時間は無限。研究するのに時間の問題はクリアしておきたいからね。それで魔人になることにした」
これらは全部本当のことだ。嘘ではない。姉さんを治すためには多くの時間が必要である。
嘘ではないのだから見抜けるはずはない。
「……そうか。だが――」
魔人レオンハルトが次の言葉を口にする。来るであろう言葉も予

測してあるし、その答えもシミュレーション済みだ。問題ない。
「何の為にそれほどの研究をする？」
「自分のためだよ。他に理由はない」
問いには間を置かず、即座に答えた。
これも嘘は全くない。自分のため、姉さんを治すことは自分のためである。自分の全ては姉さんに捧げる。どこにも嘘はない。
「……」
ゆえに、レオンハルトは目を細めたまま、こちらをじっと見詰めるも、何も読み取れないはずだ。
考えているようだが、嘘ではないのだから不審なところは出ていない。仮に何か怪しい部分があっても確証は何もないだろう。
そして少し時間が経つと、やがて、
「……そうか」
レオンハルトは軽く息を入れて頷いた。
何かを思うような、そんな息の入れ方だったが、その際に圧力が和らぎ、
「良いだろう、魔人パイアール。――お前を歓迎する」
「そう。それは良かった」
別に歓迎されたくもないが頷いておく。余計な火種を作ることはない。
だが、レオンハルトは続けて面倒なことを口にした。それは、
「魔人になった以上、お前の行動は自由だ。誰にも阻まれることはない。だが、魔王様――ナイチサ様の命令には従ってもらうぞ」
「……分かったよ」
面倒だが仕方ない。魔王に睨まれては研究がやり辛いどころか、殺されてしまいかねないものだ。
「それに合わせて、魔軍にも協力してもらうことになる。俺からも命令することがあるだろうが、出来れば飲んでもらいたい。それと、これから魔王城に登城してナイチサ様への顔見せをしてもらう。これはお前の為にも――」
「はい、分かった。全部了承。要するに、魔王様とその命令を受ける

そっちの命令だけ受けて後は自己責任で自由に行動していいって話だろ。面倒だからさっさと済ませよう」
面倒だったので噛み砕いて、全て了承する。こんなことで時間を浪費したくはないが、必要であれば呑むしかない。ならば面倒なやり取りは省略したいものだ。レオンハルトは頷くと、
「……そういうことだ。俺もお前の研究を邪魔する気はないが、何かを頼むことはあるかもしれん」
「……分かったよ。それより、さっさと行こうか」
やはり面倒だが、逆らったところで不利になるので渋々頷いておく。そして部屋から出ていく素振りを見せて、さっさと連れて行け、と言外に態度で示す。
するとレオンハルトは同じく部屋を後にしようとしたが、不意に立ち止まり、
「……お前も、俺に何か頼み事があれば頼んでくれても構わん」
「……ああ、そう」
頼むことなんてない。姉さんは自分の力だけで助ける。誰に手も借りない。
強いて言うなら邪魔しないでほしいってことくらいだ。
だと言うのに、
「俺はこう見えて様々な知識、情報。それを為すための手段を持っている。何かやりたいことがあるなら役に立つぞ」
「……必要を感じないけど」
自慢か。どうでもいい。そんなのは必要ない。
だが、なおもレオンハルトは言う。こちらに何かを思う目で、
「……いいから覚えておけ。そしていつでも頼んでみろ。ひょっとしたら俺は、お前の研究の役に立つかもしれんぞ」
「……はいはい、そうかもね」
もはや相手にせず、ぞんざいに頷く。気分を害するかとも思ったが、どうやら気にしていないようだった。
……お前が役に立つ？　姉さんを治せるとでも？
内心で問う。馬鹿を言うな。そんなわけがない。

ただの魔人が何の役に立つと言うのだ。多少、頭が良いくらいで調子に乗るな。
姉さんは自分が助ける。他の者の手は借りないし、借りる必要もない。他の頭の悪い有象無象ではそんなこと出来もしないのだから。
「……まあ良い。言いたいことはそれだけだ。さっさと行くぞ」
「時間を取ったのはそっちじゃないか……」
息を入れ、気を取り直したように先を行くレオンハルトに続く。
向かうは魔王城だろう。魔王ナイチサ他、多くの魔人に出会うかもしれない。
だが自分には関係ないことだ。いざこざが起こっても面倒なのである程度は対応してやるが、深く付き合う必要も、関係を持つ必要もない。
……何百年、何千年掛かったとしても、助けてみせるからね、姉さん……。
パイアールの目的はそれ一つ。それだけを成し遂げるために、パイアールは魔人の生をスタートさせた。

研究所を後にする魔人レオンハルトは、背後に引き連れる魔人パイアールを思い、内心で嘆息した。
それは、先程の室内。その先にあった気配のことである。
レオンハルトは人の気配に敏感だ。戦闘の際、視界を封じられた際や不意打ちに対応するためにも気配の察知は必須であると思っている。
無機物や死人であれば気配の察知は難しいが、そうでなければ大体の生物は察知出来る。部屋一つ分くらいは訳ないものだ。ゆえにレオンハルトはパイアールの部屋に入って直ぐに気づいた。
部屋の向こうに感じる人間の気配に。
それを守るようにさり気なく立ち塞がるパイアールの姿に、レオンハルトは気づいていた。
しかしその気配はとても弱々しいものであり、死人と見紛うほどの

ものであった。
……パイアールは俺を信用していないか。当然だが……。
いきなり出会った魔人を信用出来るはずもない。逆の立場でもそう思うだろう。
しかしそれを解っていてもレオンハルトにはパイアールの姿が、虚勢を張り続ける哀れな子供にしか見えなかった。
孤独な戦いを続けている子供。その意思と成し遂げるに足る力は称賛に値するが、
……落ち着いて周りを見る、というのも時には必要だ。
しかし自分が何を言ったところでパイアールの心には響かないし、届かないだろう。それを見切ってしまった。
レオンハルトに出来ることは、せいぜい上手く立ち回れるよう便宜を図ってやったり、それとなく助けてやれることくらいだ。
一先ずはナイチサへの謁見のための知恵でも授けてやるか、と、レオンハルトはパイアールに声を掛けることにした。

その日、新たな魔人が魔軍に加わった。
魔人を倒し、その魔血魂を飲み込むことで魔人になった人間の魔人――パイアール。
戦闘力はそれほどではないものの、優れた物を作る技術――科学力に優れるというその魔人は、周囲の予想に反しナイチサに受け入れられた。
以前からいる者ならともかく、人間の魔人を作ることはなかったナイチサのことだ。自分の血を分けた魔人を倒し、新たに魔人になった人間を殺すか生かすか、そんな賭けが行われるほどだったが、
「おお……これは何と言うのだ？」
「ナイチサ様。それはパイプオルガンです。演劇や音楽を嗜むナイチサ様への手土産として、こちらのパイアールが製作しました」
「なるほど……優れた技術を持つというのは本当のようだな。してパイアールよ。他にはどんな物が作れる？」

「……魔王様が希望するなら、何でも作れるように努力したいと思います。一応、各種兵器や機械の類であればご用意していますが……」
「ふむ、面白いな。――良いだろう。卿を余の家臣と認めようではないか」
「……ありがとうございます」
「レオンハルトも此度の働き誉めて遣わすぞ。また褒美を与えねばな」
「……私などより、パイアールに褒美を与えては如何でしょうか？それらを製作したのはパイアールであり、私は何も……」
「ふむ……それはそうかもしれぬな。ならばパイアールと卿、両方に与えようではないか。優れた者を登用してきたのであればそれは功に値する」
「……度重なる褒美に、感謝の言葉も御座いません」
「フフフ、よい。忠臣に報いるのは王の責務である。それに余はこの楽器を気に入ってしまったからな。パイアールの褒美は考えるとして、いつも通り、卿には好みの娘を下賜しよう」
「……はっ、有難う御座います……」
機嫌の良いナイチサから巨乳の美少女を下賜されているレオンハルトを見て、噂は本当だったか……、と白い目で見るパイアール。
どちらにせよ打ち明けることはないが、やはり、姉の事を言わないで正解だった、と心で思うパイアールであった。

聖女の子モンスター４

広い浴場。レオンハルトの城の一階にある巨大な部屋に、その主はいた。

風呂好きでもある魔人レオンハルト。その趣味も兼ねて作られた大浴場はこだわり抜かれた内装をしており、彼だけでなく城に住む者達にも評判の場所だ。

普段は使徒やメイド達と一緒に入り、身体を洗ってもらったり、そこからヒートアップしてお楽しみを行うのが常だが、今は一人である。

と、言うのもやはりたまには一人でゆっくり入りたいからだ。レオンハルトとしても、彼女達がお世話をしてくれるのはありがたいが、毎回それではお風呂を堪能出来ない。贅沢な悩みだと自覚しているし、ゆえに皆からは残念がられるものの、数ヶ月に一度か二度程度ではあるが、一人で入らせてもらっている。

「いい湯だな……」

広い浴槽に肩まで浸かり、熱いお湯を堪能していると気分が安らぐ。誰の目もないというのもあって開放感が凄い。足を伸ばし風呂を堪能する。このまま歌でも歌いたいたいくらいだ。本当に誰もいなければ。

「……それで、お前は何故またここにいる？　――セラクロラス」

「んにゅ、お湯気持ちいい……」

気がつけば隣に、金髪ツインテールの幼女が裸でお湯に浸かっていた。

眠そうな表情で同じく風呂を堪能するのは、４体いる聖女の子モンスターのうちの一体である〝時〟のセラクロラス。

神出鬼没である彼女だが、時たまレオンハルトのところにも遊びに来ることがある。

と、言っても数百年振りではあるが、さすがに忘れてはいない。

「まさか風呂に入りに来たのか？」

「そう……」

「……そうか……」
……別に構わないが、何というかな……。
気の抜ける返事だ。風呂に入りにわざわざ城まで来るというのはどうなのだろう。一応、聖女の子モンスターという女の子モンスターの一種のような名前をしているのだし、魔物と関係も深いのだから街の公衆浴場に行けばいいのに、と思ってしまう。身体から力を抜いているのか、風呂にぷかぷかと浮いているセラクロラスを半目で見る。というか、
「お前、また髪と身体洗う前に風呂入ったな？」
「……そうかも」
「そうかもじゃない。全く……マナーくらい守れ」
ほら、と、セラクロラスの身体を掴み抱え上げると、そのまま浴場から連れ出す。
壁際にある椅子に座らせ、同じように椅子に座ると備え付けの洗剤を使って泡を立てて髪に付けてやる。そしてわしゃわしゃと泡を立て、
「来る度に俺が洗ってやってる気がするな……たまには自分で洗え」
「んゆ……レオンハルトの方が上手だから……」
「理由になってないな」
俺の方が上手かろうが自分の髪は自分で洗うものだろう、と呆れてしまう。女の長い髪を洗うこっちの身にもなってほしいものだ。手抜きが出来ないのが面倒くさい。
実のところ自分も普段は使徒やメイドに洗ってもらってるからあまり強くは言えないのだが、その分のツケが来たのだろうか。
「ほら、お湯かけるぞ」
「んっ……」
長い髪を満遍なく丁寧に洗ってやると、お湯を流してそれを終える。次は身体か、と石鹸を取り出しながら、
……マジで子供の世話してるみたいだな……。
軽く嘆息しながら思う。自分がこんなことをしてると部下や他の魔人が知ったらおったまげる気もする。他人に奉仕する経験など皆

無に近いし、そういう立場でもない。そうしてセラクロラスの身体を洗ってやるのだが、あまり身体を動かさないので難儀する。
「ほら、腕上げろ」
「にゅー……変なとこ洗われてる……」
「誤解を招くようなことを言うな。いや、まあ確かにアレだがそう言うなら自分で洗え」
「……子作り、する？」
「しねぇよ」
とんでもない事を言ってくるセラクロラス。洗ってやってるだけなのだから誤解を招くことを言わないでほしい。だが、
……確かに、噂を立てられたら面倒だな……。
ただでさえ不名誉な噂が広まっているのに、これで金髪幼女と一緒に風呂に入った挙げ句、体を洗ってた、など字面だけで見れば邪推されてもおかしくない。ロリ野郎とか言われたらちょっとしばらく立ち直れない気がする。
出る時は気をつけるか……、自分に注意喚起をしていると、不意にセラクロラスが、
「……あ」
「ん？」
声を上げてこちらを見る。何かを思い出したような、そんな様子だ。そして、
「用事ある……」
「用事だと？」
こくり、とセラクロラスが頷いた。そして何の気なしに、
「べーちゃん……捕まってるから助けてほしい」
「……あぁ？」
再び知り合いの名前を出されたレオンハルトは、そのお願いに困惑するのだった。

暗く狭い鉄の檻の中で、彼女はひたすらに犯されていた。

「ん……」
うしなどの魂のないムシと同じ檻に入れられ、交尾を強要されているのは力の聖女の子モンスターであるベゼルアイだ。
彼女は赤い髪とその裸体を白濁れにされながらそれを受け止め続ける。
それを外から見ている者がいた。
「ブーヒッヒッヒ！　さすが聖女の子モンスター！　産む能力はピカイチのようだ！」
丸く太った身体を持つ中年の男。片眼鏡と貴族風の衣装を来たその男は、周囲をぶたのようなモンスターに守らせ、高笑いをしている。
彼は通称――バンバラ博士。
魔物やムシなどを対象に研究と実験を行っている研究者であり、聖女の子モンスターであるベゼルアイを騙して捕らえている張本人である。
バンバラ博士は新たな魔物、自分だけの配下を作るためにベゼルアイを捕らえ、ムシと交尾させることによって新たなモンスターを生みだした。
それが彼の周囲にいる二足歩行の太ったぶたのようなモンスター、ぶたバンバラである。錆びた槍、木の盾で武装した豚の獣人のようなぶたバンバラはそれほど強くはないものの、人間を殺すことが仕事であり、同時に楽しみ、生き甲斐であるという凶悪な魔物である。
他にもうしバンバラなどの様々なバンバラシリーズを作っている。その母体がベゼルアイ。聖女の子モンスターである彼女達はどんな相手とも交配し、１００パーセントの確率で孕む。
力を失い子供のような見た目になると同時に卵が生み出され、そこからは新種のモンスターが生まれるのだ。
そうして生まれる新種のモンスターに、バンバラ博士は目をつけた。本来であれば人間に従うはずもない魔物であるが、どういうわけかぶたバンバラ達の多くはバンバラ博士に忠実である。結果的に、バンバラ博士の目論見はうまくいったのだ。
「ブヒヒ！　もっと、もっと産み落とすのだベゼルアイ！　私だけの

兵隊を！　そうして私は、人類の支配者になるのだ！　ブーヒッヒッヒ！」
「……」
　ベゼルアイはそれに答えない。真顔のままバンバラ博士を見ている。
　何を考えているのかは解らない。しかしそれでもバンバラ博士はご機嫌なようで、高笑いを続ける。
「ブヒヒ！　ブヒヒヒヒ！　ブーヒッヒッヒ――ぎゃあああああああ!?」
　不意に、バンバラ博士が悲鳴を上げて地面に倒れ込んだ。
　倒れ込んだ地面には、バンバラ博士のものである血が身体から吹き出し、地面を赤く染めていく。
　周囲のぶたバンバラ達が右往左往する中、その暗い洞窟に現れたのは、
「――大層な野望だな」
　魔人レオンハルトだ。
　彼はその手持った魔剣を鋭く振り、刀身に付いた豚の血を落とすと、牢屋の中にいた知り合いを見て、
「……本当にいるとはな……まあ、とりあえず――」
　既に絶命しているバンバラ博士を踏み越え、周囲のぶたバンバラを威圧する。
「殺されたくなければ消えろ。いいな？」
「っ――！」
　ぶたバンバラ達が怯えたように一斉に頷く。
　そしてその言葉に従い、洞窟から一目散に逃げ出していった。そうして静かになった洞窟で、レオンハルトは息を吐き、
「……久し振りだな、ベゼルアイ」
「ん……？　あら、レオンハルト君じゃない。久し振りね」
　牢屋に捕らえられ、無心でその場にいたベゼルアイはレオンハルトが声を掛けると極めて普段どおりに対応する。だが、その姿は酷いものであり、長期間の間、ここでムシに犯されながら生活していたこと

を感じさせるものだ。
「ちょうど良かったわ。そろそろ出たいから出してくれない？」
「……」
レオンハルトは眉間に皺を寄せながらも、一応、彼女の頼みに応じて剣を振る。
鉄格子を斬り、ベゼルアイを繋いでいた異常な数の鎖も斬り裂き、ついでにムシ達も斬り殺すと、ベゼルアイはすくっと立ち上がり、
「ん……やっと自由になったわ。ありがとね。それじゃ外に出ましょうか」
何事もなかったかのように外に出ようとするベゼルアイ。それを見て、レオンハルトは、
「いやお前……大丈夫なのか？」
「……何が？」
「……いや、随分と酷い目に遭ってると、セラクロラスに聞いてやって来たんだが……」
「んにゅ……べーちゃん、久し振り……」
「なるほど、セラが助けを呼んでくれたのね。ありがとう。だけど、べーと呼ぶのはやめてって言ってるでしょ」
こちらの背後から顔を出したセラクロラスに、ベゼルアイがいつものやり取りを交わす。
やっぱりいつも通りでしかないベゼルアイに軽く戦慄というか呆れてしまう。何というか、
「お前、犯されたこととか閉じ込められてたこととかで思うことは無いのか？」
「出してくれないことは困ったけど、新しい子もいっぱい生まれたし結果的には良かったわ」
「……そうか……」
先程生みだしたばかりなのだろう。卵を見て言う子供状態のベゼルアイ。
逞しすぎる彼女を見て、釈然としない思いを抱えてしまう。やはり魔物を生み出すことを使命とする聖女の子モンスター。それも使命

に熱心なベゼルアイだ。常人とは価値観が違う。
長期間捕らえられ、犯され続けたはずなのに、直ぐ様立ち上がり歩ける辺りもさすが〝力〟のベゼルアイといったところだろう。
だが、
「……さすがにちょっと気怠いわ。レオンハルト君、運んでくれる？」
「……別に構わないが……先に身体を洗わないか？」
汚れた状態のベゼルアイを見て言う。するとようやく気がついたのか、身体に付着したそれらを眺め、
「……そうするわ」
真顔で頷いたので、とりあえず身体の汚れを落としてやることにした。

「ふぅ……久し振りのシャバは気持ちいいわね……」
「シャバってお前な……」
汚れを落とし、洞窟からベゼルアイを連れて帰還したレオンハルトは、城の食堂で料理に舌鼓を打つベゼルアイを見て呆れたように呟いた。
色々と用意させたが特に甘いものをよく食べており、その趣向は変わっていないことが解る。
「久し振りにちゃんとした物を食べたから凄く美味しく感じるわ……」
「……何ともツッコミ辛い話だな」
どうやら数年以上閉じ込められていたらしい。聖女の子モンスターは八級神なので栄養を摂らなくても死ぬことはないが、それでも久し振りの食事はさぞかし美味しく感じることだろう。
「そんなことより！　このロリっ娘達は誰なんですか!?」
と、声に出したのは使徒のペールだ。
ペールは食事を摂るベゼルアイとセラクロラスを指差し、
「レオンハルト様、まさかロリ趣味に目覚めてしまったとか……」
「誤解を招くようなことを言うな。こいつらは聖女の子モンスター

だ」
「聖女の子モンスター？」
首を傾げるペール。そう言えば説明したことなかったかもしれない。
キャロルやハンティは当然知っているし、他の者達も知っているものと思ってしまっていた。
「モンスターの産みの親みたいなものだ。昔からの知り合いでな。力を使ったり卵を産んだ後はこんな風に子供の姿になる」
「ベゼルアイよ。よろしくね、ペールちゃん」
「よろしく……」
ベゼルアイとセラクロラスが挨拶をする。食事をしたまま。
そんな二体を見てペールは、一応頷くと、
「……なるほど。つまり、大きくなってから頂いてしまおうと――」
「頂くの？」
「頂かねぇよ！」
セラクロラスの件を考えると言い切ってしまうのもアレだが、変な噂が立つのは避けたいので否定しておく。
するとペールが微妙に残念そうな表情を浮かべた後、気を取り直したように、
「……とりあえず、昔からのお友達なんですね。でも確かに、言われてみればキャロル先輩からそんな話を聞いたことがあるような……確か、街に恋したんですよね？」
「それはハウね」
ハウ？　と聞き返すペール。レオンハルトとしても微妙な想いを抱える相手だ。ベゼルアイが説明する。
「惚れっぽい子で、街もそうだけど花や雲にも惚れてしまうのよ。以前レオンハルト君にも惚れてたわ」
「あっ、そうなんですか？　だったらお仲間ですね！」
「……そういや、アイツはどうしてるんだ？　また変な相手に惚れ込んでるのか？」
少し気になったのでペールの言葉を無視して聞いてみる。以前は

色々あったのもあって曖昧なまま別れてしまったので、少しだが、悪い気持ちもある。おそらくはまたいろんな相手に恋をしては振られているのだろうが、と思っていると、
「……そうね。前会った時も別の相手に惚れてたわ。だけど……ちょっと厄介な感じにはなってるわね」
「厄介？」
　ええ、とベゼルアイが頷く。こちらの目を見て、
「レオンハルト君のせいよ」
「……あ？」
　……俺のせい？　どういうことだ？
　何がどうしたら俺のせいになるのか、とレオンハルトが胡乱な表情を浮かべる。しかし、
「いつも通り、新しい恋を見つけた時は良いんだけどね。振られるとレオンハルト君のことを思い出してブルーになるらしいわ」
「……俺を思い出して、どうして気分が沈むことになる？」
「振られてないせいね」
　ベゼルアイは簡潔に言った。続けて、
「あの時は色々あったから、曖昧なまま別れたでしょ？　だから未練が残ってるのよ」
「……新しい恋は？」
「あの後も直ぐに別の相手に惚れだしたから大丈夫だと思ってたんだけど……終わったらぶり返して、自己嫌悪した後、新しい恋見つけてって感じでループしてるわ」
「……前より酷くなってないか？」
　何とも言えないが、こじらせすぎだろう、と思う。人間的に言うなら、片思いしていた相手に振られてない内から別の相手に惚れたが、しかし振られてしまい、吹っ切れたと思ったら以前の片思いの相手を思い出した挙げ句、自分のビッチさに自己嫌悪している――という状態だろうか。しかし、
「聖女の子モンスター何だから気にする必要もないだろう」
「私もそう言ったんだけどね」

人間の尺度で言えばちょっとばかし問題があるかもしれないが、聖女の子モンスターの使命を考えると何も問題ない。むしろ使命を果たしているので良いことをしているとも言えるし、そもそも魔物社会でその辺を深く考える必要もないと思うが、気になってしまったのだろう。
「というわけで見かけたらでいいから少し気にかけてくれる？　会う度に拗れていってるからちょっと面倒くさいわ」
「ぶっちゃけるな。……別にいいが、思い出した時点で会いに来そうなものだがな。あの性格だと」
「ハウも負い目があるみたいね。あの時も気にしていたし、珍しく自重してたわ」
「……そうか」
　惚れた相手を監禁して、強制的に一緒になろうとするアレな性格であれば直ぐにすっ飛んで来てもおかしくない、と思ったのだが、どうやら気を使ってくれたらしい。
　レオンハルトは大きく息を吐くと、
「……まぁ、見かけたら話してみよう」
「お願いね。……それはそうと、ここのお菓子、凄く美味しいわね」
　おかわり、といつの間にか皿を空にしていたベゼルアイが言う。話の合間に食べていたが、凄まじい速度だ。よっぽど美味しかったのだろう。話題の急転換に何とも言えない気分になりつつも、レオンハルトは気を取り直し、
「お前も以前食べた、街の料理のレシピを開発した料理長が作ってるからな。あの時よりも美味いだろう」
「ええ……本当に美味しいわ……久々だから余計に……やっぱり、この街に住もうかしら……」
「……別に構わんが、お菓子に釣られていいのか？　聖女の子モンスター……」
　しっかり者に見えるベゼルアイだが、こういうところがあるから騙されて捕らわれてしまうのではなかろうか。妙に抜けている部分がある気がする。

そして、気がつけば視界の端で、セラクロラスがペールの膝に乗り、
「……72点の膝……」
「それは高得点でいいんですか？」
先程まで近くにいたセラクロラスが移動している。それを見て、
「ある意味、セラクロラスが一番まともかもな……」
「……ロリコンなの？」
「違う」
ベゼルアイの言葉に食い気味でツッコミを入れ、レオンハルトは久々の再会を楽しんだ。

ケイブリスの憂鬱

魔軍の拠点である魔王城。
魔王の居城でもあるそこでは定期的に魔人達が集まり、定例会を行うことがあった。
今日はその定例会の日であり、普段は大陸各地で人間を苦しめ、好き勝手動いている魔人達が集まってくる。他の生物を圧倒する隔絶した力を持ち、我も強く曲者だらけの魔人達は纏まりも悪く衝突することも少なくない。
しかし定例会など魔人達が一堂に会する場では、諍いはそれほど起きない。何故ならその場には他の多くの魔人――魔人四天王、魔人筆頭、場合によっては魔王もその場に姿を現すこともある。自分と同格、もしくは格上の存在が集まる場で揉め事を起こせば上位の存在の不興を買い、手痛い目に遭うからだ。
ゆえに諍いが起きるのは集合前か、定例会を終えた後である。
「――おいっ！　ケイブリス！　無視してんじゃねぇっ!!」
「……あぁ？」
そんな中、リスの魔人である魔人ケイブリスも、定例会を終えて帰るところであった。
しかし背後から怒声を浴びせられたので振り向く。聞こえた声によっては即座に振り向き、ぺこぺこと頭を下げるのがケイブリスの常であるのだがその様子は見られない。
振り向くとそこには三体の魔人が立っていた。
……何だ、やっぱりゴライアスか。しかも他の二体付きかよ……。
ケイブリスの予想通り、その声を上げてきたのは魔人ゴライアス。アベルの時代から生きてる古い魔人の内の一体で、よくケイブリスを苛めてきていた魔人でもある。巨人族の魔人であり、身長はこちらよりも大きい。
荒っぽい性格の、荒っぽい声を向けてくる魔人を僅かに首を上げることで見上げる。その際に、横の魔人が、
「……ケイブリス。私達を無視するとは何事ですか？」

……相変わらずねちっこくてうざいな、オスロの野郎……。
もう一体もよくケイブリスを苛めてくるちゃそばの魔人である魔人オスロ。カエル顔の気持ちの悪い奴で、よくゴライアスとセットでこちらを苛めてくる。こちらはゴライアスよりは頭が回るのか、周囲を気にしながら声を掛けてくる。以前のように半殺しにされないよう注意し、こちらに掛ける言葉も選んでいるのだろう。自己保身だけはいっちょ前だ。
そしてその後ろにももう一体、
「そ、そうだ！　ケイブリス！　お前、何様のつもりだ!?」
……うぜぇな。踏み潰してやろうかセイロンのカス野郎がッ!?
ちゃつみの魔人であるセイロンが二体に追従するようにこちらに強い口調を浴びせてくる。こいつもアベルの時代からいる魔人の内の一体だが、魔人の中ではかなり弱い方であり、常に味方の魔人の傍に擦り寄っている。一緒になってこちらを苛めてくることで難を逃れている金魚の糞だ。最弱のケイブリスがいたからこそ立場を保てているだけの存在。その生き方はケイブリスにとって理解出来るものではあるが、ウザったいことには変わりない。
だが、そのセイロンは昔と違い、こちらを少し怯えた表情で見ている。ゴライアスなんかは無視されたことにイラつき、オスロは少しだけいつもの小馬鹿にした表情を隠している。
その理由は解る。簡単なことだ。
……けっ、俺様がちょっと強くなった途端これか。ざまぁねぇな。
己が、昔と比べて格段に強くなっていること。それゆえに対応を変えているのだ。
身体も大きくなり、ゴライアス以外の二体の身長を越えている。実力に至ってはこの三体を越えてしまっているだろう。
とはいってもまだまだ中級魔人程度。上級魔人の手前、といったくらいだ。それほど強くはない。
虐められた恨みを晴らそうと三体をブチ殺すことも可能だろうが、
……いや、まだわかんねぇ。確実に勝てるくらい強くないと……しかも、向こうは三体だぜ？

こちらの方が不利だ。死んでしまうかもしれない。一対一なら勝てる自身もあるが、それでも確実ではないし、三体なら尚更だ。
万が一でも自身が負け、死ぬ確率がある限り、ケイブリスは動かない。それがケイブリスの生き方であり処世術なのだ。
ゆえに、
「……あっ、ごめんなさい。少し考え事をしてまして。何か御用ですか？」
腰を低めに対応する。雑魚のセイロンだけ、もしくは新参の弱い魔人共であれば強気に、あぁ!? うっせーぞ、ボケ！ 死ね！ といった具合に対応するのだが、そこそこの強さの二体。一応三体もの魔人が同じ場でこちらに敵意を向けているのだ。ここは下手に出るのが正解だろう。
……今すぐぶっ殺してやりたいのは山々だが……慎重にやらねぇとな。
少なくとも今はその時ではない。そう思い、ケイブリスは揉み手をしながら対応を待つ。
すると正面、こちらを見下したゴライアスが凄んだ顔で、
「何か御用ですかじゃねぇんだよ！ てめぇ、最近調子に乗ってねぇか!? ちょっとばかし強くなったくらいでよぉ！」
「……そーですかね？ 調子に乗ってるように見えたなら謝りますよ。すみませんでした！」
……うっせぇんだよ馬ぁ鹿クソボケ!! 俺様はもうテメェより強ぇのよ！ だから調子に乗って何が悪い！ さっさと失せろやゴミ！
と、内心でボロカスに言ってやるも、三体に勝てるとは限らないのでさっさと謝ってしまう。しかし未だゴライアスの怒りは収まらないようで、
「てめぇ、俺らのこと舐めてんだろ!? 媚びへつらいやがって、心の中では舐め腐ってんだろうが!?」
「そんな……誤解ですよ、ぺこぺこ」
……当たり前だろうがゴミカス！ そのうち俺様が更に強くなっ

たらテメェは真っ先にぶっ殺してやるから覚悟しとけやぁ！
　そうやって躱していると、オスロが前に出てくる。そして大声で怒鳴り続けるゴライアスに向かって注意するように、
「ゴライアス。その、声が少し……」
「お前もムカついてんだろ！　なぁ、オスロ！　こいつは手出されないと思って調子くれてやがるんだよ!!　ここらでシメとかねぇと腹の内が収まんねぇだろうが!?」
「……そ、そうですよ！　三体ならボコボコに出来ますから一緒にやりましょう、オスロさん！」
　……あ、テメェ、セイロン！　何てこと言いやがるクソがぁ……！
　もし万が一戦いになりでもしたらテメェは真っ先に潰してやるからな!?
　強くなったとはいえ三体一は不安が残る。出来れば戦いを回避し、もしくは逃げてしまいたい。
　しかしセイロンの申し出を受けたオスロは考えるように顎に手を当てた後、ややあって、
「……しかし、以前のようにレ、レオンハルト様に見つかりでもしたら……」
「ひっ……」
「ッ……それは……」
　その言葉に、セイロンだけでなく、ゴライアスまでもが苦虫を噛み潰したような表情で言葉に詰まる。
　六百年ほど昔の話だが、以前ケイブリスのことをゴライアスとオスロが苛めていた際、レオンハルトが乱入してきて半殺しにした事件があった。その時の恐怖を思い出しているのだろう。
　あれからというもの、オスロは露骨にレオンハルトを警戒して前よりも避けるようになったし、ゴライアスの方も反発することは無くなった。魔人筆頭という誰もが認める力を持つ魔人レオンハルトを畏れているのだ。
　それを見て、ケイブリスは内心で爆笑する。
　……ぐぁはぁはぁ！　ざまぁぁぁぁーーーっ!!　そうだ！　俺

様に手を出したらレオンハルトが黙ってねぇぞ!!　もし来なくても逃げ切った後でチクってやるからな！　手を出せるもんなら出してみやがれ!!

　こちとらレオンハルトの子分であり、そのために千年近く媚びてきた身だ。時に大好物のこかとりすを献上し、時に好みだという巨乳の美女を献上してきた、レオンハルトの覚えめでたいケイブリスだ。それは向こうも知っている。ゆえに手を出せまい、とケイブリスは堂々と口を開く。

「……あー、そういえば僕、レオンハルト様に用事があるんでした！　だから帰ってもいいですか!?」

「ぐ、てめぇ……！」

　ゴライアスが怒りに染まった瞳でこちらを睨んでくる。怖くとも何ともない。どうせ何も出来やしないのだから。

「……諦めましょう」

「そ、そうですね。れ、レオンハルト様に目を付けられるなんて……」

「……クソがっ!!」

　オスロとセイロンがゴライアスを宥める。

　さぞかし屈辱的だろうと思うが、いずれもっと屈辱的な目に合わせてやる、とケイブリスは心を燃やしていた。

　……そのためには強くならねぇとな。不安で眠れもしねぇ……。

　もう数百年、ケイブリスは眠れていない。それは周囲の危険な状況、魔人達や魔王の恐怖から来るものであり、いつ殺されるか分からないのに寝ていられない、という不安の表れだ。

　安心して眠るためにも強くなる、その想いを心に秘めて、ケイブリスはその場を後にしようとした。

　しかし、

「――ハァッハッハッハッ！　くたばれ目玉ぁぁぁぁぁ!!」

「――ユーがダイするね！　メイクドラーマー!!」

　廊下の揺れとともに、二体の魔人がケイブリスらの前に飛び出してくる。

　お互いに僅かな傷と、汚れを作った二体の魔人を見て、ケイブリス

はぎょっとした。
……げっ!?　レキシントンにレッドアイ!?
原因は解らないが、状況的に喧嘩をしているらしき二体の魔人に冷や汗をかく。
赤黒い肌を持ち、巨大な二つの棍棒をその怪力で振り回す鬼の魔人レキシントンと、二足歩行の巨大な魔物に寄生し、その身体を操りながら最上級の魔法をアホみたいに唱える宝石の魔人レッドアイ。
どちらも危険な魔人だった。戦いがアホほど好きで、レオンハルトにすら定期的に喧嘩を吹っかけるというアホとしか思えないレキシントンと、そもそも狂っていて強くなることと生き物を殺すことにしか興味のないキチガイのレッドアイ。その二体の戦闘に、ケイブリス達は巻き込まれそうになっていた。
同じ現実を認識し、慌てる他の魔人だが、ゴライアスがレキシントンに向かって怒声を浴びせる。
「てめぇ、レキシントン！　こんなところで喧嘩してんじゃ――」
「ああん？　誰だお前。儂の喧嘩を止めたきゃ力づくで来ーーーい!!」
名前も顔も憶えてないのか、ゴライアスの言葉を一蹴するレキシントン。
続いてオスロがレッドアイに向かって、
「レッドアイ！　こんなところで戦ったらどうなるか、解らない貴方では――」
「……ユーは誰さんか？　田中さんか？　今はミーのパワーをそこの鬼にルックさせてる最中ね。邪魔をするならユーの方からキル・あなた！　クケケケケ！」
こちらはさらに話が通用しない。レッドアイは瞳を煌めかせ、魔法の詠唱に入る。
再び、レキシントンとレッドアイの戦闘が始まった。
「うおおおっ!?」
ケイブリスが咄嗟に身を翻した瞬間、二体がぶつかり合う。先に攻撃をしかけたのはレッドアイであり、魔法光とともに光の奔流が発生

する。それは、
「メイクドラーマー!!」
白色破壊光線。続けて黒色破壊光線。魔法としては最上級の威力を持つそれは、凄まじい魔力を持つレッドアイが放てばその分、威力が高まる。その両方の魔法を平然と発動すると、レキシントンの方も二本の棍棒を持って迎え撃つ。
「効、く、かあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
二本の棍棒を振り回し、光線を受け止めるレキシントン。
魔人一の怪力を誇るレキシントンはレッドアイの魔法を受け止めると、多少のダメージに怯むことなく足に力を込め飛び上がるようにレッドアイに向かって棍棒を振り下ろす。
その際に、邪魔なゴライアスやオスロは吹き飛ばされ、セイロンに至っては隅で震えている。
「ハハハハ！　ぶっ殺してやるわい！」
「ボーンも残らずキル・あなたよ！」
二体の魔人の戦いに、出るに出れなくなったケイブリスは、廊下の隅に隠れながら内心で叫ぶ。
……ちくしょーーー！　この戦闘狂ども！　よりによって何で俺様の近くで戦いやがるんだ!?
下手に出ていくと巻き込まれてしまう。それだけは避けたい、と、ケイブリスはカーテンで身を包むようにして隠れるが、それも時間の問題な気がする。レッドアイが広範囲に効果を及ぼす魔法を発動したり、レキシントンのあの長い棍棒がこちらに当たるかもしれない。
一か八かで逃げてしまうか、と、ケイブリスが決断を迫られていると、
「――何をしてる、この馬鹿共」
「――む？」
「――オ～……？」
レキシントンとレッドアイ。その両方の間に割って入り、攻撃を受け止めた影があった。
それは当然、この場にいる皆が知る魔人であり、それだけの力を持

つ魔人だ。
「ここは魔王様の居城だぞ。喧嘩なら外でやれ」
「ハハハ！　レオンハルトか！　何だ、お前も儂と喧嘩しに来たのか!?」
「……ん～……レオンハルト。ユー、あなた、か……」
　魔人レオンハルトが、その手に魔剣を持ち、二体を威圧する。鋭い目で二体を交互に見ると、レキシントンは嬉しそうに声を上げ、レッドアイは何かを思考するように動きを止めた。
　戦意を沈めたレッドアイから視線を切り、レキシントンに向き直ると、目をさらに鋭く細め、
「俺は忙しい。外で喧嘩しようってんなら構わんが……一瞬で終わらせるぞ？」
「……ほーーー？　くく、それは楽しみだ。ならば外で待っているぞ！　ハーッハッハッ!!」
　レオンハルトに戦意をぶつけられ、むしろ戦意を滾らせたレキシントンが豪快に笑いながらその場から立ち去る。次にレオンハルトはレッドアイに視線を向けると、
「……お前はどうする？　レッドアイ。暴れ足りない、というなら俺が相手になってやるぞ？」
「……オー、ミーは遠慮しておく」
「なら大人しく帰れ」
「オーケー。ミーは帰る。帰ってヒューマン共をキルしてくるね！」
　簡潔にそれを拒否したレッドアイは、物騒なことを言いながらレキシントンとは別方向に去っていった。
　そうしてその場には、戦闘の爪痕とケイブリスだけが残った。他の魔人は、
「壁が壊れたか……修理させないとな」
　壁の向こう、外に吹っ飛んでいってしまったのだろう。レキシントンとレッドアイの攻撃の恐ろしさが垣間見える。巻き込まれなかったセイロンはさっさと逃げてしまったのか、その場にはいない。残ったのは、ケイブリスのみで、

「……ケイブリスか。大丈夫だったか？」
「あ、はい！　大丈夫でした！　ありがとうございます、ぺこぺこ」
カーテンの外に出て、レオンハルトに頭を下げるケイブリス。しかし内心では、
……来るのが遅ぇんだよ！　魔人筆頭ならもっと早く来やがれ！
生憎俺様まで巻き込まれるところだったぜ、全くよぉ！
来るのが遅かったレオンハルトに悪態をついていた。そんなことを考えているとは知らないレオンハルトは、息を入れると、
「無事なら良い。ちょうど、お前を探していたところだ」
「へ？」
……探していた？　俺様を？
思わず間の抜けた声で応じてしまう。一体何の用だろうか、と思っていると、レオンハルトは懐から二振りの剣を取り出し、
「――ほら、プレゼントだ」
「え、うおっと……」
二本の大剣を手渡される。その重さに不意を突かれ、少しよろめいてしまうが、それよりも言われた言葉の意味を理解するのに必死だった。
「プレ、ゼント……？」
半信半疑のまま聞き返すもレオンハルトは、ああそうだ、と頷き、再度プレゼントだということを告げてくる。
「いつも世話になっているからな。それに貰い物ばかりでお返しが何もないのも何だ。お前も強くなったし、これくらいの業物を持っていてもいいだろう」
「え、あ、それは……」
予想だにしていなかったイベントにケイブリスは戸惑ってしまう。
……貰い物なんて初めてだな。なんて言えばいいんだ……？
迷った挙げ句、ケイブリスはいつもどおり頭を下げてお礼を口にした。
「あ、ありがとうございます……」
「日頃のお礼だ。気にするな」

「は、はぁ……」
釈然としない。自分にプレゼントなど、頭が沸いてるのだろうか。それとも何かを企んでいるのだろうか。
解らず、しかし渡された大剣をまじまじと見る。見る限り、確かに良い物な気がする。
だが、
「これ……かなり大きいんですが……？」
その大剣は身長が２メートル近くになったケイブリスを越える程である。それが二本。魔人の筋力を考えると使えなくもないだろうが、少し使いづらいと思った。
なので確認の意味も込めて聞き直すと、レオンハルトは苦笑し、
「そうかもな。……だが、お前ならそのうち使えても不思議ではない。とある迷宮で見つけたんだが……お前に上げるのが一番良いと、何となく感じてな」
「は、はぁ……そうですか……あ、いえ、ありがとうございます！」
貰ったものに不服な様子を見せている気がして慌ててお礼を言う。あぶね、とケイブリスが焦っていると、レオンハルトはそれを見て、ふっ、と笑って踵を返すと、
「その大剣の名は、ウスパーとサスパーだ。精々使ってやってくれ――」
「……分かりました」
じゃあな、とレオンハルトは先程レキシントンが向かった方向に歩いていった。約束していた外で喧嘩を行うのだろう。それも気になるが、それより、
……俺様の剣か……いや、でもなんか裏があるんじゃねーか……？
猜疑心が強くなってしまう。しかし、物は良いもののようで、
「……おら！」
何となく大剣を振ってみる。
少しでかいが、不思議と手に馴染むものだ。何とも言えない気分を感じる。
「……まぁ……使ってやるか……」

……返せ、って言われても返さねぇからな……？

いやまあ言われたら返すんだろうが。怖いし。レオンハルトは魔剣を持っているから必要がないのだろうし、言われないとは思うが。

ケイブリスは何とも感じたことのない微妙な気分を感じ、心をモヤモヤさせながら帰路に就いた。

使徒エルシール

私の名前はエルシール。元人間の貴族だ。
貴族といっても悪党に家を没落させられ、領地内の村落で性処理用の共用奴隷として飼われていたので、元貴族、というのが正しいかもしれない。
だが今の私は元人間の使徒エルシールだ。性奴隷として苦しんでいたところを魔人ケッセルリンク様に救われ、血を分け与えられた。人間を止めて、使徒になる。その意味は知っていたが私を地獄からすくい上げてくれたケッセルリンク様のためならば、使徒になって仕えることにも後悔はない。そして人間にも未練はない。大切な方と共にに居れる生であればそっちの方がいい。
かくして私は姓を捨て、ケッセルリンク様のお世話をする使徒メイドになった。なったのだが、
「――あっ！」
ガシャン、という音とともに白い破片が地面に飛び散る。お皿を割ってしまったのだ。その音に反応して、近くにいた女性が見かねて近づいてくる。
「エルシール？」
「あっ、ご、ごめんなさい！」
声を掛けてきたのは同じく、ケッセルリンク様の使徒メイドを務めるパレロアだ。使徒としては二番目らしい。彼女に注意をされ、慌てて頭を下げるも、
「大丈夫よ。まだ慣れていないものね。それより怪我は無い？」
「それは大丈夫ですけど……」
「なら良かったわ。私も手伝うから片付けましょう？」
「は、はい……」
申し訳無く思い、しかし一先ず割ってしまったお皿を丁寧に片付けていく。
パレロアはこう言ってくれているが、これでもう五回目だ。メイドの仕事、家事全般がとても苦手な私は使徒になってからというもの迷

惑をかけてばかりである。これではケッセルリンク様には勿論、先輩方にも申し訳ない。
「……私、ちゃんと出来るようになるんでしょうか……」
不安に思い、そんなことを口に出してしまう。言ってから、弱音を吐いてしまった、と少し後悔するが一度吐いた言葉は飲み込めない。
パレロアが苦笑を向けて、
「大丈夫よ。私も、最初は失敗ばかりだったから。エルシールも慣れたら大丈夫よ」
「そうでしょうか……」
「ええ、きっと。それに、使徒の仕事は家事だけではないわ」
「他の仕事……ですか」
パレロアの言葉を反復する。使徒になって日が浅いのでそれほど仕事をこなしたことはない。
だが、人間時代に貴族としての教育は受けてきたので、それが活かせるような仕事なら出来るだろうか、と思う。後は、
「もしかして、戦いとか……」
不安になって尋ねる。戦いなどしたことがないからだ。魔人の使徒になったのだから少なからずそういう機会は巡ってくる。なので怖じ気付いてはいけないのだろうが、それも徐々に慣れるだろうか。
そんなことを思っているとパレロアが少し間を置いて、
「……そうね。そういう仕事もあるわ。でも、使徒の仕事は主を支えること。だから戦闘だけでなく、本当に色んなことをするわ。例えば――」
「あら、何のお話？」
と、不意に横から声が掛けられた。
柔和な笑みを携えてそこに立っていたのは、ケッセルリンク様の使徒の中で一番の古株であるシャロンで、パレロアが簡潔に説明する。
「エルシールに、使徒のお仕事について教えていたんです」
「……はい……やっていけるかどうかが不安になってしまい……」
顔を俯かせてしまう。しかしシャロンは、なるほどね、と頷くと、笑みのままで続けた。

「……エルシール。これからちょっとした集まりがあるのだけど、良かったら一緒に来ない？」
「え……集まり、ですか？」
「ええ。使徒同士の、ちょっとした仕事の調整なのだけれど、エルシールはまだ他の使徒と顔を合わせていないでしょう？　レオンハルト様のところ以外は」
「はい。そうですね……」
魔人レオンハルト。それはケッセルリンク様と仲の良い魔人であり、魔人筆頭、魔軍参謀である御方だ。
以前、使徒になってすぐに城に行き、ケッセルリンク様に紹介してもらった。物凄く怖いイメージを持っていたが、意外とそうでもないような、少なくともケッセルリンク様や、同じく仲の良い魔人のガルティア様と話しているところを見る限りは親しみやすい雰囲気であった。
シャロンやパレロアも普通に接していたので怖くて強いだけの魔人ではないらしい。ケッセルリンク様もそうだが、魔人も結構お優しい人が多いのだろうか、と、ちょっとだけ胸のつかえが取れた気分だった。
だが使徒の集まり、と言うと、
「……私なんかが行っても大丈夫でしょうか」
「ええ。大丈夫よ。仕事の調整もあるけど、それ以外はちょっとした世間話をするだけだから。慣れるためにもちょうど良いと思うわ」
「……それならお願いします」
少しでも早く仕事とこの生活に慣れるため、やれることはやりたい。頭を下げてお願いすると、シャロンは、ふふ、と温かい笑みで告げる。
「なら早速行きましょうか。パレロア。後を任せるわね」
「ええ、いってらっしゃい。エルシールも、頑張ってね」
「はい。頑張ってきます」
丁寧にお礼を言うと、内心で気合を入れて、シャロンの後に続いた。

魔王城。その二階。
一階とは違い、警備の魔物兵などを除けば魔軍の幹部、魔物隊長以上でなければ立ち入ることも許されないその階に、エルシールはシャロンとともに居た。
……初めて来たけど……凄い城……でも、ちょっと不気味なような……。
やはり魔王が住む城となれば雰囲気もおどろおどろしい。城内は内装や調度品も含めて整っているが、不気味さは抜けない。上の階からは微かな音楽――曲のようなものが響いているのも、雰囲気に拍車をかける。
気持ち、シャロンとの距離を詰めると、シャロンがそれに気づき、あらあら、と声を上げた。
「ふふ、これは魔王様が最近気に入っていらっしゃるというパイプオルガンの音よ。そんなに怖がらなくても大丈夫。普通にしていればいいわ」
「……そう、ですか……」
と、言っても怖いものは怖い。だが、怖い、と認めてしまうのも癪だ。シャロンにはバレているだろうが、せめて態度だけでも虚勢を張っておく。ケッセルリンク様の使徒として、メイドとして恥ずかしいところを見せないように。
そうしてしばらく歩いていると、目的の部屋に近づいてきたのだろう、もうすぐですよ、と、シャロンが告げてくれる。
すると反対側から同じように歩いてきた男がいる。お互いに気づいて近づくと、部屋の前でちょうど合流する形になり、
「こんにちわ、七星さん」
「ええ、どうも。シャロンと……そちらの方は、ケッセルリンク様の新しい使徒ですか？」
整った顔立ち、瞳を閉じた長身痩躯、長衣の男だ。察するに彼も使徒なのだろう。シャロンが笑みを浮かべ、こちらを紹介するように手で示す。

「ええ、新しく使徒になった者です。――エルシール」
「……はい。私は、新しくケッセルリンク様の使徒になったエルシールです。よろしくお願いします」
「私はカミーラ様の使徒――七星です」
お互いに無難に挨拶をし合う。カミーラ。確かケッセルリンク様と同じ魔人四天王の一人だ。その使徒ともなればやはり貫禄がある。見た目は人間に近いが、どうも元人間ではないような気がする。そう推測していると、
「とりあえず、中に入りましょうか」
「そうですね」
七星の言葉に頷くシャロン。先に七星が扉に手を掛ける。
三人で中に入ると、そこは会議室のような広い部屋だった。
「――来ましたわね！」
と、部屋に入るなりに声が聞こえた。
そこにいたのは金髪ツインテールで、青い改造軍服のような服を着た少女。レオンハルトの使徒――キャロルだった。彼女は部屋に入ってくる三人を見るなり、最初に入ってきた七星にビシッと指を突きつけ、
「どうやら私の一番乗りだったようですわね！　七星、今回は私の勝ちですわね！」
「……そういうことになりますか」
ふふふ、と得意気な笑みを浮かべて胸を張るキャロル。それを見た七星が軽く息を入れる。キャロルが続けて、
「ふふん、悔しいでしょう？」
「いや、別に構いませんが……」
「構いなさいっ！　敗者は悔しがってリベンジを誓うのがマナーですわー！」
なんで悔しがってないんですのー！　と、憤慨するキャロル。レオンハルトの城でキャロルには会っているので彼女のことは知っているが、こんな性格だっただろうか、と疑問を覚えていると、
「皆さん、どうもです」

と、同じくレオンハルトの使徒であるペールが挨拶してくる。シャロンが笑みを返し、
「こんにちは。今日もハンティさんはお留守番ですか？」
「あはは、そんなところですよう。まあ今日はちょっと、月イチのアレと被っちゃってるのもあるんですが……」
「月イチのアレ？」
よく分からない語句に首を傾げてしまう。まさか、と思っていると横のシャロンが得心したように頷き、
「……ああ、アレですね。確かにハンティさん、アレの後は辛そうですし、来れないのも仕方ないでしょうね」
「そーなんですよう。見てる方もキツそうなので、今日はお留守番してもらいました。……巻き込まれたくないですし」
最後、小声で呟いたペールだが、二人の会話にエルシールは困惑する。
……え、え？　月イチのアレで辛いって……いや、まさか……。
使徒なら無い気がするんだけど、というか、二人共結構普通にそんな話するんだな、とか色々思ってしまう。魔物社会では結構そういう話題はオープンなのだろうか。自分もなにかあったら相談した方がいいのだろう。
いやでも……、と、内心で抵抗を覚えていると、キャロルの方が七星との会話が一段落付いたのか、シャロンに向かって、
「シャロンさん。これ、先日遠征に行った時のお土産ですの！　是非、食べてくださいな！」
と、何やら折り詰めされた箱を手渡してくる。食べる、というからにはお菓子だろうか。シャロンが、ふふ、と小さく笑い、
「ありがとうございます、キャロルさん。後で頂きますね。それと、この前のお土産のお返しにお菓子を焼いてきましたので良かったらどうぞ」
「まぁ、ありがとうございますの！　でしたらシャロンさん、一緒に頂きましょう！　シャロンさんとお茶したいですわ！」
「ふふ、ええ。構いませんよ」

そう言って、キャロルが予め準備していたのか、お茶を淹れ始める。笑い合ってる二人は何というか、
……二人、凄く仲が良いのね……。
正直意外だ。主同士が仲が良いからだろうか、性格は結構違いそうなのに随分と親しげである。不思議を感じていると、シャロンは七星にも声を掛け、
「良かったら頂きませんか？」
「……仕事は――」
「やりながらでも出来ますわ！　ほら、優しいわたくしはライバルを仲間外れにはしませんの！　だから七星の分も用意してあげましたわ！　感謝して頂きなさいな！」
「……しょうがないですね」
ふぅ、と息を吐きながら七星は、やれやれ、といった面持ちでお茶を頂く。しかしその様子とは裏腹に慣れた感じにも見える。キャロルの様子から察するに、いつもの事なのかもしれない。
そうやって観察していると、
「ほら、エルシールさんも、一緒に頂きましょう！」
「え、ええ……」
ペールがこちらの手を取って椅子に座らせてくる。
……使徒同士も、思ったより仲が良いみたい。
もっといがみ合ってるイメージだったが、そうでもないようだ。シャロンが焼いてきたお菓子を口にしようか、と、テーブルに座りながら考えていると、再び部屋の扉が開いたことで皆がそちらに注目する。入ってきたのは、
「おう、来たぜー」
「戯骸さん！　こんにちわですの！」
「戯骸、ですか……」
すらりとした筋肉質の男。戯骸、と言うと確か、魔人ザビエルの使徒だったはずだ。同じ魔人四天王の。
その登場にキャロルは快く迎えたが、七星は微妙な顔になる。それに反応した戯骸は煙管を加えながら七星に近づいていき、

「おお、七星。何だ、俺が来るのは嫌だったか？　かーっ！　俺はお前と会えて嬉しいのによ！　薄情な奴だぜ！」
「い、いえ、そういう訳では……」
ささっと、距離を取る七星。どことなく顔が青褪めているのはどうしてだろう、と、首を傾げる。
すると代わりにペールが返事をした。少し勢いづいて、
「当然ですよう！　だって、戯骸さん以外だとアレな人ばっかりで接しにくいですし、今日は戯骸さんが来てくれて嬉しいです！」
「ハハッ、嬉しいねえ。まー、あいつらはちょっと癖が強ぇからなぁ……。悪気はない、とは言い切れねぇけど、数少ない使徒仲間だ。あんまり邪険にしないでくれや」
「戯骸さんがそう言いますし、レオンハルト様も露骨に態度を変えるな、って言うからちゃんと営業スマイルしてますけど……やっぱ苦手なんですよねぇ。特に魔導さんは生理的にちょっと……」
「おいおい、そりゃあしょうがねぇ部分だ。あんま言ってやんなよ？
不細工とか言うとアイツ怒るぞ」
「……イイマセンヨー」
棒読みになるペールに、戯骸が肩を竦める。
……魔人ザビエルの使徒には気をつけろ、ってケッセルリンク様も言っていましたが……この方は、何となく良い人に見えますね……。
さばさばした好青年、と言った感じだが、実は裏で酷いことをしてたりするのだろうか。いや、魔人の使徒なのだからほんとは皆酷い人、もとい魔物なのだろうけど。性格的な意味でだ。
後、どう見ても人外っぽい。何の種族だろうか。加えた煙管から時折炎を吹き出しているあたり、炎に関係する魔物、と言った感じか。ちょっと強そうだな、と警戒していると、戯骸はこっちに歩いてきて、
「嬢ちゃん、隣いいかい？」
「え……あ、はい。どうぞ」
「あんま固くならなくていーぜ。俺は戯骸だ。あんたの名はなんて言うんだ？」
「……ケッセルリンク様の使徒、エルシールです」

「ほう？　道理でちょっとやりそうだと思ったぜ。まあよろしくな」
「？　ええ……よろしく」
やりそう、と評され疑問符を浮かべる。
どういう意味なのか分からないが、悪い意味に聞こえないのはどうもこの戯骸の雰囲気というか話しやすさが原因だろうか。男はあまり得意ではないが、接しやすい気がする。魔人のガルティア様に近いだろうか。
しかし、さっきの言を聞いてる限りでは、この戯骸以外はアレだったりするのだろう。そちらが来た場合は気をつけないといけない。
そう思っている間にも戯骸はキャロルとシャロンに話しかけられており、
「戯骸さん、これ、この間の遠征で撮ったレオンハルト様の写真ですの！」
「うおっ!?　これは……良い！　良い写真だな！　惚れ惚れするぜ！　ありがとよ！」
「戯骸さんも良かったらどうぞ。お口に合うかどうか解りませんが……」
「おお、美味しそうじゃねぇか。ありがたく頂くぜ」
……やっぱり仲が良いのかしら。
使徒って思ったより緩いなぁ、と思う。気が抜けた、というか拍子抜けだ。
開き直ってこちらも少し気を抜いて楽しもうかと、紅茶を口に含む。香り立つ茶葉と染み渡る味が心地良い。そうやってようやく心を落ち着けた。
その時だ。
「――こら、ジュノーの馬鹿ちん！　あんたが寝坊するから遅れちゃったでしょうが！」
「――うるさいなぁ……昨日、朝方まで飲んでたから寝てないんだよ……ふわぁ……」
「それは私も同じだっての！」
と、言い争うようなやり取りとともに扉が開けられた。怒った女の

声と、気怠げな男の声。
この部屋に入ってくるということは使徒だろう。次は誰の、どんな使徒だろうか。
……今の所、意外と良い人だらけだけど――
と、エルシールは入ってきた二人を、特に一人を見て、凍りついたように固まった。
一人、灰色の肌をした青い髪の女性がバツが悪そうに笑いながら入ってくる。
「ご、ごめーん。遅れちゃったわ。こっちの馬鹿のせいで……」
「そんなに待ってないから大丈夫ですわ、アトランタさん！」
アトランタ、と呼ばれた使徒らしき女性はキャロルに声を掛けられ親しげに会話をする。しかし、
……な、なんで全裸……!?
全裸だった。杖を持ち、灰色の肌で、耳が長く、スタイルの良い美女で明らかな人外だが、裸だった。
それを誰も指摘することなく、普通に受け入れる。エルシールが困惑していると、もう一人が目に入った。
「もう、ジュノーさんは駄目ですねえ。あんまりアトランタさんを困らせたら駄目ですよう？」
「うわっ、ペール……相変わらずでかいおっぱい……うぷっ、吐きそう……」
「ちょっ！　このつるぺた好き！　なんて失礼なこと言うんですか!?」
「ハンティなら良かったのに……」
「……それ、聞かれたらハンティさんに殺されますわよ、ジュノーさん……」
珍しく、キャロルが微妙な表情でツッコミを入れる。
それを聞いた戯骸が笑い、
「ハハハ、相変わらずだなジュノー。良い男で目の保養になるな。俺の隣、座れよ」
「げっ、戯骸。やめてよね。あんたと一緒にいると僕までホモと思わ

れるじゃないか」
「あら、貧乳が好きなんだから良いじゃない。一回くらい掘られてみたら？」
「嫌だよ、気持ち悪い」
　アトランタの言葉にジュノーと呼ばれた男がツッコミを入れる。短く濃い紺色の髪、少しだけエルシールに似た髪の色に、どこか飄々とした褐色肌で引き締まった身体の美青年、と言った感じの男だ。
　しかし、その男も――
「あ、あ……」
「ん？　誰、そっちの。新入り？」
「馬鹿あんた、恰好的にケッセルリンク様の使徒に決まってるでしょ……。こんにちは、私はレキシントン様の使徒――アトランタよ。よろしくね？」
「ん、僕はジュノー。レキシントン様の使徒ね。よろしく――」
　と、エルシールは近づいてきた魔人レキシントンの使徒だというアトランタ。そして、ジュノーという――全裸の男を見た。
　エルシールの視線が徐々に下に降りていくと、そこにはジュノーの堂々とさらけ出された股間があり――
「――きゃあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっっ!?」
　それを視界に入れたエルシールの悲鳴が部屋中に響き渡った。
「どうしたんですか、エルシールさん!?　急に叫んで……」
「――っ！　――っ！」
　何事か、とペールが身体を支えてくれると、口をパクパクとさせながらジュノーを指差す。それを見て、
「ちょっとジュノー！　なに新入りを怖がらせてんのよ！」
「はぁ!?　僕は何もやってないんだけど!?」
「……ああ、そういうことですか」
　と、不意に七星が気づいたように声を上げた。皆が注目する中、七星は説明するように、
「ジュノー。……おそらく彼女は、あなたの裸を見て悲鳴を上げたの

でしょう」
　あー……、と皆が納得したような声を一斉に上げる。しかしジュノーは納得していないようで、
「僕の美しい肉体を見て悲鳴を上げる要素がどこにあるのさ!?」
「前から解ってたけど、馬鹿でしょあんた。いや、私が言えることじゃないけどさ」
　ナルシストを発動するジュノーにアトランタが半目でつっこむ。他の者達も口々に、
「……はっ、そういえばアトランタさんにジュノーさんも！　全裸ですわ!?」
「今更ですよう!?　いや、確かに慣れてしまった感はありますけど……そういえば最初はビックリしましたねぇ……」
「まぁ使徒的には、露出が高いのは珍しいことではないですが……カミーラ様もどちらかと言うとそういうのお好きですし……」
「俺も好きだぜ。ジュノーの裸」
「戯骸さんは意味が違うのではないでしょうか？　……とにかくジュノーさん？　一時的で構いませんので隠してくれませんか？」
　にっこりと笑みを浮かべてシャロンが締める。そのことにジュノーは不服そうに、
「一時的にって……これからも顔を合わせる度に隠さなきゃならないなんて、僕はごめんなんだけど。慣れてもらったほうが早いんじゃない？」
「一理あるわねぇ。魔物的には珍しくないし、私も隠す気はないし……」
「……とりあえず、今日だけはお願いします」
「ちぇっ、しょうがないなぁ……」
　と、シャロンにお願いされ、ジュノーが渋々とではあるが股間を隠す。テーブルに置いてあったお菓子の蓋だ。こっちの方が変態度が増すな……、と皆がしみじみ思う中、ペールとシャロンに立たせてもらいながら、不意に、横から何かを差し出される。そこにいたのは、
「……」

……あ、確か、ラウネア……？

魔人ガルティアの使徒――ラウネア。蜘蛛の下半身を持つ黒髪の少女の見た目をした使徒が、こちらにおしぼりを差し出してくれる。一番人外なのに妙に優しくて、その優しさが染み渡る。汗を拭きながら、

……私、本当にやっていけるの……？

新たに始まった使徒生活が前途多難過ぎて、不安を隠せないエルシールであった。

英雄の生まれた日

魔物界。
レオンハルトシティから北西にある山間部。
木々に囲まれた窪地、そこにある滝壺を中心とした水場には幾つもの傷があった。
周囲に生き物の気配はない。魔物界なので人の気配がないのは当然だが、元々は魔物や多くのムシが生息していたものだが、いつからかこの水辺を避けるようになっていた。
理由は明快だ。この場所が、魔人の修行場であり、月に一度、その魔人と使徒が模擬戦の場所に使う場であったからだ。
轟音とともに影が吹き飛ぶ。その持ち主は長い黒髪で額に赤いクリスタル。黒のレオタード風の衣装を来た元ドラゴンカラーの使徒――ハンティだ。
彼女は苦悶の声を上げてそのまま滝に激突する。水飛沫が発生し、重力に引かれて滝壺に落ちてさらに小さな水柱が上がる。水の中から顔を出したところでハンティは主の声を聞いた。
「また単純な仕掛けに引っかかったな。――ちょうどいい時間だし、一旦休憩だ」
「っ……自分の使徒を気軽にぽんぽん吹き飛ばすんじゃないっての！ ったく……」
冷たい水の中から身を起こし、一応抗議の声を浴びせるもそれで改善されるわけがないことは自分がよく知っている。もう数百年以上この調子なのだから。それを自分に強いている相手、魔人レオンハルトはそれを聞いて片方の口端を上げて笑みを浮かべると、
「ちゃんと滝に向かって吹き飛ばしてやってるんだからダメージも少ないだろ？　木や岩にぶつけるよりはマシだ。それに……お前も水に濡れたおかげでいつもより美人になってるじゃないか。良かったな、ハハハ」
「死ね！」
「おおっと」

水の中に隠すように忍ばせていた短剣を素早くレオンハルトの顔目掛けて投擲する。休憩、と言われたがムカついたので不意打ちだ。しかし憎たらしいことに首を少し横に傾け、余裕を持って避けられる。

分かってるぞ、という顔がかなりイラッとするがこんなことはいつものことだ。レオンハルトは戦闘でノッてくると、テンションが上がり、普段はあまり言わないような軽口を連発してくる。仕事以外の仲間内の間でもあまり言わないことも、戦闘時には言ってくる。戦いを楽しんでいる時の癖だ。今も、ニヤついていたので一つ前の言葉について反論する。それは、

「大体、単純な仕掛けって言うけどあんた、自分のやってること理解してる？　回避不能の技を、瞬間移動も使わずに避けるか受けろって馬鹿なんじゃないの？」

「酷い言われようだな。だが、それを考えるのがお前の修行だ。つまり、お前も馬鹿になることだな――ほらよ」

「ん、馬鹿にはなりたくないんだけど……」

言いながら投げ渡される水筒を受け取る。

中に入っているのはこの山の湧き水である。それを少しだけ口に含むと、滝壺から這い上がって適当な岩に腰を下ろす。すると向こうも適当な岩に背中を預けた。手に持っていた魔剣を収め、腕を組んでこちらを見ると、

「これもお前のために言ってるんだけどな。お前は俺と戦って強くなり、強くなったお前と戦うことで俺もまた強くなる。これで永遠に強くなれるからな。完璧な計画だ」

「……あたし、たまにあんたが物凄い馬鹿なんじゃないかって思う時があるんだけど……今まさにその時だね」

どんな理論だ。普段、魔軍参謀として頭脳労働をしている者の言葉とは思えない。戦いの時は脳が蝕まれているんだろうかとさえ思う。戦闘時はほんと馬鹿というか性格変わるなぁ、と。

だが、

「だからさっさと一本くらい取ってくれると助かるんだがな」

「……言われなくても取るっての」
「そう言い続けてどれくらい経ったかな……」
「くっ……！」
わざとらしくそんなことを言うレオンハルトにむかっ腹が立ち、衝動的に雷撃を発動しようとしてしまうも、
……ふぅー……冷静に、冷静に……。
戦いになると熱くなり、軽口を言ったり馬鹿になる。そんな評を主に付けたが、他ならぬ自分も、そういった傾向にあることを、ハンティは自覚していた。
これも主人の、魔人の使徒になった影響なのか、とも思うし、元々こうだったような、とも思う。どちらにせよ、乗せられるのは少し癪で、
「……大体、あんた今でも最強とか何だの言われてるのに、これ以上強くなってどうする気？」
気を取り直して問いを投げる。前々から思っていたことだ。
戦いを楽しむのは理解出来るが、既に充分な強さを持つレオンハルトが、これ以上の強さを求める理由がイマイチ解らない。
それこそ、魔王とか一部の例外を除けば、レオンハルトより強い生物はこの地上にいないだろう。
なので聞いたみたが、レオンハルトはそこで少し真面目な顔になると、
「……強いことに越したことはない」
「……いや、そりゃそうだけどさ」
もう充分強いじゃん、と言う言葉は首を振られ、即座に否定された。
「魔物社会において、強さは何よりも重要だ。強ければ下の者達を従わせ、腕に覚えのある者にも容易に手が出せなくなる。俺の身内、部下達が街で安全かつ快適に暮らせるのも、俺という存在が抑止力になっているからだ」
「それは……分かるけど」
確かに、使徒になって魔物社会で生活していればそのことは骨身に染みるものだ。

魔物は力を重んじる。魔人達もそうだ。強者は弱者に何をやっても許される。法というものがない魔物社会での唯一のルールは、魔王の命令と、強者に目を付けられないこと。

ゆえに魔物達は魔王や魔人、魔軍が定めたルールを守るし、他者に殺されないよう身内での争いは出来るだけ控える。暴虐な行いは、より強い者のひんしゅくを買うからだ。

魔物社会はよく、人間社会よりも自由だと言われるが、本当に自由なのは一握りの実力者のみであり、殆どの魔物達は暗黙のルールに則って生活している。人間社会と変わりない。明確な法と罰がないだけだ。

レオンハルトの街が、あのように文化的で、レオンハルトに忠誠を誓っているのは、生活や安全をある程度保障され、魔軍での働きにおいても他の軍に比べて良い思いが出来るからだ。

だが、そのことも元はと言えばレオンハルトの実力があるからであり、弱ければ幾ら魔王のお気に入りとはいえもっと荒れていたし、統率も規律も取れていなかったかもしれない。

それにやはり、実力行使が取れるのと取れないのとでは全然違うもので、

「……弱すぎて困ることはあるけど、強すぎて困ることはないって？」

「そういうことだ。最近は俺に喧嘩を売ってくる魔人もいる。追いつかれないように俺も鍛える必要があるだろう」

「……なるほどね」

得心する。レオンハルトは最近、魔人レキシントンから定期的に喧嘩を申し込まれている。時たまレキシントンが城にやってきて、喧嘩するぞ、と馬鹿笑いしながら大声でレオンハルトを呼ぶのだ。確かに、あれは鬱陶しい。

……それに、ザビエルも何かときな臭いしね……。

こちらの周りをうろちょろと嗅ぎ回っているような動きが散見される。レオンハルトから話を聞く限りだと、弱みでも探っているのだろうが、特に直接的な動きはない。精々、レオンハルトがよくザビエル本人から絡まれてるというくらいで、

……ま、そういうとこは嫌いじゃないけどさ。
身内や仲間、城の人間達や街の部下達を大切にするレオンハルトは魔人としては珍しい部類に入るだろう。そのために強くなろうとしていることは素直に美徳だと思える。しかし、
「でもいいの？　強くなりすぎたら、また本気を出せる相手がいなくなると思うけど」
そもそもそういった理由で自分は使徒になったはずだ。熱い戦い、というのはレオンハルトが数少ない、気兼ねなく楽しめるものであり、ハンティとしても色々と気苦労の多いレオンハルトが楽しむため、と言うなら使徒として働くのもやぶさかではない。他の使徒がやってるアレな働きは絶対にお断りだが。それについては色んな意味で関わりたくない。
なので心配してみたのだが、レオンハルトはそこで一度考える素振りを見せ、
「……まぁ、確かにそれはあるかもな。今でさえ、俺が本気を出して耐えられる相手はほぼ皆無だ」
だが、と、レオンハルトはそこで、ふっ、と笑みを見せると、
「これから先はどうなるか解らん。もしかしたら――俺と同等以上にやり合える人間も出てくるかもしれないぞ？」
「……はぁ？」
言われた言葉に疑問というか、胡乱な視線を向けてしまう。
……レオンハルトと同等以上の人間？　この化け物と？
ハンティは即座に否定した。
「いやいやいや、ありえないでしょ!?　あんたみたいな化け物とやり合える魔人ですらいないってのに、しかも人間？　そんな人間現れたら世の末もいいところね。いたとしても、ちょっと人間と認めたくないかな……」
「ククク、分かんねぇだろ？　ひょっとしたら俺を越える化け物が現れるかもしれないぜ？」
「何でちょっと楽しそうなのよ……もしそんなのが現れたら……いや、人類的には助かるかもだけどさ……」

不敵な笑みを浮かべるレオンハルトを半目で見る。
自分としては戦うことになりそうなのもあってそんな人間がいたら悪夢であるが、人間にとって少しは救いになるかもしれない。魔軍に立ち向かい、多くの魔物、魔人を倒し、魔物に苦しめられる人間を多く救うことが出来るだろう。
だが、きっと魔王には勝てないだろうし、仮に勝ててもその先に待つのが平和だとも限らない。この世は理不尽で、バランスが取れるように出来ているものだ。均衡は保たれ、仮にどちらか一方に傾いた場合でもすぐに元に戻る。
長く生きていればそんな厳しい現実が理解出来るようになるものだ。しかし、一時的にでも救われるなら、取り返しが付く範囲でなら良いことのはずで、
「……いや、無理。やっぱ想像出来ない。あんたより強い人間を想像しても人間じゃない化け物が出来上がる」
「人間、やれば何だって出来るものだ。……いや、魔物や他の生物であってもな。だからお前も強くなる努力を欠かすなよ。そのうち、その化け物を目にすることもあるかもしれねぇしな」
「会わないことを願いたいんだけど……まぁ、強くなることはやめないけどさ」
「ほう？　いい心がけだな。それでこそ、楽しめるってもんだ」
そう言ってレオンハルトは赤い双眸を煌めかせ、戦意をぶつけてくる。休憩は終わりだ――と、そういうことだ。
ハンティは立ち上がり、戦意を乗せた視線をレオンハルトにぶつけ、
「そろそろ一本くらい取りたいからね――」
「――ハハ！　精々頑張れよ……！」
お互いに戦闘態勢を取った。時間的に後一回くらいはやり合えるだろう。しかし、
……最近、妙にギラギラしてるし……おかげで大変なんだけど……！
模擬戦の際の気合いの入り方が、ここ数百年無かったレベルのもの

だ。軽く本気を出しているのではないかと思うほど。おかげで攻撃も激しく、生傷が絶えないし、全然一本を取れる気がしない。
戦う度に着実に強くなる最強の魔人にして自分の主に、それでも一矢報いるため、ハンティは向かっていった。

……そうだ、ハンティ！　もっと向かって来い……！
魔剣を構え、瞬間移動を用いて突っ込んでくる自らの使徒を、レオンハルトは迎え撃つ。
その心にあるのは――歓喜。
そして、待ちきれないという期待の感情であった。
レオンハルトが気兼ねなく本気を出せる相手など、ほぼ存在しない。先程語ったそれは事実であり、強くなればなるほど愉しめる相手は少なくなり、戦いでの愉しみは少なくなる。
その悩みを再び、レオンハルトは味わうことになるのだ。
だが、
……未来はどうなるか解らねぇ……！
そう。今は確かに存在しない。
自分を愉しませることの出来る人間など夢物語だ。空想の類でしかない。
しかしこれから先、生まれてこないとも限らないものだ。
それを、レオンハルトは知っている。
自分を愉しませる――あるいは圧倒出来るかもしれない戦士の存在。
人間という存在が生まれて約千年。地上を血で染める魔王が君臨して既に六百年近く。自分という存在が生まれて千年を越える。
そろそろ英雄が現れてもおかしくない頃合いだ。
もし――本当に現れたのなら、
……そいつは――俺の獲物だ。
誰にも渡す気はない。
全身から溢れる闘気を必死に抑えながら、レオンハルトはその相手

を心待ちにしていた。

――ＮＣ６６１年。

魔人レオンハルトがハンティとの月イチの模擬戦を行っている最中。

とある国では、一つの命が生まれたところであった。

「――様、この男児の名前は……」

「うむ。もう決めてある」

畳の部屋の中で、お産を終えた女の手に抱かれた赤子に、男は名前を付ける。

その名は――

「――石丸」

――この日、後世に名を残すことになる一人の男児が誕生した。

夢

ＪＡＰＡＮの春は正に長閑、という言葉が似合う季節であった。
爽やかな風に澄み渡る空。冬の間は物言わぬ木々たちは一斉に芽吹き、色とりどりの花を咲かせる。農民達も田畑に出て、種を巻き始める季節でもある。野山では冬眠から覚めた獣達が野を行き交うようになり、雪解け水が湧き水となって麓に降りてくる。地震や妖怪による災害に悩まされるＪＡＰＡＮに於いても、それは長閑と形容してもいいものであった。
そんな穏やかな春の季節に、桃色の花――桜の木が生え、咲き乱れる庭園がある。
そこはある貴族の屋敷であり、敷地内には警備の召使い。この屋敷に仕える――武士、侍と呼ばれる者達がいた。和装に身を包み、刀を帯刀した彼らはＪＡＰＡＮ特有の階級、職業であり、ＪＡＰＡＮを牽引する存在である。
地震、妖怪、鬼、様々な災害――特に妖怪や鬼に対抗するために武装し始めたのが起源とされ、彼らは一つの共同体として家という形を取り、その土地を収め、勢力を作った。
それが武家。武士、侍が属するＪＡＰＡＮの盟主達であり、この屋敷はその武家の一つ――藤原家が所有する屋敷であった。
その庭園の真ん中で、武士を圧倒する者がいた。
「やぁ――！」
「むおっ!?」
武士は手に持っていた訓練用の木刀を弾き飛ばされ声を上げる。気がつけばもうひとつの木刀が武士の顎を下側から突き上げるように添えられていた。
木刀を突きつけているのは、武士の身長の半分程しかない男児であった。顔立ちは歳相応の幼さがありながら、しかしどこか猛々しさを感じる強い目をしている。その瞳が、武士を射抜いた。それに気圧されるように武士は言う。
「……参りました」

「うむ！　良い腕であった！　また頼むぞ！」
少年の上から目線の言葉に武士は、は……、と短く平服するしかない。
しかし不快に思うことは何もない。この男児、侍が仕える藤原家の四男として生まれた。つまりは主君の子であり、幼かろうとも身分は上。武士にとって身分というのは重要なものだ。
加えて言うならこの男児――石丸は齢三つの時に初めて剣を握り、五つの時には既に超越した剣技を振るっていた。今は七つ。藤原家に仕える武士の中で上から数えた方が早いこの武士であっても、相手にならなくなってきている。つまりは今更であり、天より賜ったとも云われる藤原家きっての剣の天才。麒麟児に負けたとて恥になろうはずがない。
しかしその人間離れした剣の強さが、四男であり家督を継げる位置にいない石丸を、更に冷遇せしめることになろうとは皮肉でしかない。その強さを、彼の兄達や父、果ては石丸が慕ってやまない母からも疎んじられ、主城から離れたこの屋敷に、半ば臭いものに蓋をするように預け置かれたのだ。
石丸の破天荒な性格も災いした。年の割りにしっかりとした考えと、教養を理解出来る頭を持っていたが、その素行は些かやんちゃに過ぎた。
屋敷を抜け出すのは当たり前、悪戯の常習犯であり、野山に出て獣や魔物を狩ってくることは日常茶飯事、それに姫様まで誘って行くのだから仕える武士や召使いからすればたまったものではない。あまりにも頻度が多いので、狩りに限っては敢えて許可を出し、供を付けることで解決しようとしたくらいだ。
しかしそれでも石丸は抜け出すことをやめないので、屋敷にいる武士達は半ば諦めた。というのも、武士達、召使いも何故か破天荒な石丸のことを嫌いにはなれず、一部の武士や召使いからは好感まで持たれるほど。理由は解らないが、人を惹きつける何かがある、と、石丸とよく手合わせを行う武士は見ていた。
特に女人にはよく好かれる。子供、というのもあるが端正に整った

顔立ちのおかげだろうか。全くもって羨ましいものである、と武士は屋敷に戻っていく石丸を見て一息ついた。

石丸は武士との手合わせを終えると、中庭の井戸から水を汲み、一口飲むと、縁側に腰掛けた。

すると手合わせを見ていたのだろう、綺麗な着物を着た幼子が近づいてきた。そして石丸を見て一言。

「石丸さま……すごかった……！」

「む、そうか？　春には解らないであろう？」

春、と呼ぶその姫の名は――春姫。

歳は石丸より二つ下。短く切り揃えられた桃色の髪が特徴的な藤原家の縁戚の姫であり、訳あってこの屋敷で共に暮らしている。謂わば幼馴染であった。石丸が良く外に連れ出すのもこの春姫である。内に籠もっていてはつまらんだろう、という善意によるものであるが、春姫はともかく召使い達は困っていた。あまり悪影響を与えないように、とお達しが来るほどである。

だがそんなこともお構いなしに、石丸は話しかける。解らない、と言われた春姫は頬を膨らませて怒ってみせる。

「むー、わかるもん。石丸さまは、あぶないことがとくいなんです」

「危ないことなどない！　俺は天才だからな！」

ハハハ！　と豪快に笑う石丸に、春姫はムスッとした表情になる。しかし、すぐに不安そうな表情に変化し、

「でも、あぶないことはだめですよ……外にでるのも……こわいし、けがしちゃうかもです……」

「外に出たくらいで怪我などせんわ！　それに、外に出ることは怖いだけではないのだぞ！」

と、石丸は脇に置いていた幾つかの書物を手に取った。それは屋敷に置いてあった書物の中で、特に石丸が好む書物らである。内容はどれも似たり寄ったりな冒険物語。その中で毎日読むほどにお気に入りの一冊を手に取ると、石丸は春姫に見せつけるように掲げてみせ

る。
「外は楽しくて興奮することでいっぱいだからな！　内では出来んことも沢山出来るぞ！」
「……でも、ともも付けずにそとにでるのはよくないですし……」
「たわけ！　付けずに出るから良いのではないか！　知らぬことがあれば自分の目で見て確かめるのが面白いものよ！」
　供を付ければ、何かと説明し、主君の子である石丸には危ない行動をさせないように働く。それも仕方のないこと故、理解は出来るが、自分で何か出来ないのは楽しくない。
　それでは意味がない、と石丸は力説する。
「冒険とは、己の力で切り拓き、踏破するから面白い！」
「だから、剣のれんしゅうをしてるんですか……？」
　石丸は頷いた。笑みとともに、
「自らの武勇で魔物を倒し！　新たな発見に胸を躍らせ！　夢を叶えるのが男児の本懐よ！　俺はな、春よ。己の力で夢を叶えてみせるぞ！」
「夢、ですか……？」
　春は何だか解らない、といった様子で首を傾げた。しかしそれに構わず、石丸は無邪気な笑みで夢を語る。
「そうだ！　故に元服したら直ぐに旅に出るぞ！　後、数年であるからな！　うかうかしてはいられん！」
「……でも、石丸さまは藤原家の――」
「俺は四男。家督を継げはせんからな！　誰も俺の行く末など気にしておらん！　精々、適当な縁を結ばせ、手駒にするつもりであろう！」
　春姫の問いを理解し、被せるように答えてみせる。
　石丸は自分の立ち位置をよく理解していた。自分が周囲、親兄弟からどう思われ、何故ここにいるのかも。
　だがそのことで恨みを持ったり、憤慨することはない。それは仕方のないことだ。だが、
「自分の行末は自分で決める！　俺は夢を叶えるために旅に出るぞ！」
　こんな小さな屋敷では、俺を閉じ込めておくには狭すぎるからな

！」
親が、主家が何する者ぞ！　と、石丸は豪快に笑う。周囲、たまたまそれを耳にした武士や召使い達はそれを聞かなかったことにした。面倒事には関わりたくないものである。
そして、それを聞いていた春姫は顔を俯かせ、
「……そう、ですか……」
残念そうにそう口にした。
ところが、
「……？　何を言っている。お前も連れて行くに決まっておろう！」
「へ……？」
春姫は顔を上げ、石丸を見上げる。そこには、憤ったような、不満そうな表情の石丸がおり、
「冒険にはそれを見届ける者が必要であろう！　……それに！　お前もこんな屋敷で一生を過ごすのは嫌であろう！　腐ってしまうぞ！」
「く、くさる……」
その言葉に春姫は嫌そうな顔になる。それを見て石丸は更に勢いづいて続けた。
「そうだ！　腐りたくなければ俺と共に来い！　俺の傍で俺の冒険を――俺の夢が叶うその時を見届けろ!!」
「……」
石丸は真っ直ぐで、そして無垢な瞳で、そう言い切った。
口元を釣り上げるような不敵な笑みを浮かべ、子供とは思えぬ堂々とした威風を身に纏う。
しかしその子供らしい小さな手は、春姫に向かって差し伸べられていた。
春姫は、暫しの間呆気にとられたような間の抜けた表情でそれを見ていた。しかしやがて、ゆっくりと、その手を伸ばす。
「……石丸さまの、夢……それは……それは、何なのですか……？」
疑問は自然と口から出た。石丸が言う。
「……まあ、春なら良いか。誰にも言うんじゃないぞ？　……俺の夢はな――」

春姫の手が、石丸の手を掴む。石丸も握り返し、春姫を引っ張り上げる。
――それは子供の頃の夢。
――しかし、今も変わらない昔の夢。
――それは藤原石丸という男の冒険の始まりであり、
――私と石丸様の……夢の始まりであった。

――夢を見ていた。
「――……丸様！　石丸様！　起きて下さい！」
「む……？」
こちらを揺り動かす振動と、声を聞いて覚醒し、薄っすらと目を見開くと、そこには見慣れた顔があった。
その男――藤原石丸は短い桃色の髪靡かせた女の名を呼ぶ。
「……春か。どうかしたか？　もしや夜這いにでも来たか？　それなら大歓迎だ」
「ち、違いますっ！　そうじゃなくて――あんっ」
眼の前の女性――春姫の着物。石丸がその膨らんだ胸元に手を伸ばすと、春姫は声を上げた。
柔らかい果実の感触を堪能していると段々と微睡んでいた意識が覚醒し始める。次いでに股間の刀剣も抜刀を心待ちにしている。石丸は身を起こした。
「一回だけ構わんか？」
「構います！　今はそんなことしてる場合じゃ――んんっ！」
今度は尻を撫でる。また春姫が声を上げた。
やはり容姿の整った女を堪能するのは男児の本懐だな、と、その女体をまさぐっていく。
「起きる為に必要な行為だからな。うむ、これは仕方ない。一発沈めてもらってからでないと身体に力が入らんからな」
「う、だから……駄目、駄目です……」
「駄目とは可笑しな事を言う。身体の方は準備が出来ているようだが

――がふっ!?」
と、下半身に手を伸ばしたはじめた石丸であったか、そこで不意に石丸の頭に打撃が飛ぶ。
短い声を上げ、頭を抑える石丸に、続いて飛んできたのは声であった。
「――戯け者がァ!! 軍議中に睡眠を貪るだけでは飽き足らず、何を情事に耽けようとしておる!!」
「むぅ、痛いではないか。何をする、麻呂よ。今は俺と春の情事の最中であるぞ」
「大事な軍議の最中じゃ馬鹿者が!!」
褐色肌の、白く立派な髭を蓄えた武者が怒鳴り声を上げる。
その爺の名は――坂上田村麻呂。
石丸の剣の師であり、征夷大将軍という武家の棟梁ともいえる要職に就く爺だ。そんな大事な仕事があるというのに、石丸の冒険に付いてきた変わり者の爺であるが、その元々の目的は元服するなり旅に出た石丸と春姫を連れ戻すためであり、旅の最中に何度も石丸と戦っている。
しかしいつの間にか旅に付いてくるようになり、いつしか、石丸の片腕、とも呼ばれるようになった。
そんな爺の隣に座する男が、顎に手を当てながら言う。
「小生としましても、さすがに軍議の最中に秘め事を行う者は初めて見ましたなぁ……全然秘めれておりませんが。しかしそれもまた一興でありますか……観覧させていただいても宜しいかな?」
「良くないです! 怒りますよ、ミッチーさん!」
「駄目でありますか……残念」
春姫の一喝にさほど残念そうでもなく言う男は――菅原ミッチー。
石丸や春姫とは幼い頃からの付き合いであり、世間では学問の神様、とも云われている男である。――変態だが。
着流しに煙管、ニヒルな笑みを浮かべた傾奇者といった美丈夫であるが、幼い頃より様々な教養を学び、大陸にも出て知識を得たＪＡＰＡＮでも一、二を争う知恵者だ。

しかしスケベな事でも有名であり、遊女遊びを毎日のように行い、官能的な詩や小説をよく書いている変態である。太政大臣、という政の長ともいえる要職に就いている。
ミッチーが手元の紙に筆でさらさらと何かを書いていると、今度は反対側に座っていた女武者がしなをつくりながら石丸に視線を送った。
「ほう、石丸様は溜まっておるのか。ならば、わしと一戦――」
「戯けが小娘ェ！　朕の言葉が聞こえておらんかったのか!?」
「さっきからうるさいぞ糞爺！　ぶっ殺してやろうか!?」
「殺せるもんなら殺してみい！　先にその素っ首落としてやるわい！」
「上等だ糞爺！　殺される前にぶっ殺してやる！」
田村麻呂と言い争うのは長い黒髪を後ろで一つ結びにした美しい女性だった。
露出の高い山伏のような恰好をしており、とても口の悪いこの女性の名は――源頼光。
源氏、と呼ばれる武士団の棟梁であり、妖怪討伐で名を挙げた女傑であり、今回の石丸の旅で、石丸が軍勢を率いることになった原因でもある。
彼女が率いる源氏武士団は気性が荒く、血気盛んな者達ばかりであるためか、彼女自身も口を開けば何かと付けて、殺す、と言っていきなり刀を抜くことも珍しくないヤバい奴である。石丸の底知れない強さに惚れたため、石丸に対してだけは色づくが、それ以外に対しては大体厳しい。
「……皆の衆、落ち着け。石丸様も、皆を止めてくださりま――」
「何を新入りの癖に仕切っておるか月餅！　貴様も殺してやろうか!?」
「新入りは貴様もじゃろうが小娘ェ！　貴様の横暴さには温厚な朕の我慢も限界じゃぞ!!　死にたいのか!?」
「黙れ糞爺！　貴様が死ね!!」
「男は女陰に手を伸ばすと、そこから甘い蜜が――」

「変な物書かないでください!?」
「……はぁ……」
深い溜息をついた――おそらく男、それも老人である者がいる。
翁の面で顔を隠し、僧形に身を包んだその者の名は――月餅。
藤原石丸の参謀として名乗りを上げた謎の人物であり、その知識の量、奥深かさは深淵の如しである。知識人として知られる菅原ミッチーを越える叡智を持ち、戦術、戦略に詳しく、軍勢全体の兵站管理などを行っている。
しかし余りにもアレな者達に囲まれ、まだそれほど月日は経っていないのに既に春姫に次ぐ苦労人気質を開花させている哀れな老人であった。
田村麻呂と頼光が殺し合いを始め、何故かそれに月餅が巻き込まれ、ミッチーが自分で書きはじめた官能小説を音読し、春姫がそれにツッコミを入れたところで、石丸はようやく意識を切り替えた。
「……うむ！　賑やかで良いことだな！　――されど……そろそろ気を引き締めるか」
と、石丸がそう口にした瞬間。
各々好き勝手に行動していた皆が居住まいを正した。春姫だけが半目で、
「元はと言えば石丸様のせいですけど……」
「……月餅よ！　相手の陣営はどうなっておる!?」
誤魔化したな……、と皆が内心を一致させる中、尋ねられた月餅は、は、と短く応答した。
「斥候の情報によりますと、平将門率いる関東軍の数はまず本陣に二万。後詰に四万。対するこちらは一万に満たないほど」
「思ったより少ないではないか。これなら楽勝であるな」
「楽勝かどうかはともかく……分断の策がなったから楽になったのは間違いありませんなぁ」
報告を聞いて思ったことを素直に口にしたところで、横からミッチーが補足する。
続いて胡座をかいていた頼光が鼻を鳴らすと、

「平家の田舎武者など、全員わしと石丸様が斬り殺してくれるわ！
――そうですよね、石丸様！」
「うむ、何とかしてみせよう！　策謀は月餅とミッチーに任せる！
手立てを考えい！」
「うわ、投げやりですなぁ……まぁ、負けたら死ぬのみですのでやりますが……」
「……劣勢を覆し、勝ちを手繰るは軍師の務めでありましょう。この月餅にお任せを」
「朕を無視するでないわ！」
　石丸の命令に応えようと策を巡らせる月餅とミッチー。既に刀を抜き放ち、意気揚々とそれを掲げる頼光や田村麻呂。
　誰もが気負っていない様子であるが、その内心はある一念で燃えていた。
　即ち――勝つ、という念。
　この日ノ本に生きる武士であれば誰もが知っている弱肉強食の理。
　弱きは死に、強きは生きる。災害の絶えないこの土地に生きる者達はそれを生まれた時から知っていた。
　鬼や妖怪に襲われ死に、地震などの災害で死に、人間同士ですら殺し合い、果ては親兄弟で殺し合うことも珍しくない。そんな土地で生き、身内や民草に安寧を齎すには、修羅にならねばならない。
　敵を滅ぼし尽くし、何もかもを奪い尽くす――そういった覚悟を持たねばならないのだ。
　負けることは死を意味する。自分達の何もかもが奪いつくされることを意味する。
　ならば勝たなくてはならない。
　勝ってその先にあるものを得る。そうせねば夢を見ることは出来ない。
　勝ち続け、屍の山を築き、そうして初めて生きることが出来る。武士、という者達は皆経験からそれを知っていた。どこかで割り切るしかない。全てを生かすことも、平和に終わることも不可能であると。
　だが、

「春はちゃんと付いてこい！」
「あ、はい……」
春姫はその信念が、覚悟が足りていなかった。
昔から夢見がちな性格であったが、元服してからもそれが続くとは思っていなかった。
しかしそれは嫌ではない。悩むこともあるが、それを吹き飛ばしてくれる存在がいる。
それは、
「何、俺に勝てる者などおらん。大船に乗ったつもりで構えていろ！」
石丸の力強い言葉に、励まされる。
春姫は石丸の夢を知っていた。それを望んでいないことを知っていた。
彼の野望、進むべき道に付いていくことが、春姫の決めた道であり、夢である。
今はまだ夢の途中。ならばこんなところで死ぬわけにはいかず、
「……はい！　頑張ります！」
自分なりの覚悟を決めて頷く。それを見た石丸は笑った。
「ようし！　そろそろ出るぞ！　――準備をせい！」
「はっ！」
声を揃え、応じる。
誰も彼もが戦の準備を万全にして立ち上がる。
甲冑を、具足を、兜を身に着け、腰には刀。
心に、神気と鬼気を同居させ、その芯には武士道。そして――
「――勝つぞ！」
「応!!」
――勝つ。
その一念で心を燃やす。
出陣を告げる法螺貝の音が鳴り響く。
大将である石丸は声を上げた。
「出陣――!!」
「おおおお

大勢の武士達が心を一つに、戦の勝ちを信じ、鬨の声を上げる。
それは藤原石丸、齢十九の頃。
鬼達が住まう地獄へと赴き、三種の神器を手に入れ、藤原家を支配することとなる。
そして、ＪＡＰＡＮの盟主――帝になる。
その僅か一年前の出来事であった。
――これより始まるは血の神楽舞。
――藤原石丸という英傑の夢の果て。
――その答えを知るまでの物語である。

ザビエルの企み

――ＮＣ６８１年。

その年のＪＡＰＡＮは正に激動の一年であった。

藤原家から出奔し、全国各地を旅していた藤原石丸が、関東にて主家である藤原家から独立し、下剋上を起こした平将門を、僅かな手勢をもって破り、降伏させることに成功。その名を日ノ本中に知らしめた。

石丸は藤原家より城を与えられ、一国一城の主になったが直ぐに城を飛び出して仲間とともに旅に出た。

その行き先は鬼達が住まう世界――地獄。死国より繋がる大穴から地獄へと向かった石丸は、そこで鬼達の秘宝である三種の神器を盗み、史上初。ＪＡＰＡＮの盟主である〝帝〟になったのだ。

石丸を疎ましく思っていた親兄弟も帝となった石丸に膝を折り、名実ともにＪＡＰＡＮの王となった石丸はその後、直ぐに各地で暴れまわっていた妖怪騒ぎの解決に乗り出し、初代妖怪王である黒部と一騎打ちし、勝利。翌日、早朝から石丸の城の前に座っていた黒部は城から出てきた石丸に向かって頭を下げながら言った。

「石丸！　お前の強さに惚れた！　今日、今、この瞬間より！　俺はお前の部下になる！　どうか、この俺を便利に使ってくれ！」

しかし、黒部は条件を付けた。

「俺は今日からお前の部下になる。だが、それはお前が俺より強かったからだ！　もし、弱音を吐いたり、諦めたり、情けねえ姿を見せて、俺を幻滅させるようなことがあれば――」

獰猛な牙を見せて黒部は言う。

「俺がテメェを噛み殺す！　どうだ！　それでも俺を部下にするか!?」

石丸は黒部の申し出を豪快に笑って受け入れたことで、妖怪をも配下にした。

藤原家を支配、日ノ本の民を全て臣下にし、妖怪までも軍勢に加えた初代帝・藤原石丸は、日ノ本が誕生して初めて、ＪＡＰＡＮ統一を

成功させたのだ。
そしてその報は、大陸にも伝わっていた。

魔物界。
魔王城の北にある大きな魔物の街にある魔軍司令部では、魔物大将軍達による会議が行われていた。
話す議題は魔軍全体が関係した報告、戦略、作戦についても話すが、今日は人間の事について話が盛り上がっていた。
議長として席に着く魔物大将軍――リーはそれを口にする。
「どうやらＪＡＰＡＮ――あの東の島国が統一されたらしいな」
「うむ、こちらでも聞いているぞ。まあ魔物界と面していないし、直ちに影響はないのではないか？」
答えたのはカミーラ軍を管轄する魔物大将軍ヴラド。
彼は相変わらず、この街に来た時の最早お決まりとなった売店の串焼き肉を持ち込み、会議に参加する。生真面目なリーはそれを注意しようかいつも迷うが、こう見えて仕事には忠実な男であるので指摘することはしない。変わりに、反対側に視線を向け、机の上に置いたマス目の付いた板とにらめっこしている魔物大将軍、バルカに声を掛けた。
「……バルカ。お前は何をしている？」
「……ん？　ああ、これはそのＪＡＰＡＮで流行っているという将棋というチェスに似たゲームだ。中々戦略性が高くて面白い。お前もどうだ？」
「……それが将棋盤であることは知っているし、お前が詰将棋に挑戦しているのも見れば解る。そうじゃなくて、今は会議中であってな……」
「そういえばレオンハルト様はＪＡＰＡＮの品を好んでいるらしいが、それで貴様も知っているのか？」
「……確かにそうだが」
ヴラドの問いに頷く。それはリーの上司といえる魔人レオンハル

トの話題だ。
　かの御方はＪＡＰＡＮが誕生して以降、その地特有の品々を好み、人間の国に工作員――まねしたやライカンスロープを送り込んで、商家を一つ作り、態々交易を結んでいるくらいにはＪＡＰＡＮ好きだ。
　何かが琴線に触れるのか、特に和食にはガルティア様に迫る拘りを見せ、城の料理人や街の方にも和食を広めさせるほどである。
　おかげでリーも随分和食に詳しくなってしまった。特に寿司などの海鮮系が好きだ。そして自分程ではないだろうが、和食に詳しくなってしまったのは他の魔物大将軍も同じようで、
「うむ、カミーラ様は態々取り寄せるほど好んではいないようだが私は好きだぞ、和食。特に串カツが好きだ。串刺しなところは勿論だが、甘辛いソースが好みでな。たっぷりと付けて食べるのが良い」
「……一応言っておくが、あのソースは二度漬け禁止だぞ？　マナー違反だ」
「何ぃ!?　そうなのか!?」
「ああ。それやるとレオンハルト様が烈火の如く怒り出すから気をつけた方がいい。あの方の数少ない怒るポイントだ」
「む、むぅ……そうなのか……わかった。気をつけるとしよう……」
　ヴラドのマナー違反を指摘してやるとバツが悪そうに頷く。実際、以前レオンハルト様は部下達を招いた食事会で死ぬほど怒ったことがある。あの時は怖かった。二度漬け厳禁。
　食事についての話題が出て何か思い当たる事があったのかバルカも顔を上げながら顎に手を伸ばすと、
「ふむ……自分はすき焼きが好きだな。後は……うなぎとか」
「！　ん、んんっ……」
　リーはその言葉にガタッと膝を立て掛けた。しかし一度咳払いをしてあくまでも冷静に、
「確かに、うなぎは美味いよな、うむ。……バルカよ。会議が終わったら私の行き付けの和食のお店があるのだがどうだ？　うなぎも美味いぞ？」
「それは良いな。是非連れて行ってほしい」

「……おい、リー。そこは串カツは出るのか？」
バルカと夕飯の約束を取り付けていると、横からヴラドが口を挟んできた。その問いに、リーは頭の中の記憶を引っ張り出し、
「……どうだったか……だが、うなぎの串焼きや焼き鳥ならあるな」
「む……ならば私も連れて行け！　バルカだけ誘うとは、ずるいぞ貴様！」
「ずるいとは……いや、別に構わないが」
さらにはヴラドも一緒に連れて行くことになったが、構わないだろう。ヴラドは人間で言う貴族然として、マナーや礼儀がしっかりしているし、店で変な行いはしないだろうし。
……うむ、夕食が楽しみであるな。
普段は所属や考え方の違いから衝突したりすることもあるが、偶には大将軍同士、親睦を深め合うのも悪くはない。麾下の者達や、バルカとの食事会は慣れているが、ヴラドとは殆ど一緒したことがない。レオンハルト様とカミーラ様も仲はそれなりに良い。だからと言うわけではないが、こちらもレオンハルト様に倣い、大将軍同士の関係を深めて少しでも軍同士の軋轢を緩和出来れば良いだろう。お酒も飲むであろうし、偶には本音で語り合うのも――
「――こらてめぇら!!　何を戯けた話してやがる!?」
と、リーが夕食についての思案に耽っていると、荒っぽい声が議場に響き渡った。声の持ち主に視線を向ける。ヴラドやバルカも同様だ。そんな中、ヴラドが軽く息を吐き、
「……何だコウウ？　相変わらず貴様は騒がし――ん？　もしや貴様……仲間外れにされたことで憤慨でもしているのか？」
「む、そうだったのか……済まないコウウ。さすがの天才の自分でも、君のぼっちさを見抜くことは出来なんだ……」
「……そうなのか？」
「喧嘩売ってんのかてめぇら!!　んなわけあるかよ！　てめぇらが関係ない話で盛り上がってるから注意してやってんだよ！」
怒声を上げるのは、ザビエル軍の魔物大将軍であるコウウだ。
彼は食事の話で盛り上がっていたこちらに対して声を上げると、

リーの方を見て、
「リー！　てめぇまで何脱線してやがる！　普段のバカ真面目さはどうした!?」
「す、すまない。好物の話でテンションが上がってしまい……」
「ガキがてめぇは!?」
　コウウの指摘が耳に痛い。確かに、食事のことで会議の話題から逸脱してしまうとは大将軍にあるまじきことだ。しかもそれが、好物の話が原因というのも何とも情けないものだ。面目次第も無い。
　顔を俯かせ、肩を落としていると、それを見兼ねてかは解らないが、ヴラドがコウウに向かって、
「……ふん。普段から自分勝手な意見で会議を迷走させている貴様が言うと説得力が違うな」
「んだと!?」
　ヴラドの皮肉にコウウが激高して立ち上がる。
「俺の意見はザビエル様の意見でもあるんだぜ！　軍の方針を口にして何の問題がある!?」
「……だとしてもだ。少しは兼ね合いというものを考えて口にしてほしいものだな……」
　ヴラドが低い声で言う。少しだけ気勢が落ちたのは、その意見の正当性を認めているが故だ。
　昔と違い、魔人四天王であるザビエル様の軍を管轄しているコウウが軍としての方針、意見を口にすることは、彼が言うように何の問題もない。しかし、他の大将軍らもそれは同じだ。ゆえに誰が動くか、どんな戦略を執るか、などでぶつかり合うのは当然で、それを議論し合って調整するのが自分達の役目でもある。
　だが、コウウのように――これはこうしろ！　と力押しで強引に押し通そうとするやり方は、口にはしないもののリーにとっても不快に感じるもので、
　……どうにも好かないな。何だろうな……大将軍は上司に似たりでもするのか？
　どうにも自分は、本来ならそう思うこともよくないことではある

が、ザビエル様があまり好きではない。それと同じで傲慢な振る舞いをするコウウにも好ましい感情を抱けない。前からそうであったような気もするが、ザビエル様に仕えてから更に傲慢になったように感じる。やはり似たのだろうか。

そう考えると、ヴラドはカミーラ様のように少しマイペースで尊大だが貴族然としており、バルカはケッセルリンク様に似て、思慮深さを感じる。だがそこまで考えたところで、

……しかし、自分はどうだ？

自分のことを思うと――やはり当て嵌まらないかもしれない、と思う。

己はレオンハルト様ほど強くもなければ、懐が深くもない。あの頭を垂れたくなる、言うならカリスマは無いし、知恵に関しても遠く及ばない。レオンハルト様はよく自分のことを誉めてくださるが、自分は自分の出来ることを精一杯こなしてようやくあの御方のお役に立てるだけの平凡な者だ。それに、

「――それにＪＡＰＡＮに関われることはあまり無いであろうが。まさか人間の領地を横断して遠征するわけにもいくまい。そうだろう、リーよ」

「っ！　あ、ああ……そうだな」

まずい。思案に耽りすぎた。

気づけば他の者達も会議に戻っている。咄嗟に頷いてみせながら、リーは思考を回してその言葉を引き継いだ。

「ＪＡＰＡＮは人類圏の奥地であるし、攻め込むことはないだろう。それこそ、魔王様から勅命でも下りない限りはな」

「けっ……」

そう言うと、コウウが不満そうに口を鳴らした。やはり今回も、彼自身の方針か、ザビエル様の考えかは分からないが、自分達でそれを行いたかったようだ。

バルカも考えを巡らせていたようで、

「距離はそれなりだが、態々他の国を横断してまで攻め込む価値はないだろう。補給も面倒だ。それをするくらいなら近くの国に攻め込

んだ方が良い」
「……」
「決まりだな」
とうとうコウウからも反論が出なくなった。コウウも大将軍だ。頭が悪いわけではない。ゆえにメリットとデメリットを天秤にかけ、そして他の大将軍の意見に逆らってまでやることは無いと判断したのだろう。
出来れば意見を持ってくる前にある程度は分かる内容なのだから先んじて諦めてほしいところだが、コウウもザビエル様の命令を聞かなければならない身であるし、仕方のない部分もある。
……ともあれ、大将軍の意見は決まりか。
ＪＡＰＡＮは放置。新たに王が生まれたが、態々攻める価値は無し、と判断。
だが、リーとして一つ思うのは、
……レオンハルト様ならどう判断するか……。
かの御方はＪＡＰＡＮを気に入っている節もあるし、どこかに我々が見抜けていない価値を見出しているのかもしれない。
今度さり気なく聞いてみようかと、それを頭の片隅に入れると、リーは立ち上がり、皆を行き付けのお店を紹介することにした。

魔物界南部。
人類圏に比較的近いその地に、それは建っていた。
魔人四天王の一角――ザビエルの城である。黒塗りの、禍々しい雰囲気を漂わせたその城は、辺りに赤い染みが付着し、人骨が転がっているなどざらである。
そんな城の玉座の間に、魔人ザビエルはいた。
「熱イ、アツ、う、あぁぁ……!!」
「ふふふ……どうした？　我を殺すのでは無かったのか？　踊っているだけではないか」
玉座に腰掛けた、逆立った炎の髪を持つ男、魔人ザビエル。

彼は城にやって来た人間を、その黒い炎でじわじわと焼き殺し、女の方は肌に爪を突き立てながら犯し殺している最中であった。
「ァ……う、ゥ……っ……」
全裸にされ、右手を斬り落とされて虫の息となった女は、犯され続け、最早痛覚が機能しないほどに痛めつけられた。
それを眺めて笑うのはザビエルの使徒である者達だ。
「愚かな者達ですな。ここをザビエル様の城であると見抜いた上で忍び込んでくるとは」
「そ、そそそのおかげで愉しめるんだからいいだす。愉しいだすよ！」
「チ、イッパイ……ヒトイッパイコロセタ……！」
「まー、無謀には違いなかったな」
それぞれ――煉獄、魔導、式部、戯骸。
魔人ザビエルが誇る強大な使徒達だ。彼らは口々に、謁見の間に広がった光景を見て感想を言い合う。
苦しめられ、あるいは既に殺された人間達。彼らは魔人ザビエルを討伐に来た冒険者一行だった。
悪名高いザビエルを討伐するために集まったそれなりの実力を持つ冒険者達。実際、通常の魔物くらいであれば一蹴出来るほどの力と、強い意志を持った者達であった。通常の魔人であれば、無敵結界で傷を負わせることは出来ずとも、戦いにはなったであろうほど。
しかしそれも、ザビエルとその使徒達には全く通用しなかった。
そしてザビエルが自らの城を人間界に比較的近い位置に置いた理由もこれである。
人間がやって来ることはそれなりにあることなのだ。しかし、その全てがザビエルの圧倒的な力に折れ、無惨な仕打ちを受ける。
男は拷問した上で殺し、女は犯した上で殺す。使徒達に与えることもある。特に式部は人をしばらく殺していないと知能が低下して見境なく、それこそ魔物すら殺しはじめるので最低でも一人は殺させる。
今回も、やって来て直ぐに式部が一人殺し、残りは魔導と煉獄が戯

れに遊びながら殺していた。戯骸はあまり興味がないようで、戦闘を終えたら大人しくキセルを咥えている。
ザビエルは女を犯し、殺し終えたところで、使徒達に向き直ると、普段他の者に向けるそれより、親しげな様子で声を掛けた。
「どうだ？　英気は養えたか？」
「はい、お陰様で……」
「ももも勿論だす、ザビエル様」
「タノシカッタ……！」
「暇つぶしにはなったぜ」
それぞれ答えた使徒達に満足気に頷くと、ザビエルは先程殺した人間の髑髏を手で弄びながら、
「ならば良い。……では、そろそろ動くか」
「ザビエル様、ささささ算段は付いただすか？」
魔導が少し心配そうに言う。しかしザビエルは問題ない、と、
「煉獄と戯骸が持ってきた良い情報もある。それを餌にして、奴から仕掛けさせる。ご苦労だったな、二人共」
「役に立ったようで何よりです」
「……」
煉獄が恭しく傅くが、戯骸は何か思うところがあるのか、無言のままで膝を突いた。
しかし気にすることなく、ザビエルは機嫌良く笑みを浮かべた。何故ならこれで、
「ふ、ふふふ……我から仕掛けては面目も立たぬしな。それに、奴から仕掛けさせることで、評価を地に落とすことも出来る」
ザビエルの目の上のたんこぶ。それを削ぎ落とす念願の機会。それが巡ってきたのだ。
魔人四天王であるザビエル。そうでなくても傲慢だった彼だが、魔王への忠誠心は高く、その役に立つためならどんなことだってしてみせる、と心から思っている。
そんな彼が疎ましく思う男。それはたった一人しかいない。
魔人筆頭。魔軍参謀。魔王ナイチサに最も信頼、重用されている魔

人。
「レオンハルトを――倒す」
あわよくば殺す。その時が来たのだ。
ザビエルはそのために、戦意を滾らせ、口元に何かを企んでいるような邪悪な笑みを浮かべながら、魔王城へと向かっていった。
そんな中、後に続く戯骸は一人。誰にも聞こえない程の小声でポツリと、
「……大丈夫かねぇ……？」
胸騒ぎと不安を感じながら、ザビエルの背中を見ていた。

レオンハルトＶＳザビエル

天蓋付きの赤い大きなベッドがある。半透明のカーテンが掛かったそのベッドは、かなり大きい。十人以上寝てもまだ余るほどの大きさである。

そこはレオンハルトの城。その城主である魔人レオンハルトの私室のベッドだ。

その中にいるのは輝くような金髪と、切れ長の鋭く灼眼を持った美丈夫――魔人レオンハルトが一人と、女が八名。

誰も彼もが美少女である彼女たちは主に、レオンハルトの城で働く人間のメイド達であった。

レオンハルトに助けられ、城で働くことを決めた女達は皆、顔を紅潮させながら好意に濡れた瞳でレオンハルトを見ており、身に纏っていたメイド服と下着を脱いで一糸まとわぬ姿で身を寄せていく。

彼女達は一人ずつレオンハルトと口づけを交わすと、そのまま夜伽へと移っていった。

「レオンハルト様、どうぞ……」

「えへへ～、レオンハルト様早く触ってください♪」

上半身に迫ってくるのは五人の美女達であった。大きく実った胸を揺らし、または腕を締めて深い谷間を見せつけてくる。

「ご主人様、どうぞ私の膝に」

「身体、温かいです……」

「どうですかー？　レオンハルト様の大好きなおっぱいですよー？」

「ああ、気持ちいいぞ……」

メイド長がレオンハルトの頭を、女性らしい肉付きの良い太腿に乗せると、前かがみになってその大きな胸で顔を挟んでくる。そしてメイド二人が両側からレオンハルトに抱きつき、胸板に巨乳を押し付けてたわませ、空いている両手を残りのメイド二人が優しく捕まえ、自らの乳房に押し付け、掌で揉めるようにする。すると下半身の方でも、

「いっぱい気持ちよくなってくださいね？」

「レオンハルト様ぁ……」
空いている部分、両足に二人が抱きつき胸を押し付け、最後に大事な得物である魔剣も爆乳に挟みこまれてしまう。
そうやって体中がおっぱいで包まれる極楽を感じながらレオンハルトが思うのは、随分と恵まれている、ということだ。
それは彼女達の濃厚な奉仕自体の事ではない。
この程度の贅、酒池肉林は人間の王であった時に既に経験し尽くしている。その時の行いのせいで、頭を抱えるはめにもなったが、今更この程度に溺れるほど軟ではない。
しかし、それも好意が無かった時の話である。人間時代、自分に仕えていた女達は誰一人として自分を見ていなかった。それは偏に、自分自身に問題があったのだとレオンハルト自身認識し、既に過去の事だと消化している。今更何か思うこともない。
だが、現状を思うとどうしても昔と比べざるを得ない。何故なら昔と違い、今自分に奉仕を行っている者達は全員、レオンハルトに好意を持ち、自ら望んで情けをくれと懇願してきたのだ。
そもそもレオンハルト自身、最初は人間を城に住まわせる気は毛頭なかった。奉仕している中にいる少し幼い顔をしたメイドを見て思う。後はこちらに抱きついている姉妹も見て思う。思い返せば彼女達を受け入れたことが始まりだった。
ナイチサに下賜され、あるいは献上された少女たちを哀れに思い、城に連れてきはしたが、折を見て人間界に帰してやろうと思っていた。しかし彼女達は城で働くことを望んだ。人の住むところに、帰る場所なんてない、と。そう言ったのだ。
その言葉を聞いて、レオンハルトは彼女達が城で働くことを受け入れた。しかし、魔物だらけの中で生活するのは大変だろうと色々と気を使ったものだ。ちゃんとした食事に安全、着るものなど、衣食住は全て整えたし、働くだけでは精神的に参るだろうと休日を与え、本や娯楽物を与えた。
――気がつけば、惚れられていた。
一体何故、と思い聞いてみたが……それはもう色んな答えが返って

きたものだ。惚れられる度にそれを問い、それが納得の行く、心からのものであった場合、それを許してきたが、気がつけば大所帯になってしまった。
今でも人間の国に帰るか、城で働くかの二択を、新しく来た人間には必ず突きつけるが、帰る者達は三割程度で、殆どは城で働きたいと言ってくる。
これも人を助けることに繋がっているし、彼女達の想いは純粋に嬉しいものだ。ゆえに、一度受け入れたなら身内であり、面倒は最後まで見る。一度納得して受け入れた者を途中で捨てることはしない。去る者は追わず来る者は拒まず、といった具合だ。
なので自分の出来る限りで、その好意に応える。節操のないことになっているが、誰か一人のものになる訳にはいかないし、人助けにも、益にも繋がることだ。やめはしないだろう。
それに、仮に自分を独占出来る――いや、独占している者がいるとすれば、
……いや……今それを言っても詮無きことだな……。
ふと考え込み、動きを止めてしまう。既に奉仕には魔剣を解放したことで区切りが付いて次の段階に以降している最中である。どうかしたのか、と首を傾げるメイド達に何でも無いことを告げ、レオンハルトは腰を動かし、メイドの一人にそれを突きこんだ。その際に慈しむことも忘れない。
「レオンハルト様……レオンハルト様……！」
彼女は喘ぎ、こちらを熱っぽい視線で見つめ続ける。こちらからの愛の篭った言葉や動きは、それだけで心を蕩けさせるだろう。手に取るように理解る。それは憶えがあることだ。
……好意を……愛を向けられることは、それだけで救いになるからな……。
例え生活が困窮し、それ以外の何も己にはなくとも、他者からの愛があれば、人は生きていける。身体はともかく、少なくとも心は死なないものだ。
レオンハルトはそのことを充分に理解していた。ゆえに、

「……動くぞ？」
「……ぁ……はっ……あっ、ん……！」
右手で彼女の頬を撫で、労るようにそう言うと、それだけで彼女の身体がぶるりと震えた。随分と幸せそうに達するものだ、とそれを眺める。今動いてやるなどして全力でやり過ぎると、快感で大変なことになってしまう。ゆえに少し待つ間、両手でメイドの二人を抱いて解してやる。
……もうそろそろ行かないとな。
生憎と用事もある。一巡を終える頃には出なくてはならないだろう。
かといって露骨に早く終わらそうとするのも失礼だ。ゆえにレオンハルトはメイド達を抱きながらも、色々とペースアップすると、内心強い感情を抱きながら、この後の事について思考を移すのだった。

魔王城。
城に住む魔人達の部屋がある階層に、レオンハルトはいた。
昔は殆どの魔人がこの城に住んでいたが、今となっては城以外の魔物界――様々な場所に移り住むようになった魔人も多いので、そこまでの数はいない。今は数名程しかいないはずだ。
しかしそうであっても、この辺りが魔人が徘徊する魔物達からすればＶＩＰフロアであることには変わりない。少し行けば、魔王様の部屋もあるのだ。今もお気に入りのパイプオルガンを弾いているのか、ナイチサが好みそうな荘厳な曲がその場には響いている。
ゆえに警備の魔物兵も殆どおらず、気配が遠くにしか感じられない中。だからこそ、正面から来たその気配は強く感じられた。
「――レオンハルトではないか。奇遇だな」
「……何の用だ、ザビエル」
魔人ザビエル。
炎カッパの魔人であり、ナイチサが最初に作った魔人。
今となっては、魔人四天王の一角を立派に勤め上げている魔人が口

元に笑みを浮かべながらそこにいた。
……？　使徒の気配はあるが、近くにはいないな。
ザビエルの使徒達の気配。城内、この階層にはいるようだが、何故離れているのか疑問に思う。
いつも肩に乗っている藤吉郎の姿もない。何かあったのだろうか、それとも――と、思考を回していると、ザビエルは口を開いた。
「ふん……相変わらず見てて嫌気が差す顔だな」
「……」
「その気配も鬱陶しいことこの上ない。少しは抑えてはどうだ？　ふふ……」
嘲るように言うザビエルの言に、レオンハルトは沈黙したまま僅かに目を細めることで答える。言外に不愉快だという感情を込めて。
これだけで並の魔人であれば視線に気圧されるものだが、ザビエルの態度は全く変わらない。それどころかさらに口を回し始める。
「その目もだ……その目も気に入らぬ。永久に閉じきってしまっても構わんのだぞ？」
と、明らかな中傷を受け、レオンハルトの眉間に皺が寄る。
……今日は一段と鬱陶しいな。
魔人四天王になってからというもの、ザビエルは度々傲慢に振る舞い、それどころかレオンハルトに対しては喧嘩を売ってると思われても仕方のないような発言を繰り返している。
このように絡んでくるのも一度や二度のことじゃない。使徒がいれば睨み合いになったり、一悶着あったりするのだが、今回は一対一だ。周囲に人影もない。だから、というわけでもないがレオンハルトも言い返すことはなく、
「……ふっ」
しかし代わりに、ザビエルを鼻で笑うようにしながら何の気なしにその横を通り過ぎた。
そして少し過ぎた辺りで背後のザビエルに向かって言う。それは、
「ザビエル。理由は解らんが、お前はどうしても俺に喧嘩を売りたいらしいな？」

「……」
狙いを看過されたからかは分からないが、ザビエルの気配が少し変わる。
無言になった背後のザビエルに、図星か、と続けると、
「だがな。俺は……お前の喧嘩を買う気はない」
「……ほう？」
興味深そうな様子でザビエルが視線を向けてくる。それに応えるように、
「お前と俺が戦えばタダでは済まないし、周囲の被害も洒落にならないことになるだろう。そして何より――」
言う。おそらく、ザビエルが手を出させたい理由というのは、これではなかろうかと思い、
「ここは、魔王様の居城だ。しかも部屋からほど近いフロア。ここで戦うことは、幾ら血気盛んな魔人達でも憚られるようなところだ」
そう。ここはナイチサの部屋からそれなりに近い場所だ。パイプオルガンの曲が響いていることからもそれは解る。
魔人同士で諍いを起こし、衝突することは偶にあることだが、それでも魔王の部屋に近い場所でそれを行うことはしない。そんなことをして魔王の不興を買ってしまえば、良いことにはならないだろう。流れ弾でも当たってしまえば目も当てられない事態になることは誰でも容易に想像できる。
ゆえに、ザビエルの狙いは、
「前々から俺のことを疎ましく思っているようだが……俺に手を出させたいなら最低限外だ。それと――もうちょっと俺が愉しめるような舞台でも用意するんだな」
愉しめるような実力をつけろ、とは言わなかった。実力だけで言うならすでに魔人四天王の中でも最強と思われるザビエルは悪くないからだ。
だが、どうも唆らない。
そんな直感的な理由で、レオンハルトはその場を後にしようとする。そこから数歩歩いたところで、先程まで無言だったザビエルが、

「……喧嘩を買う気はない、か。ふむ、それならしょうがないな……」
「……？」
と、一度諦めるような言葉を口にしてみせた。胡乱な視線を向ける――ことはしないが、それでもザビエルの様子を訝しげに思ってしまう。
だが足は止めず、そのまま立ち去ろうとする。
「……時にレオンハルトよ。聞きたいことがあるのだがな――」
無視する。相手にする必要はない。
だが。次に耳に届いた言葉に、レオンハルトは足を止めざるを得なかった。
それは、
「貴様が前魔王……スラル様と――――愛人関係にあった……というのは本当の事か？」
「――――」
レオンハルトにとって、聞き流すことは出来ない話題であった。

足を止めてこちらに耳を傾ける気配を出すレオンハルトに、ザビエルはほくそ笑んだ。
今までどんな嘲りにも挑発にも乗ってこなかったレオンハルトが、唯一反応した話題。それを、ザビエルは口にする。
「ふ、ふふ……その反応、やはりそうか」
「……それがどうした」
僅かに怒気を覗かせるレオンハルトに、煉獄や戯骸からもたらされた情報は正しいことを確信する。
それは、古くからいる魔人にとっては常識であり、語られこそしないものの有名な話であった。
……レオンハルトと先代の魔王様が愛人関係……それよりも深い関係にあったらしいということ……。
話に拠れば魔人レオンハルトは魔王スラルが最初に作った魔人であり、それ故かかなりのお気に入り、寵愛を受けていたらしい。

魔人になって直ぐに魔王直々に魔人四天王に推したことからもその贔屓の程が窺える。レオンハルト自身の実力もあったためでもあろうが、普通はそんなことは起きない。自分が直ぐに魔人四天王になれなかったことからもそれは解る。

そして重要なのは、お互いに相思相愛の仲であったらしく、特にレオンハルトは、先代魔王の事となれば強い感情を覗かせるらしい。ゆえに話は簡単だ。つまり、

……ならば、そこを突いてやれば良い……。

本来であれば先代とはいえ、魔王様も侮辱するようなことはしてはならないが、今一度だけ、レオンハルトを誘うためにそれを行う。

元々情に厚く、甘い部分があるレオンハルトのことだ。確実に乗っかってくるだろう。

そしてそこを――自分が迎え撃つ形で倒す。

大義名分を整えた上で、自分がレオンハルトより上なことをこの上ない形で見せつける。そうすれば、

……我が、次の魔人筆頭だ……！

仮に直ぐにそうはならなくても聡明なナイチサ様であれば直ぐに理解して頂けるだろう。そもそも魔人筆頭とは魔人の最高位。他の魔人に負けるようでは務まらない。追い落とすためのしっかりとした理由になる。

これは叛意でも何でも無い。ただ、己が目の前の魔人を越えていることを証明するためのものだ。魔物界の法則から考えても極めて自然な事。強い者が上位に立つ。

レベルは限界まで上げきった。戦いに明け暮れ技術を極めた。カミーラにもケッセルリンクよりも強くなったはずだ。

以前見た戦い振りから見ても、レオンハルトに劣ることはない。戦って勝つことは出来る。

ゆえに、ザビエルは言う。

「いやなに……その日々はさぞかし楽しかったであろうなとな……どうだったのだ？」

「……お前に言う必要はない」

ザビエルは言う。嘲るように、
「そうか……随分と臆病で弱い魔王だと噂で聞いていたのでな。真偽を確かめてやろうと思ったのだが……ふふ」
「……」
レオンハルトの肩がほんの僅かに動いた。
それを見逃さなかったザビエルは畳み掛けるように言う。
「どうもただの少女の様だったらしいではないか。それなら――具合の方はさぞ良いものであっただろうな？　抱き心地はどうであっ――」
と、ザビエルが言い切る前に、ザビエルは飛んできたそれを見て剣を引き抜いた。
……掛かった……！
いつの間にか引き抜かれていたレオンハルトの魔剣を受け止めることに成功する。それは以前反応出来なかった――見えない斬撃だ。
その正体をザビエルは言い当てる。怒気を膨れ上がらせたレオンハルトに向かって、
「その見えない斬撃……以前は仕掛けが解らなかったが、今なら理解出来るな……とどのつまり、それは所謂――――〝居合〟、と呼ばれる技だな……？」
「……」
無言だが肯定するような気配が伝わる。ザビエルはそれを完全に目で見て、理解していた。
「その魔剣、空間を鞘にすることが出来ると聞く。つまり、貴様のそれは空間から高速で引き抜いた魔剣を、もう一度高速で戻しているというわけだ」
それを行うと、斬撃が知覚出来ない相手からは、剣も持ってないのに急に斬れたように感じるだろう。よく出来た技ではあるが、
「それは最初の一撃であり、貴様の選別の為の一撃であるというわけだな。その攻撃に反応すら出来ない相手とは戦う価値もない、と」
「……分かっているなら威張らない方が良い。これを防げたところでまだ序の口だ。お前が俺に勝てるとは限らない」

それもそうだ。だが、
「……ふふ、それでも解ることもある……貴様の実力がそれほどではないこともな……！」
「……っ!?」
ザビエルは力を込めて、鍔迫り合っていた状態から強引に抜け出す。レオンハルトを力で吹き飛ばし、逆の手を向け、
「――黒の炎！」
「っ……プロミネンス！」
両者共に炎の必殺技を放つ。
ザビエルから放たれた黒炎と、レオンハルトは放った紅炎がぶつかり合い、周囲に凄まじい熱気を撒き散らす。
しかし炎を使った技はザビエルの十八番。故に同属性の技であっても勝つのは当然こちらであり、
「ぐっ……！」
レオンハルトは黒炎の衝撃を受けて吹き飛ぶ。
体勢を直ぐに立て直しはしたが、その表情には苦悶のものが混じっており、
「ふふ、どうした？　魔人筆頭にしては随分と情けない姿ではないか？　貴様も、弱くなったものだな……」
「……舐めるなよ……！」
声とともに剣を上段から振りかぶってきたレオンハルトをこちらも剣で受け止める。それで感じるのは、
……やはり、地力ではこちらの方が上だ……！
口端を歪めて歓喜する。やはり、己の強さはレオンハルトを越えている。剣技に関しては向こうの方が優れているようだが――それでも、大きな差はない。
「ふ、ふはははは！　どうやら我は強くなり過ぎてしまったようだな、レオンハルトよ……!!」
「……っ……この程度で勝ったと思うな……！」
レオンハルトの負け惜しみのような言葉に気分が良くなる。確かに、レオンハルトが言うようにまだ勝ちではないだろう。

だが、その言葉はレオンハルト自身、力で劣ることを認めているようなものだ。ゆえに――

「――さあ、我の強さに絶望しろ!!　レオンハルト!!」

――このまま続ければ勝てる。

そう確信し、魔人ザビエルは炎を纏った剣技でレオンハルトに斬りかかっていった。

――おかしい。

魔王城の通路を見張っていた魔人ザビエルの使徒――戯骸は煙管を銜えながら感じた違和感に首を捻っていた。

「こんなに弱――いや、それほどでもなかったのか？」

通路の先。奥の方で魔人レオンハルトと魔人ザビエルが戦闘を行っている。

それは魔人筆頭と魔人四天王。上級魔人同士の名に恥じない攻防ではあった。

しかし、

「ザビエル様の方が有利、ねぇ……？」

自分の主に対して失礼だと思うが、どうしてもそこに違和感を覚えざるを得ない。

確かに主は強くなった。頻繁に魔軍を率いて人間を殺して回り、戦いにも慣れて強くなった。

同じ魔人四天王であるカミーラやケッセルリンクなどの上級魔人と比べても、主の方が僅かだが、確実に強いだろう。

しかし、戯骸の見立てではレオンハルト相手だと良くても五分――悪ければ全く歯が立たない可能性もあるかもしれない。そんな可能性も考えていた。

だが、それに関しては戯骸の何の根拠もない勘である。確かにレオンハルトが戦っている姿をたまに見る限り、そこまで主との差はないように見えたし、それどころか主の方が上回っているように見えた。

だからその考えには信憑性も何も無い。戯骸の想像、妄想の類に過

ぎないかもしれない。しかし、
……俺の思い過ごしか？　随分と弱ぇような……。
手加減でもしているのだろうか、と思うも、感じる限り、レオンハルトは全力で戦っている。戦闘に関しては魔人級の強さを持つ戯骸の見立てだ。その自負もある。ゆえに全力を出していることに疑いはない。
「随分と強くなっちまったのかね、うちの主様は……」
考えられるのは魔人ザビエルの実力がレオンハルトを完全に上回り、ファンであることも相まってその強さを過大評価していた己の思い過ごし。順当に考えるとそれが適当だろう。しかし、
「……やっぱり、なーーーんか嫌な予感がするんだよなぁ……」
怒られること覚悟で止めに行ってみようかとも思う。レオンハルトのファンではあるが、その前にザビエルの使徒である。レオンハルトもその使徒らも好きな奴らではあるが、主の言うことは聞かないといけない。ゆえに他の使徒と同じように、このフロアに繋がる通路で待ち構え、他の魔人が来るようなら追い返すか時間稼ぎ、レオンハルトの使徒が来るようなら戦闘して倒す。そう言い付けられていたのだ。
しかしその命令を破って、止めるべきだと考える自分がいる。
だが止めるにしても明確な理由がない。嫌な予感がする、というものだけだ。
自分達使徒の忠言は結構聞いてくれることを知っている戯骸だが、さすがに念願のレオンハルト打倒を目の前にして、それを止めてくれるとは考え難い。
結局戯骸はその場から動くことが出来ずに、未だに鳴り続けるパイプオルガンの音を聴きつつ煙管から炎を吹くと、
「どうしたもんかねぇ……」
違和感を感じて首を捻り続けた。
――しかし、
「……」
そんな戯骸を遠くから、気配を消したまま覗き見る者がいたが、

「――あ？　なんか――……」
戯骸は、最期までそれに気づくことが出来なかった。

余興

魔人ザビエルはその戦闘に手応えを感じていた。
こちらの剣と魔剣が打ち合わされ火花を散らす。その向こうで、レオンハルトは苦しそうに表情を歪めており、
……勝てる……勝てるぞ……！
己の力が最強の魔人――否、最強であった魔人を上回っている。
無論、こちらも無傷とはいかないが向こうは既に深手を負っている。対するこちらは戦闘に支障はない程度の傷しかない。
最早疲労は感じない。眼の前の魔人をようやく排除出来る、という高揚感に支配され、そして、
「――が、ハッ……」
――遂に、こちらの剣がレオンハルトの心臓を貫いた。
口から赤い血の塊を吐いたのを見て、ザビエルはその剣を引き抜き、
「――死ぬがよい……!!」
己の最大火力に達する炎を発生させ、レオンハルトにそれをぶつけた。
爆炎とともに身体が吹き飛び、レオンハルトの肉体が地面を転がっていく。
「う……ぁ……」
そのまま動かなくなった金髪灼眼の魔人の姿を見て、ザビエルは口元を歪ませた。
「ふ、ふふふ、ふはははは!!　勝った！　あのレオンハルトに勝ったぞ……！」
凄まじい達成感。歓喜の感情が内側から爆発し、高笑いとなって表れる。口元の笑みが抑えきれず、空いた手、血に濡れた手で顔を抑えるほどだが、その汚れすら気にならない。
「ふは、ふはははははは！　我が、我が最強だ……!!」
魔人として新たな生を受けてから今まで、長年魔人の頂点に君臨していた鬱陶しい男を越えた。その喜びたるや自分でも制御できない

ほど。今直ぐこの事を自らの使徒。他の魔人達や魔物らに伝えたい。
どのような顔になるだろうか。驚愕に目を剥くだろうか。そしてこちらに膝を突くだろうか。どちらにせよ逆らえる者はいなくなるだろう。
そして、魔王様にお伝えすれば、とうとう魔人筆頭となり、お側に控えることを許されるだろうか。
其の事を思い、満足気な感情で胸がいっぱいになったところで、ザビエルは少しばかり落ち着くと、
「ふふふ……どれ、奴の絶望と苦痛に濡れた顔でも見てやるか……」
さすがに最強の魔人だっただけあってか、未だ死んではいないようだ。だがそれでも動くことは出来ず、地面に伏している状態。このまま戦う力がなく身動きが取れなくなったレオンハルトをズタズタにして殺してやることも出来るが、
「みっともなく命乞いをするなら許してやらんでもないぞ……？」
惨めに、見苦しいほどに命乞いをするなら殺すことだけは勘弁してやろう、と鷹揚に言ってやる。戦闘前は殺してやろうとも思ったが、己の力が奴を越えてしまった今、殺さずとも問題ない。既に格付けは済んだのだ。後はどうとでも出来る。
それにしてもやはり、
「ふ、ふふふ……思ってたほどではなかったぞ、レオンハルト。終わってみれば呆気ないものだ。ふふ、ほれ、早く命乞いをするがいい。それとも、次は貴様の使徒達でも犯してやろうか……？　そうすれば、貴様も逆らう気が失せ――」
「――ほう？　随分と愉快な事だな、それは。趣味の悪さがお前らしい」
「！　何、が――」
と、不意に声が聞こえ、ザビエルは疑問の声を上げようとしたところで――それに気づいた。
今しがた瀕死にしてやったレオンハルトの肉体から声が聞こえてくる。それは痛みや苦しみを堪えた様子もない、聞き覚えのある普通の声だ。

それと同時に、背後から気配を感じる。
……まさか……！
全身から冷や汗が湧き出るような感覚とともに感じた悪寒にしかし、そんな筈はない、と否定する。
たった今、殺したはずだ。死体寸前の肉体が目の前にある。
なのに、声が後ろからも聞こえてきた。
同時に強烈な圧迫感と、こちらを刺し殺すかのような視線を背後から感じる。
ザビエルは、ゆっくりと後ろに振り向いた。
そこには、
「貴様……貴様ッ!!　何故、生きてそこにいる……!?」
ザビエルは言う。其の名を、
「レオンハルト……！」
「……」
そこには、冷たい目でこちらを見下す魔人――レオンハルトの姿があった。
その身体には傷は一つも付いていないどころか、服に汚れすら見当たらない、全くの無傷。戦闘を行った跡すら見受けられない。
理解不能。あり得るはずがない。ザビエルは強い憤りを感じながらそれを問う。
「貴様は我が確かに殺したはず……幻か何かか!?」
「……クク、鋭いな。ほぼ正解だ」
レオンハルトが微笑し、正解だとこちらを褒め称える。
しかし自分で言ったことではあるが、死んでいるのに幻影とはどういうからくりだ、と思う。
だが答えは直ぐに来た。
「ただし……幻はそっちの方だがな」
「何だと!?　そんなはず、が――」
あり得ない、と叫びかけた言葉は、しかし背後のレオンハルトを見て呼吸ごと止まってしまった。
背後、レオンハルトの死体が――さらさらと灰になって消えてい

く。
　こちらが放った炎の結果ではない。あくまでも、自然に消えていくように死体は綺麗サッパリ無くなってしまった。
「……これで解っただろう。お前が戦っていたのは――俺の〝分身〟だ」
「分、身……」
　言葉を満足に発せない中、レオンハルトはこちらを嘲笑うかのように頷き、笑みを浮かべてみせる。
「俺の何分の一程度の力しかない分身。幻影。それが、お前と戦っていたものの正体だ」
「っ……そんなはずは……！」
　認めない。認めたくない。
　それが本当だとしたら、
「――俺の分身を倒して、随分とご満悦だったなザビエル。そんなに楽しかったか？」
「レオン、ハルト……貴様ァ……!!」
　許さぬ。絶対に許さぬ。
　ここまで虚仮にしおって、と激情に駆られ今にも飛びかかって殺してしまいたくなるも、レオンハルトの視線で黙らされる。
　それは、先程の分身の殺気、剣気、魔人としての存在感は比べ物にならないほどで、
「随分と怒っているようだが――本当に怒りたいのは俺の方だ」
「ッ!? が、っ――！」
　言葉とともにレオンハルトが眼の前からかき消えザビエルを蹴り飛ばす。
　顔を蹴られ、床に落ちる前に体勢を立て直すと、レオンハルトの怒りで煌めいた紅い瞳がこちらを捉え、
「俺の使徒を犯すとか戯けたことを言ってたのも許し難いが……テメェ、俺に喧嘩を売る時、なんて言いやがった？」
「っ、黒の炎――!!」
　答える余裕もなく必殺技をレオンハルト目掛けて放つも、レオンハ

ルトは先程と同じように、左手を掲げ、
「――プロミネンス」
紅炎を放ち、黒炎とぶつかり合う。
しかし今度の結果は逆であった。紅炎が黒炎を飲み込み、衝撃がこちらを吹き飛ばす。
……馬鹿な!? あり得ん! 我が炎で負けるなど……!
炎自体は殆どダメージにならない。炎カッパの魔人である己は炎に対する強い耐性を持つ。炎を使った技も魔人一であるという自負があった。
だが、その自分の炎がレオンハルトの放った必殺技に負けてしまった。その事実に驚愕し、しかし認めたくなくて、ザビエルは強く歯噛みしながら相手を見据える。
レオンハルトの言葉は続き、
「アイツを馬鹿に……テメェ如きが……テメェ如きが馬鹿にしてんじゃねぇぞ――ッ!!」
「! ガ、っ……!」
レオンハルトが全身から殺気と剣気、闘気といったものを溢れ出させる。
それは分身のそれとは明らかに違う。それどころか、ザビエルが今まで一度も見たことのないほどの力の奔流だ。
赤いオーラが全身から立ち昇り、周囲の風景を歪ませるどころか、物理的な圧力となってザビエルを吹き飛ばそうとする。その余波で、床に散らばった破片をカタカタと揺らしてしまう中、レオンハルトは右手を伸ばした。
「――〝オル＝フェイル〟ッ!!」
レオンハルトの持つ魔剣。魔人であれば誰もが知っているはずの魔剣。
しかしザビエルが見たそれは、
「紅い、刀身……!?」
蒼色の刀身ではなく――紅。
紅く変化した魔剣は、まるで魔人レオンハルトの本気。または怒り

を表しているかのように紅く煌めいている。視界に入れているだけで、不安や恐怖、禍々しさを感じてしまう。
本能がそれを拒否してしまい、ザビエルは一歩後退った。しかし、
「逃げようとしてんじゃねぞ、ザビエルッ!!」
「っ！　ぐっ!?」
逃さない。
全力の殺気をぶつけてくるレオンハルトに怯んだところで、魔剣が振られ、ザビエルは吹き飛んだ。
レオンハルトが放つ真空の斬撃。遠距離からでも相手を斬り刻むことが出来る剣技。
しかし通常のそれとは明らかに威力が違うそれは、防御に成功したザビエルをたやすく壁まで吹き飛ばし、背中を打ち付けた。
「おいおいどうしたッ!?　随分と情けない姿じゃねぇか!?」
「ぐぅ……舐めるな――」
と、言ったところで、
「少し力を出したくらいでこれか？　どうした、今までに散々喧嘩を売ってきた……お前が望んだ喧嘩だ、ぜッ！」
「ギ、アアアアアッ!?　き、貴様アア……！」
魔剣がこちらの身体を斬り裂いた。激痛で悲鳴が漏れる。
しかしレオンハルトは止まることなく、魔剣で身体をめった突きにする。
「ククク……どうしたザビエル。俺の強さに絶望したのか？　――次は左足いくぞ」
「ッ！　ギッ！　やめ――ッ、ぐああァアアッッ!?」
魔剣が左足を貫き、血飛沫を当たりに撒き散らす。
苦しみに悶えるザビエルをレオンハルトは愉しそうに笑みを浮かべながら、怒りが籠もった瞳で見詰めると、
「俺が実力行使に出ないと知って調子に乗ったのか？　下手に出てりゃつけ上がりやがって……テメェみたいな馬鹿が出るなら俺も対応を考えねぇといけねぇなあ!?」
「っ……ぐああッ！」

右足を貫かれる。必死に右手を動かし、剣で抵抗してみせるも、それはレオンハルトにたやすく弾かれ、
「偶には魔人らしく、魔人筆頭としてッ！　何度言っても言うことを聞かねぇ馬鹿への対処法を！　お手本がてら見せつけてやるのも！
悪くねぇかもなあッ!?」
「ッ、グッ！　ガぁあ!?　や、め……グァァァッ！　止、め――」
「最初に言ったはずだがなァ！　上位の者を怒らせるなってよ！
散々忠告してムカつくテメェにも平等に優しくしてやったのに、それなのに――テメェがこんなにも間抜けだとは思わなかったぜ、ザビエル!!」
「ガァァァァァァァァァ――ッ、ぐッ、アァ……!!」
右手、左手、右太腿、左太腿、右腕、左腕、左肩、右下腹部、右肩。
順番に魔剣を突き立てられ、ザビエルは止まない激痛を与え続けられる。
簡単に死なないように、致命傷になるような部分は避けて。
まるで拷問するようにレオンハルトはそれを続けていく。
「俺の分身にも言ってやがったなァ!?　ほら、命乞いをしてみろ！
みっともなく床に額を擦り付けろ！　そうすりゃあ許してやるかもしれねえぞ!!」
「ア、ぐ……」
ある程度身体の大部分を斬りつけたレオンハルトは、これ以上斬れば死んでしまうとでも思ったのか、地面に転がったザビエルの頭を踏み付ける。
床に叩きつけ、頭を掴んで壁に叩きつけ、血塗れで傷ついてない場所がないほどにボロ雑巾になったザビエルの顔面を蹴り飛ばし、床に転がす。
全く歯が立たない。既に戦闘は戦闘の体をなしておらず、一方的な暴力になっている。
そんなザビエルを、レオンハルトは冷たく見下ろすと、
「もしくは――ここで死んでおくか？」
「――！　や……め……！」

魔剣を首元に突き付けられ、必死に声を出すも満足に声を上げることが出来ない。
制止を呼びかけようとする間もなく、レオンハルトは魔剣を振り上げ、
「――レオンハルトよ。その辺にしておくが良い」
「！」
しかしそこで、救いの声が聞こえた。レオンハルトの腕が止まる。
そして即座に魔剣を空間に収め、闘気も何もかもを鎮めると、レオンハルトは膝を突き、礼をした。
「……申し訳ありません――ナイチサ様。熱くなりすぎてしまいました」
「そのようであるな。この惨状を見れば解る」
……ナイチサ様……!!
戦闘でボロボロになった廊下をゆっくりと歩いてきたのは、この城の支配者――魔王ナイチサ。
ザビエルにとっては救いの手に他ならない偉大なる御方が、周囲、膝を突いたレオンハルトや床に転がったザビエル、戦闘の爪痕を残すフロアを見て言う。
レオンハルトは膝を突いたまま、
「……面目次第も御座いません。魔人筆頭である私が、魔王の居城を荒らしてしまうとはあってはならないこと。如何なる処罰も覚悟します」
「……確かに、やり過ぎではあるな。卿とあろう者が……」
ナイチサは少しばかり気を落としているのか、軽く溜息を吐いた。
それだけ見れば普通のやり取りだが、ナイチサをよく知るザビエルにとっては違和感でしかない。
……追求が弱い……何故、怒りもしないのだ……？
ナイチサ様であれば、配下の魔人の喧嘩だけならともかく、城をここまで破壊されて怒らないはずがない。だからこそ、ザビエルは最初に手を出した相手をレオンハルトにするつもりであった。あくまでも自分の実力で打倒するのが目的である。

故に解せない。そんな思いを得ていると――しかし、ナイチサは耳を疑うような発言をした。
それは、
「……だが、余もそれを承服した身だ。面白い見世物であったことであるし……今回の件は両者不問としよう」
「……はっ、御身の慈悲深き裁定に感謝致します」
……承服した身……だと……？
それはまさか、と思っていると、ナイチサはレオンハルトの言葉を受け、続いて言う。
「ザビエルよ。随分と、レオンハルトを怒らせたようであるな？」
「……ぁ……ナイ、チサ……様……！」
どういう事ですか、と言外に問う。
するとナイチサは笑みを浮かべ、
「フフフ、卿は謀られていたようだぞ？　何しろ――事前にレオンハルトの方から余に、卿が喧嘩を売ってくるかもしれないからそれを受けることを許してほしい、と申し出があったのだからな」
「なっ……!?」
驚愕に目を剥く。するとレオンハルトが息を吐き、
「……お言葉ですが、ナイチサ様。私は謀ってなどいません。ただ……そういう事があるかも知れないので事前に許可を取ったまでです」
「で、あろうな。己を律することに誰よりも優れた卿が、ここまでするとと言うことは本当に喧嘩を売られたのであろう。途中から見ていたが……フフ、魔人同士の喧嘩など見ても面白みもないと思っていたが、卿とザビエル程の魔人ともなれば中々に見所があったぞ」
……そんな、そんなことが……。
最初から、最初から全てレオンハルトの掌の上だったというのか。
認めたくない。屈辱で内心が染まる。しかし、ナイチサ様はレオンハルトと、床に転がったこちらを向けて、
「中々に愉しい余興であった。ザビエルも、良い見世物であったぞ」
余興。見世物。

この戦いはそういう意味でしかなかったと言う。
「我、は……レオンハルト、を……越え……！」
そして、貴方様に忠誠を捧げ、そのために命を使う。その想いだけは曇りないものだ。
だから己を認めてくれ、と、手を伸ばした。
そんな己を、ナイチサ様は、何とも思っていないような様子で見下ろし、
「……ザビエルよ。卿ではレオンハルトに敵わぬ。身の程を弁えることだ」
「そ、んな……そんなことは――」
「もう少し人を見る目というのを養うがよい。卿は強さだけはあるが――些か蒙昧だ」
「っ……」
その冷たい目に何も言えなくなる。
ザビエルが言葉に詰まる中、ナイチサは息を入れて身を翻す。そして、
「余の配下として、もう少し精進するのだな。――レオンハルト」
「はっ」
そのままレオンハルトを連れ立ってその場を後にしてしまった。
ナイチサは振り返らない。
だが、代わりに、
「……ふん」
「っ……！」
レオンハルトが、立ち去る寸前、こちらを見て鼻を鳴らした。
その視線は、こちらを見下しきっているような視線であり、
……許さぬ。
憎らしい。
自分の上に立ち、魔王の信頼を一身に受けるだけでは飽き足らず、
……この我を……ここまでの屈辱を味わわせおって……！
こんなに惨めな思いをしたのは生まれて初めてだ。
頭が、血が煮え立つ。奴への憎しみで。

……いずれ……貴様に復讐してやる……！
ザビエルは床を這いながらそれを誓う。
しばらくして戯骸以外の無事であったらしい使徒達が駆けつけるまで、ザビエルはその場で怒りと屈辱に震えていた。

……少し軽率だったな。
レオンハルトは、ナイチサに付き従いながら先程の事を思って内心、憂鬱な思いであった。
最初は最近憶えたばかりの〝分身〟の実験がてら、ザビエルの襲撃に備えようと思っていただけであったのだが――想定外の事を言われて喧嘩を買った挙げ句、怒りで我を忘れて力を出してしまった。
見せるつもりもなかった力の一端も見せてしまったし、あれだけ気をつけていた城の破壊までしてしまった。
そのことに関して、ナイチサは全く怒っている様子がないのが幸いだろう。むしろ少し機嫌が良さそうだ。それほどまでに見ていて面白かったのだろうか。
それはともかく、
……あのままではザビエルを殺していたしな。そのことは感謝だ。
まだ奴を殺すわけにはいかないのに、怒りに身を任せて殺してしまえば面倒になる可能性があった。
そして分身の性能もある程度は把握出来た。やはり四天王級の魔人相手では分が悪い。それが分かっただけでも収穫はあったと言えるだろう。
だがザビエルを安易に殺さずに良かったと思う一方で――奴を殺してしまいたい、という想いは未だに残っている。
それはザビエルの発言によるものだろう。それを引き金に今まで積もり積もった不満が爆発した。今までは扱いを決めかねていたが、
……もうお前の〝運命〟は決まった。
許しはしない。アイツを馬鹿にした奴には、それ相応の報いを受けさせてやる。

カミーラの城

魔人レオンハルトと魔人ザビエル。二体の魔人の戦い。そして、ザビエルの敗北は直ぐに多くの魔物の知るところとなった。

戦いが行われたのは魔王城。その戦いを、少なからずであるが見た者もおり、ザビエルが瀕死の体で運ばれていくところを目撃した者もいる。

対するレオンハルトはほぼ無傷である。ザビエルの度重なる挑発にとうとうレオンハルトが激怒し、城の一部分を破壊するほどの力を見せつけ、一方的に半死人に追い詰めた、というのが詳細である。

それから少しして、ザビエルは魔人の驚異の回復力で復帰したが、前とは違い、ザビエルはレオンハルトを挑発することはなくなり避けるようになり、更にはレオンハルトの方もザビエルを無視することが多くなった――城の破壊跡や目撃者の証言もあって、これがレオンハルトの圧勝劇が事実であることの裏付けともなった。

だが、それほどの事件の反面、周囲の反応は冷ややかなものであった。

というのも、ザビエルが傲慢なのは言わずと知れたことである。あの規律を重んじ、自ら暴れることもしないレオンハルトですら怒らせたのも無理からぬことであった。

しかしそうはいってもザビエルも魔人四天王であり、殆どの魔物、魔人にとっては雲の上の強さを持つ上級魔人。内心では〝ざまあみろ〟と思っていても、態度に出すものは本当に極一部であった。

加えて、レオンハルトの怒り、というのも他の魔人や魔軍の将校らを緊張させた。魔人の喧嘩を仲裁することが多く、喧嘩を売られることがあっても、それはレキシントンという戦好きの例外が頻繁に、最早遊びに誘うような気軽さで行われるくらいであり、殆どの喧嘩は買うことすらない。気に食わない魔人がいても平等に扱い接する。それほど理性を律する術に優れたレオンハルトが、激怒した。一体何をすればそうなるのかは解らなかったが、怒らせたら殺されてしまうかもしれないその恐怖を身近に感じたことは、魔人達の襟を正させるの

は充分であり、少しの間、僅か数年程度であるが、魔人達は自らの行いに気をつけ、魔人同士の喧嘩がほぼ無くなった程である。例外はやはりと言うべきか、レキシントンくらいのもので、彼だけは憚ることなくレオンハルトに喧嘩をしようと誘いにいっている。

魔王ナイチサも、このことで何らかの処罰を行うこともなく、大規模な作戦行動も事件もない。

結果、魔人レオンハルトと魔人ザビエルの関係が険悪化した。しかし魔物界は反面、暫しの間ではあるが平穏になったそんな時、当人であるレオンハルトはある魔人の城に招かれたのであった。

「招待されるのは二度目だったか？」

「ええ、一度目は、城が建てられた時にカミーラ様が招待致しました」

「わたくし、初めて来ましたの！　カミーラ様！　お招きありがとう御座いますわ！」

「……うむ」

魔物界。

大陸西部の森。ミダラナツリーというツリー都市の近くに建てられ、白金で彩られた豪奢な城に、レオンハルトは使徒のキャロルとともに招かれていた。

そこは数百年前に建てた魔人四天王。カミーラの城であり、数人用の小さなテーブルで、主である魔人カミーラは幾つもの装飾が付いた豪華な椅子に長く綺麗な足を組んで、頬杖をついていた。

テーブルの正面、来賓用で用意していたであろうワンランク価値が落ちる椅子に、レオンハルトのみが座り、使徒であるキャロルや七星は立ったまま、お互いの主の横に控えている。キャロルが純粋に感動しているのか、カミーラに向かって勢い良く礼を行う。続けて、

「大きくてキラキラしててすごいですわー！　さすがはカミーラ様ですの！」

「……そうだろう」

「ええ！　カミーラ様の美しさに相応しいかと！　……あっ、でもカ

ミーラ様の方が綺麗ですわ！」
「くくっ……そんなに褒めるな。……何か食べるか？」
「頂きますわ！」
「七星」
はっ、と機嫌良さそうな主からの声を聞いた七星は、求めたれたことを正確に読み取り、離れて控えていた美少年――カミーラの下級使徒を呼ぶと、直ぐに高級料理であるうはぁんが運ばれてくる。デザートとしてはよく出されるもので、滅多に取れない幻の食材、桃りんごを使ったデザートだ。
それをキャロルに与えたカミーラは、頬を膨らませて〝美味しいですわー！〟と頬を綻ばせるキャロルを見て小さく笑みを浮かべる。レオンハルトはそれを見て、
……やはり、カミーラと会う時はキャロルが適当だな。相性が良い。
昔からではあるが、美女、美少女の類が大嫌いなカミーラはキャロルに対してはかなり甘く、時には優しさすら見せるときがある。
今も、言われ慣れているであろう単純な美辞麗句を美少女といえる容姿を持つキャロルから言われ、満更でもないのだろう。眉をひそめるどころか笑みすら見せ、食べ物を上げるほど機嫌が良くなっている。
先程、招かれたことへの礼儀として、宝石を幾つか手土産としたのだが、眉一つ動かさなかったカミーラがだ。
その理由をレオンハルトは把握していた。おそらくではあるが、
……キャロルは純粋だからな。何の裏表もない正直で、真っ直ぐな言葉だと分かるからこそ、気に入っているのだろう。
カミーラに限った話ではないが、やはり権力者にもなると、その手の擦り寄りや美辞麗句は聞き慣れてしまっている。何らかの思惑がある言葉、そうでなくても普通の相手ですら、邪推し、素直に受け取れないものだ。
しかしキャロルにはあまりそういった部分は見受けられない。善悪に頓着がないどころか、ほぼ考えてない節がある。最近は空気を読

むことは出来るものの、それでも思ったことは素直に口に出すし、命令されればどれだけ残酷なことでも明るく実行してみせる。友人、知人といった相手でもそれを行うかどうかは解らないが、それでも一番容赦がないのはキャロルであろう。捕まえた人間から情報を引き出せ、と言うと拷問の教本を見ながらそれを行うし、馬鹿にされたり、何か不愉快なことがあるととんでもないグロ行為を行う時がある。反面、人間や知能の低い魔物やムシ相手でも優しかったり、仲良くしていたりもするが、やはり純粋なのだろう。

……もっとも、カミーラの場合は愛玩動物的に見ていそうだがな……。

だから気に入られているのかもしれない。女性、美少女、というより先に、ペット的な感じを覚えるのだろう。理解らなくもないから困る。

とはいえ、レオンハルトが気になるのはそれだけではない。カミーラに視線を向けて、適当な話題を振る。

「前に来たときはそれほどでもなかったが……随分と、人間――美少年が多いな？」

周囲、室内には多くの美少年がじっと控えるように立っている。

これはカミーラの趣味だろう。綺麗な宝石を集めるだけでなく、美少年を集め、それを自らの下級使徒として使って愛でているのだろう。

何ともいい趣味だ、と思っていると、

「……城に１００人以上の美少女をメイドとして侍らせているものは、言うことが違うな……？」

「……」

藪蛇であった。

反射的に苦い顔を浮かべてしまうが、それを持ち直し、咳払いすると、

「……１００人はいない。９６人だ」

「五十歩百歩……という言葉が、東の島にあるらしいな……しかも見たところ、胸の大きい女ばかりだったが……変態か」

「変態ではないし、胸が大きいのは偶然……七割程しかいない」
即答しておく。
偶然、と言い淀んだのは半分はそうではないからだ。下賜されたり、献上されたものもある。
あらぬ誤解――そう、あらぬ誤解だ。まるで自分が巨乳しか好きではないと思われるのは甚だ心外である。ゆえに、
「俺の周囲を思い出してみろ。思ったより貧乳も多かったはずだ」
「……ふん、確かにそうかもしれんな……」
「……カミーラ様。そこでわたくしの方を見られるとさすがに複雑ですの……」
「……」
キャロルが少ししょんぼりしたのを見て、カミーラが目を逸らす。謝りも訂正もしないが、ちょっと悪いと思っているのだろう。これでも、カミーラにしてはかなり慮っているといえる。
そんなキャロルに、控えていた七星が、
「……まあ、レオンハルト様の第一使徒は貴方ですし、胸を張っても良いのでは――」
「何言ってますの七星！　胸の話だけに胸を張れとでも!?　喧嘩売ってますのね！　勝負ですわ！」
「そういうわけでは――くっ!?」
キャロルが七星に飛びかかっていった。
室内なので得物を抜くことはなく、徒手格闘で挑んでいる。七星も防戦重視であるが応戦し、使徒同士の小競り合いが起きているが、主である両者ともに動かない。これくらいなら日常的に起こることであり、どちらも慣れたものだ。ゆえに余裕をもってお茶でも飲みながら、
「……それで、俺を呼んだのはまた何か用でもあるのか？」
「……用、というほどでもない、が……」
と、カミーラはそこで区切り、間を置いてからそれを口にした。
「……ザビエルを、瀕死にまで追い込んだそうだな……？」
「……その話か」

その話題についてはあまり好んで話したいことではない。こちらとしても恥ずかしい事件であり、同時に怒りが沸いてくる話題であるからだ。
しかし、荒々しい思いを抑え、レオンハルトは冷静になることを努めて言う。
「あいつの挑発に、我慢が出来なくなっただけの話だ。他に言うことはない」
「……そのまま殺してしまえばよかったものを」
苛烈な言葉に少し驚く。だが、ザビエルの傲慢さは魔人であれば誰もが思うところがあるものだ。気位が極めて高いカミーラであれば嫌っていても何ら不思議はないだろう。
「……それには同感だが……殺してしまえば問題になる可能性もあったからな」
「ふん……あれが生きてることの方が問題だ……」
……相当嫌ってるようだな。
しかし、その言には一理ある。ザビエルは度々他の魔人とも諍いを起こす上、独断専行も多いので問題も多い。魔人筆頭としても魔軍参謀としても害であるし、個人としても癪に障る。その暗い感情を思いながら、
「まあ、あの傲慢さだ。お前が嫌うのも無理ないが……俺はもう、かっぱの戯言だと思って流すことにした」
「かっぱ……か。くくっ、それは良い名だな。今度、使ってやろう……」
だが、とカミーラは嘲るような笑いを収め、
「……かっぱの分際で、魔人四天王の席に着くなど……あり得ないこととは思わぬか……？」
「……何が言いたい？」
目を細めて問う。
カミーラはプライドは高いが、魔人四天王であることを誇ることも、それを持ち出すことはしない。生まれつき、実情はどうあれ、貴人として過ごしたカミーラは、自分が上位に立つことを当然と考えて

いる。魔人四天王の座も、悪い気はしないから就いているに過ぎないだろう。
ゆえに、言いたいことは分かる。だが敢えて、それを自分から口にすることはしなかった。
カミーラの口が、弓形に歪み、
「言わずとも分かるであろう――――取り除け」
「……分かってはいたが、本当に言われるとはな」
軽く息を吐きながら応じる。カミーラが続けて、
「お前なら簡単だろう……さっさと殺してしまえ」
「……さっきも言ったが、問題がある。ナイチサ様にも止められてしまったしな……」
そう。魔人筆頭という魔人を統率する立場であり、魔軍参謀という魔軍を統括する立場に就く自分は、常日頃から規律あるよう他者にそれを強いており、それを言い続けている。
それだけであれば、魔人の行動の自由を引き合いに出して行うことも出来るが、なまじザビエルが魔人の中でも立場があるのが問題だ。
実際、ナイチサは殺さない程度に痛めつけるくらいならともかく、殺すことは直前に止めた。あれはやはり、家臣を減らすのは好ましくない、と思っているか、まだ見限るほどではない、と判断したか――あるいは両方だろう。
……そうでなければ――
と、仄暗い感情が内心で増幅する。
「……くっくっくっ……レオンハルト……お前のそんな顔は初めてみたぞ……」
「……あ？」
急に愉快そうに笑い始めたカミーラに、何だ、と眉間に皺を寄せる。
しかし、なおもカミーラは笑いながら、
「くく……聞いていれば……まるで邪魔が無ければ……問題が無ければ――殺している、と、そう言っているようだぞ……？」
「……」
「気づいておらぬのか？　――憎々しさが、溢れているが……」

「……自覚はしてる」
カミーラに指摘され、そう答えるも、どの程度かどうかまでは、鏡を見ていないので解らない。
しかし、そう言われてはもう隠す意味はないか、と思う。
そう思うと、言葉はすらすらと喉を通った。
「……当たり前だ。殺していいなら――――とっくに殺してる」
「……ほう？」
カミーラが興味深そうに笑みを浮かべながら視線を向ける。
まるで先を促されているようだが、分かっていても止める気もない。
「いいか？　いずれ、あのクソ野郎は俺が直々に相応の報いを与える。手出しするんじゃねぇぞ」
「……くくく、怖い怖い。お前を、それほどに怒らせるとはな……」
あまり使わない強い口調をカミーラに向けて使ったが、カミーラは少し驚きはしたものの怒ることはなく、それどころか滅多に言わないような冗談めかした言葉を吐く。
「……それなら、私が言うことはないな……くっくっ……どのような報いを受けさせるのかは気になるが……」
「……クク、安心しろ。奴は地獄に叩き落とす。普通には殺さねぇからな」
「くく……教えてはくれぬのか？」
「悪いが、教える気はない。……だが、事が終わった後でなら、奴の醜態を思う存分聞かせてやる」
「……く、くくくく……！　それは良い……なら、大人しく待ってやろう……」
「――レオンハルト様にカミーラ様が楽しそうに笑ってますの！　何か良いことでもありましたの!?」
「機嫌がよろしいですね」
カミーラと二人、くつくつと笑っていると、勝負に区切りがついたのかキャロルと七星が戻ってくる。するとカミーラが、
「くく……なに、レオンハルトと……ちょっとした、悪巧みをしていた

……」
「……なるほど」
「そうなのですか!?　なら、当然わたくしもレオンハルト様とカミーラ様のお力になれるよう頑張りますわ！」
　気合いを入れたようにポーズを取り、屈託のない笑みを浮かべるキャロルに、レオンハルトは頼もしく思いながら言ってみせる。
「ああ、お前にも働いてもらうからな」
「あっ……はい！　頑張りますわー!!」
　軽く頭を撫でてやると、さらに気合が入ったのか声が大きくなる。嬉しそうに締まりのない笑顔を浮かべるキャロルを見ていると、微笑ましい気持ちになる。
　しかし、それと同居し、愉快な気持ちにもなる。それは、
……さて……どういう風に料理してやろうか……。
　結末だけは決まっているが、過程はどのようにでも出来る。他にもやること――やりたいことはあるため、それだけを優先は出来ないが、
　――この俺を怒らせて、タダで済むと思うなよ……後悔させてやる。
　レオンハルトはカミーラの城で歓待を受けながら、ザビエルが出来るだけ苦しむよう悪い笑みを浮かべながら、策を考え始めるのだった。

石丸の旅路

大陸。
人類圏のとある国に足を踏み入れた一行がいた。
「――おお！　ここらも面白いではないか！」
どこまでも広がるかと思われるような緑の大地。極東の島国では見ない文化の数々。それらを見て声を上げるのは、大陸では見ない恰好――和装に甲冑を身に着けた男。
その名は藤原石丸。
ＪＡＰＡＮの盟主。初代帝である稀代の英傑であり、最強の剣士とも名高い男である。そんな彼に後から付いてくるのは、何人かの男女だ。
「もうっ、珍しい物を見たからって、置いていくのは止めてくださいっ！」
「何分、石丸殿は足も早いでありますからなぁ……追いかけるのも一苦労で」
眉を立てて怒っている石丸の妻――春姫と、石丸の幼馴染である菅原ミッチーが煙管で煙を吹かしながら顎に手を当てて染み染みと言う。
それを聞いて眉間に皺を寄せたのは、石丸に先に追いついていた長い黒髪を後ろで一つ結びにし、烏帽子を被った女武者、源頼光で、
「軟弱者め！　同道するというなら足腰は最低限、鍛えて然るべきであろうが！　わしは全然問題ないですよ、石丸様！」
「ははは、そのようだな！　偉いぞ！　貴様らも頼光を見習え！」
「文系に無茶を言うものではありませんなぁ……しかし、小生はともかく、奥方には配慮された方が良いのでは？」
言いながら、実はケロッとしているミッチーは春姫を見て言う。若い頃に見聞を広めるため大陸を旅していたミッチーにとって、この程度は体力的に問題ない。ちょっと速いというくらいだ。故に少し注意してみたのだが、春姫は微笑み、
「いえ、大丈夫ですよ、ミッチー様。私のことは気にしないでくださ

い」
「そら見たことか！　春は慣れてるから問題ない！」
「自分で言うことですかな……そう言えば、黒部殿は――問題なさそうですな」
　と、ミッチーは石丸と春姫という幼馴染から視線を外し、付いてきている八尺程の体躯を持つ大柄の者を見て言う。身体と顔をすっぽり隠す外套を着た男は、それを聞いて、
「いや、確かに体力的には問題ないけどよぉ……」
「？　何じゃ貴様。妖怪の癖に泣き言でも言うつもりか？」
　頼光が何気なく言う。妖怪、という単語を否定することなく、大柄の男は語気を荒げて言う。
「そうじゃねぇ！　これ着てるからくっそ熱いんだよ！　くそ……なぁ、脱いだら駄目なのか？」
　その言葉に頼光。そして石丸は半目になり、
「……妖怪王ともあろう者が情けないのぉ……」
「うむ……あっ、いや、犬だから熱いのか？　その毛並みが熱いであろうしな」
「犬扱いすんじゃねぇ!?　理由はそうだけどよぉ！」
　石丸に犬扱いされて大声を上げるこの者。その正体は皆が言うそれだ。
　――初代妖怪王、黒部。
　石丸が妖怪騒ぎを解決しようとして一騎打ちを挑み勝利したことで配下に加わった強大な妖怪だ。鋭い牙と爪を持ち、ＪＡＰＡＮ中の民から恐れられた黒部も、今となっては石丸の配下として楽しく過ごしている。
　どうにも犬扱いされてしまうのが、悩みのタネではあるが。
　そして今は、お忍びで大陸にやってきたこともあり、正体を隠している。そのことを、ミッチーは一応注意した。
「まあ黒部殿が犬かどうかはともかく、余り妖怪など口にしない方がよいかと。大陸の民に、妖怪は馴染みがありませんからなぁ。無用な騒ぎを招いてしまうかと」

「なに、問題ない！　もしバレても俺のペットだと言い張ってやるわ！」
「無理があるような……」
「であるな。このような馬鹿でかいわんわんが大陸にいるとも思えぬ。……いっそ、わんわんの王、犬王とでも言ってごまかすか？」
「お前ら、俺をそんなに虐めて楽しいか!?　特に頼光！　剣――犬王とか言ってんじゃねぇ！　噛み殺すぞ！」
　石丸、春姫、頼光がそれぞれ口々に黒部を犬扱いする。春姫は違うが。
　黒部が頼光に吠えて、外套の袖から鋭い爪を見せると、ほう？　と、頼光が不敵な笑みを見せ、
「はっ、わしを殺すだと！　上等ぞ！　殺せるものなら殺してみい！　ふはははは！　どうせ出来まい！　暴れれば姿を現すことになるであろう！」
「ぐっ、てめぇ……ほんとにちょっと噛んでやろうか……」
「ま、まぁまぁ、黒部殿。どうどう。頼光殿も、ここではあまり喧嘩を売るような真似は避けてもらえますかな？　ここはＪＡＰＡＮとは文化が違うので、問題になる可能性がありますからなぁ……」
　少し慌ててミッチーが諌める。普段はミッチーもＪＡＰＡＮでは変わり者で有名であり、大陸かぶれで自由人というのもあって諌められる側なのだが、注意する側に回っているのはやはり普段注意している者がいないからだろう。
「折角のお忍びの旅路。大事になれば国元にいる麻呂殿や月餅殿、多くの家臣に迷惑が掛かってしまいますからなぁ。まぁ、月餅殿は元凶でありますので、少しくらい掛けるのも一興かと思いますが……」
　そう。今回石丸達は家臣達の制止を振り切って逃げるように大陸に来ている。
　というのもミッチーが言うように、月餅の提案があったからであり、
「ははは！　何を言う！　俺に直々に依頼が来たのだ！　解決してやるのが筋というもの！　それともミッチーは人助けをするなと申す

つもりか？」
「血も涙もない男め！　だから女に見向きされないのだ、戯け！」
「いや、これでも結構モテるのでありますが。妻子もおりますし――って、そうではなくて、別に人助けが悪いとは言っておりませんが……」
　じゃあ何だ？　と言う石丸と頼光に、ミッチーは軽く肩を竦める。
「……ぶっちゃけ言いますに、とうに後戻りできる段階は通り過ぎておりますからなぁ。さっさと解決するために、寄り道や必要のない騒ぎを起こすのは避けたほうが無難でありましょう」
　その言葉に、頼光は驚く。本当に血も涙もない男だとでも思っていたのだろうか。それなりに長い付き合いなのに。とミッチーが思っていると、
「……貴様、妻子いたのか？」
「頼光殿。小生に興味無さすぎでは？」
　本気で驚いている頼光に大陸式でツッコミを入れる。何故知らないのか。武家でこの歳まで妻の一人もいないのに、遊び呆けていたら完全に頭おかしい人でしょう。居て遊び呆けるのもアレではあるが、そこは文化というもの。
　軽く頭を抱えていると、
「はは……ともかく、早く悪い人を成敗しなくてはなりませんね」
「最初からそう言っているのでありますが……分かってくれるのは春姫様だけでありますなぁ……」
　春姫が助け舟を出すように話を元の道に戻してくれた。味方が一人しかいない状況も珍しい。普段はゼロであるし。
　ともあれ、ミッチーは頭の中で今回の依頼について思い出す。一言一句違わず、それらは記憶しているもので、
「奴隷交易の元締め……この国の王をどうにかしなくては。調べたところ、ＪＡＰＡＮの民も被害に遭っているようでありますし、放置は出来ぬでしょうな」
「……ははは！　分かっておるわ。どうせ肥え太った豚親父であろう？　そのような豚は俺が叩き斬ってくれる！」

石丸がいつものように豪快に笑いながらも、怒気を忍ばせてそう言う。
春姫もいつもは穏やかで優しい人ではあるが、それを聞けば表情が真剣なものに変わり、
「……そうですね。大変ですが、頑張りましょう。ですが――」
と、春姫はそこで言葉を区切った。腑に落ちないものがあるという表情で、
「街の中には日本人の奴隷どころか、奴隷一人見当たりません。どこかに隠されているのでしょうか……」
「俺は人間の社会はよく知らねぇが、奴隷って雇って働かせるもんじゃねぇのか？」
「ふん、何でも良いわ！　わしが全員ぶっ殺してやる！」
「おう、斬り込むか！」
頼光の言葉に石丸が頷いたのを見て、ミッチーが微妙な顔になる。
そういえばそこについても説明しなければならないか、と。閉鎖的な国家であるため、知らないのも無理はないが、
「全員殺すだの斬り込むだのは置いといて……奴隷の情報については依頼書に書かれてありましたなぁ。憶えていないので？」
言うと、全員が目を合わせた後、一斉に、
「……大陸の言葉は解らないからなぁ……」
「……そういえばそうでありましたなぁ……」
そんなことを言ったので、何を、と思ったが冷静に思い返すと当たり前の話だった。
大陸とＪＡＰＡＮでは使われている言語が違う。ＪＡＰＡＮではＪＡＰＡＮの言語――日本語が使われているが、大陸では大陸特有の言葉が使われているので、
……誰も依頼書の内容を……概要以外知らないのでありますかぁ……。
だから妙に何も知らない者が多かったのか、と思う。思い返してみれば自分が久しぶりの大陸で遊び呆けている間、皆は何が何やら解らず右往左往したり、騒ぎを起こしていた気がする。周りに目を向けて

いなかった自分の責任か。だって、見目麗しい女子が……、と思うが言い訳してもしょうがない。とりあえず、詳細を口にしようと、ミッチーは咳払いをした。
「……まず、大陸にある商会――キリング商会が、冒険者ギルド経由で藤原家に依頼が来たのはさすがに知っていますな？」
念の為確認する。しかし、
「俺を馬鹿にしているのかミッチー！　……知っている！」
「わしを馬鹿にしておるのか貴様！　ぶっ殺すぞ！　……知らぬわ！」
「あ、確か貿易のお得意様ですよね」
「あー……確か、物を交換してるんだっけか？」
「……まあ知っているのなら良いですがなぁ……」
……頼光殿は放っておくとして、石丸殿は本当に知っておりますかなぁ……？
依頼のことは知っていても、キリング商会とかその辺の名前は忘れてないだろうか。一応、月餅はちゃんと口にしているし、結構関わりの深い商会であるのだが。それもあって、春姫や黒部は知っているみたいだ。
事の経緯としては、まず――キリング商会という大陸有数の商会から依頼が来たことに始まる。
キリング商会は以前から、ＪＡＰＡＮの品を求めて取り引きをしているお得意様で、ＪＡＰＡＮが石丸によって統一される以前、古くはＪＡＰＡＮが生まれ、大陸と繋がる天満橋が出現した折りから様々な物品を金銭や大陸の品と交換するなりして取り引きを行っている。
そんなキリング商会からの依頼こそが――大陸のとある国が行っている、奴隷交易を止めてほしいというものだった。冒険者ギルド経由で来たその依頼だが、普通ならそのような大事に関わらせるはずがない。
しかし藤原家の参謀である月餅は、これを石丸に伝えた。すると一も二もなく頷き、その日の内に制止を呼びかける坂上田村麻呂や他の家臣から逃げるように自分達を連れてＪＡＰＡＮを出た。

石丸は大陸に興味があったのだろう。そして、月餅もそれを見抜いていたが故、大陸を見せるためにそれを承諾したのでは、とミッチーは思っている。
……何となく、月餅殿の意図は分かるが……今はそれは置いておくべきですなぁ。
予想が当たっているなら、近い内に月餅は石丸にある提案をするのではないだろうか。それはミッチーにとっても悪くはないと思うものだが、やはりかなり大事になる。そのことについてはこれが終わった後で協議するしかないだろう、と、ミッチーは思考を元に戻した。
「奴隷の行方ですが……おそらくは境界近くの街、ないしは陣にいるでしょうなぁ」
「？　何故そんなことが解る？　というか、陣だと？　貴様、わしを馬鹿だと思って適当言っておらんだろうな？　言ってたら殺すが」
「……街は解るんですが、境界近くって……国境ではなく？」
頼光と春姫の問いに、ミッチーは頷く。
「適当も言っておりませんし、国境ではなく境界で合っておりますよ。……皆様はここが大陸のどの辺りにあるか知っておりますかな？」
「……真ん中あたりであろう？」
どうやら石丸は気づいたようだ。元より頭は悪くない。
「そう、真ん中でありますなぁ。であれば、その北になにがあるかは異国の事、我らには馴染みが無いとは言え、さすがにご存知でありましょう？」
「真ん中の北……って、あ――」
春姫が気づいたように声を上げたところで、ミッチーは答えを口にした。
「気づいたようでありますなぁ。そう、この国の領土より北は――――魔物界であります」
「！」
皆の表情が硬くなるのを確認しつつ、ミッチーは続ける。
「魔物界、つまりは魔王と魔人が支配する土地であり、多くの魔物が住まう土地でありますな。その境界を接する国では、魔軍の侵攻は日常

的に行われていると聞きます」
　大陸では常識に近い事柄だが、百年近く大陸から離れ、天満橋が繋がり数百年経った今でも、極東の島国であるＪＡＰＡＮの民にとって、魔王や魔軍の脅威は馴染みが薄い。それよりは鬼や妖怪の方が詳しいくらいだ。逆に大陸では妖怪は全く見ないし、鬼も殆ど出てこないという。
　ともあれ知らぬのも無理からぬことであり、責めることは酷であろう。他ならぬ自分も、幼い頃から勉学に励み、知識の上では知っていたが、それを現実のことだと認識出来たのは大陸を旅してそこに住まう人々の生活を見て、話を聞いたからこそだ。ＪＡＰＡＮで賢人、知者と呼ばれる者でも正しくそれを認識しているものは殆どいないだろう。ＪＡＰＡＮでは右に出る者がいない知者であると言われる自分ですらそうだったのだから。
　だが、月餅殿は知っているだろうな、と己を越える参謀への信頼を確かにしていると、もっとも馴染みが薄いだろう妖怪王である黒部が頬を爪で掻きながら、
「……よく解かんねぇが、それと奴隷が何の関係があるんだ？　奴隷っていやぁ、さっきも言ったが働く――」
　と、言ったところで動きが止まった。顔は見えないが見なくても解る。まさか、と言ったところだろう。
　黒部がややあって声を低くして言った。それは、
「……まさか、奴隷を戦わせてんのか？」
「……左様でありますな」
　正解の言葉であったため頷く。すると横から声が飛んできた。
「他所の土地の民を攫って戦わせる？　そのようなことをしても大して戦力にならんだろう。鍛錬を受けていない者を戦わせたところで邪魔でしかない。それとも、肉壁にでもしておるというのか？」
　その言葉を放ったのは頼光だ。冷静であるのは、彼女が武士の棟梁として幼い頃から教育を受け、それを我が物としてきたからだろう。ＪＡＰＡＮの武士はこういった血生臭い話題や、一見卑劣ともいえる行為には慣れている者が多い。これも文化の違いだろうが、ＪＡＰＡ

Ｎの武家に生まれたとしても、露骨に眉を立てている春姫の様なお優しい方もいる。人間としては彼女の方が好ましいが、この場においては即座にその言葉を吐ける頼光の方が頼もしい。ミッチーは頷いた。
「当たらずといえども遠からず……と言ったところでありますなぁ」
「何だ？　遠回しに言いおって。そこらの民を使って無理やり戦わせたところで、利よりも害になるであろう。囮くらいには使えるかもしれぬが、結局負ければ全員屍となるのだ。斯様な策を取るくらいであれば、勝ちのための策を執る方が――」
「おっ、正解が出たではありませんか」
「あぁ？」
　眉をひそめて首を傾げる頼光に、ミッチーは敢えて笑って言ってみせる。大陸の事情はもっとどうしようもないものだと、
「確かに、戦えぬ者を前線の陣や街に置いたところで時間稼ぎにしかなりませんなぁ……しかし、それこそが狙いでありますな」
「どういう事だ？　援軍でも来るのか？」
　首を振って言う。
「まず、魔軍というのは基本、相手を滅ぼし尽くす――ということを余りしないのでありますよ。ある程度軍を進め侵略し、街を占領するなどして、しばらくすれば物資や残った女人などを持ち帰る。これが魔軍の戦略ですな」
「……意味が解らんが。何故、相手を滅ぼせる力があるのにそれをせん。魔軍とは斯様に心優しいのか？」
「それについては解りませんが、とにかくこれは大陸の国家では常識でありますな。故、大陸では魔軍との戦争とは勝つための戦ではなく、どれだけ時間を稼ぎ、被害を少なくするか、という戦いになるのでして。さすがに戦わずに逃げることは民のひんしゅくを買いますし、色々と問題がありますからなぁ」
「……なら、奴隷というのは――」
　頼光の言葉を引き継ぐ。それは、
「簡単な事でありますな。……前線の街や陣を、他国から連れてきた奴隷で全て賄い、それを犠牲にすることで魔軍に帰ってもらう。――

早い話が生贄でありますな」
「なっ!? そんなの――」
酷すぎる、と目を剥いて言おうとする春姫。しかし機先を制するように、
「人としての倫理はどうあれ、自国の民の犠牲を少なくする、という意味では有用な策ではありますな。……その他国を敵に回すことになることを考えなければでありますが……」
「……それについてはどう問題を解消しておるのだ?」
石丸から問いが来る。主君からの、帝からの問いだ。答えたいが、
「そこが小生としても腑に落ちないのでして。幾ら軍事力に優れていたとして、一つの街を賄うほどの奴隷を他国から連れてきていれば、周囲を敵に回すどころか魔軍を無視してまで即刻攻め込んできてもおかしくないのでありますがなぁ……一国だけでないことは、数が少ないながらもＪＡＰＡＮからも連れて行かれていることから解りますし……」
隣国や比較的距離が遠い国から攫ってくれれば戦争状態にはなり難いかもしれないが、他国との関係を考えるとやはり悪手にも見える。
こんな時、他国との交友をそれほど持っていないＪＡＰＡＮは情報面で後れを取る。ともすれば、国同士で秘密裏に協定を結んでいるという可能性もあるのだ。
と、それを考え、
「……もしかしたら、国同士で取り決めをしているのかもしれませんな」
「あぁ? 自分の所の民を売るような奴いんのか?」
「そうとも限らないのでありますな、黒部殿。先程も言った通り、魔軍と多く戦うのは魔物界と面した国々。大陸南部の国などは北側の国が盾になっているので被害も少ないでありますから……そのことを引き合いに出し、奴隷をある程度連れて行くのを黙認しているのかもしれませんな。ある程度金でも与えて譲歩すればそういうことも可能であるかと」
「はぁ? じゃあまさかＪＡＰＡＮでもその取り引きやってんのか

？」
「そういう事実は、少なくとも小生が知る限りはありませんな」
　これでも行政を司る長である。そういうことを黙ってやってる大名はいないだろう。ＪＡＰＡＮ南西部、アフリカ半島ほど幾内より離れれば有り得なくもないが、幾ら南国人とはいえ、帝である石丸がいるのに勝手なことをするはずもない。日本人であれば帝に逆らえないのだ。故にそれはない。
「じゃあ、勝手に……」
「でしょうなぁ。まぁ、舐められているのでしょう。極東の田舎国家。今まで大陸との交友も殆どないものでありますし……勝手にやっても問題ないだろうと」
「……そんなの、酷いです」
　春姫が顔を俯かせる。
　確かに、遺憾ではある。
　だが、ここまで暗い話をしていて何だが、
「……なるほどな。ははは！　ならば俺がやることは変わらんではないか！」
「石丸様？」
　急に笑い始めた石丸に、皆が注目する。
　石丸は皆に向かって通る声で告げる。
「元よりそれを何とかするために来たのであろう。まあ旅のついでにしておくにはあんまりだが、俺がいればどうにかなる！　首謀者を叩き斬ってくれるわ！」
　楽観的に笑う石丸に、皆が一瞬驚くが、しかし慣れたものでそれが伝播するように笑みになっていく。
「はーっはっはっは！　それでこそ石丸だ！」
「はははは！　情けない姿を見せれば噛み殺されてしまうからな！」
「おう！　だが、今回噛み殺すのはそのくそったれの馬鹿だ！」
　黒部が石丸と一緒になって笑う。実のところそういう気は微塵もない癖に、照れ隠しでああいった言を吐いているのだろう。
「石丸様！　わしもやりますぞ！　ぶっ殺すことに関しては源氏の右

に出る者はおりませんからな！」
「おお、頼りにしているぞ！　お前の剣は苛烈で最高だからな！」
「せ、石丸様……！　はい、気合いを入れて頑張りますぞ！」
　石丸に褒められたことで頼光が少し頬を赤くする。頼光は普段は男勝りで物騒な女だが、石丸の前だとああなる。こういったやり取りは使えるからメモしておこう。
「石丸様、頑張って人助けしましょう！」
「おう、ちゃんと俺に付いてこい！」
「……はい！」
　春姫と石丸は流石の呼吸。元服してすぐに一緒になって旅をしていたのもあって言葉少なくともちゃんと意志を伝えあっている。自分が旅に参加したのは、大陸から帰ってきてしばらくしてからであるから、ほんの少し開きがあるのはしょうがない。
　だが、
「……さて、では小生は出来るだけ楽に済むよう策でも考えるとしますかな。月餅殿も今回はおりませぬし……」
「ははははは！　何を言っている！　お前も月餅も、ＪＡＰＡＮでは右に出る者のいない知者ではないか！　その頭で俺を助けろ！」
「……言われずとも、誠心誠意、人事を尽くす所存であります。ま、程々に期待しておいてくだされ」
　石丸はこうやって褒め称えてくれるが、軍師としても政治家としても武人としても、己が月餅に劣っていることは、己が一番理解している。
　しかしこの古くからの友は幼い頃から変わらず、頭を使うことがあれば己を頼りにしてくれている。それに応えないわけにはいかない。参謀としての能力こそ月餅に一歩も二歩も劣るだろうが、主の求めることを察する能力だけは己が一番であるという自負がある。精々うまくいくように頑張ろう。
　石丸が皆を先導して先に進む。自分は変わらず頭を回し続ける。思うことは、
　……奴隷交易が国同士の秘密協定の類であったとして……キリン

グ商会は如何様にしてこの事を知った？
幾らそれなりに大きい商会とはいえ、国の機密を知れるほどなのか。奴隷交易に関わっている可能性もなくはないが、自らが行っていることを態々潰させるようなことはしないだろう。ＪＡＰＡＮは特に大口の相手だ。関係が悪くなれば少なくない損害を被るだろう。
考えられるのはそれを行っている国の有力者とのコネがあり、頼まれるなどして奴隷について知ることが出来た。それをお得意様であるＪＡＰＡＮに恩を売ろうと、知らせた。というのがあり得るが、
……どうにもすっきりしませんなぁ。
解らないことがあるとそういった気持ちになりやすい自分であるが、今回は特にそう思う。
とはいえ今考えるべきは、如何にして首謀者の所まで行き、それを抑えるかだ。戦闘に関しては心配する必要もない。石丸が最強であることもそうだが、他の面々も歴史に名を残せるほどの英傑達であると見ている。勿論、自分もだ。相手は国がバックにいる上、軍だけでなく、雇われた用心棒などもいるがろうが、後れをとることはないだろう。
しかし楽に済むことに越したことはない。菅原ミッチーは、石丸の後に続きながらそのための策を考え始めるのだった。

街を一望出来る丘の上。
風に揺られる一つの影があった。
「……」
その影は黒いフードを被り、顔の部分を仮面で隠した怪しい者であった。
仮面から小さく覗く双眸は、街に足を踏み入れていくとある一行に向かっている。
それは大陸ではあまり見ることのない和装の人間達であり、その先頭には、白く大きな剣を背負った、精悍な顔つきの男であり、
「……アレが――」

影はその男をじっと射抜くように見つめ続ける。
そして、
「――――フ」
その影は口元に小さく笑みを浮かべると、それを最後に丘の上から跳躍し、男達を追いかけるようにして街に入った。

仮面の男

藤原石丸とその一行は、それから国の首都に足を踏み入れ、やがて王宮にまで忍び込んだ。

菅原ミッチーの策で奴隷交易を止めたいと願うその国の姫シナモンの協力を得た石丸達は安全かつ慎重に忍び込んだはずであったが、石丸と頼光が道中、兵士を斬り殺して侵入がバレてしまい強行突破に変更し、並み居る兵士を斬り捨てた。奴隷交易の首謀者である国王ハバネロは、一時は追い詰められたが、国宝であるバランスブレイカーと呼ばれる強力なアイテムの力を使い窮地を脱し、王宮の地下に逃走。地下は広大な神殿。ダンジョンとなっており、石丸一行は途中、ハバネロの命を受けて待ち受けていた実力者達を順番に打倒していく。

その全てを倒し、地下の最深部にて暴君ハバネロを再び追い詰めた石丸達は、バランスブレイカーの力に苦しめられながらもハバネロを打ち倒したのであった。

「ぐあああぁぁぁ

「……ふん。そんなことは知らぬわ。同じことがあればまた俺が斬ってやる。それに、首謀者さえ殺ってしまえば、後はミッチーや頭の良い者がどうにかしてくれるからな！　問題ない！　そうだな!?」
背後で戦闘を終えて息を入れていたミッチーを見て言う。煙管を吹かしながら、
「そうですなぁ……まあ、仲介していた商人も殺しましたし、情報もある程度ありますし……後はこの国の姫様の協力があれば断絶――とまでは行かずとも、こちらの国元と連携して止めることは出来るかと」
「そら見たことか！　神妙に斬り殺されるがいい!!」
「ぐっ……誰か！　くそ、誰かおらんのか!?」
その言葉を聞いたハバネロは呻くと、周囲に向かって叫ぶ。しかし、
「ふはは！　無駄じゃ！　貴様の配下は全員あの世に送ってやったからの！」
「他愛もない相手だったぜ」
助けを求めだしたハバネロを見て頼光や黒部が無駄だと言う。それを示すように、石丸一行はゆっくりと打ちひしがれて動けなくなっているハバネロに近づいた。
親玉を倒し、問題を解決するために。
だが、
「――！　お前ら離れろッ!!」
石丸が動いた。
身を動かし、叫ぶように仲間達に言う。
ほぼ同時のタイミングで、
「――終わるにはまだ早いな」
「っ！　うお……!?」
不意の男の声が地下最深部に響き、同時に石丸とその一行は衝撃を受けて吹き飛ばされた。
「何奴!?」
「――新手か！」

頼光と黒部が警戒し、身構える先。
そこには男らしき影が立っていた。
「――なるほど。今の攻撃を防げるくらいには腕が立つようだな」
背丈は長身。石丸よりも高いくらいであり、身体を覆い隠すような黒装束で全身を包んだ男だ。顔の上半分を仮面で隠した男はその手に何も持っておらず、石丸らを驚愕させた。
何故なら、直前に鳴り響いた金属を打ち合う音と、石丸自身が感じた手応えは、明らかに何らかの得物を防いだものであったからだ。
それに、
「石丸殿を吹き飛ばした……？」
ミッチーが小さく疑念を呟く。
藤原石丸は人類最強である。それは仲間達は勿論、石丸自身も自負していることだ。己より強い存在には今まで出会ったことがない。
そんな己を吹き飛ばした怪しい男に、石丸は興味を抱く。
「お前は……」
「……そちらさんも、ハバネロに雇われた刺客でありますかね？」
その正体を探るように、ミッチーが言う。ちらりと怪しい男の影の背後にいるハバネロにも視線を向けた。しかし、ハバネロも男を見て驚愕しているように見える。
そんな中、男は口元に微笑を浮かべた。
「フ――俺が誰かなどどうでもいい」
「何だと貴様！　戦うなら名を名乗らんか！　武士の礼儀であろう！」
「……生憎と、俺は武士ではない」
「その割には、随分と日本語が堪能でありますなぁ……まさか、日本人ということは――」
「……」
ミッチーが石丸、そして男を見たところで、
「……というわけではないようですな。日本人であれば石丸殿に逆らうような真似は致しますまい」
「……そういうことだ」

男がそう言ったところで、春姫が警戒するようにしながら男に尋ねる。
「それじゃあ、貴方は一体……何者なんですか……？」
「……ふん、もう一度言うが、俺が誰かなどはどうでもいい」
鼻を鳴らし、春姫の問いを一蹴する。
「日本語は昔……習ったことがあるというだけの話だ」
「それなら何しにきおった!?　この怪しい男め！　吐かねばぶっ殺すぞ！」
頼光が早速刀を構えて食って掛かる。頼光も、ＪＡＰＡＮの武士では五本の指に入るほどの猛者だ。その気迫を受け、しかし男は怯むことなく、
「……お前達のここまでの戦い、見させてもらった」
「何ぃ……？」
「付けられていたのですか……？」
頼光と春姫が言うと、男は軽く笑みを浮かべることでそれを肯定した。すると、まさか、と頼光がわなわなと震えだし、
「……貴様！　よもや休憩中に石丸様と色々した時も覗いていたのではあるまいな!?」
「……」
「最初に気にするのがそこでありますか……」
ミッチーが呆れたようにツッコミを入れると、頼光が怒気を漂わせて言う。
「貴様、まさか変態か!?　ぶっ殺してやる！」
「……いや、覗いていな――」
「えぇ!?　変態さんだったんですか!?」
「……違うが――」
「ええい！　この変態め！　どうせ怪しい風貌とその隠形でそのようなことばかり繰り返しているのであろう!?」
「……話を戻すが――」
「そうでありますよ、頼光殿。まぁ、顔を隠している辺り、きっととんでもなく見れない顔の非モテなのでありましょう。女日照りであれ

ば覗きくらい、リア充の寛大な心で許してやるのが良いでしょうな」
「……なるほど、そういう事情であれば――」
「……女に不自由したことは、生まれてこの方一度もない」
「ははは、何を言うかと思えば……嘘乙！　で、あります！」
「……殺す」
　ミッチーがポーズを取って言うと、そのウザさに男が凄まじい殺気をぶつけてきた。ミッチーが慌てる。ともすれば挑発に乗って正体を表してくれるかと思い、頼光達に乗ってみたが、まさかこれほどの殺気を当てられるとは、と。
　だがそこで、黒部が石丸の様子を見て声を掛ける。
「おい、石丸。さっきから静かだが何かあんのか？」
「……いや……」
「石丸様？」
　石丸の様子のおかしさに、春姫を筆頭に他の者達も訝しげな表情で視線を集めた。そのタイミングで、男は声を飛ばした。
「……人類最強、藤原石丸とその仲間。ここまでの戦い、中々に悪くなかったぞ」
「……何？」
　急に褒められ、眉間に皺を寄せて警戒を露わにする一行に、男は告げる。
「特に石丸。お前の腕は他の奴らとは一線を画している。ここまでの相手も、お前一人でもどうにかなっただろう」
　その言葉に頷いたのは石丸ではなく、周囲の者達であった。
「確かに、石丸殿は一人でもどうにかしてしまいますからなぁ……もう石丸殿一人で良いのでは？」
「雑魚も多いから俺らも戦ったけどな」
「一騎打ちということであれば、わしらは控えておりますので頑張ってください、石丸様！」
「石丸様は、頼りになりますから」
　口々に石丸を褒め称える一行。それを聞いて、男は口元を歪めると、

「だが……俺を相手にするには足りない」
「！」
と、そこで石丸一行は目を見開いた。
男が右手を前に出し、空間に手を差し入れると、その歪みから、蒼い刀身の剣を引き抜く。身の丈を越えるほどの長さを持った得物は、どこか禍々しさを漂わせており、本能に訴えかけるような忌避感のような物を感じる。
その剣を男は構えると、
「お前達の力、試させてもらう――――全員で来い」
「っ……これは……！」
「……！」
瞬間、可視化出来るほどの剣気と殺気が、紅い奔流となって男の周囲を漂い始める。その圧迫感すら感じる存在感に、石丸一行は否が応にも警戒と戦闘態勢を迫られた。
そんな中、石丸は周囲の者達に向かって告げる。
「……お前達、無理だと思ったら逃げろ」
「せ、石丸様⁉　何を――」
「いいからそうしろ。アレは俺と同格か……いや、ともすれば、俺よりも強いかもしれん」
「――――」
石丸の言葉に一行が絶句する。
藤原石丸という男は、それほどに強い。自信家であるが、それに見合った実力を持つ最強の剣士である。その石丸が、容易に己より強いと認め、さらには、口元に深い笑みを浮かべていたことで、一行はそれを認めるしかなかった。
「それは穏やかではありませんなぁ……しかし、やるしかないようです」
「確かに、アレは俺なんかよりよっぽど化け物だな。本当に人間か？」
「臆するでないわ！　鬼であろうが化け物であろうが、殺せば死ぬ！　ぶっ殺してやろうぞ！」
「石丸様……頑張りましょう！」

「……ふ、馬鹿共め」
一行が一斉に武器を構え、戦闘態勢に入ったのを見て、石丸が笑って悪態をつく。
弓と符。牙と爪。刀と槍。薙刀。そして最後に、石丸が帝である証――帝ソードを構えた。指には帝リング。額には帝ハチマキが巻かれている。清らかな神気と、苛烈な武士としての鬼気。
そして石丸自身の剣気が混ざり合い、闘気となって内側から奔出している。
「――では、参る!!」
「フフ……どうやら覚悟は出来たようだな」
仮面の男が蒼の長剣を、石丸達に向けた。
その口元には、石丸と同じように笑みが浮かんでおり、
「――全力で掛かってこい!」
その言葉を皮切りに、戦闘は始まった。

戦いは石丸の空を斬る攻撃から始まった。
帝ソードを縦に振るい、その場から動かず待ち構える仮面の男目掛けて放つは、
「――〝疾風〟!」
その名は疾風。
石丸の技の一つであり、空を斬り、斬撃を遠距離から放つ埒外の技。今まで多くの者達が、この技を振るわれ、遠距離にも関わらず両断されてきた。
しかし、その必殺の一撃に、仮面の男は同じように剣を振ることで応じた。
「っ！　馬鹿な!?」
頼光がその光景に驚愕の声を上げる。
仮面の男が剣を振ると、石丸のそれと同様の現象が起こった。それは、
「何故貴様が、石丸様の技を……!?」

――疾風。
石丸が使う技と全く同じもの。遠距離から斬撃を飛ばす技でもって応じた結果、斬撃同士が打ち消し合うような形で衝撃の余波を周囲に拡散させる。
仮面の男が笑みで、
「……何を驚いている？　どれだけの型、技があろうと、剣理を極めた者が最終的に行き着く場所は一つしかない。ならば同じ技を使えてもおかしくないだろう？」
その言は偏に、己も剣を極めた達人であると言っていたが、石丸以外誰もが使えない技を使われては納得するしかない。石丸が斬撃を飛ばしている間に距離を詰めた頼光、黒部、春姫は、それぞれの得物で持って仮面の男に肉薄する。
「死ねぇっ!!」
「ズタズタにしてやる！」
「倒れてください……！」
三者が三方向から仮面の男に得物を振るう。それに合わせて、
「荒事は苦手なのですがなぁ……！」
弓を引き絞り、男目掛けて放つ。
四方向からの襲撃。しかし仮面の男はその長い剣を構えると、
「――甘い」
「なっ――ぐっ!?」
埒外の膂力で四つの攻撃全てを、回転斬りで弾き返した。
近距離から攻撃を仕掛けていた三人が後方に吹き飛ばされると、遠距離から攻撃を仕掛けていたミッチーに向かって剣を投げる。
「得物を投げ――くっ！」
その行動に驚愕したミッチーだが、一先ず腰の脇差しを引き抜いて剣を弾く。得物が手元から離れ、チャンスを得たと思った瞬間、仮面の男は目の前にまで迫っていた。
その手に、弾き飛ばしたはずの剣を持って。
「遅い」
「っ――く、あ……!?」

「ミッチーさん!?」
ギリギリのところで脇差しで剣を防いだミッチーだが、そのまま仮面の男の右足の蹴りを食らい、壁に打ち付けられる。春姫が叫ぶ中、石丸が迫り、
「おお……!」
「……!」
連続での剣による猛攻。細かな剣の連打が高密度に放たれ、その分だけ火花を散らしていく。
それが意味するのは、石丸の剣撃を全て捌いているという現実だ。
正に神速と言うべき石丸の剣とその軌跡は、常人では防ぐことはおろか、視認すら不可能な代物である。それを正確に、一つ一つ丁寧に捌く仮面の男の技量には驚く他ない。
だが、戦いは一騎打ちではない。背後、直ぐに復帰した頼光と黒部が必殺技を放つ。
「――頼光一閃!!」
「――妖怪槍津波!!」
どちらも常人が食らえば絶命必死の技。それを石丸の剣撃を受け止めている最中の仮面の男に放つ。だが、瞬間、
「――分身」
「!?」
そう呟いた瞬間、仮面の男の背後にもう一人。まったく同じ姿をした男が現れた。
その言葉を信じるなら分身。幻影。残像の類だろう。その現れた分身は二人の必殺技を剣で受け止めると、そのまま頼光に斬りかかっていった。
「な、何だこのふざけた技は!? 幻か!?」
「なに、ただの分身だ。俺の何分の一程度の実力しかない、な」
「よ、妖怪の類ですか……!?」
「妖怪でも出来ねぇよ!!」
三人が驚愕する中、襲いかかってくる分身は、しかしちゃんと実体があり、剣を振るってくる。その間にも、石丸と仮面の男は剣撃を交

わしており、
「……ふはははは！　面白い技を持っておるようだな！」
「大したことはない」
「ふっ、左様か。ならば――こんなのはどうだ？」
「！」
　石丸の剣気が増幅したように勢いを増すと、剣を霞に構え、技を放った。
「――――〝紅蓮〟ッ!!」
　瞬間、起こったのはありえない現象だった。
　連撃。それも三つの斬撃が振るわれるもの。
　しかしそれは、全て全く同時、同じ時に放たれる。
　物理法則、時すらも無視した必殺の一撃に、逃れる術非ず。三方向からの斬撃は仮面の男を確実に捉え、血の花を咲かせる。
　だが、
「……なるほど。受ける側になってみるとこれほどに厄介だとはな」
「！　仕損じただと……！」
　後方に下がりながらも、しかし無傷であった仮面の男に目を向ける。
　何故防げたのか。それは、見ていた石丸にしか解らない。
「聞き覚えのある技だらけだが……他に技はないのか？」
「……よくぞ、気づいたな。これは俺が子供の頃に見たとある本に乗っていた技名だ」
　格好いいだろう？　と笑みを浮かべる石丸に、仮面の男は無言のまま語らない。
　代わりに石丸が続け、
「故に他の技は開発中だ！　何かあればよいのだが、中々思いつかなくてな！」
「……そうか」
　石丸の言葉に、少し残念そうな色を滲ませて頷いた仮面の男。しかし気を取り直したように仮面の奥の視線を石丸に向けると、

「悪くはないが……俺に届くものではないな」
「っ、痴れ事を！　わしがぶっ殺してくれようぞ……！」
「俺の幻影に苦戦するほどでは、それは不可能だな」
未だに分身と戦い続ける頼光らに冷たい視線を向けて言う。
「……次で最後だ」
「むっ……まだ仕合わんのか？」
「言っただろう。今のお前では、俺に勝つ可能性は……限りなく０に近い。これ以上は無意味だ」
ゆらり、と剣を構え直しながら言う。
「――来い。剣の畢竟。その理を見せてやる」
「！　やはり――」
その言葉を聞いて、石丸が嬉しさを滲ませたような様子で仮面の男を見る。
しかし、何かを言おうとする口をぐっと噛み締める。代わりに剣を構え、
「……おお……ッ!!」
裂帛の気合いを以って、仮面の男に向かっていく。そして、
「紅蓮ッ!!」
もう一度、石丸が放てる必殺の一撃を放つ。
それは今の石丸の最高、最大の一撃であった
だが、
「――がはっ……！」
「石丸様!?」
剣を受け、倒れたのは石丸の方であった。分身に苦戦する春姫が石丸の名を叫ぶように呼ぶ。
それを目撃した者達は、一体何が起こったのか理解が及ばない。
剣を振ったのは石丸だが、仮面の男が剣を軽く、撫でるように動かした途端、何故か石丸の方が倒れたのだ。――その身に三つの傷を負って。
石丸が倒れ、しかし耐えようと膝を突いたのを見て、仮面の男は踵を返す。

そして徐ろに剣を振ると、
「え――あっ」
斬撃を飛ばし、壁際でこそこそと逃げようとしていたハバネロの首を飛ばした。
そしてその死体に近づくと、その手にあったバランスブレイカーを手に取り、
「俺に勝つ可能性を、ほんの僅かでも上げてみせろ」
膝を突いた状態の石丸に告げる。
「頂にて、貴様を待つ」
「っ、待て……！」
分身が消え、一行が仮面の男を止めようとするも、
「――いずれまた、死合うぞ」
仮面の男はその場から一瞬で消えてしまった。
周囲の気配を探るも、先程まであった存在感が完全に無くなっている。
「石丸様、大丈夫ですか!?」
春姫が膝を突く石丸に駆け寄り、心配そうに肩を支える。
しかし、皆の予想とは違い、石丸は笑みを浮かべており、
「……はははは!!　なるほどなるほど！　さすがだ！　参った!!」
「石丸様……？」
まるで何か面白い愉快なことがあったと言わんばかりに、声を上げて笑い始めた石丸に、疑問符を頭に浮かべる春姫。勝負に負けてここまで可笑しそうに笑う石丸を、皆は見たことがない。
とはいえ戦いにおいて負け知らずの石丸である。そんな経験は一度もない。だからこそ、石丸がどんな反応をするのかは未知数ではあったが、
「見ていたか、春よ！　お前達！　おお、ミッチー！　貴様、寝てる場合ではないぞ！」
「ちょ、ちょっと、石丸様。それはさすがに……」
「……あんまりじゃねぇか？」

壁際にて倒れていたミッチーの元にずかずかと近づき、ガシガシと叩いて起こし始める石丸に春姫や黒部が半ば引き気味に言う。
「い、痛っ！　ちょ、やめ、やめてください！　見ていましたから……！」
「ははは！　そうか！　ならば解るな!?」
「一体どうしてしまったのですか、石丸様？」
石丸のおかしな様子に、さしもの頼光も不安そうに尋ねる。
すると石丸は馬鹿笑いしたまま、
「いたぞ！　俺の目標！　俺の越えるべき相手が！」
「え……」
その言葉に最初に驚いたのは春姫だった。そのことを、幼い頃からずっと聞かされているが故である。
「おい、石丸。お前の目標って、よく言ってるアレか？」
次に反応したのは黒部だ。石丸に降ってからというもの、その話は耳にたこが出来るほど聞かされている。石丸は頷いた。
「そうだ！　アレだ!!」
「……本当だとしたらまさかでありますなぁ……」
ミッチーが蹴られた箇所を抑えながら言う。幼い頃から聞かされているのもそうだが、ＪＡＰＡＮ中の書物、大陸に渡ってからも知識を収め、あらゆることに造詣が深いミッチーにとっては知らぬはずがないことだ。
「……すみませぬが、アレとは一体……？」
「おお！　それはだな――」
ただ一人、首を傾げる頼光に、石丸は言った。
「――剣王だ!!」

「……」
王宮地下。そして首都から脱出した仮面の男は、街より北にある丘にて思いに耽っていた。
しかし不意に、その指がとある箇所を撫でる。

それは左肩。そこに解りにくいが、僅かに衣装がほつれたような部分がある。
だが触れているのは衣装ではなく、その下にある肉体の方だ。
そこには、ほんの薄皮一枚にも満たない幅1センチほどの切り傷だ。
短い時の中で、最後に食らったその一撃で負った傷。それを感じて、仮面の男は、
「ク、ククク、クハハハハハ……！」
抑えようとして、しかし抑えきれない愉悦を感じて笑い始める。
そこに、一人の女性がその場に現れる。
「お待たせいたしましたわ――!!」
金髪ツインテールの、高級感のある布地の衣装を着た少女だ。
どこぞの貴族か、大商人の娘、といった出で立ちで現れた少女は、仮面の男を見て首を傾げる。
「ご機嫌のようですが、何かありましたの？」
「ククッ……ああ。あったな、最高に愉しいことが……」
仮面の男は言う。紅い瞳を煌めかせて、
「人間相手に傷を負ったのは初めてだ……！」
「！　それはいけませんの!!　早く治療を――」
「いらねぇよ。放っとけば治る。――それより、ペールはどうした？」
治療を拒否した仮面の男は、少女に向かって問う。すると慌てていた少女も気を取り直して、
「あ、はい！　ペールさんはお仕事を直接確認してから戻ってくるそうですわ！」
「そうか。確かに、いつも書類上か人伝でしか見てねぇからな。なら、先に戻るぞ」
「了解ですの！」
仮面の男は踵を返し、北側に向かって歩いていくと、その後に少女が続く。
「それにしても、完璧な変装ですわ！」
「……そうか？」

「はい！　あ、でも溢れるカリスマは隠しきれてないので、バレてしまうかもしれませんわ！」
「……そうだな」
はい！　と、至って真面目にそう言う少女に訂正することなく、仮面の男は振り返ることなく進む。思うのは、
……これで、準備は整った。
後はその時を待つのみだ。アイツなら、これで確実に強くなる。初めて会ったが、一目で解った。アレは己と同じ類の人種だ。
ならば確信出来る。これ以上の手を加える必要もない。
……その時が愉しみだ。
仕事も、私怨も、趣味も。その全てを達成出来る時を仮面の男は思い――魔物界へと帰っていった。

月餅

畳張りの、いわゆる和室と呼ばれる部屋がある。
襖や座敷、板張り、木造建築で作られた家屋はＪＡＰＡＮ特有の建物であり、地震の多いＪＡＰＡＮでは石造ではなく木造が基本となっているのだ。
その城の中の一室、天守閣に近いその一室に、僧形姿の老人はいた。翁の面で顔を隠したその者は、藤原家参謀である月餅。彼は眼前に座る同僚の話を聞いて頷きを入れる。
「――なるほど。ではその仮面の男に敗北した為に、石丸様は斯様に修行しておると」
「然様でありますなぁ……」
煙管を加えた着流し姿の男、菅原ミッチーが頷く。両者の意識は城の外――そこから聞こえる声に向いた。
「ふはははは！　遅い！　遅いぞ麻呂よ！　そのような有り様では亀にすら抜かれてしまうぞ！」
「ぐっ……お主が速すぎるのだ戯けが！　少しは年寄りを労らんか！」
刀を打ち付け合う音と男同士の声が聞こえる。楽しそうに馬鹿笑いしている方がこの国の帝である藤原石丸で、もう一方のしゃがれた声で怒声を浴びせるのが征夷大将軍である坂上田村麻呂だ。
石丸の剣に防戦一方の田村麻呂だが、石丸は容赦する様子を見せずに常人では視認できない速度で剣を振る。それを何とか防ぎながらも汗だくで息を切らしそうになっている田村麻呂に、石丸は笑みの声を飛ばした。
「どうした麻呂よ！　やはりもう歳か!?　隠居するのか!?」
「おお、それはよい案ですな石丸様！　ほれ、糞爺。さっさと隠居して、朽ちて死ぬがよいぞ！」
「何じゃと!?　年寄り扱いするでないわ！　朕は生涯現役である!!」
「さっきは年寄りを労れなどと抜かしておいてよくそんなことが言えたな糞爺！　自分の言ったことも解らぬほど耄碌したのならわしが

介錯してやろうぞ！」
「言いおったな小娘ェ!!　一度吐いた言葉は呑み込めぬからなァ!?」
「む、乱戦か！　ははは、負けんぞ!!」
　と、源頼光がまたぞろいつもの売り言葉に買い言葉で刀を抜く。それに田村麻呂が応戦し、石丸が混ざったことで何やら石垣か、建物が崩れるような音がしたところで月餅はミッチーとともに溜息を吐いた。
「……止めなくていいのでありますか？」
「止めて止まるような者達であればとうに止めている。……今のうちに修繕の手配をした方が賢かろう……」
「……ですな。……小生は算盤でも弾きますかなぁ……」
　お互いに悟ったような目で言い合う。実力的にも、このＪＡＰＡＮに１００万近くいるという武士の中で最強の三人であるが、仮に力で上回っていたとしても止まる連中ではない。
　石丸の幼馴染であり正室でもある春姫であれば止められるかもしれないが、生憎と今春姫は、
「ふんふーん……って、あっ！　ちょっと黒部さん、動かないでください！」
「わ、悪い。……でもよぉ……その、なんだ。くすぐったくてな……」
「毛並みはちゃんと整えないと駄目ですよ。辺りに毛が抜け落ちちゃいます」
「でもなぁ……」
「――でもじゃないですよ？」
「……はい」
　部屋の隅に布を敷いた上で座らされ毛並みを整えられている黒部を、笑顔で押し止める春姫。
　元服した折りより石丸に付いて旅をしていた為か、これと決めたことは曲げない頑固な一面がある。滅多に怒ることこそないものの怒れば家中どころか、ＪＡＰＡＮで一番怖いのでは、という疑惑が広がっているほどである。
　あの石丸も春姫が本気で怒った時は素直に従う他ないくらいだ。

田村麻呂や頼光、黒部や、ミッチーに月餅らも類にもれない。
そんな藤原家の最終兵器が使用出来ないとなると、ミッチーや月餅は泣きを見るしかないのだ。最近、胃痛が酷いのでありますなぁ、と呟くミッチーに、内心で同意しながら月餅は話を戻した。
「……その者は、真にあの剣王であると？」
「さて……本人がそう言っていた訳でもなし、小生には判断出来ませんが……石丸殿を越える剣の腕があったことは間違いないかと。そして何よりも――石丸様が絶対にそうである、と」
「ふむ……」
月餅が腕を組んで唸った。
内心で考えるのは石丸を心配するものであって、そうではない。
……今死んでもらっては困るのですがな……。
大陸を見て回り、興味を抱くだけではいざ知らず、そのような危険な相手と戦って死んでもらっては目的の成就は叶わない。
というのも何を隠そう――月餅は人ではない。
月餅の正体は、〝悪魔〟である。
悪魔王ラサウムの配下であり、地上の魂達を簒奪することを仕事とする人外である。
その中でも月餅は第参階級の悪魔であり、〝三魔子〟と呼ばれる支配者達の直属の部下。広い悪魔界の土地を管理し、四階級以下の悪魔達を管理している高位悪魔である。
そんな月餅が藤原家にて石丸の参謀として働いているのは、当然悪魔としての使命を果たす為である。なので石丸に死んで貰っては困るのだ。死んでしまえば、
……折角、天志教をＪＡＰＡＮに広めることを許されたのに中途半端に終わってしまっては堪ったものではない。
――天志教。月餅がＪＡＰＡＮで布教している最中の、新興宗教である。
中身自体は至ってまともな教義であり、人心の救済を目的としているが、最終的には帰依の術で仏の世界へ送ると称して、魂を地獄からラサウムの元に送るためのものである。

この宗教を人類に広めてしまえば、魂の集収においてこれに勝るものはない、と言い切れるほどの方法を月餅は思い付き、実行に移しているのであった。

……通常の契約して、魂を集める……などというのは効率が悪すぎる。

普通の低階級の悪魔達は、人間の願いを叶える代わりに死後に魂を貰うという契約で地道に魂を集めていくのだが、そんなことをしては何千年掛かるか分かったものではない。

それにこの方法を一度成功させてしまえば、以降は何もしなくても半永久的に魂が自動で回収される。ゆえに月餅としては大陸中にこの天志教を広めたいのだ。

そのために人と思えない強さと、他者を惹きつける魅力を持つ石丸に仕えてきた。最初は駄目であれば直ぐに抜けてしまえばよい、と思っていたのだが結果的にこの判断は最適であったといえる。

石丸はすぐに帝になり、ＪＡＰＡＮの支配者となった。参謀として働いている自分も必然的に立場が上になり、今では多くの部下と信徒を持つ権力者である。天志教だって広めることを許された。

だがまだ満足するわけにはいかない。大陸にも天志教を広めなくてはならないのだ。

だからこそ石丸に大陸への旅をまずは勧めた。ちょうどキリング商会というお得意様からの依頼もあり、都合が良かったのだ。

しかしその依頼の最中に石丸を越える男――その言を信じるなら剣王が現れたという。

剣王の名は月餅も知っている。人間の間では有名な冒険譚。元は叙事詩とも言われる剣王伝に出てくる人物であり、人類の歴史においては確認出来る最初の王である剣の王の逸話を元にした話である。

しかしその原本は残っておらず、それを元にした本は作者や地域によって名前や話が違っており、今では娯楽としての側面が多くを占める物語である。ＪＡＰＡＮにも剣王伝は伝わっており石丸が所有していたはずだ。

だが、その物語に出てくる剣王とはとある魔人を題材にしたもので

あるということが、一部の権力者や歴史家に知られている。つまり剣王。その本物にもし、本当に会ったのならば――

……死なずに済んだことを喜ぶべきか……？

幾ら石丸が最強だとはいえ、それはあくまでも人類間での話だ。

人間という枠から外れれば強い者など幾らでもいる。

もっとも、石丸であれば一部の人外であれば勝つことも不可能ではないが……魔人が相手ともなれば分が悪い。己がいれば何とかなるやもしれぬが、そもそも関わらないことに越したことはないのだ。

……大陸を、藤原家が席巻するまでは何としても護らねば……。

大陸に興味を持たせること自体には成功している。それ以上に剣王への想いが強そうなのが懸念される事柄だが、どちらにせよ大陸進出を断りはしないだろう。

元より、石丸の夢を考えるに――

「……月餅殿？　どうかしたでありますか？」

「！　……いえ、申し訳ありませぬ。少し考え事をしておりました」

「ふむ、なら良いのですが……」

声を掛けられていたのだろう、不思議そうな表情を浮かべるミッチーに慌てて返事をする。するとミッチーはこちらに苦笑を見せ、

「もし疲れておいでなら少し休んではどうでありますか？　月餅殿は石丸殿の参謀。倒れられては元も子もありませんからなぁ」

「……いえ、ですが――」

「石丸殿も心配しておりましたしなぁ。働きすぎだから休むよう言っているのに気がつけば働いている、と」

「……それを言うなら、菅原殿こそ働き詰めでありましょう」

「あー……小生はまあ、適度に息抜きしておりますので。なので月餅殿も息抜きしては如何ですかな？」

「……考えておきます」

曖昧に話を濁したのだが、ミッチーは訝しげに顎を撫で擦ると、いつものように飄々とした様子で、

「月餅殿は働き者でありますなぁ……しかし、結構なお歳でありましょう？　湯治にでも参られては如何ですか？」

「むぅ……しかし……」
と、言われても困る。
この翁の面の下は触手の生えたワームの如き様相である。顔を晒すわけにはいかないのにどうやって温泉に入ればいいのか。
と、思っていると、
「そうですよ、月餅さん。――はい、どうぞ」
背後から春姫が近づいてきた。その手には湯呑を乗せた御盆がある。緑色の液体はＪＡＰＡＮ特有の茶である緑茶だ。それを置くとミッチーが春姫に声を掛けた。
「これは奥方。黒部殿の毛繕いはもうよいのですかな？」
「はい、ある程度は綺麗になりましたので。――次は来週辺りに、湯に入れてから行おうかと」
「左様ですか。黒部殿も苦労しておりますなぁ……」
内心だけで同意する。押しが強い春姫には逆らえないだろう。
「月餅さんもミッチーさんもちゃんと休んでください。息抜きは大切ですよ」
「いやぁ、小生もそう申しているのですが、月餅殿も中々強情でありましてなぁ。奥方からも言ってやってください」
そう言うと春姫がこちらに視線を向ける。まずい、と思うも彼女の言葉は止められない。
「月餅さん。ちゃんと休んでくださいね？」
「あ、いえ……拙僧は――」
「――ちゃんと、休んでくださいませ。月餅さんも、石丸様の相手やお仕事で苦労してますよね？」
「……」
困って無言になってしまうも、春姫は笑顔のまま視線を外してくれない。この圧がすごいのだ。耐えきれずに首を縦に振ってしまいそうになる。しかし、
……本当にいらないのだが……。
確かに苦労していないといえば嘘になるが、それはミッチーも同じであるだろうし、何より己がやっているのは悪魔としての使命。やめ

るわけにはいかないのだ。
……石丸様も他の者も、一々心配など……。
休まずとも過労でどうこうなる程、悪魔は軟ではない。しかし悪魔であることを隠しているため皆は自分のことを普通の老人だと思っているだろう。
ならば休むべきか？　とも思う。老人が働き詰めで疲れの一つも訴えないのは不自然かもしれないし、周囲の目もあまりよろしくない。そして何より、
……石丸様に心配を掛けられても困りますしな……。
それで他のことが手に付かなくなるような御仁でもないが、気には掛けるだろう。あまり些事に気を取られてほしくはない。思うままに行動してもらうのが良い。
どの道しばらくは国内に手を付けるべきだ。幾ら石丸が強くても、戦をするには生産力や経済力、つまりは兵を食わせるための兵糧や、武器や防具の生産、またはそれらを買い揃えるための金銭が必要である。大陸の国家相手に戦争を仕掛けるなら今まで以上に大規模なものとなる為、まずは国力を上げるのが先決。大陸進出を進言するのはその後である。今もそれなりには忙しいが、本当に忙しくなるのは数年か数十年後。
ならば今のうちに休んでおくのも悪くはないか……、と思った月餅は適当な時に休みでも取らせて貰おうと湯呑に淹れられたお茶を、顔が見られないようにして飲み干して頷く。
「……であれば、暇を見つけて信濃辺りに湯治にでも参りましょうかな」
「それがいいです。疲れをちゃんと癒やしてきてくださいね？」
「いやぁ、良きかな良きかな。月餅殿。美人との艶話、期待しておりますぞ？」
「それはちょっと……」
……ミッチーめ。憶えていろ……！
いやらしい笑みを浮かべる同僚にイラッとしてしまう。何を期待しているのか。春姫を使って休暇を勧めたのは結果的に納得したが、

やり口が卑怯過ぎる。
……くっ……まぁ、顔だけであれば何とかなるか……。
面だけは手放さなければどうにでもなる。不審に思われそうであるが、顔に傷があるとかで逃げ切ろう。無理強いする者などそうは居まい。
さり気なくミッチーに仕事を押し付けようと、公文書にさらさらと筆を走らせながら、月餅は一先ず息をつくのであった。

石丸はひたすらに剣を振っていた。
相手は坂上田村麻呂や源頼光など石丸の配下である多くの武人達である。
誰もがＪＡＰＡＮでは名の知れた達人。腕自慢の剣客達であり、数時間の鍛錬はわけもない事である。戦と慣れば数日、数週間。あるいは半年から一年以上も滞陣を続けることもあるのだ。
故に体力には自身がある。その武士達が、
「ははは！　どうしたお前達！　だらしないぞ！」
「くっ……」
「はぁーっ……はっ……っ、石丸様……無茶を言わないでください……！」
揃いも揃って息を切らして地面に伏している。
何とか膝を突き、得物を杖代わりにして体勢を保っているのが数人程度。立っているのは坂上田村麻呂と源頼光の二人しかいない。その二人にしても膝が笑っている。
対して石丸の方は全員を相手にしてなお余裕があるのか、素振りを続けていた。
「ならば小休止していろ！　そして体力が回復したものより斬りかかってこい！」
「分かり申した……石丸様は……？」
「決まっている！　――剣を振るのだ!!」
「……承知」

――この御方には敵わぬ。
それがこの場にいる武士達が共通する想いであった。
元より日ノ本最強の武士。それに帝としての力が加わり、他の者を歯牙に掛けない強さになっている。負けん気の強い武士達も素直に認めるしかない。
藤原石丸は最強。この御方に敵う者など存在しないであろう、と。
それは妖怪王である黒部を下したことも関係している。人外の妖怪や鬼ですら石丸には敵わないのだ。ならば石丸は現人神の如き存在なのだろう。
だがそれでいて人としての魅力にも溢れている。日本人であれば無条件に頭を垂れる。そんな存在であるのに、石丸はまるで余人のように以前と変わらず接してくる。
そのことが石丸に畏敬の念を抱かせながらも、必要以上に崇めるようなことはない。
だがそんな石丸ですら、大陸でとある者に敗北したという。
俄には信じられない話だが、それを実際に見た者達の反応。そして石丸自身の行動がそれに真実味を漂わせる。
そんな石丸は剣を振ることを止めないまま内心――燃え滾っていた。
……違う！　こうではない!!
石丸は自身の剣を振るいながらしかし、否、とそれを強く否定する。
これでは勝てない。これでは届かない。己はまだまだ弱い。
大陸ではそれを自覚させられた。
他ならぬ――石丸が憧れ、目標にしていた人物に。
坂上田村麻呂とはまた別の、石丸の剣の根本。その師である。
武術とは、先人の模倣から始まる。幼き頃に見たその書物に記された技を見て、石丸の剣は形作られたのだ。
空を斬り、衝撃を飛ばす技も、全くの同時に剣の軌跡を合わせる技も、周囲から笑われ、無理だと断じられながらも毎日のように鍛錬に励んだ。竹刀、木刀、真剣を握り、手にタコが出来て、それが潰れて血を流れても止めることなく剣を振り、石丸が完成させた努力と才能

の結晶である。
そのどれもが、剣の秘奥――雲耀が如し。武士達にそう称されるほどに卓越した必殺技だ。
しかしそれは通用しなかった。
……振り出しだな！
歓喜、という感情を覚えながら思う。
己こそが最強だと思っていた。名の知れた剣客、剣聖と謳われた達人ですら己の剣に屈し、膝を折る。
自身の技を教えようとしても誰もその境地に達することが出来ず、他者の技は容易に覚えられる。
己には誰も追いつけず、先人達を風の如く抜き去り、誰にも見えぬその先の境地に、誰よりも速くに到達する。
剣への熱が冷めかけていた。そんな時に現れた。
己の目標であり夢の一つである世界最強の剣士。
短い死合であったが、確かに剣を交え、その薫陶を再び受けたのだ。
己は未だ挑戦者であり、その座を手にしていないことを思い知らされた。
……俺はまだ強くなれる。
天下を取り、帝となって自惚れていた。
その道の奥深さを忘れていたのだ。
……剣の道は、修羅の道。
極めんとするならば、狂うほどに心を燃え立たせ、その激しい熱量を剣に――己に込めていくしかない。
人の身を外れた者を相手にするというなら尚更の事、元より避けられぬ戦いであり、故に烈しく熱を持たなくてはならない。
しかし同時に、心に芯を、清々しい神気を同居させなくてはならない。
鬼気迫るだけでは道を外れた鬼となってしまうだろう。
だが心に修羅なくしては道を外れてしまう。
相手を討ち滅ぼすが剣である。そこを有耶無耶にしてはならないのだ。

石丸はそのことを、幼き頃から無意識に知っていた。才覚、と言うべきものである。
剣の道を往くために生まれたような人間が己だと、不思議と自覚していた。
……勝ってみせる！
取っ掛かりは得たが、それでも勝てるかどうかは解らない。
しかし今はそのために才覚を以て、努力を為すだけであった。

それから数十年後。
藤原石丸率いる藤原家の遠征軍が大陸に進出。
ＪＡＰＡＮの武士達は大陸の国家相手に各地で連戦連勝を続け、僅か五年で大陸の半分――人類圏を支配した。
だが、それで終わりではない。
藤原家の人類統一。参謀月餅による天志教の布教。
その報は直ぐに大陸の支配者――魔王ナイチサの耳に届いたのであった。

戦争前夜

――ＮＣ７０５年。

魔王城にある自室で、魔王ナイチサは心中の昂りを抑えようと必死であった。

「悪魔の宗教など……断じて許さん……！」

その原因は藤原家の台頭にある。

厳密に言えば藤原家が推し進めようとしている天志教と呼ばれる新興宗教に、ナイチサは激しい怒りを覚えていた。

最初は人間同士の勢力争いなど放置しておけばよいと思っていたが、人類圏と呼ばれる大陸の南半分を支配した藤原家を生意気に感じて調べてみたところ、天志教は悪魔を信仰し、魂を悪魔に捧げるためのものであることに気づいた。

そんなことは断じて許されない。神に弓引く行為など、神を否定する行いなど、決して許されざる事だ。

生まれながらにしてＡＬ教の教えを学び、その真意を察したナイチサにとって、神とは価値観そのものに近い。神が悪行を望んでいる。神が正義の行使を望んでいる。

神に逆らおうとするだけでは飽き足らず、その真逆の存在である悪魔の宗教を世に知らしめるなど、己の価値観を揺るがす如き行いだ。

許すわけにはいかない。

「ぐ……っ、の、異端者共が……ッ！」

それを思うと不意に、己の中の殺意と破壊衝動が高まり、力任せに暴れそうになってしまう。だがここは自らの居城。そこで怒りを発散しても無意味どころか害にしかならない。

衝動を必死に抑え、椅子に腰掛けると、ナイチサは頭を押さえながら荒く息を吐いた。

このように怒りに震える姿は王にあるまじきものだ。

もうじき人が来るのだ。このような有り様は見せられない。

ナイチサは落ち着くために愛飲しているワインではなく、メイドさんを呼んで直ぐ様、紅茶を用意してもらう。少しして淹れてもらった

それを一口含むと、怒りこそ消えていないものの落ち着くことが出来た。
「……どうするか……」
落ち着くと、今度は手段を模索しはじめる。
それは当然、藤原家を滅ぼすための方法であるが、それは直ぐに答えが出る。その方法は、
――配下の魔人に命令し、滅ぼさせる。
それも一刻でも早い内にだ。
ゆえに考えるのはどうやってやるかではなく〝誰に〟ということだけであった。
魔軍を動かすのだから余程のことが無い限り負けることはないが、万全を期すなら魔人を動かすのが最善だろう。相談もしたいが、そのための側近は直ぐにやって来る。今の内に誰に行わせるかを考えようと、ナイチサは思考を回した。
……実力の高い魔人がいいであろうな。
魔人であればその殆どがかなりの強さを持つが、確実性を重視するならその中でも特に高い実力を持つ魔人を選ぶのがいいだろう。
だが魔人には癖の強い者が多い。魔王の命令である以上、可能な限りそれを為そうとはするだろうが、それでも問題のある者もいる。
まず何か一つの事に執着する魔人は除外だ。周りが見えなくなる可能性がある。
魔人ガルティアは食に対する情熱が常軌を逸しているし、レッドアイやレキシントンも除外だ。あれらは戦闘力には問題ないが些か思慮に欠けるため、不確実である。
戦闘力に不安が残るパイアールなども向いていないし、かといってメガラスは無口過ぎて魔軍の指揮において問題がある。
……であれば、やはり四天王以上の者になるか。
魔人カミーラはどうだろうか。彼女は上級魔人の中では最も古株である。当然、実力に問題などない。人間如き容易く滅ぼしてみせるだろうし、使徒の七星も万事において優秀である。
しかしカミーラは気まぐれな部分があり、狩りがいのある獲物でも

いれば相応にやる気を出すが、そうでない場合は些か怠惰である。今回の任には向いていない。
ならば魔人ケッセルリンクはどうだろう。彼女も高い実力を持っており、特に夜の戦いにおいて右に出る者はいない。
だがあまり争いに興味がないのか、そういったことには淡白な様子が見られる。任された以上仕事はこなそうとするだろうが、今回の戦争はかなり大規模だ。ゆえに少し不安が残る。
魔人ザビエルであればどうなるか。実力的には文句はない。忠誠心も確かであり、人を苦しめることを好む。使徒達においてもかなり優秀である。命令を下されれば喜んでそれを行おうとするだろう。しかし、
……ザビエルは、どうにも傲慢に過ぎる。
今回の任務に向いてはいるのだが、それをこなしたことでまた傲慢になってしまわないかという不安がある。ただでさえザビエルは他の魔人に喧嘩を売りその力を容赦なく振るう上、それに飽き足らず力の差を見極められないばかりか、度重なる挑発を行った結果、危うく殺されてしまうところであった。自分が止めなければ死んでいただろう。
……ならばやはり……。
そうして最後の一人を思うと、不意に音が聞こえた。
「――ナイチサ様。魔人レオンハルト。只今参りました」
「……来たか。――入ってくるがよい」
扉がノックされる音と、呼びかける声が聞こえたので入室を許可してやると、失礼します、という言葉とともに一人の男が姿を見せた。
……魔人レオンハルト。
魔人筆頭、魔軍参謀の任に就く最高位の魔人である。彼は顔を見せると直ぐに一礼し、
「遅くなってしまい申し訳ありません」
「よい。夜分遅くに呼びつけたのは余である。礼を失したのも余であるゆえ気にするな。――座ってよいぞ」
「はっ、失礼します」

そう言ってこちらの正面の椅子に腰掛けるレオンハルト。相変わらずの礼儀正しさに満足を得る。
今の時刻はもう夜半である。魔王や魔人は睡眠が必要ないとはいえ、夜分に家臣を呼びつけるのはあまり礼儀がなっているとは言えない。火急の用であればそれも許されるが、それでも礼を失していることに変わりはないのだ。
ゆえに気遣うのは己の方である。
「……何か飲むか？　食事でもよいぞ？」
「……いえ、お気遣いなく」
そう断ってみせるレオンハルト。しかし慌ててきたのは確かだろうし、ひょっとしたら疲れているのかもしれない。それに一度は断るのも珍しくはないのだ。なのでもう一度、
「なに、遠慮するな。余も少々口寂しいと思っていたところで、夜食を頼もうと思っていたところである。卿もどうだ？」
「……なるほど。恐縮ですが、そういうことであれば頂きます」
今度は頷く。二度目であればよっぽどの事でなければ断らないのがレオンハルトという男だ。その忠誠心を利用するようで悪いが、こうでもしなければレオンハルトは何も欲しようとしない。働きに報いることの出来ない君主など無能も良いところである。故に度々こうして食事に誘ったり、褒美を下賜したりしているが、レオンハルトも喜んでいないわけではないだろうし構わないと見ている。
メイドさんを呼び、二人分の軽い食事を申し付けると、ついでにレオンハルトの分の紅茶を淹れさせる。そして一息ついたところで声を掛けた。
「さて、レオンハルトよ。卿が何故呼ばれたのか解るか？」
「は……」
急の試すような問いに、レオンハルトが考えるように間を置く。しかし直ぐに答えが出たのか、口を開き、
「……藤原家をどうするか。或いは先んじて私へ決定を告げるためでしょうか？」
「ほう？」

その答えに感嘆を得る。
当てられてしまったことに対する小気味よさはあるが、何故そう思ったかが気になる。ゆえに続けて、
「何故そのように思った？」
「……夜半の呼集ということを考えますに、公的なものではないと考えました。臣下を罰するための上意である可能性もありますが……自分で言うのは面映いですが、失敗した覚えもありません。であれば個人的な相談。それも最近の話題となれば、藤原家に関することではないかと――そう愚考した次第です」
「……フフ、なるほど。正解だ」
思わず笑みを漏らしてしまう。やはり能力では頭一つ抜けている。
……レオンハルトに命じてしまうか……？
最強であり最高の魔人であるレオンハルトに負けはあり得ない。それは実力もそうだが、それ以外の能力が稀有なものであるからだ。魔人にとって強さは何よりも大事であるが、それはレオンハルトを語る上では二の次とも言える。
魔軍参謀という要職に就き、魔軍を取り仕切るその手腕。
魔人筆頭となり、魔人を統率するそのカリスマ性。
人望にも溢れ、知性も高い。様々な事に造詣が深いのが会話していても解る上、言葉遊びを解するので話していて苦ではない。媚び諂うこともない実直さも長所だ。
そしてそれだけの能力を持つ魔人であるのに、驕ることなく謙虚な姿勢を保ち、しかしそれでいて謙虚過ぎることもなく、礼儀や規律を重んじ、必要以上に罰することもせずに相手を許す懐の深さもある。
使徒や部下も優秀な者ばかりであり、レオンハルト軍は魔軍最強と称されるほどだ。人の素質を見抜く目、洞察力や観察力も優れているのだろう。部下に慕われているのも人の上に立つ者として必要なものを理解し、そうあるように努めていると推測出来る。
そして何より――強い。レオンハルト一人で他の魔人数人分の働きをこなせるだろうし、忠誠心においても問題はない。正に完璧な魔人。魔人の鑑だ。

強いて欠点を上げるとすれば、他者を虐げるような真似は好まないことだろうか。褒美を強請らないのも困る。
だがそれも命令か、それをせずとも言って聞かせればその意を汲み取って任をこなす。私的なものを余り混じえない。
女好きで巨乳好きという面白い一面もあるが、英雄色を好む、とも言う。問題ではない。
まあ全く含むところがないというわけではないが、それを踏まえてもやはり問題はない、とナイチサはレオンハルトを評する。
ゆえにナイチサは、目の前の魔人に命じることにした。
「……レオンハルトよ。実はな――」
と、
「藤原家討伐の任――卿に任せたいと思うのだが……どうだ？」

「……ご命令とあらば、全霊を懸けて遂行する所存で御座います」
レオンハルトはナイチサの言葉を受けて一先ず言葉を返した。
……やはりそういう用事だったか。
ナイチサに呼ばれた時からこうなることは予想出来ていた。
なにせ礼儀を重んじる男である。通常、貴族というのは夜分遅くに臣下を呼び出したりはしない。
ナイチサもその例に漏れず、夜になれば城で大人しく過ごしているが、何事にも例外というものがある。
礼儀を無視して家臣を呼び出す理由としては、危急の用か、臣下を罰する上意という悪い報せが殆どである。それ以外となると個人的に親しい場合のみにおいて夜食や酒の誘いがあったりもする。
地域によって違いはあるが概ねこのような礼儀であり、ナイチサがこれを破るとは思えないし、破ったことはない。
ならばそのどれかであることは予想がつく。なので既にレオンハルトは答えを用意していた。
「フフ、そうか。ならば卿に任せよう。卿であれば単騎で攻めても問題あるまい？」

「……お言葉ですが単騎では時間が掛かってしまいます」
「そこで〝出来ない〟と言わないところが卿の頼もしいところよ。ふむ――ワインでも飲むか？」
　笑みを絶やさずにそう言うナイチサ。部屋に入った当初は苛立ちを抑えているような様子だったが、今は機嫌が直ったらしい。酒を勧めてくる辺りそれが窺える。
　だが言わなくてはならないこともあるのだ。その申し出を断り――しかしどうせ受けることになるだろうな、と思いつつ言葉を作る。
「遠慮しておきます。――進言したいこともありますので」
「む……何だ？　言ってみるがよい」
　ありがとうございます、と一度お礼を言ってからレオンハルトはそれを口にした。
「もし出来ればで宜しいのですが……それを正式に皆の前で命じられる際、お願いしたいことが一つあります」
「ふむ、続けよ」
　ナイチサの許可を得て話し続ける。
「それを命じる際に、ある者が自薦した場合のみにおいて、その者を討伐の任に加えていただきたいのです」
　意を決して言った。
　断られると少し面倒だな、と思いつつナイチサの反応を窺う。
　しかし機嫌を害した様子はなく、顎に手を当てると、
「……それはつまり、魔人をもう一人付けて欲しいということか？」
「はっ、お願いできればと」
「誰を付けたい？」
　成った。ここまで来れば成功したも同然である。
　故にレオンハルトは言った。その者の名を、
「加えてほしいのは――魔人ザビエル」
「……！　ほう……？」
　ナイチサの表情が興味深そうに変化する。
　……さて、まずは奴に嫌がらせでもしてやるか。
　ザビエルを少しでも苦しめてやるため、レオンハルトは悪意を以て

ナイチサにその企みをお願いするべく建前上の理由を言って聞かせることにした。

魔王城でナイチサにお願いを聞いてもらったレオンハルトは、そのまま夜食を口にし、少し話に付き合ったところで城に帰った。

夜分でも変わらず警備を行う魔物隊長や親衛隊の女の子モンスターを労い、城に帰ると真っ先にメイドが頭を下げてくる。

「――お帰りなさいませご主人様」

「ああ、ただいまメイド長。もう皆寝ているか？」

「使徒の方々は皆起きています。それとケッセルリンク様とその使徒の方々。食堂にガルティア様。夜更かしするガウガウ様。後は私と料理長。一部のメイドと親衛隊の方々が起きていらっしゃいます」

「……そうか。お前もよく起きていたな？」

「メイド長ですので」

いつものように笑顔でそう言い切られる。

殆ど起きているとは頭が下がる想いだ。何名かは完全に私用だったり、ただの不摂生だったりと何も言えないものだが。

何でメイド長さんはここに居ながらにして誰が何処でどうしてるかまで把握出来ているのか、などと思わなくもないがメイド長さんであれば仕方ない。これくらいは当たり前にやってのけるのがメイド長さんだ。

とはいえ、

「ならメイド長。使徒達を全員、自室に呼んでくれ。それが終わったら休んでも構わない」

「……よろしいので？」

「ああ。どの道、これから忙しくなる。出来ればメイド長のお前にも働いて貰いたい」

「であれば、どうぞお命じ下さい。主人の力になることはメイドとしての生き甲斐に等しいことです」

「……今の内に休んでいてもいいんだぞ？　毎度思うが、疲れてない

のか？」
少し気遣って言うも、メイド長は胸を張って言う。
「メイド長ですので」
「……そうか。ならば頼む」
「はい。――ではお呼びして参ります」
と、言ってメイド長さんはその場から一瞬で消えた。最早慣れたものだ。何も言うまい。正直、瞬間移動でも使っているのでは疑惑があるが、そうでないことはハンティが確認している。余計解らないが、何も言うまい。メイド長と料理長に関してはツッコまないのがこの城での暗黙の了解だ。
ゆえに気にせずレオンハルトは自室に向かう。
だがその途中、ボサボサの緑髪をした小柄な少女を見かける。彼女はこちらに気づくと、
「……うっ、レオンハルト……」
「ガウガウか……って、お前、またカップラーメン食べてるのか。食生活は改善したんじゃなかったのか？」
微妙にバツが悪そうに顔をしかめたガウガウ・ケスチナの手には、カップラーメンがある。それを見て呆れたように言ってやるとガウガウは、むっとして、
「……確かに城の食事も美味しいけど、こういうの身体に悪そうな大雑把な味も偶に食べたくなるんだよ。特に夜中になっ！」
「……なるほど、一理あるな」
ガウガウの言葉に納得して頷く。確かに良い物を食っていても時たまそういったジャンクな物を食べたくなる時がある。
……特に夜中に無性に食べたくなるんだよな……。
レオンハルトはガウガウの手にあるカップラーメンを見て思う。特に最近、というかさっきもナイチサに誘われて夜食を口にしたが、ナイチサは貴族らしく軽くて上品な味付けのさっぱりとした物しか頼まない。別にそれはそれで構わないのだが、
「……決めた。俺も食べるぞ。――メイド長」
「……は？　いや――」

「はい、ご主人様。ご所望のカップラーメンで御座います」
「おお、悪いな」
　しばらくして食べようとメイド長を呼ぶと、直ぐ様メイド長さんがカップラーメンとともに現れる。手渡された熱々のカップラーメンとお箸を受け取ると、湯気とともに香ばしい匂いがしてきた。実に美味しそうだ。なのでガウガウと一緒に食べるか、と思っていると、
「って、速いよ！　というか出来上がってんじゃん!?　お湯を入れて三分じゃないの!?　時間超越したの!?」
「いえ、さすがに時間はどうにもなりません。ですが――こんなこともあろうかと、先にお湯を入れておきました」
「まさかの未来予知!?」
　……何も言うまい。
　おそらくはどうにかしてガウガウと自分が出会ったのを確認し、カップラーメンをガウガウが持っているところから自分も食べたくなるであろうことを予想してから作ったのだと思う。多分。そうじゃないと説明が付かない。説明がつくギリギリとも言える。
「では私はこれにて」
「ああ。……よし、ガウガウ。部屋で食べるぞ」
「……未だにメイド長さんと料理長には慣れない……」
　げんなりしたガウガウを押して部屋に連れて行くと、ソファーに座って二人でそれを食す。
　……夜食だとこういうものの方が食べたくなる辺り、貴族には向いてないな。
　そうやってカップラーメンのジャンクな味を楽しんでいると、
「お、レオンハルト。何だ、良い物食ってんじゃねぇか」
「……ガルティアか。生憎とこれは俺のだ。やらねぇぞ」
「また増えた……ずるずる……」
　匂いに釣られたのかガルティアまでやって来た。カップラーメンを見て何を思ったのか、ガウガウの隣に腰掛けると、
「……別にいらねぇとか思ってたが、見てると俺まで食べたくなってきたな。……一口くれないか？」

「嫌に決まってるだろ！　幾ら魔人の頼みでも、私は屈しないからな！」
「……残念だ」
　珍しく割とマジに残念そうにするガルティアと、意外な意地を見せたガウガウを見ていると、
「……レオンハルトにガルティア。それにガウガウか。集まって何をしているのかね？」
「どうやらお夜食を食べているようですね、ケッセルリンク様」
「夜中にカップラーメンは……」
「……まあ、珍しいですね」
　ケッセルリンクとシャロン。パレロアやエルシールまでやって来た。するとガルティアがケッセルリンクに向かって、
「見てたら無性に食べたくなってな……一口くれって頼んだんだが断られた。お前からも何か言ってやってくれ」
「……いや、もう一つ頼めばよいのでは……？」
「そーだそーだ！　もっと言ってやれ！」
「……なんなら全員分頼むか？」
「お、それはいいな」
　善意でそう言うと、ガルティアが喜ぶが、シャロンがこちらに笑みを向け、
「……女性としては、あまりこういったものを夜中に食べるのはよろしくないのですが……無理強いするおつもりで？」
「……いや、そういうつもりじゃないんだが……なら、ガルティアの分だけ――」
「それとこれとは話が別です。――ですよね、ケッセルリンク様？」
「ん、ああ……それは構わないが」
「どうかしたのかしら、シャロン……」
「というかいつの間にか私達まで食べることに……」
「――こんなこともあろうかと」
　妙な押しの強さにケッセルリンクや使徒達が戸惑う。
　……ひょっとして、シャロンも食べたかったのか？

食べたいけど、食べたいと思ってると思われたくなかったのだろうか。
如何にも女性らしいなぁ、と変な見栄を感じながら皆してメイド長の持ってきたそれを受け取ると、
「レオンハルト様ー！　ただいま参りましたわー！」
「こんな夜中に、何の用――って、何で皆してカップラーメン食べてるの？」
「うわぁ……何だかすごい不良感ありますねぇ……」
キャロルとハンティにペールが、別々の反応を見せながら部屋に入ってきた。
するとまたしてもメイド長が現れ、
「――さあどうぞ」
「ありがとうございますわー！　頂きますですの！　ずるずる……」
「……って、何一つ疑問に思うことなく食べるかね、普通……」
「懐かしいです。昔、引きこもってるときは夜な夜な一人でこれを啜って……あ、思い出すと泣きそう」
三者にまたしてもカップラーメンを手渡す。さすがにもう終わりか、と思っていると、
「――貴様ら、こんな夜中に何を揃って食べている。……俺にも寄越せ」
ガルティアに次ぐ食いしん坊が窓から声を掛けてきた。
するとまだ近くにいたメイド長が、
「……さすがにライゼン様に差し上げる物となると、ご用意出来ていません。ですが直ぐにキッチンをフル稼働させてお作りいたしますので暫しお待ち下さい」
「これも用意してる、とか言われたら怖いけどねっ！」
「俺もこれじゃ足りねぇからついでに持ってきてくれ」
ガウガウがツッコミを入れる頃には既に居なくなっていたメイド長さんだが、ガルティアの注文は聞こえているのだろう。メイド長なのだし。
しかし、

……夜中なのに賑やかだな。
本当は使徒達を呼んで、明日から戦争の準備をするよう命じるつもりだったのだが、
……明日でもいいか。
殆ど皆が集まっているのでちょうどいい気もするが、今それを言う気分にはあまりならない。
ゆえに今は皆で歓談でもしていよう、とレオンハルト達はカップラーメンを片手にいつもの日常を過ごした。
「……あら？　よく見るとシャロンさん達のそれ、カップラーメンじゃなくてカップ焼きそばですわね？」
「結構美味しいですよ？」
「濃いわね……塩分相当高いんじゃないかしら……」
「あっ……でも意外と美味しい」
「あたしのは蕎麦なんだけど……いや、美味しいからいいけどさ」
「私はうどんでしたよう？　……それにしても、懐かしい青春の味ですねぇ……」
「……この手の食べ物は啜るのが礼儀と聞いたが、啜るのは難しいな……」
「……」
「あっ、こらラウネア！　食べ物を残すなっていつも言ってるでしょ！」
「……なあレオンハルトよ。俺のはまだか？」
「私のいるか？　麺食べ終わったからスープだけだけど……」
「……三分くらい待ってろ」
――賑やかにも程がある夜中であった。

魔軍出陣

魔人達が魔王ナイチサの命により集められたのは翌日の午後であった、

大陸全土に散らばっていた魔人達が続々と城に登城していく。

その中には当然、魔人ザビエルの姿もあった。

「……」

ザビエルは無言で何をするでもなく、魔王城の謁見の間にてその時を待つ。魔人四天王の一人、ということもあり並ぶのは一番前であり、背後には他の多くの魔人達の視線を感じている。

だがその視線が、ザビエルを不愉快にさせていた。

……どいつもこいつも……！　この我を嘲るように見おって……！

誰も何も言いはしないものの以前と比べて恐れるような視線は減り、代わりに見下すかのような嘲笑の目で見られている、とザビエルは思っていた。

さらには魔王ナイチサからの呼び出し――声を掛けられることも圧倒的に減った。以前は供回りをすることもあったのだ。

それもレオンハルトが忙しい時の穴埋めのような形であったのが癪に障るが、それでも交流の機会はあったし、それなりに認められていたはずだという自負もあるが――しかし今はそうではない。

そしてこれは、己が魔人レオンハルトに敗北した時からのものであることも分かっていた。

ゆえにザビエルはその怒りをレオンハルトに向ける。

……許さん……いずれ貴様に地獄の責め苦を与え、亡き者にしてやる……！

ナイチサの隣に立つレオンハルトを射殺すように強く睨むも、レオンハルトは全く意に介した様子がない。その態度もザビエルを苛立たせる。

まるで自分の事など眼中にない、と言われているようで。

路傍の石や塵を見るような冷めきった視線に歯噛みする。

そんな中、ザビエルが忠誠を捧げる相手――魔王ナイチサが話を始めた。
「卿らを呼んだのは他でもない。――藤原家を滅することを決めたからである」
「！」
その言葉に一同が目を剥く。
藤原家とはここ五年で勢力を拡大し、人類圏を征服したＪＡＰＡＮの勢力だ。
数年前まではそれを放置する方針だったのだが、今年に入って人類統一を成し遂げ、大陸の半分を制覇したことにより、そろそろ派兵することになるのでは？　と魔物界ではその話で持ち切りだった。
そのため――遂に、やはり、とうとう――などそういった反応が魔物将軍らから聞こえてくるのだが必要以上にざわつくことはなく、程なくして静かになると話は続いた。
「故にその討伐の任を今ここで命じる」
ザビエルは主のその言葉を聞いて反応した。
これは主からの評価を上げるチャンスである、と。レオンハルトに苦汁をなめさせられて以降、己の評価はあまり高いとは言えない。
だがこれほど大規模な人間との戦い。それを見事完璧に遂行してみせればナイチサ様も再び己を評価してくださるだろう。
一番手っ取り早いのはレオンハルトを誅殺せしめることだが、正面からの戦いは忌々しいことに歯が立たない。ならば何かしらの策を立てて奴を追い詰めるのが良いのだろうが、その目処も立っていないのだ。
そのため今は命令を完璧にこなして評価を取り戻すのが先だ。元より魔王様の命令であればそれを優先し、任務遂行に尽力するのは魔人であれば当然である。
ゆえにザビエルは、不躾とは思いつつも声を上げることにした。
「……よろしいでしょうか？　ナイチサ様」
その場にいる者達の視線が一斉に自分に向く。それは主も例外ではなく、やや不快そうに眉をひそめると、

「……何だ、ザビエル。余の話に口を挟むとは不敬であるぞ」
「申し訳ありません。しかし、その藤原家討伐についてお願いしたいことがありまして……」
「お願い、だと？」
は、とザビエルは頷いてみせると、自分の願いを口にした。
「その討伐の任――このザビエルにお任せ頂けないかと」
「……ほう？」
ナイチサの目が、興味を抱いたようにザビエルを射抜く。口端をほんの少し歪め、
「殊勝な心掛けであるな。自ら誅を下してみせると？」
「は……私めにお任せ頂ければ必ずや、ナイチサ様の期待に応え、藤原家を完膚無きまでに叩き潰して見せましょう」
「ふむ……」
考え込むように顎に手を当てたナイチサ。それを見てザビエルは祈るような気持ちで主を見る。
……何卒、忠臣たる我にお任せを……！
己の力であれば幾ら人類を統一した軍勢とはいえ、それを叩き潰すことは容易い。所詮は人間。脆弱極まりない下等生物だ。人間を苦しめ、命令を遂行し、戦功を成すのは己である。
「……では命じよう」
「！」
すると己の願いが通じたのか、ナイチサはこちらを見て威厳ある声で言った。
「――魔人ザビエル」
「はっ！」
意欲を燃え上がらせながら返答する。命じてくださったことへの喜びもある。
――だが、その喜びは直ぐに裏切られることとなった。
「魔人――レオンハルト」
「はっ、ここに」
「っ……！」

ナイチサに名前を呼ばれ、傍らで礼をするレオンハルト。その名が聞こえた時点で、ザビエルの心に浮かんだ喜びは、直ぐに激しい怒りへと変わった。
殺意とも敵意ともいえるその憤りを必死に何とか抑えながら、ザビエルは主の言葉を聞く。
「卿らに藤原家討伐を命じる。数日中に魔軍を動かし事に当たるがよい。追って詳細を伝える。――以上だ」
「承りました」
「……ははっ、承りました……」
「うむ、頼んだぞ」
レオンハルトと揃って一礼するのは心底嫌であったが、それを飲み込んで礼を行うと、ナイチサは期待の言葉を掛けて謁見の間を後にする。
その際、レオンハルトにだけ目を合わせて言葉を送っていたのは気の所為ではないだろう。こちらにも言葉を掛けてくれたが、それはレオンハルトのついででしかない。
そのことで更に怒りが増幅していくのを自覚しつつも、ザビエルは一先ずそれを我慢し続けた。
だが、謁見の間から主がいなくなってしばらくすると、周囲の魔物将軍達や魔人らもまばらに解散していく。その際、一部の魔人からどうにも嘲笑するような視線を向けられているのは、レオンハルトと一緒に任務を受けるからだろう。
――また逆らって、今度は殺されろ。
そう言われているようであったが、それも腹立たしい。
何故そんなにも己を敵視しているのかが解らないのだ。
やはり弱いくせに生意気だな、と他の魔人らを内心で侮蔑し、見下す。そもそもさっさとこの場から去るような者は弱いからだとザビエルは思っていた。
魔王城で魔人達が集まる場合、殆どの魔物はそれを避け、用事が終わればその場を後にする。
それは偏に、魔人同士の争いがよく行われるのを知っているため、

それに巻き込まれないように気をつけているのだ。魔人であってもそれは例外ではない。
……雑魚どもが……我を何だと思っている……？
魔人四天王である己にそのような不躾な態度を取るとは、何を考えているのか、と思っていると不意に横からの声が飛んだ。
「レオンハルト！　儂と喧嘩するぞ！」
魔人レキシントン。
鬼の魔人であり、大の戦闘狂。敵わないと知りながらも毎度レオンハルトに喧嘩を吹っかける大馬鹿魔人だ。それを見て嫌そうに顔をしかめる小柄な魔人が一人。
「また始まった……何でもいいけど、ここでやるのはやめてよね。とばっちりを食らう可能性だって０じゃないんだから」
と、魔人パイアールがレオンハルトに向かって言う。いつも何かしらの研究をして引きこもっているためか他の魔人との交流は殆どない。
だがレオンハルトとは他と比べて幾分か交流があるようである。
「言われなくとも、ここでやるつもりはない。……それより、レキシントン。話を聞いていただろう。俺はこれから忙しくなる。お前の喧嘩を買っている暇はない」
「ハハハ！　おう、ちゃんと聞いておったわ！　――だからこそ挑ませてもらう！　お前が戦争に出向くなら、しばらく喧嘩は売れんくなるだろう！」
「……まあいい。それなら外で待っていろ。一回だけ、相手になってやる」
「おう！　酒でも飲みながら待ってやるわい！　――行くぞ、ジュノー！　アトランタ！」
「やれやれ……魔王城の前で酒盛りなんて怒られても知らないよ？」
「では、レキシントン様！　参りましょう！」
レオンハルトの言葉を受けたレキシントンは馬鹿笑いしながら背後に全裸姿の男女。ジュノーとアトランタという使徒を連れて豪快な足取りでその場を後にする。

レキシントンを見送り、軽く息を入れたレオンハルトは周囲の魔人達をその鋭い目で見渡すと、
「一応言っておくが、今回の戦争は俺とザビエルのみで行う。勝手に戦場に現れるようなら処罰させてもらうぞ」
その言葉に何人かの魔人達が不満そうに目を逸らした。この場で釘を差されてしまっては、もし戦場に偶然現れたとしても、それらの言い訳は通用しない。レオンハルトはやるといったらやる。
どうやっても戦争に参加出来ないと知った何名かの魔人達が退出していくと、残った何名かの魔人。レオンハルトと仲の良い魔人達が軽く声を掛けた。
「じゃあ頑張れよ、レオンハルト」
「……では、また」
ガルティアにケッセルリンク。明確にレオンハルトに付いていると思われる二体の魔人が親しげな様子を見せて去っていく。
ザビエルに声を掛ける魔人はここまで誰もいない。
だが、最後に退出していく魔人がザビエルを見て、
「……フッ……」
と、鼻で笑った。
それは魔人四天王であるカミーラであるが、ザビエルからすれば格下と思っている女だ。ゆえにザビエルは軽い苛立ちを抑えようとせず、
「……カミーラ……我に喧嘩を売っているのか……？」
「……別に……ただ、大人しい貴様が珍しくてな……そんなに横の男が怖いのか……？　くく……」
「貴様……ッ！」
くつくつと嘲笑してくるカミーラに殺気をぶつける。生意気でプライドの高い女を調教してやろうと心が燃え立つも、
「やめろ、ザビエル。また俺の手を煩わせる気か？」
「っ……！　喧嘩を売ってきたのはカミーラの方だ……！」
レオンハルトに言葉と視線だけで止められ、歯噛みしつつも原因は相手だと言い張る。カミーラが口を弓形に歪め、

「くく……怖い怖い。こんなところで襲いかかろうとするとは……やはり〝かっぱ〟風情に魔王城の水は合わなかろう……？　川にでも、帰って落ち着いたらどうだ……？　くくく……」
「き、貴様ァ……！　そんなに死にたいのならここで――ぐっ!?」
ザビエルの元の種族は炎カッパである。そのことを馬鹿にされ、怒りは頂点に達した。
だが、炎を発生させ、目の前の女を焼き殺してやろうと力を込めるも――それはすんでのところで未遂に終わる。背後からの衝撃で床に倒され、首を押さえられてしまったからだ。
魔人四天王の中でも最強と称されるザビエル相手に、それを行えるのは一人しかいない。
「――やめろと言っているのが聞こえなかったのか？」
「レオン、ハルト……!!」
力を込めて立ち上がろうとするもびくともしない。それどころか力を強められ、床に強く頭を擦り付けられる。するとカミーラがこちらを見下ろし、
「くくっ、無様だな……かっぱにはお似合いの姿だ……」
「き、さま……！　殺す……殺して――があッ！」
レオンハルトの力が強まる。圧迫感で声を出せないでいると、そのまま頭上でやり取りが行われた。
「カミーラ。俺はこれからこいつと仕事について打ち合わせがある。世間話はまた今度にしてくれ」
「……そうだな。私も戯れが過ぎた。お喋りはまた今度にするとしよう……」
「ッ……！」
レオンハルトとカミーラのやり取りを聞いて驚きと屈辱を感じる。
……このような挑発が、世間話だと……!?
あのレオンハルトが自分だけを注意し黙らせ、カミーラに対しては世間話を止めよと言う。それは明らかに、己だけを差別した行いである。
しかもカミーラはそれを知ってか知らずか、こちらを見下しきった

様子で挑発を続けた。
ゆっくりと使徒を伴って去っていくカミーラを射殺すように睨む。
……貴様も……いずれ……いや、戦争が終われば直ぐに殺してやる……！
城を燃やし、使徒を引き裂き、その肌に爪を突き立て、存分に犯して苦痛を味わわせながら殺してやる。
だがその憎々しい思いも、頭上で力を込めてくる憎き相手には敵わず、
「……さて、戦争について話し合わなければならないが……ちょうど二人だ。このまま話すか？」
「ふ、ざけ……！」
「――と言っても話すことはそれほどないがな。お前も俺も、それぞれ軍勢を整えて境界線に布陣。タイミングを合わせて侵攻を開始する」
理解は出来る。境界線というのは魔物界と人間界を隔てる場所の事だ。
そこに軍勢を集結させて侵攻する。というだけのシンプルなもの。理解出来ないはずがない。
だが、その後の言葉は評価を上げたいザビエルにとって承服できないものであった。
「そして、お前は全面的に俺の指揮に従え。――分かったな？」
「それ、は……！」
嫌だ。自分は自分で好きに動かさせてもらう。
他の魔人であればそう言って話は終わったであろう。魔人四天王たる自分に意見出来る者などそうそういない。
だが今命令しているのは最高位の魔人であり、続く言葉は力によって抑えつけられた。
「……〝それは？〟　違うだろう。お前の返事は、〝はい、よろしくお願いします〟――だ。分かったら返事をしろ」
「がっ……!!」
万力の如き力が加えられ、無理やりにでもそれを強制される。

しかし頷かない。それに頷くわけにはいかない。
……誰が、貴様なぞに従うものか……！
憎き相手に抗おうとするも、力の差は歴然であり、レオンハルトは冷たくこちらを見下ろすのみ。力が弱まる気配は全く無い。
だがややあってレオンハルトは息を吐くと、
「……そんなにも独自に動きたいか？」
「――っ、はぁ……はぁ……」
不意にザビエルを床に投げ捨て、そんな問いを投げる。
だがその答えを言う前にレオンハルトは出口へと歩みを進め、
「ならば勝手にしろ。その代わり――お前がどうなろうと俺の知ったことではない」
最低限の足並みだけは揃えてもらうがな、と最後に言い残し、レオンハルトはその場から立ち去っていった。
残ったのは己一人。使徒達は危険もあったので連れてこなかった。
ゆえにザビエルは誰にも見聞きされることなく、怨嗟を口にする。
「絶対に……絶対に、殺してやるぞ……！」
人間共を滅ぼしたら、次は貴様の番だ、とザビエルはしばらくその背中を睨み続けていた。

魔王城を後にし、レキシントンとの喧嘩をいつもよりも手早く終わらせたレオンハルトは城に戻ると作戦に参加する皆を集めた。
「これだけ大規模な戦争は初めてで胸が躍りますわー！」
「……さっさと、終わらせないとね」
「これだけ集まると壮観ですね」
使徒であるキャロル、ハンティ、ペール。
「レオンハルト様。召集、完了致しました」
レオンハルト軍を統括する魔物大将軍リーと、麾下の魔物将軍、魔物隊長達。
「物資は設置される予定の前線司令部に順次運んでいきます。補給線は常に確保するようにお願いしますね」

その他、親衛隊や遠征中の世話や補給、食事を担当する者達に、
「……」
じっとその時を待つのはレオンハルト軍――総勢１００万の魔物兵達。
その半分は後詰めとして街と補給線、前線を行き来する前線に出ない者達だが、それでも半数以上が前線に出ることになる。
それらを前に、レオンハルトは使徒のキャロル。そして大将軍リーの言葉を聞いた。
「レオンハルト様！　準備が終わりましたわ！」
「こちらも、全指揮官に作戦通達済みです。いつでも行けます」
「後はレオンハルト様の号令一つですわー！」
「……そうか。ご苦労」
軽く二人を労うと、レオンハルトは右手を上げる。既に準備は完了していた。
今朝方から始めさせた準備は昼頃には全て終わる。その速度に満足しながらも、レオンハルトは気を引き締める。
今回の任務は様々な意味を持つ。ゆえに失敗は許されない。
レオンハルトとしてもこれほど大きな戦いは初めてである。そのことに対する不安も勿論あるが――それよりも、楽しみの方が勝っていた。
期待による愉悦をその身に秘めながら、レオンハルトは一度だけ息を入れる。
呼吸を整え、そして静かに、大戦争の始まりとなる声を発した。
「――――全軍、人間界に向かって出陣せよ」
魔人の言葉と同時に、魔物兵達は一糸乱れぬ動きで行軍を開始した。
人類と魔物。人類統一を果たした藤原家と大陸を支配する魔人率いる魔軍。
その最初の大戦の幕が、今ここに上がったのである。

開戦の日

大陸南部。
人類圏にあるとある城に、藤原家の重鎮達は集結していた。
今日は人類統一を果たした藤原家による茶会の日であり、大陸各地の王族――藤原家の傘下に降った家臣達も集まり行われる茶会は、茶会という名こそ掲げられているものの、実質宴会のようなものであり、花見が出来る土地で行われる毎年恒例の催しである。
今年の開催は少し送れて９月。季節は秋だが、季節外れの桜が見れる珍しい場所を石丸が見つけたことで茶会はそこで行われることとなった。
あちこちで様々な催しが行われる中、ある童女が母親らしき女性と手を繋いで辺りを見回っている。
「母上母上！　あれは！　あれはなんでございますかっ!?」
母上、と呼ばれた女性は童女と同じ桃色の髪をしており、顔立ちもよく似ていた。明らかに親子であることが解る。
「落ち着きなさい、もも。あれは――ミッチーさんの茶会ですね」
穏やかな笑みを見せながら子供を嗜めた女性は――春姫。
人類統一を果たし、世界の王にまで上り詰めた藤原石丸の正室であり、幼い頃からの石丸を知る藤原家の古株でもある。
歳は既に四十を越えたはずだが、未だ変わらぬ美しさを持つ春姫は石丸との間に設けられた子――もも姫を連れて茶会を見て回る。
幼い頃の春姫に似て可愛らしい容姿をしているが、利発そうで元気の良いところは石丸に似ていると評判である。
そんなもも姫が好奇心旺盛な様子で指を指した先では、春姫の説明通りの催しが行われていた。
「良いですかな？　茶の道とは、人をもてなす事を大事としておりましてなぁ――」
「ふむ……」
大勢の観衆――ＪＡＰＡＮの武士や、大陸の貴族を相手に、地面に畳を敷いて作った即席の座敷の上で正座をし、それを実践してみせる

のは菅原ミッチー。
　藤原家の大陸制覇に大きく貢献した藤原四天王の一人である傾奇者であり、荒事、策謀に強いだけでなく、ＪＡＰＡＮどころか大陸でも有数の文化人と名高い男である。
　行政を司る太政大臣としての顔や様々な要職を兼任している多彩な彼は茶会本来の在り方を示すため、自ら茶道を実践しているのだが、
「ふはははは！　ミッチー！　飲んでるか!?　飲んでないなら飲め！　今日は宴会だぞ!!」
「……石丸殿。確かに小生、飲んではいますが飲むのは酒ではなく茶で――んぐっ!?」
　と、突然現れた男がミッチーの首を締めるように捕まえ、その手にもった一升瓶を飲ませようとする。
　それは春姫やもも姫にとって見慣れたものであり、特にもも姫は騒ぎ立てる父の姿を見て駆け寄り、
「父上ー！」
「ん……？　おお、ももか！　ははは、楽しんでいるか!?」
「ふははー！　楽しんでおります！　父上も、楽しそー！」
「ははは！　そうか！　それは何よりだ！」
　父である藤原石丸と笑い合うもも姫。大陸を統一し、世界の王となっても変わらない石丸に春姫が思わず微笑ましくなる。
　しかし笑ってばかりではいられずに春姫は声を掛ける。
「石丸様、そろそろミッチーさんを離してあげてください。何だか顔色が悪く……」
「おお！　忘れておったわ！」
　その言葉に未だ首を絞めて一升瓶を口に突っ込んでいたことを思い出したのだろう、ミッチーを離した石丸。
　しかし既に大量の酒を飲まされたミッチーはふらふらしながら立ち上がり、
「せ、石丸殿……酷いであります……飲み過ぎで死んだらどうしてくれ――うぷっ」

それなりに酒は嗜むはずだが、さすがに日本酒の一気飲みは来たのか、ミッチーが口元を押さえている。吐きそうになっているのだろうな、と内心苦笑しながらお水でも渡そうかと思ったが、石丸と石丸に続いてやって来た武者姿の女性とともに、
「大丈夫だ、ミッチー！　酒の飲み過ぎなど、それくらいで人は死なん！」
「そうだぞ貴様！　酒の飲み過ぎで死ぬような軟弱者は、死ぬ前にわしがぶっ殺してやる！」
「無茶苦茶な……」
武者姿の女性――源頼光とともにミッチーに厳しい言葉を浴びせる石丸。
頼光の方は十三人いる石丸の妻の一人であり、源氏武士団棟梁。更には藤原家武士を統率する侍大将の地位を持った藤原四天王の一人でもあり、人類最強の女性とも名高い。
ああ見えて既に子供を九人も産んだ立派な母親であるはずなのだが、未だに落ち着きが無いというか物騒な性格は変わっておらず、子供達にもそれが受け継がれてしまっている。他の子に悪影響だからやめてほしい。
よく見れば彼女の子供達も暴れる母を遠巻きに眺めており、暗に近づきたくない、と恐れている様子である。
だが、そんな中、
「貴様らァ！　何をそんなに暴れておる！　朕の能の邪魔じゃ！」
怒声とともに現れたのは茶褐色の肌をした大柄で鍛え上げられた肉体を持つ老人。
征夷大将軍――坂上田村麻呂である。
藤原四天王の一人であり、石丸を除けば最強の武士と謳われる強さを持った達人であり、武勇伝には事欠かない御仁である。
そして大体頼光と喧嘩をしている。今も大刀を担いでやって来た田村麻呂に対し、頼光が眉を立て、
「あぁん!?　まだ生きてたのか爺！　さっさと死んで征夷大将軍をわしに譲れ！」

「貴様もそろそろババアじゃろうが!?」
「んだとこのジジイ――ッ！　わしはまだぴちぴちの三十代――いや、見た目的には永遠の二十代ぞ！」
「気持ち悪い！　寝惚けた事を抜かすでないわババア！」
「二度もババアと言ったなジジイ!?　もう許さぬ！　今日という今日はぶっ殺してやるから覚悟しろ！」
「やれるものならやってみせよ!!」
　刀を抜いて戦いはじめた二人を見て呆れてしまうが、周囲はそれを恐れて離れていってしまう。どうにかして止めようかな、と思うも石丸は酒を飲んで我関せずであり、ミッチーは既にダウンしている。
　どうしようかな、と悩んでいると、
「――行けぇ、黒部ー！」
「……何で俺なんだ？」
　……もも……一体何を……？
　気が付けばもも姫が近くにいた妖怪王――黒部の身体をバシバシと叩きながら戦いに交じるよう催促している。
　藤原家の主力である妖怪軍団を率いる黒部は、藤原四天王でもあり、その強さは凄まじいものがある。その人となりは理解しているので危険というわけではないのだが、一切臆することなく強大な妖怪である黒部に命令しているのは、何というか困惑する。
　それは黒部も同様のようで、どうすればいいか幼い子供を見て困惑している。
「黒部は強いから戦ったら面白いでしょ！」
「面白いって……あのなぁ……止めるならともかく、暴れるのは――」
「ふははー、行け黒部！　二人を血祭りに上げるのですっ！」
「お前意味分かって言ってんのか!?」
「もも……」
　軽く頭を抱える。育て方を間違えただろうか。石丸に倣って女の子なのに剣を振らせてみたのが間違いだった。
　と、
「おう、春！　お前も楽しんでいるか!?」

「きゃっ、石丸様……」
いつの間に近づいてきたのか、不意に背後から石丸が頭をがしがしと撫でてくる。無遠慮な手付きだ。それをやんわりと嗜めながら、
「もう……あんまりはしゃいだら駄目ですよ。もういい歳なんですから」
「何を言う！　俺はまだまだこれからだ！」
そう言い張る石丸を半目で見る。しかし、
……実際、昔と比べても今の方が活き活きとしてます。
昔からこのような性格であったことに変わりないが、今はもっと元気だ。
その強さも、昔とは比べ物にならないほどであり、今が全盛期であると確信出来るほどである。
その原因を、春姫は何となく察していた。
だがそれを思うと、春姫は心に暗いものが落ちる。
そうして出た言葉は、
「……今がずっと続けばいいのに」
という願いだ。
春姫にとっては今が幸せの最高潮ともいえるのだ。
少し前までは戦争で色々あったが、人類を統一してもう戦争をする必要のないところまで来た。
家族や友人、多くの仲間や愛する子供や夫に囲まれて平和な日々を過ごす。隣人や見知らぬ誰かも傷つくことのない世界。その光景が今、目の前に広がっているのだ。これ以上の物はないのだといえる。
だが、
「……それは難しいな。なにせ、俺はまだ夢を叶えていない」
「っ……！」
やはり聞こえていたのか、石丸がゆっくりと返事をする。
「――お前の夢もまだ叶えてない」
「――――」
「だというのに今を続けることは出来ん。俺は……力ある者としてそれを叶える義務がある」

「……はい。分かっています」
でも、という言葉は口に出せなかった。
自分達の夢を叶える。そう言って季節外れの桜を見上げる石丸の顔が――昔見た……幼き頃の石丸とそっくりであったから。
希望と期待に満ちた将来を夢想していた――そんな無垢で純粋な瞳に惹かれたのだ。
……今も、変わってないのですね……石丸様。
それに惹かれた身として、彼の夢を否定することは出来ない。
歳を取り、多くのしがらみや背負わなければならないものが増えても、あの日見た願いは色褪せていない。
――いや、だからこそ……石丸は進むのだろう。
石丸の夢に魅せられた者達。石丸の姿に夢を見た者達の想いを背負っているからこそ、石丸は歩みを止めることがない。
例えそれが――
「……石丸様」
「なんだ？」
「石丸様は……夢を叶えてくださいますか？」
己の震えを抑えて言う。
石丸は一瞬、表情を真面目なものに戻したが、しかしややあって口端を歪めると、
「……心配するな！　俺は人類最強の男、藤原石丸だぞ！　その俺が道半ばで倒れると思うか!?」
「……いいえ」
「そうだろう！　ゆえに……期待していろ！　全部、俺もお前達の夢も……この俺が全部叶えてやる!!」
「……はいっ」
その自信に溢れた顔と心強い言葉に胸が安らぐ。
例えそれが――到底叶わない夢だとしても。
今はその言葉だけで夢を掴めると。
そう思わせてくれたから。

藤原石丸が、大陸の諸侯を集めて行った茶会の夜。
人類圏の北側。大陸の中央にある魔物界との境界線に築かれた砦がある。
そこは魔物界を監視する役割を持っており、何か動きがあれば即座に国元に知らせる役目を背負っていた。今は藤原家所属となった国境警備隊。所属の兵達は欠伸を噛み殺しながら任務に没頭していた。
「異常無し。……最近、暇だなぁ」
「こっちも異常無し。……おいおい滅多なこと言うな。俺達が暇なのは良いことだろうが」
砦の外で少数の魔物を倒して、砦に戻ってきた兵士たちが言う。魔物界と面したこの一帯では、侵入してくる魔物の数はそれなりに多い。
そのため少数の魔物であればそれを討伐するのも砦の兵士達の仕事の一つであった。
これらの業務のおかげで戦闘経験も積めるため、レベルも上がってそれなりに強い兵士達は最近の仕事内容を弛緩した空気で愚痴りあう。
「藤原家な……とんでもない強さだったらしいが、魔軍より強いのかね？」
「どうだろうな。藤原家とは直接やり合ってないし、魔軍も最近は大人しいから……でもまあ魔軍には勝てないんじゃないか？」
藤原家が大陸を制覇するまでに五年。
その間、魔軍の動きはここ数十年で類を見ないほどに動きが無かった。
精々、散発的かつ少数の魔軍が境界線の砦を少し襲ったというくらいであり、それは他の地域も同様だと報告が来ている。魔軍の情報に関しては、国同士で共有されることも多く、特に魔軍の侵入は真っ先に共有される情報である。
なにせ自分達の国にも侵攻してくるかもしれないのだ。そうならないためにも、対策は何よりも優先される。

だが先程も兵士が言ったように、藤原家が人類を統一してからは所属こそ違えど同じ旗本であるため特に問題なく情報が共有されている。
しかし魔軍に動きがないので恩恵を受けたことは未だ無いのが実情だが。
と、兵士が先程の兵士の言葉に答える。
「それは分かんねぇぞ？　なにせ、藤原家当主の石丸――様は神に選ばれた帝の力を持ってるらしいしな。妖怪とかいう魔物みたいな化け物も従えてるし、ひょっとしたら魔物も歯牙に掛けない可能性が……」
「……いやー……まあ、魔物には勝てるかもしれんが、魔軍ってなると無理だろ。魔人は人間の攻撃は効かないしな」
「でも神の力が本当なら魔人も倒せるかもだろ？」
「それは……」
兵士には判断が出来ない事だ。
だが、だからこそ希望や期待が湧くというのもある。
帝という未知の力と、人類最強という肩書は余人に期待を抱かせるには充分であった。
「……と言っても襲ってこないことに越したことはないだろ。石丸様がどれだけ強くても、俺達じゃ一瞬で殺されるだろうしな」
「まあそれは……そうかもな」
「だろ？　それよりも、ＪＡＰＡＮからの移住者とか文化も入ってきてるし、そっちの方が今は問題だろ」
「ああ……そういえば日本語憶えなきゃならねぇんだった……お前、どこまで憶えた？」
「こんな仕事して勉強する時間が取れるわけないだろ。日常会話も難しいよ。……なんなら息子の方が上手なくらいだ」
「ははっ、良いことじゃねえか。将来的には助かるだろうしな」
「そうだけどな……はぁ、今度息子に教えてもらうか……」
藤原家が大陸を支配したことにより、人や文化が大陸にも渡り、日本語も憶えなくてはならなくなったことに愚痴をこぼす兵士達。

上役の者達は仕事で必須にもなってくるため徐々にだが憶え始めているし、子供に関してはもっと早い。
しかし一兵卒の兵士達にとってはそんな余裕もなく、かなりの面倒事であった。
兵士が溜息を漏らしていると、不意に音が響いた。
「……ん？　何か聞こえないか？」
「……これは――」
低い音が聞こえる。
兵士が反応し、素早く魔物界の地平を目を凝らして確認する。
そこに見えたのは、
「……お、おい……」
兵士の声が震えた。
そこに見えた波のような何かに怯えたのだ。
「嘘だろ……？」
ベテランの兵士達もそれを見て、身体を震わせる。背筋に嫌なものが走り、全身の毛穴から汗が吹き出す。
夜天の空の下に見えたのは――地平を埋め尽くさんばかりの群であった。
「――ま、魔軍……!!」
地表にあるのは赤、青、緑の魔物兵。
それも数万や数十万という数では利かない大軍勢であった。
空気と音の唸りは百万単位の魔物兵の足音であったのだ。
それを前にした人間の兵士達は震える声で言う。
言えることは一つだ。
「お、終わりだ……」
自分達の――人間の終わり。
百万を優に超える魔物の大軍は、容易に人類圏の境界線にある砦を飲み込み、果ては近くの街まで侵攻すると、その全てに人間の死骸を晒した。
国境の警備隊。並びに街を常備されていた軍勢は激しく抵抗したが、その抵抗虚しく魔軍に殲滅されていく。

大軍に見合わない迅速な動きで人類圏の街の数十を落とした魔軍。その動きを警戒していた藤原家参謀――月餅の指示により防衛の為の軍勢を差し向けた頃には、街に陣を敷いて人類軍の襲撃に備えており、無駄足に終わってしまった。

だが、魔軍と一戦混じえたのは無駄では無かった。

防衛に向かった兵士の殆どが死んでしまったが、数少ない生き残りによって魔軍の陣容――大軍を率いる魔人の存在が確認された。

一人は魔人四天王の一角――魔人ザビエル。

そしてもう一人は魔人筆頭兼魔軍参謀――魔人レオンハルト。

人類にとって絶望の権化とも言える二体の強大な魔人の侵攻が確認されたのである。

レオンハルト軍

大陸中央部。
肥沃な土地で知られ、大陸通商路として極めて重要な地域であるキナニ平野。
その北側は対魔軍の最前線であったが、突如として攻め込んできた魔軍の大軍勢によりあっけなく陥落。
現在、キナニ平野は人類圏に攻め込んできた総勢２３０万の魔軍の本拠地として機能していた。
しかし魔軍のとある事情から本陣は二つに別れ、西側にはザビエル軍。東側にはレオンハルト軍が布陣しており、その間に簡易的な魔軍の司令部を作ることをお互いに承諾していた。
とはいえ軍議はお互いの本陣で行うため、中央の司令部は連絡用としての役割しか担っておらず、魔軍を率いる二体の魔人の関係性が見て取れるようであった。
そして東側。とある人間の国家の首都を占拠したレオンハルト軍は、その王宮を司令部として使うことにした。
街の中を魔物兵達が我が物顔で闊歩しており、住人達は怯えた様子で魔物兵達に連行されていく。だがそんな中、一体の緑の魔物兵が小声で疑問を呟く。
「……なぁ、これって何の意味があるんだ？」
「ん、何だお前。知らないのか？　新入りか？」
「……実は今回の戦争が初めてなんだ」
なるほどな、と赤い魔物兵が得心したように頷く。新入りだという緑魔物兵は背後に連れた人間達を見て、
「何で襲ったら駄目なんだ？　いや、レオンハルト様の命令だってのは分かるけどよ……好きに掠奪出来るのを楽しみにしてきたのに……街を汚すなとか人間は可能な限り捕まえろとか……まさか全員保護でもするのか？」
「……お前、本当に何も知らないんだな」
だが新入りなら当然か、と赤魔物兵は納得の色を見せて続ける。

「それこそまさかだな。うちの軍じゃ常識だが……掠奪は戦闘後直ぐなら許されるけどな。占領した後は基本的に使えそうなもんかき集めて後は配給制だったり、褒賞として使われたりってとこか」
「というと？」
　緑魔物兵の言葉に、赤魔物兵は背後の人間達を指して、
「食料は単純に物資として保管。余ったら持って帰るんだが、人間の方は一旦捕まえてから選別だな。半分は殺しても犯しても好きにしていいが、半分は働かせたりするんだよ。飯とか作らせたりな」
「へぇ……じゃあ褒賞ってのは？」
　赤魔物兵が軽い笑みで答える。
「そのまんまだな。手柄に応じて好きなものくれるんだよ。大体は女とか昇進願ったりとか……後は街に帰ってから人気店の一ヶ月フリーパスとかな」
「あ、それ地味に欲しい……」
「分かるぜ。俺も近所に出来た行き付けの店があってな。そこの和風カレーマカロロが絶品で……正直、女貰うかフリーパス貰うかで悩むんだ。フリーパスだと一食限定とかじゃなく食べ放題だしな」
「なるほどな……でも、人間の女はこういう時じゃないと出来ないしな……」
　背後の人間、若い女性を見て緑魔物兵が呟く。その視線を感じて女が顔を青褪めさせる。
　震える女も唆るなぁ、と思いながらしかし赤魔物兵は手振りしながら、
「でもまあ、慰安婦として好きにしていい女もちゃんといるしな。うちは大所帯なんで順番待ちが面倒なのがアレだが……あ、そういえば巨乳の美女見かけたら報告しろよ。もしくは傷つけないようにして捕まえろ」
「え、何でだ？　犯すのか？」
　本当に何も知らないのか、そんな間の抜けたことを言い出す緑魔物兵に溜息が漏れる。出発前にちゃんと告げられていたはずだが。とにかく説明しておこうと、赤魔物兵は軽く注意するように、

「馬鹿、お前。隊長の言うこと聞いてなかったのか？　――レオンハルト様の貢ぎ物として使うんだよ」
「……ああ、そういえば巨乳好きか！」
　思い出したように声を上げた緑魔物兵を見て、赤魔物兵は呆れるように肩を竦めると、
「知ってたなら気づけよ。貢ぎ物として渡したら代わりに褒美をくれたり、昇進が近づいたりするんだからな。もし俺達がレオンハルト様の目に適うような巨乳の美女を見つけて、それを隊長が貢いだことで魔物将軍にでもなったら、俺達も魔物隊長になれるかもしれないんだぞ？」
「お、俺達が魔物隊長……！」
　ごくり、と唾を飲み込む緑魔物兵。下っ端の魔物兵にとって魔物隊長以上の地位というのは喉から手が出るほどに欲しい地位だ。
　特にレオンハルト軍であればその恩恵はよく知っている。赤魔物兵はそれを口にした。
「魔物隊長になったら街の高級料理店や会員制の娯楽施設も利用可能で、将軍や大将軍閣下、果てはレオンハルト様の城にお呼ばれしての食事会もある上、女の子モンスターからもモテモテで、高級住宅街の庭付き一戸建てに住むことも許され、二人も三人も嫁を囲って暮らせるんだぞ？」
「……良いよなぁ、魔物隊長。もっと言うなら魔物将軍……」
　魔物将軍になればそれの比ではない。屋敷を持つことすら許されるし、各種施設もフリーパスで使い放題。嫁が十人近くいるのも珍しいことではない。
　もっとも、レオンハルト軍は総勢百万程であり、魔物将軍も約五十体の狭き門だが、それだけに魔物将軍とは魔軍のエリート。魔物の勝ち組だ。
　文化的な生活を送るレオンハルト軍の魔物兵達はなまじそれを知っている分、野心が疼いてしまうのである。
「そのためにもしっかりと仕事をこなすんだよ。……かと言って勝手なことするなよ。レオンハルト様を怒らせたらどうなるか……」

その言葉を聞いて、半ば抜け駆けの方法を考えようとしていた緑魔物兵はギクッと身体を跳ねさせ、慌てたように振り返る。
「や、やらねぇって！　レオンハルト様を怒らせるとか……」
「だったら気をつけろよ。あのザビエル様ですらレオンハルト様を怒らせて半殺しにされたそうだからな……ともかく、命令を忠実に、仕事は全力で。そして規律を守ることがうちの鉄則だ。……本来、話を聞いてないってだけでかなり怒られるからな」
「お、おう……悪い、気をつける……」
レオンハルトの怒りを買うことを想像したのだろう、緑魔物兵が声を震わせて怯えた様子を見せる。赤魔物兵は再度、息を入れて緑魔物兵の肩を叩くと、
「まあ普通にやってたら怒られることもないし、良い生活も送れるからな。失敗せず、着実に功を積み上げることだ」
自分に言い聞かせるように言う。昇進を夢見るのは魔物兵であれば――いや、魔物であれば誰もがそうだ。
だがそこで焦ると失敗する。致命的なミスを犯す。
ゆえに大事なのは確実に評価を上げていくこと。プラスだけを着実に積み上げれば魔物隊長になることは難しくないはずだ。
赤魔物兵はそれを思い、連れてきた人間達を見て笑みを見せる。見た目の良い女もそれなりにいる上、胸の大きな美少女だっている。
これを連れてきたと報告すればそろそろ自分の番かもしれない、と赤魔物兵は見ていた。
ゆえに焦ることはない。そうして赤魔物兵は王宮へ緑魔物兵とともに歩みを進め、
「……そういえば、街を汚さないのことは理由があるのか？」
「……レオンハルト様の趣味じゃないか？　隊長から聞いたが、あの方、意外と景観気にしたり拘り凄いらしいし。ここを本拠地にするなら一応気にするだろ」
「……でも他の街もそうなんだろ？」
緑魔物兵にそう聞かれ、しばらく考えた赤魔物兵はやがて、
「……知らん。趣味じゃね？」

「……そうか……」
まああの街を作ったくらいだし綺麗好きなんだろうな、と未だ綺麗な外観を保つ街を見て、適当なことを思う魔物兵であった。

王宮。
その玉座の間ではレオンハルト軍の重鎮が集まっていた。居並ぶ魔物将軍は勿論、魔物大将軍リーや三体の使徒も当然そこにおり、玉座には、
「レオンハルト様。貢ぎ物を渡したい、と第十七軍所属の魔物隊長が申しておりますわ」
金髪ツインテールに下がレオタードになった青の改造軍服を着た少女は魔人レオンハルトの使徒キャロルであり、彼女は部下の報告を受けると、玉座に座り、足を組みながら頬杖をつく魔人レオンハルトを見てそれを告げる。
金髪灼眼。鋭い目つきが更に細まり、キャロルを捉える。
通常の人間であれば一瞥されただけで生物としての格の差を思い知らされ膝を折るか、気を失ってしまうほどの圧力がその双眸に込められている。
そしてそれは、魔物や魔人であっても例外ではない。
多くの魔人が恐れるレオンハルトの睨みを受け、しかし使徒であるキャロルは満面の笑みを浮かべている。居並ぶ魔物将軍らが緊張する中、ややあってレオンハルトは息を入れて、
「……少し多くないか？　貢ぎ物」
微妙な表情を浮かべてそう言い放った。
というのもレオンハルトへの貢ぎ物の報告は今日だけで数十件にも渡る。
その全てが女であることから、レオンハルトは頭を悩ませていた。
しかしキャロルはそんなことは露と知らず、
「はい！　これもレオンハルト様の御威光あってのこと！　皆さんよく働いているようでいいことですわ！　これからも励むがよくって

よ！」
「は、はっ！　それはもう……」
キャロルの言葉を受けて魔物将軍が応答するも、何故か感じるレオンハルトのプレッシャーに冷や汗をかく。
新入りの魔物将軍がゆえにレオンハルトが考えていることがいまいち分からないのだ。貢ぎ物が多いことは喜ばしいことのはずだが、そうは見えない。
まさか実は内心では喜んでいるのだろうか、と顔色を窺っているとレオンハルトは軽く息を吐いてキャロルに告げた。
「……後宮があっただろう。そちらに運んでおけ。そろそろ王宮には入らんだろうしな」
「はい！　畏まりましたわ！」
キャロルが早速それを魔物隊長に伝えると、魔物隊長は早足でその場を後にした。
すると玉座の横に控える長い薄紫髪の少女、使徒ペールがレオンハルトに寄りかかるように、
「……レオンハルト様ー？　掠奪ハーレムも良いですけど、ちゃんと私も可愛がってくださいよう？」
「……ああ、分かっている」
「あんっ！　……もう、いけずですねぇ」
そう言って大きな胸をぐいぐいと押し付けてくるペールを軽く押し退けると、レオンハルトは再び眉間に皺を寄せた。横からの視線も、
「……随分と良いご身分だけど、ちゃんと戦争のことも考えてるんでしょうね？」
「……当たり前だ」
「……それならいいけどね……」
もう一人の使徒、ハンティが半目で責めるように見てくるのを感じて軽く目を背ける。はっきり言って、この手の貢ぎ物は一度も命令したことはないのだが、皆良かれと思ってそれらを差し出してくるから何とも言えない。

だがその忖度も、ある意味で良い口実になる。理由なく人間を保護することは魔軍の将として良いこととは言えないからだ。
ゆえに断ることもないのだが、消極的とはいえ受け入れているのも事実なため、人間保護派のハンティからすれば眉をひそめたくもなるだろう。
それとも貧乳だから怒ってるのか？　とふざけた事を考えてみたが、これを口にしたらこの場で戦争が起きるので自重する。触れてはならないこともあるのだ。
と、思考を回しているとまた報告が来た。今度は魔物将軍が直接告げてくる。
「レオンハルト様。この国の姫と名乗る者を捕らえました」
「……姫、か」
それを聞いてレオンハルトの脳裏に幾つかのパターンが思い描かれる。それを考えながら聞くべきことを聞こうと続けて、
「国王はどうした？」
「はっ。どうにも国王は占領後に少数の兵を引き連れて逃げようとしていたところを魔物兵達が見つけて殺してしまったようです。恰好も平民に偽装していたようで見抜くことが出来ず……申し訳ありません」
「……姫が生きてるなら問題ない。――ここに連れてこい」
「はっ！　直ぐに連れてきます！」
魔物将軍が副官の魔物隊長に命令する間、軽く眉間を揉みほぐす。
国の権力者がここに連れてこられ、どういう反応を見せるかのパターンは大体決まっている。千年以上戦争をしていればこういったことは多々あることだ。
ゆえに、いつもどおり対応してやろうと姫の到着を待っていると、やがて美しいドレスに身を包んだ美少女が魔物兵に連れられてやって来る。
……随分と大人しいな。これはあのパターンか？
抵抗する様子はない。こちらの姿を見て一瞬ビクリと身体を震わせたが、それでも気丈に耐えている。この時点で強気な性格か、王族

らしい気品と覇気に溢れた性格なのかに絞られるが、その場合だとまた背負い込まなければならないな、と内心で頭を抱える。
そんな中、魔物兵に突き飛ばされるようにしてこちらの前に出てきた姫はゆっくりと頭を下げると、
「……魔人レオンハルト様、ですね。わたくしはこの国の第一王女エクレアです」
以後、お見知り置きを、と王族らしく礼儀に則って礼を告げた少女に内心で評価を上げる。
……助けてくれ、と泣き叫ばない相手は珍しいからな……といっても、対応はそっちの方が楽だが……。
何でもするから、と何をしてでも助かろうとする王族は珍しくもないし、対応も楽なのだが、このように確かな王族としての気概と、現実を見据えている目をする相手は大体恭順の意を示すか、自己犠牲を行い何かしらの取引を行ってくる。レオンハルトとしてもこういう女は嫌いではないが、どういった対応を取るかは状況にもよる。相手がどのパターンで来るかも関係する。
……だが、嫌な予感がするな……。
良い予感を嫌な予感と例えた――というのも、彼女の容姿が優れているせいだ。
金髪縦ロールでツリ目の、如何にも高飛車なお嬢様といった感じの容姿だが、そのスタイルが問題だ。
くびれた腰つきから足先までの女性らしいラインもそうだが、特にその胸元が大きく盛り上がっているのが確認出来る。かなり大きい。しかもドレスの胸元が大きく開かれており、胸の谷間を見せつけるようになっている。
おそらく自分の容姿や見た目がどんなものか自覚しているタイプだろう。それでいて国のためを思い、自ら姫だと名乗り出て、魔物将軍に捕まった。――計算の可能性が高い。
こうなれば言い出す言葉も予想出来てしまう。一応こちらとしても王族を捕まえることはそれなりにやらせたいことがあるからなのだが、これだと結局は背負い込むことになるだろう。魔軍の為により

良い行動を取ることを考えるなら、それに加えて要求を一部飲んでやるくらいが落としどころか。
ゴールを定め、ある程度予想したところでレオンハルトは口を開く。
「――レオンハルト様。この女……」
だがその前にキャロルが口を挟んできた。
キャロルが睨むように姫を見る。おかしな反応に訝しみながら、一応聞いてやる。
「どうした、キャロル。何か気になることでもあるのか？」
「……はい。この女――」
「……なんでしょうか？」
キャロルがより一層彼女を睨んだ。
……まさか、俺も気づいていない何かを察したか？
であれば良いのだが、とキャロルの言葉を待つ。
やがてキャロルは姫をビシッと指差すと、高らかにそれを口にした。
「この女――――わたくしとキャラが被ってますわ！」
「……は？」
「……は、い？」
思わず間の抜けた声を出してしまう。他の者達も同様のようで、魔物将軍ら一斉にポカンと呆気にとられた表情をしているのが面白い。
そんな中、ハンティが大きく溜息を吐いて言う。
「キャロル……何を言うかと思ったらそんなこと？」
「そんなことではないですわハンティさん！　キャラ被りはよくありませんのよ!?」
その言葉に皆が改めて姫に視線を向ける。
だが、ややあって思ったことを代表するようにペールがおずおずとキャロルに向かって、
「……あのー、キャロル先輩？　似てるのは口調くらいですし、髪型はツインテールとツインドリルでは似て非なるもの。そして何より、キャロル先輩は貧乳で、相手は巨乳――」

「なっ!?　言いましたわね！　戦争！　それを言ったら戦争ですわ！
第一、わたくしはハンティさんよりはありますから貧乳ではないですの！　美乳と言いますのよ！」
「流れ弾飛んできたんだけど!?　喧嘩売ってんの!?」
ハンティが顔をひきつらせながらツッコミを入れる。やっぱり気にしていたのか、と納得する。
……というかヤバい。こちらを見る目つきが胡乱な感じになってる。俺の威厳が……。
この状態で自分だけポーカーフェイスで真面目な顔をしていてもあまり意味はない。ゆえにレオンハルトは軽く頭を抱えながらそれに対処しようと声を上げる。
「……お前ら、少し黙ってくれ。今は大事な話の最中だ」
「でもレオンハルト様！　キャラが！　キャラが被ってますの！」
「心配するな。お前ほどキャラが立ってる奴はそうはいない」
……良くも悪くもな。
しかしそう言って褒めてやるとキャロルははっとしたように顔を変化させる。
「！　レオンハルト様……はい、そうですわね！　わたくしが間違っておりましたわ！」
納得したようで静かになる。感動したようでキャロルがポーズ取ったまま止まっていて少し鬱陶しいが、それを視界から排除するように努めると、改めて姫の方に視線を向けた。
「騒がしくて悪いな」
「……い、いえ……ん、ごほん。大丈夫ですわ」
さすがにこんなやり取りを目の前で見せられるのは予想外だったのだろう。キャラ被りがどうのと言われることは彼女の中の予定には無かったはずだ。お姫様が咳払いをして居住まいを正すと、改めて強い意志が籠もった瞳が向けられる。
「さて……単刀直入に言おう。お前には仕事をして貰いたい」
「……それはどんな仕事でしょうか？」
レオンハルトは頷く。それは簡単なことだ、と。

「この首都に住む人間を、魔軍のために働かせる。そのために、この国の姫であるお前の口から直接呼びかけてほしい」
と、言うことだ。
しばらくの間はこの首都を本拠地とすることを決めた以上、戦争の経緯にもよるが半年以上はこの国を占領することになるだろう。
魔軍の効率の良い運用のためには、人間を働かせてしまったほうが手っ取り早い。ゆえにその提案を出したのだが、
「……わたくしが言わずとも、貴方方が命じてしまえばよいのでは？」
そのようなことを宣う。
レオンハルトはそれに対しては鼻白んだ。分かってる癖に、と。
「ふん……確かに暴力と恐怖をちらつかせて働かせるのも悪くないが、嫌々働かせても効率が悪い」
「それは……無理からぬことかと。魔物のために働きたいと思うはずがありませんわ」
貴様！　と、魔物将軍の内一体が声を上げるが、それを視線だけで抑える。魔物の為に働く気がない、と言われ苛立つのも魔物の立場としては理解るが、彼女の言っていることは当然の道理だ。だが、
「お前が呼びかければ、少なくともこちらが命令して働かせるよりはやる気は出るだろう」
「……」
お姫様が考え込む。
実際お題目は何でもいいが、姫が生きていることを知らせるのも狙いだ。
魔軍に従い、きちんと働けば少なくとも生きることは出来る、と民に知らしめることが出来る。街を汚さず、大きな掠奪もなく、人を仕分けているのも活きてくる。
少なくとも魔軍は、話が通じるのだと。膝を折って従順になれば助かると一度思わせてしまえば、後はいちいち命令しなくても働くようにもなるし、待遇が悪くないことを知れば、中には魔軍のために働きたい、と願い出る者も出てくるだろう。
しかしそれも最初が肝心だ。恐怖を与え過ぎれば言うことは聞い

ても心が死んでしまう。逆に恐れが無ければ反乱が起こる。
国の権力者を抑え、代わりに命じさせるのも民の感情を思えば効率が良い。
もっとも、半数は魔物兵のガス抜きも兼ねて死んでしまうが、仕分けているだけ優しいほうだろう。老人と男の大半は死ぬだろうが、女は慰安婦に選ばれたとしても運が良ければ生き残るし、子供に関しては安全に隔離してある。他の軍がやる事を思えば優しすぎるほどであり、魔人として、魔軍参謀として無条件に配慮出来るのはここまでが限界だ。
これ以上を望むなら口実を、こちらに益が無ければならない。ゆえにこれは相手のための交渉でもある。それを分かっているかどうかはさておき、チャンスだけは平等に与えようと返答を待つ。
するとやがて、考えが纏まったのか姫の口がゆっくりと開かれ、
「……分かりました。わたくしが呼びかけます」
「ふむ、それはありがたいな」
だが、それだけではないんだろう？　と内心、続く言葉を待つと予想通り、
「――ただし、条件があります」
「……条件、だと？」
「っ……そうです」
不機嫌さを押し出すように眉を顰めて軽く威圧してみせる。同じように魔物将軍らも不愉快そうな気を漂わせている。それもそうだろう。こちらとしては本来、条件など飲む必要はないのだ。
嫌と言うなら無理やり働かせるだけ。あくまでもその方が効率が良いというだけで、手段を選ばなければ出来ないことではないのだ。
悪辣な方法を使えば人間に言うことを聞かせる方法など幾らでもある。それこそ死ぬ気で働いてくれるだろう。
しかし自分は、そんな方法を取る気はない。少なくとも、必要に迫られない限りは。
ゆえに聞いてやる。その条件は何だ、と。
「……今居る国民の命を、保障してください」

姫の告げた条件に目を細める。
……やはりか。しかし……悪いが、それは無理な相談だ。
「……それは無理だ。お前も知っているかも知れんが俺の軍では占領した街にいる人間は選別し、半数は殺す。そうしないと部下の鬱憤も溜まるからな」
人間もよくやっていることだろう？　と言ってみせると、不謹慎だが面白いように表情が変化した。戦争を行ったことのある人間であればそれを知らないはずがない。人間同士ですら掠奪、暴行は行われる。
それを行うだけだ、とあくまで当然の権利を主張してみせる。
お姫様はそれを聞いて一度喉を鳴らしたが、やがて覚悟を決めたようにこちらを見据えると、
「……でしたら、レオンハルト様に差し上げたいものが御座います」
「……ほう？」
興味を示した、と相手が分かるように抑揚を僅かに上げると、ちゃんと察してくれたようでお姫様は続きを口にした。
「――――わたくしを、好きにして頂いて構いません」
覚悟を決めていても恥ずかしいのか、僅かに頬を赤らめながら言う。
しかしこちらとしては、やはりか、という思いだ。
……そんな扇情的なドレスは普通は着ないだろう。明らかに男を誘うような恰好だ。
太腿が見えるようにスリットを入れたり、胸元を大きく見せたりするドレスは、とても第一王女という身分高い女性の着るものではない。
お姫様は腕を胸の下組み、その大きな胸を腕で軽く持ち上げるように動かすと、
「レオンハルト様は大の女好きと聞きます。特に、わたくしのような女性が好みだとか……」
「……それで？」
今更だが世界規模で巨乳好きであることが知れ渡ってることにげ

んなりするというか、恥ずかしくて頭が痛くなる。こうなったらペールに頼んで巨乳好きだったのは過去の話で、今はどちらでもない、みたいな話を広めさせてみるか。などとそんな馬鹿だが大真面目にその評判を払拭する方法を考えていると、巨乳のお姫様はこちらを見詰めながらも条件を口にした。
「わたくしはレオンハルト様のものになります。ですから……民の命に配慮して頂けないでしょうか……？」
「……お前は第一王女だろう？　居なくなってもいいのか？」
王族を根絶やしにすることは基本的にしない。魔軍が立ち去った後にその土地を求めて要らぬ争いが起こるからだ。王族は争いの火種にもなり得るが、一人でも残っていれば正統後継者がいることもあって争いにはなり辛い。しかし、
「……はい。兄や妹がいますので。どこにいるかは教えることは出来ませんが」
その言葉に謁見の間がざわつく。魔物将軍達のものだ。
だがこちらとしてはさほど驚きはない。わざと捕まった辺り、全て計算してのことだろう。兄は第一王子であることから捕まるのは論外。妹は感情が許さない。
……もしくは貧乳だったとかか。……これが真面目な理由として通じる辺りどうしようもないな……。
しかしそういった趣味趣向が知られる魔人との交渉に挑もうとするなら、客観的には大正解であるといえるだろう。私的にも大正解だ。口実が作れる。仕事のことを考えるなら、王様か第一王子辺りを捕まえてしまったほうがよかったが……今更言っても詮無き話だ。
今は答えを出すしか無い。レオンハルトは言葉を作った。
「……いいだろう。6割を生かし、4割は殺す」
「……レオンハルト様。わたくし、必ず貴方様を満足させてみせます……」
少し距離を詰め跪いてみせるお姫様。その際に腕を締めており、玉座に座るこちらからは胸の谷間がよく見える。
……いつも思うが……ここで譲歩するとまんまと釣られてるみた

いで嫌なんだよな……。
この方法を使うと巨乳好きだとか女好きという評判が高まる。しかし今更だ。そのくらいの不名誉なら甘んじて受けてやろうと、ぐっとそれを飲み込み、
「……6．5割。残りは殺す」
「レオンハルト様に忠誠を誓います。……お望みとあらば、今ここで……」
と、お姫様はドレスの肩紐をしゅるりとずらしながらこちらに近寄ってくる。
距離を詰め、やがてこちらの足元まで這い寄ると、そのまま足に手を這わせてくる。レオンハルトは片目を瞑り、
「……7割を生かしてやる。3割は諦めろ」
これでかなり譲歩した。調べさせたところ、首都の人口は約３００万。
２１０万を生かすなら、残りは９０万。単純計算で１００万の魔物兵が好きにしていいとしても一体につき一人に足りない。男は殺すだけなのでさほど重要ではないが、半数の女に慰安婦をさせるなり、褒美として与えるとしてもギリギリに近い。
そして何より、２１０万の人間を生かすのは単純に手間だ。生活の手は自分達でやらせるとしても管理に兵を割く必要がある。もっとも非戦闘員の民間人であれば一個軍でも街を管理するには充分だが、逃げる者も出てくるだろう。それを止めることは難しい。
魔軍の為になり、それでいて人間にも配慮するのはこの数が適当であるだろう。
……これで満足するんだな。
これでもこのお姫様の意気に免じてかなり譲歩したのだ。色仕掛け、というだけならさほどでもないが、魔人の圧力を感じながらここまで距離を詰めるのは言うほど簡単なことではない。
今彼女は、次の瞬間に殺されるやもしれないという空間で必死にそれを行っているのだ。普通の精神力では難しいだろう。
だがこれ以上は駄目だ、とレオンハルトは抑えていた圧力を少し解

放する。話しやすいように抑えていたがこれ以上は必要ないことだ。
しかし、
「っ……何でも、いたしますわ……」
「……」
お姫様が更に詰めてきたことで表には出さないが驚愕する。
……これに耐えるのか……。
玉座に座るこちらに侍るように身体を押し付けてくる。当然、その豊かに実った胸が押し付けられ、柔らかく心地良い感触を伝えてくる。かなり大きく、三桁はあるか、などと冷静に判断してみたが、レオンハルトの頭は今別の事柄でいっぱいだった。
……震えながら、よくやるものだな。
この手の色仕掛けであったり、女を差し出すものは今までに大勢いたが、初対面でこれだけ圧力を掛けているというのに自らここまでやって来たものは皆無だ。
お姫様は胸を擦りつけながらもゆっくりとこちらの太腿を撫でて官能を呻ってくる。玉座に我が物顔で座るこちらに思うこともあるだろうに。
親衛隊や警備の魔物兵ら、使徒達も何も言わない。慣れている、というのもあるがこちらが何も言わないからだ。
レオンハルトはやがて大きく溜息を吐くと、姫の手がこちらの股座に触れる前に、
「――7．5割だ。お前が俺の物になるというならこの街の人間の7．5割を生かす。その条件で手を打ってやろう」
姫の手が止まった。こちらを見上げ、
「7．5割……ですか……」
「ああ。それ以上は、お前の働き次第だ。――分かったなら下がれ」
「……はい。このエクレア。必ずやレオンハルト様のお役に立ってみせます」
こちらが下がるよう指示を出し、後宮につれていくように魔物兵にも指示を出すと、お姫様はゆっくりと後ろに下り、失礼します、と一声掛けてから再び魔物兵に連れられていった。

完全に居なくなったのを確認するとレオンハルトは圧力を弱めて、息一つで気持ちを切り替える。
……人間というのは、たまにああいうのが出てくるから面白い。
僅かに愉しさを感じる。魔人として長年人間を見ていると人間の弱さ、脆さが目に入り、どこか達観したものを自覚するが、数十年や数百年に何人か見所のある人間も現れる。
そういった意気の強さを見せたのが城にいるメイドの多くであり、誰もが何か光るところを見せているが、今の女も中々に良い女だった。文字通り、国の為に身命を捧げる。言うは易しだが、行うは難しい。それが出来る権力者など1割もいないことは経験上分かっている。
そう思っていると、横からペールが話しかけてくる。
「……良かったんですか？　あそこまで譲歩してしまって」
「構わん。この街での犠牲を減らすなら、他の場所を襲うなりしてしまえばいい」
「あぁー……なるほど、納得しました」
そう。別にこの街にいる国の人間を襲わないなら、また別の国の人間を襲えばいい。
しかも今回は魔軍としても過去に例を見ない大戦争であり、掠奪には事欠かないのだ。
それに、とレオンハルトは口端を歪めて笑みを見せる。
「今の女は――エクレアだったか。あいつも面白い女ではあるが……今回は、もっと大きな獲物がいるからな」
先程の女、メイド候補のエクレアは確かに見所があったが、今回は千年に一度の逸材や、それに届かないまでも何人もの英傑が集まっている。
やはり時代なのだろう。たまに大勢の英傑が集まるのは、何か大きな事が起こる前触れか、戦乱の世ならではのことだ。
人類が統一され、魔軍との全面戦争となるのは必然であったのだ、と確信する。
「……しかし、レオンハルト様。西に布陣するザビエル様の軍勢の動

きもあります。今後の活動を考えると、慎重に動いたほうが良いのではないでしょうか？」
　そう言ったのは、先程から黙って控えていた魔物大将軍リー。彼はザビエル軍の動きを警戒しているのだろうが、それも仕方のないことだ。
「確かに功を焦っているのか、突出した行動が目立つな……キャロル。相手は何か言っていたか？」
　と、聞いたのはキャロルが向こうとの連絡や相談役を、リーとともに請け負っているからだ。先んじて、おそらくザビエルの使徒と、大将軍のコウウと軍議を行っているはずで、
「煉獄さんやコウウさんとお話しましたが、我々は勝手にやらせてもらう――みたいなことしか言ってませんでしたわ」
「そうか。……ザビエルめ、よっぽど俺のことが嫌いらしいな。あれだけやったのにまだ懲りていないらしい」
「ですねぇ。身の程知らずってなもんですよう」
　そう言って笑えたのはペールのみで、魔物将軍達は曖昧に苦笑するだけだ。この反応が、ザビエルの嫌われっぷりと、如何に恐れられていることが分かる好例だろう。
　だが内心では明確に苛立っているのか、その後に出てくる案はザビエルを蔑ろにしたもので、
「向こうが勝手に動くというなら、こちらも無視しては？」
「ですな。向こうは数こそこちらよりかき集めてきたようですが、練度を考えるとお話にならないレベルですし」
「いっそ向こうを矢面に立たせて漁夫の利でも掻っ攫いますか。犠牲は少ないことに越したことはありません」
「文句を言われても怖くはありませんしな。仮に戦っても負けるはずもありません」
「こら、滅多なことを言うものではないぞ！」
　戦っても、という言葉にリーが注意を挟む。すみません、と謝る魔物将軍に、レオンハルトはしかし笑みを見せ、
「まあ実際、奴らなどどうとでもなるが……少なくとも最初は奴らと

轡を並べることになるだろうな」
「と言うと、まさか……」
リーの言葉に、ああ、と頷く。
「朝方に届いたばかりの情報だ。――藤原家とその傘下にある大陸の諸侯が続々と南に兵を集めている」
謁見の間に緊張が走る。しかし同時に期待するような戦意にも満ち、
「大方、全力で戦える内に一当てどころか、戦力を削るつもりだろう。長く戦えば不利なのは向こうだからな」
それに交通の要衝を完全に押さえているのもある。各個撃破されれば向こうは手立てがなくなるのだ。大陸南部と東側が分断されては向こうの不利であり、シナ海を船で渡ることも出来るが、急にこちらから開戦したのもあって大軍を運ぶための船の建造はまだ完全ではないだろう。
逆に向こうは、軍が別れているなら各個撃破や挟み撃ちを狙いたいだろうが――そんなに甘くないことも分かっているはず。
「……何にせよ、キナニ平野で一戦だな。それも両軍全力のぶつかり合いだ」
その言葉に幾人かの魔物将軍らが唾を飲み込む仕草を見せる。戦いに生きる魔物、魔物将軍らとはいえ、ここまで大規模な戦争は経験がない。多少の余力は残すだろうし、敗戦となった時のために逃げることも視野に入れるため、ここで殲滅とはいかないだろうが、それでも大きな戦いであることに間違いはない。相手が人間とはいえ緊張するのは無理からぬことだろう。いざ始まれば緊張も消えてくるだろうが、今は仕方ない。
それに先程の取引のおかげでかなりの数の人間を働かせることが見込める。輸送が必要な補給以外の後方支援をある程度減らせ、前線に出せる兵も増えるだろう。準備は今の所、順調だ。
レオンハルトは居並ぶ配下。使徒、大将軍、将軍、隊長らに通る声で告げる。
「初戦にして決戦の地はキナニ平野だ。――焦ることはない。ゆっく

りと準備を進めろ」
配下達の一糸乱れぬ応答の言葉にレオンハルトは満足すると、これから始まる戦いとその結果に思いを馳せ、笑みを深めた。

ザビエル軍

大陸中央部、キナニ平野。

その西側では東側のレオンハルト軍と同じく、魔軍の警戒線であった街を幾つも落としたザビエル軍がとある国の首都を占拠する形で布陣していた。

ザビエル軍としてはレオンハルト軍よりも手柄を立てることを優先しているため、軍の先鋒はやや突出していたが、軍勢をある程度纏めていた藤原家に迎撃され、侵攻を一時止めることとなった。

国の首都。その中心にある王城を魔軍の司令部に使い、街中に魔物兵を駐留させているザビエル軍。そこに住む国の民達は、この世の地獄を体験していた。

多くの建物が魔物兵によって破壊され、焼き払われ、そこにある金品や物資は根こそぎ掠奪される。人間相手にも容赦をしない魔軍は、街を包囲してしまうと中にいる人間達を片っ端からその暴力の餌食にしていた。

「ははははは！　おらおら！　もっと愉しませろよ！」

「ヒャッハー！　生意気な人間が大量だぜ！　さっさと死にやがれ！」

ザビエル軍に人間達の扱いに関する決まりや命令は特にはない。一つだけあるのは――人間には何をしてもいい、という決まりであって決まりではない自由な命令のみ。

その言葉に従い、魔物兵達は街を自由に闊歩し、好き放題に行動しはじめる。

女は片っ端から捕まえ、その場で複数の魔物兵による陵辱が行われる。昼夜問わず１３０万の魔物兵達が交代で女達を休むこと無く犯すため、眠ることすら許されない。下腹や胃の中が魔物達の精液で膨らみ、嗚咽を漏らしながら呼吸が出来なくなるなど、肉体に与えられる絶え間ない苦痛と精神的ショックで気絶するように眠るも、女の悲鳴が聞こえなくなったことに気づいた魔物兵が腹を殴りつけた痛みで無理矢理意識を覚醒させられる。全てを諦め、絶望した女達はその

うち、壊れた人形のように肉体に与えられる生理的な痛みを感じて時たま身体を震わせたり、うめき声を上げるのみで、皆一様に虚ろな目を浮かべる。
大体そうなれば殆どの女は数日中から一週間程度、早ければ翌日には死んでしまうため、魔物兵達はまた別の女を犯し、また遠くないうちに壊してしまうのだが、本能に忠実な魔物達は我慢が利くことなく、魔物隊長の言葉や、ある程度数が減ったところでようやく手加減を憶え始めるのだ。
一方で男や老人、子供などは魔物兵の遊び道具であり、娯楽のように殺される。
殺してしまった方が負けという暴力を振るう遊びや、人間同士で殺し合わせ、それを見物するような遊びも行われ、特に子供は様々な工夫が出来るため、より苦しめられた。親に子供を殺させる。親の前で子供を拷問し、止めたければ性奉仕を行うよう強要させたり、逆に親を殺させる。幼女であれば逆に子供を親の前で犯したり、一緒くたに犯してしまったりなど、凄惨かつ残虐な行いが街の各所で行われたが、それでも人間の数が多いため、三分の一程度は生きたまま焼かれるなどしてあっさりと殺された。
これらの占領地の掠奪、暴行は人間同士の戦争と比べても惨いもので、魔軍としてはさほど珍しくもないことであったが、ザビエル軍のそれは魔軍の中でも最も苛烈なものとして知られていた。
各軍には、率いる魔人か魔物大将軍、将軍らによって定められたルールがあり、魔物兵達はそれに従い、また軍の特色に適合するものである。
例えばガルティア軍であれば魔人ガルティアの趣向から食料を徴収することを優先する。配下の魔物兵もそんなガルティアに釣られてか、美味い食事に興味を示すものが多く、虐殺はあまり行われない。
魔物の生物的な本能として、人間を苦しめることを好みやすい性質こそあるものの、基本的に魔物は上位に逆らうことを考えないため上からの命令には従順であり、そうあろうと努めて適合していくのだ。
そのため魔人ザビエルと大将軍コウウに率いられたザビエル軍は、

魔軍でも屈指の凶悪さで知られていた。
　そんな中で、ザビエル軍に所属する二体の魔物隊長は街で暴れる魔物兵を眺めながら世間話を行っている。
「へへ、久々の戦争なだけあって解放感がやっぱすごいな。兵も相当暴れてる」
「まあこれだけ大規模な戦争で、大きな都市を占領するのは初めてだからな……」
　街の中に設けられた公衆便所。そこから出てきた二体の隊長は染み染みとそんな事を言う。未だに長蛇の列を作り、中からは女の悲鳴と、魔物兵の楽しむ声を耳にしながら、
「どれだけ暴れても構わないんだから最高だろ。女も犯し放題だしな」
「他の軍と比べてもこれだけ自由な軍は無いらしいからな。レオンハルト様の軍とか決まり事が大量にあるらしいし」
　二体揃って今の感想を言い合う。その表情は、ある程度は満足そうである。
　だがやがて、ただなぁ……、と二人揃って声を上げると、何か思う所があるのか示し合わせたように今度は小声で愚痴を吐き始めた。
「これで待遇とか扱いが悪くなければ最高なんだが……」
「それだよな……ザビエル様はお強いが、嫌われ者だし、兵の扱いも厳しいし……」
　この軍の頂点に立つ魔人ザビエルは、魔軍では有名な嫌われ者である。多くの魔人に嫌われ、兵には恐れられているだけでは飽き足らず、あのザビエルの下、というだけで他の魔物から蔑視されがちなのである。
　というのも、
「なんでザビエル様はレオンハルト様を怒らせるような真似を……おかげで俺らの立場まで悪くなっちまった」
　魔物隊長が言うように、レオンハルトを怒らせたことにより、ザビエルの下に付きたがる魔物兵が激減するだけではなく、魔物隊長や魔物将軍にすら関わりを避けるようになってしまったのである。

ザビエルに従ったり、関わったりすれば自分もその争いに巻き込まれるのでは、と頭の回る魔物隊長や魔物将軍が考えた結果だ。
それを思うと憂鬱になるが、魔物隊長にとってはそれに加えて更に頭を悩ませることもある。それは、
「それだけならまだしも……コウウ様は褒賞も中々くれないしなぁ……」
「お、おい……！　滅多な事を言うなよ、聞かれたら殺されちまうぞ……」
魔物隊長がその発言にぎょっと驚くと、周囲を見渡して聞かれてないことを確認して息をつく。だが相手の魔物隊長は、悪い、とは言いつつも不満は燻っているようで、
「……でも、お前もそう思うだろ？　コウウ様、戦の時は頼りになるけどケチで褒美は独り占めにしようとするし、昇進も滅多にないし……」
「……まあ、な。そのくせ面倒くさいんだよな、あの方……プライド高いし、気まぐれだし……しかも怒ると当たり散らしたり殺したり……そのくせ気まぐれだし……」
「ああ、それな。妙に優しい時もあるんだが、褒美はくれないんだもんなぁ……あ、そういえば知ってるか？　コウウ様の夢というか目的」
「？　知らないな。ひょっとして何か崇高な目的でもあるのか？」
いや、と魔物隊長は首を振った。先程よりもかなり小さな声で耳打ちするように、
「うちの魔物将軍が、コウウ様と特に親しい側近の魔物将軍から聞いた話らしいんだが……ここだけの話、コウウ様は最終的に魔人になるのが目的らしい」
「……は!?　いや、それは――」
「馬鹿……!?　声が大きい……！」
声を上げかけた魔物隊長をもう一方の魔物隊長が口を押さえるようにして止めて注意する。
「……わ、悪い……だが、それを思うのはまぁ……俺達でも願わないわけでもないからいいとしても、本当に可能なのか？」

魔人や使徒になりたい――と、魔軍に所属する魔物が酔ってる時や冗談半分で言うことはあるし、それを全く空想したことが無いと言えば嘘になる。

だが魔物兵とてある程度考える頭を持ち、実力を測る目を持つ。魔物兵は多かれ少なかれ野望を胸に秘め、魔軍の門を叩いた者達だ。食うに困らないだろう、とか、人を襲える、など生活や欲の為であっても、魔軍での立身出世はやはり誰もが願うもの。ましてや魔物に生まれたのだ。ある程度力を持っており、魔軍に入ろうと思うなら己の力に自信を持つ者も多い。自らの力、能力のみで出世を果たすことを夢見るのはおかしなことではない。

――しかしそれは、直ぐに打ち砕かれる。

周囲には同じ魔物兵スーツを着用した魔物達。実力にそれほど差はないが、それだけに功を積もうと思えばそれなりの努力や頭を使う必要がある。上には何百万といる魔物兵から勝ち上がった魔物隊長。その上には種としての進化を行い、昇進した魔軍のエリートである魔物将軍達。そこまで上り詰めたとしても、上には魔物大将軍という真のエリート。魔物としての最高階級であり、殆どの魔物は将軍を目標にするか、大きく見て大将軍にするかの二択だ。

それはひとえに、実力の違いや格の差を理解させられるからである。

周りや上の立場の者達を見て思い知らされるのだ――自分は、井の中の蛙であったと。

魔物大将軍の上に立つ使徒や魔人達の実力は想像を絶する。彼らの機嫌一つで自分達は塵のように殺されてしまうのだ。魔物界で上位者との実力差を見極める目がない蒙昧な輩は長くは生きられない。強者の機嫌を損ねて殺されてしまうのみだ。使徒や魔人を夢見る――それは正しく魔物にとっての夢ではあるが、叶うものではない。身の程を弁え、目標を将軍に定めるので精一杯か、諦めて今を謳歌するかの二択である。

ゆえに魔人を目指すなど身の程知らずと馬鹿にされてもおかしくはない。正気ではない、といった表情で自分達の上司を思う。

「出来るかどうかは知らないが、コウウ様はマジで目指してるらしい。自ら戦場に出て戦功を積み上げそれを独占するのも、魔王様の目に止まるのを期待してか、いずれザビエル様にお願いして口利きしてもらうためらしいぜ……」
「い、いや、それでも……うーむ……確かにコウウ様は大将軍の中では頭一つ抜けた強さを持ってるとは聞くがな……」
「正直無理そうだよな……噂だが、ザビエル様って魔王様からの評価あんまり高くないらしいし……」
「……なら仮に御眼鏡に適うとしても他の大将軍の方々の方が可能性あるんじゃないか？　バルカ様やヴラド様は優秀だと聞くし……リー様はあんまり大きな成果を上げたみたいな話聞かないから解んないけど……」
「馬鹿。あのレオンハルト様が長年重用してるお方だぞ？　確かにそういう話はあまり聞かないが、優秀ではあるんだろう。癖も無い人格者とも聞くしな」
「……コウウ様は癖だらけだからな……槍働きだけしてれば誰よりも頼りになるんだが……はぁ、やっぱ他の軍の方が良いのかね……？」
「魔物兵の身ならうちが一番何も考えなくていいし楽しいだろうけどな。如何せん俺達は魔物隊長だし、暴れることだけ考えてられる身分じゃないからな……はぁ、俺も女の子モンスターの嫁欲しい……」
二人して大きく溜息を吐く。そこかしこで暴れる魔物兵達の賑わい、楽しそうな様子を見てると何とも羨ましい。これからの展望や上司、身の振り方を考えると頭が痛く、鬱憤が溜まるのだ。
そんな中、目の前の長蛇の列を眺め、
「……もう一回行くか？」
「……そうするか」
魔物隊長としての身分があるので、優先的にそういったことを行うことは出来る。魔物隊長達は数少ない特権を使ってストレスを発散しようと再び列に混じっていったのであった。

ザビエル軍が司令部として使っている国の首都。その中心にある立派な石造りの王城。
その玉座の間では、街中に負けず劣らず凄惨な光景が広がっていた。
「――ふふふ……どうだ？　自分の国が、魔物に汚される気分は……？」
玉座に座するのは、赤い外套に黒の鎧。燃え盛る炎の髪を持つ男――魔人ザビエル。
彼は相変わらず肩に使徒の藤吉郎。傍らに他の使徒達や魔物将軍らを控えさせながら、玉座の間に磔にした人間達を眺めて笑みを浮かべていた。
「も、も……う、やめて、く……れ……ッ！」
「……」
掠れた声で制止し助けを乞うのはこの国の王であった男だ。彼と同じようにどこからか持ってきた木の板に磔にされているのが全部で6人。
その全てが、王族の者達。国王の家族であった。
魔人ザビエル率いる魔軍に強襲され、軍は激しく抵抗したものの個々の力だけでなく数でも上回る魔軍に敢えなく惨敗。首都を包囲され、多くの民がザビエルが放つ黒い炎に苦しめられる中、王城に立て籠もるしかなかった王族もやがて捕まってしまった。
国王の隣に磔にされた王妃は声を発することはない――既に屍になっていた。
魔人ザビエルに玉座の上で陵辱され、抵抗したがために足を切り落とされ、その上で磔にされて生きたまま焼かれてしまった。
しかし早めに死ねたのは寧ろ幸運であったのかもしれない。
何しろ、それ以上の拷問を受けずに済むばかりか、その後の悲惨な光景を見ずに済むからだ。
「さて、では次だ。連れて来い、魔導……」
「かかかか畏まりましただす、ザビエル様」
「あっ……あぁ……っ！」

ザビエルの視線の先、使徒である大顔の不細工男――使徒魔導が近づく相手は、この国の第三王女である幼い少女だ。
彼女は順番待ちをしていたのである。
「や、めてくれ……その子は……！」
何度目、何十回目かの懇願を行う国王。
国王と第三王女である彼女は、ここまで家族が苦しめられる様をまじまじと見せつけられたのだ。
まずは王妃が真っ先に犯され焼き殺され、次に第一王女が同じ様に犯され、控えていた使徒の式部に身体を切り刻まれて殺された。第二王子が第一王女の死肉を無理矢理食べさせられ、その後に串刺しにされて殺された。第二王女はその様を見て、それを見ていた魔物将軍らが哀れに思うほど必死に媚び諂い、苦痛に耐えながらザビエルに奉仕したが、その甲斐あって魔導の物となることが決まり、裸のまま首輪を付けられて飼われている。その顔の醜さに嫌悪を憶えた結果、魔導の怒りに触れて何度も殴られて、足や身体を悪くした。今も魔導の横でリードを付けられ、四つん這いになって笑みのまま身体を震わせている。嫌悪を憶えたら痛めつけられることを憶えたのだ。第一王子は国王同様、家族が苦しむ様を見て藻掻くところをザビエルが見て楽しむために生かされていたが、隙を見て縛めから脱し家族を救うためにザビエルに挑んだが、魔人四天王最強とも称されるザビエルに敵うはずもなく、一太刀で足を斬り飛ばされると、そのまま拷問を受けて殺されてしまった。
そして残ったのが国王と第三王女。国王もそうだが、既に数日掛けて家族が苦しむ様を見せつけられて心は折れている。まだ幼い少女である第三王女は何度も泣き叫び、股間に染みを作りながらも抵抗したが、初日で声を上げることは無くなった。
しかし今、魔導によって第三王女がザビエルに献上されると、うわ言のように、嫌、嫌、と呟き始める。国王が止めるのを無視し、ザビエルはその少女に股座を己の物で引き裂くようにして挿入すると、大きな悲鳴が玉座の間に響き渡った。そのままザビエルは腰を動かす。
「やめろ……！　やめて、くれ……っ！」

見ていられず国王がもう枯れたはずの涙を再び流しながら懇願するもそれは聞き届けられない。それを聞いてより一層笑みを深めたザビエルは国王に向かって言う。
「ふふ……確かに名残惜しいな……この幼子を殺したら最後、お前達の嘆きや苦しみが見られなくなる……」
そこでザビエルは妙案を思いついた、と言わんばかりに笑ってみせる。それは、
「ふはははは！　ならこれが終われば、この少女は魔物兵の慰み者としてやろう……！」
「なっ、ふざけるな……それだけ、は……!?」
「貴様の言う通り、止めてやろうというのだ……なに、命が延びるのだから僥倖だろう？　我の優しさに感謝するのだな……！」
そう言ってザビエルは少女の中に精を吐き出すと、そのまま床に向かって無造作に投げ捨てる。そして配下に向かって、
「その少女を連れて行け……民に見せつけるように大きな広場で行うようにしてやるのだ」
「……は、はっ、畏まりました」
魔物という立場として惨いとはまでは思わずとも、ザビエルのその凄惨なやり方に恐れを抱いた魔物将軍が、即座にそれを行うべく魔物兵に命令して連れて行かせる。
これで残ったのは国王一人。最早用はない、とザビエルは掌から炎を発生させてみせると、
「楽しかっただろう？　――では、死ぬがよい」
「っ、アァ、ああっ、あアアあああああ――ッ!!」
黒の炎を放たれ、生きたまま燃やされる。国王はしばらく悲鳴を上げて苦しんでいたが、やがて声も止むと、後には黒焦げとなった死体が残るのみであった。
それを終えると、ザビエルは傍らの使徒に独り言のような声を掛ける。
「ふふ、終わってしまったな」
「……お疲れ様です」

そう返事をしたのは白い肌をした福耳の大男――煉獄。
ザビエルの使徒の中で特に様々な仕事に携わる男である。
その次に声を掛けたのは、使徒ではなく大柄の魔物であった。
「ザビエル様、お疲れ様です。……早速で悪いんですが、この後の動きについてご相談しても……？」
「……いいだろう、コウウ。報告と合わせて聞かせるがよい」
ありがとうございます、と礼をしたのは魔物大将軍であるコウウだ。
ザビエル軍を統括し、個人の武勇であれば他の魔物大将軍の誰にも負けない、と誇るコウウは他の能力についても自分が一番であると信じて疑わず、好んで他者に従うような男ではないのだが、ザビエルとは相性が良いのか、彼が魔人四天王になって直ぐに彼の下に就くことになった魔物大将軍であった。
コウウはザビエルに向かって普段の荒々しい口調を封印しつつ告げる。
「現在、我が軍はキナニ平野北西部にある首都を占拠中。進軍を一時、止めている状態であります。その原因は南側に集まりつつある藤原家と大陸諸侯の軍勢。彼奴らに足止めされている形となっています」
「ふむ、その数は？」
「詳しい数はまだ不明ですが……おそらくは、２００万に届くかと」
「……多いな」
ザビエルは暫し思考を巡らせる。
こちらの軍は１３０万。本来はこれほど大きな軍勢を持たないのだが、レオンハルト軍１００万に対抗するためかき集めてきたものだ。
１３０万の数でも戦えなくもない。自らとその使徒の力があれば容易に勝てるだろう。
しかし、数で負けていることもあり、単独で戦えば損害が大きくなって後にそのことを責められかねない。それに不安要素として、敵の参謀のこともある。
人間界に攻め入る前に、魔王ナイチサの命令、及び詳細を伝えられ

たのだ。それは、
……悪魔の宗教を広めようとしているのだったな……。
それこそが藤原家を滅ぼす大きな要因であるという。
悪魔の宗教云々はともかく、それを広めようとしているのが悪魔で、悪魔はそれなりに強力な力を持つというのが、ザビエルがほんの少し気になる部分である。
だが、もっとも警戒しているのは藤原家でも悪魔でもない。
ザビエルはそのことを思うと、頭が沸騰しそうになるのを抑えながら眼下のコウウに問う。
「……レオンハルトの軍はなんと言っていた？」
「……それは――」
言うべきかどうか迷っているのか、コウウが言葉を止める。だが代わりに横から声が飛んだ。
「我々は好きにさせてもらう、と言ったら――ならこちらも好きに動きますので、と……」
そう告げたのはレオンハルト軍との連絡、相談役としてコウウとともに赴いていた煉獄。その答えに頷きながらもザビエルは続きを促す。
「……それだけか？」
「……いえ……好きに動くが、泣きついてくるなら助けてやらなくもない、と、使徒のキャロルが――」
「っ……あの喧しい女か……！」
苛立ちが募る。レオンハルトだけでなくその使徒にすら舐められていると思うと、我慢ならない。今直ぐにでも出向き、苦しめた末に殺してしまいたい。それこそ、さっきの王族達のように。
しかしそれは難しいことは、理性では解っている。解っているが、激情がこの身を支配しそうになる。
「忌々しい……！　レオンハルトめ……!!」
「……」
怒りで手に持っていた殺した人間の頭蓋骨を握り潰すも、怒りは晴れない。今のがレオンハルトであったのならどれだけ気が晴れるこ

とか。
　無言のまま佇む煉獄に怒りを抑えて問う。頭に手を当てつつ、
「……奴らの今後の動きはどうなっている？」
「……それは、藤原家のではなく――」
　ザビエルは怒りのままに肯定した。
「当然だ……レオンハルト軍の動きを教えろ……！」
「……畏まりました」
　煉獄が恭しく頷く。煉獄には藤原家だけでなく、レオンハルト軍の動きも調べるように命じていた。奴を貶めるためには、奴の動きを読んで謀略を使わねばならない。
　……人質などを使って脅迫か……人間の軍や我の軍を使って奴の力を削ぐのもいい……！
　言い訳の余地さえ残していれば、レオンハルトは罰してこない。明確な違反行為でないのなら軍勢に損害を出したり、奴の使徒達を傷つけることも可能だろうと、ザビエルは見ていた。
　特にレオンハルトは、身内に甘い。使徒や奴が大切にしているものを人質に取ってしまえば、やつは身動きが取れなくなるだろう。そうなれば一方的に奴を痛めつけて殺すことも出来る。
「……レオンハルト軍は、南の藤原家をキナニ平野で迎え撃つようです。後、あちこちに工作員と思わしき者を放つ動きがあります」
「……なるほど。では、どうするのがいいか」
「……一先ずは同じ様に藤原家を迎え撃つのが得策かと。そのために軍も動いていると聞いていますが……」
　煉獄がコウウ、そして魔導に視線を向ける。同じ様にザビエルも視線を向けると、二体はそれぞれ順番に話し始めた。
「はっ、数日中に集まるかと思われますので、魔導様や煉獄様と相談して南に布陣するよう準備を進めております」
「まままずは藤原家を弱らせるだす。魔王様のめ、命令もあるだすから……そそそのために斥候を出して、ぶぶ物資も集めてるだすよ……！」
「……そうか」

ザビエルは考える。
確かに魔王様の命令は確実に遂行しなければならないし、そのためにも首級はこちらで挙げてしまいたい。
レオンハルトに手柄を持って行かれるのは論外ではあるが、ある程度向こうの軍勢に戦ってもらった方が楽にもなる。となると、
……邪魔をしてやるか……。
使徒を使って奴の主力を邪魔し、可能であれば捕まえてしまうのはどうだろう。上手くいけば、使徒を人質にレオンハルトを言いなりに出来るかもしれない。
奴の使徒は三体ともそれなりに強いと聞くが、自分の使徒には敵わないと見ている。
「……戯骸よ、仕事を頼みたい」
「……ん、何だ、仕事って？」
自らの使徒の中でも最強の使徒である褐色肌に煙管を加えた男――戯骸に声を掛ける。
考え事をしていたのか、少し反応が遅れたが、最近はよくあることだ。
……戯骸はレオンハルトと交戦して生き残ったほどの強者だ。問題はないだろう……。
それはあの忌々しい事件の時のことだ。
他の魔人や使徒が来ないよう、そしてレオンハルトの使徒が現れたら妨害し、可能であれば捕らえるように命令し、その通りに行動していた戯骸は、運悪くレオンハルトに出くわしたらしい。
しかしレオンハルトの攻撃を受けても何とか生き残ったのか、死んだと思っていた戯骸はしばらくして無傷で戻ってきた。理由はザビエル本人にも解らない。だが生き残ったことは僥倖であった。自分の使徒の中だけでなく、使徒全体を見ても最強と名高い自慢の使徒である戯骸を失わずに済んだのだ。その時は柄にもなくほっとしてしまった。
無論、レオンハルトが本気であれば間違いなく死に絶えていただろうが、レオンハルトも流石に使徒相手に本気ではなかっただろう。し

かしそれでも逃げ切り、生き延びている、というだけでも評価を更に上げるには充分だ。その圧倒的戦闘力を持つ戯骸に加えて、それぞれ多彩な能力、長所がある使徒達。煉獄や式部、魔導の手もあれば確実だろう。真の姿という奥の手もある。誰か一人でも成功すればよいのだ。

藤原家などは片手間でも充分に制圧出来る。軍を纏める魔物大将軍、コウウもそれなりに使える。特に戦場では他の魔物大将軍よりも良い働きをしてくれるだろう。

そして何より、この我がいるのだ、負けるどころか苦戦するはずもない、とザビエルはほくそ笑んだ。

……ふふふ……！　レオンハルトよ……今回の戦争が、貴様の最期になりそうだぞ……？

ザビエルはそのための策謀を、使徒達に命じてみせた。

「……あー、なるほどなぁ……そういう感じか……」

「チガミレル……！　タノシミ……！」

「い、いいい言い訳が利くならなんとかなるだすよ。あとは、たたたタイミングを間違えなければ……！」

「……ご命令とあらば努力致します」

主であるザビエルの命令を受け、戯骸、式部、魔導、煉獄はそれぞれ思い思いに了承する。魔導や煉獄、戯骸による多少の変更や改善点もあったものの、主の命令を叶えてみせようと、それらは受け入れられたのだ。

ザビエルの瞳は藤原家を見ておらず、ただレオンハルトへの激情で燃えていたが、それを指摘出来た者は誰もおらず、ザビエルはレオンハルトが自身の足元で這い蹲る結果を思い、笑みを深めた。

藤原家

キナニ平野、南方。
草原が広がる大地。なだらかな丘陵の上にあるのはとある都市であり、現在は藤原家の本陣として使われている砦でもある。
その都市に向かって、大陸各所から続々と藤原家傘下の諸侯が兵を連れて参陣する。人類を統一した藤原家の軍勢は人類史上例を見ないほどに膨れ上がっていた。
――その数、実に二百万。
その中で一際多くの数を占めているのはＪＡＰＡＮ本国から呼び寄せた藤原家の軍勢であり、甲冑や具足、兜を身に着け、刀や槍を装備した武士達。異形の姿をした妖怪の軍勢の姿もある。
これほどの大軍勢を集めて戦争の準備をするには、途轍もない労力と時間が掛かる。
だがその準備は迅速かつ正確に整えられた。参謀である月餅や、菅原ミッチー。大勢の優秀で頭が回る者達のおかげである。
藤原石丸には藤原四天王も含めた五十七名の信頼のおける部下と、十三名の美しい妻。そして四十名もの優秀な子供達がいる。誰も彼もが武士の魂を持ち、石丸の薫陶を受けた益荒男、女傑であり、石丸の大陸進出にも大きく貢献した精兵達だ。
外様の諸侯達も主君である石丸のため、皆心を一つにして勝つための事を為している。
主だった者達は都市で一番大きい屋敷、都市長の館――ではなく、都市の外で布陣している兵達の近くに設けられた陣幕の中で評定を行っているところであった。
これは石丸が、いつ敵が攻めてくるか解らないし、どうせ野戦することになるのだからこの方が落ち着くだろう――という考えがあるのか気分なのかよく分からない理由で外になった。
しかしその言葉に一理があるのも事実なので外での軍議と相成ったのだ。
そんな中、参謀の月餅は内心で酷く狼狽していた。

……最悪だ……どうする、どうすればいい！　どうすればこの状況を打破出来る……!?

それは魔軍が突如として攻めてきてからずっと頭にあるものだった。

月餅の目的は順調に進んでおり、後一歩のところまで迫っていた。

藤原石丸を唆して大陸に進出し、石丸とその配下の強さ、己の献策によって連戦連勝。やがて五年という短い歳月の中で人類を統一することに成功した。

ある程度国の体裁を整えてしまえば、後は天志教を人類全てに広めてしまうのみであり、その目前まで達していたのだ。

だがそうはならず、魔軍が攻めてきたことによって藤原家は対応を迫られることになる。

藤原家参謀という立場にある自分も忙しく、またそうでなくとも今の段階で布教をしても効果は薄いというか、どこの国もそんな場合じゃないと突っ撥ねられるだろう。

そのため魔軍をさっさとどうにかしなければならないのだが――これが難問過ぎる。

魔人ザビエルに――魔人レオンハルト。

魔人四天王と、魔人筆頭という強大な魔人二体という最悪の組み合わせであり、人類には荷が重すぎる相手なのだ。そもそも無敵結界を抜けない人類ではどんな魔人が相手であったとしても勝ち目がない。

……かといって儂が戦っても……勝つのは難しい。

悪魔であれば無敵結界は抜ける。ゆえに月餅であればダメージを通すことが出来る上、並の魔人相手であれば相手が出来るという自負もある。悪魔界の君主の顔を持つ高位悪魔は伊達ではないのだ。

しかし、今回は相手が悪すぎる。

魔人四天王は強大な力を持つ魔人達の中でも指折りの強さを持つ魔人達であり、魔人筆頭に至っては最強の魔人である。さすがの月餅もその両者を相手にして勝ち切る自信はない。

ともすれば魔人四天王一体であれば仕留めることが出来るかもしれない。しかし、その後に残った魔人筆頭を相手にすれば殺されてし

まうだろう。
この際目立ちすぎてしまうのはしょうがない。悪魔としての力を使って大いに戦う覚悟はある。
だがそれを足したとしても魔軍に勝てるかといえば――勝てない。
どう足掻いても負ける。人間にしては精強でまとまった軍隊だが、魔物の軍勢には劣るのだ。
居並ぶ諸侯の中にもそれが理解っている者がいるのか、明らかに覇気がない者達がいる。よく見れば魔物界と領地を接しているか、それに近しい領地を持った諸侯であり、魔軍と戦をした経験がある者達だろう。であれば仕方ない。彼らは魔軍の恐怖を正しく経験から理解しているのだ。恐れるのも当然であり、それを責めることは出来ない。
しかし上座に唯一座る男だけはいつもと変わらず自然体で佇んでいた。藤原石丸である。
そんな石丸に、菅原ミッチーが声を掛けた。こちらもいつもどおり飄々としているが、頭を悩ませているのだろう。渋い声で言う。
「うーむ、どうやら向こうの数は２３０万ってところでありますか。西の都市に１３０万。東の都市に１００万。率いる将は西が魔人ザビエルに大将軍コウウ。東が魔人レオンハルトに大将軍リー。……どちらも有名人でありますなぁ。さて、石丸殿と他の皆々様も、何か聞きたいことはありますかな？」
「ふむ……ザビエルとはどんな奴だ？」
石丸が顎を撫でさすりながら言う。ミッチーがそれを受け、石丸を半目で見ると、
「……さすが石丸殿。ご存知ありませんでしたか。……まあ簡単に言ってしまうと炎を扱う魔人ですな。後は一応剣も使えるようでありますが――って、石丸殿？　ちゃんと聞いておりますか？」
「ふわぁー……あ、聞いておる聞いておる。続けてよいぞ」
「欠伸をしながら言われても説得力ゼロでありますなぁ……一応、魔人レオンハルトの情報もありますが……」
「ああ、そちらは言わずともよい。続けよ」

即答する石丸にミッチーや居並ぶ面々が呆れる。参陣している石丸の子供らや妻達もそれぞれ微妙な表情でそれを見ている。その空気を感じ取りながらも、ミッチーは気を取り直すように咳払いを一つ。
「よくはないのでありますがなぁ……でもまあ有名人でありますし、どちらも情報は頭に入っているでありましょう。魔人については大陸の方々の方がお詳しいのでは？」
と、大陸の諸侯達と目を合わせるように問うと、何名かが低い声で答えた。
「……魔人ザビエルは、とんでもない化け物です。極悪非道な魔人で、奴の炎によって死んだ人間は何百万と居ります……」
「……魔人レオンハルトは古くから知られる決闘魔人ですな。剣術の達人で……ご存知ないかもしれませんが、剣王伝のモデルとなった人物とも噂されています」
「あ、いえ、ＪＡＰＡＮにもその書物は御座いますぞ。確か石丸様もお好きでありましたな」
「……うむ。まあな」
ＪＡＰＡＮから来た大名の一人が石丸に尋ねるように言う。しかし石丸は素っ気なく頷いただけであった。
それを知る者達が一様に微妙な表情を浮かべる中、一番事情に詳しいであろう春姫が声を上げた。
「あ、あのミッチーさん。占領された街の様子は……？」
「……っと、そうですな。確か――」
何か思案に耽っていたのだろう、ミッチーが少し遅れて春姫の問いに反応する。少し間を置いて、
「……東側、魔人レオンハルトの支配下ではかなり規律立った統治をしているようですな。人間を働かせてはいるようですが、無闇な虐殺もなく街も綺麗に保たれているようです。後、まだ真偽不明の情報ではありますが、王族を従属させて民に働くように指示を出させているらしいとも」
「……では、西側は？」

「その半面、西側は掠奪、暴行、虐殺……まあ非道な行いのオンパレードですな。聞きしに勝る暴虐振り。噂に聞く魔軍らしいといえばらしいのですがな」
「……そうなんですね……」
　王族も皆殺しにされたようですし、とミッチーが補足する。春姫が少し顔を俯かせた。魔軍に占領された都市の人間を想っているのだろう。
　しかしその空気をぶち壊すように声を上げたのは大柄で褐色肌の爺――坂上田村麻呂であった。
「それで全軍で攻め入るのだろう!!　で、いつ頃決行するのだ!?」
「……早ければ明日の明朝にでも。今日中に準備が終われば、になりますが」
「ふんっ！　であれば明日は朕が華々しく活躍する日となるな。そのザビエルとかいう阿呆を血祭りに上げるのみじゃわい！」
「坂上様……ありがとうございます」
　気を使ってくれたことを察したのか春姫がお礼を言う。続いて近くにいた大柄の妖怪。妖怪王である黒部も威勢よく口を開き、
「はっ！　魔物なんざこの俺が噛み殺してやらぁ！　妖怪が魔物より上だってとこ見せてやるよ！」
「おおっ、黒部つよそー！」
「うおっ!?　急に乗っかってくんじゃねえ!!　危ねえだろうが！」
　飛びかかってきたもも姫を捕まえて地面に下ろす黒部。ＪＡＰＡＮの侍、大名達はそれを皮切りに威勢の良い言葉を上げて、士気を高めていったが、それを見聞きしていた大陸の諸侯が立ち上がりつつ異を唱える。
「し、しかし魔軍２３０万を倒すのは難しいかと！」
「そうですな……やるなら魔物隊長や魔物将軍を狙って兵を離散させるのが良いですが……」
「だがそれは唯でさえ強力な魔物兵に囲まれている奴らだけを狙って倒さなきゃならんだろう!?　しかも魔物隊長や魔物将軍は個の強さでも我が国の精兵や将軍でも太刀打ち出来ないほどで――」

「――おう、帰ったぞ！」
と、大陸諸侯の有力者達が声が飛び交う陣内に、不意に女の声が響き渡った。
陣幕を潜って顔を見せたのは軽装の女武者――源頼光だ。
彼女は両肩に大量の何かをぶら下げた二本の槍を担いで満面の笑みで陣内に足を踏み入れるが――その姿に大陸の諸侯らがぎょっと目を見開いた後に顔を引き攣らせ、彼女をよく知るＪＡＰＡＮの武士達も苦笑いを浮かべている。
「……ん？　何じゃ貴様ら。人を化生を見るような目で見おって。ぶっ殺すぞ？」
「――っ」
その理由は――彼女の全身が血塗れであったから。
怪我でもしているのかと何人かが誤認して声を掛けようとしたが、よく見ると服に切れ込みがあるのみで見えている肩や足など、肌には傷一つ付いていない。
「……また派手にやったなぁ……」
「あ？　なんじゃ黒部。わしの恰好に何かおかしいところでもあるか？」
「いや、いつも通りだけどよぉ……」
黒部が言葉を濁らせる。同じ様にＪＡＰＡＮの武士達も何も言わない。
何故なら、頼光の白い和装が敵の返り血で真っ赤に染まるのは見慣れた光景であるからだ。束ねられた黒い髪や、肌や得物まで赤い染みが出来ているのもいつもの事。
しかしそれを見慣れていない大陸の諸侯はその姿に唖然とする。
「っ……おい貴様！　そのような恰好で会議に顔を出すとは何事だ!?」
「あっ、馬鹿……」
その中で気位の高い貴族風の男が血の匂いを漂わせて入ってきた頼光に食って掛かる。黒部が止める間もなく立ち上がり頼光に近づいた男に頼光は反応した。

「あぁん？　なんじゃ貴様。シナ海に沈めるぞ」
「沈め――くっ、今は大事な軍議中だ！　分かってるのか貴様！」
「……はぁ？　だからこうして忙しい中顔を出しとるんじゃろうが」
「っ、今は魔軍の対抗策を話し合っているところだ！　魔物将軍や魔物隊長をどう仕留めるか――」
「――隊長に将軍とは此奴等の事か？」
「……は？」
　言い争っていた男が頼光の言葉を受けて動きを止める。
　頼光が指し示す先は両肩に担いだ二本の槍。その柄にぶら下げられている物を見せつけるように、頼光は片方の槍を前に構えた。
　そこにあったのは――複数の魔物隊長の首と、魔物将軍の首であった。
「――ヒィッ!?」
「何じゃ、首如きで驚きおって。……ああ、不格好なのを驚いておるのか？　しかし魔物隊長はともかく、将軍は首が短くてどう切ればいいか迷ったぞ。大陸ではどうやって首実検するのか後で教え賜りたいところじゃな」
「あ、あ……！」
「……と思ったが単に怯えておるだけか。殺す気も失せるわ腰抜けめ」
　文字通り腰を抜かして後退る貴族の男を心底つまらなそうな表情で見下ろす。居並ぶ面々はそれを眺めていたがミッチーが横から感心したように口笛を吹くと、
「おお、頼光殿。また随分と首を取ってきましたなぁ。どれくらい刈ってきたので？」
「え？　あ～……ひのふのみの――ああ、めんどいわからん忘れた。まあ２０は越えておる。箱に詰めておいたから後で勝手に調べればよい」
「それはお手柄でありますなぁ。――して、魔軍は如何でありましたか？」
　そこまで飄々とした笑みを浮かべていたミッチーだったが、そこで

表情を真剣なものに変えると、頼光も幾分か真面目な顔で答えた。
「……まあ最初は手こずったが慣れれば何とかなったの。中々に骨のある奴らだと思ったが……彼奴ら、頭が討ち取られたと知った瞬間散り散りになって逃げていきおったわ。アレなら鬼の方が手強いわい」
「で、ありますか。戦えなくもないようですなぁ」
「あ？　当たり前じゃろうが――ってそういえば先程戯けた声が聞こえたな。勝てないだの泣き言を喚く腑抜け共が」
その言葉に何名かが目を逸らしてバツが悪そうな表情を浮かべる。頼光が睨んだためだ。
顔を俯かせる諸侯達に向かって頼光は目を向けて言った。
「いいか貴様ら！　次に泣き言を言ったらわしがぶっ殺してやる。負ける気で戦をするような玉無しは今殺そうが後で殺そうが一緒じゃからな！」
「は、はははいっ……！」
「……肝に銘じておきます」
ふん、と鼻を鳴らしその返事に不機嫌になりながらも口を閉じて、ドカッと地面に胡座をかいて座る頼光。それを見て、月餅は思う。
……頼光とその手勢は現地の軍とともに先んじて魔軍と戦わせた。奇襲から幾つもの都市を落として勢いに乗っていた魔軍をこのキナニ平野で一時止めることが出来たのも頼光のおかげである。
しかもこのタイミングで魔軍の将の首を取ってきたことで、にわかに諸侯らの目に光が宿った。
それを見て笑みを浮かべたミッチーを見て、月餅は内心思う。
……勝つつもりか。
月餅には勝つのではなく負けを遅らせるための策を考えて実行する気であったが、どうやらミッチーは勝ちに行く策を取るつもりらしい。何と無謀な。魔人の強さ、魔軍の恐ろしさを知らないのか、と思う。
だが大陸を旅していたミッチーはそのことはよく知っているはずである。ならば知った上で勝利を得ようとしているのか。ならばもっと理解不能だと月餅は訝しむ。

確かに石丸を始め、人類としては最強クラスの者達がここには集まっている。ある程度までなら戦うことも可能だろう。
しかし魔人が戦場に出てくれば長くは保たない。出てこずとも無尽蔵ともいえる魔軍の兵力に押しつぶされる。勝つためには魔人を倒さなければならないが、そのための手段は――少なくともこの場にいる人間達では皆無。
……ミッチーよ。何をする気だ？
黙って趨勢を見守っていると、ミッチーが再び上座に顔を向けた。
「……しかしまあ……頭を取らねばならないのは確かですなぁ。――というわけで石丸殿」
「――なんだ？」
問い返しながらも意味を理解しているのだろう、鬼気迫った形相で答える石丸。
当主として、帝としての貫禄、覇気を持った男の声に皆の顔も自然と引き締まる。かくいう月餅も、
……不思議だ。
自信に溢れた石丸を見ていると、負ける気がしない。
これまで何度も戦の度に感じてきた感覚だが、未だに不思議に思う。
言うならばカリスマ。生まれながらにして人を従えることを決定づけられた王の器と言うべき威容。
英傑とはかくあるべし、という見本がそこにあるようだ。
今まで何人もの人間を見てきたがこれほどまでに極まった人間は石丸が初めてであり、
「石丸殿には、魔人を討ち取ってもらいたいのでありますが……まずはどちらを狙いましょう？」
「……そうだな……」
……不思議だ。
ミッチーの策を知って、無謀だと思いながら同時にそう思う。
「どちらか一方を先んじて仕留めることに成功すれば、戦いも楽になりましょう。石丸殿を最大限助力出来るように配置も決めますので

――どうかご決断を」
「……であれば――」
石丸が魔人の名を口にする。其奴を必ず討ち取ると豪語する。
皆が一斉に臣下の礼を取るのに、自然に合わせながら月餅は自らに問い続けた。
……儂は……。
ある程度配置や動き、策も決まって軍議を終えても答えは出ない。
「――月餅」
「……は、何で御座いましょう……？」
立ち去る己に声を掛けた石丸は、
「――期待しているぞ」
「――――」
少年の様な屈託のない笑みで、こちらの肩を叩いた。
ではな、と一声掛けて踵を返した石丸に月餅は内心に不可解な想いが混じったことを自覚する。
――敵わぬ。
月餅は立ち去る石丸に対し小声で、ありがとうございます、と礼を言うと暫くの間、深々と頭を下げ続けた。

――その日、大陸中央、キナニ平野に三つの軍勢がその準備を終えた。
北側。西に布陣するのは総勢１３０万。手柄を立て、友軍の魔人を誅殺せんと企む魔人ザビエルが率いるザビエル軍。
配下には5体の使徒――藤吉郎、煉獄、魔導、式部、戯骸。それに魔物大将軍コウウと配下の魔物将軍、魔物隊長が続く。
北側。東に布陣するのは総勢１００万。友軍の魔人を陥れ、魔王の命令と己の目的を遂行せんとする魔人レオンハルト率いるレオンハルト軍。
配下には3体の使徒――キャロル、ハンティ、ペール。魔物大将軍リーに麾下の魔物将軍、魔物隊長。それと親衛隊も含めた私兵。

そして南側には魔軍の侵略に応戦し、二体の魔人を倒さんとする藤原石丸率いる藤原家と大陸諸侯――総勢２００万。
藤原四天王――坂上田村麻呂、菅原ミッチー、源頼光、妖怪王黒部に、参謀月餅を含む５７名の信頼のおける部下。石丸を支えてきた春姫を含む１３名の妻に、４０名の子供達。その大半は元服を終えて立派な武士となり、参陣している。
早ければ正午前にでも開戦となるだろうと、各軍師、将軍達は見ていた。
その目的は誰も彼もが異なるが――その根底にあるのは変わらない。
――〝勝つ〟。
勝って終わるのは己だと、それを誰もが願い信じて、あるいは信じようとする中。
修羅に生きる者達の戦いが、今ここに始まろうとしていた。

キナニ平野の戦い

曇り空の下、草むらの広がる大地の上で藤原家率いる大軍勢、鎧を着用し槍や剣などの得物を持つ兵士達は緊張感に溢れた面持ちで列を作っている。彼らの正面、北側には主に緑、青、赤の三色で構成された魔軍という名の敵集団が今か今かとその時を待っていた。

２００万と２３０万。約４３０万もの戦士が集まっているにも関わらず、その場所は妙な静けさで満ちていた。

それは正しく、嵐の前の静けさとも言うべき状況であり、両軍とも敵の姿を注視しながら開戦の号令が鳴るのを待っている。

「いやぁ、これだけの数だとやはり壮観でありますなぁ、石丸殿？」

「――ああ、そうだな」

その人類軍の大将――藤原石丸は開戦の前の精神統一を行っていた。

己の生涯において最大最高の大一番となる勝負を目の前にして、石丸の心にまず浮かんだのは――〝愉快〟であった。

人類存亡の危機かもしれないというのに何を不謹慎な、と思うかもしれない。

しかし石丸は、この戦が己の魂が最も輝く時であると確信していた。

石丸の歳は既に４４歳であり、戦に勝とうが負けようが老いという逃れられない定めによって全盛期を過ぎるであろう。既に限界まで鍛え上げたことにより、これ以上肉体的に強くならないことも理解っている。

――ならば〝今〟こそが、俺という命の見せ所よ。

今までもそのつもりで戦ってきたが、今回はそれにも増して思う。

なにせ己の夢が間近に、手を伸ばせば届く距離に見えているのだ。

ここで振るわねば男ではない。

――俺は、どこまで行ける？

子供の頃から感じていた疑問がそれだった。

幼少の頃から天禀の才を持っていた石丸は書物を読みながら何度

も己に問うていたのだ。
人という存在の儚さを幼き日より知っていた石丸は、この世の無常さを感じては庭に植えられた一本の木を見上げていた。
それは石丸が最も好きな――〝桜〟の花であった。
幼き石丸は思った――〝人の世の儚さは、この桜に似ている〟、と。
人の命など、世界から見れば桜が咲いて散るまでの一瞬に過ぎない。たかだか数十年、長くとも１００年ほどの短い命であり、天運が悪ければ鬼や妖怪、魔物に呆気なく殺されて死ぬだけのもの。この桜の花びら一つ一つがこの世の何処かで死にゆく人間。あるいは己の未来であると石丸は理解していた。
――ならば人の生に意味などない、と絶望するのか？
石丸はその問いに対して、断じて〝否〟であると答えを突き付けた。
人の一生が短く、いつ散っていくのか解らないのなら、その分今日という日を全力で生きるのみだと石丸は活力を漲らせた。
やりたいことをやって、夢を叶えてみせる。お前は四男だから当主にはなれないだの、冒険は無謀だの、世の中は魔物の天下であることなど全て知ったことではない。険しい道のりだというなら尚良し。それでこそ挑戦しがいがあるというもの。己がどこまで行けるか確かめられるというものだ。
数や質、将の強さも何もかも、人間は劣っているのかもしれない。特に相手の大将は己より遥か高みにいる怪物だ。いつもの調子では――いや、例え十二分に力を発揮しても勝てないかもしれない。本来なら恐怖して然るべき相手――であるのに、石丸はその怪物を思うと笑みが浮かんでくる。
不思議なことに、一度として面と向かって話したこともないのに、その怪物とは馬が合い、お互いを深く理解し合っているという気がした。いや、今まさに語り合っているという確信すら持てた。
この戦場のどこかにいる男の姿を思い浮かべ――しかし今一度その幻影を掻き消す。
代わりに思い浮かべたのは先に倒すべき相手だ。

……必ず勝つ。
勝って己という存在を見せつけてやる。今が一番強いのだと証明してやる。
そうして怪物を倒し、己の夢を叶えてみせる。
存分に咲き誇ってからでないと、死ぬには惜しい。
「――ミッチー、後は任せたぞ」
「……は、お任せ下さい」
己や他の者達の代わりに本陣で指揮を執るミッチーに声を掛ける。心強い言葉が返ってきた。
「――麻呂、頼光、黒部、月餅……」
多くの者達の名前を読んでいく。ここまで自分に従って付いてきてくれた者達だ。中には子供達もいるが、他ならぬ己の血が入っている。ゆえに心配はしていない。
そして最後に、
「――春よ」
「はい」
己の最も大切な人を見て言う。
「――俺の活躍を見ていろ」
「……はいっ！」
その声を聞き終えると、精神統一は終わった。
後に残るのは、全身に満ちる鬼気に神気、剣気。そして雑念無しの一念。
「――必ず、勝つぞ!!」
「――応!!!」
その一念が乗り移ったかのように兵達が声を上げる。帝の証――帝ソードを天に掲げ、全軍に響き渡るように渾身の号令を上げた。
「懸かれ――――ッ!!!!」

人類軍と魔軍の戦闘は両者、遠距離からの攻撃から始まった。
「撃てェェ!!」

「放てッ!!」
人間の将に魔物将軍らがそれぞれ配下に指示を出し、魔法や弓を一斉射撃させる。
上空で矢が行き交い、両軍が盾を上部に構えて防御する中、両軍の間では幾つもの魔法がぶつかり合い、戦場に音を響かせていた。
炎、氷、雷、光、闇。魔法光とともに様々な属性、様々な魔法が打ち消し合うように爆発し、大地が僅かに抉れて焦げつく。
数百数千の魔法の撃ち合いは両軍の前陣をそれなりに崩したが、魔法は一度放てば次に撃つまで時間が掛かる。
その間に進み出てくるのは歩兵。戦の主役たる部隊であり、
「突撃――!!」
「進め!!　人間共を殺し尽くせ!!」
「敵を迎え撃て!!」
両軍の歩兵が一斉に走り出す。敵に肉薄し、その手に持った剣、槍、斧、刀などの得物で敵を屠ろうと裂帛の気合いを持って立ち向かう。
両軍の本格的な戦闘が始まったのである。

「進め進め!!　兵をどんどん進ませろ！　魔物の恐ろしさを教えてやれよテメェらぁ!!」
「はっ！」
一番最初に突出したのは北西に布陣するザビエル軍だった。
ザビエル軍全体を指揮する魔物大将軍コウウは、比較的前線に近い場所で指揮を執ることを好む大将軍であり、時には自ら弓を持ち、槍を振り回して敵を蹴散らすこともある好戦的な男である。
今回もその例に漏れず、前線に近い場所で指揮を執っていたコウウは魔物兵達を鼓舞しながら一斉に突撃させる。
「人間如き、てめぇらなら楽勝だ!!　さっさとぶっ殺してやれ！」
コウウがそれだけ果敢に攻めさせるのは上役である魔人ザビエルの意志もそうだが、己の手柄を欲するがゆえだ。
何しろ敵は人間だけではない。東側、魔物にもいるのだ。

……リーの奴に手柄は――いや、誰にも手柄は渡さねぇ。俺だけのものだ!!

今回の大戦争。人間の首魁をぶっ殺し、多くの将兵を討ち取って手柄を上げる。そうして最終的には魔王様にお願いして魔人になるのだ。

魔人になれば他の魔人に気を使わなくてよくなるどころか、何でも好き放題に生きることが出来る。食事、女、金銀財宝、部下の命まで思いのままだ。

ムカつく他の大将軍共――ヴラドにバルカ、リーも殺せる。

今の時点でも実力は誰にも負けていない自信があるが、一人殺したことがばれれば他の奴らに敵視されて殺される可能性もある。ヘタな行動は取れない。

だが魔人となれば無敵結界があるのでどれだけ他の生物と戦ったところで負けることはあり得ない。

……魔人になるためにリーには勿論、ザビエルの野郎にも手柄は渡さねぇぞ。藤原石丸とかいう大将の首は、俺が取る……!

今回はそのために比較的前線に近い位置にいると言ってもいい。大将らしき奴を見かけたら自ら出ていって殺してやろうとコウウは企んでいた。

ザビエルは人間ではなくレオンハルトの方にご執心だし、自分の所の兵や将が討ち取る分には文句は言わないだろう。ザビエル軍の誰かが討ち取ったなら、それはザビエルの手柄になるのだ。文句の付けようもない。

しかし実際に自分が討ち取ったなら魔王様にお目通りを願うことくらいは出来るだろう。そうなったら後は適当にごまをするなり、己の優秀さを見せつけるなりして魔人にしてもらうだけだ。

そのためにも、魔物兵にはさっさと人間の兵を削って貰わねばならない。奴ら、弱い癖に数だけはかき集めてきたようであり、さすがに今自分が突撃するのは面倒だし骨が折れる。効率の良さで言うと魔物兵にしばらく戦わせて、敵が焦れて他の将や大将が出てきたところで自分も出ていくのが理想だろう。魔物に人間が勝てるはずはない。

多少強い人間が出てくれれば雑兵は殺せるが、逆に言えば偉い立場の奴が出てこなきゃ魔軍を倒す可能性すらないのだ。
ならば俺は命令を出しながらじっくりと待っていればいい。それこそ、魔人のように――とコウウがほくそ笑んでいると、
「うわあああッ!? 出たあ!?」
「や、奴らだ! 奴らが来たぞ……!!」
前線の兵が急に動揺した気配が、怯えた声とともに伝わってきた。コウウは急ぎ、副官の魔物将軍に確認を取る。
「おいっ! どうなってやがる!? ――まさか大将か!?」
「い、いえあれはおそらく――」
魔物将軍も少しだが動揺している。だが心当たりはあるのだろう、その声を放つより先に、前線から魔物兵がやって来た。
「で、伝令!」
「何があった! さっさと報告しろ!」
部下を急かすように言うと、魔物兵は、はっ、と短い声を上げて即座に説明した。
「――ぶ、武士です!!」
「っ……まさかこの前の奴らか!?」
はい! と頷いた魔物兵にコウウは苦悶の声を漏らす。得心したのだ。
人間の部隊など本来憶えるまでもないと思っているコウウだが、今回の戦で例外的に名前を憶えた連中がいた。それは、
「武士だか〝源氏〟だかいうクソ共が……!! クソが、落ち着いて囲んでやれ! 突っ込んでくるならそれで潰せる!! 魔法でも何でも使え!!」
コウウは急いで指示を出しながら、前線にいる人間共を憎々しく思った。

ザビエル軍と人類軍がぶつかり合う前線。
歩兵同士のぶつかり合いは均衡、やや魔物兵の優勢であったが、そ

の勢いは突如として沈静化した。
その理由が彼らにある。
「――やぁやぁ！　我こそはァァァァァァァ!!」
「ひぃぃ!?　がっ――」
猛然と声を上げながら振るった槍が、魔物兵の喉を突く。
「やぁやぁ、音にこそ聞けェェェ!!　近くば寄って目にも見よオオオオォォッ!!」
「き、来た――ぐ、ァ……！」
尋常ではない気迫でひた走ってきた男が、やはり凄まじい声を上げながら刀を奮って魔物兵の頭をかち割る。
「我こそはあああああァァァァ!!　源宛の長男!!　渡辺綱なりぃィィィィッッ!!!!　死ね死ね死ねェェぃ!!」
「我こそはあああああァァァァ!!　相模足柄山に生まれた男!!　坂田金時なりぃィィィィッッ!!　ブチ殺オオオオオオス!!!」
「我こそはあああああァァァァ!!　源頼光の長男!!　源頼国なりぃぃィィィィッ!!　ヒャッハー!!　首寄越セィ!!」
何故か全員が怒涛の名乗りを上げながら襲いかかってくる兵達。
その名は――武士。
藤原家の本拠地であり主力。鬼、妖怪、地震など危険で人が生きるには適していないＪＡＰＡＮで生まれ育った鬼子達であり、その形相はまさに修羅そのもの。誰も彼もがこの世に生まれ落ちた第六天魔の化身を称する日ノ本の戦士達である。
彼らはＪＡＰＡＮの風習である名乗りを上げながら一切の恐れを見せずに魔物の群れに突撃して刃を突き立てて首級を挙げてみせる。
とはいえ、ＪＡＰＡＮの武士の中でもここまで苛烈な戦い振りを見せるのは限られている。
その鎧や羽織に笹竜胆を織り込んだ者達。
そんな武士達の棟梁は――誰よりも深く進んでいた。
「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッッ!!!」
後方の味方を置き去りにする勢いで魔物兵がひしめき合う中を往くのは一人の美しい女性だ。

既に名乗りも終えて敵陣に突っ込んだ彼女は後ろに束ねた黒髪を靡かせながら戦いを為すだけの羅刹と成り果てていた。
「ひぃ!?　誰かこいつを止め――」
「ば、化け物かッ!!」
化け物、と呼ばれた彼女こそがこの集団――源氏武士団の棟梁であり藤原四天王の一人である源頼光。
〝鬼姫〟とまで呼ばれるほどの戦好き。女性では人類最強とも噂される女傑であった。
その歩みを、精強な魔物兵でも止められない。
一歩踏み出し、右手の刀で魔物兵を殺し、二歩目の前に左手の槍で魔物兵を数体薙ぎ払って殺すと、二歩目を踏み出して相手の攻撃を避けながら刀を魔物兵の眉間向かって投げつける。三歩目で殺した魔物兵が持っていた斧を空いた手に持ち、すかさず近くの魔物兵も殺すと、四歩、五歩で先程刀を投げつけて殺した魔物兵の近くまで魔物兵を殺しながら近づき、斧を投げて魔物兵を殺すとそのまま刀を回収して再び刀で斬り殺す。
少し遅れて頼光の部下の武士達が追い付いて声を上げるも、
「大将ォォォ!!　さすがに突っ込みすぎではなかろうかあァ!!」
「そうですぞ母上ェ!!　もう我らしかいませんぞォォ!!」
そう話しながらも魔物兵を斬殺していく彼らも真の武士。源氏武士団の名に恥じない苛烈な戦い振りである。
しかし頼光は魔物の群れに斬り込むことを止めず、笑みの顔を向けながら叫ぶように言った。
「馬鹿者がぁ!!　こんな愉しいこと、止められると思うてか!!　わしを止めたくば石丸様を連れてこォォォい!!」
言いながら頼光は跳躍し、再び魔物兵の集団の中に飛び込み斬り込んでいく。
そこには魔物隊長がおり、彼らは頼光を見て狼狽えながらも応戦の構えを見せた。
「えぇい!!　好き勝手させるかっ!　囲んで殺せ!!」
「うおおおっ!!」

魔物隊長の言葉に魔物兵が雪崩れ込むように襲いかかる。魔物隊長自身も大剣を構えて頼光を迎え撃つ。
しかしその光景に頼光は――その口端を深く歪めた。
「――――ニヒッ」
「――ッッ!?　お、お前達！　早くそいつを殺せ!!」
その笑みをまじまじと見てしまい恐怖した魔物隊長が後退りながらも切迫した様子で指示を出す。
しかしその時にはもう遅かった。
「一番首見つけたァァァァァァァァァッッ!!!」
「ッ!?　うあああああ、来るなァ!!　やめ――」
歓喜と狂気に満ちの表情を見せ声を上げて迫ってくる人間の女性に、魔物隊長が気圧されて大剣を振り下ろすが、
「まずひとぉぉぉっッ!!　魔物隊長何某の首、この源頼光が討ち取ったりィィィィ!!」
既に頼光は大剣を潜り抜けて魔物隊長の首を斬り落としていた。
その首を取って、周りの魔物兵を槍で殺しながら素早く首級を取ったことを高らかに天に吠えると、その首を槍に巻き付けて再び戦闘を再開する。
しかし周囲の魔物兵は魔物隊長が瞬く間に殺され、現在も戦闘を止めることなく仲間を殺している頼光を見て悲鳴を上げた。
「ひぃぃぃ!!　ふ、ふざけんな！　こんな化け物とやってられるかっ!!」
「お、押すな!!　く、くそぉ！　俺だって逃げてぇよぉ!!」
「どけ、どいてくれ!!　俺を逃がしてくれ!!」
二百名近くの魔物兵が一気に逃げ出そうとするが、数が数なだけに逃げることは難しい。
押し合いへし合いの中で頼光、そして追い付いてきた源氏武士団の面々にやはり素早く殺されると、頼光は再び別の場所に飛び込んでいった。
「姉御ォ！　お待ちくだされ!!」
「ハハハハハハ!!　待つかアホンダラァ!!　百――いや、二百は最低

でも取ってやるぞぉ!!　さぁ、次の首はどこぞ!?」
配下の頼光四天王や息子達を笑いながら罵倒すると、周囲を見渡して楽しそうに次の首を探し始める。頼光は大の戦好き。一歩間違えれば死にかねない窮地を好む戦闘狂は、魔物の血で顔が濡れてなお、目を輝かせながら魔物だらけの戦場を往く。
鬼退治や妖怪退治を得意とし、ＪＡＰＡＮでは悪名高い彼女と源氏武士団は大陸で戦っていた時もその苛烈な戦いで恐れられており、今でも大陸諸侯の貴族、兵士には恐れられている。
魔物相手でも一切怯むことなく突き進み、首の山を作り上げて自軍の勝利に貢献する。これが彼女達のやり方であり、名乗りを上げながら攻撃を仕掛けるのも、大陸では名乗りを待ってくれないので仕方なく――〝待ってくれないなら名乗りながら攻撃すればいいのでは？〟――と、頼光が考えた狂気の風習だった。
返り血や何もかもを一切気にせずに戦う彼女はまさに〝鬼姫〟の名に恥じず、彼女の配下の源氏武士団もそれに負けじと魔物兵達を集団で飛びかかるように殺していく。
彼らは戦場を自由に駆け、ザビエル軍に少なくない損害を出していた。
敵の指示で囲むように彼女達を足止めしようとするも、中々源氏武士団は止まらない。
それどころか、彼らに手をこまねいている内に前線が崩れて大陸諸侯の兵達も次々に魔物兵相手に戦果を上げていく。
更には、
「どけええええええええええええええい!!」
今度は茶褐色の肌をした大柄の爺が、風のように素早い動きで魔物兵達を薙ぎ払っていく。
その手に持つのは大型の大刀であり、魔物兵の身体の二倍も三倍もある巨大な得物であった。
それを振り回しながら敵陣に突っ込むのは藤原四天王の一人。
「朕は征夷大将軍――坂上田村麻呂であるぞ！　控えおろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおうう!!」

「ぎゃあああああああ――!?」
大刀を振り回して魔物兵の陣を付き包む姿はまさに暴風であり、その走りに巻き込まれた魔物兵達は皆骨を砕き、身体を吹き飛ばされていった。
坂上田村麻呂は元最強の武士であり、藤原石丸の師を務めていたこともある達人である。
若い頃は毎日の様に戦や鬼退治、妖怪退治に出かけ、ＪＡＰＡＮでは知らぬ者がいないほどの有名人であり、歳を食った今でも、日ノ本で二番目の武士で在り続けている。
そんな彼を偶然にも見つけた者がいた。それは、
「だあああああああ!! クソ!! クソがッ!! 役立たず共!! こうなったら俺様が出てやる！ うおりゃあああああああ!!」
「――むっ」
乱戦になり、魔物兵の群れの中から出てきた一際大きな魔物に、坂上田村麻呂は目を向ける。傍らの魔物将軍の制止すら振り切って槍を構えたのは、
「コウウ様！ お待ち下さい!! 総大将に出張られては……それに、さすがに早すぎます!!」
「うっせえ!! 持ちこたえねぇとやべぇことがわかんねぇのか!! このままズルズルと押されたら不利な上に、武士共のせいで士気もガタ落ちだ!! 回復させようと思ったら将を殺すのが手っ取り早えんだよ!! ザビエルの使徒共もいねぇし、その次に強いのつったら俺しかいねぇだろうが!?」
「っ、ですが――」
「ですがじゃねぇんだよ!! 負けたくなかったらテメェも一緒になって戦いやがれ！ 今は武士を止めるのが先だ!!」
「は、はっ！ 畏まりました！」
魔物将軍が納得したのを見て戦闘を始めたのは魔物大将軍コウウ。
彼は周囲を見渡して敵陣深くまで切り込んできた武士を見つけると、
「――そこかァァ!!」

「むっ！　何じゃ貴様――って大将首か!?」
　キラキラした目を浮かべ、襲いかかってきたコウウを見たのは源頼光。
　明らかに大柄で偉そうな魔物を見て楽しそうな表情を浮かべている。
　だが、その途中に割って入るように、
「どけ小娘ェ!!　そいつは朕の獲物じゃあああああああ!!!」
「あぁん!?　出おったな糞爺！　こいつの首はわしが取る!!　貴様はほれ、そこの魔物将軍で我慢せい!!」
「んじゃとこのガキャあああああああああ!?」
「やんのか糞爺イイイ――ッ!!」
　急に喧嘩を始めた源頼光と坂上田村麻呂。二人の藤原四天王。人間の将を見つけた大将軍コウウは、
「……ははは、ツイてるぜ!!　おら、雑魚共!!　このコウウ様が相手になってやるから纏めて掛かってきな!!」
「あぁ!?」
「んじゃとぉ!?」
　ここで二人を仕留めてしまえば手柄になるし、前線も持ち直せる。魔物大将軍なりに戦況を有利にしようとして選んだ行動だった。
　その挑発にも似た言葉に、頼光と田村麻呂は揃って怒りの感情を見せて、得物を構える。
「ふははは！　よう吠えたわ！　わしが直々にぶっ殺してやる!!
素っ首寄越せえええええええええええ!!!」
「無礼者がああああああああああ!!　貴様、朕を舐めておるな!?　斬り殺してやるわああああああああああああ!!!」
「一々うっせぇんだよてめぇら！　叫ばねぇと戦えねぇのか!!　――こっちこそ、手柄にしてやらぁぁ!!」
　コウウのそのサイズに見合った巨大な槍と、頼光、田村麻呂の刀が打ち合わされる。
　戦場は早くも将同士は矛を交える展開となっていた。

キナニ平野の戦い２

東側、人類軍と魔軍の戦いは人類側の突撃をもって始まった。
魔軍に向かって前進し、突撃を敢行する藤原家の武士達と大陸諸侯の混成軍。しかし西側とは違って前線は膠着していた。
それは源氏武士団という大陸でも随一の切り込み役がいないということもあるがそれだけではない。ＪＡＰＡＮの武士達はこちら側にも配置されており、今なお声を上げて奮戦している。
だがそれでも前線を中々突破出来ないのは、相手側の異様な硬さのせいだ。
「くっ……此奴等、手強いぞ！」
「なんという堅牢さ、敵ながら天晴ぞ！」
武士達が果敢に刀を奮って何度も突破を試みるも、数名の魔物兵は倒せたところで止められてしまう。
「数はこちらが上だ！　人間だからと甘く見ず、最低でも二人以上で懸かれ！　無理に攻めずに前線を維持することに努めよ！」
「隣の奴を守れ！　訓練通りにやれば問題ない！　魔軍最強たる所以を見せてやれ！」
「――了解!!」
前線の魔物隊長。奥から聞こえる魔物将軍らしき者の声に応答を返した魔物兵達がより一層、連携を高めていく。武士達が魔物兵に斬りかかり体勢を崩させても、隣の魔物兵がそれをカバーするように得物を振るって武士を追い返す。人間達も複数で当たろうと攻撃を加えても、同じかそれ以上の連携を見せて魔物兵も複数で戦闘を行う。
結果、個の強さで勝る魔物兵の密集陣形を破ることが出来ずに、武士達は歯噛みする。
「魔軍の強さ、これ程のものだとは思わなんだ！　それでこそ、首の価値も上がるというもの！」
「だがこの程度で諦めては武士の名折れよ！　キェェェェェイ!!」
「ぐっ……ちっ、こいつら、全然俺達の事恐れねぇぞ……！」
「噂に聞く武士だ！　くそっ、この変態民族め……！」

だが全く怯まない武士の猛攻にほんの僅かではあるが綻びが生じる。しかしその穴は他の魔物兵によって即座に埋められるのだが、
「――行くぞ、テメェら!!」
「うおおおおお！　やってやるぜぇ!!」
突如、前線に現れた集団がレオンハルト軍前衛の魔物兵を吹き飛ばす。個の強さとしても、連携力の高さも兵士として一流の彼らが吹き飛ばされたことに、それを指揮していた魔物隊長は目を剥いた。
「何だと!?　って、あれは――」
また新手の武士かと顔を向けた魔物隊長は、しかしその集団を見てその予想が外れたことを思い知る。それは遠目で見ても人間ではない、異形の集団であった。
それは彼ら魔物の容姿に近いものであって、根本的に違う生き物。彼らの名を、その集団を率いる巨大な影が口にした。
「妖怪軍団！　クソッタレな魔物共を血祭りにあげてやるぞ！　血が欲しい奴は俺に続け!!」
そう言って魔物兵の群れに突っ込んできたのは、魔物将軍以上の巨体を持つ黒い犬のような化け物である――〝妖怪〟。
ＪＡＰＡＮ由来の生物であり、聖獣オロチから生まれたという妖怪達は藤原家の傘下でもあり、主力の一つであった。
だが本来、妖怪達はＪＡＰＡＮから出ることが出来ない。
妖怪が存在するために必要な妖力はオロチが発生させているものであるからだ。
しかし、それを可能する存在こそがこの巨大な妖怪。
妖怪王――黒部。
藤原四天王の一人であり、人食い妖怪としても有名であった最強の妖怪である。
オロチの牙から生まれた妖怪黒部は身体から異様な妖気を発しており、本来ＪＡＰＡＮから出ることのできない妖怪達を数千以上率いることが出来る。ゆえに、後ろに続く者達も妖怪達であり、多種多様な姿をした者達が魔物兵に一斉に襲いかかった。
「ば、化け物だ!?　化け物が来たぞ!!」

魔物兵の言葉通り、それは正しく化け物であった。
妖怪達は多種多様な能力、特性をもって魔物兵を倒していく。ＪＡＰＡＮでは鬼や魔物と変わらぬ脅威を放つ妖怪の軍団は、魔軍の強固な前線を突破していった。
その先駆けとして活躍するのは、やはり妖怪王、黒部であり、
「おらおらどうしたぁ!? 俺に食われたい奴から掛かってきやがれ!!」
その言葉とともに鋭い爪を持った手で魔物兵の喉笛を切り裂くと、そのまま腕を振り上げて殺到する魔物兵達を吹き飛ばす。
それだけで数十体の魔物兵が吹き飛び、しかし黒部の行進は止まらない。
巨体に似合わぬ速度で突進し、魔物兵の身体を砕くと近くにいた魔物兵に牙を突き付けて噛み殺してしまう。
そしてその背後に続く妖怪たちも負けず劣らずの活躍を見せる。
その光景は百鬼夜行と言うべきものであり、魔物にとっての地獄絵図。
だが人間達にとっては頼もしい援軍に他ならなかった。
「動揺しているぞ！ この隙を逃すな!!」
「武士ばかりに活躍させるな！ 近衛騎士団！ 前線を押し上げろ！」
妖怪軍団と武士達によって出来た綻びを、大陸の騎士、戦士達も見逃さずに魔物兵を押し込んでいく。
その強さも然ることながら、妖怪の強みは不死身の存在であることでもある。
斧で斬られようが、魔法で焼かれようが妖怪はしばらくすればまた復活してしまうのだ。正攻法では倒し切るのは難しく、特殊な方法を使わねば滅することが出来ない。
そんな妖怪の加勢は、精兵で規律だった組織を構築するレオンハルト軍すら混乱させてしまう。前線がにわかに押され始め、魔物将軍は声を張り上げた。
「くっ……仕方ない。――特殊猟兵、前へ！」

「はっ!!」
「！　何か出て来たぞ！　気をつけろ！」
黒部が叫び、顔を向ける先、魔物将軍の号令によって列をなして出てくる者達がいる。
彼らは他の魔物兵とは違い、黒と赤の軍帽、装備を身に着けた数百規模の魔物兵達だ。
その集団行動は他の魔物兵と比べて更に規律だった動きであり、機械的ですらあった。
彼らは魔物将軍の命令を受けて一糸乱れぬ動きで前に並ぶと、先頭に立つ魔物隊長が声を上げた。
「我ら、レオンハルト軍特殊猟兵部隊――通称ブラックティーガーである！　この名を授けて下さったレオンハルト様の威信に掛けて、ここから先は一歩も進ませぬ!!　――総員、構え!!」
「はっ！」
魔物隊長の指示を受けて、素早い動きで装備を構えた魔物兵達。その手に持つのは黒の短剣や戦斧、他にも腰に道具がぶら下げられている。
「戦闘開始!!　奴らをここで足止めせよ!!」
その言葉とともに、黒の魔物兵は一斉に妖怪や武士達に襲いかかった。
黒部はそれを迎え撃とうとして、その動きの軽快さと集団行動に驚いた。
「っ、鬱陶しい!!」
黒部が爪を振り回すも、それでやられるのは攻撃を仕掛けていた一体のみであり、他の魔物兵達は一定の距離を取りながら黒部の周囲を回るように動いている。
「――！」
「！　ちっ……！　なんなんだテメェら!?」
黒部の死角である真後ろから攻撃を仕掛けてくるが、黒部が振り向くと直ぐに魔物兵は下がってしまう。代わりにまた背後の魔物兵が攻撃を加えようとしてきたので、黒部は対応を迫られた。

他の妖怪、武士達も苦戦しているようであったが、兵の強さはそこまで変わっていない。多少強くはあるが、それだけだ。妖怪や武士でも倒せない相手ではない。
にも関わらず倒しきれないのは、彼らの集団行動、連携が異常なほどに卓越しているからだ。
常に一定の距離を保ちながら移動し、攻撃を捌くことを重視しているが、隙を見れば一撃離脱の攻撃を加えてくる。
強くはないが、倒しきれない。
だが相手は確実に一人一人を殺して、数を減らしていく。
黒部ほどの強さであれば無理矢理力に任せて数体を屠ることは出来るが、それでも通常の魔物兵と比べて多少掛時間を掛けられるのは事実であった。
その黒の魔物兵が不敵に人間達を嘲笑う。
「我らは魔軍最強のレオンハルト軍の中で選りすぐられし最強の部隊……！」
「レオンハルト様直々に認められた兵しか入隊出来ず、入隊後も厳しい訓練を課せられる……」
「だがその訓練を乗り越えた我々は最早ただの魔物兵に非ず！」
「左様！　我らは集団戦と隠密行動に特化した特殊部隊！　普通の魔物兵だと思うな！」
「然り！　我々は普通の魔物兵と違って待遇も良く、レオンハルト様の信頼も厚い！」
「しかし、何故かレオンハルト様には微妙な目で見られることも多く――」
「馬鹿！　それは言うな！　皆気にしてるんだ！」
「……悪い」
「ほんとに何なんだテメエら！　噛み殺すぞ!!」
自分の周りで回りながら言葉を交わす魔物が鬱陶しくなって、爪を振り回すも一体は殺したが他には逃げられてしまう。
「無理矢理にでも突破させてもらうぜ！」
「させん！　お前達、目に物見せてやれ！」

妖怪軍団と特殊猟兵が東側でぶつかり合った。

レオンハルト軍本陣。
後方に設けられたその場所には、魔物大将軍リーが全体の指揮を執っていた。
背後、戦場をじっと見つめ続ける魔人レオンハルトの存在感を背中で感じながら魔物将軍に指示を出す。報告を聞くとそれを即座に頭の中で反復して思考を回した。
……前線は妖怪によって一時突破されかけたが、現在は特殊猟兵を用いて防衛戦を再構築している、か。やはり侮れんな。
レオンハルト軍の方針としてはしばらく防衛に徹し、無理に攻めずに戦線を維持することに注力することになっている。
相手がどれだけ精強な部隊であっても前線を突破されることはない、と思っていただけに妖怪軍団の参戦は中々に痛い。文字通り、虎の子である特殊部隊も早々に出してしまった。
しばらくはまだ保つ。だが、何か策を用意した方が良いかと考えたところで、
「――リー。焦るな」
「っ、はっ、レオンハルト様。しかし……」
背後から魔人レオンハルトの鋭い声が飛び、己だけでなく周囲の魔物将軍らもにわかに緊張する。使徒の方々はいない。それぞれ部隊を率いている。ゆえに今この場においてレオンハルト様に直接声を掛け、何かを提案出来る者は少ないのだ。
己の任務を思うとプレッシャーではある。ゆえに何か行動を取った方が良いのかとも思うが、
「……前にも言ったが、奇をてらった策を取る必要はない。長引けば有利なのはこちらだ。お前は、お前の良さ――王道で戦え」
「は、はっ！　畏まりました！」
こちらの背中を押すような言葉に胸が熱くなる。この方が掛ける言葉の一つ一つが己の血肉となるようだ。

リーは思う。己は、凡庸な男であると。
魔物大将軍としてレオンハルト軍を統率してはいるが、その殆どはレオンハルト様の功績であり、己は特別な働きはしていないと思っている。
レオンハルト様の将としての資質、才覚は魔物大将軍を上回る。己など、彼の指示に従ってその通りに仕事をこなすだけの存在でしかない。
ゆえに己への陰口も理解出来るのだ。他の大将軍と違って能力が低いだの、目立たないという陰口は的を射ているとリーは思う。
自分にはヴラドのような人を使う上手さも、バルカの天才的な知略もない。コウウのような圧倒的な武勇もないのだ。彼らはその能力を用いて大いに結果を出し、上司である魔人に認められている。魔軍や魔人の勝利に大いに貢献しているのだ。
それに比べて自分はどうだろうか。ただレオンハルト様の指示に従うのみで、特別な戦術指揮を行っているわけでもない。勝てるのはレオンハルト様や使徒の方々、他の将軍達や隊長ら、兵達が優秀だからだろう。
己は特別なことはなにもしていない。魔物将軍であった頃となんら変わりないのだ、と大将軍リーは悩んでいた。
だがある日、それをレオンハルト様に見抜かれ、彼に食事に誘われたのだ。
レオンハルト様がよくお忍びで通っているというラーメン屋のカウンター席で、レオンハルト様は己に言った。
『お前は、将に向いている』
そんな言葉を掛けられ、リーは否定した。それはありません、と。
己には統率力も、知力も、武勇もない。こんな自分が大将軍という席に着いていていいのか。そう問うた。
するとレオンハルト様は一転、真面目な顔になって首を振った。
『智謀や武勇に統率力……確かにそれらは良き将を構成する重要な要素かもしれない』
だがな、と。

『人を惹きつける魅力は、智謀や腕力に勝るとも劣らない資質だ。――リー、お前にはそれがある』

『――――』

『お前は部下の将軍や隊長に慕われている。それは、お前の日頃の行い、働きによるものだ』

リーはその言葉に無言になった。言葉を返せなかったのだ。

その間にもレオンハルト様は言葉を尽くす。

『将も兵達も、心ある生き物には違いない。兵の心の機微を蔑ろにする者は、良き将となれん』

必ず手痛い失敗を犯すだろう、とレオンハルト様は言った。

こちらが無言のまま言葉を発せないでいると、レオンハルトはそこでこちらの肩を叩いて言った。

『俺とお前が作り上げた軍は、ちょっとやそっとのことで負けはしない。奇策に頼る必要もない。ただ正道をもって進め、リー』

鍛え上げられた兵と優秀な将兵。そして数させ揃えれば前進制圧のみが最強の戦略だと、レオンハルト様は言う。それが出来るのは、ここまで軍を成長させた己の手腕の成果なのだと。

ゆえに胸を張れ、と。

『お前が劣っているなど俺は一度として思ったことはない。俺にはお前が必要だ。――これからも手を貸してくれ』

と、レオンハルト様はこんな凡庸な魔物に励ましの言葉を掛けてくれたのだ。

こんな己を必要だと、胸を張れと。

手を貸してくれ、と頼んでくれたのだ。

魔人という強大な力を持つ身で、一魔物に願ったのだ。

将として魔物として――これほど突き刺さる言葉はない。

その時に食べたラーメンの味が今でも忘れられないほど、胸に突き刺さったのだ。

だから、

「……全力を尽くします！」

リーは改めてそう言って部下に命令を出す。

部下もよく応えてくれる。優秀な者達である。
己が特別な指示を出さずとも、自分たちで考え行動し、時にこちらに相談し、提案してくる。
今も前線では魔物将軍や魔物隊長が、己の考えで状況を打破しようと行動しているのだろう。
魔物兵も必死に勝つために戦っている。
そんな彼らと、我が主のために、己は戦うのだ。
己は堂々と、一番良いと思う指示を出すだけである。
それで足りなければ他の者達がフォローしてくれる。
将としては凡庸かもしれないが、
……私は、これで勝つ！
そして、それに甘んじる気もない。
他の者達が己の頭で考え、行動するように、自分も大将軍としての責務を全力で果たすのみである。
ゆえにリーはレオンハルトの方針だけを最優先にして、軍を動かす。
ザビエル軍に怪しい動きもある上、敵も侮れない。
レオンハルト様にも何か考えがあるようだが、
――正道をもって戦うのみ！
続けて防衛に徹するように、部隊の動きや引き際だけには注意するように指示を出すと、リーは再び戦場の動きに集中し始めた。

レオンハルト軍中央。
前線が僅かに乱戦になり、西側ではザビエル軍と藤原家の激しい戦闘が行われる中、中央で部隊を指揮を担当しているレオンハルトの使徒――キャロルは部下を相手に色々と試していた。
「では、このポーズはどうですの？」
「……その、少し……少しですが微妙かと」
「ふむ、そうですの。では……これでは!?」
「……うーむ、何だかしっくりきませんな」

「むぅ……そうですの……わたくし、ひょっとしてスランプ？」
格好いいポーズの感想を魔物隊長や魔物兵に求めながらうんうんと唸っていた。
魔物隊長や魔物兵はそれを微妙な気分で見守っているが、部隊指揮だけはきっちりこなしてくれるので文句は言えない。
普段はレオンハルトの親衛隊――女の子モンスターの部隊を指揮しているが、今は魔軍の部隊も統率している。親衛隊も数こそ少ないが存在するが、何故かキャロルは魔物隊長達にその感想を言わせていた。
というのも普段は女の子モンスターか、使徒にしか聞いてないのでこういう時は一般の魔物の意見も聞きたいらしいのである。
そんなこと知ったことではない、と魔物隊長は思ったがこれでも上司、上司の命令である。断れるはずもないので、いっそ気楽にやらせてもらおうと何かが起こるまではそれに付き合うことを決めた。
そんな時だ、声が来たのは。
「では、次は――」
「――こんなところにいたか」
「っ！」
キャロルが次なるポーズを取ろうと逆立ちの構えを取ろうとする前に、魔物兵を掻き分けてやって来た者がいる。
その存在に、キャロルは気づき、目を向けた。
「あら、煉獄さんではありませんの。ちょうどよかったですわ。何の用かは知りませんが、ついでいいのでわたくしのポーズの評価をしてくださる？」
「……それは――」
「じゃあ、こういうのはどうですの？」
「……」
返事を聞く前にキャロルがポーズを取ったので、魔人ザビエルの使徒――煉獄が無言となる。
キャロルが言うように何の用事で来たのかは知らないが、何かしらの用があるのだろう。魔物隊長や魔物兵の身ではどんな用かとキャ

ロルを差し置いて聞くわけにもいかない。
なのでそれを待っていると、煉獄が不意に口元に笑みを浮かべた。
「そうだな……そのポーズは――」
と、言いかけ――煉獄は驚きの行動をもって答えとした。
「――あまり良くないな」
「ッ!? なにを――ぐあっ!?」
煉獄が言葉とともに、その手にもった筒から弾を発射する。
キャロル目掛けて放たれたそれは、着弾すると爆風が周囲の魔物兵、魔物隊長まで巻き込んで衝撃に吹き飛ばされた。煉獄の行動に驚いた魔物隊長は、反射的にキャロルの安否を確認しようと顔を上げ、
「大丈夫ですの？」
「あっ……ご、ご無事でしたか！」
眼の前で手を差し伸べるキャロルを見て身体を起こした。
それを見た煉獄が息を入れて言う。
「……避けられたか」
「ええ、まあ。……それはそうと煉獄さん、危ないですのよ？ 急に攻撃してくるなんて、一体どういうつもりですの？」
服に付いた汚れを手で払いながらキャロルが問う。煉獄はにやけた笑みのまま、
「わからないか？ 同じ使徒ならば分かるだろう？」
「……それはつまり、ザビエル様の指示で攻撃をしたと？」
「なっ――!?」
馬鹿な、と魔物隊長は煉獄の言葉に驚愕する。周囲の魔物兵達もどういうことか、と距離を置いて見守っている。前線のザビエル軍自体は人類と変わらず戦ってはいるものの、それは明確な裏切りではないか、と疑いの目を向けた。
しかし攻撃を受けた本人、キャロルは未だ純粋に首を傾げており、特に表情を歪めていない。
そんなキャロル相手に、煉獄は更に続けて言った。
「ザビエル様がお前を連れてくるように言っている。一緒に来てもらうぞ、キャロル」

「……ひょっとして、わたくしを人質にするとかそういうことですの？」
「……どう捉えてもらっても構わん。だが、抵抗するなら多少手荒な真似をしてでも連れて来いと言われている」
それを聞いたキャロルはまたしても、ふむ……と考え込んだ。そして考えた末に、
「……それはレオンハルト様に敵対する――ということでよろしいですか？」
そう煉獄に問いを投げた。しかし既に人質にすると答えている煉獄の答えは分かりきっていて、
「……そうだと言ったらどうする？」
「……そうですの……それなら――」
キャロルはそこまで疑問に満ちた表情を浮かべていたが、煉獄からの答えが来るとそれを笑顔に変えて言った。
「では――殺しても問題ありませんわね？」
「――！」
腰の銃を素早く抜いて、躊躇なく煉獄の頭を狙った射撃を行う。煉獄がそれに気づいて回避行動を取ったが、笑顔のまま攻撃されたことに多少冷や汗を掻きながら言葉を発した。
「……キャロル。お前はそういう敵意や殺気とは無縁だと思っていたが……本当に殺気無しで攻撃されるとはな」
その言葉は暗に、キャロルの行動に敵意や殺気が無いと言っているも同じであったが、キャロルはその言葉を理解しているのかいないのか、首を傾げて何を言っているのか、という風に煉獄に問い返す。
「え？　だって、煉獄さん、敵ですわよね？　なら殺してもよいはずですわ」
「……ふ、ふふ……普段向けてられる目そのままで言われるとは、さすがに不気味だ」
キャロルに敵意は一切無く、同じ使徒仲間を見ているかのような様子のまま殺すと武器を向けてくる。それが可笑しくなり笑ってしまった煉獄だが、その意味がまた解らない、とキャロルは疑問符を頭

に浮かべ、
「何を言っているのか解りませんが、煉獄さんは殺してもよいので、殺すだけですわ。……ザビエル様は許しませんが……」
ザビエルにだけ敵意を覗かせたキャロルは、おそらくレオンハルトへの叛意を理解したからだろう。その基準が分かりかねるが、しかし明確な判断基準は確かにあるようでキャロルはその敵意を直ぐに消して煉獄に言う。
「というわけで煉獄さんには死んでもらいますわ。珍しいんですのよ？　レオンハルト様は滅多に殺害許可出しませんのに、煉獄さんだけは殺しても良いと――ってあら？　これ言ったらダメなやつだったような……」
「……そもそも、お前に俺が殺せると？」
「え？　脳か心臓でも傷つければ死にますし、首を切れば多分死にますわよね？　――ならやってみるだけですわ！」
キャロルはそれが当然の仕事、と言わんばかりに胸を張って言ってみせる。
左手で腰の剣を引き抜き、右手の銃を煉獄に向けて突き付けたキャロルはそれなりに格好いいポーズを取り煉獄に宣言する。
「とりあえず言ってはダメなことも言ってしまったので口封じですわ。煉獄さん、今から殺しますが――――覚悟はよろしくって？」
「――――死ぬのはお前だ！」
「っ、総員退避――!!」
僅かに好戦的な笑みを浮かべたキャロルを見て魔物隊長が叫ぶと同時、二体の使徒がレオンハルト軍の陣の真ん中で対峙し、炸裂するような音と爆炎が周囲に衝撃を与えた。
キャロルと煉獄。魔人レオンハルトと魔人ザビエルの代理戦争とも言えるそれは、他の場所でも同じ様なことが起きている証左でもあった。

キナニ平野の戦い3

「――さぁて、一体どういうつもりか聞いてもいいですかね？」
レオンハルト軍の部隊の一つを率いていた使徒ペールは、正面からいきなり攻撃を加えてきた存在を見て問いを投げる。
周囲、魔物兵達はペールと相手がいる場所から距離を取って遠巻きに見守っていた。そうでないと危ない、と本能的にそうさせたのと、ペールの指示によるものである。
誰もが視界の中心に入れるのは、和装で杖を持ち、黒い肌、顔デカの不細工面の男だ。ペールは一応、営業スマイルを浮かべているが、顔が僅かに引き攣っている。彼を苦手にしているのだ。
「ととと捕らえにきただすよ。大人しくつつつ捕まるだす」
「……女性を無理矢理誘うのは嫌われますよー、魔導さん」
魔人ザビエルの使徒――魔導。
どもった口調が特徴的な彼は、その馬鹿でかい顔をペールに向けてニヤついた笑みを浮かべる。
「おおお大人しく捕まるなら手荒なことは、し、しないだす。て、てて抵抗するなら色々とやってもいいと、ザビエル様にきょ、許可を貰ってるだすよ……！」
「うわっ、キモっ……」
魔導の気色悪さに思わず本音が口から出てしまうペール。半ば引き気味に身体を動かしたところで己の言葉に気づいたが、既に魔導は怒り心頭の様子で、
「きききキモくないだす……！　ちょ、ちょっと顔が、おおお大きいだけだすよ！」
「……いや、普通に気持ち悪いです。直視してるだけで気分が悪くなるくらいには。レオンハルト様に比べたら魔導さんは不細工を通り越してゴミですね。汚物です。臭いが移ったら嫌なので近寄らないでくれますか？」
もういいや、と吹っ切れたペールは営業スマイルを止めて冷ややかな顔を浮かべると魔導をボロクソに貶した。それを聞いた魔導はぷ

るぷると身体を震わせ、顔を赤くして叫ぶ。
「ひ、酷いだす！　そ、そんな事言うなんて、泣いて謝ってももう、ゆゆゆゆゆ許さんだすよ……！」
「あっ、怒っちゃいました？　ぷぷ、怒り顔も不細工で気持ち悪いのでやめてくれます？　それに、レオンハルト様を害するつもりで襲ってくるなんて……まあ色々言いたいことはありますけど……一つ言うなら、馬鹿なんじゃないですか？　レオンハルト様に何一つ敵わないっていうのに。ちゃんと脳みそあります？」
「そそそそれ以上言うなら殺すだすよ……！」
殺意と敵意が入り混じったものをぶつけられ、しかしペールは呆れたように失笑する。
「はぁ……しょうがないですねぇ。正直、キモくて戦うのも嫌ですが害虫駆除も従者の役目ですし、相手してあげます。可愛い女の子にボコボコにされるんですから嬉しいですよね？　咽び泣いて感謝するといいですよう？」
くすくすと笑みを漏らしながら、ペールは指揮棒のような形の細い杖を取り出しながら戦闘態勢を取る。対する魔導は既に怒りの形相を浮かべてペールを睨み、大きな杖を用いながら魔法の詠唱を始める。
「滅茶苦茶にし、してやるだす……！　ううう腕の一本や二本は覚悟してもらうだすよ……!!」
「……はぁ、ほんとキモいなぁ……何で私の相手、これなんですかね……。早く終わらせたいんでさっさと掛かってきてください」
そもそもレオンハルト様を害すること自体あり得ないことだ。
ゆえに捕まるわけにはいかないし、やられるわけにもいかない。正面から叩き潰して、お灸を据えてやるだけだ。
そうしてペールは魔法を詠唱、発動し、魔導の放った魔法にぶつけて打ち消しあった。
……今頃、キャロル先輩や始祖様も戦ってるんですかね。
おそらくは他の二人もザビエルの使徒と戦っている頃だろうと。
だとしたら始祖様の方は大変だろうな、とペールは他の使徒の事を

思いながら魔導との戦闘に臨んだ。

曇天の下、魔物兵が見守る陣の中心に、二つの影が対峙し合う。
人類軍と魔軍。その戦場となったキナニ平野に立つのは二人の人外であった。
片方は長い黒髪を靡かせた、額に赤い宝石を持ち、長い耳が特徴的な女性で、黒のレオタードに似た衣装を着た元カラーの使徒。
それに対するは、褐色肌の引き締まった筋肉質を見せつける半裸な男で、その手に持った長い煙管からは炎を吹き出させている使徒であり、彼は女性を見て軽い調子で声を出した。
「よう、ハンティ。元気か？」
「……そういうアンタは元気そうだね」
「へっ、まあな」
そう言って気のいい笑みを浮かべるのは魔人ザビエルの使徒――戯骸。
普段どおりの表情で普段どおりに話しかけてくる戯骸に対し、魔人レオンハルトの使徒、ハンティは眉根を寄せた状態で、警戒を隠そうとしない。
だが戯骸は気楽そうに言う。煙管から一度炎を吹いてから、
「だが、状況はあんまり良くねぇな。俺にとってもあんたにとっても。正確に言うなら――俺達の方が良くねぇ」
「……なら何でこんなことを」
ハンティの問いに戯骸は、さあな、とぶっきらぼうに返す。だが代わりに続けて、
「確実に分かるのは、これで俺達は破滅を免れないってことだ。俺達使徒もそうだが、俺らの主――ザビエル様は……まあ十中八九死ぬだろ。もしくは死ぬより酷い目に合わされるか……お前さんの主によってな」
「っ、そこまで分かってるなら――」
戯骸が告げた言葉に、ハンティは言いかけた言葉を一度止め、代わ

りに間を置いて落ち着いた静かな声で話し始めた。それは、
「……戯骸。アンタに、レオンハルトからの伝言を預かってる」
「……へぇ？　愛の告白でもしてくれんのか？」
茶化すな、とハンティが短く言う。戯骸も本気でそう思っているわけではないようで、苦笑しつつハンティの言葉を待った。再び間を置いて、
「……〝こちら側に付くならお前の安全と立場は保障する〟」
「――――」
「〝だから、ザビエルを見限って俺の下に付け〟。……確かに伝えたよ」
その言葉を受けて戯骸はしばらく、言葉を発せなかった。
だがそれを頭で理解し終えると、一度煙管を吹いてから息を入れ、
「……ハハッ、嬉しいねえ。そこまで俺を買ってくれてるなんてな」
「……戯骸。アンタは――」
ハンティが答えを催促しようとした。だがそこで、戯骸はニヤリと笑みを浮かべ、
「――だがそれは出来ねぇな。それだけは出来ねぇ」
「……それなら敵対するってこと？」
ああ、と戯骸は飽くまでも軽くそれを認めた。
「ザビエル様の身の安全や立場は保障しねぇんだろ？　じゃあ無理だ。お前も使徒なら……分かんだろ、ハンティ」
戯骸はハンティの応答を待たずに続けて言う。
「主を裏切るなんざ使徒の恥だし……何より許されねぇだろ。そこを曲げるのは」
「……使徒だから裏切れないと？」
でも、と言うハンティに戯骸は真面目な顔をして視線を合わせると、
「俺は別に望んで使徒になったわけでもない。お前だって多分そうだろ？　……だが、だからと言って主を裏切れるかって言ったらまた別だ」
分かるだろ？　と戯骸は再度ハンティに言う。

「俺だって解ってんだよ。多分だが、煉獄辺りもな。とんでもねぇ無謀をやってる。どうかしちまってるってな。……だがそれでも――ザビエル様は俺の主だ」
「戯骸……」
「へへっ、あれでも良いところあるんだぜ？　身内には意外と気も使うし優しいしな。……まあ性格が良くないのは認めるけどよ」
ハンティの目が細まる中、戯骸はカラカラと笑いながら主の評価を口にする。
複雑な気持ちがハンティの内心を渦巻くが、戯骸が続けて、だからまあ、と、
「死なせるわけにはいかねぇわな。か細い糸ではあるが……主の望みのために動くのが使徒の仕事だ」
「……本気で、あたしと戦うの？」
言外に、手加減は出来ない、と眉を軽く立てて言う。
その闘気が戯骸の肌を撫でると、それを感じて戯骸も不敵な笑みを浮かべ、
「いいだろ？　ちょっとした最強決定戦だ。――ハハッ、いっぺん本気でやってみたかったんだよな。いつものやつは、互いにお遊びで手加減しまくってたしな」
「……ああ、そうだね」
ハンティはいつもの小競り合いを思い出す。
街を出禁になった戯骸が街で見つかる度、それを取り押さえるために出動してたのはハンティであり、幾度となく戦ったものだ。
ザビエルの使徒にしては気のいい性格の戯骸に、キャロルやペールも仲良くしていたし、街の住人も苦笑交じりに受け入れていた。
そしてそれは、ハンティ自身も――
「……本気で、やるって言うんだね」
「ああ。こんな時で悪いが、互いに主の為の大一番だ。俺はお前を捕らえるために全力で挑むぜ。だからお前も――本気を出してくれ」
そう言って、戯骸は闘気を全身から噴出させる。
そこから想像出来る強さは確かに、魔人に劣らないものであった。

ハンティはそこで戦闘が不可避なものだと理解すると、覚悟を決めて息を吸い、軽くステップを踏むように下がって、剣を構えながら、
「――言っとくけど……アタシ、かなり強いよ？」
「知ってるさ。だからと言って、俺が負けるとも限らねぇ。――俺も結構強いんだぜ？」
ふっ、と思わず笑みを浮かべてしまう。ハンティは闘気を解放させて構えを取りながら、
「知ってるっての――」
「……ああ、そりゃあそうだよな――」
互いに魔人級の実力者。そう噂されていたことは知っているし、強さに対する自負もある。
互いに恨みはない。されど主の為に、大切な矜持を持っており、ぶつかり合うのは必然であった。
そんな二人は、お互いにゆらりと剣と煙管を動かしつつ、足を一歩踏み出し、腰を落とすと、
「――！」
速度を出しながら瞬間移動で正面まで跳ね、剣を振り下ろすハンティと、それを迎え撃つ戯骸の煙管が交叉し、周囲に衝撃の波が広がった。

とある場所では、ある女がその場所を見て物騒な独り言を呟いていた。
「コロシテ、サラウ……ハハ、タノシミ……！」
全裸に近い機械的な目をしたその女は、右腕に付いた金色の巨大な手甲と、左手に持った〝7人首〟というクランク状に折れ曲がった刀に付いた血を舐めながら、その建物を見上げる。
魔人ザビエルの使徒――式部。彼女は主であるザビエルの命を受け、人類軍と魔軍が争う戦場を離れて、とある場所に到着したところであった。
そこにいる者達を拐い、ザビエルの元に届けるのが式部の役目であ

るが、殺戮狂で人を殺してないと知能が下がって見境なく生物を襲い始める式部は、道中でも相手を殺すことも許可されている。
故に今しがた生物を殺したところであり、地面には魔物兵の死体が転がっている。ゆえに知能はそれなりに戻っており、任務を思い出したところであった。
閑散とした街の中心にある赤い城を見上げて、式部は狂ったように笑う。
「チミタイデキレイ……ハハ、ハハハハハ！」
そうして式部は主の命を遂行するため、使徒の高い身体能力を使って中に忍び込んでいった。
しかし、
「……」
その侵入に気づき、手を打っている者がいることに、式部は気がつかなかった。

ザビエル軍本陣。
周囲の魔物将軍や魔物隊長から少し距離を取って佇んでいた魔人ザビエルは、前線からの報告を受けてそれが始まったことを理解した。
……誰かが成功させてくれれば、それで奴には勝てる。
奴とは当然、魔人レオンハルトのことであり、現在人類軍相手に戦っているもう一つの軍の司令官でもある男のことだ。
そのために使徒達に命令し、奴の使徒や大切な者を人質として連れてくるように向かわせた。そのことに対し、ザビエルに後悔はない。
使徒達であればレオンハルトの使徒に対しても勝利出来ると信じているし、あくまでも己が奴の使徒を呼んでいて、それに従わないから無理矢理連れて行く、という言い訳が取れる形にした。奴の介入を避けられるように〝保険〟も掛けた。
だが理性では、多少マズいことは理解していた。
しかしそれでもなお、ザビエルはそれを我慢することが、本能に逆

らうことが出来なかった。
……レオンハルトを倒し……奴の全てを越える……！
魔人レオンハルトという存在を思うと、頭に血が上り、何としてでも取り除かねば、という意志が湧き上がってくる。
だが奴は強い。ザビエルが魔人として新たな生を得る以前より最強の魔人として君臨し、魔王の信頼を一身に集めていた油断ならない男だ。
ザビエルは自身の強さ、能力に絶対の自信を持っており、他の生物は、例え魔人であっても己より下であると思っている。
今まで己より強い存在は魔王様を除けばいなかった。だがそれを唯一覆されたのが、レオンハルトであり、
……奴は許さん……奴が、奴を取り除かねば……！
どうしてもそれは為さなければならない。それだけは、認められない。
ザビエルは己の意志を怒りや憎しみによるものだと思い、それを取り除くためにあらゆる手段を取ってそれを成し遂げると決めた。
その理由に気づかず、
「――ようやく見つけたぞ。貴様が魔人ザビエルだな？」
「！　貴様は……？」
そんな時だ。眼の前にとある男が現れた。
いつの間に、と思うが、意識を現実に戻してみれば周囲が騒がしい上に、大勢の魔物兵が地面にその屍を晒し、更には幾人かの魔物隊長や魔物将軍すら屠ってやってきたのだろう、魔物兵の統率が乱れている。
よもやそれほどに思考に耽っていたとは、と思うが不遜にも、やって来た人間はこちらの問いに対し堂々と胸を張って答えた。
「俺は藤原石丸。藤原家当主にして帝、人類軍の総大将だ」
「貴様が……」
精悍な顔つきと、全身に覇気を纏わせたその男は確かに人間にしては実力がある方だと推察出来るし、人を従わせるに足る器を持っているように見える。

だがその威容は、ザビエルが嫌いなある男に似ていて、
「……人間如きが……今すぐ殺してくれる」
沸々と湧き上がる怒りとともに殺気を乗せ、石丸という人間を威圧する。
だがそれに怯むことなく、石丸はその剣をこちらに向け、
「魔人ザビエル――貴様に一騎打ちを申し込む……！」
「一騎打ち、だと――」
不遜過ぎる物言いに、ザビエルは怒りを沸騰させた。
「思い上がるな人間……我に敵うと思うか……！」
「ああ、絶対に倒す。俺がそう決めた」
魔人を目の前にして微塵も恐れることのないその男は、無敵結界を擁する魔人に対してもそんな大言壮語を吐く。
不敵な表情を隠そうともせず、力の差を理解しようとしない人間はザビエルにとっても我慢ならないものであった。
それに人間軍の総大将が目の前にのこのことやって来たのだ。これで手柄を立てることが出来る。魔人を消したことによるナイチサ様への申し訳も付くだろう。
ゆえにザビエルは剣を抜いた。炎を纏わせ、上級魔人としての闘気が色となって周囲を染める中、
「……いいだろう……！　我直々に殺してやる……！」
「望むところだ！　――いざ、参る！」
魔人ザビエルは藤原石丸と剣を合わせ、早々に戦争を終わらせてやる、と一騎打ちに臨んだ。
各地で役者が揃い、その武を競い合う中――人類最強の男と、魔人四天王の一角。
両軍の大将同士の戦いが幕を開けたのである。

「――始まったか」
レオンハルト軍本陣。その鋭く紅い双眸の片方を閉じて何かを確認した魔人レオンハルトは、眼の前に広げられた地図を見て一言そう

呟いた。
思うのはキナニ平野でぶつかり合う己の軍とザビエル軍、そして藤原家率いる人類軍の三つ巴の戦いのことだ。
一見、魔軍と人類軍、両者だけの戦いに見えるそれは、水面下で将同士の攻防が行われ、各所で己の使徒達がザビエルの使徒達と戦っているという。
予想通りだ、とレオンハルトはその事実を粛々と受け止めると次に石丸のことを考えた。
己の使徒達、部下に関しては心配していない。彼女らの実力を信頼しているのも勿論だが、念の為に保険も掛けているし、使徒達が攫われるようなことはないだろう。仲間割れが起きている事態に現場の魔物兵が混乱しているらしいが、魔物大将軍であるリーや、現場の魔物将軍、魔物隊長の活躍で致命的な事態には陥っていない。
前線の部隊もよくやってくれている。珍しく酔った勢いでキャロルに乗せられ、適当な名前を付けたかいがあるというもの。結果的には大成功だ。
ザビエル軍の前線に関しても問題はない。コウウが相手の将相手に暴れているという報告が来たが、コウウであれば負けはない。
やはり問題は石丸とザビエルの戦いだ、とレオンハルトは思う。
ザビエルが勝つにしろ、石丸が勝つにしろ、己にとってはメリットとデメリットが天秤に掛けられた重要な一戦だ。この戦いの如何によって、己のこれから取る行動が決定するともいえる。出来れば石丸に勝ってほしいが、客観的に見れば石丸の勝ち目はゼロに等しい。
ザビエルの強さは自分を除けば魔人最強と言っても過言ではなく、人間如きに敵う相手ではないのだ。
そして何より、無敵結界の存在がある。ダメージをそもそも負わないのであれば、どれだけ有利な状況に持っていこうが、耐え凌ごうが勝つことはあり得ない。
それを突破出来る存在は機を窺っているのか表には出てこない。と、なればどっちに転ぶかは石丸の実力次第だ。
……俺との戦いで何を得たのか。ザビエル相手に証明してみせろ。

その先で待つ。この頂きこそが、奴の目指す場所。
であれば死に物狂いで昇ってくるだろう。それを期待し、レオンハルトは僅かに口に笑みの形を作った。

魔物大将軍コウウ

……魔軍の動きがおかしい……一体何が起こっている……？

藤原家参謀。第三階級悪魔の月餅は戦場で術を使い、隠れ潜んでいた。

視界の中、距離を置いた先では藤原石丸と魔人ザビエルの戦いが始まったところであり、一先ずは目論見通りに進んでいる。石丸がザビエルを倒す。そのために皆はそれぞれの持場で奮闘しているのだ。

だからこそ、月餅は石丸のサポートとして同道を申し出た。総大将である魔人のところに辿り着くまでには多くの魔物兵、魔物隊長、魔物将軍に魔物大将軍。そして使徒の妨害が予想されるからだ。

戦場では妖怪軍団と並んで特に目立つ源氏武士団と源頼光、坂上田村麻呂の二人をザビエル軍の前線に配置したのも、彼らが暴れることで注意をそちらに向けさせ、潜入を容易にするためのことだ。

勿論、それなりの戦果も期待出来るだろうと思ってのことであり、使徒相手でも戦える相手となると彼らが最適だと考えた。

つまりは囮であり、大将軍や使徒といった強大な存在を釣るためのものなのである。いかに石丸と言えども、5体もいるという使徒を纏めて、魔人を倒すのは厳しすぎる。ゆえの配置だったのだが、

……何故、誰もいない……？

その予想に反して、ザビエル軍の本陣には使徒の姿は見られなかった。

いや正確にはザビエルの肩に乗る小さなさるぼぼのような使徒はいるが、戦闘用の存在ではないのだろう、今はザビエルの肩を降りて戦いを見守っている。

一応何かする可能性を考えて注意しているが、その気配もない。加えて周囲に他の使徒の気配もない。それが不気味でしょうがなかった。

よくよく感じれば戦場自体にいることは解るが、この周辺にはいないのだ。

しかもザビエル軍も反対側のレオンハルト軍も――特にレオンハ

ルト軍の方が動揺しているような気配がある。ザビエル軍も周囲の将軍達が困惑したように指示を送っているが、その辺りの会話や言葉をよく聞いてみると、

……仲間割れ？　使徒同士の争い？

どうやらレオンハルト軍がいる東側の戦場で、魔人ザビエルの使徒と魔人レオンハルトの使徒が争っているらしい。それが意味するところは、魔人同士の仲間割れだが、自軍にとっての最大のチャンスであった。

……何という僥倖……！　やはり、石丸様は持っておられる……！

天運に愛されたのか、こちらにとってはかなり都合のいい事態だ。月餅は自然と手に力が込もる。

この隙を逃す手はない。使徒が誰もおらず、大将軍も前線に出ている。今なら誰の妨害も受けずにザビエルに注力出来るのだ。これ以上の条件はあり得ない、と月餅は確信する。

……やはり……万が一を考えて、使っておくか……？

これで石丸がザビエルに勝てば何も問題はないが、もし負ければ自軍は一気に敗北へと傾く。ならば保険を掛けて〝あの術〟を詠唱しておくべきか、と考える。

だが月餅はしばしそれを考え、

……いや、まだ早い。石丸様がザビエルに通用するかを見極めてからでも遅くはないはず。

もし負けても石丸を連れて逃げるくらいは自分でも出来る。使うのはその後でもいいのだ。

それにこの術は術者の生命力を大きく削ってしまう。高位悪魔の月餅でさえ、それを使えば長くは生きられないほど危険な術だ。そしてそれを使って魔人一人を削っても、もう一体が残っている。二体目にも使うのはさすがに厳しいだろう。最善を尽くそうとするなら、

……これは最後の、勝利を決めるための切り札、そして敗北を止めるための逆転の一手として使うべきだ。

使わずに済むならそれが理想だが、そう甘くはないだろう。ゆえに覚悟だけはいつでも決めておく。

この戦い、月餅は己の全てを懸けて勝ちに行くと決心した。
あの自らが仕えた王のために。
第三階級悪魔。悪魔界の君主、月餅としてではなく――藤原家参謀の月餅として戦う。それを決めたのだ。
ゆえに軍師として最悪を想定して備えつつも、己の主君の力を信じて今は見守る。誰にも横槍は入れさせない。
……他の者達も石丸様の勝利を信じて戦っておる。なら儂も、それに倣うのみ。
心の指針を決めた途端、湧いてくる力に月餅は内心でむず痒いものを感じながらも、悪くはないとそれを受け入れた。

キナニ平野の西側、ザビエル軍と人類軍、藤原家の主力や源氏武士団の戦いは敵味方入り乱れての乱戦の様相を呈していた。
戦場の中では最も激しい、鮮烈な戦いが繰り広げられる中、その中心で巻き起こる戦いに魔物兵は僅かに士気を上げ、反対に人類軍は僅かに勢いを落としていた。
その戦いの中心は――巨大なクレーター状の窪みが出来ていた。
半径１０メートル程の巨大な大円。だかその円は幾つも重なり合い、少しずつ抉れていき、また周囲に新しい円を大地に作っていく。
その度に鳴り響く火薬が爆発したような轟音と、舞い上がる土飛沫に、人類軍は勢いを削がれていた。
自分たちの将、源頼光と坂上田村麻呂が相手と戦っている。
「っ、くたばれ化け物……!!」
「ぜぇ、はぁ……死なんか馬鹿者めえええええええええ!!」
頼光の持つ刀と、田村麻呂が持つ大刀が敵に振り下ろされる。
この二人は紛れもない強者。人類軍全体でも五本の指に入る実力を持つ達人であり、頼光は剣も槍も扱うことの出来る最強の女性。特に動きの身軽さ、素早さでは敵うものはおらず、戦場では必ず一番に駆けていき、次々に敵を屠っていく姿は正に鬼姫。敵味方両方から恐れられる女傑だ。

一方の坂上田村麻呂も、あの藤原石丸の師であり、かつては最強の称号を持っていた男である。剣の腕もさることながら、その怪力は大木をへし折り、岩を拳で砕く。妖怪や鬼相手に張り合うことが出来る化け物のような老人であり、征夷大将軍に相応しい今なお武士達から尊敬される達人である。

そんな二人であれば魔物を相手にしても負けはない、と武士達は確信していた。

事実、途中まで彼らが率いる武士達、源氏武士団は魔軍を相手に圧倒していた。

魔物大将軍――コウウという魔物が出てくるまでは。

「ったく、どいつもこいつも……」

「ッ！」

「ぐっ！」

頼光と田村麻呂の一撃は、コウウの手に持った長く巨大な槍によって防がれた。

静かな声とともに突き出されたそれは、身長3メートルを越える巨大なコウウの体躯を越えて更に長く、大きい。その槍を難なく振り回すコウウは、人間としては桁違いの怪力を誇る二人の同時の攻撃を防ぎ、特に力を入れた様子もなく息を吐いた。

「俺を舐めてやがんのか？　まったくよぉ――」

その瞬間、コウウは槍を持つ手に力を込めて叫んだ。

「俺をこの程度で……倒せるとでも思ってんのかアアアアアアアアアア――ッ!?」

「――っ！　あぐっ！」

「ぐぅぅ――!?」

二人と鍔迫り合いをしたまま強引に槍を振り回したコウウは、二人を垂直に吹き飛ばし、地面に叩きつける。

だが追撃は終わらず、コウウはその巨体に見合わない動きで跳躍すると、倒れ込んだ味方の武士達の中心にいる頼光達の方に槍を振り上げる。

「っ、急いでわしから離れろ！」

「が、はっ……また来るぞ……！　離れんか貴様ら……！」
頼光が周囲の味方に向かって叫ぶ。田村麻呂が血を吐きながらも何とか立ち上がって周囲の部下を殴りつけて吹き飛ばす。そして数瞬後、コウウは自らの身を空中で捻って回転させる。
大気を切り裂くような回転と、その巨大な力の塊は、コウウの気合いの入った声とともに叩きつけられる。
「くたばれやクソ人間共!!　――大螺旋、業殺槍オオオオオオ!!!」
コウウが地面に着弾した瞬間――地面が大きく破裂した。
爆発したかのような音の震えとともに土飛沫が上空に舞う。コウウ自身が巨大な爆弾の様であり、攻撃の後には巨大なクレーターが出来上がる。
逃げ遅れた武士達を吹き飛ばし、近くにいたものが肉片となり、離れていた者も地面が軽く揺れたことで体勢を軽く崩してしまう。
「あ……あ……！」
揺れで転けてしまったのか、それともコウウの強さに恐れてしまったのか、兵士の何人かが地面に尻餅をついてまごついている間にコウウの槍によって殺されていく。
凄まじい怪力によって振るわれる槍は、人間の脆弱な身体を容易く砕き、破壊する。運良く即死しなかった者も、骨や臓器を砕かれ、瀕死の状態である。
それを淡々と行いながらコウウはしかし、立ち上がる者を見て眉をひそめる。
「っ、ふざけおって……まだ死んでおらんぞ……！　相手をせい……！」
「貴様の相手は朕達二人じゃ……！」
「……まだ生きてんのかよ、面倒くせぇ」
雑魚人間共の癖によぉ、と億劫そうにコウウは言う。源頼光と坂上田村麻呂の二人とコウウの戦いは、終始コウウの優勢であった。
「人間の中では少しは強いかもしれねぇが、俺は最強の大将軍様だ！てめぇら如きが相手になると思ってんじゃねぇぞ！」
と、そう言うコウウの言葉に嘘はない。

魔物大将軍コウウは魔人に匹敵するといわれる魔物大将軍の中でも、特に強さがずば抜けている。
謂わば魔軍における最強の魔物こそがコウウであり、その怪力振りは魔軍でも有名で、戦場に出れば他のどの大将軍よりも活躍し、戦果を出すという男である。
ゆえにコウウは己の能力に絶対の自信を持ち、他の大将軍を下に見ていた。
己が劣るはずはない。自分がこんなに舐められているのはおかしい。
魔物社会は実力が絶対であるはずだ。信じられるのは己の力のみ。ならば最強の魔物である自分が下の立場に甘んじている現状こそがおかしい。
魔人になれば他の多くの魔人すら越えて、四天王や最強の魔人であるレオンハルトにも匹敵する力が手に入るはず、とコウウは思っていた。
そのためにコウウは手柄を欲する。面倒でも戦場であれば手を抜かない。
ゆえにコウウは息も絶え絶えになり、全身がボロボロになった二人を見据えながらも、周囲に聞こえるように声を上げる。
「……ようし、今だてめぇら！　盛り返せ!!」
それは大将軍であるコウウの激励であり、士気を上げるための行動だ。
己が敵の将を追い詰めている時を敢えて狙って、コウウは部下に発破をかける。
「ここで負けたら俺はともかく、ザビエル様に何されるかわかんねぇぜ!?」
「それは……」
「負けたらお前らも俺も、帰る場所はねぇ！　――ならどうすればいいか分かるよなぁ!?」
「……！　おおおおおおおぉぉ!!」
源氏武士団に押されていた魔物兵達がその言葉を受けて士気を上

げる。
「ようし、その調子だ！　こっちには俺が付いてんだ、武士なんざ恐れる必要はねぇぞ!!」
　もう後がない。背水の陣。負けたら終わりだ、という魔物の生存本能を強く刺激され、生き残るために闘争を繰り返す魔物の本能が顔を覗かせた。更には自分たちの将であり、最強の魔物大将軍であるコウウが相手を追い詰めていることを理解し、魔物兵達は勢いを盛り返す。
「くっ、此奴等……！」
「うじゃうじゃとまた湧いてきおって……！」
　殺到する魔物兵に武士達が苦悶の声を漏らす。
　元より個の強さも数でも負けているのが人間だ。武士は百戦錬磨であり、それほど強さに差はないかもしれないが、それでも魔物に勢いが戻ると厳しい。
　序盤こそ、将の強さも合って勢い良く突き進んでいた武士達だが、将同士の戦いで劣勢になると、形勢が傾き始めた。
　それを止めるには、やはり将による打倒しかなく、
「おい糞爺！　動けるか!?　死んでおらんだろうな!?」
「まだまだ元気じゃ戯けェ……！」
　と、言いながらも二人の体力はかなり削られており、先程から息を乱していた。
　原因はやはりコウウの怪力によるダメージである。一撃一撃が重く、技術もあるコウウに苦戦を強いられているのは、二対一とはいえしょうがないとも言えるだろう。
　しかし二人は納得していなかった。魔物大将軍すら倒せないでどうやって魔軍に勝つというのか。相手にはまだ、使徒や魔人も大勢残っている。その魔人の一人と今頃、石丸は決死の戦いを行っているのだ。自分たちが簡単に負けてしまっては、勝利の邪魔になる。
　ゆえに二人は覚悟を決めた。コウウを強く睨み付け、
「貴様はここでぶっ殺す……！」
「斬り殺してやるから覚悟するんじゃな……！」

未だに強気の姿勢を崩さない武士二人に、コウウが再び苛立ちを再熱させた。
「……クソが……女の方は生かしてやろうと思ったが……そんなに死にてぇならミンチにしてやる。――さっさと死にやがれやぁッ!!」
「っ……ここが正念場ぞ!」
「わかっておるわい!」
コウウが槍を頭の上で回転させ、頼光が刀ではなく、槍を構え、田村麻呂は先程と同じ大刀を構える。
破壊の一撃がコウウが放ち、爆音を合図に戦闘は再開された。

……ったく、くそ面倒くせぇ……!
魔物大将軍コウウは、眼前で戦う二人を見て悪態をついた。
手柄欲しさと戦局の打破も兼ねてまとめて相手をしたのはいいが、人間としてはかなり強いほうであり、思ったよりもしぶとくて面倒くさい。
それでも己の強さに敵うはずもなく、圧倒は出来ているのだが、今は女の方が防御主体の戦い方に変えたようで余計に面倒になった。
こちらの攻撃の初動を見切ることに終始し、槍を振ろうとしたところで柄に槍を当てて出掛かりを潰すか、穂先で受け流すかの二択しかない。
しかし防御しかしない相手であれば怖くはない。戦闘には、〝読み合い〟という重要な要素がある。
攻撃しかしてこない相手も防御しかしてこない相手も読みやすく、読まれないためにはその行動の中に反撃や迎撃の用意を散りばめなければならない。
迎撃がこないのならそこに集中する必要はない。しかし攻撃はどうやらもう一方、爺の方が担当しているようで目を離せない。
読まれてもどうしようもない攻撃が出来るほど実力に差があればどうにでも出来るし、魔人のように防御を考えなくても無敵結界という絶対の盾があれば強引に突破することも出来る。

だが遺憾な事に、
……クソッタレが……！　技術だけはいっちょ前か……!?
この人間達の動きは洗練されており、力押しの突破ではギリギリのところで避けられてしまう。先程から何度も吹き飛ばし、攻撃を放っても致命傷を与えられない理由がこれだ。実力、地力ともにこちらの方が圧倒的に上のはずなのに、決めきれない。ゆえに時間が掛かってしまう。
さっさと死ね、と殺意を込めて槍を振るうも再び避けられたところで、コウウは一つ違和感に気づいた。
それは目の前の二人の事ではなく、
……？　兵の動きがぎこちねぇな。何だ……？
戦いに参加してくる一部の兵が微妙にそわそわとしている。その様子が解せなかった。
武士に押されて動揺しているわけではない。先程、発破をかけてやったので士気自体は回復しているのだ。
ならばこのよく解らない気味の悪さは何だ？　とコウウは気持ち悪さを感じる。
嫌な予感、と言い換えても言い。大将軍としての勘が警鐘を鳴らしている。
まるで自分の預かり知らない何かが起こっているような、何かマズいことが起きる前触れのような――そんな気持ち悪さだ。
……一応、早めに終わらせるか……！
そう思い、攻撃を激しくする。結局コウウは前線で戦っているのが災いし、戦場のあちこちで起こっている事態に気が付けなかった。

キャロルＶＳ煉獄

キナニ平野東部の草原地帯。
レオンハルト軍の魔物兵が遠巻きに離れながらも南側を向くその中心に、一つの点が突っ走った。
それは巨大な魔法鉄球だった。白の大男の持つ巨大な銃砲から放たれたそれは、火薬の炸裂音とともに金色の髪の女に向かって放たれ、
「――！」
しかし、外れた。魔法鉄球は背後の魔物兵の群れに向かって飛んでいき、地面に着弾して草と土が弾けて舞う。女の方は男に対して水平に走りながらも右手の銃の引き金を引く。
銃弾が大男が首を振る前の宙を撃ち抜いた。致命傷狙い（ヘッドショット）。それを数発、連射するように狙った女は、再び発射される魔法鉄球に回避を余儀なくされる。
横っ飛びするように回避した女は大男の持つ銃を見て感心するように視線を向け、
「煉獄さんのそれ。随分と大掛かりですわね。撃つのも一苦労なのでは？」
「そういうお前さんのは随分と小さいな。狙いは大したもんだが……でも俺のハニワ砲とは相性が悪いだろう？」
それはそうかもしれない、とキャロルは思う。
こちらの銃は使徒になった際に最初から付いてきたものであり、キャロルの手に馴染む上に弾は無限だ。自身の腕前も合わせてそれなりに脅威を与えられる武器であると確信している。
しかし煉獄のそれはキャロルの銃の数倍の口径を持つ巨大な銃であり、筒の中からは人間の頭程もある魔法鉄球が射出される。
それほどの物を打ち出す機構――など詳しいことは解らないが、キャロルにはその原理に心当たりがあった。それは名前と関係のある火薬のことだ。それは、
「ハニワ砲――つまり、ぷちハニーの爆発の反動を利用して撃ち出す

ものですわね」
「……ほう？　詳しいじゃないか」
　それほどでも、と言う。ですが、
「それほど反動の大きなものとなると、普通であれば反動で腕が折れるどころかもげたりして悲惨な感じになりそうですが……煉獄さんは大丈夫そうですの」
「ふっ、確かに、人間が使えば即死だろうな。……だが、自分にとってはこれが馴染む」
「そのようですわね」
　再度の射撃。自分のいるところを狙って放たれた魔法鉄球を躱しながら得心する。使徒。それも煉獄ほどの大男、怪力を持ってすればその重すぎる銃も、凄まじい反動も問題ないと、そういうことだ。
　加えて魔法鉄球の存在を考えると、魔法力も必要であり、煉獄はその手の能力もあることが窺える。さすがは魔人四天王に名を連ねるほどの上級魔人の使徒だ。素直に凄いと思う。
　だが、キャロルは己も負けてはいない、と自信を持って言葉を作る。
「確かに、こちらの弾が弾かれるのは遺憾ですわ。威力が高いのも認めましょう。それを難なく扱える技量も。さすがはザビエル様の優秀と名高き使徒だと褒めてさしあげますわ！」
「……だったらどうする？　大人しく捕まってくれるのか？」
　いえ、とキャロルはそれを素気なく突っ撥ねる。
　煉獄も期待はしていなかったのだろう、だよな、と軽く頷きを入れた。
「ならさっさと倒れてもらいたいな。お前でこれだけ時間が掛かるとなると、先が思いやられる」
「……それはわたくしを侮っているということですの？　それは遺憾ですわ！　抗議文送りつけますわよ！」
　ムッとして騒がしくなるキャロルに、煉獄は鼻を鳴らして後者の戯れを無視する。しかし前者の言葉に応えるように、右の頬を白い大きな指で拭い、
「まあそうだな。舐めていたのは事実だ。実際、我々で誰を狙うか相

談した時も、お前は一番捕まえるのが容易だという結論が出た」
「異議あり！　その判断に異議を申し立てますわっ！」
「……だが――」
と、煉獄は拭った指を見て思わず苦笑する。
そこには己の血で赤くそまった指があり、
「どうにも俺達全員、お前の事を侮りすぎてたらしい。……考えてみれば納得だ。レオンハルト様の使徒の中では一番弱いと言っても、俺達と比べて強いか弱いかはまた別の話だ」
「一番弱っ――弱くありませんわ！　わたくしは魔物界一の完璧使徒！　いずれは七星もハンティさんもペールさんも七星も越えてみせますのよ！」
「……何故七星を二回……？　何か意味があるのか」
「意味なんてありませんわ！　気分ですの！」
「……とにかく、見誤っていたのは認めよう」
キャロルの言葉に付き合うと頭が痛くなるのを察してか、煉獄がスルーして話を戻す。
「だがザビエル様のためにもお前は捕らえさせてもらう。手加減が難しいとなると、綺麗に捕らえるのは難しくなるが……悪く思わないでくれよ？」
不敵な笑みを浮かべた煉獄は、口では悪いと言いつつも、そう思ってないような様子で言った。
だがキャロルはそれを気にすることはなく、銃を握っていない左手を軍服の内側に入れつつ言う。
「ふふん、先程も言いましたが、このわたくしに迫るその銃の腕前、見事と褒めてあげましょう」
ですが、とキャロルは内側から一発の銃弾を取り出しながら言う。
「わたくしに銃で勝負を挑んだこと――――後悔させてあげますわ」
と、キャロルはその茶色に加工された銃弾を銃に込めた。そして、銃口を煉獄に向けて引き金を引く。
「今更その程度で――！」
発砲音とともに飛んでくるキャロルの銃弾に対し、煉獄も同じ軌道

でハニワ砲を放つ。魔法鉄球はキャロルの銃弾を弾き飛ばし、そのままキャロル目掛けて飛んでいくと思った。
だが、
「――――」
煉獄は眼前で起こった結果に驚愕と、腕で身を護ることになった。
魔法鉄球が銃弾と接触した瞬間、
「これは……!?」
銃弾が爆発したのだ。
それは煉獄にも憶えのあるものであり、
「ふふん、憶えがあるでしょうが教えて差し上げますわ」
その答えを、キャロルは得意気に口にした。
それは、
「――――ぷちハニー弾ですの！」

馬鹿な、と煉獄はその事実を内心で否定した。何故なら、
……ぷちハニーを銃弾に加工した？　一体どうやって……！
ぷちハニーとはそれほどに危険な代物である。少しの衝撃で爆発してしまうぷちハニーは、煉獄もハニワ砲を使う際に気を使う部分であり、暴発の可能性だってある。
そのぷちハニーを、爆発させないように銃弾の形に加工するというのは、魔法や技術に詳しくない煉獄であっても不可能に思えた。
何より、衝撃を加えた段階で爆発するのなら、引き金を引いた時点で爆発するはずである。
それがないというのはどういうからくりかと、煉獄はキャロルに警戒しながら思考する。
だがややあって、キャロルはさらに得意気に話し始めた。
「どうですの？　このガウガウさんとハンティさん特製のぷちハニー弾。ぷちハニーを愛用するわたくしのためにレオンハルト様が頼んで作って下さった逸品ですわ」
お披露目するのは煉獄さんで二番目です、とキャロルはその詳細を

自ら口にした。
だが製法までは解らない。それに解ったとしても今は重要ではない。
大事なのは、相手がぷちハニー弾という新しい武器によって、こちらを越えかねない攻撃力を得たという点だ。
最早油断は出来ない、と煉獄は緊張を露わにするも、あることに気がついて再び表情を笑みに戻す。
「……その弾、数はどれほどある？」
「はい？」
「それほどの物であれば数はそう多くないのだろう？　ただでさえ、ぷちハニーは貴重品だ」
そう、ぷちハニーというのは結構な貴重品であり、時折流れてくるものを行商から買うなどして手に入れるしかない。安定した供給先は無く、しかも高価だと聞いている。それほどの物が多くあるとは思えない、と煉獄は考えた。
己の持つハニワ砲も、使徒になる際に身についた魔法具でなければ、おいそれと使えない代物に成り下がっていただろう。
ゆえに煉獄は問いを投げ掛けながらもほくそ笑み、戦術を確かにする。あって数発、数十発なら、それを避けきればこちらの有利に戻るのだ。ならばしばらくは回避に専念しようと、
「……ええっと、多分――――１０００発はありますわ」
「――は？」
煉獄はキャロルの耳を疑う発言に、対峙してる最中だというのに思わず唖然とした。
だが、ややあってそれを何とか脳に落とし込むと、聞き間違いかと思いもう一度問う。
「……今、なんと――」
「あ、でも帰ったら倉庫に１万発くらいはあると思いますの！」
「……１万……」
今の爆発弾が１万……と、煉獄は聞き間違いでなかったことに口の端が引き攣る。だが冷静になってじりじりと距離を取りながら、キャ

ロルに向かって聞く。それは、
「……それほどのぷちハニーを、一体どこで……？」
「あら、知りませんの？　結構有名だと思ってましたわ」
と、キャロルは懐から一枚のカードを取り出し、煉獄に向かって投げる。
攻撃かと警戒した煉獄であったが、少し前の地面に刺さったことで爆発はしないことに安堵しながらそれを拾い上げる。
カードは名刺のようであった。その表面には、
「……〝キリング商会御用達、ぷちハニー専門卸業者、B＆P〟……まさか……」
煉獄は嫌な予感がしつつ、疑問の視線をキャロルに向ける。
主に言われてレオンハルトを探っていた際、幾つか怪しいところがあったのを思い出す。
キリング商会とは、レオンハルトが運営している疑いのある商会であったはずだ、とも。
そしてキャロルは胸を張って、煉獄のその疑問に答える。
「ぷちハニーを卸している業者さんとわたくしはお友達ですの。なので、ぷちハニーは沢山持ってますわ！」
と、キャロルは懐から大量のぷちハニー弾と、普通のぷちハニーを大量に詰めた袋を軍服の裾や内側から取り出してみせる。思わず引き気味でそれを見ていると、キャロルはそれを銃に込め始め、
「外からの衝撃で爆発しないように魔法具だったり魔法を掛けたりで大変ですが……やっぱりぷちハニーって良いですわー。煉獄さんも、そう思いますわよね？」
「……ああ、そうだな……」
頷きながらも、煉獄はキャロルの腕を注視し続ける。警戒度というか危険度が一気に跳ね上がったのだ。
一発、二発程度食らったところで死にはしないが、あれだけの量を食らえば木っ端微塵になってもおかしくはない。直ぐ様動けるように行動に注意する。
……銃が一丁しかないのが救いだな。どうにかそれを潜り抜けて

……。
と、煉獄が対処法を考えていると、キャロルは楽しそうに銃を構え、
「ふんふーん――と、忘れてましたわ」
危ない危ない、とキャロルは左手を軍服の内側に突っ込む。そしてそこから出てきた物を見て――煉獄は更に顔を引き攣らせた。
「――新しく作ってもらった回転式拳銃（リボルバー）！　これを装備することでリボルバー☆キャロルに変身ですの！　銃が二丁で攻撃力も二倍ですわー！」
「――――」
銃をぐるぐると指で回しながら格好つけたポーズを取るキャロルに、煉獄は笑えなかった。
「さあ、試し撃ちのお時間ですわ！」
「！　やめ――」
思わず制止を呼びかけた瞬間だ。
「ファイアー!!」
キャロルの高い声とともに撃鉄が落ち、こちらの地面が抉れて爆発した。

大陸の地下深くにある場所。
その名は〝奈落〟。
とある魔人の住処であるそこでは、その魔人の使徒である二体の幽霊が、何故か高級葉巻とワイングラスを手にして、ふよふよと浮きながら話をしていた。
「ふっ、今月もぷちハニーで荒稼ぎだったね。第二使徒のピット君？」
「ふっ、そうだな。おかげで色んな物が買えそうだ、第二使徒のブラッド君？」
「――朽ち果てろピット!!」
「――くたばれブラッド!!」
急に葉巻もワイングラスも捨てて、殴り合いを始めた二体の使徒の名前はブラッドとピット。

元ゴーストハニーの使徒であり、魔法無効の上に、物理に耐性を持つという厄介な使徒であり、ぷちハニー卸業者、Ｂ＆Ｐという商会の会長であった。
世間で偶に流れるぷちハニーの殆どは、この二体が収穫し、仲介業者を介して人知れず世間に流しているのである。そのおかげで割とうっはうはな生活を送っており、順風満帆な二体であった。
「それにしても、キャロルさんは毎度のことだけど、今回は特に大量に買っていきましたね、ピット」
「あれほど仕入れて何に使うんでしょうか……まあ儲けられていいのですがね、ブラッド」
「本当に、お客様は神様だな……」
「というか、キャロル様が神様だな……」
昔から贔屓にしてくれる二体の共通の友人に、ブラッドとピットはほくほく顔で頷き合う。
「お、そろそろ収穫の時間ではないかね？　ピット」
「同時に仕入れの時間でもある。分担してこなそうか、ブラッド」
そう言って、二体の使徒は主の元へと向かっていった。

煉獄が身を投げ出すように回避したところで、キャロルは爆発の程度に満足しつつ彼を追いかけた。
「エークセレントッ！　良い爆発ですわ！」
やはりぷちハニーはいい、とキャロルは新兵器の完成度の高さに喜ぶ。
レオンハルト様と同じ剣を使えないのは難点だが、そちらはまだまだ腕前も足りてないので使うわけにはいかない。ゆえに得意な銃で戦うのは理に適っているし、キャロルとしても馴染むものだ。
それにぷちハニーというキャロルが常備しているアイテムを加工して撃てるようになったのもキャロルとしては嬉しい限りだ。
……ブラッドさんとピットさんには感謝ですわ！
内心で感謝を伝える。ぷちハニーは思い出深い物なのだ。後で手

紙でも送ろうと思う。金一封と女性の写真で良かったはずだ。
それに研究、加工を担当したガウガウやハンティにも感謝だ。今度一緒に試し打ちが出来るように迷宮にでも誘おうと思う。何しろ新武器は色々とあるのだ。全て自分のための武器である。
……それもこれも、レオンハルト様のおかげですわね！
やはりレオンハルト様に感謝しなければ、と思う。そのためにも、目の前の使徒を殺害、あるいは戦闘不能にしなければならないので、
「こぉら！　逃げるな、ですのー！」
「っ……！」
ぷちハニー弾が込められた銃を逃げる煉獄目掛けて連射する。
躱されるのは嫌だが、銃を連射する快感は堪らないものがある、とキャロルは煉獄を追い続ける。
だが連射を続けていると当然、
「あら、弾切れですの」
「――しめたぞ……！」
と、弾切れを起こしたこちらに対し、反転して距離を詰めようとしてくる煉獄。その際にハニワ砲による砲撃もセットで行われ、キャロルは横っ飛びで草むらを転がりつつ身を起こし、
「隙はありませんわよ、お馬鹿さん！」
「何――ぐあっ!?」
右手の銃を近くの地面目掛けて発砲し、煉獄の額を掠める。やはり狙いを付けるのが難しい。
その正体に、煉獄は直ぐに気がついたようで、額を血で染めながら憤ったような声を飛ばしてくる。
「跳弾か……!?」
「正解ですわ！　そしてその間に――」
右手の銃は使徒化の際に得たもので、弾を込めずとも無限に弾が撃てる銃だ。弾を込めることも出来る、というだけ。
その銃で煉獄を牽制、地面の小石や、僅かな起伏を狙って攻撃しつつ、右手の回転式拳銃を右手一本で弾を込める。
「わたくしのリロードはレボリューションですわ！」

リロードは素早く正確に。銃を扱う際に自然と憶えた技術を使って、片手でぷちハニー弾のリロードを終えると、再び引き金を引いて連射。
弾幕と、爆発物によって近づけず、リロードの隙を突くことも難しく、逃げることを余儀なくされた煉獄にキャロルは得意気な顔で告げてみせる。
「既にわたくしと煉獄さんの戦いは、わたくしの一方的な狩りに変わってましてよ！」
「っ……舐めるな……！」
煉獄が爆風に耐えながらもハニワ砲を発射してみせる。魔法鉄球がこちらの顔を目掛けて放たれる中、キャロルはそれを余裕を持って首だけで避ける。
「……!?」
「煉獄さん、もう貴方の射線は見切りましたわ！」
と、右手で自慢の金髪をかき上げつつ、左手の銃を煉獄に突きつける。告げるのは勝利宣言だ。
「わたくしに銃で挑んだのが運の尽きですのよ!!」
弾幕を張って煉獄の逃げ場を無くす。既に煉獄に勝ち目はない、と戦術に長けたキャロルは見ていた。
ハニワ砲はこちらに通用せず、ぷちハニーの爆風や、銃弾が身体を掠めたことでそれなりの傷を負っている。対するこちらは無傷。完全試合だ。ゆえに勝ちを告げるとともに煉獄を見据えたが、
「……なるほど、強いな」
不意に煉獄が、称賛の言葉とともにハニワ砲を地面に投げ捨てた。
勝負を諦めたか、とキャロルは思ったが、彼の表情自体は、笑みを浮かべており、
「……仕方ない。お前が強いのは認めるとして――――〝本気〟を出すとするか」
「何を……」
軽く息を吐いた煉獄を最後に、ぷちハニー弾の直撃を受けた煉獄が爆風で見えなくなる。

勝利だ、と一瞬判断しかけ――しかしキャロルは煙の中に見える影に警戒を強めて後ろに下がる。
「！　何ですの、その姿⁉」
「……避けられたか」
その直後、煙の中から巨大な何かが先程までキャロルがいた地面を叩く。
煙が張れ、爆発で剥き出しになった大地の上に居たのは、人形の白い大男ではなく――獣だった。
白い体毛を持ち、四足で大地を踏みしめる巨大な獣。長く大きな二本の牙を持つ獣は、キャロルを見据えて先程までと似た声で言う。
「これが俺の――いや、俺らの、真の姿だ」
煉獄であった男は、その姿を指して言う。
「俺の本当の名前は――――白虎。ザビエル様の使徒、白虎だ」
「……偽名でしたの？」
「……ズレた質問だが……そういうことになるな。俺達、四体のザビエル様の使徒には真の姿があってな」
白虎はそれを口にする。即ち、
「白虎、朱雀、青龍、玄武――俺はその内の白虎ってわけだ」
つーわけで、と白虎は四足で地面に力を込め、
「ここからが本当の勝負だ……！　狩りだと言うなら狩ってみせろ！」
「……上等ですわ！　やってやりますの！」
使徒同士の対決、使徒キャロルと使徒煉獄。
キャロルの圧勝で終わると思われた対決は、煉獄が白虎へと姿を変えて、第二ラウンドが始まった。

ペールＶＳ魔導

人類軍。南側に布陣する藤原家の本陣では、幾つもの報告が上がっているところであった。

「――同士討ちが起こっている、でありますか……」

「は、どうやらそのようで」

本陣にて全軍の指揮を行う着流しの男。藤原四天王の一人である菅原ミッチーは、戦場から送られる伝令から、次々に上がってきた報告に訝しむような声で呟いた。

眼の前の机の上に広げられた戦場の地図。それを見ながら、ミッチーは落ち着くために煙管を吹いて顎に手を当てる。

「魔人の使徒達による仲間割れ……それが本当ならこれ以上とないチャンスでありますが……」

と、口では言いながらも、それは本当のことだろうとミッチーは確信する。

何故なら、ちょうど戦場の、相手方の動きがおかしいと睨み、何が原因かを探っているところであったのだ。特に東部、魔人レオンハルトの軍勢において動揺は激しい。

また西側のザビエル軍でも、隠密から藤原石丸が魔人ザビエルとの交戦に入ったという情報がもたらされた。それに対して、使徒の邪魔が一切入らないことも、情報の裏付けとなる。魔人ザビエルが一騎打ちを受けるような真摯さを持っている可能性も無くはないが、使徒との交戦が全くないことも、使徒が仲間割れを行っているというなら不思議ではない。

ならば今こそが千載一遇の好機である、とミッチーは息を呑む。

石丸が何の障害も無くザビエルと戦えるだけではなく、ザビエル軍とレオンハルト軍、ともに攻勢のチャンスだ。兵が動揺しており、こちらの勢いもある今の内に出来る限り数を減らすのが良いだろう。

前線で戦っている魔物大将軍コウウや、未だ何の動きも見せない魔人レオンハルトという不安要素もあるが今はとにかく攻める時だ。

「……作戦は変えず、今のまま押してしまうのが吉でありましょう」

「はっ、では伝令は――」
「石丸様や、前線に出てる黒部殿や頼光殿らの結果が分かるまでは今のままですなぁ。ただ、今こそが好機である、とだけ伝えれば石丸様の方に問題が無かったことは伝わるでしょう」
ではそのように、と伝令役の武士が前線へと向かっていった。
どの道、長引けばこちらの不利であることは明白であり、誰かが負けてしまえば今度はこちらが追い立てられる側になってしまう。
勿論、こちらの将が敵の将を狩る――特に、石丸が勝てば一気に勝利も見えてくるが、負けた時のことも考えなければならない。そのときのために、今の内に出来るだけ敵の数を減らさなければならないのだ。
……それにしても魔人同士で、しかも戦争中に仲間割れでありますか……。
どうやら魔軍側、魔人同士は一枚岩ではないらしい。四天王と魔人筆頭という高位の、人間でいう権力者なのだから多少はそういうのもあると想像していたが……やはり不仲であったりするのだろうか。
何にせよ、今はそのおかげでこちらの優勢。攻め立てる戦略は変えず、今は石丸達の勝利を願うのみであった。

「どうにも騒がしくなってきましたねー」
と、自身の薄紫色の長い髪を指でくるくると弄りながら、ペールは南側を見て呟いた。
南側。その奥は人類軍と戦っている最前線であり、そのうちこちらまで到達してもおかしくない。向こうの指揮官がこの騒ぎを察知したのなら尚更、激しく攻め立てようとするだろう。
なので騒ぎは早めに終わらせるに限る。ゆえにペールは髪を弄っていた左手とは逆側の右手を軽く上げ、周囲の魔法魔物兵、魔素漢の兵士達に命じた。
「はい。じゃあ一斉射撃」
「はっ！　撃て――!!」

右手の振り下ろしと同時に、配下の魔物将軍の指示も受け、魔物兵達が一斉に魔法を顔デカの男に向かって放つ。顔デカの不細工男は、何やらファンシーな半透明の獣と応戦していた。それはペールが呼び出した幻獣であり、通常の攻撃を一切通さない厄介な性質を持つ生き物。ゆえに魔法魔物兵らの魔法は幻獣をすり抜けて顔デカ不細工男に激突し、吹き飛ぶ。

ついでにペールも軽い調子で、〝白色破壊光線〟を放ち、白光の奔流が顔デカの男に直撃する。更に吹き飛ぶ男は何とか直撃は避けたのだろう、しかし幾つもの魔法でボロボロになって怒声を放つ。

「ずずずずずるいだす……！　ひ、卑怯だすよ！　何で周囲の兵士まで……！」

魔人ザビエルの使徒、魔導にしてみればこの状況は少し予想外であった。ゆえに言葉をぶつけるも、ペールはそれを受けて軽く小馬鹿にするように嘲り笑う。

「はぁ？　魔導さん馬鹿なんじゃないですかぁー？　正面からこっちの軍に乗り込んできて裏切り宣言なんてされたら、部下に命じて全員で攻撃するに決まってるじゃないですか。ねぇ、魔物将軍？」

「……まあ、そうですな」

「ぐ、ぐぬぬぬ……」

ペールの煽りに静かに魔物将軍が同意する。魔導も、少し考えれば想像の範疇であったことを心の中では認めているのか、顔を赤くし、悔しそうに歯噛みしている。それを見て、ペールは指を頬に当てて首を傾げながら煽りを続ける。

「あれ～？　魔人ザビエルの参謀として名高い魔導さんがそんなことにも気づかなかったんですかー？」

「うう……！」

「そりゃあまあ頭使うのは得意でも、意外と好戦的でノリの良いキャロル先輩や、あれで結構熱いところのある始祖さ――……ハンティ先輩とかなら一対一で相手してくれるかもしれませんけどー……私的には別に魔導さんと戦いたくないどころか関わりたくもないし、さっさと仕事に戻りたいので一対一を受ける義理はありませんよねー？」

まあもっとも、一対一で戦ったところで負けませんがね、とペールは魔導をこれ以上ないくらいに煽り倒す。頭に血を上らせ冷静さを失わせるためだ。

それにまんまと引っかかっている魔導は傷つきながらも怒りの形相でペールを睨む。

「き、きききき貴様……許さんだす……！」

「はいはい、負け惜しみお疲れ様ですぅ～。不細工な上に弱くて頭も悪いとかほんと救えないですねぇ。可愛い上に強くて頭の良い私とは生き物としての格が違いますよねー。――てなわけで、発射用意お願いしまーす」

「は、はっ！　詠唱開始！」

ペールの煽りに魔物兵も圧倒されながらも命令に従って詠唱を開始する魔物兵達。それを満足そうに笑顔を浮かべながら、ペールは視界に映る魔導のことではなく別の事を考えていた。それは、

……他は大丈夫ですかねー……？

戦場の他の場所にいるキャロルやハンティ、それと別の人達を心配する。

負けるとは思っていないが、それでも心配なものは心配だ。色々と煽りはしたが、この魔導は使徒の中では優秀な方だし、魔法の腕自体はこちらより上だろう、とペールは見ていた。

こうやって圧倒出来ているのは単純な力量差や数の暴力で何とか出来るためであり、補助に回られると厳しかっただろう。直接戦闘であればこちらの方が優れていたというだけに過ぎない。

それを考えると、己は相性も良かったが、他の者達は客観的に見て不安要素がある。

キャロルは相手との力量差自体はそれほどないだろうし、ハンティに至っては相手は十中八九、あの戯骸だろう。ハンティの強さはペールも知っているし、負けることも捕らえられることもあり得ないはずだが、戯骸も中々に侮れないのだ。

……どうしましょうねぇ。終わったら他の手助けに回るか、普通に人間の相手をするか……。

困った時は誰かに相談してみよう、とペールは傍らの魔物将軍に声を掛けた。
「魔物将軍？　これが終わったら襲われているであろう他の人の手助けに行くか、人間を相手にするか、どっちがいいと思います？」
「む……そうですな。やはり、人間共を倒すのが先決かと……他の使徒の方々もペール様のようにお強いですし、こちらが向かう頃には終わっている可能性もあります」
「おっ、魔物将軍ってば褒めるのが上手ですねぇ。――それなら終わったら人間を駆逐していきますか」
はっ、とそれを改めて了承した魔物将軍にペールはそれをあっさりと受け入れる。
人間という種に情を持っているハンティと違って、ペールの人間への想いはとてもフラットだ。普通に仲良く出来るし、人間というだけで嫌悪を抱いたりもしない。
だが命令されれば――いや、命令されてなくても人間を傷つけることに躊躇いの気持ちはあまりない。魔軍を率いて人間を殺すことも、己の手で殺すことも容易に出来る。
それは昔、カラーの長だった時代に人間と戦ってきたからというのもあるだろう。カラーにとって人間の――特に男は恋愛対象でもあるが、同時に外敵でもあるのだ。長になってそのことを痛感したのも今では懐かしい。
なので自分は、ハンティよりもキャロルに近いのだろうと思う。もっとも、キャロルほど何とも思っていないわけではないが。
それに人間は己が主であり愛するレオンハルト様の元の種族であるのだ。それに対する配慮は気をつけている。城にも人間のメイドやペールの個人的な友人は多いので、やはりフラットだな、と思う。
使徒に対してもそう。基本的に仲は良いが、嫌いな人は嫌いだというだけのこと。なのでペールは、眼前の魔導を見据えて軽い気持ちで魔法を発動した。
「〝白色破壊光線〟――っと」
「撃てぇ――!!」

己の魔法と同時に、周囲の魔法魔物兵や魔素漢らの魔法が魔導に殺到する。放ったところで、死なれたら困るな、と思うも、あのザビエルの使徒ならさすがに消し炭にはならないだろうし生き残りはするだろう。

魔法は不可避。一度放たれたら躱すことは出来ない。ゆえに、

「――――」

当たった。魔法光の爆発を見て、ペールは思う。

……終わり、かな。

と、これで一つの仕事が終わったと軽く息を入れる。魔物将軍に命令しようとしたところで、ペールは声を聞いた。

「――ここここここからが、ほ、本気の本気だすよ……！」

「っ!?」

そのどもったような気持ち悪い声は、魔導のものであった。

煙の中から現れた巨大な怪物を見て、己も周囲の魔物兵達も騒然とする。

……何あれ……？

そこにいたのは、象と亀を足したような怪物だ。

正体を口にしたのはその怪物本人であった。

「これが真の姿――――玄武だす……！」

「玄武……？　魔導さんの正体がこれだったと……」

その巨体に圧倒されたのは、己よりも周囲の兵達だ。その動揺を抑えながら魔物隊長達が魔物将軍とこちらに指示を求める。

「ど、どうします……？」

「……うーん。まあ大きくて硬そうですけど、先程と同じように魔法を撃ちまくってください。的が大きくなって狙いやすいですね」

「……畏まりました。総員、詠唱開始！」

「……幻獣ちゃんの攻撃はあまり効きそうにないですね。――戻ってきていいですよー」

と、玄武に攻撃を仕掛けていた幻獣をこちらに呼び戻しながら考える。大きくなったとはいえ、あの程度なら普通に倒せなくもなさそうだが、見た目通り耐久力が高そうではある。

……正直、あまり時間を掛けたくないんですよね。うーん、ここはまず搦め手でいきますか。
方針を新たに決めたところで、ペールはカラー特有の術の準備を始める。前髪で隠れていた青のクリスタルが輝く中、ペールは杖を玄武に向けて、
「――〝暗闇モルルン〟」
呪いを掛けた。
その直後、玄武の動きが散漫なものになる。
「な、ななな何が起こってるだす!? ま、前が見えないだすよ……!?」
辺りを探るようにふらふらと足を進め始めた玄武に、己の呪いがなったとほっとするペール。
しかしそれを見ていた魔物将軍は、疑問符を頭に浮かべて尋ねてきた。
「ペール様。あれはいったい……？」
「えっと、あれはカラー特有の呪いですねー。とりあえず、目が見えなくなる呪いを掛けました」
ほら、自分の元種族カラーなんで、と言うと魔物将軍は得心したのか覚束ない足取りの玄武を見て息を呑んだ。
モルルンというカラーだけが使うことの出来る呪いは、カラーの集落を防衛する上ではお世話になった力だ。主にカラーが死んだ際に使われるものが有名ではあるが、モルルンの種類は豊富であり、中にはペールでも相当の準備と時間を掛けないと使えない高難度の呪いもある。
暗闇モルルンはその名の通り、対象の視界を暗闇にして視界を封じるための呪いだ。単純ではあるが強力であり、個人戦であれば重宝する。もっとも、
……効かなかったり、効いても意味なかったりする場合もありますけど、どうやら大丈夫みたいですね。
玄武はふらふらとしたまま周囲をところかまわず踏み潰しており、暴れてはいるものの、それは暗闇が効いている証拠だ。呪いを解こうとする動きもないので、やはり相性が良いとペールは自分の運の良さ

に感謝する。人形の、魔法に長けた魔導であれば呪いを解けても不思議ではないため念の為隠していたが、どうやらその心配も無さそうだ。
と、そうこうしている間に魔物兵達の詠唱が完了する。なのでペールも同じ様に魔法を発動し、
「――うあああああああっ!?」
玄武を攻撃する。痛みを感じているのだろう。情けない悲鳴を上げる玄武に、ペールは若干拍子抜けしたように息をつく。このまま続けてるだけで倒せそうだな、と再び詠唱を始めさせたところで、
「――た、大変です！」
と、こちらに向かって走ってくる魔物兵を見て、ペールは魔物将軍とともに眉をひそめた。魔物将軍が落ち着いた声で対応する。
「どうした、何かあったのか？」
「は、はい！　その、とんでもない化け物が前線を無理矢理突破して――ひっ、来たぁ!?」
何かに怯えるように魔物兵が声を上げるとほぼ同時、南側を張っていた魔物兵達が吹き飛んだ。
玄武のものではない。しかし、それを引き起こしたのは同じ黒色の化け物で、
「おらぁ！　次にズタズタに引き裂かれたい奴は誰だ!?」
鋭い爪と牙を覗かせて言う化け物に、ペールは目を剥いた。
……黒くて大きい犬!?
なぜ犬が……と思うもよく見ればそれは報告にあった妖怪であった。報告通り、前線を無理矢理突破してきたのだろう。他に供はいない。
相手をしなければならないが、どうするべきか、と思考を回しているとその妖怪に反応した者がいた。
「む、そそそその声、誰だすか!?」
「！　何だ、強そうな魔物もいるじゃねぇか……！　テメェがこの部隊の親玉か!?」
などと妖怪が玄武と対峙する。それを見て、ペールは悪い笑みを浮

かべた。
「ちゃーんす……♪　――魔物将軍、私に合わせてください」
「え……一体何を……？」
　いいからいいから、とペールは声を張り上げて妖怪に聞こえるように言う。
「きゃーーー！　なんて恐ろしい妖怪！　私達ではとても敵いませんよーーーう！」
「……は？」
「……何だ？」
　魔物将軍も妖怪も同じ様に何が起こったのか理解出来ずにペールを見て疑問符を浮かべる。
　だが構わずペールは続け、
「こうなったら――玄武様！　大将のあなたが出るしかありませんよう！」
「は、は？　な、ななにを言ってるだす!?　何が起こってるだす!?」
「そこの妖怪さん！　私達の大将、玄武様が貴方との一騎打ちを挑むそうです！」
「……何だと？」
　妖怪がそれに反応した。この時点で、魔物将軍はペールの狙いに気づいて、微妙な声を出した。
「あー……なるほど、そういうことですか。……汚いですね」
「何か言いましたかー？」
「……いえ、何でも。――おお、玄武様が一騎打ちを為されるそうだぞ！　皆で応援せねば！」
　ペールの笑顔の圧力に負けて、魔物将軍も演技に参加する。要は玄武とこの強そうな妖怪を戦わせて一挙両得を狙おうということだ。
　どっちが勝ってもペールとレオンハルト軍には得しかない。その策が有用であると認めて魔物将軍らが続き、魔物隊長らも遅れて気づく。
　気が付けば周囲の魔物兵からも玄武コールが始まっており、
「な、なんだす!?　いいい一騎打ちとはどういう――」

「さあそこの妖怪さん！　玄武様との一騎打ちを受けますか!?」
　玄武の前に出てその声に被せるようにペールが指を妖怪に突きつける。それを見た妖怪は、ややあって、
「……よく分かんねぇが、一騎打ちだって言うなら受けねぇ理由はねぇな。――この妖怪王黒部が相手になってやらぁ！」
「はい！　成立！　成立しましたよう！　――では両者、構え！」
　有無を言わさず仕切り始めたペールに、戸惑いながらも黒部は戦闘態勢を取る。玄武は未だ暗闇モルルンの効果で状況を理解できずにふらふらとしていたが、
「こ、こここうなったら全員殺してやるだすよ！　み、見えないなら、音の方向に攻撃すればいいだす……！」
「はい、バトルスタート！　お互いに存分に戦っちゃってください!!」
「おおおおぉぉ!!」
　開始の宣言を受けて黒部が玄武に吶喊していく。
　その声に反応した玄武が黒部の方向を向いたところで、ペールは魔物将軍の元まで戻り、ひそひそと、
「……では、あの黒部とかいう妖怪が勝ったら玄武さんを連れて一旦撤収。玄武さんが勝ったらその瞬間に一斉に襲いかかって玄武さんをボコボコにしましょう」
「……分かりました」
　と、頷いた魔物将軍であったが、その視線が気になってペールは半目になる。
「……何です？　その何か言いたげな顔は」
「い、いえ……何でも。……とりあえず、隊長らを集めて周知させます」
「ならいいですけど」
　と、ペールは魔物隊長らにこそこそと指示を出し始めた魔物将軍を尻目に始まった戦いに視線を戻し、
　……楽でいいですねぇ、これ。
　あまり使えるような作戦ではないが、成功したことは喜ばしい。
　ペールは後でこのことをレオンハルトに報告して褒めてもらおう

と、邪な想像をして笑みを浮かべた。
そして黒部と玄武の戦いが行われる中、魔物将軍や魔物隊長の間では、〝ペール様を敵に回したくないな……〟と引き気味に恐れの評価を上げていた。

式部の潜入

キナニ平野から遠く離れた大陸北東部。
レオンハルトシティの中心にある紅魔城に、魔人ザビエルの使徒、式部は潜入の動きを作っていた。
誰か一人を捕らえて持ち帰るだけの簡単な仕事であるが、殺すことは許されている。
ゆえに式部はさっそく誰かを、最初に見つけた者を殺そうと思い、窓からその城に入った。すると、
「――ミツケタ」
視界に映る光景は紅魔城の一階廊下部分。赤い絨毯や壁際の装飾が目に入る。
だがその廊下の中央に、ふらふらとした足取りで歩く人間の姿があった。
緑色のボサボサとした長い髪に、小さい身体を持つ少女。おそらくは人間の子供だろう、式部はそう判断した。
ゆえに襲おうと、式部にとって当然の帰結で少女目掛けて突っ込んでいった。
「――!? だ、誰!? というか怖っ！ 魔物!?」
「チ、ホシイ……コロス……！」
こちらに気づいた子供が怯え、声を上げる。笑みが漏れるのを自覚しながら、式部は左手の〝7人首〟を子供の首目掛けて振り下ろした。

レオンハルトの城で数百年以上居候中のガウガウは研究を一段落させ、食堂に向かうところであった。最近は気兼ねなく使えるので利用を多めにしているのだ。というのも、
……レオンハルトとかその使徒、ハンティ達もいないからな……！
この城の主達は何やら人類を統一したＪＡＰＡＮの藤原家とかいう奴等との戦争に出向いているらしい。人類統一とか、人間も進んで

るというか、頑張ってるんだなぁ、とまるで他人事のように思ってしまうのは魔物に毒されているような気もするが、とにかくそういうことらしい。
研究仲間であるハンティがいないのはちょっと面倒だったりもするが、気兼ねなく一人でゴロゴロと怠惰に過ごせているので、これはこれでいいかな、とも思ったりもする。食堂や大浴場も基本的には一人で貸し切り状態だ。それを思うとガウガウはちょっと楽しいものを感じてしまう。
……つまり、今この城は私の城みたいなものだ……！
ふへっ、と変な笑いが出るくらいには愉快だ。今の内に内装を自分好みにしてやろうかとか、帰ってきた時に引っ掛けられるように悪戯でも仕掛けてやるか、などと頭の中で悪巧みを行う。しかし、
……とりあえず、腹ごなしをしてからだな。
お腹空いたし眠い。ゆえにさっさと食堂に向かおうと廊下を歩いていたときに――それは来た。
「チ、ホシイ……コロス……！」
「ぎゃあああああっ!? 誰!? 誰!? 誰か解んないけどごめんなさいっ！」
全裸に近い痴女のような女。しかし、その右手は明らかに人外で、左手には血が滴ったヤバそうな刀を持っている。
天才魔法研究者のガウガウ・ケスチナは、謎の痴女に襲われたところであった。
振り下ろされる刀に対して、横っ飛びで廊下を転がって何とか躱す。一瞬、戦うという選択肢が脳裏を掠めるも、よくよく考えてみれば、
……そ、装備とか魔道具置いてきたし！ 戦えないじゃん!?
その殆どは研究室に置きっぱなしだ。これも、城に馴染んだがゆえ、城の中に住んでいると命の危険とは無縁であるためだろう。
これも一種の平和ボケか、と呑気に思考を回しながらガウガウは次に飛んできた大きな爪の一撃に死を覚悟した。
「く、くそーーー！ こんなことなら先におやつのケーキ食べておく

んだったーーー！」
と、ガウガウが叫んだ瞬間、ガウガウは二つの現象を見聞きした。
一つは、甲高い金属音が響いたこと。もう一つは、
「――はい。ではおやつのケーキです」
「……へ？」
眼の前に現れたメイド姿の女性から、ケーキが乗った皿を手渡されたこと。
ご丁寧にフォークも手渡してくれたその女性は、
「――メイド長さん！」
「はい。メイド長で御座いますガウガウ様。……それと、〝さん〟はいりませんよ、食べてお待ち下さい」
空いた右手に持ったナイフで、襲ってきた痴女の攻撃を受け止めるメイド長さんの姿であった。

「ナンダ、オマエ……!?」
「私はご主人様に仕えるこの城のメイド長で御座います。失礼ながらお客様、アポイントメントはお有りですか？」
「クッ……！」
式部は目の前で己の攻撃を受け止めた白髪の女性に、厄介さを覚えた。
いとも簡単に己の攻撃を受け止めただけではなく、出現を察知出来なかったことからもこの女の戦闘力の高さを物語っている。後ろにいる緑髪の子供を襲おうと思っていたが、この女がいては難しいだろう。
「ッ……！」
「あ、どこへ――」
ゆえに、式部の判断は早かった。素早く身を翻し、二人から離れるように廊下を駆けていく。背後から掛けられる声は無視だ。
こうなったら通りがかった適当な者を攫って離脱する。殺したばかりでそれなりに知性がある式部は主の命令を優先しようと廊下を

走りながら誰かを探した。
　すると、
「――イタ……！」
　廊下の奥、何やら香ばしい匂いが漂う場所から出てきた、大柄な男がいる。仮面を被った白いコック服の大男だ。
　奴を襲おう、と式部は一直線にその男の元に向かった。しかし、
「むっ、新しい食材の気配……！」
「……!?」
　気づかれた。大男の視線がこちらを捉え、荒々しい狩猟者のような笑みを浮かべている。
　よく見れば大男の背には、己の得物を越える巨大な包丁が背負われており、
「……ッ、クソッ……！」
「フハハハハハハハハハハ！　逃げる気か魔物よ！　その判断力は良し！　――だがッ！　この料理長から逃げられると思うなよッッッ!!」
　危険なものを感じて廊下の角を曲がり大男から逃げるが、背後からは全身の筋肉を膨れ上がらせた筋骨隆々の大男が、その大包丁を手に持って豪快に笑いながら追ってくる。
　しかも気づけば、それに並走するようにロングスカートを手で摘みながら追いかけてきているメイドの姿もあり、
「おお！　メイド長！　どうされました!?」
「料理長ではないですか。私は今、侵入者を追っているところです」
「なんとッ!?　あの未知の食材は侵入者でありましたか！　むむむ、許さんッ!!　丁寧におろして切り身にし、夕食にお出しするシチューの具にしてくれるわッッ……!!」
「……〝あれ〟、硬そうですが切れますか？」
「問題無しッ！　ミシュラン一族に伝わる６６６の調理術の一つ、解体の極みである、〝断殺撃獄塵衝〟を使えば、どれだけ硬い食材も細切れにしてみせますぞッ！　フハハハハハハハハッ！」
「名前だけでお腹いっぱいになりそうな調理法ですわ」

……フザケルナッ……!?
式部は内心で追いかけてくる二人に憤りと畏怖を感じる。メイド長や料理長だと自称しているが、あんなメイド長や料理長がいるわけがない。レオンハルトの使徒か、もしくは突然変異の魔物だろう。こちらは全力で逃げているというのに、後ろの二人との距離を引き離すことが出来ない。使徒の全力に追いすがってくるのだ。しかもメイドの方は一切足音が聞こえない。霊か何かだろうかと思ってしまうほどだし、料理長の方は逆に豪快に音を立てながら走ってくる。
途中、廊下にあった物を後ろに投げるように攻撃しても、
「無駄無駄無駄ッ!! 私の鋼の肉体はその程度ではかすり傷一つ付かんぞッ!!」
「……城の中の物を投げるとは……許しませんよ――」
その歩みを止めることは出来ず、しかも投げた物をメイド長が回収して走りながら全く同じ場所に配置していく。
式部は思った。ここは魔境か何かだろうか、と。
まさかレオンハルトの城にこれほどの戦力が用意されているとは思わなかった。今思えば最初の子供がマシだったといえる。
他に普通の奴はいないのか、と探していると――外の光が見えた。
窓の向こうに見えるのは中庭だろう、緑の木々や花が見える。
「ッ――!」
式部は迷わず外へ出た。逃げるため、というのもあるが、誰か一人くらい見つけられないか、と思ってのこと。また庭師が滅茶苦茶ヤバそうな人物で、巨大な鋏を持つ魔物とかであれば諦めて脱出しようかと思ってしまう中、式部は外に出て、
「……? ナンダ――」
中庭に出た途端、己のいる場所に影が差したことに疑問符を浮かべる。自然と上を見上げたところで――式部は後悔した。
中庭に出たこともそうであるし、この城に来たこともだ。
「――ほう……貴様が侵入者か」
「――――」
と、頭上から聞こえた声は大きく、威厳を感じられるものだ。

そこにいたのはドラゴンだ。それも5メートル程の、通常種のドラゴンではなくその１０倍。５０メートル程の巨躯を持った白く煌めく巨竜だ。
見下しながら放たれる声だが、それも当然に思えてしまう。生き物としてのスケールが違うのだ。それに、内包される力は、主であるザビエルに匹敵するもので、
「一応、名乗っておこう。――俺は四大聖竜のライゼン。貴様を捕らえるものだ」
だが、とライゼンと名乗ったドラゴンは式部に手をかざしながら言った。
「貴様も、戦わずに捕らえられるのはプライドが許さないであろう。故に――機会を与える」
「ナニ――グ、アッ……！」
と、声を送った最中に、式部はライゼンの手に押さえつけられた。
そしてそのまま右手の手甲をその大きな口の端で噛むようにして捕らえると、巨体を上に跳ね上げ、翼を用いて上昇を始める。
飛翔の用意をこなす中、ライゼンは口を閉じたままに声を出した。
「ここでは俺が戦うには狭すぎるし迷惑も掛かるからな。場所を移して一戦交えるぞ。もし貴様が勝ったら見逃してやろう」
「……ッ！」
ふざけるな、という意志を込めて睨み、睨むだけでなく左手の刀で顔を斬りつけるが全てその煌めく鱗に弾かれてしまう。その間にもライゼンはどんどんと上昇し、やがて水平に飛行を始めて城から離れていく。更に街を離れ、山の近くの平原までいくと徐々に降下し、周辺に音を立てて着地する。
「ここでよいか」
「――グッ……キサマ……！」
そこで式部は地面に投げ捨てられるように解放され、何とか体勢を立て直して地面に着地する。
だが改めて対峙したところで、その大きさと強さに圧倒される。まず間違いなく勝てない、と思う。だが、

「コロス……！」
諦めるわけにはいかない。
眼の前のドラゴンを殺してもう一度城に舞い戻ってやる、と強く殺気を昂ぶらせる。
そして、式部はその姿を解放した。

ライゼンは、眼下の小さな相手を見て特に気負うことなく戦いに臨もうとした。
そこにいるのはレオンハルトと敵対関係にあるという魔人の使徒らしい。先日、戦場に出ていく前に直接教えてくれたので一応覚えている。
その際に、〝もし城に来たら捕らえてほしい〟と言われたのだ。だが、
……正直、断ろうとも思ったがな。
魔物同士の抗争に積極的に関与することはしない。何か大事な理由があるならやってやらなくもないが、そういうわけでもないのだ。ゆえに断ろうとした。
だが、城に来る理由がメイドであったり、この城の者を殺し、もしくは捕らえるためと聞いては捨て置けない。
城の者達は己が世話になっている者達だ。食事の用意もそうだし、話し相手としてよくしてもらっている。そんな彼女らが害されると知っては放ってはおけなかった。
これがレオンハルト自身であれば自分で何とかしろ、とも言ってやれるのだが奴は今いないし、メイド達に戦う力はない。ならば戦う力を持った強き者が守ってやるのは自然なことだ。
ゆえに適当に運動も兼ねて叩きのめして運んでやろうと思った。使徒如きに負けるとは思っていない。己のライバルは最強の魔人だ。それ以外には、例え無敵結界を持つ魔人であっても負ける気はない。
どうせなら、そのザビエルとかいう奴と戦ってみたかったがそれは無理そうなので使徒で我慢するとしよう。弱い者いじめにならない

よう全力でやってやらねばな、と思っていると、
「変身……いや、その姿は――」
眼の前の女が、急に光りを放ち、全く別の姿に変わっていた。
鋭い爪を持った黄色い手足に、蒼い鱗を持ったその生き物。
背中に四枚の羽を持ったその姿は正しく、
「ホントウノスガタ――――青龍」
「ドラゴンか……！」
その青のドラゴンを前に、ライゼンは己の血が僅かに熱を帯びたのを感じた。

……同胞を模した者か……！
ライゼンは青龍を名乗る魔人の使徒を前に、姿勢を低くした。
龍を名乗り、形状は似ていても同胞の気配はしない。ドラゴンであったのなら例え使徒になろうが魔人になろうがライゼンには気づける自信がある。
その己の感覚がそうではない、と感じているのならそうではないのだろう。眼の前の使徒は、ドラゴンに似てはいてもドラゴンではない。
だがそうであっても、
「血が沸き立つのはどうしようもないな……！」
ゆえに、ライゼンは四肢に力を入れ、ただ前に駆けた。
巨躯に似合わぬ俊敏性、そして己の肉体こそがライゼンの得物だ。
ただ当たるだけで、必殺の一撃となるのは、ライゼンの巨体もそうだが、その鱗。ライゼンというドラゴンが生まれ持つ特性のおかげだ。
ダイヤモンドドラゴンという希少種に生まれたライゼンにとって、ダイヤの特性を持つ鱗は鎧であり武器でもある。何人たりとも、この肌に傷を付けることは叶わない。例え最強の魔人だろうが、魔王であっても傷を付けられなかったのが己の誇りだ。
その硬度はあらゆる攻撃を弾き、山をも砕く。大気を裂きながら駆

けるライゼンという暴威。その進撃を止めることは出来ない。
「砕けるがいい……！」
ゆえにライゼンは戦意の昂ぶりとともに、己の勝利を疑わなかった。
数秒後にはこの肉体に跳ね飛ばされて、負けを認める光景を幻視した。
だが、数秒後。そこに青龍の姿は無かった。
「っ、なるほど！　速いな!?」
言葉を送るとともにライゼンは反応していた。
己の背に斬撃を加えてくる青龍を見る。それは、
「フ、フフ……チ、チ、チヲヨコセッ！」
四枚の羽を動かして高速で飛翔し、その爪を鱗に打ち付けて、斬り刻もうとしている青龍だ。
その飛行方法はドラゴンというより虫に近い。器用に小回りの利いた飛行は、己の周りをぐるぐると回るように飛翔し、金属が擦り合わされるような嫌な音を鳴らしている。こちらの鱗に爪を突き立てながら飛行しているのだ。
「その程度では、俺に傷を付けることは出来んぞ！」
「ッ！」
振り払うように身を回すと、慌てたようにこちらから距離を取る青龍。一度でも攻撃が当たれば、負けることは理解しているのだろう。必死な様子が窺える。
だがライゼンの方も青龍に対して少し厄介さを感じていた。それは、
……ふむ、空中の速度はそれほど変わりないだけではなく、機動性は向こうの方が上か。
となると中々に攻撃が当て辛い。地上であれば無理矢理攻撃を当てたりすることも出来るが、宙での移動では上を取られると攻撃手段も限られる。
空中での最高速度はこちらの方が上だろうが、宙だと地上のように小回りが利かないため、相手の軌道に対して攻撃を当てられないだろ

う。ライゼンはドラゴンにしては珍しく、地上戦を得意とし、そのための戦闘技術を高めている。ステップを踏むことでの緩急や、尾を使っての攻撃はその過程で身に付いたものだ。
　かといってブレスも当てにくいものだ。如何に強大な威力があろうと、ブレスは所詮、点での攻撃に過ぎない。当たらなければ特に怖い攻撃でもないのだ。だが、
「なるほど、真の姿というだけはある」
「ハハハ！　シネ！　シネッ!!」
　飛翔しながら爪を突き立ててくる青龍に応戦しながらも言葉を送る。
「俺との相性は良い方だな。そちらの攻撃も意味はないが……それでも引き分けに持ち込むことは出来るだろう」
　それはライゼンなりの〝賛辞〟だ。
　相手の力量を認め、その上で叩き潰すという宣言でもある。
　何より――この技を使わせる相手は、そうはいないのだと。
　ライゼンは言う。
「――以前までの俺であればな」
　ライゼンは、己の力を解放した。
「〝伝導超過〟――」

　青龍は、白のドラゴンが声とともに己の肉体を光らせたのを見た。
　そのダイヤの鱗が白光し、熱を持っている。少しの危険を悟り、距離を取った。同時に、ライゼンの声が響く。
「ドラゴン種の一部が持つ特性――俺の伝導超過は、熱を与えることで身体機能を飛躍的に向上させることが出来る。己のブレスであっても発動は可能だ」
　確かに見れば、ライゼンの口から漏れる光はブレスのそれだろう。口を閉じたままブレスを発射することで、己の肉体に熱を与えているのだろうと推測出来る。
　ということは、

「ソノウエデ、タタカウキカ……！」
身体能力が向上したということは、膂力は勿論、その速度も向上したということだろう。
ならばその上でなら攻撃を当てられても不思議ではない。ゆえに青龍は警戒を露わにした。
だがライゼンはそれを否定するように小さく笑い、
「確かに、それでも倒せるかもしれないが……折角だ。貴様には新技を見せてやろう」
と、ライゼンが言った先、口元が光った。
それは先程と同じ、ブレスが発射される前兆であり、青龍は急いでその口元から逃れようと後ろに回る。
だがそれさえも、ライゼンは嘲笑うように苦笑混じりの声を発した。
「ただのブレスであれば対処法は正解だ。しかしこれは、ただのブレスではない」
そう言ってライゼンは口を閉じたまま言う。
ブレスを発射しようというのに、口を閉じたままだ。
それは、先程見せたばかりの、伝導超過という特性の為に使った技のはずで、
「ナニヲ……!?」
疑問の声を作ったと同時に、ライゼンに異変が起こった。
熱を持ち、光り輝いていた身体が、更に光を増していくのだ。
全身からもたらされるその極光を見せ付けながら、ライゼンは問いかける。
「これは伝導超過の際に俺が使うやり方だが……ある時気になってな。既に伝導超過を発動している最中に、もう一度同じことをしたらどうなるのかと。更に強化されるのかとな。それで、試してみたら――」
どうなったと思う？　と言う声に、青龍は答えることは出来ない。
しかし、光を増していく白のドラゴンに嫌な予感を感じた。
そして距離を取ろうと羽を動かした時、その答えは来た。

「答えは――――爆発。行き場を失ったブレスと熱量が俺の全身から放たれる」
「――ッ!!」
分かるか？　と言葉が聞こえた頃には、青龍はその場から離脱しようと全力で距離を取っていた。
ライゼンの身体が、もはや光に包まれて見えなくなる。そして、光が収束するような音が最大限に高まった時、
「我が強敵（とも）の為に編み出した俺の必殺技。半径１００メートルは消し飛ばす全方位のブレスだ。避けることは出来ん――――耐えてみせろ」
「！　ヤメ――」
――――〝スーパーノヴァ〟。
青龍の制止虚しく、そう口に出した数瞬後。ライゼンを中心に平原が光の爆発に包まれた。

光が収束し全身の熱が収まると、クレーター状に焦土となった平原の中心で、ライゼンは周囲を見渡した。
すると焦げ付いた大地の外側。衝撃で吹き飛んでしまったのだろう、緑の大地の上にボロボロになった生き物がいた。それは、
「……ウ……」
「ふむ、どうやらギリギリ生きていたか」
使徒の生命力というのは大したものだ、と思う。例え全開ではなく、威力がほんの少し弱まる外側に近い場所であったとしても、使徒程度であれば消し炭になってもおかしくない技なのだ。
全開だと自然を壊しすぎるため、あまり使えないが、強敵（とも）を倒すために編み出した技だ。当然特訓は欠かせないので、練習のためにある程度は使わないといけないというジレンマもある。以前に使った時は森の一角を消してしまった。
そのため、良い機会だと思い使徒に使ってみたのだが……どうやら危なかったらしい。

「出来れば殺すなと言われていたしな……」
ともあれ生きているのならば問題ないだろう。ライゼンは青龍を口で掴むように噛み、器用に背中に乗せるように投げてみせると翼を羽ばたかせ上昇を始めた。
「さっさと運ぶか」
そしてこれを言いつけた強敵（とも）に軽く文句でも言ってやろう。ペールから肉を貰うことも忘れてはならない。城の者を守ったら最高級の肉を好きなだけ食べれる契約だ。それを思うと腹が減ってくるというか、翼にも力がこもる。
……そういえば、同胞も戦っているのだったな。
と、戦場で戦っているであろう者を思い出す。その同胞とは、ハンティのことだ。色々と悩み、足掻いている同胞を思い、ライゼンは一息、
「俺に言えたことではないが、あれも考えすぎるところがある。……良い空気を吸っておれば良いが」
とりあえず全員の様子でも見てやるか、とライゼンは南西に向かって空を進んだ。

ハンティVS戯骸

「これで終わりだ――〝妖怪槍津波〟！」
「っ――――」
その一撃を受け、ザビエルの使徒、玄武の巨体がゆっくりと草原に倒れていく。
ペールが仕組んだ玄武と妖怪王黒部の決闘共倒れ作戦は、黒部の勝利で終わった。それを遠目で魔物将軍らとともに見ていたペールは笑顔を貼り付けたまま、小声で言う。
「あははー……言っても玄武さん使徒ですし、結構いい勝負すると思ったんですけどねー」
「あの妖怪……確か、妖怪王黒部でしたか。あっさり勝ってしまいましたね……」
「……ひょっとしてアレ……私より強いかもしれませんねー……」
「……ご、ご冗談を」
冗談だったらいいんですけどね、とペールは明言を避けて内心だけでそれを口にする。
実際戦ってみないと解らないところもあるが、少なくともスペックの上では相手の方が強い。おそらく魔人に近い強さを持っているだろう。
搦め手で何とかなる可能性もあるが、相手の将にこれほど強い者がいるとは予想外だった。
……この分だと悪魔も油断出来ませんし、これより強いと聞く藤原石丸も……。
危険だ、とペールは敵の評価を改める。
強いといっても所詮人間の軍隊だし大将を除いて、精々使徒に敵わない程度かと思っていたが、この分だと気を引き締めて掛からないと足元を掬われかねない。
主であるレオンハルトが負けるとは思わないが、自分達が足を引っ張ることは出来るだけ避けたいものだ。
「……魔物将軍。手筈通りに行きますよ」

「……了解」
という魔物将軍の短い応答を聞き、その指示を受けて魔物兵達が動くのに合わせて、ペールは前に出ていった。
勝負に勝った黒部に対し、煽てるような口調で、
「いやぁ～！　お強い！　なんてお強いんでしょう！　まさか玄武様をこうもあっさりと倒してしまうとは！」
「あぁ？　……こいつが弱っちすぎるだけだ。動きも滅茶苦茶だしよぉ。……それよか、テメェの方が強そうな気配がするんだが――」
「ぎくっ……もう、冗談言っちゃ嫌ですよう。私なんて雑魚中の雑魚。新米ペーペーのペールちゃんです。可愛いだけが取り柄で性奴隷として戦場に連れてこられてるだけの存在なんです」
「……雑魚には見えねぇが……もしかしてテメェ――」
「はい！　というわけで大将が負けたので撤退です！　撤退しますよーーー！」
「はっ！」
「あっ、テメェら！　待ちやがれ！」
「待ちませんよう！　――〝粘着地面〟！」
「うおっ!?」
黒部がこっちの正体に気づいたのか。しかしその声を無視し、追いかけてこようとした黒部を粘着地面という魔法で足止めすると、魔物兵達が玄武を抱え上げたところで急いで後方に駆けていく。
「それじゃあおっきなワンちゃん！　機会があったらまた会いましょうね！　もう会いたくないですけど！」
「犬扱いすんじゃねぇ！　噛み殺すぞ！　くそっ、抜けねぇ！」
ベタベタになった地面に足を取られた黒部を尻目にペールはとりあえずの仕事を完遂したことでホッと息をつく。
……これでレオンハルト様に褒めて貰えます……！
とりあえず、戻ったら報告して褒美をねだろう。性的なやつを。
ペールは頬に手を当てながら、スキップするようにレオンハルト軍本陣に帰っていった。

キナニ平野中央部に魔法光が煌めき、炎が吹き荒れた。
炎を起こしているのは煙管を振り回している褐色肌の細身、筋肉質の男だ。
魔人ザビエルの使徒――戯骸。草原の上で炎を飛ばす彼に相対するのは女だった。
「――雷撃！」
牽制の雷を飛ばし、途切れたように空間を移動する長い黒髪の女。
魔人レオンハルトの使徒――ハンティ。最強の使徒と名高い彼女との戦闘に戯骸は臨んでいた。
雷撃を左手から発生させた炎で打ち消し、ハンティの剣を右手の煙管で器用に防いだ戯骸は戦場で起きたとある変化について悟っていた。それは、自分と似た大きな力の気配。その二つが消えかかっていること。
その意味を、戯骸は正しく理解していた。それは、
……へっ、もう俺だけか。この分じゃ、式部も失敗してそうだしな。
思わず笑みが溢れるのは己の仲間達への〝しょうがねぇな〟といった苦笑の想いか、それとも見知った連中への〝やるじゃねぇか〟という賛辞の笑みか、戯骸には判断が付かない。
だがこちらの僅かな反応を読み取ったのか、ハンティの表情が若干曇った。ゆえに次に来る言葉は容易に想像がつく。
「……まだやる気？」
……ほら見ろ。顔に出てんだよ。――〝やりたくねぇ〟ってな。
分かりやす過ぎる上、未だにその道を選び取ろうとしている相手に再び苦笑してしまう。
だからこそ、戯骸は言ってやった。苦笑を好戦的な笑みに変え、
「寝惚けたこと言ってんじゃねぇよ！」
「っ、この馬鹿……！」
炎をハンティ目掛けて放つ。苦虫を噛み潰したような、憤ったようなハンティの表情はまた分かりやすい。
だが、戯骸は思う。

……全部覚悟の上なんだよ……！

全て解っている。解った上で、覚悟を決めてきたのだ。

魔導はもう消え掛かり、煉獄もやがて消えようとしている。式部はどうか解らないが、敗北したのなら終わったも同然だ。

そう、終わったも同然。終わりとは――ザビエルの死に他ならない。

その未来を回避するために、戯骸はここで戦っている。

勝負に勝っても逃げられたら終わりだということも解っている。ハンティは瞬間移動を使う。僅かでも余力が残っていれば――それこそ気絶でもさせない限りは勝負に勝っても逃げられてしまうのだ。

ゆえに目的が成就される可能性はほぼゼロに近い。しかし、それでもなお、

「使徒として――諦めるわけにはいかねぇんだよ！」

「っ……！」

叫びとともに放った渾身の炎は、瞬間移動で簡単に躱される。

それに対して思うのは〝馬鹿〟という想いと、戦士としての冷静な分析だった。

……まだ余裕がありやがるな……！

こちらの攻撃を見て躱す。瞬間移動を用いれるならそれは簡単かもしれないが、仮に瞬間移動が使えなくてもハンティは余裕を持って躱しているだろう。反応に余裕があるのだ。身体の動きや目線を見ていれば解る。躱した後、こちらに対して有利な位置を取るために瞬間移動を用いているだけで、己の足を使っても回避することに変わりはない。

だからこそ余裕があり――それでいて舐めている。

こちらを、全力を尽くして倒すべき敵として見ていない。未だ戦わずに済む方法に未練を持っている。

……目を覚まさせてやらねぇとな……。

半ば憤った感情を燃え上がらせる。半分なのは、相手に本気を出させることが出来ていない己への未熟がためだ。

「分からねぇなら、分かるまで続けさせて貰うぜ！」

己を倒すべき敵として見てもらう、そのための一撃を戯骸は思考した。前方、炎を躱し、懐に瞬間移動で潜り込んできたハンティを煙管で払いながら戦闘の分析を行う。

……どうにもこいつ、ほぼ反射で動いてやがるな！

その動きを見て気づいたのがそれだ。ハンティは高速の戦闘の際に生じる判断の速さが、もはや条件反射レベルで刷り込まれているということ。こう攻撃が来たらこう躱す、こう防御されたら次の行動はこうする、といった戦闘の最適解が、あくまでも自分なりのではあるが見えているのだ。

無論、多種多様な状況が想定される戦闘において、完璧な正答は無い。それらは終わった後で理解するものだ。あの時にこうしていれば良かったな、と。それすらも、実際にやってみないと正解かは解らない。何かが起こって回避されたり、反撃されたりする場合もある。

しかし、その難しい判断にもある程度のパターン。大体の行動に通じる半分の正解というものがある。

例えば、剣や槍での攻撃は躱せるなら躱して前に出る。魔法は回避出来ないので当たっても良い部位を見極めるか、射線上に得物を合わせて弾く。そういった判断だ。大体は二択か三択ほどで、ある程度の戦闘経験を積めば得意不得意や相手の状況、周囲の環境なども合わせてどの選択を取ればいいか経験から分かるようになるし、自ずと判断速度も高速化する。ある程度のレベルに達した者達は、その判断を反射に近い速度で選び取るのだ。

それを極めたのが、いわゆる〝達人〟。才能と経験を習熟させ、一流の戦士となった者。

戯骸は、己もその戦士であるとは自負するが、それでも目の前の相手程ではない。このハンティという使徒の速度は異常過ぎる。

それこそ――魔人のそれだ。いや、その部分だけに関しては、魔人の中に混じっても上位なのではないかと思うほど。不可思議なものだ。

だが一つ、戯骸には思い当たる節があった。それは、

……そういや、レオンハルトと戦ってるんだったか。それなら納得

だな……！

つまり、必要に迫られたから判断を極限の反射の域にまで高めたのだ。

模擬戦だろうが何だろうが、相手が最強の魔人であれば、身体能力の上では勿論及ばない。純粋な膂力、体力、速度の勝負になれば勝ち目はないのだ。

残るは技術だが、技術は一朝一夕で身につくものではない。その全ての要素で負けていては戦っても勝ち目はほぼゼロだ。ならば何かを伸ばしていくしかない。攻撃を躱し、攻撃を行うために何が必要か。

……それが判断速度だったってわけだな。

戯骸は得心する。レオンハルト程の魔人であれば、その攻撃は生半可な者では耐えきれない。躱すことも受けることも叶わない必殺の一撃はまともに食らえば己の主であるザビエルですら勝負を決めてしまいかねないものだ。

だが、瞬間移動なら戦える。

瞬間移動であれば発動さえしてしまえば容易に躱せる。ならば発動速度を上げてしまえばいい。もっと言うなら、発動しなければならない、という判断に必要な時間を短縮、反射の域にしてしまえばいい。

そうすれば、あのレオンハルトとすら戦えると、そういうことだ。最強の魔人の攻略法が解って嬉しい――わけがない。これが出来るのはハンティだからこそだ。

瞬間移動を反射の域で行えるのであれば理論上、ハンティが知覚出来る攻撃は全て躱せてしまうということになる。例え魔王の攻撃であっても、それが知覚出来るなら躱せるということになるが――言うまでもなく滅茶苦茶だ。

完全な反射の域にまで達してはいないものの、それでも並大抵の訓練では無かっただろう。文字通り、何百年とレオンハルトの攻撃を受け続け、それを知覚した瞬間に躱せるまで昇華したのだろう。

……と、それが解ったところでどうすっかねぇ……。

戦えてはいるが、攻撃を当てることは出来ていない。ざっと考えた

ところ、このハンティに攻撃を当てる手段は三つ。
一つは魔法。――なのだが、回避不能の魔法といっても限度はある。反対側に消えた相手まで追いかけるような魔法は極一部だし、それであっても剣で打ち払われたり、障害物に身を隠されれば意味はない。というかそもそも、自分は魔法が苦手である。この炎は己の生まれ持った能力のようなもの。魔法ではないのだ。よって早々に除外。
二つ目は、ハンティが反応すら出来ないほどの速度で攻撃を行う。――が、これが出来ていれば苦労していない。さっきの理論だと、ハンティはレオンハルトの攻撃ですらある程度は躱せるということになる。それを越える速度を出せるなら、主の代わりにレオンハルトと戦っているし、そもそもこんなことにはなってない。よって除外。
……なら、もう一つの方法しかないよな。
必然的に方法は絞られる。そして、そのための方法も何となく思いついた。
「痛い目、見てもらうぜ……！」
「あんたがね……！」
口だけはいっちょ前に本気みたいだ。
ともあれその方法を実行しようと、戯骸は攻めの手に出た。

ハンティは、攻める手を激しくした戯骸に対し、感嘆を得ていた。
……さすがは戯骸だね……！
魔人ザビエルの使徒。その大体がいけ好かない。少なくともハンティはその主も合わせて好きになれそうにない連中だった。
しかし、この戯骸だけは別だ。色々と厄介や迷惑も被ったが、その性根や性格は明け透けで気持ちのいい奴であり、真面目なこっちの気が抜けてしまいそうな奴だ。
その戦闘力も己と打ち合えるくらいに高く、噂では最強の使徒は己か戯骸かのどちらかである、というものも聞いた。実際、戦うのは嫌いではない。いつもは馬鹿みたいに強い戦闘狂か、言っては悪いが、自分よりも数段劣る相手との戦闘しか行っていないため、余計にそう

思う。
その性格も強さも知っているからこそ、ハンティは戦うことを受け入れた。今でもそのつもりではある。
だが心の何処かで、やはり勝敗を付けたくないという想いがあるのだ。そしてそれは、戯骸の他の使徒達が、おそらく負けたか、負ける直前であることを察してからは余計にそう思ってしまう。
……あたしが勝ったら、戯骸は……。
と、胸に重苦しい物を感じて、躊躇いを覚えてしまう。こういった葛藤や割り切りには慣れたつもりであるのに。
ハンティにとって、望まない相手との戦いは慣れたものである。それは使徒になり色々あって、特に今の魔王に代わってから慣れたものだ。
現魔王のナイチサは人間を苦しませることを使命とし、上下関係や礼儀を重要視する。命令には逆らえず、人間相手に戦うことになるのは必然だった。
ハンティは使徒になって、様々なものを見た。人間と交流し、カラーやドラゴン、魔物とも交流を持った。その上で解かったのが、その一種族だけを見て、種族全体の良し悪しや善悪を決めつけるのは早計だということ。
人間を贔屓にしてはいるが、その人間も人間同士やカラー相手には魔物と変わらない残酷さを見せる。負けた方の村や町を破壊し、男を殺して女を犯す。魔物を嫌悪しながらも、魔物と全く変わらない行いを平気で行う。
魔物も、人間を苦しめ容赦なく殺してみせるが、同じ魔物相手への振る舞いは、確かな営みを感じさせるものだ。仲間を想い、気にかけ、時に優しさだって見せる。使徒になり、己を気にかけ、慕ってくる魔物将軍や魔物隊長、魔物兵や女の子モンスターを見てそれを感じたのは記憶に新しい。
望まず使徒になりはしたが、残忍で凶悪だと思っていた魔人にも、良い奴はいる。使徒だって、個性的ではあるが基本的に気のいい者ばかりだ。大陸を支配し恐怖に陥れる魔王だって、中には優しい心を持

つ者もいる。
自分の元の種族であるドラゴンだってそうだし、カラーだってきっとそうだろう。ドラゴンは基本的に他の生物を見下しているところがあるし、カラーも人間を軽視しがちなところがある。いつか力を得て、魔物のように人間を苦しめないとも限らない。
そして悟った一つの法則は、
……勝者は敗者に、何をしても許される。
逆に敗者は、どれだけ生物としての尊厳を踏み躙られたところで文句は言えないし、言っても意味はない。苦しむ者の数が少し増えるだけだ。
そんな敗者の運命を変える権利を持つのは、勝った者だけだ。
勝者だけが、敗者の処遇を決めることが出来る。それこそが、ハンティが魔軍で戦う理由でもあった。
……苦しめられることが変わらないなら、勝ってそれを軽減してやればいい。
魔軍の側に立ち、人間を速やかに敗北させることが、救いに繋がる。苦しめられる予定の人間を即死させれば、その先にある苦しみからは逃れられるし、高い地位を持つ使徒の立場や、魔人筆頭という主の地位を使えば、適当に理由を付けて命を救うことだって出来る。
なにも人間やカラーの味方になることだけが、救いの手段ではない。敵となることで救える命も、救えるものも多くあるのだ。
今回の戦いだって、レオンハルトや己が参加したからこそ多くの命を救えた。結果的に戦場で死んだ兵士以外は、占領した都市でも不要な殺戮も、拷問や暴行も行われていない。
仮にザビエル一人に任せていたらどれだけの人間が苦しめられたかは、奴が攻め落とした街を見れば一目瞭然だった。〝自分達〟が勝利したからこそ、戦い以外での不要な犠牲を減らせたのだ。
それに、もうハンティにとっては魔物だって見捨てられない。彼らにだって心があると解ってしまった。救いようのない悪人個人であればともかく、魔物全体を悪だとは言えない。
だから見るべきは個人。どんな種族にだって、良い奴もいれば悪い

奴もいる。その大半も、敵や敗者に厳しいだけの者達であり、そういった者が大多数であるのだ。
そして戯骸は――悪い奴じゃない。
でも、主であるレオンハルトからの命令は、〝従わないのなら、殺してしまえ〟という苛烈なものだ。確かに、ザビエルの指示に従うというスタンスを取っている以上、戯骸程の力がある者を放っておけば、こちらにとって害になるかもしれない。
ならばやるべきだ。その覚悟は決まっている。決まっているはずだ。
「……！　そろそろ決めさせて貰うよ……！」
「おう、来いよ……！」
ゆえに行く。ハンティは右手で振った剣を素早く戻し、煙管と炎による反撃が来る前に瞬間移動で１０メートル程後ろに下がって離脱。
そして詠唱を始める。まず選んだのは氷属性の最上位魔法。
瞬間移動が解けた瞬間、ハンティは戯骸目掛けてその魔法を発動させた。それは、
「喰らいな――〝絶対零度〟！」
「っ、氷か……！」
見るからに火属性である戯骸に、氷属性はよく効く。周囲の草原一帯が氷に覆われていく中、ハンティは直ぐ様魔法の詠唱を開始した。次に放つのは火属性の必殺技。最上位かつ大規模な魔法だ。
「――〝火炎流石弾〟！」
「――！　おおっ、すげぇ炎だ！」
「あんたからすれば温く感じるかもね！」
戯骸が目を見開く中、自分達が戦っていた草原一帯が、激しい炎に包まれる。
吹き荒れる火炎で草を燃やし、焦土としながらも戯骸はやはり効いていないようであり、
「ハハッ、いや、いい炎だ！　中々に気持ちいいぜ――って、こりゃあ……！」
戯骸が魔法を受けて、しかし驚いたように声を上げる。

冷え切った周囲一帯を極大の炎がぶつかり、辺り一帯には、
「――霧か!?」
今頃気づいても遅い、と声を上げずに内心で思う。
……視界が奪われた状態では、あたしを捉えることは出来ない……!
瞬間移動を使うこちらにとって、この状況は必殺ともいえる不意の一撃を放てる。
この一連の連携はレオンハルトをも喜ばせた連携だ。対応こそされたものの、よほど技術に長けた者でなければ対応することは難しい。
「くそっ、こうなりゃ――」
「――〝粘着地面〟」
「うおっ!?」
おそらく動きを、飛ぼうとしたであろう戯骸を止めるべく、動きを阻害する粘着地面を発動。地面をベタベタにして足を止めさせる。その上で、ハンティは腰を落として、剣を構えてから魔法を幾つか発動した。
「〝高速飛翔〟、〝ゆらゆら影〟、〝ゆらゆら影〟――」
まずは素早さを上げる魔法を三つ。重ねて掛け、素早さを約二倍に、
「〝防御呪縛〟、〝ジャクタイン〟――」
魔法で相手の防御を下げて、約半分に、
「〝重加算衝撃〟、〝重加算衝撃〟、〝重加算衝撃〟――」
更に魔法を重ね掛け、己の攻撃力を約三倍にまで上げた。その上で、
……これで決める!
ハンティは戯骸に向かって加速し、真っ直ぐに駆け抜けた。
敢えて瞬間移動は用いず、己の速度のみで正常な時の中を突っ走る。上級魔人に限りなく近づいた速度で、巨大なドラゴンの肉体を一瞬、浮かすほどの威力を秘めた剣の一撃を加える。
例え切れずとも、肉体を破壊してしまう一撃。それを用い、

「……さよなら――」
「――――」
ハンティの剣は戯骸の身体を、真っ二つに断ち割った。
寸分違わない一閃とその手応えに、ハンティは己の勝利と、戯骸の死亡を確信する。
背後で戯骸が、支えを失ったようにゆっくりと倒れる中、ハンティは剣士が行う残心に近い不動を貫いた。
しかしそれは恰好だけであり、緩んでしまっている、と自覚する。戯骸を殺したことは、やはり色々と思うところがあるのだ。
……でも、これで――。
と、ハンティは息を入れ、剣を収めかけた――そんな時のことだ。
「――――掛かったな」
「――!? な、ぐっ――!?」
直後、背後からの声とともに己の身が炎で焼かれる。それは明らかに、
「――戯骸……ッ！ 何で……!?」
今しがた殺したはずのザビエルの使徒、戯骸が霧の中で覚束ない足取りながらもゆっくりと立ち上がる。
しかし立ち上がったところで、人形であったその姿は、徐々に大きな、炎の鳥のような姿に変わっていき、
「痛ってー……やっぱ慣れてねぇんでキツいが……とにかく、これでようやく一発か。……悪ぃな。さっきまでの姿のアレ、本当の姿じゃねぇんだわ」
と、戯骸の声で炎の鳥は言う。
紅く燃え上がったその鳥は霧が晴れた大地の上で、炎を喰らったこちらを見下ろしながらその名を口にする。
「こっちの姿の時の俺は――――朱雀。まあ適当にそう呼んでくれ」
真の姿を現した戯骸の声が聞こえた。

使徒としての

キャロルは、ぷちハニーをばら撒いていた。
ぷちハニー弾も含めて、装備として隠し持っているぷちハニーも投げつけてみせる。その爆風を浴びさせる相手は白の獣と化した魔人ザビエルの使徒、白虎だ。
四肢で大地を踏みしめて駆けてくる白虎を追い払うようにぷちハニーを投げると、その爆発を喰らった白虎が苦悶の声とともに、
「っ……これしきでやられるか……！」
気合いで爆風の中を駆けてきた白虎に少なからず驚いた。良い根性だ、とキャロルは敵への評価を上げて頷く。
「よろしいですわ。ならば、わたくしも出し惜しみはしません」
「来い……！」
言われずとも、キャロルは行動を起こしていた。試作の物こそ使えないが全力を尽くす。隠していたぷちハニー。それを収納していた大きな袋をまるごと取り出し、
「さあ、大盤振る舞いですわー！」
と、袋を白虎が向かってくる途中の空に放り投げた。
その上で、キャロルは右手の通常の弾が入った銃で狙いをつけ、
「――！」
中身を衝撃から守る効果の掛かった魔法の袋。その結び目だけを綺麗に撃ち抜き、
「ぷちハニーの雨を喰らいなさいな！」
「……貴様！」
ぷちハニーが空中にばら撒かれ、地上にいる白虎を襲った。

白虎は爆発の連鎖を受け、それでも前に進んだ。
ここで負けるわけにはいかない。死ぬわけにはいかない。自分が敗北するということは、
……ザビエル様の望みが叶えられん……！

自分達が負けることを、ザビエル様は望んでいない。勝つことだけを望んでいるのだ。
ならば前に出るしかない。キャロルは距離を取っての戦闘に徹しており、身体能力も真の姿を取ったこちらより劣ると推測出来る。身体のサイズもそうだし、膂力でも勝っているのだ。一度捉えてしまえば勝てる。――だから前に出た。
「お、おぉ……!!」
ぷちハニーの爆発の中に、白虎は全身を投げ出した。
一歩目で、既に体表は焼かれた。爆発の中にいては前すらも見えない。
二歩目で、声を上げることが出来なくなった。喉を焼かれ、火薬の匂いで鼻も利かない。
三歩目で、痛みは許容範囲を越えた。激痛に藻掻き、苦しみながらも前に出る。
四歩目、五歩目と行けば、感覚はほぼ無くなる。
だが八歩目を往く頃には、二本ある牙の片方が折れて再び激痛を味わった。
十歩目にはもう片方の角も折れた。
そこから先は、歩数を数えることも出来なかった。本能以外の全てを捨てた白虎は、もはやただ一匹の獣となり敵を狩りに往く。考えは不要だった。
前を見た。爆発が止み、煙だけの視界になる。身体の感覚はない。
だがやがて、視界が開けた。煙を抜けた。そこには、
「――!」
敵がいた。
己の主の邪魔となる敵。倒すべき相手を前に、白虎は最後の力を振り絞った。
足に力を込め、全力で相手に体当たりを仕掛ける。
速度は落ちるどころか、己の全速以上のものだ。
白虎は確信する。相手を倒すのにこれ以上の手段はない、と。
そしてそれを証明するために、白虎は身を低くして敵に正面からぶ

ち当たった。
だがそこで、己の歩みが止まった。
「っ……中々のパワーですわね……！」
「――――」
――否、止められた。
己の折れた牙を受け止めるように、敵が両手で掴み、足で踏ん張ったのだ。
敵は言う。
「ですが……お忘れじゃありませんこと？　わたくしは魔物界一の……完璧使徒。そのライバルは、元ドラゴンの七星ですわ。だからこそ――追いつくためにも、基礎能力の向上は怠っていませんの……！」
「……！」
白虎は、眼前の不敵な笑みを浮かべた小さな敵に、徐々に押し返されていく。
「わたくしの完全勝利のために……とどめ――行きますわよ……！」
「……っ！」
と、白虎は直後、下からかち上げられるように身体の前半分を、宙に浮かせた。
敵の力任せの掌底、それを受けて出来た隙に、敵が腹の下に潜り込む。そして、アッパーのような軌道で腕を振りかぶり、その一撃は来た。
「――――ドラゴン突き！」
「――っ!!」
そう名乗っただけの全力のパンチが、白虎の腹に突き刺さる。
下からの打撃に身体が浮き、反転して仰向けに倒れていく。
全てがゆっくりに見える世界の中、白虎は己の不覚を悟り、自嘲するような笑みを浮かべた。
「……見誤って……いた、な……」
相手の力量も、己の力量も、何もかもが失敗していた。それが今、ようやく確認出来た。

答えを出しながらも、挑まざるを得なかった勝負の果てに、白虎は相手に声を掛けた。掠れた声で、
「……今、のが……ドラ、ゴンを……倒す、力……と、いう……わけ、か……？」
どうでもいい、そして答える必要のない敗者の問い。何故自分でもこんなことを聞いたか解らないものだ。
しかし相手は、それに静かな声で答えてくれた。珍しい真剣な顔色で、
「……ドラゴンのパワーはこんなものではありませんわ。なので、こんなところで負けるわけにはいきませんの」
「……そう、かい……それは――」
白虎は言う。薄れる意識の中で、
――負けるわけだ……。
それを口に出来たかは解らない。
しかし、後に残ったキャロルは、それを見て、
「……ええ、完璧使徒になる予定のわたくしに負けたのですから、あなたは何ら恥じることはありませんわ。胸を張って地獄に行きなさい――煉獄さん」
ふっ、と思わず笑みが漏れた。敵のくせに、妙に気の利く奴だと。
気の抜けるところは戯骸に似てるかもなぁ、などと緊張感のない事を思い、そして、
……地獄に行ったら、後でやって来るザビエル様や他の使徒も誘って、また暴れるかねぇ……。
地獄で国盗りなど、それこそ主や他の者達が好きそうだ――と、愉快な気分になったのを最期に、白虎は意識を手放した。

炎で全身を焼かれたハンティは、かろうじて危機から脱していた。焦土と化した地面を転がりながらも、氷雪系に属する水魔法を唱えて身体に纏わりつく炎を消すと、素早く立ち上がって身構える。攻撃を喰らったからといつまでも隙を晒しているようではあの馬鹿（レオンハルト）に怒ら

れる。片膝を突きながらも剣を前に構えて顔を上げると、変わらぬ位置に火の鳥はいた。
「これでちょっとは楽になったか？　……でもまあ、ここからが本番だな。俺にとってもお前にとっても」
ザビエルの使徒。朱雀となった戯骸だ。姿こそ変わったものの、生きてそこにいる。
……確かに殺したはず！
これを生きていて良かったと喜ぶべきか、殺せなかったと嘆くべきかは微妙なところだが、不利になったことだけは事実だ。そのことに、苦々しい気持ちを覚える。
だが、その疑問はすぐに解決の取っ掛かりを得た。それは、己の中にある知識と、主から聞いた話、今眼の前で起きている現象、その全てを組み合わせて浮かんだ答えを確認するように、ハンティは細めた目を朱雀に向けた。
「……傷が炎とともに再生してるけど、あんたってばそういう生き物だったんだ」
「お、解るか？」
解る。古い友人の遺した書物にも、伝説として記されているものが、朱雀の正体だ。
「……レオンハルトと戦って生き延びたって聞いてたけど、それが正体なら納得だ」
「へぇ――言ってみな」
鳥になっても表情は分かりやすい。試すような笑みを浮かべ、答えを促した朱雀に、ハンティは告げた。
「大昔の伝説に、死んでも蘇る炎の鳥がいるって聞いたことがある」
死んでも炎とともに蘇り、死ぬことの出来ない伝説の生き物。
その名を、今の言葉ではこう呼ぶのだ。それは、
「――〝不死鳥（フェニックス）〟。それがあんたの元の種族ってわけだよね？」
「戯骸さんが不死鳥……ですか？」

レオンハルト軍本陣で、魔導を捕らえて一度戻ってきたペールに、レオンハルトは戯骸の正体を話していた。
「ああ、そうだ。死んでも蘇る不死の鳥。伝説上の生き物が、戯骸という使徒の元の種族だろう」
「それって、作り話か何かだと思ってました。昔の人が適当に作った系の」
ペールが休憩用にと持ってきたハーブティーを飲みながら言う。椅子を置いて座っているが、肩や腕が当たるくらい距離が近いのはいつものことだ。注意することも出来るが、敵軍との交戦中とはいえ、仕事を終えた帰ってきた、短い休息中ともあって何も言うことはしない。こちらも淹れてもらった紅茶で喉を潤し、それを机に置きながら、
「創作であっても、元となる話はあるものだ。確かに、大体はデマの類か、尾鰭が付いていたりするものだが……不死鳥に関しては真実だったということになるな」
「ということは、戯骸さんがレオンハルト様と戦って生き残ったって噂は――」
「……ああ、言ってなかったか。――本当のことだ。一度死んで生き返ったのを、〝生き残った〟と言うならな」
聞かれなかったのもあって言うのを忘れていたな、と己の不覚を少し恥じる。その上で、その時のことを思い出しながらレオンハルトは詳細を口にした。
「ザビエルが俺の分身と遊んでいる時、俺はカッとなって戯骸を衝動的に殺してしまってな。やってしまったと後で頭を抱えたが……実はその日の内に他の場所での目撃証言があることと、古い知識と当てはまることから既に生き返っていたらしいこと。それらの情報から、奴が不死鳥であることに気がついた」
「……それじゃあ倒せないじゃないですか。殺しても蘇るなら、無敵ってことですよね？」
「いや、そうとは限らないだろうな。一度死んで蘇っても、直ぐに動けるとは限らない。少なくとも俺が殺した時はしばらくその場から動

いていなかった。戯骸自身がよく解っていなかった可能性もあるが……復活にかなりのエネルギーがいるか、時間が掛かる可能性もある」
　ひょっとしたらザビエルも気がついていない可能性もあるな、とレオンハルトは戯骸についての考察を続ける。
「もっとも、真の姿とやらだとどうなるかも解らないが……とにかく、戯骸については殺してしまっても問題ない。殺しても死なないのだからな。ゆえにハンティにも、従わないのなら殺せと――」
「？　レオンハルト様？」
　ペールが首を傾げて、言葉を止めたこちらを見上げてくる。
　だが、レオンハルトはそれを口にしたことで、あることに気がついてしまった。そのことについて、何か問題が起きてしまわないかを考えていると、ペールが何かを思いついたように尋ねてきた。それは、
「そういえば、そのことは始祖様に言ったんですか？」
「……言ってないな」
　考えていたことと全く同じであった。こちらを見上げる半目の視線の圧力に、目線を逸しながらレオンハルトは言う。
「……失敗したな。途中で気づくだろうから問題はないだろうが……どの道、倒すのなら避けては通れない道だ」
「いやー……どうですかねぇ。私やキャロル先輩みたいに割り切りが良いならともかく、始祖様ってレオンハルト様に似て情に厚いのは良いんですけど、あれで割り切り超下手くそですし……微妙に葛藤したかもしれませんよう？」
「……だろうな。……あいつの好きな菓子でも用意しておくか」
　それがいいですよう、とクッキーを摘みながら言うペールを横目に頭に手を当てながら心の中で侘びておく。すまなかったな、ハンティ。でもまあ、どうせ解ることだから許してくれ。後でペールが食い散らかしたお菓子やるから。
　……俺としたことが、情報の共有を怠るとは……猛省しなければ。
　まだ言ってはならない情報かと思っていた。だが、考えようによってはハンティの精神を鍛える良い機会とも言える。結果的に問題は

ないだろうが、意図したものではない以上、自分の管理が杜撰であったと恥じる。ザビエルと石丸に気を取られすぎたか。
謝罪を終え、心の中のハンティが親指を立てたのを見て、おそらく許してくれたと解釈したレオンハルトは、ペールの何気ない言葉を聞いた。
「戯骸さん、強いとは思ってましたけどそんな凄い存在だったんですね。始祖様、大丈夫かなー……」
伝説の不死鳥。それが使徒となり、力を増した存在こそが、ハンティの相手だ。
確かに強く、厄介な相手だろう。だが、
「問題ない。戯骸は伝説の存在だが――それはハンティも同じことだ」
「あっ、それもそうですね！」
そう。ハンティも戯骸と同じ様に、伝説の存在が使徒となり、力を増した者だ。
しかも形は違えど、元から不死であった存在。ハンティという己の使徒はそんな奴だ。
そして、条件が同じであれば簡単には負けないし、そうでなくとも己を滾らせた女だ。そこらの男に負けるような軟な女じゃない。
だからこそ、レオンハルトは己の使徒の勝利を信じ切る。
「――ハンティは勝つ。勝利の重さを知っている女だ。そう簡単に負けるはずがない」
「ですかねぇ。……それにしても、伝説同士のバトルとか、ちょっと見てみたいですね。激レアイベントじゃないですか」
懐から取り出したメモ帳を手に、うずうずとし始めたペールに、レオンハルトは軽い溜息付きで、
「イベントと言うならこの後も大きなイベントが幾つも控えている。ハンティには、出来るだけ早めに戻ってきてほしいところだな」
「……エッチなイベント回収なら、直ぐに出来ますよう？」
しなをつくりながら腕を取って、胸を押し当ててきたペールをあっさりと振り払いながらレオンハルトは言う。

「戦の最中だ。そういうのは終わってからにしろ」
「あんっ、もう、たまには戦いの前の昂ぶりをぶつけて欲しかったのに……」
残念そうに口を尖らせるペールに、内心で謝罪する。
……悪いが、この昂ぶりをここで発散するつもりはない。
どんな形になるにせよ、戦いの前の血の熱さや、頭が冷えるようなこの感じは戦いをするに当たって特に必要なものだ。
他の雑念を混じえては、気概が衰えてしまう。色事くらいで萎えることもないし、熱くなることもあるが――今回の戦いには、極力不純物は混じえたくないものだ。
そのための〝掃除〟も、直に終わる。レオンハルトは自分が動くべき時が徐々に近づいていることを、戦場を真っ直ぐに見据えながら感じていた。

「――まあ、そういうことだ。俺は不死鳥でな」
多分、レオンハルトも気づいてるだろうぜ、と告げられるが、ハンティもそう思う。
……気づいてたなら言いなさいよっ！
これでは先程まで悩んでた自分が馬鹿みたいだ。殺害許可が出たのは、殺しても問題ない、死なないからという意味だろう。
心の中でレオンハルトに向かって親指を下に向けるような想像を行うと、ハンティは続く朱雀の言葉を聞いた。
「かく言う俺も、最近になって自覚した身でよ。いや、不死鳥ってのは知ってたが、今まで死んだことも無かったし、だからといって、死んで確かめようとはならんだろ？　だからお前の主に殺されて、気づかせてもらったことになる」
「……なるほどね」
厄介だ、とハンティは思う。殺しても復活するなら、朱雀を倒すことは出来ないのではないかと。
しかしその答えは、朱雀自ら口にした。苦笑混じりで、

「つっても、さっきみたいに直ぐに復活するのは難しいかもだけどな。新しく生まれ変わるには体力も時間もかかるみてぇで、俺としてもまだ慣れてねぇんだ」
「……それ、言わないで隠してた方が良かったと思うんだけど？」
「おっと、いけねぇ。ハハ、だがまあ言っちまったもんはしょうがねぇな」
　気楽に喋る朱雀を、呆れながら見るも、ハンティは朱雀の狙いを察する。
　――最早、己が手加減する理由は無くなったと。
　その心意気を感じ、ハンティは大きく息を吐いて、気持ちを切り替える。
「……殺しても死なない不死の生き物と、まさか実際に遭遇出来るなんてね」
「？　その反応だと、もしかして昔っから知ってたのか？」
　頷く。当然だ。
　自分はかつて、己と同じような永遠を生きる存在を、興味本位で調べてみたことがある。その際に出てきたのは、不死鳥などの伝説の生き物だが、その中には、己もいたのだ。
「――遠慮する必要は、ないってことだよね？」
　改めて問いを投げる。すると朱雀は一瞬間を置いてから、気勢を感じる声で、
「おお、当たり前だ！　俺は死んでも死なねぇからな！　――本気で来ないと倒せねぇぜ!?」
　改めて答えを告げた朱雀に、ハンティは安心したように口元が緩んでしまう。
　無理をする必要も、手加減をする必要もない。
　それなら本気を出せる。最強の自分を見せてやれる。
「見せてやるよ。あたしの――――本気の姿を」
　それを証明するように、ハンティは己を解放した。
　己の業、そして変わった在り方を象徴する真の姿を。

「――――」
朱雀は、眼前でハンティの身体が光り輝くのを見た。
そして徐々に、その姿は変化していく。
その際に、ハンティに与えた傷が一瞬で治っていく。
「再生……？　いや、それよりも、その姿は――」
朱雀が驚愕する先、光が収まり、ゆっくりと立ち上がったハンティの姿は、確かに変化を遂げていた。
額のクリスタルが第三の目のように開き、頭から角のようなものが生えた。背中からは大きな黒い翼が生え、同じ様な黒い尾が後ろから伸びている。
黒い髪は更に長くなり、その瞳は、彼女の主のように紅い双眸に変化していた。
そして彼女は、己の得物であった剣を手に取り、
「――この姿を、身内以外に見せたのは初めてになるかな」
静かな声で言った。朱雀は思わず声を上げる。
「ドラゴン……か？」
その姿はプラチナドラゴンの魔人であるカミーラに少し近いだろうか。紅い瞳や第三の目を除けば、形態としてはそれに似ている。
こちらの言葉に、ハンティは小さく苦笑し、
「以前はもっと見るに堪えない姿だったし、制御も利かなかったけど……使徒になってから変わったからね」
と、ハンティは一度笑みを消して、堂々と剣を構えてみせる。
「これがあたしの、使徒としての姿――ってことになるかな」
今までのは使徒としての戦闘ですら無かったと、そういうことだ。
だから、と、
「ここからは正真正銘の本気を出すけど……慣れてないし、手加減は出来ないからね。――さっさと掛かってきな」
「っ……上等！　中々に燃えさせてくれるじゃねぇか！」
朱雀は、己の内の闘争心が刺激されるのを感じた。
ハンティの使徒としての存在感。魔人に近いその圧力に、朱雀は心

が燃え上がるのを抑えず、その闘気を体現するように炎が吹き荒れる。

そして、空中でお互いに勢いを付けると、

「――！」

その瞬発する突撃を合図に、伝説同士の戦いは始まった。

最強の使徒

キナニ平野中央部の空では、戦闘の音と空気が響いていた。
「お、おい……見ろよ、あれ……」
緋色となった空を見上げる魔物兵達は、空中で交叉し合う二つの存在に圧倒される。それは、魔軍に所属する魔物であれば誰もが知る二人だ。
「ハンティ様と、戯骸様か……？」
「あんな姿見たことねぇ……」
最強の使徒と名高い二体の争いに、思わず息を呑んでしまう。
その姿を初めて見る、というのもそうだが、その戦闘の凄まじさに見入ってしまうのだ。先程までの戦いも凄まじかったが、今目の前で生じている戦いは、まるで、
「魔人同士の戦いじゃねぇ、よな……？」
そう思ってしまうほどの戦いだ。
少なくとも、魔物兵達には違いが解らない。解るのは、自分達よりも遥かに高いレベルで戦っているということ。そして、
「――あれは……」
二体の戦いに気づいたのは、地上にいる者達だけでは無かった。
空を行き、平野に近づいてくる白の巨竜も、遠くの空で戦う同胞と、火の鳥に気づき、
「……フッ、なんだ。中々に良い空気を吸っているではないか」
要らぬ心配だったな、とドラゴンは滑空するように徐々に高度を落とし、地上へと近づいていく。そして空に向かって言葉を放つ。
「久し振りの空だろう、存分に楽しむといい――空は、誰にでも平等だ……！」
そうして白の巨竜は、再び空に舞い戻ってきた同胞と、それと向き合う勇敢な戦士への、自分なりの敬礼として、
「――――！」
空に響く咆哮を発した。

ハンティは、再開された戦いで、久し振りの感覚を味わっていた。
懐かしい、空を飛ぶ感覚だ。
……ほんと、懐かしいね……！
確かめるように、背の翼を動かして飛ぶ。この翼を動かす感覚も、自分が足の付かない場所にいる感覚も、空気を突き抜け、風となっていく感覚も――全てが久し振りの感覚だ。
空を故郷とするドラゴンとして自由に飛び回っていたのは、もう千年以上昔のことだ。人の姿となり、一時的に跳び上がったり、魔法の力で宙にいることはあっても、こうやって飛べるようになるとは思いもしなかった。
……そう考えると、使徒化も悪くはないかな。
悪いことばかりではないことはとっくに解っていたが、空を往く感覚を思い出すと、改めてそう思う。
しかし、かなり久し振りだというのに問題無く飛べるのは、一度染み付いたものは忘れないということだろうか。ドラゴンであった頃の感覚を、身体は憶えているということかもしれない。
……気持ちいい。
そして、楽しい。
戦闘中、戦争中で不謹慎かもしれないが、素直にそう思う。
いや、戦うことも楽しいとも思う。それが意味するのは、ここが自分の戦場だということだ。地上もそうだが、空だとより一層そう思う。
「――――！」
そんな時、空の向こうから、聞き覚えのある音の震えが来た。
思わず視線を向けてみれば、遠くの空に、白の巨竜の姿がある。ここからでも見えるとは大したものだ。そう思いながら、ハンティは同胞の咆哮を受け取り、
……ああ、そうだね。
帰ってきた、という想いがある。以前とは違った存在、違った姿だが、確かに自分は、空に帰ってきたのだ。

ドラゴンでも、人でもない。使徒という存在でも、空は変わらずそこに在り――平等に自分を受け止めてくれる。
「ハッ、すげぇ愉しそうじゃねぇか。高く飛びすぎだっての」
そう告げてきたのは、こちらを追いかけて炎を飛ばしながら、しかし途中で止まってこちらを見上げる不死の鳥だ。躰の殆どが炎で出来たような伝説の鳥に、ハンティは見下ろしながらも苦笑付きで答える。自分の心境の変化を、認めるしかないと、
「そうね……結構、愉しんでるかも」
「そいつは良いことだな。――だが、どこまで行く気だ？」
ええ、とハンティは頷き、答えた。
「――どこまでも飛ぶよ。戦いに制限なんて設けたら、つまらないでしょ？」
「！　……お前――」
驚いたように言葉を無くす朱雀。それに対し、ハンティは背の翼を動かすことで更に上昇を掛けながら炎を躱し、その上で朱雀を笑みで見下ろし、誘うような言葉を掛けた。
「ほら、もっと来なよ朱雀！　あたしは、もっと上を望んでいく。あんたも付いてきな！　――それとも、不死の鳥はこれ以上高くは飛べないの!?」
「……！　――いや、そんなこたぁねぇ！」
なら、
「――もっと速く、あたしに負けないくらいの力で昇ってきな！」
朱雀が言う。こちらの笑みに、笑みで返し、
「もっと高く、もっと熱く行くぜ……!!」
と、朱雀が上昇を掛け、こちらを追いかけてきた。それを見て、ハンティはやはりと自覚する。
……ああ、駄目だ、あたし……！
今まで抑え込んできたはずの昂ぶりを抑えきれない。ドラゴンの姿に近い、使徒としての力を解放したせいもあるのかもしれない。本能に近い趣向が、内側から溢れ出してくる。
少なくとも今の自分は、空を飛ぶのも、強い相手と戦うことも、力

を出すことも、その何もかもが、
――愉しくて、しょうがない……！
ゆえに、ハンティは己の戦うために培った、剣や魔法などの技術、ドラゴンカラーやヒューマンカラー、使徒として力を存分に引き出し、それを朱雀に向けて、存分に振るっていった。
「さあ、どんどん行くよ！」

真の姿を解放した朱雀は、同じく真の姿を解放したであろうハンティと空の戦いを行っていた。
既に地上は遠く、曇天の雲が近い。羽を動かし、一瞬の上昇を続けながら、相対するハンティに炎の連射を行う。同時に突撃を仕掛け、相手も炎を紙一重で躱しながら飛翔し、こちらと交叉した。
炎で相手を飲み込もうとし、相手は剣でこちらを斬り刻もうとしてくる。だがその交叉は一瞬で、お互いが通り抜けるように位置の入れ替えを行うと、身を大きく回しながら反転し再び相手を見据えて攻撃を仕掛ける。
８の字に近い軌道で戦闘を行い、しかし上昇の飛翔を続けた。距離を置き、相手が魔法の雷撃を飛ばしてくるのに合わせて炎の塊をぶつける。再び、近距離での交叉が始まり、朱雀は笑みを浮かべながらもこう思った。
……中々にキツいな！
真の姿を解放した同士の戦いではあるが、朱雀は目の前の相手に付いていくことが苦しくなっていた。
まるで別人の様だ、と朱雀は感嘆と苦さが混ざった様な思いを感じる。本当に魔人じゃあねえだろうな、と。――それくらい、ハンティの能力は向上していた。
しかもそれでいて、地上で戦っていた時に用いていた様な技術も失っていない。宙で翼を羽ばたかせながらも、その戦闘技術は確かなもので、こちらを追い詰めてくる。
己も魔人級の強さを持つ、最強の使徒だ。などはよく言われていた

が、それでも今のハンティを見れば、苦笑を浮かべるしかない。能力の上では、確実にこちらが劣っている。だが、
「負けるわけには、いかねぇよなぁ……！」
「……！　やるじゃない……！」
放射状の炎を吹き、相手を焼き尽くしてやろうと試みる。だが、焼いたはずの相手の肌を、朱雀は見た。
……高速で再生してやがるな！
不自然な程の速度で、相手の傷が塞がっていき、１０秒も経たない頃には綺麗な肌色に戻っている。驚異の回復力だ。再生力、と言うべきもの。それを目の当たりにしながらも、
……負けるわけにはいかねぇし、負けたくもねぇ！
例え勝ったところで、仲間達の運命は変わらないかもしれない。ならば、不死とはいえ、命を懸ける必要はないかもしれない。
だが朱雀は、不死だからこそ、命を懸けたいと思う。何故なら、
……仲間だからな……！
朱雀にとって、使徒の仲間達や主は仲間なのだ。
不死の鳥として気づけばこの世界に生まれ落ちていた朱雀は、生まれた瞬間から一人であり、孤独であった。
話し相手くらいは出来たこともあったが、不死である己と違い、余人は直ぐに死ぬ。寿命が存在しない自分にとって、数十年で死ぬ他の生物は、一時の相手でしかない。
だが、そうして孤独でつまらない日々を何百年と過ごしてきた己の前に現れたのが、今の主人と仲間達であった。魔人と使徒。見るからに傲慢で、性格の悪そうな奴等ではあったが、己が必要だと、そう誘ってくれた初めての相手であった。
不死でこそないが、寿命が存在しない仲間が出来た。人を苦しめるのが好きなイカれた連中だったが、自分にとっては初めて出来た仲間だ。
そんな仲間が、これから死ぬ。既に一人は死んだ。主のために命を懸けたのだ。
他の者達も遅かれ早かれ死んでいくだろう。最後は主も死に、遺る

のは死んでも蘇る自分だけだ。そんなのは、
「寂しいじゃねぇかよ。なぁ……！」
生きて馬鹿をやるのが面白いし楽しい。悪いことだって、それを一緒に感じられるなら、そこにあるのは連帯だ。今、眼前の相手と戦い競い合うのも一種の連帯であり、己にとっては楽しい出来事だ。
そこで朱雀は、己の主を思う。
……ザビエル様も、こんな風に楽しめばいいのによ……！
そうすれば、もっと楽しい時間が過ごせたかもしれない。妬んで怒って、それを発散するために他者を苦しめるばかりでは勿体無い。
もっと向き合っていってほしいのだ。自分にも、相手にも。色んなことに。
……ここからだと見えるかよ……!?
ゆえに、朱雀は相手に先導されるように天高く昇り、命を賭して戦う。
死んでも生き返る不死の身で命を懸けたところで、その重さはたかが知れているかもしれない。
だが、それは解らない。解らないなら、
「試してみるのも悪くねぇよな……！」
楽しんで行く。朱雀は、己と同じ不死の存在に言葉を放った。
「不死の命が軽いとは、限らねぇぜ――!!」

ハンティは、不死の鳥が叫びとともにその身を大きくしたのを見た。
大部分が炎で出来た巨大な躰。それは、朱雀のこの戦いに懸ける重さそのものであり、
「良い気合だね……！」
不屈の闘志を持った不死鳥を前に、ハンティは口端が緩むのを自覚する。そしてそれは、相手も同じだ。戦いを、この状況を楽しみ抜こうとしている。楽しむこちらに呼応するように、しかし負けないと、命を懸けて挑んでいる。先程の言葉の意味はそれだろう。ハンティ

は理解した。だが、
「勝つのは、あたしだ……！」
「いいや、俺だ……！」
だから、ハンティは行った。
翼をはためかせ大気を叩き、一瞬で１００メートルを駆け抜ける加速を行う。速度は十分だ。
だが、ハンティは更に加速した。これでは足りないと。
その証拠に相手は炎の躰で同じ様に加速し、同時に炎の砲撃を翼から飛ばしてくる。朱雀はこちらの上に位置取り、頭上から獲物を狩るような動きで襲いかかってくる。
それは空の戦いだ。敵をより有利である頭上から強襲する戦い方。死角であり、空を飛ぶ者にとっては翼があり、傷つけば致命となるその狙い。それを感じ、ハンティは嘴と爪による攻撃を、下に潜り抜けることで躱しながら言葉を作った。
「空の戦いなら、こっちも得意だよ！」
「おお、見せてみろ！　ドラゴンの戦い方ってやつをよ！」
言われずとも、ハンティは行った。
相手の下を潜り抜ける際に、宙返りを行い、その後ろにある物を、朱雀に振るった。
「っ……!?」
それが朱雀を打撃する。理解が及ばぬ一撃に、しかし直ぐに朱雀は得心した。
ドラゴンの背、そこにあるのは翼だけではない。その答えを、朱雀は位置取りを優先しつつ答えた。
「ドラゴンの尻尾か……！」
「背後を取ったからって油断しないことだね！」
振るったのは、腰から生えている黒い尾だ。
それを朱雀の背中目掛けて叩きつけた。
炎に覆われた朱雀の躰に攻撃を加えれば、その部分は当然炎に焼かれる。こちらの尾も熱さと痛みを感じて一瞬歯噛みするが、徐々に火傷は治っていく。

この身に宿った呪いというべき加護。傷の治りが高速化しているのだ。
何故こんな呪いが宿っているのかは解らない。ドラゴンでなくなった頃からずっとあるものであり、ハンティとしても慣れたものだ。自分の運命や異常さを表しているようで好きではない時もあったが、
……戦いに使えるだけ上出来だね……！
戦いは別に好きではなかったが、好きになると使えるだけ好ましいとも思う。ドラゴンとしても、使徒としても、戦闘に使えるならそれは立派な武器で、有効に用いるべきものだ。
そして今の自分は、昔よりも確実に強いと確信出来る。
それは使徒になり、千年近くも同僚や主と切磋琢磨し続けたからだ。模擬戦を行い、身体を鍛え、時に技術を教わる。その積み重ねこそが、今の自分なのだ。
……今度はこの姿で戦ってみようかな！
避けていたことだが、次からはやってやっても良いと思う。どこまでやれるか興味があるのだ。空にずっといながら魔法でも撃ってれば労せず勝てるかもしれないし、あの馬鹿を一方的に攻撃出来るところを想像すると気分がいい。だが、
……そんなことしてると、そのうち飛べるようになったりして――。
嫌な想像をしてしまい、その考えを振り払う。翼が無いのだから物理的に不可能なはずなのだが、あいつなら、〝宙を高速で踏みしめれば、飛べるようになる〟とか意味不明なことを自信満々に言って、追いかけてきてもおかしくない。それくらい滅茶苦茶な奴だ。これを口にするのはやめよう。ほんとに空中ジャンプを習得しかねない。
とはいえ今の己がここにいるのは、皆のおかげなのだ。
相手も負けるわけにはいかないのかもしれないが、身内のためにも負けられないのは自分だって同じだ。
そして思う。負けない、ではない。勝つ、と。
その覚悟を決めて、ハンティは攻めに出る。相手もそれに応え、

「おお……！」
燃え盛る火炎と、風が吹き荒れる中、ハンティは一度動きを止めるように翼で大気の溜めを作り、
「……！」
それを一気に解放することで、真っ直ぐに朱雀へと突撃した。

……無茶苦茶だな……！
朱雀は、炎の中を正面から突き進んでくるハンティに、見事という思いを得た。
剣の連撃や尾、時には翼も使って炎を払い、真っ直ぐに向かってくる。その紅い瞳には、〝これで決める〟という強い意志が見えた。
「……させねぇよ！」
声とともに、炎を重ねる。鞭や槍のように炎を伸ばし、放つのは数十本の炎だ。だがハンティは変わらず炎を払いながら真っ直ぐに突撃してくる。
炎の層を恐れることなく突き進む姿はまるで、
……主の真似事か……!?
と、思ってしまうほどに、真っ直ぐで堂々としている。
己の邪魔をする障害を斬り払い、敵を倒さんと迷いなく突き進んでくる姿は、正に王道。覇者の前進だ。
そしてその剣技は、彼女の主（レオンハルト）の色が垣間見える。ここに来て剣技主体の戦闘を臨んだ相手に対し、朱雀は声を跳ね上げた。
「――面白れぇ！」
ならば自分も、魔人ザビエルの使徒として、それを受け止める。
炎の連射を、朱雀は行った。
極大の熱。相手を燃やし尽くさんとする、数百の炎の群。それを幾重にも重ねて飛ばし、
「最強の使徒だって言うなら、これくらい余裕だよなぁ!?」
「っ――当たり前だよ！」
最早隙間が無いほどの炎の雨の中を、ハンティは迎撃しながら進ん

でくる。
飛翔しながらの回避は完全には防ぎきれず、幾つもの炎が相手を焼いていくが、それでも相手は止まらない。止まるわけがない。
炎を砕き、払い、時には構わずに進んでくる。こちらを倒そうと向かってくる。再生はしても痛みが無くなるわけではない。痛みはあるはずだが、それだけでは止められないのだ。
止めるには、最大の一撃を以ってして、焼き尽くすしかない。
だからこそ、朱雀は力を溜めて、
「――最後の炎だ!!」
吠える声とともに、己も突撃した。

炎の群を突破したハンティは、朱雀の突撃を見た。
だがそれは、ただの突撃ではない。
己が纏う炎を何十倍にも膨れ上がらせた、莫大な炎の玉。
曇天の空に浮かんだ極大の太陽の如き炎球であった。
避けることは出来ないし、したくもない。だから、
「勝つ……!」
ハンティは、真正面から太陽に突っ込んだ。
高温の炎の中を、強引ともいえる動きで突き進む。この中心に、朱雀がいるのだ。勝つためには、正面から乗り越え、相手の身体に剣を突き立てるしかない。
翼で炎と空気を叩き、全速を出しながら中心にいるであろう朱雀を探す。
何十もの炎の層を突き破った先、白の鳥がいた。
「――!」
――来い、と。
そう言われているような視線を感じて、ハンティは返答するように、その通りにした。
……行くよ!
炎の中心にいた朱雀に、剣を振りかぶりながら飛翔する。

身体能力はこちらが上。強化系の魔法を掛けた時よりも速い高速の状態で行う一閃は、この距離では防ぐことも躱すことも出来ないだろう。
「おぉ……！」
だが、相手は諦めなかった。
羽を広げ、嘴で迎撃するように、熱い戦意を向けてくる。
勝ちを諦めない。全力の姿勢を前に、ハンティは歯を見せて笑い、
「――！」
高速の一撃を、朱雀に叩き込んだ。

身体に剣を突き立てられた朱雀は、天から落下する自分を自覚した。
……俺の負け、か……。
羽を動かそうとしても力が入らない。
空で敗れた者は地上へと落ちていく。それは、空に生きる生き物にとって当然の理だ。
その前に、朱雀は滞空する勝者に声を掛けた。
「……どうだったよ、俺の命懸けの戦いは」
「……あたしは楽しかったけどさ。――自分の価値は、自分で決めなよ」
言われ、朱雀は考える。
考える前に、笑みが浮かび、答えは出た。
「……楽しかったな」
「なら、そういうことだよ」
空に浮かぶ勝者に、穏やかな笑みで言われ、朱雀はそこで痛快さを覚えた。
「は、ハハハ！　――俺の負けだ！」
最強の座は掴めなかった。最初から未来はないと、負けると分かっていた戦いだった。
だが、

「今回の生も……楽しかったな――」
命も尽きようとしている。直に死に、そして生き返るだろうが、
……ハハ、今回の復活は、時間が掛かりそうだな……。
力を使い過ぎた。自分にとっても、今回の死は長いものとなるだろう。
次に起きた時には、主はいないかもしれないが、
……今回は俺にも、死ってのを感じられるかもな……。
次の状況がどうなるかも解らないが、絶望することはないと思う。
生きていれば、また楽しいこともある。また仲間と会えることもあるかもしれない。
……人の何十倍も生を感じられるんだ。楽しまないと、損ってもんだよな――
そうして朱雀は次の生を楽しみに、安らかな死というものを感じながら、地上へと墜ちていった。

地上を照らしていた炎は消え、曇り空が広がる。眼下では、未だ多くの魔物、人間が戦っており、
「行かないと、ね……」
まだまだ己の戦いは終わっていない。
これから人間との戦い、場合によってはそれ以外との戦いも待っている。
自分に敵うものは人間には殆どいないかもしれない。一方的な虐殺となる可能性だってある。
だが、
「逃げるのは、性に合わない」
仲間が戦っているのに、見捨てることは出来ない。
今の自分には、立場というものがある。その立場を想い、命を懸けて戦いを挑んだ者がいるのだ。それを蔑ろにはしたくない。
最強の使徒。強大な力を持つ者として、それを振るい、多くのことを成せる。人だって多く救えるし、戦いを楽しむことだって出来る。

生きていれば、また戦うことも出来るだろう。だから、

「――またね、戯骸」

空から地上に墜ちて消えていった戯骸を見て、ハンティは別れと再会の言葉を送った。

激戦

「あーーー!! しつけぇ! いい加減に死にやがれッ!!」
「ぐっ……」
「っ……!」
西側の前線にて人間の将二人を相手にしていた魔物大将軍コウウは、もう何度目かになる攻撃で武士の将である女と爺を吹き飛ばした。
その際に、セットで敵軍の人間共もついでに槍を大回転させて吹き飛ばす。横目で膝を突いた人間の将二人を見ると、よろつきながらも再び立ち上がり、
「まだ、まだァ……!」
「これしき、で……朕を殺せる、とでも……!」
「チッ、くそうぜぇ蝿が!」
槍と刀、両の武器を構えた女と爺が並んでこちらに突っ走ってくる。踏み込み、右からやってくる女をまず蹴りで迎撃した。地面を転がり、吹き飛んでいく女を無視し、爺の刀を槍で受け止める。火花が散り、それなりの力での連撃を行ってくるが、槍の先端でそれを弾き、流れの軌道で槍を回し、石突きで肩を叩いた。吹き飛んだ爺に、死んだか、と思うも念の為トドメを刺してやろうと槍を突き刺そうとしたところで、その間に復帰してきた女が槍でとどめの一撃を弾く。不敵な笑みで、
「貴様は……ここで殺す……!」
「あぁ!? 誰が誰を殺すって!?」
死ぬのはてめぇらだ! と、突きの連打を行う。風を裂き、鋭く敵の命を刈り取ろうとする槍は、しかし相手の捌きの連続によって的確に急所だけを外される。腕や足、腹などに掠ることはあるものの、命を取ることが出来ない。それに対し、コウウは苛立ちを隠そうとせず、槍を握る手に力を込め、
「殺すとか言う割には防御主体か!? ――勝ちを諦めた敗北者が、俺の前に立ってんじゃねえよッ!!」

「う、あ……ッ！」
もう何度目になるか分からない槍のぶちかましを行い、ゴミ掃除をするように地面ごと爺と女を払い飛ばす。土が抉れ、そこらに転がった死体の山も一緒に崩れる。魔物兵の死骸もあるが、大部分は己が築き上げた武士や人間の兵士の死骸だ。それを見て思うのは、当然、という思いと見下すような侮蔑だ。
……やっぱ人間共は馬鹿だな。強い奴と戦ったら死ぬ。そんなのは魔物界の常識だぜ。
相手の強さを見極めれないのが弱者たる所以か。己の圧倒的な武力の前には、並の魔人すら相手に出来るものだ。人間が勝てる道理はない。
だが自分とて、魔人も含めれば最強とは言い難い。そんな化け物がうじゃうじゃとひしめき合っている魔境こそが魔物界であり、魔軍という組織だ。そんな自分達に、弱い人間の身で逆らおうとするのは余りにも馬鹿らしい。
……もっとも、ケイブリスみたいに媚び諂うのはアレだがな……。
あそこまで行くと気概が萎えてしまうような気がする。虎視眈々と上を見るコウウではあるが、ああはなりたくねぇな、と思う。自信を持つことが大事だ。自分はいつか絶対に魔人になる。そのために手柄を立てる。ゆえに、
「ぶち殺してやる……！」
と、槍を回転させ、必殺技を放とうとした。そんな時だ。不意の現象が起きた。
空から、色と音が生じた。色は紅蓮、音は戦闘の音。曇り空で隠れた太陽の代わりに大地を僅かに照らすような光。それに何事かと見上げてみると、
「あれは……」
ここから東の空。その上空で、二つの影が戦っている。
それは見覚えのない二人であったが、よくよく見てみれば、見知った顔がある。それは、
……レオンハルトの使徒のハンティ……か？　何と戦ってやがん

だ？

火の鳥。そうとしか言えない相手と戦っている。見知った気配の様な気もするが、生憎と知らない生き物だ。

まさか人間の軍にいる妖怪の一種か、と思うも、そうだとしたらあの最強の使徒と名高いハンティと互角に戦える奴が人間の軍にはいることになる。そうだとすれば油断ならねぇな、と警戒を露わにしていると、背後から声が聞こえた。

「――コウウ様！　た、大変です！」

「……あぁ？　どうした？」

己を呼ぶ声に振り返れば、そこにいたのは麾下の魔物隊長。何か報告でもあるのか、と応じる。東の空を見上げ、

「ひょっとしてアレのことか？」

「そ、それもあるのですが、異様な状況となっていまして、その指示を頂きたいと……」

「？　回りくどいな。いいから言ってみな」

そう催促するように言うと短く頷き、魔物隊長はその状況を口にした。それは、

「……ザビエル様の使徒と、レオンハルト様の使徒が――――戦っているようです」

「……は？」

言われた言葉に、コウウは理解が及ばず、間の抜けた声を発してしまう。

今、魔法や矢が飛んできたら弾くことも出来ずに直撃していたやもしれない。それくらいの唖然だった。

「……何だそれは。冗談か何かか？」

「恐れながら、冗談ではありません……！　兵を動かして確認を取ったところ、どうやらザビエル様の使徒がレオンハルト様の使徒を捕らえようと戦闘を仕掛けたということらしく……」

続く魔物隊長の説明に、コウウは再び現実の認識に努めた。

魔人ザビエルが、魔人レオンハルトを目の敵にしているのは知っている。以前にボコられてからはより一層憎しみを募らせているらし

いことも。その内、また襲撃を仕掛けたりするんじゃないかとも予測していた。死ねば魔人の枠が一つ空くし、それはそれでいいかとも思っていたのだが、

……まさか、人間との戦争中に？　何考えてんだあのかっぱ!?

使徒という貴重な戦力を、一応友軍である味方相手に使うなど馬鹿らしい。魔物大将軍としてその行動に怒りを覚える。

だが、やるなら勝手にしろ、とも思う。ある意味、手柄は取り放題になったようなものだ。使徒がいないこの隙に、手柄を、とほくそ笑む。

しかしそれは、次の魔物隊長の言葉で頓挫することになった。

「既に煉獄様、魔導様、式部様もやられてまして、残るは戯骸様だけだそうです。つきましては、我が軍を指揮するコウウ様に、どうすればいいか指示を下されば……」

「……ああ、そうだ、な……」

そこで、コウウは脳裏に嫌な予感が走り言葉を止める。

そしてややあって気づく。こちらの上役である魔人ザビエルが、魔人レオンハルトに反旗を翻した、とも取れる行動を取った。そして、その軍を指揮するのは、

……あ……？　ひょっとしてこれ……俺もその身内だと思われるんじゃねーか……？

ザビエル個人がその使徒達とともに、他の魔人に喧嘩を売ったところで知ったことではない。しかし今は戦争中、ザビエルは自分達の軍の総大将だ。その軍に所属する自分は、レオンハルトに弓を引いた主犯格の一人だと――

「……まずい」

「え？」

コウウは頭を抱えて、叫びだしたくなり、我慢できずに叫んだ。

「――ふっっっざけんなっ!!　俺まで巻き添えを食らうじゃねぇかッ!!」

このままでは逆賊まっしぐらだ、とコウウは怒りを声に乗せる。よもやそんな事態になっていようとは夢にも思わなかった。

ザビエルの使徒ではない自分だが、大将軍として、その腹心であることはよく知られている。その立場を利用したこともよくあるのだ。そして軍全体を率いる立場としても、責任は自分に重く掛かってくる。知らなかったでは済まされないし、加担していたと思われても不思議ではない。

そしてレオンハルトの使徒が応戦しているというのなら、レオンハルトが動いても不思議ではない。実際に使徒達は殺されているのだ。ならば今度こそ、ザビエルも殺してしまおうと動いても不思議ではなく、

……い、いや、落ち着け！　まだレオンハルトは動いていないはずだ。今から事情を説明しにいけば……！

己の実力に自信のあるコウウだが、さすがに四天王などの上級魔人に敵わないことは解っている。最強の魔人と名高く、ザビエルを一蹴してしまうほどの強さを持つレオンハルトに自分は敵わない。狙われれば死は免れないだろう。そうでなくても、責任を負わされる可能性が高く、

「……とりあえず、レオンハルト様の元に――」

「そ、それと……言い難いのですが……ザビエル様が、敵の総大将らしき人物と戦っているらし――」

「――はぁ!?　テメェ、それもっと早く言いやがれ!!」

「す、すみません!!」

……こんの、クソ無能共がぁっ！　くそっ、どうすりゃあ良い!?

敵の総大将とザビエルが戦っているが――いや、こっちは後回しだ。ザビエルはムカつくが強い。人間に負けることはないだろう。それどころか、総大将と戦っているということは、戦争自体は勝利が近い。

ならば後のことを考えて、レオンハルトに弁明をしに行くのが先だ。これを機に乗り換えてしまった方がいいかもしれない。ザビエルは総大将を討ち取ったところで、レオンハルトに殺される可能性が高いのだ。

それに、ここで考えている時間すら惜しい。コウウは即座に動くこ

とにした。
「くそっ、こうしちゃいられねぇ！　俺は直ぐにレオンハルト様の所に向かう！　お前も付いてこい！」
「は、はっ！　しかし、ここの人間の相手は――」
「もう虫の息だ！　囲んで潰せ！　どの道、武士がどれだけ頑張ったところで俺達の勝ちは揺るがねぇ！　今はこっちの対応が先決だ！」
「畏まりました！」
と、コウウは槍を収めると残った人間達を無視して、急いでレオンハルト軍の本陣に向かう。
その際に背後から、聞き覚えのある声が届いたが、
「貴、様……待て……！」
「逃げる、気か……！」
「うるせぇ雑魚人間共!!　テメェらの相手をしてる暇はねぇんだよ！　そこで野垂れ死んでろ！」
最早相手にもせず、後方に向かって走り去った。
上空では未だ戦いが行われている。片方はハンティだが、状況を聞く限り、あの火の鳥は戯骸ということになるだろう。
……くそくそくそっ！　何で俺がこんなことで奔走しなくちゃならねぇんだ!?
何故自分がこんな目に合っているのか、とザビエルを恨みながらコウウはレオンハルトの元に急いだ。

戦場、そして空と、それらを見る視線があった。眼下では変わらず人間と魔物の戦いが行われ、空では謎の生物による戦いが行われるのを見るのは、藤原家本陣に居る二人の親子だ。
子供の方が空を指差して、
「すっごーーーい!!　母上、火の鳥！　火の鳥ですぞ!!　火の鳥と何かが戦ってますぞ！」
「本当ですね……何でしょう、あれ……」
キラキラとした目ではしゃいでいるのはもも姫で、それを嗜めるよ

うにしながらも空を見上げて居るのは春姫であった。藤原石丸の縁者である二人は空を見上げつつも、戦いの経過を見守っている。春姫の心中にあるのは、
……石丸様、大丈夫でしょうか……。
信頼はしているが、心配はどうしてもしてしまう。何しろ、今回の相手は魔人だ。幾ら石丸といっても勝てるとは言い切れない。
危険だからこそ自分達も本陣で待っているのだが、やっぱり付いていけば良かった、と思うくらいには不安が募ってしまう。
……ももの方も、不安でしょうね……。
と、己の血を分けた娘を心配して見るも、当のもも姫は空を相変わらず指差しながら、
「母上！　私、あれが欲しいです!!　次のお祝いの日にはあれを所望します！」
「もも!?」
娘のとんでもない発言に目を剥いて驚いてしまう。お祝いの日とは誕生日のことだろう。しかし、
「あ、あれは無理だと思います」
「何でですか!?」
「……ほら、鳥さんが可哀想――」
「父上に狩ってきて貰いましょう！」
「そんなお団子買いに行くみたいに気軽に……と、とにかく駄目です。あんなのお城で飼ったら、城が燃えてしまいます」
「……そういう問題ではないような――あ、はい。黙ります。指揮に集中するでありますよ！」
態々遠くから半目付きのツッコミを入れてきたミッチーを視線で黙らせる。娘の教育に悪い。
とりあえず別の物にしてもらおうと思い、宥めるも、
「むぅ……しかし、私はあれが欲しいです。背中に乗って飛びたいです」
「熱いですよ?」
「大丈夫ですぞ、母上！　父上が、〝俺くらい強くなれば、炎など水に

等しい。寧ろ寒いくらいだ！〃と、仰ってました！」
「それは……」
……またそんな強がりを……。
普段から滅茶苦茶だが、子供の前では更に大言を吐くのが石丸の癖だ。確かに多少は耐えれるのかもしれないが、さすがに炎の鳥に乗るなど、火傷してしまうだろう。
だがそこで、ももは言う。
「だから父上なら魔人ザビエルという輩も、あっという間にやっつけて来ますぞ！」
「――――」
その言葉に、春姫は言葉を一瞬失いつつ思う。
……そういえば今回の戦で戦う魔人は、炎を扱うのでしたね……。
であれば、今のは自分を元気づけようとしてくれたのだろうか。魔人との戦闘で心配を出してしまっていた自分を、自然に励ましてくれた。
やはり石丸の子供だ、と思う。そして自分の情けなさを恥じて、
「……そうですね。父上は、必ず勝ちます。落ち着いておやつでも用意しながら待ちましょうか」
「ケーキ！　この間食べたケーキが食べたいです母上！」
「……けーきはありますかねぇ……？」
とりあえず探しに行きましょうか、と、もも姫を連れて本陣を歩くことにする。先程自分で発した言葉を思いながら、
……私もしっかりしないといけませんね……。
武家の娘。武家に嫁いだ身として、不安を子供に悟られるなど恥でしかない。今自分がやることは、夫の勝利を信じ、家を守りながら待つことのみだ。少なくとも今は。
……信じていますよ、石丸様……。
戦場の何処かで戦っているであろう石丸を想い、春姫はもも姫の手を少し強めに握った。

――その戦いは、常人に視認出来るものではなかった。
余人に見えるのは、散る光と、線のような剣の軌跡。時折吹き荒れる黒の炎と、戦場を照らす幾つもの炎の残滓。草むらを一瞬で燃やし尽くし、しかし大地に残り続ける消えない炎。その中で戦うのは人間と魔人。人間が一蹴されるべき相対だ。
だがその戦いは傍目には、どちらが押しているか解らぬ程に拮抗しているように見えた。
ただ激しくなる金属の音の連続と、散る火花だけが、刃を打ち合わせていることを確認出来る。大将同士の戦いと聞いて駆けつけた魔物兵が近づくことすら出来ぬ激戦が、ザビエル軍の本陣で行われていた。
当然、その中心で戦っている魔人は、赤い外套と黒の鎧、燃え盛る火焔の如き逆立つ髪を持つ男。炎の剣を持ち、その剣に応対するのは魔人ザビエル。
魔人四天王の一角。嫌われはしても他の魔人ですら恐れるほどの戦闘力を持つその魔人は、薄っすらと汗をかいていた。彼は怒りとともに剣を振るう。
「貴様……！」
それは自分への怒りと、相手への怒り。
人間如きと互角の戦いを演じてしまっている自分への苛立ちと、それほどの強さを持った人間に対する苛立ち。それが燃え立つ火柱となって現れ、周囲を地獄の如き炎の海へと変えていく。時折、外れた炎が遠巻きで見ていた魔物兵を燃やし、灰にしてしまう。
それほどの火力、あらゆるものを灰燼と化す無常の炎。
――しかしこの男は、笑みすら浮かべて見せる。
「っ、ふはは！　この火焔！　まさに地獄の如き様相よ！」
だが、と。
その男は剣を握り、ザビエルへと肉薄してみせる。
「この程度であれば、むしろ涼しいくらいだッ!!」
「ッ！」
遠距離から飛ばす斬撃。かの魔人と同じことをしてみせる男の名

前は――藤原石丸。
藤原家当主。初代帝。人類軍総大将。人類最強。
数多の称号を持つ、最強の剣士。帝の証ともいえる三種の神器を身に着け、帝ソードを振るう石丸の強さは、魔人四天王最強と称されるザビエルを以てして、驚愕に値するものであった。
「これほどの剣技……貴様、本当に人間かっ!?」
その剣技の冴えに、ザビエルは見覚えがあった。
そしてだからこそ人間とは思えず、同時に怒りを覚える。それはまるで憎き奴の剣の弟子を相手にしているようであり、そしてその人間に苦戦し、邪魔をされていることが、
「――巫山戯るな！　我を何処までも愚弄しおって……!!」
無敵結界があるので傷こそ付かないが、時折、攻撃が当てられる。身体に来る衝撃がそれを証明する。
人間に攻撃を当てられた。――それも我慢ならない。
ザビエルは憤怒の形相を浮かべ、石丸に吠える。
「ただでは殺さん……!」
死すら生温い地獄の苦しみを味あわせてから、殺してやる。
魔人としての力を振るい出すように、怒りと殺意、敵意に呼応するようにザビエルの剣が激しくなり、
「――――!」
石丸との間に、閃光の連続が走った。
数十の剣の連続が、火花を越えて散る光となり、音を響かせていくのだ。
魔人ザビエルと藤原石丸の戦いは、余人の介入を許さない死合となっていた。

藤原石丸ＶＳ魔人ザビエル

藤原石丸は、己の秘奥を以て激しく攻め立てていた。

剣を抜き、魔人と剣を合わせてから既にそれなりの時間が経っている。向こうの剣筋は大体読めた。故に剣での勝負に勝つのは簡単な筈であったが、理解っていても簡単に勝つことの出来ぬものがそこにある。それは、

……真の剛剣……！　しかも、それだけではないな……！

剣の軌道を読み切り、それを弾くように剣を合わせても、こちらの方が弾かれる。何故なら速度や力、肉体的な能力で負けているからだ。

石丸は思う。武術の基礎は体を作ることから始まるのだ、と。

如何に技術を持っていても、身体が貧弱であれば、力が強いだけの者にやられてしまうだろう。剣の道理を知り、それを用いろうとしても、単純な速度で負けていれば後の先を取ることも難しい。

人間と魔物、魔人との戦闘というのは、詰まるところはそれだ。技術や戦術であれば、人も負けてはいない。だが人間と魔物。両者を隔てる圧倒的な力の差が、残酷なまでに勝敗を決定づける。

実際、この魔人との果たし合いで、石丸の剣は明らかに勝っていた。

しかし剣の技術で圧倒的に勝っていようと、人間を遥かに越える魔人の膂力と、それを用いた圧倒的な剛剣が石丸が押される原因となっている。相手も素人というわけではない。確かな剣の理がある。魔人の地力の高さを使った剛剣ではあるが、確かな技術と力があればそれを打ち破るのは難しい。

だがそれでも、

「〝疾風〟――」

石丸は少し距離が離れた隙に遠距離からの斬撃を放つ。以前よりも強化されたそれは正に風の如く、魔人の放つ炎を断ち切り、相手の炎剣に防御をさせることに成功する。

その一連の流れから、石丸は身を強く捻らせた。

摺り足でやや距離を詰め、上段からもう一度技を放つ。

「――〝迅雷〟!!」
「――ッ……!」
もはや可視化されるほどに高まった剣気の振り下ろしはその名の通り、雷の如し。地面を削ってしまうほどの斬撃。己の持てる最大の剛剣によって相手の防御を崩す。
その目論見通り、相手の体勢が崩れた。隙有りだ。故に当然、
「……!」
「がっ……! っ、貴様……!」
相手の懐に入り、胸を抉るように剣を振るった。
人間であれば――否、魔物や使徒であっても、今の一撃で勝負が決まるほどの斬撃。
しかしその刃は、魔人に当たる直前で壁にぶち当たったかの様に阻まれる。先程から己の攻撃を全て弾いている防御の正体は、
……無敵結界。
魔人の特性。あらゆる攻撃を弾く絶対の盾。
人間が魔人に勝てない最大の理由と謳われ、今まで幾人もの戦士の勝利を阻んできたその洗礼を石丸は受ける。
他の人間と同じように石丸の勝利を阻んだ無敵結界は、剣を弾き、魔人を勢いづかせる。
「この我に剣を……! 許さぬ、許さぬぞ人間っ! 焼き殺してくれる!!」
「むうっ……!」
その怒りを表すか如く、魔人の全身から膨れ上がるように放たれた黒の炎が石丸を襲う。地面を転がるようにしてそれを避け、次に放つのは、全く同時に行う斬撃。
「――〝紅蓮〟ッ!」
「――!? ぐっ……またしても……!」
三つの斬撃が同時に相手を襲う。衝撃によって身体は多少ぐらつくも、やはりその肌に血を流させることは敵わない。
だが、その剣がまたしても癪に障ったのか、魔人は鬼の如き形相でこちらに肉薄してくる。

「我に……奴と同じ剣を振るうのか――ッ!!」
「っ……!」
力任せの攻めが連続される。
子供が振るえば恐るるに足らずの力任せも、魔人の膂力で振るわれれば一刀一刀が、人間を絶命させるに足る必殺の剣となる。
「その剣だけには負けんッ！　負けてなるものか――！」
魔人の叫びが連続する。
剣とともに振るわれる感情の発露は、魔人の力を爆発的に上昇させていた。既に多くの攻防を行い、細かな傷や出血、火傷も多い。体力も徐々に失われていく。
だが石丸は崩れない。崩れるわけにはいかない。
ギリギリのところで敵の剣を弾き、捌き、時には身を躱してそれを凌ぐ。そうしながら想ったことは、単純な疑問であった。それを石丸は口にする。
「っ……お前は、先程から一体誰を見ておる……！」
「何……!?」
剣を振るい、火花を散らしながらも問わねばならない。
だが、誰を見ているかは解る。だが、そういうことではないのだと、
「その〝奴〟とやらにどの様な恨みがあるのか、俺は知らんが――それでも、言えることがある……！」
それは、
「お前が今相手にしているのは……〝俺〟だッ!!」
「っ……」
剣を少し押し返す。意地の反撃だ。
相手が見ているのは藤原石丸という人間の剣士ではない。この場にいない最強の剣士のことであろう。
石丸が憧れ、石丸が目標にし、最終的に倒すべき相手とした人物。石丸自身も、この魔人と同じように打倒すべき相手としている人物だ。当然、この戦いに勝てば次は奴だ、という想いはある。だが、
「俺はその男を目標にし、いずれその男と戦い、越えることを夢見た！
――だがそれでも、目の前の相手を蔑ろにする馬鹿者になったつも

りはないぞッ!!」
「っ、人間如きが偉そうな口を……！」
反撃の力はほんの僅かに弱まる。そこを突き、一瞬の攻勢に出た。
魔人が呻き、
「ぐっ……！　貴様も、この我を愚弄するかッ！　奴に挑むための、単なる障害物だと――」
「違う！　お前の相手は俺で、俺の相手はお前だッ!!」
「……！」
石丸の目は、少なくとも勝負の最中は、目の前の魔人しか映していない。
障害物ではない。目の前の相手も、越えるべき相手というだけのことだと、石丸は言う。
「俺はまだ、お前に劣る……！　ならばお前を倒さずしては、先を考えられん!!」
そう。目の前の魔人ザビエルは、己よりも強い。
そして己が目標とする最強の魔人は、目の前の魔人よりも強いのだ。今、己の目標と相対しても、己はただ無様を晒して死ぬだけだろう。
ならばまずは、目の前の魔人を倒す。障害物などではない。それは、
「お前がその奴を打倒するべき存在だと思うなら……！　お前は俺と同じ――〝挑戦者〟だッ!!」
「……！」
「頂点に立つのは一人であり、それに挑めるのもまた一人。ただそれだけのことよッ!!」
そして、頂点に挑まんとする者が、同じ場所で顔を合わせたのならば、
「同じ山の頂きを目指す者同士……！　ならば、剣を打ち合わせぬ道理はないであろうが!!」

魔人ザビエルは、眼前の人間に押されていた。
それは勝負の上でも、想いの上でもだ。
その鋭い剣技は、ザビエルにとっての憎き奴を思い出させる。
己の上に立ち続け、目の上のたんこぶであったその男。
だが、と。
自分はそもそも、何故奴を目の敵にしていたのか？
解らない。解らないが、目の前の人間は、奴を越えると口にする。
そこに何かがあると思い、ザビエルはその疑問を口にした。
「貴様は……矮小な人の身で、奴を越えるというのか……！」
「無論だ……！」
無理だ。魔人である己ですら敵わぬのに、人の身で敵う筈もない。
「我に敵わぬというのにか……！」
「無論だ……！　お前を越えることが出来たのなら、次は奴を越える……！」
無理だ。己を越えたところで、奴には届かない。
「挑んでも死ぬだけかもしれぬぞ……！　なのに諦めないというのか……！」
「無論だ!!　命を捨てる覚悟はとうに出来ている!!」
無理だ。命を捨てて挑んでも、何の意味もなく死んでいくだけ。
「っ、無謀だな……！　奴は出鱈目に強い……！　命を捨てる覚悟があろうと、奴に一太刀も入れられぬかもしれんぞ……！　殺すことなど、到底――」
「――生きているのなら、殺せない道理があるものかっ!!」
「っ……！」
奴の剣が、己の剣を穿つ。力が増している。あり得ないことだ。魔人である己の剣を、人の身で弾き返すなど不可能の筈。
だが、今こいつは確かにやった。不可能と思える事を一瞬だが成した。
そして浮かぶのは純粋な疑問。何故ここまでするのか、という不可解さだ。
それをザビエルは問う。

「……何故そこまで拘る!?　分相応に生きていれば、苦しまずに済むのだ……!?」
問うたところで、ザビエルは気づいた。
これは、己への問いでもあるのだと。
遥か昔から奴に拘り続け、己や使徒達の身を危うくする愚かな自分への問いなのだ。
だが、それが解らない。己は何故、奴に拘るのか。
屈辱を与えられ、憎いだけではないのか。
奴だけが評価されるという妬みではないのか。
ただ気に入らないというだけなのか。
だが、根本的な物が欠けている。芯となる物が欠けている。
何故自分は、ここまで奴を目の敵にしているのか。
その答えは、
「大したことではない……!」
既に多くの傷を負った石丸が言う。
それは、
「――ただ、1番になりたいだけだ……!」
「――――」
「頂点を目指さない自分など、自分ではない……!」
そして、
「その先に、俺にとっての幸せが……!　夢があるというだけだ……ッ!」
ザビエルは、その男の叫びを聞いた。
矮小な男の叫びは、己の在り方を思い出させた。
「……そうか」
ザビエルは思う。それは、魂に刻まれた己の在り方だ。
魔物として生まれた自分は、ただ漠然と力を付け、弱者を圧倒していた。
己に匹敵する強者でさえも、力を付け、技を工夫し、最後には意地を通して闘争に勝利していたのだ。
そんな自分の前に現れた魔物の王と、それに付き従う最強の魔人。

魔王に忠誠を誓い、魔人となった。そうしてかの魔人の背に続いた時、ザビエルは思ったのだ。
――いつか自分が、目の前の男を越えて最強になる。
それは魔物の頃から続けていた己の在り方。
勝って1番になる。頂点に立つ。最強になる。
そうでなくては、自分ではない。勝つことを諦めれば、自分は自分でなくなる。
己の主よりも、何よりも優先するべき己の渇望。
己はただ、
「――諦めきれないのか」
――野望(ゆめ)を、諦めることが出来ない。
石丸は答える。
「俺は登ることしか知らぬ！　挑むべき山と、そこに続く道を見つけた――後はただ登るのみだ!!」
ああ、そうだ。
魔物として、男として。挑むべき山があるのなら、
「……人間。今一度、貴様の名前を教えろ」
「――俺は、藤原石丸!!　お前を倒す者だ……!!」
その名を、ザビエルは呼ぶ。
「……石丸よ。我は魔人四天王が一人、魔人ザビエル。これより、魔王様の命に従い――貴様を倒す」
既に道を違えた身。とっくに手遅れであるかもしれない。
だが、進むべき道を思い出した。
ならば最後にそれを果たし、挑戦して死ぬも悪くはない。
既に多くの無様を晒している。今更恥も何もない。
ならば最期まで悪足掻きをさせてもらおうと、
「――もう言葉は不要か」
頷き、得物をゆっくりと携え、身を前に倒す。
その猛る想いが走り出す様に、
「――来いッ!!」
「――ッ!!」

瞬間。人間と魔人は初めて激突した。

石丸は、魔人が速度を上げたのを見た。

しかも速度だけではない。力も技も何もかも、先程までの戦いを凌駕する実力があり、

……これが魔人四天王の本気か!!

魔人四天王。約２０体はいると思われる魔人の中でも、五指に入る実力者。

その中でも最強に近いと噂される魔人の全力は、人間の身では追いつくことも難しい。

だが、

……それでも負けるわけにはいかない……!

「……ッ!」

技術と経験、それらから見える勘に近い読みを用いて、その速度に追い縋る。

剣の初動と、そこから続く連携を読めば、辛うじて防御することは出来る。技術はこちらが上。ならば、初動を捉え、そこから予測出来る剣の軌跡に剣を合わせることで、致命は起こらない。

しかし、

……炎が……!

時折攻撃に混ぜられる炎は、剣理に沿ったものではないが故に、対応が難しい。

炎の動きは一定ではないのだ。直線で飛んでくる時もあれば、曲線を描いて来る時もあるし、放射状、または不規則な動きで辺りを跳ね回る時もある。

「っ、紅蓮!」

堪らず同時斬撃による攻撃と防御を行う。一度で三つの斬撃を行える紅蓮は、攻守の切り替えに於いても強力な技である。

だが、

「――効かん……!」

「っ……！」
ザビエルの強引な切り返しにより、押されてしまう。三つの斬撃の内、一つは相手の肩口に当たったが、それ以外を防がれてしまった。
先程まではこの技を見切ることが出来ず、衝撃によろめくこともあったザビエルが、ここに来て、こちらの剣技に対応して来ている。
……否！　これこそが、此奴の本来の実力……！
石丸は気を引き締める。先程までは勝負に集中もしておらず、動揺もしていたため、力以外は怖い存在ではなかった。
だが目の前の戦いに集中し、本気を出した魔人四天王の実力はやはり伊達ではない。
「どうした……！　それでは我を倒すことなど出来ぬぞ……!!」
炎を自在に動かしながらも、ザビエルは炎の剣を用いて近接戦闘を挑んでくる。新たな火傷を負い、骨が軋みを上げる。
正に炎を得意とする魔人に相応しいものだが、剣技においても隙が消えはじめた。こちらの技に対し無理に対応しようとせず、時には下がり、炎を飛ばしての牽制を行ってくる。
それに怯むと、相手は燃え盛る炎の中を構わずに肉薄してくる。炎を扱う魔人、ましてや自身が放った炎である。火傷となる道理はない。
しかもこの連撃は、弾いたところで止まることはない。圧倒的な力と速度は、こちらに１０回に１回程度の反撃しか許してくれない。
その反撃も相手は読んでいるのか、綺麗に下がって攻撃をいなしてくる。
完全なジリ貧という状態だ。このまま戦闘が続いても、基礎体力の差でこちらが不利となる。先に体力が尽きるのはこちらなのだ。そうなれば敗北である。
だが、そうでなくとも敗北は必至。本気の魔人の実力。それと相対、対応することは、既存の技では不可能だ。
疾風や迅雷で遠距離から斬撃を行っても容易に防がれ、紅蓮は放った瞬間には既に下がられている。惜しいところまではいくが読まれているのだ。

そして、それが当たったとしても、無敵結界の壁に阻まれる。無敵結界を攻略しなければ勝ちはないのだ。
……そのための技は……。
石丸の原点ともいえる剣王伝。疾風や紅蓮の発明に役立った本にも、そのための技は載っていない。
だが、それを実際に見たことはあるのだ。
それは忘れもしない。数十年前。
石丸が大陸に旅に出たときのこと。
とある王国での事件を解決したと思ったところに現れた仮面の男。地下神殿で交戦し、完膚なきまでにボコボコにされ、敗北を得た。
その時の最後の攻防。その時に奴が放った技を、石丸は見覚え、今の今までそのための修行に費やした。
相手の流れを読み切り、相手に攻撃を返す技。
それを使うためには、己の肉体を頭の天辺から足の指先まで完全に制御し、その上で相手の攻撃に完全に合わせる必要がある。
今まで一度も成功したことはない上に、失敗すれば死ぬ。
その重圧の中で、しかし石丸は笑ってみせた。
……勝つ。
難しいことは考えない。
……勝つ！
その一念だけで、今まで乗り切ってきた。
出来ることは全てやってきた。やり遺したことはない。
後は己のやってきたことを信じるのみ。
負ければ、自分はそれまでの男だったというだけのこと。
勝てば、己はまだ登れる。
この果てしない剣の道を。己の夢に続く道のりを。
……まだ登れるのだ……！
ゆえに、石丸は決死の修羅場へと、自らを追い込んだ。
「――っ！」
ザビエルが驚愕する。
こちらの剣の――否、纏う気が変わったことを悟ったのだろう。

剣を下段に、だらりと自然体で構え、石丸は静かな神気と剣気が入り混じった闘気を乗せて告げる。
「――――来い」
これが、己の必殺だ。

ザビエルは静かに待ち構える石丸に、対応を迷った。
――明らかに纏う空気が変わった。
何かをしようとしている。それは理解出来る。
だがこちらには無敵結界がある。何を仕掛けられようともこれを突破することは不可能。
しかしその上で警戒して、遠距離から炎で潰すことも出来る。確実に勝つにはその手を取るのが良いのだろう。
だが、
「……良いだろう……！」
人間の挑戦だ。
大陸の支配者たる魔人が逃げるなど、恥以外の何物でもない。
「何をする気か知らんが――――受けて立つ！」
ザビエルは行った。
敵を見据え、ただ敵を倒しに行った。
右手に炎を纏わせた剣。それを黒の炎に変えながらも、全力で突っ走る。
石丸は下段に剣を構えている。こちらの上段、あるいは胴切りに合わせようとしているのだろうか。
だがザビエルは、その考えを捨てた。
剣において、自分は相手に劣る。業腹だが、劣ることを認めようと。
そしてその剣理に沿うことは、相手の有利にしか働かない。考えても無意味だ。
なればこそ、ザビエルは己の全力を出すことに終始した。
奴を倒すために鍛え上げた己の力。その力を全て、目の前の人間にぶつける。

相手の負傷、体力の衰えは明らかであり、これを止めることは不可能。魔人であっても対応することが難しい一撃。人間であればまたたく間に押し潰される。

……勝つのは我だ……！

もはや相手の動きは見ない。

余分な思考の全てを削ぎ落とす。

ただ目の前の人間に対し、己の全力を乗せた剣を振り下ろせばいい。

そして、前に出た。

普段よりも鋭い動き。以前よりも力が増している。

その違和感には直ぐに気づいた。力が増しているのではなく、戻ってきているのだと。

理由は、

……そうか。死んだか……。

奴を陥れるために向かわせた己の使徒が死に、与えた力を主に返している。

通常、使徒が死ねば主に対してその力は徐々にではあるが返ってくる。

だが、これほどに早く戻ってくるとは思っておらず、

……すまない。

彼らには悪いことをしてしまった。

己の無茶な頼みを、全力で為そうと力を振り絞り、その上でまだ力を貸してくれるのだ。

――お前たちの為にも、勝ってみせる……！

おおよそ初めて感じた気持ちであった。

真の意味で、誰かのために戦うということを覚えた気がした。

その自覚は、ザビエルにはない。だが、

……勝ちたいのだ……！

この戦いに勝ったところで己に未来はない。使徒達も既に死んでしまった。己も遠からず、同じ運命を辿るだろう。

だが、失うものも何もない。仲間も、名誉も、未来も、全て無くなっ

たが、それを受け入れてしまえば、もう怖いものなどはなくなるのだ。
そして最後に残ったのは――純粋な己の力のみ。
その上で最期に勝ちたいと、勝利のための渇望はより一層強くなり、己の最後の火を灯してみせると、
「――――勝負だ!!」
剣を振り被り、己を業火と化し、修羅場へと飛び込んだ。

刹那。
誰もが息を呑んだ。
焔で視界が阻害されながらも、総大将であるザビエルの勝ちを疑わずに見ていた魔軍の兵。
遠目でその様子を窺っていた藤原石丸の参謀である悪魔月餅。
更に遠くから戦いを見届けようと、気配を断っていた男。
その全てが――――ザビエルの勝ちを予知した。
「我の――――勝利だ……!」
ザビエルの剣が、石丸の首に迫る。
ゆっくりと、走馬灯の様に遅くなった視界の中で、誰もが勝ちを確信する。
だが――そこで石丸は動いた。
「……見えた」
それは静かな声であった。
だが不思議と、響く声であった。
同時に、石丸の剣は緩やかに。それでいて誰もが動いたことに後から気づくほどに自然な動作で動いた。
だが次の瞬間、剣は見えなかった。
「――――〝流水〟」
技の名を告げた。
一瞬、防がれたと石丸の剣を受けたザビエルの剣がそっくりそのまま――ザビエルに向かって跳ね返る。
そして、

「――――」
ザビエルは攻撃を受けた。
自身の胸を深く傷つける一撃。無敵結界を突破したその攻撃は、
「我、の……」
ザビエル自身の、剣であった。
そしてそれこそが、無敵結界が作用しない原因であった。
無敵結界は前提として、他者からの攻撃を防ぐもの。
必然的に、自刃に対しては発動しない。
石丸の剣は、ザビエルの攻撃を跳ね返すことで、攻撃を通すことに成功したのだ。
そしてその一撃は、致命の一撃であった。
「……負け、か――――」
ゆっくりと、力を失ったザビエルの身体が後ろに傾いていく。
地面に倒れていくザビエルの姿を、誰もが信じられないような表情で見ていた。
その事実をはっきりと理解し、納得出来たのは、その場にいる二人だけであった。
「……俺の……勝ちだ……」
傷に塗れた石丸の身体が震える。
地に足を付きながらも、その様相は落ち武者と見紛うほどに血に汚れている。
だが石丸は、確かにそこに立ち、生きて、
「――――！」
そして、叫んだ。
己の勝ちを知り、しかし信じられないほどの達成感や、高揚、身体の震え、感情を全てを吐き出すように叫び――そして、勝者の義務と権利を行使した。
「敵将、魔人ザビエル……！　――――討ち取ったりイィ――――!!」

魔人の敗北

魔人四天王ザビエルの敗北。

それを目の当たりにした魔軍の兵達。その中の一体が震えた声で言った。

「ざ、ザビエル様が……負けた……」

その声を皮切りにして、魔物兵達は理解する。

魔人の敗北。

魔人に無敵結界が備わってから７００年。一人の例外を除き、誰もが成し得なかった前人未到の偉業。

それを正面から成したのはたった一人の人間――藤原石丸。

人類最強の戦士による魔人討伐の報は、またたく間に戦場に伝播していく。

「ひぃぃ!?　ま、負けた！　ザビエル様が負けた！」

「ど、どうすりゃいい!?　俺はあんなの相手にしたくねぇぞ！」

「くっ、お前たち落ち着け！　まだ戦争は終わって――」

「い、嫌だ！　俺は逃げるぞ！」

「勝てるわけねぇよ、あんな化け物！」

「だから落ち着け！　まだ大将軍であるコウウ様やリー様。そしてレオンハルト様が――」

「俺は逃げるからな！」

「お、俺も……！」

「くっ、兵の動揺が……!?」

それは古くから共通する魔軍の最大の弱点。

魔軍の旗印ともいえる強大な魔人の敗北は、軍を瓦解させていく。指揮官を失えば、魔物兵は統制されることなく、好き勝手に行動し始めた。

魔物隊長や魔物将軍であっても兵の混乱は著しいが、それが魔人ともなれば軍全体が崩壊しかねないほどの衝撃であった。

魔物将軍が必死に魔物兵の統率を取ろうと呼びかけるが、魔物兵達の混乱は収まらない。それどころか、指揮をするはずの魔物隊長の中

にも動揺している者が数体見られた。
押し合いへし合いで逃げようとする魔物兵ば多く見られるその場にて、それを見ていた悪魔月餅は未だ興奮冷めやらぬ中、石丸に駆け寄る。
「……石丸様！」
「む……月餅、か」
隠形を解いて話しかけるが、石丸はまだ集中を切らした様子なく応答した。血塗れになりながらも生きて立っている石丸と、胸から大量の血を流して地面に伏している魔人ザビエル。それを見ると、勝利の実感が湧いてくる。
……お見事です……！
人の身で魔人を倒す快挙。まさか本当に成すとは思っていなかった。
いざとなれば、隙を見てザビエルに攻撃を加えようと隠れて窺っていたが、無意味となってしまった。石丸が無敵結界を突破することが出来ずとも、その激戦での疲労は相当なものになるだろう。その時が動くべきだと感じていたが、
「……お疲れ様でした、石丸様。――後は、お任せください」
言って、月餅は魔人ザビエルに近づく。
既に瀕死の様相を呈しているが、正確にはまだ死んでいない。放っといても直ぐに死ぬだろうが、殺して次の段階に移る必要もある。いつまでも喜んではいられないのだ。
……魔軍が混乱している今こそが好機。速やかにザビエルを殺し、本陣に戻って魔軍を攻め立てる……！
そのための自分だ。石丸の技では、相手の攻撃が必須となり、とどめを刺すことは出来ない。
だが悪魔である自分であれば問題無くザビエルにとどめを刺すことが出来る。魔物は混乱こそしているが、邪魔立てが入らないとも限らない。なればこそ、傷を負った石丸の為にもとどめを刺してから一度戻るべきだ。
そうして自分が動く様を、石丸は察したのかじっと見ていた。一歩

一歩、ザビエルに近づき、数メートルの距離にまで迫ると、不意に声が飛んだ。
「――っ！　下がれ、月餅!!」
「！　一体、何が……!?」
石丸の叫ぶような声とともに、月餅は目の前で生じた現象を見た。
それは――宙を斬り裂いて破壊をもたらした。
月餅が後ろに飛び退いた瞬間、先程まで月餅がいた場所に、地面を引き裂くような斬撃が飛んできた。
……これは、石丸様と同じ……！
こちらとザビエルの間を分かつように走った剣による斬撃。その使い手を想像し、警戒を露わにした直後、その場が凄まじい重圧に包まれた。
「――――中々に良い勘だ。よくぞ見破った」
「……！」
声を聞いて、全身が総毛立つ。
気が付けばザビエルの近くに、一人の男が立っていた。細身だが無駄なく鍛え上げられているであろう肉体を、黒を基調にしたコートと、黒と赤が入り混じった制服に近い服を着た美丈夫だ。
しかしその身から放たれる気配は、人外そのもの。光り輝く黄金の髪を持ち、揺るぎない意志を秘めた鋭く赤い双眸、常人であればその威容を見て頭を垂れるか、膝を折るかの二択を迫られてしまうほどの覇気。
その名を、今では誰もが知っている。かつては人の王であった人類最古の英雄の名を、英雄ではなく魔人として知っている。
魔人筆頭。魔軍参謀。最強の魔人。世界最強の剣士。剣王。
その魔人の名は――――レオンハルト。
人類にとって絶望の具現となった脅威が、石丸達の眼前に現れていた。
「そして、見事だ。藤原石丸。まさか本当にザビエルを倒すとはな」
「……っ、やる気か……！」
石丸が剣を構える。だがそうやって戦意を見せても、レオンハルト

は僅かに一瞥するのみで、
「そうしたいのは山々だがな……。瀕死の貴様相手に決着をつけたいとも思わん。他にやらねばならないことも多いしな」
「何……？」
石丸が眉を顰める頃に、既にレオンハルトは動いていた。
周囲で混乱の極致にある魔物兵。そちらに向かって、
「――総員、そのまま聞けッ!!」
不意に、よく通る覇気に満ちた声でレオンハルトは言った。
それは、将としての才能を孕んだ、つい耳を傾けてしまうような声であった。
「あれは、レオンハルト様……」
「一体何を……今更もう……」
魔物兵が注目する。一体何を言うのか、と一時的にではあるがその耳は確かに傾けられた。
そんな中、レオンハルトは言った。
「――逃げたいのなら、逃げても構わんッ！」
「……えっ……」
戦え、といわれると思っていた魔物兵達は、思わず間の抜けた声や表情を出してしまう。それも当然だろう。
逃げようとしていた魔物兵達ではあったが、実際に魔人の口から逃げてもいいと言われるとは思ってもいなかったのだ。
だが、次に続く言葉に、魔物兵達はその意味を理解した。
「だが、逃げるのなら全員で、一丸となって逃げろ！　闇雲に逃げても助かりはしない！」
「ぜ、全員で……？」
「つっても、どうすれば……」
魔物兵の不安の声を聞いたかのように、レオンハルトはそれに答えを出す。
「魔物将軍の指示を聞いて、後方の都市まで撤退しろ！」
そして言う。魔物兵の生きる希望となるための言葉を、
「――殿は俺が務める！　総員、後方の都市まで撤退を開始せよッ！」

「！」
魔物兵の目に光が灯る。
最強の魔人の援護。それも、自分達が逃げるための時間を稼ぐために、戦うという。殿として、これ以上のものは存在しないだろう。魔物兵でも、それくらいは理解出来た。
「――コウウ！」
「……はっ、ここに」
そのタイミングで、レオンハルトは控えさせていたであろう大柄の魔物。魔物大将軍コウウを呼びつけると、続けて命令する。
「お前に仕事だ。ザビエル軍全体を纏めて撤退を行え。前線を押し返す必要もある。お前の武勇は役に立つだろう」
「はっ！　このコウウにお任せください！　どんな任務でもこなして見せます……！」
そのコウウの瞳は、怒りや嘆き、焦りなどが入り混じった複雑なものであったが、絶対に成功させるという燃え立つような意志を感じた。
「任せる。直ぐに動け。まずはこの場を収拾しろ」
「ははっ！　それはもう！　直ぐに動きます！」
平服するように、何度も頷くと直ぐ様事態の収拾に取り掛かろうとコウウは魔物兵らの元に向かっていった。
そしてそれを、月餅は黙ってみていることしか出来ない。何故なら、
……先程から、儂に牽制しておる……！
動けば斬る。言外にそう威圧され、身動きが取れない。
そして石丸のこともある。下手なことをして戦うような状況になるのはマズい。このままでいれば見逃してくれる可能性もあるし、逃げることも出来るだろう。一先ずは大人しくするしかない。
己の得物である鎌を隠し持ちながら、月餅はいつでも動けるように警戒を続ける。そんな中、指示を終えたレオンハルトは地面に倒れていたザビエルを見下ろし、
「……さて、ザビエル。次はお前の番だ」

「……ふ……我、を……殺しに、来たか……？」
既に助からない傷を負い、口端から血を吐きながらも、ザビエルはゆっくりと声を上げる。
その表情はどこか自嘲のような笑みを浮かべており、まるでこの状況を予期し、受け入れているようであった。
そしてレオンハルトの方は感情の見えない表情でザビエルを見下ろし続けていたが、やがて息を入れると、
「……その予定だったがな。お前が一騎打ちに負けたせいでその予定も無くなった。人の手柄を横取りする趣味は俺にはないからな。……しかし、本当にお前が負けるとは……」
「ふ、ふ……気をつけろ、レオン、ハルト……我を倒した、其奴、は……かなり強いぞ……？」
それを聞いたレオンハルトは、僅かに眉を動かした後、眉間に皺を寄せて答える。
「……お前が俺に注意とはな。どういう心境の変化があったかは知らないが、お前らしくもない。憎まれ口でも叩くのかと思ったが」
「……なに……少し、思い出したまでよ……我の、夢をな……」
「……夢、か」
それに何かを感じたのか、呟くように反復する。
その内容を、ザビエルは口にした。
「ああ……貴様を越えるという、我の夢だ……」
「……なるほど。お前が俺に執着していた理由がそれか」
合点がいった、と目を細めるレオンハルトはそこで大きく息を吐くと、
「……全く、復讐する気が失せることを言わないでほしいものだ。そうなったお前をこれ以上貶めてしまえば、俺の方が無粋になってしまう」
「……ふふ、それは悪い、ことを、した……」
「ああ、本当に始末が悪い。お前が謝罪の言葉まで吐くとは思わなかった」
そう言うと、ザビエルは口端を歪め、

「どうせ、最期だ……戯言にしか、聞こえんだろうが……そういうこと、を……口にするのも、悪くない……」
「……なら、俺も戯言を言わせて貰うが――」
と、レオンハルトは一拍置いて、ザビエルを見据えると、
「お前が魔人になった時、俺はお前を――いずれ右腕になるかもしれないと期待していた」
「――――」
「そのために色々と手を尽くしたが……今となっては、戯言でしかない話だ」
レオンハルトが言い終えると、ザビエルは唖然としたまま空を見上げ、しばらく言葉を発さなかった。
だが、ややあって目を閉じると、
「……そう、か。……確かに、戯言……だな……っ」
血が溜まって上手く喋れないのか、言葉が途切れるようになった。おそらくザビエルの死が近いのだろう。
そんなザビエルを見て、レオンハルトもそれを悟ったのだろう。目を据わらせて言う。
「――さて、最期に何か言いたいことがあれば聞いてやるが？」
その言葉に、そうだな、と静かに考え込んだザビエルは間を置いて、
「……ナイチサ、様に……」
「……何か伝言でもあるのか？」
その問いにザビエルは、いや……、と否定すると、
「ナイチサ、様、に、は……人の手に、かかり……死んだ、と……それだ、け……言って、くれ……」
「……何故だ？　それを言えば、お前は――」
「解って、いる。だが……ナイチサ、様……の……信念、に……水を……差したくは、ない……」
「……承った。なら、魔血魂はナイチサ様にでいいんだな？」
「ああ……」
頷くと、ザビエルはやがて言葉を発することも億劫になったのか、静かにその時を待つ。気が付けばその近くにはザビエルの肩に乗っ

ていた使徒の姿もあった。
ただ黙ってそれを見届けている使徒の姿を見て、レオンハルトはその最期に、
「――じゃあな、ザビエル」
「――ああ……」
言葉を交わし、それを最後に、ザビエルの身体が光ると、
「……！」
身体が消滅し、小さな赤い珠だけがその場に残る。
それは、魔血魂。
魔人が死んだ証ともいえるそれを遺し、魔人ザビエルは消え去った。

……何とも、不思議な感覚よ。
ザビエルは己の死を感じ、不思議な光景を見ていた。
真っ赤な空間の中に、己が立っている。
魔人は死ねば、その魂は魔血魂となり封じられる。
ゆえに完全な死ではない。
だがザビエルにとってはそれも時間の問題でしかなく、
……ナイチサ様には、悪いことをした。
忠義を果たせなかったばかりか、迷惑を掛けてしまった。
その末路としてこの結果は相応しいものだろう。後は、己の完全な消滅を座して待つのみだ。
だがそこで、見覚えのあるものを感じた。
それは、己の血を分けた存在だった。
白、黒、青、赤――五つの内、一つの除いた色が己と共に立ち、
……馬鹿共が……我に付いてこずとも良いものを……。
赤はその内戻るかもしれないが、それ以外はもう元には戻れない。
だがそうまでして、共に行こうとする者達の忠義を嬉しく思う自分もいた。
自分の生は、悪辣で見るに堪えないものであったが、少なくとも彼

らが付いてきてくれるくらいの生き方は出来たのであろうと。
……我にしては、出来過ぎな結末だ……。
ならば、最期まで共に行こうと。
赤い闇の中に足を踏み出したのを最期に、意識は溶けて消えた。

魔血魂となったザビエルを拾った魔人レオンハルトは、それを見てままならない想いを感じた。
……最期に忠義を示したか。
最期の願いを思い、やはり複雑な気持ちになる。
恨みもある相手ではあるが、今のやり取りの後で復讐する気も起きない。
ナイチサやカミーラ、他の魔人にはどう言ったものかと今から頭を悩ませていると、
……藤吉郎か。
その場に遺ったザビエルの使徒は、藤吉郎のみ。それ以外は皆、主に付いていく道を自然と選んだ。
どうしていいか解らずに佇む藤吉郎は、こちらが手に取った魔血魂を見詰めており、
「……悪いが、これを渡すわけにはいかない」
「……」
理解しているのかどうかは解らない。
だが、不思議と頷いているようにも見え、
「……お前はどうする？」
尋ねると、藤吉郎はややあって、こちらの肩に飛び乗った。流石に驚き、
「……まさか、俺に付いてくる気か？」
「！」
するとコクリ、と藤吉郎は頷いた。
レオンハルトはそれを飲み込み、
「――わかった。好きにしろ」

言うと、好きにする、と言わんばかりに藤吉郎はこちらの肩に陣取った。それを見て、思わず可笑しくなり、
……随分と逞しい使徒だな。
間接的にとはいえ、主の仇とも言える。そうでなくても、主が憎んでいた人物に付いていこうとするなど、酔狂としか言いようがない。
だがそういうのも嫌いではないと、レオンハルトはそれを受け入れることにし、心の整理がまだ付かぬままではあるが石丸達に視線を向けた。
すると向こうから静かな声で、
「……友人だったのか？」
「……まさか。俺とザビエルは、お互いを嫌い合っていた」
石丸の問いに複雑な気持ちで答えるが、答えを聞いて石丸は僅かに笑い、
「ふっ、そうは見えなかったがな」
「……そう見えたのなら、それはお前がそうさせたのだろう」
「？　俺は何もしていないが」
本気で分からないのか、疑問符を頭に浮かべる石丸に可笑しさを感じる。
だが、そんな風にいつまでも談笑してもいられない。
レオンハルトは魔人として、石丸に問いかける。
「それはいい。――だが、どうする？　相手をする気がないとは言ったが、兵を害する気であれば俺も戦わざるを得ないが……」
僅かに闘気を滲ませながら石丸を睨みつける。
月餅が分かりやすく警戒を滲ませたが、石丸の方は僅かに身を震わせたものの、苦笑交じりに、
「いや、今日のところは帰る。この状態で勝てるとも思わん」
「ふん、万全の状態なら勝てると？　言っておくが、俺の模倣が俺に通用するとは思わんことだ」
その問いには即座の応答が来た。
「ああ、分かっている。次はまた強くなった俺を見せてやろうぞ。――そうでなければ、俺ではないからな」

そう不敵に告げてくる石丸の表情には自信と覇気に満ち溢れている。
心地よい闘気が肌を撫で付ける中、レオンハルトはその昂ぶりを抑えつつも微笑し、
「――面白い。ならば次は見せて貰おう。……キャロル！」
「はい！　ずっと待っておりましたわーーー!!」
近くに隠れていたキャロルを呼び出し、踵を返す。
「兵を纏めて後方に下がるぞ」
「既に滞りなくですわ！　ハンティさんとペールさんが既に部隊を率いて撤退戦の指揮を執っていますの！」
うむ、と頷く。キャロルが言うように滞りはない。
敵の部隊に幾つか不安の種もあるが、ハンティやコウウがいれば武力の面では問題ないし、ペールやリーも如才なくそれをこなしてくれるだろう。
それに、いざとなれば自分も出る。石丸や月餅の脅威こそないが、万が一がないとも限らない。そのため早く戻らなければならないが、
「――藤原石丸」
「――何だ？　魔人レオンハルト」
精悍な顔つきをした石丸を見て言う。
「今日のところは俺達の敗戦だが、次からは勝てるとは思わないことだ」
「何……？」
続けて、
「次からは、俺も出る。故にお前たちは、どれだけ被害を減らすかだけを考えるがいい」
それは宣戦布告でもあり、自分なりの忠告であった。
だが、石丸は鼻を鳴らし、
「――笑止。負けるつもりで戦う者が何処にいる？」
「ならば精々、傷を早く癒すがいい。どの道、その怪我ではしばらくは戦えまい」
「言われんでも万全に仕上げてくる」

その返答に、満足し、
「ならそれでいい。楽しみにしている。――行くぞ、キャロル」
「畏まりましたわ！」
と、キャロルを伴ってその場から一瞬で消えるように移動する。
向かう先は自軍の本陣。撤退の動きは既に進めているだろうが、２００万強の大軍ともなれば撤退にも時間が掛かる。それまでにやるべきことは多くあるのだ。しばらくは前線も維持し続けなければならない。
だが、それを考えるべきであるのに、脳裏に掠めるのは石丸のこと。
……あの傷では、失った体力を取り戻すのに時間が掛かるだろう。
ＡＬ教徒などが主に使う神魔法であれば治癒自体は直ぐに終わるだろうが、失った血や疲労、体力までは元に戻らない。ザビエルとの戦いで負った傷は深く、一週間か二週間は最低でも掛かるだろう。動くだけなら数日でも可能だろうが、その状態で戦っても兵はともかく、己と戦うには足りない。
だがそれは、こちらにとっては朗報でもある。
……これ以上、無様を晒すわけにはいかない。
自軍が負けたわけではないにしろ、同じ戦場でもある。実質、魔軍として初の敗戦なのだ。咄嗟に兵を纏めはしたが、それでも半数は離散するのを覚悟しなければならない。
そして経過はどうあれ魔人の敗北。その動揺も大きく、無様を見せてしまった。
ならばそれを払拭しなければならない。己は、何があろうと負けるわけにはいかないのだ。
……数日以内、遅くとも一週間には軍を纏めて、再攻勢に出られるようにする。
そうしてその戦場には自分も出るのだ、とレオンハルトは決意を新たに昂ぶりを一時抑えることにした。

キナニ平野で行われた、藤原家率いる人類軍と魔軍の戦いは、魔人

ザビエルの戦死と、魔軍の一時撤退により、人類軍の勝利と終わった。
無敵と謳われた魔人を藤原石丸が倒したことで、人類軍の士気は高まり、人々は希望の光を見た。
対する魔軍は兵の損失こそ抑えられたが、それでも５０万近くの兵を失い、残った兵達も士気の低下が著しい。
勝利への期待を滲ませ、勢いづく人類だったが、一部の者達はそう甘くはないことを知っていた。
四天王の一角を落としたが、未だ最強の魔人であるレオンハルトと、その使徒達に魔物大将軍リーは健在。更には圧倒的武勇を誇った魔物大将軍コウウも軍を纏めてレオンハルトの指揮下に入り、命令系統が統一された。その上、援軍が来ないとも限らないのだ。
――人類軍はこれから、最強の魔人の何たるかを知ることとなる。

戦いの休息

キナニ平野の戦いから数日が経過していた。
夜の空の下にある人類軍の前線司令部の都市では、篝火が幾つも灯されている。その周囲には多くの兵士達が酒や料理を片手にしながらも程々に騒いでいる。その中心には、魔人の撃破を果たした立役者が赤みがかった顔で酒を片手に暴れており、一緒になって騒ぐ者や、安静にしてほしいと嗜める者、それを眺めて笑う者など多くの人間、それと妖怪が一先ずの勝利を一様に喜んでいた。
「さすがは父上です！　やはり、父上は最強です！」
「はははは！　そうだろうそうだろう！　次も父の格好良いところを期待しておれ！」
「はい、期待しております！」
「流石は石丸様！　次はわしも活躍して見せますぞ！　あのコウウとかいう魔物もぶっ殺してくれよう！」
「あれは朕の得物じゃ！　小娘では荷が重かろう！　後方に下がって油でも売ってるがよいわ！」
「んじゃと糞爺!?　貴様は怪我人じゃろうが！　これを機に隠居でもしてろ！」
「もうっ、三人共酷い怪我だったんですからゆっくり休んでください！」
春姫の眉を立てた言葉に、石丸や頼光、田村麻呂など怪我が特に酷かった者達が揃って唸る。
手配した神魔法の使い手のおかげで傷こそ綺麗に塞がっているが、失った血や体力は自然に治すしかない。なので本来は安静にしないといけないのだが、石丸達は喜んで宴に参加していた。
子供達に武勇伝を言って聞かせるのはまだしも、酔って暴れた挙げ句、身体に負担を掛けるのはあまりよろしくない。
だが、どの道完治するまではしばらくは戦いには出さないようにと軍師達の話し合いでは決まっている。少なくとも明後日の戦いには出れないだろう。

なので酒に酔った後に大人しくしてくれるならそれでも良いかと思うが、しかし、
「ちゃんと見てないと勝手に出ていきそうですね……」
「そうでありますなぁ……いっそ縛っておきますかな？」
「縄くらいじゃ普通に引き千切って来んだろ」
ですよねぇ、とミッチーや黒部の言葉に吐息付きで応じる。続いて月餅が静かな声で、
「一応石丸様に関しては士気向上の為に参陣はする予定ですが、本陣に引きこもって貰う予定となっております。……石丸様が見てるだけで我慢できるかは疑問ですが、戦場では儂が見張っておきましょう」
「……お願いしますね、月餅さん」
任されました、と月餅が頷く。しかし、とミッチーが顎を撫でさすりつつ、
「とはいえ戦力に不安がありますなぁ……」
「はっ、そんなの俺が補ってやらぁ」
「勿論、黒部殿は紛うことなき主力。今回は頼光殿麾下の源氏の方々を休ませたいので、敵の真正面に当たれるように一番の激戦区に配置致します」
おお、と軽く頷く黒部。一番危険と言われても臆することがないどころか、戦意を滾らせているのは流石は妖怪を束ねている妖怪王だ。ミッチーや月餅も信頼しきっている。その強さを知っているからだ。
ゆえに心配なのはそれ以外の部分であり、
「ですが、敵の戦力はまだまだ強大でありますな。先の戦いで頼光殿や麻呂殿を倒した大将軍コウウや、もう一体の大将軍リー。それだけならまだしも、魔人筆頭とその使徒が相手でありますからなぁ……」
渋い顔でそう言うミッチーに、春姫は気になって尋ねる。
「……やはり、厳しいのですか？」
「……士気と数の上ではこちらが勝っているでありましょう。相手は旗印であった魔人の一体。それも魔人四天王を失い、多くの兵が離散したのに対し、こちらは開戦初日だったこともあって、被害は軽微。

無敵の魔人を討ち取ったことで将兵の士気が上がっただけではなく、大陸各地の民が期待の声を上げていますな」
「そのおかげで志願兵が増えております。各地の有力者からの援助も多く頂き、戦をするに当たってこれ以上ないほどの条件が揃っていると言えるでしょう」
だが、と、ミッチーの説明を引き継ぐように語った月餅は続けて問いの答えを口にした。
「魔人の武勇は、あらゆる戦略、戦術を凌駕してしまう可能性があります」
「今回は運が良かったでありますからなぁ……初日で様子を見ていたのか、戦場で暴れることはありませんでしたし……ぶっちゃけ石丸殿に頼れない明後日からは、しばらく防衛戦に近い感じで戦うことになるかと」
「……そんなにですか」
魔人の強さ、というのを春姫はほぼ知らない。十数年前にそれらしき人物とちょっとだけ戦ったことはあるが、それだけだ。それも主に戦っていたのは石丸であった。
話としても恐ろしいほどに強いというのは聞いているが、石丸は倒してみせた。石丸と同等以上の強さであれば戦場では脅威であるということは理解出来るが、それでもこちらの方が士気と数で勝っているのに、その次戦から直ぐに防衛戦をしなければいけないほどに脅威なのか、と疑問が湧く。
だがその疑問にはミッチーが答えてくれた。
「まあ、最初は向こうの兵も及び腰でありましょうし勿論攻めますが、少しでも押され始めたら防衛に徹する予定でありますな。魔人を倒せない我々では、どれだけ頑張っても時間稼ぎが精一杯でありますし……」
「……そうですな」
ミッチーの言葉を聞いて、月餅が間を置いて静かな声で頷く。魔人の強さを憂いているのだろうか。しかし、
……石丸様に頼ってばかりでは駄目ですよね……。

春姫は手をぎゅっと握りしめて元気づけるように微笑みながら、
「石丸様の負担を少しでも和らげるために皆で頑張りましょうねっ！」
「……はっ、お任せを」
「頑張りすぎて死んだら元も子もないので、程々な感じで――って、春姫殿は石丸殿の傍に付いておかないと。何かあったら作戦立てた小生や月餅殿が多方面からボコボコにされて……特に頼光殿に知れたら源氏殺しされてしまいますからな」
「ふふっ、そうですね」
「……そういや、たまに言ってるその源氏殺しって何なんだ？」
と、黒部が問う。ミッチーが微妙な表情で、
「……半半殺しのことでありますな」
「あん？　じゃあ四分の一ってことか」
「……いえ、半分殺してからまたその半分殺すので四分の三殺しであります」
「……それ、ほぼ死ぬんじゃねぇか？」
「源氏ではやらかした人間には大体これでけじめをつけるのでありますよ。切腹させるよりは優しいだろうということと、少し瀕死の方が攻撃力が上がる気がするとか狂人みたいなことを真面目に言っているので、彼女らは喜々としてそれをやりますな……」
「……魔軍より先にあいつらをどうにかした方がいいんじゃねぇか？」
「あ、あはは……とにかく、頑張りましょう」
苦笑いしつつ、折角なのでお酒を注ぐことにする。
ともあれ、こうやって騒げるのも今日で終わりだ。
明日は丸一日戦の準備であるし、明後日には再び魔軍との本格的な戦になる。
だから今日のこのひとときくらいは、肩の力を抜いて楽しもうと、藤原家の面々はほんの少しの夜更かしを行うのであった。

一方その頃。
魔人四天王の一角であるザビエルの死は、魔物界に住む者達を震撼させた。
その多くは魔人がやられたことによる純粋な驚愕であったが、魔物界の支配者層である魔人達の反応は様々なものであった。
だが魔人達の中で最も多かった反応は、仲間がやられたことによる悲嘆や義憤といったものではなく、それとは正反対のものであった。
「ぎゃはははははッ！　おい聞いたか！　あのザビエルが、あのザビエルが人間にやられたんだってよ！」
「ええ、聞きました。大方、無敵結界を切って遊んでいたところを不意打ちでもされたのでしょうが……魔人の面汚しですね。同じ魔人としていい迷惑です」
「ザビエル様――いや、ザビエルって馬鹿ですねぇ。まあ、死んでくれて清々しましたが」
「全くだ！　ははは、ざまぁみやがれ！」
魔王城で集まっていた魔人達は、口々にザビエルの悪態をつき、死亡の件を肴に酒を煽るように飲んでいた。
傲慢で他の魔人をその強大な力を用いて虐げることも多かったザビエルは、ほぼ全ての魔人からよく思われておらず、むしろ死んだことを喜ばれていた。
ゆえに仲間の魔人が死んだというのに、この喜び様である。魔王城の部屋では食事や酒を己の使徒に運ばせ、ザビエルの悪口を言い合う軽いパーティと化していた。
だがそんな者達もいれば、ザビエルではなく別の部分に目を向ける者もいる。
「レキシントン様、本当に行くんですか？」
「レオンハルトに怒られても知らないよ？」
「ハーッハッハッハ！　馬鹿野郎！　あのザビエルを倒した人間だぞ！　どんな奴かは知らんが、体が疼いてしょうがないわい！」
と、馬鹿笑いしながらも機嫌良く大股で魔王城の廊下を行くのは鬼の魔人レキシントンと、その使徒である全裸の二人、アトランタと

ジュノー。
　大の戦好きのレキシントンは、ザビエル戦死の報を聞くと配下の鬼を伴って戦場へ向かおうとしていた。使徒がやんわりとレオンハルトに怒られるかもしれないと止めたが、その言い訳はとりあえず行ってから考えると言い切ったので苦笑しつつもそれに付いていっている。援軍とか何とかの許可を魔王様に取れば大丈夫か、と使徒が一応、予防線を張ることを考える。
　だが他にも、そのザビエルを倒した人間に興味を抱いているものがいた。
「魔人を倒すほどのベリーストロングヒューマン……そのボディを手に入れればミーのパワーも格段にアップ！　クケ、クケケケケ！」
　大型の魔物の肉体に寄生し操り、狂った笑い声を響かせているのは宝石の魔人であるレッドアイ。
　命ある生物を殺すことと、強くなることの二つのみを目的とするレッドアイは如何にしてその人間の体を手に入れるかをデジタル的な思考で模索し始めていた。他にも、
「ふーん……あのザビエルが人間に、ねぇ……？　嘘くさいけど、もし本当なら人体実験用としては使えるか。相当頑丈だろうし。でも――」
　と、ブツブツと研究についての思考を垂れ流しているのは魔人パイアール。
　とある目的の為に研究にしか興味のない彼だが、強い人間であれば無茶な生体実験にも耐えられるかもしれないと少しだけ思考を割く。
　だが、そのためにはレオンハルトに頼んでその人間を捕まえるなりを頼まないといけない。そうでなくとも、あのレオンハルトに許可を取り、ザビエルに勝つほどの人間を自分自身で捕まえなくてはならないというのは、リスクとリターンがあまりにも釣り合っていないので直ぐに思考することをやめた。非公式ではあるが魔人を倒した実績のあるパイアールだが、魔人を倒した人間、という共通項でもあるはずの部分にはあまり興味を持っていないようであった。
　そして他にもパイアールが疑問視したように、ザビエルが人間にや

られたことを疑う者もいる。それは、
（……はっ、どいつもこいつも馬鹿だな。ザビエルが人間に殺されるわけねぇだろ）
と心の中だけでその話題で盛り上がる魔人達を見下したのは魔人ケイブリス。
彼はザビエルが人間に殺されたのではなく、別の者に殺されたと思っていた。ムカつく奴ではあるが、魔人四天王という席に着くだけの実力があるのは解っている。ならば、殺せる者も必然的に限られるのだ。
（レオンハルトが殺したに決まってんだろ。ザビエルのこと、嫌ってるみてぇだったしなぁ）
最強の魔人であるレオンハルトであれば、ザビエルを殺すことも可能。しかも二人とも同じ戦場にいる上、動機もあるらしいとくればそう思うのも必然である。
きっと人間に手に掛かったという風に見せかけて殺したのだろう。いい気味ではあるが、
（……いや待てよ。そんな分かりやすいことをあのレオンハルトが本当にするのか？）
しかしケイブリスは持ち前の猜疑心で、それを再び疑ってかかる。というのもレオンハルトという魔人をそれなりに知っていると自負しているからであり、
（あんな魔人二人しかいない戦場で殺せば、自分が殺してますって自白してるよーなもんじゃねぇか）
別に強い魔人が弱い魔人を殺すくらいは当たり前の話だが、それはケイブリスの考えであってレオンハルトはそうではない。
誰に対しても、それこそ最弱であった自分にすら平等に接していたレオンハルトが、何があったのかは知らないが嫌ってるくらいで、しかもそんなバレバレな殺し方をするのか。魔王城とかであれば誰がやったかも解らないのでやりやすいし、魔物界にいる時にやっちまった方が手っ取り早いとケイブリスは思う。となれば、
（……ま、まさか……本当に人間に……？）

それを想像した途端、ケイブリスの背筋に寒気が走った。
冷や汗を垂らしながら、
（……と、とりあえず……しばらく人間には近づかないようにしよう）
ザビエルを殺せるならば自分も当然殺せるということになる。ゆえに内心で密かに、少なくともその人間が確実に死ぬ百年は人間と戦うのはやめておこうと心に決めたケイブリスであった。
だが一方で、レオンハルトが殺した、と確信を持っている人物もいた。
「くくく……やってくれたな、レオンハルト……！」
くつくつと笑い声を響かせているのは、ザビエルと同じ魔人四天王の一人であるプラチナドラゴンの魔人、カミーラ。
彼女にしては珍しく機嫌良く笑みを浮かべているカミーラは、以前自分の城で結んだ約定をレオンハルトが果たしたのだと確信していた。
「く、くく……よもや、これ程に早いとは……」
「はい、驚きですね。カミーラ様」
カミーラの忠実な使徒である七星もこの結果には驚いている。
どのような方法を取ったのかは解らないが、集めた情報からするとレオンハルトが殺したという目撃情報は無く〝人間が殺した〟という情報が入ってきている。
だがそれによってザビエルの評価は今、地に落ちている。そのおかげでカミーラの機嫌はここ数百年では一番と言えるほどである。
これは見様によっては、レオンハルトが自分の手を汚さず、人間の手で殺した――もしくは殺したと見せかけることによって、ザビエルの評価を地に落としたという可能性もあるのだ。
少なくとも七星やカミーラは、レオンハルトがザビエルを憎み、珍しい悪い顔を浮かべているところを見ているため、そのように思っていた。
「くく、戻ってきたら、土産話を聞かせて貰わないとな……」
そう言って、カミーラは自分の城へと帰っていった。
そんな中で、レオンハルトと親しい魔人の一人である彼女は、城か

ら出ていこうとしていた魔人を咎めているところであった。
「――どこに行く気かね？　レキシントン」
「ああん？　誰――って、ケッセルリンクか」
　レキシントンが振り向くとそこには魔人四天王の一人、ケッセルリンクが立っていた。人の名前や顔をあまり憶えない、憶えたとしても忘れてしまうレキシントンでも、さすがに自分より強い者の存在はちゃんと記憶している。
　そしてそのケッセルリンクの背後には、メイド姿の使徒が三人。シャロン、パレロア、エルシール。彼女たちは主に付き従うように背後に控えながらも、邪魔をしないように笑みのまま自然な動作で不動と沈黙を保っている。
　レキシントンは彼女らを見て、いやらしい表情を浮かべて笑う。
「相変わらず良い女連れてるな。どうだ、儂とやらんか？」
「――私の質問に答える気はないのか？」
「っと、冗談だ。恨みを買ってしまっては後が怖いしのう。言われんでもやる気はないわい」
「三度目だ。――どこに行く気かね？」
「……はぁー、わかった、わかった。行くのをやめれば良いんだろう？」
　ケッセルリンクの重圧の乗った冷たい視線を浴びせられ、レキシントンが肩を竦めて降参だ、と言わんばかりに首を振る。
「……分かればいい。では、私はこれで――」
「おおっと！　その代わりに……解っておるな？」
「……戦う気か？」
　踵を返そうとしたケッセルリンクを、レキシントンが意気揚々と言葉を差し止める。その瞳から向けられる闘気が、何を要求しているのかを如実に語っていた。
「儂と話がしたい時は酒だが、儂に言うことを聞かせたければ――――戦って勝ってみせろ!!」
　ハーッハッハッハッ！　と、高笑いを始めたレキシントンに、ケッセルリンクは未だ冷たい表情のまま圧力を強くする。だが怯むこと

のないレキシントンに諦めが付いたのか、軽く吐息し、
「……良いだろう。ただし手加減は出来ないが、本当に構わないのだな？」
「ハハハ、手加減なんぞいらん！　全力で来い！」
そう言って二本の金棒を取り出すレキシントンに対し、ケッセルリンクはただ右手を曲げるように上げて応じる。武術の構えのような所作ではないにも関わらず、全くの隙がないケッセルリンクにレキシントンは笑みをより深くした。
背後の使徒たちはいつの間にか離れており、
「レキシントン様ー！　頑張ってください！　宴の準備はしておきますから！」
「頑張れー、レキシントン。負けたらイッキ飲みね」
「おう、多分負けるが勝つ！」
「……来い！」
アトランタとジュノーの応援を受けレキシントンは床を踏みしめると、待ち構えるケッセルリンクへと金棒を振り下ろした。

「――ということがあった」
「……そうか。大変だったな」
占拠した都市の王宮。その中の豪奢な一室にて、魔人レオンハルトはやってきた魔人ケッセルリンクの話を聞いて溜息を吐いた。
部屋の中には、椅子に腰掛けるレオンハルトとケッセルリンクの他、食事用の大きなテーブルの前に座った褐色の男もおり、
「へぇ、そんなことがあったのか……お、これ美味いな。これはなんて言うんだ？」
「……はい。それはトキカマクという我が国の料理人が開発した料理で……」
「ほう、良い仕事してるな。なあレオンハルト、俺への報酬はこの国の料理一年分で良いぜー」
と、料理のことを給仕をしているこの国の第一王女、エクレアに質

問したガルティアはいつもの様に食事を摂りながら器用に声を出し、レオンハルトに向かってそんなことを口にする。軽い提案にレオンハルトは眉をひそめ。
「ふざけるな。お前の一年分とか俺達の何年分になると思ってる。レシピは控えさせてるからそれで我慢しろ」
「えー……いやまあレシピは嬉しいけどよぉ。働きがいがねぇなぁ……」
不服そうに言うガルティアにレオンハルトが〝我慢しろ〟と再度告げるが、悪い空気ではない。魔人としての恐ろしい一面しか見ていないエクレアから見ても、親しみが感じられるやり取りであった。
だが、気丈に振る舞っては見せても、内心ではかなり動揺していた。
何しろ、当初は二体と思われていた魔人の内、一体が消えてなお三体存在するのだ。魔人の物になると誓いを立てたもののいきなり三体の魔人と同じ部屋で、しかもただ一人の人間の身で働くことになるとは思わなかった。
……でも、国の為に頑張らないといけませんわね。
三体の魔人が部屋の中。それほどの無理な状況に陥ると逆に諦めが付いて開き直れる。こうなったらより魔人に気に入られるように振る舞うしかない。それが国の為であり、自分のためでもある。
そうしてエクレアは魔人達の話を聞きながらも、それを表情には出さないように努めつつ、同時に魔人の為に働いた。お酒のボトルを手に、魔人レオンハルトに近づくと、
「――お注ぎします」
「……頼む」
グラスに注ぐのはドンペリのホワイトゴールドという炭酸系のワインだ。透き通った黄金の液体がグラスの三分の一程度を満たすと、レオンハルトがそれに口を付ける。
そして口を離すと、再び口を開き始めた。話す内容はこちらにはあまり理解が及ばないことだ。
「何にせよ、俺の目論見は外れてしまった。ガルティアも後は自由にしていいぞ」

「折角戦場を見張ってやったのによ。……でもまあ良いもん見れたぜ。あの人間は確かに凄えな」
人間、という言葉に思い浮かぶのは人類軍の総大将である藤原石丸である。
先程の話から想像するにそれで合っているだろう。だが、味方の魔人が殺されたというのに落ち着きすぎというか、
「……いいですか？」
「え、あ、申し訳ありません。何でしょうか？」
不意に話しかけられたことで思考に耽っていたことに気づく。話しかけてきたのは、メイド姿の使徒。確かシャロンと呼ばれていた少女だ。
「炭酸のワインを注ぐ時は、二回に分けて注いで、泡が収まるのを待つのがいいですよ」
「……あっ」
と、小声で間違いを訂正してくれる。知っていることだ。なのに間違えてしまった。
「ふふ、緊張し過ぎないようにね。ちょっとの失敗で怒るような方ではないから」
「……分かりました」
使徒にやんわりと注意され、自分を戒める。思考に耽りすぎるのはよろしくない。
しかし、この使徒はやたら気品があるような気がする。まるで自分と同じどこかの姫の様な――
「――というかレオンハルトに頼まれてきた俺はともかく、ケッセルリンクは勝手に来て良かったのか？　一応、勝手にきた奴は罰することになってんだろ？」
「……まあ、そうだな。確かに教えてくれたことは嬉しいが、一報入れてくれるだけでも良かったんだぞ？」
と、気が付けば話は進んでいた。魔人ガルティアの問いにレオンハルトがケッセルリンクへと言葉を向ける。
すると隣にいた使徒メイドがケッセルリンクの傍に戻り、にっこり

と笑みをレオンハルトに向けた。何の意味があるか解らないが、威圧感があるような気がする。その間にもケッセルリンクは応じて、
「……その、なんというか……」
「ん、どうした。ケッセルリンク。何が――」
何故か言いづらそうに視線を迷わせる。若干、顔に赤みがかってもいた。
すると使徒メイドのシャロンがレオンハルトにワインを持って近づく。そして小声で、
「レオンハルト様――軽蔑しますよ？」
「おい待て」
「待ちません。私としても心苦しいですが……帰ったらレオンハルト様の人間時代の秘密を暴露することにします」
「……待ってくれ」
「……なら、分かりますよね？」
……使徒相手なのに魔人の方が下に見えるのは気の所為かしら……。
何故かレオンハルトに強気な使徒を見て、戦慄する。
だがレオンハルトはその笑顔と言葉を見聞きし顔を引き攣らせていたが、ややあって、
「……ああ、そういうことか」
「？　一体何を……」
と、ケッセルリンクが疑問符を頭に浮かべる中、得心したように頷いたレオンハルトは再度ケッセルリンクに顔を向け、
「――ありがとう。態々心配して会いに来てくれたのか」
「！　……いや、大したことではない。その、私が好きでやったことだ……」
優しげな笑みでそう言うと、今度は分かりやすくケッセルリンクの表情が変わった。
それは頬を紅潮させ、じっと見ているのが恥ずかしいのか、しかし嬉しいのだろう。目線をレオンハルトに向かってチラチラとさせつつも微笑を浮かべた――簡単に言えば、恋する女性の表情で、

……えっ、もしかしてそういう関係ですか？
魔人ともなれば性的にどうこうすることは有っても、愛だの恋だのに夢中になるイメージはないものであったが、目の前の二人の魔人は傍から見ても明らかに関係を持った男女特有の空気だ。
第一王女として今までに多くの人を見てきたエクレアはそういう人の機微を察することが得意だと自負する。誰が誰に惚れていて、誰と関係を持っている、などを見抜くのは結構容易なのだ。
……そういえばこの魔人も胸が大きいですわ。
何となく合点がいった気もするが、とはいえこの空気に割って入ることはちょっと難しい。身体を差し出すことは躊躇しつつも受け入れた。だが、容姿に加えて己の働きを見せて優秀であると判断されれば、それだけ譲歩してくれたり、出来ることだって増えていくかもしれない。単純に扱いが良くなることが大いにありえるのだが、性奴隷程度に扱われると飽きれば使い捨てられる可能性だってある。それだけではなく、不快に思われれば一発でアウトだ。
故に立ち回りには気をつけなくてはならない。この魔人が魔人レオンハルトに恋慕しているのであれば、あまりアピールしすぎるもの良くはないだろう。どの世界でも出しゃばりの命は短いものだ。出る杭は打たれるとも言う。
ならば粛々とやるべきことをこなし、求められることに応えることで地道に評価を上げるしかない。
「……しかしここまで来てもらって何だが、ガルティアもケッセルリンクも戦争には参加しなくていい」
「お、いいのか？　ちょっくら運動していこうかと思ってたが……」
「……ザビエルがいなくなった今、ガルティアの監視は必要ない。手が足りなくなることも想定してたが、こうなったらやることは単純だからな」
「しかし援軍は本当にいいのか？　私であれば遠慮は不要だ」
「その気持ちは嬉しいが、これ以上は過剰戦力だ。だが直ぐに帰れ、と言うつもりもない。明後日からは戦いに出るが、それまではここで指示を出しながらゆっくりする予定だしな」

「……そういうことなら」
どうやら話がまとまったようだ。戦争における魔人の参戦はないらしい。
とはいえ舐めすぎではないだろうか、とも思う。魔人を倒した人間がいるならばもう少し警戒しても良いような、とも思うが、
「よし、それじゃあ今の内にメシでも食いまくるか！」
「お前はいつも食ってるだろうが」
「ふっ、なら使徒達が戻ってきたら全員で食事会でもやろうか」
「それはいいですね、ケッセルリンク様」
しかしその心配とは裏腹に、魔人達は余裕といった様子で呑気なことを言っている。魔軍と人類の戦争中、しかも今の所は負けているというのに何とも気楽な光景だ。
だが何にせよ、今日は夜通し魔人や使徒のお世話だろうか、と息を入れる。
大変だろうな、とこれからの苦労を思っていると、不意にレオンハルトがこちらを向いて、
「……お前も疲れただろう。食事を取ったら休んでも構わん」
「っ、それは……」
「まあここにいると言うなら止めんがな。ただ、少々どころではなく騒がしくなるから覚悟しておけ」
責任感から躊躇いを見せた自分に、そんなことを苦笑しながら言う魔人。
その表情は、やはり最初に見た時とは違い、人間味のある表情であり、
「……覚悟は決まってます」
「それならいいがな」
それを見て改めて覚悟を決めると、返事をする。
しばらくして使徒達も帰ってくると、魔人とその身内は戦地で暫しの団欒を楽しんだ。

第二次キナニ平野の戦い

戦いから一週間。

ザビエル敗死によって一時撤退した魔軍と、それを追撃していた藤原家の軍勢は、魔軍が再び軍備を固めたことによって改めて軍勢を編成し、戦いに臨もうとしていた。

両陣営とも、大軍をキナニ平野の北部の平原に集結させ、戦いの時を待っている。

だが魔人を倒し、魔軍を敗走させたことで人類軍の士気は最高潮にまで高まっている中、一方の魔軍は自分達よりも遥かに強い魔人がやられたことで戦いに及び腰になっていた。

一部では、レオンハルトすらもやられてしまうのではないかと魔人の実力が不安視される始末であり、間違いなく過去最悪の状況であった。

そんな背景で行われる第二次キナニ平野の戦い。その開始が目前に迫っていた。

魔軍の陣地である北側では、ザビエル軍の兵を吸収する形となったレオンハルト軍１８０万が陣を形成していた。

そして早速、中心である司令部では戦いの前の会議が行われ、声が作られている。

中央のテーブルに広げられた戦場の地図と部隊を意味する駒のようなものを動かしながら、説明を終えたのは魔物大将軍であるリーであった。そのやや後ろには、同じく魔物大将軍であるコウウの姿もある。

「――以上になります。数の優利こそそこまで影響は無いでしょうが、問題は士気ですね」

「……やはり、兵の士気は低いか」

当然ではあるが、と声を出したのは魔人レオンハルトだ。周囲には彼の使徒であるキャロル、ハンティ、ペールも揃っており、ザビエル

の使徒である藤吉郎の姿もある。
その問いにリーは渋い声で頷き、
「……はい。実際の被害が少ない我が軍でも、多くの兵が不安を感じております」
「っ、申し訳ありません！　我が軍の兵がレオンハルト様の軍に悪影響をもたらしてしまい……かくなる上はこのコウウ。自らの槍でもって汚名を返上する所存であります！」
と、勢い良く頭を下げたのはコウウだ。彼はザビエルの使徒がレオンハルトの使徒を襲っていると気づいてからこんな調子であり、更にザビエルの戦死と前回の戦で敗走したことで四六時中顔を青褪めさせており、挽回しようと躍起になっている。
焦ってもしょうがないし、コウウが今回の事態に関係していないことは分かっているが、それも承知の上でレオンハルトはコウウを一瞥し、
「ああ、期待している。存分に槍を振るえ」
「はっ！　我にお任せを！」
勇ましく礼をしたコウウだが、やはりその槍を握る手は僅かに震えている。処罰されてしまうことを恐れているのだろう。その指揮に問題は無かったとはいえ、ザビエル軍が原因で負けたのは事実。そしてザビエルがいなくなった今、ザビエル軍の最高責任者はコウウであり、敗走の責任を取らされる可能性は大いにある。
これ以上の醜態を晒すわけにはいかないと、より強い想いで戦いに臨んでいるのだった。
そしてコウウが一歩下がると、それを待っていたかのようにハンティが声を向けた。
「それで結局どうするのさ。このまま普通に戦っても勝てるだろうけど、危ないのも数人いるんでしょ？」
「レオンハルト様の獲物の藤原石丸という敵の大将ですわね！　後は参謀の月餅、妖怪王黒部などの藤原四天王がやはり前回も活躍したそうですの！」
ハンティの質問には、情報収集をしていたキャロルが勢い良く答え

た。それを聞いてペールが嫌そうな表情で反応し、
「黒部って妖怪は戦ってるとこ見ましたけど、結構ヤバいですよう、アレ。見た目は大きなワンちゃんですけど、ちょっと私じゃ勝てないかもですねー……」
　使徒であるペールが〝勝てない〟という弱腰の発言をしたことでそれを聞いていた魔物将軍らが唸る。だがレオンハルトは動じることなく頷き、ハンティに視線を向けると、
「なら黒部はハンティに任せる。見かけたら相手をしてやれ」
「……まあ別にいいけどさ。でも、月餅の方はどうするの？」
「参謀であれば前線には容易に出てこないだろう。出てくれば相手をするが……俺やハンティ、それとコウウ以外は出会ったら逃げても構わない」
　言外にそれ以外の者では敵わない強さを持つ、と告げると名前を上げた両者からは即座の返事が来た。
「はっ！　必ずやその首を献上致します！」
「ん、了解。……でも、参謀だから前線に出ないとかよりによってあんたが言うの？」
「あ、それ私もちょっと思いました」
　ハンティが半目で呆れるように言うと、続いてペールまで苦笑交じりに言う。レオンハルトが眉間に皺を寄せ、
「……俺が普通ではないだけだ。本来なら、総大将が戦いに出ることは戦術として破綻している」
「そうですわ！　レオンハルト様は普通じゃなくて、超絶完璧ですの！　だから戦いに出ても問題ないのですわ！」
「……そういう意味で言ったわけじゃないんだがな」
　小声でキャロルの言葉を訂正するも、キャロルは拳を握り、目を輝かせてレオンハルトの凄さを力説する。こっ恥ずかしいのでやめさせようとレオンハルトが咳払いを一つ。そして話を終えるように、
「何にせよ、これ以上の醜態を晒すことは許されない。ここでの戦いで形勢をひっくり返す。敵は様々な手で持って応戦してくるだろうが、全て正面から叩き潰す。手を抜かず、自分に出来る最大限で臨め。

――誰が最強か、王道を以て奴等に教えてやるぞ」
「はっ！」
その言葉に使徒達のそれぞれの返事、魔物将軍らの揃った応答を聞くとそれを合図に、各員が持ち場に就いた。
レオンハルト自身も本陣を離れる中、戦いは始まろうとしていた。

「おっ、この辺りにしようぜ」
と、戦場が一望出来る丘の上でドカッと座り込んだのはムシ使いの魔人であるガルティア。
彼は多くの料理を地面に置きながら、早速肉に食いつく。
「……確かに、ここなら眺めることは出来るか」
「はい、ケッセルリンク様。こちらへどうぞ」
「今準備を致します」
「日傘もご用意しますね」
そうして続くのは魔人ケッセルリンクとその使徒達。
ガルティアがもう少し見ていくと言い、ついでに見ていこうぜと誘われたケッセルリンク達は帰る前に戦いを少し見ていこうと集まっていた。
パレロアやエルシールが椅子や机を設置し、日傘を差す中、ガルティアは遠くの魔物兵の様子を見て、
「んー、やっぱ結構落ち込んでるな。まあ魔人がやられてんだからしょうがねぇか」
兵の動きに落ち着きがない。やはり士気が低下しているな、と分析するガルティアに、ケッセルリンクは静かな声で、
「……大丈夫だろうか。兵があの様子では、被害も増えてしまうだろう」
「大丈夫ですケッセルリンク様。ケッセルリンク様もご存知の通り、レオンハルト様は士気を上げるのがお上手ですので」
不安を吐露するケッセルリンクの言葉に答えたのは、使徒のシャロンだった。笑顔のシャロンに、エルシールが言いづらそうに、

「……私はその辺のこと詳しく知らないのだけど、それほどに……？」
「あら、そういえばエルシールはレオンハルト様の本気の戦いを見たことが無かったわね」
シャロンがそういえば、といった様に応じる。そして続けて、
「レオンハルト様は後方での指揮もお上手だけど、戦場で兵を率いている時が一番輝くの。兵に慕われるのもそのおかげね」
なるほど、と半信半疑で頷くエルシールにシャロンはふふ、と笑い、
「見ていれば分かるわ」
それだけを口にして、シャロンもケッセルリンクのための紅茶を用意しつつ、
……それこそ、人間の時からお上手ですから。
と、心の中だけで知っている事実を言うと、皆と同じ様に戦場へと視線を向けた。

キナニ平野北部。
先日とは違う戦場で向き合う両軍は、その様相からも全てが違っていた。
数に於いても、人類軍２００万に対し、魔軍は１８０万。将兵を多く失った魔軍。逆に魔人を開戦初日で倒したことで、被害も殆どない人類軍だが、一番顕著なのはお互いの士気であった。
「……今回の戦い、もしかして負けるんじゃねぇか？」
「馬鹿、滅多なこと言うんじゃねぇ！　見つかったら怒られるぞ！」
「でもよぉ……相手には魔人を倒せるくらい強い奴がいんだろ？　そんなのと当たったら俺達なんて虫ケラみたいに殺されて……」
「そ、それは……レオンハルト様が何とかしてくれるだろ……」
「だといいけどなぁ……」
口々に不安を言葉にする魔物兵。その大半はザビエル軍の魔物兵のものであったが、レオンハルト軍の中でもそういった話題はちらほら上げられていた。
魔軍最精鋭であるレオンハルト軍すらも、自分達のせいではないと

はいえ、戦場での初めての敗北による影響は完全に消すことは出来ずに多くの魔物兵の中に色濃く残り続けているのである。
　そして一方で、藤原家率いる人類軍では未だかつてない士気の高さを見せていた。
「行くぞ！　俺達の住処を荒らす魔物共に人間の意地を見せてやる！」
「魔人なんか怖くねぇ！　こっちには石丸様がいるんだからな！」
「魔物を根絶やしにしてくれようぞ！」
「魔物や使徒がどれだけいようと全部ぶっ殺してやる！」
「正義は必ず勝ちます……！　きっと神もこの戦いをご覧になり、人類の勝利を信じています！」
「人類と石丸様に神のご加護を！」
「人間は魔物や魔人なんかに負けねぇ！　それを見せてやる！」
　持ち場に就く人間達は、先の戦いから参陣する藤原家の武士団や大陸諸国の軍勢だけでなく、物資による援助で留めていたはずのＡＬ教の騎士団や神官も、藤原石丸が魔人を倒したことで新たに軍勢として加わっていた。
　続く大地の先にいる魔物の軍勢を見据えて魔物を倒すと息巻く兵達だが、軍勢全体を指揮する月餅や菅原ミッチーなどの者達は、勢いだけではなく多くの策を用意し、苦戦することになってもしばらくはこのキナニ平野で防戦を維持するつもりでいた。
　最初の突撃、数時間程度でどれだけ数が減らせるか。そしてどれだけ士気を保てるかが勝負の鍵だと軍師達は睨んでいる。
　そのために藤原家の主力である妖怪軍団、それを率いる黒部にも出来るだけ派手に暴れるように告げてある。そして同時に、各軍の指揮官には戦の趨勢を見誤らないようにと、危うくなれば直ぐに引くようにと伝えていた。
　引き際を見誤れば多くの被害が出るだけではなく、士気も下がってしまう。ある意味では、先の戦いよりも重要であるのだ。
　そして本陣には、伝令などにも見えるように藤原石丸を立たせている。

戦いには出さないが、石丸が付いている、と兵達に解らせることで、より一層士気を維持出来るだろう。
やるべきことを全て終えると、月餅の指示を受けて石丸は軽く腕を上げた。
そしてそれを前に出し、総大将の務めとして、
「――――全軍、突撃せよ！」
開戦の号砲を発し、それを聞いた兵達の声が波のように平原に轟いた。
第二次キナニ平野の戦いが始まり、指揮官の指示を受けた兵達が一斉に魔軍に向かっていく。
魔物達はそれを迎え撃つように指示されるも、その腰は引けてしまっていた。
魔物将軍や魔物隊長、人間の指揮官。現場で戦う兵達。その誰もが魔軍の不利と、被害を想像した。
そしてそれは実際に起こる未来であったが――――彼らは忘れていた。
「っ！　おい、あれ……！」
「何を……!?」
人間の兵。そして魔物兵が気づく。
突如としてその場で待ち構えていたはずの魔物兵の中から、一つの影が飛び出してきた。
それは魔物の姿ではない。人の形をした男であった。
魔物兵でも、魔物隊長でも、魔物将軍でもない。人の姿をした魔の存在は限られている。
そしてその名を、誰もが知っていた。
「魔人レオンハルト……！」
一人の前線指揮官が、その名を口にする。
だが、兵も、それを指揮する指揮官も、誰もその突撃を止めることはしなかった。
魔物兵を置いてたった一人で向かってくる魔人に、誰もが恐怖することを忘れた。

魔人など恐るるに足らない。どれだけ強かろうと、所詮は個人に過ぎない。戦場とは、たった一人で戦局が左右されるほど甘くはない。魔人一人が如何に被害を出そうと、このまま突撃すれば多くの魔物兵を倒すことが出来る。指揮官にはそんな計算もあった。

だが、彼らは忘れていた。

知らぬ者もいた。数十年、魔物との大きな戦を経験せず、ＪＡＰＡＮの武士に至っては全くの未経験である。そして経験した者達も、魔人が倒されたという大きすぎる偉業によって忘れていた。

だがそれを、かの魔人は咎めることもなく、ただ鋭い双眸で見詰めていた。

魔人の口が開かれる。

「……良い覚悟だ。魔人を目の前にしながら、臆することなく突撃するその胆力。この場にいる者は真の戦士なのだろうな」

だが、

「その覚悟に応え、俺も本気で相手をする。――〝オル＝フェイル〟」

と、魔人は空間に手を伸ばし、得物を引き抜いた。

空間を引き裂くような異音を響かせながら引き抜かれるは、蒼の魔剣。

怪しい輝きを放った身の丈を超える長さを持つ細身の魔剣は、見ているだけで不安を掻き立てられるような威容を放っていたが、それだけでは終わらなかった。

「人類軍２００万。魔物を討ち倒さんと一つとなったその強大な意志で俺を砕けるか――――存分に試してみろ」

魔人の言葉と同時、目の前である現象が生じた。

それは魔人から立ち昇る圧倒的な存在感と、その闘気。

可視化出来るほどに立ち昇ったそのオーラは、赤黒く輝いて物理的に周囲を振動させるが、その魔剣にも影響を及ぼす。

先程までは蒼色であった筈の魔剣が紅くなり、禍々しい光を発した。

本能が揺さぶられてしまうほどの圧倒的な力の塊。それは魔剣だけでなく、眼前で待ち構える魔人からも感じた。

その紅い双眸が、魔人の戦意に呼応して更に紅く煌めく。
黄金の髪を持つその男は、全身から覇気を滾らせ、彼らを敵と見定める。
その背後にいる者達を、守り、導くものと定義する。
剣を構えて走り出す。２００万の軍勢に単騎で立ち向かったその瞬間。
「――――！」
魔人の蹂躙が始まった。

「な……何だ、あれは……！」
戦場より僅かに後方。両軍が接敵するその場所を見渡せる緩やかな丘の上で、一人の人間は声を震えさせた。
それは彼だけでなく、周りにいる兵士達も恐怖で顔を青褪めさせている。
何が起きたかは分かる。魔人がたった一人で、前線の軍と接敵した。
だがその結果起きている事態に、脳が理解を拒んだ。
魔人といえども、所詮は個人レベルの脅威でしかない。
そう思って――否、思い込んでしまっていた兵士達は、全てを思い出した。
魔人とは、人が敵うものではないことを。
「――――！」
それは、常人では視認すらも難しい動きであった。
近くでそれと接敵したものは、何が起こったか理解出来ていないであろう。
魔人が凄まじい勢いで距離を詰め軍勢に飛び込んだ途端、百人程度が瞬く間に身体に斬撃を浴びて両断され、命を落としていく。
人類軍の兵士達も、魔人が近づいてきたことで剣や槍を構え、指揮官の指示に従って戦おうとした。
「構え――」

一秒と保たなかった。
指示を出した前線指揮官の将軍は、遠距離から飛んできた斬撃に即座に首を落とされた。兵士達は一瞬の事でそれに気づかなかったが、交戦と同時に同じ様に身体を大地に沈めた。
前線の指揮官を殺した魔人は、軍勢の中にたった一人で飛び込む。
途端、暴風が巻き起こった。
飛ばされるのは人間の首、身体。魔人が一切の歩みを止めることなく、剣を振り、人間を塵の様に屠っていく。少し前での異常を感じ取り槍を構えた兵士達は、しかし数秒後、全く同じ目に遭って意識を飛ばした。
やがて魔人の周囲が人だらけになると、それに気づく兵士が増えていき、その姿を映した。
「あ……あぁ……」
それは、最強の魔人の姿であった。
魔物兵も連れずにたった一人で剣を振り、人間を蹴散らしていく姿は正に魔人。
魔人筆頭、魔軍参謀。かつて剣の王と呼ばれ、たった一人でも魔物の群れを相手に剣を振り、何度も魔軍を撃退した最古の王。
民に化け物と恐れられながらも、味方の兵士からの支持は絶大であった最古の英雄の名を人々は思い出した。
魔人レオンハルト。
魔人に堕ちて人類の敵となった王は、その剣を人に向ける。
「――――すげぇ」
それは魔物兵の声だった。
彼が戦うところを初めてみた魔物兵達は、その後ろ姿に憧憬の感情を覚えた。
そして直ぐにそれは畏怖、尊敬、崇拝に変わっていく。
「ああ……すげぇ、な……」
その戦う姿は正に圧巻。
鎧袖一触。立ち塞がる敵は一片の容赦もせず即座に斬り捨てる。
それはレオンハルト軍が掲げる王道の化身であった。

ただ真っ直ぐに、鍛え上げた強大な力を以て叩き潰して勝利する。
それは獲物を全力を尽くして狩る獅子の果敢。
人々を導くための王者の前進。
戦場での有り様は疾風迅雷。赫焉の光を放ちながら戦場を閃光の如く駆ける魔人を、何人たりとも止めることは出来ない。
その姿はかつて王として未熟であったと自負するレオンハルトが唯一、王として示せること。それこそが先陣を切って戦い、敵を討ち滅ぼすことで民を守ることであった。
人であった頃と全く変わらない戦法で剣だけを手に勝つまで敵を狩り、勝利にひたすらに突き進む姿は正に護国を司る剣の王。
「あぁ、ああっ……！」
「助け……助けて――」
戦えない民を守るその威光を魔物兵は一身に受け、かつてその威光を受けていた人間は敵としてその刃を浴びる。
「か、神よ……我らに加護を……っ！　邪悪なる敵を倒し――っ」
「せ、正義は勝ち、勝っ――」
祈るように天を拝んだ熱心な信徒は、何もすることが出来ずに天に召された。
魔物にとっての英雄は、人間にとっての大敵となる。
「っ、俺達はこんなところで何をしてんだ……！」
「……ああ、そうだ。俺達はあの御方と戦いに来たんだったな……！」
魔物兵達は自分達を守るために代わりに戦う英雄の姿に、心を奮い立たせる。
魔物隊長、魔物将軍らが指示を出すのと、走り出すのはほぼ同時であった。
「全軍突撃ィィ――!!　レオンハルト様を援護するのだ！」
「我らは魔軍最強のレオンハルト軍！　最も強い御方が率いる覇者の軍勢！　それを人間に知らしめよ！」
「おおおおおおおおおおおおおお――ッ!!」
単騎で敵に立ち向かうレオンハルトの姿に、魔物兵達が無敵の軍勢へと変生し、遥か先を進む英雄に追いつこうとする様に人間の軍に突

撃する。
「こ、こんなことが……！」
「ひ……怯むな！　何としてでも奴を止めろ！」
たった一人の魔人の戦闘で、下がりきった士気を持ち直した。
反対に、人間の士気が削がれていく。
あらゆる武器も、魔法も、策も、たった一人の魔人を止めることが出来ない。
魔軍が攻勢に出たにも関わらず止まることなく戦場で死を振りまく魔人の姿に、人間は恐怖する。
次の瞬間には殺されてしまうかもしれない。現実として、魔人は一切止まらずに突き進んでくる。
そんな中、大柄な黒い影が魔人に突っ込んでいった。
「これ以上やらせねぇ……！」
「――！　ほう……？」
今までの雑兵とは違う実力の持ち主。妖怪王黒部の姿に、レオンハルトは僅かに眉を動かす。
事実、そのレベルは他の人間とは違い、魔人クラスの戦闘力を誇る黒部の突進は同じ魔人であっても容易には防げない。
だが、
「悪くはない。――だが、俺を相手にするには足りん」
「ぐ、おおぉぉ……ッ!!」
剣の一振り。
防御に成功し、僅か数秒を止めることに成功した黒部だが、その程度では止められないと言わんばかりに、レオンハルトは黒部を一刀で吹き飛ばす。
次の瞬間には既に他の人間を数十人は屠っていた。
「この魔人が……！」
「ここで止めるぞ……！」
次に多くの武士がレオンハルトの前に立ち塞がった。
藤原家の主力でもある武士達。石丸の信頼する部下や、中には石丸の実子の姿もある。

だが、
「その程度かッ！」
「――ッ！」
「く……あ……！」
瞬く間に魔剣の線が走り、全て屍となった。何万といる武士も、初めて相対する魔人に自然と後退る。
「くっ、こっちは二百万だぞ……！　貴様一人で――」
決して弱くはない武人達を相手にしながら魔人は吼える。
「――二百万だろうと二億だろうと、俺は止まらんッ！」
「っ……！」
即座に斬って捨てる。武士を相手にも一歩も止まることのない魔人は、指揮官と立ち塞がる兵を全て殺しながら戦場を突き進む。斬り捨てた数は万に届こうとしており、人類軍の半ばまで到達していた。
そして前線に位置する魔軍も、彼らにとっての英雄の戦い振りに触発され、勢いを増していく。
「どうした人間！　この前の威勢はどうした！」
「この程度でレオンハルト様は――俺達は止まらねぇぜ！」
レオンハルト軍は連携を用いながらも、圧倒的な強さで前線を押し込んでいく。ザビエル軍であった魔物兵達も魔物としての強さを発揮し、人間を屠っていく。
魔軍最強と謳われるその脅威、士気が最高潮に達したその軍勢を止めることは至難であり、前線を魔人に荒らされまくり士気が低下した人類軍には不可能であった。
「おおおおぉぉぉ!!　どけや、雑魚人間共――！」
その中には魔物大将軍コウウがいた。
槍を振るい、先の戦いでの汚名を晴らさんといつにも増して気合いを入れているコウウは、一振りで大勢の人間を吹き飛ばしながら暴れ回る。
「おら、てめぇらも気張って進めやぁ！　もたもたしてると、手柄も全部取られちまうぜ!?」
「はっ！　分かっております！」

魔物隊長らも指示を出しつつ、大剣を振るって人間を殺していく。
コウウの率いる部隊が猛然と進む中、レオンハルト軍は三体の使徒を中心に人間の部隊を攻め立てる。
「レオンハルト様の勇姿を拝むためにも、どんどん突き進みますわよ！」
「……あたしは先に行ってるからね」
「はい、どんどん撃っちゃってくださーい！」
魔人に匹敵する速度で戦場に突っ込んでいったハンティは、まるでレオンハルトの様に真っ直ぐと突き進み、的確に指揮官の首を落としていく。
ペールが率いる部隊には魔法を使う魔素漢や魔法魔物兵が多く、速度を出せる部隊ではない。ゆえにペール自身も魔法を放ちながら進んでいるが、その速度は一定で緩やかだ。
そんな中、キャロルは右手の銃を空に掲げ、
「さて、新部隊のお披露目ですわ！」
引き金を引き発砲の音が響いたのを合図に、空に幾つもの影が走った。
鈍い色をした円盤型のそれは、百程度の部隊。その正体を、キャロルは告げた。
「飛行魔物兵部隊！　その脅威を味わうといいですわ！」
「――!?　な、あれは……！」
人間の兵が驚愕する中、空を飛ぶそれはレオンハルト軍の本陣、魔物大将軍リーの指示で発進した飛行魔物兵。
近年誕生したばかりで数が少ない彼らは、レオンハルト軍にだけ配備された新兵科であった。
「航空機動部隊エアフォースワン！　レオンハルト様の命にて参戦します……！」
「我らが初陣……！　部隊名を下賜して下さったレオンハルト様の為にも、犠牲となってもらうぞ！」
空を行く飛行魔物兵は編隊飛行を行いながら人間達の真上となる上空に到達し、降下を行いながらある物を雨のように落としていく。

小さな玉にも見えるそれは、
「キャロル様より頂いたぷちハニーによる爆撃だ……！」
瞬間、地上で幾つもの爆発が巻き起こり、人間を吹き飛ばしていった。

「が、あ……！」
「助けてくれ……っ――」
「やめてくれ……やめてくれよおおおお！」
「だめだ……もう終わりだぁ……！」
そして地上では、爆撃と剣撃の嵐が巻き起こる。
死が量産される爆撃の中であっても、修羅と化した魔人の行進は止まらない。
爆風の中ですら戦うことを止めないその姿は荘厳で苛烈。数少ない戦おうとする者も無敵結界を使わせることすら出来ずに死んでいく。空からの爆発以上に死を振りまく魔人は、人間を絶望に叩き落とすには十分であった。
既に前線は崩壊しつつあり、殺し場となった戦場では、膝を突き許しを請う者すら出てくる。目の前で起きる惨劇の光景を、現実と認めたくないのだ。
だが魔人は一切の容赦をすることなく、彼らへ平等に死を与える。
「――いいや、まだだ。まだ、戦いは終わっていないぞ」
レオンハルトは戦いを目の前に許しを請い絶望する人間に、しかし戦いは止めんと拒否の言葉を突きつける。
「最初から分かっていたはずだ。魔人に戦いを挑む意味を。挑めばその先にあるのは死だということを」
獅子奮迅の勢いで戦いを続ける魔人は、人間に覚悟を突きつける。
「ここに立つ者は、例え女子供であろうと平等に戦士だ」
ならば戦え。どれだけ差があろうと抗ってみせろ、と。
「戦うことの意味を理解し、自ら戦場に立ったにも関わらず、戦う意志すら失くすような半端者は戦場に立つな」

無駄に命を散らすなと、魔人は言う。
「最初から負ける気で戦うような者は、戦士ではない」
戦士で無くなってしまった者達を戦士と平等に屠りながら、魔人は言う。
「死にたくなければ勝て。方法は何だっていい。俺に勝つことだけが、この場で生き残る唯一の方法だ」
それはかつて人として魔物に立ち向かった男の慈悲。
生き残るために苦悩し、己の意味を疑問していたからこそ理解出来る――人間への同情の言葉だ。
だが、
「俺は負ける気はない。例え一人で人類全てと戦うことになろうと勝つ。勝って大切なものを守り、未来を勝ち取ってみせる」
それは過去に立てた己への誓い。
どれだけ厳しい状況でも生き残り、どれだけ守るものが増えてもそれを守りきり、どれだけの時間が掛かろうと己と大切な者達の望みを叶える。
そしてもう失わないために。何かを得るために。
己は強くなり、全てに勝つと決めた。
例えどれだけの困難が待ち受けようとも、あらゆる方法を用いてそれを成す。
力を以て成し遂げるのだ。
立場の違いがあろうと、弱者を殺すことは本来忌避するもの。
しかしその全てを飲み込み、出来る限りの幸いを多くの者達に与えると誓ったのだ。
そのための意志と覚悟は決めたつもりだ。
故に、己を止めたいと。生き残りたいと願うなら、どのような方法でも勝つしかない。
「俺は止まらない。それが現実だ。――ならば逃げてでも生き残れ。それがお前達にとっての〝勝利〟となる」
かつての人間の王は、最後の慈悲としてそう告げた。
どれだけの聖人でも英雄でも、敵を守ることは出来ない。

後は敵である魔人として、戦う者を一切の容赦をせずに斬り捨てる。それを示すかの様に、レオンハルトの闘気とその手に持つ魔剣が、更に紅く鮮烈に輝いた。

「――全力で来いッ！　俺は全力を以て、それを見届けてやる……！」

最強の魔人の何たるかを戦場で示した魔人レオンハルトは味方に希望を与え、そして敵対者に絶望を与えた。

二人の英雄

人類軍。藤原家の本陣に、武士達の声が響いていた。
「お下がりを！」
「ええい！　ならん！　どけ……！」
五人の武士が一人の暴れる男を取り押さえている。
それは戦場を見て、放っては置けないと戦場に出ようとしている藤原石丸だった。
その直ぐ近くでは、同じく戦場を見て苦々しい表情を浮かべている菅原ミッチーと、表情こそ解らないが、嘆いているであろう月餅の姿があった。
「……撤退の準備を」
「……やはりそれしかないでありますか……」
彼らは同じ結論に達した。
戦闘が始まって僅か一時間。既に前線は崩壊し、魔軍によって蹂躙されている。更には魔人レオンハルトが軍の中央で暴れており、もはやそれは戦闘ではなく虐殺の様相を帯びていた。
だが、石丸はそれを聞いて武士達の拘束を振り解きつつ、苦悶の表情を浮かべ、
「俺が出る！　俺が奴と一騎打ちすれば――」
「……お言葉ですが、今の状態では勝つことは……」
「勝つ！　いいや、俺は勝たなくてはならん！」
「……あれを見て、尚勝つ、と仰っしゃりますか」
戦場で行われているのは当然戦争であったはずだ。
前線の魔軍との戦争はかろうじて戦闘になっているかもしれない。
だが、魔人レオンハルトとの戦いは、戦いになっていない。
まるで路傍の石のように兵隊を蹴散らして真っ直ぐ進むレオンハルトのその紅い瞳には修羅が潜んでおり、揺るぎない意志を秘めている。
敵である人間を見ながらも、見据えているのはここだ。
本陣に向かって真っ直ぐに突き進むレオンハルトは、もう一時間か

二時間もすればここに辿り着くだろう。そうなれば軍は完全に崩壊する。２００万の軍勢が全滅させられる。それだけは避けなくてはならない。
　そのためには今の段階で撤退を行わなくてはならないが、それでも勝とうとするならレオンハルトを倒すしかない。
　だがそれは無謀にも思えた。第三階級悪魔であり悪魔界の多くの強者を見てきた月餅ですら、勝てないと諦めてしまいそうな強さ。
　見立てでは第二階級に匹敵。或いは第一階級悪魔に届くやもしれない――実際には違うかもしれないが、底知れ無さという意味では同等――と思わせてしまうその強さは魔人としては異常。悪魔界の戦でも将としてやっていけるであろう実力は、地上では過剰戦力だ。
　まるで大人と赤子。巨大な獅子と蟻の対決。生物としての格が違う。事実、月餅にはその人間大の男が実物以上に大きく感じられた。
　それほどの差がありながらも慢心せずに、敵を本気で狩りに来るその姿勢は付け入る隙を見つける方が難しい。単騎でありながら剣の一振りで百の敵を一蹴し、あらゆる策を踏み潰して踏破、将としては本来破綻している行動も、かの魔人であれば英雄の振る舞いとなる。
　剣の王。剣王伝に記された伝説以上の光景が、今ここに具現している。
　敵は即ち人間。この戦場は舞台装置であり、自分達は彼の英雄譚を彩るための脇役に過ぎない。
　それに対抗出来る者がいるとすれば――――同じ英雄でしかない。
「俺はあいつに勝つために生きてきた！　ここで行かなくてどうする！」
　この場に於いて、それは藤原石丸。
　史上初、魔人を討ち倒した人類最強の剣士。彼に他ならない。
　彼の振る舞いを見れば、敵の英雄に砕かれた闘志が再び奮い立ってくる。
　人を導く覇者の器。人の上に立つために生まれた王の中の王。強大な敵を前にしても悠然と立ち向かい、己の勝ちを疑わない。
　事実、魔人に蹂躙されてなお、戦場が未だギリギリのところで保っ

ているのは、石丸の存在のおかげであった。
石丸がいれば魔人を相手でも勝つことが出来る。今まであらゆる戦に勝利した石丸であればこの絶望的な状況をひっくり返してくれる。先の戦で魔人を倒した偉業を忘れることはない。人類は皆、それだけを頼りに踏ん張っているのだ。
それはここにいる者達も例外ではない。月餅は悩んだ末に、
「……分かりました」
「む……ははは！　それで良し。俺は勝ってみせるぞ！」
月餅の許可を得たことで石丸が笑う。だがミッチーが静かな声で問うた。
「……良いのでありますか？」
「構いません。……ですが石丸様。その代わりに――」
「何だ？」
ミッチーの視線には言外に、負ければ終わりである、と語っていたがそれは百も承知だ。
そしてその通り、今の石丸ではあの魔人に勝てないであろうことも。
だが月餅は、勝利するためには一度、あの魔人と石丸を戦わせる必要があると見ていた。その上で死なせず生き残らせるために、月餅は提案をする。それは、
「儂も付いていきまする。そして、撤退の指示にだけは従って貰いたい」
「む、だが……」
「味方が撤退するまでの殿として、石丸様には戦って貰います。勝てばそれで良いですが、どちらにせよ軍を立て直さなければなりません。それまでの戦いです」
渋る石丸に、月餅は敢えて負けた時の話はしなかった。
勝つ気で戦うことは戦士という人種にとっては大切なことだ。可能な限り雑念は混じえたくない。それでこそ、石丸の勝利の可能性が生まれる。
自分の仕事は、負けて殺されることが無いように〝保険〟を掛ける

ことだ。撤退が出来る段階になれば、勝負が続いていようが石丸を連れて逃げる。全ては成長の為。その先にある〝勝利〟の為だ。
その意志を込めて、石丸に提案した。だが不意に横から、
「そういうことであればわしらも行かせて貰おうぞ」
「ちょうど身体を動かしたいと思っておった所じゃ」
告げたのは源頼光。そして坂上田村麻呂の二人。
どちらも、先の戦いの重傷から後方に控えさせていた者だ。
その二人が何故ここに、と思ったがその表情を見れば分かりきったことであった。
――このような戦を目にして、この二人がじっとしていられる訳がない。
石丸と同じように、居ても立っても居られなかったのであろう。自分の部下達は戦っており、今なお強敵を相手に蹂躙されようとしている。そんな場面を見て、動かない武士ではない。
二人は据わりきった目で更に告げる。
「報告を聞いたぞ。使徒が暴れておるとな。其奴らの相手は任せて貰おう。後、あのクソ大将軍もいるであろうしな……」
「引かせるならそちらの対処も必要である。前線の指示は征夷大将軍である朕に任せて貰おう」
「……相分かった。御二方の好きにされると宜しい」
思考し、許可を出す。石丸は元より許可を出す気満々であったのもそうだが、この二人であれば余程の相手でなければそれを成功させるであろう。そちらを避けさせればどうにかなる。
そして続いて声を上げたのは、同じく藤原四天王の一人だ。
「……そういうことであれば、小生も出ましょう。撤退の指揮は他の者でも出来ますし、今は武勇の持ち主が必要な時でありましょうからな」
「ほう、ミッチーも来るか。珍しいな」
と、石丸が言うように、確かに珍しい。普段は後方で指揮に専念し、前線にはあまり出たがらない。だが、
「今が正念場でありますからなぁ……面倒などと言ってはおれません

でしょう。死ぬ気でやらねば一事成すことも出来ますまい」
苦笑しながらもそう言うミッチーに、頼光が不敵な笑みを浮かべた。
「よくぞ言った！　それでこそ武士ぞ！　よし、貴様は死んでこい！」
「いや、死ぬ気でやるだけで死ぬのはちょっと勘弁してほしいのですが……」
「根性無しめ！　貴様、それでも武士か!?」
「……まあ、程々で良いでしょう。それより、そろそろ――」
このままいつもの調子でやり取りをするのも緊張の緩和としては悪くはないだろうが、今は一分一秒が惜しい。こうしている間にも、魔人は凄まじい勢いでこちらの兵を減らしている。迅速に行動をしなければ全てが手遅れになる可能性もあるのだ。
だがここにいる者達は長年戦に身を投じ続けた武士達。直ぐに戦いのための覚悟を終えると、それぞれの得物を手にしていく。
「……石丸様」
「……春か。どうした」
「いえ、あの――」
その直前、本陣に詰めていた春姫が石丸に声を掛ける。
彼女は何かを言おうとしてそれを取り止めると、迷った挙げ句に微笑みを見せ、
「何でもありません。――いってらっしゃいませ、石丸様」
「……うむ。行ってくるぞ」
と、やり取りを終える。それは明らかに、何かあるような様子だったが敢えてそれを指摘するようなことはせずに、石丸は本陣を後にしていく。
そして道中、ミッチーが石丸を見て、
「……勝たなくてはなりませんなぁ、石丸殿？」
「――元よりそれは変わらん」
「これは失敬。そうでありましたな」
その言葉を最後に、それぞれがそれぞれの道を行く。
別れ際、何も言わずとも皆の心は一つであった。

――勝つ。
負けないのではなく、勝利するのだと。
魔人の脅威を目にし、撤退することを決めて尚、彼らの瞳には揺るぎない意志が色濃く残り続けていた。

戦場を駆ける存在は、何も魔人レオンハルトだけではなかった。
周囲に兵も付けず、単騎で敵の群れに飛び込むのは長い黒髪と赤いクリスタルを有する女だった。黒のレオタード風の衣装に身を包んだ彼女は、右手を振ると、
「――雷神雷光！」
「あああああッ!?」
「っ……ぁ……！」
雷の雨が、人間達を襲う。その中心にいた多くは黒焦げとなって命を失くしてしまう。続けて殺到していた反対側の敵に対しても、少しの間を置いて魔法を発動し、敵を屠る。
それを為しているのはレオンハルトの使徒であるハンティであった。
彼女は感情の見えない表情のままひたすらに人間を絶命させていたが、不意にその表情が変わった。
……空気が変わった？
と、訝しげに目を細める。
戦場を覆っている恐れといった空気はレオンハルトが作り上げたものであった。味方にとってのいい空気を作り出してもいるが、ハンティがいるのは敵の真っ只中である。多くの敵兵、指揮官を討ち取っているのだ。
ゆえにこのような空気が流れるのは状況が変わったということだ。
……誰か来る！
おそらく敵の将。それも一線級の主力。
そう思考した直後、大柄な黒い影が来た。
「奴はここか……!?」

「っ、あんたは……」
と、現れたのは人ではなく妖怪であった。ハンティは直ぐにその正体に気づく。
妖怪王黒部。藤原家、人類軍の主力である妖怪軍団を率い、魔人級の戦闘力を持つと噂される存在。ハンティが目を向けると、こちらに気づいた黒部と目が合った。
「てめぇは……使徒か。強そうな匂いがするな」
「……妖怪王黒部ね。悪いけど、相手になってもらうよ」
「っ、上等だ……！」
こちらの力を感じ取ったのだろう、警戒し、敵意を露わに爪と牙を剥き出しにする黒部。積極的に探し出してまで相手をするつもりは無かったが、
……眼の前に出てこられちゃ、相手せざるを得ない。
一応主の命令だ。ここで黒部を見逃しては、他の仲間が黒部と相対することになってしまう。簡単に負けることはないだろうが、実際に目にしたところ、確かに他の者では荷が重いだろう。
ならば自分がここで倒してしまうのがいい。しかも妖怪であれば、どれだけやったところで死ぬことはない。気兼ねなく相手が出来るというものだ。それに、
……これなら、相手にするには申し分ない。
敵意をぶつけられ、ほんの少しの武者震いを感じる中、ハンティはそれを隠すように剣を構えた。
「ほら、掛かってきな。先手は譲ってあげるよ」
「舐めやがって！　――噛み殺してやる！」
黒部の爪の一撃を、ハンティは受け止めた。

人類軍の中央では、魔人による蹂躙が続いていた。
「ひっ、やめ――」
「た、助けてくれええええ！」
「命だけは……！」

「……」
魔人の脅威に恐怖して逃げ惑い、命乞いをする人間の首を容赦無く斬り落としていく。
辺りは蜂の巣を突いたような騒ぎであり、殆どの者が戦意を喪失している。中には戦意を保って剣や槍を構える戦士もいるが、力量差はどうしようもなく、戦士でないものと一緒に屍となっていく。
そんな中にいて、レオンハルトは思うのは〝落胆〟の感情だった。
人類を統一し、総力戦で挑んだ今回の戦い。弱者を虐げることの憂鬱さもあったが、それでも戦いが楽しみでなかったと言えば嘘になる。
こんなにも呆気ないのか、とレオンハルトは感じていた。
彼は、今回の戦いにおける自軍の不利を感じ取っていた。魔人を倒され、士気はどん底。数の上でも負けており、幾ら己が手塩にかけて育てた軍団とて、厳しい戦いになると予想していた。
しかしだからこそ、レオンハルトはそれを覆してみせると、そう意気込んでいた。自ら剣を取り、敵陣に突っ込んだのは味方の被害を出来るだけ減らす為でもある。
その上で勝ってみせる、と烈々たる気合を持って戦いに臨んだ。
しかしレオンハルトの予想に反して、敵は呆気なく瓦解してしまう。
人間の意志の強さとはこの程度なのか。そう落胆した。
英雄に率いられ、これだけ意志を統一した人であれば、どれだけ圧倒的な力を前にしても立ち向かってくるであろうと期待していたのだ。
だが、そうではなかった。言葉にすればそれだけのことだ。
……こんなものか。
それでも落胆は生じてしまう。
魔軍の指揮する立場として見れば喜ばしいことなのは勿論だが、私人としては全力を尽くしてぶつかりたい。そんなままならない我儘ともいえる望みをレオンハルトは夢想していた。
人という生き物の弱さは知っていたが、同時に無限の可能性がある

とも信じていた。
だからこそ、眼の前で起きる命乞い、戦いを放棄するような振る舞いはレオンハルトを失望させる。
隣人を守るため、そして生き残るために解っていて抗っているのではないのかと、剣を以って問いかける。
そんな様では不可能だ。可能性すらない。先程まではまだ相手が勝つ可能性はあったが、今はそうではない。
勝ちが決まった戦いは戦いではない。一方的な暴力だ。
守る者のためならばそれも辞さない覚悟はあっても、それが好きかどうかはまた別である。
故に暴力ではなく、〝戦い〟をさせてほしいと、レオンハルトは願った。
――だが、こちらの勝ちが決まり、相手の負けがほぼ決まっているからこそ、それを覆そうという者は現れる。
「――――遅かったな」
レオンハルトは不意に動きを止めて言葉を放つ。
視線を向けた先、人混みの間から現れるのは精悍な顔つきをした一人の男だ。
「……待たせてしまったか」
周囲を見て、そしてこちらを見て言うのは人類軍の総大将――藤原石丸。
己を倒し、敗北に傾いた勝負の天秤を勝利へと傾けようとする、己が待ち望んだ相手。
魔人を倒した最強の英雄の登場に、周囲の人間の眼に希望の光が僅かに宿る。
「ああ、待っていた。貴様がいつ我慢出来ずに来るのかとな」
「……ふ、そうだな。居ても立ってもいられなかった」
やはりか、とレオンハルトは内心で仕方のない相手を思う。
おそらく万全ではない石丸が己との戦いに挑むのは、自殺行為に近い。勝ち目はほぼないだろう。ゆえに待ち望んではいても、来てほしくはなかった。

だが同時に、この状況で来ないはずがないとも思っていた。この戦いに、万一の勝ちの可能性があるとすれば、それは藤原石丸が自分に勝つしかない。
その状況を作り出さなければ、戦意を失った人間は魔物に蹂躙されてしまうだろう。戦いを続けるにはこの手しかなかったのだ。
ゆえにレオンハルトは喜び、しかし残念に思う。来てしまったか、と思う。こうなれば戦うしかない。万全ではない状態で戦っても、元々細かった勝利への糸筋が完全に切れてしまう。
最終的な勝利を得るためであれば、石丸は逃げるべきであった。兵にどれだけの被害が出ようと、我先にと逃げ出すべきであった。
それゆえの落胆。先程とはまた別のそれが湧き立つのを感じながら、レオンハルトは剣を構えながら口を開く。
「是非もなし、か……」
相手を摘み取ってしまうという残念を感じながらも、義務としてそれを行う覚悟を決める。周囲の景色を歪ませるほどの闘気を発し、それを石丸にぶつける。もはやお前達に勝ち目はない、と。
だが、
「――言っておくが、負ける気はないぞ」
その圧倒的不利な状況に於いて、石丸は不敵な笑みを浮かべた。
「戦いにおいて、万全という状況はそれほどない」
地の利、人の利、如何な不利な状況であっても、戦わなくてはならない時はある。
「だがそれでも――俺は勝ってきた。だから、お前にも勝つ」
「――――」
不遜にもそう言い切る石丸に、レオンハルトは言葉を失った。
「お前を前にし、俺はかつてない程に燃え立っているのだ。ならば今の俺こそが一番強い己であろう」
帝の証である帝ソードを構え、石丸はそう言い放つ。
額には帝ハチマキ。首に掛かっている紐には帝リング。三種の神器を手にした帝は、魔人を討ち倒さんとその威光を発する。
レオンハルトはその言葉を受け、萎え掛けていた戦意が再び湧き立

つのを感じた。
「……なるほどな。確かに、お前は強い」
この男はかつての自分などよりも、よっぽど強い。
「人という括りで、お前に勝てる人間は過去を含めてもいないだろう」
魔人に為す術なくやられただけの自分など、足元にも及ばない。
だがそれは、過去のことだ。
「――それは人間の中での話だ。ザビエルを倒したことは称賛に値するが……それでも、俺に勝つことは出来ん」
今の自分の方が強い。そう信じ切ったレオンハルトはその意志を石丸にぶつける。
闘気の乗ったこちらの視線を浴びた石丸が口元に笑みを携え、
「やってみなくては解らんだろう？」
「然り。そうだな。ならば――」
お互いが、剣を引き構え、
「――その剣で、証明してみろッ！」
「ああ！　最強の剣、挑ませて貰う！　――いざ征かんッ！」
二人の英雄の戦闘が、今ここに始まった。

舌戦

戦場で部隊を指揮しながらも自ら戦っていたキャロルは、空気の変化を感じ取っていた。

戦いの音の響き、魔物兵の声や人間の悲鳴、剣を打ち合わす金属音に空からぷちハニーによる爆発音はあちこちから聞こえていたが、遠くの戦場から聞こえる遠雷のような響きをキャロルは聞き漏らす筈がない。

「レオンハルト様、ようやく少しは骨のある相手と出会えたようですわね！」

それは自らの主が戦う気配。忠誠を誓った親愛なる主のそれをキャロルは感じ取った。

そしてレオンハルトの喜びは自分にとっても喜びだ。今回の戦いはレオンハルトの格好良いところを多く見れているのでキャロル的には満足であったが、レオンハルトの方は色々と考えることがあったりと大変そうであった。

敵も主の足元にも及ばない雑魚ばかりで、さぞかし落胆したであろう。それを思うとこちらも悲しい。それを払拭するために人間に銃口を突きつけて無理矢理にでも戦わせて喜ばせてあげたいが、それをしても主は喜ばないであろうことも容易に想像出来るのでそれは諦める。正直、さっさと藤原石丸に出てきてもらって、レオンハルト様へ熱い戦いをプレゼントしてやってほしい、とキャロルは思っていたが、この分だと一応それは叶っているのだろう。それを実感すると途端に笑顔を抑えられなくなる。

「ふんふ～ん、わたくしも嬉しいですわー！」

ご機嫌になってしまい、鼻歌交じりに戦場を歩いていく。途中で敵を撃ち殺していくのも忘れてはいけない。出来れば今直ぐにでも駆けつけてそのお姿を拝見したいが、主の命令は何事にも優先されるし、そうでなくともお仕事をこなすことが、主の為になる。なのでそれを見ることは叶わない。

こういう時、身体が二つあればいいのにな、と思う。主の使う分身

とか自分も使えないだろうか。しかしあれは主の使う技の中でもトップクラスの難易度を誇る技らしい。今の自分では絶対に無理だろう。
　でもいつかは使えるようになるといいなぁ、と気分良くお仕事をしていたのだが、不意に溜息を吐くと、
「折角、レオンハルト様の事を考えて幸せでしたのに……」
「――人に近い容姿の魔物、貴様が使徒だな？」
　眼の前に現れ、こちらを鋭く睨んでくる人間の女性に目を向ける。黒髪を後ろで一つに結んだ強そうな武士だ。その後ろでは、救援に来たのであろう少し強めの武士達。その名は知っているし、議題にも上がっていた。
「如何にも、わたくしはレオンハルト様の第一使徒であり、魔物界一の完璧使徒であるキャロルですわ。あなたは……源頼光。そして後ろにいるのは源氏武士団とやらですわね？」
「ふん、知っているなら話が早い。キャロルと言ったな。わしと死合ってもらうぞ」
　それくらいは情報として幾つも流れているので知っている。源頼光というと藤原四天王という敵の主力に他ならない。やはり友軍を助けるためにやってきたのだろう。その証拠に奥の部隊は、
……撤退をしようとしておりますわね。
　それに気づいた背後の魔物将軍や、魔物隊長らが魔物兵に指示を出して人間を追い詰めようと動く。だが自分達やお互いの側近はその場で変わらずに対峙している。
　使徒を目の前に正面から来るとは随分と不遜な人間だが、勝負を挑まれたなら受けて立つのみだ。結構強そうな相手ではあるがキャロルは胸を張って得意気な表情を浮かべると、
「あら、命知らずですわね。レオンハルト様の使徒であるわたくしに挑もうとは」
　だが頼光はそこで口の端を上げた。そして煽り気味に身体を反らし、
「ふん、何を言う。人類最強であり、世界一格好良い石丸様の臣下であ

り、最愛の妻であるわしに狙われた貴様こそ、運が悪かったと嘆くのだな」
　今まで笑みのままであったキャロルの表情がそこで動く。眉を立てた顔で、
「……聞き捨てなりませんわ。――世界一格好良いのはレオンハルト様ですの！　そして最強の魔人であるレオンハルト様の方が凄く、完璧！　そこらの人間のおじさんと比べられては不愉快極まりないですの！」
　言ってやると、今度は向こうもガラの悪い表情で、
「あぁん!?　なんじゃと貴様！　わしの石丸様をおじさん呼ばわりしおって！　そんなこと言ったら魔人なんぞ全員ジジイではないか！
　そして貴様もババアだ！」
「ふっ……永遠の美を持つわたくし達に嫉妬する気持ちは解らないでもないですが、そんな下品極まりない言葉を使っては、主の品格が疑われますのよ。従者の振る舞いは、そのまま主への評価に直結し――」
「うっさいわババア！　歳の上では年増には違いなかろう！　ぶっ殺すぞ！」
「……ふ、ふふん。醜い負け犬の遠吠えですわ。それにぶっ殺すなど……そういう言葉は使う相手を選びなさいな。貧弱極まりないただの人間がわたくしの様な使徒にそれを言っても、戯言にしか――」
「うっさい殺すと言ったら殺すんじゃ！　あ、それとも年食って耳が遠くなったのか？　やーい！　ババア！　ババア！」
「……ふ、ふん。幼稚な罵倒ですわね。そんな分かりきった挑発にわたくしが乗るとでも――」
「しかも貧乳ではないか！　やーい、貧乳高飛車ババア！」
「――ぶっ殺しますわよ!?」
「キャロル様!?　挑発ですから落ち着いて下さい！」
　部下の魔物将軍や親衛隊の者達がぷちハニーを取り出したキャロルを必死に止める。周囲は未だ人間との戦いの最中。味方が巻き込まれてはいけないので使用には注意が必要である。無闇矢鱈に投げ

てはいけない。
少し落ち着きながらも、眉を立てた表情のままキャロルは相手を睨み付ける。
「ふん、何を言おうとわたくしの方が優れていますし、最強最高完璧で偉大なる御方であるレオンハルト様にその石丸とやらは殺されることとなりますわ。精々、お墓の用意でもしておくんですわね」
「わしも石丸様も負けぬわ！　石丸様は最強の剣士であるからな！」
頼光の言葉に、同意するような声が人間たちから上がってくる。負けじとこちらも、
「所詮は人間の中で最強ってことですわよね。レオンハルト様は魔人の中で最強ですの。明らかに格が違うってことがわかりませんの？」
背後の親衛隊から頷く音が聞こえる。だが向こうも反論するように、
「やってみなきゃわからんじゃろうが！　バーカバーカ！」
「バカって言う方がバカですのよ！」
「じゃあ貴様もバカじゃ！　はい貴様の方が二倍バカー！」
「わたくしはバカじゃありませんわ！　それにその理屈だとあなたの方がもっとバカですのよ！」
「うっさいわ！　だったらやはりババアじゃ！　やーいババア！　貴様の様な貧乳ババアが使徒とは、主の趣味を疑うわい！」
「！」
言われた瞬間、キャロルの何かが切れた。
「……」
「あ、あの……キャロル様？」
顔を少し伏せて黙ったキャロルを心配して魔物将軍が声を掛ける。それに対する反応は何もなかった。
だが、ややあって身体を震わせると、懐に入れてあった回転式拳銃の二丁を手に取り顔を上げ、
「――――上ッ等ですわ！　ならその足りない脳みそに直接鉛玉撃ち込んで分からせてやりますの……！　覚悟しなさいなッ!!」
「……！」

敵意と殺気が入り混じった視線を向けられ、頼光や供回りの武士達が目を見開き、身体が震える。
キャロルの背後にいる者達も珍しいものを見たように呆気にとられつつも恐怖で距離を取り、
「キャロル様が怒った……!?」
「あの温厚な隊長が……!?」
普段から騒がしいいものの、意外にも怒りの感情を見せることがほぼない。あっても少しムスッとする程度だと思っていたキャロルの怒りだが、今回の怒りは普段のそれとは訳が違う。
「……ふん、人に近い姿をしていてもやはり使徒じゃな。その魔物特有の気配は隠せておらん」
頼光が警戒しているのか、眉をひそめ、刀を抜きながらそう言う。彼女が言うように、今のキャロルは主のそれに似て、使徒らしい濃密な存在感を放っていた。
ペールやハンティといった強者に隠れがちだが、キャロルもあのレオンハルトの使徒。そのことを、配下の魔物は改めて思い知る。
「……先程、ぶっ殺すとか色々幼稚な事を仰っていましたが……わたくしも少し、あなたのレベルに合わせることにしますわ」
「はっ、それがどうし――」
――パンッ、と。
一発の発砲音が鳴り響き、飛沫のようなものが頼光の顔にかかる。
「――は……？」
先程の煽り気味のものとは別の間の抜けたような声が口から漏れる。
その発砲。撃ったことに、撃たれてから気づいたのだ。
そしてそれは、周りも例外ではなく、撃たれた人物もそれに気づくことはなかった。
「頼、家……」
頭に一発。
銃弾で頭を撃ち抜かれ、あっさりとその命を終えたのは、頼光の息子の一人である頼家だった。

周囲に血と脳髄を撒き散らしながら地面に倒れていく息子を呆然と見詰める。
そしてそれを見て、キャロルは言う。
「わたくしも〝ぶっ殺す〟と思ったので、実演してみせましたわ。貴方達全員、このようにしてぶっ殺して差し上げますの」
「……貴様……！」
頼光は怒りに震える。
頼光も息子達も源氏という名のある武家に生まれた。
ゆえに戦場での死は付き物であり、いつ死んでも構わないと、覚悟は勿論していた。
だが、眼の前で息子を殺されて黙っている母親はいない。
――パンッ、と。
また一人、息子が撃ち殺される。
その早撃ちに、頼光は反応出来なかった。
「なっ……!?」
驚く頼光を、キャロルが嘲笑うように、
「思ったより動揺していますわね。隙があったのでもう一人、ぶっ殺して差し上げましたわ」
「……！」
それは油断。
特別なからくりは言うほどない。レオンハルトから着想を得て身につけた、単純な早撃ちの技を行っただけ。頼光であれば弾くくらいは出来たであろう。
しかし、眼の前で行われた初めての身内の死に、思ったよりも揺らいでしまった。
その揺らぎによって生み出された身内の死。それに震える頼光を見て、キャロルは肩を竦める。
「何となく息子か何かではないかと思いましたが……別に狙ったわけではありませんのよ？　ただ、狙いやすい位置に頭があったので殺しただけですわ。まあ、早いか遅いかの違いですので問題はないでしょう。――ご希望の順番があれば、その順番通りに殺してあげますが

？」
「……貴様……殺すッ！！」
頭の血が身内を殺された恨みで激しく沸き立ち、その怒りのままに刀を強く握り、使徒に向かって駆け出す。
それを皮切りに、両者の戦闘は始まる。
頼光らの目的はあくまでも撤退まで時間稼ぎだが、今の頼光の頭にそれはない。
あるのは、眼の前の使徒を殺すことのみ。それだけを考えて吶喊する。キャロルは銃を二丁構えて、迎え撃とうと腕を交叉させた。
「気持ちは分からなくもないですけど、案外武士というのも普通ですのね。もっと鬼みたいなのを想像してましたのに」
「黙れ！　貴様は……貴様は殺す！」
血走った眼と剥き出しになった歯で襲いかかってくる様子は、正に〝鬼姫〟。
しかしその怒りを受けてなお、キャロルは失笑するように冷たい瞳で彼女を見た。
「怒っているのはこちらも同じことですが……まあ相手をして差し上げますわ。ちょうど、実戦で試したい戦闘方法もあったことですし――」
「死ね！」
と、刀を上段からキャロル目掛けて振り下ろす。
身体を真っ二つに両断するつもりで放ったそれは、しかし何かに受け止められる。
「何？」
それは、キャロルが持っている二丁の拳銃。
それを交叉させて受け止めたキャロルは、口の端を吊り上げて、
「レオンハルト様との特訓の成果を見せて上げますの。光栄に思うといいですわ。銃を使った近接格闘術。名付けて――」
「っ！？」
キャロルの言葉と同時に、再びの衝撃。二丁の銃が発砲したのだ。
しかも同時に腕に力を入れており、銃によって刀を持った腕が弾か

れるように上がる。
　その間にもキャロルは銃をまるで近接武器か何かのように使って間合いを詰めると、右手の銃を顔に突き付け、
「――〝ガン＝カタ〟。存分に味わいなさいな！」
「……！」
　その引き金と空を撃つ音とともに、両者の戦いは本格的に始まった。

「――んー、もう撤退しようとしてますか。呆気ないですねぇ」
　口元に指を当てながら言うのはレオンハルトの使徒のペール。
　彼女は魔軍の魔法部隊を率いながらゆっくりと着実に敵を殲滅していっているのだが、
「それで、足止めとしてやってきたって感じですかね」
「――まあ、そんなところでありますなぁ。小生は菅原ミッチーと申します。お見知り置きを」
　ですよね、と告げる先にいるのは着流しを来た中年くらいの男。
　しかしその飄々とした態度とは裏腹に全く隙がないため、部隊を引き連れた後、一人でやってきたミッチーにこうして普通に喋りかけてしまったペールであった。相手はこちらに笑みを見せつつも礼をしてみせ、
「というわけで美しい使徒のお嬢さん。良ければ小生に時間を預けてくれませんかな？」
　美しい、と言われよく分かってるじゃないですか、と感心しかける。よく見ればダンディなイケメンだし。とはいえ油断することなく愛想笑いで、
「それって、戦うってことですかね？」
「いえ、小生としては追撃をやめてくださるのなら戦闘はせずにお茶でも振る舞いたいと思うのでありますが……それはそちらが許さないのでありましょう？」
　問われ、しかしペールは思考しながら答える。

「うーん……別に私も戦いはそんなに好きでもないですし、戦わないで済むなら――」
「ペール様!?　馬鹿な事を言わないでください！　相手が逃げるなら追撃しなくては――」
「冗談、冗談ですからそんなに声を荒らげないでくださいよう、魔物将軍。せっかちな男は嫌われますよう？」
「ぐ……しかし……」
　上司にそう言われると魔物将軍も呻くしかない。だが、それを聞いたミッチーがしたり顔を魔物将軍に向けると、
「そうでありますなぁ。余裕の無い男は嫌われるもの。気をつけたほうがいいですぞ」
「人間如きに言われる筋合いはないわ!!」
「そうやって直ぐに怒鳴るのもどうかと……あ、お茶菓子ありますが良ければどうぞ」
「そうですよう。少し声を落として、カリカリしないでください。折角ですし、糖分でも補給しますか。皆魔法沢山撃って疲れてるでしょうし」
　はいどうぞ、といつの間にかミッチーの近くまで行き、大量の和菓子を持ってきたペールがそれを自然に手渡す。箱を地面に置き、
「……うむ、美味いな。よし、ならば全員、おやつ休憩――ってなるかあーー!!　戦場で敵の真ん前でおやつ休憩を取るやつが何処に居る！　悠長の極み！　って、お前達も何を身を乗り出している!?　休憩は――って、違う違う！　並べとは言ってないだろう!?　持ち場に戻れ!!」
「え？　――あっ！　す、すいません……つい……」
　お菓子が食べられると聞いて魔物兵達が行儀よく列を作ろうとしたところで我に返る。レオンハルト軍の魔物兵は普段からお菓子を食べたり、人気店の行列に並び慣れたりしているのでこういう時はとても行儀が良い。あと、レオンハルトの方針で〝休む時はきっちり休む〟という部分も浸透しているので、一瞬、完全に休憩時間に入りかけた。

弛緩しかけた空気をもう一度締め直そうとしたところで、しかしミッチーとペールが半目で魔物将軍を見ると、
「一人だけ食べておいてそれはあんまりでありますなぁ。一人だけ美味しい思いをする気でありますか？」
「魔物将軍だけ魔法撃ってないのに、魔法を沢山撃って疲れた兵達には休憩を取らせないんですか!?　これ私、知ってます！　パワハラ！　パワハラですよう！　レオンハルト様が酔った時に言ってました！　断固抗議するべきです！」
「ペール様はどっちの味方ですか!?」
「え？　レオンハルト様の味方ですけど？　何言ってるんですか？　ひそひそ」
「当たり前でありますなぁ……人間の小生でも分かります。ひそひそ」
　こいつら……！　と、怒りで震える魔物将軍。密かにレオンハルト様に異動届けを出そうとか呟いていたが、残念なことにそれを最初に見るのは私なので意味ないですよう、と内心で肩を竦める。後で却下しておこう。この魔物将軍、ノリが良くて面白いし。
　ともあれ、いつまでもふざけているわけにはいかない。一緒に井戸端会議風の演技をしたところでミッチーに向かって、
「じゃあ、時間稼ぎはこれで終わりで」
「……これはこれは、気づかれておりましたか」
「これくらいは策としては序の口ですよねぇ。ということで魔物将軍、何時も通りボコボコにしちゃいましょうか」
「は、はっ！　やっと本来の職務に戻れるのですね！」
　魔物兵達にも指示を出して戦闘態勢に入る。すると向こうの部隊もミッチーの指示に合わせ、
「では、戦闘準備。距離を取って迎撃を優先。時間を稼ぐように」
「御意！」
　よく見ると遠くに見える向こうの部隊も魔法部隊の様だ。少々特殊な格好をしているが、
……もしかして……。

それを見てペールの脳裏に浮かぶものが一つあった。それは、
「……もしかして、陰陽師とかいうやつですか？」
「……ほう？　知っておりましたか。いやはや実戦配備するのも初めてでありますし、数もまだまだ少ないので、殆どは大陸の魔法部隊なのですがな。使わずに済むほど甘くはないようで」
ミッチーの飄々としたどこまでが本当か解らない言葉に、やはりか、とペールは思う。
陰陽師とは、ＪＡＰＡＮ特有の魔法使いのようなもので、最近発祥したばかりの技術であったはずだ。まだまだ広まっているとは言い難いらしいのだが、その基礎は既に組み上がっており、教えが徐々に広まっていると聞いた。ペールとしてもよく解らないが、情報部やレオンハルト様が言うにはそうらしい。
だが、そう来るとなるとちょっと面倒になる。だが主の命令はこなさなくてはならない。ご褒美貰えないし。
なのでペールは少し目を細めて顔色を見るようにしながら問いかける。
「……もしかして、ミッチーさんもそれ使えるんですか？」
「さて、どうでありましょう。使えるかもしれませぬし、使えないかもしれませぬ」
「ええー、教えてくれないんですかぁ？　こんなに可愛い娘が聞いてるのに？」
「小生も男として答えてあげたいのは山々ですが、こればっかりはどうにも。――試してみては？」
と、ミッチーの眼光が鋭くなる。
その眼の奥には、他の武士と同じ様に修羅が潜んでいた。
……面倒ですけど、仕方ないかぁ……。
杖を取り出しながら息を吐く。そして気持ちを切り替えると、
「どうしても、教えてくれないんですね？」
「……さて、こちらに寝返ってくれたりすればもしかしたら……」
「あ、それは無理ですね」
「……即答でありますな」

既に眼の奥が笑っていないミッチーに、こちらも張り付けたような笑みで答える。
「ふふ、私はこれでも一途なんですよう？　レオンハルト様一筋です。だからごめんなさーい。それに実は――人間はそんなに好きじゃないんです」
「ははは、奇遇でありますな。小生も――魔物を口説く趣味は持ち合わせておりませんので」
その言葉と同時に笑みがかき消え、お互いの攻撃が炸裂した。

剣の理

コウウは、ただひたすらに焦っていた。

「おら、次ィ！」

戦場で槍を振るい、次々に人間を殺していく。普段なら己の圧倒的な力で雑魚を捻り潰すのはスカッとすることであるはずだ。

だが、今は焦りしかない。

「全員ぶっ殺す……！」

人間の群れに突っ込んで普段以上に全力で殺し回るのは、ひとえに恐れているためだ。

今のコウウにとって、一番怖いのは敵ではなく味方。すなわち――責任を取らされることである。

……クソが……！　俺が何をしたってんだ……!?

先日の戦いで負けたのは、コウウが率いるザビエル軍が瓦解したせいである。だからこそ、レオンハルト軍も被害を減らすために一緒になって撤退した。

そしてその理由とは魔人ザビエルが戦死したこと。そのせいで多くの魔物兵は離散した。

他の使徒達も藤吉郎以外は全員死亡した。レオンハルトに喧嘩を売ったせいである。幸いにもコウウ自身が関与していないことは解ってもらえたと思う。

しかしザビエルが死んだ今、旧ザビエル軍の最高責任者は紛れもない自分であり、責任を取らされる算段が高い。

……ザビエルのクソ野郎が！　やるだけやってくたばりやがって！　どうせ死ぬなら責任取ってから死ねや！

確かに自分も下剋上を考えもするが、戦場でやるような馬鹿はしない。そもそもあのレオンハルトに逆らうなどただの自殺行為だ。

ともあれ手柄を立てなければならない。それも圧倒的な戦果の上でだ。負けることはあり得ないし論外だが、ただ勝つだけでは駄目だ。

ゆえに目立つように滅茶苦茶に暴れているのだが、主要な将は見当

たらない。こんなことなら前回の時に女と爺はぶっ殺しておけば良かったと思う。あの時は切羽詰まっていたのでどうしようもなかったような気もするが、
「――コウウ様！」
「あん？　どうし――」
魔物隊長のこちらを呼ぶ声と同時に、魔物隊長の首が飛び、更にこちらにまで攻撃が飛んできた。
それは巨大な大刀だった。
コウウはそれを槍で弾き返すと、再びそれを掴んだ人間が前に駆けて、こちらに大刀を振り下ろしてくる。コウウはその突撃してきた人間に向けて荒い口調の声を飛ばした。
「――またてめぇか！　クソジジイ！」
「征夷大将軍、坂上田村麻呂……！　大将軍コウウ、その首、頂戴致す！」
大柄で褐色の爺の大刀を受け止め、コウウは叫び、
「くたばり損ないの爺が……！　そんなに死にてぇなら今度こそぶっ殺してやらぁ!!」
槍の一撃を見舞った。

大刀と槍がぶつかり合い火花を散らす。
お互いに衝撃を受けて距離を取り合うと、睨み合う間もなく再度の突撃を行う。
……相変わらず凄まじい力じゃ……！
敵は魔物大将軍コウウ。先日にも戦った凄まじい強さを持つ魔物だ。己よりも圧倒的に強い膂力に苦悶の声が漏れる。
だが坂上田村麻呂は、覚悟を伴ってここに来ていた。今回の目的は相手を倒すことよりも時間を稼ぐこと。無理に攻めに行く必要はない。
だが、半端な逃げ腰の覚悟では、それすらも成せないであろうと田村麻呂は見ていた。故に、

……ここを、朕の死に場所とする……！
すなわち、刺し違えてでもここでこの魔物を仕留める。
既に隠居していてもおかしくないどころか、寿命も近い己だ。
ならば仲間のために使うのがよいと思っていた。
……石丸も、今頃は頂きに挑んでおるのであろうな……。
思うのは己の弟子である一人の男のこと。若き頃より天禀の才能を持ち、早々に己を越えてしまった剣聖のことだ。
そんな男が、今は世界の王となり、魔人との戦いに臨んでいる。力を振り絞って戦っている。それは他の者も同じであり、
「おらおらおら！　二対一ですら勝てなかったくせに、サシで敵うはずがねぇだろうが！」
「ぐっ……！」
槍の連撃を何とかギリギリのところで捌きながら思う。皆も、このように死地に挑んでいるのだと。
……全く。
老骨には厳しい相手だ。このような相手と戦わなければならないくらいならさっさと隠居しておいた方が良い余生を過ごせたのであろう。
だが、隠居をしなかったからこそ、この命を使うことが出来るのだ。
人類の趨勢、そして己が認めた男や仲間、部下の為に。この命を使うことに何の躊躇いがあろうか。
そして、確かに眼の前の大将軍は強い。強いが、
「まだまだ……！」
「あぁん⁉　また防御重視か！　いい加減にしやがれ、腰抜け爺が！」
槍を捌き、前に出る。だが、そこでも牽制の攻撃をしつつも防御を行い、後ろに下がる。
この程度であれば、
「朕の弟子の方が、何倍も強いわッ……！」
「……！」
石丸であれば、防御もさせない。凄まじい崩しでもって戦いを終わらせることが出来るだろう。

だが目の前の魔物は、身体能力は高くても、石丸の様な迫力はない。一太刀で相手を黙らせるような力も技術もない。
ならば技術で防げぬ道理はないのだ。強引な突破に関しては、
「武士の棟梁を舐めるでない……！」
「っ、死に損ないが……！」
気合で何とかしてみせる。
自分が連れてきた部隊も、恐慌に陥った兵達を逃がそうと必死に魔物を食い止めている。退けば味方が死んでしまう。後ろにいる者達が死んでしまう。だから、
「退くでないぞ、貴様ら……！」
「御意……！」
良い返事だ。
誰も彼もが中年か、初老の武士達。老い先短い爺だらけだ。皆、戦う必死の表情がそこにある。力も体力も衰えてきたが、それでも踏ん張るのは後ろにいる若い芽を摘ませないためだ。
ここ数十年。自分達は夢を見ることが出来た。ＪＡＰＡＮという危険と隣り合わせの土地で、田村麻呂や同世代に生きる者達は鬼や妖怪、地震によって生きることが精一杯だった。鬼退治や妖怪退治の名手であり、日ノ本一の武士と言われた田村麻呂でも、部下や身内を守れずに苦悩したことがある。
だが、そんな時代において現れたのは藤原石丸という男なのだ。
帝となり、ＪＡＰＡＮを統一し、妖怪すらも従えた益荒男。自分達を率いて戦に明け暮れながらも大陸にも進出し、人類を統一してしまった英雄。
石丸のおかげで、以前よりも格段に平和となった。夢を見せてもらった。そしてこれからも、若い世代が夢を見れる時代が来るだろう。誰もがそう感じていた。
その若い芽を、自分達に夢を見せてくれた英雄のためなら、何だって出来る。
自分達はもう十分夢を見せて貰った。英雄が作ったその道に、後ろから続いた。

ならばここからは、自分達が道を付ける番だ。
「先には行かせぬ……！」
「老骨に道を譲るがよい……！」
後ろの兵士達を庇うように、部下達が次々に魔物の前に立ち塞がる。魔物を数体殺したところで頭をかち割られて死ぬ者や、魔法の射線に入って死ぬ者もいる。
だが誰もが望んでやっていることだ。嫌々やっている者は誰一人としていない。
武士とは、主家に仕え、御恩と奉公というもので成り立っている。自分達は多くの御恩を石丸から賜った。
「今こそ、御恩を返す時……！」
今こそ、今までの分、全ての奉公をする時であると。
田村麻呂は敵を道連れにすることを決断した。

魔人レオンハルトと藤原石丸の戦い。
人類軍の部隊のど真ん中で行われた戦いは、その場を自然に円形としていた。
巻き込まれるのを避けた者達が距離を置いたためである。
だがそれでも、達人同士、総大将同士の人知を超えた戦いは、その圧力をビリビリと周囲に放っていた。
人々は何が起こっているか理解出来ない。
だが、石丸は理解しながらも高い壁を幻視していた。
……凄まじい圧力だな……！
戦いはレオンハルトの〝待ち〟から始まった。
その場から全く動こうとしないレオンハルトに対し、石丸は素早く距離を詰めようとした。互いに遠距離へと斬撃を届かせることは出来ても、距離を詰めることに越したことはない。剣本来の間合いであれば、それだけ戦いやすいのだ。
しかしその距離が7メートルほどになった時点で、石丸は足を止めた。

「――どうした、来ないのか？」
「……」
そう問われるが、意地が悪いと言わざるを得ないだろう。
レオンハルトはその長い剣を左の腰の部分に携え、その刃だけを空間に収納していた。
それはまるで居合の構え。身の丈を越える刃の長さを利用した結界だ。
即ち――間合いに踏み込んだ瞬間に斬られるということ。
……さて、どのように仕掛けるか……。
並の剣士であれば強引に力技でも突破出来る。
だが眼の前にいるのは伝説にして最強の剣士。生半可な仕掛けでは即座に斬って捨てられる。
遠距離からの疾風から距離を詰めるか、紅蓮による突破か。そのどちらかを取るべきかと思考をしていると、不意にレオンハルトが息を入れ、
「……やはり、お前の剣は俺に似ているな。ＪＡＰＡＮのものが基礎に見えるが、その応用の多くに俺の剣の色が見える」
「……何度も夢見たからな」
何度も、本を読んで参考にしたのだ。似ないはずはない。技の着想は眼の前の魔人から得たものであるし、根っこの部分にはやはり憧れがある。
「だが、だからこそ――お前は俺に及ばない」
「……」
言われた言葉に、理屈では納得する。
仮に同じ流派、同程度の技量であれば残るのは単純な身体能力と読み合い、運が勝負を決めることとなる。
だが身体能力では負けているし、そもそも同程度の技量かどうかは怪しい。読み合いで勝ち続けるのも無理があるし、運に任せたくはない。
するとどうなるか、それがレオンハルトの言う意味だろう。魔人は剣を構えたまま目を細め、

「剣だけではない。あらゆる武術に於いて最強の戦法は、先に行動することだ」
　それは、
「先手必勝。相手が防御や回避を行うより先に攻撃出来れば、あらゆる技は意味を成さない」
　人間が魔人に勝てない理由の一つだと、レオンハルトは言う。石丸は表情を変えないまま、
「それが俺とお前にも当て嵌まると？」
「ふっ、まあお前であれば防御や回避くらいはギリギリのところで可能だろう」
　だが、と鼻で笑っていたのを止め、
「身体能力や反応速度は圧倒的にこちらが上。故にお前は、俺から〝先の先〟を取ることが出来ない」
「……ああ、そうかもしれんな」
　先の先。つまり、自分から仕掛けることだ。
　相手が何かをしようとするよりも速く、瞬時に先制攻撃を加えることが出来れば、その時点で勝利はほぼ確定であるし、勝てずとも、その後の仕合は有利となる。
　事実、石丸も多くの勝負を先の先による仕掛けで勝ってきた。それは身体能力が圧倒的に上であったから。それに加えて剣の確かな技術があったからだ。そのどちらも上の相手に、先の先を取ることは出来ない。となれば、
「となればお前は、俺相手に〝後の先〟を取るしかない。俺の使徒がやるように、〝先々の先〟を取る方法もあるが、あれは起こりを見定める奇跡の様な読み、もしくは相手の動きを完璧に捉える反応速度がなければならない。お前には無理な方法だ」
「……無理とは限らんだろう？」
　確かに後の先――相手の動きを捉えて、カウンターのようにして攻める手が一番現実的な戦い方。実際にこの手と、後の先の極みともいえる〝流水〟を用いることで、あのザビエルには勝てた。
　先々の先は相手の攻撃の起りを見て、それを出掛かりで潰すことだ

が、こっちは遥かに難しい。防御の為に使う程度であれば僅かに遅れはしても可能だが、攻撃に転じるのならばそれこそ、瞬間。刹那の時にそれを判断して攻撃しなければならない。石丸は、０から１００の力を一気に出すような身体技法も体得しているが、それを使っても同程度の身体能力を持つ相手ならともかく、遥か上の相手には通用しない。実力以上に速くなるわけではないのだ。

それをやってのけるというレオンハルトの使徒にも興味が湧くが、とはいえ、

「それに、そう思うのならば何故お前は攻めずに居合の構えを取っているのだ」

矛盾している、と石丸は指摘する。

居合は基本的には待ちの構え。奇襲のように先制攻撃に使う場合や、剣を鞘に滑らせて速度を増す、という方法もあるとは聞くが、若い時はともかく、帝になって帝ソードを使うようになってからは鞘を持ったことがないのであまり解らない。そう考えると向こうだけ出来るのはずるいようであるが、ともあれ居合は基本的には後の先か先々の先。先に攻撃出来るというならばそれをすればいいのだ。居合でそれを行ってくる可能性もあるが、それをしないということは、

「簡単なことだ」

その理由を、レオンハルトはこちらを見下ろしながら口にした。

「俺が全力で攻めれば――――お前は直ぐに死ぬ」

「っ！」

「だから、俺は全ての行動を、お前よりも一瞬遅く行うことにする」

やはり、と思う。増した重圧に耐えつつ相手を見据える。

……要は、舐めているな。

だがそれほどの実力差があるのは解っている。単純な力の差だ。

それを言って分からせようと、なおもレオンハルトは続けた。こちらを自然に下に見ながら、

「お前が使っている俺の技だが……それらは全て俺の必殺技ですらない」

「……ほう？　ならその必殺技とは――」

レオンハルトが言う。それとは違う言い方、答えではあるが、
「……俺が先の先の極みであるそれを放てば、俺より遅い者や、少し速い程度の者は全員俺の初手で死ぬ。だからこそ、俺はその技を早々に封印した」
「それは……」
それは強者故の傲慢であり、驕りであり、孤独でもある。
だが事実、勝負にならなくなるのだろう。この世界最強の剣士は、勝負を望んでいる。その赤い瞳がそう物語っていた。
「俺の最速の技は、よく例えに挙がる風とか雷では足りん。――光だ」
だから、とレオンハルトは言う。
「たとえ後から俺に攻撃しようが、奇襲を仕掛けようが問答無用で先制して斬る技。普段は使わないが……たまに出てくる、勝負の邪魔をする者。お前のような無粋な馬鹿を斬るためのものだ。――月餅」
「――！　月餅！」
その言葉が紡がれた瞬間、レオンハルトの背後に鎌を振りかぶった月餅が音も気配も無く現れていた。
月餅が使う陰陽だか不思議な術か、何かは解らない。だが、完全なる不意打ちであり、未だレオンハルトは正面を向いたままだ。
「――ッ！　気づかれたか！　だがもう遅い……！」
その鎌の刃先が、レオンハルトの首に迫った。
だがレオンハルトはこちらを向いたまま、
「遅いのは貴様だ――」
瞬間、石丸の目からレオンハルトは、動いたようには見えなかった。
気づいた時には――もう終わっていた。

それは刹那。一瞬の時。
月餅の鎌が首に触れようという時になり、ようやく放った一撃。
風も雷も、何もかもを置いていく光の如き一閃。
第三階級悪魔の月餅も、同じ才能を持つ藤原石丸ですらそれには気づけない。

月餅が危険を感じ取る前に、石丸が危険を感じ取り、声を上げた時には既に遅かった。
その神業は未だ無敗。誰にも破られたこともなく、勝負にならないとしてレオンハルト自身が封印した必殺の一刀。
格上や、確実に殺さなくてはならない相手にのみ使うと決めている切り札の一枚。
瞬きをする間に相手を何度も殺すことの出来る秘奥であるそれは、レオンハルトの剣の理――その一端を解放する。
かくしてレオンハルトの眼光が紅く輝いた瞬間、〝それ〟は放たれた。
「――〝瞬光〟」
「――」
一瞬の光。遠くからは稲光が走ったとしか思えないその剣は事実、速すぎて遠くからも光の線が見えただろう。
それが剣の軌跡だと解る者は片手の指で足りるほどしかいないだろう。剣を振るったことで起きた大気の擦過であり、莫大な力の放出でもあるそれだが、しかし確かにその剣は――
「何、が――」
月餅を、容赦なく両断していた。

王の器

レオンハルトは、その剣で仕事を成したと思った。
視界に映る月餅の身体を、確かに両断した上、振り切った剣から感じる手応えも、確かに〝殺した〟と判断を出来る。
しかしだからこそ、起きた結果に眉を顰めざるを得なかった。
「おおおおおッ!!」
「……ふん」
それを言うより速く、石丸が一瞬の加速で肉薄してくる。
振り下される剣を剣で防ぎ、鍔迫り合いのような形になる。近く、距離で顔を合わせた石丸が血相を変えた表情で、
「一生の不覚……！　腹心を眼の前でみすみす死なせてしまうとは……！」
憤り、それも、自分の情けなさに対する感情を間近で聞いて思わず息を入れてしまう。剣に力を込め、
「……仲間思いなのはいいが、よく見ろ」
「何!?　――ぐっ……！」
石丸を強引に吹き飛ばし、月餅の近くにまで移動させてやる。そこには死体ではなく、
「っ、はぁ……はぁ……！」
「月餅!?　生きていたか！」
「……なん、とか……」
地面に手を付き、胸を強く抑えて蹲る月餅がいた。石丸が驚愕し、生きていることを喜ぶ中、レオンハルトは剣に付いた血を払い、
「確かに斬り捨てたはずだが――さすがは悪魔だ。魂を複数持っていたか？」
「っ……！」
月餅が強くこちらを睨む。その言葉に石丸が眉間に皺を寄せ、
「……どういうことだ？」
「そのままの意味だ。そいつの正体は悪魔。それもかなりの地位にある第三階級の悪魔だ」

「！　き、さま……！　何故それを……!?」
「……さてな。生憎俺は、ナイチサ様に命じられただけだ。藤原家討伐と、悪魔月餅の討滅をな」
　問いかけの意味は分かる。だが、今回のこれはあくまでも今回の戦争は魔王ナイチサに命じられてのこと。石丸に関しては自分の趣味でしかない。悪魔の知識も、ナイチサに教えてもらったのは事実。それ以上を言う気はない。
　月餅の問いに答え、目的を告げてやったところでレオンハルトは、だが、と、
「片方の用事はやがて終わる。即死を免れたようだが、魂の乖離は一時的に防げても、その身体では直に死ぬだろう。仮にこの場を切り抜けて身体を治癒したところで失った魂――生命力は戻らない。もって一年程度の命。まず助からん」
　ゆえに仕事はほぼ終わりを迎える。
　その前にレオンハルトは石丸に剣を突き付けながら問いかけた。勝負の再開の前に、
「そいつはお前を騙して藤原家の元に潜伏し、魂を回収するために今日まで暗躍し続けてきた。謂わば戦いの元凶だ。そして、俺達の戦いを邪魔した無粋な奴でもある」
　だから、
「そいつを見捨てろ。そして、改めて戦いを始めるぞ。俺とお前の間に、〝それ〟は必要ない」

　致命傷を浴びて地面に手を付いた月餅は、対峙するレオンハルトの問いを聞いていた。
　石丸に明かした真実。それを聞いて、石丸は黙りこくっている。やはり、
　……もはやこれまでか。
　魔人を倒そうと隙を伺い、不意を打った結果がこのザマだ。魔人の強さは正しく理解していたつもりだし、石丸の成長の為、とも思って

いたが、
「欲張りは、良くないな……」
敵は強大であった。高位の悪魔である自分がたった一手で致命傷にまで追い込まれるほどに。
そして、魂を集めるためとはいえ地上でやり過ぎた。
石丸に仕え、しかし主君も周りの仲間も皆騙してきた。今回の戦いも、元はと言えば自分が欲を出したせいである。自分のせいで魔人を敵に回し多くの人間を死なせ、このような危機に陥っている。正に自業自得。人を弄ぶ悪魔にはお似合いの結末だと思う。
一つ、心残りがあるとすれば、
「……月餅を見捨てろ、か……」
彼の顔がこちらを向く。
藤原石丸。
己が仕え、人ながら主と認めた男。
彼がこの後、どうなるか。その結末くらいのものだ。
……何を馬鹿な。魔人との力の差は歴然。勝てるはずがない。
そう。客観的に考えれば、石丸が魔人レオンハルト相手に勝てるはずがない。
なのに、何か起こしてくれそうなその佇まい。
彼ならばと、そう考えている自分に可笑しなものを感じてしまう。
だが数日前、同じ様に戦えば〝負ける〟と見ていた魔人ザビエルを、死闘の末に石丸は倒してしまった。その奇跡の感動は未だ胸に残っている。
だからこそ、石丸を見届けたい。しかし、邪魔となるなら、
「……石丸様……」
月餅はその覚悟を決める。
一度邪魔をした身。これ以上、お荷物になるくらいならば、
「……先程の話は、全て本当です。儂は悪魔――」
「――知っていた」
「……は」
不意に被せるような石丸の言葉が耳に入り、思考が止まる。

聞き間違いじゃないだろうか、と確認を取る。
「い、今なんと……？」
「だから知っておると言ったのだ。悪魔とは思わなかったが、人ではないだろうとな」
人外の存在だとは思っていたと、石丸はあっけからんと言う。
「いや、単純に人の気配が感じられないような気がしたのと、ミッチーがそうではないかと色々と裏で調べていたようなのだがな。やはり人ではないらしいと、そのような結果になったのだ」
「は……」
二の句が出てこない。
だが、主の言葉を疑うのは良くないが、とても信じられない。もし本当であるならば、
「あ、あり得ませぬ……！　もしそうであるなら、何故に人外の者を側近にするという暴挙を……！」
何故だ、と問う。
「何故、藤原家の……御身の重要なものを儂に任せるなど……！　能力があったとしても、迎え入れることに危険があるとは考えなかったのですか……！」
何故自分は、そこまで重用されたのか。
生まれた疑問に対し、石丸は即座に答えた。
「信頼出来そうだったからだ」
「っ、しかし、儂は人外の悪魔で――」
「人外だから何だと言う。黒部にもそういうつもりか？　あれも妖怪であるぞ」
言われた言葉にぐっと怯み、
「……黒部殿は石丸様と戦い、正面から信頼を勝ち取りました。儂のような得体の知れない輩とは違い――」
「同じだ、馬鹿者め」
「――――」
即座に斬って捨てられる。
よいか？　と呆れたような様子で、石丸はこちらに近づいてきた。

そして、顔の翁の面を掴むと、
「っ、何を……！」
「……ほう。これがお前の顔か」
それを剥がし、顔を露わにされる。
人ではない化け物の顔。複眼や触手が生えており、悪魔の中でも醜悪で恐ろしい顔つきだ。
それを見て、石丸は笑った。
「――ははは、ようやくお前の顔を見ることが出来た」
「……！　な、何故……」
自分のことが恐ろしくないのか。恐れずとも、気持ち悪いと思わないのか。
だが石丸は、
「何故？　いや、何十年と付いてきてくれた重鎮の顔も知らないというのは、些か寂しいだろう。うむ、中々個性的でいいではないか」
「石丸、様……」
ああ、と。月餅は思い出した。
こういう人であったと。
どんな相手にも臆せず、十人中十人が恐れるような化け物相手でも気さくに接する。どんな状況であろうとそれを楽しみ、勝ちきった後に、戦った相手を仲間にしてしまう。
領民相手にも対等に接することを喜び、どんなに偉い相手でも身分が低い相手であっても同じ土俵に立って話をする。老若男女、種族を問わない人徳。王の器。そんな石丸だからこそ、月餅は――
「……儂は、儂の目的のために、石丸様に接近したのですぞ。そのために、多くの人を犠牲にして……」
だからこそ、自分が許せないのだと。
そう言ったつもりだった。
しかし石丸は首をひねり、
「？　別に構わんだろう。誰にだって目的はある。それを言ってしまえば、俺とて此奴との戦いに望み、今なお多くの人に迷惑を掛けてる

と言える」
「……」
レオンハルトを指して言う。それに対し、魔人は静観を貫いている。まるで石丸の答えを待つかのように。
石丸は周囲、多くの人間が戦う現状を見ながら、
「俺は帝だが、多くの人に支えられているし、同時に導く義務があろう。俺が夢を見せ、俺の夢を叶え、他の多くの人間の夢を叶えるために戦う。それはお前とて例外ではない」
「！」
その言葉は、石丸の王としての言葉。
ＪＡＰＡＮの盟主である帝。人類を統一した王の言葉。
だが同時に、石丸という男の胸に秘めた言葉だ。
だから、石丸は笑って言う。不敵に笑ってみせ、
「俺には、叶えたい夢がある。やりこともたくさんある。他の者達だって皆そうだろう。やりたいことや、叶えたいもの、守りたいものが多くあるはずだ。ならば――」
言う。それは他者への気遣いではない石丸の在り方だ。
「お前らのやりたいことを俺に教えろ。俺がそれを叶えてやる。どうしようもない敵がいるなら倒してやる。そうでなくても手伝ってやる。夢を見ることすら厳しい世の中だと言うならば、それを変えてやる」
だから、と。石丸は月餅を見た。
他の多くの者達と同じ様に手を差し伸べ、
「俺にはお前達の力が必要だ。その夢を一緒に叶えるために、俺に付いてこい」
そして支えてくれと。石丸は己の想いを言い切った。

月餅は、その言葉を深く飲み込んだ。
……儂の夢、か……。
考えたこともないことだ。魂の集収は悪魔としての使命。階級を

上げることを目的としていたはずだが、それも義務感に近いものであって〝夢〟とは程遠い。
だが、
「……付いていきましょう」
上司には申し訳ないが、これよりは自分は、真の意味で石丸様のために仕える。
今更遅いかもしれないが、
「儂の運命、石丸様にお任せ致します……！」
「――応！　任せておけ！」
そうして正面を向いた石丸の後ろ姿を見て思ったのだ。
今は、主君を支えることこそ、我が望み。
その先にある光景を見たい。それこそが、自分の夢だと。
それが伝わったかは解らない。だがきっと伝わってるのだろうと、月餅は石丸を見て確信した。
「……なるほどな」
正面、魔人が小さく呟いた。
石丸にその鋭い視線を向け、
「お前は〝夢を叶える〟と、そう言ったな？」
「ああ。だから、月餅はやらせん。こいつは俺に必要な男だ」
剣を構え、立ち塞がる石丸にレオンハルトが目を細めた。
依然として厳しい状況であるのは変わらない。強引に突破されて殺される可能性だってある。先程の技は、石丸であっても防ぎきれないだろう。使わないと言っているのが救いだが、気が変わらないとも限らないのだ。
「……お前のその信念とも言うべき強い意志。そしてその願いは、俺としても理解出来るところだ」
だからこそ、とレオンハルトは剣を構える。
「その在り方自体は認めてやってもいい。だが――」
レオンハルトは揺るぎない意志を秘めた赤い瞳を向けて言う。
「俺の目的と重なった時点で、その夢を叶えることは出来ん」
「……ああ、そうなのだろうな」

石丸が応じた。理解を秘めた瞳で言う。不思議と月餅にも理解出来た。それは、
……相容れない、ということか。
詳しい事情や、かの魔人が何を目的としているか、その行動原理が何かは解らない。
だが、石丸と近い部分で生きているのだろう。そして、だからこそ認めるわけにはいかないのだろう。
ゆえに二人が戦うのは必然。極めて自然で、当然の帰結であった。
「来い――」
「行くぞ――！」
二人の言葉が終わるよりも速く、石丸は行った。
レオンハルトの正面、常人では理解が及ばない仕掛けを以って、
「……！」
二人の剣戟は始まった。

剣による線が幾重にも見えていた。
その一刀一刀が必殺の一撃。並の人間は疎か、鬼や魔物ですら両断せしめる。人間としては脅威の力と技。それが石丸の剣であった。
だがそのどれもを、レオンハルトは難なく捌いていく。
一つ一つ丁寧に、まるで手ほどきをするかの如く剣での防御を行う。自然体の構えは、好きに打ってこいと言外に示しており、更には最初に宣言したように、全ての行動を石丸より一瞬遅れて行っていた。
しかしそれでもなお、レオンハルトの剣は石丸の剣に追いついてくる。
石丸が最速で放った剣も、遅れて始動した剣が余裕を保たせた上で弾かれる。リーチの上でもレオンハルトのほうが上回っており、その分間合いを詰めることも石丸は行うが、それすらも卓越した剣技によって防御された。
「……どうした？　その程度か」

「……！」
まだまだ、と石丸は行動で答えた。
レオンハルトの剣の反撃、それを読み切ることに成功すると半歩距離を制することに成功した。下段からの切り上げに対し、紙一重でそれを回避する。
そして回避した瞬間。反撃に出した剣が引き戻される前に石丸は技を放つ。
「〝紅蓮焔〟……ッ！」
同時に斬撃を繰り出す大技。
一度に四刀という限界を越えた剣技だ。回避は不可能。防御も不可能。無敵結界の存在はあっても、衝撃自体は食らうという。であれば全くの無意味ではない。
だが、レオンハルトは反撃の剣を引き戻すと同時に、回転するように剣を横に一閃。たったそれだけの大振りな技は、しかし石丸の剣を全て弾き返す。
「その程度なら夢を見ることも、勝つことも出来んぞ……！」
「っ……！」
懐への突きをギリギリのところで逸す。そのまま続けて放たれる攻撃は、防御のための反撃。こちらよりも一瞬遅く放ったが、追い抜いた斬撃がそのまま攻撃に、〝先々の先〟のようになり、攻撃の始点、出掛かりで潰される。
結果、相手の剣に押し込まれてしまいながら、石丸は耐え忍ぶ。
……今は、〝見〟の時間だ……！
見ることも、また戦いである。相手の太刀筋や動きの癖。技などを完璧に見てしまえば、勝負は容易となる。必然的に読み合いにも勝てるため、戦う上ではかなり重要なことだ。
特に相手は魔人。〝流水〟のような相手の攻撃を跳ね返す技には必須であり、これが出来なくては勝ちの可能性すらない。力や技で負けているなら、それ以外の部分で補わなくては勝てないのだ。だからこそ、
「……手加減したこと、後悔させてやるぞ――」

「……！」
石丸は、それを成功させる。
レオンハルトの剣に対し、静かに、流れる水の如き返し技。
「〝流水〟――」
石丸はその技を用いて、レオンハルトの剣の一刀を跳ね返した。
成功させたはずのそれ。感覚はそう言っている。
だが、レオンハルトは無傷だった。
「防がれた……？」
手応えはあったが、実際には斬られておらず、レオンハルトはそこにいた。こちらを見据え、
「流石に上手い。――が、その技は誰が見せてやったか忘れたか？」

レオンハルトは言う。
「俺が使う技だ。当然、その対処法、返し技も知っている」
それは過去に自分が作った技。そのどれもが、伝説となって伝わっているという。
石丸が〝流水〟と呼ぶその技も、かつてレオンハルトが仮面の男として石丸達の前に表れ、最後の打ち合いの際に放った技なのだ。
やはり、と石丸が、
「――あの仮面の男はお前か！　随分と変わった趣味だな！」
「……俺の趣味ではない……！」
気持ち強めに、石丸の剣を弾き返す。あれはキャロルやペールから、姿を隠すならこれが似合うと渡されたものだ。
終わってから恥ずかしかった思い出であり、それを蒸し返されて苛立つが、問題はそこではない。勝負の中に於いての話だ。
「俺の技を使えるのであれば、おそらく才能としては互角だろう」
しかしレオンハルトは剣を袈裟に振りながら、石丸の剣を経験とそこから来る読みによって返す。その意味は、
「だが俺は、お前が生まれる千年以上前から剣を積み重ねてきた。戦いの経験に於いても、俺を越える奴はそういない」

「だから勝てないと？　それは解らんだろう！」
　いいや、解る。何故なら、
「お前の剣の道。そこは俺がかつて通った道でもある。そこから幾つもの壁を越えて、俺は今の位置まで剣を極めた」
　無論、極めきったとは思わない。
　それは己の可能性を狭めてしまう。未だ見ぬ極限。未知の理が眠っているかもしれない。人は、やれば何だって出来るのだ。
　そして事実として石丸の遙か先の場所に、自分は立っているのだと。
「俺達の様な狂人にとって、死地は成長の機会に他ならない。お前もザビエルとの戦いで強くなったのだろう」
「……」
　以前見た実力よりも遥かに強くなっている。剣を合わせるとそれはより鮮明に感じられる。その差もはっきりと解る。故に、
「だが、まだ足りん」
　――俺を倒すには足りない。
「お前がこの戦いでどれだけ成長出来るかは知らないが……壁を一つ二つ越えたところで、俺はそこにはいない」
　己がいる場所は遙か先だ。
　それを見せつけるように、レオンハルトは剣を振る。
「ならば、十でも二十でも越えてやろう……！」
　しかし石丸は折れない。
「お前を越える……！」
　迷いなく越えてみせると断言する石丸に、口の端を僅かに上げて、
「よく言った。ならば、ここからは少し気張れ」
　剣を握る力を強め、レオンハルトは闘気を溢れ出させる。
　思うのは先程の石丸の言葉。
　……皆の夢を叶える、か。
　まさか似たようなことを考えていようとはな、とレオンハルトは内心で笑みを作る。やはり石丸とは馬が合うのかもしれない。奴の考えは自分としても大いに賛同出来るものだ。

だが似てはいても、己のやり方とは根本的な部分で違う。
自分はそのためなら何でもやる覚悟がある。必要とあらばこの手を罪無き者の血に染めても厭わない。
その上で、大切な者や救える者は出来る限り救ってみせる。
だが、想うだけでは夢は叶わない。
叶えるには〝勝ち〟続けるしかない。
そのための〝力〟だ。暴力だけじゃない。あらゆることに対応するための能力や力。
その中で最も重要なのが己自身の強さであるのだと、レオンハルトは知っていたし、何よりも立場の部分で自分達は相容れない。
レオンハルトは魔人として、そして何よりも大切な者達のためにも負けるわけにはいかないし、彼らを殺さなくてはならない。
その手向けとして、出来る限りの力を見せて殺してやる。それこそが敵の戦士に対する礼儀であると、レオンハルトは更に力を出すことを決めた。
「――少し、〝本気〟を見せてやる」

藤原石丸は、視界であるものを確認した。それは、
……剣の光が強くなったか!?
魔人レオンハルトの持つ魔剣。紅くなったその煌めきが更に強く輝いている。
それだけではなく、レオンハルトの闘気と混ざり合って物理的な圧力となり、周囲の空気が歪んで見えてくる。
レオンハルトは魔剣を大上段に構えると、身体を捻り、力を溜めた上で腕を振り下ろした。
「〝震天〟……!」
「……!」
瞬間、石丸は本能に従い受け止めることをやめ、地面に倒れた月餅を拾って右側に駆けた。
レオンハルトの魔剣が凄まじい勢いで振り下ろされ、地面を叩く。

その時、戦場にいる誰もがある現象を感じた。
「……!?」
石丸達がいる場において起きた現象は、レオンハルトがその手に持つ魔剣で大地を百メートルほど斬り裂いたこと。
だが戦場の大部分では、レオンハルトの必殺技の副次的な現象として彼らがいる場所を中心とした震動が発生した。
それは、
「地震か……!?」
紛れもない――〝地震〟であった。
それを機に戦場の中心で行われる戦いは、より一層激化した。

キャロルＶＳ源頼光

戦場で起きた地震。僅かな揺れではあるが生じた現象に、多くの者が戸惑った。
それを最も遠くで感じていたのは、高台のようになった崖。その上にいる者達だ。即席用のテーブルと椅子に座り、持ってきた弁当に舌鼓を打ちながら微弱な震動に、おお、と声を上げたのはガルティアだ。
「またレオンハルトが滅茶苦茶やってるな」
「相手がそれほどの実力を持っているのだろう」
「……凄まじい力ですね」
と、分析をするガルティアとケッセルリンクに、後ろから感想を述べたのはエルシールだ。不慣れな手付きで紅茶を淹れながらも内心で驚く。ケッセルリンクがお礼を言いつつ、
「レオンハルトがここまで力を出すのは珍しい。人間相手ともなると初めてのことだろう。相手の強さが伺えるな」
「……確かに、思ったよりも時間がかかっていますね」
パレロアが戦場を見ながら言う。視線の先では、魔物兵に攻め立てられる人間の姿が広がっている。
だが、一部では攻勢が遅れている場所も見受けられるのだ。故に、おそらくはその場所で人類軍の主力が奮闘しているのだろうと推測出来る。
ここまでくれば撤退しようとしていることは誰でも分かるのだ。魔物兵の攻めも厳しくなるが、逃げようとする勢いと、食い止めようとする殿の意地も中々のものである。
それを感じながらも、シャロンはふとフラットな表情のまま、
「……ケッセルリンク様やガルティア様から見て、この状況はどのように見えているんですか？」
「ん、そうだな……よくやってんじゃねえか？」
問いかけに対し、食事を続けながらも曖昧に答えるガルティア。だが続けて、
「まぁ、すぐ崩れるだろうけどな」

「……崩れる、ですか？」
　ああ、と頷くガルティア。少し冷たい物言いだが、戦士としての見方で言う。最近になって戦闘に優れた才能を垣間見せているエルシールが続けて疑問するように、
「……今の所は個々の力もあって持ち堪えているようですが……」
「そりゃそうだろ」
　と、ガルティアは完食した皿を置いて次の皿に手を伸ばしながら同意しつつ言う。
「人間ってのは殆どはそれほど強くないけどな、個々の実力だけで言えば魔物隊長や将軍。使徒や魔人に迫る奴だっている。ましてや人間の戦士を纏めた軍だ。数人くらいはいるだろ」
　だが、それほど甘くないと。人間と魔人、両方の視点に立ってガルティアは続けた。
「人間が魔軍と戦うなら最低限、魔人と使徒を足止め出来るってのが、勝負が成り立つ条件だ。魔物将軍を倒せるくらいじゃ話にならねぇ。魔物兵の方が殆どの人間より強い以上、普通に戦っても勝てないからな」
「……レオンハルトや始祖様を押さえた。だがそれは、逆も然り。殿として敵の猛攻を受け止めるための将は軒並み足止めされてしまっている」
　その説明を引き継ぐようにケッセルリンクも言う。
「何も特別なことはない。地力の差で、普通に負けている」
「今はギリギリのとこで踏ん張ってるだけだな。人間の将が負けたら一気に崩れる。このまま長引いても普通に負けだな」
「なら、勝つには……」
　パレロアの言葉に、ガルティアは肩を竦めて、
「方法は簡単だけどな。――レオンハルトに勝てばいい」
　時が一瞬止まる。場が静まり返り、だがやがて半目のエルシールが、
「……それ、簡単な方法ですか？」
「もしくは、魔物兵を殲滅、皆殺しにすれば勝てますね。簡単です」

「……そ、そうね……」
「……つまり方法はないと……」
笑顔で怖いことをさらりと言うシャロンに、困ったような苦笑をするパレロアと、味方の事ながら軽くげんなりしてしまうエルシール。ガルティアも軽い笑みを伴った考えるような素振りで、
「んー……魔物兵を全滅させるほうが簡単かもなぁ……あいつ、最近分身したり剣からビームみたいなの出すし……」
「……常識って何でしたっけ……？」
「〝常識に縛られなければ人は何でも出来る〟。レオンハルト様の言葉です。あの方と接する時は、何が起こっても不思議ではないと、自然に受け入れてしまえば面白く感じますよ？」
「シャロンは何をやられても驚きそうにないわね……」
「ふふふ、パレロアったら。私だってちゃんと驚きますよ」
笑みのままそう言うシャロンだが、誰もが乾いた笑いや苦笑、ケッセルリンクすら真顔になるのみで同意も否定もしない。
話を変えようとするようにケッセルリンクが、
「……そろそろ状況も動くだろう。私達もそれを見届けたら、夜までには帰路につかねばな」
「ああ、そうだな」
「畏まりました」
ガルティアと、三体の使徒の同意が続く。戦場の光景は、終盤の入り口に差し掛かろうとしていた。

源頼光との戦闘に入ったキャロルは、地面からの震動に身を震わせた。
相手が眉を顰めて叫ぶように言う。予想される言葉に、キャロルは否定するように口を動かした。
「地震か……！」
「いいえ、レオンハルト様ですわ！」
体捌きで距離を詰めて、銃を相手の顔に向けて発射。首を捻るよう

にして回避した敵に、もう片方の回転式拳銃を向ける。
脚が動き、相手が腕を抑えようとしてくる。射線に入らないように、自分で動きながらも相手の方を押さえる動きだ。この距離では相手も槍は使えないが、中途半端に距離が開けば銃撃を至近距離で食らってしまう。そうなれば回避も防御も難しい。
だがこちらとしては一発当てればほぼ勝ち。人間は脆い。銃弾一発で簡単に死ぬのだ。肌や鱗、爪や筋肉、生まれ持った特性などで当たってもダメージがあまり入らなかったりする者も多い魔物界とは違う。そのためのぷちハニー弾だが、人間相手では過剰だ。使わずとも勝てるし、この間の大盤振る舞いと、飛行魔物兵に配った分で備蓄も少ない。ゆえに節約していこう。
……わたくし、これでも経済的に強者ですのよ……！
商会の会長もやってるし、必要はないがお金は沢山持っている。レオンハルト様の為になるので良いことではあるのだが、金を持っているからと無駄な浪費をするのは美しくない。完璧な使徒ならば戦術を駆使して完璧に勝つ。そして、
「さっさと仕事を終わらせて、レオンハルト様に褒めてもらいますのよ！」
「勝つのはわしで、石丸様に褒めてもらうのもわしだッ！」
右手の刀を横一文字に振られる。それを後ろへのスライドで躱すと、
「わたくしのダンスに付き合って貰いますわ！」
「舞踊は嫌いじゃ……！」
そう言いながらも、相手はそれに付き合ってきた。付き合わざるを得ないとも言う。
右へのターンと銃口を向ける動きを取る。相手の動きは左からの銃口を避けるために右に回って距離を詰めてきた。銃口から光が連続し、しかし外れる。
……避けるのはお上手ですわね！
だが、とキャロルは近くにいる相手に左からの後ろ回し蹴りを行った。それ自体は何でも無い普通の回し蹴り。防御は可能だろう。

しかしこれは攻撃のための崩しでしかない。右脚の回し蹴りを相手が防御し、しかし力によって僅かに跳ね飛ばされる。こちらの身が正面を向くタイミングで両手で照準を合わせ、
「――！」
両手の引き金を引く。そして敵は、
「鬱陶しい得物を持ちおって！」
二発を刀で弾き、三発目が来る前に左に身を回した。しかし自分の方も左に動いた。
「ギアを上げますわよ……！」
速度を上げて、ステップを踏んだ。
左の回転式拳銃を向けようとし、敵の刀に逸らされる。だが、右手の銃を向けて発砲。相手は屈んで躱す。至近距離の相手の刀が来る前にタックルで相手を吹き飛ばし、
「足元がお留守ですわ！」
「っ、危な――」
また少し距離が空いた相手の足元に右手で二発。その間に再び距離を詰め、
「当たったら死ぬだろうが……！」
起き上がりつつの一閃をかがんで潜り抜ける。お互いが背で向き合い、
「ええ、ご安心を。殺すつもりですの」
「わしは死なん！　貴様が死ね！」
右手を後ろに向けた銃の発砲は、相手の肘を押す動きで外れた。だが、これは得意な距離と状況だ。故に、キャロルは内心の喜びを表情に出しながら、
「――どこまで躱せるか、見ものですわね！」
「……っ！」
至近でのスライドとターンの応酬。そして銃撃の連射が始まった。
厄介な、と頼光は敵の動きに意識を集中させた。

……やり難い……！

相手の回るような動きと、射線を向けてくる動きが中々に対応が難しい。

使徒のくせに、人間のような技を使うのだ。ムカつくが、そこには確かな反復練習の名残が見える。コンビネーションが厄介なのだ。

敵の武器は両手の銃という即死武器。相手の銃口から放たれる鉄の弾は回避も防御も出来なくはないが難しい。両の射線に入るのは愚策だ。

それだけなら懐に入って斬り捨ててしまえば終わりのはずだが、相手はその銃を近接武器の様にも使ってくる。その際の足技も中々に癖が悪くていやらしい。防御も回避も難しくないが、その後の銃の反撃がセットだと、途端に迂闊なことが出来ずに攻勢に回るのが難しくなる。

総じて隙が少ない。左手の銃は隙があるがその隙も右手の銃や、相手の動きによって潰されるし、極僅かなものだ。

後、微妙に剣術のような動きもある。それもあって焦点がずらされるのだ。緩急があるというのか。

とはいえ手をこまねいているわけにはいかない。体力勝負になればこちらが不利であるし、長引くと連れてきた部下も徐々に減っていく。撤退までは後少しかもしれないが、それでも相手が追い付いてくるのを止めることは必要だ。

……石丸様……待っていてください……！

先程の使徒の言葉。先程の地震が魔人によるものだと聞いて、頼光の内心は穏やかではなかった。

それほどの相手。信じてはいるが、先日の疲労もある。今度ばかりはもしかしたら、という不安が無いと言えば嘘になる。出来れば今直ぐ加勢に行きたいが、

……まずは此奴を殺す……！

部下や息子を殺された。許すわけにはいかない。だが、普通にやっても厳しい。

「そろそろ風穴を開けて差し上げますわ……！」

「っ……嫌に決まっておろう！」
言いながら敵の動きを捌いた。
回るような動きで追走し、発砲と回避をそれぞれ行う。相手の動きは横にずれるようなスライドと、回り込むターン。そしてステップを用いての肉薄。その際に射撃がセットで付いてくる。
攻撃を行えば相手はスライドターンで下がりながらの銃撃か、直接銃で受け止めてくる。しかし、前者は相手の手番が続き、後者は鍔迫り合いからの発砲や、蹴りの動きによって距離をリセットされるか、攻撃が続く。射程が長い武器は厄介だ。普段ならこっちも槍を用いて一方的に相手を攻撃出来るものだが、この相手の武器はそれよりも遥かに厄介。攻撃するために距離を詰める必要がないというのが汚い。
戦い方としては魔法使いに近いが、魔法を撃ったら次の発動までに時間がかかる上、近づけば肉体的には強くない魔法使いとは違い、近距離での戦闘も可能で、隙もリロードの時のみ。それも右手の銃には必要ないようで、連射が可能。左手の銃は撃ち終えれば左手一本で器用に弾を込めている。その際に、〝銃に命を吹き込んでますの……！〟などと色々とうるさいが、右手の銃を連射してくるので距離を詰めることが出来ない。
ふざけた相手だと思ったが、やはり使徒。戦闘能力が高い。このままではジリ貧であったが、近距離で隙を晒してくれれば一瞬で決める自信はあるのだ。
ならば、と。頼光は一手打つことにした。覚悟を決めて動きに出す。
右手の銃声が一発。左手からも一発。身を横に回すことで躱し、続く動きに頼光は加速した。

何をするつもりですの、と正面から突っ込んできた敵にキャロルは疑問の思考を回した。
だが、何をやってこようが自分は正面からそれを打ち崩すだけ。そ

れがレオンハルト様の使徒である自分に相応しい動きなのだ、とキャロルは思う。
……負けられませんわ！
そう、負けられない。ゆえに〝勝つ〟。
この戦い方も、レオンハルトに勧められて数百年の練習の末に体得した戦闘方法だ。銃を用いた戦闘の特訓はずっとしていたが、伸び悩んでいた自分に対し、こういった戦い方はどうだ？　と、色々と教授してくれた。
キャロルは自分は弱いと自覚している。ライバルとしている七星に敵わないばかりか、後輩二人にも敵わない。レオンハルト様を戦いで楽しませることも出来ない。
だがそれでも、レオンハルトは自分に期待してくれる。いつか完璧な使徒になれると、その言葉を信じてくださっている。
ならば泣き言を言っている暇はない。レオンハルト様のために働きながら、己を磨き続ける。弱いなら強くなればいい。当たり前のことだ。今はその目標を口にしても笑われるだけだが、いつかは、
……レオンハルト様にも、他の方々にも、本気で認めさせてやりますわ……！
それが己の夢であり、原点だ。一度誓ったことは絶対に成し遂げる。半端はしない。
実戦でこの戦い方を用いて戦うのは初めてだ。敵も手強い。だがそれでも、
……負けていい理由にはなりませんの！
言い訳は厳禁。情けないことはしないと、そういうことだ。それは完璧使徒には相応しくない。正面から勝つのが相応しい。そうしていつか、レオンハルトに使徒であることを誇ってもらえるように、
「――！」
キャロルは2丁の銃を、加速して来る頼光に向かって連射した。
すると相手はそれを数発は弾いたが、次の瞬間には刀で地面を叩き、僅かな土飛沫とその場に刀を残して、下に消えた。
「っ、何が――」

目眩ましか、と思い、しかし途中で気づいた。
「もう遅いわ！」
と、声は背後から聞こえた。何故か。それは、
……スライディングで、股下を潜り抜けた……！
思った瞬間、背後から続く声が聞こえた。
「――〝頼光（らいこう）一閃〟！」
「……！」
キャロルは、動きを迷わなかった。

……獲ったッ!!
頼光は自身の必殺技と呼ぶべき一刀を横薙ぎに振るい、勝ちを半ば確信した。
幾ら使徒とはいえ、生物には違いない。首を飛ばせば死ぬし殺せる。故に迷わなかった。刀に力を込めて、両断せしめてやると気迫を込めて振るう。
だが、その先に使徒はいなかった。
「っ……！」
どこに消えた。まさか自分と同じ様に下か？
そう思った次の瞬間に、声は上から聞こえた。
「――これにて終幕ですの」
背後に振り向き、その姿を見た時点で、頼光は相手の動きに気づいた。それは
……空中に跳んでの後ろ宙返り……!?
頼光は驚愕し、しかしその行動は失敗だ、と思う。
空中に跳べば、着地を狙われてしまう。相手は両の銃口を空中でこちらに向けているが、ギリギリで気づけたことで致命にはならない。数発は当たってしまうかもしれないが身を動かして急所を外すことは出来る。
そう思って、次の行動に臨もうとした時、使徒は銃口をこちらからずらした。

何を、と疑問し、銃口の先を横目で見る。すると先程まで使徒がいた足元に袋詰にされた何かがあった。
それは、黒い穴が三つ空いたようにも見える、ある生き物の死骸で、
……ぷちハニー……っ！
跳躍の前に落としていたのか、狙いに気づき、その場から動こうと身を跳ねさせるように瞬発させる。
しかし頼光が動き、退避するよりも速く、
「中々に良い戦いでした。ですが――さよならですわ」
銃声が一発。そして一瞬遅れて、
「――――」
爆発音が響き、頼光は爆風に包まれた。

ハンティVS黒部

爪と剣が激突し、火花を散らす。

両者とも人外。爪や牙を振るうのは黒部で、剣と魔法で戦うのはハンティだ。

傍目には互角に見える戦闘の中で黒部は相手の強さに歯噛みしていた。

「くそっ、ちょこまかしやがって！　逃げてんじゃねぇよ！」

「攻撃が当たらないからって悪態ついてんじゃないよ！　ただの力不足でしょうが！」

言いやがったな！　と、黒部は急に別の位置に出現した使徒に爪を振るうが、今度は普通に躱される。今度は自分の背後に気配が現れた。そちらに振り向くと同時に、相手の声が聞こえ、

「〝雷撃〟！」

「っ……！」

直線の軌跡で雷が全身を打つ。一瞬の硬直、痺れに身体が止まりかけるが、強引に身を起こして連続される剣戟を爪で防御する。

先程から一瞬で位置を変えてしまう相手の技は、おそらく魔法。魔法に詳しくないためひょっとしたら違うかもしれないが、別に何であっても変わりはしない。現実では、相手が瞬間的に移動しているし、それが出来るのだ。それさえ分かれば細かな分類などはどうでもいい。

……とはいえ、どうする!?

己に問いかける。現在の状況はこちらの防戦一方だ。

相手は剣の腕、魔法の腕、体術に優れながらも、身体能力もかなり高い。少なくともこちらで全力でぶん殴っても問題無く受け止めるくらいには力もあるし、瞬間移動を用いなくても速度がある。

これだけでも強敵だが、やはり瞬間移動が厄介過ぎるのだ。

何せ回避に於いてはほぼ隙がなく、魔法発動の前後の隙が全く見えない。攻撃しようと思ったら消えているのだから思わず、〝このインチキ野郎！〟と叫んでしまったくらいだ。直後に〝野郎じゃないよ

！〟と雷撃を撃たれたが。
だが魔法だけでなく、近接戦闘に於いても瞬間移動はキツいものがある。普通は相手の身体の動き、その起りを見て次はどう動くか、などの読みを行うし、視界で見ていれば相手の動きは追いきれる。瞬間移動がある場合だと、前面で相手の動きだけを見ていても、次の瞬間にはかき消えて死角からの攻撃が来ていたりするのだ。致命傷は防げるが、全てを防ぐことは厳しく、
……体中が痛ぇな……！
剣や魔法を少しずつ喰らい、だんだんと痛みが増え体力が減っていく。妖怪は怪我を負っても再生出来るが、痛みや疲労は残る。破壊されることはあっても死ぬことはないが、とはいえそれも時間が掛かることだ。ゆえにやられるわけにはいかない。
手立てを考えようと思うもそういうのは苦手であった。さりとて諦めるわけもなく、黒部は全力で眼の前の相手を噛み殺そうと戦闘を行う。
だがそれも、
「ほらほら、あんた妖怪王でしょ！　だったらもっと妖怪らしく戦いな！　だんだん冷めてきたよ！」
「っ、うるせぇ！　この化け物が！」
剣と爪が強くぶつかり合い、衝撃の波が空気を震わせ、体毛を撫でる。まさか〝化け物〟という言葉を自分が言う羽目になるとは、世も末だな、と思ってしまう。
しかし事実だ。僅かに口の端に笑みを覗かせた使徒は、瞳を紅く輝かせて剣を振るい、
「もっと攻めてきな！　一方的じゃ詰まらないからねッ！」
「全然冷めてねぇじゃねぇか！　舐めんな！」
叫ぶように言って、攻撃の密度を濃くする。爪と牙、体も使った強引な突破を試みると、使徒が笑ってそれを受け止める。
「ハハッ、良いじゃない！　その調子でもっと向かって来な！　受け止めてやるよ！」
「鬱陶しい女がよ！　絶対、食い殺してやる……！　不味そうだがな

！」
「あんたの肉も不味そうだけどね！　犬っぽくて！」
「俺を犬扱いすんじゃねぇよっ！」
　飛び掛かるように体重を乗せた一撃を放つが、使徒は剣に両手を携えて防御を成功させる。使徒にまで犬扱いされちゃ堪らねぇな、と憤りをぶつけるように放った両爪の連撃も、相手の肌を傷つけることは敵わない。相手は愉しめるだけの余裕があるようでそれに苦々しい気持ちを覚えてしまう。
「使徒ってのは全員テメェみたいに強ぇのかよ！」
　相手の攻撃を追いながら問う。すると向こうが苦笑しつつ、
「安心しな。――あたしより強い使徒はいないよ！」
「……そりゃあ安心した、ぜっ！」
　爪の一撃は地面を穿ち、相手はそれを跳ねるように下がることで躱した。
　……でもこれは朗報だな。この女くらい強ぇ奴しかいねぇなら、他の奴らは既に死んじまってる。
　自分の強さは石丸の次くらいには強いと自負している。魔人相手でも劣るつもりはない。出会っても戦ってやると思っていたが、この使徒は己が追い詰められるほどの馬鹿げた強さを持っているのだ。
　となれば石丸の相手、こいつの主人である先程の魔人は――と思考を回したところで、
「っ……また地震が……！」
　足元の大地が震動した。強靭な足腰を持つ黒部が転けるようなことはないが、周囲の魔物兵らはたたらを踏む者もちらほらいる。少し距離を取った使徒が別の方角を見て、
「……かなり暴れてるね。これはそろそろ終わりになるか」
「っ……ふざけんじゃねぇ！　俺もあいつもまだ終わんねぇよ！」
　牙を剥き出しにして形振り構わず突撃をするも使徒は雷を放ちながら瞬間移動で距離を取り、こちらの接近を許さない。そして先程の笑みとは打って変わった冷たい表情を見せる。
「結構な数が逃げられてるけど、前線の人間はもう壊滅寸前……って

とこかな。多分、他の将も死んでるだろうし、あたしもそろそろ行かないとね……」
「ああ!? テメェ、まさか――」
と、告げたところで使徒が答えた。
「そのまさかだよ。この場での時間稼ぎはそっちの勝ち。でも他の場所は終わってるみたいだから――」
だからまあ、と、
「あんたを倒し切るには時間が掛かりそうだし、逃げたいなら逃げな」
「……! 寝惚けたこと言ってんじゃねぇ! 俺はまだ――」
「やれないでしょ、もう。それとも――死ぬまでやる?」
「!」
底冷えするような視線を向けられ、背筋がゾッとする。
並の人間をそれだけで殺せそうな殺気に警戒し、身構えながら一歩下がると、使徒は息を入れ、
「……でもまあ、兵を殺されちゃ堪んないからね。――〝迷宮生成〟」
そう呟いた瞬間、魔法の光とともに黒部は別の場所に移動させられた。
「なっ!?」
辺りが森となり、それでいて空が白い不思議な空間。蔦の張った地面の上に、黒部は立っていた。そして大木の根に立っている使徒はこちらを見下ろし、
「しばらくここで遊んでな」
「テメェ! 何処に俺を連れてきやがった!?」
顔を上げて叫ぶも、相手は身を翻しながら既にここを後にしようとしている。
……させるか!
と、飛び掛かって攻撃を行うが、その前に眼の前からかき消えた使徒が空間に声を響かせた。それは、
「ここはあたしが作った迷宮。心配せずとも数時間もすれば自然と消滅して出られるようになってるから。その頃には、戦いは終わってるだろうけど」

「おい！　ふざけんな！　ここから出――」
「それじゃ、縁が合ったらまた何処かで。勝負は〝引き分け〟ってことにしといてあげる」
その上から目線の言葉を最後に、使徒の気配が空間内から消える。
深い森の中のような迷宮空間。後に残されたのは黒部のみであり、完全に遊ばれていたことや告げられた状況に血が滲むほどに歯噛みすると、
「……くそっ！」
黒部はその自慢の爪を、大木に向かって全力で叩きつけた。

世界を赤く染め上げたようなそこは位相の異なる場所、アドミラル空間。
時が止まった空間の中に瞬間移動の魔法で入ってきたハンティは、自身が作った迷宮の中に取り残された黒部を見て息を吐いた。
「悪く思わないでね――って、さすがに無理だよね……」
何せこちらは敵。
しかも勝負を途中ではぐらかされた上に、迷宮内に置き去りにするような酷いやつだ。
ペールが書くような小説なら悪者の手先といったところだろう。
……実際、使徒の立ち位置ってそんなものだけど。
使徒とは難儀なものだ、と内心で軽く愚痴ってみる。時が止まっているのでどれだけ時間を潰しても遅れることはないので問題ない。この空間にいる限りは無敵だ。レオンハルトだって手を出せない。こっちからも手を出せないのがアレだが。出せたら最強なのに、と無い物ねだりを思う。
この黒部も、瞬間移動の対応には苦戦していた。
……別に使わなくても勝てるけどさ。
何となく自分の強さが瞬間移動のおかげのように感じて負け惜しみのようなことを思い微妙な顔をしてしまう。理由は、そんな子供じみたことを思ってしまった自分への恥ずかしさと、本当にそう思って

るが故のどうしようもなさだ。自覚してるのに治せないとか末期じゃないだろうか、と頭を抱える。先程の戦闘も、思い返してみれば随分と楽しんでしまった。黒部は妖怪王と呼ばれるだけあって、自分と戦えるほどに強敵だった。強い相手との戦闘はやはり楽しく感じてしまい、そんな自分に戸惑う。

……でもレオンハルトよりはマシでしょ。

レオンハルトみたいに戦闘中に笑ったりは――多分してない。してないったらしてない。会話はしたけど。ちょっと煽ってしまった気もするけど、ただの戦闘中の掛け合いのようなものだ。あれくらいは普通だろう。模擬戦ではよくやるし、周囲の魔人や使徒もああいう感じで楽しむ者は多い。それに比べたら自分なんて極めて普通。常識の範疇だ。

それに強い相手と戦えるから楽しいというのも確かにあるだろうが、それよりも〝戦いになる〟という方が自分にとっては重要だ。弱者を相手にしなければならないとなると、戦いにならない。一方的な虐殺になってしまう。それはかなり憂鬱な事であり、ある程度の覚悟を決めてもやはり気分が沈むことは避けられない。相手は戦場に出ることを決めた戦士であるし、冷徹に事を運んではいるが、たまに戦場に出てくる少年や少女。新兵か、実力があって戦いに出るような子を相手にすると一瞬手が止まりそうになる。

ハンティは基本、魔軍との戦いに参加する時は相手と味方、ともに犠牲を減らそうという信念を持って戦っている。特に戦場に出ない民間人への扱いには注意しており、虐殺や暴行が避けられない場合は進んで殺して回っている。そうすることで苦しめられる人間が苦しまずに済むからだ。

だがレオンハルト軍ではそれも少ない方であり、行う時も――こう言っては何だが、秩序のあるやり方でやる。まず必ず生かす人間と殺す人間を選別するし、虐殺や暴行を望む場合も魔物兵が上司の魔物隊長に希望を出すし、女性も一応は慰安婦という立場を設けた上でやらせる。多少乱暴であることは致し方ないらしいが、魔軍の中ではそういった行為中での殺害件数や、酷い陵辱が圧倒的に少ない。たまに配

属されたばかりの魔物兵が我慢できずに占領した街で暴れることもあるが、そういうことをするとこっ酷く怒られるし、罰則やペナルティが加算される。初犯は軽いが、二回目からは加算された分もあってどんどん厳しいものとなる。代わりに一度も罰則を受けたことのない者や、優秀な者には年に二回のボーナスがあってそれを貰える可能性がある。大体は街で使える食事券や、施設利用券だが、これが中々に好評だという。

そして年に一回の昇給制度もあり、こちらにも影響してくるので出世を望む者ほど罰則には気をつけるようになる。曰く、魔物にも飴と鞭で学ばせること。そして文化的な生活を送らせることで規律的な思考を促しているのだ。

ルールを守る者は優遇され、破る者は罰を受ける。それに加えて魔人レオンハルトと言う魔物界を力で支配する魔人の代表格、魔人筆頭兼魔軍参謀という肩書がルールを守らせるのだ。本来なら魔人が決めたことを破るのは、即座に殺されてもおかしくないことだが、寛大にもちょっとした罰則を受けるだけで許してくれるという。その上、ルールを守っていれば街に住み続けることも出来るし、様々な特典もあり得る。ルールを守ることが苦じゃない。窮屈ではないと思わせれば後はある程度放って置いても規律だった行動をするようになるのだ。それでいて、魔物の良さを消さないために私闘は禁じていない。街を壊さなければ、そしてやり過ぎなければ何か言われることはない。

魔物の普遍的な価値観である実力主義を残しつつ、秩序ある組織を作ること。それがレオンハルト軍の基本方針。軍としての強さは後から付いてきたものに過ぎない。

それに比べれば人間の組織はお粗末に見えてしまう。今回の相手はよく出来ているが、人間の国の殆どが権力者の腐敗という問題を抱えている。利権や金銭などの様々な理由から甘い蜜を吸おうという権力者が絶えず、しかもそれを放逐出来ない。魔物界であれば殺して終わりだし、そもそも実力による完全な上下関係が出来ているので、上位からの命令に逆らうことはない。下剋上も起こりうるが、実力主

義の上では当たり前のことだ。余程のクズがトップに立たない限り、ある意味でバランスが取れているのが魔物界だ。上位の魔人達の気位が高いためでもあるだろう。アレな魔人もそれなりにいるが、魔王という絶対者もいるので理不尽が起こるとすれば魔王かその下の魔人くらいか。

……全く、ちゃんとしてほしいね……。

その上で思うのが、やはり人間のこと。色々と考えたが単純にハンティが感じているのは、子供を戦場に出しているという憤りだ。

戦える年齢になったから、とか、ちょっと強いからという理由で戦場に出てこないでほしい。負けそうになって泣かれるとどうしようもない気分になってしまう。レオンハルトなら、戦士でない子供を戦場に出す真似はしないし――

……っと、いけない。これじゃレオンハルト信者みたいじゃないのさ。

そんなつもりはないが、どうにも最近は考え方に納得してしまうことが多くて何とも言えない。キャロルみたいに妄信するつもりもないのだ。

何はともあれ、そろそろ行動に移ろうと、ハンティはアドミラル空間から一度出て自分の部隊の魔物将軍に声を掛ける。

「――状況は？」

「！　――と、ハンティ様でしたか。相変わらず心臓に悪いですな」

一瞬反射的に身構えたが、慣れているのだろう、直ぐに気を取り直す魔物将軍。そして咳払いを一度した上で、

「現在、殆どの部隊で逃走する人間を追討中ですが、一部では前線で抵抗を続ける武士の姿が散見されるとのこと。我らは接敵した妖怪軍団との戦いも行っておりますが、こちらも徐々に敵数を減らし、やがて殲滅出来るかと。……そういえば、妖怪王は――」

「……ちょっと別の空間に置いてきた。まあ死んではないけど、しばらくは出れないから無視していいよ」

「……なるほど、畏まりました。でしたら特に問題はありません」

魔物将軍の簡潔な説明に頷く。ならば自分は、

「……ここ、引き続き任せてもいいかな？」
「構いませんが、何処に？」
　ああ、うん、と魔物将軍の問いに再び踵を返しながら言う。
「加勢がてら――ちょっと他の所の様子も見てくる」
　そう告げて、ハンティは再び瞬間移動を行った。

「……行ってしまいましたね」
　魔人レオンハルトの使徒、ハンティが去った後にそう呟いたのは副官の魔物隊長だ。その声には少し残念の色が見える。それを指摘することもなく、魔物将軍は息を入れ、
「ああいう方なのだ。人一倍責任感があり、仲間を見捨てられない優しき義の御方。それがハンティ様だ」
「……それでいて最強の使徒。気さくに見えて、何処か貫禄がありますよね。最近はそれも更に増したような……」
「……お前もそう思うか」
　ええ、まあ、と魔物隊長が頷く。あまり戦争に出ないハンティだが、その麾下に就くことになった魔物将軍はその光栄と言うべき役割を得て張り切ったものだ。
　最強の使徒であるハンティは、やはり凄い。その強さも然ることながら、かなり接しやすい。戦っている最中はピリピリしていることもあるが、それくらいは上司として許容範囲だと思う。やはり魔人レオンハルトの使徒だけあって、かの御方にもかなり似ているようにも感じる。振る舞いなどを見ていると、それに近いものを感じるし、その下にいると彼女のために戦いたくなってくると魔物隊長は感じていた。
　魔物将軍は吐息を漏らし、
「本当いいよな、ハンティ様……見た目も凛々しいし、気さくで飾らない。その上ちょっとお茶目なところもあって――」
「……あ、あの将軍？」
「それにあの衣装も良い。……いや、その部分に注目するのはアレか

もしれないが、あのレオタードは良い。戦ってる時の下半身の動きを思わずガン見してしまう。私の眼では追いきれないのが残念で仕方ない……お前もそう思うだろう？」
「え、あの……わ、分からなくもないですが……」
「うむ、そうだろうそうだろう。この前なんてな。ちょっとしたことではあったんだが、歯を見せて屈託のない笑顔で笑うハンティ様を見て思わず……うむ、何だ……こんなことを言うのも何だが……思わず私のブツが猛ってしまい――」
「……ファンってことですか？」
「ファン……おお、そうだ。私は確かにハンティ様のファンと言える。……ならばファンクラブを作るか？　レオンハルト様のファンクラブのようにハンティ様の魅力をもっと多くの魔物に知らしめるべく活動を――」
「……あ、あの……」
魔物隊長が遠慮がちに、そして引き気味に声を掛ける。
まさかちょっとした言葉からここまで饒舌になるとは思ってもいなかったのだ。実はこの二人はレオンハルト軍に入って僅か数年の新入りである。今回の戦争で初めて同じ部隊に配属された者同士であるため、人柄をそこまで知り得ていない。
なのでこんなアレな方だとは思っていなかったのだ。真面目で優秀な方に見えたのだが、
「――よし！　そうと分かればさっさと戦争を終わらせられるようより一層励むぞ！」
「え？　あ、はい。そうですね」
それはその通りだと思うので魔物隊長は頷く。
だが魔物将軍は魔物隊長を見て、手を肩に置くと、
「そしてお前の言う通り、ファンクラブを作るぞ！」
「……は？」
思わぬ言葉が聞こえ、思わず上官に間の抜けた声で応答してしまう。なおも脳が理解を拒んでいるのか、その状態は続き、
「……が、頑張って下さい？」

一応、応援のような他人事のような言葉を告げると、魔物将軍は首を傾げ、
「？　何を言っている。お前も入るのだ。同士なのだろう？」
「え、いや――」
「うむ、大丈夫だ。分かるぞ。ファンクラブ活動など不安で仕方ないだろう。だが、ハンティ様のため、共に力を合わせて頑張っていこうではないか！」
そういうことじゃない、と言う前に魔物将軍が自分の胸を叩き、
「案ずるな。私が会長をやろう。お前は副会長だ」
「な⁉　そ、それは――！」
「うむ、一先ずは会員を増やすことから始めなくてはな。とはいえ勝手も解らぬし……ここはファンクラブ運営の先駆者であらせられるキャロル様に知恵を頂き――」
「ちょ、いや、魔物将軍⁉　私は――」
「大丈夫だ！　何も言わずともよい！　全て私に任せておけ！」
「だから違――」
いつの間にかハンティ様ファンクラブの副会長に任命された魔物隊長は、この後何度も訂正を試みたが話を聞かない魔物将軍のゴリ押しと、部隊の指揮を行わなければならない、と有耶無耶にされて結局ファンクラブの会員として働くことになる。
何故かここに、新たなファンクラブが設立されたのだった。

「……？　何故か嫌な予感が……」
不意に悪寒が走り、ハンティは腕を押さえる。黒部の事だろうか、と思い、しかし目を細めると、
「……ま、あれも不死なら、いつか出会う機会はあるでしょ」
妖怪は不死の存在。ゆえに今回の戦争でもう戦うことが無かったとしても、いつかはまた相手をすることもあるかもしれないだろう。
それこそ自分が使徒で、彼が人間の味方をする限りは。
出来れば自分も、人間の味方もしたいんだけどな、と思いつつ、ハ

ンティは思考からそのことを消し、
「急ぐ必要はないけど、急がないとね」
まずは自分と同じ使徒の様子でも確認しに行こう。レオンハルトは放っておいてもどうにかなることはないだろうし。
アドミラル空間内を徒歩で移動していたハンティは、ファンクラブの事に一切気が付かず、身内の元に急いだ。

ペールＶＳ菅原ミッチー

キナニ平野での戦いの趨勢は、ほぼ決していた。
魔軍の勢いに押され、多大な被害を出した人類軍は、既に撤退戦を開始しており、追いかけてくる魔物兵を殿が何とか食い止めようとしている。
だがそれも、ほぼ全ての場所で魔軍の勝利が確定し、後は戦場に取り残される形となった人間達を囲んで殲滅するのみである。
しかし、その戦場の中の二箇所では未だに攻防が行われていた。
一つは魔人レオンハルトと、藤原石丸の戦い。こちらは戦場の中心だが、誰も近づけない有り様で、魔物兵が遠巻きに眺めることしか出来ていない。
そしてもう一箇所は、ペール率いる魔法魔物兵の軍団と、菅原ミッチーが率いた混成戦士団の戦いだ。
しかしその模様は、人と魔物の戦いと言うより、人外と人外の戦いであった。
「……ああもう！　なんて面倒臭いんですか！」
と、相手に抗議するように叫び、魔法で敵勢を吹き飛ばしたのはペールだ。前方から向かってくる多くの敵に、周囲の魔物兵も必死に魔法を放っている。こちらも幻獣を用いて対抗しているのだが、相手にしているのは、
「ふむ、やはりやりますなぁ……では、また追加で――」
声を作るのは敵影の奥にいる中年の男。菅原ミッチー。彼が声とともに腕を振るい懐から出した紙の束を周囲に散らばらせる。およそ百枚はあるであろう紙が地面に落ちると、再び敵は現れた。
それは式神や鬼、妖怪の軍勢だった。
特殊な紙で出来た存在や、紙から呼び出された者達が地面から湧いて出てくるように現れる。それは戦う前にペールが口にした術法のものだ。
「やっぱり陰陽術使ってるじゃないですか!?」
「……はて？　どうでしょう。小生の独自の術の可能性もあります

ぞ」
「それはそれで危険なので仕留めます！　――幻獣ちゃん！」
こちらも負けじと幻獣を召喚して突撃させると、式神や鬼との戦いを始めた。出来れば直接、召喚者であるミッチーを狙いたいが、肝心の本人はこちらが召喚したのを確認して煙管を吹くと、
「ややや、怖いですなぁ。怖いのでもう少し下がっておきましょう」
……この……っ！
こちらを煽るような表情にぶん殴りたくなるが、それを抑えて冷静であるように努める。今はこの状況をどうするかを考える方が先決だ。
相手が使う陰陽術。札を用いて様々な能力を持つ式神を使役したり、召喚札というものを用いて鬼などを召喚したりするらしい。
だが数体程度ならどうにでもなると考えていたのだが、数としては一度に百体以上。それもそれなりに強力な人外の軍勢だ。倒せないほどではないが、数がいるので鬱陶しい。
……折角タコ殴りにしてやろうと思ってたのに、酷いですよう……！
そういうのはこちらの専売特許だ。まさか向こうも数で押してくるとは思ってもいなかった。幻獣や魔物兵も頑張ってくれてはいるが、数が減っていくと再び追加で召喚されてしまう。いつかは札が切れると思うのだが、
「全然切れない……！」
その様子が見られないことに眉をひそめる。札を使う以上は上限があるはず。それが切れれば後はこっちのものだと思って既に結構な時間が経っている。他の部隊の殆どは、既に消化試合に入り始めているというのに、
……これじゃあ、レオンハルト様に褒めて貰えません……！
おそらくだが、キャロルやハンティも既に戦いを終えているだろう。自分一人だけが時間を掛けているというのは失態に他ならない。レオンハルトは怒ることも咎めることもしないだろうが、自分が納得出来ないのだ。

となれば手立てを考えるしかない。既に敵軍の撤退も始まっており、ある程度はしょうがないが、せめて将の首だけでも獲っておけば、戦いも楽になるし、手柄にもなる。人間とはいえこれほどの能力を持つ相手の首であれば大手柄だ。きっとレオンハルトも褒めてくれる。

ならば、とペールは行動を起こそうとした。軽く眉を立てた表情で、

「魔物将軍！　ちょっと行ってきますから、援護よろしくお願いします！」

「……はっ、了解しました！　ご武運を！」

話が早くて助かる。応答の声が聞こえると同時、ペールは前に出た。そうして杖を振りながら、

「近接戦闘は苦手なんですけどね――っと」

式神に脚を振り上げて蹴りを見舞った。そのまま続いて魔法を発動して敵を吹き飛ばす。使徒の身体能力に任せた強引な突破だ。近接戦闘が苦手ではあるが、

……レオンハルト様に扱かれてますからねぇ……。

自分の主は魔人の中で最強、近接戦闘に於いても右に出る者はいないレオンハルトだ。当然、日常の中でハンティやキャロル同様に訓練を施されており、その内容には近づいた時の戦い方もある。自分は魔法使いだが、それでも近づかれたらどうするのか、というレオンハルトの言葉には逆らえない。

それにある意味で心配しているようなものでもある。もし近づかれてどうにかなったらどうするのか、という意味でもあるのだ。それは嬉しい。それに、

……為になってますから結果オーライです！

今こうやって役立ってるのでその甲斐はあったと思う。訓練の内容を思い出すと微妙にげんなりとしてしまうが、今は気分が良い。何しろ敵を倒せる。勝てる。勝てれば気分が良い。単純な事だ。

「魔法部隊！　前へ！　ペール様を援護するぞ！」

更に背後から魔物将軍の命令と、その指示通りに魔法を放つ魔物兵の援護で、多くの式神や鬼を払っていく。どうもです、と内心でお礼

を言うと、前方に見えてきたミッチーを捉えて全力で距離を詰めた。
杖を振り上げ、
「もう来てしまいましたか。そろそろ撤退しようと思っていたのでありますが……」
「それは叶いませんよ！　あなたは私にやられちゃいますから！」
と、ミッチーを打撃しようとした。使徒の身体能力で叩けば、人間は容易く地面に沈む。そう思って放たれた打撃は、
「――それはやめてほしいでありますな！」
「……！」
ミッチーの抜き放たれた刀に防がれた。やや驚愕し、距離を取る。相手のその動きは淀みのないものであり、ペールは眉を立てて問いかけた。
「……随分と器用なんですね！」
「これでも藤原四天王の武士としてやっておりますからなぁ。剣術は勿論、あらゆる武芸を嗜んでおります故。基本、後方で指示を出すのが仕事なので披露する機会は少ないでありますがな」
ミッチーが刀を構えながら、軽い笑みを浮かべた。言う通り、隙の少ない構えだ。そこには確かな武の色が見える。
「……嫌ですねぇ。近接用の武器を持ってない丸腰の女の子に刀を向けるなんて。武士として恥ずかしくないんですか？」
「使徒ともなればその肉体が武器でありましょう。見た目が女性だからと油断するような馬鹿は武士ではありませんな」
ご尤も、と内心で同意する。
確かに私の体はある意味で武器ですけど、と事実兼下ネタを思い付くが口に出すのは自重しておく。そういうのは味方相手になら良いが、人間の男、しかも敵を相手にそれは嫌悪感がある。自分は痴女でも淫乱でもないのだ。仮にそうだとしてもレオンハルト相手限定。好きな男だけに一途で都合がいい女でありたい。さすが私。ペールがそう思っていると、
「――ペール。手伝おうか？」
「っ！　始祖様！」

不意に横から声が飛んできたので少し驚いたが、直ぐにそれがハンティのものであることに気づく。瞬間移動でやってきたのだろう。やはり気配も前触れも何も感じ取れないので自然と奇襲みたいになるなぁ、と思う。その証拠に相手は警戒してまた少し距離を取り、
「……新手、でありますか。参りましたな。頃合いを見て逃げようと思っていたのでありますが……」
「ふふん、それは無理ですね！　この私と、始祖様相手に逃げられると思ってるんですか！」
「……ま、そういうことになるかな。大人しくしてくれるならそれほど酷い目には合わないけど……抵抗してみる？」
ハンティとともに眼の前の相手を追い詰めるべく身構える。既に敵の多くも下がっており、前線で戦っているのはミッチーだけだ。将の一人くらいは仕留めておかないとまんまと相手の目論見通りとなってしまうだろう。
だがこれで勝負は決したようなものだ。自分だけでなく、ハンティもいるのだ。逃げられるはずも、勝てるはずもない。だからか、ミッチーは苦笑しながらも武器を腰に収めた。そしてその上で懐に手を入れ、
「……抵抗しても無意味でありますのでしませんよ。ただ――」
と、そこから一つの植物を出してみせる。
それは鉢に植えられた植物。盆栽と言うべきものであった。それにペールは目を見張り、
「それは――」
「ご存知でありますかな。これは〝お帰り盆栽〟というアイテムの一つ。〝帰り木〟とも同じ効果を持つ貴重品でありまして……でまあ、効果は言うまでもありませんな？」
「っ――逃しません……！」
ペールは即座に駆けた。肉薄し、そのアイテムを使われる前に一撃を与えて使用出来ないようにする。だが、
「ではまた――」
「！」

その言葉を最後に、ミッチーが盆栽の木の枝を一つ折り、同時にその場から消える。攻撃が空を切り、ペールは苦悶の声を漏らした。
「……あーもう！　逃してしまいましたよう！」
「……みたいだね。気配も完全に消えてる」
ハンティが周囲を見渡すが、やはり何処にもいないのだろう。諦めたように息を吐いている。
「お帰り盆栽か……うちにもあるけど、普通の人は大体帰り木だよね。さすがは人類を統一した藤原家の重鎮ってところかな」
「呑気な事言ってる場合じゃないですよう！　せっかくの私のご褒美が……！」
頭を抱えて落ち込む。まさか本当に逃げられるとは思ってもいなかった。
お帰り盆栽とは、一枝折れば拠点に帰ることが出来るレアアイテムで、帰り木というアイテムと同じ効果を持つ上位互換だ。
帰り木は一度使えば使えなくなるが、お帰り盆栽は使っても折れた枝は１０分程度で再生するので何度でも使うことが出来る。
ハンティが言うように、自分達も一つ持っているが、基本的には帰り木を使っている。お帰り盆栽も迷宮に潜る際には使うこともあるが、貴重なので誰か一人が常に持っていることはない。単独行動などの必要な時だけ保険として持たされるくらいだ。
「……まあ逃げられてしまったものはしょうがないし、一度レオンハルトの様子でも見に行こうか。戦いに勝ったことには変わりないし」
「……そうするしかないですよねぇ……はぁ……レオンハルト様になんて言えば……」
敵の将を前にして逃げられた、など彼の使徒としてあるまじき失態だ。なので肩を落としていたが、
「あたしも仕留めきれてないし、そんなに心配しなくてもいいんじゃない？」
「――えっ、そうなんですか？」
「敵も不死で時間掛かりそうだったし、適当にあしらってきたからね」
「あっ、あー、そう言えば妖怪王が相手でしたっけ。確かに面倒そうで

すよねぇ、あのワンちゃん」
　この間の戦いで見かけた黒部の姿を思い出して嫌な顔を浮かべるペール。明らかに自分よりも強いであろう妖怪王を相手にしていたハンティだが、さすがと言うべきか、彼女の肌には傷一つない。使徒最強は伊達ではないのだ。
　だが仕留めていないことを聞いたペールは顔を綻ばせ、
「それなら大丈夫ですよね？　始祖様でも仕留めきれなかったんですし、私も同じ結果ならご褒美貰えますよねー？」
「……いや、それは分かんないけど、とりあえず怒られることはないんじゃない？」
「ですよねー！　よし！　そうと決まればレオンハルト様の格好良いところを見に行きましょう！」
　後のことを魔物将軍に任せて、その場をハンティと共に離れる。後は追撃を行うのみであるし、少しくらい離れても問題ないだろう。レオンハルトに報告もしたいし。
　ハンティは先を行くこちらを見て硬い表情のまま息を入れると、
「……もう終わってるかもだけど」
「あっ、それもそうですね！　でしたら早く行きましょう！　もし終わってたらそれはそれで勝利を労いますから！」
「……ま、とにかく行こうか。キャロルも先に行ってるだろうし」
　レッツゴー！　と腕を振り上げてペールは機嫌良さげにしながら、ハンティと共にレオンハルトの元に向かった。
「……それにしても、陰陽術か。ちょっと戦ってみたかったんだけどな」
　道中、ハンティがニヤリと笑みを浮かべながらそんなことを言う。ペールが半目を向けて、
「……始祖様。最近、好戦的になりましたよね。レオンハルト様みたいですよう？」
「――はぁ!?　いや、違うから！　ちょっと戦ってみたいと思っただけだし！　レオンハルトみたいに笑ってないから！」
　その言葉に過剰なほど声を大にして否定をするハンティ。あまり

見ないレアな様子にペールが面白いものを見たという風に笑顔を向けると、
「いやでも、今ちょっとニヤリとしてましたし――」
「だから違うから！　これはちょっと……思い出し笑い的なそういうアレで……とにかく行くよ！」
「あっ、待ってくださいよう！　そんなに嫌がらなくても、レオンハルト様みたいで素敵ですよー？　あ、ひょっとして恥ずかしがってるんですかー？　始祖様ってばとっても可愛いですね――」
「……雷撃！」
「ぎゃー!?」
怒って先に行ってしまったハンティを追いかけながら、ペールはニヤニヤしながらハンティをしばらくからかい続け、やがてお仕置きの雷撃を喰らい、今日一番のダメージを負うことになった。

……実に、危ないところでありましたな。
菅原ミッチーは拠点にしていた場所まで帰ってくると、ほっとしたように一息をついた。
敵の使徒との戦い。こちらは式神や召喚札を用いて善戦したが、使徒がもっと早くに出てきていれば終わっていたかもしれない。それほどの強敵であった。
加えて後からやってきたもう一体の使徒は更に強そうな気配を醸し出していたし、出現を察知することも出来なかった。あの場で死んでいた可能性だってある。
だが生き残れはした。ゆえにミッチーは再び仕事に戻る。配下の報告を聞き、撤退の指示を出しながら、
……石丸殿はまだ……。
まだ戦っている。かの魔人と。
後方の部隊が撤退するまでの時間を稼ぐため、魔人を一人で引きつけた。そして他の者達の活躍もあって見事にそれを成功させた。ならばもういつ撤退してもいいはずだが、

……それは出来ませぬか。
おそらく帰ろうとはしないし、帰ることも出来ないのだろう。あれほどの相手と死闘を演じているのだ。背を向けるような隙はあるまい。
戦いは敗北。どれだけの被害が出たかはまだ正確な所は解らないが、少なくとも５０万は死んだだろう。それで済んだだけマシな方だ。あの魔人とそれに引っ張られるように士気を増した魔軍相手では、こちらが全滅する可能性だってあった。それだけでも防げたのは僥倖だろう。ただ、
……このままでは、負けてしまいますな。
今回の戦いではなく、魔軍との戦争の事だ。一度にこれだけの数が減り、主だった将でも歯が立たない敵の強大さ。こちらはジリ貧だが、向こうにはまだ余力がある。さらなる増援や魔人の参戦がないとも限らない。十中八九負け。勝ちの目があるとすれば、やはり石丸の存在だ。
……石丸殿が魔人に勝利してくれれば……。
それを願うことしか出来ない。軍師として情けない限りだが、魔人をどうにかしなければ何度戦ったところで今回のように蹂躙されるだろう。前回の戦いで上がりきった士気も、今回の戦いで地に落ちることは容易に想像出来る。時間を稼いだところで厭戦気分が高まるのみで、事態が良くなることはないだろう。傘下の多くが離反。脱走兵もかなり増えるだろうし、これ以上の徴兵は難しい。
故に石丸の勝利は最低限の条件。最悪は、この戦いで石丸が死ぬこと。現実的なのは何とか生き残ってもらい、次に備えてもらうことだが、
……月餅殿。頼みますぞ……！
人外の存在であろう仲間を想う。人外ではあるが、数十年間に渡って石丸を支え続けてきた戦友だ。今更叛意があるとは思っていない。
己に陰陽術を教え、様々な能力や石丸に匹敵するかもしれないと思わせる強さを持つ月餅なら、石丸を生きて帰らせることも不可能ではない。

自分が出来るのは、それを信じて後に備えることのみ。戦線を後退し、拠点を移動させるための指示を行うと、ミッチーは拳を強く握りしめながら、己の無力さを呪った。

最期の意地

鋼が打ち合わされる快音が響く中、石丸は相手の動きを見切ることだけに集中していた。

自分が今まで培った技術を防御に用いる。攻撃に出ないのはその隙間が無いことと、今攻撃に出ても無駄であることを理解したからだ。

今の自分の技量では、この魔人に打ち勝つことは出来ない。だから戦いの中で強くなるしかない。

しかし、

「っ……！」

身体が重い。

理由は解る。出血と疲労によるものだ。

既に百近い傷をこの身に受けている。それでもなお死んでいないのは、極限のところで己が強くなっているからだ。成長の自覚はある。

だが、それでもなお足りない。この魔人を倒すにはまだまだ強くならねばならない。

……勝つ……！

その一念。それだけを考え、それを成してきた。

しかし今度ばかりは、という思いは頭によぎる。今この瞬間にでも負けてしまいかねないことを悟っている。想像の自分に身体が付いてきていない。最強の自分になれていない。

だが、剣を振りながら相手は言う。

「……筋が良くなってきたな」

不意に褒められた。

しかし、喜ぶことは出来ない。その物言いは相手が未だ遥か上にいることの証明だ。

剣を弾き、連続の攻撃を行いながら魔人は言う。

「だが――俺はお前の成長を待ってやる義理はないぞ」

残念だがな、と後に小さく付け加え魔人はこちらの背後に視線を向

けた。
「月餅も、既に虫の息か……もしくは死んだか」
「っ……！」
半ば憤るように剣で押し返すことを試みるが、難なく受け止められる。こちらの背後にいる月餅は既に身じろぎ一つせず地面に倒れ伏していた。
その生気の無さは石丸にも感じられるところであり、本当に生きているのか死んでいるのか確証が持てない。しかしそちらに気を割く余裕は一切なく、結果的に生きていることを信じて月餅を守るように戦うしかない。魔人の狙いは月餅にある。自分が負ければ月餅も殺されることとなるのだ。それは看過できない。
だが、自分の技は通じない。そもそもがレオンハルトが使っていた技だ。相手の行動がこちらより一瞬遅かろうが、直ぐにこちらを追い抜いて攻撃が行われる。
壁を越えても届かない高みを石丸は初めて体験していた。
魔人はこちらの目を見て言う。
「……本当に惜しい逸材だ。お前ならいずれ剣の理に到達することが出来るだろう。それこそ、魔人や使徒になれば俺を越える可能性もある」
その声の響きには、確かな残念の色が見えた。落胆ではない。ままならない、という想いを感じた表情だ。
「直にこの戦いも終わる。そして、お前達は死ぬ。仮にこの戦いで生き延びたとしても結末は変わらない。なら――」
レオンハルトはそこで目を細め、凄まじい殺気をこちらに向けて言った。
「ここで、殺させてもらう。それがお前という人間の剣士に出来る最大の賛辞だ」
そこで、レオンハルトは剣を八相に構えた。
剣を右手側に寄せ、左足を出す。しかし通常の八相とは更に構えが大きく、腕を大きく伸ばした状態で行うそれはＪＡＰＡＮで〝蜻蛉〟と呼ばれる構えに似ていた。

通常より強い斬撃を放てるその構えから放たれるのは、先程も見た魔人の必殺の剣。
「――〝震天〟」
その言葉とともに、石丸の視界は真っ白に染まった。

刹那、大地は再び震動した。
レオンハルトは石丸を殺す気で己の必殺技を用いた。人間相手どころか魔人相手にも出すこともない必殺技の一つ。それを放つことで、人間最強の剣士である藤原石丸の最期に花を添えてやるつもりだった。
十分な速度に、十分な力。〝震天〟は己の持てる技の中でも最大の威力を誇る。大地を斬り裂くほどの強大な力は、相手に受けることを許さない。防御を行えば相手の得物ごと叩き斬るし、少しでも切っ先が触れれば衝撃だけで全身の骨や臓器を破壊し、死に至らせる。並の人間なら即死だ。そうでなくとも戦闘の継続は不可能となる。
故にこの技を放った時点で、石丸は死は確定したはずだ。
だが、魔剣は大地のみを穿ち、地震を引き起こした。
人を斬った手応えはない。それを感じレオンハルトは目を見開いた。
「なに……!?」
そこに、石丸の姿は無かった。
周囲を見渡すようなことはしない。気配すら消えてしまったことは解っている。
完全にその場からいなくなってしまった。そのことを理解し、そして同時に気づいた。
石丸の背後に伏していた悪魔。月餅が地に伏した状態で僅かに口を動かしていた。
「……〝すたすた〟――」
それは、天志教独自の術の一つ。
帰り木と同じ効果であるそれは、拠点へと帰るためのもの。

それを知る由もないレオンハルトは、それを理解した上で息を入れた。
「……死の間際に石丸を逃したか」
随分と健気な事だ、とレオンハルトは月餅を見詰める。しかしどうにも解らないことがあり、レオンハルトは眉間に皺を寄せた。
「だが解せないな。何故、お前はここに残っている？　逃げられるのであれば一緒に逃げれば良かっただろう」
それが使えるのなら容易であったはずだ。それなのにそれをしなかったのは、既にそれを行うだけの余力が無かったのか、それとも、
「何か狙いでもあるのか？」
「……」
月餅は答えない。
それはそうだろう。月餅は、既に生気を失っている。生命力が無くなっている。
魂を複数持つ悪魔とはいえ、この状態は間違いなく死だ。己の剣を受けたことでやはり耐えきれなかったのだろうか、今から改めて殺さずとも既に死んでいる。
だが、
「……やる、か」
レオンハルトは月餅にゆっくりと近づいた。
念の為、首と心臓、頭部を断つ。
人間ではないのだ。念には念を入れるに越したことはない。石丸は後からでもどうとでも出来るが、月餅だけは必ず殺さなくてはならないのだ。
普通の人間でないだけに、万が一逃げられればどうなるかは未知数。こちらが知らない何かを用いて生き延びることだってあり得る。
故にレオンハルトは魔剣で月餅を斬り刻むことにした。死んでいるのなら死体を貶めることになると理解しながら、己の任務の為に――
「――!?」
だがそこで、レオンハルトは不意の光を浴びた。視界が明るく染ま

り、
……何だ!?
攻撃、ではない。仮に月餅の攻撃だとすれば無敵結界を抜ける可能性はあるがその様子はない。しかし警戒して身を引こうとした時だ。レオンハルトは身体に起きている事態に気がついた。
「っ、身体、が――」
身体が動かない。
それどころか、力が抜けてきている。
死体となった月餅と、自分を中心に発生した謎の現象の名を、レオンハルトは口にした。
「〝月餅の法〟、か……!」

死した月餅は、魔人により致命傷を受けてから死ぬ前にあることを為していた。
一つは、石丸を逃がすための〝すたすた〟の術。
そしてもう一つが――封印術だ。
魔人を封じ込めるための術法を、己の命を代償にして発動していた。
この戦いが始まった時にはもしもの時があれば使うことになると覚悟していたその術だが、使用には術者の生命力が持って行かれる。悪魔である月餅とて、万全の状態でも寿命を削られ、瀕死の状態であれば死は免れない。
それだけの術を、月餅は迷うこと無く発動していた。
それは偏に、石丸のためであった。
己を受け入れてくれた石丸という男のために、月餅は命を懸けた。
石丸という希望の為であれば命が無くなろうとも構わない。どの道数年も生きられないというのなら、ここで使うのが何よりも彼らの為になる。
だから躊躇わなかった。地獄へと魂が帰っていき、薄れゆく意識の中で月餅は想った。

……石丸様……お先に、失礼致します……。
あの主は、きっと自分のような悪魔であっても悲しんでくれるのだろう。そんな主だからこそ、失わせたくはない。
そしてもう一つ、月餅はかつての主についても謝罪した。
……申し訳ありません、プロキーネ様……。
魂集収の為の任務はある程度はこなせたが、これ以上成すことは出来ない。ある程度の布教は行ったが、後は自然の流れに任せることしか出来ないのだ。そのことと、主を鞍替えしたことに対する謝罪を行い、月餅は闇に沈んでいった。

魔人レオンハルトは、封印術を受けて汗を流していた。
悪魔月餅による封印術。その存在こそ知っていたが、
……これほどの物か……。
普通の封印術程度であれば己の力のみで強引に突破出来ると踏んでいたが、流石に苦しい。抜け出そうとしても力が上手く入らないのだ。第三階級悪魔が使う封印術とはやはり普通の物とは違う。
とはいえ、レオンハルトは慌てることはなかった。
これしきであれば何の問題にもならない。こんなものでは自分は止まらない。まだ道半ばもいいところなのだ。止まるわけにはいかない。
故にレオンハルトは、気を落ち着けてそれを解放した。
「――――」
瞬間、封印術は内側から崩壊した。

「ほらほら、早く行きますわよ！　きっとレオンハルト様が待っていますわ！」
「そうですよう始祖様！　早く行かないとレオンハルト様の格好良いところを見逃しちゃいます！」
それぞれの戦いを終えて合流した三体の使徒。キャロル、ハン

ティ、ペールは、レオンハルトの元を目指して戦場を闊歩していた。
既に前線の人間はほぼ駆逐し終わり、後は撤退した人間達を追討するのみである。故に殆ど戦うこともなく順調に使徒達は進んでいた。
ハイテンションで歩みを進める二人に対し、ハンティは肩を竦めて、
「……いや、早く行くならあたし一人で先に行ってるけど――」
「それは駄目ですの！」
「抜け駆けは駄目です！」
「――って、なるしねぇ……」
即座の応答が来た二人を見て呆れるようにハンティは息を吐く。そもそもレオンハルトの戦いなど飽きるほどに見ているというか体験している自分にしてみれば別に見たくもないものだ。
遅く行く必要もないが、かといって瞬間移動を使ってまで様子を見に行くほどでもない。心配だった使徒仲間二人とは合流したのだ。
それにレオンハルトがどうにかなるはずもない、とハンティは思う。人間如きでどうにか出来るなら、先に自分がどうにかしている、と思う。
……なんなら、石丸もあたしが相手に――。
と、それを考えるとそれはそれで愉しそうだな、と思ったところで三人の視界にレオンハルトの姿が見えた。
だが、その様子は妙であった。人間の姿はなく、そこには何かの死体があるだけ。そしてレオンハルトが不意にふらついて膝を突いたところで、
「……！　レオンハルト様！」
真っ先にキャロルが駆け出していった。それに続いてペールとハンティも行く。
「な、何があったんですか!?」
「……まさか――」
人間に致命傷でも負わされたのだろうか。真っ先にそれを思考するが、レオンハルトに近づいたところでそれが杞憂であることは分かった。

どうやら向こうも気づいたようで、
「……お前達か。大丈夫だったか？」
立ち上がり、いつもと同じ冷静な様子で言うレオンハルト。
だがキャロルは心配した様子で詰め寄り、
「レオンハルト様は大丈夫ですの!?」
「今、膝を突いていたみたいですけど……？」
ああ、とペールの問いにレオンハルトは頷き、
「……大したことはない。慣れないことをしたからな。少し疲れただけだ」
そう言うレオンハルトの表情には汗一つない。魔人なので当然だが、身体に傷もない。だからこそ逆に違和感を憶えるが、別段突っ込むことでもないと思ったハンティは息を吐きながら、
「……ま、そんなところだと思ったけどね。負けるわけないし」
「わたくしも信じていましたわ！　――ですが、お疲れなら直ぐに休みましょう！」
「それなら良かったですけど、お疲れならお弁当――はありませんけど、お菓子食べます？」
手のひらを返したように喜ぶ二人の使徒をハンティが半目で見る中、レオンハルトは頷いた。
「ああ、貰う。だが、先に仕事を終えるぞ」
ペールの問いを了承しながらも、レオンハルトは死体に近づいていく。そして異形の顔を覗かせたその首を剣で分かつと、左手でそれを持ち上げ、
「キャロル。適当な箱に詰めておけ」
「畏まりましたわ！」
その首をキャロルに投げて渡すと、即座にキャロルは懐から出した布にその首を包んでいく。それを見ながらペールが嫌そうな表情になって引き気味に言う。
「うわぁ……凄いグロテスクですねぇ……ひょっとしてこれが悪魔ですか？」
「……こんなもの、持って帰ってどうするのさ」

続くハンティの問いにレオンハルトは魔剣を収めながら、
「手土産として使う」
「……なるほどね」
それだけでハンティは勿論、他の二人も察した。
魔王ナイチサへの手土産。任務達成の証拠として使える上に、これを手渡すことで機嫌を取れる可能性もある。その辺りのことも考えているのだろう。だが、
「藤原石丸の方には逃げられたの？」
聞くとレオンハルトは眉をひそめ、沈みかけた闘気を滲ませて言った。
「――〝あいつ〟の首は次に持ち越しだ」
「……そう」
ハンティは頷くだけに留め、敢えてそれ以上聞くことはしなかった。というのもレオンハルトの全身からひしひしと戦意が伝わってくるからで、
……これ、触れたら爆発するね。
今までの経験上、分かる。レオンハルトが戦いで熱くなる寸前の気配だ。
今回は仕事として挑んだことと、相手が人間というのもあってそれはないと思っていたが、
……レオンハルトを熱くさせるくらいには、強いってことね……。
ザビエルを倒しているので考えてみれば当然だが、改めてそれを思い知った。これはもう、いよいよ次はレオンハルトも爆発してしまうだろう。そうなったらもう止まらない。周囲への被害を考えるくらいの理性があるが、今のレオンハルトが仮に全力の本気で暴れればどうなるのか。
そして石丸の強さは如何ほどなのか。それを思うとハンティは妙に震えてきて、
「……やっぱあたしもやりたいなぁ……」
誰にも聞こえないくらいの小声で呟いていると、
「――あら、藤吉郎さん」

キャロルの声に皆が視線を下に向けると、魔人ザビエルの使徒である藤吉郎が近寄ってきていた。
その手には白い紙を持ち、それをレオンハルトに向かって差し出そうと掲げている。レオンハルトがそれを受け取り、目を通すと、
「……これから追撃戦となるか」
「やっぱり、リー大将軍からですか」
その言葉に皆が察する。レオンハルトが手紙を懐にしまうと、そのまま踵を返して歩き出した。そして藤吉郎も自然に肩に乗ると、
「一度本陣に戻るぞ」
主の言葉にそれぞれが了承の言葉を返し、後ろから付いていく。指揮に戻るのだろう。となれば使徒である自分達も働かなければならない。
そしてふと、ペールが歩きながらハンティに向かって、
「悪魔って皆あんな姿なんですかね？　もしそうならカラーって――」
という嫌そうな顔をして放たれる疑問にハンティは即座に答えた。
「……いや、もっと人間っぽい見た目になるけどね。その場合」
カラーが天使か悪魔に転生する〝変化の時〟のことを言っているのだろうと思い、説明する。だがハンティも直接見たことあるわけではないため、多分そうであろうという予想だ。クリスタルを持つ悪魔はいるし、おそらく間違っていないだろう。
だがそう言うとペールは表情を一転させ、笑みを浮かべた
「あっ、なら良かったです。もし悪魔化したら不細工になるのかと思って心配しちゃいました。――まあもっとも、もし私に変化の時が来ても天使になってたでしょうけどねっ！」
「……」
瞬間、皆が無言になって思い思いの反応を見せた。レオンハルトが真顔になり、キャロルは笑顔のまま、ハンティも曖昧な笑みを浮かべる。しかし皆が一様に心の中で、
（いや、悪魔だろ）
「絶対悪魔になりますわ」

（悪魔だよねぇ……）
皆の思いが一つになった。

かくして、第二次キナニ平野の戦いは終結した。
参謀である月餅の戦死。そして多くの将の死によって士気が低下する中、藤原石丸は辛くも生き残った。
だが魔軍の総大将である魔人レオンハルトに敗北したことは多くの人に伝わり、そのことがまた人類の意志を挫いた。
多数の損害を出した人類軍の戦線は大きく後退し、藤原石丸も再び回復に追われている。
――人類軍の敗戦は、刻一刻と近づいていた。

ハンティの自覚

第二次キナニ平野の戦いから一ヶ月。
人類圏の都市に築かれた魔軍司令部では、今日も明るい声がそこかしこから響き渡っていた。
「ははは！　今日も快勝だな！」
「脆弱な人間共が、逆らうからこうなるんだ！」
多くの魔物兵が戦争の話を肴に食事や酒を口にしている。暗い雰囲気は無く、あるのはすでに戦勝したかのような空気だけだ。だからこそ、このように戦闘後であれば多少の羽目を外す。
しかし何人かの魔物隊長が魔物兵の元にやってきて、
「あまりやり過ぎるなよ。楽勝とはいえ、まだ終わっていないんだからな。そういうのは勝ってからだ」
「歯ごたえが無さすぎて緊張感が無くなりそうになるのは分かるけどな」
そう言いながらも軽く酒のボトルを傾けて中のアルコールを喉に通す。宴会とまではいかないが、軽い息抜きがてらに旨い料理と酒を味わう。
そして遠慮することもない。何しろ今口にしているものの殆どが、人間の街から奪ってきた食料であるからだ。既に大陸南側の部隊や都市は陥落しており、戦線に余裕が出来たところ。残るは東側のみであり、哨戒や斥候、見張りに割く人員も少なくなる。となれば一度前線に出て交代、後方に下がった部隊に対しては、ある程度の騒ぎも許容される。数日経てば、もしくは相手側に動きがあればこちらも動くことになるが、それまでであれば問題ない。働く時に働き、休む時は休む。レオンハルト軍のポリシーのようなものだ。
ゆえに魔物兵も承知している。魔物隊長の注意を受けて、酒も程々にしながらも、雑談はやはり戦争の話題になる。
「それにしても、あとどのくらいで終わるかね？」
その問いの主語は、当然この戦争のこと。流れとして理解している魔物兵達はその問いを聞いて数秒の思考の後に自分の思う答えを口

にする。
「あー……後1ヶ月くらいで終わったら嬉しいけどなぁ。さすがに3、4ヶ月は掛かるんじゃねぇか？」
「確かに。俺も早く街に帰りたいな……」
「マジか？　俺はもうちょっと暴れたいけどな。これほどデカイ戦いでしかも勝ち戦なら手柄も取れるかもだし」
「わかるぜ。戦いを楽しむのもそうけど、出世を考えるならここで上の目に止まるような働きぶりを見せなきゃな」
　もうちょっと暴れたい派の魔物兵の発言に早く街に帰りたい派の魔物兵達が〝なるほど〟と、得心したように頷く。とはいえ、と一体の魔物兵が、
「そこまで長引かない気もするな。敵の大将を討ち取ったら終わるだろうし」
　その言葉を聞いて、多少場の空気が引き締まる。〝敵の大将〟というのは人間とはいえ魔物兵達にとっても恐れる相手でもあるのだ。
「……藤原石丸、だっけか。あのザビエル様を倒したんだよな……」
　一体の魔物兵が身を軽く震わせながら言う。一介の魔物兵でしかない彼らにとって、遥かに強大な存在である魔人、その中でも上位の存在であったザビエルを倒した人間というのは魔人と変わらない恐怖を与えてくる。
　だがその恐怖はある存在のおかげで緩和されるのだ。そのため続く言葉を放つことも出来る。それは、
「でもレオンハルト様は余裕だったらしいし、そこまで怖がることもないだろ」
「……だな。最近は戦場にも出てこないし、出くわす可能性も低いだろ。もし出てきてもレオンハルト様が何とかしてくれる」
　魔物兵達は口々に自分達の上に敷いている魔人レオンハルトの名を出す。
　最強の魔人という肩書とそれに相応しい戦い振りを目撃した魔物兵達にとって、レオンハルトへの信頼は極限まで高まっている。強者への畏怖と服従は力を何よりも重んじる魔物社会では至極当たり前

のこと。多少強いくらいでは下剋上も目論むが、隔絶とした差があればそんなことを考えもしない。
そうして不安を霞ませた魔物兵達は再びボトルを傾けようとして、
「っ！」
遠くから響いてきた不意の轟音に揃って身を跳ねさせた。
それは巨大な存在が力を放った鳴動だ。
だからこそ魔物兵達はそれで動くことはなく、代わりに少し小さな声で、
「……それよかレオンハルト様の戦闘に巻き込まれないことを考えた方がいいだろ」
「……だな。周りに構わず戦う方じゃないとはいえ、前の地震とかも普通に危なかったからな……」
はぁ、と魔物兵達は夜空を見上げて、少し離れた場所にいるであろう魔人を思い嘆息した。

ハンティは、背中で大地を感じていた。
視界には木々、そして星空。耳には風が歯を揺らす音や、水の流れが聴こえる。自然の中で生きる種族であったハンティにとっては馴染みある雰囲気であり、落ち着ける場所だ。
しかし、全身に感じる痛みと気怠さ、そして心にある気持ちは、落ち着きとは程遠いものである。
その原因が、足音と共に近づいてきた。
「まさかぶっ倒れるまでやるとはな。お前にしては珍しい。何か心境の変化でもあったか？」
こちらを見下ろしながら告げる声に、ハンティは意地で背中を起こしてやってきた男に視線を向けた。
そこには先程まで月一の模擬戦で争っていたレオンハルトが魔剣を手に持ち立っている。そしてその問いに対しハンティは眉根を寄せながら答える。
「……別に何もないけど。そろそろ一本くらい取ってやろうと思って

たけどね」
「……そうか。少し戦い方が苛烈になった気もしたが……」
「……それ、あんたが言うの？」
一度昂ぶったら苛烈どころか周囲に被害を与えるほどに暴れ回る戦闘狂に言われたくはない。そう思っての事だったが、今回は何故かレオンハルトも眉根をひそめてこちらを見ると、
「いや、お前も最近は酷いだろ」
「は？　何言ってんの。別に普通だけど」
心外だとそういう意味を込めて告げるがレオンハルトの表情は変わらず呆れるように息を入れた後に、
「……気づいてないのか？　お前、戦っている間ずっと笑ってるだろうが」
「……笑ってないけど？」
視線を逸らして言う。自覚があるけど認めたくない気持ちの現れだ。特にレオンハルトの前では影響されてるみたいでちょっと癪だし。
だがレオンハルトはこちらを半目で見下ろすと続けて、
「今も笑ってるのにか？」
そんなことを告げてきた。
ハンティはそこでドキッとしてしまい、
「はぁ!?　そんなわけ――」
と、自分の口元に触れてみたが別に笑っているということもなく、
「ああ、今は別に笑ってないな。……まんまと引っかかった使徒がいるが」
「っ……！」
こちらを見て口元の片方を吊り上げたレオンハルトを見て、ハンティはそこで嵌められたことに気づく。おそらくこちらの表情が動いたのを見て更に笑みを深めたレオンハルトが、
「くく、そうか。お前もとうとう俺と戦うのが愉しくなってきたんだな。しかもそれを隠そうとするとは……何だ、恥ずかしいのか？　そう考えるとお前にも可愛いところがあるじゃないか――」

「〜〜っ！　雷撃!!」
我慢できず反射的に雷撃をレオンハルト向けて放つ。
しかし何の仕掛けもない魔法一つ。仮に無敵結界が無かろうともその程度が通じるはずもない。あっさりと魔剣に断ち切られるとレオンハルトが更に続けて、
「おいおい、別にそこまで恥ずかしがることもないだろう。使徒としてもドラゴンとしても好戦的なのは普通だし、俺の使徒なら尚更だ」
「く……そうかもだけど……！」
かもしれないが、何度も言うがそれを認めるのは微妙な気分になる。
しかし、
「……そういえば新技をお前に受けてもらおうと思ったんだが――」
「！　へぇ……？」
それを聞いて最初に湧き上がったのは期待と愉しみだ。
目を輝かせ、口角を上げたところで、
「そんなものはない。……というか気づけ」
「えっ、あ……」
ないことに残念を感じ、そして直ぐに気づく。
……またあたし、笑って……。
しかも明らかに期待を滲ませたような表情になってしまった。これはもう言い逃れのしようもない。そして何より、
「……はぁ〜〜〜……」
――自分の心は誤魔化せない。
大きく息を吐くと、ハンティは頭を抱えて蹲り、
「あたし、もう駄目だ……」
「……そこまで落ち込むか？」
微妙な表情で言うレオンハルトの言葉にも顔を上げず、
「……いつからこうなって……いや、考えても遅い。あたしはもう、レオンハルトと同じ戦いを愉しむ戦闘狂になってるんだ……」
ぶつぶつと呟き、地面を見る。きっと今の自分は死んだ目をしているのだろう。レオンハルトもこちらに気を使っているのか、窺うよう

に、
「……ま、まあ悪いことではないだろ。嫌々でやるよりかは……」
「……あんたは良いよね。最初っからそうだし……」
「いや、俺も別に、最初っからそうだったかと言われると違うんだが……」
何気に初めて聞くことだ。そうなのか、と内心で頷く。ある意味で慰めになるが、それだけでは足りず、
……まあ、ドラゴンの本能だし……。
明らかに大本の原因がそっちだと思うし、そう考えればそこまでマイナスにも感じない。ゆえにこれからはドラゴン的な戦闘狂なのだとそう思うことにして、
「……はは。そう考えると楽になれそう」
一度認めると今まで胸にあったものがスッと消えて軽くなる。
そして代わりに、戦闘への意欲が増してきて、
「……レオンハルト。次に戦うのっていつだっけ？」
「次に戦うの？　……人間とのか？」
頷く。その予定を聞いた。
するとレオンハルトは少し間を置いた後に、
「……何もなければ次の戦いは三日後だ」
三日後。藤原家との戦いは三日後となる。
そのことも知っていたはずだが、改めて聞いた。予定が変わることもあるが、それよりも、
「……なら、明日か明後日まではやれるね」
「！」
告げた言葉にレオンハルトの目が驚きに見開かれる。そして直ぐに気を取り直して、
「……まだやる気なのか？　約束は月一の筈だが――」
使徒になった際の月一で戦う約束を持ち出してくるが、ハンティはそれに不敵な笑みで答える。
「別にいいでしょ。最低限月一ってことだし。……それに、まだ一回目も終わってないよ？」

戦意を滾らせ、再び立ち上がって剣を構える。戦いはまだ終わっていないと姿勢で訴えかけた。
だが、にもかかわらずレオンハルトは迷ったように渋い顔のままこちらを見詰めている。何を考えているか解らないが、らしくない、と思う。難しい立場で考えることもあるのかもしれないが、
「レオンハルトだって溜まってるでしょ？　少しは抜いておいたほうが良くない？」
「……」
レオンハルトは無言となる。だがそのはずだ。
何しろレオンハルトが愉しみとしていた藤原石丸との戦い。その戦いは前回は不完全燃焼で終わり、それから一度として石丸は戦場に現れていない。
期待も鬱憤も相当に溜まっているはずだ。元より強い相手との戦いが無いとストレスを感じるのがレオンハルトであり、適度に解消することを望んでいる。自分も元々はレオンハルトの相手をするために使徒になったのだ。それを思えば自分の行動は使徒として間違っていない。
「これ以上我慢するとイライラしてしょうがないでしょ？　三日後に戦えるかも微妙だし、調整は必要だよね」
そして何より、自分が強い相手と戦いたいのだ。
どう頼んでも石丸との戦いを許可してくれるわけがないし、それ自体は納得している。別に逆らう気もない。
だがレオンハルトの相手はそもそもの自分の役目であり、義務なのだ。妨げるものは何もない。存分に戦うことが出来る。
故に、
「……いいのか？」
レオンハルトが静かな声で言う。
その身から再び闘気を滲ませ、
「悪いが、気遣う余裕はあまりねぇぞ？」
あまり見せることのない荒々しい口調で、確認を取ってくる。
つまりは、愉しむための戦闘をここである程度解放するということ

だ。
ハンティは思う。普段、魔人として行動し、戦うレオンハルトも圧倒的で畏怖されるべきものだが、
……こっちの方が、楽しいんだよね……！
戦闘狂となったレオンハルトの方も恐ろしいと。
ハンティとしては模擬戦でこの状態を相手にすることが多いので、とても馴染み深い。
だからこそ、ハンティはレオンハルトの確認に笑みで答えた。
「いいから早くやろうよ……！」
その返事に、レオンハルトの笑みが深くなる。魔剣を構え、
「……戦いの準備や最終確認もあるから明日までだ。だから、それまでは倒れてくれるなよ？」
「あんたこそ、途中で萎えるんじゃないよ！」
「ハハッ、言うじゃねぇか！　――なら、愉しませてもらうぜッ!!」
ビリビリと大気ごと身体を震わせるような気迫に、ハンティは引かずに突っ込んでいった。
「こっちこそ！　愉しませてもらうからッ！」
魔人レオンハルトとその使徒であるハンティ。
二人の模擬戦が星空の下で始まり、お互いに鬱憤や色んなものを吐き出すように気兼ねない戦いを愉しむ。
ハンティは石丸とも戦えず、自分の湧き出る欲求を解消するため。
レオンハルトはいずれ来る石丸との戦いへの不安や不満、自分の中に溜まった期待や戦いの熱を解消するため。
だが、二人は――否、魔軍の者達は知らなかった。
その藤原石丸が現在、ある苦しみに囚われていることに。
石丸を苦しめているものの名。それは――〝挫折〟であった。

初めての挫折

大陸南東部。
現在の魔軍との最前線であるその一帯よりも、更に東側に行ったところにある都市が人類軍の拠点となっていた。
「――これ以上どうすると言うのだ!!」
ばん、と前線司令部に机を叩く音が響き渡る。手を打ち付け、怒声に近い声を上げたのは前線の軍を預かる一人の将軍だ。
その言葉に即座に応答出来るものは誰もいない。人類軍及び藤原家の作戦指揮を務める菅原ミッチーも、居並ぶ各大名、大陸諸国の参謀らも押し黙る。
彼らの様相は多様なものであったが、大きく二つに分かれる。
一つは断固たる意志を秘めた眼光を鋭く藤原家とその麾下の面々に浴びせる者達。今しがた声を上げた将軍や大陸諸国の者達がこれに属する。
もう一つは藤原家を中心としたＪＡＰＡＮの者達。彼らは苦渋に満ちた表情のまま異人達の視線を受け止め続ける。
だが両者とも、内心が不安と怒りによって荒れ狂っていることに違いはなかった。
「……先の戦いの批判でありましたら甘んじて受け止める所存でありますが」
そんな中、最初に声を発したのはやはり菅原ミッチー。
空席が目立つ議場の中で、上座に座ったまま矢面に立っている人物だ。その横には主君は居らず、同じく主君を補佐していた参謀の姿もない。そのことに何を思うか、いつもの飄々とした様子は鳴りを潜め、静かに応対する。
反対に声を大にして言う将軍だが、彼はミッチーの言葉に否を突きつけた。
「違う！　作戦の事などどうでもいい！　これ以上はもう戦えんと申しているのだ！」

再度机が叩かれる。その机の上には大陸の地図が広げられており、事細かに戦況を示すラインや駒が置かれている。
それを見ればここ二ヶ月の魔軍との戦闘で、人類軍が如何に後退しているかは明らかであった。
戦争が始まる前の人類圏と魔物界の境界線。大陸中央に設けられ、開戦時にはほぼ中央にて拮抗していたはずの防衛戦は既に大陸東部にまで下げられている。これより押し込まれてしまえば後はＪＡＰＡＮに撤退するしかない。
そしてその未来は時間の問題。後二、三回か悪ければ一度の戦闘で前線は再び崩壊する。そうなればまたしても大きく後退するしかない。これより後ろに有用な防衛拠点はＪＡＰＡＮくらいしかないのだ。
だからこそ、大陸軍としてはここが分水嶺であり、そうなる前に行動を起こしたい。
「我々は本国に帰らせて貰う！　これ以上下がってしまえばシナ海に辿り着くことすら困難なのだ！」
「……ならば敗北を認めると？」
おうとも、と将軍ははっきりとその言葉を認めた。
「もう勝ち目などない。それは誰しもが解っているだろう。開戦当初程の兵力も士気もなく、おまけに帝殿は戦いに参加するどころか、軍議の場にすら姿を見せん。これでどうやって勝てと言うのか！」
「それは――」
応じはしたが続く言葉が出ないミッチーに対し、将軍は責めるように言葉を続けた。
「戦う度に兵を減らされては堪ったものではないのだ！　兵站だけ余裕があっても意味がない！」
戦死者が予想以上に出ているため、魔軍に略奪されたものを差し引いてなお食料などの物資が余っているが、将軍が言うように肝心の兵がいないのでは意味がない。
魔軍は強大かつ膨大。魔物兵の強さはただでさえ人間の兵士の二倍以上の強さを持つというのに、数でも負けている。それでも基本に

忠実に攻めてくる魔軍に対して戦術的な有利を取れることは一時的かつ局所的ではあるがある。しかしそれでもどうにもならないほどの数の差。力の差。物量という暴力の前には一時的な戦術的有利など意味を成さないのだ。

唯一それを覆すことが出来るとすれば敵将を討ち取ってしまうことだが、人類軍の最強戦力である藤原石丸は魔人レオンハルトに手も足も出ず、主だった将達の殆どが使徒や大将軍に討ち取られてしまった。

魔人が無理なら被害を抑えるためにもせめて敵の使徒の一人くらい討ち取ってほしいものだが、その大本命である藤原石丸は戦場に出ない。残ったのは妖怪王である黒部や菅原ミッチーくらいのもの。もしくは、

「……」

藤原家の面々が並ぶ中にいる一人の女武者に、将軍はちらりと視線を向ける。

無言のまま何を考えているのか押し黙り、右のみとなった腕で刀を抱えているのは源頼光。その右目の眼光は刀にのみ向けられており、視線を向けられてもピクリとも反応しない。使徒との戦いで辛うじて生き残り、左手と左目を失った彼女だが、それでもなお藤原家の主力には違いなかった。もっとも手負いとなった今では使徒や大将軍に拮抗出来はしない。可能性があるとすれば黒部くらいのものだ。ミッチーは作戦指揮で亡くなった月餅の穴を埋めるべく奔走しているし、頼光はご覧の有様。後はやはりここにはいない男になるが、それも期待出来ないとなると、

「……これ以上は生き残るための戦いだ」

と、居並ぶ面々の内、大陸側に属する者の一人がそう口にした。褐色の肌に緑色の髪、体中に紋様が描かれたその者は、大陸南側に住むムシ使いの一族の代表だ。彼は静かな声で将軍の言葉に同意する。

「我々とて最初から負ける気で戦っているわけではない。それは大昔から変わらないが、それでも負けが決まれば後は民を生かす為に戦うものだ」

それは大陸諸国にとっては共通と言っていい考えだ。魔軍との到底勝ち目のない戦争、それに抵抗するのは戦う術のない民の犠牲を少しでも減らすため。政治的な事を言えば、無抵抗でいては国としての体裁が保てないというのもあるが、戦うことで民の被害を減らせるのは事実だ。

多くの兵が死ぬことを考えるとその差は誤差かもしれないが、それでも多くの民間人は兵が戦っている間に避難し、命を拾うことが出来る。魔軍が国を滅ぼし尽くす事例がそれほど多くないことと、必要以上に追ってこないからこそだが、人間としてはそこに希望を見出すしかないのが現実だ。

「兵を失い過ぎれば国元の民を守る者がいなくなる。だからこそ、我々はここで降りさせてもらう」

「……負ければ人類が滅ぼされるとは考えないので？　これほどの攻勢は今までに例を見ないはずでありますが」

その問いかけの答えを解っていながら、しかしミッチーは口にせざるを得なかった。ＪＡＰＡＮの政治の代表としてはここで引き下がることは出来ない。

だが予想通りと言うべきか、大陸諸国からは反論の声が上がった。一度は頷き、

「確かに歴史上、これほど大規模な魔軍の攻勢はありませんし、その危惧も全くないとは言いませんが……かといって勝つことが出来るかと言われればそれは無理でしょう」

「……なればこそ、今までどおり魔軍が程々で撤退することを期待すると？」

「無論だ。そちらの方が可能性が高い」

その保証はどこにもないが、歴史的にはその可能性の方が高いことは明らかであり、実際にそれは正しかった。将の一人が続いて口にする。

「それに、だ。魔軍は藤原家を狙っており、他の国軍に対しては執着していない疑いもある」

「……確定ではないでしょう」

内心を隠したが、そう言うのが精一杯でもあった。事実、第二次キナニ平野の戦いで離散し、大陸南部の本国に帰投した軍を魔軍は放置し、東側に逃げる本隊――藤原家やＪＡＰＡＮの軍勢だけを狙っているように見えている。

ミッチー等は魔軍の離間工作ではないかと考えているが、それも当たっていた。

彼らは知る由もないが、魔軍が人類を滅ぼし尽くすつもりではないことは事実であり、ＪＡＰＡＮの軍勢――正確には藤原石丸率いる藤原家を滅ぼすための戦争であることが、この戦争の表向きの真実である。

そしてこの状況を利用し、分かりやすく大陸の人間を見逃したり、敢えて大陸南部の国に対しての退路を用意して人類軍の離間を誘っているのがレオンハルトの策であることに間違いはない。

今は、その策が見事に嵌っている状況であった。ＪＡＰＡＮの面々は大陸諸国が離散していくのを苦々しく思っても止められはしない。義に訴えかける、そもそも属国であることを主張する。方策や反論は色々あり、口にもしたがそれらは聞き入れられることはない。

平時であれば従わぬ場合には制裁、あるいは戦争に発展することもある上、藤原石丸率いる藤原家の強さは恐ろしく勝てるものではないことは皆が知っている。

だがそれ以上に恐ろしい魔軍という存在に、藤原家は滅ぼされようとしている。故に中にはそのことを内心でほくそ笑む者すらいた。人類を一度は統一されはしたが、藤原石丸と藤原家さえいなくなれば魔軍がいなくなった後に再び自国が盛り返すことが出来ると。

そして今この場で離散を防ぐ力も藤原家にはない。そもそもこの状況では上から命令してもさらなる離散を招く可能性がある。大陸東部の国を中心に残ってくれる国もまだいるが、それも時間の問題だろう。これ以上後退するようなことがあれば藤原家がＪＡＰＡＮに撤退するのに合わせて彼らも離れていく。

その未来を脳裏に想像しながら、ミッチーは議場から出ていく者達を黙って見送ることしか出来なかった。

「……せめて石丸殿がいれば……」
いや、それでもこの流れを止めることは出来ない。
月餅や坂上田村麻呂、多くの藤原家の有力家臣も亡くなり、このままいけば敗北も遠い未来ではない中、ミッチーが出来るのは可能な限りの時間稼ぎを行うべく、次の戦闘での策を考えることだけであった。

前線の拠点にて軍議が行われている頃。
その拠点よりも少し東部に下がった都市に建てられたとある屋敷に、一人の女性がいた。
「……」
言葉を発さず沈鬱な表情で庭先にいる一人の男を見るのは石丸の妻である春姫だ。
故に視線の先にいる男は精悍な顔つきをした夫、藤原石丸であり、二人は第二次キナニ平野の戦い以後、ずっとこの屋敷に籠もっている。
正確には石丸が屋敷に籠もり、春姫はそんな石丸を世話するために付いて来たのだ。
「っ！　っ！」
そして石丸は庭先にてひたすらに剣を振るっていた。
戦場にも出ず軍議にも出ず、それらの結果は人伝に聞くのみ。会うことが許されているのは近しい者や世話のために屋敷に務める数名のみで、後は面会を禁じている。
全ては修行の為であり、毎日のように剣だけを振る日々を送っている。
駆られる様に剣に打ち込んでおり、起きてから寝るまでの時間を全て剣に費やし、春姫が言わなければ食事も摂らないどころか寝ることすら忘れる。修行漬けの毎日だ。
それは偏に魔人レオンハルトに勝つためである。それは春姫や近しい者達には分かっている。一見すれば自分に求められている使命

を果たさんとするべく努力しているように見えるし、そのことに間違いはない。
しかし春姫には石丸に起こった変化に胸のざわつきを隠せないでいた。
「……っ！」
剣を振る石丸。その姿は以前と比べて――覇気がない。
それはおそらく春姫でなければ解らないような微細な違い。言われれば解る者もいるだろうが、幼き頃から石丸を見ていた春姫は直ぐにそれに気づいた。
石丸は剣の修行の際でも、どこか喜悦を帯びたような轟々とした気を漂わせていたものだ。
しかし今はどこか勢いがなく、その剣のキレはいまいちであるように春姫には見えた。
技術的には変わらない、ともすれば進歩しているかもしれない。その辺りの剣の技術に関しては春姫が詳しく口に出せるものではない。
だが――どうしてもその剣に空虚なものを感じざるを得ないのだ。
まるで嫌々やっているような、もしくは使命感のみで動いているような、そんなイメージだ。
……引き摺っているのでしょうか。
今まで敗北を知らなかった石丸が、初めてそれを経験した。
坂上田村麻呂や月餅、その他多くの仲間の死と共に敗北を痛感した。ゆえに引きずるのも無理はないとは思う。
しかし敗北はともかく、仲間の死であれば別に初めてというわけでもない。ＪＡＰＡＮの武家――否、武家でなくとも民であれば身内や隣人の死は珍しいことではない。ＪＡＰＡＮは危険な土地であり、一度の地震で何万と死ぬだけでなく、鬼や妖怪の襲撃や、身内同士で殺し合うことだってあるのだ。それは石丸も分かっているはず。
やはり近しいものが死んだことが堪えたのだろう。加えて負けたことも。
……ひょっとしたら、内心では諦めて……。
そう思い、しかし直ぐにその考えを振り払った。そうは思いたくな

いのだ。
あの藤原石丸が諦めるところを見たくはないし、そう思ってほしくない。
だが同時にそれは自分達の我儘かもしれないと、春姫は思う。
石丸とて一人の人間に過ぎない。魔人相手に負けたからといって責められる謂れはないはずである。
しかし彼には立場がある。帝として、人類の長としての多くの者を導く立場と責任がある。その立場が、石丸をギリギリのところで留めているのかもしれない。もしその立場がなければ、早々に諦めて逃げ出すことも叶うはずである。負けることを察したところで、そのことを口にすることも許されるだろう。
だが、人類最強という肩書が、帝という立場から来る周囲からの重圧が彼を苦しめてやまない。
春姫の想像でしかないものの、あながち的外れでもないだろうと春姫は思っていた。
そしてもしそうなら、彼をその苦しみから解放するのがいいのかもしれない。
「……母上ー」
「……どうしたの？」
庭先の縁側にてごろごろしていたももが不意に声を掛けてくる。退屈しているような気怠げな様子だが、それも致し方ないだろう。かれこれ一ヶ月はこの調子だ。実の子供の声であっても今の石丸には反応している余裕がない。最初は石丸の剣の修行に騒いでいたが、代わり映えしない一日に飽きて気ままに過ごすようになった。勉強などはさせているが、それ以外は好きにさせている。最近では庭先で石を的に当てる遊びをしている。妙に才能があるのか、百発百中だと自慢していた。そんなももが、遊びをやめて近づいてくると、
「父上はいつまで修行するのですか？」
「……そうですね……」
即答は出来ない。というかこちらが石丸に聞きたいことだ。
だが、長くはないと春姫は思う。後数回ほど魔軍と戦い負ければ、

ＪＡＰＡＮまで撤退することになるだろう。魔軍がどこまで追いかけてくるかは不明だが、戦いが続くにしろ終わるにしろ、石丸の修行の日々は終わりを告げることになる。撤退する前に致命的に敗北してしまえば散り散りになって逃げるしかなくなるだろう。そうなれば石丸も戦わざるを得ない。

……どうすれば良いのでしょうね……。

不安に思うのは春姫も同じだ。屋敷に籠もっていても戦況は聞いている。このままでは敗北は必至であり、自分達の身も危ういだろう。自分はともかく、ももには生き延びてほしいが果たしてそれが叶うのか。そして、石丸はどうなるのか。

考えて、春姫は曖昧な笑みを浮かべた。

「……ごめんね。それは母にも解らないことなの」

「……そうなんだ」

少し間を置いてももが頷く。そして考えるような素振りを見せた後に、

「母上！　お願いしたいことがあります！」

「？　どうしたの？　改まって……」

勢いよく顔を上げて笑みを浮かべたももに何故か嫌な予感を感じつつ尋ねる。すると案の定と言うべきか、笑顔でとんでもないことを宣った。

「私も戦う術が欲しいですっ！」

「……えっ」

「そして魔物をボコボコにしてやるのですっ！」

思わず間の抜けた声を発し、口を半開きにさせたまま固まる。

……た、戦う術って……さ、さすがに早すぎなのでは……!?

何となくだが言おうとしていることは解らないでもないが、まだ小さな子供であるももには早すぎる気もするし、そうでなくとも危ないことは出来ればしてほしくはない。

だが武家としては一応の理解はあるので、危ないことをするなという否定は控える。代わりに前者を口にしようと一息ついて、

「……まだ早いから駄目です」

「でも父上は私よりも幼い頃に剣を振るっていたと……」
痛いところを突かれた。いや、それは確かにそうなのだが、
「……石丸様は特別です。なのでそのお願いは認めることは出来ません」
「それはずるいですっ！　父上がおーけーなら私もおーけーでいいではありませんか！」
「駄目なものは駄目です」
微妙に最近の言葉を使いつつ言うももにぴしゃりと否を突きつける。不満そうに頬を膨らませたももだが、この言い分だとその気持ちも解らないではないが、武家にとって親や当主の言いつけは絶対だ。それを破りまくった石丸や自分が言えることではないかもしれないが、それはそれ。親の言うことが絶対です。
「……そもそも何故そんなことを。今から鍛えてももに出来ることは何もないですよ？」
「……出来ることならありますぞ！」
と、ももは縁側に立って不敵な笑みを浮かべて言った。
「私が総大将となって民を導いてみせますっ！」
「……！　それは――」
ももが放ったその言葉の意味を少し吟味する。そして出てきた答えは、
「……父の代わりになりたいのですか？」
「ふはは！　そうですぞ！　今の父上は軍議にも出ないにーと状態ですし、私が代わりに帝になるのですっ！　下剋上しますっ！」
「え、ええー……？」
下剋上下剋上とリズム良く言うももに困惑してしまう。というか石丸に対して酷い言い草だ。聞こえていないだろうかと心配になる。距離もあるし、修行中の集中力を考えると周囲の音なんて聞いてないだろうけど。しかしこの発言は、
……幼い頃の石丸様みたいなことを……。
やはり血は争えないなぁ、と染み染み思う。将来石丸みたいに滅茶苦茶になったらどうしよう。嫁の貰い手がなくなったら困るなぁと

も。
そんなことを考えていると自分の中で不意に、
「……あっ――」
ふと思いつく。
確かに、石丸が引きこもっていることで軍議が荒れたり、士気が下がったりと色々と問題が出ている。ミッチーらがそれを解決しようと何とか奔走しているが厳しい状況が続いているのが現状だ。
それを少しでも解決出来ればとこちらも知恵を出し合っていたが、
「……もも。支度をしますよ」
「！　お出かけですか⁉」
飛び上がらんばかりに身体を起こし目を輝かせるもも。最近は屋敷から出ていなかったから嬉しいのだろう。その問いに静かに頷き、
「ええ。ちょっと良いことを思いつきましたから」
そう言って、屋敷の奥に支度をしようとももを連れて引っ込む。頭の中では既にこの後の行動についての思案が巡っており、
……確か蔵に……あっ、その前に一応ミッチーさんに相談して――。
思考しながら支度を終えた春姫とももは直ぐ様屋敷を出て目的地へと向かっていった。

前線の魔軍司令部――そこに女性の声が響いた。
「――そろそろ年越しですよーう！」
軍議をしようと集まったレオンハルト軍の重鎮達は一様にその発言を聞いたが――誰も反応することなくシーンと部屋が静まり返る。
そのことに発言をした張本人。魔人レオンハルトの使徒であるペールは首を傾げて不満そうになる。
「ちょっとちょっと！　皆さんノリが悪いですよう！　年末くらいはもうちょっと盛り上がってもいいと思います！　レオンハルト様もそう思いますよねっ⁉」
「……今が戦時中で、軍議の真っ最中じゃなければな」

静かにそう声に出したのは占領した都市の一際豪華な屋敷の一室。その上座に一人座る魔人レオンハルトだ。
金髪で灼眼の鋭い瞳をした魔人筆頭兼魔軍参謀。その声を聞けば多くの魔物がひれ伏す最強の魔人は、しかし呆れたように息を吐いて自らの使徒を見た。
「よく見ろ。年末だからと騒いでいるのはお前だけだ。お前以外は――」
「も～い～くつ寝ーるとー、お正月～♪　ですわー！」
「……」
よく見るとレオンハルトの第一使徒であるキャロルが、その金色のツインテールを揺らしながらご機嫌な様子で歌い始めていた。
その手には年明けに遊ぶつもりなのだろうか、独楽だったり凧だったり色んな遊び道具がある。レオンハルトが発言した直後のその様子に居並ぶ魔物将軍達は気まずそうに口を噤む。ツッコミを入れるようなことはさすがにしない。
だがそのような遠慮をしないペールは半目で、
「……キャロル先輩は楽しそうに騒いでますよ？」
「……おい、キャロル」
ペールから視線を逸らしてキャロルを呼ぶと彼女は即座の反応を見せてこちらに振り向いた。
「はい、レオンハルト様！　どうかしましたか!?」
レオンハルトは眼を細め、いつものことながら自らの使徒の行動に呆れつつ言葉を続けた。
「どうかしましたか？　じゃない。お前、忘れてるんじゃないのか？」
「え、忘れ――ハッ!?」
そこで何かに気づいたようにキャロルが文字通りハッとする。ようやく本筋に戻れるなとレオンハルトが息を入れると、
「年越し蕎麦の手配を忘れていましたわ！　申し訳ありませんの！今直ぐ手配致します！」
「そうだ……年越し蕎麦を忘れるなど愚行の極み。万死に値する――って、そんなわけあるか！」

「あれ？　違いましたの？」
「レオンハルト様がノリツッコミした……」
　キャロルとレオンハルトのやり取りに魔物将軍らが内心での呟きを小声で口にしているとキャロルが続けて残念そうな様子で、
「なら年越し蕎麦は無しですの……？　それは残念ですわー……」
「そうじゃない。それは別に良いことだ。ちゃんと手配しろ」
　真顔になって言うレオンハルト。普段よりもテンションが高い気がするのはやはり年末だから微妙に盛り上がっているのだろうか。意外とイベントが好きで割とこだわるのはレオンハルト軍の古参の面々にはよく知られた事実である。
　ともあれそういうことではないと、
「そういえば遠征中ですし、兵達の分も手配しますか？　街にいないのでこのままでは皆年越し蕎麦を逃してしまうことになりますの」
「む……それは確かに……」
　キャロルの言葉でレオンハルトが思考をそちらに向ける。確かに、平時であれば街では年末年始はイベントがあったり、風物詩として蕎麦を食べたり、餅を突いたりするものだが遠征中ではそれは出来ない。
　戦争中とはいえ一日、二日の息抜きとしてちょっとした宴会を開くくらいは考えていたが、他に考えることが多くて忘れていた。これを忘れてしまっていれば兵から不評不満が出るかもしれなかったので良い機会だったかもしれない。とはいえ、
「それは良いが、今から手配して間に合うのかが肝だな……輸送にも兵を割いてはいるが、追加で物資を運ぶとなると追加の人員も必要となる。問題はないだろうが、前線からこれ以上の兵を割くのは……」
「そうですわね……この際ですし、その輸送分だけケッセルリンク様やガルティア様に頼んでみてはどうでしょう？　戦争に参加するわけではないので手を貸したことにはなりませんわ！」
「……良案だな。まあ、深く考えることでもない。そうするとしよう。手配は任せるぞ」
「承りましたわー！」

そうして年末年始に関する議題が終わる。すると、横から声が飛んだ。
「いやいやいや、そうじゃないでしょうが。何普通にゆるいこと話してんのよ」
と、半目で口にしたのはレオンハルトの使徒である元黒髪のカラーであるハンティだ。真面目な彼女は乗っかることもせずに軌道修正しようとツッコミを入れる。
「次の作戦についての軍議でしょ？　年末の事については後からでもいいでしょうに」
「その通りです！　もう少し緊張感を持ちましょう！」
「……元はと言えばあんたのせいでしょうが！」
「あんっ、始祖様ってば手厳しいー！」
ツッコミを入れられたペールがからかうような口調で言ったが、ハンティが魔法を出すような素振りを見せると手のひらを返したように直ぐに黙った。
すると居並ぶ魔物将軍の前にいた一際大きな魔物、魔物大将軍リーが何事もなかったかのように、
「しかし推移は順調。仮にこのまま素直に攻勢を続けていても問題無く勝てるでしょう。故に問題は、どれだけ損害を減らせるか。そしてどれだけ早期に終わらせられるかですな」
「さすがはリーさんですね……滅茶苦茶自然に話を戻しましたよ」
「むっ……リー大将軍には負けませんわ！　わたくしの方が自然に話を戻せますわよ！　勝負ですわ！」
「えっ……いや、あの……」
ペールに煽られてキャロルがビシッと指をリー大将軍に向かって突きつけた。困惑したように反応に迷うリーにハンティが口元を引き攣らせ、
「あーもう！　話が進まないから余計な茶々入れない！」
「そうですよう。一度落ち着きましょう。なので、ここは一旦休憩に――」
「――次この場で余計な事言ったら問答無用で雷撃だから」

「……」
ハンティの暴力宣言に議場が一斉に静まり返る。とうとう力で黙らせに走った。魔物社会的には一番正しいかもしれないが……、とレオンハルトが何とも言えない気分になっていると、リーが再び恐る恐ると、
「……え、えー……それでは、どうしましょうか……？」
との伺うような言葉にも魔物将軍達が微妙な雰囲気で機を伺っているので、レオンハルトは話やすい空気を作るべく、己の務めを果たそうと口を開いた。
「……先程のリーの言葉の通りだな。このまま普通に攻め立ててもこちらの勝利は既に揺るぎない。後はどれだけ早く終わらせられるかだ」
「そうですわね！　損害に関しては最近は抑えられていますし！」
キャロルはあまり怯んだ様子もなく同意する。補足として損害についてもコメントし、
「向こうの将も沢山討ち取っていますし、個人として敵になりそうな敵も少ないですわ！」
うむ、とレオンハルトはその発言に頷く。
雑兵については特に考えなくてもいい。真正面からぶつかれば魔軍に勝てる軍隊は存在しない。相手の作戦、戦術に注意し、不意を打たれないようにしながら大きな数で当たれば簡単に勝つことが出来る。兵数差が開いてきた今では尚更だ。
従って次に考えるのは敵将、実力者に対することだ。
魔軍に勝利、ないし食い下がろうと思うなら魔物隊長や魔物将軍を討ち取ってしまうのが早い。
だが単騎でそれが出来る人間は限られている。大勢で当たれば倒すことは出来るだろうが、こちらも軍勢を率いているのだから簡単に一対多とはいかない。確実にやるなら集団戦の中で、相手の将を上回る強さが必要なのだ。
そして人類軍にそれが出来る人間は限られている。妖怪王である黒部や参謀である菅原ミッチー、身体部位の欠損が生じるほどの重傷

を負ったが、戦場にて戦う姿が目撃されている源頼光。この三人が今の人類軍の主力であり、それより下は大分開きがある。数はそれなりにいたが自分や使徒達、そしてかなり張り切っている――

「特にコウウは良い働き振りだな。多くの将を討ち取ってくれている」

「ははっ！　勿体なきお言葉！　感謝致します！」

ハキハキとした様子で感謝を告げる魔物大将軍コウウ。先の戦いでザビエル軍崩壊の責任を取らされないかと怯えているコウウは鬼神の如き戦い振りで多くの将を討ち取っていた。

レオンハルトが部下の戦功の機会を必要以上に取らないようにとやや自重し始めてからはレオンハルトに迫る勢いの首を取っている。戦場における働きぶりはコウウをあまり好ましく思っていない多くの魔物将軍らも舌を巻く程だ。認める他ない。

とはいえ、レオンハルトも戦場には出続けているし、使徒や他の将達も士気高く敵を順調に蹴散らしている。

そんな中で、レオンハルトが気にかけているのはやはり一人の男の存在だった。

「……だが、藤原石丸は未だ戦場に姿を見せず、か」

その発言に居並ぶ諸将は渋い顔をする。

レオンハルトが戦場に出続ける理由、それは藤原石丸への〝対策〟に他ならない。

第二次キナニ平野の戦いでレオンハルトに手も足も出なかったとはいえ、石丸は魔人四天王の一角であるザビエルを討ち取った人類最強の猛者。

ゆえに使徒や大将軍らでは不安が残る。レオンハルトが戦場に出ていない時にそちらを狙われてしまう可能性があるのだ。だからこそレオンハルトは毎度戦場に出ている。石丸が現れた時に直ぐに対応が出来るように。

そして更に言うなら、石丸を討ち取った時点でこの戦争はほぼ終わりと言っていい。

魔王ナイチサの命令である藤原家討伐。その目標の一つである悪

魔月餅は既にあの世に送った。魔軍に所属する多くの者は知る由もないが、この時点で一番重要な戦略目標は達成されている。正直、藤原家はおまけに過ぎないのだ。
多少生意気だから潰しておけというあくまでついでである。それでも魔王の命なので重要な事には変わりないが、こちらに関してはある程度どのように終わらせるかの融通は利く。
藤原家討伐、という任務をどのように解釈するかで終戦は決まってくるのだ。
当主である藤原石丸を殺して終わりなのか、主だった面々を殺して終わりなのか、それとも文字通り関わった人間を皆殺しにするのか。
その答えとして、レオンハルトはまず最低限、藤原石丸の殺害と、藤原家の継戦能力の消滅を設定した。
藤原家という勢力がこの先台頭することのないように、石丸という中心人物とその兵力は徹底的に潰す。主だった将達も殺してしまうのが望ましい。血の繋がった一族も出来るだけ殺す必要があるだろう。全員を探し出して殺すことは特定することも考えると完璧にこなすことは難しいが、ある程度ちゃんとやっているというポーズは取らなければならない。なので数十名単位で殺す必要は出てくるだろう。無為に殺すことはないが、必要であれば女子供とて容赦はしない。
ともあれ、最優先として石丸を殺すのが敵の士気を砕く上でも手っ取り早いことには違いない。なので石丸が現れるのを待っているのだが、
「レオンハルト様の強さに恐れをなして逃げたのでは？」
「あー、それはあるかもですねぇ。普通に考えて人間からしたら絶望でしかないですし」
と、何の気なしにキャロルが言う。それにペールも肩を竦めて同意した。
その発言に、レオンハルトは以前であれば〝それはないだろう〟と否定していたと思う。
だが今は、その意見が正しいのではないかと思い始めていた。

戦場に現れないこと。そして敗北を与えたことで心が折れたのではないかと疑っていた。
それはレオンハルトと相対した人間の戦士が最期に感じること。
〝絶望〟。
魔人レオンハルトと死合った人間は、その非情なまでの実力差に諦め、絶望して死んでいく。
数少ないレオンハルトに見初められ生き残った人間も、戦士としては再起不能となるのが殆どであり、二度とレオンハルトの前に姿を見せることはない。
今回もそれではないかとレオンハルトは思い始めていた。
「……期待、し過ぎたか……」
声に出したか出してないかくらいの声を発する。落胆していることは明らかであり、本人も自覚していた。長年、藤原石丸であれば愉しめるのではないかと期待していた。そして確かに、藤原石丸は最強の人間であった。ザビエルを倒したことからもそれは分かるし、その実力はレオンハルトの期待値には届いている――と思っていた。
思ったよりも、己の期待値は高かった。己が勝手に期待していただけなのだから石丸は悪くないのだが――裏切られたように感じてしまっていた。
それもひとえに、己が期待し過ぎたがゆえの事。そして、強くなりすぎたがゆえの結果だ。強くなることは必要なことであるとはいえ、多少の寂寥感のようなものを感じる。
まだ解らないとはいえ、その可能性は限りなくゼロに近い。だから期待するのはやめようと、レオンハルトはそれを吐き出すように深く息を吐いた。
そして居住まいを軽く正し――魔軍参謀としての心持ちで、レオンハルトは発言する。
「――そうだな。少し、策を取ってみるか」
その言葉に周囲の眼が集まる。キャロルがキラキラした瞳を向けてテンション高めに、
「久し振りにレオンハルト様の神算鬼謀振りが見れるのですわね！

――して、どのような作戦ですの!?」
「別に大した策じゃない。少し狡いだけの策だ」
「少し狡い、ですの？」
「ふふふ、そういうの。ペールちゃんは大好きですよう」
キャロルが首を傾げ、ペールが悪い笑みを浮かべる。レオンハルトは立ち上がり、
「準備に多少時間は掛かるがな。だがそれを差し引いても早く終るだろう。――とりあえずハンティには手伝って貰うぞ」
「あたし？　別にいいけど……結局何するのさ」
ハンティが頷きながらも疑問を投げる。魔物将軍らも一体何をするつもりなのかと疑問する視線を言外に向けてきている。それらに応えるように、レオンハルトは不敵に口を開いた。
「魔人にしか出来ないちょっとした〝技〟を使う。それは――」
議場にレオンハルトの策を説明する声だけが暫くの間響き渡る。その内容にキャロルは眼を輝かせ、ハンティは納得した表情を見せ、ペールは黒い笑みを浮かべ、リーやコウウはその作戦が単純ではあるが有用であることに頷き、魔物将軍や魔物隊長らも魔人への畏怖を再確認する。
そうして魔軍は次の戦いに向けての準備に動き始めた。

魔人の秘術

数日後。
人類軍の前線拠点、その司令部は静寂に包まれていた。
「……」
「……」
数日前に行ったばかりだというのに再びの突然の招集。しかし戦時中であるためそのことに不服を申す者はいない。解決出来るかや、それが無駄かどうかはさておいて、話し合うべき事柄はいくらでもあるのだ。
しかし招集に駆けつけた各軍の重鎮達は部屋に入り、そこにやってきた者を見て――時が止まる。一瞬沸き立ちかけ、しかし正気に戻ったかのように疑念の目を上座に向け始めた。
上座に座るその人物は周囲の無言の圧力を感じながらもゆっくりと、ややくぐもった声を発する。
「……今まで軍議に参加出来ずにすまなかった。だが、これからは顔を出すことにする。皆、安心してほしい」
いや、安心出来ないんですけど。というか、顔出てないんですけど……、そう言葉に出来る者は皆無だった。
上座に座るのは藤原石丸を名乗る人物。多分、石丸だと思われる人物だ。
そうやって疑いをかけるのは無礼だが致し方ないだろう。
全身、そして顔を甲冑で覆い隠していては無理ないことだ。
「……あ、あの……その鎧は……？」
そんな中我慢できずに恐る恐る問いを投げた一人の男に、周囲は心の中で静かに称賛した。さすがに〝貴方は本当に藤原石丸ですか？〟と聞くわけにはいかない。もし本当に石丸だったら無礼過ぎる。
そして疑いはあっても確信には至らない。というのも、
「む？　ああ、これか？　これはうちの家に代々伝わる由緒正しき鎧でな。祖先はこれを身に着けて戦場に出向いていたらしい。なので、俺もこれを身に着けようかとな」

「魔軍相手の戦争であればいい装備を身に着けるに越したことはないでありますからなぁ」
「左様ですか……」
石丸と思わしき人物の言葉にミッチーが同意する。その声を聞いて男は引き下がるしかなかった。
周囲の者達も何も言うことが出来ない。
鎧の中から発せられる声、それは正しく石丸のものであったからだ。
加えてミッチーを筆頭にした藤原家やＪＡＰＡＮ勢は一切動じることなくそれを当然のものと扱っている。何となく怪しいが、それでは通らない。
はっきり言って影武者ではないのかと疑念を抱くが、にしては声も同じで、嘘をついている様子もないのだ。
この場にいる者達の中には国のトップやそれに近い立場の者がたくさんいるが、様々な人間と関わり、その内面を見透かすことに長けるような老獪な人物にとっても影武者かどうかを見抜くことは出来ない。
顔見せろ、と言えばそれまでなのだが――とそこまで考え、頭の回る者達は気づいた。だからこそ、余計な言葉が誰かから発せられる前に発言を行う。
「……なるほど。まあ、何にせよ石丸様がお戻りになられたのは良いことですな」
「うむ、このことを知れば兵の士気も上がり、民の不安も緩和されるでしょう」
と、そこまで言ったところで殆どの者達が気づいた。
今言ったことが答えだ。真実を明らかにする必要はない。〝石丸〟という名を自称する人物がいれば十分だと。
人類軍の士気はドン底と言ってもよく、まともな戦いになるかどうかも怪しい。脱走兵も多く、それを止めることに奔走しているのが現状だ。
その原因の一つである藤原石丸。彼が復帰したという報を大々的

に知らしめればまたしばらく保つ。
　それでも姿が見えなければ真偽が疑われるが、顔を表さないとはいえ少なくとも声が同じであれば問題ない。殆どの兵はその声を知らずとも、知っている者達が本物の声だと信じてしまえばその噂は伝染する。本当に本物であれば問題ないのだが可能性は薄いだろう。であれば戦場にて戦うことは難しいかもしれないが、戦場にいるということが重要だ。実際に戦っているかどうかはそこまで問題にならない。
　それに魔軍相手と言えども藤原石丸の存在は脅威の筈だ。向こうは魔人レオンハルトという圧倒的な存在が控えているとはいえ、魔人ザビエルを倒した事実は耳に新しく、恐怖が無いと言えば嘘になるだろう。多少の効果はあるはず。
　これでもう少しの間は戦うことが出来る。時間稼ぎ、その場しのぎの策だが無いよりはマシだ。
　根本的な解決ともなっていない上に、この場面で影武者ともなればいよいよ石丸の復帰は絶望的かということにも気づいたが、石丸がいたところで魔人レオンハルトに勝てるかどうか。それを考えればいてもいなくても結果はあまり変わらないのかもしれない。
　藤原家に残った多くの大陸諸国の者達は残りはしたものの勝つことに目を向けてはいなかった。士気にも関わるためはっきりと負けると口にはしないが、頭の中では既に勝利が現実的に厳しいことを冷淡に捉えている。
　ゆえに彼らの目的は過程にこそある。即ち、魔軍をどれだけ疲弊させ、なおかつ如何に矛先を藤原家に向けさせるかだ。
　余力のある状態で魔軍を放置しては自国にも被害が拡散するかもしれないし、体裁も悪い。隣の家の火事を黙ってみているのはさすがに遺恨を残すし、良心が疑われるのだ。
　魔軍という名の火の勢いを弱めつつも、最終的には火元を離れ、その火を藤原家に押し付ける。頑張ったけどどうにもならなかったという枕詞でも付けてやれば完璧だ。火の粉が降りかからないように細心の注意を払う必要があるし、最終的には魔軍の機嫌次第ではある

が、数が減り、戦力が衰えれば自国がついでに狙われることはなくなるだろうし、仮に狙われても狙いが各国に分散されてくれれば被害も相対的に少なくなる。大陸諸国は共同戦線を張っていた。
「……そうだな。それは良いことだ」
「はい、石丸様のおかげでまだ戦えそうです」
　藤原家としても兵の士気を上げることが出来るので成果は大きい。実際そのために立てた影武者のはずだ。本物の石丸が復活するまでの時間稼ぎと考えるとこの策は有用である。それでも一ヶ月か二ヶ月程度が関の山だろうし、それまでに復活しなければ結局は負ける。出ても負けるだろうが、糸よりも細い勝利を掴まんとするなら最低限魔人を倒せる石丸がいなければ可能性はゼロだ。勝利を目標としている藤原家としては何が何でも石丸に復活してほしいところだろう。
　残った大陸諸国としても勝てるならそれに越したことはないが、国や軍のトップに就く者達としてはほぼあり得ない可能性に頼るよりは生き残るための最善の可能性を取るのが当然だ。
「で、あれば引き続き戦いのための準備をしなければなりませんな。現在の魔軍の動きは？」
「数日中に攻めてくる気配はありません。今はこちらとの前線に陣を築いているようですが……」
　その質問に斥候を担当している将がそう答える。また別の将が頷き、
「準備だけは着実に進んでいるな……この分だと次の戦は一週間前後となるか？」
「こちらを油断させるためかもしれません。数日中に攻めてくる可能性も見越して自分達も予測される地点へと布陣を――」
「今拠点としている場所とは少し距離があるからな。籠城することになっては堪らん、野戦の準備をするべきだ」
　と、再び藤原家とそれ以外の諸将達による軍議が始まる。藤原石丸がいるという状態であればやはり活気づくものだ。気づいている者からしても兵の士気が上がる見込みを得たのだ。動きやすいことに変わりはない。その中身が石丸ではないとしても、確証がなければそ

れは石丸として扱われる。
緊張しているのは中身だけで、久々に軍議が円滑に進み、人類軍の兵士は石丸復活の報を聞いて僅かに希望を見出した。

その夜、人類圏のとある場所では――。
「――これで最初の準備は出来た」
黄土色の岩肌や石が転がるとある峡谷。入り組んだ地形や細い道が広がり、見晴らしの悪いその土地の中で、広場となっている場所。
男の人影は屈んでその広場の地面を手で擦り、準備を終えたことを口にする。
「……確かにちょっと狡い」
いやまあいいんだけどさ、ともう一人の女は同じ様に地面を見ながら口にした。続けて頭に浮かんだ疑問を単純に口にする。
「というか今まで使ってこなかったこれ使うくらいなら、もうあたしかあんたで奇襲したほうが早く終わるんじゃないの？」
「……早く終わらせるだけならそうだな」
男は地面から手を離して立ち上がるとその赤い瞳を女に向けて質問に答える。
「俺やお前が単騎で襲撃し、大将の首を刈る――確かにそれが一番手っ取り早いだろう。特にお前は暗殺にはうってつけだからな」
「……出来ればやりたくないけどね。でもいざという時はあたしも覚悟出来てるよ」
そう言う女に、だが、と男は言葉を区切り、
「それでは部下に悪い。戦い、戦果を持ち帰り、出世を望む者達にとって戦争はまたとない機会だ」
戦争を望む部下達の分の戦功。それを奪ってしまうのは避けるべきだ、と男は言う。
「下の者の働く機会を奪うようなことを、上に立つ者はしてはならない。部下を上手く使うことも上司の役目だ」
それに部下の成長機会を奪うことにもなる。上司が全てをやって

しまうことは可能かもしれないが、それでは下の者達の存在意義が危ぶまれることにもなる。それを避けるために、こうするのだと。
その言葉に女は得心したように頷いたが、やや半目で男を見ると、
「分かるけど……あんた、たまに一人で突っ込んで終わらせる時もあるじゃない」
女の指摘に男は一瞬止まったが、ややあって息を入れると気を取り直したように続けた。
「……程々に、だ。目的によってはそういうこともある。余裕がない時なんかは特にな」
「……ま、そうだね」
思い当たる節が自分にもあるのか、はたまた同じ想いを共有したことがあるのだろう、今度は女も指摘することはなく話題を流す。再び地面に描かれたものに目を向けると、
「これなら確かに安全に手早く勝てるもんね」
「そういうことだ。……さて、そろそろ始めるぞ。向こうに行って準備をするよう伝えてこい」
「……簡単に言ってくれるよね、結構面倒なのにさ――」
と、女は若干嫌そうに言いつつもその場から一瞬にして消える。超常的な現象だが男に動じた様子はない。珍しいことではないからだ。
そして約一分後、
「――伝えてきたよ。向こうの準備は万全だってさ」
女が再び一瞬にしてその場に現れた。やはり男は動じず、直ぐ様準備に動こうと声を女に飛ばす。
「よし、なら魔法陣に手をかざせ」
「あいよ」
と、二人は地面にあるもの――巨大な魔法陣に向かって手をかざす。女が男に向かって、
「というか、二人で大丈夫なの？」
「俺とお前の魔力なら問題ない。――やるぞ」
「ん――」
男の声を合図に、二人は魔力を巨大な魔法陣に向かって注ぎ込む。

「――――」
十分な魔力を注ぎ込み、男が声を発すると、夜闇の中にあってなお眩しく、目を閉じてしまうほどの光が魔法陣から発せられた。
そしてその魔法陣の中に幾つもの輪郭が薄っすらと現れ、
「――――成功だ」
「……みたいだね」
光が収まる頃には、男が目論んだ通りの結果が現れており、女も静かに瞠目する。
地面に描かれた魔法陣の正体、男から教えられたその答えを、女は何気なく口にする。
「魔人の秘術と呼ばれるだけはあるね……この〝転移魔法陣〟」
「……まぁ、な」
その男――魔人レオンハルトは使徒であるハンティの言葉に僅かに目を細めたが、そのことに対して特に何か言うこともなく淡々と次の作業に取り掛かった。

死地

それは年明けも近い冬の頃。
人類軍と魔軍による本格的な交戦が行われようとしていた。
人類軍は約９０万――大敗戦を喫した第二次キナニ平野の戦いや幾度もの交戦を経て多数の死傷者や離散した大陸諸国の軍、更には脱走兵も合わせて開戦当初の半数以下となった数で魔軍を迎え撃たんとする。
対する魔軍は少なく見積もっても人類軍の倍近くの兵数。士気も高いままであり人類軍の勝ち目は薄い。
しかしそれでも、人類軍の士気はドン底の状態から脱していた。何故なら、
「おお……石丸様……！」
「今日は石丸様が付いていてくれるぞ……！」
第二次キナニ平野の戦いで魔人に敗北してから一度も戦場に姿を表さなかった人類軍の大将――藤原石丸。
彼が復活したという報が全軍に知らされたからだ。
これにより決して高いとはいえないものの戦えるだけの士気は回復した。相手が魔軍とはいえ、石丸がいれば〝もしかしたら〟、という希望も考えられる。逆に言えば縋れるものがもはやそれしか残っていないとも言えるが、自己防衛のための現実逃避なのか、それをはっきりと声を大にして口にするものはいなかった。
「もうすぐ始まるな……」
「……ああ」
開戦を前にして人類軍の本陣では遠くに見える魔物兵を見て息を呑む。
その中心にいるのは藤原石丸――全身を覆い隠すような鎧を装備しているが、その声は確かに石丸のものだ。
周囲には菅原ミッチーや側近の者達が身を固めており、時折何かを話し合っている。それは作戦のことであったり、別のことであったり色々だが、戦いは不意に始まった。

「っ！　魔軍が前進して来ます！」
先に動いたのは魔軍。魔物将軍の指揮を受けた魔物兵達が人類軍に向かって歩みを進める。
それに気づいた兵は声を上げ、指示を仰ぐ。魔軍の動きを見ながらも兵の声を聞いた菅原ミッチーは頷きつつも横に顔を向ける。
「来ましたな……石丸殿」
「うむ……総員、戦闘準備！」
「はっ！」
石丸の声を聞いて本陣は一斉に動き始める。
当初より少なくなったとはいえ大軍であることに変わりはない。総勢９０万もの人の群は、総大将と参謀、各軍を纏める者の指示に従い、巨人が巨大な手足を動かすようにゆっくりと動き始める。一つ一つの動きは素早く、乱れの少ないものであり、戦闘を行うには十分な練度の高さであった。
平原は多くの人、そして百万以上の魔物兵が近づいてきたことにより変化が生じていた。
「揺れてるな……」
「ああ、すげぇ数だ……」
微細な地面の震動とともに魔物が距離を詰めつつあることを実感して喉を鳴らす。
地平を埋め尽くすほどの魔物兵の大軍。この戦争が始まって何度も見る光景ではあるが、何度見ても慣れることはないし、慣れたとしても好きになることはあり得ない。
感じるのは等しく恐怖や不安、先の戦いで敗北したことを思い出させる。
だが身体の震えを抑えるように手に持った武器を構え、自分を奮い立たせる。
大丈夫だ、こちらには石丸様もいる。直ぐに決着が着くことはない。持ち堪えていれば石丸様が敵の将達を討ち取って、形勢が変わるはずだ。そうなれば最初の戦いのようにこちらが優位に立って、逃げていく魔物を追討することが出来る。

魔軍を敗走させた輝かしい過去の栄光を思い出して自分達を鼓舞する。自分達の大将を信じる。そうして覚悟を決め、戦いの準備を決めた時だ。
「……？　おい、援軍が来るなんて聞いてたか？」
「は？　いや、聞いてないが……どうしたんだ、急に」
ふと、人類軍の最後方に位置する部隊の一人が同僚にそう問いかける。何を言ってるんだ、と同僚が顔を向けると問いかけてきた兵士は後方を指して言った。
「いや、なんか後ろから来てないか？」
「えっ……あ、本当だ。なんか来てるな」
一緒になって背後を見てみれば地平の先から土煙とともに近づいてくる何かが見える。
「どこかの部隊が遅れてやってきたのか？　それとも、逃げた奴等が帰ってきたのか――」
「何にせよ、人手が増えるならそれに越したことは――」
と、呑気にそう話していた兵達の口が不意に止まる。
最初は味方の援軍だと思って軽い気持ちであったが、徐々に近づいてくるに連れて彼らの顔から血の気が引き、心臓の鼓動が早さを増していく。
まさか、何故、意味がわからない、という語句が頭を駆け巡り、それを実際に口にも出す。
背後からやって来るもの、徐々に伝播するように兵達が気づいていくが、どうしてそこにいるのかは理解出来ない。
ただ現実のものとして、彼らは半ば狂乱し、叫ぶようにその現実を口にした。
「ま、魔軍が背後にっ――！」
人類軍の背後には、前方と同じように地平を埋め尽くさんばかりの魔軍の姿があった。
「まずい……！　っ、石丸殿、今直ぐ撤退を！」

そのことを知った菅原ミッチーは、弾かれたようにそう叫ぶ。声の先は石丸。全軍の指揮こそ現参謀であるミッチーが務めるが、戦線を放棄しようというのだ、許可は必要である。
石丸はそれを聞いてやや緊張したような雰囲気でミッチーに視線を向けると、
「……無理、なのか？　それに、一体何が……」
「……小生にも解りません。解りません、が……」
どうしてこんなことに、と信頼する参謀に向かって答えを求めるがその答えはミッチーにも分からない。周囲の諸将らも分からない。皆顔を青くして、自分達が死地にいることだけを理解していく。
今の今まで西側に布陣していた魔軍が、こちらの後方にも現れるなど誰も予想出来ない事態であった。東側は人類の勢力圏内であり、魔軍の侵入は確認されていない。前線には防衛戦も築いているし、哨戒だって密に行っている。数体、数十体程度の魔物ならともかく、あれほどの大軍の侵入に気づかないほどの間抜けはいないだろう。
しかし現実に、魔軍は人類軍の背後に現れた。まるで逃げ道を塞ぐかのように。
ミッチーは、一体何を見落としたのかと頭を回すが、思い当たる節はない。そして、考え込んでいる時間もない。
このままでは皆、等しく屍をさらすことになるのだ。
「……！　とにかく、ここから逃げねばなりません！　前後から挟まれて戦えば全滅するのも時間の問題であります！」
「そんな……！」
石丸が驚愕したような、弱気な様子で呟く。明らかに様子がおかしかったが、魔軍に囲まれて死地にいるこの状況でパニックにならず、なおかつそれに気づき、指摘出来るものは皆無であった。
ただ一人、ミッチーだけがその様子にやむを得ないと先んじて指示を出す。
「見るに、南側が一番包囲が薄いでありますな。軍を動かしてそちら側に突撃するのが苦肉の策でありましょう。後はしんがりでありますが――小生が受け持ちましょう」

しんがりをやるのは自分だと、自ら名乗り出る。撤退戦の指揮を執る者に不安が残るかもしれないが、命をとして時間を稼ぐのに、自らは向いている。そう思ったが故のことだ。
もっとも、残ろうが逃げようが生き残れる確率は限りなくゼロに近い。ミッチーの軍師としての頭脳は、人類軍の敗北、それも全軍が包囲され、全滅してしまうという結果をはじき出していた。
だが、人類軍としての戦いの終結を感じ取っても一人の男、菅原ミッチーとしては諦めていない。
「っ、でも、それなら自分が――」
「良いですか、石丸殿」
しかし石丸はミッチーのしんがりを認めようとせずに声を上げようとして、機先を制された。そのまま真っ直ぐ、鎧の奥にいる者に向かっての言葉を送る。
「しかし――」
「お聞きあれッ！　石丸殿！」
「っ……！」
ミッチーの怒号に近い言葉を聞いて、石丸が怯む。初めてみるその剣幕に周囲も驚く中、ミッチーは静かに声を聞かせた。
「お聞きあれ、石丸殿。……良いですか、貴方が死ねば、本当に何もかも終わりなのです。石丸殿が再び剣を取ることも出来ません」
「……」
それは不思議な言い回しだったが、言葉を向けられている者にはその意味がよく理解出来た。
そしてだからこそ、鎧の中にいる者はその想いを言葉に出来なかった。
無言となり下を向く石丸に向かって、ミッチーは小さく笑って言う。
「――実は小生、石丸殿が嫌いでありました」
「……えっ？」
その意外な言葉に間の抜けた声で反応する。ミッチーはその反応を聞いて、苦笑するように話を続けた。

「意外でありましたか？　まあ、そうでありましょうな……何せ昔の事である上に、誰にも気取らせていなかった自信があります故」
「……どうして――」
その問いに一息つき、ミッチーは何時も通り軽い調子で答えた。
「いやぁ、なんと言いますか……簡単に言えば〝嫉妬〟でありますな。幼い頃から大人よりも強く、頭も悪くない。それでいて伝統や格式を無視し、自分勝手にやりたいことをやる石丸殿が……妬ましかったのでありますよ」
それはミッチーが今の今まで秘めていた心の内だ。石丸は知っているだろうが、それ以外で知っているものはいない。
菅原ミッチーは幼い頃、菅原家というＪＡＰＡＮでも有数の名家で生まれ育った。幼き頃から勉学に明け暮れ、満足に遊ぶことも出来ない幼少期を送ってきたのだ。
全ては菅原家という名家に相応しき人物になるためであり、そのためには自分の意志や私生活など無いも同然であり、ミッチー自身もそれに何の疑いも持っていなかった。
そんな時に現れたのが藤原石丸だ。
彼は昔から悪童として有名で、藤原家という名家に生まれながらも好き勝手して過ごしていた。ミッチーにはそれが許せなかったのだ。
加えて、とある名家のお姫様と仲が良かったのも幼きミッチーの心をざわつかせた。幼き頃は何度も思ったものだ。どうしてこのような奴が、周囲に好かれ、持て囃されるのかと。
そのことに納得が出来なかったミッチーはある日、石丸を人気のない場所に呼び出した。
『貴様のような名家に生まれながら品格を下げ続ける無頼漢にはきついお灸を据えてやる。覚悟！』
そのような建前を引っさげて石丸に一騎打ちを挑んだ。今にして思えば単純に気に入らなかったのだと、ミッチーは自覚出来るが幼い頃の自分には喧嘩を売る理由すら名家という肩書に縛られていた。
石丸は大人に勝てるくらい強いとは聞いていたが、自分だって大人に勝てる。なればこそ、毎日厳しい修行を積んでいる自分が負けるは

ずがないと考えていた。
しかし、ミッチーは負けた。
全く歯が立たなかった。こちらの剣は石丸に届かず、一瞬にして決着がついたのだ。
その結果に、ミッチーは自身のプライドがずたずたになるのを感じた。
最早、自分に価値などない。今までの努力は何だったのかと自分を追い詰めようとした。
しかしそんな自分に石丸は言ったのだ。
『お前、中々強いではないか！　明日もやろうぞ！』
呆然とした。
言っている意味が理解出来ない。何故、そんなことを言うのか。
だが固まるこちらを放って約束を取り付けると、石丸はさっさと屋敷に帰っていった。
ようやく事態が飲み込めた後も、石丸への苦手意識は変わらなかった。なんか明日もどうだとか言っていたが最早関わる気もなかった。
だが次の日、しれっと石丸は菅原家の屋敷にまでやってきて、嫌がる自分を引っ張って外に連れ出した。
そうして同じく連れ回されていた春姫とも一緒に、石丸が行う無茶苦茶な事に付き合わされ、帰ってきた後に教育係の者にこっ酷く怒られた。
次の日は付き合わんとしていたが、またしてもこちらを無理やり引っ張り回し石丸は無茶な事態にこちらを巻き込んだ。あまりにも無茶で向こう見ず、しかも春姫が不安そうにしているため仕方なく安全に終わらせようと学んでいた兵法から適当に策を出してやった。
すると頼りにされ、また次も付き合わされ、再び策を練る。
石丸は戦闘担当で、こっちは頭脳労働。春姫は癒やしだった。
そうして最後には石丸の師匠でもあった坂上田村麻呂に怒られ、げんこつを落とされるのが気づけばお決まりとなっていた。
周囲の者達からも素行についての評価が落ちていくのを悩みつつも、ミッチーはある日、石丸に尋ねたのだ。

何故そのように好き勝手に振る舞えるのか。怖くないのか、と。
すると石丸は笑って答えた。
『人生は一度きりであるからだ！　やりたいことをやらねば勿体ないだろう！』
そうして石丸は同時に夢を語った。
世界最強の剣士になりたいだとか、世界征服したいだとかとんでもなくスケールのでかい夢であり、到底叶うとも思えなかったが、
『男の目指す頂点は高ければ高いほど良いだろう！』
と言って聞かないばかりか、お前にも協力してもらうからな、と一方的に言い放った。
その時だ。ミッチーは石丸の器の大きさに、敵わないと思い始めたのは。
嫉妬が、羨望に変わったのは。
何にも憚ることもなく自身の夢を堂々と追いかける石丸の凄さを感じ取り、同時に羨ましく思った。自分もこうなりたいと。伝統やしきたりに縛られるのではなく、自分のやりたいことをやってみたいと。
そう思い――ミッチーは家を出た。
名前を変え、見聞を広めるために世界を見て回るべく大陸を旅したのだ。
そこには自分の知らないもので溢れていた。
今まで書物の中でしか知らなかったものを実際に見ることも出来た。広く狭い屋敷の中にいては体験出来ないことをたくさん体験出来た。
そうして世界を周り、ミッチーは石丸が何故あれだけはしゃぎまわり、夢を追いかけるのかを理解した。
――世界は広い。
解っているつもりで、解っていなかった。それを旅に出て、少し理解した。
自分の内心に変化が生じた後、久し振りにＪＡＰＡＮに帰った。
すると生まれてから今まで見てきたはずのものも違って見えた。

良いところも悪いところも改めて実感出来た。
幼い頃に口酸っぱく言われていた伝統やしきたりの美しさや意味を理解し、同時にＪＡＰＡＮが大陸諸国と比べてどうなのかという疑問の答えも出た。
変えなければならない。
今度は自分の意志でそうしたいと思い、改めて学問に時間を費やした。石丸や春姫と再会し、旅路に加わったのもその頃だ。
戦乱に参加したり、地獄で鬼の宝を盗んだり、石丸が帝となったり、妖怪を配下にしたりと色んなことがあったものだ。
頼光や月餅、黒部などの仲間も増えた。
今にして思えば、月餅とは石丸を王にしたいという目標を共に掲げた同志であったなぁ、と思う。既に逝ってしまったが、今一度語り合いたかった。
人類圏を統一し、魔軍と戦争し――大陸を制覇する夢に敗れても、ミッチーの胸には後悔はない。
それに、まだもう一つの夢も残っているのだ。
そのために、菅原ミッチーは石丸に成りすましている春姫に今生最後となる言葉を伝える。
「死ぬ気ですか……？」
そんな演技も忘れたような言葉を掛けてくる。いくら声を陰陽術で変えているとは言えさすがにバレるだろう。
とはいえ今更気にすることでもないな、とミッチーは笑みを作る。
「さて……生き残れるかは解りませんが、これが一番後のためとなるでありましょう」
「後のため……」
そう。それはミッチーの夢でもある。
「生きて、石丸殿にもう一度――夢を見て欲しい」
「――――」
「それを見届ける役目は小生ではありません」
ですが、と、
「そのための道を、小生が作りましょう」

その結果、ＪＡＰＡＮや人類を更に変えてしまうかもしれない。
その夢の先を見ることが出来ないのは残念だが――
「では、お急ぎを。今ならまだ間に合いましょう」
「っ……わかっ……た……」
春姫がこくりと小さく頷く。
辛い選択をさせてすまないと思う。
しかし彼女とて武家の娘だ。涙を流すことはない。
ぐっと堪えて春姫は立ち上がる。そうして共回りの者達に連れられるようにして、
「……また、会おう」
「……ええ、また。次に会った時は、久し振りに三人で山にでも出かけましょうか」
「……そう、だな」
石丸への演技を続けて頷く。だが、
「……吉祥丸さん」
「！　っと、はは……懐かしい名前ですな。はい、何で御座いましょう？」
不意打ち気味にそう呼ばれ、苦笑いを浮かべる。今の名前よりも二つ前――幼少期に春姫と出会った頃の名前だ。こちらも昔のように丁寧な口調で問い返す。
すると春姫はこちらを真っ直ぐ見て、
「色々と――ありがとうございました」
その言葉を最後に、春姫は本陣から去っていった。
幾つもの人が亡くなり、また去っていった本陣の中でミッチーは小声で、
「……こちらこそ、感謝します。石丸殿や春姫様には夢を見させて貰いました」
本当に楽しい日々だった、と自らの人生を振り返りながらも感謝を述べる。
しかし、物思いに耽ってばかりでもいられない。こちらにはまだ仕事が残っているのだと、

「……随分と少なくなったな」
突如、陣中に声が響いた。
その声の持ち主にミッチーは静かに反応する。
「頼光殿ですか。……ちょうど良い、今から石丸殿を追いかけて撤退戦の援護をお願い出来ますかな？」
片腕と片目を失った源頼光が陣幕をくぐり、仏頂面でこちらを見ていた。そしてそのお願いに頼光は鼻を鳴らすと、
「……援護は構わんが、わしは逃げるつもりはないぞ。貴様こそ、軍師らしくさっさと逃げたらどうだ？」
その言葉はミッチーにとって意外でもなんでもない言葉だった。そして頼光なりに気を使ってもいるのだろう。だからこそ、ミッチーは溜息をつきつつも、
「……了解致しました。で、ありましたら小生とともに魔軍相手に玉砕して貰いますぞ」
そう言うと頼光は破顔する。
「ふはっ、よくぞ言った。石丸様でないのは癪だが……貴様なら最期にわしと轡を並べて戦うのに申し分ない」
微妙に上からの言葉にミッチーは微妙な表情で笑いつつ、
「偉そうでありますなぁ……しかし意外でもありますな。頼光殿は小生の事はあまり好きではないと思っておりましたが」
武士としての誇りや面子を大事にする頼光は、ミッチーのような胡散臭い人物は苦手で、いつもぞんざいな扱いをしていた。
しかし頼光は眉間にシワを寄せつつ目を背け、
「戯け。貴様の戯けた性格はともかく……仲間としてはとっくに認めておるわ。それこそ、二十年近く前からな」
視線を外しながら言う頼光にミッチーは言葉もなく驚く。
「……そうでありますか。まあ、ＪＡＰＡＮが誇る鬼姫が残ってくれるなど、これほど心強いものもありませんな。ちょうど見た目も鬼みたいになっておりますし」
「ぶっ殺すぞ。……だがまあ任せておけ。本物の鬼のように首だけになっても戦ってやるわい」

「期待しておりますぞ」
と、二人は互いに不敵な笑みを浮かべあう。気が合わない二人でも、死地に於いては最期を共にする戦友にして仲間であった。
そんな中、頼光はふと思い出したように声を上げ、
「そういや黒部はどうした？」
「ああ、黒部殿なら戦線を離れておりますよ。なんでも、〝約束〟を果たしに行くのだそうで」
「……ああ、なるほどな」
答えに納得したのか頼光が頷く。丘の上からよく見れば遠く、南に抜け出ていこうとする集団がいる。おそらくそれだろうな、と当たりを付けながらもミッチーは補足として、
「まあ、ああなっては黒部殿に戦う義務はありませんからな。……とはいえ、春姫様を送り届けてくれる辺り、随分と義理堅くてお人好しの妖怪王でありますが……と」
そろそろ始まるか、とミッチーは距離を詰めつつある魔軍の動きに顔を引き締める。
頼光や残った将達も同じように身を引き締めて、相対する用意を整えた。ここは既に死地であることから、死ぬ覚悟すらも決める。
前と後ろ、こちらを包囲するように軍を展開する魔軍に対して、人類軍は寡兵にして士気も低く、地の利も失った。
最早唯一の希望を残すのみの人類軍。そんな中で、魔軍による人類軍殲滅作戦。
そして希望を残すための撤退戦が幕を開けた。

転移魔法陣

それは交戦が始まる数日前のこと。
渓谷の奥では魔軍が人知れず作戦準備に取り掛かっていた。
「次！　３４１部隊目の転移作業を開始せよ！」
「はっ！」
魔物隊長の声を受けて大勢の魔法魔物兵が巨大な魔法陣に向かって魔力を注入する。
これによって発動した魔法陣は光を発し、その光が収まる頃には数百名程の魔物兵が現れていた。その場に現れた魔物兵達は自分達は本当に転移したことに驚いた様子だが、ざわつくより先に魔物将軍の指示を受けた。
「前進し、抜けた先の広場にて待機！　細い道であるからな！　十分注意せよ！」
「はっ！」
命令通りに前進し、魔法陣から離れる。そして確かに前方には両側が岩肌に包まれた細い道があり、魔物兵達はそこを縦に並んで通り抜ける。
するとその先には同じように転移してきた大勢の魔物兵の姿があり、魔物隊長の指示に従って同じように並んで待機する。
しばらくすると再び後ろから同じように転移して移動してきたのだろう、別の部隊の者達が並んで待機する。そうやって同じ作業をひたすら繰り返すのを確認するように見ている者がいた。それがこの作戦を立てた張本人である魔人で、
「……この分だとまだ少し掛かりそうだな」
レオンハルトは崖となった高台の上から眼下を見て呟く。大部隊での移動や展開に向かない細い道の多いこの渓谷の中で巨大な魔法陣を描ける場所はここしかない。渓谷を分断するように通る大きな道に部隊を展開するのにもそこまでの移動に時間が掛かる。だがそれを鑑みてもこの作戦は有用なものであるはずだ。
眼下では多くの魔物兵が待機し、炊事を行っていたり、寝泊まり用

の天幕を張っていたりする。部隊を完全に転移させるまでに後数日は掛かることを考えればこれは致し方ない。
　しかし、いくら人里離れた渓谷の中とはいえこれだけ大規模に動いていては発見される可能性もあるが――それに関しては別の方法で解決した。
「ペール、結界は問題ないか？」
「はい、レオンハルト様。万全ですよ。今の所、人の気配もないですしね」
　そうか、と頷く。使徒の一人であるペールにはこの場所を中心に結界を張ってもらっている。迷いの結界だ。
　誰かが渓谷に入っても、この場所には辿り着けないように。作戦前にバレてしまえば効果は薄れてしまう。ゆえにハンティにも渓谷の中や周囲を見張らせている。結界に気づいたり、何かの拍子で感づかれてしまっては目も当てられないのだ。
　レオンハルトがじっとそんなことを考えていると、横で作業を行っていた使徒キャロルがこちらを向いて、
「さすがはレオンハルト様ですわ！　転移魔法陣なんて素晴らしくも高度な魔法を知っていて、それを扱えるなんて……！　これがあれば人間なんてあっという間に蹴散らしてやれますわ！　――あ」
　と、そこまで言ってキャロルは不意に動きを止める。表情も、作業のために動かしていた手も。
　何事かとキャロルを見て疑問符を頭に浮かべたレオンハルトとペール。しかし数瞬後、キャロルは先の発言を申し訳なく思うように表情を落ち込ませ、
「レオンハルト様なら転移魔法陣が無くても余裕ですわ……！　わたくしったら危うくなんて過小評価を……！」
　これでは完璧使徒失格ですわ！　と叫ぶキャロルにレオンハルトは軽く呆れ、ペールもいつものことだと苦笑した。
「……別に気にしてないからお前も気にするな」
「というかキャロル先輩の意見もある意味間違ってないですよね。レオンハルト様が一人で突っ込んでも終わりますけど、効率的にとか、

色んな意味でこっちの方が良さそうですし」
「まあ、そうだな」
「……理解っていても過小評価はよくありませんわ！　これが終わったら特訓兼お仕置きとして渓谷の周りを十周ほどしてきますわ！」
　己を鍛えるべく自ら罰を与えようとするキャロル。向上心が高くて何よりだ。レオンハルトは一つ頷き、
「目立つからやめろ」
「なら普通にトレーニングで我慢しますわ！」
　そんなことをしたら人間に目撃されるかもしれないので止めておく。それを聞くとキャロルは即復活して、再び得物である銃を整備し始めた。得物の手入れを怠るな、とかなり昔に教えてから毎日欠かさずやっているキャロルの日課である。
　……だがまあ、やはりこの策でも問題無さそうだな。
　そして実際、彼女たちの意見も間違っていない。この方法を選んだのは戦争を早く終わらせるためであり、部下達に暴れてもらうためなのだ。そういう意図で発案した今回の作戦。その肝であり主柱は自らが使った〝転移魔法陣〟だ。
　これはそれぞれ別の地点に巨大な魔法陣を描き、大量の魔力を注入することで魔法陣の上に乗ったものをもう一方に転移させることが出来るという高度な魔法だ。
　魔人にしか使えない魔人の秘術であり、準備に時間を要するが、一度魔法陣を構築し、準備を整えてしまえば魔力を注ぐことで何度でも使える優れた魔法である。壊されない限りは半永久的に使える上、破壊するのにも手間が掛かる。一度に送れるものの数にも制限はなく、魔法陣の上に乗っていれば幾らでも転移可能。
　だが、魔人の秘術とはいうもののある程度魔法の腕が必要なため、魔人であれば誰にでも使えるというわけではない。最低でも必殺技を使えるくらいには魔法の腕が必要で、魔法陣を描くために消費される魔力の量も膨大だ。発動にはそこまで魔力を食わないが、それでも何十体かの魔法魔物兵で交代して発動させないといけないくらいには魔力を消費する。魔人並の力があれば発動には問題ないが、転移魔

法陣を描くのに殆どの魔力が持っていかれるだろう。かくいう自分も、一日で魔法陣を二つ描いてから直ぐに魔法を発動させるには微妙に魔力が足りない。なのでハンティにも付いてきてもらい手伝ってもらったのだ。

正直、魔人の秘術とは言うが、原因はこれなのではないかとレオンハルトは思う。魔人並の実力――即ち、魔力がないと使えないというだけではないか。

何故なら魔王は使える。魔人だけ、という条件だが教えればハンティも使えるのではないかと思う。彼女はもっと便利な魔法があるのでそこまで必要ではないだろうが。仮に人間でとんでもない魔法の才能の持ち主がいれば解らない。人間用に作られていないが、ハンティ並の魔法の才能があればその無理も押し通すことが出来るだろう。この魔法の存在や、発動方法を知ることが出来ればの話ではあるが、

「あ、藤吉郎さん。そこの部品取って下さいまし」

「！」

「ありがとうございますわ。よし、これで整備完了ですの！」

何故かキャロルが整備していた回転式拳銃がパン、と発砲。

「ギャー!?」

「な、何だ!? どこからか流れ弾が……！」

「あ、ごめんなさいですの！」

「またキャロル様か!?」

「気をつけてくださいよー！ 当たりどころが悪ければ死んでますよ！」

と、キャロルと魔物兵の間でやり取りが行われる。ガウガウに貰った得物の調整はキャロルに任せないほうがいいかもな……と思う。

再び調整を始めたキャロルに気を取られつつも、

「……とにかく、この戦いで藤原家は壊滅させる」

途中で頭を切り替え、強い意志を込めてそう口にする。今まで一度も人間との戦争はおろか、殆ど使ったことのない魔法を使った理由がこれだ。

作戦が成功すれば、ほぼ確実に藤原家の――否、人類軍を壊滅させることが可能で、多くの将を一網打尽に出来る。
不安要素があるとすれば、
「藤原石丸。奴がいればいいが……」
「そういえばその藤原石丸が復活したとかなんとか言う噂が上がってきてましたね」
ペールが思い返すように噂を声に出す。そのまま続けて、
「確かにそろそろ帰りたいので総大将が包囲の中にいてくれればいいなぁ。ここより東とか、ＪＡＰＡＮとかにいたら面倒過ぎますよう」
はぁ、と溜息をつきながら頬に手を当てるペール。転移魔法陣を使って人類軍の後方――東側に魔軍を移動させ、西と東の両方から集まった人類軍を挟み撃ちにする作戦。その中に藤原石丸がいれば、確かに直ぐに戦いが終わる。いなかった場合は面倒なことになる可能性がある。しかし、
「面倒かもしれないが、その場合はＪＡＰＡＮまで遠征することになる」
「えぇ～……面倒ですよーう……」
「とはいえ人類軍は今回で徹底的に叩いて磨り潰す。だからＪＡＰＡＮに行くことになっても抵抗は殆ど無いだろう。遭ったとしてもそれこそ磨り潰すだけだからな。任務でこういう風に例えるのは良くないが……それこそピクニックに行くようなものだ」
「ＪＡＰＡＮに小旅行ですわね！　わたくし、お団子が食べたいですわ！」
「それはそうかもですけどね……はぁ……」
キャロルはＪＡＰＡＮへピクニックだと聞いて能天気に団子が食べたいと声を上げたが、それを聞いてもペールのテンションは低いようだった。レオンハルトは微妙に違和感を感じて目を細めてペールに聞く。
「……何故そんなに嫌がってる？　こう言うのもなんだが、おそらくこれが最後の山場でこれより先はそれほど面倒な仕事はないぞ？」
仕事を嫌がっているのかと、もう一度、苦労するような仕事はない

と伝えてみる。
しかしペールはこちらを見て再度溜息を吐くとふらふらと距離を詰めてきて、
「いや、仕事を嫌がってるわけじゃなくてですね……」
「？　じゃあ何だ？」
再度問う。するとふらふらと近寄ってきたペールが距離を詰めてこちらの服を掴み、
「……ぶっちゃけ、そろそろ欲求不満が限界で……」
「……は？」
一瞬、自分の中で時が止まる。一体こいつは何を言ってるんだ。頭は大丈夫か？　と、更に目を細めたが、近くにいたキャロルなどはそうではないようで、ガバっと身を起こしたペールの続く言葉に頷いた。
「だってレオンハルト様！　遠征中は相手してくれないじゃないですか!?　だから早く帰ってぐっちょぐっちょに爛れた生活――もとい性活がしたいんですよう!!」
「あ、確かにそうですの！　それなら解りますわ！　も、勿論、この完璧使徒にしてレオンハルト様の第一使徒であるわたくしはこれくらいのおあずけは問題無く我慢できますが！」
……何言ってんだこのアホども……。
声を大にしてそんなことを宣った頭の中がピンク色な二人。白昼堂々と何を言ってるんだと真顔になる。しかし、一応だが得心もして、
「……ああ、なるほどな。よし、仕事を再開しろ」
「――異議あり！」
「その異議は棄却されました。……いいからその話はやめろ」
即座に異議を切り捨てたがペールは未だにこちらの服を掴んで訴えかけるように、
「何でですか!?　何で遠征中は抱かないんですか!?」
「……いや、いつものことだろうが。少しくらい我慢しろ。普段は出来てるだろう」

というかこんな話を往来でするんじゃない。眼下には大勢の魔物兵もいるし、少数だが崖の上にも魔物兵はいる。聞こえない距離じゃないのだから自分のイメージを害するようなことは言わないでほしい。

だがそんな願いも虚しく、ペールは心の叫びを訴える。

「二ヶ月や二ヶ月なら我慢できますけど、それ以上はキツいんですよう！　禁欲反対！」

「……いや、だからな――」

「これ以上我慢するのはキツいです！　デモしますよ！　ストしますよ！　私に精の一票を！　性権交代です！」

「……遠征中は戦いのためにもそういったことは抑えるようにしているのは分かってるだろう？　それよりその話は少し声を小さくして――」

「セッ○スしたいんですううう！　それが駄目ならせめてしゃぶらせて下さい！　それともおっぱい使いますか、おっぱい！　どっちも好きですよね、レオンハルト様！　今ならそこの岩場の影で――」

「――やめろお前もうちょっと黙れ！」

大声で卑猥な事を叫び始めたペールをその言葉をかき消すように大声で黙らせようとする。しかしペールは黙るどころか更に続けて、

「どうしてですか!?　おっぱい嫌いになったんですか!?　フ○ラは嫌なんですか!?　パ○ズリしないんですか!?　この前まではあんなに好きだったのに!?」

「待て待て待て、嫌いになったわけじゃない！　……いや、そもそもそんな事実はない！」

「……えっ？」

それを聞いてか、周囲の者達が一斉に声を上げる。皆一様に、〝嘘でしょ？〟と言わんばかりの表情だ。微妙にイラッとする。

というか聞こえちまってるじゃねぇか、とレオンハルトは内心頭を抱える。このままでは己のイメージが崩れて、巨乳好きの変態というイメージが更に強まってしまう。

「ほら、レオンハルト様も溜まってますよね!?　ちょうどここに都合

よくレオンハルト様が大好きな巨乳美少女がいますよ！　ならやるしかないですよね！　セッ○スしましょうセ○クスー！」
頭を抱えるこちらを前に淫語を連呼する真性のアホに頭が痛くなる。すると横から埒外のバカも口を挟もうとしてきた。
「そういうことならわたくしも黙っていませんわ！」
ポーズを取って得意げな顔を浮かべたキャロルに頭痛を感じる。十中八九余計なことを言うつもりだろう。そしてペールも未だに暴走中だ。
埒外のバカと真性のアホが揃ったら手がつけられない。普段は頭の良い二人なのだが、こういうことになるとビックリするほど頭が悪くなる。
こうなってくるとハンティが恋しくなってくるが、ハンティは今渓谷の外周りを行っているので助けを求めることは出来ない。となれば、
「……わかったから一旦黙れ。今直ぐ黙らないと戦争が終わった後もしばらくおあずけにするぞ」
「……」
「……」
二人のバカが一瞬で静かになる。こちらの言葉の本気度を感じ取ったのか、さすがにその罰はキツいのか。わんわんか何かを躾けてる気分になってきて頭が痛いが、静かになったのを見てレオンハルトは二人に口にする。
「いいか？　次の戦いが無事に終われば人類軍に戦う力は無くなる」
だから、
「後数日。そしてその戦いで充分な働きを見せてくれれば――その後で幾らでも相手してやる」
「……！」
その言葉にペールの目が期待で見開かれる。キャロルも似たような感じだ。続けて言い含めるように視線に圧を乗せ、静かな声で、
「お前らが欲求不満なのはよく分かった……だが、そういうことを言う時は場所を考えろ。後、声量。俺のイメージを崩すんじゃない」

人の上に立つ者にとって、イメージとはとても大切なものだ。下の者達に全ての人柄が伝わらず、全ての思想や思考を伝えることが出来ない以上、大まかなイメージとしての自分を形作る必要がある。
そして細かな発言や行動でイメージとは変わってしまうものだ。それが良いものなら良いが、悪いものは御免被りたい。
なのでそう言い含めたが、二人はそれを聞いてゆっくりと頷いてくれた。
「よし。それなら俺は少しその辺りを見てくる。何かあれば呼びに来い」
「……畏まりましたわ！」
「……了解ですよう」
キャロルがいつもの如くキラキラとした瞳を向けながら元気よく了承し、ペールは落ち着いた様子で頷く。
……これなら俺のイメージも問題ないだろう。
二人や魔物兵らを尻目に、レオンハルトはその場から離れた。

レオンハルトが去った後、周囲で待機していた魔物兵らは、
「……レオンハルト様って女好きで巨乳好きだったんだな」
「は？　何馬鹿言ってんだお前。レオンハルト様が巨乳好きとかそんなの――常識だろ」
今更馬鹿言ってんなよ、と魔物兵が軽い調子で言う。新しく魔軍に入り、レオンハルト軍に入ってきたばかりの魔物兵は、〝そうか……常識か……〟と染み染みと呟いた。
そうしていると他の魔物兵が二体を見つけ、
「おい、お前達。手、止めてないでさっさと作業始めるぞー」
うーっす、と軽い調子で作業を進める魔物兵。それを見聞きしていた崖の上の二人の使徒は、
「……さすがはレオンハルト様！　イメージ戦略は完璧ですわね！」
「あははー……こういうのを手遅れって言うんでしょうね」
キャロルとペールの言うように、今更こんなことがあっても下がら

ない、ある意味完璧なイメージ戦略が出来上がっており、それを理解しているペールが半笑いで仕事に戻った。

包囲網

藤原石丸は、寒気を感じて再び意識を起こした。

「……ぐ……っ」

屋敷の庭に大の字になったまま寝ていた。右手には剣が握られた状態のままである。

そのことからやはり、修行中に疲労と睡魔が積み重なった結果、倒れるように寝てしまったのだろう。意識を失ったと言った方が正しいのかもしれないが、石丸としてはどちらでも変わりない。

身を起こして再び手に力を込める。再び剣を振るためだ。

疲労だけでなく腹も減り、肉体的にはボロボロの状態。本来であれば石丸を休ませていたはずの春姫の姿もなく、また、石丸もそのことに気が付かない。

今の石丸は肉体よりも精神の方が重傷であった。

だが、その自覚は石丸にはない。

彼の中にあるのは〝勝たなければ〟という強迫観念だけだ。

あの日、魔人レオンハルトに手も足も出ずに敗北し、しかし月餅のおかげで辛くも生き残ってから石丸はずっと剣の修業に明け暮れている。

戦いの中で月餅が自分を庇って死亡し、坂上田村麻呂も戦死した。

大勢の大切な者達が、あの戦いに負けたことで命を失ったのだ。

自分を信じ、今までついてきてくれた者達の想いに、己は応えることが出来なかった。

不甲斐ない――そう思う。

己は今まで何をしてきたのか、無謀な挑戦を続けて無為に仲間を死なせてしまっただけなのではないか。そもそも最初からこんなことをしなければ良かったのではないか。だが、自分は帝であり、人類軍の総大将だ。諦めるわけにはいかないし、何としてでも強くならなければならない。魔人レオンハルトに勝てるくらいに。

だが、己が勝てるとは思えない――この時の石丸の頭の中は、その堂々巡りをひたすらに繰り返していた。

「諦めてはならん……」
覇気のない声でそう独り言を呟きつつ剣を振る。今の石丸にはその剣が以前の石丸と比べても、明らかに気が籠もっていないことにも気がつかない。
技術的に多少の向上が見られても、多少では意味がない。
修行を続けて一週間、未だ石丸の中には、〝成長〟という言葉が見えてこないのだ。
原因は何だ、と石丸は自分に問いかける。
しかし答えは出ない。以前であれば、剣のことであれば自然と答えが解る筈なのに。
以前であれば、強敵の戦いを経験して、それ以上に強くなれる筈なのに、今はその実感もなく、ただただ緩い停滞が続いているように感じる。
やはり、もっと身を削るような修行を行わなければ成長は出来ないのか。
その最たるものが実戦。本気の死合の中で成長することが出来ると、石丸は思っている。
しかし今は同時に、それを行っても意味などないのではないかという疑念も生まれている。そこまで考え、結局は、
「――っ！」
剣を振る。
苛立ちを、不安を、自分の中に生まれた負の感情をぶつけるように剣を振るう。
その剣には成長も何もない。何かを掴まなければならないのにそこに新しい何かは生まれず、その事実にさらなる憤りを感じて叫びたくなるような衝動を剣にぶつける。修行ではなく行き場のない感情の発露として使われる剣は、以前のような鬼気迫る剣気の輝きを失っているようであった。
自覚もなく、そのような剣を振るっていると、集中力が切れかけた石丸の耳に近づいてくるような足音と息遣いが聞こえた。そうしてしばらくすると、

「せ、石丸様！　大事で御座います！」
「……」
反応することこそ無かったが耳には届いていた。伝令だろう、若い武士の姿がそこにある。
その顔は蒼白で、汗でびっしょりと濡れており、息遣いも乱れ、声も震えている。そこでようやく、石丸は嫌な気配を感じて武士の方に向き直った。
「……どうした。何かあったのか？」
「は、はっ……そ、それが――」
ゆっくりと武士の報告が石丸の耳に届く。
それは自分の心臓の鼓動が聴こえるほど静かで、視界の中の景色が歪んでしまいそうな衝撃を石丸は感じた。
武士の放った言葉は慌てて焦燥しきっているにしては詳細かつ正確なものであったが、石丸には細かい部分は聞こえていなかった。
ただ頭の中に反覆しているのは、はっきりと示されたその結果のみである。
――人類軍は魔軍に敗北し、全滅した。
膝から崩れ落ちそうになるが、石丸は足に力を入れて踏ん張ることで耐える。
しかし次の瞬間には駆け出していた。
「せ、石丸様の影武者を務めた春姫も、現在は生死不明で――って石丸様⁉　何処に行かれ――」
背後から掛けられる慌てるような声も無視し、石丸は屋敷を飛び出した。

平原の西側。本来、人類軍と正面からぶつかり合うようにと予定通りに布陣した魔軍――総勢１００万の軍勢は相手を包囲するように列を広げながら人類軍に向かって全速力で突っ込む。
その先頭にいるのは一際大きな槍を掲げた魔物大将軍コウウだ。旧ザビエル軍の軍勢とレオンハルト軍の残りを率いているコウウは

大声で配下に激を入れる。
「いいかテメェら!! この戦いで人間の兵は皆殺しにする！ つまり戦争が終わるからな！ 手柄立てる最後のチャンスだ！ 精々気張りやがれ！」
「おおっ！」
「はっ！」
旧ザビエル軍の魔物兵も残ったレオンハルト軍の魔物兵もコウウの激励に応答し声を上げる。気合の籠もった良い返事だ。士気は充分だな、と次に命令を下す。
「向こうは左右から囲まれてアホ面晒してやがる！ その隙に殺しまくって、ついでに退路も塞ぐぞ！ 魔物将軍！ 隊を分けて波状しろ！」
「はっ、心得ております！ 閣下はどちらへ？」
副官の魔物将軍が頷きつつも問いを投げてくるのでコウウは即答した。
「馬ァ鹿！ 俺は当然南だ！ あっちは地獄だが、その地獄に辿り着く前に俺が全員殺してやらぁ！」
「……なるほど。了解致しました！」
それは当然のことだ。敵の大将首を狙うコウウにとっては。何しろ、
……これで戦争が終わりなら最後に武功を立てねぇとな……！
失態を犯した自分にとって最後のチャンスなのだ。それを逃す手はない。
先の戦いで大物の首を取ったし、多数の将を殺してやったがまだ安心出来ない。万全を期すなら大きな武功を打ち立てるべきだ。
だからこそ敵が逃げ込むであろう南側に行く。バカ正直に包囲の真ん中で戦う可能性もあるが、この状況であれば大将は逃げるはずだ。ならばそこを討てばいい。
もっとも、南側は包囲の中心よりも死地に近いので、そこに辿り着く前に接敵して仕留めなければならないが……それくらいのリスクを飲む価値はあるとコウウは見た。どうでもいい兵隊を何千と殺す

のも悪くないが数を稼ぐのは将を数人、数十人と殺してからでも遅くはない。
槍を持つ手に力を込め、コウウは進行方向にいた人間を数十人程纏めて殺しながら、部下に聞こえるように大声で言う。
「おらおらテメェら！　包囲戦だぞ殺しまくれ！　殺せば殺すほど褒美は期待出来るぜ！　魔物隊長や魔物将軍にもなれるかもしんねぇぞ！　だけどこっちの方が数は多いからなぁ！　モタモタしてると殺し尽くされて美味しい人間がいなくなっちまうぜぇ!?」
「おおおお……!!」
部下に発破をかけると、誰も彼もが得物を構えて咆哮する。人間を他ならぬ己の手で殺してやろうと轟々とした熱気が魔物兵達から立ち昇る。
それを満足そうに確認し、コウウもまた叫んだ。
「うおおおおらぁぁ!!　安全に殺してぇ奴は俺様について来い！　余りでいいならくれてやらぁ!!」

平原西側。転移魔法陣にて転移し、奇襲を仕掛けるはレオンハルト軍の魔物兵、総勢四十万。
東側に比べれば少ない上、人類軍の半分程の数だが、狭い渓谷の中に隠しておける数の限界や、時間の問題もあってこの数となったが、これでも充分な兵数だ。
挟み撃ちにするなら総数が少なかろうがあまり問題にはならない。西側の魔軍を指揮する魔物大将軍リーは、戦場の地図を見ながらそう分析した。
……いつもながら、レオンハルト様の作戦には感心するばかりだ。
少しは魔物大将軍としての仕事を残して置いてほしいものだが、と贅沢な悩みを思いもするが、しかし決して不満ではない。
こちらを信頼してくれているが故に、総指揮を任せてくれているのだ。魔軍参謀である彼が実際に現場で細かい指揮を執ることは少ない。

いつも大まかな作戦や方向性だけ決めて、後はこうしろ、ああしろ、と言って実際にどうそこまで持っていくか等の細かい方策はこちらや魔物将軍達に任せる。
そして結果さえ出せば独自の工夫や突出であっても認めてくれるのだ。
大体は彼の作戦に穴がないため、あまり工夫することも少ないが、使徒の方々等は作戦を知った上で独自に動いて結果を出してくることが多い。
実力のある者達だけが出来る一種のスタンドプレーであり、そういった環境が兵達を活き活きとさせているのだと思う。魔物隊長や魔物将軍らも良いアイデアを出してくれたりする。
なのでリーがやるのは全体の管理や調整が主な仕事だ。レオンハルトや使徒の方々の方針、動きに合わせて軍の動きを調整し、魔物将軍達から上がってくる意見などを纏めたりもする。具体的な動きが決まれば後はそれを眺めつつも、戦場で起きた微妙なズレをその都度調整し、何かあれば指示を仰ぐ。
上の立場の方と下の立場の者との板挟みになるような役目だが、リーはこの仕事に誇りを持っていた。
どれだけ地味と言われようが堅実に、組織の運営が正常に働くよう歯車を調整し続ける。
自分のやることが少ない時ほど、組織の運営が上手くいっていたり、現場の状態が良いということだ。言うことがないというのは何も問題がないということ。好ましい状態だ。
それに全くやることがない、というわけではない。それならそれで上位の方々の補佐に回ったり、部下の事を気にかけたりなどやれることは幾らでもある。
「左翼での抵抗が少し激しいようにも感じるな……」
戦場の報告を受けたリーは静かにそう呟く。それを耳にした副官の魔物将軍は考えるような仕草を見せつつ、
「どう致しましょう？」
「……問題はないかもしれないが、念の為ここの兵を少し増援に回し

てみるか？」
「良い案かと思われます。では、直ぐに」
余裕のある場所から兵を回して、不測の事態が起こらないように配慮する。副官も賛同してくれたようであり、直ぐ様部隊毎動き始めた。
さて、とそれを尻目にリーは戦場を見渡して、
「不安要素があるとすれば敵の将ではあるが……レオンハルト様や使徒の方々であれば問題ないだろう」
多少兵を敵将に蹴散らされたところで包囲した時点で負けることはあり得ない。１５０万近い兵数に包囲されては敗北は必至。それこそレオンハルト程突出した強さが無ければ覆すのは不可能だ。
包囲の薄い南側に逃げる可能性もほぼ無いと言っていい。なんなら、一番包囲の厚い場所といっても過言ではないからだ。
「後は総大将がいることを願うのみだな」
長いようで短かった戦争もそれで終わることが出来る。戦後に面倒を残したくはないな、と確実に人類軍を殲滅するべくリーは細かく指示をし続けるのであった。

「はぁ、はぁ……！」
藤原石丸――の影武者として鎧を身に着けた春姫は少数精鋭の部隊に囲まれながらも包囲網からの脱出を試みていた。背後から追いかけてくる魔物兵から逃げようとひたすらに走り、誰もが身体の何処かに傷を負っている。
しかしここにいるのはそれなりの腕を持つ者達、幸運も手伝ってか今はまだ誰一人脱落者を出すことなく順調に逃げ延びようとしていた。
また春姫もそれなりの実力を持っており、いざとなれば戦うことだって出来る。逃げることを優先としているのと周囲に守られているため戦うことはないが。
しんがりとして残った菅原ミッチーや源頼光らの必死の抵抗も手

伝ってか追ってくる者も少ない。彼らの犠牲を無駄にしないためにも、春姫はなんとしてもここから生きて逃げ延びなければと足を動かした。
だが、不意に背後から大声が聞こえ、突如地面に衝撃が走った。
「――よぉし！　見つけたぜクソ人間共!!」
「っ！　あれは……魔物大将軍……！」
将の一人がその姿を見て表情を歪める。巨大な槍をぶん投げて地面を抉りながらも数人を肉片にして殺した魔物大将軍コウウ。坂上田村麻呂をその武勇でもって殺した怪物が背後に迫ってきていた。
「早くお逃げを！　ここは我々が食い止めます！」
「っ……」
後方にいた何人かの武将が刀を抜いてコウウの前に立ち塞がる。全ては春姫を逃がすため。決死の覚悟で怪物に挑む。
その覚悟を受け取り、春姫は振り返ることなく走る。
「はは！　雑魚の人間共が！　全員俺の手柄にしてやらあぁぁ！」
「――――」
しかし次の瞬間、背後から嫌な音とともに彼らの声は聞こえなくなった。
一瞬で玉砕した彼らだが、少し距離を稼ぐことは出来る。直ぐにコウウが追い付いてくるが、
「これより先には行かせん……！」
「この命と引き換えに貴様に少しでも……！」
次々と追撃を行ってくるコウウを足止めしようと武将たちが足を止めて迎え撃たんと刀を抜く。
「テメェら如きが勝てるわけねぇだろうがよぉ！」
次の瞬間には容赦なく物言わぬ屍となる。
人間の中ではそれなりの実力を持つ彼らも、残酷なことに、大将軍最強とも称されるコウウには敵わない。ほんの少しの時間稼ぎにしかならないのだ。
しかし、
「お逃げ下さい……！」

「我らのことはお忘れを！」
「っ……皆さん……！」
誰も彼もが、そのことを解っていながら、躊躇うことなく死地へと身を投じていく。ほんの少しの時間稼ぎ、一秒でも一瞬でも時間を稼げるならそれで構わないと。
大将を守るために一人ずつ捨て石となるべくコウウに突撃していく。
だがコウウも諦めることはない。距離を稼がれつつも大声を上げながら追い縋ってくる。
「クソうぜえ！　こんなことしても無駄だと解らねぇかぁ!?　誰一人として逃さねぇぞ!!」
さすがに鬱陶しく感じ始めたのはイライラした様子で逃げる者達を睨むコウウ。その手も足も止まることなく動いているが、さすがに距離が離れてきた。
「もうすぐで包囲を抜けられます……！」
春姫の近くにいた武将がそう口にする。コウウの足止めのために少しずつ減っていき、背後から聞こえていた凄まじい音がどんどん遠ざかる。残った者達も僅か数人程度となったが、その甲斐あってか何とか包囲網を抜けられそうであった。
だがその希望が見えかけた時、突如として前方から声が飛んだ。
「――残念だが、行き止まりだ」
「っ!?」
声と同時に、地面に斬撃の線が走った。
衝撃に足を止めざるを得なかったが、再度足を動かすことも出来なかったのは前方に立ち塞がる存在のせいだ。
「逃げる可能性は低いかと思っていたが……どうやらここで待っていて正解だったか」
「魔人……レオンハルト……！」
周囲の空気が重くなるほどの圧倒的な存在感を発しながらそこに立つのは敵の総大将でもある金髪灼眼の魔人――レオンハルト。
その手に持った魔剣から剣気を立ち昇らせながら、彼は逃げ延びよ

うとする一行をその鋭い視線で捉えた。
そしてその中心は、レオンハルトの目当てでもある総大将――藤原石丸の姿だが、
「……だが、石丸には見えないな。何だお前は」
「……っ」
何かを感じ取ったのだろう、レオンハルトは藤原石丸の振りをしている春姫を見て怪訝そうに眉間にシワを寄せる。怪しんでいることを悟った春姫が意を決して、
「……久し振りだな」
と、石丸をイメージして声を発する。
声は石丸と同じだ。鎧にミッチーの陰陽術を掛けただけであるが、見抜くことは至難のはずだが、
「……声は同じだが随分と弱々しい気だな。折れた、というのは本当だったか？」
だがまあ、とレオンハルトは一度息を入れ、
「――確かめてみれば分かることか」
「くっ！　やる気か……！」
それだけで屈してしまいそうな戦意を発してくるレオンハルトに、春姫らも応戦しようと得物を抜く。
しかし、誰もが次の瞬間、無謀であったことを改めて悟った。
「え……あっ――！」
刹那、春姫を守らんと刀を抜いた者達は一人残らず首を刎ねられた。
戦いにすらならない。一瞬の出来事。路傍の石を取り除くように何の感慨もなく彼らを殺したレオンハルトはいつの間にか剣を収めたのか、手ぶらの状態のままゆっくりと春姫に近づいた。
「さて……この時点で石丸ではないだろうが……」
「ぐっ、あ……！」
石丸であれば対応も可能であったと暗にそう言うレオンハルトが溜息を吐きながら春姫との距離を詰める。
春姫の手を素早く取り、関節を極めるようにレオンハルトは背後に

移動すると痛みで苦悶の声を漏らした。
　これほどに魔人とは桁違いなのか、と春姫は改めてその強さを思い知る。
　そして同時に、これと戦闘になっていた石丸の凄まじさも改めて分かった。
　そんな中、レオンハルトは春姫の鎧――兜を外して中身を確認する。
「……お前は――」
「くっ、離して、下さい……！」
　春姫の姿を見て何故か僅かに眉をひそめたレオンハルト。その間にも春姫は必死に逃げ出そうと力を込めるが、魔人の膂力に人間が敵うはずもなく、レオンハルトはびくともしない。
　少しの間、レオンハルトは春姫の顔をじっと見ていたが、僅かに頭を振った後、続く声を放った。
「お前は……石丸の縁者か何かか？」
「っ……」
　どうしてそれを、と思ったが春姫は答えなかった。しかしレオンハルトにはその反応で充分のようで、
「なるほど……石丸の女か」
「……違い、ます」
　そうだと言って足手まといにはなりたくない。だからこそ否定したくはなかったが否定した。しかしこちらの返答など意にも介していないのか、レオンハルトは考え込むようにしばらく無言となった。
「はぁ、ようやく追い付い――」
　と、そこに足止めを突破して追い付いてきたコウウがこちらを見て言葉を止める。そして直ぐ様態度を豹変させ、
「れ、レオンハルト様ではありませんか！」
「……コウウか」
「はっ、コウウであります！　何かありましたら何なりとご命令を！」
　先程人間を追っていた時とは違い、怯えたように丁寧に接するコウウ。春姫は心の中で微妙に思ったが、レオンハルトは特に何か言うこ

ともなく、
「……どうやら藤原石丸は戦場にはいないらしい」
「そ……そうでありましたか。であれば如何致します？　察するに、その女が影武者であったようですが……」
春姫の鎧を見てコウウも気づく。レオンハルトは、ああ、と応答しつつも少し考えるように目を細め、
「……とりあえず、戦いを終わらせるぞ。石丸についてだが……そうだな。この女を――」
と、声を途中で止めたレオンハルトにコウウが頭に疑問符を浮かべたが、少しして同じように反応して槍を構えた。
レオンハルトらの正面、戦場に吹き荒れる土煙の中から大きな黒い影が現れたが、
「見えてんだよボケがぁ！」
「っ！」
コウウが奇襲に反応し手に持った槍で黒い影の攻撃を弾く。そうして姿を現したが、その影に反応したのはレオンハルト達だけでなく、春姫もであった。
当然だがその姿にはよく見覚えがあり、声を上げる。
鋭い爪と牙を血で染めて近づいてくるのは石丸がこの場にいない今、人類軍の最大戦力である――
「――悪いがそいつをやらせるわけにはいかねぇ！」
「黒部さん……！」
妖怪王黒部が、唸り声を上げてレオンハルトらの前に立ちはだかった。

戦争終結

「妖怪王黒部か。女を助けるために姿を見せたのはご立派だが、些か無謀過ぎるな」
「無謀だとかそんなこたぁ知ったこっちゃねぇよ……！」
魔人レオンハルトの冷たい視線と呆れるような言葉に黒部は知ったことではないと突っぱねる。
血に濡れた爪と牙はここに来るまでに遭遇した魔物兵の血だ。中には魔物隊長や魔物将軍のものもある。怪しく煌めかせた爪を魔人に向かって叩きつけるように振るおうとする。しかし、
「おいこら俺様を無視してんじゃねぇ！」
「っ、邪魔だ！」
直前でコウウの槍によって防がれる。火花が散り、巨大な力がぶつかり合った衝撃で風が吹くが、力量はほぼ互角。お互い弾かれるように距離を取るも、黒部は迷うことなく突き進んだ。
「駄目です、黒部さん……！　逃げて下さい……！」
春姫がレオンハルトに捕らえられながらも、前につんのめるようにして表情を歪めながら叫ぶ。魔物大将軍コウウと魔人レオンハルト。一対一でも厳しい相手が二体。さすがの黒部も敵うはずがない。
だが黒部は諦めようとはしなかった。
「うるせぇ！　それくらいやんねぇとあの馬鹿に合わせる顔がねぇんだよ……！」
「……！」
黒部が呼ぶあの馬鹿とは石丸のことに他ならない。それを感じ取り春姫は言うべき言葉を見失う。
しかしその間にも黒部は厳しい状況に陥ろうとしていた。
「いたぞ……！」
「くそっ、手こずらせやがって……！」
戦場に魔物兵がどんどんと集まってくる。黒部を追っていた部隊であり、彼らは黒部を囲むように集まり始める。
それを見てレオンハルトは考えた上でこう言った。コウウに視線

を向け、
「この分だと俺が相手をするまでも無さそうだが……コウウ」
「はっ、何で御座いましょう!?」
黒部との戦闘を継続しながらコウウが声だけで応じる。レオンハルトは間を置いて、
「そいつには〝役目〟がある。瀕死にまで追い詰めたら解放してやれ」
「!? レオンハルト様、それは……ぐっ！」
予想外の命令に動揺したのか、僅かに押されるコウウ。だが押している黒部の方もその発言に眉をひそめた。
どういうことだ、と言外に問いかけてくる黒部に答えるようにレオンハルトはそれを告げた。
「この女は人質だ。返して欲しければ俺の前に姿を現せ。――そう石丸に伝えろ」
「っ！ テメェ……！」
春姫を指して言うレオンハルトに黒部は殺気とともに魔人を睨む。常人であればそれだけで身が竦むような威圧も、それ以上の恐怖かつ圧倒的な存在である魔人には届かない。
涼しげにそれを流したレオンハルトは黒部に背を向ける。春姫を連れた状態でだ。そうして背中越しに通告する。
「期限は定めないが……出来るだけ早くした方が懸命だな。遅ければどのみち、虱潰しに探すことになる。女の命も保証しない」
逃げられるとは思わないことだ、とレオンハルトは黒部に伝えると続けてコウウに向かって、
「そういうことだ、コウウ。お前一人でも充分だろうが、しぶといようなら数で当たれ。多少手荒にしても妖怪は死ぬことはない」
「……畏まりました！」
「俺は一度本陣に戻ってから戦場に出る。後で様子を見に来るが――それまでには終わらせろ」
それは遠回しに、戦功を得る最後のチャンスだと言うことだ。レオンハルトが春姫を置いて戦場に出てくるまで。包囲している兵を殲

滅するまでの時間が期限。あまりにも遅いようであれば彼直々に終わらせるのだろう。
「……必ずや、ご期待に応えて見せます……！」
だがそれは、コウウにとっては無能の烙印を押されたに等しい。レオンハルトは黒部の実力も感じ取った上でコウウの戦功を欲する願いを汲み取ったからこそコウウに任せることにした。加えて、見立てでは負けることはないだろうがそれなりにいい勝負をするだろうと思っているので、間に合わなかったとしても失望するようなことはないだろう。
しかし、これだけ有利な状況で相手を倒せないようでは自身の未来は明るくない。文字通り首を切られる羽目になる可能性もあるのだ。
ゆえにコウウはレオンハルトが去った後で、周囲の魔物兵に命令を下す。
「くそったれが！　待ちやがれ！」
「おおっと、行かせねぇよ！　……よしテメェら！　俺の援護をしやがれ！」
「はっ！」
レオンハルトの言葉は一部、周囲の魔物兵にも聞こえていたこともあって自然にコウウに加勢する。
黒部は周囲一帯を魔物兵に囲まれながらも、レオンハルトを追いかけようとした。だがその行く手を阻むコウウと魔軍に怒りを隠すことなく黒部は吼える。
「上等だ！　邪魔する奴は全員噛み殺してやらぁ！　掛かってきやがれッ――！」
「っ、うざってぇ犬っころがよぉ……そんなにズタボロにされてぇなら望み通りしてやるよ！　おら、やっちまうぞテメェら！」
「おお！」
集まってきた数千の魔物兵と魔物大将軍コウウ。その中心で怒りの吼える黒部の声がかき消されようとしていた。

……これで、一先ずの区切りか。
魔人レオンハルトは、平原で包囲され、徐々に数を減らしていく人の群れを見て内心呟いた。
包囲は完了し、一兵たりとも逃げる隙間はない。後一時間もしない内に向こうは満足に応戦することも出来なくなり、文字通り数の暴力に押し潰されることになるだろう。
たった数時間で百万近い人間が死ぬ。それを成した自分の手腕は恐らく誇るべきなのだろうな、とレオンハルトは息をつく。
己は己の立場から見て最善の行動を取っているに過ぎない。今更後悔も憂いもないが、それでもこれだけの数の人間が死ぬともなると思う所が無いわけではない。
もう少し犠牲を減らすことも可能だったかもしれない、と一度だけ思案するのみだ。
しかしその考えは直ぐに掻き消す。終わったことを考えるのは反省の一度だけだ。自身の行動を振り返ることで、次により良い結果を生むことにも繋がる。
とはいえ完全に終わったわけではないのだから気が早い。戦争は終わりだが、やるべき仕事はまだ残っている。そのために、この女を生かしたのだ。
「……お前の名は？」
「……春、です……」
桃色の髪の女性――春と名乗った石丸の女。打ちひしがれたようにか細い声だが、答える余裕は一応あるらしい。加えて軽くこちらを咎めるような強い視線を向けてくる。流石は、と言うべきか。強い意志を秘めた目だ。
「後悔……しますよ」
「……何？」
まさかそっちから声を掛けてくるとは思わなかったとも思いつつ、レオンハルトは訝しげに言葉の意味を問うと、
「石丸様は、必ず立ち上がります」
「……それで俺を倒すと？」

「石丸様は、私に……皆に、夢を見せてくれると約束しました」
「……ほう」
感心するように薄い笑みを浮かべる。石丸のことではなく、この女に対してだ。
「随分と強気だな。俺が怖くないのか？」
「……恐れていますよ。ただ、それを表に出すほど軟な育ち方はしていませんし、声を上げたところでどうにかなるわけでもありません」
確かにそうかもしれないが、普通は助かろうと形振り構わず泣き叫び、命乞いをするものだ。余程屈折した生い立ちでも無い限り、育ち方程度で恐怖心がどうにかなるはずもない。
だが、それに、と続く言葉をレオンハルトは聞いた。
「私は、石丸様を信じていますから」
「……そうか」
なるほどな、と得心する。単純だがそれが原因かと。
確かにあれほどの男ならそれに縋れるのも理解出来る。だが、
……奴が現れるかどうかは半々と言ったところか。
おそらく石丸の大切な女だろうと春姫を人質にしたのはいいが、それでも一度折った相手が再び現れるかは微妙なところであるとレオンハルトは感じていた。
なのでそうは言いつつもレオンハルトは先程黒部に言ったように、どの道石丸を探すことになるだろうと見ていた。現れればそれでいいが、現れなければこちらから探す。奴を殺すまでは終われないし、終わりにはしたくない。
そして、そのための手段に黒部や春姫を使うあたり、自分はまだ石丸に期待したいとも思っているのだと自覚する。少々遠回しな手段ではあるが、目論見が外れたところでデメリットも少ない。
ゆえに期待も込みで半々。戦争が終わったことで絶望する可能性の方が高いが、それならそれで当初考えていた通りに探し出してから殺すだけだ。幸い、手段を選ばなければ探すこと自体は難しいことではない。出来ればその手段は取りたくはないが、必要とあらば行うことにもなる。

だからこそ、レオンハルトとしても思うのだ。
「……後悔させてほしいものだ」
後悔するほどの戦いであれば、自分も熱くなれる。戦争が終わった後であれば好きにすることが出来るからな、とレオンハルトは僅かに期待して最後の仕事に望むことにした。

魔物兵が人間を置い囲んで殺す中。
ある戦場には、一人の〝鬼〟がいた。
「おおおおおおおおおぉぉぉ!!」
「ひぃ！　がっ――」
咆哮を上げて刀で魔物兵の頭部を斬り裂く。
「ひ、怯むな！　相手はたった一人だぞ！」
「し、しかし……！」
戸惑う魔物兵の隙を突いて、鬼は刀を投げて魔物兵を突き殺す。
既に何百、ひょっとしたら千もとうに越えているかもしれない。斬り過ぎてボロボロになった刀を捨てて地面に落ちていた味方の置き土産である刀を抜いて魔物を殺す。
「がああああああっ！」
「ば、化け物……！」
そこでたった一人で戦うのはＪＡＰＡＮの〝鬼姫〟――源頼光だ。
彼女は死地と化した戦場で未だ抵抗を続けていた。
味方は全員死に絶えた。戦場の何処かでは生き残っている者も少しはいるかもしれないが、いたとしても殺されるのは時間の問題だ。
だがそれでも頼光は一人で戦い続けた。
その戦いっぷりは凄まじく、数の上で勝るはずの魔物兵が怯えて後退りしてしまうほど。それも手伝ってか彼女は魔物の首を狩り続ける。
……あと、どれくらい戦える……？
自分に問いかけてみるが答えは出ない。何故なら、とうに限界は越えているからだ。

とっくに身体の感覚は無いに等しい。頼光を支えているのはただの気合だ。
そして雑兵であれば幾らでも殺してやるとも思う。痛みも何もない今はそんなことを考えられるだけの余裕があった。
だがそれも、やがて終わる。思ったよりも早く、終わりの時間は来たのだ。
「――確かに、これは凄まじい」
「れ、レオンハルト様！」
「……！」
その戦場に魔人レオンハルトが現れ、周囲は僅かにざわつき出す。頼光から見てまだ距離はあるが、その一つしかない目ははっきりと遠く、魔物将軍の近くにいる魔人を捉えていた。
「っ、おおおおぉぉ――!!」
確認した次の瞬間、頼光は一片の迷いもなくそちらに向かって駆ける。途中の魔物兵も殺しながら。そして向こうも、近づこうとするこちらに気づいた。
「……とはいえ虫の息か。遠くから魔法でも撃てば死ぬだろう」
「はっ、そのように。――魔法を放て！」
魔物将軍の号令とともに魔法の密度が上がった。
左肩が砕け、右脚が炎に包まれた。
しかし速度を一切落とすこと無く頼光は突っ込んだ。
……諦めて、たまるか……！
視界の奥に倒すべき相手。敵の総大将がいる。じっと指を咥えて待つのは源氏の武士の名折れだ。
大将の元には行かせないと道を阻む魔物兵を、頼光は突き刺すようにして突破した。
だがその隙に、左半身はほぼ消えた。
バランスを崩しそうになりながらも、頼光は右脚一本で跳躍し、魔人に向かっていった。
右の刀で魔物兵を殺し、しかし腹に幾つか突き刺された。血が喉から溢れそうになるのを堪え、前に進んだ。

だが今度は右半身も穿たれた。あと僅かなところで身体が倒れそうになり、しかし、
……まだ、行ける……！
足も無くなり、腕も無くなり、刀を失った。誰がどう見ても戦えないとい状況で、しかし諦めないのは脳裏の浮かぶ男のためだ。
……石丸様……！
二十年程前に出会い、助けてもらい、愛した相手を想う。彼には色んなものを与えてもらったのだ。
特に彼が掲げる夢に、頼光は憧れた。興奮した。眩しいものを見た。
かつて何もかもを諦め、武士として生きることを決めた自分を勇気づけたのだ。
だからこそ、頼光は諦めない。憧れた石丸のように。
一つとなった視界の中に、魔人の姿がある。もはや消えゆく命の中、殺到する魔物の攻撃を受けて首だけとなった頼光は、それでも食らいつくように行った。
そこでようやく魔人は動く。
魔人が空間から剣を取り出した。それを見ていながらも、頼光は叫び、突撃した。
「その首……貰い受ける……ッ！」
そして次の瞬間、頼光の頭部は魔人の剣に両断された。

魔剣を振り下ろし、最後の一兵を斬り捨てたレオンハルトは地面に落ちた女の頭部を見た。
「……ＪＡＰＡＮの女は恐ろしいな」
「は……？　ひっ！」
魔物将軍が同じ様に視線を下に向けると、そこにはなおもレオンハルトに攻撃を加えようとしたであろう女の首が足元にあった。
噛み付いてやろうとでもしたのだろう、既に死んで動かなくなっているが魔物将軍が恐怖するのも無理はない。

とはいえこれで終わりだと、レオンハルトは首を無視して踵を返した。魔剣も収め、周囲を見渡す。
平原には数えきれないほどの人間の死体があった。赤に染まった大地の上で、レオンハルトは言う。それは魔軍の完全勝利を表すもので、
「一先ず、戦争は終わりだ」
だが顔は東を見ている。その先にいるであろう大将首の事を思い、
「勝鬨を上げろ。――俺達の勝利だ」
天まで響かせるような魔物兵の勝鬨の声を耳にしながら、レオンハルトは戦場を後にした。

そうして、人類軍は魔軍に包囲殲滅され、僅かに残った残党もほぼ全て駆逐され魔軍の勝利で終わったのである。

夜。
無人の荒野を行く人影があった。
「……！」
屋敷を出て着の身着のままで駆けるのは藤原石丸。人類軍の総大将だ。
しかし今はそうであった、というのが的確な表現だろう。
何しろ人類軍は魔軍によって駆逐されてしまっているのだから。石丸が率いるべき者達の姿はもう何処にもない。
だが、それでも石丸は走り続けた。
それは偏に、自身の大切な存在のためであった。
既にこの世にはいないかもしれない。そもそも今更石丸が駆けつけたところで出来ることがあるのかは甚だ疑問だ。今更彼一人がやってきたところで守るべき存在はいない。守りたいなら最初から戦場に出ていくべきであった。
しかし石丸は心の中で諦めた。己が目指すべき存在、最強の剣士である魔人レオンハルトには勝てないと。自覚こそなかったが、心の奥

底では到底敵わないと認めてしまっていた。
だが走る。駆ける。足を踏み出す。それは何かに駆られていながら迷いある不確かな足取りであったが、失いたくないという一心で石丸は走り続けた。
屋敷から戦場までは到底一日や二日で辿り着けるような距離ではない。しかしじっとしていることは石丸には不可能であった。
この期に及んで自分は都合良く、行かなければならない。行かなければどうにもならないという思いに石丸は追い込まれていたが、それは間違いであった。
行ってもどうにもならない。それに未だ気づくことなく、石丸は夜の下を行く。常人では到底不可能な何時間もの全力疾走も、幸か不幸か、人類最強の石丸の肉体はそれを可能とする。
そうしてしばらく走り続けたところで、石丸はその影を見た。
「はぁ……はぁ……」
流石に息を切らしつつゆっくりと減速する。
その影を見て立ち止まろうとしたのは、やはり遠目でもそれを感じ取ったからであろう。他ならぬ、仲間の存在に。
「……よぉ」
「！　黒部、か……？」
距離が縮まるにつれてその姿ははっきりと石丸の目に映る。そこにいたのは、血に濡れた姿の妖怪王、黒部であった。
だがその姿は見るも無残なもので、全身傷だらけの有り様だ。色濃い血の匂いが石丸の鼻をそよぐ。
「逃げて、きたのか……？」
「……」
黒部は答えない。答える力がないのか。
いや、敢えて答えていないのだ。そう示すように黒部は石丸をじっと見続ける。
「他の、者は……？」
「……ほぼ死んだ」
「……！」

黒部は短くそう答える。石丸は絶句し、目を見開かせる。
「春は……」
「……捕まった。返して欲しかったら姿を現せだとよ」
その答えにようやく石丸はほんの少しだけ落ち着いた。
しかし、
「あいつと俺以外は全員死んだけどな」
「……そう、か……」
さもありなん、相手はあのレオンハルトだ。奴と奴が率いる魔軍と相対しては生き残る術はないだろう。
ましてや万全であればともかく、まとまりに掛けた状態で挑んでも勝機は薄い。
やはり勝てないのだ、と石丸の心に再び暗いものが差す。
「……で、どうするつもりだ？」
「どうするか……？」
思わぬ言葉に石丸は確認するように問いかける。
「ああ。これから、お前はどうする」
それは黒部にとって大事な確認の言葉だった。彼が初めて認めた人間の男、藤原石丸。その男の意志は、未だに消えていないのかと問いかける大事な質問だ。
だが、
「……どうすればいい」
石丸はその問いに覇気のない静かな声で答えた。
「どうすればいいのか……俺には分からん。分からなくなってしまった」
それは葛藤する石丸の心の叫びだ。
勝ちたいが、勝つことは出来ないし、それを可能とする方法も解らない。
だが勝たなければならないし、諦めてはならない。
そんな葛藤を石丸は負けてからというものずっと抱えてきた。
「何故こうなった……やはり、俺は間違えたのか……？」
自分の行動は何処かで決定的に間違えてしまっていたのか。途中

までは上手くいっていたようにも思えた。何もかもが順調だった。にもかかわらずこうなったのは何かを間違えてしまったからだろう。
「それとも、最初から間違えていたのか……？」
最初から分不相応な願いなど望まなければ――
「……お前の答えはそれか？」
「……分からない。俺は、一体どうすれば――」
再度質問を重ねてきた黒部に石丸は分からないと表情を歪める。
それを見た黒部は、深い溜息を一つつくと、
「――お前は、俺より弱くなっちまったのか」
「……なに、を――っ、ぐっ……！」
不意に黒部の攻撃を受けた石丸は身に着けていた帝ソードを抜いてその鋭い爪をガードする。その力は重傷とは思えない力の入った一撃だった。
しかし傷のことを考えると身体を激しく動かすのは危険である。ゆえに石丸は声を上げた。
「何をする!?　やめろ黒部！　その怪我の具合では――」
「やめねぇよ……！」
「っ！」
爪での連撃を剣で防御する。しかし黒部に止まる様子は見受けられない。
「お前と戦うのは久し振りだな、石丸……！」
「何故だ!?　俺には戦う気など――」
「お前には無くても俺にはあるんだよ!!」
石丸の言葉に被せるように黒部は怒りに吼える。
「忘れたか石丸ッ！　俺との約束を！」
「……約、束……」
ああ、と攻撃の手を緩めずに黒部は続けた。
「お前が弱音を吐いたり、諦めたり、情けねえ姿を見せて、俺を幻滅させるようなことがあれば――」
言う。それは二十年以上前の約束だ。
「――俺がテメェを噛み殺すってな……！」

「……っ！」
二人の得物が甲高い音を響かせる。
藤原石丸と妖怪王黒部。二人の男が昔に誓った約束。
それを果たすため、見るもののいない戦いが夜の荒野で始まった。

戦勝報告

――ＮＣ７０６年

魔物界東部。

曇天の空の下、禍々しさを醸し出している巨大な城がある。

そこは魔軍の本拠地。大陸の支配者であり、魔物達の頂点に君臨する魔王の居城――魔王城。

魔人レオンハルトは自らの職務に則り、戦いが終わって間もない中、軍を人類圏に残したまま単身、魔王城を訪れた。

それは任務についての報告のためだ。簡易的な報告は先んじて手紙で送っておいたが、詳細は自らの口で説明するのが齟齬を起こすこともない確実な方法だ。

階段を上がって目的の部屋へ向かっていると、道中で楽器の音色を耳にする。部屋にいることは間違いないらしい、と真っ直ぐ部屋に向かうと、レオンハルトはその扉をノックして声を発した。

「――入るがよい」

「はっ、失礼します」

楽器の音色が止むと同時に室内から返事が来る。入室の許可を貰ったレオンハルトは、久方振りにその部屋に足を踏み入れた。

「帰ってきたか」

「は……魔人レオンハルト。報告の為に一時帰参しました」

部屋に入ると直ぐ様片膝を付いて頭を垂れる。頭上から来る声は普段と変わらない平坦なもの。

「うむ、では聞こう。そこに座るがいい」

「はっ」

頭を上げて立ち上がる。気品に溢れた調度品で彩られた室内、椅子に座しながらも反対側に座るように示したその男は、約三ヶ月前に見た姿と変わりない。

異様に白い肌を持ち、貴族のような容姿、服装をしながらもその全身から溢れ出す気配は常人では耐えきれないほどに濃い魔の結晶。

魔王ナイチサ。その名を聞けば誰もが震え上がる恐怖の権化がそ

こにいた。
　彼はテーブルに置いていたワインを手に取ると久し振りに帰ってきたレオンハルトに向かってグラスを掲げる。
「どうだ？」
「いえ、職務中でありますので」
「フッ、卿は変わらんな。普段であればともかく、戦いの後くらいは勝利の美酒に酔ったらどうだ？」
「……任務を完全に達成したわけではありませんので。一杯だけなら」
　歓迎してやろうという厚意か、それとも何時も通りなのか。とにかくいつもの様に酒を勧めてくるナイチサの提案を了承し、グラスを受け取る。一言挟んでから注がれた赤い液体を口に含むと、一度それを置いて話を進めようと口を開いた。
「では報告致します。……藤原家率いる人類軍総勢２００万の内、途中で南部へと離散した５０万の軍勢を除いて全て撃滅しました。これにより、藤原家勢力の継戦能力は消滅したかと思われます」
　レオンハルトは一切を誤魔化すことなく事実だけを伝える。長年の忠勤もあってナイチサはこちらを信頼しているため、水増しや隠蔽も不可能ではないが、そんなことをしてもメリットはない上に、バレた時の代償を想像すると嘘は極力つかない方がよいのだ。
　特にそういった機微には目敏く、嘘を嫌うナイチサには自殺行為とも言える。信頼を失うだけでは済まないかもしれない。
「ふむ、続けよ」
　特に言葉を挟まれることもなく、先を促される。その通りにレオンハルトは続け、
「はっ。そして、藤原家参謀であった悪魔月餅を仕留めることに成功しました。――その首がこちらになります」
　懐から箱を取り出してナイチサに献上する。ナイチサはそれを自然に手に取ると、中身を開き――ニィ、と口端を歪めた。
「フ、フフフ……！　確かに。悪魔月餅の首、確かに受け取ったぞ。まさかこれほどに醜悪な面構えだったとはな。忌々しい奴ではある

が、こうして見ると中々に趣深いではないか」
　ハハハ、と悪魔の首を手に機嫌良さそうに笑うナイチサ。今回の戦争で一番重要な任務であり、そもそもこの悪魔を滅するために今回の戦争を起こしたのだ。その首が手に入ってご満悦なのも頷ける。
「直ぐに消し飛ばしてやろうかとも思ったが、これだと暫く飾り立て――いや、晒してやるのも悪くないか。貴様はどう思う？　選ばせてやるぞ、フハハ！」
　その問いかけはこちらに向けたものではなく、月餅の首に話しかけたものであった。当然何も語ることはないが、それを分かりながらも、月餅を貶めてやろうと敢えて屈辱なやり方で煽り立てる。よっぽど憎々しかったのであろう。ここ百年では一番喜んでいるかもしれない。
「うむ、うむ……よくやったぞレオンハルトよ。余の勅命をこれほど完璧にこなしてみせるとはな。やはり卿に任せて正解であった」
「……過分なお言葉光栄に存じます。ですが――」
　と、レオンハルトはナイチサに絶賛されるが、ここからは色々とマイナスな部分を自ら口にしようと報告を続けた。少し憂鬱ではあるが、これもまた自分の役目だ。レオンハルトは一息入れ、意を決してそれらを口にする。
「……ザビエルとその使徒の戦死、そして第一戦での敗戦により、ザビエル軍を中心に５０万近くの兵を失いました。ザビエルの敗北が原因とはいえ、この責任は――」
「ああ、それならよい」
　だが、報告と責任の所在を示す発言をしようとする前に、ナイチサはそれをあっさりと止めさせた。僅かに呆気に取られる中、レオンハルトは気を取り直して疑問を問う。
「ですが――」
「よい、レオンハルトよ。その件については聞いている。卿が言うように、ザビエルが人間――藤原石丸と言ったか。藤原家の当主に負けたそうだが、余としてはその責任は卿にはないと考えている」
「……左様ですか」

レオンハルトは困惑する。てっきり小言やお叱りの言葉の一つや二つは浴びせられると予想していたからだ。人間を下に見ているナイチサが、魔軍が一時とはいえ敗戦したなどと聞かされては激怒しないはずがない。

……月餅の首で怒りが吹き飛んだか？　だが……。

しかしそれにしてもだ。ナイチサはあまりにも興味がないように見える。冷淡、とでも言うべきだろうか。どことなく冷たい雰囲気が漂う。

だが次の発言で、レオンハルトはその怒りの矛先が何処に向いているかを改めて思い知った。

「そもそもザビエルが負けるから悪いのだ。人間如きに殺されるなど、魔人の面汚しでしかあるまい……全く、これでは卿に殺されていた方が良かったではないか」

「は……確かに、名誉という意味では……」

僅かに憤ったような様子のナイチサに、レオンハルトは気持ち弱めに頷くに留める。

やはりと言うべきか、ザビエルが人間に負けたことが気に食わないようだ。自分に殺されていた方が良かったなどと言うほどには。

「そもそも、最初その報を聞いた時は卿が殺したのかと思ったがな……だが、調べてみると本当に一対一で敗れたそうではないか。卿が手を下したわけではないのだろう？」

「……手は出されましたが、ザビエルとは戦うどころか顔も合わせておりません。使徒同士で小競り合いが起こった程度です」

その結果、使徒は戦死したがザビエルには関わっていない。関わろうとしてはいたが、その前に石丸がザビエルを殺ってしまったのだ。

「仮に卿が殺して、その結果敗走するような愚を犯していれば失態だが……今回のそれは、ザビエルが勝手に自滅したに過ぎん。奴も、卿を誅殺せんと企んでいたようであるしな」

ザビエル一人に任せていたと思うと頭が痛い、とナイチサは息を吐く。

どうにも怒りもあるが、心底失望したという面持ちだ。ザビエルは

ナイチサが初めて作った魔人であり、それでいて魔人の中でも上位の実力者だったのはレオンハルトも認めるところである。ゆえにその落胆は大きいのだろう。
「……ザビエルのことはもうよい。魔血魂は回収しているのであろう？」
「はっ、それなら……こちらに」
懐のポケットに入れていたザビエルの魔血魂を取り出してナイチサに手渡す。するとナイチサは一切悩むことなく、
「――――」
――ザビエルの魔血魂を、初期化してしまった。
「……これで、ザビエルについての話は終わりだ。報告を続けよ」
「……は、畏まりました」
レオンハルトはそれを見て、ほんの少しだけ瞳を閉じていなくなった同僚の事を思ったが、直ぐに気持ちを切り替えて続けた。
「後は、敵の総大将――藤原石丸の行方を捜索中です」
なのでその首は今暫くお待ちを。――そう言ったつもりなのだが、ナイチサは更に続けて驚くべき言葉を発した。
「うむ、まあ見つからないのであれば構わん。後は卿に任せる」
「……は……？」
思いがけない言葉に間の抜けた声を上げてしまう。それに目敏くナイチサは反応した。
「？　どうかしたか？」
「あ……ああ、いえ……その……」
レオンハルトは珍しく狼狽えたように言葉を紡げない。
……見つからなくてもいい……のか……？
敵の総大将だぞ？　とレオンハルトは心の中で自分にも問う。何としても見つけ出して殺すことが合理的かつ正しいはずだ。
ましてやあれほどの実力の持ち主である。レオンハルト程ではないにしろ、魔人を倒した実力と実績の持ち主。生きていては禍根を残すことになりかねない。
それこそゲリラのように戦われれば厄介であるし、再び奴を旗印に

人が集う可能性もある。歳を考えても戦えるのは後数十年もない。魔人にしてみれば極僅かな期間だが、それでも危険ではあるのだと。
「どうした？　何か進言があるなら余と卿の仲だ。好きに申せ。それとも……褒美でも強請るつもりか？」
「……褒美……いえ……」
「確かにこれほどの大仕事を僅か三ヶ月に満たない期間で成したのだ。それ相応の褒美を与えねば王として示しが付かぬのも道理だな。……よし、好きなものを申せ。限度はあるがそれを好きな褒美を好きなだけ下賜してやろうではないか」
「……そういうわけではないのですが」
「遠慮せずとも良いのだぞ。それとも言い辛いものか？　ふむ……ん、もしやまた胸の大きな美女が欲しいのか？　生憎と城に捕らえてある人間も少ないからな……すまないが、それなら人間界から好きなだけ摘んでくるとよい。文句を言うものなどおらぬ」
　果物かよ。好きなだけ摘んでこいとか……さすがに世の男性から怨嗟の声が届きそうだ。
　というか機嫌が良いせいか、いつも以上に厚意が凄い。そうではない、と言いたいが褒美は褒美で受け取らないと不服そうになるので最低限は受け取らなければならない。
　そもそも問いたいのはそこではなく、
「……褒美については考えておきます。それより、先程仰っておりましたが――」
「何だ？」
　はい、とレオンハルトは恐る恐ると問いかけた。
「……藤原石丸は……放置しておいてもよいと？」
　それはレオンハルトにとっては重要な問いであったが、しかし、
「……？　ああ、卿の好きにするがいい」
　あっさりとナイチサは石丸については好きにしろと言うだけ。まるで興味のない様子だ。そのことにやはり何とも言えない感情は沸き立ち、レオンハルトは再度確認するように、
「しかし……あれを放置しておくのは……」

呟く。だがそこでナイチサは眉をひそめつつも、
「む……？　……ふむ、そうか。なるほど」
「ナイチサ様……？」
何かを得心したように頷くナイチサを怪訝に思う。
だがそんなこちらの反応が可笑しいとでも言うように、ナイチサは苦笑混じりに視線を向けた。
「レオンハルトよ。卿は、余がどうしても石丸とやらを殺さねば気が済まないとでも思い込んでいたようだな？」
「――っ」
それもないとは言えない。バツが悪いように感じて目を伏せる。
だが追求の手が止まることはない。
「余は総大将の首くらいであれば無くても構わんよ。重要なのはこの悪魔の首と、生意気な人間共にある程度恐怖と絶望を与えることが出来ればそれで良い。家臣が決死の覚悟で戦っている最中に姿も見せず君主としての役目を放棄するような落伍者など、血眼になって探すほどではない」
「……」
その言葉に何も言えなくなる。こちらの様子を見てナイチサは一つ一つ丁寧にその考えを説く。
「ましてや卿はたった3ヶ月で150万以上の人間を殺し、この世に魔の何たるかを示したのだ。成果としては充分だ」
普段も国を滅ぼし尽くすこともない上、君主が逃走して見失ったとしても何も言うことはないはずだと。レオンハルトは分かっているはずだとナイチサは言う。
「にも関わらず放置を良しとすることに驚き、殺すことに拘ろうとするのは……他ならぬ卿が拘っておるのだろう？　その強者を、己の手で殺すことに」
「……それは」
「別に責めているわけではない。その在り方を称えはしても貶すようなことはない」
「……」

自分の性分を言い当てられ言葉を失くす。さすがはナイチサと言うべきか。
「それほどに唆るのか？　その男は」
「……そう、ですね。人間としては今まで見てきた中でも最強と言ってよいでしょう」
答えると、ナイチサは笑みを深めた。しかし意地悪いというよりは、愉快そうな笑みで、
「なるほど。卿がそこまで言うのだ。かなりの傑物なのだろうな。ふむ……面白い」
ではこうしよう、とナイチサはこちらに向かって告げた。
「その藤原石丸の処遇は卿に委ねるとしよう。殺すも生かすも好きにするといい。それを、褒美の一部とする」
「……はっ、そうして頂けるのであれば願ってもないことでありますが……」
迷いはあるが、どちらでも良いと言うなら歓迎すべきことのはずだ。困惑しながらも受け取る意志を見せる。
だが、
「余としても些か興味が出てきた。あくまで、卿が推薦するのであればだが――」
と、ナイチサは一拍置いて、
「――その男を魔人にしてみるのも面白そうだ」
「なっ……!?」
今度こそ絶句する。その反応を見たかったのだと言わんばかりにナイチサは笑い、
「ハハハ、勿論その判断は卿に任せる。褒美であるからな。余としては人間……それも余の魔人を殺した相手ではあるが……他ならぬ卿は推薦するのであれば新しい魔人とするのも吝かではない。ザビエルが抜けた穴も埋めねばならないだろう？」
なんなら卿の使徒にするのでも良いぞ？　とナイチサは言う。
どこまで本気かは分からないが、ナイチサが褒美だと口にしたのだ。よっぽどのことでなければ反故にすることはあり得ない。もし

連れてきたら本当に魔人にしてしまうことだろう。
……藤原石丸を魔人に……何を馬鹿な……。
しかし、その提案を受けて自分の中に迷いが生じる。殺すべきだと考えていたところでのそれだ。最初は殺したいと、やり合いたいと思っていたが、急に自由を与えられるとどうすれば良いか一瞬分からなくなる。
だが、答えは決まりきっているはずなのだ。
「……考えておきます」
「そうするといい。どの道、しばらくは兵を動かして捜索するのであろう？」
「その予定ですね。攻め落とした人間の国の管理や、戦後の処理もあるのでそれだけとは参りませんが」
特に戦後の処理というのは、ある意味で一番厄介かつ重要な仕事なのだ。たった三ヶ月。されど三ヶ月。その期間、戦場に出かかりで、溜まっている仕事は多くある。城に戻ったり、占拠した都市も回らなければならない。優先度は低いが、ペールとの約束もある。時間の拘束がエグいため、どこかで時間を見つけなければならないが。
……いざとなったら分身するか。
ただそっちは本体でやらないと駄々をこねられるのが問題ではある。とはいえ、
「そうか。ならばしばらくは城に来れないのであろう？　今日は、城に泊まると良い。勝利の祝いにとっておきの美酒をくれてやろう」
「……お言葉に甘えてさせて頂きます」
ナイチサが〝そうしろ〟と言うので頷いておく。
何だか以前にも増して気に入られているような気がしないでもないが……仕事はしやすいので助かるな、とレオンハルトはグラスの中の液体を飲み干した。
「――……と、彼は二百万の軍勢を打ち破り……ん～……ラストがいまいちですねぇ」

「……何やってんの？」
　人類圏にある都市。魔軍が占領したその街の屋敷の一室で、ハンティは後輩が机に向かって羽根ペン片手にうんうん唸ってるのを見て声を掛けた。
　すると後輩――ペールはこちらに振り返り、
「あ、始祖様。お疲れ様で～す。私は今絶賛執筆中なのですよーう」
「……もしかして例のアレ？」
　ハンティは部屋の壁に背中を預けると、半目で視線を向けてて質問を重ねる。ペールは頷き、
「そうですよ。今回の事を題材に新刊書いてるんですけど……ちょっとラストがぱっとしなくて……やっぱり、大戦争の割りには立ち塞がる強敵みたいなのが少ないのが駄目ですかねー。巻末のボスがいないのはちょっと……」
「……やっぱり、あの馬鹿の話か」
　ハンティは自分の予想があっていたことに喜ぶこともなく息を吐く。やっぱ剣王伝を書いてたのか、と。正直、微妙な気持ちにさせられるからやめてほしいのだが、ペールが好きでやっていることをやめろとも言えない。迷惑が掛かっているわけでもないし――
「あっ、そういえば今回は始祖様のモデルのキャラが戦いの楽しさに気づいて、バーサクモード入って変態的言動をしながら血みどろの大バトルを繰り広げるんですよ！　割りとその話には自信があって――」
「――何してくれてるの!?」
　全速力で書きかけのそれを奪う。ペールも咄嗟に抵抗したが、瞬間移動するこちらを捉えきれていない。あっさりと本を奪うことに成功する。
「あっ、ちょっ！　瞬間移動はずるいですよう!?」
「うるさい。んっと……ここだね」
　そして躊躇いなくそのページだけを破り捨てると、ペールから〝あぁっ!?〟という悲鳴が上がった。
　書きかけのそれを破かれたペールは涙目になり、膝を折って地面に

手をついて項垂れる。
「あぁ……私のレオンハルト様との性のリビドーを抑え込みながらも徹夜して書いた渾身の一作が……」
「……あたしのこと書くのやめてっていつも言ってるでしょ。懲りないんだから……ったく」
　毎度ながら微妙に申し訳ない気持ちになるからやめてほしい。まるでこっちが悪者みたいだ。
　どうにかしてちょっと励ましてやりたいが、どうしようか。仕事でも代わってあげて――
「うぅ……こうなったら始祖様がエッロエロでグッチョグチョになる本書いて発散してやりますよう……始祖様なんて本の世界の中でチ○ポ狂いになってしまえばいいんです。〝んほおおおおおアソコから火炎流石弾出ちゃうのおおおおおお。快感が瞬間移動しちゃうううううう〟みたいな感じで。く、くふっ……ちょっと面白いですね。これをファンクラブの方々に渡して――ハッ!?」
　ふざけた事を言っているペールの首根っこを、ハンティは後ろから笑顔で捕まえた。
「……ふーん、そっかそっかぁ……」
「あ、あの……始祖様ー？　離してくれませんかー？　というか目が笑ってないんですけど……」
　ペールがハンティの顔色を伺うが、その眼は据わっていた。そのまま彼女を引きずり、
「……そんなに魔法喰らいたかったんだね。いやー、ちょうどあたしも全力で暴れたいところだったんだけど……付き合ってくれるよね？」
　圧力を感じる笑みをペールに向ける。
　その瞳は赤く輝き、ギラギラとしている。翼や尻尾も生え、真の姿になったハンティにペールは青くなった顔で、
「の、ノー……」
「ん？　〝はい〟って言った？　よーし、それなら人気のない場所行こっか！」

「嫌あああああああっ!?　言ってない！　言ってないですよーーー!?」

そのままペールはハンティに掴まれ、窓から飛んでいってしまった。しばらくして轟音と一緒に悲鳴と、笑い声が響いたが、それを偶然聞いた魔物兵はその正体に気づきつつも、敢えてそれに深く突っ込むことはなかった。巻き込まれたくないし。

しかし近い未来、ハンティ様ファンクラブの会合にて、謎の作家〝P〟によって様々な情報がもたらされることになろうとは、この時のハンティには知る由もなかった。

そして二人がいなくなり、無人となった部屋の床には、途中まで書きかけの〝剣王伝〟の新刊が転がっていた。

支配

人類軍を殲滅し、勝利した魔軍。その報は瞬く間に大陸中に知れ渡った。

多くの人間が絶望し、あるいは諦観する中、勝利した彼らは占拠した人類圏の都市に集まっていた。

そこは魔軍に占領されたにしては景観が保たれた都市。レオンハルト軍が拠点として使うとある国の首都である。

「――では、これより我らレオンハルト軍恒例の新年会兼戦勝パーティを始めるが……為すべきことはまだ大いに残っている。羽目を外しすぎないよう――」

「勝利に乾杯ですわーーー!!」

「かんぱーーーい!!」

「……」

広場の中心。簡易的に作られた壇上で乾杯の挨拶を始めようと口を開いた魔物大将軍リーは、横からジョッキを持って現れたキャロルに機先を制された。

しかもその音頭に部下達も乗っかってしまう。やはり勝利した高揚感、多幸感によって気が昂ぶっているのだろう。普段はもう少し落ち着きがあるのだが。

「……まぁ、よいか……」

一斉にジョッキやボトルを傾ける兵を見て、せめて己が気をつけていればいいだろう、と息を吐く。言った通り、勝利したとはいえやるべきことは山程あるのだ。特に戦後の処理に関してはリーが最も気を揉む事案である。勝利というのは一種の毒のようなもので、それは酒のように一時の酩酊状態とも成り得る。魔物兵の風紀や規律が乱れる懸念があるのがこの時期だ。特に占領した街を無許可で荒らし回ったり、人間に暴虐の限りを尽くしたりなど、気が大きくなってしまう。

普段からレオンハルトが定める鉄の掟、鋼の意志で知られるレオンハルト軍ですら、勝利後のこの時期だけは羽目を外して色々とやらか

す輩が現れるのだ。戦後に人間を苦しめることはどの道許可されるので、厳しく取り締まられるわけではない。あって口頭での注意に留まる。

しかしだからといってルールを破っていいわけではない。物資の略奪、人間への暴行も全て決められた範囲で決められた分だけやるべきなのだ。魔物の間では、人間など下等種族であり何をしてもいいというのが多い価値観だが、リーはそうは思わない。

確かに種族全体として比較的劣っており愚かだというのも間違いない。

しかし、リーが尊敬するレオンハルトは元人間。魔人となった方々には少ないが元人間も存在する。ケッセルリンクやガルティア等の人間の中でも特異な能力を持った出身者や、最近だとパイアールなども元人間だ。

彼らは皆、例外なく優秀で高い実力を持っている。それこそ人間の頃からだ。魔人になって力を増したのは間違いないだろうが、それでもその事実を軽視してはならない。

このことから解るのは、人間にも優秀な者が存在するということ。それは戦場にいればよく解る。一人で魔物を何百と殺してしまうような化け物もいるのだ。

また、戦闘以外にも何らかの才能を持つ者もいる。有名なのは料理だろう。魔物は極一部の個体を除き、食材を調理するという文化はほぼないに等しいし、またその才能もない。それなりの期間を修行に費やせば不可能ではないが、それでも一般的な多くの魔物にとって料理というのは敷居が高い。

ゆえに魔軍――特にレオンハルトシティなどでは、料理を人間に任せることが一般的だ。料理を習った魔物、女の子モンスターなどがやっている店なども多いが、それでも未だ人間の料理人の割合は大きい。

そのためか、魔軍の中でも料理人だけは一定の地位を認められている。兵達も、料理人だけには一切手を出さない。何しろ暴力を加えでもしたらそれこそ処罰されてしまうし、それがなくとも困るのは自分

達だ。料理が食べれなくなる。一度調理した食材の味を知ると、もう元の食生活には戻れない。もっとも、素材のまま食べることもなくはないが。

酒なども最近はレオンハルトシティでも製造されているが、もっぱら人間の街から奪ってくるのが普通であるため、殺しすぎて作る者がいなくなっては困るのだ。

ゆえに決められた範囲内のみで、というのはそういった人間を選別する意味合いもある。無許可で殺すなど言語道断だ。兵達はそれを理解出来ていない。人間だからと無条件で舐めて掛かるのは良くないのだ。戦場で思い知っているはずだが、中々その考えを魔物の身で理解することは難しい。

とはいえ料理人などでも、増長して抵抗したり、舐めた行動を取る人間は処分されることとなる。魔物が上で人間が下というのは変わらない。それを分かっているものは待遇も良くするし、手厚く扱おう。分かっていないものは切られるだけである。

有名なのはガルティア軍などだろうか。魔人ガルティアはグルメかつ、一日に何百キロという食料を消費する。そのため料理人は奮闘することになるのだが、だからといって料理に手を抜くとそれを見抜かれて処分されてしまう。

とはいえレオンハルト軍での人間の扱いは、他の軍や大勢の魔物と比べると雲泥の差である。三食部屋付き。欲しいものがあれば働きに応じてきちんと支給されるし、融通だって利かせられる。虐げられることもない。

にも関わらず、待遇が悪いなどと文句を付けてくる馬鹿はレッドアイ軍に送り込んでやった。向こうなら魔軍の中でもかなりの高待遇であるし、働く日数も少ない。働くだけ働いたら後はずっと〝休み〟な上、ボーナスだってある。きっと一日と経たず声を上げて喜ぶに違いない。

そもそもレオンハルトの支配下に入ったということは、その全てはレオンハルトの所有物なのである。その所有物を勝手に殺すのも駄目だし、所有物が勝手をするのもあり得ない。それを何故分からない

のか。あれほど公平かつ器の大きい御方の下に就いているというのに――

「――ちょっとリー大将軍！　聞いてますの!?」

「ん……あっ、何でしょうキャロル様」

思考に耽っていると、目の前で不満顔の上司がいた。しまった、と自分を責めてみるがもう遅い。

「何でしょうじゃありませんわ！　せっかくわたくしの有り難いお話を披露していたというのに……わたくしの事は眼中にないんですの!?」

「そ、そういうわけではないのですが……」

眼中も何もない。というより、キャロルはよく自分と張り合ってはくるが、

……正直、私の事など気にせずともよいと思うのだが……。

キャロルよりも早期にレオンハルトの下に就いていたから目の敵にしているのだろうが、仮にそういう勝負だとしたら自分の負けは揺るぎない。

何しろ魔物大将軍とはいえ、自分は一介の魔物に過ぎない。キャロルの方はレオンハルトの使徒。どちらがよりレオンハルトに近いかといえば一目瞭然だろう。

だからこそそうではないと否定したのだが、キャロルは責めるように眉をひそめ、

「……なら何故話を聞いていないんですの？」

「ぐっ、それは……」

キャロルに痛い所を突かれて二の句を継げなくなる。確かに、上司の話を聞いていないというのは組織に所属するものとしてあり得ないことだ。

「申し訳ありません……」

ここは素直に謝っておく。すると周囲から、

「まぁまぁキャロル様。今は祝いの席なのですから、あまり責めずとも……」

「きっと大将軍閣下は今後のことについて気を揉まれていたのであり

ましょう」
　魔物将軍らからそんなフォローの言葉が届く。将校らによる席であるため、キャロルやリー以外は魔物将軍か魔物隊長くらいしかいない。本来ならレオンハルトや他の使徒の方々も列席するところだ。しかしレオンハルトは報告のために魔王城へ顔を出しているし、ハンティとペールは空を飛んでどこかに行ってしまった。悲鳴が聞こえたが、それは聞こえなかったことにしておく。
「……まぁ、わたくしは器が大きいので許してあげますわ！　細かいことは気にしませんの！」
　完璧使徒ですから！　と手を逆の頬に当てるポーズで得意げになるキャロル。周囲から、〝よっ！　完璧使徒〟、〝あまりにも完璧すぎて直視出来ない……！〟、などと囃し立てられるが、どうにも自分よりキャロルの扱いが上手くなってないだろうか。かなり得意気になって高笑いしている。酒も入っているためか、いつもより三割増しでアレなのだが、とか思っていると、
「その完璧なわたくしが完璧に手配した美食の数々を堪能するといいですわ！　今回の遠征で手に入れた新食材を使った新しい料理もありますのよ！」
「さすがはキャロル様！」
「あまりにも完璧……！」
　その言葉に魔物将軍たちも沸く。理知的で頭の良い彼らでも勝利の高揚感からは逃れられないのだろう。
　……それは私も同じではあるがな……。
　かくいうリーも、新しい料理を聞いては楽しみとなる。そう、そのためにも人間の料理人は貴重なのだ。弱かろうが頭が悪かろうが、料理が上手ければいい。下等種族であっても――
「フハハハハハハハッ!!　この新食材共め……ッ！　我がミシュラン一族に伝わる調理法で美味しくしてやるッ！　ドラゴンを葬り去った我が奥義を喰らえッ！　〝シベリアの落雷〟ッ!!」
　……だが、あの化け物は人間とカウントしない。あの、聞いただけではどんな調理をしているか全く想像出来ないが、文字通り必殺技の

ような連撃を雷のような轟音とともに食材に叩き込んでいるアレは人の皮を被った鬼か何かだと思う。
そういえばレオンハルト様の厚意で兵を労おうと一日だけ出張に来ているのだった、とリーは思い出した。あんなのでも料理は魔物界一である。有り難いが、出来れば音はもう少し控えめにしてほしい。
その点、
「……どうぞ」
「ん……ああ」
給仕に来た人間を見て思う。
レオンハルトが石丸の餌として捕まえてきた人間の女だ。しばらくは捕らえておけとの命令だが、料理が出来るとのことで手伝わせることとなった。逃げられないように監視と鎖付きではあるが役に立つのなら良いことだと思う。
藤原石丸の情に訴えかけるようなありふれた人質作戦だが、果たしてこれが成功するかどうかはレオンハルトを信奉しているリーから見ても微妙なところだ。
人間相手ではよくあることだが、国や軍の支配者層が我が身可愛さに逃げ出すことは珍しくない。そういうところが、人間の好ましくない部分だ。理解は出来る。敗戦した時、後の反撃のためにも将を生かさねばならないし、優先順位が違うのは解る。
だがそれを加味してもやはりあり得ない。魔物将軍、魔物大将軍と経験を積んできたリーは、石丸の将としての評価を凡将であると位置づける。
……途中までは稀代の猛将だと思ったが……最後にケチが付いたな。
だがそれも、レオンハルトが相手ならばしょうがないとも思う。そもそも敵対した時点で間違いだ。人間とて、魔軍――いや、レオンハルトに恭順し、忠誠を誓うのならば幸福は訪れるのだ。それならば、同じ志を持った……そう、〝同志〟として温かく迎え入れてやれるものを。
リーは魔軍のために働いている春姫や、他の人間達を見て〝こうあ

るべきだ〟という自身の理想の光景を肴に酒を呷る。
……それにしても料理の上手い嫁か……確かにそこは外せないだろうが……ううむ……。
軍の間でも、一部の料理の上手い女の子モンスターなどは人気が高い。部下からも、よく早く嫁でも作ってはどうかと聞かれるし、レオンハルトもそれを勧めてくるのだ。
レオンハルト様の頼みとあらば頷きたい、とリーは思うのだが、相手が難しい。
せめてレオンハルト様の様な素晴らしい相手であればな……、とリーは再びその話題を向けられる気配を感じて、重い溜息を吐いた。

「では、恒例の隠し芸大会を始めますわよー!!」
「おおおおぉぉ!」
使徒キャロルの掛け声に合わせて声を上げる魔物を遠目に見て、春姫は率直な感想を得た。
……凄い熱気ですね……。
勝利の宴と考えればこの熱気も無理ないかもしれないが、はっきり言って驚いてしまった。
その光景は、自分達が戦いに勝って喜んでいる様子と大差ない。違うのは種族――そして人間が働かされているというだけだ。
しかしその人間達も、特別不満そうにも見えない。内心どうかは分からないが、少なくとも表面上は普通に働いているように見える。
特に派遣されてきたという料理人は、恐怖と暴力を背景に働かされているという感じには、とてもではないが思えない。
魔軍に捕まり、捕虜となったからにはそれ相応の覚悟していたが特に何もされていない。精々、こうやって料理を作らされているくらいだ。どうにも思っていたのと違うというのが正直な感想だ。同じ様に働かされている人に聞いてみても、
「……え？　いつもこんな感じだけど？」
「いやまぁ……答えにくいけど、待遇は思ったより悪くないんだよね

……」
「我が一族は代々魔軍――ひいてはレオンハルト様に仕えてきた身！
全身全霊の料理を振る舞うのは当然であるッ！」
などと、あまりマイナスな言葉は返ってこない。
これなら監視も緩いのかな、とどうにか折を見て逃げ出せないかと試みる。しかし、
「――出来れば、妙な真似はやめてくださると助かります」
「！　貴方は――」
周囲をそれとなく観察していると、後ろから声を掛けられる。そこにいたのは、見覚えのある女性であった。確か、
「……エクレアさん……？」
「はい。お久しぶりですわね、春姫様。藤原家の宴会で顔を合わせた以来ですか」
そう、確かこの国の第一王女であったエクレアだ。国が開戦当初、直ぐに魔軍に攻め落とされて心配していたのだが、無事で何よりだ。
しかし何故かメイド服を着ているので気づくのに遅れた。
「……その服は……？」
「……訳あって、魔人レオンハルト……様に仕えることになりましたの。着慣れていないのであんまり言わないで頂けると……」
「あっ、ごめんなさい……」
やはり何か事情があるのだろう。軽々しく踏み込むわけにはいかない。素直に頭を下げる。
それにしても、ちょっとアレな服ですね、と思ってしまうが重要なのはそこではない。
しかし何と声を掛けるべきか迷っていると、向こうの方から軽い息付きで、
「……とりあえず安心してください。無為な暴力に怯える必要はありませんので。大人しくしていれば何もされませんし、食後のおやつだって出てきますわ」
「それはどういう……？」
随分と捕虜の待遇が良いように感じるが、一体どういう意図なの

か。いまいち解らない。
しかしエクレアは、その問いに簡潔に答えた。
「わたくし達は、大切な労働力だということです。……それより、逃げ出そうなどとは考えないでくださいね？」
「それは……」
それは無理だ、と答えたい。自分は、石丸の足を引っ張るわけにはいかないのだと。
だが次のエクレアの言葉に、春姫は何も言えなくなった。
「大体の事情は察しているつもりですが……わたくしも、わたくしの民のためにレオンハルト様の意志を優先させますので」
「……」
「恨んでくれても結構です。……さ、仕事も溜まっていますし、働きますわよ」
どうやら逃げることは不可能の様だった。監視が付いている。
やはり自分には、石丸を信じて待つことしか出来ないのだろうか。己の無力さを恥じ入る。
「……気持ちは分かりますが、皮肉なほどに良い環境ですのよ、ここは」
「……そう……みたいですね……」
確かに、考えてみればこれは毒かもしれない。
自分の様に理由があるのならともかく、普通なら抵抗しようという気が失われるだろう。抵抗しても無駄な上、地獄を見る。全く旨味がないが、従順にしていれば並以上の生活は送れる。後から聞いた話だが、エクレアのように優秀な者は、かなりの高待遇であるらしい。
中には以前とほぼ変わらないどころか、以前よりも良い生活を送っている者すらいるという。そういった者達は、むしろ魔軍に良い感情を持ち始めているのだと。
そしてエクレアも、複雑な思いはあるものの、それを認めざるを得ない一人だ。だからこそ、己の意志でレオンハルトに従うのだと。
春姫は、このような手段を取る魔人レオンハルトを、悪人というわけではないのだろうと感じつつも、同時に底知れない恐ろしさを感じ

る。強大な魔人でありながら力一辺倒ではなく、知恵を持って人間を懐柔する異端者。春姫にはそんな風にも見えた。

……石丸様は……。

そしてそれは、石丸の身を案ずることにも繋がる。

信じているが、これほどの相手と今まで戦い、実際にその強さを誰よりも感じているはずだ。

ならばどうして逃げずにいられようか。石丸とて完璧ではない。ＪＡＰＡＮでは神に等しい帝であっても、ただの人間であることを春姫はよく分かっている。

だが、それでも諦めてほしくないと思う。無事であってほしいとも思う。

やはり、自分は石丸に似て諦めが悪いのだな、と春姫は同じ月の下にいるであろう石丸を想った。

彼らの夢

――男には夢があった。

幼き頃に見た一冊の本の内容に惹かれ、憧れた。純粋で、叶うはずのない儚い夢であったが、子供の頃は男が子供であるがゆえに、現実を知らない子供の戯言だと相手にされなかった。大人になれば、男も現実を知るだろうと。

しかし男は元服しても、夢を語り続けた。周囲の人間はそんな男を、理解出来ないと言わんばかりに嘲笑し、また冷めた視線を送った。

きっとあいつは物を知らない馬鹿だ。もしくは頭がおかしくなった狂人。男の強さは誰もが知っていたが、その夢が叶うと思っている者は殆どいなかった。

だが、男はそれを分かっていながら夢を語り続けた。周囲に馬鹿にされるのは当然だ。

何故なら己は、馬鹿げたことをしでかそうとしているのだから。余人は当然、それを分不相応だと笑うだろう。

そして、笑ってくれて構わなかった。笑い話として他人に吹聴するのもいいだろう。夢が叶うまでは笑い話だ。

その代り、もし本当に夢が叶ったなら自分と一緒に目一杯喜んでほしいと、男は言った。

男がそう言い続け、いつしか周囲には人が増えていった。

彼らは男の夢を聞いて、何処か惹かれてしまった者達。男に魅せられてしまった者達だ。

彼らは最初、こう思った。――〝ああ、なんて馬鹿なんだろう〟と。

だが、夢のある話だと思った。その夢がもし叶うのなら、これほど痛快なことはない。

誰も彼も言葉は違えど、男に、自分に誓ったのだ。〝その夢を叶えるための力になる〟と。

そうして彼らは数多くの冒険と戦をくぐり抜け、とうとうあと一歩で夢を叶うところまで辿り着いた。

その中には、一体の化け物がいた。

満月の明かりが照らす荒野の真ん中で、鋭い爪と牙は男に向かって振るわれる。

男――藤原石丸はその手に持った帝の証、〝帝ソード〟で攻撃を防ぎながら、必死に声を掛けた。

「――やめろ黒部……！」

石丸の視線の先にいるのは妖怪王黒部。藤原石丸の部下となった男だ。

しかし今はそうではない。それを示すように、黒部は血に染まった巨体を動かし、石丸に向かっていく。

「うるせぇ！　誰がやめるかよ……！」

止める訳にはいかないと、黒部は言う。その理由は石丸にだって分かっていた。

昔、黒部と交わした約束。それを果たそうというのだ。ならば自分が悪い。戦いを挑んでくる道理も理解出来る。

しかし石丸は戦いたくない。戦うわけにはいかない。

何故なら――戦えば黒部がいなくなってしまうから。

魔軍にやられた傷は深く、その姿はとても痛々しい。傷を負っていない箇所など一つもなく、頑丈な爪と牙でさえも、一部が欠けてしまっている。今すぐ治療を施すべきであり、そうしなければ黒部はいなくなってしまうだろう。妖怪である黒部は死ぬことこそないが、壊れてしまうことはあり得る。

以前に聞いた話だが、妖怪は戦いでの負傷があまりにも深いと、壊れてしまうことがあるという。

その際は復活までに百年や二百年――あるいはそれ以上の年月を掛けて復活するのだ。

ゆえに死にはしないかもしれないが、石丸にとっては永遠の別れとなってしまう。

石丸には耐えられなかった。これ以上、仲間を失いたくはなかっ

た。
　だからこそ先程から黒部の攻撃に対して防御や回避のみを行い、戦いをやめるよう説得を繰り返しているのだが、黒部はそれを聞こうとしない。繰り出される爪の一撃を剣で受け流しながら石丸は言う。
「っ……約束は分かった！　だが、今ここで戦うのはやめてくれ！」
　石丸は必死に声を張り上げる。またしても無視されると思ったが、
「……何故やめなくちゃならねぇんだ？」
　返答が来た。石丸は即座に理由を答える。
「このままではお前が死んで――壊れてしまうからだ……！」
「っ……何故俺が破壊される……！　俺はテメェを噛み殺すって言ってんだろうが！」
　しかし、あくまでも黒部は石丸を噛み殺そうと戦いを続ける。
　だから石丸は言った。大切な仲間の、馬鹿げたことをやめさせようとして、
「――お前が俺に勝てるわけないだろう……！　〝馬鹿〟なことはやめろ……！」
「――――っ」
　その容赦のない現実を突きつける言葉に、黒部は一瞬止まった。

　黒部は石丸の言葉に、懐かしいものを感じた。
　しかし石丸が黒部に言ったことではない。逆だ。
『――魔人を倒して世界征服するだぁ？　……ハッ、馬鹿なこと言ってんじゃねぇよ』
　昔――黒部が石丸の夢を聞いて、似たような言葉を口にしたのだ。
　だからこそ、黒部は一度止まり、再度石丸を強く睨み付ける。
「……よりによって、お前がそれを言うかよ」
「……何？」
　石丸は訝しげに眉をひそめる。どういうことだ？　と。忘れてしまったかのように。
『そうとは限らんだろう？』

『……さすがに難しくねぇか？　魔人はとんでもねぇ化け物だって俺でも聞くしな。……いくらお前でも勝てるか？』
それは遠回しに石丸の身を案じた言葉でもありながら、どこか期待を込めたような問いでもあった。自分の認めた男ならば、と。そしてその答えは当然、
『――勝てないと誰が決めた？』
だから黒部は言葉にする。
「……俺がテメェに勝てないと……誰が決めた？」
その問いに相手は答える。
『……誰がというかな……人間は普通、魔人には勝てねぇだろ。そこらの人間が妖怪に挑むようなもんだ。俺だって言うぜ。〝お前は俺より弱ぇ。諦めな〟ってな』
「黒部……お前は、俺より弱い……！　戦ったらただでは済まんだろう……！　だから――」
だから、黒部はその問いに答えることが出来る。
『だから諦めろと？』
「……だから諦めろと？」
相手は問いに頷く。
『……態々勝てねぇ相手に挑んで死ぬこたぁねぇだろ。そんなもん、ただの無駄死にだ。馬鹿だと笑われちまうだろうぜ』
「無駄に戦って消えることはない……！　頼む、黒部！　馬鹿なことは――」
無駄なことはやめてくれ、と懇願するように言った。
ある時、黒部は不安になったのだ。その石丸の有り様に。
いつか石丸は――自分の認めた男であり、自分なんかのことを仲間だと言ってくれた男が――いつか無為に命を散らすのではないかと。
黒部は、石丸や今いるこの環境が好きだった。
素直になれず、口にすることこそ出来ないが、ずっと彼らと過ごしていたかった。
ここには自分を怖がるものはいない。見た目だけを見て〝化け物〟だと石を投げ、あらぬ罪を被せてくるものはもういなくなった。

それを作ってくれた男を死なせたくない。その死を汚したくない。死んだ石丸を〝馬鹿な奴〟だと笑う相手を噛み殺し、怒りと悲しみに苛まれるような時間を過ごしたくない。

仲間を得て弱くなってしまった黒部は遠回しに彼に言ってしまったのだ。――〝どうか諦めてくれ〟と。〝自分の命を大切にしてくれ〟と。分不相応な夢を追って苦しむ必要はないと。

だが彼は、到底無理なことだと相手に諭され、その言い分を理解しつつも――しかしこう言った。

『――知ったことか』

「……知ったことかよ」

「……!」

相手は目を見開いて驚く。だが、そんなことは今まで何度だって言って聞かされてきた。

――だから、俺は〝馬鹿〟をやる。

『馬鹿げた夢であるのは承知の上だ。無論、何も成せないで死ぬ可能性だってある。大切なものを失う可能性もある。それら全部を分かった上で、俺はそれでも――』

「馬鹿な事だと分かってる。分かって、それでも――」

――救いようがないほどに馬鹿げたことをだ。

――だが、とても大切なことを俺はやる。そう心に決めて、

『高みを、頂点を目指す』

「俺は、お前に挑む」

黒部はただ全力で、相手に向かっていった。

妖怪としての、化け物としての自分で。

どれだけ無駄なことだと笑われようと、全力で夢を追いかけていたあの頃の石丸を思い出させるため。

「――行くぞ……!」

――黒部は夢へ向かって突っ走った。

石丸は正面から突っ込んできた黒部に気圧された。

妖怪王としての身体能力に任せた力任せの突撃。それは単純な力比べとして考えた場合脅威ではあるが、技術で圧倒的上位に立つ石丸にとって、それは脅威とはならないはずだ。
にも関わらず、石丸は黒部の迫力に一歩後ずさった。
「ゴォオオオ

だがそれでも石丸は戦うどころか、こうも思ってしまう。
――もう、いいのではないか。
ここで黒部に殺されてしまうのが、ひょっとしたら一番いいのかもしれない。
そうすれば黒部は約束を果たせるし、石丸も今ある苦しみから解放される。
これ以上頑張って何になるのか。もう何もかも失ってしまったのだ。どうにもならない現実に直面しているのだ。
ならば諦めても構わないだろう。誰も文句はないはずだ。
そう思っていた石丸の耳に、黒部の言葉が届く。
「テメェ！　まさか諦めるつもりか!?」
「……そうだと言ったら……どうする？」
黒部はその答えに吠えた。
「何故だ!?　テメェは……テメェには、夢があるんだろうが！」
ああ、そうだ。夢ならあった。確かにあったが、
「それを追いかけて、今更何になる……！」
「テメェがそうしたいって言ったんだろうが！　寝ぼけてんじゃねぇ！」
ああ、言った。自分でそう決めた。決めたが、
「俺は、奴には勝てない……っ！　頂点には届かない……！」
己と頂点の間には、非情な程の差があるのだ。多少であれば戦うことでその差は縮まる。しかしその差が埋まったところで、勝機は絶望的だ。
人間と魔人という種族の壁。そして千年という経験の差は大きい。
「俺がどこまで夢を想い、これだけ剣を鍛えても……何の意味もない……っ！」
「それでも、ここまで来たんだろうがッ!!」
ああ、確かにここまでは登りつめた。
しかしどうしようもないほどに、神は残酷だ。
「想い続けるだけでは、夢は叶わない……！　努力しても、欲しいものが手に入るとは限らん……！」

それは幼い頃から知っていたはずの現実。何度も聞かされてきたこの世の理だ。
「夢を叶えるには〝勝つ〟しかない……！　どうしようもなく、そのための力が必要なのだ……！」
勝たなければ意味がない。結果を出せないのならば、想いや努力なんてものは無価値だ。
そして勝つには、想いや努力とは関係ない――〝実力〟がいる。それさえあれば、他のものがなくとも勝つことは出来るのだ。
「俺には、その力が無い……！　無かったんだ、黒部……！」
「……」
分かってくれ、と。
許しを請うように石丸は歪んだ表情で黒部に懇願する。
いつしか戦闘は一時止まり、黒部は情けないことを言う石丸をじっと見続ける。
しかし、
「――ふざけんじゃねぇ!!」
「……っ！」
黒部は怒りに震えながら、石丸に向かって言葉をぶつける。
「テメェはそれを分かった上で、夢を追うことを選んだんだろうが！」
「っ、だが……！」
「今はそうじゃないとでも言うつもりか!?　――それこそふざけんじゃねぇぞ!!」
いいか!?　と黒部は叫ぶように続ける。
「テメェが諦めるのは勝手だが、その前に思い出しやがれ！」
黒部は言う。それは、
「俺や俺達は、テメェの夢と――夢を語る石丸！　何処の誰でもねぇテメェに惹かれたんだ！」
「……それは……だが、その仲間も……」
仲間はもういない。だからこそ、石丸は諦めたいのだと。
だが、黒部は言葉を止めなかった。
「――俺達の夢は、テメェの夢を叶えることだ!!」

「――――」
「俺はなぁ石丸！　俺の認めた男は――」
黒部は一度、そこで言葉を区切って続けた。何かを飲み込むようにし、しかし反復して、
「俺の認めた男は――どれだけ馬鹿にされようがッ！　どれだけ後ろ指をさされようがッ！　負けて逃げるようなことがあっても決して最後まで諦めない強ぇ奴だ!!」
――石丸は幼少の頃から、決して夢を追うのに良い環境であったとは言えなかった。
藤原家という名家に生まれはしたが、４男という家督を告げない立場。加えて彼の生い立ち、言動や行動が彼を厳しい環境に追いやった。
親からも距離を取られ、別邸の屋敷に隔離された。腫れ物のように扱われ、親しいと言える人物は少なかった。将来は道具のように扱われることが確定していたが、彼はそれに抗った。
しかしそれは茨の道だった。実家を出て直ぐに追手が送られた。彼を亡き者にしようと刺客も多く送られた。
意外にも、負けたことだって何度もあった。幼少の頃から彼に敵う大人はいないほどの剣士であったが、それでも成長しきるまでは格上の実力者相手には分が悪く、何度も打ちのめされた。
そして何度も言われた――お前の夢はそれこそ、夢物語だと。到底叶うはずのない馬鹿げた目標。そんな無駄なことは諦めろと。
だが、それでも彼は諦めなかった。
「どれだけその道が険しかろうがそいつには関係ねえ！　ただ夢に向かって真っ直ぐ走り続ける！　馬鹿だ、やめろ、なんて言っても聞きやしねぇ！　周りの頭の良い連中や、自分より強ぇ相手に向かってそいつは決まってこう言うんだよ――」
それは、
「んなもん知らねぇ！　〝知ったことか！〟ってな！」
周囲の計算なぞ知らん。それはあくまでもお前達の言い分だと。それ自体はいいが、

『俺の限界を、お前が勝手に決めるな！　俺の限界は、俺が決める！』
　そんなことを、石丸は言うのだ。
「とんでもねぇ奴だと思ったぜ！　馬鹿だとも思ったけどな！　……だが、同時にこうも思った！　この馬鹿はすげぇ馬鹿だってな！」
「……褒めて、ないだろう……」
　小さな聞こえるかどうかの声で石丸は呟く。
　しかし黒部の耳にはしっかりと届いた。
「……そんで次にこう思った！　〝この馬鹿の夢を、馬鹿のままで終わらせたくない。その夢が叶う瞬間を一緒に見たい〟――なんて小っ恥ずかしいことを思っちまったんだ！」
「……」
「確かにもう殆どいなくなっちまったし、実際には聞けねぇが、これだけははっきりと言えるぜ！　俺達は――」
　彼らは、
「――お前の夢を叶えるために、ここまで辿り着いた！」
「辿り着いた……」
　今度の声は、黒部には届かなかった。だが、
「それは無様でも何でもねぇはずだ！　あいつらは、お前が最後に夢を叶えることを信じて最後まで戦った！　無駄死にじゃねぇぞ！　無駄死にかどうかここから決まる！」
　その意味は、石丸にも分かった。
「お前が諦めたら、俺もあいつらも無駄死にだ。今、一人で残ってるあいつもな」
「……春……」
　春姫。魔軍に囚われ、自分が来るのを待っているであろう人物。
　幼い頃からいつも一緒で、ただの一度も石丸の夢を馬鹿にせず、ここまでずっと付いてきてくれた大切な女性だ。
「テメェが夢を追ってみせるなら俺達は本望だ！　――だから迷ってウジウジしてんじゃねぇ石丸！　テメェには、計算とかそんなのは似合わねぇ！　そんなもんは周りの奴に任せて――」
　言う。再度構えて、

「――ただ突っ走れッ!!　藤原石丸!!!」

――男には、夢があった。

それは世界最強の剣士を倒し、その手で世界を掴むこと。

幼き頃に見た物語に魅せられ、男は一振りの刀を握った。

最初は誰も本気にはしていなかったが、どれだけ経っても剣を振り、どれだけの苦難が降り掛かっても諦めない男の姿を見て、いつしか男の周りには多くの人が集まった。

しかし男は、あと一歩のところで夢に敗れた。

辛くも命は拾ったが、その代わりに男は大切な人達を幾人も失った。

絶望に苛まれ、膝を折る。夢を諦めかけた男の前に、一体の化け物が現れた。

化け物は男の大切な仲間で、命を懸けて男に大切なことを思い出させた。

――ああ、そうか……。

それは男の、本当の原動力。

夢を追うと決め、ここまで頑張ることが出来た力の源。

――俺は、俺の夢を信じてくれる人のために、ここまで来たのだ……。

最初は、同じ屋敷で閉じ籠もっていた少女にも夢を見せたいと思ったのが始まりだった。

将来を想い、不安と絶望を感じ取る少女に、明るい未来を見せてやろうと思った。

夢を語り、それを見届けろと言うと、彼女はぽかんと間の抜けた表情を見せた後――〝たのしみです〟と笑ってくれた。

そして応援してくれた。

男がこれまでよりも更に強く、夢を追おうと心に決めた始まりだった。

それから男の夢を応援する者はどんどんと増えていった。

男は彼らのために、夢を掴む自分を見せたいと思った。
いつしか男は彼らに支えられながら、夢を追い続けた。
――支えてくれる者達がいたからこそ、夢を見ることができたのだ。
彼らは男に夢を見せてくれたと語ったが、それは逆も然りであった。
男は彼らに、夢を見せてもらったのだ。
この夢は、自分だけのものだと思っていた。
しかしそうではなかった。
それに気づいた時、男は心に再び、火が灯るのを感じた。

「――――俺は」
藤原石丸は目の前の大切な仲間に気づかされる。
……俺はまだ、何も終わっていない。
「まだ何も、負けていない……！」
何故ならまだ生きている。
多くの仲間達のおかげで、ここに立ち、呼吸を行い、鼓動は強く脈打つ。
そして何よりもまだ剣を握ることが出来ている。
まだ戦い、夢を追うことが出来る。
「……へっ、ようやく馬鹿に戻ったか」
「……黒部……」
そして気づく。
まだ自分の夢を信じて、支えてくれる仲間がいることに。
……春姫。
自分の夢が叶う瞬間を信じて、待っていてくれる大切な人がいることに。
……もも……。
自分の帰りを待ち、そして、後に継いでくれる家族がいることに。
ならば、

「俺は……勝ちたい」
――〝勝つ〟。
「勝って……夢を掴みたい……！」
そのために、頂点に挑みたい。
――差は歴然。勝ちの目はほぼ存在しない。次に負ければ殺されるだろう。
だれかが言うであろう、現実を知らせるそんな言葉。そんなことは、
「知ったことか……！」
そんな言葉は言わせておけ。限界など、勝負など、やってみなければ解らない。以前負けたからまた負ける。そうとは限らないだろう。
そして、死んで夢を追えなくなって、初めて〝負け〟だ。それ以外はまだ負けではない。
何も考えず、全力で挑むだけだ。負けた時のことは、負けてから考えろ。その覚悟は決まっている。
自分はいつだってそうやって挑み続けてきたはずだ。
だから、
「……俺の役目も、そろそろ終わりか」
「黒部……お前は――」
「皆まで言うんじゃねぇ。……もうじき終わりだからよ」
黒部が笑みで言う。全身から血を流したまま戦い、必死に言葉を掛けてくれた一体の化け物。
その終わりが迫っている。
だからと、黒部は続けた。
「最後に、付き合ってやる。……準備はいいか？」
「……ああ」
「うし。じゃあ――行くぜ」
間を置き、表情を歪めたのはほんの一瞬。石丸は黒部の覚悟を感じ、それを無駄にしないためにもただ頷いて、剣を構えた。
……こんなにも、軽かったか。
剣を持つ手が軽い。先程までは沼に嵌ったかのようだが、今は剣に

羽が生えたかのようだ。
しかし別の意味で、剣が重い。これから大切な仲間と別れなければならないのだ。
そのための言葉として、石丸は、
「――黒部」
「あん？」
「……お前がいて、楽しかったぞ」
「……ハッ、そうかよ……」
黒部は目を細めると、それだけ言って構えた。
最後まで素っ気ない奴だ、と笑う。だが、妖怪としては駄目だな、とも。
その優しい瞳を見て、石丸は心を決めると、彼の最後の攻撃を受け止めた。
「――〝妖怪槍津波〟ッ!!!」
「――ッ！」
妖怪王黒部の全力の必殺技。存在と力の全てを使ったその一撃は、石丸の知る彼の必殺技よりも遥かに強く、鋭くなっていた。
……さすがだな、黒部……！
本当に面白く、頼もしい部下を持った。やはり思ったとおり、黒部がいて退屈しなかったなと思う。
連撃は力強く、その一撃一撃がまるで魔人の力のようであった。
身体能力だけ見れば、石丸を越える強さ。膂力を持つ黒部の全霊の必殺技は防ぐだけで腕が痺れ、吹き飛ばされそうになる。
……受け流すか!?　だが……！
ただ受け流すだけでは、連撃は止まない。黒部は自身が壊れるまで続けるつもりだろう。
一撃、黒部の連撃をどうにか防いで前に出て、一撃を与えなければならない。長時間続けば黒部も倒れるだろうが、それでは駄目だ。
……このくらい、正面から打ち勝てないでどうするというのだ！
頂点は、力一点だけとっても黒部より確実に上だ。これをどうにかして上回らなければどうしようもない。

ならばどうする。どうすればいい。
答えを出せ。どうにか出来るはずだ。自分は、こんなものではない。
そうして黒部の必殺技を受け――そして、石丸は気づいた。
だが、それが出来る保証はない。
しかし、それでもやるのが石丸という男だ。だから、
「行くぞ――」
もう止まることなく、石丸はその剣を放った。

黒部は、石丸に必殺技を放った。
自身の命を懸けた最後の一撃は、普段の自分を大幅に上回る最高の一撃だった。
だからこそ、石丸も足を止めてしまっている。
しかし、石丸はその状況を打破した。
……ようやくかよ。
全く、世話が焼ける。相当の馬鹿をやらかしてしまったという自覚がある。
まさか人間のために命――ではないが、妖怪にとってそれに近いものを懸けてしまうとは。
だが後悔はない。
石丸のためなら、黒部は何だってしてやれる。
何せ自分の認めた男だ。
そしてだからこそ、自分に勝つのも当然のことである。
……やっぱ強えなぁ……。
やっぱり、石丸は強い。
これならきっと魔人とも戦える。夢が叶うかどうかは分からないが、勝っても負けても再会することは叶わないだろう。
石丸が不意に動きを見せた瞬間――黒部の必殺技は正面から防がれ、そして同等以上の威力の剣で弾き返された。
そうして黒部の懐が空いた刹那に、石丸は剣を縦に振り下ろした。

「――――俺も、楽しかったぜ」
だから、黒部は最後にそう口にした。
妖怪として恐れられた黒部は、破壊される最後に自分を仲間に入れてくれた相手に感謝し、意識を手放した。

「……黒部」
地面に倒れた黒部が消えていく。
妖怪は死なない。破壊されたとしても、一時的に消えるだけだ。
数百年、あるいは千年以上の時間を掛ければ、復活出来る。
しかし石丸は人間であり、そこまで生きることは出来ない。黒部とまた言葉を交わすこともないだろう。
だからこそ今生の別れとして黒部が消えゆく最後まで見届けると、
「――ではな」
敢えて彼のように軽い挨拶を送り、背を向けた。
最早、迷うことはない。
夢を掴み取るため。頂点に挑み、勝利するため――ただ行動するのみだ。

戦後処理

魔王城の報告から戻ってきたレオンハルトは、まず自身のやるべきことに取り掛かった。

戦争の終わりには必ず戦後処理が伴われる。それは魔軍も例外ではない。

人間同士の戦争ではないのだから交渉してどうこうというのはないが、それでもやるべきことは多々ある。

占領した都市を的確に運営するための調整――とはいえ魔軍の運営といえば人間を如何に使うか、ということに終止する。人間を殺し、弄び、恐怖と血の匂いを刻みつける。魔王の方針としてこれらは最低限やるべきことだ。魔物兵の多くもその時間を楽しみにしている。

かといって殺しすぎてもよくない。こちらは魔軍参謀であるレオンハルトの方針だ。

人間は生かさず殺さず。利用できるものは利用し、適度に魔物に貢献させる。復興が出来ないほどに壊してしまっては奪うことは出来ず、自分達で作るしかなくなる。

仮に世が魔物の天下になれば、否が応でもその辺りのことを考えなければならないが、それを考えるのは今ではない。

今は敵を作り続けることが肝要なのだ。

そのための調整は妥協しない。各占領地に送り込む兵の数に、魔物界に持ち帰る物資の数、占領期間、様々な議題をキャロルやペール、大将軍リー以下、魔物将軍らと処理していく。

そしてレオンハルトにとって良い誤算があった。

それは新しくレオンハルトにメイドとして仕えることになったエクレアの存在だ。

「――付きましては、より魔物界と人類側の各都市への往路を迅速に行うべく通商路と隣接都市の道の整備行うのがよろしいかと……」

その発言に参列する魔物将軍らは舌を巻く。

彼女は人間側の代表として、唯一会議に参加し、一応だが意見を述

べることを許されていた。通常は魔軍側で全てを決めるか、参加してもこちらの決めたことを飲ませるためにそこにいる存在であり、何か案を出すことなどない。魔物を恐れて発言を躊躇するか、欲張って迂闊な発言をして黙らされるのがほとんどだ。

しかしエクレアはレオンハルトに飼われることになった人間だ。ならば特に問題はない。少なくともレオンハルトが認めているのだから異を唱えることもない。

レオンハルトとしても情報を提供させたり、人間を働かせるための窓口として最初から話を聞かせたほうがやりやすいだろうと配慮してのものだった。

しかし、エクレアの能力は予想以上であった。

彼女は元自国や周辺国、地理など、人類圏における多くの情報を知っており、また、その活かし方も欠点もよく理解していた。

ゆえに彼女は、魔軍のためになると占領地の交通を整えたり、人間の技術者との折衝を行ったりしている。それは確かに魔軍にとって有益ではある。だが彼女は、

……魔軍の力を利用し、今の内に自国内のインフラを整備する気か。

魔軍に益をもたらすのと同時に、魔軍がいなくなった後に自国が良くなるよう開発を行う。後で彼女自身がいなくなろうとも、一度整備した道などは残るのだ。

ここで成したものの分、後でこの土地に住む人間の得になると。

魔軍にとって有益であれば仮にそれに気づいたとしても無視は出来ない。最低でも考慮に値するものだ。

その証拠に、魔物将軍らは彼女の案を受けて議論を白熱させている。

安易に否定しないのは、この軍の魔物将軍達が理知的で、人間だから、という理由だけで良いものを認めないということをしないからだ。

加えて、エクレアはレオンハルトのことも結果的に利用している。

レオンハルトのメイドという肩書きは、レオンハルトが思っている

より魔物界では効果がある。そもそも人間を従えている魔人は何もレオンハルトだけではない。
有名なのはカミーラだ。彼女は自身の城に、自分好みの美少年を飼い、中には下級使徒としている。
この下級使徒、というのが魔物達にとっては厄介で、種族上はたとえ人間だろうがわんわんだろうが、下級使徒となった時点で魔軍内では魔物大将軍よりも上位の立場に位置づけされる。
どれだけ脆弱だろうが、新参だろうが逆らうことは出来ない。力で殺すことは出来るだろうが、魔人を怒らせたらどうなるかは火を見るより明らかである。
レオンハルトのメイドにしても同じことだ。例え下級使徒でなかろうとも少しでも大事にしているものに危害を加えては、結局は怒らせてしまうし、そもそもレオンハルトの従者やそれに近しいものが弱いとは限らない。
メイド長さんや料理長、そしてあのドラゴン――ライゼンなど、使徒でなくとも力で敵いそうにない化け物だっている。
レオンハルトのことをよく知る勤続年数の長い古参や中堅の将軍達は意見を否定したくらいで怒るわけがないと分かってはいるが、それはそれとして彼らが畏敬するレオンハルトの、その従者相手に横柄に振る舞うのはどう考えても失礼だ。下級使徒だろうが従者だろうが、仮にペットや奴隷であっても、魔人の所有物であることには変わりなく、それに手を出すのは、喧嘩を売ってると取られても仕方ない。上位者の不興を買わないことは、魔物界において数少ない基本的なルールの一つ。上位者の決めたルールこそが、下位者にとってのルールとなる。――命がいらないのなら話は別だが。
そういった思考が極一部のどちらかというと否定的な新参の将軍らを躊躇わせているが、概ね会議は順調に進んだ。
エクレアの活躍によってキャロルやペールが嫉妬するという事態はあったが、戦後処理に関しては問題ない。
だが、レオンハルトは戦後処理の最中もずっと、頭の片隅に一つの問題を抱えていた。

それは魔王城で魔王ナイチサに言われたこと。
未だに姿を表さない――藤原石丸の処遇についてだ。

人類圏の平原を行く魔物兵の集団がある。
その軍は当然魔軍であるが、どちらかと言うと戦後処理に奔走しているレオンハルト軍ではない。
「おら、テメェら！　草の根を分けてでも探し出せ！　俺達に休んでる暇はねぇぞ！」
「は、はっ！」
彼らの中心に立ち、部下に怒声に似た指示を下しているのは魔物大将軍コウウ。
そう、彼らはコウウ率いる旧ザビエル軍。
戦争中の失態を出来る限り雪いで見せようと自ら藤原石丸探索の任を引き受けたコウウとその部下達の姿だ。
「クソっ……まだ見つかんねぇのか……！」
その様子はどこか余裕がない。
特に大将軍のコウウはその焦りが表れてしまっており、しきりに悪態をついている。
「も、申し訳ありません……ですがやはり、何の手がかりもなく探すとなるとどうしても時間が――」
「謝ってんじゃねえよ！　うざってぇ！　謝る暇があるなら探せ!!」
「……は、はい」
兵に不安が伝播してしまうその焦り方は、将としてあるまじき姿であったが、そこを気にしている余裕はコウウにはない。
彼は戦後の論功行賞にて判断が下されるまで、休んでいる暇はない。
今この瞬間にでも、魔王ナイチサか魔人レオンハルトの命令によって首を切られるかもしれないのだ。魔軍の中で首を切られるというのは文字通りの意味だ。
魔物大将軍という立場にいながら無能扱いを喰らえば、いつ切り捨

てられるかわからない。
実際には両者ともその気はなかったが、コウウには知る由もなかった。
「〜〜っ、二ヶ月以上も進展無しなんざ普通はあり得ねぇぞ……！」
コウウはもはや自ら兵達の先頭に立って探し始めるほど焦っていた。
既に藤原石丸の捜索を始めて二ヶ月を過ぎ、やがて三ヶ月目に差し掛かろうとしている。
その間、コウウは軍を率いて人類軍の拠点であった場所を中心に捜索を始めた。
しかしどこを探しても石丸の影も形も無い。
石丸が終戦直後までいたという屋敷までは何とか見つけたが、そこはもぬけの殻であり収獲はなかった。
人類軍に所属していた兵士を探し出して聞き出したが、拷問にも限界がある。そもそも一兵士如きがそんな重要な情報を知ってるはずもない。
かといって将は殆ど皆殺しにしてしまった。
レオンハルトの策でも現れないのは、ある意味コウウにとって僅かに朗報だが、上司の細かな策が実を結ばなかったからといってコウウの責任がなくなるわけではない。
しかもこの任務はコウウが自分から引き受けてしまったことでもある。そのため何としてもやり遂げねばならないのだ。
だが色々と問題があるのも確かだった。例えば、
「おっ、人間がいるぜ」
「ひっ……!?」
捜索中、兵達が人間の男女二人を見つけた。
行商人の夫婦か何かだろうか。魔軍が闊歩する中ご苦労なことである。
魔物兵に見つかればどうなるかは分かりきっているはずなのに。
「ひゃはははは！　女だ！」
「おい、この男、さっさと殺しちまおうぜ！」

部下達は揃ってこんなことを言う。魔物兵として極々ありふれた一般的な思考であり、当たり前の光景。人間など、魔物の欲望を満たすための下等種族でしかない。
コウウも人間などどうでもいいと思っている。普段なら放置だろう。
だが、
「――おいテメェら……」
「へ……何ですかコウウさ――」
次の瞬間、コウウは魔物兵を衝動のままに槍で吹き飛ばし、一撃で絶命させた。
そして空いた左手で別の魔物兵の頭を掴んで持ち上げる。
「何遊んでやがる馬鹿共ッ!!」
「――っ!?」
その怒声と、怒りに染まった顔に魔物兵は何も発することは出来ない。
そもそも魔物大将軍、その中でも最強の実力を持つコウウの力から逃げられるはずもない。万力のような力で掴まれた魔物兵は痛みで、しかし声も上げることが出来ずに宙で足をバタバタさせて藻掻き苦しむ。
しかもそれだけは終わらず、怒りで充血した目で、コウウは魔物兵を睨みつけた。
「人間に手を出してる暇があんのか!? なぁ、おいっ! 聞いてんのかッ!?」
「っ、アっ、ギ、ぎ、ひて……!」
頭が割られそうになりながらも助かろうと必死に頷こうとする。
その意味が伝わったのかは不明だが、コウウを止めようとする者ならいた。
「だ、大将軍閣下! 落ち着いてください!」
慌てて駆け寄ってくるのはコウウの側近である魔物将軍。
既に部下を一体殺したコウウだが、それ以上はやらせてはならないという使命感からコウウを止めようと声を上げる。

「時間がないのは重々承知です！　しかしだからこそ、兵を失ってはその分捜索に遅れが生じます！」
「……っ」
　その言葉を聞いて、コウウの力が少し抜ける。
　魔物将軍は更に落ち着かせようと続く声を放った。
「人間を襲おうとした程度で殺すのは、あまりにも処分が重すぎます！」
　しかし、
「……何言ってやがるテメェ！」
「……は？　がっ――!?」
　その言葉がコウウの怒りを更に沸騰させる。
　何故、どうして、意味が解らない。魔物将軍は今の言葉に何の問題があったのか理解出来ず、コウウの膂力による締め付けを喰らって痛みに悶える。
「ああ、分かるぜ！　確かに人間なんざ俺だってどうでもいい！」
　なら何故？　という心の中の問いに、コウウは声を荒げたまま答えた。
「だがそのどうでもいい人間を殺すことで、俺が殺されたらどうするつもりだ!?」
「っ、それ、は……」
　さすがに考えすぎだ。マイナス思考にも程がある。
　そう思った魔物将軍を否定するように、コウウは更に続けた。
「いいか!?　レオンハルト様は無関係の人間には極力手を出すなって言ったのはお前も知ってるよなぁ!?」
　無論、知っている。魔物将軍はそう示すように首を振った。
　だがそれは、あくまでも極力であり、実際には殺し過ぎない限り問題にはならない。
　そもそも大多数の魔物兵を完璧に止めることは不可能に近い上、無関係という線引も曖昧だ。聞き出すための拷問は認められているのだから、拷問の末に死んだという解釈や言い訳を行えばいい。
　だからこれくらいのことで怒る必要はないはずだ。

「俺も普段なら何も言わねぇ！　けどな……今は俺の処分が掛かった瀬戸際だ！」
　しかし、コウウの言い分は違う。
「確かに何もねぇかもしれねぇし、人間を殺すことなんざどうだっていいことだ！　だが、そこに愉しむ以外にメリットはねえ！　――だからその〝無駄〟な行為で！　〝無駄〟に俺が処分される可能性を高めるなんざありえねえんだよ!!」
「っ、ギ、あ……！」
　コウウの力が強まる。さすがの魔物将軍も声に苦悶のものが混じり助けを求める。
「テメェら、もし俺がそのことを責められたらどうするつもりだ!?……俺の代わりに死ぬかッ!?　死んでくれるんなら好きにさせてやるが――」
　だが、そんなことはあり得ないと、コウウは言う。
「責任を取るのはどうあっても俺だ……！　テメェらがどんだけ失敗しようが最終的な責任は俺に降り掛かるんだよ!!」
「……！」
　もはや誰もが口を開けない。
　コウウの怯え、不安、怒り。それらが内包された迫力が、彼らに口を開くことすら躊躇わせる。
「俺の代わりが出来る奴がこの中にいんのか!?　いるなら今直ぐ名乗り出ろ！　直ぐに俺の代わりに大将軍にしてやる！　そんで俺の代わりに死ね！　もしいねえのなら――」
　コウウは言う。戦慄する部下達に向かって、自身の重圧をぶつけるように、
「――黙って俺の言葉に従えッ！　……おら、返事はどうしたぁ!?」
「……！　は、ははいッ!!」
　全力の怒りを食らった魔物兵達はもはやその言葉に従って頷くしかなくなる。
　彼らにとっては魔人もコウウも変わらない。どちらも自分達が束になっても敵わない化け物だ。仮にこの場で全軍で逆らったとして

も、コウウも無傷では済まないだろうが――それでも勝つだろう。
実際にどうかは解らない。しかし少なくとも魔物兵にそう思わせる程の実力者がコウウという魔物であった。
彼の言葉には間違いはない。コウウの代わりが出来る者などいないのだ。采配に関しては各大将軍で特色が違い、差異はあるが代わりは務まる。
しかし大将軍最強の実力を持つコウウの代わりは誰も出来ない。
だからこそ、コウウは処罰されない、という考えもあるのだが、追い詰められたコウウはその考えには至らない。
コウウはギリギリのところで怒りを堪えて魔物将軍を離すと、捜索を再開させる。
「いいかテメェら！　捜索だけを行え！　石丸以外の人間は見つけても無視しろ！　ただし、邪魔をしてくるような目障りな馬鹿だけはその場で殺すか、俺に報告しろ！　１秒と掛からず八つ裂きにしてやらぁ！」
「はっ……！」
もはや頷きながらも足を止めることはしない。先程出会った人間――コウウの全身全霊の怒りを身近で受けて気絶した彼らを放置し、旧ザビエル軍は真っ直ぐ東に向かう。
行き先は大陸ではなく――ＪＡＰＡＮ。
藤原家の本拠地である島国だが、距離の問題と、まずは近場を捜索するコウウの方針によって大陸の後回しにされていた場所だ。
だがここまで探していないのであれば後はＪＡＰＡＮしかない。
幸いにもＪＡＰＡＮの出入り口は一つ。大陸南東にある天満橋だけであり、そこを封鎖してから捜索すれば逃げ場はない。
道中、出会った商人や冒険者は徹底的に無視をした。ただ一人、何故か立ち向かってきた冒険者とそれを見守っていた従者だと言う子供は撃退した。それなりに強く、魔物兵では梃子摺る様子だったので先程言った通りコウウ自ら殺してやろうと槍を奮ったが、後一歩のところで運良く大地が崩れて逃げ延び、従者と言っていた子供は消えてしまったため、コウウの鬱憤は溜まった。そんな出来事もあったが、

それでも旧ザビエル軍は無事に天満橋まで辿り着いた。
だがそこで、
「――こ、コウウ様！　誰かいます！」
「石丸以外は無視しろっってんだろ!!　それともまたさっきの錆びた剣持ってた馬鹿か!?」
「い、いえ！　それが……」
ああ？　と、コウウは前方を見て、その姿を確認し――なるほど、と得心した。
「外套を羽織っててて顔が分かんねぇな……よし、一応捕まえて確認してこい！」
「はっ！」
コウウは念の為、ということで即座に魔物兵に命令する。
しかし、コウウはある意味で、指示を間違えた。
仮に本当に藤原石丸であれば、魔物兵に行かせたところで捕まえることなど出来るはずがない。即座に切り捨てられるのがオチだ。
ある意味それが石丸であるという証拠にもなり得るかもしれないが、それでも疑いがあるならコウウが行くべきであった。
しかしコウウは心の何処かで、〝こんな待ち伏せするように都合良く、天満橋の真ん中に立つような奴が、石丸であるはずがない〟と思っていた。
コウウの中での石丸は軍を捨てて逃げ出した腑抜け野郎であり、どこか人気のない山奥の小屋で震えるようにして隠れ潜んでいると考えていた。そこを探し出して、無理かもしれないが殺してやろうとも。
無理そうなら見つけ出した時点で遅滞戦闘を行いながら撤退、もしくは包囲。数の上では圧倒的に勝っているため、遠距離攻撃や防御に努めて体力を削りつつ時間稼ぎを行い、伝令を送ってレオンハルトに報告するつもりだった。
だからこそ、コウウは見誤った。
そのことに気づいたのは外套を羽織った男が、魔物兵と幾つか話を行い、無理やりにでも捕まえようと手を伸ばした瞬間だ。

背に隠すように持っていた見覚えのある剣を振るい、恐ろしいほどに素早く魔物兵を斬り捨てた瞬間。
コウウの動体視力でさえ見切ることが出来なかったその一閃に、コウウは頭で理解するよりも早く叫んでいた。
「――いた！　見つけた！　勝った！　いやがったぞ!!」

『その藤原石丸の処遇については卿に委ねるとしよう。殺すも生かすも好きにするといい。それを、褒美の一部とする』
頭の中では、その発言が繰返されている。
『余としても些か興味が出てきた。あくまで、卿が推薦するのであればだが――』
もし、自分が望むのなら、
『――その男を魔人にしてみるのも面白そうだ』
あの男を、魔人にすることも出来る。
「……馬鹿なことを」
魔人レオンハルトは、ベッドの上で寝転がりながら思わず呟いた。
ここはレオンハルト軍が占領し、拠点とした都市の王宮。その奥にある王の寝室だ。
自身の城にあるベッドよりは小さいが、通常の何倍もあるサイズのベッドの上でレオンハルトは寝返りを打つ。魔物も夜番の兵以外は寝静まる時間帯だ。窓からは月明かりが差し込み、室内を僅かに照らしている。
魔人であるレオンハルトに睡眠は必要ないため、眠気というのはあまりない。体力、精神力の消耗により緩やかな倦怠感を感じた際、そして義務的に寝るのみだ。なのでやることや、考えることがある際はこうして眠らない日もある。
床にはほぼ毎日入るが、それは寝るためではなく夜の営みを行うためだ。
ゆえにレオンハルトが服を着て寝ることはほぼ無く、今もその身体には何も身につけておらず、剣士として鍛え上げられた一切の無駄の

ない引き締まった肉体を晒している。
その横には、主のことなどお構いなしにぐっすりと幸せそうに寝ている金髪ツインテールの姿。いつものことながら、事が終わると真っ先に気を失ったように眠るのは如何なものかと思うが、僅かにも自分の責任が無いとは言えないので何か言うことはない。
その裸体はいつ見ても胸の部分がなんとも言えない。とはいえ、これはこれで趣があるし、腰つきが女性らしく魅力的ではある。特に――
「……悩みすぎて思考が馬鹿になったか」
額を押さえて吐息付きで、自分自身に呆れる。今更、自分の使徒の肉体批評をしてどうするというのだ。
やはり、難しい悩みがあると長い時間思考に没頭してしまう。長い時を生きる魔人の性なのか、一度考え込むと中々結論が出ずにかなりの時間が経ってしまうことがある。仕事ややるべきことに関しては即断即決とまではいかないものの、最適だと思う答えを早い時間で導き出せるのだが、私的かつ自由度の高い問題に関してはそうはいかない。
やってもやらなくても良い上に、どちらが正解かはよく解らない。
ならば魔人として、自分のやりたいことをやってしまうのが良いのだが、
……俺は、奴をどうしたい？
殺したいのか。それとも、魔人や使徒にして楽しみたいのか。
欲として言うなら決まりきっているが、その判断が本当に正しいのか。
レオンハルトが悩んでいるのは、その部分についてだ。
自分は、まだ人類最強の剣士に期待しているのか。
それとも、見限ってしまっているのか。
将来を考えれば奴が強くなって自分を愉しませる可能性があると思いたい自分と、例え魔人になろうが自分より強くなることはないかもしれないという未来の落胆を想像する自分。
どちらをとることも今のレオンハルトには悩ましい。

何故なら彼には欲がある。
矛盾するが、偽りない彼の行動指針。
……俺を熱くさせてくれる相手はいないのか……？
一つは、自身を燃えさせてくれる強敵への渇望。
互いに拮抗し、己の限界を越えてなお凌ぎ合う戦いの楽しさ。
それが出来るだけの相手を、レオンハルトは求めている。
だが、レオンハルトは強くなり過ぎた。
もう一つの欲でありやるべきこと――己が最強になりたいという欲のために。
彼にはやるべきことがあり、守るべきものが多くある。
また、強い相手と戦いたくもある。
そのために彼は強さを求めた。元来の負けず嫌いも影響しているのだろう。彼は負けるわけにはいかない。負けたくない。強くなりたい。強くなって守りたい。そして成し遂げなければならない。
だからレオンハルトは剣を、己を鍛えた。
その結果、レオンハルトは強くなったが……レオンハルトに敵うものはこの時点で既に少なくなってしまった。
彼はまだ強くなれるのに、戦える相手は少ない。
そしてこれからもっと少なくなる。
だがそれだけであればレオンハルトは、敵わない相手に無謀ながらも挑みかかればいいだけの話だ。
……いっそのこと――。
脳裏に浮かぶのは今の彼が敵わないであろう相手。
少なくとも地力や身体能力だけでは勝てない者達。
――魔を支配し、大陸に恐怖を与えんとする王。
――かつての世界を席巻した偉大なる種族の王。
――神に与えられた役割を果たすために勇を示す者。
――神を引きずり降ろさんと企むもう一つの魔の者達。
まだレオンハルトが敵わない相手はざっと考えただけでもおそらくこれだけおり、それらに挑むことでレオンハルトは少なくとも決死の戦いをすることが出来るだろう。

いっそのこと戦いを挑んでしまおうかという彼の内側を熱くし、それが身体から溢れ出しそうになる。
しかし、彼の最後の夢であり目的が、その欲の邪魔をする。
それは、
……俺は、絶対に死ぬわけにはいかない。
それは必ず生きること。
生きて、目的を成し遂げること。
だからこそ彼は強さを求めたが、それでも彼が無謀だと判断するような勝ち目がないに等しい相手とは、退けないような事態になった時や、大切な者の為でなければ戦わない。
傍目から見ればなんと情けないことだろう。生きるか死ぬかの熱い戦いがしたいと言いながらも、勝ち目がないような戦いは避ける。生き残ることを優先したいと言うのだ。
だが、その評価を甘んじて受け入れてでも、彼は生き抜いて目的を達成するまでは死ぬわけにはいかない。
全てが矛盾しているが、これらがレオンハルトの全てだ。
目的を達成したい。
最強になりたい。
強敵と熱い戦いをしたい。
だからこそ悩む。
ここで石丸を逃してしまえば、もう二度と熱い戦いは出来ないのではないか。石丸でこれなら、今後もきっと期待出来ない。――その未来の想像が、レオンハルトを孤独にする。
だが異常な力を持った脅威は、これ以上強くなる前に摘んでしまった方がいいのではないか。
……そして何より、奴は――
「……！」
その時、レオンハルトは僅かに眉根を寄せた。
それは自身に起きた変化を感じ取ったためだ。
神経を通じて、レオンハルトの脳にある感覚を伝えてくる。
血潮が滾り、生理的現象を呼び起こす中、レオンハルトはその正体

に一瞬で気づき、腰に掛かった毛布を捲り上げた。
「……人が悩んでいる時に何をしている、この痴女」
「んっ、ちゅる……ぷはぁ、何って、そりゃあナニに決まってるじゃないですか、くふふ……」
「……」
「あっ、ちょっと……そんな心底呆れ果てたような雌豚を見るような目で見ないで下さいよう。そんな目で見られたら――」
「……見られたら、何だ？」
「――興奮するじゃないですか……！」
当然、と言わんばかりに馬鹿なことを言い出した痴女の正体はやはりペールだった。
脳内がピンク一色のこの痴女は、同じく何も身につけておらず、その生意気な裸体を存分に見せつけてきている。約束したからしょうがないとはいえ、主が悩んでいる間もすかさず復活してくるのは何とも言えない気分になる。
構わないが、たまには自重もしてほしい。とはいえ、
「……まあ、好きにしろ」
「あれ、いいんですか？」
「約束したからな」
久しぶりであることも確かであり、約束もしたのだから異を挟むこともない。
だから好きにしろ、と言ったのだが、するとペールは唇を舌で舐め、
「ふふん、じゃあ――」
と、覆い被さろうとしてきた。だが、
「――レオンハルト！　とうとう石丸が現れ、て……」
「あ……始祖様」
「……」
タイミングよく部屋に飛び込んできたハンティが、見る見る内に表情を変えていく。
視線が上下を行ったり来たりし、徐々にそれを理解したハンティは顔を僅かに紅潮させた後に後ろを向いて、

「な、なんでこんな時間までやってんのよ！」
「……と、言われてもな。お前だって分かってるだろう」
「音がしなかったから……！」
　こちらを見ないようにしながら責めるように言うハンティに、レオンハルトとペールは半目になる。
　……聞いてるのか……。
　もしくは聞こえてると言うべきか。などと考えていると、
「始祖様ったら、音聞いてるなんてとんでもないムッツリですね」
「っ！　聞こえるんだから仕方ないでしょうが！」
「いやいや、本当は聞きたかったんじゃ――」
「雷撃！」
「あばっ!?」
　こっちに向かって容赦のない雷撃が飛んできたので巻き添えにならないようペールから離れると、一瞬の後にペールに雷撃が直撃した。
　そしてペールがぱたりと倒れ込む中、ハンティに身体ごと振り向くと、
「それで、何処に現れた？」
「ふぅ、ふー……ああ、それが――って」
　ハンティは詳細を語ろうとしながらこちらに振り返ろうとし、直前でまた首を戻し、言葉を止める。そして微妙な間を置いて、
「……その前に何か着てくれない？」
「ん……ああ、そうだな」
　自然に話を聞こうと立ち上がったが、全裸のままであった。
　とりあえず服を着ようと移動するが、その間ペールは、
「うっ、あっ……このビリビリも悪くないかも……」
　……ド変態だな。
　何故か新しい扉を開こうとしているペールを尻目に、レオンハルトはハンティの話を聞くことにしたが――そこでハンティは衝撃の報告を行った。
「藤原石丸は――ＪＡＰＡＮの、とある山にいるらしい」

その報告にはレオンハルトは僅かに息を漏らすだけで驚かなかった。
だが、続く質問が衝撃の事実を引き出した。
「そうか。……コウウが見つけたのか？」
問うと、ハンティは表情を険しくして、間を置いてから頷いた。
「……ええ。ただ、見つけたのはその山じゃない」
「……どういう意味だ？」
理解が出来ず、更に質問を重ねる。
その山で見つけたわけではないのなら一体どうやってその場所にいると分かったのか。
人伝にでも聞いたのかと思考が回った時、ハンティは説明を続けた。
「石丸が現れたのは、天満橋。そこでコウウ達、旧ザビエル軍が見つけたんだって」
だが、
「そこで石丸はコウウ達に、〝お前達、魔軍と戦う気はない。春姫を連れて、レオンハルトがこの場所まで来てほしい〟、と伝言を頼んだそうよ」
「……俺が、か」
今更どういうつもりなのかと眉間に皺を寄せる。
だがそのことは重要ではないと、レオンハルトは息を入れた。
「……まあ、いい。それで、コウウ達はそれを聞いて帰ってきたのか？」
「……いや」
そこでハンティは首を横に振った。
「コウウは立ち去ろうとする石丸を止めようとしたみたいで……それで戦う気のないって言った石丸だけど――」
レオンハルトが嫌な予感を感じた瞬間、ハンティはそれを告げた。
「コウウ率いる旧ザビエル軍は――石丸一人に撤退させられた」
「――――」
「コウウは何とか帰ってきたけど……ちょっと精神的に不安定みたい

で、少し大人しくしてもらってる」
まさか、という思いだった。
しかしハンティに嘘をついている様子は見られない。
ならば今の報告は事実なのだろう。
……以前の石丸であっても、魔軍相手にそれを達成することは不可能ではないだろう。
だが、伝言の内容といい、その報告といい――胸騒ぎがする。
その正体は解らない。
だが、レオンハルトは立ち上がった。
「……準備をしろ。最低限の人員と、春姫だけ連れて行く」
――そしてレオンハルトは、
「ＪＡＰＡＮへ――藤原石丸の元へ、行くぞ」
石丸との最後の舞台に向かった。

新たな剣

ＪＡＰＡＮの春は、長閑という言葉が似合う季節である。
厳しい冬を乗り越え、多くの花々を咲かせるこの季節。春の始まりの月に、彼らはこの島国に足を踏み入れた。
「この先か？」
「うん、聞く所によるとね」
「……」
そこにいるのは一体の魔人とその一行。仕入れた情報を頼りに目的の山へと向かう者達。
使徒である三人と少数の部隊で向かうその中には、春姫の姿もあった。
彼女は無言のまま使徒に囲まれるように山道を行こうとし、その場所に気づく。
……ここは……。
藤原石丸が待つというその場所。その場所の意味に気づき、春姫は息を呑む。
その間にも山道は段々と険しくなっていき、大所帯で通るのは難しくなって来ていた。
故にその集団の長である魔人レオンハルトは、僅かに視線を上げ、その後で兵達の方を向いて言った。
「お前達はここで待っていろ」
「……それは……」
魔物将軍が僅かに躊躇いを見せる。だが、
「何、直ぐに終わる。それとも俺の事が心配か？」
問われ、魔物将軍は息を詰めた。そして不敬を示すわけにはいかないと、
「……いえ。――では、行ってらっしゃいませ」
敬礼付きで見送ってくれる。レオンハルトは頷き、続いて使徒達に顔を向けた。
「春姫を連れて付いてこい」

「畏まりましたわ！」
「……はいよ」
「了解です」
応答が返ってきたのを確認すると、再びレオンハルトは山道の先に進んだ。
道はどんどんと険しくなる。だが、魔人や使徒である彼らには全く問題とならない。春姫にしても石丸との冒険をこれまで行ってきたことで人間の中ではそれなりに逞しい。ゆえに一行は順調にその道を進んでいった。
そしてやがて、
「――これは……」
一行が僅かに目を見開く。
険しい山道を越えた先、そこに見える景色は絶景であった。
「綺麗ですねぇ」
「桜ですわ！」
彼女らが言うように、そこからは満開の桜の山が一望出来る場所であった。
そこは展望台の様に周囲の地形を確認することの出来る場所であったが、そこだけはだだっ広い広場となっており、一切の障害物が周囲に存在しなかった。
視界に移る景色は遠くに見える桜の山々と空のみ。
だがその広い大地の上にいたのは彼らだけではなかった。
広場の中心に胡座をかいて座る一人の男。その姿を確認し、レオンハルトは目を細める。
「……ふん」
随分と潔いな――レオンハルトが最初に思ったのはそれであった。
本当にたった一人で、何か罠を仕掛けているわけでもなく待っているとは、と思う。
だが驚きはない。
レオンハルトはゆっくりと石丸の傍に近寄ると、十メートル程手前で立ち止まる。

戦争で戦って以来の再会だが、それほど期間が空いたわけではない。
少なくとも魔人の感覚としてはついこの間出会ったばかりの男。
しかしその雰囲気は、以前とは打って変わっていた。
悠然とした自然な気を感じる。眼の前にまで近づいても石丸はレオンハルトに視線を向けることもなく、遠くの山々に咲き誇る桜を見て、手に持ったそれを傾けている。
それを見て、レオンハルトは眉をひそめた。
「……何のために呼び出したかと思えば……仲良く花見でもするつもりか？」
「……」
その手に持っていたのは徳利。そして盃。
中に入っているのは十中八九酒だろう。
だからこそ花見でもするのかとレオンハルトは問うた。
しかし石丸は直ぐには答えず、盃に入った一杯を飲み干すと、
「……！」
盃の一つをレオンハルトに向かって投げた。
思わずそれを受け取ったのを見て石丸は更に徳利の方も浅く投げ渡す。
石丸の無言の行いを不思議と感じ取り、レオンハルトは少し逡巡した後、盃に酒を入れて一杯だけ飲み干した。
その酒の味はレオンハルトの舌にも合い、自然とその先の言葉を促した。
「……良い味だな」
「――だろう？　俺の生まれ育った土地の酒だ」
呟く様に感想を言うとそこで初めて石丸は口を開いた。
レオンハルトはもう一度それらを投げ返すと、石丸もそれを受け取る。口端に微笑を浮かべながら、
「……この山は俺達の遊び場。そしてこの場所は俺の修行場だ。春になるとここで一人、桜を眺めながらこの酒を飲むのが元服してからの楽しみであった」

「……それで最後の花見か？」
言うと石丸はふっと笑った。
「そういうことになるか。ただし――」
間を置くと石丸は徳利と盃を置いたまま立ち上がり、レオンハルトに向かって眉を立てた顔でこう言った。
「――最後になるのは、俺とは限らんぞ」
「……ほう？」
威勢の良い言葉を言い放った石丸を計るかのように注視する。
その間にも石丸は背に背負った帝の証――帝ソードを携えた後に叫んだ
「レオンハルト――お前に一人の剣士として、一騎打ちを申し込む！」
「……」
「よもや逃げはすまいだろうな!?」
レオンハルトは鼻で笑い、思う。安い挑発だな、と、
剣士として挑む。今石丸はそう言ったのだ。
確かに既に魔軍に敗北し、人類軍も藤原家も滅びた今、石丸を縛るものは何もない。
その意味は伝言の際、魔軍と戦う気はないと言ったこととも繋がるのだろう。普通なら受ける義理はないかもしれない。
だが、レオンハルトは自分の矜持からその申し出を否と突き返すことはしない。
それは彼の拘りだ。魔人としてならともかく、一人の剣士として勝負を挑まれたなら、レオンハルトは同じ一人の剣士として受けて立つ。
そして石丸の全身から溢れる闘気は、以前にも増して研ぎ澄まされたものであった。
……温い。
だが、今のレオンハルトの食指は動かない。
既にもう、そのくらいでは自分を熱くすることは出来ない。
そのことに孤独と諦めに似たものを感じながらレオンハルトは石丸を正面から見据える。

「……随分と気合いが入っているようだが、まあいい。一騎打ちの事だが……その前にこちらからも一つ、言うことがある」
「……何だ？」
ああ、それは――と、レオンハルトはその意志を石丸に向かって伝えた。
「――藤原石丸。……魔人になる気はないか？」

石丸はその発言とその意味を説明するかの様に語り始めたレオンハルトの声を聞いた。
魔人の背後ではレオンハルトの使徒が僅かに驚きの表情を見せているが、同じ様に驚いた様子の彼女の方に目が行った。
……春……。
奴であれば大丈夫だろうと思っていたが、心配していなかったと言えば嘘になる。
ゆえに無事で良かったと石丸は内心で安堵した。正面ではレオンハルトが石丸に向かって告げる。
「お前に何があったのかは解らないが、きっと以前とは少しだけ違うのだろうな。お前の顔と、その気を見れば解る」
だが、と、
「お前は、俺より弱い」
決して勝つことは出来ない、とレオンハルトは正面から告げる。石丸はそれを静かに受け止めた上で、
「……そうだな」
「お前のその決闘の申し出は、俺にとっては受け止めるべきもの。だが例え――」
続けて魔人は言う。それは、
「――無敵結界を解くことになろうが、お前の剣は俺には届かない」
それは以前の戦いで証明された事実。
レオンハルトは絶望的な程に厳しい現実を石丸に向かって突きつける。

「そんなお前が俺に挑んだところで、勝ちの目はない。それはお前も分かっているはずだと思ったがな」
「……」
無言だが、内心で肯定する。
確かに自分の剣に、勝ちの目は無かった。
こちらの態度を肯定したと受け取ったのか、レオンハルトは闘気を見せることもなく続く声を響かせる。
「だがお前が魔人になり、今よりも成長することが出来るならば、勝負は解らなくなるだろう。そのための手配は既に整っている」
手配。つまりは魔王の許可を得たということだろう。
石丸の内心の予想だが、レオンハルトはその予想を正解だと示す説明を口にした。
「本来なら俺は魔人として、人類軍の総大将であったお前を殺さなければならないが……魔王様はあのザビエルを倒したお前に僅かに興味を持っている」
魔人になるための準備は整ったと、そういうことだ。
だからレオンハルトは石丸に告げる。相容れない言葉を、
「お前なら、いずれ俺のいる場所まで上がってこれるかもしれない。だから――」
「――断る」
「……！」
石丸はレオンハルトが言葉を全て言い終える前に、その申し出を強くはっきりとした声で断った。
そして息を吸い、己に確認を取るように告げるのは、己の覚悟と意志だ。
魔人になるなどあり得ない選択だ。自分の夢についてきてくれた多くの人に申し訳が立たない。
そんな形で夢を叶えることを、石丸は望まない。
そして何よりも、そうすれば勝てるなどと勝手に評することは、
「勝てないだとかそのために魔人になれだのそんなことは――」
言う。かつての自分の様に、

「知ったことか」
「……馬鹿が」
レオンハルトがこちらを見て、呆れるように眉を立てる。
そして深い息を吐くと、こちらに向かって今度は敵意をぶつけてきた。魔人のオーラが赤く漂い、周囲の空気を重くする。
だがその存在感に怯むことなく、石丸は言い放った。
「ああ、馬鹿で構わん。それくらいでなければお前を倒すことなど出来んだろう」
「……どうやら本当に死にに来たようだな。もういい――〝オル＝フェイル〟」
剣の名を呼ぶと同時に、レオンハルトが伸ばした右手が空間から剣を引き抜く。
以前にも見た魔剣。刀に近い身の丈を越える魔剣の存在感は魔人にも勝るとも劣らず。禍々しく、背筋が凍るような蒼の刀身が妖しく輝いている。
それを確認した石丸は軽く足を開いて帝ソードを構えた。戦闘態勢に入ったのだ。
魔人は冷たい闘気を発しながら魔剣を構えた。石丸を睨むように見据え、
「前にも言ったが、俺の剣に憧れるだけのお前が、俺に勝つことはあり得ない。力の差は歴然とかけ離れている。それでも挑むか」
「当然だ。お前は力の差は歴然だと言うが、敢えて言おう。――だからこそ挑むのだと！」
石丸は言う。それは馬鹿になった自分の想いだ。
「確かに俺はお前に憧れていた。子供の頃からずっと、お前を倒し、世界最強の剣士になるのが夢だった」
「……叶うことのない夢だ」
レオンハルトの否定に答えるように石丸は言う。不敵な笑みを携えて、
「確かに到底叶いそうにない夢だが、俺にとって、夢とはそういうもののことだ！」

それを理由に諦めるなどあり得ないと石丸は叫ぶ。
「届かないから諦める？　笑止！　届かないからこそ挑むのだ！」
到底叶わないような自身の理想であり目標。
だが叶いそうにないような幸福な未来であるからこそ、人は夢を見るのだと。
「男が挑むべき道を見つけたのなら！　只そこへ向かって全霊を注ぐのみ!!」
そして、
「その夢は高ければ高いほど、困難であれば困難であるほど……！」
だからこそ、
「挑みがいがあるというもの!!」
だから挑む。なりふり構わず、真っ直ぐ立ち向かう。
「ましてやそこに、目の前に！　夢にまで見た頂きが見えているのだ！」
眼の前には夢にまで見た世界最強の剣士。
ならば石丸がやるべきことは決まっている。
「挑まなければ――男が廃る!!」
そして〝勝つ〟。
勝って、夢を叶える。
そうすることで、喜んでくれる者達がたくさんいる。
その内の一人は直ぐ近くにいる。ならば、
「――春っ!!」
「……っ、石丸様……！」
石丸は大切な人の名を呼んだ。向こうも、名前を返してくれる。
多くは語らない。石丸は春姫にその言葉だけを告げる。
「俺の戦いを、最後まで見ていてくれ!!」
彼女を見て、想いを告げるように石丸は告げた。
春姫はその言葉に一瞬、表情を歪ませはしたものの、直ぐに笑顔になった。僅かに目の端に雫を零し、
「最後まで、見届けます……！」
「ああ……！」

これで憂いはない。
ならば後は行くだけだ。
「勝負だ……！」

レオンハルトが、その想いの乗った言葉を耳にして、静かに言った。
「……お前の想いは分かった」
だが、レオンハルトは言うことはせずに内心で言葉を作る。それは、
……少なくとも、気持ちだけは盛り上がっているようだな。
冷静にそう思う。
何故ならば、自身に勝つことなど不可能であるからだ。
想いの強さだけで、戦いの結果は変わらない。夢が叶うこともない。
戦いには善悪も、背負っているものの重みなども関係ない。強いやつは何もなくとも強いのだ。戦いは力の強弱で決まる。
戦う理由などは関係ない。どれだけ崇高な理想を持ってそれに挑もうが、力が無ければそれは夢物語だ。
だからこそ、レオンハルトは何よりも強さを重要視する。
力と名の付くもの。それが無ければこの世界で生きることは出来ない。
暴力、知力、統率力、政治力、権力、財力、魅力、精神力――どんな下らない能力であろうとも、それが他者より優れたものであれば有用な力となり得る。
そしてレオンハルトの何よりも優れた能力を越えようと、眼の前の男は全身全霊で挑まんとしている。
故にはっきりしていた。真っ向からレオンハルトの道に立ち塞がるというなら、後はもう戦うしかない。
ならば強さで負ける石丸が、己に勝つことはあり得ない。
石丸が使う全ての技も、レオンハルトの技の模倣でしかない。
疾風、迅雷、紅蓮、流水――何を使おうがレオンハルトには通用し

ない。
無論、以前よりは成長している可能性はある。
だがそれでも届かない。
自分を熱くすることも出来ない。
しかし相手は自分に、男の勝負を挑んできた。
ならば正面から、王道をもって、その夢を完膚無きまでに打ち砕く。
想いだけは届いたのだ。だからこそ、
「――せめてもの情けだ。一撃で終わらせてやる」
これ以上、自分としては戦う価値の無くなった相手である。
だがその想いと、藤原石丸という一人の男を称えよう。
そのために以前と同じ必殺技で、一刀の元に、石丸を両断する。
苦痛は与えない。敗れたという認識も出来ないだろう。
夢を抱いたまま、幸福のまま満足して死ぬがいい。
「来い……ッ！」
正面から速度を持って突撃してくる石丸に、レオンハルトは上段からの一撃を持って、勝負に幕を下ろした。
「――〝震天〟」
直後、形容出来ないほどの轟音がその場に鳴り響いた。

レオンハルトの必殺技が放たれた瞬間、誰しもがその戦いの終わりを予見した。
ひょっとしたらもう少し早かったかもしれない。
レオンハルトが一撃で終わらせると言った時から、その戦いを見ている者達は確信した。
キャロルもハンティもペールも、戦いは一瞬でケリが付くだろうと黙ってそれを見ていた。
当然だが、レオンハルトと決闘をして、今まで生き延びた人間は誰一人としていない。
魔軍を、魔人を倒そうと一騎打ちを仕掛ける人間は多いが、その誰しもがレオンハルトの圧倒的な強さに膝を屈した。

ある者はレオンハルトに才能を見込まれて見逃されることもあった。
しかしその者は魔人の強さに恐怖し、二度と戦いの場に出ることはなかった。
剣士としての決闘は既に幾度も行われ、レオンハルトはその全てに完璧に勝利してきた。
無敵結界が無くとも、彼の肌に傷を付けることが出来たのは片手の指に満たない。
攻撃を通すことが出来たのは、人間時代の魔人ガルティアと、一度目の正体を隠して戦った石丸の時だけである。
人間では勝てない。魔人であっても、レオンハルトの必殺技を受けて立っていたものは今までただ一人もいないのだ。
だから彼の使徒達が、レオンハルトの勝ちだと思ったのは自明の理。レオンハルト自身でさえも自分の勝ちを疑わなかった。
次の瞬間に視界に映るのは、石丸が両断される光景か、跡形もなく消し飛ばされる光景。
だからだろうか――それ以外の光景が映った時、誰しもが呆然とした。
それはレオンハルト自身も例外ではない。一番最初に異常に気づいたのも彼だが、何が起こったのか理解出来ない、という意味では戦いを観戦している者達と大差ない。
だがその中で、その結果に驚かなかった者が二人いた。
一人は当然、藤原石丸。その結果を起こした張本人。
もう一人は、春姫。彼女は石丸の勝利だけを信じていた。
「!?　っ……！」
結果が引き起こされたのは一瞬。直ぐにレオンハルトは続く手を放とうとする。
しかし数秒後、ようやく最初の一人が我に返った。
だが半信半疑の様子で、最初に気づいたハンティが、その結果を震える声で口にした。
「防がれた……？」

レオンハルトが必殺技を放った直後。
二人は弾かれるようにして、距離を取った。
その光景は、
「……何をしたの……!?」
レオンハルトの必殺技を、石丸が剣で防ぐことに成功した――その証明であった。

その結果を見たレオンハルトは、警戒して直ぐに前に出ることをしなかった。
率直に言って、起こった結果を理解出来なかった。
己の全力の一撃。必殺技の中でも威力だけなら最強の技を、
……どうやって防御した!?
あり得ない、と思う。
人間の身体能力で受け止めきれる技ではないはずだ。
まさかそれほどに強くなったのかと思い、レオンハルトは石丸の動きを観察した。
しかし、
……身体能力自体は以前と変わっていないか……!?
ならば人間を辞めた訳ではないのか。
だがそれなら余計に意味が解らない。変わってないのなら断ち切られるのみのはずだ。
何かからくりがあるのかと思う。
しかし続く攻防、石丸が距離を詰めて剣を振るってきた時、レオンハルトは更なる驚愕と疑問を得た。
「おお……!」
「っ……!」
こちらの剣を振るった瞬間に、怯むと思った石丸の剣が怯まず、更には同程度の威力でもって反撃が来る。
それは先程必殺技を放った時に反撃されたのと同じ感覚だ。
……こちらの攻撃を跳ね返したわけではない。だが、そうじゃない

なら一体どうやって……！
そもそも相手の攻撃を跳ね返す、石丸が流水と呼ぶ技は相手の技量を上回り、読み切ることが出来なければ放てないはずの技だ。レオンハルトには通用しない。
やはり理解が出来ない。一体何故、石丸は自分とここまで剣を合わせることが出来ているのか。
本来であれば喜ぶべき事態だが、それ以上に混乱が強く、レオンハルトは思考を必死に回してその答えを探す。
そうしてようやく頭が冷静に物を考え始めた時、レオンハルトはふと、強烈な違和感を感じた。
それは知っているはずなのに、知らない感覚。剣を合わせていて、何故か思っていたのと違うという不思議な感覚。
……何だこの剣は……石丸らしくない。これでは――。
と、そこまで考えたところで、レオンハルトは目を見開いた。
その強烈な違和感と、思い違いを感じるものの正体に気づいたのだ。
気づいた瞬間、レオンハルトは強く声を放った。
「――貴様、どうやって〝その剣〟を捨てた!?」
「！　ははっ、気づいたか！」
石丸のしてやったりという類の笑みに、レオンハルトは歯を噛み締めた。
ああ、気づくに決まっていると。何故なら、
……石丸の剣技に見えていた筈の、俺の剣の色が消えている……！
石丸の剣技、その全ての動きが、まるっきり以前とは違っているからだ。

どういうことだ、と言外に問う表情は、レオンハルト以外にも浮かべているものだった。
それを感じて、石丸は苦笑する。そんなにも意外かと。
石丸にとっては当然の、簡単な事でしかないのだ。

「……以前、お前は言ったな。俺の剣は、お前に似ていると」
それは以前、レオンハルトが石丸に言ったこと。
だからこそ、石丸はレオンハルトに勝てないのだとそう言ったのだ。だから、
「俺の剣を捨てたのか……！」
「そうしなければならなかったからな」
剣を振るレオンハルトに自分自身の剣で応える。そうした理由は勝つためだ。
「確かに、俺はお前に憧れた」
それは幼少の頃に眼の前の魔人を題材にした本を読んだからであり、その本が在ったからこそ、自分はここまで強くなることが出来たとも言える。
しかし同時に、
「だが……いつまでも憧れていては、お前に勝つことは出来ない」
憧れとは、そうなりたいと願うもの。
越えたいという想いとは相容れないのだと気づいた。だからこそ、
「だから、憧れることはもう止めた」
越えなければならないのだ。
眼の前の尊敬していた男を、敗北者にして、自分が勝利者になる。
勝利とは重いものだ。
勝利するということは、相手を負かすということ。
相手に屈辱を与えなければならない。
そのために憧れという想いは捨て去らなければならない。
敬意は持つ。世界最強の剣士として、先人への敬意は忘れてはならないものだ。
しかし心構えの意味でも、実際に戦う上でもレオンハルトの剣を捨てることが勝利に繋がると石丸は考えた。
だから、
「基礎から全て――俺の剣技を一から十まで再構築した」
「っ、違和感があったのはそういうことか……！」
以前の自分とは全く違う剣。無論、簡単にはいかなかった。

だが何とかそれを成した。正真正銘の自分自身の剣が出来上がった。
そしてこの剣を振るう相手は、生涯ただ一人、
「この剣は、〝お前〟を倒すためだけに鍛えた剣なのだ……！」
「……！」
全ては眼の前の男を倒し、夢を叶えるため。
そのためだけの剣を、自分は形作った。それだけのために作ったこの剣は、世界最強の剣とは全く違う。
王道とは違う――正反対の剣だ。
「この剣で、俺はお前を越える……!!」
「っ！」
レオンハルトの凄まじい威力の剣を受け止め、反撃を返した。
だがその反撃を受け止めた上で、レオンハルトは何かに気づいて目を細めた。そして距離を取ると剣を振り、
「……なるほど。何となくだが、お前の剣の正体が少し掴めた」
「ほう？　どのような剣だと言うのだ？」
問いかけてみるが、おそらく本当に気づいたのだろう。この剣の正体を。
レオンハルトは石丸の内心を射抜くような鋭い視線で言い放った。
「先程から使っているその技――〝俺の力〟を利用しているな？」
「……！　もう気づいたのか。さすがであるな」
やはりもうバレてしまっているらしい。
とはいえ正直に正解だと言ったのは、簡単に破れる技ではないと確信するからこそだ。
それをレオンハルトも気づいているのだろう。彼は身構えを深くしながら言った。
「俺の剣から伝わる威力を、そのまま自身の剣に乗せて跳ね返す……〝流水〟と似ているが、それとはまた違うな。〝流水〟は攻撃をそっくりそのまま跳ね返す技だが、お前のそれは威力だけを自身の剣に上乗せする技だ」
「ふっ、さすがに世界最強の剣士は理を得るのも早いな。だが、知った

ところでどうにもなるまい？」
　不敵に返すとレオンハルトは眉をひそめた。そして気に入らないと言わんばかりに鼻を鳴らす。
「ふん、確かにしてやられた気分だ。その技は、魔人である俺には必要ない」
　そう。これは人間が人間以上の化け物を打ち倒すために編み出した技。
　黒部との最後の一合で編み出した技だ。
「地力で他者より勝り、強大な力を正面から打ち立てる魔人の剣は当然、正面から打ち破る方法が無いほどに強力だ」
「最初から実力の上で勝っているなら小細工を弄する必要はない。特に力の上で圧倒的に負ける格上相手との戦闘など、確かに俺には経験がない」
　そう。だからこそ、
「俺はその剣を知らない」
「俺の剣はお前に届く」
　言い合うと、レオンハルトは軽く吐息付きで更に言う。
「少し打ち合ってもお前の新しく形作ったその剣がおかしなものだと解る。奇襲や撹乱、小手技で俺の剣を打ち崩すつもりか？」
「気に入らないか？」
　いや、とレオンハルトはそこで瞳を瞑った状態で軽く笑みを見せる。
　そして目を見開くと、
「ちょっと……いや――かなり唆ってきたぜ」
「――！」
　レオンハルトが歯を見せて笑みを見せた瞬間、纏っていた闘気が変わった。
　先程までとは正反対。身も凍るような冷気のような気が、そこにいるだけで周囲の風景がぼやける程の熱く禍々しい気に変化している。
　見開かれた目も赤く煌めいており、口端は笑みで歪んでいる。
　まるで戦いを愉しむ修羅――鬼を見ているかのようだ。

……ここからが、本番か。
分かる。今のこの状態こそが、世界最強の剣士の本来の姿なのだと。
それは即ち、今まで自分はスタートラインにも立っていなかったということだ。
ここからが本当の戦いの始まり。それを予見させるように、レオンハルトは愉しそうに笑う。
「ククッ、なんだ……ちゃんと出来んじゃねぇか……」
そう小さく呟くと、今度は大きな愉快さを示すような喜色に満ちた様子でレオンハルトは魔剣を構えた。
「悪かったな。ちょっと舐めてた。最近は歯ごたえのない相手ばかりで絶望しててな。これから先もそうかと思うと憂鬱だったが……」
「……そうとは限らんぞ」
「ああ？」
石丸はそのレオンハルトの言葉に異を唱えた。笑みを携えるレオンハルトに同じ様に笑みで、
「己より強い奴など幾らでもいるのだ。世界は広いぞ。探せばどれだけの強者がいるか解らない。――そのことを、俺はお前に気づかせてもらった」
「――――」
「絶望などする必要もない。これからも強者は幾らでも誕生する」
そして、
「そして何より――この俺がお前を倒す!! それが出来たのなら不満はないだろう！ お前は、自分より強い男と戦えたことになるのだ！」

石丸の言葉が、レオンハルトに突き刺さる。
不意のことに呆然し、暫しの間、時間が止まったようにレオンハルトは動かない。
だが、その表情はやがて、呆気にとられたようなものから、だんだ

んと笑みに変わっていき、
「――クハハ……なるほどな」
そういうことであれば納得だと、レオンハルトは顔を押さえて笑う。
自身の思い上がりを僅かに恥じる。
そうだ。世界は広い。
そのことを、自分はかつて大切な人と知ったではないか。
「そうだったな……」
強者であればこれからも現れる。
そして既に多く存在する。身内だとハンティなどはそれなりに楽しめて将来に期待出来るし、ライゼンとは全力でぶつかり合うことが出来る。
その他にも、強い奴はたくさんいるし、今は及ばずとも予想外の成長を遂げることだってあるかもしれない。
そして何より、眼の前の男は自分を愉しませてくれると言い放った。
「ハハハハッ……！」
レオンハルトにとって未知数の剣技。それはきっと先程の一つだけではないだろう。他にも自分を驚かしてくれる技が幾つもあるかもしれない。
とはいえ単純な実力では未だこちらが上ではある。
だが、確かに愉しませてくれると、勝ってみせると宣言し、前払いとしてそのために習得した技も見せてくれた。
ならばそうしてくれるのだろう。愉しみだ。
レオンハルトは待ちきれない想いをほんの少しだけ抑えながら、石丸に魔剣を向けて告げる。
「それなら全身全霊で挑んでこいッ！　緊張の糸を、集中を一切切らすんじゃねえぞ！　その時はお前の命が終わっちまうからな……！」
「……言われなくともそうするつもりだが？　俺は、お前に勝って夢を叶えるからな！」
威勢の良いことだ。だが、ちょっとだけ面白くない。

何故なら、
「……言っておくがな――」
言う。もはや抑えることもしないと、
「――俺は負けず嫌いなんだよッ!!」
「――それはこちらとて同じことぞッ!!」
二人は研ぎ澄まされた神気と、轟々とした鬼気が入り混じった剣気を発しながら構え合うと、

――これより始まるのは最後の一勝負。
「いざ――」
――桜舞う季節の戦の国で、
「尋常に――」
――二人の剣士の意地を懸けた、
「――勝負ッ!!」
――戦いの幕が、遂に開かれた。

挑戦者

金属音の響きは、幾重にも折り重なるように広場に鳴り響く。
剣と剣が打ち合わされる音。それらを発生させているのは二人の剣士だ。
風を斬り裂く斬撃の曲線は、相手の線や点と軌跡を重ね、一瞬の火花を散らせて弾かれる。時に払われ、時に身を動かして回避を行う。一足一刀の間合い。一瞬で相手と斬り結ぶことの出来る間合いの侵入と退避を繰り返し、互いの制空権を制していく。それらは剣を用いて行われる舞のようであった。
その迫力さと優美さは周囲を魅了し、見る者を一刀で黙らせる。
しかしその鋼のやり取りを完全に視認し、把握出来るものなどその場には存在しなかった。
ただ戦いを見る魔人の使徒達は、その状況こそが異常だと硬くなった表情で見守っていた。
「……本当に、あのレオンハルトと打ち合ってる……」
その呟きを放ったのはこの中では彼らの領域に最も近い者――ハンティ。
彼女は目の前で起きる現実を正しく認識しながらも、あり得ないものを見るような面持ちであった。
それはキャロル、そしてペールも同じだが、理由は言うまでもない。彼女達はレオンハルトの強さをよく知っている。
底の部分まで知っているとは言えないかもしれないが、それでも彼女達の評価で言うなら、人間など一瞬でやられてもおかしくない話。たとえ相手が人類最強の剣士だろうと、レオンハルトに敵う道理はない。そう確信していた。
だが目の前の人間――藤原石丸はどうだろう？
確かに剣を打ち合わせている。勝負になっている。レオンハルトが、相手を一瞬で斬り伏せることが、出来ていない。
その、相手の力を自分の剣撃の威力に上乗せする、という摩訶不思議な剣技を使って対抗している。

例えそれが事実だろうとレオンハルト相手に行うなど神業のような技量が必要なはずだ。
しかし石丸はそれを可能とする。
何故なら石丸は、世界でただ一人――レオンハルトの剣の才能に匹敵する男であるから。
その才能は世界を制するに足るもの。剣で行えることであれば鍛錬次第で不可能なことはない。
実際にレオンハルトは今までその異常とも言える剣の技量で、物理法則を無視するほどの神業を習得してきた。
では同じ才能を持つ石丸ならば、同じ様にあり得ないような神業を披露することも可能である。
その事実を知識ではなく実感として、観戦する者達は確信しつつある。
そんな中、ペールは喉を鳴らし、そして引き攣った笑みで口を開く。
「……わ、私の本、とんでもない化け物を生み出しちゃったみたいですねー……」
「言ってる場合じゃありませんわ!?」
「……」
キャロルのツッコミが入り、ハンティがそちらを見ないまま半目になる。
戦いから目を逸らすことが出来ないと、ハンティはそちらから視線を外すことを本能で拒否していた。
そして戦いに割って入ることも不可能だ。キャロルなどはレオンハルトの勝利を信じていながらも、応援するように拳を握って前のめりになっている。
使徒として、もし主が死ぬようなことがあればそれを防がなくてはならない。
それが使徒の本能である。
しかしそれを防ぐことも、止めることも叶わない。
今まで主の危険を殆ど感じることのなかったレオンハルトの使徒達は、一様に〝本能〟が僅かな警鐘を鳴らしていた。

その危機感は本当に極僅かなものであるが、今までそれを感じる相手はほぼいなかった。
そして逆に言えば、使徒の本能が警鐘を鳴らしていることが、この勝負が勝負足り得るという証明でもある。
即ち、本当に極小の可能性ではあるが――レオンハルトが負ける可能性もあるということ。
一方的な虐殺ではない本当の戦いが、始まっているという示唆であり、そうでなくとも、誰しもがその勝負から目を外すことが出来ず、彼女達は固唾をのんで勝負を見守っていた。

レオンハルトは、相手の剣に手応えを感じていた。
藤原石丸の剣、新しく形作ったという剣と、自身の剣を打ち合わせている。
以前の石丸の剣には、自分の剣の色が見えた。それは確かに強力で、多くの剣士達を下すに相応しい剣技だった。
だが、レオンハルトにとって以前の石丸の剣はこちらを打ち倒すに足るものではなかった。
技量、経験、身体能力、あらゆる部分で勝るレオンハルトに、下位互換でしかない石丸は歯が立たない。
同じ剣技であれば読みやすく、相手の手の内も見える。それとレオンハルトの千年分の経験値があれば、どちらに軍配が上がるかは分かりきっていた。
しかし今は違う。
今の石丸の剣は全く新しい剣技だ。
正真正銘、石丸だけの剣技であり、以前の石丸とは一から十まで違うもの。
しかもその剣の術理は、レオンハルトにとっては正反対のものだった。
レオンハルトの剣は、正面から相手を倒す王道にして強者の剣。
だが、石丸の剣は違う。それを、石丸は口にする。

「俺の剣は、弱者の剣だ」
そう、弱者の剣。
魔人という種族の下地、地力で圧倒的に勝り、正面から相手を打ち崩すことが出来るレオンハルトには、使う必要のないもの。
だからこそ、人の弱さを受け入れ、それでも強大な相手を打ち崩さんと工夫を凝らす弱者の剣を、レオンハルトは知らないし、憶えることもない。
ともすれば、人間の時に才能を開花させていれば、もしくは普通ではどうしようもない圧倒的な格上と戦う機会があれば、レオンハルトにも窮地の状況でそれを会得することが出来たかもしれない。
だがそうはならなかった。レオンハルトは強くなり過ぎたのだ。
もはや同じ魔人相手だろうと、地力だけで相手を踏み潰すことが出来る。
世界最強の剣士というその肩書きは真実で、しかし、だからこそレオンハルトは格下との戦闘を多く経験している。
つまり別方向への変化を遂げることはなかったのだ。
ゆえにその剣は知らない。レオンハルトは初めての相手と相対するような感覚を得ていた。千年分の経験値の中に、自分も含めて、今の石丸と同じ剣は存在しない。
だから石丸は言う。
「俺の剣は頂点を獲るための――挑戦者の剣だッ！」
だからこそ、その剣は届きうる。
自分だけを狙いすました剣は、効果的に作用している。
それは例え地力で圧倒的に勝っていたとしても、レオンハルトにとって久し振りに訪れた窮地に違いなかった。
普通なら自身が殺されるかもしれないという状況は、危機を憶えるはずのものだ。
だが、
「――面白ぇ」
レオンハルトは、普通じゃない。
確かにその剣は自分に通じる。

だが、未だ自分の方が上だという確信がある。
その上で、どこまでやれるか見せてみろ。
王道の剣を相手に、挑戦者の剣がどこまで通じるか、見せてみろ。
口端を歪めながら、彼は相手の剣を称賛した。
「――面白ぇなぁッ!!」
「……!」
腕に力を込め、魔人の力を剣に乗せて振り下ろす。
だが、〝震天〟を、自身の持つ必殺技の中でも最大威力の技を受け止めて返した石丸だ。
天地を砕き、地震を引き起こす一撃を防御されるのなら、同じような力だけの剣は受け止められる。直後の反撃の剣を受け止めながらレオンハルトはそれを理解した。
「ハハッ！　やっぱ力じゃ無理か！　やりやがるッ！」
力では無理かと言いながらも、レオンハルトは愉しそうに声を上げて笑う。
石丸の剣技に感心しつつ、しかし頭の中では対抗策を弾き出していた。
しかしこちらからしても未知の剣だ。通じるかは解らない。
だが解らないのも面白い。
だからレオンハルトは試すように不敵な笑みを浮かべた。
「――だがよぉ！　絶え間なく攻撃し続ければいつかは崩れてくれるんじゃねぇかぁッ!?」
「やってみるがいい……！」
そして石丸は受け止めてくれるらしい。
ならば受け止めてもらうしかない。
この昂りをぶつけるように、この剣をぶつけるのみだ。
「じゃあ行くぜ――」
言って、レオンハルトは剣に力を込めた。
放つのは己の必殺が一つ。剣の連撃を加えるだけの単純な技。
その発動に合わさり、レオンハルトの剣気が更に禍々しく膨れ上がり、周囲に向かって風が吹いた。

「――〝禍津風〟ッ!!」
「……っ!!」
それは正しく、単純な剣での連続技と言うべき技だ。
しかしただの連続攻撃も、レオンハルトが全力を尽くして放てばそれは必殺となり得る。
全力かつ連続の剣撃は、大気を幾重にも切り裂き、剣の動きに合わせて擬似的な突風が吹き荒れる。
一刀一刀が石丸が〝疾風〟と呼ぶ、剣の衝撃波であり、もはや剣の引き戻しの際にも大気を斬り裂く斬撃が発生し、必殺技の余波で起こった剣の嵐が周囲を無差別に切り刻む。
――魔人とは人類にとっては災害そのものである。
その魔人の必殺技――それは仮に魔法であれば、周囲の地形を変容させてしまうことすらあるという。
そしてそれは当然、レオンハルトも例外ではない。世界最強の剣士が必殺技と名付ける秘奥は全て、周囲に被害を出してしまうものである。
ただ連続で剣を振るうだけの必殺技も、レオンハルトが振るえば、それは災害となるのだ。
人の形をしながら、人類を苦しめる天災の如き現象を起こす――それが〝魔人〟なのだと、
「付いてこれるかッ!?」
「っ、無論、だ……!!」
だが石丸はそれを裂帛の気合いで防ぐ。
そして気合いだけではない。確かな技術がある。それをレオンハルトは感じ取った。
……便利な技だなッ！
それはまたしても先程の技の応用。
こちらの連続攻撃の一刀目。その勢いを利用し、次に放つ剣の速度を上げる。二刀目をそれで防ぐと、今度もまたその勢いを利用して三刀目を放って次の斬撃を防ぐ。
それを延々と繰り返す。その間には必殺技の余波でやはり、周囲の

地面に斬撃痕が刻まれ、空間に斬撃は吹き荒れる。近くに障害物がほぼ存在しない広場であることは幸いだ。
「ひゃあ!? こっちにまで飛んできましたよう!?」
「危ないんだけど!? くっ……!」
「遠くの桜、風で桜吹雪になってますわ……綺麗ですわねー」
「ああもう! 世話のやける!」
しかし周囲に被害が出るのはやはり考えものだと思う。だがハンティが文句を言いながらも前に出て何とか防ぎきっているから問題は無さそうだ。
その間にも、都合百を越える斬撃の暴風を石丸は耐えきってみせた。レオンハルトは笑ってそれを喜ぶ。
「ハハハ! これも防ぐかッ!!」
「当然……! この程度は想定済みだ!」
まさか本当に防ぎ切るとは。半信半疑であったが喜ばしいことだ。だが、
「この程度とは言ってくれるじゃねぇか! 守ってばかりじゃ勝てねぇぞッ!!」
確かに防ぎきられたことは素直に称賛出来る。
しかし今の所、防御とこちらの攻撃に反撃する形でしか攻めに転じていない。
仮にこのまま攻め続けていれば、体力の差でいつかは勝利することが出来るだろう。
しかしその決着を、レオンハルトは望まない。
この自分の剣を凌ぐ弱者の剣を、正面から制圧しなければ勝利とは言えない。
だからレオンハルトは気を集中させた。
「――!」
視界の中の石丸が反応して目を見開き、行動を起こそうとするが――遅い。
この秘奥にはあらゆる防御、回避は無意味となる。受け止めることが、ではない。そもそも剣を合わせることが出来ない。

第三階級悪魔である月餅を葬ったこの技は、反撃の技であり、先制の技。
先手を取った相手に合わせる形で放ちながらも、相手を追い抜いてこちらが先手を取ることの出来る最速の剣。放たれてから避けては間に合わない。瞬きの何百、何千倍以上の速さは知覚させることなく相手を両断し、斬られたことにも気づかない。
正にその剣は、雲耀自在。光の如し。――剣の秘奥は今再び、彼に向かって放たれる。
「〝瞬光〟――！」
不可視の魔剣の一撃には誰もが置き去りにされる。空間でさえも一瞬斬られたことに気づかず、一瞬遅れて轟音と、異常な速度での剣の擦過により白い線のような閃光が発生する。
「断ち切った!?」
「勝ちましたわ――！」
その剣は石丸の身体をちょうど臍の辺りから両断し、身体を別れさせた。
一瞬遅れてその結果を視界に映したのは誰も彼もだ。ハンティはその結果に声を上げ、キャロルは気の早い喜びを表現する。レオンハルトでさえも結果が起きた後にしか何を斬ったのか理解出来ない。それほどの速度を持って放つのは〝瞬光〟である。
ゆえに遅れて石丸を斬ったことを知覚したレオンハルトだが、そこで違和感を感じる。
それは手応えの有無。剣士にとって剣は手足のようなものであり、例えレオンハルトほどの膂力――肉や骨を空気のように斬り裂くことが可能であったとしても、断ち切った感覚は知覚出来るのだ。
しかしそれがない。どういうことだ、と疑問を覚えた瞬間、その答えが来た。横から、
「――〝陽炎〟」
「ッ……！」
直前で気づいたレオンハルトは袈裟に放たれた石丸の剣を魔剣で防御する。そして声を放った。

「今のは……残像かッ！」
「然り。今お前が断ち切ったのは、俺の残像だ」
やはりか、とレオンハルトはしてやられたという風な口端を吊り上げる笑みを浮かべる。
おそらくこちらの気の変化を察したあの時だろう。あの時に、おそらく残像を残した。
だが、
「……よく気づいたなッ！」
「……前に見たのを憶えていただけだ。お前のその技には、事前に一瞬の溜めがある」
石丸は気づいている。この必殺技を放つ直前の動作。
以前に勝負の際に見ていたからこそ、その動作の変化に気づけた。ゆえに、
「その瞬間に残像を残して逃げたのだが……ふはは！　どうやら有効なようで何よりだ！」
石丸は目論見が上手くいったことを無邪気に喜ぶ。いたずらが成功したかのような憎たらしい表情だ。
「……面白ぇなぁッ!!」
やはりこの相手は、この男――藤原石丸は面白い。
弱者の剣も存外やる。こちらの剣を利用して受け止め、反撃し、時にいなして躱す。小手先の技ではある。
だが、その剣は確かな剣理に沿った技だ。
ならばいつかは読むことが出来る。
こちらの剣が通じないこの窮地。それこそがレオンハルトを成長させる絶好の機会となる。
この窮地を待っていた。待ち望んでいた。
感謝する。藤原石丸という一人の人間の男に。
確かにその道では石丸の方が先達である。
しかし、
「遅ればせながら――」
レオンハルトは相手の剣を目に焼き付ける。同じ剣を使った技、術

理であれば例えその技を知らず、使わずとも――いつかは読み切れるのが道理だ。
「追いかけるぜッ！」
「来いっ！」
石丸はこちらに正面からの突撃を行った。
だがそれは、残像。レオンハルトが残像を斬り裂くと、少し遅れて石丸が別の方向から斬りかかる。
そしてやはり、こちらの剣は利用されて反撃される。
……やっぱこれほどの達人相手だと直ぐに終わらせることは出来ねぇなぁ……。
内心で染み染みと、しかし喜悦の響きを持って呟く。
直ぐに勝負が終わらないというのは、まだまだ愉しめるということだ。
初見の剣理、それもレオンハルトの剣とは異なる剣を読み切るのは、幾ら自分でも時間が掛かる。しかも相手の小手先の技は攻撃を読ませないことにも繋がっており、見切ることは至難だ。
残像は単純な速さでないことは確定しているが、ならば歩法。ステップを踏むことで行っているのか。発想だけならレオンハルトにもそれはあるが、ほぼ手探りのような領域だ。
……追いついて読み切ってやる……ッ！
全身の血が沸騰するような熱を自覚し、レオンハルトはその赤い瞳で石丸の剣を把握するべく注視しながら、目まぐるしくなるような攻防を行った。
――だが、レオンハルトに盲点があったとすれば。
「……！」
――藤原石丸は今この時も、全力でレオンハルトを追いかけているということだ。
レオンハルトが剣を振り下ろそうと距離を詰めた瞬間――石丸が剣の動きとともに気を溢れさせた。
直後、
「――ッ!?」

レオンハルトは不意に、自分から地面に転げ、石丸の剣に当たりに行ってしまった。
「レオンハルト様!?」
「何やってるんですか!?」
「一体何が……」
キャロルやペールが驚き、ハンティが疑問を呟く中、石丸の剣をレオンハルトは防御しながら内心の驚きを隠すことなく発する。
「ッ、今の技は……!」
後方に一瞬で距離を取りながら石丸の剣と気を観察する。
自分から地面に転げるような動き。それをしてしまった理由を考え、レオンハルトは遅れてその正体に気づいた。
それは、
「〝気当たり〟ってやつかッ!?」
「ははは、そんな大層なものではない！　ただのフェイントだ！」
「ただのフェイント……？」
ハンティが遠くで眉をひそめる。だがそれは当然だ。
今の技はそんなに生易しいものではない。
その正体は口にしたように――気当たり。
それも攻撃してくると錯覚させるほどの神業染みたそれだ。
「……殺気や攻撃する意志ってのは本気でぶつけると相手がビビりすぎて死にかねなかったりもするが……攻撃を錯覚させるとは味な真似をしてくれんじゃねぇか……！」
「そう言うな！　これは真の達人にしか通用せん！　気だけで攻撃の瞬間、位置を感じ取ることが出来るお前だからこそ通じたのだ！」
「……クク、なるほどなぁ。光栄だぜ」
とは言うものの厄介な技ではある。
つまりあまりにも露骨で強烈な気を受け、攻撃に対して最適な結果を取ろうとした結果、レオンハルトは自分から地面に転げたのだ。
レオンハルトと言えども全ての行動に考えてから動いているわけではない。魔人の知覚は反応速度、動体視力と共に高速の域にあるが、それでも単純な動きを取る際はほぼ反射に近い。考えるより先に

身体が行動する。
武術においてこの反射は重要である。剣を振る、防御する、回避する。基本の動きは何度も行った反復行動によって反射の域にまで高められ、思考するよりも速い行動を可能とする。
レオンハルトも反射神経、反応速度は常人を遥かに越えるが、それでも防衛からくる危機的反射があるのは同じだ。
魔人は無敵結界が存在するため、危機に関する反応が鈍く、奇襲や不意打ちには弱いが――レオンハルトに関しては当て嵌まらない。普段から修行や模擬戦、実戦で無敵結界を解いた戦闘を経験し、そうでなくとも無敵結界に触れさせないほどの彼は、他の生物と同じように危機に関しても敏感に反応する。
無論、殆どの行動はレオンハルトが知覚して考えて動き出すよりも遅いので問題とならないが、曲がりなりにも人類最強クラスの相手となれば別だ。
特にこの戦闘において気を払っていたレオンハルトは、石丸の未知の剣に関して慎重だ。強敵相手に昂ぶって大胆な行動を取っているように見えるが、戦闘においては冷静な判断を下せる。
「やってくれるじゃねぇか……！」
今の技は石丸が口にしたように、石丸の気当たりから攻撃の意図を察して反射的に行動出来るような達人にしか通じない。
他の魔人であれば気の察知まではともかく、咄嗟の危機には鈍く弱いので咄嗟の行動が出来ずに今の技を食らうことは無かっただろう。
剣術において脊髄反射レベルにまで行動することが可能なレオンハルトだからこそ、今の技に引っかかった。
それはやはり、一つの事実を改めて浮かび上がらせる。
この藤原石丸という男は、他の剣技も合わせて――レオンハルトだけを狙ったものであるのだと。
それはまるで、対レオンハルト用剣術。
レオンハルトだけを狙いすまし、倒すためだけ特化したような剣術。それが石丸の新しい剣の正体だ。
何故なら石丸より弱い者を相手にするのであれば、以前の剣を使っ

た方が効率が良い。態々小細工を弄する必要はないのだ。
勝負の前に語った言葉に嘘は一つも無かった。
この藤原石丸は、本気で――
「本気で、俺を倒す気か……」
その事実を再度、理解する。
分かっていたはずだったが、まだ自覚が足りなかった。
この相手は、己を殺す可能性がある――死合いの相手である。
ならばこちらも、油断してはならない。
「……ハハ、お前は……俺の敵となり得るのか……」
いいだろう、と。
「――お前を〝挑戦者〟と認めてやる」
「……今までは認めていなかったのか？」
石丸が問うてくるが、そういうわけではない。
「俺の自覚が、足りなかっただけだ」
そう、自覚が足りなかった。
今までの相手は自分に挑戦する資格もない奴ばかりであった。
どう足掻いても勝てないのに、無謀にも挑んでくる人間。その意気は認めるが、決まりきった勝負は勝負じゃない。
だがようやく、人間の中に自分に挑戦出来る相手が現れた。
そのことを自覚する。
「――掛かってきな。相手してやる」
「……！」
それは本当の意味で放った言葉だ。
人間に対して初めて紡ぎ、示した――レオンハルトの意志だ。
相手してやると。
その言葉を聞いた石丸は息を呑み、それを吐くことなく飲み込むと
――再び笑みを浮かべて、
「挑ませてもらう……っ！」
「――来いッ！　お前の意志を俺に見せてみろッ！」

夢の果て

広場では戦いの音だけが響いていた。
桜の花びらが強風に舞い、散った火花が沈んだ闇の空へと消えていく。
二人の剣士の戦いは加速的に速度を増し、何人たりとも立ち入ることの許さない戦場となっていた。
圧倒的な威力を誇る大技を連発するレオンハルトと、工夫を凝らした小手先の技でそれをいなす藤原石丸。
剣戟の音が激しくなる。
それが示すのはまた速度が上がったということ。
上がって、上がって、止まらない。
単純な速度による残像が見えかねない程の速さで以って繰り広げられる決闘。見る者にすら試練を与える極上の戦闘だ。
剣士という生き物がこの場にいれば、瞬きすらせず、食い入るようにこの戦いを見つめ続けるだろう。
一つ一つの剣の応酬。それを見るだけで剣の腕が一つ向上しかねない。
剣を極めんとしている者にとっては、どんな宝よりも価値のあるもの。
だが、
「傷が増えてきてる……」
ハンティがその戦いを何とか目で追いながら言う。
それは、石丸の方を指して言った言葉だ。
レオンハルトの方も、何度か地面に転がされて服が汚れてはいるが、石丸の方は薄い血の線を肌に走らせている。
それはレオンハルトの剣圧の鋭さによって負わされたものが殆どだが、中には一連のやり取りで負った傷もある。
未だ実力はレオンハルトの方が上だということの証明だ。
ならば十中八九、このまま行けば勝つ。
だが、石丸が更に成長してしまえば――

「また速くなった……！」
まだ勝負は解らない。

歯を噛み締め、石丸はレオンハルトの剣の凄まじさを感じていた。
相手は強大だ。身体能力、技術、経験、あらゆる部分で勝っている。
力は地を砕き、速さは音を置き去りにする。気を抜けば一瞬で己は命を散らすこととなるだろう。
――だが、それがどうした。
そんなことは端から分かっている。
研ぎ澄ませ。
己の感覚。内に秘めた力。頭の天辺から足の先。血の一滴。底の底から全てを絞り尽くせ。
もはや何も残らなくても構わない。
覚悟していたことだ。
勝利したところで、手に入るものは少ない。既に多くを失ってしまったのだ。もはや多くを望むことは叶わない。
だが、〝勝ち〟だけ。
勝利だけ。その一つさえ手に入ればいい。
勝った後のことなど考えるな。
自分だけの理。剣の極みに至ってみせろ。
己の剣を信じ、相手を越えろ。
誰にも見えぬ先へ。
誰よりも速く。
未だ見ぬ場所へ。
「おお……っ!!」
石丸は相手を見据えながら、更に力を振り絞った。

レオンハルトは石丸の動きを捉えようと目を凝らした。
剣を振るい、相手の剣を追い続ける。未知の剣ではあるが、全てを

読み切ってしまえば勝ちなのだと視線を鋭くする。
その間に何度も反撃され、躱され、転がされるが致命は一つもない。剣による傷は一つも負っていないのだ。
最強の剣士であるという自負。その道の覇者が挑戦者の剣を真っ向から受け止めないはずがない。
その上で勝利する。
自信はある。それだけの力が、自分にはあるのだ。
だが、
……まだ速くなるのか……！
レオンハルトはその石丸の動きの鋭さに違和感のようなものを感じる。
それは石丸の、異常な成長速度。
剣を合わせれば合わせるほど、石丸の動きが鋭くなっていくのだ。
常に有利なのはこちらで、相手の対応は常に後手。
後の先を取ろうとする剣が、石丸の剣だが、とはいえ不利であることに間違いはない。
だと言うのに、石丸の剣は段々と、こちらの良いところを突いてくる。
未だ読みも追いつかず、石丸の剣だけが研ぎ澄まされていく。
それは、
「！　……そういうことかよ……！」
不意に、レオンハルトはその正体に気がついた。
石丸の剣が成長していく原因。その大本だ。
……こいつの剣を急激に今、引き上げているのは――
それは、
……他の誰でもない――俺自身だ……！
石丸の強さ。それを引き上げているのは、他ならぬ己の剣である。
剣が合わさる度に、石丸はレオンハルトの剣を見て、吸収し、成長している。
千年分の経験値が詰まったレオンハルトは、剣士にとって餌にも成り得る。

無論、実力が離れすぎていれば剣の理の一端も理解出来ずに終わるだろう。
だが石丸はレオンハルトと同等の才能を持つ剣士。そして戦った数も一回ではない。
都合二度、石丸はレオンハルトと戦い、敗北している。
一度でも負ければ死に絶え、それ以上剣の道を行くことは出来ないが、幸運にも石丸はその二度を生き残った。
そして三度目。新たな剣を携えて勝負を挑んだ石丸は、この三度目でレオンハルトの剣に追いつこうとしている。
感じた違和感とは――追われる感覚。
今まで一度も感じたことのない、背後から追い抜こうと迫ってくる感覚に、レオンハルトは戦慄したのだ。
吹けば飛ぶほどに脆弱な筈の人間は、その可能性を振り絞り、力を増し、強くなっていく。
レベル如きでは測ることの出来ない――人間の、剣士の底力。
限界に達して、なお、限界を越えてくる相手との邂逅に、レオンハルトは身震いするような感覚を得た。
……やるじゃねぇか……。
口端に笑みが浮かぶ。
やはり、人間は強い。
可能性の塊だ。
己如きでは、その全てを悟り、測ることは叶わない。想定を越えてくるのが人間だ。
例え敵わないと分かっていたとしても。
諦めることなく、可能性を追い続ける。
それは愚かとも言えるのかもしれない。
高位の存在はそんな人間の在り方を見て、馬鹿だと、嘲笑うのかもしれない。
だが、石丸の表情は物語っている。
――笑いたいなら笑え。
それでも、自分の道は自分で決める。他人(かみ)が決めた限界など知る

か。
例え百年と満たずに散る、儚い命であったとしても。
魂を燃やしながら、この世で戦い続ける。
……強いな。
知ったことかと、人の生き様を見せつけるように戦う石丸に、レオンハルトは本心からその在り方を強いと認める。
人の弱さを嫌というほど知っているが、それでも人を信じるのは、その可能性を信じているからかもしれない。
どんな人間にも可能性があり、良くも悪くもこの世を動かすことが出来る。愚かだからこそ、その先の事など考えないのだ。
世界を救うような人間は、目の前の人間の様な、自分の可能性をどこまでも信じる馬鹿に違いない。
だが、
……俺は負けねぇ。
限界が来ていないのはこちらも同じことだ。
仮に限界が訪れても、その程度で諦めることはない。
自分の可能性を信じているのは己だって同じだ。お前達だけではない。
それが人間だと言うなら己とて、人間としては先輩だ。その人間の可能性を、更に高めた魔人だ。
ならば人間に出来て、魔人に出来ない道理はない。
……ああ、そうだ。追いつきたいなら追いついてこい。
追いついた程度で、自分は負けない。二度と負けないと誓ったのだ。
己の得物である魔剣を強く握る。与えられ、活かそうと信じて鍛え上げたこの剣の腕。
何人たりとも上には行かせない。その意志を示す。
「――行くぞッ！」
「……！　何ッ!?」
視界の中の石丸が上を見上げて、驚愕する。何故なら、
「跳躍した……!?」

「普通に使うと危ねぇからなッ！」
足に力を込めて跳び上がり、宙に身を躍らせる。眼下にいる石丸を見据えたまま、レオンハルトは気を高めた。
それは己の必殺技の一つ。己の剣気を放出して相手にぶつける必殺技だ。
力を溜めて、レオンハルトは地面にいる石丸を捉えると、
「――〝天羽々斬（あめのはばきり）〟ッ!!」
「っ……！」
瞬間、力の塊である白の奔流が、石丸に向かって放たれる。狙いは簡単だ。これなら、
「防ぐことは出来ねぇだろ!?」
防ぐことも、そして躱すことも難しい。そのために上空から大地に向かって放ったのだ。
平面から撃つと、側面に回られて躱される。その可能性を排除した。
爆発した剣気の放出は、極太の光線となって地面を穿つ。石丸の相手の剣を受け止める剣術も、これなら使用することは出来ない。
〝陽炎〟を使っても関係ない、上から降り注ぐ面の攻撃。一撃で相手を消し炭にしてしまうその必殺の剣は、しかし――
「――読めたぞ」
「ッ……！」
――何者にも当たることはなかった。
レオンハルトが落下中に背後に感じた気配。そして声に気づいた。
そこにいたのは藤原石丸。おそらく、陽炎を使って同じ様に跳躍したのだろう。
「――やりやがる……ッ！」
「おお……！」
レオンハルトは気づいた。この状態での防御は不安定であり、動作もギリギリであると。
必殺技を放った隙を狙った。言葉にすればそれだけのことだ。
だが、その意味はとても大きな意味を持つ。

「ッ……！」
宙に、赤い雫が僅かに落ちる。
「あ……！」
それを目視した者は震える。その赤の意味に。
極々小さなものではあるが、それを成したことには変わらない。
「――レオンハルト様に、傷を……」
石丸の剣が、レオンハルトに傷を付ける。
その意味は単純明快。
たった一回のやり取りであろうと、
「ようやく、一つ……！」
――この瞬間、石丸は確かに頂点に並んだのだ。

「ククク……」
その結果を受けて、レオンハルトは口端を歪めた。
「クハハ……！」
己に傷を負わせた。無敵結界があれば防げたものであるが、そういう問題ではない。
「ククク、クハハハハッ――!!」
己が防ごうとして、防ぎきれなかったことに、意味がある。
相手が、自分に、僅かでも並んだことに、レオンハルトは歓喜する。
――ここまで来たか。
追いついてきた挑戦者を心から称賛する。
まだ愉しめるのだと。こんなところでは終わらないのだと、全身で訴え、強い意志を見せてくれている。
なら、
「――まだ行けるよなぁ!?」
「――当たり前だ！　剣士であれば、当然……！」
幾重にも行われた剣技の応酬。その消耗はゼロではないはずだ。
だが石丸は、それを否と突き返す。その程度で、そんなことで終わる筈がないと。

例え限界が訪れようとも、
「ハハッ、剣士ならこれくらい、普通だよなぁ!!」
「ああ！　剣士であれば！　これくらいで戦いを止めることはせん！
剣士は光線だろうが地震だろうが動じることはせん！　嵐の中であろうと剣を振る！」
レオンハルトと石丸にとって、体力など些末な事だと。
剣士であればどんな状況だろうと最期の時まで剣を振る。剣士にとっては極普通。誰でも出来ることだと二人は声に熱を入れて語る。
その言葉を聞いて、ハンティは、
「いやいやいや、アンタらだけだから……!?」
と、ツッコミを入れつつも、微妙に武者震いをした。
だが直後、
「――ッ！」
「――！」
更に戦いは激しさを増した。

二人の剣士の戦いは、一つの終着点に達していた。
王道の剣。強者の剣を振るう魔人レオンハルトと。
挑戦者の剣。弱者の剣を振るう人間、藤原石丸。
頂点に達するは前者。しかし後者も追いついた。
そうして二人は、同時にある事を感じる。それは、
――剣は、まだ深いのか……！
剣の理。本物の修羅にしか到達することが出来ない剣の道を極めてなお、その先には道があるということ。
「〝震天〟ッ――！」
「〝猿廻〟っ――！」
仮に――剣の神と呼ばれる者がいるとするならば。
「〝瞬光〟ッ！」
「〝陽炎〟……！」
それは、この二人のどちらかである。

――或いはまた別の、剣の神という者が既に存在していたとしても。
二人は――その隣に座れる。
二人が足を踏み入れているのは、剣の神域。
レオンハルトが最初に到達したそこに、石丸は一太刀で以って足を踏み入れた。
たった一太刀。されど一太刀。
しかし剣術に於いて神にも等しいこの男に、一太刀を入れることは並大抵の事ではない。
誰にも異を挟むことは出来ない。結果で証明した。彼は確かに、並んだ。
千年分の経験値を凄まじい速度で吸い上げ、追いついた。
そうして同じ領域に立った二人の剣は、相手の剣を通じて更にその高みを引き上げる。
一瞬一瞬が最高の時間。
誰にも見えぬ先へ、誰よりも速く駆け抜けていく。
遠い頂きへの道を、瞬く間に加速し、創り上げていく。
その先に、何が見えるのか。
それは二人にしか分からない。
だが、確かに言えることは、
「やるな……！」
「そちらもな……！」
だが、とレオンハルトは微笑を作って言う。
「そろそろ、か」
「ああ、残念だがな」
二人は不意に、勝負の終わりを悟る。
無論、戦う力はまだある。体力が尽きても戦うと言ったのは嘘ではない。
しかし、これ以上は緩やかに落ちていくのみ。
長く戦えば、それだけ鋭さは劣っていく。
ならば、頂点に達している今この時に、終わらせるのが良いと、同

時にそう思ったのだ。
「……剣というのは不思議だな」
「ああ」
もはや敵意などはない。
「たった一本の剣が、棒に刃を付けただけのものが、ここまでのものを生んでしまう」
「ああ」
そこにあるのは自分を形作ってきた全てのものへの感謝。
それは眼の前の、敵であるはずの相手も例外ではない。
「だからこそ――剣は面白え」
「ああ――違いない」
それは、本来交わることのない二人が、初めて語り合った事。
最初で最後の、友としての語らい。
それを最後に、二人は剣を構える。
魔剣と神剣。二人の剣の煌めきが月明かりを反射し、桜の花がその光景を彩る。
風の音すら止んだ決闘の場は、静寂に包まれる。
見る者すら瞬きを忘れ、息を呑んだ。その瞬間の訪れを感じ取る。
剣の宴も最早これまで。戦乱の絶えないこの戦国の世に出会った二人の英傑は、最後の一刀を以ってその運命に幕を下ろす。
この戦乱の世の隨の定めに従い、彼らは修羅となり、剣を交える。
二人の神気、鬼気、剣気、全てが入り混じった気が膨れ上がり、地を揺らす。
放つのはお互い、己が持つ至高にして最強の一刀。
二人の持つ夢、思想は違えど、今この時に共通する想いがある。
それが、
――さあ、覚悟は良いか？
覚悟はとうに出来ている。ならば、
――〝勝つ〟。
「――〝魔仭王剣〟」
「――〝桜花剣乱〟」

いざ尋常に――勝負！
二人の一念が今、激突した。

その剣は、人にして魔。剣の王の剣。
古今東西。剣王、剣聖、剣帝、剣神。様々な呼び名で語られる伝説の男の、未だ誰にも見せたことのない正真正銘の秘奥。
最強であることの証明である。
その理は、やはり王道。
敵を討ち倒し、その上で己の意志を貫き通さんとする男の剣。
誰にも見切ることの叶わない不可視にして最強の魔剣。
細かな道理など不要。
最大の力と最大の速さを以って、全てを斬り伏せる。
負けは許されない。
自分の大切な者達のために、これからもやるべきことは多くある。
脳裏にはその者達の姿が映る。
そしてその中には、白い髪を靡かせた――己の最も大切な者の姿もあった。
――〝勝つ〟！
そして、剣の王は剣を振った。

――男には夢があった。
その夢を最初に思い描いたのは幼き日のこの季節。
桜舞い散るこの光景を見て、この時を夢見た。
まるで夢幻。
人として生を受けたことに後悔はない。厳しい環境に置かれたことにも不満はない。
是非もなし。
今まであった全ての物事が、己をここまで成長させてくれた。
視界の奥には、その大切な者がいる。

既にいなくなった者達も、不思議と近くに感じられる。その全ての者達に伝える。
――ありがとう。
お前達がいたから、自分はここまで夢を見ることが出来たのだ。
この身砕けたとしても、そのことを忘れはしない。
その全ての想いを集約した石丸の剣。
その理は王道とは似て非なるもの。
頂点に挑むために鍛えた剣は、今この時に頂点と剣を交えたことで息吹を上げた。
今までは想定していても、未完成の剣であったこの剣は、眼の前の男のおかげで完成する。
憧れて、憧れて――夢破れてなお、また目指し、勝ちたいと思った男。
――いざ、行かん。
彼を目指したからこそ、幾つもの縁を結び、ここまで登ることが出来たのだ。
そして今、このようにして剣を交えることの何と幸福なことか。願わくば、この身朽ち果てても、この剣を只振っていたい。
しかしそれは叶わぬ夢。人の世は泡沫の如く。
己の剣に感じる手応えから、雲耀に達するその魔剣が迫ってきているのを感じる。
――ああ、そうだ。そろそろ、辞世の句でも考えておかねばな。
武士には必要なことだ。不思議と時間は長く感じられる。読む時間くらいはあろう。
この手のものはあまり得意ではない。しかし、
――出来た。
不思議とそれは直ぐに出来た。自分の想い、それを乗せればよいのだと。
――〝疾く生きて〟
ここまでよく生き、駆け抜けてきたものだ。
――〝人の儚き　知りてこそ〟

どれだけ困難な道だろうが。
――〝遠き頂き〟
その頂点に、
――〝されど挑まん〟
例え何度生まれ変わったとしても、俺はまた――この道を選ぶだろう。
また夢破れたとしても、その時は。
……ふっ、さて、参ろうか――
これも俺の定めか。
石丸は笑みを浮かべ、そして、
「――――」
最期に見たのは桜が散る光景と――愛しい人の姿だった。

この瞬間、歴史の刻まれる剣豪同士の死合が決着を迎える。
一閃。そして剣戟。鋼の音が響いた。
「――――」
「……」
交叉するように二人は背を向き合う。その姿を、皆は見守る。
傍目には、結果はまだ伝わらない。
だが、勝者だけは、その決着を感じていた。
「……剣で、ここまで……」
言葉を発したのは、金髪灼眼の魔人だ。彼は静かな声で結果を口にする。
「剣で……ここまで、傷を付けられたのは、初めてだな――」
その言葉に、まさか、という想いが使徒達の中に沸き立つ。
「だが――」
しかし、レオンハルトは続く言葉を放つ。腹の部分には斬撃の痕。血を口から滴らせながらも、
「――俺の、勝ちだ……！」
「……！」

――勝負あり。
背後では、心の臓を貫かれた石丸が、ゆっくりと地に伏していく姿があった。

「石丸様……」
少し離れた場所で、その戦いを見ていた春姫は呆然と呟いた。
藤原石丸の敗北。そして、一騎打ちの末に死亡。それを目の当たりにしたのだ。
何をすればいいのか分からない。
悲しさは沸き立つ。しかし、どこかまだ、実感が沸かない。夢か何かを見ているようだ。
しかし同時に、不思議な気持ちもあった。
それは、石丸の表情。まるで少年の頃のような、無邪気で、それでいて満足そうな顔をして死んだ石丸を見て、
「……そう、ですか……」
春姫は、それを悟った。
石丸が最期まで、石丸であったのだと。
まるで畳の上で老衰して死ぬような満足を、得ることが出来たのだと。
刹那を生き抜いた心の底からの笑み。熱い思いを果たし、これも定めかと笑っていた。
それを感じたからこそ、春姫は膝を突くことはなかった。
視界の中では、深手を負った魔人に使徒が駆け寄って、慌てている。
だが魔人は、こちらにゆっくりと近づいてきた。
「……」
何を言うのだろうか、と思う。
貶めるのか、それとも殺されるのか。
しかし春姫は思った。受け入れようと。
例え死であろうと、もはや抵抗することは出来ないし、その権利もない。

自分は捕虜であった。そして、そのための救いはいなくなった。
心残りは一つだけあるが、もはやままならない。
五十年の世の英華も、仇桜の如く、一瞬の後には一炊の夢となるのが無常なるこの世の常。
ならば私も武士の妻として、人の世の定めを受け入れて笑いましょう。
最後まで己を貫き通した――愛する男の様に。
故に全てを受け入れるのみだと、春姫は瞳を瞑り、僅かに首を見せるように顔を上げた。
そんな時だった――
「――母上っ！」
「……！　もも!?」
不意に、こちらの前に躍り出るように現れた影。
それは自分と石丸の娘――ももだった。
「子供……？」
使徒がももを見て疑問を漏らす中、ももは魔人の前に立ち塞がった。
「もも！　何を――」
「っ！」
どうしてここに、とも思うが、ここは実家の屋敷よりかなり近い場所であることを思い出す。子供の時の自分達ですら来ていた場所であった。
どこにいるのかを心配してはいたが、おそらくそちらに預けられていたのだろう。石丸の手によって。
そんなももが、何故かここに来て、魔人を見上げている。
その光景に、春姫は最悪の事態を想像し――しかし何処か不思議と見守る自分がいた。
まるで誰かを見ているようであった。
「……」

魔人レオンハルトは勝負を終え、不意に現れた子供に面食らっていた。
おそらくは石丸と春姫の子供。一体どのタイミングでやってきたのか。普段であれば気配で感づくところを、石丸との勝負に集中しすぎていたせいか気づくことが出来なかった。
しかし何にせよ、この子供は自分の前に立ち塞がっている。
……まさか、俺と敵対するつもりか？
何を思ったかは知らないが、父親が殺されたことで思わず行動に起こすこともゼロではない。
「……何だ？」
「……」
もともと呼ばれた子供は、問いを掛けても口を発しない。
いや、発せないと言うべきだろうか。こちらの存在感に怯え、足は震えている。
子供にとって、魔人の気配はそれだけで気絶しかねないもの。当然といえば当然である。
だがレオンハルトは、ふとその行動の意図に気づいた。
腕を広げて、こちらを見上げている。その意味は、
「……母親に、手は出させないと？」
「……！」
声を発することはない。
しかしその視線は、こちらの眼を捉えたまま一切逸すことなく、その意志を言外に伝えてきている。
吹けば飛ぶような小さな命。挑みかかっても死ぬだけだと分かっているのだろう。他の行動は一切取らない。
ただ涙を堪えながら腕を広げて、母親の前に立ち、こちらを睨みつけているだけだ。
だが、
「……父親に、よく似ているな」
その瞳に映る意志の強さは、まるで石丸を思わせるような輝きを放っていた。

「レオンハルト様……えっと、その――」
「――いや、いい」
ペールがこちらと子供を見て、迷ったような様子の言葉を掛けてきたが、それを否と言う。
「随分と、深手を負ったからな。さっさと帰るぞ」
「そ、そうですわ！　子供に構ってる暇はありませんのよ！」
キャロルがあたふたと慌てたように言う。それを可笑しく思いながらも、レオンハルトは子供に声を掛けることにした。
「戦いはもう終わった。母親を連れて何処へなりとも行くと良い」
「……」
だが、まだ立ち去ろうとはしない。その意味は、
「……ふ、敵に背を向けることはしないか」
その心に秘めるのは、武士道。
……良い薫陶を受けているようだな。
将来は立派に育ちそうだと思う。道が交わることはあり得ないだろうが、
……いや、それは分からない、か。
決めつけては足を掬われる可能性もある。子供の可能性は馬鹿に出来ない。
意志は受け継がれる。この幼子も、いずれは一廉の器となって大成することもあろう。
魔人は微笑を浮かべ、その横を通り抜けた。
「ならここは退かせてもらうか。今襲われては、苦労しそうだ」
行くぞ、と使徒達を連れて立ち去ろうとする。
背を向け、山を降りようと足を踏み出したところで、レオンハルトは最後に声を聞いた。
「――ありがとう、ございました」
「……！」
それは横を通り過ぎ去ろうとした時に聞こえた春姫の感謝の言葉。
石丸のこと、子供のこと、色んな意味の籠もった言葉だろう。
だがレオンハルトは、少し歩いたところで、徐ろに想いを口に乗せ

た。
「……人の可能性、か」
最後まで己の意志を貫き通した多くの武士達。
石丸を待ち望んだことは間違いではなかったと、レオンハルトは浮かぶ月と夜桜を見上げる。
そんな時、一片の桜の花びらがひらひらと自分の前に舞い落ちてきた。
何となく掌を広げると、花びらは掌に落ちる。
……あの世で存分に誇れ。
その花吹雪の、儚くも美しい最期の散り際の光景を、決して生涯忘れることはないと――レオンハルトは心に誓った。

――かくして、男は答えを得た。
――二人の剣士が戦ったと云われるその山は、戦いの激しさを物語っているようであり、〝剣の聖地〟として多くの剣士の知るところとなる。
――そこには世界最強の剣士と、それに挑み続けた藤原石丸という一人の男の軌跡がある。
――多くの英傑が散っていった戦乱の最後を弔うかのように桜の花びらは舞う。
――夢を追い続けた一人の男の物語はこうして、幕を閉じたのである。

おやつ休憩

――ＮＣ７ＸＸ年

魔物界北東部。そこにある街は普通の街ではない。

通常、魔物の街といえばツリー都市のことを差す。世界樹と呼ばれる大きな木の中、その周囲に作られる街のことだ。

だがここ――レオンハルトシティだけは、その名を冠する魔人によって建築された街であり、文化的な生活を送ることの出来る街。

謂わば魔物界の最先端ともいえる街である。人類圏よりも上かもしれない。

何故ならこの街の開発、運営などに関わっている人材は人類圏のそれよりも豊富かつ優秀であり、更には管理者は優れたものを迅速に取り入れているからである。

魔物が家や家庭を持ち、職務の傍ら外食を行い、休日には公衆浴場や劇場、各種娯楽に興じて生活に潤いを与える。高級将校である魔物将軍の家ともなると、もはや人間の貴族の様であり、庭付きの屋敷に、会員制の高級店。ＶＩＰが与えられ、快適な生活を送ることが出来る。

その生活レベルの高さは、人類圏からたまに連れてこられる人間が、軽くカルチャーショックを起こすほどである。

そんなこの街の中心にはこの街の建物の中でも一際大きい建物がそびえ立っている。

紅魔城と呼ばれるその城は、この街を治める支配者の城だ。

数多の戦争に勝利し、魔物界に繁栄をもたらし続けている〝魔物界の英雄〟と呼ばれる魔人。

「――馬鹿な……」

城の一室にあるソファに座り、テーブルの上を見て頭を抱えている金髪灼眼の美丈夫がいる。

見る者を怯ませる鋭い眼と整った顔立ち。無駄なく鍛え上げられた肉体を黒を基調とした衣服で身を包んでいる、圧倒的存在感を醸し出す魔人がいる。

彼こそが魔人レオンハルト。魔人の最高位たる魔人筆頭。そして魔軍の総指揮を行う魔軍参謀の任を担う魔人である。
その名を知らぬ者は大陸に存在しないのではないかと思うほど有名な魔人。その逸話には事欠かない彼である。
特に戦闘面に関しては世界最強の剣士として名高く、先の大戦でも、その実力を遺憾なく発揮した。
そんな彼が今、頭を抱えて落ち込んでいた。
その理由は、
「この俺が……負けただと……」
そう。信じられないかもしれないが、負けた。
最強の魔人と名高いレオンハルトは、敗北した。それも一度ではない――何度も。
何度やっても勝つことが出来ない。己の腕に絶対の自信を持つレオンハルトである。自称ではなく、誰もが認める強さの持ち主。
本人も負けるはずがないと思っていた――が、負けた。何かの間違いかと思い、もう一度挑んでみるもまた負ける。戦法を変えて挑んでみても勝てない。普段であれば絶対やらないであろう〝命乞い〟も行った。
しかしそれでも勝てない。
圧倒的敗北を味わったのだ。
「あ、ありえん……何故この私が敗北する……！」
そしてもう一体、敗北に震えているのはレオンハルトだけではない。
レオンハルトの隣でソファに座り、同じ様にテーブルを見ながら頭を抱えているのは巨体の魔物だ。
彼の名はバルカ。こちらもレオンハルト程ではないが、有名人である。
魔軍に7名しかいない魔物大将軍。その内の一人。ケッセルリンク軍を預かる魔物大将軍がバルカである。
自分自身の事を稀代の天才軍略家と自賛して止まない彼は、その自惚れに見合った天才的な戦略、戦術で幾度も魔軍を勝利に導いてい

る。
役職柄、レオンハルトと話すこともそれなりにある。特に同じ軍を動かす優れた戦略、戦術家である。その話題は仕事の事も多いが、画期的な新戦術について話し合うことも多い。
先の戦いで行った飛行魔物兵を使った空爆も、レオンハルトとバルカ。そしてもう一人が話し合って出来た戦術である。
そんなバルカは、仕事でケッセルリンクと同じ様にやって来ると、レオンハルトと同じ様に敗北した。
何故勝てないのだと。自分は天才ではないのかと。自分が一番自信のある分野なだけに、ショックが隠せない。
そしてこの両者に土を付けた者が、対面に存在する。彼女は二人を見て珍しく困ったようにオロオロしており、何を言っていいか分からない様子である。
そんな光景を見て、部屋の隅で息を吐くものがいる。呆れたような溜息を吐きながら、半目で彼らを見るのは魔人レオンハルトの使徒であるハンティだ。
使徒になってから色々あり、研究者になったり街の治安を維持していたり、最近だと戦闘狂になって暴れまわっていることも多い彼女だが、元来お人好しな彼女である。
ゆえにハンティは見かねて助け舟を出すことにした。一息、レオンハルトとバルカを見て、
「……別にいいじゃない。たかが――」
ハンティが机の上にある物を見て、言葉を一度止める。
それこそがレオンハルトとバルカが敗北した物。その正体は、
「……え～っと、何だっけ……ああ、そうだ。たかだ〝将棋〟に負けたくらいで――」
「たかがじゃねぇ！」
「たかがじゃありませんが!?」
机に置かれた木の盤と駒。それを指してレオンハルトとバルカが叫ぶ。それを見た対面の勝者は困った様子で、
「あ、あの、レオンハルト様？　こ、これはその……そう！　偶然です

わ！　まぐれ勝ちですので気にしないでいいですの！」
　レオンハルトの使徒、キャロルは、明らかに気を使った様子で二人に偶然だと言い放った。二人は揃って叫ぶ。
「これだけ負けてるのに偶然な訳あるか!!」
「へ!?　あ、あの……それは……」
「……はぁ……何でこんなことに……」
　ハンティは落ちた駒の一つを拾い上げて溜息を再度漏らす。
　そもそも何でこんなことになったのか。それを思い出すのであった。

　少し前。
　レオンハルトはいつもの様に執務室で仕事を片付けていた。
「こっちを頼む」
「畏まりましたわ！」
「ハンティはこっちの警備関連の書類だ」
「……なんかアタシ。いつの間に警備の責任者みたいになってない？」
　ハンティが気になっていたことを尋ねる。いつの間にか魔法研究だけでなく、担当として街の警備、治安の担当になっている気がすると。
「何だ。やりたくないのか？」
「……やりたくないって言ったらどうするの？」
　重ねて質問すると、即座の答えが来た。書類から視線を逸らさないまま、
「別にどうもしない。別の奴がやるだけだ」
「……やるよ。ほら、貸して」
「ん」
　微妙な表情に変わった後に、レオンハルトから書類を受け取る。自分以外にやらせるとなると、それはそれで困らせてしまうのが嫌だった。

ハンティは何だかんだで責任感が強く、お人好しなのである。一度引き受けた仕事を放り出すようなことはしない。
そのせいで最近はかなり忙しくなっているのだが、頼まれたのは確かでも、引き受けた自分の責任でもあるので何とも言えない。
一番気分的に嫌なのが、最初は嫌々だったはずの模擬戦の時間が、一番の息抜きに感じることである。ドラゴンの本能的に細々とした書類仕事や、頭を使う魔法研究、大人しい方であるとはいえ、荒くれ者の魔物兵が多く住まうこの街での治安維持などの気を使う仕事よりは、何も考えずに全力で身体を動かす方が楽しく感じてしまうのだ。だから楽しいのはしょうがない、とハンティは自分を納得させておく。
とはいえ別の息抜きもしたいところであった。今も研究室から直接やって来たため白衣を着たままで、しかも魔法具に魔力を込めながらである。
ぶっちゃけおやつでも食べながらだらけたい気分である。しっかり者のハンティではあるが、休みの取り方が分からないで何百年も働くような主や、主の為ならガチで不眠不休で働きかねない先輩とは違って、別にワーカーホリックというわけではないのだ。意外と昔は、ぼーっと景色を見て過ごすことも多かった。だらけるわけでもないが、幾らハンティでも一年に数度くらいはそういう気分の時だってある。
そんなことを思っていると、
「――ご主人様。お茶とお茶菓子をお持ちしました」
三回のノック。仕事中であるためか、レオンハルトの短くも淡白な返事を聞いて部屋に入ってきたのはこの城のメイド長であるメイド長さんだ。
女の子モンスター、メイドさんの突然変異体であるメイド長さんはその手に人数分のティーカップとティースプーン。そしてケーキの乗った皿を乗せたトレイをテーブルに置く。
時刻はちょうど昼の三時である。メイド長さんが時間を間違えるはずもない。

つまり彼女が来たということは、小休憩の合図であった。
「……よし、じゃあ休憩にするか」
「了解ですの！」
「やっと休憩かぁ……」
「待ってました！」
「おお、来たか。早く食おうぜ」
皆が執務用の机から離れ、横に長いテーブルの席につく。
この時ばかりは味音痴で特別食事に興味があるわけではないハンティも気分転換となる。
「本日も、料理長が腕を振るいに振るい、皆様それぞれに合わせた品をご用意致しました」
「ああ。ご苦労と伝えてくれ」
――というか、料理長がヤバ過ぎるせいでもある。
何がヤバいのかと言うと、あの化け物料理長。この城に住まう全員、そして良く来るお客の好みを全て把握している。
城にメイドだけで百人近く。親衛隊や客も合わせると二百や三百を越える数である。その全ての好き嫌いを把握し、それぞれに合った品を出してくるのだ。
同じメニューの時でさえ、味付けを微妙に変えたり、健康状態や気分を考えて材料や分量を調節し始めるのである。味音痴のハンティ相手でも例外ではなく、絶妙に食べたくなる料理を作ってくるのだ。
心遣いは嬉しいが、あの料理長はどんだけ化け物なんだと思う。メイド長さんが言った様に、腕を振るいに振るったのだろう。物理的に。
だが、別の部分で気になることもある。それは、
「……で、何で二人まで自然に入ってきてるのさ」
「え、駄目なの？」
「美食のある場所なら俺はどこにでも現れるぜ」
気づけばガウガウ・ケスチナと魔人ガルティアが同じ様にテーブルに付いてきた。凄い自然にメイド長さんと一緒に部屋に入ってきたので、何か用事でもあるのかとスルーしていたのだが、

「何だ、集りに来たのか」
「おう。暇だったからな」
「そうか」
レオンハルトがガルティアと軽いやり取りを行う。長い付き合いなだけあってその呼吸は自然だ。
……まあ、ガルティアは暇だろうねぇ……。
内心で、嫌味ではないのだが、そんなことを染み染みと考えてしまう。
魔人はレオンハルトが良く言うように何をするにも自由であり、行動に制限はない。
あるとすれば上位からの命令。魔王からのものくらい。もしくはレオンハルト。魔軍の仕事は部下の魔物将軍などに任せることが出来るので、ガルティアは戦う時以外はだいたい食事して、食べ歩いて、飯を探しているのだ。魔人一のグルメは伊達ではない。
こうやって集まってくることも多い。なので何の不思議でもない。少し羨ましくはあるが。
と思っていると、
「私も暇だった」
「いや、アンタは暇じゃないでしょーが！」
ガウガウがそんなことを宣ったので、ハンティは思わずツッコミを入れた。言うと、ガウガウは、え？　と驚いた表情になり、
「酷いよハンティ！　私にだってお菓子を食べる権利はあるはずだ！」
「それはちゃんと働いてたらだよ！　アンタ、ついさっきも、〝休憩先取り〜〟とか言って研究室で一時間くらいお菓子食べてたじゃない!?」
「うっ……」
ガウガウが怯む。図星の筈だった。
ハンティは先程、こちらに来る前にも魔法研究室で研究を行っていたが、同じく部屋にいたガウガウはメイドに注文してお菓子を食べながらごろごろしていた。

「……記憶にございません」
「何都合の良いこと言ってんの！　ほら、研究室に帰る！」
「嫌だ！　私は絶対おやつを食べるまで帰らないぞ！」
……こいつ……！
またしてもおやつ休憩を取ろうとするガウガウにハンティはイラッとする。あまりこういうことを言いたくはないが、真面目に働いている自分が馬鹿みたいだ。
こんなのでも、魔法具を生成する〝付与師〟としては天才、多くの功績を残した高名な魔法研究者なのだ。あの悪名高い魔人レッドアイを作った張本人であり、ある意味で人類の敵のような気もするが、本人は至って真面目に、一応は真剣にレッドアイを正常に戻そうと頑張っているらしい。とてもそうは見えない。
天才にありがちなマイペースで、我儘。きっと頭脳と食い意地に大人になるための栄養を全て取られたのだろう。おかげで身長と胸が――いや、胸のことを言うのはやめよう。人として最低なことだ。
とはいえお灸をすえてやらねば、とハンティは何時も通り魔法を発動する。ツッコミ用に弱くしたものだが、
「――雷撃！」
「っ！」
指の先から出た魔法の雷がガウガウに向かっていく。
しかし、
「――無駄無駄ぁ！」
「……へ？」
何故か、雷がガウガウの身体に当たった瞬間、ダメージを負わせることなくかき消える。不意の出来事に間の抜けた声を上げていると、ガウガウはポケットからあるものを取り出してニヤリと笑う。
「くくく……！　天才の私には抜かりはないのだよハンティ！　もうハンティの魔法は私に効かない！」
「なっ……!?」
何気に凄まじいことを言い出したハンティは目を見開いて絶句する。

何をふざけたことを、と思わないでもないが、実際に先程、こちらの魔法を無効化したのも確かだ。
「……まさか、魔法の完全無効化か？」
「へぇ、だとしたら凄いな」
「凄いですの！　天才ですの！」
傍観していたレオンハルト達も、さすがの発明品に舌を巻く。注目を集めたガウガウは更に得意気な表情になると、
「くくく、その通りだ――と、言いたいところだが、まだそこまではいかない！」
そうではないとガウガウは自信満々に胸を張って言う。ハンティはまだ困惑しながら、
「じゃあ、どうして私の魔法を……」
「ふふん。知りたいか？　知りたいか？　――私を天才と崇めるなら教えてやってもいいぞ！　天才美少女魔法研究者、ガウガウ様と呼ぶがいい……！」
「ぐっ……調子に乗って……！」
物理で殴ってやろうかと拳を握るも、その前に横から声が飛んだ。
「教えてくださいませ。天才美少女魔法研究者であらせられるガウガウ様」
「くっくっく！　しょーがないなぁ……！　そこまで言うなら教えてやろう！　私の偉大なる発明品をっ！」
メイド長さんに煽てられ、ガウガウが得意気に腕を組んでニマニマとし始める。普段はダウナーでものぐさ引きこもりの実年齢数百歳の合法ロリババア経産婦の癖に、何かを完成させると鬱陶しいほどにテンションがハイになる。
だがハンティとしてもその発明品が気になるので余計な茶々はいれない。
「これは特定の魔法使いの魔法を打ち消す魔道具。名付けて――ウィザード・デス！」
ババン！　と効果音が出そうなポーズを取って魔法具の名を高らかに言うガウガウ。

それを聞いてレオンハルトやガルティアが、
「ウィザードです？　……自己紹介か？」
「間違えたんだろ。察してやれよ」
「間違ってないっ！　ウィザード・デス！　これは魔法使いだけに狙いをすました魔法具なんだっ！」
飛び跳ねて怒りを露わにするガウガウ。しかし説明は続ける様子で、
「魔法使いがその身に秘める魔力！　それを取り込むことでその魔法使いからの魔法を完全無効化！　魔法使いに対して圧倒的優位に立てる素晴らしい大発明だぞ！」
「ハニーみたいですわね！」
「そうだ。それに近い。最初、私はハニーの破片でも使えば絶対魔法防御特性を獲得出来ないかと試したが、それは困難を極めた」
だが、と、
「そこで天才の私は閃いた！　全ての魔法を無効化することが出来ずとも、魔法使いの魔力の波長を調べ、その微細な違いを見極めて数値化し、魔法具に記憶させる！　記憶化や魔力の数値化は、以前私が発見した新魔力相対理論を用い――」
「それ、説明しても誰も解んないだろうから省いたら？」
ハンティは説明が長くなりそうなのを感じて、そう口にする。おそらくは自分以外は分からないんじゃないかと思った。レオンハルトなども魔法は使うが、ここまで踏み込んだ魔法理論はさすがに分からないはずだと。
ガウガウは一瞬、動きを止める。しかし気を取り直し、
「……とにかく！　条件はあるが私はこの魔法具を発明してから、秘密裏にハンティの魔力を採取して取り込んだことで、先程の魔法を無効化したのだ！」
私は天才だ！　と胸を張るガウガウ。
しかしそれは間違いではないだろう。大発明には違いない。皆も感心している。
だが、最後にガウガウはぼそりと小さな声で、

「……しかしまだ未完成で一つの属性魔法しか無効化出来ないのだが……」
「何だ。そうなのか」
「それだと実戦使用は難しくないか？」
　レオンハルトからの指摘にガウガウは僅かに目を逸らすも、
「うぐ……確かにそうだが……それは今だけだ！　将来的にはまずこれを完成させる！　そして！　今の状態でも日頃容赦なく行われるハンティのお仕置き雷撃を無効化することが出来るのだ！」
「日頃からやられてますのね」
「そうだ！　これも私のぐーたら生活――じゃなかった。私の魔法研究のため！」
　怠けるために作ったのか……、という疑念の視線を向けられるが、怯んだ様子はない。こいつは本当にレッドアイ直す気あるのかと思いたくなるが、一応目的に繋がりそうなことをしているのでその気はあると信じたい。
　そんなガウガウはハンティに向かって不敵な、煽るような表情を見せつけると、
「くくく、やーいハンティ。これで私にそれは効かないぞ！　さぁ、この私にケーキを献上して立ち去るがいいっ！」
「立ち去られると困るが」
「そして私を甘やかすのだ！」
「聞けよ」
　レオンハルトの声も届いていないみたいで、ガウガウはハンティに向かって勝ち誇る。
　ハンティはそれを半目でじっと見ていたが、やがて息を吐くとガウガウに向かって一瞬で近づき、
「あっ」
　ガウガウからその魔法具を奪う。
　青い宝石の用な魔法具を手に取り、掲げてまじまじと眺めると、
「ふーん、これがねぇ……？」
「こらっ！　返せっ！　それは、私の発明品だぞっ！」

背伸びし、届かず、ジャンプしても届かない。ガウガウは小さかった。
「くそっ、届かない……！」
ぐぬぬ、と悔しそうに歯を噛みしめるガウガウに、ハンティはしばらく魔法具を眺めた後、
「はい、返す」
「……えっ？」
あっさりとガウガウに魔法具を返した。
不意の事に驚くガウガウ。ハンティを怪訝そうに見上げて、
「どういうつもりだっ!?」
「いや、どういうつもりも何も……別にそれがあっても手段が変わるだけだし」
「な、何!?」
ガウガウが声を上げる。予想外だったのか。天才なのにやっぱ馬鹿だなぁ、と思っていると、ガウガウは恐る恐ると窺うように、
「……あ、あの……参考までに聞かせて貰いたいんだけど……手段って？」
ああ、とハンティは頷き、
「魔法を無効化するんだし、今度からは物理的にやってもいいよね？
……それとも実験を兼ねて、もっと強力な魔法でも撃とうか？」
「……」
頬に汗を見せてガウガウが表情を引き攣らせた。ニコニコと笑顔を見せたハンティに恐怖する。
ガウガウは背後の皆に向かって、
「だ、誰か助けてっ！」
助けを求める。しかし、
「……今日のケーキも美味いな。生地がサクサクだ」
「ああ。んぐ、はぐ……細かな生地と果物の甘さが絶妙に調和して美味しさを倍増させてやがる。じゃんじゃん持ってきてくれ」
「クリームたっぷりで美味しいですわ～。さすがは料理長ですわね！」

「皆様の感想、料理長にお伝えしておきます。――それとご主人様。先程、ケッセルリンク様がバルカ様を連れて街に入りました。間もなくこちらにお見えになるようです。お仕事の話があると」
「分かった。城に来たら直ぐにここに通せ」
「畏まりました」
皆ケーキを食べながら談笑している。意図的にこちらを見ないようにしながらだ。
それを見たガウガウはゆっくりとハンティの方を振り返り、
「……エスケープ！」
その場からの逃走を図った。ケーキを持って。しかし、
「……出来るわけないでしょうが」
「の、ノー!! 助けて！ ヘルプ！」
ハンティは瞬間移動を使うまでもなく回り込んだ。逃げられない。ハンティから逃げようと思ったら最低でも料理長レベルの脚力、もしくはメイド長さんほどの瞬発力が無ければ勝負にもならない。どれも肉体的には貧弱（使徒基準で）なガウガウには無理なことだ。
「ミーはケーキを食べたいんだー！」
……どうでもいいけど、なんか口調がレッドアイみたいになってない？
やはり製作者だからだろうか。それともレッドアイがガウガウに似たのだろうか。
「……」
「あ、こら！ ラウネア！ 一口だけ食べて残すなっていつも言ってるでしょ！」
「私のケーキーーー!?」
「……はぁ」
天才だけどどこか抜けてるガウガウを見てそんなことを思ったハンティだった。

……って、この話じゃない！

関係ないところまで遡ってしまったハンティは、先程の事を思い出して額を押さえる。
確かこの後にケッセルリンクとバルカが来て――

「……レオンハルト様は私達が訪れるのを知っていたはずなのに、先におやつを食べてしまうんですね？」
「……」
部屋を訪れるなり、ケッセルリンクに付いてきていた使徒、シャロンが首を少し傾け、亜麻色の髪を靡かせつつ、笑顔でそんな指摘を行う。するとレオンハルトもバツが悪そうに軽く目を逸らした。
毎度のことながらこの二人の距離感は独特だ。シャロンはレオンハルト相手にだけ妙に厳しさというか砕けた様子を見せるし、レオンハルトの方も強くは言えないようで、大体は渋々頷いたり、やんわりと嗜めている。
今回もレオンハルトはシャロンの言うことにやんわりと、
「……しょうがないだろ。時間は決まっている」
「数分も待てないと？　おじ様の城での立場も随分と弱くなった様ですね？」
少し呼び方を変えて遠回しに軽い非難を行うシャロン。妙な呼び方だが、理由を聞いても〝秘密です〟と言うのみで教えてくれない。
しかしその呼び方にレオンハルトは表情を歪め、
「その呼び方はやめろ……幾らケッセルリンクが許してるとはいえだな……」
「おじ様もお許しになったではありませんか」
「……じゃあ仕事中はやめろ。今は――」
「今は――おやつ休憩、ですよね？」
「……そうだな」
諦めたように肩を落とすレオンハルト。それを見て、隣に座っていたシャロンの主は、
「……まあ、あまり困らせないようにな」

「はい。申し訳ありません。ケッセルリンク様」
「怒っているわけではないから気にせずとも構わない。……ちょっと羨ましいだけだ」
小声でそんないじ可愛らしいことを言うのは、スタイルの良い美女だった。
彼女は魔人――ケッセルリンク。魔人四天王の一角。カラーの魔人であり魔人の中でも随一の実力者である。
気品溢れた立ち振舞いにその美しさ。その淑女振りに女性であっても見惚れる者が後を絶たない。魔人としての畏怖も集めている彼女だが、レオンハルトとは良い関係であり、彼の前ではただの恋する乙女の顔を覗かせる。――そこが良いのだと彼女のファンクラブは力説してるらしい。
最近はレオンハルトの仕事が忙しいせいか、ケッセルリンクは仕事中でもこういった反応を見せることが多くなってきた。別にいいのだが、ハンティとしては仕事中にイチャイチャしてると周りが気を使うような変な空気になることも多いので出来ればやめてほしい。むず痒くて苦手なのだ。
同じ感想を抱いてはいないかと周囲を見てみるも、
「お久しぶりですわ、シャロンさん！」
「ふふ、そうですね、キャロルさん。この間はありがとう。おかげで楽しい時間を過ごせました」
「先輩使徒として当然ですわ！　……そういえば例の新刊が出ましたので、今度のお茶会の時にでもお渡ししますの」
「まぁ、ありがとうございます。お茶会、楽しみですね。ハンティさんも、次回は参加してくださいね？」
「……え、あ、ああ……そうね。考えとく。ありがと」
急に声を掛けられてちょっと狼狽えたが普通に返答する。
どうやら二人は気にしていないようで、普通に談笑していた。この二人は性格が合わないように見えて、かなり仲が良く、よく楽しそうにお話してるのを見かける。
たまに行われる使徒だけのお茶会を主催してるのもこの二人だ。

使徒だけの集まりはまた別にあるが、こっちは女子だけでやるものらしい。一々分ける必要があるのかと思うが、どうやらあるらしい。
ハンティも誘われるのだが、使徒同士の集まりには一応たまに顔を出しているのでこっちに顔を出す必要があるのかな、と渋っていた。
というか、一度だけ参加した時に行われていた会話が苦手なものだったため、出来れば行きたくない。仲良くしたくないわけではないのだが、ああいう話は縁がないし、苦手だ。あと、この間参加していたアトランタに軽くそのことを馬鹿にされたのでムカついている。後、それに乗っかってからかってきたペール。ペールはいつもの事だが、アトランタの方は次会ったらボコボコにしてやろうと思っている。しかしあれはあれで逃げ足が速いので中々機会が訪れない。そういう意味では参加したいが、さすがにお茶会をぶち壊しかねないので自重する。女子とはいえ皆使徒なので特に禁止されているわけでもないが、さすがに普通に楽しんでる人に悪い。
「藤吉郎さんも参加します？」
「……！」
「行きたいと言っていますわ！」
「いやいやいや、あんたオスでしょうが!?」
衝撃の発言に思わず声を大にしてツッコミを入れてしまう。キャロルの肩に乗っていたはぐれ使徒である藤吉郎がこちらから身を隠すように隠れた。
いや、普通にオスだと思うが、違うのだろうか。分からない。というか何気にキャロルが当然の様に意志を理解してるようだが、キャロルはラウネア、タルゴ、サメザンといった言葉を話せないガルティアの使徒とも意思の疎通を取っていたりするので不思議ではない。
ハンティは深く溜息を吐く。やはりこの空間はどうなのだろうと。
何気なく、最後の一人に希望を掛けてみようとソファーの方に視線を向けた。すると、
「……む？　こうして、こうすると――お、おおおおお!?　こ、これは新しい戦術となり得るのではないか!?　はははは、私は天才か!?　――天才だった！」

なんか一人で盤面と睨み合い、突如として声を上げて狂乱し始めた魔物大将軍を見て口を引き攣らせてしまう。
魔物大将軍バルカ。ケッセルリンク軍を預かる魔物大将軍であり、自称、天才軍略家。事ある毎に思考に耽っており、時には仕事をほっぽり出して一日中考え込んでいることもあるらしい、魔物大将軍一、マイペースな男。その性格にはリーや他の魔物大将軍も苦労しているらしい。会議の時ですら書物を読んだり、一人チェスを行ったりしているらしく、リー達の苦労が伺える。
だが、あながち天才軍略家というのも嘘ではなく、常識を覆すような戦術を披露して魔軍に勝利をもたらしているらしい。ケッセルリンクも楽が出来ると褒めていた。失敗もちょいちょい起こるらしいが、そこは魔軍の底力。ちょっと戦術的に失敗したところで立て直せるので上手く回っている。
そして意外にもリーとの仲も良いらしい。ハンティにとって魔軍一の常識人と評価の高いリーと、この奇声を上げながら自画自賛を続ける知的ナルシストが結びつかないが、やはり人間も魔物も、性格的に正反対くらいの方がいい関係を築けたりするのだろうか。
そして思うのは、やはりこのバルカもおかしな奴だということ。自分とは合わなそうだとハンティは考える。というかこの空間は、
……もしかして、この場の常識人ってあたしだけ!?
ガーン、と頭の中で衝撃の音が鳴る。何ということだ。今からこの空間内で仕事をしなければならないとは。
もう全ての仕事を放り出して外に出て、意味もなくライゼン辺りを殴りにいってバトルを始めたくなる。この間、脈絡もなく戦いを挑んでみたら、〝え、今からバーベキューなんだが……〟みたいな感じで嫌そうだったのは納得いかない。ドラゴンなんだから常在戦場のつもりで待ち受けてないと駄目だろう。その時はちょっと待ちきれずに問答無用で魔法ぶち込んでしまったが、今思えば悪いことをしたなぁ、と思う。
ともあれ、それが選べるはずもない。自分がいなければ仕事が滞るだろうとハンティは己を鼓舞する。終わったら迷宮にでも行こう。

今はケッセルリンク達がやって来て休憩の延長中だが、それが終わったら仕事だ。
と、そんなことをハンティが考えていると、
「ん、バルカ。それは……」
ケッセルリンクの相手をしていたレオンハルトが不意に、バルカが眺める木の盤に気づいた。バルカもさすがに魔人の声を無視はしない。即座に反応すると、
「これですか？　これはＪＡＰＡＮで流行っているといわれる将棋と呼ばれるボードゲームです。ご存知ですか？」
「……ああ、知っている。戦略性、戦術性があって面白いゲームだ」
レオンハルトはどうやら知っているようで、将棋と呼ばれる盤を見て顎に手を当てる。それを見たバルカも興味深そうに、
「ふむ……もしやレオンハルト様……指せますか？」
その瞬間、バルカの視線が鋭くなる。戦意にも似たその気に、レオンハルトは眉を顰めることなく、不敵に笑みを返し、
「ふ、当然だ。魔軍を指揮するこの俺が指せないはずがないだろう」
「左様ですか……でしたら――」
「何をしますの？」
そのやり取りを聞いていた皆も同じ様に興味を持ち始める。しかし、大半は知らない様子で、
「……チェスに似ているが、これはどういう遊びなのだ？」
「雰囲気があってかっこいいですの！」
ケッセルリンクとキャロルが将棋盤と駒を見て私見を言い合う。するとレオンハルトが答えた。
「チェスと似ているのは間違いじゃない。取った駒を使うことの出来る。敵陣の三マス目に入ると成ることが出来るなど、少しずつルールだったり駒の動きは違うがな」
「ですがその戦略性はとても奥が深く……この天才軍略家の私でさえ、全てを理解することは難しいものです」
「へー……」
釣られてハンティも何となくそれを見る。さすがにチェスくらい

は知っているが、確かにちょっと難しそうな雰囲気がある。こういう頭を使うのはそこまで得意じゃないのもあるが。
　そんなことを考えていると、未だ一心不乱におやつを食っていたガルティアもそれを見て、
「あー……そういや、こういうのはレオンハルト得意だよなぁ。俺はさっぱりだ」
「それほどでもない。……というかお前は何も考えずに直感で駒を動かすからだろうが。しかも、それで微妙にやれてるのも質が悪い」
「あれこれ考えるの面倒だからな」
　ガルティアがそう言うと、シャロンが反応してレオンハルトを見た。そして何か含みのある笑顔で、
「……そういえば、おじ様は以前、私をチェスでぼこぼこにしましたね。弱者を甚振るのはさぞ楽しかったことでしょうね？」
「……いや、あれはお前から挑んできたんだろ。自信がある、とか言って」
「……私の記憶にはありませんが？」
「おい」
　なんかついさっき見たような言い訳で逃げるシャロン。そこでバルカはようやく最初の話題に戻り、
「……それで、レオンハルト様。どうでしょう？　この私と一局、指してみるのは？」
　将棋を指さないか、とレオンハルトに尋ねる。やはり戦意を出しながら。レオンハルトも応じて、
「別に構わない。……それに、どうも俺を倒したいようだな？　顔に出ているぞ？」
「いえいえ……胸を借りる気持ちですよ。ただ……自分で言うのもなんですが、私は将棋というゲームが出来てからというもの、かなりの時間研究に研究を重ねてきました。そう、それこそ仕事など手に付かないほどに……」
「いや、仕事しなさいよ」
「そうして導き出した私の最強の戦法――名付けて、振り飛車穴熊に

勝てますかな？」
　聞いちゃいない。仕事を放り出すのはどう考えても駄目だろう。それでケッセルリンク軍書類の提出が妙に滞っていたわけかと嫌な納得を得る。
　レオンハルトはそれを聞いて、苦言を呈するかと思いきや、
「……振り飛車党か。それに……いいのか？　最初に戦法を宣言してしまって」
「その口ぶりですとレオンハルト様は居飛車党ですか。……いえ、問題ありませんよ。これは私が開発した新戦法。レオンハルト様が穴熊をご存知であっても、普通の穴熊とは違いますから」
「……言うじゃないか。――ならばその新戦法とやら、俺が正面から叩き潰してやる」
　もはや何を言っているか分からない。何か初めて聞く単語がいっぱい出てきたが、そもそもルールを知らないのだから分かるはずもない。そう思っていると、
「――では、私が皆様にルールを説明しましょう」
「メイド長さん!?」
「メイド長、で結構ですよハンティ様。というわけで説明は私にお任せを」
　いつもながら急に出てくるのは心臓に悪いからやめてほしい。本当に瞬間移動を使っているのではないかと感じるほどだ。
　ハンティが微妙な表情でそんなことを考えていると、シャロンが微笑のままで、
「メイド長は将棋のルールをご存知なのですか？」
「ええ。将棋の一つも指せないでメイドは名乗れませんから」
「……なるほど。では、ルールの説明をお願いしてもいいですか？
それと、今度私達にも指導をお願いします」
「畏まりました。時間を見つけてお教えいたしましょう」
　メイドってなんだっけ。そう思うような会話だったが、もはや突っ込む気力すら沸かない。というか最近のゲームじゃないのか。なんで城に籠もってるはずのメイド長さんが知ってるんだ。

その間にもメイド長さんは皆にルールの説明を行う。駒の動き、将棋盤のマス目の読み方などを概ね――皆が理解し終えると、
「では、レオンハルト様。先手は差し上げます」
「……随分と余裕だな。まあいい。こちらも、その自信の程を見させて貰おう」
二人の対局が始まる。その間の解説はメイド長さんが行い、
「初手、７六歩。――まずは順当に角道を空けましたね」
「これにはどういう意味が？」
ケッセルリンクが尋ねる。メイド長も答え、
「将棋の初手、というのは様々ですが、オーソドックスなのは斜めにどこまでも移動出来る〝角〟の道を開ける７六歩。もしくは縦横に移動が出来る飛車先を伸ばす２六歩となります。もっとも、自分の戦法によっては変わりますが、例えば――」
説明していると、今度はバルカが次の一手を指した。間を置いた説明はその手を見てから続き、
「バルカ様が指したこの５二飛。これは振り飛車が用いることのある初手ですね。振る場所によって４筋か３筋かなどの違いはありますが、これは敵陣中央を突破する中飛車戦法と言います」
「……あー、なるほど。相手の玉が真ん中にいるのもあって使えそうだな」
ガルティアの言葉を聞いてメイド長さんが頷く。
「はい。中飛車は中々に突破力に優れた戦法です。しかし……最初に宣言するなら対策はありますし、そもそも用いられる初手は５四歩など、先に歩を突くのが一般的ですが……よほど自分の棋力に自信があるのでしょうね」
……なるほど、分からん。
ハンティは分かるような分からないような話を聞いて、とりあえず何となく眺めることにした。見たほうが早い。
するとメイド長さんの解説がありながらも、どんどんとお互いに指していき、
「王が片方に寄っていきますね」

「囲いを作るためでしょう。バルカ様は先程、穴熊を用いると宣言しましたので、隅で王を囲うつもりでしょうね。対するレオンハルト様は……まだ居玉となっています」
シャロンの問いに答える。すると続いてケッセルリンクが、
「玉がそのままの場所に残っているな……やはり、良くないのか？」
「……そうですね。一般的に、居玉は防御面ではあまり堅さはありませんし……中飛車相手ですので、どちらかに囲った方が良いかとも思いますが……穴熊は将棋界では最強の囲いとされていますし……」
「……」
しかしレオンハルトは、その声が聞こえているはずだが、何も言わないし、表情も変えない。対局中に答えることはないだろうが、形勢を理解しているのだろうか。ただ盤面をじっと見つめている。
皆が見守る中、しかし、同じ様に盤面をじっと見つめている者がいた。それは、
「……あっ」
「キャロル様？　どうか致しましたか？」
キャロルが不意に声を上げたのを見てメイド長さんが声を掛けたが、これは何か質問があるのではないかという意味であった。
しかしキャロルは少し考え、頷いた後、
「……これ、後、数手でレオンハルト様が勝ちますわ」
「……え？」
突然そんなことを言い出す。いや、レオンハルトを第一に考えるキャロルとしては珍しくないが。
そのせいか、僅かに違和感を感じたものの、特に発言は気にされない。対局しているバルカも、後数手で相手の勝ちだとあり得ないことを言っていたので特に気に留めることはなかった。
だが、
「……1二香。次で王様が1一に入り、2二に銀が上がって閉める。そして金が寄れば、穴熊の完成ですね」
「……」
バルカが僅かに口元を上げる。まだ序盤とはいえ、穴熊に組めるの

だから気分的には良いものだ。
しかし、レオンハルトの表情は変わらない。１二香、と穴熊の手順が進んでも顔色を変えることも、迷うこともなく次の一手を指す。
「２五桂……。角を取りにいく手ですが、これは次で逃げられ――」
しかし、その一手を指し、解説をしている途中――言葉が止まる。
「？　メイド長？」
ハンティが訝しげに名を呼ぶも答えない。代わりにキャロルが、
「……終わりましたわ」
小声でそんなことを言った。
終わった、とはどういう意味なのか。それを考える時間は充分にあった。
「……」
何故かここで、バルカの手が止まった。角を逃がすと思われた手を、指すことが出来ない。頭の中で思考を重ねているのだろう。
しかし、バルカは不意に、どんどんと顔を青くさせる。
「……っ」
悩んだ末に角は３三から５一に逃げた。だが、
「……」
レオンハルトは迷うことなく次の一手を指した。４五歩。４四の歩に当たったが、これを、
「……これを取ることは出来ませんわ」
「キャロル？」
「ん？　……あー、そうか。なるほどな」
「おじ様のこの手は……」
「ふむ、確かにこれは……」
次々に得心する様な声が聞こえる。手の意味に気づいたのだろう。ハンティが気づいたのはこの場では一番最後だった。
「……あっ」
それはレオンハルトの３三の角。そこはバルカがの王がいる斜めの位を睨んでおり、４四の歩がどくと王が取られる――自殺手になってしまうため、レオンハルトの４五の歩が取れない。

結果、悩んだ末に、
「くっ……」
「7三角……」
7三角と角を別の場所に移動させる。
レオンハルトは悩むことなく歩を4四に進ませ、バルカの歩を取った。
その時点で、バルカは悔しそうに身体を震えさせながらも4四の歩を5三の銀で取り返しつつ、しばらくは指したが、
「……負けました……！」
そこから少し手が進んだところで投了。
駒の損得、形勢。全てが素人目にも分かるほどにレオンハルトの有利だった。
「……バルカ様が香車を上がり、ご主人様の桂馬が跳ねた時点でバルカ様の敗着でしたね」
「……勝ったか」
メイド長さんがそう評し、レオンハルトが息を入れる。するとバルカはぶつぶつと呟き始め、
「……今の、今の新手……！　いったいどうやって思いついたのですか!?」
「……あ？」
バルカの問いにレオンハルトが首を傾げる。しかしバルカの熱は止まらず、
「今の穴熊破り……！　私の定石には存在しない新戦術……！　将棋界を激震させかねないあんな手を、レオンハルト様は思いついたと言うのですか!?」
「……何を言ってる。あれは……――」
その説明を口にしようとしたところで、レオンハルトの動きが止まる。
皆が訝しげに視線を向ける中、何故かレオンハルトはそこで目を逸らし、
「……いや、今のはだな……」

「勿体付けるおつもりですか!?」
「いや、そうじゃなくてだな……そう。今のはそうだ。人から教えてもらったんだ」
教えてもらったとレオンハルトは言う。レオンハルトが考えたわけではないのだと。
するとバルカは、
「誰が!? 一体誰が思いついたのですか!? その人……人間ですか!? 出来ればその人間を私の元に連れて頂きたい！ 弟子にして貰いますとも！」
「い、いや……それは……」
レオンハルトが困ったように表情を引き攣らせる。どうやら事情があるように見えるが、よほど会わせたくないのだろうか。
だがまあ、魔物と関わらせるのを喜ぶはずもないか、と思っていると、
「……それは、残念だから無理でな。何故なら――」
と、レオンハルトは一瞬間を置いて、緊迫した表情になると恐る恐るとその理由を口にした。
「その人物とは……人じゃない。将棋星に住む将棋星人だからだ……！」
「……!? 将棋星人……!?」
一体何なんだそれは、とバルカだけではなく他の皆も同じ思いを得る。するとレオンハルトは汗を流しながら説明を続けた。
「将棋星人とは将棋を指すことに特化した恐ろしい生物でな……その将棋星では将棋に負けると地獄のような苦しみを味わいながら次々と奈落に落ちていく……らしい……」
「そんな恐ろしい場所が……」
……こいつら馬鹿なの？
どう考えても嘘に聞こえるが、バルカは信じているように見える。こっちの頭がおかしいのだろうか、とハンティは半目になる。同じ様に疑っているシャロンは、しかし笑顔で、
「……おじ様はどこでいつ、その将棋星人と出会ったのですか？」

追求をした。レオンハルトは僅かに怯みながら
「……その昔にだな……一人で歩いている時に空から落ちてきたんだ」
「……では、その将棋星人はどんな見た目をしていたのですか？」
またしてもレオンハルトが一瞬止まる。そして、
「……見た目は眼鏡を掛けた中年くらいの男だ。その男も、別の人から今のシステムを教えてもらったらしい」
「……名前は？」
「は……は、ハニュー九九世」
「……王族？」
シャロンが真顔でそう言うと、レオンハルトは頷いた。
「そう、将棋星には七つの国で分けられており、そこの王の座は一年に一度、全て将棋で決まる。将棋の強い者が正義であり、例え王の座に就いていた者でも、挑戦者に負けてしまうと王の座を剥奪されてしまう弱肉強食の世界なんだ……」
ごくり、とバルカが喉を鳴らす。真に受けるな。絶対嘘だから。しかしハンティのそんな心の声は届かず、
「……では、そのハニュー九九世とは……？」
「ああ。ハニュー九九世は将棋の魔王とも呼ばれた男であり、将棋星にある７つの国全てで９９回も王の座を取り、永世七冠という偉大な称号を得た凄まじい男だ……」
「そ、それほどの存在が実在するとは……」
多分、実在しないと思う。どんな無茶苦茶な奴だ。たかが将棋とはいえ、そんな化け物がいるはずがないだろう、とハンティは馬鹿馬鹿しいと切って捨てる。
「そしてその男は、次は百回目に挑戦すると言っていた……ゆえにこの星に来ることは出来ないとも……」
「……くっ！　何ということだ！　留まってくれてさえいれば如何なる手段を持ってしても弟子入りを志願したものを……！」
多分、そのハニュー九九世さんもこんな馬鹿でかい魔物が弟子入りに来たらビビると思う。

レオンハルトは、残念そうに肩を落とすバルカを慰めるように肩を叩くと、
「ああ、だから諦めるしかない」
何とか纏めたと一息ついたのだろう。レオンハルトが明らかにホッとしたような表情を見せている。
そして話題を変えようとするように、
「……それよりキャロル！　先程、あの戦法に直ぐに気づいていたが、よく分かったな!?」
「え？　……あ、そうですわね。何故か不思議と盤面を見た時に頭に思い浮かびましたわ」
話題を振られ、キャロルが自分でもよく分からないと言うように首を傾げる。確かに不思議ではあったが、
「ひょっとしたらお前には才能があるかも知れん。どうだ？　俺やバルカと一局指してみないか？」
レオンハルトはそうやって将棋にキャロルを誘う。するとキャロルは嬉しそうにしながらも、
「本当ですの!?　それは光栄ですが、きっとレオンハルト様には勝てませんわ！」
「ははは、やってみなければ分からないだろう。なぁ、バルカ？」
「む……そうですな！　キャロル様！　ハニュー先生に少しでも近づくために、今は実戦と研究を積もうと思いますので、良ければ一局どうですかな!?」
「……それじゃあ頑張りますわー！」
そうして妙にテンションが高くなった三人は、将棋を指し始めた。仕事の話は？　と言いたくなったが、タイミングを逃してしまったため、休憩はまだまだ続く。メイド長さんがお茶を淹れ、談笑しながら皆がそれを見守った。

――だが、

「……勝てない」

「負け、ました……」
一時間後。そこにいたのは二人の敗北者だった。
勝利者は一人だけ、将棋初心者のはずのキャロルだった。
「また勝ってしまいましたわ……」
自分でもバツが悪そうにするキャロル。どれだけやってもレオンハルトとバルカはキャロルに勝てなかった。
「この俺が負けるだと……くっ、もう一回だキャロル！　とっておきの戦法を見せてやる……！」
「わ、分かりましたの」
レオンハルトが闘志に燃えながら将棋盤を挟んでキャロルと向かい合う。――何度も。
「鬼殺し！」
「6二金で対策出来ますわ」
「パックマン戦法！」
「取らないで歩を突けばただの四間飛車ですわ」
「新鬼殺し！」
「角交換しなきゃいいだけの話ですわ」
「もう普通に矢倉！」
「普通に勝ちますわ」
何度やっても――キャロルに勝つことは出来ない。
しかも、やればやるほど、
「……ああ、こうすると面白い形になりますわね」
やればやるほど、キャロルが成長した。
最初は何とか拮抗していたレオンハルトとバルカだが、一時間も経てばキャロルの方が圧勝するようになっており、
「……負けました」
「ありがとうございますの。わたくしも、だんだんと将棋が分かってきましたわ！」
もう何度目かになる敗着に、レオンハルトが頭を抱える。
何故こんなにもキャロルは強いのかと。
チェスはそこまで強くなかったはずだが、不思議と将棋はアホみた

いに強い。
次はどうするかとレオンハルトが頭を悩ませていると、ふとキャロルはレオンハルトに尋ねた。
「あ、そういえばレオンハルト様。ちょっと聞きたいことがありますの」
「……ん、何だ？」
キャロルは何気ない様子で質問する。それは、
「――レオンハルト様、どうして先程から奇襲戦法ばかりお使いになりますの？」
「！　……それは……」
レオンハルトが固まる。嫌なところを突かれたと。
だがキャロルは純粋に疑問を感じているようで、悪気なくそれを尋ねる。
「奇襲ばかりだと受け方を知られて一度か、精々数回くらいしか通用しませんわ。それに、普段から正面対決を望むレオンハルト様らしくないな、と思ってしまい……」
「……っ！」
レオンハルトは頭を殴りつけられたような感覚を得た。
王道。正面対決を望んでいる自分が、将棋では奇襲戦法ばかりを好んで使う。
レオンハルトも無自覚であったが、それに気づき――そして同時にそのことを知られてしまい、凄まじい羞恥と衝撃が彼を襲った。
「何か考えがあるのかと思うのですが、わたくしでは思い当たらず……使徒として、主の考えを察せないのを恥じ入るばかりですの。それで、レオンハルトの考えを理解するために、申し訳ないのですが教えて頂けると……」
「ぐっ……」
その言葉に、レオンハルトの心は折れた。
純粋な言葉が一番効く。それを身をもって体感したレオンハルトは、すくっと立ち上がる。キャロルはそんなレオンハルトを見て、しかし楽しそうに、

「ですが、将棋って面白いですわね！　良ければ後でもっとやりたいですわ！　また面白そうな手を思いつきましたの！」
「ヒィッ……!?」
しかもまだ将棋でこちらをボコろうとしてくる。バルカが悲鳴にも似た声を上げて、後退った。
そしてレオンハルトは、小声で、
「……ねぇ」
「え、何て言いましたの。レオンハルト様？」
レオンハルトは大きな声で宣言した。
「――しばらく将棋はやらん!!」
「――えっ!?　何でですの!?」
ガーン、とキャロルがショックを受ける。
「……」
そんな二人を見て、ハンティは窓の外から差し込む夕焼けの日差しを浴びながら、深く息を吐くと、微笑を浮かべ、しかし解せない気持ちを感じながら、とうとう思っていたことを口に出した。
「……いや、早く仕事しよ……？」
賑やかすぎて仕事が進まなかった一日だった。

ケイブリスの成長

多くの魔物、そして魔人が住む魔物界。
その中心である魔王城に、一体の魔人がいた。
「……あー……面倒くせぇ……何度も何度も呼び出しやがってよぉ……」
悪態を、誰も聞こえない程度の小声でつくのは、異形の姿をした魔人。
彼の名は魔人ケイブリス。リスの魔人であり、４千年近くを生きる最古の魔人。ある意味で有名な魔人である。
そんな彼は現在、命令を受けて魔王城にやって来たところであった。住処にしている洞穴から態々ここまでそれなりの時間を掛けてやって来たのである。
とはいえケイブリスも今や立派な魔人。その程度でへばりはしない。少し前までは魔王城の一室に住んでいたが、身体がでかくなったことと、強くなったことで住処を魔王城の外に移したのだ。無敵結界が存在することと、今ならそこらの魔物には負けないだろうという考えもあったが、それよりも魔王城にいる方が、自分よりも上位の存在と多く遭遇するので魔王城から離れたかったというのが大きな理由である。
しかしそれはいいが、離れたら離れたで招集の度に長い距離を歩いてやってこなければならないからそれはそれで面倒だと思うわけである。とはいえ命令を無視したり、断ったりすれば自分の身が危険。最悪死ぬこともあり得るのでそういうことは絶対にやらない。
ケイブリスは臆病な魔人であり、自分にちょっとでも危険があると考えれば直ぐにあらゆる手段を用いて生き残ろうとする魔人である。強者に媚びへつらうのは当たり前。弱くては死んでしまうかもしれないから毎日毎日身体の改造を施したり、ひたすらに鍛えているという努力家な一面もあるが、一方で自分より弱い者には傲慢さを隠そうとせず、横暴に振る舞う性格の悪さも持ち合わせているし、必要とあらばギリギリの部分で野心を成すために行動を起こすこともある。

大剣ウスパーとサスパーを腰に差して歩くケイブリスは、魔王城の廊下を周囲を警戒しながら歩いていた。魔王のお膝元である魔王城とはいえ、どんな危険があるかは分からない。たまに厄介な魔人が喧嘩していたりするのだ。

……まぁ、今の俺様ならタイマンなら勝てるかもな。ぐぁはぁはぁはぁ！

それだけ強くなったという自負がケイブリスにはあった。腕も増やしたし、身体も大きく強くなった。今の自分を見て、最弱の魔人であったなどと、人によっては信じないだろう。

だが、

……とはいえ、油断は禁物だぜ俺様……一対一で勝てるかもっても確実じゃねぇし、そもそもタイマンだという保証はねぇからな……。

だからこそ、喧嘩などには巻き込まれたくない。一対一で勝てる可能性は出来ても、そうとは限らないし、二対一とかであれば高い確率で負ける。そして死ぬ。細心の注意を払わなければ弱肉強食の魔物界で生き残り続けるのは難しいのだ。

ゆえにケイブリスは周囲に気を払う。するとやはり、

「ハーハッハッハッ！」

廊下で馬鹿笑いが響く。その聞き覚えのある声にケイブリスは廊下の角で立ち止まった。

……面倒な奴がいやがる……！

ケイブリスはそーっと廊下の角から顔だけを出してその先を覗く。身体が大きくなり、強くなってもやってることは昔とあまり変わっていなかった。

この魔王城であんな馬鹿騒ぎをするような奴は一人しかいない。そう思って覗いてみるとやはり奴がいた。

「今日も酒が美味いわい！　ハーハッハッハッ！」

「やれやれ……またこんな場所で酒盛りなんて馬鹿なことするよね」

「そう言いながらあんただって楽しんでるじゃない！」

全裸の使徒二人と酒盛りしてる鬼の魔人――レキシントン。

ケイブリスが苦手な魔人がそこにいた。
……こんなとこで酒盛りとか何考えてやがんだ!?　馬鹿か!?　馬鹿なのか!?
言うまでもなくここは天下の魔王城。魔王ナイチサの居城であり、いつこの場に魔王が現れてもおかしくないのである。そんな死地で酒を飲むなどあり得ないはずである。
なのでケイブリスは心の中でレキシントンとその使徒を馬鹿認定した。ついでに言うとバレて死んでくれればなお良い。本当は自分自身で殺してしまいたいが、
……レキシントンか……強くなった俺様なら多分勝てる……が、多分じゃリスクが高え。関わらないのが頭の良い選択ってやつだ。
魔人の中でも上位の実力を持つレキシントンと態々諍いを起こす必要はない。ゆえに別の道を行こうと踵を返す。すると、
「あ、ここにいたのか」
「!?　は、はい！　何でしょ――って、テメェか」
不意に声を掛けられたことで丁寧に対応しようとしたところで、その姿を見て即、対応を雑にするケイブリス。
振り向いた先にいたのは不健康そうな肌の色をした人間の少年。
手元で何かの機械的なものを操作しているのは魔人パイアール。人間の魔人であり、科学力に優れているらしいが、ケイブリスよりは格下。ゆえにケイブリスは恐れることはない。
そのパイアールはケイブリスを見て僅かに目を細めるも、軽く息を入れ、
「……久し振りに会ったけど……相変わらずみたいだね、ケイブリス」
「あぁん？　何だパイアールテメェ。この俺様に文句でもあんのか？」
「……別にそういうわけじゃないけど」
目を逸らして億劫そうに答えるパイアール。チンピラのようなケイブリスの対応だが、格下相手だとこの対応は普通であり、良くも悪くもない。
格下への対応はムカつく相手には露骨に牙を見せるが、そこまでで

もない――危険性が少なくてどうでもいいような相手であれば機嫌よく応じることもある。
パイアールに対してはどうでもいいのだが得体の知れない相手という評価だ。いつも引きこもって研究をしているらしいので別に自分をイジメてたこともなければ関わったこともそんなにない。とりあえず舐められないように強気な態度を見せているが、暴力を行う気配もない。どうにも魔王から重宝されていたりするし、そんなことをすれば自分が危ない可能性だってある。
ゆえにケイブリスにとって普通の対応をしたわけだが、パイアールは特に縮こまるわけではないが、目を逸らしたままその用件を告げた。
「……レオンハルトが探してたから一応声を掛けただけだよ」
「――！　お、おう。そうか……レオンハルト様が呼んでたか……なら、さっさと行かねぇとな……」
しかし、その名を告げられた瞬間、今度はケイブリスの対応が大人しくなる。
魔人レオンハルト。魔人筆頭兼魔軍参謀。最強の魔人であり、魔王の信頼も高い――ケイブリスが魔王以外で最も恐れる相手だ。
自分は強くなったという自負があるも、まだ魔人四天王やそれより上位のレオンハルトには敵わない。そんな魔人の名を出されてはケイブリスも慎重となり、格下相手でも露骨に態度を軟化させるのだ。
まあ、彼が魔人になった頃にかなり媚びたのもあって色々と利用出来るのだが、それでも怒らせた者がどうなるかをケイブリスは知っている。
――そして同時に、パイアールはそのケイブリスの怯えを感じ取っていた。
パイアール自身もレオンハルトに用事があって会ってきたばかりなのだが、自分の研究の時間が削られるので面倒だな、という思いがあった。
しかし上位者の命令には粛々と対応する。魔人になって数百年ほどの年月を過ごしたパイアールも、この魔物界での生き方、効率的な

立ち回り方というのを理解していた。
魔人は自由。何をしても問題ない。人間の国にあるような倫理観だとか社会的にどうかだとかつまらない問題はない。研究が自由に出来るのは良い環境だとは思った。魔人になったことで魔物達は自分を恐れるのもあって干渉も少ない。
だが唯一のルールこそが魔王、そして上位者の意向だ。厳密には魔王の命令以外は逆らっても構わないが、面倒を引き起こす可能性がある。弱者ならともかく、自分を害する強者の相手は面倒を通り越して危険だ。
その点、ケイブリスの生き方には理解は出来る。もっとも、面倒な相手には違いないのだが。
高圧的に接してくるケイブリスに、パイアールはちょっとした意趣返しを思いついた。嘘でもないし、ある意味で親切だ。効率的でもある。ゆえにパイアールはケイブリスにこう言う。
「……そうした方がいいよ。これが原因じゃないだろうけど、ちょっとピリピリしてたからね、レオンハルト」
「な、何ぃっ!?」
「じゃあね、確かに伝えたよ。……はぁ、早く帰って続きを――」
そう言ってパイアールはその場から去っていく。残されたケイブリスも、少ししてその場から早足で目的地に向かった。
……くそっ、早く行かねぇと……！　ダラダラし過ぎたか……!?
ピリピリしてると言うが、まさか怒ってるのだろうか。もしそうならヤバい。早く行かなければならない。いきなり殺されるようなことはないと思うが、心象が悪くなるのはいただけない。機嫌を損ねてはならないのだ。
着いたら、開口一番に遅くなったと頭を下げよう。ケイブリスにプライドはない。いや、あるにはあるのだが、自分の命に比べればゴミクズのようなものだ。比べられるものではない。自身の安全に繋がることなら地べたに頭を擦り付けるくらいわけないのだ。
――そうして、しばらく。廊下を駆けたケイブリスは、レオンハルトの執務室のあるフロアまで辿り着いた。

途中、魔人やら使徒にも遭遇したが、格下ばかりだったので無視した。どうでもいい連中に慮る余裕はないのである。昔、こちらを虐めてきた数体の魔人が嫌な顔をしていたが、やっぱムカつくのであいつらはいつかぶっ殺す。そう心に留めて、廊下の角を曲がろうとすると、声が聞こえてきた。

……何とか間に合ったか……？

と、前に進み出ようとした時――会話の内容が聞こえてきて思わずケイブリスは立ち止まった。

「ふん……！　気に入らんな……！」

その声は、ケイブリスが懸想する魔人の美しい声。

……か、かかかカミーラさん!?

プラチナドラゴンの魔人であるカミーラ。魔人四天王の一角。格が違う美貌の持ち主である女王は、何故か苛立った声で殺気立っていた。

そしてまた声が聞こえる。今度も美しい声だった。

「客観的に物事を見てはどうかね？　君のはただの主観。しかも感情的なものでしかない」

……今度は、け、ケッセルリンクか……!?

カラーの魔人であるケッセルリンク。こちらも魔人四天王であり、とてつもない美貌の持ち主だ。

しかしカミーラと同じく、言葉や表面上は冷静なようだが、少し殺気立っているようにも感じる。どうやら口論になっているようだ。

美女二人がその場にいる。男であればちょっと声を掛けてみたいと思うことは何の不思議でもないが、この例で、その意見に賛同してくれる者は魔物界どころか大陸を見渡してもゼロに等しいだろう。

美人だからこそ、怒った時は恐ろしい。それは見た目もそうだが、氷の様に凍てつく殺気を感じれば分かるし、何よりこの二人の場合は物理的に危険だ。

下手な男が下心を持って近づけば、死もあり得る。人間の男など腕の一振りで一秒と掛からずに殺せる二人だ。一人でもそうなのだから、二人だとミンチになるだろう。

魔物や魔人とて例外ではない。二人しかいない魔人四天王。この場に割って入れるのは怖いもの知らずかつ馬鹿なレキシントンか、彼女たちよりも上位の存在くらいだ。ケイブリスでは、とてもではないが割って入る勇気はない。怒りが収まるのを待つのみである。

……ぐ、う～～～……レオンハルトの部屋に行かねぇとならねえってのに、何でよりによってその部屋の前で……！

しかしもっと怒らせると怖い者が、ケイブリスを待っている。それがレオンハルトだ。

レオンハルト一人と、カミーラとケッセルリンクの二人。どっちの方が安全か、そんな究極の選択がケイブリスの中でせめぎ合う。

だが、その答えを出すより早く、新たな声が聞こえた。それは、

「……二人共、あまり熱くなりすぎるなよ？」

……！　レオンハルトもいたのか……!?

その声はやはり、ケイブリスを呼び出した張本人であるレオンハルトのものだ。二人の争いに割って入ることの出来る数少ない人物。

考えてみれば部屋の前で騒がれたら気づくに決まっている。レオンハルトがいるのは自然なことだろう。

だが、その様子は何だかおかしい。長年の経験から培われた気配を消す技術を用い、音を殺して遠くからその会話を盗み聞く。すると、

「……元はといえば、お前のせいだろう」

「……それはそうだが……」

カミーラにそう指摘され、レオンハルトもやんわりとそれを肯定する。ケッセルリンクも追従し、

「……私はレオンハルトを信じている。思うところがないと言えば嘘になるが、それでも、その選択を支持したいと思う」

「ケッセルリンク……」

どうやらケッセルリンクの方はレオンハルトを信じるらしい。何の話か全然分からないが。

カミーラはそれを聞いて、ふっ、と小馬鹿にするように笑うと、

「レオンハルト……自分の意見も持たない小娘より、私の言うことの方が正しいに決まってるだろう……？」

「……む……」
その発言にレオンハルトは困った様に唸る。
しかし今度はケッセルリンクが僅かに眉を立て、
「そういうわけではない。私では判断しかねるということだ」
「同じ事だ……レオンハルト。経験の薄いこの女より、私の方が良かろう……？」
「……私とて、そちらには劣るがそれなりの経験を積んできたと自負しているが」
「私に負けているのだから意味はない」
「それはカミーラ。君の主観でしかない。私にも権利があると思うのだがね？」
「……ふん、私の品位まで落ちてしまうな……」
「……」
二人の口論はだんだんとヒートアップしていく。その間にいるレオンハルトは、二人を見て何か考えるように顎に手を当てていた。
……はっ！　まさか……。
この状況。ケイブリスの頭の中にはある一つの答えが導き出された。
レオンハルトを挟んで喧嘩する二人。お互いがお互いを邪険にしており、自分の方が良いと主張する。――やはりアレしかない。
ケイブリスがそう考えていると、続くカミーラがやはりと言うべきか口を開き、
「あんなのを選ぶ気がしれんな……」
レオンハルトとケッセルリンクを見てそう口にした。やはり、
……ま、間違いねぇーーーっ!?　か、かかかカミーラさんとけ、ケッセルリンクが、レオンハルトを取り合ってやがる……!?
そういうことだろう。男を挟んで女二人が喧嘩する原因の筆頭だ。会話の内容を聞いてもどうにもそれっぽい。経験がどうとか、言ってるし、ケッセルリンクはレオンハルトを信じたくて、カミーラの方はあんな女を選ぶなんて気が知れんと、
……くそっ、なんて羨ましい――じゃねえ！　ふざけやがって……レ

オンハルトの奴……！

ケイブリスの愛しのカミーラ。噂ではレオンハルトと仲が良いと聞いてはいたが、あの噂は事実だったのか。ケッセルリンクだけじゃなく、カミーラまでその毒牙にかけるとは恐ろしや魔人筆頭。

魔人きっての美女二人を侍らすなど許されることではない。必ずやあの邪智暴虐の魔人からカミーラさんを奪い返さねばならないとケイブリスは心に誓った。――その内強くなったら。

だが、妙なところで納得があるのも悔しいが事実だった。

……ぐぐぐ、くそーーー！　確かに、レオンハルトは強ぇし、カッコいいかもしれねぇがよぉ……！

頭の中でカミーラとレオンハルトが並んで、結婚式を挙げているところを想像してしまう。釣り合っているように見えるのが腹立たしかった。

……ま、まだそうと決まったわけじゃねぇ……！　もう少し会話を……。

ケイブリスはその場で悶ていたが、それをぐっと堪えて続きを盗み聞く。するとやっぱり、

「――そうなると、私の時の様に皆の前で披露目することになるのか？」

「ああ、そうなるな。ナイチサ様にも話は通してある」

「……私は参加したくないが……」

……皆の前でお披露目!?　――結婚式かっ!?

頭の中で純白のドレスを着たカミーラと、黒のタキシードを着たレオンハルトが馬鹿でかいケーキの前で並んでいる。まさかのナイチサが壇上で挨拶を行っているが、そんな大々的にやる気かと。

……つーか、私の時の様にって、ケッセルリンクはもうやったのか……？　僕、知らなかったんですけど……。

まさか自分にだけ伝わってないという悲しい事実をケイブリスは認識する。いや、別に参加したいわけではないが、明らかに仲間外れにされてると思うと何とも言えない。

だが、まだだ。まだそうと決まったわけではない。一縷の望みに賭

けて、ケイブリスは続く会話を耳にする。
「……そもそも、新しく作らなくてもいいだろう……」
「ナイチサ様がそう命令してきたんだ。仕方ないだろう」
……作るぅぅぅ!?　え、まさか……こ、子供っ!?
頭の中でプラチナブロンドの髪と赤い目を持った男の子と、金髪で黄金の瞳をした女の子を連れているエプロンを着たカミーラと、それをコーヒー片手に見ているレオンハルトの姿が浮かぶ。あの二人の子供とか滅茶苦茶美形な上に馬鹿みたいに強そうだ。
というかエプロン着用のママさんカミーラも良い。子供になりたいくらいだ。
……ぐへへ、カミーラママぁ――って、そうじゃねぇ！　子供を作るなんてそんなこたぁ許されねぇのよ！
そんな妄想をケイブリスがしていたが、途中で頭を振って我に帰る。あやうく、変な扉を開けてしまうところだった。
しかし、まだ、そうと決まったわけではない――と思うが、これはもう決まったのではないかとも思う。
そしてもしそうだった場合止める手段はない。雑魚なら男を脅すなりぶっ殺すなりして終わりだが、相手はあのレオンハルト。どちらも効くはずがない。返り討ちにされて終いだろう。
このまま二人は結婚して、自分はそれを眺めるのみ。そんな屈辱の未来を幻視するが、
……くそくそくそっ！　何か手はねぇのか!?
今の時点で出来るような手段だ。物理的に奪うことは不可能だし、逆らうことも難しい。強くなってから奪い返しにいくといっても最低で後千年くらいは掛かるだろう。我慢して待つことは得意ではあるが、果たしてそれでいいのか。
「……なら、カミーラも納得したところで俺は部屋に戻るぞ。そろそろ――」
と、レオンハルトが二人との話を切り上げて部屋に戻ろうとした瞬間、
「……あ、ああ、ど、どうもー！」

ケイブリスは、廊下の角から出て、三人の前に姿を現した。
「ん、ケイブリスか……」
「……ふむ」
「……ふん」
三人の上位者の視線がケイブリスに集まる。その時点で、ケイブリスは自分の行動に驚愕した。
……な、何やってんだ俺様ーーー!? 自殺願望でもあんのかよっ!?
自分で自分にツッコミを入れる。思わず出ていってしまったが、どう考えても悪手だ。
それに何だ今の挨拶。中途半端にフレンドリーな感じを出している。明らかに滑ってる。レオンハルトはともかく、他二人の視線が冷たい気がする。ケイブリスはその空間の重圧に怯えていると、
「……貴様、聞いていたな?」
「は、はひっ!?」
不意にカミーラから話掛けられる――が、とんでもない冷たい視線と圧力とともにだ。聞いていたか、などと問われたが明らかに先程のことだろう。聞いていたかいないかでいえば聞いているが、それをバカ正直に言っていいものか。
だからといって嘘をついてもヤバい気がする。ケイブリスが自身の命の掛かった選択肢に悩んでいると、カミーラはふと何かを思いついたように、
「……ちょうどいい。聞いていたなら話は分かるだろう……?」
「……へ?」
カミーラは突然、そんなことを口にする。レオンハルトとケッセルリンクにも告げるように、
「ケイブリス……貴様が決めるがいい……相応しいか、相応しくないかをな……」
「……え」
衝撃の発言に頭が完全に固まる。だがその間にもレオンハルトとケッセルリンクは考え込み、
「……まぁ、いいだろう。参考までに聞くが、ケイブリス自身はどう思

う？」
「……確かに、聞く必要はある、か……」
「え、え……えっ？」
レオンハルトにまで問いかけられ、ケイブリスは困惑する。内心では、
……え？　俺がレオンハルトに、か、かかカミーラさんが相応しいか相応しくないかを決めるのか？　……そりゃあ……。
それは当然、相応しくないと答えたい。答えたいが、その後にレオンハルトがどう思うかを考えると、
……な、何だこの質問⁉　どっちを選んでも地獄じゃねぇか！　ふざけんな！　何やってやがるよ数分前の俺様⁉
改めて自分の行動を悔いるが、ここまで来ては逃げられない。
「さあ……どうした……？　早く答えろ……」
「は、は……」
カミーラからも早く答えろと急かされる。その顔は、答えなければ許さないと言外に語っており、逃げればどうなるかを如実に語っている。
究極の選択を迫られ、ケイブリスのストレスがピークに達しようとした時――しかし、あることに気がつく。
それは、
……あ？　つーか……か、かかかカミーラさんは、どうして俺にそんなことを聞くんだ……？
ふと、そんな疑問が頭に浮かぶ。レオンハルトと結婚したいなら、そんな質問を格下である自分に聞く必要はない。勝手にしてしまえばいいのだ。先程までは言い争っていたケッセルリンクも何故か納得しているし、障害は何もない。だというのに、再び障害を――言い訳を作ろうとしているかのような行動。
……！　まさか……！
再び、ケイブリスの身体に電流が走る。そう考えれば辻褄が合う。
まさかとは思うが、
……か、かかカミーラさん……本当は結婚なんてしたくないのか

……？

だから断るための口実を作ろうとしているかと思い立つ。一応、他の魔人からの反対があればレオンハルトも諦めるだろうと。

それが意味するのは、レオンハルトが無理矢理カミーラに迫ったということ。そして責任を取らせようとはしたものの、やっぱり、そこまで縛られたくはないと思ったのかもしれない。

カミーラは城に美少年を飼っているし、結婚なんてすれば自由を奪われるかもしれない。

それについてはレオンハルトも同じで、お互いに縛られる必要もないと、態々結婚するまでもないと思ったのやも。普通に付き合って子供を作るだけでもいいという考えか。もしくは、それすらも嫌なのか。その真意は分からない。

だが、

……もしそうなら……一応相応しくないと言っとくか……？

レオンハルトが怖い気もするが、レオンハルトの方も同じ質問を重ねてきているし、参考までにとも言っている。レオンハルトの方も迷っているのかもしれない。

ならば相応しくないと言っても怒る可能性は低い。レオンハルトは魔人の中で一番偉いというのに、カミーラに気を使っていたりするし、案外素直に引き下がるかもしれないのだ。

ならば、とケイブリスは覚悟を決めた。

それでもケイブリスにとっては一世一代の大勝負。彼にとって、少しでもリスクのある危ない橋を渡るのはとてつもなく珍しいことだ。

これも愛ゆえにかもしれない。ケイブリスはゆっくりと口を開き、

「……そ、そのー……ふ、相応しい、か、相応しくないかでいうと……ふ――」

言葉が止まる。やはりかなりキツい。

しかしそこでカミーラは睨むように眼を細め、

「どうした……？　早くその先を答えろ……」

「っ！」

問い詰められる。やはり答えるしかない。

ケイブリスは、珍しく天に祈った。普段から神など微塵も頼りにしていないが、もはやそれ以外に縋れるものがなくなってしまったのである。

……もうどうにでもなりやがれっ！　こんちくしょーーー!!

ケイブリスは再び腹を決めた。今度ははっきりと、

「……ふ、相応しく……ないかもしれません……」

答えるとカミーラはニヤリと笑う。反対に、レオンハルトは驚いたように目を見開いた。

後者の反応にケイブリスはまずい、とフォローを入れる。

「あっ！　ちょ、ちょっとだけ！　ちょっとだけですよ？　ちょびっとだけ、相応しくないかなーという意見もあるかもしれなくて……僕としては喜ばしいことだと思いますけど、やっぱり、まだちょっと早いかなーって、へ、へへ」

「……」

「……」

「……」

その発言に、三人は無言となった。

そして今度はカミーラが微妙に訝しむような目を向け、レオンハルトは何か頷くような納得した表情。ケッセルリンクはじっとこちらを観察していた。

……な、何だこの感じ……俺様、まさか間違えたか……？

次の瞬間、ミンチにされる可能性もある。そう思ってケイブリスは震えて誰かが発言するのを待った。

ケイブリスが再び祈る中、最初に発言したのはカミーラだった。

「ふん……。だ、そうだが？」

言って、レオンハルトらを見る。不服そうな表情だ。

レオンハルトは頷き、

「……ああ、ならばその意見を参考にしよう。――二人共、相談に乗ってくれて感謝する」

「これも仕事の内だ。感謝する必要はない」

「……私はもう行く……」

レオンハルトが二人に礼を言うと、カミーラは不機嫌そうにその場から去っていった。
「では、私も先に戻る。レオンハルトはケイブリスと話があるのだろう？」
「ああ、そうしてくれ。後で結果を伝える」
「うむ。……ではな」
そしてケッセルリンクも、レオンハルトに声を掛けてその場から立ち去っていってしまった。何故か去り際にケイブリスの方をちらっと見たが、どういう意味なのかとケイブリスは疑問符を頭に浮かばせる。
「……さて、ケイブリス」
「は、はいっ！　何でしょうレオンハルト様！　僕、何でもやりますよ！　――あっ、後、遅くなってごめんなさい！」
二人になると、レオンハルトがケイブリスに鋭い視線をぶつけてきたのでケイブリスは開口一番へりくだり、遅くなったことを謝罪する。先程の発言に怒ってるかもしれないのだ。地べたに額を擦りつけても足りないかもしれない。徹底的に媚びる。
「れ、レオンハルト様！　そういえば僕！　レオンハルト様にプレゼントがあるんですっ！　きょ、巨乳の美女とか、レアな剣とか……あ、今はちょっと置いてきてしまって持ってないんですけど、後で必ず渡します！　後、何か欲しいものがあれば揃えてきますよ！　ぼ、僕っ、レオンハルト様の子分ですので……！」
これ以上ないほどに媚びへつらう。用意などしてないが、もうこの場を切り抜けるにはこれしかない。帰ったらダッシュで掻き集めるしかない。どうせ寝れないし、不眠不休で集めてきてやろうと。
しかしレオンハルトは、そこで僅かに微笑を浮かべ、
「……ふっ、まあそれは今はいい。それより、呼び出しの件だが――」
「っ！　あ、そうでしたね……このケイブリスに何の御用でしょう？」
何を言われるのか、とケイブリスは身構える。どうやら怒ってはいないようだが、それならそれで用件が想像つかない。食事でもするか、とか、迷宮探索の誘いだろうか。

だが用件はそのどちらでもなかった。レオンハルトはこちらを見て、感心したような顔つきで言う。
「……本当なら、お前の魔人四天王就任が内定したことを知らせようと思ったのだが……どうやらその必要はないようだな」
「……はい？」
何かよく解らない単語が聞こえて思わず聞き返してしまう。
「……え、何に……えっ？　ま、魔人四天王と言いましたか？」
レオンハルトは頷く。だが、
「ああ。ナイチサ様からの命令でな。魔人四天王の席に誰かしらを着かせようと現四天王であるカミーラとケッセルリンク、そして俺とで協議していたんだが……お前を推薦したところでカミーラが先程の様に猛反対してな……」
「……えっ……あ」
ケイブリスはそこでようやく、事の真相に辿り着く。
先程の会話の内容。相応しいとか相応しくないとか。その意味を理解する。
経験（魔人四天王の）。お披露目（魔人四天王就任の）。新しく作る（魔人四天王）。
……主語を言えよ馬鹿っ!!　つうかちょいちょいおかしいだろ!?
ケイブリスはようやく自分が盛大な勘違いをしていたことに気づく。先程の会話は、レオンハルトが相談し、カミーラが反対、ケッセルリンクがレオンハルトの推薦を支持していたということだ。
盛大な独り相撲を取っていたことに気づいたケイブリスだが、気が抜けそうになったところで、自分にとって更に重要な事実に気がつく。
……俺様が魔人四天王――って、いや待て。俺様、さっきなんて言った？
魔人四天王になれるという一つの目標。上級魔人の中でも最高位の集団の仲間入りを達成しかけたことに気づき、喜びが湧き上がる直前で――今度は自分の発言に気づく。
先程の発言とその流れ。それを鑑みると。

ケイブリスの嫌な予感が的中する様に、レオンハルトは感心するような表情でケイブリスを見て告げた。
「こう言っては何だが……自分から力が足りないと断るとは思っていなかった。……見直したぞ」
「……あ、あの、それは――」
ケイブリスは小声で訂正しようとするが、それより先に、
「お前がそう言うなら仕方ない。推薦は取り消すとしよう。しばらくは保留にしておくが……自分で納得がいく強さになったのなら俺に伝えてくれ」
「……は、はい……」
何故か評価が上がってることと、勘違いしていたこともあり、今更そうじゃないと言えないケイブリス。用件はそれだけだ、というレオンハルトだが、最後にケイブリスに向かって、
「……そうだな。良かったら今度、俺の修行場に付いてくるか？　かなり鍛えられるぞ？」
「……はい。その……お願いします……」
ケイブリスはその申し出を受けた。それもこれも、
……ちくしょーーー!!　どいつもこいつも紛らわしい事しやがって！　今に見てろ！　直ぐに！　直ぐに強くなって魔人四天王になってやるからなぁあああ!?
ケイブリスは憤りを心の中で吐き出すように、そう叫んだ。

そして後日――しばらくレオンハルトの修行に付き合ったケイブリスは地獄を見ながらも必死に耐え抜いてレベルを上げ、再び四天王の推薦を申し出ると――とうとう魔人四天王に就任した。
カミーラを始めとした多くの魔人は嫌な顔をしたが、ケイブリスは喜んだ。しかしよくよく考えるとあれほどカミーラが反対していたことに気がつき、〝もしかして俺様、嫌われてるんじゃ……〟と、ケイブリスは自分の住居で一人、落ち込んだ。

使徒加奈代

大陸東の浮島――ＪＡＰＡＮ。
地震や妖怪、鬼、騒乱が絶えないこの土地に、一人の可愛らしい少女がいました。
少女は武家――大陸で言う貴族の家柄に生まれ、両親や家に仕える武士達にも可愛がられ、とても大切に育てられました。
そんな周囲の事を少女は大切に思っていましたが、特に尊敬していたのが少女の姉でした。
多くの災異に悩まされ、人の住むに適さない土地だと大陸へと移住する者が増えているＪＡＰＡＮ。更には長らくＪＡＰＡＮの盟主であった藤原家が滅亡し、多くの問題が噴出する中、少女の姉はこんなときだからこそ、皆で力を合わせてお国の為、民の為に頑張らねば、と周囲を叱咤激励し、自らも努力を欠かすことなく精力的に活動していました。
眉目秀麗、知勇兼備。あらゆる事に秀でて、何事にも手を抜かないその優秀さと抜かりのなさ。加えて、厳しいだけではなく優しさまで兼ね備える少女の姉。
少女はそんな姉の事が大好きで、とても尊敬していました。
少女の姉も、妹である少女の事を大層可愛がっており、姉妹仲はとても良好でした。
そうして幸せな生活が続くある日。一つの契機が訪れました。
――姉に婚約者が出来たのです。
ＪＡＰＡＮでは盟主である藤原家が倒れた影響で、どこの大名も自分の家と領地、勢力を発展させる動きが強く、少女達の家も、他の家と同じ様に自分達の勢力を拡大させようと動いていました。
全ては、ＪＡＰＡＮの次なる盟主――帝となるため。
婚約者を作ったのもそんな目的のための活動の一つ。家同士の結びつきを強め、強大な力を持つ他家に対して優位を作るため、婚約は成立したのでした。
早い話が政略結婚。大陸でもＪＡＰＡＮでも支配階級の家にとっ

ては珍しくない事例であり、恋心を持たずともそれを押し殺して家の為に有利な結婚をするのが当たり前の考え、当然のことでした。

しかし、姉と婚約者の仲は悪くありませんでした。

特に姉の方が婚約者に惚れているようで、婚約者が出来てからの姉はよく婚約者の男のことを話し、家に連れてくることも多々ありました。

少女は婚約者に夢中な姉を見て、少し寂しく思いましたがこれも姉の幸せ。受け入れて祝福してあげることにしました。幸いにも婚約者はとても良い人であり、少女にもとても親切にしてくれました。

だけど、少女はその頃から少し違和感を感じていました。

婚約者が、露骨にこちらを構っているような気がするのです。

時が経ち、少女はさすがに気づきました。――姉の婚約者は、自分に惚れているのだと。

さすがにちょっと引きました。嬉しい気持ちもゼロではありませんが、彼に恋愛感情はありませんし、何よりも彼は姉の婚約者。正直困るのでやめてほしい。姉に悪いし、諦めてほしいと思いました。

しかしこちらがいくら避けても、向こうは何度もさり気ない――つもりでこちらにアピールしてきます。正直、少女から見るとバレバレでしたが、本人は隠しているつもりだったのでしょう。

そして案の定と言うべきか、姉もそのことに気づき始めました。

その頃から姉の少女への態度は露骨に悪くなっていました。いや、気持ちは分かるのですが、悪いのはどちらかと言うと、婚約者がいるというのにその妹に勝手に惚れてきた男の方です。尊敬する姉でしたが、正直、男と話し合って勝手に解決してください、と思いました。

しかし感情的に許せないと思うのも人として解らなくもありません。だから少女はしばらく、二人と距離を置くことにしました。

適当な理由を付けて親戚の家に厄介になることにしました。その間、男がやってきても適当な理由を付けて会わずにいようと思いました。

今は少し気持ちを落ち着かせるべきです。男も、しばらくすればそれが如何に馬鹿な事かに気づき、諦めることだろうと。

姉も、しばらくすれば嫉妬の火が消えるだろうと。
自分がいては争いの火種になってしまう。ほとぼりが冷めた頃に戻って、また仲良くしようと思いました。
そうしてまたしばらく、少女が親戚の家での生活に慣れ始めたある日のこと。
久し振りに、姉からの手紙が送られてきました。
――もしかして、解決したのかな？
そうだったらいいなと、少女は僅かに期待しながら手紙に目を通しました。
手紙には、〝久し振りに会いたい。○○の屋敷まで来て欲しい〟――と、書かれていました。
何で○○の屋敷なんだろう、少女はそう思いました。
しかし、事態を収集するために自ら離れたとはいえ、少女は寂しさを抱えていました。なので久し振りに姉と会えるという喜びから深くは考えず、本家とは別にある屋敷に向かいました。
嬉しさを滲ませながら屋敷に着いた少女。
しかし何故か出迎えも何も来ません。普通なら、使用人か誰かが迎えるはずです。
中に誰かいないのかと、少女は屋敷に足を踏み入れて中を調べました。
そして少女がある一室に足を踏み入れた時――驚くべきものを目にしました。
そこにあったのは――屋敷にいた者達の死体。
血溜まりとなった畳の上で、多くの死体が積み重なっていました。
武家の娘として、こういう光景にも耐性があったはずの少女も、これには卒倒。
驚き、何がどうなっているかと混乱し、しばらくへたり込んでいると、外から音が聞こえました。
少女がその音に振り向くと――そこにいたのは尊敬する姉の姿。
背後に何名かの武士を連れて現れた姉の姿に、少女は期待しました。

何事かは分からないが、きっと姉がこの事件を解決してくれるのだと。
そう思い、正気に戻ろうとしたところで――姉はこちらを見て声を上げました。
心配して名前を呼んでくれるのかと思いました。
ですが、
――〝この娘が犯人よ！　捕らえなさい！〟
――え？
その言葉を、少女は最初理解出来ませんでした。
だが、困惑する中、武士達は姉の命令を受けて少女の身を縄で縛り始めます。
ようやく事態を飲み込み、犯人だと疑われていることに気づいた少女は、冤罪を主張します。
しかし武士達も、姉もその言葉を取り合うことなく、少女は牢屋へと入れられました。
牢屋に入って数日経つ頃には、何となく何が起こったのかも掴めてきました。
ですが信じられません。自身の推理があっても、それが正しいと認めたくありません。
だから少女は、信じて待ち続けました。
そのかいあってか、またしばらくして、牢屋に一人、姉がやってきました。
番兵も、お付きも誰もいません。
檻越しに二人きりとなった少女と姉。少女は姉を見上げ、姉は少女を見下げます。
そうして姉はいつもの優しい笑顔のまま、牢屋へと、少女の耳元に顔を近づけ、こう言いました。
――〝貴方が悪いのよ〟
――〝貴方が、あの人をたぶらかすから〟
――〝私の為に、死んで〟
姉の口元は、酷く歪んでいました。

少女は気づきました。
何ということでしょう。姉は、婚約者への嫉妬から、少女を亡き者にしようと企んだのです。
屋敷に来いと綴った手紙は嫉妬に狂った女の罠。少女は罠に嵌められたのです。
そこまで分かったところで、少女は自分の無実を訴えましたが、それらは全て無駄に終わりました。
姉は周囲に強く信頼されており、姉が嘘をついているとは誰も思いません。手紙もいつの間にか処分されており、証拠に繋がるものは全て闇に葬られるか、既に渡りを付けられていました。
少女の言い分は全て嘘と判断され、少女に惚れていた姉の婚約者も、凄惨な事件を起こした少女を恐れて離れていきました。
少女は死刑が決定し、暗く冷たい檻の中で長い時を過ごしました。
実際にはそれほどの時は流れていないかもしれません。ですが、尊敬する姉に裏切られたことと、死を待つ身になったことで、少女の精神は酷く衰弱していました。
そんな時、暗闇に一筋の光が差しました。
とうとう死刑が執行されるのか。そう思った少女でしたが、顔を上げると、そこにいたのは――麗しき美貌を持つお姉さま。
『――大丈夫かね？』
無実の罪で鎖に繋がれた私。気遣うように人ではない魔のお方は声を掛けてくれました。
少女は思いました。〝何て美しい方だろう〟と。
少女はその魔人――ケッセルリンクに助けられ、彼女に恩を返すことにしました。
恩を返す必要はないと、ケッセルリンク様は言います。しかし武家の娘として、受けた恩は必ず返すのが武士道というもの。
私はそれを強く訴え――ケッセルリンク様の使徒になりました。麗しいお姉さまの使徒になり、幸せに暮らしはじめ、同じ使徒の先輩方である可愛らしい女の子たちと、毎日キャッキャウフフな百合色の生活を送っています。

姉と婚約者、そして姉の嘘を信じた周囲の人達には、〝バーカ！〟と言ってあげたいのと同時に、〝ありがとう！〟　とも言いたいです。

「――そんな愉快な感じで、私、加奈代はケッセルリンク様の使徒になったんですよ～うふふ」

「……」

そこはレオンハルト城の中庭。

いつもの様にお茶会を行い、新しくケッセルリンクの使徒になったという小柄で、黒の髪を編み込みにした少女――加奈代の話を聞き終えると、聞いていた者達は無言となった。

反応しないのもどうかと思った魔人レオンハルトは、どう切り出すべきかと悩みつつも、咳払いを一つし、腹を決めて思ったことを口にした。

「……何というかまぁ……よくそんなに平然と明るく話せるな」

「え？　だってもう過去の事ですし～……それにこれ、面白くないですか？　結構な笑い話だと思うんですけどー。はい、ケッセルリンク様。お茶が入りましたよー♪」

「……うむ」

しかし加奈代は気にした様子もなく、ケッセルリンクの前にカップを置いて微笑む。ケッセルリンクも微妙な表情をしているのが珍しい。

そんな中、相変わらず料理を口にし続けているガルティアが、

「ま、気にしてないんならいいんじゃねぇか？　自分の中で整理は付いてるんだろ」

「はい。私はもう吹っ切れてますので皆様方もお気になさらずで、お願いしますね？」

「……うふふ、加奈代は逞しいわね」

シャロンが微笑を浮かべて、加奈代を褒める。しかしレオンハルトとしては、逞しさで言うなら、シャロンも負けず劣らずで――

「……何ですか、おじ様？　何か言いたいことがあるならはっきりと仰った方がよろしいですよ？」

「……何も考えてない。吹っ切れたのなら良いことだと思っただけだ」
何故かシャロンが笑顔を向けてきたのでレオンハルトは誤魔化す。シャロンは少し間を置いて、
「……まぁ、今は加奈代の歓迎会も兼ねていますし、それで納得しておきますね？」
「……ああ」
今は、と言うからには後で追求されるのだろう。レオンハルトの頭の中には、この後どうやって迅速に逃走するか、もしくは追求から逃れる手段を何通り、何十通りと模索し始めるが、そのどれもが通じなさそうなので諦めた。現実逃避気味に紅茶を口に含むと、
「ふふふ、ここは可愛らしい女の子がいっぱいで目が幸せですー。やっぱり、レオンハルト様の趣味なんですか？」
不意に加奈代が話しかけてきた。
使徒になったばかりで、しかも初対面だというのに全く怯えることなくこちらに声を掛けてくるとか、自分で言うのも何だが、肝の座り方が尋常ではない。大体はちょっと怯えていて、こっちが気を使うことになるのだが。
加奈代の胆力に内心で驚きつつも、レオンハルトは軽く目を細めて返答しようとし、しかし加奈代の横から先に声が飛んだ。
「こら、加奈代。レオンハルト様に失礼でしょう？」
「えっ、そうですか？　気に障ったのなら申し訳ありませんけど……」
注意したのはケッセルリンクの使徒であるエルシールだ。晴れてケッセルリンクのとこのメイド長になった彼女は、初めての後輩の行動に目を光らせている。
そんなエルシールも、いきなりレオンハルトに向かって物怖じすることなく話しかける加奈代に驚いているようだ。エルシールは物凄く怯えていたのを思い出して微妙な気持ちになる。
……確かに、使徒が魔人に対して軽い口を利くのは、一般的にはやめておいたほうがいいだろう。
魔人の中にはプライドの高いものも多い。そのことで暴力を受け

る可能性だってないわけじゃないのだ。
だからこそ、レオンハルトは自分の使徒達に誰に対しても口の利き方には気をつけろと教えている。
だが、身内なら話は別だ。公の場であれば配慮する必要もあり得るが、そういう場ではない。ましてやプライベートであれば特に注意する必要もない。人と付き合う上での当たり前の礼儀さえ弁えていれば、突っ込んだ質問をしたり、軽く話しかけることも問題ないのだ。むしろ推奨したい。
ゆえにレオンハルトはカップを置いて告げた
「いや、構わん。ケッセルリンクの使徒であれば俺にとっても近しい存在に変わりない」
「わたくしにとっても後輩ですので、この先輩完璧使徒であるわたくしにいつでも頼るといいですわ！」
「可愛い後輩改め、頼れる先輩のペールちゃんもいますよう！」
キャロルとペールが加奈代を歓迎するように声を上げる。どうでもいいが、恥ずかしいのでこちらの背後でポーズを取るのはやめてほしい。こちらまで馬鹿だと思われそうだ。
加奈代はこちらを見て楽しそうに笑うと、
「はい。頼らせて頂きますね～ふふふ」
微妙に身体からハートが出てるようにも見えるが、それは気にしないでおこう。
微笑ましい光景だな、と感じた違和感から目を逸らしていると再度、質問が来た。
「それで、結局レオンハルト様の趣味なんですか？」
「……俺の趣味、か。……やはり、そう見えるのか？」
「はい。レオンハルト様のその辺りの趣味は、ＪＡＰＡＮでも有名でしたからね」
「……そうか……」
やっぱり知られているのか、とレオンハルトはいつもの如く若干気分が落ち込む。
しかし毎度の事なので立ち直るのも早い。気を取り直すと、今度は

こちらから、
「……どんな風に知られているんだ？」
「えっとですね～……ＪＡＰＡＮでは魔人と言えばレオンハルト様ってくらい知られてますよ？　あの藤原石丸を倒し、何十万もの人間を剣一本で斬り殺した恐ろしい魔人みたいな感じで」
「さすがはレオンハルト様ですわ！　名声が轟いていますのね！」
「……何十万は盛り過ぎだ」
　さすがにそんなには殺していない――と思う。正確に数えたわけじゃないが。ひょっとしたら十万に届いた可能性はゼロではないが、あの戦争の後半は部下の仕事を取らないように気を使ったし、いってないと思いたい。
　だがそれだけではないようだ。加奈代は続いて、
「そして、胸の大きな女の子が大好きなんですよね？」
「それは……」
　レオンハルトは言い淀む。だが加奈代は口を休めることなく、
「この城のメイド達も、皆可愛い上、殆どが大きい子でしたし～……やっぱりそういう趣味なんですよね？　制服も可愛いですが、谷間が開いてたりしてますしー。というか、剣王伝にも書いてましたよ？」
「またあの本か……」
　ペールの方を横目で見る。性懲りもなく続きを書いているらしいが、思うところもあり、やめろとは言い辛い複雑な活動だ。ペールは一瞬怯んだが、それよりも加奈代の方に笑顔で距離を詰めると、
「こんなところにも私の本の可愛らしいファンがいましたよう！」
「えっ、あの本ってペールさんが書いたんですか？」
　ペールは満面の笑みで頷く。
「はい。ちなみに、ここのメイド服のデザインも私ですよっ！」
「何でそんなに誇らしげなんだか……」
　コーヒーを飲みながらジト目をペールに向けるハンティ。最近はよくコーヒーを飲んでいるみたいだが、研究が捗っているのだろうか。
　そんな発言も届くことなく、加奈代とペールは話を弾んでいるよう

で、
「いいなぁー私もたまに服を作ったりするんですけど、私も新しいメイド服とか作ってみたいです」
「あ、私はデザインだけで、実際に作ったのはキャロル先輩ですよう。……でもまあ、アドバイスは出来ますし、作ってみたらどうですか？」
「えっ」
エルシールがその発言を聞いて固まる。加奈代は眼をキラキラさせ、
「……ケッセルリンク様！　私、この城のメイド服みたいに、可愛らしい服を着てご奉仕したいです！　作ってもいいですか!?」
「……構わないが」
「やったぁー♪　ふふふ、どんな服にしようかなぁ～？」
ケッセルリンクの許可を直ぐに取り付ける加奈代。それを見て、エルシールは嫌な予感を覚える。
この城のメイド服みたいに、ということは、妙にいやらしいエッチな感じになるのではないかと。
ガーターベルトを付けてたり、胸の部分を開けたり、直ぐに脱げるようになっていたり、様々な改造が施されているのだ。それと同じ様になる。それを、エルシールだけでなく、ケッセルリンクの使徒メイド達は想像する。
同じ様に、何名かもそれを想像し、
「……私だったら死ねるな。というか着させた奴を抹消する」
「……そ、そんなこと言ったら駄目ですよ？」
ボソリ、と恐ろしいことを言うガウガウに、パレロアが声を震わせながら注意する。おそらく、ガウガウは胸がないからだろう。とか言ったら抹消されるのだろうか。
だがパレロアも、微妙に不安を感じているのだろう。声が震えていた。そしてシャロンも、
「……おじ様？　何故、こちらを見ているんですか？」
「……いや、別に……」
レオンハルトは、自分のところのメイド服を着てるシャロンを想像

したが、何とも言えない気分になったので目を逸らす。
しかしそこまで嫌なのか、と思う。うちだと、かなり人気な上、普通に胸の小さい娘達も喜んで着ているようだから普通だと思っていた。
だがよく考えてみると、普通のメイド服に比べて肌色が多めなのは事実だった。魔物界ではもっと肌色が多かったり、それどころか全裸だったりする奴もいるので、あまり変に感じることはなかったが、これも感覚を破壊されているのだろう。
「う……もし、あんなのなら……」
しかしエルシールはまだ抵抗はあるようだ。シャロンなどは受け入れている節もあるが、彼女の場合はまだ羞恥があるのだろう。頭を悩ませている。
だが、
「――あんなの、というのは酷い口ぶりですね？」
「！　メイド長さん……！」
突然、横から声が飛んだ。メイド長さんだ。ハンティばりの瞬間移動で皆の前に現れたが、気にする者はいない。メイド長さんと料理長は、その職務の事であれば何をしでかしても驚きに値しないのだ。
そんなレオンハルト城のメイドを取り仕切る長であり、パーフェクトメイドとして城内だけでなく、女の子モンスターのメイドさん、ケッセルリンクの使徒達からも尊敬されているメイドの中のメイドであるメイド長さんは、エルシールに柔らかな口調で語りかける。
「メイド服は、我々メイドの魂の様なものです。メイド服なくしてはメイドとは呼べません。――まあ、私はメイド服が無かろうとメイドとなり得ますが」
「え、あ、その……ごめんなさい」
その勢いに、思わず謝ってしまうエルシール。
メイド長さんはいつもどおり微笑を浮かべているが、珍しく熱が入っている様子だった。やはりメイドの事となると譲れないのだろう。
「エルシール様。メイドであれば、あらゆる状況に適応し、対処するも

のです。例えメイド服が変わったとしても、貴方様の、主の為に仕えたいという奉仕の心は変わらない。――違いますか？」
「……違い、ません」
そしてメイド長さんは、同じメイド長であるエルシールにメイドの心得を教え込む。
「であれば、その程度で狼狽える必要はないはずですわ。可愛い新人が作ってくれたメイド服の一つや二つ、受け入れてみるのも良いのではないでしょうか」
「……そう、ですね……！」
――だが、これは何だか、メイド長さんも面白がって遊んでるだけな気もする。
メイド長さんはエルシールがメイド長になってからというもの、よく色んな事を教えているが、その内容が何とも言えないものばかりで、遊んでるのではないか、という疑惑が皆の中にあった。今も、
「では、今日もこの前の授業の続きです。宿題の詰将棋は終えてきましたか？」
「あ、はい……一応」
「はい、確かに。では今日は筋違い角戦法の定跡について勉強しましょう。特別講師に、魔物界将棋連盟会長のキャロル様に来て頂きました」
「あ、わたくしですの？　よく解りませんがやってやりますわ！」
「……これ、本当にメイドと関係あるんでしょうか……？」
――ない。明らかに騙されているエルシール。
そんな疑問を持ちながらも、何故か将棋の講義を受け始めたエルシールを放置し、加奈代はペールとデザインについて話し合っているようで、
「ふふ、加奈代ちゃんは話が分かりますねぇ。色々と仲良く出来そうですし、私のことはペールお姉さまと呼んでいいですよ？」
「ふふふ、はい、ペールお姉さま♪　私も、お姉さまとは仲良く出来る気がします。色々と語り合えそうで……」
「ふふふ♪」

「ふふふ♪」
「ひっ!? な、何……この悪寒……」
「……嫌なタッグだな……」
ハンティやガウガウなどが声を上げる。周囲の女性達を見てキラッと目を輝かせる加奈代とペールを見て、レオンハルトは眉間に皺を寄せた。
どちらも人を誂う癖があるので、意気投合したのだろう。確かに、性格的にも似てる気がしないでもない。
そんなこんなで、今日のお茶会は加奈代の紹介を無事に終えてお開きとなった。

だが後日、メイド服を完成させ、シャロン達に着させた後、加奈代はエルシールの質問を受けて、皆の前で衝撃の発言をした。
「やっぱり、ここは可愛らしい女の子ばかりでいいですねー」
「……そんなに女性が気になるの？」
「はい。だって私――女の子の方が好きですしー」
「……えっ」
「ふふふ、これから楽しくなりそうですねー♪」
「……えっ」
とんでもないカミングアウトを頭の上にハートを浮かばせながら発する加奈代。その小悪魔的な表情に、多くの女性が身の危険を感じて後退ったという。

カラー王国

――ＮＣ８ＸＸ年

大陸は未だ、動乱の時代にあった。

かつては人類を統一した藤原家は滅亡し、ＪＡＰＡＮではその後釜である帝の座を求めて各地の大名が兵を率いて争いあう群雄割拠の戦国時代に突入した。

大陸では大戦で魔軍の残した爪痕からの復興に力を入れる国が多数あったが、魔軍の定期的な侵攻は収まることなく、人類は魔物達に苦しめられている。しかしそれでも、人類国家の覇権争いは留まることを知らない。

幸いにも先の大戦を少ない被害で切り抜けた大陸南部の諸国は再び争いを始めた。

大陸東部では魔軍の侵攻により多くの国家が崩壊、幾つもの土地がいずれもの国家にも属さない空白地帯となっていたが、その土地の有力者達が寄り集まり、新興国家――オピロス国が誕生した。

だが、そのどれもが覇権国家には程遠い。

今現在、どの国が覇権国家かと聞かれれば、多くの人々はこう答えるだろう。

大陸中央部。森林地帯を中心に人類圏の北側全域を支配する亜人種の国家――〝カラー王国〟だろうと。

大陸の中心。世界の頂点。標高1万メートル以上の大地。

人類未踏、世界一の標高を誇る巨大な山――翔竜山。

多くの冒険者、登山家が挑戦し、その困難な道程に断念するその山は魔物以上に危険な種族――ドラゴンの住処である。

ドラゴン種は自分達の住処に入り込んできた異物に牙を剥く。この山に挑戦した人間が死亡する原因の一つであった。

しかしその凶暴なドラゴン達も、ある存在の前では牙を引っ込め逃げるように距離を取り、戦いを避ける。

あらゆる生き物の中で最も偉大で完璧な種族であるドラゴンは、強者の気配に敏感であり、戦いを好む種族であるが――その知能、本能も優秀だ。
既に彼らは知っている。アレは強さと誇りを示した者だと。
自分達が挑んでも一瞬で殺される。それで怖気付くような種族でもないが、アレ相手に戦う必要はない。
ゆえにドラゴン達は巣穴に閉じこもりながら、天空を見つめていた。時折、何かの衝撃で雲が割れるのを眺めながら、彼らはそれが過ぎ去るのをじっと待ち続けるのだ。
雲の上にある翔竜山山頂――そこは魔人レオンハルトの修行場の一つだった。
「……！」
彼の剣が衝撃波を発生させ、雲を断ち割る。かれこれ5時間以上、レオンハルトはこの場所で剣を振っていた。
今日は彼にとっての休日。普段であれば近場の山で済ませるが、休日は遠出して修行するのがレオンハルトにとってお決まりの行動だった。
というのも訳がある。彼は満足に剣を振れる修行場を求めた結果、ここにいるのだ。
世界最強の剣士であるレオンハルトの剣技。それを本気で振るえば、一種の災害となり得る。地は裂け、稲光が発生し、嵐が吹き荒れる。そんな剣技を近場や、ましてや城内、多くの人がいる場所で振るうわけにはいかないのである。
無論、手加減することも出来るし、周囲に影響が出ないように修行することも不可能というわけではないが、それでもたまには本気で剣を振らなければ修行にならないとレオンハルトは感じていた。
ゆえにレオンハルトは修行場を探し求めた。大陸北側の極寒の地や、海中なども修行場の一つであるのだが、レオンハルトが特に好む修行場が、この翔竜山の頂上だ。
他の場所も同様ではあるが、この場所なら生物どころか、障害物も何もない。精々、雲の形が変化する程度である。山に住むドラゴン達

は、こちらを避けて引きこもってくれているようなので、叩き落とす心配もない。
空気も薄く、他の場所程ではないが生きるのに困難な環境に身を置くことで生物としての本能を意識させるこの場所は修行にはもってこいの環境であった。自然の厳しさと雄大さを感じられるのも個人的には評価が高い。
そして何より、ここは雑念が入りにくい。思い出深い場所ではあるが、それもマイナスには繋がらないものだ。
ゆえに世界最強の剣士は、世界の頂きで剣を振り続ける。
この場所に人が訪れたことは一度もない。もしも誰かがこの場所を訪れ、自分がこの場に居合わせれば、〝試し〟を行うのも悪くないが、と。そういうことも考えもする。
そうして剣を振り続けていたが、レオンハルトは不意に剣を止めて、眼下に見える大地に視線を移した。
……下が騒がしいな。
久し振りにこの場所にやってきたが、どうにも最近はカラー勢力の動きが活発らしく、翔竜山麓の森が騒がしい。しばらくは別の場所を使ったほうがいいのかもしれない。
「……そろそろ戻るか」
ならば、とレオンハルトは早速山を降りて魔物界に帰ることにした。魔物界に面した北側の森から帰れば騒ぎも何もない。そういう意味でも、この場所は重宝する。
だが人の出入りが活発になるなら、幾ら気配を消していてもバレる可能性がある。バレても問題はないのだが、森に住む者達を一々不安にさせることもない。
ゆえにレオンハルトは魔剣を空間に収め、崖となった山の斜面から飛び降りていく。降りる時は落下するのが早い。以前ならともかく、無敵結界がある上、落下の衝撃くらいどうとでもなるのだ。緩和する手段だってある。それを用い、レオンハルトは山の階層を一つずつ飛び降りていった。帰ったら帰ったでやることもある。そっちの相手もしないとな、などと思っていると、

「――！」
突然、ドラゴンの咆哮が響き渡った。
山に木霊して聞こえるその声は、レオンハルトの耳にも届く。
……誰かいるのか？
ドラゴンが一匹で今のような咆哮を上げることはない。そこには何か、仲間内での喧嘩であるとか、何かしらの要因があるはずだ。
そしておそらくは――人だろう。
無謀な冒険者や登山家、という線が高い。ドラゴン同士の喧嘩であるなら二匹目の声も聞こえてこないのはおかしいからだ。
……どうしたものか。
普段であれば無視するのだが、偶然にも声は真下から聞こえた。このまま降りれば遭遇するだろう。避けていくことも出来るし、そのまま通り過ぎてもよいのだが、
……しょうがない。助けてやるか。
レオンハルトはそうすることを決めて徐ろに、眼下へ飛び降りる。仕事の時、魔人として行動する時であればともかく、プライベートでは一々見捨てる必要もない。助けることの出来る人間を眼の前で無視するほど薄情になったつもりはない。
もっとも、この行動が厄介事を引き込んだり、城に人が増える原因になりもするのだが……今回はおそらく、何の事情もないただの登山者。適当に麓まで連れていけば勝手に帰るだろう。仮にも中腹まで登ってきたのだ。それなりの実力はあるはず。
後は、助けるといっても斬り捨てるのはドラゴンにも悪いし、適当に威圧して引き下がってもらおう。もしくは、そのまま攫って逃走。人間だろうがドラゴンだろうが、無駄な血を流す気はレオンハルトにはなかった。
そう思い、落下中に下の階層が見えてきたところで、やはりと言うべきか赤いドラゴンと、人影が見えた。しかもそれは、
「あ、う……足、が……」
ドラゴンに攻撃されたのか、足を抑えて地面にへたり込む女がいる。水色の長い髪に、青い瞳。長い耳と、額に赤いクリスタルを持つ

美しい種族の名は、
……カラーか。
襲われていたのはカラーだった。山の麓にある森に住む種族。レオンハルトとも何かと縁のある亜人種だ。
カラーは時折、山に薬草を取りに来るらしいが、それにしてはこんな高い場所まで登ってきている。
登頂目的だろうか、とも思うも、どうもそういう風には見えない。何か事情のありそうな、幸が薄そうな気配を身に纏っている――などと落下中に観察してみたが、総評すると長年の勘から、厄介事の匂いがするのだ。
しかし、だからといってもう落下直前で助けるのをやめて横切るのも違うだろう。命の危機なのだ。
一応は助けてやろうと決心し、息を入れると、レオンハルトはその少女と、ドラゴンの間に降り立った。

翔竜山の上層には多くのドラゴンが生息し、山に侵入してくる者を襲うことがある。比較的標高が低い場所であればその限りではないが、山の中腹を越えてくるとドラゴンとの遭遇率は大幅に上昇する。
そんな例に漏れず、カラーの少女はドラゴンに襲われて足を怪我すると、自身の終わりを予感した。
だが、
「――その辺にしておけ」
「え……？」
「……ッ!?」
突然、少女とドラゴンの間に音もなく降り立った者がいた。
不意の乱入者。少女はその姿を見て呆然とし、ドラゴンも強者の到来に唸り声を上げる。
それは金髪灼眼の男。鋭い目を持った顔立ちの整った男だ。
そしてその存在感は、常軌を逸して高い。重さとも言える存在の圧がその場に充満する。

男は少女の方をチラリと横目で見た後、ドラゴンの方に視線を移動させ、こう言った。
「……この女はもう戦えん。俺が麓まで連れて行くから、引き下がってくれないか？」
「グ、グルル……」
「……直ぐに連れて行く。そして、背を見せたところで俺が剣を抜くこともない。安心しろ」
「……！」
怯えるような素振りを見せるドラゴンに対し、男は敵意はないとそう言うと、ドラゴンも不思議とそれを理解したかのように羽を広げ、上昇していく。逃げるようにして飛び去っていくドラゴンを眺め、男は呆然としている少女の方を向くと、
「さて……どうだ？　立てるか？」
「え、あ、その……」
少女は戸惑ったように男の顔を見上げて言葉にならない声を上げる。それを怯えていると取ったのか、それとも、別の意味で取ったのか。それは分からないが、男は屈んで少女の足の傷をざっと眺めると、
「無理そうか」
「あ、は……はい……」
ようやく肯定が帰ってきたところで、男は、そうか、と頷く。少しの間を置いて男はこう提案した。
「……しょうがない。麓の森まで連れて行くが、構わないな？」
「……それは……きゃっ!?」
しかし少女はその提案に顔を俯かせる。
やはり何か事情がありそうであったが、直ぐに連れて行くといった手前、立てない様子であったのを見て、男は少女を抱え上げる。
「う、う……」
だが麓の森に連れて行くことに躊躇われると困る。男が少女の返答を待ちながら内心で頭を悩ませていると、男に抱きかかえられて恥ずかしがっていた少女が不意に顔を上げ、男に向かって意を決したよ

うに声を掛けた。
「あ、あの！」
「ん、どうした？」
　何を言うつもりだ、と男が僅かに目を細める。すると少女は、窺いながらも確信した様子で、
「……魔人、ですよね……？」
「……ああ、そうだが？」
　やはり知られてるか、と男は驚かない。少女の方もやっぱり、と言った風に、
「魔人、レオンハルトさん……で、あ、合ってますか……？」
「……ああ、そうだ」
　名前を言い当てられるレオンハルト。やはり有名だな、と自分の知名度に微妙な気持ちを感じていると、
「あっ、す、すいません。わたしは……く、クライア・カラーと言います……助けてくれて、ありがとうございます」
「……ああ」
　名も名乗らずに色々と一方的に質問したことを詫びたのだろうか、律儀だな、という感想をクライアに抱き、レオンハルトは一先ず頷く。
　だがその次に、妙な問いが来た。それは、
「その……レオンハルトさんは、強いですか……？」
　――何だ、その質問は？
　レオンハルトが内心でそんな呟きを思い、返答に一瞬迷う。ここで、いいえ、と答えたらどうなるだろう。自分で言うのも何だが、魔人が強くないというのは無理がある気がするとも。
　ゆえに答えは決まりきっていた。レオンハルトは正直に思ったことを答える。
「……少なくとも、この山を踏破出来るくらいにはな」
「……なら」
　クライアはその答えを疑うこともなく、どこか縋るような表情でレオンハルトを見ると、
「……れ、レオンハルトさん……お、お願いがあります……！」

「……何だ？」
妙な厄介事の匂いを感じながらも、レオンハルトは先を促した。するとやはり、
「私はどうなっても構いません……その代わりに――」
カラーの少女、クライアは言う。自分はどうなっても良いから、
「……レガリア様を……私達の女王様を、止めてくれませんか……？」
「……」
レオンハルトは一世一代の決意の如く、こちらにお願いをしてきたクライアを見て、内心で染み染みと思う。
色々と言いたいことはあるが、
……前にも、こんなことがあったな……。
この手のお願いや相談は珍しいことじゃないが、休暇中に、しかもカラーからのものとなると以前の事を思い出す。
しかも人類圏から集めている情報から察するに、とてつもない厄介事に巻き込まれた気がして、レオンハルトは深く息を吐くと――とりあえず、彼女から事情を聞くことにしたのだった。

深い森の奥。そこにある都市は森に住む一族の伝統的な集落だった。
歴代女王が人間や魔物からこの森を守り、徐々に発展を遂げてきた一族の名はカラー。
美しい女性だけの種族であり、自然の中で生きる長命な亜人種である。
彼女たちの発展。歴代女王が次代へと託してきたその繁栄は、この時代に最盛期を迎えていた。
「あはは！　ほら早く早く！　お店しまっちゃうよー！」
「ちょっと待ってよー！」
「今日も森に異常はないみたいね」
「……帰ってきた？」
「来てない。多分、死んだかな。とにかく女王様に報告しましょう」

深い森の奥。そこにある都市は、今や大陸中央部を支配する覇権国家の首都。
――カラー王国。森に暮らすカラー達の理想郷が、そこにあった。
意図的に残された美しい自然と、その間に建てられた木や石の建物。街の中を自然の水路が通り、木漏れ日がそれらを照らす。子供たちが遊び回り、警備隊に所属するカラー達は見回りを行っている。
多くのカラーが生き生きと暮らすカラー王国。その中心には、豪奢な王宮があった。
親衛隊が警備を固め、自然の中で取れた宝石などの綺羅びやかな飾り付けや調度品が並ぶその王宮の奥。謁見の間に、カラーの黄金時代を築いた張本人はいた。
「……そう。ご苦労だったわね。後で褒美を上げましょう。――下がりなさい」
「はっ！」
玉座に座るのは、長大な杖に腰には剣。そして青いクリスタルがある額の上に王冠を被った、優しげな笑みを浮かべる一人のカラー。
彼女こそが、前女王から女王の座を受け継ぎ、カラー王国を建国し、覇権国家まで押し上げた初代女王――レガリア・カラー。
歴代女王と比べても高い実力と知能、高いカリスマを持つ女傑である。
周囲の者達にも優しく、気品溢れる仕草でカラー達からも羨望の眼差しで見られる女王は、報告に来た親衛隊の部下を下がらせると、柔らかい笑みを浮かべて近くにいた側近に告げる。
「……今の子、嘘ついてないわよね？」
「……どちらとも言えないかと。上層に登ったきりで帰ってきておらず、死体の確認はしていない様子ですので、嘘と言えば嘘ですが……確認が難しいのも事実です」
側近は淀みなく女王の質問に答える。既に調べてきたかの様に答える側近の言葉に、レガリアは薄い目を僅かに開き、意味深な声を上げた。
「……ふ～ん。それならいいわ。嘘ならお仕置きしようとも思ったけ

ど、裏切ってないなら、ちゃんと可愛い同胞よね、うふふ」
「……」
後で褒美を上げて、というレガリアの言葉に、側近は恭しく頭を下げる。この国で女王であるレガリアに逆らう者は存在しない。
同胞であるカラーに慈愛に満ちた表情を見せるレガリアは、ふと何かに気づいた様に目を見開いた。視線を下に下げて、彼女は再び微笑を浮かべる。
「……ね～え？　何で動いてるの？　私、動いていいって言った？」
「っ、ぁ……い、言ってま、せん……」
視線の先は、レガリアの真下。四つん這いになって彼女の椅子になっている人間の男の姿だった。
手と足を鎖で繋がれた男は、材質だけは綺麗な布に身を包み、息も絶え絶えになりながら責め苦に耐え続けていた。そんな男を見て、レガリアは微笑を向ける。手元に置いてあったナイフを取り出し、
「――喋っていいとも、言ってないわよねぇ？」
「っ、あぁあああああッ!?　がっ、あ……！」
ザクリ、と、ナイフを男の肩に突き刺す。
人間の男は痛みに悶絶し、床に倒れ込む中、それより早く立ち上がっていたレガリアは男を見下ろし、
「ね～ぇ？　何勝手に倒れ込んでるの？　せっかく顔が良いから椅子にしてあげてるのに……くす、また戻りたいの？」
冷たい笑みに変化し、その言葉を告げると、若い男は豹変した様に悲鳴を上げた。
「っ！　あ、あぁぁあ！　嫌だぁあああ……！　やめ、やめてくれ……！」
だがその言葉を聞いた瞬間、レガリアの表情から笑みが消える。
「……下等種族の猿が――」
無表情となったレガリアだが、その言葉とともに表情が一変する。
歯を噛み締め、怒りに満ちたその表情。内側から溢れ出る感情を、レガリアは隠すことなく男にぶつけた。
「偉大なるカラー種に……その女王の私に……誰がそんな口の利き方

をしろと言ったのですかねぇッ!?」
「あぐッ！」
　足を振り上げ、思い切り力を込めて、男の顔面を蹴飛ばすレガリア。短い苦悶の声を上げながら吹き飛ぶ男に、レガリアは近づいて更に追い打ちを掛ける。足を上げ、
「いいですかぁ!?　何度言っても分からない知能障害の猿くぅん!?　分からないのなら分かるまで身体に教えてあげますよぉ!?」
「ぁ！　う！　ぎっ！」
　レガリアは男を何度も踏みつけながら狂気に満ちた笑みで言う。何度も言ってる、彼女の思想を、
「貴方達人間はぁ……劣等種なんですよぉ!?　美しく、劣化しない容姿と能力！　人間を越える魔法力の高さ！　数だけは無駄にうじゃうじゃといる醜い人間が！　カラーに逆らうなんて、あってはならないことなんですよぉ!?」
「っ！　ぐ……た、すッ……！」
「貴方達はぁカラーの道具、奴隷なんですよぉ！　私達に使われるために生まれた種族なんです！　うふふ、とっても幸せですよねぇ？　偉大な私達に使われるんですから、とても光栄ですよねぇ？　魔物の餌になるのとどっちが幸せですかぁ？　――考えるまでもないですよねぇ？」
「っ……ぁ……」
「だと言うのにいつまで経ってもご主人様の言うことを聞けないなんて……うふふ、言うことを聞けないペットには躾けをしてあげないといけませんねぇ。どうしましょうか。魔法で身体の内側からじっくり焼いてみるのはどう？　時間が経つと臭うのが欠点ですけどねぇ。それとも、蟲蔵にまた一ヶ月ほど漬け込んであげましょうかぁ？　大丈夫ですよぉ。食事はたくさん与えますしねぇ。凍らせてから肉を千切るのもいいですよねぇ？　骨付きのチキンみたいに綺麗に肉が取れて面白いですし……よし、それにしましょうかぁ。ではさっそく――」
「……レガリア様」

「ん、なぁに？　あ、今の話は聞いていたわよね？　今から遊びに行きたいんだけど、構わないかしら？」
レガリアの楽しそうな問いに、側近は男を見て答える。無理だと。
「……いえ、それは難しいです」
「え、どうして？　急ぎの仕事はないでしょう？」
違う。そうではないと。何故なら、
「――その男、もう死んでいます」
「……あ」
謁見の間の床。レガリアの踏みつけを何度も受け続けた男は、全身の骨や臓器を損傷し、死に絶えていた。カラー王国の中でも最強と謳われる高レベルのレガリアの踏みつけを、ただの人間の男が耐えられるはずもなかったのだ。
もっとも、ここで死ねたのは幸運だったかもしれない。ここで生き延びれば、それ以上の苦痛を受けるはめになっていたのだ。
レガリアは死んだ男を見て我に返ると、つまらなそうに元の玉座に戻って呟いた。
「はぁ……それ、捨てといて」
「畏まりました。――誰か」
「はっ」
側近の言葉に即座に近づいてきた親衛隊のカラー達が、数分掛からず男の亡骸を片付ける。男がこの場にいた痕跡は、綺麗に隠滅されてしまった。
「また新しいの連れてきてね。今度は簡単に壊れない体格の良い子がいいわ」
「調教師に伝えておきます」
しかし、懲りずに新しい奴隷を補充しようとするレガリア。――これがこの王国の日常だった。
カラー王国では、人間は奴隷として扱われる。異常な程の種族主義者であるレガリアの政策の一つであり、人類圏の支配を企む野望の一端でもある。
カラーに対する慈しみに溢れ、優れた政策を施す一方で、人間には

何をしても許されるというのがレガリアが定めたこの国の法である。そして人間を匿ったり、優しく扱う様な同族にも厳しい罰を与えることでも有名であった。

だがレガリア・カラーが優秀なことに変わりはない。先代から地道に続けた政策や発展があったとはいえ、一代で大陸中央部を支配する王国を築き上げた手腕は伊達ではなく、彼女を崇拝し、その思想に賛同する親衛隊も入隊者が後を断たない。

元々、どちらかというと人間を見下したり、敬遠する傾向が強いカラーである。過去に人間種から攻められたこともあり、意外にもレガリアの思想は多くのカラーに受け入れられた。

中には人間への同情心からか、隠れて人間を逃したり優しくするカラーも現れたが――今は存在しないし、いたとしても表立ってそれを行うものは皆無である。違反した者は、秘密裏に、そして合法的に処分される。

例えば、深い海の底にいる怪物が持つお宝を手に入れてくれれば許してやるとか、翔竜山の山頂まで到達することが出来れば許してやるなど――あくまでも勝手にいなくなって死んだという風にする。もっとも、勘の良い民は気づいているが、それを言える者はやはり存在しない。

レガリアは個人としても優秀で、逆らう者には容赦をしないのだ。カラーのために国を導く熱意や同胞に対する優しさは本物だが、それ以外には実力行使を躊躇わない。

女王になった当初、人類圏を統一した藤原家の呼びかけを頑なに拒否したのも彼女だった。彼女に言わせれば、

「ちょっと強くて運が良いだけのボス猿に、我ら偉大なカラーが従うなんてありえませんよねぇ」

とのことである。

もっとも魔軍に対する脅威など、カラーにとっては知ったことではない、という事情もあるのだが。カラーにとって魔軍は、味方ではないが敵でもないのである。それを女王であるレガリアは、よく知っている。

「……偉大なる先祖のために。そして、私の〝野望〟のためにも早く人類を支配しないとねぇ……うふふふふ」

その目的を思い、レガリアは慈愛に満ちた笑みを浮かべた。

クライア・カラー

「――それで、おじ様はまた新しい女性を連れてきたと」
「……人聞きの悪い言い方をするな」
声が響いたのはレオンハルト城の中庭。食事やお茶会用に設けられたスペースだった。
椅子とテーブル。傘などが並び、少し離れた場所には調理用の鉄板が置かれた区画もある。軽く話を聞いた上で一度戻ってきたレオンハルトは、その厄介事を持ち込んできた張本人――クライア・カラーを席に着かせ、更に詳しい話を聞こうとした。
しかしそのクライアは先程からずっと戸惑っている様子で、
「さあさあ、いーっぱい食べていいですよーう？　ここには何でもありますからじゃんじゃんどうぞ！」
「え、あ、あの……ペール様……ですよね？　８００年前の女王様の……」
「そうですよー！　だからクライアちゃんは私の可愛い後輩になりますね？　だからもてなしてあげますよーう？」
「で、でも……」
ペールの歓迎ぶりに困惑し、周囲を見渡している。どうにも落ち着かない様子だ。だが、無理もないことだ。
魔物界、それも魔人の城に連れてこられたと思ったらカラーにとってのビッグネームが多数。それらに囲まれ、テーブルには所狭しと並べられた料理の数々。山に登ってからしばらくちゃんとした食事を取っていないとのことだったので食事を作らせたのだが、それを聞いた料理長が号泣しながらいつも以上に張り切って料理を作っている。中庭では鉄板を使ってペールが軽く料理しているが、どう考えてもクライア一人で食べる量じゃない。ガルティアが食べる様な量だ。これほどに歓迎されてはクライアも居心地が悪いだろう。だが、
「……まぁ、食べなよ。しばらくちゃんとした物、食べてないんでしょ？」
「っ、始祖様……その」

「ああ、いや、こっちには気を使わなくていいからさ、うん……始祖って言っても、今は使徒だし」
ハンティもクライアを気遣うように優しい声を掛ける。その横からも微笑を浮かべたケッセルリンクが、
「まずは心と身体を癒やすといい。話はそれからでも遅くはないだろう？」
「……そう、ですね。すみません。それじゃあ――」
皆の気遣いの甲斐があってか、クライアがようやくテーブルに並べられた食事に手を付けようとする。しかしその直前、いただきますと口にしようとしたクライアより前に、別の声が上から飛んだ。
「……しかし、カラーの集落がそのように変化しているとはな」
「ひっ……!?」
「えっ」
中庭の中心。巨大な顔をクライアに向けて声を飛ばしたライゼンは、突然怯えるような拒絶の動きを見せたクライアに、ライゼンが何故だ、と怯む。
レオンハルトが息を吐き、
「ライゼン……お前、何を怯えさせてる。お前みたいな馬鹿でかいドラゴンが急に喋ったら怖いに決まってるだろう」
「ぐ……！　貴様とて強大な力を持つ魔人ではないか！　俺に怯えるというなら貴様も――」
「うぅ……」
しかし大声を出したライゼンに対し、更に身を縮こませるクライア。それを見てレオンハルトは鼻で笑い、
「そら見たことか。女の扱いがなってない奴め。ドラゴンに襲われた直後なのだから少しは自重したらどうだ？」
「何だとレオンハルト貴様！　よし、いいだろう！　表に出ろ……！
今日こそ決着を――」
「はいはーい。そんなつまらないことで喧嘩しないでくださーい」
ペールが呆れた様なおざなりで、嗜める声を掛けると、直ぐにクライアに向かって、

「大丈夫ですよ、クライアちゃん。ライゼンさんは怖くないです。今はちょっとお腹を空かせてるだけで、普段は普通のドラゴンですよう？」
「……そうなんですか？」
「むっ……」
　クライアがライゼンを見上げるが、ライゼンからするとペールの言い方が多少気に入らない。何もしてないのに怯えられるのは困るが、全く恐れられてないというのもドラゴンの矜持的に受け入れられないのである。めんどくさい種族だ。
「ふん。確かに腹は空いているが……見くびるなよ？　俺は四大聖竜のライゼン。かつて世界を手中に収めた、偉大なドラゴン種の――」
「ほーら、特産Ａ５うし肉のレアステーキですよーう？　血が滴る肉汁たっぷりの焼き立てですよーう？」
「おおおおお!?　今日は宴か!?　そのような極上の品を用意するとは……！　早く寄越せ！　ハグッ！　ハフッ……！」
「ドラゴンはこうやってお肉を上げたら言うことを聞きますので、今度襲われたら試してみるといいですよ？」
「は、はい……そうだったんですね……」
「納得しちゃったよ……。この馬鹿ライゼン……！」
　ペールが焼いていた肉をライゼンに投げるように与えると、ライゼンは尻尾を動かしながら興奮して貪り食う。クライアが納得したのを見て、今度はハンティが苛ついていた。同じドラゴンとして恥ずかしいのか、イラッとするのだろう。
　そのままハンティがライゼンに雷撃を放つが、ライゼンが、〝なんだハンティ!?　この肉はやらんぞ!?〟　と言い出して殴られた辺りから、レオンハルトはそれを無視することにした。いつも通りの賑やかさだが、これに付き合っていてはいつまで経っても話が進まない。
「とりあえず、軽く食べろ。頼みについて、話をするためにもな」
「あ、はい……ありがとうございます」
　ようやく少し微笑を浮かべたクライア。そして食事を口にして驚く彼女を見て、レオンハルトやケッセルリンクらは微笑ましさを感じ

つつしばらく見守った。

クライアが食事を終え、ハンティがライゼンへの一方的な暴力をやめて戻ってくると、話は再開された。レオンハルトはそれをまとめるような一声を放つ。それは、

「――つまりそのレガリアを、魔人の力で以て失脚させてほしいと？」

「……はい。そういうことになります……」

と、こちらの問いを肯定したクライアだが、その声はどこか弱々しいものだ。

それはおそらく自分の選択に自信がないのか、もしくは単純に気が進まないのだろう。優しい少女なのだろうが、気になることもある。色んなことを確認するために、一度ここに連れてきたのだ。

ゆえに問う。まずは、

「……気が進まない様だが、お前は殺されかけたんだろう？　それについてはどう思う？」

殺されかけたのなら憎しみを覚えても不思議ではないし、魔人を使って復讐しようというのも考えられる話だ。

それに利己的な目的から、女王を害そうと企む可能性もある。

もっとも、そうは見えないが確認のため、レオンハルトはクライアとやり取りを交わした。クライアは表情を落ち込ませながらも、ゆっくりと、自分の言葉で話し始める。

「……見てられないんです」

「見てられない？」

はい、とクライアは思い返す様に言う。

「街では、どこも人間の奴隷が沢山いて……毎日酷い仕打ちを受けています」

「……ッ」

ハンティが僅かに表情を変化させたのを横目で感じ取る。クライアは続けて、

「人間に優しくすることは禁じられていて……でもわたしは、隠れて

人間を逃したり、ご飯を上げたりしていました」
「……」
ケッセルリンクはクライアの話を黙って聞いている。何か思うところがあるのだろう。
「それがレガリア様にバレて……わたしは、国から追放されました」
「……あんまりそういうことばかりやってると、不満が溜まって反乱とか起きそうですけどねー？」
ペールは淡々と疑問を呟く。感情ではなく国としての損益で考える辺りがかつてカラーの集落を発展させた長らしい発言だ。クライアはその疑問に顔を俯かせ、
「レガリア様は国で一番の戦士で敵う者は国にいません。少しでも反抗しようとした人は、直ぐに私の様に国から〝追放〟されてしまいました。……それに、レガリア様は頭も良くて、リーダーシップに優れていて……その手腕が、女王に相応しいと……今は少なくとも、表立って反抗しようとする人はいなくなりました」
「つまり、能力が優秀で、同族以外や裏切り者には容赦のない独裁者って感じですか。……面倒ですねー……そういう思想があって能力のある個人って執念深い上に何度説き伏せても譲らないしで……うっわ、唐突に昔の思い出が沢山出てきそう……」
ペールが心底面倒そうな顔で呆れるが、途中から何かを思い出したように嫌そうに頭を手で押さえた。為政者時代の思い出があるのだろう。
他の面々も口々に、
「権力者にとって、気に入らない人を消すのはとっても簡単ですからねー。お裁縫の方が難しいくらいですよ」
「人減らしか。ま、それで上手くいくんならいいけどな」
「権力者か……研究者の私にとっては、クレームの多いお客様って感じだったなぁ……」
「……」
加奈代が普段どおりの表情で。ガルティアは軽い様子で料理を口に運びながら感想を言う。

ガウガウなどは別の意味で昔に思いを馳せており、権力者談義の様になっているが、遠くでガルティアに料理を給仕しながら偶然話を聞いていたエクレアは微妙そうな表情だった。
だが、そんな中でも、
「……国はいずれ滅ぶものですが……周囲を顧みず、民を蔑ろにするような国は、長くは保たないでしょうね」
「……そうだな」
「ふむ……人の組織とは面倒なものだな……」
シャロンの言葉に、レオンハルトは同意する。権力者の汚い部分など、それこそ腐るほど見てきた。魔軍を動かす立場にもなり、綺麗事だけで渡れるほど甘くはないことも知っているが、それでもこちらの想像を超えるほど愚かで、欲望に溢れ、何かが起これば責任を取らず保身に走るような人間――権力者の殆どがそれだと知っている。
対してライゼンなどは、人の在り方を純粋にそういうものか、と得心している。完璧な種族であり、強者が上に立つ単純な社会構造を築いていたドラゴン種にとって、陰謀や策謀とは無縁とはいかないまでも、かなり少なかったはずだ。何かあれば、正面からぶつかっていくし、ぶつかることを厭わない。
……さて、どうするか……。
ある意味、この状況こそがクライアを連れて帰ってきた目的の一つだ、とレオンハルトは身内の何名かの様子を窺う。
正直言って、これが以前の様に、利己的な目的に己を利用するような輩であれば、迷うことなく突っ撥ねていた。
だが、そうではない。このクライアは、仲間のカラー達や、別種族である人間を憂いて行動を起こしている。
それに加えて、今回は、自分の件じゃない。ただの人間であれば助ける義理はないが――それが身内の元同族ともなるとレオンハルトも迷う。だからこの場に連れてきた。
仮に彼女たちが助けてほしいと願ったのなら、レオンハルトはその願いを叶えるために最善を尽くす。例えどんな方法を使ってもだ。
それだけの力が、レオンハルトにはある。単騎で国を落とすこと

も、その女王の首を落とすことも簡単だ。簡単だからこそ、考える。一度動けば、あっさりとそれを成せるのだ。取り返しがつかない可能性もある。
　ゆえにレオンハルトは、彼女達の答えを、もしくは考えを待った。待った末に、
「確かに、ちょっと前にカラー王国に行った時には、もう沢山の人間の奴隷がいたわ」
　そう口にしたのは、お菓子を食べている赤い髪の子供。その自然な口振りにレオンハルトは真顔で、
「……お前、いたのか」
「さっきからいたわ。お菓子を食べに来てたの」
「それは見れば分かる」
　あらそう、と特に何を思うでもなく再びお菓子に舌鼓を打ち始めたのは、聖女の子モンスターのベゼルアイだ。子供状態の彼女は、自然にこの会話に混ざってきていたが、
「……というかお前、前に行ってきたのか」
「ええ。ちょっと野暮用でね」
　あっけからんと言うが、亜人種とはいえ、人間の国に普通に出向いて大丈夫なのかと思う。レオンハルトは眼を細め、ベゼルアイに視線を向けると、
「……ちなみに、何の用だったんだ？」
「……カラー王国で最近流行ってる新しいお菓子が食べたくて……」
「……お前の頭の中は甘い物でも詰まってるのか？　いや、もうお前自体の味が甘くなってるのかもな……」
　甘い物のことばかり考え、甘い物ばかりを食べるベゼルアイに呆れ返る。だがベゼルアイは自分の手を眺め、
「……そういえば私ってどんな味がするのかしら……？」
「お、食べて確かめてやろうか？」
「む、肉か？　それなら俺も……」
「何の話だ。やめろ食いしん坊共」
　ベゼルアイの馬鹿な発言に、ガルティアやライゼンが乗っかってき

たのでツッコミを入れてやめさせる。やはり話が進まない。ベゼルアイは真顔で、
「冗談よ」
「……どこからどこまでがだ？」
「カラー王国に行こうとしたのは本当よ。ただ……入るなり追い返されて目的の物は食べれなかったわ……」
「……そうか……」
真顔のままガチ凹みしてるベゼルアイを半目で見る。やはり、こいつも異常者だな……。
などとレオンハルトが思っていると、
「あ、あの……最近流行ってるお菓子ですよね？　なら、私作れます」
「！」
クライアがおずおずと小さく手を挙げた。それに露骨に反応するベゼルアイ。彼女を見上げ、
「……それ、本当？」
「あ、はい。お菓子作りは得意で……あっ、でももう森には……」
「――どっちなの？」
ベゼルアイが問い詰める。微妙に迫力があって威圧してる様にも見えるが、単に食い意地を張ってるだけだ。
クライアは申し訳なさそうな様子で、
「ごめんなさい……カラーの森でしか取れない材料を使うので……私は追放されてしまったので、もう森には……」
「直ぐに女王様を倒してくるわ」
「こらこらこらこら」
大剣を片手に腕まくりをし始めたベゼルアイを即座に止める。
「何を急にやる気出してる。少し落ち着け」
「落ち着いてる場合じゃないわ。お菓――カラーの危機よ」
「お前の食い意地の危機なんて知るか。完全にお菓子目当てじゃねぇか……」
突っ込むことにもだんだんと疲れてくる。色々と気を回してるのが馬鹿みたいだ。

「あら、助けたくないの？　レオンハルト君が好きな巨乳の美少女のお願いなのに？」
「きょ、巨にゅっ――」
　ベゼルアイがそんなことを問うてきたおかげで、それを聞いたクライアが言葉を止めて赤くなる。頬を染めて恥ずかしそうに胸を押さえていたが、少しして何かを決心したように、
「……こ、こんなもので良いのなら……あ、あ、上げても構いませんけど……」
「……いや、それはだな……」
　こんなものじゃない――って、そうじゃない。そんなものを報酬に出されても困る。現に周囲からもジトッとした視線が、
「……おじ様？　やはり、それ目当てで連れてきたんですか？」
「うっわー。交換条件に付けるなんてえげつないなぁ……」
「いいなぁ……」
「……お前らちょっと黙れ。いつも言ってるが、そうじゃない」
　シャロンやガウガウからの視線から目を逸らしつつ無実を訴える。こう言うのもなんだが、全部偶然で向こうの方からやって来るのだ。自分から集めてるわけじゃない。
　そして加奈代のそれは、なんか違う。ただの百合百合しい羨望の眼差しだった。
「――あーもう！　あんたらうるさいっ！」
　そしてとうとう、ハンティが耐えきれず苛ついた様に声を上げた。そして続いて、
「もうウダウダ考えるのは面倒だし、会ってから考えることにする。というわけで、あたしは行くから」
「し、始祖様……」
　もう決めた、という風に腕を組み、ハンティが決断する。最近のハンティは、割りと行動派というか、直情的になっている気がした。
　続いてケッセルリンクもゆっくりと閉じていた目を開き、
「……そうだな。一度、この目で状況を見てからでも遅くはない」
「ケッセルリンク様も……」

ケッセルリンクらしい慎重な行動を決める。
だが続くペールは、
「えぇー……皆行くんですかぁ……？　まあ皆が行くなら行きますけど……何というか、話し合いで解決出来る気がしないんですよね……まあやるなら一応同族の事ですし、頑張りますけどー……」
「……ペール様……ありがとうございます」
何故か嫌そうだった。やはりと言うか、ハンティやケッセルリンクとは考え方が違うのだろう。気が進まない、というのが態度から現れている。
これで三人とも意志を示した。ならば、
「……なら、俺も動こう」
レオンハルトも重い腰を上げる。身内の為でもあるし、何より、
「最初に頼まれたのも、この件を持ち込んだのも俺だ。やると決めたのなら俺が誰よりも動くのがけじめだ」
「レオンハルトさん……」
立ち上がった４人を見て、クライアが嬉しそうに、そして申し訳なさそうに見上げてくる。
しかし、先に言っておかなければならないこともある。それは、
「魔人の力を借りるという意味を知って頼むのなら……その覚悟は出来ているんだろうな？」
「……っ」
レオンハルトは軽く圧を込めてクライアを射抜く。これは最初に言っておかなければならないことだ。
魔人の力で、女王を失脚させ、罪のないカラーを救う。方法は幾つかあるが――どれを取っても碌な事にはならない。必ず犠牲となり、苦しむ者は現れる。
それを背負う覚悟はあるのかと、レオンハルトは問う。
クライアはやがて、ゆっくりと顔を上げ、
「はい……覚悟は、しています……」
「……ならいい」
レオンハルトは頷く。ならば後は最善を尽くすのみだ。

そして、
「それじゃ、早速カラー王国に行きましょう」
ベゼルアイが先頭に立った。思わず眉間に皺を寄せ、
「結局、お前もついてくる気か……」
「まあ、一応」
「皆さん……ぐすっ、ありがとうございます……！」
涙目で頭を下げ、お礼を言うクライアと一行を見て、レオンハルトは妙な不安を覚えるのであった。

招待

カラー王国。森の奥にある王宮。
謁見の間では女王であるレガリアが奴隷を椅子にしながら思慮に耽っているところであった。
「さて……次はどうしましょうかねぇ……」
考えるのはカラー王国の女王としての使命、職務のことだ。
一代でここまでの王国を築き上げ、そして維持する労力は並大抵のものではない。普段から奴隷を虐めることを日課としているレガリアも、この時ばかりは真面目な為政者としての顔を見せる。
独裁者である彼女だが、独裁者であるからこそ、誰に頼ることもなく、決めるべき事柄は多い。女王になった当初は反発する声も大きかったのだ。
それこそ、藤原家が人類圏を統一した時など、やはり少なからず合流するべきだという声は上がったが、レガリアは強硬にもそれを一蹴。後日、魔軍が人類圏に攻めてきたことで人類に合流する声は下火になり、更にはレガリアが終戦後、魔軍撤退のタイミングを見て多くの土地を侵略し、領土を広げたことから、それまで若すぎる女王だと舐められていたのが、一気に掌を返した。それからというもの、潤沢な物資を基礎に軍備を整え、多くの侵略戦争を繰り返し、大陸中央部全域を支配する覇権国家まで登りつめたのだ。
しかしまだ油断は禁物だ。まだまだやるべきことはある。人類を支配するために立ち止まっている暇はない。
……まずは南かしら……ムシ使いとか、ＡＬ教が多少面倒だけど、国力が高いわけではないし……かといって、東を放置しすぎると対抗出来るだけの力を蓄えかねない。今の内に叩いておくべきかしら……？
大陸南側は小勢力が幾つも乱立するＪＡＰＡＮさながらの群雄割拠の状態だが、潰そうと思えば潰せる。団結されては厄介だが、分断して各個撃破すればよい。
だが問題は東側。大陸東部は、魔軍の被害も多いがとんでもない力

を秘めた土地だ。
　そもそも国力を高めるために必要なのは、人手もそうだが、生産力が重要だ。そして生産力を高めるには何よりも広い土地と労働力が必要である。カラーは人口こそかなり増えたが、その土地は大部分が森であり、お世辞にも生産力が高いとはいえない。森の資源が豊富であるため食うに困らない程度にはあるが、無駄遣い出来るほどではないのだ。
　だからこそ、レガリアは魔軍が大陸中央から撤退して直ぐに、その一帯を実効支配した。この大陸中央部は、キナニ平野と呼ばれる広大な平原、草原地帯で、肥沃な大地として有名である。魔軍の侵攻も多いが、その度にその肥沃な土地は新たな作物を実らせ、人類を繁栄させてきた。
　大規模な穀倉地帯としても有名であり、他国にも多くの食物を輸出しているこの土地。ここを支配することが、人類圏の覇者に繋がる第一歩である。その全域を支配し、それを元に軍事力を増強させたカラー王国はまさしく、大陸の覇権国家の地位を確立したといえる。
　だが、それでも油断ならないのが大陸東部だ。
　こちらも古くから温暖で豊かな土地として有名であり、国力は強大であった。人類圏の盟主として君臨していたのはいつの時代もこの大陸東部の国家であったのだ。
　本来であれば先の時代でも、人類圏の支配者として君臨出来ていたはずだが、新興勢力であるＪＡＰＡＮの藤原家に敢え無く敗北した。どう足掻いても勝てないはずの戦力差。国力、継戦能力は低いはずであったが、それでも勝利した藤原家は異常であったと言えるだろう。
　だが、その藤原家が人類圏を支配したおかげで、とばっちりの様に大陸東部の国家が幾つも崩壊したのは、哀れという他ない。レガリアにとっては笑いが止まらないことであったが。
　しかしその笑いは直ぐに収まることとなる。
　レガリアが大勢のカラーを率いて大陸中央部を支配し、カラー王国を興して奔走しているころ、東部でも崩壊した国家の有力者達が寄り集まり、一つの国家を興した。

それがオピロス国である。このオピロス国が中々に油断ならない。
元老院と呼ばれる各地の代表者で構成された議会で今の所は協力して政治を行っているが、こいつらが厄介だ。
彼らは古くから何代にも渡って大陸東部という潤沢な土地を奪い合い、血で血を洗う政治闘争を行ってきた毒蛇共だ。その老獪さは油断してると気づかない間に手遅れになる可能性もあるほどであり、レガリアも中々に気を使う。
そんな魑魅魍魎が跋扈する元老院だが、寄り集まって協力されるとその政治手腕は国家の異常な成長として表れている。建国してからというもの、豊かな土地を基軸に生産力を高め、大陸諸国、遺恨があるはずのＪＡＰＡＮの大名や、カラー王国にまで外交を行い、力を高めているのだ。
人間が嫌いなレガリアは、この自分達の同胞が奴隷にされている国にすら友好的な態度を見せて手土産を持って近づいてくる面の皮が厚いこいつらが一番嫌いだった。
だがある程度は素っ気なく出来ても、露骨に使者に暴言を吐いたり、それ以上のことをしでかす訳にはいかない。一国同士の戦争であればこちらの勝利はほぼ確実だが、相手が人間を迫害してることを口実に他国に協力を要請し、団結でもされたら幾ら覇権国家にまで登りつめたカラー王国と言えども敗北してしまう可能性がある。今はまだ、敵対しない様に表面上の友好を保つ必要があった。
だが放置していては大国へと成長する可能性も高い。魔軍の被害を被りながらも成長していく地力は馬鹿には出来ないのだ。
もっとも、大きくなっていけば内部の権力争いにより一枚岩であるオピロス国も分断する可能性もある。
……やっぱり、今は力を蓄えるしかないかしらねぇ……。
とはいえ歯がゆい。制限時間とて、引き伸ばすにも限界がある。出来れば早々に状況を動かしたいところだが、
「――失礼します、レガリア様。少々よろしいですか？」
「……あら、どうしたの？」
不意に信頼している側近に声を掛けられ、レガリアは思考を一時中

断する。国の展望を考えるだけが国家元首の仕事ではない。幾らでもやるべきことはあるのだ。
「先程、親衛隊から報告が来たのですが……その――」
常に冷静な側近が、多少言葉を迷わせる。そのことを珍しく思いつつも、それほどの事態が起きたのかと報告を聞くと、
「……へぇ？　その話、本当？」
「はい。間違いないと」
「……ふ～ん、そうなんだぁ……」
側近に確認を取るも、やはり間違いないとのこと。レガリアは、口端を歪めた。
それは笑みに依るもので、
「なら、盛大に歓迎しないといけないわねぇ……うふふふふ……」
レガリアは早速、そのための命令を下した。

魔物界からカラー王国へと密入国を果たしたクライアと魔人の一行は、森の中で一先ずの休憩を行っていた。
「すいません……わたしに合わせてもらって……」
「構わない。こちらとしてもやることはあるしな」
「……やること、ですか……？」
ああ、と頷いた魔人レオンハルトは何かを思考する様に顎に手を当てている。
それを見たクライアは何となくその横顔を眺めてしまい、
……不思議な人……。
正確には魔人であるが、魔人だからこそ、その対応を不思議に思う。
魔人といえば恐怖の存在だ。人間を苦しめる存在だと聞いている。カラーにとっては複雑な立ち位置だが、それでも魔人は怖い人なのだと思っていた。
しかし先程からずっと気を使ってくれている彼や、ケッセルリンク、使徒とやり取りをしていると、噂の様な怖さを不思議と感じない。
とんでもないことになるかもしれないと、レオンハルトに問いかけ

られても、その裏には、どこかこちらへの気遣いが見える様な気がした。クライアの気の所為という可能性もあるが、
「……わたしも頑張らないと」
「何を頑張るんです？」
「っ!?」
小さく呟いたところで、直ぐ近くの背後から声を掛けてきたのは、レオンハルトの使徒であり、元カラー集落の長でもあったペールだ。
不意の問いかけに驚き、距離を取る中、ペールはクライアとその視線の先を見て、
「……ははーん？」
「ち、違いますっ」
いやらしい笑みを浮かべたので否定する。しかし更にこちらが引いた分の距離を詰めてペールが、
「何も言ってませんよ？　それなのにそんなに焦って……くふふ、何を、いえ、誰を見ていたんでしょうねー？」
「うう……」
誂われている、という自覚を感じつつも、何も言い返せずにいてしまう。
すると右から別の元カラーがやって来る。
「何からかってんのよ。やめなって」
「あうっ」
そう言ってペールの頭上にチョップを入れたのはカラーの始祖――ハンティだ。
今はペールと同じ、レオンハルトの使徒。同じ立場であるが、未だ上下関係はあるのか、ペールが頭を擦りながらハンティに視線を移し、
「こんな可愛い後輩の頭を殴るなんて……最近の始祖様、色々と遠慮が無くなってきてませんか？」
「普段の行いを振り返ってから言いな。……それより、あんたクライアに絡みすぎじゃない？　何かあるの？」
「あー、それはですねぇ……」

ハンティが呆れた様に問いかけると、ペールは一度間を置く。
……何だろう？
クライアが頭に疑問符を浮かべると、その直後にクライアの肩に手を置いて、ペールは言った。
「――クライアちゃん。私に似てるじゃないですか」
「……は？」
「え、えっと……」
時が止まった。森の中に静寂に包まれる。
クライアだけが反応に困って視線を右往左往させる中、この場にいる全員が微妙な表情で、
「……は？　あんた、何言ってんの？　クライアは痴女じゃないでしょ？」
「……どちらかと言うと物静かでお淑やかな……正反対だな」
「うふふ、面白い冗談ですね、ケッセルリンク様？」
「……髪の長さとかであれば……」
「言われてみればそうですが……それを言うならハンティさんとか、長めの人は他にも……」
「私も長い方ね。それとも……体型的な話かしら」
「ちょ、皆酷い！　酷いですよう!?」
ハンティにレオンハルト、付いてきていたケッセルリンクの使徒である加奈代と尋ねられたケッセルリンク。同じく付いてきたエルシールに、ベゼルアイと、それぞれ何を言ってるんだ的な反応にペールが抗議する。
「ほら！　確かに今は私も明るく可愛くなりましたけど、何だか昔の私っぽくないですか!?　内気で気弱で、大人しい美少女だった頃の私に！」
「……あー……」
言われ、皆が今度は思い出そうと考え込む。知っている者達だけではあるが、それを聞いて頭の中で想像し、眼の前のこれと比べると、
『う、うぅ……私に長なんて無理ですよう……』
『可愛くて強いペールちゃんにお任せ！　さぁ、レオンハルト様ー？

今日もい～っぱいエッチなことしますよーう♪』
想像し、比べる。皆は深い息を吐き、
「あの頃は大人しい良い子っぽかったのに、何でこうなったのやら……」
「私の教育が悪かったのだろうか……？」
「あの頃の面影は全くないな……」
「だから酷い！　酷すぎますよう!?　立派に成長したじゃないですか!?」
ハンティやケッセルリンクが過去を思い、教育が悪かったのかと疑問し、レオンハルトも頭を抱えるが、どうやら事実ではある様で、知らない者達は軽く驚いていた。
ペールも再度抗議するが、レオンハルトが息を入れ、
「じゃあペール。昔の自分のこと、今でも再現出来るのか？」
「簡単ですよう。見ててください」
と、ペールは一度後ろを向いた。演技の準備だろうか。スイッチを入れようとしてるみたいだが、何というか、芸人みたいだな、という感想を何名かが覚えていると、
「……はぁ……私って何でこんなにダメダメなんでしょう……長なんてやめて、引きこもって読書しながら金髪イケメンに介護されたい……」
「うわぁ……」
「あー……」
エルシールや加奈代が引き気味の声を漏らし、レオンハルトやハンティが何だか懐かしいものを見る様に声を上げる。陰鬱とした表情に、雰囲気。多少過剰演出の様な気もするが、確かに昔はこうであったと。ペールは少しして顔を戻し、
「とまあこんな感じですかね。ふぅ、久し振りにダウナーな気分入れると疲れますねー……。今考えると何で私ってばあんなにネガティブだったんでしょう？　こんなにも勝ち組なのに」
「いや……」
そんなことは知らない。が、皆が言いにくそうに言葉を濁らせてい

ると、クライアは少し落ち込み、
「わたし……そんな風に見えてるんですか……？」
「……そう言われるとやっぱ全然違うな。安心しろ、クライア。お前はこうじゃない。どう考えてもペールがヤバいだけだ」
「ほっ……」
「ちょっと!?　レオンハルト様酷いですよう！　後、何気にクライアちゃんも酷い!?」
レオンハルトの励ましにホッと息をつくクライアだが、ペールがまた抗議の声を上げていた。それを聞いてクライアは、
……賑やかです……。
不思議と、心が安らぐのを感じる。
家族も友人もいなかったクライアにとって、この様な楽しいやり取りは始めてだった。
自然と表情が綻ぶ中、不意にそのやり取りが止まった。
皆が何となく気を引き締め、前を見る。
……一体何が……？
と、思った直後、クライアもその気配を感じ、その現象は来た。
「……ふん、随分な挨拶だな」
レオンハルトがそう言って、徐ろに空間から蒼の長剣を取り出して無造作に振るう。
すると地面には綺麗に真っ二つになり、はたき落とされた矢が落ちていた。
少しして皆が目を細めると、今度ははっきりとした音と気配が、前方から聞こえてきた。
「――さすがは魔人といったところですね」
「！　……貴方は……」
称賛するような言葉を発しながら現れたのは、弓を手にした一人のカラーだ。
クライアはその顔を知っている。女王の側近のカラーだ。
先程の弓矢も、この側近が放ったものだろう。確か親衛隊や側近のカラー達は皆レガリアの思想に賛同し、そして女王に次いでの強さを

持っていたはずだ。先程の矢も鋭いものであった。
だが、
「……何でもいいが……攻撃してきたということは――俺と敵対する気か？」
「っ……く……！」
だが――相手が悪いと言わざるを得ない。
カラー王国、そして人類の中でも上位の強さを持っていたとしても、魔物界ではそれなりの強さでしかなく、魔人や使徒には全く通用しない。
レオンハルトが発した圧力、敵意と殺気が入り混じった魔人のオーラだけで、側近のカラーは顔を青くし、冷や汗を流す。しかし気丈にも耐えてみせ、立ったまま側近は告げた。
「っ……いえ……今のは試しただけです……ご不快に思われたのなら謝らせて頂きます……」
そう言って側近は頭を下げるが、その顔はかなり苦しさを耐えているようだった。
見るからに、レオンハルトがその気をその鋭い視線とともに全力でぶつけているのだろう。その場にいるだけのクライアでさえ、不安を感じるのだからそれを一身に浴びている側近は相当辛いはずだ。
だが側近は、どこか強い意志を秘めた視線でレオンハルトを見上げて用件を告げた。それは、
「我らが女王――レガリア様が、あなた方を王宮に招待したいと仰っています……」
「……ほう？　ならお前は案内人というわけか？」
レオンハルトが若干威圧を弱めて問う。側近の肩が少し上がり、
「……はい。そういうわけで、私についてきて頂けると助かります」
「……」
「っ……」
その言葉にレオンハルトは一度無言となる。無言のプレッシャーに側近が怯みかけるが、何とか堪えて返答を待つ。いつ殺されてもおかしくないという状況に耐えている側近に何を思ったか、レオンハル

トは敵意を止めると、
「……いいだろう。なら案内しろ」
「は……ありがとうございます。では皆様こちらに……」
重圧から解き放たれた側近が頭を下げてお礼を言うと、先導する様に歩き始める。
無言でレオンハルトが付いていくのを見て、皆も後に続くが、ペールがぼそりと、
「なーんか……胡散臭いですねぇ……」
「……ま、案内してくれるって言うなら良いんじゃない？」
ベゼルアイが気楽にそう言う。だがクライアは内心で不安だった。
……レガリア様……何を考えているんでしょう……？
胸騒ぎを感じる中、一行は側近に案内され、カラー王国の首都に足を踏み入れた。

反抗

――それは、レオンハルト達がカラー王国女王に招かれ、側近の案内を受けた少し前の話。

大陸東部。

その中心に近いところにある大きな街は、この土地に出来た新たな国の首都である。

人と物が集まり、次々と復興と発展を遂げるその街の中心地に、レンガ造りの講堂の様な建築物があった。

そこはオピロス国の最高意志決定機関である元老院。

オピロス国を構成する３３の領邦。その代表が集まる国の中枢であり、人類圏をこれまで支配してきた一族の末裔が集まる怪物達の住処である。

そこでは今日も、オピロス国の――人類圏の趨勢を決める会議が彼らによって決められていた。

「――我らが親愛なる同志達よ！　次なる議題は先日、元老院議会で保留とされた例の議題についての再審議を執り行う！　まずは重要参考人を連れてきたのでその者をここへ入室させることの是非を問いたい！」

前面中央の席、カールの髪に顔の彫りの深い男が立ち上がり、他の議員達に向かって覇気のある声で決議を問う。オピロス国の最高意思決定機関である元老院議会には、元老院議員以外の者の立ち入りは厳しく制限されている。入室を許可されているのは元老院議員の証を持つ彼ら、３３人の元老院議員と、警備の人間だけだ。それ以外の者の入室は、やむを得ない事情に限り決議を取ることとなり、その可否で決められる。

その法に従い、彼らは自らの意志を挙手で示す。彼らが持つ一票の価値は皆同等。少なくとも、表向きには。

多数決に従い、半分は直ぐに手を挙げたが、半分は少し渋った末に手を挙げた。それを見て元老院議員の男は頷く。

「ありがとう！　聡明なる同志達よ！　――では、重要参考人をここ

へ！」
「はっ」
　警備の兵士が一度退室し、外の警備を行う者から一人の男を引き取り戻ってくる。
　その男はボロい布切れの様な服を着た乞食の様な見た目の男だ。お世辞にもその身なりは有力者達が集まる元老院議会の場には相応しくない。
　だが先程決議を取ったカールの男は、その重要参考人である男を自分の直ぐ隣に連れてくると、臭いに顔をしかめることもなく再び議員達に語りかける。
「この者は先日、かのカラー王国で奴隷として不当な扱いを受け、我が国に亡命してきた新たな同志である！　この者の話をまずは聞いてほしい！　さあ、前へ！」
　カールの男の声を受け、奴隷の男がおずおずと前に出る。しかしその前に、別の議員が立ち上がった。それを見て男は発言を許可する。髭の生えた議員の男は話始めた。
「親愛なる同志よ！　カラー王国の件であればまだ耳に新しい！　以前聞いた話を、よりによって命からがら逃げてきて体力的にも疲れ果てた同志に強制的に話をさせることは如何なものだろうかと私は思う！」
　その言葉に、半分の議員達が頷く素振りを見せる。しかしカールの男は直ぐに反論した。
「本人から直接話を聞くことに意味があるのだと私は思う！　そして私は命に誓って、話を強制させてはいない！　これは我らの新しい同志であるこの者が、自ら力になりたいと申し出たものである！」
　もう半分の議員から拍手が飛ぶ。それは奴隷の男にも向けられていた。
　異議を出した髭の男は、これ以上この件で突っ込むのは無理だと反論を諦める。カールの男は己と元老院を二分する政争の相手であったが、この件で動くことに関してはどちらも意見は一致しており、今のはただのポーズだ。

ゆえに再度、カールの男によって奴隷の男は促される。そうして語ったのは、己が受けてきた仕打ち――カラー王国の実情だ。
「……お、俺は……１０年前まで、ある村に住む農民だったが……ある日突然、カラーの軍隊に襲われて捕まり、１０年間を奴隷として過ごした……」
男の告白に、議場は静まり返る。それほど大きくない男の声を聞くためではあるが、話を聞きたいという思いを見せるためだ。
「遊び半分で爪を剥がされ……魔法で傷つけられ……一日の殆どを強制的に働かされ……食事は一日、黒いパンが一つと水だけ……仲間の殆どは全員衰弱して死んじまった……！」
男は声を震わせて今までの生活を告げる。それは外交員から間接的に話を聞くよりも説得力を感じる話だった。
「男も女も関係ねぇ……！　あいつらは悪魔だ……！　俺の飼い主から聞いたが、あいつら、いずれは人類全てを奴隷にする気なんだ……！　俺だけならともかく……平和に生きてる女や子供まで苦しめられるのは耐えられねぇんだ……！」
そこまで話したところで、カールの男は奴隷の男の肩に手を置き優しく微笑を浮かべると、今度は議員達に向かって迫真の表情を作りつつ、声を張り上げた。
「聞いたか同志達よ！　彼は一刻も早くこの深刻な事態を我々に告げるため！　何よりも先にこの場に出向いたのだ！　食事や風呂に入ることも出来たのに、我が身よりも他者を優先したのだ！」
何と美しいことだろう！　と、仰々しい口調で演説の様に喋るカールの男。その語りは続き、
「先日！　この話を大袈裟だと罵り、デタラメだと決めつけるものがいたが、私は敢えて言おう。――その者の言こそ、デタラメであると！」
「ぐっ……」
何名かの議員が苦悶の声を漏らす。それを確認したところで、カールの男は再び口を開き、
「しかし聡明なる同志達であれば当事者である彼の身なりと話を聞い

て理解したことだろう。事態は深刻であると！」
垢で汚れ、爪は剥がされ、身体に多数の傷を負った男を敢えて指して、カールの男はそれを強調する。
「彼らの怒り、嘆き、悲しみは正当なものであり、だからこそ！　我々は人類の盟主として！　かの邪智暴虐なカラーの王国を取り除く正義の鉄槌を下さねばならないということをッ！　親愛なる諸君達は理解しているだろうか！」
だが、その言葉には異議が出た。別の議員が、
「事の重大さは理解しよう！　親愛なる同志よ！　その提案は正当な感情からくる人類の使命であることも！　――しかし！　今の我々にそんな力があるだろうか⁉　あると思うのなら今直ぐ外に出て、周りを見てみるがいい！　今はまだ、復興に力を入れるべきではないかね⁉」
「同意だ！　現在の国力では、他の有象無象であればともかく！　カラー王国と事を構えるには不安がある！」
「事を急いて倒れてしまえば元も子もないであろう！　今はまだ力を蓄え、然るべき時に事を起こすべきではないか⁉」
だが、その意見にも別の議員から反論が出る。
「そうして言い訳を並べ立て、苦しむ人々を放置すると言うのか！」
「対岸の火事だと思うのは早計かと！　かの王国を放置していては、いずれ我々にも火の粉が降りかかりますぞ！」
「逆を言えば今こそが好機となり得ます！　かの王国を取り除いてしまえば、直ぐにでも我々の国が――」
「静粛に！　親愛なる同志達よ！」
熱の入った議論を行う議会の場に、カールの男の声が響く。
そうして再び静かになり始めた議場で、カールの男は予定通りに事を進めた。
「諸君らの意見は理解した！　だが！　その不安は無縁であると私は訴えよう！」
その言葉に議員達がざわつく。カールの男は手元から一枚の紙を取り出すと、

「見たまえ！　これは大陸南部の諸国！　そして、人類圏に於ける協力者達のサインが記されている！」
　おお、と幾人かの議員達が驚く素振りを見せ、また何名かは本気でその書類に驚く。男は続けた。
「これはカラー王国に正義の鉄槌を下すため！　物資や人員の協力に同意する署名である！」
「それは……！」
　議員達が驚く。だがカールの男は二枚目の紙も取り出し、
「そしてこちらには！　大陸で名を馳せる幾つかの商会！　金銭と物資の出資を行う旨のサインが記されている！　ロック商会！　ロスチャ商会！　キリング商会！　ノイマン商会！　どれも皆、聞き覚えのある商会のはずだ！」
「おお……！」
　そこに書かれていたのは大陸の経済を牛耳るほどの大規模な商会の名前と、その代表のサイン。内容は、資金や物資の援助を行う代わりに、攻め落とした土地の権益を一部割譲すること。そこには、カラーという資源の存在も記されていた。近年発覚した事実に基づくものだが、人類にとってかなり衝撃の事実であったため、まだ耳に新しい事実だ。
　そしてその内容は南側諸国の書類も同様だ。それらを集めてきたカールの男は、自信を持って告げる。
「そして現在！　既に反乱の意志を宿す我らの同志達は、王国の各地に潜伏し、そのための準備を進めている！　我々が一声掛ければその火は瞬く間に王国全土に燃え広がり！　我らの正義に屈することであろう！」
「……」
　そこまで言えば、最早彼らは理解した。
　理解していない者でさえも――既に根回しは終わり、自分達の一声で全てが決するということを。
　ゆえに最後に代表して声を上げるのは、この元老院における最大のライバルである髭の男だ。彼は立ち上がり、

「親愛なる同志よ！　その提案、真に我々に必要な提案であると理解した！　さあ、決を取るがいい！」
「感謝する！　親愛なる同志よ！　――では、決議を取ろう！」
普段であれば反対の立場に立つ両者が結託し、事実上彼らの動きは決まったが、それでも建前を崩すわけにはいかない。カールの男は皆に問う。
「賛成の者は挙手を！」
その手を挙げたのは、３３人の議員、全員であった。
そこで男は両手を広げて宣言する。
「全会一致で可決！　ではこれより！　我々は国を挙げて、かの国へ正義の鉄槌を下すこととする！　――我らが祖国に栄光あれ！」
「――我らが祖国に栄光あれ！」
その言葉とともに、オピロス国元老院議会は閉会する。
――それはカラー達のこの先の運命が、決まった瞬間であった。

――そして時は招待される直前まで戻る。
人類圏にあるとある建物。その室内では、二体の会話が行われていた。
「――ということらしいですわ。つい先程、行動を起こす旨の連絡が届きましたので、もう間もなくかと」
「……そうか」
多くの人の出入りがあるここは、とある大規模な商会の本部。
その殆どは、ここの本当のトップの正体を知らない。人の形に化けた存在が多く存在し、人を支配する存在がその裏にいることも。
「さすがに間に合わなそうですわ」
「だろうな……まあ、こちらはこちらで何とかしてみるしかないが……結果は変わらないだろうな」
息を吐くのは中央の机に座り紅茶を呑んでいる男。女の方は書類を何枚か捲りながらその案件についての詳細を計算している。男は空いた手で頭を抑えながら、

「……とりあえず、向こうに伝達するためにも、事が起きるまではここで待っているか」
「！　それでしたらここで出来ることも少ないですし、将棋でも致しませんこと!?」
「っ、将棋か……」
女の声に男は若干怯む。この女との将棋は嫌な思い出しかないのだ。
だがそれ以外にやることもない。彼は決心し、
「……しょうがない。一局だけだからな」
「！　ありがとうございますわ！」
そう言って将棋盤と駒を持ってくる女を見て、男は内心で別の憂いを覚えていた。
……全てを救うことは出来ないな……なんと言ったものか……。
変わらないであろう結末を想い、男は軽く息を吐いて向こうの状況を確認することにした。

カラー王国の首都に足を踏み入れた一行は、その光景を初めて目にした。
「栄えてますねー」
「そうね。ただ――」
加奈代の何気ない言葉に、エルシールが頷きつつも目を向ける。
カラーの集落。それを目にすること自体
は初見ではないものが殆どだ。元カラーのケッセルリンクやハンティ、ペールなどは懐かしい空気を味わっているし、レオンハルトも見たことだけならある。
だがそれは、あらゆる意味で知った光景ではなかった。
街の景観はかなり整っており、一目見て豊かな生活を送っているであろうことが分かる。１０００年近く昔と比べても、その生活レベルは格段に上がっているのだ。
しかし、ところどころ目を凝らすと、その綺麗な街の景観に合わな

い違和感のある存在が目に映る。それが、
「人間の奴隷ね」
「ですねー」
「……」
ベゼルアイの呟きに、今度は素っ気ない様子で前髪を弄っているペールが単に同意する。ハンティなどは露骨に目を細めて嫌悪と複雑な内心が入り混じった様子であるが、ペールの方はあまり興味が無い、というわけではないだろうが、淡々としている。
クライアなどはやはり哀しそうな憐れむ様な視線を人間の奴隷に向けていた。ケッセルリンクはただ無言でそれらを観察している。そしてレオンハルトは内心で現状の分析に努めていた。
……やはり、事実だったか。街のあちこちに潜んでいるな。
カラー王国の奴隷制度は予想以上に酷いようだ。表通りで態々行う者はいないが、遠くからは人間の悲鳴らしき声が響いてくる。強制労働、そして拷問や殺人は日常的に行われている様だった。
だがこの程度の光景を見ただけで眉を顰めることはない。この程度であれば、魔軍とて、同様の事を行っている。もっとも、レオンハルトの息が掛かり、影響下が強い場所であれば、数を定めたり、労働する者への暴行は行なわず待遇を整えるなど、恐怖だけで支配しようとはしない。私的に好まないというのもあるが、恐怖による支配は反発を招きやすいからだ。人間同士でも、戦争で負ければ敗戦国の人間は苦境に立たされるが、やはり限度というものがある。それは情であったり、利用価値であったりだが、全てを苦しめ殺し尽くすようなことは普通はしない。
だがこの街からは――そのタガが外れている様に見える。
裏に見えるのは、人間への憎しみだ。その負の感情が、この奴隷政策からは垣間見える。
利益を得るために奴隷を作ったのではなく、そうしたいから奴隷を作った様であった。付加価値は後から加えたものだと。必要だからやるのではなく、やりたいからやるのだと。
まるで魔物の様だが、これを一応亜人種という同類が人間に対して

行うというのが正気の沙汰ではないが、差別というのは往々にして起こりうることだとも理解している。
魔人となり、魔物の考えをある程度理解したからこそ、狂っていると断じることが出来る。魔物社会では、差別は当たり前であって、当たり前じゃない。
魔物は実力に応じて反応が決まるので、弱いものは扱いが下に、強いものは扱いが上になるが――それはある意味で平等だ。能力が高ければ優遇されるのは当たり前であり、であれば自らを高めればいい。魔人や使徒などの特権階級を除いて、生まれや種族で差別はされない。されるのは、その個人が己より強いか弱いか。弱者に優しくないともいえるが、そんなものはこの世界の生物として生まれたのなら当たり前のことだ。完全な平等などは存在しない。
だから争いも、差別自体もレオンハルトは否定はしない。程度の差はあれど、自分より劣る存在を下に見てしまうのは避けられないことだ。
だが、だからと言って同じ組織、社会に属する何の罪もない仲間、同僚ともいえる存在に、露骨な虐めを行ったり、扱いを極端に悪くするのは愚かと言う他ない。誰しも役に立てる事柄、役割があり、何かの能力がある。それを尊重し、活かし方を考え、最低限の生活を送れるようにするのが、集団を纏め上げ、組織を運営する者の義務だ。差別に傾倒してそれを忘れているのが、このカラー王国だ。
もっとも、だからこそ――そこらにいる人間の奴隷達は何かを待つ様に瞳に強い意志を潜ませているのだろう。
この流れを止めることは出来ない。強引になら可能だが、それをやれば結果は同じことだ。自分がやるか、他の誰かがやるかの違いでしかない。
そしてそれが正しい道理に沿った、自然淘汰であるというなら――
「んー、それでレオンハルト様？　どんな感じでいくんです？」
と、不意にペールが話しかけてきた。既に王宮に入り、やがて謁見の間に入ろうとする前のことである。レオンハルトは、そうだな、と一息置いて、

「……とりあえず、話すだけは話す。――が、それを聞き入れたとしても聞き入れなかったとしても、結果は変わらないだろうな」
「あー……やっぱそんな感じですか。それじゃあまあ、気楽にやりましょう。失敗しても大暴れして帰ればいいだけですし」
ペールが朗らかにそう言う。だがその言葉を聞いて、ハンティが目を細め、
「……変わらないってどういうこと？」
そう問うてきた。レオンハルトは即座に、
「そのままの意味だ。おそらく、俺達がこうやって一応の話し合いに望みに来たのは無駄に終わるだろう。……クライアには申し訳ないがな」
「それって……」
「……」
ハンティやクライアが言葉を失う。そして切り替えるようにレオンハルトが、
「だから、やるべきことはこの後にある。帰ったらフォローの準備だな。それで、ある程度は救える」
「……でも」
引き下がらないハンティに対し、レオンハルトは小声で言った。それは先程知った事実で、
「……この国は、直に人間の反抗を受けて滅ぼされることになるだろう」
「！　それは――」
ハンティもそうだが、他何名かも驚く。ペールなどは驚かず、ケッセルリンクも反応しないが、それでも初耳のはずだ。
「先程、情報が入った。どうも既に反乱を起こすための準備は整っているとのことだ。そしてそれは――もう間もなく起こることだと」
「確かな話なの？」
ベゼルアイの問いに頷く。
「それを企んでいる人間から直接聞いた話だ。まず間違いない。――その話で分かるだろうが、簡単に言えばカラー王国と人間勢力の間で

戦争が起こる。そしておそらく、カラー王国は負ける。だから俺達が介入する意味は、もう殆どないということだ」
「そんな……」
クライアが悲しそうな顔をする。ハンティが苦虫を噛み潰した様な表情で、
「……でも、あたし達が出れば――」
「出て……どうする？　カラー王国に加勢して大勢の人間を殺すか？　仮にも、奴隷扱いから脱しようと目的を掲げた連中だぞ。そいつらを殺してカラー王国を守るのは、クライアの願いからはズレている。それはお前達も本望じゃないだろう」
「……だけど」
「それとも、俺達がカラー王国を滅ぼすか？　……まあそちらの方がマシかもしれないが……今は軍を連れてきているわけではないし、結果的に被害が拡大するだけになる可能性が高い。だから一度戻って、後のフォローに動いた方がマシだという話だ」
「……」
そう。もはや結果は変わらない。変えることが出来るのは過程くらいだ。被害を少なくするだけなら、一度帰って準備を整えれば不可能ではない。そちらの方が、罪のない多くのカラーを救えるだろう。そして結果的に、手を汚さずに差別主義に取り憑かれたカラーの癌を、一斉に取り除くことが――
……嫌な考え方だな。
そこまで考え、軽く頭を振る。自分の事ながら、こういう時でさえ合理的な思考が淀みなく働くというのは複雑な気分だ。
だが現実問題、そうすることが最善であるだろう。こうなってくると、今の時間すら惜しいかもしれない。
「……こうなると、今ここにいることが無駄な時間かもしれないな。直ぐに戻ることも考えるか……」
「で、でも……話してみれば分かって――」
「分かってくれる可能性は低いだろうな。クライア。そう思ったからこそ、お前は俺に力を貸してほしいと頼んだはずだ」

「っ……それは……でも……」
「あー、それは確かに。話し合いで済むならこうなってはないですよねぇ。聞く限り、その女王様は今まで何度もクライアちゃんみたいな意見は聞いてるはずですよう？」
「……」
　クライアが顔を俯かせる。分かっていたはずだろうが、事を起こす前にこうなってしまうとやはり戸惑いが大きいかと思う。だが、言葉を重ねたペールは押し黙ってしまったクライアを見て、何を思ったのか考える素振りを見せると、
「うーん……でもまあ、私はちょっと話してみたいですけどね」
「えっ、どうしてです？」
　帰る様な流れになっていたのに、そう言い始めたことに加奈代が問いかける。ペールはニコニコとした笑顔で人差し指を立て、
「いやほら、ここまでの事をしでかしたお馬鹿さんの顔を一度見ておきたいなぁと思って。これからのカラーの歴史に名を残しそうな愚物でしょうし、作家としてちょっと興味があると言うか」
　黒い笑顔を浮かべてペールは言う。続けて、
「後はまぁ……ちょっと有り難い先人の言葉を授けてあげようかなぁって。虐めてあげようかと思うわけですよう。滅茶苦茶勿体無いことしてくれてますし……あー、何か考えるとちょっとイラッとしてきますね。せっかく私も含めて歴代の女王達がすっごい頑張って発展させて、遂にこれだけの王国にまで成長したのに……馬鹿な事をしたせいでこれから全部無駄になるとか……うわぁ、凄い勿体無いというか何やってくれてんですかって感じですね。私もあれだけ頑張ったのに……うわっ、すっごくイラッとしてきました！　ちょっと文句言ってくるので、私だけでも会ってきていいですか!?」
　自分で言っててだんだんとムカついてきたのだろう。明らかにいらっとした表情でペールが言う。レオンハルトがその様子を見て仕方ないと言わんばかりに、
「……まあ、行きたいなら行っていい。考えれば考えるほど、俺は帰った方がいい気がしてきたから俺は戻るが……お前達はどうする？」

それはどうしたいかという意味も込めた言葉だったが、それに最初に答えたのはケッセルリンクだった。
「……私は、しばらく街に留まろうと思う」
「ケッセルリンク……」
ハンティが名前を呼ぶ。どうやら思うところがあるようだ。ケッセルリンクはハンティも含めて皆に告げる。
「眼の前で、罪のない女性が無為に死んでいくのは忍びない。隠れて、そういった者だけでも逃がせないか試してみよう」
「……そうか」
それもいいだろう。救える数は少ないかもしれないし、見分けることも難しいだろうが、何もしないよりはマシなはずだ。
「……すまないな」
「謝ることはない。これは……彼女達が作り出した問題だ。むしろこちらが謝りたい」
ケッセルリンクも多少の責任を感じているのだろうが、それこそ責任を感じる必要はない。こうなったのは、今いるカラーが原因であり、自分達は関与していないのだから。元同族だからと罪を感じる必要はない。
「……こうなると、しばらくお菓子も食べれそうにないわね……」
「まー仕方ないですよう。後で材料くらいなら持ち帰るんで、それまで我慢してください」
ベゼルアイの溜息にペールが淡々と答える。今度はエルシールが、
「……なら、このカラーはどうしますか？」
エルシールが抱えているのは、案内役のカラーだ。王宮について早々、警備の兵共々気絶させておいたがさすがにまだ起きる様子はない。レオンハルトは考えるまでもなく、
「適当にそこらに転がしておくのがいいだろうな。一々殺す必要もない」
「そうしなさい、エルシール」
「はい、ケッセルリンク様。レオンハルト様」
エルシールがこちらの言葉通り、床に側近を寝かせる。そこでレオ

ンハルトは行動の指針が固まったと頭の中を纏め、
「なら、のこのこと王宮まで来ておいて何だが、帰らせて貰おう。……ハンティと……クライアはどうする？」
最後に二人にも聞いておく。ハンティはまだ迷ってはいたが、
「……あたしは……女王に会って、それからケッセルリンクと合流するよ。クライアも――」
「……わたしは……何か、救うための力になりたいです……」
レオンハルトは頷く。そして、
「なら、二人共今はとりあえずケッセルリンクの指示に従い行動するといい。追って指示は出す。俺は一度戻るぞ」
「……了解」
「……は、はい」
そうして指示を出し終えたところで、レオンハルトは王宮から出ると、屋根を跳んで街の外へ向かっていく。
だが、その道中、
「……！」
不意に、街の一角が爆発し、女性の悲鳴の様なものが聞こえた。それを見て、レオンハルトは確信した。
「――始まったか」
やはり、猶予はあまりないようだ、とレオンハルトはそれを尻目に一度魔物界へと戻っていった。

轟音が響き、謁見の間にはレガリアの声が飛んだ。
「……何事ですか？」
「申し訳ありません。直ぐに確認を――」
側近が確認に動こうと親衛隊を呼び出そうとする。その間にも、レガリアはまさか、と思考を回した。
「魔人が動いたかしら……？」
そうだとすると些か残念というか、短絡的だと言わざるを得ないが、何のつもりだろうか。

彼らがこちらに対して悪意があるとは思えない。元とはいえ、同族――それも偉大な先人達であり、レガリアと同じ、人間を害する道を選んだ尊敬する先達だ。だからこそ、一度会って話をしてみたかったのだが、

……まさか奴隷のことで腹を立てたとかかしら。……そんな筈ないわよね。

人間がカラーの敵であることは分かってるはずだし、魔物だって同じことをしている。それで怒るはずはないとレガリアはその可能性を排除した。

……何か機嫌を害したというなら、機嫌を取らないとね……私の、野望のためにも……。

いずれは人類圏を支配し、人類全てを奴隷にする夢が、レガリアにはある。そしてその果てに――レガリアは魔軍と交渉し、更に偉大な種族に生まれ変わるのだ。

人類圏を差し上げれば、それは容易に叶うだろう。そしてカラーの管理官になり、カラーには不自由のない快適な生活を送らせ、人間には苦しみを与える。カラーにとって、レガリアにとっての理想郷がそれだ。このことは側近にも教えていないことだが、カラーの繁栄のためには最善の選択であることは間違いない。混乱を起こさないためにその時が来るまでは伝える必要はないと判断した。

魔王や魔人には敵うはずがないのだから、敵対するのは馬鹿がやることである。恭順し、その下につけば、恩恵は受けることが出来るのだから、その方が賢い選択だ。

もっとも、人間はそれがやりたくても出来ないのだから笑えてしょうがない。彼らは愚かで、自分達が世界の覇者だと疑わない傲慢さがある。そのためなら他種族を害しようが何とも思わない。その傲慢さが、レガリアは大嫌いだった。

……もう少し……もう少しで、人間を地獄に叩き落すことが出来るわ……。

そのためならレガリアは何でもする。何でもしてきたからこそ、ここまで上り詰めることが出来たのだ。

その夢まで後もう少し。その光景を思い浮かべ――レガリアはその報告を聞いた。
「れ、レガリア様……！」
「！　何？　一体どうしたの？」
側近が血相を変えて謁見の間に戻ってくる。
直後、レガリアは彼女の言葉に言い様もない不安を覚えた。
「――人間が街で暴れて……その上、攻めてきた……？」
それはカラーにとって、絶望の序章に過ぎなかった。

レガリア・カラー

カラー王国首都のあちこちでは、煙が上がっていた。
主に木で出来た家屋から昇るそれは、発生した火を基軸に吹き広がる。
街に住むカラー達はその火を起こした爆発音を聞いてその場から離れていき、反対に街を警備する警備隊や親衛隊の武装したカラー達は騒ぎを聞きつけてその場に急行する。
しかし、既にその場は暴動による地獄が発現していた。
「へ、へへ……遂にこの時が……」
「おお……行くぞお前ら……！」
奴隷として扱われていた人間達が、ぞろぞろと集団で寄り集まり、カラー達の方へ下卑た笑みや、意志の秘めた瞳を向けて歩いていく。
「な、何……？」
「ちょっと⁉　何命令以外のことしてるのよ！　人間の癖に！」
幾人かは人間達の異様な雰囲気に怯え、また幾人かは人間の態度に怒りを顕にする。この場では、後者の方が多かった。
少ない前者のカラーが後退る中、後者のカラー達は人間に向かって突っかかっていく。
「ああもう最悪！　何やってるのよ！　汚い奴らが寄り集まって見れたものじゃないわ！　ほら！　こっちの目が腐る前にさっさとあっちへ行きなさいよ！」
カラーの内の一人が人間達に向かって罵詈雑言を浴びせる。集まってきているのは主に労働奴隷であった。その名の通り、街の外れで強制労働に従事する奴隷のことである。カラー王国で使役される奴隷には３つの種類が存在し、一つが個人が所有することの出来る娯楽用奴隷。主に家の中や街中で暮らし、ペットの様に扱われる奴隷である。その用途は拷問や陵辱、個人で愉しめる範囲であれば多岐に渡るが、街中の景観と合わせて比較的綺麗な格好をしており、容姿も整った者が多い。
もう一つが、子孫繁栄用の性奴隷。こちらはその名の通り、カラー

と性行為を行い、子種を出してもらうための奴隷である。
カラーは女性だけの種族であり、子供を作るには多種族――人間の雄の精液が必要だ。ゆえにカラー王国では、人間と恋愛するようなことを禁じつつも、種を増やすためにこの様な方法を取っており、国が管理している。こちらも容姿は整った者が多い。
そして最後が、労働奴隷。国が指定した強制労働に一日中従事し、使えなくなったものから処分される最も人権のない奴隷である。個人で所有される奴隷や性奴隷には、数こそ少ないものの、国の目を欺いて家の中で家族に近い扱いを受けて暮らしている者もいる。しかし労働奴隷にはそんなこともあり得ない。国が徹底的に管理しているため、休む間もなく働かされ、施設管理をしているカラー達にストレス解消と称して遊び半分で責め苦を受ける。国が定めたものとはいえ、カラーが最も嫌がる仕事であるからだ。
その労働奴隷は個人所有の奴隷や性奴隷に比べて、明らかに醜い容姿をしており、汚くて臭い。カラーが眉を立て、蛇蝎のごとく声を荒げているのは、寄り集まった奴隷の殆どが労働奴隷であるためでもある。人間嫌いのカラーにとって、美しい自分達と違った、醜い人間がこうして闊歩しているのは耐えられないことであった。
「ほんとあり得ない！　気持ち悪いし、臭い！　さっさと行かないと殺すわよ！　地面に這い蹲って命乞いをしたくなかったら早く行きなさいよ！　この豚！　ゴミクズ！　生きてるだけで害悪な豚が、美しい私達カラーに――」
「――黙れよ」
「……え？」
奴隷の一人が呟いた言葉に、思わず呆気にとられてしまうカラー。吐いた言葉の意味は、咄嗟には理解が及ばなかった。
しかししばらくして、それを理解した時、再びカラーの怒りは燃え上がった。
「っ～～～！　何、その口の利き方!?　この汚い豚！　もう怒った。魔法でぶっ殺してやるから、そこを動――」
「――うるせぇ！　死ぬのはテメェの方だ!!」

「……!!　何を――」
だが、カラーは気づけなかった。
普段であれば、労働奴隷は鎖に繋がれており、満足に動くことは出来ないはずである。
しかしその枷は今は解かれている。奴隷の中に紛れ込んだ幾人もの魔法使いや盗賊達の手によって、施設管理を行っているカラー達と共に破壊された。
反抗の為の手はずはとっくに整っており――それに気づくことが出来ずに奴隷達を逆撫でしたこのカラーは、最初の犠牲者となった。
「……お前ら！　やっちまうぞ!!」
「おお!!」
「えっ、ちょっと、何――きゃあっ!?」
奴隷達が走ってカラーの元に駆け寄ると、そのまま覆いかぶさるように地面に押し倒した。そのまま男達が殺到していく。
「この……炎の矢！」
「ぐあぁ!?」
ようやく事態の異常さと身の危険を感じ取ったカラーが炎の矢を人間の一人に向かって撃ち込むが、それでも群衆となった人間達は止まらず、魔法を放ったカラーにも飛び掛かって地面に押し倒していく。
既に最初のカラーは男達の手によって服が強引に破られ、悲鳴を上げていた。
「きゃあああああぁぁっ!?　やめっ――やめな、うぶっ!?」
腹を殴られ、息が抜けるような声を漏らしたカラーに男達は容赦なくその陵辱の槍を差し向ける。
「テメェらはやめろっつってもやめなかっただろうがよぉ!!」
「へへへ、今までの恨みを晴らしてやるから覚悟しろよぉ……！」
「っ、い、いや……やめ――」
だが人間がその声を聞き届けるはずもなく――カラーの少女はお腹の奥から感じる激痛と異物感に、今までで一番高い悲鳴を上げた。
「いやあああああああああああああああ――!?」

カラーの額にあるクリスタルが、赤から青に変わる。それを見て、男達は腰の奥から感じる快感と征服感、少女の悲痛な表情と叫びに情欲が燃え上がるのを感じ、その状況に陶酔する。
「おらおら！　今度はテメェらが豚になる番だぜ!!」
「あぐっ、うぐっ、う、うぅ……やめっ――！」
とうとう口まで塞がれ、くぐもった声を上げることしか出来なくなったカラー。男達の手が美しいカラーの柔肌を痣が付くほど強い力で掴み、陵辱する。
「――っ、何事だこれは!?」
「分からんが……とにかく鎮圧するぞ！」
そこに、カラーの警備隊が到着する。
奴隷達が暴れているところを見て、即座に弓を構え、ある者は魔法を放とうとする。
しかし、
「がっ――!?」
「何――ぐっ……!?」
その直後、横から飛んできた魔法やナイフ、潜り込んできた何かの刃を受け、血飛沫を上げながら倒れていくカラー達。
それを行ったのは、
「警備隊や親衛隊が集まってきたぞ」
「ああ、油断するな。我々に失敗は許されない」
刃に滴る血を払い、会話を行うのは奴隷の身なりをした男達だ。
しかしその体つきや、顔つき、眼の光は、明らかに荒事に慣れた戦士のもの。
事実、彼らは今回の計画のために奴隷としてカラー王国に潜り込んだ人間の国の兵士や冒険者であった。魔法使いや盗賊などの技能が使える者達で構成されており、奴隷達を扇動し、一斉に暴動を起こすのが狙いであった。
そしてその混乱に乗じて、街中でゲリラ戦を行い、警備隊や親衛隊を倒しつつ、国境から侵攻する予定である本隊を待つ。奴隷達の数は多く、潜伏している者達もそれなりに手練が多いが、敵国の首都で戦

い続けるとなると消耗戦となり、最終的には死んでしまう可能性もある。
　だからこの暴動開始直後で、状況が把握しきれていない今が勝負だった。奇襲を繰り返して兵を倒し、出来る限り混乱を長引かせつつ数を減らす。軍が集まり、奴隷達が完全に鎮圧されてしまえばこちらも撤退するしかない。だから今こそが好機だ。
「ははは っ！　見ろ！　言っていた通りだ！　クリスタルを取ったら死んじまいやがったっ！」
「これ持って帰ったら高く買い取ってくれるんだろぉ!?」
「根こそぎ奪い取ってやろうぜ!!」
「！」
　見れば、カラーを犯していた男達がそのカラーから青のクリスタルを抜き取り、それを手にして掲げている。クリスタルを抜き取られたカラーは、白濁れのまま絶命していた。
「本当だったのか……」
　潜伏していた冒険者の一人が呟く。予めそれを教える様にと伝えられていたが、この目で見るまでは何処か半信半疑であったのも事実だ。
　カラーのクリスタルは処女を失うことで赤色のものから、青いものに変化する。これ自体は広く知られていることだ。
　しかしこのクリスタルに先日、新たな事実が判明した。
　この青いクリスタルは、膨大な魔力を秘めており、様々なマジックアイテムの元に出来る可能性のある神秘かつ、希少な宝石であると。ある魔法研究者の報告、実験で判明した事実だと言うが、
「……今回の件で、その事実は世間に広く認知されるだろうな。ふむ……」
　目敏い雇われ冒険者の一人はそれを目にして考え込む。
　知られたばかりの資源。その価値は何よりも高く、一つ持ち帰り、売るだけでも財産。何個も持ち帰れば莫大な富を築くことが出来るだろう。
　需要は高い。魔法研究者でなくとも、世の中には、希少というだけ

で金を払いたがる金持ちが幾らでもいる。それを上手く利用すれば――美味しい仕事であることは間違いなかった。
「どれ、暇があれば集めてみるかな」
「おい！　俺達の仕事は――」
「分かっている。そちらもきちんとこなすさ。暇が出来ればの話だ」
「全く……気持ちは分かるけどな」
奴隷に紛れて街中を走り抜けながら、潜伏者達はつかの間の気安いやり取りを交わす。
カラーのブルークリスタル。その価値はこれからも変わらないだろう。
ゆえに、これが終わった後にでも狩りにくればよい、と何名かの冒険者はその予定を頭の片隅にしまい込み、同じく潜伏している国の兵士とともに声を張り上げた。
「カラーを倒し、悪しき支配から脱却せよ！　恥じることはない！　これは正義の行いである!!」
合言葉の様に奴隷達を扇動すると、その言葉に釣られ、奴隷達の動きが激しくなる。その目、表情は誰もが血走った様な怒りや喜悦、暗い喜びに満ちていながらも、その行いを何ら恥じることはないと使命を帯びたかの様な顔をしていた。
その光景を見ていた、ある者は後にこう語る。
己の行いを正義と確信した時――人は最も残酷で、容赦のない生物に変貌する、と。

「――始まったか」
人類圏にあるとある建物――大陸でも有数の大商会であるキリング商会の本部であるその建物の奥では、金髪灼眼の魔人と、その使徒である金髪ツインテールの少女が会話をしていた。
魔人は、片目を閉じたまま向こうの状況を確認してそう呟く。
「あら、もう始まりましたの？　レオンハルト様」
普段とは違い、人間の貴族の様な衣装を着た使徒――キャロルは〝

レオンハルトの幻影〟に向かって問いかけた。
今の彼女は、人類圏に潜入するための仮初めの姿であり、人間としての身分を持つ存在である。対するその主――レオンハルトは普段と変わらない格好ではあるものの、その気配は分身であることも含めて、格段に抑えられていた。
そんなキャロルの問いに、レオンハルトは頷く。
「ああ。やはり間に合わなかったな……まあそれならそれで、こちらも動くぞ。俺が一度魔物界に戻っているが、さすがに少し時間は掛かる」
「どう致しますの？」
「配下のライカンスロープとまねしたを向かわせろ。冒険者として、もしくはカラーとして潜入し、弱気なカラーを適当に攫ってこい」
「畏まりましたわ。ですが……弱気、ですの？」
ああ、とレオンハルトは頷きを入れる。
「本来なら差別主義に傾倒していない――と言いたいところだが、それを見極めるのは難しい。だから人に化けて……嫌悪感を抱いておらず、反抗の意志が無いものだけ攫ってこい」
レオンハルトのその命令に、キャロルは感心した様に声を漏らす。
「なるほどですの！　人間嫌いのカラーであれば嫌悪感か、もしくは気丈に抵抗してみせるはずですわ！　となると、怯えて弱気になっている者を攫えば解決ですわね！　さすがはレオンハルト様！」
「よせ。これも確実じゃない。確率が高い方を選んだだけの一種の賭けだ。暴動が起こっていることから考えると、身の危険を感じて必死に抵抗しようとする罪のないカラーもいるだろう」
頼まれた手前、そして良心から、出来る限りで罪のないカラーを救おうとは考えるが、その手段が中々に難しい。
自分が直接見れば、ある程度その者の内面を見抜くことの出来る自信はあるが、それを部下の魔物にまで求めるのは酷なことだ。末端にまで理解しやすい命令を下すにしても、これが限界だと言える。いや、これでも無理難題に近いものだ。実際に弱気で抵抗の意志を見せないからといって、差別主義者でないという保証はない。ただ、人間

を見て憎悪を覗かせ、激しく抵抗する者よりは可能性が高いというだけだ。
　もしくは、
「……それか、もしケッセルリンクやハンティ達と合流出来たなら、そちらの判断を仰いでも構わない。現場にいるあいつらの方が、判別は容易だろう」
「伝えますわ。では、早速代表を呼び出して――」
　キャロルがそう言って、動こうとする。しかし直前で何かを思い出した様に、
「あ、そういえば、もしその差別主義者？　を攫ってきてしまったらそのカラーはどうしますの？」
　キャロルが首を傾げて問う。レオンハルトは冷たい声で、
「……言わなくても、分かってるだろ？」
「……それもそうですわ！　申し訳ありませんの、レオンハルト様！　では早速、命令を伝えてきますわ！」
　完全に理解したのだろう、キャロルがはっと気づいた様に笑顔になり、ビシッと敬礼して部屋から退出していく。それを見送り、レオンハルトは憂いを吐き出す様に、息を吐いた。
「……後味の悪い一件になりそうだな」
　しかしどうしようもない。事態は動いてしまった。
　後はどれだけ零したものを掬い上げれるか。そういう戦いであると。

　レガリア・カラーは、目の前に広がる光景にふと――昔の事を思い出した。
　それは彼女がまだ、今の様な種族主義に傾倒していなかった幼い頃のこと。
　物心がついて最初に見た光景は、人間の父親と、カラーの母親が暮らす小さな家だった。
　レガリアの母親は人間と駆け落ちして森を抜け出し、外で暮らし始

めたカラーであり、父親は人間の元冒険者。
父は冒険の途中でカラーの森に足を踏み入れ、魔物に襲われて片腕を、右手首の先から失った。何とか魔物からは逃げることは出来たらしいが、森で迷い、体力も尽きて死ぬのを待つだけとなった父を、偶然森で薬草を採っていた母が見つけて看病したらしい。
それを切っ掛けに二人は出会い、恋に落ち、父の方から誘われて森を出た。それがレガリアが母から聞いた馴れ初めの話。
これだけを聞けばなんとロマンス溢れるいい話だろうか。出来ることなら、ここで話を終わらせてほしいほどである。
しかし、現実はそうはいかなかった。
結婚して子供を作り、父は商売道具である片腕を失ったことから冒険者を廃業し、別の仕事を探して母と娘であるレガリアを養うと言った――らしい。レガリアにはその時の記憶はないからそれが本当だったかは分からないが――そうだったとしたらふざけた話だと思う。
父の仕事は上手くいかなかった。片腕がないせいか、もしくは冒険者一筋で生きてきた今までの経験、はたまた本人の堪え性が無かったせいか――とにかく、父は仕事をクビになり、新しく見つけた仕事もトラブルを起こしてクビになった。
それでも、最初は出来る限り頑張ろうとしていたらしい。何度も仕事の宛を見つけて働いたが――何度もクビになり、やがて働き口が殆ど無くなった。
最初は冒険者時代に稼いだ貯金で生活出来ていたが、やがてその生活はどんどんと質素になり、貧しくなっていた。レガリアが成長し、物心がついたのはこの頃だ。
やがて父は諦め、仕事を探すこともしなくなり、家に籠もって酒に溺れるようになっていた。
母は父を説得しようとしていたが、父はそれに耳を貸すことなく母を殴りつけ、少ない貯金から酒を買いに行かせていた。
母は父に仕事をさせようとすることを諦め、自分で仕事を探した。
しかし母はカラーであり、人間とは違う。中々仕事は見つからな

かった。
だが、そんな母でも唯一需要があり、働ける場所がある。
それが身体を売る仕事。美しく、衰えることのない容姿を使った仕事だった。
母は自分を育てるために決心し、その仕事を始めた。
また父を、昔の様に優しい人に戻そうともしていた様に思える。そのためにも、お金が必要だったとも。
だが、自分を売ってまで家族の為に仕事をする母に対し、父はこれでもかと愚行を重ねた。
酒癖はどんどんと悪くなり、愚痴を吐いて母に暴行を加え、遂には娘の私にまで暴力を働いた。
母がいる時は母が庇ってくれていたが、その後に目にするのは父が嫌がる母を犯す光景。目を背けたくなるほどの現実を、まだ生まれて一年か二年といった頃に目の当たりにした。
母がいない時は暴力を受け、外に酒を買いに行かされた。しかも帰ってくると、父は別の女の人を連れ込んでいたり、出かけていて、やはり別の女性の匂いを染み込ませて帰ってくることがあった。母が幾ら働いても、そのお金の殆どは酒と女に消え、家は裕福にはならなかった。
そしてそんな日が続いたある日のこと。父が大金を持って、珍しく外から美味しい料理を買ってきた。しかし母は血相を変えて詰め寄った。どこからこんな大金を持ってきたのかと。
父が持ってきたそれは、商会から借りてきたもの――つまり借金であった。
冒険者時代の伝手から紹介してもらい、言葉巧みに金を借りてきたのだという。これには母も絶望した。
一時的に生活は裕福になったが、直ぐに前と同じ――いや、前よりも酷い生活を送ることになった。
母は借金を返すために仕事の時間を増やし、家にいない日が多くなった。だが、家にいる時はいつも私に勉強を教えたり、一緒に遊んでくれていた。

その半面、父はどんどんと醜くなり、そして相も変わらず愚行を重ねた。暴力は激しくなり、母が他の男に抱かれていることにも腹を立て、性行為の最中にも暴力を振るうようになった。
それがエスカレートし、とうとう母も、森に帰ろうかと私に相談した翌日――母は亡くなった。
父に暴力を振るわれ、酒を買いに行き、帰ってくると、母は犯されており、暴力を振るわれていた。母は、いまにも死んでしまいそうなか細い息を吐いており、子供ながらに母が危険な状態にあることが分かった。
父に掴みかかって止めるように訴えたが、廃業したとはいえ、元冒険者である父の力は強く、私は床に倒れた。
痛みに悶絶して床に蹲る中、不意に物音が消えた。
何があったのかと視線を向けると、そこには動きを止めた父の姿。
止めてくれたのか、と一瞬だけ期待した。――しかしそれは間違いだった。
母は死んでいた。
死んでしまったからこそ、父はそれを一度止めたのだ。
私は泣きながら母の死体に向かい、母を呼び続けた。
父は呆然としていたのだろうが、そちらには目もくれず、何度も母を呼び続けた。
しかし何度呼んでも母は血を流したまま意識を起こさない。既に死んでいるからだ。手遅れだ。
それを半ば理解しながらも母を呼び続けていたその時――不意に身体を床に倒された。
仰向けになって見上げた先には、血走った目でこちらに欲情した様子の父の醜い姿。
父は言った。――今度はお前を孕ませて、お前を働かせてやる、と。
錯乱していた、のだとは思う。が、父の目は本気だった。
もはや正気を失った父は、今度はこちらを犯しはじめた。
まだ未成熟な子供の身体を、無理矢理貫き、快感に震える父。
私は激痛に泣き叫びながら、止めてと訴えた。母を呼び続け、同時

に助けてと訴えた。
しかし救いはなかった。行為を終え、下から赤いものと白いものが流れ落ち、額には青いクリスタルが残った。
その頃には、もはや何もかもを諦めていた。
もう自分は死ぬんだ。いや、もういっそ殺して欲しい。どうなっても構わない。どうせもう母はいなくなったのだから。
茫然自失し、天井を見上げていると、再び音がした。
そして、またしても目にしてしまった。その醜い、鬼畜の様な所業を。
父は、母に向かって腰を振っていた。
母の亡骸に向かって、今まで頑張ってきた母の死体に向かって、その下卑た欲望を満たそうとしていた。
――その瞬間、眼の前が真っ赤になったような気がした。
頭が沸騰するような、それでいて心が冷えるような感覚。
その衝動のままに、私は何かを手にとって無意識のままに父に振り下ろした。
父が、悲鳴を上げて床に倒れる。しかしもう一度振り下ろした。
やめてくれ、と訴えるような声が聞こえた気がする。だが、止めることはなかった。
気がつけば、声は聞こえなくなり、肉を抉るような鈍い音だけが室内に木霊していた。
ふと腕を止めると音は無くなり、自分の手は真っ赤に染まっていた。
暗い部屋の中で、母が身だしなみを整えるのに使っていた鏡で自分を見る。
そこには、手にナイフを持ち、全身を返り血で真っ赤に染めた自分の姿。
その額だけが青く輝いた、子供の姿だった。
母が殺され、父を殺した。
そう認識することに、時間は掛からなかった。自分でも驚くほどに、脳が現実を処理していた。

私は母が死んだことに涙を流したが、直ぐに何かに駆られるように、お金を持って家を出た。――今思うと、ここにいては不味いことになると察したのだろうと思う。

家を出て、血を近くの井戸で洗い、駆られるようにある場所を目指した。

子供であることを利用しながら、幸いにもその場所に辿り着いた。

カラーの住処である森。そこに着いた私は、直ぐに巡回していたカラーの防衛隊の人に保護され、集落に連れてこられた。母以外の同族の姿にホッとして涙を流した。

集落に着くと、集落の長だというカラーの元に連れていかれた。自分の事情を話すと、まるで自分のことの様に悲しんでくれた。

聞くと、どうやら母はこの長と姉妹であったらしい。自分が森を出ていくことを止めなかったばっかりに、と悔やんでいた。

そしてこうも言った。――よくある話だと。

私は疑問した。これが、よくある話なのかと。

長は頷いた。何でも、カラーが人間と駆け落ちし、酷い目にあって死んだり、帰ってきたり、子供だけ帰ってきたり、というのはよくあることであるらしい。

だからこそ、人間とそういう仲になっても、森を出ることは基本的に許していないらしいが、どれだけ止めても恋に舞い上がったカラーの意志は堅く、森を出ていこうとするものが後を絶たないと言っていた。人間は危険なのだと。

それを聞いた時、頭は冷えた。

こんなレベルの話が、よくある話だと言う。

――そんなことがあってたまるかと。許されてたまるかと。

自分の様な思いをしているカラーが他にも沢山いて、これからも出てくるかもしれない。

あの父の様な、醜い人間と関わる限りは。

私は変えなければならないと思った。人間への憎しみと、一人のカラーとして使命感を感じたのだ。

だから私は、その夢を長に語った。すると彼女は頑張ってほしい、

応援すると言ってくれた。
それから私は、新しい長になるために必死に勉強し、身体を鍛えた。
幸いにも、私には才能があったらしく、その能力はどんどんと伸びた。
程なくして成体になった頃には、集落で私に敵うものはいなくなった。
そんな頃、長は変化の時を迎え、この世を去った。
私は悲しくなったが、それ以上に、次の長に私を指名してくれていることに喜びを感じた。
これであの醜い人間をこの世から消し去り、カラーの繁栄を成すための道を踏み出すことが出来ると。
だから私は、藤原家の誘いを蹴り、隙をついて人間の土地を支配することにした。
あの醜い下等種族を、これ以上この世にのさばらせておく訳にはいかない。奴らは悪魔であり、優しくすると付け上がる生き物だ。徹底的に管理し、増長しない様に苦しめて管理しなければならない。滅ぼすなり何なりは後からでもいいのだ。
そして私は、カラーの繁栄のために様々な知識を付けつつ、行動に移した。過去のことや、魔王や魔人の事を知り、カラーを保護するには魔人になってしまうのが確実だという結論に達した。誰も逆らえない様な強大な力を持つ存在になれば、幾ら人間だろうと襲ってはこないし、襲ってきても返り討ちにすることは容易い。だから何処かのタイミングで魔軍に接触し、交渉する必要はあると思った。人類を支配し、その見返りに魔人にしてもらう。それを約束し、前借りとして魔人にしてもらう――というのは出来過ぎだが、その様な計画を立てていたのだ。
もうすぐで、全てのカラーが安心して生活出来る理想郷が完成する。その目前まで迫ったはずだった。
――私が目にしたのは、人間に苦しめられる同胞の姿だった。

カラー王国首都で起こった奴隷達の反乱に、ようやく鎮圧の指示を出し始めた頃、女王であるレガリア・カラーは、王宮を闊歩し、こちらに向かって歩いてくる者達を発見した。
「あ～～～あぁ……、とんでもないことになっちゃってますねー？」
「！　貴方達は――」
薄めていた目を見開く。
そこにいたのは人外の存在感を放つ魔の集団。
その殆どが額にクリスタルを持つ、元カラー。
魔人と使徒。レガリアが呼び寄せた一行がそこにほぼ揃っていた。
ただ一人、確認したはずの、ある魔人の姿を除いて。
だが、それでも彼らの圧倒的な力は感じられる。レガリアは背筋を震わせた。喜びのものだ。
そしてその脳裏に彼らを利用することを思いつき、即座に実行に移そうとする。中には裏切り者である元同胞の姿もあるが、そのことに対する憎しみは表には出さず、にこやかな表情で、
「ようこそおいでくださいました。ケッセルリンク様に、ペール様。それに、始祖様であらせられますね？」
「……あー、はいはい。そんな感じですよー」
それ以外のものは無視して挨拶する。だが反応は芳しくない。口を開いたのはおそらく、ペール・カラーと思わしき人物だけで、それ以外は無言のまま冷たい瞳をこちらに向けている。そのペールも、対応はどこかおざなりな様子だ。
やはりこの状況が良くないのだろうか、と思う。元カラー、それも元女王ともなれば、カラーの集落が人間に襲われている状況は眉をひそめたくなるだろう。
しかしそうであれば、これから行う提案も協力してもらえる可能性が高いと、レガリアは笑みを深めた。
「……本来であれば、歓迎の御用意をさせて頂くところですが、今は見ての通り、非常事態でして。直ぐに我が精鋭達が鎮圧に成功するかと思いますが――」
と、そこでレガリアは憂う様な表情を見せる。

民を心配する一人の為政者としての顔。勿論、まるっきり嘘というわけでもないが、やや過剰に演出してみせるのがコツだと。
「……今この時も、罪のない我々の同胞が苦しめられています。そこで、どうでしょう。差し出がましいお願いであることは重々承知でありますが、ここは一つ、偉大な先人達の力を、お借り頂けないかと――」
「――あ、そういうのいいんで」
「……はい？」
こちらの言葉を差し止めるかの様なペールの拒否の言葉に、レガリアは首を傾げてしまう。思わず問い返し、
「……ですが、我々の同胞が苦しんでいるのですよ？」
「いや、言いたいことは分かりますけど一応は元ですし。というか何か期待してるみたいですけど、別にペールちゃん達は手助けをしようと思ってきたわけじゃなく、単に貴方の顔を見に来てみただけですよう？」
「な――」
ペールの言葉に絶句しかけ――しかし、ぐっと堪える。
言葉を飲み込み、ペールから目を逸らし、今度は黒髪のカラーに顔を向ける。
「……始祖様は手伝ってくれませんか？　私達は、貴方様の可愛い末裔、謂わば子供の様なものですよ？」
「……じゃあ、何で……」
黒髪のカラーはカラーの始祖である証。そのことを引き合いに出したレガリアだが、当人であるハンティは歯を噛み締めて憤るように言葉を絞り出す。
「何で……あんな馬鹿な事をしたのさ……!?」
「？」
馬鹿なこと？　と、レガリアが疑問符を頭に浮かべる。はて、心当たりがない。何かしでかしてしまっただろうか、と。
「えっと、申し訳ありませんが、心当たりがありません。馬鹿な事とは一体何でありましょう？」

「っ……人間を、奴隷にしたことだよ！」
「！　……あー……それのことですか」
　直接的に言われてレガリアもようやく気づく。そして理解する。どうやら始祖様はそっちの方だったか、と。レガリアは呆れ返り、息を入れると、
「……それの何が悪いんですか？　カラーにとって、人間は敵。外敵でしかありません。カラーを守るために奴らを支配し、滅しようとすることは女王として当然ですよねぇ？」
「だからって、こんなやり方は――」
「奴隷ってとっても効率的ですよぉ？　とっても生産的ですし……そういうのは、魔軍だって知ってますよねぇ？」
「っ……それは……」
　ハンティが語気が弱まる。どうやら始祖様は偉大で力が強くとも、話術や腹芸の方はそこまで得意ではないようだ。どうにも直情的に見える。
　これなら交渉がしやすいな、と内心でほくそ笑むと、表では真逆の様子を醸し出した。
「いえ、責めてるわけではないんですよ？　理解してほしかっただけです。魔軍の行動も、私は批判してません。なにせ――過去にもカラーの集落を守ってくれた恩人ですからね」
「！」
　僅かに驚きを見せるハンティ。知っていたのか、と言った様な表情だ。
　無論、レガリアは知っている。過去の文献は読み漁った。その中の記録の一つに、人間の軍勢からカラー達を守った魔人や使徒達の記録が残っている。
　だからレガリアは、魔軍の事は嫌悪していない。むしろ、人間を苦しめる仲間だと思ってるくらいだ。
「魔軍とは、同盟国――とまではいかずとも、中立として今まで敵対しないでくれましたよね？　詳しい意図は知りませんが……おそらくは、皆様が働きかけてくれたのでは？」

「……」
沈黙が帰ってくる。しかし、沈黙は肯定を意味する、とはよく言ったものだ。その意志は手に取るように分かる。
「であれば……中立の立場として、少し交渉を受けてもらうくらいは構わないのではないでしょうか。そちらとしても悪い話ではありませんよぉ？」
「……例えば？」
ペールの問いかける言葉に、内心で笑みを深くした。乗ってきた、と。
それを覆い隠しながら、レガリアは言う。それは、
「そうですねぇ……例えば……我々が近い内に人類圏を支配します。それを、魔軍に献上致しますので、代わりに魔王様の配下にしてもらい、カラーの管理官としてもらうというのは……？」
言った。
あくまでも仮定のやり取りではあるが、その目的を伝える。
それを聞いて、ペールは満面の笑みを浮かべてくれる。レガリアが期待し、顔を綻ばせる。その答えは、
「――――馬鹿なんじゃないですか？」
拒絶だった。

王国の最後

ペールの明確な拒絶は、王宮の廊下に酷く響いた。
それほど大きな声は出していない。というのに響いたのは、やはりレガリアがその言葉に衝撃を受けているからであろう。相手の内心は理解出来る。読心術――というほど、大層なものではないが、やはりこれほど長生きし、多くの物事を見て経験を蓄積すると多少なりとも分かってくるのだ。
……随分と可愛い反応ですね？
そこで衝撃を受けていることに、ペールは相手を哀れとも思い、同時に愉悦が湧いて口端を吊り上げてしまう。やはり自分でも知らない内に怒りを覚えていたのだろう。もうそこまでカラーに対しての情はないと思っていたが、そうでもないらしい。自分は使徒で、カラーはカラー。相手のやり方にどうこう言うのは内政干渉だ。愚痴程度に話すならともかく、今更関わることもない。だが、
……それにしても酷いです。
ペールはこれでも、過去にカラーの集落を治めていた。眼の前の今の女王程、大した実績を残してはいない。ただ必死に集落を良くしようと頑張っただけ。公的な仕事が上手くいくように調整、各種担当との折衝役を務めたり、生産性を少しでも向上させようと、自然を大切にしようというカラーの勢力に必死に頭を下げて利を解き、交換条件を出して畑を広げた。森を攻めてくる人間に対抗するため、侵攻ルートを読んで防衛戦を築き、自身も前線に出て戦う時もあったが、やはり主に行っていたのは地道な内政だった。人間の領土に攻め込んで領地を広げるなどやろうともしなかったし、おそらく出来なかったであろう。それほどに国力に差があったのだ。
だがペールは、それでも良かったし、自分の成した仕事に自信を持っている。自分の代で成せた事は少なく、それほど大きく変わったわけではない。
だが、少なくとも集落を守りきり、少しでも畑を増やし、カラーの数が増えても、誰もお腹を空かせることなく生活出来る。自分が成し

たことといえば細かいものを除けばこれくらい。地味なものだ。
後のことは問題も含めて次の女王に託したし、それが出来たからこそ、自分は胸を張って好きな人に会いに行ったのだ。
もっとも、今思えば改善点は思い浮かぶ。それは、ペールが更に成長した証だった。
自分の政治力、これに関して、ペールは仲間内の中でもそれなりのものだと自負している。
ハンティは、あれで情に厚いため、甘い対応をしたり、非情になろうとして出来なくて、物凄い悩むことがある。
キャロルは命令通りに何でもこなすし、ある程度なら融通も利くが、たまに暴走する。後、命令に真っ向から反することだけはやらないし、レオンハルトが白だと言えば絶対に白だと言い切ってしまう。
レオンハルトだって優秀で、その判断は大体が的確かつ適当なものだが、それでも完璧ではない。たまに無意識で、厳しさを他人に強いることがある。レオンハルトにしてみれば、苦労は自分が請け負い、弱者には最低限の仕事を任せてるつもりだろうが、その最低限の水準が高いので弱者は苦労するのだ。そういう時はそれを指摘すると、レオンハルトも考えた末に調整してくれる。
まあ上手く飴と鞭で頑張らせているのもある上、こんな世の中だからこそ、レオンハルトの配下というものは皆その恵まれた位置から離れたくないので必死に頑張るのだが、これも一種の独裁政治だろう。
力ある者が、それを背景に配下を従わせる。トップが有能であれば通じるが、自分達の様な弱者では不可能であり、色々と妥協して動く必要がある。自分の器を出る分不相応な望みや、企みをすれば先に待つのは破滅だ。それを、このレガリアというカラーは犯している。
だからペールは、それを自分の考えを元に馬鹿だと切り捨て、その先を指摘した。
「――いいですか？　ちょっとあんまりにも馬鹿な発言なので言いますが……別に人類の支配、ましてや領土なんて交渉の材料になり得ませんよ。それ、分かってます？」
レガリアが浅く眉を立てる。あ、その反応は分かってないですね、

と。
　そもそも分かってないからこういうことを言うのだ、という理解もあるが、それを承知で虐めてやろうとペールは続けた。
「魔軍は人類圏なんていつでも支配出来るんですよ。なのにそうしようとしないのは、それが魔王様と、魔軍を預かるレオンハルト様の意向だからです。レオンハルト様はともかく、現魔王のナイチサ様は、人類がどうなろうと興味が無いんですよ」
「そんな……そんなのあり得ません！　魔物の統治者として君臨しているのに、領土を広げることを望まないなど……例え人間に興味がなくとも、民の為に、今ある現状よりも発展させようとするのが王の役目です！」
　レガリアが薄い目を見開いて意見を発する。その意見は確かに分かる。それは国を治める統治者としては正しい意見だ。
　だが、そうではない。自分達がおそらく永久に理解出来ない思考が、魔王や魔人達の頭の中にはある。それを本当の意味で理解することは出来ないが、事実として理解していることをペールは言う。
「そもそもその考えからして違うんですよ。それはあくまで――国を支配する王の意見です」
　だが、魔王は違う。大陸を支配する王達の考えは違う。それは、
「魔王というのは、世界を支配してるんですよ？　つまりは大陸の支配者です。その箱庭の中で、誰と誰が戦争し、繁栄し、滅びたなんかどうでもいいんです。だってそこはそもそも魔王が支配する土地なんですから」
「――！」
　レガリアは言葉を失う。ようやく理解したようだ。
　そう、これこそが、自分達の様な凡人とは違う本当の支配者の考え。以前、レオンハルトが語り、教えてくれた論を、ペールは語る。
「魔王様からすれば、人間や他の種族なんて自分が持つ土地を間借りさせて遊ばせてるに過ぎないんですよ。普段はその土地を取り合ってる人間の姿をワイン片手に眺めて、気が向いたら遊び半分で殺し、奪い、恐怖を与える。そもそも私達が敵国や他種族に抱くような敵意

なんてありません。人間なんかは魔族を敵と見做してますし、魔物の殆ども、自分達を人間の上位だと認識してますけど、戦いの相手だという意識はあります。でも多くの魔人や、魔王様にはそれがありません。――分かりますか？　自分達の存在を脅かす〝敵〟と見做されてないんですよ」

「そ……そんな……馬鹿なことが……」

レガリアが青褪めた様子で言う言葉を、ペールは残酷にも否定する。

「あるんですよ。それほど、力の差があります。それが現実です。――魔王様や多くの魔人の方々にとって、人間やカラーなんて欲求を満たすための遊び道具なんです。中には、そうじゃない魔人の方もいますけど……まあ、どちらにしてもこの世界で少しでも幸せに生き延びようとするなら、本当に強い存在に寄り掛かるか、自分の器を出ないように謙虚に生きるしかないですね」

ま、それでも死ぬ時は死にますけど。と言うと、レガリアだけでなく、ハンティやエルシールなんかも微妙な表情になる。こんな救いの少ない世界の現状を、既に知っていることを聞いても面白くないだろう。そこは申し訳ないと思う。

しかしそれが現実だ、とペールは改めて突きつける。

「国を広げて世界を支配する。自分達こそが世界の覇者だ～……なんて願いは妄想にしかならないんで止めた方がいいですね。世界は魔王様みたいな本物の怪物が支配してるんですよ。私達なんて、その怪物の気まぐれで一秒と掛からずに殺されちゃいます。……そんな大陸を支配する魔王様が、自分の支配する土地を我が物顔で――〝この土地を差し上げますから魔人にしてください〟。なんて言う人をどうすると思います？　――地獄を見ると思いますよ？」

「あ……う……」

レガリアが口をパクパクさせながら僅かに後退る。怯えているようだが、自分の言はおそらく間違ってないだろう。

ペールは魔王ナイチサのことをそれほど知っているわけでもないし、直接話したことはほぼ皆無だが、レオンハルトから聞く限りはそ

のような印象だ。
　おそらくは一度は笑ってみせるが、その後で激怒し、とてつもない責め苦を受ける羽目になるだろう。人間を下に見ているナイチサだ。カラーの長如きがそのような事を提案したら、カラーを丸ごと滅ぼそうとしかねない。
　ここでレガリアの野望が潰えて正解だった、とペールは一度息を入れる。というかそもそもだ。
「大体、人間を奴隷にするとかもうね……個人的にダメダメですよ。まあ、国を守るために先制攻撃して外敵を排除するのはいいんですよ。貴方が言うように、それは為政者の権利、役目ですし、どんな方法を取ろうと一応の自由はあります。その内容が良いか悪いかは別として、その努力は認めます」
　実際、これほど国を大きくした手腕は認めてやってもいい。これで何もなければ、ペールはレガリアを絶賛したことだろう。
　だが、
「そんでまあ、奴隷は最悪ですけど、一番腹が立つのは、逆らったからといって、同族まで手に掛けてる辺りがムカつきますね、何様って話ですよ」
「ペール様……」
　クライアが背後から視線をこちらに向けてくる。それを気にせず、ペールは憤りを吐き出した。
「そもそも人間を舐めすぎですよ。人間ってのは凄い厄介です。特に、数の多さはカラーでは太刀打ち出来ません」
「っ……それ、は……数を増やして――」
「はぁ？　数を増やすぅ？　舐めてるんですか？　前にレオンハルト様から聞きましたけど、人類ってのは全部でおおよそ3億はいるらしいですよ？　それに対して、カラーの人口はどれだけいるんですか？
　多少増やしたところで、3億に対抗出来るほどの数はいませんよね？　頭沸いてるんですか？」
「ちょっと、ペール……」
　ハンティが声を掛けてくるが、止まらない。

「それで対抗出来ないのは自明の理です。であれば、人類全てを敵に回すような行動は避けるべきですよね？　なんか自分の実力に自信があります！　みたいな顔してますけど、貴方なんて世界全体から見れば雑魚ですよ？　ましてや集団に勝てるほどじゃないです。魔人になる夢を見すぎて魔人になった幻覚でも見てるんですか？」
「あの、ペールさん……？」
　エルシールが声を掛けてくるが、それでも止まらない。ペールが口撃を続ける。
「権力者になると自分が強いとか錯覚しそうになるんですよねぇ～。でもそうじゃないんですよ。確かに権力というのはある種、力の一つですけど、絶対的な力ではないですよね？　頭を刺したら死にますし、心臓が潰されても死にます。そもそも集団から排斥された時点でその力は無くなります。別に倒す方法なんて幾らでもあるし、権力にはそこまでの力はないです。権力ってのは集団の上に成り立つ力ですよ？　幾ら権力があろうと、個の上では矮小な存在でしかない。権力者ってのは、それを自覚しないといけないんですよ。権力があるからと自分が世界一偉いと錯覚してる馬鹿は、本当に強い人達の癪に障って破滅します。それも分かってないのに、よく今まで女王なんてやれてきましたね？」
「ペール……」
　ケッセルリンクが名前を呼ぶ。しかし止まらない。もはや完全に火がついたペールは、レガリアの精神をとことん攻撃する。
「しかもさっきは馬鹿の癖にケッセルリンク様や始祖様になんか失礼なこと言ってましたよね？　ん？　よくそんな態度取れますよね。言っときますけど、貴方の百倍は偉くて強い偉大な祖先ですよ？　貴方みたいなミジンコが、対等に話していい存在じゃないですからね？　ん？　何ですかその顔？　何か言いたいことがあれば言っていいですし、ムカつくなら殴りかかってきてもいいですよ？　やってきたらやり返すだけですし。元同族だからって手心を加えてもらえるなんて思わないでくださいね？　でも良かったですねー？　ペールちゃん、割りと容赦のない方ですから、あらゆる手段を使ってボコボ

コにしてあげますよ？　ええ、実力はそこまでじゃないですけど、ちゃんとボコボコにしてあげます。感謝してくださいね？　さっき貴方の部下がレオンハルト様に攻撃してましたし、この場にキャロル先輩いたら拷問フルコースですよ？　私達みたいに元同族とかいう意識ないですから、一切の慈悲もなく、淡々と苦しめてきますよ？　それに比べたらペールちゃんは優しいから良かったでちゅね～？　半殺しくらいで許ちてあげまちゅよー？　どうせ、私達がやらなくても――」

「――ちょっとペール！」

「っ、と。何ですか始祖様？　どうかしました？」

ハンティが大声で呼びかけてきたので、そちらに反応する。愉しいところだったのだが、

「もういいでしょ。他にやることもあるし……そろそろ行くよ」

「……それもそうですね」

どうやら昂りすぎていたようだ。ちょっと失敗。自分達にはまだやるべきことが残っている。

有無を言わさずにこの場を後にしようとするハンティを追いかけるべく、俯くレガリアを尻目に、

「……始祖様が優しくて良かったですね？　ま、後は精々頑張ってください」

「……」

最後に応援の言葉を掛けて、その場を後にする。

皆で王宮の回廊を行き、外に向かうが、ペールは気になってふと、横のケッセルリンクに話しかけた。

「……何か言わないで良かったんですか？」

「……構わない。私には、掛ける言葉が見つからなかった」

そう言うケッセルリンクの表情は、少し悲しそうだった。

この方も、大概優しいお方だ。元同族が苦しめられていること。そして、それをなしたのも元同族であることに、単純に悲しんでいるのだろう。

普通であればあの場で怒って女王を殺してもいいはずだ。もしそ

うしたのならペールは止めないだろう。
だがハンティもケッセルリンクも優しい。怒りはあっても、それ以上に悲しむことが出来るのだ。自分の様に、ただ怒りが先行してしまう普通の人とは違う。
そんなことを考えていると、今度はこちらの背後から声が来た。
「あの……ペール様……」
「？　何ですか？」
その声の持ち主はクライアだった。彼女は歩きながらではあるが、頭を下げて、
「……ありがとう、ございました」
「……いえいえ。別にペールちゃんは、自分のために怒っただけですし」
「それでも……ありがとうございます。私なら、あれほど強く、意見を言えませんでしたから……」
「……そうですか。なら、ありがたく受け取っておきます」
言って、今度こそ正面を向いてハンティを追いかける。顔を戻す際に溜息を漏らし、
……ほんと……皆が優しくて良かったですね？
ただそれが彼女の幸いに繋がるかは微妙なところだ、とペールは肩を竦めて先を急いだ。

魔物界の南側。カラーの森が近い前線司令部で、レオンハルトは一息ついていた。
外に並んだ大勢の魔物兵。魔軍の部隊を眺め、こちらの横にいる指揮官に声を掛ける。その相手は、
「急な呼び出しに応えてもらってすまないな、バルカ」
「いえ、これも魔軍の将としての務めでありますから」
真面目にそう言い返すのはケッセルリンク軍を預かる魔物大将軍バルカだ。
そう、ここにいるのはケッセルリンク軍。そこに所属する軍団だ。

というのもレオンハルト軍が主に駐留するのは魔物界北東部であり、カラーの森からは距離がある。そこまで一々戻ってる時間はない。一番近いのが、魔物界南側、人類圏における北側を主に拠点とするケッセルリンク軍しかなかった。
カミーラ軍は西側であるし、ケイブリス軍は東部の最前線。それ以外の魔人の軍も今は特に動かしていないか、同じ様に適当な占領地で遊んでいるだろう。
なのでバルカを呼び出してケッセルリンク軍を動かした。元々自分の権限で全軍を動かせる立場にはあるが、特にバルカは何も聞くことなく迅速に動いてくれる。
何のために動くか、というのはあまり興味がなく、単純に戦争をして自身の戦略、戦術を試したいというのがバルカだ。ある意味で誰よりも戦争狂いともいえる。
だが今回は特殊な状況だ。それを何度も念押ししておく。
「分かっているな？　今回は、カラー王国を攻める人間を横から潰し、その勢いのままにカラー王国も占領する」
「つまりは包囲殲滅ですな！　私の得意分野ですとも！　お任せください！」
拳を握って気合いを入れているバルカ。案の定分かってなかった。もう一度訂正する。
「包囲はするが殲滅はしない。カラーは出来る限り捕縛するぞ。アレは使える」
と、資源であることを匂わしておく。クリスタルの事実は既にバルカにも伝えてあるから、さすがにそれを無視することはしないだろう。
「むぅ……しかし、それでは新しい戦術が試せませんぞ……」
物凄く残念そうに言うバルカに、レオンハルトは溜息を吐いた。仕方ない、と、
「……人間であれば好きにしていい」
「！　おお！　それならば！」
「ただし、カラーは捕まえろよ。抵抗する奴は殺しても構わないが、投

降してきた時点で全員捕虜にする。その後で〝分別〟するからな」
「承りましたとも！　ふふ……待っていろよ人間共……将棋から編み出した私の天才的戦術の実験体になってもらう……！」
「……程々にな」
「分かっておりますとも！　レオンハルト様とケッセルリンク様の為にも、必ずや、我が軍は戦果を上げてみせます！」
「……ああ」
戦闘意欲が高すぎて不安なバルカに頷きながらも、レオンハルトは魔軍を率いてカラー王国へと進撃を開始した。

カラー王国に於ける奴隷の反乱。それを引き金に、オピロス国を中心とする人類諸国はカラー王国に攻め込んできた。
首都や各地の奴隷の鎮圧に時間を割き、状況の把握に遅れたカラー王国は初動で充分な迎撃の準備を行うことが出来なかった。
その間に、人間達は東側と南側。両側からカラー王国に攻め入り、競い合うように前進してくる。
事実、彼らは競い合っていた。大陸中央部の肥沃な土地と、カラーという新資源。権益を巡って彼らはカラー王国を蹂躙した。
遅れてカラー王国も防衛戦を行うも、その勢いに飲まれて次々と部隊が壊滅し、街を占領され、カラー達が捕虜となっていく。――その最中、何人ものカラーが集団で行方不明となる事件もあったが、それを気にしている余裕は両勢力とも無かった。
特にオピロス国の勢いは凄まじく、地方を後回しにして早々に首都にまで攻め入った。
女王レガリア・カラー率いる親衛隊も軍と一緒に必死に戦ったが、数の上で圧倒的に勝る人類国家に敢え無く敗北し、女王レガリア・カラーは捕らえられる。
オピロス国を盟主とする人類軍が勝利し、カラー王国の土地と権益は人類国家のものとなるとそう思われた。
しかし、その直後――北側より攻め込んできた魔軍に、人類は大打

撃を受ける。
カラー王国との戦闘直後で疲弊していた人類諸国に、その土地を守り通す余裕はなく、被害を出しながらも次々に本国へ撤退していく。
特に魔人レオンハルトが攻め込んできているという情報を受け、人類諸国は完全にカラー王国側からの撤退を決意。
カラー王国を滅ぼしたという結果だけを残し、後は魔軍が撤退した後にでもその土地を実効支配してしまえばよい、と、国境に大軍を留め置きながら様子を見ることにした。
人類圏に於ける覇権国家。黄金時代を築き上げたカラーは、その資源としての価値が見つかったことにより、暗黒時代を迎えることとなる。
そして、その引き金を引いてしまった女王――レガリア・カラーは、歴史の闇に葬られた。

オピロス国がカラー王国首都を攻め落とした直後。人間の兵士や奴隷達は、首都を占領し、資源を活用するための準備を進める。
それは、魔物も苦笑いを浮かべそうなほどの――凄惨な光景だった。
「ははは！　おら！　まだまだ終わんねぇぞ！　次だ次！」
「いやぁ……もうやめて……」
「これは正義の行いだぜぇ！　今までさんざん虐めてくれやがってよぉ！」
「ごめ、ごめん、なさいっ……！　あやま、あやまるからぁ……！」
「誰が許すかよボケが！　てめぇらはもう犯されまくってクリスタルの価値を高める道具だ！　おら、人間様を最後まで喜ばせろよ！」
「い、いや……クリスタル、だけは……いやあああああぁぁ――!?」
街のあちこちでカラー達の悲鳴と苦痛の声。腰を打ち付けるような音や、水音、断末魔が連続する。
そしてこれを正義の行いだと言って行う人間達。仮にも人類種に属する者達にする仕打ちではないが、今まで奴隷として扱われてきた

事実が、それを正当化させる材料となる。
犯せば犯すほど、カラーのクリスタルの価値は高まる。国は富み、持ち帰ったものはその後の生活が楽になる。
怒りもある。奴隷扱いされてきた報いだと、奴隷達は叫び、兵達もそれに便乗する。
美しい女しかいないカラーを犯せる快感や、暗い悦びもある。やりたい放題であり、しかもそれが罪になることはない。男達は精が枯れ果てるまで行為に没頭し、枯れ果ててもその欲望は収まらず、休憩してからまた再度その催しに参加する。
森の奥や、各地に集団で逃げるカラー達もいるが、戦う力はない。追手が放たれ、捕まるのも時間の問題だ。資源としての価値が示され、しかもそれを正当化することが出来る。人間は止まることはない。死してなお、その全てをしゃぶり尽くすまで、使われることだろう。
そしてその責め苦を、最も受けようとする者がいた。それは、
「この……豚共……！　美しい、カラーの、女王に対して……離せ！　離しなさい！」
女王レガリア・カラー。彼女は屈強な男達数人がかりで捕まえられ、必死に抵抗していた。
「っと。ああもう、うっせぇうえに力が強ぇなぁ。大人しくしろよ」
「それとも、達磨にでもされてぇか？」
「っ……この下衆……」
男達の脅しに、顔を青くして力が弱まる。悪態をついているが、その表情に最早余裕はなかった。
「その言葉、そっくりそのまま返すぜ。カラーの女王様よぉ。てめぇはとくに酷く犯していいって言われてるからなぁ」
「奴隷達も、お前をヤラせろって言う奴が多いらしいぜ？　よっぽど恨みを買ったんだな」
「ま、これも戦争の常だ。恨むんなら、自分の弱さを恨むんだな」
そう言って、男達は一斉に準備を始める。
それを見たレガリアが〝ひっ〟と短い悲鳴を上げた。

「や、やめ……やめなさいよぉ……わ、私に、こんなことして、ただで済むと――」
涙目になり、声を震わせるレガリアの肉体を、男達は一斉に乱暴しはじめた。
「い、嫌ぁあああ!?　やめてぇ！　触らないでぇ!!」
服を強引に破り、その裸体が晒される。
その肌は滑らかで美しいものであったが――痣のようなものが幾らか見受けられた。
「あぁ？　何だ？」
そのことに若干の違和感を感じつつも、男達は攻め手を止めない。
いやいや、と叫ぶレガリアの声も虚しく、その身体を誰かが貫いた。
「あああああああああっ!?　嫌、嫌ぁあああああ!?」
「うっせぇなあ……ちょっと黙ってろよっ！」
「ぐうぇ！」
男の拳が腹に突き刺さる。くぐもった声を漏らし、僅かに静かになったところで、再びそれは再開されるが、
「あ、あ……！」
レガリアは脳裏に昔の経験をフラッシュバックする。
男に組み伏され、苦しみを得ていた幼少期を思い出す。救いのない光景。暗い世界。それを再び感じ取り、レガリアはとうとう泣き叫んだ。
「――い、いやぁあああっ！　ママっ！　ママァ！　助けて！　助けてぇっ!!」
「あ？」
急に訳のわからないことを言い始めたレガリアを見て、男達の眉間に皺が寄る。
しかしその言動は止まらない。まるで幼子のように彼女は母を呼んで泣き叫ぶ。
「ママぁ、ママぁ……！　助けて……！　死なないで……！　ママぁ……！」
「何だこいつ。急にママとか言いやがって……」

「はっ、頭がおかしくなっちまったか？」
男の一人が嘲笑混じりにそう言うが、間違ってないとも言える。
レガリアの精神は過去を思い起こさせるような状況で極限状態に陥り、幼い時のトラウマを呼び起こしていた。
だが、助けは来ない。男達は、むしろより激しくなる。
「まぁ愉しむのに支障はねぇだろ。むしろ興奮するぜ」
「おら、もっと良い声で泣けよ！」
「やめてぇ！　良い子にするからぁ！　何でもするからぁ！　助けてぇ！　ママっ……！　ママあ……っ！　ママぁああああ……！」
「ははは！　おめぇのママも今頃どこかで喜んでるかもなぁ！　もしくはもうこの世にいなくなってるだろうぜ！」
「いやぁああ！　ママぁあああああ！　ママあああああああっ!!」
「安心しな！　てめぇも直ぐにママの元に送ってやるからよぉ！」
レガリアは母の名を呼びながら、泣き叫び続ける。
しかし止まらない。
それは幼き頃の再現であった。
二度と味わいたくないと思った地獄を、レガリアはしばらくの間、再び体験した。
何度も男達に襲われ、全身に暴力を受け、穴という穴を犯されて体内を男達の精で膨れ上がらせても、それは止まなかった。
――だが数時間が経った頃。
もはやレガリアの意識は希薄で、母を呼びながら鈍い反応を出すだけの機械となった頃、男達が焦り、何言か話し合った後に逃げようとした。
その際に、レガリアだけは連れて行こうと彼女の身体を持ち上げた瞬間、
「早くずらからねぇと！　もう森にま――」
「……」
言葉を言いかけた男の首は、不意に胴体から分かれた。
その結果が生じたのは彼だけでなく、この場にいた人間の男達全て、同様に首を斬られて絶命した。

それを行ったのは、蒼く輝く長い魔剣を持った、金髪灼眼の魔人であった。
森の外に逃げようとする人間達は、今度は森を囲んでいる魔物達に殺される羽目になった。
先んじてやってきた魔人レオンハルトは、無事なカラーを探して街を回ったが、それは無駄足に終わった。生き残ったカラーの殆どが森の奥に逃げ延びたり、一か八か、西や北の魔物界や、翔竜山に逃げ込んだ。
そちらの捜索を指示し、レオンハルトは人間を掃討していたところ――それを発見した。
「……お前は……」
「マ……マ……ま、まぁ……」
壊れたように声を漏らすそれは、辛うじて生きていた。肉体的には。
彼女を見たわけではないが、近くに落ちている服の切れ端や、ペンダントや王冠。それを見れば正体は分かる。
だが伝え聞く彼女の印象とは、当然だが違う。今の彼女は、全身に暴行の後を滲ませながら、虚ろな表情で、虚空へと手を伸ばそうとしていた。
「パ、パ……やめ、て……マ、マ……た……けて」
「……」
「な、んで……こ……な、こと……する、の……？」
「……俺が分かるか？」
「なん……で……やさ、しく……して……く……ないの……？」
「……さぁな」
意識がはっきりしていないことを確認し、その質問に息を吐いたところで、レオンハルトは魔剣を振り上げる。
レオンハルトは彼女の事情は知らないし、ましてやそれを理由に手心を加えることもしない。
どんな境遇だろうと、行き着くところまで行き着いてしまったものには手を差し伸べる事もできない。辛い境遇に遭い、その末に行動を

起こしたとしても、それは彼女の責任だ。
だから、代わりにレオンハルトは言った。最後の言葉として、
「今生では無理だろうが――」
言う。それは、
「来世であれば……俺を頼れ。力になってやる」
「……」
何かあれば、自分を頼れと。
意味のない声掛けではあるが、今生でどうしようもなく救えなかった彼女に対して、慰めとしてそう言い――レオンハルトは剣で首を刎ね飛ばした。
その表情は、最後にほんの僅かに、安心した様に――笑みを浮かべていたように見えた。
「……ふん」
剣を収め、レオンハルトは最後にその亡骸を見ていたが、直ぐに視線を切って踵を返す。
まだやるべきことは残っている。無事なカラーも残っているはずだ。
この世のどうしようもなさ、彼女が感じていたであろう考えに僅かに内心で同意すると、レオンハルトはその場から消えるように移動した。

そうして、魔軍はカラー王国跡地を占領し、人間を追い払った。
多くのカラー達が犠牲となったが、カラー王国各地に潜入した魔軍の工作員や、ケッセルリンクらによって救われた者もそれなりにいた。
魔軍によって捕虜となったカラーの多くも、普通に働かされるのみで、暴行されるようなことや、命を取られるようなことはなかった。
――その結果、全てを算出した書類を目にし、それを相手に渡したレオンハルトは、静かな声を自分の城の執務室で響かせる。
「――これが今回の一件で救えたカラーの数と、犠牲となったカラー

の数だ」
「……そう、ですか……」
その内容を見て、クライアは声を震わせる。無理もないことだ。
救えた数もそれなりにいたとはいえ、当初のカラー王国の人口の半分以上は、人間の犠牲となってしまった。
クライアがこうして頼み込んだにも関わらず、犠牲となったカラーの数はあまりにも多い。戦争を多く経験したレオンハルトやその配下の者達は慣れたものだが、それでもハンティやペールにも思うところがあったのか、ほんの少し憂鬱そうに動いている。
今までの相手はただの人間だったが、やはり同族を失う悲しみを初めて味わったこともあり、あっさりと割り切れるものではないのだろう。
そして、良い経験になる――などと頭の中で考えている自分の思考にも憂鬱になる。これくらいで動じなくなったことを、喜ぶべきなのか分からないが、現実としてそうなっている。
とっくに分かっていることだが、通常の人間の精神とは一線を画しているのだ。惨たらしい光景を目にして、気に入らないと眉をひそめはしても強い感情は動かない。
今もクライアを見て、これを乗り越えてくれるか、という部分に焦点が行ってしまう。
それでも気を使う気持ちはあるのだろう、レオンハルトは目を伏せ、彼女に対して告げる。
「役立たずだと、罵ってくれても構わないし、恨んでくれても構わない。この犠牲の大きさは、お前が望む結果ではなかったはずだ」
「……確かに、そうかもしれません」
こちらの言葉に、ですが、とクライアはまっすぐとこちらを見て答える。
「それでも、レオンハルトさん達がいなければ、皆死んでいたかもしれません……ありがとうございます」
「……それはそうかもしれんが……」
クライアが頭を下げてお礼を言う。こちらの戸惑いに顔を上げ、

「わたしが、もっと早く……レオンハルトさんに助けを求めていれば……」
「……ああ。そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。だが少なくとも、お前は最善を尽くした。あのタイミングで会えたのも、相当運が良かったはずだ」
「……」
クライアの問いに、敢えて曖昧に同意する。
内心では、結果は変わらなかったかもしれないとも思っているのだ。
カラーのクリスタルという資源が人間にバレた時点で、遅かれ早かれこうなることは目に見えている。それを防ごうとするなら、カラー全体を魔軍に組み入れたり、人間を滅ぼし尽くすといった方法を取らなければならないがあまり現実的ではない。
だが、お前がもう少し早ければ助かった、と言うつもりもない。そうかもしれないが、現実的ではないからだ。あの時点で会えたのは言ったように相当運がいい。
曖昧な言葉で留めたのは、クライアへの気遣いだ。何もそこまで言うことはない。もしも、という救いを否定するほど、レオンハルトは薄情ではない。
「これから……カラーはどうなるんでしょう……」
ふと、そんな呟きをクライアが宙に乗せる。なのでレオンハルトは頭の中の計画を舌に乗せた。
「……少し考えがあってな」
「考え、ですか……？」
ああ、と頷きを入れ、
「もう少し後の話になるが……森にカラーの隠れ里でも作らせようかと思う。カラーを守るためにな」
「――――」
「そうだ。もっとも、魔軍が表向きに協力するわけにはいかないからな。だから俺が個人的に支援する。始祖という立場にあるハンティと現地の協力者でも募ってやればいけるだろう」

それが頭の中にある計画の一つだ。
この先の時代を生き抜くためのカラーの助けにもなるし、自分にも利益が出来る可能性がある。友好関係を築けるというだけでも大きい収獲だ。
それを話すと、クライアは息を呑み、その考えを理解しようとしばらく黙り込んだ。だがやがて、眉を立ててこちらを見ると、
「……わたしも、それを手伝いたいです……！」
「……お前が？」
はい、とクライアは強い意志を秘めた瞳を向けて言う。お願いするように、
「……わたしは、レオンハルトさんに恩を返さないといけません。それは分かってます。ですが……お願いします。そちらの方も、手伝わせてほしいです……！」
「……」
再度、こちらに大きく頭を下げて告げてくる。その言葉はレオンハルトにとって少々意外なもので、僅かに目を細めた。
しかし、出会ってから知ったクライアの性格を鑑みると、そこまでおかしな提案でもない。
それに、クライアにそれを手伝わせることに、特に不利益はない。元々、クライアにやらせようと思っていたことは特にないのだから。
ゆえにレオンハルトは答えた。クライアのお願いを受ける形で、
「ああ、構わない」
「！　本当ですか……!?」
顔を上げ、興奮したように期待を込めた視線で見上げてくる。頷き、
「ああ。元々、お前にはこの城で働かせるつもりだった。カラーの隠れ里を作る上で、これから俺の仕事も増える。ならばその手伝いを、主にクライアにはやって貰おう」
「～～っ！　ありがとうございます！　レオンハルトさん！　わたし、頑張ります……！」
本当に嬉しそうに頭を下げるクライア。働かせてもらうことに感

謝するその様子に少し可笑しくなるが、直ぐにそれを引き戻し、指示を出そうとする。
そこで、扉は開かれた。外から突然入ってきたのは、
「――それじゃあ！　クライアちゃんも私達の仲間！　ってことで、今日からこれを着てもらいますよう！」
「ですわ！　頑張りましたのよ！」
「えっ、えっ？」
突然ペールとキャロルが笑顔で室内に突入してくる。――その手にメイド服を持って。
不意の事態に戸惑いを見せるクライアだが、そのメイド服を見て、
「えっと……その……可愛いですけど……ちょっと露出が……」
「なぁに言ってんですかクライアちゃん！　こんなやらしい服着て、やらしい身体してるってのに、そんな変わらないですよう！　レオンハルト様もそう思いますよね？」
「そ、そんな……うぅ……」
「……ノーコメントだ」
クライアが恥ずかしがっているが、確かにそう思う。ぶっちゃけ服の露出度で言うならうちのメイド服よりも、クライアの着てる服の方が高いくらいだ。
むしろ健全になるだろう、とレオンハルトはクライアにそれを勧める。また賑やかになったな、と思いながら、
……俺も、随分と面の皮が厚いな。
そんなことを思いもする。
そうしてレオンハルトは恥ずかしがるクライアと騒ぐペール達を見ながらも、これから先の事に対して再び頭を悩ませた。

メイドの日常

魔物界。

大陸北側に位置するその場所は、人間を襲う凶暴な魔物達の住処であり、絶対的な力を持つ魔人達が闊歩し、魔軍の本拠地であり、大陸の支配者である魔王が住む魔王城などが存在する死の領域だ。

冒険者であってもそこに足を踏み入れる者はほぼ皆無だ。稀に腕の立つ冒険者が魔物界に何があるかを調べようと足を踏み入れるが、帰ってきた者は誰一人としていない。

ゆえに魔物界は多くの謎に包まれている。魔王城はどんな形をしているのか、魔物達はどうやって生活しているのか、攫われた人間はどのような扱いを受けているのか。人類圏に住む人間達はこれらの実態を何一つ知らない。

だが、魔物界に住む人間は知っている。極一部の環境ではあるが、魔物の生態というか、その生活や文化を。

その驚きの真実を、今日はある人間の視点でお届けしよう。

わたくしはエクレア。エクレア・フォン――まあなんちゃらかんちゃらという長い家名を持つ元王族です。姫です。

百年程前の魔軍と藤原家の戦争の折に我が王国は滅び、その際に魔軍を率いて我が王国を占領した魔人レオンハルトと交渉。その結果、彼のメイドとして魔物界に住みはじめた人間です。

最初は慣れない生活も、百年も経てば慣れます。とはいえ、色々とおかしな部分があるのは事実。常識が色々と破壊されるような驚きの連続に、言いたいことは山程ありますが、それをグッと飲み込む毎日。しかしそれを発散するために趣味として日記を書き始めたのですが、始めてみるとこれが中々内側に溜まったものを程々に消化出来て良い感じです。

ですが、それでも発散出来ないものはあります。しかし、文句を言っていても始まりません。何を感じ、何を思おうが、時は無常に過

ぎていきます。この城の中だと、たまにそれを忘れそうになりますが。

そんなこんなで、メイドとしての一日は今日も始まります。

紅魔城。

その名の通り、全体が赤で染められたその城は恐ろしい存在が住まう恐怖の城です。

この大陸に住まう者なら、誰でも一度は聞いたことがあるでしょう。そう――魔人です。

人間や他の生物とは隔絶した力を持つ大陸の支配者達。暴虐という言葉が相応しい化け物。

この紅魔城に住む魔人は、その化け物の中でも最も恐ろしいといっても過言ではないでしょう。この名も、人類圏では有名ではないでしょうか。

魔人――レオンハルト。

魔人筆頭兼魔軍参謀。最強の魔人。世界最強の剣士。魔物界の英雄。決闘魔人。剣王伝主人公のモデル。

巨乳好き。どう見てもラスボス。息を吸うように女を連れて帰ってくる。あの人、どうやって倒すの？　――などなど。

後半、ちょっとおかしい証言もありましたがそれも概ね間違いではありません。

その名を聞けば誰もが息を呑むビッグネーム。人間だけでなく、魔物界でも畏怖を集める存在が、この微妙な趣味の城の主であり、わたくしの主でもあります。

魔人レオンハルトは女好きとして知られていて、特に大きな胸――いわゆる巨乳に目がないとか。この噂の真偽はともかく、広く知られたものであることは確かで、魔軍に所属する彼の興味を惹こうとする者達は、戦争の際に巨乳美少女を見つけては彼に献上しているらしいです。人間からすればいい迷惑ですね。

かくいうわたくしも、その噂を聞いて恵まれた容姿と巨乳を用いて

交渉し、メイドとなることで望む条件を引き出しました。
そんなこんなでこの城には、私と同じ様な人間のメイドや使用人が住み込みで働いています。
だけどここは魔人が住む魔の城。
人間を襲う恐怖の魔人。ゆえにメイド達は彼に恐怖と暴力を背景に働く事を強制され、日夜怯えている――
「――はー……レオンハルト様とセックスしたい……」
――というわけではない。
朝の掃除を行う一人の先輩メイド。
これまた例に漏れず、胸が大きい上に美少女だ。銀髪に切り揃えられたミディアムショートの髪。どこかクールな印象を与えるそんな人が、窓を拭きながら唐突にそんなことを口走った。
普通、仕事中にこんなこと言ったら、〝頭おかしいんじゃないだろうか？〟と思うがこれが日常なのが救えない。近くにいたメイドが注意する。
「何言ってんのよ！」
ほら来た。先輩メイドの登場だ。
明るい髪色をしたこれまた巨乳の美少女。仕事中に不適切な猥褻発言を行った後輩を折檻してくれるのだろう。怒り心頭な様子でモップを持ったまま後輩に近づく。そのまま注意してほしい――というのがエクレアの願望だ。
「――今日は貴方の番じゃなくて私の番でしょ!?」
――ずっこける。
そうじゃないでしょう!?　と頭の中で叫ぶが、これがいつものことなのだ。
その二人がこちらに気づく。軽く転けた自分に対し、近寄り、
「ちょっとエクレア！　大丈夫？」
「躓いたりでもしてしまいましたか？」
「い、いえ……そういうわけでは……」
大丈夫じゃないのはお前達の方だ、という酷い発言を思い浮かべたりもするが、心配してくれている辺り、とても良い人達だ。というか

基本的には良い子しかいない。権謀術数入り乱れる王宮で暮らしていた自分にとっては眩しいほどに。
そう、彼女達は別に強制されてなどいない。自ら望んでここにいるし、自ら望んで主であるレオンハルトに仕えたいと思っている。色んな意味で。
というのもここに連れてこられる人間の女性は、皆一度は人類圏に帰るか、ここで働くかの二択を突きつけられる。不幸にも魔物界に連れてこられてしまった人間に、これからの自分の進退を決めてもらう。ここで帰りたいと言ってしまうのが罠で、惨たらしく殺される――ということもない。普通に帰してもらえるらしい。
何とも不思議なことだが、魔人レオンハルトという男は、魔人にしてはかなりの良識派であるらしく、人間を無為に苦しめることを好まないらしい。巨乳の美女を攫ってくるのも、部下達がレオンハルトに気に入られたり、便宜を図ってもらおうと忖度した結果であり、一度も命令したことはないという。
しかしこれはこれで無為に殺される人間を救えるということで放って置いてるらしいのだ。なら最初から人類を襲わないでほしいとも思わないでもないが、この辺は複雑な事情だったり葛藤があるのは分かってるので口にしない。連れてこられた人間が、誰しも最初に思うことだが、魔物界に住んでると薄々とではあるがその辺りの事情も分かってくる。
とにかく、魔人レオンハルトはこれからの人生をどうするか、彼女達自身に決めさせ、もう行く場所がない、とか、自暴自棄になって、とか、複雑な事情や感情があってここに残った者達である。
自らレオンハルトに支えることを決めて、この城で働き続けるメイド達。自分も事情があってここにいるが、例えばこんな人達がいる。
「はいは～い。ちゃおちゃお～♪　皆、そろそろ次の仕事にいっくよー☆」
「あ、はい。リムさん」
客室から掃除用具を持って出てきたのは、小柄でノリの軽い美少女。

その身長は、かなり小さい。おそらく、１４０センチ程で、ボリュームのあるふわふわの白い髪を、ツインテールに結っており、他の者達よりもスカートが短かったり、露出を多めにし、挑発的な笑顔に小悪魔的な印象を抱かせる彼女はやはりメイドの一人。
「ん？　どうしたのエクレアちゃん☆　わたしの顔に何か付いてる？」
「あ、いえ……相変わらずだな、と」
「それってばっちり決まってるってこと？　わーい♪　エクレアちゃん大好き☆」
「え、ええ……そうですわね」
そう言ってひしっと軽いノリで抱きついてくる胸の薄い少女。どう見てもかなり年下の後輩なのだが、やはりそうではない。
彼女はリム。これでも、この城で１番の古株のメイドである。メイド長さんとほぼ同時期からこの城で働いており、既に８００歳を越えているのである。
かくいう私も百歳を越えており、多くのメイドも何百年と生きている。なのに見た目が変わらないのがこの城の敷地内は全て、永久保護魔法という中にいる生物の成長を止め、歳を取らなくなるという凄まじい魔法の影響下にあるためである。
だからこの子供の様な見た目の少女が誰よりも古株でもおかしくないのだ。彼女はメイド長さんを除いたメイドの中でもリーダー格のメイドの一人であり、一つの班を纏める班長。副メイド長ともいえる立場にある。
「んー！　エクレアちゃんのおっぱいもふかふかで温かくて気持ちいいね♪」
「……そろそろ離れてくれませんか？」
「えー……もう、しょうがないなぁ……エクレアちゃんはそっけないね☆」
「仕事に忠実なだけですが……」
そう言って抱きついてきてたリムがすっと離れて笑顔を向ける。
どうにも人をからかったり、甘えたりするのが好きらしい。

何でも、昔は長閑な村で両親と仲の良い姉と平和に暮らしていたが、住んでいた村が運悪く魔王に襲われ両親は死亡。冒険者とともに村を脱出しようとしたが、それも魔王に阻まれ、最後に、姉妹のどちらかを伴として魔王に付いてきていたレオンハルトに褒美として授け、片方は魔物の慰み者とする、と魔王に告げられた。極めつけには姉に見捨てられ、死を覚悟していたところをレオンハルトに選ばれ、そのまま城に連れてこられたらしい――というのを明るく、リムは口にしていた。

そのせいか甘えたがりだと他の人が言っていた。それを聞くと、何とも断りづらいから困る。イタズラはやめてほしいのだが。

最初からこんな性格だったのかと頭が痛くなるがそうではないらしい。古株のメイドに聞いたが、何でも、よく面倒を見ていたレオンハルトの使徒の一人に影響された結果だとか。リムは彼女を、お姉さまと慕っているらしい。一応、使徒も自分達が世話する相手であり、上位の存在なのだが……本人たちが納得している様なので何も言うことはない。

「あ、リムちゃん。お仕事頑張ってくださいねー」

「！　お姉さまっ！　今日も頑張ります！　また今度、えっちなテクニック、教えてくださいね」

「くふふ、いいですよーう。またお勉強会、しましょうねー？」

「はぁーい☆」

……その使徒が誰か……などは言う必要はないだろう。皆分かっている。使徒の一人の影響を受けた、と言う時点で誰しもが一人の痴女を思い浮かべたはずだ。それで間違いない。悪影響もいいところだ。

「はー……今日はそっちの班が夜の担当でしょー？　いいなぁ……」

「いやでも、そっちは明日お風呂担当じゃない。我慢しなさいよ」

だが、誰しもが程度の差あれど、似たようなものだ。

なんというか、多くのメイドが百年以上生きているということと、それなりにアレな人生を送ってきただけあって、皆どこか個性がある。ちょっとおかしい、と言い換えてもいいかもしれない。

しかもそれが１００人以上、この城には存在する。この広い城の全ての業務を分担して行うため、８つの班に分かれ、働いている。メイド長さんを頂点、冥土王とし、その下にいる八人のメイドは八大冥土と呼ばれている――らしい。リムが勝手に言っていただけな気もするが、冥土王――じゃなかった、メイド長さんはノリノリだったのでよく分からない。

それはどうでもいいとしても、業務内容は主に、清掃、給仕、洗濯、接客、庭の手入れ、風呂、夜伽などなど。

厳密には後者２つは仕事ではなく、あくまでもメイド達が自主的に行っているに過ぎないが――制限や分担をしないととんでもないことになるので仕事として分けることにしたという経緯があるらしい。そして、やりたくないのならやらなくても良い。だが、この辺りがあの女たらしのあざといところだと思う。

それは一旦置いておいて、とにかく、この城に住む者達の個性は強い。そう、例えば――

「くくく、はーっはっはっは！　出来たぞ！　やはり私は天才だ！　最高だ！　ようしハンティ！　実験成功したし、パーティしようパーティ！　私の好物を全てもってこーい！」

「いや……あたし、これから別の仕事あるし――って、ちょっと!?　室内でそれ使うとか何考えて――って、今度はそれ!?」

「くっくっく！　今の私は誰にも止められん！　自由だ！　フリーダムだ！　このままこの城を支配してやるぞー！」

「ああもう！　雷撃！」

「ぎゃああーーーっ!?」

物凄い騒ぎが聞こえてきたが、素通りすることにする。出来れば、この部屋には近づきたくない。

一階にある魔法研究室――ここは天才魔法研究者、ガウガウ・ケスチナの研究室だ。

主にレオンハルトの使徒であるハンティと日夜、魔法の研究を行ったり、ゴロゴロとサボってハンティに怒られて雷撃を撃たれたりと騒ぎが絶えない場所である。

そんな部屋から、小柄な少女が出てくる。緑のボサボサヘアーの可愛らしい少女だが、肉体年齢は三十路らしい。目の下にクマを作る彼女がガウガウ・ケスチナ、その人だ。
「げほっ……容赦が無さすぎる……くっ、とにかく食堂へ……あ、そこのメイド！」
「！　はい。何でしょう？」
呼び止められてしまったのでメイドとして応対する。彼女は反対側を指差し、
「ハンティが私の行方を聞いてきたら、あっちに向かったと言ってくれ。いいな、食堂でサボってるとか絶対教えるなよ！」
「……畏まりました」
「よし。それじゃあ食堂に――」
そう言って小走りで食堂に向かっていくガウガウ。聞かれたら普通に教えようと心に留めておく。
とはいえ、あんなのでも実は人類圏で有名な魔法研究者だ。昔王宮で読んだ魔法史関連の書にも名前が乗っていた。何でも、ある魔人の元となった魔法生物を作り出したらしい。ヤバ過ぎる。どう考えても危険人物だった。
そんな印象は感じさせないが、やはり過去には色々あるもんだな、とも思いながらも自分も食堂の方向に向かう。
ただし向かうのは、食堂ではなく――厨房だ。
「……はぁ、厨房はあまり、中を覗きたくないのだけど……」
と、思うのは何名かのメイドも共通する想いだろう。
何しろ、厨房とはこの城の危険スポットの一つ。魔境なのだ。
何故厨房が魔境？　と思うかもしれないが、それはこの厨房を取り仕切る――化け物のせいである。
溜息をつきながらも覚悟を決めて厨房に足を踏み入れると、やはり声が聞こえてきた。
「――料理とはあああああああああッ!!　宇宙ッ!!」
白いコック服を膨れ上がる筋肉でピチピチにした二メートル強の化け物が訳のわからないことを叫んでいた。

……どうしよう、もう帰りたい。
挫けそうになるが、これも仕事だ。責任感のある自分の身が憎い。
早くも厨房に足を踏み入れたことを後悔しつつも料理長の言葉を聞いてしまう。
「宇宙の様に奥が深い料理は宇宙なのだッ！　料理は宇宙！　宇宙は料理！　ならば――」
料理長――ガストロノミー・ミシュラン。
古くより魔王城、魔軍の厨房を取り仕切り、延いては魔物界を代表する化け物料理人一族。その中で最も魔物に近いと云われる料理人が、レオンハルト城の料理長を務める彼だ。
「料理を極めんとする私も――宇宙でなければならないッ!!」
ほんと、何言ってるんだろうこの人……。
今直ぐ帰りたい。これを目に入れてるとこっちの頭まで料理次元に侵食されそうになる。
ポージングを決めながら料理について熱く語っている料理長を見て、何とも言えない気分になっていると、
「我が肉体は宇宙ッ！　食材は星であるのだッ!!　さあ！　我が全身全霊の奥義を受けよ!!　スーパーマッシブブラックホール――インパクトォッ!!!」
「ひぃっ!?」
厨房にいる料理人達が一斉にその轟音に身体をビクッとさせて顔を強張らせる。中には怯えた様子で後退るものもいた。おそらく新人だ。
料理に叩き込むための調理法――の筈なのだが、その技で人や魔物を容易に殺せそうなのはどうしてだろう。さすがに魔人には勝てないはずだが、不思議とそれを感じさせないのは意味不明だと思う。さすがはメイド長さんと並んで、この城の絶対領域と怖れられているだけはある。
その分野において敵に回せば命はないらしい。料理人ってなんだっけ。そんなことを考えていると、
「さあ、この肉を誰か中庭へ！」

「あ、はい」
　ようやく仕事が来たので他の給仕のメイドと一緒に皿を運ぶ。かなり大きい皿だ。一人では持ちきれないほどに。
「よいしょっと……」
「重いねー」
「ねー」
　数人がかりで皿を持ち上げ、厨房を出ていく。ぶっちゃけ、料理長なら一人で持っていけるんだから持っていけよ、と思わないでもないが、彼は彼で滅茶苦茶忙しいので厨房を離れられない。
　まあそれもそうだろう、厨房は城にいる者達全員の食事を作っているのだ。
　メイドも含めて百人以上の朝食、昼食、夕食。加えて時にはおやつであったり、来客時の軽食や求められたらいつでも食事を作らなければならない。その大変さは想像を絶することだろう。そう考えるとあの肉体や意味不明な強さも必要なことなのだろうか、と思わないでもない。
　後、何気に優しいのだ。おまけに細かい気配りも出来る。城にいる者達の好き嫌いは全て把握しているし、栄養管理も完璧。前に疲れてるだろうと、疲労回復用のドリンクを差し入れてくれたりした。
　でも意味が分からないのは変わりませんわ、と中庭に行くと、
「ねぇ、ライゼンさん！　ちょっと山でお肉取ってきてほしいんだけどー！」
「頼んでもいいですかー！」
「む……？」
　中庭の中央にいる馬鹿でかい影。それは中庭に住む巨大なドラゴンのものだ。
　全身をダイヤの鱗で覆われた５０メートル程のドラゴンの名前はライゼン。
　何でも古から生きる偉大なドラゴンで、四大聖竜の内の一体らしい。ちょっとスケールが大きすぎてよくわからないです。
　昔レオンハルト様と戦い、友誼を結んでからこの城に住み始めてい

るらしいが、人間からするととてつもない大きい存在だ。
踏み潰されたら一瞬で絶命。人間を数十人、丸ごと飲み込めるほどの大きい口。鋭い爪と牙。そんな凶暴なドラゴンの足元で上を見上げ、お願いをするメイドが二人。
彼女達は八大冥土の二人――というのは置いといて、班長の内の二人である二人の姉妹である。
やはりどちらもかなりの巨乳で、左右対称に髪を結った彼女達は、姉が赤い髪にツリ目のミオで、妹が青い髪で色気のある方がマオだ。
二人共強気な印象で――自分に匹敵するくらい胸が大きい。しかも二人共、かなり昔に滅ぼされた国の王女であり、ある国に売られてレオンハルトの元に来た二人であるという。
いや、別に競ってるわけではないし、どうでも良いはず。しかしたまに気になってしまうのだ。
その二人はライゼンに向かって山に肉を取りに行ってほしいと頼んでいる。
「今度メイドの一人が誕生日だから――！」
「料理は頼めば出るけど、私達も故郷の料理作ってあげようと思って――！」
二人はそう大声で頼み込む。別に大声でなくてもいいはずだが、あれだけ大きいドラゴンに声を掛けようとなると自然と大声になってしまうのは分からなくもない。確かに、そんな感じになる。聞こえるはずではあるが。
「だから一匹くらいでいいからお願い！」
「お願い、ライゼンさん！」
「！　何だと!?」
しかしそのお願いに、ライゼンは顔を向けて瞳を鋭くする。
そして牙を見せて二人に告げる。
「貴様ら……俺を誰だと思っている！　四大聖竜のライゼン！　城に住んでいようともこの胸には未だ龍の誇りがある！　その誇り高いドラゴン種の中でも怖れられたこの俺の強さを知らんと言うのか!?」
ドラゴンが吼える。当然だろう。それだけ偉大なドラゴンに対し

て、山に肉を取ってきて欲しいなどと言う、おつかいを頼んでも、聞き届けてくれるはずがない。
　その爪と牙を見せ、ライゼンがくわっと迫真の顔で、迫力満点に翼を広げる。不躾な態度を取る人間には、相応の裁きを与える。そんな様子で、
「……一匹？　巫山戯るでない！　俺なら十や二十――いや、その山全ての獣を刈り取ってみせよう!!」
「ありがとー！　ライゼンさん！」
「じゃあ、お願いねー！」
　……龍の誇りって何でしょうねぇ……？
　こうやって普通におつかいを聞いてくれる誇り高きライゼンさん。そう、やっぱりというか、実はかなり優しい。
　メイドの中でもかなり人気があるというか、話してみると結構面白いのだ。メイドは皆おしゃべりが好きで、特に話題は近頃の世間の事だったり、誰かの身の上話だったり、人の話とか知らない話が好きだ。
　ライゼンは特に中庭にいると話し相手として話しかけても相手してくれるし、話しかけてもくれる。しかも過去の、ドラゴンが今の人類くらい沢山いた時代の話をしてくれる。知らない話ばかりで面白いのだ。
　自分も何回か話したが、ドラゴンを纏めてた時の人間関係――ならぬドラゴン関係？　の話とか、ドラゴンの話のはずなのに間抜けな話が多くて親近感が湧く上、とても面白かった。歴史的にも滅茶苦茶興味のあるというか貴重な話な気もするが、その時代を生きてきた当人の話なせいか、実感が籠もっているというか苦労話も多いしであまりそういう風に感じないのが不思議だ。
　たまに身体の上に乗らせてくれたりもする。大きくてツルツルしていた。メイドの一人が肌ツヤ良くていいね、などと言っていたがその感想はちょっと違う気がした。
「……む、今日の朝食か！」
　そんなことを考えながら皿を運んでいると、ライゼンがこちらに気づいた。頷き、

「はい。角クジラの肉を挽肉にして焼き上げた巨大ハンバーグですわ」
「今日も料理長が滅茶苦茶よく分かんない調理法で作った自信作らしいから味わって食べてね！」
　一緒に運んできたメイドがそう言うと、ライゼンは少し止まり、
「うむ……あの料理長の技は凄まじいからな……」
　ドラゴン基準でもそうなのか。いよいよもって化け物だ。
　ちょっと気になったので皿を置いてから口を開く。
「さすがにライゼンさんの方が強いですわよね？」
「ん、勿論だ。だが……前に間違えて尾で吹き飛ばしてしまったのだが……ピンピンしていたからな。頑丈さでは中々侮れん」
「……人間って何でしょうか……？」
「可能性の塊だろう」
　そんな一言で締められても困る。あんなのになれる可能性はいりませんわ。
「……ドラゴンとか魔物の変異体なのでは……」
「ドラゴンはともかく、確かに魔物も可能性としては中々だ。メイド長さんを見てよく思う」
「ああ、あれはまあ……」
　確かに、あっちも別のベクトルで凄まじい。などと思っていると、
「――私が、どうか致しましたか？」
「っ！　メイド長さん!?」
「メイド長、ですよ」
　背後から突然気配もなく現れたメイド長さんを見て、思わず軽く飛び退いてしまう。ライゼンも目を細め、
「……相変わらず一瞬で現れるな。どうだ？　今度一戦交えてみないか？」
「申し訳ありません。私はただのメイドですので、ライゼン様のご期待には応えられないかと」
「ただのメイド……？」
「メイド足るもの、呼ばれたら直ぐに馳せ参じるのが務めです。――

エルシール様？」
「はぁ……はぁ……待ってください……早すぎます」
メイド長さんが不意に背後に向かって声を掛けると、追いかけてきたのか青い改造メイド服を来たメイドが現れた。
だが彼女はうちのメイドではない。それに、こちらより上位の存在なので頭を下げておく。
使徒エルシール。
レオンハルトと仲の良い魔人、ケッセルリンクの使徒であり、そちらの方のメイド長を務めている。
その縁でメイドの中のメイドと云われるメイド長さんに師事しているらしいが、傍から見ると遊ばれているように見える。今も、走って追いついてきたばかりのエルシールに対して、
「さあ、仕事に空きが出来たのなら修行の続きを致しましょう」
「は、はい。今日は――」
「昨日に引き続き、一流の寿司職人になるための修行です」
……メイドの修行はどこに？
しかしそんな想いは届かず、メイド長さんはニコニコとエルシールに向かって講義を行っている。
「寿司職人になるには１０年以上の修行期間が必要と言われていますが、そんな常識、メイドには通用しません。料理が想像を絶するほど苦手なエルシール様でも、３年で美味しい寿司を作れるよう誠心誠意お教え致しましょう」
「はい。でも……本当にメイドに必要なんですか……？」
当然の疑問だ。ぶっちゃけ必要ないと思う。
しかしメイド長さんは笑顔で続ける。
「エルシール様。もしケッセルリンク様が突然、美味しい寿司を食べたい、と仰られたらどうするおつもりで？　泣き寝入りでもするおつもりですか？」
「それは……」
いや、寿司屋に連れていけば良いと思うのだけど……。
もしくは寿司を作れる人に作ってもらえばいい。料理長とか。

しかしその言葉は届かないようだ。指摘しようとも思ったが、それを読んだメイド長さんが笑顔で威圧してくるので言い出せない。何も言うな、と顔が言外に語っている。
「しかしエルシール様が寿司を握ることが出来るならその心配はいりません。直ぐにでも魚を捕り、ご飯を炊いて酢飯を用意し、醤油とわさびを用意して握って差し上げればいいだけです。それだけのことを成すのは並大抵のことではありませんが、それを成したエルシール様に、ケッセルリンク様はこう言うでしょう。――〝エルシール。君は私の誇りだ〟と」
「！　ケッセルリンク様……！」
あ、完全に騙されてますわ。
というか最後の声真似が異常に似ていたのだが、このメイド長は特技というか能力が多すぎるだろう。もう殆どケッセルリンクだった。
「さぁ、厨房をお借りして始めましょう。それが一通り終われば、今度は漫画家になるための修行をしましょう」
「ま、漫画家!?　あ、あの……それはさすがにメイドとは関係――」
「……エルシール様。もし、ケッセルリンク様が、面白い漫画を見たい、と仰ったらどうするおつもりで？　そういう時に面白い漫画を描いて差し上げることが、メイドとして出来る真の奉仕ではないでしょうか？」
いや、絶対に違う。その場合の真の奉仕とは、直ちに漫画を図書館から借りてくることだ。
だがエルシールは騙されたように、
「……なら、それも頑張るしか……」
「大丈夫ですエルシール様。どれだけ大変でも、私は付きっきりで応援致します。エルシール様が立派なメイドになるまで……」
「メイド長さん……」
何故か感動っぽく話を誤魔化そうとしてるが、やはりメイド長さんの威圧に何も言えなくなる。少しして気を取り直したメイド長さんは、
「なので、その次は一流のギャンブラーになるための修行をしましょ

う」
「絶対メイドと関係ないですよね⁉」
「……！」
うわぁ、物凄く楽しそうな笑顔ですわ……。
その表情から心境を読み取るなら、〝ようやくツッコんでくれた！〟だろうか。やはり誂っていたのだろう。とても楽しそうだ。
しかしその笑顔を多少抑え、メイド長さんは咳払いをすると、
「……いいえ、そうとは限りません。エルシール様。もし、ケッセルリンク様がお金に困ったら――」
絶対にあり得ない上に解決法がギャンブルというふざけた提案だ。仮にそんな状況になったら真面目に働け、声を大にして言いたい。どう考えてもおかしいだろう。なのに、
「し、しかし……」
――何ちょっと迷ってますの⁉　早く断りなさい！
このままだと将棋が指せて美味しい寿司が握れて面白い漫画が描ける一流ギャンブラーなメイドになってしまう。もう訳がわからない。
だがメイド長さんはエルシールを連れてそのままどこかに行ってしまった。おそらくは厨房だろう。ご愁傷様、と言わざるを得ない。
「……よく分からんが、大変そうだな」
「……そうですね……」
ライゼンの言葉に同意し、切り替えてそのまま次の仕事に向かうことにした。

料理長が作ってくれた料理を食べて、再び掃除。室内をたくさんのメイド達と分担して行う。
この城はかなり広い。なので手分けしてやらないと終わらないのだ。
今日の担当は入り口。玄関前と言えばいいだろうか。城門の直ぐ近くを箒を掃いて掃除をする。すると、

「……今日も賑やかですね……」
開かれた城門の奥、街が見える。
そこは魔物達の街であり、レオンハルトが治めるレオンハルトシティだ。
自分の名前を付けるセンス――と言いたいが権力者が自らの権威を示すために自分の名前を付けたりするのは珍しいことではないのでまあそこまでおかしくないだろう。
それにこの街、人間が見たら軽くカルチャーショックを起こしてしまうくらい文化的だ。前にレオンハルトに街を見回らせてもらったが、劇場や大衆浴場、娯楽用のスポーツ施設や屋台や飲食店が多数。明らかに人間の街よりも豊かな街が広がっており、魔物達はその生活を大いに楽しんでいる。今も、城門の前を警備している魔物兵らが、
「……なぁ？　仕事終わったら今日はどこで飲む？」
「あー……いつもの場所でいいんじゃねぇか？　あそこ、俺が好きなたこわさ出るんだよ」
「ああ、あれ美味いよな。……でも、たまにはもうちょっとお洒落な場所も良くね？　俺、劇場の裏手にある店のカニクリームコロッケが食べたくてよ」
「ああ……確かにいいな。……でもあの店、たまにガルティア様が出るらしいぜ？」
「うげっ、マジかよ。知らなかった……ってことはやっぱ美味い店なんだな……」
「いやまぁ分かるけどよぉ……城とかで好きなだけ食べれるんだからちょっと遠慮してほしいよなぁ……ガルティア様来たら、俺らが食べる分なくなっちまうし……」
「つーか材料無くなるまでその店で食うの、禁止されてなかったか？
ガルティア様の場合。後でレオンハルト様に怒られるんじゃね？」
「あー、かもな。だったらその店でもいいかもな。仕事終わったら風呂行ってから行くか」
「おお、じゃあ――」
と、そんな会話が城の前で行われている。

おそらくはこの街のどこもそんな感じだろう。何でも、この街にある店は全てお金が掛からない。
そもそも魔物界では貨幣制度がないので当然なのだが……全て無償なのだそうだ。
もっとも、魔軍に所属する者でも頼める量に制限があったり、外から来る魔物には街に入る時点で券を渡され、それを引き換えに店を利用するため制限はあるのだが、それでも破格だ。
元々国を動かしていた身としては、人手は魔軍のものを用いているからともかく、どうやってそこまでの食料を賄っているのかと疑問になる。
それを以前聞いてみたのだが、何でも大陸西部には、魔物達が集まる世界樹というものがあり、そこにツリー都市というものを築いているらしい。そして、その木の周囲には沢山の野菜や果物、食料が生えてくるらしく、どれだけ取っても無くならないから飢えることは無いそうだ。最初それを聞いた時、魔物ってズルい、と思ったものだ。いや、今でもそう思う。
人間だと、餓死なんかは珍しくない時代だ。貧困に喘ぐ国は多いし、魔軍に襲われて大量の食料を奪われた日には、生き残ったとしても多くの餓死者が出る。そうでなくとも食糧事情はそれなりに厳しい。制限したとしても無償で渡せるほどの食料はないのだ。
この辺りの運営方法というか、社会制度の殆どは、人手を全て魔軍に所属する多くの魔物兵で賄い、完全な縦階級社会を形成している魔物ならではだと思う。どれも人間の常識ではありえない。生まれた瞬間から戦い、生き残るために成長が早く、どんな魔物だろうと平均して人間より強い魔物という種は、確かに人間より優れているといえるかもしれない。乱暴で短絡的、という特徴もあるが、人間と同じで多様性があり、あくまで傾向でしかない。
事実、この街の魔物達は文化的な生活を好み、人間と同じ様に家を持って普通に暮らしている。治安も人間の街より良いくらいだ。魔物同士の喧嘩、くらいならあるが人間社会で犯罪に位置するような事件は殆ど起こらない。

それはやはり、魔物の強いものに逆らわないという本能の様な考えが根付いているからだろう。
力が全ての魔物界において、魔王や魔人の命令に逆らう馬鹿はいないという。逆らえば死ぬだけだからだ。
人間ではそれは出来ない。独裁を行うことは出来るが、必ず民の不満が溜まり、反乱なども起こる。権力は足が早いのだ。仮に上手くいっても寿命で死んだりして王が変わればまた状況も変化するし、次の代ではどうなるか分からない。
その点、魔物社会では上は絶対だ。魔人達に寿命は存在しないし、力は魔物達の遥か上。法も倫理観も存在しないような場所では逆らえば幾らでも殺される。不満を持っても死ぬだけ。強い相手に逆らうこと自体が間違いだ。
しかしこうも思う。もしもこの先、魔王が――
「おい！　何を盛り上がっておる！　仕事中だぞ！」
「あっ！　も、申し訳ありません！」
「！」
と、不意の声に思考を中断する。声を上げたのは魔物兵の向こう、街の方からやって来た魔物隊長だった。
おそらくは城の周囲を警備している部隊の隊長だろう。仕事中の雑談を注意する上司としてあるべき姿。魔物兵が思わず謝ると、魔物隊長は彼らに近づき、
「全く……レオンハルト様の城を警備するという大事な仕事を任されたのだから少しは気を引き締めろ。何も起こらない可能性の方が高いとはいえ、だ」
「す、すみません……」
やはり怒られている。しかし、魔物隊長は直ぐ近くまでくると、周囲を見渡して、
「……後で俺も飲みに参加してもいいか？」
「え……隊長も来るんですか？」
そんなことをこそこそと話している。直ぐ近くに聞いているものがいるのだが、大丈夫だろうか。

「俺がいるといつもより多めに頼めるぞ」
「！　ぜ、是非一緒に行きましょう！」
「ははは、現金な奴らめ！」
　魔物隊長や魔物将軍といった管理職に就くと、街でも色々と特権があるらしい。それをちらつかせて一緒に仕事後の飲みに行こうと誘う魔物隊長。確か高級店やＶＩＰ用の個室なんかも使えたはずだ。
　やっぱり上手いやり方だと思う。それもこれも、ここの主のおかげなのだろう。
「……はぁ、ほんと良い場所ですわね……」
　人との違いを感じて溜息を吐いてしまうくらいには良い環境だ。
　どうして人間はこうならないんだろう、とどうしようもない事を思ってしまう。
　仮に彼のような人が人類を導いたらどうだろう？　彼はかつて、人間の集落を率いていた王だったと言う。彼が仮に、そのまま王であり続けていたら？
　――何も変わらないだろう。これは彼の問題というより、人間という社会では不可能なのだ。
　権力争いに固執し、出る杭を打ったり、遠ざけたりしようとする人間の社会は権謀術数乱れる魔境だ。魔物社会がそうではないとは言わないが、人間社会の方が複雑であることは間違いない。
　どうやったら人間社会は良くなるだろう、と考えてしまう。もう関わりはないというのに。
　仮に魔物がいなくなっても、人間は争いをやめない。この街のようにはいかない。それを思うと憂鬱になる。
「……ふぅ、駄目ですね」
　気づけば手が止まっていたので掃除を再開する。そのタイミングで、
「っと、いたいた。エクレア？」
「！　ハンティ様、ですか。どうか致しましたか？」
　急に目の前に黒髪のカラーが現れる。レオンハルトの使徒であるハンティだ。頭を下げて用件を聞く。すると、

「いや、ちょっとレオンハルトが呼んでてさ。何でも、仕事について意見を聞きたいことがあるみたいで。悪いんだけど執務室に向かってくれない？」
「？　分かりました」
　何だろう、と思う。だが、何か街の運営だったり、人間のことについてだろうか、と適当に当たりを付ける。
　そうして城の中に戻ろうとしたが、直前で呼び止められた。
「あ、そういえば――」
「？　何でしょう？」
　ハンティが思い出したように問う。それは、
「……ガウガウ、どこ行ったか知らない？」
「……食堂ですよ」
「……分かった。ありがとね」
　再びその場から消えてみせるハンティ。
　――少しして、食堂から声が響いた。

「……来たか」
「はい。何の御用でしょう？」
　執務室に着くと、部屋の中にはこの城の主であるレオンハルトが一人で書類を見ていた。
　他の使徒達はいない。普段であれば一人はいるはずだが、何か別の用事だろうか、と思う。
　レオンハルトは書類から目を離すと、そのままその鋭い目をこちらに向けてきた。
「ちょっと手伝って欲しくてな……見ての通り、手が足りてない」
「……はぁ、他の方々は？」
「別の用件で少しな。お前ならこういった仕事も得意だろう？」
「それはそうですが……」
　机の上に溜まっている書類の山を見て言う。確かに元王女で、それなりに政務に携わっていた身であるからこういったものは得意だ。

しかし、
「……重要そうな書類ですが、私なんかに見せていいので？」
「何の問題もない。お前の事は信頼しているからな」
「っ、そうですか……」
出た。だから嫌なのだ、と思う。
こうやってナチュラルにあざといことを言うので困るのだ。しかもそういうつもりがないのが余計に何とも言えない。本人は至って真面目だ。
他のメイドが言っていたが、こういうとこが駄目なのだ。最初は殆どのものがそういうつもりもないし、レオンハルトの方も好きにしていいと優しくしてくれる。
だが、気がつけばこういうのが積み重なって気になりはじめ、気がつけば落とされているのだ。
どうにも悶々としてしまうが、その術中に嵌りかけている自分に腹が立つ。そんな気はない。そんな気はないのだが、
「？　どうした。呆けている様だが……」
「っ、別にそういうわけではないです！」
「……そうか。それならいいが……」
「あ……」
思わず大きい声を出してしまった。バツが悪くなる。
同時に意識してしまっていることに気づいて顔が熱くなる。それを誤魔化すように、
「……分かりました。手伝います」
「ん、そうか。それは助かる。そこの机を使ってくれ」
「はい」
言われた通りに備え付けの机に座り、書類を手に取る。
やっぱり、それなりに重要なものも多い。メイドに見せるようなものではない。
だが、彼は信頼していると言ってくれたし――。
……っ、そうじゃないでしょう！
こんな考えばかりではいけない。自分が駄目になる。

とりあえず仕事に没頭しようと思う。仕事に集中していれば余計な思考は働かないはずだと。
そう思い、書類に取り掛かった。
――そしてそれは、一先ず上手くいった。
「……」
「……」
室内には紙やペンの音しか聞こえない。たまに外から誰かの声が聞こえもするが、耳に入らない。
それだけの集中力を以て、仕事を進めた。
だが、不意に手が止まる。それは、
「……っ」
それは――魔王が滅ぼした街の被害を纏めたものと、その収穫物に関するもの。
書類を目にし、エクレアは僅かに動揺する。先程、止めかけていた思考が、再び脳裏に流れた。
……もし、魔王の代が変わったら……次はどうなりますの……？
そう、それは魔王の代替わりという魔物社会、大陸が大きく変化する時代の転換期のことだ。
魔王とは、任期、寿命が存在する。
約１０００年の任期を終えると、魔王は別の魔王に継承されるのだ。
この城に来て聞いたことだが、何でも前魔王から今の魔王に代わった際、やはり少なからず様々な事が変化したという。
人間を襲う頻度が増えたのも、今の魔王――ナイチサの特徴である。
だが、そこまで人間に固執はしない、というのもナイチサの特徴であるらしい。
この魔王の思想や行動が、大陸に影響を与えるのだ。
魔王には絶対命令権というのが存在し、配下の魔人や魔物達を従わせることが出来る。
ゆえに魔王が人類を滅ぼせ、と命じたら滅ぼすし、どんなことだっ

てしてしまうのだ。
この魔王が代替わりした時、次の世の中はどうなってしまうのか、と不安を抱いてしまう。
人間に優しい――それこそレオンハルトの様な魔王であればいいかもしれない。不安はない。
しかし逆に人間に厳しい――人間を道具のように弄んだり、ましてや生きてることすら許さない、といった悪夢のような魔王であれば。
「……っ」
それを思うと、不安と震えが来る。
人間はどうなってしまうのか。自分達はどうなってしまうのか。
自分の身だって、どうなるか分からない。そんな次代への不安。
考えれば考えるほど、今が続けばいいと思ってしまう。今ですら、人間に厳しいというのに、そんな不謹慎なことを願ってしまう。
次の魔王が良い魔王であればいい。しかし、そんな可能性は限りなく低いのだ。
そんなものは来なければいいと思うが、時は無常だ。後二百年もしないうちに魔王は移り変わり、新たな時代は始まる。その時、人類は、私は――
「――大丈夫か？」
「……え……？」
気がつけば、声を掛けられていた。近くまでやって来ていたレオンハルトに。
彼の顔を見上げ、思わず震えが止まり、顔が赤くなる。
「あ、いえ、その……」
「……？　具合でも悪いのか？　それとも、悩みでもあるのか？」
「そ、それは……」
「……まぁ、どちらにせよ、仕事にならなそうだがな……」
軽い溜息とともにそう言われると悪い気がしてくる。
だが、レオンハルトは正面の椅子に座ると、そのまま両肘を膝に乗せるようにしてこちらを向き、
「少し休憩にするが、本当に具合が悪いなら今直ぐ――」

「いえ、そうじゃなくて……」
「……それならいいが……まあ、とにかく休憩だ。俺も少し疲れたしな」
レオンハルトは強制的に休憩を告げる。明らかにこちらに気を使っていた。
普段から同じ様に書類をこなしているレオンハルトが、朝から直ぐに疲れるはずもない。そんな様子も見えないものだ。
それを悪いと思いつつも、別の思いもあった。それは、
「……あの……」
「どうした？」
レオンハルトなら、聞いてくれるのではないかと。不安を消してくれるのではないかと、そんな思い。
そんな想いから、エクレアは考えていたことを舌に乗せた。
「……わたくし、不安になってしまったんです……」
「……何がだ？」
「次代の……次の魔王の治世で、人間が、世界がどうなるのかと……」
「！　……そうか」
僅かに目を見開いたレオンハルトが、こちらの不安に頷いてくれる。
そうしてしばらく、何かを考え込んでいたレオンハルトは、ゆっくりと口を開いた。
「……お前が不安に思うのも分かる。確かに、魔王が変われば世界は大きく変わるからな。不安に思うのも当然だろう」
「……はい」
「ひょっとしたら、今の魔王よりも酷い時代が来るかもしれない。そんな可能性は０じゃない」
その通りだ。だから、不安になる。
背負い込んでしまっているという自覚はある。ここにいれば、安全である可能性は高いのに。
人間がこれからどうなるか、という未来を考えて不安を感じてしまう。

面倒な女だ。自分はもう、王女でもなんでもないというのに。
しかも本当は自分の身を心配しているだけで、その延長で人間全体を心配しているだけな、自分の深層心理が垣間見えて嫌な気持ちになる。
そんな自分を、レオンハルトはじっと見詰めている。何を考えているのだろう。
彼は常人とは違う。千年以上を生きる魔人だ。そんな彼であれば常人の思考とはまた違うものを見ているだろう。
ひょっとしたら、未来の予想や、それを想定して対策でも考えているかもしれない。そんな馬鹿な妄想すら考えてしまう。そんな訳ないのに。
不安が再び浮上してくる。――そんな時だ。レオンハルトが再び口を開いたのは。
「……確かに、俺は全ての人間を守れるわけでも、救えるわけでもない。寧ろ傷つける側だ。俺のせいで苦しんでいる人間は数多くいるだろう」
自分は修羅であり、多くの人間を殺し、苦しめるのだと彼は言う。
それはそうだ。彼にも立場がある。
魔人であり、魔軍を率いる彼には、多くの魔物を導く義務がある。だからこそ、彼は人間を斬るのだ。
魔物界の英雄、という異名はそんな彼の在り方を表している。
つまり、人間にとっては不倶戴天の敵に他ならないということだ。彼はこうやって少なくない数の人間を救っても、本質的には人類の敵なのだと。
だから救うことは出来ない。そう言うのだ。
しかし、彼は言葉を続けた。
「だが、それでも俺は……自分の大切なものはどんなことをしてでも守り切る」
それは、
「それは、お前も同じだ。エクレア」
「――！」

「お前が、お前達が俺の内側にいる限り、誰であろうと傷つけることは許さない。――例え魔王だろうとだ」
「レオンハルト……様……」
そんな大言壮語を、レオンハルトはこちらを真っ直ぐ見て語る。
それは難しいはずだ。彼は魔人の中で最強と言っても、所詮魔人でしかない、魔王には敵わないのだ。
だが、何故だろう。
彼の言葉を聞いてると、とても安心する。
言葉だけではない。彼の傍にこうやっているだけで、震えは止まるのだ。
きっと彼は、例え到底不可能であろうとも、その誓いを守ろうとするのだろう。
その強い意志を秘めた瞳が、言外にそう言っていた。
そして、その瞳に見詰められると、見ていると、どんどん鼓動が大きくなる。
……ああ、もう……。
それを自覚していくと、もう駄目だった。気がつけば、椅子から離れ、彼に近づき、
「……なら、もっと近づけば……もっと、守ってくれますか……？」
「ん？　あ、ああ――っ」
彼に抱きつき、その胸に顔を埋めていた。
するとやはり、とても安心し、胸がドキドキする。
「……おい、エクレア……？」
レオンハルトが僅かに戸惑った様子で声を掛けてくる。そんな様子はあまり見ないのでちょっと可愛い。こちらも顔赤くしながら彼の顔を見上げ、
「ん……駄目でしたか……？」
「……そういうわけではないが」
「じゃあ……嫌いですか……？」
「……嫌いでもないが……」
歯切れの悪い回答に可笑しくなる。思わず笑みを浮かべ、

「ふふっ、あれだけ女性を侍らせてるのに、可愛い反応を見せるんですね……？」
「……からかうな。別に戸惑ってるわけじゃない。ただ……急だったからほんの少しびっくりしただけだ」
言い訳っぽくてやはり可笑しくなる。やはり計算というわけではないのか。
だがこれで、他のメイド達が言っている意味がようやく分かった。確かにズルい。
ただでさえ色んな面で完璧な癖に、妙に弱いところとか可愛いところを見せられると、のめり込んでしまいそうになる。なるほど、こういうことか。
彼の反応がもっと見たくて、自分の最も膨らんだ部分を強く押し付けてしまう。するとかなり分かりにくいが、僅かに眉が動いた。
鉄面皮で何事にも動じない彼が、こんなことで動じる辺り、やはり巨乳好きであることは事実なのだろう。もっと色々としてみたくなってしまうが、彼は不意に息を入れると、
「……お前の気持ちは嬉しい。だが――」
と、続く言葉は止めた。
「はい、分かってます」
「……本当か？」
「はい。貴方は、そのままでいてください。わたくしは、他の方と同じ様に、慰みを頂ければそれで……」
「……」
その瞬間、彼はどこか自嘲するような、複雑な想いを滲ませた表情で目を伏せた。
それはレオンハルトに関するある噂のことだ。有名ではないが、彼に近しい者ほど、それを知っている。
彼は例え、メイド達の好意を受け止め、それを返したとしても、どこか一線を引いているのだ。
忘れきれず、譲れない何か。レオンハルトにとって最も大切なものであるらしいそれ。その存在が、彼のその発言に繋がるのだ。

「……分かった」
彼は言う。また覚悟を決めた顔で、
「俺の好意がお前の救いになるのなら……俺はお前を愛してやる」
「……ありがとうございます」
その言葉は、エクレアの事を受け入れる様でありながらも、やはり一線を引く言葉だ。
だが、彼の言葉、そして抱きしめてくるその行動も何もかもに、好意と愛を感じるのだから彼は器用だし、不器用だと思う。女としては只々嬉しくなるその気持ちの込め方は、しかし彼の身を心配してしまう。
……ああ、そういうこと……。
気持ちが昂りながらも、どこか冷静な面も残すエクレアは気づいた。他のメイド達と同様の気持ちに。
だからこそ、少しでも彼に尽くして、彼に気持ちよくなってほしいのだと。
これだけの愛をくれる相手が、少しでも楽しめたらいいと、尽くすのだ。
それに気づいた時、エクレアは自分の身体を彼に擦り付けることを躊躇わなかった。
「……おい、今は仕事中だぞ」
「……休憩中、と仰いませんでしたか？」
彼の好みの身体で良かったと、心から思う。それだけ彼を悦ばせることが出来るのだ。
しかし、そうでなかったとしても彼の好意は全く揺らぐこともないのだろう。そう思えば、そうじゃない娘達も彼に迷いなく、それでいて激しく尽くそうとするのだろうな、と思う。
そうしてどこか淫靡な空気が、部屋の中に広がっていく。明らかに自分のせいだが、レオンハルトは息を吐き、
「――悪いがお預けだ」
「……え？」
それはないだろう、と思った直後、部屋が開けられた。

「レオンハルト様ー！　例の報告書、持ってきましたよー！　ついでにクライアちゃんも部屋の外にいたんで連れてきました！」
「あ、あ、あの……お茶とお茶菓子をお持ちしたんですけど……」
部屋に入ってきたのはレオンハルトの使徒であるペールと、最近メイドとして入ってきたばかりのクライア・カラーだ。
ペールの方は紙を手にして普段どおりだが、クライアの方はどこか顔を赤くしている風に見える。エクレアは赤くなった。
……も、もしかして……。
聞かれていたのか、と思う。しかしレオンハルトは全く動じることなく、いつの間にかこちらから離れていて、
「ああ、二人共ご苦労。お茶はテーブルに置いてくれ。ペールはちょっと手伝え。今日はちょっと忙しくなる」
「は、はい」
「了解ですよう！　って、うわぁ……書類多いですねぇ……それに――って、エクレアちゃん？」
「え、あ、はい。何でしょう？」
どもってしまったこちらを見て、ペールが顔を近づけて観察してくる。何か疑っているような顔だ。バレてしまうだろうか、と思う。
そうして暫く見詰められ、
「……あぁ。ははーん」
……その分かりました、みたいな顔、ムカツキますわ……！
なるほどなるほど、と言いたげにこちらから離れ、机に向かっていくペール。もう完全にバレただろう。どうせ明日にでもなれば城中に広まってるだろうが、恥ずかしいものは恥ずかしい。
そうやって顔を赤くして羞恥に悶ていると、
「――続きは今夜だ」
「……!?　え、あ……」
「さて、仕事を始めるか」
レオンハルトが一瞬、こちらの横を通る際に小声で耳打ちしてきた。
続きは今夜。その意味が分からないほど、初心ではない。思わず背

筋が震え、
……ど、どうしましょう。と、とりあえず、念入りに身体を綺麗に……。
先程盛り上がりすぎておっ始めようとしていたことも忘れ、内心が荒れ狂うエクレア。それを見て、今度はペールがレオンハルトには見えない様に何かを書いて、
『今度、私の夜の講義、受けてみます？』
と、そんなことを書いた紙を見せてきた。どうでもいいが、書類の裏に書いていいのか。
エクレアは僅かに悩み、そして、
「……」
ペールに向かって頷いた。
――そして次の日。いつもと違う部屋から自分の部屋に向かったエクレアは、待ち伏せていたペールに〝昨夜はお楽しみでしたね？〟とニヤニヤした顔で言われ、そのまま講義を聞きに彼女に付いていった。
そして思った。――ああ、こうやって、人は堕ちていくんだなぁ、と。
この城のメイドが出来上がる行程を、自分の身で体感したエクレアであった。

使徒バーバラ

人類圏に住んでいた人間の少女――バーバラは魔物界で自分の生きる場所を見つけた。

彼女の不幸は生まれた時から既に始まっていた。

先天性の病気。バーバラは生まれた時から身体が上手く動かなかった為、何をするにも他者の補助が必要であった。最初の頃は家族も、いつかは治るのではないかという淡く、根拠のない期待を抱いて世話をしていたがバーバラが１０歳になる頃には病気が治ることも諦め、世話も嫌々やるようになった。

バーバラの家は平民の、この時代においては一般的な中流家庭である。餓死するほど貧しくはないが、それでも生活に余裕があるわけではない。

彼女の世話に時間を割かねばならない、というのは働く上でも邪魔だったし、相当の苦労だったことだろう。

だからだろうか。バーバラは家族に虐められた。

それはただの八つ当たりでもあり、純粋な虐待でもあった。お前のせいで自分達は苦労させられている――そんな愚痴や暴言を呟くように、時には怒鳴るように聞かされたし、手を上げられることもあった。

やがて、苦労させられている分のお金を家に入れろ、という言い分から身体を売らされた。先天性疾患を患ってはいたが、容姿には恵まれたバーバラではあったので程よく稼ぎにはなった。

傍から見れば酷い境遇のバーバラではあったが、それでも彼女は家族を恨むことはなかったし、変わらず愛していた。

自分が病気に罹って生まれてきたせいで、家族に苦労を掛けてしまっている。家族の言い分は事実でもあり、バーバラにも負い目があった。

しかし家族は決して裕福ではない家でも、ここまで自分を世話して育ててくれたし、酷い扱いをしても見捨てることはなかった。そのこ

とに感謝していた。
魔物の活動が活発であり、戦争も多いこの時代、自分の食い扶持は自分で稼ぐくらい当たり前の話である。身体を売らされるくらい構わない。これくらいしか出来る仕事はないのだし、苦労を掛けた分、自分に愚痴や暴言を吐くくらい当然だと受け止めるべきだ。彼女は決して悲観も絶望もすることもなく、家族を愛し、身体を満足に動かせないながらも心だけは逞しく生きていたのだ。
そんなある日のこと、父が珍しく、自分をおぶって外に連れて行ってくれた。
外は雪が降り積もる寒い冬の日だったが、外出するのなんて何年振りだろう。まるで小さい頃のようでバーバラは嬉しかった。窓から眺めるしかしたことのない外の風景を、実際に見て肌で感じれる。しかも家族と一緒だ。こんなに嬉しいことはない。
ほら見ろ。やっぱり生きていたら辛いことばかりじゃない。生きていたらいつか楽しいことだって訪れるのだ。
些細な幸せを感じながら冬の山を登っていく。どこに行くのだろう。聞いてみたが曖昧に応えるのみだ。
やがて父の足が止まる。山の中だった。ここに何があるのだろうと辺りを見渡していると、不意に父がバーバラを冷たい雪の上に下ろした。
思わず驚いたのも束の間、バーバラをその場に置いて、父は踵を返してどこかに行ってしまった。
呼びかけたが振り向くことはない。あっという間に父は雪の中に姿を消してしまった。
どういうことだ、と思いつつもバーバラは必死に父を呼び、雪の上で藻掻くようにしてその後を追った。
だが動かせるのは精々、腕くらいだ。追いつけるはずもない。
雪山に放置されてしまい、脳裏にある不安が過ぎったが、それを無理矢理かき消して追いかける。――そんな筈がないと。
これは何かの間違いだ。何か事情があるに違いない――そう信じ込み、バーバラは必死に雪の中を進んだ。

手袋も何もない。辛うじて生地が薄い服を着ているだけ。手は赤く悴み、意識は朦朧としてくる。寒さで震えが止まらなかったが、藻掻いて藻掻いて、必死に山を降りていった。
耐えていれば良いことはある。悲観することなんてない。
それを信じ続け、彼女はとうとう、自分の家まで辿り着いた。
家には明かりが点いている。バーバラは最後の力を振り絞り、腕で家の縁を掴み、窓から家族に呼びかけようと思った。
だがそこに映っていたのは――自分を捨てた家族達が、暖かい部屋で談笑する姿だった。
まるで自分など、最初からいなかったかの様に、今まで見たことのない様な表情で幸せそうに団欒する家族を見て、バーバラは気づいた。
――最初から、愛されていなかったんだと。
バーバラは世界に絶望した。今まで必死に、何事にも悲観せずに生き抜いてきたが、そこで切れた。
救いなんてないのだ。不幸な人間は不幸なまま。救われることなく死んでいく。この世の無情さを知ったバーバラは、そのまま雪の中で事切れようと力を抜いて、眼を閉じようとした。
そんな時――不意に手が差し伸べられ、バーバラは熱を感じた。
その正体こそが、人ならざる存在である魔人。バーバラの命の恩人であり、新しい行き場所をくれた主――ケッセルリンクだ。
バーバラはしばらく、ケッセルリンクのところに世話になっていたが、やがて自らも望んでケッセルリンクの使徒となった。
バーバラは、新たな一歩を踏み出すことが出来たのである。
自分の足で歩き、新たな仲間と生活を始める。
魔物界、という部分に不安が無かったと言えば嘘になるが、それ以上に身体が動くことと、ケッセルリンクの為になれることが嬉しかったし、周囲の人達も皆親切だった。もっと恐ろしい殺伐とした場所を想像していたのだが、拍子抜けしてしまったくらいだ。
だが、大変な事もある。例えば――
「――はい、じゃあ次。右からー」

「っ……！」
　声が聞こえた瞬間、右から一撃が飛んでくる。咄嗟に腕でガードしたが声の持ち主の力は手加減していてもとんでもない威力だ。全く力を込めていない様子で軽い声が飛ぶ。
「受けきれない、って思ったら避ける感じで。――はい、じゃあ次は適当に組み手で」
「は、はい……！」
　そう言って声の持ち主――ハンティは軽く手を打ち合わせて合図を出す。
　野原の上で息を吐くと、疲れで思わず倒れそうになる。それを横から支えてくれる者がいた。
「大丈夫？　バーバラ」
「ぱ、パレロアさん……あ、ありがとうございます！」
　そこにいたのはこちらと同様にケッセルリンクの使徒であり、訓練に参加してるパレロアだった。ふらふらしてしまったこちらを支えてくれたパレロアにお礼を言うと、優しく労ってくれる。
「良いのよ。もし疲れたのなら休んでも。貴方はまだ使徒になったばかりなのだし……まだ慣れていないでしょう？」
「あー……ひょっとしてやり過ぎた？　だったらごめんね」
　こちらの様子を見てハンティも締りが悪そうに頭を掻きながら謝ってくれる。それをバーバラを拒否した。
「い、いえ、折角の機会だし……頑張りたいかなって……ハンティさんも、ありがとうございます！」
「あー、まぁ、大したことしてないから別に良いんだけどさ。無理はしないようにね？」
「無理なんて……」
「そうよ、バーバラ」
　ハンティの気遣いを受けながらも無理はしてないと言おうとしたところで、今度は横からシャロンがやってくる。ケッセルリンクの使徒の中で1番の古株である先輩の姿に、思わず畏まる。
「シャロンさんまで……あたし、別に無理なんて……」

「良いんですよー、バーバラさん」
「加奈代まで……」
　この中では1番歳が近いらしい加奈代が得物である弓を持ってやって来る。こちらの背後を指して、
「少しくらい休んでも大丈夫です。そういうのは、向こうに任せる感じでー」
「……？」
　と、加奈代の声で皆がバーバラに合わせて一斉に振り返る。するとそこには、
「いいですかエルシール様。昨今、戦えないメイドはメイドではない、などと言われて久しいですが、それは私も推奨するところです。主や家内の身を守るためにも、戦闘の心得があることに越したことはありません」
「確かに……」
「ましてやエルシール様は使徒。この〝力こそが全て〟の魔物界で生きるならば力を付けることは必ず、役に立つことでしょう」
「……どうしてでしょう。今までで1番納得のいく説明を聞いた気がします……」
「さあ、時間は有限です。早速始めるとして……まずは戦闘スタイルを決めましょう」
「す、スタイルですか？　私、これまでは素手と魔法で――」
「確かにそれも悪くありませんが、メイドであれば他にも様々な戦い方があります。ナイフ、糸などの各種暗器は普段は服の下に隠す事が可能で仕事の通常業務の邪魔にならない上、お洒落感が増します。大剣なども見栄えがいいですね。後は、キャロル様と同じ様に銃とか……」
「す、素手だと駄目なんですか……？」
「素手でしたら古くから真のメイドにのみ伝わる一子相伝の拳法、冥土拳がありますが……宜しければお教えいたしましょうか？」
「……何だか色んな武器を試してみたくなりましたので、そちらをお願いしてもいいですか!?」

「……そうですか。でしたらナイフから順番に使ってみましょう。訓練の相手には、ご主人様から部隊をお借りしました」
「え？」
　メイド長さん、と呼ばれるメイドさんの突然変異体の女の子モンスターの背後から一糸乱れぬ素早い動きで現れたのは、黒い装備を身に着けた魔物兵だった。彼らは順番に喋り始める。
「我らは魔軍最強のレオンハルト軍の中でも選りすぐられし精鋭だけが所属を許された最精鋭の部隊……！」
「レオンハルト軍特殊猟兵部隊――その名も、ブラックティーガーである！」
「この度はレオンハルト軍とケッセルリンク軍の合同軍事演習に於いて、光栄にもエルシール様の訓練に協力を求められたものである！」
「そして――……えー、あー……と、やべっ、次何て言うんだったかな……」
「馬鹿者！　貴様、台詞を忘れるとは何事か!!」
「格好良い喋り方と台詞の練習は毎日欠かさず行えとあれだけ通達しておいただろうが！」
「も、申し訳ありません！　私の不徳が成すところで御座います！」
「……まあいいだろう。気を取り直して――そう！　我々は集団戦と隠密行動に特化し、独自の作戦行動を取ることが許された特殊部隊なのだ！」
「隊員は選りすぐられし精鋭！　何故かアブノーマルな性癖の持ち主が多いが、それはただの偶然だ！」
「特殊部隊、の特殊の意味は決して特殊性癖という意味ではないから注意してほしいであります！」
「しかしそのせいか、レオンハルト様には微妙な眼で見られることが多く――」
「馬鹿者！　それを言うと皆傷つくからやめろと隊の規則に書いてあるだろうが！」
「ふ、ふふ……訓練前に手痛いダメージを受けてしまったな……さすがはエルシール様……」

「まだ何もしてないのだけど……」
「ここからは気を引き締める必要があるな……！　総員、かかれ！」
「おお！」
「え、ええっ!?」
　魔物隊長の号令とともに、エルシールに襲いかかる魔物兵達。それを外から見て、助言を行うメイド長さん。
　その光景を見て、バーバラは戦慄した。
「……いや、あそこまでは……」
「でしょ？」
　加奈代の言葉に頷く。さすがにあれに巻き込まれるのは御免被りたい。
　もっとも、エルシールは自分達のリーダーでもあるメイド長なので1番戦闘訓練に気合いが入ってるというか入れなければならないという事情もあるらしいが。今もシャロンがそのことについて言っている。
「エルシールは私達の中で1番強いものね……」
「やっぱりそうなんですか……」
　エルシールとその特殊部隊だという部隊との戦いを見ながら呟く。
　多対一という状況。使徒の身体能力があるとはいえ、ケッセルリンクの使徒達は使徒の中ではそこまで強い方ではない。だがやはり戦闘慣れしていることもあってか、エルシールは良い動きを見せて相手を翻弄していた。
「慣れない武器を使うと……くっ」
「ぐ……はぁ……はぁ……中々やるな……！」
「ああっ、隊長に傷を！」
「隊長が興奮している！」
「まさかあの姿を解放するつもりでは……！」
「ふ、ふっふっふ、さすがはエルシール様。普通の姿では相手にならないようです……」
「普通の姿？」
　エルシールが周囲の魔物兵の攻撃を躱しながら疑問符を浮かべる。

膝を付いた魔物隊長は不敵な笑みを浮かべながら言った。
「左様！　魔物隊長スーツを着た私は真の姿の数分の一程度の実力しかないのだ！」
　魔物隊長は魔物兵と同じく、特殊なスーツに身を包んでおり、中身は通常の魔物が入っている。そのことを指して、真の姿を言っているのだろう。周囲の魔物兵も囃し立て、
「出るぞ……最強の魔物隊長と名高い隊長の真の姿が……！」
「我らが隊長であるイカ伯爵様はイカマン！　しかし、只のイカマンと侮るなかれ！　隊長は魔軍の中でも数少ない突然変異体！　レオンハルト様にその実力を認められ！　かの紅魔城の警備隊総隊長も兼任しているのだ！」
　隊員達が器用に戦いながら隊長を称賛していた。その間にも、魔物隊長はその外部装甲を外していく。
「そして隊長はかなりの紳士でもある！」
「ドMなのに触手責めが大好きという倒錯した性癖を持ち、街の女の子モンスター相手に正面から触手で責めても構いませんか？　と聞いてしまうほどの変態だ！」
「ふふふ、照れるな……」
「見ろ！　ドMだから部下に罵られようが傷を負おうが精神的には無傷どころか回復する！　どうだ、恐ろしいだろう!?」
「メイド長さん！　私、今直ぐ戦うのを止めたいです！」
「駄目です。それと、メイド長で結構です」
　変態に遭遇したエルシールの必死の提案を一蹴するメイド長さん。その間にも、イカ伯爵はその細身で人形の姿を晒していた。
　イカの怪人の様な見た目をしたイカマンは見た目だけなら強そうでスマートに見えるが、はぁはぁ、と息を乱しながら触手をうねうねさせてエルシールににじり寄る姿は恐怖でしかない。
「はぁ……はぁ……さあ、エルシール様……我が攻撃を受けて頂きますよ……！　もしくは、もっと打ってください……！」
「きゃーーーっ!?　こっち来ないで!!」
「うわぁ……」

気持ち悪さに皆で少し距離を取る。エルシールもあまり見ない必死の顔で悲鳴を上げてメイド長さんから受け取ったナイフをイカの怪人に向かって投げていた。狙いが完璧になっているのは火事場の馬鹿力というやつだろう。バーバラは皆と同じ様に引きながらも、こうも思う。

……あたしも、あれくらい動けるように……。

使徒になって病気も治り、身体を十全に動かせるようになったとはいえ、今まで歩いたことがなかったせいかたまに加減を間違えてふらつくことがある。直に慣れるだろうが、出来ればケッセルリンクの役に立つためにも皆と同じくらいには動いて役に立てるようになりたい。

そのためにも出来る限りこういった訓練の時は頑張りたいのだ。

と、そんなことを内心で思っていると、

「――調子はどうかね？」

「！　ケッセルリンク様……！」

今度は別の方向からケッセルリンクがやって来た。ほんの少し額に汗を流しているのは、同じ様に訓練をしていたのだろう。シャロンやパレロア、加奈代など、エルシール以外のメイド達が近づき、バーバラもそれに倣った。

「お疲れ様です、ケッセルリンク様」

「お疲れ様です！　ケッセルリンク様！」

「お疲れ様ですー。今、お茶をお淹れしますね？」

「お疲れ様です、ケッセルリンク様。おじ様との模擬戦は如何でしたか？」

「うむ、ありがとう。……そうだな、私としても良い運動になった」

そう言って微笑を浮かべるケッセルリンク。シャロンが言う〝おじ様〟というのはあの最強の魔人レオンハルトのことだろう。

レオンハルトはケッセルリンクと仲が良く、只ならぬ関係らしい。昔から親交が深いので使徒同士も仲が良いのだと言う。そのため、こうやって使徒達をハンティが指導したり、合同訓練の様なことも問題なく行える。そのハンティとケッセルリンクも、カラー同士であり、

色々と関係があるので気安い仲だ。今もハンティが近寄り、
「そのレオンハルトは？」
「連続でガルティアと戦っている。それが終わったら一度戻ると言っていた」
「そっか。じゃああたしはあっちの様子も見てこようかな」
と、言って横目を向けるのは大勢の魔物兵達が集まる場所。そこでは、お互いの軍が連携や行軍の確認をしたり、軽く部隊同士で模擬戦を行っていたりする。
そちらには、両軍を預かる魔物大将軍、リーとバルカ。レオンハルトの使徒であるキャロルやペールがいる。ハンティもそちらに合流しようと言うのだ。
「じゃあ、また後で見に来るよ」
「はい、キャロルさん達にもよろしくとお伝え下さい」
ハンティとシャロンがやり取りを交わすと、ハンティは即座に掻き消える。瞬間移動という高等魔法だ。それらを見て、やはり思うのは、
……やっぱり、周りは凄い人だらけだ。
能力や知恵があり、それを活かす術を知っている。未だ手探りの自分とは違うのだ。
それを思うと、手に力が籠もる。そろそろ訓練を再開しないと、と思っていると、
「バーバラ」
「！　はい、何でしょう、ケッセルリンク様」
主に呼び止められる。直ぐ様返事をすると、ケッセルリンクはこちらをじっと見て、
「……君はまだ、身体の扱いに慣れていない。私の為に頑張ってくれるのは嬉しいが、無理をされると心配だ。――それを頭に入れて、頑張るといい」
「……！」
ふっ、と微笑を浮かべて励ますケッセルリンク。
完全に内面を見抜かれていることに一瞬驚くも、千年以上を生きる

魔人に、内心が見透かされてることは何の不思議でもないとも思う。それだけ分かりやすかったというのもあるだろうが、やはり隠し通せないだろう。
その上で、心配だという言葉を入れて頑張るよう励ましてくれた。そのことを嬉しく思う。
「……はい！」
だからこそ、頑張ろうという気力が湧いてくる。
自分を救ってくれた恩人に報いるためにも、使徒として成長しなければならないのだ。
そうして心が晴れやかになったバーバラは、また一歩を、自分の足で踏み出した。そして、
「きゃあああああ!?　このっ……変態！」
「ぐはぁ!?　ぐ、はぁ……はぁ……やりますな……だが――気持ちいい!!」
「何で倒れないの!?」
「エルシール様。イカ伯爵様は毎日、自分で自分の身体を痛めつけるほどのドＭです。殺せれば話は簡単ですが、それはさすがにマズいので捕らえてみましょう。次は糸を使った戦闘です。エルシール様の為に取り寄せた特別性の糸をお渡しします。これなら修練次第で相手を捕らえることも――」
「それ、どれだけやればいいんですか!?　直ぐには出来ないですよね!?」
新たに糸を渡され、模擬戦を行うエルシール。それをじっと見て、ケッセルリンクが、
「……ふっ、エルシールも、頑張っているようだな……」
「……」
染み染みと良い感じに言うケッセルリンクに、バーバラは心の中で出掛かった言葉を呟く。
……あ、その程度な感じなんだ……。
少なくとも、違和感が無くなるほど日常的にエルシールはあんな風に頑張っているらしい。頑張りたいは頑張りたいが、ああいう方向に

頑張りたくはないな、と変態に悪戦苦闘する先輩メイドの姿を見て、バーバラはこれから先の生活を夢想した。
そして後日、変態との戦いを潜り抜け、更にメイド長さんの特訓を受け続けたエルシールはと言うと――
「……糸、本当に使えるようになってしまったわ……」
「さすがはエルシール様です。私は信じていました」
「……」
明らかに信じていなさそうだったが、本当に強くなってしまったので言うに言えなくなってしまったエルシールであった。

接待

ある日のレオンハルト城。
昼下がり、思い思いの時間を過ごしていた主だった面子は、突如レオンハルトに呼び出された。
「非常事態だ……」
開口一番、頭を抱えたレオンハルトが珍しく顔を俯かせてそんなことを言う。只ならぬ様子の主に呼び出された者達の中からハンティが代表して問う。
「非常事態って……一体何があったのさ？」
「……ああ、実は――」
と、明らかに疲れた溜息を吐いてレオンハルトは言う。それは、
「……魔王様が、ここに来ることになった」
「……は？」
疑問符を浮かべたのはその場にいる殆どの者だった。ハンティと同様に唖然としたペールが苦笑し、
「えーっと……どうしてそんなことに？」
「ああ。それは……つい先程、こんなことがあってな――」
質問を聞いたレオンハルトが皆に向かって、ため息混じりに回想を語り始めた。

魔王城。
泣く子も黙る大陸の支配者、魔王ナイチサが座するその居城に、レオンハルトはいつもの様に呼び出されて参上していた。
……ナイチサからの呼び出しか……さて、今日は一体何だろうな。
頭の中では今回の用件についての予想を思考し始めている。魔人の最高位である魔人筆頭であり、魔軍を取り仕切る魔軍参謀という立場にあるレオンハルト。ナイチサからの信頼も厚く、個人的に話し相手や食事に誘われることもしばしばあることだ。

であれば何らかの勅命を受ける――仕事の話であるとも限らない。仕事の可能性が高いのは確かだが、それ以外の可能性も予め頭に入れておく。
そうすればどんな命令が来たとしても動じることはない。千年以上魔軍参謀を務めている頭脳は伊達ではないのだ。
予想を一通り頭に入れたところで、レオンハルトは謁見の間に辿り着く。玉座の背後、巨大なパイプオルガンの前に、魔王ナイチサがいる。音楽が好きなナイチサはこうやって楽器を弾いてることも多い。軽快な曲を弾いてる時もあるが、今回は重苦しい荘厳な印象を感じさせる曲だ。どちらかと言うとこういった曲調のものが多い。頻繁に弾いているだけあって、その腕前はかなりのものではあるがいつまでも立ち止まって聞いているわけにもいかない。前に進み出て片膝を床に突くと、
「ナイチサ様。魔人レオンハルト――御身の前に参上致しました」
「……来たか」
「はっ」
鍵盤を弾いていたナイチサの手が止まり、音色も止まる。立ち上がりこちらに振り返ると、玉座に向かって移動しながら、
「レオンハルトよ。今の曲を知っているか？」
「は……確か、５００年程前の名作曲家、イヴァン・ロドロコスキーの交響曲第４番、〝光の処刑〟だったと記憶しております。人間の間ではもはや知らない者の方が少ないとまで言われた名曲であります」
淀み無く知識の中にある答えを出すと、ナイチサは一度頷いた。玉座に腰掛け、その続きを口にする。
「そうだ。今では学のない平民ですら、教会や劇場で耳にするというほどの名曲。だが、その名曲を生み出した名作曲家は存命時は全くの無名であったという」
音楽家についての知識。芸術分野に詳しく、そうでなくとも様々な知識を暇な時に身に着けているというナイチサは自身が下に見る人間の偉人であってもそれなりに詳しい。人間は下等だが、良いものは良いと認め、人間が生み出したからといって差別はしない。事実、音

楽や絵画などの芸術、料理や娯楽、文学作品など、人間が生み出した文化を嗜むナイチサは正しく大陸の王と云えるだろう。一々敵視することはないのだ。
　かくいうレオンハルトも、空いた僅かな時間を見つけて本を読んだり、情報収集で知識を仕入れているため、最近の流行にも詳しい。芸術分野もナイチサほど詳しくはないが、音楽などは嗜むし、偉人の伝記なども読むことがあるため、知識には入っている。
　ただ伝記などはたまに、自分の事が書かれていたりもするため複雑ではあるのだが。
　そんなことを思いながら、レオンハルトは相槌を打ち、ナイチサの話の続きを耳にする。
「このイヴァンという作曲家の曲は、生み出した当初は暗く重い曲調が不評であり、演奏家も演奏を拒否したほどであるという。評価されたのは比較的最近の話であり、百年程前のことだ」
「……ですが芸術の分野ではそういう事例も珍しくはないでしょう」
　思ったことを素直に口にすると、ナイチサも同意した。玉座の上で頷きを入れて、
「そうだ。芸術の世界では死後に作品を評価されて名を残す者も多い。反対に、存命時には高い評価を受けても死後、時代の流れとともに忘れ去られていく芸術家も多く存在する。……さて、この場合、どちらが勝利者なのであろうな？」
「……芸術、という分野に於ける成功者であれば前者でしょう。人間は例え、様々な功績を残した偉大な英雄であろうと１００年も経てば皆土に還ります。しかし、後世に残るほどの作品というのは、評価が覆らない限りは永遠にも等しいでしょう。……もっとも、人生の勝利者は後者でしょうが……」
「……そういうことになるだろうな」
　そう話を締めて、ナイチサは少し間を置く。話の意図が見えないが、ナイチサとの会話にはよくあることだ。思慮に耽れるような哲学的な、答えの出ないような難しい話を振ってくることはよくある。
　だが、レオンハルトとしては実はこういう話の方が気楽だ。ほぼ無

意味な話であり、思ったことをそのまま口に出せばいいだけなのだから。
そしていつものパターンであれば、こういった他愛もない話の後に本題が来る。一旦、何らかの会話を挟みたがるのは人間の貴族らしい癖だ。それを思い、再びナイチサが口を開くのを聞いた。
「さて、レオンハルトよ。余が卿を呼び出した理由だが……心当たりはあるか？」
問われ、考える。特に重要な仕事を任されてもいないし、最近あった出来事や会話の中に、何らかの伏線のようなものはない。
となると、難しいものだ。先程、どんな用件が来ても良いように予想しておいてはいたが、それを当てるとなると難易度は格段に上がってしまう。
傾向くらいであれば何となく当てれそうだが、ピンポイントで当てるにはそれなりの情報が無いと難しい。
……先程の会話に関係でもあるのか？
そういうことも無くはない。こちらを試すような遠回しな発言はナイチサの十八番だ。
だが芸術の話に関連性がある用件は思いつきそうにない。演奏会を開きたい、とかだろうか。微妙にあり得る気もするのが怖い。
それとも物騒な方に寄せて、芸術家を捕らえてこい、とかだろうか。そして戯れに、眼の前で楽器を惹かせるとか。それもないとは言えないが、並の演奏家では、ナイチサの圧力を前にして普段通りに演奏することなど不可能だろう。ナイチサがそれを分かっているかはさておき。
仕事の方だと、やはり近頃勢力を拡大しているあの国だろうか。しかし、人間の国が多少大きくなった程度でナイチサは毛ほども気にしない。かつて人類を統一した藤原家でさえ、悪魔の事が分かるまでは普段通り放置しようとしてたくらいだ。
「……心当たりはないのか？」
そして思考を纏めている間に再度問われる。やはり分からない。これ以上は待たせるのも失礼だと思い、レオンハルトは返事をした。

「……申し訳ありません。少し、考えてみましたが特に見当たらず……」
「……そうか……」
そこでナイチサは息を吐いた。珍しいことに、深く大きな溜息だった。
残念そうな、僅かに落胆したような、そんな雰囲気のナイチサに、レオンハルトは内心で強張った表情を見せる。
……思った通りの答えではなかった……とすると、分かって当然のことか？
こちらの答えに落胆した。それは理解出来る。
しかしナイチサも魔王だが、理不尽ではない。家臣であるという魔人達や、特に自分などには気遣いを見せてくれたりもする。分かるわけがないことを外したところでそういった態度は出ない。
となるとこちらが何かを見落としたのか。
ナイチサが再び話始める前にもう一度考えてみるが――やはり浮かばない。心当たりは皆無だ。
半ば諦めてナイチサの答えに覚悟を決めていると、
「……仕方あるまい……出来れば、余の方から言いたくはなかったが……」
そんなことを残念そうに呟くナイチサ。言いたくない？　何の話だと。
こちらから言い出すのが好ましい話とは何だ。余計に分からなくなる。
表面にはおくびにも出さないが、内心で困惑しているとナイチサは一息、
「……レオンハルトよ。いつになったら、余を招待してくれるのだ？」
「……は……は？」
その言葉に、思わず間の抜けた声を上げてしまう。ナイチサの前だというのに。レオンハルトはその語句を脳で読み取ると、戸惑いながらも咄嗟に質問を告げた。

「……招待……でありますか？」
「そうだ。魔王になってかなりの年月が経つが……余は卿の城どころか、卿の街にすら行ったことがない」
「は、はぁ……」
　そんなこと知るか。魔王何だからこっちの許可を取る必要なんて無いだろう。来たきゃ勝手に来い――などと思ったが言える訳がない。来たら来たで困るのだが。特に城には。
　しかしナイチサはそのことを不服そうな様子で指摘していく。
「無論、卿が忙しいのは重々承知している。その忠勤を邪魔することは王として好ましくないことだ。それに、まだ一度も訪れていないというのに、こちらから招待してくれと言い出すことは礼儀としては微妙なところでもある。故にそちらの都合の良い時まで待つことにしたのだが……いつになっても招待が来ないともなれば、さすがの余も苦言を呈さざるを得ないぞ、レオンハルトよ」
「は、はっ！　申し訳ありません！　そのように考えていらっしゃったとは……」
　慌てて謝る。憤怒、というほどでもないがちょっと怒っているようだ。こちらは大丈夫だが、並の魔物や人間ならこれでもショック死しかねないだろう。ナイチサは鼻を鳴らし、
「ふん、もうよい。言った様に、卿が忙しいのは承知している」
「は……申し訳ありません」
　しかしこれまでの忠勤の積み重ねが活きているのか、特にこれ以上指摘されることはないようだ。少し安心しながら再度頭を下げて謝る。
　……とりあえず、安心だな……。
　ホッとしていると、
「――それで、いつならよいのだ？」
「……は？　それは……」
　またしても突然の言葉に、レオンハルトは再度固まる。
　まさか、と嫌な予感を感じていると、やはりその用件は来た。もう一度詳細な内容で、

「いつなら空いている？　その日に、余は訪問するとしよう」
……や、やっぱりか!?
話は終わってはいなかった。完全にやって来る気満々だ。
しかも具体的な日数を尋ねてきており、これは避けられないだろう。毎日忙しいは忙しいが、急ぎの用件でもなければ、その程度の時間くらいは作れるのだ。
レオンハルトはその場で頭を抱えたい気持ちでいっぱいになったが、ここでそれをすることは出来ない。何とか表情筋を保ちながら、レオンハルトは告げる。
「……そ、そうですね……来月――」
言う。すると、
「……少し遅いな。もっと早くは出来ないのか？」
「それは……」
催促される。もう既に、一度聞いてきたためか、とことん追求してくるつもりだった。礼儀もクソもない。
真顔になりながらも頭の中では計算を行う。本当の予定であるとか、諸々の準備も含めると、
「……であれば、時間を作りますので……来週などで……」
「……ふむ、来週か。準備も必要であるし、適当であるな。良かろう」
今度は納得して頷いてくれる。
しかしこちらは内心ではまだ抗議したい気持ちだった。というか単純に来ないでほしい。特に街はともかく、城は自分にとって癒やしのための空間、絶対領域なのだ。
そこに自分が1番苦労させられるナイチサが来るとか、悪夢でしかないのだ。
話は聞いているだろうし、信頼が厚いことは自覚しているので余程のことが無ければ大丈夫だろうが……それでも緊張してしまうのだ。
今からやっぱ駄目って言ったらどうなるだろう、とナイチサを見上げると、
「フフ、来週が楽しみだな……レオンハルトよ。期待しているぞ」
「……はっ、精一杯饗させて頂きます……」

……これは駄目だ……！
行けると分かった瞬間、先程とは打って変わって明らかに機嫌が良くなるナイチサ。それを見て、最早観念するしかないと悟ったレオンハルトは、普段より足取りが重い様子で、城に帰ったのだった。

「――ということがあってな……」
回想を終え、皆に概要を説明すると、皆も同様に微妙な表情になった。
キャロルが首を傾げ、
「つまり……魔王様がいらっしゃいますので、おもてなしをしなければならない……ということですの？」
「ああ、それもあるが……まあ面倒が起こらないように準備する必要もあるな」
「あー、そっか。魔王が来るってなると街に住む魔物にも伝えとかないとね……」
キャロルの問いに頷くと、得心したようにハンティも街の心配をする。顔を向け、そちらの言葉にも頷き、
「ああ、そうだ。少し出入りを制限しないとな。騒ぎ……にはならないだろうが、厄介事になる可能性はある」
「どう考えても静まり返りますよう……とりあえず、城のメイド達はお休みにして引き篭もって貰います？」
そして街の魔物もそうだが、城に済むメイドなどは更にマズい。長年生きて、レオンハルトや他の魔人と接してるため多少は免疫が付いただろうが、それでもただの人間に過ぎないのだ。魔王を目の前にしたら仕事どころじゃない可能性がある。
それにメイドの中にはナイチサにトラウマを持つ者もいるのだ。それも考えてシフトを組まなければならない、とペールの言に同意し、
「ああ。当日は最低限の人員だけで相手をする。使徒のお前達とメイド長、後は……料理長も大丈夫か」

「はい。メイド長の名に懸けて、どんな相手であろうと誠心誠意もてなして見せましょう」
「フハハハハハハハハッ！　勿論でありますレオンハルト様ぁあああああ！　今代の魔王様へ料理をお出し出来るッ！　それを思うと料理人としての血が騒ぎますぞッ！　腕が鳴りますなぁ……！」
　柔らかな笑みを見せて、メイドとしての挟持を語るメイド長さんと、物理的に腕を鳴らしている料理長。どちらも全く動じていない普段通りのもので、安心出来る。職務に対する安定感は抜群だ。この二人は特に問題ないだろう。
「後は計画を立てないとな……」
「とりあえず、魔王様が来るのに相応しいお店の厳選と、予約はしておきますの？　貸し切りで」
「そうしてくれ。後、勿論貸し切りだ」
　でないと他の客が死ぬ。
　だが予約はするが、ナイチサがふらっと気が向いた店に入る可能性もある。それを考えると意味ないかもしれないが、その場合は魔物達には我慢してもらうしかない。
　……とりあえず、今から動かないとな。
　特に城などは、見られてはマズいものもある。隅から隅まで探索することはないだろうから大丈夫だが、念には念を入れておこう。
　……接待の準備をしないとな……はぁ……。
　魔王相手に接待をしなければならないと思うと、とても憂鬱だった。

　そうしてしばらく、レオンハルトは準備の奔走し、無事当日を迎えた。
　一度魔王城にナイチサを迎えに行き、一緒に街へと向かったのだが、既に迎えに行った時点で、
『劇場やスポーツ施設もあると聞いたな……フフフ、楽しみだ』
　なんかうきうきだった。レオンハルトは若干テンションが下がっ

た。
　もうこうなったら手早く紹介して手早くスケジュールを消化してしまおうと心に決める。街を前にして、
「ほう、ここが……」
「はい。ここが私の治める魔物の街――レオンハルトシティです」
　紹介するためなので仕方なく口にしたが、何で自分の名前が付いてるんだろうと思い恥ずかしくなる。自分でこの名前を言わなければならないとか拷問だろう。
　そうして、レオンハルトはナイチサを先導して街に入った。中に入ると予め聞かされていた魔物兵達が普段通りの生活から道を開ける動きに変わる。
　それでも動きを止めないのは、出来る限り普段通り生活しろ、と伝えたからだ。
　眺めるものもいるが、動くものもいる。それを見たナイチサは興味深そうに、
「ふむ……聞いた通り、魔物達が自然に文化的な生活を送っているようだな……」
「はっ。これだけのものを用意すれば、日々の生活にも張りが出てきます。特に魔物は、あまり娯楽というものを知りませんでしたから」
「なるほど。こうやって多くの娯楽や食料を餌に、秩序を作り、統制された軍隊を作る一助としているわけか。ふむ、興味深い……」
　街を眺めているナイチサ。その様子に幾人かの魔物兵がかなり緊張しているようだが、少し我慢して欲しい。じっとしていれば直ぐに終わる。
「……では、幾つかお勧めのお店がありますので、そこを紹介しましょう」
「うむ、期待しよう」
　そう言って、ナイチサを連れて接待を行う。その辺りは順調だった。
　まずは食事に連れて行く。今日はまだ何も口にしていないらしい。昼食として連れてきたのは、ある一つのお店だ。

「……ここが卿のお勧めのお店か？」
ナイチサが若干怪訝そうな眼で見てくるが、レオンハルトは自信を持って頷く。
「はい。ここは私が個人的に贔屓にしているお店――大衆食堂〝食仙人〟です。さあ、入りましょう」
「……ああ」
やはり不審そうにしながらも、一応こちらを信用しているのだろう。入り口の戸を開けて入るこちらに、ナイチサが続く。
だが不審に思うのも無理もないだろう。この外装、内装を見れば。
「……外観から予想していたが……狭いな」
「はい。大衆食堂ですからそれも仕方ないでしょう」
「……なるほど。人間で言うところの平民が訪れるような店ということか……」
カウンターに１０席程。四人席のテーブルと、座敷のようになっている席が２つずつ。木造で出来たそこは明らかに大衆食堂。とてもではないがナイチサの様な立場ある者が訪れる場所ではない。
それはレオンハルト自身にも言えることだろうが――しかし、レオンハルトはここを実際に贔屓にしてたまに訪れていた。
その理由を、ナイチサへ勧めた理由と一緒に語る。それは、
「ここは魔物兵達に人気のお店です。多少、狭いのはともかく、味は確かです」
「……だが」
「それにナイチサ様はこういったお店に入ったことがないのではありませんか？」
「！　ふむ、それは確かに……入ったことはないな……」
ナイチサも元人間だろうが、貴族のような高貴な身分にあればこそこういった店には入ったこともなければ、大衆料理など殆ど口にしたことがないはずだ。
だからこそ選んだ。高級料理などは食べ慣れている。料理長が作ればそれも充分美味しいものだが、そちらは後に回して、まずはここだからこそ楽しめる場所を選ぶのだ。

……高級料理店を選べばいいというのは貧乏人の発想。真の金持ち相手には普段は行かないこういう場所を選択するのがベターだ……！

食べ慣れてる相手に食べ慣れた物を出してもつまらない。せっかく普段来ない場所に来たのならそこでしか食べられないものを食べさせるのみ。

それにレオンハルトは高級料理も食すし、ガルティアほどではないが食に拘っているが、こういった食事の方が好みだった。薄味の上品な味付けも悪くないが、旨味をこれでもかと詰め込んだ濃い味付けの料理が好きなのだ。料理長などはその辺も加味して作ってくれるが、雰囲気も合わせて、人を選ぶような完璧でないが故の料理も食べたくなる。その辺にマッチしているのがこの店だった。

思考としてはこっちの方が貧乏人の様なものだ、とレオンハルトは評する。そんなこんな思考を回していると、ナイチサも納得したのか、

「……良いだろう。知らずに否定するのは愚か者のやることだ。余の口で実際に食し、その上で評価しようではないか」

「はっ、そう言って下さると思っておりました。既にこの店でお勧めの品を作るようにと伝えておきましたので席に座って待ちましょうか」

「うむ」

椅子を引いてテーブル席に座らせる。レオンハルト個人としてはカウンターの一番奥か、座敷が好きなのだがナイチサはどちらも好まなそうなので普通の席にした。自分も対面に座り、暫し料理が来るのを待つ。

予め、店に来たらこの料理を持ってくるようにと伝えておいた。注文の際に店員をしている女の子モンスターの金龍とかが怯えてしまわないようにだ。直接顔を合わせないなら大丈夫だろう。

しばらくして、

「はーい！　お待たせ致しましたー！」

元気の良い声とともに料理を運んでくる者がいる。チャイナ服を

来たその少女は、レオンハルトは勿論のこと、ナイチサにも見覚えのある顔だった。
　ナイチサが気づく。料理を運んできた彼女の顔を見て、
「ん……卿は……確か、レオンハルトの使徒の……ペールと言ったか」
「はい。今日は魔王様が街に来るとのことで、微力ながら街を紹介するレオンハルト様のお手伝いをさせて頂いております」
「そうか。大義である」
「過分なお言葉を頂き、感謝します」
　と、告げて一礼。普段はアレだが、こういった時はちゃんとすることが出来るので問題ない。
　ナイチサも特に気にした様子もないようだ。それよりも料理が気になる様子で、
「ふむ、色々ある様だが……幾つか知っている物もあるな」
「はい。こかとりすの唐揚げ、とんぽーろ、天麩羅、厚焼き卵、ラーメン。どれもこの店では定番のメニューです」
「左様か。ならば、早速頂くとしよう」
　ナイチサが食器を手に取り、料理の中から一つ――まずはとんぽーろを手に取る。
　そしてゆっくりと口に含み、咀嚼すると、
「……なるほど。こういう味なのか……」
　飲み込んで、感心する様子を見せる。そのタイミングでレオンハルトは尋ねた。
「お味の方は如何でしょう」
「確かに、悪くないな。次は――」
　満更でもない様子で、次々と食べ進めていく。すると意外にも気に入ったのか、
「……魔物兵も、思ったより良いものを食べているのだな……」
「食事は魔物達にとって1番の娯楽といっても過言ではありません。食事事情についてはかなりの力を入れました」
　レオンハルト軍やこの街に限ったことでもない。魔軍の遠征中、他の軍などでもそれなりに良い物が食べれるようにはなっている。レ

オンハルト軍やガルティア軍が1番拘っているだろうが、魔物兵の食事が思ったよりも良いものであることには違いない。
そうして食べ終えると、レオンハルトとナイチサは店を出て今度は娯楽施設に向かった。劇場、各種スポーツ施設。安牌であるのは劇場であるし、そちらにもちゃんと向かうが、サプライズとしてレオンハルトが用意したのは、
「次は食後の運動と参りましょうか」
「運動というとスポーツか。しかしこれは……一体何と言うものだ？」
街の外れ。新しく開発したその場所は緑の丘を利用したとあるスポーツの施設だ。
実験的に作ってみたそれが今回、ようやく役に立つ。
木の棒のようなものでボールを飛ばして穴に入れるスポーツ。その名は、
「ゴルフと言うものです。この木の棒を使って白いボールを飛ばし、遠くの穴に入れた方の勝利となります」
「ふむ、加減が難しそうだな」
ナイチサが言う通り、魔人と魔王の力では中々加減が難しく、ボールを何個も無くしてしまったりもしたが、最後の方はどちらも慣れて、それなりに楽しめるようになった。
「なるほど、これは如何に手加減出来るか、という部分が肝なのだな」
「……そういうことです」
違うと思うが、そういうことにしておこう。ゴルフが出来るのも魔物将軍や魔物隊長以上の者に限られるだろうしな。
そして最近気づいたが、身体能力がある程度均一でないと、スポーツは成り立たないのだ。
たまに身内とテニスをしたりするが、ハンティやケッセルリンク、ガルティアくらいならともかく、他の相手に力を込めてショットを打つと――死にかける。この間もハンティがテニスをしてペールをＫＯしていた。テニスはそういう競技ではない。
なので身体能力が劣る相手だと手加減が必須なのだ。

そのうち、また余裕があればスポーツ施設を作りたいが、最近はまた忙しいのでいつになるか分からない。このゴルフ場もつい最近、魔物将軍達がテニス以外にも何か新しいことがやりたいと言うので、仕事のボーナスがてらに作ったものだ。
そのテストも兼ねてやってみたが、コースの長さを思わず人間基準で作ってしまったので、全力で打つともれなくＯＢになってしまう。改良の余地ありだな、と頭に書き留めながら劇場で劇を観覧する。
「ほう、随分と見れるな。この演技や演奏は一朝一夕では身につくまい」
「お察しの通り、有志の魔物達が劇団を開いております。空いた時間によく練習しているようで」
劇場で劇を行っている者達は全員魔物兵の中身。男の子モンスターや女の子モンスター達だ。良い息抜きになっているらしい。
「脚本も出来が良い」
脚本は結構前からペールが暇を見て書いているらしい。腐っても物書きなのでかなり出来が良い。普段からそういう作品だけ出すならこちらとしても不安が無くていいのだが、どちらかと言うとペールはアレな方の作品に力を入れたいらしいのでその願いは叶わない。
昔の様にケッセルリンクがたまには出ないかと、主にペールにお願いされているらしいが、本人は少し恥ずかしいらしく、断り続けている。それだけが理由ではないかもしれないが、まあそれはいい。
気がつけば劇も終わり、日も落ちる頃。とうとう城にナイチサを招き入れることとなる。
予定としては少し早いが、ナイチサを連れて城門を潜り、城内に入ると、
「お帰りなさいませご主人様。魔王様も、本日はようこそおいでくださいました。心より歓迎致します」
「良きに計らえ」
「畏まりました。では、こちらへどうぞ」
メイド長さんはさすがと言わざるを得ないだろう。魔王を目の前にしながらも、普段と全く変わらない淀みのない動作で一礼し、自然

に先導してくれる。
ナイチサも、相手が一使用人であるため一々声を掛けたりはしないものの、不快には思っていないはずだ。一声掛けただけでも問題ないことが分かる。
廊下を行き、食堂に向かう途中、ナイチサは周囲を観察しながら、
「……中々に良い城であるな、レオンハルトよ」
「はっ、有難うございます」
「魔人の頂点に立つ卿に相応しい城だ」
「過分なお言葉、恐れ入ります。ですがこれでも持て余しているのが現状でして……」
「フ、そうか」
満足がいくものだったのか、微笑を浮かべる。それを見て、
……どうやら、無事に終われそうだな。
と、内心で一息つく。
後は食事を取れば予定としては終了。ひょっとしたら、暫くは会話に興じたりはするかもしれないし、城の中を見て回りたいと言うかもしれないが、この様子だと機嫌も良いみたいだし、問題はないだろう。
城に来ると言った時はどうなるかとも思ったが、どうやらその心配は杞憂だった様だ。
そうして安心して食堂に足を踏み入れようとした時、直前でメイド長さんが立ち止まった。何かに気づいた様に、
「……申し訳ありません、魔王様、ご主人様。どうやら少しトラブルがあったようで、少し手前でお待ち頂けないでしょうか？」
「……どういうことだ？」
突然の言葉にナイチサが眉をひそめる。そしてそれは、こちらも同じだ。
そんなことを言う予定はないし、メイド長さんが何かミスをすると思えない。本当に中でトラブルでもあったのだろうか、と思う。
しかし食堂は目と鼻の先だ。ドアはなく、廊下から直接入れる作りになっている。その直前で止まるとなると、
「直ぐそこであろう？　であれば中で待つ」

「……それは――」
「――卿に許可を求めている訳ではないぞ？」
「……」
その言葉にさしものメイド長さんも何も言えなくなる。だが、理不尽という訳ではないようで、
「余に、廊下で立ち止まっておけと言うつもりか？　もし本当に中に入れないなら理由を説明せよ」
「……それは……申し訳御座いません」
一体何があったのか。メイド長さんが何かを隠そうとしている。
レオンハルトでさえも分からない。さすがにこの様子だとテーブルに吹き残しがある、とかではないだろう。であれば、と思考を回したところで、ふと気づいた。
……中に誰かいる？
それは人の気配だ。ナイチサの強い存在感にかき消えてしまいそうな気配。そのせいで気づくのが遅れた。
その事実に嫌な予感を感じ、フォローをしようとしたところで、ナイチサが足を踏み出した。
「もう良い。入るぞ」
「っ……！」
「！　ナイチサ様――」
と、メイド長さんは当然、止めることが出来ない。横を通り、食堂の中に入っていく。それを咄嗟に追いかけて食堂の中を見たところで、レオンハルトは顔を強張らせた。
それは、中にいる人の様子だ。
普段通りの食堂。内装におかしなところはない。
だが――その床に、腰を抜かすようにへたり込み、顔を青ざめさせて震えるメイドの姿があった。
「あ……あ……」
「っ!?」
それはメイドの一人である――リムという少女。
レオンハルトの城のメイドの一人で、人間のメイドの中で最も古株

の少女だ。
……そういうことか！　これはまずい……！
何故彼女がここにいるかは分からないが、メイド長さんが止めようとした理由は理解出来た。
ナイチサに彼女の姿を見せるわけにはいかなかったのだ。
それは何故か。それは彼女が、かつて住んでいた村をナイチサに襲われ、レオンハルトに褒美として下賜されたこと。
無論、人間のメイドを飼っている、というだけならそこまで問題はない。これまでも、何十人と貰っているのだ。
しかし、問題なのはかつて自分が、ナイチサに対して彼女を助けるために、〝嘘〟をついたということ。
自分が女好きだと知れてからはなかったが、当時は彼女を下賜する際に、〝殺せ〟と命じられたのだ。
そして自分は、そのことに対して嘘をついた。彼女を犯して殺したと。
ナイチサが彼女を憶えているかは分からないが、もし憶えてたら命に反したこととなる。それはマズい。今更自分を処分などはしないだろうが、理由を追求され、命令通り、彼女を殺す羽目になるかもしれない。
何としても、それだけは避けなければならない。ナイチサが憶えていないのが一番良い。当時とは髪などの容姿が多少違うためその可能性を期待したい。しかし、
「卿、は……」
……！　やっぱり憶えてたか……！
その反応に確信する。やはりどうにかフォローしなければならない。
だが咄嗟のことであることと、上手い言い訳が見つからない。言い訳を重ねてしまえば、余計に悪化する可能性もある。
どうすれば、と頭を回す。ナイチサが追求してくる前か、最初の一声で何か言わなければならない。
動じずに口を開くことは可能だが、問題は何を言うかだ。その文言

が解らない。
　迷い、辛うじて思考を回転させて何を言うか導き出すと、それとほぼ同時にナイチサが、怯えるリムを見て口を開いた。その内容は、
「……ふむ、なるほど、な。メイドが食事をしており、それを見せたくなかったと……そういうことか？　レオンハルトよ」
「……！」
　決めていたフォローを言おうとして、直前で止める。そして受け答えを行おうと、
「……はは、どうやらそういうことの様ですね。これはお恥ずかしいところをお見せしてしまいました。一応、ナイチサ様の訪問は城の者には知らせておいたのですが……」
「構わない。聞いていた予定より少し早めに訪れたであろう。であれば致し方あるまい。ミスではあるが、そういうこともあろう」
「そう言って頂けると助かります。――メイド長」
「はい。……では、どうやら驚いてしまった様なので少し部屋に連れて行って参ります。少々お待ちを」
　こちらの意図を組んだメイド長さんが、即座にリムを抱え上げ、その場から消えるように移動する。言葉通り、部屋に連れて行ったのだろう。
　だが直ぐに戻ってくるはずだと、ナイチサの方に視線を向けると、
「……では、座って待つよしよう」
「はっ、ではこちらに」
　自ら先導して普段は自分が座っている上座にナイチサを座らせる。そして自分は別の席につくと、
「……レオンハルトよ」
「はい、如何しましたか？」
　名を呼んできたので、応える。だが、
　……何だ？
　名を呼んできただけで、中々その先の言葉が来ない。まさか呼んだだけ、というペールみたいなことはしないだろう。やったらギャグどころの話じゃない。

それとももしかしてリムのことをやはり気づいていて、指摘するのだろうか。怒ってはいない様に見えるが、それはそれとして追求するなど、あり得ない話ではない。

何かを考えているような素振りも見せているし、今の所はその可能性が高い。

だが、ナイチサはこう言った。かなりの間を置いた後で、

「……いや……うむ、そうだな……夕食のメニューは何だ？」

「は……ああ、それでしたら料理長がディナーのフルコースを用意する予定です。その時に給仕から説明が入るかと思いますので、楽しみにして頂けたらと」

「……そうか。それなら致し方ない。楽しみに待つとしよう」

と、再び当たり障りのない――と言ったらアレだが、普通の会話を行う。

だが、いつもと違い微妙に歯切れが悪いようにも感じる。

……？　様子が変だな……。

しかしナイチサの表情も読み難い部類に入る。今の反応だけではちょっと解らない。リムのことを気づいていたようにも見えたが、追求を行うことは無かった。気づいていたのなら、何故追求しなかったのかが疑問に残る。

それとも、本当に気づかなかったのか。それもあり得る。ナイチサは基本的に人間に興味はない。８００年以上昔に襲った少女の一人憶えていなくとも可笑しくはないし、リムも昔とは容姿や雰囲気が違う。それが運良く、機能したのかもしれないと、

「――ただいま戻りました」

「！　戻ったか。どうだった？」

今度はこちらから問う。主語がない曖昧な問いだが、メイド長さんは完璧に意図を察して答えてくれた。

「はい。どうやら食事の時間を間違えたそうです。夕食を取りに行こうとしたところで、魔王様が既に来ていたことに気づいてびっくりして腰を抜かしたと。私の部下が失礼な事をしてしまい、申し訳ありませんでした」

説明し、最後にナイチサに向かって頭を下げるメイド長さん。おそらく、その説明は本当だろう。この場で嘘をつくメリットはないし、リスクが高すぎる。ひょっとしたらもっと詳しい事情もあるかもしれないが、そこまで言う必要はない。現にこの時点でナイチサが納得したという表情を作り、

「やはりか。うむ、そういうことであれば致し方あるまい。許そう」

「ありがとうございます」

「……ご配慮、痛み入ります」

ナイチサから許しの言葉を頂き、メイド長さんのお礼に合わせて、こちらも礼を言っておく。こういった積み重ねが大事なのだ。礼儀を示すことは大事なのだ。

……しかし……今度こそ、無事に終わりそうだな……。

一時はどうなることかと思ったが、一番の難所、ハプニングを切り抜けれたのは大きかった。

――そして今度はそのフラグを折ることに成功し、食事もつつがなく終えた後は、ナイチサを城まで送り届けて、無事接待は終了する。

「……」

「……？」

……何だ……？　やはり違和感が……。

だが帰り際、ナイチサの口数が少なかったことと、その違和感だけが、妙にレオンハルトの頭の中に残った。

勇者クエタプノ

――この世に、神はいない。

誰かが言ったそんな言葉を、僕は信じたくはなかった。

だが、１０歳の時に初めて生まれ育った田舎から出て世間の色んなものを見て、そこに住む人の話を聞いて、単純にこう思った――酷い世の中だと。

田舎で暮らしていた頃は感じることはなかったが、世界は荒れていた。

貧困、などではない。確かに貧しさに苦しみ、その日を生きるのに精一杯な人はたくさんいたし、道端で餓死しかけ、掠れた声で物乞いをする大人を見た。

まだ何も知らなかった僕は、僕の帝都での後見人になってくれるという先生に問いかけた。

――どうして？

曖昧な質問。どの部分に答えればいいか解らない質問は今考えれば酷いものだった。

でも幼い僕は、怪我や貧困、心の傷を負って生きる気力を失った人達を見て、何を聞けばいいか分からなかったのだ。

何故こんなことになっているのか。貧しいのか。怪我を負っているのか。彼らを何とかしてくれる人――国の偉い人や教会の人は何故彼らを救わないのか。そんな世の中の理不尽を問いかけるのに、あの時の僕は上手い言葉を見つけることが出来なかったのだ。

だから何故？　と聞いてしまった。

とても困らせてしまった。先生の苦虫を噛み潰したような表情を見て、僕はそれを軽々しく尋ねたことを後悔した。

しかし先生のその表情は一瞬。直ぐに先程までの表情に戻ると、必要な事だと判断したのだろう、少し間を置いてその質問に答えてくれた。

――魔物さ。

短い答え。しかし単純かつ分かりやすい答え。そんな答えを、先生

は失った利き腕の方の肩を撫でながらそう口にした。
多くの人間が苦しんでいる理由、それは魔物だと言う。色々理由はあり、中にはそれ以外の要因、人間自身が理由の場合もあるが、大本は魔物の所為だと。
そんな言葉を口にした先生は、先生の右腕を見る僕を見て、かつての経験を僕に話してくれた。
先生はかつて、帝国でも名の知れた騎士だったらしい。
帝国では騎士というだけでエリートだ。兵隊とは違う。兵隊は志願すれば誰でもなれるが、騎士になるには厳しい試験を潜り抜けなければならない。
必要なのは強さだけではない。一番重要なのは腕っぷしの強さ。剣や槍の腕だが、教養だって必要となる。
何故なら騎士は、国を守るための主力だからだ。
皇帝陛下の居城、国の中枢である王城を守護するのも騎士。皇帝陛下を直接守護するのも騎士。何千、何万という兵隊を率いて他国や魔物と戦うのも騎士だ。
故に強さだけではない。最低限、戦術についての理解や、知識が必要だ。
そんな騎士達は民衆からすれば憧れの的であり、社会的な立場も兵隊に比べれば高い。
給金だって相応に貰える。街で普通に働くそこらの大人の数倍。あるいは数十倍。もっと途方もないお金を貰えることもある。命を懸ける職にお金欲しさに――という意見もあるかもしれないが、僕が騎士を目指す一番の理由はお金だった。
女手一つでこれまで僕を育ててくれた母に少しでも楽をさせてあげたいため、僕は平民でも大金を稼げる可能性のある騎士の道を選んだ。
幸いにも僕は小さい頃から剣を振っており、腕にはそこそこの自信があった。田舎で元兵士だというおじさんに教えて貰っていたのだが、彼の言を信じるなら僕には才能があるらしい。
実際、僕は村の中では1番強かった。とはいえ、それは戦えるもの

がいないからだ。村で戦えたのは幼馴染で、母が魔法使いだという女の子と、元兵士のおじさんだけ。

だからだろうか、僕が騎士を目指すといった時、母やその幼馴染は猛反対した。

死んでしまうかもしれない。理由はほぼそれだった。お金のために命を懸けることはないと。母は諭すように言った。

心配してくれるのは嬉しかった。だけど……どうしてだろうか。その時の僕は、不思議とそれでは駄目だと直感的に感じていた。

確かにこれまで通り、母の畑を一緒に耕しながら長閑に暮らす生活も悪くないかも知れない。

だが、その安全に保証はないことを、僕は薄々と感じていた。

そもそも小さい畑で採れる少ない作物を売って暮らすのは価格が安定しているなら問題ないかもしれない。しかし作物の相場は一定ではないし、売れなくなることだってあるかもしれない。

仮に戦わなくても、死ぬ可能性は何処にだって転がっているのだ。

だから安定した生活を送るために、危険な仕事に手を出すのは愚かな選択とは一概には言えない。それだけ平民の生活は苦しいのだ。

だからこそ、危険だと分かっていても軍に入ろうとする若者は減らない。命を懸けなければ死んでしまうのが今の世の中だ。

だから――ではない。その時の僕はそのことを良く分かっていなかったが……それでも僕は母に恩返しをするため、そして僕自身の為に、騎士を志すことにした。

一向に譲ろうとしない僕を見て、やがてそれを認めてくれたのか、母の伝手で先生を紹介してくれた。母が唯一付き合いのある都会の人だと言う。元騎士だという隻腕の男に剣の腕を見てもらい――結果は言うまでもなく僕の負けだったが、光るところがあると認めてもらい、一緒に帝都までやってきた。騎士になり、お金を稼ぐために。

そんな僕に初めて教えてくれたのが、騎士になったらほぼ確実に戦うことになる――魔物のこと。

世界の半分は魔物に支配されているという。強大な力を持つ魔物達の王――魔王と、その配下である魔人達。そして魔物の兵が多く集

う魔軍。彼らは、定期的に人間の国に攻め込んでくる。
魔物と人間の戦争。言葉にすればそうだが、人間が勝つには絶望的な戦力差があり、何処の国も防戦一方であるらしい。
かくいう帝国も、魔軍の被害が多い地域だ。近年、更に活発になったという魔軍は何度もこの国に攻め込んでは多くの人間を殺し、食べ物などを奪い、恐怖を与えて帰っていくという。
街で苦しんでいる人が多い理由がこれだった。魔物が国を襲えば、例え滅ばなかったとしても国は困窮する。食料は少なくなるし、多くの人手も失う。例え生き残ったとしても後に残るような怪我をしてしまえば働くことも出来ない。
元騎士だったという先生も、かつては国を代表する騎士だったが、魔人との戦いで腕を斬り落とされて騎士を止めたらしい。
そのことを話す先生の顔は、子供の僕が見てもはっきりと分かるほどに青褪め、怯えていた。
帝都に来て、僕が一番強いと思った人は今の所先生である。現役の騎士団幹部や高名な冒険者などであれば強い人もいるかもしれないが、少なくとも、騎士見習いとして騎士を目指す者達や、教官としてやってきた現役の騎士の中にも、先生より強い人はいなかった。話を聞いてみると先生は片腕を失った今でも、強さは上から数えた方が早い騎士だと言う。
なので国から現役復帰を打診されているらしいが、先生は断り続けているのだと言う。
原因は解らない。でも、魔人の事を思い出して震えている先生を見て、それが関係しているのかもしれないとは思った。
先生の様な達人を戦意喪失させる。それだけの戦闘力を持つのが魔人。――騎士が戦わなければならない相手がそれだった。
無敵結界というあらゆる攻撃を弾く絶対防御を持ち、腕の一振りで数十人の人間が吹き飛ばされ絶命する。歴史上、魔人を倒した事例は、かつて人類を統一して魔軍との全面戦争に挑んだ英雄――藤原石丸しかいない。
人を越えた強さを持っていたというその石丸ですら、最後は別の魔

人に殺された。
しかも魔人を倒し尽くしたところで、それに輪にかけて強大な魔王が控えている。
彼らを倒さなければ、苦しむ人間はいなくならない。少なくとも。増えはしても減りはしないだろうと先生は語った。
それを聞いてしまうと――この世に神はいないのではないかと考えてしまう。
だって本当に神がいるなら――もっと世界は、救われていていいはずだと思うから。
苦しみや悲しみに溢れた世界。田舎から出て世間を知ったことで、僕は世の無情さを思い知ったのだ。
困ってる人に手を差し伸べる余裕すらない。そんな世の中は間違っていると思うから。
母や親しい人も含め、多くの人を救ってあげたかった。
全ての人間が救えないとしても、僕の力で救える範囲で、出来るだけ多くの人間を救いたい。
そんな目標を掲げて僕――クエタプノは、騎士としての道を歩き始めた。

――ＮＣ８９Ｘ年。
人間が生まれて約千五百年程。
人類という文明の、最盛期とも言える時代。一つの完成形ともいえるその文明の最中、大陸では戦乱が絶えず行われていた。
ここ数十年の間。大陸の支配者である魔王――ナイチサは人類への圧力を強めた。
これまで以上の頻度で魔軍を各地に派遣し、時にはナイチサ本人が同行し、人間を苦しめた。
その被害は――戦略的にはさして襲う必要のない長閑な村にまで及んだ。
「おらおら！　魔物様のお通りだぜー！」

「人間如きが勝てると思ってんじゃねぇぞ！」
魔軍の一部隊が戯れに人間を襲っていた。それは本隊が近くの街を占領したため、哨戒も兼ねて周囲を見回っていたところで村を発見し、ストレス発散も兼ねて襲ってみたに過ぎない。
だが一応戦闘となっているのは、街が占領されたことで村の人間を連れて逃げるために、この国の兵達が訪れていたからだ。
「怯むな！　何としてでも住民を死守しろ！」
「ぐっ、しかし……うがっ!?」
部隊の隊長らしき騎士が必死に部下達に指示を出しているが、多勢に無勢。ただでさえ人間の兵より強い魔物兵だ。数でさえ負けてしまえば勝ち目はない。
今はまだ部隊は崩壊していないが、まだ崩壊していないだけだ。このままでは住民も合わせて、死ぬのは時間の問題。
そんな絶望の戦場で、騎士見習いの少年は剣を手に戦っていた。
「はっ――！」
「ぐえっ――」
「ふっ……！」
「うが、っ、強ぇ……」
村の外れで住民を背に、一人戦っているのは綺麗なブロンドの髪を結った少年だ。
無駄のない細身の身体を鎧に包み、端正で中性的な顔立ちをした少年は、騎士見習いとは思えない剣の冴えを見せ、魔物兵を次々と屠っていた。
しかし魔物兵達も逃げる様子はない。数の上では勝っているためか、数十体の魔物兵達は集団で少年を襲いかかってみせる。
「この数に勝てると思うなよ――へぶっ!?」
「っ……後、どれだけ……！」
眉を立て、周囲を見渡しながら必死に戦う。額には汗が滲み、息が徐々に乱れ始めてくる。逃げるならまだ戦う力が残ってる今の内しかない。
そして、一人なら逃げることも出来るかもしれない。だが、

「う、うう……！」
背後にいる村の住人を感じ、少年はその選択肢を思いついた瞬間に掻き消す。
そんなことはあり得ない。騎士を志す人間が、戦う力のない人々を守るために存在する騎士が、守るべきものを放って逃げるなどあり得ないのだ。
戦うしかない。その覚悟を再度決める。
一人前になるまでは無理をするな、というのが先生の教えだが、その教えを守る余裕は無さそうだった。
実力があるからと騎士に正式に任命される前に実地訓練を行った途中で魔軍の奇襲に遭ったのはついていない。そのまま現場の指揮官に戦力として数えられたのも不運だと言える。
だが後悔はしていない。例え上司が命じずとも、自分から志願していただろう。
眼の前で助けを必要としてる人を、見捨てることは極力したくない。ましてや自分一人の力で助けになれることがあるかもしれないのだ。躊躇する理由はない。
「ふー……」
戦闘用に呼吸を一度、大きく行う。呼吸は戦いにおいて重要だ。動く上でもそうだし、心を落ち着けたり、気持ちを切り替えるためにも使える。
一度覚悟を決めてしまえば、腹は括れる。
――大丈夫だ。やれる。
思ったよりも魔物兵は強くない。部隊の規模も、魔軍の一部隊であれば数は２００の筈だ。こちらは自分も合わせて５０名程。既にどれだけ減ったかは解らないが相手に与えた損害は少なくないはずだ。
仮に２００丸々残っていたとしても、後２００だ。いや、自分がもう３０倒したから１７０。仲間が一人一殺してくれていれば１２０。
希望的観測だが、後１２０体の魔物兵を斬ればいい。もしかしたらその半分くらいも倒せば撤退してくれるかもしれない。
「……では、行きます」

「はっ！　息を整えて、どこに行こうって――ぐぎゃっ!?」
「何処にも行きませんよ。――貴方達を全員倒す。その覚悟を決めただけです」
逃げる振りをして、前に出てきた魔物兵の首を斬り裂く。
続く連動の動きで近くにいた魔物兵も横薙ぎに剣を振って倒す。
これで３２。
「てめっ！　いい加減に――うあぁ!?」
「……良かった。その……服？　を着ていても、目眩ましにはなる様ですね」
「っ、砂を……がっ――」
足元の砂を左手で掴み、魔物兵の顔に向かって振りまく。思わず顔を押さえたところを一閃。他の魔物兵が声を荒げて、
「くそっ、卑怯な事しやがって――っぐ」
「申し訳ありません。今はそんな余裕がないもので」
襲ってきた相手の得物を剣で防御し、手首を返すように弾いてそのまま喉笛を突く。３４。
確かに正々堂々であることに越したことはないし、騎士らしい振る舞いは常に心掛けている。だが、戦場ではそれを守るだけの余裕がないことも知っている。これくらいの小手先の技で人を救えるなら、幾らでも使う。外道な行為であればともかく、この程度であれば、卑怯と罵られようが使うことに躊躇いはない。
「ふっ！」
「あぎゃああ――!?」
「ぐえっ!?」
これで３６。何とかなりそうだ。
先頭の何名かが死ぬ覚悟で体ごと押し込むように襲いかかり、そのまま押し潰すように押し斬られてしまえば、たった一人で戦う自分には為す術はない。戦えているのは、魔物兵達がこちらの強さに恐れをなしているからだ。
誰だって死ぬのは怖い。それは魔物も同じなのだろう。強者を前に、攻め掛かることを躊躇するのは生物として当然のことだ。

「ぐ、くそ……！」
だからそこを見逃さない。躊躇した魔物兵の隙を突くように剣を振るう。観察眼は中々のものだと先生に褒められている。相手の一挙手一投足、表情などの感情の変化にも注目し、意識の薄くなった瞬間、部位を狙う。
カウンターの様な奇襲の様な戦い方で魔物兵を倒していく。これで４２。後２０も倒せば引いてくれるかもしれない。もう少しの辛抱だ。
そんな時だ。奥から大きな魔物がやってきたのは。
「もう遊んでいるのかと思ったが……まだ戦う者がいたのか」
「！　あれは……」
大剣を持った人形の魔物。それは確か、魔物隊長だ。
おそらくこの村を襲った部隊の指揮官だろう。兵達に注意しながらも、意識をそちらにも向ける。
すると他の魔物兵がこちらを指して、
「た、隊長！　あの人間、滅茶苦茶強いです！」
「ほう？　……しかしまあ残り一人だ。どれ、俺も相手するか……！」
「っ……！」
大剣を構えてこちらに向かってくる魔物隊長に視線を鋭くして注意深く見詰める。
魔軍は指揮官である魔物を倒せばいい。それが常識だ。魔物兵の指揮を行っている魔物隊長や魔物将軍を倒せば、部隊は瓦解して魔物兵はまとまりが取れずに容易に倒すことが出来る。人間同士の戦いにも通じることだが、魔物の場合はそれが最も顕著であるという。
であれば彼を倒せばいい、と剣を強く握りしめた。しかし、
「ぐっ……！」
「ははは！　ガキが調子に乗ってよくも俺の部下を殺ってくれたな!?
お礼にお前も、直ぐに仲間の元に送ってやるぜ！」
その剣を受け止めはしたが、その大剣から伝わる重さに腕が軋み、苦悶の表情を漏らす。
魔物兵ではそこまで感じなかったが、これが人間と魔物の差。身体

能力の上で圧倒的に劣っており、身体が出来上がっていない自分ではかなりキツい。
剣技だけならこちらが勝ってるかもしれない。しかし、純粋な剣速の差と、力によって徐々に押し込まれる。
そしてやがて、
「！　しまっ――」
「おらっ！　死ねやあああああああ――っ！」
「――！」
魔物隊長の大剣に剣を持つ腕がかち上げられた。そのまま大剣を横に滑らせるように叩き込まれ、
「く、あ……っ！」
剣で防御しようとしたが間に合わない。そのまま大剣の腹が、こちらの横腹にぶち当たり、凄まじい痛みと骨に感じた衝撃で意識を飛ばしそうになりながら、奥の茂みにまで吹き飛ばされ、木の幹にぶつかる。
背中を打ち付け、空気が口から漏れて、そのままうつ伏せに倒れる。
遠くから声が、
「よーし、こんなもんで終わりか」
「さすが隊長！　あの強い人間をやっつけちまうとは！」
「これで後はお楽しみですね！」
……くっ、止め……！
声を出すことすら出来ず、顔を上げて手を伸ばすが、力が入らない。痛みに気絶しそうになりながらも、魔物達の喜ぶ声と、人間の悲鳴が大きくなる。
――やはり、駄目なのか。
人間では、魔物に勝つことは出来ないのか。
苦しみに抗うことは出来ないのか。
この世に救いはないのか。
神はいないのか。
幾つかの疑問が浮かんでは消え、救えなかったことを酷く悔しく思う。

既に死んだと思ったのか、とどめを刺しにこないが、それもキツかった。村の人々の苦しむ声が聞こえるのだ。いっそのこと、気を失ってしまえばどれだけ楽だっただろう。
しかしこんなところで終わるわけにはいかない。こんなところで、自分は、
……もし、神様がいるなら……。
教会や人々が謳うその慈愛に満ちた存在。もし本当にいるのなら、
……何故こんな悪を……見逃すのですか……！
悪逆非道の輩。罪を犯した彼らは然るべき罰にて裁かれるべきなはずだ。
しかしそんな奇跡は起こらない。
自分はここで終わるし、神はいない。
――そんな時だ。声が聞こえたのは、
「――――力、欲しいですか？」
「……っ……！」
それは眼の前から聞こえた。
薄れる直前の意識を必死に叩き起こし、目を見開くと、そこにいたのはリュックを背負い、フードを被った小柄な少年。
村の人――には見えない。そもそも何故ここにいるのかも解らない。
そんな何処か不思議な雰囲気を持つ少年は、力が欲しいかと己に問いかけた。その問いの意味は理解できない。欲しいと答えたところでどうなると言うのか。何も起こらないはずだ。そんな都合の良いことがあるはずない。
しかし、気づけば、
「……ほ……し、い……！」
喉から声を振り絞っていた。僅かに目を見開かれ、
「！　まだ口を開く力がありましたか。思った通り、見どころがありますね」
淡々とした様子で喋る少年。だがその内容はどうでも良かった。それより、

「……力が欲しい――って、顔に書いてありますね。まあいいですけど、結構大変ですよ？　それでも要ります？」
「……ひと……を、すくえる……なら……なん、でも……！」
それは本心だった。
出来るだけ多くの人間を救いたい。
理不尽に抗えるだけの力が欲しい。
その力で、苦しむ人の数を減らしたい。
世界に光を与えたい。
そう思って――クエタプノは、手を伸ばした。
そして意識を失うその刹那、
「……いいですね」
少年の口端が一瞬歪み、そして、何かを取り出してクエタプノの前に差し出した。
――それは古びた剣だった。
完全に錆びてしまっている剣をクエタプノの前に差し出し、その少年は感情の読めない表情で言う。
「貴方、名前は？」
「……ク……エ、タプ……ノ」
「クエタプノね。はい――では、クエタプノ。貴方は選ばれました」
選ばれた、と少年は言う。
クエタプノを見下ろしたまま、錆びた剣に視線を向け、
「これを手にとってください。そうすれば、貴方の望む、人を救う力が手に入りますよ？
瀕死のクエタプノに対して、剣を取れと言う。
それは到底無理なことだった。
だが、
――それで本当に、人を救う力が手に入るなら。
「っ……！」
――英雄は立ち上がる。
例えもう無理だと、万人が諦めるような状況であっても。
「僕、は……人を……！」

英雄は、勇気を胸に立ち向かう。
「救い、たい……！」
他者の為に、自分の力を使える者。
神に選ばれ、力を授けられた者
魔物に立ち向かうことの出来る、人類にとっての唯一の希望。
勇気を振り絞って戦う者。その名を、この世界ではこう呼ぶ。
閃光が走り、
「……おめでとうございます。これで貴方は、人を救う力を手に入れましたよ」
その名を、少年は口にする。
「――新しい〝勇者〟……クエタプノ」
――勇者。
それはこの世界で唯一、魔王と対になる人間側の英雄。
その力に選ばれ、何かが身体に染み込む様な不思議な感覚を覚えながら――クエタプノは、意識をゆっくりと手放した。

違和感

「――何？　村に行った部隊が戻ってこない？」
占領した人類圏の街で指示を出していた魔物将軍は、副官の魔物隊長の報告に訝しげな表情で確認を取った。
「それは確かか？」
「はい。今他の部隊を向かわせて確認を取らせているところですが……」
「……ふむ」
内容は、哨戒に出ていた部隊の消失。順調に占領出来ていたと思ったところに起こった僅かなイレギュラー。
戦いの中で部隊が一つ消えるのであれば話は分かるが、この辺りの戦力は軒並み掃討し終えたはずだ。
だというのに戻ってこないということは……十中八九、もうこの世にはいないだろう。
そういうことであれば心配はその部隊よりも部隊を潰した敵の存在だ。隠れ潜んでいたところを運悪く遭遇してしまったのは災難でもあり、僥倖でもある。
敵がいる、ということが分かっただけでも価値はあるのだ。
「念の為、警戒しておけ。哨戒する部隊の数を増やすぞ」
「はっ、畏まりました」
「後は――」
とりあえず敵を探させ、警戒網を強めたところで次の手を考える。随分と余裕が出来てしまった。となれば、更に侵攻することも考えたい。
過度なやり方はマズいが、一つくらい余計に街を落とすくらいであれば構わないだろう。
だが許可は取らなければならない。故に魔物将軍はその場から少し移動し、上官の元へ向かった。
占領した街の中で一番大きな屋敷。その屋敷の中に、この軍のトップである存在はいた。

「ぐぁはぁはぁはぁ！　オラオラ！　お楽しみタイムいくぜぇぇぇぇ!!」
「ひっ!?」
「た、たすけて……」
　屋敷の広間。即席で作られた玉座の間のような空間の中心で、耳障りな笑い声を響かせる大柄の化け物がいた。
　複数の腕や生殖器を持つ獣のような姿を持つ彼に、人間の女性達が恐怖とおぞましさに腰を抜かす。人間にとっての最悪な相手――魔人だ。
「良かったなぁてめぇら！　この、魔人四天王の一人であるスーパーウルトラミラクルな俺様にやられるんだからよぉ！　感謝してもいいんだぜ？　ぐぁはぁはぁはぁはぁ！」
　それも彼――ケイブリスが自分で言うように、末席とはいえ魔人四天王の一角を目の前にすれば絶望するのも無理はない。
　魔人というだけで恐怖だが、ケイブリスはその中でも特に人間が嫌悪する様な見た目をしているのだ。触手のようなそれを、人間に纏わりつかせようとしたところで、魔物将軍は声を掛けた。
「ケイブリス様。少しよろしいでしょうか？」
「……あぁ？　何だ、魔物将軍。俺様は見ての通り忙しいんだがよぉ」
「邪魔してしまい申し訳ありません。少々進言したいことがありまして……」
　ケイブリスがこちらを向いて、億劫そうな様子でそう言う。魔物将軍は即座に謝りつつも用件を伝えた。
　この軍のトップは当然、魔人であるケイブリスだ。故に許可は取らなくてはならない。そうでなくとも気分を害せば殺される可能性もある。
「……チッ、しょうがねぇな……さっさと報告しやがれ」
　ありがとうございます、と礼を挟んでから、魔物将軍は時間を取らせないように率直に告げた。
「先の戦い、ケイブリス様のおかげで随分と余裕が持てましたので……あと一つ、この先の街に侵攻しては如何でしょう」

「あ？　どういうことだ。最初に言ってた計画だとこの街で終わりじゃねぇのか？」
「は、その通りですが……余裕がありすぎて多くの兵が手持ち無沙汰になっているのは現状です。なので、もう一戦、戦功を上げるついでに収獲を増やすのはどうかと愚考致しました」
「……」
　ケイブリスが考えるように少し黙る。実際、今言った事は本当の事でもあり、物資の数も連れてきた兵の数と比べて少し少ないのだ。
　なので敵戦力をもう少し潰すついでに、侵攻しては如何かと説いた。魔人であるケイブリスがいれば、次の戦いも楽勝であることは間違いないし、少しくらい欲を出してみるのかどうかと。
　しかし、
「……駄目だ」
「……は、それはどういう……」
　許可を出さない可能性は低いと思っていたところに、否定の言葉が来たので僅かに間を置いてから理由を問う。するとケイブリスは声を荒げて、
「――いいから余計な事すんじゃねぇ！」
「っ……」
　魔人の一喝に身が竦む。上級魔人の威圧はそれだけで相手を気絶させかねない代物だ。魔物ですらそうだし、見れば女たちなどの中にはそのまま気絶してしまう者すらいた。
　魔物将軍は魔物の中でもエリートである。その自負は伊達ではなく、ケイブリスの一喝を耐えると、そのまま続く言葉を耳にした。
「作戦では一応、この街までだと、他ならぬレオンハルトの奴が言ってるってのに！　テメェは俺が積み上げた信頼をブチ壊す気か!?」
「！　い、いえ……そんなつもりは……」
　そんなつもりはないと、慌てて釈明するが、ケイブリスは怒ったままこちらを睨みつけ、
「そう言ってんだよばーーーか！　いいから大人しくしてろ！　戦いにも勝って命令もきっちりこなしたってのに、無駄に動いて心象悪く

なるようなことは出来ねぇんだよ！」
「は、は……そういうことであれば畏まりました……」
若干残念に感じながらも魔人に逆らえるはずもないので従う。
しかし魔人レオンハルト――魔人筆頭という最強の魔人の命令に一言一句違わぬよう正確に従い、かの魔人を怒らせる可能性は潰したいという。その気持ちは分かるのだが、些か怯えすぎだと考えてしまう。
何しろ作戦では、この一帯の街を標的にしており、この先にあるもう一つの街は、おそらく次に攻めることになるとも言っていたのだ。時間の問題だと。
ならば現場の判断で、臨機応変に。先に攻めておくのも悪くないはずである。末席とはいえ魔人四天王であるケイブリスの判断であれば、文句はそこまで出ないとも思う。
しかし万が一、億が一、機嫌を損ねる可能性を考えて、ケイブリスはその提案を却下した。
「ったく……まだまだ敵わねぇってのに、ふざけた事言いやがって……」
ぶつぶつと何事かを呟きながら、改めて女達の方に振り返ったことで、気絶していない女達は再び怯えたように顔を青褪めさせる。
そして、
「……さぁて、邪魔が入ったが……待たせたな。テメェら全員、犯してやるぜぇぇぇぇ!!」
「ひ……あ……！」
ケイブリスがその触手の様なものを巻きつけようとし、実際に何名かが即座に絡み取られて陵辱された。
しかし、その獣欲を叩きつけようとケイブリスが女達を見たところで、
「――ん？」
ふと動きを止める。暴行が一時的にだが止まった。
何かを見るようなケイブリスの視線。それは、一人の女性の胸部にあった。

「や、やめて……！」
集められた女達は全員美女だったが、その女は他の女と違うところがあったのだ。
それは――胸の大きさだ。
他の女と比べても明らかに大きい。そんな女を見て、興奮するのも確かである。
しかしケイブリスはじっとしばらくその女を観察し続け……頭の中で計算を終えたところで、舌打ちを一つ。
「……チッ。――おいテメェ」
「！　は！　どうか致しましたか？」
魔物将軍に向かって声を掛ける。そしてその女を指差し、
「そこの女、連れてけ」
「は……と、申しますと……」
魔物将軍もちらりと横目で女を見た時点で、何となく予想は付いたが一応問う。するとやはりと言うべきか、予想と同じ言葉が来た。
「決まってんだろ。贈り物にするんだよ」
「……は、畏まりました」
やはりそういうことだ。魔軍だと有名な話。魔人レオンハルトの巨乳好きだ。
野心ある者や、機嫌を取りたい者が率先して集め、献上する。ケイブリスは、その贈り物の常連。信頼を手放さないため、定期的に巨乳美女を捕まえては送っているのだった。
ゆえに魔物将軍は確認を取った。それは、
「……手紙には、何て書きます？」
「……あ？　馬鹿かテメェは！　今は夏だろ!?　なら、〝暑中見舞い申し上げます〟に決まってんだろーが！」
「……それもそうですね、申し訳ありません」
「おう。いつも通り速達で送っとけ」
「その様に」
「あ、後か、かかか、か……かかカミーラさんに、送るようの宝石も集めておけよ！　そっちの方は間違っても勝手に送るんじゃねーぞ！

宝石はお、俺様が直接、か、かかかカミーラさんに渡すんだからな！」
「……承りました」
と、女を運ぶ様に連れて、屋敷を後にする。一度司令部に戻ってケイブリスの代わりに手紙を書かなくてはならないのだ。
「……はぁ……転属、考えておくか……」
ケイブリス軍は色々と気を使う部分が多いし、ケイブリス自身が色々と理不尽だったり、器が小さかったりで、仕えがいがない。
自身より強いレオンハルトにはぺこぺこと情けない姿を見せ、カミーラには最近になって遠回しにアプローチを掛けている。
間接的にその被害を被る魔物将軍の頭の中は既に手紙と、魔物界に帰った後に出す予定の転属願いの事で頭がいっぱいだった。
部隊を全滅させた敵の事を脳の片隅に追いやり、魔物将軍は重い足取りで司令部へと向かった。

何かがおかしい、とレオンハルトは感じていた。
自身の寝室で、そんな考えをしてしまうほどにはそう思う。
それは表面的にはほんの僅かな違いだが、レオンハルトにはその違いが、今までの経験からはっきりと感じ取れていた。
「はぁ……んっ、ちゅっ、レオンハルトさまぁ……だぁいすき……」
「あぁむ、じゅる、れろ……ちゅぱっ……おひんひん、おいひい……」
「レオンハルト、様……の手すごいぃ……！　気持ちいい、よぉ……」
「ほぉら……おっぱい、ちっちゃくても気持ちいいでしょぉ……？」
……それは別に、胸の小さいメイド達が集まって色々としていることは関係ない。おかしくとも何ともない。そりゃあ毎回ローテーションしているのだからたまにはこういう日もある。
そもそもこの場合は表面的に大きな違いだし、別に小さいのが嫌いというわけでもない。これを言うと、冗談を言っているのだと笑われるか、えっ、みたいな反応をされてしまうのが納得いかない。
確かに、業腹ではあるが、己の性的趣向、信仰の対象が巨乳である

ことは甘んじて認めよう。それはもう今更だ。その辺りの趣向がバレバレで良い気分ではないのは確かだが、もう全世界規模で知られているのだ。さすがに慣れた。

大きいおっぱいが好き。別に何もおかしなことはない。これを非難する者の方が少ないはずだ。

で、それは良いとしよう。しかしだ。別にそれが好きだからとて、他のものが嫌いであるということではない。

つまり、巨乳が好き＝貧乳が嫌い――ではないということだ。

これはそう――例えるなら食べ物だ。

大好物の食べ物がある。それは例えるなら肉だ。肉類が好きで、特に唐揚げが好き、とか。そういった好みが誰しもあるだろう。

だが肉類が好きだからとて、野菜が嫌いというわけではないし、食卓に出されて食べないわけもない。野菜を食べたい時だってあるのだ。

そりゃあ粗悪品であったり、そもそも料理が不味かったりしたら食べないが、それは食べ物全般に言えることだ。この場合は全て美味しいものを食べるという前提の話だ。

で、あればだ。美味しいものであれば肉も野菜も好き、というのが生物の本質だとレオンハルトは思う。

無論、嫌いな調理法もあるが、それは避ければいいだけの話だ。食材の話であれば素材の部分で苦手なものは少ない。

それに誰しも覚えがあるだろう。子供の時は肉や濃い味付けのものが好きだったが、歳を取ってからは野菜や、素朴な味も好むようになってくることが。

歳を取って、脂っこいものは胃もたれする、という人だっている。自分は歳を取っても肉や脂っこいものが好きだが、それでも歳を取って、色んな物を食べるに連れ、好物が増えていくというのは自分とて例外ではない。

長く生きてると色んな発見があるのだ。野菜の味わい深さなども段々と分かってくる。野菜だって食べごたえはあるのだ。そもそも野菜だって肉がないわけではない。尻とか――後は、小柄だとキツか

ったり――と、少しずれたがそうじゃない。
要するに、肉が大好きだけど、野菜も好きだ、ということだ。しかしこれを周囲に言って聞かせると、御歳暮の中身が肉に加えて野菜も追加されるようになるので、言っていいか悩む。
というか自分を良く知る部下限定だが、稀に高品質の野菜を送ってくる者がいる。おそらく他の者達の裏をかいているのだろうが、正直、全部後で返す予定なのであまり変わらない。受け取るのはあくまでも、食材が望んだ場合のみだ。
これだけ言えば分かるだろう。自分は、決して貧乳が嫌いというわけではないのだと。
揉み応えはないのが残念だが、遊べることには変わりない。他の部分だって変わらず楽しめる。皆違って皆いい。それで良いはずだ。
閑話休題。とにかく、自分はおかしな思いを得ていたのだ。
それは他ならぬ――魔王ナイチサのことだ。
ここ最近、魔軍の仕事が忙しいのは、他ならぬナイチサが、もっと積極的に人間を苦しめろと、直接自分や他の魔人に命じたからだ。
滅ぼせ、ということではない。方針自体は変わっていない。適度に殺し、奪い、苦しめる。その適度が、大幅に上がっただけだ。
理由は解らない。個人的な推測、想像のようなものであれば幾つか考えもあるが、確証はない。
ただナイチサは、人間をこれまで以上に苦しめているだけ。魔王としては全く違和感のない、普通の、当然の行動だ。
つい先日も、魔王城の廊下でパイアールと会話している時、こんなことがあった。
『――こんな感じだけど……貰ってもあまり意味はないと思うよ？あくまでも情報処理の為のものだからね』
『いや、個人的に興味があっただけだ。確かにこれだけではあまり使えないだろうが……まあ、また何か有用そうなものがあれば教えてくれ』
『……はいはい。それで僕の代わりに、魔人としての仕事をこなしてくれるならいいよ』

こんな風にパイアールと会話している時、廊下の奥から歩いてくる気配を感じ、レオンハルトとパイアールは膝を突いた。
『……レオンハルトに、パイアールか』
『は、ナイチサ様。少し雑談をしておりました』
『……』
魔王ナイチサの登場に、レオンハルトは傅き、パイアールも無言のまま頭を垂れる。
そのまま通り過ぎるかと思ったが、ナイチサは声を掛けた。パイアールに、
『そう言えばパイアールよ』
『……何でしょうか、ナイチサ様』
『うむ、卿の作る機械……あれは確か、戦闘用のものもあったはずだな？』
『……はい。パワードスーツなどでしたらありますが……』
『聞いたことがある。確か、人に装着して使うものであったな』
『……よくご存知の様で』
だが、と、ナイチサはパイアールの言葉に頷きながらも、
『……もっと効率的に、人を殺傷出来る……戦う事の出来る機械などはないか？』
『……は？　それは……？』
突然の質問に、さしものパイアールも疑問を頭に浮かべる。それを受けてナイチサは、何か考え込むように顎に手を当てながらも、
『……いや、そういうものがあれば面白いと思ったまでだ』
『……そうですか』
『うむ。……もしかしたら、頼むこともあるやも知れん。考えておいてくれ』
『……畏まりました』
そう言って、パイアールが了承したのを見届けると、ナイチサはその場から去っていった。
戦闘用の機械。その可能性を考える素振りを見せていたナイチサは、魔王としてはやはりおかしくないものだ。その会話の内容も、別

段、不思議ではない。
しかし所々で何かを考えるような、謎の間を、ナイチサは時折作る。
――それが妙に、気になるのだ。
それは普段からよく接しているためか、細かな違和感となってレオンハルトを悩ませるのだ。
何か思うところがあるのか。それとも――と、レオンハルトはあくまでも自身の想像を振り払う。
推察は出来るが、本当にそれと関係があるのだろうか、と。
そして、もしそうであれば、一体どんな影響を及ぼすのかと。
であれば、自分はどうするのが一番良いのかと。考える時間が増える。とても重要な事だからだ。
仕事と平行して色々と行ってはいるが、やはりどうなるかは未知数の出来事は自分の行動に迷ってしまう。
……やはりこのまま――。
「あっ、ん、んっ、レオン、ハルト、様、あっ、んんぅ」
「――っ、そろそろ……一度出すぞ」
「らしてぇ……！　レオンハルト様の、ほしい……！」
メイド達を抱きながらであるため、思考はこの程度に留めておこうと思う。彼女達の為でもあるとはいえ、情事の最中にあまり別の事を考えては失礼だ。仕事は忙しいが、こちらも手を抜くわけにはいかない。
それに忙しいは忙しいが、頻繁に人間を襲っているせいか、段々と戦いも楽になってきている。相手が疲弊しているためだ。
それを考えると、もうしばらくは、少しだけだが気を抜いていても良いのかも知れない。遠征が多くて、彼女達も欲求不満になっている。城にいる時くらいは、彼女達との時間を楽しむのも悪くない。
――レオンハルトがこの世界の重要人物、勇者と初めて出会ったのは、仕事とプライベートで忙しい、そんなある日の遠征中のことであった。

東部オピロス帝国

大陸東部。
人類圏にあるその国家は、人類文明の一つの完成形としてそこにあった。
しかしその成り立ちは比較的新しい。
ＮＣ歴後期――魔王ナイチサの時代。かつて人類を統一した藤原石丸率いる藤原家は魔軍に大敗し滅亡。それと同時に多くの国家が崩壊し、幾つもの土地が、いずれもの国家に該当しない空白地帯となった。
大陸の覇権国家を目指そうと、大陸中央部はカラー勢力に取り込まれ。
またＪＡＰＡＮでは石丸の跡を継ぐ帝の座を巡って多くの戦国大名が争い合う戦国時代となった。
そういった情勢の中、崩壊した大陸東部の有力者が寄り集まって発足したのが、前身ともいえるオピロス国である。
オピロス国は崩壊した各国領土に生きる人々を導くために現れた国家組織であり、戦争での被害が少なく、負い目があった大陸南部の国家や一部の大名、ＡＬ教の支援を受けて国家機構を維持する。
しかし元権力者達の手腕は伊達ではなく、すぐに国家運営が軌道に乗り始めると、やがてオピロス国は大陸東部を殆ど統一してしまうほどの大国となった。
更には大陸中央部で人類の奴隷化政策を施政していたカラー王国を、外交によって他国や大商会を焚き付け、これを滅ぼす。そうして大陸中央部の約三分の一をオピロス国は戦争に勝った権益として受け取った。
新たな覇権国家の誕生は間近であったが、そんな時、オピロス国の最高権力者である元老院議会にて、その中心でもあった二人の議員が権力争いに奔走し始める。
自身の派閥を形成していた二人の元老院議員の争いは、元老院、ひいてはオピロス国全体を巻き込み、大規模な内乱に発展する。

戦乱の結果は引き分け。魔軍による人類圏侵攻が激しくなっており、この頃には人類同士も、さすがに争い合っている余裕はなかった。
双方痛み分けで終わった両国は分裂し、２つの国家となった。
大陸中央部と東部西側の一部を領土に持った西部オピロス王国。
オピロス国の前身、大陸東部を支配している東部オピロス帝国。
西部オピロス王国は大陸南部の諸国と交流を持ち、東部オピロス帝国はＪＡＰＡＮから移民としてやってきた日本人が多く住むことも関係してＪＡＰＡＮとの交流を持ち始めた。
一方で両者とも、この頃には大陸最大の宗教組織として知られていたＡＬ教とも親交が厚かった。
――だが、国力として強いのは明らかに東部オピロス帝国だった。
西部と比べても、軍事力にかなりの力を割いている帝国。これは西部よりも魔物界と接している国土が多く、魔軍の侵攻が多発しているためでもあった。
それでも当初は王国に対して侵略戦争に乗り出すつもりであったが、やはり魔軍を放置することは出来ないと断念。外交によってオピロス国の正統後継国家であると主張するのみに留めた。
だが、魔物の被害に多く遭っていても、東部オピロス帝国はあらゆる物事において、人類文明としての絶頂期にあった。
皇帝陛下の名の下に、斬新な政策を幾つも施策し、日本人とＪＡＰＡＮの文化、ＡＬ教や大陸南部の文化などの全てを取り入れ、後の国家体系の礎ともいえる国家であった。

東部オピロス帝国。
帝国最大の都市にして、人類圏全体でも最大の都市として名高い帝都、テラ・ユークリッド。
人類圏にある全ての人種と文化が集まるその帝都に住む人々は、北東部で魔軍が暴れているという事実があってなお明るい。
なにしろ、帝都に住む帝国民のおおよそ７割は、とても裕福で不安もあまりない生活を送っているのである。

一般的な平民の生活ですら、他の国家と比べて明らかに豊かであり、基本的に食うには困らないのである――裏通りに住む人々以外は。

帝都の裏町とも呼ばれるスラムでは、魔軍の被害にあって難民と化した者達が、浮浪者紛いの生活をしており、毎日の様に餓死で死んでいく者がおり、犯罪が横行する帝都の裏の顔だ。

しかしこれは帝国の治世が悪いというわけではない。寧ろ国家は彼らを何とかしようと必死に頭を働かせていた。

そのためにも公共事業を増やし、身体が悪い、あるいは怪我などで身体に障害を持つ人も働けるような仕事も用意した。帝都の郊外では、スラムの難民が暮らせるようにと、公共事業で自分達が暮らすための街を作らせ、そこに住まわせようという計画も動いている。

街の治安を守るためにも、帝国にとっては莫大な予算を使って国防のために育て上げた騎士達を、街の警邏に当たらせた。

しかしそれでも帝都、延いては帝国民全てを幸福にすることは出来ない。

その事実に、帝国で最も尊い人物は、憂いを抱いていた。

帝国の顔ともいえるその巨大な城。

東部オピロス帝国の国父として知られる男の肖像画が飾られたその執務室に、帝国の頂点に立つ男がいた。

「――して、首尾はどうかね？」

「は……芳しくありません」

質の良く、仕事の邪魔とならない様に過度な調度品を抑えた部屋。その中にある大きなソファーの上で膝を組み、頬杖を付きながら部下である大臣に問いかけるのは、彫りの深く整った知的な顔立ちに、帝国人に多く見られるブロンドの長い髪をカールにした体格の良いこの男。

この男こそが、東部オピロス帝国皇帝――アレクサンドル・バシレウス。その人である。

彼は腹心である大臣の報告、その返答に眉を顰める。その内容は帝国の現状についてと、その現状を回復するための手段のことだった。

「……魔軍の動きは？　正確に答えたまえ」
「はっ、現在、魔軍は帝国北部、先日報告したソマーの街から東、キリイリアの街、その周辺の村までを占領されました。それに伴い、５万の兵士、及び数百の騎士が死亡し、北部から新たに逃げてきた住民は、推定２０万に及ぶとのことです」
　皇帝、アレクサンドルの顔が更に険しくなる。
「……西側の動向は？」
「はい。西側でも、魔軍によって北部の街が幾つかが占領されたようです。しかし魔軍の侵攻は一時止まり……それに伴い、西側からの工作員が多く放たれたようです。何名かを捕まえて吐かせましたので間違いありません」
「……そうか」
　報告を一通り聞き終えると、アレクサンドルは顔を手で覆った。
　皇帝に相応しい、思慮に長けた人物として知られるアレクサンドル。帝国始まって以来の名君として知られる彼はいついかなる時も冷静で、帝国と帝国の民の事を想っている。幾つもの斬新な政策を皇帝の権力を使って強引に施行したのも彼だ。
　数少ない休日ですら、私費を投げ売って民に施しを行い、支援している孤児院に自ら顔を見せ、子供にプレゼントを手渡す。いついかなる時も帝国の為に動き、職務の合間を縫って、いざという時の為に自らも身体を鍛え、趣味の歴史研究も、帝国や人々の為に何か希望はないのかと探し回るような人物である。
　民からの人気も高く、部下や騎士達の忠誠も厚い。女性にも羨望の眼差しで見られ、子供達には将来は騎士か、皇帝のような人になりたいと言わしめる程である。
　そんな誰よりも愛国心のある彼は、腹心しかいないこの場所で、普段溜め込んだ怒りを、とうとう解放した。
「――この、魔軍と、西側のカス共がッ!!」
　机を拳で思い切り叩き、大きな音を鳴らす。怒りの形相で染まった彼は、普段見せるそれとは違い、激情に駆られて国家を脅かす者に対してキレていた。

「潰しても潰しても現れる……ッ！　ニキビの様な奴らめ……！　何たる邪悪な……！」
　歯を噛みしめ、怒りのままに立ち上がり、地団駄を踏み始める。大臣はそれに触れないようにひたすら気配を無に近づけていた。
「西側の爺共も！　こんな時にばかりちょっかいを掛けてくる！　卑しい空き巣共めッ！　糞！　糞！　魔軍さえいなければ今直ぐに処刑してやるものの……！」
　そしてそのまま大きく飾られた肖像画に向かう。そこに描かれているのは国父。アレクサンドルに似たその人物は、彼の曽祖父に当たる人物だった。
「ああ……！　なんとお詫びすれば良いのか……ッ！　先人達が築き上げたこの東部オピロス帝国を……！　そこに住まう人々を……！
　未だに幸せに出来ていない……！　魔軍か、西側の爺共！　そのどちらかがいなければ今頃は我らが帝国が人類を統一し、人類全てを幸福に包むことが出来るというのにイイィッ！」
「……」
　大臣が無言で彼を見続ける。アレクサンドルはその視線に目もくれず、やがて膝を突いて国父に頭を垂れた。
　そして少しの間を置いて、ゆっくりと立ち上がると、
「……ふぅ、落ち着いた。すまないな、大臣」
「……い、いえ、いつものことですので」
　スッ、と表情を真顔に、皇帝の顔に戻して大臣に軽く謝罪しながらソファーに戻った。
　あらゆる事に秀でた完璧な王とも云える彼だが、時折激情に駆られて怒り散らすのは唯一の欠点とも言える。
　しかしそれも、国を、民を想えばこそだ。国の礎を築いた国父に謝罪することで、彼は激情に駆られた心をフラットに戻すことが出来る。一種のストレスコントロールだ。
　愛国心に満ちた自身の操り方を熟知しているアレクサンドルは、再び膝を組み、頬杖をつくと落ち着いた声で呟く。
「さて……早々に動かねばな。とにかく魔物だ。おそらくはしばらく

そこに駐留するつもりだろうが、こちらも軍を動かせ。防衛線を築くぞ。魔軍を刺激しないギリギリのラインでだ。逃げてきた民は保護して後方に分散させて送れ」
「畏まりました。直ちに将軍達に通達しておきます」
「うむ、そうせよ。後は……捜索を強化せよ。この際だ。兵の一部を割いてでも見つけ出せ」
「そうですな……しかし陛下。本当に――」
と、ここまで皇帝の指示に素直に頷いていた大臣が難色を示すかのような表情を見せる。
それに気づいたアレクサンドルは、険しい顔でそれを止めた。
「何度も言っているだろう、大臣。それは絶対に必要なことなのだ」
「ですが、魔軍の相手ならば騎士達で――」
「ふぅー……大臣。貴様、軍務はからっきしだったな？　いいや、答えなくていい。だからその様な事を言えるのだろう」
「……」
皇帝の言葉に二の句を継げなくなる。確かにそれは事実であったからだ。
ゆえにかつては、自ら兵を率いて戦場に出ていたアレクサンドルは、その問題を指摘する。
「いいか？　魔軍に……魔人には絶対に勝てん。人間が勝つことは不可能なのだ。こちらを圧倒する身体能力、あらゆる攻撃を防いでしまう無敵結界。それぞれが持つ特異な力。人間では勝てんのだよ」
「で、ですが藤原石丸は――」
藤原石丸。人類史上初めて魔人を倒した英雄の名だ。
確かに彼は魔人を倒した。人間でも魔人が倒せる証明にはなるだろう。
しかし、アレクサンドルはそれを鼻で笑うと、
「ふん、藤原石丸？　ああ、確かに、藤原石丸なら倒せるのだろうな。確かに、それは事実だ」
だが、
「藤原石丸なら倒せるが――奴は何体の魔人を倒した？　たった1体

であろう？　それで２４体はいるとされる魔人全てを相手することが出来るのかね？　――断言しよう。絶対に無理だ。仮に今も存命か、石丸並の人物が現れたとしても、精々魔人一体を相手にするのが関の山」

　それでは魔人に、魔軍には勝てないのだ、とアレクサンドルは言う。

「更には魔王という規格外の存在もいる……いいか？　帝国を――人類を幸福にするためには、魔王と魔人共を一匹残らずこの世から消し去らねばならない」

「……しかし、それこそ一人の人間では――」

　一人の人間でそれを成すことは不可能。そう言うのならば、皇帝が命じている人物の捜索すら無意味のはずだ。

　しかしアレクサンドルは首を振る。諭すように、

「だから言っているだろう大臣よ。確かに、貴様が言うように、人間では無理だろう。ただの人間では」

　そう言って再びアレクサンドルは立ち上がった。執務用の机に近づき、懐から鍵を取り出すとそれを引き出しの一つに差し込み、中にあるものを取り出した。

　それは一冊の手記。彼が若い頃、冒険家として世界各地を探索していた頃の記録だ。アレクサンドルにとって、国には及ばないものの、それを除けば最も大事な物の一つ。それを取り出して見せながら、彼は演説するように語りかけた。

「――私は若い頃はやんちゃで、未知なるものに好奇心を抱く純粋な少年であった」

　それは伝え聞く若い頃の話。皇帝の経験の話だ。

「愛国心は昔からあったが、それでも若い頃の私は自分の欲を優先し、父にわがままを言って冒険に出かけた」

　それは趣味の歴史研究にも繋がる話。様々な遺跡などを冒険したのだと言う。

「そんなある日だ。信じられないかもしれないが私は――神と出会った」

　そう、神と出会った。それが嘘か真かはさておき、アレクサンドル

自身は確かに神と出会ったと腹心に自慢する。
大臣は懐疑的であったが、それは事実であった。
「美しい女神であった。ＡＬ教の信者が言うように、黄金の髪をした美しい女神だったのだ……それまでの私は、神など毛ほども信じていなかったが、実際に会ったことで考えは多少変わった」
だからＡＬ教との交流は今も持っているし、布教を大々的に認めてもいる。真実の宗教であるのなら、それを制限する理由などないのだ。
「しばらく呆然としていたが、私は気がつけば思わず、神に問いかけていた――帝国を……人間を、救う方法はないかと」
神と出会い、長年の疑問、直面する苦悩に対しての解決方法を問いかけたのだ。
神であれば、人間を苦しめる魔物達に対する対策も何かあるのではないかと。あるいはどうにかしてくれるのではないかと期待したのだ。
「女神は言った。〝ある〟と。確かにあると言った。そして、私にその方法を――いや、それを成すことが出来る存在を教えてくれた」
神は、ある人物ならば魔物を、魔王を打倒することが出来ると告げた。
そうそれこそが、
「――〝勇者〟。魔王と対をなす存在。人間の中で、唯一魔王に対抗することが出来る存在がいるのだと。勇者を使えば、人間を救うことは出来るのだと神は確かに言ったのだ。……だから私は、国に帰ってから勇者について調べてみた、すると僅かではあるが、それらしき存在が活動していた痕跡があった」
故に、アレクサンドルは命令するのだ。
「だから何としても勇者を探し出し！　我々はそれを全面的に支援し！　魔王を打倒してもらう！　情けない話だが、それこそが帝国や人々が救われる唯一の道なのだ！」
謳い上げるように彼は大臣にそう力説する。大臣はその熱に押されて身を引きながらも、一応は冷静に、

「……ですがその勇者は――」
「探し出せ！　何としてでもだ！　帝国の民、ひいては人類全ての命が懸かっているのだぞ!?」
「……畏まりました」
　ご随意に、と大臣は頭を下げる。本当に勇者はいるのか、と懐疑的な視線を目を伏せることで隠しつつ。
　――だが、勇者は確実に存在していた。しかもこの帝国内、帝国人の中に。
　その痕跡が報告の中に含まれていることも彼らは気づくことが出来ず、東部オピロス帝国は勇者を探し続けた。

「――僕が勇者……？」
「はい。貴方は勇者です」
　森の中。魔物との戦いを潜り抜けたクエタプノは、勇者の従者だと名乗る少年――コーラに話を聞いていた。
　魔物隊長の一撃を受けて死を覚悟したが、気がつけば意識を復活させていた。
　そして不思議な感覚のまま魔物達に戦いを挑み、見事勝利した。村の人達は全滅していたのが悔やまれるが、クエタプノはその力を不思議に思い、付いてきたコーラに勇者の話を聞いている最中だったのだ。
「……なら、あの不思議な感覚は……」
「不思議な感覚と言うと……」
「……魔物の動きが、よく見えるんです」
「あー、勇者になるとその辺りの見切りも鋭くなりますよ。一度受けた攻撃や必殺技なんかは完全に見切れるようになるはずです」
「……やっぱり、そうなんですね」
　魔物隊長と再び剣を合わせると、不思議とその攻撃を見切って、躱せるようになっていた。
　身体能力は上がっていないにも関わらず、魔物隊長や他の魔物兵達

を倒せたのはこの力のおかげということになるのだろう。
少し、自分の素の力ではないことを残念に思ったが、それを振り払う。
贅沢な悩みでしかない。力が手に入ったのなら喜ぶべきはずだ。
今自分に出来ることは、手に入れた力の把握をすること。力を上手く使うための努力をする。そのために話を聞くのが最善だ。
僅かな残念を封じ込め、クエタプノは再び表情を引き締めてコーラに問いかけた。
「この力は……何処までのことが出来るんですか？」
「どこまでも出来ますよ」
「？　それはどういう意味ですか？」
曖昧な言葉が帰ってきたのでその意味を問う。
するとコーラは淡々と、
「そのままの意味です。やろうと思えば、人類最強になることも可能です。一度上がったレベルは下がることはないですしね」
「レベルが下がらない……確かにそれは……有用な力ですね」
レベルというものはサボったり怠けていたりすると下がるのは有名な話だ。それが下がらなくなるというのは特殊な力ではある。だが、
……思ったよりも、微妙な力ですね。
折角手に入れた力だが、不謹慎にも内心でそんなことを思ってしまう。
レベルなど下がらない、下がらせないのが当たり前だ。レベルを下げるほどに怠けている戦士が、今の世の中で生き延びられるはずもない。戦う者であれば毎日の稽古などを欠かさないのは当然のこと。末端の兵士や冒険者ですらそうしている。
だから口ではそう言いつつも、心の中ではそれ自体に有益なものだとは思わなかった。見切りの力の方が有用なので、文句など出ようはずもないが。
しかしコーラの次の言葉に、クエタプノは今度こそ驚愕した。それは、

「まー……ちゃんと頑張れば、魔人や魔王も倒せるようになりますよ。勇者は可能性の塊ですから」
「！　魔人や……魔王も……？　……それは本当ですか？」
とんでもない事を聞かされたが、俄に信じがたい話だ。半信半疑で質問する。コーラは淡々と感情の読めない表情で、
「はい、本当です。まぁ、頑張りが足りないせいで、今までそれが出来た勇者はいませんけど」
今までも勇者はいたが、努力が足りなかったために、大した功績を残すことも出来ずに歴史の影に消えていったらしい。
だが魔人や魔王を倒せる力があるのは本当だとコーラは言う。クエタプノは少し考え込んだ末に、
「……その話、信用してもいいんですね？」
「……まぁ、私はどちらでも。ぶっちゃけ、そこまで出来るかは本人次第ですし、今回も駄目かなーって思いもあります。貴方、女性みたいな顔してますしね」
「……あまりそういった風に言わないで下さい。そう言われるのは苦手です」
その言葉に若干ムッとしてしまう。女顔と云われる事も複雑だが、それよりも、自分では何も出来ないと、努力出来ないだろうと言われたような気がしてしまい嫌だった。
クエタプノは微妙な表情をしつつも、一息、
「……分かりました。努力すれば、魔王を倒せるんですね？」
「倒せますよ。頑張れば」
「……ならそれでいいです」
どちらにせよ、自分は人を助けるために戦っていくつもりなのだ。ならば保証がなくたって構わない。保証が無いと行動出来ないような弱い人間ではない。
それに最初から諦めていては、何も成せない。魔王を倒す。それは難しいことかもしれない。
だけど、最初からそれを目指していないものが魔王を倒せる可能性はゼロだ。目指していれば可能性は極小だが、確かにある。

勇者という称号と、不思議な力が目標を後押ししてくれるなら、それだけでも充分だ。才能があろうと努力しなければ意味はない。今までと何も変わらない。自分は人の為に戦うだけ。
腰掛けていた岩から立ち上がり、クエタプノは決意に満ちた強い瞳で告げる。
「貴方は付いてくるんですよね？」
「はい。勇者の従者ですから」
当然の様に付いてくるというコーラ。頷き、
「では早速行きましょう」
「何処に行くんですか？」
クエタプノはその問いに歩き出しながら答えた。前を向きながら声だけをコーラの方に飛ばす。
「まずは街に戻ります。僕は騎士ですので、色々と報告をしなければいけませんから」
「あー……そういえば国勤めの騎士でしたっけ……なら、あんまり自由には動けないですね」
だがクエタプノは首を振った。少し複雑な表情で、
「……いえ、いずれ騎士は辞めます」
「辞めるんですか？」
「ええ。騎士のままでは……他の仕事もあって戦い続けることは出来ませんし……他の国での活動も、早々許可されないでしょうから」
勇者は人を助けるために活動する。
であれば、どこか一国だけのために戦うことなど出来ない。
それに国の騎士では戦う以外にも任務が多く、強さだけを鍛えることは出来ない。
まだしばらくは騎士の戦いを学ぶためにも在籍することになるだろうが、それを終えたら辞めることになるだろう。
先生や故郷の母には申し訳ないが、誠心誠意謝って別の仕事を探すしかない。ゆえに今後の展望を、クエタプノは口にする。
「もう少しは戦いもあるでしょうし、騎士として動きますが、少ししたら騎士を止めて冒険者になります。冒険者であれば、雇われて戦場に

出ることも出来ますし、魔物退治などの仕事も多い。お金を稼ぐことも出来ますから」
「……ふーん、まあ、好きにしたらいいんじゃないですか？」
「はい。好きにします。申し訳ありませんがちゃんと付いてきてください」
「見た目に似合わず強かなこと言いますね……」
「何か言いましたか？　早く行きますよ」
「……今度の勇者は忙しないですね……」
もはやコーラを置いてすたすたと足早に森を抜けようとしているクエタプノをコーラがボヤきながら追いかける。
クエタプノは歩きながら今後の事についての計画を考えながらも、勇者として動く意志を確かにしていたが、コーラはまだそこまで期待しておらず、今回も無駄に終わるだろうと思い気怠げであった。
――こうして、勇者クエタプノの冒険は始まった。

大将軍会議と勇者パーティ

レオンハルトシティにある魔軍の司令部では、大柄の魔物達が集まっていた。
彼らは魔物大将軍。魔軍を指揮する魔物達で、魔人と使徒を除けば魔物社会では頂点に位置する実力者達である。
そして魔人と同じくらい、個性が強い者達でもあった。
「……それでは、定期報告会を行いたいと思うのだが……」
「うむ、私は構わん」
「……むぅ……？　ここの手は……いや、駄目か……」
「っ……お、おう……は、始めろ……」
レオンハルト軍を預かる魔物大将軍リーがいつもの如く号令を掛けるが――やはりいつもの如く、他の三名は色々と問題があった。
なのでリーは、大将軍の職務、会議を無事に始めなければならないという使命に従い、一人ずつ注意していくことを決める。溜息を吐きながらまず見たのは、カミーラ軍を預かる魔物大将軍ヴラド。
何も問題ないですよ？　といった風に見えるヴラドだがよく見ると明らかにおかしい。リーは、机の上に広げられた本を指して言った。
「……ヴラド。その本は……？」
「む？　これか。見て分からんのか」
いや、分かるか分からないかで言えば分かるが、分かるからこそ何故今この場で広げているのだ、と心の中で指摘する。
しかし喧嘩腰になるといけない。あくまで穏便に、何も揉めることなく会議を始めたいのだ。となればリーは声を荒げることもなくその問いに答えた。
「……ハンティ様の本か？」
「何だ、知っているのではないか。なら何を聞くことがある」
いっぱいある。何故、ハンティの絵が表紙に書かれ、中身も何やら卑猥な感じの絵が書かれている本があり、何故ヴラドがそれを持っていて、何故今この場で読んでいるのか。ざっと考えただけでもこれく

らいある。
だがリーはぐっと堪える。攻撃的な者が多い大将軍の中で、ヴラドは妙にプライドが高い。なので努めて柔らかな声で、
「……何故それを、お前が持っているのだ……？」
「ああ、それはだな――」
ヴラドが一旦溜めを作る。
一体どんな深い事情があるのか。いや、どんな深い事情があろうとこの場で読んでいいことにはならない。手に入れてること自体はちょっと難しい問題というか関わりたくないので保留にする。
そんなことを考えつつ、リーはヴラドの言葉を聞いた。それは、
「――私が、ハンティ様に劣情を抱いているからだ」
「……」
堂々と言い切った。
何も恥じることはない、といった様子で、何の躊躇いもなく。
「……そうか」
それを聞いてリーは深い溜息を吐く。一度では全てを吐き出すことが出来ず、二度目で、
「そうか……」
と息を吐く。そして内心で、
……聞かなきゃよかった……。
死ぬほど後悔した。何だその理由は。そんな恥ずかしい理由を堂々と言うやつがあるかと。
しかしリーは主の為にもう一度だけ聞くことにする。リーが尊敬の念を抱くレオンハルト。その使徒であるハンティに、迷惑が掛かってもいけない。
なので凄い嫌だが、話を聞いてみることにする。単純に、
「……ハンティ様のことが好きなのか？」
そんなことを問うてみる。何故大将軍会議で恋バナみたいなことしてるんだ、とアホになったのかと思いつつ。
だがブラドは、
「いや、そういうわけではないが？」

呆気からんと、そう言った。
何を可笑しなことを言っているのだ、という表情でだ。
一回ぶん殴ろうかと一瞬、拳を握りしめたが、力を込め、直ぐに拳を解く。怒ってもしょうがない。何故か奥のコウウが〝ひっ!?〟と怯えた声を漏らしたが、あいつはちょっと前からおかしい。そっちは今は放っておくとして、今はヴラドだ。
「……じゃあ、何故ハンティ様を……？」
「……？　何だリー。貴様、そんなことも分からんのか」
「知るかボケ」
「えっ」
思わず心の中の言葉がそのまま出てしまったところで、リーは言った瞬間に後悔して取り繕う。
「……あっ、いや、今のは違うぞ。〝知るかもね〟と、そう言ったんだ」
「……う、うむ？　そうか……ん？　いやそれはおかしいぞ。一体どっちの意味なんだ？」
「噛んでしまったんだ！　いいから聞かせてくれ！」
「お、おお……そこまでか。……なら教えてやろう」
と、ヴラドは一度咳払いをして、その理由を説明した。
ハンティが描かれた本、その中のページの一つをこちらに見せ、
「見ろ。良い姿だろう？」
「ん……これは……ハンティ様の真の姿と言うやつか」
「っ……」
そこに載っていたのは普段のハンティではなく、戦闘の際に見せる真の姿。ドラゴンの様な翼や尻尾が生えた美しい姿だ。
その一枚絵、というのだろうか。確かに綺麗だし、中々に気合いが入っているように見える。実際に目にしたことあるリーも、感嘆の声を漏らすほどだ。
しかしやはり遠くでコウウがビクッと反応したが、そろそろ治ってほしい。そう思いながらもうしばらく放置し、ヴラドの話の続きを聞く。
「このハンティ様の姿……いわゆる竜の様な姿……とても魅力的だと

は思わんか？」
「……まあ、綺麗ではあるだろうな」
　そこに関しては特に憚ることもないので素直にそう口にする。しかしそれを口にした瞬間、ヴラドがずいっと迫ってきた。
「だろう!?　リーよ、貴様も話が分かる奴であったか！　そうだろうそうだろう！　このドラゴンっぽい形態が私は好きなのだ！」
「そ、そうなのか……あ」
　と、それを聞いてふと、リーは思い当たる節を見つけて声を上げる。それは、
　……そういえば、ヴラドの上司はカミーラ様か……。
　カミーラ軍を預かるヴラドは、尊大で、魔物大将軍の中でも特に残虐性を見せるのだが、カミーラに対してはきちんとした忠誠を見せている。
　そのカミーラはプラチナドラゴンの魔人。この状態のハンティと似た姿だ。つまり、
「この女体に異物が付いていながらも、どこか自然と調和したような造形！　まるでこの形態が自然なものであるかの様だ！　人間が全員これであれば、私は趣味の串刺し刑を泣く泣く廃止せざるを得ないだろう……！」
「お、おお……そうか」
　やはり、ヴラドはこのドラゴン娘のような形態が好きなのだ。
　そういった性的趣向を、何と呼ぶのか、リーは知らないが、会議の場で堂々と性癖をカミングアウトされて、どういう顔をすればいいのか。リーは曖昧な笑みで頷く。
　ヴラドは、完全に熱が入ったように、
「ああ……何と美しい……！　この羽と尻尾を舐め回したい……！　くぅ……悩ましい。こうなれば、私の趣味に合った本を作るよう、ファンクラブに依頼するか……」
　そんなことを口に出す。周囲の魔物将軍が若干引いた。バルカはさすがのマイペースで全く聞いていなかったし、コウウはやはり怯えているのでそうはなってはいない。

だが今の言葉に、リーは気になる点があった。それを聞く言葉を作る。
「……ファンクラブ、入ってるのか」
「ああ、当然だ。会員証もきちんと持っている。私は2代目会長だ」
スッ、と懐から会員証を取り出してみせるヴラド。何でも、昔ファンクラブが出来た際、しばらくして加入したが、初代会長だった魔物将軍も亡くなったので会長職を引き受けたらしい。
そういえばうちの軍にいた気がするなぁ……と染み染みとしつつ、リーはとりあえずヴラドの話を打ち切った。
「わかった。……だがまあ、会議中は少し遠慮してくれ。少しでいいから」
「……ふん、仕方ない。同志の言うことなら聞かざるを得ない」
……いつの間にか同志になっている……!?
リーは内心で激しく動揺し、今直ぐ訂正するべきだと訴えたが、それを否定するとまた面倒なので、甘んじて同志呼びを受け入れる。まあ実害はないだろうと。
なので続いて、ケッセルリンク軍を預かるバルカに顔を向ける。
とは言ってもバルカの場合はいつものことだ。机の上に置かれた木の盤を指し、
「……バルカ。お前は……また将棋か？」
「……む、リー。ちょうどいい。私と同じ大将軍の頭脳を持つお前にも少し聞きたいのだが、この盤面、どうやっても先手が良くならないのだ……ここを先手の有利に持っていくにはどうしたらいいと思う？　この形に持っていかれることが多いので、出来れば敗着にはしたくないのだが……」
と将棋盤の上に駒を並べて、将棋の研究をしているバルカ。
確かバルカは昔からこういった頭脳系のゲームには嵌りやすく、最近はもっぱら将棋に嵌り、魔物界将棋連盟副会長にも就任したほどだ。
魔物界での将棋の普及のために活動をしており、会長はキャロルが務めている。主に魔物将軍、バトルノートと言った頭を使う系の魔物

の間で流行っている。
　そして将棋を指すのはリーも例外ではない。レオンハルトが嗜むという話を聞いて真っ先に覚えたし、単純に頭脳を使うゲームとして面白いとも思う。たまに部下達と休憩中や飲みに行った時に指すこともある。腕もそれなりにあると思う。だが、
「……なあバルカ。一応今は――」
「あ、リー。将棋を指してる時の私は、バルカ六段と呼んでもらおう」
「……何だそれは？」
「知らないのか？　魔物界将棋連盟が発行している将棋の段位だ。初段から九段までがあり、九段が最高だ。ちなみにタイトル戦として〝将魔戦〟が今度あり、私も今度参加するのだが……今の将魔はキャロル様でな……並大抵の研究では勝つことは出来ない。だから時間が惜しいのだ……」
「……そうか」
　そんなことを言われても困る。困るが、そうなのか、とも思う。
　正直仕事が忙しいのであまりその辺の話には詳しくなかったが、どうやら今は段位だったりタイトル戦があるらしい。トップがキャロルなのは薄々分かっていたが。リーも一度指したがまるで敵わず、物凄く勝ち誇られた上に、〝もっと強くしてやりますわ！〟と将棋を教えてもらった。おかげで微妙に棋力が上がったのだが、
　……今度受けに行ってみるか……。
　今の自分が将棋界でどの程度の強さがあるのか興味がある。何しろ、おそらくではあるが、
「……レオンハルト様は何段なのだ？」
「レオンハルト様か。レオンハルト様は五段だな。忙しいからあまり指せていないらしいし、将棋連盟主催の大会にも参加しないので、段位があまり上げられないのだ。実力自体は私よりも上だろうが……やはり、伝説の将棋指し、ハニュー九九世の教えを受けただけはある。続々と教わったという新手を出してくるからな……」
「……なるほど、さすがはレオンハルト様だ」
　やはり将棋であってもレオンハルト様はレオンハルト様だ。忙し

い身分であるのに趣味にも手を抜かないのはさすがという他ない。
　そして、レオンハルトがやっているとなるとやった方がいいのは間違いないのである。なので今度、将棋の勉強をしよう。
　そう心に誓い、リーは先程と同様、バルカに注意を行おうとする。
頷きながらも、
「まあ少しだけでいいから会議に参加してくれ。今回は報告だけで直ぐ終わるから」
「……仕方ない。同じ将棋指しの友の言葉だ」
　バルカが将棋盤を少し横にずらし、居住まいを正す。何だか同類だと思われると話がスムーズに進むな、と思いつつ最後に、
「……コウウ。お前はまだ怯えているのか？」
「っ、な、なんだリー!?　お、俺は怯えてなんかいねえ！」
　明らかに怯えた様子でコウウが言う。というか、
「……ならもう少し近づいてくれないか？　部屋の隅から話されては話し辛いのだが……」
　滅茶苦茶距離が遠い。皆は部屋の中心にあるテーブルに集まっているのに、コウウだけ部屋の隅にいる。周囲に部下を近づけさせもしない。全てから距離を取りながら、
「お、俺に近づいて何をするつもりだ……？　ま、まさか、袋叩き――」
「しない。というか私や他の大将軍が共闘してもおそらくお前には勝てん」
「む!?　聞き捨てならんぞリー！　この私がコウウに負けるだと!?
ふん、確かに個人の戦闘力ではコウウの方が上だろうが、私にはあの能力がある。勝負は分からんぞ！」
「ひ、ヒィ!?　やっぱり、この俺を皆でリンチに……！」
「いや、だからしない！　別にお前の事を襲おうなど――」
「この場で私がコウウに劣らないことを証明してやろうか!?」
「ひっ!?　し、四面楚歌……！」
「お願いだから黙っててくれヴラド！　話がややこしくなる！」
「そもそも、それなりに広い部屋といっても我々がいる時点で狭いし、戦うにはスペースが足りない。このような限られた空間で多対一を

行うとすれば私達が不利だろう。コウウは背中を壁に向けているから正面の相手だけをひたすらやればいいからな。私達が殺るなら、部屋を出たところを奇襲して広い場所で囲み――」
「いやぁぁぁあああああああっ!?　や、やっぱり俺を殺すつもりで……！　やめろおお！　助けてくれぇ!!」
「お前まで余計な事を言うなバルカ!!」
ヴラドとバルカの言葉に不安がピークに達したのか、コウウが部屋の隅で後退ろうとしながら壁に向かって助けを求める。
どうにもコウウは、藤原家との戦争を終えた頃からとても疑心暗鬼でネガティブな性格になってしまったのだ。以前の自信満々で粗野な性格は確かに厄介であまり好ましくはなかったが、こうなるくらいなら前の性格の方がマシだった。
頭を抱えながら、近くのコウウ付きの魔物将軍を呼びつけると、
「はぁ……いつものだ」
「はっ……おい、連れてきてくれ！」
魔物将軍が外の部下に声を掛けると、外から一体の魔物が入ってきた。
「んー？　遊べばいいのー？」
「ああ、頼む」
それは緑の髪にレオタード。うさ耳がついた女の子モンスター、きゃんきゃんだった。
最弱の女の子モンスターとして知られるきゃんきゃんは、リーの言葉を受けて部屋の隅にいるコウウに近づく。そして、
「コウウちゃーん。あーそびーましょー！」
「！　きゃ、きゃんきゃん……」
きゃんきゃんを目にして、コウウが目に見えて大人しくなる。
無邪気で無防備なきゃんきゃんは、コウウの気を抑えるために今となっては必要不可欠な存在だ。最弱、という事実も手伝ってさすがにきゃんきゃんに危険は感じないのだろう。僅かに怯えの色を消したコウウにきゃんきゃんは少し距離を取ったところで屈んで、その手のにんじんを差し出し、

「ほーら、こわくないよー。るーるる、るーるるるる」
「……あれは狐を呼ぶ時のやつじゃないか？」
「気持ちは分かるが突っ込むな、ヴラド」
ヴラドのツッコミを抑えさせ、皆で遠巻きにその結果を眺める。
きゃんきゃんが差し出したにんじん、その純粋な姿に、コウウはゆっくりと近づき、
「……い、いじめない？」
「うん！　いじめないから一緒に遊んで遊んでー！」
「……普通、逆ではないか？」
「だから突っ込んでくれるな、バルカ」
バルカの指摘も止めさせる。変に自分達が出しゃばるとまた怯えて発狂してしまう。
そのかいあってか、やがて、
「……何して遊ぶんだ？」
おお……、と皆が一様に感嘆の声を上げる。さすがはきゃんきゃん。誰とでも仲良くなれる女の子モンスターと言われるだけはある。
完全に落ち着いたのを見計らって、リーは努めて穏やかな声を出すようにして声を掛けた。
「……コウウ」
「っ！　な、なんだ、リーか。何のようだ……？」
怯えてはいるが、まだ冷静な様子で用件を問いかけてくる。記憶が混濁してるようなのがあれだが、
「……報告会をしたいんだが……報告したら帰っていいから、ちょっと頼めないか……？」
「そ、そういえばそうだったな……わかった、やってやろうじゃねぇか……」
ゆっくりと、ほんの少しだがテーブルに近づいて参加する素振りを見せるコウウ。周囲を警戒しているが、近くにきゃんきゃんがいることで妙に落ち着いているようだ。
……これでようやく始められるな……。
会議を始めるまでが1番疲れる。始まってしまえば直ぐに終わる

のだ。ゆえにリーはさっさと言わねばならないことを口にしてしまおうと、まず最初に報告を行った。
「……では、私から。まずは最近、占領した人間の都市の周辺を無断で散策していた魔物兵達が、人間の冒険者に殺されてしまった件だが……しばらくは街の周囲に個人的に外出するのは禁止とする。止むを得ない場合は最低でも一部隊単位で行動するように。――と、いうのがレオンハルト様からの命令だ。各軍、留意するように」
　それは最近、頻発するようになった事件だ。
　以前は散歩程度であれば許していたし、特に気に留めることもなかったのだが、最近は人間の冒険者の活動が活発な様で、数体から十数人程度で街を離れた魔物兵が、そのまま帰ってこなくなり、調べてみると死体となっていたという件が多数ある。
　人間の軍が通った痕跡はないし、危険な場所というのは魔物兵にも伝えてある。なので冒険者だろうと判断したわけだが、皆もその件も覚えていたようで、
「そ、外に出るなんてしねぇよ……」
「ふむ、留意しておこう」
「……ふん、冒険者、というとたかが人間数人だろう？　兵には注意させるが、我がカミーラ軍を襲うような不届き者がいれば、私が直々に出向いて、串刺しにして磔にしてやる」
　コウウ、バルカ、ヴラドがそれぞれ思い思いの感想を口にする。対策も軽く口にしながら、リーも頷き、
「……まあ、そこまで心配する必要もないかもしれないがな。一応は注意しておくのがいいだろう」
　そう、注意しておくに越したことはない。命あっての物種とも言う。魔物大将軍の強さを考えればただの人間の冒険者を相手にしたところで何も起こるはずもないが、ここまで来たら最後まで働いて勇退というのが皆いいはずだ。何しろ、
……我々も、そろそろ終わりが近いからな……。
　魔物大将軍として一代の魔王に仕える。自分などは訳あって先代ではあるが、皆と合わせて今代限りで寿命が尽きることとなるだろ

う。
魔物大将軍は再生力が高く、腹の中身のブレインさえ無事なら、例え身体を失ったとしても元通りに再生する。それだけ丈夫な種であり、魔物の頂点には相応しい力がある。
しかしだからといってその命は永遠ではない。魔人や使徒とは違うのだ。
……この４人で顔を合わせることが出来るのも、後何回叶うだろうか……。
何だかんだで同じ種族、そして戦友なのだ。それぞれが別の軍を預かっているため、喧嘩をすることもあるが、今まで魔軍のために一緒に戦ってきた戦友。他の者達がどう考えているかは分からないが、少なくともリーはそう思っていた。
だから最後まで戦い抜けたらそれでいい。それさえ叶えば未練はない。
そして何より、
……レオンハルト様に最期まで仕えることが出来れば……。
尊敬する魔人の役に立ちたい。
それが、リーの心の芯にあるたった一つの願いだった。

人類圏にあるとある街。
そこの路地裏では、とある少年が剣を振るって襲い来る敵と戦っていた。
「ふっ――！」
「ぐっ……！」
「気をつけろ、このガキ強ぇぞ！」
闇の中に紛れるようにして戦う漆黒のローブを着た男達。彼らは西部オピロス王国の暗殺部隊であった。
――彼らが何故、この勇者の少年、クエタプノを狙っているのかは話せば長くなるので割愛するが、とにかく、暗殺者達はクエタプノの命を狙って放たれた刺客であった。

暗殺者達はクエタプノの鋭い剣さばきに一人、また一人と数を減らしていく。戦いながら、〝ガキが〟とか、〝女みたいな顔しやがって〟とかばかり言われるのでさすがに頭にきてるのか、不満そうな顔で、
「……僕はもう15歳ですし、歴とした男です。女扱いは不愉快なので止めてください」
「ぐあっ――」
そう言いながら、ざくり、と暗殺者達を剣で貫いていく。――そういうところを気にするのがまだまだ大人になりきれてない証拠なのだが、クエタプノは気づかない。
そしてその間に、奥から別の暗殺者が魔法の詠唱を始めた。それに伴い、
「喰らえ、火爆――」
「スノーレーザー！」
「っ――!?　うあああっ!?」
クエタプノの奥から氷の光線が真っ直ぐと暗殺者に撃ち込まれ、一撃で奥へと吹き飛ばされていく。
魔法を放った影、現れたのは赤みがかった長い髪を持つ魔法使いの美少女だった。彼女はクエタプノに向かって、
「クエタプノ！　魔法使いは私に任せて！」
「！　危なくなったら言ってくださいよ！」
両者ともに、気安い関係が見て取れるやり取りを交わし、それぞれ路地裏の敵を掃討していく。
しかし更に遠くから、彼らを狙う影があった。
「へへへ……随分とやるようだが、遠くから頭を吹き飛ばしちまえば一発よ」
男が弓矢を番えてクエタプノを狙う。引き絞り、それを放とうとした直前、
「――やらせないっ！」
「！　――うっ……」
不意に、その男の背後に影が現れたかと思いきや、男はその少女が

持った刀に切り裂かれていた。
淡い茶髪の髪をした、大陸ではあまり見ない服装の美少女。彼女は身軽で素早い身のこなしで、闇の中から不意打ちを行おうとする暗殺者達を一人ずつ確実に屠っていく。
三人はそうやってしばらく、路地裏で暗殺者達と戦い続けていたが、やがて、
「――これで最後！」
「ぐ……」
クエタプノの剣が最後の一人を斬り捨て、路地裏に静寂が戻る。
すると、また別の声が聞こえた。
「……やれやれ、終わりましたか」
と、どこからともなく現れたのはフードを被り、大きめのリュックを背負った感情の読めない少年。その声を合図に、先程まで戦っていた三人は路地裏の真ん中辺りに適当に集まり、
「はぁ……もう！　何なのよこいつらっ！」
と最初に声を上げたのは赤みがかった髪をした魔法使い。彼女は憤りを吐き出すように大きな声で愚痴を言い放った。するとクエタプノが息を入れながら、
「ふぅ……だから言ったじゃないですか。危ないから付いてくるなって。それでもって言って付いてきたのはリナの方なのに……」
「こんなに危ないなんて聞いてない！　冒険者になるって言うから私も冒険者なりたかったし、ちょうどいいやって思って来ただけだし、そもそも勇者になったとか最近まで知らなかったし……」
と、若干不満そうに言うのはクエタプノの幼馴染であるリナだ。
彼女は同じ村の出身で、小さい頃からよく一緒に遊んでいた友達であり、クエタプノが騎士になるのを母と一緒に止めていた張本人である。
にも関わらず、本人は冒険者になろうとしている辺り、クエタプノは釈然としない気分になる。そもそも言った様に、付いてくるなと最初に言ったのだが、強引に付いてきたのは彼女の方だった。何でも、冒険者の知識なら結構あるから任せて、とか何とか言って。

無論、クエタプノも、最初は普通に冒険者稼業をやるつもりだったので問題ないかと思ったのだが、
「……それにしても、クエタプノはツイてないんだな……さすがにこう何度も刺客とばったり見つかってると、ボクも疲れてくる……」
「それは……すみません。どうにも僕の運が悪くなったみたいで……」
「……い、いや別に悪いとは言ってないから謝らなくてもいい。良い修行になると思えば……うん、悪くないから」
と、クエタプノに気を使ってそう言うのは、ＪＡＰＡＮ風の衣装に身を包んだ少女だ。
カノというある事情から旅に付いてきた少女は、何でもレンジャーとしての教育を受けていたらしく、色々と役に立ってくれる。
何故ついてきてくれるのかは分からないが、旅をする上では有り難い。なので深くは聞かない。
しかし苦労をかけてしまっているのは申し訳なく、
「ほんとよね……その癖、女の子とは縁があるみたいだしー？」
リナがそんなことを不貞腐れたように言うので、クエタプノは溜息付きで否定した。
「いや、あれはそういうのじゃ……多分、僕はそんな大した人間でもないので、惚れるなんて……」
「……ふーん……どうだか……」
「……？　何をそんなに怒ってるのさ」
クエタプノからすればよく分からない態度だ。別に旅先でやたら女性に縁があるからと言って、彼女に怒る理由はないはずだ。
しかしリナはじとーっとした目でクエタプノを見て、
「……別に怒ってないから！」
ぷいっとそっぽを向いてしまう。
理不尽だな、とクエタプノが冷静に考えていると、今度は横からカノが、
「……ま、まぁ、クエタプノも男な訳だから……そういうのも悪くないんじゃないか？」

チラチラとクエタプノを見て何やらよく分からない態度を取るカノ。しかし特に指摘するようなことはせず、クエタプノは、
「いえ、僕はまだまだ人間としても騎士としても、勇者としても未熟な半端者です。恋愛にうつつを抜かしている暇なんてありませんよ」
僕なんかがおこがましい、ときっぱりと否定してみせるクエタプノ。中性的な容姿で丁寧な言葉遣いでやたらと下に見られたり舐められやすいクエタプノだが、芯がとても強く、自分にとても厳しい。しかも一度決めたらてこでも動かない頑固さがあるため、こう言ったのなら本当にそう思っているし、そういうことはしようとしないだろう。
その事実を分かってる二人は安心したような残念なような複雑な気持ちで黙り込む。どうにかこの鉄の心を持つ少年の気持ちを動かせないかとあの手この手を試しているのだが、彼は怖いくらいに紳士だ。
前にちょっとした色仕掛けというか薄い肌気で一緒の部屋で寝泊まりしようとしたことがあったのだが、〝女性がみだりにそういったことをしてはいけません〟と、顔を赤くするでもなく滅茶苦茶真面目な顔でそう注意され、一時間ほど説教された。寝泊まりする際なんかは事情が無ければ同衾なんて絶対しないし、何なら自分達より女子らしい。規則正しい生活をしなさいと朝早くに活動を開始し、食事も余裕があれば全部自分で作り始める。しかもかなり美味しい上に、栄養バランスまで完璧に、効率的に考えられている。身の回りのことは基本的に何でもこなせるし、服が解れれば自分で縫い直してしまう。正直、女子が出る幕がない。
ちょっと隙を探そうと何となく切り口を探し、カノやリナが話しかけるも、
「で、でも……あ、ほら、藤原石丸とかも、若い頃はとてもやんちゃで女性に手を出しまくっていたと聞くぞ。だからそこまで厳しくなくても……」
「いえ、それは藤原石丸の様な英雄だからです。彼の記録が書かれた正確な文献を目にしましたが、彼は若い頃から大人顔負けの強さを持

ち、僕の歳の頃には冒険で大勢の人を救ったと伝えられています」
「そ、そうみたいね。でもまあ――」
「それに若い頃の女遊びが激しかったといっても、彼が多くの女性に手を出したのは、主に彼が藤原家の当主になり、帝になってからです。しかも手を出した女性は全員、責任を取って側室に入れたと聞きます。そこから考えると、仮に僕が女性に惚れられて、僕も相手の事を好きになったとしても、今の僕では責任を取ることも、相手を幸せにすることも難しいです。騎士を辞めて、事件に巻き込まれて国を追われていますし、何より経済力がありません。経済力がないと、女性を幸せにすることは難しいです」
「あ、愛があれば――」
「確かに、愛があれば幸せ、ということもあるでしょう。幸せはお金で買えません。それは一つの真理です。しかし、幸せはお金で無くなります。どれだけ好きあっていたとしても愛で腹は膨れません。しかも生まれてくる子供にも苦労をさせてしまうことになります。僕は自分の生まれた境遇に不満なんて持っていませんし、女手一つでここまで育ててくれた母に感謝していますが、だからといって子供に同じ苦労をさせたいとは思いません。こちらが気を病むだけではなく、子供の方も、親に気を使ってしまい、お腹を空かせているにも関わらず、もうお腹いっぱいになった、などと言われる生活には耐えきれません。だから経済力だけは必須です。それと社会的立場というのも欠かせないものが――」
「わ、わかった！　わかったから！」
「う、うん……まあ、よくわかった……はぁ……」
　クエタプノの持論に熱が入り始め、心が折れる前にクエタプノを止める。すると彼は少しはっとした表情で、
「……すみません。少々、熱くなってしまいました。今のは僕の持論ですので気にしないでください。幸せの形や恋愛観なんかは人それぞれですし、貧乏だからって不幸になると決まっているわけではありません。他ならぬ僕がそうですし……二人は気にしないで下さいね？」

「……う、うん……」
「ああ……そうだな……」
確かに相手が別の人であれば問題ないが、相手がこう言っているから問題なのだった。
もういっそ、自分が滅茶苦茶に稼ぐしか……などと内心で二人が決意を固めようとしていると、従者であるコーラが軽く呆れたように聞いた。
「……それで、次はどうするんですか？」
「あっ、そうね。次はどこに行くの？」
「この街は危ないだろうからな……」
コーラの言葉に、リナとカノが追従する。クエタプノは、そうですね、と一度間を置いて考え込むと、
「……街を出て……北の、街か村に向かいましょうか。追手が面倒ですし、そろそろまた北の方で魔物の討伐依頼か、ひょっとしたら募兵は行われているかもしれません。出来るだけ魔物との戦闘経験を増やしたいので」
「……わかったわ」
「了解した」
と、息をするようにストイックさを見せつけるクエタプノに、冒険の仲間である二人は頷く。
そうして路地裏を出ようとしたところで、リナが気づいた。
「そういえば、この人達は……」
と指したのは地面に転がる暗殺者達の死体。それに対するリナの曖昧な問いに、クエタプノは先んじて答えた。
「……気の毒ですよね。これ以上追手が現れて、死者を増やさないためにも、やはり遠くに行くべきです」
と、その言葉は彼らを気遣っているようで、しかし少し残酷な言葉だった。それに少し暗い顔をしたリナは、呟くように彼らを見て、
「……やっぱり、殺らないと駄目なんだよね……」
「リナ……」
カノが少し心配するような表情を向ける。ただの冒険者として田

舎から出てきた彼女には、人間同士で殺し殺される様になるという現実は少しキツいのだろう。
　しかしその言葉に、クエタプノは顔に影を落とし、目を伏せて憂うような表情を見せつつも、言葉はいつも通りのものを発した。
「そうですね……勿論、人を殺さないに越したことはないです。でも、彼らに慈悲を与えて放置してしまった際、いつか彼らが復讐や報復に走る可能性は高いです。そうなれば僕だけでなく三人の命だって危険です。関わっただけの罪のない人達に刃が向けられる可能性だってあります。なら……殺すしかないです」
「……そう、よね」
　リナが一応は納得して顔を上げる。だがそこで、コーラは僅かに目を細めてクエタプノを見ると、
「……騎士にしては、随分と現実主義なんですね、クエタプノは」
「騎士は現実主義者だらけですよ。人を守るためには、色々なものを犠牲にしなければならないことを知っていますから。時には自分の手を汚すことだってあります。僕も……それを覚悟して、人を守る道を選びましたから」
「……へぇ？」
　そこで初めて、コーラの表情に興味深いものが混じる。
　しかしそれには誰も気づかず、カノがその言葉を聞いて、苦笑の表情をクエタプノに向け、
「なら、やっぱり力を合わせないとな。一人では選ばなくちゃいけないことも、何人もいれば何とかなることだってあるかもしれない」
「……そうよ！　だから……私も手伝うからね！」
　励ますような言葉を送るカノに、同様に照れ隠しをしながらも手伝うことを宣言するリナ。
　それを聞いて僅かに驚き、目を見開いたクエタプノはそれを理解して微笑を浮かべ、
「二人共……ありがとうございます」
「い、いいのよ。今更だし。それより、早く行きましょう？」
「そうだな。あまり長居しては追手が現われるかもしれない」

先を急ごうと促す。クエタプノも頷き、
「では行きましょう。コーラも、ちゃんと付いてきてくださいね？」
「……はい。分かってますよ」
コーラにもちゃんと声を掛けて路地裏を出ていくクエタプノとその一行。
だが最後尾を歩くコーラは、先頭を歩くクエタプノに対し、先程見せた興味深い視線を再び向けた。
「……ひょっとしたら……」
と、誰にも聞こえないように小声で呟く。
先程のクエタプノの発言、その中にある小さな嘘を、コーラが見抜いたためだ。
今まで見てきた勇者。その中でも、群を抜いて心が強く、人を助けるために戦いながら、それでいて現実を理解するリアリスト。
しかし理解はしていても、心を痛めていることには変わりない。それは人の性質だ。
今までの勇者達も皆、人を助けることを苦と思わない善人だった。
だがそれゆえに人助けを優先しすぎて寄り道しまくって期限が訪れたり、特に何も出来ない勇者が沢山いたが――クエタプノはそうではない。
彼は人を助けはしても、寄り道はしない。冒険者としての仕事も、全て魔物か、少なくとも戦闘経験を積むことが出来る仕事のみを選ぶ。自分の力を高めるために。強くなって、目的を達成するために彼は計画性を持って動けている。本当に余裕があるような、ついでの時でしかどうでもいい人助けはしない。目的地の途中に人が取ってきて欲しいと頼んだ薬草などがあればついでに取ってくるような、効率を重視している。
しかも本心ではそうしたくないと思いながら、しかし、強靭な精神力が心を折らせない。
なるほど、鉄の心とはよく言ったものだと、コーラは思う。確かにこれは騎士という職に向いているのだろう――そして勇者という存在にも。

――面白い。
そんな感情が芽生える。
このクエタプノという人間は、とても面白いと。
そしてだからこそこう思う。この勇者を、
――壊してみたい、と。
どこまでやれば壊れるのか。邪悪に満ちた笑顔を隠しながら、コーラは勇者の背中に視線を送り続けていた。
――彼らが次に向かう行き先は、魔人が占拠している街からほど近い地域。そこでは一体何が起こるのか。
――勇者の冒険は続く。

三体の魔人

空から見た地上の景色は、様々な色で染まっていた。
まずは緑。これが主であり、緑の色は大地に芽吹く草木と、その村を占領する者達の色。
後は建物を差す茶色や灰色であったり、占領する者達の青や赤だ。
これが大部分のもの。
だが、最も勢いのある色は、二つの黒であった。
「――！」
正確には、黒と、黒を持つ金の男。村の中で、彼らは勢いを持ってぶつかり合う。
「オオ……！」
黒の大男――魔人レキシントンは、相手に向かって獰猛な笑みを浮かべながら突っ込む。
魔人の中でもトップクラスのパワーを誇る魔人。その怪力で自身の得物である巨大な金棒、〝グレイ・レディ〟と〝レディ・レックス〟をそれぞれ片手に持ち、容易に振り回す。
どちらか一方、それが当たるだけで人間はおろか、魔物は全身を粉砕され絶命するだろう。
事実、レキシントンが放った金棒、相手に回避されたそれは、地面に当たれば地面が割り砕かれ、木々に当たれば木の破片となって折れる。速度の方も申し分ない。
しかし、相手はそれを躱す。躱し、時には受け止め、鬼の魔人であるレキシントンの攻撃を真っ向から跳ね返す。
それを為しているのは、やはり魔人だ。
「……！」
「うごっ!?」
そこにいたもう一人の勢いのある男は、金色の髪と赤い瞳、黒を基調にしたコートを着た魔人――レオンハルトだ。
彼はレキシントンの攻撃に対し、懐に潜り込むと、そのまま跳躍して彼の横っ面に思い切り蹴りを叩き込んだ。最高位の魔人の力に

よって蹴り飛ばされたレキシントンは、短い声を上げて吹き飛ばされ、林の中に突っ込む。木々が折れる音とともに、巨体が大地に叩きつけられ、土煙が舞った。
　それを見て、周囲の鬼達や魔物兵は囃し立てる。
「うおおお!?　親父ぃ!?」
「うわっ……レオンハルト様えげつねぇ……！」
　巻き込まれないようにそれなりに距離を取り戦う両者を見て声を上げた。その動きを見切ることは出来ずとも、何となく勢いやなんやでどっちが攻めているかは理解出来る。
　そしてその勝負は、またしてもレオンハルトに軍配が上がるようであった。
「……ハーハッハッハッ！　まだ終わらん……！」
「うわぁあああああっ!?　岩が飛んでくるぞ――!?」
　林の中から速度を上げて飛び出してきたレキシントンが、そこにあった巨大な岩を投げつけた後、その岩に追従するように駆けてくる。その岩はレオンハルトに向けられたものであったが、躱されてしまえば背後の魔物兵や鬼に当たることになる。周囲の被害などまるで考えないレキシントンの攻撃に、レオンハルトは軽く眉根を寄せ、退かないことを選択した。
「――〝オル＝フェイル〟」
　と、言った瞬間だ。彼は空間から剣を抜刀した。
　それは刀にも似た細長い、長さは身の丈を越える2メートルほどの蒼の魔剣だった。
「周囲の被害を考えろ。バカが」
　と、彼が一刀を放つ。
　すると巨大な岩が真っ二つに、綺麗な断面を残し両断され、レオンハルトの左右に落ちた。勢いを殺し、魔物兵達をホッとさせたのも束の間、真っ直ぐにレキシントンは突っ込んでくる。
　だが、
「悪いがもう終わりだ」
「ハハハ、まだまだこれから――ぐあっ!?」

レオンハルトが言った直後、レオンハルトがレキシントンの視界から掻き消え、懐にいた。
幻影の様に消えたそれ、レオンハルトの残像に気を取られ、レキシントンは最後の一撃を腹に喰らう。レオンハルトの拳が突き刺さっていた。
「っ……ぐ」
怯み、白目を剥く中、レオンハルトはその間に魔剣の刃を首元に突きつけ、
「勝負ありだ」
「……」
寸止めで、いつでも殺せるぞ、というポーズを取られ、レキシントンが無言となる。
辺りに勢いがなくなり、周囲が静寂に包まれる。魔物兵や鬼達も息を呑み、聞こえるのは風の音だけ。
しかし、次に音を、再び勢いを作ったのは無言だったレキシントンだった。彼は、しばらく真顔のままだったが、不意に、ニィッ、と笑みを浮かべ、
「ハーハッハッハッ！　――儂の負けだ!!」
きっぱりとそう言い切り、金棒を収めるレキシントン。
するとようやく張り詰めていた場の空気は弛緩し、周囲で見ていた者達も、
「……ふーっ、やれやれ。また負けたの？　レキシントン」
「怪我はありませんか、レキシントン様？」
ホッとしたように息を吐き、直ぐ様近づいてくるのはレキシントンの使徒である全裸の男女、ジュノーとアトランタだ。
ジュノーは気安い様子で、アトランタは使徒として真っ当に心配しながら。レキシントンはそれを見て肩を回すと、
「おおう、ただの喧嘩だ。大事ないわい。……それとジュノー！　そんなに言うならお前が戦ってみろ！　挑みがいがあるぞ、レオンハルトは!!」
「やだよ、僕なんて一瞬で殺されちゃうじゃん」

「そりゃあ、レキシントン様でも勝てないのにアンタが挑んでも一瞬で肉塊よ。……でも一回挑んでみたら？　あんたのつるぺた好きも治るんじゃない？」
「うげっ……やめてよアトランタ。想像しただけで気持ち悪くなってきた……」
　気軽な会話を行う魔人と使徒二人。決闘直後に即軽い雰囲気で談笑出来るのは、やはり彼らが喧嘩が大好きな鬼だからだろうか。――アトランタは悪魔だが。
「……ふぅ」
「お疲れ様ですわ！　レオンハルト様！」
「お飲み物を用意してますよう！」
「……全く、こんな時に……」
　レオンハルトが息をつき、魔剣を空間に収めたところで、レオンハルトの元にも使徒が駆け寄ってくる。笑顔でタオルや飲み物の入った水筒を差し出してくるキャロルとペールに対し、ハンティはどこか呆れるような表情でレオンハルトを見ていた。レオンハルトも、飲み物を受け取りながら、レキシントンに顔を向けると、
「ハンティの言う通りだな。何もこんな時に戦いを挑んでこなくともいいだろう、レキシントン」
「馬鹿を言うな！　お前が女は犯すな、暴力は控えろと言うから暇で暇でしょうがないわい！　そりゃあ喧嘩もする！」
　レキシントンが声を大にして反論する。だがレオンハルトも、一部は認めつつも息を入れ、
「……別にやるな、とは言っていない。数を決めて抑えろ、と言っているだけだ。いつも後先考えずにやりやがって……お前は人間を絶滅でもさせるつもりか？」
　戦闘直後であることと普段のレキシントンの行動も相まって、途中、小声で悪態をつくレオンハルト。その後の問いを視線とともに向けると、レキシントンは鼻を鳴らし、
「そういうつもりはないわい。つーか、別に殺しまくったところでうじゃうじゃとおるんだから別に問題ないだろうが」

「全員がそういった考えで行動するとそれもあり得る。それに、普段は魔人であるお前を尊重してとやかく言っていないだろうが。俺といる時くらいは俺に合わせろ」
「……わかっておるわい！　お前は儂より強いからな！　言うことを聞いてやる！」
　微妙に不満そうであったが、逆らうつもりはない、と地面にドカッと座り込んで意思表示を行う。だが直ぐに、
「……あー……戦いに出てぇー……」
「我慢しきれてないよ、レキシントン」
「少しの辛抱です！　レキシントン様！」
　ジュノーが相変わらず気安くツッコミを入れる。アトランタの励ましの言葉の後、レキシントンはもう一度レオンハルトに向かって、
「……そういえば周囲の哨戒と散策を行う部隊があったな。レオンハルト、それに儂を参加させろ」
　記憶を辿り、レオンハルトにそんなことを頼むレキシントン。彼は戦闘狂だが頭が回らないわけではない。むしろ鬼の中ではかなり頭の良い方である。人の名前を憶えなかったり、適当に突っ込んだりという行動を取ることも多いが、本人が難しいことを考えるのが嫌いなだけで、鬼達の統率を行っているのは伊達ではない。
　ゆえにそんなことを思い出したが、レオンハルトはそれに頷きながらもこう言った。
「駄目だ」
「何でだ!?　レッドアイの奴は行っとるだろうが！」
　今回の遠征軍の司令官である三体の魔人の、この場にいない最後の一体を名指しし、レキシントンが憤る。その名前を出され、僅かにハンティが複雑そうな、憂いがあるような表情を見せているが、レオンハルトはレキシントンの問いにこう説明した。
「レッドアイはお前と違い、命令を正確に伝えれば逆らうことはしないからだ。……俺がいる場合はな」
　そう、レッドアイはどちらかと言うと忠実なのだ。
　上位者の命令には逆らわない。それを伝えたつもりなのだがレキ

シントンは即座に応答した。
「儂も言うこと聞いとるだろうが！」
「お前は女と見れば直ぐに犯す上、所構わず宴を行うだろうが」
女が居れば犯し、戦いの時以外は大体いつも部下達と酒を呑んでどんちゃん騒ぎ。多少なら息抜きとして目を瞑るが、レキシントンと鬼達に至っては四六時中それだから問題なのだ。
それを告げてやったのだが、しかしレキシントンは迫真の表情で言い切った。
「馬鹿野郎！　女がそこにいるってぇのに、レイプしない訳があるか！」
「馬鹿はお前だ馬鹿野郎」
とんでもない事を言っていたのでレオンハルトは即座にツッコむ。こちらの容赦のない言葉にさすがに諦めたのか、今度は周囲に向かって、
「おおう！　なら宴だ!!　お前ら、ありったけの酒を持ってこい!!」
「へい、親父！　既に用意してありますぜ!!」
「おう、誰か分からんが用意がいいな！　よし、飲むぞ！　レオンハルトも飲め！」
鬼達が持ってきた酒から、一升瓶を取り上げレオンハルトに向かって突きつけるレキシントン。それに露骨に嫌な顔をし、
「……俺は仕事中は極力飲まん。勝手にやっていろ。行くぞ」
と、自分の仕事の流儀を口にし、使徒達を連れてその場を後にしようとする。実際、夜寝る前だとか一戦終わった後に2、3杯飲むくらいはすることはあるが、基本的に任務中の飲酒は行わない。
だからといって戦時中に兵達が酒を飲むことをやめさせもしない。レオンハルト軍においては限られた時、遠征中でも休みの時や宴会などを行うのでそういう時に飲ませたり、占領直後なんかはお目溢し的に許可する時もあるが、軍規上は禁じている。
しかしそれが活力になることにも一定の理解はあるので、禁じていないだけだ。なので魔軍全体としてはその辺の規則は緩い。
ゆえにレキシントン達の宴会も苦言は呈しても止めはしない。仮

に宴会中に敵が襲ってきても、レキシントンや配下の鬼達は戦いとなれば目の色を変える。戦闘種族なだけはあり、酔いも一発で冷めるのだ。
　そのため心配はないし、仮に酒に酔って使い物にならなくなったとしても自分達もいればカバー出来る。そういった思いもあって、その場を後にしようとしたのだが、
「……ははーん？　さてはレオンハルト、下戸か？」
「……」
　ピクッ、とレオンハルトが眉を動かし、その場に立ち止まる。
　下戸、つまりは酒が飲めない、もしくは酒を飲む量が少ないと揶揄して言う言葉だ。
　それに反応したレオンハルトは続くレキシントンの言葉に耳を傾けた。こちらを失笑するように、
「……そういやぁ、レオンハルト、聞いたぞ。お前、儂らが飲むような辛くて強い酒は嫌いで、甘くて弱い酒が好きらしいな？　――ハッ、情けない。女みたいな奴だのう」
「――何だと？」
「あっ……」
　レキシントンの挑発に反応したのを見て、ペールが何かを察したような短い声を上げる。レオンハルトはその場で振り返り、レキシントンに向かってその鋭い視線を更に鋭くすると、
「……ふん、これだから馬鹿舌の鬼は分かっていないな。あの甘さと、僅かに舌先を刺激する上品な味わいが理解出来ないとは。酒好きが聞いて呆れるぞ、レキシントン」
「あんなの酒じゃないわい。あんなのは甘いだけのジュースだジュース。魔人筆頭ともあろうものが、酒も飲めんとはのぉ……ハーッハッハッハッハッ！　こいつは傑作だ！」
「テメェ……」
「レオンハルト様！　抑えてくださいまし!?」
　前に言っていたレオンハルトの数少ない怒りのポイント。加えて負けず嫌い。その二つが合わさってしまったのだ。

それを熟知しているキャロルは半ば無駄と分かっていながらもレオンハルトを止める。
しかし、やはり無駄の様で、
「……そこまで言うなら飲んでやる。飲んでやる、が……俺は俺の好きなものを飲ませてもらう」
「おおう、構わんぞ。飲み比べだな。ようし、ジュノー、アトランタ！
レオンハルトの分の酒も用意してやれ！」
「かしこまりました！」
「あーあ、レキシントン相手に飲み比べとか……」
ジュノーがやれやれと言った風に酒を持ってくる。人間から奪ったもので、鬼達が飲まない甘口の酒だ。それをレオンハルトは受け取り、
「俺を舐めるなよ。これでも昔は吐いてなお飲まされていたからな……」
「だ、大丈夫ですの？　レオンハルト様……」
「無理しない方がいいんじゃ……」
「飲み比べねぇ……代わろうか？」
キャロルやペールが心配し、ざるのハンティがそんなことを言う。しかしレオンハルトは首を振り、
「心配するな。問題ない。……だがペール。俺用に適当に料理を作ってくれるか？」
「え？　あ、はい。構いませんよう？」
料理が得意であるペールにそんなことを頼む。何故なら、
「酒を飲む時に空きっ腹は駄目だ。直ぐに気持ち悪くなるし、悪酔いも誘発する。ある程度腹に何かを入れないとな」
「……あ、はい。分かりました」
この時、三人は正確な言葉は違えど、〝その程度で勝てるわけないんじゃ……〟と思ったが、レオンハルトがあまりにもやる気満々だったので指摘することを躊躇った。
ペールが料理のためにその場から一時離脱すると、レオンハルトはレキシントンの対面に座り込む。キャロルが直前にシートを敷き、汚

れないようにしながらも、
「始めるぞ」
「おう。よし、野郎共。宴だアァアアア――ッ！」
「うおおおおおおおおおおおお!!」
レキシントンの声に合わせて、堰を切ったように鬼達が雄叫びを上げる。
そうしてレオンハルトとレキシントンの第二ラウンド。飲み比べと、鬼と魔物兵らの宴会が始まったところで、ハンティは半目でレオンハルトを見ながら、
「……アルコールを体内から抜く魔法、今から開発して間に合うかな……」
この後、主が陥る状態を考え、呆れるように肩を竦めた。

人類圏の一帯を占拠している魔軍。
その周囲を散策する部隊があった。
人間の軍が現われないか、周囲に村などはないか、と哨戒線に沿って偵察を行うその魔物兵の集団。
その先頭に近いところでは、ある魔人のご機嫌な歌が響き渡っていた。
「～～♪　ヒュ～～マン、ダァァァァァァイ♪」
「っ、あぁあああああ!?　熱いあああああああぁあああ!!」
その言葉とともに、連れてきていた、暴力を許可された人間を炎の矢で殺す。
「ヒュ～～～マン……キィィィィル♪」
「あがあああああああっ――がっ、あ……！」
そのリズムとともに、連れてきていた人間を定期的に魔法で殺していく。
その光景を、魔物兵達は恐怖を感じながら視線を合わさないように任務に没頭していた。
この部隊のトップである魔人――レッドアイ。

触手のついた目玉の様な見た目の宝石の魔人は、魔法に長けた魔人であり、その自慢の魔力を用いて人間を殺していた。
寄生魔人でもある彼は、巨大な魔物――あるレアモンスターの突然変異体である肉体を操り、平原を闊歩している。周囲の魔物兵達は巻き込まれないように僅かに距離を取っていた。
「デッド、オア、キィィィル！　デッド、オア、ダァァァァイ！」
その妙な歌も不気味でしかない。狂った魔人の狂った歌。生ある者を憎み殺し、自分が強くなることの二つにしか興味のないレッドアイの力は、何かの間違いで魔物に降り掛かっても不思議ではないのだ。
占領地にいる時であれば他に二体の魔人もいるため、わりかし安全ではあるが、今この場はレッドアイ以外の魔人はいない平原。
ゆえに魔物兵達は願っていた。ストックしている人間が、途中で尽きませんように、と。
「いわゆる一つのキル・あなた～♪」
――だがレッドアイは、そういう気はなかった。
もっと言うなら、特に命令違反を犯すつもりはなかった。
それは、レッドアイの思考が極めてデジタルであるためだ。
自身を天才と思い込み、前述の二つにしか興味のないレッドアイではあるが、その思考はデジタルであるが故に、一度判断してしまえば迷いはない。
魔人レオンハルトという自身を容易に殺してしまえる存在に逆らうことは、ただの馬鹿がやることだった。
それに自身が完全無敵になったのならともかく、今は魔力も完全ではなく、肉体の方にも不安がないとは言えない。人間を必要以上に殺すな、と言われることはレッドアイの欲求的に不満ではあるが、そこに反抗しても無意味であることは直ぐにわかった。
魔王とは違い、魔人の本能で逆らっているわけではなく、魔法生物のデジタル思考で今は彼に逆らっても益がないと判断する。だからこそ命令に忠実であった。
「――モンスタージェネラ～ル」

「はっ、何でしょうレッドアイ様」
レッドアイの呼びかけに即座に反応して近づく魔物将軍。そんな彼に、レッドアイは問いかける。
「もう近くにヴィレッジはないか？」
「はっ、そうですね……一通り見て回りましたし、そろそろ一度戻ってもよい頃かと思います」
如何致しましょう、という魔物将軍の問いに、レッドアイは鷹揚に頷く。
「クケケケケ！　オーケー、オーケーよ。出会ったヒューマンソルジャーはキルした！　ミー達は一度リターンよ！」
「は、畏まりました」
命令を終え、部隊は反転し、拠点にしてある村へと向かう。
レッドアイはやはりご機嫌であった。人間を殺すことを今は制限されるとはいえ、殺せることには変わりない上に、最近は戦争が多くて沢山殺せるからだ。
だからレッドアイはストックしてる人間を時折殺しながら無機質な言葉を発する。
「メイクドラ～マ～♪」
そしてやはり魔物兵達は幾ら直属の部下であるとはいえ、レッドアイに、〝ご機嫌ですね〟と声を掛けるほどの勇気はなかった。

魔人が闊歩する大陸中央部一帯。
その奥の方にある村の林。岩陰に、人目につかない小屋があった。
運良く、魔物に見つかっていないその場所は、ある人間達が隠れ潜み、隙を伺っているのだった。
「……駄目だな。完全に周囲は魔物の支配下だ」
と、偵察から戻ってくるなり深刻そうに口にしたのはＪＡＰＡＮ風のレンジャー衣装に身を包んだカノだ。
その報告に、小屋の椅子に座ったリナは、対面にいるクエタプノに吐息付きで言う。

「……はぁ……まさか迷宮に潜ってる間に周囲を魔軍に囲まれるなんて……どんだけ運悪いのよ……」
「……すみません。何故か最近、とても運が悪くて……」
自分の運の悪さを同じ様に吐息付きで落ち込むのは勇者であるクエタプノだ。彼は、カノの報告を聞いてどうするべきかと頭を働かせながら、冒険者に愛用される携帯用の食料を口にする。
すると横からコーラが、
「……それで、どうするんです？　おそらくは魔人もいるでしょうし、戦いますか？」
「……そうですね……」
率直な問いを掛けられ、クエタプノは少し悩む。
実力的にはまだまだ敵わない、と自分は判断しているが、さりとて戦わなければ経験も蓄積されないし、活路を見出すことも出来ない。
自分だけならともかく、仲間もいるのだし、逃げることが最優先だというは分かっているが、心の何処かで、戦っておかなければ勿体無いという気持ちもある。
それで死んでしまえば元も子もないので選べない。魔人と本格的な戦闘にはまだ時期が早いとは思う。
ゆえに迷った末にクエタプノはこう口にした。仲間達全員に聞かせるように、
「……隙を見て逃げましょう」
「……逃げるんですか？」
少し責めるように聞こえるコーラの言葉。勇者の従者として何か思うところがあるのかもしれない。そう思いながらもクエタプノは再度頷いた。
「はい。少なくとも、今ここで戦うのは良くありません」
「……そうですか」
戦力差を見極め、妥当な判断を下すクエタプノ。
しかし今度は別の言葉が掛かった。憂いを覗かせる表情をするリナで、
「……でも、そしたら村の人は……」

「……」
気まずい沈黙が小屋の中を覆う。彼らが迷宮に潜る前にお世話になった村の人達は、一人残らず魔軍に捕まってしまった。
そして、魔軍に捕まった人間の末路なんて決まっている。それはここにいる誰しもが分かっていた。
ゆえに三人は村の人達を思って口を閉じる。逃げるということは彼らを見捨てるということだ。
クエタプノも、出来ればそれはしたくない。本心では、助けたいに決まっている。
しかし、現実的な判断として、村の人達全てを救うことは難しい。故に、クエタプノはこう口にした。
「……数人、運が良ければ十数人程度なら、こっそり連れ出して逃げることも可能かもしれませんね」
「！　クエタプノ……！」
「……どうするつもりだ？」
希望を乗せたクエタプノの言葉に、仲間二人が少し活気を取り戻す。そんな二人に頷き、クエタプノは考えを口にした。
「大した考えではありませんよ。夜にでも、村の人達が捕まっているであろう倉庫に忍び込み、こっそりと連れて脱出するだけです」
「それは……」
確かに単純だが、難易度的には簡単ではない。レンジャーであるカノはそれを暗示させるような呟きを放ったが、直ぐに気を強く持って顔を引き締めると、
「……なら、偵察と見張りの始末はボクがやるよ」
「じゃあ私がその間に忍び込んで……」
「はい。お願いします。僕は……騒ぎでも起こそうかと思います。兵の注意を引きつけるために」
告げたのは最も危険な役割。それに仲間が異を唱える。
「待ってよ！　それじゃあクエタプノが――」
「大丈夫ですよ。一人なら、おそらく逃げることくらいは出来ます」
「……じゃあボクも、見張りを始末し終えたら合流して手伝うよ」

「その心配は無用です。僕ひとりの方が……逃げるには簡単ですから」
「！　それは――」
それは足手まといだと言われたのも同然だった。
事実、このパーティの中でもクエタプノは群を抜いて強い。だからその言葉は正しいのだ。
仲間を危険に合わせたくないために吐かれた厳しい言葉。それはクエタプノの俯いた表情が物語っていた。
だからこそ、何も言えなくなる。彼の気遣いを無駄にはしたくないからだ。
しかし、意外なところから助け舟が来た。それは、
「……まあ、彼女はレンジャーですし、身のこなしだけならクエタプノよりも軽いでしょう。逃げるだけなら苦労しないのでは？」
と、言ったのはコーラだった。
普段からあまり意見を口にしないコーラが、そう助け舟を出したことに三人は多少驚く。
そしてその意見もクエタプノはそれなりに一理あると思える言葉だった。だからか、クエタプノは迷った末に、
「……じゃあ、カノは少し手伝って下さい」
「……任された！」
少し嬉しそうにしながらも顔を引き締めて頷くカノ。
そして次に残った二人に目を向け、
「リナとコーラは村の人達を助けて連れ出して貰います。……残酷な判断をさせることになりますが……」
「……ううん、私が言い出したことだから。ちゃんとやる。出来る限り、頑張ってみるから」
「……ま、それが妥当ですかね」
二人が了承したことで話が纏まる。最後にクエタプノは仲間達の目を一人ひとり見て頷き、
「……では、夜になったら決行します。それまで、カノは絶対にバレないように村の偵察を。リナとコーラは睡眠を取るなりして休んでく

ださい」
「わかった。なら、早速行ってくる」
「わかったわ」
「……はい」
４人の意志が統一される。
クエタプノは普段より一層覚悟を決めた。
おそらく自分は、魔人を相手にすることになる。それまでに救出が終わればいいが、かなりの時間を稼がなければいけない以上、そう楽観は出来ない。
ゆえにクエタプノも今回だけは自分達の幸運を神に祈った。――どうか無事に終わりますように、と。

襲撃

夜の中の光がある。
村の到るところにある燭台は、夜であっても活動する者達のための明かりで、村を占拠している魔物兵達にとっても重要なものだ。
特にこういった田舎などでは、幾ら月明かりがあるといってもそれなりに暗い。夜番の為には必須だ。
だが、その中心、沢山の明かりが集まる場所では、皆が同じパターンの動作を繰り返している。
それは手に持った瓶やグラスを傾ける動きだ。特に、中心の二人は、
「ハーッハッハッハッ！　どうしたレオンハルト！　もうダウンか!?」
「……喧しい。頭に響く……」
上機嫌な様子でレオンハルトの背中をバンバンと叩くのは完全に出来上がっているレキシントンだ。レオンハルトの方は顔はもう赤く、泥酔状態といったところだろう、頭を押さえてふらふらとしている。
周囲も囃し立てるように声を上げていた。鬼やアトランタといった者達が、
「アハハハハハ！　サスガハ親父ダ！」
「あ、そーれ！　レオンハルト様の、ちょっと良いとこ見てみたい！
一気！　一気！」
「うるせぇ……」
馬鹿騒ぎする周囲の声にうんざりとしながらも、レオンハルトはつまみを口にしながらも酒をちびちびと飲んでいる。途中までは挑発に乗って一気飲みを何度も行っていたが、さすがに鬼のペースについていくのはしんどい模様だった。
それを見て、レオンハルトの隣でお酒を注いでいるキャロルや、レオンハルト用の料理を運んできたペールは心配した表情を向け、
「レオンハルト様？　そろそろ、お休みになられた方が……」

「そ、そうですよう！　鬼との飲み比べにここまで付いていったんですから、レオンハルト様は充分凄いです！」
　使徒二人の気遣いの言葉。それを聞いたレオンハルトは物凄く渋い顔を浮かべる。その心積もりは嬉しいが、ここで逃げると完全に敗者扱いされてしまいそうで、
「……ここは騒がしい。部屋で飲み直すぞ」
　と言って逃げた。
　勿論、飲み直すつもりはない。酔いを覚ますために休むつもりだ。
　だがやはりバレバレなのか、レキシントンはこちらを見て挑発的な言動を行う。
「おお？　なんだ逃げるのか？　なら儂の勝ちということでいいな」
　そう言って馬鹿笑いするレキシントンを尻目に、レオンハルトは強がった。
「勘違いするなよ……俺はこれから……そう、部屋で飲み直すんだ。決して負けたわけじゃない」
「ハーッハッハッハッ！　儂の勝ちだ！」
「……ぐっ、聞いていないだと……!?」
　既にレオンハルトのことなど目にもくれず、鬼達に向かって勝利宣言をするレキシントン。こうやって先に勝利だと言われてしまえば、どう言い繕っても言い訳にしかならない。実際、言い訳ではあるのだが。
　それでも胸の内に広がる敗北感は消えない。レオンハルトは歯を噛み締めて悔しがったが、ふと、力を抜いてフッと笑うと、
「ふ……酒に飲まれたのは俺の方と言うわけか……」
「あっ、レオンハルト様のスイッチが入りましたわ！」
「あー……よくわかんないこと言い始めましたし、そろそろ部屋に撤収しないと……またなんか痛い感じの事言い始めて後から後悔しちゃいますよう……」
　泥酔すると大分キザというか、ちょっとよく分からないことを口走り始めるのがレオンハルトの特徴だ。普段は自分の飲める量を越えて飲むことはないため、こうはならないのだが、それでも一年に一回

くらいは新年会やパーティなんかでこういう状態になる時がある。
ただ、実はよくわかんないことを言っていても、それなりに格好良くは見えるというか、様にはなるので印象は悪くない。キャロルやペールも、これはこれで良いかな、と思っているし、ケッセルリンクなどはこの状態のレオンハルトと接して大分参っていた。波長が合うのだろう。ストレートに褒めたり口説くこともあるし。
しかし、レオンハルトは酒を飲んで記憶を無くすようなタイプではないので、いつも後から後悔している。レオンハルト軍の幹部だけで開かれるパーティでこうなった際には、新しい部隊名の下知を頼まれ、かのブラックティーガーやエアフォースワンを名付けたが、レオンハルトは何故か後から後悔していたし、今も彼らを見ると微妙そうな顔をする。もっとも、名付けられた方は気に入っているようで、より一層の忠誠を誓っているから、結果的にはプラスだった。
そんな泥酔レオンハルトは鬼達の輪から外れると、寝所にしてある村で1番大きな屋敷に向かう。ニヒルな笑みを浮かべながら、
「俺は負けたわけじゃない……そう、これは俺がレヴォリューションするための第一歩だ……」
「？　どういう意味ですの？」
「革命するってことは今は負けているんじゃ……」
そんなツッコミを小声で行う二人。そのまま屋敷へと向かうが、途中、ハンティがキャロルとペールに対して声を掛ける。レオンハルトを横目で見ながら、
「……はぁ、とりあえず、あたしは見回りに行ってくるから」
「了解ですの！」
「私達はレオンハルト様の介抱をしておきますね」
「ん、了解」
三人はそれぞれ役割分断を行い、使徒としての仕事を行う。レオンハルトの指示が無くとも、予めどういう動きを行うかは頭に入っているため、混乱することはない。
それに今は夜中。魔軍も、基本的には夜には動かない。夜番を置いて休憩中である。魔人や使徒は睡眠を取らずとも良いが、さりとて特

別やることがあるわけではないので寝ることも多い。精々、ちょっとした見回りくらいだ。だからハンティはそれを請け負い、瞬間移動でその場から姿を消す。
後に残されたキャロルとペールは、少し前を歩くレオンハルトに近づく。介抱するように傍に控えたが、そこでペールは不敵な笑みを一瞬浮かべ、
「……レオンハルト様～？　部屋に戻ったら……良いこと、しませんか？」
猫撫で声でレオンハルトに夜のお誘いを行う。普段なら確実に断るはずのものだ。
しかし今は泥酔状態。レオンハルトはそう告げて身体を押し付けてきたペールに顔を向けると、
「……そんなに、俺に抱かれたいのか？」
と、問うてきた。ペールは目をキラリと輝かせる。掛かった、と。
「はい！　抱かれたいです！　キャロル先輩も、ですよね？」
「あっ……そ、その……わたくしは……」
ペールの言葉を邪魔せずに見守っていたキャロルは、そこで問いかけられたことで顔を赤くし、チラチラとレオンハルトを見上げる。キャロルも、泥酔状態のレオンハルトは普段と比べて積極的であるため、半ば期待していたのだ。
故に止めずにいたのだが、それはそれで利用しているようで悪い気もしてくる。なので戸惑いの表情を見せたが、やはりレオンハルトは、二人の肩を抱き、
「……いいだろう。今日は俺が、お前達に最高の夢を見せてやる。覚悟しろ」
「あっ……」
「くはっ！　レオンハルト様のレアな囁きボイス……や、ヤバい破壊力ですよう、これは……」
「フッ、今宵の俺の剣は、血に飢えている……お前達を貫けとな……」
「痛い！　痛い上に下ネタ！　――だけどそこがいいです！」
キャロルが顔を赤らめ、ペールが興奮して技を喰らったかのように

鼻を押さえる。二人共、完全にスイッチが入り、太腿を擦り合わせるようにモジモジとさせた。
レオンハルトはそれを分かっているのか、分かってないのか、ペールの大きい胸やキャロルの形の良い尻を撫で回しながらキザな言葉を呟く。後から自分の言動を思い出して後悔することは確定しながら、自分の女である二人の使徒を連れて、屋敷へと入っていった。
――そして直ぐに、屋敷の中から女性二人の嬌声が響き始め、
「これは……」
「うっ……少しだけ離れるか……」
その淫靡な雰囲気に、屋敷を警護している夜番の魔物兵達はゴクリと喉を鳴らし、気を使って多少距離を取ることにした。

魔軍が占拠する村の外周部では、夜番の魔物兵達が欠伸を噛み殺しながら見張りを行っていた。
「あーあ……暇だな……」
「そう言うなよ。気が滅入るだろ」
「俺も酒飲みてぇなぁ……」
「だから気が滅入るから言うなって。明日には解放されるし、俺達も楽しめるだろ」
「そうだけどなぁ……」
と、退屈そうに魔物兵が毒にも薬にもならぬ雑談を行う。
毎日の様に戦争を行っている魔物兵にしてみれば、このような夜番の仕事は疲れるだけでやりたくない仕事であった。
戦いに出れば人間を食い物に、楽しめる。酒も飲めるし、女もヤれる。血気盛んで、そういった目的を動機に魔軍に参加した魔物兵にとって、この現状はあまり好ましくなかった。
さりとて、不満は漏らしても逆らう勇気はない。もう一方の魔物兵が、
「お前……今この村にいる魔人様、知ってるだろ。レッドアイ様、レキシントン様、そんでレオンハルト様。誰か一人でも恐ろしいってのに、仕事サボったりしたのがバレたら……」

「……おっかねぇ面子だよな……」
背筋が僅かに震える。そうそうたる面子だ。
おかげで戦いはかなり楽に終わったが、怖い上司が沢山いるとなると魔物兵は羽を伸ばせない。彼らの気に障らないように極めて努めて真面目に仕事をするのみだ。
だが、暇には違いない。なので仕事を真面目にこなしはしつつも雑談程度なら、と隣の魔物兵と会話を行う。
そんな時だ。不意に起きた変化があった。
「……？　おい、今何か――ぐっ！」
「あ？　どうし――だっ!?」
何か影が見えたと思った直後、魔物兵は何か上から飛び込んできた影に斬り伏せられた。
「……さて、始めましょうか」
一言呟き、その襲撃者は事を起こすことにした。
敢えて騒ぎを大きくし、魔物達を引きつけるために、
「――！」
懐から何かを取り出し、それを建物に向かって遠くから投げる。
それは仲間が魔軍の物資から取ってきたという爆発物、ぷちハニー。それを近くの、数十メートル先の建物に投げ、それが外壁に当たった瞬間、
「――っ」
夜の村に、爆発音が響き渡った。

「！　何だ!?」
突然の爆発音。そして建物が吹き飛ぶのを見た魔物将軍は、直ぐ様状況の把握に取り掛かろうと部下を呼び付ける。
気づいた者はかなり多く、見れば就寝していた魔物兵達も何事かと覚醒して天幕から出て来ている。
そして魔物将軍が部下を呼びつけて数秒後、魔物隊長と、何名かの魔物兵がやって来た。焦った様子で、
「人間の襲撃者です！」

「何だと!?　見張りは何をしていた！」
　拠点を襲われるまで気づかないなんて間抜けもいいところだ、と魔物将軍は憤る。
　しかし怒っていてもしょうがない。今は対処が先だ、と聞くべきことを魔物隊長に問う。
「数は!?」
「い、今の所……1人のようです……！」
「!?　1人だと……人間の軍隊ではないのか!?」
　てっきりこの地を治めていた人間の軍の残党が襲ってきたのかと思ったがそうではないらしい。
　しかしその代りに聞いた報告は、逆に深刻なものであった。魔物隊長が顔を蒼白にさせ、
「そ、それが……その人間、物凄く強くて……今も村で暴れています……！」
「！　ちっ……人間の実力者か……！」
　魔物兵を1人で何体、何十体も屠る人間。時折、そういった実力者は戦場で見受けられる。あれはあれで厄介なのだ、と魔物将軍は自身の経験から基づく警戒を行い、部下に指示を下す。
「無理に仕留めようとするな。囲んで徐々に体力を奪え。ああいう人間は無理に攻めれば無駄に被害が拡大する。追い込んで袋の鼠にしてしまえばこっちのものだ」
　散発的な戦闘を少数で、見晴らしの悪い場所で行われるのは、大軍にとって辛いものがあるが、一度囲んでしまえば怖いものはない。故に落ち着いて対処してしまえばいいのだ。面と向かって兵達の前では言えないが、確かに強い人間というのは脅威だが、1人で起こせる被害など、たかが知れている。たった1人に何十、何百とやられるのは確かに癪だが、その程度では揺るがない。1人で起こされる被害の大きさに焦って、胡乱な指示を下せば、被害は更に拡大するのだ。
　ゆえにこちらも、持久戦の構えを見せる。獣を狩るようなものだ。徐々に追い立てて、捕まえてしまう。その後でその人間には地獄を見せてやるのだ。よくもやってくれたな、と。

だから魔物将軍は指示を出そうとし――しかし、そこで来た新たな影に遮られた。
「――あぁん……？　何だ、人間が来とるのか」
「！　れ、レキシントン様。お早い起床で……」
そこにいたのは巨体を持つ黒の鬼、魔人レキシントンだ。
酒の臭いを漂わせながらふらふらと肩を鳴らしながらやってきたレキシントンは、既に報告を聞いたのか襲撃が起こったであろう方向を見て口元をニヤつかせる。
傍らのレキシントンの使徒、ジュノーとアトランタは主の横に控えながらも同じ様に襲撃が起きた方向、燃えた建物などを見て、
「大惨事ですね、どうします？　レキシントン様」
「しかも1人でだって……度胸あるなぁ……」
「おうおう。随分と威勢のいい奴がいるもんだのう……ハハハ、ちょうどいい」
と、レキシントンはそう言って巨大な金棒を手にその方向に向かう。使徒達も一緒だ。それを見て、薄々察しながらも、魔物将軍は問うた。
「あの、レキシントン様？　一体、どうなされるおつもりで……？」
「あぁ？　そんなもん決まっとるだろう」
何を言っとるんだ、という表情で、レキシントンはその答えを告げた。
「――ちょっくら暴れてくる」

村の中を行き交い、進む先にいる最小限の魔物だけを斬り捨て、暴れ回るのは勇者クエタプノだ。
彼はぷちハニーの爆発で集まってきた魔物兵達に、敢えて一度姿を晒すと、そこから逃げてこちらを追いかけさせるようにして暴れ始めた。
身のこなしは軽く、村中を――ある一点だけを除いて――駆け回る。あくまでも、注意を逸らすのが目的だからだ。そして、これだけ

の数を全て正面から相手できるとは思っていない。出来る限り逃げ回りながら、ゲリラ的に戦うのが最善だ。
……３０分から1時間程度も暴れまわればいいでしょうか。それだけあれば、逃げ出す時間も稼げます。
村の人が閉じ込められている倉庫から仲間達が逃げ出すまで、戦えばいい。出来ればその間にもう一つの目的も果たしたいが、そう上手くはいくだろうか、と思い新たに現れた魔物兵を斬り捨てた時、
「――ハーッハッハッハッ！　活きの良い小僧！　儂の相手をせい！」
「！　魔人ですか……！」
遂に現れたのは、村の中で見られた赤や青の鬼とは違う大柄の黒い鬼。傍らに浅黒い肌をした全裸の男女を連れたのは、おそらく魔人だろう。
その圧倒的存在感、身体から溢れ出る威容から力が感じ取れる。間違いなく人外のそれだ。見れば、周囲の魔物兵達も魔人が現れたことで距離を取り始めていた。魔人の隣にいる――おそらく使徒達が、
「というわけだから、兵は下がってたほうがいいよ。これからレキシントンが暴れるし」
「巻き込まれないようにアンタ達は下がりなさいな」
危険を伝えていた。魔人の戦闘は周囲への被害も甚大だと聞いたことがある。
故にまず間違いない、と思っていると、また新たな影が来た。
「――クケケケケ！　ストロングなヒューマン！　ミーのボディのストックになるね！」
「！　何ですか……!?」
そこにいたのは、目玉のような物体が取り付いた巨大な触手の魔物。
だが中心にいるその目玉から声は発せられている。これは何だ、とクエタプノが声を発すると、同様にその魔物に向かって大声を上げたのがいた。
「お前の出る幕はないわレッドアイ！　大人しくしてろ！」

「ノー！　あのヒューマン、ミーのもの！　ミーの素晴らしいマジックパワーで、悲鳴をリスニングね！」
「……二人目の魔人ですか……！」
最初の魔人と対等に会話している辺り、おそらくはこの異形も魔人だろう。
さすがに二体の魔人を相手にするのは難しい戦いになる。どちらも強さは未知数で、自分がどこまでやれるか分からないだけに。
だがここまで来たらやるしかない。覚悟を決めて、剣を構える。そして、
「ふっ――！」
「！　うおっ！」
最初の魔人に向かって踏み込み、剣を振り下ろす。
しかし反応されてしまい、その巨大な金棒で弾き飛ばされるが、それを読んでいたクエタプノは難なく地面から着地。そして、再び動き始め、
「悪いですが、正々堂々、と言っていられるほど余裕はないので、何でもありで行きますよ」
「……ほう？」
魔人が凶暴な笑みを浮かべた。そして金棒を構え、
「ハハハ！　人間にしてはいい動きだ！　――やっぱ貴様は儂の得物だ！　邪魔するなら潰されても知らんぞ！」
「ノー！　ノー！　邪魔者は消えるがよろし！　こうなったら、どちらもキル・あなたよ！」
メイクドラーマー！　と訳のわからない言葉を吐き出す異形の魔人も魔法を放ち、
「っ……行きます……！」
クエタプノは、その光を発する剣を抜き出し、勇者として、初めての魔人との死闘に臨んだ。
その頃、村で1番大きな屋敷で、使徒との情事を行っていたレオン

ハルトは、
「大変です！　レオンハルト様！　村に侵入者、が――」
「……そうか。直ぐに行く」
慌てた様子で屋敷に突入した魔物兵は、中で行われていたそれを目撃し、顔を青くして言葉を無くす。
そこにいたのは、服を身に着けていない魔人レオンハルトと、その上で彼に奉仕している二人の使徒の姿だ。
その情事を、緊急時とはいえ目撃してしまったことで魔物兵は、気に障って殺されるのではないかと少し怯える。
しかし、レオンハルトはそうではないようで、軽く息を入れると、
「直ぐに行く……だから、扉を閉めて、外で待っていろ」
「は、はっ！　し、失礼致しました!!」
バタン、と慌てて謝罪を行いながら部屋の扉が閉められる。するとレオンハルトの上で、彼の剣の掃除を行っていた二人が、
「んっ、ちゅる……もう行きますの？」
「何か騒ぎに、ちゅるっ、れろ、んくっ……なってる、みたいですねー」
「……ああ。全く、こういう時に限って何かが起こるか……」
レオンハルトはそう言って頭を抱える。まだ酔いは残っているようだったが、そんなことを気にしてる場合ではない、と頭を無理矢理正常に戻していく。
そして服を着ようとして、それを腰の二人に止められた。手で捕まえられながら、
「あっ、まだ掃除が終わってませんよう！」
「使徒として、主を汚れたまま外に出すわけにはいきませんわ！」
「お前らな……」
と、レオンハルトが半ば呆れて息を吐く。一度目を伏せ思考を回し、まだ余裕はあるだろうと判断すると、諦めたように、
「早く済ませろ。一分以内だ」
「了解ですわ。迅速かつ丁寧にして差し上げます――」
「一分もあれば余裕ですよ。このペールちゃんの超絶舌技テクニックで――」

「……ただの後始末だ。出させるなよ」
「了解ですわ……ちゅっ」
「それはレオンハルト様次第ですよー……はい、ちゅー♪」
そう言って、恋人がするようなキスを剣の先に落とした二人を見下ろし、レオンハルトは酔いを強制的に元に戻しながら、
……仕方ない。分身に様子だけ見てきて貰うか。
このところ、遠征が多くて相手出来てないからか欲求不満だったのだろう。中々離してくれないな、と思いながらも、騒ぎが大事になってもよくはないと村の方を心配する。自分が出るまででもないかもしれないが念には念を入れた方が良い。事が起こってからでは遅いのだ。
だからレオンハルトは力を込めて分身を発動し、それにもしもの時の対応と、偵察を行わせることにした。自分が行くまでの数分から十分程度の時間稼ぎだが、分身でも並の魔人よりは強い。レキシントンやレッドアイ、ハンティもいるのだ。おそらくはこれで問題ないだろうと判断しつつも、レオンハルトは一応急ぐことにした。
……それにしても、また俺はあんなことを……今宵の俺の剣は、血に飢えている……ぐあああ……恥ずかしすぎる……！
――酒の時の自分の痴態に、心の中で悶絶しながら。

勇者の敗北

「っ――ぁ……」

闇夜に紛れて背後から忍び寄り、自分の目的である最後の一体を片付けたところで、カノはようやく息を整えた。

……これで粗方片付いたはず……。

自分の任務。クエタプノが村の中で暴れ回る隙を突いて、村人が収容されている倉庫周辺の魔物兵を始末すること。倉庫を守っていた魔物兵は直ぐに片付き、中はリナとコーラが村人を逃がすために忍び込んでいるはずだ。

その間、クエタプノが暴れているので大丈夫だとは思うが、倉庫に近づくような魔物兵をこっそりと排除しつつ、クエタプノの援護に回る。全てが完了するまで、魔軍の注意を惹きつけておかねばならないのだ。

自分とクエタプノだけであれば逃げることも可能だという判断からくるものだが、実際、カノはそれが間違いではないと判断する。

壁を駆け、建物の屋根に登りながら、カノは自分の仕事道具である一式を確認しながら騒がしい村の中を見渡す。

レンジャー教育を受けている、と仲間には言ったし、それは間違いではないがカノの場合は少々違うとも言える。

それはＪＡＰＡＮ特有の――いや、未だ数人程度しか使い手が存在しないある技術の使い手なのだ。

――〝忍術〟。カノの正体はそれを扱う〝忍者〟である。

忍術の始祖、〝ももたん様〟によって数人の弟子に受け継がれ、その弟子、カノにとっては師匠に教えてもらった技術がこの忍びの技だ。

得物は二振りの刀と各種道具、そして体術と、少々特殊な構成だが、それぞれの持ち味を活かすのがももたん様の教えだ。カノの場合は剣術にも才能があるといわれ、このような戦闘スタイルと相成った。カノは日本人というわけではないが、訳あってそれを学ぶ機会を得たのだ。

未だ世間では知られていない秘匿された技術であり、隠密に特化した技術でもある。この様な潜入や破壊工作、暗殺などは得意だ。
師に鍛えられたこともあって、夜目もそれなりに利く。村は一部の建物が燃えていたりするおかげで少し明るいが、それでも夜闇の中で行動するのには不便を感じない。
だが不安もある。人間相手ではそれなりに出来る自信もあるが、今回の相手は魔物。そして魔人だ。
魔物兵の会話を拾うなどして情報収集を行った結果、この村には今、三体の魔人が滞在していることが分かった。
魔人レッドアイ、魔人レキシントン、魔人レオンハルト。
どれも人間の間では有名な魔人だ。魔軍との戦争ではこれらの名前はよく耳にする。特にＪＡＰＡＮでは、魔人と言えばレオンハルトのことだ。世界的にも有名ではあるが、日本人に、かの魔人の名前を知らない人は存在しないかもしれない。
それは藤原石丸との戦いが語り草になっているからだろう。藤原石丸を知らない日本人が存在しない様に、その戦いのことも有名なのだ。カノも師匠から口酸っぱく注意するように言われた。
何でも、忍者の始祖であるももたん様は、魔人レオンハルトを間近で見たことがあるらしく、存命の頃には師匠達や子供や孫にその話をよくしていたらしい。
〝人の身で、彼に勝とうと思うな〟
もし勝とうと思うなら、その道を極めた〝神〟にでもならなければならない。それこそ、剣術を極め、人とは思えない程の強さを誇っていた藤原石丸の様に。
そう口にしていたと聞く。
だから不安はある。幾らクエタプノが強くても、本人が言うように、藤原石丸の様な強さは持っていない。
魔人と相対すれば死ぬかもしれないのだ。いや、その可能性が高い。
だからこそ、出来る限り己が支援しなければならないのだ、とカノは心を引き締めて臨んだ。

そんな時だ、背後から声が掛けられたのは。
「――装備を整えた人間……ってことは、襲撃者の仲間ってことで良いんだよね？」
「っ!?　ふっ！」
不意に現れた背後の人物に、カノは咄嗟に身を翻した。
相手の言葉に乗っている暇はない。そんな暇があれば忍者は相手を即座に始末し、口封じを行う。
だからカノはそうした。手元のクナイを投げつけ、二刀の刀を抜いて振り向き様に斬りかかる。
しかし、そこに相手はいなかった。
「!?　何処に……！」
流石にそう声が漏れる。忍者の自分に悟られることなく、一瞬で姿を消した謎の人物。
明らかに普通の魔物の技量ではない。使徒か魔人か――そう思った直後、
「……いい動きだけど、相手が悪いね」
「っ、が――!?」
また背後からの声、今度はそれとともに打撃が来た。
横目から一瞬見えたその動きは、軽くチョップするような力の入っていないような動作であったが、カノには大男に全力で殴られたかのような衝撃を感じた。
その手刀、手刀とも言えないような軽い打撃で、屋根に向かって叩きつけられる。身体の中の空気が口から抜けるような痛みと衝撃、しかしカノは動こうとした。
……ここで止まったら死ぬ……！
戦いにおいて、地面に倒れることほど危険なことはない。力ある相手の場合、単純に踏みつけるだけで倒れた側はゲームオーバーだ。人同士の戦闘であっても、トドメの手段として倒れた相手を踏みつけたり斬りつけるのは常套手段。
だから意識を飛ばしそうになるのを必死に耐えて、カノは動いた。忍者の技の中には、無酸素状態での身体の活用術も存在する。それを

用い、カノは身体を跳ね上げた。
「っ――！」
声は上げられない。呼吸を行えていないからだ。しかし屋根に叩きつけられた衝撃を利用して身体を捻って起こし、刀を相手に向かって振るう。
そこにいた黒髪の女性は、まだそこにいた。先程のように消えていない。そして多少眉を顰めて驚いているようにも見える。
何故じっとしているのかは分からないが、チャンスだ、と首を狙う。
しかし、その剣は――女性に受け止められた。しかも、
「……驚いた。まだ動けるんだ」
「っ！　なっ――!?」
そこでようやく呼吸を行い、声を発したが、そこにあった光景はこちらとの力の差を示すような、絶望の光景だった。
こちらの二刀の刀。その刃先を、女性がそれぞれ両手の人指し指と中指で受け止めている。
白刃取り。それも二刀同時に、両手の指だけで行う。
そのまま力を入れて手を斬り裂こうと押し引いてもびくともしない。万力に掴まれているような感じだ。
故に咄嗟に刀を諦め、手を離そうとした瞬間、相手も動いた。こちらが動くより早く、
「……それじゃ、次はもうちょっと強めにやるよ」
「！　ぁ――っ、かっ……」
と、刀を背後に捨てるように指で跳ね上げられると、そのまま空いた片方の手が、こちらの腹に来た。
今度こそ、体の中の空気を根こそぎ吐き出してしまいそうな腹への打撃。臓器で味わう衝撃と痛みに、カノの身体から力が抜け、意識が薄れていった。
「……ごめんね」
最後に見聞きしたのは、バツが悪そうな表情の黒髪のカラーが、こちらを見下ろしながら謝罪をしたことであった。

「……さてと……」
人間の襲撃者。魔軍の占領地である村が襲撃者に襲われ、慌ただしいことになっている。
見回りを行っていたハンティも、魔物兵が殺されていることに気づき、その痕跡を追っていたところで、
……ＪＡＰＡＮの人かな。
大陸の衣装とは違う特徴のある衣服や装備に、そう判断する。最近よく見るようになった刀も装備しているし。ＪＡＰＡＮから大陸に移住してくる日本人が増えたことから、ＪＡＰＡＮの文化がこのところ、大陸に浸透しているのだ。
それは２００年程前に藤原家が大陸を統一した影響もあるだろう。言葉も昔とは違った日本語になっているし、ハンティもそれらの文化は、レオンハルト程ではないが詳しくなってきている。
武士か何かだろうか、と思い、その目的を見て息を吐く。それはおそらく、
「人間を、助けようとして……ってことかな」
村の人間を収容している倉庫。その周囲の魔物兵だけ綺麗に始末されているし、倉庫の中から僅かにざわついた気配も感じる。
どうやって魔軍の哨戒線を抜けてここまでやってこれたのかは分からないが、運良く潜り込めたのだろう。大部隊ならあり得ないが数人といった少人数ならそういうこともある。ましてや魔物兵では相手にならない実力者が相手なら、それを完全に防ぐことは難しい。
だが、よりによって何故、と思う。何故ここなのだ、と。
……余計な事してくれて……って、思っちゃうね……。
命を懸けて魔軍に捕まった人間を助けようとするその行為自体はハンティとしても好ましいものだ。
しかし、であればここではなく、他の軍が動いている場所でやってほしいものだった。
何しろ、そこに捕まっている村人達は、殆ど生存が確定した者達であるからだ。

レオンハルト軍では、人間の選別を常に行っている。
占領した地域の人間の数を決めて、それ以上は危害を加えないようにしたものだ。
だからこそ、この村でその行為は、ハンティからしてみれば完全に〝余計な事〟であった。
この倉庫の人間達は既に生き延びることが確定している。それはレオンハルトがそう決めた以上、絶対の事実だ。
不慮の事態さえ起こらなければ、魔人を統率する魔人筆頭であり、魔軍の総指揮を行う魔軍参謀という、魔物界では魔王を除けば並ぶ者のいない権力者であるレオンハルトの言葉は、絶対の事実となる。
レオンハルトがこの倉庫の人間達は生かす、といったら生きるのだ。事実、人間を殺すことに遠慮がないレッドアイやレキシントンも、その決定には従っている。
そんな生き残りが確定した人間達を、助け出して次の町にでも送り届けてしまえばどうなるか。
運が良ければまた助かるだろうが、運が無ければ次に魔軍の侵攻があった際に、死ぬことになる。生き延びることが確定していたのに、再び選別され、死ぬか生きるかを天に任せることになるのだ。
無論、彼らにしてみれば魔物に捕まれば全員苦しめられた末に死んでしまう、と思うのも理解出来るし、不安と恐怖から解放されて安全な人間の町に行きたい、連れて行ってやりたい、と思うのは極めて自然な思考だ。
しかし、不安と恐怖を感じるような環境であっても、最も安全なのは、魔物に生存を約束されたここなのだ。この世で人間という種が、生きるのに、最も適した環境は、魔物の――レオンハルトの懐にしかない。
大陸の何処にいようが、高確率で生き延びられる安全な場所など存在しない。どこも魔軍に襲われれば一瞬で生命の危機に陥ることとなる。
それでも助けるのならば、魔軍が殆ど攻めてこない大陸の南の端や、人里から離れた場所、ＪＡＰＡＮの奥地などに送ってしまうのが

良いが、助けると言ってもそこまではやらないだろう。
「ままならないね……」
しかし、これを言うことは出来ないし、分かってもらえるとも思っていない。誰が同じ人間よりも、自分達を苦しめる魔人や使徒の言うことを信用するというのか。
だからハンティは歯がゆい思いを覚えつつも、自分の意志でそれを防ぐために動く。使徒としてというだけではなく、そうするのが今出来る最善だという判断を思い、
「……あっちも愉しそうだけど……」
だが遠くの、戦闘の音が響く方向を見て、そう残念そうに呟きもする。今は人間や魔物を守るのを優先しなければならないが、欲を言えばあっちの骨のある襲撃者とも戦ってみたかった。
貧乏くじ引いたかなぁ……と、自分の不運を呪いつつ、ハンティは瞬間移動でその場から一瞬にして消えた。
――だが、ハンティは気づけなかった。
「……良い感じですね。まだ１０パーセントってところですけど」
――気づかぬ間に倉庫を抜け出し、勇者の方の状況を見ようと邪悪な笑みを浮かべている、１人の少年がいたことに。

村の中心で行われるのは殆ど三つ巴となった戦闘だった。
広場や通路、遮蔽物などを利用しながら戦うクエタプノは、相手の魔人二体に脅威を感じた。
「ハハハ、ちょろちょろすばしっこいのお！　――それでこそだ！」
と、こちらを称賛しながらクエタプノの全身よりも巨大な金棒二本を平気で操り向かってくるのは巨躯の鬼。確かレキシントンと呼ばれていた鬼の魔人だ。
「くっ……！」
鬼の力。それは大陸に住むクエタプノも脅威として知っている。人並み外れた怪力が彼らの武器なのだと。
それを魔人として更に高めたレキシントンの膂力は、一撃で地面に

亀裂を入れ、遮蔽物に使った建物を粉々に粉砕する。受け止めることは不可能に近いものだ。
攻撃は単純な力任せの連続だが、その一つ一つが人間にとっては必殺のもの。回避を余儀なくされ、しかし見切りにより回避を楽にさせながら、一足早く逃げることで劣る速度を補う。剣速だけなら打ち合えなくもないが、全体の動きとして劣るのならばこちらの不利だ。力で負けていることからも、その場で留まって剣を打ち合うような戦い方は難しい。
それに、常に動き回り、走り回っていた方が今は有利になる。それは奥にいる別の魔人の攻撃を躱しながら思ったことだ。
「オー、ミーのアタックを躱すほどのスピーディーなヒューマン！やはりミーのボディのストックにする！　それでミーもユーもハッピー！　幸せ気分ね！」
そんなわけがあるか、と、こちらに飛んでくる触手の攻撃を躱す。攻撃してくるのは魔人レッドアイと呼ばれた存在。どうやら話を聞く限り、本体はあの中心の目玉で、あの大きな魔物は本体が操っているに過ぎないのだろう。
その巨大な魔物は、カースＡと呼ばれる魔物に似ていた。こちらの方が禍々しく、巨大である。カースＡは町一つを滅ぼすほどに厄介かつ巨大な魔物だが、これは大きさは安定している代わりに以前見たものよりも能力が高い。魔物の中に極稀に生まれる突然変異体というやつだろうか。その触手はこちらを絡め取ろうとしているかの様な動き。
それと同時に本体から来るのは黒の光線だ。
「メイクドラーマー！」
「滅茶苦茶ですね――っと……！」
飛んできたのは戦闘用魔法の中でも特に殺傷性に優れた最上級魔法である黒色破壊光線。軌道上にあるものを消し飛ばしてしまう魔法の力に、クエタプノはこちらを追いかけてくる魔人を盾にすることで防いだ。
「！　おお……！」

魔人レキシントンが、突然背後から飛んできた魔法に反応し、金棒でそれを受け止める。さすがは鬼の魔人と言うべきか、魔人の最上級の魔法を正面から受け止めてしまう。無傷ではない様子だが、
「ハーッハッハッハッ！　ちょうどいい！　お前もここで潰してくれるわ！」
そう言って、金棒を器用に上にトスすると、空いた手で近くにある物を持ち上げた。それは石とか道具とかそんな温いものではない。
家だ。
「どっこいせっ――と！」
近くにあったのは村に建てられた家の一つ。石造りのそれを、レキシントンはその地面から支柱ごと無理矢理持ち上げるように引っこ抜くと、それをレッドアイに向かってぶん投げた。
しかしレッドアイも、飛んでくる家に怯みもしない。触手を操り飛んできた家を貫くと、そのままレキシントンとこちら、両者に触手と魔法を放ってきた。
「ケーッケケケ！　死ぬのはユーら！　ミーによるユーらの虐殺タイムよ！　邪魔するものには容赦しない。いわゆるひとつの～……キル・あなた！」
「ことわーーーる！　それは儂とて同じこと！　大人しくせんならここで潰れてろ！」
レキシントンが空中にトスしていた金棒を再び手に取ると、流れるように伸びてきた触手を叩き潰す。どちらも一歩も引かない戦い。それは周囲の被害を広げていた。
「うあああああ⁉　またこっちに来たぞ⁉」
「親父ぃ！　やっちまえ⁉　――ぐえっ⁉」
「総員退避！　とにかく巻き込まれないように距離を取れ！　ええい、くそっ！　あの人間が逃げ回るせいでこちらもじっとしていられん！」
「ジュノー様！　アトランタ様！　どうにかしてください！　このままではこちらの被害が……！」
「いや、無理無理。ああなったレキシントンは止まらないよ」

「とにかく逃げ回るしかないわねー。ま、アタシ達も危ないっちゃ危ないからおあいこね」
「そ、そんな……」
流れ弾の魔法や障害物が魔物兵や鬼にも降り注ぐ。思わず魔物将軍が使徒であるジュノーとアトランタに助けを求めるが、素気なく無駄だと言われて顔を青くする。
しかしアトランタが何気なく、
「まあ、どうしてもって言うならレオンハルト様でも連れてきたら？」
「それならレキシントンもレッドアイも止まるだろうしね」
「！　そうだ！　レオンハルト様はまだか!?　あの御方ならこの事態を止めることが……！」
「先程伝令を送りましたので、もう少しかと！」
「よし、ならそれまで逃げろ！　もう数分もないはずだ！」
村にしては広めの場所だが、レオンハルトの足であればそんな距離はないに等しい。ゆえにそう指示を出した魔物将軍だが、ジュノーとアトランタは微妙な違和感を感じており、それを口に出す。
「というか、あの人間、それほど身体能力は高くないのに、攻撃躱しまくってるし……何か動きおかしくない？」
「そうね……何だか勝つ気がないみたいだけど、レキシントン様に恐れをなしたのかしら」
と、そんな疑問を口にする頃、クエタプノはレッドアイの操る魔物の触手を切り落とし、レキシントンからの攻撃を躱しながら思う。
事実、彼はここでの勝利が目的ではないからだ。
時間稼ぎと戦闘経験を積むこと。この二つが目的であり、勝利は二の次だ。実際、勝つことは難しい。幾ら勇者としての力があるとはいっても力の差は未だ激しく、戦えているのは、二体の魔人が仲間割れをしている部分に依るところが大きいのだ。
しかしそのおかげで、クエタプノが最も欲しかった魔人との戦闘経験と、この剣が通用するかが試せたので良しとする。
見切りの力を発揮するためには〝一度〟攻撃を受けなければならない。故にその一度を積むことで、次からその相手との戦闘は格段に

楽になるのだ。
そしてクエタプノが持つ光の剣――エスクードソード。こちらの剣を試してみたかったというのもある。
二年前に手に入れた時は錆びた剣であったが、最近、この剣が使えるようになったのだ。コーラに聞けば、この剣は勇者としての力が高まれば高まるほど力が強くなるらしく、それを引き出すには努力次第だと言っていた。今はまだ、努力が足りないとも。
ゆえにクエタプノは勇者としてまだまだ未熟であることを自覚していた。レベルも限界は来ていない。だからこそ、今この時に魔人を倒せるとは思っていない。
しかしこの経験はいつか、魔人を倒そうとした時に役に立つ。だからクエタプノは魔人の攻撃を、出来る限り一度は受けようと心に決めていた。
そのかいあってか、殆どの攻撃に反応出来るようになっている。このままいけば、この二体の魔人の攻撃全てに対応出来るようになるかもしれない。
そうなる頃には時間稼ぎも終わりでいいはずだ。こういう状況になってしまい、カノとこの場で合流するのは難しいが、時間や落ち合う場所は決めてある。
撤退の時間までもう少し。もう少しだけ、クエタプノは戦闘を継続し、それから逃げようと心に決めていた。
しかしその瞬間、クエタプノは自分が不運であることを改めて思い出した。
戦場となった村の広場。その奥から声が響いたのだ。
「一体何だ、この騒ぎは？」
「っ……！」
その声を聞いた瞬間、クエタプノは今まで以上の存在感と重圧を感じ、背筋をぞっとさせた。
村の広場に入ってきたその男。思わずそちらを見てしまう。
「……人間の侵入者だとは聞いていたが……お前達が戦っているとは聞いていないぞ、レキシントン、レッドアイ」

そこにいた金髪灼眼の男。黒のコートに身を包んだその男から発せられるのは、そこにいる者を刺し殺してしまうかのような鋭い気だ。次の瞬間には、この場にいる者達が全員斬り殺されていてもおかしくない。そう感じてしまうほど。

視線だけで人が殺せそうな鋭い紅い目。それに視線を向けられただけでクエタプノは一瞬怯んでしまう。先程までは騒がしかった広場がその魔人の登場で静まり返っている。それは動きを止めた二体の魔人も同じな様子で、

「っ、手出しは無用だぞ、レオンハルト！　それに怒るならこの目玉にせい！　儂が最初にこの人間を相手にしとったんだからな！」

「ノー！　手こずっていたから手を貸してやろうとしただけね！　先にアタックしてきたのはユー！　レキシントンの方ね！　アンダスタン？」

「あぁん!?　儂の獲物だと言っとるのに邪魔してくるお前が悪いだろうが！」

「ノーノー。そこのヒューマン、中々のソルジャー。弱いユーでは苦戦は目に見えている。だから優しく強いミーは手伝ってやろうとした。んっんー、これがトゥルー。トゥルーはいつもひとつ！　ユーらはお分かりか？」

「何だとこの目玉!?　儂に喧嘩売っとるのか!?」

二体の魔人が責任の所在を擦り付けて口喧嘩を行う。しかしそれはどうやらいつものことの様だった。

クエタプノはレキシントンが告げた名前に、やはりか、と内心で得心する。

……これが、魔人レオンハルトですか……！

つい最近まで田舎で暮らしており、世間の常識には疎かったクエタプノでも、この名は知っている。

人類の敵。魔物を束ねる魔王と、その２４体の配下である魔人。その魔人の中でも最強と称される存在が目の前にいた。

レキシントンとレッドアイという二体の魔人の威圧感ですら、こちらの常識を越えた人外のものであったというのに、眼の前の男は、人

間の姿をしてはいても、その身に秘めているであろう力が外側に溢れ出しており、尋常ではない気配を醸し出していた。
威風、と呼ぶべきだろうか、何よりも恐ろしいのは、他の二体の魔人とは違い、恐怖だけではなく覇気の様な、一種の魅力の様なものまで感じてしまうことだ。
魔人レオンハルトは魔人でありながらも、世界最強の剣士である。同じ剣士としてかは分からないが、そこに一つの尊敬の念の様なものを感じる。
行きた伝説、まるで壮大な自然の遺産を見た時の様な畏怖を感じるのだ。ただの人間が彼を前にすれば、死を悟って膝を突き、頭を垂れてしまいかねない。戦意を喪失させてしまうだろう。
クエタプノはそうはなりはしなかったが、内心での動揺はあった。
――これで魔人なら、魔王は一体どれほどのものなのか、と。
心の弱い人間であれば、見ただけで死んでしまいかねないのではないか、と。
これが魔王の配下だということに恐ろしさを感じる。その思いが、額に流れる冷や汗となって現われる。
動きを止めて、注視し、いつ行動を起こすかと見定めていると――遂に視線がこちらに来た。
「……お前達が手こずっただと……？」
「っ……！」
紅い目が、こちらを射抜く。こちらの実力を測るような、見定めるような視線。
目が合うと、余計にその畏怖は増す。強い意志を秘めた赤の魔眼。それに見られていると、よくない想像を掻き立ててしまう。
これは勇者としての力は関係なく、剣士としての直感でもあった。剣を持っている様には見えないが、分かる。
この自分が立つこの場所は、彼の間合いの範囲内なのだと。
１０数メートルは確実に離れているはずなのに、ここは制空権の範囲内であり、彼は一刀でこちらを斬り伏せることが可能なのだと。
その範囲内にいるからこそ、クエタプノは寒気を感じて仕方ない。

動かなければ死ぬが、動いた瞬間に殺される。
故にクエタプノは値踏みをする視線に動くことが出来なかった。
魔人レオンハルトが軽く息を入れ、
「……まあ、いい。どちらにせよ、これで騒ぎは終わりだ――」
と、言葉を告げた瞬間だ。
クエタプノは、飛んできたものを察知することが出来なかった。
「！　あ……っ、かっ……!?」
気づけば、斬られていた。
剣を抜いていたのかも見えない。その場から動いてすらいない。
ただ彼は、こちらが視認出来ない速度で全てを終わらせた。
空気の刃がクエタプノの身体を斬り裂くと、
……こん、な……こと、が……。
クエタプノは、痛みと血が抜けたショックで、気を失った。

一刀でその少年を斬り伏せたレオンハルトは、僅かな違和感に眉を顰めた。
風の刃を放ち、少年を確実に斬り殺したはずだ。だというのに、
……斬れていない、か。
少年の身体は、斬撃の跡を残して出血するのみで、身体の何処にも欠損をしていない。
やはり、と心に思った刹那、レオンハルトは不意に起こった現象に目を細めた。
見れば他の者達がその現象を声に出していた。魔物兵が、
「じ、地割れ!?」
「地震か!?　って、うお、あのガキの死体が――」
と、言う通りの現象が起こった。
レオンハルトが少年を斬り伏せて間もなく、地面が揺れ、地割れが起きた。
その地割れは、少年が倒れ伏す地面のちょうど真下に入り、少年を地中に引きずり込む。落下していく少年を目撃したのも束の間、今度

はその大地の裂け目が、
「元に戻った……？」
魔物兵がまた言うように、元に戻ってしまった。
地面の穴を塞ぐかのようなその現象。普通であれば思うのは、レキシントンが言うように、
「……つまらん。死んだか」
そう、死んだ。自分に斬られて死んだはずだったし、そうでなくとも地面の亀裂に閉じ込められたのなら死亡したも同然のはずだ。
だというのに、レオンハルトが感じたのは――まるで、彼を魔人から守るために道を塞いだように見えた。
やはり、と思う。先程の光る剣を見た時にもしや、と思ったが、
「……！」
「!?　レオンハルト様、何を……!?」
と、その直後、斬撃を村の建物に向かって放つ。
魔物将軍が驚愕で目を見開く。レキシントンやレッドアイも何だ何だとこちらのおかしな行動に視線を向けてきたが、
「……何でも無い。ネズミがいたような気がしたが……どうやら勘違いだった様だ」
「……そ、そうですか。はは、それなら良かったです……」
仮にネズミがいたとしてもいきなりそんなことされたらビビる、という心の声が聞こえてくるようであったが、さすが社会性に長けた魔物将軍と言うべきか、深くツッコむことはなくスルーする。恐怖を感じているのだろう、うちの軍ではないだけに少し申し訳ないな、と思いつつも、
……逃げられたな。
それは二つの意味であったが、一つは仕方ないことと思いつつも、もう一つは割りと本気で残念な気持ちだった。
しかし考えなくてはならない。今の少年がそうだと言うことはだ。
……色々と、やることが増えるな……。
何が起こっても良いように警戒しなくてはならない。だからレオンハルトの分身は、心と意識をレオンハルトと共有しながらも、身を

引き締める思いだった。
何故なら、あの剣とあの特性。それから連想出来るのは一つであるからだ。それは、
……〝勇者〟と相まみえるのは初めてだな。
人類側の救世主――勇者。
レオンハルトにとっては縁もない存在であったが、色々と複雑な気持ちにさせられる相手の登場に、注意しなければな、と心に留め置くのであった。

レオンハルトが飛ばした斬撃で壊れた建物から少し離れた場所で、その別の少年は嫌そうな表情でそれを評した。
「っと、危ないですね……あの魔人、強いことは知ってましたが、まさか見破ってくるとは……」
普通は見抜けるはずのない隠蔽を、あの魔人は的確に察知して攻撃してきた。咄嗟に逃げたが、あんな風に鋭すぎると厄介だ。隠れてみることが難しい。
「しかし……運が悪いですね。途中までは上手くいっていたのに、まさか逃されるとは……」
クエタプノの方は当然の結果なので驚きも何もないが、その仲間の犠牲者まで、まさか命を助けられるとは思わなかった。
その結果を起こしたのも、神の間では色々と噂の元カラー。昔はあの女神も筆頭に、色々と気に入らない存在として有名だったが、今は魔人の使徒ということで特に興味も失われた存在だ。コーラも同じであったが、
「……面白くない」
そう、こうされると面白くない。ある意味で勇者の幸運が勝ってしまったと言うべきだろうか。仲間を失ってくれるように動いたというのに、都合良く生かされるとあまりにも詰まらない。
これではクエタプノを壊せない。勇者としては普通の、ご都合主義で仲間まで助かってしまったかの様だ。

そこまでの悪運の良さはあまり作用しないはずだが、
「……ま、いいでしょう」
何しろ勇者なのだ。たまにはこういうこともあるし、まだ時間はある。
この分だと破滅には近そうだが、
「とりあえず、クエタプノを追いかけますかね……」
仲間はどうでもいい。いや、ある意味では必要だが、こうなってしまった以上、どうせ都合良く後から合流してしまうのだろう。なら考えるべきは、確実に生き残っている勇者と、その後の行動だ。
その果てに、救いのない未来を期待して、コーラはその場から一瞬で姿を消した。

その戦争の名は

東部オピロス帝国首都。
その王城では、帝国で最も尊き人物である皇帝、アレクサンドル・バシレウスが腹心である大臣の報告を聞いて玉座から立ち上がったところであった。
「何ッ!? 勇者が見つかった!?」
報告とは、長年探し続けていた国を救うための人物、勇者のことだった。
大臣の口から確かに告げられた言葉、衝撃の内容に思わずもう一度確認を取る。しかし返ってくる言葉はやはり肯定で、
「はい……確かに勇者であると」
「おお……! 遂に見つけたか……!」
つい謁見の間だというのに支配者としての仮面は緩み、顔を綻ばせてしまう。これほど希望ある報告は久し振りだった。
しかし自覚があっても、直す気はない。興奮冷めやらぬままに問いかける。
「して、その勇者はどこに? なんという名前なのだ?」
「……それは」
だがそこで、大臣は言い淀んでしまう。アレクサンドルはその態度に違和感を覚えた。
何故躊躇うのか。それにどこか言いたくないような雰囲気を感じる。
大臣が勇者の存在に半信半疑であり、どこか好ましくない態度を取っていたのは知っているが、それにしても以前と比べて動揺している様に見える。
何か伝えたくないこと、隠したいことがあるように。
それをアレクサンドルは、皇帝として培ってきた観察眼にて見抜いた。
それと同時に、大臣も自身が隠したいことがあると見抜かれたことを見抜いた。故に皇帝の問いかけに観念した様に、続くやり取りは円

滑になる。
「……早くしたまえ。時間が惜しい」
「はっ……では報告します」
と、大臣は懐から一枚の紙を取り出し、それを読み上げた。勇者の情報を纏めたものだ。
「……先日、偶然にも我が国が他国に忍ばせていた工作員が、一組の冒険者パーティの会話を耳にしたところ、そのパーティ内の会話に、勇者という単語が出てきたことで工作員はそのパーティに接触。その中にいる1人の少年が勇者であることを確信したため、事情を話し、条件付きで我が国までお招きすることに成功しました」
「ほう……！」
アレクサンドルは感心の声を上げる。やはり事情を素直に話すようにしたのは間違いではなかったかと。
無理矢理連れてくる、脅迫して手伝わせる、後ろ暗い手段は幾つでも浮かんだし、いざとなれば手段は選ばないアレクサンドルだが、こと勇者に限っては素直に協力を申し出た方が良いと考えた。
何しろ、魔王に対抗することが出来ると言われる勇者だ。その力は未知数であるし、正義の存在でもある。こちらを悪と見做せば国に危険が及んでしまうこととなる。それを思えば、素直に魔軍を、魔王を倒したいから協力してくれ、こちらも全面的に支援する、と言ってしまった方が良いだろう。
故に勇者の探索をしている工作員達には、勇者を見つけた場合、下手に出て協力してもらうように、と厳命しておいたのだが、どうやらそれが実を結んだようだと、アレクサンドルは判断に間違いがなかったことを確信する。
「して、名前は？　どこの国の者だ？」
大臣は一息、間を置いて答えた。何かを吐き出すかのように、
「名前は……クエタプノ。我が国の出身で、少し前までは騎士であった男です」
「！　なんと……！　それは本当か!?」
「はい、間違いありません。念の為、何人かの騎士に聞き取りを行いま

したが、確かに所属していたと。名簿にも名前があります」
おお、と声を上げ、アレクサンドルは歓喜した。
何たる幸運か。このような偶然があるのか。
やはり天は、神は我々を見捨ててはいなかった。愛する自国から勇者を出すことが出来るとは、何たる祝福。
だがそれでもなお、大臣は浮かない顔をしている。一体何なのだ、もっと喜んだらどうだ、と思うも、続く言葉にアレクサンドルは、大臣が隠したかったことに得心がいった。
それは、
「そして……私の……不貞の息子でもあります……」
「……は？」
皇帝が間の抜けた声を発したところで、謁見の間が静寂に包まれた。

平野を行くうし車が一つ。
家畜としても使えるうしに、荷車を乗せて移動する。ＮＣ期に入ってから用いられるようになった移動方法であり、自分の足で歩くよりも速く、多くの荷物を乗せて運ぶことが出来る。
そのため貴族や商人に重宝されていた反面、平民には値段が高いため手が出ない乗り物であったが、最近は平民の間でも用いられるようになった便利な乗り物だ。
そのうし車の荷車の部分に、腰掛けているのはブロンドの髪を結った中性的な顔つきの少年――クエタプノであった。
周囲には三人の仲間も思い思いの場所に腰掛けているが、会話を行う者は誰もいない。
それは偏に、クエタプノの思い詰めたような表情のせいだった。
「……」
彼は何かを考えているのか、一言も発することなく自分の使う道具や剣の手入れを先程からずっと行っている。
うし車に乗り込んでから、もっと言うなら、物思いに耽るように

なったのはあの日以来からだ。
魔軍の支配下で人々を助けようと作戦を立て、実際にその通りに行動したが、結果は失敗。
カノやリナ、そしてコーラも、魔人の使徒と思わしき女性に出くわし、気絶させられ、気づいたら近くの町の路地裏に放置されていた。
そしてクエタプノも、魔人との戦いに臨んだのはいいが、敢え無く敗北した。
まるで手も足も出なかった――自分の戦闘を、クエタプノはそう評する。
先の魔人二体、レキシントンとレッドアイ。その二体に対しては攻撃こそ難しかったが、相手の攻撃を躱すことが出来たのもあって、一応は戦闘の体をなしていた。
しかし、その次に現れた魔人レオンハルトとの戦闘は――そもそも戦闘にすらならなかった。
出会い頭の一刀。無造作に放たれた一撃にて、クエタプノは為す術もなく地面に沈んだ。
今こうして生きているのは、ただ運が良かっただけだ。普通であれば、あの場で自分は殺されていた。
あまりにも偶然がすぎる、とコーラに聞いてみると、どうやら勇者になると、こういった悪運が強くなるらしい。
それを聞いて、クエタプノは自分に対する怒りが湧いた。
圧倒的な無力感。自分の力の無さを恥じた。
何が勇者だ。この程度で勇者と言えるのか。
勇者の力が無ければ、自分など何処にでもいるような普通の冒険者に過ぎないのだと、嫌でも分からされた。
分かっていたはずだが、それでも運のみで生き残ったと言われると自分の情けなさにがっかりしてしまう。
もっともっと、強くならなければならない。今のままでは、例え見切りの力があろうと、運が良かろうと、魔人や、ましてや魔王を倒すなど夢のまた夢だろう。
頑張りが、努力が足りない。だからこそ、クエタプノは一時、その

誘いを受けて帝国へと戻ることにした。それは何故なら、
「……それで、どうして騎士を辞めたのにまた故郷に戻るんです？」
と、不意に考えていたことを問いかけられ、クエタプノはその声の方向に視線を向けた。
勇者の従者であるコーラだ。何の前触れもない質問だが、他２人はそんなコーラを見て、何やってるんだ、という顔をしている。
どうやら気を使わせてしまったらしい。こんなところも未熟だな、とクエタプノはずっと閉じていた口を開くと、息を吐き出し、話し始めた。その質問の答えを、
「……そうですね。今回の一件で自分の力不足を痛感しましたので、もう一度鍛えなおそうかと」
「……それで国に帰ると？」
「国の助けを得れるならそれに越したことはないですから。かといって、また騎士に戻るつもりはありませんけど」
自分の勝手な都合で辞めておいて、今更また騎士に戻る、などという厚顔無恥を晒すようなことは出来ない。そう口にすると仲間２人はほっとした息を吐いた。どうやらそのことについても心配していたらしいが、それについては心配はない。
「幾ら祖国でも、一つの国だけを贔屓するようなことは出来ません。僕は――勇者ですから」
「……ふーん、そうですか。まあ、利用されないといいですね？」
コーラの注意に、分かっています、と返す。国が支援に付いてくれるとは言うが、相手が国なだけに油断は出来ない。今の皇帝はとても優秀で、民衆から絶大な指支持を受けている名君だが、その半面、敵対者には容赦をしない性格で有名である。そこが人気の一つでもあるのだが、やはり国を背負っているとなるとこちらにも何か政治的な企みをもって近づいてきたのかもしれないのだ。
それこそ、他国との戦争に使われるようなことは避けたいし、それはあり得ない。騎士の立場であればそのために働くのみだが、今の自分は勇者だ。
人を助けるための要請や、魔物との戦いであれば幾らでも頼りにす

ればいいが、それ以外の企みに付き合うつもりはない。
一つだけ心配事もあるが、そのような事は勇者の自分には関係ない。そもそも例え勇者であろうと、相手はもうこちらとは何も関係のない相手だ。向こうがそのことを持ち出しても何も応じるつもりもない。自分の家族は母だけだ。向こうからこちらを、母を捨てたくせに今更擦り寄ってくるのは虫が良すぎる。もう既に赤の他人だ。だからこそ、クエタプノは国の頼みに応じた。
因縁ある相手がいるからと言って、それを断ることはない。もう関係ないのだ。他人として接するだけ。
それを強く心に誓い、クエタプノは一路、祖国へと帰る。魔軍との戦いの最前線でもあるその場所に。
もう一度鍛え直し、魔軍との戦争に参加し、その果てに魔王を倒すため。クエタプノは魔人達の強さを再度、脳裏に思い浮かべながら拳を強く握った。

――ＮＣ９０１年。
その年は、相も変わらず魔王ナイチサの命の元、魔軍が人類を苦しめていた。
特に東部オピロス帝国ではナイチサの暴虐による直接的被害を何度も受け、その大地を何度も血に染めた。
各地に散らばる魔人達も、ナイチサの命令を受けて、人類軍を相手に戦っていたが、その内容はいつも通り、程々に苦しめては切り上げて帰ってくる、という状態が続いていた。
しかしそんなある日のこと。ある命令が、全魔人に下される。
「――魔人を全員招集って……穏やかじゃねぇなあ。確かか、それ？」
「……」
「……確かに、魔王様からの命令です」
大陸西部のカミーラ軍では、ガルティアがその命令に首を傾げながらもカミーラに確認を取っていた。それにカミーラは答えず、使徒である七星が代わりに答える。

魔王による魔人の招集命令。個人を呼び立てることは多いが、全員集合となると珍しい。
それこそ、最近だとケイブリスの四天王就任の告知のために集めたくらいで、それ以前だと藤原家との戦争前に集めたくらいだ。
百年に一度程度のビッグイベント。それは魔人達にとっても予想が出来ず、回避も不可能な事件だ。
魔人は魔王に絶対服従。例えそうでなかったとしても魔王に逆らえば殺される。絶対命令権がある以上、〝死ね〟と命令されるだけで魔人は終わりなのだ。
だから命令には従う。それは確定であり断る余地もない。
故に魔人達の興味は、それがどういう理由であるかだ。
魔人ガルティアはいつも通り料理を口にしながらも、顎を撫で擦り、器用に別の魔人に向かって何となく喋りかける。
「なあ、お前はどう思うよ」
「……」
「……相変わらず無口だなあ、お前」
声を掛けた相手は魔人メガラス。大陸西部のカミーラ軍に合流していた最速の魔人だ。
しかしこちらも相変わらずというか、一切口を開くこともなく黙ってその場に佇んでいる。かれこれ千年以上はこんな調子なのだから周りも慣れているが、新参の魔人達からは気味が悪いと避けられているようだ。
でも何となくではあるが悪い奴ではなさそうだよな、とガルティアは根拠のない感想を抱くと、続いて別の魔人にも声を掛ける。
「パイアールはどう思うよ？」
「……さあ、僕は面倒事じゃなければ何でもいいよ。四天王就任とか、全魔人にそれを通達するだけ、ってのが理想かな。この間みたいに――」
「……っ……」
と、そこまでパイアールが口にしたところで、玉座に座って頬杖を付いていたカミーラが僅かに表情を歪めたことでパイアールの言葉

が止まる。
　おそらくはケイブリスの四天王就任が、よほど腹に据えかねているのだろうと察するが、さすがの魔人一の頭脳を持つパイアールでさえも、その辺の機微には疎く、ついうっかり口にしてしまった。
　強者の気に障るようなことはしない。パイアールはそれを取り繕うように言葉を変えると、
「……というか、そっちはレオンハルトから何か聞いてないの？　仲良いみたいだけど」
「あ？　あー……そういや聞いてねえな。最近は遠征してばっかだしなあ」
　パイアールからの質問に、そういえば、とガルティアは思考を回す。
　確かに、何かある時は事前にレオンハルトが何か教えてくれたりするものだが、今回は忙しいせいかそれはない。殆ど、戦場と町、城を往復しているので中々顔を合わせられないのだ。
　聞いてないと素直に口にすると、パイアールは溜息をついた。心底億劫そうに呟く。
「……まあ、どちらにしても魔王様の命令とあれば行かないとね。はぁ……面倒だな……」
「ま、行けば分かるだろうよ」
「……」
「……ふん」
　この地にいる魔人４体が命令に従う意志を見せる。それを見ながら、ガルティアは思った。周囲にいる魔物達が困っているのも含めて、
　……無口過ぎて困ってんじゃねぇか。
　レオンハルトが自分をこの軍に配属した理由はこれか、と何となく思い当たる。パイアールは普段はいないし、カミーラとメガラスだけとなれば配下の魔物達は指示が無くて困るだろう。幾らカミーラの使徒の七星がいるとはいえ、かなり息苦しいはずだ。
　魔物将軍と軽くでも会話しているのが自分だけ、というのがかなり特異な状況だと思う。そもそもガルティアも、気が向いた時に何とな

く話しかけるだけで積極的にコミュニケーションを取ろうとするタイプでもなかった。かといって、話しかけられて邪険にするわけでもないのだが、基本的にいつも食事をしているため、そちらを優先しているに過ぎない。

レオンハルトからも、何かあったら教えてくれ、とも言われていたが、こちらのフォローも何気に押し付けられているような気がする。

とは言っても自分もやるようにやってるだけだからそういう細かいのは苦手だなぁ、とガルティアは少し面倒に思う。

レオンハルトみたいに考えすぎる性格はしていない。だから魔王の命令の目的も特に思い当たるものはない。

……とりあえず向かうかね。

どんな命令だろうとこちらは従うしかない。忠誠を誓ってるわけではないが、それが魔人の本能なのだ。

食事を早々に切り上げると、ガルティアは他の魔人達とともに魔王城へと向かった。

――それは魔人を全員招集する命令が発せられる少し前のこと。

魔王城の謁見の間では、魔人筆頭であるレオンハルトが魔王ナイチサへとここ最近の戦いについての報告を行っているところであった。

「例年通り、一時魔物達を魔物界に呼び戻しましたが……また直ぐに攻め込んでよろしいのですね？」

「……構わぬ」

まただ、とレオンハルトはナイチサの様子を見て、そう心で思った。

近頃のナイチサはどこか、心ここにあらずといった様子であり、そういう時は口数も少なくなってきている。

そしてその半面で人間を苦しめるべく、活動が活発になっているのだ。最近ではよく人間の村や町に自ら出向き、人間を殺戮している様が見受けられるし、レオンハルトもそれに付き合わされている。

今までにもそういうことはあったが、これほどまでに頻発するとさすがに眉を顰めたくもなる。

しかしそれをおくびにも出さず、レオンハルトは改めて許可を取った。ナイチサがそう言うのならばやらなければならない。そしてその上でこちらが工夫すればいいのだ。
幸いにも戦いは楽になっているし、ここ数年、数十年暴れたことでナイチサも段々と落ち着いてきている。人間の間で不穏な動きもあるし、それを報告しもする。
だがその報告に対するナイチサの反応は、これまた違和感のある反応だった。
「……近頃は、人間の間で勇者なるものが活動している様子です」
「勇者……か。それは一体、どのような者なのだ？」
先日遭遇した勇者。その少年の顔を思い出しながら告げる。
「はい。以前私も目にしました。今は取るに足らない人間ではありますが……どこか不思議な力を持っている様に見えました。それと……悪運も」
「……ほう、卿が仕損じたか……」
ナイチサがその勇者の説明に興味を示す。レオンハルトは癪ではあるが頷き、
「強さは大したことありませんでしたが、後一歩のところで地割れが起き、その亀裂に落ちていきました。しかも直ぐに亀裂は閉じ――まるで、彼を守るような神のいたずらのようなものを、私は感じました」
「……フ、そうか……」
そこでナイチサは微笑を見せるが、その笑みにレオンハルトは違和感を感じる。
……笑った？
それも嘲笑や失笑の類ではない。どこか安心を得たような微笑だった。
しかもそれは自分に向けられたものではない。
であれば何に、何を思って微笑を浮かべたのか。
あのナイチサが、人間の、それも魔王と対になるような勇者という救世主の存在に、笑みを浮かべたというのかと。
それは考え難いが、だとすると一体何なのかと。

言った様に、数年前に戦ったあの勇者は、自分の分身に為す術もなくやられるほどに脆弱であり、ナイチサが興味を持つような力の持ち主ではない。少なくとも、自分が告げた報告から察せられる事実ではそうだ。

故にレオンハルトは分からない。分からないが、どことなく様子が変であるようには見えた。

このところのナイチサの内面が見えない。以前は半分程は見えていたのだが、今は何も分からないのだ。

ゆえにレオンハルトは、その後に告げられる言葉に、全く予想がつかなかった。

「……レオンハルトよ」

「……は、何でありましょうか？」

考え事はしていても、染み付いた癖は直らない。魔王の呼びかけには直ぐ様反応してしまう。

用件は何かと言葉を待っていると、ナイチサはじっとこちらを見て、何かを考えていた。

そこで目が合ったことで、ようやくだが、その内面の感情がほんの少し読み取れる。それは、

……迷い、か？

瞳の奥に、何か迷いのようなものが感じ取れる。

これから言うべき内容に対して迷っているのか、とレオンハルトが同じ様に思考を回した直後、二つの現象が起きた。

「余は――」

一つは、ナイチサが意を決した様子で、口を開いたこと。

もう一つは、

「――た、大変です！」

「！　何事だ！」

謁見の間に、慌てた様子で魔物隊長が入ってきたこと。

息も絶え絶えになりながら緊急事態だと全身で物語る魔物隊長に、突然入ってきたことに非難するような視線を一瞬は突きつけても、直ぐにそれを問う。

ナイチサの言葉が止められた形だが、ナイチサは何も言わない。ただ強い視線を魔物隊長に向けるのみだ。
そしてレオンハルトが放った問いかけの声に対し、魔物隊長は、一つの事実を、簡潔に謁見の間に響き渡らせた。
「――人間が……東部オピロス帝国が……な、ナイチサ様に――――宣戦布告を、してきました!!」
「――!」
その瞬間、謁見の間の全ての時が、一瞬止まった。
レオンハルトでさえも、その瞬間を半ば予期していたとはいえ、言葉を発することが出来ずに唖然と驚く。
魔物隊長は、それを口にしたところで、魔王から発せられる重圧の強さに気絶して床に倒れた。
謁見の間には、ナイチサの圧力が充満し、常人では呼吸さえままならないほどの息苦しさを感じる。
最強の魔人であるレオンハルトも、肩に伸し掛かる重圧はこれまでの生涯で最高のもの。つい内側から衝動が湧き出てしまいそうになるが、緊張の場であることから無意識にそれを抑える。
実際には僅か5秒に満たない程度の沈黙は、しかし、魔王城にいる魔物達、特に謁見の間に近い場にいる者ほど長く、苦しく感じた。
そしてナイチサは、5秒経ったところでようやく息を入れ、その感情を露わにし、歯を噛み締め、目にしたものを失神させる程の恐怖の形相を浮かべながらながら言葉を発する。
そのナイチサの内側を瞬く間に占めた、感情の名は――
「――――人間、如きが……余に……この、魔王である余に、宣戦布告だと……ッ!!」
激しい――怒りだった。
……終わったな。
もはや避けられない。
ナイチサの怒りを買ったその意味を、人類はその命で償うことになるだろう。
心の中でそのことをレオンハルトが思った直後、ナイチサは激しい

怒りの言葉を口にし、魔人達を全員招集する命令を発する。
宣戦布告。人類史上初、人類側から、魔物側への開戦。
東部オピロス帝国によって引き起こされたこの戦争は後に、夥しい数の死傷者を出したことからこの名で語られることとなる。
――〝死滅戦争〟と。

死滅戦争

その日、東部オピロス帝国では、魔王ナイチサに対する宣戦布告を行った。

国中の兵士を動員し、魔軍が実効支配を行っている人類圏の駐屯地を奇襲。僅か一部ではあるがそれを追い払うことに成功した。

最初の一勝、それはどんなに小さなものよりも価値がある一勝だ。

最初の一戦に勝ってしまえば、魔軍との戦争に懐疑的であった兵士や民衆も掌を返したように沸き上がる。実際に前線に忍ばせた軍の報道係によって、その報は国中へと知れ渡り、民はその勝利に僅かな希望を見出した。

だからだろうか、東部オピロス帝国皇帝、アレクサンドル・バシレウスはその事の重大さに気づくことが出来なかった。宣戦布告という行為に懐疑的であったにも関わらず、勝利がそれを覆い隠した。

しかし、心に刺さった棘のような不安は未だある。今も、大臣との会話を執務室で行いながら、内心の不安を吐露するかの様にやり取りを行う。

「……なんとかなったか……？」

「そうですな。やはり勇者の力は大きいと思われます」

それはそうだ、と頷く。勇者の支援を国が全面的に行いはじめて数年。勇者は更に成長した。

元々の才能があったためか、修行や実戦を積む度に確実に強くなっていく。試しにと、国で一番強い騎士と模擬戦をやらせてみたが、既に勇者の方が強かった。

このままいけば魔人とて倒せるかもしれない。だからこそ、皇帝はこれからも勇者を、地道ではあるが育てようとした。

だがその案には誤算があった。

この間、勇者の従者だという少年と、ＡＬ教の総主教に教えられたのだ――勇者には期限があると。

何でも、勇者が勇者でいられる期間は、１３歳から２０歳までの７年間しかなく、それを過ぎると勇者は勇者の力を失う。勇者でなくな

ると言うのだ。
その事実に、アレクサンドルは人生で一番と言っていいほど憤り、動揺した。たった７年？　そんな短い期間でどうやって勇者をこれ以上強くすればいいのだと。
だが、そこで勇者の従者は言った。実戦で鍛えてしまえばいい、と。
勇者は実戦の中でこそ、大きく成長する。とりわけ、大きな戦い、人々の危険にこそ反応し、それを守るために力を増すというのだ。
だからこちらから戦いを仕掛けてはどうか――そう提案されたのだ。
最初、アレクサンドルはその提案にいまいち腑に落ちなかった。理屈の上では理解出来る。勇者を短時間で育て、成果を上げるために最も効率的な方法は戦いをこちらからでも起こすことだ。
しかし、態々こちらから攻めなくてもいいのではないか、そう思い、口にもしたこちらに、従者とＡＬ教の使者はこう諭した。
――放っておいても、向こうから攻めてくるというなら、こちらから攻めても問題はない。
――どうせ戦うのならば、先手を取ってしまった方が戦いは楽になる。
――そもそも魔王は、人間のことを何とも思っていない。だから、こちらが宣戦布告をしたところで意にも介さないだろう。いつも通り、相手をされるだけだ。
そんな言葉の数々。最初は疑わしいものであったが、聞けば聞くほどそれが正しいように感じてくる。
最終的に協議した結果、こちらから宣戦布告と同時に魔軍を攻め立てることにした。
反撃の際、一度は今までの様に厳しい攻勢が予想されるが、それを耐えれば今までの様に一地域を支配して帰っていく。それまでに勇者を成長させ、魔王を討てば勝ちだと。
賭けでもあるが、どちらにせよ勇者がいなくなれば希望はない。それを考えれば、面白くはないし気分こそ悪いものの、国家の未来のために厳しい戦いに身を投じることも覚悟出来る。

例え多くの兵士や、自分の命が失われようとも、帝国が――いや、人類が平和になればそれでいい。
それならばこれまで国や家族、隣人のために死んでいった兵達も浮かばれるというものだ。
後は勇者クエタプノ、そして我が国の精兵がどこまで出来るかである。かつての英雄、藤原石丸の様に、魔人の一体でも早々に倒してくれれば安心出来るのだが……それは高望みし過ぎだろうか。
「勇者の力は大きい……であれば……戦争が終われば、少し使えそうですな」
勇者に懐疑的であった大臣もその様なことを口にする程度には勇者を信用している。
しかし、その発言には怒りを発した。アレクサンドルは立ち上がり、
「馬鹿者が！　貴様、あれだけのことをしておいてまた勇者の心象を悪くするつもりか!?」
「！　い、いや、決してそのようなことは……ただ、勇者の力が無くなったとしても他国はそれを知りませんし、大々的に喧伝すれば、利用出来るかと――」
「だからそれが駄目だと言っているのだこの間抜けがッ！　いいか!?
貴様は、あの勇者クエタプノからすれば恨まれても仕方のないことをしているのだぞ！」
「っ、それは……しかし、私は父親で……」
そう、この大臣は勇者クエタプノの実の父親だ。
しかし、その事情は面倒かつ遺恨を残すものがある。だからこそ、アレクサンドルは激昂した。
「父親だからこそ、怒っていると何故気づかん！　勇者からすれば、貴様は、自分達家族を捨てたくせに、今更になって擦り寄ってくる薄汚い奸臣だと思われているのだぞ！」
言い切ってやる。この大臣は、勇者クエタプノとその母親を捨てたのだと。
何でも、十数年前。大臣は婚約者がいながら、クエタプノの母親で

あり、当時はメイドであった彼女に手を出し、孕ませた。
しかし婚約者がおり、相手の家からの解消や不貞をしたことによる賠償、世間体などを考え、この大臣はそのメイドと子供を国の僻地に追いやることで隠蔽したのだ。
そして聞けば、勇者の家は、帝国の平均的な所得から考えても、極めて貧しい生活を送っており、かなりの苦労をしたらしい。母親に楽をさせるため、出稼ぎで騎士になろうとしていたくらいだ。
アレクサンドルは思う。仮に自分が、このクエタプノの立場であったら、勇者として国の為に戦う代わりの交換条件として、大臣の身柄、復讐の許可を貰うことになるだろう。
そしてそれを、国の元首として考えた時も、許可することになる。それを考えると恐ろしかった。
「貴様の不貞のせいで、勇者が腹を立てこちらに牙を剥いたらどうするつもりだ!? 言っておくが、その時は貴様の首を真っ先に捧げてやる! それとも勇者より先に、私が貴様の首を断ち切ってやろうかッ!?」
「っ、そ、それだけはご勘弁を……!」
ようやくこちらの怒りの程を理解したのか、大臣がこちらに縋り付くように謝罪する。離せ! と、強く大臣の腕を振り払うと、
「貴様がやるべきことは、勇者を怒らせないように誠心誠意謝罪を行うか、二度と関わらないことだ! 本当なら今直ぐ解雇してやってもいいんだぞッ!?」
「も、申し訳御座いません……! それだけは……!」
「ふん、覚悟をしておくのだな。貴様のこれからの行動によっては、私は容赦なく貴様を処刑する。長年重用してきた重臣であっても関係ないぞ。私の性格は、よく知っているであろう?」
「は、ははっ……! それはよく、知っております……!」
国の為なら、比喩ではなく、私は何でも出来る。
命を捨てることで国が救えるのならば迷うこと無く、私は首を掻っ切ってみせよう。
それだけの覚悟があるからこそ、皇帝の椅子に座っているのだ。

アレクサンドルはそれを改めて自覚し、再び戦争のことを思った。
この戦争が上手く行こうが行くまいが、自分は皇帝の椅子から降りることになるだろうと。
上手くいったのならば勇退することになるが、上手くいかなかった場合は責任を取って辞めることになる。
その際には大臣にも職を辞してもらう。この男は、仕事もそれなりに出来るが、いざとなったら自己保身に走る傾向がある。
国を動かそうという権力者がそれではいけない。国の為に、身を切るような覚悟がなければならないのだ。
アレクサンドルに私欲というものは存在しない。あるとするならば、それは国の発展と幸福のための愛国心というものだ。
徹頭徹尾、彼は国のために動いていた。この戦争も、そのためのものであることに疑いの余地はない。
だからこそ、そのやって来た報告に、皇帝は身を震わせた。
「も、申し上げます……！」
帝国軍の頂点に立つ将軍が、約束の時間より少し早く、報告に来た。元より戦いの経過をまめに確認するためだ。
しかしその声は震えている。顔面蒼白。熟練の戦争屋である将軍。その顔の血の気が引いていた。
嫌な予感を感じた直後、アレクサンドルはその報告を促し、それを耳にした。
「魔軍が……魔王が……２０体以上の魔人を連れて、我が国に攻め込んできました……！　数百万規模の魔軍も一緒です……！」
「……は？」
あまりにも馬鹿げた報告に呆然としてしまう。
何だそれは。夢でも見ているのか。
それほどの大規模な攻勢など、歴史上でも類を見ないものだ。その戦力であれば、人類を滅ぼせるのではないかと思うほど。
それが自国にやって来る。
今まさに、やって来ている。
「……何、を……言っている……？」

馬鹿げたことを、と口にしようとして――出ない。
唇が震えていた。声だけではなかった。
指も震えている。それは、恐怖と、とんでもない失敗を犯してしまったことによる戦慄によるものだ。
その報告によって耳にしたのは、人類が崩壊する――絶望の足音だった。

魔王城謁見の間では、既に大陸中から、魔王の配下である魔人達が、ほぼ勢揃いしていた。
メガラス、ガルティア、パイアール、レッドアイ、レキシントン。その他大勢の魔人。
そしてその少し前に並んでいるのは魔人の中でもたった4人しかその席に座ることが許されない魔人四天王。
ケイブリス、カミーラ、ケッセルリンク。現四天王の3人が泰然と、威風を放ちながら並んでいる。
そして最後の1人。魔人の最高位である魔人筆頭にして、魔軍の全権を預けられた魔軍参謀であるレオンハルトが、玉座の横に控えている。
彼は居並ぶ面々が揃っていることを確認すると、静かに、それでいて全員に聞こえるようはっきりと声を発する。
「これより、魔王様からのお言葉を賜る」
その言葉を終えると再び横に控える。続く発言は、レオンハルトが言った様に、玉座に座する男のものだ。
大陸の支配者にして、全ての魔の王。魔王ナイチサは、居並ぶ配下を一瞥すると、未だ怒り冷めやらぬ様子で語り始めた。
「ご苦労。……さて、卿ら。既に聞いているものもいるだろうが、改めて告げよう。人間が、余に宣戦布告を発したことを……！」
自分で言っていて、怒りが増したのだろう。魔人達の身に緊張が走る。
怒りを抑えようとして抑えきれないその憤怒の感情は、周囲の空気

を歪めるほどの重圧となって現われる。魔人という強大な存在であっても、息苦しさと恐怖を感じられるものだ。
通常の魔物。魔物兵だけでなく、魔物隊長や魔物将軍であっても、中には耐えきれずに失神してしまうものすら現われる。魔王の威圧は、意識を手放すことを本能が是とするのだ。これを浴び続けるくらいなら、気絶でもしてしまった方がマシだと。
事実、魔王の怒気を一身に受けては命すら危ない。それを思えば気を失えた者達は幸せだろう。中途半端に強く、気絶出来ない者達はそれに耐えるしかない。ケイブリスなどは、先程から小刻みに震えて恐怖を圧し殺している。今直ぐ逃げ出してしまいたいが、そんなことをすれば殺されるのは目に見えているし、さりとて魔人である自分が必要以上に怯えるのは情けない。何とかそれを隠そうとしているが、周囲からはバレバレであった。バレていないと思っているのはケイブリスただ1人である。
しかしその臆病なリスの気持ちに戻ってしまったケイブリスを、一体誰が責めることが出来るだろうか。普段は強者にへりくだり、弱者には横暴に振る舞うケイブリスを嫌悪する者達でも、この時ばかりはそれを責めることも、指摘することもしないし、出来ない。自分の事で手一杯であり、魔人の本能として、魔王の言葉を聞き漏らさないようにしようとそちらに注視しているからである。
「それと同時に、人間は攻め込んできたらしいが……フ、フフ……随分と面白いとは思わんか？　あの矮小な人間共、よもや余に勝てると思っているらしい」
馬鹿だ。自殺行為だ。やられすぎて血迷ったのか。居並ぶ者達の頭の中では、人間が狂ってしまったのか、とそういう類の疑問を抱く。
勝てるわけがないだろう。自分達ですら、半ば手加減して相手してやっているのだ。多くの魔人にとって、人類との戦争など、欲望や衝動を発散するためのお遊びでしかない。
中には戦士としてか、心構えの上で、真面目に戦争として思う者もいるが、それでもどこかで力を制限している部分があるのは否めなかった。

「吹けば飛ぶような塵芥の如き分際で……まさか勝負を挑まれるとは……ッ！　こちらが手心を加えていれば増長しおって……！」
配下が居並ぶ手前、怒りを圧し殺して冷静に語ろうとしているが、その衝動が抑えきれていない。先程から発せられる怒気の中に、殺気まで混じってきている。
しかしその怒りというか不可解さも分からないでもない。
何故なら今までのは戦いですらなかったからだ。
争いとは、同レベルの存在でしか起りえないもの。故に魔物が本当の意味で争いを行える相手は、魔物しかいない。
基本的には、使徒であれば使徒同士。魔人であれば魔人同士でしか喧嘩や争いというのは成立しないのだ。中には力の強弱による例外はあるが、特に魔人などは無敵結界という絶対の防御がある以上、争いは攻撃が対等に通じる魔人同士でしか起りえない。
そして魔王と争えるものは、この大陸には存在しない。中には伝説の存在として争える者が存在するかもしれないが、それでも、表立っているような種で、争える者は見当たらない。
「どうやら、余は甘かったらしい……恐怖を充分与えていると思っていたが……フハハ、奴ら――どうにも死に足りないと。本物の戦争を所望しているようだな……ッ！」
そう、今までのは戦争ごっこでしかない。
ナイチサにしてみれば、自分の庭先で配下を遊ばせているようなものだ。そこに生きる人間など、どうでもいい。魔王としての治世を示すための存在として、一定数を生かしているに過ぎないのだ。
人間に付き合って戦ってる振りをしてやっているに過ぎない。抗しているわけがないのだ。本気を出せば、一年と保たずに人類全国家を滅ぼし尽くすことが出来る。
それをしなかったのはナイチサの手心だ。彼の目的の為にも、自分の存在に恐怖を感じているという証拠として、そこに人間を残す必要があった。
しかし人間は、恐怖が、絶望が、嘆きが足りないという。
あくまでも、争いたいというのだ。

これは二百年前の藤原家とは訳が違う。あれはあくまでも、悪魔の宗教を許さないナイチサが、それを滅ぼすためにやったに過ぎない。
人類圏という人間が勝手に決めた枠組みの中で、偽りの支配者。人間の代表を勝手に決めようが、ナイチサは関与しない。蟻の中の王を、上位種である人間が決めるなど滑稽に過ぎるだろうと。
だから藤原家の台頭など放置してきたし、他の勢力が人間の中で覇権国家になろうともどうでもいい。
本来の意味で、大陸の王である存在は魔王ナイチサ。ただ1人だ。
ある意味では、人間すらも、己の臣民――魔物達とは扱いは違うものの、統治すべき対象と見ているのだ。
だからこそ、ナイチサは人間の反乱を許さない。
仰ぎ見るべき王への反乱を、王は決して許さない。
速やかに革命を鎮圧した後、首謀者を皆殺しにし、これまで以上の圧政を敷くことで、反乱を予防するだろう。
「……王として、挑まれた戦いには受けて立つ。魔王として、受けて立たねばならない！」
今まで一度たりとも戦いとは思っていなかったナイチサは、宣戦布告というこれ以上ない程に分かりやすい言葉によって立ち上がる。
舐められてしまえば面子が立たない。魔王として失格である。
だからナイチサは、己の治世が始まって初とも言える戦いに臨むのだ。
有り体に言えば――〝その喧嘩、買ってやる〟と。
「これより余は、余の秩序を乱す人間共を誅殺するため、戦場に向かうッ！」
だから魔王ナイチサは、その引き金を引く。
居並ぶのはたった一体でも国を滅ぼすのに充分な魔人が２０と余り。己の家臣である彼らに王として命じる。
「魔人達よ、余の戦列に加わることを許すッ！　――人間共に、これまで以上の恐怖を与えろ……ッ!!」
「……！」
魔人達の紅い瞳が見開かれる。この瞬間、無意識ではあるがナイチ

サはそれを発動した。
それは魔王だけが扱える力の一つ。全ての魔を従わせる絶対の力――〝絶対命令権〟。
魔王の、人間へ、これまで以上の恐怖を与える、という命令を受諾した証拠だ。
その証拠に、魔人達は一斉に魔王に膝をついて頭を垂れる。傍らにいた魔人筆頭であるレオンハルトでさえも、段差の下にまで降りて、何かを思いながらも、片膝を床に突いて、右手を胸に当てて言う。魔人を代表する様に、
「拝命致します。人間共に、これまで以上の恐怖を与えてご覧に入れましょう」
「手段は何でも構わん。ただ――殺せ。余と戦果を、死の数を競い合え。奴らが、心の底から後悔するようにッ！」
「……はっ、畏まりました」
そうして、魔王は玉座から降りて謁見の間を後にする。
その背後からは、魔人達が、その使徒達が、続いていく。
魔物大将軍、魔物将軍、魔物隊長らも続々と集合し、先頭を歩く魔王に続いていく。
彼らはこれより、史上初の戦いに挑むのだ。
人間との戦争。今まで一度たりとも戦いではなかった人間との戦争で、これ以上ないほどの圧倒的な蹂躙を、屍山血河を築いてやろうと。
魔王に喧嘩を売った代償を、その血で贖わせてやろうと思い――魔物達は、戦いの場に赴いた。

東部オピロス帝国軍。
それに所属する兵士、騎士達はその日――〝地獄〟を見た。
これまで何度も魔軍との戦争に臨んできた彼らは最初、今回の戦争もいつもと変わらないものであると信じていた。
魔軍は脅威だが、ある程度攻め込んできたところで足を止め、数年

経てば帰っていく。
それまでに国を守りきり、生き延びれば勝ちなのだと、誰しもが知識だけでなく、経験の上で知っていた。
だから魔軍の司令部の一つに奇襲を掛けて勝利を得たところで、彼らは純粋に喜んだ。
一矢報いることが出来たのならば、これからの戦いが楽になるかもしれない。こちらを手強いと見て、しばらくは戦いを避けたり、他の国を中心に攻め立てるかもしれない。
しかも今回の戦いには勇者という存在も付いているというのだから、普段よりも楽になるだろう。
だから彼らは――地平を埋め尽くすほどの魔物の群れを見た時、何が起こっているのか理解することを、脳が拒んだ。
昨晩、飲みすぎてしまったのかと。本能がその光景を幻覚ではないかと判断する。
普通の魔物だけではない。魔物達の先頭には異形の、威容な存在感を放つ魔人達が揃っている。
今までは一体でもいれば緊張したものだが、それが２０体以上、揃ってこちらに向かってきている。
そしてその更に先頭には、魔人達の存在感を集めてもまだ足りないほどの圧を放つ人の形をした魔。
白い肌に紅い目。貴族が着るような漆黒の長衣を身に着けるのは、伝えられる容姿と一致してしまう男。
――魔王ナイチサ。魔物達の、魔人達の王がそこにいた。
「あ……あ……」
彼らは真っ直ぐに、こちらに向かってくる。
兵士達からは、それが死神に見えた。
いや、もっと単純に、死そのものにすら見えた。
あれらがここに到達した時、自分達が味わうことになるのは、死であるのだと。
１人残らず殲滅され、この場に、自分達の死体の山を築くことになるのだと。

「っ、ぁ……」
気づけば、音が響いていた。
それは兵士達が身を震わせたことで鎧や武器がカチャカチャと打ち合わされる音。
もしくは自分の歯が、寒さで凍える時の様に、ガチガチと打ち合わされる音だ。
目には気づけば涙が浮かんでいる。大の男達、それも誰しもが兵士としての訓練を受けた純粋な戦士達がだ。
この中で、1番幸せであったのは先頭にいる兵士達だ。
なにせ、何が起こったかも分からずに、逝けたのだから。
少し後方にいる兵士達は、視界が真っ赤に染まるのを目にした。
ビチャ、と自分達の顔や頭上に、何かが降り注ぐ。
それらは全て、鮮やかな赤。液体や固体であった。
しかし彼らは、それを見た瞬間に防衛本能が働いた。
――これを、眼の前にあるものを、理解してはならない。
瞬間的に降り注いだものを、極力理解しないように努める。
しかしまた――ビチャッ、と。何かが降り注いだ。
生理的に嫌悪を示すような音だ。思わず耳を塞ぎたくなる。思わず下を向きたくなる。
しかしそうして、理解を拒んだところで、現実は依然としてそのままだ。故に、彼らが気づくのは必然であった。
誰かが、その降り注いできたもの、地面に落ちたものを目にして呟く。
「――肉だ」
そう。それは肉であった。
何故こんなところに肉があるのか。こんな血が滴る新鮮な肉が。
だが、その部位はところどころ、彼らが目にしたことのあるものだった。
それは胃や腸、身体の臓器であったり、指や腕、足、などの身体の部位でもあった。
それらが混じったようなミンチ。真っ赤な雨が降り注ぐ。

これは何か？　――答えは、簡単だった。
これは――誰かであったモノ。
この場にいる戦友。上司、部下、同僚。人間であった者達の生きていた痕跡。
それを理解した時、彼らは一斉に悲鳴を上げた。
「うぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああアアアァァあぁぁあああああぁぁぁぁあァあああっあああああっ!!!」
人間の肉の塊。
それは魔王によって一瞬でミンチへと変えられた人間達の死体の一部だ。
理解し、悲鳴を上げ、兵士達は狂乱に陥る。
必死に槍や剣を構えようとする者もいれば、その場から逃げようとする者、呆然として立ち尽くす、あるいは地面にへたり込む者や、狂ってしまったかのように不気味な笑みを浮かべる者すらいる。
あまりにも凄惨な光景を見たための狂乱。誰かが嘔吐するような音が連続し、しかしそれを気にかけている余裕すらない。歴戦の兵士の中でも特に優れた能力と胆力を持つ将軍達も、極僅かな一部の者達以外は、兵士達と同じ様に狂乱していた。
辛うじて正気を保っている者達も、それを立て直すことは出来ない。
そんな中で、兵士はある声を聞いた。
「――フハハハハ！　どうした？　余に戦いを挑んだのであろう？　望み通り、戦いに来てやったぞ。少しは抵抗してはどうだ？」
それは、この地獄を作り出した男の声だった。
それと共に聞こえるのは、ブチ、ブチ、という何かを無理矢理引き千切るような、様々な種類の聞いたことのない音。徐々にその音は近くなり、また男の声も近くなる。
ある兵士は、とうとうその声の持ち主を眼の前に見た。
「余に喧嘩を売った人間共……よもやこの程度で済むと思うなよ……！　1人残らず、余手ずから誅殺してやろうではないか、フフフ……！」

怒っているのか、笑っているのか。あるいはそのどちらも。怒りすぎて笑ってしまっているのか。そこにいたのはやはりと言うべきか、魔王ナイチサだった。
「う、あ、あ……」
その威容は、人間では敵わないと本能で理解出来る強大さ。
見ただけで死にかねない恐怖の塊。人として生きてきた誰もが、これ以上の絶望を目にしたことはないだろう。
利口な者は、それを見た瞬間、自ら命を絶った。
この後に自分の身に降り掛かる最悪の苦しみを味わうくらいなら、先に自分から死んだ方がマシだと考えたのだ。
そして、それはおそらく正しい。魔王がやってくるまでに生きてしまった彼らは次の瞬間、それぞれが別の地獄を見た。
「これだけいると殺し方にも悩んでしまうな。だが、安心しろ。死ぬという結果だけは変わらん。だから――安心して、苦しむがいい」
「――あ……あああぁぁぁああ、ああああぁぁかあがあああがあああぎあああ!?」
兵士の1人は、生きたまま腕や足などの身体の部位をもがれて死んだ。
その隣にいた者は綺麗に臓器の一部だけを抜き取られて死んだ。
また別の者は舌を切り取られ、呼吸が出来ずにその場でのたうち回った末に死んだ。
あるいは容赦なく身体を吹き飛ばすことでミンチにされ、後方の者達に恐怖を与えた。
その場で出来るあらゆる殺人を、ナイチサは手ずから行っていく。
それは人間時代から得意であったナイチサの殺人の技術だ。
〝殺人〟というものにおいて、稀有な才能を持っていたナイチサは、誰にもバレることなく、殺人を行うことが可能であった。
通りすがり様に人を殺したとしても、それがナイチサによる犯行だとは気づけず、誰も思い浮かべたことのない新しい殺し方を、容易に頭に思い浮かべて実行することが出来る。
それでも人間時代はまだ常軌を逸してはいなかったが――魔王に

なったことで、ナイチサの才能は、その衝動の枷とともに解き放たれた。

――〝殺人ＬＶ３〟という史上最悪の才能を持つナイチサは、世界一の殺しの才能を以て、人間を効率的に殺していく。

彼らの不幸は、この時代がナイチサの時代であったこと。

人間を殺すことにおいて誰よりも優れた魔王は、様々な殺し方を試しつつも異常な速度で死者を量産し続ける。

ナイチサが通った道は血と肉で染められ、大地を真っ赤な絨毯と化していた。

もはや誰もが逃げることは出来ない。

その背後からは魔人や魔物達が追従するように、人間達を追い詰め、殺していく。

東部オピロス帝国だけではない。人類史上、他に例を見ない未曾有の危機に直面していた。

「――さあ人間共よ！　余の悪行を止めて見せろ!!」

魔王ナイチサ率いる魔軍と、人類種全てとの戦争。

〝死滅戦争〟が、ここに開幕したのである。

もはや誰もが直面する死において。

これを救える者は――ただ１人しか存在し得なかった。

魔物大将軍ヴラド

魔軍の大攻勢という絶望の報告を、執務室の中で詳細に耳にした東部オピロス帝国皇帝、アレクサンドルは、自分の為したことに、忸怩たる思いを感じる。

魔王による本気の殺戮。今なお帝国軍総勢約８０万を、即席のミンチに変えながら真っ直ぐに前進してくると言う。

戦略も戦術も何もない。ただ前に進んで敵を屠るだけ。

そう、敵だ。自分達は、敵となってしまったのだ。

事ここに至って、皇帝は自分達の判断に、とんでもない間違いがあったのだと思い至る。まるで謀られてしまったかのような致命的なミス。それを思い、しかし皇帝はそれを許可したのも自分の責任だと怒りを抑え、冷静であることに努めた。

しかし冷静となったとしても、今現在起きている最悪の状況はどうにもならない。アレクサンドルは優れた政治家、そして軍略家でもあるが、この状況をひっくり返すほど、常識外れの存在ではなかった。

彼が出来るのは、今まで通り、妥当な判断を行うこと。国を、国民を守るために最善を尽くすこと。

だからこそ、アレクサンドルは深く、大きな息を吐くと、何かを決意したような表情で立ち上がり、大臣に言いつけた。

「……大臣。今直ぐ国中に、私の名においてお触れを出せ。――後方へ……いや、今直ぐ他国へ、安全な場所へと避難せよと」

「そ、それは……しかし他国へは……」

「同時に、人類各国へと連絡を行え。対魔軍への協力要請と、現状況の詳細。避難民を受け入れてもらえるようにお願いしろ。事は、帝国だけではない。もはや人類全体の危機であるのだと……」

そんな深刻な顔つきで告げられる言葉に、ようやく大臣も、事の重大さと、皇帝の言葉の本気度を感じ取った。ゆえに声を震わせながらも、その命令を了解する。

「……畏まりましたが……わ、我々は……陛下は、どうするのです？」

大臣がそう尋ねると、アレクサンドルは、フッ、と短い笑みを浮か

べた。全てを観念したようなそんな苦笑。その後に表情を真剣なものに戻すと、今まで通り、皇帝としての顔で、彼は答える。
「……大臣。国を治める王が滅びゆく自国に対して、最後にやるべき仕事は何か、知っているかね？」
「……は……？」
　分からないのか、とアレクサンドルは大臣を叱りつけるでもなく単にそう口にする。仕方がないな、と独り言ちながら、
「国を治める王は……国が滅びる際、自身の命を以て、国民に詫びるのだ。〝お前達は悪くない。国が滅んだのは全て私の責任だ。だから、国が滅びたことに気に病むことなく、これから先も別の国で生きろ〟――とな」
「！　陛下……陛下は、まさか……」
「戦争で滅びる際などには、王の首を交換条件に、国民の命を最後に守る……もっとも、魔王相手にそれが通じるとも思えんがな」
　故に、だ。と、アレクサンドルは執務室に飾ってある剣を手に取り、それを腰に差すと部屋の外に向かう。扉の前で立ち止まり、振り向くことなく、
「私は国民への最後の償いとして、自ら剣を取って魔王に立ち向かおう。無論、何も出来ずに死ぬだけだろうが、私が皇帝だとでも名乗れば数分か、数十秒でも時が稼げるだろう。その時間で、少しでも国民が救えるかもしれん」
　避難民の指揮は貴様が取れ。そう口にして、アレクサンドルは部屋を出ていこうとした。
　しかし大臣は、
「そ、それなら……陛下が指揮を――」
　それを止めようとした。だが、アレクサンドルは首を振った。
「まだ分からんか。私は東部オピロス帝国皇帝。他国へ戦争を挑んでおいて、我先にと逃げ出すような情けない真似はせんと言っているのだ。最後まで国民の為に命を張り、私が前に出ることでほんの僅かでも国民に希望を与える。これが、私が皇帝として出来る……最期の責務だ」

そう言って今度こそ、皇帝アレクサンドルは、執務室を出ていき、志願した近衛兵達とともに、戦場へと向かった。
人類圏における最後の覇権国家の王。彼の命が失われたのは、彼が出ていってから僅か一時間後の事であった。

その日のことを、勇者クエタプノは一生忘れられないだろう。
魔軍との戦争。その前線にて、いざという時のために控えていたクエタプノは、魔王と魔人、地平を埋め尽くす魔物の群れによる蹂躙を目の当たりにした。
その光景は正に、この世の地獄と形容するに相応しいものだった。
おぞましいほどの所業。魔王を先頭に、一切の慈悲も容赦もなく人間を殺戮していく魔の大群。ほんの僅か、瞬きの間に目を離しただけで、数百人単位で人が死んでいた。
戦いにすらなっていないそれは、もはや屠殺と形容するに相応しいものである。
友軍の兵士達が、次は自分達の番だと怯えている。大の男達が、目の前に迫った恐怖によって涙を流し、命乞いや神への祈りを捧げている。
それを見た瞬間、クエタプノは全てを振り切って前に駆けた。
仲間の制止を振り切り、周囲には〝今直ぐに、逃げて下さい〟とだけ言って、自分は魔物の群れに突っ込んでいった。
果たしてこの行動に効果はあるのかは分からないが、実際にはあったのだろう。
クエタプノはその勇者の剣、エスクードソードで多くの魔物達を屠った。
これまで勇者として鍛えてきた己の実力は、剣の腕前も含めて磨きがかかり、人類最強という頂きにまで上り詰めたのだ。
今までの努力は無駄ではない。そう信じて戦い続け、実際に多くの魔物達を殺すことで味方を守ることに成功した。
だがクエタプノの、クエタプノだけの反撃は、そう長くは続かなかった。

クエタプノが多くの鍛錬を重ね、強くなったとしても、それはまだ人間の範疇であり、魔人に正面から敵うものではなかったのだ。
多くの魔物を殺していると、眼の前に魔人が複数体現れた。
そしてクエタプノは、魔人に轢かれるようにして、敗北した。
以前は防御と回避を優先することで戦闘を継続することが出来たので、今回はそれよりももっと、上手く戦えると予想していた。
しかし、考えが甘かった。
魔人の――それも、かなり強大な力を持つであろう異形の魔人を中心に、クエタプノは一方的にやられた。
魔人達との戦いは、一対一ではなく、こちらを作業の様に踏み潰す容赦のないものだった。
運が悪かったのかもしれない。何故なら、その中でも1番弱いであろう魔人であれば、一対一ならやれる自信があった。
だから今までの修練は無駄ではないといえる。クエタプノは確かに、努力を重ね、ここまで強くなり、遂には単騎で魔人と戦い、あるいは討ち倒せるほどに強くなったのだ。
だが、クエタプノはそこで表情を歪めた。
――それでは意味がない。
魔人を一体倒せる程度。それは常人であれば称賛されるべき偉業だろう。
しかし、クエタプノは常人ではない。勇者だ。
魔王と対になり、人類を導き、救うための存在だ。
その勇者が、たかが魔人一体と同程度。
これだけの実力で、どうやって魔王を倒し、人間を救うことが出来るのだ。
複数体の魔人に襲いかかられたら、負ける程度の実力で。
魔王であれば、全ての魔人を同時にしても負けないだろう。
そこまで辿り着くことは出来なかったが、遠目に見て、感じられるその実力は文字通り桁違いだった。
その殺気を遠くから浴びるだけで、額には脂汗が湧き、心臓が握られているかのような圧迫感と、空気が濁りきって呼吸がままならなく

なるような閉塞感を感じる。
生物としての本能が全力で、〝逃げろ〟と警鐘を鳴らし続け、収まることのない吐き気と怖気が体中を襲う。
あんな生き物が、この世にいていいのか。そう思ってしまうほどの悪夢の存在――それこそが魔王だった。
どれだけ手を伸ばしても、人を救いたいと神に願い、実際にそのために足掻いたとしても。
魔王だけには到底届きそうにないと、そう思わせてしまうほどの絶望がそこにある。
だがそれでも諦めまいと、手を伸ばそうとして――気づけばクエタプノの視界は真っ赤に染まっていた。
そして次に気がついた時には、クエタプノは何故か生き残ってしまっていた。
周囲全てが人々の血と肉に染まった死の大地の中心に紛れるよう、クエタプノは倒れていた。
死体の中に運良く埋もれて、身を隠すことが出来たのだろう。
どこまでも悪運の強い自分に、しかし、深く絶望する。
何故自分だけが、生きているのか。
そこにある数十万の人々の死体。死臭も酷く、空からは血の雨が降り注いでいるが、そうなったという事実の方に、酷い吐き気と失意を感じる。
「神よ……」
天を仰ぎ、クエタプノはふと思いを口にしてしまう。
「どうしてこのような……過酷な現実を、人間に科すのですか……？」
もはや神すらも、人を見捨てたというのか。
これだけの悪行を野放しにするのか。
ならば正義とは、この世のどこに存在するのか。
そもそも、存在し得ないとでも言うつもりか。
――そんなことが許されてたまるか。
クエタプノは、魔王が作った屍山血河の中で藻掻き、立ち上がった。
「諦めたく、ない……」

何も出来ずに敗北し、多くの人が死んだ。
仲間達ですら、どこにいるか分からない。
あるいはもう既に、この死の大地の一部と化しているのかもしれない。
「僕は……〝勇者〟なんだ……」
それでも、クエタプノが勇者であることに違いはない。
魔王を倒せずとも、魔人に負けてしまっても。
これから先、何も出来ずに死んでしまうとしても。
「行かなきゃ……」
クエタプノは、勇者としての責任から逃げるわけにはいかない。
だからクエタプノは立ち上がり、落ちていた剣を手にし、その場を立ち去ろうとした。
そんな時、聞き覚えのある声が響いた。
「……どうやら、生きてたみたいですね」
「！　コーラ……！」
声の聞こえた方向に振り向けば、そこにいたのは勇者の従者であるコーラ。
彼はこの様な死体の中であっても、淡々と、いつも通り、感情が読み取れない無の表情でこちらに話しかけてきた。
生きていたことに喜ぶのも束の間、クエタプノは直ぐに問う。それは、
「他の仲間は……」
「……分かっているでしょう？　それでも言ってほしいですか？」
「っ……！」
それはコーラが見せる久し振りの表情。遠回しにではあるが、仲間の安否を示すような態度。
その様子にクエタプノは一度だけ、一瞬だけ、悲しみで表情を歪めたが、それを取り繕うように冷静に返した。
「そう、ですか……なら、いいです。薄々分かっていましたから」
こんな惨状の中で生きているはずもない。死んでいる可能性の方が高い。そんなことは分かっていたはずだ。

だからそれを必死に脳で俯瞰的に受け止め、クエタプノは残った仲間に質問を重ねた。勇者として問わねばならないことだ。
「魔王は……魔軍は、どうなりましたか？」
「……魔王は魔軍を引き連れてこの国の首都を襲い、国を滅ぼした後、各地の人類国家に配下の魔人と、軍を分散させて攻め込んでいるみたいですよ？」
「……もう、滅んでしまったんですか」
「はい。なにせここでの戦いから一週間は経ってますし。クエタプノ、気を失っていたみたいですが……飲まず食わずな上に誰にも気づかれず、よく生きてたというか……運が良かったですね？」
「……はい。そうですね……」
運が良い、と言われ反射的に否定したくなったが、生き残れたことを不運だと嘆くのは、ここで死んでいった人々に対する冒涜だ。言えるはずもない。
心の中で自分の想いを留めたところで、コーラはふと、こちらが持つエスクードソードに視線を向けた。何かに気づいた様子で、
「おや……クエタプノ。その剣……」
「え……――ッ!?」
コーラがそう口にした瞬間だ。
剣から何かが伝わり、己の中に熱い力を感じたのは。
エスクードソードから光が迸り、そのまま己からも、光が溢れていく。
全身に活力が漲り、今まで一度も感じたことのない凄まじい力を己の内に感じる。
クエタプノが欲して止まない純粋な力。それが芽吹いているのを自覚した。
「何、ですか……！　コーラ、この力は……!?」
その力を抑えようと、制御しようとしたところでコーラからの返答が来る。相も変わらず淡々と、
「あー……おそらく、勇者として成長したのでしょう」
「成長……ですか？」

「ええ、理由は――まあ、クエタプノの想いにでも反応したんじゃないですか？」
「想い……そんな理由で……」
　思わず戸惑いの言葉を発してしまう。それで覚醒すると言うのならば、先の戦いで覚醒してほしかったと。
　そもそも都合が良すぎる、そう疑念に思った問いかけは、しかしコーラに機先を制された。
「いやまあ、勇者って人が傷つけられて、そういった危機に1番力を発揮するとも言われていますし……こういうこともあるんじゃないですか？　――随分と人が死にましたし」
「……」
「あれ？　もしかして信じてません？」
　コーラの無表情で告げられる答えに、少し考えたクエタプノだが、しかしその言葉に否と答える。
「そういうわけではないですよ。……ただ、突然だったので力が手に入った実感がないというか、不可解だったので疑問に思っただけです」
　しかし確かに力は己の内にあるし、とてもありがたいことなのも確かだ。
　これならば、ともすれば魔人を倒していくことが出来るかもしれない。その果てに魔王を倒せるかどうかは分からないが、
「なら、試しにいきます？　まだ近くで、魔物が暴れてるかもですし、もっと頑張れば、更に強くなって魔王を倒せるようになるかもしれませんよ？」
「……そうですね。苦しめられている人を、放ってはおけません。魔王は未だ倒せずとも、今はこの力で出来ることをしていきましょう」
　そう言って、クエタプノは死んでいった人々の痛ましい痕を踏みつけながら、先に進む。
　人々を救えずに、死体の上を歩く勇者などあり得ないが、心の中で彼らに謝り、道を通るために、生きている人々を救うために、クエタプノはその上を歩く。

もう二度と、このような事態にはさせたくない。改めて強く心に戒めた勇者クエタプノと、口端をフードの中で吊り上げながら、その背中に付いていく勇者の従者コーラの戦いが、多くの人々の犠牲を糧に今、改めて始まった。

僅か三日で東部オピロス帝国を滅ぼした魔王ナイチサは、その地に首謀者も含めた死体の山を築いても怒りが収まらなかった様子で、世界各地に魔人達と魔軍を派遣した。

ナイチサ自身もそこらの国に攻め入り、夥しい数の死傷者を出しながら、今なお人類を苦しめようと暴虐を働いている。

この一週間でナイチサ、及びにその配下が殺した人間の数は――およそ６０００万。

実に人類総数３億と言われる内、以前から犠牲になった死者も含めて、およそ３０パーセントの人々が、魔王と魔人、魔物達の手によって失われた。

その数はナイチサの進撃の凄まじさ、そして魔人や魔物達の本気度を表しており、今までの様な占領して撤退するような気配は微塵も見られず、さすがの人類国家も手を組んだが、時すでに遅し。各地に魔軍を派遣され、国家間の協働が難しくなると、各地で激しい戦いが巻き起こった。

魔人が一体でもその地で暴れていると、国はそれに対応するだけで手一杯であり、他の事に気を回している余裕は無かった。

各地で大虐殺を起こすナイチサは、文字通りの屍山血河を作り上げ、大陸を徐々に真っ赤に染め上げていった。

とある人類圏の一地域。

そこには魔人ではないが、魔人級の実力者として、その地の攻略を任されている魔物がいた。

「ふっふっふ……まさか、このような素晴らしい時代が来るとはな

……！」
機嫌が良さそうに戦線を見渡すのは魔軍を統率する魔物大将軍の内の一体、ヴラド。
大将軍の中で最も残虐な行為を好む彼は、魔王直々の勅命にて、虐殺を許可されているのが嬉しくてしょうがなかった。
彼が攻めた地域を治める国の兵士達は、魔軍との戦いに臨もうと戦場に向かうと、ある光景を目にして思わず口元を押さえる。
そこにあったのは、
「ふっはっはっは！　どうだ、私の芸術的な串刺し刑は？　感動したかね？」
「っ……あ……」
地面に刺された巨大な槍のような棘に、生きたまま串刺しにされている人間達の姿だった。
道なりに、戦場であった場所を囲み、そこに来る兵士達を待ち受けるように築かれた串刺しの山は、生きた状態のまましばらく保存し、苦しめるように、心臓などの即死するような場所は貫かれていない。出来る限り長く苦しめてやろうと、生きたたま吊るし上げられ、串刺しにした人間達の呻き声が、戦場に未だ響いている。
もはや死を望んで止まない瀕死の人間達の、調和に満ちた音色を聞いてヴラドは鼻歌を歌うほどに機嫌がよくなり、戦場にやってきた兵士は誰もが顔を青くさせ、その凄惨な光景に士気を低下させる。
その様に、さらにヴラドの機嫌が良くなった。笑い声を響かせ、
「はははは！　そうかそうか！　思わず咽び泣くほどに感動したか！　私の趣向を理解してくれて何よりだが……しかし安心しろ！私は敵対者には容赦をしない性分でな。貴様らも、次にこうなる。なのでよーく見て、円滑に串刺しにされるよう憶えておきたまえ！」
そう言ってヴラドは、魔物兵達を引き連れて一歩前に出る。それだけで、その言葉を聞いていた人間の兵士達は一歩後退った。
こうはなりたくない。そう思って怯えてしまった時点で、ヴラドの策の術中に嵌っている。
趣味であることには違いないが、ヴラドは敵に恐怖を与えて、戦意

を喪失させる術に長けていた。そのために用いる串刺し刑は、ヴラドが長年、人間との戦争にて使用してきたポピュラーな策である。
いつでも討ち取れる人間を直ぐには殺さず有効活用し、次に攻めてくる相手の戦意を挫く。自身の策と、その一面串刺しだらけの光景に純粋に惚れ惚れしながら、ヴラドは更に前に出た。
「今日は大変に気分が良い！　だから私も、貴様らと戦ってやろう！
串刺しにされたいものから向かってくるがいい！」
「ひっ……!?」
「い、嫌だ……！」
その声を聞いて、前線の兵士達がざわつく。その隙を逃すまいと、ヴラドは全軍に号令を出し、また、自分も駆けた。
「突撃ィ――!!　人間共を、魔王様の名の下に蹂躙せよ！」
「はっ！　目にもの見せてやります！」
「ヒャッハー！　殺して犯して奪い尽くせぇ！」
ヴラドとともに人間の軍に突撃を敢行する魔物兵達。その圧力もさることながら、人間の兵士達は、最前線を走ってきたヴラドから何かが生えてきたのを目にした。
「はははは！　全員、串刺しにしてやろうではないか！」
それはヴラドの全身を覆うような棘。
数十センチにも及ぶ棘が何本とヴラドの全身から生え、背中からは棘のような触手が伸びてきている。
身体を保護するための攻性の防御であり、敵を貫くための武器ともなるヴラドの棘は、体当たりをするだけで多くの人間を串刺しにした。
「！　武器が通らな――ぐあっ!?」
「に、逃げろ……！　勝てるわけが――ぎゃあああああ！」
その身体は、武器を当てても全身の棘に弾かれる。
そして背中から伸びる触手は、逃げようとした敵を追いかけて串刺しにした。
人間の中でも実力者であると思われる将達も、ヴラドには傷一つ付けることが出来ずに他の人間と同じ様に串刺しにされた。

魔物大将軍とは、個体差もあるが、それぞれが魔人級の強さを持つと知られている。
その中でもヴラドの強さは折り紙付きであり、大将軍最強と称されるあのコウウに張り合い、一矢報いることが出来る強さを持つのがヴラドという魔物である。
全身の鋭利で頑丈な棘が武器を必要とせず、あらゆる攻撃を弾き、同時に触れるものを傷つける。素手で戦う者にとっては天敵であり、武器で戦う者でも、生半可な得物や腕前ではその肌に到達することさえままならない。
自身のその特性に絶対の自信を持つヴラドはただ敵陣を駆け回り、次々に人間を刺殺していく。その度に返り血や肉を浴びるが、ヴラドはそれでより一層興奮したように速度を増した。
「ああ……！　やはり串刺しは最高だ……！　もし許されるのならば、この世全ての人間を串刺しにして飾り、それをずっと眺めていたい……！」
倒錯した趣味と欲求を口に出し、時には手で殴りつけるようにして串刺しにしていきながら、ヴラドは悦に浸る。実際にこれは彼の性癖でもあり、人間の女性を捕まえた際には、この特性に変化し、相手を串刺しにしながら犯すのが最高だと公言して止まない。
ヴラドの全身の棘は、女性を犯そうと身体を近づけただけで肌に突き刺さり、痛みに悲鳴を上げる。より一層近づき、身体を抱擁してやれば全身が串刺しにされ、激痛で声にならない声を上げながら死んでいく。彼が特性を維持しながら女性を犯す。それだけで一種の拷問であった。
ヴラドに続く魔物兵達も、得物として三叉の槍を持って出向き、人間達を次々に刺殺。串刺しにしていく。この場でひと思いに死ねた者はいいが、中途半端に生き残ってしまえば串刺し刑を執行されて長く苦痛を味わうこととなる。
戦場はヴラドの手によって作られる針山地獄の様な様相を呈しており、腐臭に満ちていた戦場が、再び新鮮な死臭に満ちていく。
悲鳴と絶叫の交響曲が戦場を彩り、各地で人間を攻める大将軍や魔

人達に負けないほどの凄惨な現場を作り上げる。
ナイチサ様もお喜びになるだろう、と、ヴラドは自身の勤勉さにも満足していた。
願わくば、この功で魔人にでもしてもらえないかとも思うが、さすがに難しいだろうか。どうにも新しい魔人を作る気がないように、ヴラドの目には映った。
しかし少し希望を持つのも悪くないと、ヴラドは心の中でそう納得すると、辺りの人間を数百は串刺しにしたところで息をついた。
「しかしまあ……毎度の事ながら張り合いのない連中だ。戦争ではなく、これでは一方的な虐殺だな」
これはこれで一興だが、たまには歯ごたえが欲しくなる。戦闘狂というわけではないが、串刺しは相手が硬ければ硬いほど、突き刺した時の達成感が最高なのだ。
苦労して硬い肌にようやくの思いで刺しこむと、柔らかい肉や、肉の間を通る骨が、僅かに串刺しに抵抗するあの感覚。それを無理矢理力で押し込み、肉の間を潜らせる手応えは、女の処女を無理矢理散らすのにも勝る快感をヴラドに与えてくれる。
つまりは串刺し最高。串刺しフォーエバー。串刺しのおかげで幸せになりました。――そういうことだ。
大地を鮮血で染めるために血を流し続ける串刺しにされた人間達を見ると、胸に深い幸福が降りてくる。吐息をつき、
「はぁ……もし人類圏を全て我々の手中に収めたなら、魔王様に頼んで家庭菜園でも楽しんでみるのも悪くないな……」
それなら戦争が無くなったとしても、ヴラドは生きていける。
庭先を串刺しの人間達で埋め尽くし、周囲には薔薇でも咲かせよう。そして息絶えた人間は順次処分し、また新たな人間を串刺しにして、それを眺めて愉しむ。
朝も昼も夜も。食事の時や寝ている時でさえ、人間の苦痛に満ちた呻き声を耳にしながら、優雅な余生を堪能する。
……これはいいのではないか？
思いつきではあるが、とても魅力的であった。魔人になって生き永

らえるのも悪くはないが、そういった余生であれば喜んで送りたいものだ。
筆舌に尽くし難い魅力がそこにはある。戦争が終わったら願うだけ願ってみよう。
そう思い、串刺しに満ちた戦場の上を進んでいると、
「……む？」
ふと、気づいた。
こちらに近づいてくる人間がいる。
背中に剣を背負った若い人間。おそらくは人間の兵士か、雇われた冒険者。
それが随分と落ち着いた様子で、こちらに向かってくる。
ヴラドは僅かに違和感を感じた。
……私に恐怖しないのか。
この惨状を見て、自分に臆せず向かってくる人間がいるとは思っていなかったが、どうやら骨のある人間がまだいたらしい。
「ふふ、面白い……！」
ひょっとしたら、自分の腕に自信があるのかもしれない。
だがそれは井の中の蛙と言う他ない。人間では魔人はおろか、使徒相手ですら戦うには厳しいのだ。
一部の例外がいたことも知っているが、それを除けば、人間が魔人級の強さを持つ己に敵うはずがないだろうと。
しかし、歯ごたえのある人間を串刺しにしたいと思っていたのも事実。だからヴラドは笑みを携え、その人間を歓迎する。
「それでこそ、串刺しがいがある……！」
ゆえに、ヴラドは人間に向かって駆けた。
相手を串刺しにし、自分の欲求を満たすために。
一切の油断も慢心もない。この時のヴラドは、確かに全力でこの人間だけを見据えて戦う姿勢を取った。
だが、
「――――えっ？」
次の瞬間、ヴラドは自身が天を見上げていることに、間の抜けた声

を発して気づいた。
開いた口が塞がらない。何故自分は、天を見上げているのか。
身体の感覚がない。身体が動かない。一体何が起こったのかと理解が及ばないまま、
「……終わりです」
「は……？　っ――！」
頭上に人間が現れ、己に光の剣を突き刺されたところで、ようやくヴラドは、最期にそれに気がついた。
……私が、串刺しにされている……だと……？
剣を突き刺され、ヴラドは敗北を理解した。
しかしその感想よりも、最期に串刺しにされる感触を体感し、そのことに対する感想を抱こうとしたところで、ヴラドはその意識を闇に溶かした。
――そしてそれを成した者は、
「……魔人はいませんでしたか。ここはこれで終わりみたいですし、次に行きましょうか」
「そうですね」
自身が殺した魔物大将軍と、串刺しにされた人々を見て、少しの間祈りを捧げるように沈黙すると、そのまま従者を連れて、次の戦場へと向かった。

勇者の背についていくコーラは、内心で自身の感情を封じ込めながらも、笑いたい気分で一杯だった。
それはクエタプノのことでもあるし、人類の狼狽えようもそうだ。
……ほんと馬鹿ですねぇ。あんな言葉だけで信用してしまうなんて。救いようがないですよ、これでは。
どいつもこいつも滑稽で笑える。言葉一つに右往左往し、魔物に襲われてその愚かさを痛感する彼らの嘆きや絶望が面白くてしょうがない。
……というか馬鹿クエタプノもあの馬鹿な仲間達も、確認取ればい

いのに……ほんと馬鹿ですね。
あの時、クエタプノに仲間の命を聞かれた時に、自分は別に死んでいるとは一言も言っていない。
ただ〝分かっているでしょう？〟と告げただけだ。それでクエタプノも仲間が死んだと勘違いしたし、本当は生きている仲間達も、クエタプノが死んだと勘違いした。
まあ、確認を取られたとしても死んだと嘘をつくつもりではあったが。
……ペースも順調ですし……この分だと、随分と面白い見世物になりそうです。
勇者としての力の開放率。人類の死者の数に比例して力を増していくその勇者の力は、正に人々の想いを胸に戦う勇者そのものだ。
この調子ならば、本当に魔王を倒せる可能性だってあるし、そうなったらなったで面白いとも思う。
何故なら――魔王を倒しても、次の魔王が生まれるだけで、魔王は居なくならない。
また新しい魔王が選別されて、人類を苦しめる。その時人々が、クエタプノが浮かべる表情は、どのようなものだろうか。
失意、嘆き、怒り、絶望。あるいはそのどれもが入り混じった様な愉快な顔を見せてくれるだろうか。それをなじってみるのも面白そうだ。
……それにしても、神が何故こんなことをするのかと、聞くのがまた面白いですね。
何故世界から悲劇が無くならないのか。悪行が許されているのか。その答えは火を見るより明らかであるというのに。
それは、神自身が、悲劇を望んでいるから。
人間が無残に死んでいく様を見ていたいからこそだという真実を思い、勇者の従者である神――コーラス００２４は人間の従者、〝コーラ〟としての顔を、未だ保つことにした。

勇者の覚悟

魔物大将軍ヴラドの戦死。
その報は少なからず、魔物達に衝撃を与えた。
魔王と魔人達の出陣によって、負けるはずがないと考えていた魔物達はその一件で改めて身を引き締めたとも言えるだろう。
そんな中で、その報を眉をひそめて聞いていた魔人がいた。
「……ヴラドが死んだ？　それは本当の話なのか」
「はっ……そのようです」
魔人レオンハルト。
今回の戦いにおいても魔王ナイチサの供回りを務め、魔軍の総指揮を行っている魔人である。
そんな彼は司令部の中で、魔物大将軍リーからヴラド戦死の報を耳にした。
まさか、という思いである。レオンハルトは思わず確認を取ったが、それが本当の話である念を押されると吐きかけた息を飲み込み、詳細を尋ねる。
「……ヴラドの軍はどうなった？」
「はい。幸いにもカミーラ様が上手く立て直したそうではありますが……それでも、兵達の動揺は小さくありません」
「……だろうな。殺ったのは誰だ？」
「兵の証言では、人間の戦士……いわゆる、冒険者の様な格好をした金髪の人間だと。おそらくは男です」
質問を重ねていたが、その発言には引っかかる。半ば確信を得つつも、確認を取るために、
「おそらく？　それは……女顔、中性的な見た目をしているということか？」
「はい。そのようで」
リーの回答に、やはり、と思い至る。レオンハルトの予想が正しければ、ヴラドを倒したのは勇者に他ならない。
しかし、以前は魔人未満の戦闘力しか保持していなかった。

それがヴラドを倒せるようになるまで成長したということは、
……用心しないとな。
勇者は危険な存在だ。ヴラドを倒したのであれば、他の魔人であっても油断は出来ないだろう。
「……まさかヴラドがやられるとはな」
「はい……私も、信じられません」
同じ魔物大将軍ということもあってか、リーはそれなりにショックを受けているようであった。
実際、ヴラドがやられたことにはレオンハルトも驚いている。ヴラドは、魔物大将軍の中ではコウウに次ぐ強さを持っていたからだ。
ヴラドを倒せたということは、バルカやリーも危ない。コウウであればどうかは分からないが、精神的に参ってしまっているコウウでは厳しいだろう。
そして、一先ずは対応を取らなければならなかった。
「……全軍にその情報を共有しておけ。位置を捕捉し次第、俺に知らせろ」
「はっ……そのことなのですが……どうやらカミーラ様が、その人間の捜索に躍起になっているようでして」
「何？　カミーラが？」
まさか仇討ちか何かか、と一瞬思ったところでカミーラの性格を鑑みて、それはないと断じる。答えはすぐにリーの口から語られた。
「ヴラドはどうでもいいが、活きの良さそうな獲物には興味があると……そういうことを仰っていたそうです」
「……なるほどな。カミーラらしい」
戦闘狂とまではいかないが、あれはあれで結構好戦的な性格をしている。仕留めがいのある獲物であれば、狩りを愉しめる――そんなところだろう。
カミーラなら大丈夫だとは思うが、勇者相手だと多少の不安はある。
そして魔物大将軍達も、これ以上潰されると魔軍を組織する上での支障が多く出てきてしまう。それを思えば、次に行う手は、消極的な

安全策だ。
「……バルカとコウウにも通達しろ。各自、その地の攻略は一旦止め、本隊に合流しろ――と」
「！　それは……それでいいのですか？」
リーの問いに、ああ、と頷く。その訳は、
「問題ない。どの道一つ一つ着実に潰していけばこちらの勝ちだ。大将軍達が各個撃破されて兵の離散を招くよりは、俺やナイチサ様がいる本隊で暴れてもらった方がいい。本隊なら多少の距離はあっても、直ぐに駆けつけることが出来るからな」
魔物大将軍という替えのきかない存在を失えば、先程も言ったように多くの魔物兵が敗走してしまう。いなくなったとしても立て直しは可能ではあるが、そうなってしまえば面倒も多いし、安全策を取った方がいい。
こちらが有利な状況だからと、手を拱いたり余裕を持ちすぎると、足元を掬われてしまいかねない。軍略には、時にリスクを飲み込んでリターンを取ることが必要な場合も大いにあるが、今はその時ではないのだ。相手の駒は一つしかないのだから、こちらはそれに対応して受けきってしまえば勝利。少なくとも、悪くなることはない。
もっとも、相手が個人で、一定の強さを持つ以上、完璧に対応して、被害を無くすというのは不可能。
ゆえに本隊にいてもらうことで、もし狙われた時も、こちらが駆けつけることが出来るし、いざとなれば最強の手札が残っている。
総じて、本隊にいた方が危険性は少ないのだ。万が一の事態にも対応がしやすい。
「魔王様には俺から伝えておく。お前も含めた魔物大将軍達は一刻も早く、兵を纏めてこちらに合流しろ」
「はっ、畏まりました。直ぐに行います」
リーは恭しく一礼すると直ぐにその場から立ち去り、自分の職務に戻っていった。
その後ろ姿を見て、レオンハルトは思う。
……もうすぐで寿命とはいえ……戦場で死んでいい理由にはなら

ないからな……。
これまで千年以上も自分の部下として働いてきたリー。相手が勇者で、寿命が近いとはいえ、避けられる戦いで無残に死なせたくはなかった。
だからレオンハルトは、心に決める。
もし勇者がここに来たのなら、少なくともその時が来るまでは、何度でも殺してやろうと。
立ち回りは難しいが、だからと言って、眼の前の危険を放置出来るほど非情ではない。
レオンハルトはその後、身内の者達にも連絡を行った。勇者の人相、特徴を教え、
――もし勇者を目撃したら逃げることを優先し、直ぐ様俺に知らせろと。
自分なら何とか出来るし、何とかしてみせる。自分の強さを信じながらも同時に、愉しみのようなものをやはり感じてしまうのだから、自分の事ながら呆れる思いだ。
レオンハルトは心の内側で複雑な心境を渦巻かせながら、改めて勇者のことを伝えようと、ナイチサがいる人間の街であった場所に向かった。

そうしてヴラドの戦死から一ヶ月後。
残った三人の魔物大将軍が魔王ナイチサと魔人レオンハルトが統率、指揮を行う魔軍の本隊に集められた。
「――王手飛車！　ですわ」
「ぐ、ぬおおおお!!　このような厳しい手順が……！　ぐぬぬぬぬ……負けました……！」
「はい。この勝負、１０８手を保ちましてバルカさんの負けですよう。なので罰ゲームお願いしますね。今回の罰ゲームはわさび寿司１０貫を食べきることです。はい、リアクションどうぞー」
「ふ、ふふふ……私を見くびるな……魔物界切っての天才軍略家であ

る魔物大将軍の私が、こんな少し辛い程度の食べ物で屈するはずが――辛っ、辛あーーーっ!?」
「はい、ナーイスリアクション！」
魔軍の本隊。その一部、レオンハルト軍の者達が集まるその場所では、レオンハルトの使徒であるキャロルとペールが、一足早く呼び寄せられたバルカとともに遊んでいた。
それを見たハンティは呆れたような半目で声を掛ける。
「……アンタら、何やってんの？」
一応、今は軍議中。そう聞いていたはずなのだが、レオンハルトもいなければ軍議を行っている様子もない。そのことをハンティは、後ろにいるリーと、もう一体に視線を向けつつも問う。するとペールが悪びれた様子もなく答えた。
「だってー……話し合うことなんてないんですよう。大将軍が三体集まってる上に、戦いは基本、魔王様が前進するのに合わせて進むだけなんですよう？」
「なのでわたくし達は大将軍らも含めて、戦う時以外は、意外と暇ですわ！　あ、今の駄洒落はレオンハルト様リスペクトですわ！」
「まぁ……そういうことなのですハンティ様。平にご容赦を」
「……はぁ、しょうがないね……」
最後にリーが申し訳無さそうに謝罪した時点で、本当に今はやることがなかったのだろう。ハンティもサボりを追求することは諦めて息を吐く。――後、キャロルのそれは本人はリスペクトのつもりでも周りから見たら馬鹿にしてる様にしか見えないから止めた方がいいと思った。
世界のあちこちで魔軍が人類を攻め立て、夥しい数の死傷者を出しているが、まるでそんな風には見えない。ハンティはこれでも憂いているのだが、魔王の勅命である以上、自分に出来ることは少ない。出来る限り苦しまないように人を殺すことと、
……カラー達の避難は終わったけど、人に出来ることはもう……。
この場で表立って言うことは出来ないが、カラーを避難させるためにハンティは少し離れていたのだ。

森から出ないのは元からそうでもあるが、なるだけ森の奥深くへ行くよう伝えておいた。隠れ里の原型だけなら出来ているが、まだ準備は終わっていない。この状況で人間が襲ってくるとは思わないが、魔物が攻める可能性はなくはないのだ。

だから保険として、森には少しの間ではあるが、ライゼンに行ってもらった。暫くの間飛び回り、森を見ててくれるらしい。魔物が来たら、それとなく追い返すとも言っていた。彼ならば安心して任せられる。

だが、人間に対して出来ることはこれ以上ない。戦場で出会ったところで、見逃す意味もない。自分達が見逃したところで他の魔物にやられるだけだ。

ならせめて、一思いに殺してやるのが情けだ。

もっとも、そう考えているのは自分とレオンハルトくらいだろうな、と達観して思う。

それが悪いというわけではない。むしろそういった割り切りが出来るペールや、そもそもそんな悩みが存在しないキャロル達を、時に羨ましく思うことすらある。

これは自分の性分なのだな、とその考えを己の内側にしまうと、ハンティは次に別の相手を見た。少し距離をおいた物陰に隠れる魔物を見て、リーに、

「……それで、コウウはまだあの調子なの？」

「……その……ええ、はい。ここに連れてくるのにも苦労したもので。闇討ちされるのでは、などと警戒して……」

「そんなわけないってのにねぇ……」

遠く、物陰には二体の魔物。一つは大柄で、一つは小柄。彼らは物陰で遊びに興じている。

「はい！　次はコウウちゃんの番だよ！」

「お、おう……えっと……これでどうだ！」

「あっ、倒れた！　やったー！　私の勝ちだよ！」

「あ……負けちまった。きゃんきゃんは強いなぁ……」

「えへへー、そうかな？　じゃあ次は、コウウちゃんの得意なしりとり

しよ！」
「得意ってわけじゃないんだが……いや……よし、次は負けねぇぞー！」
魔物大将軍最強と名高いコウウと、最弱の女の子モンスターであるきゃんきゃん。
何ともアンバランスな組み合わせの2人が、物陰で遊んでいた。
精神的に不安定なコウウは、最弱で自分を襲う心配のないきゃんきゃんが近くにいないと、正気を保てないのである。こんな様では、戦いに出るどころか、噂の相手がもし現れても戦力にはならないだろう。
「それにしても……勇者ねぇ……」
ハンティが何とも言えないような微妙な様子でその名を呟いてみる。どうにも胡散臭いというのが本音だ。強いは強いだろうから興味はあるが、本当にそんな相手がこの世界に存在するのか。存在したとしても意味はあるのかと懐疑的になる。
ヴラドを倒したこと自体は凄いと思うが、その程度では世界を、人間を救うことなど到底不可能なのだ。
そのヴラドが何十体と束になっても敵わないのが魔王なのだから。だから勇者なんて、などと思っているとその言葉に反応して、キャロルが、
「大丈夫ですわ！　勇者というどこの馬の骨とも知れない輩が、レオンハルト様に敵うはずありませんの！」
「……まあ、そうかもだけど」
「レオンハルト様の強さはバグというかチート級ですからねぇ」
訳のわからない造語を用いながらペールも同意する。あまり声を大にして言いたくはないが、ハンティも同意だった。未だに底知れない強さ。あのザビエルを倒した藤原石丸ですら退けたレオンハルトが負ける姿など想像がつかない。もうここ何百年、石丸のもの以外は傷を負ったことすらないどころか、戦闘で膝を突いたことすらないらしい。本人が言っていたわけではなく、ペールの言ではあるが、確かにハンティも見たことなかった。

勇者であっても、容易に退けるだろうという確信が、皆の胸の中にある。だからこそのこの空気なわけだが、
「……少し緩みすぎな気が……」
「ですかねぇ。あ、始祖様。先程ケッセルリンク様と一緒にやってきたエルシールさんが、差し入れにとお寿司握ってくれたんですけど食べます？　かなり腕が上がってますよう？」
「わたくしのお勧めはイクラですの！」
「因みに、天才の私の好物はうにです。そして寿司と言えば、将棋指しは寿司の締めに、玉子、玉を食べて締めるのですぞ」
「……た、食べますか？　ハンティ様……」
「……」
寿司桶に入った握り寿司を囲むようにして食べる魔軍の重鎮達を見て、ハンティは無言となる。
そもそももう処理したとはいえ、少し前までは大勢の人間の死体が山積みにされていたこの場所で、生ものである寿司を食べれる神経がどうかしてるのではないかと思う。戦争であるため、ハンティも割り切ることが出来るが、色々と常識から外れてはないだろうかと。
リーだけはこちらに気を使ってか、遠慮がちに勧めてきた。そういえば今日はまだ何も食べてないなぁ、とか思いながら、
「……因みにリーは何が好きなの？」
「私は王道を行く大トロ――あっ、いえ……中トロとか穴子とかですかな……？」
その遠慮の仕方もよく分からないが、本人の中では変な葛藤があるのだろう。レオンハルトは穴子とかえびとか庶民的なネタの方が好きだったはずだし。気にしないことにする。
ハンティは寿司を眺め、その中の一つを適当に取って口に放り込むと、
「……エルシールはエルシールで、本当に寿司作れるようになって……何やってるんだか……」
料理とか家事は出来ない戦闘メイドだというのに、何故か寿司は握れるようになるとか、これはエルシールを褒めるべきなのか、メイド

長さんを褒めるべきなのか悩ましい――と、暗に寿司の美味しさを認めながら、ハンティはこの戦争の行く末への不安を、ほんの少しだけ和らげた。
「コウウちゃん！　寿司貰ってきたよ！　一緒に食べよー！」
「寿司……寿司か……寿司と言えば俺は鮭が好きなんだけどよぉ……ん、待てよ……寿司？　寿司と言えば……ＪＡＰＡＮの名物だ……ＪＡＰＡＮ……ＪＡＰＡＮと言えば……藤原石丸!?　うあああああああ!?　石丸が、俺を殺そうと刺客を……！　新鮮な魚達を送ったのか……!?」
「どんな話の飛躍!?」
「エルシールさんからのものですわよ？」
「新鮮な魚を送ってくれるとか、藤原石丸って優しいですねぇ」
「毒でも入れるなら刺客とも言えなくもないが、普通の毒などでは魔物大将軍である我らは死なない。となれば、もう少し工夫をしなければ――」
「コウウ!?　また発作か！　くっ、きゃんきゃん頼む！　コウウを抑えてくれ！」
皆がマイペースにコメントをする。慌てているのはハンティとリーくらいだ。
ふと、今この状況で勇者が来たらどうするんだろうと、ハンティは思った。今はレオンハルトもいないし。
そんな賑やかさを見せながらも、戦いは更に激しさを増すのだった。

しかし戦いから一ヶ月。魔王ナイチサが多くの人間を殺戮し、配下の魔人や魔物達がどれだけの暴虐を働こうと、その場に未だ、勇者は現れなかった。
単に運が悪いのか、それとも考えがあるのか。時折魔軍の撃破報告だけは上がってくる。
だが魔人や使徒による目撃情報も、交戦したという情報も上がって

こなかった。どうにも各地で転戦を繰り返し、少数ながらも人々を救っているようである。例え雀の涙ほどの、全体から見ればさほど影響のない数の人間を救っていたとしても、根本的な解決には至らない。
遂には、各地で地味に被害を与えてくる勇者にしびれを切らしたレオンハルトが、時折勇者を探して各地に視察に行ったりもしていたが、尽く空振りに終わった。
時が経てば経つほど、嫌な予感を感じる中、遂に二ヶ月の時が過ぎた。
ある丘の上では、一人の男が、眼下に広がる魔物兵の群れを見ていた。
その傍らにいるフードを被った少年は、男の背中に声を掛ける。
「……そろそろ行動するんですか？」
「……はい。これ以上、僕のレベルは上がりませんし、そろそろ期限も来てしまいますから」
そう丁寧な言葉で返したのは勇者クエタプノ。
幾つもの戦いを潜り抜けた歴戦の戦士の顔となった彼は、傍らの従者に告げる。
「少々不安もありますが……決着を付けにいきます」
「……そうですか。まあ頑張ってください。応援してますよ」
淡々と、勇者になって出会ってからのこの7年間、一度たりとも表情を変えることなかったお決まりの表情で、勇者の従者であるコーラは言う。
普段ならクエタプノもそれ以上は突っ込まないが――今日は違った。
「……次に生きて話せるかどうか分かりませんので聞きますが……」
「？　何ですか？」
クエタプノは言う。一息で、
「僕に隠し事してますよね？」
「……さあ？　まあ人間なら隠し事の一つや二つ、あるものじゃないですかね？」

「……あくまでも、白を切るということですか……」
　そうやって煙に巻こうとするコーラに、クエタプノは吐息付きで続ける。それは彼が感じた疑問だ。
「じゃあ聞きますが……僕、ひょっとして死なないんじゃないですか？　勇者としての能力で」
「……へえ？　どうしてそう思ったんですか？」
　ほんの僅かにではあるが、コーラが興味のような、感情の色を見せる。それを一つの収獲としながら、クエタプノは続けて言葉を放った。
「前々から違和感はありました。明らかに死んでしまうような傷でも死ななかったり、気づけば治っていたり……極めつけはあの日、一週間もの間、気絶するほどの重傷でありながら、僕は生きて動くことが出来ました。治療をただ受けたにしては色々と不自然です」
　一週間も飲まず食わずでいれば、怪我がなくとも普通は餓死する。しかしクエタプノは、普通に動くことが出来た。考えればおかしな話なのだと、
「もし、本当に死なないのなら、レベルが最大まで上がった今、例え何度負けようとも挑むことが出来ますし、有利ではないかと思い今日にしましたが……この勇者の力、まだ不可解な事は多いです。なので、他に何か隠していることがあれば今言って欲しいです。魔王を倒す為にも」
「……」
　その真っ直ぐな言葉に、コーラは押し黙る。再び感情が読めなくなりながらも、クエタプノはじっと今まで旅をしてきた大事な仲間であるはずの少年を黙って見詰めた。
　そして約１０秒。視線が重なり続け――とうとう、コーラは観念したように息をついた。
「……ま、分かってることならしょうがないですね。――そうです。勇者は死にません。都合のいい偶然や見切りの力が勇者を守りますし、例えどうしようもない致命傷を受けても生き返ります」
「！」

その言葉に、予想はしていたものの僅かに目を見開いて驚くクエタプノ。
しかしそれは一瞬。直ぐに表情を普段のものに戻して頷いた。
「……そうですか。……他には何かありませんか？」
「んー、まあ一つだけ面白い力というか仕様はありますが……これは最後に教えてあげますよ。一応、勇者としての能力は今ので一応、全て教えましたしね。神に誓ってもいいです」
見切り。不死。不運と、いざという時の幸運。レベルが下がらない。勇者の剣が使える。異性にモテる。従者が現われる。
これで勇者の力は全てだと、コーラは言う。何かからくりはあるとは言うが、神に誓って本当の事なのだと。
クエタプノは目を伏せて少し考えた後、覚悟を決めた後、その息を呑んで頷いた。
「……分かりました。ならば行きましょう」
「納得してくれたみたいですね、勇者クエタプノ」
「……行きますよ」
「っと、急に素っ気なくなりましたね……」
そのコーラの言葉を、内心冷めた様子で聞きながら、クエタプノは崖下へ降りるため、宙に身を躍らせた。
疑惑はある。嫌な悪寒もある。しかし、こうなった以上は自分のやるべきことは変わらない。
クエタプノは人々を救い、戦いを終わらせるため、遠くに見えるその場所を空中から見据えた。
魔軍の本隊が集まり、周囲を固める旧東部オピロス帝国の首都、テラ・ユークリッド。
魔王ナイチサが拠点にし、死の街となった最後の戦いの場に、勇者クエタプノは向かったのだ。

勇者襲撃

そこは魔軍の本隊から少し離れた場所。
ケッセルリンク軍の魔軍司令部では、魔人レオンハルトが少し様子を見に来ていた。
「少しでも異常を見つけたら連絡してくれ」
「……ああ、わかった」
レオンハルトの念を押すようなその確認に、ケッセルリンクは僅かに疑問を覚える。
勇者という人間の強者の存在。それを確認したら自分に任せてほしいとレオンハルトは言う。魔人四天王の一人であるケッセルリンクにだ。
それを殊更誇るつもりはないが、実力にはそれなりの自負がある。それはレオンハルトも理解しているはず。
だというのに、それでも、とこちらに注意を促しにくる。それほどに、
「……勇者とは、それほどに危険な存在ということか？」
「ああ。勇者は侮れないし、何をしでかすか解らない。だから出来れば俺に任せてほしい」
ここに来たのも勇者の痕跡がないかと探しにきたためだと言う。それを聞いて、ケッセルリンクの使徒であるシャロンは口にした。
「……良かったですね、ケッセルリンク様。レオンハルト様は、ケッセルリンク様の事を案じておられる様子です」
「っ、それは……」
微笑ましいと言わんばかりの笑みで、ケッセルリンクに言うシャロン。ケッセルリンクからすればほんの少し、誂われたのではないかと感じてしまう自覚がそこにはあった。
つまりはその気遣いを嬉しく思っているということで、
「おじ様も、ケッセルリンク様のことが心配ですよね？」
「ああ、心配だな」
そうはっきりと口にされ、ケッセルリンクは少し頬を紅潮させてし

まう。
　言葉を言おうとして、飲み込んでしまう。しかしお礼は言わなくてはならない。だからケッセルリンクは小声で恥ずかしがりながらも、
「……ありがとう。その……その気持ちは、とても嬉しい」
　普段はもっとはっきりと言葉を尽くせるのだが、不意打ちだと狼狽えてしまうのが何とも情けない。
　しかし周囲はそうは思っていないようで、それを見ていたケッセルリンクの使徒達は沸いた。
「きゃー！　ケッセルリンク様可愛いですー！」
「こら加奈代！　ケッセルリンク様をからかうなって！」
「……ふふ、ケッセルリンク様も乙女ですから仕方ないですね」
　加奈代が騒ぎ、それをバーバラが注意する。そしてパレロアがやれやれと微笑を浮かべた。シャロンはケッセルリンクの隣でただただニコニコとしている。いつものことだ。
　だが、レオンハルトがそこで不意に気づく。その中に、ケッセルリンクの使徒であるもう一人が足りないと、
「そういえばエルシールはどこだ？　この間の寿司のお礼を言いたいんだが……」
「エルシールなら……あ、戻ってきました」
　シャロンが答えようとして、司令部に入ってくる影を見て取りやめる。レオンハルトも聞いた後、少しして気配を感じ取って気がついた。
　エルシールが何かを終えて皆の元に小走りで戻ってくると、
「申し訳ありません。遅くなりました」
「構わない。私達の為にやってくれていることだ」
「……何をやっていたんだ？」
　謝罪をして直ぐに許す使徒と主のやり取りを見て、レオンハルトが尋ねる。するとエルシールは昔とは違い、堂々とした様子で答える。懐から何かを出して、
「あ、はい。勇者に用心するよう言われたので、各所にワイヤートラップを少々設置しておきました」

そう言って取り出したのは極細の糸だ。
常人では目に見えるギリギリ。注意しておかなければ気づかない程度の細さの糸を見せて、説明する。
そして、そうは言いながらも少し自信が無さそうであった。真面目な、敵に対して警戒を見せる表情でエルシールは言う。
「もっとも、魔人級の強さを持つ人間に、どこまで通用するか……」
「……いや、念の為で動くのは大事だ。備えておくに越したことはない。やらないと可能性すらないからな」
「……お気遣い、ありがとうございます」
エルシールが一礼する。今語ったのは気休めというわけでもなく、レオンハルトの本心だ。
やっておらず、やっておけば良かったと後悔するよりは、やっておいて、意味が無かったと後悔する方がマシだ。
やれば通用するかはともかく、少しでも時間を稼げる可能性があるし、ともすれば有利に戦えるかもしれない。自分が間に合うとは限らないのだからやれることはやっておくべきだ。
もっとも、レオンハルトは身内の危険であれば意地でも間に合わせてみせる、と心に強く誓う。物理的に無理なこともあるかもしれないが、己の強さとここまでやり終えた備え、そして運を信じるのみだ。
しかし今の所、ここは大丈夫そうだな、とレオンハルトは息を入れて一先ず安心すると、続けてエルシールに向かって話題を変えた。
「そういえばこの前の寿司、俺も食べたが美味かったぞ。随分と腕を上げたようだな」
「あ……ありがとうございます。美味しく出来ていたみたいで……正直ホッとしました」
胸を撫で下ろすエルシール。その横からシャロンがいつも通り、内心が読めない微笑みで、
「それにしても不思議ね。エルシール、他の料理は出来ないのに……」
「うっ」
シャロンの言葉を皮切りに他のメイド達も、あー、とそれぞれがエルシールの壊滅的だという家事の腕を弄る。

「どれだけ教えても上手にならないのよね……」
「もうずっとメイド長さんに教育して貰うといいんじゃないですか？」
「エルシールの寿司以外の料理は、まるで食べれたものじゃないからねぇ……」
「そ、そこまで酷くないですっ！　食べれはします！」
先輩のパレロアはともかく、後輩２人にすら酷評されてエルシールが憤慨する。
だが事実、エルシールはメイドなのに家事がてんで駄目で、半ば他のメイドからは諦められていた。
それでも彼女が古株のシャロンやパレロアを差し置いてメイド長になったのは、メイドの中で１番戦闘力に長けていたことと、人に指示を出す様な、統率力が優れていたからだ。
実際、エルシールはメイド達に仕事を割り振ったり、仕事の指示、全体の管理などは非常に優れていて、メイド長さんからも認められているくらいだ。
だが今はそのメイド長さんの教育もあって、糸を得物に、戦闘力に更に磨きがかかり、ガルティアからも評価された美味い寿司が作れて、キャロルやバルカには敵わずとも、魔物界将棋連盟が発行する段位――四段になるなど、よく分からないが様々な能力を持つメイドになっている。
最近では歌とダンスを習い、演技力を鍛えられているらしいが、メイド長さんはこれ以上、エルシールをどうするつもりだろうか。マルチなスキルを身に着けるのはいいが、どう考えてもメイドとは別方向に向かってる気がする。
レオンハルトは誂われるエルシールを中心に賑やかな会話を行うケッセルリンクの使徒達を見て、踵を返そうとした。一応は声を掛けて、
「なら俺はそろそろ行く」
「……そうか。もう少し一緒にいたかったが……」
と、ケッセルリンクが中々にいじらしいことを言ってくれる。その

発言に苦笑しつつ、
「……そうだな。だが、今は少し難しい。バルカなどの大将軍は俺の権限で連れてこれても、魔王様の命令がある以上は、魔人をいたずらに戦場から離れさせるわけにもいかないからな」
「……致し方ない」
残念そうに、しかし納得するケッセルリンク。それを見て思わずレオンハルトは言った。励ますように、
「今度、また時間を作って遊びにでも行くか」
「！　あ、ああ……それは、是非、頼む……」
こちらの忙しさを知っているため遠慮がちではあるが、本心のお出かけしたいという欲求を抑えきれず、ケッセルリンクは約束を了承する。時折時間を作っては一緒に過ごしたりしているものの、出かける場合は皆で行くことも多いので、数としては少ない。
クールな印象の強いケッセルリンクだが、こういった部分はとても乙女らしさがあって強大な力を持つ魔人四天王ケッセルリンクとはギャップがある。レオンハルトとしては見慣れたものだが。
とりあえず、今日のところはやるべきこともあるし、心配事もある。なので一旦別れを告げようとしたところで、
「――レオンハルト！」
不意に、司令部に響き渡ったのは、いきなり現れたハンティの声だった。
ほんの一瞬皆が身を固くしたが、それが瞬間移動で移動してきたハンティだと分かると、警戒を解く。だがその切迫した様子に、レオンハルトは真剣な顔つきをハンティに向ける。
「……どうした？　まさか――」
まさか、と次に続く言葉を放つ前に、言葉を待つのも惜しいとハンティは即座に告げた。
「――本陣に勇者が現れた！　今皆で対応してるけど長くは保たないよ！」
「！　よりによってこのタイミングでか……！」
言うが早いか、レオンハルトは駆けた。

魔軍本隊への勇者の襲撃。
遂にその時が来たのだ。

――それはハンティが、レオンハルトに勇者の襲撃を告げる少し前。

以前はやることがないとは言ったものの、いる以上は仕事を任される。魔物大将軍達は街の外れの平野で布陣する新兵の部隊を中心に、ちょっとした軍事教練を行っていた。

「全体、止まれ！」

リーが声を跳ね上げると、魔物兵達が動きを止めてその場に停止する。魔軍ではあまりやらない新兵訓練だが、レオンハルト軍では所属する際に必ず訓練を受けるよう義務付けられている。

魔物は生まれながらの戦闘種族であり、同時に、魔物兵スーツによる力量や特性の固定化、魔物将軍らの統率能力があるため、特に集団行動の訓練は必要とされていないと見られていた。

それを変えたのがレオンハルトであり、かの魔人は、同じ魔物兵でもやはり訓練を行った方が連携などの動きが良くなるし、平均的な強さも多少は上がるだろうと己の権限を使って珍しく強行した。

レオンハルトが行った指示の中では、珍しく魔物には不評であったが、訓練を受けねばあらゆる面で恵まれているレオンハルト軍に入れないのと、訓練を続けて強くなったことで、面倒だが差し引きでプラスになることに気づき、これはこれでいいと結局は受け入れられる。面倒がるのは大体、魔軍に入ったばかりの新兵だ。

だからここでリー達は、この機会に訓練に力を入れようと努力する。バルカも手伝っていた。コウウはきゃんきゃんと一緒に見ているだけだが、魔物大将軍がいるというだけで言うことを聞かねばと戦々恐々とするので、一応役には立っていた。

だが、リーはふと声を掛けることもある。訓練の合間だが、だからというわけではなく、前からたまにやっているのだが、

「……コウウよ」

「ひっ!?　な、なんだよリー……？　まさか俺を――」
「何もする気はない。近づかないからそのまま聞け。……そろそろ、自信を取り戻したらどうだ？　私達もレオンハルト様も、お前を害する気はないし、このまま何もしなければお前の立場がもっと悪くなってしまうぞ？」
　それはコウウに対する励ましのような言葉だった。
　同じ魔物大将軍として、出来れば立ち直ってほしいと言う。別にバルカとは違い、仲が良いわけではない。むしろ嫌われているだろうし、リーからすれば、そのようなことはレオンハルトに頼まれてすらいないのだが、以前と比べておどおどしたコウウは非常に仕事がやり難いし、さすがに気の毒だと声を掛ける。
　しかしコウウは後退りながら声を大きくした。
「そ、そんなの信用出来るかってんだよ！　そうやって油断させて殺るつもりだろうが！」
　聞く耳を持たないコウウの疑心暗鬼に、リーは、またその言い分か、と半ば呆れ返る。そしてふと疑問を覚え、それを問いかけた。
「……何故そんなことを思う？　私とお前では、お前の方が強いし、特に脅した覚えも、私にはないのだが……？」
「っ、それは……」
　問うと、コウウが僅かに怯んだ。言い淀むような様子。その反応に、その部分を突けば解決策が見つかるやもとリーはじっとそれを待つ。するとコウウが、やはり怯えた様な態度で、
「……い、今まであんなに横暴に振る舞ってたっていうのに、う、恨んでねぇはずがねぇだろうが!?」
「！」
　コウウのその言葉、その真意を読み取り、リーはようやく得心する。それは、
　……なるほど、自分がやってきた振る舞いに対し、周りが怒ってないはずがないと思っているのか……。
　確かに、こうなるまでのコウウは何というか、他者の気持ちを考えない嫌な奴ではあった。横暴で我儘、自己中心的な態度は、組織とし

ての和を乱すため、リーはあまり好きではなかったのも確かだ。他の者達も、コウウを好んでいたものは殆どいないだろう。彼の直属の部下ならどうかと思うが確証はない。
それをコウウは自分でも理解しており、そのため報復に遭うのではと怯えている……そうリーは解釈した。
「コウウちゃん……」
「……」
「……なるほどな」
傍らにいるきゃんきゃんが、コウウを心配そうに見詰めている。それを視界に映しながらもリーは、コウウに理解をし、言葉を尽くす。率直な気持ちで、
「……確かに、お前の態度はいつも直線的というか乱暴だったな……」
「……ほら見やがれ。テメェも、俺のことを――」
と、続ける言葉をリーは遮った。
「だが……以前の方が、お前らしかったと、私は思う」
「……は、はぁ!? 寝ぼけてんのか!?」
そうかもな、とリーは僅かに自嘲するような笑みで言う。
「こういうのは柄じゃないはずだが……私も歳か。寿命が近づいて、仕舞い込んでいた言いたいことを我慢せずに言った方がいいのではと思ってしまってな……」
「……何を言ってやがる」
リーは告げる。疑念に満ちたコウウに対し、仕舞い込んでいたものを、
「……はっきり言って、私はお前が羨ましかったよ」
「……は?」
コウウは予想外の言葉を耳にし、唖然と声を返す。直ぐには理解出来ずに時が止まるが、少しして理解すると、声を跳ね上げて言った。
「な、何言ってやがる!? どうせ嘘だろうが! レオンハルト様に気に入られて何の苦難もないテメェが、羨ましく思う要素なんて一つも――」
「お前は強いだろう?」

「っ、それ、は、そうかもしれねぇが……」
だろ？　とリーは同意させるように言う。苦笑というか、自分の情けなさを暴露するようで嫌ではあるが、
「私は……レオンハルト様に重用されてはいるが、実のところ……何もない。だからお前や……お前以外の大将軍が羨ましかった」
「……何もないこたぁ――」
「そんなことはない。私には、お前の様な強さや、バルカの様な卓越した知略も持ち合わせていないし、ヴラドのような自分を曲げない誇り高さもない」
そう、自分が1番よく理解している。
レオンハルト様の役に立つには言うことを聞いて無難にこなせばいいと、自分を納得させてきた自分が1番よく分かってるのだ。
「私にお前達の様な強みが一つでもあれば……私はレオンハルト様の役に、もっと立つことが出来たと……そう思ってしまってな。実を言うとずっと必死だった。せめてお前達に負けない様に、真面目に頑張ろうとな」
使徒の方々も羨ましいが、あちらは使徒だ。だから諦めがつく。
しかし同じ大将軍だというのに、どうしてここまで違うのかと。同種族に負けたくはない。負けたくはないが、能力の低さを、心の奥では認めてしまっているのだ。
だから真面目に努力することでその差を少しでも埋めようとした。少しでも追いつこうと。しかし、
「だが、どうにも性分なのか、私は周囲を放ってはおけない部分があるらしい。自分のことに集中出来ず、いつも周りを見渡しては、心の中で人の事を考えている。仕事を円滑に進めるためというもっともらしい言い訳はあるが……それよりも自分の事に目を向けるべきなのにな……」
「……」
とうとうコウウは黙る。何を考えているのだろうか。それを読み取ることは出来ない。
だが、己の内側だけは悔いのないように伝えておこうと思う。

「……一つ、はっきりしているのは……私は、存外にお前達のことを羨ましく――そして、好ましく思っていたらしい」
「っ……」
「ふ、魔物達に恐れられる魔物大将軍らしくないだろう？　結局のところ、私はそういうものなのだ。魔物大将軍としては中途半端な、成り上がり者に過ぎない」
自嘲の言葉は止まらない。結局千年以上経っても、この性分は変わらなかったな、と残念に思う。
「言いたいことはそれだけだ。私はお前を、どうしようとも出来んよ。別に嫌ってもいない。……だから気にするな」
そう言って、リーはその場から離れた。これ以上はコウウを困らせるだけになるだろうと。
だがそれを押しても、ここまでは。己の内側だけは最後に告げておきたかった。
自分の欲求に素直になるなど、ようやく魔物らしくなれただろうかと思う。
そうしてリーが、再び訓練の場へと戻ろうかと思った直後――
「ぎゃあああああ!?」
「！　何だ!?」
突然魔物兵のものと思わしき断末魔が響いたことで、リーは瞬時に意識を戦時のものに切り替える。声のした方向を向いてみれば、同じ様な断末魔が連続し、
「リー閣下！　大変です……！」
「！　――将軍！　何が起こった!?　敵襲か!?」
こちらに走ってくる副官の魔物将軍。訓練のためにとこちらに一緒に来ていたのだが、
「はぁ、はぁ……先程、勇者が――」
と、息も絶え絶えに、報告を行おうとした直後、
「あ――」
「！　将軍っ!?」
魔物将軍は、飛んできた槍に身体を貫かれ、即死した。

何が、と槍が飛んできた方向を見ると、魔物兵が応戦し始めたその中心に、一人の人間がいた。
ブロンドの髪をした女顔の男。騎士のような、冒険者のような出で立ちで、光の剣を持ったその男は、魔物大将軍であるヴラドを殺した

「勇者……！」
「……！」
魔物兵の大群を、一人で蹴散らすその男、こちらを遥かに越える実力の持ち主を見て、リーは戦慄した。

「……魔物大将軍ですか」
「ぐ、まさか勇者がこんな場所に……！」
突然に戦場となった平野で、リーは勇者と対峙した。
見れば他の大将軍、バルカも騒ぎを聞きつけて、
「……！　驚いたな。まさか魔軍の本隊が駐留する街に、単騎で奇襲を仕掛けてくるとは……その強さは本物であったか……！」
勇者を前に身構える。この場には魔人も使徒もいない。多くは本城、魔王がいる街の中心部にいるため、今は魔物兵の他に勇者と戦えそうなのは魔物大将軍の三体しかいないのだ。
しかしヴラドを一瞬で片付けた勇者に対し、幾ら三体とはいえ、どこまで食い下がれるかは解らない。
それにそもそも、その内の一体のコウウは、
「あ、ああ……ゆ、勇者……!?　勇者が、俺を殺しに……！」
勇者を見て、怯えた様子で腰を抜かしており、使い物にならない。
リーとバルカは、勇者を前にして一瞬だけ目を合わせ意志を疎通する。無論、負けるつもりはないが、こうして目の前にしてみると勝てる可能性は低いとお互いが思い至る。
ならば魔軍として最優先すべきなのは、誰かを街まで送り、その間に魔人――確実なのはレオンハルトか、誰かに来てもらうことだ。
もしかしたら魔王が来る可能性もゼロではない。そうなれば自分

達も命を繋げる。
全員で逃げることはあり得ない。魔物大将軍として、この場の魔物兵達を統率しなければならない。将が生き残ることを優先したいのは山々だが、この場にいる魔物兵は少なくはない。勇者一人が現れたからと兵を見捨てて逃げては魔物大将軍の名折れだ。
だから2人は、その両方の案を取るため、同時に背後に声を掛ける。振り向くことなく、
「――コウウ！　逃げろ！」
「……あ……？」
てっきり戦えと言われると思ったコウウは、二体の魔物大将軍の言葉に呆然と二体を見る。しかしこちらを見ることはなく、
「早くしろ！　逃げて、魔人の方々を呼んでこい！」
「あるいは魔王様でもよいぞ！　その方が確実であるからな！」
「だ、だがよ……」
怯えてはいても、直ぐに逃げることは気が引けたのか、コウウは戸惑う様子を見せる。それを背中で感じた二体は、更に大声で、
「いいから逃げろ！　死にたいのか!?」
「……っ！　く、くっ……！」
その声に弾かれるようにして、コウウはその場から逃げていった。傍らのきゃんきゃんも連れてだ。
コウウの気配が遠ざかるのを背中で感じて、リーとバルカはほっと息をつく。
まだ少し魔物兵の群れがあるため距離はあるものの、直ぐに勇者はここに到達するだろう。
しかしその後も耐えなければならない。周囲では魔物将軍や魔物隊長が必死に声を張り上げて魔物兵を動かしているが、焼け石に水か、近づいたものから殺される有様だ。
「……ふ、ふふ、本当に魔人の……それも魔人の中でも上位に匹敵する強さに見えるな、リーよ」
「……そうだな……人間だからとて、油断は出来まい」
バルカはあまりの不条理さに笑い、リーは身を引き締める。そんな

真面目なリーに、バルカは不意に言った。
「……お前も逃げたらどうだ？」
「！　馬鹿な事を言うな！　お前や兵達を置いて逃げるなど……」
「――そう、そこだ」
　と、突然言葉を遮るようにはっきりと断言したその言葉に、リーは思わず面食らう。
　前方に脅威が迫り、もはや一刻の猶予もないなかで、バルカは重要な事なのだと告げた。
「先程の話……少し耳にしたが、確かにお前は魔物大将軍らしくはない。他者の事を、慮り過ぎる」
「……それが……そんなことは理解している！　今はそれよりも――」
「実を言うとな。私はな、リー、お前の事が好きではなかった」
「っ！　そ、れは……」
　突然のカミングアウトに、リーが動揺する。それを面白そうに感じたバルカは、少し説明するように、
「いや……というより、お前が特殊なのだ。私も含めて、他の大将軍も、自分が1番で、他の大将軍など、皆邪魔だと思っている。私も自分が1番天才だと思っていたし、今もそれは変わらないが……昔は、どうにかして亡き者に出来ないかと考えたものだ」
　初耳だった。バルカとは、友人同士だとリーは思っていたからだ。
　それだけに衝撃を受けて、リーは押し黙る。今度はリーが狼狽える番だった。
　しかし、
「だが気がつけば、私は、お前と友人の様になっていったし、他の大将軍とも、気がつけば普通に何の企みもない他愛のない会話を行えるようになっていった。あの二体とも、お前は随分と打ち解けていたな」
　一転、バルカはリーを見て、苦笑するように告げる。急に褒められたように感じ、リーは動揺しながらも答えた。
「私は……いっぱいいっぱいだっただけだ。お前達を越えようと……」

「そう、それだ。お前のその謙虚さや、周囲を慮る姿勢や気配り。それが私を……私達を変えた」
「……！　私は、何も――」
「しているのだよ。その協調性……和を整えようする態度、統率力とでも言おうか。お前はそれに優れている。こうして、大将軍同士で協調することなど、出会った当初は考えられなかったことだ」
そんなことはない、とリーは言おうとして、しかし言えなかった。
バルカの言葉が、真に迫っていたからだ。自分と同じ様に、心に秘めていた事をようやく口にしたのだ。
なるほど、これは否定したくなる。先程のコウウの気持ちが少し理解出来た。
だが、相手は真剣だった。異を挟むことが出来ないほどに。例え本人に否定されても、他でもない自分がそう思っているのだと、譲らない姿勢だ。
「天才の私が言うのだから間違いない。コウウだって、先程は何も言わなかったがそう思っているだろうし、ヴラドは……あいつはプライドが高いから素直に口にはしないだろうが、認めているはずだ」
でなければ、会議の時にお前を立てるようなこともしないし、言うことを聞くこともしないと、バルカは言う。
皆リーの能力を認めているからこそ、対等に付き合うことが出来たのだと。
そしてだからこそ、バルカは友人と認め、言う。それは、
「だからリー。お前も逃げろ。ここは私一人で充分だ」
「！　馬鹿な！　それでは作戦が――」
「作戦などどうでもよい。私は……お前に、少しでも長く、生きていてほしいと思う」
「――――」
バルカのその言葉に、途轍もない衝撃を受ける。
あのバルカが、作戦など、どうでもいいと。
それよりも、自分の命が大事だと――そう言うのだ。
バルカは自分で告げた言葉を、可笑しく思ったのか、自嘲するよう

に苦笑を浮かべ、
「我ながら、天才の私らしくないとは思うが……初めて出来た唯一の友人を、みすみす死なせたくはない。だから……後生だ。お前も逃げろ」
「っ……！　そんなことが、出来るはずが……！　せめて二体はいなければ、ヴラドと同じ様にやられて――」
その時だ。声が聞こえたのは、
「――だったら、やっぱり俺がいりゃあいいだろうが!!」
その声は、覇気に満ち溢れた荒々しい声だった。
聞き間違うはずもないその声に、リーとバルカは思わず、勇者が迫っているのにも関わらず、背後を振り返ってしまう。
「……！　まさか……」
「……これは驚いたな……」
そこにいたのは、やはりと言うべきか、
「コウウ……！」
怯えて逃げていったはずの――コウウだった。

――コウウは、リーとバルカの大声に弾かれるように逃げた。
後方には勇者がいる。あのヴラドを一瞬で殺したという人間の実力者だ。
そう、あの自分をいとも簡単に退けた藤原石丸と同じ、人間の実力者。
……怖い。
世界の広さを知り、コウウは恐怖した。
……俺如きじゃ、どうにもならねえ。
だというのに、横暴に振る舞い続けた自分は、多くの者達に恨まれており、いつ殺されてもおかしくない立場なのだ。
……俺は失敗した……。
失態を犯した。いつ処分されてもおかしくない。今は辛うじて生きているが、次に失敗したら自分は確実に処分されるだろう。

……俺を慕う奴なんて、誰もいやしねぇ……。
他ならぬ、自分がやったことだ。
天上天下唯我独尊。コウウは、自分のことを天下を取る器だと思っていた。
魔軍の頂点、魔物大将軍として生まれ、しかもその中でも最強の強さを持って生まれた。戦えば戦うほど強くなったし、魔人にも負ける気はしなかった。
あんなのは無敵結界が強いだけだ。無しで勝負したら、俺の方が強い――そう思っていたこともある。
だから魔人にさえなれば、自分はもっと強くなれると思ったし、魔人や使徒を除けば、魔物の中でも頂点の強さを持つ自分が、魔人になるのは当然だとも思っていた。
己の強さを疑わず、誰よりも自信に満ちあふれていた……己の汚点。忌まわしき過去だ。
今となってはそんな野望も、力に対する自信も、全てが綺麗さっぱり消え失せた。
自分は弱い。個人としてはそれなりに強くとも、やりようは幾らでもあるし、自分より強い奴も多くいる。
今襲いかかって来ているという勇者だってそうだ。己を越える強さを持つであろう人間。そんなのに立ち向かい、無残に死んでしまうのは馬鹿なことだ。
だから逃げる。逃げて、他の者にやってもらう。リーやバルカ、他の魔物達に目もくれず。
その判断に、疑いはなかったはずだった。コウウは迷わず真っ直ぐに街に向かって逃げた。逃げようとして――止まった。
それは、脇に抱えたものが逃げたせいだ。
「！　きゃんきゃん！」
不意に脇から逃げ出したのは、女の子モンスターのきゃんきゃん。
最弱の女の子モンスターであり、コウウが一緒にいて、唯一安心出来る存在だ。
そんな彼女が脇から離れ、その場に立ち止まる。

「ど、どうした……？　お腹でも痛いのか……？　は、早く逃げようぜ。逃げねぇと、俺もお前も死んじ――」
「――わたし、戦ってくるね！」
「……は？　……え？」
元気よく、普段通りに狂ったことを言ったと、コウウは戸惑う。
しかしこちらが頭に疑問を抱いているとはいざしらず、きゃんきゃんはこちらに向かって眉を立てて告げる。
「コウウちゃんは逃げていいよ！」
「！　な、何言ってやがんだ！　た、戦うなんて……んなもん、自殺行為だぞ！　お前が行ったって、何の役にも……」
しかし、きゃんきゃんは困ったように苦笑しながらも頷いた。分かっていると、
「うん、わたし弱いからすぐにやられちゃうかも。……だけど、駄目だよ」
「何がだ!?　弱いなら逃げてもいいじゃねぇか！　なあ、一緒に逃げようぜ！」
しかしコウウの説得にも耳を貸さず、きゃんきゃんは首を振る。そしてこう言った。
「だって……わたしの仲間は、沢山戦ってるから……それを見捨てるなんて出来ないよ」
「っ、それは……」
確かに、それはそうかもしれない。
きゃんきゃんとて、魔軍に所属する魔物兵の一員だ。
魔物兵の中には男の子モンスターだけでなく、女の子モンスターだって多数存在するし、その中にはきゃんきゃんだっている。
コウウはそれを知っているし……何より、このきゃんきゃんも、そんな魔物兵の中から一匹を連れてきただけのはずだ。
だから彼女の仲間がいるのは確かなのだろう。だが、
「……だけど、お前が行ったって結果は変わらねぇ！　あの勇者だとか言う化け物に、皆殺されちまうだけだぜ！　全員無駄死にだ！」
「えへへ……そうかもね」

「そうかもねじゃねぇんだよ！　いいから逃げるぞ！　無駄に死ぬことなんてねぇんだ。弱いってんなら、逃げたって誰も文句は言わねぇ。しょうがねえなってなるだけで――」
　だが、きゃんきゃんは言った。コウウに屈託のない純粋な笑みを向けて、
「――心配してくれてありがとう、コウウちゃん」
「っ！　べ、別に、心配なんか……して、は……」
　してない。そう言おうとして、言えない。
　明らかに心配していたからだ。死んでほしくないと、心が認めていたからだ。
　だからこそ、コウウは二の句が継げずに押し黙ってしまう。
　そんなコウウを、きゃんきゃんは慈愛に満ちた表情で見詰めて、更に告げた。
「……わたし、コウウちゃんと遊べて楽しかったよ」
「！　……何を……」
「コウウちゃん、凄く強い魔物なのに、わたしのこと気遣って、いっぱい遊んでくれたよね」
　だから、と。
　きゃんきゃんは最後に満面の笑みで、
「――ありがとね、コウウちゃん！」
「――」
「じゃあわたし……行くねっ！」
　そう言って、きゃんきゃんは踵を返して、勇者の元に、仲間の元に向かった。
　その場にただ一体、残されたコウウは、去っていくきゃんきゃんを引き止めることも出来ずにその場で立ち尽くす。
　……何がありがとうだ……。
　遊んでくれて楽しかったとか言ってたが、そんなのはただの暇潰しで、自分を慰めるためにやっていただけのことだ。別にきゃんきゃんと遊びたかったからやっていたわけじゃない。自分を襲う可能性がない相手なら誰でも良かった。

……勝手にしやがれ……。
別にいなくても困らない。他の奴を探せばいいだけだ。
魔物大将軍も勇者の襲撃で自分以外は皆死ぬだろうし、ある意味では自分の天下だ。残り短い寿命だが、前みたいに横暴には振る舞わずとも程々にやっていけばいい。
きゃんきゃんの代わりだって見つかるし、仕事だって、あいつらが死ねば他の大将軍もそのうち生まれてくるだろう。
……俺はどうせ、一人だ……。
そう、ひとりぼっちのはずだ。
自分が死んだところで悲しんでくれるものはいないはずだし、自分のことを想ってくれるものはいない。自分は嫌われ者だ。
――だと言うのに、どうしてこんなに悲しいのか。
自分のことを嫌いではない、羨ましいと言ってくれたリーや、最後には逃げろとこちらが生き残ることを優先したバルカ。
そして自分と遊べて楽しかったと、ありがとうと言ってくれたきゃんきゃんも、皆これから――勇者の手にかかって死んでしまう。
どうにもならない。勇者に勝てるはずがないのだ。
――なら、なぜ……自分の手は震えているのか。
それが許せないと。認めたくないと。どうにかしろと。己の内側が荒れ狂っているのか。
どうして彼らを死なせたくないと憤っているのか。その答えは、簡単なものだ。
――自分は彼らを、大切に想っているのだ。
少なくとも、己の心を奮い立たせるくらいには。心を動かしてしまうくらいには。
「……はっ……どうしようもねぇなぁ……俺……」
かっこ悪すぎる。最弱の女の子モンスターを先立たせて、自分はさっさと命惜しさに逃げようとしている。
昔の自分なら考えられない行動だ。指差して笑うだろう。
臆病者が。俺を誰だと思ってやがる――と。
俺は最強の魔物大将軍だ。誰が俺に敵う？　魔人だっていつかは

ぶっ殺してやらぁ。
そうやって臆病だと笑う者は誰だ？
――他ならぬ、過去の自分だ。
「……くそったれが……情けねぇ……」
昔の自分なら、自分より強いと聞いた相手でさえも、恐れずに立ち向かっていた。
なら、出来るはずだ。
あんなに弱いきゃんきゃんですら、戦おうとしている。無駄だと理解しながらも、仲間を救いたいからと戦場に向かっている。
この世は戦わなければ生きてはいけない。しかし戦ったとしても、弱者は生きていけないこともある。
なら、それなりに強い自分ならどうだ。
少しでも、何かを成せるんじゃないのか？
例え相手には勝てずとも、腐れ縁の仲間二人と、女一人くらい、逃して守り切ることが出来るんじゃねぇのか？
「それくらいやんねぇで……何が最強の魔物大将軍だ……！」
コウウは背に背負っていた槍を手に取る。
己が千年近く使ってきた愛槍だ。石丸に負けて、怯えるようになっても、これだけは手放さなかった。
それをコウウは、力任せに、地面に向かって叩きつける。
「こんの……馬鹿野郎がああああああああああああああああああああああ!!!」
力任せの一撃は、自分の情けなさに当てたもの。
最強の自分に戻るための一喝のような一撃。
地面にクレーターを作るその破壊力は、きゃんきゃんや、他の魔物大将軍では出せない強さの証明だ。
「……うし、戻るか」
コウウは槍を肩に背負ったまま、踵を返して戦場へと舞い戻る。
途中で、直ぐにきゃんきゃんには追いつき――謝った。
もうそこに、情けないコウウの姿はなかった。

戦場に戻ってきたコウウは、勇者に向かって対峙しながらも他の魔物大将軍二体に向かって告げる。
「つーわけで、俺がいるから問題ねぇだろ？　お前ら二人とも揃って逃げろ」
「コウウ……お前、立ち直ったのか……！」
リーが思わず感動した声を上げるが、コウウは鼻を鳴らして素っ気ない態度を取りながら言う。
「ふん、ちょっと休憩してただけだ」
「随分と、長い休憩だったな？」
「っ、うるせぇぞバルカ！　いいから足手まといどもは逃げやがれ！　あの勇者――なんて言ったか。……おいテメェ！　名を名乗りやがれ！」
バルカの言を突き放した後、コウウは勇者に向かって大声で問いかける。すると立ち塞がっていた魔物を、ちょうど屠り終えた勇者が前に出て言う。
「……クエタプノと言います」
「クエタプノか。はっ、弱っちそうな名前だぜ！　到底俺に勝てるとは思えねぇな！」
「……行きます」
クエタプノが無言で、剣を構える。
そして一閃。かなりの速さで放たれた剣は、正に魔物大将軍を一刀に斬り伏せてしまう鋭い一撃だ。
しかし、
「――しゃらくせぇ！」
「っ！　なるほど、やりますね……」
コウウは槍でその剣を見切ると、その力でクエタプノを跳ね返してしまう。
力で拮抗されたクエタプノが思わず称賛の言葉を浴びせる中、コウウは、そら見たことかと他の奴らに言い放った。
「今ので分かっただろ？　あいつは俺一人で充分。俺がこの槍で勇者

とかいうふざけた野郎をぶっ殺してやる。だから……お前らが逃げろ」
「それは……」
　リーが躊躇いを見せる。それに、コウウは自信満々になるが、対するバルカが、ふむ、と思考すると、
「……なら任せるか。行くぞ、リー」
「え、そんなあっさり……いいのか？」
　バルカの急な態度の変わりように、リーが、あれ？　と首を傾げる。それを見て、コウウが怒りをぶつけた。
「くぉらバルカ！　テメェ、少しは躊躇しろよ！　テメェらの代わりに残ってやろうってのに、直ぐに行こうとする奴があるか！」
「いや、別に私は、リーとは友人でも、お前とは友人になったつもりはないからな……ならば作戦を優先するのみだ」
「ぐっ……どこまでも可愛げのねぇ奴だ……もういい！　さっさと行っちまえ！　スケールのデカイ俺は、そんなテメェだってついでに守ってやらぁ！」
　憤った様子で闘気を高めるコウウに、勇者が警戒する間、リーとバルカは行こうとして――しかしバルカが先に告げた。
「……死ぬなよ、コウウ」
「！　……当然だろうが！　俺を誰だと思ってやがる！」
　おら、テメェら言ってみろ！　と、コウウは二体だけでなく周囲に残る魔物達全員に向かって叫ぶ。
　するとまず最初に彼女が叫んだ。途中でコウウに拾われた、女の子モンスターのきゃんきゃんが、
「魔物大将軍最強のコウウちゃん！」
「へっ……そうだ！　ほら、テメェら！　もっと俺様のテンションを上げろ！　そしたら、俺はもっと強くなるぜ!?」
　コウウの言葉に、次に告げたのは魔物大将軍の二体だ。二体は苦笑混じりに、
「……魔物大将軍最強のコウウ」
「……大将軍最強のコウウだ」

「ははははは！　ようやく認めたなテメェらも！　よし、お前ら、俺を応援してろ。そしたらこいつをぶっ殺してお前達も守ってやらぁ！」
そして、彼らは少しずつ、声を上げる。
「魔物大将軍最強のコウウ様……」
「大将軍最強のコウウ様……！」
「最強の魔物、コウウ様だ……！」
誰もが、それを認める。
魔人や使徒を除けば魔軍最強の魔物こそ、魔物大将軍のコウウだと。
「コウウ様に栄光あれ！」
「コウウ！　コウウ!!」
そのコールに、コウウは自分の中の力が最大限まで高まるのを感じた。
「よっしゃーーー!!　おら、テメェ！　覚悟しろ！　絶対にぶっ殺してやらぁ!!」
「……出来るといいですね」
と、魔物大将軍コウウと、勇者クエタプノはぶつかった。
危機であることには変わりがないものの、彼らにとっては、時間を稼ぐための希望にして、もしかしたら本当に倒してくれるかもと希望を見る――救世主に他ならなかった。
――だが、彼らは知らない。勇者の強さ。その特性を。
「……何も知らずに……人間も馬鹿ですが、魔物も中々に馬鹿ですねぇ……」
遠くからその戦いを見る神は、それすらも絶望を彩る材料だと、彼らを嘲笑っていた。

最期の願い

魔軍の本隊が占拠する東部オピロス帝国の首都。
そこに、ある報告が届いたことで、皆が血相を変えた。
「勇者が来たって!?」
「は、はっ！　街の外れに奇襲を掛けてきたようです！」
魔物将軍の慌てた報告に、ハンティが窓の外に広がる街を見て、歯を噛みしめる表情を取った。
視界の中央、街の外れに当たる部分に映るのは、魔物兵の群が削られ、割れるかのように別れていく有様だ。
地面に亀裂を入れたかのような魔物兵の動きは、あの中心に凄まじい強さを持つ敵がいることを意味する。
つまりは近づけないほどの強さ。そういうことだ。そして魔軍に敵対する人間の中で、あそこまでの所業を為せるのは、勇者しかいない。
「うっわ……あれ、ヤバそうっていうかマズそうですねぇ……今はレオンハルト様もいませんし……」
ペールが頬に汗を掻き、引き攣ったような笑みで言う。その隣から、窓の外を覗き込んだキャロルも、手を額に水平に当て、敬礼のような遠くを見るようなポーズを取ると、
「凄くやられてますわ!?　あっちにはリーさん達もいますのに……！」
魔物大将軍が街の外れで訓練を行ったこのタイミングでの襲撃。随分と、勇者というのは運が良いらしい。
直ぐに対応しなければならないと、向き直った使徒達は、報告に来た魔物将軍の窺うような視線を受けて、話し合った。
「レオンハルト様はケッセルリンク様のところにいるはずですよう！」
「なら、あたしが伝えてくる！」
言うが早いか、ハンティが一瞬で姿を消す。ここからケッセルリンクの場所まではそこまで距離があるわけではないが、さりとて気軽に

行けるほど近いというわけでもない。
一瞬で移動出来るハンティに任せるのが一番早く、また、確実だ。
残ったキャロルとペールはお互いに顔を見合わせ、
「とりあえず、全軍に通達致しましょう！　勇者を迎え撃つのですわ！」
「もしもの時は、ひょっとしてペールちゃん達が相手にしなきゃならないんじゃ……魔王様にお願い出来るわけもないし……ヤバいですよう……！　――あ、でも始祖様も一緒なら何とかなりますかね……？」
だが、ハンティが直ぐに戻ってくるだろうことに気づき、ペールは落ち着いて思案する。
ハンティが戻って来た後に全員で相手すれば何とかなるかもしれない。
確実なのはレオンハルトが相手をすることだろうが、レオンハルトが直ぐに来るかどうかは分からない。
瞬間移動でハンティは移動出来るが、アレは他人と一緒に移動させるのは危険だとも聞くし、ハンティもそのため他の者と一緒に移動することはしない。
しかしレオンハルトであればそれを押しても、移動して来るかもしれない。
それを思いながらも、街の外れには間に合うのか微妙なところだ。
特にあの様子だと、魔物大将軍が生きているかどうかも怪しいが、それを言って士気を無闇に落とすことはない。確証が取れるまでは明言を避けるべきだ。
だがキャロルなども、それを分かってか表情を硬くして、魔物兵達に指示を飛ばしている。普段はああだが、仲間想いなところもある。心配しているのだろうと推察出来た。
ペールとしても心配ではあった。だからこそ、どうか間に合えと心の中で祈る。
……レオンハルト様なら……！
自分達の主なら、間に合わせる。それを信じることにして、ペール

はキャロルと共に、やるべきことに取り掛かった。

街の外れ。
ほんの少し前まで鳴り響いていた激音と大気の振動は、突如として鳴り止んだ。
それを合図に、周囲でそれを固唾を呑んで見守っていた魔物兵達は、乾いた喉から結果を口にする。
「こ、コウウ様が……負けた……？」
「か、勝ったかと思ったのに……！」
それは、勝負の決着を示すもの。
地面に倒れた巨体の魔物と、未だ立ち続ける人間に、魔物兵達は堰を切ったように声を上げた。
「う、うあああああ!?　あ、あの人間、化け物だ！」
「死んだかと思ったのに生き返りやがった!?」
「か、勝てるわけがねぇ！　誰か助けてくれ……！」
「に、逃げないと……！」
魔物兵達が、眼の前で魔物大将軍を失いパニックになり、思い思いの行動を取り始める。
逃げる者、立ち尽くす者、押し合いへし合いになって喧嘩をする者達。実力主義の魔物達にとって、自分より圧倒的に強い相手が負けたとなると、誰もが戦意を失う。
それが魔物大将軍最強のコウウともなれば尚更だ。残った魔物兵達は勇者から逃げるようにして散り散りばらばらになっていく。
それを勇者クエタプノは、直ぐに追いかけることはなくじっとしていた。傷の具合を見ているのだ。
やがて魔物兵達がいなくなると、傍らに従者であるコーラが現れた。地面に倒れた大柄の魔物を見て、
「随分と手こずっていましたね」
「……」
クエタプノは無言だが、肯定する雰囲気を見せる。コーラは続いて

言った。それはクエタプノの傷の理由だ。
「まさか、本当に一回殺されてしまうとは思いませんでしたよ」
「……彼は、僕が思ったよりも強かった。想定以上の力を出した。――それだけですよ」
そう、クエタプノはコウウによって、一度殺された。
力量は完全にクエタプノの方が上であったが、それでもコウウは食い下がり、必殺の一撃を以てクエタプノを一瞬だけ上回ったのだ。
魔物大将軍程度なら以前も一瞬で倒したのだし、余裕かと思っていたが、
……彼、強かったですね……。
勇者の不死の特性が無ければ、自分は負けていたのだ。
明らかに勝勢だったのにも関わらず、自分は魔王どころか魔人でない相手に負けてしまった。
これではいけない。自分はもっと、強い相手をこれから相手にしなくてはならないのだ。
改めて、身を引き締める必要がある。自分は勇者なのだ。
死なないとはいえ、本来であれば一度たりとも負けることは許されない。
心にそう刻み込むと、クエタプノは残りを倒さないと、と前に進もうとした。しかしコーラが、
「……ところで、あれは殺さないんですか？」
「……あれ、は……」
コーラが視線で示す先、コウウと名乗った大将軍の傍らに一体の魔物がいた。
女の子モンスターであるきゃんきゃんだ。先程から疑問だったが、彼女だけは、魔物兵スーツを着ておらず、そのままの状態でいる。
最弱と名高い魔物。それを見て、クエタプノはコーラの問いに答えた。
「……害は――」
「あれも魔物ですし、一応殺しておいた方がいいのでは？　ここで生き延びて、人間を襲うかもしれませんよ？」

「……それは――」
確かにそうだ。魔物は人間を襲う。
だから殺さなければならない。それは正しいことのはずだ。
「……いや、そうですね。勇者として、使命は果たします」
そう言って、クエタプノはきゃんきゃんに近づいていった。
コウウの死体を踏み越え、きゃんきゃんに迫ろうとしたその時、
「……ま……ち、やが……れ……」
「っ!?」
その足元からの声に、クエタプノは咄嗟にその場から退避した。
既に死んだかと思ったその相手、コウウは、地面に倒れたままではあるが、確かに声を出して、こちらを止めようとしていた。
「まだ息がありましたか……」
これもまた失態だ。既に虫の息で、放っておけば死ぬとはいえ、生死を見誤ってしまうとは。
しかし、もう脅威とはならない。
立ち上がることすら出来ないコウウは、ただ手だけを動かし、這いずるようにしてきゃんきゃんの近くまで寄っていった。
まるで、きゃんきゃんを守るかの様に、
「や、ら……せ、ねぇ……ぞ……!」
「コウウちゃん……!」
こちらからきゃんきゃんを庇うかの様に、倒れたまま対峙しようとする。
だが、戦う力はないし、守るための力もない。仮に攻撃を放っても、二人纏めて死ぬだけだろう。
だから剣を振ればいい。振ればいいだけなのだが、
「……」
「あれ？　殺さないんですか？」
コーラが再度、相手を殺さないのかと促してくる。こちらはまだ剣を構えていたが、余程渋い顔をしていたのだろう、こちらの顔を見て、
「あれは魔物ですよ。何を絆されているのか知りませんが、人間の敵です。特に魔物大将軍なんて、大勢の人間を殺してきた化け物ですよ

？」
「……分かって、います」
ああ、そうだ。分かっている。
魔物は殺さなくてはならない。ならないが、
「……ですが……放置しても問題ないはずです」
そう言った。
何故なら、彼らはもう、人間の脅威になり得ないはずなのだから。
「魔物大将軍の方は放っておいても死にますし、きゃんきゃんは……無理に相手をする必要はありません。それよりも逃げていった魔物大将軍二体を倒す方が優先されるべきです」
「……はぁ、そうですか。それなら別にいいですけどね。彼らが後で人間を殺したりしても知りませんよ？」
「その時は僕の責任です。いいから行きますよ」
「……はいはい」
彼らよりも重要なことがある。そんな理由を付けて、クエタプノは二体の魔物の横を駆け抜けていった。

……くそ……体中が、痛ぇ……。
コウウは、去っていく勇者を見て、自分の力が及ばなかったことを悟った。
最後の一合で見たのは、倒したと思った勇者が起き上がり、こちらを一閃で斬り伏せたその姿。
……勝ったと思ったんだがな……すまねぇ……。
このままではリーやバルカも危ないだろう。自分の力が及ばずすまないと、コウウは心の中で謝罪を行う。
しかし不安に思う一方で、彼女を守りきれてよかったとも思ってしまう。傍らで、こちらに寄り添ってくれているのは、きゃんきゃんだった。
「コウウちゃん……」
「お……おお……ぶ、じ……か……？」

「うん……！　コウウちゃんの、おかげで……！」
……へっ、それなら良かったぜ。
力が入らないことと、血が溜まって喋り難いこと以外は、不便はない。ようやく痛みも無くなってきたところだ。
そして、このまま死ぬんだろうなぁ、と他人事のように思ってしまう。
結局自分は、最後まで野望も何も成すことも出来ず、勇者とかいう人間にやられて、無残に死んでいくのだ。
だが不思議と、嫌な気持ちはしない。あれだけ死ぬのを怖がっていたはずなのに、どこか受け入れてしまっている自分がいた。
それは多分、
「……守ってくれてありがとう」
「……ああ……」
こちらを見て、悲しそうな、泣きそうな顔になっているきゃんきゃんを見て、コウウは不謹慎にも、嬉しく思ってしまう。
「今まで、遊んでくれて……一緒にいてくれて、ありがとう……！」
「……ああ……」
それはこちらの台詞だった。
彼女がいたからこそ、自分は最後に、ここまで満ち溢れた気持ちで逝けるのだ。
「……大好きだよ、コウウちゃん」
「あ、ああ……――――」
――俺もだ。
その想いは、最期まで口にすることは叶わなかったが、彼女に合わせられた手を、浅く握ることで伝える。
どうにも情けない。天下を取るとこの世に生を受けた自分は、最後まで何も大きな事を成すことが出来なかった。
自分が千年近くの生の中で成したのは、たった一体のきゃんきゃんを守り、たった一体のきゃんきゃんから好かれたことだけ。後はせいぜい、最後に仲間の為に時間稼ぎを行い、少しは見直させたか、とそれくらいだ。

だが、その成したことに対して、自分の生について、こう思い、評価する。惚れた女を守るだけ。それしか出来なかったが、
……なんだよ俺……やるじゃねぇか……。
――それが出来ただけ、上等だ。
そうしてコウウは最期まできゃんきゃんに看取られて、息を引き取った。
しばらくの間きゃんきゃんは、すすり泣くような音を漏らし、血に濡れながらも……決して、彼の傍を離れようとはしなかった。

「ひぃ!? あ、あの人間、化け物だ！」
「ど、どうすりゃいいんだ……!?」
勇者が街の中心に向かって、魔物兵を倒しながら凄まじい速度で進む。
まるで風の様な速度で駆けるクエタプノは、直ぐに後方に逃げようとしていた魔物大将軍二体に追いついた。
「逃しませんよ」
「……ふ、ふふ、そのようだ。……もはや逃げることは叶わないようだな」
「くっ……コウウまでもが……！ ……こうなっては仕方がない。バルカ。お前は――」
と、やって来た勇者に一歩前に出ようとしたところで、遮るように翳された手で止められる。
「バルカ!? 何を……！」
「大丈夫だ、心配するな、リー。天才の私には、奴を倒す秘策がある」
馬鹿な……！ と、思う。先程の勇者とコウウの戦闘を、少しでも見たら、敵わないことは理解出来ている。
これを倒すような策。幾らバルカが天才だからといって、こんな何もない状況であるはずがない。
だが、バルカは言った。いいか？ と、
「実を言うとな、リー。私は最後の最後の戦いで、この策を使ってから

死ぬつもりだった。天才軍略家である私には、寿命で死ぬなどは似合わない。最期こそ、最大の敵を倒してから逝く。それでこそ、私の名も轟くというものだ」
　それはバルカらしい、魔物大将軍としての在り方だった。コウウとはまた違った自信の持ち主。自分は天才であり、その知略を以て自分の名を高めようとする魔物としての欲求だ。
　それは理解出来る。彼が、そうすることを願っていることを。
「っ、だが、私は……お前達に、生きてほしかった……！」
「……ああ、分かっているとも、リー。他者の気持ちを慮るのは苦手だが……これでも、友だ。お前の考えること、お前の欲くらい、何か分かっているさ」
　だがな、とバルカはそれを理解しながらも押して口にする。
「そんなお前だからこそ、私は、私達は、命を懸けられる。私は今まで一度たりとも、他者の為に戦ったことはなかった。……最期くらい、お前を守らせてくれ」
「バルカ……お前は……！」
「ではな、我が友よ。――先に、行かせてもらうぞ！」
　そう言うが早く、バルカは勇者に向かって駆けた。
　勇者が剣を身構え、迎撃の準備を行う。
「っ、何を……！」
「ふっ、お前が私を斬ろうが、何をしようが関係ない。そんな作戦が私にはある――」
　だがバルカは、構わず無防備に、突き進んだ。
　それはバルカが用意していた最後の策。
　天才軍略家として、最後はこれを一度、試してみたかった。華々しく散るために、と用意しておいたのは、
「――自爆だ」
「っ……!?　くっ……！」
　勇者の剣がバルカの腹に突き刺さった瞬間、そこから光が漏れ出し、
「――――！」

バルカは自分を中心に、大爆発を起こした。

爆風は周囲に衝撃を広がらせ、爆炎を発生させる。

「ば、バルカ……！」

空気の圧を腕で防御しながら、リーは勇者に対する自爆特攻を行った友の名を呼ぶ。

勇者は、バルカは、一体どうなったのか。勇者は倒せたのか。万が一にでも、バルカは生きてはいないか。

そんな少ない可能性を信じたいがため、リーはその結果を確認する。

爆煙が徐々に晴れていき、リーの視界には人形のシルエットが映る。

「まさか……」

それを目にし、リーは戦慄した。

爆風の中から無事に現れた人物。何が起こったのか、運良く爆風から逃れ、助かっている人間の姿。

それは――勇者だった。

「……けほっ、どうやら……運が悪かったみたいですね……」

こちらにとっての不運。相手にとっての幸運を目の当たりにし、リーは拳を強く握って、震えた。

……皆、いなくなってしまった……。

誰もが勇者にやられた。ついこの間までは、元気に思い思いの姿を見せていた三体の魔物大将軍。

ヴラド、コウウ、バルカ。リーのかけがえのない仲間。たった3体の友人達は、皆先に逝ってしまった。

……ずるいではないか……！

後に残された自分は、どういう思いを得るのか。彼らは考えたことがあるのか。

途轍もない寂寥感。胸にぽっかりと穴が空いたようだ。

このような想いをするくらいなら、一緒に逝かせてほしかった。

だが、それは出来ないことは分かっている。

それを思うだけならともかく、口にするのは彼らの想いを踏みにじることとなる。
誰もが個性的で、厄介な連中だった。マイペースで、自分のやりたいことに正直な連中だ。
だからこそ、彼らは自分の想いに従って動き、自分はこうして、彼らの想いを踏みにじらないために最後まで残っているのだろう。
彼らは皆、トラブルメーカーではあったが、リーにとっては、大切な友人達だった。
だが、自分にはまだ大切なものが残っている。だから死ぬわけにはいかないはずだ。
……レオンハルト様……。
リーは自分が尊敬して止まない男を思い、そして謝った。
自分は、彼の為に働かなくてはならない。命令もある。勇者と対峙したら、全力で逃げろと。
しかし、既に逃げることは不可能。他の大将軍達は皆死んでしまった。
かくなる上は、立ち向かうしかなかった。
無論、敵うわけがない。自分は魔物大将軍の中でも特別、能力が高いわけではない。
だが――やるしかない。だからこそ、リーは謝る。
……レオンハルト様……申し訳ありません。
自分はこれ以上、役に立つことは出来ないと。その覚悟を謝罪を心に刻み、リーは拳を構え、勇者を迎え撃った。
「――おおおおおおおおおおおお!!」
「……申し訳ないですが――」
と、勇者が告げた瞬間。
「……一撃、です」
「――か、はっ……!」
リーは勇者に、腹を斬り裂かれた。
腹は魔物大将軍にとって、最も重要な器官である、ブレインがある。
ここ以外であれば、どんな傷であろうと再生してしまう魔物大将軍

も、このブレインだけは回復することが出来ない。
だから何があろうとも、ここを傷つけられた時点で、リーの死は確定したのだ。
膝を突き、地面に倒れようとする瞬間――リーはその姿を見た。
一瞬でその場に現われた男の姿。彼の使徒も一緒だ。
リーが尊敬して止まない魔人。彼はリーの姿を目に映し、次に勇者の姿を目に映すと、
「――よくもやってくれたな……勇者ッ!!」
「っ、くっ……がっ!?」
誰もが視認出来ない速度で魔剣を抜き放ち、勇者を一刀で吹き飛ばした。
――魔人レオンハルト。最強の魔人が、遂に勇者と対峙するその瞬間を、リーは彼の使徒達が駆け寄ってくるのを感じながら、目の当たりにしていた。

「――分身」
「っ、増えた……!?」
レオンハルトは剣の一閃で距離を取らせながらも、立ち上がってきた勇者クエタプノに対し、まずは分身に当たらせた。そのまま屋根の上で戦闘が始まる。しかしレオンハルトの本体は、直ぐ様リーの元に駆け寄った。
「おい、大丈夫か!?」
「れ、レオンハルト……様……」
地面に倒れ、腹部のブレインを破壊されたリーの命は、もはや風前の灯火だった。
一緒に来たハンティや、キャロル、ペールらも、皆が険しい顔をして、
「これは、もう……」
「……リーさん……」
「魔物大将軍は、中のブレインを破壊されたらどうしようもない……

みたいですね……」
彼女達にとっても親交のある相手だ。
そしてレオンハルトにとっても、千年以上の間、自分の下でずっと働き続けた部下でもある。
それを看取るために、レオンハルトは一先ず分身で、勇者を止めたのだ。
分かっている。そちらを優先した方がいいのも、リーがもう助からないのも。
だがそれでも、衝動的にレオンハルトは駆け寄っていた。リーがこちらを見上げ、
「……お役に、立てず……も、うしわけ、ありません……レオンハルト、様……」
「っ、謝るな！　お前はよくやってくれただろうが！」
「……私、は……レオンハルト様に、仕えること……が、出来て……これ以上ない、幸福を……得て、きました……」
リーのその言葉は、否応にも彼の最期なのだということを実感させてくる。
だからレオンハルトは声を掛けた。彼の最期を、幸福なものにするためにも、
「……ああ、俺も……お前がいてくれて助かった」
「……そう言って……下さる……の、なら……ば……これ、に……勝る、喜び、は……ありま、せん――」
そしてとうとう、リーのその口は音を発することが出来なくなる。
だが、その口の動きを、レオンハルトは不思議と読み取れた。
――今まで、ありがとうございました。
それは感謝の言葉だった。
自分の死に際になって、最後の最後に、言う言葉は、自分への感謝だ。
……俺は……。
レオンハルトは思う。
自分は、そんな感謝をされるべき奴じゃないと。

レオンハルトは勇者という存在を知り、仲間に危害を加えないように警戒しながらも、それを積極的に討伐しようとはしなかった。
目的の為に、レオンハルトは動き、その結果、リーや他の大将軍も死なせてしまった。
やらせる気はなかった。結果論ではあるが、防ぐことは出来たはずだ。
しかしそれを選び取ることが、レオンハルトには出来ない。
だからレオンハルトは、リーの命を救えない。
そもそも最初から、自分の道の上に、リーはいない。
いない、はずだったのだ。
だからレオンハルトは衝動的に、自分の右手を振り上げると、
「レオンハルト様!?」
「あんた、何を――」
キャロルとハンティが声を上げる。レオンハルトが、拳を強く握り、爪を突き立てることで、自分の右手を自分で傷つけ、血を流したからだ。
そして使徒達に告げるのは、これから起こることの一種の報告だ。
「今から……リーを助ける」
「助ける……って、レオンハルト様……まさか……」
ペールが、無理です、と言おうとして、しかしその方法に思い至る。
レオンハルトは言った。――そのまさかだ、と。
「――――」
その言葉とともに、レオンハルトは自分の右手から流れる血を、リーに与えた。
瞬間――リーの身体から、光が広がった。
リーは死の間際で、暖かさを感じていた。
最期に、自分が尊敬して止まないレオンハルトに看取られて逝く。
自分のような不出来な成り上がり者には、出来すぎた結末だ。
だから悔いはない。
これ以上を望むのは欲張りすぎというものだろう。

本来であれば、もうずっと昔に死ぬはずだった。
だが魔物大将軍への進化という僥倖に遭遇し、リーはここまで生きることが出来たのだ。
もう充分。後は、レオンハルトやその使徒達、自分が関わってきた彼らの行く末が幸福であることを願うだけだ。
レオンハルトには何か目的がある。ただ生きて、魔人として相応しい行動を取っているだけではない。
だからなのか、レオンハルトはよく、何かをじっと考え、その先を憂うような表情を見せることがある。戦いの際も、戦いで起こる犠牲に対し、少なからず、同情の心を隠し持っているようにみえる。
そんな誇り高くも、優しい修羅であるレオンハルトのことが、リーは心配だった。
何を考えているかまでは分からない。
だが、レオンハルトが少しでも悩まなくてすむように、リーはどこまでも真面目に、彼の助けになるよう全力で職務に取り組んだ。
魔物大将軍として出来ることは、ただそれだけだった。軍人として、ただどこまでも愚直に、彼のために尽くす。せめて仕事の事だけでも、自分に頼ってもらえればと。
彼の使徒達や、周囲の者達にもよくしてもらったし、同僚や部下にも恵まれた。とても賑やかで、楽しいと心から言える日々だった。
もし生まれ変わったのならば、
……願わくば、次も……あの御方の下で戦いたいものだな……。
それはリーが、魔物将軍として死ぬ最期の日に、同じ様に口にして、願ったものだった。
例え千年生きても変わることはなかった。彼に忠義を尽くし、彼の下で戦いたい。
そのためならばただの魔物として、ただの魔物兵となっても構わない。
だからリーは、生まれ変わるなら、レオンハルトがいる時代に生まれ変わりたいと願った。
しかし、その奇跡は起こらない。あの日のような延長戦は起こらな

い。
それは分かっていた。
――だがそれは、急激な痛みによって、引き起こされた。
……っ、何だこれは……!?
全身を包み、身体の中を弄り、破裂しそうなほどに暴れ回る何か。今までに感じたこともない形容し難い何かが、自分の身体で起こっている。
激痛に苛まれ、永遠にも感じるその苦痛を乗り越えた先に、
「――――」
奇跡は起こった。

その場が激しい極光に包まれ、前も見えないほどに視界を塞がれる。
だがその光が収まると、そこに魔物大将軍であったリーの姿はなく、代わりに、
「――これは……」
そこにいたのは、魔の雰囲気を漂わせながらも、人の形をした一体の男の姿だった。
彼自身も含めて、レオンハルトもレオンハルトの使徒達も、その姿を確認して息を呑む。
紅い軍服に身を包んだ、体格のいい男がいる。歳の頃は人間でいう中年。短く切り揃えられた茶髪と、同じく茶色の口髭と顎髭。それに右目に黒の眼帯を付けた男は、幾つもの戦いを潜り抜けてきた歴戦の軍人の様にも見える。
その名を、レオンハルトは呼んだ。
「――気がついたか、リー」
「レオンハルト様……一体これは……」
リーの疑問に、レオンハルトは答えた。簡潔に、はっきりと、
「お前は、俺の使徒になった」
「!? な、何故……私などを……!」
最初に出てきた言葉はそれだった。

何故自分などを使徒にしたのか。リーは、自分程度の者をわざわざ力を削いでまで使徒にしたことを憂う。
レオンハルトであれば使徒が数体増えたところで力が衰えることはない。衰えたとしても感じることはないだろうということは理解しているが、それならばもっと相応しい者を、と、リーは思った。
だが、レオンハルトは言う。その疑問には、少し陰の差した表情で、
「……実を言うとな。俺はお前を、生き長らえさせるつもりはなかった。寿命が尽きたなら、そこまでの関係だろうと。ならそこで看取ってやればいいと思っていたし、お前を使徒にしようなど、考えてもいなかった」
だが、
「お前が死にかけているのを見た瞬間……俺はお前を死なせたくないと思った。その衝動に、自分の欲に従った結果、お前は使徒になった」
「……レオンハルト様の……欲……？」
ああ、とレオンハルトは頷く。リーを真っ直ぐに見据え、
「死なせておくには惜しい。他ならぬ俺が、お前を必要だと感じた」
「――――」
「だからリー。俺の下で、これからも戦ってくれ」
勿論、嫌なら断ってくれても構わない。そんな枕詞を付けて、レオンハルトは告げた。
だがそれは、リーが死の間際に――いや、ずっと願っていた願いそのものであった。
だから言う。リーは歯を噛み締め、己が最も掛けてほしかった言葉と、その願いを叶えてくれた主に対し、感激による涙を封じ込めながら、
「っ……レオンハルト様……！」
片膝を突く。それは軍人としての、忠義の証を示すためだ。
震える声で、彼は告げる。
「私は……これより、レオンハルト様を我が主とし、全霊の忠義を捧げることを誓います……！」
「――ああ。これからも、よろしく頼む」

「はっ……この身が朽ち果てるまで……何処までも仕えさせて頂きます……！」
　そうやって忠誠を示したリーに、周りの使徒達が思い思いの言葉を掛ける。
「……リーさん！」
「っ、はっ。なんで御座いましょうキャロル様！」
　魔物大将軍の時の癖か、リーがキャロルの言葉にはきはきと反応する。
　それを指摘することなく、キャロルはリーに向かって、指を突きつけて言った。
「……今まではわたくしの先輩でしたが……使徒となったからにはわたくしの後輩ですのよ！　これからはわたくしが使徒としての心構えなどを教えて差し上げますから、存分にレオンハルト様の為に力を発揮しなさいな！」
「……！　はっ！　畏まりました、キャロル様」
「ふふん、可愛がって差し上げますわ！」
「よろしくお願い申し上げます。――ハンティ様に、ペール様も、何卒、若輩者の成り上がり者ではありますが、誠心誠意、務めて頂く所存で……」
「い、いや……年齢で言うとリーさんの方が先輩な様な……？」
「……まさかこうなるとはねぇ……ま、とにかくよろしく頼むよ」
「はっ、よろしくお願いします」
　魔物大将軍の時よりも落ち着きと貫禄が出てきた気がするリーの姿と挨拶に、ハンティとペールが苦笑交じりに応じる。
　そうして使徒同士となったやり取りを終えると、レオンハルトが場を整えるように声を発した。
「さて……もう少し団欒していたいのは山々だが、立て込んでいるからな。お前達は、兵の指揮を執って兵を避難させろ」
「畏まりまし――」
「畏まりました！　全霊を掛けて任務に取り組みます！」
　キャロルが胸に手を当てて、応答しようする前に、リーが気合いの

入った様子で答える。使徒になったばかりだからか、やる気と覇気に満ちあふれているようだった。
　しかしその態度にキャロルは、むっ、とし、
「わたくしより先に返事をしてはいけませんのよ！」
「!?　それは……申し訳ありませんでした……何分、使徒としての礼儀に疎く……」
「いやいや、そんな礼儀ないから」
「関係性は、使徒となっても変わりそうにないですねぇ……」
「お前らな……」
　いつも通りのミニコントを行おうとする使徒達を、レオンハルトは肩を竦めて息を入れる。そして改めて、
「……とにかく、お前達も少し離れていろ」
「まあ、いいけど……レオンハルトは――って、聞く必要ないか……」
　ハンティの強張った表情の問いかけに、レオンハルトは頷いた。
「俺は――客人の相手をしてくる」
　レオンハルトは刺すような冷たい雰囲気を漂わせ修羅の顔となると、屋根の上で分身相手に戦う勇者を見て、そう呟いた。

クエタプノＶＳレオンハルト

「やべぇよ……！」
「一体何が起こってるんだ……!?」
「――落ち着け！　まずは正確な状況の確認だ！」
魔物兵達の混乱を、魔物将軍は必死に収めようとする。
勇者の襲撃、相次ぐ魔物大将軍戦死の報に、さすがの歴戦のレオンハルト軍でも、混乱は避けきれなかった。リーの副官を務める魔物将軍は、嫌な想像を頭から必死に振り払おうとしながらも、現実的な判断で、それが難しいと苦悶の表情を浮かべていた。
ヴラド、コウウ。そして続いてバルカ、リーと死んでしまえば、兵の動揺を抑えるにも限界が来てしまう。特に直属の上司であるリーが死ねば、幾らレオンハルトが健在であるとはいえ、少なくない離散者が出てしまうだろう。魔軍最精鋭と呼ばれるレオンハルト軍が、魔王が御わす地にて離散してしまうなど恥以外の何物でもない。レオンハルトがそれに対して怒ることはないかもしれないが、彼に恥をかかすことになってしまうのはいただけない。
だから魔物将軍は願った。部下としても、リーには死なずにいてほしいと。
そんな時だ。その場に声が響いたのは、
「――総員、その場にて待機せよ」
「！」
その声は大声でもないというのに、よく響き渡った。
魔物兵達がざわついていた街の一角での一声は、レオンハルト軍の魔物兵が聞き慣れている声に、よく似ていたのだ。
こちらを従わせるに足る将の声。その声の持ち主の名を呼ぼうとして、魔物将軍は前からやって来た者の姿に目を剥いた。
「……リー、閣下……です……か？」
「ああ、少しばかり生き長らえてしまってな。今は大将軍ではない。レオンハルト様の使徒となった」
「っ!?　それは……なんという……」

前方からやって来たのは、赤い軍服を着た人間の中年のような見た目の男。しかしその身から発せられる色濃い魔の気配と、聞き知った渋い声に、魔物将軍はその名を当てることが出来た。
しかしそのリーから告げられる衝撃の結果に、魔物将軍はなんと言えばいいか言葉を見失う。魔物大将軍ではなく、あのレオンハルトの使徒になったというのだ。
最強の魔人にして、自分達の直属の上司であるレオンハルトの使徒が増えたというのは、悪いことではないにしろ、それだけで大事件だ。しかもそれが、レオンハルト軍を預かる魔物大将軍であったリーとなると、余計に。だから動揺してしまうのはしょうがないだろう。
だが一方で、リー大将軍ならばそういうこともあるかもしれないと思ってしまう。レオンハルトの信頼厚いあの御方であれば使徒になってもおかしくはない。
しかも不思議と嫉妬もない。魔人や使徒になるというのは、魔軍の組織を飛び抜けて出世するようなものであり、時に成り上がった者は、魔物から嫉妬の思いを向けられることもある。
しかし、職務に対して誰よりも真面目であり、取るに足らないはずの魔物将軍や魔物隊長、魔物兵のことまで気遣い、時には失敗した部下を庇い、飲みに連れて行ってくれるあのリーなら、使徒になっても、
「……おめでとうございます、閣下」
「ふっ、もう私は閣下ではないぞ」
「それでも、です。我々にとって、閣下と言えばリー閣下。貴方のことを指しますゆえ」
レオンハルトのことも魔軍参謀閣下と呼ぶ時は呼ぶが、どちらかというとレオンハルト様、魔人であるが故に直接呼ぶことの方が多い。
だからそう言ったが、リーはやはりと言うべきかそれを知っていた。苦笑した上で指摘する。
「……レオンハルト様も、閣下であろうに」
「はっ、申し訳ありません。レオンハルト様を軽く見ているわけではなく――」
「分かっている。好きに呼べ」

リーからの許可を得たため、魔物将軍は言う。
「では……リー閣下。我々はどうすれば？」
「……レオンハルト様の命令だ。我々は今直ぐ、この一帯から距離を取る」
「それはどういう……襲撃者に対しての対応は如何するのですか？」
うむ、とリーは頷く。以前よりも落ち着いた、覇気のある声で、
「ここらは直に、レオンハルト様の戦場となる。兵を巻き込むわけにはいかない」
「！　なるほど、了解致しました」
レオンハルトが戦う。その意味を、知らない者はいない。
特にレオンハルト軍では、レオンハルトが戦闘に入った場合のマニュアルすら存在する。それもかなり昔に、リーがレオンハルトの戦いの激しさを見て、作ったものだそうだ。
剣士の常識というものが通用しないレオンハルトであれば、剣の間合いの外、本来なら弓や魔法などで攻撃するしかない遠距離であっても、剣の間合いになる。
そしてあらゆる障害物は意味を為さない。斬撃の流れ弾を喰らわないためにも、距離を取ることは必須だ。
全てはレオンハルトに、気を回させないため。近くに魔物兵がいるからと注意を払わなくてもよくするために、距離を取る。
だからそれを聞いた途端、レオンハルト軍の将兵の誰もが行動を起こす。中には魔物兵であっても、魔人の戦闘に巻き込まれないために、と素早く動き始める。それを見て、リーは言った。
「迅速かつ正確に、順序良く動け。急ぐ必要はあるが、焦る必要はない」
「はっ！」
「それと、現時刻を以て、レオンハルト軍を指揮する魔物大将軍がいなくなったため、臨時の指揮官としてジャクソン将軍を任命する」
「！　わ、私ですか!?」
「レオンハルト様と……私からの推薦だ。このような慌ただしい時で済まないが、引き受けてくれ」

その心遣いを、魔物将軍は受け取る。レオンハルトからの推薦とはいうが、魔物将軍はレオンハルトのこともそれなりに知っている。
公平かつ果断。しかし慎重さもある方だ。だからリーにも一言くらい相談しただろう。
その時に、リーが自分の名前を出してくれたのだろうと、魔物将軍は正確にそれを読み取ることが出来た。
そして数いる魔物将軍の中から、態々自分を推薦してくれたことに、胸が熱くなる。その昂りのままに、しかし同時に襲いかかる責任感に身を引き締め、魔物将軍は頷いた。
「……はっ！　拝命致します！」
「よし、ならば動くぞ。レオンハルト様はここから南西の時計台の辺りで戦闘を始めている。レオンハルト軍は巻き込まれないように、ここから東側と北側に軍を分けて移動させるぞ」
了解しました！　という良い返事と、直ぐ様他の魔物将軍、魔物隊長達に指示を下し始めたのを見て、リーは満足そうに頷いた。
そして部下達への心配がある程度はなくなったところで思うのは、レオンハルトのことであった。
――ご武運を。
使徒となったリーは短く、心の中で、主であるレオンハルトの勝利を祈った。
主に仇討ちを頼むつもりはないが――どうか、死んでいった仲間達の為にも、勇者を討ち倒してほしい、と。
遠くからは、戦闘の激音が響き始めていたのだ。

魔軍に支配され、今は魔王ナイチサの前線拠点となっている東部オピロス帝国の首都、テラ・ユークリッドの街中では、一つの戦闘が進行を始めた。
先程まで、部下を助けるために戦いを分身に任せていた魔人レオンハルトが、戻ってきたのだ。
屋根の上に登ってきた金髪灼眼の男を、勇者クエタプノは見た。視

線が合わされ、レオンハルトが鼻を鳴らす。
「……ふん、昔はただの勘違いしたガキだったが、今はデキるようになったみたいだな」
と、告げて、屋根の上から視線を横に向ける。向けた先は、先程までレオンハルト達がいた街の表通りとは逆側、表通りから外れた路地裏の地面だ。
そこに倒れているものをみて、レオンハルトは舌打ちを一つ、
「まさか――俺の分身を倒すとはな」
「……お褒めに預かり光栄です。随分と強かったですよ、貴方の分身」
路地裏で朽ち果てていくのは、レオンハルトが作り出したレオンハルトの分身だった。
まだ数分か、１０分程度しか経っていない。それだけの短い時間で、クエタプノはレオンハルトの分身を倒してみせたのだ。
そのことに対して、いっちょ前に挑発してみせるクエタプノに、レオンハルトは眉を顰める。強かった、と言うが討ち倒した後であれば反対の意味にしか聞こえない。
――大したことなかったですよ、と。
レオンハルトにはクエタプノの言葉が、そう聞こえた。生意気なガキだ、と思いつつも、
「……分身を倒したくらいでいい気になるな。あれは俺の数分の一程度の力しかない、ただの幻影だ」
「そうですか。――あれの数倍程度しかないんですね？」
ブチッ、と何かが弾けたような音がした。
レオンハルトは、額に血管を浮かばせた上で、しかし冷静にあるように努めて言葉を作る。
「……何も知らないガキが。他人に貰った力で、正義の味方ごっこは楽しいか？」
「……それは関係ないでしょう。大切なのは力の出処ではなく、その力で何をするかです。それに大体――」
と、クエタプノはレオンハルトに対して、眼を細めて告げる。
「――他人に貰った力。それを言うなら、魔人だって魔王に力を貰っ

たわけでしょう。〝勇者〟としての力を振るう僕と、〝魔人〟としての力を振るう貴方。一体何が違うんですか？」
「……！」
それは、レオンハルトも理解しながらも、敢えて告げなかった言葉だった。
レオンハルトの内心を要約するとするならば――〝知った風な口を〟というのが簡潔だ。
確かに始まりとなる力を得たのは間違いない。だが己は、お前のように狂ったような仕掛けの力は貰っていないし、ここまで強くなったのは己の才覚と、それを磨き上げた努力によるものだと思っている。
それを押してもなお、クエタプノの言葉の方が多少の道理があるが、それでも敢えて告げたものだ。
裏にある言葉の意味は――〝お前は知っているのか？〟と。
返答は、知らない。不快に思ったとこを見ると、多少何かに感づいているか、その力に違和感を覚えているのかもしれない。
しかしまだ、その糸から抜け出てはいない。自分が舞台に上がった演者だと勘付きつつも、自分の行動が正しいと信じているガキが、眼の前の勇者だ。
完全な操り人形からは抜け出ているかもしれないが、道化であることには変わりない。
そんな道化に、正論でやり返され、レオンハルトは自分が冷静に話続けていることを褒めたい気分だった。
「……どこまでも癪に障るガキだ」
「さっきからガキとばかり……僕がガキなら、貴方はお爺ちゃんじゃないですか。人の容姿や特徴をあげつらって中傷するのはあまり良い行いとは言えませんよ」
「……随分と、俺の部下を殺ってくれたようだが……覚悟は出来てるな？」
「ええ、貴方と――魔王を倒す覚悟なら、決めてきました」
そう言って決意を秘めた視線を向けてくるクエタプノに、口の減らないガキだ、と、苛立ちを募らせる。

だが口に出すのは苛立ちではなく、己の意志を決定づけるものだ。
レオンハルトは空間から魔剣を引き抜くと、それを勇者に突きつけて告げる。
「少しくらい、手心を加えてやろうかとも思ったが……やめだ。――本気で潰してやる」
「どうぞお好きに。僕も――本気でやりますので」
そうして次の瞬間、踏み込みは同時。
お互いはお互いの武器をぶつけ合い、火花を散らせた。

勇者の剣、エスクードソードと、魔剣、オル＝フェイルがぶつかり合い、お互いを弾く。
そうして弾かれるのはお互いの得物だけではなく、互いの距離もだ。
クエタプノは、自分の方が距離を取らされたことに対して、相手の危険度を大幅に跳ね上げさせた。
ここまで戦ってきて、おそらくは魔人級の強さを持つ大将軍だって上回ったし、魔人を越える力を得ていると思っていたのだ。
そしてそれはきっと、間違いではない。
だが、この眼の前にいる魔人は違う。この魔人に対して自分は、
……力負けした……！
それが示すところは単純。相手は、自分よりも強い。
力と速度において、クエタプノは眼の前の魔人に負けた。その結果が、自分だけが大きく距離を取らされた現状だ。
先程、分身とは戦い、勝利した。そして会話の中で、その数倍程度なら、という挑発も行った。実際はそれだけ強かろうが倒すという自分への意思表示を含んだものであったが、
……かなりキツいですね……！
実際には苦しい。今も、距離２０メートルほど離れた屋根に着地したところでも、剣士としての感覚が警鐘を鳴らし続けている。
それが意味するのは、相手の異常な間合いの長さだ。

「――！」
「くっ……！」
思った通りに、攻撃が来た。
それは先程の分身も使っていた斬撃を飛ばす剣撃。
相手にとっては技ですらない通常攻撃。ただ剣を振っただけのものは、距離２０メートルを一瞬で埋める風の刃だ。横薙ぎに振られたそれを、見切って回避を行う。背後の建物が切り崩される音と振動が鳴り響いた。
やはり、自分は相手の間合いにすっぽりと入り込んでしまっている。
剣士としてはあり得ないものだ。確かにあの魔人が持つ禍々しい剣の長さは通常の剣と比べてもかなり長いが、それでも一足一刀で届く距離は7メートルから9メートルといったところだろう。
だが魔人の身体能力、技能を以てすれば、その間合いは何倍にも膨れ上がる。
魔人レオンハルトは一刀で数十メートル先の相手を斬り伏せ、一足で数十メートルの距離を埋める。そして遠くに刃を届かせる。
近ければ近いほど剣撃の鋭さは高まり、厄介になっていくが、遠くから戦っても戦士にとっては攻撃手段がなく、不利になるだけ。
これが世界最強の剣士の剣技。反則級の力を容易に振るう魔人の剣だ。
そこには確かな修練の足跡が窺える。ただ同程度の身体能力があるだけでは、神業染みた剣技の数々を行うことは出来ないだろう。
今も、斬撃を二つ、三つに別れさせながら迫ってくる。回避の難しい剣技だが、それを放たれる前に動くことで回避する道を作り出すと、こちらも魔人に対して、逆袈裟で反撃を行った。
「ふっ……！」
速度は充分。こちらも相手の剣に追い縋れるくらいには身体能力はある。
すると相手の魔人の無敵結界を、突破した感覚が剣から伝わってきた。

やはりこの剣は、と思いつつも、相手もその結果に目を細めた。
忌々しいと言わんばかりに、
「勝負にはなるようだなッ！」
「……どうやらそうみたいですね！」
この期に及んで無敵結界を突破出来ないとかであれば大問題だったが、そういうことはないようで少し安心する。
しかし無敵結界が突破出来ることと、相手に攻撃を与えられるかどうかは、また別問題だ。
攻撃を加えるためには、この魔人の剣撃の嵐から極小の隙を見つけ出して、更には相手の防御を潜り抜けなくてはならない。運や偶然も味方してくれるだろうが、それも期待出来ない。それは実情として、知ったことだ。
相手の剣。その動きに対する勇者の力の補正。それが、
……働いていない……!?
何故、という思い、疑問が来る。そしてそれを見抜かれたのか、相手は不敵な笑みを浮かべた。
「俺に不運が発動しないから動揺しているな？」
「っ！　貴方は、この力を知っているのですか……!?　その上で、何か対策を――」
「……馬鹿が。対策なんざ必要ない」
「なら一体何をっ!?」
剣を合わせながら疑念を口にする。動揺の現れであることは否定出来ない。相手に答える義務もない。
だが眼の前の魔人は答えた。こちらを小馬鹿にするような、もしくは、力の差を見せつけるように、その答えを口にする。
「不運なら起こってる。起こってるが――だからどうした」
と、
「こんなもので俺の動きを乱せるとでも思っているのか？」
魔人は足元に転がってきた石を、思い切り踏み砕いて、言った。

レオンハルトは鬱陶しい、とは思いつつも、この程度で、という想いで剣を振るいながら告げる。
勇者の力。それについては一通り把握している。
「勇者の幸運。それは敵対者に対して、小さな偶然が幾つも積み重なることで発動する。僅かな体捌き、足元の石ころ。そんな小さな偶然が、敵対者の攻撃を乱し、ギリギリのところで致命傷を回避する」
それが勇者の幸運。これと見切りの力があるため、勇者を、一度でも殺すことは至難の技だ。
「さっきから俺を転ばせようとしてきたり、偶然俺の足元だけ濡れてたり風が吹いたりとうざいことにはなっているが……俺の剣に、偶然なんてものは一つもない」
こんなもので、己を乱せると思うな、とレオンハルトは事実を告げる。
「身体の動きを百パーセント正確に把握し、動かすことが出来るなら、僅かな体捌きの差異など、起こりうる筈もない。足元が多少不安なくらいで、俺の動きは乱れない。それ以外の不運は――その都度、対応してやればいい」
「そんな馬鹿なことが……！」
と、勇者が言った瞬間だ。不意に空に浮かぶ黒い雲が光った。
「――！」
それは莫大な音とともに、レオンハルトに向かって落とされる――落雷。
偶然、クエタプノの相手である魔人への降り掛かった自然の脅威に、クエタプノは咄嗟に飛び退き――しかしその結果を驚きの表情で見た。
「――〝瞬光〟」
「なっ――!?」
それはクエタプノの強化された目を以てしても視認出来ない一刀。目視した時には既に結果は現れていた。
レオンハルトが天に向かって剣を振るったのか、おそらくは落雷を断ち切った。

それを成した上で戦闘を止めることなく、レオンハルトは言う。
「――この程度の不運如きで俺を殺せると思うな。俺を殺したければ、実力で来い」
「……！」
クエタプノの表情が驚きに染まるが、レオンハルトからすればこの程度は大したことではない。
頭の天辺から足の先まで。一切の狂いなく身体を動かし、全てを自分の意志で動かしてしまえばいいのだ。
血の巡りを感じ、心臓の動きすらも自分で止めることも動かすことも出来るようになればいい。身体に対する不運はそれで対応出来る。
外部からの干渉についても簡単だ。石ころや出っ張りが来たら、それを見てから反応するか、転けてから反応すればいい。
躓いた瞬間に、不運が起こっている最中に、もう一度踏み込んで調整すればいいだけの話だ。
そして不運には限界がある。最大のものが、落雷や地割れ、突風などの自然現象だろうが、それが起こってから対応出来るだけの速度さえあれば、対応は難しくない。
「今度は地割れ程度で逃げれると思うなよ。その前にお前をすくい上げて剣を突き立て続けるくらい、俺には訳ないことだ」
告げる。もう絶対に逃がすつもりはないと。
「俺の部下をあれだけ傷つけたんだ――百回は殺してやる。精々耐えてみせろ」
「……ッッ、く……!?」
刹那、レオンハルトの魔剣がクエタプノの胴を斬り裂くと、勇者は一度、死を迎えた。

刹那の力

東部オピロス帝国王城。
人類の覇権国家であった帝国の権威の象徴ともいえるその豪奢な城の中は――もはや異空間と化していた。
禍々しい気が充満する城内。それは城の奥に行けば行くほど、色濃くなっていく。
その原因は、皇帝しか座ることの許されない玉座に座る、一人の魔の王であった。
「――外が騒がしいな」
死臭漂う謁見の間に、ただ一人、その窓の外を見て呟くのは魔王ナイチサ。
大陸の支配者、王の中の王である彼は、右手にこの国の王であった男の髑髏を、同じ様に骨だけを並べられた台に一度置く。
そこにあるのはこの国の権力者達の頭蓋骨だ。男も女も、老人も子供も、等しく殺してやったという証。魔王に喧嘩を売った代償は、その命で払わされたのだ。
だがそれではまだ足りない。
恐怖が、悲嘆が、絶望が、死が――まだ足りない。
魔王の威光はこの程度ではない。
魔王として、大陸全土を震え上がらせるほどの悪行を為さなければならない。
そうでなければ意味がない。平和を謳歌出来るほどの余裕があるというなら、魔王はそれを不幸にするために動かなくてはならない。
そうなって初めて、この世に正義を布くことが出来る。
だからナイチサは人間を殺し続ける。配下の魔人、魔物共に命令し、今なお、世界中で膨大な数の死を撒き散らしていることだろう。
その果てに、地上には何が残るのか。
人が絶滅し、魔物が闊歩する、悪行に満ちた世界になるのか。
それとも――
「……！」

その時、城が揺れた。
地震ではない。それは人為的に起きた衝撃による揺れだ。
「……レオンハルトが暴れているな」
その現象を部下によるものだと正確に読み取ったナイチサは、しかし、先程から長いこと続く戦闘に、興味を示した。何故なら、
……レオンハルトが、これだけ暴れなければいけないほどの存在か……。
魔人最強の実力を持つレオンハルトは、人間の実力者程度は軽く捻ってみせるだろう。
それこそ、一秒と掛からない。本気を出せば一撃で終わってしまうはずだ。
しかし、そうはなっていない。レオンハルトが遊んでいる可能性もあるが、この揺れから考えると、そういうわけでもなさそうだ。
つまりその人間の実力者は、レオンハルトと戦い、これだけの時間を生き延びているということを意味する。そしてその正体は、前に耳にした人間の救世主――勇者に違いない。
「――――面白い」
ナイチサは口端を吊り上げた。
人を救うために地上に突如として現れた存在、勇者。
それが生まれた原因や、この期に及んでかの存在が表に出てきた理由は、ナイチサには解らない。
だが、この状況だからこそ、現れたと仮定するならば、
「フフフ……！」
これほど愉快な事はない。
確かなところは何もないが、それはナイチサを期待させるに充分な成果であった。
ならば、自分の取るべき行動は決まっている。
ナイチサは玉座から立ち上がり、外へ向かって悠々と歩みを進める。口元に笑みを携えながら、呟く独り言は、彼にとっての絶対のものだ。
「……この世の正義（あく）が証明される日も……近い、か……」

ナイチサの呟きは誰の耳にも届くこともなく、宙に溶けて消える。
そして数秒後。禍々しい雰囲気を漂わせる謁見の間には、もはや誰の姿もなかった。

街の通りは、徐々に通常の街の光景とは酷くかけ離れていった。
魔人と勇者の戦闘。どちらも音速に迫る速度で以てぶつかり合い、流星の如き破壊力を叩き出す両者の戦いは、もはや街の外にいてもその振動が響くものであった。
魔人による、糸を走らせたような優美な斬撃は、しかし常人では視認することは出来ず、また、その斬撃でもたらされる結果は、優美とは言い難い鮮烈なものであった。
「――！」
魔人が剣を横一閃に走らせると、その軸にあるほぼ全てのものが、綺麗に両断された。高い建物はその上部分だけを切り取られ、建物であった上部の破片が、そのままの形を保ったまま下に落ちる。高所からの落下の衝撃で、ようやく瓦礫となった建物は、しかし屋根の上の戦場を、徐々に平らなものにしていく。
縦に割られるものはもっと単純に、左右に分かれた建物が、支えを失ったように地面に倒れ、破壊をもたらす。
それは戦いの過程における流れ弾でしかないものだが、この規模の大きさの被害を個人で出すとなれば、それはもはや一種の災害だった。
しかもそれがたった一本の剣で引き起こされるものとは、到底余人には思えない。
だが現実――魔人レオンハルトはそれを可能としている。
一刀で自然現象と同程度の被害を与える彼は、人類にとって極めて危険な災害の一つに間違いない。
そしてその災異を、一身で受けるのは、人類側の救世主――勇者クエタプノ。
勇者はどんなことをされても立ち上がる。決して諦めず、何度でも

敵に向かっていく。
その今の光景を、仮に今を生きる人類が目の当たりにすれば、誰もが喉を枯らすような、応援の声を叫び続けるだろう。
だが、その背景を知れば逆に、〝もうやめてやってくれ〟と懇願するかもしれない。
常人には、レオンハルトの剣を受けて、なんとか致命傷を避けたようにも見えるし、思ったよりダメージがなかったのかと安堵の息を漏らす者もいるかもしれない。
だが実情は違う。
「――〝震天〟ッ！」
「――……！　――まだ、まだ……っ！」
また、レオンハルトの剣が、クエタプノの身に当たった。
その魔人の必殺技は文字通り、必殺の剣。
大地を割り砕き、地震を引き起こすほどの破壊力を秘めた一撃は、本来であれば人間の身体を粉微塵に破裂させてしまうほどの衝撃を与える。
レベルを上げ、どれだけ身体が丈夫であっても、全身の臓器は破壊され、骨は粉々に粉砕される。その結果は死に他ならない。
だがクエタプノは立ち上がった。当然だ。
何故なら勇者は、決して死なない。
この世界における主人公とも言うべき存在は、この程度では倒れない。
主人公はあらゆる困難を越え、目的を達成するように作られている。
だから勇者は死なない。その身体は砕けない。不思議と力を残し、動くことが出来る。
だがそれは――殺されないということでもない。
勇者の不死を起こすものは三つある。
第一に見切りの力。
厳密にはこれは、不死とは関係のないものではあるが、あらゆる技を見切り、攻撃を受けなくなっていくというのは、能動的な無敵の力

ともいえるかもしれない。
第二に幸運の力。
勇者は常時、不運とはされているが、いざという時の勇者は真逆。異常なほどの幸運に愛される。
その力はあらゆる偶然、幸運を巻き起こし、敵対者を必ず失敗させてしまう。
足元の石ころ、身体の揺らぎなどの小さな偶然などから、突風、落雷、地割れなどの大きな自然現象による不運まで、ありとあらゆるものが勇者を守り、その命を守ろうとする。
これら二つだけでも、勇者はほぼ死なないと言っていいものだ。
だが、それを越えてくるものがいた場合、そこで第三の力が発動する。
それは――魂の補充。
勇者の見切り、幸運でもどうにもならない致命傷を受けた場合、勇者には身代わりとなる魂が補充される。
無論、個人を個人足らしめているものが魂であり、勇者と言えどもそれは変わらない。魂を失えば、それはもう元の人格とはならないものだ。
だから死にそうになったところで、魂は補充される。
肉体が死んでも、魂がその身体から離れるには多少の時間を要するし、消えることはない。そして魂とは力の源にもなり得る。
魂を複数持つものは、それだけで強い。一個の魂だけを持つものとは隔絶した差が開いてしまう。
例えば、一部のドラゴン。彼らは複数の魂を持つものが存在し、それらの個体は異常ともいえる強さを持つ。
そして悪魔、神々もそうであるし、魔王や魔人も複数の魂を持つ。勇者とは違い、一度の死が死であることには変わりないが、それでも、普通は死ぬような衝撃を受けても死なないのは、そもそもの力の容量が桁違いだからだ。
勇者の魂は一つ。だが、犠牲となる魂を常に補充することで、死を回避してしまう。

つまりは魂の身代わり。死の肩代わりこそが、勇者の不死の秘密だ。
故に、この勇者クエタプノは、先程から魔人の攻撃で立ち上がり続けているが厳密に言えば、何度も殺されていた。
その死の数、実に１０２回。
宣言通り、百を越える死を与えられながら、クエタプノはまだ折れることなく、立ち上がり続けていた。

レオンハルトは内心で感嘆とも、呆れとも言える複雑な気持ちを得ていた。
……これだけやっても、折れないのか……。
都合、１００回以上、眼の前の人間を殺してやった。
勇者の不死。それは知識として知ってはいたが、ここまで来ると不気味でしかない。
まるでゾンビを相手にしているようであった。今も、こちらが放った剣を受けて、一瞬身体をぐらつかせたが、
「――まだ、ですっ……！」
足に力を入れて踏ん張りを入れ、反撃の剣を放ってくる。
しかもそれは、先程よりも鋭くなっていた。
……力が増しているな。
戦いの始めよりも、明らかに身体能力が上がっている。
まだまだこちらに追いつくほどではないにしろ、現在進行系で成長を続けているのだ。
もっとも、これを〝成長〟と呼ぶのは違和感があるのだが、とにかく、力は上昇していた。
それについてはまだ問題ないが、問題となりつつある。クエタプノが折れないためだ。
レオンハルトとしては、途中で折れるものだと思っていたし、心が折れるか、その直前で戦いは終わる予定であったのだ。
何故ならこの勇者の不死は、不死であってもまた特殊であるから

だ。
殺されても生き返るのが勇者の不死。であるならば、ここまで何度も死を経験しているのである。
何度も、こちらの必殺の剣を受けた感触、痛みを受け、自分が死ぬ瞬間を、感覚として味わう。そんなものは通常の精神では耐えきれない。地獄のような責め苦だ。
一度や二度であれば、死んだという実感も薄いだろうが、何度も続けていると、おそらくはその瞬間というのを何度も体験し、憶えているはずだ。
死んだと思ったら次の瞬間には息を吹き返し、しかしまた殺される。それをずっと、勇者としてのリミットが来るまで繰り返す。そんなものを繰り返していれば、いつかは心が折れ、発狂し、廃人になってしまうだろう。
不死というのはメリットだけではない。そのことを、レオンハルトは知識ではなく、経験として知っている。
なにせレオンハルトは不老の魔人だ。勇者の様に完全な不死でこそないものの、その気になれば永久に生きることが出来る存在である。
しかし長い時を生きていると、人によってはその精神が変容したり、だんだんと感情の動きが希薄になって表に出にくくなってくる。
レオンハルトも、千年以上昔と今では、考え方や感情の動きが全く同じとは言い難いものだ。魔人という人を越えた存在になった為の一種の自己防衛本能なのか、精神的に苦痛を味わうことこそないが、ずっと同じ生活を続けていると感覚がだんだんとズレていくような違和感を感じることがある。
長きを生きるに当たって精神の平穏を守るには、新しいものに目を向けたり、本能から欲求を大切にしたり、また拘ったりと、工夫が必要なのだ。
趣味などを広げてみたりするのも有効だし、食事や睡眠などは出来るなら欠かさず取った方がいい。性行為も含めた三大欲求は特に重要だ。レオンハルトは睡眠に関しては疎かにする時もあるが、食事は

人間の時と同じ様に毎日行っているし、性行為に関しても言わずもがなだ。城にいる者たちにも、注意させていることでもある。
　これが不老によるデメリットとその対策だが、では不死。特に勇者の、何度も生き返ることについては、レオンハルトとしても想像でしかないが、想像でもキツいことが理解出来る。
　死を感じるというだけでも相当だが、毎回痛みを味わうだけでも辛いはずだ。そして何度やっても敵わないという無力感まで味わうことになる。
　だからいつ折れてもおかしくないはずなのだ。
　だがこの勇者は、変わらずこちらに向かってきている。
　さすがに身体能力の上昇と、見切りの力が鬱陶しくなってきたが、まだ問題はない。
「〝瞬光〟ッ！」
「――……く、何故、見切りが……それに、どれだけの技を持っていると……！」
　神速の一刀がクエタプノを斬り裂くが――しかし生き返って疑問を呟いた。何故防げないのかと。
　いよいよゾンビ染みてきたな、と思いながら思い違いを正す。
「一度受けた攻撃は見切るようになる。――そうは言うが、同じ攻撃など、俺からすれば存在しない」
　告げるのは、剣士として、武人としての意見だ。
「剣を振ると一口に言っても、角度や力の入れ方によってその技は大きく変化する。武術においてその変化は千差万別。たかが見切りの力一つで見切られるほど、俺の剣は浅くない」
　同じ剣士なら分かるはずだ、と視線で告げる。
「こんなものは常識だ。俺の知る人類最強の男なら、この程度は軽く突破してみせる」
　クエタプノの瞳が細まる。歯を食いしばり、こちらの剣を受け止めながら、
「っ、それは……藤原石丸のことですか……!?」
　レオンハルトは頷く。隠す必要もないと、

「ああ、あいつは強かった。今のお前よりもな」
「……！　くっ……！」
　力で強引にクエタプノを弾き飛ばし、建物に向かって叩きつける。この程度も防げないのかと、
「あいつは今のお前ほど身体能力は高くなかったが、それでも魔人を倒し、俺と互角の勝負を演じてみせた。……分かるか？　お前には、その実力の元となる下地がない」
　石丸の剣は、石丸が何十年と剣を振り、足掻き、それでも諦めなかったからこそ到達した境地であり、だからこそ、その剣は自分にも届いた。
　しかし眼の前の勇者は違う。その強さは結局、借り物の強さでしかない。
「それに、例え見切りが発動しようとも、対応出来なければ意味はない。今のお前の様にな。お前は通常の魔人を上回るほどの身体能力を持っているが……結局はそれだけだ。剣の才能はある様だが修練はまだ不完全。俺からすれば、そこらの魔人を相手にするのと変わりはない」
「！　しかしレベルは――」
「レベルがどうした。限界まで上げきったとでも言うつもりか？　――レベル程度で、人の限界を狭めるな。例え身体能力の上で限界が来たとしても、今よりも強くなるための方法は必ずある」
　やれば出来るのが人間なのだ。逆に言うと、やらなければ出来ないのも人間である。
　この勇者は、自分の前に立つための修練が足りていない。だからレオンハルトは言う。
「そろそろ諦めたらどうだ。今のお前では、例え何度向かってこようが俺に勝つことは出来ん。無駄死にだ」
「……ッ、が、ァ……っ！」
　都合、１１０回目の、剣による死を与えたところで、レオンハルトは忠告した。
　――お前のやっていることは、無駄だと。

クエタプノの目の焦点が消え、しかしまた復活する。
だが肉体は瓦礫の中に突っ込んだ。その衝撃ではさすがに死なないだろうが、
……もう起き上がってくるな。
１００回も殺せば戦いも終わると思っていたが、実際には終わっていない。どうにも異常な精神力を持っているようなので、言葉の上でも諦めろと告げた。
これ以上、相手をし、なおかつ勇者を倒そうと思うなら、拷問の様な手段を取るか、こちらの手札を切る必要がある。
だがそれは、出来れば避けたい。ゆえに折れてくれるのが理想であった。
戦闘による破壊や、何度も地割れが起きた結果ボロボロになっていく街の中で、レオンハルトは瓦礫に埋まっているであろう勇者を思う。
じっとその場所を建物の上から見詰め続け、十秒後。ようやく折れたかと思った直後に、
「――まだ、終わりません……っ！」
「……」
勇者は１１０回目の死を乗り越え、立ち上がった。
その姿をレオンハルトは、険しい顔をしながら見下ろしていた。

「あらあら、さすがにもう駄目ですかね……」
その戦いを遠くから見ていたコーラは、もはやこれまでかとほんの少し残念がってみせる。
魔人を倒せる力を得たはいいが、相手が悪すぎた。
他の魔人であればクエタプノでも倒せただろうが、あの魔人は難しいだろう。
幾ら不死で、何度でも立ち上がるとは言えども、精神の限界はある。
百回以上も殺されたなら、普通はもっと前に廃人になってもおかしくない。魂が汚れて汚染人間となってしまうだろう。

しかしその気配もない。クエタプノの精神は殆ど綺麗なままだ。
「やはり、異常……」
そう、異常な精神力の強さ。
ここまでやって魂が汚れないというのは人間としては規格外だ。
出会った時から何かあるとは思っていたが、まさかここまでの逸材だったとは、と思う。
それだけに壊れるところを愉しみにしていたのだが、これだけ耐えられると興醒めだ。むしろ早く壊れてほしい。
それとも、今から真実を教えてやれば壊れるだろうか。
「……ありですね」
ふと思いついたものだが、それがあまりにも良い考えなので、本気で実行しようかを悩む。
そんな時だ。――解放を感じ取ったのは。
「！　へぇ、とうとう来ましたか……！」
思わず感情を隠すこともなく純粋な笑みを零してしまう。
勇者という存在が生まれて約千年以上経ったが、ここまで力の解放が為されたことは、今まで一度もない。魔王が人類を殺しまくったおかげだろう。
クエタプノの身体から光が、力が漏れ出していた。
その名を、コーラは呟く。
今までのは人類死滅率３０％――逡巡モード。魔人を倒せる力。
ならこれは、
「刹那モード……！」
人類死滅率５０％。そうなった場合の勇者は。
――魔王を倒せる力を得る。

深淵を、クエタプノは何度も感じていた。
自分ではもはや数えていない、何度目かの闇だ。
そして圧倒的な、虚無。もはやそこにいることも認識出来ないような暗闇。

百回を越えただろうか、それだけの死を、クエタプノは経験した。
その度に、クエタプノは勇者の力によって息を吹き返す。
なるほど、これは辛い。これが死か。あまりの苦しみに心が悲鳴を上げている。
だがクエタプノはその度に、自分を無理矢理奮い立たせる。
強引に意識を覚醒させ、倒れかけた肉体を踏ん張り、戦闘を継続する。
魔人レオンハルトは思った以上に強大で、こちらの剣が通用しない。
見切りも幸運も、何もかもを突破してこちらを殺してくる。
長時間戦えば、圧倒的有利なのはこちらなのに、戦えば戦うほど、死が訪れる間隔は短くなっているように感じた。
相手がこちらの動きを見切りはじめたのだ。
それは己のような他者から得たものではなく、純粋な技量と経験によるものだった。
もはや何をしようが敵わない。冷静な視点ではそう思う。
しかし、クエタプノは諦めなかった。
まだだ。まだ終わらない。
何故なら勇者は、人々を救うために何度でも立ち上がらなければいけないから。
自分が体感しているこの死が、今この時でさえ多くの人に降り掛かっている。
そんなものは悲しすぎる。そんな現実は認めたくない。
他の誰でもない自分の意志で、クエタプノは勇者としての使命を全うしようとしていた。
何か違和感は感じる。
この力の出処は何なのか――クエタプノには幾つかの予想がある。
その中でも最悪の予想が、当たらなければいいと願いながらも、しかしクエタプノはそうであった時のことを考える。
もしそうであったのなら、尚更諦めるわけにはいかない。
自分は、勇者は――多くの人々の想いを糧に戦っているのだ。

であればやはり、諦めるわけにはいかない。
眼の前の魔人と、魔王を倒すまでは、戦い続けなければならない。
それが勇者だ。どんな理由や背景があろうとも、それは変わらない。
「――まだ、ですよ……！」
だからクエタプノは立った。
死を体感し、また死が訪れると知りながらも諦めることはない。
魔人がこちらを見て、眉間に皺を寄せた。そして問いかけてくる。
「……どうやら、お前を普通の方法で諦めさせるのは難しいようだな」
そうだ。僕は諦めない。
死んでいった家族、仲間達や、多くの罪のない人々のために。
命を賭して、正義を示さなくてはならない。
例えどんな方法を取られようが諦めないと、剣を構える。
魔人が息を入れた。その上で、
「……この手は、使いたくはなかったがな……このままでは俺も危ない。だから――」
と、魔人は魔剣を構えた。
そして、
「――使わせてもらうぞ」
「ッッッ――!?」
瞬間、本能が眼の前の魔人を避けた。
眼の前の魔人から、禍々しい圧力が増している。先程までの存在感も圧倒的ではあったが、それを輪にかけて、恐ろしい。
もはや幸運は意味を為さない。敵に降り掛かるあらゆる不運は対処される。
だが、勇者としての勘か、幸運の最後の助けなのか、自分に警告してくる。
――眼の前の魔人から逃げろと。
でなければ、次はどうなるか解らない。
勇者としての不死は、こちらが折れない限りは続くはずだが、それでもなお、危険だと本能が訴えている。

魔人の身体から気が立ち昇る。魔剣が妖しく紅い光を発している。
それが増す度に、クエタプノはこの場から逃げるべきという判断と衝動に駆られそうになる。
だが、それすらも堪えた。
「僕は、勇者です……！」
だから、
「決して、引きません……！」
「……いい度胸だ」
こちらの啖呵に、魔人は答えた。
――死んでも恨むなよ、と。
「――オオ……！」
魔人が声を上げて迫ってきた。
しかしそれでもなお、現在進行系で力は増しているように感じる。
剣を構え、それを迎撃しようと試みるが、対応出来るかは微妙なところだ。
しかしそれでも、諦めない。勇者は諦めない。
必ず勝たなくてはならないのだ。――そう想いを刻んだ瞬間、
「――！」
「何――ぐっ!?」
不意に、クエタプノの全身に力が溢れた。
今までのものの、何倍にも、何十倍にも膨れ上がる力。
その光と力の塊は、放出するだけで魔人を吹き飛ばした。
「これは……」
自分の手を見て、その力の強さに驚く。
先程までの自分や、眼の前の魔人が小さく感じる……隔絶した力。
誰が相手でも負ける気がしない全能感。これなら例え魔王であっても――と思い、クエタプノははっとして、それに思い至った。
……まさかこれが、勇者の、魔王を倒せる力……？
コーラが言っていた。勇者は魔人や魔王すらも倒せる可能性があると。
その可能性を開いたように感じる。前に強くなった時と、感覚が似

ていたからだ。
「……！」
「ぐ、おお……！」
クエタプノは徐ろに、勇者の剣であるエスクードソードを魔人に向かって振る。
するとそれだけで、先程までこちらを圧倒していた魔人は吹き飛んだ。
剣を受け止めることはしたようだが、こちらに力負けしてしまったような形だ。
そしてその結果でも、改めて理解した。
自分はもはや、魔王と同等。
眼の前の魔人筆頭など、相手にならないほどの力を手に入れたのだと。
それは勇者としての使命を真っ当することが出来るという僅かな喜びを、胸に抱かせたが、同時に酷く心が冷める気分にもなった。
「……どうやら、勝負は終わりのようですね」
「かはっ……！」
再び攻撃を加えて魔人を地面に転がすと、今度は逆に、こちらから勝負の終わりを宣告する。
もう魔人に、抗う術はない。もはや敗北は必至。魔王と同等の力を受けて生きているだけでもその強さが理解出来るし、先程の禍々しい気はまだ感じるが、それでも勝てるという自信がある。
だからクエタプノは、一思いに終わらせようと思った。
いつ勇者としての力が切れるかも解らない。時間は有限で、一刻の猶予もないのだ。
故にクエタプノは剣を構えた。眼の前の魔人を殺そうとして。
その勝負に決着をつけようと、踏み込んだ。
だが、
「――力を開放し……俺を圧倒するだけの力を身につけたか……」
魔人は膝を突きながらも、先程の一撃を耐え、しかも立ち上がってみせる。

呟くように放たれた独り言は、次に、こちらに向かって放たれた。
「――クク……唆るじゃねぇか……！」
「っ!?」
再び魔人の気が増した。
またあのおぞましい気配だ。
しかし、力はこちらの方が上だ。頭に流れる血を手で押さえながらも口端を歪めてみせる魔人は、もはやこちらの一刀で沈むはずの存在。そのはずだ。
だというのに、不思議とまだ戦えるような予感がする。
……この魔人は、危険です……！
ただの魔人でありながらこの異常な力は、人類に災厄を齎す可能性が高い。そう判断したクエタプノは、己の絶大な力、その全力を以て、相手を屠ると決める。
対する魔人は、剣をゆらりと構えた。
「いいぜ……来いよ」
「っ！　行きます！」
クエタプノは、もはや音速を越えた速度で、レオンハルトに迫った。
その力に、魔人が対応出来るはずもない。事実、直前までレオンハルトは反応している風には見えなかった。
だが、その一瞬の刹那の間に――レオンハルトの瞳がこちらを捉えた。
目が合ったことに背筋がゾワッとするが、偶然という可能性もある。
もはや足を止めることはないし、剣を振ることを止めることはない。次の瞬間には魔人の身体に、こちらの剣が突き立てられているはずだった。
だがそれは叶わなかった。何故なら、
「――！　っ……!?」
不意に横から、何かが入り込んできた。
それはこちらと同等以上の速度を以て魔人の前に割り込み、更には、こちらの剣を弾いて見せたのだ。

魔王と同等の力を得た自分と、互角の力を持つ者など、クエタプノは〝彼〟しか知らない。
その名を、クエタプノは震える唇で呼んだ。
「――魔王……ナイチサ……！」
「――如何にも。余こそが大陸の支配者にして、この世全ての魔、その頂点に立つ存在」
言う。全身から圧倒的な魔の力を漂わせながら、
「魔王ナイチサである。強き人間の戦士よ。余に名を告げることを許そう。――さあ、名乗るがいい」
こちらも言う。彼に従ってではないが、そうすべきだと、
「……僕は……勇者。勇者、クエタプノです」
勇者であることを改めて自覚させるように告げると、魔王は笑みを深めた。
恐ろしい、暴虐の支配者としての笑みだ。正に魔物の王と言えるが、それでいて、どこか気品や優雅さを感じる。
悠々とした仕草で、魔王ナイチサは腕を広げた。背に、魔人を置きながら、
「勇者クエタプノよ。よくぞ余の最強の家臣をここまで追い詰めた。その功績を認め、余が直々に相手をしてやろう」
「ナイチサ様……」
「レオンハルトよ。暫しの間、下がっておれ。これよりここは、魔王の戦場となる」
「……はっ、畏まりました。ご武運を」
最強の魔人を難なく従えてみせる様は、間違いなく魔人達の主だ。かの魔人は、直ぐ様その場から距離を取る。それを確認し、魔王ナイチサは再度こちらに、その血の様な紅い目を向けた。
「――さあ勇者よ。これで戦いの場は整ったが……その前に、卿に問うべきことがある」
「……何でしょう？」
魔王からの問いに答える義務などないが、自然と促してしまう。
その上で、魔王は言った。こちらを真っ直ぐ見据えて、

「卿は、何のために余を倒さんとする？　何のために戦うと言うのだ？」
「……そんなことは決まってます」
問われた言葉には即座に応じる。悩む必要のない問いかけだったからだ。
クエタプノは剣を魔王に向けて、告げた。勇者としての、クエタプノとしての意志を。
「――この世の、〝正義〟の為に」
眼の前の悪を倒すためだと、そう言った。
だが、
「……フフフ――」
魔王は数秒、それを真顔で聞いていたが、直ぐに笑みを浮かばせる。
「フハハ、フハハハハ――！」
魔王は高笑いをする。心底可笑しいとでも言うように。
クエタプノは眉を顰めた。何故笑う？　と。
しかしナイチサはその理由を告げた。高揚し、演説を行うかのように、
「――正義！　正義と言ったか！　フハハ、なるほど！　余を、〝悪〟だと！　人間を苦しめ、その姿を嘲笑う余を！　倒すべき邪悪だと、そう言うわけだな⁉」
「……ええ、当然です。貴方は、魔王は……倒すべき悪です。人々を不幸にする貴方の悪行を、野放しにしておくわけにはいきません」
「フハハハハッ！　なるほど！　余が許せないか！　悪が許せないか！　だからそれだけの力を得たのか！」
だが、と、
「余は絶大な力を持つ魔王であるぞ！　余を倒すことを出来る生物は、地上には存在せん！　多くの英雄が余に辿り着くことすら叶わなかった！　故に、絶望的な戦いになるであろう！　それでもなお、挑むというのか⁉」
クエタプノは頷く。魔王の天に届くような声量に負けないよう、こちらも声を跳ね上げて、

「当然です！　悪は、討ち倒さなければならない！　この世を生きる人々に希望と、正義を示さなくてならないんです！　そのためにも、勇者は魔王を倒さなくてはならない！」
「ならば魔王である余に証明してみせよ！　人の勇者よ！　正義の使者である勇者よ！　邪悪の化身である余を見事滅ぼしてみせよ！」
魔王が絶大な邪気を解放する。
「余の屍の上にこそ、人類の希望が！　この世の正義は存在するッ！　さあ、勇者よ！　正義の力を見せてみよッ!!」
「倒します……！　勇者として……そして人間として！　悪は、滅びなくてはならない!!」
そうして、勇者と魔王は己の正義を証明するため、眼の前の相手を討ち倒さんと力を振り上げた。
魔物が支配する人間の街で神々に見守られながら、この世で最大級の正義と悪は、激突した。

クエタプノＶＳナイチサ

勇者と魔王。究極の力を持つ二者の頂上決戦。
人類の命運を懸けたその戦いは、互いに正面からの激突から始まった。
挑んでこい、と言わんばかりに両手を広げて待ち構えるのは全身から魔の気を漂わせる魔王ナイチサ。
それを討ち倒さんとエスクードソードを振り上げたのは全身から神気を立ち昇らせる勇者クエタプノ。
勇者の剣、光の一撃が、魔王ナイチサに向かって振り落とされる。
それはもはや、剣技という枠を、力技で強引に越えた異常な一撃だ。
クエタプノは己の身から高まる力が、もはや完全に人の身を越えたことを自覚した。元の何十倍。何百倍の身体能力から放たれる斬撃は、技術などなくとも大気を斬り裂き、天地を割る。
これなら先程は身体能力と技術の差があって意味をなしていなかった見切りも、十全に活かすことが出来るだろう。この地上で勇者が追いつけない力の持ち主など、眼の前の魔王しか存在しない。
その魔王であっても、同等の力で以て討ち倒すことが可能だ。
だからそれをぶつけた。しかし、
「――――効かぬな」
「!?　何故――――！」
その光の斬撃。もはや魔法に近い光の奔流は、ナイチサの手に掻き消されてしまった。
勇者の、聖なる光の力は、魔王に一切通用しなかった。何故だ、とクエタプノは疑問を口にする。
勇者の問いに、ナイチサは王者の風格を漂わせながら余裕を持って答えてみせた。
「フハハ……余に、邪悪な存在に光の力が通用しないことがそんなに意外か？　種別は同じなのだ、ならば効かぬのも道理であろう！」
「種別が同じ……それは一体――――」
不敵に笑みを浮かべて戸惑う勇者を見下すのはナイチサ。疑問が

解消されないクエタプノを、ナイチサは空に浮いて右手を上げた。
「分からぬか。ならば教えてやろう……！」
ナイチサが力を溜める。
魔王としての、己の力。その力の正体を、クエタプノに見せつける。
「！　魔王、貴方はまさか――!?」
集まっていく力に、己と同じものを感じたクエタプノは、驚愕の表情でナイチサを仰ぎ見る。
ナイチサは答えた。――そのまさかだと。
「さあ、我が光の力を見るがいい……！」
ナイチサが右手を掲げた先、空に巨大な光の球が発生する。
極光を発しながら膨れ上がっていくそれは太陽にも似ていた。
その光の力こそが、ナイチサが勇者の力を無効化したものの正体。
魔王としての特異な力。ナイチサのそれは、光属性である。
〝ＮＣ体質〟。あらゆる光の力を完全に無効化してしまうナイチサは、光の力をその身に集める。
それは彼の在り方の具現。魔王とは、光の存在であることの証明だ。
この世の価値観、正義とは、魔王にこそある。
他ならぬ天上に御わす存在が、ナイチサに〝そうあれ〟と命じたのだ。
ならばこの世の真の正義を布くのは、魔王ナイチサである。
彼は天命を受けたのだ。
己の悪行を正義だと肯定された男は、己の中にある真の正義を証明するために、光の力を振るう。
神々に祝福されし光。それは滅びと消滅を意味するナイチサの必殺の光だ。
一撃で数十万、数百万の人間を葬り去るその極光は、まるでこの世の終わりのような光景を作り出す。
「仰ぎ見ろ！　我が光は滅びの光！　地上に生きる神の玩具を消滅させる正義の光である！」
ナイチサは高らかに謳い上げる。

天に地に。全ての者達に魅せつけてやると、光を、勇者がいる地上に向かって落とす。
「――〝ホーリーデストラクション〟……!!」
あらゆるものを葬り去るナイチサの必殺技。太陽の如き光球は地上に落ちると――
「――――!」
鼓膜が破れそうなほどの轟音とともに。
その場にあるものを、塵一つ残さずに、消滅させた。
圧倒的な破壊の力を振るい、魔王ナイチサは両手を広げて祈りを謳い上げる。
「これこそが、この世の善！　地上で唯一の正義！　悪行を成すことこそが、この世の正義である！」
破壊の衝動に駆られるままに光を落とした魔王は、地上を見て問う。
――〝正義とはこの程度なのか？〟と。
それに応えるように、人影は宙に躍り出た。
「――違います……！」
それは人類の救世主――勇者クエタプノ。
彼はその理を認めないと、聖なる剣を手に魔王に斬りかかる。
「人を殺すことが……正義のはずありません……ッ！」
彼はどこまでも人の為に剣を振った。
魔王の光の力。それは驚きに値する。不利な戦いになることは明らかだった。
だが、諦めない。
勇者はどんな絶望的な状況でも諦めない。
既に百度を越える死を乗り越えた勇者は、魔王の光に抗う。
そんなのが正義だと、今この世を満たす光だと、そう言うなら。
「僕が、地上に光を与えてみせます……！」
お前の代わりに、己が真の光となると。
魔王による悪の光など、地上にはいらない。
人々は善を、救いを求めているのだ。

それを乱すものは誰であろうと、
「滅びの光は、僕が払ってみせますっ!!」
「――面白い！　余を前にしてよくぞ吠えた！　ならば抗ってみせよ！」
この世の正義を証明してやると、二人の戦闘は激化した。

魔王と勇者の戦闘は、街の半分を破壊した。
特にナイチサの光の一撃は、そこにあったものを消滅させ、瓦礫すらも残らない巨大な穴となった。
その戦いを見ながらも、戦いの被害から魔物達を遠ざけるために、奔走している者がいた。
「――急げ！　街にいる全ての魔物を撤収させろ！」
と、配下の魔物達にそう命令するのは、先程まで勇者と戦っていた魔人レオンハルトだった。
彼はナイチサの命令を受けて下がるように言われると、直ぐ様魔物兵を助けるために動いた。
魔王と勇者の戦いが始まれば、多くの被害が出ることは目に見えている。兵を無闇に損失するわけにはいかない。
幸いにも、勇者とレオンハルトの戦いで既に街の隅まで移動していた者が殆どであったため、避難は楽に済んだ。今は逃げ遅れた魔物兵がいないかどうか最後の確認を行いながら、出来るだけ遠くへと魔軍を移動させる命令を出したところである。
故にレオンハルトは、未だ街の中にいた。
己のやるべき仕事を行いながらも、レオンハルトはその戦いを見て、目を細める。
「とんでもない戦いだね……！」
と、冷や汗を垂らしながら言うのは、同じ様に街の見回りを行い、こちらに報告に来たハンティだ。
瞬間移動は、こういう緊急性の高い用件の時に役に立つ。迅速に兵を撤収させられたのは、殆どハンティのおかげだろう。

そのことに内心で感謝しつつも、レオンハルトは戦いから目を離せない。
思うのは、自分の戦いの結果と、口惜しさであった。
「……」
「……ちょっと。何、殺伐としてんのさ」
ハンティが容赦ない指摘を行ってくる。いつもながら遠慮のない言い方だ。
こちらの内心を読み取っているのだろう。嫌そうな顔を浮かべながら正確に告げる。
「……混ざりに行きたいとか、血迷ったこと言わないでよ？」
「……ハッ、よく分かったな？」
レオンハルトは特に隠すこともなく、しかし苦虫を噛み潰したような表情のまま問う。ハンティは呆れたように頭をガシガシと掻き、
「いや、分かるよ。そんなに剣呑とした気出して、目がギラギラしてたら。出会った魔物兵が怯えてたじゃない。あんた、気づいてる？」
「……ああ、悪いな。どうにもまだ、昂ぶってしょうがねぇ」
あれだけの強者を見たら昂ぶるのはしょうがないだろう、とレオンハルトは言う。
彼の戦いはもう終わったというのに、未だ口調は荒々しく、禍々しい気を露わにしていた。
だがそれもしょうがない。レオンハルトとしては不完全燃焼なのだ。
一番良いところで。これからと言う時に邪魔が入った。
ナイチサは己を助けようともしていたのだろう。それは解るし、一応感謝もしよう。
だが、あの状態の勇者を、横取りされるのはたまったものじゃない。
ようやく己を越える化け物との戦闘が叶い、それを越える良い機会が巡ってきたというのにだ。
しかもおあずけを食らったばかりか、こんな場所で魔王と勇者の勝負を見せつけられてしまうと、どうにも辛抱堪らない。昂ぶってしょうがないのだ。

何か面白い、唆る攻防を目の当たりにする度に気は高まり、
「んっ……だから！　あんま近くで戦意出すなっての！　こっちまで反応するじゃない！」
「ハッ、それはお前が悪いだろ。いつからそんな敏感な身体になった？　なんなら今から俺とおっ始めるか？」
「～～～っ！　あんたのせいでしょうが！　というか、こんな場所でやるわけないでしょ!?」
まだ一応正気のハンティだが、レオンハルトの刺すような闘気に反応して身体を反応させる。戦闘意欲が刺激されているのだ。
だがそのことを軽くからかわれたハンティは、声にならない唸りで歯を噛み締めた後、憤った様子で文句を言う。
聞く人が聞けばアレな会話に聞こえるが、本人にはあまり自覚はない。レオンハルトの方も特に気にした様子もなく、肩を竦めて踵を返してみせる。
「冗談だ。さすがに、仲間内で乳繰り合ってる場合じゃない。今はやるべきこともあるしな」
「……一応、避難は終わったけど、何するつもり？」
屋根の傾斜の上に立つハンティが、その場から離れようとするレオンハルトに訝しげに問う。
レオンハルトは答えた。口元に不敵な笑みを浮かべながら、
「何、ちょっとな。――ネズミと遊んでくるだけだ」
己の昂りを鎮めてもらおうと、レオンハルトはその場から一瞬で移動した。

光と光。
正反対の存在でありながら、同属性の力を振るう二人の戦闘は、近接戦へと移行した。
「ほう、余の家臣には敵わずとも、中々の腕前だ！」
「お褒めに預かり光栄ですね……！」
地上を、空を。二つの閃光が行き交い、時折激突して火花を散らす。

並ぶ者のいない高速の移動は、それだけで大気を打撃し、周囲に衝撃波を撒き散らしている。
打撃は建物を粉砕し、地面を割り砕き、斬撃はあらゆる者を両断してしまう。
だがナイチサは、勇者の剣撃を見て、高い評価を与えつつも、己の家臣以下だと断じた。
それは当然だ。ナイチサの一番の家臣である魔人レオンハルトは、世界最強の剣士。
勇者が魔王と同等となり、剣を扱っても、その剣の腕前には隔絶した差が横たわっている。身体能力の差でカバーは出来るものの、最高峰の神業染みた剣技を知っているナイチサからすれば、見劣りしてしまうのは間違いなかった。
そして一方でクエタプノも、魔王の戦闘力に驚きを見せる。
「随分と、戦い慣れてますね……！」
苦悶の声を漏らしながらクエタプノが告げる。
そう、魔王ナイチサの戦い方は、明らかに達人のそれだった。
武術というものではない。魔王として強化された鋭い爪で勇者の剣を弾き、身一つで戦っているに過ぎないのだ。武人という風貌でもなく、魔王としての身体能力に任せた戦い方をするのかと思えば、悪い意味で裏切られてしまった。
だから慣れているのかと問うた。しかし、魔王の答えはある意味で、最悪なものだった。
「戦い慣れているわけではない――殺し慣れているだけだ」
「っ、それは……！」
ナイチサの強み。勇者として、騎士として戦ってきたクエタプノに、戦い慣れていると評させるからくりは、そこにあった。
殺人ＬＶ３。この世で最も、殺しに長けた稀代の殺人鬼であるナイチサは、戦闘という戦闘を殆ど行ったことはない。
ただ、殺してきただけだ。隠れて、堂々と、時に斬新な手口を使って、残酷に、一方的に。
殺しの技術に於いて、ナイチサは誰よりも優れる。

そして戦いとは、戦闘技術とは――つまるところ、殺しの技術だ。
如何に相手を殺すか。効率的に相手を殺す方法を突き詰めたのが武術であり、戦いの理である。それは歴代の達人――レオンハルトや藤原石丸の剣の理も、根本的には変わりない。
戦いにおける究極的にして原初の理こそが、殺人である。
どんな武術も、最終的には人を殺すとこに行き着く。どんな戦士だろうとそれを否定出来はしないだろう。
ナイチサの殺人の才能は、戦闘にも転用が可能だった。
己と同等の身体能力。見切りの力を用い、幸運を持ち、優れた戦士でもある勇者。
しかしナイチサの脳裏には既に、その勇者を如何にして効率的に殺すか――その道筋が幾つも立てられている。
殺しとは、己は殺されず、相手を先に殺すこと。相手に危害を加えられず、または相手より先に、相手を害することだ。死んでしまえば相手を殺せない。殺すことにはならない。
殺すことに特化したナイチサの才能は、戦いにおいても遺憾なく発揮され、眼の前の戦士を追い詰めるのだ。
「余は億を越える人間を殺してきた魔王！　殺しなど、余にとっては息をするに等しい行いだ……！」
「ッ、外道め……！」
この魔王は――いや、ナイチサは、どこまでも魔王だった。
正にこの世の悪行を体現する巨悪の如き存在。人類にとっての不倶戴天の敵であり、殺人を好む天敵。ナイチサという生物にとって、人を殺すことは、生きることと同義だ。
罪の数を数えるのも馬鹿らしい。どれだけの人間を殺してきたのか、考えるだけでおぞましい悪の所業。
そんな邪悪も、ナイチサにとっては、正義の行いだと言う。
正に悪のカリスマ。この世における絶対の悪。魔王の中の魔王。
あり得ないことだ。天地がひっくり返っても、このような存在を認めるわけにはいかない。
クエタプノはその手に力を込めた。これ以上、悲劇を繰り返すわけ

にはいかないのだと、
「魔王ナイチサ……！　貴方は、この世にいてはならない存在だ！」
「フハハハハ！　人を殺すことがそんなにも許し難いか!?　死ぬために生まれてきた人間が、天に定められた死から抗うというのか!?」
　死ぬために生まれてきた玩具こそが人間だと、ナイチサは事実を遠回しに口にする。
「例えいつかは死ぬとしても、だからと言って、不当に殺されていい理由にはならない！　そして貴方という殺人者を、天はお許しにならない！」
　例えいつかは死ぬとしても、人間を殺していい理由にはならない。
　殺人を許容する巨悪を、天は許さないはずだと、クエタプノは願望を口にする。
　それに対し、ナイチサは笑みを深めた。
「天は余を許さないか！　面白い！　ならば余は、この身に天罰が下るまで人を殺し続けてみせよう!!」
「僕が、その天罰です……！」
「人の身で天罰を名乗るか！　愚か！　全くもって愚かなり！　矮小な人間よ！　――しかし人である限り、卿は余という死の運命から逃れられれん！　余がこの身に秘めるのは神聖なる邪悪の力！　人を殺す邪なる正義の力だ！」
　その言葉の通り、ナイチサはその右手から光弾を連続して撃ち出す。
　一つ一つが、地上を破壊する滅びの力。それクエタプノは、一つ、また一つと躱し、時に弾き返す。
「なら、その正義を正します……！」
「甘い！　蒙昧なり勇者よ！　この世を満たす痛み！　苦しみ！　恐怖！　絶望！　あらゆる負の現象からは、決して逃れられぬと知れ！」
　ナイチサの左手。そこからいでるのは魔の波動だ。
　――〝魔の渦〟。決して逃れられぬ魔王の力が、勇者に襲いかかる。

だが、
「なら僕は、そこから逃げるための道を作ってみせます――っ！」
「！」
勇者はエスクードソードを横薙ぎに振るった。そこから放出される光の剣は、ナイチサを斬り裂くことは出来ずとも、ナイチサから放たれる魔の力を斬り裂くことは可能だった。
ナイチサの表情に僅かながら驚きが混じる。しかしそれは、直ぐに笑みに変わった。
「魔の頂点に立つ王の攻撃から、そのように逃れるか！　それほどまでに、希望が欲しいのか?!」
「っ、ええ、欲しいですね……！」
迷わず、肯定する。
同時にクエタプノは、魔王が動きを加速させたのを見た。
――来る。魔王の本気の連撃が。
全神経を研ぎ澄ませ、魔王の行動に目を凝らしたその瞬間、クエタプノは魔王の姿を見失った。
「――ならば、余が与える幾重もの〝死〟を耐えきってみせろ」
「っ、……くっ、あ……！」
魔王が、驚くべき身体能力の上昇を見せ、クエタプノの腹を貫いた。
理由は解らない。だが、魔王が告げたその宣誓をクエタプノは聞いた。
「これより余は、卿を殺す。絶対に、確実に、一片の慈悲も容赦もなく、卿を殺し、死を与える」
その宣誓に反応し、ナイチサの動きが力が、加速度的に上昇した。
だが、ナイチサは続けて言う。
「しかし、卿はどうやら不死であるらしいな。余の力を以てしても、完全な死を与えることが出来るかは怪しい。――そこでだ」
告げる。クエタプノにとっての、悪夢の始まりを。
「先程、卿は余の家臣、レオンハルトに百回は殺されたらしいな。ならば余は――」
と、

「――千回だ。千回、余が思いつくありとあらゆる方法で、卿を殺してやる」
「――――」
さあ、と。魔王は絶望の行進を始めた。
「真に希望が欲しいと、正義を証明したいと言うなら――耐えてみせろ」
ナイチサの右手。あらゆるものを貫き、斬り裂く鋭い爪が、クエタプノの腹から抜かれ、心臓に向かって突き立てられる。
「まずは――刺殺」
「っ――……くっ……！」
クエタプノは死んだ。が、直ぐに意識を覚醒させてその場から脱した。
だがナイチサは既にクエタプノのすぐ近くまで迫っていた。
「斬り刻まれろ――斬殺」
「ッ、――……ふっ……！」
速い。
とんでもなく速くなったナイチサの攻撃速度。岩をも斬り裂く爪によって、今度は斬りつけられる。
何度味わっても嫌になりそうな死を受け、しかし歯を食いしばって意識を覚醒させた。
剣を振って、反撃を返す。
だがナイチサはそれを紙一重で回避し、今度は拳を作った。
「砕けよ――殴殺」
「ッッ……ぁ……ぐっ！」
脳髄を大地を砕くほどの打撃によって破壊されて死ぬ――が、勇者の力がそれを破壊をギリギリのところで回避し、命を復活させる。
クエタプノはまだ耐えた。だが、先程の戦闘よりも短い間隔、連続で与えられる死に、精神に濁ったものが混じりはじめる。
たまらず、クエタプノは逃げた。だが、
「撃ち抜くぞ――射殺」
「っ！　――っ……はっ……！」

光弾。それも極小のものが、寸分違わずにクエタプノの心臓を素早く撃ち抜く。
呼吸が止まったような感覚を得て、クエタプノは再び戦闘に戻ろうとした。
だが、気づけばまたナイチサはいなかった。
しかし不意に、クエタプノは横から大質量の何かに打撃された。
「――撲殺」
「……っ！」
それは、塔だった。
ナイチサが地面から無理矢理引っこ抜いたのは、街にある巨大な時計塔。それを引き抜き、即席の鈍器としたナイチサは、それでクエタプノを殴りつけた。
続いて地面に叩きつけられたクエタプノに、ナイチサはその時計塔をもう一度上から叩きつけ、
「押し潰されよ――圧殺」
「ぐ、ぁ、ぁあああああ、ぁ、かっ……!?」
上から思い切り押し潰され、しかしナイチサの膂力に耐えきれずに、時計塔は粉砕される。
しかしそれでも、ナイチサは下にいるクエタプノの顔面を掴み、大地に押し潰して殺した。
そして右手にクエタプノを掴んだまま、ナイチサは光の力で熱を発生させる。
「焼け死ね――焼殺」
「〜〜〜っ、がああああ、はっ……!?」
全身を焼かれながらの死。直前の圧死にも勝るとも劣らない苦痛を味わい、苦悶の声を上げながらも、ナイチサはまだ手を休めなかった。
「己の血肉を刮目せよ――抉殺」
「っ、っ、あ、ぐぅ……！」
ナイチサの爪が、クエタプノの肉を、臓器を抉り取る。
筆舌に尽くしがたい激痛を味わい、己の臓器を目にしながらも、ク

エタプノは勇者の力で守られ、生き返った。
「苦しみ抜いて死ぬがよい――扼殺」
「か、ぁ、あ……！」
今度は首を手で絞められ、殺される。呼吸ができなくなり、死の間際を強く感じてしまう。
次に生き返った時、クエタプノは気合いを腹に入れ、動いた。
「――ま、だ……ですよ……！」
と、ナイチサの絶え間ない殺人から逃れようと斬撃の連続を放った。
しかしナイチサはそこにはおらず、次の瞬間、突然の死を与えられた。
「――――暗殺」
「っ――……ぐ……!?」
音もなく背後に忍び寄っていたナイチサが、クエタプノを後ろから刺殺する。驚愕に目を見開いたが、ナイチサの方はこちらの死に様を見て、笑みを浮かべていた。
「フフフ、どうした？　そろそろ苦しくなって来たか？」
「っ、この程度……！　なんともありません……！」
心は悲鳴を上げ続けていたが、それすらもクエタプノの強靭な精神力は耐える。
だがナイチサの方も、折れないクエタプノにやりがいを見定めたのだろう。更に笑みを深めると、
「さすがは勇者だ。なら、もっと耐えられるであろうな？　後９９０回は死んでもらうぞ」
と、ナイチサはクエタプノに高速で近づき、魔王の力で以てその身に、拷問の如き苦痛を与えた。
「――惨殺……！」
「――！　う、ぁ……！」
出来る限り死を引き伸ばし、痛みを与えることに特化した惨たらしい殺し方。
それらを順序よく叩き込んだナイチサは、己の悪行に苦しみながら

も耐え続ける勇者に、とうとう高笑いを始めた。
「フハハハハハ！　どうした勇者よ!?　卿の力は、正義はその程度か!?」
殺人という最悪の才能を十全に用いて戦闘を行うナイチサは、人間であるクエタプノにとって最悪の相手であった。
――もう何度目かも解らない死の中で、しかしクエタプノは抗うと、心に定め続ける。
――まだ、諦めない……！
この程度で、諦めてたまるか。
全身から血を流し、絶え間ない痛みと死の連続を受けながら、クエタプノは戦い続ける。
何故こんなにも苦しい思いをしなくてはならないのか。
魔王は強大だ。勝てるわけがない。
だからもう諦めてもいいんじゃないか。
そんな〝逃げ〟の衝動が、幾らクエタプノの心を覆い尽くそうとしても。
――勇者は、諦めない……！
魔王との相性は最悪で、クエタプノは何度も殺されてしまっている。
だがそれが、何だと言うのだ？
それでも生き返るのが勇者だ。魔王を倒すための力を与えられた、人類にとっての救世主。希望こそがクエタプノなのだ。
ならばこの程度、耐えきれない道理が、どこにあると言うのか。
――意識を研ぎ澄ませ。
重要なのは集中し、己の力を十全に発揮すること。
どれだけ勇者の力が絶大でも、それを扱う本人が脆弱であれば、本当の強者には勝つことは出来ない。
あの魔人がこちらに告げたことだ。
不運を実力で踏破し、見切りの力を掻い潜り、しかし見切られてもなお、純粋な剣技で正面から突破してみせたあの魔人の言葉。
それに倣うわけではないが――解消する方法は己の実力の中にし

かない。
幸運は当てに出来ない。ある程度は発動しているようだが、幸運はあくまでも、ギリギリの部分で最悪を回避するだけだ。それだけを当てにして、戦闘は出来ない。
――もはや自分は、どうなっても構わない。
死を恐れるな。どうせ勇者は死なないし、いつかは死ぬとしてもそれから逃れる術はない。
ならば考えるだけ無駄だ。
全神経を研ぎ澄まし、相手を倒すことだけを考えろ。
クエタプノはここにきて、開き直った。
そして、再び、百回を越える死が与えられた頃――
「――――見えました」
「ッ！」
ナイチサから与えられる死の一つ。
それをたった一度だが、防いでみせた。
魔王による悪行に、世界で唯一人、それを否と突き返せるのは、
「……フハハハハ！　やるではないか――勇者クエタプノッ！　まだ終わらぬか!?」
「……ええ、まだです」
神から人類の勝利の可能性を与えられた者――勇者。
クエタプノが、己の血に濡れながらゆらりと立ち上がり、剣を構えた。

決着

「……まさかここまでとは」
と、街の外れで気配を消してその戦いを見るのは勇者の従者コーラ。
彼は邪悪と言うべき口端見せながら、魔王と勇者の戦いを愉快な見世物だと嘲笑った。
「このままだと、本当に魔王を倒すかもしれませんね……」
それは神々からすれば、一応、面白くないものだ。
人間は、メインプレイヤーは、苦しむために存在する。
悲劇を作り、その愚かさと死に様を神に見せつけることが、人類の存在意義なのだ。
だからハッピーエンドはつまらない。この世は絶望に満ちていなければならない。絶望を彩るための多少の平穏であれば許容出来るし、そのための存在が勇者ともいえる。
だがそれを望むわけがない。
魔王を倒し、世界に平穏を与えるなどあり得ないことだ。
だが、
「まあ、どっちに転んでも意味はありませんけどね」
ニヤニヤと必死になって戦うクエタプノを見て呟く。
馬鹿なクエタプノ。それだけ必死になって魔王と戦ったところで、意味はないのに。
魔王は死んでも、また新しい魔王が生まれるだけなのだから。
魔王は、魔人は、いなくならない。
悲劇は無くならない。だから無意味なのだ。
この上、勇者の真実を教えてやればどんな顔をするだろうか。
想像するだけで愉悦は止まらなかった。
コーラはこの後、戦いが終わった後にでも折を見て、教えてやろうと今後の予定を立てる。
勇者の従者としての仕事は、人間の絶望を地上で、眼の前で観覧出来るのがたまらないのだ。

不敬にも、この愉しみを知らない殆どの神々を気の毒に思ってしまう。過度な干渉を行わず、精々、俯瞰で全体を見るだけであったりと、そんなのはつまらないだろう。
次の勇者がどうなるだろうか、それを考えるだけで――
「ッ……!?」
と、不意にコーラは身を翻した。
殺気も何もない不意の、鋭すぎる一撃。
それにコーラは見覚えがあった。だからこそ、コーラは溜息をつく。こんな楽しい時なのに、と。
「ようやく見つけたぞ――ネズミが」
「……勘弁してくれませんかねぇ……」
コーラが隠れ潜んでいた路地に現れたのは、魔剣を引き抜いた状態で歩いてくる金髪灼眼の魔人の姿だ。
魔人レオンハルト。魔人筆頭にして魔軍参謀。最強の魔人にして、今まで幾度となく人類に悲劇を与えてきた働き者の魔人。
先程も、勇者と戦ってみせた強大な魔人の登場に、コーラは小声で愚痴っぽく呟いた。
何故気づかれたのか、と思いもするが、前にもこの魔人には気配を感づかれた。その強さもさる事ながら、異様に気配に敏感なのだろう。そう思い思考を止めると、この場を切り抜けようと言葉を作る。
「お前だろう。ここ最近勇者の周りでこそこそと動いていたネズミは」
「……勇者の従者ですからね。と言っても、何の力もないただの少年ですので、逃げ隠れていただけなんですけど……」
と、弱者を演じてみせる。無駄な争いは好ましくないし、相手はあまりにも大物過ぎる。正体もバレたくないし、魔人と事を構えるのは大事になる可能性もあるのだ。だからご無体はやめてくれと、言ってみた。
魔人レオンハルトは人間の、特に弱者には慈悲を与える時もあるというのは、大陸で長年過ごしていれば普通に耳に入ってくることだ。
だからそれにつけ込もうとしたのだが、レオンハルトはそれを鼻で

笑った。
「ふん、笑わせるな。俺の剣を二度も躱した奴が、ただの少年だと？　嘘をつくならもっとマシな嘘をつけ」
「……偶然ですよ。それより、出来れば見逃してほしいんですけど……」
どうやら疑われてるようなので極力無害を装ってみる。
しかしこれも、魔人レオンハルトには一笑に付された。
「見逃す？　何を言っている。魔人は人間を殺す。それも遊び半分でだ。しかも勇者の従者だという人間を見逃す道理はないだろう」
「……貴方は、弱者を殺すような魔人では――……ッ!?」
言葉を言い終える前に、剣は振られ、こちらの胸を浅く斬り裂いた。
直前で気が付かなければ、もっと手痛い傷を負っていただろう。
その結果を見て、満足いくものではなかったのか、眉をひそめたが、しかし次の瞬間には不敵な笑みをも浮かべてみせる。
「ああそうだ。弱者を殺すのは、俺の趣味ではない。だが――クク、お前は弱者じゃないだろ？」
「……っ、何の根拠があるんですかね……」
警戒して後ろに下がるが、それすらも判断材料だと言うように、「俺の目を誤魔化せると思うな。強い奴の気配は、匂いで分かる。特にお前からは、美味そうな匂いがするぜ？　殺しがいのありそうな〝ゲテモノ〟の匂いがよ」
「……貴方、まさか……」
気づいてるのか、と魔人の表情を窺う。
そこに確信を抱いているかは解らない。しかし、強者であることを確信してるのは確かな様で、
「さあどうする？　お前も俺を熱くさせてみるか？　それとも何の感慨もなく、掃除されるのが好みか？」
「……」
どちらにせよ殺す。魔人の紅い目はそう言っているようだった。
コーラは深く溜息を吐く。出来れば騒ぎは起こしたくない。
この魔人の危険さは何となく解る。不思議と、今も対面して僅かに

ではあるが――恐怖を感じるのだ。
力の強大さもそうだが、もっと別の何かを隠し持っているような……確証はほぼないが、そんな気がする。
強いて言うならその手に持つ魔剣。そこから異様な気配を感じるが、
「――後悔しますよ？」
「ククク……お前がな。逃げるなら今の内だぜ？　今の俺は、手加減が出来ねぇからなぁッ――!!」
「っ……全く面倒な……」
魔人の気配が膨れ上がる。
赤黒い禍々しい気がその場に充満し、コーラは眉をひそめた。
なるほど。これは魔人として規格外だ。
勝てない――とも言い切れないが、勝てる確証もない。どの程度強いか、その真価はまだ完全には判断がつかないが、どちらかと言うとこちらの不利に感じる。
戦っては無傷ではすまない。幾ら４級神のコーラス００２４であってもだ。
その段階で、コーラは方針を決めた。やはり、
「……悪いですが、逃げさせてもらいますよ……」
「――クハハハ！　逃がすと思うかッ!?」
魔人が高速で迫り来る。その顔に、戦いを愉しむ修羅としての顔を貼り付けて。
……また面倒なものに絡まれましたね……！
コーラ改め、コーラス００２４は、魔王と勇者の戦いを眺めることを一旦諦め、眼の前の魔人に対処することにした。

街は、もはや街では無くなっていく。
「――！」
「……！」
勇者と魔王の戦いは、まるで神話や、お伽噺のような非現実的な規

模の戦いだった。
彼らが移動を行うだけで、大気は破裂し、建物の窓が割れ、壁に亀裂が入る。
彼らの攻撃はそれこそ、その余波で街を次々と更地にしていくほどの破壊力を秘めていた。
お伽噺というには、あまりにも鮮烈な戦い。血に濡れながら戦う勇者と、凄惨な笑みを深めていく魔王。
外から見れば、赤と黒の閃光が飛び回っているようにしか見えないだろう。
どちらも光。しかしその性質は、真逆。
滅び。人を殺めるための邪悪なる光を操る魔王と。
救い。人を救うための善に満ちた光を操る勇者。
しかしその力の根本は全くの同じ。どちらも神聖なるものだ。
戦いは魔王の優勢だが、徐々にその力は拮抗を始めていた。
勇者の力の増幅。今なお世界中で死に絶え続ける人間達のおかげで、僅かにだが、力を増しているのだ。
そして、見切りの力も相まって、ナイチサも徐々に苦戦する場面が増えていく。
だが勇者も、体力的にも精神的にも疲労が蓄積され、更には期限切れという時間制限もある。
究極の戦いは徐々にだが確実に、終局に近づいていた。

ナイチサは眼の前で血に濡れながらも、己と互角に戦う勇者に、感嘆を覚えていた。
幾度となく死を与えた。並の人間なら何度も廃人となっているであろうその悪行に、
……耐えて、なおかつ力を増してみせるか！　勇者！
己の力。人間を殺すための、邪悪なる力を浴びて、倒れない人間がいるとは思わなかった。
魔王の力とは地上を支配する究極にして至高の力だ。ナイチサが人を撫でるだけで、その邪気を集中するだけで、人は容易に死ぬ。

例え魔人であっても勝てる者など存在しない。あるいは、と思わせる者も存在するが、基本的に逆転など起りえないのだ。
地上に生きるあらゆる生物が、魔王の暴威に屈して膝を突く。頭を垂れて諦める。絶望して死を受け入れる。
だが、眼の前の人間――勇者は、それを決して受け入れようとしない。
何度殺されようと己の正義を信じて曲げようとせず、人々を救おうと足掻き続ける。
不屈の精神力。善にして光の力を振るい、魔王という悪を倒そうと聖なる剣を構える。ナイチサとは違う、真なる正義を証明するために。
しかしそれは難しい。この世の全ては、一つ残らず――我らに加護を与える神の箱庭であるからだ。
世界は神の光によって照らされ、完全に蝕まれている。
その力を預かった魔王を倒すことなど、出来ようはずがない。
だが、ナイチサはそれでも内心に喜悦の感情を交える。
……余という悪を倒すために、これほどの者が現われるか！
愉快なり。実に面白い。
よもや魔王としての生の末期にて、これほどの存在が現われるとは。
筆舌に尽くしがたい感動を覚える。
それでこそ魔王として悪行を為し続けた甲斐がある。
この眩いほどの希望の存在。それを相手に、魔王としての全力を尽くしてこそ、この世の正義は完成を迎える。
千年を生きる魔王の集大成。悪であることに拘り続けたナイチサは、その道の果てに、唯一無二の答えを知ることが出来る。
今はまだ未完成なこの世の理。二つの正義が、今地上にはある。
それを天に示すことが出来るのは、魔王である己と、勇者である相手だけだ。
例え神の意志は決まっていても、この世の正義を地上に示すための戦いは止まらない。

善と悪がある限り、異なる両者が存在する限り、どれだけの時が経とうと、両者は争い続けることだろう。
眼の前の勇者の様に、人間は足掻き続ける。神の祝福から抵抗を続ける。
それを叩き潰すべき魔王という存在。
今代の魔王の名は――ナイチサ。
己の役目は完全に理解している。
例えどれほどの困難が道を阻んだとしても、最期の時まで悪行を示し続けることだ。
だからナイチサは行く。己の役割を果たすために。この世の理を示すために。
「――さあ、勇者クエタプノよ。名残惜しいが――」
告げる。天上からの裁きを与えようと、宙に浮かび、力を最大限にまで高め、
「――――決着の時だ！」
ナイチサは己の最大の必殺技を、滅びを意味する光の大玉を、勇者に向かって落とした。

天上から光が降り注ぐ。
それは魔王が放つ滅びの光。
地上にいる生命。人々を終焉に導く破滅の光だ。
空を覆う雲間から、ナイチサを祝福するかのような光が差し込む。
まるで魔王こそが、これこそが正義だと、示すかのような光景は、地上に生きる人類にとっての悪夢に他ならなかった。
街一つを丸ごと消滅させてしまうその光球を、ただ一人、勇者クエタプノを滅するためだけに放つ。
魔王の表情は、不敵に歪められ、言外に問いかけられていた。
――〝これを耐えられるか？〟と。
魔王の最大の一撃。それは例え勇者特性の不死があろうとも、身体を焼き尽くしてしまおうとする超高温のエネルギーの塊だ。

喰らえばあの光球によって身を焼かれ続け、何重もの死が与えられるだろう。
既に何百、千にも届こうとする死を与えられたクエタプノにも、そろそろ余裕がない。
次の死であるいは、というところまで、クエタプノの精神は傷ついてしまっていた。
だがそれでも、
「――僕は、負けません……」
クエタプノは剣を構える。
たった一つの目的を成すために。
魔王ナイチサ――それを倒すために。
「人々に、救いを与えるまでは……!!」
己の正義を証明するために――クエタプノは力を振り絞り、勇者としての最大の一撃を放った。
「――ッッッ!!」
勇者だけが使える聖なる剣――エスクードソード。
その最大破壊力の一撃。あらゆるものを消滅させる斬撃を、ナイチサに向かって放つ。
異なる存在である両者の、対となる一撃が衝突し、
「――――!」
世界は真っ白な光に包まれた。

お互いに相手を殺そうとする――その殺気と敵意が充分に詰まった必殺技。
勇者と魔王。両者のそれは、お互いに相手を殺すのに充分な威力を秘めていた。
力量は拮抗し、お互いの技が形容し難い轟音とともに衝突し合う。
純粋な力による拮抗は、互いの正義を喰い合おうとする意志の発露。
人を殺すことを善とする正義と。

人を救うことを善とする正義。
どちらの信念も、間違いではなかった。
真実に近いのはやはり、神の意志に従う魔王だ。
だが、人の立場で見れば勇者も正義には違いない。
正逆の存在として作られ、正逆の想いを抱える両者の激突は、偶然ではなく必然であった。
そして――その想いがより強かったのは、
「――ッ、ま、だ、ま、だぁあああああああ

魔王を殺し、世界は救われる。魔物の首領である魔王の死は、魔人と魔物達から戦意を失わせ、人間の住む土地から撤退を始めるだろう。
もはや疑いようのない終わり。邪悪の化身たる魔王を、正義の代名詞である勇者が討ち滅ぼす。
まるで勧善懲悪のお伽噺のような結末。誰もが夢見る幸福と希望に満ちた未来だ。
クエタプノは確信した。これで終わりだと。
――だが、
「――油、断……したな？」
「――!?」
刹那、背筋が凍った。
断末魔を上げて、倒れたはずの魔王が、徐ろに立ち上がってみせ、
――終わりだ、と。
こちらを嬉しさと哀しさ、その両方をないまぜにした様な表情でナイチサは死を宣告する。
「――誅殺に、処す……！」
「――ぁ……」
口元から血を吐き、肩で息をする瀕死の魔王が、直ぐ近くの距離にいた。
そしてその手は、クエタプノの左胸を、心臓を貫いており、
……こ、んな……こと、が……ッ！
通ってたまるかと。勇者は再び意識を覚醒させようとしたが――
それが叶わない。
クエタプノは、死にすぎた。
幾らクエタプノが鋼の精神力を持っていようとも、心と身体は、とうに限界を迎えていたのだ。
それら全ての防衛本能を、気合いで跳ね飛ばしていたクエタプノは、しかしとうとう、正真正銘の限界を迎えて、意識を薄れさせていった。
……だめ、で、す……こ……れ、で……は――。

勇者の特性により死だけは回避されるものの、クエタプノはここに来て遂に、意識を手放してしまった。

――そして、魔王ナイチサは、

「はぁ……はぁ……ぐ、ふっ……」

肩で息をしながら、地面に倒れたクエタプノを見下ろす。

なんとか勝利を収めた。

勇者と魔王の戦いは、魔王ナイチサの勝利だ。

それは間違いない。最後の攻防で、相手を確実に殺すために、己の死すら偽装してみせたナイチサの企みは、成功に終わったのだ。

だが、

「傷が、深い、な……！」

ナイチサも、瀕死であることには違いなかった。

いや、勇者が不死によって生き返ったことを考慮するなら、ナイチサの方が重傷かもしれない。

寿命が縮まり、大部分の力を失うほどの深手を負ったナイチサは、己の状態がマズいことに気づき、勝利の感慨もなく、その場を立ち去ろうとした。

「せ、めて……傷、を――」

と、言葉を発してふらついた直後。

ナイチサはその傷によって意識を保つ限界に達し、意識を薄れさせていく。その瞬間に思うのは、勝負によって得た答えのことだ。

……この、世、の……正義、は――――。

そうしてその答えに微笑を浮かべたところで、ナイチサは、闇に意識を預けた。

――魔王ナイチサと勇者クエタプノの戦いは、魔王が勇者を倒し、勇者が魔王に、寿命を縮めるほどの深手を負わせる――痛み分けの、相討ちに終わったのだ。

「――音が消えたな。どうやら、戦いは終わったようだが……」

と、もはや街ではなく、瓦礫の山の上に立つ魔人レオンハルトは、西側の空を見てそう言う。
戦闘の激音が消え、更には周囲一帯を包んでいた重苦しい気配が消失したのだ。魔人としての本能も、主の戦闘が終わったことを告げている。
それが意味するのは戦争の終局。撤退の合図であり、仮に魔王が気を失ったとするならば、魔人筆頭であるレオンハルトがそれも含めて魔物達を引き連れて、撤退の指揮を執らなければならない。
つまりは時間制限が来てしまったのだが、しかしレオンハルトは眼前の相手を睨みつけて告げる。
「チッ、しょうがねぇな……俺はもう行かなきゃだが――まだやるか？」
「……冗談。貴方が勝手に襲いかかってきたのでしょう」
私は逃げさせて貰います、とそう言うのは勇者の従者であるコーラであり、その身体には幾つかの傷を作っている。
魔人との追いかけっこ。ほんの少し攻撃もしたが、その全てを掻い潜ってコーラを仕留めようとしてきた。残念ながらそれは叶わなかったが、それでもなお、レオンハルトは鼻を鳴らして忠告する。
「お前の首はおあずけだな。次に会った時は覚えてろよ。今度は勇者共々消してやる」
「……おっかないですね。極力、姿を現さないようにしますよ」
「ああ、そうした方が身のためだな。精々、俺に怯えて逃げ隠れてろ。ネズミみたいにな」
「っ……」
最後まで挑発してやると、コーラは苦虫を噛み潰したような、忌々しいと言った表情をレオンハルトに向け、それから姿を消した。
どのような方法か解らないが、一瞬でこの場から脱してみせたのだ。
とは言ってもそこまで遠くにも行ってないし、気配も捕捉している。また追いかけることは可能だが、
「……まぁ、止めておくか」

機を逃した以上、今から更に拘ろうとするのは蛇足だし、面倒でしかない。
未だ不完全燃焼であり、身体の内側では、グツグツと戦闘衝動が渦巻いている。それもこれも、魔王と勇者の戦いのせいだ。
「アレと戦り合いたかったんだがな……」
魔剣を空間に収めると、その場から跳躍するようにして移動する。
宙に浮き上がり、眼下をついでに眺めると、そこにはやはりと言うべきか、街の原型など殆ど残っていなかった。
その中でも、特に破壊の規模が大きい場所。最早何もない原っぱのような場所になってる空間に急いでみれば、やはりそこには瀕死の重傷を負って倒れている魔王ナイチサの姿があった。
「本当にやりやがったか……」
感嘆を呟き、それを成した英雄の姿を探してみるが、いない。
勇者特性の幸運、また地割れか何かで逃げたのだろうと、直ぐ様捜索を諦めると、ナイチサの身体を抱えてその場から移動した。
そのボロボロになった肉体を見てしまえば、否が応でもその先のことを思考してしまう。
「――時代は変わる、か……」
千年近い魔王の任期も、直に終焉に向かい、新たな魔王の時代がやってくる。
まだもう少しは時間があるだろうが、魔人にとって、百年などあっという間でしかない。
それを思いながら、レオンハルトは直ぐにその場から立ち去ると、街の外に待機していた自身の使徒達と魔軍に一つの命令を下した。
――魔王、ナイチサ様の負傷につき、全魔人と魔軍の一時撤退を告げる。
正式なものではないが、おそらくは正式なものになるであろうと、レオンハルトはこの先のことに想いを馳せながら、魔物界へと帰っていった。
――こうして人類の半分が犠牲になった死滅戦争は終結した。

勇者クエタプノと魔王ナイチサの戦いは、魔王ナイチサの勝利に終わったが、その身に受けたダメージは深刻なものであり。
また、勇者クエタプノも、勇者としての任期を終えることとなり、魔王を倒せる力を失った。
人々はあまりにも多すぎた犠牲を嘆き、悲しみながらも、次に進んでいく。
――その先にあるのは希望か、それとも絶望か。
――そこに正義はあるのか否か。
――今はまだ、誰にもわからない。

勇者の真実

魔王ナイチサの原因不明の負傷と、戦争の終結は、両陣営に衝撃を与えた。
魔軍は、大規模な攻勢を止め、再び散発的な侵攻に留まった。
人類は、戦争の深い爪痕から復興しようと力を合わせる。
そして、神々が喜ぶその戦争の功労者達は、未だその傷痕から抜け出せないでいた。

「――っ……ここ、は……」
戦いを終えて、深淵から意識を浮上させたその少年は、未だはっきりとしない呆然とした様子で周囲を見渡す。
そこは深い地の底だった。勇者として敗北した際に、何度も目撃したもの。
つまりクエタプノは、魔王に敗北したのだ。
クエタプノが信じる正義は、悪の魔王に屈した。
「～～～っ……！」
そのことを思い、クエタプノは両手を強く握る。
既に勇者の力は感じられない。
自分はもう勇者ではないのだ。
だが魔王は、未だ魔王であるはず。
ならば人々はこれからも、苦しめられることとなる。
それを想うと、自分の情けなさも相まって、涙を禁じ得なかった。
あれだけの好機は二度とない。
そのまたとない好機に、自分は失敗した。
今直ぐ自分を殴りつけ、あるいは誰かに罵倒してほしい気持ちが芽生える。
しかしそれもまた、救いを求める行為だと思うと躊躇われた。
暫くの間、クエタプノは何も出来ずにその場に留まる。
だがやがて、その場を動こうとした時――声は聞こえた。

「随分な様ですね、クエタプノ」
「……！　コーラ……」
暗闇の中から声を掛けて、姿を現したのは、勇者の従者であるコーラだった。
この七年間、ずっと一緒に旅をしてきた仲間であり、得体の知れない相手でもある少年は、いつもながら淡々とした様子でクエタプノを眺める。
――のだが、今回は少し違った。
「勇者として、魔王を倒せなかった気分はどうですか？　一応、寿命を縮めるほどの重傷は与えたみたいですけどね」
「……最悪です……が、そうですか、寿命を……」
「ええ。おそらくはもう何十年と生きられないでしょう。魔王をここまで追い詰めるとは、今までの勇者が一度たりとも成し得なかった偉業ですよ。誇っていいんじゃないでしょうか」
「……そう、ですね。魔王が死んで、人々が助かるなら……」
コーラはいつになく饒舌だった。
しかもどこか、ニヤついた笑みを浮かべている。
今までに一度も見たことのない表情で告げるのは、クエタプノにとって僅かな慰めとなる言葉だ。
魔王は倒せなかったものの、その寿命を大きく削り、後数十年もしない内に死んでしまうという。
その数十年、人々が苦しむことになるのが問題だが、もし本当にいなくなるならそれに越したことはない。
自分のやったことは、完全には無駄じゃなかったのだと、自分を慰めることが出来る。
不安があるとすれば、このコーラの表情だった。
――何か、邪悪なものを感じる。
七年間旅をしてきた仲間に対して思うことではないが、その笑みには酷いものを感じてしまうのだ。
だが、直前まで、クエタプノは信じていた。
仲間を疑いたくなかったからだ。

しかしその願いも虚しく、言葉は来た。
「――多くの人間を犠牲にして得た力も、これで報われるというものですね？」
「――――」
その言葉は、クエタプノの心を酷く打った。
だがそれに反して、クエタプノは極めて冷静にそれを問い返す。
「……多くの人間の犠牲、ですか……」
「ええ、そうです。あれだけ強力な力、何の犠牲も無しに使えるわけないでしょう？」
と、コーラは酷い笑みを深めて、こちらを嘲るように告げる。こちらを嘲るように、
「勇者の力は、どれだけ人間が死んだか――それで決まります。聖なる剣が使えるようになるには１０％。魔人を倒す力が３０％。そして、魔王を倒す力は――人類の半分が、死滅しなければ解放されません」
それはあまりにも酷い、勇者の力の真実。
魔王を倒し、人々を救うためには、最低でも半数の人々を犠牲にしなければならないのだ。
それが勇者の力。人々の屍の上に立つ、偽りの救世主。
それが勇者の正体。クエタプノが担っていた役割の真実だ。
これだけでも衝撃過ぎる事実だが、更にコーラは続けて、
「それに、魔王を倒したところで、魔王はいなくなりませんよ。次の魔王が現われるだけですから」
「……！」
「驚きましたか？　まあ、そうでしょうね。普通は知るはずがないですし」
ニヤニヤとこちらの反応を眺めながら次々に驚きの真実を伝えてくるコーラ。
魔王が死んでも、また現われるだけ。それにはさすがのクエタプノも心が締め付けられるような痛みを感じる。
この世に救いなんてものはない。定められた正義なんてものは存

在しない。
あるとすれば、それは〝地獄〟だ。人々が嘆き苦しむ地獄こそが、この世の中の正体。
それを想い、クエタプノは悲しんだ。確かに、苦しみを得た。
だがコーラは、それに対して眉を顰め、
「……反応が鈍いですが、まさか嘘だとでも思ってるんですか？　物証なんかは提示出来ませんが、疑いようのない真実ですよ、これは」
信じていないのかと、コーラは更に強調して告げる。
クエタプノを絶望させ、その心を折り、最後にその様を見て嘲笑うために。
「おかしいとは思いませんでしたか？　魔王の対になるなんて、まるで作られたかのような存在に。何故神が悪を放置してるのか。それは全部、神の御心だからですよ。人が苦しんで死ぬことを、神は望んでいるんです」
神々は、人間の死を望んでおり、魔王こそが、神の御心の体現者である。
勇者なんてものは、神の戯れで作られた、舞台装置の一つでしかない。
だからお前のやってきたことは全て無駄だ――そう言われ、しかしクエタプノは涙を流したが……一向に壊れた様子はなかった。
「……何故、まだ平気なんですか？　それとも、もう壊れているんですか？」
コーラは堪らず問いかけてしまう。
どれだけ絶望の言葉を発しようと、クエタプノは嘆き、苦しむ様を見せない。
そのことに苛立ちと、残念さを覚えたためだ。
この七年間の集大成ともいえる勇者の絶望を、笑いたいのだ。
嫌味を、毒を吐いて、彼を苦しめたくてしょうがないのだ。
それこそが、コーラス００２４の愉しみであり、勇者の従者なんていう面倒な仕事で得られる最高の報酬なのだ。
だから苦しめ。絶望しろ。そう嘯き、コーラはクエタプノの表情を

見る。
だが彼の表情は、その眼の輝きは――未だ死んではいなかった。
クエタプノは言う。
「……貴方は、悲しい人ですね」
「……は？」
言われた言葉に意外を、何を言っているか分からないとばかりに間の抜けた声を出すコーラ。
――悲しい人？　何を言っているのだ？
何故こちらが哀れみの視線を向けられているのか。そんな疑問を口にするより先に、クエタプノは言葉を作った。
「勇者の力の源が……人々の犠牲の上に成り立つものであることは、確かに悲しいです。ですが――」
「……まさか、気づいていたとでも？」
「いえ、そういうわけではないです。ただ……そういう可能性もあり得るとは、思っていましたが」
クエタプノはそれを予想していたという。
あくまでも予想の一つでしかなかったが、もしかしたらそういう事もあり得るかもしれないと。
幾つもの予想の中でも当たってほしくない最悪な予想であったが、クエタプノはそれすらも覚悟して、今日まで戦ってきた。
例えどれだけの困難があろうとも、人々の為に戦うと。全ての可能性を考慮しながらも、自分の正義だけを信じて戦ってきたのだ。
神がそれを望んでいないことすらも、勘定に入れていた。
だが、そんなクエタプノでも、最も悲しんだことがある。それは、
「……魔王が死んでも復活する……それはさすがに堪えましたが……」
魔王が決していなくならないこと。人々が苦しみ続けるということ。
この世から悪を取り除けないことに、クエタプノは涙した。
そしてその上で、それを伝えてきたコーラに対して思うことは、ただ一つだった。

「コーラ。貴方は……僕を……いえ、人々を壊そうと、しているんですね？　自分の快楽の為に」
「！」
その内心を見抜かれ、コーラが僅かに目を見開く。
如何にも、人間を苦しめて、その様を眺めるのはコーラの趣味だ。
クエタプノを苦しめようと真実を教えたとはいえ、まさか完璧に見抜かれるとは思っていなかったと、コーラは内心驚いてみせる。
だが努めて冷静に返そうとする――が、その言葉は自然と棘を帯びていた。
「……だとしたら何です？　悪は許さないとでも言うつもりですか？
――その悪に力を恵んで貰ってる分際で、随分と調子のいい言葉を吐きますね」
軽く威圧しながら発言だが、しかしクエタプノは意に介さなかった。
ただクエタプノが、哀れむように、コーラを見詰める。仲間だと思っていた相手が、どうしようもない悪だったことを察して、恨みもせずにただ言葉を紡ぐ。
「……悪いですが、コーラ。貴方の思い通りにはなりませんよ。僕は壊れません。――自分の思い通りにならないからと、苛つかないで下さい」
「っ、この……！」
その言葉に、コーラス００２４は怒りを急激に跳ね上げた。
自分が鴨だと思っている人間に、馬鹿にされた。
それだけの理由で、コーラはその力の一端をクエタプノにぶつけようとする。
だが、
「……それが貴方の本性ですか」
「……たかが人間の分際で……！」
クエタプノは、コーラの攻撃を躱してみせた。
クエタプノはもう勇者ではない。
勇者であった頃の彼なら、例え４級神――コーラス００２４が相手

だろうと一蹴し、消滅させることは容易だろう。
しかしそうではない。勇者の力はもう宿っていないのだ。
だが、勇者として鍛えた力がなくなるわけではない。
勇者でなくなったとしてもレベルは下がらないし、幸運は無くならない。
そして何より――彼のこれまでの戦闘経験は、無駄にはならない。
だからクエタプノは、ギリギリのところでコーラス００２４の攻撃を躱すことに成功した。言ってしまえばそれだけの話である。
実際に戦えばクエタプノの不利であることには変わりはない。
だがクエタプノは、その勇者としての力を支えた鋼の精神力を秘めた瞳で、コーラを強く射抜く。
「僕を殺そうと言うなら構いません。かつての仲間と戦うのは心苦しいですし、勝ち目は薄いですが……襲いかかる悪を、野放しにするわけにはいきませんので」
と、クエタプノは言う。
偶然にもそこらに転がっていた剣を拾い上げ、それをコーラに向かって突きつける。
そして勇者であった頃と変わらない強い表情で、
「どれだけ困難だろうが――貴方を倒しますよ？」
「……！」
はったりだ。瞬間的に、コーラス００２４は思った。
しかしこのクエタプノという男は、そう言ったのなら本気で引こうとしないだろう。どれだけ困難だろうが、こちらの胸に剣を突き立てるために、あらゆる手段を尽くす。
神としての重圧を差し向けるが、魔人の武威にも、魔王の死にも、そして神の毒にも屈さなかった男だ。今更この程度で引くはずがない。
やると言ったらやるのだ。それは彼が今まで戦ってきた強敵達の眼にも似ていた。
魔物大将軍や魔人筆頭、そして魔王。彼らは自分の正義だけを信じて、勇者と矛を交えた。その一つ一つで、クエタプノは確かに感じ取ったのだ。彼らの正義を。

クエタプノの正義はそれらを認めることは出来ないが、それが存在すること自体は確かに認めた。
その上で、自分の正義を貫くのだと、クエタプノは剣を振るい続ける。――例え勇者でなくなっても。
そしてその強靭な精神力から放たれる視線の圧力に、僅かにコーラス００２４が眉を立てた。
確実に殺せる。こちらの方が上だ。その判断に間違いはない。
だが、勇者として培ってきた戦闘経験やレベル。未だ残る幸運。そしてクエタプノの鋼の精神力であれば、もしかしたらもあり得る。
だからコーラは、
「……不愉快ですね……」
と、そう言って、矛をしまった。
代わりに告げるのは、少しでもクエタプノを苦しめるための言葉の刃だ。
「貴方のやってきたことは全て無駄です。魔王は新たな魔王に代わり、この世を再び地獄に落とします。貴方がこれから何をしようが、意味なんてありません。貴方の友人は死にますし、貴方の家族、子供や孫、子孫は全員残らず地獄の苦しみを味わって死ぬことになります」
「……例えその可能性が高くても、そうならないように少しでも頑張るだけです。この世に絶対なんてありませんから」
最後の最後まで、希望に満ちた言葉を吐くクエタプノにコーラは反吐が出そうな気分になる。
今直ぐにこの男を地獄に叩き落としたいが――それは自分の役目ではない。
だからコーラは願った。まるで呪詛の様に、
「……では、さよならですクエタプノ。もう二度と会うことはないでしょう。貴方が苦しみ抜いた末に死ぬことを、心より願っていますよ――」
その姿とともに、宙に溶けて消えていった。
ただ一人、地の底に取り残されたクエタプノは、警戒を保ちつつも、

息を入れ、
「……まったく、随分と救いのない世の中ですね……」
と、ほんの少しの愚痴を口にした。
魔王の言うことが正しい世の中なんて、どんな悪夢なのだと。
だがその上で、クエタプノは一歩、前に進む。
「――ですが、止まってる暇はありませんね……」
この世を少しでも良くするために、出来ることは必ずあるはずだ。
勇者でなくなったとしても、僕は止まらない――そう心を新たにして、クエタプノは地の底から再び歩みを始めた。

――身体が疼いてしょうがない。
魔物界東部。魔軍の本拠地でもある魔王城の寝室の中で、魔王ナイチサは胸を押さえて蹲った。
それを支える者がいる。魔人筆頭兼魔軍参謀、ナイチサの懐刀ともいえる男――魔人レオンハルトだ。
「……やはり無理はしない方が……」
「……いや、大丈夫だ……直ぐに収まる……」
こちらを案ずる言葉に、しかし大丈夫だと手でその支えを拒否する。
勇者クエタプノに負わせられた傷は、今なおナイチサを苦しめていたのだ。
まったくもって忌々しい。
勇者という存在が眼の前に現れたこと自体はともかく、それにやられてしまう自分に憤りを感じる。
しかもそのからくりが、人類の死の数にあるとは思いもよらなかった。
レオンハルトに教えて貰ったが、どちらにせよ〝確認〟は取るつもりであったのだ。
その事実に少しばかりの残念を感じるが、致し方ないことでもある。

何にせよ、己の悪行によって人類の半分は死に絶え、神を喜ばせ、答えを知った。その結果、己は重傷を負った――それに間違いはないし、文句もない。
力の衰えは顕著だが、それは問題ない。それよりも寿命が短くなった方が問題であった。
「――先日、パイアールが頼まれていた戦闘用無人兵器、通称ＰＤを開発したと報告が来ましたが……如何なさいますか？」
「……良きに計らえ」
「畏まりました。では、適当に戦地に派遣します」
レオンハルトの報告を受けながらも、ナイチサは今後の重要課題について考えに耽る。
魔王としての寿命が近い。かねてより考えていたことではあるが、早めに実行しなければならないなと、ナイチサは思い至った。
「……レオンハルトよ。卿に、頼みたい仕事がある……」
「……は、何なりと」
頭を垂れてその責務を告げる。それは、
「――余の後継者を、探してもらいたい……」
「……！　それは――」
レオンハルトの瞳が見開かれる。続く言葉が来る前に、ナイチサは、然り、と頷いた。
「次代の、魔王のことだ……余も、並行して探すことになるが……ともかく時間がない。魔王の資質を持つものは限られる。卿も、捜索に参加せよ……」
「……畏まりました。直ぐに動きましょう」
「頼んだぞ……」
勇者に受けた傷の影響で苦しみに苛まれながらも、命じる。それだけ重要な事であった。
魔王の継承は重要な使命の一つ。これからも魔王による治世を継続させるために、魔王は己の継承者を探す。
継承に必要な血の精錬も、直に終わる。本来であればもう少し時間を置きたいが、寿命が縮んでしまったために、己は千年以上生きるこ

とが叶わないのだ。
だからこのタイミング。後５０年以内に継承を行わなければならない。
もう少し余裕があるとは思っていたが、勇者との戦いの結果もあり、最早一刻の猶予もないと、ナイチサは己の優秀な家臣であるレオンハルトにも命じて、魔王の継承者を大陸中から探させることにした。

紅魔城。
その玄関、広間に向かって歩く二人がいた。
「急に呼び出すとか……ちょー面倒……」
「え、えっと……もう少しですから……頑張ってください……！」
肩を落としながら歩く小柄な影は、レオンハルト城に住む魔法研究者ガウガウ・ケスチナ。
その隣であわあわと彼女を応援するのは、カラーの少女、クライア・カラーだ。
彼女達はこの城の城主である魔人レオンハルトに呼ばれて広間に行くところであった。
そのことに対して、ガウガウが疑問を口にする。今更何故、と、
「改まって全員集合させるとか……何をする気だ……？」
「……きっと、何か深い考えがあるんですよ」
そう、城にいる者は全員、集まるように言われている。
レオンハルトがこういう風に全員を招集するなんて一度もなかったことだ。
それだけに、若干の疑問を感じてしまう。
だがクライアなど殆どの人は、レオンハルトを信じていた。
……重要な提案って先輩から聞きましたけど……一体何でしょう？
何でも城にいる者達にある提案があるらしいが、おそらくは悪いことではないはずだ。
この間も、クライアは呼び出され、カラーの隠れ里についての準備

がある程度整ったことを、ハンティとともに教えられた。
それだけの親切を行ってくれたレオンハルトだ。きっと今回も悪いことではない。
だがガウガウは信用してないのか軽い冗談なのか、頭に手を回して軽い調子で、
「でも、全員使徒になれー、とかだったらどうする？」
「……わたしは、構いませんけど……」
「いや、それどころか全員でエッチなことさせようとするかもよ？」
「エッ……そ、そんなことないですよ……！　レオンハルトさんは、そういう人じゃありません……！」
「……いやぁ……どうかなぁー？　私的には、そのどっちかな気がするけど。――あ、もしくは何か記念のパーティするとか？　それだったら大歓迎だけど！　もしそうだったらクライアもお菓子作って！」
「も、もう……ガウガウさんってば……ふふ、しょうがないんですから」
子供のように菓子をねだってくるガウガウに、思わず笑みを零す。
やはりこの城の人達は皆良い人だなぁ、とクライアは僅かな不安を掻き消し、ガウガウとともに、広間へと向かった。

「――それにしても、まさか撤退することになるなんて思いませんでしたわ」
魔王城の一室。魔軍参謀の執務室の中で、その使徒であるキャロルはしみじみと言葉を紡いだ。それに対してもう一体の使徒、紅い軍服姿の中年が答える。
「……とはいえ、戦争に敗北は付き物かと。もっとも、今回は敗北というより痛み分けに近いと判断しますが……」
「……そうですわね」
と、珍しくリーの言葉にも同意を返すキャロル。彼女は机の上にある将棋の駒を眺めている。
反対側には誰もいない。いつもであれば、バルカ辺りがそこに座っ

ていたりするものだが、彼は今回の戦争で戦死した。
そして彼だけではない。他の大将軍達は、皆死んでしまった。
リーにとってはかけがえのない仲間であり、どことなく哀愁を漂わせている。
その手には、戦場から持ち帰ってきたコウウの槍。彼の死体の近くにいたきゃんきゃんが、どうか受け取って役立ててほしいと渡されたものだ。
リーに槍を扱えるような才能はないものの、形見としてそれを受け取ったリーは、それを眺めながらも、主の命令を待つ。
執務室の机には、その部屋の主にして彼らの主でもある魔人レオンハルトが目を伏せたままじっと考え込んでいた。それを見たキャロルは、物思いに耽っていた顔から一転、いつもの明るい様子で声を発する。
「――でもレオンハルト様が無事で何よりですわ！　さすがはレオンハルト様ですの！」
「……そうですな。主が無事であることは使徒として、何よりの喜びであります故」
キャロルの言にリーが同意する。そして続く言葉も、リーが問いかけた。
「して、次の行動は――」
「――お前達には俺と一緒に、人類圏での調査に向かってもらう」
と、瞳を閉じたままレオンハルトがそう口にする。
主からの言葉だ。キャロルとリーは一も二もなく頷いた。
「畏まりましたわ！　何でも来やがれですの！」
「承知しました。全力を賭して、任務を遂行致します」
二人で敬礼を返し、レオンハルトもそこで瞳を開いて頷きを入れる。続いて口にするのはそのための詳細な方法だ。
「まずは商会経由で情報を集めるぞ。今から俺が言う情報を頭に入れておけ」
「分かりましたわ！　それで、その情報とは何ですの!?」
気合いが入っているのか、新しい後輩に負けたくないのか、キャロ

ルが興奮気味に質問を重ねる。レオンハルトは、ああ、と頷いて口にする。それは、

「――――美しい女賢者だ」

善と悪

――ＮＣ９ＸＸ年。

人類が、戦争の爪痕から復興しようと未だ力を合わせる。

そんなある日、とある国に――１人の子供が生まれた。

非常に恵まれた容姿と才能を持つ女の子であったが、彼女の両親は、複雑な事情によって蒸発してしまった。

生まれて直ぐに孤児院に送られた彼女だったが、彼女は自分の境遇を恨むことはしなかった。

優れた知性を持ったその少女は、孤児院にある僅かな書物や、大人達からの話で知識を仕入れ、直ぐに頭角を現していった。

特に魔法の才能に優れた少女は、直ぐに国から招聘され、その才能を国の為に活かすように命じられた。

少女はその命令に、首を縦に振ることで答えた。国に直接仕えることは、畏れ多いと固辞しながらも、多くの人の助けとなるべく、その聡明な知識と魔法の力で以て、人々を救い始めた。

いつしか彼女は賢者と呼ばれるほどにまで成長したが、彼女を有名足らしめたのは、その知識よりも――その美貌だった。

透き通るような明るい水色の髪を持つその少女の美貌は、国内だけでなく、周辺国家にすら轟くほど有名だった。

絶世の美女という言葉が、これほどまでに合致する存在も少ないであろう。それほどに美しい女性だった。

しかもただ美しいだけではなく、彼女は優秀な頭脳を始めとする才覚も併せ持っていた。

当然、多くの男性を惹きつけたが、彼女は見向きすることはなかった。理想が高く、賢者として知識を活かすことを望んでいた彼女にとって、恋愛など些末なことである。想いを寄せてくれたことに対して、それを断ることを申し訳ないとは思いつつも、己の意志を優先し、彼女はあくまでも賢者であり続けた。

俗世には必要以上に関わらない。ただ知識を以て、成すべきことを成すべき時に行うだけ。国や人の為に、純粋に役に立つためには、政

治と必要以上に関わってはならないのだと彼女は思っていた。
人の思惑に踊らされて、本質を見失うことは避けたい。故にあくまでも彼女は、一人で人の為に知識を使うことを選んだ。
それでも多くの人が彼女の元を訪れた。
純粋な、知識を貸してほしいという頼みや、人助けの頼みもあったが、相も変わらず求婚の申し出であったり、国に仕えるようにとの辞令もあった。
中には人だけではなく、人外の存在も彼女の元を訪れた。噂を聞きつけて、態々魔物界からやって来たという。
それに対しても、彼女は普段通り応じた。
人外の存在である魔人は問う――〝怯えはないのか？〟と。
それに対して女賢者はこう答えた――〝怯えてどうにかなるわけでもないでしょう。殺すつもりであれば、私はとうに殺されています。そうなっていないということは、何か私に、別の用があるとお察ししますが？〟と。
魔人はその言に納得し、しかし特に用件を口にすることはなかった。幾つかの他愛のない会話を行ったら直ぐに帰っていった。
何でも〝噂の賢者を、一目見に来ただけだ〟――とのこと。
魔人であっても、そういった噂は気になるものなのか、と女賢者は訝しげに思いながらも得心した。かの魔人は、大層な女好きであるとも知られている。その噂は真実だったのだろうと、深く気に留めはしなかった。
それからしばらく――彼女は賢者であり続けた。
変わったことは何一つない。あるとすれば、日々訪れる来客の中に、魔人が混ざるようになっただけ。
他の男性と同じ様に、口説きにでも来ているのかとも思ったが、どうやらそうではないらしい。単純に様子を見に来ただけだと、彼は口にする。
不思議な魔人だな、と思いもしたが、害意は見受けられなかったので、特に何をするでもなく、ほんの少しの会話を行い、いつもいらないと言っているのに持ってくる土産を仕方なしに受け取ると、その魔

人は帰っていった。
そんな奇妙な交流が、数ヶ月に一度、行われるようになったが――しかし、最後に出会った時に、〝一緒に来ないか〟などと誘われたこともあったが、素気なく断った。
そういう色っぽい話なのかと疑いもしたが、そういう風でもない。彼は確かに、今まで見てきた男性の中でも――いや、男性という生き物の中でも頂点に位置するほど魅力的であり、実直な性格も好ましいものであったが――しかし、己は賢者として、人のために知識を活かすことを願う。
人である自分が、魔人に与することはない、と、そう断ったのだが……不思議と、その時に見せた魔人の表情が忘れられない。何かを迷うような、憂うような表情だったが、それを問い質すことは遂になかった。
それから交流は無くなった。以前と同じ日々を、女賢者は過ごすことになった。
だが、とある日のこと――彼女は、謂れなき迫害を受けた。
何でも女賢者は、怪しき呪術を扱う魔性の女であると、幾つかの有力者が口にし始めたのだ。
なんとも馬鹿馬鹿しい。こんなものは根拠のないただの嫉妬だ、と、女賢者は吐き捨てた。
何故ならその有力者達は皆、少しばかり容姿が劣る女性であったり、己にこっ酷く振られたプライドの高い男ばかりであったからだ。
誰もが見知った者であり、己にしつこく付き纏っていた者達でもあった。
だからそれが醜い嫉妬によるものだと直ぐに解ったし、当然、そんなものが認められるはずがないと女賢者は相手にすらしなかった。
特に報復なども考えもしない。嫉妬は人間にとって当たり前の感情であり、防ぐことはとても難しいものだ。
だから下らない妄言だと吐き捨てながらも、それを罪だとは思わず、仕方のないことだと女賢者は自分の中で処理した。彼らも、いずれ自分のしたことの愚かさに気づき、自ら悔い改めるようになるだろ

う。その時まで、自分はこの事を忘却し、その時になって初めて許してやればいいのだ。
人間同士で争うなど馬鹿げたことでしかない。反目せず、力を合わせることが人間の美徳だ。女賢者はそう信じて、変わらず人々のために己の知識を活かすことにした。
――だがそれが、間違いだった。
女賢者は、間もなくして国によって認められた嫌疑で投獄された。
罪状は様々だ。やれ、悪しき呪いを研究していた。男を拐かした。隣国の間者であった。魔法で人を傷つけた、あるいは殺した――その全てが見に覚えのない冤罪だった。
だから女賢者は訴えた。理を説き、己が何もしていないという証拠をこれでもかというほどに叩きつけ、国にその訴えを取り下げるように己を弁護した。
だがそれらも全て、取るに足らない戯言だと却下された。
全ては始まる前から決まっていた。周囲の何もかもが、女賢者を貶めるための仲間であった。
こんなことが認められるはずがないと、女賢者は声を大にして訴えた。お前達のやっていることは愚行以外の何物でもないと。
――しかし人間は、想像よりも愚かであった。
嫉妬心に駆られた周囲の人々は、女賢者をどうしても貶めたかったのだ。
だから女賢者に謂れのない罪を被せて投獄し、女賢者にその醜い欲求の全てをぶつけた。
昼夜問わない拷問に暴行。女達には、よくも好意を寄せていた男を誑かしたな、などと数多くの凄惨な拷問を受け、男には、よくも自分を振ったな、と醜い性の欲求を己に吐き出し続けた。
言葉にするのも憚られるほどの数々の恥辱と惨たらしい拷問を受け続けた。
何度も止めるように、または、助けて、と。もはや尊厳の欠片もなく、苦痛から逃れたい一心で叫び続けたが、それも叶わない。それどころか、その悲鳴を受けて余計に興が乗ったのか、責め苦を激しくす

る始末。
女賢者に、救いは一つも与えられなかった。
最終的には晒し者として民衆に晒され、そこでも拷問と暴行を受けた。
そして四肢を切断された後、遂にこちらを苦しめることに飽きたのか、獄中へと己を放置した。
無限の苦しみ。この世の苦痛という苦痛を全て一身に受け、地獄を体験し、もはや死を待つのみとなった女賢者は、獄中で――憎しみを募らせた。
何故自分がこんな目に。
私は、人の為に尽くそうと頑張っていただけなのに。
何故このような責め苦を受けなければいけないのか。
苦しい。痛い。悲しい。辛い。死にたい。殺してほしい――あらゆる負の感情を芽生えさせる中で、最後に芽生えた感情こそが。
――人間への憎しみだった。
彼女は、もはや声も出せないはずの潰された喉で、しかし誰にも聞こえない程の、掠れた声を発する。
――コロしてやる。
人間を、自分を苦しめた者達を。
――必ず、殺してやる……！
もし生まれ変わったのならば。仮に、この状況から生き延びることが出来たのならば。
どんな方法を使っても、己が味わった苦しみを何倍にもして、永遠にも等しい無限の地獄を。
――愚かな人間共に、味わわせてやる……！
獄中にて、女賢者は人間を呪う、呪詛の言葉を吐き続ける。
「――――殺す殺す殺す

例え死んでも、殺してやる。
生まれ変わっても、殺してやる。
ただでは殺さない、殺してくれと叫んでも殺さない。
絶望の淵の淵に追い込まれ、全てを諦めた瞬間、嘆きと苦痛の極致に達し、それを充分に味わわせて慣れてしまう直前に、殺してやる。
人をどうすれば苦しめられるかは、お前達が全て、この身に教えてくれた。
どうすれば人を殺さずに苦しめられるかは、この身が全て知っている。
故にその返礼として、災いを。
人類に、無限の災いを。
生き地獄を。残酷で救いのない地獄を。
恐怖と苦痛に喘ぎ、悲鳴が鳴り止まぬ世界を。
人の血に塗られた真っ赤な大地を。狂気に満ちた絶望の大陸を。
この世に顕現させよ。
光差すことのない冷たい獄中。深淵の闇の中でたった一人。孤独と絶望の極地を味わった女賢者は、狂ったように人間への憎悪を吐き出し続けた。
そこに光が差したのは、女賢者が息絶える直前の事であった。
「……ここに、いたか」
「――――」
と、暗闇の中に光が刺す。
それは滅びの光だった。
この世の正義を称する邪なる光。人への憎悪に満ちた女賢者でさえ唖然としてしまう程に、邪悪に満ちた光。少なくとも彼女はそう感じた。
そして驚いた原因はもうひとつあった。
声を最初に発したもの。鎖に繋がれるこちらを見て、それを抱え上げた者がいる。
それはいつしかの魔人だった。
まだ穏やかな日々を過ごしている頃に出会い、少ないながらも交流

のあったある魔人。
女賢者が迫害を受け始めてからは出会うことのなかった彼がそこにいたのだ。
そしてその隣には、貴族の様な見た目をした魔の極致がいた。
魔人と同じ様にこちらに視線を覗かせる男は、興味深そうに息を漏らす。
「ほう……確かに、素質はあるようだな……」
「……は、この者なら、ナイチサ様の御眼鏡に適うかと……」
魔人が告げた名前は、やはり女賢者の想像通り、この世の支配者である魔王――ナイチサだった。
この世に降りた悪の化身。人間を苦しめる魔物達の王。ある意味で、女賢者が願う地獄の体現者がそこにいた。
だがその会話を、女賢者は理解が出来ない。そもそも頭が十全に回らない。
もはや息絶える直前の女賢者は、苦痛もなく、死を迎えるだけとなっていた。
薄れゆく意識の中で、しかし会話だけは耳にする。両者の会話は、
「――して、この者の名前はなんと言う？」
「……は……○○と言います」
魔人が、己の名前を教える。それに頷いた魔王はこちらを見てその手を向けた。
「――では、○○よ。今から卿に、魔王の継承を行う。――覚悟はいいか？」
問われた。当然、答える気力もない。
そのはずだが、女賢者は無意識に、その言葉に頷いていた。
「フ、良かろう。では――――」
薄れゆく意識の中、最後に見たのは、魔王の中から真っ赤な何かが現れ、それが己の中に入っていく光景。
瞬間――女賢者は、絶叫とともに、人間としての死を迎えた。
――それは人類文明の終焉の音。
――魔物の黄金時代、その始まりの音色。

――数多の英雄達が生きた魔王ナイチサの時代が終わり、
「新たな魔王――――ジル様。何なりとご命令を」
「……苦痛を」
――歴代最恐、最悪とも称される、
「――――人間共に、永久の苦痛を……っ!!」
――――魔王ジルの時代が、今ここに始まった。

――そこは大陸にある、名もなき洞窟だった。
その穴の奥深く。もはや魔物すら住み着かないほどのその場所に、ある人間は移り住んでいた。
そこに到達したある魔人は、出会うなりに神妙に声を掛ける。
「――お久しぶりです」
「……フ、久し振り、か。確かにな。ここにいてはどれだけの時が経ったのかは分からぬが……少なくともそれなりの時は経っているのだろう」
洞窟の主である男は、昔と違い、幾分か柔らかい表情でそう答えた。だが、その身にある力や覇気に衰えは見られず、老いすらも殆ど見られない。
やはり人間離れしているな、と思いながらも、魔人は男の言葉を聞いた。
「外は凄まじい事になっているようだな」
「……ええ、まあ。魔物にとって、とても住みやすい環境になりました」
「……そのようだな。ならばあの時の余と――卿の判断は正解だったか？」
「……どうでしょうね」
魔人はその答えを知らない。それ以外の答えを知らない。
その判断は、半ば消去法であり、これしかないというものだ。正否など、判断がつかない。
故に曖昧な言葉に留める。そして用件を伝えようとした時、逆に男

から言葉が来た。
「して、ここを訪れたからには何か用件があるのだろう？」
「……はい。少し、気になることが」
「……では、言ってみよ。余としても少し気になることがあった。この機会に、最後の語らいと行こうか」
「……なら、聞かせて頂きます」
と、臣下の礼を未だに取りながら、魔人は問う。
それはかねてより気になっていたことであった。
「……昔、私の城に来た時のことを憶えていますでしょうか？」
「ああ、そんなこともあったな……無論、憶えている。それが？」
はい、と魔人は続けた。あの時、
「あの時――殺せと命じられた人間を見た時、どうして気づいていない振りをしたのですか？」
「……ああ、そのことか」
思い当たる節があったのであろう。男はあっさりとそれを白状した。誰にも口にするでないぞ、そう枕詞を付けながら、
「私はな……この世に、正義を証明したかったのだ」
それは男が語る、かつての記憶。
善行を積み、神に出会い、そして神に出会うために悪行を積み重ねた男の深淵だった。
「かつて人であった頃……私は神と、神の正義を信じる余り、悪行を積み重ね、天罰を望んだ。そうすることで、戻れないほどに悪行を積み、好んだ己を罰してもらい、同時にこの世の正義を証明出来ると思ったからだ」
しかし、そうはならなかったと男は言う。何故なら、
「私の悪行は神に肯定され――魔王になった。魔王となった私は、神の御心と、己の欲望のままに、悪行を成し、その正義を執行するだけを望んだ」
だが、
「私は正真正銘、魔王として悪を望んだ。だが同時に、正義が証明される日も望んでいた」

「それは……」
魔人が言葉を、二の句を躊躇わせる。
それは矛盾した男の在り方だった。
善と悪。その両方を目的とした男の生は、徹底的に矛盾している。
悪を成すことで、善を証明するなんて、狂ったやり方だ。
しかし男は言った。全て承知の上だと、
「私という史上最大の悪。それを倒すことが出来る者が存在するなら——それはこの世に、正義があることの証明に他ならない」
手加減などもっての外。己という悪が全力を賭してなお倒しきれない善が誕生した時こそ、この世の善は、正義は完成を迎える。
だが、男は疑問を口にした。
「……だが、貴方は神を——」
「ああ、信仰している。——だからこそ、許せんのだ」
魔人は絶句した。男の信仰。神を奉じるからこそ、彼には許せないことがあるのだと。
それは、
「神は絶対でなくてはならない。己のような悪と同一の存在に身を落とすなど、神への冒涜だ」
神の正義など、あり得ない。神は神でしかない。
それが男の信仰の在り方であった。
故に、
「私は神の正義を自称し、また、そうあるように努めた。己が悪であったからこそ、それは楽なものであった。……そして、己という完全なる正義を討ち倒す者が現れた時、この世には真の正義が証明される」
神が悪を正義と言うのであれば、真の正義が現われるまで、己は悪として在り続けよう。
だから男は、正義の存在に感謝するのだ。それは例えば、
「私は勇者が、魔王を倒せるほどの力を持った勇者が現れた時、歓喜した。やっと、この世の正義が証明されるのかと。例えそれが私と同じ、神の玩具であったとしても、それを正せるだけの正義が現れたことに、間違いはないのだと」

最終的に、正義が負けてしまったことは残念だが、それも一興。全力を賭した悪に匹敵する善の存在が現れた。それだけでも、充分なのだと。
そして、そんな価値観を持つからこそ、男は魔人に告げる。
「私はな……卿の城であの人間の少女を見た時、愚かにも思ってしまったのだ――〝良かった〟と。魔王という絶対の暴威に逆らう正義が、こんな近くにもあったのだと、私という悪は思ってしまったのだ」
「……買いかぶりすぎです。私は、正義でも何でもありません」
魔人は息を漏らしながら言う。己は、正義でも何でも無いと。
寧ろ真逆。己の目的の為に他者を食い物にする修羅にして悪。
それが魔人の本性だ。断じて正義ではない。
だが魔人の主張に対し、男は言う。苦笑混じりに、
「フ、卿らしいな。人助けですら、己のエゴだと嘯くか」
「事実です。私は……目的の為に、動いているに過ぎない。貴方に忠義を見せていたのも、魔人として仕方なくやっていたに過ぎないですし、本心では――」
と、告げると、男は魔人に先んじて言った。
「私が聞きたかったのはそこだ。卿は、何故そこまで出来る？　卿の本質は、私のような悪を嫌う戦士のものだ。幾ら魔王に逆らえないとはいえ、あそこまで好意的に忠義を見せつける必要があったのか？」
それに、
「卿は、勇者の事や、多くの知りうるはずのないことを知っていた。それはいったい、どういうことなのだ？　……まさか、私の様に神に直接聞いたのか？」
男の問いに、魔人は頷く。悩みながらも、そうですね、と。
「……私は、魔人という立場からは抜け出せないのです。だから、本当に必要が無い限りは、極力魔王様には従います」
それは魔人の本心だ。
魔軍参謀という役割、魔人という新たな生。その立場から逃げることはしない。

己の大切なものに抵触しない限りは、出来る限り従い続けるし、希望にも沿う。その中で、出来る限りの救いを与えているに過ぎない。
何しろ自分は、この時代すら、止めることが出来たはずなのだ。
「知識についても……ええ、そうですね。私は神に少しばかり、恨みがありまして……それを果たす過程で知り得たことです」
男は笑み付きで言った。それは、と、
「フ……そうか。それだと必要があれば魔王にも逆らう……そう言っているように聞こえるぞ。……これは忠告だが、あまり無理はしない方がよいぞ。魔王の力は強大だ。卿が平気でも、周りがそうとは限らん」
「……肝に銘じておきます」
「……もっとも、卿なら上手いことやってしまうか……あるいは、魔王すらも倒してみせるやもしれんな。神への恨みとやらも……卿ならもしかしたら――などと思ってしまう」
「……お戯れを」
「そこで無理だと言わないのが、卿の恐ろしいところよな」
ともあれ、聞きたいことはお互いに聞き終えた、と、男は立ち上がり、傍にあった質素な棚から一つのボトルを取り出してみせる。
それを見て、魔人は目を見開いた。そして苦笑し、
「……懐かしいですね。またそれですか」
「いらぬか？　千年ものだぞ。フフ、ここぞという時の為に取っておいたが……今がその時であろう」
「……なら、頂きましょう」
魔人は頷いた。男が最後の時だと言うのだ。少しくらい付き合っても罰は当たるまいと。
それをグラスに注ぎ、口に含む。すると思わず、感嘆の息を漏らした
「……美味しい、ですね。この上なく」
「そうだな……余も、このワインのように、成れたであろうか？」
「っ……」
突然の問いに、魔人は言葉に詰まる。

だが、直ぐにその問いには答えた。
「……貴方は私が思うに……ナイチサ様は――最も、魔王らしい魔王であったかと思います」
「！　ほう、それは……」
「魔王という役割とその統治、それに関して、ナイチサ様以上の者はこの先も現れないでしょう」
これも本心だ。
魔王という役割を、最もきちんと遂行したのは、魔王ナイチサであると。
魔人や魔物達の統治も含め、己の職務に最も忠実であった。
だからこそ、魔人も仕事がやりやすかったのだと、そう言う。
その言葉に、ナイチサは一瞬驚き、そして笑みを見せた。
「……フ、フハハ……！　そう言ってもらえるとはな……正に、魔王冥利に尽きるというものよ……」
そう言って、ひとしきり笑った後、ナイチサは別のボトルを取り出した。
そしてこちらに向かって、それを手渡すと、
「……レオンハルトよ。頼みがある」
「……何でございましょう？」
うむ、とナイチサはグラスを差し出し、
「最後に、余にそのワインを注いでくれ。それは――」
と、
「余にとっての、最期のワインだ」
「！　……分かりました」
主からの最期の頼みに、魔人レオンハルトは神妙に頷いたボトルを傾ける。
グラスの中には、真っ赤な液体。ナイチサの魔王としての結晶。それを示すかのような極上のワインだ。
それを半分程注いでみせると、ナイチサはふと語りだした。
「余の本質は、どうしようもない程に悪であった。そのことに後悔はない。全て己が選んだ道であり、そこに詫びる気持ちも、懺悔するつ

もりもない。そのような女々しいことはしないし、許されてはならない。――これだけの悪行を成せたこと、魔王として、実に満足であった」
あくまでも、己は悪。
例えどのような理由が背景にあろうとも、悪は悪。罪は罪であり、それに対して女々しくも理由を口にするなどあってはならないことだ。
どのような理由があろうとも、被害を受けた者達は、加害者を許せるわけがないのだから。
だから悪人が出来るのはたった一つ。〝やってやったぞ〟と邪悪に満ちた笑みを浮かべてやることだけ。
言い訳も何もない。やりたかったからやったと。そんな純粋悪だからこそ、被害者達は心の底から純粋に悪人を恨み、正義を執行することが出来る。
それこそが、真の悪だけが出来る、悪人としての最大の供養なのだ。
だからナイチサは、己の心の内を、腹心以外の誰にも語らないし、それを口外するなと言い含める。
己は最悪の魔王でいい。事実、それだけのことをしてきたのだから。
魔王ナイチサは決して善人ではない。正義の為に悪を成す――最悪の魔王なのだ。
だが、言う。彼に対しては、
「卿にどのような目的があるか、余は知らない。だが卿は――私のように歪むな。己の信じる正義だけを貫け」
「……！」
己のようにはなるな、と。
自分の正義だけを、最後まで貫け、と。
約束してくれるな？　と、元魔王、ナイチサは忠義を示し続けてくれた家臣に、そう告げる。
その想いに、レオンハルトは驚き、そして、
「……ナイチサ様」

魔人は、膝を突く。
これまでの偽りの忠義ではない。
最後の最後だけは、彼に忠義を示そうと、レオンハルトは言葉を尽くした。
「……俺は、貴方という魔王がいたことを憶えておきます」
だから、
「安心して、お休みください。――お疲れ様でした、魔王ナイチサ様」
「――――」
ナイチサは、グラスを傾けた直後、その発言に呆然とした。
今まで偽りの忠義を捧げてきた男の、本当の忠義。
最後の最後に、己はかの魔人と、一瞬でも主従になることが出来たのだと、
「……フ、フフ……なんとも、嬉しい手土産だ……最後に、このような驚きをくれるとは……」
魔王であった男、ナイチサは己に回り始めたそれを感じ、意識を薄れさせながら告げる。
「……余と卿が、選んだ……次代の悪……人間への、憎しみに溢れる最悪の魔王……余よりも強大な悪に、匹敵する存在が、現われるか……フフ……実に、見ものだな……」
だから、
「……もし、こちらに、来たら……その、結果と……卿の……土産話を、聞かせて……貰、おう……か――――」
そうして眼の前の、ただの人間となった男は、人間であった頃と同じ微笑を浮かべながら、意識を失い、やがて息を引き取った。
魔王としての使命を果たし、大往生を迎えた彼の、最期の一時。
それを見届けた魔人レオンハルトは、呆然としようとする己を奮い立たせ、その場から立ち去ろうとした。
既に時代は変わった。
己には、まだまだやるべきことが残っている。
英雄達はもういない。
誰もが己だけの正義だけを信じ、競い合い、駆け抜けてきた彼らの

時代はもうどこにもない。
これより続くのは深淵の闇。
人が人でなくなる閉ざされた絶望の世界。
人間達の暗黒時代にして、魔物達の理想郷。
そこには一片の希望すらありはしない。
次に救いの光が降り注ぐのがいつになるのか。
そして、彼がどのような道を選ぶのか。
「――正義、か……」
今はまだ、誰にも分からない。

ＧＬ期
国狩り

――ＧＬ１年。
アコンカの花は世界中に咲き誇り、次代の魔王の名を伝える。
その名は――ジル。
次の魔王はジルと言う名の、美しい人間の女性だった。
しかし、誰もが見惚れるほどの美貌を持つその魔王の内側は――凶悪そのもの。
人間時代に受けた謂れのない拷問に暴行。四肢を斬り落とされて放置されるなどの人間の所業によって、人間への憎しみを募らせたジルの精神は、完全に狂いはじめた。
更には魔王となることで、その破壊衝動と憎悪が混ざり合い、ジルという魔王は完成を迎えた。
人々は、新しい魔王という存在に、不安を覚えていた。
以前のように、戦争だらけの世の中になるのか。
また大勢の人間が魔物によって殺されるのか。
だが――そうはならない。安心してほしい。
魔王ジルの治世は、人間の大量虐殺が起こるような、争いに満ちた世界ではない。
むしろその反対。
魔王ナイチサの時代の様な、争いに満ちる修羅の世界ではないのだ。
魔王ジルの時代。それは――人が人でなくなり、殺してくれと懇願するような、そんな地獄の如き世界であった。

――その最初の一年は、人類にとって、悪夢の序章にしか過ぎなかった。
人類圏の国が、魔軍の侵攻による戦火で満ちる――そんな当たり前

の所業は、ただの天国でしかなかったのだ。
「――はぁ……はぁ……っ、はぁ……！」
とある国の首都で、兵士の格好をした男は息を乱しながら、全力で走っていた。
周囲には燃え盛る、街の風景。つい数時間前までは全く変わらない日常が行われていた平和な街の風景は、今はどこにも存在しなかった。
表通りには大勢の魔物兵と、人間。既に戦える国の兵士は殆ど殺された。
もはや戦う力はなく、滅びゆく祖国の運命。しかし兵士にとっては、そんな身命を捧げたはずの国より、自分の身が大事であった。
今、この街を覆う恐ろしい気配。
身の毛がよだち、歯がカチカチと震える。気を抜けば狂ってしまいそうな、そんな恐怖と絶望に満ちた禍々しい気配。
それが何よりも恐ろしかった。
今直ぐこの場から走り去って、どこか遠くへ。この気配の持ち主の手が届かないどこか遠くへと、誰もが願い、ただただ逃げる。
男も女も、子供や老人でさえも、本能が拒絶し、全力で、体力の限界が来てもなお、逃げようと足を動かした。
戦おうなどと、考える馬鹿はいない。
戦いになんてなるわけがないし、愚かにもそれに挑んだ国の兵士達は、地獄の様な責め苦を受けている。
兵士はチラリと見たその光景を、思い出したくないと頭を振った。
あんなのは人のやる所業じゃない。
悪魔か鬼でさえも、もう少し手心を加えるのではないかという拷問の数々は、思い出すだけで腹の中のものを吐き出そうと、すえた息を口から漏らしてしまう。
もうとっくに腹の中のものは吐き出したというのに、思い出すだけでまた吐き気を感じる。
だがそれが、今この街で行われてる、極普通の日常の光景だ。
あり得ない。この世は地獄か何かなのか。

男は神を信じたことはなかったが、本当に切羽詰った時、人は祈るのだと知った。
神よ。
今からでも信仰を、祈りを捧げますから。
どうかこの地獄のような状況からお救い下さい――と。
自分が助かりたい一心で、誰もが祈り、願う。
本当の信仰心などありはしない。救いがほしいから、神という超常の存在を信じ込み、己の心を僅かばかり慰めるだけ。
だが神は、その浅ましさを許す。
何故なら人間の愚かさは、神が作ったものであるからだ。
全ては御心のままに、神の掌で、思った通りに動いているに過ぎない。
だから彼らに、罪はない。少なくとも神の中では、そうあれ、と作ったのだから当たり前の話だ。
むしろ喜ぶべきことだ。その愚かさも相まって、神々はその状況と光景を何よりも喜んでいた。
――さあ、逃げろ。奴が来るぞ。
この世のありとあらゆる負の存在よりも恐ろしい化け物が来るぞ。
神でさえ、その所業と憎悪の深さには舌を巻くしかない――そんな悪鬼がやってくるぞ。
人間の愚かさがあの悪鬼を作り上げたのだ。それを思うと愉快さしか感じない。神すらも、意図的に作り上げることは難しいかの者。それに誰しもが怯えていたのだ。
街の中には靴音と、炎が建物を焼き尽くす音。そして自身の息遣いと鼓動だけが聴こえる。
遠くから微かに聴こえる悲鳴の連鎖は、聴こえないようにと、聴こえない振りをした。
未だこの身が、五体満足であることにこの上ない幸せを感じてしまう。身体の機能が正常であることを神に感謝してしまう。
薄情なことだが、自分さえ無事なら、他の誰も彼もが、どうなっても構わないとさえ思った。

それだけ、この地獄から逃れたいのだ。
――だが、不意に音は聞こえた。
――ひた、ひた、と。
「……ッ!!!」
男は街の出口に差し掛かろうという一本道で、それを目の当たりにし、息を止める。
喉が乾き、全身が震える。耐え難い嫌悪感が、衝動的に己の眼から涙を覗かせる。
――ひた、ひた、と。
前方からゆっくりと歩いてくる人影がある。
それは人の形をしていたが、まるで人とは思えない――絶世の美女だった
燃え尽きる街の通りを、悲鳴が鳴り響く街の中を、悠々と歩く、全裸の美女。
それは容姿だけなら、あらゆる男が魅了される――魔性の女だ。
女性らしい身体のラインは、あらゆる男に性への渇望を抱かせる。
見ただけできめ細やかさと、その滑らかさが想像出来るようなシミひとつない白い肌。悩ましく膨らんだ臀部は、今直ぐにでもその中に、己の遺伝子を宿らせたいほどに情欲を刺激する形をしており、その細い腰つき、ウエストは、この世のどんな曲線よりも美しくくびれており、その大きく形のいい胸は、歩く度にほんの僅かに揺れ、その張りと柔らかさを想起させ、その桃色の突起には誰もがむしゃぶりつきたくなるような堪らなさで満ちている。
身長の倍はありそうな長さの明るい水色の髪は、しかし全くの汚れもない、綺麗でしなやかな髪だった。
そして当然、その顔の造形は、女神と見紛うような完璧な造形。女性という生き物の黄金率は眼の前に存在すると、そう思ってしまうほどの美女。
ただその手足だけが、中頃からドス黒く、禍々しい紋章が浮かんだ、奇妙なものとなっている。
しかしそれを差し引いても、男の性衝動を刺激するには充分なもの

であったが、
「――――どこへ、行く気だ……？」
「ッッ!!　ぁ……ぅ、ぁ……」
その涼やかな美声を聞いてなお、恐怖に口をパクパクとさせてしまう。
絶世の美女、その裸体が惜しげもなく晒されていると言うのに、男の物は縮こまり、性衝動の欠片も見せない。
それだけ、この女性が恐ろしいのだ。
その身に纏う雰囲気を、目の前にするだけで、泣き出しそうになる。
そして遂に、
「う、う、うぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!」
男はその場から踵を返して、逃げた。
足をもつれさせながら、不格好ではあるが、その場から脱しようとした。
しかし恥ではない。彼女を前に足が竦まず、一応は走ることが出来ているのは、それだけで称賛に値する。並の人間であれば、その場からまず動けなくなっているところなのだ。
だからこそ、美女は口元に笑みを浮かべた。
それは見るべき時に見れば、男を惚れさせる女の武器であったことだろう。美しさだけは全く変わらない。
だがその笑顔の意味は――人間に苦しみを与えることが出来ることに喜ぶ、狂気の笑みだ。
だから美女は近づいた。出来るだけ、恐怖を与えてやろうと、
――ひた、ひた、と。
男の背後から、足音が近づく。
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

の足音は、徐々に近づいてくる。
その音こそが、己が無事でいれる期間を示すタイムリミット。その音が己の直ぐ背後で鳴り止んだ時――自分は終わる。
だから逃げた。何もかもを捨てて。
――神様！　お願いです、助けて下さい！
空想であるとされた存在にすら全力で祈る。
嫌だ、と。あんな風に苦しめられるのは嫌だ、と。
脳裏に、苦痛を与えられた様々な人間達の顔が浮かんでくる。
彼らは誰しもがこう言っていた。
――もう、殺してくれ。
――こんなに苦しむくらいなら、早く死にたい。
――こんな目に遭うくらいなら、生まれてこなければ良かった。
もはや自分から死を望みだす、狂った世界。
その世界の理を、自分も味うことになるのは嫌だ。
だが、無慈悲にも、足音は背後で止まった。
そして、
「――捕まえたぞ」
と、美女の声が聞こえた瞬間。
男はその足を、まずは潰された。
「っっっ!?　あぎあががあああああああ、あっ、あっ……あぁあああ!!!」
激痛によってもはや言語を保てず、ただただ悲鳴を、苦痛の悲鳴を上げる男。
しかしそれでは終わらない。終わるわけがない。
人間への憎悪で満ちた魔王――ジルの人間への復讐は、これだけで終わらない。
彼女はその潰れた足を掴み、男を引きずった。
これから、地獄を超える苦しみを、味わわせるために。
「ぎ、ぎやぁ、あぁあ、うぎあ、だずけ、やべでええええええええええッ!!」
男は叫んだ。嫌だ、と、それを意味する叫びを放った。

しかし魔王ジルは、それを聞いても一切動きを緩めない。それどころか嬉々として、男に魔力で出来た棘を突き刺し、皮を剥ぎ、性器を切り落とし、耳や眼球を引きちぎり、四肢を斬り落とした上で、さらなる苦しみを与えてやれ、と魔物兵に投げ渡し、終わることのない拷問が続けられる。
彼が、殺してくれ、と魔物達に懇願し始めるのは、それから直ぐのことだった。
ジルはこれを、あらゆる国、あらゆる人間の街で行い、その全てを憎悪で染め上げた。
僅か一年。それだけの短い期間で、全ての国を破壊する〝国狩り〟を命じて、それを手ずからも行い、全くの例外なく遂行した。
全ては人類に、永遠の責め苦を、終わることのない生き地獄を与えるため。
忌避されるはずの殺人が救いとなるほどの人類の暗黒時代――それこそが、ジルの布く世界の光景だった。

人間をひとしきりに苦しめ、愉快そうに笑みを浮かべた魔王ジル。
しかし彼女は、街の中で苦しみに喘ぐ人間達を冷たい表情で見下ろしていた。
それを目にした魔物兵達は、背筋を一瞬震えさせて、人間を苦しめる手を強める。
「ひぎ、あぐ、はが、あぎいいいいいい！」
「やべ、ごべんださい……なんべぼ、しますがら……っ！」
「ゆるじでぇ……いぎ、ぐぅあぁいやぁ、ひび、あぐ……」
「おらおら人間ども！　もっと苦しみやがれ！」
「お前らは魔王様を愉しませるだけのおもちゃだ！　ほら、壊れるまで悲鳴を上げんだよ！」
「ぎゃはははは！　おら、まだまだつっかえてるぞ！　死ぬまで犯してやるから愉しみだろ！　なぁ、おい！」
それは終わることのない拷問と暴行。

街に住んでいた人間は、一人残らず広場に集められ、到るところで人間を苦しめるべく様々な仕打ちを行う。
男は老人も子供も、等しく拷問され、血と肉を溢れさせながら、悲鳴と呻き声を響かせる。
女は魔物兵に集団で陵辱され、恥辱の極みを受ける。
拷問は、皮を剥ぎ、爪を剥がし、沸騰させた湯や油に人間を突っ込み、生きたまま串刺しにし、人間を使ったスポーツを行ったり、四肢をねじ切ったり。
暴行は、全身の穴という穴を犯し、腹が魔物達の精が溜まって膨らみ、全身が汚され、精神が壊れるまで。
人間を苦しめるためなら、ありとあらゆることが魔物達に許された。
基本的に人間を苦しめることを好む魔物達は、これに大いに歓喜し、魔王ジルを讃えた。
そして中には、興奮し過ぎて、やり過ぎる者すらいたが、
「ぎゃははっ！　そろそろ死ねや、人間！」
「はべ、やべで……だすけ……」
「あっ、こら、まだやめとけって――!?」
「うるせぇな！　どうせ殺すんだから、何やっても、おな、じ――」
と、一体の魔物兵が、興奮して人間を殺そうとしたところで、しかし動きが止まる。
同僚の注意を聞いたわけではない。こちらに真っ直ぐにやってくる存在を見て、思わず絶句したのだ。
周囲にいた魔物兵達も、広間の中心を真っ直ぐに歩いてくる強大な存在に、一時的に下卑た声も、人間を苦しめる手すらも緩めてしまう。
それほどに、かの存在は畏怖を集める存在だった。
「――――おい」
「ひっ、は、はい！　な、何でございましょうか!?」
人間を殺そうとしていた魔物兵は、その仰ぎ見るべき存在に声を掛けられ、声を震わせながら敬礼し、応答する。
その紅い瞳を持つ、鋭い目つきが細まり、魔物兵をじろりと睨みつ

ける。
視線だけで人が殺せそうな圧力は魔物兵達にとって、魔王には敵わずとも、恐怖でしかなかった。
彼の一声で、魔物兵の運命は終わるし、彼が軽く魔物兵を弾くだけで、命は終わる。
だから魔物兵は、慎重に、そして祈りながら沙汰を待った。
永遠にも等しい男の圧力は、やがてほんの少しだけ弱まると、
「……人間を殺していい、と、誰が言った？」
「は、は……い、言っておりません！　興が乗ってしまい……も、申し訳ありませんでした!!」
誠心誠意、心を込めて、必死に頭を下げる魔物兵。
それほどに、人間を殺すのは大罪だった。
魔王ジルの治世では、人間を殺すのは、殺してくれと懇願した者だけであり、それ以外は殺してはならないことになっている。
だからこの男は、その命令に従って魔物兵を咎めたのだ。
魔王の命に逆らうなど、あってはならないことだと。
そう刻みつけるように、男は魔物兵に再度言い含める。
「……次はない。注意しろ」
「は、ははっ！　畏まりました……！」
そう言って、男は背を向けて、再び広場の中心を真っ直ぐと進んでいく。
周囲の魔物兵達は、その光景を見てごくりと喉を鳴らした。
あれが――魔人、レオンハルト。
魔王の懐刀。多くの魔人達を束ねる魔人筆頭にして、魔軍全軍を指揮する魔軍参謀。
金髪灼眼、短く切り揃えられた黄金の髪と、鋭い目つきが特徴的で、その容姿は魔人の――男性の中でも、特に優れている。
女性であれば誰もが見惚れるほどに整った顔立ち。鋭い目つきが若干、威圧的な印象を抱かせるも、それを差し引いても男性としては完璧に近いと言わざるを得ない。
その肉体は剣士として、無駄なく鍛えられており、太すぎず、細す

ぎず、まるで鍛えることを知った獣の様な戦闘の為の肉体は、しかし、それを見る人にも美しさを感じさせる。
黒と赤を基調にした衣服、そして前面を開かれたロングコートの様な衣服にその身を包む。見た目だけなら人間の美丈夫といった面持ちだが、その内側からは、隠しきれない強い魔の気配を覗かせている。
歩いているだけなのに、全く隙が見当たらない。それどころか、少しでも敵意を見せれば、次の瞬間には彼が隠し持っているであろう魔剣に断ち斬られてしまう――そんな幻視をするほどに、その気は凄まじかった。
初めてその姿を目にした者は、その風貌、立ち振る舞い、そして強さに、ある種の憧憬に近い畏怖を覚える。
強さを絶対とする魔物達にとって、最強の魔人という立場は誰しもが魅せられてしまう憧れのような存在だ。
もはや息をすることすら忘れて見入る者だっているし、思わず、〝すげぇ……〟と呟いてしまう者だっている。
あれが――〝世界最強の剣士〟。
三代にも渡って魔王に仕え、魔物の黄金時代を築いた――〝魔物界の英雄〟だ。
彼のおかげで、今この状況があると言っても過言ではない。
既に単騎で、十以上の国を落としたという怪物だ。彼を敵に回すなど、例え人間であっても同情してしまう。
しかしそんな恐ろしい存在も、魔物達にとっては唯一無二の英雄である。歴代最恐にして最高の魔王であるジルと、かの御方がいれば、魔物界は安泰であると。
そして直に、魔物界という呼称も無くなるだろう。
何故ならこれからは、大陸全てが、魔物達の支配する土地になるのだから。
魔物達は自然と敬礼を取りながら、レオンハルトが進む先を見る。
「ぐぅ、あああ……だずげて……」
「もぉ、ごろじて……ごろしてよ……」
「嫌ぁ……あぐ、ひぎ、やめで、うぐ、やめてぇぇッ！」

「……」
周囲の人間達、男、女、老人、子供。誰もが苦しむ様に、レオンハルトは小揺るぎもせずに真っ直ぐと向かう。
その先にいるのは、魔王ジル。
魔物達ですら恐怖してしまうほどの、恐ろしい魔王。
その前に、躊躇うこともなく、レオンハルトは進み出ると、直ぐに膝を突いた。そして口を開くと、実直な性格が滲み出るような声を発する。
「――ジル様。ご報告に参りました」
「――どうした？」
魔物達の間に流れる空気が死ぬ。
会話自体は特別なものではないが、魔物達の頂点に位置する彼らの会話は、それだけで緊迫した空気を作ってしまうのだ。魔物達は、それが聞こえている者も、聞こえていない者も、自然と口数が少なくなり、静かに人を苦しめるべく手を動かす。
広場には悲鳴と呻き声だけが目立つようになった。
そんな中で、レオンハルトはジルに促され、報告を口にする。
「つい先程、全ての国家の掃討が完了致しました」
「……！」
おお、と自然と声を漏らしてしまったのは、近くにいた魔物将軍であったり、会話を聞いていた者達だ。
遂に、遂に、世界が我々、魔物のモノになった。
その朗報に、沸き立たない魔物などいない。
今はジルとレオンハルトの手前、表立って騒ぎ立つようなことはしないが、それがなければ階級も何も関係なく、隣にいる者同士で肩を組み、歓喜に満ちた雄叫びを上げるであろう。
だがそんな朗報を聞いても、ジルは僅かに口端を吊り上げるだけであった。
「ふん……ようやくか。お前にしては、遅かったな……」
「申し訳ありません。〝例の計画〟の草案を纏めるのに、時間が掛かってしまい……」

レオンハルトが魔軍の指揮を執り、たった一年未満で全ての国を滅ぼしたというのに、ジルは遅いと言い放った。その発言に、レオンハルトの手腕を知る魔物達は驚くが、さりとてそれを口に出せるわけもない。ちょっとした異議でさえも、心の中だけに留める。

しかしレオンハルトの遅くなった理由に、ジルは僅かに眉を上げる。興味を示したのだろう、喜悦の混じった声で、ジルはレオンハルトに問いかけた。

「く、くくく……そうか。私の満足のいくものなんだろうな……？」

「御命令通り、人間の人口調整と虐待、その両方に特化したものとなっております。大まかな方針とルールは統一し、細かな運営は、施設毎に魔人を責任者に就けて、一任させようかと……」

それは話を知らない魔物達にとっては、頭に疑問符を浮かべる内容だが、話を知る魔軍の重鎮達は、喜ばしいことではあると思いつつも、末恐ろしさを感じるものでもあった。

そして魔王ジルは、その内容に更に笑みを深めた。魔王の気が僅かに昂ぶる。それだけで近い距離にいた魔物兵は顔を青褪めさせたが、

「くくく……！　そうか、よくやったぞ……！　なら、早速計画を動かせ……！」

「……はっ、畏まりました。全軍を動かし、速やかに計画を実行致します」

歓喜に満ちた笑みを浮かべるジルに対し、恭しく頭を下げて了承するに留めるレオンハルト。両者の温度差は対照的ではあったが、それを気にすることなく、ジルはレオンハルトに向かって機嫌良さそうに告げる。

「……では、お前には褒美をくれてやる。私の部屋に行くぞ」

「……分かりました。有り難く、頂戴致します。ですが、これから計画の実行の為に――」

と、褒美を受け取ることを了承しながらも、暗に、今は忙しいので後にしてもらえないかと言おうとしたレオンハルトは、続くジルの、不意の言葉によって、それを差し止められた。

「――我に、口答えする気か？」

「！」
「ひっ……！」
ほんの少し、苛立った様なジルに、魔物兵達が怯えた様子を見せる。
僅かな感情の動きにすら、ジルの魔王の力が揺れ動き、周囲を禍々しく変容させるのだ。
だがレオンハルトは、それに僅かに眉を動かしたものの、極めて冷静な声で、
「――そういうわけでは。今直ぐに、ということであれば従いますが、配下に一言だけ指示を行いたく思いますので、数秒程、お待ち頂けないかと」
「……ふん……ならさっさとしろ」
その言に一応納得したのか、ジルが鼻を鳴らしながら許可を出す。レオンハルトが、はっ、と短い声を上げると、直ぐ様立ち上がって近くの魔物将軍に近づき、それを命じた。
「俺の使徒に伝えてくれ――〝計画通り、進めろ〟と」
「はっ！　畏まりました！」
魔物将軍ははきはきとそう答え、直ぐ様その場を後にしようとする。それを見届け、レオンハルトはジルに向き直った。
「お待たせしました。では、部屋に向かいましょう」
「……そうだな。計画についての詳細は、褒美の最中にでも、じっくり聞かせて貰おうか。くく……」
「……お望みとあらば」
ジルが広場に作られた、観覧用の即席の玉座から立ち上がると、レオンハルトのエスコートを受けてゆっくりとその場を後にする。
あれが、あの二人が、この世界を現在支配している魔物達の頂点。
魔物兵達はその、機嫌が良さそうなジルと、淡々と魔人然とした態度で応じるレオンハルトの、対象的な二人の背中に視線を少しばかり送ったが、命令に従うため、直ぐに視線を切って人間達の虐待に戻った。

魔王ジル

魔王ジルによる国狩り。

全人類を魔物の支配下に置くための闘争は、全魔人に通達され、僅か一年で全ての国家を破壊するに至る。

魔物達はこぞって人間を苦しめるために魔軍に参加し、己の欲望を満たそうとし、被害を受ける人間達は、この地獄が早く終わってくれと、誰もが懇願し、咽び泣く。

そしてある計画が始動し、これ以上の人間達の地獄が作られようとする中、その命令を下した張本人である女と、命令を実行に移す男は薄暗い部屋の中で二人きりとなっていた。

「んっ……そうだ……はぁ……そのまま話せ……」

「……畏まりました……っ、では、ご説明します……」

天蓋付きの大きなベッド。その上に二人の男女が身体を絡ませていた。

女の方、僅かに息を乱しながらニヤニヤと口元を吊り上げて男を見ているのが魔王ジル。

そして男の方、仏頂面のまま、しかし時折表情を乱しているのが魔人レオンハルトだ。

そう、レオンハルトは褒美という建前で、ジルの夜の相手を、いつも通りに務めていた。

ここ一年、ジルが魔王になってから、何度も行ってきた行為。それをレオンハルトは、極力冷静になって行おうとし、同時に計画についての説明も行った。

「先程、ご説明した通り……人間の人口調整と虐待、その両立を果たすため、御命令通りに牧場という形式を取ることにしました。共通する方針、コンセプトは――〝生き地獄〟。魔人を各施設の責任者とし、配下に各軍を置くことで、半永久的に、組織の運営を、行うことが出来ます……」

「っ……ああ、そうだ……それでいい。ナイチサより教えられた勇者の、んっ、脅威……その対策を取りながら、あっ、人間に地獄を与え

る……奴らを、永久に苦しませるためだ……！」
時折甘い声を出しながらも、ジルの人間への憎悪はその言葉からも表れている。
そのための計画。安全に確実に、人間を苦しめるための一連の計画なのだ。
ジルは魔王になった直後、前魔王であるナイチサに、幾つかのアドバイスを受けたのだ。
その中の一つに、勇者の存在があった。
地上で唯一人、魔王に匹敵する対の存在。人間が死ねば死ぬほど力を増し、半分程死ねば、その力は魔王をも討ち倒すことが可能であるという。
ジルにとっては忌々しいことこの上ない存在だが、人口を調整してしまえば問題ないことに、ジルは直ぐに気づいた。
しかもそれは、ジルの目的である、人間を苦しめることにも繋がる。故に魔人筆頭であるレオンハルトに命じて、国狩りと計画の草案を纏めるように動かしたが――ジルにとって、このレオンハルトという存在は僥倖だったといえる。
ナイチサより受けたアドバイスの中には、〝レオンハルト程、完璧な魔人はいない。大事に使え〟というのがあった。
はっきり言って、魔王の力についての説明は聞く価値のあるものでも、そのような命令に近いアドバイスまで聞く必要はない。ナイチサが前魔王であっても、今の魔王はジル。誰をどんな風に用いるかは自分で決める。
だが確かに、このレオンハルトという男は優秀だと、ジルも認める他なかった。
最強の魔人であり、これまで魔軍という組織を取り仕切ってきたその手腕は、ただやりたいことを命じるだけで、完璧なまでに行動してみせる。
組織の運営、その実務において、これほど出来る人物はそうはいない。国狩りも、出来る限り民衆を殺さずに行えという命令にきっちり従い、魔人や魔物達を統制した。血の気の多い魔人ですら、レオンハ

ルトが一言添えればそれに従う。魔王の命令でも充分ではあるが、レオンハルトの場合は、その実績が違う。誰もがその強さ、能力を知っているからこそ、黙って付き従うのだ。
更には単騎で幾つもの国を落としてしまう始末。魔人であれば国一つ落とすくらいは訳ないが、それでもここまで一切休むこと無く、魔王の命令を冷徹なまでに淡々と行うのは、さすがと言わざるを得ない。
武人基質で殺戮を好まないとは聞いていたが、必要とあれば女子供であっても容赦はしない。正に修羅の如き人物だ。
そして何より実直で、人間の様に醜くないのがジルにとっては好ましい。元人間とはいえ、殆ど古代の、文明の開闢期の人間であり、その精神も在り方も、とっくに魔人のものである。
だからこそ、ジルは己の判断で、レオンハルトを重宝していた。こうして、夜の相手を務めさせるほどに。
――しかしレオンハルトの方は、その扱いに内心、遺憾と歯噛みするような気持ちを覚えていた。
だが、出来るだけ表には出さずに、レオンハルトはそれをいつもどおり行おうとする。ジルの指示に従い、
「くく……どうした……動きが止まっているぞ？」
「っ……申し訳ありません。直ぐに動きます……」
――この魔女め。
レオンハルトは内心で半ば憤ったようにジルをそう評する。
だが表では、従順に、直ぐ様行動を起こしていた。腰を突き上げ、
「っ……」
「～～～……っ！　入って、きたな……く、くく……どう、だ？　私の身体は、気持ちいいか？」
「……はい……」
ジルの問いかけ、それに対してレオンハルトは、複雑な思いでそれに応える。
それは何故か。別に本当は気持ちよくないから複雑に感じているわけではない。

――本当に、気持ちよすぎるから問題なのだ。
レオンハルトは眼の前の女、自分が抱いている女を眺め、思ってしまう。
己の矜持として、好意を持ってくれた女であり、なおかつ己が認めた相手としか行為を行わない。そんな矜持がレオンハルトの中にはあり、その条件に当て嵌まっていない女とやるのは久し振りであった。
しかし命令であれば致し方ない。甚だ遺憾ではあるが、魔王の命令は魔人にとって絶対であるのだ。
だから神妙に、レオンハルトはこれまで行為を行ってきたのだが――やる度に、レオンハルトは恐ろしくなる。
ジルはあまりにも女性として、魅力的過ぎた。
その造形は完璧。美人過ぎる顔立ちや、綺麗な髪。女性としての魅力がたっぷりと詰まった蠱惑的なスタイル。手足の紋様など些末なことに過ぎない。
見ているだけで、男なら堪らないだろう。これでは誰もがその魅力に惚れたのも、醜い嫉妬を集めたのも頷ける。彼女を手に入れることは、雄として至上の悦びであるはずだからだ。
だがその真骨頂は、肌を合わせた時にこそ明らかになる。通常、一度手に入れた女に、男は慣れるものであり、魅力的には感じても、それを実際に手に入れてからはある程度は落ち着いてしまうものだ。
もっとも、いい女であればあるほど、飽きなど来るはずもないが、ジルはそれに当て嵌まる。
ジルとの距離が縮まるのを感じながら、レオンハルトは思った。
「ん、はぁ……レオンハルト……くく、お前の、随分と硬くなっているぞ……そんなにも、んっ、私とするのは、堪らないのか……？」
――堪らない。そう口に出来る者はどれだけ楽なことだろうか。
はっきり言って、レオンハルトは好意を持たない相手との情事など、たかが知れていると思っているし、実際に精神的に満たされない相手との行為はただの作業だ。好意があるのとないのとでは、随分差があるということを、レオンハルトは経験的に知っていたし、好意が

ないのに交渉を行うなど、好ましくないものだと思っている。
だが、だと言うのに、レオンハルトの身体は、感覚は、とてつもない快楽を感じてしまっていた。
ジルの身体は極上過ぎる。その白く滑らかな肌は、スベスベという言葉が生温く感じるほどで、女を知らぬ男であれば、撫でただけで達してしまうほどのもの。
鞘の具合は剣を絞るために特化したもので、溶けそうなほどに熱く、きつく締め付けてきており、刺しているだけで果ててしまいそうな最高の具合。
そんなジルを、レオンハルトは全身で感じている。彼女の腕が己の首に回され、肉付きの良い太腿と臀部が己の腰に乗っかっている。動く為にジルの細い腰に手を這わせているが、愛撫するためにその曲線をすりすりと撫で、時折太腿や尻にも手を伸ばし、彼女の官能を高める。
しかも時には、レオンハルトの好きな部分も、
「ふふ……胸は、触らないのか……？」
と、ジルがこちらを真っ直ぐ見詰めながら、そんなことを言う。
上体を見せつけるようにしたそこには、ジルの形のいい大きな胸がある。
「大きな胸が、好きなのだろう……？」
分かっているのだぞ、とこちらを誘惑する様に、ジルは己の耳元に熱い吐息を吹きかけながら告げる。
その際に、背中に手を回し、己の胸板に、ジルの巨乳がたっぷりと押し付けられ、柔らかく広がって押し潰れる。極上の弾力と柔らかさだ。先端の突起がこちらの肌を撫でてきてぞくぞくとしてしまう。
暗に〝触れ〟と命令されていた。だからレオンハルトは、その胸を手のひらで揉み上げる。
「んっ……そうだ、私の身体を貪れ……」
ジルの美巨乳は、己の指が沈む最高の触り心地だ。
レオンハルトは大きい胸が好きで、ジルよりも大きい胸を好んでいたし、彼の女達の中にはそれだけ大きい胸の持ち主――千年間、大陸

中から選りすぐられた最高の美女、美少女達がいる。
それは雄として、至上のハーレムだろう。毎日の様に、彼女達の最高の女体に、胸に、もみくちゃにされて愛され、溺れるような生活を送っており、女性から齎される快感には耐性がある。古今東西、ありとあらゆるタイプの美女を抱き、快楽の殆どを極め尽くしたといっても過言ではないかつての人間の王は、雌を虜にし支配する、雄の中の雄だ。
だがその雄でさえも、ジルの肢体の前には、油断すれば溺れてしまいそうになる。
「くくく……ああっ、いいぞ……！　もっと貪れ……私を、んっ、滅茶苦茶に、っ、はぁ、しろ……！」
そしてジルの方も、そんなレオンハルトと愉しむことを、一つの愉しみ、享楽の一種として楽しんでいた。
レオンハルトの方は自己評価が僅かに低いというか、謙虚な部分があるため認めはしないだろうが、レオンハルトの方も、周囲から見れば最高の雄に違いなかった。
金髪灼眼の美丈夫、剣士として無駄なく鍛えられた逞しい身体と、鋭く威圧的だが、強い意志を感じさせ、屈服してしまいたくなる紅い瞳。短く切り揃えられた黄金の髪も、その能力の高さも、性格も、何もかもが、雄としての一つの完成形であると言える。
女性であれば、多少の好みの差はあるため一概には言えないが、おおよそ殆どの者が、彼と番いになることを喜ぶだろうし、そうでなくとも好意を持たれたり、関係性を持つだけでも満更ではないはずだ。
レオンハルトにその気はないだろうが、その強さや能力の高さも相まって、彼に好きに出来ない女性など存在しないほどである。
そんな極上の男を、ジルは身勝手に、抱くことが出来る。
それは魔王として生まれ変わった己の全能を実感させるのに、これ以上無い役割を持っていた。
魔王は世界の支配者であり、遊び半分で人間や他の生物を殺し、苦しめてもいい。この世のありとあらゆる財を手にすることが出来るし、気に入らないものは気に入らないと世界を捻じ曲げることが出来

る。手に入らないものなど存在しないのだ。
その気になれば、世界一の男ですら手に入る。自分を苦しめていた嫉妬深い人間の女共では、どれだけ願っても手に入らない極上の雄に、己を犯させ、愛させることすら出来る。それを思えば、ジルは人間を苦しめるのとはまた別の、暗い悦びを感じることが出来た。
この世の頂点に立ち、世界一幸福になるのは自分で、人間は僅かな幸せすら手に入らない不幸のどん底であると。
それを実感するために、ジルはレオンハルトに命じる。もっと己を貪れ、と。
「あっ、あっ……いいぞ……っ、もっとだ……んっ、あんっ、くく……！」
行為に慣れたレオンハルトの技巧は、ジルを満足させるに足るものであり、甘い声を漏らしながら与えられる快感と、とてつもない優越感を甘受するのだ。
対するレオンハルトも、なんとかその悦楽を耐えようとしていた。
あまりにも甘美なジルの身体を抱いていると、幸福を感じかけるのが何よりも腹立たしいのだ。
眼の前の、己の腕の中にいるジルという美女。その腰を抱き、尻を鷲掴みにしてこちらに引き寄せ、胸板で最高の美巨乳の感触を味わい、その肌を全身で感じ、時にさらさらの髪を撫で、口内を舌で蹂躙し、鞘に己の剣を突き立てる。
そして最終的には、この美女の中に、己の剣気を、存分に吐き出せるのだ。
きっと誰もが羨み、夢想するものだろう。この極上の雌の肉体を味わい、己の遺伝子を刻みつけるなど、誰もが出来ることではない。
好意を持たない女との行為で、これが至上の幸福なのだと、錯覚しそうになるのが、とてつもなく腹立たしかった。
「っ……っ……！」
「ふっ……ん、はぁ……そう、だ……あっ、もっと、激しく……！」
水音と、ベッドが軋む音が室内に鳴り響く。快感を我慢するような男の息遣いと、それを素直に甘受する女の甘い嬌声も響き合う。

ジルの指示に対し、レオンハルトは忠実にそれを行った。あくまでも、これは仕事なのだとそう示す。
俺は、お前の男ではない――そう示すかのように、思い切り身体を動かし、強い動きで突き立ててやる。
あくまでも、魔王の命令だからやっているだけなのだ。だから指示以上のことはしてやらない、と、レオンハルトは従順過ぎるほどにジルに指示に忠実に従い、彼女とやり合う。
その中に、偽りではあるが、僅かながらの愛を見せてやりながら。ジルの指示であり、彼女に対して、僅かながらの負い目を感じるが故に、その指示にも忠実に従う。腕で強く締めるように抱きしめてやると、腕の中のジルが息を乱し、
「あっ、ああ……レオンハルトっ……そろ、そろ……出せ……んっ、私の、中に……！」
「……っ、畏まりました……！」
とうとうジルも限界が来たのだろう、レオンハルトの腕の中で頂まで導かれようとしながらも、最後は己の鞘にその剣を吐き出せと命じる。
レオンハルトも、その命令が出されたことで、ようやくそのせき止めていた快感を解放した。
「……ッ！」
「～～～っっっ！　あ、ああ……！」
腰を引き寄せ、思い切り剣気を放出する。ジルとレオンハルトの身体がベッドの上でこれ以上ないほどに震え、息を乱して倒れ込む。
強すぎる快感。お互いの真意はどうあれ、雄と雌としては最高に近い相性を持つ二人は戦いを終えると暫くの間、ベッドの上で息を整えた。
そして息をある程度整えたところで、ジルは告げる。倒れ込んできているレオンハルトの耳元で囁くように、
「……これが、終わったら……牧場の建設に取りかかれ……」
「……畏まりました。直ぐに、行います」
レオンハルトは努めて冷静にそう頷く。だがジルの方は、まだまだ

情欲を抱いているようで、
「お前は優秀だな……レオンハルト……私のためにここまで従順に働くとは……愛い奴め……」
舌で首元や耳を舐められながら、褒められるが、レオンハルトはそれを否定した。
「……魔人が、魔王に従うのは当然、ですので……」
「……確かにな。魔物が魔王に従うのは当然……それが本能だ」
多くの魔人が、己に傅いたのは力の差も当然だが、そういった本能も関係してくる。
絶対命令権を持つ魔王には、例え命令されずとも、魔王の血が彼らから反抗の意志を奪うのだ。
だからこそ、ジルは言った。気に入ってるのはそこなのだと、
「だが……レオンハルト。お前ほど、瞳の奥に反抗的な、自分だけの意志を持ち続ける者はいないぞ……？」
「っ……お戯れを……」
「くく……心配するな。咎める気はないぞ……その醜くない在り方は、嫌いではないからな……」
「……っ」
ジルに身体を蹂躙され、レオンハルトは耐える。快感を感じながらも、会話は行われ、
「初めて会った時からそうだったな……その強靭な意志は、一度理解すると、目にしただけで惚れ惚れするほどだ」
だが、とジルは続けてこう言う。レオンハルトの剣を手で弄りながら、
「忠義は確かなようだが……それは魔王にであって、私個人にではないな……それだけが残念だ」
「それは……」
レオンハルトは何も言えなくなる。それは事実であったからだ。
「私を手に入れようと誘っておいて、薄情な奴だ……絶対命令権で心変わりをさせてもいいが……それは、精神性の変容、お前の良さを失うリスクがある」

だからそれは使わない、とジルは言う。しかし、
「だから、私の個人的な戯れとして……お前を、可愛がってやる」
可愛がる。その言葉の意味は、この一年でよく分かっている。
だが改めて、何度でも、ジルは告げるのだ。戯れとして、
「お前は私の右腕だ……そして私は、お前の主だ。それをゆっくりと、心に浸透させてやろう。何百年と使ってな……」
そのために、己の衝動をレオンハルトにぶつけるのだ。
明確な恋愛感情はないと言う。ただの遊びで、レオンハルトと関係を持ってやると、
「もっとも、お前とするのは、私としても悪くないことだ。だからそれがなくとも可愛がってやるが……くく、私の魅力に夢中にならないよう、注意するがいい……」
そう自信に満ちた蠱惑的な表情で、ジルはレオンハルトを見下ろす。その頬に両手を這わせ、首筋に思い切り、唇で吸い付くと、
「んっ、ちゅる……はぁ……ほら……好きにしていいと言っただろう。お前の好きな胸はここにあるぞ……？」
今日は褒美だからな、とジルはその胸をレオンハルトに押しつけて誘惑してみせる。
レオンハルトの巨乳好きは有名な話だ。そんなことは人間時代から知っている。
ゆえにジルはそれを好きにさせてやろうとした。彼が溺れるようにと胸を掴ませながら、ジルは愉快そうに笑う。
「これからどんな女を抱いても……私を思い出してしまうかもな、くくく……！」
「……」
レオンハルトは内心で、何度目かとなるジルの企みを、認識していた。
ジルは、完全に遊びで、己の心に侵食しようとしている。
戯れで、己を汚しているのだ。
己の欲求を満たすついでに。
レオンハルトを、己の真の忠臣にしてやろうと。

それを思うと、様々な念が入り混じった複雑な気持ちになる。
中には哀れむような気持ちもある。
だが、それだけはあり得ない。
何度こうやって汚されようとも、己は自分の大切なものを見失わないし、新たに大切なものが出来て、肌を重ねたとしても、その最中にジルを思い出すようなことはない。
また、今の彼女に、真の意味で忠義を捧げる気もない。
だから何度やろうと無駄だと、レオンハルトは己にも言い聞かせるように内側に言葉を作る。
彼女の作るこれからの世界は、人間達にとって、まさしく地獄だ。
その一助となることは、とっくに覚悟を終えた。
だが――どんなに地獄を作り、希望を取り上げようとも、人は諦めない。
それを正そうと、足掻こうとする者は、必ず現われる。
たとえどんな時代であろうともだ。
人の意思を、可能性を、ジルは舐めているのだ。
そして、それを信じているからこそ、レオンハルトは己の出来ることだけを行い、人間達を想いながらも、耐えることが出来る。
今までのように、多くを救うことは不可能かもしれないし、救えたとしても真の意味で幸福にすることは、出来ないかもしれない。
だがそれでも、レオンハルトはこの時代に進んだ。
ならば後は、やれることを、やるべきことをただやるだけ。
ジルの命令にだって、快く従ってみせよう。
だが、己の意志を諦めることもしない。
何かを切り捨てながら、何かを拾い上げる――今までに何度も繰り返したことだ。その規模が、犠牲の数が、膨大になるに過ぎない。
だからこそ――犠牲になる者達の為にも、一度拾い上げた者は、必ず救う。
それが己の〝正義〟だ。
レオンハルトはジルとの淫靡な夜を過ごしながら、国狩りが終わった後の次の行動を思い、憂鬱な感情を心に仕舞い込んだ。

凶行

世界を魔物が支配した今、各地では魔物達の度重なる凶行が相次いでいた。
人を無許可で殺すことを禁じているジルの治世だが、殺してくれと懇願した人間や、相手が兵士などの戦闘力のある相手などであれば殺してもよい。
それと、魔人であれば殺しすぎない限りは自由を許されていた。
それ以外は特に命令もない。国狩りや、これから行われるある計画を進める際に、魔人を使いはするものの、基本的に、ジルは配下の魔人に無関心だった。
人間への憎悪とその虐待を最重視するジルにとって、魔物も魔人も、己の手駒の一つに過ぎない。魔人達が一斉に傅いた際も、冷淡な対応を取り、命令を下した後は、冷たく見下ろすだけであった。
干渉は少なく、人間を苦しめて最低限の義務を果たせば、魔人の自由を保障する魔王。その事実に、一部の魔人は好都合だと内心でジルの対応に喜んだ。
そんな中、この状況をチャンスだと睨んだとある魔人が、一つの事件を、今まさに起こしていた。
そこは魔物界。魔王が不在の魔王城の中で行われていた。
「オラオラオラ！　どーしたテメェらッ!!　いつもみたいに、俺様を虐めてみろやぁぁぁぁ!!」
「ぐあああああっ――ッ！」
「う、ぐ……」
魔王城の中庭。そこで魔人相手に凶行に走っている一体の魔人がいる。
中心にて両手に大剣、ウスパーとサスパーを握る異形の巨漢。醜い獣のような化け物がそこにいた。
紅いマントと、身体に身に着けた鎧を揺らし、魔人達を見下ろしたのはリスの魔人――ケイブリス。
魔人四天王の末席にして、最古の魔人である彼は、その手で魔人達

を瀕死にまで追い込んでいた。
　そして地面に倒れるのは、ゴライアス、オスロ、セイロンなどの古株の魔人らや、前時代に横暴な振る舞いを行っていた一部の魔人達。彼らを見下ろしながら、ケイブリスは口元をニヤリと歪ませた。
「けっ、ざまぁねぇなぁ！　ええ、おい！　いつもの威勢はどうしたよ!?　俺様が気に入らねぇんだろ!?　雑魚だから、魔人の恥晒しだ、アイツは仲間でも何でもねぇって……おら、言ってみろよぉ!!」
「が、あ……！」
　ケイブリスの足に踏み潰され、魔人が血まみれの状態で苦悶の悲鳴を上げる。
　誰もがケイブリスにやられていた。魔人四天王にまで上り詰めた強さによって、屈服させられていた。彼らは一様に思う。
　――まさかこれほどにまでなるとは。総括するとその一言に尽きた。
　彼らは皆、か弱いリスの魔人であったケイブリスを、虐めていた魔人達。最弱の魔人であったり、下級魔人であったケイブリスを見下して、こき下ろしていた魔人達だ。
　仲間内では一番の古株の癖に、一番最弱であったケイブリスは、かつてそのことから虐められていたのだ。
　雑魚だ雑魚だと言われ続け、酷い中傷を受けてきた。何度も暴力を受けて、殺されかけたことだってある。何とか難を逃れはしたが、それからも怯え、必死に彼らの顔色を窺いながら日々を過ごした。
　あのレオンハルトの腰巾着、金魚のフンだとも言われ、暴力は殆ど受けることはなかったものの、陰口をよく叩かれたりしたものだ。
　その恨みを、全部、何もかもを、ケイブリスは憶えている。憶えてきた。
　今は耐え忍ぶ。苦難を耐え続けたのだ。
　己を鍛え続け、この弱さから脱却し、いつか強くなって、復讐してやろうと。
　全く同じことをやり返してやる、とケイブリスはその恨みを憶えてきた。

そして今、その我慢が報われようとしている。その事実に、ケイブリスはちょっとした達成感を感じていた。
……長かったぜぇ……。
さすがに感慨深いものがある。かつて彼らから見下されていた自分は、今は彼らを見下ろし、生殺与奪を手にしているのだ。
だからケイブリスは告げるのだ。己のされていた事を思い出しながら、瀕死の彼らに向かって、
「――こんなとこで転がってんじゃねぇよ、オラァ！」
「がっ……！」
地面に転がる巨人の魔人、ゴライアスを蹴り上げてやる。そのまま別の魔人、今度はオスロに向かって、
「魔人とは思えねぇ弱さだぜ！」
「うぶっ……！」
思い切り拳を叩きつける。骨が砕ける音がして、なんとも気分がいい。
「俺様は今、むしゃくしゃしてるからなぁ！　悪ぃがサンドバッグになってもらうぜぇぇぇ!?」
「……！」
セイロンに至っては、もはや口すら利けなくなっていた。ケイブリスの打撃を食らっても、もはや鈍い反応を返すのみ。殆ど死んでしまっており、まだ形を保っているのは、やはり魔人という種の恩恵が大きい。
その他の魔人も、ボロ雑巾のようになりながらも辛うじてまだ生きている。魔人の生命力は、長く苦痛を与えられるという点でケイブリスを喜ばせ、彼らを苦しめていた。
だがそんな中で、最も余裕のあるゴライアスが、地面に倒れながら声を発する。とはいえ瀕死には違いないが、
「やめて、くれ……ケイブリス……」
「あぁん？」
ケイブリスは身体をそちらに向け、怪訝な声を出す。
一体何を言うのかと、ずしん、ずしん、と重量感のある身体を動か

し、彼に近づいていく。
　するとゴライアスは、苦渋に満ちた表情で、
「俺が……俺達が、悪かった……！　まさかお前が、こんなに強くなるとは……思わなかった……！」
「……」
「だから、許してくれ……ケイブリス……これ以上やられたら、死んじまう……」
　それは謝罪だった。
　今までケイブリスに行ってきたことの謝罪。お前は強いと認め、もう逆らうこともしないし、陰口だって叩かないと、誓ってみせる。
　見れば他の魔人も、意識ある者達は同じ様にうわ言の様に謝罪していた。命だけは助けてくれ、と。
　ケイブリスは思った。己にも経験があることだ。
　――こいつらは、本当に悪いなんて欠片も思っちゃいない、と。
　謝ってるのは形だけ。自分の命が惜しいから、謝ってみせてるだけだ。
　魔人だって死ぬのは怖いし、何よりも避けたいこと。それをケイブリスは、誰よりも理解している。
　魔物であれば強者には逆らわない。力こそが絶対正義なのだ。
　だからこそ、己が弱かった時代にやったことを、こいつらは反省もしていないし、悪いとも思っていない。
　あの時は、弱かった自分が悪いのだ。こいつらの方が強くて、己は何も出来なかった。それだけだ。
　それでも本当に悪いと思ってるのなら、詫びとして、今直ぐ死ね、とケイブリスは言いたくなったが、それをぐっと堪えて別の言葉を作る。彼らの命乞いを、命懸けの謝罪を嘲笑するように、
「……あぁー？　死んだって問題ねぇだろうが。テメェら、雑魚だしなぁ？」
「っ、それ、は……」
　ゴライアスは怯み、眉根を寄せる。それはいつしか、己がケイブリスに告げた言葉だった。

それを今、ケイブリスは意趣返しとして発したのだ。口元に笑みを浮かべたケイブリスが馬鹿笑いを響かせる。
「ぐぁはぁはぁはぁはぁはぁはぁはぁ！　安心しな！　テメェらが死んだとしても、テメェらは雑魚だからな。なーんにも困らねぇし、誰も気に留めることはねぇ！　まぁ、なんだ。魔人四天王の俺様が、お前らは強ぇ人間に殺されたとでも報告しといてやるからよぉ！　感謝するんだな！　ぐぁはぁはぁはぁ！」
「っ……！」
「う、あ……」
それは地面に転がされた魔人にとって、絶望の宣告。
自分たちは今から死ぬのだと、そう告げられたのだ。
誰もが顔を青褪めさせ、己の運命から脱しようと力を入れるが、それも難しい。逃げようとしたところで、ケイブリスにボールを蹴るように蹴られ、更にダメージを負わされる。
この場からの脱出は不可能。既に彼らの運命は決まっていた。
――が、彼らにとっては僅かながらの希望が、その場を通りかかる。
それは、
「……！　レオン、ハルト……様……！」
「……」
中庭にやってきたのは、最強の魔人、魔人筆頭である魔人レオンハルト。
魔軍の秩序を守る魔人の登場に、彼らは僅かながらの希望を持った。
彼が魔人の凶行を見逃すはずがない。直ぐに止めてくれるだろう。
普段は鬱陶しくてしょうがない目の上のたんこぶは、この時ばかりは救世主に見えていた。
レオンハルトは彼らをちらりと見ると、しかし、視線を直ぐにケイブリスに向けた。
その些細な動きに、彼らは違和感を覚える。何だ、と、
「……こんなところにいたか、ケイブリス。そろそろ定刻だ。お前も急げ」

「！　――はい！　了解です、レオンハルト様！　僕、直ぐに終わらせて向かいますよっ！　へへへ……」
「っ!?　な、何故……!?」
用件だけを告げて、踵を返してさっさとその場を後にしようとするレオンハルトに、オスロは疑問を声にして飛ばした。
魔人レオンハルトであれば、魔人の秩序を重んじる彼であれば、この凶行を止めないはずはないのだ。
事実、以前にも、彼らはケイブリスを殺そうとしたことを止められたことがあるし、魔人の喧嘩を止めることもよくあることだ。
だからこそ、オスロや他の魔人達も疑問する。何故、と。
しかしレオンハルトは、その声に足は止めはしたものの、振り返らずに告げた。それは、
「……悪いが……これは上意だ。諦めろ」
「！　上意……って、まさか……」
「へへへ……」
レオンハルトの短い説明と、ケイブリスの下卑た笑み。その二つを組み合わせ、頭の回る魔人達はその意味を察してしまう。
ケイブリスの凶行は、まさか、魔王の許可を得たものであるのだと。
もしくは、放置しておけ、とでも言われたのかと。
レオンハルトが上意、と言った意味と、その行動を見れば、そのようにしか思えなかった。
つまり自分たちは、魔王様に見捨てられ――
「――つーわけだからよ。悪いが全員、俺様にぶっ殺されろやぁぁぁぁ!!」
「……！　っ、あ……！」
ケイブリスの一撃が一体の魔人に振るわれ、肉が弾けるような音が鳴る。
それを聞いてレオンハルトは告げた。短いため息とともに、
「……あまり遊ぶなよ」
「はい！　分かっていますレオンハルト様！　さっさと殺しますね！」

「……それと、魔血魂は一つ残らず回収して持ち帰ってこい。全て、魔王様にお返しする」
「了解しました！　態々伝えてくださってありがとうございます！」
「……早く来いよ」
と、レオンハルトはそうして中庭から離れ、再び室内へと帰っていった。
それは今度こそ、間違いなく彼らの運命が決まった瞬間だ。
魔人筆頭であるレオンハルト。そして魔王ジルが放置すると決めた以上、ケイブリスの凶行は誰にも邪魔されずに行われる。
それをケイブリス自身も実感したのは、笑いが止まらないと言わんばかりに耳障りな声を発しながら、ケイブリスは告げた。
「ぐぁはぁはぁはぁ！　これでわかったか!?　テメェらは、とっくにお払い箱なんだよ！　テメェらみたいな雑魚で無能の馬鹿は、必要ないって、あのジル様が認めたんだぜぇぇぇ!?　なら、快く死んでみせるのが、お前らの役目だろ？　ぐぁはぁはぁはぁはぁはぁ！」
「そ、んな……」
「っ……」
ケイブリスの笑い声が中庭に、彼らの耳にこびりつく。
実際には、いらないというよりは、いてもいなくてもどっちでもいい、という消極的な放置、無視のようなものであるのだが、彼らには気づけない。
実はケイブリスの方も危ない橋を渡っており、内心ではヒヤヒヤものであった。最初に気づかれた時はヤバいと思ったものだが、
……気づかれた時は死ぬかと思ったが……ジルはともかく、レオンハルトまで放置するなんてな……こいつら、本気で見限られてやがるな、いい気味だぜ……！
ジルの意見なんて知らないが、あれは配下の魔人に興味がそもそもない。あの冷淡な態度というか気配が恐ろしすぎて、ちびりそうになっていたケイブリスにとって、干渉が少ないのはありがたいことであった。
なので、兼ねてより殺してやろうと思っていた魔人を、この時に一

掃してやることにしたのだが、それがバレてしまったのだ。
しかし、
……魔人を作りたいだろうから枠にある程度余裕を持たせるのは、良いこととは言えないが必要なことだ、とか恐ろしいこと言いやがって……ある意味俺様がこいつら殺すのって大正解なんじゃねーか？
もし、適当に選ばれたら……。
レオンハルトは魔人に枠を空けるのは必要なことだと言ったが、それにしてもまだ余裕はあるはずだ。だと言うのに、放置されたのは見限られたとも言えるが、これがレオンハルトではなく、配下に興味がないジルが、魔人を作るから、と適当に選び始めた時に、ケイブリスが処分される可能性はゼロではない。
そう考えればある意味で、最高の選択を、これ以上ないタイミングで行動に起こせたともいえる。
時代が変わるとまた気をつけねばならないことが増えるのはいつものことだが、
……つっても俺様も魔人四天王だ。新しく作られた中でも、あの爺以外の魔人は恐れるに足らねぇし、随分と生きやすくなったかもな……。
最近になって、魔人を3体ほど、ジルは生み出したが、内2体はケイブリスよりも格下。警戒せずともよい。
だがジルが作った最初の1体――あの爺だけは、ケイブリスも注意せざるを得ない。
何しろ、魔人四天王、その最後の一席に座り、しかもその序列はケイブリスよりも上なのだ。
後はジルだが、あっちはひたすらに怖い。人間の女の魔王って言うからそこまで怖くねぇだろ、とか思っていたが、あのナイチサよりも怖い。怖すぎる。
あの眼と圧力を思い出すだけで、ケイブリスは身が震えるのを自覚した。
……ぶるぶる、早く終わらせるか。魔人としての命令……これまで以上に忠実にしねぇとな……あの人の機嫌を損ねたらマジで死んじ

まう……。
魔人だろうが容赦はしない。魔人四天王という称号も関係ない。機嫌を損ねれば、本当にゴミのように殺されるだろう。だからケイブリスは息を入れて、彼らを見下ろした。そうならないために、さっさとこいつらをゴミにしなければならないと、
「……さぁて、覚悟はいいか!?　おら死ね！　すぐ死ね！　ゴミみたいに死にやがれぇぇぇぇ!!」
「……っ！　う……がぁぁぁぁぁぁぁ――!?」
ケイブリスの大剣が魔人達を一体一体、丁寧に打ち込まれ、その身体を小さな血の塊――魔血魂に変えられていく。
数分と掛からずにそれらの作業は終わり、ケイブリスは即座に魔血魂を拾い集め、それをレオンハルト経由でジルに返却した。
魔血魂は受け取った瞬間、即座に初期化されたと聞き、ケイブリスはその容赦の無さに、やはり身震いした。――恐ろしい。
魔物達にとっては住みやすい、快適な世の中にはなりそうだが、だからといって気を休めすぎるのは危険だと、最古の魔人は、新しくやってきた時代を、そう評価した。

「……止めずとも良かったのですか？」
魔人レオンハルトは、魔血魂を返却し、初期化を終えたところで、ジルに問いを投げた。
そこは魔王城にある魔王の私室。ナイチサのものを一掃し、己の好みに作り上げたその暗い部屋で、相変わらず全裸のままベッドに腰掛けるジルは、特に何を思うでもなくそれに答えた。
「どうでもいい。ただのリスが少しばかり、暴れただけだ……」
本当に興味が無さそうに、ジルは答える。
ケイブリスをただのリスと評するその無関心さ、実際は知識には入れているのだろうが、それを踏まえてもどうでもいいと評しているのだ。
駒として、ちゃんと動くのであれば何をしようが問題ない。

だが、その駒としての役割が、失われることをレオンハルトは一応危惧した。
「しかし、あれほど多くの魔人を一度に失っては、魔軍と、今後世界中に建てられる施設の運営にも問題が出る可能性が……」
「そんなものはどうとでもなるだろう……足りなければ、お前が兼任するなり、また新しく魔人を作ればよい……」
「……確かにそうですが……」
実際、戦力としては明らかに下るはずだが、人間を完全に下した以上は、そこまでの戦力は必要ない。
一応、今後建てられる施設の反乱防止の為にも、念の為、魔人にいてもらった方が都合が良いが、いなくとも実務の上では問題ないのだ。
それに先日、新しく作られた魔人もいる。レオンハルトとしてはそちらについてもどうすべきかと思考を回しているが、
「私が作った魔人の教育も、基本的にはお前に一任するぞ、レオンハルト……」
「は、それはお任せを」
それについては今までもレオンハルトが担当してきたことだ。何ら問題はない。
強いて言うなら、その魔人が厄介であると、面倒になるというくらいだ。
今回の場合は、一体は問題無さそうだが、残り二体――いや、その内の一体が、特に問題児となりそうだ。
魔人を作ったのは国狩りの最中であり、レオンハルトもまだ、殆ど話していない。一体は、魔人四天王でありジルの側近でもあるため、よく話すが、残り二体は、国狩りで世界中に散らばっているため、魔人になった時にその姿と声を見て、ジルの前で命令を下しただけだ。
しかし国狩りが終わり、後はちょっとした反乱分子を滅ぼすくらいだ。今は施設の建造に取り掛かっている段階であり、直に、全魔人が集結する。
その時にでも、色々と交流しなければならないが、やはり個性が強

そうで憂鬱ではある。
……陰気で戦闘狂の爺と、趣味の悪い女……まあ、もう一体は紳士っぽいというか普通そうだがな……見た目以外は。
個性的な面々を頭の中で想像すると、やはり小さく息を漏らしたくなるが、これも責務だ。己の役目であるため、面倒がってはいられないし、きちんとこなさなければならない。
だからレオンハルトはまた次の仕事について考えようとして――しかしジルに邪魔をされた。
「さて……なら、今日も私の身体に溺れておくか……？」
「……お命じ下さるのならば、ご随意に、ジル様」
「くく……お前は硬いな……こっちに来い」
内心では億劫そうに、しかし忠実に、はっ、と短い声を上げてベッドに腰掛けると、こちらにしなだれかかってくるジル。触れただけで立ち上がりそうなジルの身体を、冷静に受け止めてみせながら、レオンハルトは思う。
先程までは冷徹な様子を見せていたが、今日も人間へ充分な苦痛を浴びせていたために、満足し終えたのだろう。
基本的にジルは――こう言っては何だが、暇だ。国狩りの最中、この一年はまだ魔王になったばかりで忙しいし、今もまだやることは少しはあるが……それでも、一日の多くを怠惰に過ごす。
基本的にはずっと外で人間を苦しめるか、戯れで思いつきの行動を取る我儘娘だ。ケイブリスの凶行を観察したのも、ただの思いつきの戯れであり、基本的には暇している。
故に、後は性的な快楽を得るためにレオンハルトを襲うくらいだ。レオンハルトの方はやるべきことが山積みであるし、そうでなくとも遠慮してほしいのだが、魔王の申し出は光栄なことだ。拒否出来るはずもない。
だからレオンハルトは今日も黙ってジルとの情事を行う。
――人類を苦しめるための悪夢の施設の誕生まで、後僅か。そんな一日のことだった。

魔人ノス

人類圏であったとある地域。
既に国として滅びたその土地に――しかし、未だ無事な勢力があった。
それは国が滅びた後に、各地で生き残った者達が集ったレジスタンス。山中にある砦をそのまま拠点として使っているそこは、人間達の最後の砦である。
他にも人里離れた場所に移り住むことを選んだ集団や、一族、ギルドなどがいるが、このレジスタンスにいる者達は人類の中でも生き残った強い者達が寄り集まり、魔物を討伐し、可能であれば魔人を討ち倒すことを目的としている。
謂わば、生き残った最後の英雄達だ。
だがそのレジスタンスの拠点、人類最後の抵抗勢力は――今まさに、崩壊しようとしていた。
それも、たった一体の魔人の手によって。
「う、あ……化け、物……め――」
「……」
「うぐ、やめ――」
魔人が掌で人間の顔を掴み取り、そのまま握力だけで握り潰す。
燃えるレジスタンスの拠点、その前に立つのは――巨漢の大男だった。
3メートルに近い巨躯を、黒のローブに近い衣服とマントで覆い隠すのは、一見、老人のような顔立ちをした男だ。白い髪と白い目が特徴の初老の男。しかしよく見れば、その肌が異質であった。
顔の部分の肌が、岩のような茶色い無骨なものとなっており、更によく見れば、衣服の隙間から見える腕なども地面にも似た茶色い鱗のように見える。
明らかに人ではない容貌。内側から放たれる色濃く凶暴な魔の気配は、魔人であることを示していたが、魔人になる以前も、人には到底思えないものであるように感じてしまう。

そしてそれは正しい。彼は戦闘を終え、自らの特性である力で変形した姿を徐々に戻しながら、一言呟いた。
「……他愛ない。下らぬ、最後の抵抗勢力が、よもやこの程度とは……」
その声色は、落胆を隠しきれていなかった。
砦を人間の血で染め上げながらも、彼は満足が出来ない。
何故なら彼は、僅かばかりの期待をして、このレジスタンスを潰しにきたからだ。
その期待とは――血湧き肉躍る闘争。
殺し殺される最高の殺し合い。
完全に満足は行くまい、とは思っていたが、多少は愉しませてくれると期待したのだ。
巨躯の老人は、戦いを好む。
元の種族の傾向ではあるが、その中でも特に、純粋に戦いを好んでいたのがこの男だった。
しかしそれも期待外れ。
所詮は人間。この程度であるか、と失望し、冷笑する。
「ふ、ふふふ……しかしこれで……世界は、ジル様のものとなる……！
我らが魔王、ジル様の物に……！」
戦闘は愉しむことは叶わなかったが、老人は、もうひとつの願いが成ったことで興奮し、喜悦の感情を隠さずに、笑みで声を跳ね上げる。
彼は魔王ジルによって作られた魔人だ。そして、誰よりも恐ろしく。容赦のないジルを、これ以上ないほどに信奉していた。
彼女こそが、世界の支配者に相応しい最高の魔王。己が仕えるべき最高の主。最も偉大で、至高である神の如き御方。
それがジル。彼にとってのジルは、神に等しいものだった。
かつての王などと比べ物にならない。そんなジルの作る世界を夢想し、男は笑みを絶やすことが出来ない。
何故なら、もうすぐにそれが現実となるのだ。国狩りを終え、最後の抵抗勢力を潰した今、後は施設が出来るのを待って、そこに人間をぶち込んでしまうだけである。

そして、世界はジルのものとなる。その世界で、自分達魔人は生きることが出来るのだ。
これが幸福でなくてなんと言うのだ。これを幸福でないと言う愚か者は、己が排除してくれると。
そう思ったところで、声が来た。男以上の存在感を放つ、鋭い男の声だ。
「――――終わったか……ノス」
「！　……レオンハルト様」
――ノス。そう呼ばれた巨躯の魔人は、背後からやってきた魔人に振り返り、名を声に出す。
魔人レオンハルト。魔人筆頭兼魔軍参謀。最強の魔人である男であり、
「……何故、ここにおられるのですかな？　それに、ジル様は……？」
ジルの腹心、右腕とも呼ばれる男でもある。
だからノスは、レオンハルトを見て、真っ先に言葉を丁寧なものに作り変え、そう問いかけた。
地竜の魔人であり、魔人四天王の一角――魔人ノス。ジルの側近として、かの御方がどこにいるのかと、その使命に従って。レオンハルトは鋭い目で砦を一瞥してから、
「……ジル様であれば今は城でお休みのはずだ。俺は仕事があってな。ちょうど近くまで来ていたから様子を見に来たに過ぎん」
「……左様でありましたか」
ノスはさりとて指摘することもなく頷いた。
レオンハルトはジル配下の魔人の中では最も仕事が多い。例の計画についての指揮、調整を任されている他、国狩りについても全軍を指揮し、同時に自分でも国を落としに行っているのだ。
態々こちらまでやってきたのも、本当に何かあったから来たのだろう。ただ様子を見に来るだけ、というのはあり得ない。そんなにレオンハルトは暇ではないからだ。
おそらくは、新入りの自分がしっかり仕事をこなしているかの確認も兼ねているのだろう。ジルの為なら何なりと行うつもりであるノ

スにとっては心外な話だが、まだ魔人になって一年足らず。信用が足りないのも致し方あるまい。今は一つずつ積み重ねて、信頼を得るしか無い。無論、ジル様の信頼を。
　そう思考を回したところで、今度はレオンハルトが口を開いた。
「レジスタンスか……誰か活きのいい戦士はいたか？」
「……どいつもこいつも、ただの凡愚、雑魚でありました……やはり人間はつまらないですな」
「……そうか。ならばいいが……また無敵結界を解いて戦っていたようだな？」
　レオンハルトがノスの僅かに変質した身体の箇所に視線を向けて言う。そしてノスが事も無げに、
「最後の抵抗勢力と聞いて、少しばかり期待していました……それは実りませんでしたが……しかし、ふふ、これで大陸全土がジル様のものになると思うと、感慨深いものですな……！」
　くつくつと陰鬱な声で笑うノスは、心からジルの支配を喜んでいた。
　しかしレオンハルトは特に表情を変えることなく、そのまま続ける。
「戦闘狂のお前が、戦無き世を喜ぶとはな」
「……確かに、些か惜しいところはありますが……異な事を仰られますな。ジル様の治世、その野望の成就と比べれば、私の衝動など、些末なものでしか。……それに、レオンハルト様には、言われたくはありませんな……？」
　と、ノスは僅かに眼光を鋭くしながら告げる。その目の奥は、戦を好む――修羅の瞳があった。
「レオンハルト様こそ、随分なものと聞いていますが……戦が無くなろうと、問題はありませんかな？」
「……ああ、問題はない。何しろ、レキシントンや――お前のような馬鹿が、ちょっかいを掛けてくることも、これからは多くなりそうだ」
　暗に、戦意が漏れ出していると告げられ、ノスは口端を僅かに歪める。

こちらの闘気に反応して、レオンハルトもその存在感、魔人としての圧力を僅かに漏れ出させているのだ。
それがノスよりも上であることに、ノスは愉快そうな感情を隠そうとせずに声を響かせる。
「……くく、確かに。今まではただの邪魔であったレキシントンの干渉も……そして、レオンハルト様とも、愉しい時間を過ごす機会があるでありましょうな」
「……もっとも、生憎だが俺は暇ではない。これからもやるべきことも多い。お前ら程度の相手を真面目にやっている暇はないな」
今度は言外に、戦うに値しない程度の存在だと挑発され、更にノスが内心で、戦いの衝動を強くする。
魔人になって早々に魔人四天王となるほどの実力を持つノスを、一蹴しようとするその胆力。それはその裏に、確かな実力を持つからこその所業だ。
並の魔人であれば、ノスの圧力に眉をひそめるものだが、レオンハルトは小揺るぎもしない。今はまだ相手にすらしてもらえないということか、とノスは強者の存在を喜びながら、レオンハルトの声を続けて聞いた。今度も真面目なもので、
「直に、牧場も完成する。お前にも働いてもらうぞ、ノス」
「……は、それは私としても、望むところで」
それがジルの為になる。だからノスは、レオンハルトを通じて告げられる仕事の数々を真面目に取り組み、一定の成果を出しながらも、さらなる命令を求める。
欲を言えば、ジルからの勅命を、直接の言葉を掛けてほしいが、王にそこまでの贅沢を求めるのは不敬ともいえる。
ジルの御心のままに。ノスはジルに仕えることが、何よりも幸福なのだ。その忠誠心は何よりも優先される。己が好む戦闘を禁じられたとしてもノスは、残念だ、とは思いつつも、一切不服を口にすることなく、粛々とそうあるように臨んでいくだろう。それほどまでに至上の存在なのだ。
そのためならば、この男の命令を聞くのも吝かではない。ジルはレ

オンハルトを一番に信頼しており、その能力を高く買っている。それはノスも重々承知だ。如何に、作られた魔人の中でも最も早くに作られた魔人であっても、能力で劣っているのだからその扱いは妥当なもの。仕えている月日はレオンハルトの方が先であり、ノスの序列は下だ。

だから不満はない。むしろ早期に魔人四天王に任命して下さったジルの判断、その評価に報いるべく、精力的に活動しなければならないし、ジルの考えや方針を即座に実行に移し、形にしてしまう忠臣であるレオンハルトのことは、ほんの僅かながらの嫉妬はあっても、決して邪魔してはならない。誰を好み、誰を重用するのかもジルが決めることで、その判断には間違いがあるはずもない。

後、ノス個人としてはレオンハルトの強さに注目しており、機会があれば死合ってみたいものだと考えている。地竜時代に聞いた噂が本当であれば、余計に衝動が増してくる。おそらくは事実だろうが、

「――時に話は変わりますが……あのライゼンを倒したというのは、本当の話でありましょうか？」

「……倒した、か。それは正確ではないな。正確には、〝引き分けた〟――だ。ちゃんと記憶しておけ」

「……ほう、あのライゼンと……」

「……知り合いなのか？」

「知り合いというほどでもありません。多少……死合ったことがあるだけですな。ふふ……血湧き肉躍る……誇り高き決闘において」

レオンハルトの問いに対して、ノスは特に含むこともなく答える。こちらを地竜と知り、相手がライゼンを知っているのだから殊更隠すこともでもない。

かつて、ドラゴンが飛び回っていた時代。その遥か昔に、ノスはライゼンと出会っていたに過ぎない。

四大聖竜最強にして、ドラゴン王の懐刀であった男――ライゼン。奴と死合い、そして敗北したのは懐かしい記憶だ。

ドラゴン種では、己の強さ、決闘での勝敗が、何よりも優先される。強い者程ドラゴンの中での地位が高くなり、ドラゴン王との決闘に勝

てば、生きる王冠であるあのカミーラが手に入った。
ノスは雌にも地位にも興味は全く無かったが、血湧き肉躍る闘争だけを好んでいた。だから片っ端から強者との戦闘に臨んでいたが、その中でもドラゴン王に次いで強かったライゼンとの戦いは、特に記憶に残っている。
己の強さに自信を持っていたノスだが、ライゼンには敵わなかった。
ダイヤモンドドラゴンというドラゴン種最硬の鱗を持つライゼンに対し、己は地竜。地竜の特性を考えれば、相性は悪くないはずだった。
しかしその相性の悪さがあってなお、ライゼンは、弱点を物ともせずにこちらに勝利を収めた。
かつての逆臣、アベルとの戦いでは、その爪や牙、ブレスですら傷を負わなかった化け物がライゼンだ。それほどの存在に、このレオンハルトは引き分けたと言う。
では、魔人となって力を増した己とやればどうなるのか。――想像するだけで血が昂ぶってくる。
だが、今それは許されていない。優先するのは己の衝動ではなく、魔王ジル。
ノスが興味を惹かれる存在、特に魔人四天王やレオンハルトなどと死合ってみたいとは思うが、それは本当に暇が出来て、許可が出てからだ。
別に私闘を禁じられているわけでは全く無いが、レオンハルトと戦えば、おそらく負ける。そして、こちらも確実に無事では済まないとなると、ジルの為に働くことが出来なくなってしまうのだ。
だから他の魔人であればともかく、格上との戦いを行うのは、今の所は出来るだけ避けておこうと思ったのだ。
「……そうか。では、そろそろ行くぞ。一度魔物界――魔王城に帰投する」
「……そうですな。一度、ジル様にご報告を行わなければ」
故に、時期が来るまでは、この衝動を己の内側に溜め込んでやろう

と、ノスは漏れ出ていた笑みと衝動を表から引っ込め、ジルの為に再び行動を始めた。

魔王城。

そこは大陸を支配する魔王の居城であり、魔人達が魔王に報告を行うために集まる――ある種の社交場でもあった。

そしてこの日は魔王ジルに謁見するため、それとちょっとしたすり合わせを行うべく、とある一室に、最上級の魔人達が集合していた。

しかし――

「――あ、あの……カカカカカミーラ様？　お、お茶はどうですか？　美味しいですよ？」

「……」

「……あはは、そ、そうですよね今は喉乾いてないんですよね？　と、というわけで置いておきます。あ、ケッセルリンク様も、ど、どうぞ……」

「……うむ」

「……」

「あ、あはは……」

――部屋の空気は、殆ど死んでいた。

そこにいるのは魔物界の支配者層である魔人の中でも、僅か数人しかいない最上級の魔人達。

魔人四天王。今日彼らは、全員集合することになっていた。

正確にはもう一人、魔人筆頭にして魔軍参謀である魔人も参加するが、今集まっているのはそれでも3人だけ。残り二人は、少し遅れている状況であった。

そして部屋の中では、一番の巨体を持ちながらも、頭をペコペコと下げて身を縮こまらせ、メイドさんから受け取ったお茶を二者に渡す魔人がいた。

それが魔人ケイブリス。魔人四天王の末席にして、無限の可能性を持つリスの魔人。野心をその身に秘めた最古の魔人にして、強い者に

は逆らわない主義の彼は、部屋にいる二人が相変わらず仲が良くないことに胃を痛めていた。
……く、くそ！　か、かかかカミーラさんもケッセルリンクも、見向きすらしねぇ！
内心で、ケイブリスは部屋の空気を少しでも緩和しようとした試みが、今の所無駄に終わっていることに辟易としていた。
魔人四天王で集まる時はいつもそうだ。この二者は仲が悪いのだ。今も、
「……ふん、毎度ながら、嫌な時間だ……」
「……しかしこれも務めだ。文句を言っていても致し方あるまい」
「……うるさい雌が……」
「……今のは聞かなかったことにしておこう。――お互いの為にも」
「……」
「……」
互いが互いを、強く睨む。
喧嘩を先に売ったのは、気位の高さが全身から溢れ出ている女性。ドラゴンの様な翼や角などの特徴を持ち、長いプラチナブロンドの髪を靡かせる、スタイルの良い絶世の美女。
魔人四天王の一人、プラチナドラゴンの魔人である魔物界の女帝、魔人カミーラ。
そしてもう一方は、悠然とした気風を身に纏う女性。額に青い宝石、長い耳。短い水色の髪を持つのは、均整の取れた美しい肢体を持つ絶世の美女。
魔人四天王一人、カラーの魔人である魔物界の女貴族、魔人ケッセルリンク。
この二者の間には、いつもこんな風な空気が流れていた。
カミーラとケッセルリンクが仲が悪いだけでなく、ケイブリスのよいしょにも反応してくれないため、大体空気は死んでいる。
空気を復活させようと思ったら、やはり魔人筆頭がいなければどうしようもない。
しかも最近は、新しく入った魔人と仲が悪いせいで、余計にカミー

ラの機嫌が悪いのだった。
噂をすれば、
「――悪いな、遅くなった」
「……どうやら、我らが最後の様ですな」
部屋に入室し、開口一番に軽い謝罪を行った男の後ろには、ケイブリスほどではないが巨体の男が続いて入室してくる。
その者達を、直ぐに出迎えたのは、やはり一番下っ端であるケイブリスだった。
「レオンハルト様に、ノス様！　お疲れ様です！（テメェが遅かったせいで俺の胃が毎回死ぬんだよ！　もっと早く来やがれ！）」
「ああ、悪いな。待たせて」
「いえいえ、とんでもないですよ！　忙しいんですから仕方ありません！（いいからこの空気を何とかしやがれってんだ！）」
ケイブリスは言葉の裏で悪態をつきながら、表ではペコペコと対応してみせる。これが魔物界一の出世頭とも言われるケイブリスの処世術だった。
だが、それを見抜いているのかいないのか、後ろの男がそれを嘲笑った。
「レオンハルト様が謝ることはありますまい。上位の者が、下位の者を待たせるのは当然であります故。――そうであろう、ケイブリスよ」
「う……そ、そうですよ！　だから気にしなくていいです！（うっせぇぇぇ！　この糞爺！　話を混ぜっ返そうとしてんじゃねぇ！空気読めねぇのか死ね！）」
この陰気な爺に対して内心での暴言を加速させるが、これも表に出せないケイブリス。
なにしろ、この男も魔人四天王なのだ。
重厚感ある存在感を放つ大男。魔王ジルに最初に作られた魔人であり、地竜の魔人である魔人ノスは、ケイブリスよりも格上の存在である。
なのでいつかはぶっ殺すと思いながらも、それを表には一切出さな

い。
　このノスが魔人四天王に入ったことで、魔人四天王の席はようやく埋まったが、逆に空気は更に死んだ。その証拠に、ノスの言葉に反応したカミーラが、僅かに目を細めて刺すような圧力と共に言った。
「……ならば、貴様は謝るべきではないのか……？」
「……これは異な事を。この場に、レオンハルト様以外で儂が謝らねばならない存在は、どこにもいないように思えるが……」
「……っ！　貴様……！　たかが地竜の分際で、この私にそのような口の利き方を……！　そんなに死にたいか……っ!?」
　椅子に腰掛けていたカミーラが立ち上がって殺気を部屋の中に充満させる。思わずケイブリスがビクッとして3歩程後ろに下がった。
　しかし挑発したノスも引くことはない。相変わらず嘲笑するような、陰気な厭味ったらしい言葉を吐く。
「ほう、それが出来るのか、カミーラ。まさか、ドラゴン時代の上下関係を、引きずっているのではないか？　どうなのだ――生きた王冠よ」
「――！　殺す……っ！」
　カミーラがもっとも触れられたくない過去を、単語とともに蒸し返され、カミーラの怒りが頂点に達する。憤怒の形相と、殺気を全身から溢れ出させ、戦闘態勢に入ったカミーラ。
　対するノスも、本気で来ると思ったのか、戦いの時に生じる笑みを口元に生じさせながら迎え撃とうとする。強者との戦いは、ノスも望むところだった。
　そうして元ドラゴン同士の戦いが始まろうとし、ケイブリスが部屋の隅に退避しようとしたところで――室内に鋭い声が響いた。
「――ここで喧嘩する気か？」
「っ……レオンハルト……！」
「っ……！」
　カミーラもノスも、その声と威圧感に足を止める。当然だ。
　彼は魔人筆頭にして魔軍参謀。最強の魔人の称号と、数々の異名を持つ魔物界の英雄――魔人レオンハルトなのだから。

普段は他の魔人に対しても寛容さを示し、仕事の事以外であれば融通も利かせてくれるある意味特異な魔人の彼も、秩序を乱そうとする者には容赦しない。
この間のケイブリスの行動も、魔王の許可が出ていなければ腕ずくで止められていたところであり、こういった私闘は、特に職務中にやるとかなりの怒りを見せる。
その威容は魔人最強に相応しいものだ。カミーラが眉を立てて、文句を言うも、
「先にこの私を侮蔑したのはこいつだ……！」
「ああ、見ていたから知っている。――ノス、どういうつもりだ？」
「……は、申し訳ありませぬ。やはり、かつての同胞ともなれば気が昂ぶってしまうもので……些か口が滑りました。この通りですので、お許し頂きたく存じます」
先程とは違い、あっさりと頭を下げてみせるノスにケイブリスはある意味で似たようなものを感じてしまう。
しかしそうではない。明らかにそうとは思っていないが、表向きにはどうとでも言えるし、別にレオンハルトのことを恐れているわけではない。
ただ立場上、上位の存在だからと慇懃に接しているだけであり、あくまでもジルの顔を立てているに過ぎない。
それを理解しているのかは分からないが、レオンハルトは僅かに眉をひそめるも、それ以上は追求しようとせず、
「……カミーラ。悪いがここは、俺の顔を立ててくれ」
「……なら、貸しだ」
「ああ、それで構わない」
カミーラの貸しという注文を、一切躊躇うことなく了承してみせるレオンハルト。不思議とレオンハルトは、カミーラより上位で実力も上であるというのに、カミーラには未だに気を使っている。
カミーラの方もレオンハルトが諌めたことで、一応だが再び席に着く。ノスを睨みながらだが、ノスの方は既に知らん顔だ。
そしてようやく殺気が消えたところで、今度はケッセルリンクが声

を掛けた。なのでケイブリスも一緒になって近づき、
「レオンハルト……久し振りだな。その、元気、か？」
「ああ、大丈夫だケッセルリンク。今回も特に問題はなかった。お前の方こそ、元気そうで何よりだ」
微笑を浮かべながらのやり取りに、ケッセルリンクの頬が僅かに染まる。こんなところでいちゃついてんじゃねーよ、というか、よくあんなヤバいやり取りの後に平気でいちゃつけんな……、と、ケイブリスが言葉を飲み込むが、先程の死んだ空気とか、修羅場よりはマシだ。とりあえず、比較的安全なこの二人の側にいればとばっちりを受けることはないだろう。
……ようやく一息つけそうだぜ……。
ホッと安堵の息を漏らす。そのタイミングで、レオンハルトは思い出したように言葉を繋いだ。
「ああ、そういえば……今回もお土産を幾つか持ってきたから渡しておく」
「！」
来た、とケイブリスは思う。これはいつものやつだ、と。
レオンハルトが長い遠征に出ていると、時折お土産と称して色んなものを渡してくることがある。そこまで大きいものではないし、大したものではないのだが、
……まあ、貰えるってんなら拒否する理由はねぇ。普通に良いものも多いしな……。
ケイブリスの経験上、この手のものは相手によって変わるが、そう悪いものではない。
例えばケイブリスだと、経験食パンだとか食べ物系だったり、なんだかよく分からないちょっとした物が多いが、貰って損はないものだ。
最初の方は捨てることも考えたが、それはそれでバレた時のことが怖いので止めた。時折、渡した物についての感想を聞いてくることもあるので、でっちあげ続けるのも難しいし、かといって遠慮するのも変な感じになる。

だからケイブリスはいつもどおり、そわそわしながら待った。すると、
「ほら、ケイブリス。お前には超熟経験食パンと……これだ」
「！　ありがとうございます！」
……よっしゃあああ！　今回は当たりじゃねぇか！　へへへ……！
通常のものよりも更に経験値が入る超熟経験食パン。滅多に手に入らないのだが、それを幾つかまとめて渡されて、自然とケイブリスの頬がニヤける。
しかし、もうひとつの筒のようなものに、ケイブリスは首を傾げた。
「これは……一体何でしょう？」
するとレオンハルトは、得意気に言い放った。
「それは万華鏡だ」
「万華鏡……ってなんですか？」
まさか凄いアイテムだったりしねぇかな、という期待を込めて聞く。すると、
「中を覗いて回転させると……」
「……回転させると？」
言った。フッ、と笑い、
「――綺麗だぞ？」
「……な、なるほど……それは良いものですね……あ、ありがとうございます！」
ケイブリスは思った。内心で、
……あ、これは外れだわ……。
これはよくわかんないもののパターンだ。時折、なんか普通に面白いものがあって腹立つ時もあるが、基本的には下らないものが多い。
しかしレオンハルトはそういった、人間が作ったよくわからない物が好きらしく、定期的に色んな物を持ち帰ってくる。なので素っ気なくは出来ない。
レオンハルトは続いてカミーラにも、
「カミーラにはいつもどおり、上質な宝石を持ってきた」

「……ふん、まあ、受け取ってやろう……寄越せ」
宝石が沢山入った袋を手渡すレオンハルト。心なしか、カミーラの機嫌が回復したように見えた。
そして今度はケッセルリンクに、
「ケッセルリンクには……ちょっと珍しい花を持ってきたんだが……」
「ん、それは……」
と、レオンハルトが懐から花を出す。
しかしその数は異様に少なく、一輪しかなかった。
「もっと沢山持ってこれたら良かったんだがな……捜索する暇がなくてな。一輪しか持ってこれなかった。悪い」
レオンハルトがバツが悪そうに謝る。
しかしケッセルリンクはそれを受け取り、微笑を浮かべ、
「……謝らないでほしい。私は……その気持ちが、私の為に選んで探し、渡してくれたことが、何よりも嬉しい……」
「……そうか。それなら良かった」
「……ふん」
「……お、おお！　この超熟経験食パン！　超うめぇぇぇ！　しかも凄い経験値が身体に染み渡ります！」
だからいちゃついてんじゃねーよ！　と、ケイブリスは腹の中だけで叫ぶ。カミーラもまた少し、機嫌が悪くなった。空気読めないから怒っちゃってるじゃないかと、表では超熟経験食パンを食べて感想を叫んでおいて紛らわした。
まったくもって、この二人は面倒だ。時と場所を考えてほしい。
そうしてケイブリスの声に反応してくれたのか、ケッセルリンクが周りの眼に気づいて、身体を寄せようとしていたのを我慢した。そうして周囲に向かって、
「……今のは忘れてくれ」
恥ずかしそうにそう告げた。するとカミーラは特に何も答えなかったし、ケイブリスも気づいていなかった振りをした。……さぁて、ようやく空気も――

しかしこれまたノスが、
「……魔人四天王ともあろう者が、魔人筆頭に色目を使うとは……如何なものですかな？」
「……確かにこの場では相応しい振る舞いではなかったが……そちらには関係ないだろう？」
「ふ、笑わせる。貴様は――」
「うぉおおおおおお!?　この万華鏡！　すげぇ綺麗いいいいいい！　超絶目が楽しいです！　これ、僕気に入りました！　僕がこれに嵌らないうちに早く話を進めましょう！　レオンハルト様！」
「お、おお……気に入ってくれたようなら何よりだ」
「……」
「……」
ノスがまた喧嘩を売る前に、ケイブリスは全力で万華鏡を見て声を上げた。周囲に若干白い目を向けられながらも、何とか対処する。そしてノスに敢えて顔を向けながら、
「あ、ノス様！　どうかしましたか!?　お茶が欲しいなら僕取ってきますよ!?　ぺこぺこ（てんめぇぇぇぇぇぇ！　誰がまた喧嘩売れつったよ!?　さっきレオンハルトに怒られてたじゃねぇか！　空気読めねぇならさっさと死ね耄碌爺！）」
「……ふん、いらぬわ」
「あ、申し訳ありません……余計なお世話でしたね！　僕、反省します！（俺様もてめぇなんかいらねぇよバーーーーーカ!!　憶えてろよ陰気爺！　俺様が最強になったら真っ先にぶっ殺してやるからなぁぁぁ!?）」
ノスが発言を諦めたのを見て、ケイブリスはひやひやしながら一歩下がる。
するとレオンハルトがこちらを見て、
「だがまあ……そうだな。ケイブリスの言う通りだ。俺が発端とはいえ、そろそろやるべきことを済ませようか」
場を整えてそう言ってくれる。何というか、ケイブリスとしては複雑な気分だ。

……相対的にレオンハルトが一番マシに見えてくるな……いや、確かに魔人の中ではマシだけどよぉ……。
周囲がアレで、ケイブリスの不安を煽ったり、ムカつく馬鹿ばかりなので、相対的にレオンハルトがとんでもなくいいヤツに見えてしまう。レオンハルトもケイブリスが気を揉む厄介な相手であるはずなんだが。
とはいえ、全員集合を終えたのだから、そろそろ動かねばならないだろう。それは、レオンハルトがその名前を出した瞬間に、全員理解した。
「ジル様の勅命でもある。この人間牧場計画についての仔細を、取り敢えず四天王であるお前達には先に説明しておこうか」
「！　は、ははは い！　ジル様の命令ですし……早く済ませましょう！」
「は、お聞かせ願えますかな」
「……そうだな」
「……ふん」
ケイブリスが過敏に反応し、ノスなどは切り替えたのか、これ以上ないほどに真面目に応対しようとする。ケッセルリンクとカミーラも、特に文句はないようで、話を聞く態勢に戻った。
魔人四天王全員が席の両側についたのを見渡して確認し、上座に立つレオンハルトは真面目な声を発した。
「質問や意見があれば遠慮なく言ってくれて構わない。――では、説明する」
――そうして、人間牧場計画の全容が明らかになった。
その地獄の様な計画に、ノスは嗤い、カミーラはどうでもいいと無関心、ケッセルリンクは眉をひそめ、ケイブリスは内心で称賛しながらも戦慄した。
それだけ恐ろしい計画は、質問を受け付けてそれに丁寧に答えると、僅かながらの意見を取り入れ――今日この日に、完成を迎えたのだった。

下級使徒

魔物界東部。そこにある街は、ある魔人が治める魔物界の繁栄の象徴でもあった。

丘陵地帯の中にある広々とした平原。その土地に建てられる街は、これ以上無い賑わいを見せていた。

「うおおおおお！　やりきったぜー！」

「ようやく帰ってこれたな……！」

「魔軍最高！　魔物最高！　レオンハルト様最高！　ジル様最高！」

「魔軍に栄光あれ――！」

「イェエエエエエ！」

その街の通りでは様々な姿形を持つ魔物達が、今日は魔物兵スーツを脱いで、騒ぎ合っていた。

よく見ればまだ魔物兵状態のままのものも多いが、彼らの多くは先程帰ってきたばかりで興奮冷めやらぬ状態である。スーツを脱いでもよいと言われても、それを脱ぐ手間も惜しいと言わんばかりに、今日ばかりは誰とも肩を組み、酒の入ったジョッキを打ち鳴らし、美味しい食事を好きなだけ手にとって食べる。

何故ならここは――レオンハルトシティ。

魔軍参謀であり、魔人筆頭であるレオンハルトが治める魔物界の一大都市であり、レオンハルト軍に所属する魔物兵達が住む、娯楽と文化、美食の街。

普段も活気がある街だが、今日は戦勝祝いであり、いつもの何倍もの活気があった。

何しろ今日の戦勝祝いは普通のものではない。

大陸全土を魔物の手中に収めた――記念すべき快挙を祝う宴なのである。

魔王ジルが布告した国狩り。全ての人類国家を破壊し、人間を支配し、魔物の黄金時代を築く。

それの最前線に戦ったレオンハルト軍は、国狩りが成ったことに誰よりも喜んでいた。

今日ばかりは一般の魔物兵であっても、食べ放題に飲み放題。どの料理でも酒であっても好きなだけ掴み取りして構わないという大盤振舞い。
そんな粋な計らいをしてくれ、自分たちを勝利へと導いた存在に、誰もがその名を呼び、栄光を讃える。
「レオンハルト様万歳！　レオンハルト様万歳！」
「我らが英雄！　レオンハルト様ー！」
「きゃー！　レオンハルト様好きー！」
男の子モンスターも女の子モンスターも、誰も彼もが声を上げてかの魔人を讃える。
その声の先は、街の中心にそびえ立つ紅い城――紅魔城。
レオンハルトの居城であるそれに向けられており、城門がある場所、観光名所でもある噴水広場では特に多くの魔物で賑わっていた。
普段であればあんまり騒ぎすぎると警備の兵が飛んできて注意をするのだが、今日ばかりは苦笑交じりにそれを見逃す。声を大にして讃えたいのは彼らも同じだからだ。
ハメを外しすぎないようにと、魔物兵の中にいる数体の魔物隊長や魔物将軍も、中には一緒になって馬鹿騒ぎを行うものもいる。これ以上ない勝利の美酒を前にして、歓喜を抑えきれないのだ。
そして城の中では、外よりも落ち着きがある催しが開かれていた。
そこは城の中庭。多くのテーブルが並べられ、所狭しに料理が並べられたその場所は、今はレオンハルト軍の重鎮だけの戦勝パーティが開かれていた。
「す、すげぇ……！」
「ふっ、そういえばお前は来るのが初めてだったか……」
「は、はい。まさかこれほどのものとは……」
そこに来ているのは、レオンハルト軍の魔物将軍、約５０体と、それに同行する副官の魔物隊長５０体。
レオンハルト軍では、年始や大きな戦いの戦勝時に、このようなパーティを執り行う。これに出席出来るのは、魔物将軍と、魔物将軍に招待された魔物隊長のみであり、参加すること自体が大きな名誉な

のだ。
　そもそも城に入る機会すら、殆どの魔物にはないため、多くの魔物隊長はこの時に初めて城の中を目の当たりにし、その豪奢な内装やパーティ会場を見て驚愕の表情を浮かべる。
　自分達とはスケールの違う世界。これが魔人の、その中でも頂点に立つ者が見ている世界なのかと。
　特に凄いのは奥の方のテーブルだ。そこでは、レオンハルトの使徒達がいるだけでなく、見上げるほどの巨大生物すらいた。
　それは、
「うむ、うむ……！　今日も肉が美味い……！　さあ、早く次の肉を……！」
「フハハハハハッ！　畏まりました！　熟成された最高級うし肉……！　それを最高の調理法でッ！　この私がッ！　皆様に全力で振る舞って見せましょうぞッ！」
「うおおお！　何たる香ばしい匂い！　くぅぅ、待ちきれん……！　どんどんと食欲が湧いてくるぞ……！」
　なんだか化け物が二体ほど、そこでは肉を焼いて食って興奮していた。
　それを初めて目の当たりにする魔物隊長などは戦慄して――率直に言うと、ドン引きして後退る。
「あ、あれは何でしょうか将軍……？」
「ん？　ああ、あれはレオンハルト様の食客であるというドラゴンと、城の料理長だな。ドラゴンの方はいつも肉を食っていて、料理長は……まあ、あれは、気にしない方が良い。私はもう気にしないことにした」
「そ、そうなのですか……とてもお強そうというか……」
「……ちなみに、料理長はあれで人間らしいが、私は信じていない。多分、新種の魔物か何かだと思う」
「……なるほど……」
　確かに、と魔物隊長が得心する。確かによく見てみると人の形をしているが、魔物将軍を越える巨体を持つ辺り、多分人間じゃない。

そうして戦慄しながらも料理と酒を立食形式で手にとっていくと、そこで不意に声を掛けられてもする。それは、
「お食事の追加をお持ちしました」
「！　これは、メイド長さん様……！」
「え……あっ、し、失礼しましたメイド長さん様……！」
一瞬で眼の前に、料理を持って現れたメイドに、咄嗟に魔物将軍と魔物隊長が頭を下げる。
何故一介のメイドに、魔物将軍が頭を下げるのか、と思うが、その光景は各所で何度か見られた。
「お酒の追加を持ってきました――」
「！　態々申し訳ありません、リム様……！」
「え、ええと……べ、別に気にしないで下さい☆　私達はメイドですしね？」
「レオンハルト様への挨拶がお済みになった方は、好きにしても構わないとのことで――」
「ありがとうございます、ベアトリス様……！」
「……いえ、頭をお上げ下さい。私共、もとい私はレオンハルト様に毎日奉仕するしか能のない卑しい、もといいやらしいメイドでありまして、本日はそのレオンハルト様よりお客様をもてなすように言われてますので――はっ！　もしやこれは新手のプレイなのでは……!?疑似ネトラセプレイ的な……くっ、何たることでしょうか……メイドでもっとも脳内がピンクだと蔑まれるこの私が、そのような高度なプレイに気づけないとは……とりあえず、メイド長かレオンハルト様に確認を――」
「ベアトさん!?　暴走しすぎですわよ！」
「エクレアさん……これはレオンハルト様が私共に課せられたプレイのようです……！　既にご褒美は始まっていたということで――」
「んもうっ、そこにいる貴方の親に言いつけますわよ!?」
「っ、それは――」
何故か誰もが、城のメイドに対して頭を下げており、それをやんわりと、メイドだから気にしないで下さい、という様なやり取りが続い

ている。幾つか、個性の強すぎるメイドが暴走し、真面目なメイドがそれを止めたりしているが、苦戦していたりする。
そしてここでもメイド長さんへの挨拶に、メイド長さんが、
「私共に、畏まる必要はありません。メイド長、で、結構で御座います」
と、にこやかな笑みで告げる。しかし魔物将軍は苦笑し、頭を掻きながら、
「も、申し訳ありません……あ、いや、申し訳ない……ですな。その、何度も仰っていられるので分かってはいるのですが、やはり下級使徒となると礼儀を失するわけには……軍規でも、そのように決まっていますので……」
と、魔物将軍がちらりと、メイド長さんの肩に目を向けて言う。
彼女達メイドの特殊なデザインのメイド服。それぞれが違う服を着ているように見えるのは、何種類かあるらしい。その中でもメイド長さんのは生まれた時から着ている一着だけの特殊なものであり、ロングスカートの少し落ち着いたものだ。そしてその、肩が露わになったその素肌の部分には、何やら紋様が刻まれている。
よくよく周りを見てみれば、メイドの誰も彼もが、一様に身体の見える部分にその紋様を刻んでいた。
大体は、肩か手の甲。首や首元であったり、少し大胆なメイドともなると、胸の谷間の少し上や、太腿、お腹の部分など、少し目のやり場に困りそうな場所にも刻まれていたりする。
そしてその紋様の意味は――レオンハルトの下級使徒であることの証だった。
だからこそ、魔物将軍らは揃って頭を下げたのである。だが、メイド長はこうも言った。
「確かに、魔軍での立場上、下級使徒である我々は皆様よりも上位であるでしょうが、それはあくまでも魔軍の中でのもの。今はプライベートなものであり、加えて私達はメイドでありますので、そこまで気にせずとも構いません」
「む、むぅ……しかし……」
メイド長さんの言葉に、今度は魔物隊長が戸惑いの言葉を発した。

が、それはメイド長さんによって差し止められる。
「駄目ですよ」
「！」
と、畏まろうとした魔物隊長の口元にメイド長さんの人差し指が立てられる。
それ以上は口にしないように、とのことだ。反射的に、魔物隊長は言葉を止めたところで、メイド長さんは手を元の位置に戻し、茶目っ気のある様子で言った。
「まだ気にすると言うのであれば、下級使徒である私からの命令です。今日は下級使徒である私達の立場は気にしないで、存分に楽しんでください。……ということでどうでしょう？」
「あ……」
ふふ、と笑みを浮かべたメイド長さんは、そう告げたところで頭を下げて、
「では、引き続きパーティをお楽しみ下さい。失礼します」
綺麗に一礼。完璧な所作を見せて、メイド長さんはその場から去っていく。
その際に、大きな胸がたゆんと揺れて、
「――んんっ……気持ちは分からないでもないが、やめとけよ」
「！　あっ、い、いえ、そういうわけでは……！」
魔物将軍が咳払いをして、魔物隊長に注意する。そこでようやく我に帰った魔物隊長が咄嗟に言い訳を口にしようとするが、その動揺の仕方が完全に物語っていた。
魔物将軍は軽いため息を付きながら、副官に小声で告げる。
「……主の女に惚れるのは、さすがにやめておけ。下級使徒である以上は確実に実らないし、そもそもここのメイド達は皆、レオンハルト様に惚れている。まあ、奥を見れば分かるだろう」
「……はい」
ちらり、と横目で魔物隊長は奥の席、一番上座であるその場所に視線を向ける。
そこには、自分達が仰ぎ見るべき上司、この城の主である魔人が、多

くのメイド――下級使徒達が手ずから酒を注ぎ、食事を追加し、レオンハルトに対して、紅潮した笑みを浮かべながら献身的な奉仕を行っていた。
　その誰もが美少女、美女。殆どが胸の大きいスタイルの良い女達で、胸が大きくない者であっても、とてつもない美少女だったりする。
　ざっと見て百人以上はいるはずだが、どれだけいるかは魔物将軍にも正確なところは分からない。確か１５０人近かった様だが、何分多い上に、軍務では姿を見かけることがないので憶えにくいのだ。
　それでも半分くらいは魔物将軍の義務として何とか憶えたが、たまに名前の知らないメイドがいると反応に困る。下級使徒はこちらよりも立場が上であるため、礼儀を失してはならないからだ。
　先程は気にしないでいいとは言われたが、それでも一応の筋は通す必要がある。名前を憶えていないなど、失礼にも程があるのだ。
　もっとも、寛大であるレオンハルトはそれを怒りはしないだろうが、だからといってそれに甘えていいわけではない。一応は努力する必要があるだろう。
　そうして魔物将軍は魔物隊長にその光景を見せたところで、肩を叩いて慰めるように、
「まあ、なんだ。魔物隊長ともなればそこそこはモテるようになっただろう。街で嫁でも探すか……もしくは、今度うちの嫁の友達でも紹介してやろうか？　まだ相手のいない女の子モンスターも多いそうだ」
「……お願いします」
「ははは、ならそうしよう。まあ私も男だ。気持ちは分かるとも」
　笑いながら一瞬で惚れて失恋しかけた部下を慰める魔物将軍。実際、これだけ美女がいれば目に毒ではある。
　種族的な優れた頭脳と社会性から、魔人の女である使徒や下級使徒に惚れる馬鹿はいないはずだが、それでも劣情を一切抱かないと言われると嘘になるだろう。男として、魅力的だとは思う。
　だが多くの魔物将軍は、それ以上にレオンハルトへの畏怖や尊敬が勝っているため、そんなことはありえないと誰もが心に強く刻んでい

る。
後はやはり、余裕があるおかげだろう。魔物将軍ともなれば、この城程とは言わずとも、街の高級住宅街に屋敷を貰い、１００人とは言わずとも、１０人程度なら嫁を貰うことも可能だ。
休日などは特にそちらの相手で大変なのに、他の女に色気を出す余裕はない。実際にそうなってみると分かることだが、複数の女がいるというのは、それはそれで大変なのだ。
だから多くの嫁持ちの魔物将軍からは、レオンハルトに対して羨ましいというのを通り越して、〝一体どうしているんだ……？〟とか、〝おそらく、大変なのだろうな……〟みたいな疑問や、苦労を察するところがある。
しかし外から見れば羨望してしまうのもしょうがない。だからこそ、魔物将軍は注意を行いはしたものの、そこまで怒ることはなく、今はパーティを楽しめ、とフォローを行った。
むしろ多くの魔物将軍達は、パーティを楽しみながらも、既に、今日は眠れないだろうな……、という達観のような悟りを開いている。というか、寝かせてくれないだろうと。
そのことを幸福だと思いもするし、仕事終わりだと久方振りであるので仕方のないことではあるのだが、満たされる一方で、疲れは取れないだろうな、と軽い息を漏らすのだった。

レオンハルトの城の中庭。
戦勝祝いのパーティが開かれるその会場の奥のテーブルでは、数人でその席を囲んでいる者達がいた。
そこはレオンハルトの使徒達が、座るための席。真ん中に大きな鉄板が設置されたその席には、両側に魔の気配が濃い者達が座する。
「――あぁ、うまぁ……」
と、その存在を確認しながらも、何故かその席に座っているガウガウ・ケスチナは、彼らを半ば無視して、最高級うし肉に舌鼓を打っていた。

それを見て、気にしない者の方が多かったが、一応注意する者がいる。注意というよりも小言だが、
「……いやあんたさ……ここに座ってると目立つけど、いいの？　というか、こういう催し物とか嫌いだったんじゃ……」
そう半目で告げたのは、ガウガウの隣に座る黒髪のカラーの様な人物。
黒のレオタード風の衣装に、長い髪を靡かせるのは、額に特殊な紅い宝石と長耳を持つレオンハルトの使徒――ハンティ。
使徒最強とも称されるハンティは、最近の出来事に苦い気分を抱えながらも、今この時だけは、と気を休めてちびちびと小物を箸で摘みながら、酒を飲んでいる。
そんな同僚の発言に対し、ガウガウはそちらには目もくれず、鉄板の上にある肉に夢中になりながら、
「ぶっちゃけもう慣れた。いや、今でも嫌っちゃ嫌だけど、この肉を食べるためなら私はこの状況を甘受するぞ！」
「声を大にして言うことじゃないけどね……」
拳をぐっと握って言い放つガウガウに、ハンティがいつもの様に呆れる。何百年と生きてるはずなのに、妙に俗っぽいのは変わらないよなぁ、とある意味で良いことにも感じながら息を吐く。
しかし、妙に俗っぽいのは彼女に限ったことではない。
ハンティは正面に座る男を見て、思った。彼は、いつもの用に真面目な様子で、真剣にそれを行っている
「――どうぞ。これとこれも焼けました」
「やったぁ！　頂きまーす！」
「は、こちらはネギと一緒に食べると美味しいそうです。レオンハルト様が仰っておられましたので確実かと」
と、肉を常に焼いて皆の更に配っているのは、眼帯を付けた男だった。
紅い軍服を身に纏った中年らしい顎髭の男は、人間の国の将軍の様にも見える。
彼は元魔物大将軍の使徒である――リー。レオンハルトの使徒の

中で唯一の男性であり、鋼の忠誠心を誇る彼は、落ち着いた様子で肉を焼き続ける。
　そのことに、隣にいる薄紫の髪の少女が声を掛けた。
「リーさんは肉ばっか焼いてるけどいいんですか？」
「御心配なく、ペール様。私はこの様に、肉を焼くことに充実を感じております。焼けた瞬間を完璧に見抜いた時の達成感が格別で……」
「いやまあ、食べる分は幾らでもあるからいいんですけどね。……それより、良い機会だから聞きますけど、なんでその本、ずっと脇に抱えているんですか？」
　そう問いを投げたのは、ハンティと同じ様に、長耳と、前髪に隠れてはいるが青い宝石を持つ使徒の一人。
　カラーの使徒――ペール。白のレオタードと、黒の外套のようなものを身に着けた彼女は、テーブルに置かれた野菜にその焼かれた肉を包んで食べている。
　そんな彼女は、ふと思い立ったようにリーが小脇に抱えている赤い装丁の本を指して問う。
　それは一応、ハンティも知るとある本だった。一応気になってその話に耳を傾けると、
「……剣王伝の事でしょうか。そのことであれば、私はこれを己の聖書として定めていますので、持っていないと落ち着かず……」
「ああ、いえ、責めてるわけではないですよう。むしろありがとうございます。ただ、何で常に持ってるのか気になって……しかも一巻ですし、とっくに読み終わっていますよね？」
「はい。しかし、時折これを読むことで、私は満たされた気分になり、レオンハルト様への忠誠心を更に自覚することが出来ます故。とくに一巻が、私の心を打つものが多く――失礼。どの巻も素晴らしいものであるのですが、特にこれが私のお気に入りでして」
　リーが饒舌になり、その本の素晴らしさを語る。器用に肉を焼きながら。その忠誠心の暴走っぷりに、おそらく一番それがないハンティは呆れ顔になってしまう。
　使徒になってから落ち着きが出来て、どこかダンディになったのだ

が、如何せん、忠誠心が天元突破してるように感じる。
事実、リーはレオンハルトに命じられた任務を、１００％確実に、寸分の狂いもなく実行するようになっていた。部下や他人に対しては寛容ではあるのだが、己に厳しく、任務を僅かでも達成出来なかった場合、レオンハルトに謝罪を行いながら、自分の不甲斐なさを責める。その度にレオンハルトがフォローし、よくやったと褒めるのだが、その度にレオンハルトへの忠誠心を高める。忠誠心エンドレスな状態だ。
本人は至って真面目で、基本的には常識人のはずなのでハンティも悪くは思っていないが、レオンハルトが言ったことなら、黒でも白と言ったり、完全に信じ込むのはどうかと思う。
戦闘力は高く、軍の指揮も相変わらず長けているので頼りになるのだが、忠誠心があんまりないハンティとしてはバツが悪いためそのノリについていけなかったりする。
逆に、そのことに対抗心を抱くものがいるのだが、
「――リーさん！　こちらのお肉はレアの方が美味しいとレオンハルト様が言っておりましたのよ！　なのに何故、ウェルダンにしているんですの!?」
と、どうでもいいことで声を荒げたのはレオンハルトと同じ金髪を、ツインテールに結った、青い改造軍服の少女だ。
彼女は、自称、元バトルノートの使徒であるキャロルで、レオンハルトの第一使徒だ。一応は使徒達のまとめ役で、レオンハルトに忠誠を捧げながらも、向上心が強く、常日頃から完璧使徒と称して特訓を続けながら自分を追い込んでいる。
能力的には割りと優秀なのだが、どことなく残念さを感じてしまうのは、彼女の似非お嬢様口調のせいなのか、気が抜けるような馬鹿な行動のせいなのか。とにかく、そんな彼女の注意を受けて、リーは衝撃を受けたのか、見えている左目をかっと見開いた。
「な、なんと……!?　では、私は、間違った焼き方をしてしまったというのか……!?」
「ふふん、分かっていませんのね。レオンハルト様は基本的にレアが

お好きですが、一部のお肉はウェルダンで食しますの。ちなみにその場合に付けるものはタレではなく、こちらのソースですわ」
「ぐ……私は、なんという罪を犯してしまったのか……！」
「いや、別に罪じゃないし。これも美味しいけどね」
ガウガウが焼かれた肉を普通に食べて、何気なくツッコむ。よく言ったガウガウ。自分では微妙に空気を読んでしまうというかあんまりこの話に口を挟みたくなかったので助かる。
しかしその言葉が聞こえていないのか、リーはテーブルに手をついて落ち込む。キャロルがその正面で腰に左手を当てながら、右手を口元に携え、
「ほほほほ、どうやら、まだまだレオンハルト様への理解が足りないようですわね！　わたくしの方が理解していますのよ！　まだレオンハルト様が若い頃、様々な食事の好みを語ってくれましたのですわ！」
どやぁ、と自信満々な表情で告げるキャロル。それを聞いて、あー、とハンティも思い出す。そういえば食事を一緒に取っていると、これはこう食べるのが好きだ、とか、色んな食べ物の拘りを口にすることが多く、ハンティも耳にしたことがある。
例えば――〝カレーは辛口〟、〝寿司はさび抜きか、ほんのちょっとだけ入れる〟、〝お好み焼きにマヨネーズは掛けない〟、〝唐揚げに勝手にレモン汁かける奴は百回殺す〟、〝串カツでソース二度漬けする奴も百回殺す〟――みたいなやつだ。
ハンティの記憶を遡ると、確かに、肉はレアが好きで、一部の肉だけ結構焼いて食べていた記憶がある。憶えてしまっているのが癪だが、レオンハルトはよく食のうんちくを語りたがるので変に記憶に残ってしまうのだ。
しかしリーは、使徒になって自分達程年月が経っているわけではないため、その辺りの知識がまだ完璧ではないのだろう。そのことを、キャロルに指摘されてしまっていた。
「そんなことでは、まだまだレオンハルト様マスターへの道は程遠いですわね。もっと先輩であるわたくしに追いつけるよう精進するの

ですわ！」
「……！　はっ！　勉強させて頂きますキャロル様……！」
「ふふーん！　それでいいのですわ！」
　リーに勝利したことで、腕を組んで上機嫌な様子になるキャロル。ようやくその話に決着がついたのか、ハンティも息を吐いて声に出す。
「そもそも、何であたしらだけこんな所帯じみた感じで焼き肉してるのさ」
「レオンハルト様がこういうの好きだからですわ！」
「まあ、レオンハルト様。あんまり形式張ったものは好きじゃないですからねぇ。たまに城じゃなくて街の方の食堂に行ったりしてますし、お酒飲む時も結構普通のもの食べますから」
「いやまあ、分かるけどさ……」
　確かに、あんまり豪華なものばかりだと気疲れする気もする。ハンティとしても、そういうのはあんまりだ。マズいわけではないのだが、どちらかと言うと気軽に食べられるものの方が好きで、特に自然なもの、素材を単純に調理したものの方が好きだ。肉とか野菜とか。
　なのでありがたいはありがたいのだが、立食パーティの奥でこういうことしてるのは違和感が凄い。というか、
「その肝心のレオンハルトは、それどころじゃないみたいだけど」
「あー……それはまあ……言っちゃうと、私も混ざりたいと言えば混ざりたいんですけどねぇ……先に食べてろって言われましたし、後で出来るんで、まあ今はいいかなと」
「レオンハルト様の命令ですわね！」
「我らも、こうして休むのは久し振りですからな」
　と、告げられた言葉、特にリーのものに、ハンティは同意した。実際、
　……最近は戦い続きだったからね……。
　それを思うと苦い気持ちというか、憂鬱な気持ちが復活しそうになる。
　新しい魔王――ジルが発した国狩りの命令で、ハンティ達も各地で

人間の国を滅ぼすべく、戦っていたのだ。
レオンハルト軍を率いて各地で転戦を続け、帰ってきたのが今日のこと。ちょっと前には戦いは終わっていたが、別の計画の準備があるということで動かされていた。
それが特に、ハンティを憂鬱にさせる。これから人類に行うことは、考えるだけでも反吐が出そうな所業だ。
魔王ジルはこれまで見てきたどんな魔王よりも最悪だ。それに従わざるを得ないというのも苦い気持ちになる。
もっとも、僅かながらの救いがあるとすれば、カラーについてはそれから免れることが出来たことと、自分達の管理するものに限り、方針の違いから、少しの救いがあるということ。それでも基本的には酷い扱いなのだが、少しでも人が救われるなら、協力しないと気がすまない。
それに、人間がこれから地獄の苦しみに喘ぐ一方で、魔物達はこれ以上ないほどに、喜んでいるのだ。
魔物の繁栄。黄金時代が来るのだと、誰もが期待し、自分達を讃えている。それを無下には出来ない。明らかに、人間を殺すことを好むような悪ならともかく、ここの魔物の殆どは、どちらかと言うと戦いに勝利し、栄光を掴んだことを喜んでいる。人間を苦しめることも、人間が人間にやるような、戦争では当たり前のことしかやっていない上に、軍規を守ろうとする。
街で警備担当として接して、魔軍の将としても接して、悪い奴らではないことは分かっているのだ。ただ、立場が違うだけ。それだけに歯がゆい思いをしてしまう。
割り切ったはずでも、やはり嫌になってしまうのはしょうがないというか止められない。だから憂鬱なのだ、とハンティは奥のレオンハルトを僅かに視界に入れながら、ジョッキを傾けた。むしゃくしゃするので模擬戦してくれないかな、と思いつつ、口にするのは、
「……まあ、レオンハルトはよくやってるしね……」
何しろ、城の人間を守るために――その全員を、下級使徒にしたのだから。

それを思いながら、しかしやはり鬱憤は溜まるなぁ、と、
「はぁ……誰でもいいから痛めつけられながら相手をボコボコにしたい」
「……始祖様、最初と比べて大分変態になりましたよね」
「……はぁ？　どこが？」
それだけの強者と戦えたら愉しいだろうなぁ、という意味なのに何を勘違いしてるのだろうか、この娘は。
おそらく、自分が変態だからそんな想像をしてしまうのだろうな、と素直で純真だったあの頃を思い出して染み染みとしながらもちょっとイラッとして、
「あんまりふざけたこと言ってると、鉄板の上で土下座させるよ？」
「拷問！　それ普通に拷問ですよう始祖様!?　私、そんなドMじゃないんでNG！　どっちかっていうと責めるのが好きなので！　……はっ!?　もしかして始祖様はドS……？」
「……よいしょっと」
「熱っ、あっつ!?　え、何今の……って、これヘラじゃないですか!?　お好み焼き用で鉄板の縁に置いておいたやつ！　あっつあつのこれペールちゃんの柔肌に押し当てるとか何考えてるんですか!?　S過ぎますよう！」
「使徒なんだからそれくらいで火傷なんてしないでしょ。というか、そもそもそんなに熱くないし」
ほら、と少し行儀が悪いが、自分でも触ってみせる。するとペールも首を傾げ、
「あれ？　なーんだ。始祖様ったら、イタズラが過ぎますよう――って、あっつい!?　やっぱ普通に熱いじゃないですか!?」
面白いリアクションを披露してくれる。騙したな、という顔を浮かべたペールに首を振って、
「いやいや、あたしは別に鉄板に手押し当てても別に平気だし、ペールも実際火傷はしないでしょ？」
「火傷はしませんけど熱いもんは熱いですよう！　始祖様みたいな魔人級化け物と一緒にしないでください！」

相変わらずペールをからかうのは面白なぁ、と思う。よくからかわれるのでたまにはお返ししないと気がすまない。
そうやって盛り上がっていると、
「む……コンビ対抗リアクション対決ですの？　いいですわ。でしたら次はわたくし達が手本を見せます。ほら、リーさん」
「……構いませんが……何をするのですか？」
「決まってますわ。リアクションと言えば熱湯風呂か熱々おでんと相場が決まっていますの――と、前にレオンハルト様が言っていました。なので、沸騰させたお風呂にリーさんを突っ込みますので、それでリアクションを取ってくださいまし」
「……キャロル様は何をなさるので？」
「わたくしは押す役ですわ！　リーさんが、〝押すなよ！　押すなよ！〟と叫んでいる時に、不意打ちで押してやりますの！　楽しみですわ――！」
「……うおおおおおおお！　レオンハルト様！　苦難に挑む私に力を……！」
「何やろうとしてんのよ……」
「でも面白そうなのでやってください！　せっかくなので、皆の前で余興ということで！」
「なら私の魔道具を貸してやろう！　瞬時にお湯を沸騰させる魔道具があるからな！」
――そうして宴会は余興へと移り、夜は更けていった。

城の戦勝祝いのパーティは、夜遅くまで行われる。
街の方では文字通り、夜通しの宴会が行われ、朝まで飲み明かすどころか、その次の日も騒ぎが続くであろう。魔軍は人類に勝利して大陸を支配。施設の方も、ほぼ完成を迎え、急ぎの仕事は殆どないのだ。
後は人間達を収容していくだけ、となると、今はその前に束の間の休日を取ろうと、全軍に指示が出た。
人間を管理し、魔軍を保つための人員を確保し、交代でそれを行い

ながらも、休みを入れる。ひょっとしたら、これからの時代はそのような形態で仕事を行うかもしれないと思いながら。
　そんな中、その命令を下した男は、パーティから一時抜け出て、城の中でメイド達――下級使徒達に纏わりつかれていた。
「レオンハルト様、お疲れ様ですっ」
「えへへ、レオンハルト様どうする？　そろそろ別のことする？」
「私達も、レオンハルト様としたいこと、いっぱいあるんですけどー……どうしますか……？」
「ん、そうだな……」
　自分の私室でベッドに腰掛けた魔人レオンハルトは、その直後に纏わりついてくるメイド達を見て、どうするかと呟いた。
　城に帰ってきたのは久し振りだが、戦勝パーティを行っていたので、それは仕事の範囲であった。
　だがようやく、城の中で久し振りにプライベートな時間を取ることが出来る。
　そうなった途端、メイド達は目の色を変えて身体を擦り寄せてきた。
「はぁ……んっ、久し振りのレオンハルト様だー……」
「んー♪　レオンハルト様とくっつくの、幸せです……」
　隣に座って腕に抱きつくだけではない。背中から、前から。レオンハルトの首や背中に手を回して抱きつき、足元の床にも座って、レオンハルトの太腿に顔を乗せたり、身体を寄せて、その手を這わせている。
　だがこれもいつものことである。大体夜、彼女達が仕事を終えると、担当の者が部屋にやってきて、こうやってレオンハルトに侍って、色々なことをする。
　それぞれが、レオンハルトの興奮を煽るために薄着だったり、スケスケだったり、中には下着だったりコスプレしてくるものだが、何もそういうことばかりをするわけじゃない。その時間は謂わば、レオンハルトとレオンハルトに惚れているメイド達による、謂わば恋人同士の触れ合いのような時間である。

普段から多忙を極め、日中は仕事であったり趣味であったり、修行や、身内との語らいに回すレオンハルト。
メイド達も、日中は仕事である。当然、主人と雇い主という関係であり、仕事中の邪魔などは絶対に出来ない。
これはケッセルリンクやレオンハルトの使徒であり、女でもあるキャロルやペールもそうだが、この時間はレオンハルトと個人的なやり取りを交わすための時間であるのだ。
「レオンハルト様、そういえばこの間ね、この子が――」
「あっ、言っちゃ駄目！　駄目だからね！　レオンハルト様も聞かないで！」
「私も失敗しちゃって……」
「ん……そういえば、今は新しい下着を履いてるのだけど……レオンハルト様、ちょっと脱がせて見てみませんか……？」
「あっ、誘うのずるい！　私だって、今日はレオンハルト様の為に色々と――」
誰もがレオンハルトとやり取りを行おうと様々な会話を行う。
好きな相手とは色々なことがしたいものである。だからこそ、こうやって雑談したり、時には遊んでみたりもする。特にメイド達は、心より慕うレオンハルトと少しでも触れ合いたいとその欲求を常に持っている。
そして癒やしてあげたいとも。この時間だけは、レオンハルトが何も考えず、頭を悩ませることなく、素直に欲求を吐き出し、気持ちよくなってほしいと。常日頃から人の為、魔物の為、身内の為、そして自分達の為にあらゆる手を尽くしてくれているレオンハルトを、いっぱい愛してあげたいと。それだけが、自分達に救いと幸福をくれたレオンハルトへの恩返しだと、皆が心に秘めている。
皆を守るためだと、下級使徒になることを提案した時も、メイド達は誰もが思ったことだ。
己の全てを、レオンハルトの為に捧げようと。
だからこそ、この時間の彼女達は遠慮もしなければ――とてもいやらしい。

「……あー、レオンハルト様の、おっきくなってる～」
「んっ、もうこんなに……」
「私達で興奮してくれたのね……嬉しいわ」
と、彼女達はそれを見て、誰もが小悪魔のような天使のような笑みを浮かべた。
そう指摘されてレオンハルトは苦笑し、
「……お前らにそんなに触られるとな、そりゃあこうなるだろ」
レオンハルトは己の状況を見て、感じて、そう思う。
彼女達は皆、美しく、可愛い。
レオンハルトの城のメイドは、レオンハルトの部下やナイチサ、ケイブリスなどが大陸中から、千年間もの間集めた――謂わば選りすぐりの美少女達。
その８割ほどが巨乳で、そうでなくとも男なら堪らない美貌の持ち主達だ。
そんな彼女達はレオンハルトの身体に纏わりついている。
そして誰もが、会話を行いながらも軽いスキンシップを行っていた。
軽く唇や頬にキスしてみたり、胸を押し付けたり、細くしなやかな指が、幾つも太腿や内股、腹筋などを撫で回し、レオンハルトの官能を、いたずらに高めようとする。
するとやはり、当然ではあるが、レオンハルトの剣も、徐々に興奮して戦闘態勢を取る。
そうなると、彼女達は眼を輝かせて、小悪魔のような天使のような、色香に満ちた微笑みをレオンハルトに向けながら、
「えー？　別に、普通に触ってるだけだよー」
「主の剣は、メイドの私達が手入れするのが筋ですわ……」
「そうそう、レオンハルト様は、私達に任せて気持ちよくなっていいんですよ」
「あっ、手持ち無沙汰なら、そろそろおっぱい触る？」
さすさす、しこしこ、すりすり――と、彼女達のすべすべの手が、レオンハルトの剣を擦り始める。

１０人もの美女達による軽い手での手合わせだが、もはや彼女達の手でレオンハルトの武器は殆ど見えない。しかもそれを、全身に女体を密着させながら行うのだから、その心地よさは単純に擦られているだけに留まらないだろう。
「お前らな……あまり俺を挑発するな。我慢が利かなくなるだろ？」
「あんっ」
「んっ」
言いながらも、レオンハルトが両脇にいたメイド二人の乳房を鷲掴みにする。すると胸を揉まれたメイド二人は、黄色い声を上げた。
「んっ……はぁ……もー、レオンハルト様えっちー……巨乳好きー」
「えへへ、私のおっぱい、どう？　気持ちいい？　私の身体、全部レオンハルト様のものだから、好きにしていいよ……」
「ああ、柔らかくて最高だ」
主に、その手で掴みきれない豊満な果実を捧げるように、彼女達は上体を反らしてみせる。
指が沈み、掴みきれないずっしりとした柔らかさを掌で感じながら、しかしレオンハルトはそちらにだけ注力していられない。周囲では他のメイド達も動き始めていた。
「あぁ、ずるいっ。私達も触ってほしいのに～」
「ねぇ、レオンハルト様、私も触って？」
「私のも……ほら、押し付けてあげるから……私のいやらしいおっぱい、当たってるの分かるでしょ……？」
「ああ……確かに。いっぱい実ってるな」
全身に、彼女達が擦り寄ってくる。
己の身体をすりすりとレオンハルトに擦りつけ、誰もがレオンハルトと戦いたいとアピールを始める。
やはりと言うべきか、久し振り過ぎていつもより誘惑が激しい。誰もが目にハートを浮かべ、早くしてくれと言わんばかりになっている。
中には少しフライングして、メイド服の上側、胸の部分をずり下げて擦りつけているものすらいた。先端の突起や、生の乳が押し付けら

れ、レオンハルトが僅かに身を震わせながら、周りにいる彼女達の巨乳を愉しむ。
　すると彼女達のメイド服も段々と淫らに肌を晒していく。するとレオンハルトの正面にいるメイド達が意味深な、淫靡な雰囲気を醸し出すような笑みや羞恥を見せる。
　それを合図に、彼女達はまず自分達のメイド服に手を掛けた。
「レオンハルト様ぁ……ほら見てぇ……私のおっぱい大きいでしょ……？　Ｉカップ、あるんだよ……？」
「それなら私だってＪカップはあるんだから、レオンハルト様ぁ……」
　彼女達が着ているメイド服。胸の谷間は大きく開かれたその服は、当然、彼女達が持つ豊満な胸でパッツパツに盛り上がっている。
　大きな胸に細い腰、女性らしい丸みを帯びた臀部。レオンハルト好みの身体を包む衣服を、一枚一枚、レオンハルトに見せつけるように脱いでいく。
　何故こんなことをするのか、というとやはりパフォーマンスだ。
　レオンハルトを気持ちよくするために、どんなことでもしていい。だからメイド達は予め、今日はどういう風にするかを相談して決めているのだ。
　そして、大体お決まりなのが、この脱衣ショーといえる行為。
　いつも冷静で、その上仕事を終えたばかり。まだ仕事モードが抜けきってないため、仏頂面のレオンハルトの官能を高めるために、いやらしく、彼女達は服を脱ぎ捨てる。
　スカートにシャツ。靴下などを脱ぎ捨て、下着姿になり、ガーター付きの下着を脱ぎ捨て、最後には胸を晒して全裸になる。
　たぷんっ、と弾みながら今までメイド服に仕舞われていた巨乳が解放され、スカートを下げて、あるいはたくし上げて尻をレオンハルトに向けて振っている。
　レオンハルトはそれを目にして、僅かに目を細める。分かりにくいが、反応している証拠だ。
　レオンハルトは巨乳好き。誰もが知る事実だ。故に、このように目と鼻の先にずらりと美少女達のおっぱいを並べられたら流石に反応

は大きい。
　もっとも、男であればこの光景は垂涎モノであり、今直ぐに襲いかかってもおかしくないだろうが、レオンハルトは落ち着いてそれを眺める。
　主が反応している。それを分かっているメイド達は、主が喜んでいることを嬉しく思いながら、同時に彼の服を脱がせるのだ。
「では、失礼しますねー」
「腕の方、失礼します」
「下も……」
　９人掛かりでレオンハルトの服を脱がせるが、そんなに数はいらないはずだ。
　だが彼女達はレオンハルトの興奮を煽るために敢えて皆で囲むように服を脱がせる。
　胸を触れさせ、少し押し付けてみたり、手でレオンハルトの肩や背中、腹、太腿などをスリスリと擦ったり。そして下を脱がせようとする者達に至っては、明らかに膨らんでいるそれを見て、目をハートにさせながら鼻息荒くそれを曝け出させる。
「レオンハルト様……脱がしますね……？」
　と、最後の一枚を脱がせる。
　するとそこには、
「あっ……」
「レオンハルト様のもの……」
　既に臨戦態勢に入ったレオンハルトの剣があった。
　収納されていた刃渡り１８センチほどの魔剣。それが解放されたことで、誰もがうっとりとした表情でそれに視線を浴びせる。
　この場にいるだけで２０人近くの美少女達の視線を受け、主の喜びと血の昂りを示すようにピクピクと揺れ動き、天を向いている。
　それはこれから１５１人の美少女の奉仕を受け、彼女達の最高の女体と戦って征服する――支配者の剣だった。
　それが解放された瞬間から、彼女達は本格的な戦闘に自然と移り始める。

「……ちゅっ♡」
「あっ、抜け駆けずるい……」
下を脱がせ、先程から膝を付いたままレオンハルトの剣を凝視していたエクレアが、うっとりとした様子で、その先端に唇を落とした。
レオンハルトが反応を返し、メイドが声を上げる。最初にそれと斬り結ぶことが出来るなど誰もが羨むことだ。自然と、それを行ってしまったエクレアは頬を紅潮させながら、
「んっ、ごめんなさい……見てたら、愛おしくなってしまい……我慢できず……」
「いや、構わないが……そんなに俺のが欲しかったのか？」
そもそも謝るようなことではないが、とレオンハルトは彼女を見下ろして問いかける。しかし返答は別の所から来て、
「当たり前だよー、だってレオンハルト様のこれ、皆大好きなんだもん……ちゅー♡」
「勿論レオンハルト様のモノだからだけどね。皆レオンハルト様のこと大好きだから……ちゅう♡」
「見ただけで濡れちゃいます……んっ、レオンハルト様……早く、私達の身体で癒やされてください……ちゅ♡」
と、何名かのメイドが剣に顔を埋めてエクレアと同じ様にレオンハルトを見上げながらそこにキスを落とす。
美少女達が一人キスをするたびに、ピクッと動き鋭さを増す剣を、彼女達は愛おしそうに見詰めながら、指示を待つ。その間にも眼下では既に剣に舌を這わせての手入れが始まっているが、それぞれが周囲でレオンハルトに身体を、その自慢の乳房を擦りつけ、または手を取って揉ませながら、
「ほらぁ……今日は１５１人全員相手するんですよ……興奮、しますよね……？」
「どうするの？　まずは……おっぱいでも味わうの？」
「くすくす、もう既におっぱい天国だけどねー。乳比べでもする？」
「誰でも好きな女の子から、襲っていいんですよ？　何人がかりでも……ここの可愛い女の子も、綺麗な女の子も、皆レオンハルト様のモ

ノですから」
「レオンハルト様が私達を、レオンハルト様のモノにしてくれたんだもんね……？」
と、彼女達は己の身に刻まれた紋様を感じながらそう事実を告げる。
彼女達に刻まれたそれはレオンハルトの下級使徒である証であり、つまり彼女達はレオンハルトの所有物であることを意味する。
下級使徒という魔物達の上位の存在。それは、レオンハルトの庇護下で守られていることを意味していた。
魔人筆頭兼魔軍参謀として、彼を知らない魔物など存在しない。その威光は、パーティ会場での魔物達の反応を見ても明らかであった。
彼女達に手を出せばレオンハルトが黙っていない。ただのメイドの時ですらそうであったが、更にわかりやすい形で彼女達は守られることとなった。
それを説明され、理解している彼女達は、もはや最大ともいえた好感度を更に増大させる。
もう何でもやってあげたい。自分達を救い、守り、愛してくれた彼に、こちらからも愛をいっぱいあげたい。
その苦労を、悩みを、疲れを、全て癒やしてあげたい――それが下級使徒であるメイド達の総意だった。
戦いを終えて、城に帰っている時であれば、いつだってこうして、レオンハルトに身体を捧げて、癒やしてあげると。
もはやいやらしく、娼婦のようにレオンハルトを誘うことも躊躇わない。それでレオンハルトが喜ぶのなら、誰もが己の身体を武器にして、レオンハルトに襲いかかる。
その一身の愛を受けて、レオンハルトは衝動の箍が外れる。
そこからのレオンハルトは、自分を汚した相手を忘れ、上書きするためにも、昔のように欲望に素直になった。
「――っ、お前ら……今日は寝れないと思え。存分に愛してやる」
「あっ……」
「んっ、レオンハルト様の、またおっきく……」

より魔剣を肥大化させて、獲物を狙い定めながらレオンハルトは彼女達を抱きしめる。
レオンハルトの剣を舐めていた４人はその自分達を征服してくれるそれにうっとりとして、更に戦闘を激しくさせ、運良くレオンハルトの両脇から抱きついていた２人は、その力強い抱擁に身を震わせて歓喜する。
あるいは彼に触れている者達も、そうでない者達も皆、一様にその言葉を聞いて、お腹の奥が熱くなり、太腿に液体を漏らす。
――そこからは、ただただ熱い時間だ。
「ちゅっ、ん、んんー……れろ、ぷはぁ……レオンハルト様……私達の為に戦って、守ってくれてるレオンハルト様……感謝してます……」
「んちゅ……ちゅる、れろ、……私達の為にも、頑張ってくれてるんだよね。……だから、いっぱい癒やしてあげる」
「レオンハルト様の、美味しい……お汁、飲みたいよぉ……」
「ああ、いいぞ……たっぷり飲ませてやる……ッ」
レオンハルトの魔剣に顔を埋める女の子達が、愛情たっぷりに舌を這わせ、あるいは咥えてみせる。その熱さと、滑らかなものが這い回る快感に、レオンハルトが剣気を放出させれば、
「あんっ……次はおっぱい？　レオンハルト様、おっぱい大好きだもんね……」
「全身、おっぱいで埋もれさせて、天国にしてあげますね」
と、次はレオンハルトの好きな巨乳、爆乳の美少女達が寄り集まり、レオンハルトの各部位にたっぷりと自慢の胸を押し付ける。
背中から前から、全方位からレオンハルトの首に手を回して上半身をおっぱいで埋め尽くし、足すらもレオンハルトに抱きつくようにして挟み込みながら、両手を伸ばした先に、おっぱいを差し出して、そのたっぷり実った重柔らかさを掌で味わう。
そして興奮したレオンハルトの魔剣も、おっぱいに包み込まれてしまい、
「あっ、胸の中で大きくなってるー♡　レオンハルト様、これだーいすきだもんねー？　メイド服にあんな穴開けるくらいだし」

「レオンハルト様すっごい気持ちよさそうね……全身に巨乳を押し付けられるの幸せ？　これぜーんぶ、レオンハルト様のものだからね……？　興奮する？」
「あっ、んっ、腰振り、すごい激しいですわ……！　ふふ、わたくしの胸、そんなに犯したかったんですのね……」
「エクレアちゃん、おっぱいおっきいからねー。Ｌカップあるらしいよ？　――きゃんっ。って、また激しく……」
「私のいやらしい胸の心地はどうですか？　胸の中で受け止めますので、遠慮せずに達してくださいね……」
　全身をむにゅむにゅと押し潰すように押し付けられる果実に、官能を高めるレオンハルトだが、その魔剣も即座に包まれてしまう。
　たぷん、たぷんと音が鳴り響き、腰の上でバウンドを重ねる乳房や、あるいは己から爆乳に向かって剣を突き立てて攻撃するも、その質量と吸い付いてくるような最高の感触、そして全身に押し付けられ、両手でも揉む快感にあっさりと敗北まで追い詰められる。
　おっぱいに埋もれる天国を味わいながら順番に三桁を越える果実を征服して剣気を放出し、あるいは複数人で包まれて放出しながらも、しかし幸せも戦いも、まだ終わらない。
「きゃんっ……レオンハルト様に、襲われちゃう……♡」
「好きな女の子を、好きなだけ征服していいんですよ……♡」
「ほら見て……私の、もう準備万端だから……いつでも突っ込んで、出していいのよ……？」
　広いベッドの上で、女の子の上に覆いかぶさると、その下に複数の美少女達がいるだけでなく、レオンハルトの周囲に集まるように、しなだれかかって来る。
　誰もが目にハートを浮かべて腰をくねくねとさせてレオンハルトを戦闘に誘う中、そのうちの一人にとうとう剣を突き立てると、チャンスとばかりに攻め手はもう止まらない。
「あっ、あっ、んんっ！　レオンハルト様、の、すっごい硬い……あぁっ♡」
「もっと、して、あっ、はぁっ、いいんだよっ……☆　……んふ、やっ、

あっ、広げられてぇ……すごいぃ……！」
「レオンハルト様の本気の素振り、すごいかっこいいよ……男らしくて、全然衰えなくてぇ……んっ、来たぁ……♡」
「はぁ、んっ、レオンハルト様、あぁ、剣の達人、だもんねっ。そりゃ、んんっ！　んく、剣の扱いが、上手に決まってるよ……っ、はぁ、最高ぉ……♡」
一人ずつ、激しく愛を与えていく。
下に組み伏せ、あるいは四つん這いにさせて並べて順番に、あるいは上に跨がらせて、様々な型で剣を振るっていく。
その間にも、次々と仕事を終わらせたメイド達が部屋に入室し、服を脱いでベッドの上に上がって戦場へと入っていった。
さすがに１５１人は入らないが、それでも部屋が女の子達でいっぱいになるくらいには、入室を果たしてレオンハルトの相手を待ってレオンハルトを見詰め、自分を慰めながらそれを待ちながら、心の何処かでこういう意識もある。
――レオンハルト様は汚させない。
彼女達は、レオンハルトを侵食しようと背後でその蠢く影と、戦っていた。
何年、何十年、何百年とレオンハルトと過ごしてきた彼女たちには分かる。
レオンハルトの心に棘を刺し、己のモノにしてやろうとする女の影を。その女の影が、こう言っているのだ。
――これを、私の虜にしてやる。
尊大かつ傲慢に、己の美貌に溺れて、己に忠実な雄にしてやると。
そしてお前達に出る幕はない。有象無象の雌の一匹に過ぎないのだと。
それは確かに、単純な戦闘力であれば、彼女達では到底敵いそうにない強敵ではあった。
しかし、戦いであれば負けない。
長年レオンハルトと肌を合わせた経験は伊達ではないのだ。
たかだかまだ一年、レオンハルトを犯した程度では生娘に過ぎな

い。
こちとら約千年近い経験がある。例え何百年経とうが、小娘に渡しはしないと。
もし本当に彼が欲しければ、正々堂々と想いを抱き、それを告げてみろ。かつての自分達の様に。
それすら出来ない奴に、ベッドの上で負けはしない。彼女達はそう決心し、だからこそいつもよりも激しくレオンハルトを癒そうとする。
――さあ、かかってこい。
彼女達の武器はその肉体、唯一つ。しかし、一つであって一つに非ず、その武器は、百五十一にも連なっているものだ。
――対するそちらはどうだ？
絶世の美女だとは聞いているが、それがどうした。こちらも美貌には自信がある。
加えてそれが百五十一。しかもこちらはお互いに好きあってそれを行っている。
たった一人で、この物量も揃った愛の集合体とも言える我々に、勝てるとでも思っているのか。プライドが高く、彼に奉仕する度胸もない小娘が。
それでも、奪えるものなら奪ってみろ。
だが決して、彼はお前の思い通りにはならない。
情が湧くことは考えられても、お前の望む通りの結果には決してならない。
それを教えてやる。だから掛かってくるがいい――魔王。
彼女達には彼女達の戦いがある。女同士の戦いだ。
そしてベッドの上では、比喩ではなく、完全に美少女達の女体に埋もれるレオンハルトがいた。
一人ずつ剣で倒していき、しかし敵に囲まれるがその意志は折れぬ無双状態。その幸福過ぎる状況をレオンハルトは全身で、五感で、感じ続ける。
「ん、ちゅっ、あんっ、っ、れろ、んっ……！　レオンハルト様ぁ、大

好きです……！」
「ちゅる、れろ、はぁ、んちゅ、私達を、ん、下級使徒にしてくれた、あんっ、お優しいレオンハルト様……」
「愛してます……んんっ！」
「お慕いして、はぁ、んっ！　おり、ますぅ……！」
全身から愛を囁かれ、それをぶつけるように戦闘を激しくしていく下級使徒のメイド達。
身体の下では、両手に花どころか、両手いっぱいに抱きしめた三人の美しく可愛い女達が、己に身体を、女体を、乳房やすべすべの肌をこちらにたっぷりと押し付けながら、荒い息を漏らして、キスをする。
顔には唇だけでなく、顔中至るところに美少女達のキスを受けて、陶酔するような気分になりながらも、剣を動かして相手を倒す快感を貪る。
背中にも覆いかぶさってくる彼女達の感触を感じ、全身が女体で埋もれる。女体の海で泳いでいるかのようだ。
ふと、室内の嬌声に紛れて、こちらを挑発するメイドの声が耳に届く。
「んっ、はぁ……こんなこと、してもらえるの、きっと、世界でレオンハルト様だけですよぉ……？」
言われ――そうだろうな、と、どこか冷静な思いが脳裏に湧く。
男であれば天国と見紛うような場所が、ここであった。
女体が触れていない場所などほぼ無く、どう動いても快感が湧いてくる。両手を徐ろに伸ばして辺りを適当に触ってみると、誰かのたっぷりと実った爆乳に指が沈み、誰かのむっちりとした太腿や臀部を撫で、それ以外のどこかの肌を触れて、喘ぐ声が聞こえた。
美少女の一人に剣気を放出してそれを抜いてやると、即座に誰かが己の剣に舌を這わせ、あるいは胸を寄せてくる。そしてすぐに別の女性を貫くのだ。
快感が止まらない。
それはレオンハルトの精神を、文字通り癒やすような堪らない心地であった。

……これ、だよな。
レオンハルトは内心で、やはり、と得心に至る。やはり好意があるのとないのとでは充足感が違う。
半強制的に犯される様な愛のないものは、ただ虚しいだけだ。どれだけ快感が強くても己の心に訪れるものは何もない。ただ一時的に満たされないものを誤魔化しているだけ。少し経てばまた負の気持ちが高まり、まだ誤魔化そうと同じことを繰り返し続け、いつまで経っても満たされない。
だがこれは違う。お互いに愛をぶつけるようなそれは、身体だけでなく心も満たしてくれるのだ。
それにレオンハルトは感謝を感じる。１５１人、この場にいない者も含めて皆が、こんな自分に好意を寄せてくれていることに。
少しでも犠牲が減れば、と始めただけのことで全ては自分の自己満足だ。だから感謝など、する必要はない。ここに残る選択を、自分の意志で選んだからこそ、彼女達は幸せを掴んだ。
その責任を、己は持たねばならない。彼女達を助け、好意を寄せられ、それに応えた責任だ。
下級使徒という己の配下という扱いにしたことも含めて、彼女達に応えなくてはならないし、また応えたいとも思う。
そのためにも、己も彼女達のために、受け身ではなく彼女達を求めたい。
だからレオンハルトはそれをひたすらに続ける。彼女達に、愛を与え、与えられる行為を。
「レオンハルト様ぁ、大好きぃ……」
「……ああ、俺も好きだぞ……っ」
好き、と言ってやると誰もが締め付けてくる。堪らずに剣を動かすと、嬌声を響かせる。
止めるわけにはいかない。何しろまだ何十人と己の愛を受けようと待っている者がいるのだ。
一人一人に耳元で愛を囁きながら剣気を放出してやると、誰もが幸せそうな顔で身体を震わせた後に、脱力する。

それがレオンハルトは好ましいと思った。
そして同時に、彼女達の愛を受けてもうひとつ思うのは――責任だ。
自分には、彼女達を、身内を守る責任があるのだと。
一度拾い上げたからには、最後まで面倒を見てやらねばならないのだと。
例えどんな苦難があっても、己は諦めるわけにはいかないし、失敗するわけにはいかない。
己の失敗は、周囲のあらゆる者達を危険に晒す。
己の行動一つで多くの人の運命を動かすことになるのは、魔人になった時から半ば覚悟していたことだし、時が経つに連れて理解したことではあるが、
……これからは、更に大変になるからな……！
ここからは更に気を引き締めなければならない。なにせ今の魔王は、あのジルだ。
戦争がなくなるからと己を鍛えることを止めることは出来ないし、気を抜くことも出来ない。油断ならない者達が沢山いる。
如何に魔人最強とはいえ、出来ることには限界がある。ある程度であれば越えてみせるという気概はあるが、そもそもそういった事態にならないことに越したことはない。
危険な相手を好みはするが、身内の危機と比べられるものではなく、出来る限りは対策を取る必要はある。
そのための身内でもあるが、これからも、そういった懸念を、己は持ち続ける必要があるだろう。
だが、こうやって城にいる時くらいは、身内との時間で身体と心を休めることが出来る。
食事や睡眠も重要だが、レオンハルトにとっては、守るべきものを再確認することが、何よりも己の心を奮い立たせるものであった。
ジル程度に、心を侵食されてたまるか、と。
彼女に関しても不安はあるが、己を安売りするつもりはないのだ。
己の心が少しでも欲しければ、それに相応しい相手でないとレオンハ

ルトは認めない。
ただ求めてくる相手を、レオンハルトは愛すことはないのだ。
それに見合った行動と――〝意志〟を示す者だけを、レオンハルトは認める。
彼女達はそれを示したが、ジルは違う。そうではなくなってしまった。
しかし、夜が更けていく中で、レオンハルトは僅かにジルのことを思い出し、こうも思う。
もしも彼女が、それを示してしまった時――レオンハルトはどう行動すればいいのか、自分の中に答えが出ないのだと。

――そして次の日。レオンハルトが部屋でようやく休憩を取った頃に、魔軍経由で伝言が届いた。
その内容をレオンハルトはメイド長から耳にするそれは、
「――アポイントメントだと？」
「はい。レオンハルト様に、是非お会いしたいと」
メイド長さんの頷きを、ベッドの上で聞いたレオンハルトは頭に疑問符を浮かべる。
何しろ、そんなことを態々してくる者など、魔物界にはいない。
特に城を訪ねてくるような魔人連中は、皆来たい時に勝手に来るのだ。
精々ケッセルリンクくらいのものだが、彼女の場合は魔軍経由でアポを取ることなどしない。その他の魔人は、ガルティアだろうがレキシントンだろうがカミーラだろうが、勝手にやってきて勝手に用件を済ませようとしてくる。
基本的には我が強く、あまり他人を顧みないのが魔人だ。そんな中で、アポを取るような人物と言えば――と、レオンハルトは考え、浮かぶ答えより先に、メイド長さんに問うことにした。
「……まあいい。それで、相手は？」
「はい。相手の方は――」

と、メイド長さんは告げた。アポを取ったその名を、

「――魔人、ジーク様です」

魔人ジーク

魔物界東部にあるレオンハルトシティ。
その名の通り、魔人レオンハルトが治める魔物界の一大都市である
その入口に、大きな影が、一つだけ立っていた。
周囲に誰も連れず、街の入り口や外観を見て関心を示す息を漏らしたのはただの魔物ではなかった。
「――ふむ……これは……」
体長が二メートルを越えているその魔物は、細長い手足に大きな手を持つ、全身、黄色い肌をしている――魔人だった。
長くて黄色い顔を持ち、ある魔物に似たその魔人は、その異形とはミスマッチなはずの正装、キリッとした黒のスーツを着ており、右手にはかなり長いステッキを手にしている。
彼は評判通りのその街の外観をしばらく眺めていたが、やがてゆっくりと、それでいて優雅に街に足を踏み入れる。
魔物兵達が闊歩するその街に、彼の姿はやや目立つ。案の定、その見た目と気配から、彼が魔人であることに気づいて誰もが道を開けた。
「む、気を使わせてしまったか」
しかし、彼は魔物兵達が賑わっていた表通りがざわついてしまったことで、やや己の軽率な行動を反省する。
彼らには、彼らの営みがある。それに、目上の方が治める街で騒ぎを起こしてしまうのはあまり褒められた行動ではない。
先んじて伝えておいたとはいえ、ましてや今日はプライベートだ。仕事の時であればいざ知らず、彼らの休息を邪魔してしまっては心苦しいものだ。
だから、彼は人混みから外れ、一度路地に入り込んだ。
「……この辺でいいか」
と、彼は辺りを見渡し、己に気づいている者がいないと判断し――その姿を綺麗さっぱり変えた。
「これで兵達に気を使わせることもないでしょう」

そう言って彼は再び街の表通りに戻る。
だが、今度は彼を気にする者は誰もいなかった。
むしろ、彼を見て気さくに声を掛ける者すらいる。
「美味しい串焼きですよー！　お兄さん、食べていきませんか！」
「ん……ほう、これは……食欲を唆る良い匂いですね。これだけ多くの屋台があるとは……」
声を掛けてきた先は、表通りに並ぶ屋台の一つ。そこに立つ女の子モンスターからのものだった。
彼は声を掛けられたところで、その立ち並ぶ屋台の数々を見て、やはり感心する。その言葉を聞いた女の子モンスターは首を傾げた。
「あれ？　お兄さん、表通りの屋台知らないってことは……ひょっとして、新兵ですか？」
「ん、ああ、そうですね。新兵です」
やっぱり、と己の予想が当たったことに喜ぶ女の子モンスターの目には、彼が魔物兵に見えていた。
そしてそれは周囲も例外ではない。彼の姿は、緑の魔物兵スーツを着た魔物に見えていたのだ。
だから誰も騒がない。同じ魔物兵がいるだけなのだから。周囲では、先程魔人を見たという噂が聞こえてくるが、いつの間にか消えてしまったという話になっている。
それを背後に聞きながらも、その噂の魔人は、声を掛けてきた女の子モンスターに頷き、
「では、一本だけ、頂けますか？」
「あれ、一本だけでいいんですか？　新兵ならサービスしますよ！」
「はは、それは嬉しい申し出ですがね。この後、上司との予定がありまして」
「あっ、そういうことですか！　ならしょうがないですね！　――はい、どうぞ！」
「ありがとうございます」
こちらの事情を察して、親切に手渡ししてくれた女の子モンスターにお礼を告げる。上司と予定、と聞いて、食事か何かと思ったのだろ

う。
そして事実、上司との予定があるし、食事だって用意してくれているかもしれないので嘘はついていない。半ば騙しているようなものだが、出来れば嘘をつきたくないし、他者を騙すような真似は頂けない。正々堂々というのが彼の信条だ。
食事の用意がない可能性もあるが、それならそれで構わない。こちらが気を回しすぎただけで済むのだ。
だが、食事の用意があるのに、予め腹が膨れるほどに食事を取るのは、あまりよろしくないことだ。もし先方から何かを出されれば、それが例えどんなものであろうと完食するつもりである。それが礼儀というもの。
だからこそ、腹は多少、空かせておくのがマナー。魔人の肉体を考えると、この程度で腹が膨れるはずもないが、念の為という言葉もある。用心しておくに越したことはない。
そう思いながらも、串焼きを口にすると、香ばしい匂いとともに、肉汁が口内で溢れて旨味を味覚に届けてくれる。
……美味しいですね。これが、一般兵の食べる物ですか……。
食べ進めて内心でその味に評価を下す。他の場所とは違い、調理された物で、この味。美食の文化がない魔物の中でも、この街だけは例外のようだった。
ただの串焼きですらこの味だ。他の屋台やお店もどういうものなのか興味が湧いてくるが、残念ながらこれだけと決めていた。
だからまたの機会にしておこうと串焼きを食べ終える。
口元が多少汚れてしまったので、懐から食事用にハンカチを取り出して口元を拭く。
するとしばらくしてようやく、街の中心に到着した。その光景に、彼は思わず感嘆の声を漏らしてしまう。
「おお……何という……」
街の中心である噴水広場。そこにある光景は魔物界では他にない、一種の絵画のような光景だった。
噴水から湧き出る水は、キラキラとした水飛沫を水面に響かせ、涼

やかな音色を耳に届ける。それを楽しみながら周囲の大きな建物や看板を見てみれば、多くの魔物兵達が出入りする公衆浴場や、中から音楽が聞こえてくる劇場。魔物将軍や魔物隊長などの将校が利用するスポーツ施設など、様々な施設がそこにある。

そしてもっとも目を奪われてしまうのは――やはり街の中心にそびえ立つ赤い城。

紅魔城とも呼ばれるほど赤い外観が特徴のそこは、魔人レオンハルトの居城である。

魔人筆頭兼魔軍参謀という立場を持ち、最強とも英雄とも名高いレオンハルトの住む権威の象徴。

そしてその城こそが、彼が今日、訪れようとアポイントメントを取った場所だ。

故に眺めるのは程々にして、彼は城門にゆっくりと近づいていく。

するとあと僅か、といったところで、城門の脇に立っていた魔物兵が反応し、

「む――止まれ！　ここはレオンハルト様の居城であるぞ！」

何も符号を持たない一般の魔物兵の姿をしている己が呼び止められるのは当然だ。

だから彼は、そこでその変身を解いた。すると魔物兵が目を見開き、

「!?　な、おま――いや、貴方様は……」

途中でその気配と姿に気づいて、魔物兵が言葉遣いを変える。元の姿に戻った魔人は、そこで丁寧に告げた。

「騙すような真似をしてしまいましたね。ですが、街で騒ぎを起こすのもどうかと思いましたもので。……申し訳ありませんが――魔人、ジークが参りましたと、レオンハルト様にお伝え下さいますか？」

「――レオンハルト様。魔人ジーク様が、お見えになりました。どうなされますか？」

城の執務室で仕事を進めていたレオンハルトは、メイド長さんのそ

の報告を聞いて、書類から顔を上げた。
「来たか……とりあえず、俺が出迎える。お前達も付いてこい」
「畏まりましたわ！」
「はいはーい、了解ですよう」
「は、了解しました。同行致します」
「……えぇー、あたしも……？　いや、まあいいけどさ……」
　仕事を行っていた４人の使徒がそれぞれ思い思いの言葉で、同意を返す。ハンティだけが微妙そうな顔だったので、レオンハルトはそちらに顔を向けて問いかける。
「何だ、嫌なのか？」
「……いやだって……あのジルが作った魔人でしょ？　絶対あのノストとか、ヘビ女みたいに、嫌な奴でしょうに……」
　思い出したのか嫌な顔をするハンティ。その答えを聞いてレオンハルトは、ああ、と頷きながらも、
「確かに気持ちは分かるが……多分、お前が心配するような奴ではないと思うぞ」
「？　レオンハルトもちゃんと話した事ないのに、何で分かるのさ」
　レオンハルトはそこで僅かに息を入れ、苦笑混じりに部屋の外に向かいながら口にした。それは、
「――勘だ。まあ、とりあえず付いてこい。おそらくは大丈夫だ」
「……？　まあ、行くけどさ」
　と、訝しげな視線を向けるハンティと他の使徒達も一緒に、レオンハルトは玄関まで魔人ジークを迎えに行った。
　――そして、玄関に辿り着いて、ジークと対面した瞬間、ハンティは思わず内心で、〝え？〟と逆に疑問を感じてしまった。
「――お初にお目にかかります、魔人、レオンハルト様。ジークと申します。魔王ジル様に魔人にして頂いたばかりの若輩者では御座いますが、どうぞよろしくお願い致します」
　……え？
　玄関に訪れたレオンハルトを前に、優雅かつ丁寧に挨拶をしてみせる魔人がいる。

ノスの様に嫌味な様子は全くなく、寧ろ紳士的。服装も紳士そのものの正装で、スーツを着ているだけでなく、
「ああ。よろしく頼む。だが一応、初対面ではないはずだが？」
「はい。確かに、魔人になった際に一度顔を合わせましたが、ちゃんとご挨拶が出来ていなかったので、改めてご挨拶に伺った次第です」
「……律儀だな。お前の流儀か何かか？」
「はい。私は紳士であるように努めていますので。新参者の私が上司であるレオンハルト様に挨拶をしない訳には参りません。先に、他の同僚の魔人の方々やカミーラ様などに挨拶を行いましたので、順番が前後してしまったのは申し訳ありませんが……」
と、聞かれたことにすらすらと答えるジークという魔人は、正に紳士だった。
見た目がまねしたでなければ、ただの紳士だとそこで終わるのだが、スーツを着た人型のまねしたに見えるのが微妙にシュールだと思うのは、己だけだろうかとハンティは思う。
……まねしたの魔人とは聞いていたけどさ……。
前情報では、まねしたの魔人と聞いていたジーク。
まねしたとは変身能力を持つ魔物の一種で、レオンハルト軍でも工作員としてライカンスロープと一緒によく働いてくれている魔物で、黄色いぬいぐるみの様な姿をしている魔物である。
それを大きくしてちょっと形を変え、スーツを着せたのが、ジークの見た目だ。
なので微妙なアンバランス感があるのだが、よくよく見ていると、不思議とそのスーツは似合っているようにも見えてくる。
……実は猫被ってたりしない？
と、ハンティは疑心暗鬼に駆られてそう思う。あのジルの魔人。その二体が最悪だったからこそ、ハンティは疑いを掛ける。
「そうか。まあ、構わないが……とりあえず紹介しよう。こっちが、俺の使徒達だ」
「レオンハルト様の第一使徒、キャロルと申しますの。どうぞお見知りおきを、ジーク様」

「……ハンティと言います」
「ペールと申します、ジーク様。どうぞよろしくお願い致しますね」
「リーです。レオンハルト様の使徒を務めさせて頂いております」
レオンハルトに促されたので順番に挨拶をする。
するとジークはその全てに、うん、うん、と頷き、
「はい、確かに憶えました。態々私の様な新参者に使徒総出でお出迎え頂き、感謝します」
そう言って再びお礼を告げる。しかも、
「それとこれは、私からのほんの気持ちで――」
と、包装された箱を、ジークは懐から取り出してレオンハルトに手渡す。レオンハルトがそれを見て、
「これは？」
「はい。レオンハルト様は、うはぁんがお好きだと耳にしたので……うはぁんの詰め合わせとなります。心ばかりの品では御座いますが、どうぞお納め下さい」
「ん……そうか。悪いな、態々気を使わせて」
「いえ、とんでもない。このくらいは気を使った内に入りませんよ」
贈り物まで態々用意してくる始末だ。
しかも魔物にありがちかつ、レオンハルトにありがちな、人間の女だったりしない。普通に良い物を贈ってきた。
……あれ、もしかして……本当に紳士？
ここまでのやり取りを見て、さすがのハンティも、おや、と疑念を解き始める。まだ確証はないが、確かに他の二体とは違う様に思える。
そう思っていると、レオンハルトは城の中にジークを招き入れ、
「まあ、立ち話もなんだ。入ってくれ」
「はい。では、お言葉に甘えて、お邪魔させて頂きます」
ちゃんと一言添えてレオンハルトの後ろに付いていく。
入城を許可されたことだけでも、少なくともレオンハルトは認めているということである。ガルティアやケッセルリンクなどを除いて、基本的に魔人を城の中に招き入れることはしない。たまにやってく

るレキシントンなどは基本的に外で会話をして追い出したり、街の外で用事を済ませたりする。
だというのにジークを城に招いたということは、それだけ信用したということである証左だった。
……というか、このジークの方もレオンハルトへの信頼みたいなのが見えるような……。
どうも先程からそんな気が見える。
紳士だからというのもあるのかもしれないが、ちょっと街の魔物と近いかもしれない。
レオンハルトに尊敬の念を抱いているような感じだ。
そう思った直後、ハンティの予想は、応接間のソファーに着いたところで、正解だったことに気づく。
「――それで、挨拶に来ただけか？　それとも……何か用事でもあるのか？」
対面同士に座ったレオンハルトがジークに視線を向けて問う。
するとジークは、ええ、と頷いてみせながら、少し間を置いて話始めた。
「……実を言うと、私――」
と、ジークは一息置いて声に出す。それは、
「――レオンハルト様を、個人的に尊敬していまして」
……えっ？
ハンティが内心で、二度目の間の抜けた声を漏らす。
しかしハンティの中でちょっとしたフリーズが始まっていても、ジークは止まらない。レオンハルトの頷きを受けて、
「……そう、なのか。……一応、何故かと聞いていいか？」
「はい、簡単に言えば……魔人の中で、私が思う最も魔人然とした人物が、レオンハルト様なのです」
「魔人然とした……？」
はい、とジークは尊敬する目上の者の言葉に、丁寧に頷きながら説明を続ける。
「三代もの間、魔王様に仕え続け、魔人を統率し、魔軍を取り仕切るそ

の手腕と実力。最強の魔人と謳われながらも、必ずしも暴力だけではない、時には力以外の手段で問題を解決し、魔人や魔物を従わせてみせるその能力の高さ。加えて、教養もお持ちで、あらゆる文化に造詣が深いことは、この街や城を見ているだけで解ります」

「……！」

おお……！　と、言わんばかりの表情を、キャロルとリーのレオンハルトへの忠誠心高すぎるコンビが浮かべる。〝分かってるじゃないか！〟みたいな顔しないで欲しい。なんか反射的にツッコミを入れそうになってしまう。

しかしジークの語りはその間も続く。饒舌に、

「そしてレオンハルト様もとても紳士的であり、それでいながら戦いの際には正しく王道。敵を容赦なく斬り伏せ、英雄の様な雄々しい戦いを見せてくれるレオンハルト様の活躍振りは、魔人になったばかりの私の耳にも届いております」

は、これが？　と、ハンティはレオンハルトに半目を向ける。

普段のは紳士でもなんでもないというか、真面目で寛容に見えるけど、妙に拘り強かったり負けず嫌いだったり、神経質だったりするし、戦いの時はただの変態というか、昂ぶって滅茶苦茶なこと言い出す変態だ。

「それにレオンハルト様は、私の元の種族である〝まねした〟も有用に使ってくれていると聞きます。魔物を導きながらも、その力で驕り高ぶることなく、己の道を真っ直ぐと突き進むレオンハルト様は、正に私が想像し、そうありたいと感じる理想の魔人像なのです」

そこまで言い終え、納得してくれましたか？　と、声を発したジークに、レオンハルトが僅かに言葉に詰まりながら、

「お……おお、そうか。そこまで褒められるとこそばゆいが……悪い気はしない。それほど大したものではないと思うがな」

ちょっと動揺してるな、とハンティはレオンハルトの僅かな反応で内心を読み取りながら、今度はジークの反応を見る。その言葉を受けたジークは首を縦に振り、

「その謙虚さも、是非見習いたいものです。……そこで――」

好意的な言葉を返し、しかし今度は神妙な雰囲気で言葉を繋げた。
「不躾ではありますが……レオンハルト様に一つ、お願いがありまして……」
「……なんだ？　とりあえず言ってみろ」
はい、と頷き、ジークは告げた。そのお願いの内容を――
「――この街に住みたいのですが、よろしいですか？」
「……この、街に？」
「!?」
ハンティは驚愕して思わず唖然としてしまう。
魔人がこの街に住みたいと願う状況は、特殊過ぎてついていけないものだ。
しかし警備担当であるハンティが必死にそれを飲み込もうとしてる間に、レオンハルトは思考を回して考えをまとめたのか、真面目な顔でジークを見ると、
「……まあ、構わんが」
「おお……それは真ですか……!?」
ジークが声を上げて、露骨に喜びながら問うと、レオンハルトがもう一度頷きながらキャロルを見て、
「ああ。幾つかのルールは守ってもらうし、ずっとという訳にはいかないだろうが、それでもいいなら構わん。詳しくは、そこの町長に聞いてくれ」
「はい！　レオンハルト様の第一使徒にして完璧使徒の町長、キャロルですの！　転入希望でしたら、幾つかご説明しなければならないことがありますが、よろしいですの？」
ジークは頷いた。
「――聞きましょう。説明をお願いします」
……やめろ馬鹿ーーー!?
まさかそう声を上げるわけにもいかないので視線で全力で訴える。
何を街に問題を持ち込もうとしてるのかと。街に魔人が住むとか、ただでさえ厄介事が多い警備の仕事が、更に面倒な事になる可能性が高まる。

だと言うのにレオンハルトは問題ないと判断したのか、もはやキャロルに任せて自分はうはぁん食ってるし、キャロルはキャロルで、何故か目の色を輝かせながら全力かつ懇切丁寧に説明を始めている。リーも神妙に頷くばかりで役に立たない。

最後のペールに至っては、若干苦笑しながらも考えることを諦めたのか、呑気な顔でうはぁんに手を伸ばし始めた。

しかもその間にも、転居の説明は書類を交えながら進められ、

「ここまでで、何かご質問御座いますの？」

「ふむ、そうですね……ゴミの分別はどうなっていますか？」

「燃えるゴミと燃えないゴミで分けて頂きますの。燃えるゴミの日は火曜と土曜で、燃えないゴミの日は水曜と日曜ですわ。出来ればその日の朝になってから出してほしいですわ。街の景観を損なってしまうので……」

「ふむ、ちゃんと分けられているのは好ましいですね。ええ、それなら問題ありません」

「ご協力感謝致しますの。あっ、後は最近、夜になってから建物に落書きをしたり、男の子モンスターを襲う不審者が現われるとの情報がありまして、大丈夫だとは思いますがお気をつけて下さい」

「なんと……そのような卑怯な不届き者がいるとは……許せませんね。――よろしい、見つけたらこの私が退治しておきましょう」

……魔人なのに良い奴かっ!?

ゴミの分別を気にしたり、不審者を許せないと憤る正義の心を持っている。その様子を見ていると、本当にあのジルの魔人なのかと逆の疑いが生じてきた。演技というわけでもなさそうなのが何とも言えない。

レオンハルトが妙に気を緩めているのも気になる。なのでハンティは、レオンハルトに近づいて耳打ちするように、

「……ちょっと、本当にいいの？　あれ」

「……ああ、問題ない。ジークは、紳士だからな。それに――」

「それに？」

と、先を促して答えを待つが、しかしレオンハルトはそこで言葉を

止めて答えず、
「……何でも無い。とにかく、あいつは紳士だ。だから街に住まわせるくらい問題ない」
……何その謎の信頼……。
小言でのやり取りを終えてため息をつく。確かに悪い奴には見えないのだが、魔人というだけで妙に癖があるように感じてしまうのだ。
ハンティは、一応、ジークが何かを企んでいる可能性を鑑みて、しばらく警戒することを心に決めた。

……おお、これで私も、この文化的な街に住むことが叶うのか。
ジークは内心で喜ぶ。ダメ元ではあったが、来てお願いしてみて正解だった。
……これで、レオンハルト様から魔人としてのノウハウを付きっきりで教えて貰えることも叶います。
何しろジークは魔人になったばかりで、まだ右も左も分からないのだ。
レオンハルトの側で指導して貰えれば、魔人が受けるらしい新人教育も効率的に習うことが出来て、仕事のやり方がいち早く身につくだろう。
それに、レオンハルトから様々な文化や教養を習うことだって叶うし、畏れ多いが、個人的に親交を深めることも出来るかもしれない。
だからジークは喜んだ。レオンハルトの使徒であるキャロルから受け取った転居届などの書類にサインすると、
「――レオンハルト様。どうか新参者のこの私に、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いします」
「……ああ。こちらこそ、よろしく頼む」
差し出された手としっかりと握手を交わし――魔人ジークはレオンハルトシティに住み始めた。

インデックス・カラー

朝靄に濡れて雫を落とす葉の群れがある。
そこは木々の影の下、林、森の中であった。
大陸中央部、翔竜山を囲むようにあるのは大森林地帯。
いわゆる――カラーの森と呼ばれるその場所だ。
そしてその森の中でもかなり奥にいったところでは、朝日を受けて、動き出す水色の髪の美女達。
額に赤や青のクリスタルを持つ亜人種、カラーだった。
彼女達は早朝であることにも関わらず、機敏に動き出し、木造の建物から作業場へ移動し、そこに積まれた資材を手にして作業を始める。
彼女達が行うのは、自分達カラーが住居とする建物を増やすことだ。
「あれ？　こっちの資材ってどっちのだったっけ？」
「これはあっちよ。向こうの班が持っていくだろうから放って置いて。それより、今日は先に、先日壊れたところの補修から取り掛かるから」
「はーい！　分かりました親方ー！」
「誰が親方よ。なんか親方って言われると凄くむさい男みたいだからやめなさいっていつも言ってるでしょ？　何回言ったら分かるのかしら、貴方達は」
「はーい、お姉さまー！」
「それでいいのよ。――さて、それじゃあ始めるわよ」
建設現場のカラー達は簡単に朝食を取ると、親方――建築が得意なカラーのリーダー格の号令を受けて作業を始める。
この仕事はかなり重要なものなのだ。何しろ、カラーの隠れ里の居住人数を増やすためのものなのだから。
だからこそ、カラー達のリーダーであり、この隠れ里の初代女王となる予定の、インデックス・カラーは、柄じゃないと思いながらもそれを全力でこなすのだ。

長いストレートの髪をかき上げて、ややキリッとしたクールな印象を持ちながらも、童顔な顔立ちと、小柄で華奢、だけど胸だけは大きく育った、そんな身体を持つインデックスは、周囲のカラーに指示を出しながらも思うのだ。――何故自分が、と。

もっとも、今では納得しているものだが、当初は何故、という思いが強かった。しかし理由を聞いてみると、自分でも納得のいくものだったからリーダーを引き受けたに過ぎない。

何しろ、己はカラーの中でも強い。それに、あまり人の命令に従うのが好きじゃない。だからといって一人で生きていけるものでもないので、あまり他人と馴れ合わずにマイペースに過ごしていたのだが、いざ任されてみると、どうやら人に命令を下す方が得意で、やはり気分がいい。

他者を顎で扱き使うのは中々に良い気分だし、それでそれなりの充実感も得られる。上の立場になってみると人付き合いもそこまで悪いものではない。

仕事は確かに面倒だが、それについては四の五の言ってる場合ではないことはよく分かっている。カラーの立場とは、それほどに危ういものなのだ。

数百年前にあったというカラー王国と、人類との戦争で、カラーのクリスタルの効果が判明してからというもの、人間はカラー狩りなるものを行い、カラーを資源として見るようになった。

処女を奪い、犯し続けると、クリスタルの持つ魔力が高まる。それを抜いて、様々なマジックアイテムに使用することが出来るのだ。

そしてクリスタルを抜けば、カラーは死ぬ。それを分かっていながら、人間はカラーを狩ることをやめない。

もっとも、最近になってそれはなくなったが、それは人間がそれどころじゃないからであって、諦めたわけじゃないことは知っている。

だからインデックスは、人間が嫌いだし、基本的に、男も嫌いだ。野蛮で強欲、暴力的で、やることといえば女に乱暴することしか考えていない最低な生き物。

だからといって、滅びろとも思ってないし、積極的に殺しにいくも

のではない。
憎しみというよりは普通に嫌いで、単純に、関わりたくないだけだ。関わってもいいことがないというのは歴史が証明している。
それでも繁殖には人間の男が必要だというのだから何とも憂鬱な気分ではあるが。人間以外とでも出来ればいいのに、と思う。幾ら生まれるのがカラーとはいえ、人間の男で孕むなんて、考えただけでもゾッとする。必要なことだと理解はしているので、周囲にそれを押し付けようともしない。自分は嫌だ、と思うだけだ。繁殖は他のカラーに任せればいい。
とにかく、この隠れ里の設立は、カラー達を守るためにも重要で、手が抜けない大事な仕事だ。支援をしてくれる彼らの為にも、休むことはない。
そんなことを考えていると、
「――っと、調子はどう？」
「！　始祖様」
いきなり眼の前に現れた黒髪のカラーの姿に、一瞬驚くも直ぐに気を落ち着かせる。いつものことだからだ。
魔人の使徒であり、自分達カラーの始祖でもあるハンティは、この隠れ里のために支援をしてくれている者の一人だ。
そして、いつもはカラーのクライアと、あの方と一緒に現われるのだが――その姿がない。
「調子はいいけど……今日は一人なのかしら？」
「……後からくるよ」
「！　そ、そう……ならいいわ」
と、半目になったハンティの視線を無視して髪を無意識に弄る。ハンティとはここ何年かで友人になったというか、向こうがタメ口でいいと許可を出したので遠慮なく喋らせて貰っている。敬語は苦手だからだ。
「あっ、始祖様！」
「始祖様！　おはようございます！」
「はい、おはよう。今日も元気がいいね」

「手を止めちゃ駄目よ。挨拶はしていいけど」
「はーい！」
　すっかり顔馴染みになったハンティに群がりかけたカラー達を、先んじて注意しておく。カラーは結構ミーハーというか、割りと流されやすい部分もあるので、長の自分が気に留めておかなければならないのだ。
　そうして作業場の殆ど真ん中で、２人して会話を行う。しかし、
「……ということなので、別に帰ってもいいわよ？」
「こらこら。来たばっかでなんで帰らせるのよ」
「だって、態々皆の始祖様に手伝って貰うことなんてないもの。人間が森に入ってきてるわけでもないし」
「いや、なんかあるでしょ。ないわけないじゃん」
　と、ハンティが軽くツッコむように言うので、インデックスは顎に手を当てて考え込む。何か仕事があったかと、
「そうね……あ、なら私の家の庭で草むしりでもして貰おうかしら。最近また伸びてきてるのよね」
「思いっきり雑用でしょうがそれ!?」
「あら、瞬間移動が出来る始祖様なら一瞬でしょ？　中々お似合いな仕事だと思ったのだけどね」
　良いツッコミを返してくれたのでくすくすと笑みで返してみる。するといつも通り、遠慮のない言葉が来た。
「一応あたし、始祖なんだけどね……というか、自分の家の仕事くらい自分でやりなさいよ」
「私だって女王よ。それに、私は嫌よ。手が汚れるもの」
「代わりにあたしの手が汚れるんだけど？」
「いい女に、草むしりなんて似合わないわ」
「……滅茶苦茶馬鹿にされてる気がするんだけど気の所為かな？」
「気の所為よ」
　言い切って終わらせてやる。口では敵うまいと。
　こういう遠慮のないやり取りが出来るのが、ハンティの良いところだが、彼女も日頃から鍛えられてきたのか、たまに反撃が来る。今も、

ぐぬぬと悔しそうに怯んだ後に、軽く眉を立てて、
「……年下なんだからちょっとは年上を立てなさいよね！」
「若さって武器よね。特に女と畳は、新しいものの方が良いって言うし」
「……チビのくせに」
「守ってあげたくなるような可愛らしい小柄な体躯で、しかも出るところが出てる私と、方や長身だけど貧相な身体を持つ心の狭い女。一体どちらが魅力的かしら？」
「……私の方が強いでしょうが！」
「……それ、女として終わってる発言よハンティ。まるでゴリラの言い分。パワーゴリラならぬカラーゴリラね」
「……」
「痛っ！　痛い痛い痛い!!　ちょ、ちょっと！　暴力は駄目でしょう!?　口でやりあってるんだから口で――って、痛い痛い痛い!?　ちょ、謝るから抓らないでよ！」
　と、言ったところでようやく離してくれる。
　やはり脳筋のメスゴリラめ、と視線を向けると、何かを察したのかまた手を握ろうとしてきたので、さっと目を逸らす。ハンティがため息をつき、
「ほんっと、可愛くないわねぇ……」
「あら、よく聞こえなかったのだけど、私のこと、超可愛いって言った？」
「無敵かあんたは」
「美少女は無敵なのよ」
「口の減らない……」
　ハンティが諦めたように気勢を落とす。今日も勝った。自信満々に言い切ると、そのままハンティは建物の壁に背を預ける。
　そして肩を竦めると、
「あんまり毒舌過ぎると、友達無くすよ？」
「別に。ハンティだけでもいいわ。それに私は、カラーの長は少しくらい毒舌な方が良いって教えを守ってるだけだもの」

「ペールの教えじゃないそれ……いい加減なものもあるからあんまり真に受けない方がいいと思うけどね」
「知っているわ。でも、元長の教えってだけで説得力があるから、都合の良い時だけ使うのよ。保守的なカラーは大体、始祖様か、かつての偉人が言っていた、と言うと黙るから凄い楽よね」
そう告げてやるとハンティは一瞬間を挟む。そして苦笑し、
「……あんた、ほんといい性格してるよね」
「褒め言葉として受け取っておくわ。……それより、朝食用にサンドイッチがあるのだけど、食べる？」
「ん、食べる」
じゃあはい、と、手元の台に置いてあったバスケットを手渡す。
それを開き、ハンティは無造作にその中に一つを手に取り、口に含むと、
「……こういう気遣いは出来るのにねぇ……」
「友人を気遣うくらい当たり前よ。採れたての茶葉から淹れたお茶もあるけど、いるかしら？」
「頂戴」
差し出してきた手に、水筒を手渡す。作業現場において、水分補給は必須だ。
もっとも、使徒であるハンティには食事も水分補給もそこまで必要ないだろうが。味音痴だし。しかし、だからと言って摂らないでいいというわけでもない。
「まぁ、貴方達の住んでる場所の料理と比べたら、大したことないものだけど」
「……どうだろうね。でもまあ、あたし的には落ち着く味だよ」
「味音痴なのに？」
「味音痴でもよ」
と、即座に告げられ、少しやり返された気持ちになる。中々に響くものだ。
やはり自分の作ったものを褒められるというのは悪い気がしないな、と思いながら、

「……ありがとう。まあ、それはいいわ。それよりも、少し聞きたいことがあるのだけど」
「？　何さ、改まって」
　聞きにくいことでもあるため、一応前置きを置く。そしてあまり周囲には聞こえないように声を落として、
「最近、外の様子が凄いというか……悪い噂を聞くのだけど、それって本当なのかしら？」
「っ、それは……」
　問いを投げると、やはりハンティは言葉を迷わせ、露骨に表情を歪めた。どうにもこの優しい直情的な友人は、嘘や腹芸が微妙に苦手らしい。
　聞いておいて何だが、あまりその先を言わせたくはないな、とインデックスは先んじて言葉を作る。
「今の反応で大体分かったわ。まあそれと……別に私としては人間がどうなろうとどうでもいいわ。あの子たちを守れればね」
　と、作業を行うカラー達の方に顔を向けて言う。誰も彼もが、充実したいい空気を吸って、平和を謳歌していた。
　この光景が守れるならばそれでいいのだと、
「前の魔王もヤバいとは聞いていたけど、今代は更に凄いようね」
「……まぁ、そうだね。カラーは、大丈夫だと思うよ。もう結界も張ってるし」
　ハンティが気を取り直して頷き、結界のことを口にする。
　このカラーの隠れ里であるペンシルカウでは、森に結界や罠を仕掛けており、人間の侵入を防いでいる。結界のおかげで辿り着くことすらも難しいこの場所に加え、罠と、念のために防衛隊も組織しているのだ。
　後はカラーの女王――己だけが使える大規模な呪い。それがあれば、特に問題はないはずだと、インデックスは頷く。
「魔物も、あの人が指揮してるなら大丈夫でしょ？　貴方だっているのだし」
「……魔王に命令されなければ大丈夫だと思うよ。命令されたら、従

わざるを得ないからね……」
　魔王が持つという絶対命令権には、魔人や使徒であっても逆らえないという。何とも嫌な事実だった。
「魔人や使徒も、恵まれているようで嫌なものね。私だったら絶対に嫌よ。例え魔王だろうと命令されてそれに従うなんて、死んでもごめんだわ」
「……あはは。インデックス、命令されるの嫌いだからねぇ」
「そうよ。だから長になったようなものなのだし、誰であろうと命令されて言うことを聞くなんてことしないわ」
「あはは、頼もしい。あんたなら、そうかもね。魔王の命令も跳ね除けちゃいそうな感じするわ」
　当然よ、と不敵に笑みを浮かべてみせる。
　だがお互いに、現実は理解しながらの、おふざけのようなものだ。実際は難しいだろうと。
　しかしだからと言って、そんなことで暗くなることも、諦めることもない。今のはもしもの話ではあるし、大丈夫である可能性の方が高いのだ。
　何しろ、こっちには頼もしい支援者が付いている。ハンティやクライア、ペールやケッセルリンクといった元カラーの者達と――
「――すまない。少し遅れた」
「！」
　と、そんなことを考えていた時に、今度はその支援者がインデックス達の前に現れた。
　気配を消してきたのだろう。建物の影からすっと現れた魔人の姿に、インデックスが軽く目を見開く。
「……待っていたわ。レオンハルト様……」
「……そうか。少し、物資を運ぶのに手間がかかってな。遅くなってすまない」
　カラーの支援者である魔人――レオンハルト。
　この隠れ里のために物資を幾つも提供し、ハンティを遣わして様々な協力を行ってくれた、カラーにとって恩人とも言うべき魔人だ。

歴史的にも、何度もカラーを救っており、その使徒にも始祖様や、カラーの長であるペールなどが存在する。
それだけの人物なのだ。だから、と言うわけではないが、インデックスはレオンハルトとの距離を詰め、
「ふふ……なら、少しだけ付き合ってくれるかしら？」
「……何だ？」
「うわ……」
レオンハルトに近づいてその腕を取ると、ハンティが呆れたような声を上げたが、そちらは無視して、レオンハルトに告げる。それは、
「大したことじゃないわ。ちょっと私の部屋で、個人的に、親交を深めるだけよ」
「……それか」
「……男嫌いって言ってた癖に……」
同じ様な意味の問いかけを、レオンハルトとハンティからぶつけられ、インデックスは微笑む。意味深に、
「あら、カラーの女王と、カラー全体を何度も救って、それを支援してくれる親切な魔人。その２人が親交を深めるのは何もおかしなことじゃないわ。極めて自然な摂理よ」
「……いきなりか」
などとレオンハルトが言うので、インデックスは返答した。肯定しながら距離を更に縮め、
「ええ、いきなりよ。男と女の関係だもの。遠慮する必要はないでしょう？」
と、腕に自慢の胸を押し付けるようにしてやると、物凄く分かりにくいが、彼にとっては分かりやすい方の反応を示す。可愛い、と思いつつ目を細めていると、
「あー!?　レオンハルト様がいる！」
「ほんとだ！　レオンハルト様ー！」
「お、おはようございます！　そして、いつもありがとうございます！」
「きゃー！　レオンハルト様とお姉さまがくっついてるー！」

「大人の関係なのね……！」
さすがにレオンハルトの存在に気づいたカラー達が、声を跳ね上げて、目の色を変えて近づいてくる。始祖様よりも凄い反応だが、それも致し方ない。
……レオンハルト様は人気あるものね……。
カラーを救った魔人。それも超絶イケメンで、しかしに滅多やってこない人物だ。近頃余計に出会いが少なくなって、人間が嫌いになる子が増えたカラーにとっては、貴重な男性、異性の存在だ。
そしてインデックスにとっても、唯一認める男性だ。他の男性なら嫌だが、彼の子なら孕んでもいい。それくらいには想っている。
そんなレオンハルトを見上げて、微妙に困っているのを察したインデックスは、声を掛けた。
「人気者ね。このままだと騒ぎが起きそうだけど……どうするの？」
「……悪いが、ちょっと落ち着かせてくれ」
「わかったわ。――こら貴方達。レオンハルト様の迷惑になるでしょう？」
「！　インデックス様……」
息を吐いてこちらに告げた言葉を、インデックスは即座に実行に移す。女王の言葉に一応足を止めたカラー達に、間髪入れず次の言葉を繋いだ。
「今から私とレオンハルト様は、個人的かつ重要なお話があるから、貴方達は仕事を続けなさい」
「あーっ!?　ずるい！　お姉さま、そう言ってお仕事サボっていちゃつく気でしょ！」
「女王だからって独り占めはよくない！　職権乱用はんたーい！」
バレまくりで、そんな声が上がる始末ではあったが、インデックスは怯まずに、
「失礼ね。ちゃんと真面目なお仕事の話よ。何もしないから貴方達も仕事に戻りなさい」
「えっ、そうなの……？」
「だったら仕方ないけど……それにしてもズルいなぁ……」

そう言うと、渋々だが従って仕事に戻ってくれた。彼女達が後ろ髪を引かれるような面持ちで戻っていき、ようやく離れたところで、インデックスはレオンハルトに向き直ると、
「――さあ、これで邪魔者はいなくなったわ。私の部屋に行きましょう」
「……」
「あんた、何普通に嘘ついてんのさ!?」
「女は嘘をつく生き物よ。男絡みでは特にね」
レオンハルトが真顔になり、ハンティがツッコんできた。しかもハンティの指摘は少し遡り、
「しかもあんた、あんだけ言っといて普通に命令聞いてるし」
「確かにそう言ったけど、何事にも例外は付き物なのよ。私は人の命令を聞くのは大嫌いだけど、一つだけ例外があるわ」
女としてのものでもあるが、と言葉を繋げる。
「――いい女は、惚れた男にだけは従順になるものよ」
「……あんた、それ言ってて恥ずかしくないわけ?」
ハンティが微妙な表情で言う。こういったことに免疫がない上に、主のそういう部分は見たくない、といった表情だろう。親の恋愛事情を見るような感覚に違いない。
しかしだからといって自重はしないと、インデックスは堂々と告げた。
「好きだから好きと言って何が悪いのかしら。時間は有限だし、特に、今はこんな世の中よ。積極的にいかないと、恋人はおろか、出会いすら訪れないわ」
「……まあ、逞しいのはいいことだ」
「！　ほら、見なさい。貴方の主はこうやって褒めてくれているわ」
「あんたね……」
不意にレオンハルトから褒められたところで、締まりのない表情を見せそうになってしまったので、ハンティを責めながら顔を後ろに向けて誤魔化す。あまりこういった顔は見られたくないものだ。プライド的に。

ハンティが何度目かの呆れた声をあげると、レオンハルトもそこでようやく話に入れると、真面目な声を発し、
「それは構わんが、後にするぞ。先に、言っておかないといけないこともあるしな」
「言っておくこと？」
「何かしら？」
２人してレオンハルトに疑問を向けると、レオンハルトは神妙な顔で頷いた。
「カラーには影響がないとは思うが……明日にでも、人間牧場の稼働が始まる。そのことについて、一応な」
「っ……」
「それは……また随分と大変そうね」
レオンハルトの腕に抱きつきながらも、ちらりとハンティを見ると、露骨に眉を立てた後に、憂うような表情を見せていた。
この始祖様は、随分と優しい。カラーだけではなく、魔物や人間にも同情を見せ、その未来を憂いて、悲しんでみせるのだ。
インデックスにとっては、全く理解出来ない価値観だが、その優しいところは、とても好ましい部分だ。自分にはないからこそ、余計にそう思う。
他種族に見せる優しさなんてない。受けてきた仕打ちを考えるとそうはならないし、何もなくても他人を気遣う余裕はない。自分とその周囲を守るだけでも、この世は苦労するのだ。
だからインデックスは、ハンティのその想いに協力してはやれない。
だが、そのことで悩んでいる友人を気遣うくらいなら、行うことが出来る。自分の周囲の一人であるのだし、それくらいはやってみせなければ友人ではなくなってしまう。
だから、インデックスは声を発した。
「……まあ、何かあれば協力するわ。ハンティも、疲れたらいつでもここに来なさい。ここは貴方の故郷なのだしね。来たらお茶くらいは出してあげるわ」

「……あんた、ほんと気遣い出来るよね」
「見抜かれているようではまだまだよ」
　気遣いで言葉を掛けたと見抜かれていることを、インデックスは僅かに不服に思いながらも、微笑を浮かべてみせる。そして敢えて茶化すように、
「まあ貴方に恩を売っておくことに越したことはないわね。私も、引退したらそっちに行こうかと思うし」
「は、はぁ!?　あんたマジで言ってるの!?」
「マジよ。大マジ。レオンハルト様にも告げてあるわ。ハンティも、友人の私が近くにいた方が嬉しいでしょ？」
「……い、いや、そうかも、だけど……」
　ハンティが急な言葉に戸惑っているところに、インデックスは追い打ちを掛けた。小悪魔的な笑みとともに、
「そして、あまりにも脳筋で色っぽい話がないカラーゴリラの貴方が、恋人を見つけられるように色々と教えてあげるわ。女子力とか」
「……ペールじゃないんだから、そういうこと言わないでくれる？」
　その手の話題に辟易してるのか、心底嫌そうな表情を浮かべた。そろそろ、気が紛れたきただろうかと、
「私はペールのこと、尊敬しているわ。あれは巫山戯ているようで、結構いい女よ」
「この場にペールがいたら死ぬほど調子に乗りそうな言葉だね……」
「――ところがどっこい！　ペールちゃんはここにいまぁす！」
「うわっ、いつの間に!?」
「さっきからいましたよーう？　もう始祖様ったら、私はそれくらいで調子の乗りませんよ。だって――いい女なのは本当のことですから！　あ、でもありがとうございますね、インデックスさん」
「どういたしまして。私も思ったことを言っただけだからお礼はいらないわ」
　と、不意に現れたペールにハンティが驚く。よっぽど気を抜いていたのか、それともペールの気配断ちが凄かったのか。
　とにかく、気は紛れたようで、安心していると、

「……悪いな、インデックス」
「っ……あら、なんのことかしら？」
不意に頭上から声が掛けられてしまう。分かってる、と言ったような表情で、
「何、友人想いな奴を褒めようと思っただけだ」
「……そう。一体、誰のことかしら」
「ふっ……誰だろうな」
軽い笑みとともに、頭を撫でられ、インデックスはビクッと身体を反応させそうになるのを何とか留めた。そしてレオンハルトを見上げて、ジトッとした目を思うのは、
……あざとい……。
こういうのが嫌に感じないから困るのだ。普通なら、頭を撫でるなど、子供扱いされているようだし、そうでなくとも絶対に許さないのだが、
……惚れた弱みよね。
あまりにもどうしようもない理由を思い、インデックスは更に騒ぎ出すペールとハンティを見て、企みを、改めて心に刻み込んだ。
……ふふ、確かに、引退したらレオンハルト様の城に行くとは言ったけれど……。
だが、それをどの様に叶えるかまでは口にしていない。
単純に、彼のメイドとなる方法もあるが、その程度では満足する気はない。
……駆け上がってみせるわ。今に見てなさい。
今はただ、大勢の中の一人に過ぎないが、女とはそれを許容しても、好きな人の一番になりたいと思うものだ。
大勢が諦めるであろう競争率の高いその位置を、インデックスは諦めはしないのだと、彼を抱きしめる力を強くした。

人間牧場

――ＧＬ２年。

新たな時代が始まって一年。魔王ジルの国狩りによって全ての人類国家が壊滅した。

人類圏という呼称は消滅し、人類文明も崩壊。大陸は魔物の天下となり、名実ともに大陸の支配者となったジルは、直ぐに人類の奴隷化を宣言した。

大陸各地に人間を大量収容出来る施設を建設し、その場所に魔軍を使って各地の人間達を送り集めた。

その施設は、これからこの時代を生きる人間にとっては当たり前のものであり、人類の暗黒時代を象徴する悪名高い施設。

その名は――人間牧場という。

「――おら、きりきり歩けーーー！」

「もたもたしてんじゃねーぞ!!」

「脱走しようとした奴は鞭打ち百回の刑だ！　今日中に到着出来なかったらもっとひでぇことになるからな！　さっさと歩け！」

「っ……はぁ、はぁ……！」

平原を歩く人間の集団と、それを囲む魔物兵の部隊がそこにある。

魔物兵達の声を受けて急ぐようになった人間達だが、その足元は既にボロボロで、中には出血している者すらいた。

彼らは今日中にとある目的地に辿り着くようにと、平原を素足で、何時間も歩くように強制されていた。

だがそれを拒もうとする人間はいない。拒んでも無意味だからだ。

それどころか、もっと酷い目に遭わされる。その可能性があるのではなく、確実にだ。

何故なら既にここに来るまでに、多くの人間が足並みを乱した罰として、凄惨な拷問を受けており、周囲の人間はそれを目の当たりにしているのだ。

反抗しようにも、魔物兵達は並の人間と比べて何倍も強い。しか

も、数の上でも向こうの方が上なのだから、勝ち目がないのだ。仮に魔物兵を倒せる人間がいたとしても、それより恐ろしく強大な存在もいる。ある程度戦える国の兵士などは皆、国狩りで死んだか、心を折られて廃人になり、既にこの世を去っていた。

民間人が魔物に抵抗出来るはずもなく、遂にはこの日を迎えたのだ。人類の暗黒時代、その本格的な始まりとなる施設が、稼働する日に。

人間の集団は、やがて、平原の先にあるものを捉えて一様に反応を見せる。

最初に見えてきたのは――柵だった。

人間の誰もがそれを見たことがある。特に、畜産や農業を営んでいる農村部の人間にとっては馴染み深いものであった。畜産用のうしなどを集めておくために、そして脱走を防止するために建てられる柵。

ただ彼らと知ってるものと違うところといえば、その柵は、こちらの背の倍くらいに高く、そして、棘のようなものが生えた鉄線が巻きつけられていることであった。

そしてその鉄線には、早くも赤い染みがこびりついていた。

しかし、人間達はそれに気づきはしたものの、それに注視することはなかった。

何故なら次に見えてきたものに、誰もが引き攣った青褪めた顔で、注目したからだ。

それは柵の向こうに、幾つも見えた。

「いや〟ああぁああああああァあッ――！」

「やべ、やめ〟で、おねが、だずげで……」

「ぐぎっ、あぐっ、……うぶッ……う、ぁ……」

そこにいたのは――人間であって、人間の扱いをされていない者達だった。

それを目撃した誰かが、ポツリと、無意識に呟く。

――アレは何だ？

アレ、と評するしかない。このような鬼畜の所業を、何と形容して

いいか分からない。
そこにいたのは自分達と同じ人間。おそらくはこの集団よりも多くの数が、その柵の囲いの内側に存在する。
そして誰もが、視線を向けることを憚られる様な、凄惨な虐待を、魔物兵達から受けていた。
「ははは！　おらっ！　もっと良い声で鳴きやがれ！」
「今日は記念すべき日だからな！　まだまだやめねぇぞ！」
「安心しろ！　後数時間もすれば休憩もあるし、飯もちゃんと食わしてやる！　――その後でもうワンセット拷問だけどな！」
その虐待、暴行を行う魔物兵達の声は、人間達の苦痛に満ちた悲鳴とは反比例して、軽やかなものだった。その手に人間を苦しめるために作られた棘付きの棒や、鞭、巨大な焼きごてなど、様々な拷問器具を用意し、それらを人間達に使用していく。何も持たない者も、素手で人間を殴りつけ、あるいは集団で女達を犯していく。
しかしその虐待に、規則的な動きはなかった。
何故ならば、魔物達は自分の好きなことをやっているに過ぎないからだ。
彼らは魔王からの勅命で、殺さない限りはどんなことをしてもいいとお墨付きを貰っている。
故に運営している魔人の方針にさえ従えば、ここの人間には何をしても構わない。
そしてこの時間は、全ての施設において共通する自由時間だ。
人間達を広めの囲いの中で放し飼いにし、好きにしても良いという時間。
だが、魔物達も人間達に何をしてもいい時間でもあり、故に人間の自由時間とは言うものの、彼らは稼働初日で興奮した魔物の相手で手一杯であり、自由を楽しむ余裕などなかった。
そこには人権など存在しない。その施設には、僅かな救いすら存在しない。
命の保証をされてしまっているこの世の地獄。その名が、
「へへへ……あれがお前たちが入る――人間牧場だ」

「人間……牧場……」
一体の魔物隊長がニヤつきながら告げた言葉に、幾人かが反応する。
その名の意味は、人間を魔物の奴隷にするという最悪のものだった。
まるで人間が、うしなどの家畜を飼うように。魔物が人間を飼うのだ。
人類が負けた意味。魔物が天下を取ることとは、下等な種族である人間を、名実ともに下に置くこと。
即ち、その人間牧場では――否、この世では、永遠の苦しみだけが人間に齎される。
心の底から死を願うような絶望の淵にだけ、死というこの世から離れる救いがある。そんなものだけが、救いとなる世界。
狂っている。誰もが明確にその語句を思い浮かべはしないものの、無意識にそう感じた。
これからはこれが当たり前の世の中となる。人間の扱いは、魔物の下であり、苦しめられることこそが当然の在り方となる。
それはある意味、当たり前だと思っていれば多少の救いとはなるが、
「う……あ……！」
「嫌ぁあああああああああッ！」
「嫌だ……嫌だ……誰か助けてくれ……！」
この時代を、前時代から生きる彼らにとっては、まだ当たり前ではなかった。
だからこそ、彼らはこれからのことを思い絶望し、そして狂乱する。
「う、ひゃあああぁぁぁぁぁあっ、うひぃぁぁぁあああああああ――!!!」
「あ、こら！」
一人の人間の男が奇声を発しながら人間牧場の反対側に猛然と走り出した。
当然、直ぐに魔物兵に殴られて地面に転がり、捕らえられた。それ

は当然の帰結だ。
だが、その程度の想像が働かないか、もはやどうなっても構わないという思考の元では、思いもよらない行動に出る。逆らったら死ぬかも、などとはもはや考えつかないか、頭から消えている。
目先の狂気に当てられた人間の暴走。それは、他の人間にも伝播した。
「うぁあああああッ！」
「いや、嫌！　嫌ああああああ！」
「っ、やっぱりこうなったか！　総員！　鎮圧しろ！」
「はっ！　――おら、大人しくしやがれ！」
魔物将軍の号令を受けて、魔物隊長と魔物兵達が一斉に人間達を殴りつけるなどして暴れているところを抑え込む。二度目の収容作業となった魔物将軍にとって、これらは一度経験したものであり、上司によって予想されていたものでもあった。
凄惨すぎる光景を、これから自分達に降りかかると理解した時に、人間がパニック状態にならない保障はない。
魔物に逆らっても無駄だ、という当たり前の結果すら超越して、彼らは半ば狂乱的に逆らってみせることすらある。今の彼らには〝こうしたらどうなる〟という思考が一時的に存在していないのだ。
追い詰められた人間はこういった無謀ともいえる行動を起こすことがあるが、そのなりふり構わない行動が、結果を掴むことも稀に起り得る。
人間の意外性、愚かとも称される行動だが、馬鹿には出来ない。
「っ、暴れるなっての！」
「くそっ、面倒な……！」
「反抗が激しい者は気絶させてでも抑え込め！　誰一人逃がすな！」
事実、魔物兵達は意外にも苦戦していた。
戦闘になっているわけでもなければ、命の危険があるわけでもない。一個軍二万に対し、約二千の人間を連れているのだ。しかも相手は兵士ではなく、抵抗といっても無茶苦茶に走って、形にもなっていない暴力で抵抗するだけ。生まれながらの戦闘種族であり、魔物将軍

に率いられた魔軍に勝てるはずもない。
だが、殺さずに捕らえる、となると多少は苦戦はする。
それは人間が興奮した家畜を取り押さえる光景に似ていた。
殺すだけなら一瞬だが、人間を殺してはならない。魔物達にとって、これからの人間は魔物を愉しませるための資源であり、何より魔王の命令でもある。これから拷問を行い、いずれは死を願うとしても、それまでは殺してはならないのだ。
二千の人間が狂乱して暴徒と化すと、幾ら民間人ばかりとはいえ、鎮圧に多少の時間と手間が掛かる。中には軽傷ではあるが、怪我をしてしまった魔物兵すらいるほどだ。
収容する段階、そして稼働初期はこういったなりふり構わない反抗が予想される――彼らの上司が言った通りであった。
心が折れて、それが当然となり、次の世代となってくると反抗も無くなるだろうが、それまでは気をつける必要がある。
だからこそ、人間牧場には運営、管理用の魔軍、魔物兵が最低でも１０万は詰めている。稼働初日の現在では、各魔人の軍が丸々その管理と作業を行っていた。
だがその甲斐あって、鎮圧作業も終わると、ようやく人間達を牧場に収容する。多くの傷を作りながら再び歩かされた人間達は、巨大な門を目の前にする
「む――来たか。少し暴れていたようだな」
「はっ！　申し訳ありません！」
収容作業に従事していた魔物将軍は、門の前で複数の魔物将軍や魔物隊長と話す赤い軍服の中年に敬礼を返す。
人間達はそれを一瞬、同じ人間かと目を凝らしたが、それは一瞬、濃い魔の気配を感じて、誰もが震える。知っている者には明らかであったが――彼は使徒であった。
「構わない。抵抗は予想されていたことだ。無事鎮圧したのなら予定通りだ」
「はっ、誰一人逃してはおりません、リー様」
「よし。ならば迅速に収容に行う。――門を開け」

リー、と呼ばれた使徒の声に反応して、その巨大な門がゆっくりと左右に開いていく。
それは人間達にとって、地獄への入り口に他ならなかった。
だが、その地獄への誘いを止めることの出来るものはどこにもいない。もはや彼らに出来るのは、祈ることだけだ。
自分や周囲の人間を想い、もはやどう願っていいのかも分からない祈りを、人間達は絶望に満ちる心の中で行った。

その人間牧場は、各地で建設、運営される人間牧場のプロトタイプかつ、基本となるものとして魔王城の直ぐ近くに建てられた。
故に、稼働初日にその牧場を視察する者がいるのは当然だった。
「――では、次はこちらに」
「くくく……ああ」
人間牧場の中央部に建てられた管理を行う魔物用の建物の中に、人間牧場計画の中心人物である二者はいた。
人間を憎悪し、人間に苦痛を与えることだけに魔王としての全能力を使用し、人間を奴隷化、家畜とすることを配下に命じた魔王ジル。
魔王の命令を速やかに実行しようと人間牧場の草案を計画し、実際に魔軍を動かして各地に人間牧場を建てさせ、適切な運営を行うように指導している魔人レオンハルト。
魔物達にとって記念すべき日である牧場の稼働初日に、レオンハルトはジルの命を受けて牧場を視察に訪れていた。
魔物兵達が詰める庁舎を案内した後、レオンハルトは順番に施設の案内を行うのだ。
「基本的な一日の流れは以前にも書面にてお伝えしましたように、生命維持の為、一日二回の餌やりを朝と夜。一日の多くは自由時間で、魔物達にある程度の虐待を義務付けていますが……まあこれは義務にしなくても好きにするでしょう。後は〝人うし〟の選別と、それを可愛がるための自由時間、人口増加の為の性交の強制が義務付けられています。各牧場の運営責任者に魔人を置いており、独自の裁量を与

えていますので、各牧場によって方針や一日の流れに多少の差異はありますが、これらに関しては共通のルールとして執り行っています」
ジルを先導して歩きながら、レオンハルトは場の繋ぎとして、人間牧場についての説明を簡単に行っていく。実際、現場では惨たらしい光景が広がっているだろうが、書面上や口頭で口にする分には悲惨さが想像し辛い。それが良いか悪いかは分からないが、ジルはそれを聞いて、やはり機嫌良さそうに口の端を歪めていた。
それを後ろ目に確認しながら、レオンハルトは説明を続ける。
「……現状では急激な状況の悪化によって、狂ってしまう人間や早期に死を望む者が多く、多少の抵抗が起きているようですが――おおよそ百年も経てば、自分達の扱いに疑問は持たなくなり、狂気に陥る者も減っていくでしょう。人うしにも一定の効果が見込める他、抵抗に限れば数年から数十年で少なくなるのでは、という試算が出ています」
「……くく、なるほど。多少の差異とは？」
「魔人によってそれぞれではありますが……私のところですと、選別による工夫を少々。後は各々の欲望に沿ったものが、傾向としては多いようです。それらについても、まとめて報告させます」
と、告げるとジルは多少間を取り、思考した後に、
「一々魔人を呼び集める必要はない。お前が把握して私に報告しろ」
「……はっ、畏まりました。では、大まかな説明は以上となります」
牧場についての報告は、後でお前が行えと、ジルは言う。魔人を呼び寄せる必要はないと。
その意味を考えると少し憂鬱だが、レオンハルトは仕方のないことだとそれを諦める。ジルはそもそも、配下の魔人に対して、酷く素っ気なく、基本的には無言で魔人の言葉を聞くか、短い言葉での命令や、会話も、一方的な冷たい言葉を掛けるくらいだ。よく喋るのは人間を虐めていて機嫌が良い時か、レオンハルト相手の時くらいである。一応、側近であり、ジルに心から忠誠を誓っているノスも、ジルに言わせれば〝便利な手駒〟くらいのもので、特に何とも思っていないのだからどうしようもない。

レオンハルトとしては正直、ノスがジルの為に働きたがっているのだから色んなことを押しつけてしまいたいのだが、今日も人間牧場の視察にと一緒に来るように命令されたのは自分であり、ノスは自分が管理する人間牧場に向かった。

他の魔人もそれぞれ、自分が担当する人間牧場を視察しているはずだが……果たして何人がそれを真面目に行っているのか。

いや、さすがに稼働初日くらいは興味から一応見に来ることくらいはするだろうが、殆どの魔人は、配下の魔物達に任せて好き勝手し始めるだろう。レキシントンなどが真面目に人間牧場の運営を行うわけもない。人間を苦しめること自体は、好き好んでやる者もいるだろうが、それは個人的な趣味の話であり、結果的に運営方針が変わるに過ぎない。

なのでそれっぽく説明してはいるのものの、かなりいい加減なものだ。把握して報告する際は、嘘はつかずにまたそれっぽく言う必要があるだろう。

もっとも、人間が苦しんでいることには間違いないのだから問題はないのだが。問題があるとすれば、レオンハルトが担当している場所の多さだ。

各地にある人間牧場の数は、魔人の総数と合わせて２４箇所になったが、魔人の数が足りていないため、魔人が直接担当している牧場は１２箇所しかない。残りの半分は、レオンハルトが一応の責任者として兼任し、現地の魔物将軍などに任せている。つまりはレオンハルト直営の牧場も合わせて、全部で１３箇所もの牧場を運営しなければならない。

実際は配下に命令し、問題が起こった時に対処すればいいだけの単純作業なのだが、これだけ数があるとやはり書類や報告だけでもそれなりの数に上る。新しく魔人が誕生すれば空いている牧場の担当に命じてしまえばいいのだが、結局、人間牧場全体の報告は自分のところに上がってくるため、多少の変化しか感じられないだろう。

だが、真面目な一部の魔人は自ら牧場運営を行ってくれるだろうから、それだけが救いだ。それ以外はこちらから関わっていかなければ

ならない。
事務仕事だけ、という何とも面倒過ぎる仕事だ。人間を家畜とする酪農業の経営者など、自分の性に合わない。魔物にとっては平和な世界だが、これなら争いに満ちた方がマシかもな、と心の中だけで言葉を作る。人間にとっても、魔物にとっても。
それに何より、牧場の光景は中々に気分が悪い。今更、虐待や暴行を目にしたところでそれを割り切るくらいのことは出来るつもりだが――なるほど、これは確かに最悪だ。
「あ〝あ〝あ〝ッ！　いや〝ぁあああぁあああああッ！　あ〝がッ！　ひぎっ……」
「ふん……たかが乳房を千切っただけで大袈裟な……くく、次はもう片方も捻りきってやろう」
牧場の敷地内、人間を集めている外の草原に出たジルは、そこにいた適当な人間を捕まえて、虐待を行った。偶然捕まった女性は、おそらく今この世で最も運が悪く、地獄を見る人間だろう。
ジルは魔力で作った棘を女性の足に突き刺し、地面に縫い付けるようにすると、裸に剥いた女性の乳房に手を伸ばし、強引に力で千切り取った。
女性が悲鳴を上げる中、それを見ていた周りの人間は恐ろしさの余りにそこから離れるか、その場で腰を抜かして嘔吐するか、黄色い染みを股間に作る。
虐待や暴行に勤しんでいた魔物兵ですら、魔王の恐ろしさに平服するしかない。こちらに危害が来る可能性は低いが、ゼロではないのだ。機嫌を損ねないように、殺してしまうことにだけ注意して人間への虐待への手を強め、魔王への忠誠を示す。
その虐待や暴行も、まだまだ序の口に過ぎない。ここまでならこれまで戦争の中で、人間へ行った拷問や暴行と変わらない。
これが何年も、何十年も生かされながら続けられ、子供や孫が出来ても一緒に虐待や暴行を受け、延々と続けられる。終わりはない。死ぬ時だけが救いだ。それ以外は大人も子供も老人も、男も女も平等に、責め苦を受ける。

そしてやがて、彼らはその扱いに疑問を抱かなくなり、苦しめられることが人として当たり前なのだと思うようになる。
反吐が出る行為だが、それもある意味では幸福かもしれない。日常から叩き落とされた今の人間に比べれば、幸福を知らないだけ幸福だ。
そして狂うことすら許されない制度もある。それが、
「くくく……そうだ。貴様を、最初の〝人うし〟にしてやろう。本来は人間達に自ら選ばせるところだが、私からの特別賞だ。受け取るがいい」
「ッ……いぎっ――あ〟ああ〟ああ〟ああっっっ!!」
ジルが歪んだ笑みでそう告げると、女の足を無理矢理切断した。
続いて反対の足。右腕、左腕。四肢を切断すると、ジルはその女の顔を掴み、無理矢理口を開けさせ、
「……さて、この辺りか？」
「ッッ！　あ〟ーーーーッ！　あ〟――！」
「！　くくく……！　どうやら成功したようだな……？」
その舌を千切り、地面に投げ捨てる。
四肢が無くなり、舌も死なない程度に切られた女は、満足に歩くどころか立つことも出来ずに、辛うじて残っている肘の先と膝の先だけを使って地面の上で藻掻く。
「あ〟ーーーー！　う〟ーーーー……！　うあ〟ーーーーー……っ！」
しかもその口からは舌が切られたことで満足に言葉を発することが出来ずに、母音だけを使ったような呻き声が鳴り響く。
「人うしの完成だな。……さて、記念すべき一頭目を殺すのは酷というものだろう。行くぞ、レオンハルト」
「……はっ」
残酷な笑みを見せてジルは告げる。人うしが生まれたと。
これが人間牧場における最下級の身分――〝人うし〟。これがこの人間牧場システムの一つの肝と言ってもいい。
日々における拷問や暴行、それらは当然、人間が狂ってしまう可能性が非常に高い。

何かしらの楽しみや安息があればこそ、平静というものは保てるのだ。生き地獄とは言うが、本当に絶え間ない拷問を行ってしまえば、死ぬよりも早く精神が壊れる。

故に休息も食事も与えるし、楽しみだって与える。その楽しみこそが、人うしなのだ。

人うしは人間よりも下に置かれた身分であり、彼らの愛玩動物だ。魔物達は人間に何をやってもよいが、同様に、人間も人うしに対しては何をやっても許される。

そして人うしの選出には――人間達が、自分達で誰をひと牛にするかを選ばせるのだ。

こうすることで、彼らの中には醜い欲望や打算、保身など様々な感情、意識が生まれる。嫌いな人間や、好きにしたい人間などを選ぼうとする。そうして実際にそうさせることで、日々の楽しみを作るのだ。

狂ってしまうことの防止。そのための策である人うしだが、これを考えたジルの発想は、正に最悪と言ってもいい。

何故ならこの人うしには、人間牧場に置ける唯一の救いである死が、どう足掻いても与えられないのだ。何故なら、

「あ゛ーーー、あ゛ー……」

人うしは――言葉を発せない。

つまり、殺してほしいと懇願することが出来ない。

人間への殺害許可が出るのは、殺してくれと願い出たものだけだ。

その意志を示すには当然、言葉でそれを示す必要がある。そして、普通の人間にはその最後の一線を願う権利だけは与えられるが、最下級の身分ともなるとそれすら奪われる。

正真正銘の生き地獄であり、人うしはこれから、同じ人間にすら苦痛を与えられる。それが自然死するまで、ずっと続く。

正に最悪だ。魔物達も若干引き気味になり、魔物兵や他の魔人による多くの凄惨な拷問を見てきたレオンハルトであっても、さすがに眉根を寄せてしまう。

出来る限り苦痛を与えようとするジルの治世。その象徴ともいえ

る人間牧場は、出来るだけ多くの人間を、効率的に苦しめるために適したものであった。
「う゛ー……あ゛ー、あ゛ー……」
「……」
レオンハルトは、その最初に人うしにされた女に視線を向けたところで、偶然にも目が合った。
そして言葉にならない声を上げながら何かを訴える女に、舌打ちしそうになるのを抑える。何も考えずに剣を抜いてやりたくなるが、それを抑え、レオンハルトはそこから目を背けてジルの背に続く。
周囲では、人間が相変わらず苦しめられる光景と、悲鳴の連続。地獄の坩堝ともいえる牧場の敷地内を、ジルは憎悪に満ちた笑みを浮かべながら闊歩し、時折気まぐれに人間に拷問を行い、人間を苦しめ続ける。
レオンハルトはその後ろに黙って続いていたが、不意にジルがこちらを向いて、
「レオンハルト……よく私の命令に従って、ここまでのものを作り上げてくれたな……？」
と、笑み付きで告げられる言葉は、こちらを称賛するような抑揚の言葉。
レオンハルトは感情を殺しながら粛々と頷き、
「……は、恐れ入ります。ですが、ジル様が提言したからこその今の世であるかと」
「くく、謙遜するな。お前には、後で褒美をやる。この人間牧場を作り上げた褒美をな……」
「……！」
褒美、と言われ、レオンハルトは僅かに心を跳ね上げさせる。
その意味は分かる。だが、重要なのはそこではない。
……褒美、だと？　――はっ、なんだそれは。
レオンハルトは思わず笑ってしまいそうになる。どんな冗談だと。
この地獄を作り上げた己に降りかかるものが、罰ではなく褒美なのかと。

――つくづく冗談の様な世の中だ。
しかもその褒美は、この地獄を提案し、己に命令した張本人である彼女と、淫蕩に耽ることである。
もし善良な神がいるならば、間違いなく天罰が下るほどの悪行だ。
しかしそうはならない。神は死なず、この世に地獄が顕現したことを喜び、自分達に祝福を与える。地獄の様な苦しみを与えられ、更には殺してくれと懇願する女に背を向けた直後に、己は褒美を与えられるという。
レオンハルトは拳を強く握りしめながら、しかし、丁寧にジルへと礼をしてみせる。
「……ありがたく、頂戴致します」
「ああ、受け取れ。たっぷりと、私の身体をな」
「……はい。光栄です」
その気分は、今まで生きてきた中でも――最悪のものだった。

魔人メディウサ

大陸各地で稼働を始めた人間牧場。
連鎖する絶望が大陸を彩り、血の匂いが充満する様は、人類にとって文字通り、具現化した悪夢そのものであり、陰鬱とした暗い気が、現実を侵食していく。
だが一方で、魔物達にとっては紛れもない黄金時代の到来を意味していた。
大陸は魔物達によって支配され、かつての人類圏であった地域を、魔物達は堂々と闊歩する。人間の街があるからと迷宮に籠もっていた魔物達の多くも這い出るようにして大陸中を埋め尽くし、好き勝手過ごし始めた。
戦争のない平和な時代となり、長年人間と戦ってきた魔軍も人類を管理するための平時ともいえる任務に従事するようになった。
大規模な動員は必要なく、人間牧場を管理、防衛するために彼らは働くようになる。仕事は無くならないが、それは平和的かつ牧歌的な日常の具現だった。
朝起きて、朝食を摂り、同僚と談笑しながら牧場に出勤し、人間達の餌やりを行う。それが終われば人間達を苦しめるための虐待や暴行を行うなりして、放置。時折自由にさせては休憩を取らせたり、人うしを可愛がるための時間を与えたりするなどして、きちんと狂わない様に温情を見せる。そして人間を増やすためにも性交を強要させる時間も与えるのだから、人間にとっても良い時間であるだろうと。
一日三回交代の当番に従事し、それが終われば魔物達は自由時間。牧場で引き続き人間を自主的に虐めたり、酒を飲んだり、野良の人間を狩りに出かけたりする。休日も大体このような感じであり、誰もが勝利の美酒を味わっていた。
そして、同じ様に大陸中で暴れまわっていた魔人も、魔王からの命令を一つだけ残して自由に行動を始めた。
その命令とは、人間牧場の責任者として一応の管理を行うこと。
とはいえ、この仕事は配下である魔物将軍などに任せておけばよい

ので、特にやることはない。精々人間を苦しめるために己の欲望に忠実になることくらいである。
「人間牧場ねぇ。そんなのに時間を割いている暇はないけど……そうだな。実験に使う人間を幾らでも調達出来るのは便利かな」
ある者は、己の目的の為の人体実験に、人間を調達したり、
「……」
ある者は、牧場を配下に任せて不干渉を貫いたり、
「飽きてきたのぉ。……活きのいい人間でも探しに、狩りにでも出かけるか！」
またある者は、牧場運営を部下に丸投げしながら、最初は好き勝手女を犯していたが、段々とそれに飽きて野良人間狩りに出向くようになった。
そんな中、この人間牧場というシステムを、誰よりも悦び、堪能している者がいた。
「――ひあっ、ぎ、うぐッ、あああッ！　うあああああああああッ!!」
女の狂ったような悲鳴が響き渡り、死臭で充満した室内がある。
そこは貴族の屋敷、一番偉い人間が住むような大きな部屋で、その部屋だけで生きるのに大体のことは済ませることが出来る生活空間だ。
だがその空間には、幾つかの家具や調度品とは別に、地面に転がった多くのモノが存在した。それらが死臭を発生させているのだが、現在進行系で響いている悲鳴は、中央にある天蓋付きの赤いベッドの上から聞こえた。
そこに見えるのは、二つの影だ。
「んっ、はぁ……うふふ、中々良い声で鳴くじゃない。ん、いいわね、もっと愉しめそう……ッ！」
「いやッ、あがっ、あっ、たず、ぎィっ！　ふぐッ！　やぁあああああああッ！　うがッ！」
聴こえるのは愉悦に満ちた女の声と、また別の女の絶叫。
ベッドの上では、一体の魔人が、人間の美少女を虐めていた。

２メートル程の長身と、黒のストレートの髪を靡かせたスタイルの良いその魔人は、美人と言って差し支えのない容姿を持っていた。
しかし、その手足は猛禽類を思わせる異形のもので、口から覗く舌は、蛇のように細長いもの。
そして恥丘からは、白の大蛇が生えており、その大蛇は、人間の少女の中に下から抉るように侵入し、中を抽送している。
しかしそれはそんな甘いものではなく、中に入った蛇は膣を食い荒らして貫通し、腸や内蔵を蹂躙し、女性に拷問や暴行という言葉が生温いほどのを陵辱を行っていた。
女性の絶叫と、涙と鼻水、口から漏れる泡や血、苦痛でぐしゃぐしゃになったその顔を見て、魔人はその頬に赤みを差しながら、口元を弓形に歪める。
「あは♪　もう壊れちゃうのかなー？　でも駄目よー。もうちょっと私を愉しませてくれなきゃ……ッ、ん、はぁ……ほら、もっと激しくいくわよ。ふふふ……！」
「いぎゃあああっ！　あぁ！　いぎっ！　がああああああああああッ！」
そうやって美少女の中を大蛇で蹂躙しながら、血に濡れた彼女の頬をぺろりと舐め、己も悦に浸るのは魔王ジルによって作られた魔人の一人。
女の子モンスター、へびさん出身の魔人――メディウサ。
女性をいたぶり、陵辱することが趣味の、最悪の魔人だ。
そんな彼女の元に、ある者がやって来る。
「――ここにいたか。メディウサ」
「んっ……んー誰よ、こんな良い時に――って、レオンハルトじゃない。ノックもしないで女性の部屋に入ってくるとか、んっ、ちょっと酷いんじゃない？」
扉が遠慮なく開け放たれ、外から金髪灼眼の魔人が入ってくる。音と気配に気づいて顔を向けたメディウサは、レオンハルトが入ってきたことに僅かに身を反応させたが、女性への陵辱は止めることなく、そのまま言葉だけで反応する。

「ふん……俺が来ることは予め通達しておいたはずだがな」
「ん、ふっ……あーそうなの？　ごめんねー、ここ最近、ずっと部屋に閉じこもってたから兵の報告とか聞いてなかったのよ。――だからほら、散らかっちゃってるでしょ？」
　と、メディウサが告げて指した先、床には到るところに、人間の死体が転がっていた。
　それらは全て、美少女、美女であった女性達だが、誰もが身体から臓物を引きずり出され、血を流し、凄惨な陵辱の痕が見て取れた。
　身体中の傷は当たり前。中には、眼球がくり抜かれている死体や、全身の関節を外されてぐにゃぐにゃになった死体など、その他にも数多くの責め苦を受けたであろう少女たちの死体が足の踏み場もないほどに散らかっている。
　それを見て、レオンハルトは僅かに眉をひそめ、
「……お前の趣味の犠牲になった人間か。随分と多いようだが」
「んー、そう？　確か、５０とか６０くらいだと思うけど……途中から数えてないわねー。んっ、あれ、でもどうだったかな……ひょっとしたら１００も超えてるかもだけど……」
「……」
「でもまあ、どうでもいいわね。牧場があるから幾らでも調達出来るし。それでも、美少女だけとなるとちょっとずつ減っていくのが悩ましいけど……ッ、ふふ……っ！」
　メディウサはこともなげにそう言ってみせる。女性への陵辱を続けながら。
「あぁああああああッ！　やめッ、いやぁああああああっ！　ひぐっ、ひっ、あふっ！」
「……そうか」
　と、メディウサが人間の女性を陵辱する光景と悲鳴をしばらく耳にしていたレオンハルトは、一度目を伏せた後に――その剣を抜き放った。
「ひあああああ！　あっ――」
「っ！　ちょっと！　何するのよ――」

レオンハルトの魔剣が、一瞬で女性の首を斬り落とし、即座に絶命させる。これから、というところでその楽しみが奪われたメディウサは、文句を言おうとして――しかし、一度それを差し止めた。
レオンハルトがその鋭い視線に重圧を乗せ、メディウサに突き刺していたからだ。
「――お前こそ、俺がいる前でいつまで遊んでいるつもりだ？」
「っ……何よ、ちょっとくらい――」
と、再度の抗議の声をあげようとしたが、
「巫山戯るのも大概にしておけ。それとも――俺を怒らせてみるか？」
「っ――」
それは最強の魔人が僅かに解放した殺気だった。
魔人筆頭の地位に就くに相応しい存在感が、闘気とともにレオンハルトの身体から僅かに漏れ出ている。それを受けたメディウサは先程とは打って変わって表情を硬くすると、今度は観念したように、
「っ……はいはい、わかったわよっ」
ふてくされた様に口を尖らせながら、レオンハルトに向き直る。
我儘お嬢様、といった様な性格の持ち主であるメディウサは、普段から自堕落に過ごし、他のものを顧みようとしない性格の持ち主だが、さすがに己以上の強者ともなると、やはり渋々ではあるが従わざるを得ない。
残念そうな息を漏らしながら、メディウサは首が無くなってしまった女性を、ゴミを地面に捨てるように無造作に投げ捨てると、大蛇を引き抜き、裸体を晒したままベッドの上である程度居住まいを正した。
それを確認して、レオンハルトが目を細める。
「……そのまま話をする気か？　服くらい着たらどうだ」
「ええー？　面倒だし別にいいじゃない。……あっ、でもそっか。そういえばレオンハルトは巨乳好きだったわね。ということは、気が散っちゃうと――」
「――いい加減にしないと殺すぞ、メディウサ」

「っ……うそうそ冗談だって。直ぐに服を着るからちょっと待ってねー……ったく、もう怒ってるじゃないのよ……」
レオンハルトの巨乳好きを、自分の豊かな双丘と絡めてからかおうとしたメディウサだが、更に強い殺気をぶつけられて発言を撤回する。そして億劫そうに、ぶつくさと文句を言いながらも、メディウサがベッドの上に戻り、そこらに置いていた服を手に取ると、もたもたと服を着ていった。
そしてようやく、その白い巫女服のような衣装を身に纏うと、再びレオンハルトに向き直る。
「はぁ……自分で服着るのって疲れるわねぇ……ってことで、これでいいでしょ」
「……ようやくか」
レオンハルトが殺気を解きながら、ようやく整ったか、と呆れるようにメディウサに言う。するとメディウサも、少し気怠そうにしながらも用件を問おうと口を開いた。
「それで、一体何しに来たのよ」
「牧場の稼働状況と、お前の様子を見に来ただけだ」
魔人レオンハルトは人間牧場全体を取り仕切っており、魔人を統率する魔人筆頭でもある。
だからレオンハルトは一応、行きたくはなかったが、他の魔人の様にメディウサの元にも訪れたのだ。
「ふーん、それは態々お疲れ様。牧場もちゃんと魔物達に任せてるし、私は元気よ。ジル様の命令通り、ちゃーんと人間いじめてるんだし、何も文句はないでしょ？」
「……ああ、そうだな」
メディウサの言葉に、レオンハルトが淡々と頷く。
事実、ここに来るまでにメディウサが担当する牧場の視察を行ったが、特に問題はなかった上、メディウサのやっている趣味も、咎めるものではなかった。
だからレオンハルトは何も言うことはない。精々、注意することだけだ。

「魔人の行動は自由とはいえ、あまり仕事をサボるなよ。目に余る様なら俺が指導することになるからな」
「はーい。畏まりましたレオンハルト様ー。……ってことで、用件はそれくらい？」
　おどけるように恭しく一礼してみせ、メディウサは肩を竦める。レオンハルトが頷くと、
「ああ、これで終わりだ」
「そっ。じゃあもう帰る？　茶飲み話する雰囲気でもないみたいだし、私も続きを――って、思い出した。ちょっと提案があるんだけど」
「……何だ？」
　レオンハルトが踵を返そうとした瞬間、メディウサは今思い出したといった様子でレオンハルトを呼び止める。そして先程と同じ様な、愉悦に満ちた笑みを浮かべると、
「大したことじゃないんだけどね。私からも貢ぎ物あげるから、ちょっとした〝便宜〟を図ってほしいのよ。あまり仕事を割り振らないように」
「――何だと？」
　仕事をサボるなと言った直後に仕事をあまり割り振らないでほしいなどと言われ、レオンハルトの眉間に皺が寄る。再び重圧が高まるその前に、メディウサは軽い調子で言った。
「可愛い女の子、ちょーっとだけ分けて上げるから、その分だけ免除してほしいのよね。こういうの。ほら、好みな上に集めてるんでしょ？」
「……それで？」
　レオンハルトは肯定も否定もせずに続きを促してやる。話は聞くといった意思表示だ。それにメディウサはにこやかな笑みで、
「まぁ、だからそうねぇ……月に一人、差し出すから、面倒な命令とかはあまり回さないようにしてほしいなぁって。ジル様の命令とかなら仕方ないけど……魔軍とか動かす時はそっちに任命権とかがあるんでしょ？」
　魔人筆頭であり、魔軍参謀という立場から、魔人と魔軍の指揮権を

預かっているレオンハルトに、仕事の割り振りの便宜を頼む。
それを正しく理解したレオンハルトは、その鋭い視線でメディウサを見据え、
「……つまり、今以上の仕事を回すなと？」
「そんな感じ。――どう？　悪い話じゃないと思うんだけど」
「……」
メディウサからの提案に、レオンハルトは目を細めてしばらく思考する。
はっきり言って、ふざけた提案であることには違いないし、魔軍を指揮する立場から考えれば、戦力に制限を付けるような提案は断りたいところだ。
だが、レオンハルトは床に散らばった少女達を見て、思う。
己がそれを断れば、その差し出される予定の少女達は、以前と同じ。戦争で捕らえられた者達の様に、苦しめられる。
それどころか、相手はメディウサだ。魔物がやる以上に酷い責め苦を受けるだろう。それを少しでも救えると考えれば悪い話ではない。
人権云々は今更の話だ。取引として考えるのならば、これからのことを考えても、受けたほうがいい話かもしれない。やることも、今までの貢ぎ物と同じだ。どんな道を選ぶかは当人次第で、人類圏に返すともなると今の時代では酷ではあるが、この女の元にいるよりかはマシだろうし、可能性が与えられるだけでも扱いは良い。
ならば、とレオンハルトは答えを出しながらも少し悩んだ末に――メディウサに向かって告げた。
「……貢ぎ物は心身ともに無傷なものだ。お前や魔物に痛めつけられた者は認めない。その条件を飲むのなら、千年間、お前に面倒な仕事は回さないでおいてやろう」
「千年……悪くない、かな。それで条件は無傷ねぇ……ひょっとして、中古は嫌いなの？」
「壊れかけたおもちゃに興味がないだけだ。……それで、どうする？条件を飲むのか？」
レオンハルトに改めて問いかけられ、メディウサは、そうねぇ……、

と少し考え込む。
だが内心では、思ったよりも上手くいったかも、とほくそ笑んでいた。
誰にも邪魔されずに己の欲望を満たすための提案だったのだが、千年という条件は破格ともいえる。出来れば貢ぎ物が続く限りはずっとと言いたいところだが、あまり欲張り過ぎるとご破産になる可能性もある。
それに千年経った後に、もう一度提案すればいいことだ。
ケーちゃん――ケイブリスからちょこっと聞いた、レオンハルトは、貢ぎ物を渡すとある程度便宜を図ってくれるという話は本当だったようだ、と、最近少し仲良くなった魔人からの情報とその成果に、メディウサは笑みを深める。女の子を月に一人、渡さないといけないというのはメディウサにとっても多少残念ではあるが、それくらいで何もしなくて良くなるなら別に構わないだろうと。
そして目を細めて悪どい表情を浮かべると、
「――それでいいわ。月に一人、無傷の女の子で千年ね。それで、どうせ巨乳美少女がいいんでしょ？」
「……好きに判断しろ」
契約が結ばれる。しかし、レオンハルトの表情はすぐれず、素っ気ない態度を取っている。
実際内心では、千年なら問題ない、という思いや、こんな女と契約を交わしたことに虫酸が走る思いだったが、それは表には出さない。
メディウサはそれに気づくこと無く、機嫌良さそうに告げた。
「りょうかーい♪　……それにしても、随分と好きものよねー。月に一人で千年なんて。我らが魔人筆頭は、世界一のハーレムでも作るつもりなのかな？」
「……そんなところだ。条件は必ず守れ。分かったのなら、俺はもう行くぞ」
「はいはーい。じゃあねー。便宜よろしくー。――あ、なんなら帰りに今月分の持っていっていいわよー」
「……ならそうしよう。ではな」

レオンハルトは己の内心を隠しながら、最低の気分になるメディウサの部屋からさっさと退出した。
そして対するメディウサは、レオンハルトが出ていって一人になった己の部屋で、欲望を隠すことなく、独り言を呟く。
「さぁて……これで千年間は、魔王様の命令以外で動かずにすむわねぇ」
今までも充分に好き勝手していたが、これ以上牧場を任されたり、何か不意の任務を任されたりしなくなる保障は悪くないものだ。
レオンハルトに命令されないのならば、他に命令してくるものはほぼいない。他の奴らはあんまり関わってこないからだ。
仮に魔王の命令が頻繁に下るなどして無駄に終わったとしても……癪ではあるが、月に一人くらいなら痛くも痒くもない。人間牧場にいる人間の数は膨大なのだ。その中でも美少女達はメディウサの趣味のために隔離してストックしてあるし、その中から適当に貢いでいけばいい。それ以外は全部メディウサのものだし、何も問題はないのだ。
「あー、楽し。今の世の中は中々に居心地がいいわねぇ」
少し前までは人間が世界の半分を支配していた上に、己もただの女の子モンスターであり、肩身の狭い思いをしていたと思う。
それがジルの時代になって、一変したのだから、ジル様様だ。
ベッドの上から降りて、メディウサは伸びをすると、再び自堕落に過ごすために行動を起こす。
「お風呂に入って、魔物兵に部屋の掃除をさせて……そしたらまた、楽しんじゃおうかな……んー、次は、仲の良い姉妹とかがいいかな」
再び服を脱ぎ、浴場へと向かったメディウサは、この後はどんな風に虐めようかと考えながら、悪辣な微笑みを浮かべた。

「――最悪の気分だな……」
メディウサの人間牧場から適当な女性を連れて、その場を後にしたレオンハルトはメディウサの所業を思い出して、苛立ちを滲ませる表

情を浮かべていた。
　そんなレオンハルトの元に、近くで待っていた己の使徒が声を掛けてくる。
「……終わった？　って、その子は――」
　ハンティが神妙な顔つきで声を掛けてきたが、連れてきた少女を見て僅かに目を見開く。
　その問いに、レオンハルトは頷いた。
「……メディウサのストックから一人、連れてきた」
「……そう。じゃあ、あたしが運ぶよ」
「ああ」
　気を失った状態の少女を抱えていたレオンハルトは、それをハンティに手渡す。また女性を引っ掛けてきたのか、とハンティが茶化すようなことはない。これがそういうものではないことはハンティにも分かっている。
　特に相手がメディウサで、そのストックだと言うのなら、全員連れてきてもハンティは非難するどころか内心で称賛した末に快く協力するだろう。
　だが、それが難しいことは理解している。故に何も言わずに五体満足な少女を抱え、ハンティは歩き出すレオンハルトの後ろに続いた。
「……あのヘビ女は？」
「……相変わらずだったな。俺が出向いても変わらずに女を陵辱していた」
「っ……一緒に行かなくて良かったよ。抑えきれるかどうか分かんないからね……」
　前にメディウサに会った時のことを思い出してハンティが眉を立てる。その時も、メディウサは少女を捕まえて、外道という言葉が相応しいほどの陵辱を行っていたのだ。
　その光景を思い出すと腸が煮えくり返り、怒りが沸々と湧き上がってくる。長年色々なものを見て、昔よりかはドライになったつもりのハンティだったが、最近はまた直情的になってきたのも含めて、苛立ちが沸き立つのだ。

「……気持ちは分かるが、表には出すなよ」
「……分かってる」
それよく理解しながらも、レオンハルトはハンティを宥める。
個人的な趣味が微塵たりとも合わないメディウサは、レオンハルトとしても不愉快な存在だが、だからといって簡単に殺していいかと言われるとそうではない。
今は戦争がないとはいえ、ただでさえ魔人の数が足りていないのだ。あんなのでも、必要な人材であることには違いない。己の譲れない部分を侵したのならばともかく、それ以外で消してしまうのは避けたいところだ。
だからこそ、レオンハルトは趣味が合わないことを自覚しつつも、魔人筆頭として、仕事上は出来る限りは普通に接しているのである。
だからハンティがイライラするのも理解出来る。同じく、趣味が合わないのだ。それもあって、ハンティは帰る途中の道中で、待っていたのだ。
もっとも、
「――魔人メディウサ……その反応だと、よっぽど酷い魔人みたいね」
「……ああ。魔人一、趣味の悪い女だ」
城に寄る予定のインデックスを、残していくわけにはいかなかったため、こちらの方が理由としては大きいのだが。
基本的にはこちらからカラーの隠れ里――ペンシルカウに寄って、必要な資材であったり、相談を受けるのだが、今回はインデックスが城に一度行ってみたいと言うので、連れて行くところだったのだ。
近くにメディウサの人間牧場があるため、そちらも済ませなければならないという事情での同行だったが、一緒に入れば危険はほぼないとはいえ、中々に肝が座っている。今もメディウサの所業を軽く聞いた上で、
「……ふーん。じゃあ私とは相性が悪いわね。いい女は、悪い女に目の敵にされるものと、相場が決まっているし」
「いや、そういう話じゃ……」
ハンティがすかさずツッコむ。テンション低めではあるが、それで

も指摘せざるを得ない辺り、ハンティの反応は衰えていない。
　しかしインデックスは得意気な表情で、
「だからハンティは私によくツッコむのよね？」
「――どういう意味よッ!!」
　ハンティがその意味に即座に気づいて魔法を放とうとしたが、インデックスは素早くレオンハルトの身体に隠れてしまう。そして顔だけを、身体の影から出すインデックスにハンティは歯噛みし、
「くっ、レオンハルトの後ろに隠れられたら当たらないでしょ！　卑怯者！」
「馬鹿ね、ハンティ。これは男がいる女だけが出来る最強の防御よ。男は女を守るもの。男は女にとって、最強の矛であり盾にもなるの。つまり、今の私はハンティを歯牙にもかけないわ。なんたってレオンハルトがいるものね」
「相変わらず屁理屈こねてくれるね……！」
「悔しかったらハンティも男を作りなさい。そしたら私の男であるレオンハルトと、ハンティの男である何某かで、戦わせることが出来るわ」
「っ……あたしは男なんて別に、必要ないからっ！」
　その発言はどうなんだ……、とレオンハルトが半目でハンティを見る。すると横からもう一人が、
「あー無理無理。無理ですようインデックスちゃん。私も大分長いことそんな感じのこと言ってきましたが、全然その気にならないんです」
　と、告げたのは諦めたように肩を落とすペールだ。ハンティの女子力の低さに呆れるように、インデックスに向かって説明する。
　そしてハンティの方も見て、
「それに、その気があったとしても……始祖様と付き合えるだけのタフな男性って中々いないと思いますよう？」
　インデックスもハンティを見て頷く。確かに、と、
「そうね。ハンティに対抗出来るくらいムッキムキのゴリラじゃないと駄目ね、きっと。それこそ、ぷちハニーの爆発を受けても死なない

くらいのゴリラよ」
「そうですねー。どんなに高いところから落下しても平気で立ち上がるくらいのゴリラなら上手くいきそうですねぇ？」
　二人がくすくすと口元に手を当てながらハンティを軽くからかう。
　挙句の果てに、何か微妙な顔をしたレオンハルトまでもが、
「……まあ、魔人級と言うとあれだが……魔物大将軍を殴り倒せるくらい強い相手なら上手くいくかもな……」
「あはははっ！　レオンハルト様ってばもう！　それだともう、ゴリラの域越えてますよう！」
「ゴリラの域を越えたゴリラね……ハンティに似合いそうだわ……ぷっ、くふふ……！」
「あんたら……！　というか、レオンハルトまで……！」
「……いや、すまん。何となく、な……」
　レオンハルトが失言した、という風に謝る。それを許したかはともかく、ハンティは自分を笑う罰当たりなペールとインデックスを見て、笑みを浮かべると、
「……なら、城に帰ったらあたしと模擬戦でもしようか、二人共。カラーの始祖として、鍛えてあげるからさ……」
「ひっ!?　あ、あのう、それは……」
「……か、か弱くて可愛い私達を虐めると言うの？　始祖様が、そんなことするはず――」
　と、インデックスが再び言葉で誤魔化そうとする前に、ハンティは口端を釣り上げた獣のような笑みで告げた。
「あはは、大丈夫大丈夫。ちょっとばかし、親交を深めるだけだからさ……そもそも、今のあたしは使徒だし、ちょっとくらいやっちゃってもいいよねぇッ！」
「ひぃっ!?　始祖様がレオンハルト様みたいに!?」
「だ、大丈夫よ。レオンハルト様が守ってくれるわ。そ、そうよね？」
　と、インデックスとペールがレオンハルトを見上げて助けを求める。レオンハルトは二人の視線を受けて、呆れるようにため息を吐きながら、

「……まあ、たまには模擬戦もいいだろう。ペールは言わずもがな、インデックスも、カラーの女王として戦闘経験を積むのは悪いことではないしな」
「そ、そんな……」
「か、考え直してくださいレオンハルト様！　今の始祖様はゴリラというか猛獣ですよう!?　それに――ひぃっ!?」
がしっ、とペールの肩にハンティの手が置かれる。そして二人に向かっていい笑顔で、
「――帰るのが愉しみになってきたね、二人共……あはっ♪」
「……あ、これ死んだわ」
「ぐ、ぐぬぬ……こうなったら、勝ってしまえばいいんですよう！　一対一なら勝ち目はありませんが、二人なら――」
――しかし二人はレオンハルトの城に到着した後。直ぐにハンティに近くの山まで連れて行かれ、程々にボコられるのだった。

敵情視察

大陸東部のとある場所。
そこでは、爆撃のような攻撃音が響いていた。
音を響かせるのは二体の魔人だ。
「ハーハッハッハッ！　潰れろノス！」
一体は、２本の巨大な金棒を手に振り回し、地面を陥没させるほどの一撃をいとも簡単に振るう鬼の魔人――レキシントン。
魔物界ではよく知られた喧嘩馬鹿、戦闘狂であるレキシントンに対し、拳で迎え撃つのは、
「潰れるのは貴様だ、レキシントン……！」
岩のように変形した肌でレキシントンの攻撃を受けきっている魔人四天王の一角――ノス。
地竜の魔人である彼は、その特性である膨張硬化――傷を負えば負うほどに装甲が厚くなるという厄介な防御でレキシントンの怪力を受けては、反撃をするという繰り返しを行っていた。
戦いはノスの方が優勢ではあるが、レキシントンも強い相手との戦いで燃えるタイプであり、喜悦に満ちた獰猛な笑みを浮かべながらノスに迫る。
そしてノスも、暇だからと喧嘩を売ってきたレキシントンを煩わしく思いながらも、戦闘の喜びに浸り、凶暴な笑みを浮かべていた。
普段は冷静なノスだが、戦闘ともなればドラゴンとしての本能がはっきりと表に出てくる。口には出さないものの、魔人を叩き潰せる楽しみを与えてくれたレキシントンに感謝すらしていた。
しかしその場に割って入る影もある。それは、二者に比べれば小柄な影だったが、力は全く劣るものではなく、二人を弾き飛ばした。
「――いい加減にしろ！　出会ったら直ぐに喧嘩しやがって！　少しは自重することを覚えたらどうだ!?」
と、声を大にして叱りつけるように言うのは、魔人筆頭である魔人、レオンハルトだ。
人間牧場の運営などで忙殺されている魔人は、苛立ちを抱えている

のか、普段よりも荒々しい様子で二体の喧嘩に割って入ったが、
「ハハハ！　レオンハルトも来たか！　面白い！　お前も混ざっていけ！」
「レオンハルト様、どうぞお気になさらず……この馬鹿を潰すのは私の役目ですので……！」
レキシントンとノスがそう言いながらも戦いを止めようとしない。
完全にスイッチが入っていることに気づいたレオンハルトは、やはり内心の苛立ちを抑えながらも、半ば抑えきれずに、
「……何度言ってもやめねぇなら、仕方ねぇな……」
と、小さく呟くと、空間から魔剣を引き抜いて赤黒い剣気を解放する。
そして彼らと同じ様に、口端に笑みを忍ばせながら、
「……クク、そんなに潰されてぇなら、俺が潰してやる。――覚悟はいいんだろうなぁッ!?」
「ハーッハッハッハッ！　いいぞ！　幾らでもこい！　今日こそ儂が勝ぁつ！」
「やるというなら仕方がありませんな……負けても、恨まぬように頼みますぞ……！」
レキシントンとノス、そしてレオンハルト。三者の争いはそこら一帯の土地に凄惨な爪痕を残しながら、何度も繰り広げられたという。

――と、そんなことがあったと言われたのは、城に帰ってきたレオンハルトが、再び姿を現してからだった。
紅魔城1階、食堂。
そこで出された料理は、想像を遥かに越える美味さだった。
「あの馬鹿共……何度も何度も喧嘩しやがって……次やったら俺から喧嘩売って半殺しにしてやる……」
「……魔人界隈も大変みたいね。……というかこの料理凄い美味しいわね……」
少し苛立った様子で帰ってきたレオンハルトの話を聞きながら、眼

の前に出された料理をスプーンで一口頂いたインデックス・カラーは、その料理の美味さに思わずポツリと呟いてしまう。
前々から魔物界の――特に、レオンハルトの城で出される料理は美味いとは聞いてはいたが、まさかこんなにも美味いとは思ってもいなかった。
インデックスが食べているのは、何の変哲もないオムライス。炒めたケチャップライスを卵で綴じただけの簡単な料理だし、何度も食べたことのあるものだ。
しかし今まで食べたどの料理よりも美味い。そのことに驚き、インデックスは同席してる面々に声を掛ける。
「……いつもこんな美味しいものを食べているの？」
「え？　――あー、そうですね。ここの料理、最初食べたらびっくりしますよね。滅茶苦茶美味しいから」
「料理長のおかげだな」
「はぐんぐ……いつ食っても料理長の料理は相変わらず美味ぇよな。このミュミュミュなんて奥深さがあってたまんねぇな」
「……そう……」
ペールにレオンハルト、そしてレオンハルトの友人である魔人ガルティアの言葉を受けて、ふむ、と料理を味わっていく。
若干ガルティアが食べている量が気になるが、それを無視しながら料理を口にしつつ、
「それに……メイドも凄く優秀というか……」
「――お褒め頂きありがとうございます、インデックス様」
「まあ、頼んだら何でもやってくれるから助かるよね」
「……私の使徒も、よくここのメイド――特にメイド長に師事しているからな」
「そうですね、ケッセルリンク様。……特にエルシールが……」
どこからともなく現れたメイド長さんという女の子モンスターのお礼を皮切りに、ハンティ、ケッセルリンク、その使徒であるシャロンと、発言が続く。
というかこの城、人が多いわね……、とインデックスが集まった面

子を見て何とも言えない表情を浮かべながら料理を食べ終え、ご馳走様、と一言。そして何気なく、
「……ふと思ったのだけど、ここにはどんなメイドがいるのかしら？」
そう問いを投げた。
するとレオンハルトも特に含むところもなく、
「どんな……と言われても色々いるが……それがどうしかしたのか？」
「ええ、別に他意はないのだけど……でも、そうね」
と、インデックスはあくまでも何気なく、目的を口にした。それは、
「せっかくだから、色々教えて貰おうかと思ったのよ。料理とか、掃除とか色々」
「……ああ、なるほどな。それなら――」
「――はい。そういうことなら、私にお任せ下さい」
レオンハルトの言葉を引き継いで、メイド長さんがインデックスに告げる。
「インデックス様に、当城のメイド達をご紹介致しましょう」
「……ええ、お願いするわ」
頷き、心の中だけで、よし、と頷く。
――これで、敵情視察が叶う、と。

メイドを紹介する、という言葉を受けて、インデックスはレオンハルトとメイド長さんに案内されて中庭へと出た。その際、たまに資材を運んでくれる巨大なドラゴン――ライゼンが寝ているところを確認しながら、
……とりあえず、どんな娘がいるか確認しとくのがいいわね。
メイドに色々と教えて貰おう、というインデックスの建前は嘘ではない。しかし、本当の目的は別にある。
それは、レオンハルトの下級使徒――彼の寵愛を受ける最低限のレベルを確認しておこうというものだ。
インデックスは、レオンハルトの一番を目指す気でいるが、そのラ

イバルは多い。彼の使徒や、ケッセルリンクなどもそうだし、それ以外にも数多くのライバルがいる。
　その中でも最多の数といえるのが、レオンハルトの下級使徒であるメイド達だろう。先程聞いたところ、眼の前のメイド長さんや、クライアも含めて１５１人もいるらしい。この２人だけでも脅威なのに、後、１４９人だ。
　メイド長さんは己をいい女と自称するインデックスから見てもいい女だし、クライアも中々に綺麗だと思う。二人共スタイルが良いし、性格もお淑やかで女性らしい。――己の友人であり、女子力が微妙過ぎるハンティとはえらい違いだ。
　残りの１４９人も、レオンハルトが選んだのだからいい女ではあるだろうが、問題なのはそのスキルや性格、魅力だろう。男が女を選ぶに当たって、色んな要素があるとは思うが、大体重要なのがその辺りだろうか。レオンハルトであれば女性の〝意志〟や好意の強さなども重要だろうが、意志はともかく、好意の強さなどは彼の女になった以上は既に示されている。なのでそこからは、他の要素で勝負するしかない。
　つまり、如何に彼の気を惹けるかどうかだ。自分の持つ魅力が、他の女性と比べてどうなのか。それぞれ良いところも悪いところもあるだろうが、例えば、同じ部分では勝っているのか、などだ。分かりやすいところでいくと、容姿や能力となるだろう。
　それについては、インデックスもある程度自信はある。下級使徒とはいえ、素の人間だ。仮に戦闘となれば負ける気はしない。容姿についても問題ない。多少、身長が低いのがコンプレックスだが、それでも出るとこが出ていて、引っ込むところが引っ込んでいる中々に唆る身体をしていると思う。身長が低いのも、男性から見ればプラスにもなり得る。属性的にはロリ巨乳というやつだろう。〝ロリ〟と付くこと自体、誠に遺憾ではあるが。
　そして才能に関しては、まだ分からない部分もある。己は色んなことを卒なくこなせるとは思うが、料理や掃除などの家事については人並みよりちょっとマシという程度で、それを何百年と続けてる者に

は、流石に敵わないかもしれない。
だが、それも努力で補える――はずだ。少なくともある程度は。その分野で一番、とまでは言わないが、弱点を消すことは出来る。
弱点を一個一個消していき、能力を高め、容姿で彼を誘い、性格で、彼を幻滅させないようにする――さすれば、一番に限りなく近づける。
何よりそうやって自分のために頑張ってくれる女性の姿を、レオンハルトは好ましく思うはずだ。
あまり人前で努力などは柄じゃないが、いい女は、惚れた男の為に尽くすもの。ならばそうしない理由はない。
貪欲に、しかし迷惑を掛けずに、虎視眈々と狙うのだ。
そのための視察。ペンシルカウについての相談は終わったし、少しくらい引退後の生活を有利にするために立ち回ってもバチは当たらないだろう。
「――というわけで、まず一人目を呼んできました」
「！」
と、いつの間にか呼んでいたのか、メイド長さんがそう声を掛けてくる。レオンハルトが椅子に座り、ちょっとした休憩なのか、これまたいつの間にか淹れられていた紅茶を口にして、ほっとしている。魔人なのに、妙に所帯じみてる雰囲気を出す時があるのが素敵だと思いつつ、メイド長さんに連れられてきたメイドに視線を向けると、
「はーいっ☆　ちゃお～♪　レオンハルト様の下級使徒で、副メイド長のリムだよー☆」
「……えっと……どうぞよろしく。インデックスよ」
そこには、己よりも小さい白髪ツインテールの美少女が、軽いノリで手を振りながらやってきていた。
……なんというか……露出過多ね……。
色々と小さいリムというメイドは、お腹や脇を出した特殊なメイド服を着ていた。メイド長さんのものと比べると、スカートがミニだし、ニーソックスを履いていたり、見えているお腹の下腹の部分に、下級使徒の証である紋様を刻んでいたりと、なんというか、

「よろよろー♪　――それで、レオンハルト様ー♡　今休憩中ですかー？」
「ん、まあな。インデックスがメイド達を紹介してほしいというから少し付き合ってる」
「へー、だったらぁ……リムとも、ちょっと付き合わない？」
と、レオンハルトを見つけ駆け寄ったリムは、目を細めて流し目を送ると、舌でちろりと人差し指を舐めて、そんなことを口にした。
お尻を軽く左右にふりふりとしながら、前かがみでレオンハルトに迫っている様子は、インデックスの目から見ても――いや、誰の目からみても、
……誘っているわね。
随分と、小悪魔的というかあざといメイドが来たものだ、とインデックスはリムをそう評価する。
計算ではあるだろうが、それを差し引いてもエロティックだと認めざるを得ない。胸は小さいし、身長も小さいが、スタイルは悪くないし、充分魅力的だ。
ただ思うのは、
「……本当にメイドなの？」
「はい。彼女はメイドの中でも一番の古株で御座います。そんな彼女の特技は――」
「あ、そういえば紹介するんだっけ？　いいよいいよー♪　リムちゃんの得意技、教えてあげるねっ☆」
と、リムは懐から二枚程の雑巾と、一つの箒を取り出して言う。
「リムはぁ、掃除のプロなんだよー☆」
「……そう」
本当に？　と思ってしまうが、
「あ、その顔は信じてないでしょー？」
「……ええ。てっきり、エロが得意なのかと思ったわ」
「うっわ、正直ー☆　まあでも、間違ってはないよ？　そっちも、リムは得意だし。ねー、レオンハルトさまぁー？」
「……いいから話を進めてやれ」

「えへへー。はーい♡　というわけで、将来リムの部下になるかもしれない娘に、リムの凄さを教えてあげるよー☆」
　内心で、そうなるつもりはない、と思いつつも、今は特に何も口にすること無く、リムの動きを見る。彼女は二枚の雑巾のうち、一枚をこちらに渡して、
「はい♪　じゃあ、このテーブルを拭いてみて？」
「……雑巾で綺麗にしろということ？」
「そうそう☆　別に早くしなくてもいいけど、ちゃんと綺麗にしてね？　――どうせ出来ないだろうけどねー☆」
「むかっ……見てなさい。これくらい、私なら簡単よ」
　インデックスは一枚の雑巾を手にテーブルを眺める。それは何の変哲もない丸テーブルだが、多少の汚れがある。掃除がまだなのか、このために態々汚したのか。
　何となく、いつも綺麗に保ってそうなので後者な気がするが、
「……！」
　インデックスはテーブルの上に折りたたんだ雑巾を手にして、丁寧に拭いていく。
　おそらくは、早くしようと焦らせて失敗させるつもりだろうが、そんな手には乗らない。
　ちゃんとゆっくりと、満遍なくテーブルを拭けばそれでいいのだ、と、
「――終わったわ」
　終了を告げる。するとリムはテーブルの上を見るまでもなく、
「まあ、早くしなくていいとは言ったから遅いのには目を瞑るけど――ぷぷーっ♪　それでもきったなーい☆」
「っ、そんなことないでしょう？　充分綺麗に――」
「いやぁ、これはちゃんと指導しないとねぇ☆　ほら、よく見て？」
　と、リムがテーブルの上を指して言う。こちらがテーブルに視線を移したのとあわせて、
「微妙に埃が残ってるでしょー？」
「……ほんの少しでしょう？　それに、雑巾だけじゃこれは――」

「ほんの少しでも駄目に決まってるでしょー？　というか、リムが二枚持ってきた意味にも気づけないとかー、ダメダメだねー☆」
「！　もしかして……」
インデックスがリムの持つ雑巾の一つに視線を向けて気づく。そちらは、濡れていないもので、
「まあ、普通は乾拭きくらいしないと駄目だよねー？　それ以前の問題ではあるけど☆　というわけでお手本を見せてあげるね♪」
見てて、と告げるリムが、雑巾を手にする。
そして、さっさっと雑巾でテーブル全体を拭く。
僅か数秒だ。それだけで、
「ほら、これだけでもさっきより綺麗でしょ？」
「……本当ね」
リムが拭いた後だと、己が拭いたのとは雲泥の差だった。
その上から更に乾拭きをまた数秒で終えると、
「ほーら、これだけでピッカピカだねー☆」
「……これは……」
今度は完璧に綺麗になっていた。
２行程終えた時間が、先程の自分のものよりも早い。
そのことに驚いていると、
「うんうん、その反応が初々しくていいよね☆　まあ簡単に説明すると――インデックスちゃん、雑巾の面積の分だけ、テーブルが拭けてると思ってるでしょ？」
「……違うのかしら」
「全然違うよー♪　雑巾って、ちゃんと力込めてないと、手で押さえてない部分は全然拭けてないんだよ？　だから結構力入れてやらないと駄目だしー、丸テーブルだから端の方なんかは特に気をつけて拭かないと汚れが取れないんだよ？」
「……なるほど、確かにそうみたいね」
先程のリムのやり方を思い出してみると、確かに言っていた通りにしていた。
雑巾がけ一つ見ただけだが、掃除のプロというのは本当なのだろ

う。
　ただ、
「くすくす♪　それにしてもー……インデックスちゃん。あんなに自信満々だったのに、全然出来ないなんて、ものすっごく弱々だねー？　ざーこざーこ♡」
「……ま、まあ、私が間違っていたのだから甘んじて受け取るけど――」
「ざーこ♡　ざーこ♡」
「ぐ、ぐぐ……っ」
　こちらを舐め腐ったような不敵な笑みに滅茶苦茶イライラしてしまう。
　それを感じ取ったのか、レオンハルトが息を漏らしながら、
「……リム、その辺にしてやれ。出来なかったからとあまり虐めるものじゃない」
「はーい♪　ごめんねー、インデックスちゃん☆　掃除のやり方ならこのリムちゃんにお任せってことで、色々教えてあげるから許してね？」
「……あら、別に怒ってないわよ。自分の未熟さを指摘された程度で怒るほど、私は狭量ではないわ」
　この間に自分の中の怒りを抑え込むことに成功して、何ともない風に振る舞ってみせる。そう怒ってない。怒るのは心の奥底でだけだ。
　……この生意気な雌は、いつか私が完全に越えることで報いとしてやるわ……。
　負けている状態で何を言っても無駄だ。この世は弱肉強食。強い者だけがものを言える世界である。
　戦闘ならボコボコに出来そうだが、相手の得意分野で負けたからと他の分野でボコボコに仕返すというダサいことは自分の矜持に反する。
　負けず嫌いで悔しがるのはいいことだが、あんまりみみっちいことをするつもりはない。なのでここは余裕を見せるために一礼してみせ、

「良ければ、また色々と教えて貰いたいわ」
「りょうかーい☆　というわけで、リムちゃんはいくねー♪　レオンハルト様、後でエッチしようねー？」
「……後でな」
「では、仕事に戻ってください」
　はーい、とリムは最後まで軽い調子でその場から去っていった。それを見送った後で、レオンハルトはため息付きで、
「……まあ、リムはああいう娘だ。昔はもうちょっと素直だったんだが……ある奴の影響を受けてな」
「……ああ、誰か分かったから言わなくていいわ」
　頭の中に薄紫の髪をした痴女が出てくる。確実にその影響だろうと思い、メイド長さんのフォローを聞く。
「掃除の腕なら私にも勝るとも劣りませんわ。他のメイド達からの人望も厚いですし、苦手な仕事もありませんわ」
「へぇ……人は見かけによらないものね」
「何気に酷いこと言ってるぞ。……分からなくはないがな」
　レオンハルトが珍しくツッコむ。やはり、城の中だと素が出るのか、雰囲気が柔らかい気がする。
　いつもはペンシルカウで会っていたからあまり見ない雰囲気だ。
　そういう一面もいいな、と思いながら、
「では続いて――二人目のメイドの紹介ですわ」
　と、メイド長さんが告げる。テンポが良すぎて小説の間なんかにある紹介コーナーじみてる気がするが、メイド長さんがやることに違和感を感じていてはいけないと、この短い時間で既に理解したので気にしないでおく。
　リムと入れ替わるようにやってきたのは、
「……どうもこんにちは」
「あら、可愛いお客様ね」
「……二人？」
　やってきた赤い髪と青い髪の女性を見て、首を傾げる。二人目とは何だったのか、と。するとメイド長が、

「彼女達は姉妹なのですよ。二人共副メイド長です。だから、二人で一人ですわ」
「メイド長さん、またそれ？　……まあいいけど。ミオよ。よろしくね」
「うふふ、マオです。ちなみに、私が妹よ」
　ちょっとサバサバしてるというか素っ気ないのが姉で、妙にお姉さんっぽい色気と余裕がある方が妹らしい。
　そしてどちらも胸がかなり大きい。やはりこの城のメイドには胸が大きい娘が多いな、と思いながら、
「そこでどうして二人で一人になるのか分からないけど、そこは気にしないでおくわ。とりあえず、よろしくお願いするわね」
　挨拶を交わし、次に二人が何が出来るのかを尋ねる。すると、二人は声を繋げて
「洗濯」
「と、お裁縫ね」
　と告げてまた仕事ぶりを見せてくれる。説明を行いながら、
「別に双子ってわけでもないんだけど……息が合うのよね。だから役割分担もスムーズだし……」
「解れた服なんかも直しているわ。後、キャロル様が私達のメイド服を縫う時に手伝ったりもしたわねぇ」
「ふぅん……そうなのね」
　頷きつつ彼女達が裁縫を行うところを眺める。手際が良くて正確な手つきだった。自分も裁縫は出来るが、こんなに早くはこなせない。なので感心していると、
「――レオンハルト様、ここにいましたか」
「ん、エクレアか」
　と、別の方向からまたメイドがやってくる。
　これまた胸の大きい金髪のメイドで、その手には書類を手に持っており、こちらをチラッと視線を向けはしたが、
「この書類のことで少々お聞きしたいことが……」
「ああ、そのことか。これは――」

と、そのまま仕事についての話を始めてしまう。
その様を見て、メイド長さんが、
「ついでに彼女も紹介しておきますが、彼女も副メイド長の一人のエクレアです。主に事務仕事を担当している、メイドの中では異色のメイドですわ」
「確かに、メイドがするお仕事じゃないわね」
と、言いながらもレオンハルトが信頼しているようなので特に言うことはない。ある意味、向いているとはいえメイドなのにその仕事を任されることが脅威ともいえる。
姉妹の方も、姉妹というだけで脅威だし、今も、一通り仕事を終えたところで、レオンハルトに向かって、
「その……レオンハルト様？　今日は夜までいるの？」
「ああ。出かける予定はないな」
「！　それじゃあ――」
「ふふ……なら、今日も愉しみにしているわね……」
「……そ、そういうことだから……お仕事、頑張ってね」
と、姉の方は顔を赤くしながらも恥ずかしそうに、妹の方は余裕たっぷりにレオンハルトに向かって夜のお誘いを掛けている。
その辺りも油断がならない。姉妹で、というのは男のロマンだとも聞くし。要注意だ。
……なるほど、これは魅力的ね。
姉の方は恥ずかしがり屋なのに誘ってくるし、妹の方はストレートに色気で迫っている。どちらも屈んでその深い谷間を見せつけるようにしてる辺り、ポイントは高い。
そしてエクレアと言ったメイドも去り際に、
「……また後でお願い致しますわね……」
と、明らかに意味深な笑みを向けて、去っていく。
同じ女であるインデックスには分かる。どう見ても雌の顔をしていた。
何でもない風に笑顔を見せているが、中身はもう犯されたくて堪らないど淫乱だ。これは男なら食指を伸ばさざるを得ないと思う。

……こっちも要注意ね。
メイドの情報を次々に頭に入れながらも、にこやかに別れるとメイド長さんが再び、笑顔とともに告げてくる。それは、
「次は、いよいよ料理ですね」
「っ！」
「りょ、料理!?」
しかし、料理とメイド長さんに告げた瞬間、中庭にいる何名かのメイドがビクッと身体を反応させた。
……え、何？
料理と聞いてびっくりするようなことが何かあるのだろうか、と疑問に思う。あんなに美味しい料理が出るのなら、特に問題はなさそうだし、インデックスとしても一番知りたかったものだ。
だが、中には驚くこともなく苦笑を浮かべているメイドもいる。やれやれ、と言ったような表情だ。
「――と言っても、料理長は今も忙しいので、代役を連れてきましたわ」
と、続けて言うと、明らかに何名かがほっと胸を撫で下ろした。何故だろうか。インデックスとしては料理長とやらに教えて貰えることが楽しみだったので残念なのだが。
とはいえ代役もそれなりにデキる相手なのだろう。ならば問題ない、とその相手を待つ。すると今度は上から、
「――お待たせ致しました、お客様、メイド長。そして、レオンハルト様」
「！」
何故か上階の窓から飛び降りてやってきたそのメイドに、インデックスが僅かに目を見開いて驚く。
何事もなく着地して、一礼を行っているが、どう考えても危ないだろうと。そもそもその登場の仕方は何なのだ、と思っていると、彼女は名乗った。
「私はベアトリスと申します。レオンハルト様の下級使徒にして、卑しい、そしていやらしい、そして淫乱の三拍子揃ったメイドで御座い

ます。ベアト、とお呼び下さい。どうぞ、よろしくおねがいしますインデックス様」
「……ご丁寧にどうも？」
いやらしいと淫乱の意味が被ってることにはツッコんだ方がいいのだろうかと悩んでしまう。だが、ベアトリスと名乗った少女は、あくまでも真顔なので真面目に言っている可能性もあるのでちょっと自重した。
改めてその容姿を見ると、銀髪をボブカットにした、華奢だが胸がかなり大きいクールな印象を感じさせるメイドだ。やはり容姿のレベルは高い。
そして料理のために呼び出されたということは料理が得意なのだろう、とその発言を待っていると、
「私を呼び出した、ということは――ずばり、エロ講習……もしくは戦闘訓練のどちらかだと推察しますが、一体どちらなのでしょう？」
――と、全く別のことを言い出してしまった。
あれ？　とメイド長さんやレオンハルトを見ると、メイド長さんは穏やかな笑みのまま訂正した。
「違います。今日は、料理についての講習ですよ」
「……料理、ですか。しかし私は、料理についてはまだ修行中の未熟者に過ぎませんが……」
ベアトリスはそう渋る様子を見せる。
だが今度は横から、レオンハルトの声が飛んだ。至って真面目な様子で、
「いや、それでもお前は城の中では二番目に料理が上手い。だから呼んだんだが……まあ、無理と言うならしょうがない。他のメイドに――」
「やりますやります！　レオンハルト様の為なら何でも！　だから料理の後におセックスしましょう！」
「何の交換条件なのよ……」
インデックスが半ば呆れるように呟くと、ベアトリスはキリッとした表情でインデックスの方を向くと、

「ふ、インデックス様。料理を極めるには、エロが必要不可欠なのですよ」
「何でそうなるのよ」
　最早普通にツッコミを入れる。するとベアトリスは、やれやれ、と肩をすくめた上で、今度は拳を握って力説し始めた。
「料理とは、材料、器具、技術。それらを組み合わせて作るもの。そう、つまりは――３Ｐです」
「この人頭おかしいんじゃないの？」
「……俺の口からは何とも言えんな」
　ベアトリスを指差しながらレオンハルトに向かって問うも、レオンハルトは微妙な表情で頭を抱えるのみだった。ある意味、その表情が既に物語っているというか、言っているようなものだが。
「食べさせる相手のことを想い、愛を持って調理し、料理をお出しする――これはもう、料理人と食べさせる相手とのラブラブセックスみたいなものです」
　――どうやら本気で頭がおかしい相手と出会ってしまったようだ。
　ベアトリスはインデックスの発言に全く気にしていないように、語り続ける。
「つまり、料理とはエロ。エロとは料理です」
「どうやったらそんな思考に行き着くのか、逆に興味が出てきたわ……」
「ならば教えて差し上げましょう。ベアトの、壮絶なる料理修行の道程を――あ、これは童貞ではなく、道のりということですからあしからず」
「しかも教えてくれるのね……後、その注釈は余計過ぎるわ」
「ベアトにそういう注意をしても無駄だ。喋らせないように口を閉じるくらいしないとな」
「えっ、しゃぶる？　――畏まりましたレオンハルト様。どうぞ、私のいやらしいお口にその逞しい魔剣を突っ込んで犯してくださいませ」
「言ってないからやめろ。……こういう奴だ」
「なるほどね……」

と、言って跪いて口を開こうとしたベアトをレオンハルトが差し止める。インデックスが呆れる中、ベアトリスは残念そうにしながらも気を取り直し、話を戻して語り始めた。
「私は幼い頃から、父に言われて料理の修行に明け暮れていました……そのために、身体を鍛え続けていたのです……」
「……ねえ、これって私の頭が悪いのかしら？　最初から全然理解出来ないのだけど。どうして料理の為に身体を鍛えることになるのよ」
「大丈夫ですわ。ほとんどの人が理解出来ておりませんので」
「……家庭の事情だからあまりツッコんでやるな……」
メイド長さんとレオンハルトがフォローを行う。家庭の事情ってどういうことだ、と激しく指摘したい衝動に駆られつつも、これから語られるのかも、と僅かに期待しつつ話を聞いていく。
「全ては最強の料理人となるため、私はひたすらに強さを求めつつ、肉体を鍛えていましたが……どうやっても父の様な究極の肉体には至りませんでした。というのも、私は女性で、しかも幼い頃からレオンハルト様を見ていたので、レオンハルト様の好みに沿うように女性としての魅力的な肉体美を目指していたのです」
ここまで料理の話題が一個も出ていないのだが大丈夫か？　と激しく不安になる。
だが、ベアトリスは至って真面目な様子で、
「相反する想いを抱えながら毎日を過ごしていた時……ベアトに天啓が降りてきました。すなわち――料理とは、エロなのだと……！」
電波受信しただけじゃないか、という指摘を視線とともに行うが、それも意に介さない。段々とテンションが上がってきたのか、熱を入れてベアトリスは語りを続ける。
「私は、自分をレオンハルト様に召し上がって頂くために、自分を調理していたのです……！　ご主人様の好みに沿うよう、胸が大きくなるように栄養バランスを考え、時にマッサージなどで育乳を施す……これは料理と同じなのだと！　相手のことを考えて料理を作ることと全く同じなのだと、ベアトは気づいたのです！」
バーン！　と、衝撃の事実の様にベアトリスは告げる。絶対に違う

と思うが、
「料理ｉｓエロ。エロｉｓエロ。その真理に気づいたベアトは、みるみるうちに成長し、やがてレオンハルト様に寵愛を頂き、強さも料理の腕も、段々と上達していきました。これも全て、エロのお陰なのです……！」
「全く関係ない気がするのだけど……普通に料理を練習し続けてたからじゃないのかしら。というか、途中からエロ一直線になってるわ」
「根はいい子なんだがな……こういう話の時に口を挟むと損するぞ」
「えっ、挟む？　畏まりましたレオンハルト様。私のいやらしく実ったお胸にその男らしい魔剣を突っ込んで犯してくださいませ」
「だから言ってない。昼間から発情するな」
　屈んで胸の部分の穴を開こうとしたのを止めさせながら、レオンハルトがもはや諦めたような表情で言う。インデックスも流石にここまでの痴女ではないので微妙に引いていると、
「――ちがあああああああああうッ!!　違うぞ愚昧なる娘よッ!!」
　不意に、中庭に大声が響いた。
「！　父上……！」
　城の屋根の部分、そこに大きな人影が立っていた。
　筋骨隆々とした男の影だ。それを皆が見上げたタイミングで、ベアトリスがその男を見て叫ぶ、父上、と。
　そして男は屋根の上から飛び降り、ベアトリスの前に降り立った。目の部分に仮面を付け、馬鹿でかいコック帽を被った男に、インデックスは呆然としながら、
「……何アレ？　化け物？　新種の魔物？」
「うちの料理長だが……一応は人間だ」
「生物学上は人間ですわ」
「えぇ……？」
　確かに人の形はしているが、人の形をしているだけだ。あんな二メートルをゆうに超えるムキムキのゴリラが、人間とは認めたくない。

だがそこで、インデックスは、ハッと気づいた。彼ならば、と思い呟く。
「……彼なら、カラーゴリラのハンティとも上手くいくかも……」
「――冗談でもやめて!!」
と、1階の窓の一つからハンティが顔をだして叫んだ。聞いていたのか、嫌すぎて発言を察知したのかどっちなのだろうかと疑問を覚えるも、それよりも眼の前の化け物から目が離せない。
化け物とベアトリスは対峙し、視線を合わせている。身を低くしたベアトリスに対し、化け物は腕組みをしながらベアトリスに向かって大声で言葉を下す。
「貴様は、まだそんなことを言っているのかッ!? いいか! 料理を極めるに当たって、一番重要なのは己の肉体! そして強さだッ! レオンハルト様に寵愛されるようにと努力することはいいが、我がミシュラン一族の真理を歪めることだけは許さんッ!」
「強さは確かに重要です! しかし、料理の真理はエロ! これだけは譲れません! これは私が至った料理の境地です! ベアトは、父上とは別の道を行きます!」
いや、料理は料理だろ、というツッコミを、インデックスや周囲でそれを聞いていた者達は飲み込んだ。巻き込まれたくないし、関わりたくないと、
「ぐううう! この私の前でよくぞ吠えたッ! ならば、己の拳で、刃で! 証明してみせろッッッ!」
「言われずとも! 己の選んだ道が間違いではないと示すために、ベアトは父上を倒しますッ! お覚悟をッ!」
化け物が両手を開いて戦闘態勢を取る。ベアトリスも、懐から2本の短剣を取り出して低い構えを取った。
そしてベアトリスが低い構えで突撃して短剣を振るい、料理長という名の化け物は拳でそれを跳ね返す。
「フハハハハハッ! 見せてやろうッ! 我が肉体に宿る料理の力を……ッ! バニッシュ・ピュレッ!!」
「ッ! なんの……ッ! この程度ではやられません……! 料理を

極めるまでは……ッ！」
「フハハハ！　ミシュラン一族に伝わる調理法を用いねば、私を倒すことは出来んぞッ！　ヘル・フランベッ!!」
――そして何故か料理とは全く関係ないように見えるガチバトルが始まってしまった。
ベアトリスが短剣を用いて素早い動きで斬りつけているが、化け物の肉体には傷がつかない。そしてその化け物の方も、形容出来ない凄まじい技を、己の肉体一つで行っている。
「フハハハハッ！　強くなりたければ喰らえッ！　グラトニーシュトロームッッッ!!」
芝生の上で両手を広げ、高笑いしながらスライド移動して高速で近づいてきたり、空中でコンボ決めたり、目と口から白色破壊光線出したりしているが――やはりどう見ても人間の戦いじゃない。
「っ、ミシュラン一族に伝わる調理法が一つ！　みじん切りの極意……餓狼千殺撃！」
ベアトリスも二つの短剣を目にも留まらぬ速さで刻むなど、中々にいい動きをしているのだが、料理長が化け物過ぎて普通の動きをしているように見えてしまう。
「フハハハハハハッ！　我が娘よ！　お前の調理力はその程度かッ!?」
「ま、負けませんッ！　例え調理力で負けようとも……心で勝って見せます……ッ！」
二人共、もはやオーラ出しながら普通に壁とか走ったりしてるのは何なのだろうか。調理力とかいう謎の単語まで出てきてるし、物理法則が歪んでやしないかと、インデックスは半目を向ける。
「……何これ」
「ただの親子喧嘩だ。気にするな」
「二人共、城を傷つけないように行ってくださいね？」
メイド長さんの言葉に両者が声を上げて頷いている。実際、よくよく見てみてると戦闘でも一切城を壊すどころか、汚すことなく戦っている辺り、何とも器用過ぎる戦いだ。

「というか……何よあれ。素肌に刃物が刺さらないとか、おかしいでしょう。それに、あのメイドも押されてるけど渡り合ってるし……」
「ベアトは城のメイドの中ではメイド長に次いで強いからな……」
「ちょうど料理長が休憩に入ったみたいですね。仕方がないので、別の講師をお呼びしましょう」
「不安しかないのだけど……」
　というかあれを休憩と言い張る神経がインデックスには分からない。眺めているとこっちの頭まで料理時空に巻き込まれそうなので目を逸らしたいというのは分かるが。一部のメイドが怯えていた理由が分かったなぁ、と思いつつ、メイド長さんが連れてきたメイドを見る。今度は、
「……その人は？」
「はい。私の弟子の、エルシールです。レオンハルト様のメイドではなく、ケッセルリンク様の使徒メイドではありますが、一部の料理なら完璧にマスターしていますわ」
「えっと、お寿司を教えればいいんですか？　それとも、また歌とか踊りとか……」
　何で歌と踊りになるのか意味が分からないが、インデックスは半目でエルシールという使徒を見る。そしてため息をつきながら、
「……態々来てもらって悪いのだけど、寿司くらい教えて貰わなくてもね……酢飯作って握るだけで――」
「――はあ⁉　貴方、何を言ってるんですか⁉」
「えっ」
　急に大声を出して詰め寄ってくるエルシールに、反射的にビクッと驚いてしまう。
　彼女は凄い剣幕で、
「寿司は飯炊き一つでも、とても繊細な技術が必要なんです！　切りつけも美しくするには細かな知識や技術が必要ですし、握りも簡単に見えるかもしれませんが、本当はとっても難しいんです！　軽々しく作れるなんて言わないで下さい!!」
「え、あ……ご、ごめんなさい」

その勢いに思わず謝ってしまう。不思議と説得力があるというか、迫真の表情だった。
しかもその勢いは謝っても止まらず、
「寿司を作るのにその程度の知識しかないなんて論外です！　まずは座学から！　お米の知識からネタの知識まで、全部頭に叩き込んで貰います！　板場に立とうとするなんて１０年早いですよ！」
「え、寿司は別に――って、ちょ、ちょっと!?」
がしっ、と肩を掴まれて連れて行かれそうになってしまう。このままついていったら駄目な気がして逃走を試みるも、
「っ、何逃げようとしてるんですか！　逃しませんよ！」
「っ!?　な、なにこれ!?　何かが巻き付いて……！」
エルシールが腕を振ったと思ったら、己の身体に細い糸の様なものが巻き付いて、身動きが取れないように縛られてしまった。
そしてそのまま、インデックスはエルシールに抱えられて、
「さ、行きますよ。時間は限られていますが、任された以上は寿司職人の名に掛けて、貴方が立派な寿司職人になるまで面倒を見てあげます」
「い、いや、あの……」
「――返事は？」
「……は、はい」
よろしい、と厳しい目つきになったエルシールがインデックスを連れて城の中に行ってしまう。
後に残されたレオンハルトは、それを何とも言えない表情で見送ると、
「っと、こんなとこにいたかレオンハルト。そろそろ――って、どうした？　変な顔して」
「ガルティアか……」
やってきたガルティアに顔を向ける。連れて行かれたインデックスから目を逸らして、
「……今夜は寿司になりそうだな」
「おっ、またエルシールか？　あいつの寿司は美味いからなぁ。今か

ら楽しみだぜ」
「……そうだな」
　そのために、たった今一人が犠牲になったわけだが……と、レオンハルトは意図するところと違う結果になったことを憂いつつも、あれはあれでいいかと気にしないことにした。
　――そして、
「く……この城のメイド……侮れないわね……腕がなるわ……」
「はい。では寿司についての基本的な知識からまず講義を行います。それと――私語は慎むように」
「は、はいっ！」
　エルシールに連れて行かれたインデックスは、改めて魔物界というか、レオンハルトの身内の厳しさを垣間見て、より一層、気持ちを燃え上がらせるのだった。

勇者アキラ

人類圏も含めて、全てが魔物界となった大陸。
各地に人間牧場が建てられ、到るところを魔物が闊歩する世界では、人間の安息の場所は限りなく少なかった。
殆どの人間が人間牧場で捕らえられる中、森や山の中に、身を隠すようにして点在する人間の住処がある。
魔物達が言うところの野良人間が住むその場所は、町と言えるほどの規模のものはなく、村の様な規模のものが殆どだった。
しかもそれらも、魔物に見つかっては直ぐに襲われて遊び半分に蹂躙されてしまうため、夜は明かりを消し、気配を消すような芸当が要求されてしまい、朝日とともに命あることに感謝する暗黒時代となっていた。
だがそんな中でも、人間達のセーフエリア。謂わば安全地帯ともいえる場所が、ほんの僅かだが存在する。
その一つが、とある山の中。山道から外れた谷のような場所にあった。
国狩りの際、魔王には勝てないとして逃げることを選択したとある冒険者ギルドの長の素早い判断により、冒険者達が建てた、町とも施設ともいえるその場所は、まだまだ人に知られていないながらも、何とか隠れ住むことの出来る人間達の生息地だった。
何とか逃げ延びることの出来た人間達は、安堵し、何とか平穏を保ちながらも、外の状況を聞くと絶望しそうになる。人間が生きていけるとは言うものの、魔物が闊歩する大陸では、下手に外に出て、何かをするわけにもいかない。
しかし人間が生きるには食料なども当然必要であるのだ。
畑を作って自給自足を行うことにも、限界はある。外に出て、食料や資源を取ってくるなどしなければ、生きることも難しい。
なので冒険者は外に出て魔物を討伐する者だけではなく、食料を採取しに行く者も多く存在した。
食料が多くあるような場所は、今や魔物も多く生息するため、戦え

ない人間では食料を取ることすら難しい。
結果的に各地では人間の食糧事情が困窮しているが、それでもこの場所はマシな方であった。
国狩りから何とか逃げ延びてきたという商会の協力もあり、そして冒険者も多く存在するこの場所では、そこに住む人間も何とか明るい顔で生活することが出来ている。
だがやはり、平穏がいつまでも守られる保障はない。
人間がこうなった根本の原因である魔王を倒さなくては、平和は訪れないのだと、
「……そろそろ行かないとな……」
とある黒髪の少年は、町の裏手にある墓地で、一つの墓を前にして呟いた。
その墓は少年の――いや、ここに住む全ての人間の恩人である男の墓だ。
この隠れ里を建てた冒険者ギルドのリーダーで、年老いてなお、誰よりも強い眼をし、現役の冒険者にすら勝る剣の腕を持った強いリーダー。
彼の言葉を思い出し――アキラは己の旅立ちの日を迎える。
『魔王は、勇者にしか倒せません』
それは、アキラがここのリーダーである老人に聞いた質問の答えだ。
人間を苦しめる魔王を、倒す方法はないのかと、その問いの答えとして、彼は神妙な顔をしながらそう答えたのだ。
勇者、という存在に対して詳しく聞こうとしたところ、その老人は深く、長く考えた末に、〝明日、またここに来なさい〟と言ってくれた。その時に、勇者について教えると。
しかしその翌日――老人は息を引き取っていた。
もう既にかなりの歳だった老人は、寿命によって息を引き取り、数多くの人に惜しまれながら死んでいったのだ。
結局、勇者について教えてもらえることは叶わなかったが、老人の死によって落ち込むアキラの元に、しばらくして一人の少年が現れた

のだ。
『勇者になってみませんか？』
コーラと名乗ったその少年は、勇者の従者であるという。
アキラは、驚愕して狼狽えてしまう自分を必死に制しながら、質問した。――勇者になれば、魔王を倒せるのかと。
その問いに、コーラは笑顔で答えた。
――倒せますよ、と。
事実、勇者はかつて、魔王と互角の戦いを繰り広げ、魔王の寿命が縮むほどの大ダメージを与えたという。しかもそれを成した勇者は、アキラの恩人で、無理を言って師匠になってもらった老人、その人なのだと。
そう告げられたアキラは、どこか運命のようなものを感じた。
全てに合点がいった。何故師匠が、勇者について知っていたのか。それは師匠がかつての勇者だったからなのだ。
魔王と対になり、人間を救うための存在である勇者。それにならないかと言われたアキラは、一晩悩んだ末に、勇者になることを決めた。
勇者の剣であるというエスクードソードを渡され、晴れて勇者となったアキラは、とうとう旅立ちの時を迎える。
「師匠……今度は俺が、魔王を倒してみせるよ」
魔王退治にあと一歩のところで失敗したという師匠の墓前に、アキラは決意に満ちた表情で告げる。
「師匠はいつも言ってたもんな。自分の信じる正義を成せって」
かなり頑固なところがあり、一度言ったことは曲げないくせの強い爺さんだったが、そんなところもアキラは尊敬していた。
だからアキラも心に決めるのだ。
「苦しんでる人が、世界にはいっぱいいるし……柄じゃないかもだが……ちょっとは良くしたいからな」
師匠ほどお人好しではないが、そんな自分でも困ってる人を助けたいとは思う。
勇者になることで少しでも人々を救えるのならば、
「俺、勇者として魔王を倒すから……そこで見ててくれよ」

墓前の前で誓う。師匠の跡をついで、勇者になって魔王を倒すと、
「――それじゃあ、行ってくるからな」
と、アキラは墓前から離れ、待たせていたコーラと合流すると、隠れ里を出て、魔王を倒すための旅を始めた。

――ＧＬ１２年。
人類が魔物に敗北してから約１０年の月日が流れた。
人間牧場という地獄は徐々に日常と化していき、少しずつ過去の文明は忘れ去られていく。
しかしまだ人々は過去の平和だった日々を憶えているが故に、今の境遇、魔物から受ける酷い仕打ちに絶望と悲嘆に満ちた声を上げるのだ。
未だそのギャップについていけず、狂ってしまう人間もまだまだ多い。
だがこれが後百年も続けば、平和だった過去の時代、文明は忘れ去られ、人々は今の家畜のような扱いに疑問を持たなくなってしまうだろう。
だからこそ、まだ人々が狂気に染まっておらず、立ち直れる者が多いであろう今のうちに、魔王を倒し、人間の平和を勝ち取らなければならない。
そう決意し、勇者アキラは魔王を倒すため、魔物が支配する世界に旅立った。
全ては人間を救うため。己の身に宿る勇者の力を信じて。
――だが、
「くくく、はははははっ！　どうした？　私を、魔王を倒すのではなかったのか!?」
「っ――あっ……あああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ!!」
――ある人間牧場。
多くの人間、魔物が目にするその場所で、魔王ジルは３回目となる死を、少年に与えた。

激痛に悲鳴を上げながら、そして死を実感して悶え苦しみながら、魔王に手も足も出ずに地面をのたうちまわる少年。
――その少年は、勇者アキラであった。
「こ、んな……はずじゃ……！」
殺されても死ぬことが出来ずに蘇る勇者の特性を実感しながら、アキラは血に濡れた表情で声を振り絞る。
勇者として身体を鍛え、強くなったつもりでいた。
邪悪な魔王を倒し、人間を救うつもりで、救えるつもりでいた。
――だが甘かった。
アキラは、ある人間牧場に魔王がいるという情報を掴み、勇者としての期限が切れる最後の年に、魔王ジルに襲撃を掛けた。
しかし、勇者の剣は魔王ジルには届かなかった。
それどころかその傍らに控える――鋭い目をした魔人にすら敵わない。
戦闘にすらならない。先程から、アキラは嬲られ続けていた。
地面をのたうち回る勇者の醜態。それを見て、ジルは自分の策が成功したことを口端を歪めながら喜ぶ。
「勇者の力とはこの程度か？　もっと愉しませてみろ――ほら」
と、ジルは地面に倒れたアキラに向かって魔力の杭を、その腕と足に突き刺す。
「ぐがあああああああああッ!!」
腕と足に杭が刺さり、再び絶叫するアキラ。このままでは死ぬ、と察知したのか、勇者の特性が発動する。
地割れ。絶体絶命の勇者を逃がそうと、神の作った幸運がアキラを救おうとする。
「――どこへ行く気だ？」
「っ、あがぁぁっ……!?」
だが裂ける地面に落ちる前に、ジルはその長く綺麗な髪を操って伸ばしてアキラを捕まえてみせた。
そのまま強く締め付けて、アキラが瞠目して痛みに悶える中、ジルは鼻を鳴らすと、

「ふん、勇者の幸運とやらもこの程度か。見切りの力とやらも大したことない……くく、勇者とやらも、こうなってしまえば死なないだけの人間に過ぎんな」
「……そのようで」
ジルの言葉に、傍らにいたレオンハルトが粛々と同意する。
その鋭く、ただの人間であればそれだけで突き殺せるような赤い視線は、勇者アキラを捉えており、どこかつまらない、落胆したようなものと、僅かに同情するような感情の色が混在していた。
そしてそんなレオンハルトの視線は4回目の彼の死を見届け、しかしまだ痛めつけようとしているジルに促されてそちらを向く。
「だがこれはこれで面白い……レオンハルト。お前も少し痛めつけてみろ。中々に愉しいぞ？」
「……分かりました。それでは――」
と、レオンハルトはジルの命令に従おうと、近くにいた魔物兵から適当な得物――槍を借りると、鋭利に尖った先端を無造作にアキラの腹に突き刺した。
「アアあぁあああああ!?　あっ、あが、ぐ、あ……！」
「……これでよいですか？」
全く面白いとも思っていない普段通りの表情で、投げやり気味にレオンハルトは槍でアキラの肉体の中を掻き回す。命令には従ってみせる、という態度が見え見えではあったが、それを別段咎めることもなく、それどころか笑みを深めて、勇者に五度目の死を与えたレオンハルトに、ジルは頷く。
「くくく……ああ、面白い見世物だな。幾ら痛めつけても死なないとは……嗜好品としては悪くない。これをしばらく飼うのも悪くないな」
幾ら痛めつけても悲鳴が聞ける勇者という玩具に、ジルは夢中な様子だった。策が成ったという喜びもあるのだろうが、
「……このまま持ち帰るおつもりで？」
「駄目か？　この状態なら危険でも何でもないとは思うが」
レオンハルトは逆に問いかけられ、少し思考する。

勇者の特性。その力の源である魔王を倒せるようになるスイッチを無効化してみせる策こそが――人間牧場なのだ。
勇者の力は、地上にある魂の数で決まる。
人間が３０％死ねば、魔人を倒せるように。半分も死ねば、魔王をも倒せるようになる。
そのことを魔王ナイチサから教えられたジルは、人間を苦しめることと、勇者対策を両立するため、人間牧場という形式を取ることにしたのだ。
勇者の力は厄介なもので、余計なリスクを負わないためにも対策は必須。それでいて、生き地獄を味わわせるために、人口調整をして勇者の力を解放させないようにしたのだ。
勇者という一片の希望すら、魔王ジルは与えない。人間に与えるのは絶望と地獄のみ。それが魔王ジルのやり方だ。
そしてその勇者という人間を、実際にすり潰すように嬲り、殺している現状は、地上でジルの悪行を止められるものが、いなくなったことを意味する。
それを事実と認識しながらも、レオンハルトは思考し、魔人筆頭として発言した。勇者を飼うことは、
「……城内に僅かでも、危険の種を飼うことは魔人筆頭として賛同しかねますが」
「ほう？　私の身を心配するのか？　可愛いことを言うやつだ」
「魔人として当然のことです。それに――」
と、機嫌のいいジルに対して、もっと合理的な理由を口にした。
「魔人が四六時中見張っているならともかく、牢屋などに入れていても、幸運でいつ逃げてしまうかしれないものですし……そして何より、勇者には期限があります。おそらくは後一年もしないうちに勇者ではなくなるでしょうし、そうなってしまえば、後は普通の人間と変わらぬかと」
「……ああ、そういえばそうだったな。全く、脆い玩具だ。使えん」
レオンハルトが淡々と指摘してみせると、思い出したかのようにジルが目を細め、つまらなそうに呟く。

耐久性は高くても、消費期限はそこまで長くないのが勇者なのだ。捕まえ続けておくのも面倒なので、愉しむならこの場のみだと。
その結論に達したジルは、再びアキラを嬲り、6度目の死を与えた。
するともはやアキラはうわ言のように、
「や、め……やめ、て、ください……なんでも、します、から……」
と、魔王に向かって命乞いを行った。
何でもするから、と、もはや剣も持たずに彼女の足元に這いつくばる。
それを見下したジルは、またもやつまらなさそうに冷たい表情で言葉を口にする。
「堕ちるのが早いな。たかだか6回死んだくらいで……」
「――そうですね」
それについては素直に同意しつつ、レオンハルトもアキラを見下す。
この程度の意志でジルに挑もうとするなど、力があるなし以前の問題だと。
かつての勇者なら例え力が及ばずとも、みっともなく命乞いをすることはないだろう。どれだけ苦しめられても目に光を宿して、抵抗を続けたはずだ。
数百回以上殺されても、決して諦めなかったあの勇者であれば、ジルの前でも変わらぬ意志の強さと輝きを見せてくれただろうし、レオンハルトを愉しませることが出来たかもしれない。
それを知っているからこそ、魔王を倒せる勇者であろうが、この程度の精神力では何も成せない、とレオンハルトは落胆してみせる。
もっとも、アキラの精神力は常人よりは上といったところであったが、その程度で人を救う――魔王を倒すなど話にならないし、己の期待にも応えられない。
そしてジルも、命乞いを始めたアキラを見て軽く息をつきつつも、これはこれで遊べるか、と、己の髪の上に腰掛けて頬杖を突きつつ、アキラを見下し、
「ならそうだな……足でも舐めて忠誠でも誓って貰おうか」

「っ……は、はい……」
アキラは全身の痛みに息をはぁはぁと乱しながら、ジルの足元に近づいていく。
ジルは足を組んで黒く紋様の入った右脚を差し出していた。その蠱惑的ともいえる曲線美の先に近づき、舌を伸ばす。
だがそこでジルは、己の足に向かって伸ばされたアキラの舌に、魔力の棘を突き刺してみせた。
「っっっ!?　〜〜〜っっっ!!!」
「本当にやろうとするとはな。やはりもう堕ちたか。勇者と言えども愚かな人間であることには変わらないらしいな……」
それとも、色香に目でも眩ませたか？　と、ジルは地面で舌を押さえて声にならない声を上げながら悶えるアキラを見下す。
その凍え死ぬような冷えた視線に、アキラは全身をゾッとさせながらも、最後の力を振り絞って逃げようとした。
だがその瞬間――アキラの両足は斬り飛ばされた。
「――っ……っっっ!!」
「さて、では次はどうやって殺すか……心臓を直接握りつぶしてみるか」
と、ジルはその黒い手でアキラを掴み、右腕で無理矢理アキラの胸を開いて肉と骨を露出させ、その中にある心臓を握りつぶしてみせた。
しかしそれでも、アキラは生き返ってしまう。もはやどういう原理で生きているのか分からない状態でも、勇者は死なないのだ。
「これで7回目だが……さて、まだ耐えられるか？　次はゆっくりと嬲り殺してやろう……」
と、生き返ったアキラに対し、ジルは再び、魔法などを用いてアキラを嬲り始める。
そこからはまるで実験の様だった。じっくりと魔法の炎で火炙りにしながら、魔法の杭で死ににくい場所だけを串刺しにしながら、ジルはアキラの悲鳴を聞き続ける。
周囲でそれを遠巻きに見ていた人間達は、あれだけ強そうな人間で

すら、やはり敵わないのだと心に深い絶望を芽生えさせていた。
逆に魔物は、魔王様がいれば魔物の世は安泰だと、魔王を末恐ろしく思いながらも心の内で静かに喜ぶ。
そして皆に見守られながらゆっくりと嬲られ、じわじわと8回目の死を迎えた時――とうとうアキラの心は壊れた。
「……」
「――ん、反応が無くなったな。遂に壊れたか」
ジルが特に感慨もなくこともなげに言う。
事実、アキラは心に深い絶望を植え付けられ、もはや全ての行動を諦めていた。
普通であれば一度の死や、それに近い苦痛を与えられるだけでも、心には耐え難い傷として残る。通常それは死ぬことで救われるのだが――勇者は死ぬことが出来ない。
故にアキラは、8度となる苦痛と死を与えられ、絶望を深めた結果、魂を徐々に〝汚染〟させ、遂には〝汚染人間〟となってしまったのだ。
反応のなくなったアキラから、負のオーラが漏れ出てくる。
近くにいるだけで陰鬱としそうなものではあったが、魔王や魔人の前では特に影響を及ぼすこともなく、ジルはしばらくアキラに反応がないかをあの手この手で確かめ続けた。
最終的に、殆ど人の形をしただけの肉塊のような有様になったところで、ジルは血に濡れた右手の指先を舌でペロリと舐め取ると、
「ふむ……もういいか。つまらんし、もう動けもしないだろう。――帰るぞ、レオンハルト」
「……はっ、畏まりました」
と、実験を終えた研究者の様に、勇者への興味を無くしたジルがその場を去ろうとしたところでようやく勇者の幸運は実を結び、地割れが肉塊を引き込んでいった。
未だに助けようとしているその様が面白かったのか、ジルは僅かにくつくつと笑うと、
「くく……掃除が楽でいいな、勇者は。また現れたら遊んでやるとし

よう」
「……牧場が上手く機能し続ける限り、勇者はあの様に力を発揮できないでしょうし、これでジル様の治世は盤石となりましたね」
「ほう？　お前がそういうことを言うのは珍しいな。ノスにでも影響されたか？」
「いえ、そういうわけでは。単純に事実を申し上げているだけです」
あいつに影響されるとか冗談じゃないな、と、内心で同僚の忠誠心を吐き捨てていると、ジルは再び機嫌が良さそうに口元を弓形に吊り上げた。
「そうか。なら、帰ったらまた褒美をやろう。今度は何が欲しい？」
そんな風に褒美を問われるが、これの答えは一つしかない。
レオンハルトはげんなりしながらも、それを表には出さずに一応は答える。多少違うことを言っても機嫌を損ねることはないだろうと今までの経験から、
「……では、適当な宝でも……」
「ほう、宝か。上げたいのは山々だが……くく、生憎とお前に相応しい宝は切らしていてな。別のモノにしろ」
ニヤニヤとしながらジルが再度考慮するように言う。だから再び、
「……なら、高価な酒など……」
「酒か。悪いがそれも切らしてる。くく……それより、もっと欲しいものがあるだろう？　遠慮せずに言ってみろ」
こちらの顔を見上げながらジルは促してくる。宝も酒も幾らでもあることを、レオンハルトは知っているし、ジルも知っているはずだが、それでも一つの言葉を言わせたいのだろう。
レオンハルトは出かかった深いため息を飲み込み、代わりに別の言葉を吐き出す。それはジルが欲しがっているであろう言葉だ。
「……では、ジル様を頂けたらなと……」
「……くくく……！　そうかそうか……まあ、お前程働き者の部下の頼みならしょうがない。私が一肌脱いでやろう……」
――全裸のお前が言うな。脱ぐものないだろうが、と、本来の意味だとしたら的はずれなツッコミだが、実は的を射ているツッコミを内

心で行う。
　しかしそれを言うことは叶わず、露骨に口元をニヤけさせてこちらを責めるように見るジルの言葉を受ける。
「そんなに私の身体を味わいたいなら、褒美でなくともいつでも言うがいい……くっ、くくくく……！」
「……身に余るお言葉。光栄に存じます」
　――全部お前が言わせたんだろうが……このセクハラ魔王め……。
　と、男上司にセクハラされる女性の気持ちが微妙に分かってしまい、レオンハルトは表で恭しくお礼を言いながらも、憂鬱な思いを感じて頭を抱えた。

独りの人間

人類の希望、勇者アキラが魔王ジルに為す術もなく敗北してしばらく。

各地の人間牧場は容赦なく人間を苦しめ続け、その扱いを日常のものとしていた。

そして野良では、魔物の目を盗みながら身を寄せ合い、怯えて生きるしか無い人間達。

そんな時代のそんな環境において、この時代に生まれた一人の男は、その全てを〝どーでもいい〟と称し、思うがままに生きていた。

「――……あぁ……？　もう朝か……」

岩山の影に隠れるようにして作られた閑散とした人間の村。その小屋の中で、一人の青年が目を覚ます。

目元を隠すほどの長さの暗い紫色の髪を適当に掻き回し、欠伸をしながらその身をベッドから起こす。古ぼけたものしかないが、毛布があるだけでも上等だ。他の家具も、軒並み質素だが、この時代の人間の暮らしにしては並以上の生活を送れている様子が窺える。

男が使っているねぐらだが、その小屋も、家具も、全ては適当にそこらからかっぱらってきたものだ。

家具を売ってる親切な店など、存在しない。それどころか、店なんてものもかなり珍しいものだ。時折やってくる、なんたら商会の行商人とやらが、数少ない貴重な食料などを売りに来る場合もあるが、基本は自分達で調達するしかない。

野良の人間の暮らしなど、そんなものなのだ。餓死する者も多い。誰もが生きることに必死なのだ。

だがそんな中にあって、この青年――レイ・ガットホンは、特に焦ることも不安に駆られた様子もなく、面倒そうに起き上がって、そこらを見渡して呟いた。

「……メシがねェな」

生きるためには必要不可欠な食料がない。

それは死活問題であったが、レイは特に何も思うでもなく、腹が空

いたから、という己の本能と欲求に従って何の気なしに外に出る。
「さぁて……」
荒野の岩山に隠れるようにして建てられた人間の村。その離れに建てられた小屋から出てきたレイは、朝日を鬱陶しく思いながら村へと降りていく。
今の時間であれば夜のうちに外に行っていた奴らが帰ってくるころだろうと。
そして案の定、レイの求める類の者はいた。
「はぁ、なんとか手に入れられたな……」
「これでまたしばらくは保つ……」
何名かの男たち。彼らの手には、何かが入った大きめの袋がある。
それはおそらく、食料であることがレイには分かった。
だから、レイは何も憚ることなくそれを実行に移す。彼らの背に近づき、
「おい」
「え……っ、レイ……さん」
男達がレイに気づく。会いたくない人物に会ってしまったかの様に引き攣った表情を浮かべつつも、下手に出るような怯えた表情でレイの顔色を窺う。
「ど、どうしたんですか、レイさん？」
「……分かってンだろ。――食料だ。寄越せ」
それ以外に、己がお前らに声を掛ける理由などありはしないと言った風に、レイは貴重な食料を寄越せと男達に言う。
そんな横暴な振る舞いに、しかし男達は怒ることはなく、やはり顔色を窺うように告げた。
「で、でも……これは、村の人たちの分もあって……」
村の人たちの為に危険を冒してまで取ってきたという食料を、全て渡すわけにはいかないと、男はレイに訴える。
しかしレイはその答えに鼻を鳴らし、
「ふん。だったらお前らだけでここを守ってみるか？」
「それは……」

男達が言い淀む。レイはそんな彼らの反応を鼻白みながら、
「魔物を追い返す代わりに、食料を寄越すって言ったのはお前らだろうが」
と、レイの口から告げられたものは事実であった。
だからこそ、男達はそれに言い返す道理がない。
しかし感情からか、空腹状態であるという本能からか、男達は胸の内に黒いものが湧き上がる。
確かに食料を分けるとは言ったが、毎日の様にきっちり一人分の食料を取られてはたまったものではない。
レイ一人が1食に食べる分で、ここの人間は3食以上は平気で保たせることが出来るのだ。
この時代の一食分と言えば、それが通常のものである。レイのように腹いっぱいに食べられることなど、あり得ないのだ。
だからだろうか。男達は衝動的に、レイを害することを決めて、媚びるような笑みを見せる。
いつでも懐のナイフに手を伸ばせるようにしながら、
「……分かりました。食料を――って、あれ？　レイさん、後ろに何か落ちてますよ？」
「あん？」
男が指を指した先を、レイが身体を半身にして視線で追いかける。その顔が、こちらから逸れた瞬間だ。
「――っ！」
男はレイの心臓目掛けてナイフを突き刺そうとした。
だが、
「――バレバレなんだよ雑魚共……！」
「なっ……!?　がっ!!」
襲いかかってきた瞬間に振り返ったレイの拳が、男の顔面を直撃する。
顔面の骨を砕きながら数メートルほど吹き飛ばされた男の一人に、もう一人の男も焦って得物を抜こうとするが、
「おっ……らぁっ！」

「か、はっ……!?」
その前に首根っこを掴んで自分の元に引き寄せたレイは、もう一人の男をそのまま反対の手で殴り倒し、倒れた男を思い切り蹴りつける。
痛みと衝撃で完全にダウンした男達を見下ろし、レイは苛ついた様に吐き捨てる。
「ケッ、つまんねェ騙し討ちなんかしやがって……やるならもうちっとマシな挑み方しやがれ」
この程度じゃ熱くなることも出来ないと、レイは男の手から落ちた食料を手に取りながら怠さを感じて息を吐く。
「クズ共が……これじゃあ、俺の方が騙された間抜けだな」
求めるばかりで、群れるクズに悪態をつく。この男だけではない、食料程度なら自分でも取ってこれるが、レイは己を利用しようとしているだけのクズに踊らされた自分にも自嘲する。
レイ・ガットホンには、生まれながらに力があった。
周囲を顧みず、我を通せるだけの力があった。
人間にしては異常な力を持つレイの強さは、人間だろうが魔物だろうが問題にせず、好き勝手振る舞うことが出来る。
そして本人も、我を抑えるような気質でもなく、頼まれたからと無償の奉仕を行うような性格でもなく、愛想もない。
周囲の人間はレイの秀ですぎる力を恐れ、彼から距離を取った。
しかしそれも、レイは問題としない。
孤立しようがレイは生きられる。それを問題にしないだけの力がある。
強すぎる力に怯える周囲の方がくだらない雑魚なのだと、彼は思っていた。
偶然にも魔物に襲われている村を、ただ暴れたいからという理由で魔物を殴り殺して助け、まるで英雄の様に祭り上げられたが、それを鬱陶しく思い、食料をくれるというので何となく少し居着いてみた。
しかし彼らは、レイの力を利用しようとしていただけであった。
ここのところ、魔物が村を襲ってはいなかったため、もう必要ない

と判断したのだろうか。とにかく邪魔者だと思ったのだろう。
村の人間はレイのことを皆恐れているし、疎ましく思っている。それは彼らの視線や態度から垣間見えた。
「――くだらねェ」
そんな思惑に乗ってやる必要なんてない。自分はやりたいようにやるだけだ。
生きるために必要なのは力だけである。それは特に教養のないレイであっても分かる単純な現実だった。
世界は魔物で溢れかえっており、人間は彼らに飼われるか、隠れながら生きるしか無い生き物だ。以前耳にした話だと、数十年前まで、レイが生まれる少し前までは、人間も国というのを持ち、魔物と戦争して覇を争っていたというが、それが本当か嘘かすらどうでもいい。
少なくとも今、レイが知る世界では、力が全てだった。
腹を満たしたければ自分で取ってくるか、他者から奪うしかない。どちらも力が必要不可欠であり、中にはこと同じ様な隠れ里などで交渉や金、物々交換などをして手に入れることも出来るが、それも能力や知恵がある者だけであり、より確実なのは力の方だ。
他者から奪うことなんて、当たり前のことなのだ。レイもそうやって生きている。
飯を奪い、気に入らない相手を潰し、ヤリたい女がいれば襲う――それが普通の世界だ。
別に欲が強い方ではないレイだが、やりたいことをやるだけであり、それらを抑える理由も気分もなかったのだ。
「……ふん……ここもつまらねェな」
レイは独り言を呟き、早々にこの村を出ることを決める。
食料を取りに来たその足で村から出ていくが、ねぐらに戻って持っていく物など一つもないし、必要になればそこらで取ってくるだけだ。
僅かに向けられる視線を受けながら、レイは袋から適当に取り出した黒くて固いパンを取り出して口に含む。
不味くもないが、別段美味というわけでもない味だが、これでも人

間が食べるものにしてはかなり上等なものだ。そこらの得体の知れない草を食べることだってあるし、人間牧場から盗んでくるようなものは、これまた得体の知れない固形物だったりする。
以前手に入れた、冒険者用の携帯食料なども、よく分からない食感とよく分からない味のものばかりだった。
しかしそれらを不味いと言えるだけの舌を、今の人間は持ち合わせていなかった。
もう少し上等な隠れ里にでも行けばマシなものが食えるかもしれないし、何か幸運があって、もしくは数十年前を知る老人などであれば、以前食べていたような料理の味を知り、今の時代に食べるものを、〝不味い〟と評することが出来るのかも知れない。
レイが食べている黒パンは、どこで手に入れたものかは分からないものの、かなり上等なものの一つで、レイにとっても食えない味ではないと思わせるほどではあった。
しかしレイは、飯の味などどうでもいいと、同時に思う。
彼の心に常にあるのは――〝退屈〟だった。
……つまらねェ。
胸の内を占める〝渇き〟と退屈。そして沸々と湧いてくる苛立ちに、レイは年がら年中、苛まれていた。
そしてだからこそ、こうも思う。――暴れたい、と。
レイがその退屈を紛らわせることの出来る唯一のものが、己の力を存分に振るうこと。
即ち――戦いだった。
故に彼は駆り立てられるように、何もない荒野を一人で歩き出して、退屈を紛らわせるための相手と機会を探す。
切っ掛けや相手は何だっていい。
ただ暴れられればそれで構わない。やりがいのある相手であればなお良い。
以前に相手した強いモンスターや、人間の冒険者との戦いを思い出してその衝動を高めていく。
襲いかかってきた相手や、目が合った相手をブチのめしてしまえば

いい。
　些細な切っ掛けでも、彼の中で燻っている苛立ちを、怒りに燃え立たせるのには充分なのだ。
　だからこそ、彼は魔物兵の集団を見つけた時、自然と笑みを浮かべてしまう。
「ははは！　おら、逃げろ逃げろ！」
「魔物様を楽しませてみやがれ！」
　それは魔王の配下である魔軍の兵。彼らが行うのは、この時代では珍しくもない――〝人狩り〟だ。
　普段は人間牧場にいる人間達を魔物達は虐げているが、それをつまらなく思ったのか、より活きの良い獲物で愉しみたいのか、魔物兵達は野良の人間達を探して追い詰める人狩りに、少なからず精を出すようになった。
「うああっ！　あがっ、ひっ！　やめ、やめてくれぇぇぇ……！」
「いや、ひぎ、うぐっ、いや、いやぁ……！」
　レイの視界の中では魔物兵の集団が人間を囲むようにして襲い、男が拷問され、女が犯されている。
　それらを助けるつもりなど、微塵もない。
　だが、魔物兵の集団というのは、今のレイにとって都合のいい相手であった。
　故にレイは、無造作に、気配を隠すでもなく、ずかずかと自然に近づいていく。
「……ん？　おっ。こっちにも人間がいるじゃねぇか」
「え？　ああ、本当だ。へへ、追い回して……って、おい。なんか普通に近づいてくるぞ？」
「逃げないのか？　……ひょっとして頭イッちゃってる系の奴じゃないか？」
「えぇー、それなら俺はパスだな。狂った人間虐めてもつまんないし……」
「探せば牧場に幾らでもいるからなぁ……まあ、大体勝手に死ぬんだけどよ」

「狂っちまうと反応も鈍いしな。放置してようぜ」
「ま、そうだな。それか、やりたいやつが勝手にやるだろ」
と、魔物兵達はレイが近づいてくるのを見ても特に戦闘態勢を取るわけでもなく、他の人間を虐待する方に戻っていった。
彼らの反応は、人間が変わった動物を見つけた時のものに似ていた。
こちらを見ても逃げようともしない変わった個体。だからこそ、関わっても楽しくないだろうと魔物兵達は無視する。
しかしそのレイという動物は、人間の中でも、とびきり凶暴な――猛獣だった。
「ぐあああっ……っ!?」
「！　何だ？」
「悲鳴か？」
次の瞬間、魔物兵が殴り飛ばされ、即座に絶命する。
魔物隊長や魔物兵が何事かと未だ事態を把握していない様子で、断末魔の方向を見ると、
「へっ……ちったぁ、楽しませろよ」
と、魔物兵を殴り飛ばしたレイが、前髪の奥の眼光を、魔物達に向ける。
そして、取り出した櫛で、前髪をかき上げて戦闘の邪魔にならないように、全力を出せるようにすると、
「――――叩き潰してやる！」
「っ……!?」
魔物兵達は、単身で突っ込んでくるレイとの戦闘に、不意打ち気味に突入した。

――レオンハルトシティ。
魔物兵達が行き交う大通りから少し外れた路地に、魔物兵達に人気のお店があった。
大衆食堂、〝食仙人〟。このお店は日頃から多くの魔物兵達が気に

入られている知る人ぞ知る名店であり、レオンハルト軍が発行しているレストランガイド、〝ミシュランブック〟にもお勧めのお店として乗っており、あのグルメ魔人、ガルティアも星二つを付けるほどの人気店なのだ。
普段は常連と新規客で溢れるその店内は、しかし今は、閑散としており、カウンターに二人の人影があるのみであった。
人の形をした二人は、人であって人ではない。魔の気配を色濃く漂わせる二人は、この店を貸し切りにした魔人であった。
「――ああ？　兵がやられてんのか？」
「ああ……というか、お前のところの兵だけどな」
と、カウンターで大量の料理を並べて食事をするのは、褐色の肌に紋様が目立つ緑髪の青年、魔人ガルティア。
そして幾つかの料理を摘みながら、珍しく酒を飲むのは、短く切り揃えられた金髪に、鋭い目つきから赤い眼光を覗かせている魔人、レオンハルト。
二人は特に理由もないが、たまにこうして何となく飲みに出かけることがあるのだが、そこで不意に、レオンハルトから情報が齎された。
レオンハルトとしてはそれを言うついでに誘った様な部分もあるが、そうとは知らずにガルティアが軽い調子で驚き、何気ない様子で料理を口に運びながら呟く。
「マジかよ。全然知らなかったな……」
「おい」
何で知らないんだ、と呆れる様にレオンハルトが責める視線をガルティアに向ける。ガルティアは気にした様子もなく、笑みを浮かべ、
「つっても、ここ数日はこっちにいたからなぁ……そんくらいの出来事だろ？」
「まあ、そうだが……にしても何で俺の方が先に知るんだ……普通、お前のとこにまず報告が行くだろ」
と、レオンハルトは半ば嘆くように指摘する。ただでさえレオンハルトは忙しいのに、何故ガルティアのところの兵の報告がこっちに来るのかと。

しかしガルティアは思い出そうとするように声を上げ、
「あーーー……そりゃあれだな」
「？　あれってなんだ？」
再度問うような言葉に、ガルティアは頷く。あっさりと、
「なんかあったら報告はレオンハルトの方に送っとけって命令したから……」
「ふざけんなよテメェ!?」
レオンハルトが瞬間的に怒る。厨房の奥でガシャン、と食器を落とすような音が聞こえたが、それに構うこと無くレオンハルトはガルティアに詰め寄る。
「俺がどんだけ忙しいか分かってんだろ!?　自分のとこの事件くらい自分で把握しとけ！」
「あー、悪い。前に長いこと城に来た時に伝えちまっててな。レオンハルトに伝えてくれれば、ついでに俺にも伝わるかと思ってよ。それ、無効にするの忘れてた」
さしものガルティアも、レオンハルトの剣幕に若干目を逸らして苦笑混じりに謝る。それを聞いてレオンハルトも、まだ若干イライラとしながら、
「……とにかく、お前にやってもらうからな、その仕事」
「その人間を殺せって？」
情報を聞いたガルティアが軽い調子で問いかける。魔人の世界にとって、誰ぞを殺すなどの命令や仕事は日常茶飯事であり、今更両者の間でそのことで引っかかりはしない。
気になることがあるとすれば、その人間がかなり強いらしいってことくらいだ。それこそ、兵では敵わず、何度も人狩りの部隊がその人間を殺そうとしているが、いつまで経っても捕まらないくらいには。
だからこそ、遂にはその命令が出されたのだ。
「……ジル様からの命令でな。その人間を捕らえて眼の前に引きずり出せ、ってな。そのための采配を任されたんだが……それをお前にやってもらう」
「ってことは捕らえろってことか」

魔王ジルからの命令。魔人達を従える女王から直々の命令で、その人間を捕らえろと告げられた今、そのために動かないわけにはいかず、それが実現しないわけにはいかない。
魔王の命令は絶対。言ったことは、必ず叶えるし、叶うものだ。
魔人筆頭、魔軍参謀として、レオンハルトはそれを叶えるために最善を尽くさなければならない。
故にガルティアにそれを頼んだのだが、ガルティアは顎に手を当てながら、
「まあ、いいけどよー……それなら暴れたくてしょうがないレキシントンとかノスにやらせればいいんじゃねぇか？」
「暴れたがりだからやらせたくねぇ。ノスなんかは忠実に従うだろうが、レキシントンだと、仕事の最中に滅茶苦茶やりそうだからな……」
「あぁ、なるほどな」
レキシントンなどは暇そうで暴れたそうにしているが、それだけに人間を間違って殺してしまわないか不安でしょうがない上、仕事をきっちりこなしてくれなさそうで任せたくない。
ノスはジルの命令なら素直に従うだろうが、レオンハルトは道理に従ってガルティアに任せることにしたのだ。
「へっ……まあ、俺の管轄内で起きたことなら、俺がやるのが筋に違いねぇな」
「そういうことだ……はぁ……なんでジルは俺ばっかり……他の奴にしろよ……」
レオンハルトが酒を煽りながらそう結論付ける。
どうにもストレスが溜まっているのか、いつもより飲むペースが早い上、ブツブツと愚痴を呟いている。
酒を飲むことも少ないレオンハルトがこれだけ飲むとなると、やはりそういうことなのだろうとガルティアは思う。
大体自分と飲む時は愚痴なんかも多いが、最近は特に苦労があるようだった。
だから、というわけでもないが、ガルティアは食事を取りながら肩を鳴らして何の気なしに言う。

「……ま、お前も忙しそうだしなあ。結構やる奴みたいだし、たまには腹ごなしに動くとするか」
「そうしてくれ……いや、ほんと頼むぞ」
　頼むから逃してくれるな、というため息付きの言葉に、ガルティアは強いと噂の人間を思い、楽しげに唇を歪ませて頷く。
「任せろ。これ食ったら行く」
「……お前にしては行動が早いな。それ食ったら行くんだな？」
　と、レオンハルトが訝しむように確認を取る。
　するとガルティアはその場で動きを止めて考え込み、
「……やっぱ後数軒――いや、数十軒回って、最後に城で飯食ってからでいいか？」
「――いいから早く行けッ！」
　レオンハルトの素の怒りの声が室内に木霊する。
　――ガルティアは己の友人から頼まれた仕事をこなすため、その日のうちに自分の軍を率いて、目当ての人間を探し始めた。

魔人レイ

「――おっ、らぁあああああああぁぁ!!」
「へぶっ!?」
その人間の男――レイ・ガットホンは、荒々しい雄叫びを上げながら何十体目かの魔物兵を己の拳で屠ると、周囲を見渡した。
「っ……はぁ……はぁ……これで、終わりか……」
息を整えながら、周囲に転がった魔物兵の死骸を見渡す。
立っている者は一人もいない。全てレイが、その手で殴り、蹴り殺したのだ。
一応、戦いが終わったことでレイはほんの僅かに気を緩めてふらつく。
「へっ……やってやったぜ……!」
レイも無傷ではない。
一部隊を丸ごと相手にするのはさすがに骨が折れるもので、人間として規格外な強さを持つレイであっても、身体の所々に赤の線や痣を作っている。
しかしその口元に浮かぶのは、愉快そうな笑みだ。
全身の痛み、疲労、そして戦闘に勝利した時の高揚感。
今もう一度襲われたら危険だという焦燥感も全て刺激に、生きているという充足感に変換される。
このときばかりは、訳も分からずに苛まれ続ける退屈や苛立ちというものから解放されるのだ。
人狩りの為に集まり、狙いをつけてくる魔軍を、たった一人で相手取るのは、レイの日常における極上のスパイスだった。
「――いたぞ！　例の人間だ！」
「くそっ、またこんなに仲間を……なんとしてでも捕まえろ！」
「！　来やがったか……！」
遠くから、こちらに気づいた別の魔物兵達がこちらに近づいてくる。
このまま戦ってもいいが、また一部隊を相手にするまでは体力が保

たないし、それ以上の数がいるようにも思える。
故にレイは、屈辱と怒りを感じながらも逃げ出した。
同時に、大勢の魔物達がこちらの命を狙ってくる状況、窮地に陥っていることに激しいスリルと興奮を覚える。
……面白ェじゃねぇか……！
人狩りの標的に初めて成り、それを叩き潰したときから魔物兵との戦いは退屈を紛らわせるためのいい時間だった。
しかしこの頃、さすがに目をつけられたのか、魔軍が自分を探し回り、部隊を差し向けるようになっていった。
魔物の数は徐々に多くなっていき、今では一軍丸ごとが自分を狙っている。
それは幾ら人間の中では規格外なレイと言えども、いつ追い詰められてしまうか分からない危険な状況だ。
全力を出したとしても勝つことは難しい。
そこまで執拗に狙ってくることに怒りを感じつつも、同時に充実を感じてしまう。
暴れることの理由を与えられるのは、レイにとって好ましいものであったのだ。
追撃を掛けてくる魔物兵を躱し、時には殴りつけて迎撃し、勢いのままに駆ける。
怒りと屈辱を糧に力を振るうと、生きているという実感を感じる。
訳の分からない想いが薄れていくのを感じる。
ただ好き勝手に過ごすためだけに、レイは魔物兵との死の追いかけっこに興じた。
だが――
「――おお、ようやく見つけたぜ」
「っ……何だ、てめェは……？」
魔物兵の集団。それらを率いるように先頭に立つ人間の様な男がいる。
褐色の肌に緑色の髪。腹に大きな穴が空いた男だ。
魔物か、と思うも、その気配はかなりやりそうなもの。人間の姿を

しているだけで、普通ではないことは分かる。
　そしてレイが、まさか、という思いを内心で強めた時、先頭に立つその男はその名を口にした。
「魔人ガルティアだ。お前だろ？　最近魔物兵を相手に大立ち回りを演じてるやつってのは」
「……魔人……！　てめェが……！」
　大陸の支配者である魔王。その忠実なる配下である魔人。
　各地の人間牧場を運営している、人間にとっては強大な恐怖の存在である魔人。そのうちの一体がとうとうレイの前に現れたのだ。
　ガルティアと名乗るその魔人は、背後に大勢の魔物兵――魔物隊長や魔物将軍すらも引き連れ、レイを囲ませ逃げられないようにすると、
「頑張ってるお前には悪いけどよ。魔王様とか俺の友人が、お前を捕まえろって煩くてな。捕らえさせてもらうぜ」
「……チッ、そうかよ……」
　とうとうこちらを捕まえるために本腰を入れてきたというわけだ。
　最初から追い詰めるために網を張っていたのだろう。待ち伏せされ、周囲を囲むように現れた魔物兵の動きに、そう確信を得る。
　徐々に距離を詰めてくる魔物兵達に、しかしレイは爆発的な速度で魔人に突っ込んだ。
「――なら捕まえてみろ！」
「――っと。ははっ、随分と思い切りがいいな！」
　ガルティアは、稲妻の様な勢いを持つ男の拳を受け止めた。
　腕を差し出すような防御だが、特に力を込めてはいない。レイの全力を込めた拳は、ガルティアの肌に到達する前に、硬い壁のようなものに阻まれてしまった。
「なっ……!?」
　自分の拳が全く通用しない。そのことに驚愕するが、ガルティアはその反応を見て苦笑しながら、
「おお、その反応だと知らねぇか。これは、〝無敵結界〟っってよ。魔人は皆これを備えてるんだが……まあ、これのせいで、他の生物の攻

撃は一切食らわねぇんだわ」
「……！　んなこと知るかよ……！　おらぁッ!!」
砕いてやる、と言わんばかりに、先程よりも力を込めて拳を連打するが、そのどれもが無敵結界に弾かれてしまう。
「おお、おお……気合入ってんなぁ。これだけやれる人間は久し振りに見たぜ。兵がやられんのも納得だな」
「舐めやがって！　上から語ってんじゃねぇぞ……！」
蹴りをお見舞いし、それも弾かれたところで、今度は魔人が動き出す。
「まあ、このままだと大人しくしてくんねぇだろうしな。ちょっくら倒れてもらうぜ」
「っ、ぐ、おお……ッ！」
懐から蛮刀に似た得物を取り出し、レイに向かって振るう。
今まで見たそのどれもより鋭い攻撃に、何とか横っ飛びで躱したレイだが、その間に、既にガルティアは爪の間から糸を伸ばして、レイに巻き付け、彼を思い切り引き寄せた。
「なん、だ、これは……ッ!?」
「一応戦闘中に、それを教えるほど俺は親切ではねぇなあ……というわけで、ちょっと眠ってろ」
「ぐ、がはっ……！」
謎の攻撃を喰らい、ガルティアの元に引き寄せられたレイは、ガルティアの拳を腹に喰らい、血を吐きながら地面を転がる。
その様を見て魔物兵達が沸き立つ。魔物将軍がガルティアの元に近づき、
「お見事です、ガルティア様」
「おお。とりあえず、適当に捕らえて連れてくぞ。あんまり遅いとまた文句言われるからなあ」
「はっ、畏まり――」
「――あ？」
と、ガルティアが懐から肉を取り出そうとした時、魔物将軍とガルティア、それと魔物兵達の動きが止まる。

ガルティアに殴られたレイが、ふらつきながらも立ち上がっていたからだ。
「っ、はぁ……はぁ……！　ま、だ、終わりじゃ、ねぇぞ……っ！」
そして拳を構え、未だ戦い、抵抗する様子を見せる。
それにガルティアは感心するような声を上げた。
「へぇ……あれで立つのか。やるもんだなぁ……」
「とはいえ、瀕死の様ですが……如何しましょう？」
魔物将軍がどうするかとガルティアに問いかける。するとガルティアは顎に手を当てて僅かに思考し、
「殺すのは無しだからな。普通に捕らえろ。うっかり殺しちまったら、魔王様もレオンハルトも怒るぞ」
「っ……はっ、了解しました。――聞いたな、お前達！　その人間を捕らえろ！」
「は、はいっ！」
大勢の仲間を殺され、鬱憤が溜まっていた魔物兵達だったが、ガルティアの口から出てきた魔王とレオンハルトの名を聞いて、怯んだ様子を見せる。彼らの命令に反して怒らせるなど、死は免れないどころか、ただでは死ねない可能性もある。
それを思うと、抱えていた怒りや不満など、どうでもよくなった。
迅速に瀕死のレイを囲んで捕らえる。その際に、未だ抵抗の意志を見せるレイが何体かの魔物兵を殴り倒したが、瀕死で立つのがやっとの状態での底力だ。すぐに数十もの魔物兵に取り押さえられ、手錠と鎖が巻きつけられる。
だがそれでもレイは身体を動かして暴れ、
「ぐ、うっ、うおおおおおおおおぉぉ!!　離し、やがれ……ゴミ共がぁぁ……ッ！」
「くそっ、暴れるな！」
「おい、そっちも抑えろ！　もう歩かせるな！　蹴られるぞ！」
「くっ、なんて凶暴な人間だ……！」
必死の抵抗を続けるレイを、魔物兵達は鎖を巻きつけることで身体の動きを封じていく。

肉を食いながらその抵抗を見ていたガルティアは、傍らの魔物将軍に向かって何気なく声を掛けた。
「あれは大丈夫なのか？」
「……本来であれば、もう少し痛めつけて運ぶことも考えますが……それで万が一殺してしまうことを考えると、容易には……」
「だよなぁ。俺がもう一回殴ると死にそうだし、しょうがねぇからこのまま運ぶか」
「……畏まりました」
魔物将軍が溜息をつきたくなるような間で頷く。
平和な時代であっても、やはりたまにはこういう事件も起り得てしまうものだ。
特に、野良人間が集団で魔物を殺すような事件などは、魔軍にとっては脅威とは言えないまでも、中々に悩みの種である。
探し出して討伐してやりたいのは山々だが、野良で生き残るような人間は中々に巧妙で手強いため、解決に至りにくいのが現状だ。
今回の、この凶暴な人間の捜索も、随分と犠牲が出てしまったし、最終的には魔人にまでご足労頂くことになってしまった。
それを思うと任務がほぼほぼ完了したとはいえ素直には喜べない。手こずってしまったのもあって、褒美も期待出来ないのだ。
「それにしても抵抗が激しいな」
「ええ……ですがまあ、魔王様を前にすれば大人しくなることでしょうし、直に処刑されることとなるでしょう。それを思って溜飲を下げることに致します」
「そりゃあな。普通の人間には耐えられねぇだろ」
と、ガルティアは告げながらも、同時にこうも思う。
普通であれば、魔王に興味を持たれて連れてこられた人間の処遇など、凄惨な拷問を受けた末に殺されることに決まっている。
しかし、殆どあり得ない確率だが、生き残る可能性も無くはない。
だからまあ、冗談としてガルティアは言った。十中八九、そうはならないだろうな、と思いながらも、
「気に入られて魔人になったりしてな」

「ははははっ、ご冗談を。あの魔王様が人間を魔人になど……」
「分かんねぇぞ？　レオンハルトのことは気に入ってるみたいだしな」
人間が嫌いな魔王であるジルが、人間を魔人にするなどあり得ないと、魔物将軍は上司の言葉に笑う。
そして続く言葉に頷きながらも、
「魔人になっている元人間であればまた別なのでは？」
「ま、そうだな」
ガルティアも、そうだろうな、と思い、同意する。人間と、元人間の魔人ではやはり違うだろう。
そもそも魔人になった時点で、もう魔人という種族には違いないからな、と思い、魔物将軍の言葉を聞く。
「もしあの人間が魔人にでもなったら、ガルティア様と同じだけの料理を平らげてみせますよ」
「ほお？　言うな。まあ確かに、殆どあり得ないけどよ」
「はい。だからそうはならないでしょうね。どちらも無理なことなので」
そんなやり取りを交わしながら、魔人ガルティアとガルティア軍は、目的の人間を差し出すため魔王城に向かった。

レイ・ガットホンは、魔軍の手に落ち、魔王城の牢屋に投獄された。
血まみれになりながら鎖に繋がれたレイは、瀕死の様相でありながら――
「くっ、そ、がああああああああああああああ……!!」
レイの、振り絞るような叫びが地下牢に木霊する。
ガチャガチャと鎖が鳴り響く音、血が滴り冷たい床に落ちる音を覆い隠し、身動きが取れないまま暴れようとするレイの様子に、牢番の魔物兵達も困り果てた。
「うるせぇぞ人間！　大人しくしろ！」
「今すぐ処刑されてぇか!?」

「がっ……！　ぜぇ……はぁ……やって、みろよ……処刑する瞬間に、てめェだけでも殺してやるぜ……！」
「っ、この……！」
牢屋に入ってきた魔物兵が軽い拷問用の鞭でレイを打ち付けるも、レイの生意気な態度は全く衰えず、なおも凶暴な視線を髪の奥から飛ばしてくる。
その態度に苛ついた魔物兵が再び鞭を振るうも、レイは手足を動かそうとじゃらりとした金属音を響かせながら魔物兵に組み付こうとする。
それは鎖によって阻まれ叶わない。だが、その凶暴過ぎる暴れっぷりに魔物兵が一歩後退った。
「なんなんだよこいつ……全然大人しくならねぇ……！」
「もう放っておけよ……どのみち、しばらくすればそいつも死ぬんだからよ」
と、もう一体の魔物兵に宥められ、魔物兵がレイの牢屋から出ていく。
再び一人となったレイは、もはや何をしようが無駄で、死が免れない場所に来ながらも、抵抗を止めようとしなかった。
「クソ、が……外れねェ……！」
何とか手足の鎖を引き千切ろうと力を込めるが、鎖はびくともしない。
体力が全快であれば、ともすればそれも可能だったかもしれないが、今のレイは戦闘による負傷と、度重なる死なない程度の拷問で体力が底をついている状態だ。
少しでも気を抜けば失神し、もう起き上がれないだろうし、それどころか目を覚ますかどうかも分からない。
そしてこの、身体の内を占める怒りは収まらない。
故にレイは、未だ暴れようと抵抗を続けていた。
鎖を引き千切ろうと咆哮を上げながら身体を暴れさせて、それが無駄だと分かったところで少しだけ力を抜く。
しかしまたしばらくすると、同じことを繰り返す。

もう何度同じことを繰り返したのか分からないし、どれだけの時間ここにいるかも分からない。
だがレイは、己の内の衝動に逆らうことなく、ひたすら荒れ狂う様に暴れ続けた。
「がああああああッ!!　あああああああ……ッ!!」
何度も何度も声を上げ、この状況から逃れようと無意味に暴れる。
もはや何も考えられないし、何のために暴れているかも分からなくなってくる。
しかしそれでもレイは――暴れざるを得ない。
暴れていないと、もはや己を保てない。
怒りの矛先がどこにあるかも分からないまま、レイは只々闇雲に暴れ続けた。
それがまたしばらく続き、レイの気勢も段々と衰えてきた時だ。
「――――随分と、暴れているようだな……」
「――……ッ!?」
不意に、地下牢が異様な気で満ちた。
その女性の声が響いた瞬間、視界の中がむせ返るほどの恐怖で充満する。
そしてレイの牢屋の前に、それが現れた瞬間――レイは、本能的な恐怖から身を竦ませた。
「こいつが、報告にあった人間だな……」
「――は、レイと言うらしいです、ジル様」
そこに立っていたのは、全裸の美女と、金髪灼眼の美丈夫だった。
金髪の男が臣下のような立ち振る舞いを見せている。その男も凄まじいものであったが、より恐怖を感じたのは女の方だった。
それも当然だろう。その男から告げられた名前、それはこの大陸を支配する最恐最悪の魔王の名だからだ。
……こいつ、が……魔王、ジル……か……。
凄まじい圧力と存在感。こちらがちっぽけに感じるほどの強大な存在に、レイは呆然とそれを眺める。
そしてジルも、傍らの魔人に促されてレイの方を向いた。

視線が合わさった瞬間、呼吸が止まりそうな恐ろしい気を感じるも、レイはまだギリギリ残る思考の部分で、手に力を込めていた。
「――ぐっ、ううううう……ッ！」
「……ほう？」
「……」
ジルと魔人に牢屋の外から視線を向けられながら、レイは鎖を千切ろうと腕を動かした。
外れない。それだけの力はもう残っていない。
だが、暴れざるを得ないのだ、と、己の衝動に任せてレイは鎖をがちゃがちゃと鳴らす。
その様子にジルの目が、僅かに興味の色を覗かせる。
それは研究者が珍しい動物を見つけたかのような視線ではあったが、興味には違いない。
目を細めてレイを観察するジルは、ふと、思い立ったように呟く。
「――なるほど。面白い有り様だな……」
と、ジルはそう言いながらレイに向かって近づいてくる。
牢屋の鍵など必要としない。無理矢理入り口をこじ開けると、ひたひたと足音を立てながらレイとの距離を詰める。
「……ジル様。まさかとは思いますが――」
「くく……何、これも一興だ。たまには戯れに行動してみるのも悪くない……」
「……左様ですか」
その行動を眉を上げた視線で問いかけた魔人は、ジルの愉快そうな返答に少し間を置くと、異を唱えることなく頷いて黙り込んだ。
ご随意に、と態度で示した魔人と、もはや誰も止めるものがいなくなった魔王ジルの行動。
とうとう殺されるのか、と、レイは再び荒れ狂いながら暴れようとした。
だがその前に――
「――愚かなお前に、良いモノをくれてやろう」
「――！」

と、ジルは自分の手を自分で傷つけ、そこから滴る血を、レイの傷口に落とした。
瞬間、
「――――ぐ、おおおおおおおおおおおおおッ!?」
全身に、稲妻が走ったかのような衝撃と激痛が駆け抜け、レイは絶叫した。
体内が作り変えられるような異変。それを感じながらもあまりの激痛にレイの思考は止まる。
そして異変は周囲にも至った。
レイの周囲、レイを中心に、稲光が走った。
大気を裂くような轟音とともに散るような放電を発し、光とともに火花を発生させる。
雷が牢屋の中を、レイの身体を掻き毟るように暴れ狂う。
あれだけ引き千切ろうと力を込めていた鎖が音を立てて千切れ飛び、周囲の床や壁を黒く焦げ付かせながら雷は広がっていく。
それはレイの内心を表すかのような激しさであった。
放電を間近で目撃し、雷が伝わりながらも、ジルや魔人は小揺るぎもしない。
ジルは更に口端を歪め、魔人は無言のままそれを見つめた。
そしてやがて、雷が収まっていくと――そこには、身体からバチバチと電流を流す人型の青年がいた。
「――なん……だ……？」
未だ状況が理解出来ないように、レイが己の手を見て疑問の言葉を呟く。
しかし、それを見ていた者達には状況がはっきりと理解出来ていた。
この瞬間、レイという人間の男は――魔人に生まれ変わったのだと。

――後日。

「おい、聞いたか？　新しく魔人が増えたんだってよ」
「ああ、聞いた聞いた。何でも人間の魔人らしいな」
魔王城では、魔物兵達の間でその噂が既に広がっていた。
新たな魔人の誕生。それは魔物社会にとっての一大ニュースである。
何しろ自分達の支配者。上司となる人物なのだ。
その名や特徴などを知っていないと、場合によっては命に関わるし、知っていると役に立つことだってある。
魔軍に所属する魔物兵にとっては自分達の上役を知らないなど、基本的には許されない。
なので基本的に魔人や使徒の情報などは直ぐに広まる。
だからこそ、その魔人が魔王城の廊下を歩いていても、それが誰かなど知らない者は基本的にいない。
「……」
「お、おい……あれが……」
「ああ……魔人――レイ様だな……」
魔物兵達の視線の先に、人間の魔人――レイがいた。
人間を憎んでいると噂の魔王ジルが、何故か作った魔人。
理由は不明だが、理由なんてどうでもいい。
少なくともレイ本人はそう思っていた。
大事なのは、今の自分が、人間であった時と比べ物にならない力を得たということ。
そして、あのジルの下で更に暴れることが出来るということ。
そのことを思いながらも、レイは己に宿る力を制御しようとしていた。
だからというわけではないが、性分も変わっていないため、レイはひそひそとこちらを見て何事かを呟く魔物兵の視線に、ほんの僅かな苛立ちを感じて――だからこそ近づいた。
「――おい」
「へ？　――ぎゃあああああっ!?」
「な、何を!?　――がああああっ!?」

声を掛けると同時に、レイは魔物兵の身体に触れ、その身体に電気を流した。
一瞬で黒焦げになるほどの出力の電撃。それを無造作に振るったレイは、黒焦げの死体になった魔物兵を見下して独り言を言い捨てる。
「人のこと、じろじろとガンつけてんじゃねぇぞ……！」
そう、レイがその暴力を振るったのは、たったそれだけの理由だ。
魔物兵達の視線が癪に障った。その程度のことだけで、レイは己の身にある魔人の力を振るう。
無闇矢鱈に暴れるつもりはなくても、何か些細な切っ掛けさえあればその小さな火種を爆発的に増大させる。
つまるところレイとは、そういう人物であった。
好き勝手して、退屈を紛らわせるためなら何だって良い。
自分以外の存在など全てが暇潰しのための存在であり、その中でも暴れることが特に好きなのだ。
少なくともレイは、己のことをそう評していた。
そして魔人になってまだ数日だが、レイは思った。――悪くねェ、と。
魔人としての日々というのは、人間の時よりもスカッと出来る。
人間との詰まらない助け合いなんてものは存在しない。
己の力だけが全て。それがもっと分かりやすくなったのが魔物界だ。
最恐最悪の魔王が一番強くて、それが力で魔人と魔物達を支配している。
レイも思わず痺れてしまうような存在が、己を魔人にした魔王、ジルだ。
その下には魔人がいるが、魔人の行動は自由だ。
どれだけ飲み食いしようが、自堕落に過ごそうが、暴れ回ろうが自由。
気に入らない奴はぶっ飛ばしても構わない。
ルールは魔王の命令には絶対だということだけ。それ以外なら何

をしても構わない。
そんな刺激的な世界が、魔物界だ。
まだまだその全貌を理解出来たとは到底言えないし、心地いいことばかりとも言えないが、少なくとも人間の社会よりかは楽しめる。
今はまだ、それに飽きが来ていない状態であり、だからこそレイは思うがままにしようと魔王城を闊歩していた。
そうしていると、大柄な魔人と遭遇する。
「……よう、ノス。昨日ぶりだな」
「……レイか」
声を掛けた相手は魔人ノス。
地竜の魔人であり、魔人四天王の一角だという魔人の中でも指折りの強者だ。
だからこそ、レイはまた喧嘩を売ろうか悩むが、ついこの間に負けたばかりでまた挑むというのも芸がない。
故にレイは別のことを口にした。
「ジルの姉御は？」
「……今はレオンハルト様と一緒に部屋に居られる」
「……レオンハルト……あの野郎か」
ジルの姉御、と呼ぶのは尊敬しているからだ。
あれほどの力の持ち主。あれほどの恐怖の存在。眼の前に立つだけで震えるような相手を、レイは姉御と呼んで慕っていた。
だからこそ、何となくその居場所を側近であるノスに問うが返ってきた答えは、私室にいる。
そしてレオンハルトと一緒にいるということだ。
己が魔人になった際もジルの側にいた魔人を思い出しながら、レイは質問を重ねる。
「……なんかやってンのか？」
「……そうか。貴様はまだ知らぬか」
「あぁ？」
ノスがレイの問いかけに鼻を鳴らして応答する。レイが、何だ、と視線を上げてみれば、

「レオンハルト様はジル様にご寵愛を賜っておる」
「！　そいつは……」
学がないレイではあるが、その意味くらいは解る。
つまりあの二人は肌を重ねているのだ。
そのことを思い、レイは何とも微妙な空気のまま質問を重ねた。
「……気に入られてんのか？」
「左様。ジル様は、レオンハルト様を気に入っておられる」
「……ふん、あの野郎がねぇ……」
レイはここ数日、ほんの僅かに関わったレオンハルトの姿を思い出して鼻を鳴らす。
威圧的な鋭い視線を向けてくるスカした野郎という印象で、レイは何となく気に入らなかった。
魔人の最高位である魔人筆頭にして、魔軍の総指揮を行う魔軍参謀の地位にいる男。
後は嘘みたいな経歴を幾つかもつらしいが、そんなことはレイにはどうでもいい。
少しでも気に入らない奴であれば、己の力を抑える理由にはならない。
それに最強の魔人ともなれば、己の暇を潰す相手にはちょうどいいかもしれないと。
レイは無意識に身体に流れる電流を抑えきれず、僅かに火花を散らせる。
だが、
「――やめておけ」
「――……あ？」
そこでノスの声が不意に飛んでくる。
「レオンハルト様に喧嘩を売るつもりであろう。貴様程度では、勝てぬぞ」
それはこちらの意志を見抜いて制止するノスの言葉だ。
そしてレイでは勝てないと断言する。
最強の魔人という称号は伊達ではない。

己に負ける程度の実力では勝てるはずもないと、ノスは言うのだ。
だがレイは、
「……知らねェよ」
「――何？」
レイはその言葉を突っ撥ねる。
「やりたいようにやるだけだ」
と、言ってレイはノスに背を向けて歩き去っていく。
今日のところは出直そうという動きだ。
だが、その後は、構わずに挑んでやると、その背中から言外に漏れ出ている。
「……ふん、まだまだ青い……」
その背を見て、ノスはレイを若造だと評して失笑する。
しかし一方で、その無鉄砲さが、レオンハルトに叩き潰されるところを見るのも一興かと思う。
魔人の中でも戦闘狂に属するノスにとって、魔人同士の闘争は中々に面白みのあるものだ。
だからこそその戦いの気配を感じて、ノスは口元を歪めたのだ。

薄暗いその室内では、男女の乱れた息遣いが漏れ出ている。
ベッドを僅かに揺らしながら、その上で肌を重ねる二人は、直近の出来事についてのやり取りを行っていた。
「はぁ……んっ……くく……レオンハルト、気づいたか……？　あのレイという男の、愚かな在り方を……」
「……ええ、まあ……っ」
股間の部分で水音が鳴り響き、快感が強まるのに合わせてジルは喜悦の声を漏らし、レオンハルトも僅かに表情を歪める。
だがそんなジルの愉悦には、また別のことも混ざっていた。
それこそが、ジルが魔人にした、レイという男のことだ。
彼のことを、ジルはこう評する。
「あっ、んっ……アレの、中身は……空っぽだ……っ！」

レイという男には何もない、とジルは言う。
腰を揺らして極上の男を犯す快感を貪りながら、
「はぁ、はぁ……だと言うのに……何もない自分から目を背け、んくっ、その原因が、周囲にあるものと、決めつけている……くく、あれほど、愚かな男は、中々いないぞ……あっ」
「……確かに、っ、そうですね……」
甘い声を漏らしながら、ジルは言う。その下にいるレオンハルトは快感に耐えながらも同意を返した。
するとジルは一瞬冷めた表情を浮かべた後に、息を乱すレオンハルトを見て、笑みを吊り上げ、
「全く詰まらない、愚かな男だ、アレは……くく、そろそろイキそうか？」
「……ええ、まぁ……！」
「く、ふふ……！　なら、出せ……！　私の中にっ……思い切り……！」
ジルがそれを欲しがるように、腰をぐりぐりと思い切りレオンハルトに向かって擦りつけてそれを中で味わうと、程なくして――剣気が放出された。
「っ……！」
「――んんんぅぅ～～～っ♡」
ジルがレオンハルトの唇を無理矢理奪い、口内を蹂躙した瞬間――ジルが声にならない声を漏らして身体をビクビクと跳ねさせる。
そしてその震えはしばらく続き、やがてそれが少し落ち着くと、口を離して銀色の線を落としつつ、ニヤケ顔でレオンハルトの胸に顔を埋め、逞しい剣がドクッ、ドクッ、と跳ねる脈動をお腹の奥で感じて、堪らず吐息付きで腰をぐりぐりと更に押し付けると、
「はーっ……はーっ……ふふ、まだ、出し足りないだろう……？　次は、お前が上になれ……っ、んんっ」
「……畏まり、ました……」
今度は上になるように命じて、ジルはまたしばらくレオンハルトと淫蕩に耽る。

既にレイのことなど、欠片も頭には残っていなかった。

レオンハルトＶＳレイ

勇者を討ち倒し、更には新たな魔人、レイを加え、盤石となった魔王ジルの治世。
もはや人類に抵抗する手段はなく、野生で生きる人間達は毎日、朝日が昇る度に己が生きていることを喜ぶ毎日。
そして魔物達は、各地の人間牧場で魔王ジルの命令を受けて毎日人間を苦しめ、増やしていた。
その計画を実行した張本人である魔人レオンハルトは、魔王城での用事を終えて、次の仕事へ向かおうとしていた。
背後に使徒の内の二人――キャロルとペールを連れた状態で、
「――そういえばレオンハルト様、おっぱい揉みますか？」
「……何が〝そういえば〟なんだ？」
馬鹿なのか痴女なのか、あるいはそのどちらもなのか。ペールが真顔でそう言ってきたのを歩みを止めることなく、言おうとした言葉を飲み込み、半目で吐息を吐きながら問いかける。
するとペールは得意気な笑みで答えた。こちらを見上げ、首を傾げながら、
「いやー、まるで仕事の報告を行う感じで言えば、自然に頷くかなーって思ったんですけど、やっぱり駄目でしたよう」
「――馬鹿なのか？」
飲み込んだはずの言葉を今度は躊躇わずに口にする。するとペールは不満顔で頬を膨らませ、
「むー、別に我慢しなくてもいいんですよう？　本当はレオンハルト様だって揉みたいですよね？　毎日揉まないと元気が出ないはずですし」
と、ふざけたことを口にする。
それだと自分がおっぱい好きの変態みたいではないか。
別におっぱいが好きなくらいで変態ではないと思うが、とにかくそこまでおおっぴらにやりはしないだろ、と内心でツッコミを行いつつ、表では別の言葉で返す。頷いて、

「……ああ、そうだな。じゃあ――」
と、レオンハルトは右手を伸ばしてペールの胸元にあるたわわな果実を軽く一揉み。
するとペールがまさか来るとは思っていなかったのか、戸惑った笑みを浮かべながら、目を見開き、
「あんっ♪――って、え、まさか本当に……これは言ってみるものですね――」
「――お前の言う通り揉んだからな。これで今日のお前の分は無しだ」
「えっ」
言いつけてそのまま歩いていく。ペールだけが短い声をあげてその場に立ち止まった。
しばしの間呆然とし、そして再起動して追いかけてくるとその意味を理解したようで、
「な、無し無し！　今の無しにしてください！　それはさすがに酷すぎますよう！」
「四六時中発情しているからだ。一日くらい大人しくしてろ」
「そんな!?　ペールちゃんはレオンハルト様に抱かれないと調子が悪くなるのに……うう、鬼ですか……？」
「元人間の魔人だ」
「冗談にマジレス禁止ー！」
どこから取り出したのか、〝性行為の自由を！〟など〝セックス禁止、断固反対〟などというプラカードを取り出していつの間にか鉢巻を巻いて抗議の声を上げてくる。禁止を反対とか分かりにくいな、と思いながら少し無視していると、反対側に立つキャロルが腕を組み、
「ふふん、欲張るからそうなるのですわ。その点、わたくしはいつもいい子にして待ってますからご褒美も沢山貰えますのよ」
「キャロル先輩は確かに〝忠犬か！〟って言うくらい待ってますよね……前世わんわんかってくらい……」
「レオンハルト様の犬になら喜んでなりますわ！　というかもうなってますわ！」

「前世わんわんで怒るかと思ったのにまさかのノーダメージ！」
「きっとレオンハルト様に飼われてるわんわんだったのですわ」
「ああ、そういう……」
　相変わらずメンタルだけは無敵というか、使徒最強なのではと思ってしまうほどの図太さだった。あまり細かいことを気にしないというか、ポジティブというか。
「……そういえばキャロル。お前、好感度の高い上司ランキング、1位だったぞ」
「マジですのレオンハルト様!?　やりましたわー！」
「ああ、うちの軍でたまにやるやつですよね。魔軍全体で匿名アンケート調査するやつ。キャロル先輩、人気ですからねぇ……ちなみに、ペールちゃんは何位でした？」
「……聞きたいか？」
「やっぱり言わないでいいですよう！　その反応で分かりましたから！」
　ペールが両手で耳を塞ぎながら、ぐぬぬ、と悔しがる。
　実際はそこまで低いわけでもなかったが、それを言うとまた調子に乗るので言わないでおく。ハンティとかリーよりは低いので、落ち込む可能性もあるのだ。
　ちなみにその他だと、最近魔人になったばかりのジークが高かった。自分が殿堂入りしたので誰が一位になるかと見ものではあったが、まさかのキャロルになるとは。
　意外というほどでもないが驚きではあった。
　そのうちご褒美でもやらないとな、と思うが、最近はやはり仕事が忙しい。なので雑談から仕事の話に切り替えるかと、言葉を作る。
「……うちの牧場もようやく軌道に乗ったからな。今日は早めに戻るぞ」
「あっ、そういえば今日って〝選別〟の日でしたよね？」
「ですの。リーさんや魔物将軍達が総出で動いてますし、わたくし達も手伝わないといけませんわ！　半年に一度の大仕事ですのよ！」
「うちはちょっと特殊ですからねー、仕事量も他より多いですし、早め

にやらないと今日中に終わりませんよう」
キャロルとペールの言葉に、ああ、とレオンハルトは頷く。少し思うところはあるが、今更そんなことを感じてもしょうがない。自分はやれるだけのことをやるだけだ。
そのためにも、牧場運営は適切に行わないといけない。
だからレオンハルトは早々に魔王城から街の方にある牧場に戻らなくてはならない。
今頃、牧場の副管理長を務めているリーが魔物将軍達を動かして忙しくしていることだろう、と、レオンハルトは足を早めた。斜め後ろに並んで歩く二人も、足を早めた時に、
「――おい」
不意の声が、前方から生まれた。
無遠慮な男のそれは、見知った声であり、徐々に見えてきた姿はやはり声と一致する男の姿だった。
目元に掛かる紫の髪の奥から、雷のような鋭い眼光をこちらに飛ばしてくるのは、口元に、草の葉を紙で細長く包んだ薬物、〝タハコ〟を咥えて煙を吸っている青年だ。
その名を、レオンハルトは口にした。
「――レイか」
魔人レイ。ジルが戯れで魔人にした男がこちらに近づいてきた。

「――レイか」
レイは、己の名前を呟いた男を、髪の奥の視界で捉えた。
金髪に威圧的な赤い目を向けてくる己より僅かに背の高い男――魔人レオンハルト。
背後に二体の使徒を連れたレオンハルトに、レイは無遠慮に近づいていく。そちらには目もくれずに、レオンハルトの鋭い眼光にだけ目を合わせ、
「……おう、レオンハルト。ちょいとその澄ましたツラ貸してくれよ」
「……レイ。生憎と俺は暇じゃない。さっさとお家に帰れ」

「……ハッ、女と乳繰り合うので忙しいか？」
レイはレオンハルトに敢えて失礼な物言いを行う。
相手に慮る理由のないレイにとっては普通のことだが、これは明らかに挑発のための台詞だった。
だがレオンハルトはそれに対して目を細め、酷く冷めた視線で見下して肩を竦めると、
「――そうだ。お前と違って、俺にはやることが沢山あるのでな」
「ッ……待てよ」
さっさとレイの横を通り抜けようとするレオンハルトに対し、レイは軽く足を開くことで意思表示とした。
そして身体の中で燻る火が爆発的に上昇していく。
レイにとって、これを抑える理由はない。
レオンハルトに喧嘩を売りたいから売るだけ。ムカついたから殴るだけだ。
だから告げる。バックルから櫛を取り出し、髪を掻き上げると、魔人としての力を立ち昇らせ、電流を強めた。
「相手、してもらうぜ……ッ！」
「……！」
レイは有無を言わさず、挨拶代わりの一撃をレオンハルト目掛けて放った。
魔人となり放電体質となったレイの身体から、雷撃が迸る。それはレオンハルト目掛けて一直線に走り抜けたが、レオンハルトはそれを軽く横に逸れることで回避すると、溜息を一つ、
「……随分と威勢の良いことだな。魔人になって気が大きくなったか？」
「……それは、俺に喧嘩を売ってるってことでいいんだよな……！」
レイが喧嘩の名分を見つけたと言う風に言う。しかしレオンハルトはそれを一笑に付し、再び冷たい表情に戻すと、
「――違う。脅しているだけだ。生憎と、お前に買えるほど俺の喧嘩は安くはない」
「ッ……てめェ……！」

こちらを相手にしないレオンハルトの態度にレイが額に青筋を立て、放電が激しくなる。
しかしレオンハルトはそれを見ても鼻を鳴らし、
「喧嘩なら他所で勝手にやってろ。ガキが大人に喧嘩を売るものじゃあない」
「ッ、なら俺がガキかどうか試してみろ!!」
レイが遂に、右拳を振り上げてレオンハルトに向かって踏み込んでいった。
するとレオンハルトは背後の使徒達に、下がるように指示すると、やはりそれを紙一重で避ける。
そして鋭い視線をレイに向け、
「……随分と俺を目の敵にしているようだが……何か理由でもあるのか？」
「――てめェが気に食わねェだけだ!!」
と、レイは怒声を上げながらレオンハルトに向かって拳を振るう。今度は雷撃も飛ばしてレオンハルトの逃げ場を無くそうとしたところで、ようやくレオンハルトは空間から得物を抜いて、雷を斬り裂くと、しかし殺気は飛ばさずに眉をひそめ、
「お前は……愚かだな」
「何だとッ……!?」
レイが眉を立てて更に怒りを爆発させる。
それはレイにとって看過できないものだ。
彼が姉御と慕うジルにすら告げられた言葉。そのぞんざいな言葉は、あのジルなら、と不快にこそ思わなかったものの、眼の前の男から再度告げられると、不思議と怒りが湧き立つのだ。
「ジル様がそう言うのも頷ける。お前は愚かだ。愚かなガキでしかない」
「ッ……潰す……!」
レイの攻撃が激しくなる。雷の様な勢いを持ってレオンハルトに肉薄すると、拳や貫手による格闘でレオンハルトに傷をつけようとラッシュを行う。

放電体質であるレイは、自身が近接戦闘を行いつつも、相手には一方的に不利を押し付ける厄介な特性を持っているため、レイの攻撃はその身を流れる雷も一緒に浴びることとなる。
触れただけで反動のように電撃が相手の身体を流れるため、相手は容易に得物などで受けることも叶わない。
そして戦闘中にレイが己の身に流している電撃は、並の人間ならそれだけで死にかねないものであり、触れた瞬間に相手を黒焦げにしてしまうことも可能だ。
戦士にとっては天敵ともいえる魔人が、レイという男だった。
だからレオンハルトも躱すしかないと、レイはそう思っていた。
相性は悪くないと感じながらも、躱し続けるレオンハルトの言葉を、レイは聞いた。
それは剣を振るうのと同時であり、
「なっ――!?」
「……この程度か」
レオンハルトがレイの拳をその魔剣で受け止める。
その瞬間、レオンハルトの身体を電撃が駆け巡るが、レオンハルトはそれを僅かに眉をひそめるだけで受けきり、その威力を感じて肩を鳴らす。
「腕の差は歴然。だと言うのにそれも見極める目を持たず、闇雲に突っ込んでくるだけ。それがガキでなくて何と言う?」
「……! ガキとガキとうるせェ……! 俺ァ暴れたいから暴れるだけだッ! てめェらと何も違わねェよ!!」
「ふっ……!」
レイが右からの回し蹴りをレオンハルトに向かって放つが、レオンハルトはその蹴りも魔剣で軽く弾いてしまう。触れた瞬間に先程よりも強い電流が流れるが、しかし雷撃に堪えた様子はなく、変わらぬ様子でレオンハルトは続けた。
「俺達と同じ? ――ふっ、笑わせるな。お前は戦いを純粋に好むノスやレキシントン、俺とはまるで違う」
レオンハルトが失笑だが、初めて笑みを浮かべてレイと相対する。

だがその笑みは一瞬であり、直ぐに冷たい表情に戻ると、
「空虚なお前を見ていると、哀れでしょうがない。そして、俺にはそんなお前に掛けてやれる時間は1分足りともないんでな。だから悪いが――」
「っ――……!!」
レイの視界から、レオンハルトが一瞬で消える。
高速の踏み込み。視認出来ないほどの速度でレオンハルトは己の剣で一閃、レイを斬りつけた。
「ぐおおおぉぉッッ!?」
「――これで終りだ」
と、レオンハルトはレイの身体を斬りつけた時に流れる雷撃を物ともせず、体の前面に大きな切り傷を受けて倒れるレイを見下す。
最強の魔人、世界最強の剣士の一撃は、レイをたった一刀で制したのだ。
血を流して倒れるレイは、だがしかし、脂汗を流し、苦悶の表情のままレオンハルトを見上げ、
「ざけ、ンな……まだ、終わって――ぐあぁぁあっ！」
だがレオンハルトはそんなレイの傷を軽く踏みつけることで地面に押し付ける。
「……ふん、おいたが過ぎたようだな」
レイが苦鳴の声を上げたのを見て、レオンハルトは足を離すと、そのまま離れていた使徒が近づいてくるのに合わせて、レイを後ろ目に見下し、
「喧嘩を売る時は相手を選べ。何もないお前では俺には勝つことはあり得ないし、お前を相手にしても、俺は唆らない。時間の無駄だ」
「クソ、が……ま、待ちやがれ……ッ！」
「見逃してやるからガキはさっさとお家に帰るがいい」
傷を押さえながら息を乱し、レオンハルトに追いすがろうとするが、力が入らない。そのまま離れていくレオンハルトとその使徒の背を見送るしかないレイは、廊下で一人、負けを認めて屈辱と怒りを感じながらも、再戦を直ぐに誓う。

「……はぁ、はぁ……ぐっ……へっ、だが面白ェ……あの野郎、絶対に、吠え面かかせてやる……！」
レイは床を這いずり、その言葉の意味も気づかずに、去っていく背中だけを見つめ続けた。

魔人レオンハルトと魔人レイの、喧嘩とも呼べぬようなぶつかり合いを終え、城を出た当人も含めた3人。
その道中にて、口数の少なくなったレオンハルトに、ペールは恐る恐ると声を掛けた。
「……あのー、レオンハルト様？」
「……どうした？」
ペールの問いかけに、レオンハルトは何とも言えない微妙な内心を隠しながら応対する。出来ればだが、そのことを聞いてほしくはないな、と思いながら、質問を促すと、やはり、
「……レオンハルト様、妙にあのレイって魔人に厳しい気がするんですけど……なんかありました？　いや、喧嘩売られたんですからイラッとするのは分かるんですけどね？　珍しいなーって」
「レオンハルト様に喧嘩を売るなんてどうやら新しい魔人の方は頭の方が少々よろしくないようですわね！　でも、これで自分が馬鹿だったと悟り、それを教えてくれたレオンハルト様に敬服するようになるはずですわ！」
「いや、そういう話じゃないんですけど……まあ、確かに、こっちもちょっとイラッとはしましたけど」
キャロルがいつもの調子で喋る中、ペールは首を傾げて疑問符を浮かべてくる。
それを聞いたレオンハルトは、少し間を置いて眉間に皺を寄せながらも答えた。まずは問いかけるように、
「……お前達は、アレが何故喧嘩を売ってきたか分かるか？」
「何故喧嘩を売ってきたかですか……」
んー、とペールが腕を組み、頬に人差し指を当てながら斜め上を見

て考える。しかしその間にキャロルが勢いよく手を挙げた。
「はい！　きっと、完璧過ぎるレオンハルト様に嫉妬したのですわ！」
「あー、なるほど。可愛い美少女を連れてる上に、魔王様の寵愛まで受けるモッテモテのレオンハルト様への醜い男の嫉妬ですね。それはそれでありそうですよう」
　それはない、と断言仕掛けて、しかし直ぐに自分の判断に異を唱える。
　もしかしたら、それもある。一因として、それもあり得るかもしれない、とレオンハルトはレイの内心を思い、その理由を思考する。
　しかし、主な理由としては違うだろうとも思う。
　では何かと言うと、レオンハルトは口にすることで答えた。
「……ただの憂さ晴らしだ」
「憂さ晴らしですか？」
　ペールが確認するように再度言葉にする。レオンハルトは首を縦に振り、その先を繋げた。
「ああ。アレは空虚な自分を誤魔化すために、拳を振るっているに過ぎない」
「それは……」
　ペールが何とも言えない表情で苦笑を浮かべるが、それも分かる。
　レオンハルトはそれよりも更に微妙な気持ちを感じているのだ。
　それは苛立ちに限りなく近いもので、
「戦いに身を投じている間だけは、空虚な自分を見つめなくて済む。だがアレは、それにすら気づいていない。それに気づくことなく、周囲に当たり散らしているだけの男だ」
　それがガキでなくてなんと言うのだ、とレオンハルトは言葉にするだけで苛立ちを増した冷めた口調になるが、その感情を抑えるように努める。
　だが当然、使徒達はそれに気づいている。こちらの顔色を窺うように、気遣うように見上げる二人の使徒が言葉を発した。
「えっと、つまりあの魔人が単純にムカつくからということですか？」
「喧嘩を売られてるのですから当然のことですわ！　というか、やっ

てしまっては駄目ですの？」
キャロルが何気に物騒なことを言うが、全くの的外れでもないことを言う。
そちらには首を振りつつ、ペールの理由には同意する。ただし、言葉を付け加えた。
「それもあるが……それだけじゃない」
「？　と言いますと？」
ああ、とレオンハルトは頷く。認めるのも癪で、口に出すこと事態もかなり憚られるが、それでも言った。
……アレは、あいつは――
「――――昔の俺に似ているからだ」
「……！」
「それは……」
キャロルとペールが浅く眉を立て、言葉を迷わせる。
二人や、自分に近しい者達は知っていることだからこそ、それをどう言っていいか分からないのだろう。
千五百年以上昔の――己がまだ馬鹿なガキだった頃の、忌まわしき過去のことだ。
自分自身でさえあまり触れたくない時期のこと。とっくに乗り越えているため、必要とあらば口に出すことに躊躇いはないが、自ら喧伝するほどのものではない。
今となってはそれすらも大切な経験の一つであり、情けない笑い話のようなものだが、それを思い起こさせる様な振る舞いを見て冷めた感情が湧いてしまう辺り、完全に無感情ではいられないというか、思うところはあるらしい。
「……まあ、お前達は気にしなくていい。俺も、そこまで苛ついているわけではない。調子に乗った魔人を諌めることも魔人筆頭として必要なことだ」
そう。苛立ちではなく、どちらかというと、哀れむような気分に近い。
昔の自分を見ているようでどうしても冷めた気分になる。だから

冷たい、突き放した様な態度を取ってしまうのだと。
目的や大切な者がある自分と、何もないレイとでは戦いや生きることに対する覚悟がまるで違う。
それが勝負の結果に関わるかはまた別問題であるし、そうでなくともあの態度には問題があるため、対応は変わらないかもしれないが、と思いながらも、ただの同族嫌悪であることを軽く自嘲し、そう口にすると、二人は納得したようで、
「……もう一回おっぱい揉みます？」
「わたくしの身体なら胸だけじゃなくどの部位でも構いませんわ！」
「……何故そうなる？」
二人が胸を手で寄せたのを見て、渋い表情で頭を抱えると、ペールが苦笑混じりに、
「いやー、お詫び半分、残りはシリアスを壊すためにですかね。そういう真面目過ぎる空気はあまり好きじゃないというか、壊したくなるというか」
「わたくしは単純にノッてみただけですわ！」
「胸張って言うことじゃないな……」
ペールとキャロルにボソリと呟くようにツッコむ。
だがまあ、確かに多少気分は戻ったから、特に注意することもないだろうと、
「……まあいい。とにかく、急ぐぞ。今日は忙しいからな」
「畏まりましたわー！　今日もバリバリ働きますの！」
「頑張りますから、後でご褒美下さいね？」
気を取り直して、レオンハルトは二人の使徒を連れて己の管理する牧場へと向かっていった。

レオンハルト直営人間牧場

人間牧場。
それはこの時代の人間が生きる主な場所であり、魔物達が管理、運営する施設の名だ。
人間達にとっては生き地獄に等しいその施設は、大陸各地に建てられ、魔王の配下である魔人がそれぞれの人間牧場を魔軍を率いて統治している。
故に人間牧場は、基本的な方針は同じでも、多少の差異、異なるシステムで運営されていることもある。
その中でも、一際異彩を放つ人間牧場が、大陸北東部にあるレオンハルトシティの近くに存在する。
その街の名が示す通り、その牧場は魔人筆頭にして魔軍参謀、人間牧場計画の総指揮を執った魔人レオンハルトが直接管理する直営牧場であり、街のすぐ近く、僅か数キロ離れた場所に位置する。
担当の魔人がいない人間牧場を、レオンハルトが仕方なく管理しているそれらとは違い、その牧場だけはきちんとした方針を持って運営されていた。
「あー、今日も出勤かぁ」
「急げよ。今日は選別の日だからな」
「あっ、そうか。じゃあ早く行かねぇと一日仕事になるな……」
と、一日の最初、朝日が昇るころにやりとりを行うのは魔物兵の二人組。
レオンハルト軍に所属する魔物兵であり、この人間牧場を管理する大事な兵達だ。
一千万近い人間を収容する大規模牧場であるここでは、魔物兵による働きは特に重要であり、サボりや欠勤は厳しく罰せられることになるため、止むを得ない理由でも無い限りは休むことは出来ないのだ。
それでも特に不満がないのが、そこまで仕事が大変ではないことや、人間を虐げられること、レオンハルト軍に所属し続けることのメリットなど、多くの理由があってのことだ。

宿直で管理している魔物兵以外は、レオンハルトシティから徒歩で出勤することになる。
レオンハルト直営人間牧場は、敷地がかなり広く、多くの人間を収容している、柵で仕切っているだけの平原なども含めれば、レオンハルトシティの倍以上の面積を誇っている。
その敷地内と外を繋げるたった一つの出入り口である巨大な門の中、そこだけでも数千の魔物兵が整列することが出来るその場所に魔物兵は整列していくと、定刻に合わせて魔物隊長や魔物将軍達も前に並んでいく。
そして最後には、この人間牧場を管理している魔人レオンハルトの使徒も現われる。
日によっている時といない時もあるが、基本的に必ず一体は存在するのだが、今日の使徒は、
「――全員揃っているな？」
「はっ！　一人の欠員もおりません、リー様！」
整列するレオンハルト軍の魔物兵達の前に、レオンハルトの使徒であるリーが厳格な落ち着いた声で問いかける。
赤い軍服を来た人間の中年の様な男は、右手に赤い装丁の本を持ち、右目に眼帯をした軍人然とした男であり、居並ぶ魔物兵達も自然と身を引き締める。
これが他の使徒――ハンティならともかく、キャロルやペールとかがいると緊張感に欠ける妙なやり取りを行うことがあるのでここまで静かにはならないのだ。
ある意味ではそちらの方がムードが良かったりもするのだが、リーはリーで、そうやって緩んだ気を引き締めてくれるので適材適所とも言える。
管理長としての役職を与えられているリーは、この牧場を適切に動かすことが出来るだろうと、レオンハルトに信頼されている。そのリーが、いつにも増して厳かな雰囲気を醸し出しているのは、やはり今日が大事な選別の日だからだろう。
「ふむ、皆分かっているとは思うが、今日は選別だ。かなりの時間を要

するため、迅速かつ正確に動く必要がある。それを頭に入れておくように。――私からは以上だ」
「はっ、ありがとうございますリー様！　では総員、解散！　それぞれ持ち場につけ！」
魔物将軍の号令を受けて、魔物隊長や魔物兵達が応答の後に動き始める。
誰もが流れに沿って、迅速に仕事を始めようとする動きだ。
それに満足気な頷きを入れて、リーも管理業務を行うべく、魔物将軍を引き連れて施設内へと足を向けた。

牧場施設内。
沢山の人間達が飼われているその場所は、各牧場によって様々だが、基本的に柵の中や人小屋とも呼ばれる厩舎の中で寝起きするのが基本であった。
熱い地域などでは外で寝かされる場所もあれば、寒い地域では人間が凍え死なないように最低限のものではあるが、室内で暖炉のようなものが設置され、防寒具が支給されることもある。
だがレオンハルト直営牧場では、そのどれもが当て嵌まっているとも言えた。
「うーん……もう朝ぁ……？」
「そうだよ、そろそろ起きなきゃ」
「今日は選別だから早めに起きて準備しておいたほうがいいぞ」
と、大部屋に幾つも並べられた三段ベッドから次々と目を覚ましていくのは、その全てが子供であった。
男も女も、大体が５歳から１５歳までの子供であり、誰もが一様に灰色の同じ衣服を身に纏い、それぞれが違う番号のマーカーが首元に記されている。
その数、一部屋に付き３０人であり、起きて部屋の外に出た子供達は広めの廊下を他の部屋からもちらほらと出てきた子供達とともに支度を行う。

建物の外に置かれた井戸から水を汲み、喉を潤す者や、顔を洗う者。外に出て友人と遊ぶ者や、運動場ともいえる仕切られた柵の外周を走る者。

部屋の中で本を借りて勉強をする者など、その行いは様々だった。

これら、そしてこれからの光景は、レオンハルト直営牧場で産まれた全ての子供の日常であり、普段と変わらぬ光景であった。

今日は選別の日でもあるため、普段よりも勉強や運動を行う者も多かったが、特に子供達の表情に暗いものはない。誰もが今の生活や自分の運命に、全く不安や危惧を抱いていないような元気な様子だった。

だがそれも、朝七時の鐘が鳴るのと同時に、誰もがそれらを一斉に止める。

そして全員が室内に戻り、食堂へと向かっていく。そんな彼らは歩きながら、口々に会話を行い、

「今日のご飯、なんだろうねー？」

「選別の日だからきっとめちゃくちゃ美味いものが出るぜ！」

そう、彼らが言うように、朝七時は朝食の時間なのだ。

時間どおりに行かないと、先生や魔物に怒られる。だから彼らはきちんと決まりを守る。

食堂は幾つかに分けられているが、纏まった場所にあり、子供達がそれぞれの厩舎に割り当てられた食堂に向かい、列に並んでいく。

その先にいるのは、朝食を配ってくれる飼育係の人だ。

「きちんと列に並べー、並ばないと飯はやらないからなー」

「……はい、どうぞ。今日は選別だから、豪華美味しいものいっぱい作ったよー」

「わーい！　ありがとうございまーす！」

列の横に立ち、子供達を見張っているのは、幾体かの魔物であった。魔物隊長が一体に、魔物兵が数体。それらが子供達を見張っており、子供達の朝食が、料理を作っている人間の大人――飼育係の手によって手渡されるのをきちんと確認している。

取り終わった子供達から席に着き、食事を取り始める。

今日のメニューは飼育係が豪華で美味しいものだと言っていたが、それは嘘ではないようで、肉や野菜の入った煮物を中心に、玉子にパン、果物や牛乳など、普段は殆ど出ないような豪華な食べ物ばかりであり、彼らは目を輝かせながら勢いよくそれらを口にする。
そして人間の子供達の食事は、大体1時間程で全員が食べ終える。
時刻は8時。その時間までに、子供達は食堂から教室へと移動し、それぞれが割り当てられた席に着く。
するとその教室には先生がやって来るのだ。
「せんせー！　おはようございます！」
「はい、おはよう。今日も元気が良くていいですね」
と、子供達の朝の挨拶を穏やかな笑みで返したのは物腰が柔らかそうな一人の若い女性であった。
人間の女性であり、容姿が、その服装なども含めて整った彼女の首元には、番号ではなく〝A〟と記されている。
他の教室でも男であったり、もうちょっと歳を重ねていたり、もう少し若かったりと色んな先生がいるが、その誰もが同じ印を刻まれていた。
その人間達こそが、子供達の言う先生であり、授業で様々なことを教えてくれる頭の良い大人だ。
そして、子供達の親代わりでもある。
親がいないわけではないが、親はまた別のところにおり、会うことは出来ない。
少なくとも〝選別〟を終えて、運が良くなければ会うことは叶わないため、生涯実の親の顔を知らない人間も多いのだ。だから子供達にとって親とは、先生や、自分達を飼ってくれている者達の事だ。
だから子供達は明るい顔を見せる。それが、心底幸せなことであるように。
それを見て、先生はニコリと笑顔を浮かべて、子供達全員に聞こえるように声を発した。
「はい、静かに。いいですか？　今日は選別ですからね。先生や魔物の言うことをよーく聞いて、頑張って試験に臨んでくださいね？」

「はーい！」
「はい、よろしい。……では魔物将軍様、お願い致します」
「うむ」
と、声を上げて部屋に入ってきたのは、黄色くて丸い、大きな身体を持つ魔物――魔物将軍。
魔軍の指揮官であり、人間達にとっては雲の上に近い存在である地位にいる者の姿に、子供達も様々な反応を見せて静かになる。
魔物兵や魔物隊長くらいであれば、日頃からよく見る相手であり、敬いはしてもそこまで緊張する相手ではないが、魔物将軍ともなれば滅多に、それこそ選別の日くらいにしか姿を見ることは出来ないため、子供達はその姿に驚きと畏怖を覚える。
中には憧れに近い眼差しを見せる者すらおり、この環境の特異さが際立っていた。
「……ではこれより、選別を開始する。初めての者もいるため、軽く説明するが、選別は、〝知能〟、〝身体能力〟、そして〝一芸〟の三つで審査することになる。順番に執り行っていくため、係員の言うことをよく聞いて執り行うように。なお、選別試験中のルールを破った者には、厳しい罰があるため、注意することだ」
「は、はい！」
「うむ。では、まずは知能試験を執り行うため、これより説明を始める。質問は全ての話を終えた後に行うように。では――」
と、魔物将軍は毎度のことであるため、すらすらと順序良く言うべきことを淡々と口にしていく。
半年の一度の選別では、今しがた告げた三つの試験の結果で、子供達の選別を行うのだ。――大人にも一部の者達には選別資格があるが、それは今は割愛する。
最初の試験は、知能を測る試験であり、子供達に様々な問題が書かれた紙とペンを支給し、時間内にそれらを解かせるという普通の筆記試験だ。
子供達は魔物将軍の合図で紙を表にし、自分の収容番号を最初に記入すると、問題を解き始める。出題される内容は様々であり、一般教

養であったり、文字の読み取り、書き取りであったり、歴史であったり様々だ。例えば――

『問1．人間は、魔物に飼われて生活する生き物であるが、その人間は何のために生きている？　次の中から、当て嵌まる答えを一つ選び、答えなさい』

A．魔物を楽しませ、または奉仕するため

B．人類の繁栄のため

C．自由回答　下記の空欄に答えを記入しなさい

という問題。これはかなりのサービス問題であり、見た瞬間に誰もが迷いなく答えられる問題だ。

まだ5歳で、初めてこの試験を受ける子供ですら答えられるこの問題。正解は勿論――Aの、〝魔物を楽しませ、または奉仕するため〟だ。

選別の度に毎度出題される問題の一つであり、これだけはどんなに頭が悪くても答えられるというサービス中のサービス問題であり、誰もが迷いなくAを記入していく。

そして次に第2問は、

『問2．この牧場を運営している偉大なる魔人の名前を答えよ』

これもサービス問題だった。この牧場にいる人間なら誰もが知っている。

答えは当然――〝レオンハルト様〟だ。

魔人筆頭。魔軍参謀。世界最強の剣士。魔物界の英雄。様々な称号を持つ偉大なる魔人にして、自分達を飼ってくれている慈悲深い御方だ。

かの御方のことについては、授業でも散々習うため、知らない者はいないどころか、更に詳しい情報を知る者もいる。

この他にも、最初の方の問題は誰もが最初に習うような基本の問題ばかりであり、基礎知識が試されていた。

しかし知能を測る試験であるため、やはりと言うべきか、このような問題ばかり出るわけではない。

ある意味、最初の方の問題は、言ったようにサービス。そして小さ

い子供でもまだ答えられるような問題しかないが、後の方になるにつれて、段々と難しい問題が増えていく。
それらは明らかに授業では習わない範囲の問題すらあった。
だがそれらを、一部の子供達はすらすらと、あるいは苦戦し、悩んだ様子を見せながらも問いていく。
何故彼らは授業でも習わないことを知っているのか。それは、この環境にあった。
この牧場にいる子供達は、教室に隣接する図書室から、好きな本を借りて読むことが出来る。
それらは、絵本や童話などの他愛もない本から、何かの専門書や学術書なども置かれており、それを好きに見ることが出来るのだ。
そしてこの知能試験に出る問題は、日々の授業と、その図書館にある本の中で理解出来るものだけが出題される。
故に、頭の良い子供達はそれらを日頃から読んで勉強し、選別の日に備えているのだ。
後半の最後の方になると、もう殆ど専門家でもないと理解出来ないような問題ばかりであり、満点を取ることは不可能に近い。
だが不思議なもので、何年かに一人は満点を取る者も現われる。
実のところ、子供達の先生を務めている人間達は、この知能試験で満点を取った天才ばかりだが、子供達はそれを知らないし、先生たちも、魔物達もそれを教えることはない。
子供達には、選別試験を頑張れば、より良い地位と生活を与えられ、魔物のために働けるということだけを教えられており、物心が付く前から魔物のために痛めつけられてでも彼らを愉しませ、奉仕するのが人間だと教えられている子供達は、ただただそのために選別試験を頑張るのだ。
子供達が必死にペンを動かし、それが1時間近く続いたところで、終了の鐘が鳴ると、魔物将軍は声を上げた。
「――そこまで！　ペンを机に置き、紙には触れないように。試験官が直ぐに回収する」
と、告げると、子供達がその指示に従い、そして教室で見張ってい

た魔物兵らがその試験の紙を一枚一枚丁寧に集めていく。
それらを全て集め終えて、何も問題がなければ、試験は次に移っていく。
「では次に、身体能力試験を執り行う！　運動場へと移動し、係員の指示に従って試験を行え！」
「はい！」
魔物将軍がそう言って教室を退出していくと、それを少し待って、子供達も教室を出て外の運動場に向かった。彼らは道すがら、先程の知能試験の事を話題にこっそりと盛り上がるが、それもほんの少しの間であり、運動場に出れば直ぐに次の試験を行うことになる。
柵で仕切られた草原の上。そこが子供達の使えるスペースであり、そこでは既に大勢の魔物兵を引き連れた魔物隊長や魔物将軍がそれぞれ所定の位置で待ち受けていた。
野良の人間であれば恐ろしいだろうが、子供達は何の躊躇もなく、順番に並んでいく。
まずは、幾つかの機材が並ぶ場所に、子供達は一度服を脱いで並んでいくと、
「身長と体重を測り終えたクラスから順次、試験に移れ！」
魔物隊長のその言葉が運動場に響く。
その言葉の通り、子供達は身長と体重を順番に測り、それを魔物が紙に記録していく。
そしてそれらが終わると、今度は身体能力を測るための試験に子供達は挑んでいく。
握力、５０メートル走、腹筋、腕立て、持久走。それらの基本的な能力を魔物兵の監督の元に行っていく。
「うーん、私体力無いなぁ……」
「よっしゃ、握力記録更新！」
「はぁ……退屈」
これらもやはり、子供によって得意不得意が分かれ、日頃からよく運動している者の方が高い記録を出す傾向にある。自由時間に運動場で走っていた者達などは特に体力があるようであった。

しかし中には、普段から特に何も目立ったことはしていないのに、普通よりも高い運動能力を見せる者もおり、明らかに度を越した子供に対しては、魔物隊長が手元の紙に、その収容番号を記録しておく。
それらが一度終わると、子供達は昼食を配られ、それを口にする。
レオンハルト直営牧場では、一部の者達を除いて一日3食が保障されており、特に子供達は試験の結果が良かろうか悪かろうが平等に支給される。
今日のメニューはどうやらサンドウィッチだったようで、子供達はそれらを早々に食べ終えると、今度はまた室内に戻って次の試験に移っていく。
身体能力試験を監督していた魔物将軍が子供達に向かって、
「では次に、〝一芸〟試験を行う。希望する者、呼ばれた者から順番に指定する場所に来るように！」
そう告げる。選別の本番とも言える試験だ。
だが、一部の子供にとっては試験はこれで終わりだ。
希望することもなく、魔物兵に呼ばれることもなかった子供達はそのまま部屋での待機を命じられる。
それに加えて、知能試験と身体能力試験である程度の結果を出した者達も、その試験に向かわない者がちらほらといる。もっとも、好成績を残した子供も、更に己の能力を見せようと希望する者が多かったし、二つの試験で目をつけられた子供は別に呼ばれるのでそれがない好成績者は殆どいなかったが。
そうして約半分程の子供達が順次、次の試験場に向かっていく。
場所はそれぞれ別々であった。
食堂に向かう者、運動場に残る者、教室に向かう者が主で、中には個室に呼び出される子供もいるが、それはほんの極一部であり、数人程度のもの。
それぞれが一芸を見せるために適した場所に向かっているのだ。
そしてそこには、今までの試験とは違い、子供達にとってはかなりの大物が監督を行っていた。
まずは食堂。そこにやってきた子供達は、明るく軽くおちゃらけた

ような様子の声を聞いて身を硬くする。
「はーい。では、今から料理人試験を始めますよーう！　ここにある食材は何でも使って構わないので、出来上がった者からペールちゃんと魔物将軍の元に持ってきてくださいねー？」
「は、はい……！」
そこにいたのは魔人レオンハルトの使徒であるペールだ。
彼女はニコニコと子供達に笑顔を向けながら、１０体程の魔物将軍を引き連れてテーブルの前で声を放っている。そこで行われるのは口にした通り、料理人試験だ。
そこで合格した者は、料理人として選別され、魔物の為に働くことが出来る。
魔物の街であるレオンハルトシティや、この牧場の飼育係として働く者を選別するのだが、その需要は魔軍の中でも特に大きいため、重要視されている。
そのため、合格者もそれなりに多い。料理に関しては多くの子供達が一度は受ける試験であり、そこで見込みありと判断されていれば、次の選別でも試験を受ける事ができる。
そうでなくても、図書室には当然、料理について書かれた本も沢山あるので、それらをよく読み込んで頭に入れていれば、悪くない品を作り上げることが出来る。
専門的に学ぶには合格した後でもいい。多くの試験に言えることだが、これらは人間の子供達の個人の資質、〝才能〟を見極めるための試験なのだ。
レオンハルト軍にとっては、食に関することだけあって魔物将軍達もかなり険しい真剣な表情をしている。彼らも結構な食通であり、試験の為に味に敏感な者達が集められたのだ。
後は料理が出来るペール。それらの人たちに子供達は順番に料理を持って、判定してもらう。
「んっ、これは美味しい……こっちは、微妙。だけど見込みあり。それで……うえー……こっちは見込みなし、と……」
一つずつ味見をしてその判断を行っていくペールと魔物将軍達。

ここで明らかに美味しいものを作った者は、年齢が若すぎる者を除いて即合格が言い渡される。
それ以外の子供達は料理を作り終えた者達から部屋に戻って試験結果を他の子供達と一緒に待つことになるのだ。
そして他の場所でも、やはりそれぞれの場所で試験を行っていた。
「――では、ここでは追加の一芸試験を始めますのよ！」
「これより、追加の身体能力試験を執り行う。任意の得物を取り、指定の相手と模擬戦を行え。では――」
教室では、試験官であるキャロルが知能試験で好成績を残した者達を中心に別の技能についての試験を行う。座学が中心だが、中にはその能力を実際に見るために実践を行わせたりもする。
そして運動場では同じく試験官であり使徒のリーが模造の得物を支給し、主に戦闘能力を見極めるための試験を行う。
どちらも、この人間牧場の管理人となるため、もしくは、〝コロシアム〟の闘士になるために必要かつ重要な試験だ。
選別試験の中でもこれらが一番時間が掛かり、試験は夕方、もしくは夜まで続く。
その間にも子供達は順次夕食を取り、試験の結果を楽しみにしながら夜９時には眠りにつく。
――そして翌日。
夜通しで判別されたその試験の結果は、先生を通じて子供達全員に通達される。
「あー、今回も駄目だったぁ。でも料理は見込みありで保留かー」
「体力試験合格した！」
「うーん、〝C〟かぁ……でも魔物の為に働けるのには変わりないし、どっちでもいいか」
子供達はその試験結果を言葉にしてそれぞれ近くの者達と話の種とする。
特に明るい顔をしているのは、今回で〝卒業〟を迎える１５歳の者達だ。
彼らの選別試験に、判断保留というものは存在しない。

１６歳になる前の選別試験で、良い者も悪い者も平等に、選別されることになる。
卒業を迎える子供達は口々に己がどこに選別されたかを口にする。
「俺、〝Ｂ級〟だったけど、そっちは？」
「僕は〝Ｃ級〟だった」
「料理人試験で合格して〝Ａ〟かぁ。頑張らないとなぁ」
「やったー！　〝Ａ級〟取れたぁ！　イヴちゃんは？」
「ふふ、おめでとうございます。私は〝特Ａ級〟でした」
「ええー!?　じゃあ主席なの!?　さすがイヴちゃん！」
Ｃ級、Ｂ級、Ａ級、そして特Ａ級と順に数が少なくなっていく。
これは卒業していく子供達にとっての進路。勤め先を決めるものであり、１５歳の子供達全員にそれが言い渡された。
中には１５歳よりも幼い子供が、結果を言い渡されたりもするが、それらは残らずＡ級の、才能を認められた者達であり、それ以下は判断保留としてまだ選別されることはない。
中でも特Ａ級は原則として年に１人しか選別されず、相応しい者がいない場合は誰も選出者がいない年もある程の超エリートであった。
そんな子供達は、一通り試験結果の話に花を咲かせたところで、先生から声が飛ぶ。
「はいはい。では、名残惜しいでしょうが選別された人達はこれで卒業です。係員の指示に従ってそれぞれ指示された場所に向かってくださいね」
「はい、先生！　今までありがとうございました！」
「うぅ、寂しいよぉ……」
「よしよし、貴方も選別されたら会えるようになるんだから泣いちゃ駄目よ」
「……」
それはこの人間牧場という施設に相応しくない光景であった。
子供達がこれまで一緒に過ごしてきた年長のお兄ちゃん、お姉ちゃんに別れの言葉を告げ、涙を見せるものすらいる。
そんな巣立ちの時に、作ったような笑みを顔に貼り付けているの

は、一人だけしかいなかった。
先生ですら、それを幸福なことであるように心から喜んでいる。
もしかしたら先生の中にも、何かを想っている者がいるかもしれないが、それは巧妙に隠されているのか、誰にも見抜くことが出来ない。
しかしそれを唯一見抜き、昨日まで教室にいた子供が一人、いなくなっていることに気づいた特Ａ級の子供は、淡々とその現実を判断する。
――確か、個室に呼び出された子供の一人だ。
知能試験も身体能力試験も好成績を収めていた、ある意味少女のライバルとも言える少年は、いつの間にか教室から消えていた。
友人に聞いてみれば何でも、一足早く選別され、昨日の内に卒業したという。
それを聞いて何でも無いように見せかけつつ、少女は思う。――消されたな、と。
何かを思ってしまったか、真実に気づいてしまったか。もしくは愚かにも脱走でも試み、それが露見したのか。どれにせよ、マズいことであることには変わりなく、一足早くに卒業するのには充分な理由だ。
馬鹿ですね、と少女は記憶の中にある少年をそう評する。
気づいてしまったことで動揺するのは正常な人間として理解出来るが、それでボロを出してしまえば意味がないし、明らかにルール違反とも言える行動を取るのは愚か過ぎる。
教室の後ろ――自分達を監視するために設置されている〝魔法ビジョン〟は、ここだけでなく到るところに設置されている。
気づきにくい様に巧妙に隠されているが、魔法ビジョンというものを知ってさえいれば気づくことは容易だ。
もっとも、魔法についての知識は図書室の本でも基礎程度しか習うことが出来ず、先生に聞いても教えてくれないため子供達がそれを知ることはほぼ不可能ではあるが。
きっと少年はそれに気づくことが出来なかったのか、見極めを誤ったのだろう。

いや、例え気づいていたとしても、やはりその判断は愚かと言うしかない。
知識があればあるほど、外に出ても無意味であり、より厳しい生活を強いられるということに気づけるはずなのだ。
ここ以外の人間牧場であれば少女も気づくことが出来ず、気づいたとしてもその絶望しかない将来に脱走を選んでいたかもしれないが、幸運なことに、ここには〝救い〟がある。
少女にとっての幸いは、この牧場に産まれたこと、優秀な才能を持って産まれたこと、そしてそれらに気づくことが出来たことだ。
その全てが揃ったからこそ、少女は適切な道を選ぶために努力をすることが出来たのだ。
何も分からない者達はC級やB級でも〝魔物の為に働ける〟と満足しているが、冗談ではない。
家畜扱いも奴隷扱いも少女には御免被りたいものだ。
だからこそのA級。今よりも良い生活が保障されるその地位を目指した。
その中でも数年に一度、不作であれば10年に一度しか出ないという特A級を取ることが出来れば、己の人権は保障されたようなものだ。
特A級の進路は牧場の管理官となることであるのは知っているし、それよりも更に優秀な者は魔物将軍よりも上の地位に就くことだって可能なのは、当然把握済みだ。
コロシアムでのし上がる選択肢も無くはないが、強さを競うともなれば自分でも未知数であるため、確実ではない。下手をすれば一生、魔物達の見世物として終わることも考えられるのだ。
それもB級やC級よりはマシだろうが、少女にとってはあまり変わらない扱いだった。
「――では、イヴさん」
「！　はい」
選別される時になり、己の名前が先生の口から呼ばれる。
「貴方は先生に付いてきて下さい」

「――分かりました」
やはり、と聡明な少女は内心で思考する。
Ａ級の人間達と別れてただ一人、子供達を管理している牧場の外から管理棟に移動する。
Ａ級も救いであることには間違いないが、特Ａ級ともなれば更に上を目指すことだって出来るのだ。
そうなれば人間としては破格の待遇を受けることが出来るし、世界一安全かつ快適な生活を送ることも出来る。
少女は先生の背に付いていきながらも、背後で魔物兵に連れられながら手を振るＣ級、Ｂ級、Ａ級の人間達を感じて、それを哀れんだ。
この選別が、天国と地獄を分ける運命の分かれ道であることに誰もが気づいていないことに。
だがそれも、ある意味幸福なのかもしれない、と少女は背後の人間達と別れ、魔物の世界へと飛び込んでいった。

レオンハルト直営人間牧場２

選別を終えた人間達は翌日直ぐにそれぞれの場所に向かう。
その大半、おおよそ９割の人間は〝Ｃ級〟と〝Ｂ級〟であり、選別を終えた子供達は魔物兵に連れられてその場所へと向かう。
まず、Ｃ級に選ばれた者達。
レオンハルト牧場の人間においても、５割から６割ほどの人間がこのＣ級に属している。
そんなＣ級人間の生活は――他の牧場と大差のない生活であった。
「ひぎっ、あぐっ……！」
「うぐ……うぶッ……」
「あ゛ー、あ゛ー……」
「そろそろ交配の時間だなぁ……げほっ、げほっ」
「へへへ、ぐぶっ……そうだな……おれ、あの雌とやりたいなぁ……」
牧場の半分を占める敷地内の草むら、厩舎の中では、Ｃ級の人間達が魔物達に拷問や虐待、暴行を受けていた。
選別試験に於いてのＣ級に選ばれた彼らは――つまるところ、〝価値なし〟と判断された最下級の人間達だ。
知能、身体能力、一芸、そのどれもに目立った成績を残せなかった役立たず達である。
最低限でも勉強や運動を行えば少しでも上にいけたかもしれないのに、努力を怠った者達。
皆平等に機会はあったというのに、それを行わなかった負け組の彼らは毎日魔物達に苦しめられ、無理矢理交配させられて数を増やす、正に家畜のような扱いをうける。
他の牧場の様に、人うしなども健在であり、時折、同じ人間達によって苦しめられていた。
だが彼らは、誰一人としてそれを苦しいとは感じても、疑問を抱くことはない。
彼らにとってはこれが日常であると同時に、人間として、ごく当たり前のことであるからだ。

人間は魔物を楽しませ、奉仕して生きる種族である。
魔物に飼育して貰わなければ、人間は生きることが出来ない。
だから魔物から暴力を受けたり、犯されたり、というのは当たり前の事であり特に疑問を持つべきことではないのだ。
そもそも、誰もが子供の頃からその事実を知っているはずなのだ。
魔物に暴力や暴行を受けるのは至極当然の事であり、どれだけ駄目な人間であっても、それを行ってさえいれば、生きることが保障されると、誰もが教育を受けている。
だから彼らは努力せずにC級であったとしても、生きていられることを魔物に感謝して喜ぶし、なんなら幸せそうでもあった。
ボロい布切れのような服ではあるが衣服があり、魔物達によって外の危険から守ってもらえ、厩舎や気持ちいい草むらで睡眠を取ることが出来る。
一日二回の餌やりの時間を楽しみにし、交配の時間となれば雄は誰もが股間を隆起させてまるで動物の様に好きな雌に襲いかかる。一人の雌を取り合って喧嘩になることもあるが、管理している魔物兵に叩かれてちゃんと全員が交配を行い、子供を作ることを義務付けられる。
子供が出来た雌などは、子供と一緒に過ごせて幸せそうであったし、特に何の疑問も抱いていない様子であった。
余談だが、赤ん坊が出来た人間の雌は、5歳になるまでその子供を育てないといけないため、魔物兵による虐待や暴行からある程度免れることが出来る。
やり過ぎるなどして親が死んでしまえば、その赤子の面倒を見る手間が掛かるため、魔物兵も手心を加えなければならないのだ。
そしてこのC級の人間達が集められている一帯は、一般の魔物や、休日の魔物兵のために一般開放されており、好きに人間達を虐めたり、その生活を眺めたりすることが出来る長閑な場所なのだ。
逆にB級などは一般開放をされておらず、その役割は決まっている。
C級農場から少し離れた場所にあるB級人間が集められる施設で

は、人間達が魔物の指示を受けながら働いていた。
「急げ急げー！　工期が送れたらどうなっても知らんからな！」
「はい……！　頑張ります……！」
「こらそこ！　今はまだ休憩時間ではない！　働け！」
「す、すみません！　頑張りますのでお許しを！」
「慰安婦は今の時間の内に身体を清めることを許可する！」
「！　ありがとうございます……！」
彼ら、B級の人間達は、謂わば〝奴隷〟であった。
魔物の生活のために強制労働を課され、一部の女達は魔物兵の相手をする慰安婦、性奴隷として生活している。
家畜扱いのC級よりは扱いはマシといった程度であり、見込みありと判断された彼らは、大人になってからも選別を受けることが出来る。
その係によって様々だが、C級の家畜の餌を作っている者達の中からは、料理の腕を上げてA級に上がる者も数少ないながら存在するし、特に身体能力が高い者達は、もっと分かりやすい進級方法が存在する。
それが――〝コロシアム〟であった。
「おお、今日もいっぱいだなぁ」
「まあ選別が終わってすぐの日だからな。新しい闘士も出るだろうし、今日は特に多いだろうな」
と、声に出してやり取りを行うのは、二体の魔物兵。
彼らはコロシアムを管理当番となったレオンハルト軍の魔物兵であり、円形となった高い建物の中から、大勢の魔物達でごった返している外を見て感嘆の声を上げていた。
とはいえ、入場が始まったのでぼーっとしている暇はない。魔物兵達は闘士の人間達が集められている牢屋に向かい、彼らに一人ずつ、調教師が声を掛けた。
「最初はお前の番だ！　支度をしろ！」
「へい。畏まりました」
「今日は大一番だからな！　気合入れろよ！」

「うす、頑張ります！」
「今日はチャンピオンとの試合も予定している！　その前座として、まずは――」
　闘士達が集まるコロシアムの地下では、魔物兵や魔物隊長、魔物将軍が人間達に向かって今日の試合予定の者達を発表する。
　そこにいる人間達は誰もが鍛えられた肉体を持つ男達や、無駄のない引き締まった肉体をした女達だ。
　誰もが得物である武器を持たされ、試合前の最終確認を行っている。
　そんな彼らは、身体能力試験で見込みありと判断されたB級、もしくは合格してA級になったが、コロシアムで負けてしまい、B級に落ちた者達だ。
　彼らはこのコロシアムで、観覧に来た魔物達を愉しませるために、生死をかけた試合に臨むのだ。
　地下の階段からコロシアムの舞台へと上がると、徐々に満員の観客席から歓声が浴びせられ、実況の声が高らかに鳴り響く。
『さあ今日も、神聖なるコロシアムが開演致しました！　実況はわたくし、あの特殊部隊、エアフォースワンの隊長であり、女の子モンスター、コンテの突然変異体であるファントムちゃんが！　そして解説は――なんと！　あの紅魔城警備隊の総隊長であり、特殊部隊、ブラックティーガーの隊長でもある、イカ伯爵様にお越しいただいております!!』
『ふふふ、この私が、あのイカ伯爵だ。よろしく頼む』
『はい！　この方があのイカ伯爵様です！　何が〝あの〟なのか分かりませんがよろしくお願いします！』
　ランタンを持ってふよふよと浮いている黒衣の幽霊、ファントムと、イカマンの突然変異体であり、スリムなイカ怪人のような見た目をしたイカ伯爵。豪華な実況、解説の登場に会場の熱が目に見えて上昇していく。始まりが近いことを誰もが悟っているのだ。
『さて、今日は選別が終わり最初のコロシアムということで、活きが良いニューフェイスが揃っているとお聞きしておりますが、今日はどの

ような散りざまを見せてくれるのかー!?』
『散るとは決まってはいないが、私も楽しみだ』
『ツッコミ、ありがとうございます！　イカ伯爵様の言う通り！　散るとは決まってはおりませんが、それを楽しみにしているコロシアムのファンも多いことでしょう！　というわけで長ったらしいお喋りは抜きにして、早速最初の試合に移りたいと思います！　まずは――A級闘士である二匹の対戦だぁーーー!!　選手、にゅうじょーーーう!!』
わあああ、と観客席から魔物の熱狂的な声がコロシアムの中を反響する。
そしてコロシアムの地下に続く入場門から、選手が現れ――なかった。
『……おや？　選手が入場してきませんね？　何かあ――はい？』
不意に、コロシアムの実況解説席に魔物兵が走って飛び込んでいき、何かを耳打ちする。実況のファントムがふむふむ、とそれを聞いて頷くと、
『……どうやらトラブルのようです！　会場の皆様は、しばしの間、お待ち下さい！　その間、私達のフリートークで場を温めておきましょう！　というわけで結局お喋りすることになりました、イカ伯爵様！』
『ふむ、たまにはこういうこともあろう。闘士は血の気が多いと聞いているからな』
と、告げたところで会場にいる魔物兵達は疑問符を頭に浮かべ、少しざわついたが、しばしの間、二者の会話を聞いて試合の始まりを待つことにした。
――その頃、コロシアムの地下では、
「急げ！　こっちが出口だ！」
「はぁ、はぁ……なんとか撒けたな……！」
「後はこのまま……！」
と、息を乱して走るのは、コロシアムの闘士であり、目玉でもあるA級闘士も含めた3人の人間。

男二人と女一人。誰もが自分の得物であるその刃に血を滴らせ、コロシアムの外に向かって走り抜けようとしていた。
彼らが行っているのは――脱走。
Ａ級闘士である男から真実を教えられた二人は、その当人と一緒に、脱走を企てたのだ。
コロシアムの試合の時に、武器を渡されるその時を狙った犯行。
連中は、あまりこちらが逆らってくることを考えていないのか、調教師達も油断しており、何とか討ち倒して逃げることが出来た。
３人は誰もが数年前に身体能力試験でＢ級やＡ級に選ばれ、闘士として生活し、コロシアムで鍛えられた腕利きの戦士である。
強さには自信があり、その腕前は並の魔物を容易に凌ぐほどになっていた。
だからこそ、３人は追手が居なくなり、出口が見えた時点で、半ば脱走が成功したと確信する。
後は外に出ていくだけ。
そんな時に、声は掛けられた。
「――止まれ」
「ッ……！」
「！　嘘、あれは……！」
「くっ、お前は……！」
と、３人の顔が険しく歪みを見せる。
コロシアムの出入り口。その直前に立ち塞がるように立っていたのは、赤い軍服を来た眼帯の中年。
右手に赤い本、彼らも知る剣王伝を手に持ちながら、濃い魔の気配を漂わせるこの牧場でも切っての大物。
その名はリー。
魔人レオンハルトの使徒である男が、険しい視線を３人の人間に向けていた。
その圧力に３人は気圧されたように一度、立ち止まると、彼の続く言葉を聞いた。
「……今すぐ回れ右をし、檻の中に戻って罰を受けろ。これは――〃

命令〝である」
　リーの渋く冷えた言葉に、３人の表情が反抗的に歪む。憤ったように、
「っ、何が命令だ……！」
「そうよ！　人間は、あんたたち魔物の奴隷なんかじゃない！」
「俺達はあんた達の指図は受けない。自由に生きるんだ……！」
　と、３人は想いをぶつけるように剣や槍、弓を構えて戦闘態勢を取る。
　だがリーは、それを聞いても目を僅かに細めるだけで、
「……もう一度告げる。今すぐ檻の中に戻り、罰を受けるなら、その罪は許される。貴様らはレオンハルト様の所有物であり、そのような勝手な行動は許されていない。身の程を弁えろ」
「そんなことは望んでいない！　俺達は、自由を掴み取る！　――行くぞ！」
「ええ！」
「ああ！」
　３人がとうとう武器を構え、リーに向かって襲いかかっていく。
　最初に肉薄したのは、槍を持った男だ。
　Ｂ級の中でも上位に位置し、Ａ級も間近と言われた闘士の槍が、寸分違わぬ正確さで、リーの額に向かって振るわれる。人間はおろか、並の魔物ではそれを防ぐことは不可能だろう。
　――だが、
「――え？」
　槍の男は、気づけば声を漏らしていた。
　何が起こったか理解出来ないといった様な、揺れた瞳は、己の胸に突き刺さったリーの拳に向いており、そこから血が流れていることを確認し――断末魔の一つを上げること無く、そのまま絶命した。
「――お前達の言い分は、よく理解した」
　と、それを成した張本人であるリーは、男の身体から左手を抜きながら言う。
　一瞬の拳撃で、男の身体を貫通させた左手は、その白い手袋が血で

真っ赤に染まってしまっている。
「嘘、だろ……？」
「そんな……!?」
残った二人は、呆然として顔を青褪めさせ、そこでようやく、自分達と対峙している相手の力量を感じ取る。
――レベルが違う。
それは文字通りの意味でもあった。
使徒リー。魔人の使徒である者の強さを、彼らは知らなかった。
そして人間を一撃で絶命させたリーは、既に命の灯を消した男には目もくれず、残った二人を見て最後の言葉を紡ぐ。かつかつと、音を立てながら歩いて、二人に近づきながら、
「レオンハルト様の所有物を辞め、なおかつ脱走し、人間の世界で生きる――つまりは、自由に生きたいと言うのだろう。ならば、そうするがいい」
と、リーは怒気と殺気が入り混じった闘気を立ち昇らせながら、二人にその許可を出した。
人の世界で自由に生きることの意味を教えてやる、と、
「これより、魔物として貴様らを襲わせてもらう。レオンハルト様の所有物ではないと主張するなら、もう命の保障はしなくてよいからな」
「う……あ……」
「っ……う、うあああああ!!」
その絶望の宣告に、女は目に涙を浮かべて戦意を喪失させ、男は絶叫しながら剣を振りかぶると、リーに向かって斬りかかっていく。
人間牧場で生きる人間は、誰もが生かされている。
それは魔王ジルの命令でもあり、レオンハルトの命令でもあるのだ。
リーはそんな慈悲深い主が与えた命の保障を、自ら捨てるという人間達に、激しい怒りを抱いた。
人間を活かし、生かす――主が定めた救いともいえる道の恩恵を受けておきながら、それを〝いらない〟と拒否するなど、あり得ないこ

とだ。
それは〝殺してくれ〟と、〝今すぐ死にたい〟と、自殺宣言をしている風に、リーは解釈した。
「頭も悪ければ力も弱い。その上、我らが主の心を理解せず、それを拒否するなど――万死に値する」
「っ、ぁ……――」
リーの蹴りが襲いかかってきた男の首に炸裂し、胴体と永遠に別れを告げる。
使徒の中でも上位に位置するリーのパワーは、人間の身体を容易く粉砕することが出来る。
男の顔面が風船のように破裂する瞬間を間近で見た女は、もはや地面にへたり込み、股間に黄色い染みを作ってしまう。
それを見てリーは、僅かに眉を顰めると、
「……最後の最後まで、レオンハルト様の物を汚すつもりか……やはり救えん。――己の罪深さを自覚しながら死ぬことだ」
「ひっ、あ……た、たすけ……」
しかし、女の助けを求める掠れた声は誰にも届かず、リーという死神が徐々に近づいてくることで応えられた。
もはや死を待つだけとなった人間の女。
だが不意に、その声は響いた。
「――なーに、やってますの！　リーさん！」
「うぶっ!?」
バシィィィン！　と、突如としてリーの背中を打ち付ける音がその場に鳴り響く。
同時に聞こえた声は女性のもの。それを行った女性のものだ。
金髪ツインテールで青い軍服を来た少女は、リーの背後に腕を組んで立っており、不意打ちを受けたリーは背中に痛みを感じながらゆっくりと振り返る。
「きゃ、キャロル様？　一体何を……？　私は、自殺志願をした人間の始末を――」
「どうもこうもありませんわ！　脱走を企てた人間が、複数いますの

よね!?」
「は、は……それはそうですが……」
「なら、尋問して他に漏らしていないか吐かせなくてはなりませんわ！　だから、全員殺してはいけませんのよ！」
「！　それは――」
　リーはそこで、身体に電流が走ったような衝撃を受ける。
　レオンハルトの使徒であり、同じく脱走したという報告を受けてやってきたキャロルの言葉は、彼にとって正論であったのだ。
「怒るのは理解出来ますが、怒りに我を忘れて目的を忘れてはなりませんのよ！」
「……！　はっ！　申し訳ありませんでしたキャロル様！　私は、今しがたとんでもないミスを犯すところでありました……止めてくれたこと、感謝申し上げます」
「ふふん、分かればいいのですわ！　ちゃんと一人は生き残っているようですし、さっそく行きますわよ！」
「はっ！」
「……えっ、きゃあああ!?」
　リーが敬礼をするのを待たずに、キャロルは先に行動をお越し、戸惑っていた人間の女性の足を掴んでそのまま歩き始めた。
「お仕事は正確に！　ですが、何事も臨機応変に、ですわ。先輩であるわたくしの言葉をちゃんと聞いて、レオンハルト様に尽くすのですわ！」
「はっ、今一度、心に刻みつけておきます。今回の件について、レオンハルト様に謝罪を行わねば……」
「それは良いことだと思いますの！　レオンハルト様はお優しいので、そこまで怒ることはないと思いますが、わたくし達がそれに甘えてはいけませんのよ！」
「は、正にその通りであるかと」
「いやっ、やめ、痛っ、離して……！」
　有無を言わさずに女性を引きずって運んでいくキャロルは、女性の声に反応することもなく、先輩として、リーに使徒としての心得を教

えている。
　リーもそれに慇懃に頷いており、お互いに主に対しての忠誠心と、人間への容赦の無さが窺えるが、全く気にしていないというわけでもないようで、
「っと、さっきから片方の足が当たって邪魔ですわ」
　と、キャロルは徐ろに、持っている足とは反対の足が邪魔だと感じて一度立ち止まると、足を振り上げて、
「いぎっ――ぎゃあああああああ!?」
「ふぅ、これで歩くのに邪魔にはなりませんわー」
　と、何事も無かったように再び歩き始める。
　邪魔だった人間の女性の足。その片方の足を踏み潰して、無理矢理引き千切ったのだ。
　そして片方の足をまるで道具が何かを持つように無造作に手に取ると、女の悲鳴を意に介さずリーを連れて目的地へと向かっていく。
　しかし道中、やはりその悲鳴がうるさいのか、背後を見ながらリーに向かって、
「むー、うるさいですわ」
「仕方がないかと。それとも、どうにか致しますか？」
「っ……！　あ、ぐ……うぐぅ……！」
「あれ？　でも静かになりましたわ」
「……痛みに慣れたのでは？」
「……？　まあとにかく、良いことには違いありませんわ。行きますわよ」
「はっ」
　と、リーはキャロルの、人間の声がうるさいという疑問に答えたが、その答えは違っていた。
　足を潰した張本人であるキャロルに、うるさい、と言われ、次は喉を潰されると想像した人間が、自主的に声を上げることを我慢し始めたのだ。
　しかし、尋問を行って他に真実を知った者がいないか自白させるためにも、喉を潰すわけにはいかない。だからそれはあり得ないことな

のだが、キャロルが言うように静かになったのならそれに越したこともなく、真実を告げる必要もないので、リーは痛みに耐える人間を尻目にそのままキャロルの背についていった。

Ｂ級。そして一部のＡ級の人間達が生活するコロシアムからまた離れた場所。

僅か１０名にも満たないＡ級に選ばれた人間達は、コロシアムに連れて行かれる者を除いて、全員がレオンハルトシティへと辿り着いていた。

だが彼らは街の表通りではなく、紅魔城の裏手、ゲートの様な場所で仕切られた街の外れのような街に向かうと、引率した魔物将軍の言葉を受けた。

「Ａ級のお前達には、今日からこの〝人間街〟へ住んでもらい、魔物のために、それぞれ栄誉ある専門職に就いてもらう！」

「……！　はい！」

そこで掛けられた魔物将軍の言葉に、Ａ級に選ばれた人間達はそこで自分達が、数多くの人間達の中から選ばれ、栄誉ある地位に就けたことを喜び、魔物への感謝を胸に抱く。

その〝人間街〟は、彼らが知る牧場の光景とは違い、まるで夢の様な街だった。

ここに来るまでに目の当たりにしたレオンハルトシティの街並みも凄かったが、人間街も彼らにとっては充分に綺麗な街だった。

小規模な街ではあるが、舗装された道路があり、各種施設や噴水が設置され、公園なども存在する夢の様な街。

仕事で出向いている人間を除いたそこに住む人間達は、どうやら休日を満喫しているようで、浴場やレストランなどの施設を利用したり、公園で子供を遊ばせたりと長閑な時間を過ごしていた。

牧場の中の世界しか知らなかった彼らにとっては、正に夢のような街だった。

あるいは、外の人間が見ても夢のような街だと思ったかもしれな

い。
それくらい、人間街に住む人間達の姿は、かつて人類の文明が残っていた頃よりも変わらない――いや、それよりも上等な生活を送っていたからだ。
違うのは、彼らの思想や中身くらいであり、人間が平和に暮らしているというのは変わらない。
だが、それを享受出来るのも彼らが優秀だからだ。
彼らは選ばれた。
毎日の様に努力を続けて、その才能を開花させた選ばれた人間達。
彼らはこの街を治める魔人によって恵まれた生活と安全を保障され、その才能を魔物のために活かすこととなる。
料理や建築といった技術職、知能が高い者であれば人間牧場で教師として働く者がおり、一人の例外もなく、彼らは己の才能を活かす場所を与えられる。
家を与えられ、職を与えられ、家庭を持つことだって認められる、人間の理想郷。
そこが〝人間街〟であった。
街の中は魔物隊長に率いられた一部隊が警備のために巡回しているが、その中心にいるのは通常の魔物ではなかった。
長い黒髪と長耳、額に赤いクリスタルを持つスラッとした体格の美女は、魔物将軍と、それに引率された人間の子供達に気づいて声を掛ける。
その人間達を見て少し目を細めると、
「……今回はこれだけ？」
「はっ、申し訳ありません、ハンティ様。今回の選別は、基準を満たす者が少なく……」
「……あっ、いや、ごめん。別に責めてるわけじゃなくてさ……うん、まあ気にしないで」
「……？　は、畏まりました」
女性の言葉に魔物将軍が疑問符を頭に浮かべながらも、特に気にせずに頷くことにする。

そして女性の方は、子供達の前に向き直り、それらの顔を一通り眺めた後に、複雑そうな表情で溜息を吐いた後、しかし何かを切り替えるように笑顔を浮かべて、
「――ようこそ、でいいかな？　ここは〝人間街〟。そしてあたしは、ここの管理人で街の警備担当でもあるハンティ。よろしくね？」
「……っ！　あ、貴方様が……！」
「す、凄い……本物の使徒、ハンティ様だ……」
「綺麗な人……！」
子供達は、やはり、と、その名を聞いて目を輝かせ、あるいは畏れ多いとばかりに身体を震わせる。
魔人レオンハルトの使徒であるハンティの名を、知らない者はこの場にはいない。日々の授業でも習うことだし、知能試験にだって必ず出てくる。
魔物ですら自分達よりも上位の存在であるというのに、使徒。それも試験などでも姿を見せないハンティの姿に、誰もが感嘆の吐息を漏らす。
そしてハンティの方は、その毎度お馴染みの反応を受けて、やはり複雑そうな苦笑を浮かべた。
「あはは……とりあえず、街の案内をするからついてきてくれる？」
「は、はい！　畏まりました、ハンティ様！」
「畏まらなくてもいいんだけどね……それじゃあまあ、まずはこっち」
と、ハンティは魔物将軍と一緒に新しい人間達が住むための家に案内し、街のルールなども一緒に説明する。
許可なく人間街から出てはいけない。結婚したい場合は役所に届け出ること。子供は一人まで。それ以上生まれた場合は、牧場で育てることになる、など、様々なルールを一度に教えられるが、ここにいるのは才能豊かな子供達ばかりであり、その持ち前の頭脳でそれらを問題なく記憶していく。
そうしてルールの説明が終わり、それぞれが住む場所を教えられると、次にどこで働くことになるかを直接言い渡される。
料理人が多く、その他の技術職が次に多い。残りは人間牧場の先生

など、進路が示されるが、そこで直ぐにその職を任されるわけではなく、来たばかりの彼らは実地研修としてその場所でしばらく学ぶことになる。
実際に働いて、経験を蓄えなければ分からないことも多いため、先に働いている先達に直接教えてもらうのだ。
そこで躓けばその職をクビになることもあり得るが、才能と努力を示した彼らが今更そこで躓くことはほぼあり得ないことであり、一度A級に選ばれてからB級に落ちる者など、殆どいなかった。
禁忌とも言われるルールを破ったり、運悪くとあるイベントに選ばれたりすれば、その限りではないが、
「……」
ハンティは、明るい表情でこれからのことに希望を持った子供達や、幸せそうな街の人間達を見て、思う。
――せめて、彼らだけでも、無事に生きてほしい、と。
C級やB級に選別された多くの人間達を想い、ハンティはそれらの想いを息と一緒に飲み込んだ。

そして特A級に選ばれた少女――イヴは先生や魔物将軍の後について、ただ一人、別の場所に連れて行かれていた。
両端に警備の魔物兵が並ぶ真っ白な廊下を歩きながら、徐々に牧場の中心へと向かっていくが、彼女の知識の中に於いても、この先は未知数であった。
しかし名称としては知っている。この先に続く場所の名は、
……この先は管理棟ですね。
魔人レオンハルト直営の人間牧場。それらについての知識は一通り頭に入っている。
この牧場は円形になっていて、その中で三つのブロックに分かれて人間を管理している。
東側にあるのが、C級の人間達を集めるエリア――家畜が集められた牧場施設。

西側にあるのが、Ｂ級エリア。強制労働を強いる収容施設。
そして今しがたやってきた南側にあるのが、選別前の子供達を洗脳、教育し、管理するための施設だ。
この三つのエリアはそれぞれ別のシステムで運営されているが、この人間を選別するやり方も、全体としてみれば一つのシステムで成り立っている。
才能ある人間や、優秀な人間だけを抽出し、魔物の下で忠実に働かせるためにこの選別システムは運用されているのだ。
このシステムが中々の効率性を誇り効果があることは、実際にこれまで教育を受けてきて、周囲の子供達を見てよく理解しているし、とっくに実証済みであるのだろう。
実際、周囲で天才、優秀と評価された子供達も、物心ついた時からの洗脳教育によって特に疑問を持つこと無く育っている。
先生ですら同じ様な匂いを漂わせているのだから、優秀な大人であってもその洗脳教育の効果からは抜け出せていない。
自分の様な特殊な能力でもなければそれを見抜くことは不可能であろうし、見抜いたとしても発狂するのが関の山。焦って脱走など企てる者がいれば、その人間は秘密裏に消されてしまう。
魔物にとって都合のいい人間だけを生かすこのシステムは、もはや悪辣というより、舌を巻くほどに秀逸なものであり、少女も思わず感心してしまう。
だが、ただ感心してるだけではいられない。
ここから先は、先程説明した三つのブロックの中心。魔物達や管理官達が詰めていると言われる〝中央管理棟〟だ。
他のブロックもそうだが、通常、選別以外の理由で他のブロックに移動することは出来ず、ここに住む人間達は子供時代を過ごした〝エリアＤ〟とも呼ばれるその場所と、自分達が住まう場所以外は知ることがない。
知識だけはあるイヴですら見たこともないし、管理棟ともなると知識の上でも未知数だ。
おそらくは、魔法ビジョンを映している部屋や、魔物達が使用する

施設などがあるのだろう。それも徐々に理解し始めてきたが、まだ全容は掴めない。
だが、それを知っている者に長い間近づいておくか、触れでもすれば大体は分かる。
故にその時は近いだろう。知ってどうなるわけでもないが、これからのことを考えれば知識を身に着けておくに越したことはない。
だからこそ、その時をじっと待つ。
そうして、管理棟に入ってしばらく。
遂にその中枢ともいえる部屋に、イヴは入室した。
だがそこには、
……至って普通の部屋ですね……。
その部屋はかなり広めの部屋であり、警備の魔物兵らが立ち並んではいたが、一見他の部屋と変わらない普通の部屋。
人間は、自分以外だと先生達くらいしかおらず、大物も、魔物将軍や魔物隊長がいるのみ。
……てっきり、使徒か、それ以上が待ち構えていると思いましたが。
特Ａ級に選ばれればそれに近づくことの出来る道が開かれるはずだが、それを通達するに相応しい人物といえば、それらの者達だ。
事務的にただ伝えることもあり得るが、それだけ重要なことを、末端からただ伝えるというのも味気ないし、権力者というのはそういった式典染みた辞令を大切にするものだ。
目上の者から通達されることにも意味があり、それが下級使徒ともなれば尚更顔を合わせた方が良いはず。
だから誰かしらがそれを通達するものかと思ったが、その気配はなく、更には先生や魔物将軍が話し始める気配もない。
ただ一言だけ告げたのは、
「しばし待て。もうすぐ、ここの責任者が来られる」
「……はい。分かりました」
やはり、という思いを強くする。
ここの責任者、という単語から想像出来るものは、やはり先程挙げた大物のことだ。

その中で誰が代理としてやってくるかは分からないが、それでもそれなりに近しいものがやってくるはずだ。
魔物将軍の、〝来られる〟という何気ない言葉遣いも、それを示唆している。
そして、その時は不意に訪れた。
奥の扉が開き、ゆっくりとした歩調で現れたのは、
「……お待たせ致しました」
「はっ、とんでもありません。態々ご足労頂き、ありがとうございます」
魔物将軍や魔物隊長、周囲の魔物兵や、先生達が一礼を行う。
しかしその相手の姿は、
……子供？
と、イヴは心を跳ねさせる。
己もまだ子供で、華奢な方だと自覚しているが、それよりも小さく華奢な少女がそこにはいた。
真っ白い髪と、白い肌。白と赤の、ＪＡＰＡＮ風の巫女装束の様なものを身につけた可愛らしい少女だ。
まさか彼女が魔人であったり、使徒であったりするのかと一瞬思ったが、それにしては魔物特有の気配がしない。
ただの人間の子供に見えるが、彼女の両目が部屋に入室した時からずっと閉じられていることと、その手に刀を握っていなければ、普通の子供ではないかと疑っていただろう。
しかしその子供は、魔物将軍に敬語を使われていることから、それよりも高い地位にいることが分かる。
ならば、とその地位の予想を頭の中で打ち立てた時、子供はこちらの５メートル程手前まで来たところで口を開いた。
「こんにちは。貴方が、数年振りの特Ａ級ですね。私は、白兎。ここの責任者の名代としてやってきました」
「……ご丁寧にありがとうございます。私はイヴと申します」
白兎と名乗る相手の立場が遥か上であることを理解し、イヴは丁寧に、そしてにこやかな笑みを浮かべて優雅に挨拶してみせる。

対する相手は冷ややかな様子で、こちらに顔を向けているが、瞳を開くことはないため、見ているのかどうか分からない。
しかし彼女は、こちらの顔を正確に見上げて声を飛ばした。
「イヴさんですね。ふむ、確かに、聡明そうな顔つき、そして雰囲気を感じますね」
「それはありがとうございます。ですが……気分を害したら申し訳ありませんが、目を閉じたままではお分かりにならないのでは？」
と、半ば確信に至りながらも敢えて聞いてみせると、やはりと言うべきか、白兎は淡々と気にしていない様に答えた。
「ええ、見えませんよ。貴方の予想通りです。目に先天性疾患を患ってまして、生まれつき目が見えません」
「！　それは……不躾な質問をして、申し訳ありませんでした」
と、イヴは謝ってみせるが、心の中で思う。――こちらの予想を見透かしてきたのか、と。
だが相手は何も気にしていない様で、
「構いません。生活に不自由はありませんので。それよりも、そちらの方が面白いものを持っていそうですが――」
「？　なんのこと……――っ!?」
イヴはその問いにしらばっくれようとしたところで、それを感じてその場から離脱するように後ろに飛び退いた。
周囲が何が起こったかと、訝しげな目を向けたところで、白兎と名乗る少女は先程までと変わらない様相でそれを指摘する。
「……ふむ。どうやら、人の感情や……もしくは考えていることが分かる様ですね。私の〝斬る〟という想いに反応したようですし」
「っ……ふふ、いえ、単に殺気を感じたに過ぎませんよ」
しかしそれは嘘だ。本当は、彼女が言うように、人の感情や思考をある程度読むことが出来る特殊な能力を持っている。
イヴにとって、周囲の感情は匂いのようなものであり、近づけば近づくほどその匂いは濃くなるし、触れれば相手の考えている内容が殆ど完璧に読み取れる。
数メートルの距離なら感情と、単純な思考くらいなら読み取れる

が、詳しい部分までは読み取れない。
生まれた時から不思議と身についていたこの能力が、イヴの知識の源と言っても良いだろう。
図書室にある知識だけで、この牧場の真実に気づくことは、絶対に不可能ではないものの、ほぼ不可能であり、運良く、配置された〝それら〟に気づけるかが鍵となる。
イヴは魔物兵からそれを感じ取り、物心ついて直ぐに牧場や人間の真実を知っていた。
そして今まで巧妙に隠して、利用してきたこの能力。それを隠そうとしたところで、しかし白兎はこちらを――見ていないが、見て、口にする。
「嘘ですね。先程、指摘された時に心音が強く脈打ちました。どうやら本当にそういった能力があるようです。今も、また心音が強くなっていますし」
「！　……白兎様は、とても耳が良いようですね？」
「それほどでも。視覚以外の五感は異常に優れていると自覚しているので。故に見えずとも、見えています。見えすぎるほどに」
と、告げた白兎は淡々とこちらを見上げてその見えているものを口にしていく。
「身長は１４９センチ。体重は３７キロ。華奢ですね。もう少し太った方がいいかと思います。髪はセミロング。サラサラで綺麗だと思います。胸は小さい、Ａカップ程ですか。ですが安産型の様ですし、子供を産むには苦労しなさそうです。足のサイズは――」
と、白兎はイヴの身体的特徴を次々と言い当てていく。
何も見えていないはずなのに、その全てが当たっており、イヴは僅かに驚くも、ニコリと笑顔を見せ、
「ふふ、白兎様は見えていないのによくそれだけの情報を当てることが出来ますね。感服致しますが、女性として個人情報を晒されるのは、少々気恥ずかしい気もします」
「見えていなくとも、あらゆる情報でそれらは特定出来るものですよ。声や心音が聞こえる位置や、歩いた時に聞こえた足音から察せられる

歩幅、身じろぎした時に空気に触れて動く髪や、身体の凹凸も、私にははっきりと見えています」
さすがに色までは理解出来かねますが、と言いつつも、彼女にははっきりと世界が感じられるようであった。
……異常聴覚――いえ、視覚以外の感覚に優れた盲目の剣士、ですか。
中々にクセの強い相手だ。と、さすがに初めての相手でやりにくさを感じつつもイヴは声を送る。
「……人間は、五感の内、どれか一つでも失うと、その他の感覚が鋭くなるとは聞きますが……白兎様のそれは、もはや異常の領域ですね」
「お褒めに預かりどうも。ですが、貴方の方こそ、最初から気づいていましたし、今もさり気なく、私の間合いに入らないようにしていますね。さすがは特Ａ級に選ばれた人間。先輩として、鼻が高いです」
先輩、という言葉に、やはりこの白兎も、特Ａ級として選ばれた人間であることが分かる。
だがそれならそれで疑問もある。それは、
「それはそれは。先輩に褒めてもらえるなんて光栄ですね。ですがここ数十年。特Ａ級は生まれていないと聞きましたが……子供に見えて、実は結構なお年を召しているので？」
「うら若き女性に問うに相応しくない質問ですね。肉体的には、貴方と殆ど変わりはありませんが。実年齢の方は、差し支えさせて頂きます。……後、貴方の方が子供だと思いますが何か？」
白兎が子供という言葉に若干イラッとしたのか、片頬を膨らませたのを見て、子供だな、と内心で一瞬馬鹿にしつつも、冷静な方の思考では、〝どういうことだ？〟と内心で疑問を作る。
やはり使徒になるなどして不老になったのかと思い、どうにか思考が読めないか試してみるも、距離が遠くて読み取れない。
しかし白兎は周囲からは分からないが、その手に持つ刀をいつでも抜けるようにしており、間合いに入れば斬られてもおかしくない殺気を見せている。
これだけでとんでもない達人であることが分かる。直接戦闘では

勝ち目がないだろう。
だが、どうしたものか。特Ａ級として何をするのかとか、聞くことがあるのだが、不思議とそのタイミングを逃してしまった。
なので白兎が話し出すのを待っていると、魔物将軍が恐る恐ると、
「あ、あの……白兎様？　そろそろ――」
「む、そうですね。お遊びもこのくらいにしておきましょう。実力差は、はっきりしましたし」
「……」
その言葉にイラッとしてしまったが、少なくとも戦闘面では敵わないのは事実であるために、何も言い返せない。
そしてこれも、心音などで見抜かれてしまっているのだろうかと思うと、少し落ち着かないが、こうなるとペースを相手に握られてしまうため、努めて気を落ち着ける。
周囲の反応を見ているだけでもこの白兎という子供が、魔物将軍からも恐れられているのが理解出来る。だからといって負ける気は微塵もないが。
さすがなもので、イヴも相手に感情を出来るだけ伝えないように落ち着いて微笑を浮かべると、ちょうど白兎が話を始めた。
「こほん。では特Ａ級に選ばれた貴方への特権を説明致しましょう。まず、貴方はこれより、しばらくこの牧場の管理官として働いてもらいます。言うなれば、教師達よりも上の立場に立つことになりますね」
「……それだけ、ですか？」
「ほう、普通であればこれだけでも名誉なことでかなり喜ばれることですし、どうやら色々と知っているようなのに動揺も見られません。やはり貴方はかなり優秀な様ですね。――そんな貴方が知りたがっている情報を、これからお教え致しましょう」
と、敢えて不満を小さく零してみせたイヴに、白兎は特に怒るでもなく、淡々と告げる。その情報とは、
「その特異な能力や知能、才能は、ここまでのやり取りで大体理解しましたから、ほぼ合格と言っていいですが――今後、私の師にして主で

ある彼に認められれば、貴方は晴れて私と同じ――」
と、彼女は着物の裾を上げて、その紋様を見せつけた。
「〝下級使徒〟になることが出来ます。――理解しましたか？」
「……ええ、理解しました」
下級使徒。それは、魔人の忠実なる下僕となることではあるが、魔物将軍よりも上の立場となることが出来るという、人間としては破格の大出世だ。
一応はイヴの目標でもあるその地位に就くには、やはり特Ａ級として選ばれることが近道だったのだろう。
だが、その先達である白兎はこうも言う。
「まあもっとも、今まで生まれた特Ａ級の中でも、下級使徒になれたのは牧場の最高傑作とまで言われた私だけですが」
「……なるほど。優秀なのですね？」
「まだまだ修行中の身ではありますが、少なくとも、コロシアムでチャンピオンになり、主様に直接剣を指導してもらい、真実に気づいた者を人知れず闇に葬れるくらいには、優秀なつもりですが」
イヴが褒めると、白兎は心なしかない胸を張り、真顔だが自慢するような声の抑揚で自信満々にそれらを口にした。
なるほど、少し弱点が分かったかもしれない、と、イヴはそれらを頭に記憶しながら、動揺することなく頷きを返していく。
「そうですか。では、私も頑張らねばなりませんね」
「貴方も、余計なことをしたりしたら私が斬り殺しますよ」
「それはそれは。ではそうならないように頑張らせて頂きます」
そう、頑張らねばならない。
ここで認められずに落ちるなど、全てが水の泡だ。
だからこそ、イヴはにこやかな笑みを浮かべながらも、野望を胸にして彼女の問いに答えるのだ。
「やはり動じませんか。……ちなみに、その特異性以外で、特技などはありますか？」
ええ、とイヴは頷く。自分が可愛く見えるように首を傾げて笑みを浮かべて、

「魔法が得意であること。そして――可愛いことですかね？」
そう最後まで冗談めかして己を演出し、イヴは特Ａ級としての最後の試験に望み――その結果を手にすることになった。

白兎

魔人レオンハルトの下級使徒にして、新しい特Ａ級の人間を見極めに来た少女――白兎は、目の前にいるイヴという少女を感じて、内心で感嘆の息を作った。

……ふむ、やはり悪くないですね。

実際に会話を行った感触としては悪くないものだ。その才能はこれまでの特Ａ級の中でも特に図抜けており、その特異性も然ることながら、真実を知っていても何も動じない精神力は見事と言う他ない。

故に、彼女ならば、と思ってしまう。どの道、彼女の特異性を考えると、隠し通し続けることは不可能なことだ。

今も、敢えていつでも〝抜く〟という構えを取って近づかせないようにしているが、近づかれてしまえば秘密が露見してしまうだろう。

そして、どうせバレるなら、少し試してみてもいいのではないかと思う。

だからこそ、白兎は彼女に顔を向けて告げる。見えてはいなくとも、見えている。視覚以外の異常な感覚は、常人よりも正確に周囲の世界を感じる事ができる。

今、魔物兵が後ろ手に背中を掻いたことも、扉の外にいる警備の魔物兵が欠伸をしたことも、その全てを白兎の感覚は捉えていた。ある意味で煩わしく思う時もあるが、これは物心付いた時からずっと感じていることなので慣れている。そう思いながら、白兎は正確にイヴの顔を捉えて告げた。

「――では、私の後輩になった貴方に、先輩から色々なことを教えて差し上げましょう」

「……そうですか。それはありがとうございます。何を教えてくれるのでしょうか？」

物腰柔らかに対応してくれるが、それ自体は自分を演出する手段でしかないことには気づいている。

元々そういう性格なのだろうが、どこか意味深な笑みに感じるというか、思考は常に高速で回っているのだろう。全てが緻密な計算の上

で成り立っているように見えた。
だが、それを乗り越えて、目的は達成してみせる。それくらいが何だと言うのだ。
純粋な知能では、ひょっとすれば勝てないかもしれないが、こちらには経験があるし、何より強さはこちらの方が上。
それを引き合いに出すつもりはないが、それ故に相手のペースに飲まれることはない。
「特A級になった貴方の為に、この城を紹介、案内して差し上げます」
「……なるほど。それは有り難いですね。しかし、レオンハルト様には――」
「――御心配なく。許可は取り付けてありますので」
そう、許可はあるので問題ない。
特に許可は必要ないという許可がこちらにはあるのだ。
なのでこれから、先輩として城を案内してあげるのだ。
そしてその末に――
「……では、私に付いてきて下さい」
「ふふ、分かりました」
出来れば目的を達することが出来ればいいな、と、白兎は紅魔城を案内するため、その中へと足を進めた。

白兎に連れられてやってきた先は、魔物が住まう街、レオンハルトシティ。
そして彼女の急過ぎる提案で、あの魔人レオンハルトが住む紅魔城を案内すると言われたわけだが、
……一体何を考えているのでしょうか。
急に案内するとは言うが、その狙いがいまいち分からない。
自分の住む予定の人間街なる場所に連れて行かれるものと思っていたのだが、それを変更して城をただ案内する意図とは一体なんだろうか。
やはり下級使徒に内定したのだろうか。それなら別にいいのだが、

それ以外の可能性だってありえる。
心を読んでみたいが、触れさせてくれないどころか距離をある程度取っているので、曖昧な感情しか読み取れない。この能力も万能ではないのだ。
だが、眼の前を行く彼女から読み取れる感情は、
……期待？
〝期待〟。どうやら彼女は、何かに期待しているらしい。
状況的には自分に期待しているのだろうが、何をどう期待しているのかがやはり謎だ。
もっと深く読んでみたいが、この距離だと難しいし、やるとするなら時間が掛かる。
この力を使う際に少し集中するのだが、距離やどの程度読み取るかによって難易度が変わるパズルを解いているようなものなので、近ければ近いほど、そして感情や曖昧な思考程度ならあっさり読み取れるが、遠かったり、深く読もうとしたら難易度が変わる上に頭が痛くなるので読み取るのが難しい。
対象がある程度強く想いや思念を抱いてくれれば簡単にそれが読み取れるが、そう都合よくいかないだろう。
なのでしばらくはこれに付き合うか、とイヴは覚悟を決める。
どの道断れないのだし、と背後から白兎の白い髪、僅かに揺れるツインテールを何となく見ながら城に入ると、
「――お帰りなさいませ、白兎様」
「ただいまです、メイド長さん。今日は特Ａ級に選ばれた子を連れてきました」
「はい、イヴ様ですね。ようこそいらっしゃいました」
「――ご丁寧にどうもありがとうございます」
入るなりに一礼してきたのは、メイドだった。
メイド長さん、と呼ばれたそのメイドは、優雅かつ洗練された動作で一礼。男女問わずに見惚れるような笑みを浮かべると、こちらに対しても丁寧に接してみせる。
……気配からして、女の子モンスター。そしてあの肩の紋様を見る

に、下級使徒みたいですね。
先程白兎の方の紋様を見せてもらったので、それは直ぐに判別出来た。
しかしどうして名前を知っているのか、という疑問を瞬間的に抱いたが、予め通達されていたのかもしれない、とそのことについて考えることを止める。
そして、下手な行動を取らない方がいいだろう。自分の能力がバレた以上、無闇に心を読もうとすれば、疑念を抱かせてしまい、場合によっては処分もあり得ないことではない。
もし自分なら、心を覗かれる可能性のある人間など、出来れば早急に始末しておきたいところだ。
だからこそ、無害だというアピールは必要だろう。不信感を抱かれては、出世の道は閉ざされる。
故にとくに触れることなく、ニコニコと笑みを浮かべて、むしろ触れないようにする。
すると、不意に大きな気配を感じて身を固くしてしまう。
同じ様に――いや、こちらよりも早く気づいたのか、白兎もその場に立ち止まると、対面の角から、
「あら、白兎さ――」
「む……！」
角から現れたのは、青い軍服を着た金髪ツインテールの少女と、赤い軍服を着た中年の男の二人組だ。
それを見て、白兎は間髪入れずに、頭を下げる。
「キャロル様に、リー様。こんにちは」
「……」
名前を聞いた瞬間、使徒であることは理解出来たので、こちらはただ一礼。
使徒など、声をただ掛けるだけでも畏れ多いとされているのが常識だ。
魔物ですら上位。その魔物の中でも階級があり、下級使徒でさえ魔物将軍よりも上だが、使徒は魔人から直接血を分けられた、れっきと

した特権階級だ。
故に下手な行動どころか言動も出来ない。こちらは特Ａ級とはいえ、未だただの人間だ。
彼らの気分一つでこの世からおさらばする可能性もある。
そしてそれは白兎という下級使徒であっても変わらないはずだ。
階級の差は明らか。向こうが上位。
だと言うのに、
「あ、あら……白兎さ――さんと、た、確か特Ａ級に選ばれた少女でしたわね。こ、こんにちはですわ……」
「……は、はっ。何か――で、ではなく、な、何を、し、している……？」
その使徒達は――何故か酷く挙動不審だった。
全身から汗を流しながら、声どころか身体を震わせながら、挨拶を返している。
キャロルの方は笑みだが、その笑みが引き攣っており、リーの方は完全に目が泳いでいる。
両者ともに、強い動揺を見せており、イヴはその様子を不審に思った。
一体何が、と理由を推察しようとする前に、眼の前の白兎が少し間を置いて答えた。不服そうに、
「……この娘に、城の案内をしていました」
「そ、そうですのね……で、では、お気をつけて……」
「！　では、その任をわた――ぐぼぁ!?」
今度はリーの言葉の途中で、何故かキャロルが渾身の腹パンをお見舞いする。
くの字に折れ曲がったリーを、キャロルが肩に背負うように受け止めると、そのまま引き攣った笑みのまま。
「お、おほほほほ……どうやら、リーさんの腹の調子が悪くなったようですので、部屋に連れて行ってきますわ！　ご、ごきげんよう！」
何かを誤魔化すようにそう言うと、ピューッと、そのまま廊下を走り去っていく。

……明らかに殴ってましたけど。
あまりにも露骨な行為に、さすがのイヴも困惑する。そして白兎の方は、
「……では、行きましょう。次は食堂です」
「……はい。お願いしますね」
やはり複雑な感情を抱いているようだが、致命的なものは読み取れずにそのまま先を行ってしまう。
だが、何かがあるように思えてしょうがない。
先程読み取る気はないとは言ったが、どうにも気になってしまう。やはりこれだけでも読み取ってしまうべきかと危ない好奇心を抱いていると、
「……ん？　おお、白兎じゃねぇか」
「……こんにちは、ガルティア様」
今度は褐色の肌に特徴的な紋様、緑色の髪をした男と食堂で遭遇する。
こちらも知識として知っている――魔人ガルティアだ。
魔物界一の大食いグルメ魔人として名高い魔人である。
そんな彼に対し、白兎はほっとした様な息を吐いて、挨拶をする。
すると大量の料理を掻っ込んでいたガルティアが、その料理の中から一つを手に取ると、
「相変わらず細いなあ。ちゃんと食ってるか？　ほれ、これやるからもっと大きくなれよ」
「……余計なお世話です。まあ、頂きますが……」
微妙にムッとしながらも白兎が差し出された皿の上のいなり寿司を一つ手にとって口にする。食べるのか、と内心で指摘する。一応、下賜になるから食べないといけないのか、などと思っていると、ガルティアがこちらにも向いて、
「……お？　そっちの嬢ちゃんは見ない顔だな。新しいメイドか？　それとも、またレオンハルトの――」
「んーーーー!?　んくっ、げほっ、げほっ！　っ、牧場の人間です！　特Ａ級の！」

「お、おお……？　――ああ、そういうことか」
「はい、そういうことですので、ガルティア様は心ゆくまで食事を楽しんでください！　ではっ!!」
「え、ちょっと……！」
と、今度はガルティアの言葉の途中で、いなり寿司をもぐもぐとしていた白兎が慌てたように声を上げて、それを差し止める。
急いでいなり寿司を飲み込んだせいか咳き込み、頬にご飯粒がついているが、それらを全て無視し、ガルティアに別れを告げて食堂を出ていく。イブも慌ててそれを追いかけながら、
……今度は白兎さんの方が挙動不審に……？
先程は使徒二体が動揺していたが、その次は白兎本人が何かを誤魔化そうとした。
一体何があるのか、と更に疑問の色を濃くするが、動揺の匂いが強すぎて逆にそれの内容が分からない。
「……次は中庭に行きます」
「……そこまで急がなくてもよいのでは？」
「……いえ、時間は限られていますから」
「……そうですね。まあ、その通りです」
でももう少し落ち着いてくれないかと半目を向けながら、イヴが再び廊下にでた白兎の後ろに付いていくが、
「――む」
「あ……」
「！」
今度はまた別の強い気配と遭遇した。
その気配の濃さに、イヴは思わず身を固くする。
水色の短い髪に額の青いクリスタルが特徴的な美女。
先程遭遇した魔人ガルティアよりも強い気配を全身から漂わせている美女は、傍らの亜麻色の髪のメイドとともに微笑を浮かべて挨拶をしてきた。
「白兎か」
「こんにちは、白兎さん」

「あ、はい。こんにちは、です。ケッセルリンク様、シャロン様」
魔人ケッセルリンク。
魔人四天王の一角と遭遇したイヴは、これが上位魔人の存在感かと目を見張る。
なるほど、これなら確かに、人間では勝てないわけだ。
少なくともこれに近い強さの魔人が４体。その上に1体の魔人と、魔人の支配者である魔王。
普通の魔人ですら、人間では勝つことが出来ないとすら言われているのに、その魔人を一方的に叩き潰せるであろう力量を持つ上位魔人。
仮にイヴが戦いを挑んだりしたら、一秒と掛からずに床の染みとなる。
力の差がありすぎて戦闘にすらならない、とイヴは戦力差を正確に判断してみせる。
傍らにいるメイド、シャロンと呼ばれた方は使徒であろうが、こちらもやはり使徒であるため、イヴでは全く敵いそうにない。
幸いにも、こちらに敵意もなく、相手も友好的な雰囲気を覗かせていることが救いだ。
つくづく、野良の人間や、これらと戦争していた時代に生まれずに良かったと思いながら、やり取りを眺めていると、
「……そちらはお友達かね？」
「あっ……その……こちらは、今回の選別で選ばれた特Ａ級の子で……」
白兎が僅かに間を置きながらイヴについて説明する。
なのでそのタイミングで一礼しておく。失礼に思われないように。
……それにしても白兎さんは、顔が広いですね……。
ただの下級使徒にしては、魔人にも顔を憶えられており、主との関係なのか、声を掛けられるほどには親交があるようだ。
「……ふっ、そうか」
「っ……」
と、ケッセルリンクが穏やかな笑みを浮かべて、白兎の頭を軽く撫

でる。
白兎がぴくっ、と身体を反応させたところで、しかし手は離れ、
「ではな」
「あ……はい。また今度です、ケッセルリンク様」
ケッセルリンクがその場を離れていく。
そして同じ様にシャロンと呼ばれたメイドも、ケッセルリンクに直ぐについていくかと思いきや、
「白兎さん」
「？　何でしょう、シャロン様――んっ」
と、今度はシャロンの方も白兎の髪に触れた。
そして髪から何かをさっと取る。それは、
「髪に何かついてましたよ」
「！　……ありがとうございます。慌てていて、気づきませんでした……」
「……ふふ、そうですね。服も少し乱れてますし……少し直しておきますね？」
「え、あっ、そこまでは……」
「駄目です。白兎さんも、女性なんですから身だしなみは気をつけておかないと……」
白兎が遠慮するような声を出すが、シャロンはぴしゃりとそれを拒否して、有無を言わさず白兎の服の乱れを簡単に直していく。
「――はい。綺麗になりました」
「……ありがとうございます」
「ふふ……では、また今度ね」
「……はい、また」
と、照れる白兎と、何故か凄く笑顔で可愛がっているシャロンの二人のやり取りを見せられる。
それは明らかに、ただの使徒と下級使徒の関係には見えず、イヴは困惑してしまう。
……まさか、そういう関係なんですかね……？
最初に思い浮かぶのは百合的な関係だが、考えついてから、白兎の

反応がまた微妙に違うことに気づいてその可能性を排除する。
何というか、気恥ずかしさの中に、ほんの僅かに不満みたいな感情も混ざっていて、
……何でしょうか。これは。今まで見た中で言うと――子供扱いされて不服、といった感情に近いですかね？
先程からそういった子供扱いに少し不満を抱くような態度を見せることがあったのは、心を読まずとも見れば分かる。
だが、それだけでは説明がつかない反応も幾つかあった。
特に使徒の二人の反応は不可解だった。
下級使徒相手だと言うのに、まるで目上の相手に接する様な反応を一瞬見せており――
……もしや。
と、不意に、一つの推測がイヴの頭に降りてくる。
パズルのピースがぴったりと当て嵌まるような感覚を感じる。
その感覚のままに、眼の前の白兎に目を向けてみると、
……っ！　まさか本当に――！
と、僅かだが、それを手がかりに読み取ると、驚愕の単語が頭に浮かんだ。
その瞬間、白兎の瞳がぱちりと、見開かれ、
「――気づきましたね？」
「っ……！」
その赤い瞳を、鋭くこちらに向けてくる白兎。
右手は刀を今にも抜こうと手にかけており、完全に臨戦態勢に入っている。
それに気づきつつも、既に間合いの中にいるため、離脱は遅い。
だからか、イヴは苦し紛れに言葉を発した。通用するわけがないと思いながらも、
「……何がですか？」
「しらばっくれても無駄ですよ。貴方の心音、先程私の方を見て強く響きましたから。しかも、気づきましたね、という質問に対する反応も大きいものでしたし」

「……嘘もつけないんですね。貴方の前では」
「耳がいいですから」
そんなレベルではないが、と思いつつ苦笑する。
心音を常に聞かれて、その反応の大きさを正確に判断してくるとなると、ほんの僅かな動揺すら悟られてしまう。
嘘発見器、とでも言うのだろうか。この白兎という少女の前では、何もかもが丸見えだ。
見えすぎるほどに見えている、と言っていたのを思い出し、それに得心してしまう。
しかし感心している場合ではない。
相手の心が、こちらを〝斬る〟と言っている。この窮地をどうするか。一か八か戦ってみるとしても、ここは魔人の住処のど真ん中であり、どう考えても助からない。
大人しく投降するか、秘密を守ると誓ってみるか。
しかしそんな口約束を信じてくれるほど、甘い相手なのかと思うと、やはり万事休すではないかと冷静な頭は判断する。
まだだ、と諦めずに頭を回し続けている間にも、白兎はこちらに見えてはいない赤い目を向けつつ、
「……さて、秘密を知られてしまったからには、貴方を始末しなくてはなりません」
「……私を殺しますか。そんな勝手に――ああ、いえ、貴方なら問題ないんですね」
「そういうことです。久し振りの特A級の逸材。私の後輩を殺さなくてはならないことは非常に残念ではあります。――ですが」
と、白兎は一つ間を置いて、続ける。
「ある条件を満たすなら、貴方は死なずにすみます。私としても出来れば貴方を殺したくはないので、それを受け入れてほしいのですが……その条件、聞いてみますか？」
イヴはそれを聞いて、一瞬で幾つかの選択肢を浮かばせつつも、聞くしかないと即断する。
「……お願いしたいですね」

「はい。ではまあ、条件なんですが――要は身内となればよいのです」
身内、という言葉を聞いてイヴは少し固まる。
だが顎に手を当ててそれを吟味すると、少し冗談めかして、
「……身内、ですか。くす、貴方と結婚でもすればいいのですか？」
「だ、誰がそんなこと言いましたか！　私は女性ですし、貴方も女性です！」
「そういう愛の形もありだとは思いますけどね」
イヴが肩を竦めて苦笑。白兎が僅かに頬を紅潮させたのを見て、そういう話に免疫がないのか、とか、肌が白いから照れたり恥ずかしがると直ぐに分かるな、とか、意外とありかもしれない、など幾つかの思考が乱立するが、それら全てを脳にインプットしながらも一度掻き消し、相手の続く言葉を耳にする。少し気を落ち着かせたようで、
「……そうではなくて、要は近しい関係になればいいんです。例えば、下級使徒になるとか、その縁者になるとかです」
「……ああ、そういうことですか」
「察しが良くて助かります。こういう時は便利ですね。貴方のその能力」
それほどでも、と返しながらもイヴは思考に耽る。
つまり、ここの身内であれば処罰されることはないということだ。
どうやらここの主とその使徒、下級使徒達は、かなり距離が近いらしく、身内の様に親しい関係にあるらしい。
主従関係こそあるものの、失敗したり、秘密を知ったところで、処分されることは絶対にないという。
なればこそ、身内になればいいという話だが、とはいえ、だ。
「しかしどうするおつもりで？　身内となるには……ふむ、あまり簡単な事でもないように思えますが。考えがあるのですか？」
「はい。もっと簡単な方法があります」
と、白兎は頷いて告げる。少し緊張の感情を漂わせ、それを隠そうとしながら、
「――私と、お友達になればいいんです」
「……！」

白兎はそう言った。
ふふん、と笑みを浮かべ、凄いことを思いついた、と言った風な表情だ。
その様子に、思わずイヴは呆然とした後、急に気が抜けるような思いを感じてその通りに態度に出した。息を吐き、
「……何を言うかと思えば……随分と、可愛らしいことを思いつきますね」
「ふ、ふふん。どうです？　名案でしょう？　友人を殺すわけにはいきませんからね」
自信あり気な表情と感情の中に、僅かに不安が見え隠れ。やはり、随分と子供っぽいというか、可愛らしい性格だな、と思いながらも、イヴはその提案を耳にして、
……そういえば、友人なんて作ったことがありませんね……。
と、イヴは思う。今まで友人なんていなかったことに。
利用するという意味で友人の皮を被ったことはあったが、真の意味で友人とは程遠く、牧場で一緒に過ごした子供達は、利用するべき手駒であり、相手によっては蹴落とす相手――ライバルであった。
対等な友人関係、というのは築いたことがない。
それを考えると、微妙に愉快な気もしてくるが、対等でもなんでもないような気もしてくる。
しかしまあ、と、イヴはそこで一度、深く考えずに言った。生き残るためにも、という言い訳があるのなら、それも悪くないと、
「……まあ、私は構いませんが……そちらは大丈夫なんですかね？」
「！　な、何がでしょう？」
少し興奮した様子の白兎に、イヴは問う。冷静な思考を吐き出すように、
「心を読む相手と知って、私を避けずにいられるのかと思ったまでですよ。それに、貴方の立場と、私の立場は、天と地程の差がありますしね。対等な友人関係など、無理ではないかと。まあ、形ばかりの、というのならそれでも構いませんが」
と、イヴは冷めた目線で告げる。

今までこの能力を知られたことこそないものの、これを知られたら、自分はどんな社会でも生きてはいられないと確信している。
心を読んでくる相手と、付き合いたい人間など存在しない。
人は多かれ少なかれ、心を、内心を隠す生き物であるのだ。
全てを曝け出して生きている人間など、存在しないと言っていい。
もしいるとしたら、それは精神異常者か、動物の様に本能だけで生きる者だけだ。
心を隠すことで、人は他者と上手く付き合うことが出来る。
中には知られたくないような秘密や本心もあり、そうでなくとも、常に心を読んでくる可能性のある相手など、敬遠したくなるのが人として自然だ。
そんな相手と、自分と、友人になれる者など存在しない。
だからこそ、そこには価値を求めず、自分だけがのし上がって好きに生きれるようになればいいと思っている。
だからイヴは、敢えて本心を曝け出した。
こんな自分と友人になれるのか？　と、友人を欲しがっているであろうことを見抜いた上で言ってやった。
だが、返答は直ぐに来た。
「……？　はい、問題ないと思います」
「――――はい？」
思考が止まり、思わず間の抜けた声で問い返す。
問題ない、問題ないと言ったのか、と。
それはつまり、友人になれるという意味かと。
それを問い返したつもりなのだが、相手は戦意を収めて目を閉じると、興奮したように笑みを浮かべて、
「な、なら、今日から私と……い、イヴさんはお友達です。だから、秘密を知られても大丈夫です。何か言われるかもしれませんが、私が守ってやりますよ！　ふふん！」
と、拳を握ってぶんぶんと振り回しみせる白兎に、イブは戸惑う。
そして慌てるように、
「ちょ、ちょっと？　ほ、本当に言ってるんですか？　私と、友人にな

るなど……私は、心が読めるんですよ？　秘密があっても直ぐにバレてしまうかもしれないと、ちゃんと分かってますか？」
しかし、白兎は言った。
こちらの手を握り、
「分かっていますっ！　二人だけの秘密というやつですよね!?」
「全然違いますっ！」
駄目だ。この子。子供っぽいとは思っていたがアホすぎて話が進まない。
今もこちらの手に迷いなく触れてきている。そのおかげで、相手の内心が読み取れてしまう。
そこから流れ込んでくるのは、
――ちゃんとしたお友達は初めてですし、嬉しいです！
とか、
――今までは気味悪がられてしまい、城の人以外で優しくしてくれる人はいませんでしたが、この人なら大丈夫そうです！
とか、
――後で〝パパ〟に紹介しないとですね！
とか、そういったものだ。
心を読まれることは理解しているはずだというのに、それに対する悪意は一つもない。
――心を読まれる、ということは……今も読まれているのでしょうか？
と聞こえてきたので、頷く。そういうことだ。今も読まれているんですよ。だからやめといた方が……と。
しかし、続く内心では、
――つまり以心伝心ってことですね！　ステキです……！
違う、そうじゃない。心が通じ合ってるというか、一方的に盗み見られているわけであって、そんな素敵な感じじゃない。
そもそもこちらから伝える手段はないわけであって、
――ふふふ、イヴさんも鼓動が大きくなってますし、これは嬉しいということですね！

……っ！　そういえば、異常聴覚が……！

白兎は、こちらほど明確に心を読めるわけではないが、異常に発達した視覚以外の五感、聴覚などでこちらの動揺や揺らぎを感じ取り、嘘や感情などを読み取ることが出来る。

「っ……！」

それを理解した瞬間。イヴは異常に顔が熱くなるのを自覚する。

初めての感覚だ。特定の個人を見て、こんなにも鼓動が激しくなるのは。

動悸が激しいし、熱もある。何かの病気だろうか、と半ば現実逃避を行っていると、白兎は未だ興奮冷めやらぬ様で、

「で、では早速ですが、紹介したいので付いてきて貰えますか？　その後に、一緒に遊びましょう！」

「え、あ、あの……仕事は……？」

「そんなの後回しです！　それと、人間街に住むのは取り止めさせますから、ここで暮らしましょう！　一緒の部屋はまだ気恥ずかしいので、隣の部屋同士で……あっ、でも、互いの部屋でお泊まり会とかはしてみたいです！」

「い、いやいや、そんな急に色々とやって大丈夫なんですか……!?」

「大丈夫です、私に任せてください！　一から十まで説明して全部納得させてみせますから！　それでも駄目なら反抗します！　反抗期になります！」

「だ、だから……」

あまりの勢いに押されてしまう。

何とか宥めようとするも、急過ぎて思考が回らない。

〝仕事はしないとマズいのでは？〟とか〝そもそも友人ってどんなことするんだっけ？〟とか〝説明なら私に任せてください〟とか、様々な思考が乱雑に頭の中を駆け巡り、定まらない。

そんな中、白兎はこちらと手を繋いだまま一直線に廊下を走り始めてしまう。

やはりと言うべきか、凄い力で運ばれて、イヴはその言葉を口にした。

「早くパパのところに行きましょう！　この時間なら、執務室にいるはずですので！」
「だ、だからちょっと待ってくださいってばーーー!?」
と、叫びながら、イヴは白兎に連れられて、その場所へと向かっていった。

――その頃。
「……」
執務室では、無言のまま書類を片付けていく城の主――魔人レオンハルトの姿があった。
いつもと比べても眉間に皺が寄っているのは、選別の次の日であり、処理しなければならない仕事が大量に溜まっているということが決して無関係とは言えない。
しかし今のレオンハルトは、僅かながらの不安を覚えていた。
書類を片付けながら、お茶を淹れに来たメイド長さんに、思わず呟いてしまうほどには、
「……白兎はまだ仕事に行っているのか？」
「いえ、レオンハルト様。今は特Ａ級に選別された子と一緒に、城に帰ってきてますよ」
「……そうか」
と、レオンハルトは頷く。そして自然な動きで椅子から立ち上がったところで、
「――駄目ですよ、ご主人様」
「……何がだ？」
レオンハルトは努めて何でも無いような様子で、メイド長さんにその鋭い瞳を向ける。
しかしメイド長さんはにっこりと笑顔で、
「今仕事をこなしておかないと、後々レオンハルト様が苦労することになってしまいます。なので、白兎様の元に行きたい気持ちはお察ししますが、今はお仕事に集中して頂くのが、最良だと判断致します」

「……そうか」
と、レオンハルトは残念そうに呟いて、再び席に着いて書類を片付けはじめる。
その様子を見たメイド長さんは、しかし何かに気づいて更に笑みを深めると、
「それに――今はここにいた方が良いかと」
「……？　それはどういう――」
と、レオンハルトが聞き返そうとした時。
外の気配を感じて、レオンハルトは目を見開いた。
そしてその三秒後。執務室の扉が、ノックされることなく開かれた。
そのような無礼なことが出来るのは、この城の中でも数少ないし、レオンハルトがそれで怒らない相手も少ない。
その相手は、レオンハルトやメイド長さんの予想通りである人物であり、姿を見せると同時に声を響かせた。
珍しく、興奮したような大きな声で、
「――父上っ！　お友達が出来ました！」
「白兎、ノックくらいは――――何だとッ!?」
勢いよく部屋に入室してきた白兎に苦言を呈そうとしたレオンハルトが、しかしその発言の内容を聞いて迫真の表情で立ち上がる。
そして白兎は自信満々に部屋に入り、その手で引っ張ってきた少女を指し示すように紹介した。
「私のお友達第一号のイヴさんです！　人間のお友達ですよ！」
「お、おお……！　まさか本当に……！」
「ふふん、私だって、やれば出来るんです……！」
と、驚愕している魔人レオンハルトと、自慢気な白兎の様子を見て、紹介された張本人であるイヴは思う。
――読み取った時はまだ半信半疑でしたが……この二人、やっぱり〝親子〟なんですね……。
下級使徒であり、人間牧場で生まれた特Ａ級の人間であるはずの白兎。

その正体は、人間と魔人のハーフ。
魔人レオンハルトの血を引いた〝実子〟であり、周囲にはその存在を隠している――いわゆる隠し子であった。

親馬鹿

――その娘は、人ならざる者としての生を受けた。
魔人と人間。その両方の遺伝子を掛け合わせたハーフ。
この世界において、初めての存在。
通常、魔王の血を持つ存在は、子供が出来ないとされている。
しかし、本当はそうではない。ただ生まれにくいだけなのだ。
男性の魔人は、他の生物を妊娠させることが出来る。
女性の魔人は、妊娠することが出来る。
魔王や使徒であってもそれは同じ。ただどの例を取っても極端に成功率が低いため、子供が出来るという事実は広く知られていなかったのだ。
故に――ほぼ毎日の様に１０人以上の女性と、日によっては一日で１００以上の性行為を行い、それを約千年続けていれば、幾ら確率が低かろうと当たる日も当然来る。
むしろ、今まで一度も当たらなかったことが運が良かったと言えるだろう。
魔人が従える１５１人を越えるメイドの中から、たった1人。運良く孕んだ者が現れたに過ぎない。
当然、妊娠が発覚した当初、周囲は大慌てであり、一時は当人も含めて阿鼻叫喚な事態に陥った。
だが、色々考えた末に、やはりその子供を産ませることにした。
出来てしまったものは仕方がないし、複雑な気持ちもあったが、それが嬉しくないと言えば嘘になる。
とりあえず、これからは無闇矢鱈に妊娠させないように、発明してもらった避妊魔法を掛けることにし、周囲はその出産のためのサポートに回った。
人間が魔人の子供を産む際には、激しい痛みが伴い、死に至る危険性もあったが、周囲が全力でそれを回避しようと手を尽くしたことで、母親も無事なまま、出産は成功。
かくしてその娘は生まれた。

娘の誕生に、当人らも周囲も大盛り上がりではあったが、良いことばかり、というわけにはいかなかった。
まず、かの魔人に子供が出来た、という事実を隠さねばならなくなった。
魔物界では知らぬ者はいないほどの有名人であり、魔王の寵愛すら受ける身であるその魔人。
更には魔王は人間を憎んでいることで有名であり、人間との間に子供を作ったと知られればどうなるか分からない。
しかも最強の魔人の子供ともなれば、それを知ってよからぬ事を考える連中も現われるかもしれない。最強の魔人の一人娘を狙う馬鹿など、存在しないかもしれないが、馬鹿の考えることは分からないものだ。
故に、その娘の存在を、徹底的に隠すことにしたのだが――その方針を決めて直ぐに、別の事実も発覚した。
その娘は生まれつき――目が見えなかった。
先天性、それも原因不明の疾患なのか、生まれつき目が見えず、代わりに、聴覚を始めとする他の器官の発達が異常だった。
故に目が見えないにもかかわらず、見えている人と変わらない感覚を、赤ん坊の頃から身につけていたのだ。
人の顔も判別出来るし、周囲の風景だって見える。なんなら目が見えている人よりも正確に周囲の状況を感じ取ることが出来た。
不幸中の幸い、とも言うべきか、不自由を感じさせない娘の様子にほっとした面々だったが、その娘の存在を隠すため、そしてアリバイを作るために行った方法が、その娘の能力を大きく育てた。
人間の子供として育てさせ、後に下級使徒にして拾い上げるという方法を取ることにした彼らは、人間牧場の子供を育てる施設で、５歳から１５歳までの１０年間を、人間達の中で過ごさせた。
故にその娘にとって、物心ついてからの初めての記憶は、両親や周囲の人からそういった旨の説明を受けて、同じ年の子供達の中で暮らし始めるところだった。
幼い頃から天才と称され、高い知能を持っていた少女は、人間達の

中で暮らして、親と会えない日々を、苦には思わなかった。
初めて出会う同じ年の頃の子供との生活は、少女にとっては刺激的で、友達が出来るかもというワクワクでいっぱいだったのだ。
また、父や周囲の期待に応えたいという想いもあった。
5歳になるまでも、軽い英才教育を受け、天才だと褒められて育った彼女は、もっと褒められたいと思ったし、偉大な父に少しでも近づきたいと自ら真似するように木の枝を振っていたし、本を読んでよく知識を拾い集めていた。
そして軽く教えてもらった剣のコツの様な教えや、言いつけをよく守り、施設の中でも伸び伸びと過ごそうとした。
始めは上手くいっており、それなりに話すことの出来る人も増えたが、しかし、徐々に周囲から浮いていくようになる。
少女は、余りにも優秀過ぎた。
他の子供どころか大人すら越える身体能力に、天才的な頭脳。目が見えないのにも関わらず、それを全く感じさせない特異性は、正に〝神童〟。
その不気味とも言える赤い瞳も相まって、彼女はいつしか気味が悪いと避けられ、周りから〝化け物〟扱いを受けてしまう。
友達を作ろうと人間として集団生活をしていても周りから避けられる少女は、そこで初めて周りとの〝違い〟を自覚した。
目は見えていないが、ちゃんと見えている。力は少し強いかもしれないが、それを無闇に振るったりはしないし、劣っている者達を下に見る気も全く無い。
だが、少女自身はそうでも、周りはそうは思ってはいない。
人間だという体を取っていても、少女はやはり、魔人の血が入った化け物だったのだ。
少女はそれで諦めることもなかったし、勇気を出して声を掛けることもあったが、それは全て無駄に終わり、いつしか淡々と己を鍛えるだけの生活を送るようになった。
時折、人間の様子を見に来る振りをして、見知った顔が訪ねに来ることもあり、その時間だけは楽しみだった。

授業や図書室の本などで、父親の話を聞くのも楽しかったし、卒業後にまた城に戻って楽しい生活が待ってると思うと心が躍った。
故に彼女は、友達作りを一旦諦め、父親に恥じないように子供達の中でぶっちぎりの一番で卒業するように努力を重ね、実際に特Ａ級の評価を得て卒業した。
実を言うと、例えどんな成績でどんな問題を残そうが、適当な理由を付けて召し抱える体を取るつもりであったが、彼女は評価を担当している魔物将軍らや人間の教師をも舌を巻くほどの歴代最高の成績で卒業し、正当に召し抱えられた。
下級使徒という偽りの立場を与えてもらい、人間牧場の責任者の名代として父の為になろうと動きつつ、実戦経験を得る修行の為にコロシアムにも参加した。
表立って父の子供だと言えない特殊な事情の生まれと育ちだったが、少女は普通に幸せだった。
その事実を知る周囲の者達――身内はよく自分を気にかけて可愛がってくれているし、人間でも対等ではないが仲良くしてくれる者もいた。
両親からもとても愛情を感じるし、父からは剣術の修行も受けさせて貰えている。
ただ、皆余りにも過保護過ぎるような気はしたが、それもこちらを想ってのことだと理解はしているので、口にするのは憚られた。
生活にも不満はないし、欲しいものは基本的に与えられている。
友達がいないことだけがちょっぴり、残念だった。
だがそんな時、人間牧場に数十年ぶりとなる特Ａ級の子供が現れた。
しかもその子は、魔人と人間のハーフである自分程とはさすがにいかないものの、特殊な能力を持っていて中々に優秀だったし、自分相手でも一歩も引かない態度を見せてくれている。
もしかしたらこの子なら――そう思って、魔人レオンハルトの娘であるその少女、白兎は、その子を、初めての人間のお友達としたのだった。

「――というわけなので、今日からイヴさんをお城に住まわせてくださいっ！　後、これから一緒に遊びに行ってきます！　それと、お互いの部屋でお泊まり会もしたいのでそのようにお願いしますっ！」
「……お、おお……急だな……」
執務室に入ってくるなりにそんなことを言い始めた娘に対し、魔人レオンハルトは若干気圧されていた。
だがそれを見て、その娘である白兎は、逆にチャンスだと攻め手を緩めない。
何しろ、落ち着いて考えられては駄目だと言われる可能性もあるのだ。
だから白兎は頭を働かせて、父に向かって言質を取るために距離を詰めてひたすらに押す。
「いいですよねっ!?」
「……いや、ちょっと待て――」
と、レオンハルトが僅かに考え込む姿勢を見せる。そして、
「仕事は――」
「後回しです！」
「……今日は俺と稽古を――」
「明日に回します！」
「……コロシアムの試合が――」
「それも明日にしましょう！」
「……そもそも、その娘は――」
「イヴさんです！　イヴさん！　こちらが私の父上です！」
「……よ、よろしくお願いします？」
「挨拶もしたので礼儀もバッチリです！　なのでいいですよねっ!?」
「お、おお……まあ、そうだな……」
と、レオンハルトが戸惑いながらも頷いたので、白兎はそれを〝勝利〟と見る。
故にこの後のことを想像し、思わず顔を綻ばせながら、

「それじゃあ行ってきます！」
と、もはや遊ぶことや全てが確定したように挨拶する。
すると、レオンハルトは一瞬硬直し、しかし、しょうがないとでも言うように、溜息をつくと、こちらを見て肩を竦めながら、
「……しょうがないな……仕事も稽古もサボっていいのは、今日だけだぞ？」
「分かっています！　――では、イヴさん。行きましょうっ！」
「え、あ、ちょっと――」
と、少し戸惑うイヴを連れて、白兎は執務室を出ていく。
何もかもサボって遊ぶのは今日が初めてだ。
いつもは真面目に、父の名に恥じないように修行する毎日であったが、
……今日の私は、一味違います……！
今日は守るより攻めていく方針だと、白兎はまず、自分の部屋に彼女を連れて行くことにした。

そして――白兎とイヴがいなくなった後の執務室では、
「……何ということだ……」
魔人レオンハルトが、机に両手を突いて、身体を震わせながら項垂れていた。
今、彼の身に降り掛かっているのは、娘にようやく友人が出来たという喜びと、一抹の寂しさだ。
対等な友人を作ってやれなかった理由は、明らかに自分のせいでもある。自分の立場や、自分の娘であるという事実は、やはり普通とは違う、魔人の娘という壁がある。
それを知っている者達は、それが理由で彼女を蔑ろにすることもないし、むしろよく可愛がっている。
自分も、彼女の欲しいものは何でも与えてきたし、何だってするつもりである。
だが、

「レオンハルト。A級の子供達の案内終わったよ。それで、さっき白兎が人間の女の子連れて走ってけど――」
「――ぐおおおおお……！　これが親離れなのか……!?　ぐぅうう うっ、今日は白兎との稽古や試合を楽しみに仕事を頑張っていたのに……！」
「……」
「お帰りなさいませ、ハンティ様」
「……ただいま」
　A級の子供達を、人間街に案内し終え、その報告の為に部屋の中に入ってきたハンティは、自分の主が机に向かって声を上げているところを見て、思わず無言で部屋を退出しかけた。
　しかし、メイド長さんのいつも通りの出迎えの言葉を受けて、出るに出れなくなったハンティは、そのまま部屋の中に入ってしまう。
　非常に声を掛けたくないが、掛けないと話が始まらないため、声を掛けるしかない。
　とはいえ、声を掛けてもしばらく話は進まないであろうことは分かっているので、ハンティは大きく息を吐いた。
　一息を終えるとともに、意を決して声を掛ける。
「……それで？　白兎に何かあったの？」
「――そうなんだ！　聞け、ハンティ！　今日は白兎に初めての友達が出来た！　これがどういうことか分かるか!?」
「……へぇ、良いことじゃない」
　告げられた言葉に、ハンティも僅かに目尻を下げながら微笑を浮かべる。
　周りの連中ほど過保護ではないが、ハンティとしても色々と気にかけているし、心配なのは確かだ。だから、白兎に友人が出来たことは素直に喜ばしいと思う。
「そうだ！　つまり今日は記念日！　白兎の〝初めてのお友達記念日〟として今日は祝日にするぞ！　最高級の食材をありったけ用意しろ！　湯を沸かせ！　窯を炊け！」
　――この鬱陶しいほどの親馬鹿さえなければ。

ハンティは思わず半目でレオンハルトを見続ける。そして呟くように、
「……いや、子供ってことは隠さないといけないから駄目でしょ」
「ぐっ……それはそうだが……」
と、本気で悔しがるレオンハルトに、メイド長さんが笑みを浮かべながら提案する。
「祝日は難しいかもしれませんが、料理長に報告しておきましたので、今夜はご馳走ですね」
「っ、そうするしかないか……ちゃんと、白兎の好物を作らせておけ！」
「はい、心得ておりますわ」
「それなら問題ないな……いや、待て。飾り付けもちゃんとしないとな。後は、何かプレゼントを――」
なんなら仕事の時以上に迫真の表情で指示を出すレオンハルトに、ハンティはやはり、話が進まないなと、頭を抱える。
一度こうなると、色々と発散させないと仕事が進まないので、ハンティは敢えて自分から言うことにした。
「……さっき、親離れがどうとか言ってたけど、あれはどういう意味？」
「！　――そう、問題はそれだ！」
絶対大した問題じゃないが、それをツッコまずに続くレオンハルトの言葉と聞く。
拳を握って、眉根を寄せると、
「あの白兎が、今日は仕事や稽古、試合までもを、サボると言い出した……友人と遊びたいからだと言う……」
「で？」
「それはそれで構わない。友達は大切だからな……男だったら殺――白兎に相応しいかどうか、少し試さなくてはならないが、女の子だったし、それはいい」
「……今、殺すって言わなかった？」
「だがッ！　俺との稽古の時間が無くなるのはあんまりじゃないか!?

しかも、楽しみにしていた試合も無くなると言うじゃないか！　しかも今日はお泊まり会をしたいと言うが、ということは一緒にお風呂も入ってくれないということじゃないのか!?　週に一度しか入れないと言うのに！　その楽しみを奪われてしまった、このやり場のない気持ちは一体どこに吐き出せばいいッ!?」

聞いちゃいない。

相変わらずの親馬鹿っぷりに、ハンティは呆れ返る。

これが最強の魔人にして、多くの魔物から畏怖される男の姿だと知れば、皆はどう思うだろうか。

ここまでの発作が起こるのは稀だが、普段もナチュラルに親馬鹿なため、色々と注意した方がいいかもしれない。

ただでさえ、この男は娘の為なら普段はやらないようなヤバいことをやるのだ。

しかし抑えることも出来ないので、ハンティは投げやり気味に言う。

「……とりあえず、メイドと乳繰り合ってれば？」

「……確かにそれも大切だが……白兎との時間は……」

「明日もどうせ稽古するんだから別にいいじゃない」

と、ハンティが柄にもなくレオンハルトを何故か慰めるような形になる。

結局毎日のように稽古しているのだから、時間が少ないことはないだろうと思う。

というか、ハンティとしてはその稽古の時間の方が愉しみなのだ。

……この親に似て、中々に愉しめるからねぇ……。

魔人と人間のハーフ。それも、最強の魔人であるレオンハルトの血を引いた実子だ。

人間を越える身体能力に、様々な工夫、機転、戦術を行えるだけの頭脳に、異常聴覚を始めとする感覚の発達や特殊な能力。

それに加えて、親譲りの剣術に対する天禀の才は、ハンティも舌を巻くほどだ。

母親譲りの才能もあってか、自分で回復も行えることだし、継戦能

力も高い。
なので明日は自分も参加させてもらうとしよう、とハンティはそれを心の予定に入れておいた。
だがその愉しみを愉しむ前に、
「足りない……白兎との時間が足りない……こうなったらもう、どうにかして俺も一緒に遊ばせて貰うか……？　だがそれは、どうなんだ……？　友人との時間を邪魔することになるような――」
「なるような――じゃなくてなるからやめなよ!?」
この親馬鹿を抑えて、仕事を終わらせなければならないと、ハンティはツッコミを行う。
――母親の方がいなくて良かったなぁ、とハンティは染み染みと思った。

母親

突如として友人認定を受け、父親に紹介され、今度は部屋で遊ぼうと今日一日で怒涛の展開を現在進行系で経験しているイヴは、前を行く白兎を見て戸惑いの言葉を掛ける。
「あ、あの……本当に今から遊ぶのですか？」
すると白兎はこちらを向いて、首を傾げながら、
「？　そうですけど……もしかして、嫌でしたか？」
と、心なしかしょんぼりするような、こちらを窺うような表情の変化を見せてきたので、
「い、いえ、そんなことはないですけど……！」
「……ほっ、なら良かったです」
安心したのを見て、こちらもほっとするが、
……しまった……！　残念そうにしていたから思わず……！
と、自分の行動を思い頭を抱える。
しかし、だからといって断るのも憚られた。
相手がこちらと遊びたがっているのもそうだが、ここまで無償の好意を向けられると、
……断りきれない……！
自分の事ながら新発見だ。心を読めるという特異性を知った上で、ここまで心を開いてくれるのは、色々とくるものがある。
だからまあ、そこまで言うなら、仕方なく、本当はどっちでもいいのだが、友達になってやってもいい。
それに、相手は魔人の一人娘だし、利用も出来るはずだ。
……そうです！　利用出来るのだから、そのために友人になるだけです！
ふふふ、と思わず笑みを零してしまう。そう、自分は自分の為に、この子と友人関係を演じるのだ。
そう、あくまでも仕方なく。仕方のないことなのだ。魔人の娘から頼まれたら断ることなど出来ないのだし、しょうがない。
だから自分が友達になりたいと思っても何の違和感もないし、自然

なことだ。
……友達……ふふふ、友達……なんて良い――ではなく、なんとも有効な関係ですね……！
しょうがないなー、これは。友達になってもしょうがないだけのメリットがあるからなー。うん、これは友達にならないと不利益になっちゃうし、友達にならないといけないなー。
と、イヴはうんうんと頷き、気持ちを切り替えて前を行く白兎に再び声を掛けようとした。自然な話題を、とイヴは意を決して、
「……そ、それで……な、何して遊ぶんでひゅか？」
――そして噛んだ。
その瞬間、イヴは自らの失敗を自覚して顔が熱くなるのを感じて、引き攣った笑みを浮かべた。
……あああ!?　この私が噛んだ!?　何で!?　でひゅか？――って……恥ずかし恥ずかし恥ずかしい……!!
ぷるぷると震えながら若干涙目で恥ずかしさに耐える。コミュニケーション能力には定評があり、あらゆる人間と友好的に接することが出来ると自負出来る自分が、まさかの失態だ。
プライド的にもあり得ないことであり、今すぐ時を戻してほしいと思う。絶対に指摘される……！　と、思っていると、
「そうですね……それは重要な事です……一応、テーブルゲーム系は色々と揃ってますし、運動がしたければそれ用の施設もありますが……ただお喋りするのもこれまた外せません……あっ、そうです！イヴさんは何がしたいですか!?」
真剣に考え込み、噛んだことを全く気にしていないようにこちらに問いかけてくる白兎。
しかし、内心はどうなのかと心を読んでみると、
――初めてのお友達と何をして遊ぶかは、何よりも重要ですし、ここはイブさんのやりたいことがいいですね！
……あ、良い子でした……！
どうやら本当に気にしていないというか、気づかなかったのかもしれない。純粋な良い子で良かった、とイヴはほっとする。

そして僅かに気を落ち着かせてから、微笑を浮かべて、
「……そうですね……汗を流すのも悪くはありませんが、私は頭を使う方が得意ですので、そちらの方がいいかなー……と、思うのですが……ど、どうでしょう？」
「良いですよ！　それじゃあ部屋ですね！」
白兎の返事を受けて息を吐く。良し。今度は噛まなかった。
何故か微妙にどもってしまうのが困ったものだ。しかし、原因ははっきりしている。それは、
……よくよく考えてみれば私、友達とちゃんと遊んだことってありません……！
牧場では友達付き合いとは本当に付き合い程度で、ほとんどの時間を自分を高めるためか、情報収集に使っていた。
なので、ただ遊ぶ、という行為をしたことがないため、勝手がわからない。
だが幸いにも、白兎の方もほぼ初めての様なので、ボロは出ていない。いつもの完璧な自分のはずだ。
それに遊びの内容も頭を使う方となれば、自分の得意分野なのでおそらくは勝利することが出来るはずだ。
なのでイヴは、再び自信を取り戻した。ここは友達初心者の白兎に、完璧な自分が友達付き合いの何たるかを教えてあげなくてはならない。
いつもの様に悠々と、余裕を持って臨めばいいのだ、とイヴはその足取りを軽くしたところで、
「あっ……」
「――――白兎、帰っていたのですね」
と、前を行く白兎が、不意に声を掛けられた。
名を呼ぶ女性の声に、白兎とともに声の方向――十字になった廊下の右側を向くが、声を掛けられる前に白兎はそれに気づいたようで反応を返していた。
異常聴覚というのは便利だな、と思ってしまう。さすがにその芸当は真似出来ないと思いながら、イヴも遅れてそちらを向くと、

……着物？
そこに立っていたのは、イヴは知識だけは知っていて、実際には初めて目の当たりにするＪＡＰＡＮ風の衣装である着物を着た女性だった。
絹のように長く艶のある黒髪に、首元からは白い肌が覗いている。身体の線が分かりにくい着物の上からでも分かる大きな胸や、その女性らしいスタイルの良さに、特徴的な赤い瞳、クールで上品な印象を感じさせる美しい顔の造形。
正に絶世の美女と言う言葉が似合う女性であり、まるで本の中に出てくるＪＡＰＡＮのお姫様のような見た目をしていた。
同じ女性として、色気を感じさせる大人っぽさを目の当たりにし、イヴは感嘆の息と、微妙な悔しさを感じて複雑な内心を作る。
魔物の気配はないが、メイドでもないように見える。一体どういう存在なのかと、思ったところで、白兎が喋る直前にそれに気がついた。
「はい、母上。ただいま帰りました」
母、と呼んだ白兎に、答え合わせが来たような感慨を得て、イヴは眼の前の相手に注視する。
するとそのタイミングで、白兎の挨拶を受けた女性が目を細めてこちらに視線を向けると、
「……そちらの子は？」
「はい、母上！　私の初めてのお友達ですっ！」
と、白兎は先程父親にやった様に、自慢気にイヴのことを紹介した。なので一応、白兎の紹介に合わせて、
「イヴさんです！」
「……イヴと言います。その……よろしくお願いします……」
「……そうですか。私は、白兎の母――紅月と言います」
「あ、はい。ご丁寧にどうも……」
と、頭を下げて挨拶を行うのだが、どうにもこの紅月という母親は、妙な威圧感というか緊張感を感じさせてくれるもので、
……もしかして、私のことを快く思っていない？
娘の初めての友人。それがどこの馬の骨とも分からない相手であ

ることに不満や不審でも抱いているのだろうかと。
なので、イヴは相手の感情を少し読み取る。
内心まではこの距離で読み取れないが、単純なものであるならこの距離でもいけるのだと、感情を読み取ってみると、そこには、
……〝可愛い〟？
えっ、と声を上げてしまいそうになる。
まさか自分に可愛さを感じているとでも言うのか、と。
娘の友人と会っていきなりそう思うのは、可愛いという気持ちがどの程度かにもよるが、どうなのだろうか。
というか、先程からずっと目を細めて強く睨んでいるようにしか見えないが、一体どの辺りが好意的なのかと疑ってしまうほどの表の表情。
これだけではちょっとよく分からないな、と判断を保留にしようとする。まあ不信感を抱かれてないなら良かったと、こちらは引き下がって白兎と紅月の親子のやり取りを眺めることにする。
「……それで白兎？　今日はこれから、父との稽古の時間ではないのですか？」
「あ、はい。ですが、その……と、友達と遊んでみたくて……だ、駄目ですか？」
と、白兎が申し訳なさそうにしながらも、母親を見上げて窺うような、お願いするような表情でそれを告げた瞬間――頭の中にとんでもない量の感情が流れ込んできた。
――可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い……!!
……えっ、な、なにこれっ!?
強すぎる感情に身体をビクッと跳ねさせてしまい、白兎がこちらをチラリと見て訝しむが、その間にも、紅月が手に持っていた扇子で顔の下半分を隠すと、
「……いえ、駄目ではないですよ。お友達を大切にすることはとても良いことです。ですので、今日だけは許しましょう」
「！　ありがとうございます、母上！」

「っ……明日は、ちゃんとするのですよ……」
と、ぷるぷると顔を隠して震え始めた。
そこでようやく、イヴもその感情がどういった意味かを理解し始め、ある疑惑を感じる。
やはりこの人も――、
「……それと、今日は家族水入らずで湯浴みをする予定でしたが――」
「あっ、今日はイヴさんと入りますのでそれは無理です。ごめんなさい、母上」
「……っ!! そ、そうですか……ま、まあ、友人と親交を深めるのは大事ですし、仕方がありませんね……!」
と、今度はこちらを射殺さんばかりに強く睨んで来て、思わず〝ひっ!?〟と声を上げそうになるがそれを必死に抑える。読み取れる感情は、
――憎い憎い憎い

「え、え？　あ、あの、お母様は……？」
「大丈夫です。あれくらいいつもの事ですし、母上は自分で回復出来ます。それに、いざとなればメイド長さんが介抱しますから」
あれがいつもの事ってヤバ過ぎるだろうと戦慄する。この子の家はどうなっているのだろうかと、
「……愛されてるみたいですね？」
「過保護なんですよ、父も母も。全く、いつまでも子供扱いするんですから……！」
と、早足で歩きながら不満そうに言うが、伝わってくる感情としてはそこまで嫌なものではないどころか、嬉しくは思っている様だ。
――イヴさんの前でいつもみたいにならなくてよかったですが、それでも恥ずかしすぎます……！
みたいな感じで、友人の前でそれを見られるのが恥ずかしい、と言った内心の様だ。
よく分からないが、親とのそういうところを見られるのが恥ずかしい、みたいなことだろうとイヴは実感はないが納得する。
それよりも思うことは、
……あれで抑えてるって……抑えなかったらマズいのでは……？
読み取れた感情だけでも凄かったのに、あれが表に出てくると思うと、恐怖でしかない。
いや、愛情の表れなのだろうが、それにしてもあれほどに強い感情は初めて感じた。
これからのことを思うと、関わることが増えるのは必然で、とてつもない不安が押し寄せてくるのを感じながら、イヴはひとまず、それを脳の片隅に追いやって現実逃避――問題を先延ばしにすることにした。

その女性――紅月は、去っていった白兎とその友人であるイヴを見送り、身体に回復を掛けたところでフラフラと立ち上がった。
「……っ、白兎に、あのような友人が出来るとは……思いもよりません

でした……」
　これも親離れなのか、と紅月は自身の最愛の娘を想い、口元に付着した血を拭き取る。
　そして真っ先に歩いて向かうのは、白兎の部屋――ではなく、別の場所だ。
　さすがに娘が初めての友人と遊ぶのに、それを邪魔することはしない。
　理由を付けてお邪魔したい気持ちもあるが、断腸の思いでそれを取り止めると、代わりに別の者に声を掛けておく。
「――それで、貴方は何をしているのですか？　藤吉郎？」
「!?」
　廊下にいた小さなさるぼぼのような生き物を捕まえて強く睨む。
　そして笑みを携え、
「おかしいですね。貴方には、白兎の伴を任せていたと記憶しているのですが――こんなところでサボっていたとは……これは、レオンハルト様にもご報告をしなければなりませんね」
「……！」
　ぶんぶん、と藤吉郎が慌てて首を振る。
　どうやら何か事情があるような身振り手振りだ。それを見て紅月は、言い訳かとも一瞬思うも、
「……まあよいでしょう。とりあえず、今から白兎を追いかけていつも通りに伴をしなさい。いいですね？」
「！」
　こくこくと首を縦に振ると、その場から逃げるように白兎が向かった先に駆けていく。
「まあ、これで良いでしょう」
　あの娘の友人が何かをするとは思えないし、白兎がどうにかなるとは思えないが、万が一もある。
　一応ははぐれ使徒である藤吉郎でもいれば、いざとなった時に役に立つだろうとレオンハルトと一緒に考えて役割を与えたのだ。
　そうして一応は注意を終えて、まっすぐにその部屋に向かう。

そして扉をノックして、返事を待ってから中に入ると、
「――紅月か……どうした？」
と、そこには紅月にとって、最愛の人が机で項垂れていた。
やはり、この人も同じ想いをしたのかと紅月は距離を詰めて言う。
「先程、白兎がサボりを咎めた私に対して、〝と、友達を遊んでみたくて……だ、駄目ですか？〟と上目遣いで問いかけたきたのですが――」
息を大きく吸い、感情を解放するように、
「滅茶苦茶可愛かったーーー

「む……だが、あまり甘やかすのは良くないからな……」
「ええ、当然ですね。甘やかしすぎると碌な大人になりませんから。……なので、ここは前から欲しがっていた珍しい貝でも与えてはどうでしょう？」
「ああ、前にキャロルに影響されて集め始めたやつだな。ふむ、それは良いことだ。とりあえず、商会経由で珍しい貝を集める依頼でも……もしくは、魔軍を動かして集めさせるか……」
「はい。それが良いかと思います。それと、この前遊びに行った海が気に入っていた様ですし、あなた様が仰っていたプール施設など、城内にお作りしては……？」
「名案だな。早速作らせよう。海に毎回連れて行くのはさすがに甘やかしすぎだからな。これくらいがちょうどいい塩梅だ」
「はい。甘やかしすぎてはあの子の為になりませんから。これでご褒美についてはいいですね。後は……初めての友達記念日として、お祝いでも致しませんか？」
「ふっ、それならもう手配してある。会場の準備から白兎の好物を中心とした料理まで、完璧にな……」
「まぁ……さすがはあなた様です。惚れ直してしまいました……♡どうでしょう、今日は白兎と寝ることは難しそうですし……また私を孕ませて、二人目など……♡」
「っ……いやそれは……」
と、レオンハルトにしなだれかかって、胸を押し付けながらアピールをする。
しかしそのタイミングで、邪魔者が入った。
「――あのさぁ……親馬鹿トークだけならまだしも、あたしが部屋にいるのに乳繰り合うのはやめてくれないかな？」
若干イラッとしたような様子でそう告げたのは、執務室にある机の一つで書類を片付けていたハンティだった。
それを聞いて紅月は、まあ一理あるか、とはしたない真似を一度は止めて、しかし反論する。
「……それは悪う御座いました。ですが、親馬鹿とは言い過ぎでは？

我が子を想って話をしていたに過ぎないと言うのに」
「親馬鹿ではない。ただちょっとだけ子供を可愛がってるだけだからな」
「それが親馬鹿なんだけどね……」
レオンハルトの言葉にも肩を竦めながら反論したハンティに、紅月は口元を扇子で隠してボソリと呟く。
「……男を知らぬ、処女の戯言。いと醜し」
「聞こえてるから！　喧嘩売ってんのかあんた!?」
ハンティが憤ったように椅子から立ち上がって腕まくりをしたが、それに臆することなく紅月は続けて、
「誰もハンティ様の事とは言っておりませんが……そう聞こえたということは自覚がお有りで？」
「ぐっ……相変わらず陰湿な……」
とハンティが歯噛みしたところで、勝利した、と確信を得る。
なので続く言葉を放とうとしたが、
「その辺にしておけ。紅月も、メイドを辞めたからと言っても一応、ハンティはお前よりも上の序列だからな。じゃれあいにまで口うるさく注意するつもりもないが、程々にしておけ」
「はい、あなた様。私は夫であるあなた様に従います」
「夫ではないんだがな……」
「全く……」
ハンティだけでなくレオンハルトも息を吐く。それを見て、紅月は僅かに目を細めながら、
……まあ、今のは少し、調子に乗りすぎましたか。
と、自らのやり取りを反省してやりすぎを認めるが、内心では己の立場を勝ち誇ってもいた。
……白兎を産んで、メイドも辞めましたし……中々の地位には昇りましたね。
運良く一人娘を懐妊したので、己の立ち位置は下級使徒であっても、中々複雑な位置にある。
レオンハルトの使徒達は、使徒であっても主の血を引いた娘である

白兎に従うし、その母親である自分に対しても丁寧に接するようになっている。
別に今まで扱いが悪かったわけではないが、明らかに扱いが変わってもいた。
ある意味、女としては一歩上に行ったとも言える。
どうにも一番は難しそうだが、一人娘がいるとなると一緒に過ごす時間も増えて中々に恩恵を受けている。
その時間を幸せに思うのだが、自分の変わりようを懐かしく思いもする。
……父は、これを知ってどう思うのでしょうか……。
と、そう思うのは、紅月の両親は、この魔人レオンハルトに殺されているからだ。
かつて紅月は、レオンハルトが魔軍を率いて参加した戦い――藤原家との戦争に参加した。
その戦いの中で、両親は戦死。紅月は1人、身分を隠して逃走を図ったのだが、敢え無くして魔物兵に捕まり、貢ぎ物としてレオンハルトに送られた。
どこにも行くところが無かった紅月は、この城にメイドとして残ることにしたが、その内心では密かに、両親の仇討ちなども考えもしたのだ。
しかし結局はレオンハルトに絆されてそれは諦めることにしたし、自分の出自は今まで誰にも明かすことはなかった。今なおそれは明かしていないが、
……これをレオンハルト様や、白兎に伝えたら……。
それを思うと、変な笑いが起きそうになる。
白兎はともかく、レオンハルトに伝えた場合は面白いことになりそうだとも思うも、
……やめておきましょうか。
やはり、これは墓場まで持っていこうと思う。
今更それを告げられたところで、レオンハルトもそうだが、白兎も微妙な気持ちになるかもしれないし、良いことにはならない。

受け入れてくれるだろうという確信もあるが、態々、自分の自己満足の為にそれを言う気にもならない。
これもある意味、武士の常でもある。まるで恨み節の様にそれを言うのも武士の恥だし、父の顔に泥を塗ることになるだろう。
武家の娘としての冷静で非情な思考だと、一人娘が生まれた今なら、色々と悪いことも考えつく。
しかし今となっては武家として教育されたそういう思考も、自分の子にそれを教育する以上の意味を持たないものだ。
自分の父を殺した相手だが、愛しているし、娘も可愛くてしょうがない。
それに、この事実を教えたらレオンハルトは微妙な気分になることを考えると、
……これも一種の復讐ですか。
逆に父の場合はそれを愉快と思い大笑いするだろうし、両者の反応の差を考えたらこの件は父の勝ちだ。
ならば、仇討ちは成った、という解釈を取ってもいいだろう。
それに、勝負ならこれからも出来るし、相手を負かすことも不可能ではないのだ。
故に、今日も他の者達と共に勝負の申し出を行う。
「あなた様、夜は覚悟しておいてくださいね……？」
「……程々にな」
「くす……」
と、紅月は己の袖の下に隠していた、藤の家紋が描かれた仕込み刀を、もう使うことはないだろうと息を入れると、顔の半分を隠した扇子の下で笑みを零した。

親子として

愛が重すぎる母親と遭遇し、挨拶を終えたイヴは、ようやく白兎の部屋だと言う場所まで辿り着いた。

その道中、不思議なさるぼぼの様な生き物が現れて、白兎の肩に登ったが、

「……その生き物はなんですか？」

「この子ですか？　この子は藤吉郎です。私が生まれる前から城にいるはぐれ使徒で、私のお供であり友達です」

「……！」

藤吉郎と言うらしい小さなさるぼぼが、白兎の肩の上で胸を張っているが、

「……これが使徒？　あんまり強そうじゃなさそうですが……」

「はい、弱いですよ」

「!?」

「とはいえ、全く戦えないというほどでもありませんが」

「……！」

藤吉郎がショックを受けたように白目を剥くが、白兎の淡々としたフォローを受けて首をぶんぶんと縦に振っている。必死な様がよく分かるというか、

「……〝いつか強くなります！〟って、感じですね」

「そういえば、イヴさんは心を読めるんでしたね。なら、藤吉郎の言ってることも分かるんですか？」

「動物の心だと、言語が抽出出来ないから難しいですが……まあ、何となくは分かりますよ」

一応動物やムシの気持ちも読み取れるが、人の言語ではなく抽象的な形でしか読み取れないので、それを完璧に読み取ることは難しい。

しかしまあ長年使ってきた力なので、動物の心でもパターンは何となく分かっているし、感情と合わせれば何となくは翻訳出来るものだ。

さすがに言葉を介せないはぐれ使徒となると初めての経験だが、要

領は同じなので出来なくはない。使徒相手に無礼は出来ないと思っているし、怖い存在であることには間違いないはずだが、
「……よく見ると可愛いですね。使徒には見えないくらいには」
「何でも、かつて人類を治めていた藤原石丸に倒された魔人の使徒だそうです。その際に父が生き残った藤吉郎を引き取ったらしいと」
「……人類史、ですか」
白兎から齎されたその内容に、イヴは微妙な気持ちになる。
するとそれを察したのか、白兎が僅かに息を詰め、
「……そうでした。牧場育ちのイヴさんには、人類史は知りようがないことですね」
「……ええ、お察しの通り、牧場で習う歴史は、〝人類はその昔から魔物に生かされていた〟ということくらいで、その他のことは詳しくなく……よければ、それらの歴史が記述された本でもあれば閲覧させて頂きたいですが……」
「構いませんよ。図書室がありますので、そこで自由に閲覧出来ます。……もしくは、知りたければ私が教えてあげても良いですが？」
「お気持ちは有り難いですが、自分で調べてみたいので結構です」
「そ、そうですか……残念です」
教えたい、と言わんばかりにうずうずとし始めたが、遠慮させてもらう。その際にしょんぼりとされたので、若干心苦しくもなるが、人類史について魔人の娘から教わるのは――こう言ってはなんだが、一方的な目線の物の可能性もある。
勝者の歴史と敗者の歴史は違うし、先程教えてくれたことも、特に魔物側に都合の良い情報というわけでもなさそうだが、出来れば幾つかの書物などから精査したいものだ。
もっとも、書物であっても書き手の意図は介在するので、完全に公平な目線で書かれた歴史書はないかもしれないが、それでも事実だけを客観的に書こうとしているものは存在するはずだし、幾つかの書物と照らし合わせることで正確な史実が読み取ることも出来る。
牧場で教えられる歴史は、魔物の都合の良いように改竄されたものな上、人類史となると詳しく語られることもないため、少し楽しみで

もある。
　ある意味で、白兎が教えられた魔物側の目線から見た歴史というのも興味深いので、自分で調べた後でならそれを聞くのも悪くないかもしれないが。故に、
「……聞きたいことが出来た時は、よろしくお願いしますね」
「！　はいっ！　私に任せてください……！」
　目線を逸しながら一応そう告げてやると、白兎が嬉しそうにそれを了承する。
　何というか、この一日で大分人間強度が下がった気がしてくるが、まあ、まだ大丈夫だろう。これくらいは友達関係を維持するために必要なことをしてるだけなのと、自分の利益の為にやっていることなので、決して白兎を慮っているわけではないのだ。
　そう思うと、タイミング良く白兎がある扉の前で立ち止まり、その部屋を開けた。こちらを中に招き入れ、
「ここが私の部屋です。ささ、どうぞ」
「……へぇ……」
　と、招き入れられた白兎の部屋の中を見渡しながら興味深いなと息を漏らす。
　魔人の一人娘ともなると、やはりかなりの広さがあるし、家具なども拘って作られているように感じた。
　特に部屋の片隅に、座敷の様な、畳の敷かれた一角があるのは、やはり彼女の母親がＪＡＰＡＮの人だからだろうか。
　本人の身に着けている服や得物もＪＡＰＡＮの文化にちなんだものであるし、影響を受けたのかもしれない。
　そしてどれも、イヴにとっては初めて目にするものばかりだった。
「友人を部屋に入れるのは初めてなので、楽しいですね……！」
「そ、そうですか……」
　部屋に入れるだけで楽しいのか、と冷静な指摘を頭の中で思い浮かべるが、何故か自分もそわそわしてしまっているので思わず頷いてしまう。
　しかし、聞くべきことは聞いておこうと、咳払いを一つ行うと、

「んっ……そういえば、聞きたいことがあるのですけど、よろしいですか？」
「……！　構いませんよ。何でもどうぞ」
と、前置きを一つ。白兎の微妙に期待するような様子を見ながらも、イヴは疑問を口にした。
「えっと……今日から、本当にここに住むんですか？」
「そうして貰おうかと……もしかして、嫌ですか？」
「い、いえ、嫌ではないですけど……」
「ほっ、なら良かったです」
露骨に残念がられると困るが、まあそれはいい。
城に住めるならそれはそれで良い生活が送れるのだし、特Ａ級に選ばれた自分に相応しい場所とも言えるだろう。
だが、他にも聞くべきことはある。例えば、
「お仕事などはどうするのです？　ここから通えばいいんですか？」
「あっ、はい。イヴさんには私の補佐をして貰います」
「補佐と言うと――」
「お供と言いますか……秘書みたいなものです」
白兎の言葉に内心で、なるほど、と頷く。
ある意味では大出世だ。下級使徒の秘書、と言うと少し低いようにも感じるが、牧場の管理を実質的に行っている者の補佐。それも実は魔人の娘の秘書となると、かなりの地位なのではなかろうかと思う。
「――分かりました。では、これからよろしくお願いしますね？」
「はい。こちらこそ、よろしくお願いします」
その気になれば更に上も目指せそうな位置だと納得し、イヴはにっこりと笑みを浮かべて握手を交わす。
すると白兎は早速と言わんばかりに少し足早に部屋の棚に向かうと、
「というわけで遊びましょう……！　何がいいですか？　何でもありますよ！」
「……そうですね……」
イヴは白兎から選択権を与えられたので、どれを選ぶかと悩みつつ

も、これからのことに思考を回す。
友人関係を築くこととは言うが、友人だとしても主導権はこちらが握りたい。
故にここは、勝ち負けが決まるもので遊び、その強さを見せつけて置きたいところだ。
そうすれば白兎も、〝凄いです……天才ですね、イブさん！〟みたいな感じでこちらを持ち上げれくれるだろうし、主導権を少しこちらに引き戻せる。
想像してみただけでとても気分も良いし、そうしよう。
となればここは確実に勝てるもので行こうと――
「……チェスなんかどうですか？」
「いいですよ」
と、自然に自分が1番得意なゲームを選んでみせる。
こういった頭脳を使うものは、自分の天才的頭脳もそうだが、心や感情を読み取れるこちらが圧倒的に有利なのだ。
幾ら白兎も天才とはいえ、これなら負けないだろうと。本当はトランプなんかでも良かったが、目の見えない相手――幾ら感覚が図抜けている白兎とはいえ、絵柄以外に違いがないものを判別するのは難しいだろうし、止めといた方が無難だ。
心理戦が得意なので、ポーカーなどが良かったが、
……ふ、ふふ、これくらいハンデですから。
そう、ハンデなのだ。
本当は相手が最も不利なものを選んでも良いのだが、それだと可哀想だろう。別に白兎を気遣っているわけではなく、これは王者の余裕というやつだ。
勝負は一方的だとつまらないものだし、友人に少しくらい花を持たせるのも悪くない。
その上で勝ってしまえばいいのだ、と、イヴは不敵に笑みを浮かべると、
「では、先行は差し上げます」
「いいんですか？」

「構いませんよ」
何故なら、
「私――チェスで負けたこと、ありませんから」

――イヴは負けた。
「……チェックメイト、です」
「〜〜〜っ！」
しかもこれで5回目の対戦であり、5回目の敗北だった。
拳を握り、頬を紅く膨らませながら、イヴは敗北の屈辱を感じて声にならない声で唸る。
「……もう一回」
「……いいですけど、5回勝負だったのでは？」
「こ、ここまでは練習です。今からが本番ですから……！」
「……それなら――」
と、泣きの一回を続けて――また負けた。
「お、お強いですね……」
「……ええ、まあ……昔から、周りの人と遊んでましたし……」
白兎が言い辛そうにそう口にすると、イヴは、〝くっ〟と苦悶の声を漏らした。
何たる屈辱か。よもや己の得意分野だと啖呵を切って、負けるとは。恥ずかしすぎる。
主導権を握るばかりか、辱めを受けてしまった。そのことに対するフォローを咄嗟に考えるも、
「イヴさんの方は、指し方にクセがありますね」
「！」
と、白兎の言葉が先であった。
彼女はチェスの駒を元の位置に戻しながら分析するように、
「戦法を変えてはいるみたいですが、最初の1戦で大体のクセは見抜けましたので読み切ってしまえば楽です。指し方が特徴的なのは牧場の閉鎖的な空間で勝利の経験を拾いすぎたからでしょうか。経験

値の差がどうしても浮き彫りになっていますし、フェアではありませんでしたね」
「そ、そうですね……チェスは得意なのですか？」
「いえ、どちらかと言うと将棋の方が――」
「……」
「あっ……で、でも、友人とやるのは初めてなので……楽しいですね！」
「っ……そ、そう……まあ、そうですね……」
悔しさを噛み殺しながら問いかけるが、笑顔でそう言われてしまい、何も言えなくなってしまう。
まあ何か言っても負け惜しみみたいになるのでこれで良いのかも知れないが、
……意外と毒舌ですね……！
何とまあ、こちらの痛いところを突いてくる。今までトップを走ってきた自分にとっては中々、プライドが傷つけられる発言だ。
だが、
「……そ、それより、もう少しで夕食なので楽しみにしておいてください！　うちのご飯は美味しいですから！　それと、お風呂も広いですし、ベッドもふかふかで……あ、イヴさんの服も幾つか持ってこさせますね！　それ一着だと味気ないですし……！」
気を使うならもっと早く使って欲しいと思いつつも、白兎はこちらに必死にアピールを続ける白兎を見る。正直、遠回しな実家自慢を喰らっている様な気もするが、
「……ありがとうございます」
有り難いことには違いないので、素直にお礼を告げておく。
友人という相手から施しを受けるのはどうなのかと疑問を覚えるが、そう言ってられる立場でもないし、相手はこれから上司ともなり得るのだ。
それに、
「あ、あの……もしかして、お節介でしたか……？」
「……いえ、そんなことありませんよ」

「それならいいのですが……では、次は別のことをして遊びましょう。それに、今日は室内ですが、明日は私の試合もありますし、外で遊びましょうね！」
と、こうやって積極的に距離を詰めようとしてくるのは、嫌な気分ではない。
……しょうがないですね……。
故にイブは、この奇妙な友人関係にしばらくは付き合ってみることにした。

――翌日。
白兎の朝は早かった。
いつも早いのだが、今日は一段と早い。
何しろ、
……昨日は興奮し過ぎてしまいました……。
初めての人間のお友達が出来たことで舞い上がってしまい、一晩中興奮してしまい全然眠れなかったのだ。
しかし、己は魔人と人間のハーフ。一日睡眠を取らなかったくらいではどうにもならない。
親からはちゃんと睡眠を取るようにと言われているので、今日はそれを破ってしまった形だが、それもある意味で大人みたいでいいと思う。
それに自分は大人なのだし、体調管理くらいは自分でも余裕だ。
今も身体に不調は見当たらないし、と自分の身体を軽く動かして確認すると、白兎は毎日の日課をこなすために支度をして部屋を出た。
「おはようございます、白兎様」
「おはようございます、メイド長さん」
部屋を出ると、目の前にメイド長さんが立っており、お互いに挨拶を交わし合う。
どんな時でも呼べば瞬時に現れるスーパーメイドであり、白兎もその万能振りを尊敬している相手だ。

なので早朝から部屋の前に現れたことは疑問とはならない。いつものことなのだと、
「ご主人様が中庭でお待ちです」
「わかりました」
と、白兎はメイド長さんの言葉を受けて直ぐに中庭へと向かう。
途中、既に仕事を始めていた幾人かのメイドとすれ違うが、その度に挨拶を交わし、軽く撫でられたりもする。少しスキンシップが多い気がするのが何とも言えないが、半目で軽く抗議の視線を送るだけに留める。
しかしそれはそれで〝可愛い〟と寄ってくるのもいるので疲れる。なので早々に中庭へと辿り着くと、
「――おはよう御座います、父上」
「ああ、おはよう、白兎」
と、既に中庭の中央で待っていた父――レオンハルトに挨拶をする。そして上を見上げ、
「ライゼンさんもおはよう御座います」
「うむ……今日も訓練か」
「はい。なのでよろしくお願いします」
居候をしているドラゴンのライゼンにもきちんと挨拶を行う。
稽古を行う時なんかはお世話になることもあるし、幼い頃から話し相手にもなってくれることもあってそれなりに仲は良い相手だ。
「今日は山に行く」
「はい。……失礼しますね、ライゼンさん」
「うむ」
と、そのレオンハルトの言葉とともに、白兎はライゼンの背に跳び乗るようにして乗り込む。相変わらずライゼンがレオンハルトを軽く睨んだり、ちょっとした言葉のやり取りを行うが、特に嫌がることもなくライゼンも乗せていってくれるのだ。
そうして山に着くと、直ぐに白兎の稽古が始まる。
「では、始めるぞ」
「――お願いします」

稽古前に深く一礼。
自分にとって剣術の師である父には、時折こうやって稽古を見て貰っている。指導してもらうに当たって当然の礼儀をまず行いながら、白兎は己の持つ刀を構えた。
稽古の際、やることは幾つかあるが、その全てに共通することがある。
それは――剣を振ること。剣を構えて行うことだ。
「いつも通り、呼吸から気を集中。それからゆっくりと剣を振れ」
「――はい」
言われた通りに、まずは呼吸を行う。
最初は当然、剣術の基礎からだ。
その確認の為に、まずは呼吸を意識しながら行い、意識を集中させる。
僅かな気の緩みもなくなったところで、ようやく剣を振るが、これは父の、〝ただ闇雲に剣を振っても効率が悪い〟という教えから来ている。
そして、稽古において筋力トレーニングや体力づくりのための走り込みは一切やらないが、これも父の教えの一つだ。
「――すぅ……ふー……」
ゆっくりと剣を振り、その動きを確認しながら、徐々に剣速を速くしていき、素振りを行う。
体作りは基本的に、素振りや実戦のみで行うのだ。
これは、剣を振る以外の無駄な筋力を付けないための訓練方法である。
筋トレや走り込みを行うと、幾ら正しい方法でそれを行ったとしても、剣を振る以外の邪魔な筋肉が付いたりしてしまう。
それらの無駄を完全に排除するため、レオンハルトは娘である白兎に、剣を振ることと実戦以外の基礎トレーニングを禁じていた。
剣を振り、また戦いのために動くことで、それらに適した剣士としての無駄のない肉体になっていくのだ。
力だけを闇雲につけても剣士として強くなるわけではない。身体

を鍛えようとしているわけではなく、剣士として強くなろうと言うのなら、剣を振る以外のことをするな、とレオンハルトは白兎に教えていた。
剣を通じて、強さを鍛える。力も速度も技も心も、その全ては剣から通じるものであり、剣に伝わっていなくてはならない。
それが世界最強の剣士であり、白兎が尊敬する父の、剣の理だ。
レオンハルト自身は、〝俺と同じ剣である必要はない。自分なりの剣を見つけろ〟と言ってくれるが、白兎としては父の剣の道を追いたい。
父の血を受け継ぐ自分なら、それは可能であるはずだ。
幸いにも才能はあると言ってくれているし、未だ修行中の身であるが、それなりに〝出来る〟自信もある。一度剣の道を選んだ以上は、父の名に恥じないように。そして父や周囲の期待に応えたいと思う。
故に――、
「――！」
と、不意に飛んできた攻撃を、白兎は刀で振り落とす。
それは父が放った木刀での斬撃だ。
「続けろ」
「はい――」
稽古の最中、時折父からこうやって不意の攻撃が飛んでくる。――これも、こちらの集中力や反応速度を鍛えるための訓練だ。
かなり手加減された攻撃ではあるが、魔人である父の攻撃が重く鋭い。そこらで拾ってきた木の棒を、軽く剣の形に整えた即席の木刀であっても、世界最強の剣技を以てすれば、鉄を斬り裂くことも出来る。
「っ……！」
「……」
変わらずいつもの稽古を繰り返す中でも、不意の斬撃は飛んでくるため、気を抜くことは出来ない。そして気を張り続けていると、その打ち込みの強さも相まって、段々と体力を削られていく。
最後の軽い掛かり稽古に差し掛かる頃には、かなり体力が削られているが、だからといってそこで手を休めることはない。体力と気力が

続く限り、休憩は一切取らないのだ。
「……足捌きが少し乱れたぞ」
「はいっ……！」
普段は優しい父だが剣術については拘り、当然、稽古の時も厳しい。
声を荒げるようなことはしないが、駄目なところが直ぐに指摘の声を飛ばすし、その剣気に当てられ、鋭い眼差しでじっと見られながらの訓練は重圧を感じて足が重くなる。
それでも稽古は1、2時間もすれば終わるが、休み無く動き続けるのは、魔人と人間のハーフで身体が人よりも丈夫な白兎であっても、それなりに疲労が溜まる。
しかも遥か格上の父相手であれば尚更だ。並の相手であれば24時間戦い続けることも不可能ではないと自負しているが、父相手だと1時間も経てば息が切れてしまうので。
「――今日はこの辺にしておくか」
「はぁ……はぁ……っ、ありがとう、御座いました……！」
と、父がこちらの様子を見て稽古の終了を告げると、息を乱しながらもきちんと一礼する。
そこでようやく、身体を休めることが出来るのだが、
「ほら、水だ」
「ありがとうございます……」
父から手渡された水筒で水分を補給する。
そしてそのタイミングで、父はこちらを見据えて言った。
「今日は反応が僅かに悪かったが、何かあったか？」
と、言うその顔は、何かあったんだろう？　と確信するような顔だ。
その日の状態なんかを正確に気づいてくる父に、隠し事は通用しないので、白兎は恐る恐ると切り出した。
「……実は、その……昨日は興奮してしまい、寝れずに……」
「……興奮？」
はい、とその理由を白兎は恥ずかしく思いながらも説明した。
「は、初めての友達が出来て……でも、なんだか距離があるような気もして……その、私一人が浮かれてしまっていたようで恥ずかしいんで

す……」
　内心を吐露すると、父は一瞬動きを止めたが、直ぐに再起動して頷いた。
「……なるほどな。それが気になって集中出来なかったか」
「……はい、ごめんなさい、父上」
　友人の事を考えて稽古に身が入らないというのは、はっきり言って良くないことだ。
　こちらはお願いして稽古をしてもらっているのだから、集中できないなら止めてしまえと言われてもおかしくない。
　だからバツが悪くなり、白兎は謝る。しかし、
「……いや、謝らなくていい。友達を想うことは大切なことだ」
「……ですが、稽古に集中出来ていないのは駄目です」
　友人を言い訳にしたくはない。
　だが父はこう言った。
「確かにそうかも知れない。――だが、友人を蔑ろにしてまで剣に打ち込むよりは、稽古に集中出来ないくらいに友人を想っていることの方が……親としては嬉しい」
「……！」
　と、父は微笑を浮かべ、こちらの頭を撫でながら言った。
　剣の師としてではなく、親として、
「稽古はいつでも好きな時に頑張ればいいが、人間関係はそうはいかない。だからそちらを優先しても構わない。……まあ、友達のことについて、俺がしてやれることはそう多くはないが……何か相談や手助けしてほしいならいつでも言っていいからな」
「父上……」
「白兎のやりたいことをやってみろ。俺が出来ることなら何でもやってやるし、全力で応援してやる」
　頼もしい父の言葉と、大きな手を感じて白兎は父を見上げる。
　その温かい言葉に、もやもやが綺麗に消えていくような感覚を覚えて、白兎は尊敬する父の愛情を深く感じ取る。
「……ありがとうございます、父上……」

「礼はいい。家族として、親として当然のことだ。……それとな――」
感謝の言葉を告げると、膝を突いて、こちらに目線を合わせてくる。
何でしょう、と首を傾げていると、
「……昔みたいに、パパって呼んでくれてもいいんだぞ？」
「……」
「あ、出来れば、〝パパ、大好き〟って言ってくれるとお父さん、凄く喜ぶし、おまけにちゅーしてくれたらもっと喜ぶんだが……どうだ？」
と、迫真の表情で白兎を見据えて、父は問うてくる。
思わず白兎が半目になり、感動が半減した。
……ガッカリです。
途中までは凄く温かい気持ちになって幸せだったのに、最後の最後で締まらないことを言われてしまい、何とも微妙な気分になる。
それに、そういうことを言われてしまったら、尚更やり辛いのだ。
唯でさえ恥ずかしいのだから。なので、
「……パパ、嫌いです」
「――ぐはぁあああっ!?」
試しにそう口にしてみると、レオンハルトはその場から仰け反り、胸を抑えて倒れた。そして息も絶え絶えになり、
「ぐっ……う、ぐ……はぁ……はぁ……や、やめてくれ、白兎……その言葉は、俺に効く……！」
「……」
「うがあああっ!?　む、無言のジト目も可愛いが、反応がないのは、つ、辛い……！　ここがあの世か……ッ！」
……冗談だったのに。
白兎の冗談でこのダメージは、本気だったとしたら本当に死ぬのではないかと思ってしまうほどの反応だった。
最強の魔人としての実力や肉体、その防御、無敵結界すらも貫通して致命傷を負わせる世界最強の攻撃。それは、娘からの〝嫌い〟発言であったのだ。
魔人レオンハルトを敗北させたいなら、正面衝突で挑むよりも娘を

懐柔してそう言わせた方が手っ取り早いかもしれないかもしれない。少なくとも弱体化はするだろう。
「……はぁ、全く……」
と、しかし白兎は倒れ込んだレオンハルトの耳元に顔を近づけると、
「――ぱ、パパ、大好き……」
「――ッ!!!!」
今度は、反対の言葉を照れながら告げた。
瞬間、レオンハルトはガバっと即座に立ち上がり、
「か、可愛いいいいいい……ッ!! 可愛いぞ、白兎ォ――!!」
「あっ、ちょっと――」
復活し、白兎を胸に抱きしめてスリスリと頬ずりを始めた。
「天使過ぎる……いや、天使と比べては失礼だな……! もはや可愛さの化身だなぁ、おい!」
「っ、く、くすぐったいので止めて下さい……」
と、言いながら顔を赤くして照れる白兎だが、満更でもないのか抵抗は薄い。
故にレオンハルトも止まることはなく、一人娘の可愛さにテンションをバク上げしていた。
「この後はパパと一緒に朝風呂だからな? 昨日約束したし、ちゃんと洗ってやるから白兎もパパの背中洗ってくれるよな!?」
「……わ、分かってますよ、もう……」
「恥ずかしがりやなところも可愛いぞー!」
世界最強の攻撃が嫌い発言なら、世界最強の復活術は〝好き〟発言だった。
普段から威厳たっぷりで、鋭い目つきもあって威圧的なレオンハルトが、娘の前ではその全てを霧散させて、ただの人の親となる。
それを見て白兎は息を吐き、
……仕方のないパパです……。
レオンハルトの暑苦しい抱擁と可愛がりを受けながら、自分もちょっぴりとだけ、父親の身体をぎゅっと掴んだ。

使徒ラインコック

魔軍参謀である魔人レオンハルトは遠征を行っていた。
とはいえ、以前の様な〝戦争〟のための遠征ではない。
平和な時代となった今の時代において、レオンハルトの遠征といえば、各地にある人間牧場の視察のことだ。
レオンハルトは自身が直営で管理する牧場の他に、大陸各地に、担当する魔人がいないから、という理由で管理している人間牧場が幾つか存在する。
それらは大陸西部や、ＪＡＰＡＮなどの遠方にすら存在するため、レオンハルトにとっては自身の拠点から遠く離れるために中々に面倒な仕事だ。
しかし、定期的に見に行かないと魔物達が暴走する可能性もあるし、魔人がいるというポーズも見せる必要があるため、視察を疎かにする訳にはいかない。
だがそのためだけに遠方までいってとんぼ返り、というのも効率が悪いため、距離が近い場所についてはまとめて視察したり、別の仕事も一緒に終わらせる。
その一つが、各地に散らばっている魔人の様子を見ることだ。
実際、そんなことを魔王であるジルから命じられてるわけではないが、魔人筆頭であり魔軍参謀という役職に就いている以上は、配下の魔人達がどうしているかなどの管理だって必要になる。
そしてこれが中々に気が重いというか面倒なのだ。
何しろ魔人達は皆、個性的で我が強く、各地で好き勝手やっている。
こちらに好意的で、かつ紳士的な者であれば軽く雑談するなどして和やかに終わるが、それ以外の奴らはめちゃくちゃなので気が滅入るのだ。
喧嘩を売ってくる奴、露骨に嫌がり、さっさと帰ってくれという雰囲気を醸し出す奴、逆にかなり気合いの入った接待を行ってくる奴や、話をする横で人間を虐めたり、キチったりしてる奴らや、そもそも一言も喋らない奴など、色々と面倒なのが多い。

そんな連中の中でも、面倒とまではいかないが、それなりに気を使う必要のある相手が――

「ノスを殺れ」

「……」

魔人四天王の一角であり、こちらともそれなりに親交のある魔人――カミーラだ。

そのカミーラの居城は、大陸西部にあり、そこにあるカミーラが管理する人間牧場とともに視察を済ませ、何となく城に招かれた。

綺羅びやかな宝石、調度品が並び、下級使徒だと言う多くの美少年達が頭を下げるのを横目に、毎度の如く、カミーラに会いに行く際には相性の良いキャロルを連れて、奥の部屋に通されると、席に着いて開口一番、カミーラは単刀直入にそんな物騒なことを口にする。

思わず、レオンハルトは渋い表情を浮かべて、

「……急にどうした？」

問い返す。カミーラ流の軽い冗談であってくれ、と。

するとカミーラは、再び真顔のままで、

「……ノスを殺せ」

「……」

同じ事を口にする。どうやら冗談じゃないようだ。

レオンハルトは更に渋い顔になりながらも一度額を押さえ、息を入れる。

カミーラと会話する際には、下手に出過ぎない程度に下手に出るのが基本だ。プライドの高いカミーラ相手に、魔人筆頭として上から威圧的に接すると、必ず反発が来るであろうことは目に見えているし、言うことを聞いたとしても遺恨が残るだろう。

これでも１５００年以上の付き合いなので、どこが地雷なのかは分かっている。故にその通りに接して説明してもらおうと、口を開いた。

「……物騒な話だが……何故殺せと？」

「――この私を、侮辱したからだ……！」

つまり――〝ムカつくから〟であるらしい。

レオンハルトは一応は頷き、続きを問いかける。
「……どうして俺に？」
「……以前、ザビエルを殺っただろう」
「ああ……それか……」
思わず頭を抱えたくなる。
……そういえばカミーラは未だに俺が殺ったと思っているんだったな……。
確かに以前、カミーラの城に来て、お互いにムカつく相手であるザビエルを俺が殺すと暗に示唆するようなやり取りをした。
だが実際には色々あって、ザビエルはあの藤原石丸にやられたわけだが、カミーラはあの時のように、ムカつくノスも殺せと言っているらしい。
……まあ、動機は分かるがな……。
というのも、ノスは元ドラゴンであり、カミーラの触れられたくない過去の事を知っているだけではなく、それを持ち出して皮肉を言うことがある。
生ける王冠であったことは禁忌にも近い話で、古い魔人であればそれなりに有名な話ではあるが、それを口に出す者はいなかった。そんなことを言えば、魔人四天王という地位につく上級魔人の武威を受け、殺されてしまうだろうからだ。
だがノスは強い。本人も自覚しているだろうが、おそらくはカミーラよりも強い。
故にこそそれなりに親交があり、ノスよりも上位である魔人筆頭に、殺害を依頼しているのだろう。
ぶっちゃけ、簡単に言えば〝告げ口〟みたいなものだ。物騒なので可愛らしく表現すると、〝あの子に虐められたの！　助けて、お兄ちゃん！〟――みたいな感じだ。カミーラの方が年上なのだが。
とはいえそれを指摘するのは憚られるし、幾ら何でも殺すわけにはいかない。ちょっとくらい痛い目を見せるくらいなら構わないが、ノスの場合、戦って痛めつけたとしても喜ぶだけなのでやっても意味がない。少し語弊がありそうな言い方だが間違ってない。

なのでそれを諭す必要がある。気が重いが、殺るわけにはいかないので言うしか無い。
「……カミーラ。それはだな――」
「……報酬も用意してある」
と、しかしこちらが渋るのを見て取ったのか、カミーラがそんなことを言う。
報酬？　と疑問に目を細めると、カミーラはやはりと言うべきか、
「お前の好きなものだ」
「……ああ、なるほどな……」
もうそれだけで何が贈られるか分かってしまったので、溜息が漏れそうになる。
それを思い、軽く息を吐くに留めながら、レオンハルトは口にした。渋い表情で、
「……悪いがカミーラ。それは諦めてくれ。さすがにジル様の側近でもあるし、殺るのは憚られる。――お前の好きなものやるから」
「……レオンハルト……お前、私には好きなものを貢げば言うことを聞く……などと思っていないか？」
「お前もな」
いや本当に。巨乳美少女を送れば言うことを聞くと思ってるであろう、カミーラには言われたくない。
暗にそう言ってやると、カミーラは一度、目を逸らした。都合が悪くなったのだろう、そのままで、
「……１０人」
「数の問題じゃないんだがな……」
さすがに浅くツッコませてもらう。だがカミーラは再びこちらを向いて、
「……何故だ」
「何故と言われてもな……じゃあ俺が、１０人やると言ったらどうだ？」
「……悪くはない」
「……お前な……」

……こいつ、これだけ美少年囲っておいてまだ欲しがるのか……。
怖くて聞けないが、ひょっとしてカミーラもアレな生活を送ってたりするのだろうか、と思う。暇そうだし、やることがないとそういうことしがちだよな、と思っていると、
「――か、カミーラ様！　準備していた人間はどうしますか!?」
と、割って入るような声を上げた者がいた。
その場にいる者達が視線をそちらに向ける。
とはいえレオンハルトは先程から気になっていた人物でもある。
カミーラの横。普段は七星が控えている場所に、今日は七星だけでなくもう一人が存在した。
フリルが沢山付いた白いドレス風の衣装を着た、水色の長い髪を後ろで一括りにした可愛らしい顔つきの者。
美少女の様な容姿をしたその少年の名を、傍らにいる七星が吐息付きで呼び止める。
「――ラインコック。今はカミーラ様とレオンハルト様が話している最中ですよ」
「で、でも……」
「弁えなさい」
「うっ……」
カミーラの使徒である七星に注意され、表情に影を落としたのは、ラインコックと呼ばれた少女の様な少年。
そう、少年だ。どう見ても美少女にしか見えないが、その少年が相変わらず苦労してそうな七星に注意を受けている。
だからという訳でもないが、良い機会だと、レオンハルトは言葉を発した。
「……気になってはいたが、そっちの奴は？」
「……私の使徒だ」
そうカミーラがあっさりと告げると、七星が再び少年にその細い目を向けた。
「ほら、挨拶しなさい」
「あ、はい……！」

と、少年は一歩前に出てこちらに一礼した。
「カミーラ様の使徒、ラインコックと言います」
「カミーラ様の使徒ですのね！　ということは――七星の後輩ですの!?」
「えっ、きゅ、急に何なのあんた……？」
いきなり声を上げたキャロルに、ラインコックがビクッと身体を跳ねさせて訝しむ。七星が少し間を置いて、
「……キャロルをまともに相手すると疲れますよ」
「あら、失礼ですわね。完璧使徒のわたくしは、七星の後輩だからと言って敵扱いは致しませんわ！　倒すべきライバルは七星だけですの！」
「出来れば今日はやめて欲しいですが……言うように、未熟な後輩の面倒を見ないといけませんのでね……」
「後輩の面倒？　――なら仕方がないですわね。今日は諦めますわ」
「えっ」
「むぅ……未熟じゃないし……七星の意地悪……」
七星が、まさかキャロルが諦めると思っていなかった、と言わんばかりの驚愕で呆然としている横で、ラインコックが頬を膨らませて不貞腐れている。
見れば見るほど美少女にしか見えないが、一応は男の筈だと、レオンハルトは確認の為にも問いかける。
「女に見えるが……男だな？」
「えっ、女性じゃありませんの？」
「……当然だ」
キャロルは女性だと思っていたのか、こちらの言葉を聞いて首を傾げるが、カミーラからの同意を受けて感心するようにラインコックを見る。
するとまたもやラインコックは不満そうに、
「……なんで皆、僕を女と見間違えるのさ……僕は男なのに……」
……じゃあ、女の格好をするな。
と、レオンハルトは内心で、女性が着るような服を着ているライン

コックにツッコミを入れたが、何となく、カミーラの趣味だろうなとは感じているので心の中に留める。
魔人化や使徒化した際の姿は主や本人の精神が影響するので、ラインコック自身か、カミーラのどちらかが要因であるはずなのだ。
だからまあ、ラインコックの方が自覚している可能性もありそうだと思っていると、
「……」
「あっ、カミーラ様……」
カミーラの手が、不貞腐れるラインコックを撫でる。
するとラインコックは顔を綻ばせて直ぐに機嫌を元に戻した。
「はぁ～……カミーラ様……！」
その姿を見て、使徒というより、愛玩動物に近い扱いをされている気もしたが、レオンハルトは気にしないことにする。
「……とにかく、ノスについては保留だ。態度については俺からも注意しておくし、度が過ぎた場合は少し痛い目を見せておく。それで我慢してくれ」
「……ふん、あのような奴、さっさと殺ってしまえばいいものを……」
「そう言うな。――さて、今日のところはこれくらいか」
「……随分と忙しそうだな」
「お陰様でな。何か用があればまた城に遊びに来てくれ。――出来れば、事前に通達してからな」
「……考えておく」
とりあえず、カミーラの新たな使徒であるラインコックを確認出来ただけでも収穫は有ったと見て、レオンハルトはその提案を断り、カミーラの城を後にしようとする。
だが、
「……むぅー……」
「……？」
何故か、そのカミーラの新しい使徒であるラインコックが、こちらを見て不満そうな気配を感じたが、レオンハルトはそれを気にしないことにした。

――魔人レオンハルトとその使徒であるキャロルが去った後のカミーラの城。
部屋にカミーラが一度戻り、二人となったその場所で、ラインコックは声を上げた。
「七星！　あれはなんなの!?」
「……どうかしたのですか、ラインコック。私は今、キャロル対策に貴方が使えるのではないかと考えるので忙しいのですが……暇なら牧場で人間の虐待に励んできなさい」
「あの魔人のこと！」
と、ラインコックが口にすると、七星はそこでようやく考え込むように下を向いていた顔を上げてラインコックを見る。
「レオンハルト様の事ですか。ラインコック、我らにとっての主はカミーラ様ですが、カミーラ様よりも上位の立場にいる方を、あの魔人などと言ってはカミーラ様の立場が悪くなる可能性もあります。慎みなさい」
「っ……だって、カミーラ様と……そのレオンハルト……様。妙に仲が良いような気がして……」
ラインコックはその不満を口にする。
自らの主であり、慕っているカミーラと、あのレオンハルトという魔人の仲が良く見えて、ラインコックは嫌な気持ちになっていた。
簡単に言えば――〝嫉妬〟の感情を抱いたのだ。
故に思わず敵意を抱いてしまったのだが、そんなラインコックの心情を、気づいてか気づかずか、七星は頷いて答えた。
「ああ、そうですね。仲は良いかと思います」
「や、やっぱりっ！」
ガーン、と擬音が聞こえるように口を開いて涙目になるラインコックに七星は淡々と説明した。
「まあカミーラ様とレオンハルト様は、レオンハルト様が魔人になった折――約１５００年前からの付き合いです。当時の関係からか、レ

オンハルト様が魔人筆頭になってからもレオンハルト様はカミーラ様相手に気を使っていますし、カミーラ様も、悪い気はしないでしょうね」
「う、うぅ～……じゃあ、もしかして、そういう関係だったり……？」
ラインコックに問われ、七星は一瞬考えたが、
「……いえ、おそらくそれはないでしょう」
「……本当に？」
ラインコックは疑うようにもう一度問い返した。すると七星は頷き、
「多分」
「多分なのっ!?」
「ええ、まあ……そういったことはないですが……カミーラ様の好みに、レオンハルト様は当て嵌まってないとは言えないですし……レオンハルト様の方も、胸の大きい美女が好みであるらしいので、そういうこともあり得なくはないかと思いますが……」
「そ、そんな……！」
ラインコックは衝撃を受ける。
まさかあの魔人、格好いい感じだが威圧感があってなんか怖いと思っていたが、そんな変態だったなんて、と。
しかもカミーラ様を狙ってるなんて――断固として阻止しなければ、と。
とはいえ、使徒として主がそう行動したのなら止めることは出来ない。
魔人レオンハルトは男としてかなりスペックが高く、よくよく考えてみると惚れてもおかしくない相手だ。
付き合いの長さも怪しいし、カミーラが好む容姿の整った相手で、しかも上位の立場でありながら下手に出てくれて、こちらを立ててくれる相手。
おまけに貢ぎ物も欠かさず送っていると聞けば、もはやいっそうなってもおかしくないように感じてしまう。
なのでその前に、それを抑止しなければならないのだと、

「ど、どうにかして阻止しないと……！　カミーラ様があの魔人の毒牙にかかってしまう……！」
「そうと決まったわけではないのですが……あまり出過ぎた真似をしてはいけませんよ」
「分かってるってば！　くぅ……あの魔人、ちょっと格好いいからってカミーラ様を狙うなんて……ムカつく……！」
「……はぁ……分かっていないようですね……」
　溜息を吐いて、新たな苦労の予感を感じた七星の隣で、ラインコックは魔人レオンハルトへの嫉妬を確かなものとし、如何にして主と仲良くならないようにするかを考えながら、歯噛みしていた。

まともな人間

ある日の紅魔城。
昼下がりの中庭には小さな影が幾つか集まっていた。
「――というわけでイヴさんの魔法のテストをします！」
「！」
と、肩に藤吉郎を乗せた状態で得意気な顔で告げたのは、魔人レオンハルトの娘である白兎。
そしてそれを受けたのはその友人である人間の少女、イヴだ。
「何がというわけなのかは分かりませんが……」
「はい。言ってみたかっただけですので当然ですね。説明しましょう」
相変わらずちょっと変なところがある子だなぁ、と半目を向けて苦笑するイヴは、しかし以前とは違って支給された可愛らしい服を着ていることから微妙に気分が良い状態だった。
なので特に不満でもなんでもなくその理由を耳にする。それは、
「イヴさんはこの間、魔法が得意と言っていましたし、実際どれくらい適正があるのかを調べてみようかと思いまして。その強さによっては、色々と出来ることも増えますし、イヴさんにとっても良いことかと」
「まあ……そうですね。牧場だと、魔法は最低限のものしか教えませんし、テストもそれに合わせたものになりますから、私のちゃんとした適正が測れたとは言い難いかもしれませんね」
と言って、イヴは頷く。
実際、牧場だと強すぎる魔法は脱走を誘発したり、危険が増えることから初級程度の魔法しか教えていない。
しかしそれでも、適性がないものはそれすらも使えないため、見分けるのは楽だそうだが、それでも選別出来るのは魔法を使えるか使えないかと、使えて手際が良いか、くらいだ。
なので魔法についてちゃんと適性が測れているかは疑問だ。イヴは己を、それなりの才能があると自負しているが、それは牧場の警備

で見かけた魔素漢の心を読んで、ちょっとした中位の魔法を知って、おそらくは使えるだろうと判断したことからだ。
牧場内で使ったらバレるので使っていないが、今もその認識は変わらない。詠唱も憶えているし、理論もバッチリのはずだ。
なので今度こそ、イヴは己の得意な部分を見せてやろうと息巻く。心なしか胸を反らして。しかしその際に周囲から、
「あっ、白兎様とイヴちゃんだ」
「相変わらず可愛い～。胸反らして自慢気にしてるし、子供っぽくて可愛いよねっ」
「そうですね、胸の方も可愛らしく――ゲフンゲフン！　……失礼。素晴らしく上品なバストだと……」
「あははー☆　ベアトちゃん、それ絶対聞こえてるし、リムちゃん的にもムカつくからＮＧ」
と、遠巻きに作業をしていたメイド達――１人を除いてどいつもこいつも巨乳がそんなことを口にしていたので、
「……ふふふ、とにかく、魔法の適性が高かったらいいですね。そうすれば、貧乳を馬鹿にする巨乳に天罰を与える魔法を開発しますのに……！」
「……私も応援します。是非頑張ってその魔法を完成させて下さい……！」
「はい、ありがとうございます……！」
白兎と、ガシッと固い握手を交わし合う。出会ってから最高に友情を感じた瞬間だった。
「おお、白兎様とイヴ様が友情の固い握手を……！　あれは貧乳同士の誓いですね。間違いない」
「いつまでも何見てやがるんですか!?　ぶっ殺しますよ、ベアトッ！」
「おや嫉妬が……ということで逃げさせて頂きます」
と、ベアトと呼ばれたメイドは中庭から二階の窓に跳躍して逃げていった。他のメイドもそそくさと離れて我関せずと言った様子を貫く。
それを苦々しく思いつつも、イヴは白兎の呟く声を聞いた。

「ぐっ……今に見ていることです……母上は胸が非常に大きいですし、その遺伝を考えると私も――」
「!?　裏切る腹積もりですか白兎さん！」
「いえ、そういうわけでは。ただ、もし成長したならそれは仕方のないことです。何しろ成長は本人の意志関係ない不可避なもの。そう、私が成長したとしてもそれは不可抗力なのですよ、ふふん」
「くっ……ずるいです……！」
何という裏切りだろうか。これほどまでに友情が儚いとは。
……いや、でも……この様子じゃ……。
しかしよく考えてみると、こちらより大分年上なのに、未だにこの容姿ということは、成長は期待出来ないのでは？　という疑惑が残る。
そんな思いが生まれた瞬間、憎しみは全て消え、代わりに慈愛、憐れむ感情が湧いてくる。
「いや……そうですね。白兎さんが成長するなら、それは喜ばしいことです。応援してますよ」
「……？　あ、ありがとうございます。そう言われるとなんだかバツが悪いですね……イヴさんもきっと成長しますよ！」
「はい、ありがとうございますね」
ニコニコと笑みを浮かべて感謝を述べる。
成長が絶望的な相手からの言葉だと思うと泣けてくるくらいだ。
それに比べて、まだ可能性が残っている自分などは、希望に満ち溢れているように感じる。夢は捨てずにいよう。
「……話が脱線しましたが、魔法の適性を調べるために、特別講師をお呼びしました」
「講師ですか？」
「はい。私の方はあまり魔法は得意ではないので、より魔法に詳しい高位の魔法使いを呼んでおきました」
へぇ、と期待の声を上げる。
高位の魔法使いに見てもらえるというのは、一応は魔法を得意だと自負する己としても興味がある。

「では藤吉郎。呼んできてください」
「！」
白兎に指示を受けた藤吉郎が白兎の肩から降りて、中庭からとある部屋の窓に入っていく。
おそらくはそこで待機しているのだろう。一体どのような人物なのだろうと頭の中で想像を張り巡らせる中、イヴは中庭から出入り出来る扉から出てきた二者を見て、目を見開いた。
特に、目に飛び込んでくるというか、目が行くのは先頭を行く一人だ。
緑色のボサボサ気味の髪に、魔女っぽい帽子と白衣。そして今の時代では見ない微妙に露出多めの衣装を着た、明らかに魔法使いの風貌をした女性がそこにいる。
ゆっくりと近づいてきたその相手を見て、イヴは段々と首を下に向けた。
「――あーい、ガウガウさんだよー……ふわぁ……」
「……」
と、何故なら、大きな欠伸をして挨拶をしてくる相手――ガウガウと名乗った少女の身長が、白兎並に小さい上に、なんだか威厳のない、だらしない感じの相手だったからだ。
思わず言葉を失っていると、もう一人、後ろからやってきた相手が挨拶をしてきた。
「……えーと、あたしはハンティ。一応前にも会ったよね」
「あ……はい。ハンティ様ですね、存じております」
白衣と眼鏡を装備したのは、この間執務室でも出会ったレオンハルトの使徒、ハンティだ。
それに牧場の教育ではそれなりに名前が上がる人物なので、勿論知っているし、かなり目上の立場なので畏まらないといけない。しかし、
「まあ、他はともかく、あたしには楽にしていいからさ。それなりに気を抜く感じで」
「……分かりました。よろしくおねがいしますね、ハンティ様」

なので深く一礼しておいたが、ハンティの方は評判の割に気さくな人の様でこちらをリラックスさせようと笑みを浮かべて気遣ってくれている様子が窺える。
前見た時も思ったが――最強の使徒で、強い相手と見れば問答無用で殴りに行く戦闘狂で、男なんてどうでもいいと言い張り、女子力を逆方向に突っ走ってる直情的な人物だと習ったので、とんでもないゴリラなんじゃないかと思っていたが、格好良くてサバサバした感じの美人さんだ。
やはり評判と言えども当てにならないということだろう。男くらい幾らでも作れそうな感じだし、身長が高いのは素直に羨ましい。
……胸の部分は羨ましくないどころか、自分達よりも下ですね……。
しかし、それも含めて好印象だ。やはり下がいるというのは安心する。
もう一人も、何となくアレな雰囲気を漂わせているが、一応は聞いておこうと、イヴはにこやかな表情で視線を下にも向けた。
「それで、こちらの方は……下級使徒か何かで？」
「ああ、ガウガウはまあ……居候の研究者かな？　一応人間」
「一応か。まあ、私は天才美少女だからな。人間の範疇に入らないのかもしれないな……くくく、自分の才能が怖い……」
「というわけで家の魔法研究者二人、ハンティさんとガウガウさんです」
「……そ、そうですか」
白兎が二人を差すように紹介するが、ハンティはともかく、ガウガウの方は残念な雰囲気を隠しきれていない。
というかこの人も子供に見えるのだが、また実は凄い年を食ってる魔人の娘だったりするのではないか、と疑念を抱いてしまう。
「――ん？　どうした？　私の天才美少女っぷりに見惚れたのか？　何じっと見つめている」
「いえ……あの……失礼ですが、人間で、魔法研究者なんですよね？」
「む、疑ってるのか？　凡人そうな雰囲気の癖に」

「ぼ、凡じっ――……いえ、まあ、随分とお若い様に見えたので……」
凡人と言われてちょっぴりムカついてしまう。こんな胡散臭い人よりは才能ありますよ、と、内心で相手への憤りを愚痴の様なものに変換していると、
「ふっ……ま、しょうがないな。凡人では私の才能を見抜くことは出来ないだろうし」
「……ふふふふ、そうですね。ちょっと分かりませんので、出来ればその才能とやらを見せて頂きたいと思いますが」
今度こそムカッときたので、イヴは笑みを浮かべながらも皮肉を言うようにガウガウに突っかかっていく。
そこまで言うなら見せてみろ、と。どうせ大したことないのだろうと予想し、遠回しに〝大したことない〟と貶してやろうかと。
それか、もしかしてこの時点で怒るだろうかとも思う。それならば適当に流してやるだけだから問題ないと、イヴは余裕を見せて涼しい顔で反応を待つ。
だが、
「――良くぞ聞いてくれたな!!」
「えっ？」
と、ガウガウは失礼な事を言ったこちらに対して、不敵な笑みを浮かべて腕を組むと高らかに謳い上げた。
「私は天才美少女魔法研究者、ガウガウ・ケスチナ！　歴史に残る付与師であり、今後伝説になる偉人だ！」
「あー……始まった」
「付与師……確か、魔法具を作る人の事を、そう呼ぶと……」
「そうですね、魔法で作られた凄い能力を持つ道具の事を総称してそう言います。主に術式を組み込んで、魔力を注ぎ込んで作るそうですよ」
頭を抱えるハンティと、説明を捕捉する白兎に挟まれながら知識を引っ張り出した。
知識の上では知っているだけとも言えるが、一応はその辺りも勉強しているため、すっと出てきた。

その答え合わせとして白兎が口にしてくれるが、それを聞いて、ですよね、と己の記憶していた知識に間違いがないことを確認すると、更に機嫌良さそうに声を跳ね上げさせたガウガウの声を聞いた。
「くくく、その付与師として最高峰に位置するのがこの私だ」
「……そうなのですか？」
「まあ、一応……」
「ガウガウさんは凄い人ですよ」
ハンティは嫌そうに、白兎は真顔でそれを認めているので、その様子を見る限り本当なのかもしれないとようやく思い始める。
なのでどうしようかと対応に迷ったところで、しかしガウガウはこちらの対応を気にせずに続けた。
「今日はせっかくなので、私の天才的な発明品を見せてやろう！」
「あー、やっぱり脱線した……」
「細かいことを気にするなハンティ！　――よし、ではまずはこれだ！」
「……？　なんですか、これ」
「ただの透明な服にしか見えませんが……」
と、皆が首を傾げる中、ガウガウが取り出したのはぴっちりとした透明の服だ。
それは何なのかと視線でも問うと、ガウガウは口端を吊り上げて説明した。
「これは、着て魔力を注ぐだけで透明になれる服、名付けて――〝馬鹿にも見えない服〟だ！」
「え、透明になれるのですか!?」
「凄いです……！」
「ふふん、そうだろうそうだろう！　もっと褒めていいぞ、白兎！」
イヴが純粋に驚く横で、白兎は目をキラキラとさせて興奮している。しかし、
「いや、白兎には見破られると思うけどね……」
「……え……あっ」
ハンティが良い辛そうに指摘すると、白兎も気づいた様に短い声を

上げる。イブも内心で、
……まあ、元から目が見えなくて、他の感覚で相手の位置や空間を把握してる白兎さんには、透明化は意味ないかもですね。
とはいえ、透明化だけでも充分凄いと思う。ワクワクしていた白兎は気の毒だが。少し慰めてやるべきかと思っていると、ガウガウが少し狼狽えて、
「で、でもだな、透明になれるのは本当で――」
「しかもそれ、一度透明になると２４時間は透明になりっぱなしで途中で解除出来ないんだよね。服を脱ごうと思っても脱げないしで実験した時は大変だったなぁ……おまけに、解除された時には――」
「仕方ないだろぉ!?　凄い効果には代償は付き物なんだよっ！　だからこれは失敗作じゃなくてちょっと面倒なだけ！」
染み染みと遠い目で口にしたハンティに、ガウガウが全力で言い訳をする。
その言い方だと失敗作にも聞こえなくはないが、
「確かに、充分凄いですけどね……」
「！　お前は分かっているじゃないか！　くく、ハンティよりもよっぽど物分りがいいぞ！」
「はぁ、ありがとうございます……？」
率直に凄いものは凄いと言っただけだが物凄く褒められる。一応お礼を返したが、そこまで喜ばれるのは不可解だ。褒められるのが滅茶苦茶好きなのか、褒められたことがないのか。そんな疑問を抱いているとハンティが、ガウガウの発言に対し呆れ顔で、
「あんまり褒めるとサボってぐーたらし始めるからあんまり褒めないでね」
「何故だ!?」
「今言ったでしょーが……」
……なるほど。何となく、二人の関係性が見えてきましたね……
要するにガウガウがトラブルメーカーというか、ちょっと変わってるというかイカれている方で、ハンティはそれを止める方で、苦労人であるということだ。

自分と白兎で言うと、常識人の自分がハンティで、変人の白兎がガウガウ。そんな感じだろう。
そうなってくるとハンティに親近感が湧いてくるから不思議だ。親しみやすいし、この人と仲良くするのもありかもしれない。
「はぁ……とりあえず、本題に戻ろうか。イヴだよね。魔法は何が得意？」
「あ、はい。一応は火の魔法が得意ですね」
「オッケー。それじゃあ、これに使える魔法の中で一番強い魔法撃ってみて」
「はい。……はい？」
自然な流れだったので一度は頷く。やっぱり、常識人相手だと話が早いなぁ、と。
しかし、よく見るとおかしかったので問い返すように首を傾げるも、ハンティも疑問を抱くように、
「？　どうしたの？　調子悪い？」
「い、いえ……その……調子は良いんですが……ま、魔法撃つんですか？」
「そりゃあ見てみないと分からないしね。……あ、なるほど。耐久性の心配してる？　大丈夫だよ、これ丈夫だから。こんな感じで――白色破壊光線！」
と、ハンティが軽い調子で最上級魔法を発動させる。
白の光線がそれにぶち当たり、思わずイヴは〝ひっ!?〟と怯えて白兎の後ろに隠れる。
白色破壊光線は何も壊すこともなく、無事にその大きな壁のようなものに打ち消されたが、それを見てハンティは笑顔で言う。
「ほら、大丈夫でしょ。こんな感じで魔法撃っちゃって」
「い、いいいいや――ひぃっ!?」
と、イヴが声を震わせながら白兎の背中越しに断ろうとしたが、壁が動いたことでもう一度悲鳴を上げる。
その魔法を打ち消した壁はゆっくりと起き上がって頭をこちらに向けると、その口を大きく開けて声を飛ばした。

「――ん……やはり同胞か……。お前はまた魔法撃ってきたのか……寝てる時にやるなっていつも言ってるではないか……」
「だって、ライゼンの身体ならどこに当ててても大丈夫だし。庭の植物とか花に被害与えても駄目だし、建物も壊したら駄目だしね」
「いやだからな……寝てる時に火とか光の魔法で〝伝導超過〟発動してしまうと気分的にあまりよくないんだ。睡眠中からいきなり血の巡りが早くなるし……だから殴ったり魔法放つなりで襲撃掛けるなら、せめて起きてる時にしてくれないか……？　襲撃自体は許すぞ。諦めたしな」
「？　嫌だけど？　というか、ドラゴン的には勝負仕掛けられるのって名誉でしょ？　断らないんだからいつ挑んだっていいでしょうが」
「……俺が言うのもなんだがな――いつでもドラゴン脳はやめてくれ、頼むから……！」
と、巨体故に大きな声を上げて懇願するのは、巨大なドラゴンだ。
ライゼンと呼ばれるこの城の中庭に住み着いているそのドラゴンは、非力な人間でしかないイヴにとっては分かりやすい恐怖の形だった。
魔人とか使徒の方が身近な分、あまり恐怖はないが、ドラゴンという非現実的な存在を見て、しかもこれだけの巨体となると本能的な恐怖が襲ってくる。
ハンティと気さくに会話をしているところを見ると良い人――良いドラゴンなのだろうが、まだちょっと慣れない。
というか話を聞いてるとハンティの方もヤバい人の様な気がしてきて戦慄する。
「ま、まさかハンティさんまで頭がヤバい人だったとは……」
「ハンティさんは凄くヤバい方ですよ。最強の使徒の方ですし、強い相手と見るや積極的に勝負を挑んでくるバーサーカーみたいな人です。別名は始祖様とかカラーゴリラとも呼ばれているらしく、色んな意味で人気のある方です」
「まともな人はいないんですか、この城には……？」
白兎の背にしがみつきながら恐る恐ると問いかける。今のところ

普通の人間がいなくて何とも言えないのだ。
　すると白兎は考え込んだ末に、
「うーん……あっ！　料理長なら凄く優しくて良い人ですよ！　お腹が空いてる人を放っておけなくて、とても強くて優しくて、家庭も持ってる上に料理が上手くて、皆に認められてる人です！」
「……本当に？　人間じゃなかったりしませんか？」
　疑ってかかってしまうこちらに対し、白兎は自信満々に頷く。
「はい、確か人間だったかと思います。魔法も使えたと思いますし、良い機会です。紹介致しましょうか？」
「……そう、ですね。お願いします」
　まだこの城に来て日が浅いが、ここの料理は口にしている。
　あれだけの絶品料理を作っている料理長。しかも家庭を持っていて人間であれば、きっと普通の人だろう。
　なので期待を込めて、イヴは白兎に紹介をお願いした。
　――だが、
「フハハハハハ!!　白兎様の御友人の方ですな!!　初めましてッ！　私が料理長ですッ!!　少し痩せ気味というのもあって、料理を振る舞いたいのですが構いませんか!?　ミシュラン一族に伝わる調理法の一つ――〝ジェノサイドミキサー〟を使った栄養たっぷりの料理を振る舞いますぞ……ッ！」
「先程はどうも。私が料理長の娘のベアトリス。ベアトとお呼び下さい。お近づきの印に、私流のエロ調理術をお見せしたいのですが……発禁指定なので――え、イヴ様は１５歳？　あ、ちょっ!?　メイド長様、連れて行かないで下さい！　それならそれでやりようがあると言うもの――」
「……は、はい」
　白兎は目の前に現れた二メートル超の化け物と、その娘と名乗り、何故か服を脱ごうとしてメイド長さんに連れて行かれた痴女を無視して、白目を剥いた。
　そして小声で聞こえるだろうと白兎に声を掛ける。
「は、白兎さん……これ、人間じゃないですよね……!?」

「……？　いえ、立派な普通の人間ですよ。父上が一応人間だと言っていましたし、生物学上は人間らしいのでちゃんとした人間です。声が大きいのが私的にはちょっとアレですけど」
……そ、そういう問題じゃないですよね……!?
イヴは人とは思えない巨体とあり得ない程の筋力で行われるあり得ない動きと轟音から放たれる調理法とやらを見て、完全に頭をショートさせた。
そして傍らにいる白兎を見て思う。
……もしかして白兎さんって、かなりマシというか癒やし枠なのでは……？
殆ど確信に近い思いを抱きつつ、まともな生物がいない中庭の風景を見て、イヴは涙目のまま固く誓う。
「……白兎さん、私達、仲良くしましょうね……」
「っ!?　は、はいっ！　よく分かりませんが、う、嬉しいです……！」
――その日の一件。白兎からすれば、これから魔法の才能を見てそれを存分に褒めることで親交を深めようと思っていたのだが、その前にそれを達成できて、困惑しつつも嬉しい想いを得る。
――なおイヴは後日、きちんと魔法の才能は認められた。
しかし、たまにガウガウとハンティの研究室で助手としてサポートすることになり、部屋で頭を抱えることになるのだった。
「……前途多難です……」

破壊神

――ＧＬ４ＸＸ年。

魔王ジルの治世が始まり、約４００年の月日が流れた。

人間が魔物に虐げられるのは完全に世の中の常識となり、魔物達はその平和な時代を謳歌した。

人間牧場の人間達は、自分達が家畜として飼われ、苦しめられることに何の疑問も抱くことなく、日々を過ごし、野良で生きている人間達は、魔物を恐れ、明かりを灯すことすら出来ずに怯えて眠れない夜を過ごし、朝が来ればその命があることを感謝する――そのような日常を送っていた。

また、ＪＡＰＡＮにおける隠れた宗教団体である天志教が、魔王ジルへの恐怖から心を守るためへの支えとして、ＡＬ教を超える宗教組織になったりするなど、幾つか時が進んだことによる変化は訪れていた。

しかし、この時代が始まってから数百年。魔物の天下、人類の暗黒期であることは一切変わることがない。

人類を憎む最凶の魔王、ジルの治世は一切揺らぐことなく、ほんの僅かでもそれを揺らがすものは現れなかった。

一部の冒険者や、魔物討伐隊といった存在が野良で魔物を相手に対抗しようとしているが、その結果は芳しく無く、魔物側からも野良の人間が少し荒れているといった認識であり、見つけたら殺る程度の事例――つまりは相手にすらされていなかった。

魔人は各地で好き勝手に過ごし、魔王も人間を苦しめながら好きに過ごしている。

そんな世界の姿を、俯瞰で見ている者達がいた。

――ここではないどこか。

この世のものとは思えない不思議な空間。

そこにいたのは、甲殻類状の六肢を持つ、ヒトデか蜘蛛の様な巨大な体躯を持つ存在だ。

「――うーむ……」

人とは思えない神々しい存在を発するその声。
持ち主は、この世界の基幹を作った三体の超常存在の内の一柱――三超神、プランナー。
魔王や魔物の制作を担当し、例外とした勇者をも生み出したその存在は、しかし、思考に没入して、なおかつ納得のいかないような声色を吐き出していた。
彼の仕事は基本的に上手くいっており、勇者という存在も舞台装置の一つとしてきちんと機能している。何も問題は無いはずだった。
しかし、
「……バランスが、悪い……」
そう、彼の不満と悩みはそこだった。
先代の魔王も今代の魔王も人間を苦しめるために適した者達であり、今の世の中は神々にとっては良い世の中なのだ。
だがそれは、世の中のバランスの悪さが浮き出ているようでプランナーにとっては、眉を顰めるような光景であった。
人間を庇うわけではないが、明らかに人間側が手も足も出ていないため、どうにも気分が良くない。
そういう意味では、魔物側が負けない程度に戦乱が絶えず起っていた前時代の方が良かったのではないかと思ってしまうほどだ。
「いや……この時代はこの時代で悪くはない。人間を苦しめるための効率性を突き詰めたのは、素直に今代の魔王を褒めたい気分ではあるが……いや、でもバランスが……」
プランナーは結論が出ない悩みを、その身体をふよふよと左右に揺らしながら考え込む。
どうにかしてバランスを取る方法はないかと。
そんな時だった。
「――相変わらずの様だな」
「！」
と、不意にその空間内に女性の様な声が響いた。
瞬間、その場にはプランナーと似た神々しい雰囲気を放つ存在が現れる。

中心に鯨のような顔、その他に四つの人面の様な模様のある黒の塊。
明らかに人ではないその存在の名を、プランナーは呼びかけた。
「――ローベン・パーンか」
「……久しいな、プランナー」
その名は――ローベン・パーン。
この世界におけるメインプレイヤーの創造を担当しており、かつては丸いもの、ドラゴン、そして人間を誕生させた三超神の一柱である。
その存在を前に、プランナーは己と同格である存在に愚痴を吐き出す
「ちょうどよい。今、世界におけるバランスの悪さを憂いていたのだが……人間はどうなっている。もっと頑張ってくれないと困るぞ」
「……妄に言われても知らぬ」
ローベン・パーンが呆れた様な雰囲気を見せる。最後に会ったのがいつだったか忘れたが、プランナーは何も変わっていないと。
しかしそれは逆もまた然りだった。
「今の世の中は、かのお方も大層喜んでおる。僅かに戦と混沌が足りぬが、それでも変える必要性を感じぬ」
相変わらずの平穏嫌い。
混沌と戦乱を好む神であるローベン・パーンは、プランナーが魔王を生み出したことでとうの昔に満足し、人々の欲が入り乱れた〝乱世〟とも言うべき世界をただ見守っている。
故に今はもう働くことも自ら動くこともない。
なので三超神にしては動いている方なプランナーとしては、何とも言えない気持ちになるのだった。
「……それはそうだが、戦と混沌と言うならやはりバランスが必要だろう。今の世の中はどう見てもバランスが悪いぞ」
「……知らぬ。ハーモニットにでも言うがよい」
しかしプランナーもブレずにバランスの事を口にする。基本的にプランナーはいつもそうなのだが、それを素っ気なく、もう一柱の名を出しながらローベン・パーンが返事をすると、プランナーも無駄だ

と悟ったのか別の事を口にする。
「それで、用件は何だ？」
「……少しばかり、相談があってきた」
相談、と聞いてプランナーが怪訝な雰囲気を醸し出す。それこそハーモニットにでも言えばいいのに、と。
しかし返事を待たずに、ローベン・パーンは続きを口にした。
「――以前、妾が作ったこれを憶えているか？」
と、ローベン・パーンが一瞬の光とともにその空間内に呼び寄せたのは、黄金の髪に、赤みがかった紫色の瞳と、青に近い緑色の瞳をそれぞれ持つオッドアイの美女だった。
二柱には劣るものの、神々しい存在感を放つそれを見て、プランナーは記憶を辿って口にした。
「ん……ラ・バスワルドか。ああ、憶えている。冒涜者や汚染魂を消去するための破壊神だな」
簡潔にプランナーはその存在の説明をすると、それを捕捉するようにローベン・パーンが淡々と同意する。
「然り。お主が作り出した勇者システムと一緒に生み出したもの」
「……」
その存在――二級神、ラ・バスワルドは何も感じさせない無感情、無表情でそこに佇んでいる。
神々にとって良い存在ではない汚染魂を浄化するため、地上へ顕現して天罰を与える破壊神である存在であり、魔王を越える程度のそれなりの力を持つ存在であるのだが、
「――で、それがどうしたと言うのだ？」
「――簡単な事」
と、ローベン・パーンはプランナーの問いに対してはっきりと答えた。
「――――これの使い道がない。如何にすべきか？」
「……」
その空間がとても静かになった。
プランナーが沈黙し、一瞬思考を停止させる。

もし人間の顔があれば呆然とし、真顔になっているだろう。
だがそこは創造神を除いて最上級の神だ。その意味を理解し、プランナーは冷静に言葉を返す。
〝それくらい、自分で考えろ〟――と言いたくはなったが、それを飲み込み、
「……なるほど。確かに、いまいち使い勝手が悪いのは確かだな……」
強い力の割にバランスが悪い、とそう思う。
何しろ生み出してかなりの時が経ったが、地上の汚染魂は全然と言っていいほど増えない。
千年に数か数十というペースでは、一生使い道がないのではと思ってしまうほどだ。
そこでプランナーは考えた。使い道がないと言うのなら――
「……そうだな。実験でも行うか」
「実験とは？」
「まあ、褒美も兼ねてな。少し面白い事を思いついた」
そう言って、プランナーはローベン・パーンにその詳細を説明した。
そしてその説明に混沌を好むローベン・パーンが楽しげな雰囲気を出すと、実験は了承され、二柱はラ・バスワルドという存在に手を加えて、それを行うことにした。

魔王城。
大陸を支配する魔物達の王であるジルの居城であるその場所には、今日も今日とて朝から出勤を行うある魔人の姿があった。
「っ、見ろ……レオンハルト様だ……！」
「うおっ、俺初めて見た……」
「相変わらずすげぇオーラだな……」
「……」
魔物達のひそひそとしたやり取りの先にいるのは――魔人レオンハルト、その人だ。
最強の魔人として名高い魔物界の英雄。魔人筆頭という最高位の

地位。
地位や名誉、この世のありとあらゆるものは殆ど思い通りになる魔人の存在に、周囲は色めき立つ。
だが、その中心にいる魔人レオンハルト本人は、険しい表情のままジルの部屋へと向かっていた。
もしかしたら何か重大な要件や任務でも抱えているのかもしれない――そんな想像をさせるレオンハルトの刺す様な存在感は、同時に緊張も与えていた。
しかし、その内心では、
……はぁ……今日も、一日二度出勤か……。
と、漏れ出る溜息をぐっと飲み込んでレオンハルトは重い足取りを必死に動かす。
魔物の天下となり平和になった大陸において、魔軍の役目は人間牧場の運営くらいであり、それ以外の仕事は殆ど有りはしない。
人間牧場計画の総責任者であり、直営のもの以外にも各地の牧場を幾つか担当しているレオンハルトにとっては、そこそこの仕事量ではあるのだが、それらについての苦労はそれほどではなかった。
人間、魔人も慣れるものである。戦争の無い日々は退屈だが、戦いくらいであれば自分である程度は機会を作れるので問題ない。
しかし、ジルの呼び出しについてはそうはいかなかった。
レオンハルトの唯一にして絶対の上司と言っていい魔王、ジルの呼び出しはレオンハルトにとって不可避なものであり、同時に憂鬱でしかないものである。
何しろほぼ確実に――性行為を要求されるのだから。
中には真面目な用事もあるが、それは殆どない。あったとしてもレオンハルトが自主的に魔軍の秩序を保とうとやっている報告などであり、ジルは殆ど興味を示さない。
なのでジルからの呼び出しと言えば、セックスだ。もう４００年近く、ずっとそんな感じであるので大体分かる。
というか先程も、ほぼ夜通しで汚されたばかりなのだ。
しかしそれが終わって一度城に帰ろうとしたところで、こう言われ

た。
『――朝になったら、また部屋に来い……また可愛がってやるからな。くくく……！』
と、身体の上にのしかかったままのジルが、魔剣にいやらしく手を這わせ、耳元でそう呟いてきた時、レオンハルトは毎度の事ながら何とも言えない気分になった。
仕方がないので城に帰り、直ぐに食事で栄養と気力を少しばかり回復させ、風呂で身体を洗い、僅かな休憩を取った後に、再びジルの部屋に向かって出勤。
こういう日は結構多いのだが……何というか、商売女というか、風俗嬢的なサムシングを感じる日々だ。
思わず、〝あれ？　俺の職業ってデリ○ル嬢だっけ？〟と、思ってしまったほど。嬢ではなく男ではあるため、何と呼ぶかは知らないが。
とはいえ、殆ど毎日の様に呼び出しを受けて、身体をいやらしい手つきで触られたり、抱きつかれたり、無理矢理襲われたり、風呂で身体を流したり、命令を受けてこちらから責めたり、終わった後も弄られたり、セクハラ発言を受けて微妙な顔になる自分を見てニヤニヤとしてくるジルを見て、何というか、ヤバい客の付いた風俗嬢の気持ちが分かるような気がしたレオンハルト。
どこのエロ親父だ、と言いたくなるほどの呼び出し頻度やセクハラは、こちらの精神を中々に擦り減らしてくれる。
しかしその一方で、どこかその好意を持たない相手に汚されることに慣れてきている自分もいて、レオンハルトは自分や自分の生活を鑑みて、時折とても憂鬱になるのだ。
そして同時に、通常の魔人筆頭や魔軍参謀としての業務も手を抜くわけにはいかないので、中々に大変だが、精神的にはそちらの方が楽で、むしろ息抜きになってしまっているのが現状である。
そこまで好きではない酒も、以前よりは飲む頻度が増えた。とはいえ月一程度ではあるが、ストレスを解消するために模擬戦などでは激しくしすぎる場合もある。

出来ればどうにかしたいがな……、と内心のみで呟きながらも、レオンハルトはジルの部屋に辿り着いた。今日はもういっそのこと積極的に責めて早々に終わらせてやろうかとも思うが、ジルの方が燃え上がって離さない可能性を考えると危険な賭けとなる。

そうして今日の作戦を吟味し、あまり意味はないな、と自嘲しつつ扉にノックをしたところで――レオンハルトは不意に現れた中の気配に気づいた。

「……！　ジル様？」

「レオンハルトか。くく……時間通りだな。入ってくるがよい」

と、少し機嫌が良さそうなジルの声を受けてレオンハルトは、失礼します、と室内へと入っていった。

するとそこには、

「――!?　ジル様……その者達は……？」

「言わずとも、気配で分かるだろう？」

と、ジルに促された視線の先、部屋の床には、二人の女性が転がっていた。

一人は、紫色の短い髪、青を基調にしたレオタード風の衣装の娘。

もう一人は、朱鷺色に近いサイドの長い髪が特徴の、赤を基調にしたロングスカート付きの衣装の娘。

どちらもかなりの美少女でありながらも、頭からは角、背中からは羽が生えている。

そしてその二人は、どちらも色濃い魔の気配を漂わせていた。

同じ存在であるレオンハルトが、それらを間違えるはずもなく答えを口にする。

「――新しい魔人、ですか……」

「そうだ。――ラ・サイゼルとラ・ハウゼル。どちらも……エンジェルナイトの魔人だ」

青い方を指してラ・サイゼル。赤い方を指してラ・ハウゼルとジルは告げる。姉妹であり、前者が姉で後者が妹であるとも。

それを聞いてレオンハルトは眉根を寄せた。何かを考え込む様子で、

「それはまたいつの間に……随分と急な事ですね」
「くく、少しな。――それより、今日はおあずけにしといてやろう。その二人を適当に連れて行け。もう用はない」
レオンハルトにとって嬉しい命令と、曖昧な命令が同時に来た。しかし顔には出さずに問い返す。
「適当にと言いますと……」
「適当に魔人としての教育でも施してやれ。魔人についてはいつも通り、お前に任せる」
「……畏まりました。では、ジル様は……？」
と、もはやその二人に興味はないと言わんばかりの表情のジルは、何やら意味深な表情でレオンハルトの問いに答えた。
「私は少し、考えたいことが出来たからな。少し籠もる。またその内に呼び出すからいつも通りに来い」
「……は、畏まりました。それでは――」
「ああ、次を愉しみにしておけ……」
と、レオンハルトは床に転がった二人の女魔人を両手で抱えて連れて行くと、口端を歪めたジルから逃げるように部屋を後にする。
そしてジルの部屋の前から外へ向かって踵を返し、両脇の二人を見て溜息を吐く。
「――また面倒が増えそうだな……」
そう言いながらも、多くの者達よりはマシだろうなと思い、また、今日の務めがなくなった喜びの方が大きく、レオンハルトは少し足早に帰路についた。

――そして、レオンハルトが二体の魔人を連れて立ち去った後の魔王の部屋では、
「……先程の声は……やはり〝神〟か……」
ジルがベッドに腰を掛けたまま、考え込むように顎に手を当て、真剣な表情となる。
その姿はまるで、かつての賢者時代の様であり、知的な雰囲気を漂

わせていた。
しかし同時に、何やら悪巧みをしているかのような、不敵な口の笑みも窺える。
……神の存在は、そこまで信じていなかったがな……。
ジルは思考しながらも、その考えを否定する。
確かに、先程の女達を与えると言ったのは神か、それに近い超常の存在であることは確かだった。
声を聞いただけなのに、魔王である自分がまるで敵わないと思わされるほどの神々しさだ。
先代魔王、ナイチサの神が云々というのは話半分というかそこまで重要視していなかったのだが、ここで直接声を掛けてくるどころか、干渉してくるとは、
「――面白い」
くく、と思わず笑みが漏れる。
実際に神が存在し、こちらに有益なものを齎すことが出来る全能の存在であると言うのなら、興味深いことだ。調べてみる価値はある。
ともすれば、何か面白いことが分かるかもしれないし、神とやらに聞いてみたいこともある。
手探りになるかもしれないが、幸いにも時間はそれなりにあるし、手掛かりとなり得る存在もいる。
「……どれ、手慰みがてら、調べてみるか……くく……」
――そうして、魔王ジルは久方振りとなる研究を開始した。

魔人姉妹

紅魔城。
その客室の一つのベッドでは、とある魔人らが寝かされていた。
「――ん……」
「――ふぁ……」
人間が天使と見紛うのではないかというような美しい二人が、ゆっくりと目を覚ます。
ここまでずっと寝ていた二人だったが、覚醒したのはほぼ同時であり、瞼を擦りながらベッドから身を起こしていくと、まずはお互いの姿が目に映った。
しかし最初に声を発したのはその二人のどちらでもなく、ベッドの脇に置かれた椅子に座る、一人の男だった。
「――どうやら、気がついたようだな」
「――えっ？」
「――はい？」
その男――魔人レオンハルトが声を掛けると、二人の姉妹はそれぞれ間の抜けた返事をあげる。
目をぱちくりとさせて自分と相手を見ると、先に声を上げたのは、紫がかった短い髪の姉の方だった。
「だ、誰よあんた？　何でここに……というか、ここはどこなのよ!?」
「あ、貴方は一体……？　それに、私達は何を……？」
起きるなり、眼の前にいる男と訳の分からない状況に憤慨するように疑問を叫ぶ強気な姉。
そして妹の方は不可解な状況に直面して、素直に戸惑っているようだった。
その二人を見て、鋭い眼を僅かに細めるレオンハルト。それだけで姉の方が、〝うっ……〟と僅かに怯えを見せた。
しかしレオンハルトはその警戒を読み取り、出来る限り強張らせないように一度息を吐くと、ゆっくりとまずは問いかけた。
「……その前に一つ聞くが……お前達、自分の名前は分かるか？」

「ッ……ば、馬鹿にしないでよ！　そんなの、分かるに決まってるでしょ！」
「じゃあ名乗ってくれるか？」
「そんなの……――あれ？」
即座に反応したのは、やはり直情的な様子が既に窺える姉の方。
しかし続く、名乗ってくれ、という頼みに対し、姉は眉を立てながらも答えようとし――答えられなかった。
「ええっと……あたしは……ちょ、ちょっと待ちなさい。ど忘れしてるだけだから……うん、きっとそう……」
「……そっちは答えられるか？」
自分に言い聞かせるようにしながら名前を思い出そうとしている姉を見て眉根を動かすと、顔を今度は妹の方に向けた。
「……私は……私の名は……その、ごめんなさい。私も忘れてしまったようで……」
「……そうか」
ふぅ、ともう一度息を吐く。妹の方も答えられないと、顔を俯かせたのを見て、レオンハルトは間を置いて答えた。
「……ラ・サイゼル。そして、ラ・ハウゼル。この名前に聞き覚えは？」
「あっ……！　それよそれ！　あたしの名前！」
「！　思い出しました！　私はハウゼルです……！」
名前を言ってやると、姉の方――ラ・サイゼルの言うが早いか、即座の反応を見せ、妹の方――ラ・ハウゼルも俯いていた顔を上げて名前を思い出せたことに興奮する。
「……思い出せたなら良かった。なら、これまでのことや、それ以外のことで憶えていることはあるか？」
「これまでのこと？」
「それ以外のこと……」
二人は眼の前の男への警戒や不可解な状況に対する困惑の何もかもを一旦忘れ、記憶を辿ろうとする。しかし、
「……えっ、えっ？　何で？　何も分からない……」
「……私は……今までに、一体何を……？」

サイゼルが明らかに動揺を見せ、ハウゼルは静かに自分の事が分からないことに不安を見せる。
それをしばらくじっと観察するように見続け、しかしレオンハルトは促すように口にした。お互いを見て、
「――お互いの事は憶えてるか？」
「お互い……あっ……」
「……姉妹……だと、思います……」
ハウゼルが言葉に出したそれに、レオンハルトはしっかりと頷く。
「……ああ。確かに、お前達は姉妹だ。サイゼルが姉で、ハウゼルが妹――で、合ってるか？」
「……言われてみれば、そうだった憶えがあるような……ハウゼルが妹よね？」
「ええ……そうね。私が妹で、サイゼルが、姉さんだったと……」
二人がお互いの姿を確認して頷き合う。
サイゼルとハウゼルの二人は、自然に相手を自分と近しい相手と感じ取った様で、姉妹という認識はしっかりとあるようだった。
その様子を確認したところで、レオンハルトはまとめに入る。
「なら、それ以外に分かることはないと言うことだな？」
「……そう……よ」
「……はい……」
二人とも不安そうに顔を俯かせる。姉のサイゼルの方は、まだ少し気丈に振る舞っているようだが、妹のハウゼルは見るからにその様子が表情に表れていた。
自分達の名前と姉妹の事以外は憶えていない姉妹に、レオンハルトはその務めを果たすべく、説明を口にする。
「ならこれから俺が、お前達の事や周囲の事、状況についても説明する」
だからちゃんと聞いておけ、と言うように、まずレオンハルトは二人についてのはっきりとした事実を伝えた。
「お前達二人は――魔人になった」

「魔人……私達が？」
「聞き覚えがあるようなないような……その、申し訳ありませんが、それは……？」
　魔人、という言葉の響き自体は知っているのか、二人は一応その事実を聞いて首を傾げることはなかった。
　だが、はっきりと分かるという訳でもないようで、レオンハルトは、やはりそこから説明がいるか、と内心で頭を抱えてみせる。
　子供でこそないだけで、今生まれたばかりの者に物を教えるようだと、
「……魔人というのは、魔王から血を分け与えられた一つの種族の様なものだ。魔物達の上位に位置し、最大２４体まで存在する支配者層だな。今は俺やお前達も含めて十数体と言ったところだが……魔王の説明もいるか？」
　丁寧に教えてやりつつ、一応他の事についても覚えているかと確認を取る。しかし、
「あ、あれ？　なんで？　聞いたらなんだか思い出してきたというか……」
「ええ……魔人は大陸の支配者である魔王の下僕で、魔物達を治めるもの……のようだったかと……」
「……思い出したのなら話が早くて助かるな。なら、人間についてはどうだ？」
　一から説明しなくて済みそうだとレオンハルトは頷き、問いかける。するとやはり、二人は思い出していくように、
「確か、地上で生きる……なんか弱い生き物？」
「……魔物とは違う種、ですよね？　私達の姿に少し似た……。それと、姉さん？　そんな言い方は……」
「な、何よ。確かそうだったでしょ？　凄い弱い生き物って憶えがあるし」
「それは……そうかもしれませんが……」

ハウゼルがサイゼルの〝弱い生き物〟というぞんざいな言い方を耳にして、表情に影を落とす。
ハウゼルの方は優しい性格の様で、サイゼルは逆にそこまで気にしていない様だ。
若干憚られることでもあるが、事実はしっかりと伝えてやろうと、レオンハルトは魔人としてサイゼルの言葉に同意する。
「まあ……概ね間違っていない。人間とは魔物とは違う種であり、基本的には、魔人どころか魔物よりも圧倒的に弱い生き物だ」
「ほら、やっぱりあたしの言ってることが正しいじゃない」
「……そう、ですね……」
ハウゼルも薄々分かってはいたのだろう。眉を落としながらもゆっくりと頷くのを見て、レオンハルトは先の説明から続けた。
「とはいえ、少し前まで――数百年前までは人間も、魔物と戦争するくらいには栄えていたがな……。今は俺達、魔軍との戦争に負け、魔物の家畜として飼われている種族だ」
「ふーん、そう」
「……」
サイゼルは興味無さそうに頷くが、ハウゼルは明らかに憂いを見せている表情となる。
とはいえ現状を聞かせなければしょうがないと、レオンハルトは先を続けた。
だがその前に、
「……あ、あんたも、ま、魔人なの？　魔人……よね？」
「ん……？　ああ、俺は魔人だ」
サイゼルが質問をしてきたのでレオンハルトは特に含むところもなく頷く。
しかしサイゼルは更に続けて、
「……な、何か、特別な魔人とかではなく……？」
と、震える声で言われて、ああ、とレオンハルトは頷き、応答を返す。
「特別と言うか、一応は魔人筆頭と魔軍参謀を魔王様から拝命してい

る。そういう地位的な意味では普通の魔人よりも高い立場にあることは事実だ。だが、お前達と同じ、ただの魔人であることには変わりはない」
「……そ、そう……」
「……」
　サイゼルは納得したのか、その言葉に頷く。ハウゼルの方が無言で、何かを考えている様子なので気になったが、レオンハルトは特に指摘することもなく続きを口にした。
「俺は魔王様――ジル様からお前達の教育……簡単な説明を任され、魔王城から俺の城まで連れてきた。ジル様の事は憶えているか？」
「っ……ジル……様……」
「魔王様……確か、私達を、魔人にした……？」
　明らかに怯えを見せながら恐る恐る口にしたところで、レオンハルトが安心させるように頷く。
「そうだ。どうやらお前達は魔人になる前の記憶がないようだな。魔人になってすぐに気絶していた様だから命令された俺がここまで運んできた形となる。――ここまでで、何か質問はあるか？」
　大体は状況の把握が済んだだろうと、レオンハルトはそこで一旦何か質問はないかと二人に向かって尋ねる。
　すると今度はサイゼルではなく、ハウゼルが、
「……私達は、これからどうなるんですか……？」
　窺うような視線とともに問われ、レオンハルトは簡潔に答えた。
「……魔人は魔王の配下だ。お前達も薄々と感づいていることだろうが、魔王様に逆らうことは、絶対に出来ない。故に魔人として、色々と動いてもらうことになるな」
「……具体的には何をすれば……？」
　続く質問にも頷く。良い質問だと、
「今は、主に人間牧場の管理。そのために魔軍を一個軍ほど率いてもらうことにはなるが……それ以外、魔王の命令以外は基本的に自由だ」
「は、はぁ？　自由？」

「……つまり、何をしてもいいんですか？」
「魔王様の命令や意志に背かない限りはな。――だが、だからと言って横暴に振る舞い過ぎないことだ。魔人は強大な力を持っているが、それは他の魔人も同じ。魔人になったからと力に溺れ、不用意に敵を作っていると、他の魔人に襲われることもあり得るからな」
「……よ、よく分かんないんだけど……」
「原則として、魔王様の意志以外のルールは無く、自己責任だと言うことだ。魔王様から魔人の統率を任される俺や、魔人四天王といった上位の連中の言うことも、聞きたくないというなら聞かなくても構わない。魔人は自由だからな。……だが、その後に相手が力でねじ伏せてくることもあり得る。それらのリスクを考えつつ、自分の強さと相談して、上手いこと立ち回ることが求められる。それが出来なければ――死ぬだけだ」
「っ……」
「……」
サイゼルとハウゼルがこちらの説明を受けて黙り込んでしまう。
脅されたように感じてしまったのだろうが、魔人の生き方を教えるに当たって、最初はこれくらい言っておいた方がいい。
とはいえ多くの魔人は、口では頷きつつも、平気で好き勝手したり、喧嘩を売ってきたりする奴もいる。直面すればこのように怯える奴らも多く見てきたが、大体は自分の力を自覚したところである程度暴れて痛い目や、格の違いを思い知らされるのがいつもの流れだ。
「……とはいえ、俺のスタンスとしては、他の魔人が殺し殺されることを基本的に許すつもりはない。魔人を率いるのが俺の役目だからな。喧嘩して痛い目を見る、見させるくらいならある程度大目に見るが、殺されそうになれば目の届く限りで止めてやるし、逆も然りだ」
「……」
「……」
「……後はまあ、俺が指示することについては出来れば聞いてほしいと言うことくらいか。魔王様の命令に関すること以外なら強制ではないし、相談があれば聞くが……お前達はどうしたい？」

すっかり無言となってしまった姉妹に問いかける。どうすればいいのか計りかねているのだろう。
サイゼルの方はどうしたらいいのか分からずに動揺して目が泳いでいたり、何かを言おうとして、しかし飲み込むというのを繰り返してしまっている。
そしてハウゼルの方は、先程から何かを考え込んでいたが、
「……その、貴方の名前を聞いてもいいですか？」
「！　ああ、そういえば名乗っていなかったか……レオンハルトだ」
思わず失念していたと言う風に名乗っておく。するとハウゼルは名前をきちんと聞いて頷き、
「レオンハルトさん……その、相談といいますか、お願いがあるのですが……」
「気にせず言ってみろ」
地位などを慮って遠慮する必要はない、と気を抑えることで言外にも示す。するとハウゼルは、
「ありがとうございます。それではお言葉に甘えて――」
と、ハウゼルは一旦間を置いて、
「……その話からすると、私達は魔王様の命令を受けたり……その……人間牧場？　を運営したりして、生活していかなければならないんですよね……？」
「ああ、そうだ」
頷く。ハウゼルも改めて理解したように神妙に頷き、
「……なら暫くの間、色々と教えて貰いたいのですが……それと、出来れば部屋を間借りさせて頂けないかと」
「……ん？　教えてやるのは構わないが……部屋とは、ここのか？」
確認するようにレオンハルトが問いかけると、ハウゼルはしっかりと頷いた。
「はい。その、ご迷惑でなければでいいのですけど……」
「ちょ、ちょっとハウゼル……！」
その丁寧にお願いをしてくるハウゼルに、サイゼルがぎょっとした様に表情を変えて、異を挟んだ。

隣のサイゼルから呼びかけられたハウゼルは、それを聞いて、あっ、と自分のミスに気づいたかの様に訂正する。
「申し訳ありません。その、出来れば姉さんと私、二人ともお願いしたいのですが……構いませんか？」
「え、いやちょっと……」
そうじゃない、と言いたげなサイゼルにハウゼルは首を傾げる。
「？　どうしたの、姉さん」
「い、いや……その……め、迷惑が掛かるでしょ！　そんなの！　だからそんなお願いは……」
「はい。だから、出来ればでいいのですが……どうでしょうか……？」
ハウゼルが申し訳なさそうにレオンハルトに恐る恐るお願いする。レオンハルトはそのお願いに、僅かに考え込んだが、
「……まあ、俺は構わないが……」
と、告げるとハウゼルは顔を綻ばせた。
「！　ありがとうございます！　ほら、姉さんもお礼を言わないと……！」
「!?　い、いや、その……」
サイゼルがハウゼルに促されながらも、何かを言おうとしてレオンハルトの顔色を窺う素振りを見せる。
そして、
「……どうするんだ？」
「っ……わ、わかったわ。……あ、あ、ありがとう……」
「……そうか。……それでいいのか？」
サイゼルに出したつもりの助け舟が、怯えで帰ってきたことにレオンハルトは何とも言えない気分になりつつも、最後の確認を取るようにハウゼルに声を飛ばす。するとハウゼルは微笑を浮かべ、
「はい、お願いします」
「……」
何の含むところもなく真摯にお願いし、素直に喜んでいた。
それを見て、レオンハルトは息を吐くのを取り止め、
「……分かった。なら、部屋を用意しよう。ここで待っていてくれ。

少し時間は掛かるかもだが、食事の時に一旦呼びに来る」
「はい、分かりました」
「……あ、うん……」
椅子から立ち上がると、素直に頷いたハウゼルと、何やら項垂れるサイゼルを尻目に、レオンハルトは一旦、部屋を後にした。
そして部屋を出て一言、
「……どうするか……」
突然の事態に迷うかのように、レオンハルトは暫し、歩きながら思考に没頭した。

新たな魔人の姉妹――ラ・サイゼルとラ・ハウゼル。二人の女魔人は、紅魔城の部屋の中に残されて、しばらくそこで待機することになった。
しかしレオンハルトが部屋を出て数秒経った後に、真っ先にサイゼルが声を上げる。隣のハウゼルに抗議するように、
「あ、あんた……何言い出してるのよ!?」
「？　何って……しばらくお世話になれないかお願いしてみたんだけど……ふふ、レオンハルトさんが親切で良かったですね？」
「ちっ、がーーーう！　そうじゃないでしょ！　あんな危なそうな奴の世話になるなんて、何考えてるのよ！」
能天気に笑うハウゼルを見て、サイゼルが怒りの声を上げる。
だがハウゼルは姉の憤りの内容を聞いて、更に頭に疑問符を浮かべた。
「危なそう？　確かに強そうな人――魔人だけど、とても良い人だったじゃない。右も左も分からない私達にあんなに丁寧に教えてくれて……そのレオンハルトさんを、危ない人呼ばわりしたら駄目じゃない、姉さん」
そして逆に、好印象といったハウゼルの発言に、サイゼルが更に、何を言っているのか分からない、と言わんばかりに声を跳ね上げさせた。

「いや、確かに色々と教えてくれたかもだけど、あんなの、腹の中じゃ何考えてるか分からないじゃない！　あ、あんなヤバそうなオーラ出してたし……！　あいつは絶対ヤバい！　見た目は普通の人間っぽいけど、実はとんでもない化け物よ、あれは……！　私達を騙して食べる気かもしれない……！」
「何言ってるのよ、姉さん……。レオンハルトさんはそんな危ない人じゃないと思います。それに、せっかく親切な人に会えたのだから、色々と教えて貰った方がいいでしょう？　ご迷惑をお掛けするのは、心苦しいけど……」
「あ、あんた、なんでそんなにあいつの肩を持つのよ!?」
「別に肩を持ってるつもりは……そんなにおかしい？　とても良い人だから仲良くした方がいいと――」
「だから良い人じゃないって言ってるのよ、馬鹿ハウゼル！」
　完全に平行線のやり取りに、サイゼルが怒声を上げる。
　それを聞いてハウゼルはむっとした表情を浮かべ、
「馬鹿って……確かに、まだそこまで人となりが分かるわけではないけど、同じ魔人の仲間を信じて何が悪いの？　姉さんみたいに疑いすぎるのは……正直、どうかと思いますよ」
「ッ……この……！　妹のくせに……！」
「っ……サイゼルこそ、姉ならもっとしっかりしたらどうなんですか！」
　とうとうハウゼルも、サイゼルの〝妹のくせに〟といった発言に怒って声を荒げる。
　するとサイゼルは、一瞬ビクッとしたものの、
「何よ！　あんたが妹なのは事実でしょ!?　なら、姉のあたしの言うことを聞くのが普通でしょうが！」
「そんなの普通じゃない！　ちょっと先に生まれたからって偉そうにしないでください！」
「生意気言わないの！」
「姉さんこそ、勝手なこと言わないで！」
　お互いが部屋の中で睨み合い、眉を立てる。

気がつけばお互いの瞳はそれぞれに赤と青の闘気が発生し、ゆらゆらと揺れていた。
自然とお互いの身体から圧力が漏れ出る。
それは魔人としての力であり、存在感、オーラといったものだが、それだけではない。
「いい加減にしないと怒るわよ……！」
サイゼルの周囲には、極寒の冷気が発生する。
サイゼルを中心に温度が下がっていき、空気中の水分が氷り、霜を発生させる。
そして気がつけば、その左手には、巨大な銃が握られていた。
先端が尖った巨大な白の魔法銃の名は、魔銃――〝氷結の女神（クールゴーデス）〟
サイゼルが身に秘める氷の魔力を収束し撃ち出し、ありとあらゆるものを凍らせてしまう凶悪な得物だ。
「もう怒ってるじゃない……！」
そして、もう片方のハウゼルの周囲には、高温の熱気が発生する。
ハウゼルを中心に温度が上がっていき、周囲の景色が歪む。急激な温度の上昇の発生源はハウゼルの炎だ。
気がつけば、その右手には、巨大な放射器が握られていた。
炎を象った様な根本の意匠と、黒の長大な放射器の名は、魔砲――〝燃える塔（タワーオブファイヤー）〟
ハウゼルが身に秘める炎の魔力を放射状に撃ち出し、ありとあらゆるものを燃やし尽くす凶悪な得物。
お互いに自然にそれぞれの得物を取り出しており、既に一触即発な雰囲気ではあった。
当人達にその気はなかったが、気がつけばお互いに言い合い、いつぶつかり合ってもおかしくない状況になってしまっている。
殆ど無意識に、距離を取り、軽く前傾姿勢になるのは、戦闘態勢に入ったと言っていいものだ。
そして、お互いがぶつかり合うのを不可避と化す直前、
「――今すぐ止めろ」
「――っ！」

「――あ……！」
部屋に戻ってきたレオンハルトが、鋭い声を飛ばして二人を牽制し、それを止めさせる。
かの魔人の声に乗せられた圧力は新米魔人である二人の戦意を抑えるのに充分な力があり、サイゼルとハウゼルはそれぞれ我に返ったように闘気を徐々に鎮めていく。
それと同時に冷気と熱気が収まっていき、レオンハルトはその室内の空気に微妙な不快感を感じつつも二人に尋ねた。
「まさかいきなり喧嘩するとは……一体何があった？」
「……別に……」
「……ごめんなさい、レオンハルトさん。少し、言い争いをしてしまって……」
サイゼルが素っ気なく言うのに対し、ハウゼルは素直に謝ってくる。
そのことに対し、サイゼルが僅かに歯噛みしたが、レオンハルトは特にそれを指摘することもなく告げた。
「……そうか。少しは大目に見ると言ったが……出来れば城の中での喧嘩は止めてくれ。俺以外の奴にも迷惑が掛かるからな」
「はい……ごめんなさい」
「……っ……分かったわよ……」
「……なら付いてこい。食事の準備が出来たからな」
謝るハウゼルと不満そうなサイゼルにそれを告げながら部屋の扉を開ける。
しかし背後から付いてくる二人は、
「ふん……」
「……」
お互いがお互いにそっぽを向いており、微妙な空気感になってしまっていた。
それを感じて、レオンハルトは、前途多難だな、と内心で言葉を作りながらも、とりあえずは食事で少しでも緩和出来ることを期待した。

――そして、それから少し経った食堂では、
「何これ……うっわ……」
「凄い美味しい……」
サイゼルとハウゼルの二人が、初めて口にする料理の味に感動し、舌鼓を打つ。
レオンハルトはそれを見て、試しにと、
「……気に入ったか？」
「まあ、食事は――」
「はい、とても――」
あっ、と同時に声を上げたことに言葉を止めると、
「……ふん……まぁまぁね……」
「……はい、とても美味しいです」
「……そうか。まあ、好きなだけ食べてくれ」
そして再度、一応は言葉を返してくれたが、再び微妙な空気感を発生させたのを見て、レオンハルトは何とも言えない気分のまま食事を摂った。
二人の姉妹間のやり取りが下手くそであろうことを理解し、これからのことを憂うレオンハルトだが、ラ・サイゼル、ラ・ハウゼルという新たな魔人の誕生を、一応は喜ぶことにした。

魔人ラ・ハウゼル

新たな魔人の内の一体、妹の方のラ・ハウゼルは魔人として新たな生をスタートさせた。

いきなり姉のラ・サイゼルと喧嘩しかけたのは自分でもどうかと思ったが、この城に自分達を住まわせてくれて、魔人としての色々なことを教えてくれる親切な魔人、レオンハルトの仲裁もあって一応は喧嘩せずに済んだ。

だが、喧嘩はしないで済んだものの、サイゼルの態度を見ると苦言を呈したくなって仕方がない。

今も、ハウゼルはサイゼルとともにレオンハルトに案内を受けたり、色々と教えてもらっているのだが、

「――魔軍は一個軍の単位が2万で、一部隊が２００体。これは魔物隊長が一度に率いることの出来る魔物兵の数が２００体であり、魔物将軍が１００体の魔物隊長を指揮出来ることからだ。その上に、魔物大将軍という数十万単位の魔物を指揮出来る特別な魔物が――」

「なるほど……」

「……」

ハウゼルは、サイゼルと並んでレオンハルトの教えを受けているのだが、きちんと頷きを返すハウゼルに対し、サイゼルは基本的に無言で、返事を返さない。

聞いていないわけでは無さそうだが、

「――言うまでもなく、魔王様がトップで、その下に魔人。魔人に血を分け与えられた使徒。血を与えてはいないが契約で魔人の下僕となった下級使徒と続く。ここまでは分かったか？」

「はい」

「……ん……」

「……よし、それなら次はもっと細かい部分になるが――」

と、レオンハルトがこちらの返事を聞いて続けて講義を行う。

だがその際のサイゼルの態度が、

……悪いし、素っ気ない……。

それがハウゼルにはどうにも気になってしまう。
正直言うと、今すぐ注意しておきたいが、レオンハルトの話を遮ることになるためそれは我慢し続けている。
しかし内心では不満が燻り続けており、
……サイゼルったら、どうしてあんな失礼な態度を……！
せっかく、レオンハルトがここまで親身になって教えてくれているのに、それはどうなのだと思う。
あの後、食事を摂って、それぞれ別の部屋を与えられて、風呂に入ったりとしてふかふかなベッドで睡眠を取った。魔人は食事や睡眠などを摂らなくても問題はないとのことだが、出来るなら取った方がいいと言われ、やってみると中々に味わい深く、精神的に良いものであった。
そしてそれからは、レオンハルトに様々な常識や知識を教えて貰っている。
簡単に彼の使徒だという者達や、メイドとも挨拶し、軽く言葉を交わしたが、そちらも皆、気遣ってくれてとても良い人達だった。
だと言うのに、サイゼルは誰に対しても素っ気なく、話しかけられても無視か、短く言葉を返すだけ。しかも特に、レオンハルトに対して不満の視線を向けている様で、ハウゼルは軽い憤りを感じる。
初めて出会ってから今まで、ずっと優しくしてくれているのに、どうしてそんな対応が出来るのか。一応は姉の言うことにも一理あるのかもしれないと百歩譲ってレオンハルトを観察してみて、良い人かどうかを判断しようとしてみたが……断言しよう。――間違いなく良い人だ。
「――では次は、人間牧場についてだが……その前に少し休憩にしよう。お茶を淹れさせる」
「はい、ありがとうございます」
「……」
レオンハルトがこちらの前に立って説明を続けてくれているが、途中で休憩を言い渡す。すると、机から書類を手に取り、何かを書いては別の書類と変えて読み込んだりし始めた。

こちらがメイド長さんからお茶を頂いても、彼は書類に掛かりっきりになっており、
「あの、その紙は……ひょっとして、お仕事ですか？」
「ん……ああ、そうだ。悪いがこちらもやることが溜まっていてな。講義の最中に別の事をするのは失礼だと思うが、出来れば許してほしい」
「……！　いえ、教えて貰えるだけ有り難いですから、気にしないでください」
ハウゼルはそれが気になって質問してみたのだが、どうやらレオンハルトは高い立場にいるだけあって、仕事が多いらしく、こちらに教える合間を縫って仕事を行っているのだ。
そう、それだけ忙しいのに、こちらへの講義には手を抜くことなく掛かりっきりで教えてくれている。責任を果たしながらも、こちらへの時間を作ってくれているのだ。
しかも自分達だけではなく、周囲の者と話す時は、優しげな親しみのある声を掛けているし、話しかけられても無視するようなことはしない。全部丁寧に対応してくれる。
これを見ると、講義に手を抜くことは失礼だ。なので休憩は程々に、彼から貰った勉強用のプリントを取り出して問題を解き始める。
記憶がない自分達に、どれくらいの知識があるのかの確認の為に実施したテストで、その正解率を参考に、問題を作ってきてくれたのだ。別にやらなくてもいいとは言われたが、ハウゼルとしてはレオンハルトが態々忙しい時間を縫って作ってくれたことと、そもそも学ぶことを楽しめることもあって、やることは苦ではない。
「えと、レオンハルトさん。このプリント、終わったんですけど……」
「ん、もう終わったのか。ハウゼルは勉強熱心だな」
「いえ……そんなことはないですよ。私は、やれることはやろうとしているだけですから……」
「だとしてもだ。魔人には、これほど勤勉な者は少ない。充分誇っていい美点だ」
「！　は、はいっ……！」

終わったプリントをレオンハルトに渡すと、それを見たレオンハルトから軽く褒められる。こそばゆいが、そう言われると嬉しく思ってしまうのも事実で、ハウゼルはたちまち心が弾むのを感じて、同時に意欲も湧いてくる。
記憶がなくてお世話になっている申し訳無さが先に来ていたのだが、今は自分からやれることはやりたいと思ってしまうのだ。
ちょっと気に病むこともあるが、それを押してでも、
「……ふむ、正解率もほぼ完璧で――」
「っ……あ、あー、疲れた。勉強とか止めて外に行きたい」
と、不意にレオンハルトの言葉をまるで遮るように、サイゼルのそんな声が室内に響き渡った。
それを聞いてレオンハルトが、ハウゼルとハウゼルの渡したプリントから視線を移動させて、サイゼルの方を吐息付きで見ると、
「……サイゼルは勉強が嫌か？」
「べ、勉強ばっかりじゃ息が詰まるのよ。それに……えーと……あっ、街とか牧場とやらの案内だってするんでしょ？　そっちからやればいいじゃない」
サイゼルがそんな事を言うと、レオンハルトは少し無言となって考え込んだ末に、
「……そうだな。確かに、そちらの方も疎かには出来ないし、勉強ばかりだと息が詰まるのも一理あるだろうし、実際に目で見ておいた方がいいのもある。――なら、行くか」
「そ、そうしましょう！」
「……」
「ハウゼルも、それでいいか？」
「……はい。大丈夫、です」
サイゼルの言葉を発端に、次は牧場の案内をすると言うレオンハルト。
それも必要な事であると、ハウゼルは理解しているが故に、特に文句を言うこともない。
だが気になったのはサイゼルの態度で、

……勉強が嫌だからって急にそんなことを言って困らせて……！
姉さんは勝手過ぎます……！
今日の予定に外に出る予定は無かったのに、気分でそんことを言って予定を変えるなんて、あまりにも勝手すぎると。
それに今から自分は、もっと勉強を見て貰おうと思っていたのだ。それを急に変えられたため、妙にモヤモヤしてしまう。
というか、サイゼルはさっきからずっとそうだ。自分がレオンハルトと会話を弾ませていると、勝手なことや訳の分からないことを言ってその場の空気を微妙なものにする。
まるで仲良く会話するのを邪魔されているようで、姉に対する憤りが増していく。
レオンハルトや自分のやることを邪魔して何が楽しいのだろうか。正直、やりたくないのなら黙っていてほしいくらいだ。
レオンハルトは、姉の為にも色んなことを教えているというのに、ふざけてばっかり。しかも、牧場への視察を先にやらせようとするなんて、出来ればこちらの心の準備が整ってからにしてほしかった。
……姉さんの馬鹿……ほんと、勝手なんだから……！
しかし、姉に対しての憤りを感じても一度決まったことを変えることは出来ないし、喧嘩をしては迷惑が掛かる。
なのでハウゼルは、先を行くレオンハルトの後ろを、サイゼルと距離を取りながら歩き始めた。

新たな魔人、ラ・サイゼルは、魔人としての生を、妹のラ・ハウゼルとともにスタートさせた。
いきなり妹と喧嘩仕掛けて微妙な空気になってしまったのがサイゼルとしては悶たい気持ちとなる。
これも、自分達を運んできたという魔人、レオンハルトのせいだ。
ハウゼルがレオンハルトに対して気を許していたりするのが、癪に触るし、レオンハルトがハウゼルの方ばかり褒めているのは、自分への劣等感の様なものを感じてしまって妙にイラッとする。

今も、レオンハルトから様々なことを教えて貰ってる最中だが、
「――この街は、おおよそではあるが１００万の魔物兵が住んでいる。その全員がうちの軍に所属しており、戦うための兵として。街や牧場を運営するための貴重な人手だな」
「凄い活気……他の街も、これほど活気があるんですか？」
「……自慢になってしまうが、ここほど活気がある魔物界の街はないかもな」
「そうなんですね。とても賑やかで、皆楽しそうで……いい街だと思います」
「……ふん」
自分達を連れて城の外に出たレオンハルトが街の説明を行うが、ハウゼルが周囲の賑やかさに声を上げて感動している様だが、その妹の浮ついた様子と、レオンハルトがハウゼルを気にかけてることに対して思わず鼻を鳴らしてしまうが、
「じゃあ、牧場へ向かいながら、街を案内する。途中、何か興味のあるものを見つけたり、質問があれば遠慮なく言ってくれ」
「はい、レオンハルトさん。よろしくお願いします」
「……っ……」
と、レオンハルトがこれから案内を行うと告げる。
しかしその際のハウゼルの態度が、
……楽しそうだし、浮かれてる……！
それがサイゼルにはどうにも気になってしまう。
ぶっちゃけ言うと、今すぐどうにかして邪魔したいが、ハウゼルに軽く睨まれるし、レオンハルトが怖いのでそれは出来ない。
しかし内心では不満が燻り続けており、
……ハウゼルったら……！　何であんな奴に気を許してるのよ……！
あんなに危ない魔人に対して気を許すとか、平和ボケというか、危機意識が無いにも程があると思う。
目覚めてから食事や風呂も頂き、部屋を与えられて住むことにはなったが、いつ襲われるのかと気が気でない。

魔人になって直ぐに分かったことではあるが、自分達の力は、確かに他の魔物と比べても圧倒的に強大なものであるのだ。
しかしだからこそ、レオンハルトの強さにはすぐに気づいた。
明らかに自分達よりも強い。二人合わせても勝てないだろうと思わせてしまうほどの強さを感じて、サイゼルは怖くてしょうがないのだ。
ハウゼルもその強さは感じているはずなのに、優しくて良い人だからと仲良くしようとしているのだからあり得ないものだ。
城の中で聞き耳を立てたり、噂を聞いてみたが、どうにもレオンハルトは危ない奴らしい。
強い奴と見れば襲ってくるらしいことや、女は高確率でどこかに落としてしまうらしいことや、興奮すると凶悪になるらしいなど、メイドの話ですらそんなことを言っていたのだ。
だと言うのに、ハウゼルはレオンハルトに話し掛けられて楽しそうに会話したり、褒められて嬉しそうにしている。
しかもハウゼルの方も、勉強などをやらせると、自分よりも出来が良いため、なんだか比較されてるようでムカつくし、モヤモヤする。
自分の方が姉なのに。ハウゼルの方が優秀で、しかもそれを自慢されているように感じるし、レオンハルトもハウゼルばかり褒めている。
大切な妹なのに、段々と苛立ってくるから何とも言えないのだ。自分が我慢できない。
妹のハウゼルの言うことも少しくらい聞いてやろうとレオンハルトを観察してみて、恐ろしさを立証しようとしたのだが……断言しよう。――間違いなくヤバい奴だ。
「――ついでに昼食も街で摂るか。その後で、牧場の視察にしよう。どこか入ってみたいお店はあるか？」
「あっ、はい。そうですね……どれも美味しそうで、迷ってしまいます……」
と、ハウゼルが周囲を見て、お店を選ぼうとする。
何となく、その良い雰囲気というか、姉がこんなに悩んでいるのに

妹が楽しんでいるのがイラッとしてしまい、
「……そこの店でいいでしょ」
一つの店を指して告げる。するとハウゼルが動きを止めた。
レオンハルトがその間にこちらを見て、
「その店がいいのか？」
「そ、そうよ」
「ふむ……俺は構わないが、ハウゼルはどうしたい？」
レオンハルトへの怯えを隠しながらも何とか頷くと、今度はハウゼルにも同意を求める。
何となく街を眺めながらサイゼルが思う良さそうな店を選んでみたのだ。邪魔はしたいが、食事は悪くないので、出来れば美味しいものを食べたいと思ってのことだ。
その場所なら、ハウゼルだって喜ぶだろうと思う。
だが、ハウゼルがその店を見て、
「……私は――」
「は、ハウゼルも、そこで良いわよね？」
「……いえ、私はあっちのお店の方がいいです」
「えっ」
と、まさかの反抗。
別の店を指して、そっちに行きたいと声に出した妹に、サイゼルは間の抜けた声を出してしまう。
レオンハルトが両者の意見を聞いて軽く息を入れると、
「……なら、今日のところはこっちに行くか。あちらは、また別の日か……もしくは夕食にでも連れて行こう」
そうレオンハルトが告げた先は――サイゼルが選んだ店だ。
それを聞いて、サイゼルは不覚にも妹に勝ったみたいで少しだけ気分がよくなってしまう。
「！　ふふん、まあ、それでいいんじゃない。ハウゼルも、後から行けるんだから文句ないでしょ？」
「っ……ええ、いいですけど……」
「……そうか。なら、そうしよう」

ハウゼルは一瞬何かを言おうとして、しかしそれを飲み込んで頷く。
レオンハルトがサイゼルの選んだ方の店に向かっていくと、別にどちらでも良かったがやっぱりハウゼルに勝った気がして気分がよく、
……ま、まあ、姉の私が選んだ場所だし、こっちの方が良かったに決まってるわね！
その方がハウゼルだって美味しいものが食べれて嬉しいし、楽しいだろう。微妙に落ち込んでいるように見えるのが、サイゼルの心にダメージを与えてくるが、
……あ、あの子が間違ってるんだから……あんな危ない奴と仲良くしようとして、放っておいたら危ないから……あたしが姉として仕方なく、守ってあげてるんだから……うん、そうよ。
だと言うのにハウゼルは警戒心もなくレオンハルトに近づいていくのだから、こっちが気を張っていなければならないのだ、と、サイゼルはレオンハルトを挟んだ先を歩くハウゼルを感じて、自分の行いは正しいのだと言い聞かせ続けた。

――そうして3体の魔人はレオンハルトシティにあるお店で簡単に食事を摂ると、その足で街を歩き、人間牧場へと向かった。
レオンハルトはともかく、姉妹の間の空気は微妙過ぎるものであったが、レオンハルトとしてはこの場所での反応こそが気がかりなものであった。
しかし案内はせざるを得ないものだと、覚悟を決めてその光景を二人に見せると、
「うっわ……」
「これが……」
サイゼルとハウゼルが人間牧場の日常ともいえる光景を見て、声を漏らす。
サイゼルは目を見開いた後に少し引いているくらいだが、ハウゼルの方は目を見開いて驚いた後に、露骨に表情を歪めた。

後者の反応に、やはり、という思いを浮かべつつも、レオンハルトは神妙に説明を始めた。
「……これが人間を家畜として飼い、生き地獄を味わわせるための施設――人間牧場だ」
簡潔にその真実を、言葉を選ぶことなく伝える。
ここで誤魔化したり、言葉を良いものに変えることには何の意味もない。
かといって悪しきもののように伝えることもしない。単純な事実だけを伝え、感じ方は相手に委ねるのみだ。
反応を見るために一度間を置いて二人の方に身体を半身にして向けると、ハウゼルが震える声で、
「……こんなことが、世界中で……？」
「……ああ、そうだ。ジル様の治世が始まってすぐに、ジル様は俺達魔人や魔物に命令を出し、全ての人類国家を壊滅させると、人間を家畜として飼い、苦しめることを俺達に命令した」
「魔王様からの、命令、で……」
魔王の命令、という単語に、ハウゼルが反応する。どうやら、心を痛めているが、魔王の命令ということを改めて自覚して、逆らえないことを本能で理解したようだ。
人間に対して可哀想だと思っているのは、それだけ心優しいことの証明でもあるが、そうやって苦しんでしまうという欠点でもある。魔人としては本来、邪魔なものであることには違いない。
「今では大陸各地に人間牧場が設置されていて、魔人がそれぞれの牧場の責任者を務めている」
「……魔王様って、人間が嫌いなの？」
と、問いを投げてきたのはサイゼルだ。こちらはやはり、フラットと言うか、良いこととも思っていないかもしれないが、人間に思い入れがあるわけでもないので、そこまで動揺はしていない。淡々と、それでいて偶然にも核心を突いた質問を飛ばしてくる。
「……ああ。理由は話せないが、ジル様は大の人間嫌いでな。人間を苦しめるためならどんなことでもするお方だ」

「ふ、ふーん……そう……ま、魔人は大丈夫よね？」
「基本、干渉は少ない方だ。魔人や魔物を特別害することもない。――逆らわなければな」
「……な、なるほどね……逆らわなければ……」
サイゼルは自分達が同じことをされないかの方が心配だった様で、その答えを聞いて少しほっとするも、恐ろしい御方であることを本能で感じ取ったのか、大人しく頷く。
そして、その光景を見ていたハウゼルが僅かに目を伏せながら、
「……私達も、この牧場を運営しないと……いけないんですよね……？」
「……そうだ」
それだけはどうしようもない、と短く頷くことで伝えると、ハウゼルは無言で黙り込んだ。
しかし数秒間を置いたところで、瞳を見開いて、
「……そう、ですね。私も魔人として……やるべきことはやらないと駄目なんですよね……」
気丈にも、それを受け入れる態度を取ってみせた。
だが悲しんでいることは見て取れたので、レオンハルトはそれを受け入れたことを良しとして、少し助け舟を出そうと言葉を続ける。
「なら、視察を続けるぞ。他の牧場ならともかく、うちは色々とやり方が違うからな」
「？　どういうことでしょうか……？」
と、案の定ハウゼルが質問してくれたので、レオンハルトはそれに答える形で教えてやる。
「各牧場の方針は、その魔人に任せられているからな。同じ牧場といっても、そのルールは異なる。最低限、人間を苦しめてさえいれば、多少のルール変更は問題ない」
そう言って、レオンハルトは奥の方に歩いていきながら自分の牧場についての説明を続ける。背後の二体に向かって、
「今見たこの柵の中の光景は、オーソドックスで最低限の牧場施設。うちで言う〝C級〟の人間が集まる場所で、他の場所はグレードが上

げた人間が行く場所であり、扱いもここより酷いものではない」
「！　苦しめずともいいんですか……？」
　その言葉には首を振る。その言葉は正しくないし、言ってはいけないことだと、
「違う。苦しめることには変わりない。苦しめ方を変えるだけだ。強制労働や慰安婦、娯楽のための戦士にしたり……うちだと、それよりも優秀な人間は、魔物の為にその能力を万全に発揮出来るように、先程の街で暮らして貰っている」
「……なら……」
　ハウゼルの表情にほんの僅かだが、希望が宿る。レオンハルトは思わず口端を歪めそうになるのを自重しながら、
「どんな牧場を作るかは魔人次第だ。……とはいえ、最低限のやるべきことを受け入れることは必要だがな」
「……そうですか」
「ふーん……」
　ハウゼルが複雑な表情で頷き、サイゼルが辺りを見渡しながらやはりそこまで興味が無さそうに声を上げる。
　レオンハルトはそんな姉妹を連れて、牧場視察を続けたが、やはりその際のハウゼルの元気の無さを見て、後で元気づけてやるかとその予定を頭の中に組み入れた。

　牧場視察を終えたその日の夜。
　夕食と風呂を終えた魔人、ラ・ハウゼルは、与えられた自室のベッドに寝転がり、天井を見上げながら考え込んでいた。
　……あれが、今の世界……。
　頭の中に思い浮かべる景色は、先程見た人間牧場のものだ。
　ハウゼルは、自分達とは違う種である人間達が苦しめられる姿を思い出し――そして、悲しさを覚えてしまう。
　酷い暴力を受けるその姿が可哀想だと、単純にハウゼルは感じてしまったのだ。

それに加担しなければいけないというのは分かっているし、そうしなければならないとも思っている。
魔王の命令なのだ。それを本能でも自覚し、逆らうことは出来ないし、その気も起きなくなってしまう。
だから人間の扱いはあれが正しい。そう思ってはいるが、気が沈んでしまうのはどうしても避けられない。
とはいえレオンハルトの牧場は、確かに最初の場所と比べて、後に見せられた場所はマシに思えた。
痛めつけられるわけでもない。ただ単に強制的に働かされているだけだし、その後の〝人間街〟など、ごく普通の平和な街にしか見えなかった。
子供達が集団で生活し、勉強や運動、遊んでいたりする微笑ましい光景もそこにはあった。
牧場にいる誰もがそれを日常と疑わず、楽しんでいるような光景に、ハウゼルは僅かな救いを見た。
それはやはり、レオンハルトの優しさなのだろう。思い返してみれば、彼もそれを望んでいるようには見えなかった。
やっぱり優しい良い人なのだな、と嬉しく思う反面、あれだけ優しい人でも、人間を苦しめることは不可避なのだと見せつけられたようで、自分の現状を思い知った気分だった。
「ふぅ……そろそろ、明日に備えて眠らなきゃ……」
そろそろ眠りにつかねばならない時間帯だが、どうにも眠れない。
魔人は睡眠を取らなくても問題ないが、出来る限りは取ったほうがいいのだろう。
とはいえ、こうなってくると復習でもして、気を紛らわせるしかないかとも思う。なので身を起こし、レオンハルトから貰ったプリントを取ろうと机に向かったところで、
――コン、コン。
「……？　はい」
と、扉がノックされたので、机に向かわずに扉へと向かう。
こんな時間に誰だろうと、扉を開けると、

「……レオンハルトさん？」
「起きていたか……悪いな、こんな時間に」
訪ねてきたのは、レオンハルトだった。
開口一番、バツが悪そうに部屋を訪ねてきたことを謝るレオンハルトに、ハウゼルは謝らなくていいと言わんばかりに首を振る。
「い、いえ、ちょうど眠れなかったので……何か用ですか？」
「ん、まあ……眠れないなら、ちょっと付き合ってくれないかと思ってな」
「？　はい、構いませんけど……」
ハウゼルは首を傾げて〝付いてきてほしい〟というレオンハルトに付いていく。
もしかしたら勉強でも教えてくれるのだろうか、と期待しながら付いていくが、途中で声を掛けられ、
「……ところで、ハウゼルは何かやりたいこととかないのか？」
「やりたいこと、ですか？」
「ああ、例えば……趣味とか」
趣味、と言われ、知識の上では分かっていても、それに値するものはないし、何をしたいかも分からないなと、ハウゼルは首を振る。
「……いえ、私は……今は、やるべきことをやるのが先で……」
と、否定すると、レオンハルトは苦笑し、
「……まあ、勉強熱心なのは良いことだがな。何か楽しめることや、趣味を見つけたりして気を休めないと気が滅入るだろう」
「……そうでしょうか？　でも、私には何も――」
と、言いかけたところで、レオンハルトは一つの部屋の前で立ち止まった。
そしてこちらに振り向きながら、扉に手を掛け、
「今は何もないかもしれないがな。まあ、何かしら見つかるものだ。……というわけで、今日はその手伝いというか、ちょっとした布教をさせてもらおうと思ってな」
「布教、ですか。それは一体――」
またしても言いかけたところで、今度は自らの意思で言葉を止め

る。
レオンハルトが開いた扉をくぐった先の光景。
そこには、ハウゼルにとって初めて見る――
「――本が、沢山……」
――本の山だった。

部屋に入るなり、ぽかんと口を開きっぱなしにしたハウゼルを見てレオンハルトは苦笑しながらも本棚の一つに向かう。
そうして一冊の本を引き抜きながら言うのは、プレゼンテーションの語り口の様な言葉だ。
「今日、お前に紹介しようと思うのは――読書だ」
「ど、読書……」
「さすがに読書は分かるよな？」
冗談めかして言うと、ハウゼルは少し顔を赤くしながら、
「ど、読書くらい分かります……！　本を読むこと、ですよね……！」
微妙に恥ずかしかったのか、取り繕うような説明に、ああ、とレオンハルトは頷き、
「俺も昔は暇な時や眠れない時に本を読んでいてな。今はそこまで昔ほど読んではいないが、集めるのが習慣になってしまって、今はこの有様だ」
と、小さな図書館に近い大きさの図書室に並んだ本の数々を見せてそう言う。
その半分程はまだ見てもいないものだが、それでも何冊かを順に引き抜きながら、ハウゼルに向かって差し出し、
「これと、これと、これ。後は……これとかもいいか。試しに読んでみないか？」
「い、いいんですか？」
「ああ……というか、その様子だと、やっぱり興味あったのか？」
そわそわしているハウゼルを見て言うと、ハウゼルは、〝あうっ……〟と恥ずかしそうに視線を逸しながら、

「そ、その……ちょっとだけ……そのうち読んでみようかなと……勉強の時にも、部屋に本があって、どんなことが書いてるんだろうと思ってしまって……」
「ふっ……それなら、ちょうど良かったな。遠慮はしなくていいから好きに読んでみろ。とりあえず、最初でも読みやすい本を幾つか選んだからな」
「は、はい……それじゃあ、お言葉に甘えて……」
ハウゼルがドキドキしてるのか、好奇心を抑えきれないといった様子で、本を受け取り、図書室備え付けの椅子に腰掛けて、ゆっくりとページを開く。
そして、夢中になるのに時間はそう掛からなかった。
「……」
頬を紅潮させながら、微笑を浮かべて本のページを次々と捲っていくハウゼルを見て、レオンハルトはその試みが上手くいったことに苦笑し、
……さて、それじゃあ俺も久し振りに何か読むか……。
忙しいのもあって最近は離れていたからな、とレオンハルトは自分がまだ読んでいない本を適当に抜き出すと、ハウゼルの隣の椅子を引いて、読書を始めた。
――そしてしばらく、ページを捲る音だけが部屋に響いていたが、
「ふぅ……」
やがてハウゼルが、一冊目を読み終わり、満足そうに吐息をつく。
そしてきょろきょろとレオンハルトを探して、隣にいることに気がつくと、
「レオンハルトさん！　この本、凄く面白かったです！」
「――お、読み終わったか。そうだろう。どの辺が良かったんだ？」
「はい！　タエとカナコの仲直りのシーンとか、台詞が凄く良くて……！」
「ああ、あの辺りか。ケイとの思い出の場所だけあって凄い良いよな」
「そうなんです！　それに、ケイとマオが喧嘩する場面も、お互いの想いが凄く伝わってきて――」

相当興奮しているのか、かなり距離を詰めて感想を言ってくるハウゼルに、レオンハルトは相槌を打ち続けた。
だが一通り語ったところで、レオンハルトはそれを区切るように、
「楽しんでくれたようで良かったが……少し落ち着いたらどうだ？」
「あっ……ご、ごめんなさいっ！」
気がつけば、とんでもなく近い距離で話していたことにハウゼルが気づき、慌てて自分の椅子まで離れる。レオンハルトが肩を竦め、
「面白かったか？」
「は、はい。それは勿論……その、こんなの、初めてで、身体が熱くなってしまって……興奮してしまいました」
恥ずかしそうだが、満面の笑みを浮かべるハウゼルに、〝それは良かった〟と返すレオンハルト。
それでこそ、勧めた甲斐があるというものだと、
「なら他のも読んでみたらどうだ？　どれも面白いぞ」
「はい！　そうさせて貰いますね……！」
と、ハウゼルは二冊目を手に取り、やはりまだそわそわしながら本を開く。
趣味としてどうだ、と聞こうと思ったのだが、
……聞くまでもないか。
既に二冊目に夢中になっているハウゼルを邪魔しては悪いか、とレオンハルトは自身も本を読み進めることにした。
――その夜。図書室では、ページを捲る音と、時折本の感想を言い合う女性の弾んだ声と男性の落ち着いた声が朝まで続いた。

魔人ラ・サイゼル

夜が明けて、次の日になると――妹の様子が更におかしくなった。
「レオンハルトさん……その、今日もいいですか？」
「今日か？　……夜はさすがに寝たほうがいいと思うが……それに、態々俺に了解を取らずとも好きにしても構わないが」
「そうなんですけど……やっぱり、駄目ですか？」
「……まあ、昨日みたいに一晩中とかでなければな」
「！　じゃ、じゃあ、それまではおすすめしてもらったものを読んでおきます！　だから、後で感想を言い合いましょうね！」
「……ふっ、ああ、分かった」
何故か昨日よりも明るい様子で笑顔を向け、積極的に話しかけにいってるハウゼルと、何やら微笑ましいものを見るように受け答えをしているレオンハルト。
それを見て、姉のサイゼルは気が気でないというか、疑問符で頭がいっぱいになった。
……な、なんで昨日よりも仲良くなってるのよ!?
昨日はちょっと自分も含めて気まずい感じで別れたというのに、一晩明けたらこれだ。
ちらっと聞いた限りだと、読むとかなんとかで、昨日別れた後もひょっとして勉強でもしていたのかと想像させる内容だ。
やたらと勉強熱心なハウゼルならあり得るが、レオンハルトを誘ってまでやるなど、さすがにどうかと思うし、よく分からないが怪しい雰囲気も感じる。
だからという訳ではないが、
「……は、ハウゼル……？」
「！　おはよう、姉さん」
「！　お、おはよう……」
話しかけてみると普通に挨拶を返してくれて、驚いてしまう。
素っ気ない態度を取られると思っていたのだが、どうやら機嫌がいいのか、普通の対応だ。

……今なら、ちゃんと話も出来るかも……。
これだけ機嫌が良く、普通に話せる状態であれば、何があったかも聞けそうだし、自分の話も聞いてもらえるかもしれない。
だからサイゼルは勇気を振り絞って、
「そ、その……ハウゼル。昨日は――」
「聞いて、姉さん！　この本が、とても面白いの！」
――と、サイゼルの言葉は興奮したハウゼルの声に差し止められてしまった。
サイゼルは呆然としてしまい、思わず自分の言おうとしていたことを忘れ、その話題に言葉を返してしまう。
「え……本？」
「そうなんです！　レオンハルトさんから貸して貰った本がもう……！　どれも面白くて！　良かったら姉さんも読んでみませんか？」
本をこれでもかと見せながら、ハウゼルは笑みでそれらを薦めてくる。サイゼルはそれに戸惑ったものの、
……ま、まあ、この子がこんだけ話掛けてくるなら……ちょっとくらい乗ってみても……いいかな？
別にそこまで興味もないが、反抗期の妹がこれだけ話しかけてくることは魔人になって初めてのことだ。
だからサイゼルは一度咳払いをして、気持ちを切り替えると、
「ふ、ふーん？　本って何？　何か勉強のもの？」
「小説よ、姉さん。物語が書いてあって、とっても面白くて……！」
「あっ、そういうのなら……」
小説、と告げられ、見たことはないが知識の上では頭にあったので、それなら自分でも読めるかもと、少し興味が湧いてくる。
難しいものならキツいが、と思いながら、サイゼルはハウゼルから本を受け取って開いてみるも、
「どう、姉さん？」
ニコニコと笑みを向けてくるハウゼルを前に、サイゼルは固まってしまう。
そして視線を逸しながら引き笑いで、

「――じ、字がいっぱいでちょっと……」
「……そうですか」
……えっ、凄く冷たい!? な、なんでよ!?
「……はぁ……先に行ってるわ。今日も、勉強しないと……」
「え……あ、ちょっと……」
こちらが呼び止めるのも聞かずに、ハウゼルはさっさと廊下を行ってしまう。
自分が冷気を感じてしまうほど。今までで一番冷たくされてしまったように感じる。
ただの本くらいでそこまで冷たくしなくてもいいのに、とサイゼルは思い、
……う～～～、これも、あいつのせいよ……!
同時に、その本を勧めたハウゼルに勧めたレオンハルトのせいだとサイゼルは思い、恨みを募らせた。

ラ・ハウゼルは、これ以上ないと思えるほどに心を弾ませていた。
それは自分が脇に抱える――本のお陰だ。
「～～～♪」
思わず鼻歌を歌ってしまう。それだけ楽しい、ワクワクする気持ちでいっぱいだ。
……早く続きを読みたいです……!
内心は本の事でいっぱいであった。
これほどまでに読書が楽しいとは、思いもよらなかった。
本は良い。本を読むと、知らなかったことが沢山知れるし、様々な物語は胸の内を熱くさせてくれる。
まるで生まれ変わってしまったかのような楽しい気分になれるのだ。
これも、読書を勧めてくれたレオンハルトのお陰でもある。
彼が勧めてくれた本はどれも面白く、感想を言い合うのもとても楽しい時間だった。

だから早く、一緒に本を読んで、昨晩の様に感想を言い合いたい。
しかしやるべきことはこなさないといけないことは確かだ。
……私は、魔人ですから。
魔王の命令には従わなければならないし、魔物達が困らない様に導いてあげなければならない。
人間の扱いは可哀想だが、平和は維持したい、というのがハウゼルの想いなのだ。
各牧場の方針は魔人にある程度は一任されるというのも教えてくれたし、ちゃんと出来るようになれば、レオンハルトの様に少しは救いを与えられるかもしれない。
昨日までは魔人としての責任を果たそうと、ただ頑張ろうと思っているだけであったが、今はちょっとした目標と、楽しみを得て、世界に色がついたような心持ちだ。
本当に、昨日は充実した一日だったなぁ、と思う。そして、もっと頑張ろうとも思える。
「……ふふ、レオンハルトさん、良い人だったなぁ……」
今日はまた後で、一緒に本を読む約束をしたのだ。
早く夜にならないかなぁ、と、お思いながらハウゼルが廊下を歩いていると、
「――どうも、おはよう御座いますー。ハウゼル様」
「おはようございます、ハウゼル様」
「！　おはよう御座います。貴方達は――」
と、前方から歩いてきた女性と男性が一礼とともに朝の挨拶をしてきたので、ハウゼルも直ぐに挨拶をにこやかに返す。
そして見知った顔であることも直ぐに思い出した。
「レオンハルトさんの、使徒の方でしたよね」
「ふふふ、ペールちゃんのことを憶えて下さって光栄ですよう」
「……正しく、光栄でありますな」
「いえ、そんな。同じ城に住む皆さんの顔を憶えるくらい、当然のことですよ」
挨拶もしてくださいましたから、とハウゼルは二人のレオンハルト

の使徒――ペールとリーを見て自然と微笑んでみせる。
城に住む者達全員の名前を憶えている訳ではないものの、顔くらいは出来れば憶えたいし、話しかけられたのなら出来る限り仲良くしておきたい。
親切な皆へのお返しというわけでもないが、自分も他人に親切に接することに躊躇いはないのだ。
それが階級が下の使徒や魔物であっても変わらない。
まだまだお世話になる身だが、自分のやりたいようにやれと、レオンハルトには背中を押して貰ったし、魔人であっても偉ぶる必要もないだろう。
だからあくまでも自然に。ハウゼルは誰に対しても自分の態度で接し、仲良くしようと心がけた。
気持ちが浮ついているせいもあるのだろう。せっかくだし、何か話すことはないかと彼女らを見て考え込んだ瞬間、
「――！　そ、それは本ですか!?」
「……は？　あ、いや、はい、そうですが……」
本ですか？　と聞かれ、リーが一瞬戸惑いを見せたが、直ぐに気を取り直した様に頷く。
ハウゼルも質問のおかしさに自分で気づき、改めて問いかけようと言葉を作る。
「あっ、ごめんなさい……！　どうみても本ですよね……その、私、レオンハルトさんに勧められて読書に興味が湧いてまして……良ければその本が何なのか、教えて貰えませんか？」
「！　――ほう？」
「！　へぇ……？」
すると問いかけられたリーが眼光を鋭くし、隣にいるペールが意味深に笑みを浮かべた。
急な雰囲気の変化にハウゼルが微笑を浮かべたまま、首を傾げていると、最初に答えを返したのはペールの方だった。
「いやぁ～、さすがはハウゼル様！　趣味が良い上にお目が高いですよう！」

「正しく……！　この本は、私が聖書と崇め、何度も読み返してしまうほどに素晴らしい本なのです……！　読み応えのある重厚な物語は、時に涙、時に笑い、時に熱く、童心を思い出させながらも、大人でも楽しめる！　特に！　主人公が！　主人公がとても格好良く……私もその方を敬服しています！　そんな、千年以上続く超大作にして最高傑作なのですッ!!」
「そ、そうなんですか……？」
　急に豹変した様なリーの熱い語り口調に、少し押されたものの、ハウゼルはそれを聞いて胸を高鳴らせた。
　どきどき、わくわく。と、いった感じで、ハウゼルが微笑を浮かべ、想像しながら期待してしまう。
　読書に嵌ったばかりのハウゼルは、もうそれを聞くだけで読みたくて堪らなくなってしまうのだ。
　うずうずと貸して貰おうかを悩むハウゼルに対し、ペールが横のリーの勢いを若干抑えながらも、懐から赤い符丁の本を取り出し、
「ええっと！　そんな感じです！　なのでもし宜しければ、ハウゼル様も、この本をお貸ししますので――」
「――借ります！」
「そ、即答!?　まあでもいいですよう！　ペールちゃんは器が大きいですからね！」
　と、子供の様に目を輝かせながら迫ってくるハウゼルに、ペールがまた押されそうになりながらもハウゼルにそれを渡す。そしてその後の言葉に、ハウゼルは更に喜びの気持ちを上昇させる。
「はいどうぞ！　せっかくですし、それはハウゼル様に差し上げます！」
「！　い、いいんですか!?」
「はい！　その本、この城にはいっぱいありますしね。続きもありますので、図書室で探してみるのもいいかもですよう。欲しければ、また差し上げますので」
「っ、ありがとうございます！　大切にしますね！」
　と、ハウゼルは受け取った赤い本を、レオンハルトから借りた本と

共に大事に胸に抱え込む。表紙に書かれていたタイトルは、
……〝剣王伝〟。一体どんな本なんでしょうか……！　楽しみです……！
折角貰ったのだし、今借りているものが読み終わったら直ぐに読もうと思う。
城の者は皆持っていると言っているし、ペールやリーだけでなく、きっとレオンハルトも知っている本なのだろう。
後でこの本の感想も語り合いたいなぁ、と、ハウゼルはその本を大事に抱き抱えた。

「――こ、こうなったら……あいつの弱点を探ってやる……！」
と、城の柱から顔を出し、ある一点を見つめ続けているのはラ・サイゼル。
彼女は、妹を拐かしている疑惑があり、とても危険な奴だと思っている魔人レオンハルトの弱点を見つけてやろうと息巻いていた。
……どんな奴でも、弱点の1つや2つくらいあるらしいし、それを突けば……。
――倒せるかもしれない。
――いや、やっぱ無理かもしれない。
2つの想いがサイゼルの中でせめぎ合うが、妹の為にも危険な相手は倒した方がいいはずだと、
……っ、そ、そうじゃなくて……あたしがやりたいからやるだけだから……ついでに、あの子も助けてあげようかなーって……。
内心ですら言い訳を行いながら、首を振って気を取り直すと、サイゼルは視線の先のレオンハルトに視線を向ける。
幸いにも、今日はレオンハルトに用事があるらしく、自分達の教育はお休みらしい。
ハウゼルなどは自主的に勉強しているだろうが、サイゼルにとっては、何もしなくていいお休みなのだ。
故に、サイゼルは今日、レオンハルトを尾行しようとしていた。

「と、とにかく……何か見つからないか――あっ！」
早速行動しようと気合を入れ直したサイゼルの視線の先、レオンハルトに動きがあった。
城の玄関、城門から出ていこうとする動きであり、つまりは、
……が、外出……そ、外、かぁ……。
まさかの外出。その事実に、サイゼルは二の足を踏む。
何しろ、サイゼルは魔人となって、記憶の上ではこの前の外出が初めてであり、
……あ、あたしって、外に出てもいいんだっけ？
何かまだ駄目だった気がするし、何も言われてないような気もする。
そうでなくても、未だ勝手がわからない身として、外出のハードルは結構高く、
……多分、大丈夫よね……。
いけるはずだ。
何しろ自分は魔人。そこらの生物と比べてもかなり強い力を持つのだ。特に危険はないはず。
無敵結界という魔人に備わった便利なものがあるし、基本的に怪我や危ない目には遭いっこないはずだ。
同じ魔人とかであれば打ち消しあうので働かないらしいが、
……ま、ここはあいつの街だって言ってたし……早々他の魔人になんて会わないでしょ。
他にどんな魔人がいるかはまだ分からないが、魔人の中でもかなり立場が高く、強いらしいレオンハルトのお膝元であれば、魔人がいきなり喧嘩を売ってくることもあるまい、とサイゼルは判断する。
それ以外であれば何度も言うように、無敵結界があるのだから危険な目には遭わない。
最悪、自分は飛べるのだから飛んで逃げればいいのだ。
危険はない。だから大丈夫。
そう信じて、サイゼルはこっそりと窓からレオンハルトを追いかけた。

しかし――
「あ、あれ？」
外に出て追いかけ始めて直ぐに、サイゼルはレオンハルトを見失った。
街の外に出ていった様だが、どこにも見当たらない。
軽く飛んで上から見渡して見るも見つからず、
「ど、どうなってるのよ……もうっ！」
最後に見かけた場所に再び降り立ち、辺りを探す。
折角尾行して弱点を探そうとしたのに、とサイゼルは口にしかけたところで、
「――俺に何か用か？」
「ひゃああぁぁぁああああ!?」
サイゼルは背後からの突然の声に、飛び上がる勢いで悲鳴を上げた。
何だ、と軽く距離を取り、背後を振り返ると、
「っ……れ、レオンハルト……」
やはり――レオンハルトだった。
一応は見知った相手だったことに対し、若干安心するような、やっぱり危ない様な、矛盾する気持ちが渦巻いてしまう。
だが、
……ど、どうしよう。ここで、弱点見つけるために尾行してます、なんて言ったら……こ、殺されるんじゃ……！
目をグルグルと回す勢いで動揺しつつ思考を回し、サイゼルは何とか誤魔化さないとと口を回そうとする。
こちらを鋭い目で見下ろすレオンハルトに対し、サイゼルは、
「……な、中に……」
「……中？」
レオンハルトが訝しむ。サイゼルはそれに怯みながらも続けた。
「し、城の中に籠もってばっかだと息が詰まるから……あ、あたしも連れていきなさいよ！」
と、強気に言ってみた。が、

「……」
レオンハルトが無言となり、辺りに静寂が訪れる。サイゼルは叫び出したい気持ちになった。
……あ、あたし的には結構良い言い訳だと思ったんだけど、やっぱり駄目っぽいーーー!?
こう言っておけば、合法的に秘密というか、弱点を探るために付いていっても問題ないと思う名案な気がしたのだが、レオンハルトが反応を返さない辺り、サイゼルはそれが失敗したのかと不安になる。
だが数秒、間を置いてレオンハルトが口を開くと、
「……まあ、別にいいが……付いてきても面白くないぞ?」
「! べ、別にいいわよ! 暇潰しなんだから!」
「……そうか。じゃあ、付き合って貰うか」
と、レオンハルトは息を吐きながらも頷き、先を行き始めた。
それを見て、
……な、何とかなったー!? え、ほんとに!?
まさか今の何とも言えない言い訳が通るとは思ってもいなかったが、通ったのなら万々歳だ。
これで合法的にレオンハルトの弱点を探ることが出来る。
……これなら、何とかなるかも……。
凄い頭が良いのかと思ったが、思ったよりも馬鹿なのかもしれない。
もしくは人を信じやすいタイプなのか。
「……何をしてる? ついてこないのか?」
「っ、付いていくわよ……」
「……まあ、いいが……出来るだけ急ぐからな」
と、レオンハルトは言うなり駆けていってしまう。サイゼルは慌ててそれを追いかけた。
……は、速っ!? と、飛んでるのに追いつけないんだけど……!?
レオンハルトが地上を駆ける速度に、サイゼルは飛行して追いかけているのだが――追いつけない。
というかそれほど急いでどこに行くのかと疑問を覚えたが、

「――あー、もうっ！　何なのよあいつ……！」
サイゼルはそれを考える余裕がなく、レオンハルトを追い続けた。

――そうしてしばらく、
「……着いたぞ」
「……っ、はぁ……そ、そう……」
レオンハルトとサイゼルは、ある場所に到着して、足を止めた。
サイゼルは全速力で飛行を行い続け、何とか付いていくことが出来たが、それよりも、到着した場所が訳わからないため、思わず素の疑問をぶつける。
「というか、何なのよここは……？」
「ここか？　ここは、大陸の北側。いわゆる、豪雪地帯だな。雪が積もってるだろう？」
レオンハルトが周囲を指して言うように、そこは一面が白の、雪が降り積もった光景が広がる大地だった。
周囲には生物どころか、草木の一つも生えていない。
あるいは、生えてはいても雪に埋もれてしまっているのか。
軽い吹雪は止む気配はなく、それどころか時折強い風が吹いて、激しくなる兆候すら見せている。
周囲は極度の低温であるはずのその場所にやってきたことに、サイゼルは微妙な表情で再度の質問を投げかけた。
「そんなの見れば分かるけど……何のために来たのよ？」
「ここは俺の修行場の一つでな」
「修行場？」
ああ、とレオンハルトが頷く。軽く首を鳴らしながら、
「生物が生きるのに、これほど適していない環境はないからな。並の人間や魔物なら、この場所に数分いるだけで凍死する可能性だってある。――そしてだからこそ、良い修行場所になる」
「……ふーん……確かに何もないけど……」
辺りを見渡しながら、やはり何もないことにサイゼルは納得する。

しかし、
「……でも、涼しくて過ごしやすそうなんだけど……」
「……そりゃお前はそうかもな」
サイゼルにとっては、平気かつ、過ごしやすい場所であった。
多少、〝涼しいかも？〟とは思うが、寒さは感じない。
氷の力を身に秘めるサイゼルにとっては、むしろ快適に感じてしまうのだと、サイゼル自身も何となく、実感はないが思い至り、
「……普通は苦しいってことね。よく分かんないけど……」
「現に俺は寒い。――が、だからこそ修行には良い場所だ。前に強くなりたいからと連れてきてやった奴――魔人も、震えるくらい嬉しがってたし、叫びながら剣を振ってくれたくらいにはな」
「これだけ涼しいし、嬉しがるのも無理ないってことね」

――とある魔人の城。
「――はっくしゅんっ！　くそっ、最近寒くなってきたな……それとも、誰かが俺様の噂でもしてんのか……？　嫌な予感がしやがる……」

「……そうじゃないけどな。でもまあ、嬉しがってたのは確かだったろうし、機会があればまた連れてきてやるか……」
「よく分かんないけど、魔人って、変わってる奴が多いんだ……」
自分にとっては快適なのでよく分からないが、態々苦しい場所にやってくるなんて、レオンハルトもその魔人も変わってるな、と思うサイゼル。
そして気がつけば、レオンハルトはいつの間にか二メートルを越える長大で細身の剣を空間から取り出して構えていた。
「っ……そ、それって、あんたの……剣？」
「ああ、魔剣オル＝フェイル。俺の愛剣だ」
……な、なんか禍々しくて怖いんだけど……。

サイゼルは寒さではなく、別の意味で背筋を震わせてしまう。
その魔剣の刀身の輝きは、見る者に恐怖を与えるような怪しいものだった。
それを構え、徐ろに目を閉じるレオンハルト。
しばらくそれを眺めたサイゼルは、
……動かないんだけど……。
まさか凍死した？　と思いつつも、漏れ出るような存在感というかオーラは健在だ。死んではいない。
単純に動いていないのだ、と思いながら見続けるが、
……いつになったら動くのよ……？
ぶっちゃけ暇になってきた。
修行と聞いて、どうかと思ったが、その強さの一端でも知れるかもしれないと切り替えて眺めることにしたのだが、こうも動きがないと退屈が過ぎる。
付いてきたのは失敗だったか、と思った直後、
「――サイゼル」
「ひっ！　な、何よ？」
急に声を掛けてきたことで、サイゼルは驚いてしまう。
ようやく動いたかと思ったら動いたのは口だ。何の用だと驚きを誤魔化すために問うと、
「折角だ。俺に攻撃していいぞ」
「――へ？　こ、攻撃？」
攻撃していい、とは何を言っているのか、とサイゼルは固まってしまう。
冗談かなにかかと思うも、レオンハルトは目を閉じたまま肯定を重ね、
「ああ。お前も、ただ待っているのは暇だろうし、どうせなら身体を動かしたいだろう。魔人としての力を振るいたいだろうしな」
「そ、それは……」
それは確かに、そうだと言える。
暇なのは確かだし、魔人としての力がどんなものかと振るってみた

い気持ちもあるのだ。
まだ魔人になって日も浅く、振るう機会も特に無い。
急に扱っても問題ないと思える本能的な確信はあっても、自分で見てみたいという気持ちはある。
それに、それを聞いた瞬間に、むしゃくしゃしていた気分を暴れて発散したいという気持ちが段々と湧き上がっても来る。
しかも相手はその原因ともいえる相手だし、その相手に自分の力を合法的に振るえるなら――
「……本当に、攻撃していいのね？」
言外に、〝こ、攻撃しても反撃とかしてこないわよね？〟と予防線を張っておくも、
「ああ、構わない。全力でやれ」
レオンハルトは遠慮するな、と頷いた。
「――なら」
と、サイゼルは自身の感覚に従い、左手に得物を出現させた。
魔銃、氷結の女神。魔人になってサイゼルの武器として備わっていた得物。
それにサイゼルは、魔力を集中させ、
「――ッ!!」
レオンハルト目掛けて、その引き金を引いた。
瞬間――氷結の女神とその先を中心に、甲高い音が鳴り響いた。
「……！　これが……！」
サイゼルが放ったそれは、この極寒の地に於いても、周囲の空気を更に凍てつかせる白の光線。
収縮された細長い絶対零度のレーザーだ。
高速の射撃であり、直撃したものを、瞬時に凍らせてしまう冷気の光線は、レオンハルトに向かって真っ直ぐに飛んでいく。
サイゼルは初めて自分の力を目の当たりにし、どこか感嘆とするような声の響きを持って、その行き先を見守る。
その力の強さは、魔人として申し分ないものであり、あらゆる生物に勝るというのも確かだと確信出来るものだった。

故にサイゼルは思う。――これなら、勝てるかもしれない、と。
魔人の力を振るい、自覚したサイゼルは、その強さに自惚れかける。
だが、
「――――」
「……えっ」
サイゼルの放ったレーザーは、あっさりと切り払われてしまった。
いとも簡単に。造作もなく。
一瞬何が起こったか分からないほど自然に、レオンハルトはその魔剣を振るい、サイゼルの氷の力を斬り断ったのだ。
しかもレオンハルトは、瞳を閉じたまま、視界に頼ることもなく、それを行っている。
……通用……しない……。
それはサイゼルを、力の高揚から叩き落とすのに充分な威力を秘めていた。
魔人としての本能が、改めて悟る。
敵いっこない、と。
こんなにあっさりと防がれてしまっては、きっと、どれだけ撃っても結果は変わらない。
そして相手の剣は、それこそあっさりとサイゼルを両断してしまうのだろう。
それを幻視し、サイゼルは折れかける。
弱点などあってもなくても、自分では無理でないかと。
だから諦めて、従っていた方が幸せではないかと。
そう思い、サイゼルは銃を下ろそうとして――レオンハルトの言葉を聞いた。
「――どうした？　もっと撃ってこい」
「……それは……」
攻撃しても意味がないのなら、やる意味はない、とサイゼルは躊躇する。
しかし言った。それでもだと言うように、
「まだ一発しか撃ってないなら撃ち足りないだろ？　ここまで付き合

わせたんだ。俺の修行でもあるが、お前も好きに暴れて構わない。お前だって鬱憤が溜まってるだろう？」
「！」
不敵な笑みとともに告げられ、サイゼルは項垂れかけた気持ちと腕を一度止める。
鬱憤なら溜まっている。確かに溜まっている。
ならそれを発散するために暴れろ、とレオンハルトは言うのだ。
「心配せずとも、俺は反撃はしない。弱い者いじめになりそうだからな。それとも……暴れることも出来ないか？」
「っ……この……！」
そこまで言うなら、とサイゼルはレオンハルトに向かって再度引き金を引く。
半ば馬鹿にされるような発言を受けてのことだが、それを込めた銃撃はしかしまたしてもレオンハルトの剣に斬り払われてしまう。
「ほら、もっとだ。もっと連続で撃ってこい」
「……あーもう！」
サイゼルは全く歯が立たないことに対して、馬鹿馬鹿しい思いを感じつつも、もうヤケクソ気味に引き金を引きまくった。
白の光線が連射で、折り重なるようにレオンハルトに向かう。空気を引き裂く音が連続し、同時に空気を斬る音が聞こえる。
やはりと言うべきか、それは通用せずに、しかしレオンハルトは声を上げた。
「いいぞ。段々良くなってきた。力が増してるな」
「っ、こんのお……！」
……上から目線がムカつくわね……！
と、サイゼルは内心で苛立ちながらも引き金を引いて、レオンハルトへの攻撃を加え続ける。
それをひたすら続ける内に、サイゼルはもはやレオンハルトの声が無くとも攻撃を放っていたが、
「ははは、段々良くなってきたぞ……ほら、もっとだ。もっと俺に撃ち込んでこい。お前の力を見せてみろ……！」

「あー！　もう！　知らない！　どうにでもなれっ！」
レオンハルトの声が若干喜びの感情が漏れ出るのを耳にしながらも、それに気づかずにサイゼルはしばらく暴れ続けた。
――そしてそれが数時間、続いたところで、
「はぁ……はぁ……もう、なんなのよ、あんたは……」
サイゼルはとうとう、疲れて雪の上に座り込んでしまった。
どれだけやっても全く通用しない。
そのことに対し、歯噛みするような気持ちがある。
しかし同時に、不思議な爽快感も感じており、
……なんだろう、すっごくすっきりする……。
全力で暴れて、身体の方は若干疲労が溜まっているが、気持ちの方はすーっとしている。
身体を動かすのって意外と気持ちいいのかもしれない、と思っていると、
「はは、もう終わりか」
「っ……化け物……」
不敵に笑みを浮かべて近づいてくるレオンハルトに、思わず悪態をついてしまう。
何気に、気がつけば普通に喋ってる気がしてサイゼルは自分自身に疑問を抱いたが、それを解消するのを待たずに、レオンハルトはこちらに話しかけてきた。
「だがまあ、やれば出来るじゃないか。最初より、大分力が強くなったし、狙いも良くなってたぞ」
「えっ……」
不意に褒められ、サイゼルは座ったままレオンハルトの顔を見上げる。
そこには、普段よりも幾分か感情が分かる――どこか楽しそうなレオンハルトがおり、
「これなら、訓練を続けたら伸びるかもな」
「……そ、そうなの……？」
思わず問いかけていた。

何故か、そのことに対して興味が湧いてしまい、
「まあな。魔人だけあって才能もあるだろうし、磨けば光るだろ。勉強が嫌いなら、強くなってみるのはどうだ？」
「強く……なる？」
サイゼルの疑問にレオンハルトは、ああ、と頷きを入れた。
いつもよりも軽口が多い、不思議な口調で、
「体を動かす方が好きなら、別にそれだけやればいい。無理に勉強なんてしても意味なんてないからな。……それに、お前は姉だし、妹を守るためにも強くなってみるのも良いだろ？」
「っ、べ、別にハウゼルなんて……」
「そうか？　でもまあ強くなるに越したことはない。魔人なら強さは絶対必要だしな」
「……そう、なんだ……」
サイゼルはレオンハルトの言葉を聞いて、何とも言えない気分になる。
身体を動かして疲れ果てたからか、内側にすっと入り込んでくるものだ。
強くなって、妹を守る――というのは別にそんなつもりはないが、妹より強くなるというのは、小気味いいかもしれないと、
「……じゃ、じゃあ、こうやって好きに暴れてもいいの？」
と、サイゼルは試しに聞いてみる。
強くなるために戦うことというか、暴れたりすることが必要なら、それをしてもいいのかと。
だが、レオンハルトは顎に手を当て、
「あー……まあ、無差別に暴れられるのは困るが、魔人は自由だからな。外に出て戦うことを止めることはしない。まあ、こうやって修行の時や暇な時なら俺が付き合ってやってもいいが……」
言われ、サイゼルは少し考え込む。
そして、
「……じゃあ、たまになら……あんたに攻撃を加えに来てもいいってこと？」

「ハッ、変な頼みだな。まあ、楽しいからいいぞ」
「……そう」
軽く笑うレオンハルトの許可を得て、サイゼルはどこか気が抜ける感覚を得た。
思うのは、
……そうよ。姉なんだからハウゼルよりあたしの方が強いに決まってるし……でも、一応特訓はしといた方がいいわよね。こいつとこうしてれば、弱点が分かるかもしれないし……。
妹への対抗心や、レオンハルトへの対抗心（？）。それに、身体を動かす方がマシだという想いから、サイゼルはそれを自分の中でも納得する。
そしてしばらく休憩しようと力を抜く中、もう一つ思うのは、
……こいつ……いつもとちょっと感じ違うのよね……？
修行が始まって、しばらくしてからやたらと軽い感じになったが、
……でもまあ、この方が緊張しないで対等っぽく喋れるわね……。
と、レオンハルトの様子を見て、〝こっちの方がいい〟と思ったが、城に帰る頃には普段通りに戻っていたため、サイゼルは首を傾げることになるのであった。

嵐の前の静けさ

レオンハルトの城で世話になっている二体の魔人、ラ・サイゼルとラ・ハウゼルの姉妹の新人教育は、概ね順調に進んでいった。

元々、魔物界のルールや傾向、魔人としての生き方や、魔物や魔軍の知識さえ最低限頭に入っていれば問題ないので、教えることも少ない。

今まで魔人レオンハルトは魔人筆頭として、多くの魔人に魔人としての心構えの様なものを教えてきたが、殆どの魔人はやはり我が強く、自分のやりたいようにやるという連中ばかりだったので、教育は最低限。それこそ1日、2日、教えることを教えたら後は好き勝手し始める者もいた。

魔人は自由であり、魔王の命令以外では縛られない。一応はそうなっているため、レオンハルトとしても、聞きたくないと言うのなら聞かせる必要もない。本当に最低限出来てさえいれば、後は上から命令して指示するなり、追々憶えていったりすればいいのだ。

なので、今まで教育をしっかりと受けた魔人はジークくらいのもので、それ以外の魔人はレオンハルトの教育は最低限で、後は自分なりに経験や失敗を重ねて憶えていくのだ。

だが、この姉妹に関しては、きちんと教育が進んだ。

妹のハウゼルは、元々真面目なので勉強にも熱心に取り組み、レオンハルトの言うことも素直に聞くため、それは不思議ではない。

しかし姉のサイゼルの方も、そこまで邪魔をしたり逃げ出すこともなかった。

というのも、日々の中でレオンハルトと接していく内に、

「……ひょっとしてあいつ……悪い奴じゃない……？」

――という思いが浮かんだためだ。

考えて直ぐに、まだ早計だと確信こそしなかったものの、自分や妹に全く危害を加えるそぶりもないことから、実際に危ない奴かはともかく、大人しくしてる分には何も問題ないという信用が持てていく。

更には、

「――ほら、もっと撃ってこい。そろそろ一発くらい当ててもいいんだぞ？」
「っ、い、言われなくても当ててやるわよ！」
時折、レオンハルトの鍛錬に付いていき、ちょっとした訓練に付き合ってもらうようになった。
勉強があまり好きになれず、代わりに妹よりも強くなればいい、とアドバイスの様なものを受けてから、サイゼルは何となく気が向いたのと、ハウゼルへの対抗心から積極的にそれに付いていくようになる。
しかも、
「最近は動きも良くなってきたな」
「そ、そう？　……まあ、当然よね」
「ああ、魔人としては申し分ないな。まあ、俺にはまだまだ敵わないが」
「一言多いのよ！　ふん、そのうち、あたしも強くなって……」
「強くなってどうするんだ？」
「そりゃ、あの子をま――じゃなくて……あ、あの子を越えて……」
「越えてどうするんだ？」
「……ぎゃ、ぎゃふんと言わせる」
「……そうか。まあ、頑張れよ」
「な、なによ！　なんか文句でもあるの!?」
「いや？　ただ、なんか可愛いこと言うやつだな、と思ったくらいだ」
「う、うううう、うっさいっ！　何が、か、可愛――」
――と、この様に、鍛錬の合間や、行き帰りの最中に会話を行うことで、これくらいには普通に会話が出来るようになった。
そしてやはり、日が経つに連れて、ハウゼルの言う通り、悪いやつでもないし、思ったよりも話せると思えてきたものの、
……い、今更そんなこと……。
ハウゼルにあれだけレオンハルトは危ないと言い続けて、しかも色々と邪魔をしてきたため、今更そんなことは言えないと、サイゼルは未だに当初と同じ様な態度を続けていた。

勉強や食事などでハウゼルと会った際には、〝あんな危ない奴に近づいちゃ駄目よ〟とか、〝新人教育ってのが終わったらさっさと出ていくんだからね！〟などと言っている。
因みに、自分がレオンハルトの特訓についていってることはハウゼルには内緒にしている。
ハウゼルへの対抗心もあってか、そういうことをしているとは思われたくなかったし、こっそりと強くなってハウゼルよりも上だということをそのうち見せつけてやろうとも考えていた。
魔人には頭脳よりも力の方が重要だと聞いたし、ハウゼルはよく本を読んだりして勉強している様だが、どれだけそっち方面で優秀でも関係ない、と自分に言い聞かせているのだ。
――そして反対に、ハウゼルは、
「レオンハルトさん、レオンハルトさん。この本、読みましたか？」
「ん？　ああ、それなら読んだぞ」
「！　面白かったですよね！　最後のネタバラシのシーンまでの組み立てや台詞回しがとても良くて……！」
「〝それは違わない！〟とか〝真実はいつも一つとは限らない〟とかな」
「はい！　〝ばっちゃんの名にかけて！〟とか、〝駄目だ駄目だ、全然駄目じゃない！〟とかも、私は好きです！」
「近代ミステリーの礎を築いたといっても過言じゃないからな……まあ、それを読んだなら、次は――」
と、以前よりも更に読書にのめり込み、殆ど毎日の様にレオンハルトと本の感想を言い合っていた。
レオンハルトの方は忙しいこともあって毎回図書室まで付き合えるわけではないが、それでもおすすめの本を紹介してもらい、ハウゼルはそれを読んで再び感想を言いに行く。
ハウゼルのそれは最早完全な趣味となり、日課となっていた。
本を読み終わると直ぐに、隣で本を読んでいるレオンハルトの服の裾を掴んで控えめに引っ張り、本の感想を言い合い、それが終わればまた本を読むといった日常だ。

だが、本以外にも趣味を見つけて共有しあったことで、仲良くなってきたハウゼルはそれ以外にも雑談をしたりすることもある。
そしてハウゼルが思うのは、
……やっぱり、良い人です。
レオンハルトと接すれば接するほど、彼が優しい人であることがよく解る。
城の者達、街の魔物兵からも慕われている様子は過ごしていればよく解るし、直接話すことでそれを実感してもいる。
魔軍の仕事についても丁寧に教えてくれるし、やっぱり良い人なのだと。
だからそれだけに、
……姉さんは、なんでレオンハルトさんの事をあんなに嫌ってるんでしょう……？
姉の行動や態度に疑問を抱いてしまう。
サイゼルにだって、レオンハルトは優しく接しているはずだし、だからこそあんなに邪険にする必要はないはずなのだ。
だと言うのに何度も、〝あいつは危ない奴だから〟と言ってくるのは、ハウゼルとしてもムッとしてしまうし、心に不満が積もっていく。
喧嘩しそうにもなるが、そういう時はいつもレオンハルトが直前で止めてくれるため、何とか喧嘩しないで済んでいたが、間の空気は未だに微妙な状態で保たれていた。
ハウゼルにとって、悩みという悩みは、まずそれが一つ。
後、地味に困っていることがある。それは、
「それとハウゼル。この間貸した本は読んだのか？」
「っ！　あ、あれは……その……よ、読みましたけど……」
「……？　あまり面白くなかったか？」
「い、いえいえ！　そういうわけではなくて……！　た、ただちょっと……」
と、レオンハルトが貸した本の感想を聞こうとして、しかしハウゼルの対応に訝しむ。
ハウゼルは顔を赤くし、困ったように眉根を寄せていた。

というのもその本は、ハウゼルにとっては苦手というか、読むのに苦労する本であるからだ。
……あ、あれの感想をレオンハルトさんの前で……そ、そんなの無理です……！
ジャンルとしては――恋愛小説だ。
男女が恋仲になるまでの過程を書いたり、その後の甘々なやり取りを書いたりする小説は、ハウゼルにとって刺激の強いものであった。
手を繋いだりする描写だけで胸がドキドキとしてしまうし、初めてキスの描写を見た時は心臓が破裂しそうなほどに脈打ち、身体が熱くなってしょうがなかった。
恋愛描写だけでドキドキしてしょうがないのに、恋愛を主軸にするような本の感想を、他人に――それも、男性に言うなんて恥ずかしすぎる。
それも相手がレオンハルトとなれば、特別恥ずかしい。
なのでレオンハルトからの感想の追求を誤魔化し続けているのだが、
……っ、次は、この間ペールさんに勧めてもらった本を……。
しかし一方でハウゼルは、恋愛描写のある小説をレオンハルトには内緒で読み続けていた。
初めて読んだ時から、恥ずかしくてしょうがなかったが、それでも不思議と読むことが止められず、気がつけば図書室にある本からそういう類の本を選んで借りていってしまう。
しかもその場面にレオンハルトの使徒であるペールに見られ、一時はどうなるかと思ったが、内緒にしてくれると約束してくれた上に、おすすめの恋愛小説を貸してくれるとのことで、お世話になっていた。
それからは本の調達にも困らないが、過激な描写を見ることも増えたせいで、ハウゼルは油断するとそれを思い出して身体が熱くなってしまう状態に陥っていた。
レオンハルトと会話する時なども、意識してしまうと小説の描写を思い出したりしてどうしようもなくドキドキとしてしまう。

だが、頭を振ったり、腕をつねったりしてどうにかこうにか意識を戻したりして、ハウゼルは日々を過ごしていた。

――そしてそんなある日のこと。サイゼルと一緒にいる場で、レオンハルトからこんなことを言われた。

「そろそろ、教育も終わりだが……二人はどこか希望の場所はあるか？」

「！」

「！」

希望の場所。それは言うまでもなく、人間牧場の運営の為に、担当の牧場をどこにするかという問いだ。

それを問われ、ハウゼルはその瞬間になって一瞬悩んだものの、結局は前々から考えていたことを恐る恐ると口に出した。

「……その……もし良ければ、この街の……すぐ隣にある牧場が良いんですが……」

「構わない。そこは俺がついでに担当してる場所だからな」

許可を貰い、その上でハウゼルは続きを口にした。

「……なら、そこを担当しますので……この城に住まわせて貰ってもいいですか……？」

「！　それは……」

レオンハルトが何とも言えない表情で言葉を迷わせたが、ハウゼルは再度お願いした。

「お願いします。その……こ、ここの居心地が良くて……皆さんと別れるのも寂しいですし……で、出来ればでいいんですけど……」

と、告げたところで、レオンハルトは軽く息を入れた。

そして僅かに困惑を匂わせながらも、どこか諦めたように、

「……ああ、構わない」

「！　いいんですか!?」

「そこまで遠くもない場所だからな。城からでも通えるだろう」

レオンハルトが理由付きで頷きを見せる。

それを聞いて、ハウゼルは自然と嬉しくなって笑みを浮かべた。
だが、横のサイゼルは、
「……それで、サイゼルはどうするんだ？　空いてる場所ならどこでも構わないが――」
「……あ、あたしも、城に近い場所でいいわよ」
「……ん？　それは……」
レオンハルトがサイゼルの返答に眉を顰める。ハウゼルも首を傾げた。
だがサイゼルは構わず、もう一度声を発した。
「あたしも、まだここにいるから！　は、ハウゼルも危なっかしいし、引っ越すのも面倒なのよ！」
と、いつものように強気で言うと、ハウゼルが僅かに眉を立てた。サイゼルに視線を向け、
「……姉さん。それはレオンハルトさんが決めることでしょう。なのに姉さんが勝手に決めるなんて……しかもそんな言い方……」
「べ、別に良いでしょ。ほ、ほら、どうなのよ？」
サイゼルの問いを受け、レオンハルトがまたしても眉間に皺を寄せる。
その表情の変化に、サイゼルが微妙に不安そうに表情を歪めたが、
「……まあ、いいだろう」
「っ……ほら！　レオンハルトがいいって言ってるんだから、ハウゼルが言うことでもないでしょ？」
「……そうだけど……」
ハウゼルはその言い方に不満がまだあるのか、何かを言いたそうに表情を少し歪めている。
そのやり取りを見て、レオンハルトは額を掌で押さえた。
「……どのみち、最終的な報告はここまで送られてくるからな。それが省けると思えばメリットの方が……」
そしてぶつぶつと仕事についての考えを小声で口にしながら、姉妹や他のことについても頭を悩ませた。
かくして、二人の担当も決まり、順調に日々を過ごしているように

見えた矢先。
――とうとう二人の喧嘩は勃発した。

――その日は、レオンハルトにとっての休日であった。
多忙を極めるレオンハルトと言えども、休日は存在する。
休みを設けているというよりは、仕事を集中的に終わらせておいて、自力で休日を捻出するという強引な方法ではあるが、それは確かに休日であった。
そしてそういう日は――当たり前であるのだが――決まって仕事以外の事を行う。
大体は鍛錬に出かけたり、私室に籠もったり、色々なことをするのだが、
「レオンハルトさん、今日は魔王城に行ってるんですね……」
ハウゼルが城の廊下を歩きながら、先程メイドに聞いた話を口に出す。
レオンハルトの休日を聞いて、自分に暇があったので、今日は一緒に本を読もうと誘おうとしたのだが、それよりも早く、レオンハルトは魔王様に呼ばれたとかで城へと行ってしまっていた。
なので今日は、いつ帰ってくるかは未定。とはいえ、魔王城に朝から行くときはお昼や夕方には帰ってくることもある。
場合によっては夜遅くになる時もあるが、突発的な呼び出しの際は意外と早く終わるのだとレオンハルトは以前言っていた。
なのでハウゼルは、レオンハルトが帰ってきたら、一緒に読書しようと誘おうと思っていた。
この間も、次は一緒に読んだことのない本を探して読もうと約束したし、
……楽しみだな……。
早く帰ってこないかなぁ、とハウゼルはレオンハルトの帰りを心待ちにする。
それまでは一人で読書するなどして時間を潰そうかとも思う。

前にもらった剣王伝もまだ途中なのだ。かなりの長編で巻数が多い為、じっくりと読んでいるのだが、これがとても面白く、色んな興奮や感動を与えてもらえるので、続きが楽しみな本の一つだ。
……特に、主人公が格好良くて……。
主人公にとても魅力があって楽しいし、主人公とヒロインの恋愛描写もドキドキさせてくれる。
しかし、誰かに似ている気がするが、それが誰かまでは分からない。
そんなことを考えていると廊下の曲がり角まで到達し――
「っ！」
「っ！」
そこから出てくる相手と、ぶつかりかけた。
「――あっ、ごめんなさい。よそ見をして――」
「……！　ちょっと、気をつけなさ――」
と、お互いに顔を上げて、相手の顔を見る。
するとそこには、
「……ハウゼル」
「……姉さん」
自分の姉妹がいた。

サイゼルは城の廊下でぶつかった妹を見て早速、声を送った。
「鈍くさいわね。ぼーっとしてたら危ないわよ」
と、危ないから気をつけなさい、と言った意味の言葉を、サイゼルが自分流で強気に口にする。
するとハウゼルは僅かに目を細め、
「……姉さんこそ、上の空のまま歩いていたんじゃないですか？」
「は、はぁ!?　そんな訳ないじゃない！」
……な、何で解るのよ!?
嘘であった。
サイゼルは先程、廊下を歩く際に――〝今日はレオンハルトが休日だし、帰ってきたら鍛錬に付いていってやろう〟と考え、上の空で

あった。
　レオンハルトが鍛錬に行くとは限らないのだが、そういう時は決まってサイゼルの方から――〝あ、あー。今日はなんか暴れたい気分だから、こ、攻撃させなさいよ〟という下手くそな誘い文句でレオンハルトを鍛錬に行かせるのだ。
　攻撃させなさい、とかいう生意気な誘い文句は、どこぞのリスの魔人が聞いたら自殺行為かと思い、即座に洞窟に籠もってレオンハルトが暴れ終わるまで震え続けるほどのものだが、初めて会った魔人がレオンハルトなせいか、彼に対しては強気で通すことが出来る様になっているサイゼルに、そんなことを考える頭は存在しなかった。
　危機意識は有っても頭は残念なので、肝心な部分で失敗することが多いサイゼルの行動だが、それが逆に、〝あのレオンハルト様に恐れることもなくタメ口で……ひょっとして、サイゼル様も相当の実力者なのでは……？〟という噂が魔物達の間で広がっているとかいないとか。それよりも、〝最近、レオンハルト様が美女魔人姉妹の二人と良い仲らしい……〟という噂の方が確実に広がっているのだが、そんなことは当人達は知らない。
　ともかく、サイゼルは今日はレオンハルトと鍛錬に行く予定を考えて、ぼーっと歩いていたのである。
　だがそれを悟られるわけにもいかずに、サイゼルは誤魔化そうと話題を探し、そしてあることを口にした。
「そ、それより、あんたは今日何するのよ？　ま、あんたのことだから何だかよく分からない本を見るんだろうけど」
　サイゼルは珍しく休日の話題を出してみた。
　というのも、レオンハルトが帰ってくるのが遅いようなら、たまには妹と過ごしてやろうかと思ったのだ。
　……あ、あくまでも、この子が一人だと可哀想だし？　姉として仕方なく面倒を見てやるのよ。
　と、納得させ、サイゼルはハウゼルに問いかける。
　しかし、その答えは、
「……今日はレオンハルトさんと一緒に本を読む予定です」

「っ、レオンハルトと？」
サイゼルは、ハウゼルが嬉しそうに言うその言葉にどきりとし、同時に変な気分が湧いてくる。
それは、
……レオンハルトのやつ、またこの子と……。
ハウゼルと一緒に過ごしていることに対する羨望や嫉妬のようなものを感じる。
それに胸の中がもやっとするのが、いつものサイゼルの心の動きだ。
しかし今日は、もう一つ思ったことがあった。
それは、
……今日は、あたしがレオンハルトと過ごす予定なんだけど……。
という思いだ。
そのことに対しサイゼルは、不思議とイラつきを感じさせる。
自分がやろうとしていたことを、予定を、優秀な妹に奪われるいつもの対抗心がまずひとつ。
そして、それと似た想いとして、もうひとつが――
「……ふーん。でも、それは無理なんじゃない？」
「え？　どうしてですか？」
ハウゼルが純粋に疑問を抱いた様に問いかけてくる。
それに対し、サイゼルは直情的に、純粋に、言いたいことを告げた。
「だってレオンハルトは今日――あたしと過ごすんだから」
「……は？」
それは、妹に対する別の意味での――軽い〝嫉妬〟だった。

姉妹喧嘩

魔王ジルの居城である魔王城の室内では、もはやこの四百年あまり、日常となった光景が広がっていた。
「んっ♡　んっ……っ♡　あくっ♡　んくっ♡　くく、気持ちいい、か……？」
「っ……はい……」
薄暗い部屋の中。ベッドの上で、肌を重ねる男女の姿がある。
「あぁっ♡　くっ♡　んっ♡　な、なら……もっと、っ、腰を、振れ……♡」
柔らかいベッドに身体をうつ伏せにし、頭を下にして、その頭よりも尻を高く上げて命令し、喜悦に満ちた快感の喘ぎを漏らすのは、魔王ジル。
「分かりました……！」
そしてその後ろに周り、そのジルの細い腰を両手で掴み、快感に耐えながらも美尻に腰を押し付けて強く揺らしているのは、魔人レオンハルト。
休日に呼び出された魔人筆頭である男は、誰もが羨むような絶世の美女を抱き、その命令を受けて剣を用いるため、腰を振って快感を感じながらも、内心では溜息をつきたい気分となっている。
……色んな意味で、慣れてしまったな……。
この光景、この状況は、レオンハルトにとってほぼ日常に近いものであった。
ジルは気が向いたら直ぐにこうやってレオンハルトを襲うため、レオンハルトとしても〝慣れ〟が来るのは必然だった。
「あっ♡　くふっ♡　今、中で大きく……なって……♡　っ、震えたぞ？　はぁ、ん……♡」
しかし、快感が相変わらず強いことには変わりない。
変わりないが、我慢の仕方や、勝手が分かってきたと言うべきか。
一体どのようにすればジルが満足し、己に与えられる強すぎる快感を制御し、どのように心や感情の調整を行うかが分かってきている。

ジルの命令や指示には基本的に、やり過ぎるくらいに従っており、その際には素の感情を出来る限り殺し、仕事という意識の元で行う。
女に抱く情欲を一定で差し止めながら、己の性感も殺さずに保ち続ける。
行為には精神的な要素が重要であり、充足感などの満たされるような気分や、一定の興奮、情欲が無いと、性感はあまり感じずに、萎えることになるのが常だが、その点、ジルの美貌はそこに関しては考える必要がなく、便利であった。
「レオン、ハルトっ……♡　もっと、強く、ひゃっ♡　強く、貪れ……っ♡　敬語、も……んっ……やめ、ろ……」
新たな命令であり、いつものお決まりの命令を受けて、レオンハルトは仕事としてきちんと主のオーダーに応える。
「……分かった……いくぞ、ジル……！」
「〜〜〜っ、んんんっ♡」
ジルの腰を強引に掴んで引き寄せ、顔を近づけて耳元で囁いてやるように名前を呟くと、ジルの身体がビクンッと震える。
「っ、はぁん……♡　ほ、らぁ……早く、突け……っ♡」
「っ……ああ……分かっている……」
ジルが入れられたまま、左右に尻をふりふりと動かす。
その後ろから見る、ジルの艶めかしい背中から腰のラインが、弓なりに反らされたことで強調され、そのスベスベ肌と、もっちりした丸い臀部の柔らかさが、すりすりとこちらの下腹部に押し付けられている。
自身の剣が埋まっているそこは、握られているかのように強く締め付けており、きゅうきゅうと蠢いている。
ベッドの間で潰れ、横から見える美巨乳が揺れる様や、蕩けて性欲を味わうことを望んでいるジルの表情。
蠱惑的に男を拘束し、萎えることを許さないといった様なジルに美貌は、レオンハルトにとっては都合の良いものだ。
何しろ――心を防御しながらも、魔王の命令に応えるために、身体は反応させることが出来るのだから。

「あぁ、あぁあああああっ♡」
「っ、っ……！」
ジルの命令通りに、レオンハルトは強く剣を突きこんで満足させてやろうと試みる。
並の男なら頭を性欲に支配され、だらしなく涎を垂らし、この雌を自分のものにしてやろうと表情を歪めながらも、しかし呆気なく敗北してしまうほどの淫らな光景、自分の状況に、しかしレオンハルトは眉間に皺を寄せ、息を漏らすだけに留めた。
こちらの剣を敗北させようとしてくる様々な攻撃に、しかし剣は、より一層肥大化して、その攻撃を跳ね飛ばす。
ジルの耐久力はかなり高く、満足させるためにはかなりの手練手管が要求されるが、レオンハルトも１５００年以上の経験を持つ男である。
その技術に関しては並の男が束になっても太刀打ち出来ないほど。
まさに王の剣だ。たかだが数百年如きの経験で勝てるものかと、レオンハルトは剣を振るう。
それに、さっさと相手を敗北させ、満足させなければ、レオンハルトは休日がこれだけで消費されて台無しになってしまう。やりたいこともやるべきこともいっぱいあるのだ。
それは自分の趣味や修行であったり、身内との交流であったり。
特に最近はハウゼルが読書に誘ってきたり、サイゼルが攻撃させろと行ってきたりで、レオンハルトとしても少し新鮮な交流を楽しんではいる。
色々と不安な二人だが、今のところはよくやってくれているようで良かった。
しかし、二人の間の空気に関しては、微妙なものが続いていたりするので、長く空けていると不安になってくる。
……大丈夫か……？　喧嘩していなければいいが……。
なので、出来れば早く戻りたいと、レオンハルトは二人の女魔人の事を憂いながら、ジルへの突き込みを激しくした。

紅魔城の廊下の中央で、二人の姉妹は対峙していた。
その妹の方――ラ・ハウゼルは、姉のラ・サイゼルが告げた言葉の意味がよく分からず、唖然と表情を固まらせてしまう。
その言葉の内容を理解しようとして……出来ない。
今しがた、自分の予定を口にしたばかりだったし、そもそも姉のサイゼルはレオンハルトの事を嫌っており、避けているはずだ。
自分にも、何度も近づかないようにと口うるさく言っていたのだ。
「……どういう意味なの？　姉さん」
だからどういう事なのだと、ハウゼルは一度冷静に言葉を返す。
しかしサイゼルはそれを聞いて、堂々と胸を張って頷き、
「そのままの意味よ。今日は、あたしが……レオンハルトと――レオンハルトに、付き合ってあげる日なの」
一度言い直しながらも、サイゼルはハウゼルにはっきりと告げる。
「だから今日は駄目よ」
今日は自分の時間なのだと、そう告げてきたのだ。
そしてハウゼルはその言葉に、少なからず驚きを覚えた。
「……ね、姉さんはレオンハルトさんのこと、嫌いなんじゃないの？　それに、付き合ってあげるって……」
「べ、別にそれは……ど、どっちでもいいでしょ。付き合ってあげるっていうのは……まあ、ちょっとした模擬戦みたいなものよ！」
「模擬戦……それって、もしかして前から……」
「……そうよ。だから、今日はあんたは我慢しなさい。今日は……姉のあたしが……レオンハルトに付き合ってやる日なんだから」
「……ッ……そんなの……」
妹だから我慢しろ、とそう言われ、ハウゼルは理不尽なものを感じてしまう。
しかも、実は前々からレオンハルトとこっそりと仲良くしていたと聞いて、何故かハウゼルは姉に対して憤りや不満の様なものを感じてしまうのだ。
「そんなの……関係ないでしょう！　レオンハルトさんの予定は、ま

だ別に決まってはないじゃないですか！　それをどうして、姉さんが勝手に決めるんですか!?」
「私の方が姉なんだから、姉を優先するのは当然でしょ！」
「だからそんなの関係ない！」
　気がつけば、お互いに段々と声を大きくしてしまっていた。
　しかしそれを慮る余裕はなく、相手しか見えていない二人は眉を立て、声を荒げる。
「大体、あれだけ私に近づくなって言ってた姉さんが、何でレオンハルトさんと仲良くしてるんですか!?」
「べ……別にそれはいいでしょ！　仲良くしてるわけじゃないし……ちょっと付き合ってあげてるだけよ！」
「それならレオンハルトさんに誘われないと駄目じゃないですか！　姉さんは今日、誘われでもしたんですか!?」
「っ……誘われてないけど、今日はそう決まってるの！　関係ないんだから口出ししてこないでよ馬鹿ハウゼル！」
「っ……サイゼルの方が馬鹿じゃないですか！」
「い、妹なんだからちゃんと姉さんって呼びなさいよ！　馬鹿妹！」
「口を開けば馬鹿馬鹿馬鹿って……馬鹿って言う方が馬鹿なんですよ！」
「あー！　じゃあ今ハウゼルも馬鹿って言ったし、あたしよりも多く言ったから大馬鹿よ！　バーカ！」
「こ、子供みたいなこと言わないでください！」
　――と、二人は売り言葉に買い言葉。会話の内容はレベルの低いものであったが、徐々にその身体から闘気を立ち昇らせ、低く身構える。
　お互いの手には既にそれぞれ得物が握られており、今まさに激突しようとしていた。
「ハウゼル……！」
「サイゼル……！」
　互いが互いを、敵意の乗った強い視線で射抜く。
　いつもであれば、二人の喧嘩の原因であるレオンハルトが、それとなく先に止めるのだが、そのレオンハルトは魔王城に行っており、こ

の場にはいない。
故に次の瞬間に映る光景は、二人の激突に他ならなかった。
「――ッ！」
「――ッ！」
二人の魔人は、ほぼ同時に動いた。
宙へと羽ばたき、自らが戦う場所に適した場所に自然と移動する。
二つの影は、空いた窓に飛び込んでいくような軌道で、空へと羽ばたいた。
上昇する動きが生じ、同時にお互いは得物の照準を相手へと向ける。
「こうなったら……力づくで決めるから……！」
と、告げるのは、自らの得物、〝氷結の女神〟を用いて、周囲を凍てつかせるレーザーを放つサイゼル。
「ええ、望むところです……！」
同意し、同じ様に得物を掲げて引き金を引いたのはハウゼル。
〝燃える塔〟の砲口から、放射状に放たれる超高温の炎は、サイゼルのレーザーに対する盾でありながら、優秀な攻撃範囲を持ち、サイゼルへと迫っていく。
「姉の方が強いに決まってるでしょ……！」
拡散する炎の塊を放つハウゼルの攻撃に対し、不利にも見えるサイゼルのレーザーだが、その極低温のレーザーはハウゼルの炎よりも高速の攻撃であり、一点集中された細い攻撃でもあるためか、放射状に放たれるハウゼルの炎の合間を抜けようと宙を行く。
「……！　いつもサボってる姉さんなんかには負けません……！」
故にハウゼルも油断は出来ない。飛び回り、射撃を行ってくるサイゼルから防御重視で炎を壁になるように発射しながらも、攻撃の事を考えてサイゼルの方に身体を向けていく。
逆にサイゼルは攻撃重視であり、それには彼女が攻撃を好むという単純な理由もあるものの、優秀な妹を倒すことに躍起になっているためか、積極的に攻撃を仕掛けていく。
魔人になって日も浅いが、それでもレオンハルトの特訓に付き合

い、攻撃を仕掛けてきた経験は無駄ではない。
ハウゼルはまだ、自分の力をどのように使うかについては手探りな部分があり、殆ど本能と勘で動き、
「これなら……どうですか……！」
「っ……このくらいなんてこともない……！」
そしてそれの結果から齎される経験を学習しながら戦っていた。
学習能力が高いハウゼルは、サイゼルの宙を飛び回りながら射撃する動きを見て、徐々にその動きを学び、動きが良くなっていく。
しかしそれが、サイゼルにとっては不満だった。
――妹に負けるのか、と。
もっと圧倒的に勝てると思っていたサイゼルは、自分と互角の戦いを演じるハウゼルへの嫉妬や自分への劣等感などのを感じる。
「こ、のおおおおおお！」
妹に対するコンプレックスが刺激され、サイゼルが叫びながら引き金を引きまくる。
それを原動力に、サイゼルは攻撃の激しさを増し、ハウゼルも姉の勝手な行動や言い分に怒り、炎の勢いを激しくしていく。
――レオンハルトさんの行動まで勝手に……！
と、内心では不満と憤り、そして自分には近づくなと言っておいて、自分は仲良くしてることに対して、自覚のない何かを強く感じており、それを原動力にハウゼルも戦う。
魔人姉妹の姉妹喧嘩は、紅魔城中庭の上空でその動きと音の激しさを増していた。

昼過ぎ頃。
ジルの私室から出てきたレオンハルトは、大きく溜息を吐いて早速、帰路についた。
……今日は、早めに終われたな。
と、内心で勤めの感想を呟き、同時にそれが終わったことでようやく休日に到れるという軽い解放感を得る。

あれだけやれば、今日はもう呼び出しはないだろう。あるとしても起きてしばらくしてから。明日くらいになるはずだ。
ならば今からは本当の休日。もはや何をやっても問題ない休日だ。
……どうするかな。修行もしておきたいし、白兎とも過ごしたい。他の奴らからの誘いがあるかもしれないし、白兎とも過ごしたい。悩ましいところだ……。
故に、レオンハルトはようやく休日についての予定を悩ませる。
休日であってもやることが多いため、レオンハルトはある意味で休日でも忙しい。
何しろ自分の時間だけではなく、周囲の者から誘われることもあるためだ。
使徒との時間、キャロルと将棋したり、ハンティと戦ったり、ペールとエロしたり、リーと酒を飲んだり。
他にも魔人、ガルティアと食事だったり、ケッセルリンクとお茶会やデートをしたり。最近だとジークからも交流を深めないかとお誘いがあったりする。
それ以外にも城に住む者達との時間。特に、娘の白兎との時間は癒やしでしかないため、身内との用事に連れて行ったりすることも多い。
友人との時間が、とかで断られることも最近は多いが、そういう時はしょうがないものの、悲しくてしょうがない。むせび泣きたくなる。
……あの二人もいるしな。
魔人、ラ・サイゼルとラ・ハウゼル。二人の姉妹だって城にいる。
最初、城でお世話になりたいと言ってきて、しかも新人教育が終わってからも城に住みたいと言われた時は、真顔になったし、何故だ……、と内心で強い疑問を抱きもした。
しかし悩んだ末に、二人なら問題ないだろうと許可を出したのだが、一応は大きな問題は起こらずに何よりといったところだ。
読書に嵌ってくれて明るくなったハウゼルや、暴れられるようになってストレスが発散出来るようになったサイゼルなど、レオンハル

トとしては勧めた甲斐があるというもの。
あの本を読まれたり、強引に誘ってくるのは少し困るが、それも苦笑程度で済ませられるものだ。本気で嫌というほどでもない。
どうせなら、二人を誘って以前みたいに出かけるのも悪くはないかもな、とレオンハルトは休日にやれることを思い浮かべる。
二人の仲をどうにか良く出来れば良いとは思うし、二人を誘ってどうにかしてやるのも今後のことを考えれば良い時間になるかもしれない。
その分の気苦労はありそうだが、それくらいなら今更だ。引き受けた時にある程度は覚悟しているものである。
……少し、誘ってみるか。
少し思考してみて、やってみる価値はある良さげな案だと判断したレオンハルトは、帰ったら二人を探して提案してみるかと、帰ってからの行動を決める。
仮ではあるが、そういう休日も悪くはないと、レオンハルトは城から外に出たところで、
「――レオンハルト様！」
「！　キャロル。どうかしたのか？」
と、不意の声が正面から飛んできて、レオンハルトは即座に言葉を返した。
今日はキャロルも城に待機していたはずだが、そこから走ってきたのだろうかと胸を撫で下ろしているキャロルを見て、目を細める。
ひょっとして、何か不測の事態でもあったのか、と思うも、表情を見る限り、切羽詰まっているという様子ではなく、単純に報告にやってきたという感じだ。
なのでこちらも落ち着いた気持ちでキャロルの言葉を待っていると、キャロルは〝はいっ！〟と元気よく頷き、こう口にした。
「サイゼル様とハウゼル様が喧嘩しましたの！」
「……何？」
マジ？　と言いたげな表情を自分で浮かべてしまい、キャロルから〝マジですの〟と言いたげな表情が返ってくる。

そして続けて、
「それで色々あった結果、サイゼル様がどこかに行ってしまいましたわ！　家出っぽい感じで！」
「……そうか」
急に言われた言葉を自分の中で噛み砕き、そして大きくため息をつく。
詳細は分からないが、めちゃくちゃ深刻そうな話ではないが、かといって放置出来るほど軽い話でもなかった。
故にレオンハルトは思う。
……今日は、休日返上だな……。
憂鬱な気持ちを感じて、レオンハルトはとりあえず、キャロルの口から詳細を聞いてみることにした。

姉妹喧嘩の結果

紅魔城の中庭には、見上げる者達の視線が集中していた。
「ねえ、何あれ……？」
「あれ、サイゼル様とハウゼル様じゃない？」
「何か戦ってるけど……誰かに知らせた方がいいよね？」
と、まずメイド達が最初に空を見上げた上で、報告しようと何名かが城の中へと戻ろうとする。下級使徒ではあるが、ただの人間である彼女達に、魔人の喧嘩をどうするかなどの判断はつかないものだし、どうにか出来るものでもない。
故に誰か上の者に報告しようとしたのだが、上空での異変を察知し、既に城にいる使徒達は中庭へと集まってきていた。
そして周囲のメイドと同じ様に空を見上げながら集合するなり、
「戦ってますわね」
「戦ってますねぇ」
キャロルとペールが、呑気にサイゼルとハウゼルの喧嘩を見上げて呟く。
空では拡散する炎と、収束する氷が激突し、音を中庭まで響かせている。
何故喧嘩しているのか、と理由が不明だし、出来ればそれを止めたほうがいいと理解しているが、
「……あれだけ高いところで戦っていると、さすがに手出しが出来ませんな」
と、同様に見上げながら呟いたのはリーだ。
魔人級の戦闘力がある使徒でも、飛べるわけではないし、そもそも無敵結界があるので止めれるかどうかは微妙なところである。
「レオンハルト様は魔王城にお勤めに行ってますし、どうにも出来ませんわ！」
「大声で呼んでみたらどうです？　キャロル先輩、声大きいですし」
「なるほど、やってみますわ――サイゼル様ーーーー!!!　ハウゼル様ーーーー!!!」

と、キャロルが一度大きく息を吸い、その後に大声を空に放つ。
高音かつかなりの声量で放たれる声は、上空で戦う二人の魔人に声を届かせるのに十分だった筈だが、
「……反応はありませんな」
「むぅ……失敗ですわ」
「相手しか見えてないかもですねぇ」
見上げ、反応がないことに皆で唸る。どうしたものか……と、皆で次の案を出そうとしていると、
「……あたしなら飛べるし、あそこまで行けるんだけど？」
と、ハンティが真顔でそれを指摘する。
だがそれを言うと、皆が微妙な顔をした。特にペールが、
「駄目ですよう。始祖様、相手が強い人の場合、止めるんじゃなくて戦いに行こうとしてるじゃないですか。場合によっては被害拡散しますし」
「……別に、そういうわけじゃ……ただ、止めようとしたら抵抗されるし、叩きのめさないと捕らえられないじゃない？　だから無理矢理こう――ボコボコってするだけよ」
「なんかそれっぽいこと言ってますけど、戦ってる時すごい楽しそうにしてますよね？」
今度はペールが半目でそう指摘すると、ハンティは、うっ、と怯み、しかし眉を立てて反撃した。
「仕方ないじゃない！　合法的に暴れられるの気持ちいいんだから！」
「完全に主張が危ない人じゃないですか!?　そんなんだからカラーゴリラって言われるんですよう!?」
「ハンティ様……最近、開き直ってますな……」
「元気なのは良いことですわ！」
もはや完全に戦闘狂染みた危ない人の様になったハンティにペールがツッコミを入れ、リーが渋い表情になる。キャロルがうんうんと頷いているのがよく分からないが、後輩が元気である分には細かいところは気にしないのだろう。

「とはいえ、どうしましょうか……魔法でも撃ってみます？」
「……飛行魔物兵を招集し、投降を呼びかけるというのは如何でしょう？」
「もしくは、全員で力を合わせて、空に向かって料理長をぶん投げますの！　驚いて喧嘩を止めるかもしれませんわ！」
「……何だろう。キャロルの案が一番上手くいきそうな気がするのは……もしくは、やっぱりあたしが――」
と、皆で案を出し合い、もう仕方ないから戦闘狂を解き放つかを悩みかけたところで、
「――なら、私がちょっと行ってくるわ」
「え……あ、ちょっと！」
不意の声の持ち主が、そう言うなりハンティの制止を無視して羽を駆使して空へ上がっていく。
それを見てペールが、
「ああ……まあ、話を聞いてくる分には適した人材ですし、良いんじゃないですかね。しばらくはこっちに被害はこなさそうですし、駄目なら別の案出す感じで」
「いや、あたしでも話くらい聞けるんだけど……」
「ハンティはカラーゴリラだから無理よ。何だかややこしい話みたいだし――私みたいな、いい女じゃないとね」
「誰がカラーゴリラよ!?」
と、態々ハンティを小馬鹿にした様な声を送ってきたことで、ハンティがイラッとした声をぶつける。
それから逃げるようにして空に上っていった彼女に、周囲の面々は、とりあえずどうなるかを見守ることにした。

空の上では、魔人同士の戦闘――姉妹喧嘩が続いていた。
分厚い炎の壁を展開し、中距離を保つように空を行き、サイゼルを追い詰めていくハウゼルは、姉の強さに中々の苦労を強いられていた。

……やりますね、姉さん……！

言葉には出さないが、内心でその強さを口にする。姉の戦い方は、少しだけ、自分より慣れたものであるからだ。

やはりレオンハルトと模擬戦をしていたというのは事実なのだろう。その結果に、やはりレオンハルトさんは凄いな、と感嘆を得るし、姉の強さも良いことだとは思う。

しかし一方で、姉が自分に内緒で、レオンハルトと過ごしていたことには憤りの様なものを感じてしまい、

「っ、そろそろ諦めてください！　今日は、私がレオンハルトさんと過ごすんです！」

言葉とともに、炎をお見舞いする。

先程から続く戦闘で、ハウゼルも戦いには慣れてきたし、己の力の振るい方にもコツが掴めてきた。

周囲に炎を広く展開し、常に有利になるように位置取りを行う。放射状に放てる炎は、攻撃にも防御にも使える万能の武器だ。

相手の遠距離からの攻撃は炎の壁で防御し、近づいてくる相手にも、炎を展開すれば相手は近づくことが出来ない。触れるだけで相手を傷つけることの出来る炎は、盾として優秀だ。

だが、

「っ、あたしが一緒に過ごすのよ！　あんたは留守番でもしてなさい！」

「！　くっ……」

サイゼルの氷のレーザーが、炎の切れ間を通すように飛んでくる。

何とか躱すことは出来たが、中々に難儀させられる攻撃であった。

サイゼルの氷の力、〝氷結の女神〟から放たれるレーザーは〝燃える塔〟の放射状の炎とは違って、高速かつ集中されたもの。

防御に関しては、広く展開出来る分ハウゼルの方が有利だが、攻撃速度、連射性能はサイゼルの方が上であり、ハウゼルは早い判断を迫られる。

距離にもよるが、レーザーを撃つのと同時に炎を放つのでは、若干遅い。かなり直前で、レーザーを防御することになるのだ。

炎も遅いわけではないし、激突すれば両者ともその攻撃を止められるのだが、どちらかと言うと迎え撃つのが得意なハウゼルの性質は、どちらかと言うと攻め立てるのが得意なサイゼルに押されていた。
それでも狙いが甘ければ問題ないのだが、サイゼルの狙いは悪くないものであり、ハウゼルの練度の低さも相まって、どちらかと言うとサイゼルの有利とも言える状態になっている。
しかし勝負の行方はまだ分からない。サイゼルの方は勝てると思っているのか、更に攻撃を激しくしているが、ハウゼルは少し構えて、動きを見切ることに集中し始める。
「姉のあたしが勝つんだから……！」
「いえ、私が勝ちます……！」
どちらも勝つために、全力を尽くしているそんな時。
「――貴方達、そろそろ止めたら？」
「っ!?」
「なっ!?」
と、不意に、声とともに、空を斬り裂く第三の攻撃が飛んできた。
炎と氷の間を通るように飛んできた攻撃は――大型の鎌だ。
お互いしか見ていなかったサイゼルとハウゼルは、それに驚くように距離を取り、間に入ってきた相手の姿を見た。
「あんた誰よっ！　邪魔しないでくれる!?」
「っ、貴方は――」
サイゼルの方は露骨に追い返そうと敵意を見せたが、ハウゼルの方は間に入ってきた相手を見て、若干の躊躇いを見せる。
見知った顔であったからだ。
「……男の取り合いはまあ別にいいけど、そのための手段が戦闘ってのは女子力がとても低いわ。――愛しのレオンハルトに嫌われるわよ？」
「は……はぁ!?　あ、あああ、あんた、何言ってるのよ!?」
「い、いいい愛しって……そ、そんなの……！」
「あら、可愛い反応。初心なのか、自覚無しなのか、どっちかしら」
したり顔で告げるその女性に、両名とも顔を赤くしてしまう。

「そ、それよりあんたは誰なのよ……！」
「私？　私は――」
と、女性は不敵な笑みを浮かべて告げようとする。
だが、ハウゼルにとっては知ってる相手だ。
人間とほぼ変わらない姿を持つ女性だが、その肌の色は白だが、少し暗い色となっている。身長は低めだが、スタイルの良さ、特に胸は大きく、露出の高い衣装を身に着けている。
だが特徴的なのは、額に青いクリスタルを持つことと、長い耳、頭から生えている2本の角と、背中から生えている蝙蝠のような羽、そして尻尾だろう。
身の丈を越える大きな鎌を肩に抱え、本を片手に持つのは、彼女が図書室の司書であるからだ。
その者の名は、
「インデックス。紅魔城の図書室の司書と――悪魔をやっているわ。よろしくね？」

インデックスは二人の魔人の喧嘩を一時的にでも差し止めることが出来たことに、僅かな安堵を得る。
だが、図書室の常連で面識のあるハウゼルの方はともかく、面識のないサイゼルの方はこちらに向かって眉を立て、いつ攻撃してくるとも知れない状態だ。
故にどうにかして冷静にして、喧嘩を完全に止めさせないといけない。
別に命令されたわけでもないが、レオンハルトの女としては当然のものだ。
……点数稼ぎ、とも言えるわね。
その微妙にせこせこした思惑を、インデックスは恥じない。
好きな男に尽くすのは、いい女であれば当然のものなのだ。
そのために、インデックスはカラーとしてこの城に来るのではなく、悪魔となったのだから。

――それは数百年前のことだ。
カラーの女王としての任期を終え、後継者に女王を継がせたところで、インデックスは考えた。
今のまま、レオンハルトの元に行き、下級使徒となることは出来る。
それだけの交友を深めてきたのは無駄ではないし、前に遠回しに聞いた時も許可は得られたのだ。
だが、まだ一番になるには程遠く、使徒になるにも好感度は低いような気がした。
これで子供でも出来れば良かったのだが、やはり魔人の子を孕むには確率が低いようで、子宝には恵まれなかった。
しかも別の女に先を越されてしまい、インデックスとしては歯噛みしたい気持ちになる。
親交をもっと深めたいが、下級使徒のままそれを成すというのは、中々に難しいことのように思えた。下級使徒の好感度が低いわけでも、蔑ろにされるわけではないが、どうせなら、好きな人にとって唯一無二の特別になりたいと思ってしまうのは女として当然のことだろう。
だからこそ、インデックスは考え、ちょっとした賭けに近い策を講じた。
レオンハルトの城に掛かっているという永久保護魔法に入ることなく、変化の時を迎えたのだ。
そして天使か悪魔のどちらかになった上で、レオンハルトの元に行く――という策だ。
結果的に、それは成功したと言える。個人的には天使になると思っていたので、悪魔になってしまったのは甚だ遺憾であったが、ともかく成功したのなら良い。
悪魔になり、悪魔としての生を新しく迎えたところで、インデックスは魂の回収任務としてレオンハルトの元へと行き、真の名を教えて、彼の使い魔となった。
悪魔は真の名というものがあり、これを知られて契約を結ぶと、絶対の服従を誓うこととなる。

これを無視すれば灰となって死んでしまうらしく、中々に怖いデメリットだが、好きな男に服従するなら何のデメリットでもない。
むしろこうすることで、下級使徒の様に城に籠もるのではなく、外に自由に行くことが出来るため、レオンハルトとともにいる時間を増やせるし、悪魔となって戦闘力もかなり向上したため、単純に役に立てる。
悪魔の任務とやらは鬱陶しいが、強制というほどでもないし、頑張って階級を上げてみるのも悪くない。
ただ命令されるのが大嫌いなため、やるとしても自発的にやるのみだ。
今は第五階級だが、もう少しあげて第三階級にでもなれば、悪魔界に領地を貰えて部下もつくらしいし、それも悪くない。その地位や部下を使ってレオンハルトの役に立つことが出来るのだ。
――とはいえ、今はこの二体の魔人の喧嘩を止めるのが先だ。
どうやら二体ともレオンハルトの事を少なからず好いているような気がするし、ライバルとなるため、蹴落とすのが正解だとも思うが、
……良い女は、そんな卑怯なことはしないわ。
そう、やるなら出来る限り正面勝負だ。
自分を如何に魅力的に見せるか。アプローチを掛けて、口説き落とす。
そのためなら天使だろうが悪魔にだってなるし、こうやって魔人の喧嘩を止めることだってする。
何故なら良い女だから、とインデックスは二体に聞こえるように声を送った。
「男を落としたいなら、他の事で勝負するべきよ」
「な、何言ってるのよ！　邪魔だからどきなさい！　どかないと――怪我するわよ！」
と、サイゼルの方がレーザーを放ってきたので、インデックスは咄嗟に大鎌を振るう。
「危ないわねっと……！」
「っ……！　邪魔なのよ！」

はぁ、とインデックスはレーザーを弾いて、溜息をつく。
「……やめといた方がいいわよ？　私は悪魔だから無敵結界は突破出来るのだし」
そして言うのはちょっとした牽制というか忠告だ。
魔人に備わる無敵結界は、悪魔には通じない。
実際に戦えば、多分だが自分は負けるかもしれないし、やられても困るのだが、こう言っておけば少しは躊躇するだろう。
「そ、そんなの……知らないわよ！　邪魔するならまとめてやっつける！　折角、ハウゼルに勝てるかもしれないんだから……！」
「あら、中々の脳筋ね。私の親友のカラーゴリラと良い勝負だわ」
「――ぶっ殺すわよ!?」
眼下から怒声が聞こえてくるが、無視する。というかどんだけ地獄耳なんだ、とこちらがツッコミを入れたい気持ちになるが、
「……貴方もやるのかしら、ハウゼル？」
「っ……私、は……」
サイゼルの方に身体を向けながらも、ハウゼルに横目で語りかける。
どうやら見知った者が割って入ってきたことで、ハウゼルの方は少し冷静になり、これ以上続けることを躊躇しているようだ。
これならば、喧嘩を止めることも難しくないような気もする。
しかし、
「やらないならあたしの勝ちだからね！　レオンハルトと付き合うのはあたしよ！」
「は、はぁ!?　どうしてそうなるんですか！　ふざけないでください姉さん！　レオンハルトさんと付き合うのは私です！」
と、サイゼルの言葉を受けて、ハウゼルが再び張り合い始める。それを見て、
……何か、聞いてるだけだと、完全に雄を取り合う雌の構図ね。
何となく、レオンハルトとの時間を奪い合っているのは理解しているが、本質的にはそれで間違っていないかもしれない。
まあレオンハルトは優秀な雄だし、初心な雌が惹かれるのも、同じ

雌として理解出来るものだが、にしても初々しくて可愛らしく感じる。
一瞬、〝このまま放っておいてもいいんじゃないか〟とも思うが、一応は魔人の喧嘩で危ないため、インデックスはそれを止めるために、言葉と鎌を放つ用意をする。
無敵結界は突破出来るとはいえ、魔人との戦いとなると厳しいことに変わりはないのだ。
「ふぅ……少し、冷静になってもらわないとね」
「あんたも敵ね！　だったら、先にあんたから――」
「っ！」
と、サイゼルがこちらに向かってぐんぐんと距離を詰めてくる。
魔人の飛行する速度は中々に高速で、直ぐに距離が縮まろうとする。
しかしその時、インデックスはそれに気づき、声を跳ね上げさせた。
「――急に飛び出したら危ないわよ！」
「はぁ!?　何を言って……――っ!?」
と、次の瞬間――サイゼルは横から飛んできたものに気づいた。
それは、自分達よりも遥かに大きい飛行物体。
真っ直ぐと中庭の上空に向かってくる高速の生物。
それを見る皆は、〝あっ……、あのタイミングは……〟と、次の瞬間に起こる事件を想像した。
サイゼル自身も、迫りくるそれをスローに感じながら、
「へぷっ――!?」
ガンッ、とぶつかり、ボールのように空中で跳ね飛ばされた。
無敵結界により、ダメージこそないが、巨大な飛翔生物に激突したサイゼルは、涙目になりながら空中で吹き飛んでいく。
それをぶつかってからようやく感じた巨大飛翔生物であるドラゴン――ライゼンは、
「――ん？　今……ひょっとして、何か当たったか？」
「ね、姉さーーーーーん!?」
「うわぁ……人身事故……」

思わずハウゼルが叫び声をあげ、インデックスや、地上にいる者達がドン引きしながら呟いた。

外から帰ってきたライゼンは、自分が事故を起こした事を少しして理解した。
自分は、何かの生き物を跳ね飛ばしてしまったのだと、
「こらあーーー!?　ライゼン、あんた何やってるの!?」
「思いっきり轢いてましたねぇ……」
「無敵結界があるから大丈夫だとは思いますが……なければぐちゃぐちゃですな……」
「逮捕！　逮捕ですわ！　轢き逃げで逮捕ですのよ！」
「に、逃げてはおらん！　そこだけは主張させて貰う……！」
地上から非難の声が上がり、ライゼンは冷や汗をかいてしまう。
……何たることだ……よもや、飛行中の事故を起こしてしまうとは……！

空を生きる者としては恥ずかしいことだった。
かつて、ドラゴンが多く生きていた自分達の時代では、この手の、飛行中に誰かと誰かがぶつかったという事故はあまりにも多く、それが原因による喧嘩も絶えなかったため、激突事故は罰則を設けたり、皆で〝安全飛行月間〟と称して気をつけたりしていたものだが、それを施行していた自分が、まさか事故を起こすとは夢にも思わなかった。
横では、確か新たな魔人であったラ・ハウゼルという女子が、自分が轢いてしまい、涙目で飛んでいった姉を呼んでいるし、悪魔となったカラーの娘は、呆れるように肩を竦めると、半目をこちらに向けて、
「私……第一発見者とかで事情聴取受けるのかしら？　ねぇ、なんて言ったら良いと思う？」
「む、むぅ……すまぬ……この辺は、空を飛ぶものが少ないから、注意を怠ってしまった……」
「ね、姉さんは!?　姉さんは無事ですか!?」
と、ハウゼルなどは姉の安否が心配なのか、空中でおろおろとして

しまっている。
　言われてライゼンも、皆とともにサイゼルの姿を探していると、
「……」
「あっ、姉さん！」
　ふらふらと、墜落した平野から戻ってきたサイゼルを見つけた。
　その身体に、怪我などはなく、
「良かった……姉さん、無事だったのね」
「ふぅ……怪我は無かったか……」
「だからといって、罪は軽くなりませんのよー！」
「そうですよう、ライゼンさん！　大人しく下に降りて来て下さい！
　速攻で免停しますから！」
「ぐ、ぐぅ……こんな筈では……」
　これだけ身体が大きいのに、一度も事故を起こしたことがないというのが自慢だったのに、まさか前科者になってしまうとは、とライゼンは項垂れる。
　しかしそんな横で、サイゼルは空中で立ち止まると、こちらやハウゼルを見て、
「――う、うわあああああああん！　もう嫌ああぁぁぁああああ！　い、家出、家出するーーー！」
　泣きながら、ぴゅーっと逃げるように物凄い勢いで空中を飛んでいってしまった。
　それを見て、ハウゼルが、
「ね、姉さん？　あ、ちょっと……ど、どこに行くんですか!?　ね、姉さーーーん!?」
　誰も止める暇もなく、姉が飛んでいってしまったことでハウゼルが戸惑いを見せる。
　その結末を見て、インデックスが、大きくため息を一つ、
「……喧嘩は止まったけど、面倒なことになったわね……」
「す、すまない……」
　ライゼンはただ平謝りをするしかなかった。

サイゼルの気持ち

魔王城でのお勤めを終え、帰路につく道中でキャロルから話を聞き終えたレオンハルトは、城につくなり、ライゼンからの謝罪を受けた。
「話は聞いているかと思うが……事故を起こしてしまってすまんな……」
「……事故に関しては後で罰するとして……それより、サイゼルはどっちに飛んでいったか分かるか？」
ええ、と頷いたのはレオンハルトの使い魔となったインデックスだ。彼女は、右の空を指差して、
「西の空に真っ直ぐ。一応、途中までは追いかけてみたのだけど……やっぱり、新米とはいえさすがは魔人よね。撒かれてしまったわ」
肩を竦めてそう言うインデックスに、レオンハルトは返答するように頷いた。
「そうか。まあ、ある程度方向が分かるなら、捜索出来ないこともない」
よくやってくれた、とお礼を言うと、インデックスが何も言わずに微笑んだ。これくらいは当然という態度だが、その視線には期待が込められている辺り、後でお返しをしないとならないのだろうと、レオンハルトは軽く息を入れる。それは甘んじて行うとしても、
「……とりあえず、手が空いている者で手分けして探すか」
「……放置しててもも帰ってきそうな気もするけど行くの？」
と、ハンティが告げた声に、皆が沈黙する。
中庭で普段通りの業務を再開しはじめたメイド達も、動きが止まり、何とも言えない微妙な表情になる。
そしてレオンハルトが息を吐き、
「いや……さすがにそれはあんまりじゃないか……？」
「始祖様……いつからそんな血も涙もない判断が出来るようになったんですか？　それはさすがに酷すぎますよう……」
「きっと頭がバトル脳に支配されてるのね。そんなんだから友達少ないのよ」

「な、何よ！　最初に動こうとしたのあたしだし、止めたのはあんた達でしょうが！　あたしが行ってたら今頃――」
元カラー二人の言葉に、ハンティは抗議の声を上げる。そして彼女の言葉に、皆がもしもの話を想像した。
もしも、ハンティが姉妹喧嘩に割って入っていたのなら――
「……姉だけじゃなくて妹の方も家出してたわね」
「ハンティは魔法研究者なのに脳筋だからな。もっと私を見習ったほうがいいぞ」
「うっさい！　後、ガウガウ！　あんたはまたサボって……！」
ガウガウが魔法研究室の窓からひょっこりと顔を出し、お菓子を食べながらハンティへの評価を口にしたが、ハンティが魔法を放とうとする動きを取ったところで室内へと退散していく。
最近、ハンティがツッコミ役というかイジられキャラになっているなぁ、と何名かが思ったところでレオンハルトは、
「……とにかく探してみるか。――ハウゼルも、それでいいか？」
「っ、はい……その……姉さんを、よろしくお願いします……」
と、声を掛けた相手は喧嘩をしていた片割れ、ハウゼル。
彼女はレオンハルトの確認に頷きはしたが、レオンハルトに話しかけられた時に何故か身を硬直させ、しかもお願いしながらも、眉根を下げ、レオンハルトの方をチラチラと窺うような目の動きを見せている。
やはり、姉の事が心配なのと、ちょっとした事件を起こしてしまったことによる申し訳無さを感じているのだろう。
だがそれだけでもないような気がしたが、レオンハルトはその考察を一旦頭の隅に追いやり、動きを生じさせた。
それは、有無を言わさずにライゼンに跳び乗る動きで、
「お前にも協力して貰うぞ」
「……致し方あるまい」
ライゼンが翼を広げ、飛行するための動きを起こす。
だが、
「ライゼンさん！　安全飛行じゃないと困りますのよ！」

「次やったら一年間、お肉禁止にしますからね？」
「とりあえず、今は執行猶予ということにしておきましょう」
「つ、罪が重くないか……？」
「あまり脅してやるなよ……」
キャロルとペール、そしてリーの注意に、露骨にライゼンの動きがぎこちなくなったところで、レオンハルトは息を漏らし、サイゼルの捜索を開始した。

――姉妹喧嘩の決着から数時間後。
突発的に家出を強行した魔人、ラ・サイゼルは、大陸西部の森で一人、佇んでいた。
「……せっかく、もう少しで勝てるところだったのに……」
ずっと飛んできて疲労が溜まったので、森のなかにある巨木の根の部分に腰を下ろし、ぽつりと呟く。
心の中に生じるのは、様々な気持ちが入り混じった複雑な想いだ。
もうちょっとで妹に勝てたのに、という悔しさ。
巨大なドラゴンの体当たりを受けて、吹き飛んだ衝撃とショックによる怯え。
何で自分だけ、こうも嫌な目にばかり遭うのか、などと暗い気持ちになる。
それと、
「あたし……どうしてあんな……」
レオンハルトのことで、妹と喧嘩した事実を振り返りながら思う。
自分は何故、あんなことで喧嘩したのだろうかと。
少し冷静になった頭ではそう思った。しかし一方で、もう一度そのことを思い出してみると――イラッとしてしまう。
今頃、ハウゼルはレオンハルトと読書とやらで楽しく過ごしているのだろうと想像すると、二重の意味で心が揺れ動くのだ。
その意味を考えようとすると、サイゼルは首を振ってそれを否定する。

「ち、違う。違うんだから。これは……なんか、自分のやりたい事を取られたのが癪で……」
きっとそうだ、とサイゼルは自分の気持ちを決めつける。
ハウゼルがレオンハルトと過ごすのも、レオンハルトがハウゼルと過ごすのも、何だか自分のやろうとしてる事を取られるようで嫌なだけだ。
別に二人のことなんてどうでもいいし、それほど良く思っているわけでもない。
ただハウゼルは妹だし、姉として面倒を見てやらないといけないし、レオンハルトの方も、修行に付き合ってやると嬉しそうだから、一応は世話になってる借りを返すため、自分が暴れるついでにちょうどいいからと、付き合ってやってるに過ぎない。
それを邪魔されたから自分は嫌なのだ、とサイゼルは自分の気持ちをそう結論付ける。
「そうよ……うん……きっとそう……」
うんうん、と自分で言い聞かせていると、少しずつだが心が落ち着いていくのを感じる。
しかし少し落ち着いたところで、自分が今置かれている状況、自分が為したことを徐々に実感していくと、
「……こ、これからどうしよう……」
思わず、家出をした。城を飛び出してきてしまった。
あんな風に出ていってしまった以上は、直ぐに帰ることは出来ない。
とてつもなく恥ずかしいし、情けないような気がするからだ。故に、しばらくは帰らずに一人で過ごさないといけないのだ。
むしろ、自分一人でも生きられるってところを見せてやるのも悪くない。向こうから戻ってきて欲しいと言われるまで、帰ってやるものかと、強気にも思う。
しかし、
「……食べ物も寝る場所もない……」
城なら美味しい料理もあるし、ふかふかのベッドもあるのに……

と、既に若干、城を出ていったことを後悔してしまうサイゼル。
魔人なので、飲まず食わずだろうが、睡眠を取らなかろうが、死ぬことも病気になることもないだろうが、精神的にはどうかと思ってしまう。
食べる必要はないが、かといって食べれないとなると気分が悪く、途端にひもじい気分になってしまう。
睡眠も同様だ。眠くはないし、寝る必要はないが、眠れないとなると何だか窮屈な気持ちになってしまう。
加えて、やることも何もないし、話し相手も誰もいない。
今までは、態々話しかけてくる相手のことを少し面倒に感じていたりもしたが、誰もいないとなると寂しさを感じてしまう。
「ふ、ふん……別に、寂しくなんてないんだから……」
しかしそれを感じていない振りをして、サイゼルは膝を抱えて座り込む。
静かな森の中は、まるで世界にただ一人、自分だけしかいないのではと感じてしまうほどに静かで、気配を感じない。
時折、風に揺られて葉が擦れ合う音が聞こえるが、それすらも、自分の孤独を自覚させる嫌な感じに聞こえてしまう。
木を凍らせればその音も止むだろうかと思うが、それをやる気力も湧いてこない。
どうしたものかと、サイゼルは膝から顔を上げ、木々の隙間から漏れる夕暮れの日差しを見上げようとしたところで、
――ズン、と音が聞こえた。
「っ、な、何？」
地面に響いてくる大きな音。
サイゼルは地面から伝わってくる衝撃を尻で感じて、思わず跳び上がるように立ち上がる。
周囲を見渡して、その音が近寄ってくるのを感じていると、
「ひっ!?」
「……」
木々の間から、それは現れた。

サイゼルを大幅に上回る巨体を持った人形のモンスター。
鼻の下に立派なヒゲを生やし、筋肉質な肉体を持ち、木々を薙ぎ倒し、岩と魔物を踏み潰し、あるいは殴りつけて、その拳と靴を真っ赤に染めるものの名は――トッポス。
魔物達にとっての死神だった。
「――！」
「ひぃっ!?」
そしてそのトッポスが、サイゼルを見つけるなり、有無を言わさずに突っ込んでくる。
その勢いに悲鳴を漏らし、横に飛ぶようにして逃げたサイゼルだが、一瞬反撃を行おうとして、しかしそのトッポスの頑強さに驚く。
「な、なんなのよあんた……!?」
「……！」
トッポスは、サイゼルが先程まで腰掛けていた巨木を体当たりで無理矢理叩き折ると、そのままサイゼルの放ったレーザーを、拳で受け止めて猛然と駆けてきた。
魔人であろうが恐れもせず、問答無用で襲いかかってくるそのトッポスの影が、サイゼルに覆いかぶさる。
そういえば聞いたことがあるような、とサイゼルはここに至って思い出す。
確か、西の森に、魔物を殺すことに生涯を懸けるヤバいモンスターがいると。
その名をトッポスと言い、一度出会ったら、例え魔人であっても決着がつかないため、逃げるしか無いような存在だと。
確証はないが、その話を思い出し、サイゼルは身体に震えを感じる。
普段であれば強気になって、もう少し立ち向かってみるかもしれないが、今は色々とあって少し弱気になっているためか、身体の動きがぎこちない。
自分を轢いたライゼンほどではないが、圧迫感を感じるその巨体の勢いに、サイゼルはじりじりと後退りながら思わず涙目となってしまう。

「こ、こっち来ないでよ……!?」
「……!!」
サイゼルが怯えの混じった声を上げながら、〝氷結の女神〟によるレーザーを連射する。
その全てが直撃するが、全く効いている様子はない。当たった箇所が僅かに霜になりはしたが、怯みもせずに向かってくる。
無敵結界は作用するので死ぬことも傷つくこともない――とは頭では分かっているし、それは事実だが、魔人に匹敵するような怪物の力で殴られれば、衝撃は受けるし、それを体験したばかりなせいが、普段以上の恐怖がある。
故にサイゼルは、トッポスの攻撃から目を背け、硬直してしまった。
……何で、あたしがこんな目に……！
もういやだ、と怖い目に遭うことに拒否を起こし、衝撃を味わうのが不可避となったその瞬間、
「――――全く、世話のやける奴だな」
と、見知った声が、サイゼルの耳に届いた次の瞬間、
「……！」
トッポスの拳は、何か細長いもので止められ、轟音と衝撃波を周囲に散らした。
それを間近で感じたサイゼルは、閉じていた瞳を開き、何が起こったのかと確かめようとして、
「っ!? えっ……あ――」
そこにいる人物に気づく。
こちらに背を向け、身の丈を越える、細長い赤の魔剣でトッポスの拳を受け止めているのは、短く切り揃えた黄金の髪を持つ男だった。
彼は身体を正面に向けたままではあるが、顔を僅かにこちらに向けると、
「……ハハッ、まさかこんなところでトッポスに襲われてるとはな。おかげで気配に気づけたが」
「っ……レオン、ハルト……」
口元に不敵な笑みを浮かべながら言うレオンハルトに、サイゼルは

彼が迎えに来たのだと直感で思い至った。
そしていつもの、修行の際に見れるような感じになっていることに気づく。
トッポスを前に、愉しそうな笑みと気配を見せながらも、レオンハルトは剣に力を入れてトッポスを弾き飛ばし、その勢いを利用してサイゼルに近づくと、
「――ほらっ、捕まってろ！」
「え……うぇえっ!?」
魔剣を一時空間に収納し、サイゼルを抱き抱えた。
……え、あっ、ちょっ、これ……!?
内心で驚きと悲鳴が連続し、叫びたくなるような気持ちになる。
しかしそれは出来ず、抗議する前にレオンハルトが抱えて身を宙に飛び出すようにトッポスから逃げ出したため、甘んじてそれを受け入れるしかない。
……こ、これ、お、お姫様抱っこって言うんだっけ……？
さすがのサイゼルもそれくらいは知っているが、それを自分が受けるとは思ってもいなかった。
レオンハルトはこちらの身が固まってることを察したようで、即座に抱える判断を取ったのだろう。こちらを見て、苦笑混じりに、
「お前、めちゃくちゃ軽いな。ちゃんと食べてんのか？」
「え、えっ……べ、別に、た、食べてるけど……？」
思わず真面目に答えてしまう。それよりも距離が近いことや、めちゃくちゃ身体が触れ合ってるところとか、気になる部分がありすぎて頭が働かない。
しかしレオンハルトは特に疑問を抱くこともなく、
「そうか。まあそれはいいが、動けるようになったら動いてくれよ？森を出るまでは後ろのあいつが追いかけて来るだろうしな。対応出来るようにしとかねぇと」
と、言われ、サイゼルは何と答えていいか分からなくなる。
そして思うのは、
「……な、何で……」

「ああ？」
気がつけば言葉に出していた。
疑問を、いつも通り少し強気に言葉に出してしまう。
「な、何で……態々追いかけてきたのよ……い、家出したんだから、別に来なくても……気に留める必要なんて、な、ないでしょ……？」
と、迎えに来たことを嬉しく思っているのに、そんなことを言ってしまう。
これで見捨てられたらどうしよう、とか頭にはあるものの、どうにもやめられないのがサイゼルの性分だ。
だがレオンハルトは、それを聞いてなんとも可笑しそうな表情になると、
「……気に留める理由か。まあ色々あるが……1番は、お前自身が、気に留めて欲しそうな顔をしてるからだ」
「……！　そ、そんなわけ……」
ない、とサイゼルは何だか凄い恥ずかしいものを感じながら口に出そうとする。
しかしレオンハルトはそれを差し止めるように、
「いや、してるな。俺はそういう奴は何となく分かるし、そういう奴は……不思議と気になっちまうからな」
「き、気になる……」
と、言われて、サイゼルは何故かドキリと鼓動を強くする。
先程からどうにもおかしい。レオンハルトの言葉を聞いて、レオンハルトを見てると身体が熱くなってくる。
森の中を駆けながらのやり取りで、風を強く感じているのに、身体は熱くなるばかりだった。
「ただの魔人なら放っておいてもいいんだがな。……だがまあ、お前はよく頑張ってるし、俺の修行にも付き合ってくれてるだろ？」
「っ……う、うん……」
その言葉に色々な想いが渦巻いたが、どれも上手い言葉にはならず、頷くしか出来ない。
そしてレオンハルトは、こちらが頷いたのを見て、続きを口にした。

「俺としても、そういうのは悪い気はしないからな。出来ればお前とも仲良くしておきたいって思っただけだ」
「……！」
悪い気はしない。仲良くしたい。そんなことを言われ、サイゼルは顔を真っ赤にしてしまう。
……ふ、ふーん……レオンハルト、あたしと仲良くしたいんだ……。
それに、
……あたしに……その……付き合うのも、悪い気はしないって……。
と、心の中で反復すると、顔を覆い隠したい気持ちになってしまう。
……ふ、ふーん、ふーん……そっかそっかぁ……。
つまり、自分のことが――ごによごによってことだ。
それを心の中で認識しただけで、サイゼルはとてつもない恥ずかしさを覚え、同時にお腹の奥が熱くなるような何とも言えない感覚になってしまう。
ただ、悪い気はしないし、寧ろ――ごによごによって感じだ。
「……！」
「――っと。やっぱり追いかけてきたな……サイゼル。動けるならそろそろ自分で飛んでくれるか？」
そうサイゼルが、自分の心の中で色々と舞い上がり、自覚を感じていると、背後からトッポスが木々を薙ぎ倒しながら追いかけてくるのを感じ、レオンハルトがそんな言葉を掛ける。
だがサイゼルは、レオンハルトの視線から目を背けてもじもじと身体を動かしながら、
「……む、無理……まだ、動けない、から……その……」
「……？　あ、ああ……まあ、それならしょうがないが……」
レオンハルトが訝しげに視線を細めながらも、何とも言えないような表情で納得する。サイゼルは内心で安堵し、
……そ、そうよ……まだ動けないんだから……これは仕方ない、仕方ないのよ。それに、レオンハルトもこうするのが……その、きっと、良いだろうし……。

と、そうしてサイゼルはとてつもなく恥ずかしいが、仕方なく、暫くの間、レオンハルトの腕の中の感触を堪能することとなり、
……ひょっとして、あの子も……？
ある一つの疑惑を浮かび上がらせながら帰路についた。

レオンハルトは、サイゼルを抱き抱えながら、疑問を内心で作った。
近くにいるライゼンの場所まで行ければそれでいいため、逃げるだけなら問題ない。
本心では戦いたい気持ちが湧き上がっているが、今はサイゼルを安全に連れ戻すのが先だ。
しかしトッポスが追いかけてきているため、攻撃された時の対処として、腕が空いている方がやりやすい。
だからサイゼルには、動けるなら飛べるのだし、自分で戻ってくれ、と告げたのだが、
……こいつ……どう見ても、もう動けるよな……？
サイゼルの様子を見て、そう思う。
明らかに太腿を摺り合せたり、身じろぎを繰り返しているため、動けるように思えるのだが、動けないと言った意味が不明だ。
その様子に心当たりというか、そういうのは何となく分かるのだが、
……いや、仮にそうだったとしたら……何故そうなる？
そうだとしたら不可解でしかない。どこにそうなる要素があるのか、と。
特にサイゼルはそういう部分は子供に近いというか――こう言っては何だが、まだハウゼルの方がそういう風な様子を感じる。いや、ハウゼルもそういう感じではなく、単純に趣味の合う友達という感じの筈だが、強いて言うなら、だ。
とはいえ確定ではないので、こう思ってしまうのは自意識過剰だし、違うのに確信してしまうのは恥ずかしすぎると思う。自分の経験上、９０％くらいの確率で、こんな反応をする女はどう考えても〝そ

れ〟なのだが、確定じゃないのだから自分からは何とも言えないのだ。
「れ、レオンハルト……」
「……どうした？　もう動けるか？」
「そ、そうじゃなくて……お、落ちそうだから、も、もっと強く、抱き抱えなさいよ……！」
「……ああ、まあ、別にいいが……」
「し、仕方ないわね……お、落ちないように首に……て、てててて、手を回すけど、これは仕方なくなんだからねっ！」
「……おう、そうか……」
と、恐る恐ると、恥ずかしそうに首に手を回してきたのと見て、レオンハルトは思う。
……いや、首に手を回せるならもう動けるよな……？
そして、こんなことを態々してくるということは、とも思うが、あまりにも急すぎて困惑してしまう。
なのでレオンハルトは、サイゼルからのその気持ちを一旦、保留にし、一先ずは城に帰ることを優先とした。

ハウゼルの気持ち

大陸西部の森で迷子のサイゼルを連れ帰り、城に帰ってくる頃には日は完全に沈んでいた。

そして帰るなり、待っていたハウゼルと顔を合わせると、二人は微妙な、バツが悪そうな様子で視線を合わせ、

「そ、その……ごめんなさい、姉さん……」

「……い、いや、別に……その……」

ハウゼルが小声で謝るが、しかしサイゼルは謝ることは出来ずに、もごもごと言葉を迷わせる。

喧嘩の時のように険悪な空気にはならなかったが、どうにも顔を合わせづらい様子で、お互いにチラチラと相手の様子を窺っている。

それを察したレオンハルトは、今日のところはとりあえず解散だと言い渡した。

喧嘩したばかりだとお互いに遺恨が残らずとも、今すぐ仲良くしようというのも難しいだろうと。

なのでお互いに冷静になる時間を設けた方が良い。少し時間が経てば、お互いに少しずつでも歩み寄ってくれるのではないかと思った。

場合によっては、レオンハルトがそのために何か一計を案じ、動いてもいいのだ。

――そう言えば、何が原因で喧嘩をしたのかは教えてくれなかったな……。

キャロルはそれをどうやら知らないらしかったし、インデックスは意味深に微笑むのみで、帰り道でサイゼルに尋ねても顔を背けられるので答えて貰えなかった。

何となく思い浮かんだものはあるが、仮にそうだとしたらレオンハルトとしては何とも言えない。いや、厳密に言えば言えないこともないし、解決しようと思えば出来なくもないのだろうが、それをやるのには少し迷いがあるし、確定じゃないと出来ればやりたくないものだ。

なので一旦保留。そしてレオンハルトは、自分の休日が、ほぼ潰れてしまったことに何とも言えない虚しさを覚え、ある場所へ向かっていった。

ラ・ハウゼルは自室で借りてきた本を読んでいた。
だが、
「……ふぅ……集中出来ませんね……」
息を吐き、本を開いたまま顔を軽く伏せる。
気を紛らわすために趣味である読書を行おうとしたのだが、本を開いても、集中出来るのは十分くらいであり、何度も溜息を漏らしては再び本に集中しようとするのが続いていた。
いつもならば数時間はずっと本を読んで楽しんでいられるのに、今日はそれが叶わない。
その原因は、
……私、どうなってしまったんでしょう……？
それは喧嘩の原因ともいえる自身の気持ちのことだ。
姉であるサイゼルに、レオンハルトとの予定を取られたように感じ、姉の身勝手な行動につい怒りをぶつけてしまった。
それだけならば正当な憤りだと思うし、特に悩む必要はないかもしれない。
だが、姉が黙ってレオンハルトと仲良くしていたりすることや、レオンハルトが自分との時間を過ごしてくれないことを考えると、何とも言えない感情が湧き上がってくるのを感じる。
それが原因で、ハウゼルは先程から集中出来ないでいた。
一体この気持ちはなんだろうと考えてみるも答えが出ない。
いや、厳密に言えば出かかってはいるのだが――それを考えると妙に顔が熱くなって取り止めてしまう。
「……」
考える頭と身体、両方に熱が入って上手く働くことが出来ない。
これではいけない。明日からもレオンハルトと過ごすことは確実

だからだ。
先程のようにまともに目を合わせられない事態となることは避けなければならない。
……お風呂にでも入りましょうか。
と、ハウゼルは自身の考えや心を少し落ち着かせるために、本を閉じて、部屋を出ることにした。
気づけばかなり遅い時間。本に集中出来なかったとはいえ、何度も集中を試みた結果だ。
そろそろ皆寝静まる頃だろうし、今なら誰かと鉢合わせるのは最小限で済むだろうと、ハウゼルは扉を開き、浴場へと向かうことにした。
その予想は的中し、風呂までは無事に辿り着けた。だが――
「――おっ……ハウゼルか……」
「あっ……」
風呂を頂いて部屋へと帰る道中、廊下を歩いていると、ばったりと今最もハウゼルの心をかき乱す存在と鉢合わせた。
……な、なんでレオンハルトさんが……！
何で、と思ってしまうも、彼の城なのだから当然だ。どこにでもいる可能性はあるし、鉢合わせる可能性だって少なくない。
やはり冷静になれない。動揺している、と自身の状態を理解しながらも、彼の顔を見ると安心するような、それでいてドキドキとしてしまう不思議な感覚になってしまう。
……う、あ……ど、どうすれば……？
いつもならここで、一緒に読書でもしないかと自然と言葉が出てきたり、普通に会話することが出来るのだが、先程の件で考えさせられることが沢山出てきたため、普段どおりの対応が取れない。
こう言ったら変に思われないだろうか、などのネガティブな思考が多発して、言葉を迷わせてしまう。
そうしてる間に、変な間まで生まれてしまうため、段々と気まずくなってしまう。
時間を取らせるのも悪いので別れるべきだろうか。でも話したい気持ちはあるという矛盾するような気持ちを覚える中、先に言葉を発

したのはレオンハルトの方だった。
「――湯上がりか」
「あっ……は、はい……そうです……！」
湯上がりであることを問いかけられ、何故か恥ずかしい気持ちが大きくなりながらも頷く。
……でも、レオンハルトさんから話しかけてくれて良かった……。
それならば受け答えするだけなので、まだ楽だ。自分から話を振るのは、今のハウゼルにとって少し難しい。
だからハウゼルは、レオンハルトの言葉を待ち構えることにした。それならば対応は難しくないと思い――レオンハルトが笑みを浮かべて、口を開くと、
「ああ、道理で――色っぽいわけだ」
「……えっ」
と、レオンハルトからの言葉に、ハウゼルの思考は一時、機能不全を起こした。
レオンハルトからのストレートともいえる言葉。色っぽいと褒められた。
それを頭で理解したハウゼルは、
「〜〜〜っ！」
身体の熱が強くなるのを感じて、声にならない声を上げそうになった。
しかしそれを何とか差し止め、ハウゼルは顔を真っ赤にして、あわあわと慌てたように、
「い、いいい色っぽいって……そ、そんな……別に、私はそんなことなくて――」
「いや、色っぽいし、可愛いと思うぞ。勿論、いつも可愛いがな」
「な、なななな何を言ってるんですか!?」
遂に抑えきれず疑問が噴出した。
可愛い、と告げられて思わず顔を背けてしまうほどの羞恥がハウゼルを襲う。
しかしレオンハルトの言葉は止まらず、

「ふっ……そうやって恥ずかしがってる様子も可愛いな。天使の様だ」
「はうっ……あっ……うぅ……レオンハルトさん……」
壁に向かって顔を背けていると、レオンハルトが近寄ってきてこちらの顔を覗き込むようにしてきた。
壁に追い詰められ、レオンハルトの身体と壁の間に自分の身がある。
しかもレオンハルトの左手がこちらの顔の横の壁に置かれている。その伝説的な状況の名を、ハウゼルは心の中で口にした。
……こ、これは……た、確か、か、壁ドンというものですか……!?
最近見始めた恋愛小説の中に、このようなワンシーンが確かあり、著者の補足で、〝これは壁ドンって言うんですよう〟と書いてあったので身につけた知識だ。
それを今、まさに自分が体験している。
本の中では、主人公の女の子が気になる男性にこのように迫られてしまい、その後は――
「……ハウゼルは頑張り屋だし、とても優しい良い娘で……そういうところ、好きだぞ」
「すっ、す……!?」
空いた右手で顎を僅かに浮かせられながら、そういうことを言われ、ハウゼルはもはや顔が熱くてしょうがなくなってしまう。
心臓の鼓動が痛いほどに強く脈打ち、身体も凄く熱い。特に、お腹の奥がきゅうきゅうと締め付けられるような熱を感じてしまう。
好き、と言われただけなのに、自分でもびっくりするくらいに動揺してしまっている。
それを思い――
「あ、あああのっ、きょ、今日はそろそろ、お、お休みの時間なので、ここ、これで、失礼しますーーー!」
ハウゼルは自分の気持ちとは裏腹にその場から逃げ出した。
その場に留まっている様子のレオンハルトを置いてけぼりに、ハウゼルは急いで自室へと戻ると、自室の扉に背中をもたれかかり、

「はぁ……はぁ……」
胸を押さえて乱れた息を整える。
だが呼吸は整っても、身体の熱は収まってくれない。
それに先程のレオンハルトの言葉やその表情が思い起こされ、
……今日のレオンハルトさん、大胆だったな……。
と、ぽーっと虚空を見つめながら思い出してしまう。
いつもより積極的だったが、ああいうレオンハルトもとても良いと思う。もしあのままその場に居続けたらと思うと、
「あうっ……」
もしやそのまま、小説の中の様なことをしていたのではないかと思い、再び激しい羞恥に襲われる。
思わずベッドに倒れ込み、枕に顔を埋めてみるもその恥ずかしさや熱は消えない。
しかし同時に、残念の様なものを感じてしまったり、先程の言葉を思い出して嬉しさのようなものも感じてしまう。
それを想いながら、ハウゼルは腰のむずむずが大きくなり、自然と手を下に伸ばした。
「あっ……！」
自分の熱の発生源と思われるその場所を人差し指で恐る恐るなぞると、甘い感覚が全身を襲う。
ぴくっと身体を震わせてしまい、何だかおかしなことをしてるような気がする、と冷静な部分での指摘が頭に浮かぶ。
……レオンハルト、さん……。
いつも親切にしてくれて、自分達の面倒を見てくれている男性。
魔人の役目に気を落とす自分に、読書という趣味を与えてくれて、それに付き合ってもくれる優しい男性。
それでいてとても格好良く、頼もしい男性だ。
しかも、自分の事を好きと――
「っ、ふっ、はぁ……」
想い、ハウゼルは指をまた動かしてしまった。
すると先程も感じた〝気持ちいい〟という感覚が来る。止められ

ない、中毒性のある快感だ。
レオンハルトの言葉や、表情、彼の事を想い、先程の事や、その先の事を何となく想像してしまい、濡れてしまっているそこで指を動かすと、
「あっ……あぁっ……んっ♡」
先程よりも強い快感がきて、甘い声が漏れてしまう。
自分の手を、太腿で挟み込んでしまうほどの快感を感じて、ハウゼルは未知の感覚のその先に行こうと自然に手を動かしてしまう。
「やっ、はぁ……ん……♡」
空いた右手で、今度は自身の胸に手を伸ばしてみると、熱を増幅させるような快感が背筋に走った。
レオンハルトを想像しながら胸を揉んでいくと、揉めば揉むほどに快感は強くなる。
……これで、下もしたら……。
と、頭の中の想像は、直ぐに止めることは出来ずに実行してしまう。
自分の大きな胸を揉み解すのと同時に、濡れたそこに手を這わせる。
「あっ、レオンハルトさんっ……んっ、レオン、ハルト……さん……♡」
気づけば自然に名前を呟いていた。
だがそうする方が、快感は強くなる。
自分の中のレオンハルトが、先程のように自分の名を呼んで、可愛い、とか、好き、とか言ってくれる妄想が頭に浮かんでくる。
そしてそれと同時に、顔を近づけてきて――その後で、こんな風に、
「あっ、あっ……レオンハルトさ、レオンハルトさん……♡」
もはや自分では制御出来ないほどに、激しく指や手を動かす。
腰が浮きそうなほどに甘美で強い快感を感じて、ハウゼルは自分の中から何かがくる感覚を覚え、
「っ！　～～～っ♡　あっ、ふっ……」
そしてやがて、身を大きく震わせて、声にならない声を上げた。
気がつけば、汗で自分の身体はびっしょりと濡れているし、汗ではない別のもので、下がびしょびしょになってしまっている。

そして段々とクリアになっていく思考の中で、ハウゼルは思った。
それは、
……私、レオンハルトさんのこと――。
天井を見上げ、乱れる息を整えながらハウゼルはその想いを自覚した。そういうことなのだと。
「……また……お風呂、入らないと……」
自分がとんでもなく恥ずかしいことをしてしまったような罪悪感や羞恥に襲われる中、同時にまた会えないかと期待している自分がいることにも気づき、ハウゼルは身悶えするような夜を過ごした。

――紅魔城。
ハウゼルと遭遇し、そして逃げられた後のレオンハルトは特に気にすることもなく、自室へと戻っていった。
しかし道中、
「――ご主人様、そろそろお休みになられてはどうですか？」
「メイド長か……」
と、レオンハルトは目の前に現れた人物を視線で捉えると、ふらふらと近づいていき、
「あんっ♡　……ふふ、いけませんご主人様。今日は私の担当ではありませんわ」
「知っているが――無理だな。今日は俺の剣が、特に獲物を欲しがっている。逃れられると思うなよ？」
「っ♡　大分、酔っておられるようですね……」
いきなりメイド長さんに抱きつき、その豊かな胸元を鷲掴みにし、既に臨戦態勢に入っている剣を下腹に押し付けながらニヒルな笑みを浮かべるレオンハルトに、メイド長さんは主人の状態を正確に判断した。――酔っておられる、と。
レオンハルトが泥酔すると、このように積極的になり、少しキザになってしまうのは身内の間では有名な話だ。
かなり積極的になって自分から求めてくるため、使徒やメイドと

いった彼の女達からは好評ではあるのだが、レオンハルト自身が、それほど酒を飲まない質なため、滅多に見られることはない。
大体何らかの理由がない限りは酒を飲まないのだが、この場合は、
「察するに、休日が潰れてしまったことによる虚しさを白兎様に癒やしてもらおうと部屋を訪ねたら、イヴ様と遊ぶため、出ていって下さいと断られ、そのショックも重なって街に繰り出し、ガルティア様やジーク様辺りと飲みに行っていた――というところでしょうか」
「……ああ、そうだ。言うならば今の俺は、哀しみを背負うルーザー……お前達の様な美しい花に慰めて貰わないと地に伏してしまうだろう……」
「んっ♡　……それは光栄ですわ」
相変わらず酔うと微妙に痛いことを言い出す主人だが、それもまた好ましいものだ。お酒で記憶を失くすタイプではないので、後からの自分の行動や言動に後悔することが多いのだが、それも含めて魅力的だと思う。
「では、こちらへどうぞ。私も含めて、たっぷりと慰めて差し上げますので」
「ああ……頼む……この俺の剣が餓えてしまっているからな……」
下ネタかつ痛いことを言いながらも、甘えるように胸を揉んだりいたずらしてくるレオンハルトを運ぶように寝室に連れて行く。
その際に衣服の下で主張をしている剣をさすさすと擦りながら、主人の官能を高めていると、
「！　あら、レオンハルト。遅かったわね――あっ♡」
「んくっ♡　レオンハルト様、どうやら今日は酔っているみたいですよう……！」
寝室に入るなり、近寄ってきたインデックスやペールを抱き寄せた。
それだけで直ぐにレオンハルトの様子に気がついた部屋の中の美少女達は、期待するような黄色い声をあげて喜ぶ。
「ん……部屋に入る前からこんなにガチガチにして……いけない人ね……♡」

「やぁん♡　レオンハルト様に襲われちゃいますぅ♡」
インデックスやペール、メイド長さんや他のメイドが、レオンハルトのズボンの中に手を入れて、這い回る。レオンハルトが周囲の者達の巨乳や尻を揉み解したり、キスを落としながら、
「お前ら……今日の俺は、朝まで収まることはない。覚悟しろ」
と、その言葉を開始の合図に、寝室の中ではレオンハルトを慰めるための行為が行われ――その日は朝まで嬌声が絶えなかった。
そしてレオンハルトは酔いが覚めた後で、昨夜の自分の発言を思い出して身悶えすることになり、サイゼルとハウゼルはレオンハルトのことを意識し始めて、少し大人しくなった。

人の意志

――ＧＬ５０Ｘ年。
人類にとっての暗黒時代を作り出した魔王ジルの治世も、５００年余りが過ぎた。
もはや人間が過去に国を持ち、文明があったのは遠い昔。
現在では、人類は数百年前から魔物の家畜として飼われていることが常識として語られ、殆どの人間がこの世界の状況を不思議に思うこともない。
数少ない野良の人間達も、過去の文明の事を憶えている者は更に限られており、人間は魔物に見つからないように注意を払いながら、怯えて暮らすことが常識となっていた。
だが、中には人間の世界を諦めない者達もいる。
野良で生きる人間の冒険者や、魔物討伐隊といった者達は、自分達人間がより豊かに生きようと自衛するための力を鍛えている。
数少ない食料や資源を魔物から奪うために少数のパーティを組んで行動したり、人狩りを行う魔物達を討伐したり、魔物達を駆逐するための何かを探して冒険者と同じ様にダンジョンの探索を行ったりしていた。
そして――彼らの様に、魔物の物となった世界で、人間として意志を燃やして戦う一人の青年がいた。
「――はぁっ！」
「ぐへっ――!?」
青年の剣が、１体の魔物兵の腹を斬り裂き、絶命させる。
彼は刃に付いた魔物の血を払うようにしながら、息を吐き、
「――これで、数十体は倒しましたか……」
と、周辺に散らばる魔物兵の死骸の中心に立つ青年は、長い金色の髪を揺らして再び剣を構える。
長身で美形の青年の名は――アイゼル。
野良の人間として生まれ育ち、人間の為に剣を振り戦う一人の人間である。

彼は今、自分達の隠れ里に現れた魔軍の部隊を追い払うため、他の人間達とともに剣を振るっていた。
魔物と戦う大きな理由があるわけではない。
ただアイゼルは、魔物に怯え、魔物に飼われるような生き方を〝弱い〟生き方だと嫌っており、抵抗もせずに勝てないと諦めることは〝美しくない〟と思っていた。
周囲の人間に対してどうと言うよりは、自分はそんな弱い生き方を選ばない。醜く生きるくらいなら死んだほうがマシだという理念に近いものだ。
だからこそ、アイゼルは隠れ生きるような道を選ぶことはせず、自分の意志に従って、堂々と生きることを選ぶために剣や魔法を覚え、戦う手段を身に着けたし、実際にこうして戦っているのだ。
だが彼は、戦っている姿とは裏腹に――悩んでもいた。
「私は……後どれだけ、戦えば良いのでしょうか……？」
それは、次々と現れて迫り来る魔物兵達のことでもあり、今まで戦ってきた日々に対する悩みでもあった。
アイゼルはこれまでの日々に意味があると信じて戦ってきた。
幼い頃に世界の常識を周りの大人に知らされてから、それは美しくないと思い、せめて自分だけは自分の意志を貫こうと生きてきた。
その姿を、かつての大人たちはどこか生暖かい目で見守るような、それでいて諦観に満ちた視線で見つめていたもので、当時はそれに対する反発の様なものを感じていた。
だが、実際に大人になり、アイゼルは現実の厳しさを知った。
世界の殆どは魔物達のものだった。人間が安全に暮らせる場所など、大陸全体の１％程でしかないだろう。
いや、真の意味で魔物に生活を脅かされずに暮らせる場所など、この世界のどこにもありはしないし、並の人間を越える強さを持つ魔物達の数は相当に多く、人間牧場で暮らす意志無き人間を除いた人間達の何千倍といった数が存在するだろう。
そして更には、その魔物達を越える強大な魔人達や、その魔人達を越える凶悪な魔王が存在するという。

そのことをアイゼルは知った。少しずつ、実感していった。
どれだけ魔物を屠ろうとも、一向に状況は変わらない。むしろ悪くなっているのが現実だ。
今この時の様に、魔軍に目をつけられて人間の隠れ里が狩られることが増え、日に日に意志を持つ人間達は数を減らしている。
噂では、何とかこの状況を変えようと強力なアイテムを切り札に、魔人に挑んだ大規模な魔物討伐隊は魔人に一切の傷を負わせることも出来ずに壊滅したという。
数百、数千、あるいは数万やそれ以上の人間が寄り集まろうとも、魔人に傷一つ付けることが出来ないという。
そんな彼らが席巻する世界で、自分というちっぽけな人間は一体何を成せるというのか。
「私の生き方に、意味はあるのか……？」
今はまだ、辛うじて自分は生きているし、抗うことが出来ている。
しかし自分は、魔人や魔王といった存在を前に、どこまで自分の意志を貫くことが出来るのか。
無論、貫くつもりではいる。弱さや醜さを晒すつもりはない。
しかし、どうあっても不安や悩みは消えてくれない。
強く生きようとして、しかし、至極当たり前の判断が脳裏を掠める。
――魔物に勝てるわけがない。幾ら抗おうと無駄なことだ、と、自分を揺らがせる考えが、時が経つに連れて頻繁に脳裏に浮かんでしまう。
その度に自分を奮い立たせる。自分は屈しないのだと。
どれだけ強大で恐ろしい魔物が現れ、己の意志を砕こうとしても、それに屈しはしないと。
そう思って、そう思って――その〝試し〟の時は突然、現れた。
「――――ほう、活きの良いのがいるな……？」
「ッッッ――!?」
不意に、魔物兵の波が途切れたかと思った直後、それは現れた。
……な、んだ、アレは……。
今日の戦場はいつも以上に不安を感じてしまうと思っていたが、そ

れが現れた瞬間、アイゼルはその原因が眼の前の女にあることを理解した。
その場にいるだけで、肩に重く伸し掛かる重圧。怖気が走り、まるで極寒の地域に裸でいるような寒気を感じて、身体がガチガチと震えてしまう。
直視しただけで気分が悪くなり、気を失ってしまいかねないショックが与えられる。並の、心が弱い人間なら気を失うか、死んでしまうことだっておかしなことじゃない。
長く綺麗な水色の髪を持つその女性は、しかしその恐ろしさに反してとんでもない美貌を持っていた。
衣服を何も身に着けず、惜しげなくその美しい裸体を曝け出した絶世の美女は、同性であっても目が眩む様な美貌を持ちながらも、圧倒的な負のオーラを纏っており、見る人間に恐怖と絶望を与えてくる。
「う……ぐっ……」
アイゼルも小さくうめき声を漏らすことしか出来ない。まともに喋ることは出来ず、剣を持つ手も震えてしまう。
それは本能が完全に、眼の前の存在に対しての〝敗北〟を認めていた。
ちっぽけな人間でしかないアイゼルは、眼の前の存在に勝てないと、既に認めてしまっているのだ。
仮にこの剣を振るったとして、仮に当てることが出来たとして――眼の前の女性に通用しないだろうと、想像してしまった。
そしてそんな怯えや諦めを、眼の前の存在は悟ったのか、不敵な笑みを浮かべながらアイゼルを観察するように睨めつける。
「……ふむ、中々に見れる容姿だが……くく、まさか私と戦うつもりか？」
「っ……わ、私、は……」
こちらを嘲笑するような発言や態度も、アイゼルは怯えて言い返すことが出来ない。
何とか声は出たものの、その先は続かない。それを見て、その存在は可笑しそうに口端を吊り上げる。

「怯える獲物は嫌いじゃない……が、さて、どう料理してやろうか……？」
と、その存在はゆっくりとアイゼルの方に近づいてくる。
ひた、ひた、と。何の警戒もしていないゆったりとした動作で歩いてくる。眼の前の人間の反撃などまるで考えていない様子だ。
そしてそれは実際、反撃など無意味であろうし、そもそもアイゼルの方に、剣を振る勇気が湧いてこない。
絶対に屈しない。自分は弱くなどないし、どんな苦境にあっても意志を貫いてみせる。
そう思って挑んだその試しは、実際には何の反抗をすることも出来ずに、その存在の接近をただただ許してしまった。
「これだけ容姿が良いなら、飼ってみるのも悪くはないか……？　くく、たまには戯れてみるのも悪くなさそうだ」
「う……ぁ……」
女性の黒い手がアイゼルの首筋を軽く撫でる。
それだけで心の臓を握られたかのような恐怖が襲いかかってくるが、事実、今のアイゼルは眼の前の女性に生殺与奪を握られている。
生かすも殺すも彼女次第であり、これから死よりも苦しい拷問が与えられるとしても、アイゼルには抗う術はない。
「戦いたいと言うなら遊んでやっても良いが……どうする？」
「……！」
女性から問いかけられ、アイゼルは恐怖で心が押し潰されそうになった。
おそらくは軽くであろう、彼女から向けられた戦意のようなものに、気絶しそうな程の重圧が伸し掛かった。
「……わ、私、は――」
戦えば殺される。
しかし、自分は抗うことを決めたはずだ。自分の意志を貫いてみせるのだと自分に誓ったはずだ。
だからこそ、アイゼルはこう言うのだ――それでも戦う、と。
そう言うつもりだったのだ。

「――私、は……貴女に……従い、ます……」
アイゼルはゆっくりと彼女に向かって膝を突き、頭を垂れた。
完全なる敗北、屈服の宣言だった。
アイゼルは、その選択を取ってしまった自分に対して、最早何も思わなかった。
最初に彼女を目の前にした時点で、その意志はとうに折られてしまっていたのだ。
その何も思わなかったことに対して、アイゼルは自分の醜さに吐き気を催した。
そしてその女性も、嘲笑するように含み笑いを漏らし、
「――く、くくく、はははは……！　そうか。やはり、その程度か」
アイゼルを見下しながら笑い声を響かせる女性。彼女はアイゼルの首に再び手を這わせると、その顎を強引に上に向かせた。
「くく、貴様は、戦士よりも男娼がお似合いだな――」
「……」
もはや何も言うことも出来ない。
相手の嘲笑に反抗することも出来やしない。
アイゼルの心には、深い絶望と同時に、生き延びることが出来そうだという安堵の感情が芽生えてしまっていた。
そのことに対して、とてつもない醜さを自分に感じてしまう。
自分の意志の弱さ、脆さ、醜さ。その全てを認めろと言われている気がして吐き気がした。
だがアイゼルは、眼の前の女性の顔が首に近づいてくるのを感じながら、それを、否と断じた。
……私は、弱くなどない。
自分は弱くなどない。
ただ眼の前の存在が、現実が、魔物達が、理不尽なだけだ。
他の人間でも同じことになるだろう。自分のように負けるだろう。
あるいはもっと酷い醜態を晒すだろう。
故にこの選択は間違いではない。逃げることは間違いではない。
人間全てが弱いことが原因なのだ。

人間全てが、大多数の人間が醜いだけだ。私は醜くない。
もしこの先があるのなら、それを証明してやる。
美しい意志を持つ人間とて、強大な力の前には屈することしか出来ないのだと。
自分は、美しいものが、美しい意志を好むのだ。
その美しさというものを、永遠に追い求め続けよう。
例え、どれだけの時を彷徨い続けることになろうとも――
「……忠誠を誓います。魔王、ジル様……」
そうして失意の果てに人としての心を捨て去り――アイゼルは魔人となった。

新しい魔人を作った――そんな報告を、その新しい魔人を連れて報告されたのは、人間の隠れ里の襲撃を終え、僅かに離れていた数十分の間の後のことだった。
「いつも通りレオンハルト、お前に任せるからな……」
そう告げられて、魔王ジルは、やることがあるから、と珍しく部屋に自分を誘うことなく、その場から去っていった。
そうしてその場に取り残されたのは、
「……それで、お前がその新しい魔人か」
「はい。お初にお目にかかりますレオンハルト様。私は魔人――アイゼルと申します」
よろしくお願いします、と優雅に一礼してみせたアイゼルは、柔和な、それでいてどこかまだ緊張しているかのような笑みを浮かべてこちらに礼を尽くしている。
２メートル程の長身に、赤い瞳、長い金髪を持ち、赤い縁取りのマントが付いた黒鎧姿の男だ。
見たところかなりの美形であり、何となく、ジルが魔人にした理由に嫌な想像をしてしまうが、それについては触れずに置く。
とにかく、自分は新しい魔人に対しての教育や、その人柄、性格の把握などを行わなくてはならないのだ。

だが、やはり見たところ、礼儀は出来ているようなのでそこまで苦労はしないだろうな、とレオンハルトは内心思いながらも口にする。
「アイゼル。お前にはこれから、魔人として人間牧場の一つを管理してもらう。その他、ジル様の命令以外であれば自由と言っていいが……何か聞きたいことはあるか？」
望むのなら、魔人の生き方について色々と教えてやるのも吝かではないが、とレオンハルトはアイゼルに告げてみせる。
するとアイゼルは数秒間を置いて、思考した上で問いを投げてきた。それは、
「何をするにも自由……それは人間に対しても何をしても構わないということで？」
「ああ。魔人であれば、基本的に禁止されている殺人も許可されている。ただし、殺しすぎには注意しろ」
「……そういうことでしたら問題ありません。私は……私は、人の〝意志〟というものを試してみたいだけですので」
「……人の意志だと？」
気になる言葉を耳にしたため、確認するように目を細めて問うと、アイゼルは、はい、と頷いた上で、説明を口にした。
「魔人という強大な力を、絶望を前に、人間はどこまで抗うことが出来るか……私は、人の強く美しい意志を見つけて、それを愛でてみたいのですよ。幸いにも、私にはそれに都合のいい力が備わっているようですしね」
と、アイゼルはそう言いながらも、不意に、近くにいる警備の魔物兵に向かって、視線を合わせながら、片手を上げて何かを発動する。
「へ――あ、が……うぐ……！」
すると魔物兵は頭を押さえて苦しみ、そして、
「……」
声も発することなくその場に佇んだ。
その状態を見て、レオンハルトは眼を細めながらその力の正体を口にする。
「……洗脳能力か」

「はい、その通りです。魔人となり、私は洗脳、催眠、妖術と呼ばれるような能力を得た様ですね」
　と、そう言ってアイゼルは魔物兵に軽く命令してみせ、その通りに動くことを実演してみせると、不意に元の配置に付くように命令してから術を解き、
「精神力の低い者では、このように簡単に洗脳を掛けることが出来ますが、強靭な心を持つ者であれば、抵抗することも叶う――そういう術です」
「――なるほどな」
　悪趣味な術だ、と内心で吐き捨てながらも、同時に有用な力であることも認める。意志を奪う力など、個人としてはあまり受け付けない力だが、軍を動かす役職に就く者としては、かなり強力で戦略にも組み込めるだけの力だ。
　使い道も多く思いつくため、これを使わせることもあるかも知れないなと思い、しかし注意を行っておく。
「あまりやりすぎないようにしろ」
「ええ、肝に銘じておきますよ。……時に、レオンハルト様。個人的に聞きたいことがあるのですが……よろしいですか？」
「……何だ？　言ってみろ」
　改まって前置きをつけるその言葉は、何か意味があるのだろう。個人的な、ということで仕事や魔人の事以外の質問なのかもしれない、と予想を付けたところで、アイゼルは少し影を差した表情で告げてきた。
「……レオンハルト様は魔人になる前は人間――それも、最古の人間であり、最古の人間の王だとお聞きしました」
「……ふん、大袈裟な話だ。少しばかり長く生きているというだけに過ぎん」
　おそらくはジル辺りから聞いたのだろうと、鼻を鳴らして応対する。あまり昔の話をするのは好きじゃない。今更コンプレックスになるようなことは何もないが、だからと言って人に話すことは憚られることだ。

「……それでも、レオンハルト様は今まで、多くの人間を見てきたかと思います」
「……そうかもな。それで？」
単刀直入に口にしろ、と視線と言葉に気分を乗せるように発言すると、アイゼルはそれを察して質問を口にした。
「……圧倒的な絶望を前に、抗うことが出来た強い意志を持つ人間は、果たしてどれほど存在し得たのかと……少々、気になっていまして……」
「……そうか」
どこか言いづらそうに、それでいて気になってしょうがない、と言わんばかりの影を差した様子で、アイゼルは質問を投げかけてきた。
その質問に、レオンハルトは一度瞳を閉じた上で息を入れる。
強い意志を持つ人間は、レオンハルトとしても好ましいものだ。
無論、心当たりはある。
今では、少なくなってしまったかつての英雄達や、強い意志を示した人間は、レオンハルトの心に強く刻まれているし、そしてこれからも現れるであろうと思っている。
だがレオンハルトは、その答えを持ちながらも――答えを告げなかった。
「――その質問の答えは、自分で見つけてみろ」
「……え……？」
アイゼルの疑問符を浮かべた表情に、レオンハルトは自分の答えを告げずに、アイゼルと視線を合わせ、強く睨むように答えを告げてやる。それは、
「俺なりの答えはある。――が、それを俺の口から……他人の口から聞かされて、お前は満足するのか？」
「っ、それは……」
アイゼルが僅かに動揺を見せる。こちらの視線から逃れるように、僅かに視線を逸した。
だが、悪いが今更視線を逸しても遅い。とっくに見抜いている。
このアイゼルという男は、その答えを聞いて〝安心〟を得たいだけ

なのだと。
人の弱さを目の当たりにすることで、自分の弱さから目を背けているのだと。
それを否定はしないが、かといってそれを解消してやることは出来ない。
その答えは、自分で見つけないと意味がないのだ。
だからこそ、レオンハルトはアイゼルに、厳しく突き放すように告げるのだ。
「人の意思とやらの答えは、自分で確かめてみろ。魔人の生は長い。お前がそれを知ることを諦めない限りは、いつかは答えを得ることが出来るだろう」
「……」
アイゼルが無言となり、どこか呆然としたような雰囲気で立ち尽くす。
だが、少ししてアイゼルは我に返ると、
「……そう……そう、ですね。分かりました。質問に答えて下さり感謝します、レオンハルト様」
「構わない。――それより、幾つか仕事の具体的な事について説明する。ついてこい」
「……はい、お願いします」
そうして歩き始めたこちらの後ろから、アイゼルが素直に頷いてついてくる。
……こいつも、随分と厄介な業を背負っているな。
魔人になった若輩者の人間に、レオンハルトはその在り方に興味深いものを感じながら、仕事についての指導を始める。同時に思考するのは、そろそろ、という思いだ。
……俺も、そろそろ動かなくてはな。
人の強い意志。この人間の暗黒時代において、困難なそれを体現し得る英雄の存在。
レオンハルトは自身の興味と使命から、その5人の存在を思い浮かべ、内心で喜悦と憐憫などが入り混じった複雑な感情を忍ばせた。

魔人アイゼル

――魔王城。

新しく魔人となったアイゼルの教育は、レオンハルトの予想した通り、特に問題なく終わった。

伝えるべきことを伝え終わったレオンハルトは、普段どおりの業務に戻ろうと、使徒達とともに仕事を行おうとした――そんな時だ。

「失礼。レオンハルト様、少々お時間よろしいでしょうか？」

「む……アイゼルか。どうした？」

使徒を引き連れて魔王城の廊下を歩いていると、アイゼルがふと声を掛けてきた。

その背に、三体の人影を連れてだ。しかしそちらにはまず触れずに、レオンハルトはアイゼルの用件を問うと、アイゼルは真面目な表情で先を口にした。

「……例の件についてご相談が……それと、私も使徒を作りましたので、ご紹介させて頂ければな、と」

「ああ……なるほど。構わないが、それなら先にその使徒達を紹介するといい」

例の件、と言われて一瞬渋い顔になりそうになったがそれを差し止め、得心したように頷き先を促す。

視線は、アイゼルの背後で緊張しているのか、身を固くしている三体の少女に向ける。

だがこちらが視線を向けると、その少女たちはビクッと明らかに怯えるような反応を返してきた。

それを知ってか知らずか、アイゼルは余裕のある笑みを浮かべて頷く。

「ええ、では……ガーネット、サファイア、トパーズ。レオンハルト様に挨拶をなさい」

「うん――じゃなかった、はい！　わかったよアイゼル様！」

「シュアー……分かりました、アイゼル様」

「あっ、あっ、は、はいアイゼル様。ご挨拶します……」

アイゼルの背後にいた使徒達が、主に促されて前に出てくる。
まず一番最初に挨拶を行ったのは、赤いストレートの髪に、赤い宝石を宙に浮かせた普通サイズの胸の少女だ。
「すぅーはぁ――……初めまして、レオンハルト様！　ぼくはアイゼル様の使徒、ガーネットって言います！　その、よろしくおねがいしますっ！」
「……ふーん……？」
と、快活そうな印象の赤い娘はガーネットと名乗った。
緊張はしている様子だが、主の命に従って、元気よく挨拶を行ってきたので、レオンハルトは、ああ、と頷いてみせる。背後にいるハンティが小さく声を漏らし、品定めをするように目を細めたが、あまり脅かすのは止めた方がいいと思う。人の事は言えないが。
そして続いて、二番目に挨拶を行ったのは、やはり青い宝石を宙に浮かせ、特徴的なイントネーションで喋る、青い長めの髪を後ろで二つ結びにした胸の大きい少女だ。
「アイゼル様のエターナルドール……使徒の一人、サファイアと言います。よろしくお願いします、レオンハルト様」
「へぇ、中々良いものを持ってますねぇ……？」
と、やはり全体的に喋り方が特徴的な青い娘がサファイアと名乗る。
こちらは上手く態度を隠せている。一番理性的な性格なのかもしれないな、と内心で分析しながらレオンハルトが頷く。背後のペールがそのサファイアの胸部を見て、良いものを持っていると寸評を行うが、自分よりは小さいと勝ち誇っている。あの格好だと目に入るのは分かるが、初対面でまじまじとそこを観察するのはどうかと思う。
そして最後に前に出てきて挨拶を行ったのは、黄色い宝石を低めに浮かせ、黄色の髪に長めのツインテールの胸の小さな少女だ。
「あっ、そ、その……あっ、よろしくお願いします、れ、レオンハルト様……アイゼル様の第一使徒、トパーズって言います……」
「！　レオンハルト様レオンハルト様、わたくしとお揃いですわ……！」

と、どこか陰気な雰囲気を漂わせている黄色い娘はトパーズと名乗り終えた。
何やらこちらの顔色を窺っている様子であり、卑屈染みた笑みを浮かべているが、さり気なく第一使徒ですというアピールをかましてきてる辺り、腹黒で悪巧みが好きだったりするのかもしれない。
そして案の定、その発言に対し、ガーネットとサファイアが横目で軽く睨み、それを受けたトパーズは、にひひ、と笑みを浮かべる。
どうでもいいが、キャロルがトパーズを見て、お揃いだと目を輝かせているのは意味がよく分からないが、髪型の事だろうか。確かに、同じ金髪ツインテールだが、細部は色々と違う様に見えるが、と、
「……もう三体も使徒を作ったのか」
「ええ、まあ。私も、貴方や他の魔人が羨ましく思ったものですから」
「……そうか。使徒の作りすぎは魔人としての力が僅かに落ちる。注意しろ」
「心得ていますよ」
涼しげにアイゼルは答えたが、そこで一度、再び何かを憂うような表情に戻ると、
「……では、少しご相談を……そうですね、そこの空いてる部屋などは如何でしょう？」
暗に、他の誰かや使徒達にも聞かれたくない話だと告げるようなアイゼルの提案に、レオンハルトは頷く。
「構わない。なら、お前達はここで待っていろ」
「畏まりましたわ！」
と、代表するようにキャロルが元気よく頷くと、レオンハルトの他の使徒達も頷く。
そしてアイゼルの方も使徒達に顔を向け、
「貴方達も、ここで待っていなさい。話し相手もいるようですし、退屈はしないでしょう」
「はい！」
「了解しました」
「あっ、はい、分かりました、アイゼル様……」

三体の使徒がそれぞれ頷くと、レオンハルトとアイゼルは近くの部屋へと入室した。
そして二人だけとなったところで告げるのは、
「随分と慕われているようだな。人間か？」
「まあ……そうですね。少々見どころのありそうな人間を選んでみました」
「……そうか。てっきり、容姿で選んだのかとも思ったが」
「その要素もゼロではありませんが……ええ、まあ、最初はどうなるかと思いましたが、中々に可愛く思っていますよ」
美しさを重視し、美しいものが好きなアイゼルの三体の使徒。
使徒達は人間ということは、大なり小なり、アイゼルに救われたのだろう。あの様子だと命を救われていてもおかしくないし、そもそもアイゼルの容姿だと、女性ならあっさり惚れてもおかしくない。
アイゼルの方も、自分の血を分けた相手をそれなりに好ましく思っている様だし、関係性は良いようだ。
レオンハルトの目から見ても、中々に良い使徒だとは思うが、
「……」
「……レオンハルト様。貴方程の魔人にあまり強く視線を向けられると、若輩者の私としては少し辛いものがありますので、少しばかりご容赦を……」
「……ああ、悪いな」
思わず強めに視線を向けてしまったので、僅かにそれを弱める。
というのも、ある疑問が湧いてきたからだ。それは、あのガーネット、サファイア、トパーズの服装の事で、
……何で、胸のところが丸出しなんだ……？
三体とも、胸の部分が丸出しの衣装を着ており、上半身の胸の部分から腰の部分までが全部見えてしまっているのだ。
なので心の中で胸の寸評をしたのは、特におかしなことではない。痴女な方が悪いのだ。
……アイゼルの趣味か？
だとしたら爽やかな顔をしてとんでもないド変態だが、さすがにそ

れを面として聞くことは、レオンハルトには出来なかった。

「――なんで胸丸出しの服を着ていますの？」

と、素朴な疑問を、キャロルは口にした。

魔王城の廊下では、レオンハルトとアイゼルの使徒達がその場に集まっており、何となく窺うような視線を向けていたアイゼルの使徒に、挨拶の後に遠慮なく第一声を仕掛けたのはキャロルの方だった。

続いてペールやハンティも、

「変に全裸とかより痴女感増しますねぇ。アイゼル様のご趣味ですか？」

「……ペールに言われるとか、もうよっぽどだよねぇ……」

「とはいえ、使徒の服装は使徒化の際に自然と定められるものであり、主に最初に与えられた使徒の誇りとも言えます。あまり小馬鹿にするのはよろしくないかと……」

と、リーが真面目にそう発言すると、三体の使徒は抗議の声を上げた。

「そうだよ！　ぼくはアイゼル様から貰ったこの服、気に入ってるんだから！　変に言わないでよっ！」

「これはアイゼル様が私達にくれた、オーダーメイドのファッション。このセンスは誰にもコピーできない」

「そ、それに、そっちだって男はともかく、他は全員レオタード着てるじゃん。そっちの方がなんか……」

トパーズがリーを除いた三体の女使徒の格好を見てそう言うと、キャロルが自慢気に胸を反らして、

「ふふん、レオンハルト様の高尚なセンスの賜物ですわ！　ところでトパーズ、と言いましたわね。あなた、中々にいい髪型をしていますわね！　わたくしとお揃いですわ！」

「は、はぁ……？　べ、別に、ただのツインテールが被ってるだけじゃん」

「ハッ……もしかしてわたくしの妹とか、もしくは親戚ですの？」

「……ば、馬鹿じゃないの……？」
　トパーズが小声で悪態をつく。まだ身内以外に面と向かって文句を言うことは出来ないようだ。
「というわけで、貴方も、この魔物界一の完璧使徒の後輩として特に可愛がって差し上げますわ！　分からないことがあれば何でも聞くといいですの！」
「うげ……変なのに目をつけられた……」
　しかしキャロルの方はトパーズを気に入ってしまったようで、トパーズのげんなりした表情を無視して後ろから抱き抱えている。
　それを苦笑いで見ながら、ペールが、
「それにしても……なんのお話をしているんでしょうねぇ？」
「ぶっちゃけ、どうでもいいけど……早く終わんないかねぇ」
　ハンティがペールとともに部屋の方を見て興味無さそうに呟く。
それをリーが、
「あまり詮索するのはよろしくないかと」
「でも気になりますよね？　レオンハルト様とアイゼル様、ちょっと似てるところがありますし」
「あ、それぼくも思った！」
　と、今度は快活そうなガーネットが話に入ってきた。二体の魔人を思い浮かべながら、
「見た目は結構似てるよね。まあ、アイゼル様の方がかっこいいけど」
「ふふ、黄金のヘアーに、赤いアイ……ですが、アイゼル様の方が僅かに勝っています」
　サファイアまでもが得意気にそう言い張ると、聞き捨てならないとばかりにペールと、トパーズを抱えているキャロルが声を上げた。
「……はい？　何を言ってるんですか？　レオンハルト様の方がどう見ても格好いいですよう？」
「レオンハルト様のは魔物界どころか世界一の格好良さですわ！」
　二人はレオンハルトの方が格好いいと主張する。するとガーネットやサファイア、トパーズが、
「ふふん、知らないの？　アイゼル様は魔人一の美形だって最近噂さ

れてるんだよ？」
「それに、確かにレオンハルト様の容姿もビューティフルですが、レオンハルト様はアイが鋭くて少々怖いです……」
「ほんとそれ……なんか威圧的で怖いから……ふふ、うふふふ、やっぱり、アイゼル様の方が優しくて素敵……」
　レオンハルトの方は、目が鋭くて威圧的だし、アイゼルの方が優しいから勝っていると主張するが、
「はぁ？　分かってないですねぇ、あの目がいいんじゃないですか。それにアイゼル様の方は少し頼り無さそうですよう。レオンハルト様の方が男らしくて強くて格好いいですよねぇ」
「レオンハルト様の魅力は天井知らずですわ！」
「死ぬほどどうでもいい話題なんだけど……まあ、強いのはレオンハルトだよねぇ。アイゼルは洗脳は厄介だけどあんまり強く無さそうだし。でもやるなら――」
「ハンティ様……話の転換があまりにも強引過ぎますし、その話題は女性としてあまりにも……」
　女子トークにどうでも良さそうな表情を浮かべていたハンティだが、頭の中でアイゼルの強さを想像しながらニヤリと笑みを浮かべたので、リーがさり気なく止めに入る。
　女子の中に中年の親父が一人ということで、リーは特に言葉を発することなく空気に徹していたが、こういう暴走は止めに入らざるを得ない。
　まあ心の中では、レオンハルトこそが至高であり、他の魔人などその足元にも及ばないと考えているが、その、他の魔人の使徒を慮って、特に口出しすることはない。
　心を落ち着かせるために剣王伝でも読んでいようかとリーが思っていると、そのどちらがイケメンかという論争は激しくなり、
「だって、普通に見かけたら怖いでしょっ！　その点、アイゼル様はその怖さもないよ！」
「でも何だか怪しい感じがしますよね？　実際、洗脳なんて力持ってますし」

「アイゼル様の方が身長が高くて、ビューティフルです……！」
「高ければいいってものじゃないですよう？　高いだけならもっと他にもいますし……それに、もしレオンハルト様とアイゼル様が戦ったらレオンハルト様が勝ちますし、男は強い方が素敵ですよね？　他の多くの部分でもレオンハルト様の方が勝ってますよう？」
「まあ単純な多数決でも４対３ですし、魔軍で投票を取ってもレオンハルト様の勝ちですわ。こちらの派閥の方が数は多いですし、そもそもレオンハルト様の名声は大陸中で知るところですのよ！」
「ぐ、ぐぬぬ……強さや数でマウント取ってくるなんて卑怯……！」
「……そんなことより、強いモンスターの話とか……」
「ハンティ様……だから流石にそれはどうかと思います……」
　どちらかと言うとペールの口の上手さや勝っている部分が大きいという理由でレオンハルト側が優勢な様だが、それでもアイゼルの使徒達は引き下がらない。
「ぐ……こうなったら、勝負――」
「あ、勝負するんだったらあたしが出るよ」
「――するのは止めておいたほうがいいよねっ！」
「お、オフコース！」
「そ、そそそれは勘弁……」
　ハンティが勝負と聞いてようやく興味を湧かせたが、それを聞いた瞬間、勝負と言いかけたガーネットがそれを慌てて取り下げ、サファイアやトパーズも慌てたように拒否した。
「ちぇっ……せっかく、暴れられると思ったのにさ」
「止めて下さい。被害が馬鹿になりません……」
　実は街や建物なんかの修復を担当しているリーが、冷や汗をかきながらやめてくれと頼み込む。
　建物の建築や増築、遠征の際の拠点や陣地の構築はリーが得意とする仕事だが、あまり戦闘で荒らされると困るのだ。
　とはいえ、アイゼルの使徒達も力の差は弁えている様で、直ぐに拒否した。流石に使徒最強と名高いハンティに勝負を挑むのは自殺行為に等しいだろうと。

だが、そうしていると、
「――お前ら、少し静かにしろ」
「っ、申し訳ありません、レオンハルト様……」
「ご、ごめんなさい……」
部屋の中から、レオンハルトが出てきて騒ぎ立てる使徒達を注意する。
その注意を受けて、アイゼルの使徒達もバツが悪そうに謝ったが、レオンハルトの方はそのアイゼルの使徒の方を見て、
「それと、誰か一人、部屋に入ってこい」
「え、あ、あの……それは……？」
「アイゼルの命令でもある。お前達使徒の中から一人、あることに協力して貰うから部屋に入ってこいとな」
それを告げられると、アイゼルの使徒達の眼の色が変わった。
そして全員が、
「じゃあぼくが――」
「私が適任で――」
「うふふふ、アイゼル様の第一使徒である私が――」
「……」
と、同時に声を張り上げ、同時にそれに気づいた。
そこで彼女達はお互いに目を合わせ、牽制するように目を向けたところで、
「――ジャンケンポン！」
「ポン！」
「ポン！」
同時にじゃんけんを行い、代表者を決めた。
その勝者は――
「……決まったようだな。なら、付いてこい」
「ふふん、畏まりました」
「ぐっ、サファイア……！」
「ぐぬぬぬぬ……！　なんで私じゃないの……！」
ガーネットとトパーズが悔しそうに歯噛みし、サファイアが得意気

に付いてくる。
　そうして部屋の中に入っていくレオンハルトとサファイアを見て、ペールが首を傾げて呟いた。
「何をするんでしょうね？」
「さあ……とにかく、早く終わってくれないかな」
　ハンティが興味なさげに答え、使徒達は再び適当な雑談に興じた。

「貴方が来ましたか……サファイア」
「はい、アイゼル様。このサファイアが、アイゼル様のオーダーをパーフェクトに遂行してみせます！」
　部屋の中でベッドに腰掛けていたアイゼルはサファイアが来たのを見て、何とも言えない様な表情で頷いた。
　いつもと同じに見えるが、どこか疲れているような悩んでいるような表情を浮かべており、サファイアを心配させる。
　だがそれを取り除くのが使徒である自分の役目だと、サファイアは心得ていた。
　だからこそ、どんな命令が来ようとも問題ないとそれを待つ。
　だが、先に声を掛けたのはレオンハルトの方だった。言い辛そうにするアイゼルの代わりに、
「お前を呼んだのは――アイゼルの〝練習〟の為だ」
「プラクティス……？　練習、ですか……？」
　ああ、とレオンハルトは頷き、ベッドの脇に立って、厳しい目つきでアイゼルとサファイアを見る。
　そしてその用件をとうとう告げた。
「――性行為の練習だ」
「……ワッツ？」
　サファイアはそれを聞いて固まり――そして疑問符を頭に浮かべた。
　だがアイゼルはそれを聞いても何も言わないし、レオンハルトは息を吐きながら続きを口にするだけだ。

「そして俺は……遺憾ながら、その教師役だ」
「……ホワイ？」
またしても疑問の声を漏らしてしまう。
性行為、セックス。つまりはそういうことだ。
強く慕っているアイゼルとのそれはサファイアとしても好ましいものだが、それを教師役としてその場に居合わせるレオンハルトは一体どういうアレなのか、よく分からない。
だが主であるアイゼルは拒否しようとしない。何故なら、
「サファイア。これは、私にとって必要な事なのです……申し訳ありませんが、練習を受け入れてくれませんか？」
「！　そんな、謝罪はよして下さいアイゼル様！　私は、どのようなオーダーでも受け入れます……！」
まさかのアイゼルからの謝罪に、サファイアはそれを必死になって止める。使徒として命令を躊躇し、主に謝らせながらお願いされるなど、恥もいいところだ。
だからそれを受け入れると強く覚悟を示すと、アイゼルは頷き、
「……そうですか。その覚悟、感謝しますよ」
「は、はい……！」
サファイアも頷く。そのタイミングで、レオンハルトも頷き、
「……悪いが――ジル様の命令でな。俺はこれから横についてアドバイスをさせて貰う」
「魔王様の……」
魔王の命令と聞いて、サファイアの身が固くなる。見ればアイゼルは顔を青くしているし、レオンハルトの方は、何故こんなことを……とばかりに頭を抱えている。
それはつまり、
「アイゼルが……その……なんだ、あまりにも下手すぎるとジル様がお冠でな……平均的だとは思うんだが……俺が教育することになった」
「……え、あっ……」
サファイアがその言葉でとうとう意味を察する。

つまりアイゼルは、魔王ジルに戯れで犯され――気に入られなかったのだと。
言葉を選んでいるレオンハルトや、先程から表情が固い様子のアイゼルを見ると、これもジルの命令であり、望んでいないことであることが分かる。
「また呼ばれるかどうかは微妙なところだが……気が向いた時に呼ぶかもしれないから念のために鍛えておけとな……俺に教わるように命令されたそうだ」
「……そういうことです」
「な、なる、ほど……」
色んな意味で何とも言えない話だ。
アイゼルが恐れている様に見えることは、サファイアにとっても憂うべきことだが、魔王に逆らうことは出来ない。
つまり、出来ることは本当に限られているのだ。
それこそ、命令通りに行うため、自分も協力するくらいのことしか出来ないのだと、
「……というわけで、第一回の講習を始めたいと思うが……準備はいいか？」
「……ええ、お願いします」
「わ、分かりました……」
レオンハルトは勿論、アイゼルも気乗りしていない様子で、その夜の講習は始まった。

性技指導

魔王ジルの私室では、ベッドの上に腰掛けたジルが紙の束を片手に、笑みを浮かべているところであった。

「……ふむ、これは――」

ジルが最近になって時折時間を見つけては研究しているそれらは、ジルにとってはそれなりに重要度の高いものだ。

少しずつではあるが研究は資料の解読とともに着実に進んできており、ジルの暇を潰す良い退屈しのぎになっている。

だが、退屈しのぎといえば、もうひとつ、ジルが進めているものがあった。

「さて……レオンハルトは今頃、どうしているかな……ふ、くく……」

研究を一段落させながら、ジルは己の下僕である一人の魔人のことを思い浮かべ、口から笑みを漏らす。

魔人レオンハルト。魔人筆頭にして魔軍参謀という地位につく最強の魔人であり、ジルが戯れに性欲を満たす相手として気に入っている男だ。

容姿に優れ、意志の強さも持ち合わせる良い男であり、夜のテクニックの方も素晴らしいものを持っている男。だが、そのレオンハルトは忠実と言い表せる忠誠心は、ジル個人というよりは、魔王という存在に向けられている。

それだけに、戯れとしてレオンハルトを自分の物にしてやろうと試みて――気づけば５００年が経った。

自身が暇で気が向いた時は殆どレオンハルトと肌を重ねているため、それだけレオンハルトも遠慮が無くなってきたというか、中々に心に入っていけてるのではないかと思う。

しかし、

……まさか、これだけやっても堕ちぬとはな。

だが、これだけやって堕ちることはないとは、やはり人類最古の王にして魔物界の英雄とも称される程の男は、意思の強さも伊達ではない。

だからこそ、その忠誠心を自分に向けてくれれば面白いと思ったのだが、中々思い通りにはいかないので、さすがのジルも焦れてきた。
堕ちないことを愉快に思いもするが、こうなってくると多少の手を変えることも検討すべきだと、
……この間、何となく読んだ古い文献にも、そんなことが書いてあったな。
かなり古く、翻訳もされずに古代語で書かれていたため、解読には時間が掛かったが、レオンハルトの様なタイプを堕とすためには、様々な手を仕掛けることが重要だと書いてあった。
それを鵜呑みにするつもりもないが、確かにたまには趣向を変えてみるのも大事である。
故に、戯れで魔人にしたアイゼルを使って、レオンハルトを揺らがせてみようを思ったのだ。
……ふふ……これで、少しは動揺するだろう。
アイゼルがあまりにも下手くそだったのはジルとしては萎える一方だったが、そのアイゼルの性技の教育を命令することで、遠回しにそれを伝えながらレオンハルトを動揺させる。
しかもこれで、アイゼルが上手くなるなら、もし仮に今後、気が向いて戯れた時に多少でも愉しめれば良いし、そうならなくても最低限の役割は果たせる。まさに一石二鳥だ。
……この間に、レオンハルトを呼べぬのが面倒ではあるが……。
それも致し方ない。それくらいは甘んじて我慢してやろう。
その分、後で激しくしてもらおうとジルはほくそ笑み、研究を再開した。

……俺は、何でこんなことをしないとならないんだろうな……。
レオンハルトは魔王城の一室で、眼の前の情事を眺めながら、内心で大きな溜息を吐いた。
その分、表では僅かに眉をひそめるだけに留めて口を開く。
「――違う。もっと相手の事を考えろ」

「はい……すみません……」
「ん……で、ですが私は……」
ベッドの上にいるのは魔人アイゼルとその使徒のサファイア。
アイゼルはサファイアの後ろに回ってサファイアの愛撫を行っており、それにサファイアも感じている様子を見せている。
そしてこちらの指摘を受けて、アイゼルは手の動きを変えたりし、サファイアもそれなりに感じている。
見たところ、アイゼルの動きはそこまで悪いわけでもないのだが、
……はぁ……何が悲しくて、別の男女の情事の横でその男に性技の指導をしてやらないとならないのか……。
当たり前だが、レオンハルトの視界の中にいる二人は全裸だ。
サファイアのグラマーなスタイル――まあ、胸は元から見えているが――それは惜しげもなく晒されており、下が濡れているところもばっちりと見えているし、アイゼルのそれなりに整った肉体――レオンハルトからすればまだまだな――も見えているし、下の剣も見えてしまっている。
まあ、魔物界の中には全裸に近いモンスターや、使徒――そもそも魔王が全裸だったりするので、それほど珍しいものでもないし、レオンハルトとしてもただ見えているだけでどうも思わないが、情事の最中だということを加味して見せられるのは何とも言えない微妙な気分になる。
ほんと、何が悲しくて見せられないといけないのだ、という思いだ。魔物や人間が女を陵辱してる光景の方が悲惨だとは思うが、気分的にはこっちの方がげんなりする。――俺は何をしているんだ……、という意味も加えて。
……ジルも、面倒な仕事を寄越しやがって……。
性技の指導など、自分でやれ、と言いたいが、それを本当に言える筈もないし、そもそもアイゼルからお願いさせる辺りがいやらしい。これでは、自分がアイゼルに苦言を呈したところで新人の魔人を虐めているだけになってしまう。ジルに逆らう意志が微塵もないアイゼルでは、こちらにお願いするのみで、それに対してお言葉を返そう、と

いう思いは生まれないし、思ったとしても絶対に言わないだろう。
だからレオンハルトとしては後からジルに言いに行って取り止めさせるようにお願いするにしても、とりあえずは命令なのだから指導は行わなくてはならない。
……くそっ……今日も俺は、予定が詰まっているのに……！
仕事も溜まっているし、やることも多い。
直営のも含めた各地の人間牧場の管理に、部下である魔人達の様子を見に行ったり、身内との予定だって詰まっている。
特に最近は、サイゼルとハウゼルの二人がかなりの頻度で誘ってくるので、更にやるべきことが増えた。
娘の白兎との時間やら、ケッセルリンクとのお茶会。それと今度やるジークとのお茶会もあり、一緒にやらないかということで日程を整えてセッティングしなければならないし、ハンティが模擬戦しろとうるさかったりもする。
そういえばカミーラにも呼ばれていたし、その道中にあるメディウサのところから今月分を徴収しなければならない。
更には他の血気盛んな魔人と遭遇した場合などは喧嘩も売られることが多い。これは最悪無視してもいいのだが、レキシントンやレイなどはしつこくて鬱陶しい上に、放っておくと他の魔人と喧嘩し始めるのでそれを止めねばならなかったりもする。
だがジルとの情事に比べたら、魔人の喧嘩とはいえ、戦闘は多少の癒やしに感じてしまうから何とも言えない。
そもそも情事で言うなら、後で予定も入っている。
だと言うのに、
「っ……だから違う。そうじゃない。もっと相手のことを考えろ」
「！　……すみません。ですが、これでも私なりに努力はしているつもりなのですが……」
「あ、あの……レオンハルト様……？　これでも、私は十分……その……グッドだと思いますが……？」
そうじゃない、とアイゼルに注意をすると、今度は謝罪ともに言い訳と、サファイアの十分だというフォローがそれを口にする羞恥とと

もに齎された。
……くそ、全然なってないな……。
それを聞いて、レオンハルトは頭を抱えたくなる。何となく、アイゼルは上手そうに見えたのだが、と。
しかし下手というわけでもないはずだが、レオンハルトからするとどうしても、粗だらけで下手くそに感じてしまう。まさか他の男はこんなに下手だったのか、と思うが、アイゼルも経験がない訳ではないし、最低限の事は出来ている。やはり自分が気にし過ぎなのだとは思うが、
……やる以上は、半端はしない。
誠に遺憾ではあるし、全くもってやりたくないが、それでもやるとなれば、手を抜くことはしない。どこに出しても恥ずかしくない男優レベルにしてやるつもりだ。
少なくとも少しは上達して貰わないと自分の気が済まない。自分が教えたのに下手のままというのは、何となく気分も悪いのだ。
故にレオンハルトは、段々とスイッチが入ってきた様に、
「相手の事を考えろ、というのは、相手のことを思いやるだけのことではない。間違いではないが、もっと相手の事を探り、それにあったものを試せ、ということだ」
「……と言うと？」
そこから教えねばならないのか、とレオンハルトは一瞬厳しい目を向けそうになるのを直前で頭を振って止めるが、それ自体が、相手を若干だが威圧してしまったのだろう。アイゼルとサファイアが身体を一瞬震わせる。
レオンハルトは気持ちを落ち着かせる。最初は誰もが知らないものだし、未熟なだけの者に知らないからとそこを責めるのは良くない。
故に、熱が入ったとしても冷静に、軍事教練の時のようにレオンハルトは解説する。
「……まずは理論からだな。よし、説明しよう。……アイゼル。お前は戦いの時、まずは何をするべきだと思う？」

「戦い、ですか？　それはどういう……」
「何でも構わない。戦争や一対一の戦いだとでも仮定してみろ」
　と、告げてやるとアイゼルは少し考え込む。放置されているサファイアがむずむずとしており、居心地が悪そうだが、それを少し無視させてもらって、
「そうですね……まずは、相手の出方を見るのが、好みでしょうか」
　アイゼルは戦闘の際の自分の好みをまずは口にする。
　しかし、レオンハルトは首を振った。
「いや、そうじゃない。それより前の話だ」
「それより前……？　……となると、相手の確認、などでしょうか」
　と、間を置いて答えた言葉に、今度は頷いた。
「そうだ。戦闘や戦の際、まず最初にやるべきことは、相手の確認、自分の状態、その日の天候や戦場の地形、武器の手入れなどになるだろう。――性行為も同じだ」
　レオンハルトがそう言うと、アイゼルは僅かに目を見開いた。軽い驚きとともに、
「……なるほど。つまりは、相手の様子も含めて、観察することが肝要だと、そういうことですね？」
「そうだ。身体を綺麗にし、体調やムードを整え、まずは相手をその気にさせる。――自分も含めて、まずは戦いの場を整えることだ」
　もっとも、お前はまだ出来ている方ではあるがな、とアイゼルを軽く褒めながら、レオンハルトは告げる。完全には出来ていないのだと。
　しかしアイゼルは少し微妙な、言いづらそうな顔で、
「……それは、分かりました。ですが……自分から頼んだ手前、言葉にするのは憚られますが……そもそもこの状況が、相手をその気にさせるのに向いていないのでは？」
「……確かにそうだが、それを言っても仕方がない。可能な限りは努力しろ。不可能ではないはずだ」
「……分かりました、努力します」
　確かに相手役のサファイアが特異な状況にまだ困惑というか、緊張

している時点で、その前段階が完了しているとは言い難い。
しかしそれは甘んじて受けいれて貰わないとどうしようもないので、そこは気にしない方向でいく。
次は、
「まあ、それは今はいいとしよう。だが、問題なのは次だ」
と、レオンハルトはアイゼルが出来ていない部分のことを指摘する。それは、
「次に戦いの時にやるべきこと。それは――相手の弱点を探ることだ」
「弱点と言いますと……つまり――」
そういうことだ、とレオンハルトは言葉にする前に頷く。
相手の弱点とは要は、相手の性感帯。性感を感じやすい場所だ。
性行為は準備が3割。精神的なものが3割。そして技術が3割で、残りの1割は身体的な部分だ。
レオンハルト個人としては、精神的なものが5割以上を占めると思っているが、全員がそうとは限らないし、他の部分も絶対に必要であることには変わりないので、この全てをマスターすれば性行為などで失敗することはないと太鼓判を押せる。
「相手のことを考えろ、というのは、相手の弱点を観察して暴き、そこを攻めろ、という意味でもある。確かに、相手を思いやることも大切だが、相手にとって最大限の快感を与えようと思うなら、相手の性的趣向を押さえることが必要だ」
「……では、私のそれは不十分だったということですね。申し訳ありません、サファイア」
「っ！　そ、そんなことは⁉　私は、十分にエクスタシーを――」
「無論、そのままでも達することは出来るだろうが、それ以上を目指すのならば避けては通れない道だ」
と、サファイアのアイゼルのフォローに対し、それではアイゼルの為にならないと、言外に伝えてやる。
実際にアイゼルは下手というわけではない。ただ、上手になろうと思うのならそこで満足しては駄目なのだ。

とはいえ、サファイアが自ら口にするのは恥ずかしいだろうと、
「大体は、触って反応を確かめたりすれば理解出来るようになる。サファイアの場合は――乳首と……それと、若干だがMの気配がするな。強めにやられるのが好きだが、アイゼルが思いやっていることで裏目に出てしまっている――といったところか」
「わ、わわわホワイッ!? そ、そんなことは……! というか、何で……!?」
と、サファイアは明らかに動揺して、羞恥も含めて声を震わせているが、その反応が明らかに図星だと如実に語っていた。
「……見ただけで、分かるのですか？」
「慣れれば触る前から分かるようになる。大したことじゃない」
「……そうですか」
アイゼルが再び微妙な表情になる。アイゼルも余裕そうに見えて、微妙に、下手くそだと言われたようで気分が少し沈んでいるのだろう。気にしていないように見えるが、全く気にしていないというわけではないようだ。
だが、何度も言うように下手ではない。ただ自分の方が、経験もあって上手なだけだ。
「相手を観察しながら、弱点を見つけ出せ。そしてそこを適切に攻めれば、百戦危うからずだ」
「……ええ、分かりました。努力します」
アイゼルが頷いたところで、レオンハルトも頷く。
「よし。ならば次は、技の練習に入る。先程告げた弱点を攻め続けろ。その度に修正を加えてやる」
「はい、では――」
「え……？ あ、ちょ――」
そうして、今度は遂に技の修行に入り始めたが、その内心では、
……ひょっとして、アイゼルを鍛えれば、俺の仕事も楽になるのでは？
アイゼルの性技を鍛えて、もしそれをジルが気に入れば自分の呼ばれる頻度が減り、もしかしたらそのうち呼ばれなくなるかもしれな

い。
その可能性があると思うと、レオンハルトの指導も熱が入る。
室内からは、本格的な嬌声が響き始めたが、レオンハルトは我に返ることはせずに、まるで武術の修行の様にアイゼルへの厳しい指摘を続けた。

アイゼルの使徒であるサファイアは、そのシチュエーションに困惑と驚愕を覚えていた。
親愛なる主であるアイゼルの性技の練習相手。それを受けるのは光栄なことではあるのだが、
「あっ、ひっ、んんっ！」
「ふむ……確かに、言われた通りにすると反応が良くなりましたね……」
「ああ。だが、それはまだまだだ。もう少し手をこう――」
最強の魔人であるレオンハルトの指導を受けながらのそれは、サファイアにとっては特殊過ぎた。
しかし、アイゼルの方は真面目に聞き入って学んでいる様子なので、それに水を差すことも出来ない。
というか、百歩譲って見物人がいることはまだいいとしよう。相手がアイゼルなのだから、それくらいはまだ許容範囲だ。
だが、サファイアにとって恐ろしいのが、このレオンハルトのテクニックだった。
アイゼルに技術を教え、サファイアの性感帯を攻めてくる的確なテクニック。それだけでも頭がおかしくなりそうだが、特にヤバいのは、アイゼルに対して技術の指導、ちょっとした指摘を行おうとした時だ。
「手を動かす時には何となく想いを込めてみろ。後、雰囲気を疎かにするな」
「雰囲気……ムード、ということですか。例えば、どのように為されるのです？」

「見てろ」
「っ……！」
と、レオンハルトがサファイアに近づく。一瞬、触られるのかと思ったが、直前で止まったためそういうつもりではないようだ。
あくまでも真面目な指導をしてるし、アイゼルの方もそれを分かっているためなのか、特に気にした様子はない。
だがサファイアとしては、身近でこうやって指導されるのは変な気分になるものだ。
……アイゼル様の手でタッチされながら……アイゼル様に似た、レオンハルト様にルックされる……っ！
インモラルな感覚を覚え、サファイアは歯噛みしながら声を漏らしてしまう。
このレオンハルトの何がヤバいかというと、今、サファイアに触れていないのに、
「……」
「っ、あっ……あぁっ……やっ、あぁ……！」
何故か感じてしまうことに、サファイアは恐ろしさを覚える。
レオンハルトはサファイアに一切触れることもせずに、ただその目を見つめているだけだ。
だというのに変な快感を感じてしまう。
もはや催淫能力でも持っているのではないかと疑ってしまうほどだが、これもレオンハルトに言わせれば、
「――このように、雰囲気を作るだけで相手はその気になる」
「……ただ、じっと見つめているだけに見えましたが……違うのですか？」
「これは戦闘のフェイント、気当たりなんかと一緒だ。攻撃はしないが攻撃してくるかもしれないという気迫。性行為で言うところの、触れてこそないが、触れる雰囲気。つまりはムードを作り出している。殺気を感じれば身体が強張るように、淫靡な雰囲気を強く出せば、相手は勝手にその気になるということだ」
「……なるほど、道理ですね」

……な、なるほどではないですよ、アイゼル様!?
なんだその滅茶苦茶な理論は。さっきから一々戦闘に例えているが、普通はそうじゃないはずだとサファイアは内心でツッコむ。
しかし真面目に頷いている主と最強の魔人相手にそれを指摘出来るはずもなく、しかも、それで感じてしまっているのが事実なので何も言えない。どう考えても無茶苦茶なのに。
「後は、相手の望む言葉を言ってやるというのも重要だ。焦らすことも必要となる愛撫と違って、言葉の場合は、比較的にストレートに伝えた方が効果的な場合が多い。回りくどい考えさせるようなことを言っては、集中がそっちに割かれてしまうからな。とはいえ、それも使いようだが」
「あぁぁっ！　や、うぅ、あ、んひぃっ！」
「なるほど。その辺りも臨機応変に。相手に合わせる、と言ったところですか」
「あぅっ、んんんっ、ひぃぁ、ふぁぁっ！」
「そういうことだ。相手の状況によっては、こちらも手を変えて攻める。ずっと同じ刺激では快感にも慣れが来るからな。手を変えて、慣れさせないようにする」
「んッ、くっ、あぁあああああッ!?　んひゃぁっ！」
「……それも戦闘と同じ、ですか。ずっと同じ攻撃では、相手に見切られてしまうと」
「あぅっ、ふぅ、あぁくぁぁぁっ……！　あっ、ストッ、ひゃぁぁっ！　あああぁぁっ！」
「弱点ばかりを攻めるのも良いが、それだけではなく、他の場所も攻めることも重要だ。一定の快感を与えれば、相手はどこに触れても致命傷となり得るし、技術を極めれば、弱点以外でも感じさせること、つまり調きょ――いや、これはいいか……」
「んひあっ、くあっ、あ、あぁあああああああっ！」
……こ、の、魔人……もはや……セックス、モンスター……！
快感が強すぎて頭がおかしくなりそうな中、サファイアは最後のまともな思考で、レオンハルトをとんでもない奴だと内心で戦慄を覚え

る。
それに、アイゼルのやり方をレオンハルトが適時修正していくのは、
……まるで、二人にタッチされてるようで……！
グツグツと快感が上ってきている。頭や下が煮え滾り、もはやそれのことしか考えられない。
「だからそうじゃない。良くなってはいるが、触れ方や焦らし方、攻める順番などがなっていない」
「！　すみません……では、次は――」
「あひっんく、ふぁああ、やぁッ、あぁああ……っ！」
更に快感が強くなる。
だが、触れずに、指示を出すだけでこれ。しかも、これでもレオンハルトに言わせればまだまだで、先程から違うと何度もダメ出しを受けている。ふと疑問に思うのは――彼の本気とはどういうものかという好奇心にも似た興味。
喉をゴクリと鳴らしてしまうようなそれを、サファイアは快感に喘ぎ、頭を振りながら否定した。
やはりこの男は、セックスモンスターだ。
しかしアイゼルが上手くなっていき、それを味わえるのは、それはそれで役得な気がしてサファイアは複雑に思いながらも暫くの間、与えられる快感に溶けていった。

――その頃。
「アイゼル様、まだかなぁ……」
「レオンハルト様達、遅いですねぇ……これは部屋の中で、いけないことをしてると見ましたよう」
「……はぁ、馬鹿じゃないの？」
「おや、そんなこと言って、始祖様ってば実はそういう話題だと恥ずかしがってるんですよね？　可愛いですよーーーう？　うぷぷ」
「雷撃ッ！」

「ひやあああああっ!?　で、電撃は酷いでひゅうう!?」
「う、うわぁ……痴女だ……」
「いつものことですわ。気にしなくて構いませんのよ」
「しかし、長いですな……」
　防音の魔法が掛けられた部屋の外で、使徒達は時間を持て余していたが、それから少しして、ぐったりとしてアイゼルに抱えられるサファイアと、顔を俯かせ、疲れた様子のアイゼル、納得の言ってないような表情のレオンハルトが現れ、使徒達は部屋の中で何をしていたのだろうと、あれこれ想像を働かせたが、正解した人物は一人だけであった。

5人の英雄

――ＧＬ５２Ｘ年。
大陸。
世界の全てが魔王ジルとその配下である魔人達に支配され、到るところに魔物が蔓延るこの時代。
人間が生きるにはあまりにも厳しすぎるこの世界のその時代に、一人の冒険者がいた。
「ふっ――――！」
「うおぉっ!?」
同じ冒険者の男との模擬戦で、卓越した剣技を見せるのはまだ二十歳にも届いていないであろう少年だ。
赤い短髪に涼やかな顔をしたその少年は、一回りは離れたベテラン冒険者相手に劣るどころか上回り、勇ましく剣を振るう。
相手の剣を弾き飛ばし、体勢を立て直す暇を与えることなく首筋に剣を寸止めしたその冒険者の少年は、相手からの降参の言葉を聞くと、息を吐いて剣を収める。
それと同時に模擬戦を行っていた冒険者や、周りで見ていた何名かが笑みを見せて近寄ってきた。
「さすがだ。やっぱ才能あるやつは違うな」
「ははは……恐縮です」
爽やかな笑みを見せながら遠慮する少年に、周りの同じくらいの年の冒険者見習い達は感嘆の声を上げる。
「やっぱブリティシュは凄いなぁ……」
「お前なら、魔物を沢山倒せるんじゃないか？」
「すげぇ冒険者になって俺達を助けてくれよな！」
「……ああ！　努力するよ」
ブリティシュ、と呼ばれた少年は一瞬、間を置いたが、直ぐに笑顔を見せて頷く。
彼は既に年若くも冒険者として活動することが認められた期待の新星であり、この人間の隠れ里では多くの人から羨望を向けられてい

た。
しかし、そのことを嬉しく思うだけではない。彼は、この場所のように平和に生きる人間達の笑顔が好きだった。
だからこそ、彼はこの場所から一歩でも外に――いや、隠れ里の中であっても、ふとした時に不安な表情を見せる彼らの姿が、酷く脳裏に焼き付く。
それは誰もが知っている事実のせいであることを意味していた。
世界は人間のものではない。魔物のものだ。
この場所で、まだ平穏に暮らすことが出来ている自分達は恵まれている。食糧事情にはいつも悩まされているし、野良の魔物が時たま隠れ里を襲ってくることもあるし、決して裕福な生活を送れているわけではないが、確かに恵まれているのだ。
人間牧場や――そこらの、もっと小さな集落で生きる人間達に比べれば、自分達の生きる場所は天国だ。
だが、この状態を天国だと思わざるを得ない状態こそが、この世が人間の暗黒時代であることを示している。
この世は人間のための生き地獄であり、多くの人間は最低限の幸福すらも望むことは叶わない。
朝になれば自分が生きていることに安堵し、涙ながらに感謝することが、当たり前の日常なのだ。
――だが、そんなのは間違っている。
ブリティシュは、希望も未来もない多くの人々の事を、激しく憂いていた。
大人が子供が老人が、誰もが不安に苛まれて、しかしそれでも命があるだけでマシだと思ってしまうような現実は変えなければならない。
誰もが笑顔で暮らせるように、世界を変えなければならない。
とてつもなく大それた思想だ。自分ですら、そう思う。
それはこの世を支配する魔物達――その上に君臨する魔人や魔王を打倒することを意味していた。
到底無理なことであると、ブリティシュは周りの大人たちから聞い

てきた。
しかし、だからといって諦めるつもりもない。
少しでもやれることはあるはずだ。
そのためにやれることは何でもやるし、そうして強くなっていく内に、また少しずつ、出来ることが増えて、状況を少しでも変えられるかもしれない。
無理だと最初から諦めてしまっては、何も変えることは出来ない。
無駄だからやらない――なんてことは絶対にない。
やってみなければ分からない。
それに、人間は一人じゃない。
一人で無理なら、同じ意志を持つ仲間を集めればいい。
きっと――いや、必ず。自分と同じ様に、今のこの状況を変えたいと強く願う人間はいるはずだ。
ほんの少しでも協力してくれる人間がいれば、不幸に泣く人間が少しでもいるのなら。
ブリティシュは、未来をより良いものにするために戦う。
「……必ず、変えてみせる」
人知れず呟いたその誓いこそが彼の、彼らの――長い旅の始まりだった。

とある人里の建物の中。
多くの者達が集うその建物の奥で、その二体の影はあるものを探し回っていた。
「……」
「……」
廊下を素早く、それでいて静かに行くのは、人間の衣服を身に着けた二体の魔物。
目がパッチリとした金髪ツインテールの美少女と、がっしりとした体格で、右目に眼帯を付けた渋い中年の男だ。
行き交う速さは人を明らかに越えているが、それは当然だ。彼らは普通の魔物ではない。

魔王の血を分けられた魔人。その魔人から血を分けられた忠実なる下僕である――使徒なのだ。
その使徒、キャロルとリーは、廊下を無言で行きながらも時折手を動かしてハンドシグナルでの意思疎通を行っている。廊下の先を覗きながら、
「……（前方に人影無し。クリア）」
「……（了解ですわ！　ちゃっちゃと行きますわよ！）」
リーのハンドサインを受けてキャロルが一応の後方確認とともに進む。そして扉の前まで来たところで、
「……（おそらく、この部屋かと）」
「……（なら突入ですわ！）」
ハンドサインで問題なく意思疎通を行っている二人だが、キャロルのサインを見て、リーが首を振る。
「……（鍵が掛かっているようです）」
「……（鍵はありますわよね？）」
「……（キャロル様が持っているのでは？）」
「……（持っていませんわ。リーさんが持っていると思っていましてよ）」
「……」
「……」
お互いに真の意味で無言となり、見つめ合う。
だがジト目のままのキャロルがリーに向かって近づき、
「……!?　（っ、何故殴るのですか!?）」
「……（何となくですわ。もう面倒ですし、無理矢理ぶち破りますの）」
「……（……では、自分が）」
理不尽だ……、と内心でリーが思い、頭を擦りながら前に出る。そして扉を無理矢理開いた。
鍵ごと扉を入り口から外すと、二人は部屋に入室し、早速と言わんばかりに部屋の中を漁り始めた。
「……（もう少し綺麗に出来ませんの？）」
「……（扉をぶち破るのに綺麗も何もないような……）」

それもそうですわね、とキャロルが納得する。資料探しに注力しているためそこまでツッコまれなかったことに安堵しつつ、
「というか、もう普通に喋って構いませんわ。扉を破ってしまいましたし、人が来る前に終わらせるスピード重視ですの」
「それもそうですな……」
何となく、緊張感のないやり取りをしながら任務を続ける。手を動かし、資料を探していると、その中に、
「！　名簿、ありましたわ！」
「！　では早速告げられた名前の確認を……後、声は抑えめに……」
「……分かってますのよ。えーと、ペラペラっと行きますわ……」
どうやら、問題なく仕事はこなせそうだと、二人で安堵する。
すると今度は別の心配や考えが湧いてくるもので、
「……お嬢様は大丈夫でしょうか……やはり、私だけでも付いていけば……」
「それを言うならわたくしが付いていきますわ」
「む……さすがのキャロル様と言えど、お嬢様の護衛に関しては譲ることは出来ませんぞ……！」
「むむ……わたくしの方が懐かれているのですから、わたくしの方がお付きに相応しいですわ！」
「いえ、私の方が……！」
と、二人してお嬢様の取り合いを始めたところで、部屋の入り口に足音が聞こえた。
「――ん？　誰か――っ!?」
瞬間、やってきた男は高速で首を強打されて身体を床に倒した。
リーが高速で男の背後に回り込み、男を気絶させたのだ。それを見て、リーはキャロルに告げる。
「……そろそろ人も来そうですな。顔は見られてないと思いますが、殺した方が賢明か……如何なさいましょう？」
「商会の仕事がやり難くなるのでＮＧですわ。適当に転がしておいて――あ、ありましたわ！」
リーの問いに答えながら名簿を眺めていたキャロルが、目的の名前

を見つけ出したことで声を上げる。
信用していないわけではないが、一応リーも確認し、
「これで、後は帰るだけです」
「ちょっとお待ちなさい……書き書き……と。これでチェック完了ですわ！　ずらかりますわよ！」
「は、了解しました」
手元のメモに一応書き込んだところで、キャロルはリーを引き連れて人里の冒険者ギルドから撤退する。
帰る時は窓の外から、別の建物の屋根。そして木の上や岩の上を飛び越えるように人里から離れていく。使徒の身体能力であればこれくらいは簡単だ。
主から極秘の命令を受けた二人の使徒は、極秘であるがゆえに部下を使うこともなく、単独で潜入、捜索任務を行っていたが、今その担当が終わった。
二人は帰路につき、紅魔城へと帰っていく。
キャロルのメモ帳には――〝ブリティシュ　確認済み〟と書かれていた。

大陸東にある島国――ＪＡＰＡＮ。
天満橋を渡った先にあるその土地に、足を踏み入れる者達の姿があった。
「――ようやくＪＡＰＡＮに来れました……！」
「……もの凄い遠かったですね……」
「！」
その者達は、全体的に小さい者達だった。
真っ白な髪をツインテールにし、巫女服の様なものを着ている帯刀した美少女――白兎に、その肩に乗るさるぼぼのようなはぐれ使徒――藤吉郎。
そして白兎の友人であり、一応は下級使徒の身分を与えられているミディアムヘアの小柄な美少女――イヴの３人がいた。

大陸では見ない風景を目の当たりにし、感心を向けつつも、イヴはどことなく疲れた表情を見せている。
というのも、白兎のはしゃぎっぷりが原因だった。
「……白兎さん。初めての冒険を許されて嬉しいのは分かりますが、少しはペースを抑えてくれると、ただの人間の私的には助かるのですが……」
「え？　でも……イヴさん、さっきはこれくらいは平気だと……」
「……へ、平気ですが、少しは気を使ってもいいのではないですか、という意味です。ゆっくり見て回るのも良いことでは？」
先程言ってしまった強がりを誤魔化すためにイヴが咄嗟に取り繕うと、白兎は〝それもそうですね〟と頷いてくれた。嘘だとバレているような気もするが、それを指摘してこないで気を使ってくる辺りは成長している気がする。
しかし、実のところ、色んな意味で変わっていない。
見た目は全然変わっていないというか、成長していないし、性格の方も、
「ふふ、知っていますか、イヴさん。ＪＡＰＡＮは大地震によって大陸から別れた土地なんですよ。ＪＡＰＡＮは地震が多発する土地として知られ、鬼、妖怪、地震の３つは、ＪＡＰＡＮの三大災害と呼ばれているくらいです。そのせいで、人の暮らす場所ではないと大陸に移住した多くのＪＡＰＡＮの人達の影響で、大陸の人の中にはＪＡＰＡＮの名前が付いていたり、その文化が根付いていたりしました。今は人里がそもそも少ないので、その面影は殆どありませんが、食文化などは今でも――」
と、長々と解説を始める白兎。
話し始めると長いのもいつものことだ、とイヴはもう慣れてしまったので、普通に相槌を打ち始める。
「そうなのですか。凄いですね」
「！　そうなんです！　ＪＡＰＡＮは凄いんです……！　ここは私の母の故郷ですし、一度来てみたくて……見てみたい場所が沢山あるんですよ！」

と、遠足ではしゃぐ子供のように興奮しながら喋る白兎は、まぁ、一応だが、微笑ましい。
一応は友人だし、一応は冒険を許して貰うために二人で直訴しにいった甲斐があった。
そのために色々と気をつけるようにと注意はされたが、
……しかもヤバいもんまで持たされて……。
危険な事があった時の為に、と、自分にも強力なアイテムや魔法具を沢山渡された。
一点しかない、老化を抑える魔道具なども、あまりにもオーパーツというか、こんな簡単に渡していいものじゃないはずなのに預けられたし、やっぱりあの城の連中は過保護だ。
白兎の為が一番だが、一応は白兎の友人ということで、一緒に守られているのは良いことなのか悪いことなのか。まあ恵まれてはいるのだろうが、
「とはいえ、お仕事というか、おつかいもありますし、先にそちらを済ませるのは？　特定の個人が住んでる村を探すなんて、時間が掛かりそうですし……」
「……それはそうですが……仕事は出来るならですし、一年以内というそれなりに長い期限もありますし……後から一気に終わらせても……」
「露骨にテンションダウンしないでください。子供じゃないんですから」
「し、してませんっ！　それに、子供じゃないです！」
初めての冒険ということでテンションが上がってるせいか、実は大好きな親から任された仕事を後に回そうとしている。心の中を読んだら面白いことになってそうだ。
しかしまあ、あまり心を読みすぎるのは友人に悪いので自重する。感情くらいなら良いだろうと思うが。向こうも、異常聴覚でこっちの心音聞いてたりするし、一方的に読まれるのはプライドが許さない。
だが、それは置いといても、変に意固地になる必要もなく、
「……まあ、道すがら探していくくらいでいいんじゃないですか？」

「！　ふふん、そうですよね。では、まずは〝剣の聖地〟に行きましょう」
　またしても心や感情を読むまでもなく、嬉しそうになった白兎がそう告げる。
　おつかいのことはあまり考えてないな、と思いながらもイヴは応対する。
「確か、レオンハルト様と藤原石丸が戦った場所でしたね」
「そうです。母上が言うには、とても綺麗で澄んだ場所だというので、是非行ってみたいです……なんといいますか……凄く血が騒ぎます……！」
　両手を胸の前で握って興奮している様子の白兎に、何とも言えない笑みで答える。しかしまあ、
　……私も、楽しくないわけでもないんですよね……。
　なんといっても、自分にとっても初めての遠出となるのだ。
　普段は永久保護魔法の掛かった城の中で仕事をこなしながら、白兎の相手をする毎日だし、たまにはこういうのも悪くない。
　やたらアクティブな白兎に乗せられるのも癪だが、
「なら、途中でお弁当でも貰ってから行きましょうか。確か、こっちにも商人がいるんですよね？」
「ふふ、抜かりはないですよ。予め、商人がいるらしきところはチェックしてあります」
「！」
「私は読めませんが、地図だってありますし、問題ありません！」
　白兎の肩に乗る藤吉郎が地図を掲げて胸を張るのと同時に、白兎も腕を組んで胸を張っている。無い胸だ。私の勝ちだな、と僅かならのプライドの回復を行いながら藤吉郎から地図を受け取り、
「ふむ……ええっと……どうやら、結構近くの様ですね。牧場はかなり北の方にありますし、暫くはゆっくりと人間の村でも回りながら旅することになりそうです」
「なら早速行きましょう！　まずは剣の聖地です。そこで私の剣を振り回してやります！　行きましょう、イヴさん、藤吉郎！」

「！」
「はいはい……分かっていますよ」
はしゃいで先導しようとする白兎を捕まえながらゆっくりと歩き出す。地図を持っているのはこちらなので、あまり前を行かないで欲しいのだ。
……とりあえず、近くに村がありますし、それとなく聞いてから行きますか。
と、イヴは地図を見ながら旅の計画を立てる。
白兎の冒険は、一応数年はやっていいと許可を貰っているし、スケジュール上の忙しさはないが、定期的に帰ってこいとも言われてるので、行ってまた戻るという非効率なことをしないようにしておきたい。
それに、イヴとしてはおつかいの方もきちんとこなしたいのだ。
内容としては確か、
……日光、でしたか。そういう名前の少女がいる村を探せばいいんでしたね……。
その少女とその村を探してほしいらしい。見つからなければ見つからないでいいらしいが、一応は頼まれたし、引き受けたことだ。
何のためにそんなただの少女を探すのか、その理由は分からないし詮索するようなこともしないが、とにかく、早めに探して、純粋にこの時間を楽しみたいと思うのだった。

とある人里。
その中にあってしかし外れに建つ一軒家では、知的な風貌の男が書物を読み漁っていた。
「……」
その部屋はこの時代、人間達の間では貴重とも言える大量の魔導書が積まれており、研究結果を書き記したメモや、魔法具の様なものまで、様々な魔法に関するものが所狭しに並べられている。
それでいて魔法に関するものだけでなく、百冊以上の様々な分野の

貴重な書物も含めてその男の大事な資産であった。
彼の名は、ホ・ラガ。
知識を求めて生きる凄腕の魔法使いであり、新たな知識を得ることと、男以外にはあまり興味が薄い一人の人間である。
彼は実験や探求以外のことで外に出ることはなく、酷い時は数ヶ月以上も家に籠もっているため、同じ人里の人間達からは厄介な変人扱いをされていた。
だがそのことを深く気にしてもいない。彼にとって重要なのは〝知識〟を集めること。
それ以外に特に目的があるわけでもないし、無償の人助けをするほど優しくもない。頼まれれば交換条件を出して協力することもあるが、それは一時だけで長くは続かない。特に男が彼に協力を求めることは、一度目はあっても、二度目はないといえる。
時折やってくる冒険者や魔物討伐隊の勧誘も、代わり映えしない目的やお題目を掲げる者たちばかりで、協力しようという気が失せてしまうのだ。
「……ふむ、もうこんな時間か」
一冊の本を読み終わり顔をあげると、日も落ちそうないい時間であったので探求に区切りをつける。
彼の一日はこれだけしかないし、彼の生きる目的は特に無い。
世界が魔物に支配され、自分と同じ人間達が苦しんでいても他人事であった。
魔人や魔王という生物についての知識になら興味があるが、命を引き換えにするほど馬鹿ではない。
自分の暮らすこの場所が魔物に脅かされれば戦いはするだろうが、それもただそれだけ。
ここが無くなろうとも、また別の場所で知識をかき集めるだけだ。
――とはいえ、人類という種が危機に陥っていることに対し、微塵も興味がないわけでもない
何とかしなければならないことは分かっているし、元々知識を身に付けはじめたのは、知識があれば何か今をもっとより良いものに変え

られるかもしれないと思ったからであったはずだ。
だが、やはりホ・ラガは動かない。
それよりも、知識を身につけることだけが、今は大事だからだ。
絶世の美男子や、そこまではいかずとも、彼の目に適うような男でも現れれば協力するやも知れないが、というのはホ・ラガ自身が内心で、冗談めかして自覚するところでもあった。
「……魔人と魔王、か……」
大陸の支配者である正真正銘の怪物達。
無敵と噂される彼らの支配を脱却出来るような英雄はいつか生まれるのか。
ホ・ラガは窓の外を眺めながら他人事の様に興味を持った。

ホ・ラガ――そう書かれた表札が一つの入り口に掲げられている。
それを正面から眺めるのは、フードを被った人影だった。
顔を隠すようなそのフードの人物に、人里に住まう一人の青年はふと思い立って声を掛けた。
「えーと、もしかして、ホ・ラガさんの噂を聞いてやってきた人？」
青年が声を掛けると、そのフード姿の旅人は青年の方に振り向いた。
背は１７０センチ程で青年より少し低い。もしかしたら女性かもしれない、と青年が何となく雰囲気でそう思うと、
「……ま、そんなところさ。ここにホ・ラガさんってのはいる？」
と、聞こえてきた声は女性のものであり、青年はその旅人が女性であることに僅かに目を見開いた。女性で旅をしている者は珍しい。
冒険者や魔物討伐隊は男所帯であり、女性は少ないのだ。
何しろ女性にとって、外は危険であるし、男所帯の中に入ると良からぬ事件だって起こることもある。
それだけに女性の旅人ということは、それなりに腕に自信がある人なのかな、と青年は思いながらも質問に答える。
「あー……いるはいるだろうけど、出るかどうかは微妙なところだよ。

ずっと本を読んでるみたいだし、気が向いた時にしか出てこないから。根気よくノックし続ければ一応出るとは思うけど、偏屈な人だからあまりおすすめできない」
　と、この人里で一番の有名人であるホ・ラガについての説明をする。凄腕の魔法使いであり、智者として有名な彼を訪ねてくる冒険者は、それこそ沢山いるのだ。
　このようなことは何度も起こっているため、青年としても対応は慣れたものだ。
「もしどうしても用件があるなら、今日はもう遅いし、村の方に泊まっていくのをおすすめするよ」
「……いや、それには及ばないさ」
　しかし、その女性はあっさりとその提案を断る。青年は疑問符を頭に浮かべ、去っていこうとする女性に、
「あれ、いいんですか？　用件があるんじゃ……」
「少し急いでるからね。泊まってる暇も待つ暇もないのさ。態々、親切にしてくれたところ悪いけどね」
　と、言いながら女性は懐から小袋を取り出し、青年へと投げ渡した。
　慌ててそれを受け取ると、既に女性は村の外に向かって歩き出していて、
「うわっと……って、これ……！」
「それは情報料。少ないけどとっときな」
　少ないとは言うが、その小袋はぎっしりと詰まっていて重い。
　明らかに、今の大したことのない話で貰える情報料ではなかった。故に青年は慌てながら、
「あ、あの……あ、ありがとうございます！」
「……ま、それでも使ってせいぜい長生き出来るよう努力しな」
　そう最後に告げると、その女性の旅人は人里の外に去っていった。
「――――ん……ようやくこっちは終わったと。後は……二人か、一人かな」

その旅人は周囲に生き物の気配が無くなったところで、フードを捲りあげて、そう呟く。

額に赤い宝石を持ち、長く黒い髪を持つスラッとした体格の美女は、記憶してある任務と同じ名前の人物を見つけ出したところで、命令通り一度帰還しようと、一瞬でその場からいなくなった。

エターナルヒーロー

大陸南部のとある教会。
魔王ジルによる人類奴隷化と、人狩りの最中にある世界でも、宗教というものはなくならなかった。
ＡＬ教は依然として各地で細々とではあるが生き残っているし、魔王ジルへの恐怖から、ＪＡＰＡＮの天志教などは最盛期といえるほどの布教を果たしていた。
だがこの教会は、そんな大きな宗教とはまた別の宗教の小さな教会である。
神父と神官がそれぞれ一人ずつ、教会に泊まり込みで神への祈りを捧げているそこでは、身寄りのない子供を神官見習いという名目を与えながら育てるという、孤児院的な役割を果たしてもいた。
それは偏に、歳のいった優しい神父や、シスターとも呼ばれる優しい神官が、身寄りのない子供達が不憫だと始めたことであり、彼らはここの子供達の親代わりであった。
しかしこの時代、たとえ魔物に運良く襲われずとも満足に食っていくことは大変であり、多くの子供達を養っていくのはとてつもない労力や苦労を必要としていた。
だがそれでも、神父は子供達を見捨てようとはしなかったし、拾われた子供達もそのことに文句は言わなかった。
そんな、貧しいが平穏な日々を過ごすその教会に、一人の少女がいた。
「やーい、ちんちくりん！」
「ちんちくりんじゃないもん！」
一人の男の子にからかわれ、眉を立てて怒声を上げるのは、小さい子供達の中でも更に小柄で、幼い顔立ちをした癖っ毛の少女だ。
目が少し悪いのか、丸い形の眼鏡を掛けたその少女――カフェ・アートフルはいつもからかってくる男の子の態度に憤慨する。
「ちんちくりんはちんちくりんだろ！」
「もううるさい！　勉強してるんだから邪魔しないで！」

「やなこった！」
男の子の意地悪な言葉を受けて、カフェは頬を膨らませて抗議するが、男の子は何がそんなに楽しいのか、カフェのことを〝ちんちくりん〟だとか〝ブス〟だとか、そんな言葉で馬鹿にしてくる。
カフェは、そんなことを言ってくる相手に苛立ちを覚えるが、同時に、そう言われてしまう自分の容姿にコンプレックスを持ってもいた。
カフェの身長は、子供達の中でも特に低く、年下の子達にも負けてしまうほどである。
顔も幼く、おかげで色んな子――特に男子からからかわれることが多く、そのせいでカフェはあまり自分の容姿が好きではなかった。
鏡を見る度に、自分の幼い顔立ちや、癖っ毛を見ては溜息を吐いてしまうほどだ。
折角、神魔法の練習をしようと思っていたのに、これでは集中出来ない。
「……ふん！　いーっだ！」
「あっ、待てよ――」
「待たない！」
カフェは男の子から逃げるようにそっぽを向いて外に向かって駆け出した。
神魔法の心得や知識が書かれている本を持ち出したまま、教会の外にあるシナ海の浜辺に座り込み、その本を見開く。
この本は、子供達の中でも突出して神魔法が上手なカフェに、神父がプレゼントしてくれたものだ。
余裕のあるような稼ぎはないというのに、誕生日などにはどれだけ小さなものであっても、必ずプレゼントをくれる神父には感謝してもしきれない。
ゆえにカフェは、神魔法のことについては真面目に勉強し、将来は出来る限りの人を癒せればいいなぁ、と漠然に思っていた。
かっこよくて優しい人と結婚して、子供を作って、平凡だけど幸せな生活を送れればいいなというのが、カフェの将来の夢だ。

「……でも、夢見すぎだよね」
その平凡な夢は、この時代においては平凡どころか、かなり恵まれたものであり、叶えることが難しい夢であるのだ。
外は魔物が沢山いて、魔物よりも強いという魔人がいて、魔王という魔物の王様だっている。
人間は細々と生きるしかないのだ。
だがたとえそれが無くとも、カフェにはその夢を叶えることに不安がある。何故なら、
「私、あんまり綺麗じゃないし……」
水面に映る自分の顔を見て呟く。
そこに映るのは、幼い顔立ちをした癖っ毛の子供そのものだ。
確かに、まだ大人とは言い難い年齢だが、それでも自分と同じ年の女の子達は、大なり小なり成長して身長も伸びているし、女の子らしく、胸やお尻も膨らんできている。
だが自分だけは控えめなままだ。貧相と言っていい。何もかも小さいのが自分だ。
それなのに髪も綺麗なストレートではなく、外に跳ねてしまう癖っ毛。
正直、周りの子達が羨ましい。皆は、普通に結婚出来そうだし。
神魔法が使えても結婚ができる訳でもない。そりゃあ、人を癒せるのは良いことだし、それについて文句があるわけでもない。これはこれで恵まれた才能なのだと理解はしている。
しかし、理解は出来ても納得が出来るかはまた別問題だ。
冒険者になるわけでもなし、強い神魔法の力があったとしてもあまり意味はない。教会で働くだけならそこそこの腕があれば十分なのだ。
だがいくら悩んでいてもそれはどうにもならない。もう少し歳を重ねて、自分がちょっとでも成長してくれればいいな、と希望を持ってみるくらいだ。
故にカフェは、神魔法の練習でもして気を紛らわせることにした。そっちに集中している時間は、コンプレックスを感じずに済むのだ、

と、
「――あ、こんにちは～」
「！　あ、え――？」
　しかし意識の外から女性の声が聞こえて、カフェは集中を乱してしまう。
　人の声に振り返ると、そこにはシスターらしき格好をした女性がいた。
　教会のシスターではない。どこか旅人の、巡礼か何かをしているようなシスターであり、
「えっと、この近くの教会の子ですかね？」
「あ、はい。そうですけど、あなたは？」
　と、聞いたところで、カフェは相手の容姿を見て心を跳ね上げさせる。――かなりの美女であったからだ。
「私はピエールと言います。巡礼中の聖職者で、とっても清楚なシスターですよう」
　ニコニコと笑みを浮かべながらピエールと名乗った女性は、中々に刺激的な格好をしていた。
　聖職者が着る僧衣の様な頭巾や、修道服は着ているものの、足の裾にスリットが入っていてスラリとした生足が見えていたり、服の上からでも目立つ豊満な乳房の谷間が修道服の上側から見えてしまっており、綺麗さと可愛さが絶妙に合わさった親しみやすい雰囲気の美女だが、色気が強すぎる気もする。
　綺麗な薄紫色をしたストレートの髪も、カフェからすれば羨ましいものだ。
　もっとも、大体羨ましいことには変わりないのだが。たわわな胸も、きゅっとくびれた腰つきも、女性としてそれなりの身長の高さも、スラリとした綺麗な手足も、全てカフェにはないものだからだ。
　故に、思わず見惚れていると、そのピエールは前屈みになって人差し指を顔の横に立てながら、
「この近くの教会の子なら、そこまで案内してほしいなーって、ピエールちゃんは思うんですけど、お願いできます？」

「あ、はい。分かりました」
声を掛けられたところで意識を戻し、特に含むところもなく笑みで頷く。
ここからだとすぐ近くだが、困ってる人に案内をしてあげるくらいの親切心は、カフェにはある。それに、色々と羨ましいが優しそうなお姉さんだし、外から来たなら話を聞いてみたいとも思うのだ。
綺麗になれる方法とか教えて貰えないかなぁ、と思っていると、ピエールは笑顔を向け、
「ありがとうございますね。ちなみに、お名前はなんて言うんですか？」
「あっ、言い忘れてましたね、ごめんなさい。私は、カフェ・アートフルって言います」
「へぇ、カフェちゃんって言うんですか。可愛い名前で――――ん？」
だが不意に、名前を褒めてくれたピエールが途中で笑顔のまま首を傾げる。それを不可思議に思い、カフェは頭に疑問符を浮かべた。
「？　どうしたんですか、ピエールさん」
「……あ、いえいえ、なんでもないですよう！　……ちょっとだけ、聞こえにくくて……カフェ・アートフルちゃんで合ってますよね？」
「あ、はい。合ってますよ」
「あ、合ってるんですね……良かったです……あ、ああっ!?　私、ちょっと急用を思い出しましたので、ちょっと行ってきます！」
「え？　あ、ちょっとピエールさん！」
「――ごめんなさい、カフェちゃん！　縁が合ったらまた会いましょう！」
言うが早いか、ピエールは何かを思い出した様に声を上げて、踵を返して去っていく。
最後に笑顔で後ろ向きに手を振ってくれたので、思わずこちらも急いで、〝ま、また会いましょう？〟と手を振って答えたが、あまりにも急なので疑問系になってしまった。
「……何だったのかな……？」

綺麗なシスターさんだったし、男の人との約束かな？　と、ちょっと色っぽい話を想像しつつ、カフェは気を取り直して神魔法の練習に戻ることにした。

――そこから少し離れた場所。

「び、びっくりしました……まさか適当に声掛けたら見つかるなんて……もっと時間かかると思ってましたよう」

ピエールと名乗ったシスターは、前髪の下に手を入れ、額を青いクリスタルごと拭うと、聖書に見せかけた魔導書と小さい指揮棒のような杖を取り出しながら、

「とはいえ、もう終わっちゃいましたし、帰ってご褒美貰いましょう。ふふふーん♪　どんなことしてもらいましょうかねぇー？」

と、楽しそうに想像しながら、シスターは長い詠唱の魔法を唱えて、そこから移動した。

大陸東北部。

そこにある魔物界一の大都市には、とある魔人が住まう真っ赤な色の城があった。

その名を紅魔城と言う。魔王城と並び、魔物達の畏怖を集める魔人の居城であり、その街の観光名所としても挙げられる有名な城だ。

城の周りは警備の魔物達が２４時間体制で見回っており、城の中は魔人の下級使徒であるメイドが２００人以上。料理人や城の主に縁のある者達が住まうそこは、仕事や私用で使われ大変に賑わっているのが常だ。

だが、そんな城の中で、静寂に包まれたとある部屋がある。

光の差していないその部屋には、ある男がベッドに腰掛けたまま膝を組み、右手を額に当てて何かを考え込んでいた。

瞳を閉じた状態で、静かに佇むその男は、人の形をしながらも、人ならざる者であった。

即ち――彼は魔人だ。この城の主にして、魔物界の英雄である最強の魔人。
魔人筆頭にして魔軍参謀。魔王を除けば、この地上を生きる者の中でも頂点と言っていい権力を持つ男。
「……」
――魔人レオンハルト。
金髪灼眼、鋭い瞳を中心に男性として非常に整った容姿を持つその魔人は、今はその瞳を閉じたまま、何かを深く考え込んでいた。
その気配は静かな、抑えたものでありながらも、非常に色濃いものだ。
悠然とした佇まいでありながらも、世界最強の剣士としての剣気が混じった、刺すような魔の気配が部屋の中に充満している。
並の人間、魔物では、その重圧を伴った存在感に威圧され、満足に口を開くどころか、呼吸すら止めてしまうかもしれない。息をするのも憚られるような独特な緊張感が、彼の前では現れる。
しかしそれでいながら、思わず膝を屈し、全てを委ねてしまいたくなるような不思議な魅力も持ち合わせている。男性としての容姿が優れていることも関係しているだろうが、その気配から感じ取れる強さや理知的な様子、能力の高さや思慮深さが窺えるその余裕は、まさに王としてのカリスマに近いものだ。
王としては落伍者であると自分で自嘲気味に語ったこともある最古の人間の王は、剣の王としての名を捨てて約二千年近い時が過ぎたが、今となって彼は、殆ど完成された英雄としての風格を漂わせていた。
だがそのレオンハルトは今現在、どこかピリピリとしているようにも見える。
更に言うなら、悩み続けているようにも見えた。
思慮に耽っていることは間違いないだろう。かれこれ彼は三時間近くはじっと考え続けているのだ。
地位の高さと役割の多さ、魔王から重用され、部下からも頼られる彼のやるべきことは数多く、一日の時間を丸々使っても終わることが

ない。
それだけに、彼の時間は貴重なのだ。取るに足らないような出来事――新参の魔人が喧嘩を売ってくるくらいなら、無視してしまうほどに、彼は忙しい。
だが彼は、その忙しい時間を割いてでも、この思考する時間を大事にしていた。
重要過ぎる事柄については、失敗しないために必ずこういう風に考え込む。
レオンハルトの思考力は常人よりも優れているし、長い時を生きる魔人にしては腰が重くない。一度こうと決めたら即実行するのが彼のやり方だ。
だがしかし、それでもなお必ず数時間は考え込んでしまう。長い時間考えることが必ずしも良いことに繋がるとは限らないが、それでも考えざるを得ないほどには、万全を期すようにしていた。
それだけ、今レオンハルトが直面している出来事は重要なのだ。
場合によっては、今直ぐにでもレオンハルト自身が動かなくてはならない。故に彼は、全ての仕事と用事を差し止めてまで、この部屋の中でじっと報告を待ち続け、同時に思慮に耽るのだ。
そうしていると、
「――ご主人様」
と、部屋の中に女性の声が響いた。
レオンハルトの眼の前に現れたのは、深い胸の谷間や肩の部分が露出した少し大胆なデザインのメイド服を着る長いストレートの白髪の美女だ。
瞬間移動をするようにレオンハルトの前に現れたそのメイドの姿に、レオンハルトは驚きもせず、閉じていた瞼をゆっくりと開き、赤い眼光をメイドに向けた。
「……メイド長。報告は？」
メイド長、という呼び名通り、彼女はこの紅魔城のメイド長を務める突然変異体の女の子モンスター、メイド長さん。
今では２００人以上にまで増えた下級使徒達のリーダー格であり、

彼女達を統率するメイドの中のメイドだ。
見た目の美しさだけでなく、能力にも優れた彼女は、レオンハルトに向かって洗練された自然な動作で一礼し、柔和な笑みを浮かべるとレオンハルトの短い問いに対して答えようと口を開く。
「はい。おおよそは完了したとのことです。ただ――」
「……何か問題でもあったか？」
もしそうなら直ぐにでも対応するべきだと言わんばかりに、レオンハルトは目を細めながら問いを重ねた。歴戦の魔物将軍どころか、若い魔人を怯ませるほどの眼光の鋭さだが、メイド長さんは自然な畏まった態度で頷くと、
「レオンハルト様が仰っていた相手の確認は取れたとのことです。しかし、特に重要とされた二人については未だ平和に暮らしているとのことですね」
「……なるほどな」
メイド長さんの報告を受けて頷くと、レオンハルトは再び考え込む。
彼の出した極秘任務。それの詳細を知っている者は限りなく少ない。
彼に絶対の忠誠を誓う使徒達や、自分の娘、メイド長など限られた者達だけがその任務を知っている。
しかしその任務についても、大まかなものだけだ。〝この名前の人間を見つけ、それらがどうしているかを調べろ〟というもの。
何故そんなことをするのか、何の意味があるのか、などのことは誰も知らない。
忠誠心という意味でなら、死んでも裏切らないし情報を漏らさないであろうキャロルやリーといった者達でも、知っているのはその任務の内容だけであるのだ。
ゆえに、メイド長さんはその報告を伝えても、どういう意味があるのかは分からないし、知る必要もない。
彼に付き従う使徒やメイドは、主である彼の命令を忠実に行えばいいのだ。

主が知る必要がないと判断したのだから、それは正しく知らなくても良いことであるし、迷う必要もない。
「……レキシントン、それとメディウサはどうしている？」
「少々お待ちを」
だからメイド長さんは、その後に問いかけられた命令の意味を特に思考することもなく、ただただ忠実に実行し、その情報をレオンハルトに届ける。僅かな時間の後、
「……魔人レキシントン様は、部下の鬼や魔物兵を引き連れてＪＡＰＡＮで人狩りを行っているようですね。魔人メディウサ様も同じく外出しているようです。魔物将軍に聞いてみたところ、獲物を探しているのだとか」
「――そうか」
正確な情報が齎され、レオンハルトはその情報に満足したように頷く。そして直ぐに命令を出した。
「ハンティに連絡して、レキシントンを見張らせろ。件の人物が死ぬようなことがあれば存在を隠した状態でそれとなく救え。ただし、レキシントンの人狩り自体を止めたり、他の人間を救うことはするな」
「畏まりました」
その命令の意味を深く考えれば、レオンハルトが何をしようとしているかがほんの僅かでも分かるかもしれないが、やはりそれについても含むところもなく、メイド長さんはその命令を通達することを了承した。
すると、レオンハルトはベッドの上から立ち上がり、
「俺は少し出てくる。ハンティ以外は帰還させて、通常業務に戻らせろ」
「畏まりました。いってらっしゃいませ、ご主人様」
「ああ」
メイド長の出迎えの挨拶を受けて、レオンハルトはさっさと部屋を出ていって外へと向かっていってしまう。
行き先は確かではないが、明らかにもう片方のところに向かっていったのだろう。

その行動も含めて、５人の人間を確認する理由。
それは未だ、誰にも分からなかった。

その男は、それなりの有名人であった。
人間の世界は狭く、名が知れるといってもその界隈でそれとなく噂される程度のものではあったが、〝シーフ・カオス〟と言えば、腕利きの盗賊として、冒険者や魔物討伐隊の間でそれなりに知られている名前である。
人を躊躇うことなく殺しまくり、金や食べ物を奪うような極悪人――とまではいかずとも、金や食べ物を軽くくすねたりするような小悪党ではあった。
だが、この程度のことはこの時代においてはそれほどの悪行ではない。
人間が生きるに厳しいこの時代では、食うものに困り、子供でさえ生きるために盗みを働く。それも魔物相手では危険過ぎるのもあって、同じ人間から盗むことが常識で、酷い者になると殺してでも奪い取ってしまうほどだ。
だがその男、盗賊カオスはかなりの腕利きであることで知られていた。
鍵開け、罠察知、気配察知、気配を消すこと――スリなどの小手先の技術だけではなく、冒険者として必要な様々なスキルを持っている男であった。
体格はそれなりだが、身のこなしはとても軽いものであり、短刀を使った戦闘は本職の冒険者をも上回る腕前を持ち、魔物や質の悪い同業者と遭遇した際にはその強さが発揮されることも暫しある。
とても下品でスケベな性格ではあるが、根っこの部分ではそこまで悪い奴でもない凄腕の盗賊――それがシーフ・カオスの周囲からの評価であった。
そんな彼は今――恋人とのお楽しみの最中だった。
「やっ……あっ、んんぅ……カオスぅ……」

「――ぐふふ、ここがええのんか？　ここがええのんか？」
酒場の二階にある宿の一室。
質素な木造の部屋の中、簡素なベッドの上で恋人であるジーナを自慢のエロテクニックで喘がせている男がいる。
彼がカオス。凄腕の盗賊として知られる男だった。
目つきの悪い短髪の黒い髪の男であり、歳の割には少し老けて見えるおじさんの様な容姿をしている。顔つきは普通。中の上といったところだが、下品に口元をニヤつかせ、鼻の下を伸ばしているやはり中年染みた男であった。
〝自分の欲求に溺れるより、女を悦ばせてなんぼ〟という信条の元に、カオスは腕の中にいる恋人を悦ばせる。それなりのテクニックを持つと自負する彼は、エロを楽しみながら、盗賊としての生活を行うなど、この時代の人間にしてか、幾分かはマシな生活を送っていた。
彼は特に深いことを考えて生きてはいない。
ただ、苦しみたくはないし、普通に飯や酒、エロを楽しんで生きたいというだけの普通の人間だ。ただたまたま手先が器用で盗賊としての才能があったため、それを活かしているに過ぎない。
それで特に問題はないとも思っている。世間は魔物が多く、魔人とか魔王なんかでとても危険で暗いことばかりではあるが、それを気分が良いとは思わずとも、自分の方が大事なので安全に楽しく生きられればいいや、というくらいの考えだ。
なので進んで魔物と関わろうなどと思わない。ましてや魔人や魔王など関わったこともないし、知識としてもそれほど知らない。滅茶苦茶強くて危ない連中であり、もし見かけたら見つかる前に逃げろ、と教えられるくらいだ。
だからこれからも自分は、くたばるまでは楽しんでそれなりに生きるのだろうと――そう思っていた。
だが、
「……！」
「ん……？　どうしたの、カオス……？」
不意にカオスがその動きを止めたことで、恋人であるジーナは何事

なのかと首を傾げる。
だがカオスは、優れた盗賊としての感覚から、空気が変わったことを察知した。
……何だ？　魔物か？
遠く、町の入り口の方からだろうか。そこから不穏な音と気配を感じ、カオスは身を強張らせる。
各地に隠れるように点在する人里は、時折野生の魔物が紛れ込んだり、魔物兵に見つかって人狩りに遭ってしまう。その場合、そこに住む人間達に出来ることは生き延びるために逃げることくらいだ。
戦うなんて行為はほぼ自殺と変わらない。少数の魔物であれば、冒険者などでも倒せるし、数十程度であれば魔物討伐隊でもいれば追い払うことも可能だ。
だがこの空気を感じ取った時点で、カオスの盗賊としての勘は真っ先に逃げることを選択していた。
「……ここから逃げるぞ」
「えっ？」
「魔物が来てるかもしれん」
「……っ！」
と、カオスは短い言葉で、恋人であるジーナにここから逃げることを告げる。
恋人を放置すれば直ぐにでも逃げることの出来るカオスだが、そんな選択肢はカオスの中にはない。見知らぬ他人ならまだしも、親しい恋人、友人くらいは面倒見れる力はあるし、そうしたいとも一応は思っている。
故にカオスは大切な恋人であるジーナとの情事を即中断すると、服を着せてその場から立ち去ろうとした。
その瞬間、外から堰を切ったような悲鳴が連続した。
「――ま、魔人だあああああああああ！　魔人が出たぞおおおおおお！」
「っ！」
「えっ……？」

魔人。そのあまりにも強烈すぎる言葉を聞いた瞬間、カオスは目を見開いて表情を歪め、恋人であるジーナも顔を青ざめさせた。
おそらくはこの人里にいた誰かの声。恐怖に満ちたその声は、同様の感情を周囲に伝播させる。
男と女、子供や老人の悲鳴が連続し、町の中が騒がしくなる。特に女性の悲鳴が多いように感じたが、それを気に留める余裕は二人にはなかった。
「急ぐぞ！」
「っ、う、うん……！」
動揺するジーナの腕を引いて、カオスが走り出す。
宿の一室を出ると、同じ様に我先にと逃げ出す少なくない人々の姿があった。
しかし、カオスは同じ様に1階に降りて外に出た瞬間に――血飛沫に染まる人間達を見た。
最初に目に入ってきたのは人を纏めて貫く白の大蛇だった。
「ざーんねん。また外れねー。んー、可愛い娘、あまりいないのかしらねぇ……」
女性だけを捕まえ、あるいは殺していくのは、自分の身体から生えている白の大蛇を操る大柄な美女であった。
その異形の姿、本能が拒絶する色濃い魔の気配にカオスはそれをひと目で魔人だと理解した。
そして思うより先に、足が逃げようと前に出る。しかし、
「……あら？」
と、魔人の瞳がこちらを捉えた。捉えてしまった。
「――ふふ……可愛い娘、見つけちゃった」
「ッッ……！」
その情欲に満ちた蛇の視線が、カオスの隣に向けられた時――彼の運命は決まってしまった。

復讐の種

ＪＡＰＡＮにあるその小さな村は、ある少女にとっての全てであった。

少女の家はＪＡＰＡＮに幾つか生き残っている武士の家系の一つである。

魔王ジルの国狩りによって人間の国というものがなくなった世界において、武家は小さな集落や村などの隠れ里を治める長のような役割を持っていた。

少女の父も、自分達が治める村を刀を用いて魔物達と戦い、村を守る役目を担っていたのだ。

両親、兄弟、村の人々。皆が質素ではあるが平穏そのものの生活。

兄弟とともに父から剣術を学び、修行に明け暮れ、魔物との戦いを行いながらも、終わった後は気のいい村の人々と笑い合うことの出来る――そんな逞しい人達だった。

魔王や魔人といった鬼や妖怪よりも恐ろしい存在のことは知っていたが、それでも自分達はこれからも平和に生きることが出来ると強く信じていた。

だがそれが甘い考えだと分かったのは、現実にそれが起こってからだった。

「――ハーッハッハッハッ！　おうおう、活きのいい人間が沢山おるのう！」

馬鹿笑いをしながら村にやってきたのは、鬼や魔物兵を引き連れた鬼の魔人であった。

その存在感、強大な気はその場にいるだけで顔を青褪めさせてしまうほど。魔物との戦いに慣れている父や兄達でさえ、額に脂汗を発して、その表情を渋く歪めた。

それに率いられる鬼や魔物兵の数も、今までとは桁違いの数であり、村を焼き払いながら村人を襲い、容赦のない虐殺と暴行を行っていった。

その悪鬼の如き所業に、少女は憤慨し、立ち向かおうとした。

だが彼女にはまだ、十分な戦う力がなかった。
素養は十分であり、年の割には剣術の腕前も優れたものであったが、父からはまだ一人前と認めて貰えず、戦う許可を出されていなかった少女は魔人の襲来を感じて刀を抜く父の肩越しの言葉を聞いた。
――安全な場所に逃げて、隠れていろ。
父の言葉は短いものだった。
ここにいては足手まといになる。子供を庇いながら戦える余裕はないと示す言葉に、少女は躊躇いながらも、父の言葉に従い、逃げた末に裏山にある人目につきにくい修行場に隠れた。
村一番の剣客であり、時折やってくる旅人にもほぼ負けなしの父が負けるはずがない。
少女は父が負けたところを一度しか見たことがない。ついこの間にやってきた、旅をしているという剣士の少女に負けたくらいであり、それ以外の相手にはたとえ魔物であっても負けたことがなかった。
かつてこの国で生まれたという大英雄――藤原石丸の様に魔人を打倒してくれと、藤原石丸の加護を願った。
だが、数日が過ぎて村に降りた少女の目に飛び込んできたのは――全てが焼け崩れた村の光景だった。
辺りにあるのは、黒焦げとなった建物の残骸や、折れた刀や槍、人の形をした何かや肉片、白い骨、頭蓋骨、血液が染みた地面。灰が風に舞い、鼻が曲がりそうな酷い死臭が村中に充満している。
その中を茫然自失な状態で少女は歩いた。何かを探すように。
だが、変わり果てた村の中を歩いていても、見つかるのは村人であった死体だけ。
それもどれも見覚えのある背格好や特徴があり、その度に少女は膝から崩れ落ちそうなショックを受けた。
見知った村人は、誰もが屍を晒していた。
老人や子供はそこら中に死体が散らばり、逃げようとしたところを容赦なく殺されたのが分かる。

女は比較的に形が残っているが、死臭とは別の臭いも混じっており、汚されてしまったことが分かる。
大人は刀や槍を手に、最後まで戦ったのだろう。バラバラになった骨や身体の部位がそこらに散らばっている。中には強引な力で無理矢理引きちぎられたかのように別れた死体や、陥没した地面に散らばる、細かい破片のようなものもあった。
それが骨や肉が粉砕されたものだと気づくことが出来たのは、幸福ではなく不幸であろう。
何かを見る度に胃の中から逆流するそれを吐き出しながら、少女が最後に向かったのは、自分の家であった場所だ。
村の中ではそれなりに大きい木造の家は、やはり焼け落ちてしまい跡形もなくなってしまっている。
だがその家の周囲にある死体には、やはり見覚えがあった。あってしまった。
一緒に切磋琢磨してきた兄弟は、バラバラになって死んでいた。
優しい母は全裸のまま死んでいた。辺りに服が引きちぎられたような跡があり、やはり異臭がするのは、暴行されながら殺された証だった。
そして誰よりも強く厳しい父でさえも――――死んでしまっていた。
「っ――――!!」
気づけば、少女は泣き叫んでいた。
誰もいなくなった村に、少女の慟哭だけが響き渡る。
その叫びに反応する者は誰もおらず、どれだけの間泣き叫んでも救いは訪れない――そこで初めて、少女は世界の現実というものを思い知った。
魔物が生きる世界というのは、人間にとっての最悪の世界なのだと。
そこに辛うじて存在する平穏は、魔人の気まぐれによっていとも容易く崩れ落ちてしまうものだったのだ。
これまでの平和は、運が良かっただけに過ぎない。

少女が住んでいたその村と、魔物に襲われて苦しむ人間達の間には、薄皮一枚ほどの差しかない。
運悪く、何かの拍子でその壁は崩れ去り、地獄へと叩き落とされる。
だが、それよりも何よりも――彼女は魔人という存在に恨みをもった。
「許せない……！」
彼女は歯を強く噛み締め、魔人への復讐を誓う。
凛々しい顔つきに、長い黒髪を持つその美しい少女は、薄汚れた着物を気にすることもせずに立ち上がり、偶然にも辺りに落ちていた一本の刀を拾い上げ、その場を後にする。
この瞬間――この日光という少女は魔人と戦うための覚悟を決め、長い旅に出ることを決めた。

「ふぅ……あーあぁ……愉しいは愉しかったけど、どうせなら持ち帰りたかったわねぇ」
一つの人里で自身の趣味を愉しんだ魔人メディウサは、指に付着した血をペロリと長い舌で舐め取りながら吐息を漏らす。
だが、その言葉には僅かな不満が表れていた。
「特に最後の子……確か、ジーナって言ったっけ。あの子は持ち帰ってからじっくり愉しみたかったけど……ふふふ」
その血を舐めとり、最後に襲った女性の味を思い出す。
そこそこの美少女だったので、出来れば部屋に持って帰ってじっくりたっぷりと嬲るのがメディウサのやり方ではあるのだが、
「はぁ……レオンハルトに見つかったのが運がなかったわねー……」
せっかくの愉しい愉しい人狩りが、レオンハルトにバレてしまい制限を掛けられたのがメディウサにとっては予定外の誤算だった。
その時の会話を、メディウサは思い出す。
『……戦える男は殺すなって……なぁに、それ？　男にでも目覚めたの？』
『……いいから黙って言う通りにしろ。出来ないのならこれからお前

がやることを認めることは出来ないな』
『はぁ、まあいいけど。男になんか興味ないし』
メディウサは特に含むところもなく、その条件を承諾した。
可愛い女性以外には興味がなく、男がどうなろうとどうでもいいからだ。
だからこそ、殺そうが殺すまいがどっちでもいいのだが、
『念の為、遠くから確認しておく。もし、俺の出した条件を破ろうものなら――』
『……破ろうものなら？』
『――――命はないと思え』
『っ……はいはい、気をつけるわよ』
不満そうに目を逸らしながらメディウサはやはり頷く。
レオンハルトの殺気の籠もった視線に、思わず本能がそれを避けたのだ。
全く鬱陶しいことこの上ないが、逆らうことは難しい。
レオンハルトがやると言ったのなら、本気でやりかねない。メディウサが個人的に仲良くしているケイブリスの話では、以前レオンハルトと不仲だったある魔人は、人間に倒されて死んだらしいが、それもレオンハルトの策略の内である可能性があるらしく、ケイブリスはいつもの事ではあるが、相当怖がっていた。
レオンハルトを怒らせるなといつも言ってくるし、怒らせた時は俺様から出来るだけ離れた場所で殺されろ、と中々に酷いことを言ってきた。もしそうなったら近づいてやろうかな、と冗談めいたことを思うが、とにかく危ないのだという。
とはいえ相当の事をしないとそうはならないらしいので、ちょっとくらい羽目を外しても多少のお叱りを受けるくらいだろうが、破ったら殺すとまで口にしたのだから、本当にやりかねないし、一応は条件を守ったのだ。
それに戦える男を殺すな、という条件はレオンハルトが戦闘狂であるらしいことから考えるに、戦える奴には興味があり、レオンハルトが狩るのかもしれない。

メディウサは生憎と戦っているところなど見たことないが、どうにもそうらしいし、可能性としてはそんなところだろう。
なので今も、おそらく入り口の方でレオンハルトが見張っているはずだ。それもあって、メディウサとしてもじっくり愉しむことは難しかったが、一人くらいは持ち帰っても良かったかもしれないと今更ながら思う。
条件は呑んだのだし、それくらいのことは認めて貰えたかもしれないのだ。我ながら惜しいことをしたな、とメディウサは息を漏らす。
「あの子の彼氏の表情は傑作だったけどねぇ。男はどうでもいいし……」
ジーナという娘を襲った時に、何だか変な男が短刀を片手にメディウサに叫びながら突撃してきたが、戦えるっぽく、条件的に殺したら駄目なので軽く反撃して地面に転がしてから、目の前でジーナを嬲り殺してみた。
ちょっとそれがＮＴＲプレイみたいで愉しかったので、いつもより燃え上がってしまったが、それで手加減出来ずに勢いあまって殺してしまったのはやはり勿体無い。
それでいて、制限が掛けられていることからいつもより窮屈で愉しみきれなかったのも何とも言えないものだ。
そうして不満を持ちながら隠れ里の入口にまで戻ると、
「……終わったか」
「……ええ、まあ。おかげさまで充実した狩りになりました魔人筆頭様ーっと」
軽く不貞腐れながら皮肉を口にするが、レオンハルトは意に介した様子もなく無言でメディウサを睨んでくる。
どうにも機嫌が悪そうで、今日はあまり軽口は抑えた方がいいかもしれない、と思いつつもメディウサは続くレオンハルトの言葉を聞いた。
「……一つ聞くが」
「？　何よ」
「……お前は元から、この隠れ里を襲う気だったのか？」

と、レオンハルトは意味がよく分からない質問をしてきた。なのでメディウサは頭に疑問符を浮かべ、
「……？　まあ、そうだけど……なに？　我らがレオンハルト閣下も、ここを狙ってたのかしら？」
「……そうか。まあ、そんなところだ」
「ふぅん。なら、おみやげでも持ってくれば良かったかしら。今月分ってことで」
と、メディウサは例の取引を絡めて何気なくそう口にする。
するとレオンハルトはこちらに背を向け、隠れ里の外に向かって歩いていきながら、
「……ああ、そうだな。頼めば良かったかもな」
「へぇ、そう……えっ？」
レオンハルトのらしくない返答に、メディウサは驚いてしまう。
軽口に反応し、しかもそれを肯定するのはかなり珍しいものだ。
……ひょっとして、機嫌が良かったり？
機嫌が悪いかと思っていたが、実は機嫌が良い可能性も出てきた。
それだけに、やはり持ち帰ってくれば良かったとメディウサは軽く後悔する。
「……くすくす。ああ、怖い怖い。怖いわねぇ。魔王様の命令もなく、誰もが恐れる魔人筆頭様まで人狩りに精を出すなんて。これは野良の人間の全滅も近いのかしら？」
「……俺は忙しい。そんなことにかまけてる暇はないな」
「今日は来てるじゃない」
「今日は偶然時間が空いていたに過ぎん。……お喋りしている暇があったらお前も早く帰って仕事でもしたらどうだ？　仕事は振らずとも、通常業務はいつも溜まって――」
「さ、あたしは忙しいから帰るわね」
と、メディウサはレオンハルトから逃げるように早足でその場から去っていく。説教を受けるのはごめんだった。
とはいえ、
……まったく、珍しいこともあるものね。何考えてるのかしら

……。
弱者を殺すことを好まないレオンハルトが態々、城から遠く離れたこの場所までやってきて人狩りを行おうとするなど、よくよく考えると魔人界隈ではちょっとしたニュースになりかねない。
ひょっとしたらこの隠れ里に、レオンハルトが目をかけるようなとんでもない強者でもいたのかもしれない。少しそんなことを考えたが、メディウサの見立てでは特にそれほど強い人間は見当たらなかったので、逃げたか、見当違いだったのだろうと、それ以上思考を続けることはなかった。
――今回の一件で、後々に魔人にとっては厄介なものを生み出しうる種が芽吹いたことに、気づくこともなかった。

ＪＡＰＡＮにあるとある村。
冒険という名の観光を行っているのは、白兎一行であった。
「はむはむ……お饅頭、美味しいですね」
「ええ、美味しいですけど……私達、普通に観光していませんか？」
「きー！」
「藤吉郎さんは呑気ですね……」
白兎とともに歩きながらイヴが藤吉郎の心の中を読んで、そう呆れたように呟く。
要約すると、〝使徒の自分がいるんだからもし魔物に会っても怯えてひれ伏すでしょう！〟みたいな感じだ。動物だと心の声も人間の言葉じゃなかったりするので読み取ることが難しいが、藤吉郎は一応人の言葉は喋れないだけで、完全に理解はしているので読み取りやすい。
それに、結構長い付き合いになるのでパターンも分かってきているのだ。
「もし魔物兵に会ってもこの紋様を見せればおそらくは大丈夫かと。ＪＡＰＡＮにある人間牧場は父う……レオンハルト様の管轄ですので」

「まあ、そうかもしれませんけどね……」
　とはいえ野良の魔物にはレオンハルトの下級使徒の証なんて効かないだろうと心配を口にするが、
「大丈夫です。もしもの時は、私が斬り捨てます」
「ええ、まあ……期待してますよ」
「任せてください」
　ふんす、と少し自慢気に胸を反らす白兎を見て苦笑する。こう見ると子供にしか見えないし、全く強そうにも見えない。
　だがこの見た目は白髪ツインテールの和風幼女の白兎でも、実は魔人レオンハルトの実子である魔人ハーフ。身体能力も尋常ではないし、身体も凄い丈夫なのだ。
　ここに来るまでにも、道を塞いでいた岩を拳で砕いたりしてた。岩が砕ける時の音が少しうるさいのでその後からは刀を普通に抜いていたが、それでも剣術の腕前は達人レベルである白兎にとって、巨大な岩だろうが人間だろうが魔物だろうが、一刀両断するのは容易い。
　なのでそこまで心配する必要はないのだ。それに、
「まぁ、仕事も無事終わりましたからね……少しくらいは遊んでいってもいいでしょうけど」
「なら私、てばさきが見たいです……！」
「てばさき……確か、ＪＡＰＡＮ特有の大型のとりですね。乗り物にも出来るとか……」
「はい。うしよりも速いと聞きますし、お土産として一羽貰って帰りましょう」
「持って帰る気ですか……まあ行くならここからだと――」
　と、地図を開いててばさきの産地を調べる。すると、
「……も、もし、旅の御方！　少しよろしいですか!?」
「おや？　貴方は……村の人？」
「……何か御用でしょうか？」
　白兎が首を傾げ、イヴも軽く目を細めながら用件を問う。感情を軽く読んでみたが、どうにも焦りや不安の感情が多いようだ。
　外で生きる人間は大体そんな感じだったりするのであんまり当て

にはならないが、一応出会う人を調べるようにはしている。どんな悪人がいるかも分からないのだ。
　人間からすれば、魔人側についている私達の方が悪役な気もしますけどね、と思ってしまいながらもそれを気にしないように脳の片隅にしまい込むと、村に住むおじいさんは低姿勢で話を始めた。
「はい……実は、不躾ながらあなた方を、凄腕と見込んでお願いが……」
「お願いですか」
「……ふむ」
　白兎と目を合わせるイヴ。心を読んで確認してみると、どうやら嘘はついていないらしい。
　純粋に、自分達にお願いがあるようだ。となると、
「……もしかして、魔物退治とかでしょうか？」
「！　は、はい、そのようなものです。その……最近この辺りに出没する……火の化け物を、退治して頂ければと……」
「火の化け物……凄そうですね」
　白兎がそれを聞いて、少し興味を持ったような声色で微笑を浮かべる。
　イヴとしてはそんな危険な依頼を受けるのはありえないのだが、白兎の方は、やりたい、という顔をしている。
　……仕方ないですね……。
　イヴはそれを見て、渋々と頷くと、老人の方に再び顔を向け、白兎とともに、
「ええ、いいですよ」
「うきー！」
「おお……ありがとうございます。お礼は、村中からかき集めてきますので、何卒……！」
　膝を付いて頭を下げてくる老人に、二人で若干、おお、と驚く。これが土下座というＪＡＰＡＮ特有の謝罪ポーズですか、と。
　それに若干感動しながらも、イヴは報酬のこと先に交渉するの忘れたなぁ……と、次からは気をつけようと心に留める。報酬を聞く前に

承諾してしまったが、普通は先に聞くものだろうし。
「それで、その火の化け物とやらはどこにいるんです？」
「はい……山の方から飛んでやって来るので、おそらくは山の上かと……」
「……また曖昧な……」
微妙な生息情報を渡され、イヴは吐息を漏らしながら小声で呆れる。
それだけで探せるだろうかと心配になってしまうのだ。
だが白兎の方は自分の胸を右手でポンと叩いて、
「ふふん、任せておいてください。こう見えて、私は結構出来ますから」
「おお、是非よろしくお願いします……！」
自信満々に頷いたのを見て、イヴは若干不安になる。
……大丈夫ですかねぇ……。
とはいえ一度受けた以上はやってみるしかない。
そういうわけで、イヴは白兎や藤吉郎とともに、火の化け物とやらを倒すため、村人が教えてくれた山を登ることにした。

白兎の冒険

火の化け物を退治するために山道を登る白兎達は、道中でエンカウントする野良の魔物を倒し続け、一息つくこともなく直ぐに山頂付近まで到達した。

「イヴさん、は平気ですか？」

「平気ですよ。これでも昔よりは強くなりましたからね」

殆ど休みなしで登山を行っていることに対し、白兎がイヴのことを気遣うが特に問題はないとイヴは返す。

白兎と出会ってからというもの、城で一緒に訓練をしたりと鍛えられたのもあってそれなりのレベルに達したという自負があるのだ。

とはいえただの人間であることには変わりなく、魔人ハーフである白兎と比べれば体力も実力も劣る。その辺りは考えてほしいところだが、プライドの高いイヴはそれを言い出すこともない。

「先に進みましょうか。そろそろ山頂に到達しそうですし、そこまで行けば火の化け物とやらがいるかいないかも判断付きます」

「……そうですね。もっとも、ここまでそれらしい気配は感じませんが……」

周囲の気配を探っている様子の白兎が辺りをきょろきょろと見渡しながらそう言う。視界はなくとも異常聴覚を始めとした発達した感覚によって、見えていると言っても過言ではないほどの空間認識能力を持つ白兎はそういった気配を感じるのも得意だ。

視界に頼らない分、見えていない場所にある罠などにも敏感だし、背後から近寄ってくる者にも直ぐ気づくので奇襲などにも無縁だ。

死角が存在しない白兎がいると、冒険に必要と言われるレンジャーの様な職もそこまで必要はないのかもしれない。

もっとも、罠のある宝箱や避けられない罠の時には強引に突破するしかないかと思いきや、

「あ、宝箱ですね」

「危ないですよ、イヴさん。罠があるみたいです。それに鍵付きですね。――というわけで藤吉郎、お願いします」

「きー！」
一行が罠と鍵付きの宝箱を発見すると、白兎がそれを判断して藤吉郎に声を掛ける。
白兎の肩から降りた藤吉郎はその宝箱を色々と弄って罠を解除すると、そのまま鍵開けまで行い、
「ききっ！」
「ありがとうございます、藤吉郎」
「藤吉郎さん、ほんとこの手の作業は上手ですよね……」
「きー！」
〝罠や鍵開けは任せて下さい！〟といった風なことを藤吉郎が言うのをイヴが心を読むことで感じ取る。
この様に、どうも藤吉郎は罠の解除や鍵開けなどのレンジャースキルが意外にも長けているようで、どんな罠や鍵でも解除してしまう。なので、冒険の最中のその手の作業は全て藤吉郎に任せることが出来た。
使徒なのに戦闘力がそれほど高くないから、藤吉郎を使徒にしたという魔人はどんな酔狂で彼を使徒にしたのかと長らく疑問だったが、どうやらそういう役割があったらしい。
潜入なんかにも意外と長けているので、冒険に出てから世話になっているのだ。
とはいえ、イヴとしては二人に冒険のあれこれを任せっきりにしてはおけないもので、
「白色破壊光線！」
「――！」
現れた大型の魔物を最上級魔法で一体蹴散らす。
魔法の腕前はこれでも、ハンティやらガウガウに習ったのでそれなりだと思う。人間にしては強い方のはずだ。不思議とそう思えない原因がイヴの住む紅魔城にはいるので、中々実感はし難いものではある。あの変態料理人一族は人間という種から除外してほしい。
「ふふ、私の前に立ったのが運の尽きですね」
「それ、格好いいですよ、イヴさん……！」

「ふふん、この程度大したことないですね」
そう言われると悪い気はしない、とイヴは魔物の死体を前に髪をかき上げてみせる。日頃から魔人などの化け物を見慣れているし、野良の魔物くらいは大したことなく感じてしまう。
とはいえ自分はただの人間でしかない。油断は禁物ではあるが、ちょっと強そうな相手が出てきたとしても、
「――ふっ！」
「――ッ!?」
白兎が出現した魔物を一刀両断してしまう。先程、イヴが倒した魔物よりも更に一回り大きい相手であったが、白兎にとっては問題とならない。
「ふふん！　私の友達に手を出そうとする者には容赦しませんよ！」
ドヤァ、と刀を鞘に収めながら正面で得意気になる白兎。残心はどうした、と言いたくなるがはじめての冒険ということもあって妙にはしゃいでいる様なので水を差せないものだ。
まあ、白兎を脅かせる魔物など、噂に聞くトッポスを除けば殆ど存在しないだろうし平気だろう。魔人や使徒でも現れれば別だが、そういう相手と戦うことはないだろうし。
と、そんなこんなで山道を上っていくと、
「――っと、頂上に着きました！」
「ええ……それらしき存在は見当たりませんけど……」
山の頂上に辿り着くと、白兎と一緒になって辺りを見渡してみる。眺めが良い感じなこと以外は特に異変も見当たらない。
「空振りですかね……」
「むぅ……そうですか……」
白兎が露骨に残念そうになる。イヴとしては、いなくてよかったという気もするが、
「まあ、いないならいないでここで休憩にしますか？　お弁当ありますし、ここで食べたら美味しそうですよ」
「！　そうしましょうっ！」
露骨に嬉しがる白兎を見て、単純だなぁ……、と苦笑する。

因みに冒険中の料理なんかも自分の担当だ。途中に立ち寄った人間の商会や、レオンハルトが連絡を入れていたらしい魔軍の駐屯地などで食材を買って作っておいたので、折角の山登りを無駄にしないようにとそんな提案を行ってみた。
だが、どこかにシートを敷こうかと良い場所を探している段階で、
「！　キー！」
「あ、藤吉郎！　どこに行くんですか？」
「藤吉郎さん？」
不意に、藤吉郎が顔を上げると、白兎の肩から降りて真っ直ぐと駆けていった。
白兎と一緒になって首を傾げる。イヴも、藤吉郎が離れてしまったことで心が読めないので、
「とりあえず、追いかけましょう」
「見晴らしの良い場所でも見つけたんでしょうか……？」
何気に白兎が呑気なことを言っているが、特にツッコむことなく追いかける。
だが、数分程走ったところで、イヴは白兎とともに藤吉郎を見つけた。そこは、
「火山ですか……」
「私、初めて見ました。とても凄いです……！」
マグマが流れる場所を見つけ、直前になって止まる。
その時点でも結構な熱さであり、ぶっちゃけ危ない気がするのだが、白兎は感動しているようで近くで覗き込んでいた。
――だからだろうか、夢中になってその気配に気づくのが遅れたのは、
「――あぁん？　誰だ？」
「！　え……？　ひ、人……？」
不意に響いたのは男性らしい声だった。
それにイヴは顔を上げ、しかし戸惑いを見せる。
何故ならその声を発したと思われる存在は、褐色の肌をした人形でありながら、超高温の溶岩に浸かり、大きめの煙管から炎を吹いて一

服していたからだ。
白兎も声を発した時点でそれに気づき、表情を呑気な子供のものから真面目なものに変えて、
「……貴方が、この山に住むという火の化け物ですか？」
「火の化け物？　あー……まあ、間違っちゃいねえけどなー……つうかお前、なんか――」
と、その特徴的な容姿を持つ男は、白兎を見て何かを考え込むように顎を擦る。
だが、途中で別の声に反応した。
「きー！」
「あ？　……って、おお!?　藤吉郎じゃねぇか！　ハハッ、お前、生きてたのか！」
藤吉郎が白兎の足元で声を上げると、その男は何やら嬉しそうに驚きの声を上げる。
それを見て、イヴは白兎と顔を見合わせると、
「えっと……知り合いですか、藤吉郎さん？」
「きー！　きー！」
「えっ……と、それは……」
イヴが藤吉郎の心を読んで、答えを聞いた瞬間、それを伝える前に、白兎は自分で結論に達した様で、男に声を掛けた。
「……なるほど、そういうことですか。貴方、藤吉郎と同じ――魔人ザビエルの使徒ですね？」
「おお。俺は戯骸ってんだ。まあ使徒つっても主は死んでるから、今はもうただのはぐれ使徒だけどな」
「まさかの使徒ですか……」
イヴは使徒という存在にこんなところで遭遇したことに頭を抱えたくなる気持ちになる。
何やら友好的な雰囲気であることだけが救いだが、
「……つーかそっちの白い嬢ちゃん、なんか俺らに近い気配感じるが……使徒かなんかか？　それに、誰かに似てる気がするんだが……」
「……」

そう言って、はぐれ使徒である戯骸は白兎を見てやはり何かを感じ取った様で考え込む。それに対し、白兎が暫く無言でいると、
「……もしかして……レオンハルトの娘か何かか？」
「！　……いえ、それは……」
と、いきなり確信に迫ることをまさか告げられ、白兎が僅かに動揺を見せる。それを見た戯骸は、
「うお、当てずっぽうで適当言ったんだがマジか!?　かーっ、あのレオンハルトの娘、娘ねぇ……ハハッ、言われてみりゃあ雰囲気が似てるぜ！」
「あ、だから違います……！　ち、違いますよ！」
白兎がそれを取り繕おうとして慌てて声を上げるが、
「ん？　何だ？　ひょっとして隠そうしてんのか？　ハハハ！　まー、よく分かんねぇが安心しな。特に言いふらしたりする気もないぜー。あのレオンハルトの娘――じゃないにしても、関係者ならちょっかい掛けたところで殺られそうだしよ」
「……やはり、知り合いですか？　その――」
白兎がもう知られてしまった相手への対応を迷わせながら問いかける。バレたことは本来マズいことの筈だが、イヴから見ても、どうにもこちらに悪意のある様子もなく、嘘は言っていない様子なのだ。
それを白兎も分かっているはずなので、どうすべきかと悩む。
そして、その問いかけに対し戯骸は頷いた。
「ああ、知り合いだな。聞いてねぇか？　結構昔、ちょっと一緒に戦争に出かけてよ。そこで俺の主がちょっかい掛けて返り討ちにされたんだわ。そんでまぁ、俺は暫く死んでたんだが……藤吉郎はやっぱレオンハルトに拾われてたみたいだな」
「きー！」
藤吉郎が同意を返す。それを聞いて、白兎は知識を引っ張り出すように、
「……ＮＣ期における藤原家征伐ですね。当時の魔人四天王、ザビエルと、魔人筆頭である私の父が魔王ナイチサより命を受けて藤原石丸と藤原家を滅ぼした。ですが、その戦争の途中で、魔人ザビエルは藤

原石丸に討ち滅ぼされ、その使徒も藤吉郎以外は死亡した――と、私は聞いていますが」
「おお、合ってるぜ。……つーか、隠さなくていいのか？」
「ええ、まあ。もう露見してしまったので隠す意味はないかと。バラすようなことをしでかすなら、その前に斬り捨ててしまえばいいですし」
と、白兎はそう言って軽く殺気を戯骸に向かってぶつける。
溶岩の熱気もかき消すような寒さを感じる剣気だ。それをぶつけられ、視線を合わせる戯骸は、だがしかし、
「……かーっ！　いいねぇ、その殺気！　確かに、その容赦の無さというか冷たさはアイツ似だな！」
何やら喜んでしまっていた。イヴが何とも言えない表情で訝しんでいると、白兎も同じ様に困惑し、
「……拍子抜けしてしまいますね。とにかく、言ったらぶっ殺しますのであしからず」
「ハハ、まあ言わねぇよ。別に言うメリットも相手もいねぇしな。それに……藤吉郎は知ってるし、納得してんだろ？」
「うきー！」
と、藤吉郎が戯骸の言葉に頷くように声を上げる。それを聞いて戯骸も笑みを浮かべると、
「ま、そういうことだ。俺はお前さん達に危害を加える気はないぜ。リベンジしてやろうかと思う相手はいるけどよ」
戯骸の言葉に、白兎と一緒に目を合わせて首を傾げる。やはり拍子抜けする相手だ。
というか、
「良い人っぽいですね……」
「嘘も言っていないようです……」
白兎と小声でやり取りを行う。お互いに、相手の嘘やら感情を見抜けるので戯骸がその言葉に嘘偽りなく、それでいて好意的な様子なのを感じ取り、何とも言えない様子になっているのだ。
そうやってこそこそとしていると、

「……それで、お前さん達は何でここに？　なんか、火の化け物とか言ってたが、俺を探しにでも来たのか？」
戯骸にそう質問される。確かに、そもそもはそういった目的でここまで来たのだ。
なので、白兎と目を見合わせ、とりあえずそのことについて聞いてみることを決めると、イヴは咳払いをして、
「こほん、えっと……戯骸、さん？　あなたが最近、麓の村で色々と悪さをしてるみたいなんですが……どうなんですか？」
「呼び方は何でもいーぜー。そんでまあ、麓の村なぁ……別に悪さをした覚えはねえんだが……」
「それでは、ここで何を？」
白兎が引き継ぐように問う。すると、戯骸は煙管から火を吹きながら思い出すように、
「あー……なんつうかな、強くなるためにしばらく色んなとこで修行してたんだけどよ、ここを気に入って暫く住み着いてたってだけだぜ。特に人も殺してねえし、むしろこっちが襲われたくらいだ」
「襲われたというと？」
「まあ使徒だからな。ヤバい魔物にでも見えたって感じか。そんでまあ、さすがに襲われたらやり返すだろ？　そんで普通なら殺されても文句言えないが、別に殺すのが好きってわけでもねえからよ。だからまあ、命を奪う代わりに襲ってきた男共にはちょっと楽しませて貰ったくらいか」
「楽しむ……？」
「一体何をしたんでしょう？」
「……あー、まあ……気にすんな。要するに、殺さずにちょっと別のものを奪わせて貰ったって感じだからよ」
「……？」
白兎と一緒に首を傾げる。楽しむの意味が分からないが、要するに物か何かを奪っていったのだろう。
「……そういうことなら、特にぶっ殺す必要は無さそうですね」
「まあ、あんまり怖がらせるのもどうかとは思いますが……」

「ハハ、悪いな。その様子だと退治してくれって依頼でも受けてきたか？　まあ、やりたいってんなら相手してやってもいいがよ。縁もあるし、程々で切り上げさせて貰うぜ？」
　軽い調子でそう告げてくる戯骸に、今度こそやる気も失せたのか、白兎が吐息をつく。
「むぅ……せっかく、火の鳥みたいな化け物を斬り殺して、格好良く凱旋しようかと思っていたんですが……」
「というか、全然鳥っぽくないですね……」
「ん？　ああ。まあそれなら――」
　と、戯骸は軽く飛び上がり、マグマから出てくると、空中で炎と共に姿を変え、
「――まあ、こっちの形態のことだろうな。これで飛び回ったりしてたからよ」
「っ！　これは……!?」
「……！」
　イヴは驚きの声を上げて、絶句している白兎と共にそれを見上げる。
　そこにいたのは、まさしく火の鳥だ。
　人形の形態よりも大きくなったその姿は、火の化け物と言われてもしょうがないものであり、
「これなら……確かに怖がって襲われても……いえ、とはいえ、逃げたくなる気が……」
　イヴはそんな評価を下す。これに遭遇したらまず逃げるだろうとイヴは思ったが、ＪＡＰＡＮの人達は結構勇気があるなぁ、と逆に感心してしまう。
　だがそんな中、ふと白兎の方を見てみると、
「す、凄いです……！」
　目を見開き、瞳を輝かせて戯骸を真っ直ぐ見上げていた。
　そして何を思ったのか、
「戯骸さん！」
「ああ？　何だ？」

と、戯骸が頭を向けたところで、
「――私と、お友達になりましょう！」
「……えっ？」
予想外の言葉に、イヴが間の抜けた声を響かせる。
だが戯骸は驚いたというよりは、意外を感じたようで、
「……友達……ねぇ。ハハッ、俺なんかと友達になっていいのか？
これでも昔はお前んとこの奴らと割と険悪だったんだけどよぉ？」
と、そんな言葉を吐いて見せる。
しかし白兎は特に悩むこともなく、
「でも今は違いますよね？　それなら問題ありません！　藤吉郎も私のお友達ですし、それに――」
「……それに？」
と、白兎は興奮した様子で、
「火の鳥がお友達だと格好いいです！」
「……」
その言葉を聞いて、戯骸が黙り込む。
しかし少しの間を置いて、
「……く、くくっ、ハハハハッ！　そうか！　なるほどな！」
と、何やら可笑しそうに戯骸が笑い声を響かせると、
「――ああ、いいぜ。友達になってやる」
「！　本当ですか!?」
「ああ、面白そうだからな。それに、これを切っ掛けにそろそろ関わりにいくのも悪くねぇ」
戯骸はそう言うと、火の鳥の状態からもう一度人形に戻って地面に降り立つ。そして煙管から炎を吐き出した後に、
「というわけで、お前さん達について行かせて貰うぜ。――名前はなんて言うんだ？」
「はい、私は白兎です！　よろしくお願いしますね、戯骸さん！」
「……はぁ、私はイヴと言います。一応、立場としては白兎さんの部下みたいなもので――」
「私のお友達です！」

「……まあ、そんな感じですね」
「キー！」
どうしたこんなことに……、と気苦労が増えそうになることを藤吉郎が察したのか、右手を上げて励ましてくれる。まさかの理解者がさるぼぼだけという事態に、逆に悩みそうになるも、白兎の方は全く悩んでいない様子で、
「ふふん、これでお友達も3人に増えましたし、〝りあ充〟というやつですね！」
いや、少ないですよ、と言いかけるが、よく考えてみれば自分も友達が少ないことを思い、イヴは喉まで出かかったツッコミを飲み込む。
「それに、猿と鳥――雉が揃ったので、父上が聞かせてくれた〝桃太郎〟みたいでいいですね……。後は、犬がいれば……犬……イヴさん、今度犬耳を――」
「私は犬じゃないですよ!?」
「あー、まあ……俺も雉ではないけどな……」
「うきー！」
白兎が何やら変なことを言い出しながら周りを見渡し、こちらを見て謎の提案をしてきたところでイヴは我慢出来ずにツッコミを入れる。
ついでに、藤吉郎に対して〝お前は猿だろ〟的なことを言いそうになったがそれは可哀想なので自重する。猿だけど。
「……はぁ……とりあえず、予定通りお弁当でも食べますか……」
「皆で食べましょう！　私、おかずの交換がしてみたいです……！」
「おお？　俺にもくれるのか？」
「中身、同じですけどね……」
「ききっ！」
そうして、人間一人、人間と魔人のハーフが一人、はぐれ使徒が二体という少しアレなパーティは、人間が気苦労を背負い込みつつも、山の上でのピクニックを楽しんだ。

……ハハ、面白い奴だなこいつ。
戯骸は自分と友達になりたいなどと言った少女に、内心で感嘆する。
レオンハルトの娘だというこの白兎は、確かに剣術に優れているようだし、先程の冷たい殺気やいざという時の容赦の無い感じなんかが似ているが、
……大物になりそうな器の広さだぜ。
その辺りはレオンハルトとはまた少し違う別種の気配を感じる。
とはいえ、こうやって付いていくことを決めたのなら、
……再会も近そうだな。
そのうち機会があればリベンジしてみるのも悪くないだろうと、戯骸は自分と競い合った使徒を思い浮かべた。

再会と新たな依頼

「よいしょっと……さて、それじゃあ次は白兎の様子を見に行かないとね……」

立ち上がり伸びをし、そう独り言を呟くのはレオンハルトの使徒であるハンティだった。

彼女は主のレオンハルトから幾つか任された仕事を順番にこなすために文字通り、東奔西走していた。

ホ・ラガという人物や何名かの人間を他の使徒達とともに探し回り、それが終わったら一度報告に戻り、それからレキシントンが人狩りを行うところを監視し、それが終わったらＪＡＰＡＮでイヴや藤吉郎と共に冒険に出ている白兎の様子を見に行く。

瞬間移動という便利な魔法を使えるハンティは、この手の連絡役や偵察といった任務をよく任されるのだが、その中でも今日は特に忙しいし、面倒な仕事も多い。特に、

……レキシントンには苦労させられたね……。

今日の仕事の中ではレキシントンの監視が中々に面倒だった。

レキシントンが人狩りを行った村に、レオンハルトがリストに挙げた人間がいたので、それを守るために人知れず山の中に入ってくる魔物兵や鬼を魔法や結界で遠ざけるなどしていたのだ。

それが中々に面倒かつ地味な作業だった。とはいえ一応は人助けの仕事なので手を抜くことも出来ない。

……どうせなら、レキシントンに喧嘩でもふっかけて注意を逸らすとかすればよかったかな。

それなら村そのものを救えた気もしたが、他の人間は放置しろ、との命令なのでそれは無理だ。なので後で個人的にレキシントン――はマズいから、アトランタ辺りをボコろう。会う度にからかってくるし、そろそろメッタメタのボコボコにぶん殴っておきたい。

それくらい、最近の仕事はフラストレーションが溜まるのだ。

研究や警備、人間街の管理など、その手の仕事はもはや慣れてしまったが、牧場関係の仕事や人狩りなんかを見てると苛立ちは募る

し、戦闘関係の仕事がないのも身体が鈍ってしょうがない。
魔王ジルの治世は様々な意味で最悪なものだ。これなら一代前のナイチサの時代の方がマシに感じてしまう。昔は人間相手の戦争など気が進まなかったものだが、こんな牧場経営なんてするくらいなら戦争した方がマシだ、と、闘争に満ちていた昔を懐かしんでしまうくらいには、今の時代は生きにくい時代だ。
もっとも、人間にとってはどっちがいいかなんて微妙なところだとは思うが、個人的には、人間にとっても昔の方が自由に生きられたと思う。戦争ばかりの厳しい時代ではあったが、それでも今よりは自由や充実があったはずだ。
……考えてもしょうがないことだけど。
と、ハンティは頭を振る。魔王の意向で、その時代の世界の方向性というものは決まるのだ。
ドラゴンがまだ数多く生きていた時代ならともかく、魔王を脅かせる生物は今の世界に存在しないこともあって、魔王の意向こそが世界の絶対的な法となる。逆らう奴は死ぬだけだ。
その事実を分からされてはいるものの、それがあってもあんな奴に従わなければならないというのは溜息が漏れる思いだ。
……この後の相手は、良い感じの相手であることを願うよ。
レオンハルトではないが、それこそ自分の趣味として何か楽しめることがないと気が滅入ってしょうがない。カラーの里が平和だったり、模擬戦なんかも行える分、精神的な安定は図れるが、それでもたまには新しい相手と戦いたいものだ。レオンハルトとかライゼンは燃える相手ではあるが、どっちも化け物過ぎてムカつく時がある。終わった後にスッキリもするが、悔しさみたいなのも沸々と湧いてくるので〝戦いたい欲〟が結果的に収まらないのだ。
レオンハルトは相変わらずの無茶苦茶剣術が破れないし、ライゼンはあのインチキ装甲が突破出来ない。どちらもやりがいはあるが、通じなかった時のフラストレーションが半端ないのだ。
なので、この後任されている白兎の様子見と連絡を終えれば、次の仕事はそれなりに愉しめそうなので期待している。久々の新しい未

知の相手だ。
「えっと、白兎の場所は――」
と、ハンティは瞬間移動でアドミラル空間に移動し、時が止まった世界で白兎達を探す。
ＪＡＰＡＮにいることは確認しているし、魔法で探知することも出来る。そうでなくとも瞬間移動中に探していれば、相手はその場から動かないのでいつかは見つかる筈だ。
そうして、しばらくＪＡＰＡＮを歩き回って探していると、
「――あ、いたいた」
道中を行く白兎達を見つけた。イヴや藤吉郎もすぐ近くにいる。
そう思い、瞬間移動を解こうとして――ハンティは不意に、それを視界に入れた。
「……は？」
ハンティが間の抜けた声を上げる。だが、それも致し方ない。
白兎達一行の中に、ハンティは見覚えのある人物がいることに気づいた。
褐色の肌に大きめの煙管を持つ人形の異形。それは約７００年前、ハンティとある戦争で戦った人物。それは、
「……戯骸……？」
魔人ザビエルの使徒、戯骸こと朱雀。
ハンティとも親交のある人物が、白兎達に混じって旅をしていたことに、ハンティは脳への理解が少し遅れてしまった。

はぐれ使徒の戯骸を友達認定し、仲間を増やした白兎達は、山を降りて冒険を続けていた。
「――それで、なんか目的の場所とかあんのか？」
煙管から炎を吹き出しながらそう問いかける戯骸。明らかに異形ではあるが、人間ということで誤魔化すか、使役している妖怪ということにでもすることにした。ＪＡＰＡＮには陰陽道という鬼なんかを調伏、使役して操る技術があるらしいし、そういうことでもおかし

くはないだろうと、
「特にありませんが、何か面白い冒険がしたいです」
「……漠然としてんなぁ。まあ、いいけどよ」
「すみません……」
　白兎が堂々と目的がないことを伝えると、戯骸が一瞬間を置きながらもからからと笑う。何故か代わりにイヴが謝罪をしながらも、一行はＪＡＰＡＮの街道をゆっくりと歩いていく。
　しかし特にやることがあるわけでもないので、周囲の警戒だけは一応しつつ、呑気に会話を行っていた。
　だがその途中、不意に声が響いた。
「――――戯骸！」
「あ？　――おおっ!?」
「あ、ハンティさん！」
　それはその場にいる全員にとって聞き覚えのある声であり、正面に突然現れた女性の声でもあったが、彼女を知っている者であれば、気配もなく突然現れたことに対する驚きはない。
　しかしそれでも驚いたのは、ハンティが現れた瞬間、戯骸に向かって斬りかかったからだ。
　故に白兎がその彼女――ハンティの名を宙に響かせた瞬間、それを確認した戯骸はそれに目を剥き、先程藤吉郎に会った時のように驚きながらも、煙管を器用に回して不意打ち気味のハンティの剣を防ぐ。
「おお、ハンティじゃねえか!?　ハハッ、久しぶりだなあ！　出会うなり、斬りかかってくるたぁ、変わってねぇなあ！　懐かしくなるぜ！」
「久しぶりなんて呑気に言ってんじゃないよ！　あんた、何でこんなところに……！　生き返ったのはまだしも、何で白兎達と一緒にいるのさ!?」
「まあ、それは成り行きというか、お前さんの主の娘のせいだな」
「っ！　しかもそんなことまで……！」
「ああ……やっぱり怒られそう……」
　ハンティの反応に、イヴが頭を抱えて白兎の後ろに隠れる。何気に白兎がレオンハルトの娘である事実がバレてしまっていることがど

うしたものかと悩ましいものであったのだ。
　それよりハンティが有無を言わさず戯骸と戦う意志を見せているので、悪意はないと弁解しとかなければ、と思うも、
「私のお友達です！」
「えっ？」
　……は、白兎さん!?　そんな急に言うのは……！
　端的に、しかも何故か自信満々に前に進み出て、戯骸を指し示すように両手を上げながら紹介した白兎に、イヴが白目を剥く。それだけ言っても何が何だか分からない気がするのだが、ハンティは訝しみつつも、一度戦闘態勢を止めて、
「お友達って……戯骸が？」
「はい！　火の鳥は格好いいのでお友達になって貰いました！」
「……戯骸、あんた……」
「おいおい、変な疑いを持つなよ。白兎の言う通りだし、何の企みも下心もないぜ。それに、俺の趣味は知ってんだろ？」
「っ……ああ……そういえばそうだったね……」
　何故か〝戯骸の趣味〟という語句を聞いて、ハンティがげんなりしたように頭を抱える。
　観察力や洞察力に長けるイヴは、そのハンティの様子から戯骸の趣味が少し特殊であることを見抜いたが、それが何なのかは分からなかった。
　前の文脈から察するに、下心が絶対にないだろうと証明出来るような趣味なのだろう。そう考えると……実は子供好きとかで物凄い優しかったりするのだろうか？
　しかしそうだとすると、ハンティがげんなりする意味が分からない、とイヴは首を傾げる。よっぽどの事ではあるのだろうが、
「というわけでハンティさん！　戯骸さんも私の冒険の旅の仲間に加えますので！　その様に父上に伝えておいて下さい！」
　そんなイヴの思考を待たずに、白兎はやはり、ふふん、と友達を自慢するように胸を張ってハンティに告げる。ハンティは何とも言えない迷った様な表情になり、

「……う、うーん……まぁ、戯骸なら……良いかもだけど……レオンハルトがなんて言うか……」
「ま、そりゃそうだよな」
「父上は関係ないです！　お友達は自分で選びますので！」
「いや、そうは言ってもねぇ……あたしからはちょっと何とも……レオンハルトは親馬鹿だし……なんて言うか読めないねぇ……」
　呆気らかんと納得してる様子の戯骸に対し、白兎は親は関係ないと憤ったようにハンティに言いつける。ハンティも困ったように額を押さえていると、何かを思いついた白兎が静かな声で、
「……でしたらハンティさん。冒険が終わるまでは戯骸さんのことを報告しないで下さい。帰った時に、私が直接説明しますので」
「いやぁ、さすがにそれは――」
「じゃないと、父上に言いつけて暫くの間戦闘禁止にします」
「あたしは何も見てないね、うん」
「……それでいいんですかハンティさん……？」
　見事な変わり身の速さに、イヴがやんわりとツッコミを入れる。使徒的に命令違反はどうなのだろうと思うのだが、ハンティは冷や汗を僅かに垂らしながらも笑みを向け、
「ま、まぁ、戯骸ならレオンハルトも認めるとは思うよ……多分。後、勝手に気づかれる分にはあたしは知らないからね？」
「はい、それでいいです。――というわけで、これで父上に何か言われることもなく、冒険が続けられますね！」
「お、おおう……お前、強引だなあ……」
　結構頑固なんですよ……、と内心でイヴが言っておく。小声でも、異常聴覚を持つ白兎には聞かれてしまうので、言葉には気をつけなければならない。これくらいで怒ることはないだろうが、納得いかないことを言うと、長々と話して論破しようとするので今回は自重した。
　とはいえ、戯骸が一緒ともなると色々と頼もしいというか、戦闘面でも期待が持てそうな上に、暴漢なんかを追い払えそうなので重宝しそうだ。
　自分達は見た目的に、か弱そうな少女二人なので、人間に襲われた

りすることも多い。白兎があっさりと斬り捨ててしまうのだが、戦わずに済むに越したことはないのだ。
　だからイヴ的にはありだと考えていると、ハンティが軽く息を吐いた。
「……ま、それはじゃあいいよ。戯骸には今度色々と聞かせて貰ったりするとして……」
「まあ、それはしゃーねえな。俺としてもけじめはつけとかねぇとだしよ」
　と、戯骸が頷く。それにハンティも頷いたところで、続く用件を彼女は告げてきた。
「後は定期報告と連絡だけど、異常は戯骸以外は無さそうだし、こちらから告げるよ。――ちょっとの間、この先にある人間牧場付近には近づかないように」
「？　何かあったんですか？」
「まあちょっとね。危ない妖怪が出没してるから、近づかない方がいいかなって」
「危ない妖怪？」
　と、今度はイヴが首を傾げる。白兎も同じ様に首を傾げ、〝それってどんな妖怪ですか？〟と質問を重ねると、ハンティは何故かいい笑顔と共に、
「何だか人間を殺して回ってるとかいう危ない妖怪でね。人間牧場の人間にも被害が出てて困ってるから、それをどうにかするって話が出てるんだよね。まあ、レオンハルトが来るか、もしくは先に被害が出るようなら先にあたしがちょいとね……やってみるのも面白そうだよね」
「ほお、強い妖怪ねぇ……まあ妖怪ってのは中々に厄介だからなあ」
　戯骸が何かを思い出すように言うと、その次に声を発したのは、口角を上げた白兎だった。
「――それ、いいですね」
「いい……って、何が？」
「あ、嫌な予感が……」

付き合いの長いイヴが、白兎の不敵さを感じる様子に嫌な予感を感じて表情を歪める。
そして予想通りと言うべきか、白兎は皆の耳にはっきり伝えるように堂々とした声と表情で、
「――その妖怪、私が何とかしてみせます！」
「きー！」
右手を前に出すポーズを取って、肩に乗る藤吉郎と共に決め台詞の様に言い放ったが、他の3人は無言となり、少しの間を置いてそれぞれの表情で、
「やっぱりそういうこと言うんですよね……白兎さんは……」
「ハハハッ、やっぱりおもしれえじゃねぇか！」
「……いやぁ……さすがにそれは止めて欲しいんだけどね……あたしとしてもちょっと……」
イヴが頭を抱えて笑いながら涙を流す中、戯骸は呑気に笑っているし、ハンティは苦笑しながらも戦闘狂を発症しているのか、出来れば自分がやりたいと言わんばかりの苦言を呈している。
しかしこの場において止めてくれるのはハンティだけなので、それに期待していると、
「なら、ハンティさんも一緒に殺りましょう。それなら、父上の到着を待たずに確実に相手出来ますよ」
「主の娘に命令されたらしょうがないよね、うん。しょうがないしょうがない。先に問題を解決しようとするのも主のためだしね」
「うう……ハンティさん……」
頼みの綱はあっさりと自分の欲を取っていった。解せぬ。やはり使徒としてどうかと思うが、変に自分を納得させて解決してる辺りで、イヴは泣きたくなる。
自分一人が人間ということをこの人外連中は分かっているのだろうか。魔人ハーフに使徒3体に、か弱い人間一人。人間にしては強いとは言っても、危ないことには変わりないのだが、
「うきー！」
「藤吉郎さん……ありがとうございます……」

四つん這いになって落ち込む自分に対し、藤吉郎がこちらの手をぽんぽんと叩いて励ましてくれる。〝自分が付いてますぜ！〟みたいなことを心で言っていたので、やはり味方はこのさるぼぼだけなのだが、

……でも、藤吉郎さんじゃ、そんなに頼りにならないんですよね……。

と、そんなことを思ってしまうが、さすがに口には出せないので掌で顔を隠して影で嘆いておく。

しくしくと落ち込むこちらを無視して、話は進み、

「具体的にはどんな妖怪なんですか？」

「それが分からないらしくてさ。嵐の様な雷を落として人間達を殺しては去っていく妖怪で、なんでも他の妖怪も従え始めてるとか何とか……魔物将軍が部隊を率いて迎撃に出たけど、それらしき妖怪の姿は見つけられなかったみたいだね」

「そりゃあ、強そうだな」

「雷の嵐に妖怪の軍勢……ふふん、これは雷斬りを達成した妖怪退治の英雄として名を馳せる好機ですね。滾ります」

「人間的にとってもキツそうな依頼なんですけど……」

「ええ、頑張りましょうね、イヴさん！」

「……ええ、そうですね……」

イヴが小声でそう言うも、白兎から有り難い励ましの言葉を頂く。そういう意味で言ったわけじゃないんですけど。

「ちょうどいい機会だし、イヴもこれで腕上げなよ。危なくなったらあたしも……というか、白兎が守ってくれるだろうしね」

「そうですよ、イヴさん！　私の友達に手を出す奴はぶっ殺なので安心してください！」

「……まあ、それはお願いします……」

魔法の師の一人でもあるハンティから背中を叩かれて激励を受け、白兎からも刀を手に、頼もしい言葉をまた頂く。いや、確かにパーティには恵まれているのでマシではあるのだが、最初の冒険で妖怪軍団と戦うとかハード過ぎる気がする。

……レオンハルト様がさっさと来てくれたりしませんかね……。
最強の魔人の出来るだけ早めの到着を願いながら、イヴは先頭を行く白兎に続いて、強い妖怪とやらを倒すための道中を、足取り重く進んだ。

「……何故か嫌な予感がするな……」
件の人里から戻ってきたレオンハルトは、その足で今度はＪＡＰＡＮへと向かっている最中だった。
だがその途中、妙に嫌な予感を感じて背筋が寒くなる。
……こういう時は碌なことが起こらないと決まっている。用心しておくか……。
今までの経験上、こういった悪寒には石橋を叩いて渡るくらいの慎重さが必要となる。これからやることを考えると、レオンハルトは特に嫌な想像をした。
……白兎達に何かあったか？
ＪＡＰＡＮに冒険に出ている自分の娘に何かあったのだろうか、と心配になってしまう。
しかしハンティに様子を見に行かせてはいるし、何かあれば瞬間移動で教えてくれるだろうし、保険を掛けてはいる。大丈夫だとは思うが、やはり分身でもついて行かせるべきだったかと思うが、それは白兎に拒否されたので結局は信じるしかない。
しかし、そちらではないとなると、もうひとつの事案だろうかと、……ＪＡＰＡＮの人間を殺して回る妖怪か……まったく、どこの誰だか知らないが面倒なことを起こしやがって……。
人間牧場の人間も含めてＪＡＰＡＮの人間を殺して回っている厄介な妖怪騒ぎがあると聞いて、レオンハルトはその対処をするべくこの忙しい中でＪＡＰＡＮへと向かっていた。
どうにも魔物将軍らでは対処出来ないほどであるらしく、一応は自分の管轄であるため、自分にお鉢が回ってきたのだ。
ついでに白兎の様子を見に行けるかもしれないのは良いことだが、

最近の時間の使い方を鑑みるに、その余裕があるかは微妙なところだし、その妖怪にどれだけ時間が掛かるかは分からない。
倒すのは一瞬で終わらせることも可能だが、見つけ出すのに時間が掛かるかもしれないし、時間が掛かればそれだけ、スケジュールが厳しくなる。
特に最近は、仕事以外のやらなければならないことで時間を取られているため、遊んでいる暇が少ないし、使徒も動かしているため、仕事が溜まってしまっている。
なのでこんな時に騒ぎを起こしてくれた妖怪には、頭を抱えたくなる思いだ。相手が未知数なのも相まって、面倒過ぎるものであり、
……とにかく、急ぐか……。
内心の憂いを溜息に変えて、レオンハルトは真っ直ぐＪＡＰＡＮへと向かっていった。

ＪＡＰＡＮの山中。
そこに集まっているのはＪＡＰＡＮにのみ存在する異形の存在――妖怪だ。
様々な種類の、厄介な特性や人間を越える強さを持つ彼らは、大小様々な悪戯や悪事を働き、鬼と地震に並んでＪＡＰＡＮの民の悩みの種であった。
だが、そんな彼ら妖怪の中でも特に強大な力を持つ妖怪が、その中心にいた。
自由気ままに生きる妖怪達が率いられるようなことは、かつて妖怪王であった黒部以外には存在し得なかった。
かの妖怪王ほどの強さを持つ妖怪が、今まで現れなかった為である。
だがそれも、今までの話。今はそれだけの力を持つ妖怪が存在した。
「――――準備はよいか？　……では、行くぞ」
強大な妖気を立ち昇らせ、九本の尾を持つ彼女こそが、多くの妖怪

を率いて人間を襲う、〝二代目妖怪王〟となった妖怪であった。

二代目妖怪王

山岳地帯の多いＪＡＰＡＮにおいて、数少ない平野の中心に高い柵で仕切られた一帯がある。

その周囲にいるのは魔物兵で、中にいるのは粗末な布を着ただけの人間達だ。

彼らはこのＪＡＰＡＮの人間牧場で管理されている人間達であり、他の人間牧場の人間ら同様、ただ苦しみ、増やされ、しかし恐怖もない生活を送っていた。

そこに務める魔軍の魔物兵達も辺境のＪＡＰＡＮの地でありながら、それなりに生活を楽しんでおり、あまり代わり映えのしない長閑な日常が続いていた。

だが、ここ最近の人間牧場では、普段のそれよりも大変な日常を過ごしている。

人間達は、不思議と怯えた様子を見せているし、牧場を管理する魔物兵達も不安そうに修繕作業や警備に臨んでいる。

彼らの視線や行動の先にあるものは、破壊された柵や黒焦げの地面、大勢の人間の死骸だ。

魔物にとって人間は遊び道具や家畜も同然であっても、これらは魔物によって齎されたものではない。人間牧場において、人間を殺すのは魔王の命によって禁止されている。意図しないところで数人程度死んでしまったとかならともかく、これほど大勢の人間を意図的に殺すなどあり得ないことだ。そんなことをすれば、厳しい処分が待っているのはどんなに馬鹿な魔物でも分かっている。故に、魔王の命令を破る馬鹿は存在し得ない。

それに人間の死体の中には、魔物兵の死体もあった。人間と同じ様に、黒焦げとなった死体であり、それらは同様の手段で殺されたことが理解出来る。

今現在、この牧場に置ける恐怖は人間も魔物も同じであった。

そのことを、牧場の雰囲気を感じ取ることで理解した白兎一行は、牧場の中に案内されて責任者である魔物将軍のささやかな持て成し

を受けていた。
「――やっぱり、随分とやられてるみたいだね？」
「面目次第も御座いません……我々も、兵を率いて迎撃に出たのですが力及ばず……」
と、ハンティの問いかけに沈鬱とした様子で報告するのは、この人間牧場の責任者を務める魔物将軍だ。
本来の責任者は魔人であり、ここの代表はレオンハルトに違いないのだが、レオンハルトは幾つもの牧場を掛け持ちで管理しているため、レオンハルトシティにある直営牧場以外の牧場に関しては、代理の責任者として魔物将軍らを置いている。
レオンハルト軍の一員でこそないが、レオンハルトの部下である彼らは、その主の使徒であるハンティや、下級使徒の面々を前にバツが悪そうに気勢を衰えさせていた。
本音の部分では、自分達だけで解決したいというのが、牧場を任された者にとっての心理だろうな、と思いながら、一番目立たない位置でお茶を啜るイヴは、そのやり取りを耳にする。
周囲の感情も一緒に感じ取りながら、
「……やはり人間も魔物も、不安は大きいようですね」
「ふむ、それだけ強い妖怪ということでしょう。ワクワクしてきますね」
「その言葉を聞いて私も不安になってきました」
同じ様に、隣に座って出されたお茶菓子に舌鼓を打っている白兎が良い顔でそう告げてきたことに、イヴは表情を落ち込ませる。
するとハンティが、こちらに答えたわけではないだろうが、魔物将軍に向かって、
「まあ、安心しな。レオンハルトもやって来るって言うし……そもそも、先にあたしらが片付けてやるよ」
「おお……ありがとうございます。微力ながら、我々もお力添えをさせて頂ければと思います」
「防衛だけやってりゃいいよ。攻めるのはあたしだけ――あたしらだけでやるからさ」

と、不敵な笑みを浮かべながら言い直した上で、戦意を湧き上がらせているハンティは、やはり白兎と同じ様に――いや、白兎以上に良い顔をしており、それを見た戯骸が訝しむように目を細め、
「……？　なんだ、ハンティの奴、ひょっとして性格変わったか？」
「私が生まれた時からああでしたよ？」
「私はノーコメントでお願いします……」
「きー……」
今ではゴリラとして有名だよ、と言いそうになったが、後が怖いので自重する。イヴとしては、白兎と同じ感覚であり、出会った時から気遣いの出来る優しいけど、血気盛んなやべー人というイメージなのだが、普段から研究室で一緒に過ごすガウガウや、親友であるというインデックスから聞く限り、昔よりも大分ゴリラになっているという噂だ。
隣にいる藤吉郎も、それを思い出したのか何とも言えない表情でしきりに頷いている。何気にこの中だとハンティの変わりようを見てきたであろう人物なので、何か思うところがあるのだろう。
だが、ハンティの発言については、
「……というか、攻めるのは私達だけって……どういうことですか？
もし妖怪軍団が攻めてきたら自爆特攻でもするんですか？」
「正面突破は王道ですよねっ」
「正面から攻めるのが一番手っ取り早いからね」
「ふふふー……そこは嘘でも策があると言ってほしかったですねぇ……あはは……はぁ……」
「なんかお前、随分と苦労してるみたいだな……」
正面突破大好きな戦闘狂二人に付いていくことが決定し、イヴは笑顔のまま顔を青褪めさせる。とうとう戯骸にまで気を使われてしまっているのが何とも解せない。いや、有り難いのだが、こんな筈ではなかったはずで、
……くぅ……成り上がりを目指す私が、周りの個性に押されてしまっている……。
薄々分かっていたことではあるが、自分の実力は魔物界、特に魔人

とか使徒基準で言うと大したことないし、個性としても弱いのでどうにも自分のペースに持っていけることが殆ど無くなってしまっている。
本来はもっと余裕のある優雅な自分であったはずなのに、今はそうではないとは、
……いえ、駄目ですよ、私。初志貫徹。たまには自分のペースを取り戻して意見を口にするのです……！
そうだ。ここで素晴らしい策でも考えてそれを提言すれば、正面突破とかいう脳筋戦法に付き合わされずに済むだろう。楽に解決出来るのならそれに越したことはないのだ。
考えろ、考えろ。自分は天才。自分なら出来る。特Ａ級の才能と見込まれた人類では最強クラスの筈の自分なら――
「……！　そうです！　予め襲ってくることが分かっているなら――」
「敵襲ーーーーッ!!　出たぞ！　妖怪だーーー!!」
と、策を思いついて口にした瞬間、牧場内に敵襲という魔物兵の報と、ざわついた音と周囲の不安の感情が跳ね上がる。
それを不意に感じ取ってしまい、イヴは思わず言葉を差し止めるも、その間にハンティや白兎は顔を体ごと牧場の外に向け、
「ほうら、来たよ！　あんたらは言った通りに人間を守ってな！」
「は、ははっ！　畏まりました！」
「ふふん、とうとう来ましたね。この妖怪退治の達人と呼ばれる予定の私がいるとも知らずに……さあ、行きますよ――って、どうしたんですかイヴさん？　そういえば、さっき何か言い掛けていたようですが……？」
「ふ、ふふふふ……いえ、なんでもないですよ、白兎さん、ふふ、さあ、行きましょうか……」
あまりの間の悪さに自分でも乾いた笑いが漏れ出てしまう。それを見て白兎が〝イヴさんも凄いやる気で、しかも余裕そうです……！〟と感心しているのが不幸中の幸いだと心を慰める中、イヴは動き出す魔物将軍や魔物隊長らを尻目に、白兎達に続いて牧場の外周部に向

かった。

人間牧場の管理棟から出てきた白兎達は、泡を食うような騒ぎになっている中を駆け抜け、牧場の外周部へと急いだ。

「ひぃ！　またあの化け物だぁ!?」

「お助け……お助けを……！」

周囲の人間達は恐怖で腰を抜かしたり、小屋の方にまで走って逃げていっている。

彼らにとっての恐怖は魔物ではなく、外からやってきて襲いかかってくる者達のことだ。例え日頃から苦しめられていても、彼らにとってそれは常識であり、魔物が飼い主であることには変わりはない。

故に魔物兵に助けを求めるのも至極当然の事であり、魔物兵の方も、一応は人間を守らなければならないため、それに応えざるを得ない。

「急げ急げー！　妖怪が来るぞ――！」

「くぅ……！　またあいつらかよ、くそ……！　襲うなら野良の人間でも襲ってやがれってんだ！」

しかも危険は自分達にも降りかかるため、魔物兵達は必死に動いていた。

野良の人間であれば生きようが死のうが知ったことではないので守る義務はないが、魔王の命令で管理している人間牧場の人間は彼らにとっては死活問題と言っていい重要な資源である。

故に防備を高めるために魔物将軍の指示に従って牧場の外周部に陣を築いていると――それはやってきた。

「――おらおらー！　妖怪様のお通りだー!!」

「ぐはははは！　人間どもー！　今日も襲いにきてやったべー！」

「邪魔する奴らは魔物でも容赦しねぇぜよー！」

と、意気揚々と声を上げてやってきたのは、魔物以上に異形の存在である妖怪の群れ。

百鬼夜行と言うに相応しい妖怪の軍勢は、その妖気が合わさって、

周囲の雰囲気を妖しく歪ませている。
鬼火と呼ばれる火の玉がゆらゆらと宙を移動し、瘴気のような紫の煙や霧が辺りを包み込んでいる。
妖怪の種類も千差万別で、牛鬼に河童、天狗にぬりかべ、のっぺらぼうにからかさ、鵺など大勢の妖怪が揃っている。
その妖怪の見本市とも言える圧巻の光景に、白兎らは、おお、と感嘆の声を上げた。
「あれが妖怪……凄いですね。私、初めて見ました……！」
「あれ、結構骨があるんだよねぇ……ちょっと傷をつけるくらいだと直ぐに蘇るし、正攻法だと倒しにくくてさ」
「そういやぁ昔、藤原家の軍勢にもいたっけか。ハハ、懐かしいぜ」
「……あ、あれが妖怪ですか……ふ、ふふ、た、大したことないですね……」
「きー！」
……ふ、震え声とか言わないでください！
藤吉郎が若干、こちら茶化ししてきたので睨んで黙らせる。
「イヴさん、ひょっとして……怖いんですか？」
「そ、そんなわけないでしょう」
別に怖がっているわけではない。ただちょっと、不気味なので近寄り難いだけだ。
だが白兎はこちらの反応を見て、頷くと、
「……分かりました。では、早めに終わらせるために策を打ちましょう」
「！　そ、それがいいと思いますよ、ええ」
白兎が不意にそんなことを口にする。どう考えても嘘を見抜かれて気遣われてしまったが、そんなことを気にしている余裕はなかった。
しかし、
「ど、どんな策を取るんですか？」
「そうだよ。やっぱ、下手な策よりは正面突破の方が……」
「ふふん、まあ見てて下さい。私に秘策あり、です」

と、白兎は堂々と前に進み出ていった。
すると妖怪たちもそれに気づいて笑みを浮かべる。獲物を見つけたという笑みであり、
「なんだぁ？　子供が近づいてくるぜぇ？」
「刀を持っているということは侍か？」
「どちらにせよ、俺達の敵じゃねぇぜっ！」
と、数体の妖怪達が先走って白兎に向かって襲いかかる。
しかし、
「――――邪魔ですよ」
「えっ――」
「は――？」
「何を――」
と、白兎がすれ違いざまに一瞬だけ、剣気を発すると、その妖怪達は既に一刀両断されてしまっていた。
多くの者にとって視認することすら出来なかった一刀に、ハンティや戯骸なんかは感心しつつも、それを見守る。一応は目を光らせてはいるが、白兎の力量なら、そこらの妖怪に襲われたところで遅れを取ることはないと理解していた。
そして対峙する妖怪達も、仲間が一瞬で葬られたことに強い警戒を見せて後退る。
誰もが一瞬、白兎の剣技に目を奪われた瞬間、白兎は鞘に収まったままの刀を抜いて、妖怪達の方に差し向けると、
「――私はＪＡＰＡＮ一の侍、白兎です！　この私を倒せるほどの猛者がいるのなら、名乗り出るといいですよ！」
「……えっ？」
声を張り上げて、色々とツッコミたい宣誓をした。イヴは内心で思う。
……策ってそれ……？
それは策って言っていいのだろうか。ただの一騎打ちの申し出というか、名乗り出てるだけであり、そんなの無視されたら終わりな気がするのだが――

「――ほう、ＪＡＰＡＮ一の侍とな？」
「！　あれは……!?」
妖怪達の奥から、別の妖怪が進み出てきた。
だがその妖怪はとてつもない妖気を発しており、ただの妖怪でないことが一目で分かる。
つまりそれは、
「……貴方が、この妖怪達を率いている者ですか？」
「……如何にも。我は、二代目妖怪王――狂星九尾・末知女殿（まちじょてん）ぞ」
……ほ、本当に大将出てきました――!?
イヴが白目を剥きながら、驚愕する。まさかこんな手で本当に出てくるとは思わなかったのだ。
だが、ハンティは何やら得心したように頷き、
「あー……まあ、そういえばＪＡＰＡＮの人って名乗りとかが戦の挨拶みたいなもので、一騎打ちとか申し出た時にそれを断るのは恥とかなんとか聞いたことがあるような……」
「そういやあ俺も最近、戦い挑まれる時は大体名乗られてたな……。武士とおんなじＪＡＰＡＮの土地で生まれてるからそういうの大事にしてんのか？」
「いやいやいや……それにしてももうちょっと、こう……」
それにしても軍勢を率いているのにいきなり大将が出てくるのはどうかと思う。昔の戦争資料なんかを見てても思うが、どうして武勇に長けた将とか英雄みたいな連中って、前に出たがるのだろうか。どう考えても後ろで引き篭もっている方が安全で確実だと思うのだが。
とはいえ、こちらが少数の場合は、最初に大将だけ確認するなり、位置を炙り出しておくのは効果的だと認めざるを得ない。大将を倒せば終わりなのだし。
問題はその相手の強さなのだが、
「……それにしても、強そうではあるんですが……」
「二代目妖怪王って言うくらいだからそれくらいは強いんだろうね……」
イヴはその二代目妖怪王だと名乗った相手を皆とともに観察する。

その姿は、全体的に狐色だ。
というのも背からはきつねの様な尻尾が九本覗いているし、その頭からはきつねのものと同じような耳が生えているのだが、それでいて姿形は人間の女性の様なもの。肩や胸元を露出した着物を身に着けている長い金髪の美女だ。
薄まった目からは深い緑色の瞳が覗いており、肌は白く、額には桜色の紋様が二本、眉の様に描かれており、全体的な影としては人形の異形といった感じだが、その全身から立ち上る妖気は、他の周囲にいる妖怪とは格が違うものであることが一目瞭然である。
青白い炎を周囲の漂わせているその彼女に、イヴはしかし、その強さを感じ取りながらも、顔を顰めさせた。
見ると、ハンティも同じ様に何とも言えない微妙な表情をしている。
そこを気にするべきではないのだが、今彼女達の思いは一つであった。
「……大きい、ですね……」
「……そうだね」
「ふむ、これは凄いですね。まさか、私の母より大きいとは……」
「あんまり俺が言えることじゃねえが、お前ら余裕だなぁ……」
「……？　貴様ら、一体何を言っておるのだ……？」
皆の何とも言えない視線が集中したところで、二代目妖怪王は頭に疑問符を浮かべる。
どうやらイヴの嫉妬が籠もった視線の意味とか、自分の身体的特徴には無頓着の様だ。
だからこそ、イヴは敢えて言う。恨みやら嫉妬やら羨望を込めて、かの邪智暴虐の塊に正義の鉄槌を下さねばと決心しながら、
「なんですか、この超巨乳妖怪は……!?　日頃から成長しないことに苦しんでいる私への嫌がらせですか……!?」
と、イヴは、その二代目妖怪王のたわわに実りまくった胸部装甲を見て、屈辱を感じながら呻く声とともに驚愕の表情を浮かべた。
その比喩でも何でもない爆乳を見て、悔しそうに唇を噛みしめるイ

ヴに白兎が意外にも落ち着いた声で、
「大丈夫ですよ、イヴさん。あれはイヴさんを貶めるものではありません。恐れる必要はありません」
「白兎さん……」
と、友人に励まされてイヴは俯きかけていた顔を上げる。やはり持つべきものは同じ志を持つ友だ。
だが、白兎はふふんと自慢気に胸に手を当て、
「まあ、私は、母が母ですし、将来性は期待出来ますので特にダメージはありませんが、イヴさんだって成長する可能性が……」
「くっ……で、ですが、ふふふ、白兎さん？　もう４００年近く経って成長が来ていないということは、貴方もこちらと同じ――」
「成長が遅いだけですっ！」
「悲しいですが、現実を見たほうがいいですよ……ふふふ」
「ぐ……で、でも私は――」
白兎はイヴと共に自分の将来について語り合う。夢想主義と現実主義の戦いだ。
だがそんなこんなで争っていると、諸悪の根源が、
「……よく分からぬが……話を進めるぞ、幼子よ。我を倒せると思っているのなら倒してみるがよい。お主らの様な幼子とよく分からない者達に、人間を殺める手が止まるとでも――」
「幼子とか言わないで下さい！　ぶっ殺しますよ!?」
「私達はこれでももう、肉体的には大人なんです！　人が気にしてること言うなんて最低！　最低ですよ！」
「……む、むぅ……」
「おい、あの妖怪王が押されてるぜ」
「……まあ人が気にしてることを言うのは最低ってのは同意だね」
「……」
ハンティが半目になりながらも微妙に同意出来るように頷き、しかも何かを思い出しているのか怒気を身体から発し始めたところで、さすがの戯骸も無言となって空気を読む。
妖怪王の方も、白兎とイヴの勢いに押されて思わず、

「そ、そうか……それはすまなかった。訂正しよう……幼子のような姿をした少女達よ。お前達は――」
「誰が幼子のような胸ですか!?」
「喧嘩売ってんですか!?」
「……とにかく、掛かってくるがよい！」
「おお、すげぇな。遂に無視されたぜ」
「さて……それじゃあ、妖怪達も含めて相手にしないとね……こっちのこと見てる馬鹿は殺さないと……」
胸の話になってそれを理解してる妖怪がいたのか、ハンティの方を見ている〝刀狩り〟という妖怪を、ハンティが睨んだところで彼らは顔を青褪めさせる。
「ひぃっ!?　な、なんか怖そうな貧乳がこっちを見た!?」
「同じかべだから仲間意識があるのか……？　って、うわぁっ!?　雷撃ってきたぞっ!?」
「ひ、怯むな！　俺達は妖怪だぞ！　あんな奴ら、押し潰しちまえ！」
「よし、行くぞーーー!!」
と、妖怪達は白兎達に襲いかかる妖怪王に続いて牧場に向かって突撃していく。
何とも言えない形で開かれた戦端は、しかし勢いを持ってぶつかりあった。

白兎の剣

ＪＡＰＡＮの人間牧場での戦闘は、妖怪による突撃と、魔軍側の防衛という形で始まった。

妖怪側は二代目妖怪王、狂星九尾・末知女殿を旗印として人間を襲うために前進するが、魔物側がそうでないのは単純なことだ。それは、

「いいか貴様ら！　守っていれば勝てるのだから不用意に前に出るなよ！　こっちにはあのレオンハルト様の使徒がついているのだからな！」

部隊を指揮する魔物将軍の声を受けて、はっ、と短い了解の声が重なる形で連続する。牧場の外側の境界線。まだ少し残っている柵を利用しながら防衛を行う魔物兵達は、前線で戦う者達の姿に勢いを高め、燻っていた鬱憤を晴らすように叫びながら戦闘を行う。

「今日こそは覚悟しやがれ化け物共！」

「人間よりちょっと強いからっていい気になんなよ！　魔物の方がつえぇんだからな！」

「ちょっと斬りつけたくらいで死なねぇならズタズタにしてやらぁ！」

人間を越える速度で突っ走ってくる妖怪達を相手に、魔物兵もまた、人間を越える腕力で迎え撃つ。互いに人ではない種族の戦闘は、今となっては見られることのない人間同士の戦争よりも鮮烈に繰り広げられていた。

だが、拮抗している軍勢同士の戦いの中で、その変化をつけようとする者がいる。

それはやはり、軍勢を束ねる将といえる者達で、

「人を襲うこと――それが我が宿命。それを邪魔立てするというなら……容赦はせんぞ」

と、そう告げて宙を浮きながら力を込めた九尾の妖怪に、魔物兵達は自然と身構える。

あの妖怪が厄介であることを彼らは知っている。妖怪軍団だけな

ら、魔物将軍率いる魔軍でも蹴散らすことは可能だが、その戦況を左右することの出来る戦術レベルの強さを持つ相手がいると途端に厳しくなる。
「――〝大雷撃〟！」
「ッ……！　総員、身を守れ――ッ！」
その妖力が強くなり、バチバチと閃光が迸る。
以前の襲撃に於いても、多くの人間や魔物兵の命を奪った極大の雷。雷の嵐とも言うべきその大雷撃に、魔物将軍は即座に指示を出し、魔物兵達もその指示を聞く前から咄嗟に自分の身を守ろうとする。
妖怪王と称するだけの力で練られた雷は、当たれば黒焦げとなり絶命することを免れない危険なもの。それ故に、妖怪達であっても多少の距離を取りながらその力の行き先を見守る。
「さすがは末知女殿様ぞ！」
「ゲヘヘ、黒焦ゲニナリヤガレェッ！」
雷の雨が魔物達を狙って戦場に降り注ぐ。
以前と同じ様に、少なくない数がやられることを、その威力を知る誰しもが想像した。
だが、
「――ったく！　世話が焼けるね！」
「！」
その雷の雨は、魔物達に降り注ぐ前に透明な何かに弾かれたようにして消失していく。
それを引き起こしたのは、やはり黒髪のカラーの姿をした、使徒だった。
「さすがにこれ以上やられると怒られそうだからね！　それだけは防がせといて貰うよ！」
「くっ、おのれ……！」
二代目妖怪王の最大威力の攻撃に対応したのは、ハンティだった。
彼女は魔法障壁を魔物達の上部の広い範囲に張りながら、自身は妖怪達の中に突っ込んで剣や魔法で彼らを薙ぎ払っていく。

妖怪達にとっての戦術レベルの戦力が妖怪王だとすれば、この場の魔軍において、同じく戦況を変えうる強さを持つ戦力は、ハンティだった。
だが、この場にいる戦力でそれに届かずとも軍勢の中で問題なく立ち回れる者達はまだ存在した。
「ハハッ、やるじゃねぇかハンティ。よし、俺も久々に暴れるぜぇっ！」
「ぐおぁ!?　なんだこいつぁ!?」
「炎ノ妖怪ナノカ!?」
口から炎を吹いて妖怪を焼き尽くそうとしているのは、はぐれ使徒である戯骸だ。
かつてはハンティと並んで、魔人級の強さを持つ使徒として、使徒最強の座を噂された戯骸は、以前よりも強化された灼熱の炎を吹き荒らし、妖怪達を次々に討っていく。
「おらよっ！　どんどん掛かってきな！　お前らと同じで、生半可な攻撃じゃ俺は倒れねぇぜ！」
「ぐっ……こ、此奴、身体が再生している……!?」
熱風に身体を庇った妖怪が、戯骸の身体を見て言う。
中には炎に強い妖怪も存在しており、彼らは戯骸の発する炎を意に介さずに戯骸の身体を斬りつけるなどしたのだ。
その多くは、その大きくて長めの煙管をくるりと回して器用に防がれるが、様々な方向から同時に攻撃すれば、防御を潜り抜けることは出来る。
しかしそれによって出来た傷は、炎とともに再生しており、やがて無傷の状態となっていたのだ。
その事実に驚愕を返しながら、吹き荒れる灼熱の炎に妖怪達は次々と焼かれていく。
だがそれを見て、別の反応を寄越す者がいた。
「……やっぱ、先に戯骸ともやっておけば良かったかな……」
「ハンティさんっ!?　味方に戦意向けないでください！」
叫ぶようにツッコミを入れたのは、使徒達に混じって妖怪達の中で

魔法を放っているイヴだ。
彼女は人間なだけあって、身のこなしの上ではまだ常識的な動きをしていた。
「炎の矢！　粘着地面！　光爆！」
だがその動きは、彼女が前衛で戦う戦士ではないことが信じられないほどに、悪いものではない。
動きが洗練されているほどでもないが、彼女は的確に攻撃を躱しながら連続で魔法を放って戦っており、妖怪達が駆け回る彼女を中々捉えきれないでいた。
「くそっ、すばしっこいガキめ！」
「こいつ、動きでも読んでやがるのか!?」
……半分正解ですよ！　と、イヴは内心のみで答えた。
妖怪達から攻撃の際に発せられる強い感情や曖昧な思考を、イヴはその特異な読心能力で読み取りながら戦っているのだ。
前衛の様な動きは専門じゃないのだが、彼女にとってはここまで白兎に付いていき、無茶気味な戦いを経験していることが幸いだった。
前衛で魔法使いが戦う場合は、大きな魔法を使うのではなく、簡単な魔法を連続して使うのが効果的な立ち回りなのだと、知識の上でも実戦の上でも学ぶことが出来ている。
もっとも、イヴ本人は後衛で余裕をもって戦いたいのだが、それを許してくれるような状況でもない。
なので必死こいて攻撃の方向を読み取りながら、彼女はちまちまと妖怪を倒していく。
だがそれでも彼女は人間なので、危ない時もあるがその場合は、
「きー！」
「ぐああっ!?」
「な、なんだこの猿!?」
小さいさるぼぼの様なはぐれ使徒、藤吉郎が妖怪達の急所目掛けて、わらじ手裏剣を投げつけている。
戦闘力は使徒の中でも低いとされる藤吉郎だが、まるっきり戦えないというわけでもない。

身体スペック上は身軽さ以外、それほど強くはないものの毒入りのわらじ手裏剣という彼だけが使う得物はそれなりに厄介なものだ。
無視することが難しいそれを投げつけながら、藤吉郎はイヴが戦いやすいようにサポートを行う。こういった立ち回りこそが戦場における藤吉郎の役目なのだ。
もっとも、主が存命時においては、その主があまりにも強すぎたり、逆に相手が悪い場合が多くてあまり日の目を見る機会は無かったが、白兎達との冒険においては、彼はそれなりの働きをこなすことが出来ていた。
しかし、そうやって縦横無尽に戦場を駆け巡る彼らとは違って、その場に留まり続ける小柄な影が一人。その存在を見下ろして、妖怪王はその子供を仕留めようとする。
「っ……まずは貴様から仕留めさせてもらうぞ！」
と、末知女殿はその小柄な影――白兎に向かって叫びとともに雷を放つ。
その叫びに若干の怒りが混じっていたのは、白兎の体勢や態度が、戦う時のものではなかったためだ。
彼女は周囲で戦う者達を感じながらも、妖怪王と対峙するその円形の場で全く動くことなく、目を伏せている。
明らかにこちらを舐めているかのようなその態度に、末知女殿は白兎に直撃する的確な雷撃を放ったのだが、
「っと」
「……!?」
末知女殿は、その結果に訳が分からず目を見開いた。
己が放った雷。その到達は雷なだけあって一瞬だ。
雷速を躱す、あるいは防ぐというのはおおよそ不可能と言われるほどに難しい。それこそ勘に近い動きで躱すしかないものだ。
しかし白兎に放った雷は、その一瞬で鍔鳴りとともにかき消えてしまった。
――否。正確に言えば……斬り捨てられた。
「っ……！」

何が起こったのかと理解する暇も余裕も取ることはなく、末知女殿は何かの間違いであることを願って思考停止気味の二発目を放つ。
「ふむ」
二発目の雷も、高い金属の音――鍔鳴りとともに分かたれる。
その二度目の結果を、辛うじてだが捉えることが出来た末知女殿は戦慄を隠すことなく幼子だと思っていた少女に告げる。
「貴様……雷を斬ったのか？」
「――ええ」
確認のための問いかけに、白兎は平然と肯定を返した。
瞳を伏せたままの真顔で、彼女は軽く息を吐いて告げる。
「実戦での雷斬り。初めてやりましたが、やはりこんなものですか。練習と変わりありませんね」
「馬鹿な……」
なんてことないように告げる白兎に、末知女殿が額に汗を垂らしながら呟く。
だがそれを、見ていないが見えている白兎が見て、その先を口にする。左手で鞘を持ち、右手を刀の頭に携えながら、
「そして、今の反応で理解しました」
と、白兎は落ち着いた声で、
「二代目妖怪王、狂星九尾・末知女殿さん。貴方、私よりも弱いみたいですね？」
「――っ、何を……!?」
「何を……？　ええ、ですから――」
末知女殿が驚愕する中、白兎は首を傾げながら、
「今のうちに、降参しておくのが良いですよ？」
不遜過ぎる言葉を、妖怪王に告げたのだった。

「弱いだと……？　もう既に勝ったつもりか……!?」
ふむ、とこちらに憤りの言葉を告げてくる末知女殿に、白兎は冷静な様子でそれを受け取った。

どうやら相手は、自分が何故そう結論づけたのかが分かっていないらしい。自分からすれば一目瞭然ではあるのだが、
「……そうですね。分からないというなら教えてあげましょう」
こほん、と咳払いをしつつ、白兎は解説してやろうと言葉を作る。分からない相手には教えてあげることが大事だ。
自分も父に教えられて成長してきたのだし、そうやって多くのことを知識として吸収したのだ。
これを教えることで、相手がそれを理解して膝を折ってくれるのが理想だと思いながら、白兎は言う。
「妖怪王さん、貴方、私の剣が見えていませんでしたね？」
「っ……見えていたぞ」
「嘘ですね。物凄い動揺、丸わかりです。まあ、二刀目はまだ辛うじて反応は出来ていたようですが遅すぎます。その程度では――私とは戦いになりえない」
いいですか、と動揺する末知女殿を前に白兎は前置きを置きつつ、
「雷を斬ったことに驚かれていたようですが、この程度で驚かれてしまっては困りますよ。私と戦いを成立させるなら、先程の剣くらいは見えて貰わないとガッカリです」
雷を斬ったこと自体は実戦では初めてだが、鍛錬の際には幾度となく成功させてきたものだ。
だがその行為は、自分達にとって驚きに値しない。雷速くらい、反応出来なくては父の剣の、ひいては自分自身の名折れだ。
「そもそも妖怪王さん、身体能力はそれなりに高いみたいですが、戦闘経験が殆どありませんね」
「……それは……っ」
再び図星の様で、末知女殿は短くつぶやいた上で押し黙る。
反応で丸わかりなのだ。だからこそ、事実として話を進める。
「本来、貴方クラスの実力者であれば、先程の私の剣くらいは反応出来ておかしくない筈です。にも関わらず、これに反応出来ないということは、貴方が近接戦のスピードに慣れていないことを証明しています」

最低でも使徒クラスの強さはありそうな妖怪王だが、それでも戦闘経験の乏しさは致命的な弱点となり得るのだ。
特にスピードに慣れていないことは致命的だと、白兎は言う。
「速度、というものは慣れることが出来るものです。長年の修行や幾度の実戦をこなしていて、自分の出すことの出来る最高速を出し慣れている人物であれば、近接戦の高速のやり取りに対して、脳や目が追いつかないといったことはありえない」
神経は鍛えれば鍛えるほどに素早く反応することが出来るようになっていくし、脳の可塑性によって高速に慣れていればその分、見慣れてるもの以下のスピードは遅く見えるものだ。
「次に、私の剣はこの程度ではありません。手加減なんかも実は苦手なんですよ」
「……手加減、だと？」
「はい。私達の――我々の剣は、雷速程度では収まりませんので」
「――――」
末知女殿が息を呑む音が聞こえる。
真実かどうかを計りかねながらも、半ば真実だと悟って動揺を隠しきれない様子だ。
やはり戦闘経験の薄さはこういうところでも出てくる。不測の事態が起きても、戦闘中は動揺を晒すなと、自分は父に厳しく教えられたものだし、その意味を正しく理解している。
戦闘の際に弱気や動揺を晒すのは、相手を調子づかせてしまうため、極力避けなければならないのだ。
故にどんな時でも冷静に、あるいは楽しんでいかなければならない。そうすると、今のように相手はこちらにビビってどんどん気勢が衰えていくのだ。
視覚の代わりの様に発達したそれ以外の五感を持つ白兎にとって、周囲の空間や相手の動きや音は丸わかりなのだ。今も動揺している相手の心音が感じ取れるし、
……それにしても、大きいですね……。
と、関係ない部分まで正確に感じ取ってしまう。三桁はあるし、少

なくともＭカップくらいはあるだろうかと思い、正確な数字を出そうとしたところで、悲しくなるのでそれを咳払いをして一旦隅に置く。白兎は説明を続けようと、周囲の流れ弾を居合で斬り払いながら、
「私の父――我が師は、空から落ちてきた雷を何度も斬ることが出来ますし、私も今見て頂いたように速度に関しては少々自信があります」
父からは、剣術において一番重要なものとして、先手必勝を教えられたのだ。
王道の剣とは、どんな剣よりも速く強くあり、相手を打ち破らなければならない。
それに最も必要なものこそが〝速度〟であり、それに比例して強くなる〝力〟だ。
「私は師ほど強い力も速度も出せませんが……それでも私の剣は〝一撃必殺〟です。二刀目は恥と教えられてますし、妖怪王とはいえ結構痛いと思います」
「っ、その程度で……！」
「そうですか。くれぐれも無理は為さらぬように。妖怪は不死身で特殊な方法を用いらなければ完全な死はないと言われてはいますが、それでも酷く破壊されると、復活にそれなりの年数を要すると聞きます。出来れば、強い妖怪は物語の様に打倒してそれっぽいやり取りを交わしたいと思うのですが――」
「くどい……！　我はそのような戯言で屈しはせんぞ……！」
未知女殿が、妖怪王に相応しい妖気の放出を自然と行う。
なるほど、確かにこれは強大な力を感じられるが、
……父やその周りにいる人と比べたらまだまだですね。
妖怪王と聞いて、魔人級の実力者であれば面白かったのだが、スペック上の強さはともかく、まともな戦闘経験も無さそうなところを見ると、やはりそう簡単にはいかないらしい。
まあもっとも、それくらい強ければハンティは止めていただろうし、自分の身の丈にあった相手から徐々に挑んでいくのが順当だろうと、白兎は右手を刀の柄に携えると、

「では、殺さぬように努力しましょう。ですが――――覚悟してください」
「っ……！」
末知女殿が僅かに怯む中、白兎は目を薄く見開いて集中した。

白兎は剣を抜く前には、あらゆる雑念を捨てて、目の前の相手を素早く斬ることだけを念じる。
その一念。相手に勝利するということだけを念じて、修羅になることが出来ればよい。
剣気を集中させ、相手の隙を見逃さないようにその赤い瞳を見開く。
白兎の瞳は相手を映してはいないが、それでも本能からか、力を入れる際には自然と目は見開いた。
周囲に凍えるような剣気が充満する。それは彼女の父のものに酷く似ており、戦場にいる者達を身震いさせた。
そして、それを一身に向けられている末知女殿が雷を放とうと僅かに身を動かした瞬間、
「――――！！」
その筋肉の動きを異常聴覚で察知し、動くより先に白兎は動いた。
踏み込みは高速。相手の視界から消えるような踏み込みで末知女殿の懐に潜り込んだ白兎は、自らの剣の間合いに入った相手に対し、遂に刀を抜き、
「――ッッ!?　かっ……！」
刃の軌跡は、先程雷に対して行った様に、それ以上の速度で正確に叩き込まれた。
末知女殿の身体が、口元から漏れる血と共に揺らいだが、それが起こった時、既に白兎は末知女殿と交叉して背後に回っていた。
小柄な身で振るうには、それなりに大きい刀。居合の抜刀は刹那で放たれながらも、返す刃を白兎はゆっくりと鞘へと戻していく。
「――斬り捨て御免ですね」

鍔鳴りの音と後追いの衝撃波とともに、背後の末知女殿はゆっくりと倒れていった。

宿命

戦場の空気は、その瞬間に一気に変わった。
「嘘だろ……？　もうやられちまったのか……？」
とある妖怪の呟く声が響く。勢いをもって魔軍に激突していた妖怪軍団は自分達の将である妖怪王が、人間による一閃で倒れた事に驚愕し、呆然としてしまっていた。
そして魔軍の方もその結果を見て、同じ様に目を見開いて驚く。
「……あの人間……確か、レオンハルト様の下級使徒の方だとは言っていたが……まさかこれほどの強さだとは……」
魔物将軍の息を呑みながらの呟きは、戦慄の色が混じっていた。
だがその一瞬後、魔物兵達は自分達を苦しめた妖怪王が倒れたことを事実として認識すると、瞬間的に湧き上がった。
「うおおお

るように白兎に駆け寄っていくと、
「ふふん、見てましたか？　私の戦いを」
「ええ、一瞬過ぎて見えませんでしたけど、凄かったですよ」
「……そうですか。しかし、これでこのＪＡＰＡＮにも、平和が訪れますね……」
イヴの返答に白兎はほんの少しだけ残念そうになったものの、気を取り直して何やら締めに入ったような言葉を口にする。
何とも言えないものを感じながら、イヴが近づき、その内心を読んでみると、
――ふふ、今日の私、超格好いいのでは……!?
と、何やら、自分の格好良さとやらにご満悦な様で、イヴは半目の視線を白兎の背中に向ける。
……丸わかりですよ、白兎さん……。
白兎は普段は鋭いし、冷静だったりするのに、こういう時はどこか抜けているというか、こっちの気が抜けるような振る舞いが多くて何とも微妙な気分になる。
とはいえ手柄を立てたのは確かなので、ここは何も言うことなく白兎の好きにさせておこうと思う。次に何を言うのかと黙って待っていると、
「――ですが、最後に一人、救わねばならない人がいますね」
「えっ？」
白兎が徐ろにそんなことを口にするので、イヴは、どういうことだ？　と言わんばかりに短い声を上げた。
だがそんなことを気にも止めずに、白兎はゆっくりと背後を向きながら言う。渾身のキメ顔とともに、
「妖怪王さん。貴方は何故、人間を襲うようなことをするのですか!!」
ばばん、と指を妖怪王の方に向けて告げてみせる。
だがそれに反応する者はいない。
妖怪王は地面に倒れたまま反応を返してこないのだ。
それは白兎がそうしたものであるはずだが、白兎は何故か、それを見て少しの間固まると、

「……はっ!?　そういえば、峰打ちにするのを忘れてました!?」
「死んでるんじゃないですかね？」
「つい、いつもの癖で……！　ど、どうしたら……？」
イヴが冷静に指摘すると、途端に白兎はおろおろと狼狽え始める。
まさか殺すつもりがなかったとは驚きだ。てっきり殺る気満々かと思っていたのだが、実はそうではなかったらしい。
しかし死んでるのならば救うも何もないし、どうしようもないので、とりあえずは生死の確認を取ったらどうだと言おうとしたところで、
「……っ……ま、だ……」
「！　やった！　生きてますよ、イヴさん！」
「あれ？　ほんとに？」
白兎が不意に喜びの声を上げたところで、イヴは訝しみながら地面に倒れた妖怪王を遠目に見るも、少ししてゆっくりと立ち上がろうとする妖怪王を見て、本当に生きていることを確認する。
おそらくは異常聴覚で動きを察知して生存を先に確認したのだろうが、それは今更の事で驚くことでもない。
それよりも、妖怪王の方に目が行ってしまい、
「うわ……本当に生きてますね……」
「さすがは妖怪王ですね！　凄い耐久力です……！」
「いやまあ、一応は敵ですので生きていることを喜ぶべきなのか悩みますが……」
人としては生きていることを喜ぶべきなのだろうが、この状況だと何とも言えないものだ。
だが白兎の方はなんとか生きていることに喜んでいる様であり、妖怪王の耐久力に感心しながらも咳払いを一つ。そして、
「こほん。では、気を取り直して。――貴方達の負けです。今直ぐ降参して下さい。これ以上の戦いは無意味ですよ」
「それっぽい寸劇はまだ続けるんですね……」
「す、寸劇じゃないです！　これは自然と出てしまってるだけで――」
と、白兎のよく分からない行為を軽く呆れながら指摘すると、白兎

が顔を赤らめて抗議を返してくる。
だがそれを聞いていたのか、遠くからもハンティが、
「降参されるのはなぁ……もっとやりたいんだけど……駄目かなぁ……？」
「……何気に過激なこと言ってんなぁ……」
ガッカリした様子の言葉に、戯骸が苦笑し、それを聞いていた者達が軽く戦慄している。
戦闘狂の発言は置いといても、一体どうするのかとイヴは白兎を中心に周囲を観察していると
「まだ……この程度で、我の宿命は……！」
「おや、完全に立ちましたね」
妖怪王が口元の血を拭いながらも、立ち上がった。
だが白兎は、相手にもう戦う力が残っていないことに気づいているのか、特に戦闘態勢を取ることもなく、余裕の体勢で妖怪王に向き直ると、相手の発言の意味を問いかけるような言葉を発した。
「それに、宿命とは何でしょう？　人を襲うことが宿命ということですか？」
「……当然だ……！　我は、人の敵なのだから……！」
「人の敵……？　人間が嫌いということですか？」
「っ、黙るがよい……！　我は、人を襲わねば、ならぬのだ……！」
何かに駆られるような切迫した様子で、妖怪王はそう告げた。
その内心の感情をイヴは読み取り、
……迷いに諦め、悲しみ、それでいながら何やら現実逃避というか、思考停止っぽい閉じた思考ですね……。
どうにも強すぎる情念のため、触れずともある程度は読み取れてしまう。妖怪は想いや情念が形になると聞くし、そのせいだろうかと思う中、イヴは妖怪王が僅かに動きを見せたのを視界で捉えた。
「！　イヴさん、藤吉郎。少し下がっていて下さい」
「っ、はい！」
「きー！」
妖気の高まりというものを感じて、白兎が二人を庇うように前に出

て、居合の構えを取る。
戦う力は無さそうだが、それでも自分の様な人間を害することは難しくないだろう。安全に下がっておくのが得策だと、
「雷、撃……！」
思い、その予想通りに攻撃は来た。
宙を引き裂くような雷撃。それに対して、白兎は剣を構えた。
悠然とした状態のまま、剣に力を込める。白兎にとっては、雷の軌跡に刀を滑らせることは難しいことではないと、既に先程証明しているのだ。
だからこそ、イヴは身を僅かに強張らせたものの心配はしていなかったし、白兎も余裕の様子で、満足するまで付き合ったら説得してやろうと考えていたはずだ。
だがしかし、白兎の剣は、振られることはなかった。
その理由は、単純。白兎の剣閃よりも速い斬撃が、先に雷を断ち切ったせいだ。
「――――そこまでにしておけ」
と、その声は、雷を断ち切った後に遅れて聞こえてきた。
大声ではないのに、不思議と戦場全体に響く男の声。その声と共に感じ取れる存在感は、妖怪や魔物兵らを強張らせる。
「あ、まずっ……」
「っと、この気配は……ハハッ、以前よりも洒落にならねぇくらい高まってやがるな……！」
ハンティがその到来を察知して、げっ、と言わんばかりに眉根を寄せ、戯骸は久し振りに感じる気配に可笑しそうに笑った。
だが慣れている者達にとってはともかく、それを普段は感じることのない者達にとっては、その濃密な気配は息が詰まってしまうほどであり、実際に視界に入れた者達は敵味方問わず、強い畏怖の感情を浮かばせる。
味方である魔物兵は息を呑み、敵である妖怪は露骨に恐怖を感じて、身を震えさせた。
だがそんな中で、涼しい顔でその気配を感じ取って溜息を吐いたの

は、白兎のみであった。若干、バツが悪そうな、それでいて不満を感じているような様子で、白兎はいじけた様に誰にも聞こえないくらいの声量で呟く。
「……早すぎますよ、父上」
「……まさか妖怪との戦いに、俺が派遣したハンティはともかく、お前達までいるとは……これはどういうことだ？」
鋭い視線を周囲に向けながら、金髪灼眼の男――魔人レオンハルトは問いかける。
だがそれに答える者はいない。最強の魔人の、その手加減抜きの刺すような視線を受けたものは敵味方問わずに生きた心地がしないものだ。
そして答えられる者は、答える気がない。というか、誤魔化そうとしている。
彼の使徒であるハンティは明後日の方向に視線を泳がせながら、珍しい愛想笑いを浮かべており、どことなくバツが悪そうにしていた。
その近くにいた戯骸などはその視線に対して避けることなく目を合わせたが、彼に対してはレオンハルトの方が目線を合わせることを避けた。
そして直ぐ近くで周囲に漂う畏怖やら様々な感情も含めて状況を見ていたイヴは、眼の前にいる自分の上司の上司が妖怪王の方を最後に見ると――そこで僅かに眉根を寄せたのを見た。
時間が止まったかのような戦場で、最強の魔人が妖怪王の方を見て数秒の時間が過ぎる。余人には何を考えているかは分からない中で、レオンハルトは一度目を伏せながら静かに告げた。
「……まあいい。話は後からにしよう。それより、今は妖怪騒ぎを片付けなければな」
と、レオンハルトは妖怪王の方に何の気なしに歩みを進めると、
「……お前が妖怪王だな？」
「……そう、だ」
強大な力を持つ妖怪王でさえ、眼の前の男の圧には満足に動くことが出来ない。

辛うじて言葉を返すことは出来たが、それを受けたレオンハルトは一度頷いた上で、こう言った。
「……そうか。お前には話がある。ついてきて貰うぞ」
「っ……それ、は……」
「安心しろ。殺す気はない。話をするだけだ」
「……わかっ……た」
レオンハルトの言葉を信用したわけではなく、頷くことしか出来なかった末知女殿は、力なく了承して、投降してしまう。そして周囲の妖怪に対してはレオンハルトが、
「――やるなら相手になるが……どうする？」
「ヒッ……!?」
初めて見るレベルの圧倒的な強者の圧力を受けて、妖怪達が悲鳴を上げ、腰を抜かす。それを見て軽い息を吐いたレオンハルトは踵を返しながらも続けて、
「なら今直ぐにここから去れ。そしてここには二度と来るな。もしまたやって来て、人間や魔物を殺すようなら……俺が相手にならざるを得ない」
威圧するような魔人の言葉を受け、妖怪達は魔人が視線を逸らした瞬間、
「ひ、ひぃ……！　ば、化け物だぁーーー!?」
「ふ、ふざけやがって……！　あ、あんなの相手にしてたら、命が幾つあっても足りやしねぇ……！」
「お、おい、馬鹿お前ら、妖怪がビビらされるなんて恥だぞ……！　く、くそっ、きょ、今日のところはこれくらいにしといてやらぁ……！」
蜘蛛の子を散らすようにその場から散り散りになって逃げていく妖怪達。
後に残ったのは、魔軍の兵や、ハンティや戯骸、白兎やイヴ、藤吉郎といった魔の者達と妖怪王である末知女殿のみだ。
そんな中で、レオンハルトは牧場の方に歩みを進めながらも、
「さて……後片付けを済ませるか」
と、何やら疲れたような低い声を出しながらも、魔物将軍らにその

場の後始末を任せ、自身は白兎一行と妖怪王を連れて室内へと足を向けた。

「――それで、一体どういうことか説明してもらおうか」
「いや……その……」
周辺の人払いを済ませた一室で、レオンハルトはハンティに上から問いかけた。
床に正座をして強い視線を受けたハンティは、その視線から逃れるように顔をそらしながら何とも言えない微笑を浮かべる。
どうにかしてこの場を切り抜ける方法を先程探している様子だが、どう考えてもハンティが逃げる余地はない。
それを理解しているのか、ハンティは汗を流しながらも主人に告げる。窺うようにボソリと、
「……白兎が、あたしから戦いを取り上げるとか言うから……」
「――言ってません」
「うわ、酷!? そこで嘘はあんまりじゃない!?」
「はて? 嘘とは何のことやらですね。私達はハンティさんに誘われてここまで来ただけで……」
「きー!」
「……因みに補足すると、戯骸さんは本当に偶然に出会いました」
完全にしらばっくれる体勢に入った白兎や藤吉郎の弁を、イヴが横から粛々と補足する。
ハンティだけが、ぐぬぬ、と歯噛みしており、戯骸は煙管から火を吹きながら〝変わったなぁ……〟と時の流れを染み染みと感じている。
それらを見てレオンハルトは溜息をつき、
「……白兎。嘘は良くないぞ」
「冗談です。ですが、その程度の言葉で命令違反をする方に問題があるのでは?」
「一理ある。が、それとこれとは別問題だ。危険なことに首を突っ込

もうとするな。何かやる時はちゃんと俺に報告して許可を取ってからだと言っただろう」
「……むぅ……それは、でも……」
不満そうに頬を膨らませた白兎を見て、レオンハルトが何故か目元を押さえて僅かに震える。
イヴが、またいつもの発作かな、とお茶を飲みながら呑気に考えていると、白兎から視線を逸らしたレオンハルトがハンティをもう一度見て、
「……ハンティ。お前は二週間戦闘禁止だ」
「な……!? それは幾ら何でも重すぎない!? せめて一週間！」
「二週間くらい我慢しろ。これでも充分甘い――というか、他の奴なら罰でも何でもないんだがな……」
「これが罰になる辺り、ハンティさんのヤバさが際立ちますね」
「ぐぐぐ……いや、別に、平気だし……！ いや、でも……！」
「全然平気そうじゃないですねぇ……」
レオンハルトや白兎に呆れるように言われ、強がってみせるハンティだが、その様子が全然大丈夫そうではなくて、思わずイヴが半目になる。
さすがは戦闘狂として有名なハンティだと、いい意味でも悪い意味でも感心していると、今度はレオンハルトが戯骸の方を見て、
「……それで、お前は……」
「久し振りだな。ちょっと、お前さんの娘に誘われてよ。一緒に冒険させて貰ってるぜ」
「私のお友達です！」
「!? お、お友達だと……こいつが、か……？」
白兎の自慢気な言葉にレオンハルトが絶句してしまう。
娘の嬉しそうな姿が可愛いし、友達が出来ることは良いことだが、よりによってこいつがか、と表情を歪め、
「……白兎。こいつがどういう奴か分かってるのか？」
「はい、魔人ザビエルの使徒だった火の鳥さんです。藤吉郎と似たようなものですし、問題ありませんよね？」

「いや、そういうことではなくてだな……」
レオンハルトが頭を抱える。戯骸の本性というか、性癖のことを知らない娘に、戯骸のヤバさをどう説明すべきか悩んでいるのだ。
しかし、そういった汚れたことはあまり教えたくない。知る必要もないことだとしているので、性癖のことを口にすることは出来ない。
となるとどうすればいいかと、レオンハルトは悩んだ末に、戯骸を見て、
「……お前はどういうつもりだ？」
「いや、何も？　ただ友達になってくれって頼まれて、面白そうだったから頷いただけだな。別に今更敵対する気もねえぜ。つうか俺らはもうずっと昔に負けちまってるしな」
「きー！　きー！」
「あ、藤吉郎さん……」
白兎の肩に乗っていた藤吉郎が、レオンハルトの前に跳び降りて何やら頭を下げはじめた。
それはお願いするような仕草であり、その言葉が分からないレオンハルトであっても、何が言いたいかは理解出来た。
故にレオンハルトは渋い顔になる。今更ザビエルの使徒にどうこう思うわけでもないし、単純に魔軍に戻りたいというのなら快く了承するのだが、これが娘の友人として近くにいることとなると、魔軍参謀としてではなく、父親として物凄く悩む。
感情としては心底嫌だが、娘の友人をこの場で認めないと言えば、嫌われてしまわないかという危惧がレオンハルトを迷わせているのだ。
いっそのこと、白兎の預かり知らぬとこで闇に葬ってしまいたいぐらいだが、戯骸は不死鳥なのであまり意味があるとは言えないし、さすがに不審に思われる。
どうすべきかとレオンハルトは悩み、悩んだ末に、
「……お前については暫く保留だ」
「おお、好きにしてくれ。逆らう気はねぇからよ」
と、戯骸に対する処遇を保留にしておく。

このことについては周囲と相談したいし、使徒の意見も聞きたい。好意的な意見が多そうな気もするので、レオンハルトとしては何とも言えないのだが。

ただ、不幸中の幸いとして、戯骸なら娘に手を出すはずがないので、その点については安心出来る。その部分で考えると、意外と娘の友人としては悪くない気もしてくるが、気の所為だと思うことにしてレオンハルトは頭を振る。

そして最後に、レオンハルトにとっては最も意外な人物に視線を移した。

「……さて、待たせたな」

「……」

室内にあるＪＡＰＡＮ風の畳の一角に座る、二代目妖怪王、狂星九尾・末知女殿。

彼女は感情の読めない表情で、無言のままレオンハルトと対峙した。

……この者が、魔人という奴か……。

末知女殿は、人間牧場という人間が飼育されている施設の室内で、その存在と間近で対峙した。

妖怪王という称号を冠していようと、末知女殿は極々最近に誕生した妖怪に過ぎない。

故に知識としてはなんとか知ってはいても、その存在を見るのは初めてのことだった。

そして、率直に思うのは――これほどに強大な存在なのか、ということ。

先程の幼子も、下級使徒という名のついた人間でしかないが、自分を打ち倒すほどには強かった。

だが眼の前の相手は文字通り、桁が違う強さを感じる。

今を生きる妖怪の中で最強の力を持つ自分だが、この男と仮に戦闘をしては、一秒も保たない自信がある。

いや、実際にはもう少し保つかもしれないが、それこそ戦闘にならない隔絶とした差が、自分と相手の間には横たわっているのだ。
人間の敵となるべく生み出され、人間を塵の様に吹き飛ばせる己が、同じ様に塵の様に吹き飛ばされる。
だというのに、この魔人という存在は人間の敵であるという。
２０体近い魔人がいて、その上に魔王という魔人でも敵わない存在がいて、それらが人間の敵としてこの世に存在しているという。
何とも無茶な話だ。妖怪相手に苦労する人間が、これらに勝てるとでもいうのか。
それこそ、力を合わせて立ち向かわなければならない相手であり、例え全人類が力を合わせても勝てる可能性は極めて低い相手。
そんな存在がいるというのに、己は一体何だと言うのか――と、末知女殿は、自分の存在意義を見失いかねない存在を前にして怒りや悲しみなど、様々な想いが混じった複雑な気持ちになる。
これだけの存在がいるというのなら、自分は必要なかったのではないか。自分を生み出した陰陽師達は一体何を考えていたのかと訳の分からない気持ちになる。
人間を一つにまとめるための敵なら、眼の前の相手で充分だろう。自分の何倍、何十倍も強大な敵がいるのに一つになれないのなら、自分程度が何をしようとも人間は一つにならない。なる訳がない。
眼の前の男は、魔物や妖怪、鬼などのどれだけ強大な敵がいようとも、人間は人間同士で争いあってしまうという証明であった。
……人間は、何を考えているのだ……。
人間同士で争い合っている場合ではない。今直ぐにでも団結して、眼の前の男のような強大な敵に立ち向かわなければならないはずだ。
それとも相手が強すぎて諦めてしまっているのか。そうだとしたらお手上げだ。
二代目妖怪王、狂星九尾・末知女殿の宿命とは、妖怪を率いてＪＡＰＡＮの人々全ての敵となることで、人々をまとめさせること。
争いに満ちたＪＡＰＡＮに、新たな統治者を与え、争いを止めさせることだ。

しかしこの瞬間に、末知女殿は気づいてしまった。
己の宿命を遂げることは不可能であり、また、そのことに何の意味もないのだと。
人々は纏まらないし、纏まっても意味はない。
この世の統治者は人間の様な弱者ではなく、もっと力ある者達だったのだと。
それを理解した瞬間、末知女殿は足元が抜け落ちてしまったかのような感覚を得た。
もはや自分には何の意味もないのだ。
「お前は人間を襲い続けている様だが……出来ればそれは――」
「……我はもう、何の意味もない……」
「何？」
眼の前の男が話し始めた時に、末知女殿は意図せず被せるように言葉を呟いた。
「人を纏めさせることなど……出来はしない……人を襲っても無意味だ……我が存在している価値など……ない」
そう、何の意味もないし、これ以上にやることなど何もない。
だからこそ末知女殿は、もうこのまま消えてしまった方が悪くないのではと想い始めた。
だが、
「……よく分からないが、自分の存在意義にでも迷っているのか？」
それより先に、魔人は問いを投げてきた。末知女殿は深くは考えずに頷き、
「我に与えられた宿命は……どうやっても達成することが出来ぬものだ。ならばもう、我の存在価値はない……」
「……随分と悲観的だな。生きている意味がない、か……」
魔人は何かを思うように目を細めるが、関係はない。
もはや末知女殿は何をするでもなく、このまま石にでも戻ってしまいたいと思うほどに絶望していた。
だから眼の前の魔人が、何かを懐から取り出したところで、それは自分とは何ら関係のないものだと決めつけた。

しかし、そうではなかった。
「――ほら」
「……？　何だ……？」
眼の前に差し出されたものに、末知女殿はまだ残っている思考で疑問を浮かべる。
知らないものだと見上げた先で、魔人は言った。
「食べてみろ」
「食べる……だがそれも――」
「いいから試しに食べろ。……その答えが見つかる可能性もある」
「……」
何を言っているのかと、末知女殿は鼻白む。
食事如きで、自分の存在意義が、宿命が解決するわけがない。
そもそも妖怪に食事など必要ないのだ。
だからこそ、末知女殿はそれに手を伸ばした。
もうどうでもいい。故に、魔人の言う通りこれでも食べてお終いにしてしまおうと。
そう思い、末知女殿は眼の前に差し出されたそれを口にした。
「……ん」
ゆっくりと咀嚼する。
食事は初めてなので勝手が分からないが、多分、こんな感じだろうと探りながらのものだった。
だが、その舌に伝わってくる味とやらは、
「！　これは……なん、だ……？」
末知女殿は、それに不思議な心地よさを感じて閉じていた瞳を見開く。
舌先に感じる不思議な満足感。芳醇な香りに、末知女殿は混乱した。
こんな感覚は初めてだと、
「どうだ？　美味いか？」
「美味い……とは何だ……？」
「美味しいかってことだ」

「美味しい……これが……そうなのか」
人間や他の妖怪が食事を取った際に言っている言葉だ。
宿命のみを考えていたので、全く興味を持つことはなかったのだが、
「……もうひとつ……貰っても……」
「ああ、全部食べて構わない」
「！　そうか……」
あっという間に無くなってしまったそれを、末知女殿は不思議とまだ食べたいと思い、それを口にしていく。
二つ、三つ、四つと食べても、なるほど。これは美味しい。
不思議ともう一度と食べたくなる感覚。初めての感覚を訳のわからないまま感じていく。
だがやがて、全て食べ終えてしまうと、
「む……もう無くなったのか……」
差し出された箱の中身は全て無くなってしまい、末知女殿はそのことを残念に思った。
だがそこで、魔人は言った。軽く微笑を浮かべながら、
「どうだ？　まだ食べたいか？」
「……うむ」
迷いなく頷いてしまう。すると更に口角を上げて魔人は、
「なら、死ぬことは出来ないな」
「！　それ、は……」
言われた言葉に、末知女殿は目を見開く。
そして気づく。先程まで、消えても構わないと思っていたというのに、
……今は、未練を感じてしまっている……。
何故だ、と末知女殿は自分の事が分からなくなる。自分は宿命のために生み出されたのに、何故それ以外のことをしたいと思ってしまっているのかと。
だがその答えは、魔人が告げた。
「どうにもお前は、一つの宿命、自分の存在意義とやらに囚われている

ようだが……一つ教えてやろう。生きるための理由なんて幾らでもあるし、作ることが出来る」
「！　だ、だが……我の作られた意味は――」
「作られた意味だと？　そんなことはお前を生み出した奴が勝手に決めたことでお前には何の関係もないだろう」
「――――」
　自分の作られた存在価値は、自分にとっては勝手に決められたものでしかないと、魔人は言う。
　だから、
「自分の生きる意味は、自分で決めるものだ。他人が決めたことに従う人生なんか面白くとも何ともない」
「……だが」
「お前が自分で考えた末に、それがやりたいとどうしても思うならそれでもいい。好きにしろ。だが……お前は物を知らない様だから言うが、この世には生きるに値する物事なんて数え切れないくらいあるものだ」
「数えきれないほど……」
　そうだ、と魔人は頷く。空になった箱を仕舞いながら、
「それはどんなくだらないことだって構わない。余人にとってくだらないものだろうと、自分にとって価値のある物を見つければいいし、幾つ見つけたって構わない。一つのことが駄目でも、別の生きる意味を見つけてそれに没頭すればいい。くだらないものだろうが、死ぬよりはマシだ」
　と、魔人は今度は近くの机に置かれた湯呑を持ち上げ、それを末知女殿に向かって差し出す。
　呑んでみろ、という言葉に従ってそれを口に含むと、
「……さっきのとはまた違う味だが……美味しい、な……」
「当たり前だ。別の食べ物、飲み物なんだからな。どれが一番好みだ？」
「……最初に食べたもの」
　告げると、魔人は苦笑した。そして、

「そういう風に、お前の好きなものを見つけて生きればいい。――因みに最初に食べたのは、いなり寿司ってやつだ」
「……いなり、寿司……」
そう呟き、末知女殿は言葉をしばらく失った。
魔人の言うように、自分は物を知らないが、その意味は理解出来る。
……そう、か。生きる意味は、一つではないのだな……。
思い返してみれば、自分の短い経験の中でも、配下の妖怪や、見かけた人間達が、あれをしたい、これをしたいと言って、また様々なことをしていたものだ。
一つの目的だけではない。くだらないと吐き捨てるようなことも、目的から少し逸れてでもやることがあったものだ。
つまりそれは、自分という存在にとってもそうで、
「……我は……見つけ出せるのか……？」
「ああ、必ずな。……だが、かといってまた牧場の人間を殺すとかは止めてほしいがな。何でもやればいいとは言ったが、次にやられるとこちらも殺らざるを得なくなる。アドバイスしてやると、悪いことや敵を作るようなことは、自分の責任の上で、考えてやるべきだ。目的のためにどうしても必要という場合もあるが、その場合、他者との衝突は免れないからな」
「そうか……」
末知女殿は魔人の言葉に素直に頷きながら、思考する。
自分のやるべきこと。やりたいことはまだ分からない。
……いや、そうだな……。
末知女殿は自分なりに考えて、何をしたいかと結論を出す。
「……我は、先程のいなり寿司とやらをもう一度食べたい」
「ああ、探せばあるだろ。好きにすればいい」
「それに、色んなことを知ってみたいと思った」
「ああ、頑張れ。きっといつかは自分に合ったものが見つかる」
「それと、お主……レオンハルト、だったか。お主にも興味が湧いた……お主は、我を宿命から解放し、道をつけてくれた〝恩人〟だ」
「ああ、それなら――――ん？」

レオンハルトがそこで、あれ？　と言わんばかりに首を傾げる。
だがそれを意に介さず、末知女殿は自らの恩人に対して、自分の想いを告げた。
「だから……お主と共に――お主について行きたいのだが……構わぬか……？」
「……えっ」
末知女殿がレオンハルトを見上げながら戸惑いがちにそう言う中、レオンハルトは暫くの間、周囲の声も耳に入らずに固まり続けていた。

お町

紅魔城内部の廊下を歩いている者達がいる。
それはこの城の主である魔人の姿と、それに追従する何名かの使徒や連れてきた者達、狐や褐色の男の姿だ。
彼らは白兎やイヴも含めてＪＡＰＡＮでの冒険を一時終えて、城に帰還したところであった。そのついでに、先程までいた執務室での手続きのようなものを終え、金髪ツインテールの使徒と、薄紫色のロングの髪の使徒が声を掛けた。
それは説明の様なもので、
「では、戯骸さんは街に住むということでよろしいんですの？」
「末知女殿さんは、こちらへのお住まいを希望ということですよね？」
二人の問いかけには、既知の相手への気安さと、新しい顔の相手への親切の二つが同居していた。
そして先に声を発したのは戯骸の方で、末知女殿は後から、
「ああ、俺は色々と出て回るしな。まあ、レオンハルトが良いって言うなら城でもいいんだが……」
「……我は、レオンハルトと同じ住まいでよい」
二者の告げた言葉は、どちらもこの城の主に関係するもので、自然と視線がレオンハルトの方に向く。
それを受けたレオンハルトはどうも渋い顔をしながら息を入れ、
「……戯骸は……いや……その……だな……」
「――とまあ、嫌がられてるみたいだからな。城に来れるってだけで自重しとくぜ」
と、戯骸が特に不満に思うでもなく笑みを浮かべた先は、戯骸を連れてきた張本人である白兎だ。
白兎は自分の父であるレオンハルトの方を向いて不満顔になると、
「……父上はずるいです。妖怪王さんも私が説得してお友達になろうと思っていたのに……その上、戯骸さんを城に住まわせないなんて……ガッカリしました」
「いや……それはだな……」

またしてもしどろもどろになってしまうレオンハルト。心の中では、末知女殿の方もそもそも連れて来る気はなかったし、それどころか関わる予定もなかった。
３日前にＪＡＰＡＮで偶然にも出会い、何やら絶望して消えかねない状態だったのでそれを防ぐためにも少しばかりアドバイスを行いはしたが、それで道を見つけたら後はさようならになると思っていたのだ。
だがしかし、その予想に反して末知女殿はレオンハルトに付いていくことを希望した。
あまりにも意外な提案にレオンハルトは狼狽えながらも、妖怪であることを理由に断ろうかとも考えた。しかし、
「レオンハルト。我の為に、オロチの鱗を取ってきてくれたこと、重ね重ね感謝する……」
「……まあ、白兎が言ったことだからな。感謝は白兎にしてくれ……」
「あの冒険は楽しかったですね」
そう。妖怪はＪＡＰＡＮから、基本、出ることが出来ない。
妖怪の具現化に必要な妖力は、ＪＡＰＡＮでオロチが発生させているものであるため、短期間ならともかく、大陸に長く留まることは出来ないのだ。
しかし、それはあくまで基本であり、例外はある。妖怪が大陸に留まることの出来る方法が。
その方法こそが、オロチの体の一部などのアイテムを手に入れて、それを所持しておくことだ。
この方法は一部の妖怪には知られており、そしてレオンハルトも知っており、その昔にレオンハルトが白兎に教えたこともある。
故にその、妖怪はＪＡＰＡＮから出られない、という拒否は成立しない。
しかも白兎に頼まれてしまっては断りにくいし、末知女殿の方も、自分から新たな道を見つけろと言っただけに、道を閉ざしたり、放っておくのも躊躇われる。
故に結局は迷宮に潜ってオロチの体の一部を取りに行ったのだが、

その頃にはレオンハルトも、拒否する理由を考えることもなく、受け入れたとしてこの先をどうするかを考え始めた。
だがそれでも、不可解さは抜けきれないし、周囲の反応やこのところの予定の詰まり具合のせいで気苦労が絶えない。妖怪という大陸にいては見ることの難しい存在を城に招き入れたというのに、周囲の反応は何とも解せないものだ。
今の、こちらに耳を寄せてくるペールの様に、
「……レオンハルト様ってば、また随分と大きい獲物をゲットしてきましたねー、このこのー」
やめろ。肘で突いてくるな、と視線で威嚇する。まるで俺が胸に釣られて拾ってきたみたいじゃないかと。
だがペールは視線で威嚇しても悦ぶだけなのであまり意味がない。それどころか、城の新入りとして新しく入ってきた末知女殿にキャロルとともに絡んでいき、
「よろしくお願いしますね、末知女殿さん。……なんだか呼びにくいのでマチさんって呼んでもいいですか？」
「フルネームでも格好いいと思いますの。狂星九尾・末知女殿――悪の親玉みたいですわ！」
「わかります」
「わからないでください、白兎さん……」
ペールが名前が呼びにくいと言ったところで、キャロルがいつもの如く気の抜けるような事を言って、白兎がそれに頷く。イヴがそれに静かにツッコむのだが、もはやどこにも常識人がいなくてレオンハルトは頭を抱えたくなる気持ちだ。
「名か……確かに我も、あまりこの名前は……どうすればよいかの……？」
だが、末知女殿が皆にそう言われて、こちらを窺うような表情で見つめてきたので、それに答えざるを得ないと知る。
しかしこれについてはそう悩むこともないな、とレオンハルトは一息つきながら、
「……そうだな。ＪＡＰＡＮで生まれたことだし、お町、とかにすれば

いいんじゃないか？」
「お町……」
　その名を告げてやると、末知女殿を筆頭に皆がその名前を軽く呟いた。その上でまずはペールが頷き、
「お町……いいですね！　お町さんって呼ぶとなんだかしっくり来ますし、そう呼ばせてください！　――長い付き合いになりそうですしね……くふふ」
「お町、か……なら、お言葉に甘えて、そう名乗ることにしよう」
　どうやら末知女殿も新しい名であるお町を気に入ったようで、あっさりと頷いてみせる。
　それに続いて白兎らも、お町に向かってその名を呼びながら、
「むぅ……本人がそう言うのなら仕方ないですね。では、お町さん、私とお友達になりましょう。妖怪のお仲間がいるのは格好いいですし」
「……俺の時もそう言ってたが、ひょっとして毎回そう言ってんのか？」
「いえ、戯骸さん。白兎さんは最近、そういう、なんか格好いいものに嵌っているだけですので、毎回というわけでは……なんか色々とすいません」
「うきー！」
「謝る必要はねぇけどよ」
　白兎が相変わらず友達になろうとお町に声を掛けていたが、それを見ていた戯骸が疑問を口にして、イヴの謝罪を引き出してしまう。藤吉郎も一緒になって謝るポーズをしていたりするが、それを聞いていた白兎は、むっとして、
「ば、馬鹿にしているんですかイヴさん!?　私はただ、仲良くしたい相手に声を掛けているだけですよ！　優秀な冒険者は仲間を増やしていくものですからね！」
「いえ、馬鹿にしてるわけでは……くす」
「なんですかその意味深な笑みは！　イヴさんはもぉーっ！」
　珍しくやり返すことが出来たイヴがニヤリと笑みを浮かべると、白兎が軽く憤ったように声を荒げる。

そんな姿も可愛いなぁ、とレオンハルトが一瞬、現実逃避気味の感想を考えていると、一方のお町の方では、
「ここは、随分と賑やかな場所よの……」
「ふふん、そうでしょう！　とっても賑やかですのよ！」
「住んでる人も多いですからねー。……それと、お町さん？　せっかくですので、私のちょっとした教えを受けてみませんか？　レオンハルト様も喜ぶような感じの教えなんですけど」
「レオンハルトが喜ぶ教え……どういうものなのだ？」
「ええ、まあ、簡単ですよう。というわけでまず最初に教えておくのがですね。レオンハルト様は、お町さんみたいなお胸の大きな女性が――あ痛ッッッ!?」
とんでもなく余計なことを言おうとしていたので、ペールの尻に思い切り平手打ちをかますと、ペールは尻を押さえてその場から飛び跳ねた。
そのまま尻を擦りながらこちらを見て、
「ちょ、レオンハルト様！　こんな真っ昼間にしかも人目が多い中でスパンキングプレイするなんてどうしたんですか!?　そういうことなら後で……って、あ、滅茶苦茶痛い、これ……後から効いてきた……！　う、うくっ……プレイどころじゃないですよこれ……！」
「いいから黙ってろ。これ以上恥を晒すな」
「……？　主よ、喜ぶ教えとは……」
「気にしないでいい」
「？」
絶妙な力加減の平手で痴女を黙らせると、首を傾げて疑問符を頭に浮かべるお町を誤魔化す。首を傾げた際に胸元の危ない美爆乳がたゆんと揺れたが注視することはない。
だが実際、ペールもそうだが、そういった反応が多くて困るのも事実だ。
何しろ、このお町はかなり胸が大きい。自分が今まで見てきた数多くのモノの中でも最大の大きさだ。
それだけに周りからも目を引くし、周囲の者達も、通りすがる度に

こちらに意味深な笑みを浮かべてくる辺り、後でそのことを話題に出されることは確定しているし、先程白兎と共に白兎の母親である紅月のところに行ってちょっとした会話をしたのだが、白兎がいなくなった後でちょっと弄られてしまったので何とも言えない気分だ。
昔からそうなのだが、そういうつもりはないと言っても大多数の人からは信じて貰えないので定期的に憂鬱になる。身内はそこのところは分かってはいるのだが、夜のこともあるのでそのことを弄られやすいのだ。
だが自分は別に、大きさで対応を変えたり、それに目を奪われるようなことはないのだ。なので極めて普通に、レオンハルトはお町の言葉に対応する。
「……なら、またあのいなり寿司を食べたいのだが……」
「ああ、それは構わない。食堂に行ってメイドにでも言えば出してくれるだろ」
と、いなり寿司が食べたいというので食べる方法を教えておいてやる。生活についても基本はペールやらキャロルやらメイド長さんやらに任せておけばいいので、別の用事を済ませにいこうとその場を後にしようとすると、くいっと後ろから服を掴まれ、
「……どうした？　まだ用事があるのか？」
「……お主も一緒に来ないのか？」
そんなことを、お願いするような、自然な上目遣いで言われてしまい、レオンハルトは真顔になる。
なんというか、この調子だと今までの経験上、もはや時間の問題だという気がしてならないため、レオンハルトは頭を悩ませざるを得ないのだ。
いつもの事ではあるが、いつもの事だからといって適当に済ます訳にはいかない問題だし、そういう部分には真摯でいきたいのだ。
故に、食事に誘われたことにどうすべきかと悩んでいると、
「――あっ、レオンハルト！　こ、こんなところにいたのね」
と、廊下の影から、不意に女性が飛び出てきて近寄ってきた。
それはこの城に住む魔人姉妹の片割れ、姉の方であり、

「……サイゼルか。どうかしたのか？」
「べ、別に？　偶然見かけたから声を掛けただけだけど？」
じゃあ、こんなところにいたのね、という探してる風の台詞はなんだったのか、とレオンハルトが思いながらも、その指摘は憚られると無言でいる。しかしそのサイゼルは何やら強気な様子で、
「あ、あー、でもそうねー。折角だから、ちょっと……そ、外にでも行かない？　暇だし、さ。ちょっとご飯でも食べながら……こう……つ、付き合いなさいよ！」
と、今度は何やらわざとらしい演技でそう誘いを掛けてきた。
レオンハルトはその誘いに一瞬悩んだものの、予定を考え、それほど長い時間は取れないなと思い、
「……悪いが今は――」
「あっ、レオンハルトさん！」
しかし、断ろうとしたところで、今度は別の角から魔人姉妹のもう片方が現れて近寄ってきた。
妹のラ・ハウゼルが本を胸に抱えながら、
「レオンハルトさん……その……今日は一緒に本を読みませんか？　レオンハルトさんと語りたいことがいっぱいあって……あ、空いてる時間があれば……」
と、今度はおずおずと遠慮がちにハウゼルが読書に誘ってきた。
その態度はまた露骨で分かりやすいものではあるが、サイゼルの誘い方に比べればまだ受け入れやすいものだ。
とはいえ今直ぐには無理なので、レオンハルトは息を入れながら、
「……まあ、夜であれば構わないぞ」
「！　本当ですか！　あっ、あの、あのじゃあ……私、待ってますから……えへへ」
夜であれば、と頷いてやるとハウゼルが心底嬉しそうにはにかんで見せる。
だがやはりと言うべきか、ハウゼルが横から入ってきたことに対して、姉の方が反応した。
「ちょ、ちょっとハウゼル」

「！　な、なんですか姉さん？」
　ハウゼルもサイゼルの呼びかけに若干だが身を強張らせながら反応すると、サイゼルが何やら探るように、
「……ほ、本を読むんだったら、あたしも行っていいわよね？」
「っ……それは……ね、姉さんは読書嫌いだって言ってたじゃないですか。何で急に……」
「た、たまには読みたくなることだってあるでしょ。構わないわよね。図書室は誰でも使っていいはずだしさ」
「うっ……それはそうですけど……うぅ……でも……」
　ハウゼルがサイゼルに詰め寄られてこちらをチラチラと見てくる。
　そんな風に助け舟を期待されても困るんだが……と、レオンハルトが何とも言えない気分になっていると、また背後から、
「……よく分からぬが……お主は我と一緒に来てくれんのか……？」
「いや……少し待て……ちょっと考える……」
　お町がコートをくいくいと引っ張ってきたので、レオンハルトは頭の中を整理する。色々と予定が詰まっているのだが、
　……仕方ない。書類仕事は引き続き、分身にやらせておくか……。
　基本的に仕事は本体か分身のどちらかでフル稼働しているのだが、分身と本体の二人掛かりでやっても終わらなかったりするので、出来れば仕事をある程度終わらせ、休日を作るためにも自分自身が仕事に回りたかったのだ。
　しかし人付き合いなどの予定や、どうしても外せない用事――魔王の呼び出しや、今回のような突発的なやるべきこととなると、どうしても自分自身が行く必要があるので仕事から抜けざるを得ない。特に人付き合いで分身を遣わせるのは失礼過ぎる行動だとレオンハルトは認識しているので、仕事以外の人と会う用事には分身は使わないし、仕事であっても大事な相手には極力分身は使わない。使うのはどうでもいいことで突っかかってくるようなレイやレキシントン、後はメディウサ相手くらいだ。
　故にレオンハルトは今日の自分自身の予定だった仕事を分身に任せっきりになることを計算しながら、人と会う用事に対してもスケ

ジュールを確認しながら、考える。
……食事は大丈夫だし、夜も空きはあるから問題ないとして……外に出るのは……サイゼルの事だからまた修行を見たいとかそういうことだろう……夕方にするか。
と、レオンハルトは頭の中のスケジュールを調整すると、その通りに、
「……サイゼル。夕方なら時間が取れるからそれでいいか？」
「！　あ、そうなんだ……ふ、ふーん。そ、それなら別にいいけど？」
「それで、ハウゼルは先程言った様にまた夜にしよう」
「……は、はい。……では……その……出来れば、わ、私の部屋でどうですか？」
「……ああ、分かった。後で部屋に行く」
「あっ、はい！　では、そういうことで……！」
咄嗟の場所指定だが、レオンハルトはそれに問題ないと頷きを入れる。
部屋に呼び出されることに、何やら予感を感じてしまうが、それを気にしないようにして、最後に背後に振り返り、
「よし……ならお町。これから食事ついでに食堂に案内してやる。付いてこい」
「……そうか。それなら良かった……」
お町が静かだが、静かに微笑を浮かべた。
それを見て、レオンハルトはほっと息を吐くと、他の者達に向かって、
「キャロル、ペール。お前達は仕事に戻っていろ」
「了解ですわ！」
「畏まりましたー」
と、敢えてこの場では白兎らには声を掛けずに行く。
サイゼルとハウゼルが来た時点で、親子としての会話は謹んでおり、白兎やイヴなどの事情を知る者も主に対するように押し黙っていた。
だが白兎はこちらに向かって小声で、

「……行ってらっしゃいませ」
と、下級使徒としての何気ない挨拶を行ってくれた。
だがその響きは、レオンハルトを癒やすのに充分なもので、
……はぁ……やっぱり白兎を見ると癒やされるな……欲を言えば、昔のようにパパと言って欲しいものだが……。
忙しい中でもかなりの癒やしとなる白兎の可愛さを再確認する。
最近は微妙に反抗期が来ているような気がするが、まだまだ可愛いものだ。
レオンハルトが知る娘の反抗期というものは、例えば、パパと一緒に風呂に入らないとか、下着を一緒に洗濯しないで、とか、
……うっ……想像したら吐き気が……。
もし嫌われたらショック過ぎて鬱になりそうだ、と思いながらも、レオンハルトはなんとか持ち直してお町を食堂まで連れて行く。
きつねうどんを与えたらまた凄い喜んでいたので良かったな、と素直にそう思い、レオンハルトは次のやるべきことを確認して、その通りに動き始めた。

――その頃。中庭では、
「はぁ～～～……ライゼン……ちょっと戦ってくれない……？」
「……二週間後なら構わぬぞ」
「ぐっ、ライゼンまでそんな決まり守るなんて……あたしはどうすれば……！」
ハンティが中庭のテーブルに顔を突っ伏して項垂れていた。
周囲には、いつも基本的には中庭に定住しているライゼンと、ハンティと同じ様にパラソル付きの席に座ってお茶を飲んでいる、彼女の友人のインデックスやガウガウがおり、
「たった二週間でしょう？　我慢なさい。そんなだからカラーゴリラとか呼ばれるのよ？」
「言い出したのはあんたでしょうが……！」
「やーい、やーい！　ざまぁハンティ！　これも日頃から私に魔法を

撃ってくるからバチが当たったんだね！　いやー！　この二週間は快適にダラダラ過ごせそうで良いね～。ふふふーん！　たららら～ん！」
「ぐっ……ウザい……殴りたい……！」
　友人二人の言に拳を握りながら悔しそうに耐えるハンティだったが、ガウガウの発言に対して、インデックスはカップをテーブルに置きながら、
「あら？　でも、戦闘は出来ないけど、罰は与えたら駄目とは言われてないから気をつけた方がいいんじゃない？」
「へっ？　い、いやいやそれは……！」
　ガウガウが首をぶんぶんと振りながらその言葉を必死に否定する。しかしハンティはニヤリと笑みを浮かべており、
「あー……なるほどねー……それなら大丈夫ってことは――」
「お、おいやめろ馬鹿！　何余計なこと言ってくれてんだよ!?　あ、はーい！　私謝りまーす！　ごめんなさーい！　だからやめてくださーい！」
　と、全力で掌返しの謝罪を行うガウガウに、しかしハンティは笑みを浮かべたまま立ち上がり、
「ガウガウに罰を与える名目でなら、暴れてもいいということ……だよね……」
「ひぃっ!?　た、助けてライゼン！　やべー奴がやべー事言いながらやべー事しようとしてる!!」
　ガウガウが全力でライゼンの足元まで移動して擦り寄る。しかしライゼンは困ったような様子で、
「……すまんがそれはもう、俺にはどうすることも出来なくてなぁ……ドラゴン的にはよくあることなので諦めてくれ」
「私ドラゴンじゃないんですけどっ!?　滅茶苦茶人間なんですけどっ!?」
「あはは、大丈夫大丈夫。ちょっとおしおきするだけだからさ」
「じゃあなんでいい笑顔で剣持ち出してるのさ!?　ちょっとー!?　レオンハルトさーん！　いや、レオンハルト様ー！　ここに命令違反し

てるあなたの使徒がいますよー！　誰でもいいから助けてくださーい!!」
「フハハハハハハッ！　料理長である私が来たッ!!」
「城内一のエロメイドである私も来ました!!」
「すっげーやべーよこの城！　助けを呼んだら今度はやべー一族のやべー男とやべー女が来たよ！　もうお前らでいいからなんとかしてくれ!!」
「……静かにお茶を飲むって話だったけど、これはこれで面白いからいいわね」
「良くないよっ!?」
　中庭では、ハンティの二週間戦闘禁止の罰を発端にちょっとした騒ぎが起きていたが、人知れずに直ぐに収束した。

暗黒時代の冒険

――ＧＬ５３Ｘ年。
灰色の空の下では、生い茂る草木の間を遠慮なく堂々と闊歩し、行き交う者達がいた。
「おいおい、そろそろ代わってくれよ」
「え？　あー……いや、悪い。もうこれ、ほぼ死んでるわ」
「えー！　マジかよ、もう一回くらいヤッときたかったのによぉ……」
場所は森の中の窪地。小さな民家が幾つか建てられた、野良の人間の巣だ。
そこに漂うのは死臭と性臭。地面に流れるのは人の血液と魔物の精液で、血に濡れた草がその重さで僅かにしなっている残酷かつ醜穢な風景。
そんな中にいながら、魔物兵達は軽い様子で言葉を交わし合っている。この場に流れる空気は血生臭くはあっても、平和な日常風景でしかない。
ただ、人間達にとっては虐げられることが当たり前の暗黒時代であるというだけだ。魔物の黄金時代とはそれを意味している。
そこに住んでいた数十名という小さな人間の隠れ里は、毎日の様に魔物の恐怖に怯え息を潜めながら、食料も満足に取れずに貧しい生活を送っていたが、そこを運悪く〝人狩り〟を行っていた魔物兵達に見つかってしまったのだ。
夜に明かりを付けることも出来ずに耐え忍んでいた日常も、ほんの少しの偶然で全てが無に還る。野良で生きる人間達にとっては、痛みと苦しみに喘ぐただの地獄でしかなかった。
「いぎ、いう、いやぁあああああああっ!!　あああああああああああっ!!　たず、たすけで――」
「っ、ああもう、うっせぇなぁ。おらよっと」
「ひぐぇっ――」
――だが、魔物達にとってはそんなことは関係がない。
魔物兵達よりも一回り大きい人形のスーツを着た魔物隊長は、片足

を掴んで引きずるように運んでいたとある人間の叫び声を鬱陶しく感じて近くにあった岩に向かって手を振り上げ、人間を叩きつけた。
　人間の数倍以上の膂力のある魔物隊長にとって、人間を掴んで投げる、叩きつけるなどは難しいことではないし、魔物の遊び道具、家畜、ペットの様な下等種族である人間を痛めつけるにも良心の呵責を感じることもない。
　あっさりと頭から叩きつけられた人間は、短い声を上げて、頭が破裂したかのような赤い華を咲かせ、見るも無残な死体になるが、それを見て魔物隊長はぎょっと表情を歪めて、それを投げ捨てた。
「うわっ、汚ねっ!?」
「あ、隊長。どうしたんですか？」
「人間の血が飛び散って汚れちまった。あー、くそっ、汚ねぇなぁ」
「あー……そういえば隊長、潔癖気味でしたね。人狩りは好きなのに……」
　人間の血が体に付着してしまい、悪態を吐きながら自分の体を布で拭き始める魔物隊長に、そこそこ気心の知れた魔物兵らが呆れ気味に呟いた。
　だが魔物隊長は取り出した水筒の水で手を流しながら、
「しょうがないだろ。人間虐めんのは好きだけど、牧場の人間はあんまり綺麗じゃないし、活きも悪いし……例えるならあれだ。美味いもん食うのは好きだけど、料理すんのは面倒だし出来ないだろ？　そんな感じだ」
「分かるような分かんないような……というか、一応は隠れ里のリーダー捕まえたんじゃなかったんですか？　意味があるかどうかはともかく、ちょっと偉そうな奴捕まえたら昇進出来るかもって行ってたじゃないですか」
「……あ、しまったな……うるさかったんで衝動的にやっちまった……」
　岩に叩きつけて地面に投げ捨てた人間を見て魔物隊長がポツリと呟く。
　魔物兵が、〝あー……〟と何とも言えない微妙な表情で見守ってい

ると、魔物隊長もさりとて機嫌を害することもなく、溜息を漏らし、
「はぁ……全く、やっぱり昇進はキツイなぁ……こんな平和な時代だと手柄を立てて昇進みたいな、大昔みたいなことは出来ないしよ」
「そういえば、昔は人間の国があって戦争とか滅茶苦茶あったんでしたっけ？　自分も話半分でしか聞いたことないんですけど……」
「えっ？　そうなの？　人間の国なんか直ぐに滅びて終わりじゃね？」
「あ、俺も将軍閣下から聞いたことあるぜ！　なんでも、大昔だと戦争だらけで昇進し放題だったって噂だ！」
その話題を聞いた何名かの魔物兵達が、半信半疑の様子でそんな噂話を口にする。
今を生きる魔物達にとって、こんな弱い人間達が国を作って繁栄するなんてことはホラ吹き話だと思われてもしょうがないほど素っ頓狂な話だ。
だがそれは事実。もっとも、事実と知っている魔軍の高官である魔物将軍達でさえ、その時代を実際に見たり、体験したことがあるわけではないのでやはり首を傾げる思いだ。
長い時を生きる魔人や使徒の方々の話が時折流れてくるため、そのことを知っている者もいるのだが、聞けば聞くほど馬鹿馬鹿しい面白い話だと思ってしまう。
この魔物隊長もそれに当て嵌まる者だ。口端を軽く歪めながら言う。
「本当だって話だけどな。それを聞くと大昔が羨ましくなってくるぜ。こんな弱い人間を殺すだけで昇進するんだからよ」
「でも、逆に弱すぎて誰でも殺せるんで競争率滅茶苦茶高そうですね！」
「ははは っ！　それもそうだな！」
魔物達の揃った笑い声が森の中で木霊する。
本来は危険だと言われる森の中も、魔物達にとっては危険でも何でもない普通の森に過ぎない。動物だろうが野良の魔物だろうが、自分たちに敵う者がいないのだから何にも憚ることはないのだ。

世界のどこを見ても大勢の魔物が跋扈する世の中では、魔物達は大いに笑いながら幸福な生活を長閑に送ることが出来るのだ。
――だからこそ、彼らは気づかない。
闇に紛れ、息を潜め、苦しさに堪え忍びながらも、反撃の時を伺いながら、あらゆる意味で死んでいない者達がいることに。
故にその初動に気づくのに、彼らは遅れた。
「――ぎゃあああああああっ!?」
「!? なんだ!?」
森の中で最初に気づいた違和感は、誰かの断末魔だった。
その場ではないが、近い。近場からの断末魔に魔物達はそこで初めて僅かに緊張感を走らせる。
「今の声は――」
「た、隊長！ こっちに、兵の死体がありますっ！」
「何だと!?」
魔物隊長が周囲を魔物兵と一緒に見渡しながらそれを探していると、周囲の警戒に当たっていたであろう魔物兵が異変の発生源を見つけ出す。
急いで魔物兵らと一緒に発見者の魔物兵に案内されると、やはりそこには何かに斬りつけられたような魔物兵の死体があった。
「兵が殺された……？ まさか、誰か生き残りでもいたのか……？」
「ど、どうしましょう？」
魔物隊長が指示待ちをする魔物兵らを前にしながら考え込む。
部下を一体死なせてしまったのは、痛恨ではあるが、それでも致命のことではない。
おそらくはこの隠れ里に住んでいた人間が刃物か何かで不意打ちでもしたのだろう。
周囲に姿はないが、逃げてしまったのか。それも含めて、魔物隊長は不謹慎ながらも面白いと思う。
こうやって生きた人間を狩ることが人狩りの醍醐味でもあるのだ。
牧場の人間を虐めるだけでは得られない興奮とスリル。これが愉しくてしょうがないからこそ、人狩りという娯楽は多くの魔物に嗜ま

れ、長年愛され続けているのだ。
最近は魔軍の仕事としての人狩りを行うだけでは物足りないと非番の時に人を狩りに行く者も増えている。
もっとも、小規模でも隠れ里を見つけられることは稀なので、今日の自分たちは運が良かった。
しかもまだ人間はこちらを愉しませてくれるというのだから、本当に都合のいい玩具だと思う。
故に今を生きる多くの魔物達は、人間を弱くて愚かな生き物だと下に見ながらも、嫌っている者は意外にも少なかった。好んでいる理由が理由なだけに、人間からすれば迷惑極まりないだろうが、やはりそのようなことを慮る魔物ではない。
だから彼らが人間を見つけた時にする行動は一つだ。
「――その魔物を殺したのは僕だ！」
「っ！」
不意に林の奥の一本道に、人間が一人、声と共に姿を現した。
赤い短髪の髪を持つ、涼やかな顔立ちをしながらも魔物の方を睨む一人の青年だ。
しかしその姿は、それなりに使い込まれた様子の盾や鎧を装備し、その腰に剣を携えているもの。
つまりは人間の中でも数少ない、戦える人間だ。
故に、魔物隊長はこの時代に生きる多くの魔物達と同じことをやはり選択した。
「居たぞ！　追えっ！　追ってズタズタに引き裂いてやれ！」
「おおっ！」
「ひゃははっ！　まだ生き残りがいたか！」
「魔物に手を出したこと、後悔させてやるぜー！」
「っ……！」
瞬間、逃げ出していった男を目掛け、その場にいる全ての魔物兵達が魔物隊長の号令を受けて本能を剥き出しにする。
人間相手に自分達の欲望を我慢する必要はない。男は拷問の末に殺し、女は陵辱の上に殺す。壊れるまで使い切る。老人や子供であっ

ても変わらない。
等しく人間相手へ、自分達の欲望を発散するために、魔物兵達は一つの群となって森の中を走り出す。
しかもたった一人だ。魔物兵達も武器を持った相手にも微塵も怯えることもなく駆けていく。
だが魔物隊長だけは頭を回していた。逃げていった男を見て、
……一人であの装備……もしや冒険者か？
冒険者。それは人間達の間に存在する数少ない魔物に仇なす存在だ。
何でもダンジョンを潜って物資を集めたり、各地を駆け巡って魔物を殺しまわったりしているそうで、魔物討伐隊と呼ばれる比較的大規模な群れとは違って少数でいるのが基本らしいが、
……はっ、馬鹿な奴め。よりよって魔軍に所属してる俺達を標的にするとはな。
魔物隊長は冒険者らしき男に心の中で失笑を零す。
確かに、人間の中でもそれなりに強い奴がいることは魔物隊長も理解している。
だがそれでも、たった数人程度では大型の魔物に力負けするような貧弱な能力しか持ちえないし、それを打ち倒せるような更に強い人間であっても、魔軍を相手にするのは自殺行為といっていい。
それは魔軍の組織形態。集団行動をするためである。
これは人間達の間でも常識だが、魔軍の兵――魔物隊長や魔物将軍に率いられる魔物というのは、一部隊で二百体。一個軍で二万体だというのが魔軍の編成単位である。
故に人間の冒険者や大規模な魔物討伐隊というのは、例え魔物を殺して回ってはいても、大規模な部隊への襲撃などは絶対に避けるものだ。
野良の魔物の群れであれば、まだ纏まった行動を取らない可能性もあるものの、魔軍相手では魔物将軍と魔物隊長の号令のもと、集団で襲いかかってくることになる。
それに加えて知恵や連携も取られる可能性も高く、増援などを呼ば

れてしまっては人間としてはジリ貧でしかないため、かなり大きめの魔物討伐隊であっても、相手にするのは魔物隊長が率いているような精々数部隊程度であり、魔物将軍が率いる二万を相手にすることはあり得ない。
冒険者であってもそれは同じで、魔物隊長率いる二百の軍勢を相手にするのはかなり厳しいものだ。
そんな人間の事情を知らずとも、魔軍の士官であればこの程度の戦力差の可否は判断出来る。
どう考えても有利なのはこちら側。負ける要素のないものだ。
だからこその〝人狩り〟だ。多少の危険性はあろうとも、魔物達はいつだって最後には勝ってしまう狩る側なのだ。
……死に際を見ながら祝杯を上げてやる……！
部下を殺してくれたお礼に皮や肉を剥ぎ、中身を取り出して綺麗に洗ってから、その頭蓋骨で酒でも飲んでやろうかと魔物隊長は考える。潔癖でも、人が壊れるところを見るのは愉しいものなのだと、魔物隊長は部隊と共に人間を追いかけていくが、
「足が速いな……！　それに、道も狭くて――」
森の中であるため、道が狭いのはまだ分かっていたことだったが、男の足が思ったより速いのはちょっとした誤算だ。
しかし、
「おらっ、喰らえっ、炎の矢！」
「っ……！」
「ははは、当たったぜ！　おら、止まりやがれ！」
部下の魔素漢が放った魔法が男に命中する。それでも足は止まらないが、傷を負ったことは確かだ。
このままいけば直ぐに追い詰めることが出来る。人間一人ではどう足掻いてもジリ貧なのだ。
それを証明してやろうと、魔物隊長は人間を追い続け、
「――ん、ここは……？」
と、そこで部隊は不意に開けた場所に出た。
森の中にぽっかりと空いた穴のような場所。高い木がありながら

も木々の隙間から空が見える広場のような窪地に、部隊は突入した。
魔物隊長は一瞬、違和感を覚えながらも、血気盛んな魔物兵らが突入していくのに合わせて広場に入っていった。
後方にいたのもあって気づくのに遅れたが、これは念の為の処置だ。
魔軍の唯一の弱点は、その場の指揮官がやられることで、総崩れとなること。
魔物隊長以上の指揮官がやられてしまうと、指揮下にいる魔物兵達は途端に足並みを揃えることが出来ずに離散してしまうし、戦意を失ってしまうこともある。
これは部隊の長が、その部隊で一番強いという組織形態――魔物社会という実力主義に基づくものだ。その昔、魔人がやられた際には何十万という魔物兵が一気に離散したというのだからその効果は然るべしもの。
故に魔物隊長は人狩りとはいえ正面に立つことはせずに後方に位置していた。
それが幸か不幸か――魔物隊長は相手が起こした行動を目にした。最初に目にしたのは空中から飛来してきたものだ。
「なんだ!?　水か!?」
「でもなんか臭わねぇか!?」
「いや、これは――」
突如として宙から降ってきた液体に、魔物兵達が足を止めながらざわつく。何だこれは、と。
だが最初に気づいたのは魔物隊長だった。少し後方にいたため、その液体を頭から被ることはなかったのだが、それに気づき、同時に前方にいる男が何かを投げ込んできたことで、魔物隊長はそこで鼓動を跳ね上げる。
背筋に寒いものが走った瞬間、魔物兵は声を張り上げ、
「っ!?　総員退避!!　これは油だ――」
「――もう遅い」
と、瞬間。投げ込まれたものが轟音を響かせると同時に、それを着

火点として炎が燃え広がった。

「今だ……！」
「！」
「ふっ！」
「は、はいっ！」
　広場で幾人もの魔物兵に炎が燃え移った瞬間、男の声を合図に何名かが広場に姿を表した。
「くそっ、嵌められたか……!?」
　そこで初めて、魔物隊長は自分達が誘い込まれたことを理解する。
　不幸中の幸いにも、後方にいたことで炎の被害からは辛うじて逃れることが出来たのだが、前方にいれば先に気づくことが出来たのかと思うと歯噛みする気分だ。
「熱いいいいっ!?」
「ぐあああっ!?　ま、前が、前が見えねぇよぉーーーっ!?」
「し、死ぬっ!?　死ぬぅ……！　水を……っ！」
　前方では半数近い魔物兵達が炎にやられて、のたうち回っている。即死した者は殆どいない様だが、この分だと前方の連中は諦めるしかないかもしれない。
　それよりも後方の人員で対応すべく、魔物隊長は号令を発した。
「くっ、動ける者は戦闘態勢を取れ!!　人間が来るぞ！」
「は、はいっ！」
　周囲の魔物兵達が得物を片手に戦う姿勢を見せる。
　だがそこで、魔物隊長はようやく気づいた。
　……あれ？　思ったより数が少ない……か？
　少なくとも百名程はまだ無事な筈だが、それよりも数十人規模で少ないように感じる。
　だが、それを確認している暇はなかった。何故なら、
「黒色破壊光線！」
「ぐあああっ!?」

「魔法!?　しかもあんな――」
広場に現れた何名かの人間。それらが襲いかかってきたからだ。
魔法を放ってきたのは眼鏡を掛けた、黒い長い髪を持つ美形の男であり、魔物隊長も見たことないような最上級の魔法を魔物兵に向かって撃ち込んでくる。
だがそれで攻め手は止まらない。次に突っ込んできたのは、先程の男を含めた二人の人間だ。
「く、くそっ！　死にやがれ！」
「ふっ！」
「っ、止められ――ぎゃああ!?」
一人は短髪の赤い髪の男。
彼はその左手に身につけた盾で綺麗に魔物兵の攻撃を弾くと、そのまま右手に持った剣を魔物に向かって突き刺す。
横から新しい魔物がやって来るも、今度は左手を振るって盾でそのまま殴り倒し、とどめの剣を突き刺していく。
男は魔物兵の前衛の攻撃をたった一人で受け止めていた。
だがしかし、その全てを受け切ることは出来ないし、回復や支援がなければ立ちいかないだろう。
「――バリア！」
故に次に活躍したのは、神官姿の少女だった。
癖っ毛の髪を持つ童顔に丸メガネを掛けた小柄な少女は、前衛に戦う男や他のパーティに支援の神魔法――バリアやヒーリングを掛けていく。
そこで戦っている者達、彼らのパーティはたった五人ではあるが、彼女はそれらの支援を一人で回していた。
だが、その中でも一番弱そうに映り、なおかつ回復を掛けているともなれば魔物兵らの中にもそれに気づく者達がいる。
「ヒーリング！　って、きゃあっ!?」
「この人間共……！　ぶっ殺して――」
と、魔物兵が治癒を掛ける少女に向かって襲いかかろうとした。
だが、その直前で魔物兵は言葉を不意に差し止め、力を無くしてそ

の場に倒れてしまう。
　それは傍目から見れば摩訶不思議に見えなくもない光景だったが、それは確かに人の力で為されたことであった。
「まったく、ちんちくりんはいつも危なっかしいわい……」
「っ、うるさいカオス！　早く行ってよ！」
「あ～、はいはい。言われなくとも行きますよっと」
　そう言って、少女をからかったのは微妙にジジ臭い言葉を使うおっさんだった。
　その手に短剣を構え、それなりに鍛えた体格を持ちながらもその動きは身軽で軽やかなものであり、緊張感のない言葉とは裏腹にその攻撃はパーティの中で最も容赦がない。
　実は先程から気配を殺しながら偵察を行い、魔物兵らを一体ずつ音を立てず確実に殺していたりと、卓越した技術を見せる盗賊である彼は、常に魔物兵達の周囲や間を行き交いながら撹乱し、周囲をサポートするように魔物兵らの急所を正確に狙い、その短刀で突き刺し、切り裂き、殺して回っていた。
　そして徐々に数が減っていく中で、後方の魔物隊長はようやく自分達の状況に気がついた。
「こんな、こんなことが……！」
　魔物隊長は信じられないという思いで言葉を呟く。
　自分達は誘いこまれて罠に掛けられただけではなく――狩られているのだと。
　既に狩る側から狩られる側に変わってしまっていることを理解し、魔物隊長は動揺した。
　だがそこに、
「――貴方が魔物隊長ですね」
「っ!?　くっ……！」
　今度は着物を着た黒髪の美女が現れた。
　それだけなら魔物隊長もただの鴨だと喜ぶのみだが、この状況、そして女の手に血で濡れた刀があることから、とても喜ぶどころか困窮した声を漏らすことしか出来ない。

そして美女は刀をゆっくりと魔物隊長に向けるように構え、
「人を襲う悪しき魔物……その命刈り取らせていただきます」
「ぐぅ……こ、この人間風情がぁ!!」
魔物隊長は大剣を振りかぶって美女の振るう一刀をなんとか防ぐことが出来た。
だが魔物隊長はその一合だけで気づいてしまう。押されてしまったその剣撃だけで、
……こ、こいつ……魔物隊長の俺より強い……!?
魔物隊長というのは、決して弱くはない種族だ。
魔物の中でもエリートと言っていい強さを持つのが魔物隊長であり、知力や統率力、技能の多さを考慮しない単体の強さだけなら魔物将軍にもやや勝ることが出来る。
そんな己に、人間が力で勝ってきた。
あり得ないことだ。ただの魔物兵どころか、最下級の魔物にすら負けるような人間という種だというのに、魔物隊長に勝るというのは。
しかも、そこで魔物隊長は更に気づく。
眼の前の女だけではなく周囲で魔物兵らを屠っている人間達も、もしや、と。
よく見れば、魔物兵達が相手になっていない。奇襲を掛けられ、数の利を充分に活かせていない状況とはいえ、決して弱くはないはずの魔物兵が一方的に殺されていく。
対する人間達は無傷――というわけではないが、それでも傷は軽い。
何やら土や葉で汚れていながらも、その眼の輝きは、強さは、普通の人間とは似て非なるものであった。
「――はぁっ!」
「――かはっ……!」
故に魔物隊長は、美女の一刀に体を掻っ捌かれて倒れながらもようやく察した。
――ああ、なるほど。これがあの方が言っていた、人間の英雄の姿なのだと。

一度だけ視察を兼ねてやって来た魔人の御方。魔物隊長にとっては雲の上に位置する尊い御方に、ちょっとした食事の席で魔物将軍とともに列席し、魔物隊長は話を聞いたのだ。

――脆弱だと言われる人間の間にも、油断ならない者達がいる、と。

それは単純な強さも然ることながら、どんなことをしようとも心の折れない強い意志の持ち主であると。

個の強さや数の利に胡座をかいていると痛い目を見る可能性があるのだと。

耳にした時はただの冗談だと思っていたが、目の当たりにしてしまえば自分の失敗を思い知るしかない。

自分や多くの魔物達の屍の上に、血や泥に塗れ、見えない希望を追い、息を殺して戦い続ける彼ら五人こそが――今を生きる人間の英雄だ。

少なくとも魔物隊長はその予感を感じ、主である魔人に謝罪をしながら、闇の中に溶けていった。

その目的は

森の中の戦闘が終わると、張り詰めた空気が僅かに弛緩した。
生き残ったのは人間の冒険者五人。彼らは戦闘が終わったことを視界で確認しながらも、まだ生き残りはいないか、周囲の気配などを慎重に探りながら、その注意を向ける必要がほぼないことを確認すると、ようやくその声を発した。
「ふぅ……どうやら、上手くいったようだね。皆、無事かい？」
と、最初に声を上げたのは五人のリーダーである、赤い短髪の青年――戦士ブリティシュ。
前衛、ガード役を勤める騎士であり、戦闘では囮になり魔物の攻撃を受け止めながらも攻撃にも参加する卓越した剣の腕と盾捌きを備える勇敢な青年である。
彼は最も危険な役目を請け負い、一番傷つく可能性が高い場所で戦っておきながら、最初に仲間の傷をまずは確認する。それに最初に答えたのは、戦闘を終えて眼鏡を指で押し上げた学者の様な格好をした美男子だ。
「君が攻撃を引きつけてくれてるのだから、君が無事なら私達も無事だろう」
「……そうか。それなら良かったよ」
ブリティシュに無事であることを告げた彼は――魔法使いホ・ラガ。
魔法だけでなくあらゆる学問、知識にも造詣が深い智者であり、パーティの頭脳でもある優れた魔法使いだ。
だがその知性に溢れた瞳はブリティシュを見る際には僅かに意味深な光を見せる。彼は筋金入りの男色家であり、一般的に美形とされる男性は全て彼の性的趣向の対象範囲であり、ある意味で魔物よりも恐ろしい趣味を持っていた。
しかしブリティシュはその視線を特に気にすることもなく、無事であったことを喜び息をつく。それを見て、続いて声を発したのは周囲の索敵を行いながらも、物資を探している中年の男で、

「まあ、そこのちんちくは危なかったけどな」
「……確かにそうかもだけど……またちんちくって、おじさんの癖に……」
「おじさんちゃうわい。まだ３０代前半だし。あっちの方もまだまだビンビンのギンギンだしの」
と、気の抜けるようなやり取りを行う中年の男は――盗賊カオス。〝シーフ・カオス〟の通り名で知られる凄腕の盗賊であり、いい加減に見えても、偵察、索敵、情報収集、罠発見、鍵開けなどの冒険者に於いて必ず必要とされるレンジャー系の仕事を一人で行うシーフ職のスペシャリストである。
ただ、妙におっさん臭かったり、いびきがうるさかったり、娼婦遊びに興じていたり、下品でスケベだったりと、色々と残念なのがたまにキズだが、その仕事振りは信頼されている。
しかし神官姿の少女にとっては色々と悩ましいものの様で、カオスに半目を向けると、
「とんでもない下ネタはやめてよね。ちょっとはブリティシュを見習ったらどう？」
「……ふーん。せっかく助けてやったのに連れないの～」
「まったくもう……」
つまらなそうに口を尖らせるカオスに対して言動を注意したのは――神官カフェ・アートフル。
童顔で小柄、見た目は子供にしか見えない彼女だが、こちらも神官としての才能に溢れる才女であり、回復支援を中心とした神魔法の達人だ。
その容姿の子供っぽさをコンプレックスにしていたりする彼女だが、彼女の神魔法に仲間達は誰もが助けられてきているし、それだけではなく、彼女は食事などの細かい部分に対しても気配り上手であり、そんな小さな部分でも知らず周りの人間を助けるような人物だ。
容姿をからかってくるカオスとはよく軽い言い争い染みたやりとりをしているが、カフェはさり気なくカオスが自分を守ってくれたことにも気づいており、その部分では感謝しているのだが、一言多かっ

たりする彼の言動に何も言えずに終わることも多い。
　今も軽口で言ったカオスの言葉に呆れ気味にカフェが言葉を返し、それを別の者が反応したことでその話は終わってしまうことになる。その者とは、
「……すみません、カフェ。私がもうちょっと早く魔物隊長を倒していれば良かったのですが……」
「えっ、いや、日光さんが謝る必要なんて……」
「いえ、やはり私は未熟ですね……今よりももっと腕を高めないといけません」
　と、刀を鞘に収めながら自分に言い聞かせるように告げるのは――侍日光。
　ＪＡＰＡＮ出身の剣士、侍であり、達人級の剣の腕前と武士としての心を兼ね備えた麗人である。
　いかなる時も冷静で、完璧超人に見える日光だが、これでもパーティ内随一のお人好しであり、天然で騙されやすい一面があるため、度々失敗事件を起こしていたりする。
　しかしそれでもその卓越した剣技と、真面目で折れない性格は前衛としてパーティの信頼を預けるに充分なものだ。
　今も仲間がほんの僅か危険に陥ったことで、自分に対する厳しい言葉を呟く。しかし、泥や血に塗れ、罪のない人々がやられてしまったことを憂いて表情を歪めていても、その横顔は同性でも見惚れるほどに美しい。
　そんな日光の姿を見て、カフェはどうにもならない罪の感情を抱くのだが、それに正確に気づけた者はこの場にはいなかった。
　故にパーティのリーダーでもあるブリティシュは、日光の呟きに対しても答えるように口を開いた。
「そうだな……今はとにかく、力を高めながら各地を回っていくしかない。魔人と魔王を倒し……人々を救うためにも」
「……ええ、そうですね」
「……ふん、ま、上手くいけばいいけどな」
　ブリティシュの言葉、このパーティが集まった目的ともいえる言葉

に、日光とカオスがほんの僅かに雰囲気を変える。
彼らの目的。それこそが、魔人と、それを従える魔王を討伐することだ。
理由は様々だが、彼らに共通するのはその目的であり、そのためにバラバラに生きていた彼らはパーティを組むに至ったのだ。
ブリティシュが、人々を魔物の脅威から救うために仲間を探し、有名な魔法使いであるホ・ラガを訪ね、ホ・ラガはブリティシュに惹かれてその助力を承諾した。
カフェ・アートフルも、仲間を探していたブリティシュに誘われて、彼への憧れからそれを受け入れてパーティに参加した。
そして日光は親兄弟、故郷の人々を魔人に殺され、その復讐のために自らパーティに志願した。
カオスは仲間を探していたブリティシュに誘われ、彼ほどの男が言うならば、と軽い調子でパーティに参加したが、心の奥底には、恋人を眼の前で魔人に殺されたため、日光と同じ様に復讐心を強く秘めていた。
そうやって五人からなる冒険者パーティは結成され、それから各地を冒険し始めたのだ。
魔人を倒すために、力を蓄えながら、人を救ったり、伝説級の武器を探し求めたりと活動し、メキメキと腕を上げて、既に人知れず、世界でも最強の冒険者チームとなっているのだ。
今日の戦闘もその一環。偶然にも魔軍の痕跡を見つけたため、それを追跡して討ち倒すことを計画した。
数がそれなりに多かったため、準備に手間取ったり、偵察を行うカオスに負担を掛けたりもしたが、なんとかこうやって彼らは魔物の部隊を片付けることが出来た。
人を救えなかったことに心を締め付けられながらも、彼らは今日も勝利し、そしてこれでは駄目だと身を引き締める想いになる。
魔人を倒そうと思うのなら、この程度の魔物の軍勢などは正面から相対しても、無傷で切り抜けるほどの実力をつけなければならない。
彼らは倒すことだけなら可能だろうが、無傷とまでは中々いかない

ものだ。数が多いだけに不安要素も多いし、少数の冒険者ということもあって万全を期すのが基本でもある。
　しかしこれを、正面から相対しても問題ないくらいの強さ、あるいは方法を持たなければならない。
　それが出来て初めて魔人なのだと、彼らは魔人の知識をある程度は持っているホ・ラガの進言に従い、強さと方法を求めていた。
　道はまだまだ険しいし、そもそも毎日が決死の連続。生き残ることさえ難しい時代だ。
　彼らほどのパーティでも、僅かな油断で死に繋がりかねないのが今の世界。
　だからこそ、彼らはこんな戦闘に勝った後の状況でも直ぐに気を引き締めなければならない。
　野良の魔物がやって来るとも限らないのだと、彼らはそこから移動しようとし、
「――それじゃあ、お茶にでもする？」
「ずこーっ！」
　と、カオスがカフェの呑気な言葉にズッコケた。
　日光も軽く転けそうになりながらもなんとか持ち直す。しかしホ・ラガなどは頷き、
「ふむ、それはいい。私も少し疲れていたところだ。早速入れてくれるかね？」
「あっ、うん。じゃあ――」
「って、いやいやいやいや。え、ここで？　せめてもうちょっと影になる場所だろ、普通。というか空気的にお茶の雰囲気でも無かっただろうに」
　カオスが盗賊として気になる部分なのか、ツッコミを口にする。しかしカフェは口を尖らせ、
「ぶー、冗談だってば。さすがにここだと、ちょっと血生臭くてそれどころじゃないもんね？」
「いや、そもそも直ぐにお茶を飲もうという神経が良く分からん。おい、ブリティシュ。お前からも何か言えよ」

カオスがパーティのリーダーであるブリティシュにも話を振る。リーダーであるブリティシュであればちょっとは何かを言ってくれるのではないかと、
「ははは……まあ、休憩は必要だからね。ゆっくりは出来ないけど、少しくらいならいいんじゃないかな」
「……まあ、周囲を警戒していれば大丈夫でしょう。少し移動しましょうか」
「ブリティシュだけじゃなくて日光まで……あ、いやもういい。儂が場所探す。面倒になってきた」
と、どこかで吹っ切れたのかカオスが適当に周囲を散策し始める。ここで問答するよりもさっさと行動した方がマシだと考えたためだ。
それに自分も疲れていることは確かであるため、少し休みたいといえば休みたかったのだ。魔物との戦いの直後で気を張っていたため、そういう気分にはなっていなかったが、カフェが頻りにお茶休憩を取ると言うし、周りもそれに乗っかったため、カオスもそういう気分にならざるを得なかった。
故に少しして、お茶を飲めそうな岩場を見つけると、早速カフェは持参しているカップや器具などを用意してお茶を作り始めた。
大体はホ・ラガの魔法で代用出来るのだが、カフェはカフェなりのこだわりがあるらしく、自分で選んだ器具を大切にいつも持ち歩いていた。
「――はい。お茶入ったよー」
「ん、ありがとうカフェ」
「ありがとうございます」
「ったく……なんか休憩取るために余計疲れた気がする……」
やがてお茶を淹れ終わり、カフェが持参のカップにそれを入れてお茶菓子と一緒に皆に配る。お茶菓子といっても保存食であり、この時代でも比較的簡単に取れる食材で作った微妙な代物だが、それでも野で生きる人間にとってはご馳走と言っても過言ではない。この程度の食事も満足に採れない人々だっているのだ。
故にお茶菓子に文句を言うことはないし、カフェのお茶は特別上等

な茶葉を使っているわけではないはずなのに、不思議とホッとしてしまうような美味しさがある。
　しかしカオスはボソリと余計な一言を口にしてしまう。するとカフェがしたり顔でカオスを見つめ、
「んー？　じゃあカオスはいらない？　なら別の人にあげよっか」
「ほう、それはいい。ならカオスの分は私が貰うよ」
「おいこら、そこのちんちくりんとホモ！　いらないなんて一言も言っとらんだろーが！」
「ちんちくりんじゃないですー」
「ふむ、その呼び方は認めざるを得ないが、カオスに言われるのは心外だな。君の容姿は私的にも客観的にも中の下か中の中という普通の中年男性なわけだし……ブリティシュに言われるのなら私も唆るのだが……」
「相変わらず、恐ろしいほどのホモ野郎だな……儂的にはお前の守備範囲に入ってなくて心底ホッとしてるが、その容姿で女に興味がないというのも勿体ない。お前やブリティシュなら娼婦にもモテモテだろうに……」
　カオスが微妙な表情でお茶を啜りながらそう言うと、日光が冷えた視線を向けていた。カオスに向かって、
「……カオス。いつも言っていますが、そういう不健全なことはどうかと……」
「けっ。男として正常な欲求を果たしてるだけじゃい。それに向こうも生きるために交渉を持ちかけてやっとるんだからむしろ健全だろ。というか――」
　と、カオスは日光の視線を受け止めながら横目でホ・ラガを見る。すると彼は日光を見て溜息を漏らし、
「はぁ……日光。君が男だったらな……それだけの美しさを持つ君が男であればさぞかし……」
「……」
「ほら、こいつよりは正常だろう」
「……カオス。とにかくもう少し慎みを――」

「え、なんで!?　儂、どう考えてもこれよりは正常じゃね!?」
「ホ・ラガは……恋愛対象が男というだけです。貴方ほど慎みがないわけではありませんので」
　いや、たまにお前が知らないところで好みの男を無理やり頂いてたりするんだけどな……、とカオスは内心で思い、そして理不尽な注意に抗おうとそれを口にしようとした。
「いやこいつ、たまに――」
「――カオス」
　しかし、不意にホ・ラガのはっきりとした鋭い声がカオスの耳に届く。
　ついでに視線までもがカオスに突き刺さり、カオスはその眼光にビクッと体を震わせる。そして彼の言葉は続き、
「……カオス。実は私はその昔……自身の性的趣向に悩みながらも倒錯していた時期に、一度だけ……野蛮で下品な盗賊を想像して抜いたことがある。――この意味が分かるかね？」
「ひっ!?」
「そうだ……君が賢明であるのなら、その先は口にしないことをおすすめするよ……」
　ホ・ラガの恐ろしすぎる脅迫にカオスは屈し、コクコクと首を縦に振ることしか出来なくなる。男なら恐怖でしかないことだ。見ればブリティシュもお茶を飲みながら顔を青くしている。
　ただ日光は首を傾げ、
「抜く？　どういう意味ですかそれは？」
「あ、あー、日光さん。お茶のおかわりいる？」
「……ええ、頂きますが、その抜くというのは一体……」
「さ、さぁ？　私にはちょっと意味がわからないわー……」
　カフェが明後日の方向を見ながらも日光にお茶のおかわりを渡す。気づいているが触れたくないらしいし、一応は誤魔化そうとしているみたいであった。
　しかしその間にも日光は頭に疑問符を浮かべ、
「盗賊を想像して抜く……？　刀を、ということでしょうか……それ

なら脅しとして意味は通じますし……しかしホ・ラガは魔法使いで――いや、想像ということならそれも間違いではない……？」
「まあ、そのような感じだよ。少し隠語染みた分かりにくい表現をしてしまっただけだ」
「……そうですか。少し腑に落ちない部分もありますが、まあいいでしょう」
いや、隠語染みたっていうか隠語そのものだろう、というツッコミは後が恐ろしいのでブリティシュもカオスも発しない。
代わりではないが、気を取り直すようにブリティシュはお茶を啜り、息を吐きながら、
「ふぅ……やっぱり、カフェの淹れてくれるお茶はホッとするよ」
「そ、そう？　それなら良かったけど……」
と、ブリティシュに褒められ、カフェが照れながらもはにかんで見せる。
カオスはその笑顔を見て、僅かに複雑な気分を浮かばせたが、それを自分でも誤魔化すようにそれとなく周りに合わせて言葉を続けた。
「確かに、良い味をしているね。決して良い茶葉というわけでも無いはずだが……」
「ええ、カフェの淹れるお茶は確かに美味しい」
「……ま、味は悪くないけどな」
「も、もー、皆褒めすぎだって。褒めてもお茶菓子くらいしか出ないんだけど？」
カフェが更にニヤニヤと照れ始める。今度は褒められすぎて調子に乗り始める頃だ。
だからこそ、カオスは気分を切り替えるついでに今度ははっきりとした声で、
「……ま、つっても、魔物様にしてみれば俺らの普段の食事や生活も、どうしようもない感じに見えてるんだろうけどな」
「……それは……そうでしょうね。魔物から時折得られる物資には、上質な物が多いですし……」
カオスがそう言うと、日光が頷いて人々の生活と魔物の生活の差を

感じてそれを憂うような発言をする。しかしカフェはちょっと強がり、
「まあ、そうだろうけど……お茶だけは負けないんだから！」
「いや、どうだかなー。きっと、魔人様ともなると儂らじゃ想像もつかんほど贅沢な生活でもしてるんだろうしな」
「世界のほぼ全てを魔物が掌握しているのだからそれは当然だろう。世界に２０体といない魔人ともなればそれこそ、お伽噺の王様の様な生活をしているはずさ」
カオスやホ・ラガの予想だがドライな意見を受けて、少しパーティ内の空気が真面目なものに変わる。気分が沈む――というほどではない。この程度で沈んでいたら世界の現状を見て、魔人を倒そうなどと言って集まりはしない。
この場にいる者はどんな理由があろうとも、魔人と戦う覚悟を既に決めている者達なのだ。その決意は並々ならぬものがあり、この目的を決めた時点で、人である事を捨ててそれに臨んでいる。
こういった僅かな休憩だけを癒やしとし、ほぼ毎日、魔物が蔓延る危険な世界で冒険を繰り返しているのはそのためだ。
「……その現状を変えるためにも、僕達はやり遂げなければならない」
そう。努力するのではなく、必ずやり遂げなければならないのだと、ブリティシュは言う。
この暗黒の時代を、人が人として満足に生きることの出来ないこの世の中を作り出している元凶を。
他の誰でもない自分が――魔人を倒すと、そう決めたのだ。

世界を支配している魔物達は、大陸各地、どこを見ても存在する。
大昔の様に人類圏、魔物界といった括りが無くなったためだ。
だが、別の意味で容易に足を踏み入ることの出来ない場所がある。
それが――魔王城だ。
魔物達の王。魔王の居城であり、大陸各地に散らばる魔人達が集まることもあるその場所は、警備の兵や士官が立ち入る以外はおいそれ

と近づけない畏怖と権威の象徴である。
また、魔王城に詰める魔物将軍ら魔軍の幹部であっても、堂々と廊下の真ん中を歩くような真似は出来ない。
何しろそこはこの城の主や、魔人のための道であるからだ。出しゃばった真似をすれば、その時の気分で殺されることだってあり得る。
もっとも、魔軍を管理し、魔人を統率している魔人のおかげで、ある程度の秩序は取れているのだが、それでも魔人に首輪を掛けきることは難しい。それが出来るのは魔王のみであり、力ある魔人の言うことを聞きはしても、それは強制ではないため、衝動で規律を破ることだってあり得る。そのため魔物将軍ら、城に詰める魔軍の将兵は細心の注意を払っている。魔王自身、誰かを殺したからとそれを咎めるような感性の持ち主ではないし、そもそも部下の管理などに興味がない。極一部を除いて、誰が死んで誰が生きようと構わないし、興味がないので魔人や魔軍の管理はそれこそ部下に任せっきりである。
だからこそ、その管理をしている魔人筆頭が招集などを掛けない限り、魔人達が魔王城に集まることはない。それでもその魔人筆頭の命令で定期的に集会を開いたり、それとは別に礼儀を重んじたり、魔王を慕う魔人らは時折訪れては謁見して軽い挨拶を行ったりもする。
故に、月初めの今日に魔王城を訪れている魔人は、偶然にも少なくなかった。
「うお……あれ、魔人レイ様じゃねぇか？」
「ば、馬鹿っ、声出すな……！　レイ様は気性が荒いんだ……無心で警備してろ……！　襲われても助けねぇぞ……！」
「っ、そ、そうなのか……すまん……」
「……」
警備の兵がひそひそと小声で話している先。そこには、無言のままズカズカと廊下の真ん中を歩く青年――魔人レイがいた。
彼は魔王ジルを姉御と呼んで尊敬、慕っているため、今日もなんとなく手土産を持ってジルに謁見しており、今はその帰りであった。
故に機嫌はそんなに悪くはないのか、魔物兵のひそひそ話に対しても突っかかっていくことはない。単に自重しているだけなのかもし

れないが、自重出来るだけ心の余裕があるという証明でもあった。
彼にとって、魔人としての生活は人間の時よりも肌に合っているようであり、それなりには楽しい日々を送っているといえる。
何をするにも自由で欲求を我慢する必要などない。ムシャクシャしたなら暴れる。人間を殺したり、歯ごたえを求めて他者に喧嘩を売る。睡眠や食事は必要ないが、寝たけりゃ寝ればいいし、飯を食う気分になれば適当に命令すれば人間では考えられないほどの美味い飯が出てくる。女を抱きたければ牧場やそこらから適当に引っ張ってくるなり、外に出て女でも探して犯せばいい。欲しいものは命令して取ってこさせるなり、力で奪い取ればいい。
出来ないことなどほぼ存在しない。魔王に次いで、この世で最も自由な選ばれた存在である魔人はまさしく世界の支配者層であった。
彼らが慮り、憚るような存在は主である魔王と、自分と同じ魔人のみ。
故に用事もなくレイが足を止めたのは、同じ魔人に視線を向けられたからだ。
「――おや、レイ」
「奇遇ですねレイ。貴方もジル様への謁見の帰りですか？」
「……アイゼルにジークか。まあ、そんなトコだ」
魔人ともなれば、同じ魔人の気配は何となく分かる。２０体といない同種の存在の気配を感じ取り、妖術が得意な長身の美形――魔人アイゼルと、それを越える長身で黄色い肌の異形の紳士――魔人ジークはレイへと声を掛けた。
魔人の中でも物腰が柔らかく、気品があると称される二体の魔人であるためか、その感じは荒っぽいものではなく、どこか貴族同士の立ち話を連想させた。
もっとも、レイの方は良くて、チンピラ集団の頭といった感じだが、こういった様々な曲者が集まるのが魔人であり、タバコを咥えている姿にアイゼルとジークも目くじらを立てない。
相性の悪い魔人もいて、そういう時は皮肉じみた苦言を呈したり、馬鹿にしたりと、小競り合いに発展するのが魔人の付き合いだが、誰

にでも紳士的に合わせられるジークはともかく、アイゼルとレイもそこまで相性が悪いわけではなかった。とはいえジークの方は気になった様で、
「レイ。貴方の為にも言わせて頂きますが、魔王様の居城でタハコを吹かすのはあまり良い行いとは言えませんよ」
「……うっせェな。別にいいだろ。ジルの姉御も何も言わねェ」
「ええ、勿論。ジル様がお許しになられているのであればそれは許諾されて然るべし行為。私が何か言う道理はありません」
「なら、いいだろうが」
と告げるレイに、ジークは、〝いえ、ですが……〟と前置きを置いた上で穏やかかつはっきりと口にした。礼儀を見失わない口調で、
「許可は出ていても、目上の相手の前ではタハコを吹かさない方が、その忠誠を示せると思います」
「……チッ。相変わらず、礼儀にうるさい野郎だ」
と、吐き捨てるように言いながらも、レイはタハコを手に取るとそれを手で握り潰した。
一見、レイは思ったより物分りが良く見えるかもしれないが、これはレイにとっては非常に珍しいことだ。
まず他人の言うことなど、上位の魔人相手でも素直に聞くことが少ないレイが、渋々でもそれを聞き入れたのは、やはりジークの話術や雰囲気、礼儀が良かったのだろう。相手の気分を害さずに意見をはっきりと伝える魔人一の紳士は、レイの行動にそれとなく〝ええ、やはりその方が礼儀としては良く見えるかと〟とレイを褒めているような言動だってしてみせる。
それを見てか、アイゼルが僅かに微笑を浮かべながらも、話題はその謁見に関することに移る。
「……それで、ジル様のご機嫌は如何でしたか？」
「あぁ？　別に……いつも通りだ。手土産の人間の女虐めてるときは愉しそうだったけどな。それ以外は相変わらず、痺れる雰囲気だったぜ」
「……ふむ、そうですか」

レイの言う、痺れる雰囲気。つまりはいつも通り、冷淡で特に相手をすることもなかった、ということだ。
全くもって意外でも何でもない通常営業のジル。配下の魔人には無関心で、傍らに控える側近、魔人四天王のノス相手でも命令を下す以外では、人を虐めている本当に機嫌の良い時くらいでしか話しかけることはない。
故に、魔人の間ではジルに謁見する際には、特にジルが好む人間の女性をそれぞれが管理する牧場から持参して、それを手土産として渡すのが慣例となっている。
アイゼルとジークも、定期的な挨拶も兼ねて魔王城に出仕して、先程同じ様な対応でもって迎えられたのだ。
そのことを不満に思いはしない。中には、そのことを好都合だと捉える魔人もいるし、恐ろしいので関わらずに済むという魔人もいる。実際、百年以上顔を合わせていなくてもジルは特に何も言うことはないし、呼集されることも滅多にないので、こういった魔人同士の付き合いというのは、個人的に気に入った相手とのやり取りをするのみで、偶然会うことも珍しいものだ。
魔人の感覚では最近会ったばかりだと思っても、実は数十年ぶりだったりすることはザラにある。
とはいえレイは気が向いた時に他の魔人に喧嘩を売りに行ったりと暴れているため、比較的よく会う方なのだが。
故にレイはいつもの様に、何かスイッチが入ったわけでもないのに何気なく、
「……ま、偶然会ったなら丁度いいな。どっちか俺とやらねェか？」
「……また、ですか、レイ。暴れたいのであれば人狩りに出るのもまた一興かと思いますが……」
アイゼルが呆れるように息を漏らしながら言うと、レイは鼻を鳴らし、
「人間相手に暴れるのはつまらねェ。どいつもこいつも雑魚ばっかだからな」
「いえ……確かに強さ的に物足りないというのは分かりますが、それ

でも抗おうとする美しい人の意志を愛でるのも、一つの楽しみですよ」
「……ふん、ゴタゴタとどーでもいい理屈こねて、いざとなったら腰が引ける腰抜けしかいない印象だがな」
「否定はしませんよ。ですがだからこそ……一欠片の原石が輝くこともある」
「理解出来ねェ」
「おや、それは残念ですね」
　素っ気なく告げたレイに、アイゼルも別段残念そうでもなくそう口にする。魔人は基本的に血を好むとはいえ、趣味の違いは如何ともし難い。
　故に話は平行線のまま終わったかと思いきや、今度はジークが何かを思い出した様に徐ろに、
「ふむ……ですが人間の間にも、最近は油断ならない者もいるという噂ですがね」
「あぁ？　なンだそりゃ」
　レイが聞いたこともねぇ、とジークに問いかける。するとジークは長い手を顎に当てながら、
「どうにも最近、人狩りに出てる部隊が逆に全滅する被害が増えている様なので」
「ほう……初耳ですね。大規模な魔物討伐隊にでも遭遇しましたか？」
　アイゼルも興味が湧いたように細い眉を浮かばせる。ジークはその問いに否定し、
「いえ、話では人間側の死体が少なかったことから、どうも少人数の冒険者にやられたのではないかと言われているようです」
　あくまで推測ですが、と枕詞を置いて、ジークはそれを口にした。
　するとレイもようやく僅かに興味を抱いたようで、
「ふん……マジならちったぁ楽しめるか。ガセじゃねぇんだろうな？」
「さて、私には分かりかねますが……。しかし、最近はレオンハルト様

も人狩りに出かけることが増えているらしい。ともすれば、あの方もその人間とやらに期待し、探しているのかもしれませんね」
「……んだと？」
「……あのレオンハルト様が……ですか……」
レオンハルト、という言葉にレイやアイゼルが僅かに驚きを見せる。
魔人レオンハルト。魔人筆頭、魔軍参謀という肩書を持つ最強の魔人だ。
魔人界隈であってもかなりの大物。そんな動きを見せた、というそれだけでニュースになってしまうような人物だ。
それに普段から忙しく、仕事に奔走しているというレオンハルト本人が動くというのは、中々に珍しい。特に人狩りに出かけることなど滅多にないのがレオンハルトであり、そういう時は大規模な人間の隠れ里を壊滅させてきた、というそんな報せが一緒に上がってくるものだ。
それを聞いたレイは、舌打ちを行い、
「……あの野郎。最近見ねェと思ったらせこせこと人狩りに出かけてやがったか……」
「……レオンハルト様が興味を示すほどの相手……ですか……」
「あの方の立場的に、それほどの被害が出ているのであれば捜索せざるを得ない。それに、部下思いの方です。放置は出来ないと考えているのでしょう」
ジークがあくまでも推測ではあるが自身の見解を示す。
実のところこの話はレオンハルトシティやレオンハルト麾下にある魔軍の中では有名な話なのだが、レイもアイゼルも知らなかったようだ。
だがレイは、それを聞いて何やら闘気を漏らしているし、アイゼルも何か迷うような素振りを見せている。
ジークはそれを口にしながらも、やはり魔物達がやられたことを彼らも放置は出来ないのだろうと、その魔人として正しい気持ちに頷き、強者に興味を示す魔人の本能にも理解を示し、自分もたまには彼

らを見習って魔人として積極的に行動するのも悪くないのかもしれないと、その噂に再び興味を示した。

前哨戦

魔物に支配される世界。
魔王城がその世界の中心。権威の象徴だとすれば、その街は世界で最も重要な場所だ。
――レオンハルトシティ。
魔軍の宰相に等しい魔人が治めるその街は、名実ともに世界一栄えている都市であり、多くの魔物がその街に居住し、また観光として訪れる魔物も多い一大都市である。
建ち並ぶ食事処、屋台などの手軽に食べれる大衆店から、会員制の高級店まで、魔物界では珍しく、それでいて需要のある美食の街として知られ、劇場やスポーツ施設、街の外れには世界でも最大級の牧場であるレオンハルト直営人間牧場が存在し、娯楽の中心としても知られている観光都市であり、最強の魔人が治めていることから、治安が行き届いており、世界一安全な街でもある。
その中には魔軍の重要施設も存在する。魔物将軍らが詰める司令部や各種会議場、訓練場や部署毎に設けられた事務所のような場所まで。
その一つに、一般の将兵の立ち入りが許されない部署がある。
〝情報部〟と称されるその場所は、魔物将軍らであれば存在こそ知っているものの、どんな活動をしているか知っているものは少ない。知ってはいても断片的なものであり、どんな情報を取り扱っているかは知りえないものだ。
だが出入りしている者達は確かにいる。魔物兵が時折その場に入っていくのだ。
情報部専用の建物。だがそこは、内部の者達、真実を知る者達にとってはこう呼称されていた。
――〝キリング商会本部〟。大陸各地で活動している商会の本拠地であるそこに出入りするのは、まねしたやライカンスロープといった変身能力を持つ魔物だ。
彼らは皆、人間や魔物兵など様々な姿に扮して、大陸中に散らばっ

て活動し、諜報活動を行っている。
情報収集、工作などを日常としているそこは、平時である現在も精力的に活動している様子であり、その証拠に、とある一室では魔物兵に扮したライカンスロープがある報告をそこにいる責任者達に届けていた。
「――その情報は確かなのか？」
「はっ……間違いないかと。リー様」
「……ふむ」
ライカンスロープから報告を受けるのは、赤い軍服を身につけた渋い中年男性の様な見た目の魔物。魔人レオンハルトの使徒であるリーであり、彼は今、代表者である使徒キャロルの代わりにこのキリング商会本部に詰めていた。
レオンハルト軍という組織のおおよその仕事――牧場経営や各種訓練、士官の人事など様々な業務に携わるリーは、同じく様々な仕事に関わり、特に主からキリング商会の采配を任されているキャロルの補佐として、諜報活動にも従事しているのだ。
もっとも、主であるレオンハルトは秘密主義な部分もあり、個人的な仕事などは魔軍を介さずに使徒に任せることも多いため、四体の使徒はそれぞれ大なり小なり、諜報活動を行っていたりもするが、組織的な情報収集を担当しているのはキャロルとリーであった。彼らは諜報とそれぞれキャロルが総務と経営、リーが工作と補給を担当しているのである
使徒によって大まかではあるが担当が決まっており、ハンティなどは街の警備と魔法研究、ペールは内務、街の運営などを主に担当している。
戦時になれば誰もが将として動くことにはなるし、他の仕事を手伝うことも多いが、概ね平時としての割り振りはこれが適当であった。
それぞれに任せられた仕事はそこそこの量があり、大変なものではあるが、リーはそれを苦労とは感じない。
主のために働けること自体が幸福であり、主がやることに関わっていられることが至福の時であるからだ。

それに、これくらいで大変と言ってはならない。何故なら、
……レオンハルト様は、これ以上に大変なのだからな。
リーはそのことを憂う。己の主であるレオンハルトの仕事量は魔軍参謀と魔人筆頭という二つの役職を兼任しているだけあり、膨大な量だ。
先程あげた全ての業務にレオンハルトは携わり、時には口出しし、最終的な書類を全て確認しているし、レオンハルト軍だけでなく、その担当は魔軍全体でもあるのだ。
各軍から集まってくる報告を確認することは勿論だが、潤滑な魔軍運営を維持し続けるのは並大抵のことではない。配下の魔人の管理なども仕事の内だし、魔王の命令に関しては言わずもがな。時には他の魔人の仕事を代わりに仕上げることもある。
そしてその上で、レオンハルトには人付き合いにも手を抜くことなく、予定ややるべきことが詰まっており、一年中３６５日、忙しい毎日を過ごしているのだ。
故にリーは憂い、そして思う。少しでも、その負担を軽減して差し上げなければ、と。
この報告も出来ることならレオンハルトに伝えることなく、自分達で処理して差し上げたいくらいだが、それは出来ない。レオンハルトから厳命されているのだ。〝例の件に関する報告は、例えどんな小さなことだろうと必ず報告しろ〟と。
「……ご苦労。私はこの情報をレオンハルト様にお伝えしに行く。お前は暫く休んで構わない」
「はっ、ありがとうございます！　……あ、あと、一つよろしいでしょうか？」
「……何だ？」
配下のライカンスロープに問う。何やら緊張している様子だが、どうかしたのかと思っていると、
「……忙しいリー様にこのようなことを口にするのは大変恐縮ではあるのですが……その……も、もしお時間があれば、一緒に食事など如何でしょうかっ!?」

「……」
ライカンスロープに勢いよくそのように言われ、リーは珍しく言葉を用意してなかったようで、押し黙ってしまう。
予想外の言葉だ。食事の誘い自体は今まで部下の魔物将軍らから良くあったものだが、これは察するにどうなのだと考え、
「……悪いが今は忙しい。また今度誘ってくれないか」
「……は、はい。畏まりました。……失礼します……」
結局のところ、使徒であるリーは命令を守ることを選んだ。配下のライカンスロープに休暇を取るように告げて下がらせる。諜報活動という激務を担当する彼らの待遇は、レオンハルト軍の中でもかなり良い方であり、士官待遇とほぼ変わらない。それだけの旨みを提示しておかなければ、不満をもって離反する者が出かねないという危惧があるためだ。
だが、気落ちした様子のライカンスロープを見ると、少し悪いことをしたか、とも思う。何かフォローをしたほうが良いか、とも。だが、……それよりも今は、こちらの情報をお伝えするのが先だ。
情報の取り扱いに、レオンハルトは何よりも注意しており、情報部で扱う情報も慎重に慎重を重ねており、それでいて更に重要な情報は使徒などの側近にしか明かさないという徹底ぶりで、自分達使徒が報告しなければ主は困ってしまうだろう。
中には、自分達使徒にすら明かさない情報すらある様子だが、そのことを不満には思わない。主の秘密を詮索するなど冒涜も良いところだ。
……軍人は、命じられたことを忠実にこなすのみ。
リーは信仰の対象である主のことが書かれた聖典を持つ手に力を込めると、人付き合いで忙しいはずの主の元に、幾つかの情報を持っていそいそと向かった。

女性とは、とても繊細で難しいものだと彼は知っていた。
男性と女性は、同じ種族であっても違う生き物に等しい。よく言わ

れる言葉だが、これは真理に近い。
性別が違えば、その心理、考え方、価値観などは身体的な差に勝るとも劣らない程に大きく違ってくる。一般的には脳が原因だと言われ、男性は論理的、女性は感情的だとされているが、その区分けの内容そのものはそこまで重要ではないと彼は考える。
重要なのは、違っているからこそ理解出来ず、すれ違いが起こるということである。
恋愛巧者と言われる人物は、総じてこの違いを擦り合わせる能力が高いと言えるし、相手に寄り添うことが出来る懐の深い人物である。
理解出来ない相手に対する対応は〝拒絶〟が最も多い。人はそもそも違う生き物を拒絶したがる生き物だ。
いや、動物の中にあっても、群れの仲間と違うほんの僅かな身体的な特徴があるだけで、その個体は群れから排斥されてしまうことだってあるのだから、人だけではないだろう。
中には優れていることで、特別扱いされる者だっているが、それも差別であることには違いない。
理解出来ない相手は怖い。これが自然な考えであり、会話し触れ合うなどして相手を理解することでそれは解消し得るものだが、それでも最初のハードルの高さは変わらない。
それでも男女がそのハードルを越えたがるのは、やはり生物的に惹かれ合ってしまうからだろう。
その部分に関しては、彼は細かい部分などはどうでもいい。単純に好意を持ってくれるのは嬉しいし、相手に応えることも、相手がそれに足る人物であれば吝かではない。
彼は自分を安売りはしないし、相手はきちんと選ぶ。
それは、そういった男女の仲に真摯でありたいからだ。そもそも複数の女性と関係を持っているんだから真摯もクソもねーだろ、という意見はご尤だが、そういうことではない。
女性とそういう仲になるというのであれば、責任と覚悟がいる。相手の全てを背負ってもいいという覚悟だ。
ありとあらゆる意味で守らなければならないし、そもそもきちんと

愛すると誓わなければならない。愛されることで幸福は得られると考える彼としては、この愛するというプロセスは最も重要なものだ。
身体的快楽は確かに甘美過ぎて毒になるほどに強い刺激だが、最も重要なのはやはり精神的な部分。愛し、愛されるという充足感こそが、幸福に繋がるものだという持論である。
勿論、愛もないハーレムで幸福を得ることも出来ようが、ただ自分はそうではなかった。
身体的接触を蔑ろにするものではないが、きちんと愛を与えながらやるものこそが、真摯な恋愛であるのだと。
その部分に関して、己はそれなりに優れている自信がある。あまり口に出すことでも自慢するべきことでもないが、相手を愛することに関しては、精神的にも技術的にも優れているだろう。
そのせいで、上司に気に入られたり、何故か男にまでその技術を実地で教えることになっているのは甚だ遺憾ではあるのだが、それはもうどうしようもないのでほぼ諦めている。問題はプライベートだ。
ここで最初の男女が違う生き物であり、理解が難しいという部分に戻るのだが――彼は今、その難しさを痛感していた。
「……嫌なら突き放してくれ」
「っ……嫌……って、わけじゃないし……す、好きにすれば……？」
「……そうか」
場所は己の居城にあるとある一室。
相手の女性の部屋の中、ベッドの前で己――魔人レオンハルトはその相手と軽く抱き合っていた。
相手は、魔人ラ・サイゼル。紫色のショートの髪と整った容姿を持つ彼女は、客観的に見てもかなりの美少女であった。
その彼女が、顔を赤くしながらも自分の方をチラチラと見上げ、何かを期待するような、それでいてまだ戸惑っているような、それでいて強気をまだ覗かせる初々しい態度を見せている。
これを見れば、もう誰もが分かるだろうが――明らかに好意を抱いてきている。
直接的な言葉は出さないサイゼルであっても、毎日の様に自分のと

ころを訪ねてきて、出かけようとか食事をしようとか言われ、羞恥を感じながらも近寄ってくるのを見ればさすがに分かるものだ。
もうここ数年はずっとこの有様であったが、暫くは直接的に口にするでも、決定的な行動を取ることもなかったため、忙しいのもあって普通に付き合っていたが、とうとうそういった感じの雰囲気になった。
まさかサイゼルの方から言ってくるとは思わなかったが、その言い方が彼女らしいものだったのでレオンハルトとしてはなんとも言えない。
――〝あ、あの子にしたことと、同じことを……し、して……？〟
まさかそんな風に言われるとは思わなかった。というか、見ていたのか、とレオンハルトは頭を抱えてしまう。
そう。レオンハルトは、彼女の妹である魔人ラ・ハウゼルとも、遂にそういった関係に至った。彼女の方から部屋の中でいきなり迫ってきたため、それを受け入れたのだ。
だが、レオンハルトはサイゼルとハウゼル、後はまた別の相手もそうだが、好意を持たれたことは嬉しいし、それに応える用意もある。それは構わない。
ただ一つ疑問なのは、
……俺は……なんでこんなに惚れられるんだ……？
と、レオンハルトはそこらの男に聞かれたら助走付きで殴られ、罵詈雑言を浴びせられそうなことを内心で思う。
だがそれは、嘘偽りない彼の疑問だった。
いや、厳密に言えば、惚れられた理由は分かる。そこに疑問はない。優しくしたとか、親切にしたとか、要は人付き合いをしている内に自然と惚れてきたということだ。
だが、それにしてもこれだけでこんな複数の人に一日に同時に告られ、或いは迫られるのは何故なのか。
客観的に見て、確かに自分は容姿に優れているだろうが、それにしてもあまりにもチョロくないだろうか。

自分視点だとそう見えてしまうのである。何しろレオンハルトはこれまで、自分から女性を口説いたことは一度もない。
いつも自然に、自分のやりたいようにやってきただけであり、女性を助け、救い、助言することはあっても、女性を口説いたことはないのだ。
無論、何度も言うが嬉しいことではある。嫌がっているわけではない。そういうのは受け入れた相手に失礼だ。
だがこうも連続すると、レオンハルトとしては自分の魅力について考えざるを得ないのだ。
そう思いながらも、レオンハルトは相手と真摯に向き合うために、その思考をストップして相手に集中する。
行為中に別の事を考えるのは、レオンハルトも時折思わずやってしまうことだが、出来る限り止めた方が良いことなのだ。
「サイゼル……目を閉じろ」
「っ……う、うん……」
サイゼルの背中をゆっくりと落ち着かせるように撫でながら、レオンハルトはそう告げる。緊張して体が強張っている様子のサイゼルを解すように撫で続けた結果、サイゼルも大人しく、それでいて意を決した様に瞳を閉じた。
細い眉や長いまつ毛、綺麗な顔立ちを眺めながらサイゼルの顎を軽く持ち上げて、唇を合わせてみせる。
「んっ……はぁ……っ♡」
接吻を行い、サイゼルが熱い吐息を漏らす。それだけで、彼女は既に瞳の奥をとろんとさせて、眉尻を下げていた。
レオンハルトはサイゼルを更に強く抱きしめるように腕の中に引き入れながら、もう一度キスを落とす。
「んっ……ちゅる……ん、あ、これ……っ、んんっ……♡」
今度はもっと深く。唇に吸い付くようなキスを落とす。
そうしながらも、レオンハルトは加減することなく、全力で相手を感じさせるために手を尽くす。
これは指南の際にも教えたことだが、こうやってキスする時間はレ

オンハルトにとって、ある意味で重要な時間であった。
男女間の行為というのは、こういった前哨戦こそが大事であり、ここで後の難易度が劇的に変わるといっても過言ではない。
ムード作りでその辺の部分をクリアしつつも、レオンハルトの手は既にサイゼルの背中などの肌を撫でながら弱点を探しているのだ。
「……ん、んんっ……れろ……あっ、ちゅる……っっ、あっ……♡」
舌をサイゼルの口内に侵入させ、彼女と舌を絡ませるキスを楽しみながらも、レオンハルトが背中や腰を撫でる。
その際に反応が大きい部分をさり気なく頭の中に入れながら、サイゼルの身体の情報を集めていく。
基本的に感じやすい場所などは決まってはいるし、技術でカバーすることも出来るが、やはり個人によって感じやすい場所などは違うものだ。
レオンハルトはそれを探り当てているのである。
自分の欲望に従って、サイゼルのすべすべの肌の触り心地を楽しむだけではない。相手を愛するのであれば、相手を悦ばせるために男として必須の事だとレオンハルトは考えていた。
キスをして、サイゼルが段々と蕩けていくのを時折確認しながら、レオンハルトはすりすりと手で彼女の腰辺りを擦る。
「んっ……♡」
腰の下。臀部の直ぐ上の部分を擦ると、サイゼルの身体がぴくんと跳ねる。
比較的女性が感じやすい部分ではあるが、サイゼルも例に漏れなかった様であり、レオンハルトはそこを重点的に擦りながらサイゼルと舌を絡ませ続ける。
あの子と同じ様に、そう言ったサイゼルの注文通りではあるが、細部は違うものだ。
ただ、感じ方や反応なんかは似通っていると言わざるを得ない。比べてしまうのはあまり良くないことではあるのだが、
「……触るぞ」
「……う、うん……あっ、やっ……はぁ……んっ、これ、すご……あぁぁ

……っ♡」
サイゼルに一声掛けてから、レオンハルトは手をもっと際どい部分に這わせていく。
手を後ろに回し、サイゼルの下半身、ぴっちりしたレオタードの内側に手を潜りこませ、モチのような触感の尻肉に掌で撫で回し、五指を埋めさせる。
同時に、彼女の胸元にも手を伸ばし、その美巨乳を服の上から軽く揉み上げる。張りがあって柔らかい。指を突き立てるとすべすべの肌と共に指に吸い付いてくる。
そうやってサイゼルの美しい肉体を堪能しながらも、やはり弱点を探し、そこを技術を持って攻め立てるのは忘れない。
だがそれでいて、やりすぎないようには注意する。本気を出して感じさせ過ぎるとそれはそれでイキ狂ったりしてしまうので、そういうのはまだ早い。処女には刺激が強すぎるものだ。
……だが、肌の質感は似ているな……。
レオンハルトはハウゼルとの行為を思い出してしまう。それほどにサイゼルとハウゼルは似ていた。
先程もこの様に、ハウゼルを抱きしめながらキスをして、身体を撫で回し、そのロングスカートの下に手を潜り込ませて熱くなった女性らしい尻や胸を揉み上げた。
すると今のサイゼルの様に、腰をもじもじと揺らし、時折ぴくんと跳ねさせて感じている様子を見せる。
「はぁ、はぁ……ああぁっ、レオ、レオンハルトっ……んんっ、も、もう、あっ、だ、だめっ……もう、んんんっ♡」
『はぁ、んっ、あぁっ、レ、レオンハルト、さぁんっ……やっ、あんっ、んんっ、あっ、も、もうぅ……んんんっ♡』
ハウゼルとの行為を思い起こさせてしまい、レオンハルトは頭を振るように彼女の耳元に顔を埋めて、その甘い微香を吸い込みながら声を掛けてやる。
「……大丈夫か？」
「あっ……はぁ……はぁ……っ、んっ、しゅ、しゅごい……こ、こんな、

こんなにっ……♡」
どうやら一度達した様子のサイゼルを受け止めると、腕の中で息も絶え絶えに、口元から涎を垂らすサイゼルがうわ言の様にそう呟く。
一応ちゃんと意識はあるようだが、やはりハウゼルと同じでかなり蕩けてしまっている。
「レオンハルトぉ……♡」
何しろ今も、快感を求めてなのか、太腿を擦り合わせながらこちらの胸に顔を預け、荒い呼吸を繰り返しながら、恥丘をこちらの股間部分に擦り付けてきているのだ。
甘い快感もこちらを感じるが、それで我を忘れるほど経験は薄くない。レオンハルトはサイゼルをゆっくりとベッドに運びながら、
「……たっぷりと愛してやるから、好きなだけ感じていい」
「あっ……――」
耳元でそう呟きながら、今度は彼女の衣服に手をかける。
本格的にその行為に突入しようとしながら、
……そう、しばらくはまだ、時間もあるだろうからな。
レオンハルトとしては心配事というかやるべきことがありはするが、まだ暫くは動きもないだろうと見ている。監視は継続しているため、何かあれば直ぐに動けばいいが、予想としてはそれはない。
油断は出来ないが、しばらくはこっちに集中することが出来そうだと、レオンハルトはサイゼルとの逢瀬を続けることにした。

姉妹斬り

人間の隠れ里。
大陸各地にある野良の人間が住まう場所の一つに、五人の冒険者は訪れていた。
場所は酒場兼宿場ともいえる建物であり、丸いテーブルについた五人はそれぞれ思い思いに食事や酒を口にしたり、情報を収集したり、依頼なんかを確認したりと活動している。
だがそんな中で、
「あ？　人里が壊滅した？」
そう口にしたのは、盗賊カオス。ブリティシュをリーダーとする魔人を倒すために集まった冒険者パーティの一人で、何となく酒場にいた人間に話を聞いていた一人だ。
彼は相手の言葉を耳にして眉を顰める。
「それと、大規模な魔物討伐隊なんかも壊滅したみたいでな……噂によると、とんでもなく強い魔物がいたらしく……」
「……それは……」
カオスはその言葉に、あるものを想像する。
とんでもなく強い魔物、という言葉で連想するのはやはり、彼らが目的とする魔人だ。
確証がないが、その可能性もあるかもしれないと頭の中で思いながらも相手の言葉を聞き続ける。
「だからこの辺りは最近結構危なくてな……俺も別の場所に行こうかちょっと迷ってる。お前さんも、気をつけるこった」
「……ああ。情報提供、助かる」
報酬だ、と情報料として小袋を投げ渡す。別にただの世間話みたいなものではあったが、いい話を聞けたのもあって報酬は当然の代価だとカオスは直ぐにその場から離れる。すると直ぐに、
「……何か収穫はありましたか？」
「ん、ああ、日光。どうも、最近ここらで強い魔物が暴れてるみたいだってな」

やって来たのは日光。同じパーティに所属する美人侍。
酒場に来ると大体男に言い寄られるが、しかしすぐに日光の冷たさに袖にされるか、ホ・ラガの視線を受けて退散してしまうので、意外となんとかなっている天然女だ。
しかしそんなことを思っているとはおくびにも出さずに、カオスは聞いた話を口にすると、
「……私も似たようなことを聞きました。やはり――」
「……ま、その可能性はあるかもな」
と、その先を口にする前に同意する。あまり人がいる場所では口にしないほうが良い話だ。
魔人が近くにいるかもしれないなんて、とてもではないが聞きたくないものだ。故に先程の同業も、敢えて強い魔物ということで留めたのだろう。
もっとも、勘の良い奴であれば既にこの辺りからは逃げ出してるかもしれないが、とカオスはそう思う。実際に魔人がいるなら逃げるべきではあるが、自分達の場合は、
「どうするか。行くか、逃げるか」
「……一度、皆に話を持ち帰りましょう」
「ま、そうだな」
当たり前だが、まずはそうする。自分達はパーティなのだ。
そこまで真面目な集まりでもないが、それでも最低限の意思疎通や連帯は取らなくてはならない。
だからこそ、逃げるにせよ、別の行動を取るにせよ、皆の意見を聞いて、その上で行動を決めるのだ。
しかし、魔人相手ともなるとカオスは自分の血が冷たくなるのを感じてしまう。
勿論、これも表にはあまり出したくないことではあるので、カオスは日光と一緒に歩きながら溜息を吐き、
「はぁ……こりゃ、しばらく娼婦と遊ぶ暇は無さそうだ」
「またそんなことを……」
と、お硬い日光が眉間に皺を寄せたのを見て、カオスは特に悪びれ

るでも謝るでもなく、正直にそう思う。
……魔人と違って、こっちには余裕がないからな。
魔人であれば、戦闘の前だろうと楽しむような余裕はあるだろうが、こちらはか弱い人間。万全の準備をしなければならないと、カオスは魔人という目標を前に目を細めた。

――これは少し前の光景。
「んっ、はぁ……あっ、レオンハルトさんっ……レオンハルトさぁん……」
「ふっ……っ……！」
ベッドの上で、レオンハルトは魔人ラ・ハウゼルに覆い被さり、肌を重ねていた。
というのもハウゼルがいつもの様にレオンハルトを部屋に呼び、読書に誘ったのであるが、その際に彼女はレオンハルトに対して、
『わ、私を……レオンハルトさんの……お、女にしてくれませんかっ!?』
と、そのようなことを言い放ったのだ。
顔を真っ赤にしながら、腕を胸の前に、ぎゅっと拳を握りしめ、意を決した様子で告げてきたハウゼル。その瞳は既に濡れており、腰をもじもじと揺らしていることから、既に色々と辛抱堪らない状態になっているのだろう。
それを見てレオンハルトが思ったのは――焦らしすぎてしまった、という反省だ。
ハウゼルも、サイゼルと同じ様に、毎日の様に自分を読書に誘い、食事に誘い、仕事を手伝ってくれたりとこちらをずっと慕ってくれていたのだ。
出会ってからもう十年近く経つが、実際に惚れたのは出会ってから一年程のことであり、割と早期であったことを窺える。
それからハウゼルはレオンハルトのことを想って、毎日ショーツをグショグショにしてしまうほどに想っていたが、それがとうとう我慢

出来なくなってしまったのだろう。
想いが募りすぎて、ハウゼルは自分からレオンハルトにぎゅうっと抱きつき、彼の顔を見上げながら、最近読んだえっちな小説の中の様に、こう言ってしまうのだ。
『私では……駄目、ですか……？　そ、その……こ、興奮、しませんか……？』
ハウゼルの抱きつく力が強くなる。その豊かな胸がレオンハルトのみぞおち辺りに押し付けられ、ハウゼルの太腿は足に向かってスリスリと擦ってくる。ハウゼルの女体の柔らかさとめいいっぱいの好意を感じて、レオンハルトの方もそれを受け入れる身体的な準備と、精神的な覚悟が決まってくる。
『う、あぁ……これ、が……もしかして……レオンハルトさん、の……』
レオンハルトのそこが肥大化し、ハウゼルの下腹にぐいっと押し付けられる。ハウゼルはその大きさ、硬さ、熱さといった存在感をお腹で感じ、お腹の奥がぐるぐると熱を持ちながら締め付けられるような感覚を感じて腰を揺らした。
それを見たレオンハルトも、ハウゼルが自分に発情していることを感じ取る。しかし、それでも直ぐに襲いかかるような真似はせずに、レオンハルトは言葉を挟み込んだ。
『……お前の好意、確かに受け取った。今度は俺が示す番だが……本当に構わないんだな？』
と、最終通告の意味を持つ言葉を告げる。それはレオンハルトにとっては大きな意味を持つが、しかしハウゼルはやはり躊躇わず、
『はい……お願い、します……』
『……分かった』
ハウゼルが顔を上げて、彼女が好きな恋愛小説の一場面の様に瞳を閉じる。
レオンハルトが耳元で、〝好きだ〟の一言を呟いただけで、ハウゼルの身体がビクッと反応する。レオンハルトがキスを落とし、それから徐々に身体を撫でると、声を漏らして感じ入る。
腰を撫でつけ、ロングスカートの中に手を忍び込ませ丸い臀部を全

体を確認するように撫で回し、美巨乳に触れて、それを揉み解すと、軽い前哨戦のそれだけでハウゼルは達してしまった。
それから彼女の服を脱がせ、レオンハルトも服を脱ぎ、互いに生まれたままでベッドの上で相対する――戦闘の時間だ。
ハウゼルとの初めての戦闘。ハウゼルも戦闘を行うのは初めてだ。
レオンハルトはこういった場合、特に念入りに事前準備を執り行う。
何しろ女性の場合、初めての戦闘とは痛さを伴う可能性が高いので、それを完璧に取り除くには準備を入念に行うことが必要不可欠だ。
相手の初めては一生の思い出ともなるため、最高の記憶にしてやるのが男としての義務なのだとレオンハルトは思っている。
それに初めてでなくとも、いきなりしてしまえば痛いだけだろうとも。もっとも、レオンハルトとの行為に慣れた彼の女達は、レオンハルト相手であればいつ襲われても、それがレオンハルトだということに興奮し、雌の部分を疼かせて直ぐに準備が整ってしまうのだが、それとレオンハルトの矜持は関係ない。
ハウゼルの方も、実はレオンハルトとそういうことを致すことになって、鼓動はドクンドクンと強く脈打ち、顔は紅潮、既にぐしょぐしょに濡れてしまって準備は万端なのだが、念の為にベッドの上で暫しの準備を行う。
ハウゼルという、まるで天使と見紛うような美少女の、シミ一つない綺麗な裸体を眺めながら堪能する。
ほっそりとした肩にすらりと伸びた手足。太腿は女性らしく、太すぎず細すぎない極上のバランスの取れたもので、その曲線をなぞるように触れると、熱く張りのある肌の感触を伝えてくる。
お尻も母性を感じるように膨らんでおり、見ているだけでも楽しめるいやらしさが詰まっているが、触れると張りのあるむっちりとした感触を楽しむことが出来るし、触れられていることが多少恥ずかしく、しかしそれでいて感じているのか、ハウゼルが腰をもじもじと揺らすのがまた趣深い。快感から逃げようとふりふりと揺れる尻を両

手で捕まえるのは男なら楽しくてしょうがないだろう。
細いウエストも中々に趣深い。人間と同じ、人の形を保った存在であることが不思議なほどに細く綺麗な曲線を描いており、そこに手を回すとその細さがよくわかる。すりすりとそのお腹周りを撫でて曲線に沿って下に這わせれば、太腿やお尻があり、上にいけば悩ましい膨らみ、ハウゼルの美巨乳がぷるんと晒されているのだ。
そこを手で持ち上げ、指で軽く押し込んだり、五指で揉みしだいたりすれば、ぷるぷるの柔らかさが堪能出来る。ツンと自己主張をしている桃色の乳首や、膨らみの形など、とくに形が綺麗であり、思わずその輪郭を撫で回したくなるほどだ。
だがそうしながらもレオンハルトは相手を感じさせるために動いている。顔はハウゼルの首の横、耳元に埋められ、その女の子らしい微香を吸い込みながら、さらさらの髪が首元をくすぐってくるのも心地よく感じる。
人間とは違う部分である角の下には、僅かに尖った形をした耳があり、可愛らしいそこに口づけると、ハウゼルが〝あっ〟と短い声を上げて、ぴくっと震える。
そうやってハウゼルという美少女の輪郭をなぞって確かめ、堪能するように全身に手を這わせる。彼女の頬や耳元、首元に軽いキスを落とすと、その度に彼女は震え、それでいて可愛がられているという自覚があるのが、恥ずかしそうに顔や白い肌を赤くしてしまう。
だがそうしているとハウゼルも甘い快感に包まれ続けた結果か、うっとりとしたように熱い吐息を漏らしながら、その瞳を潤ませている。こうしてみるとハウゼルが一方的に感じているようだが、そういうわけでもなく、
『んっ、はぁ……っ♡　レオンハルトさんの……これ……凄い、ですね……んんっ♡』
レオンハルトの剣は、戦闘準備を終えて時折ビクビクと震えていた。
それを目の当たりにしたハウゼルは、そっとレオンハルトの剣に手を伸ばす。

細くてしなやかな指が剣に絡み、きゅっ、とおっかなびっくりの様子で軽く握られると、ハウゼルの熱くてすべすべの掌の感触を感じて、更に膨らんだ。
美少女のつたない触れ方ではあるが、それがまた、レオンハルトを興奮させる。軽くにぎにぎと確かめるように、包み込んで握ってくるが、ある意味、触れ方が分からないからこその予測できない触れ方は、こちらに甘い快感を送り込んでくるのだ。
そして、その頃には既にハウゼルの準備も整っており、ベッドのシーツをかなり濡らしている。
故にレオンハルトは、彼女をゆっくりとベッドに押し倒し、彼女に声を掛けてからとうとう戦闘の本番を行うことにした。
――その結果、冒頭に戻るのだが、
「あっ、あっ、あぁっ♡　レオンハルトさん、レオンハルトさんっ……♡」
レオンハルトの入念な準備のおかげか、はたまたハウゼルの素質ゆえか、とにかくハウゼルは痛みを感じた様子もなく、戦闘の快感に喘いでいた。
ハウゼルの上に覆いかぶさるような通常の型で、レオンハルトは剣を捌いていく。
ハウゼルの鞘に向かって腰を振り、剣を突き刺していくのだが、やはり卓越した技量のレオンハルトの剣技に、ハウゼルも強い快感で顔を溶かし、どうにもメロメロになっている様子だった。
だが、これもハウゼルだけが感じているかと思えば、そうでもない。やはりレオンハルトも、ハウゼルとの戦闘に快感を感じていた。
レオンハルトの剣が侵入したハウゼルの鞘の中は、それこそ溶けてしまうのではないかと思うほどに熱く、それでいて初めて侵入してきたレオンハルトの剣をその熱く濡れた鞘で締め付けてくる。
じゅくじゅくでうねっていて、まだ完全に形が定まっていないその鞘は、レオンハルトの剣の突き込みでその形に矯正されていく。
誰もが羨むような美少女の鞘を自分の剣でほじくり、己の形に無理やり矯正していく快感は、やはり何度味わっても凄まじいものだ。

レオンハルトはその手の快感に慣れているし、肉体的な感触よりも精神的な要素が重要だと位置づけてはいるが、だからといってその肉体的な快感を誤魔化したりはしない。
女性を真摯に扱い、並の男が抱くような感覚はかなり鈍麻しているレオンハルトではあるが、自分の中では確かに、この美しい少女を自分だけのモノにしたという陶酔してしまうような快感が訪れている。
そういった感覚と無縁に思える彼は、実際にそこまで普段からそういった優越感や独占欲というものを強く思っているわけではないが、やはり好き合う者同士での戦闘行為は、レオンハルトの鈍麻した感覚を僅かに蘇らせるのだ。
例えその感覚が訪れたとしても、それに慣れているために溺れるようなことも、醜い感情を抱いて女性を傷つけるようなことも絶対にしないだけで、確かに女性と肌を重ねる感覚は感じている。
腰を振ると、ハウゼルの女性らしい柔らかさに受け止められる。ハウゼルが快感に喘ぎ、汗を流す。こちらの動きと連動して、彼女の身体が上下に揺れて、その巨乳もぷるぷると揺れて、視覚でも楽しませてくる。
手を伸ばしてハウゼルの両胸を鷲掴みにして、その視覚でみた柔らかさを実際に堪能する。
「ハウゼル……どうだ？　気持ちいいか？」
「あっ、んひっ、やっ、あぁあっ♡　い、良い、です……凄く……んんうっ♡」
「っ、そうか……それは良かった……」
戦闘を相手も感じているようで、レオンハルトは安堵する。
それと同時に、ハウゼルの喘ぎも強くなり、終わりが近いことを察する。するとレオンハルトも、それに合わせるために快感を高めていく。
「いくぞ……ハウゼル……！」
「は、あっ、あっ、はっ、はいっ……きて、来てっ、レオンハルトさん……レオンハルトさん、来てくださいっ……♡」
言葉を交わし、戦闘もラストスパートに入る。

剣の動きが激しくなり、水音が大きくなる。剣も肥大化し、その剣気をハウゼルの鞘に放出するための準備に入る。
その最後の最後に、レオンハルトがハウゼルの耳元で、
「――好きだぞ、ハウゼル」
「っ！　あぁっ、わ、わたし、もっ、レオンハルトさんのことが♡
あっ、あっ、らめっ、大好きっ♡　あっ、だめですっ……いっ――」
次の瞬間、その言葉を引き金にした様に、ハウゼルの身体が強く跳ねた。
「あぁ、あぁぁぁぁぁぁっっ♡」
「っ、くっ……！」
その鞘の強い締め付けとともに、レオンハルトも剣気を放出していく。
膨大な剣気がハウゼルの中に放出されていくが、やはりその快感は強い。
レオンハルトは今、意識を自分の剣に。その剣を熱く強く締め付けてくるハウゼルの中に集中させており、腰を強く押し込んで、彼女の中を愛でいっぱいに染めていた。
そうしてしばらく、熱い吐息を漏らしながらレオンハルトのそれを感じて脱力するハウゼルと、同じ様にハウゼルの上に覆い被さり、僅かに乱れた息を整えるレオンハルトが戦闘の終了を感じながら時間を過ごす。
少し落ち着いたところで、レオンハルトは彼女に覆いかぶさったまま、
「……どうだった？」
「んっ……はい……恥ずかしかったですけど、レオンハルトさんの……凄かった、です……今も、熱くて……これで私、レオンハルトさんの女に、なれたんですね……」
まだ息を荒くしながらも、微笑を浮かべてハウゼルはレオンハルトの体温をうっとりと感じ入りながらそんなことを言う。それを耳にして、
「……可愛いな、ハウゼルは」

「うっ……ず、ずるいです……そんなこと言われると、恥ずかしくて……」
顔を赤くして目を逸らそうとするハウゼルの頬を撫でながら、軽くキスしてやると、ハウゼルもそれを受け入れる。
初めての女性としての幸せ、それもレオンハルトから与えられる、ある意味、もう逃れられないほどの甘美なものを感じて、ハウゼルはたまらずレオンハルトの首に手を回す。
そしてキスを終えると、羞恥を感じながらも、
「……あ、あの……レオンハルトさん……？」
「どうした？」
レオンハルトは半ば分かっていながらも一応は問いかける。するとやはり、
「……私……レオンハルトさんの……もっと、欲しいです……」
「！」
と、ハウゼルは鞘を無自覚にキツく締め付けながらそう言った。
未だ中にあるレオンハルトの剣先にちゅうちゅうと吸い付きながら、きゅうう……と甘く熱く締め付けてくる。
剣にラブラブなキスをされているような熱い締め付けを、言葉とともに食らうと、さしものレオンハルトもそれに反応した。
「やっ、あっ……レオンハルトさんの、中でおっきく……♡」
「……お前が可愛いこと言うからだ」
「あっ、あぁっ♡　ご、ごめん、なさい……んんっ♡」
レオンハルトもスイッチが入ってしまったようで、ハウゼルの細い腰を掴んで引き寄せながら、剣を鞘の奥に向かってぐりぐりと押し付けてやる。
ハウゼルが身を捩って再び快感を感じ始めたところで、レオンハルトは戦闘の二回戦目に突入していった。

――そんな風に、ハウゼルとの行為を終えたレオンハルトは、同じ様な展開で二回戦目に突入しようとしたサイゼルを感じてしまって

いた。
もっとも、サイゼルの方は一度終わると少しは素直になったのか、
『そ、その……もっと、突いて……』
と、いじらしいことを言いながら三回戦目を誘ってきたりもした。
レオンハルトの剣が入ったままの腰を上げて、そのハウゼルのものに似たむっちりとしたお尻をふりふりと振られ、それでいながら中では締め付けられると、さすがのレオンハルトも雄としての情欲が膨らんでしまう。
その尻を掴んで、彼女を後ろから剣でガンガンと貫くと、サイゼルはそれまでの行為で解れ過ぎた鞘を擦られる感覚で喘ぎに喘いだ。
レオンハルトの方も、ハウゼルと合わせてこれで六回戦目なのだが、元々この程度では剣が萎えることはないものの、ハウゼルの後にサイゼルを貫くという妙な達成感を感じてしまい、バツが悪くなって腰の振りを激しくしてしまう。
やはり姉妹を一日で両方相手にするというのは、もう一方が頭にチラついてしまいかねないヤバイ行為だ。女性を真摯に扱うことを信念としているレオンハルトでも、精神的な部分はともかく、肉体の方は誤魔化せないのか、剣がより硬く、やる気になっている気もしてくる。
「やっ、あっ、あっ、それ、いいっ♡」
あのサイゼルがこちらの剣に貫かれて素直に快感を貪ろうとしているのも、彼女の普段の態度を見ていれば妙な可愛らしさを感じるから不思議だ。中々に趣がある。
とはいえ時間も時間。そろそろ終わりにしなければな、とレオンハルトはペースをアップさせる。サイゼルの尻に腰をぶつけ、下腹でそのむっちりとした感触を感じながら、少し自分の剣に慣れてきたサイゼルの鞘を更に自分色に染めていく。
その上で、ふと思うのは、彼女たち二人のことで、
……そういえば、これが切っ掛けで仲直りをさせたりは出来ないか？
と、未だに仲が微妙なサイゼルとハウゼルのことを考える。

最近は別のやるべきことがあるため、やる暇があるかどうかは分からないが、レオンハルトとしては二人は仲良くしておいてほしいものだ。

何しろサイゼルの方が特に最近、こちらに対して相談してくるのだ――〝あ、あの子……最近どうしてる？〟みたいな感じでさり気なく妹の様子を探ったりしてくる辺り、やはり仲良くはしたいのだろう。

サイゼルとの行為中にこんなことを考えると、まるで下心を抱いているようでバツが悪いが、やはり純粋に仲良くなってほしいものだ。いつまでも喧嘩するのを止めようと近くにいるわけにもいかないのだし。

……そう、だな。二人とも、既に内側だ。なんとか解決しなくては……。

内側の者達の問題は、自分が解決すべき問題でもある。メイド達もそうだが、彼女たちを幸せにする覚悟を決めたのだから、どんな小さな問題に対しても向き合わなければならない。

「レオンハルトぉ……んっ、ちゅ、ちゅーして……」

「……ああ。いつでもしてやる」

ならば姉妹仲は自分にとっての課題といえるだろう。何か方法を考えておかなくてはな、とレオンハルトはサイゼルに対してのラストスパートを掛けながら、その問題を脳の片隅に入れておくことにした。

選択肢

――大陸のとある場所。

荒野の中心。そこに転がっているのは、その多くが黒焦げとなった人の群れだった。

「……チッ、つまんねェな」

それを成した魔人レイは、身体から放出した雷撃を抑えると、服のポケットからタバコを取り出しながらその場から離れていく。

吐き捨てた言葉は地面に転がる人間らに向けたものだが、答える者は誰もいない。魔物討伐隊であった彼らは皆一様に、強大な力で殴られ、あるいは雷撃に撃ち抜かれ、絶命していた。

「有名な魔物討伐隊だと息巻いてやがったが……こんなモノかよ」

この分だと、レオンハルトが狙ってるという冒険者も期待出来るかは微妙なところであった。

レイとしては暴れられて、なおかつ歯ごたえのある奴ならそれでいいし、そうでなくともレオンハルトの獲物を先に狩るのは気分的に悪くないものだ。

だからこそ、こうやって人間を狩りまくっているわけであり、既にそれなりの数を相手にして、それをぶっ潰した。

その最中に人里も見つけることが出来たので、そこでも暴れてみたが結局は雑魚ばかり。レイの期待値に届く者はいない。

「無駄足になるか……？」

気まぐれでやり始めたことだが、ハズレを掴まされた様な気分だ。割に合わない。

とはいえここまで来たのだから少しは収穫を得てから帰りたいというのも当然の思いだ。

……次は――あっちの方に行ってみるか。

何となく向かったのは北の方角。この場所よりは緑に溢れている場所であり、森なども多い土地だ。

そこに行って何か適当に暴れることが出来れば、終わりにしよう。そう心で決めたレイは、ずかずかと無遠慮な歩みで屍の山を後にし

た。

森林地帯。そこにある人里を木の上から遠目に眺めるのは、長身の美青年だ。

彼はただ一人、そこに立っている様子ではあるが、それは報告を待っているだけに過ぎない。

程なくして、その場に三つの影が現れると彼は人里から視線を外して彼女達に向き直った。

「――戻りましたか、ガーネット、サファイア、トパーズ。どうでしたか？」

「はい、アイゼル様！　ご報告します！」

「アイゼル様のオーダー通り、人里の中を調べて来ましたが……」

「……あまり、目ぼしい人物は見つかりませんでした」

「ふむ……そうですか……」

赤、青、黄の三体の使徒の報告を受けて、魔人アイゼルは残念に感じたように頷く。

彼は使徒に命じて、隠れ里を調べさせたのだ。人間の中の実力者のことを。

特に評判の高い冒険者を中心に、洗脳を使ったりして情報を集めさせてみたのだが、結果は芳しくないという。

レオンハルトが標的にするような相手であれば、己の求める美しさ。人間の強い意志を見ることが出来るやもしれないと期待していたのだが、今の所、収穫はない。

そしてアイゼルが考え込んでいると、サファイアが、

「いかがなさいますか？」

「……少し、混乱を起こしましょうか。それだけの実力者であれば、人里の問題を放置は出来ないでしょう」

「なるほど！　さっすがはアイゼル様！」

ガーネットの元気の良い声を聞きながらも、アイゼルは使徒達にそう命じる。

人間の冒険者であれば、彼らの安全地帯であり拠点である数少ない人里での問題を放置することはあり得ないはずだし、他人から頼られる可能性も高いはずだ。
「うふふふ……なら、このアイゼル様の第一使徒のトパーズが、とっておきの催眠で――」
「ちょっと！　手柄を独り占めしようたってそうはいかないんだから！　ここはぼくが――」
「いいえ、ここは私がスペシャルな方法でアイゼル様のオーダーをパーフェクトに――」
「誰でも構いませんよ。適当にやりなさい」
三体の使徒がそれぞれのやり方を模索するのを微笑ましく思いながら、アイゼルは再び人里に視線を向ける。
人間をやめてそれなりに年月が経ったが、人間の在り方はアイゼルが知っている頃よりも殆ど変わりはない。
これは百年や二百年、五百年や千年と経てばまた違う景色になるのだろうかと、幾ばくかの期待を込めて、アイゼルは人里で混乱を起こし、その凄腕の冒険者とやらを炙り出してみることにした。

草原地帯。
そこに建つのは、鉄の柵で仕切られた人間の地獄――人間牧場。
日頃多くの人間を家畜として収容し、多くの魔物兵が彼らを飼育、並びに虐待しているその場所では、多くの魔物兵が列を作って門の前に並んでいた。
二万の兵。魔軍の一個軍であるその先頭に立っているのが、この軍の指揮官である魔物将軍だ。
だが彼はあくまでも、魔物兵を指揮する軍隊の将である。
故にこの場で最も偉いのは彼ではない。彼の前に立つ紳士服を着た長身の黄色い異形の魔物こそが、この牧場の責任者である。
「――首尾はどうなっていますか？」
「はっ！　現在、最後の確認を行っているところであります！　もう

後、1、2分だけお待ち下さい！　魔人――ジーク様！」
「では、3分待ちましょう。慌てず着実に準備を行いなさい」
「はっ！　心遣い痛み入ります！」
魔物将軍が敬礼付きで対応するのは、ステッキを手に持ちながら用意された椅子に腰掛けているこの牧場の責任者である魔人ジーク。
彼は、最近魔物達を討伐して周囲を賑わせている凄腕の冒険者を討伐するための討伐隊を派遣することにした。
牧場運営や有事の際のためにと常から預けられている魔軍の部隊、その一個軍を使い、魔人である己もその軍勢の指揮官として同行する。
一個軍が少数の冒険者にやられるとは思えないが、それだけの強敵であるのならいたずらに部下を殺してしまう可能性もある。故に保険として己がいれば万全かはともかく、自分が出来る最大限の仕事であるに違いない。
魔人は自由であり、本来であれば責任というものはほぼ存在しないが、ジークは自分の中の矜持として、部下である魔物兵がやられたのであれば、己の様な魔人が対処するのが望ましいだろうという思考に至ったため、行動を起こした。
気まぐれに近いものであることは否定出来ないが、尊敬するレオンハルトを始めとして、レイやアイゼルも動いている。ならば仲間に協力するのは不思議なことではない。
もっとも、誰かしらが対処するのであればそれでも構わない。平和が保たれたと胸を撫で下ろし、部下にねぎらいの言葉を掛ければいいだけだ。
とはいえ、相手が少数ということもあって、都合よく見つけ出せるかどうかは微妙なところでもある。出来れば早期に解決出来ればいいとは思うが、
「失礼します、ジーク様！　討伐隊の準備、完了致しました！」
「おや、早いですね」
「恐縮であります！」
魔物将軍の気持ちのいい返事を聞いて、ジークは感心する。急かし

すぎるのはよくないと時間を余分に与えたが、かなり余裕を持って準備を完了した。
余裕を持って行動出来ることは素晴らしいことであるし、それに越したことはないのだ。ジークは椅子から立ち上がると、そのまま軍勢に向かって、
「では、出撃しますよ」
「はっ！　――前進せよ！」
「はっ！」
魔物隊長、魔物兵らが声を上げて前進を開始する。
魔人ジークは配下の魔軍を引き連れて、噂の冒険者の捜索を開始した。

紅魔城執務室。
魔人姉妹らとの睦言を終えて最強の魔人が膨大な量の仕事をこなすその場所に、彼の使徒であるリーは報告に訪れた。
その内容こそが、
「それで、報告とは？」
「はっ。どうも、魔人――レイ様。アイゼル様。ジーク様が、噂を聞きつけて動き始めたとのこと」
「何？　あいつらが？」
リーの報告。それは情報部から入ってきた極秘のものである。
レオンハルトが個人的に追いかけているとある五人の冒険者パーティ。
彼らを狙って、三体の魔人が動いたというのだ。
それを聞いたレオンハルトは眉を顰め、二つの感情を浮かばせる。
それだけに複雑な表情となり呟いた。
「……面白い――が、危険だな」
「如何がなさいますか？」
リーの問いかけに、どうすべきかを考える。
あの五人が三体の魔人相手にどう立ち回るかは個人的に面白いと

感じる。
だが、それであの五人が万が一にでも死んでしまえば、それはとんでもない事態となってしまう。
三体の魔人。それぞれ独自に動いているのであれば、何も同時に相手取るようなことはないだろうが、それでも可能性はゼロではない。
憂慮すべき事態だ。常に監視を張り付かせてはいるが、
「……まずはハンティに連絡。魔人と対峙する可能性があることを伝え、場合によってはプランBで対処しろと伝えろ」
「畏まりました。直ぐに遣いを出します」
リーが恭しく頷く。こうしておけば、万が一の時もハンティがなんとかしてくれるはずではあるが、
……一応、保険は掛けておくか。
そもそも誰かしらの魔人と遭遇した時点で命令してしまえばいい話かもしれないが、アイゼルやジークはともかく、レイが言うことを聞くかは微妙なところだ。あれは、自分のことをあまり良く思っていない。頻繁に突っかかってくる面倒な相手なのだ。
故に、レオンハルトはその場から立ち上がろうとし――しかし横の重みに腕を引っ張られた。
それは、
「む……行ってしまうのか……？」
と、残念そうな表情を浮かべるのは、こちらの左腕にぴったりと抱きついている和服姿の美女。
狐の耳や尻尾を持つ二代目妖怪王――お町だ。
こちらに抱きついたままの彼女に対して、レオンハルトは僅かに目を細めると、息を吐いて、
「……お町。俺はこれから外に出る。だから――」
「なら、我も付いてゆく」
ぎゅうっと腕の力を強められてしまう。
その際に、その胸元にある爆乳がたっぷりと押し付けられてこちらの腕が極上の感触に包まれるのだが、
「……今回は仕事だ。それもかなり大事な、それでいて危険な仕

事だ。出来れば大人しく、待っていてほしいんだが……」
その感触を感じながらも努めて冷静にそう言ってみると、
「……分かった。だが、お願いがある」
「お願いか……内容は？」
何となく、読めるような気がしながらも、一応はお町に向かって問いかける。すると彼女は、こちらを見上げながらも僅かにその白い頬を紅潮させ、
「……今日は、我と一緒に寝てほしい」
「……それは……」
「駄目か……？」
「……」
お町のその言葉に、レオンハルトは再び深く考え込む。
それは明らかに好意を持った女の言葉であり、寝て欲しいという意味もさもありなんといった感じだ。よくあることなのでさすがに分かる。
そして無論、好意を持たれ、なおかつ自分が認める相手であれば、それは好意を受け取り、それを示すことは何もおかしなことではない。覚悟も出来る。
だが、お町相手だとまた別の覚悟も必要となるもので、
……少し、先のことを考えなくてはな……。
ある意味でどうしようもない避けられないことではあるが、考える必要だけはある。
そもそもこうやって拾い、道をつけた時点で、彼女の行く末にも責任を持たなければならないのだ。
それに、今更放り出すことは出来ない。それはあまりにも彼女が不憫だ。更に不幸にしてしまう可能性がある。
今の、ここの彼女にとって、己が考えるような心配は微塵も関係ないのだから。
そんなことを言い出せば怒ってしまうだろう。
となれば受け入れるのみだが――それはそれとして、彼女の先を考える必要がある。

これはレオンハルトの目的のためにも必須。今までにも似たようなことは幾つもやってきたが、今回もそれと同じだ。
もっとも、今更遅い可能性すらあるが、それに関しては考えても意味がない。
自分には自分の出来ることしか出来ない。最善を尽くしていくことだけが、己の選ぶ道だ。
ならば、後は自分次第だと、レオンハルトは思考を終えると、
「……いや、構わない」
「！　ほ、本当か？」
「ああ、一緒に寝ても構わないぞ」
と、お町の頭を軽く撫でてそう告げてやると、お町は目尻を下げて、
「ん……んぅ……心地よい……しかし……そうか、遂に――」
まるで本当に狐か何かのように頭を手に擦りつけてきた。
……随分と懐かれてしまったな……。
あまり特別なことをした覚えはないのだが、懐いてしまったのならしょうがない。
とりあえずそれだけの覚悟を決めると、レオンハルトはあくまでも保険として、己も現場へと向かうのだった。

とある人間の隠れ里。
寝泊まり用の宿場の一室にて、五人の冒険者はそれぞれ持ち帰ってきた情報を共有し、話し合っていた。
「よし、なら一度話をまとめようか」
そう言ったのは、真面目な様子で椅子に腰掛けて、一人ひとりを見渡しながら言った戦士ブリティシュ。
このパーティのリーダーであり、自然とそういった場をまとめるような雰囲気となる彼の言葉に、仲間達が引き続き視線を向ける。
彼が話す内容は、ここ最近で起きている事件や重要そうな情報のまとめだ。
「まずは……ここから少し離れた場所にある隠れ里の話。なんでも、

人々が徒党を組んで隠れ里を占拠してるみたいで、その対処の依頼が出ている」
「そうらしいね。何でも、魔法らしい形跡もあるとかで、非常に興味深い事件だ」
と、補足するように口を開いたのは、魔法使いホ・ラガ。彼が持ってきた情報、事件がこれであり、どうにも怪しい部分が幾つもあることと、人里での問題はそこに住む人々の安全に関係してくるものであるため、力になれるのであればこれを達成するのも良いことだと思う。
次に、
「二つ目に、この近くの森かな？　何でもそこにある遺跡は、古くからある難易度の高い迷宮で、その最深部にはとてつもないパワーのあるアイテムがあるという。これはカフェが持ってきてくれたんだよね？」
「あ、うん。おじいちゃんおばあちゃん達の治療をしている最中にね、お礼にって教えてくれたの」
カフェは普段から、隠れ里を訪れる度にそこにいる怪我や病気で苦しむ人を治療してあげたりしている。治癒の神魔法では治せないものも多いが、痛みを和らげることは出来るし、何もしないよりはなにかしてあげたいというカフェの優しいところから出てきた情報だ。
これは、自分達にとってもかなり旨みのある有力な情報だ。魔人を倒すため、強力なアイテムの存在は役に立つ可能性がある。魔人を倒す方法を模索する自分達にとっては無視出来ないだろう。
だがその次は、
「それと最後に……この近くで、魔人が暴れているという話だね」
「一応は、強い魔物とぼかされてはいましたが……」
「ま、十中八九魔人だろうな」
日光とカオスが続けてそう補足する。
彼らが持ってきた情報こそが、魔人が暴れているという差し迫った脅威のことだ。
ここらで人間を狩っているという魔人。もしこれが本当であれば、

何らかのアクションを取らなければならない。逃げるのであれば直ぐにこの辺りから離れた方が良いだろうし、一度、魔人という相手がどの程度のものなのかを見てみるのもありかもしれない。
何しろ実際に魔人を見たことあるメンバーはパーティ内には二人だけ。日光とカオス以外は、魔人を見たことがないのだし、その二人にとっても強さは未知数な部分が多い。
今の戦力でどれだけ相手出来るのかを見るのも悪くない。当然、敵わなかった時のために、逃げる手段は確保しなければならないが、
「……何にせよ、今からどうするかだね」
ブリティシュはパーティメンバーを見渡す。
皆、それぞれどうしたいか、考え込むかのような表情だが、それは当然のことである。
今を生きる冒険者にとって、世界というものは厳しい。たった一つの間違いで死ぬことだって珍しい話じゃないのだ。慎重に慎重を期すのは普通のことである。
だが、ある程度のリスクを取らなければ、何も得られないことも多い。故に冒険者は、自分の身の程を弁えながら、そのバランスを考えて冒険に出なければならないのだ。
故に彼らは、考えた上で話し合い、結論を出す。
魔人を倒すために集まったパーティの選択は――

魔人との遭遇

時刻としては、昼前といった頃。
その日のうちに出立したブリティシュら、冒険者のパーティは、森の中を歩いていた。その先頭を歩くカオスが、先を見ながらこう口にする。それは、
「さて、この先が――遺跡か」
その言葉は彼らが遺跡の探索を選んだ証拠だ。
だが、正確には優先することにしたのが、遺跡の探索というだけであり、もし探索が終わって余裕が残れば、人里の依頼を受けに行くこともあるだろう。
しかし彼らはあくまでも、魔人を倒すために冒険している。
いつもならともかく、有力そうな遺跡の探索を後回しにすることはしなかった。
日光などはお人好しなので人里の問題を憂いてはいたが、その人里の占拠というものの緊急性が意外と低く、更には遺跡とその人里の距離がそれなりに離れていることもあって、先に遺跡に行くことにしたのだ。
森の探索は慣れているのもあって、それほどの時間はかからない。慎重を期す必要はあるが、熟練の冒険者である彼らにとっては、それほど難しいものではないのだ。
故に彼らは、程なくしてその遺跡の前に辿り着いた。
全員の視界に入口が映ると、彼らは一息をついた。
周囲、魔物の気配がないことを確認しながらもカオスがその遺跡の入り口を先行して検分し、
「……見たところ、普通の遺跡って感じだけどな」
「しかし難易度が高いというのは本当かもしれないね」
と、告げたのはホ・ラガ。彼は周囲に転がる人間の痕跡や、遺跡の中にいるであろう魔物の気配を感じ取ったがゆえにそう口にする。
そして他の皆も似たような感想を抱いたのか、遺跡を眺めながら真面目な顔となる。

幅が広く、高さのある入り口は、まるで大型の魔物が出入りするために作られたかのようで、かなり大きい。
しかしそれだけならダンジョンとしては珍しいものではないため、彼らは気を引き締めながらもそこまで神妙に捉えてはいない。
自分達の強さに対しての自覚は正しく持っている。今更難易度の高いダンジョン如きで躓くことはないし、そうあってはいけない。
何故なら自分達は、魔人を倒すことを目標にしているのだ。この程度で詰まってしまっては、そんな目標は到底叶いっこないだろう。
しかし心配性なカフェなどは、杖を少し強めに握りながら露骨に気を張っている様子で、
「強力なアイテム、ちゃんとあればいいんですけど……」
「うん、そうだね。噂が真実であることを今のうちに祈っておこうか」
そんなカフェを、ブリティシュが軽く微笑を浮かべながらリラックスさせるように声を掛ける。パーティのリーダーとして周囲の事はそれなりに見ていることを証明する行いだ。
だがそれを見てカオスなどは、カフェをからかうように、
「……ま、何もなくても修行くらいにはなんだろ。期待しないで行くか」
「ちょっと！　祈っていこうって時になんてこと言うのよ！」
「でも爺婆の情報だしな……」
「……カオスだっておっさんの癖に」
「ちんちくりんと違って大人だからな」
「むぅ……ああ言えばこう言うんだから……」
カフェが頬を膨らませてカオスを半目で見るも、カオスは全くダメージを負ってないようで遺跡の入り口を調べている。罠解除や索敵はレンジャー職である彼の仕事であり、特にダンジョン探索ともなればその仕事量はかなり多い。
ダンジョンの中を先導して進むのもレンジャー職であり、パーティ内の斥候として動く必要がある。
どれだけ腕っぷしが強い戦士や、高レベルの魔法使いであっても、ダンジョン内の罠などに嵌まればその実力を発揮することが出来ず

にダンジョン内で息絶えてしまうことだって多いのだ。レンジャー職の働きぶりによって、ダンジョン探索の成否が分かれるといっても過言ではない。
　他の職、ガードやヒーラーなども重要であることは変わりないし、前衛や後衛の戦闘職も魔物相手の戦闘が必要不可欠な以上はいなくてはならない存在だが、ダンジョン内ではレンジャー職の活躍の場は特に多い。
　魔物が多い今の時代では特にだ。
　故にカオスはカフェと空気が弛緩するような会話を行いながらも、気を張っており、
「ん……？」
　不意に、何かの気配を感じて振り返った。
　しかし一瞬後には何も感じず、
「？　どうかしたのですか？」
「いや……今なんかいたような気がしたが……気の所為みたいだ」
　カオスの様子を見て、声を掛けてきた日光に問題無しと返す。
　何か鳥か何か、動物でもいたのだろうかとカオスはそれを気にしないことにしながらも、皆に向かって声を掛ける。
「よし、大丈夫そうだ。進むぞ」
「うん、ありがとうカオス。――それじゃ、皆、いつも通りに」
「ああ、分かっているよ」
「準備は出来ています」
「ふぅ……うん、大丈夫」
　ブリティシュの声掛けを合図にして、彼らが隊列を組む。
　前衛のブリティシュに、後方警戒のために日光が最後列。その間にカフェやホ・ラガが入り、先行するのはカオスだ。
　冒険者としての布陣を完成させて、五人は遺跡に足を踏み入れた。

――五人が足を踏み入れた遺跡から離れた場所。
　森の中にある巨大な木の上、その太い枝に座り込むのは、黒髪のカ

ラーだった。
「あっぶな。もうちょっとで気づかれるところだった。あのシーフ、やっぱり結構な凄腕だね」
遠隔目玉、という遠くを覗き見るための魔法を行使しながら、相手の実力に感心した声を発するのは、最強の魔人の使徒――ハンティ。
彼女はあの五人を監視するという極秘の命令を受けたため、その命令をこなし続けている最中であった。
理由も分からずに監視する任務はハンティにとっては面白みのない微妙な仕事ではあるのだが、彼女が一番こういった任務には向いているということで残念なことに命令されてしまった。
元々は自然の中で、森の中を得意とする種族なだけあって森の中を移動は軽快で音もない。
加えて彼女独自の瞬間移動魔法が相手に存在を悟らせることを許さないのだ。
だが彼女としては、
「……人間にしては、結構面白そうな連中なんだけどねぇ……」
戦えたらそれなりには愉しめそうだとは思う。
それは命令違反であるため、難しいことだが、強者に興味が湧いてしまうのは当然のことなので思うだけならしょうがない。
命令違反で戦闘を禁止にでもされるのは嫌だし、さすがに人間相手に本気でちょっかいを掛けるのも悪い気はする。
というより、もっと生き残って成長してくれた方が嬉しい。
まだまだ強さは伸び盛りだろうし、監視任務とかが解かれたら、戦いに行ってみるのも面白そうだ。
勿論合意の上でやるし、手加減だってする。反則級の強さを持つ焼き肉ドラゴンや女誑しの魔人とは違うのだ。いきなりぶん殴ったり、魔法をぶち込んでもいいのはそういう頭のおかしい人外連中だけ。ちゃんと分別は出来ている。
最近は遺憾なことに、己を脳筋とかゴリラ扱いする奴が多いが、自分は普通だ。
何しろ殺しは嫌いだし、誰彼構わず勝負を挑むほどではない。

あくまでも健全な戦いを楽しみたいだけだ。死にかねないくらいの魔法をぶち込んだり、死にかねないくらいの攻撃を打ち込まれても、死なないならセーフ。スポーツのようなものだ。

そういう意味で先程挙げた連中は、どれだけ全力で、普通の人間や魔物にやったら、跡形もなく消し飛ぶか、ミンチになりそうな魔法を使ったとしても死なないから気兼ねなく楽しめる。

最近だと死なない枠に、はぐれホモ鳥が追加されたし、そこそこやれる相手も増えてきている。成長が楽しみな、主の娘や、二代目妖怪王、後は一応自分や同僚の弟子、助手扱いの子もいる。ハンティとしては楽しい限りだ。

そういうことを考えている時だけは、今の世の中の暗さを忘れられるし、野良の人間や牧場の人間達を憂わずに済む。しかしそれも、

「後、五百年か……」

人間を地獄に叩き落とした魔王の治世もいつか終わる。

１０００年。後、５００年という年月さえ我慢すれば、否が応でも時代というものは変化していくのだ。

だが、

……今の人間にとっては、あまり意味のないことだね。

口にすることを憚られて心で思う。

何しろ、この五百年経てば、などという言葉は、長命種であるが故に口にできる言葉だからだ。

１００年と保たずに死んでしまう人間にとっては、そんな言葉は慰めにもならないだろう。

かといって人間が出来ることなんてたかが知れている。

中にはとんでもなく強い人間が生まれてくることもあるが、それも結局は千年に一人といった頻度で生まれるような特別な存在。英雄でしかない。

そしてそんな英雄であっても、魔人や魔王を倒せずに終わるのだ。ただ少し強い程度の人間が出来ることなんてない。

厳しいがこれが現実。ハンティはそれをよく分かっている。

故に人間の犠牲を減らすためには、己の主がやっているように、魔

物側からそれを抑制していくしかない。
人側に立ったところで出来ることなどたかが知れている。その活動を無意味という気も、馬鹿にする気もないが、事実として、大した数の人間を救っていないのも事実だ。
冒険者や魔物討伐隊といった連中の活動も悪くないが、根本的な解決に至ることは絶対にない。
魔物にもある程度の情を持った自分の事情などを無視したとしても、人間側に立つことの非効率さは認めざるを得ないのだ。
だからこそ、彼らのような何か希望を持って立ち向かおうとする人間達を見ると、応援したくもありながらも、哀れに思ってしまう。
冷静な頭は、彼らのやることを無意味だと判断してしまうのである。己の主などは、あれで人の意志に期待している節があるが、そこまで期待は持てない。
実際にそこまで到達したのなら、こちらとしてもテンションは上がるが、基本的には現実主義。冷静な目で見分けてしまうのが己の癖だ。
ただまあ、個人的な趣味としてその強さがどこまで行くかという興味はあるのだが、
「――っ、と。この気配は……」
と、不意にハンティは思考を止めて、身体を遺跡とは反対方向に向ける。
止めざるを得なかった、とも言う。それだけの存在が、この森に入ってきたのだ。
自分達と同種。それでいて、それよりも上位の存在の気配。つまりは、
「……あー、連絡にあった相手か。それも、一番面倒な奴が……」
ハンティはその、ビリビリとした荒っぽい気を感じて、面倒だ、と息を吐く。
これだとそれとなく帰ってもらうのも難しいかもしれない。そう思い、ハンティは笑みを浮かべた。
「……まぁ、もし危なくなったら、やるしかないよねぇ」

不敵な、口元をニヤリとさせる様な笑みを浮かべて、ハンティはその来訪者を気配を隠した状態で覗き見る。
そこにいた、タハコを口に咥えたチンピラを見て、ハンティは己の血が沸き立つのを感じた。

遺跡の中は、それなりに風化していた。
古い遺跡である証拠。それを感じながらも、五人は次々と奥に進んでいく。
迷宮のようになった通路を進み、その道中にある罠を先導するカオスが時折解除しながら、そしてその道中に現れる魔物を皆で対処しながら先を行く。
もう十階層は進んだだろうか。一応マッピングは手が空いていたカフェが行ってはいるが、全容は未だ分からない。
ただ、大体の構造は見えてきており、
「これ……地下に埋まったタイプの遺跡？　ですかね」
「地下に埋まったタイプ？　それって……」
「ああ、なるほど。そういうことか」
ブリティシュがカフェの言葉に反応したかと思うと、先んじてホ・ラガがカフェの描いた地図を見ながら得心したように頷いた。先を行くカオスや背後の日光が疑問符を浮かべ、
「どういうことですか？」
「まあ降りてるっぽいし、地下は地下だろ。それの何がおかしいんだ？」
「いや、そういうことではなくてね。簡単に言うと、地上に在った遺跡が、地下に埋まってるような形になっているということかな」
「はぁ？　なんだそりゃ」
ホ・ラガの説明に理解不能といった様子でカオスが疑問する。だがその疑問にも、ホ・ラガは頷き、
「おそらくは、なんらかの理由で地面に埋まってしまったのだろう。巨大な地震か何かで地割れが起き、そこにそのまま沈下してしまった

のだと推測出来るね。思い返してみれば、周辺の地形も、少し荒れ気味ではあった」
「つまり……どういうことです？」
　日光が、結局はどういうことなのかと、再度ホ・ラガに問いかける。遺跡の謎でも解けたのかと。しかし、ホ・ラガは息を付くと、
「まぁ、だからどうということはないがね」
「えっ、ないの？」
「分かるのは、ここがかなり古い遺跡だということくらいか」
「役に立たん情報じゃな……」
「……カオス。サポートが必要そうだね。良ければ私が君の後ろに布陣しよう。そう、すぐ後ろに――」
「――と、思ったがよくよく考えたら古い遺跡ということはそれだけ儂らが求める未知のアイテムがあるということじゃな！　さあ、先に進むぞ！」
「またカオスが墓穴掘ってる……」
「ん？　掘るのは私だが――」
「後ろがゾワゾワするからやめてくれお願いします！」
　相も変わらず遠慮ない物言いをするカオスを、ホ・ラガが脅している。カフェの呆れた様子の言葉にすら反応し、カオスがかなり距離を取って先導し始めたが、さすがにカフェのせいではない。日光などは、またしても意味が分からなかったようで、〝掘るとは……一体……？〟と疑問し始めてるが、知らない方が幸せなことであるのは確かだ。
「……まあ、カオスの言う通り、それだけ古い遺跡であるなら期待も出来る。気を引き締めて進もう」
「そうですね」
　ブリティシュの場をまとめるような発言で、一応はその場は収まる。
　それからも一行は時折、会話を挟みながらも、警戒して先を進んでいくと、程なくして、
「――ん、どうやらここが最深部のようじゃな」

「え……って、うわ、本当だ。しかも結構広い」
と、先導するカオスが不意に手を上げてそれを示した。
広間の様な場所に出た一同は周囲を見渡しながら、その如何にもといったような部屋を調べる。
だが調べるまでもなく、前方には、
「宝箱がありますね」
「ふむ、如何にもといったものだが……」
「こ、これはもしかして本当に……」
日光やホ・ラガ、カフェが僅かに期待の様子で部屋の中心にある宝箱を見つめる。
ブリティシュも同じ様に宝箱を見つめた。冒険者であれば、宝箱は期待してしまうものではあるが、自分達の目的を考えると、ここまでそれらしい感じの宝箱が見つかるとなると、それは少し真剣な、息を飲むような雰囲気となってしまう。
おちゃらけていたカオスも、その宝箱を見て、真剣な眼差しで罠の有無を調べると、
「……罠はないみたいだ。ほら、ブリティシュ。開けてみろ」
「……分かった。それじゃあ――」
と、ブリティシュも軽く息を入れて覚悟をしながら、宝箱の前に立つ。
皆もそれを神妙に見守る。
そんな中、ブリティシュはゆっくりと宝箱に手を掛け、そのまま開いていくと、
「！　これは――」
「一体何が――」
「……え？」
「これは……」
「……」
ブリティシュが宝箱の中から取り出したのは、確かに宝ではあった。
だがそれは、黄金でできたひまわりのような形の、

「――――像？」
黄金の像であった。

黄金の像。
それを見たパーティの反応は、はっきり言って微妙なものではあった。
というよりも、空かされたかのような気持ちであり、
「強力なアイテム……には見えないですね……お金にはなりそうですけど」
というカフェの言葉が全てではある。だが一応、ホ・ラガなどはそれを見て首を傾げながら、
「魔法の力も感じない……が、不思議な形をしてはいる。一応は持ち帰って調べてみた方が良さそうだ」
「そうだね……使い方が分からないだけ、という可能性もあり得る」
ブリティシュも冷静にその発言に同意する。しかしカオスなどは露骨に溜息を吐き、
「はぁ……ここまでやって来て収穫がその良く分かんない像一つか。割に合わないな」
「何でもないアイテムだと決めつけるのは早計ですが……その気持ちも分かります」
それなりの高難易度のダンジョンに潜り、それらしい宝箱から出てきたのがただの像というのは、少し気落ちしてしまうのも無理からぬことだ。
勝手な想像ではあるが、誰しもが分かりやすいアイテムだと勝手に思っていたのだ。
例えるなら、伝説の武器や強力な魔法具などだろうか。故にもっと分かりやすい形をしているものだと思っており、特にカオスや日光などは明確に魔人を殺し得る力を求めているだけあって、少し残念さを共有している。カオスが首の後ろに手を回しながら、
「あーあ。もっと伝説の剣とか分かりやすいものの方が良かったんだ

けどなー……」
「……私は、刀の方がいいです」
「いや、それはどっちでもええわい。単純ならそれで――ん？」
「どうしたの、カオス？」
　上を見上げて、何かに気づいたようなカオスに、カフェが声を掛ける。するとカオスは訝しむような表情で上を見つめ、
「……いや、なんか天井に絵が描かれてるから気になって……なんだこりゃ」
「えっ？　あ、ほんとだ」
　カオスの言う通りにカフェを筆頭に皆が天井を見上げる。
　するとそこには、カオスの言う通り、絵が描かれており、
「何かの儀式や神事に見えるような……？」
「……」
「そうだね……ホ・ラガは何か気づいたことはある？」
　ブリティシュが日光の呟きに同意しながらも、黙り込んで天井を見つめるホ・ラガに声を掛ける。するとホ・ラガは少し間を置いて、天井を見つめたままで、
「いや……まだちょっと分からない。しかし、手掛かりにはなりそうだ」
「なら、調べて貰っても構わないかな？」
「ああ、勿論だとも」
　と、ブリティシュの頼みを受けて、ホ・ラガが魔法でその天井の模様を記録する。写真の様なものを作る研究用のオリジナル魔法らしいが便利なものだと思いながら、
「これで、帰ってからだろうがいつだろうが調べ、確認もしながら思慮に耽ることが出来る。もう大丈夫だよ」
「うん、それなら出ようか。皆は大丈夫かい？」
「あっ、うん。へーきよ」
「問題ありません」
「まあ、こんなところに長居するのもなんだしな」
　一応は皆が疲れていないかの確認を取る。皆の体力に問題がない

ことを確認し終えると、ブリティシュは金の像をホ・ラガに預けつつ、迷宮からの帰路についた。

時刻は昼過ぎ。もう後1、2時間と経てば夕方に差し掛かろうという時間帯に、ブリティシュらは遺跡から抜け出すことに成功した。
「あー、ようやく地上か……」
「いつも苦労を掛けるね、カオス」
「全くだ。これはもう、帰ったらしこたま楽しまないとな、ぐふふ……」
ブリティシュの労いの言葉に、カオスがいやらしい笑みで答える。カフェが半目になり、
「またそういうこと言う……」
「全く……」
カフェだけでなく、日光も呆れ果てる。よくもまあ、迷宮から出て直ぐにそんなことを口に出せるものだと。
しかしその反応にカオスはおちゃらけた様子で、
「だって儂、いっぱい働いたからの～。少しは癒やしがないと――」
と言ったところで、カオスの言葉が止まった。
不意に言葉だけでなく、動きも止めたカオスの反応に、皆が疑問符を頭に浮かべるが、程なくして皆もその原因に気づく。それは、
「――この気配、は……？」
「……異様な気配だが、これは――」
「な、なんかピリピリしてる気が……」
「っ……！」
「……」
皆が、自然と居住まいを正し、武器を構え、警戒体勢を取る。
冷えた空気、静寂に包まれた森の中。その中に、草木をかき分けるような音だけが響く。
確実に何かが近づいている。その事実を、皆が悟った瞬間、
「――――っと、やっぱり誰かいたか」

不意に、人の声が響いた。
それを発したのは、
「え、あ、あれ……？　にんげ……ん？」
カフェが言うように、森の中から現れたのは、前髪で目元を隠した青年だった。
姿形が人間の、少し柄は悪そうだが、普通の男に見える。
しかしその僅かに感じる異様な気配だけが、違和感として彼らを襲い、
「おい、お前ら」
「っ……なんだ？」
不思議と威圧感を感じるその声かけに、ブリティシュは怯みながらも応じる。
その髪の奥からは、雷光を思わせる鋭い暴力的な視線を感じるため、皆とアイコンタクトを取りながらこちらからもじっと相手を見つめる。
「お前ら――冒険者か？」
「……そうだ」
男の質問は、冒険者かどうかというもの。
それにブリティシュは頷く。武器は構えたままだ。
だが、その戦闘態勢というものを殆ど気にした様子もなく、しげしげと眺める相手は、更に値踏みするような視線となり、
「ほぉ。もしかして……当たりを引いたか？」
「……当たり？　何のことだ」
言葉の意味が分からずにこちらからも問いかける。しかし相手はそれには応えず、無視した様子で、
「いや、分かんねェか。とりあえず、やってみねぇコトには」
「……お前は一体……？」
ああ、とそこで男はようやく言葉を返した。
そして同時に、首元にあるバックルから、徐ろに櫛を取り出す。
そして大股で、無造作、無遠慮に一歩前に足を踏み出すと、その櫛で前髪を掻き上げながら、彼は言った。

「俺ァ――――魔人レイだ」
「っ!?　なに……くっ――!?」
「ブリティシュ!?」
不意にその場に充満するのは、レイと名乗った男から立ち昇る強烈な存在感。
そして、バチバチと鳴り響く音と稲光。
相手から最も近くにいたブリティシュはその余波で僅かに怯み、
「魔人、だと……!?」
「魔人……っ！」
カオスや日光が驚愕しながらも、眉間に皺を寄せ、憎々しげに強く相手を睨めつける。
そして怯えた様子のカフェと、まだ冷静なホ・ラガは、
「こ、これが……魔人……!?」
「……ふむ。さすがに、肉眼で見るのは初めてだが観察している余裕はない……少しマズいか」
脅威を認識して、後方にジリジリと後退っていた。
一同が初めて対峙する魔人。レイと名乗った魔人は、その身体から見ているだけで強烈な威力を持つことが分かる電撃を発生させ、先程までは下ろしていた前髪を完全に掻き上げ、その雷光の様な眼差しをブリティシュらに向けて告げる。
「お前らに恨みはねェが……個人的な狩りの最中でな。運が悪かったな。お前らは――」
と、レイは己の身体から放電し続ける電撃によって周囲の空気を青く染めていき、その暴力的な気を五人に向かって完全に解放すると、
「――――ここで叩き潰す！」
魔人レイが、啖呵を吐いて襲い掛かってきた。

ＶＳ魔人レイ

踏み込みと共に高速で突っ走ってきた魔人レイ。
それを見て、五人は即座に動いた。
魔人相手の戦闘は初めてで、そもそも対峙すること自体が初の事。予想外ではあるが、それを言い訳には出来ない。
襲いかかってくる相手への対抗として、誰もが布陣を整える。ホ・ラガやカフェは後方に。カオスが魔人の後ろに回るように横へ走り出し、日光とブリティシュは前衛で相手を待ち構える。
その中で一番前に、ガードとして盾を構え、敵の攻撃を受けようとしたブリティシュは、なんとか相手の攻撃の軌道を読み取った。だが、
……速い!?
相手は素手。しかし魔人だ。
殆ど一歩か二歩にしか見えない踏み込みで魔人レイはブリティシュに近づき、拳を振りかぶると、
「オラァッ!!」
「っ、がぁぁぁぁぁっ!?」
ブリティシュは拳が盾にヒットした瞬間に、そこから流れる衝撃と雷撃に、激しく身震いしながら吹き飛んだ。
「ブリティシュ!?」
「今のは……!」
カフェや日光などが驚愕する。ブリティシュは盾での防御を辛うじて成功させたが、その盾の上から吹き飛ばされ、１０メートル程後ろに下がってしまった。
体勢こそ崩さなかったものの、ブリティシュは接触により明らかにダメージを受けており、
「はぁっ！」
日光が、吹き飛んだブリティシュが復帰するまで前衛を保たせるために刀を振り下ろす。
しかし対するレイはそれを軽く腕を差し出すことでガードとした。

それだけで、彼女の剣は不思議な力で防がれた。
「なっ、っっっ!?」
その直後に、日光はブリティシュと同じ様に身体に来た衝撃に対して身を翻す。カオスがそれを見て、
「日光!?」
攻撃が防がれたことと、その結果に強い疑問を抱く。
だがその結果に対する答えはすぐに出てきた。
魔人が全身から放電し続けている。まずはそれが原因だろうと。
触れただけでも、雷撃がこちらの身体に伝わってダメージを与えてくる。
それは相手の攻撃と防御、両方に使える厄介な代物だ。
そもそも近接攻撃をする際には武器を当てる必要がある以上、その雷撃からは逃れようがない。
故に魔人の背後に回っていたカオスは、その短刀を当てることを躊躇った。するとその間にホ・ラガが遠距離から、
「白色破壊光線!」
「!」
最上級魔法の白い光線が、魔人レイに向かって、そのまま直撃する。
確かに、遠距離攻撃であれば雷撃は食らわないはずだ。
だがその攻撃はやはり、
「そんなもんが効くかよ!!」
「きゃあっ!?」
「カフェ!」
レイは構わずに雷撃を放った。
当然の様に無傷。ブリティシュや日光へのヒーリングを行っていたカフェの方に雷撃を飛ばす。
その攻撃は、戦闘開始時に張っていたバリアによってなんとか防ぐことは出来たが、そのバリアも一発で砕け散ってしまう。
「くそっ……攻撃が効かねぇ……!　化け物が……!」
カオスが悪態をつきながらも、幾つか持っていた短刀を投擲して攻撃するも、その全てが何かに弾かれる。

その様子を見て、ホ・ラガは口を開いた。彼も余裕がないのか、移動しつつ冷や汗を僅かに流しながら、
「やはり……皆聞け！　あれが前に一度告げた〝無敵結界〟だ！」
「っ、やっぱそれか……！」
無敵結界。その語句は、人間にとっては絶望を与えるものだ。
「あらゆる攻撃はあの無敵結界に弾かれる！　故に逃走が賢明だ！
あれでは――」
「へぇ、知ってる奴もいんじゃねェか……！」
「っ！」
「ホ・ラガ！」
「させない……！」
一瞬でホ・ラガに向かって踏み込み、拳をアッパー気味に振りかぶったレイに対し、復帰したブリティシュが再び盾を構える。
しかしその結果は火を見るより明らかで、
「ぐ、がっ、はっ……！」
レイの拳を受け止めた瞬間、高圧の電流が流れ、更に尋常ではない膂力による打撃で宙に吹き飛ぶ。遺跡の入り口の壁に激突し、肺の中の空気を強く吐き出したブリティシュだが、そのまま地面に向かって足をつけると、今度は怯まずに再び前へ向かっていき、
「まだ、だ……！」
「……ハッ！　雑魚は雑魚だが、人間にしては体力あるじゃねぇか……！」
口元を僅かに笑みで歪ませ、レイが放電を激しくする。
やっぱ当たりか、と口の動きで言葉を作り、
「それでこそ、潰しがいがあるぜ……！」
言って、レイが前に跳躍した。
それはガードであるブリティシュに向かったものだが、その攻撃をブリティシュは全力で身を翻すことで躱す。
だがその結果、レイの雷を纏った拳は地面へと突き刺さり、振動した
「きゃっ!?　ゆ、揺れて……！」

「っ、どんなパワーだくそったれ!?」
皆がその衝撃にふらつき、そこから跳ぶようにして攻撃の余波を避ける。
レイが殴った地面は拳によって強く砕かれ、陥没し、周囲にバチバチと雷雲を撒き散らした。
遺跡の壁や周囲の木々が放電する雷によって幾つも破壊される。
雷の威力はその雷雲に比例するようにますます上昇し、雷撃を纏った拳は激しさを増していく。
荒っぽい戦いだが、喧嘩慣れしているかのような技術があり、その攻撃は確かな致命を纏ったものだ。
「おっ、らあああ!!」
「っ……くっ、これ、では……!」
「マズいな……!」
「どうするかね、ブリティシュ!?」
レイの攻撃に対して、まともな対応が殆ど取れずに、一同は苦悶の声を漏らす。
そもそも激しい放電によってまともに近づいて攻撃をすることすら出来ない。遠距離からの攻撃も無敵結界によって弾かれるし、相手の驚異的な身体能力によって徐々に追い詰められていくのみだ。
否が応にも、五人は魔人の強さを思い知るしかない。
これが魔人。大陸を支配する絶対者達の力。
その異常ともいえる力に、人は屈するしかない。
五人の目の輝きは消えていないものの、現実を目の当たりにしたことで僅かに表情を歪めてしまう。
そんな中で、ホ・ラガにどうするかの問いを送られたブリティシュは、雷撃のダメージによって息を乱しながら、
「っ……撤退、だ……!」
リーダーのその言葉に、他の４人は異論を挟まなかった。
彼らが魔人を倒すために旅をしているとはいえ、今はまだ魔人には敵わない。
これは魔人を倒す方法を求める旅でもあるのだ。

そのための手掛かりを得て、これからもそれを模索するためにも、今は逃げて生き延びなければならない。
だが、
「逃がすと思うか!?」
「くっ……!」
この眼の前の魔人レイから逃げ延びるのは、それだけでも至難の技だ。
何かしらの隙や足止めを行わなければ、逃げることは叶わない。
雷のような激しさと勢いを持つ魔人は、力のままに暴れまわっており、その攻撃からなんとか逃れ、致命を避けるだけでも精一杯だ。
ガードのブリティシュなどは先程から雷撃を何度も受けて息を乱している。
カフェも何とかヒーリングを掛け続けて皆が動けるようにサポートしているが、それでも回復が追いつかないほどだ。
攻撃出来るのもホ・ラガくらいであり、カオスや日光は近接攻撃を封じられてしまったもので、魔人を引きつけることしか出来ない。
冒険者の中では最強と称され、人間や通常の魔物相手では無双することが可能な五人は、一体の魔人相手にまるで歯が立っていなかった。
拳の軽い一振りで巨大な木をへし折り、岩や壁を砕き、地面すらも割り砕く。彼ら五人もまともに攻撃を喰らってしまえば絶命は不可避に近い。
更には無敵結界によって攻撃は防がれる。どうしようもない事態だ。
抜け道が見えない戦闘の中で、最初に脱落したのは――カフェだった。
「回復役から潰すか……!」
「っ、あ……!」
「カフェ!? クソが……!」
カフェを狙った魔人レイに、カオスがとうとうそれを守ろうとレイに向かって低い姿勢から短刀を放つ。

だが結果は分かりきっていて、
「邪魔だ！」
「かはっ……！」
「カオス！」
裏拳によって吹き飛ばされ、カオスは近くの木に激突する。
ブリティシュが名を呼びながらも、カフェを助けようとするが――間に合わない。
「まずは一匹だ……！」
「っ――！」
レイの拳がカフェに向かって振り落とされる。
ブリティシュや日光が割って入る前に。ホ・ラガが魔法を放つ前に。全てが間に合わず、起こる結果は分かりきっていた。
杖を握ったカフェが何とかそれを防ごうとするが、近接戦闘を得意としない彼女には、その軌道を見ることは難しかった。
故に。魔人の拳はカフェに向かい、
「……!?」
「……えっ？」
しかしその拳は、カフェに振り落とされることはなかった。
至近距離で聞こえた鋼の音に、カフェは戸惑い、閉じかけていた瞳を見開いて眼の前を見る。
するとそこには――長い黒髪があった。
「――っと。危ない危ない。もうちょっとでやられるところだったね」
「テメェは……！」
驚愕したのはレイも同様。攻撃を弾かれて距離を取ると、相手の顔を見て表情を憎々しげに歪ませる。
五人もその姿を見て、思わず目を見開いた。その姿は、ホ・ラガなどに言わせれば、
「黒髪の……カラー……」
知る者だけが知る伝説の存在。人間が見ることは滅多にない彼女は、魔人レイの攻撃を防いだ剣を軽く肩に乗せると、

「ま、通りすがりの親切だ。というわけであんた達、さっさと逃げな。こいつはあたしが相手にしとくからさ」
軽い調子で魔人を前に、その美しい女性はこともなげにそう言ったのだ。

「テメェ……何しに来やがった！」
「おおっと」
魔人レイが彼女の姿を見て、怒声とともに雷撃を放つ。
しかしその雷撃を、彼女はやはり、呆気なく躱してしまい、
「何しにかって？　そりゃあまあ、言うことを聞かないといけない相手のちょっとしたお使いを受けてね。悪いけど、手を出させるわけにはいかないよ」
「っ……ただの使徒が、俺に命令でもする気か!?　レオンハルトの腰巾着風情が！」
「……レオンハルト……？　まさか……」
「ふむ……？」
レイが苛ついた様子で彼女に向かって声を荒げる。その言葉の内容を聞いて、日光やホ・ラガが眉を顰めたが、それを無視して、レイの怒声は続く。
「そいつらは俺の獲物だ！　死にたくなけりゃそこをどけ！」
「……はぁ……あんたさ、何勘違いしてんの？」
「なんだと!?」
黒髪のカラーは息を入れて、呆れるようにレイを見る。肩を竦めながら、
「……あたしは主の命令で、手出すなって言ってんだよ。それを無視するってことの意味……ちゃんと分かってる？」
彼女がそう言うと、レイは更に表情を怒りに染める。
だが、まだ手は出さない。ギリギリのところで爆発はしていない。
しかし、彼女の方は更に言葉を続け、
「しかも〝そこをどけ〟って……まあ、確かに、立場的にはあたしの方

が下かもしれないけどさ……」
　でも、と。彼女はレイを鼻で笑うと、
「あたしが命令を聞くのは一人だけだよ。ましてや、あんたみたいなガキの言うことを、なんであたしが聞かなきゃならないのさ。もうちょっと大人になってから出直してきなよ――レイ坊や」
「ッ……テメェは……殺すッ！」
　瞬間、彼女の挑発にレイの怒りが沸騰し、レイは先程よりも激しい放電をしながら突っ込んでくる。
　それを彼女は口元に笑みを浮かべながら躱してみせ、
「ほら、あんたらも！　ぼさっとしてないでさっさと逃げな！　流れ弾でおっ死んでも知らないよ！」
「っ、あ、ああ……！　分かった！　皆、逃げるぞ！」
　ブリティシュが黒髪カラーの彼女の言葉に戸惑いながらも頷く。彼女が何者かは気になるが、今は彼女の言う通り、逃げるのが最優先だ。
　木の幹に倒れたカオスを、ブリティシュが背負い、皆で逃げようとすると、
「逃がすかッ！」
「ッ……！」
　レイが雷撃を五人に向かって放つ。だがそれを、
「っと！　だから危ないって！」
「!?」
　一瞬で彼女が目の前に現れたかと思うと、その雷撃を剣で弾いてしまう。
　その移動が全く目に映らず、ブリティシュらは驚愕する。気配も移動の予備動作も何もかもが見えなかったし、雷撃を弾く技術も見事なものだった。
　しかもそれだけでなく、
「おらぁあああああっ!!」
「ほら、遅いよっ！」
「こっのっ……！　躱してばかりでイキがりやがって……！」

あの魔人を相手に、その速さと技術で翻弄していた。
傷こそ与えることは出来ていないが、その実力は傍目から見ても互角である。身体能力の上では魔人の方が上に見えるが、あの理解不能な速さと、雷撃を問題としない丈夫さに目を見開く。
それでなお、彼女の口元には、まるで戦いを楽しんでいるかのような笑みが浮かんでおり、まだ余裕がある様子でもあった。
それを視界に映しながらも、ブリティシュらはその場から脱していき、
「……感謝する！　貴方は――」
「いいから行きな！　名乗るほどのもんじゃないよ！」
「……感謝します……！」
再度、感謝を告げてブリティシュは仲間と共に魔人の戦闘域から離脱していく。
だが、日光やホ・ラガなどは険しい表情を浮かべており、
「……どうしたんだ、二人共？」
「……少し、気になることが」
「気になること？」
ブリティシュが走りながらも問いかける。カフェなどはこちらが背負うカオスに、走りながらヒーリングを掛けており、話は耳にしていても言葉を発する余裕はない。
その間にも、ホ・ラガが真剣な表情で頷き、
「あの彼女……いえ、あの魔人ですか。彼女のことを、レオンハルトの腰巾着と言っていました」
「それに、使徒、とも……」
「レオンハルト……いや、使徒、ということは……！」
ブリティシュも遅れてそれに気づく。ホ・ラガは補足するように答えを言った。
「レオンハルトとは、最強の魔人の名だね。幾つもの文献にも名前が載っているほどの有名人だ」
「ええ……私も、そう聞いています。ＪＡＰＡＮでは、その魔人の名は有名ですから……」

「……つまり彼女は、その魔人の使徒、ということか……」
そうだろうな、とホ・ラガが頷く。しかし訝しむ様な表情で、
「彼女が何故我々を助けたのか、そこが気になるところだね。もしかしたら、罠かもしれない」
「罠、か……」
ブリティシュはホ・ラガのもっともな意見を聞いて、考え込む。
それが本当であれば確かに今の状況は危険かもしれない。
しかし、
「……何か騙しているようには……罠を張っているようには見えなかったけど……」
「……そう、ですね。私も、そう見えてしまいました」
ブリティシュの迷うような意見に、日光も戸惑いながらも同意する。ホ・ラガが頷き、
「……君がそう言うのならそうかも知れないな、ブリティシュ。とにかく今は、ここから離れて安全な場所に行くのが賢明だね」
「……ああ、そうしよう。カオスも心配だ」
魔人の攻撃をもろに受けて、気絶したカオスの治療もちゃんとした方がいい。カフェも走りながらだと集中出来ないだろう。
しかし内心では、先程の光景を思い出し、
……あれが、魔人や使徒の戦闘……。
今の自分達では、人間では届かない強さを目の当たりにし、助けられるのみであった自分達に無力さを感じて拳を握り締めるのであった。

森の中で行われる魔人レイと使徒ハンティの戦闘は、追いかけるレイとそれを的確に躱し続けるハンティといった構図になっていた。
だが、逃げ続けるだけであればレイは逃げていった冒険者を追いかけるのみだ。
それが出来ないのは、ハンティがやはり、要所要所で邪魔ともいえる攻撃をしてくるからで、

「うざってエ！　消し炭になれ！」
「なら、捕まえてみるんだね！」
　レイの雷撃を纏った貫手が放たれ、一瞬前までハンティがいた空間を貫き、そこにあった大木に突き刺さり、黒焦げの炭にまで変えてしまう。
　即座に居場所を確かめようと背後を向くと、上部から攻撃が来た。
「黒色破壊光線！」
「っ、おっ、らぁあああああああああ!!」
　飛来するのは黒の極太の奔流。ハンティが放った巨大な魔力の結晶とも言える最上級魔法だ。
　だがそれを、レイは裂帛の気合いとともに振り上げたアッパーで僅かに弾くことでそれを逸らした。
　魔人であるレイには無敵結界があるので使徒であるハンティの魔法によるダメージはない。しかし強すぎる衝撃を完全に無視することも出来ない。魔人とはいえ、強い衝撃を受ければ気絶することだってあり得る。
　もっとも、レイはその程度で気を失うような情けない真似をすることはないが、それでも衝撃によって身体が揺らぎ、邪魔にはなる。
　無視して冒険者を追いかけることも考えたが、そうしようとすると一瞬で先回ってからの魔法の連続で前に進めない。故に挑発されたことも含めてぶっ飛ばしてやろうと考えるレイであったが、中々捕まえることが出来ずに苛立っていた。
「逃げ回ってばかりか！　蝿が！」
「その蝿一匹落とせないってのに粋がってんじゃないよ！」
「テメェ……！」
　口の減らない相手に対して、雷を連続して放つも、ハンティにはそれが当たらない。ハンティの方も魔人相手ということで有効的なダメージは与えることは出来ていないが、それでもその口元にはニヤリとした笑みが浮かんでおり、
「あんたは弱くはないし、身体能力はあたしより上だけど、技術の方はまだまだ杜撰だ。そんなものが当たるとは思わないことだね。――

こちとら、あんた以上の化け物と稽古してんだよ！」
「……！　クソが……！」
レイがその言葉を聞いて憎々しげに表情を歪めて、拳を撃つも、やはりそれは当たらない。
だが、ハンティの方も攻撃手段がないはずで、戦況はレイの方が有利な筈であった。木の枝を足場に跳躍を続けるハンティが宙に高く飛び、
「だからまあ、あんた相手にも試してやるよ！　森の中でやるのは気が引けるけど……！」
「チッ、一体何を……！」
空中に飛ばれれば、レイとしては雷撃を放つくらいしかやることがない。跳躍して殴りつけることも不可能ではないが、相手の方が有利である場所に行くのは愚策だろう。
故にハンティの魔法に対して身構えていると、ハンティは両手を使って魔法陣を描き始めた。
しかもそれは、魔法にそれほど詳しくないレイから見ても不可解なもので、
「！　魔法が二つ……？」
そう。魔法が二つだ。
ハンティは二つの魔法を、同時にそれぞれ扱おうとしていた。
通常は不可能である魔法の同時詠唱。それを行っているハンティは、自らが長年の研究と模擬戦による実験で編み出した魔法をレイに向かって放つ。
普通の人間相手にやれば悲惨なことになってしまうが故、魔人相手に放つのがちょうどいいのだと、
「さあ、いくよ……！　複合魔法――〝グラウンド・ゼロ〟!!」
「ッ……！」
そして、次の瞬間。レイを中心に、凄まじい爆発が起きた。
それは、炎魔法と氷魔法。両方の魔法を組み合わせたハンティの必

殺技ともいえる魔法だ。
レオンハルトやライゼンといった化け物には対処され、あるいは耐えられた魔法ではあるが、これを放った場所は巨大なクレーターが出来て、山中に巨大な水場が出来てしまったほどの大魔法。
木々の間を強風が潜り抜け、遺跡前を更地にしかねないその衝撃と爆発。
その爆発を受けたレイは、空中にいた。
……馬鹿げた威力しやがって……！
それはレイにとっての賛辞に近いものだが、苛立ちも混じっている。
その爆発によってのダメージはない。無傷だ。
あらゆる攻撃を防ぐ無敵結界は有効であり、これほどの爆発を受けても傷を負うことはありえない。
そして、とてつもない衝撃も受けたが、これに対してもレイはさして問題ではないと判断した。気絶するようなことはない。
問題があるとすれば、爆発の衝撃で宙を飛ばされ、先程いた場所からかなり遠くに吹き飛ばされてしまったことで、
「……クソっ！」
レイは空中で悪態をつく。つまりは逃げられたのだ。
先程までいた場所から軽く数キロは吹き飛ばされた。今から追いかけても追いつくことは難しいだろう。
となれば、レイが考えていた、レオンハルトに先んじて獲物を狩ることは失敗したも同然であり、
「……チッ」
レイは空中で体勢を立て直し、地上へと着地すると、足に力を入れて勢いを止め、その場で立ち上がる。
そして放電を抑え、掻き上げていた髪を元に戻すと、服のポケットからタバコを一本取り出し、口に咥えて軽い電気によって火を点けると、
「ハンティ、だったか……あの女にも、いつか借りを返してやらねェとな……！」

今までは特に憶える気もなかったレオンハルトの使徒に対し、いつか潰してやると心の中に留め置くことにした。

おっぱい

森の中の戦闘が終わり、ハンティは一息をついていた。
あれだけ吹き飛ばしてしまえば、追いつくことは難しい。そう判断してのものだが、
「……ちょっとやりすぎたかな？」
「――ちょっとじゃない。やりすぎだ」
「あ、レオンハルト」
ハンティが振り向くと、そこには己の主である魔人レオンハルトが現れたところであった。彼の渋い表情を見て、ハンティは目を逸らし、
「……見てたならさっさと出てくればいいのに」
「見てはいない。爆発が見えたから急いでやってきただけだ。暴れすぎてないかとな」
そう言ってレオンハルトは周囲に目を向けながらも、腕を組み、ハンティに向かって続けて声を飛ばした。
「……とりあえず、例の連中は無事みたいだな。よくやった。引き続き、監視を行え。だが――」
と、レオンハルトは一度息を入れて、呆れるような微妙な表情で、
「……俺があまり言えたことじゃないが……周囲の被害は考えろ」
周囲の被害――森の中心にぽっかりと空いた、大型のクレーターを見て呟くように言う。
半径５００メートルは更地になったその場所で、ハンティはややバツが悪そうに頬を掻いた。
「……別に毎回はしないし、一応は抑えたけど……」
「……まあ、分かっているならいいが……いや、本当に分かってるのか？」
「何さ、その言い草……本当に分かってるよ」
ハンティが半目で言うが、レオンハルトとしては疑念を向けざるを得ない。
何しろ普段の模擬戦でも、攻撃に遠慮が無くなってきているし、好

戦的になって久しいのだ。一応は注意しておかなければならない。
とはいえ、任務を果たしてくれていることも確かなので、それほど強く言うことはなく、
「……それならいい。もっとも、優先すべきは奴らの方だ。そのためなら何をやっても構わない」
「はいはい……それで？　相変わらず、理由は教えてはくれないって？」
「……悪いが、な」
レオンハルトの鋭い目が更に細まる。それを見てハンティは息をつき、
「ま、確かにあの連中……結構見どころあるよ。あんたが好きそうな連中だ」
と、肩を竦めながらも歩き始め、これから追いかける連中のことを褒めてみせる。しかし、
「……だけど、レオンハルト。あんたの相手になれるかっていうと、そりゃ無理だ。レイに蹴散らされる程度で、愉しめるはずもないだろう？」
「……ああ、そうかもな」
レオンハルトはハンティが言うことを認める。
実際、レオンハルトは強い相手が好きで、そういった相手には積極的に関わっていき、剣を交えることもある。過去には藤原石丸や勇者クエタプノを始め、数多くの戦士の相手をレオンハルトはしたものだ。
しかし、レイ相手に為す術もなくやられる程度では、レオンハルトは愉しめない。
レイは弱くはないが、それでも魔人の中ではまだまだ新米だ。上級魔人には程遠い。
ならばレオンハルトという最強の魔人の相手になるはずもない――ハンティの見立てではそうだったし、レオンハルト自身も理解している。
だがそれでもなお、

「――だが、あいつらには〝可能性〟がある」
「可能性？」
　ああ、とレオンハルトは頷く。
「将来的に、面白くなる可能性だ。その可能性を閉ざさないためにも、監視は必須。悪いがしばらくは続けてもらうぞ」
「……ふーん。あの連中が、ねぇ……？」
　主に、レオンハルトという男にそこまで言われればハンティとしても頷く他ない。
　それに、レオンハルトが面白くなるということは、ハンティとしても面白くなる可能性が高いのだ。
　戦闘的な意味なのか、それとも人間という種の未来に関することなのかは分からないが、そのどちらであってもハンティとしては嬉しいことである。
　とはいえ、こうやって遠巻きに眺めるだけというのも焦れったい部分があるのだが、レオンハルトはハンティとはまた別の方向に歩いていきながら、
「……だが、一度くらいは関わってみるのも悪くはないか」
「！　まさか、あんたが直接出るつもり？」
「なに、可能性を潰すようなことはしない。ただ……少し試すだけだ」
「……いや、あんたの試しとか死にかねない気がするけど？　本当にやる気？」
　レオンハルトが試す、なんてことを耳にすると相手を再起不能にする想像が目に浮かんでしまい、ハンティは眉間に皺を寄せてしまう。
　だがレオンハルトの方は苦笑し、
「大袈裟だ。俺が戦うことはない。少し、問答をしてみるだけだ。――それに、向こうも俺と関わらざるを得ないだろうからな」
「？　それはどういう……」
「奴らが拾ったものを見ただろう？　これだ」
「っ！　それ、は……！」
　レオンハルトは懐から一つの物を取り出してみせる。
　それを視界に映した瞬間、ハンティの表情が若干強張ったが、それ

を無視してレオンハルトは再びそれを懐に戻し、
「奴らがこれを集めることになるのなら、俺が持つ一つも必要となる。――だが、ただで渡すのも癪だからな。奴らのためにも少し試してみる。理解したか？」
「……レオンハルト……あんた、それは――」
と、ハンティが何かを言おうとして、言葉を迷わせた後に――それを取り止める。
言葉を飲み込み、息を吐くと気を取り直した様子で、
「……分かったよ。何を考えてるか知らないけど、あんたがそうするってことは、それほどのことなんだろうしね。とりあえず、監視は続ける」
「助かる。俺は忙しいからな。今日も直ぐに戻らなくてはならない」
まあ、そうだろうな、とハンティは思う。自分達も忙しいが、レオンハルトも予定は詰まっているはずだ。
故に何となく、ハンティは口を開き、
「因みに、今日の予定は？」
「……聞きたいか？」
「やっぱいい。予想がついた。相変わらず、女の敵だね」
レオンハルトの間の空いた反応を見て、ハンティが心底嫌そうな表情で頭を振る。そういう話題は苦手な上に嫌いなのだ。
だがレオンハルトの方も、女の敵、という単語に微妙な表情を浮かべ、
「……敵のつもりはないんだがな……」
「……そりゃそうだろうね。あんたの膝下が一番安全だろうし」
それを理解しているが故に、ハンティも呆れながらも納得する。
レオンハルトがそういった親切や、救いを与える限りは、レオンハルトに惚れ込む人間が増え続けるだろうと。
ただ彼は救いを与えているだけに過ぎないのだ。
レオンハルトに囲われること。今を生きる人間にとっては、これ以上の救いはないだろう。
レオンハルトの方も思うところはあるようだが、それを止めたりす

ることはなく、
「……とにかく、俺は戻る。お前も行け」
「……はいよ。主様の仰せの通りに」
そう投げやり気味にハンティがそう言うと、レオンハルトはその場から一瞬で移動していき、ハンティも瞬間移動でその場から消えていった。

夜。
その時間帯になれば、いつもは大勢のメイド達が主を待ち構えているその部屋で、部屋の主であるレオンハルトは１０人以上は余裕で横になることが出来る巨大なベッドの脇に腰掛け、その女性が部屋に入ってくるのを迎えた。
「――待たせたな……」
「……いや、それほど待ってはいない。気にするな」
「そう、か。それは良かった……」
レオンハルトはそのやってきた相手である――お町を優しく迎えてやる。
実のところ、３０分以上は待っていたが、そこを口に出すのは野暮というもの。女性には準備だって覚悟だってある。それを待つのも男の甲斐性だ。
それに――とっくに覚悟を決めたとはいえ、男にも準備は必要だ。
特にレオンハルトは、相手と致す前の心構えなどもきちんとするようにしている。
ちゃんと眼の前の相手を愛し、責任を取るために相手のことを考えるのだ。
そしてこうやって眼の前に姿を現してくれれば、それをきちんと確認することが出来る。
「隣に座ってもよいか……？」
「ああ、来い」
お町の言葉を受け入れて、彼女がベッドに、こちらの隣に腰掛ける。

そうして隣に視線を向けると、着物を身につけたお町は風呂上がりなためかその白い肌がほんの少し火照っているようにも見えた。
彼女はこちらに軽くもたれかかって来ており、その体温を僅かにこちらに伝えてくる。
だが、やはりもっと近づきたくて、それでいて期待しているのだろう。
自分からも許可を出し、受け入れた以上はその期待を裏切るわけにはいかない。故にレオンハルトはお町の肩を軽く抱き、
「お町、覚悟はいいか？」
「ああ……構わぬ……この日を待ち望んでいたのだ。我を宿命から解放してくれたレオンハルト、お主の女になれる日を……」
宿命、という言葉にレオンハルトは改めて己が意図せずしてやったことを自覚し、改めて覚悟を決める。
やはり、どんな相手であろうと、一度救った相手は最後まで責任を持って、幸せにしてやらねばならないのだと。
そう決めて、
「……ああ、お前を俺の女にしてやる――」
「レオンハルト……んっ――」
そう言って、レオンハルトはお町の唇を奪った。
彼女を抱きしめ、その身体の柔らかさや体温を感じながら、愛を込めて唇を合わせる。
「ちゅっ……んっ、ふっ、ちゅ、はぁ……んちゅ……」
お町はこちらとのキスを、溶けたような、それでいてまだ慣れずにがむしゃらなキスを行ってくる。
だが、そのひたむきな好意、不器用ともいえるやり方が、こちらを愛し、愛されたいという意志を感じるものであり、心地よいものを感じる。
一度愛する覚悟を決め、相手も同じ様に愛してくれると、レオンハルトとしても、普段から魅力的な相手が、更に魅力的に見えて、女を感じるのだ。
これがないと、レオンハルトは相手を完全に女として見ることが出

来ない。
例えどれだけ魅力的な絶世の美女であっても、それは客観的な事実でしかなく、レオンハルトとしても相手を恋愛的に見ることはほぼ無いと言っていい。
だがこうなると話は別で、レオンハルトも相手を女として魅力的に見て、そして愛することが出来る。
事実、レオンハルトはお町にキスをした瞬間から、きちんと雄としての熱い衝動を感じていた。
普段は鳴りを潜めているレオンハルトの情欲は、見ず知らずの女がどれだけ煽っても火が点くことはない。
レオンハルトの性衝動は、自分の女の為にあるのだ。
好きあう者同士。自分と愛し合う相手。己の女のために解放される。
故に愛し合うために必要な技術や想い、興奮も自分の女相手にしか発揮されない。
その条件を満たした相手――今は眼の前のお町だ。レオンハルトはお町を愛するために様々な準備を始める。
彼女と唇を、舌を絡ませながら、彼女の背中に手を回し、その美しい髪やすべすべの背中、肩などを撫で擦る。時折、手にもふもふのしっぽが当たるが、それすらも心地よく感じながら、相手を感じさせ、そして自分の官能も高めていく。
そのためにも、レオンハルトは顔を一度離すと、視線を下に向けて次の段階へと移行しようとした。
「お町……脱がすぞ。いいか？」
「ん……はぁ……構わぬ……脱がしてくれ」
キスで少しぽーっとした様子で、熱い吐息を漏らしながらお町は言う。
身体を僅かに悶えるように左右に揺らすが、すると、そこにあるお町の魅力的な部分が悩ましく揺れた。
それは胸だ。
危ない着方をしている着物の胸元。そこには、信じられないくらい

深い胸の谷間があった。
服を着ている状態でもその大きさが一目で分かり、仮に胸元を開かない服装であってもそのボリュームは隠しきれるものではない。
初対面の時も、目がいかなかったといえば嘘になるし、周囲の者達もお町を見ればその大きさに一度は二度見する。
だがレオンハルトは今まで、お町を女性扱いはしていても、女とは見ていなかったので無視することが出来た。
しかし自分の女となった今は、無視することが出来ず、
「んんっ……」
「……！　これが……」
レオンハルトはゆっくりと、その腰帯などを外し、その着物を脱がしてやった。
すると、眼の前で――たっぷん、と。
お町の胸が、乳房が、おっぱいが、巨乳が、爆乳が現れ、思わず声に出してしまう。
「……綺麗だな」
お町の肢体を見て更に呟く。
むっちりとした太腿に臀部、くびれた腰つきなど、お町の身体はとてもグラマーで、その真っ白な肌も魅力的だった。
だが、なんといっても目を引くのは、その重たそうにぶら下がる爆乳だ。
レオンハルトは、これまでの生の中で、人間時代も合わせて数多くの女性を見てきたし、胸だって見てきた。
しかし、お町ほどの大きさのおっぱいは見たことがない。
しかもそれでいて、丸い形をきちんと保った、瑞々しい張りのある乳房だ。
明らかに手では掴みきれないたっぷりとした質量を持ち、その張りや柔らかさを伝えるようにゆらゆらと揺れて、その中心には綺麗な桜色の乳首がある。
見ているだけでむしゃぶりつきたくなるような美爆乳だ。
「良い乳だ……」

「……レオンハルトはやはり、大きい乳が好きなのか？」
お町が見られていることに気づいて、少し下をちらちらと見ながらも上目遣いで問うてくる。既にこちらも、服を脱いでいる。故に気になってしまうのだろう。
だが、やはり、という言葉が気になったが、一応は頷き、
「ん……まあ人並みにはだ。胸だけで女を判断するほどじゃないし、あくまでも人並みにだ。普通くらいに、大きい胸は好きだ」
一応は勘違いされないように言っておく。確かに好みはそうだが、世間に認知されてるほどおっぱい魔人ではないのだと。
するとお町は、腕にその爆乳を乗せて、少し寄せてみせ、
「……そうか。なら、我の乳がこれほど大きい意味もあったということか……」
と、お町は呟くようにそう言うと、続けてこちらと目を合わせ、
「もう我はレオンハルトのものだ……我の身体も、この乳も、お主のものだ……だから――」
と、お町は上体を反らして、まるでこちらにその爆乳を捧げるようにすると、少し照れながら、
「我の乳を……好きにしてくれ……」
「！　……ああ。なら――」
その魅力的過ぎる誘いに、レオンハルトは乗る以外の選択肢を持ち合わせていなかった。
手を、お町の胸元に伸ばし、
――むにゅんっ。
「あっ……」
レオンハルトは、その大きすぎる爆乳に五指を、それぞれ突き立てた。
瞬間、掌が幸せでいっぱいになり、レオンハルトは少しばかり、内心で動揺した。
……なんだこれは？　おっぱいか？　――いや、おっぱいだ。
それは、どうしようもないくらいにいやらしいおっぱいだった。
見るだけでも凄い爆乳は、触ってみると更に素晴らしいことが理解

出来る。
見た時点で分かってはいたが、やはり掌からはみ出るし、指の先も埋もれる。
軽く揉んでみると、むにゅ、むにゅ、と聞こえるはずのないオノマトペさえ感じられる。
それだけたっぷたぷな乳肉のボリュームと、ふわふわの柔らかさ、もちもちの弾力感、その全てを兼ね備えていた。
「どう、だ？　んっ……はぁ……我の乳は……？」
「ああ……気持ちいい」
そう、気持ちいい。揉んでるだけで気持ちいい。
掌の中で形を変え、それでいて元に戻ろうとする爆乳を弄んでいく。
下から持ち上げてみると、その重量も凄く、スイカを、とてつもなく柔らかくてもちもちしたスイカを持ち上げてるみたいだ。
掌の上で揺らしてみると、その重柔らかさが、もにゅもにゅ、たぷんたぷんと揺れて、
……凄いな。これは……。
ちょっと感動してしまうほど。
数多の乳房を揉んできたし、どれも素晴らしいものだったが、これほどの大きさでこれほどの気持ちよさは感嘆するしかない。
元々、胸を弄るのは飽きないタイプだが、これこそ、いつまで揉んでも飽きが来ないおっぱいだ。
性別関係なく、これはちょっと嵌ってしまうだろう。
まさに魔性の乳房だ。
これを延々と続けてしまいそうになるが、レオンハルトとしては、やはり色々と堪能しようと思うのが男心であり、
「お町……」
「あっ――」
お町の深い胸の谷間に、レオンハルトはダイブする。
すると、顔全体が、豊かな乳房に包まれた。
両頬、耳や鼻、瞼や耳まで、もっちりと乳肉が吸い付いてきており、

甘い谷間の間の空気を吸い込む。
手で横から爆乳を押し付けると、ぱふっ、ぱふっと、撓んで幸せな感触を広げてくる。
顔を左右に動かして、特盛のボリューム感と、その迫力を味わい尽くす。そうやって楽しんでいると、お町が動くのを感じて、
「ん、レオンハルト……気持ちいいんだな……」
「んぐっ……」
むにゅうう、と手を頭の後ろに回し、抱きしめるように爆乳を押し付けてくれる。
三桁を優に超える爆乳の谷間の中は、蕩けそうなほどの気持ちよさだ。
どこに顔を動かしてもおっぱい。温かくて、たゆたゆのもっちりとした重柔らかさを感じられて凄い。
「は、あっ、レオンハルト……そこは、んんぅ♡」
だがそんな中で、やはり桃色の突起を見つければ、そちらもむしゃぶりつかないわけにはいかないだろう。
コロコロと舌の上で転がし、舐めしゃぶると、口周りでも乳房の柔らかさを感じられるし、吸い付いてお町が感じているのを見るのは気分もいい。
「あうっ、んにゅっ、ああ……吸われ、て……んんんんっ！」
掌で揉み上げ、右と左を口で行き来し、時折谷間に顔を埋めて顔に乳圧をかけながら指で乳首を弄る。そうするとお町が震え始めたので、そのまま達してもらおうかと考えていると、
「はぁ……んっ、はぁ……レオンハルト……我も……お主を、もっと気持ちよくしたい……」
不意にお町が上半身をこちらの顔から離し、息も絶え絶えになりながらそんなことを口にした。
そしてレオンハルトの下に向かって移動すると、
「確か……こう、か」
「っ……」
――むにゅうう。

お町が、自分の胸を持ち上げてレオンハルトの戦闘態勢にあった剣に向かって左右から寄せて、谷間に挟み込んでしまう。
思わず呻くような、眉を顰めてしまうほどの衝撃を受け、レオンハルトの腰が震える。
己の剣はお町の深い谷間に完全に包まれ、見えなくなってしまっていた。
先程まで手や顔、口で味わっていた極上の乳房だが、己の分身ともいえる剣が包まれるのはかなり趣が深い。腰が浮いてしまうほどだ。
「……どうだ？　気持ちいいか？」
「ああ……だが、どこでこんなことを……」
「ペールに教えてもらったのだ……我がレオンハルトにしてやれば、きっと喜ぶからと……」
「……そうか」
……どうせそんなことだろうとは思っていたが……。
あいつはいつもそういうことばかり教えているから、予想はついていたが一応は聞かざるを得なかった。いつものことながら、そういうことを共有されるのは悩ましいものがある。
しかし、己の剣をお町の爆乳がずっぽりと挟み込む感覚が甘美すぎてちょっと怒る気持ちが失せる。
もちもちの乳肉が剣に隙間なく吸い付いて、そのずっしりとした重柔らかさを腰で受け止める。
「レオンハルトの……こんなに、熱くて硬いとは……」
「……お前の胸が気持ちいいからな」
「んっ……そう、なのか……確かに、胸の中で大きくなって……」
それを感じ取ったのか、お町が左右から乳房を押して更に圧迫する。
むにゅむにゅの乳圧を感じて自然と腰が浮き上がりそうになりつつも、レオンハルトは冷静を保ってお町に告げた。
「……なら、とりあえずは任せる。教えてもらったのなら一応は理解しているのだろう？」
「ああ、任せてほしい……確か……」

と、お町は教えられたことを思い出しながら、動き始めた。
上下に胸を動かし、剣を磨く様な動きで
「このような感じで……はぁ、っ、どうだ？」
「ん……ああ……いいぞ」
爆乳がたっぷん、たっぷんと弾む光景は迫力があって視覚でも楽しませてくれるし、動く際に聞こえるオノマトペのような音が中々に趣深い。
上から見下ろす深すぎる谷間と、揺れ動く爆乳は剣の姿を現すことなく一方的に攻め立ててくる。
このボリューム感だと、ある程度テクニックが拙くても充分にこちらを攻め立てることが可能だが、
「少し、難しいな……やはり口頭だけでは……」
「……初めてなら仕方ないだろう。俺は充分気持ちいいから気に病む必要はない」
と、お町は技術の拙さを憂いているようだ。
だが、こちらがお世辞ではなく正直な気持ちを告げると、
「……そうかもしれない。でも――」
むぎゅっ、とお町は胸を寄せて、更に強く深く、剣を包み込むと、
「我の奉仕で、もっと主が気持ちよくなってほしい……だから……これからはこれで練習して、上達してみせよう……」
「っ……」
お町が先程以上に、愛情たっぷりに奉仕を始める。
それはレオンハルトが表情を軽く歪めるほどであり、
「その気持ちよさそうな表情が、我はとても愛おしい……」
それを見て、お町は爆乳でレオンハルトの剣を抱きしめて、うっとりとした様子となる。
だが、心地よさで夢見心地になってくるのはレオンハルトも同じで、
「お町……っ」
「ああ、レオンハルト……主が望むのなら、我はいつだって奉仕するし、どんなことだってする……」

剣先で深い谷間に向かって突きこみ、とろけるような柔らかさの乳肉をかき分けると、少し震える。
剣も、己を隙間なくみっちりとその全てを包んでしまうほどの強者相手に、震えて喜んでいるようであり、レオンハルトも軽く腰を揺すってしまう。
剣が硬く大きくなるも、それを再び柔らかく受け止められてしまい、悔しさで剣が涙を流す。
すると更に抽送がスムーズになるが、そうしてもにゅるにゅるとなった胸の中で扱かれるだけで負けが近づくだけだ。
その幸せな圧迫感に否が応でも官能は高まってしまい、
「っ……お町、出そうだ……」
「！　どうすればいいのだ？」
「激しく――いや、やはり、俺が動く……」
だから少し、胸を押さえててくれ、と言いつけ、お町がその通りに谷間を締め付けると、その心地よすぎる乳圧を感じながら突きを放った。
「レオンハルトのが、出たり入ったり……それに、また大きく……！」
「ああ……これは、堪らないな……！」
埋もれるほどの乳に、己の剣を突き立てる快感は、やはり極上のものだった。
官能がどんどんと高まり、レオンハルトとお町の息が乱れていく。
そして、レオンハルトの剣が最大にまで高まったところで、剣を深くまで谷間に押し込むと、
「くっ……！」
「あっ……」
剣は爆乳の谷間の中で剣気を放出した。
「熱い……こんなに沢山、レオンハルトのものが……」
そうして戦闘の前哨戦が終わると、お町はしばらくその昂ぶりを胸で受け止めきった後に、谷間を開いてみせる。白い剣気が溜まって、水溜まりのようになっていた。それを見て、お町は顔を赤くし、レオンハルトも更に興奮し、己の剣を更に奮い立てた。

「……やはり、乳好きだというのは真実だったか」
「……別にそれだけが好きというわけではない」
「隠さずともよい……我は嬉しい。我のこの大きな乳房が、主を喜ばせることが出来ると思うと……」
「っ、お町……」
少し勘違いをしているようだが、その気持ちは純粋に嬉しいものだ。
だからレオンハルトは、
「……俺もお前を喜ばせてやる」
「レオンハルト……」
お町の頬に手を当て、真っ直ぐと言い放つ。
彼女を救った責任と義務、それを果たすためにも、レオンハルトはお町に向かって再度のキスを落とし、今度は戦闘の本番へと移行した。

次の目的

誰もが寝静まるような夜中。
野良の人間が隠れ住むそこは、静けさに満ちていた。
明かりが点いている建物はない。あっても、それは外に光を漏らさない密室のような部屋だけだ。
何故ならその明かりを元に、魔物達がこの隠れ里を発見して襲いかかってくる可能性があるからだ。
そうなってしまえば、大勢の人間が死ぬし、ただでさえ少ない人類のセーフハウスがまた減って、間接的に大勢の人間が困ることになるだろう。
だからこそ、迷惑を掛けないように窓のない宿の一室で小さな明かりを点けて集まっている五人は、リーダーであるブリティシュと、今回の収穫で得た黄金像を研究したホ・ラガの話を聞いていた。
「――それで、何かわかったのか？」
「ああ、ほんの少しだがね」
ベッドにて身体に包帯を巻いている状態で寝転がっているカオスが、ホ・ラガに問う。彼は魔人の攻撃をもろに喰らってしまったため、カフェの治療を受けた後で安静にしているところだった。
故にベッドを使っているカオスや、その側で一応いつでも治療出来るようにいるカフェ、何かを考えている様子で席につく日光や、ブリティシュらを前にホ・ラガが言う。この像は、
「……どうやら、この黄金像はとてつもなく古いもののようだね。少なくとも千年、二千年以上前から存在する代物だろう」
「何か力でも宿っているのですか？」
日光が聞く。しかしホ・ラガは首を振り、
「いや、これ自体に力が宿っている様子はない」
「え、じゃあ……ただの黄金なの？」
今度はカフェが意外そうに。そしてホ・ラガも、今度は首を縦に振ると、
「ああ、至って普通の黄金で出来た像だね」

「……なら無駄足ってことかよ」
「そんな……」
カオスが表情を歪め、カフェも気勢を落としてしまう。
魔人を倒せる手掛かりを得られるかと思っていただけにショックは大きい。
それも、魔人の強さを実際に目の当たりにしたばかりなのだ。
全く歯が立たなかったというその結果を考えると、やはり自分達の強化もそうだが、普通の方法だけでは駄目だと強く心に思ってしまう。
魔人レイ。そう名乗った人形の魔人は、雷を操る力を持ち、五人にその脅威を刻み込んだ。
途中であの、謎の黒髪のカラーが現れなければ、あそこで全滅していた可能性も高い。
故に彼らは、自分達の力不足を自覚し、同時に改めて思ったのだ――魔人は人では勝てない。その上位である魔王も同様だと。
であるならば、人を捨てるほどの覚悟で、力を手に入れなければならない。
自分達は未だ人を捨てることが出来ていないし、出来ていたとしても、実力が伴っていない。
だからこそ、彼らは情けなくも今回手に入れたものには期待していた。――が、それは実らなかったのだ。
しかし、ホ・ラガはそんな様子を見ても淡々と成果を告げた。気を使うことはなく、
「無駄足かはまだ分からない。一応、それなりのことは分かったからね」
「それなりのこと？」
ああ、と日光の問いにホ・ラガが続けて、
「これを手に入れた遺跡の壁画。あれを少し調べてみたが……どうにも、これと同じ様な物が４つあるようだ」
「あん？　黄金像が……４つ？」
「それを手に入れたら……何かが起きたりとか？」

「いや、それはまだ分からない。しかし……壁画には黄金像を４つ、台座の様な場所に鎮座するような光景が描かれていた。これを単純なヒントとして考えるとすると、どこかまた別の遺跡に、同じ様な黄金像を設置することで、何かが起きるのかもしれない」
「何か……か。それはまだ分からないんだね？」
「ああ、ブリティシュ。それは私にも分からない。単純に宝でも手に入るのか、力が手に入るのか……全く見当がつかない」
「……」
　それを聞いて、部屋の中が静寂に包まれる。
　誰しもが無言となり、その成果を聞いて思い思いに考え込んでいるのだ。
　しかし、最初に声を上げたのは、やはりリーダーであるブリティシュで、
「……でも、何かがそこにはある。その可能性は高いんだね？」
　皆がその問いに、リーダーの言葉に注目する。視線が集まったことに気づいているのかいないのか。しかしホ・ラガは気づいた様子で、その問いに対して正直なところを答えた。
「ああ、何かはあるだろうね。何しろ、こんなものは普通じゃない。この黄金像も、調べてもただの黄金だというのに、いつ見ても不思議な違和感を感じてしまう。例えるなら、この世の物ではないような、不思議ななにかだ」
　皆の中心に置かれているひまわり型の黄金像は、部屋の中の明かりを反射して光沢を放っている。
　その見た目は見るからに黄金だ。黄金でしかないはず。
　しかし、どこか不思議なものに感じるというのは、ホ・ラガほど博識ではなくても、どこか感じれるものがあった。
　もっとも、気の所為だという可能性も高い。この雰囲気に、ホ・ラガの言葉に騙されてるだけかもしれない。
　しかし、リーダーは少なくともそれを信じたし、その感覚を感じ取った。故に、皆を見渡すと、
「……なら、これを少し追ってみないか？」

「黄金像を集める……ということですね？」
「ああ。残り三つの黄金像を集めて、その遺跡とやらを探してみる。どうかな？」
　ブリティシュの問いかけに皆が少し間をおく。しかし直ぐに、
「……ま、どのみち手掛かりも無かったしな。いいんじゃねぇか？」
「私も……賛成。ホ・ラガのいう変な違和感みたいなの、私も感じるような気がするし……」
「私もいいと思います。それに……我々の時間は限られてます。迷っている暇もありません」
「ブリティシュが言うのだから私は賛成だよ」
「皆……うん、そうか。なら、そうしよう」
　満場一致での賛成。これはホ・ラガの説明が良かったのか、皆も黄金像には何かがあると思ったのか。それとも、リーダーであるブリティシュの人徳かは分からないが、とにかく彼らの方針は決まった。
　世界の何処かにある４つの黄金像を集め、その先にある何かに辿り着くこと。
　人類の暗黒時代を終わらせるために、彼らはその道を選ぶ。
　――だがその先に過酷な運命が待ち受けていることを、今の彼らには知る由もなかった。

　朝日が昇る時間。
　レオンハルトは己の部屋のベッドの上で、浅い睡眠から目を覚ましていた。
　……っ……久し振りに、寝たな……。
　覚醒しながらも、まだ軽く微睡むような様子で久し振りの睡眠を感じ取る。
　ここ最近は仕事も忙しければ、交友も盛んで、更には個人的に動かなければいけないことも多かったので、あまり睡眠を取ってはいなかったのだ。
　それで健康的にどうなるでもないし、別に寝ずとも全く問題ないの

だが、個人的に眠るのは嫌いではない。
特に、自分の愛する存在の温もりを感じながら寝るのは、体力の問題ではない、精神的な充足が得られるものだ。
薄く目を開けると、今は己を枕にしてまだ寝ている様子のお町がおり、彼女の柔らかさを感じられる。
時間的にちょっと前までは致していたこともあって疲れているだろう。しばらくは寝かせてやらないとな、と彼女の頭を軽く撫でながら思う。
自分としても、昨日は初めての相手を3人も致したため、体力的にはともかく、精神的には考えさせられるところもある。
思考に割く時間はそれなりに多いのだ。サイゼルとハウゼルの姉妹仲をどうしようとか、お町の今後をどうするかなどで色々と迷ってしまう。こういったふとした時に考え込んでしまうのは癖とも言える。
だが、そうやって考え込んでいると、
「……ん……レオン、ハルト……？」
「！　起こしてしまったか」
「いや……いい……朝からお主の顔を見れたのだからな……」
「……そうか」
「んっ……」
横のお町が身動ぎをし、瞼を擦りながら目を覚ます。まだ軽く微睡むような、ゆったりとした様子だがこちらに身を寄せて心地よさそうに顔を擦りつけてきたため、こちらも軽く頭を撫でてやると、気持ちよさそうに目を細めていた。
それを見ながらしばらく穏やかな時間を過ごす。レオンハルトとしてもしばらくはまだ仕事の時間ではないのだ。
故になんとなくお町の体温を感じながら考え事をしていると、
「……考え事か？」
「ん……ああ、まあな。別のことを考えてしまって悪いな」
「……いや、構わない……」
お町にそれを気づかれて問いかけられる。お町のことも考えては

いるが、どちらかというと、今後のことについての自分の都合を考えているようなものなので、特に何かしているわけではないにしろ、少しバツが悪い。
しかしお町はそれを聞いて何を思ったのか、一度は気にしていないと首を振ったが、そのまま少し身体の位置をこちらの顔まで上げると、
「んっ……！」
不意に、こちらの頭に手を回して抱きしめてきた。
すると顔が、寝る前まで散々味わったお町の爆乳に埋まってしまう。
一体何を、まさかまたやる気なのか、と一瞬頭に過るが、どうもそういう雰囲気ではない様で、お町はそのままこちらを優しく抱きしめたまま、
「仕事の事を考えているのだろう……？　お主は、いつも忙しそうにしておるし、考え事も多そうだからな……」
「……ああ」
間を置いてから頷く。谷間に埋まってるため、声がくぐもるというか、上手く声を発せないため、声を出してみたところで頷いた形だ。
だが、お町には伝わった様子で、ぎゅっと更に抱きしめられると、
「それを、我に止める権利はない……我は、お主のそういうところに救われた身だからな……。だが、こういう時くらいは、我にも癒やさせてくれ……」
蕩けるような柔らかさと温かさに包まれながら、今度は逆に頭を撫でられる。
こういったことをやられるのは初めてではないし、こういったことを言われるのも、実はよくあることだが、
「……ありがとう」
だからといって、嬉しくないわけでもないし、ましてや感謝の気持ちを抱かないはずもない。
自分にとっては、こういったことも含めた身内との時間が、一番の癒やしになるのだから。

こういう時間こそが、己に選択をさせてくれるのである。
だからこそ、レオンハルトは少し顔を上げて、声を出しやすいように位置を調整すると、
「……お町。お前にお願いをしてもいいか？」
「愛しい男の頼みに応えぬ我ではない。何でも言ってくれ。……また奉仕でもするか？」
「いや、そういうわけではない。……たまに思うんだが、お前達は俺を何だと思ってるんだ？」
何故かお町が奉仕することを申し出てきたので、苦い気分で否定しつつ問いかける。別に俺は、性欲の権化でも、毎日おっぱいを味わわないと気が済まないおっぱい星人でもない。
しかしお町は頬を僅かに染めたまま、こちらの身体の上に乗っかってきて、たわわな乳房をむにゅむにゅと押し付けてくると、
「……昨晩、あれほど我を激しく愛していたではないか。乳も執拗に触れていたし……それに、〝ここ〟はもう準備が出来ておるようじゃが……？」
「……これは男が陥る朝の生理現象だ」
どうやらお町の身体の下で自己主張を続けているそれを確認して告げてきたようだが、それだけでもないようで、
「しかし、生理現象だろうと、朝のこれを鎮めるのはお主の女の役目だと聞いた。だから、我に任せてほしい……」
「そんなことまで聞いたのか……」
どうせペールだろうな、と息を吐くが、これもいつものことである。
しかし無理にやめさせることもない。時間もまだある。なのでレオンハルトはそれを受け入れることにすると、既に下に向かって移動し始めたお町に向かって頷きつつも本来の用件を告げることにした。
「まあ、それなら頼む。……だが、お願いはまた別のことだ」
「別のこと？」
お町が剣を自慢の胸で包みながら首を傾げてくる。昨晩も味わった奉仕の心地よさを感じながらも、レオンハルトは真面目な顔でもう一度頷き、その思いついたお願いを口にした。

「お前の古巣で配下だった――ＪＡＰＡＮの妖怪達の事だ」

使徒女子会

――ＧＬ５３３年。

夜の中にある光は、魔物の街であることの証明だった。

人間の集落であることはあり得ない。世界は魔物が覇権を握っており、人権なんてものはありはしないのだ。人間は魔物の欲望を満たすための下等種族であることなどは、今や常識なのである。

人間が魔物の目に留まれば、そして気が向けば、いたずらに嬲られ、殺されるのは自然なこと。

だからこそ、野良の人間が自らの住処で夜に明かりを灯すようなことは、自らの場所を魔物に教える自殺行為でしかないのだ。

故に夜になっても、気にせず明かりを灯しているような場所は、魔物達が住んでいる街か、人間牧場などの施設しかない。

特に、大陸北東部にある世界最大の都市――レオンハルトシティに於いて、夜の賑やかさはかなりのものである。

「あー、飲んだ飲んだ！　よし、もう一軒行こうぜ！」

「ならいい店知ってるぜ。反対側の通りにあってな。そこのトキカマクが絶品で――」

大通りでは大勢の魔物が行き交い、建ち並ぶ屋台や飲食店で食事や酒を楽しもうと友人や同僚らと明るい声を飛ばし合う。

魔人が治める１００万もの魔物が住まう都市の喧騒。その音の響きから少し離れた場所が、街の中心にある。

そこは全体が赤く塗られた巨大な建造物――紅魔城。

この街を治める魔人レオンハルトの居城であり、多くの客が訪れることもあるその城。

その中にあるとある部屋。普通の部屋よりも僅かに広く、多くのグッズが置かれているその部屋に何名かの者達が集まっていた。

「――それでは、ちょっとした女子会を始めますわ！」

「いえぇーい。ぱちぱちぱちー！」

そうやって大きめの声を発したのは、この部屋の主であるレオンハルトの使徒、キャロルだ。

彼女は同じくレオンハルトの使徒であるペールと共にテーブルの準備を終わらせ、拍手をしながら〝女子会〟の始まりを告げた。
そのテーブルの上にあるお茶菓子、そしてお茶は近くにいたメイドの少女が用意しており、
「ふふ……久し振りのお茶会になりますね」
と、そういってニッコリと笑みを浮かべるのは亜麻色の長い髪を持つ少女、シャロンだ。
魔人ケッセルリンクの使徒である彼女がいつも淹れ慣れている紅茶をカップに一つ一つ注いでいく。そうやって仕事をしていると、後輩に当たる子達も思い思いに口を開き、
「それにしても……いいのでしょうか。ケッセルリンク様から離れてこういうのは……」
「エルシールさんってば、真面目ですねー。ケッセルリンク様も私達に楽しんでくるように言ってましたし、それに時間が出来たら出来たでケッセルリンク様もきっと――うふふ～」
「加奈代は相変わらずね……それにしても、パレロアやバーバラも来られたら良かったのだけど……」
「ふたりともお留守番ですからね。仕方ないかと。その分、お土産をいっぱい持って帰ってあげないといけませんねー」
残り二人はケッセルリンクの城のメイド長であり、使徒であるエルシールと、同じく使徒で後輩でもある加奈代の二人も席に着いていた。
本来ならば全員で参加することも考えたのだが、さすがに城を完全に空けてしまうことは難しい。開催がケッセルリンクの城の場合ならば全員参加も出来るのだが、今回はレオンハルトの城であるため、3人のみの参加だった。
そして彼女達が行っているのは、お茶会であり女子会ではあるが、ただの女子会ではない。それは、
「まぁそうですねー。使徒女子会なのにこっちの始祖様も来てませんし……でも仲間はずれは可哀想なのでお菓子とかは残しといてあげましょうか」

「残念ですねー。せっかくハンティお姉さまとも触れ合えるチャンスでしたのにー」
「最近の始祖様は大分パワー系な上に、一向に男が出来る気配もないので、もういっそのこと女の子でも紹介しようか迷いますよう。なので加奈代ちゃんは頑張ってくださいね」
「はーい。頑張ります、ペールお姉さま♪」
「あんまり加奈代を焚き付けないでくださいよ、ペールさん……」
はぁ、とペールと加奈代のやり取りを見て溜息を零すエルシール。普段からメイド長としてケッセルリンクの使徒を纏めている彼女だが、その中でも加奈代は女の子が好きだったり、ペールと仲が良くてちょっとからかうのが好きだったりと色々と苦労するのだ。
「エルシールさん、今日はお茶会ですので、悩みならこのわたくし、魔物界一面倒見がいい使徒ということで有名なキャロルがお聞きしますわ！　さあ、どうぞ！」
「悩み、ですか……そうですね。最近、漫画を描いているんですが、どうも塗り方が難しくて……」
「漫画ですの？」
「メイド長さんに出された課題で……線画は基本、出来るようになったんですが、色塗りはまだまだ未熟で……中々綺麗に塗れないんですよね……」
「……エルシールは一体どこに向かっているのかしら……」
「今更ですけど、全くメイド関係ないですよねー」
シャロンと加奈代が今更ではあるが、エルシールの身に着けている技術、及び、メイド長さんの指導内容を思い出して苦笑する。
もう結構昔からそうではあるが、完全にメイドとは関係のない技術を仕込まれており、年を重ねる毎に、エルシールに色んな技術が身についたりしていくのだ。
エルシールの方も途中から割と普通に受け入れているので、特に気にしてはいないが、寿司が握れて、将棋が指せて、歌って踊れて、絵も描けて、他にも色々と出来るメイドとか、方向性を見失ってる気がしなくもない。

まあ戦闘や工作のような意外と役に立つことも教わっていて、主であるケッセルリンクの役には立っているので本人的にもそれなりに満足だろう。
だが、それを悩みとして話してもどうにもならない気がしたが、
「ふーむ。わたくし、絵は専門外ですけど、上手くいかない時は努力あるのみですわ！　たまには違うやり方を試してみたり、息抜きをしながら頑張ってみるのがいいと思いますの！　それでも挫けそうな時は、大切な人を思い浮かべたらまた頑張れますわ！」
「大切な人を……そうですね。分かりました。頑張ってみます」
普通にそれっぽいアドバイスを送っている辺り、キャロルもなんだかんだで頼りになる使徒に育っていた。しかし、
「――あ、忘れてましたわ！　今日はシャロンさん達に紹介しなければならない者達がいますの！」
「そうだったんですか？」
シャロンが首を傾げて問い返す。すると横にペールが半目で、
「あー、中々言い出さないと思ってたら忘れてたんですね……とりあえず、部屋に入れてあげましょうか」
「……謂わば今日の主役ですので、少し勿体ぶってみただけですわ！
――というわけで、どうぞいらっしゃいまし！」
と、キャロルが部屋の外に向かって声を発しながら、手をパンパンと叩く。
すると部屋の扉がガチャリ、と開けられ、外から二つの影が入ってきた。それは、
「お、お邪魔しまーす……」
「ケケケ。やっと出番が来ましたね、ケケケ」
どちらも、やはり人ではない異形の二人だった。
遠慮がちに、中にいる人達を窺うように入ってきたのは、赤いフードに、先端に細長いランタンが付いている杖、身体を覆い隠すようなゆったりとした白い服に、顔の部分を昆虫のような仮面で隠した小柄な――声から察するに、おそらくは少女。
そして紫色のツインテール、腰の部分までしかない短い白い和装

に、リボンのようになった紫の大きめの帯。下には同じく紫色のレオタードの様な衣装を身に着けている少女。ただその手は、巨大な手甲のようなものがついた金属の腕であり、その拳は少女の頭よりも大きい。明らかに、戦闘を前提としたような姿形をしていた。
そして両者ともにその身からはこの場にいる者達同様、濃いめの魔の気配を漂わせていた。同じ種であれば、間違えるはずもない。彼女達は、
「では、自己紹介をお願いしますわ！」
「あ、はい、キャロルさん。……えーと、魔人、ラ・ハウゼル様の使徒、火炎書士です。よろしくお願いします」
「はい、ちゃちゃちゃちゃ～ん、ちゃちゃちゃちゃ～ん。おっす！　ユキちゃんは、サイゼル様の使徒のユキちゃん！　てなわけでユキちゃんが遂に登場！　こっからは怒涛の超展開目白押し！　ってことで夜露死苦！」
――使徒であった。

二人の使徒――ハウゼルの使徒である火炎書士と、サイゼルの使徒であるユキの登場によって、その場は少しの間、静まり返った。
というのも唐突な上にキャラが濃いこともあり、エルシールなどは、
……うわ、またなんか厄介そう……。
と、苦労の予感を感じてしまうからだ。
常識人からすると、個性溢れる魔物界の面子はそれなりに苦労させられる。自分も、昔は苦労したものなのだ。
今は多少、慣れはしたが、それでもまた濃い相手が現れるとなるとちょっと身構えてしまう。
しかし他の者達は普通に受け入れている様子で、
「火炎書士さんに、ユキさんですね。初めまして。私はケッセルリンク様の使徒のシャロンですわ」
「同じく加奈代でーす」

「……メイド長のエルシールと申します」
と、何時も通り全く動じない様子でにっこりと笑みを浮かべて挨拶をするシャロンと、あんまり気にしていない様子の加奈代に続いて挨拶をする。
魔人サイゼルとハウゼルの姉妹といえば、この城に住む魔人の姉妹であり、レオンハルトとは良い仲であったはずだ。似たような関係にある自分達の主とも、それなりに関わることが予想されるし、それでシャロンらにも紹介しようと場を設けたのだろう。
なので、きちんとよろしくする必要はあるし、それなりに交友を図っていかなければな、とエルシールは思う。しかし不安もあるもので、
「はいはーい、よろよろー。あ、そういえばお近づきの印に良いもの持ってきたよ？」
「え、あ、ありがとうございます……」
と、思っていたら、一番心配な相手からそんなことを言われてしまい、エルシールは機先を制されたような気持ちになる。どう見てもちょっと頭ヤバイ系の話し方だったが、こういった気遣いを、フランクではあるがしてくる辺り、結構マトモなのかもしれない、と、ユキという使徒がお近づきの品を渡してくれるのを待っていると、
「はい、ダンゴムシ一年分」
「――いりませんよっ!?」
いきなりとんでもないことを言い放ったので、エルシールはその手を叩いて思いっきり引いてしまう。
するとユキは変わらない笑顔のまま首を傾げ、
「あり？　嫌だった？　嬉しくない？」
「あ、当たり前です！　そんなもの貰っても嬉しいはずが――」
「あ、わかった。コオロギ派なんだよね？　わかるよわかるよー、コオロギの方が歯ごたえあるからね！」
「コオロギ派でもありません！　というか、食べるんですか!?」
「うんうん、食べる食べる。ユキちゃんってばキチガイだから。――コオロギうめぇ！」

「……」
「あ、言っとくけどジョークよ？　イッツ・ア・ジョーク」
「……そうなんですか？」
「あったりまえじゃん。食べるならクワガタだよね。ケケケケケ」
「……」
「クワガタも食べないよ？」
……どうしよう……この子とまともに交友する自信ない……。
いきなりとんでもないことをぶっ込んでくる眼の前の相手に、エルシールは席に戻りながらも溜息を吐いてしまう。それを見ていたシャロンなどは、笑顔で、
「ふふ、ユキさんは明るい方ですね」
「そうそう、根暗なのに強がりな上司の代わりにユキちゃんは明るく振る舞っているんですよ」
「あ、明るい……？」
明るいで済ませてしまうのか……と、困惑してしまう。どう考えても、自分で言っていた通りのキチガイに見えるのだが。
この分だと、もう一体もヤベー奴なのではないか、と疑ってしまう。なので、もう一体の火炎書士の方も様子を窺ってみると、
「もー、またユキちゃんったら初対面の人困らせてー。ユキちゃんは刺激強いんだからちょっと抑えめにしないと駄目でしょ？」
「お？　ディスられたか？　火炎ちゃん、ユキちゃんのこと軽くディスった？」
「ごめんなさいね、エルシールさん。ユキちゃん、言動はこんなですけど、悪気はないので許してあげて下さい」
「え、ええ……構わないけど……」
「手厳しっ。四面楚歌な私、可哀想。泣いていい？」
「ユキさん、こっちのお菓子美味しいですのよ。火炎さんもどうぞですわ」
「あっ、ありがとうございますキャロルさん」
「ありがとー、キャロルちゃん。この優しさが目に染みるー！　もうユキちゃんは泣いちゃうぜ！　えーんえんえんえん！　ええんえん

えんえんえん！　えええんえん！　え～～～んえん！」
「ユキちゃん、嘘泣きはうるさいからやめてね？」
「妙にリズム良い泣き方ですねー」
「相変わらずのマイペースっぷりですよう」
――どうやら、火炎書士の方は普通？　の様だ。
見た目は不気味というかちょっと怖い。しかし、見る限り受け答えも普通で丁寧だし、性格に問題はない様に見える。既に付き合いがあるからか、ユキ相手には結構遠慮ない感じではあるが、それでも常識レベルだ。
ともすれば、火炎書士は久し振りに現れた、常識人なのではないかと若干の期待を抱いてしまうほど。
……キャロルさん達も既に付き合いがあるのか、結構親しげですね……。
火炎書士もユキも、キャロルやペール相手に普通に接しているし、同じ城にいるということでそれなりに親交を深めているのだろう。結構仲が良さそうだ。
個人的には、火炎書士の方なら苦労を分かち合えそうだと思い、話題を振ってみようかと考えていると、
「さーて、お茶飲むついでにユキちゃん、一発芸しますね？　――よいしょっと」
「!?　く、首が……！」
不意に、ユキがその首の部分から先だけを胴体から離してしまった。
分かれた頭はそのまま宙に浮いているし、胴体も席に着いたままである。それを見てぎょっとするエルシールを前に、ユキはそのまま頭を手で掴んでお茶を流し込みながら、
「こんな感じでユキちゃんの首は着脱可能だから、首が飛んでリタイアすることなんてありませんよ？　超便利」
「びっくりした……」
「その気持ち、わかりますようエルシールさん。ペールちゃんも、前にこれ、いきなり見せられてちょっとびっくりしちゃいましたから」

「そ、そうなんですか……」
苦笑しながらも慰めるような言葉を掛けてくれるペールと、珍しく気持ちを同じとする。テーブルの上に頭だけ着地したユキが皿の上に乗ったクッキーをぱくつくのを半目で見ていると、今度はまた火炎書士が、
「相変わらずユキちゃん、首だけの方が良いよね。私、そっちの方が好き」
「すっごいサイコなカミングアウトしてるけど大丈夫か？」
「えっ、そうかな……普通だと思うんだけど……？」
……あれ？　こっちもヤバいような……？
常識人だと思っていたが、微妙に感性が酷そうな気配を感じてしまう。すると横に来たペールが耳打ちするように、顔を寄せ、
「……一応教えときますけど、火炎ちゃん、感覚が常人とはちょっとおかしいから気をつけてくださいね？」
「……やっぱり……」
薄々そんな気はしていたな、と息を吐く。
もっとも、どの程度おかしいのかはまだ分からないのだが。と思っていると、ペールが続けて、
「簡単に言うと、美醜逆転してますから」
「え？　それって……」
美醜逆転。よく分からないが、それはつまり――
「イケメンとか美女見たらグロテスクと評しますし、不細工を見たらとんでもないイケメン、美少女だって評しますからね。まあ良い子なのでだからといって態度変えたりとかもないんですけど」
「……難儀ですね……」
思わず本音が漏れ出る。
そういうことであるならば、あまり言いたくはないが、ここの関係者などの殆どの者は自分達の主も含めて、彼女にとって凄い風に感じているはずだ。
ペールが言うように、だからといって何があるというわけでもないし、本人も良い人そうだから構わないのだが、なんとも言えない気分

にはなる。
　とはいえ、それで仲良くしないというのもおかしな話なので普通に接することはするのだが、
「火炎書士さん？　その顔の下、良ければ見せて貰ってもいいですかー？」
「え、えっ？　だ、駄目ですよ！　私の顔、その……凄くお見苦しいものですし……」
「ええー？　すっごい可愛い気がするのになー」
「ご、ごめんなさい……」
　加奈代の言葉に、尻すぼみになりながらも断る火炎書士。美醜の概念が彼女の中で逆転しているということは、そういうことなのだろうが、やはりなんともいえない気分になってしまう。
「とりあえず、うちのポンコツ上司が戻るまではユキちゃんも自由なので、お茶はガンガン飲めますよ？　お腹たぷたぷになるまで」
「飲み過ぎはよくないよ、ユキちゃん」
「あら、おかわりを遠慮する必要はありませんよ」
「シャロンさんの言う通りですわ！　好きなだけ飲み食いしていいですわ！　ええ、わたくしは太っ腹ですので！」
「お茶、注ぎますねー」
「あ、ご丁寧にどうも。まあ、確かに時間的には私もハウゼル様がお戻りになるまで余裕がありますが……」
　と、加奈代におかわりを淹れてもらって畏まる火炎書士。
　そしてその途中の言葉には、皆が同意する気持ちだった。何故なら、
「まあレオンハルト様方は色々とあるみたいですし、しばらくはお喋りしましょう。もっとお菓子持ってきますね」
「そうですね……おじ――レオンハルト様もケッセルリンク様も、最近は忙しくて予定が合わないことが多かったですし……」
　と、ペールとシャロンがそれを口にする。
　簡単に言えば、自分達が使徒女子会をしてる裏では、主達も親交を深めているのだろう。

……特にケッセルリンク様は、あの魔人姉妹の方々とお話してみたかったようですし……。
同じ魔人で女性で、しかもレオンハルトとそういう関係にあるという者同士であれば、色々と話したいこともあるだろうと察せられる。
特にケッセルリンクは同性の友人というものが少なく、魔人の間だとカミーラやメディウサとも相性が悪いのだ。単純に仲が良い相手であれば、レオンハルトを筆頭にガルティアやそれらの関係者、最近だと魔人ジークなども意外と親交がある。
しかし女性で魔人ということでケッセルリンクにとっては良い関係を築けるやもしれないし、使徒の自分達も仲良くしておくに越したことはない。
なのでエルシールはメイド長として、出来ることはしようと心に決め、
「……ユキさん、こちらのお茶菓子、いりますか？」
「貰う貰うー。お代はユキちゃんの髪の毛１２本セットと、カブトムシの角でいい？」
「……どっちもいりません」
「じゃあ歌う？　デュエットする？　オッケー。伝説作ろう」
「……歌はちょっとここでは……やるならもうちょっと設備が整った場所でないと……」
「……そういう問題？」
「あれ？　エルシールさん……ひょっとして、少しおかしな人……？」
ユキや火炎書士のツッコミを受けながら、彼女達との交友に常識人の自分がついていけるか不安を感じてしまい、エルシールは一人、頭を押さえるのであった。

晩餐

その日の食堂は、異様な雰囲気に包まれていた。

紅魔城1階。そこにある食堂は、その城に住む多くの者達が使えるように長いテーブルに幾つもの席が置かれている。いつ誰が来ても、食事の注文をそこにいるメイドなどに告げれば、厨房にいるコック達が腕を振るって美味しい料理をお出しするのだ。

しかし、誰でもいつでも使えるとはいえ、場合によってはそうでない時もある。

その場合というのが、来客があった時などだ。

日中であれば中庭のテラスを使うことも多いし、応接室も存在する。そこで食事やお茶会などを行うことも出来るのだが、夜中となれば、やはり室内を使うことが一般的である。

特に、魔物界の――否、世界の支配者階級である魔人が集まるとなれば、それは高貴な〝晩餐会〟となる。

まるで人間の貴族がやるような、それでいてそれ以上の贅を尽くしているといわれるその城。そこで行われる晩餐会ともなれば、美食の街と知られるこの街でも最高級の料理を味わうことが出来る。

事実、その長いテーブルの上には紅魔城が誇る伝説の料理人。あのミシュラン一族の総代が作る絶品料理が所狭しと並べられている。

この城に住む者や、時折訪れる者であればその味は食べ慣れたものではあるが、飽きることはない。それだけ美味なのだ。無論、この街で食べるものであればどれも世界基準では相当美味しい部類に入る品ばかりだろうが、その中でも最高級に値するのがこの城の料理である。

年に数回開かれる、レオンハルト軍の幹部である魔物将軍らを集めての紅魔城での晩餐会や宴会は、街の高級店で毎日の様に食事をしており、舌が肥えている魔物将軍らですら、ここの食事を楽しみにして、その開催を待ち望んでいるのである。

だが、今日は軍の催しではない。単純に、この城の主であるレオンハルトのプライベートでの付き合いによる食事会のようなものであ

る。
故にそこまで大仰なものではなく、感覚としては友人を呼んで饗すような感じである。近しい関係であれば、それは尚更だ。
しかし、今現在の空気は、友人同士の軽やかなもの――ではなく、僅かに緊張したものであった。
「……」
「……」
「……」
「……」
その場にいるのは給仕のメイドを除けば、４体の魔人だ。
一体は、この城の主である魔人レオンハルト。
彼は上座に座り、料理を切り分けながら紹介した後に何故か微妙な空気になってしまったその場を憂いている。
その左右には、まるで対峙するかのように魔人が並んでいるのだ。
レオンハルトから見て右側には、
「えっと……お、美味しいですね、姉さん」
「ぴっ!? え、あ、そ、そそそうね！」
二体の女魔人。姉妹である彼女達は――魔人ラ・サイゼルと魔人ラ・ハウゼル。この城に住む二体の魔人であり、最近レオンハルトと良い関係になった二人だ。
だがその姉、サイゼルは何やら怯えた様子で声を震わせながら強がっており、対する妹のハウゼルも、姉のように怯えてはいないようだが、何を話せばいいのか分からずに戸惑っている。
そんな彼女達の視線の先、レオンハルトから見て左側には、
「……」
一体の女魔人――ケッセルリンクがいた。
魔人四天王の一角にして、古くからレオンハルトとは親密な仲である魔人。
その彼女こそが、今回の晩餐会のきっかけとなった張本人である。
サイゼルとハウゼルという二体の女魔人が同席しているのも、他ならぬケッセルリンクの希望でもあったのだ。

だがしかし、その場の空気は芳しくない。
いかなる目的なのかは分からないが、ケッセルリンクは先程からサイゼルとハウゼルをじっと見ている。故にハウゼルは戸惑い、サイゼルはその威圧感に怯えているというわけだ。
その理由は不明――特に、二人にとっては不可解にも見えるだろう。
レオンハルトはなんとなく、その理由も分からなくもないのだが、ヘタレなサイゼルなどはちょっぴり限界な節がある。その証拠に、サイゼルはレオンハルトに向かって先程から強い視線を送っている。
〝助けて〟的な視線だ。故にレオンハルトは息を軽く吐いてから、
「……サイゼル。食事中で悪いが、そういえば急ぎで確認したいことがあったのを忘れていた。ちょっと頼めるか？」
「しょ、しょうがないわね」
「二人も、そういうわけだ。悪いな。数分で戻ってくるから気にせず食べていてくれ」
「……ああ」
「……？　ええ、分かりました」
席を一度立ちながらサイゼルに声を掛けて呼び出し、二人に軽く謝って食堂を出る。かなり杜撰なやり方だが、別に方便だとバレても構わない。問題なのはサイゼルを落ち着かせることだからだ。
というわけでレオンハルトは食堂から話が聞こえない程度に離れた部屋まで行くと、サイゼルが声を跳ね上げた。表情を情けなく歪ませながら、
「な、なんなのよあのケッセルリンクって魔人！　めちゃくちゃ怖いんだけど!?」
「やはり怖がっていたか……だが、大袈裟だ」
「べ、別に怖がってはないけど、ずっとこっち見てたし、何考えてるか分かんなくて不気味よ！」
「お前今自分で〝怖いんだけど〟って言ってたじゃねぇか……」
「……言葉の綾ってやつよ」
と、明らかに強がってそんなことを言うサイゼルを呆れ気味に見下

ろす。何をそんなに怖がることがある、とレオンハルトとしてはそう思うが、まともに話したこともない相手、それも魔人四天王ともなれば、怖いと思うのも理解出来ないこともない。
　しかし立場的には自分の方が上なので平気だとは思ったが、それもどうやらいつもの強がりで、内心はビビりまくっているようであった。だがそれでも、
「……ケッセルリンクはお前に危害を加える相手じゃないぞ。基本的に女性には親切な上、魔人の中では暴力などをあまり好まない。敵対しているならともかく、仲間の魔人相手に威圧するようなことはないからな」
「でも、すっごい見てたんだけど!?　無言で！　じーっとあたしとハウゼルのことを！　ひょっとして、何かが気に入らなかったとか……！」
「……まあ確かに、いつもより口数が少ないというか、表情が硬いのは確かだ。だが――」
　しかし自分が思うに、あれは、
「あれは単純に――〝緊張〟してるだけだ」

　食堂に残されたハウゼルは、眼の前の席に座る魔人ケッセルリンクと二人きりになってしまい、どうすべきかを模索していた。
　……なんで見つめてくるんでしょう……？
　とりあえずはレオンハルトにも言われた通り、手を動かして食事を摂っている。今日の料理もとても美味しい。いつも美味しいが、今日は特に気合いが入っているように感じる。
　しかし、その美味しい料理に注視することなく、眼の前の相手は自分をじっと見ていた。時折、食事するための手を動かしたり、視線を逸したり、下を向いたりと色々と行動は起こしているが、それでも必ず中継されるのは自分達を見ることだ。
　姉のサイゼルがレオンハルトと一緒に仕事の確認とやらに行ってから、その視線はハウゼルに向かって集中している。その様子を見る

に、
……私から、話を振った方がいいんでしょうか？
室内は静かで、言うなれば気まずい。給仕のメイドが音を発するはずもなく、室内には両者の食器の音だけが僅かに響いている。
一応、相手は魔人四天王でこちらの目上でもあるため、何かしらの話を振って楽しませた方がいいのだろうかと思う。会話が無いのは自分としても気まずいし、相手も退屈だろう。レオンハルトとサイゼルがいなくなると、余計にそう思ってしまう。４人だと、時折レオンハルトが会話を振ったり、ハウゼルがサイゼルやレオンハルトに声を掛けることも出来るのだから。
しかし今はそれは出来ない。眼の前の相手に声を掛けるしかないのだ。
……よし。
ハウゼルは心の中で覚悟を決め、声を掛けることを決める。
相手に気づかれぬように小さく吐息すると、
「あ、あの――」
「少し――」
と、同時に声が響いたことで、ハウゼルは咄嗟に声を引っ込める。
それは、相手の声だった。見れば相手も、声が被ってしまったことに対して、声を差し止めてしまっているし、僅かに驚いているようにも見える。
だから当然、ハウゼルは遠慮がちにこう言った。
「えっと……すみません。そちらからどうぞ」
「……いや、謝らずともよい。それより、そちらから話していい」
「い、いえいえ、私の話なんて大したことじゃありませんので、お先にどうぞ」
「それを言うなら、私の話も他愛のないことだ。だからそちらから……」
「いえいえ――」
「いや――」
お互いの譲り合いがしばらく続く。

互いに似たような理由で相手から言ってくれと続けるのだが、そうしていると分かることもある。それを、ハウゼルは遠慮の代わりに口にした。
「……気を使ってくださって、ありがとうございます」
「！」
お礼の言葉を口にすると、ケッセルリンクは僅かに目を見開いた。そして少しの間を置いてから、目を伏せて息を吐く。何かを吐き出すような様子だ。その後に再び口を開くと、
「ふぅ……どうやらそちらにも、気を使わせてしまったようだ」
「いえ……その、私は新参ですし、立場も下なのでそれは当然かと……」
魔人としては生まれて百年も経っていないのだ。魔人の感覚としては、百年だとまだまだ若造、小娘だというところでしかない。千年以上を生きてる魔人からすれば尚更だ。魔人ケッセルリンクは１５００年ほどを生きており、更には魔人四天王でもある強大な存在。新参の魔人が軽々しく接することなど出来ない。
厳密に言えば、そのようなルールは無くても、目上や自分より強い相手と接するのは気をつけなければならない。それが魔物社会での生きるための法則のようなものだ。そうレオンハルトには習っている。
だから間違ってはいないのだ。だが、
「……それはそうかもしれない。しかし私としては君たちと……」
「私達と？　私と姉さん――サイゼルのことですか？」
ケッセルリンクが問いかけに頷く。僅かに迷ったような、不思議な雰囲気を感じる。それは、
……もしかしてこの方も……緊張している？
ハウゼルは内心で疑問符を浮かべながらも、殆ど確信した。
もしかしなくとも、ケッセルリンクは自分達相手に緊張しているのだと。理由は分からないが、その態度が証明している。現に今も、何か言い辛いことを言おうとして躊躇するような反応を見せているのだ。

もっとも、その原因までは分からないが、その答えは直ぐに来た。他ならぬケッセルリンクの口から、
「……君たちと、交友を深めようと思ったのだがな。どうにも、私の方が緊張してしまっているらしい。情けないことだ」
「え……？」
交友を深めようと思った、とケッセルリンクは苦笑しながらそう言う。少し自嘲気味にだ。
それを聞いて、ハウゼルは思わず間の抜けた声を出すと同時に、疑問が浮かび、そしてその疑問を口にすることで続けた。一息置いて、
「……私達と……仲良くしたい……ということですか？」
「ああ。そのために、レオンハルトに頼んで君達との席を設けて貰ったのだ」
と、ケッセルリンクはこの席を設けた理由を口にする。確かな口調で、
「数少ない女性の魔人。それも、同じ男を愛した相手だ。出来れば仲良くしておきたいと……そう思ったまでだよ」
「！　え、あ、その……」
「……まあ、少々気恥ずかしいが……ね。それもあって、何から話せばいいか迷ってしまったのだが、そのせいで君の姉やレオンハルトにも少し気を使わせてしまったようだ」
ふぅ、と肩から力を抜いてケッセルリンクは言うが、ハウゼルの方は顔を赤くしてしまっているのを自覚していた。
というのも、同じ男を愛した、という言葉に、今更ながら羞恥を覚えたからだ。やはり、改めて口に出されると顔が熱くなってしまう。
そして見れば、ケッセルリンクの方もほんの僅かにだが、頬を紅潮させていた。そういうことを口に出すのが、自分と同じで気恥ずかしいのだろう。
だがそうなると、相手の気持ちも分かってくる。ハウゼルは息を整えて落ち着くと、微笑を浮かべ、
「そう……だったんですか。その、では……私でよろしければ、仲良くして頂いてもいいですか？」

「ふっ……私から頼むことの筈だったが、先に言われてしまったな。だが願ってもないことだ。私としても、仲間の魔人とは仲良くしたいと思っている。君の姉も含めてね」
「はい。私もそう思います。あ、でも……」
「？　どうかしたのかね？」
　ケッセルリンクが問いかけてくる中、ハウゼルは不安要素を口にした。それは、
「姉さんについては……ちょっと分かりません。姉さん、結構周りの人を遠ざけるし……それに勝手だし、時々上から目線で説教してくるし……いらないちょっかいも――」
　と、色々と微妙な関係だったりするサイゼルのことを小さく口にする。するとケッセルリンクが眉をひそめ、
「……仲が悪いのかね？　それとも、喧嘩中か」
「喧嘩、というほどではありませんけど……言い争いは多いです。それも、姉さんが勝手だから――」
「ふむ……」
「最近だって、姉さん。私がレオンハルトさんとの……デートの日だったのに、強引に付いてきて邪魔してきたんですよ！」
「む……それは良くないな。デートの邪魔は、あってはならないことだ」
「ですよね⁉　せっかく二人きりで本の感想を言い合いたかったのに……強引に外に連れ出して……！」
　ハウゼルが話ながら段々とヒートアップしていく。
　ケッセルリンクという聞き手が、ハウゼルに同調してくれているせいであり、二人は意図せずして話せる仲になりつつあった。

　――その頃、当人であるサイゼルは、
「あの子、この間もあたしの邪魔をして……！　妹なら姉のあたしの言うことをなんで聞かないのよ！　最近、どんどん生意気になって……反抗期よ！　反抗期！」

「いや……どうだろうな……」
食堂から少し離れた部屋で、何故か妹のハウゼルのことをレオンハルトに向かって話していた。
ケッセルリンクについての相談を受けていると、何故かハウゼルに対する日頃の不満に話が流れ、そこからサイゼルがヒートアップしてしまった形だが、レオンハルトの方は部屋のベッドに座りながら、隣のサイゼルの怒りを宥めようとその相手をする。
そのため冷静な言葉を返そうと、レオンハルトは声を飛ばした。
「……でも、サイゼルはハウゼルと仲直りしたいんだろ？」
「う……それは、そう、だけど……」
「なら、少しくらい妹の意志を尊重してもいいんじゃないか？」
「うっ、うう……で、でも……」
そう告げてやると、サイゼルは言葉に詰まり、気勢を衰えさせる。
レオンハルトはサイゼルと関係を持ってから、よくこういった姉妹間の仲に関する相談をサイゼルから受けており、その度に助言をしたり、慰めたりするのが定番となっている。
しかし、色々と助言をしたり、場合によっては間に入ったりするものの、ちゃんとした仲直りをすることは出来ずに、話はしても微妙に仲が良いとも悪いとも言えない関係が続いており、喧嘩もよくしてしまうのだ。
だがサイゼルとしてはもっと仲良しになりたいと、口にこそしないがそう思っており、レオンハルトもそれが分かっているために助言してやってるのだが、素直になれないサイゼルにとっては中々に助言の通りにすることは難しいことなのだ。今も、
「……だ、だってあの子、鈍くさくて危なっかしいし……あたしが見てあげないと駄目じゃない。姉なんだし……」
「少しは信用してやるのも大事だ。子供扱いされるのはお前だって嫌だろう？」
「わ、分かってるけど、でも……」
そう、頭では分かってはいる。
だが、実際には素直になれずに、真逆のことをしたり、余計なちょっ

かいを掛けてしまうのがサイゼルなのだ。
基本的にハウゼルに対して掛ける言葉や起こす行動は、彼女に対するコンプレックスと好意の裏返しのようなものであり、サイゼルがハウゼルを嫌っているなどということは決して無い。
これが難しいところで、いくら言い聞かせても分かってはいるのだからあまり意味はないし、素直になれるようにどうにか舵を取らなければならないのだが、それが中々に難しい。
こういう相手の場合、ハウゼルの方から近寄ってくれれば上手くいくことが多いのだが、肝心のハウゼルの方はハウゼルの方で、勝手なことをするサイゼルを心配しつつ、それでいて時折、苛立ちを燻らせている。
ハウゼルの方も、サイゼルが嫌いということはないのだ。故に今も、仲が悪い、というところまではいっていない。
なんというか、これはこれで姉妹仲としてはあるものだし、問題という程でもない。兄弟というケースの中には、こういった微妙な距離感を保っている兄弟だって多いのだ。ひょっとしたら、仲良しという兄弟の方が少ない可能性だってある。実際のところどうかは分からないが、この二人の場合、問題なのはサイゼルがもっと素直になって仲を深めたいと思っていることと、喧嘩した場合の被害や影響が大きいため、放置は出来ないことだ。
それに、レオンハルトとしても自分の身内のことなら解決してやりたいと思う。
だがそれも中々に骨が折れることで、
……荒療治が必要かもな。
今までは助言程度で済ませているが、もっと直接的に介入して、強引なことをする必要があるかもしれない。
加えて、サイゼルが素直になる土台作りもする必要がある。そう考え、レオンハルトはあることを提案した。
「……なあ、サイゼル」
「……なに？」
隣のサイゼルの目を見て告げる。それは、

「お前が少しでも素直になれるよう、素直になる練習をしてみないか？　――俺相手に」

最後の黄金像

聳え立つ岩山。ゴツゴツとした岩や石が辺りに広がるその場所に、巨大な魔物の死骸があった。
全長は２０メートル程。四足の獣の様な形をしており、硬い鱗と大きな口。そして鋭い牙を持った強大な化け物。これまでに数多くの人間を殺したであろう凶暴な魔物だ。
だがその魔物は、全身から血を流し、地面に横たわっていた。
そしてその魔物の死骸を前にして、武器を収めるのは五人の冒険者だ。彼らは先頭に立つリーダーが手にしたその光り輝く像を見つめて呟く。
「黄金像……これで、３つ目か」
「今度もまた変な形してるな」
「なんか……猿っぽい？」
彼らのリーダーである戦士、ブリティシュが手にしたそれは、彼らが世界各地を旅して探し集めている黄金像。その３つ目だ。
これまでにひまわりの様な形の物と、盆栽の様な形のものを手に入れていた一行だが、この口元を手で押さえた猿のような形の黄金像でとうとう３つ目。４つ手に入れればなにかがあるだろうという希望を持っての目標。それも残り一つとなり、彼らの目の奥には既に決意と覚悟がある。
魔人を、魔王を倒すために集まった彼らは僅かに緊張感のない会話をしながらも、きちんと次へと目を向けていた。
「何にせよ、これで情報にあった像は集めきりましたね」
「まあ、４つないと意味がない訳だが」
日光とホ・ラガがそれぞれ得物を収めながら言う。これまでの苦労を思い出しながらだ。
黄金像を集めると言ったものの、その捜索は困難を極めた。
何しろ、１つ目を偶然にも手に入れたのはいいが、肝心の他の黄金像の手掛かりがゼロに等しいものであったのだ。故に各地の隠れ里で情報を集めながら、その途中にある迷宮を片っ端から攻略した。古

い遺跡などを中心に探したつもりだが、それでもここまで集めるのに数年掛かってしまった。
　二つ目は、なんてことのない宝箱から出てきた。ダンジョンを潜りまくって辟易としていたところに、ちょっとした依頼も兼ねて近場の難易度の低い迷宮に潜った時、最初の宝箱を開けたところで入っていたのだ。
　それを見て、今までの苦労は何だったのだ、と軽く落ち込みが入ったが、手に入ったので良しとする。しかし、その２つ目のせいで、黄金像は、何も古い遺跡に隠されている訳でもない可能性が示唆されてしまったので、五人は捜索の手を広げる他なかった。
　古い遺跡だけではなく、なんてことのないダンジョンにも潜ったし、同業者が既に持っている可能性も考えて、話を聞いて回った。
　それもしばらく収穫のない状況が続いていたが、ついこの間、とある隠れ里の有力者である占い師の女性から、自分達が持っている黄金像を手掛かりに、残りの黄金像の在り処を占って貰うことに成功した。
　それによると、一つは巨大な魔物が丸呑みしているので、その巨大な魔物がいる場所へと向かい、これを倒した。今彼らの眼の前に転がっている魔物がその魔物である。
　占い師の情報というのに半信半疑であったため、本当に見つかったことには驚いた。だがそれはつまり、
「……でも、これであの胡散臭い魔女の情報が信用出来ると分かった。後一つの場所もさっさと占ってもらおうぜ」
「……そう、だな。残り一つ、早急に見つけるためにも、彼女に協力を仰ご――」
「――――私を呼んだかね？」
　と、五人がそこから立ち去ろうとする直前。不意に、女の声がその場に響いた。
　声が飛んでくる先に視線を向けると、巨大な魔物の死骸の上に腰掛ける、女性の姿がある。長い白髪に異様に白い肌、青いマントにとんがり帽子の彼女は、まさしく五人に情報を提供した者だ。

「いつの間に……」
「……お前、いつからいやがった？」
日光とカオスが驚きと警戒が入り混じった声を彼女に送る。魔物の上で足を組んで座っている彼女は、シーフとして周囲の警戒に当たっていたカオスの網を潜り抜けてきているのだ。
それに加えて、この場には五人の凄腕の冒険者がいる。現人類最強と言っていいほどの強者達に気づかれずにやってくるなど、例え味方であっても不気味でしょうがない。
しかしそんな警戒の目を向けられても、魔女は表情を変えない。余裕を持った小さな笑みの表情を、彼らに向けている。何処か底知れない雰囲気を醸し出す魔女の赤い視線は、彼らを見ていながら、どこか別の部分を見ているかのような不可思議なものだった。
その笑みも相まって、まるで何もかもを見透かされているような感じがして、五人の印象は一致していた。――気味が悪い、と。
そうでなくても、得体が知れない。名前も教えてくれない相手だ。美少女には違いないし、善良な心を持つブリティシュやカフェであっても、少し嫌厭してしまいかねない存在感が彼女にはあった。
そんな彼女が彼らを見下ろしながらカオスの質問に答えようと口を開く。
「いつから、か。その質問に答えてしまってもいいが、君達が知りたいのはそんなことではないはずだ。それに、私に警戒の目を向けるのは如何なものだ？　私は君達の手間を考えて怪しまれるのを承知で迅速に姿を現したというのに。むしろ感謝をしてくれてもいいのではないかね？」
「くっ……なら少しは出方を考えろよ……そんなもん、警戒するに決まっとるだろうが」
「……魔法か何かだろうか。時間があれば教えて頂きたいものだが……」
「まあそんなところだとも。優秀なシーフのカオスに魔法使いのホ・ラガ。君達程、実力に優れているのなら私が急に現れたことに対する警戒も当然だろう。何故なら、君達が知っている知識の中に、君達に

気配を悟らせずに姿を現す方法がないからだ。しかし――」
　と、魔女はそう言って立ち上がり、巨大な魔物の上から跳び下りて、五人と同じ地面に降り立つ。ふんわりとした落下で柔らかく着地した魔女に、またしても魔法を使っているのだろうかと疑問が湧いてしまう中、魔女は五人を見て、
「世界には、君達の知らないものがまだまだ沢山存在する。数十年、生きて世界を回ったくらいではこのような未知はまだまだ存在するということだよ。君達が求める黄金像もそうだ。違うかい？」
「……お前だってガキだろうが」
「見かけで人を判断すると痛い目を見るよ、カオス君。年齢の割に老けている君や、反対に若々しいカフェには理解して貰えると思うのだが、どうにも歳を言っても信じて貰えなくてね。これでも結構な歳だ」
「えっ……じゃあ何歳なんですか？」
　カフェが問う。すると魔女は頷き、
「１９９３歳」
「絶対嘘じゃねーか！」
「おっと、これは人類史が始まってからの暦だったな。失礼、間違えてしまった」
「……真実だとしたら何故そんなことを知っている……？　女性などに興味はないが、本当は一体幾つなんだ？」
「知るための方法なんて幾らでもあるとも、ホ・ラガ。だから私の発言に目を鋭くしてないで、自分なりの方法で探すといい。私から聞き出そうとしても無駄だし、どうせ君は私のことを胡散臭い狂人だとでも思っているのだろう？」
「違う。占いだけは出来る狂人だと思っている。後、男であったのなら、と」
「……ふむ。確かに、男の身体には興味があるよ。この世界は、明らかに女性よりも男性の方が楽しいだろうから、次の生では男性がいいかもしれない」
「なら、生まれ変わって出直して来て欲しい」

「かといって男には興味がないんだが……因みに、私の年齢は３３３歳だ」
「適当な会話してんじゃねーよ！　結局嘘じゃねぇか！」
　カオスがホ・ラガと魔女の聞いてて気が抜けそうな会話にツッコミ、微妙に荒れている。それをカフェが宥めるのだが、その間に話を聞いていた日光が押さえていた頭から手を離し、眼を細めながら魔女を見る。呆れながら、
「……とにかく、貴方は私達に次の黄金像の所在を教えてくれようとここまで来た……ということであっていますか？」
「その通りだとも」
「……結構な山奥で、道中は魔物も多いです。ここまでは一体――」
「戦闘は専門外だが、これでも人並みくらいには戦えるのでね。野良の魔物には後れを取らないさ」
「……そうですか」
　実際、この得体の知れない魔女なら、魔物相手に後れを取ることはないのだろう。隙だらけに見えるが、この余裕っぷりは何かあるようにしか思えないし、よく分からない魔法を使ったりもする。
　故に日光はその疑問を頭からかき消し、気にしないようにした。
　すると今度はブリティシュが話を引き継ぐように、
「……なら、早速次の黄金像の場所を教えてほしい。君の言う通りなら、この間占った時に最後の一つももう見えているんだろう？」
「……ああ、見えている。だが――」
「？　何か問題でもあるのか？」
　意味深に言葉を差し止めた魔女に、ブリティシュが怪訝な目を向ける。
　この間、黄金像の場所を占ってもらったのだが、その際に視えたという場所の内、この巨大な魔物が飲み込んでいるものは教えてくれたが、もうひとつについては、３つ目を手に入れてから教えると言われたのだ。
　だからこそ、３つ目を果たした今なら教えて貰えると踏んだのだが、魔女は顎に手を当てて少し考えるような仕草を敢えて見せる。そ

れを見てブリティシュが、
「……もしかして、分からないとか――」
「いや、既に視えている。だからそういうわけではないんだが……少しね。教えようと思って来たのは確かだが……これを教えてもいいものかと思ったのだよ」
「はぁ？　どういう意味だ？」
　カオスがそれを聞いて、眉間に皺を寄せる。いやなに、と魔女が、
「これを教えたが最後、君達は地獄の様な運命に囚われることになるからね」
「……え？」
「地獄の様な運命……ですか」
　穏やかじゃない言葉に、カフェと日光が表情を変化させる。ホ・ラガなども目を細めながら、その真意を問おうと口を開き、
「どういう意味だね？　それは」
「言葉通りの意味だ。この情報が分岐点。これを君達が知ったが最後、君達は地獄へ向かう坂道を一気に駆け落ちることになる。死よりも惨たらしい、悪辣な地獄に向かってね」
　魔女の言葉に、その場が静かになる。言葉の意味を考えて、彼らは真剣にならざるを得なかった。
　何故なら、
「……それは、僕達の旅が、失敗に終わるということか？」
「……何をもって失敗とするか、私には判断がつかないからそこまでは判断出来ないな。ひょっとしたら成功とも言えるし、失敗とも言える。それはその時の君達にしか分からないことだ」
「……」
　ブリティシュの質問。その答えとなる魔女の、僅かに憂いを見せた言葉に、今度こそ皆が押し黙る。ここに来て、この先には地獄が待っていると告げられたのだ。
　魔人を倒すため、魔王を倒すために人を捨てる思いで旅をしてきた彼らにとっても、改めて問いかけられると、ほんの僅かな躊躇が発生する。

だがやはりと言うべきか、彼らが迷ったのは数瞬。その後には、皆が目を合わせて意志を統一し、それを代表するようにブリティシュが魔女を真っ直ぐに見つめると、
「――教えてくれ」
「……いいのか？」
「ああ。僕は……僕達は、そのために進むことを決めた。例えこれまで以上の地獄が待っていようとも、人々を苦しめる諸悪の根源を倒すためにね」
ブリティシュは真っ直ぐに、強い意志を込めて魔女にその想いを告げる。他の面々も同じだ。
それらを見て、魔女は僅かに逡巡した。だが彼女の方も直ぐに、
「……いいだろう。なら、未来視の魔女の有り難い言葉を心して聞くが良い――」
と、魔女は一息で告げる。最後の黄金像の在り処を、
「黄金像はここより北。大陸北東部にある大きな街の中心にある」
「……大きな街？」
ああ、と魔女はブリティシュの問いに頷き、続きを口にする。
最後の黄金像の場所。その場所は最も困難であり、彼らにとって試練としか言えない場所にあるのだと、
「魔人が治める魔物の街。その街の中心部にある真っ赤な城に黄金像は存在する」
「……えっ、それって、つまり――」
カフェの青褪めた表情での言葉にも頷く。そう、未来視の魔女が告げる、最後の黄金像の場所は――
「想像通りだとも。最後の黄金像は――その魔人が所有している」
――最強の魔人の懐にあった。

「――入るよ」
その声は、赤い城の中心部で響いた。
一瞬にして情報を持ち帰って報告にやってきたその長い黒髪の使

徒は、主の部屋の扉をノックし、入室の許可を得る。短い声でその許可を貰うと、彼女は主である魔人にそれを伝えた。
「……監視してる連中、とうとう3つ目を手に入れたみたいだよ」
「……やっとか」
ベッドに腰掛ける黄金の髪を持つ男は、その鋭く赤い瞳をギラギラとさせてその報告に息を入れた。
言葉通り、彼にとっては、やっとここまで来た、というニュアンスの溜息。それを見ながら報告を待つ使徒に、魔人は続けて命令を出そうとした。
「なら後は最後の一つのみだ。予定通り、こちらから情報を流して――」
「……それが、その必要はないみたいだよ」
「……どういう意味だ？」
そのままの意味さ、と使徒は告げた。聞いたまんまに彼女は言う。
「どうやらあの連中、どういう訳か4つ目の黄金像の場所まで目星がついてるみたいだよ」
「――なんだと？」
魔人の表情から素直な驚きが浮かぶ。不可解、とも言えるその表情を浮かべた魔人は己の使徒に向かって鋭い声を飛ばした。
「どうやって知ったか、調べはついているのか？」
「……占い師に教えてもらったみたいだけど」
「占い師……」
魔人が頭を手で押さえて考え込む。
何故なら、その情報は調べがつくはずのない情報だからだ。知っているのはほんの一部の者達。それも皆、自分の息が掛かっていて情報が漏れる可能性はほぼ皆無と言っていいものだ。
だというのに、占い師などという胡散臭いものによってそれが漏れ出るなど、想像もしていない事態だった。
だからこそ、魔人は逡巡する。どうするかと、
「……まあ、結果的に知ってもらえたならいいんじゃない？」
「……いや、確かにそれはいいかもしれないが……それよりも、占い師

というのが気になる。調べはついているのか？」
「女の子だったよ。胸は小さい」
「……誰がそんな情報を出せと言った。他の情報を寄越せ」
「……はいはい。それじゃそっちも調べてくるよ」
「出来る限り急げ。場所が分かっているということは、直ぐにでもやってくるはずだ。それまでには間に合わせろ」
魔人の命令に、使徒は頷いた。どうやら、長かった任務ももうすぐ終わりらしい。
だが、そこで彼女には疑問が浮かんでしまう。前々から思っていたことだ。それは、
「……あんたさ……」
「？　どうした？」
「……いや、何でもない。それより、この後は？」
「……？　この後は、少しサイゼルとの用事がある。それが終ってから俺も動く」
「……ふぅん。まあそれじゃ、またあたしの方はおあずけか。最近、監視ばっかで鈍ってきてるんだけどどうしてくれんの？」
使徒は、浮かんだ疑問を、聞くこともないと飲み込み、変わりにちょっとした悪態をついた。
すると主である魔人は僅かに表情を歪める。少し呆れ気味に、
「安心しろ。終わったらしばらくは付き合ってやる。今までの分を取り返すくらいにはな」
「……その言葉、忘れないでよ」
ああ、と頷く声を尻目に、使徒は再びその場から姿を消し監視を再開することにした。

潜入準備

大方の指示を出し終えて、動く準備だけを先に整えた魔人レオンハルトは、自分の部屋に魔人ラ・サイゼルを招き入れた。
素直にやってきた彼女に対し、まずやることはベッドに座る自分の隣に座らせて向き合うこと。いつもなら、ここからは素直じゃない彼女の誘いを敢えて受け、戦闘を開始することもあるが、今日は違う。
今日やるのはサイゼルの悩みを解決するための〝練習〟だ。
「――よし、サイゼル。準備はいいな？」
「じゅ、準備……？　よく分からないけど、一体何をするのよ？」
ああ、と頷く。彼女と視線を合わした上で、
「とりあえずは……俺に〝好き〟と言ってみろ」
「……え？」
告げた瞬間、サイゼルの表情が固まる。
しかしややあって、その内容を脳が認識し終えたのか、顔を段々と赤くさせると怒った様に、
「ば、ばばば馬鹿じゃないの!?　そんなこと……！」
「なんだ、嫌いなのか？」
「そういう訳でも……そ、そうじゃなくて！　なんでそんなことを言わないといけないのよ！」
言葉をまごつかせながら、サイゼルは声を大にして言う。いつも通りのバレバレな態度だが、この態度の意味をほんの僅かでもハウゼルが読み取ってくれれば問題は即解決。
しかしそれが上手くいかないのは、ハウゼルの天然っぷりと、サイゼルの素直じゃない態度が原因だ。このどちらかを僅かでも修正出来れば、姉妹仲の修復もそう難しいことではないのだ。
「……サイゼル。お前は自分の気持ちを相手に伝える練習をするべきだ。お前は相手に誤解されやすいからな」
「うっ……で、でも……」
敢えてハウゼルとは言わないが、そう言うと思い当たる節があったのか若干怯む。そんな彼女を説得するように、

「ほんの少しでも気持ちを伝えることが出来れば、他人との仲を深めるのに大いに役立つ。相手が妹であろうと、誰であろうとだ」
「……でも、あたしは――」
「……いつも言っていると思うが、俺としては、お前とハウゼルはそれぞれ別の強みがあると思っている。比べてしまうのは分かるが、それを気にすることはない。お前が自分で言うように、自分は出来るんだと堂々としていればいい」
「……」
押し黙ってしまったサイゼルを無言で見つめる。
サイゼルが優秀な妹のハウゼルにコンプレックスを持っているのはよく理解しているが、同時に、彼女が妹を大切に想っていることも事実だ。
ならばその部分は乗り越えられるはずなのだ。複雑な思いから、顔を合わせると素直じゃないことを口走ってしまうが、実際には妹を心配したり、一緒にいたいという気持ちの方が強いため、コンプレックスの方はそれほど重くはないと思っている。
ならばその本当の気持ちを伝えられるようになればいい。だからこそ、
「……わかっ……てるけど……」
「――なら、まずは〝好き〟と好意を言葉で伝えてみろ。まずはそこからだ」
「っ、だ、だからって、そんな急に言われても……もうちょっと簡単な――」
「いや、お前の場合はそれさえクリア出来るなら解決したも同然だからな。〝好き〟と直接的な言葉を言うことが出来るようになれば、多少素直になることくらいは容易になるだろう」
「……そ、そうなの？」
「ああ、安心しろ。お前は必ずハウゼルと仲直り出来る。俺が保証しよう」
確かな自信を持ってサイゼルに告げる。そもそも二人は嫌い合っている訳ではないのだ。少し気持ちのすれ違いが起きているだけ。

ならばそのすれ違いを改善し、お互いの気持ちさえ伝わってしまえば、後は仲の良い関係を保ち続けられるだろう。そのためにも、ハウゼルに対する様に、羞恥を感じる相手へ気持ちを伝えなければ練習とは言えないのだ。

自分で言うのも面映い話ではあるが、とレオンハルトも別の意味での羞恥を感じつつも表には出さずにサイゼルの言葉を待つ。

膝の上に置いてある手がぎゅっと握られているのを確認しつつも、その直後、サイゼルは意を決したのか、ゆっくりと口を開くと、目を逸らしながら、

「……すっ、……す、す……す……！」

音が一つだけではあるがもう少し。もう殆ど言っているようなものなのだから恥ずかしがる必要はないだろうとレオンハルトは内心で応援しつつ、それを見守る。しかし、

「……あぅ」

何故か言葉を止めて、顔を俯かせてしまう。こちらも微妙に気が抜けてしまい、

「……もう殆ど言っているし、こちらとしても気持ちは分かっているのだから言えるだろう。何故そこで止める？」

「だ、だって……その……あんまりにも見るから……」

「それも練習の一環なんだがな。でもまあ分かった。それならまずは顔を見ずにやってみろ」

「う、うん……」

……かなり前途多難だな……。

分かってはいたことだが、こうまで気持ちを直接的な言葉にするのが苦手となると中々に骨が折れるかもしれない。言わせるための方法が無いわけではないのだが、それを今やってもあまり意味がない。だが、

……いや、よく考えれば〝それ〟をすればあっさりと解決するんじゃないか……？

そこまで考えたところで、姉妹仲をあっさりと改善出来る可能性の高い案を思いついたが、それを実行するのはこちらとしても心の準備

というか、ちょっとどうかと思うようなものだ。
しかし一定の信頼性というか、問題を解決出来るだろうという確信はある。だが、
……まだもう少し様子を見るか……。
それを実行するのは、真っ当な方法を試してからでも遅くはないのだ、とレオンハルトはサイゼルを見て、
「す、す……す……き」
「……もう少し間を縮められないか？」
「～～～っ、だって……恥ずかしい、し……」
遅くはないはずだ、と自分に言い聞かせるように思いながら、サイゼルの練習にしばらく付き合い続けた。

その仕事は、魔軍に所属する魔物兵にとって極めて重要かつ誰もが経験する仕事であった。
荒野を、森を、平原を、雪原を、岩山を、大地を。それぞれの道を行くのは緑、青、赤といった色の集合体。大勢の魔物兵であり、魔軍の大部隊だ。
数にして二個軍。一つの任務に対して計４万の兵を動員して行うのは、それだけその任務が魔軍の生命線であるからだ。
無論、敵戦力に対する遊撃や防衛、制圧任務を任されたのであればこの数はおかしくはない。だが、今の魔軍に敵がいないことは周知の事実だ。
人類という下等種族でありながらも、最大の敵勢力が滅び、魔軍の管理下に置かれて久しい。故に敵など何処にもいないのだ。
精々、野良の人間――魔物討伐隊や冒険者、隠れ里を探して人狩りを時折行うのが関の山であり、それであっても動員される兵力は最大で一個軍あれば足りる。野良で戦える人間の数は、魔物の数に比べて圧倒的に少ないのだ。
じゃあ何の目的でこれほどの数を動員しているのかというと、答えは簡単。――補給だ。

大陸西側から大陸各地に向かって行軍する彼らは、どの部隊も大量の荷車を引いていた。家畜として使える〝うし〟――人うしではなく、本物のうしを使って引かせていたりはするものの、その数が膨大なのはやはり、生物である以上は必要不可欠な物資、主に食料などを大陸西側のツリー都市周辺で賄っているからに他ならない。

人類にはほぼ知られていないことだが、大陸西側には世界樹と呼ばれる巨大な樹が存在し、その周辺では食料などの資源が大量に採れる。

故に古くから魔物が集落を作る場所であるのだが、その世界樹は困ったことに大陸西方にしか存在しないのだ。

世界は今や魔物が支配している。本拠地である魔王城は大陸東部にあるし、世界各地に人間牧場や魔軍の居留地が存在するのだ。

その土地で作物などを育てて補給の手間を削減しようとはしているものの、大陸北部などは中々に作物が採れないし、肥沃な土地での農業も、世界樹周辺で何もしなくても自然に採れる大量の食料資源に比べれば微々たるものでしかない上に、コストも掛かる。人間牧場で抱えている人間を奴隷の様に働かせれば解決するのではないかという声も、この体制になって直ぐに出てきたが、忘れてはならない。人間を養う必要だってあるのだ。

人間が食べる食料など粗末なものでも構わないし、それほど多くを必要としないとはいえ、それでも億を超える人間を食わせるには膨大な食料が必要なのだ。

つまり魔軍というのは世界を支配し、人間に永遠の生き地獄を味わわせるという政策を魔王ジルが発令した瞬間から、人間を養わなければならなくなってしまったのだ。

ある程度餓えさせるのは構わないが、大量の餓死者を出させる訳にはいかない。人間牧場にいる人間を殺せば、それが魔人や使徒などの支配者階級などではない限り、処罰されてしまう。

実際には眼の届かない場所で小規模の殺しは起きているものの、目立つような、露骨な大量殺人は行わないのがこの時代の魔物達の暗黙の了解となっていた。

故にどうしても殺したければ、野良の人間を襲う。野良の人間であれば殺したとしても何も言われない。生け捕りにするのが好ましいとはいえ、野良の人間には戦う力や考える力を備えてる場合も多いし、抵抗も激しい。故に野良の人間に対しては殺しても構わないという実質的な許可が出されているのが現状だ。

加えて、人間牧場で家畜となった人間達は、痛みや苦しみに対して慣れてしまっていて反応が悪いことも多く、嗜虐趣味の魔物達の間では不評なのである。そのため、人狩りが魔物達の間で流行するのも仕方がないことだと言えるだろう。

ともかく、生かして苦しめる以上は、生きて貰わなければならない。そして、生きるには食料が必要不可欠。各地の人間牧場、そこに住む多くの魔物兵達を食わせ、人間達も食わせるためには、多少の畜産、農業を営んだところで間に合わず、やはり世界樹から無限に供給される食料に頼らなければならないのだ。

幸いなのは、それさえ行えば食料に関しては心配がいらないこと。何とも都合の良いことに、魔物が食うために存在するような世界樹は、それこそ何千年という単位で食料を供給し続けている。

とはいえ一度に採れる食料には物理的な限界もある。次に食料などが生えてくるまでには長くはないとはいえ、多少の時が必要なのだ。

重要なのはそのサイクルを途切れさせないこと。食料が生えてきたら速やかに収穫し、それを各地に送り届ける。現在の魔軍は全体の半分をこの収穫、補給に回している。世界を魔物が統一し、戦争は無くなったが、牧場の管理と補給があるため、魔軍の仕事というのはなくならない。

万一でもこの補給が途切れれば、多くの魔物と人間が飢えることになる。ある程度の備蓄はしていても、消費量が膨大であるため休むことは出来ない。

故に世界最大の都市となったレオンハルトシティへの補給任務に従事しているレオンハルト軍の魔物将軍は、同僚の魔物将軍らと通常よりも多い三個軍を率いて、西側から持ってきた食料を街へ届けよう

と行軍をしていた。
報告が届いたのは、そんな折のことだった。
「将軍、偵察に出ていた部隊から報告が」
「聞こう。どうした？」
安全な補給任務を行うための、補給路の偵察。いつも行っていることであり、基本的には問題が出ることは少ない偵察に、今日は報告があった。
魔物将軍は自らの役目を全うするためにも、報告にやってきた魔物隊長に報告を促す。敬礼と共にハキハキとした声で、
「はっ、報告致します。ここより東、約３０キロ離れた森の入り口で野良の人間、それも冒険者と思われる人間らを確認したとのことです」
「……ほう？　珍しいな。この辺りに野良の人間が出るとは……」
「同感です。如何致しましょうか？」
野良の人間というだけならそこまで珍しくはないが、大陸東部。それもレオンハルトシティに近づくに連れて、野良の人間というものはあまり見なくなるのだ。
というのもレオンハルト軍による哨戒が多いこの辺りは、野良の人間もあまり近づかない。魔軍の部隊がうろうろとしている場所には、さすがの魔物討伐隊なども警戒して近づかないのだ。
とはいえ少数の冒険者であればこういうこともあるかと思う。魔物将軍は頷き、
「偵察部隊はどうしている。引き返して来たのか？」
「はい。最初は相手が少数だったこともあり、生け捕りにしようと戦闘を行った様ですが、相手の逃げ足が早く、森の中に逃げ込まれてしまった様です」
「ふむ……」
逃げられる、ということはそれなりに戦闘力を持つ人間か、と魔物将軍は推測する。冒険者であれば程度の差はあれ戦闘力は持ち合わせているというのが普通だが、
「如何致しましょう？　森の中に追撃部隊を出して捕らえますか？」
「そうだな……どうするか」

「……もし追手を出すのであれば、追撃の指揮は是非とも私にお任せ頂きたく――」
と、魔物隊長が勇猛にもそんなことを言う。
張り切っているのだろうか。野心だろうか。出世するために武勲が欲しいのだろうか、と思う。手柄といえば野良の人間を制圧するくらいしかないため、無理ないことではある。
それとも、単純に何をやっても基本的には許される野良の人間を痛めつけたいのかもしれない。人狩りは趣味でも任務でも人気があるのだ。
だが魔物将軍はそんな血気盛んな魔物隊長にこう言った。
「――いや、追わずともよい」
「……え？」
魔物隊長が間の抜けた声を出してしまう。だが直ぐに我に返りつつも疑問が晴れないのか、続けて顔を窺うように声を掛けた。
「あ、あのお言葉ですが……何故追撃なさらないので？　相手は少数ですし、捕らえることも難しくないでしょう。ここで追撃してしまった方が……」
そんな問いに、魔物将軍は頷く。
「ああ。無論、捕らえるとも。補給を終えた後でな」
「……補給が優先なのは分かりますが、部隊を分けて追撃しても良いのでは？　他の軍ではそうしていると聞きますが……」
その言葉を聞いて怒らずに魔物将軍は、なるほど、と思う。合点がいったとも、
「そういえばお前は他の軍から異動してきたのであったな」
「……はい、その通りですが、それが一体……？」
どういう意味か分からないと、頭に疑問符を浮かべる魔物隊長に魔物将軍は答える。行軍の足を止めずに、
「人間を軽視している部分がそれらしい。うちの軍出身であれば、この場合は追撃を出すことはない」
「……どういう事ですか？」
やはり分かってはいないようだと、魔物将軍は頷く。いいか？

と、
「少数とはいえ、人間の冒険者相手を追いかけて森の中に入ると、それなりの被害が出る可能性がある。部隊を分散させたのなら尚更な」
と、魔物将軍は講義をするように説明を続ける。
「人間というものは、基本的に魔物より脆弱な下等種族だ。それはいい。実際に劣っているのは事実だ。しかし、連中も馬鹿ではない」
言う。遠く、確かに見える木々の入り口を見て、
「人間牧場にいる能無しの人間共を見ていると、つい軽視し過ぎてしまうが、野良の人間というのはそれなりに強さを持ち、なおかつ狡猾であることが多いのだ。それこそ、魔物兵どころか……あまり認めたくはないが、我々の様な魔物隊長、魔物将軍よりも強い個体も少数ながら存在するという」
「は、はぁ……」
あまり理解出来ていない魔物隊長に近づき、今度は軽く問う様に、
「考えても見ろ。世界はどこもかしこも魔物の世界で魔物がいない場所の方が少ないくらいだ。だというのに連中、未だに野良で生き延びている。隠れ、逃げ、時には戦う。そんな連中が牧場にいる連中と同じだと思うか？」
「……思いません」
「だろう？　まあうちだとコロシアムで戦ってる人間なんかが良い例だな。娯楽かつ教育が行き届いているからこそ、安心だと見ていられるが、強さを持った人間は猛獣とおんなじだ。しっかりと首輪を繋げていないと牙を剥くし、首輪をつけていても何かの弾みで危害を加えられるかもしれない。我々よりも強いというならのなら尚更だ」
「そ、それは……」
魔物隊長がゴクリと唾を飲み込む。そんな奴の肩を叩きつつ、
「ま、それほど心配する必要はないのだがな。ただ、人間というのは個体差が激しい生き物だ。特に野良の個体であれば、生意気にも知恵を使って、こちらを嵌めてくることだってある。奇襲、待ち伏せ、撹乱……見晴らしの良い場所ならともかく、森林地帯や岩山なんかの入り組んだ地形に少数の部隊で入り込めば、その手のゲリラ戦術でお陀仏

になる可能性が高い。魔物討伐隊なんかが良く使う手だな」
「……なるほど。それは……」
「意外と怖いだろう？　その視点で見てみると、その少数の冒険者が森に入っていったのは……私には、誘ってるように見えて仕方がない」
うちの軍だって弱くはない。むしろレオンハルト軍は魔軍の中でも最強の精鋭部隊と言われており、それに恥じないだけの練度を持つと自負出来る。
偵察部隊とはいえ、その部隊から逃げることが出来る人間というのは――弱い筈がないのだ。
「追撃部隊を森に出して、捕らえられる可能性も勿論ゼロじゃないが……こっちにはそんなリスクを一々負う必要はない。街は目と鼻の先だ。さっさと補給を終えつつ報告して、大部隊で囲めば負けはない。相手が冒険者だろうが、森に隠れ潜んでる魔物討伐隊だろうが、どんなにいっても数は千を越えない。一個軍でも充分押し潰せるし、二個軍でも連れていけば向こうの勝ち目はゼロだ。逃げるしかない」
「……なるほど」
そう。どれだけ野良の人間強く、多かったとしても、その数は精々数百といったところだ。確認されている大規模な魔物討伐隊も、その数は千に届かない程度しかいないと報告が上がっている。
であれば、４万もいれば多少強い個体がいても押し潰せる。
強いて問題を挙げるとすれば、
「……まあ、その間に逃げられてしまう可能性はあるし、面白味のない作戦ではあるがな。これが趣味でやってる人狩りならあまりにもつまらない。だが――これは任務だ」
何よりも重要なのは、これが任務中であることだ。
魔物将軍として、補給任務に従事している今、態々少数の人間を追いかけて補給を遅らせる訳にはいかない。
となれば行動は一つ。
「仕事に自覚と責任を持たなくてはならない。補給が定刻よりも遅れれば、それだけレオンハルト様、延いては街に住む多くの同胞に迷惑

を掛けることになる。今は補給を優先し、街に到着した後、報告を行い対処するのが最良だ」
「……自分が間違っておりました。反省し、次に活かせるように精進致します」
「気に病むな。今度、講習会への紹介状を書いてやろう。キャロル様やリー様の戦略、戦術講義は中々に面白く、軍務の役に立つぞ。時折、レオンハルト様が直々に訪れることもあるから気を引き締める必要はあるがな」
「……ご指導頂きありがとうございます」
「うむ」
　どうやら分かってくれたようだ、と魔物将軍は満足そうに頷く。教育するのはいいが、中にはそれでも軽視してしまいがちな者もいるので、素直な者はそれだけ優秀だと見ることが出来る。
　何しろ己や他の魔物将軍でさえも、一応念を入れるようにその手の教えを叩き込んではいても、実感として人間を下に見てしまうのは避けられないのだから。
「……少し予定よりも遅れているか。少し急がせろ」
「はっ、畏まりました」
「補給が遅れると困るからな。それに――」
「？　なんでありましょう？」
　うむ、と魔物将軍は頷き言う。個人的な理由として、
「今日はこの後、友人らとパーティの予定が入っていてな。高級店に予約を入れてしまったし、遅れると損をする」
「……畏まりました」
　羨ましい、といった視線を受けつつも敢えてそれを気にしないようにして、魔物将軍は軍を率いて街へと急いだ。

　――その一方。森の中では、
「……チッ、あまり釣れなかったな、もうちょっと嫌がらせしておきたがったんじゃが……」

「この辺りの魔物は他の地域よりも統制が取れているようだね。動きに迷いがない」
「加えて、多少強さも上がっているような気がします」
「ほ、本当に忍び込むんだよね……」
「……まあ、目的のものは手に入ったからね。これで上手くいくと良いんだけど……」
　と、言う五人の冒険者。その目の前には、幾つかの魔物兵の死体が転がっており、彼らの視線はその魔物兵に注がれていた。

魔物の街

大陸東部。
そこにあるのは千年以上の歴史を持ち、１００万を越える魔物が住む世界最大の都市――レオンハルトシティ。
治める魔人の名がつけられたその魔都は、かつての人類圏から離れた位置に存在することも手伝って、今まで外の人間が自力で訪れたことは一度として存在しない。
だが現在、その街を訪れる者達がいた。
それは、魔物兵の格好をしている者達で、
「……本当に大丈夫なの？　バレない？」
緑色の魔物兵から、高い女性の声が出てくる。
魔物兵の中には女の子モンスターもいるため、それ自体はおかしいことではないのだが、その魔物兵は明らかに挙動不審であった。
「……おい、あんまりきょろきょろすんなよ。不自然なことすると怪しまれる」
「わ、分かってるけど……」
それを見かねて、別の魔物兵がそれを注意する。こちらは特に不自然な様子は見受けられないが、それでも通常の魔物兵よりも毛色が違うのは確かだった。
「それにしても……まさかこのような方法で忍び込むことになるとは思いも寄りませんでした」
「合理的な方法ではある。気分的に良くないのは我慢してくれとしか言いようがないな」
「すっごく歩き辛い……」
今度は青の魔物兵二体が、冷静な声をその場に響かせる。緑の魔物兵の内の一体は、あまりサイズが合ってないのか、動くことにすら苦心していた。
だがそれを見て赤色の魔物兵が、
「でも、確かにこれなら行けそうだね。警戒を怠らない方がいいのは確かだけど」

五人の先頭に立ち、堂々と遠くに見える街に向かって歩いていく。自然にしようと努力しているのが見て取れた。
何しろ、彼ら五人は魔物兵ではなく――人間なのだから。
「はぁ、まさか最後の黄金像が魔物の街にあるなんて……」
「……気持ちは分かるが、言ってもしょうがないだろ。儂らはやるしかないんだからな」
「とはいえ魔人の所有物。その魔人の住処に普通に置いてあれば良いのだが……加えて、留守であることを願いたいね」
「……そう、ですね」
彼らの口々から出るのは、最後の黄金像という言葉。
それは彼らの目的なのだ。魔人を倒すために集まった五人の。
未来視の魔女から場所を告げられた彼らは、周囲を偵察に出ていた魔物兵達を殺し、その服を剥ぎ取って着ている。
魔物兵スーツと呼ばれるそれを着て堂々と歩いている彼らだが、実際には街に近づくに連れて強張った緊張感が漂っている。
それは魔物の街に忍び込むということもそうだが、魔人の所有物である黄金像を手に入れるという今までの旅の中でも最難関ともいえる壁の高さに内心、慄いているということが大きい。
無論、覚悟は決まっているし、怯えまではいかない。だが予感として、ただでは済みそうにないというのを誰もが感じ取っていた。
というのも彼らの中には、伝え聞いた魔人の名が何度も浮かび上がっているのである。
最強の魔人とも名高い魔人であり、人間の間でもそれなりに有名な魔人だ。
故に最大限の警戒は行っている。いざとなったら戦うか逃げるか。どちらに転んでも構わないという覚悟を持ちつつも、彼らは今はまだ、魔人に勝てる可能性は薄いと、接触はしないで盗み取ることを目標としていた。
だからこその、魔物兵に変装しての潜入行動である。
しかし彼らは街に近づくに連れて、別の驚きを得ることになる。
「！　おい、あの街……」

「これは……！」
「嘘……」
　魔物兵の姿のまま彼らは驚く。遠目に街を見て驚き、やや早足で街に近づけば、更に瞠目する。
　その理由は街に他ならないが、何も粗末なものであったり、街に異変が見て取れた訳ではない。
　寧ろその逆――立派過ぎた。
「――おおい、今日はどの店に行くよ？」
「表通りの店は今日も混んでるからなぁ。お前はどう思うよ？」
「あ、悪ぃ。俺は今日夜番なんだ。飯食ったら直ぐ行かねぇとならねぇ。今日はお前らだけで楽しんで来いよ」
「あー、夜番か。それならしょうがねぇな」
「ご愁傷様だな。今日は合コンだってのによ」
「なっ!?　初耳だぞ!?」
「驚かせようと思ってな。だが夜番ならしょうがねぇ。俺達は可愛い娘と飲み明かしてくるから、お前は夜番頑張れよ、ははは！」
「くそっ、憶えてろよ！」
　街の入り口。会話をしている魔物兵らは脇道に逸れたと思えば、香ばしい匂いが漂ってくる建物に入っていく。
　それを見た五人は、ゆっくりと街に足を踏み入れると、その石造りの歩道を踏み締める感触にも驚きながら呆然とそこに広がる光景を眺めた。
　魔物の街。それは彼らが想像していたものとは全く違っていたのだ。
「ねぇねぇ、最近新しいスイーツ店出来たの知ってる？」
「知ってる知ってる！　新区画の方でしょ？　看板にとりの絵が描かれてるところ」
「そうそう、今日はそっち行かない？」
「いいねー、行こ行こ」
　街の通りには数多くの魔物がいる。数体の女の子モンスターがそのような会話をしながら表通りと思われる魔物で埋まった歩道を行

く。
　石や煉瓦といった材質で作られたと思われるのは、石で舗装された道沿いに建ち並ぶ数えきれないほどの建造物であり、そこからは数多くの音が鳴り響いていた。
「今日も異常無しだな」
「二番街の方でちょっと喧嘩があったみたいだけどな。直ぐに収まったらしい」
「ああ……あれか。あれはああなるだろう。よりによって一番街の直ぐ眼の前で喧嘩なんて……あそこには将軍方が住む高級住宅街だし、それ以上の方々の別荘なんかもあるだろう。馬鹿な奴らだ」
「そうだよなぁ。ま、もうすぐで定時だし、終わったらさっさと浴場行って汗でも流すか」
　警備をしている魔物兵達や、屋台と思われる通りに並んだお店で働く魔物達。非番なのか、思い思いに表通りを歩いては数々のお店に入って、飯や酒、娯楽などを楽しむ魔物達の姿がそこにはあり、
「これが魔物の……街、なのか……？」
「随分と……文化が――いや、文明が発達している……これは一体……？」
　魔物兵スーツを着たブリティシュが驚く。多くの知識を持つはずのホ・ラガも同様だ。他の皆も同じ様に街を見渡して驚愕から抜け出せないでいる。
　街から聞こえる音は、様々な魔物の流れと同様に止めどなく流れているが、そこには暴力的で野蛮な魔物の姿は殆ど見受けられない。
　そこで穏やかな暮らしを営んでいるという確かな生活感、文化的な暮らしを行う魔物達の姿がそこにはあった。
　魔物の生態に詳しくない彼らにとって、その驚きは筆舌に尽くし難いものである。
　彼らにとっての魔物とは、迷宮や野良で彷徨く凶暴な存在であり、統制の取れた魔軍の兵であっても、人を苦しめることだけを常に行っているというイメージがあった。
　だが、

「――ちょっと、そこのおにーさん方！」
「っ！」
不意に女の子モンスターに声を掛けられ、ブリティシュらは瞬間的に鼓動が跳ね、身を硬くしてしまう。思わず立ち止まってしまったが、挙動不審過ぎただろうか。バレてしまったのではないかと冷や汗を流しながらそちらに向くと、
「……何か用……かな？」
「いや、用って言うか……その驚き様、もしかしなくても――」
と、驚きを指摘されて一行に緊張感が走る。やはりバレたか、と、得物を取り出しかけ、
「――新兵さんだよね？」
「……えっ？」
すんでのところで、その動きを取り止めて、間の抜けた声を相手に返す。その中でもカオスが、
「……新兵……に見えるか？」
「うん。だって新兵さんって、皆最初は街並みを見て驚くんだもん。まぁ、気持ちは分かるけどね。私も最初来た時は驚いたなー」
女の子モンスターが腕を組んで、うんうんと頷く。過去の自分を振り返って懐かしんでいるようだった。
その対応を見て何名かが思うのは、情報を引き出すチャンスだということ。
故に自然に話は続いた。先頭に立つブリティシュが代表するように、
「……他の街は、こんなに栄えてはいないのかい？」
「いや、栄えてないって訳じゃないし、他の場所も良いところだけどね。それでもここまでの場所はないかな。食事も美味しくて、住むところも凄く綺麗だし、浴場や劇場なんかの楽しい場所もいっぱいあるしね」
「……そうなのか」
さすがに他の街はこうではないと聞いて、一同に僅かな安堵が漏れる。

とはいえ完全にショックから抜け出しているわけではなく、
「……分かった。ありがとう。なら、色々と回ってみるよ」
「あ、うん。それじゃあ――はい、これ！」
「？　これは……」
お礼を言って立ち去ろうとした一行だが、その前に女の子モンスターが手に持った紙コップのようなものを差し出してくる。
そしてその中には、香ばしい匂いを放つ塊が幾つか入っており、
「今度、うちもお店開くんだー。ようやく営業許可が出たからね。だからその試食品を配ってるの。よかったら味見してみて！」
「……なんという食べ物なのですか？」
魔物兵スーツを着た日光が問う。女の子モンスターは特に疑問に思うこともなく、
「あ、おねーさんもいたんだね。これは唐揚げだよ！」
「唐揚げ……」
「まあ、この街だとポピュラーだけどね。良かったら食べに来てね。そこの裏道の定食屋さんだから！」
「あ、おい！」
カオスが呼び止める暇もなく、先頭のブリティシュにカップを手渡した女の子モンスターは、直ぐにまた別の魔物に駆け寄ってセールストークを行い始めた。
断る間もなく手渡されたそれを、一同はなんとなく眺め、
「……食べて大丈夫なのかよ、それ」
「ふむ、どうやら何かのとり肉を揚げているようだね。おそらくは大丈夫だと思うが……」
「でも、確かに良い匂い……」
「周りは普通に口にしてはいますが……」
「……それじゃあ、ちょっと食べてみようか」
色々と話し合ったが、五人は結局好奇心に負けてそれを食べようと隠れてその唐揚げを口に運ぶ。冒険者としては成功している彼らだが、食糧事情に余裕があるわけではない。
故に口にしてみたのだが、

「っ!?　なんだこれ、うっま！」
「めちゃくちゃ美味しい……！　口の中で肉汁が溢れて……！」
「……魔物は随分と良い食生活を送っているようだね」
「……」
「こんなに美味しいとは……」
　ちょうど五個入っていたので、一人一つずつそれを口にするが、食べた感想は皆同様に美味しいというもの。口々に魔物が食べているものだということを忘れて思わず褒めてしまう。日光だけは無言だったが、無言で咀嚼して味わっているようだったので、言葉に出さずとも同様の感想を抱いていることが見て取れた。
「……とりあえず、街を回ってみよう。いつまでもここに留まってると怪しまれる」
「……そうだな」
「……」
　ブリティシュの声掛けに皆が神妙に頷き、その後に続く。
　目的は城とやらに忍び込み、黄金像を盗み出すこと。そのためには情報収集、街の下見などが必要不可欠だ。
　表通り、多くの魔物で混み合っているそこを通り抜けていく。
　そこにある多くは屋台や飲食店、酒場などのお店だが、そのどれもが賑わっており、特に人気らしい場所は行列が出来ていたりする。故に食欲をそそる匂いが前を通りかかる度に鼻孔をくすぐるのだが、それをぐっと堪えて先へ進んでいくと、広場に出た。
「ここは……」
「どうやら、街の中心部の様だね」
「あっ、あれ……！」
　混み合っていた大通りを抜けると、そこは中心に噴水が敷かれた円形の広場だ。
　大通りに比べればまだ空いているものの、それでもそれなりに魔物の数は多い。特に浴場と思われる施設や、劇場らしきそれには、多くの魔物が出入りしている。
　だがそんな中で、カフェが示した先を皆が見上げる。

噴水広場を更に直進した先、城門と長い道路を抜けた奥にあるのは、
「真っ赤な城……」
「あれが魔人の住む城、ですね」
「……けっ、良いご身分してやがる」
端的に、日光がその場所の意味を口にし、カオスが悪態をつく。
一行が初めて見るそれは、今まで生きていた中でも一番大きいと感じる建物であった。
紅魔城と呼ばれるその城を、一行はある程度近づいたところからその全景を眺める。
圧巻の完成度ではあるが、あの城に忍び込まなくてはならないという目的を忘れることはなく、周囲を観察するも、
「分かっちゃいたが、警備の兵がいるな」
「ええ、それに周囲に多くの目があります」
城に続く道の途中に建てられた城門。その前には警備のものと思われる魔物兵達が立っていた。
「正面からは……入れないよね、多分」
「いや、警備の魔物兵として忍び込めればいけるかもしれない」
「……一応、聞いてみようか。ちょっと危険だけど……」
カフェやホ・ラガの声に促されるように、ブリティシュが前に進み出る。だが声を掛けるのはカオスだった。
「よう、お疲れさん」
「ん？　なんだお前達？」
「分かっちゃいると思うが、ここは一般兵立ち入り禁止だぞ」
城門の正面に立つ二体の魔物兵からの返事が来る。どうやら怪しまれてはいないようだ。
「あー、分かってんだけどな。いつ見ても凄い城だなぁ、と思ってよ。やっぱ中は凄いのか？」
カオスがさり気なく、警備の兵が中に入ることはあるのか、または内装など情報を少しでも集められないかと問う。しかし、魔物兵は苦笑し、

「いやいや、んなもん俺らは知らねぇよ。中に入ることなんてないしな」
「……そうなのか？　お前ら、警備の兵だろ？」
「警備、つっても中までは警備しないからな。中はキャロル様の親衛隊とか、下級使徒の方々が見て回ってるみたいだしよ。普通の魔物兵が城に入れることなんてねぇよ」
「将軍閣下やそのお付きの隊長くらいにならないと普通は中を見ることも出来ねぇ。……ま、噂によるとすげぇらしいぜ」
「……そんなに凄いのか」
　今度はブリティシュが呟く。それに返答するように、魔物兵が首を縦に振り、
「ああ。中は豪華、なんて一言では済まないほどに凄いらしい」
「たまにちらっと見えるが、下級使徒の方々も美女だらけだからなぁ……さすがはレオンハルト様って感じだ」
「美女……って言うと人間か？」
「あ、知らないのか？　レオンハルト様の下級使徒は全員人間らしいぜ。たまーに牧場か野良かは知らねぇけど、調達してくるらしい」
「いや、十中八九牧場だろ、多分。うちの牧場は選別もあるし、美少女なんかはレオンハルト様に召し上げられるって噂だぜ？」
「あれ、そうなのか？　てっきり、牧場の奴らはどんなに優秀でも〝人間街〟が関の山だと思ってたが……」
「人間街……？」
　警備の魔物兵のやり取りを聞いて、日光が思わず呟く。だがそれに反応した魔物兵が訝しげに、
「……人間街も知らないのか？　常識だろ？」
「新兵訓練を受けたこの街の兵なら誰もが知ってるはずだが……」
「ああ、いや、悪い！　こいつはすっごい馬鹿なんだ！　物覚えが悪くてよ、俺らも相当苦労してててな！　な、そうだろ!?」
「……え、ええ。忘れました」
　カオスが咄嗟に日光の頭を魔物兵スーツの上からバシバシ叩いて馬鹿にしてフォローする。日光が恨めしげな視線をカオスに送るも、

怪しまれたのは自分の呟きが原因なので何も言えない。
　そうすると魔物兵達は、呆れるような困惑するような視線を向けて、
「えぇ……大丈夫かよ、そいつ……覚えることの多いうちの軍で忘れっぽいとか……」
「軍規違反とか洒落にならねぇからな……レオンハルト様は寛大だって言うけど、ルール破る奴には厳しいし……気をつけた方がいいぞ？」
「あ、ああ！　俺達からもよく言っておくぜ！　それじゃあ、邪魔したな！」
　これ以上ボロを出すのはマズいと判断したカオスが別れの挨拶を送ったことで、一行が城門前から離れていく。
　そしてその場所から充分離れると、少し裏道に入った人気の少ない場所で、
「あっぶねー……ありゃあ怪しまれる一歩手前だったぞ」
「……すみません」
「ま、まぁまぁ、情報はそれなりに手に入ったんだし、結果的に良かったってことで、ね？」
　日光を責めようとするカオスをカフェが宥めると、続けてホ・ラガが顎に手を当て、
「しかし、警備として城に入り込むことは難しそうだね」
「……ああ。どうしようか……」
　ブリティシュもその発言に同意し、頭を悩ませる。街に忍び込むところまでは順調だったが、城に入る上手い手立ては見つからない。
「どうする？　何処からか適当に忍び込むか？」
「……怖いけど、それしか無さそうなのよね……あっ、そういえば気になることも言ってたわよね？」
「〝人間街〟のことですね」
　うん、と日光の言葉にカフェが頷いた。
　警備の兵に聞いた人間街という語句。その意味が不明ではあるが、ブリティシュは思考した後に口を開くと、

「……情報が足りないな。この格好だと街を回る分には平気みたいだし、もう少し調べてみようか」
「……人間街という場所や、ここにもあるという牧場も気になりますね」
「……おい、まさかとは思うが……」
日光の並べた言葉を聞いて、カオスが嫌な予感がすると言わんばかりに視線を向ける。だが案の定、
「……出来れば、助けてあげられればいいのですが……」
「……うん、そうだね。余裕があれば考えてみようか」
「うわ、やっぱり……このお人好し共の悪い癖が……余裕なんてねぇっつーの！」
「ま、まぁまぁ、落ち着いて、カオス」
この状況ですら人助けを考える日光のお人好し発言や、そこまではいかずとも、人を助けようとするブリティシュの頷きを見て、カオスが現実的な叫びを響かせる。
カフェがまたしてもそれを宥める中、ホ・ラガは未だに思考の海から抜け出さず、
「〝選別〟に〝人間街〟か……まさかとは思うが……」
小声でその言葉の意味を推察し、しかしまだ憶測に過ぎないとその思考をかき消して一行に続いた。
――だが彼らは、人間街と呼ばれる場所を目の当たりにし、この街を見た以上の瞠目が生じることになる。
同時に、ホ・ラガの推測も間違ってはいなかったと、
「……え？」
「これ、は……」
「……」
「……驚きだな」
一行はそれぞれ、その街を見て驚きの声を上げる。
街並みとしては、この街全体と変わったところは見受けられない。
しかし、そこを歩くのは誰も彼もが、自分達と同じ――
「――〝人間〟だ……」

――魔物の街の中で、平和に暮らす……人間達の姿だった。

人間街

今を生きる人間。その生き方は、大きく分けて二つだとこの時代に生きる誰もが知っていた。

一つは、人間牧場で魔物に飼われながら虐げられること。

もう一つは、魔物の目を掻い潜るようにして野良で生きること。

前者は命だけは保証されているものの、人としての尊厳は存在せず、一切の自由もない。ただ魔物に好き勝手苦しめられ、数を増やすように強要され、毎日を生きるのみだ。

対する後者には自由がある。自分達の生き方は自分達で決めるという人として当然の筈の在り方がある。

だがその道はとても過酷なものだ。魔物が跋扈する世界で生きるには、魔物に見つかってはならない。力無き者は日の当たる場所に出ることも叶わない。夜になっても明かりを灯すことが出来ずに暗闇の中で息を潜め、震えて眠れない時間を過ごし、朝になれば生きていることに感謝する。

力ある者でさえ、ほんの僅かに足を踏み外すだけで死に絶える――そんな自由がそこにはある。

だからこそ、人間にとってはどちらの道も地獄であり魔物を排さなければ未来はないと、野良で生きる人間達は誰もがそう思っていた。

確かに苦しい毎日だが。魔物に飼われて生きるくらいなら死んだほうがマシだと、そう思っているのだ。

それは彼ら五人も例外ではない。魔物に飼われて生きることに、〝幸福〟なんてものがあるはずがないと強く思っていた。

だが今彼らの眼の前に広がる光景は――その認識を覆しかねないものだった。

「ママー、今日の夕飯はー？」

「うーん、そうねぇ……今日は久し振りに、へんでろぱでも作りましょうか」

「わーい！　わたし、ママの作るへんでろぱ大好き！」

「お、いいねぇ。ママのへんでろぱは絶品だからなあ」

「もう、褒めても何も出ないわよ？」
その通りを歩いているのは、魔物ではない。紛れもない人間だった。
魔物兵に化けて人間街に忍び込んだブリティシュら一行は、先程までの街並みと殆ど同じ様な街の通りを仲睦まじい様子で歩く、三人の親子を見て言葉を失った。
先程の魔物がいた場所よりかはさすがに数が少ないものの、通りにはそれなりの数の人間が歩いている。
そして彼らの表情には、暗い影が一つもない。
将来に対する不安や、今の世の中に対する絶望も、何もかもが見受けられない。
だからこそ、彼らは驚愕した。この光景は本物なのかと、
「これが、人間街なのか……？」
ブリティシュが思わず呟く。疑っているような呟きだが、その思いは誰もが同じだった。
「おいおい……夢でも見てんじゃねぇだろうな……？」
「嘘……こんなのって――あっ！」
カオスやカフェも同様に驚きに満ちた言葉を発するも、不意にカフェが声を上げた。
だがその瞬間、同じ様に皆が気づいてその場から脱した。その訳は、
「おい、お前たち！　ここは一般の兵は立入禁止だ――って、あれ？」
少しして駆け寄ってきた魔物兵が、声を上げながら表の通りから一行がいた路地の前に姿を現す。
しかしそこに見えた筈の魔物兵の姿がないことに、魔物兵は周囲をきょろきょろと見渡しながら訝しみ、
「おい、どうしたんだ？　急に走って」
「あ、あれ？　いや、ここに兵がいたような気がしたんだが……？」
「気の所為じゃないのか？　もしくは巡回してる奴らと間違えたとか」
「う、うーん、警備隊所属の腕章も無かったし、違ったような気がした

んだが……俺、疲れてんのかな？」
「大丈夫かよ。全く……終わったら飲み行かないで帰って休んだらどうだ？　隊長には俺から言っておくからよ」
「大丈夫だと思うんだけど、一応そうしようかな……」
魔物兵達はそのようなやり取りをしながら、再び持ち場に戻っていった。
そして警備の目がなくなったところで、彼らは口を開く。咄嗟に入ってしまった建物の中で、
「……間一髪か。もう行ったようだが……」
カオスが安堵の声を漏らす。しかし日光が窓の外から通りを見て、
「……どうやらここを警備している魔物兵がいるようですね」
歩道に一定間隔ごとに並んでいる魔物兵や、街を少数で巡回する魔物兵達がいることに気づき、彼らは息を詰める。どうやら堂々と通りを歩くことは難しい様だと、
「咄嗟に入っちゃったけど……ここ、誰かのお家かな？」
「裏口があって助かったけど、これはこれでマズい気が……」
カフェやブリティシュが周囲を見渡しながら言う。どうやらそこは台所の様だった。
そしておそらくは人間の家なのだろうと、皆がそう思った時、ドアが開かれ、
「――あれ？　もう帰ってたのか……うぉああっ!?　なんだお前、ら――」
「やべっ、見つかっちまった！」
家の中にある扉から、ヒゲの生えた彫りの深い顔の中年男性が物音に気づいてか一行を発見し、カオスが、しまったと言わんばかりの声を上げるが、しかし様子がおかしい。
割と鍛えられた逞しい体つきの男は、それを見て驚いたかと思うと、一度言葉を止めて、
「ま、魔物兵の方々が、家に何の御用でしょうか？」
「あっ、いや……」
驚きながらも腰を低くして用件を訊ねてくる男に、ブリティシュら

は思わず面食らって言葉を迷わせてしまう。
　何と言うべきだろう。潜入中ということもあるが、同じ人間であるが故に対応に迷ってしまう。魔物であれば殺すか気絶させるかなどという選択肢が最有力で、次に誤魔化すのが有力なのだが、
「……ブリティシュ。少し、彼から話を聞いてみるのはどうだろう？」
「え？　彼から？」
　だがしかし、ホ・ラガが意外な提案をしてきたことで、皆は一度、意志の統一も兼ねて顔を向け合う。
　その真意は何なのかと問う視線に、ホ・ラガは頷きながらこう言った。
「私達は、あまりにもこの街のことを知らないし、目的の物の手掛かりもない」
「……でも、それは僕達の――」
「ああ、そういうことになるね。しかし――」
　ブリティシュの言葉を差し止めて、ホ・ラガは言う。そうかもしれないが、と、
「だが、君や日光は人間を少しでも救いたいと思っているのだろう？
　だったら、この状況は良い機会だと私は思う。こちらの事情も知れば、彼らもひょっとしたら協力……ないしはこちらからも手助け出来るかもしれないからね」
「……そう、だね。でも皆は……？」
　ブリティシュの願いを汲み取ったホ・ラガの提案。しかしブリティシュはそこで頷きはするものの、皆に一度視線を向ける。
「……私は賛成です。拒む理由がありません」
「ちょっ、さすがに危険過ぎじゃ――」
「……私も賛成、かな」
「おい！　ちんちくりんまで……！」
「あはは……ごめん。でも情報収集は大切でしょ？」
「そりゃー……そうだが……はぁ、お前らの場合、情報収集だけじゃ終わりそうにないじゃろうが……」
「……カオスは反対かい？」

「そりゃあな。だが、もうええわい。ここまで話してる時点で怪しまれとるだろうからな。前向きに考えることにする」
「……ありがとう。それじゃあ――」
と、一行が意志を統一する。それを聞いていた男は頭に疑問符を浮かべ、
「……？　さっきから何の話を――」
「――こういうことです」
ブリティシュの言葉とほぼ同時に、一行は皆、その魔物兵スーツを一旦脱いで姿を見せた。
それを見た男はぎょっとして、
「えっ、あっ!?　お、お前ら……人間か？　なんでそんな――いや……もしかしてお前ら、外の――」
表情が困惑に驚愕、そして確信に変わっていく中、ブリティシュらは真面目な顔で告げた。彼らを助け、そして助けて貰おうとする言葉を、
「ええ。僕達は――外から来た人間です」
「っ……！　やっぱりそうか……ここの人間が、そんな格好をするはずがねぇからな……」
「……うん、その辺のことも含めて、少し話がしたい。僕達はある目的からこの街に忍び込んで来たんだけど、この街のことについて色々と聞かせてくれないかな？」
「……目的、だと？」
訝しむような表情の男に、その警戒を解こうと一同は弛緩した雰囲気を身に纏う。カオスやホ・ラガなどの愛想を良くしたり、笑顔を浮かべるのが苦手な二人はともかく、カフェなどはブリティシュと共に笑みを向けて、
「えっと……私達、一応人を助けることもしてるから……あ、話さないと助けないっていうつもりじゃないからね？　ただ……出来れば協力してほしいんだけど……」
「私達は、魔人を倒すために旅をしている冒険者です。だから、そのために必要な情報を集めているのですが――」

「――――帰ってくれ」
「えっ？」
日光が率直に目的を話始めたところで、突然の言葉がその場に響き渡る。
男のその声は、通常よりも遥かにその場に響くようだった。
日光の間の抜けた声は、思わず耳を疑ってしまい、その場が一瞬静まり返るほどに衝撃的な言葉だったことを証明している。
少しの間が空いた室内の時間。そこにカフェが一足早く我に返ると、今度は苦笑気味に、
「え、えっと……その……今なんて――」
「……聞こえなかったか？　帰ってくれ、と言ったんだ」
再度、全く同じことを告げられて皆がようやく、先程の声は聞き間違いではなかったことを理解する。
そうなると今度は、その真意を問いかけようとホ・ラガがその眼差しを鋭くして口を開き、
「……何故だね？　助かりたくないのか？」
「……助かりたい？　――ははっ、ああ……何を言うかと思えば、そういうことか」
「何を笑って……？」
日光が眉間に皺を寄せて男の様子を訝しむ。男は何かに気づいた様で、何やら可笑しそうにくつくつと笑い始めたのだ。
そしてひとしきり、ある程度笑うと、その笑みをある程度落ち着かせたところで、男はその返答となる言葉を続けた。
「お前ら、ズレてるんだよ」
「……ズレてる？　それは一体どういう意味なんだ？」
ブリティシュの問う言葉に、男が失笑を漏らして続けた。
「ああ、それはな……俺は……いや、俺達は――」
それは、一行にとって今度こそ言葉を失ってしまう――
「……別に――助かりたくないんだよ」
「――――」
――明確な拒絶の意志を示す言葉だった。

「助かりたくないって……？」
男の衝撃的な言葉を聞いたカフェは、相手の言葉をそのまま問い返すことしか出来なかった。
しかし相手の男は、それを聞いても胡乱な反応をする一行を可笑しく思った様で、僅かに苦笑すると、
「助かる、助ける……ね。じゃあ聞くがよ。助けてくれるってお前達は具体的に何をしてくれるんだ？」
問われるのはそんな質問。答えは分かり切っていると、日光が真剣な表情で、
「……ここから逃がすことになるでしょう」
「逃がす……か。ぷっ……ははは っ！　ここから逃げるか！　そりゃあいい！　逃げて野良で生きればいいってか!?　ええ？　何の当てもなくよぉ！」
「……当てがない訳ではありません。近くの隠れ里までなら何とか連れ出すことも――」
今度こそ、腹を抱えて笑い出す男に日光が眉を顰める。
そして近くの隠れ里まで案内することを持ち出すが、実際には黄金像を盗み出す用事もあるので簡単にはいかないだろう。
だが、少なくとも彼女は出来る限りのことをして人間を助け出そうと思っていたし、他の面子も、余裕があればそれを行うことに躊躇いはない。彼らはそれぞれの目的で魔人を倒すために集まったが、人を助けることを厭うことはない者達だ。
しかし、
「……へぇ、近くの隠れ里、ねぇ……俺は野良の生活なんて見たことも聞いたこともないけどよ。それはここの生活よりも快適なのか？」
「……それだ。そもそも何故、ここにいる者達は一見、恵まれた生活をしているのだ？　何か代償やからくりがあるのかね？　ここを管理している魔物は――魔人は、何を考えている？」
ホ・ラガが問う。皆も気になっていたことだ。男はそれを聞いて鼻

を鳴らすと、
「……さぁな。そんなことは俺達も知らない」
だが一つだけ分かることがある、と男は言う。それは、
「俺達人間は……魔物に生かされてるからこそ、生きてられるってことだ」
「……生かされてるからこそ、生きてられる、じゃと？」
「ああ。だから、ここから逃げてどうとか、魔人がどうとか言ってるお前らを見ると……申し訳ねぇが笑えてくるぜ。――とんでもなく可哀想な馬鹿共だ、ってな」
「なんだと!?」
「っ、カオス！」
カオスがその言葉に怒って前に一歩踏み出したが、ブリティシュの一声にその先の行動を差し止められる。危害を加えるつもりはないだろうが、掴みかかるくらいはしかねないので止めたような形だった。
だがそれすらも、男は何の怯みも見せずに言葉を続ける。
「いや、本当に可哀想だよ、お前ら。同じ人間なだけに、哀れでしょうがない。お前らの未来を考えるとな」
「……何故だ？　何故そんなことを思うんだい？　君は、魔物に支配されてる現状から、脱したいとは思わないのか？」
ブリティシュの問いかけは、この時代に生きる人間の共通の想いだと信じていた。
魔物に、魔人に、魔王に。彼ら魔族に支配される現状に未来はない。だからこそ、その支配からの脱却を目指す。魔人や魔王の打倒を目指す。そうして人間達は苦しまずにいれる世界を作り上げるのだ。
そこまで大仰な理想を掲げているのは、この中でもブリティシュくらいかもしれないが、それを目指すと聞いても、誰もが否定はしないだろう。そう出来れば一番良いはずだからだ。
だからこそ、ブリティシュは男に問うた。このままでいいのか？と。
そして男の答えはこうだった――このままでいい、と、僅かに憂い

を見せた表情で、
「魔物の支配から脱する……か。言いたいことは分かるぜ？　要は魔物にあれこれ好きにされない〝自由〟を求めてるってことだろ？　ああ、分かる。よーく分かるさ、その考えはよぉ」
　だけどな、と男は一度間を置いて言った。壁に背中を預けて、何かを思い出すように、
「そんな考えなんてものは、思いついたとしても間違いだったってそのうち気づく。かつての俺みたいにな」
「……かつての？　それって……」
　頷きが来る。腕を組んだ男から、自嘲するような笑みと共に、
「ああそうだ。俺はよ、ここのすぐ隣にある牧場で生まれ、牧場で生まれ育ったが……以前はお前達のように思ったのさ。魔物の言いなりになり続けるなんて馬鹿げてる。ここから逃げ出してやろう――ってな」
　男は壁に立て掛けた剣や斧を見ながら言う。それは、かつて己が振るった武器なのだと、
「俺はこれでも結構腕に自信があってな。ガキの頃の選別で魔物に腕前を見込まれて、コロシアムの闘士になった」
「コロシアムの闘士だと……？　いや、それより選別ってのは？」
「ま、振り分け試験のようなものだ。そんでコロシアムは……ま、魔物が楽しむための見世物だな。とにかく、俺は強さってのには自信があったし、闘うことも好きだった。現役の時はコロシアムのチャンピオンまで上り詰めたんだぜ？」
　拳を握りながら言う男。よく見れば、男の肉体は冒険者として活躍している五人と比べても、かなり大きい鍛えられた肉体をしていた。服を押し上げる膨れ上がった筋肉などはその名残ということだろう。
　だが、そんな強さを持つ男でも逃げ出すことは叶わなかったという。何故なら、
「俺はある時、魔物の監視の隙を見計らって、この街から逃げようとした。一般の魔物兵くらいなら倒せる自信はあったが、数も多いし、バレずに抜け出せるならその方がいいってな。……だけどよ失敗しち

まった」
「……どうしてだ？」
「決まってんだろ。魔物には勝てても、その上にはとんでもない化け物がいるんだ」
と、男は告げる。その存在を、
「俺の逃走は、この街から少し出たところで止められた。使徒が、待ち伏せしてやがったのさ」
使徒。それは魔人から血を分けられた忠実な下僕であり、人間よりも遥かに強大な力を持つ化け物である。そんな存在に囲まれれば、諦めることも致し方ないと思う。故にブリティシュはそこで得心し、
「そこで、投降したと？」
「……いいや。俺は使徒に囲まれるとこまでは、まだ戦う気でいた。使徒は確かに化け物で、俺よりも遥かに強い連中だって分かったけどよ。どうせ殺されるくらいなら、一体くらい道連れにしてやろうと思ったのさ」
もっとも、それが本当に出来るかは別問題だが、と男は使徒の強さも人間と比べて桁違いだと言う。
だが男は、それでも最初は戦うつもりでいたし、諦めるつもりもなかったのだ――ある者が現れるまでは。
「……お前ら、本物の化け物って見たことあるか？」
「あ、ああ？　なんだ突然？」
カオスが訝しむ。だが男の言葉はその問いに答えず、止まらない。
「俺はある。その時に初めて見たのさ。そこらにいるようなちゃちな化け物じゃない。〝本物〟って奴をよ」
「……お前……」
その男の変化に、一行は気づく。
男の手は僅かに震えていた。その時のことを思い出す彼は、その時に生じた感情や震えまでも思い出してしまう。
「最初はよ……街の方から人影が歩いてきたから、そんな筈はないのにお仲間か？　と思ったんだ……。少しして距離が近づくと、そこで気づいた。段々と息苦しくなってる。肩が重くなってる。その原因

を探るよりも前に、俺は歩いてくる存在に気づいた。――魔人だと」
魔人。それはこの世界の支配者達であり、使徒よりも更に上位の力を持つ化け物だ。
男はその時、初めて魔人を見たのだと言う。
「直ぐに気づいたぜ。その魔人は、この街を治めてる魔人だってな……一歩一歩、近づいてくる度に増す圧力、あの赤い視線を向けられた時は、冗談抜きで死んだかと思った……しかも、俺は気づいちまった」
「……気づいた？」
ああ、と頷いてみせる。すでに青褪めた顔で彼は告げる。
「その魔人は、全然本気じゃない。寧ろ力を抑えてるんだってな……姿形は人間だが、その形に、無理やりアホほど力を詰め込んで濃縮して、それを抑え込んでいるのにも関わらず、どうしても力が漏れ出してしまう……あの方から感じる気は、それくらいヤバかったんだ……！」
「お、おい……！」
男はとうとう、頭を押さえてその場にしゃがみ込んでしまう。恐怖を感じている様子で、
「直ぐに分かった。俺と――いや、人間と眼の前の方の間には、絶望的な差が開いている……！　勝てる勝てないの次元じゃない……勝負にすらならない……！　あの方がその気なら、俺は痛みを感じる暇もなく、次の瞬間には首を刎ね飛ばされていたんだ……！」
男の顔に脂汗が滲み、表情が情けなく歪んでいく。段々と声も大きくなり、
「気づけば呼吸が出来なくなっていたし、信じられないほどに身体が震えていた……！　そして死を覚悟しながら、気がつけば、俺はあの方の前に跪いていた……！」
そこまで言ったところで、今度は震えが止まり、僅かに落ち着きを見せる。きっと、その時が恐怖の最高潮だったのだろうと、
「その時の会話は憶えちゃいねぇ……もう無我夢中だった……だが、何を思ったのか、あの方は俺を許し、俺は助かった……」

九死に一生を得たのだと、男は息を撫で下ろしながら言う。そしてこうも思ったのだと、
「一時的に牢屋に入れられながら、俺はその時に確信したぜ……〝ああ、逃げ出そうとした俺が馬鹿だったんだ……〟ってな……」
「……だが、ここにいても何も――」
「――ここから逃げて何処に行けばいいッ!?」
「――っ！」
男は日光の言葉に反応して、不意に立ち上がって大声を上げる。
それは怒っているような、憤りを感じているかのような感情の発露だった。
「逃げてどうなるっ!? 野良で魔物に怯えて暮らすのか!? いつ追手が来るかの恐怖を感じながら眠れない夜を過ごすのか!? 何の保証も無いってのに!!」
「……それ、は……で、でも……」
「でも、なんだ!? ここより快適に過ごせる場所があるってのか!? 一切の危害も加えられず！ 温かい食事と立派な家を与えられ！ それどころか好きな相手と結ばれて子供を授かることだって出来る！ こんな安全で快適な生活を送れる場所が他にあるってのか!?」
「……子供がいるのか」
「ああ、そうさ！ うちだけじゃねぇ！ ここらに住む奴らは基本的に仕事さえしてれば食事だって与えられるし、家庭を持ったっていい！ 子供が傷つけられることもねぇ！ だが、外はどうだ!?」
男は一行にその想いを全力でぶつける。どうなのだ、と、
「俺に娘や嫁を連れて外で暮らせって言うのか!? 魔物にいつ襲われるか分かんないってのに！ 飯が満足に食えるとも限らないってのに！ 嫁や娘にひもじい思いをさせて、魔物に殺される恐怖に怯えながら逃亡生活でも送れってのか!? 断言するが、そもそも逃げられるわけがねぇんだよ！ 支配から抜け出せるわけもねぇ！」
「っ……確かに難しいかもしれない。魔人を倒すことは人間には難しいかもしれない。だけど、それを可能にするために僕達は――」
「だからそれが分かってねぇんだよ……！ お前らよぉ……ここで魔

人や使徒を倒すって言うなら悪いことは言わねぇ、やめときな……！
この街を治めてる連中は正真正銘の化け物だ……四体いる使徒は全員化け物だし、その上に立つあの方は、もう化け物って言葉が似合わないレベルの本物の怪物だ……！　難しい難しいって言うが、そうじゃねぇ……！　〝無理〟なんだよ、魔人を倒すってのは……！」
はぁ、はぁ、と息を乱しながら男は忠告する。五人はその勢いに返す言葉が見つからずに、暫し無言となった。
そこでようやく、男の熱も下がっていき、
「……なぁ、悪いことは言わねぇから止めとけよ。確かにお前らは強そうだ。現役の時の俺なんかよりもな。だけど、あの方と比べると……霞んじまう」
「……それほどに、強いのかね？」
ホ・ラガが問う。分かりきってることを、敢えて問いかける。するとやはり、鼻を鳴らす音が聞こえた。
「はっ……お前らは強いだろうが、今ここでどうにかして身体の何処かに剣を突き刺したり、もしくは毒でも盛れば死ぬだろ？　焼かれれば死ぬか？　溺れて窒息でもすれば死ぬか？　……まあ、殺す方法なんて幾らでもあるよな。人間ってのは脆い生き物だからよ……」
と、続けて男は言う。
「だが――魔人はその程度では死なねぇ……。そもそもそんな攻撃が効かねぇし、そんなやわな生き物じゃねぇだろうよ……ひょっとすれば、脳や心臓でも傷つければ死ぬかもしれねぇが、その壁がまず越えられねぇ。何をやっても傷つかないって聞いてるからな……」
「……無敵結界か……」
「はは、そんな名前なのか？　初めて知ったぜ……だがぴったりじゃねぇか。魔人ってのは無敵だ。決して倒せない……俺はこの世で最強なのはあの方だと思ったんだけどよ、それ以上に上の魔王様ってのがいるって改めて思った時……もう、ちょっとついていけねぇなって思っちまったよ。男ってのは戦ってたら最強を目指すもんだけどよ……明らかにスケールが違うと馬鹿らしくなってくるもんだ……もはや逆らうことすら考えたくねぇ」

だから、と、
「もう一度言うぜ。悪いことは言わねぇから帰りな。そんで……二度と関わらないでくれ。俺達は助けなんていらねぇんだ。ここにいれば、安全で快適な生活が送れる。……あの方は寛大なんだぜ？　要望を出せば出来る限り応えてくれるし、ここに定期的に来る使徒の方も、凄い親切なんだ。うちの娘が病気した時なんて薬まで届けてくれてよ。警備の魔物兵だって危害も加えてこねぇし、むしろ優しいもんだ。声を掛ければ軽い会話くらいならしてくれる。……ああ、でも、どうしても誰か助けたいって言うんなら……牧場にでも行ってみたらどうだ？」
「人間牧場か……」
「ああ、うちの嫁が牧場で子供達の先生をやってるんだけどよ……たまに〝C級〟のお仲間を見る機会があるそうだ……そんでまあ、結構悲惨だって聞くぜ。それを見て不満に感じたり、憤るような心は俺らにはもうないし、助けを求められるかはかなり望み薄だが……どうしても助けたいって言うんなら、そいつらのところに行くんだな」
「……分かった、ありがとう。話を聞かせてくれて」
「……ブリティシュ」
ブリティシュが代表してお礼を告げる。先んじての行動に、日光が名前を呼びかけるが、ブリティシュは首を横に振ることで答えると、日光はその先の言葉を飲み込んだ。
だが続けてカオスが息を吐き、その上で割り切ったのか視線を再び男に向けると、
「……ついでにもうちょっと聞きたいんだが、黄金像をどっかで見なかったか？」
「黄金像……？　悪いが知らないな」
「そうか。それなら、城や魔人の事について何か知らないか？」
「おい、止めてくれ。つい色々喋っちまったが、そんなことは知らねぇし、例え知ってたとしても言う気はねぇんだ。俺はあの方の不利になることを言いたくねぇ。今の俺にはこの生活を守ることが大事なんだ。だから……ぶっちゃけ、あの方を倒すのは止めてほしいな。お前

らじゃ絶対に無理だろうけどよ」
「……」
「ほら、言いたいことはそれだけか？　もう用がないなら出ていってくれ。もうじき、嫁と娘が帰ってくるんだ。夕飯の支度もしたいからよ……」
「……ああ、分かった」
カオスも何も言わずに頷く。ブリティシュらは、再び魔物兵スーツを着ると、そのまま勝手口から外に出ていく。
そして外に、再び人間街の路地裏に出てきたところで、カフェがふと呟いた。
「……私達……」
「……なんだ？」
近くにいたカオスが、俯いた様子のカフェに声を掛ける。しかし、首を振られ、
「……ううん、何でもない」
「……なら、さっさと行こうぜ。じっとしてたら見つかっちまう」
「……そう、だね。切り替えて行こうか」
ブリティシュがカオスの提案に頷き、気持ちを切り替えるよう口に出すが、それを口に出した本人も含めて、気持ちを直ぐに切り替えることは、到底出来そうになかった。

――五人が去った後。その家では、男が外に出ていくところであった。
「……悪く、思うなよ……」
こうしなければならない。こうするのが街のルールなのだと、自分に言い聞かせながら、何も持たずに表に出る。
そして彼は近くにいた魔物兵に、声を掛けた。

英雄達の邂逅

一行が人間街から去り、街の外に向かって歩いていく。
魔物達の声や様々な音で周囲は騒がしいが、彼らの間に会話はない。あっても、短い声掛けだけだ。
それは先程の人間街でのことを引きずっていると誰もが感じていた。同時に、引きずらないように頭を切り替えようと努力する。
だが、気持ちを切り替えることが出来たとしても、思考は止まらない。冷静になればなるほど、先程の男の言葉やこの街の光景を思ってしまう。
彼らは魔人と魔王を倒すために旅をしている。理由は別々ではあっても、根本が人の為であることは共通するものだ。
だからこそ、彼らは他ならぬ同じ人間からの拒絶が衝撃的だった。
助けてほしくない。助けられても困る。魔人を倒さないでほしい――そう言われたのは初めてのことだったのだ。
しかし同時に、一見してこれほど恵まれた生活を送るのなら仕方のないことかもしれないという思いにもなる。人は安寧を求めるものだ。それが保たれている以上、自ら危険に飛び込むようなことはしたくないというのも理解出来る。例え、魔物に支配された社会であっても。
だが、彼らが言う外で暮らす自分達からすると、生理的なものなのか、それとも本能なのか――どうしても拒否感を感じてしまう。
魔物に支配されて生きるのなんて御免だと思ってしまう。
多かれ少なかれ程度の差はあれど、彼らは同様の事を考えながら、街の直ぐ近くに隣接している人間牧場へと向かった。
辿り着いた彼らがそこで見たのは、分かっていた筈の現実であり――想像より遥かに酷い光景であった。
「ははは！　おらっ、おらっ！　もっと悲鳴を上げろ！」
「はぐっ、ひぐ！　あぐぅっ！　あぁ……」
「今日は良い天気だなぁ……」
「……早くご飯くれないかなぁ。お腹空いてきちゃったよー」

「ほーら、この石を取ってこーい」
「あーうー……」
「何してんだ！　早く取ってこいって言ってんだよっ！」
「うっ！　……あ〝ーあ〝ー……」
「うへへ、次の交尾は俺らの番だってよ」
「そうだなぁ、どの雌なんだろうなぁ……俺はあの娘がいいなぁ……」
「おらおら！　もう少しで餌やりだ！　最後にもっと痛めつけてやるぜぇ！」
「はぁ……はぁ……今日も魔物様がっ、ぐぶっ、いっぱいだねぇ……うぎゃんっ！」
屋外の柵の中では、草原の上に大勢の人間が思い思いに過ごしている。
しかしそれらは、人間であって人間の扱いをされていなかった。
「……ふむ、これが……」
「……人間牧場、ですね……」
「っ、酷い……」
「……ふん、胸糞悪い……」
「……」
五人はそれぞれ、人間牧場で飼育されている人間達を柵の外から眺める。
魔物兵の変装は続いているため、周囲から怪しまれることはないし、表情の変化を悟られることもない。
何しろスーツの中では、それぞれ眉を顰めたり歯を噛み締めたりなどと、その光景を忌々しそうに。あるいは悲しそうに見つめているのだから。
大陸各地にある人間牧場。その何処でもこれと同様の事が繰り広げられていると思うとやはり気分が悪くなってしまう。
ボロ布を巻いただけの人間達が、柵の中で魔物に痛めつけられて悲鳴をあげる。人間同士で交尾を強要されている。人間が、四肢を膝、肘の部分で切断されて言葉を喋れない〝人うし〟を虐めて楽しんでいる。魔物から渡される餌を心待ちにし、魔物の事を敬う人間達がい

る。どれだけ酷いことをされようとも、誰もが抵抗しようとせず、その現状を受け入れている有り様だった。
「ここがどうやら〝C級〟の牧場らしいね」
と、看板を指差して告げたのはホ・ラガ。彼が指した先、柵の中に入るための入口部分には〝C〟と描かれた大きな看板がでかでかと掲げられている。
それが示すのは、先程の人間街の男が言っていた〝C級〟の人間が集められている場所ということだ。
「……なんで、こんなにも差があるのかしら……？」
「ふむ、先程の話から推測するに……おそらくは何かの基準によって振り分けられているのだろう」
「何かの基準、ですか？」
おそらくな、とカフェや日光の問いにホ・ラガが顎に手を当てながらその光景を観察する。彼も見苦しいと感じてはいる様子だが、一行の中では最も冷静な視点でそれを考察していた。
「ここに比べれば、人間街に住む人間の数は少ないように思える。おおよその人間はこの〝C級〟にいるのだろう。そして、C級があるのであれば、その上も存在すると予測出来る。途中に見えた施設では、人間が労働させられていると魔物兵が言っていたし、ともすればそこが……まあ仮に〝B級〟。そして先程の人間街に住む人間達が〝A級〟だと推測出来るか。何のためにこんなことをしているのか、目的までは分かりかねるがね」
「……さっきの奴が言ってた、〝選別〟ってことかよ」
ここに来てからずっと、魔物兵スーツの中で露骨に胸糞悪いと表情を歪めているであろうカオスが、何回目かになる鼻を鳴らす。その言葉を聞いて得心しながらも、ブリティシュは湧き出た疑問を口にした。
「……でも、なんで人間街の人達にはあんな良い扱いをする必要があったんだろう」
「そう、そこが解せない。管理している人間に強制労働を課すところまでは理解出来る。痛めつけることも無論だ。だが魔物にとって、下

に見ている人間相手に良い思いをさせる必要は無いはずだ」
「……気に入った人だけ、集めてるとかかな……？」
カフェがふと呟いた言葉に、誰もがそれを為した存在を思い浮かべた。
どんな理由があれ、これを施行している人物は当然、この街を治める存在である。例えその存在が考えたことでなくとも、管理している以上は許可が必要となるだろう。
だが、
「……どんな理由があっても、この光景を認める訳にはいかない」
ブリティシュは言う。この光景は、人間の尊厳を踏み躙っていると。
「こんなことが、許されて良い筈がない。
そう、許されて良い筈はないんだ」
同じ人間である彼らが不当に苦しめられている現状を認める訳にはいかない。
そんな世界を変えたくて、ブリティシュは魔人を倒すために立ち上がったのだ。
だからこそ、彼はどんなに辛い現実を目の当たりにしても目を背けたりはしない。
拳を強く握り締めながら、真っ直ぐに、柵の中にいる人間達を見つめる。
「……助けられる人は……いないのかな？」
「……幸いにも、警備している兵はいないようですが……」
カフェが柵の中の人達を見て悲しそうに呟く。そして日光がそれを聞きながら、柵の外周部を警戒している兵が少ないことに気づいた。
同様に他の面子もその事実に気づいて訝しむ。
「かなり広い場所だが、これだと……」
「ああ――逃げようと思えば逃げられないこともない」
その事実にカオスが気づき、ホ・ラガが指摘する。
C級牧場の外周部の柵は、それなりの高さで仕切られた網の様なも

のとなっているが、それだけだと登るのも難しくないものだ。
てっきり警備の兵がもっと多く巡回なり見張りなりをしているかと思ったが、そういう様子もない。魔物は柵の内側、厩舎と呼ばれる人間を収容する場所や、その周囲で人間を虐めたり、何かを指示していたりする。
だが、何十万という人間を収容しているからだろう。その広大な面積の中には、眼の届かない場所が幾つか存在する。
厳密にはちらほらと魔物がいたり、人間が人うしを虐待していたりするが、監視の眼は少なくとも殆どないように見える。
だからこそ、彼らは思ったのだ。――これなら、助けられるかもしれない、と。
「……少し、いいかい？」
「……！　なんでしょう、魔物様」
「なにか用でしょうか……？」
だからブリティシュは、柵の近くに偶然にもいた人間の男女らに対し、声を掛けた。
まだ年若い者達。おそらくは十代後半といった者達だ。
まだまだ未来のあるはずの者達。選んだ訳ではないが、ブリティシュは偶然にも彼らに声を掛け、そして危険を承知で彼らに身を明かした。
「畏まらなくていい。僕は……君達と同じ人間だ」
「えっ!?　な、なんで……？」
「外に人が……？」
一応仲間達に左右を固めて貰いながら、ブリティシュは魔物兵スーツを少しだけ脱いで顔を覗かせると、彼らはぎょっと目を見開いて、それに驚いた。
ブリティシュは出来るだけ優しく、不安に思わせないように彼らに言った。
「事情があってね。僕らは魔物兵の格好はしているけど、中身は皆人間だ」
「だから怖がる必要はありません」

日光が補足するように告げる。ブリティシュが頷き、
「僕達は、君達をここから逃がすことが出来る。魔物の支配から脱して、外で匿うことが出来る。君達は……それを望むかい？」
先程の一件で臆病になっているのか、窺うように問うブリティシュ。
だがその答えは分かりきったものだった。
柵の中にいる人間達は、それを聞いて僅かに震えると、首を振りながらこう答えた。
「な、なんで外に行く必要があるんだよ……？」
「え……？」
それはやはり、拒絶だった。
彼らの視線に宿るのは疑念と僅かながらの恐怖。それをブリティシュらに向けるのだ。
一行はその言葉に怯みながら、我慢できずに逆に問う。カフェが悲しそうに、
「……どうして？　あなた達はこんなにも苦しんでいるのに……」
「……貴方達は、魔物からの虐待を受けているんです。それから逃げたくはないんですか？」
「……？　それが何か問題でもあるんですか……？」
「――っ……！」
だが、続く日光の率直な質問に対しても、彼らは首を傾げてしまう。
まるでこっちがおかしなことを言っていると言わんばかりの表情であり、彼らは当たり前と言うように一行に告げる。その答えを、
「外になんて行きたくないよ……何があるか分からなくて怖いじゃないか……」
「そっちも、早く中に戻った方が方がいいですよ？　そろそろ魔物様が痛めつけにくるころですし、餌やりもありますから」
「そうだぜ、そんな悪戯なんてしたら餌が貰えなくなるし、交尾もおあずけになっちまうよ……」
「っ……違うっ！　魔物に痛めつけられる必要なんてないんだ……！
そんなことを強要されずともいい！　魔物の支配がなくなれば、普

通の幸せが――」
ブリティシュは、彼らの言葉を聞いて表情を歪ませると、何かを訴えるように必死にその必要性を口にした。
彼らのその発言に自分達の――いや、人間という種が歪められる危険性を感じたからだ。
そうではない。人間は魔物に支配される存在じゃない。それを訴えたかった。分かってほしかった。見ていられない。ここから逃げたいと、自分達の手を掴んで欲しかった。
だが、
「……？　よく分かんないけど、今は幸せじゃないのか？」
「――――」
無情にも、ブリティシュの救いの手は振り払われてしまった。
そこでようやく理解せざるを得なかった。
牧場にいる人間達にとって、今は幸せなのだと。
人間街で裕福な生活を送る者達も、魔物のために強制的に働かされる者達も、魔物によって理不尽に苦しむ者達も皆、それが幸福だと思い込まされているのだ。
だからこそ、ブリティシュは絶句し、そして二の句を継げなかった。
この絶望は知っていたはずだった。
多くの人間が魔物に支配されている現状は、謂わば自分達が少数派であることの証左であり、それを改めて思い知らされたような気持ちだった。
厳しい現実を感じて一行が無言となる中、突如としてその声は来た。
「――彼らに何を言っても無駄ですわよ？」
「っ！」
「――おおっと、逃げようとしないでくださいねー」
不意に聞こえた発言の内容を理解するより先に、一行はそれをバレたと判断して逃走へ移ろうとする。
しかしそれは、反対側からの声によって防がれる形となった。
「……君達は……人か？　いや、違うか。この気配はまさか――」

両側から現れた二人に対し、ブリティシュは一目でまずは人かと疑うが、直ぐにそれを訂正する。
その人ならざる気配、それを感じ取ったためだ。
そして突然現れた二人。一行を逃さないためか、両側を固める二人の内、右側に立つ金髪ツインテールの女が告げた。青い軍服風の衣装を身に付けた美少女は、その手に一行が理解出来ない武器を構えながら告げる。
「ご明察ですわ。わたくし達は――〝使徒〟ですの」
「っ、やはり……！」
「くそっ、バレてやがったのか……!?」
「そうですねぇ、まあ普通にバレバレでしたよう？　さっきあなた方が会った人間街の人も態々報告してくれましたしねー」
カオスの問いに対しては、左の薄紫色の長い髪をした女が告げた。レオタード風の衣装に黒の外套を纏ったスタイルの良い美少女だが、やはりこちらも使徒の様で、色濃い魔の気配を漂わせている。
その彼女から、先程会った人間からの報告があったと無情にも告げられ、彼らは眉間に皺を寄せることしか出来なかった。
彼を責めることは出来ない。彼は、今の生活を守ることが大事だと言っていたのだ。
よくよく考えれば、外の人間が人間街に侵入してきたことを、魔物兵に報告しない筈がない。
ただそれでも、ブリティシュらは同じ人間として、彼が黙ってくれることを信じたかっただけだ。それが叶わなかったというそれだけのこと。だからままならない気持ちを覚えつつも言葉には出さず、ブリティシュらは眼の前の状況を潜り抜けることに注力した。
「使徒……ということは、ここの魔人の使徒ということで間違いないかね？」
「ふふん、ええ、そうですの！　わたくし、魔人レオンハルト様の使徒、第一使徒にして、魔物界一の完璧使徒であるキャロルと申しますの。以後お見知りおきを！」
「私はペールですよう。ペールちゃんって気軽に呼んでくださいね。

まあもっとも、呼ぶ機会は無さそうですけどね」
「ああっ、使徒様……！」
ふふふ、と一行に笑みを向けながらも、どうにも油断している様子もない。
魔人の使徒が二体現れたことに対し、一行は即座に魔物兵スーツを脱ぎ捨てながら、両側を警戒するような陣形を取った。
同時にそれを見た近くの人間達は使徒二体に対して頭を垂れたが、それに対してはペールが、
「ああ、はいはい。そっちはさっさと離れててくださいねー。そろそろ餌やりも近いですよーう」
「は、ははっ！　分かりました……！」
「はい、良い子達ですねーっと。って、んん？」
手をひらひらと振って牧場の人間らをその場から散らせる。その指示を聞いて機敏にその場を脱した人間達に笑顔を向けながら、しかし視線が来ていることに気づいてペールはその方向に顔を向けた。
「……？　あれ……？」
「どうかしましたか、カフェ」
カフェが、ペールと名乗った使徒に対して頭を捻らせる。それを見て日光が視線を使徒から逸らさずに声だけで問うが、
「……どこかで見たことある気が……」
「ええー？　こんな美少女が他にいるわけ無いですよう。見間違いじゃありませんか？」
「おい、カフェ！　こんな時にボケるなよ！」
「ぼ、ボケてないわよっ。……でも、ごめん」
カオスに注意され、気を取り直した様子で杖を構えるカフェ。昔見たような覚えがあったが、今はそれを思い出してる時ではないと頭を振った。
だが、そんな戦闘態勢を取りつつも、キャロルと名乗った使徒は一行に向かってある言葉を告げる。
「なんか戦う気みたいですが、そんな無駄なことは止めて、とりあえず付いてきて貰いますわ」

「まあこんなところで戦ったら牧場にも影響が出ちゃいますし、増援も直ぐ来ますので、そちらとしても付いて来る方がいいですよう、と補足しておきます」
「付いていく、だと……？」
　ブリティシュの剣を構えながらの質問に、キャロルとペールは頷いた。街の外れに向かって、
「ええ、我らの主がお待ちですの」
「というわけで、ご同行願えますか？　大人しくしてれば危害は加えませんので」
「っ……どうする？　ああ言ってやがるが……」
「主ってことは、まさか……」
「待っているのは……」
「……まあ、そういうことだろうね……」
　一行がそれぞれ苦悶の様子を見せるが、それほどにマズい状況だった。
　使徒二体というのもかなりマズいが、それよりも魔人がいることが何よりも厳しい。
　故に一行は、判断を迷わせる。この場で刃を交えてその場を脱するのが最善だが、そもそも相手方にバレてしまっていることが中々に厳しい。
　彼らにとって必要な黄金像の奪取が更に厳しくなるからだ。
　だから次の言葉を聞いた時、彼らは耳を疑った。
　それは、
「……迷っているみたいですので、教えてあげますよう。――あなた達が欲しがってる物をこちらは渡す用意があります」
「……！　それは……」
　言葉に出しかけながら、しかしそこで言葉を止める。
　何故バレているのかと思ったが、そこまでバレているとは限らない。欲しがっている物とは言うが、それが黄金像であるとは限らないのだ。
　しかし再度の言葉で、それは確信に変わった。キャロルの方が、

「確か黄金像が欲しいんですわよね？　ならさっさと付いてくることですわ」
「……」
「なんでって顔してますけど、それを答えることは許されてませんので、ええ」
「あんまり待たせると無理矢理連れて行くことになってゲームオーバーになるので、ここは大人しく付いてくるって選択肢を選ぶのが賢明ですよう？」
ペールの再三の要求に一同が固まる。
そんな言葉を言われたところで、相手は使徒。信用出来る筈がないのだ。
だが、
「……分かった」
「ブリティシュ!?」
「おい、お前……マジか？」
カフェやカオスが驚く。ブリティシュが、それに頷いたからだ。
しかし彼は目配せを仲間に向かってする。その内容は、
――いつでも離脱出来るように準備を。
それは、話は聞くが、罠だったり危なかった場合に備えて、いつでも逃げられるようにするということだ。
というのも今回の潜入において、彼らはこの時代ではかなり貴重な〝帰り木〟を用意してきている。
それさえ使えるのであれば、窮地を脱することは出来るのだ。
だが、同時にその黄金像を渡す用意があるという言葉と、魔人から話がしたいという提案の言葉に、ブリティシュは興味を持った。
この街を作り上げた魔人ということも手伝って、聞きたいことがあったし、本当に黄金像を持ってきているのなら隙を見て、それを奪えるかもしれないと考えたのだ。
何故その目的がバレているのかまでは見当もつかないが、それでもチャンスではあったのだ。
ピンチであり、チャンスでもある。ハイリスクハイリターンな状

況。
今直ぐ逃げることも出来るが、その場合は街に再び潜入することが難しくなり、黄金像の奪取が果たせない可能性があると。
それを考えて、ブリティシュは頷いた。仲間にも、目配せしながら、
「案内してほしい。だが、あまり近づかないでくれ。それに加えて武器を手に持たせてもらう。それでもいいなら――」
「はいはい、オーケーですよう」
「さっさと付いてくることですわ」
だが、警戒したその提案を使徒達は投げやりに許可して、さっさと付いてくることを促す。
武器を携帯していても何の問題もないということだろうか。
「……チッ、舐めやがって……！」
「……行こう。今は、大人しくするべきだ」
カオスが舌打ちするが、ブリティシュがそれにはコメントせずに先頭を歩く。何かが遭った時の為にガードは前に立つものだし、付いていくことを決めた手前、自分が先に行くのが道理であった。
そしていつもの陣形を取りながら、一行は使徒二体に続いて、牧場から離れ、近くの丘まで連れてこられる。
だが、
「……っ、この気配は……」
「なんか、苦しい……？」
段々と息が苦しくなるような重苦しい気配を感じて、眉を顰める。
丘の上に上がり、少しずつそこまでの距離が近づくに連れて、その気配は大きくなり、それに伴って一行の足は重くなった。
何か、とんでもなく大きい存在がいる。
その正体は分かりきったものではあったが、一行はその気配を実際に感じて、ようやく腑に落ちてしまった。
『最初はよ……街の方から人影が歩いてきたから、そんな筈はないのにお仲間か？　と思ったんだ……。少しして距離が近づくと、そこで気づいた。段々と息苦しくなってる。肩が重くなってる。その原因を探るよりも前に、俺は歩いてくる存在に気づいた。――魔人だと』

先程の男の言葉を彼らは思い出す。近づいているのは自分達の方だが、それを理解した。
一歩一歩、距離を縮める度に、気配は色濃くなる。
その姿が目視出来るような距離になると、彼らは心に思ってしまった。
――これは勝てない。
思いたくはないのに、そんな言葉が頭を掠めてしまい、カオスや日光などは露骨に表情を歪めてしまう。
それ以外の者達も、じわりと汗が滲み、手足の震えがやって来た。
その男はただ一人、石の上に腰掛けていた。
近づくに連れて、気づく。黄金の髪を持ったその男の容姿は、男として極まったものであった。
前が開かれた、赤い縁が入った黒のコートを身に付けている。内側はシンプルな赤黒い服と暗い青色のズボンだが細かい装飾もあり、全体的に軍服か、貴族が着る様な――否、それを通り越して〝王〟の如し高貴さすら感じる衣装だ。
だが、その細身の肉体が無駄なく鍛え抜かれたものであることは見ただけで直ぐに気づく。少なくとも、戦士であれば誰もがその男が達人であることを見抜ける。
彼は岩の上に足を開いて座り、瞳を閉じていたが、それでも彼が男として極まった美丈夫であることが一目で分かる。
だが同時に、その男が人の形をしていながら、人ならざる者であることにも気づく。
「――――来たか」
距離が数十メートル程まで縮まると、彼は目を開いた。
そこで怯む。否、呼吸が止まる。
その鋭い視線、威圧感を与える鋭い眼差し、紅い瞳が向けられて、一行は理解するのだ。
彼こそが、最強の魔人。これが、最強の魔人の圧倒的なまでの力なのだと。
実際にその武威を受けずとも、身体の方は全力で警鐘を鳴らしてい

る。本能が、眼の前の男から逃げるべきだと訴えている。頭を垂れて、傅くのが正しいのだと判断させてしまうようなオーラがある。
彼らは魔人を以前にも目にしたことがある。その時も、とてつもない畏怖を覚えたものだ。
だが、はっきりいって次元が違う。
眼の前で、武器を構えてもいない。戦闘態勢を取っている訳でもない。ただ座っているだけの男を相手に、彼らは死を感じる。
決して戦ってはいけない。否、勝負にならない――そう判断した人間の男の判断は何ら間違いでも無かったのだと痛感させられる。
如何に眼の前の男との戦いを避けるか。勝つのではなく、そのことばかりが頭の中を巡るようになってしまう。多かれ少なかれ、一行の頭の中もそれは例外ではない。
「う……ぁ……っ！」
特に酷いのは、カフェだ。
彼女は今にも泣きそうな表情で顔を青褪めさせ、手足どころか身体を震えさせて怯えている。周囲に仲間がいなければ、その場にへたり込むか、一目散に逃げ出してもおかしくないほどに。
カオスや日光は気丈にも睨み返しているが、その脂汗は隠しきれない。眼の前の男は、睨んでもいない、ただ見ているだけだというのに。
ホ・ラガは畏怖を覚えつつも、その美しさに感嘆を感じていた。目つきの鋭さだけは相手に威圧感を与え、好みが分かれるところだが、それを差し置いても眼の前の男の容姿は整っている。その感嘆の分だけ、ホ・ラガは多少マシではあった。
そしてブリティシュは、
「……大丈夫だ」
「……ぁ……」
震えるカフェに気づき、相手の視線からカフェを隠しながら、一歩前に進み出る。
恐怖を感じていない訳ではない。彼も、眼の前の魔人の強大さを感じ取っている。
だが、それでも引けないだけだ。

だからこそ、その様子を見て、眼の前の魔人も興味の色を覗かせる。
「……どうやらお前がリーダーの様だな？」
「……そんな大層なものじゃない。僕は……ただの冒険者、ブリティシュだ」
先に名乗ったのはブリティシュの方。それを受けて、魔人もその名を名乗る。
彼こそが、魔人筆頭にして魔軍参謀。魔物界の英雄として名高い最強の魔人。人々の記憶から消えつつある、かつての剣の王。その名は、
「――レオンハルトだ」
彼は言う。両側に使徒二体が控えさせながら、
「お前達と話がしたい。これが欲しいというなら、少し付き合ってもらおう」
「！　……ああ、分かった」
そうやって魔人レオンハルトが懐から出したのは、瓢箪の様な形をした黄金像であった。
「それで、話とは？」
「……簡単なことだ」
と、魔人は一行に向かって告げる。それは、
「魔物に支配され、人にとって終わってしまった世界で、お前達は何故諍(あらが)うのか――まずはそれを聞かせて貰おうか」
彼らの目的を目の前にぶら下げられながら、最強の魔人と現人類最強の五人は邂逅する。最後の黄金像を求め、魔人を倒すために。

幸福とは

丘の上の空間は、その問いと同時に僅かに静まった。
それは魔人の威圧感によるものではない。魔人の質問に対し、彼らが自ら息を呑んだからだ。
しかし呼吸の苦しさや肩に伸し掛かる重みが変化したわけではない。未だ最強の魔人――レオンハルトは彼らを突き刺すような紅い視線を向けている。
今までに感じたことのない圧倒的な力の塊を前にして嫌な汗が吹き出てしまう。だがその質問に対する声を魔人に返すことに遠慮はない。代わりに疑念のような、確認するかのような言葉でブリティシュが、
「……人にとって終わった世界で……何故諍うのか……だと？」
「――ああ」
解っているはずだ、とレオンハルトは告げる。石の上に腰掛けたまま、彼はその鋭い視線を一切逸らすことはない。見られていると全てを見透かされてしまいそうな深く、冷たい瞳だった。
だがその底知れない深さの中には、揺るぎない意志を感じる。
ブリティシュらにはその瞳の深さから何かを読み取れることは叶わない。何を考えているのか、どういう人物なのか、それらを見抜けるほどではない。
しかし、この魔人が自らの意志の元に行動していることだけは何となく解る。とんでもない達人であることも解る。
それほどにレオンハルトという魔人は、どこか達観した雰囲気を醸し出していた。畏怖を感じながらも逃げることなど考えず、その声に耳を傾けてしまうほどに、
「お前達は何のために旅をし、何のために黄金像を求めている？
……なぜ力を求める？」
「っ……！　それは……」
最後の言葉に、ブリティシュだけでなく皆の表情が驚きで引き攣った。

それは旅の目標である黄金像の収集の正しさを証明でありながら、眼の前の魔人にはそれがバレていることの証左でもある。
つまり、何故力を求めるのかという質問は――力が手に入ることの証明であった。
無論、魔人の言葉だ。全てを信用は出来ない。
だがこのタイミングで、思わせぶりなその言葉。全てを信用することはなくとも、全てが嘘にも聞こえない。
黄金像には確かに何かがある。それが何かまでは分からないが、自分達が黄金像を求めたのは間違っていなかったのだ。
そして――だからというわけではないが。
魔人の質問に対して、その目的を誤魔化すことは不思議とする気は起きなかった。
もうバレているという開き直りか、せめてもの抵抗なのかは分からない。しかしブリティシュは、魔人を真っ直ぐに見返すと、
「……お前達を――魔人を、倒すためだ」
ブリティシュの意志を秘めた言葉に、一行は改めてその目的を思い出し、僅かながら心を再度奮い立たせる。魔人の存在感に圧倒されながらも、レオンハルトへの抵抗として眉を立たせる。
だが、それを見聞きしたレオンハルトは不意に小さな失笑に近い笑みを浮かべた。
「……ふっ、魔人を倒すため……か」
「……何が可笑しい。言っとくが俺達は本気だ」
「ええ、いずれ必ず、魔人を倒してみせます……！」
カオスや日光が殆ど睨むように視線を向けながら言う。自分達の目的を鼻で笑ったレオンハルトへと強く告げる。だが、レオンハルトは笑みを消す代わりに、酷く冷たい表情を向けると、
「悪いがそんな言葉は聞き飽きている。魔人を倒す、魔人を倒して祖国を、仲間を、人を助ける――人類が生まれて約二千年、誰もが口にしてきた言葉だ」
「……それの何が悪い。お前達魔人を滅ぼさないと、俺達は――」
「――〝魔人を倒す〟。言葉にするだけなら簡単なことだが、それを

成し遂げるのは夢物語だと言っている」
「なんだと……？」
カオスが苛立ちを含んだ表情で眉を顰める。魔人の威圧感が無ければ、詰め寄るどころか斬りかかってもおかしくないほどだ。
しかし魔人はそれを許さない。その体から立ち昇る覇気のみで一行を押し留めながら言葉を聞かせる。
「魔人をたった一体でも倒せることが出来れば、大偉業だろう。俺は約二千年。人間がこの世に生まれ、狩猟を中心とした生活を行い、まだ国という言葉もない頃から人間を見ている。当然、誰もが魔人を倒すことを掲げて戦ってきた。中にはお前達を越える実力を持った戦士もいたが、実際に魔人を倒すことに成功したのは振り返っても数人程度しかいない。……この俺もかつては魔人と戦い、その力に敗れた者の一人でしかない」
口でいうほど簡単なことではない、と魔人は言う。何かを思い出すように、
「誰もが魔人を倒すと掲げ、身命を賭して戦ったが、たった一体の魔人すら倒せない。それを成す者達も確かにいるが、そいつらは誰もが尋常ならざる意志と力を持っていた」
「意志と力……それを成した者……」
呟く声に反応するように、レオンハルトは言う。懐かしい思い出だと、
「かつて人がまだ〝国〟を持ち、魔物との終わりなき戦争に臨んでいた時代には、多くの英雄がいた」
それは、
「一人は、夢を追い求め続けた東方の大英雄。奴はその熱を以て当時の魔人四天王最強と謳われた魔人を倒してみせ、この俺にも深手を負わせてみせた」
「……藤原石丸、ですか」
その名を日光が出すと、魔人は薄い笑みを見せた。それは先程のような冷たいものではなく、敬意や懐かしさ、喜びの感情を孕んだもので、

「ふっ、よく知っているな。文明が崩壊する以前の名だが……やはりＪＡＰＡＮの人間であれば伝承として伝わっているか」
「……ええ、死んだ父や祖父から聞きました。貴方達に殺されたので、もう聞くことは出来ませんが」
「そうか。精々、奴の話を聞いた祖国の人間として恥じない生き方をするといい」
　日光の恨み節にも近い一言にも、魔人は表情を変えることはない。
　彼女の複雑な表情を無視して、レオンハルトは言葉を続ける。その次は、
「もう一人は、正義を掲げて戦い続けた勇者。奴はどれだけ傷つき殺されようと決して心を折ることはなく、悪(せいぎ)を掲げた先代の魔王様と鮮烈な戦いを繰り広げ、最後には引き分けてみせた」
「……そちらもお伽噺のような存在だね。勇者など……」
「だが、確かに存在する。もっとも、今の世の中では勇者がいたところで意味などないだろうがな」
「……どういう意味だ？」
「気になるならいつか調べて見るといい、ホ・ラガ。もっとも、そのうち嫌でも知ることになるかもしれないが」
「……どうやら、私が知らない様々な事を知っているようだね」
　ホ・ラガはその意味深な言葉の意味を読み取れず、結論として眼の前の魔人への警戒度を上昇させた。知識の上でも、己の知らないことを多く知っているのが眼の前の魔人なのだと。
　そのレオンハルトは一度間を置いて今しがた語ったことを一行に噛み締めさせると、その上で笑みを消して、再び口を開いて言葉を繋げた。
「他にも多くの手強い戦士がいたが、とうとう魔人を、魔物を倒すことは叶わず人類は敗北し、この暗黒時代に突入した。――だが、よく考えてみれば当然のことだ」
「当然……だと？」
「必然と言い換えてもいいだろう。お前達も考えてみろ。――二十体近い魔人達にその下につく使徒、魔人級の実力を持つ七体の魔物大将

軍、一千万を越える常備兵力。人間と魔物の数はそれほど変わらないが、人間の中において、戦える人間というのはかなり少数。対する魔物は、戦える数も人間より遥かに上だ。その気になれば、魔王様の号令で総数3億全てが戦うことの出来る兵士となれる。その上、魔物兵は通常の人間よりも強い。軍隊を指揮する者として言わせて貰うが、この対立で人間側が勝てる可能性はゼロに等しい。例え、魔王様や魔人といった突出した戦力が無くてもだ」

戦力は圧倒的に魔物が上。人間が勝てる道理など何処にもないのだと他ならぬ魔軍を指揮する魔軍参謀は告げる。

「魔人を倒し、あるいは届かせてみせた奴らは、どちらも突出した個の存在であり、そこには意志や技術、それぞれの強さがあったが、魔人を倒せるほどの強さを実際に持ち合わせていた。……だがお前達はそこまで至れていない。人間としてはそれなりの実力者だとは思うが、それは魔人の域に届きうるものではない」

「……それはそうでしょうね」

しかし、だからといって、はいそうですか、と諦めるわけにはいかないのが彼らだ。

ブリティシュは魔人の言葉に首を縦に振り、頷きながらも魔人を真っ直ぐに見返す。そして、

「力はまだ足りてないかもしれない。だけど、だからこそ……僕達は人を捨てる覚悟で旅をしている。いつか魔人を……魔王を排して、この世に人々の自由と幸福を取り戻すために……！」

例えどれほど絶望的状況だろうと、この暗黒時代を続けさせる訳にはいかない。

人間が苦しみ続けるだけの世の中を認める訳にはいかないのだ。

魔人を倒す別々の理由を持ち合わせていても、一行のその想いは同じである。

しかし、その想いを口にしながらもブリティシュには疑問がある。それは、

「……その上で、聞きたいことがある」

「……ほう？」

魔人が僅かに眉を上げたところで、ブリティシュは威圧感が増したのを感じつつも、言葉を止めない。大切な事だからだ。丘の上から見える街に視線を一瞬移しながら、
「あの街を……人間街や牧場を作ったのは、あんたなのか？」
「……ああ、そうだ。全て俺が考え、計画し、実行に移したものだ」
魔人の肯定にブリティシュは、そうか、と頷く。それを聞いた上で彼は質問した。
「……なら、どうしてあんなものを作った？　牧場はともかく、魔人が人間を優遇するなんて……何か狙いでもあるのか？」
先程見た人間街で幸せそうに暮らす人間達の姿や、牧場で苦しめられる人たちの姿を思い出しながら告げる。まだはっきりと瞼の裏に映し出せるほどに近く、強烈な光景だった。
そしてそれを作り上げたという魔人は、その問いを耳にして一切の表情を作ることなく、軽く息を入れると、
「……優秀で役に立つ人間を優遇しているだけだ。ただ魔物を楽しませるために牧場で飼うのは惜しいからな。才能のある人間にはより良い環境を与えて自ら働いて貰った方が効率が良い」
「……チッ、やっぱり魔物ってのは人間を食い物にしてるどうしようもない連中ってことだ」
「――それはお前達人間も同じだ」
「っ……なんだと？」
不意にカオスの言葉に反応して、レオンハルトがその視線の圧を強める。再び呼吸が止まりそうな気を感じて怯みながらも言葉を返すと、レオンハルトは一行に圧を掛け続けながら言葉を続けた。
「……先程、お前達は魔物を排して人間の自由と幸福を取り戻すと言ったな？　その上で言わせて貰うが……仮に人間だけの世の中になったとして、本当に自由と幸福に満ち溢れた世の中になるとでも思っているのか？」
「……それは、魔物がいなくなれば当然――」
「断言してやる。人間だけの世の中になったところで、平和な世の中を築くことは決してない」

「っ、それは、そうなってみなければ分からないでしょう！　人同士であれば、互いを分かりあうことが出来ます。それを……魔人の貴方に一体何が解る！」
「！　この人間、言わせておけばレオンハルト様に対して……！」
　日光の言葉に反応して、レオンハルトの横に控えていたキャロルが眉を立てて反応する。明らかに怒った様子で腰元の得物を取り出しかけたところで、
「止めろ、キャロル」
「っ……申し訳ありませんでした、レオンハルト様。少々取り乱してしまい……」
「構わない。お前の気持ちは分かっている。だが、今は控えていろ」
「はい……」
　主に注意されて気落ちした様子で再び控える。その主の方はあまり気にしていない様子で、しかし日光と他の面子に向かって更に鋭くなった視線を向けた。
「さて話を戻そう――魔人の俺に何が解るだと？」
　レオンハルトは言う。その言葉はあまりにも浅はかだと彼らに失笑を向け、
「――笑わせるな。たかだか二十かそこらしか生きてないお前らに人間の何が解る？　実際に人が蔓延る世の中を見たことがないお前らが、根拠のない言葉と理由を並べて、そうあるはずと信じるのは勝手だが、真実を歪めるなよ」
「っ……！」
　日光が魔人の言葉に表情を歪めながらも、返す言葉を放つことが出来ない。代わりにホ・ラガが、
「……なら、そちらは真実を、人間というものを知っているというのかね？」
「少なくともお前達よりかは知っている。俺は人間が誕生した黎明の時代に生まれ過ごし、魔人になってからも人間というものを見続けてきた。お前らみたいに希望的観測ではない。全て、何もかもを実際に観測し、経験として知っている。人間の醜さや何もかもをな」

その上で言わせて貰う、とレオンハルトが続けた。真に迫る迫力で、彼は言う。
「人の業と醜さこそが、今の世の中を作り上げた原因の一つだ。それがあるからこそ、人は人同士ですら争う。自分達こそが世界の支配者だという傲慢な考えを持ち、優秀な者に嫉妬し、周囲に欺瞞を植え付け、己を虚栄心で誤魔化しながら、己の利だけを強欲に追い求めて他者を滅ぼす。これが人の持つ〝業〟だ」
「……っ」
「無論、その全てが悪いとは言わん。魔物にも人と同じ醜さがあるのは事実だ。魔物には、人よりも欲望や本能に忠実という業を持つ。……しかし、魔物には絶対的な支配者の存在があり、それが同族同士の大規模な争いを抑止する。ただ平和な世の中を作るというだけなら、魔物が世を治めた方が圧倒的に効率が良い」
「っ、だが、それだと人間があまりにも救われないです……！」
「ああ、人間であるお前達がそれを目指すのは正当な行いだ。……今を生きる人間が、本当に幸福を感じていないというならな」
「なっ……何を言ってやがる……そんなのは当然――」
「……なるほど、そういうことか」
カオスが魔人の言葉に言い返そうとする声を差し止めるように、ホ・ラガが得心したように頷く。カオスが驚愕で言葉を止め、他の者達もホ・ラガに視線を向ける。それはレオンハルトも例外ではない。
皆が視線を向ける中で、ホ・ラガは気づいたことを口にする。それは、
「……牧場で暮らす人間は、今の状況を不幸だと感じていない。――そういうことだね？」
「……えっ？　そ、そんなわけ……」
「カフェ。先程の光景を、牧場の人間が言っていたことを思い出してみるといい。彼らは皆、今の状況に満足しているようだっただろう？」
「……！」
カフェがホ・ラガの言葉で目を見開く。それはこの街に来てから出

会った人間達の言葉を思い出したからだ。
皆一様に、今の状況を受け入れて、平然と暮らす者達を見てきた。人間街で暮らす者だけではなく、牧場で苦しんでいるはずの人間も含めて。
そして、それこそがこの魔人が作り上げた牧場の根幹ともいえる効果なのであると、
「……お前達ですら、今日初めて魔物達の生活を見て知った筈だ。幸福というのは、こういうものなのだと」
そしてレオンハルトは確信を持ってそれを告げる。言葉が返ってこなかったことが彼らの真実の証明だ。
「今の状況を、不幸だと思わなければ……これ以上の幸福があると知らなければ、不幸にはならない」
「――――」
それはあまりにも残酷で、欺瞞に満ちた解決方法であった。
このような世の中で人々に幸福を与えるために。不幸と感じさせないために出来る唯一の行い。
――幸福を知らなければ、不幸にはならない。それこそが、一行が知る由もない人々の救い方なのだ。
だからこそ、レオンハルトは己の行いに確信を持っている。
もっとも、嫌悪感や罪の意識を全く感じない訳ではないが、どんな茨の道だろうと、自分の意志で決めたことだ。覚悟はとうの昔に決まっているのだと。
「牧場で魔物に苦しめられている人間とて、苦しめられることが当然の事だと思わせれば幸福に他ならないだろう？」
「っ……こ、の野郎……！」
「ふざけた話ですね……！」
だからこそ、この反応はレオンハルトが予想していたものだ。
人々が、自分達の状況をとてつもない不幸だと知らずに、不幸を幸福だと思いこんでいる状況。その原因を前にして、憤らないわけがない。
「……人は自分にとって都合の良い空想のみを信じようとし、都合の

悪い現実を認めようとしない。仮にお前達が牧場の人間に対し、今の状況を不幸なことだと言って聞かせ、あるいは解放して人里に連れて行ったとしても、何の救いにもならない。今まで自分が受けてきた仕打ちを思い出し、そこで初めて人としての尊厳を取り戻し――そして狂う。今の状況に絶望し、身体に残る傷跡を見てその凄惨な仕打ちを思い出し、疼き続ける痛みに苦しむ。いつ魔物に襲われるのかと恐怖に怯える。失ってしまったものを取り戻そうと足掻き、苦しみ続ける。――今のお前達のように」

だが、それを甘んじて受け止めながらも、レオンハルトは彼らに更に厳しい言葉を向ける。――憎しみなら望むところだと。

「あんたは……」

「！」

しかし、そこで静かに声を出した者がいた。ブリティシュだ。

憤るわけでもなく、表情を歪めることもしない。哀しそうではあるが、それよりも真っ直ぐにレオンハルトに視線を寄越してくる。

故にレオンハルトも、そこで期待した。何を言うのかと。この英雄は、どのような意志を見せるのかと。目つきを細めて彼を注視する。

ブリティシュからすれば鋭い視線が重厚な圧と共に伸し掛かってくる状態。

しかしブリティシュは怯まなかった。魔人を真っ直ぐに見つめ、

「……なんで、そんな配慮をする？」

「……ほう？」

レオンハルトが眉を上げる。

眼の前の男は怒りで我を見失うこともせずに、魔人である己に問いかけてくる。真面目な声色で、

「あんたの行いは酷いが……まるで人間を案じているようにも見える。魔人であるはずのあんたが、何故そんなことを――いや、そもそもなんで僕達にそんなことを言って聞かせる？　黄金像を渡すことも、本当に力が手に入るなら、あんたにとって利にはならないはずだろう？」

「あ……」

「……まあ、確かにそうだね」
カフェが同じく気づいた様に短い声を上げ、ホ・ラガが同意するように顎に手を当てて頷く。それを見たレオンハルトは、問いかけられたことに対して、答えではなく、別の言葉で答えた。
「……一つは俺の個人的な趣味だ。俺は強い人間と戦うのが好きだからな。だが……もうひとつの真実を俺の口から言うことは出来ないな」
「……何故だ？」
「ふっ、大したことではない。だが、言わせて貰うなら――真実というのは、直視し難いものだからだ。残酷で、どうしようもない程にな」
「あんたは……」
「――さて、まだまだ聞きたいことはあるだろうが、そろそろ問答を終わらせよう」
レオンハルトはそこでブリティシュの言葉を遮り、問答を終わらせることを告げた。
次が最後の質問だと、
「改めて問おう。――お前達は何の為に力を欲する？」
何のために力を求めるのか。黄金像を欲するのか。旅をしているのか。その全ての意味を込めた問いを、
「――答えを聞かせてみろ」
「……ああ」
ブリティシュは魔人の問いに、逃れることの出来ない圧を感じる。
仮に嘘や誤魔化しの類の答えを告げれば、一切の慈悲も容赦もなく殺されてしまう――そんなことを思わせる圧力だ。
有無を言わせない雰囲気の中、ブリティシュは皆に目配せした上で息を入れ、口を開いた。
そんなことは決まっている、と、
「色々と興味深い話だったけど……それでも、結論は変わらない」
「……」
「そのような偽りの幸福を認めるわけにはいかない。あくまでも僕は、僕らは――最善を目指していく」

故に、
「魔人を倒すため――いや、魔人を倒し、人々に自由と幸福を齎すまで、どれだけ困難な道だろうと僕達は止まることはない」
それが、
「それが――僕達、今を生きる人間の〝意地〟だ!!」
「……なるほどな」
告げられた意志のある言葉を耳にして、レオンハルトは眼を細めて一行を見渡す。
ブリティシュの誇りある信念に続いて、他の面子も同じ気持ちのようだ。
だが、その中に迷いがある者が混じっていることを、レオンハルトは見逃すことはなかった。
しかしレオンハルトはそれを指摘することはせずに見逃すと、石の上から立ち上がった。
「お前達の答えは分かった」
その上で、手元の黄金像をレオンハルトは懐に一度しまう。
「だが――それでも最低限の〝力〟無き〝意志〟であれば、そこに届くまでに虚しく散るのみだ」
「っ、何を――」
「まさか――くっ!?」
魔人レオンハルトは立ち上がり、身体を半身に動かすと、抑えていた気を僅かに解放してみせる。
瞬間、魔人から立ち昇る気によってその場の大気が震え上がった。
それが意味することは――先ほどまでの状態ですら、力を抑えているということ。
最強の魔人の底は、まだまだ知れない。そのことに一行は驚愕し、この後に起こることを予感して自然と武器を構える。
そしてその予想通りに、魔人が言った。それは、
「お前達の現時点の力が、俺の剣を相手に何処まで食い下がれるか――試させてもらおう」
「っ……戦う気か……!」

「この力は……さすがに規格外だな……」
「ほ、本当に……!?」
「くそっ……ふざけやがって……！　大体お前、剣なんて何処にも持ってねぇじゃねぇか――」
「――いや、剣ならここにある」
と、カオスの怒声に対し、レオンハルトは右手を宙に伸ばしながら答えた。
何をしているのかと疑問に思う直前、レオンハルトの右手は突如として空間に飲み込まれた。
そして手首まで飲み込まれたところで、その右手を引き抜くと、その得物が姿を現す。
「なっ……!?」
「魔道具の一種か……!?」
ホ・ラガが空間から出てきた剣をそう疑問する。実際、空間からとんでもない気配と共に現れたそれは、異様な物であった。
身の丈を越える程の長さを持つ、紅い刀身の剣。細長く、刀にも似たそれは、しかしその異様な気配が、通常の得物ではないことを確信させる。
魔人の剣気と呼応して禍々しく輝くそれをレオンハルトは一行に向ける。その銘の名は、
「――魔剣オル＝フェイル。俺の愛剣だ」
「魔剣……！」
ブリティシュは本能的に剣を構える。己の得物であり、大事な愛剣――宝剣イングランドを。
他の者達も自分達の得物を構えて戦闘態勢を取る。だが、魔人と魔剣から感じる暴威に対しては気休めにしか感じられない。
本能が全力で警鐘を鳴らし、眼の前の魔人から逃げろと告げている。
しかし、黄金像の為に引くことは出来ない。手に入れたのなら即座に逃げるところではあるが、黄金像は魔人の懐にしまわれてしまった。

その内心を知ってか知らずか、金髪灼眼の魔人は魔剣を自然体で構え、
「安心しろ。ちゃんと手加減してやる。――それと、お前達は下がっていろ」
「畏まりましたわ！」
「楽しんでくださいねー！」
「ふっ、愉しむことは難しそうだがな……さあ、始めるか」
二体の使徒を下がらせ、最強の魔人は周囲を振動させるほどの闘気を立ち昇らせ、戦闘態勢に入る。
「お前達が打倒せんと目指す魔人の力、その頂きの一端を見せてやる。――死力を尽くしてかかってくるがいい!!」
「ッ、来るぞ!!」
ブリティシュが叫び、一行が陣形を整えた瞬間。
魔人レオンハルトが襲いかかってきた。

布石

――その戦いは、鮮烈を極めた。

いや、極めているように感じられた。

最強の魔人の武威。全力とは程遠い、お遊びの様なレベルの手加減に対して、五人は全力を振り絞ってなお、食らいつくことしか出来ていない。

「はぁぁぁぁぁっ!!」

「黒色破壊光線!」

「せいっ!」

ブリティシュが盾を構えながら宝剣イングランドを魔人に向かって振り下ろす。

同じタイミングでホ・ラガが魔人の横っ腹目掛けて攻撃魔法を放ち、日光も刀を背後から突き立てようとする。同じ様に音もなく、魔人の死角を狙ってカオスが短刀を振るって奇襲をしかける。カフェもサポートとして支援の魔法を詠唱していた。

五人の連携は大陸屈指のものであり、その実力はまさに人類最強。

個々人の強さも最高レベルであり、それぞれの動きは違えど、息の合った連携で多くの魔物、盗賊などを屠ってきた。ともすれば、彼らの強さは一般的な使徒に届きうるものかもしれない。

しかし、それはこの男には通用しない。

「――悪くない連携だ」

「っ……!」

魔人レオンハルトは、その口から彼らを褒める言葉を紡ぎ出す。人類最強との相対、その戦闘において平然とした口ぶり。通常であればそれは致命的な油断であり、彼ら相手ともなれば、それは自殺行為に他ならないものだ。攻撃は今にも彼に迫っており、物理的に避けることも叶わないはず。

だがレオンハルトは、その同時攻撃を、その場から動かずに避けてみせた。

「……! この、化け物が……!」

正確に言えば、動いていないように見えた。彼らの目には、レオンハルトはその場に立ったまま、攻撃を受け止めたように見えたのだ。
しかし実際には攻撃はすり抜ける。ブリティシュ、日光、カオスの剣閃は宙を斬り、ホ・ラガの黒色破壊光線は背後の空に抜けていった。
動いていないように見えて動いている。これだけでも化け物に違いないと、目を見開き、カオスなどは悪態をつく。
だがそれどころではなかった。魔人が、その魔剣を持ち手とは逆側に振りかぶったのだ。
「っ、バリア！」
瞬間、危ないとみて放ったカフェの魔法障壁が近くの三人を魔人の攻撃から防ごうとする。
だがやはり――それは無意味だった。
「――！」
魔人の剣が振るわれる。
無造作に振るったであろう横一線の斬撃。距離を詰めていた三人を振り払うようなその動きに、三人はそれぞれ、背筋が凍る予感とともにバリアがあるにもかかわらず防御を行った。
そしてその判断は正しい。直後――
「ぐ、おおおおおおっっ!?」
「が、はっ……！」
「くっ……あ……！」
魔人の斬撃が走った。
長剣によるその一撃は、空を断ち切り、大気を分かち、衝撃の波をもって周囲に迫力と実害を齎す。
それは人為的なものであっても変わらず、大型の魔物の攻撃をも防いだことのあるカフェのバリアをガラスの様に砕き、そのまま三人を防御の上から剣を当てて吹き飛ばす。
しかしそれだけでは終わらず、剣の軌跡に沿って現れるのは、大気を斬って飛ばす斬撃の波。
真空波ともいわれる魔人の通常の斬撃が、魔人を中心に周囲を襲う。

「きゃあああああっ!?」
「ぐっ……埒外な……!」
前衛だけでなく、後衛の二人まで吹き飛ばしてしまうほどの一撃。斬撃を飛ばす、剣士の奥義ともいえる神業を放ちながらも、魔人の表情に変化はない。それを何とも思っていないという風に。
事実、世界最強の剣士であるレオンハルトにとって、この程度の技はなんてことのない基本のものでしかない。猛烈な風の刃も、彼にとっては児戯の一つ。子供の遊び相手に使う程度のものだ。
その気になれば、この場に嵐を巻き起こすことが出来るのだ。比喩ではなく、剣によって周囲を破壊する竜巻を、嵐を起こすことが出来る。
それはまさしく災害だ。人間にとって、魔人は災害の一種と例えられ、出逢ったのであれば一目散に逃げるか、諦める他ないと伝えられることもある。
かつて魔人が一人の人間と決闘を行った際に、その土地は二人の人外の技の応酬によって地形が変わるほどの爪痕が残されたという伝説がある。今もその地は残っており、それを実際に見た者はお伽噺の類だと思い込み、信じる者は少ない。
しかしこの結果を、実際にその魔人の絶技を見た者は、死の間際にそれが真実であったことを思い知ることになる。与太話でもお伽噺でも伝説でもない。全て純然たる事実であると。
「く、っ……はあああっ――!!」
その一撃の結果に、もっとも早く体勢を立て直したのはブリティシュだった。
他の面子はまだその衝撃から物理的に立ち直れていない有り様であり、守るためには立ち上がらざるを得ないというのもある。
しかしその裂帛の気合いをもって放たれた斬撃も、魔人の肌に当てることは叶わない。
「……ほう？　俺の剣と打ち合っても折れないか。良い剣だ」
「……！」
魔剣にあっさりと受け止められてしまい、ブリティシュは表情を歪

ませる。必死に力を込めるが、ピクリとも動かない。そして他のところを見る余裕もないが……先程吹き飛ばされた瞬間に見た光景を思い出し、耳に届く声にそれが事実であることを理解する。
「っ、はぁ、はぁ、刀が……」
「はぁ、くっ……得物を、断ち切られて……！」
日光とカオス。二者が持っていた刀と二振りの短刀。
どちらも業物であったはずのそれらは――中ほどから真っ二つに折られていた。
「そこの二人は、あまり良い得物と巡り会えなかったようだな。俺の所持品から幾つかくれてやろうか？」
「抜か、せ……っ、新しい得物くらい……自分で、見つけるわい……！」
「く……魔人……の、所持品など……誰が……っ！」
「ふっ、そうか」
「がっ――！」
「ブリティシュっ……!?」
レオンハルトの本気かどうかも分からない提案を突っぱねた直後、ブリティシュが一瞬にして吹き飛ばされる。
直ぐにカフェがヒーリングを掛けようとするも、それでは追いつかない。
戦闘が始まって、まだ一分と経っていない。だというのに既に全員が、顔を汗でびっしょりと濡らし、息を切らしてしまっていた。
旅で鍛え上げた五人の技量、人類最強と言われる凄腕冒険者達の卓越した連携、その実力。それを以てして、全く届かない。まだ戦闘継続の意志を瞳に宿した者が殆どではあるが、その脳裏には、どうしようもないという絶望の予測が散らついていた。
――勝てない。
それは改めて思い知らされた真実。
――この化け物には、勝てない。
それは今まで、幾万もの戦士がぶち当たってきた壁。
――人の身では、今の自分達では、決して勝てない。
誰もが魔人を倒すと謳いながら、この暴威に屈するしかなかった。

文字通り桁が違う。格が違う。次元が違う。レベルが違う。
勝負にはならない。勝負とは、ある程度対等の存在でなければ成り立たないのだ。
１００％勝ちが決まっている勝負は、勝負とは言わない。
無敵結界の有無など関係がない。眼の前の魔人と自分達の間に横たわっているのは、絶望的なまでの純粋な力の差だ。
人の形をしてはいても、中身は全く違う存在。正真正銘の化け物であり、世界の支配者達の力だ。
彼らに挑んだ先にあるのは、救いのない敗北のみ。物語の様な勧善懲悪な結末など起りえない。
人類最強――いい響きではある。自信に満ち溢れる称号だ。
しかし、人類最強というだけでは、魔人には敵わない。
彼らは皆、誰もが人を超えた存在。
魔人に人外でない者など、一体たりともいないのだから。
その魔人達を魔王に命じられ、実質的に統率しているのが、眼の前の魔人筆頭。魔軍参謀という二つの称号を敷く魔人。
彼を倒せなければ、魔王を打倒するなど夢のまた夢。妄想の類でしかない。
故に誰もがここで、心折れる。希望を見失う。膝を屈する。
家族や友人、恋人に祖国、同胞の為にと信念を持って戦ってきた者達も現実を知る。
どれだけ崇高な使命や目的があろうとも、それを叶えるには人では力不足だと。
力無き正義に意味などない――誰もがそれを理解し、理解しているからこそ自らを血の滲むような鍛錬で鍛え上げ、力をつけてきた。
そして自分にはそれを成すに足る、最低限の力があると無意識に己を認めていた。
無意識に、その戦士には英雄に成れる力があると誰もが讃えてきた。
だが英雄の卵達はそこで気づく。英雄を持て囃していた民衆もそこで気づく。まるで足りていないことに。

その戦士は、魔人に挑む最低限の力すらないことに。己の自信は虚栄でしかなく、民もまた欺瞞に満ち溢れていたことに。
だが人間は何度でも間違いを犯す。その方が――そう思っていた方が都合が良いからだ。
己の利のために周りの人間を、自分すらも騙す。権力者達は、その英雄や民の自尊心や夢の成就を煽り、自分達が世界の支配者になるために、現実を知らないまま破滅への道を突き進んでいく。
それが人の業。今の世を作り上げた原因。
真に賢明である者達も例外ではない。破滅への道は、その破滅を望む者達によって舗装されており、何度でも苦しめるように適時修正されている。
一個人の意志ではどうしようもないほどに大きな力によって、人類の苦難は決定づけられている。
そして、その破滅を望む者達ですら計算外ともいえた今の人類の有り様。
それは、人が彼らの想像を越えるほどの愚か者であることの証明でもあった。
今の世を変えようと願う者達――彼らですら、その真実には気づいていない。
ようやく理解出来たのは、破滅を願う者達によって作られた魔王と魔王の眷属達が、こちらの想像を越えて遥かに強大であるという事実だ。
「あ……あ……」
「っ、しっかりしたまえ……！」
うわ言のように声を上げるカフェを、ホ・ラガが肩を掴んで揺らす。パーティの回復支援役である彼女は、既に膝を屈して眼の前の魔人相手に恐怖していた。
彼女とて、数多くの冒険、死線を潜り抜けてきた女傑であることには違いない。
しかし、その死線の中には、こういったことはない。
今まで相手にしてきたのは、その多くが魔物や同業者である。一度

だけ魔人と遭遇したことはあっても、これほどではなかった。
故にそれは、初めての経験である。勝ち負けどころか、どう足掻いても勝負にすらならない相手を眼の前にしたのは。
気づけば歯をカチカチと震えさせ、顔は涙目どころか顔面蒼白で引き攣っている。魔人に恐怖し、戦意を喪失している。
他の者達はまだ戦意を喪失してはいないが、カオスと日光は得物を折られ、ホ・ラガはカフェをその場から退避させようとして手一杯だ。
たった数十秒のお遊びだけで、既にパーティは機能を不全している。
もっとも、この魔人が本気を出せば一秒と保たなかったことを考えれば、これでも善戦していると言えるのかもしれないが。
「……この程度か。最初の連携や動きは悪くなかったが、やはり腕の差は埋めがたいな」
その状態を見て、魔人レオンハルトは眼を細めて落胆の息を吐く。
勝負にならないことを嘆いているようにも見える彼の様子は、しかし人間にとっては未だ脅威であることには変わらず、威圧感を醸し出していた。
「言っておくが、並の魔人であればこの程度の攻防は難なく捌いてみせるぞ。四天王に名を連ねる魔人ともなれば、この程度では収まらない。ある程度、俺の本気を受け止めることも出来る。無論、お前達を一瞬で地面の染みにすることも容易だ」
「……！」
分かってはいても絶句する。魔人の強さを思い知らせるように、レオンハルトはそれだけで凍えるような冷たい視線を彼らに向けると、
「カオス、日光。お前達の仇となる魔人も、この程度の攻防でやられるほど弱くはない。お前達は、仇を相手にしてもそんな無様を晒すつもりか？」
「っ！」
「……はぁ、はぁ……くっ……！」
カオスと日光が魔人の言葉を耳にして、瞳の中に憎悪を、そして殺気を漂わせる。

だが、敵意を向けてはきても、立ち上がる余力はない。もしくは、怒ってはいても向かっても無駄だと諦めてしまっているのか。どちらにせよ、レオンハルトの基準を満たす行動ではない。
だが、別の方向から来た声に、レオンハルトは僅かに口の片端を吊り上げた。
「っ、まだ、僕が残ってるぞ……ッ！」
「……ふっ」
鋭い剣閃。しかしレオンハルトにとってはその場から動かずとも躱すことの容易な剣撃。
しかしそれを、レオンハルトは敢えて魔剣を構えて受け止めてみせる。鋼の音と衝撃が響き、僅かに押してくるようなか細い力をレオンハルトは感じる。
それはまさしく、ブリティシュが全力を込め続けていることの証明だった。
「仲間達は、やらせない……！」
「……無駄だと分からないか？」
「ぐっ――」
レオンハルトはブリティシュが込めた力を利用するようにして体勢を崩させると、そのまま流れるように身体を回して蹴りを放つ。
短い苦鳴をあげて吹き飛ぶブリティシュだが、地面を何回かバウンドしながらも、数回で体勢を立て直して直ぐに向かってくる。今度は盾で全身を隠すように駆けてきた。一体何を、と思いながらもレオンハルトは再び受け止める姿勢を見せる。だが、盾を受け止めたところで、ブリティシュは盾を手放した。
そして盾を持っていた左手を振り上げると、
「！　――目潰しか」
「っ！」
ブリティシュが放ってきた赤い雫を見て、レオンハルトはその企みに気づく。
既に鮮血が至るところから流れているブリティシュ。盾を握っていた掌も、レオンハルトの強すぎる斬撃を受けてなお、盾を手放さな

かったせいか、血液が滴っていた。
その血液を無理矢理拳を握って絞るようにして僅かに溜めたブリティシュは、それをレオンハルトの顔に向かって掛けようとしたのだ。
だが、
「……考え自体は悪くない。だが、俺には通用しない」
「くそ……！」
確かに血液は、目潰しには効果的であり、その昔、戦場では鍔迫り合いの最中に口の中で流れ出た血液を相手の顔に吹きかける事例もよくあったものだが、レオンハルトにとっては血液の雫など、見てから捌くことも難しくない。
レオンハルトは魔剣でその血液を弾くと、そのままブリティシュの剣も一緒に受け止めた。
「……やはり諦めないか？」
「当然、だ……！」
「――！　ほう……？」
鍔迫り合いの最中の問い、しかし僅かに感嘆したのはその答えではなく、腕から感じる手応えだ。
先ほどよりも、ほんの少しだが押し返そうとする力が強くなっている。
さっきまでのも確実に全力だった力が、ここにきて、限界を越えて成長している。
ただ力を、それこそ死力を尽くしているのかもしれない。
だが、先ほどの泥臭いが強かな策や、この成長はレオンハルトにとって感嘆に足るものだ。
無論、どれも受けたところで大したことない。
そもそも無敵結界があるし、それがなくとも受けたところで支障はないのだ。他の魔人であれば、敢えて受けてみせることもあるだろう。
だが、それを敢えて見抜いたり、防ぐのがレオンハルトの普段のやり方だ。

そして同時に、ブリティシュがそうしてくるということは、彼が勝負を捨てていないことと同義である。
彼は未だ、勝ち目がゼロの相手と勝負しようとしている。
どうしようもない程に愚かな行為だ。どう足掻いても無駄死にが関の山。賢明な者達は止めろと叫ぶだろう。
だが、その足掻き、執念こそが、レオンハルトにとっては心地良い。
泥臭い策も、僅かな成長も、勝負として見れば次はどんなことをしてくるか、どんな策を立ててくるかと楽しみに出来るものだ。
力の差は如何ともし難いので、ある程度手加減を抜いて戦うことは出来ないが――これはこれで、どこまで成長するかという愉しみがある。
「……ふ、ふふ」
それを自覚すれば、レオンハルトも血が熱くなる。
ボルテージが上がりかけ、このまま少し愉しんでみるのも悪くないかもしれないと思ってしまう。
だが、すんでのところでレオンハルトはそれを取りやめた。
顔を左手で押さえ、笑みを堪える。そして冷静であるように努めつつも、目的は達成したと言わんばかりに力を込めた。
「……良い闘志だ。お前達の言う人間の意地とやら、剣を通じて中々に伝わってくるぞ」
故に、
「短いが、そろそろ終わりにしてやろう」
なればこそ、この一撃を持って終わらせようと、レオンハルトは上段に剣を振り上げた。闘気の集中とともに、レオンハルトは、
「天を揺らせ――」
「っ……!?」
「っ、マズイ！　避け――」
レオンハルトの赤黒い闘気が魔剣に集中し、増幅し、周囲が気の奔流によって揺れる。その高まりを尋常ではないものと予見したブリティシュやホ・ラガの反応や声が現れる。
そして、その認識は正しい。それはレオンハルトが放つ技の予兆に

他ならないからだ。
あらゆるものを砕き、天地を揺らすその技は、
「――〝震天〟！」
「――――」
その場で放たれ、尋常ではない轟音と大地の揺れと共に、彼らの意識を奪ってしまった。

「――う、おおお!?　地震か!?」
その揺れは、街の方まで届いていた。
大地を揺らす地震には、魔物ですらも驚き、その場でぐらついて、場合によっては転げてしまう。
だがその揺れは数秒後に収まり、
「な、なんなんだよ……」
「あー……くそ、溢れちまったぜ……でも、文句は言い辛いしなぁ……」
魔物兵が手に持ったジョッキから半分ほど酒が溢れてしまったことに対して、仕方ないと言わんばかりに息をつくことに留める。
他の者達も同じな様子で、地震が起こっても特に文句を言うこともなく、普段どおりの日常に戻ろうとしていた。
そこに、その様子を不思議に思う魔物兵が、
「……文句を言い辛いってどういうことだ？」
「はぁ？　お前知らねぇの？　今の地震、レオンハルト様が起こした可能性だってあるだろうが」
「……え、あ、そ、そうなのか？」
「そうそう。いや、滅多に起こんないけどよ、たまーにレオンハルト様が街の外れとかで起こしたのがこっちまで届いたりするらしいぜ。何でも、訓練してるとか、他の魔人の方と喧嘩してるとかそんな感じで」
「え、えぇ……なにそれこわっ……」
「つってもこんだけ揺れるのは初めてだけどよ……よっぽど街の近く

か、レオンハルト様が力を出しまくってるか……もしくは本当に地震かもな！」
「いや、笑えねぇよ……」
ははは、と笑う先輩魔物兵に対して、最近入隊したばかりの新兵は戦慄する。
魔人の力ってやっぱおっかないんだなぁ、と改めて思い知った魔物兵であった。

街の外れの丘。
そこには、長い亀裂の入った地面と、その周辺に横たわる五人がいた。
倒れた者達は人間。ここまでやってきた人間の冒険者達だ。
それらを前にして、レオンハルトは魔剣を空間に収める。ほぼ同時に、二つの影がその場に現れた。
「お疲れ様ですの、レオンハルト様。お飲み物とタオルをご用意してますわ」
「お疲れ様です、レオンハルト様。また随分と被害を出しましたねぇ」
キャロルとペール。二体の使徒の言葉を受けて、レオンハルトは息を入れる。五人を、特に赤い短髪の男を見下ろしながら、
「……キャロル、ペール。この五人を近くの人里の宿にでも運んでやれ。こいつと一緒にな」
「あ、はい、畏まりました。そんじゃあ、適当に商会のうし車にでも乗せましょうか」
「畏まりましたの。直ぐに手配しておきますわ」
五人を文字通り叩きのめしたレオンハルトは、まだ息のある五人を確認して、懐から、光り輝くひょうたん型の黄金像をキャロルに手渡しつつそう命じる。代わりにキャロルから受け取った水筒で軽く喉を潤すと、再びそれを返しながら、
「それと、ハンティに命じておけ。監視任務は、奴らが例の場所に入ったところで一旦完了とすると」

「あ、それじゃあ私が言ってきますね。別の用事もありましたし」
「では、わたくしはこの人間達を運んでうし車に乗せてきますわ！」
ペールがハンティへの伝言を承ると、キャロルも五人を縄で縛って一括りにしつつ、そのまま持ち上げて運んでいく。使徒の力からすれば、人間五人を運ぶくらい訳ないものだ。
「レオンハルト様は如何しますの？」
「……俺は休憩がてらまだしばらくここにいる。少ししたら街に戻るから心配するな」
「了解しましたよう。では、行ってきますね」
「では、わたくしも迅速かつ完璧に命令を遂行してきますわ」
そう告げて、二人の使徒は礼をしつつ一度街の方に戻っていく。
後に残されたレオンハルトは、その一連の物事が完遂される余韻に浸る――わけでもなく、周囲を目を細めながら見渡す。
そしてある一点で止まり、そのままその方向を睨み続けると、周囲に誰もいなくなったタイミングで鋭い声を飛ばした。
「――そろそろ出てきたらどうだ。どこの覗き魔かは知らないが、そこにいることは分かっている」
「――おや、やはり気づかれたか」
レオンハルトが誰もいない筈の宙に声を虚しく響かせたかと思うと、しかし直ぐに返答が来た。
女性の声が響きその場に魔力の輝きと共に現れたのは、異様に長い白髪と赤い目を持つ少女であった。
如何にも魔女といった容姿の彼女に、レオンハルトは訝しむ。
対する魔女は苦笑混じりに言葉を繋げた。
「さすがは最強の魔人。この程度だと気づかれてしまうか。そちらの使徒は撒けたのだがね」
「……そういうお前は報告にあった占い師か」
「如何にも。人呼んで、未来視の魔女という。拝謁の栄誉を賜われて嬉しく思いますよ、レオンハルト殿」
そう言って、未来視の魔女は優雅にお辞儀をしてみせる。
だがレオンハルトの返答は、先ほどの五人へ掛けていた以上の威圧

であった。
「っ……と、さすがに、堪える……はは、気分を害してしまったかな？　出来れば、穏便に話をしたいと思っているのだがね……」
「黙れ。名も名乗らずに覗き見していた奴に俺が優しくするとでも思ったか？」
　信用していないと態度からありありと解る、解らせるような様子でレオンハルトは告げる。
　対する魔女はレオンハルトの重圧に汗を流し、苦笑しながらも魔人を見上げ、
「名前、か……申し訳ありませんが、今はまだ、名前を貴方にお教えすることは出来なくてね。未来視の魔女、もしくは魔女と呼んで頂ければ幸いだ」
「……今はまだ、だと？」
　その言葉に違和感を感じてレオンハルトが問いかける。すると魔女は頷き、
「左様。いずれ、否応なしに名を教えることにはなるでしょう。その頃になれば、拒否することは叶いませんので」
「……ふん、未来視の魔女、か。どこまでが本当なのか胡散臭いことこの上ないが……一先ずそれは置いてやろう」
「感謝します。私には、まだまだ語れないことが多すぎますので」
「……何をしに俺の前に現れた？　それと、覗き見していた理由を聞かせて貰おうか。答えによっては、ここで取り除かせて貰う」
　殺気をぶつけながら告げる。いつでも剣を抜くことは可能だ。その気になれば、０．１秒と掛からずに眼の前の命を摘み取ることが出来るだろう。
　だがその殺気を受けながらも、魔女は柔和な笑みを絶やすことはなかった。もっとも、余裕があるようにはみえないが、
「……貴方がやるといえばやるのでしょうな。実際、私では貴方には敵わない。摘み取られないような答えを考える必要はありますが――」
「嘘を言って誤魔化せると思うなよ？　納得がいかなければ、どちら

にせよ斬るだけだ」
「それは困りますね。いえ、私もなんですが……貴方も困るので止めてほしいですね」
「――何？」
　レオンハルトが更に訝しみ、眉根を寄せる。どういう意味だ、と。
それに魔女は頷き、補足するように、
「私を殺せば、私だけでなく、貴方様も困ることになります。言い訳がましく聞こえるのが恐縮ですが……より良い未来を考えるのであれば、まだ私の存在を消すわけにはいかない」
「……狂人か、それとも――本物か？」
「少なくとも、私は私を狂っているとは思ってはいない。いや、狂いかねないものを視てはいるので、外から見れば狂っているように見えるかもしれないがね……だが、目的を考えるのであれば貴方は私を生かすべきだ」
「……」
　レオンハルトが無言のまま眼の前の相手を注視する。
　一体何者なのか――レオンハルトの知識を持ってしても答えが導き出せない相手に、レオンハルトは最大級の警戒を行っていた。
　少しでもおかしな動きをすれば、もしくは都合が悪ければこの場で殺してしまおうと思っているくらいには。
　だが件の魔女は魔の気配を感じない、確かな人間で、こちらの威圧を受けて汗を流しながらも言葉を続ける。何かを思い出すように、
「開示出来る情報には限りがある。その上で、私を信用させるとすれば……ふむ、では予言をしよう」
　と、魔女は言った。レオンハルトの目を真っ直ぐ視ながら、
「貴方と私が待っている人物――それはこれより、約百年後に確実に現れる」
「！」
　魔女の予言が提示される。それは、
「善と悪の人格を持つ男――貴方と私が知る未来の重要人物に他ならないはずだが？」

「――っ！」
瞬間、レオンハルトは動いた。
魔女の首に手を伸ばし、そこを死なない程度の力を持って掴み上げる。
「っ……ぁ……！」
「貴様……一体何者だ？　どこまで……いや、何を知っている？」
先ほどの言葉、魔女が知る未来の人物のこと。
それを知っていることは――さして重要ではない。
レオンハルトにとっては何よりも看過出来ないのが――その未来を己が知り得ていることを、知っていることだ。
一人を除いて誰も知らないはずのレオンハルトの秘密の一つ。そして何よりも注意しなければならない秘密に繋がるその事実。
それを看破されている可能性が高いと知ったレオンハルトは、もはや冷静ではいられなかった。
全身から赤黒い闘気が溢れ出し、瞳がこれ以上ないほどに輝く。
もし本当に知っているのだとすれば、やはり生かしてはおけない。
いや、それではすまない。この魔女が他の誰かに伝えた可能性もある。
交友関係を全て洗い出し、その全てを魔女と共に消し去る必要もある。
何しろ、その真実は己どころか、全てを台無しにする危険性があるのだ。
人間と魔物の未来。そして――●●●のこと。
ここまでやってきたことが、これからのことが何もかもが無に帰する可能性がある。
露見してはならない。もはや魂ごと全て消し去ってしまうことも考えなくてはならない。
だが、
「……聞かせろ。お前は何を、どこまで知っている？」
「っ、かっ、はぁっ、はぁ……ぐっ！」
手加減したつもりだが、思ったより力が入っていたのだろう。首に

青痣を作りながらも、解放された魔女が地面に尻餅をつきながら、必死に呼吸をする。
　そして息を正常なものへと戻そうとしながら、魔女は答えた。
「はぁ、はぁ……っ、何やら危惧している様子だが……私は、貴方のことをそこまで知るわけではないよ……知っているのは、未来で貴方が行ったこと……それに繋がることだけだ……」
「……俺が未来で行ったことだと？」
　ああ、と魔女は胸を上下させながら首を縦に振る。首元を擦りながら、
「私は、未来を憂いているのさ……貴方と同じで、残酷すぎる真実を知っているからね……故に、私は未来の為に小石を投げかけ、何とか波紋を呼びかけようと足掻く……その途中で、似たような相手と出会うのだよ……貴方という、真実を知る人物とね……」
「……未来では、俺とお前が協力していたとでも言うつもりか？」
「協力か……まあ一応そういうことになるだろう。私は貴方に従わなくてはならないしね。だが、私が出来ることは少ない……私が出来るのは、〝最悪〟を回避するための時間稼ぎくらいさ」
　ようやく呼吸を正常に戻したのか、魔女が立ち上がる。首はまだ痛むようだが、それを気にせずに魔女は語り続けた。
「彼らと貴方を覗き見していたのも、彼らの行く末が心配だったからだ……彼らは我々にとって、必要な人物だからね」
「……お前、まさか――」
　レオンハルトが何かに思い至ったように目を見開く。それを見て、魔女は言った。
「どうやら、察しはついたようだね。まあ、だとしても今は言うことは出来ない。だが、本当に察しがついたのだとしたら理解出来るはずだ。私は貴方の不利益になることはしないし、世界の未来を憂いている。故に、あの方が次代の支配者となるために、このタイミングで布石を打たなくてはならないのだよ。何しろ、あの方にとって最大の障害の一つは……貴方だからね」
「！　お前、やはり……」

レオンハルトの表情が確信のついた表情となる。
すると、レオンハルトも威圧感を抑え始めた。僅かに警戒も残ってはいるが、
「……だとすれば、お前はそのために、その未来の為に動いていると？」
「ああ、勿論だよ。信用出来ないかもしれないが……私は、常に滅びゆく運命にあるこの世界を、限界まで引き伸ばし、そして波紋を生むために動いている。そのためにも、貴方とここで接触しておくのは重要な事の一つだ」
「……なるほどな。そうだとしたら……お前は俺に何を言うつもりだ？　未来でも教えてくれるのか？」
「いいや、言った通り、言えることは少なくてね。申し訳ないが、接点を持つのみで許してほしい。だから今日は、ここでお開きとさせてくれないかな？」
魔女は真剣な表情でそれだけを伝える。まるで目上の者に対するように、慇懃に腰を折ってみせる。
それは真に迫ったものであり、嘘でもない。そうすることが当然だと弁えている節すらあった。
だからこそ、レオンハルトは最後にこう問いかける。確認の為に、
「……本当に、奴なのか？」
「……そうですな。では、これだけ伝えておきましょう」
と、魔女は告げる。帽子を被り直しながら、
「私の名は――〝C〟と言います。時が来るまでは、そうお呼びください。知っているのであれば、これだけで理解が可能かと」
「……そう、か。また訪ねてくるつもりか？」
「いえ、まあ……次に邂逅するのは百年後、その時が来てからになるでしょう。それまでは、まだ暫し未来視の魔女を続けなくてはなりませんので」
そう言って魔女は踵を返す。再び帽子を取って一礼し、
「では、また。もし用があれば、魔物討伐隊でもお尋ねください。これより私はそちらを回る予定ですので」

「……分かった。好きにするといい。だが――」
「理解しておりますよ。何があろうとも、それらを口にすることは御座いません。そもそも、貴方の内側の話は私には見通せず、殆ど知りえませんが……それを口にすることは、良い未来に繋がりませんので」
「……その言葉、今は信用しておく。ゆめ忘れるなよ」
「はい。刻みつけておきましょう。では――」
と、魔女はレオンハルトの言葉を聞き届けたのを最後に、その場から消えていった。
全く気配がしなくなったことを感じ取り、レオンハルトは暫しその場で立ち尽くす。そして、
「……ああいう奴だったとはな……」
小声で呟く。それは素で放った一言だった。
何にせよ、レオンハルトは重要な出来事を一つ終えたことに、一つの区切りをつけて街へと戻る。
一年以内に目的を遂げて、そして魔女が言うのであれば、百年後には待ち望んでいた男が現れるというのだ。
「……精々、愉しみにさせてもらうぜ……？」
誰に放ったでもないそんな言葉を歪んだ口元と共に宙に乗せ、レオンハルトは己の役目を遂げるために帰路についた。

永い旅の始まり

――ＧＬ５３３年。

大陸北部の荒野に聳え立つのは、細長い岩山を細工したかのような巨大な建造物だ。

青い鉱石か何かで作られたその遺跡は、一体いつから存在するのか。どんな材質で作られているのか。誰がどんな目的で作ったのか。何もかもが分からない。

ただその古代の遺跡は、人間の冒険者にとっては食い扶持の一つとして知られていた。

主要となるのは地下の迷宮部分であり、そこは多くの魔物が住処としている他、金と食料などを求めて冒険者達がうろつく場所である。

だがそこが、別の意味で重要な場所であることに気づいているのは僅かしかいない。

地下１階。その一角の目立たない場所に、それは存在する。

４つの台座と謎の扉。それは何も知らなければ、ただそこにあるだけでなんの意味も持たないものだ。

しかし、４つの黄金像という鍵を手に入れることでその扉は開かれ、ある場所への道を繋げる。

そのある場所を知る者、あるいは何が起こるかを知り得た者、あるいは奇跡的な偶然でそれらを知り得た者。

過去、その誰もが扉の先に挑み、何事かを成して帰ってきた。

決して歴史に刻まれることのない、秘匿されたその場所。辿り着くのは並大抵のことではない。

だが、人の身でそこに辿り着いた者達がこの暗黒時代に存在した。

彼らはこの日、遂に４つの黄金像を手に入れて古代の遺跡に挑んだ。

前日に綿密な打ち合わせを行い、それぞれの夜を過ごし、最後となるかもしれない一日を迎えた。

しかし後悔はない。彼らは誰もが魔人を倒すために人を捨てた者達だ。

その力の強大さを実感した彼らは、何としてでも魔人を倒すための何かを掴まなければならない。
例えそれが魔人による罠の可能性があろうとも、彼らにはそこを目指すしかないのである。
懸念はあった。しかし、
「あの魔人の言葉に嘘はないように思えた。あの魔人は……多分だけど、僕達人間が力を手に入れることを望んでいる。敵となり得る存在を求めている……そんな気がするんだ」
「ブリティシュ……お前……」
「……貴方がそう言うのならそうなのでしょう。貴方の勘は、よく当たりますからね」
――ブリティシュのこの言葉が決定打となった。
彼のこういった重要な事に対する勘はよく当たる。窮地をこの勘に助けられ、今まで何度も死線を潜り抜けてきた仲間達はよく理解していた。
故に最も警戒していたカオスも、その言葉を聞いて最終的には納得した。
確かに、誰もが思うことではあった。あの魔人――レオンハルトは、どこか不可解な行動、言動であったと。
少数でも人間に良い思いをさせたり、自分達を見逃した上に、黄金像も約束通り渡してくるなど、どう考えても敵対関係にある魔人の行動としてはあり得ない。
だからこそ、この黄金像は罠である可能性を考えたのだがその可能性は低いと考えられた。
何故なら、自分達を害するのであればこんな回りくどいことをする必要はないからだ。
あれだけの力があるのであれば、正面から叩き潰してしまえばいい。ましてや、実際に相対して殺す機会は幾らでもあったのだ。
魔人の言葉が信用に足らないとはいえ、ただ単純に嘘という風には確かに思えなかった。
そもそも黄金像を自分達が見つけたのは完全に偶然で、しかも使用

用途の手掛かりを記した壁画も、古い遺跡から見つけたものだ。罠だとしても大掛かりすぎる。
結論として、黄金像とあの扉、そこに力が手に入る何かがある可能性は高いと判断した。
警戒はするべきだが、向かわない訳にはいかない。何があるかを確かめるためにも、ブリティシュら一行は、古代遺跡への突入を決行した。
遺跡の探索は熾烈を極める。まず最初に、遺跡に突入する直前で現れたのが、
「――ほほほほほっ！　あんた達の好きにはさせないよ！」
「ちっ、出やがったな、ヒステリー魔女が」
突然の魔法を躱し、聞こえてきた高い声にカオスが吐き捨てる。
岩肌の影から姿を表したのは、やや年を食った女魔法使い――エイナとその一味だ。
側近として二人の魔法使い、年若い女魔法使いであるメイと、青年のシンを従え、更には前衛として三人の剣士を加えた彼女は、稀代の魔法使いを自称する高飛車だが、それなりに知られた冒険者だ。
以前、ホ・ラガとブリティシュに惚れて夜這いを仕掛けたが、そのことで酷い仕打ちを受けたとして一行を目の敵にしており、行く先々で邪魔をしてくる連中――ブリティシュらにとっては、控えめにいっても迷惑な存在だった。
「黄金像だか何だか知らないけど、あたしをコケにしたあんた達……特にホ・ラガ、あんたは許さないよ！　白色破壊光線！」
ホ・ラガへの恨みつらみ、その復讐を謳いながら彼女は高威力の魔法を放つ。しかし、
「バリア！」
その魔法は、カフェのバリアによって容易に防がれてしまう。
おおよそ全ての攻撃を防いできたカフェのバリアの硬度は知られたものであり、それなりの魔法使いの魔法くらいはどれだけ撃たれようと破れることはない。
魔法の実力でも完全に負けている――だというのに、エイナは部下

に命令しながら五人に襲いかかった。
それを受けて、五人も本気を出す。今までは手加減して、適当に追い払っていたが、今日この日だけは冗談が通じない。
例え同じ人間だろうと、彼らの目的を邪魔する奴らは薙ぎ倒していかなくてはならない。
その覚悟を秘めた彼らの心を、エイナ達は見抜くことが出来なかった。
「ぎゃあっ!!」
「ぐえっ!!」
「く、そ……!」
「ほい、終わりだ。まったく……クズはこの世のためにも殺しちまうに限るな」
カオスが向かってきた三人の剣士を、手に持った短刀で瞬く間に片付けてしまう。そうしてカフェのところに直ぐに戻ると、残る戦闘を二人で観戦する。だが、
「っ……ぁ……？」
「……」
側近の魔法使い、メイが何が起こったか分からないと言わんばかりに表情を歪めて呻き声を漏らす。
戦闘は一瞬の事だった。メイが魔法を詠唱して放つ――その直後に、ブリティシュは彼女の懐に潜り込み、心臓に剣を突き立てていた。
何が起きたのか、己が死んだことすら理解出来ずにメイは瞳を閉じて、身体から力を抜く。
それを受け止め、優しく地面に横たえるブリティシュ。その表情は真剣なものであったが、どこか哀しみを感じているようでもあった。
亡骸にお辞儀をして、仲間のところに戻るブリティシュ。その間にも、また決着が着いていた。
「おおお！　ファイアーレーザー！」
青年の魔法使い、シンが両手から魔法光を発生させて、何度も魔法を放つ。
だがその対峙している相手、日光はそれを紙一重のところで躱して

距離を詰めた。
「しっ――！」
「っ、かはっ……！」
一閃。日光が目にも留まらぬ速さでシンを刀で打ち捨てる。
しかし他の者達の様に返り血を浴びることはなかった。何故なら、
「峰打ちです。殺してはいません。……殺すほどでもありませんから」
彼女は何かを思った表情で倒れたシンを放置すると、踵を返して残心。鞘へと刀を収めながら仲間のところに戻っていく。
そして最後の決着も、
「悪いがエイナ。君では二つの意味で、私の相手にはならない。それは分かっているはずだと思うが？」
「っ……うるさい！　あたしをコケにしやがって……！　何も言わずに逃げたブリティシュもだが、あんたは最低だった！　湯に入って消毒までして、挙句の果てに吐いた言葉が〝汚いから乗らないで下さい〟だ！　あの屈辱をあたしは忘れちゃいないよ！」
「女性に興味がないだけなのだがね……どうしてもやるつもりかい？」
「あんただけは何があっても殺す！　そのためだけにここまで来たんだよっ!!」
因縁の相手を睨みつけ、魔力を集中させるエイナ。
宙に浮き、自分の周囲にバリアを張るエイナは、間違いなく熟練の魔法使いである。そのことは誰が見ても明白だ。
だが、
「そうか……」
ホ・ラガはため息を一つ吐く。そこには緊張や相対する上での強い感情は見当たらない。
ただただ面倒だと感じている様子で、ホ・ラガは無造作に魔力を集中させてエイナに向かった。
その刹那、エイナが魔法を放つ一瞬の隙に割り込み、ホ・ラガは氷の魔法でバリアを貫通させ、その氷柱を以てしてエイナの身体を貫い

ていた。
「そ、んな……嘘……」
心臓を貫かれたエイナが、地面へと倒れる。それを下に見て、ホ・ラガは言った。
「二つの意味で相手にはならないと、私は言いましたよね？　貴女の魔法は私に通用しない。そのことをもっとよく理解するべきでしたね……」
そうしてホ・ラガは踵を返す。しかしそこに、
「くっ、くそ……、よくもマスターを……！」
苦しそうにしながらも立ち上がるシンの姿があった。それを見て、カオスが顔を顰める。
「おい、日光。また殺さなかったのかよ」
「……殺す必要を感じませんでしたから。ですが、立ち上がったのなら――」
再び日光が刀を構えようとする。だがそこに割り込むようにして、ホ・ラガが告げた。
「――いや、私が行く。皆はここで待っていてくれ」
「えっ？」
「……ああ、そういう……」
「言わんこっちゃねぇ……ホ・ラガ好みの美形を生かすとこうなるだろうが！　可哀想に……慈悲を与えるならまだ殺してやった方がマシだろうが……」
カオスが表情を青褪めさせ、他の面子も何ともいえない表情となる。
その間にも、ホ・ラガはシンを連れて遠くの岩陰に引っ込むと、
「君も冒険者であれば分かっているはずだ。殺し合いをしにきたのであれば、何をされても文句は言えない。殺されようとも、物資を奪われようとも、性的に犯されようとも、捕虜に文句を言う資格は存在しない。――そうだね？」
「な、なんだと……？　っ、お、おい貴様！　何をする！　何故服を脱がし――ひぃっ!?　な、何を押し当てている!?」

「何って、ナニだとも。君にも付いているだろう？」
「……っ!?　や、やめろ！　俺に触れるな！　抱えるな！　離せ！　やめっ――」
「うむ、離してあげよう。別の場所が繋がるかわりに……」
「は、離せ――――!!　離してくれえええええええ――!!」
岩陰からシンの絶叫が聞こえ、そしてしばらくして大声が聞こえなくなった。
そのことに、ブリティシュやカオスは戦慄し、カフェや日光も何とも言えない表情で休憩の準備をする。どのみち、終わるまでは動けないからだ。
故に何時も通りお茶の準備をカフェが行い、皆にお茶を配り始めて一服した頃――ホ・ラガは酷くすっきりした様子で戻ってきた。
「――ああ、待たせたね」
「本当にまったわい。ったく……どうせなら、あの若い女の方が残ってれば儂も出来たんじゃが……」
「そういうこと言わないの。もう……はい、ホ・ラガ」
「ああ、ありがとう」
カオスの発言に呆れるカフェからお茶を受け取るホ・ラガ。
怖ろしいことが起きた後ではあるが、その場はこれから死地に向かうかもしれないというのに、とても穏やかな雰囲気が漂っていた。
それは誰もが心の中で、これがゆっくりとお茶を飲める最後の機会だと予感しているからかもしれない。
扉の先に何があって、何が起ころうとも――例え無事に帰って来ようとも、自分達にゆっくりとしている時間は無くなる。
もし魔人を倒すための力を手に入れたら、その先に待つのは〝戦い〟だ。
これまで以上に激しく、どうしようもない程に戦い続けることになるだろう。皆が無事であれる保証もない。皆がこうやって、ゆっくりと穏やかな表情でお茶を飲める保証もない。
この暗黒時代。人にとっては生き地獄。明日がどうなるかさえも見渡せない暗い闇の世界において、僅かながらでもゆっくりと休める

保証があるのは恵まれていることではあった。
それは人を捨てた彼らにとって、かけがえのない時間だ。
カオスが馬鹿な事を言い、カフェが誂われ、日光が窘めて、ホ・ラガが何かを冷静に指摘し、ブリティシュが苦笑交じりに声を掛ける――人を取り戻すことの出来るかけがえのないひと時であった。
だが、この古代の遺跡に入った後は、真に人を捨てることになるかもしれない。
その保証さえも捨てることになると誰もが薄々と理解し、故に噛みしめるように最後の休憩をお茶と共に味わう。
その最後の一杯を、誰もが惜しむように、最後の一滴まで飲み干すと、示し合わせたように彼らは立ち上がった。
「――行こう」
ブリティシュの決意に満ちた一声に、皆も決意に満ちた声で頷く。
ただ一人、悩む者がいながらも、それには気づかず、あるいは気づこうとせずに――彼らは最後の旅となるかもしれない古代の遺跡へと挑んだ。

遺跡の中は、濁りきった匂いで充満していた。
その中を、五人は無言で進んでいく。
扉の場所は既に調べ終わっている。地下一階の目立たない一角。故にその場所へはあっさりと辿り着いた。
「……ついに、か」
誰の言葉か、息を呑むような音が連続する。
そこにあるのは、４つの台座と、異様に巨大な扉。
かつて古い遺跡の壁画で見たのと全く同じ構図のそれだ。
「黄金像を――」
「……僕が正面を守る。皆は黄金像を置いていってくれ」
ブリティシュが扉の正面に盾を構えて移動し、皆に黄金像を手渡す。
ひまわり型。盆栽型。言わ猿型。そして――ひょうたん型。

最後の黄金像を台座の上に置くと、皆は自然と武器を構えた。
その直後、僅かに嫌な感じがした。
「……？　おい、何も起きねぇぞ――」
「そんな……っ、後ろっ！」
「え――うぉあああっ!?」
皆の間から一瞬、空気が弛緩仕掛けた時、カフェが周囲を見渡してそれに気づく。背後に現れた存在に。
「――がぁ、がああ……！」
「っ、なんだこいつは……!?」
そこにいたのは、今まで見たことのない怪物だった。
透明のセロハンを薄く壁に印刷したような不気味かつ無骨な人に似た形をした存在。人間の四倍以上はある巨大な影。
魔物とは違う異様な気配を漂わせる怪物と対峙し、五人の緊張は最高潮に達した。
「扉は開かない……だとすれば……番人か!?」
「おそらくはそうだろう！　何にしても、まずは――」
「っ、とりあえず倒すぞ！」
「行きます……！」
「き、気をつけて！　おそらくさっきのは、酸か何かよ！」
五人が武器を構えて戦闘態勢に入る。
扉を守る巨大かつ異様な番人。五人は遂に、それとの戦闘に入った。

――その瞬間、別の場所で別の巨大な存在はそれを察知した。
「！　――ほう？　久し振りに到達する者達が現れたか……」
ここではない何処かの異様な空間。そこにいる存在は、何百年、あるいは千年振りとなる訪問者の存在に興味を示した。
その直後、空間に現れるのは輝く存在、黄金の髪を持つ美しい少女だ。
「……申し上げます、プランナー様。例の扉に人間達が――」

「知っている。――が、人間か。ふむ、面白い。人間が到達するとは……」
「はい。世は魔物が席巻しておりますれば……人において、そのような存在は貴重かと」
薄い笑みを常に携える女は、通常、下の者に見せる――どこか悪辣なものとは違い、心から眼の前の存在に対して敬い、畏怖し、恍惚した様子で慇懃に接している。
「ふむ、これも私の作り上げたバランスが優れていることの証明か」
「はい。仰る通りかと……」
だがそれを何とも思わずに、ヒトデに似た形のその存在は興味と共に自らを讃える。輝く少女もそれに同調する。続いて少女は柔和な笑みのまま、
「如何なさいますか？」
「扉を潜るようであれば直接ここに通せ。人間であれば……ふふ、どのような願いを口にするかは大体予想がつく。ちょうど、もう少しバランスを整えたいと思っていたところだ。その人間らが愚か過ぎなければ、それが叶うだろう」
「畏まりました。天界を経由せず、直接御身の前へと繋げます」
「うむ、そのようにせよ。女神ＡＬＩＣＥよ」
「はい。承りました。では――」
最後まで丁寧に一礼し、女神はその場から消える。
その場にただ一柱となった空間で三超神、プランナーは神の扉の前で戦う五人の人間を覗くことにした。
おおよそ、神が一個人を観察するようなことはなく、基本は俯瞰で全体を視ているのみだが、こういった場合は別であった。
「神の失敗作……ふふ、それを倒すほどの人間か。馬鹿のローベン・パーンが作ったにしては中々面白いこともあるものだな。もっとも、バランスを調整している私の功績に違いないが……」
プランナーは、神の失敗作とはいえ、それを倒してみせるほどの人間の存在に喜ぶ。
きっと長い冒険の果てに、死力を振り絞ってここまで辿り着こうと

しているのだろう。
ならばそれを達成した対価を与えてやるのは当然だし、おまけとして特典をつけてやるのも良いだろう。
それが例え、望まないものだとしても、とても喜んでくれるに違いないと、プランナーは彼らを出迎えることにした。
辿り着くのは４人。１人を犠牲にし、神の扉を潜って眼の前に辿り着いた矮小な人間達に、プランナーは告げる。
「――よくぞここまで辿り着いた。勇敢なる冒険者たちよ」
「っ……お前、は……？」
「私は天上に座する者。天上より世界を見守る者」
息を呑む四人に、プランナーはあくまでも善良なる神として彼らに告げる。
「汝ら――ここまで辿り着いた褒美として願いを告げるがよい。どのような願いでも叶えてやろう」
内心では、愉快ともいえる感情が渦巻く中、プランナーは願いを問いかけた。

――扉の先は、不思議な異空間だった。
神の失敗作を、ブリティシュが酷い怪我を負いながらも倒し、彼の〝行ってくれ〟という願いに苦渋の決断をしてその先へと進んだ彼らは、その神々しい声を聞いた。
「汝ら――ここまで辿り着いた褒美として願いを告げるがよい。どのような願いでも叶えてやろう」
それは、明らかに――神。
そしてその言葉は、自分達の旅が、間違っていないことの証明だ。
願いを叶える。神と思わしき存在の力があれば、それはきっと、どんなことでも叶うのだろう。
かつて目の当たりにした強大な魔人を越える存在感を放つ眼の前の何かであれば、本当に叶うのだと誰もが確信出来た。
だからこそ、彼らは願いを告げる。

「……儂は――魔人や魔王を殺す力を」
最初に願いを告げたのは盗賊カオス。
魔人にかけがえのない恋人を殺された恨みを持つ彼は、迷うこと無く魔人を殺す力を欲する。
「……私も、魔人と魔王を倒す力を」
次に願いを告げたのは侍日光。
カオスほどではないにしろ、魔人に対する憎しみを持つ彼女も、冷静な頭で願いを改めて考え、魔人を倒す力を欲した。
「……なら私は、魔人と戦うため――全ての知識を」
そして魔法使いホ・ラガ。
彼は更に深く考え、全ての知識を欲する。そうすれば、魔人を倒す方法を他に知ることが出来る他、あらゆることの役に立つと考えたからだ。
魔人に恨みはない。されど、ブリティシュの必死の願いを耳にした彼は、それを果たそうと全力を尽くすことをとうに決めていた。
「了承した。さあ――汝も、願いを告げるがよい」
「……私、は……」
最後に残ったのは、神官カフェ・アートフル。
彼女は神に願いを問いかけられ、俯く。
「カフェ……？」
「……？　おい、お前も早く願いを……」
様子がおかしいカフェに、日光やカオスが訝しむ。
しかしその言葉は届いていない。今、彼女の頭にあるのは、先ほどの出来事も含めた、今までの苦痛の思い出だ。
『やーい、チビ！　ちんちくりん！　ブス！』
『日光さんは美人だよなぁ……でもあっちのは……』
『あの五人の実力は一級品だよな。……一人、子供みたいなのがいるけど』
『この眼鏡ちび！　生意気だよ！』
彼女は子供の頃から、その子供っぽい容姿を弄られてきた。
自分でも、己がずんぐりむっくりで、日光やホ・ラガのように美し

い容姿でないことは自覚している。
しかし、それで傷つかないこととは別問題だ。
『カフェ……今、君の力を必要としているのは僕じゃない。彼らなんだ。それは分かるだろ……？』
つい先ほどのこと。ブリティシュは酷い怪我を負い、他の四人に、残るといったカフェに、先へ行くことを促した。
その様子は悲痛なものであったが、同時に、何かを危惧するような不安を抱えていることに、カフェは気づいていた。
しかしとうとう、側にいることも含めて、彼の心の内を知ることは出来なかった。
……もしわたしが……普通の可愛い女の子だったら……貴方の側にいて、貴方の考えを知ることが出来たの……？　もしわたしが、日光さんみたいに綺麗だったら……。
同じ目的で旅をする仲間、日光。彼女の美しさは男性のみならず、女性でも見惚れるほどであった。
それだけに、カフェは行く先々でその容姿を比べられ、辛い思いをしてきた。
だが、仲間達はそれを気にしてはいない。むしろ、そのように貶められる時は必ず自分の為に怒ってくれた。
日光も、
『気にすることはありませんよ、カフェ。私はカフェのことを可愛いと思います』
気にすることはない、時には褒めるような言葉と共に慰めてくれた。
そこには一切の悪意がない。純粋に、仲間を慰める優しい言葉だった。
だがカフェの心は、その度に小さな棘で傷ついていった。
空元気の様な笑みで誤魔化しながら、傷ついていることを悟られないように強がった。
そんなつまらないことを問題にしちゃいけない。
皆、魔人を倒すために真剣に戦っているのだ。

あの魔人と相対した時も、怯えて使い物にならない自分とは違って、皆は戦う意志を持ち続けていた。
自分だけが、役立たずだった。
……そう、よ。わたしなんて……力を手に入れたところで、どうせ敵いっこない……。
他の皆なら戦うことが出来るだろう。強い意志と覚悟を持っているから。
だけど自分は結局――ブリティシュについていくために、彼への恋心という不純な動機と覚悟で旅をしていたに過ぎない。
同じような目的にホ・ラガはいるが、彼は違う。彼は、ブリティシュの願いを叶えるためなら、ブリティシュすら見捨てられる。
自分には出来ない。覚悟が不十分な自分には。
だから――
「おい、カフェ！　早く願いを――」
「――私は……」
告げる。己の願いを。神に向かって、
「私は――美しさが欲しい……！　誰もが羨むような、絶世の美女になりたいっ！」
「カフェ……!?」
「っ、カフェ……お前、何を……？」
「……カフェ……君は……」
その願いを口にし、三人は思わぬ言葉に驚く。
突然の事だったからだ。魔人を倒すために集まった自分達。
その中で彼女だけが――私欲を、己の欲を果たす願いを口にしたから。
それが許せないという話ではない。そういうことを口にするとは思ってもいなかったから。
だからこそ、彼らは初めて耳にした彼女の願いを、その慟哭に近い叫びを聞いて、彼女の涙を眼にして、ようやくそれに気づく。
大切な仲間の悩みに、今まで気に留めようともしなかった真実に。
だが、その隔たりを解消する暇を、神は与えない。

「――ふふ……了承した。その願い叶えてやろう」
そこで初めて感情らしきものを見せた神は、彼らに向かって何かをする。
異空間の中で、彼らの身体が発光した。
「っ、ぐ、あああああああ!?」
「こ、れは……あああああっ!?」
「ぐ、うぐっ！　何かが流れ込んでっ……これは……!?」
「っ……これ、で……ようや、く……っ！」
四人はそれぞれ、願いに沿ったものを与えられる。
そのために身体の中をかき回されるような痛みを受けて絶叫する二者や、頭の中に流れ込んでくる膨大な知識に酷い痛みを訴えるホ・ラガ。
そして涙を落としながらも、身勝手な願いに対する思いに痛みも忘れて感じ入るカフェ。
四人の身体は光り輝き、それぞれ世界のどこかに転移されながら、その願いを叶えられる。
「魔人や魔王を倒す力――」
それは、神が予想した願いの本命。
魔人と魔王を倒せる力。それを求めた者を、世界のバランスを整えるために利用する。
その形を、黒の剣と白の刀に変えて、世界へ産み落とす。
自己意識を持たせたまま、かの無敵結界を斬り裂き、魔王とその眷属に絶大な効果を発揮する武器とする。
一つは――魔剣カオス。
一つは――聖刀日光。
勇者とは違う、人が魔を倒すための唯一の方法を産み落とし、神は別の方にも注力する。
「全ての知識を――」
それは変わり種の願い。
この世のありとあらゆる知識を得ようとする、愚かな人間らしい傲慢な願い。

だがその願いは確かに叶える。
この世のありとあらゆる知識――直視し難い真実、絶望の知識も含めて全てを与える。
そして、
「誰もが羨む美貌――」
それは、神でさえ予想し得ない願い。
愚かな人間の極み。願いを叶えられる絶好の機会を、そのようなくだらない願いでふいにしてしまう最悪の答え。
だが、その愚かすぎて予想することさえ叶わなかった願いを、神は喜ぶ。
故に願いは正確に叶えられる。
世界でも最高の、誰もが羨み、誰からもその滾った欲望を向けられ、もはや中身の尊厳も何もかもを顧みなくなるような至高の美貌を。
「汝らの願い――三超神、プランナーがたしかに叶えたぞ」
それらの願いを、出来るだけ長く味わえる様に、おまけの不老不死を加えて叶えてみせる。
全ての願いを叶え終わると、その場にはただ一柱の存在だけが残った。

――かくして、彼らの人間としての長い旅は終わりを告げた。
「儂は……人でなくなったのか……？　魔人を殺す力ってのは、こういう――」
「魔人を倒す力とは、こういうことでしたか……」
「これが、私……これで、私も……ようやく彼の元に……！」
世界のどこかで人を捨てた二振りは、今はまだ、その苦しみを認識することはない。
美貌を得た彼女も、今はまだ、手に入れた物を喜ぶ余裕があった。
その一方で、
「これが……この世の、真実だというのか……？　あれも、これも……ああ、そういうことか……かの魔人が言っていたことも、神も、何も

かも……っ！　こんな……、う、がああああああああああああっ！」
地面に膝を突き、頭を掻き毟りながら絶叫する男。
全ての知識を得た彼は、一足早い絶望を味わっていた。
想像しうる中でも最悪の――否、想像以上の悪夢。
何をどうしてもどうにもならない。それが現実だと知った彼の嘆きの叫びは虚しく響いた。
そして――
「っ、はぁ、はぁ……ホ・ラガ……カフェ……カオス……日光……皆、一体どこへ行ったんだ……？」
荒野をただ一人、歩く者がいる。
扉が閉じられ、黄金像もどこかへと消えてしまった。
どれだけ待ち続けても扉の先へと向かった彼らは戻ってこない。
彼はただ一人、消えた仲間を探して彷徨い歩く。
それは、彼が人の人生を全うして死ぬことが出来るということだ。
しかし、
「……許さ、ない……復讐、してやる……ッ！」
その影を追いかける男が一人。
己すら犠牲にする禁呪を携えた男によって、彼はまた別の運命に囚われることになる。
暗い洞窟でただ一人、孤独に生き続けるしかない――そんな運命に。

その一方で、
「――今日は記念すべき日だな。少々、不謹慎ではあるが……」
紅い城を根城とする魔人は、そのテラスから吹き抜ける風に、嫌なものが混ざっていることに苦笑する。
誰もが気の所為だと断じる程度の予感。それこそがこの世に、魔人を害するものが生まれた証明に他ならない。
だがそれが生まれたことは、これから起こる多くの出来事の布石と

なるものだ。
その手始めとして、百年後。彼が期待する存在が現れる。
「……クク、まるで〝あの時〟と同じだ」
それはかつて、己と斬りあった最強の人間の存在を予感した時と同じだ。
胸に受けた傷が疼く。既に完治して傷跡も残っていないが、深手を受けた時の記憶は今でもはっきりと思い出せる。
だが今度はまた違う。今度は、
「……随分と、愉しみにしておられるようで」
「……お前か。いやなに、相当の強者だからな、嫌でも身体が喜んじまうだけだ」
「左様でありますか」
そこに現れたのは、異常に長い白い髪を持つ魔女。
彼女は魔人の要請を受けて、百年を待たずに再び邂逅した。
その理由は、
「……しかし良いのですかな？」
「何がだ」
「いえ、私は私であのお方の為に悪巧みをしますが……レオンハルト殿は、出来れば止めておいた方がよいかと」
「……ハッ、それはつまり――」
告げる。魔女が、ええ、と首を縦に振り、
「はっきり言っておきます――負けますぞ？」
「……」
未来視の魔女から告げられた言葉――予言を耳にして、魔人は一度表情を消す。だが直ぐに苦笑し、
「……それで？」
「ええ。貴方も理解しているでしょう？　如何に貴方が最強の魔人とはいえ……かのお方の強さは尋常ではない。私も視えた時は幻を見たかと疑いましたが、幻ではない。かのお方は、魔王ですら追い詰める」
真に迫った言葉を、未来視の魔女は口にする。それは忠告に似たも

のだ。
「魔王を追い詰めるほどのお方、それに勝てるほど、貴方は強くないでしょう？　無論、良いところまでは行くでしょうが……」
「……そっちこそいいのか？　俺と戦ったらその後の戦いに支障が出るだろう？」
「いえ、問題ありませんよ。かのお方は貴方を倒してなお、その足で魔王を追い詰めますからね。多少苦しいでしょうがそれは揺らぎません」
　それはある意味、魔人にとっては愉しみに水を差すような予言に思えた。
　しかし魔人は、それを聞いてなお、笑みを深めた。
「結構なことだ。俺を圧倒するほどの化け物……ククク、唆るじゃねぇか」
「……死ぬことは考えないので？」
「俺が死ぬとでも？」
「いえ、そうは視えませんが。勝てないと言われてなお、挑もうとする神経が理解出来ず……もっとも、だからこそそれを告げることが出来る訳ですが」
　未来視の魔女は同じ様に苦笑しながら肩を竦める。しょうがないお方だと言うように、
「私としては、あの方が魔人となり、その先まで行ってしまえばいい。その過程に紆余曲折があろうとも、そう修正出来るだけの道筋は既に視えている」
「……随分と悪辣だな。俺が言えた事じゃないが、奴はそれを望んでいないだろう。悪いとは思わないのか？」
　魔人が呆れるように言う。未来を視て、それを操作しようとする――望まない未来であってもだ。
　だからこそ、畏敬の念を抱く相手に恐れ多くはないのかという意味を込めて告げる。しかし、
「……勘違いしているようですな」
「あ？　それはどういう意味だ？」

簡単な事です、と、魔女は説明する。
「私は、世界の未来を案じている。終わりを引き延ばそうと足掻いている。そのためならば、私自身が外道に堕ちることに躊躇いはない。あの方にしても同じです。例えあの方がそれを望まずとも、世界の未来は、あの方によって引き延ばされる。そういう運命にある。私はそれをより確実にし、横道に逸れないように見張るのみです。あの方ではなく、世界を優先して」
「……なるほどな」
とんでもない覚悟だ、と魔人はそれを感じ取る。この人間でしかない存在は、かなり特殊な精神をしているのだと。
「それで、次に会うのはお前でいいのか？　聞きそびれたが、お前はただの人間の筈だ。百年後に無事な筈はないだろう？」
そして疑問を告げる。それは彼女という存在の在り方を問うものだ。
魔女はそれを聞いて笑みを浮かべた。息を入れ、
「――ご心配なく。百年後であっても、認識としては私です。事実としては次の〝C〟となりますがね。精神的には変わらない。人格に多少の変化はあるでしょうがね」
「……随分な魔法の様だな。そんなことをするくらいなら――」
「ええ、まあ。不老不死になるための方法を研究したこともありましたがね。しかし、最初の私はそれを見つけることは出来ず、代わりに精神と知識を受け継ぐ方法を見つけました。まあ新しい魂に移した方が〝色々〟と好都合ですしね。言うまでもなく禁呪ですが……使命を果たすためには便利であると言わざるを得ません」
「……精神と知識を受け継ぐ、か。だが才能までは受け継げないだろう。そこはどうしてる？」
「そりゃあ産んで増やして、適応する子を探すしかないでしょう。ある程度の才能があれば支障は出ない。幸いにも、誰といつ子供を作れば、それが生み出せるかは視えますので問題はないですね」
ただ、とそれをなんとも思っていない様子で魔女は言った。
「受け継ぐのはある程度成長してからとなるため、それまでの人格と

融合して多少、歪になるのは避けられません。故に完全に同じという訳でもない。かくいう私も、子供の頃の人格と記憶が残っているおかげで、少々混乱してしまうことがありますよ。……私は何者なのだと」

自嘲するような笑みで魔女は言う。己の掌を見つめているその姿が、己の存在に苦悩しているようにも見えた。

魔人はそれを視界に収め、

「……なるほどな、よく分かった」

鋭い目つきを更に細めながらも、頷くだけに留めた。

その気持ちは大いに理解出来ることだが、それを口にすることは決してない。

答えをとうの昔に出した身としては、多少のアドバイスをしたい気持ちはあるが、目的よりも優先されるものではない。

だからこそ、魔人は別の言葉を選んで紡いだ。具体的なものとして、

「なら、次に会うのはまた別の魔女か」

「同じ様に接して貰って構いません。男かもしれませんがね。……私としても、今の所は男の身を欲している様なので」

「女になるのは嫌か」

「さて……答えに困りますね。今の私は女性。最初の私は男性で、最終的に視た姿も男性。身体に精神が引っ張られ、女性としての人格が残っているとはいえ、未だ私は男性の身を好んでいるようです。――女性では生き辛い上、女性を愛するには男性の方が都合が良いですから」

「……女が好きということか」

「いえ、どちらでも。私、男性での性交も女性での性交も経験しておりますので。子を孕ませたことも、産んだことも数多くあります。故に性的趣向は多少、倒錯しておりますれば。……ただ、女性の方が愛らしい者が多いので、そちらの方が好ましい。男性相手に愉しもうにも……容姿には煩いようで。毛深い男性やワイルドな男らしい男というのが苦手なのですよ。どちらかというと、美しさがある中性的な相

手であれば――」
と、そこまで言ったところで魔女は魔人の顔を見てハッとする。そして顎に手を当てて感心するように、
「ふむ、しかし貴方であれば私も女性での性交をするのも吝かではありません。どうですかな？　少々、私とおセックスなど――」
「ムカつくから殺してもいいか？」
「……お言葉ですが、死姦はあまり趣味がいいとは思えませんな。ですがそれが要望だというなら少々お待ちを。入れ替えの後であれば、殺して頂いても構いませんとも」
「本気で言ってるなら今直ぐ出ていってくれるか？　それと、いつか覚えてろ。いずれこき使ってやる」
「ええ、ええ、勿論冗談ですとも。そう答えてくることは視えていましたので、ここで止めておこうと思っておりました。軽快な会話をご堪能頂けましたかな？」
「やっぱ止めだ。今直ぐこき使ってやる。下の街で唐揚げでも貰ってこい。お前の予知を乱してやる」
「それも視えていましたので既に拝借しておきました。――どうぞ、お納めください」
「……」
そう言って、どこから取り出したのか、唐揚げを出してみせた魔女に、魔人はうんざりとする。
一応、唐揚げを受け取りながら、
「……お前、ウザいな」
「そういう直接的な罵倒が一番傷つきますな……視えているせいで心の傷まで二倍です」
ようやくやり返すことが出来た魔人は多少、気持ちを回復させて唐揚げをつまんで食べる。
さすがは自分の街なだけあって、唐揚げの味は良いものだ、と思っていると、魔女が真面目な表情に戻り、
「――まあ、そういう訳でして、私は今までの私によって過去を。未来視によって未来を知っています。それは、おそらく貴方が持つ知識に

劣るものではないと思いますが、如何でしょう？」
「ふん……俺がそれを持つとは限らないがな」
「ええ、承知しております。それくらい、知識が豊富だということで捉えておりますよ。まあ、改めて確認が取れたようで実りはありました。貴方が、世界を――」
「――その先は口にするな」
魔人が鋭い声で魔女の言葉を差し止める。すると魔女も間を置いて、
「畏まりました。ではまあ、そういうことでお願い致します」
「ああ、また何かあれば呼びつける。出迎えは必要か？」
「お気遣いなく」
そう言いながら魔女は手すりの縁に足を掛けて跳び乗った。その上で器用に身体を魔人の方に向けると、
「――では、また。いずれ貴方と共に、あの方の元で轡を並べるのを楽しみにしていますよ」
「……ああ、そうだな」
最後にそうやり取りし、魔女は手すりから飛び降りて、城から去っていった。
視界から消えてしばらくすれば、やはり気配は消えている。下を見るまでもない。
思ったよりも癖のある奴だと魔人が思っていると、
「――レオンハルト」
「……ハンティか」
今度はそれと入れ替わるように、彼の使徒であるハンティがやって来た。
そのタイミングは、まるで魔女がハンティがやってくるタイミングを視ていた様でため息をつきたくなる。
だがそれを堪えて魔人――レオンハルトはその報告を聞いた。それは予想通りとなる、
「……終わったよ。例の扉に入っていった。その先はどうか知らないけど」

「いや、それでいい。長きに渡る監視任務、ご苦労だったな」
「本当にね。ぶっちゃけ、これっきりにして欲しいくらいには」
さすがの長期任務なだけあって、レオンハルトも労いの言葉を掛けると、ハンティも両腕を上げて伸びをする。
かなりの拘束時間だったのもあって、自由になった解放感は凄いだろう。ある意味で羨ましく思いつつも、レオンハルトは告げた。
「しばらく休暇をやる。特に仕事も与えないから好きにしろ」
「あー、休暇、休暇かぁ……それじゃあ、あんたとライゼンにはしばらく付き合って貰おうかな？　鈍った身体を動かすためにも」
ニヤリ、と歯を見せて腕まくりをするハンティにレオンハルトは考える。
付き合うのは吝かではないが、この分だと時間も掛かりそうだと思い、
「……俺はまだしばらくは忙しい。ライゼンは暇だろうからライゼンを連れてけ」
「ふぅん……ま、あんたは一月に一回は付き合って貰うし、それをちょっと増やすくらいでいいとして……ライゼンはどこ？」
「中庭で焼き肉中だ」
「いつも通りってことね。――じゃあちょっと殴ってくる」
そう言った直後、ハンティがレオンハルトの前から消え、中庭の方から轟音が鳴る。次に珍しく怒ったような声色で、〝き、貴様ア――!?　俺の肉に何をする!?　今日という今日は許さんぞ、ハンティ！〟というドラゴンの言葉と、〝やる気になってくれて嬉しい限りだよ！〟という嬉しそうなハンティの声が聞こえる。長期任務の直後だというのにアクティブ過ぎるな、と呆れを通り越して感心してしまう。
「だがこれで――」
そう、ようやく成った。
魔人を倒す武器の誕生。それが成った記念すべき日だ。
その事実を思い、レオンハルトは口元に笑みを浮かべる。
同時に、それ以外の連中のことを思い、確認に行くのもありだと思

考する。
特にその中心たる人物については、ともすれば利用出来なくもない。
あれだけの逸材であれば、迎えてみたくもある。
故にレオンハルトは未来についての期待に胸を膨らませながら、室内へと戻っていった。
これより百年後に現れる――〝二重人格の男〟に期待をして。

こうしてＧＬ期の真っ只中において、絶望に諍おうと駆け抜けた五人の冒険者の旅は、一つの区切りをつけた。
だが、彼らの旅は終わったわけではない。
むしろここからが始まりといえる。
長い旅の果てに、魔人を倒しうる武器を生み出すに至った最強の五人。
そんな彼らのことを、後世の人間はこう呼ぶ――〝エターナルヒーロー〟と。

ガウガウの発明

――ＧＬ６ＸＸ年。

紅い城の中にある研究室。様々な魔法具などの機器が置かれているその場所は、日夜、魔法の研究に勤しんでいる者達の聖地である。

今現在、このレオンハルトシティや紅魔城の中で用いられる魔法具の全ては、ここで出来上がったと言っても過言ではない。概ね事実なのだ。

「くっくっく……ここをこうして、最後にこの術式を組み込めば――」

そんな魔法研究室で、今宵も新しい発明品が産声を上げようとしていた。

部屋の中心でひっそりと明かりを点けて何やら魔法陣を書いているのは、ボサボサの長い緑髪に、子供のような見た目をした一見すると可愛らしい少女だ。

だがそんな彼女こそが、この魔法研究室の室長にして、歴史に残ってもおかしくないほどの発明品を量産している魔法研究者にして付与師――ガウガウ・ケスチナ、その人である。

目の下に隈を作り、怪しい笑みを浮かべている万年引きこもりがちでサボり魔なバツイチ。自分の興味ある事でしか動かず、普段はものぐさで、子供っぽくよく同僚や弟子に怒られている大人げない人物だが、その天才振りだけは自称ではなく真実である。

何しろ、あの悪名高い魔人レッドアイ――史上初の魔法生命体を作り上げたのも彼女なのだ。その善し悪しはどうあれ、偉業であることは事実である。

そしてそんなガウガウが同僚や弟子たちが寝静まった夜中に、一人で作り上げようとしている発明は、またしても怪しい物だった。

乱雑に魔法具が散乱する机の上、そこのぽっかり空いたスペースに置かれているのは、黒い球体。金属製なのか、光を反射して黒い光沢を描いているその球体に、ガウガウは魔力を込めながら口元に笑みを作る。

「これが完成すれば、あれもこれも……私を悩ませている諸問題が一

気に解決する……」
　くくく、と昔からの癖なのか、独り言を呟きながら怪しい笑いを響かせるガウガウ。研究している時や、何かが完成した時はだいたいこのような感じで、テンションが高い。それだけ技術的に凄い物が生み出されようとしている、ということでもあるのだが、周囲から見れば、遊んでないで早く寝なさい、と言われてしまうような光景だ。
　事実、ガウガウの世話係に任命されたメイドや、城全体を管理するメイド長さんなどにはよく注意されている。
　しかしそれを掻い潜ってなお、一人でこの発明を完成させる必要が、ガウガウにはあった。
「さあ、起動しろ――」
　故に、ガウガウは最後の術式を書き終わり、ありったけの魔力を込めると、それを起動させる。魔法光が部屋を明るくし、部屋の窓から光が漏れる。それほどの光量を発生させながらも、その黒い球体がふわりと浮いて、やがて光を収めながら動き始めた時、とうとうガウガウは完成したと喜びの声を上げた。
「くくく、はーっはっはっは！　遂に！　遂に完成したぞ！　この私の偉大なる発明品が……！」
　それを満足そうに見上げながら、ガウガウはほくそ笑む。
　早速、後で試運転をしなければ、と朝日が昇りつつある外の光を感じながら、一度、気絶するように眠りについた。

　昼下がりの中庭。昼食を終えて一服していたレオンハルトは、ハンティや他の居合わせた者達と共にその報告を聞いて眉をひそめた。
それは、
「……新しい発明品だと？」
「そうだ！　昨晩、とうとう完成した私の新魔法具！　そのお披露目を、今ここでさせて貰おう！」
　椅子にも座らずにテンション高く腕を組みながら高笑いをしているのは、この城の居候であるガウガウ・ケスチナ。彼女の妙なテン

ションの高さは研究を終えた後ならいつもの事だが、今日は一段と高いような気がして訝しむ。特にハンティが、
「また夜中にこそこそと作業して……というか、なーんか碌なものじゃない気がしてくるんだけど……」
「……奇遇だな。俺もそんな気がしてる」
「あ、あの……ちょっとくらい付き合ってあげるのも……ど、どうでしょう？」
と、最後にレオンハルトの傍らで告げたのは、ガウガウの世話係のメイドであり、今日の配膳を担当していたカラーの少女、クライア・カラーだ。
彼女はレオンハルトとハンティの何とも言えない表情を見て、やんわりとそんな提案をする。基本的に謙虚で優しい彼女なので、ガウガウ相手でもその包容力を発揮しているのだろう。
しかしその件のガウガウの横から、一人の少女のため息が聞こえた。疲れ切った表情で、
「……いえ、まぁ、碌でもないものには違いないと思いますけどね。ですが凄いものには違いないので、気持ちは分かりますが、御二方も確認しておいた方がよいかと……後から何か起こった時の為にも」
最後の言葉を小声で告げたのは、ガウガウよりは背が高く、しかし他の者達よりかは頭一個分以上は低い華奢な少女、イヴだ。
セミロングの桃色の髪を、今は後ろで束ねた彼女は、いつものゴスロリ風の衣装の上に白衣を羽織っている。普段はレオンハルトの娘である白兎のお付き兼お友達といった立場で動くことの多い彼女だが、一応表向きの立場の一つに、レオンハルトの下級使徒で、ハンティとガウガウの研究を手伝っている助手、愛弟子という立場を持つ。そのせいか、苦労人感が表情から滲み出るようになってしまった彼女は、半目でテンションの高いガウガウに視線を向けていた。
それを見たハンティが、
「ああ、イヴはガウガウの研究に付き合わされたんだね……ご苦労さま。こういう時のガウガウは頭がアレだから苦労したでしょ？」
「……ええ、まぁ……」

目を逸らし、歯切れの悪い返事を返すイヴ。その意味が分からずにハンティは首を傾げたが、レオンハルトは何となく理解したので微妙な表情になった。
頭がアレ具合で言うなら、ハンティも似たようなものだろうと、そう思っているに違いない。故に歯切れが悪くなったのだろう。
娘の友達として色んなことに付き合っているだけではなく、この二人に付き合ってもいるのだから心労が溜まっていくのは想像に難くない。今度、イヴに休暇でもやろうとレオンハルトは心に決める。常識人は自分くらいしかいないな、と呆れながら、
「……なら、さっそく見せて貰おうか。その発明品とやらを」
「ふむ、また何か作ったのか。それは見ものだな」
と、言って上から声をあげたのは、中庭に住み着く巨大なドラゴン、ライゼン。
基本的に焼き肉しているか、メイドの話し相手になっているか、ハンティに突発的に殴られているかしている彼は、中庭にいることが多いので、会話も大体のところは聞き及んでいる。そのため、発明品のお披露目が行われると聞いて視線をガウガウの方に向けてきた。
そうしてそれなりの人数に注目を浴びたガウガウは、更に笑みを深くすると、
「くくく……！　いいだろう、そんなに見たいなら見せてやる！　この天才美少女魔法研究者にして歴史上最高の付与師である私の、久方ぶりの自信作を！」
バッ、と手を振り上げ、懐から取り出したのは謎の黒い球体だった。
それを掲げてガウガウは高らかに言う。
「見るがいい！　これこそが、付与師の概念を変える至高の魔法具――〝ブラックアイ〟だ!!」
『――イエス・マスター』
「……！」
――ブラックアイ。魔法具の名をガウガウがそう告げた瞬間、黒い球体が機械的な声を発したことで、一同は露骨に嫌そうな顔をする。
というのも、その名前や形状から、ガウガウが作った奴を連想させ

るからであり、もしやまたしても似たようなものを作ったのかと危惧したからだ。
「……ガウガウ。お前……それは大丈夫なやつなのか？」
「今直ぐ壊した方が世のためな気がするんだけど……」
レオンハルトやハンティがそう提案する。しかしガウガウは首を傾げ、
「む、なんでだ？」
「いや、それ……すっごい既視感というか……ぶっちゃけて言うと――レッドアイの色違いに見えるんだけど？」
ハンティが率直に告げる。その黒い光沢で覆われた球体は、名前も相まってあの悪名高い魔人レッドアイの二の舞になるんじゃないかと想像させる発明品だった。
またしても喋る辺りも、やはり魔法生物を作ったのだろうと頭を抱えたくなる。レッドアイが二体になると考えたら洒落にならない。今直ぐ破壊した方が世の中のためだ。
だがそれを聞いてガウガウはようやく合点がいったと頷くと、首を振り、
「いやいや、確かに名前も似せているし、思考も出来るが、今回のはあれほど危険なものではない。寄生能力はないし、魔力を高めるような思考を組んでもいないからな。とっても安全かつ忠実な子だ」
「どうだか……じゃあ、何が出来るの？」
疑いの眼を向けながら問うと、説明しよう、とガウガウが咳払いを一つ。そしてその場の者達に向けて、
「このブラックアイは、私専用の戦闘補助を目的とした魔道具だ」
「……戦闘補助？」
「……武器ということか」
レオンハルトが端的に言う。するとガウガウは我が意を得たりとばかりに頷いた。
「端的に言えばそういうことだ。これは私の魔法を補助するための杖のようなものであり、同時に身を護るための防具でもある。自ら考えて思考することで、私の意識外、反応の外にある攻撃も防いでくれる

上、攻撃の際も――」
「……先生。その辺りは実際にお見せした方が分かりやすいのでは？」
「む……そうだな。良いことを言ったぞ、助手。では見せよう。――ブラックアイ！　戦闘モード！」
『イエス、マスターガウガウ』
説明の途中にあげたイヴの提案により、ガウガウがブラックアイを宙に投げる。すると機械的な音声と共にブラックアイが空中へと浮き、そして徐々に形を変えていく。
それらが大きくなり、ガウガウを覆っていくのを見て、皆は目を剥いた。
「これは……」
「……へぇ？」
「ふむ……面白そうだな」
「凄いです……！」
レオンハルトが驚き、ハンティが口元から興味の色を浮かべる。ライゼンも感嘆し、クライアが瞳をキラキラさせて称賛した。
周囲で仕事をしながら見ていたメイド達も、中庭に突如として現れた存在に驚きの声を上げた。
それほどに、異質な存在だった。
レオンハルト達の目の前、ガウガウが居た場所には黒い人型の何かが立っている。
それは１０メートルほどの大きさを持ち、黒い装甲を持つ巨人だ。
しかし明らかに人ではない。通常の生命体とは違う――言うなれば、金属製の身体を持つそれは、鎧にも似ていた。
誰もがそれを形容する言葉を持たない。何故なら、それを示す単語は存在しないからだ。
だが、ある単語を知っている者であれば、それが何の様だと比喩することが出来るだろう。
それは、まるで――〝ロボット〟。
あるいは、何百年か後に現れるとある存在に似ていた。

だからこそ、レオンハルトは色んな意味で驚いて頭を抱えた。あまりにもオーパーツ過ぎると。
人間で言う頭部である部分、その眼のところには長方形の黒い空洞があり、赤い光が一つだけ灯っていた。一つ目と言うべきだろうか。
ともかく、そんな凄まじいものの中にいるであろうガウガウの声が響いて、その状態のことを説明する。
「これこそが、ブラックアイの真骨頂である戦闘形態！　私をあらゆる攻撃から守り、あらゆる相手をこの拳や搭載された魔法具で粉砕する――私の最強の発明品だ！」
はーはっはっは！　と高笑いを始めるガウガウ。やはりテンションが高いままで、己を天才だという自画自賛が止まらないが、それを否定することは出来ない。
実際に、今まで誰も見たことのないようなとんでもない代物を作り上げたのだから。
故に碌でもないものだろうとテンションを下げていたハンティなども、瞳に興味の光を灯しながら、
「……搭載された魔法具ってことは、幾つかの魔法具を組み合わせたってこと？」
「あっ、はい。何でも、先生が作った魔法具を融合させて、ブラックアイの中に収納してるらしく……その制御をブラックアイが統括するようにしてるらしいです。……恥ずかしながら、私にはまだその理論が良く分からず……」
「ああ、魔法を組み合わせて実験した時に出来たアレか。あたしも色々と関わったけど、あれ、確かにややこしいからね。魔法具でも複合、融合出来るのは知らなかったけど……まあ理論的には可能か……ふふ」
「あっ、始祖様が……」
「いつもの目になったな……ふぅ、いつになったら若い同胞の様な振る舞いが収まるのやら……」
クライアとライゼンがハンティの変化に気づく。ガウガウの新しい発明品に目を輝かせているが、あれは研究者としてではなく、戦闘

狂として期待しているのだろう。
　だがその気持ちも分からなくもない。確かに興味深いものであることは確かで、皆でそれを見上げる。
「さしずめ、黒い巨人か。かつて我々の時代にいた巨人族に似ている。生き物という感じはしないがな」
「巨人族か……魔軍にももういないな。デカントはいるが……」
　以前なら、元巨人族であればいたのだが、今はもう絶滅してしまっているため、ライゼンの例を理解出来る者は少ない。
　しかしそれともまた違うガウガウの魔法具に、ライゼンも何気に興味があるようだった。
　注目を集めているのを感じているガウガウは、魔法具の中から得意気な声を漏らすと、
「ふふん。どうだ、凄いだろう。この私の天才っぷりに恐れ入ったか」
「……確かに凄いけど、結局のところ、どれくらい強いの？」
「対魔人戦を想定しているからな！　まあ無敵結界の突破は難しいが……でも魔人とも長時間戦闘を継続出来るように設計している！　つまりだ――」
　と、ガウガウはブラックアイを動かして、ハンティを見下ろしながら溜めを作ると、
「――これからはハンティに殴られようが魔法を受けようが、私を止めることは不可能ということ！　この中にいれば安心してサボタージュを満喫出来るのだ！」
「……」
「いや、そうじゃないだろ……」
「えっと……中で食事とかお飲み物はどうするんですか？」
　クライアも微妙にズレた質問をする。確かに気になるが。
　その質問を聞いていたガウガウは、よくぞ聞いてくれた、と腕を組む。そして何かを発動し、
「あ、何か出てきました！」
「……また触手か」
　ブラックアイの背中の部分から、黒い触手のようなものが伸びてき

たかと思うと、その触手がテーブルにあったお菓子と飲み物を持っていってしまう。そのまま触手は背中に引っ込み、
「ふはははは！　こうすれば中にいながら食事を取ることも可能なのだよ！　おまけに、中はこう見えて快適！　スペースに余裕もあるし、空調管理も完璧で、誰にも邪魔されずに睡眠が取れるように防音の魔道具、衝撃緩和の魔道具も組み込んである！　ブラックアイは正に理想の引きこもり専用魔道具なのだ！」
『イエス、オフコース』
　グッと親指を立てて見せるブラックアイ。これはガウガウが動かしてるのか、ブラックアイが自分でやっているのか分からないが、微妙に気が抜けてしまうことには変わりない。
　しかしハンティは違うようで、
「……へぇ、じゃあ全力で殴ったりしてもいいってこと？」
「ふふん、やりたければやってみるがいい！　このブラックアイの戦闘力に跪くことになるだろうがな！」
「……それじゃあ遠慮なく――」
　と、ハンティが手に拳を作ると、無造作にそれを振り上げ、
「――ッ！」
　金属を殴りつける鈍い音が、中庭に鳴り響いた。
　同時にそのハンティの凄まじい膂力を示すかのような衝撃波が発生する。一応危ないので、中庭にいたメイド達がライゼンの影に隠れたり、クライアなどは近くにいたレオンハルトの背後に隠れたりする。イヴなども咄嗟にその場から離れた。
　そして同時に、それを目撃していた者達は予想を裏切られて驚愕する。
　使徒最強と名高いハンティの一撃。魔人級の強さを持つ彼女の攻撃を防ぐことが出来る者は限られている。
　対するガウガウは城の中でもそれほど強い者ではない。天才には違いないが、直接的な戦闘力はそこまで高くないというのが皆の認識だ。
　それは魔法具を使っていても変わらない。だが、

「――くくく、はーっはっはっは！　ハンティ！　その程度か!?」
「！　……へぇ……！」
ハンティが殴りつけたのは、ブラックアイの掌。
攻撃を察知したブラックアイが手を広げてハンティの拳を受け止めたのだ。
そして、その掌は無傷。傷一つない光沢があるのみで、その黒い装甲は攻撃を受ける前と何も変わっていないことが分かる。
それを見たハンティの口元が先程までよりも更に吊り上げられる。骨のある獲物を見つけた時のようなその愉しげな表情に、レオンハルトはため息を入れて告げる。
「……お前達、分かってはいると思うが……中庭や屋敷を壊すなよ？」
「――屋敷の方はもう結界張ってるから大丈夫だよ」
「……そうか」
レオンハルトの視線の先、確かに屋敷の方には薄い膜のような結界が張られている。
別に結界を張ればいいってものでもないのだが、いつものこと過ぎて怒るよりも前に呆れが勝る。あまり人の事は言えないが。
そんなことを思っていると、ハンティは手に魔力を集め、
「――黒色破壊光線！」
一般的に、最高威力の魔法を放つことでその答えとした。
だがガウガウの方も、ブラックアイを動かす。その拳を振り上げ、
「無駄無駄ぁ！　ブラックアイ！　防御しろ！」
『イエス。マスターガウガウ。――ディフェンス』
黒色破壊光線に対して拳を当てて、そのまま打ち消してしまう。
するとハンティはとうとう我慢できずに、
「あははっ！　やるじゃん！　ほら、今度はそっちから来なよ！」
「ふはははっ！　いいだろう！　なぁに心配するな！　多少の怪我なら私の魔法具で治してやる！　――ブラックアイ！　ラッシュだ！」
『イエス。マスターガウガウ』
ガウガウに呼びかけられてブラックアイが動きを見せる。

その動きは、ブラックアイの巨体では想像出来ない速さだった。
「っ！　意外と速いね！」
「当然だ！　速度！　装甲！　そしてパワー！　その全てを兼ね備えているのがブラックアイなのだよ！」
ハンティもその動きに一瞬驚きを見せる。足場を踏みしめたと思ったら、一瞬で目の前まで迫ってきたブラックアイの拳を紙一重で躱しながらその動きを純粋に褒めた。
未だに椅子に座りながら見ているレオンハルトも、
「……確かに、それなりの強さはありそうだな。ハンティとやりあえるなら、魔人と戦っても……」
その言葉は事実であり、同時にガウガウの目的を孕んでいるものであった。
随分と時間は掛かったが、最低限でも魔人級の実力があれば、ガウガウの目的であるレッドアイ相手でもそれなりにやれる可能性はある。
だが、懸念すべき事柄もある。レッドアイがこのブラックアイと対峙した時に何を思うか。あるいは、失敗した時にどうなるかを考えると、慎重を期す方がいいのは間違いない。
だがそれは、ガウガウも理解していることだろう。これを作ったからといって、すぐにレッドアイに挑みにいくほど短慮ではない。
そもそも戦闘力は最低条件みたいなものだと考えると、これからの研究が本番だといえる。
個人的には、このブラックアイのような発明にも興味があるが――
「――あはははは！　やるじゃないガウガウ！　これならもっと強くやっても良さそうだね！」
「っと！　くっ、このブラックアイと素手で殴り合うとは……！　このカラーゴリラめ！　かくなる上は――」
と、だんだんとギアの上がってきたハンティに押され始めたガウガウはブラックアイを一度下がらせる。
その上で額に魔力が収束され、
「さあ、行くぞ！　我が発明に恐れ慄け！　黒色破壊光線、充填！」

『マジックパワー。チャージ』
「……一体なにを――」
ハンティが訝しんだ直後、しかし魔力の高まりを見てハンティは警戒して笑みを深める。
故に魔法を受け止める構えを見せたところで、ガウガウは叫ぶように声を上げた。
「放て！　ブラックアイ、レーザァァァァっ!!」
『――！』
「っ……！」
瞬間、ブラックアイの目に当たる部分から、黒色の光線が解き放たれた。
それは黒色破壊光線に似ていたが、それよりも遥かに巨大で、収束された魔力がバチバチと音を立てているという見るからに危険なもの。
それを見て、レオンハルトはその威力に感心すると同時に、ひょっとしたらハンティでもキツイか？　と内心で心配する。威力的には、ライゼンの通常ブレスよりも下回るか、もしくは同等程度だが、人間の魔道具でそれだけの威力を出せるのは異常である。ライゼンのブレスは人間の魔法使いが使う並の黒色破壊光線で換算すると、おおよそ十倍程度の威力があり、人間や魔物程度は簡単に消し飛ばしてしまう危ないものだ。
だが逆に言えば、ハンティはそれくらいで死ぬことはないと分かっているため、安心して見ていられる。心配は杞憂だったな、とレオンハルトが紅茶を口に含む中、光線がハンティに直撃し、轟音と光の飛沫が発生した。ブラックアイの中にいるガウガウが笑みを浮かべ、
「はーはっはっは！　ハンティ、恐るるに足らず！　これは私の時代が来たのではないか!?　いや、来ている！　確実に私の時代が来ているぞ！　私は無敵だぁー!!」
まあ、そんな訳ないのだが高笑いして喜んでいるガウガウに水を差すのもアレなのでレオンハルトは無言で眺める。しかし、あのブラックアイ、どれくらい硬いのか。ちょっと斬ってみたいな……と、地味

に内心で期待していると、
「――だぁれが、恐るるに足らずだって……？」
「ひっ……！　は、ハンティ!?」
煙が晴れるのを待たずに、煙から一瞬で出てきて瞬間移動したのか、ブラックアイの頭上にハンティが現れる。
先程の光線を受けて傷を負ってはいるが、戦闘に支障はないようで、その口元には凄惨な笑みを浮かべていた。ガウガウが、思わずブラックアイごと怯んで、
「お前、化け物かなにかか!?　黒色破壊光線の十倍の威力だぞ!?　死ななくても倒れるだろ、普通！　なんで普通に立ち上がって向かってきてるんだ、このバーサーカーめ!!」
「くふふ……いやぁ、あれくらいなら普段から受けてるからさぁ……ああ、でも結構いい威力だったよ……おかげで頭の中、結構スッキリしたからね……あはは、ははは！　それじゃあ、もっと愉しもうかぁ!!」
ガシッ、とハンティの手がブラックアイの頭部を掴む。ブラックアイの手がガウガウと連動していやいやポーズになり、
「い、いや……今のレーザーは奥の手で、威力がバカ高い代わりにこれを放つと、しばらくは機能が低下するから魔力が溜まるまではちょっと――って、ひぃっ!?」
ガウガウが喋ってる最中に、ブラックアイの頭部をハンティがガンガンと殴ってきたので、ガウガウが怯えた声を出す。だがハンティは止めることなく拳を振り上げ、
「機能低下しても戦えるでしょ？　いやー、良かった良かった。ガウガウがこれだけ強くなったんなら……いつでも手加減抜きでボコれるってことだもんね？」
「え、や、それはやめ――ひぃぃ!?」
今度はブラックアイをハンティが力任せに地面に倒し、首に跨ってマウントポジションを取ると、そのままボコボコとブラックアイの頭部を殴り始めた。
中にいるガウガウは怯え始め、

「お、おいやめろ！　いくらなんでもそんなにボコボコと殴られると……！　くっ、ブラックアイ！　どうにか――」
『デンジャー。デンジャー。ビースト。フィアー……』
「お、おいブラックアイ!?　なにやってるんだ!?」
「……まさか怯えてるのか？」
　遠くから見ているレオンハルトもその事態に思わず顔が引き攣る。地面に倒されたブラックアイは、おそらく己の視界の目の前で狂気的な笑みを浮かべてボコボコと殴ってくる相手を見て目の部分がギョロギョロと挙動不審になっている。
　そして、
『ソーリー……ソーリー……』
「……遂に謝り始めたぞ」
「そ、それくらい始祖様が怖かったんですかね……？」
「ううむ……さすがはハンティ……よもや魔道具までもを戦意喪失させるとは……」
「ぶ、ブラックアイ……お前、結構怖がりなのか……？」
　ガウガウまで怯えを忘れてブラックアイの様子に困惑する。そしてさしものハンティも、
「……はぁ、わかったわかった。もういいよ」
　ブラックアイの上からどいて地面へと降り立つ。随分と冷めてしまった様子で、ハンティは肩を竦めると、
「さすがに戦意喪失して怯えてる相手を殴る趣味はないからね」
「あれ、ハンティがまともに見える……」
「気の所為だろ」
「そこを慮れるなら、毎回寝てる時や食事中にいきなり殴ってくるのは止めて欲しいのだが……」
「え？　だってライゼンはドラゴンなんだから別にいいでしょ？　あたしよりも強いし。ドラゴンの時代だと常識だったじゃん」
「……」
『の、ノー……ノー、バトル……ナット、バトル……』
「お、おいハンティ！　お前のせいでブラックアイが戦闘恐怖症みた

いになってるんだが!?　くそっ、なんてことをしてくれる！」
「……そろそろ仕事に戻るか……」
「あ、はい……」
　戦闘用に作られた魔道具が戦闘に恐怖するようになるという凄まじい出オチを見たレオンハルトは、中庭で騒ぎ続ける奴らを放置して、クライアを連れて仕事に戻ることにした。

料理人達の日常

紅魔城。その城に住む者達は、例外なく魔人レオンハルトの庇護を受けているといっても過言ではない。

最強の魔人のお膝元である街に住むだけでも、魔物界では横行しがちな理不尽な仕打ちを受ける確率が減る。腕自慢の魔物以外もその噂を聞きつけてこの街を目指すくらいだ。

その中でも、紅魔城というのはレオンハルトの居城だ。普通の魔物は特別な理由でもなければ入ることが出来ず、動員されている警備の数から考えても、勝手に入ることは不可能に近い。

そもそも城の中の方が、ヤバい奴らが住み着いているという噂もあるし、そもそも一番恐れるべきなのはレオンハルト自身である。彼を怒らせるような馬鹿な真似を、この街に住む魔物――いや、彼の名を知る全ての魔物がするはずがない。

魔物界の英雄とまで呼ばれ、魔物の黄金時代を築いた立役者とまで謳われる彼の名声は、魔軍に所属していない魔物の中にあっても有名であるため、喧嘩を売るような奴は皆無だ。

いるとすれば、一部の魔人連中くらいではあるが、それでも城の中が最高に安全かつ、快適であることに疑いの余地はない。

謂わば城に住むことが出来れば、勝ち組だ。それが例えどんな立場であっても、彼の城にいるということは、彼の庇護を受けているということ。

それが例え、下級使徒でもない普通の人間であっても、彼らは周囲からすれば、圧倒的に勝ち組なのだった。

「チキンバンバン、お願いしまーす」

「はいよー。そんじゃあ、そっち、下ごしらえ頼んだ」

「あ、はいっ！」

「むうううううううん!!　料理とはッ!!　己が肉体と愛情を以て行う究極のッ――」

白い制服に身を包んだ者達が忙しなく働く場所。

そこは紅魔城の中でも、極めて重要な施設。料理人達の聖地である

――厨房だ。
食堂のすぐ隣にあるその場所は、コック服にコック帽を身に着けた料理人達が、配膳係のメイドの注文を受けて調理に取り掛かる仕事場であり、世界最高峰の料理が作られる頂点でもあった。
というのも、そもそもこのレオンハルトシティというのは、元々魔物界一。いや、世界一の美食の街として有名なのである。
街の到るところに軽食の屋台や、飲食店、酒場、高級料亭など、大小様々な食事処が建ち並ぶ街なんてものは、この街をおいて他にない。
そしてこの紅魔城の厨房というのは、その美食の街を作り上げた原点ともいえる場所なのである。
千年以上昔から、魔軍の厨房を取り仕切ってきたミシュラン一族。人間の料理人一族である彼らが千年以上の研鑽と試行錯誤を重ねて、積み立ててきた料理の技術は正しく世界一だ。
その腕を見込まれ、魔人レオンハルトに取り立てられた者達が中心となり、この美食の街の原点ともいえるレシピなどを伝えてきた。
そして、その至高の料理は、この街の権力者であるレオンハルトの居城である紅魔城でこそ、もっとも発揮されるべきものである。
つまりは、今や数千を越える料理人が存在するといわれるこの街で、抜きん出た腕前を持つ料理人だけが、この栄光たる紅魔城厨房で働くことが出来るのである。
その数は約２０名ほど。
更に言えば、城に住み込みで働くことの出来る料理人は、かなり少ない。城に住み込みで働く料理人は、ミシュラン一族の総代にして料理長であるガストロノミー・ミシュランを含めて１０名存在するが、彼らは皆、濃い料理長に隠れがちだが、世界でも有数の料理人。そこらの有象無象とは格が違う料理人達であり、そこらの高級店で働く料理人や、牧場出身のＡ級料理人であっても歯が立たない。
だが、幾ら彼らが卓越した料理の腕前を持っていても、所詮は人間である。
約一名、人間かどうか怪しい筋骨隆々の化け物がいるが、それでも

この城には二百名以上の人間が住んでいる。故に、たった十人ではさすがに大変だろうと、人員に余裕を持たせているのである。
故に人間街に住んでいる一部の選ばれた料理人達――料理長やメイド長さんの審査を潜り抜けて合格した者達が、城に通いで働いているのである。
だがやはり、この厨房は厳しい。
そもそも料理長がヤバいのでさもありなん、といった感じだが、住み込みで働いている料理人達も、一見普通の人間のように見えて、料理の腕前は桁違いなのだ。
だからこそ――この城に通いで働き、この城の栄光ある専属料理人を目指す一人の少年は、思わずため息を漏らすのである。
「はぁ……僕、こんなんでやっていけるのかな……」
その少年は、コック帽を目の前の机に置いて、思わず情けない独り言を漏らす。
場所は厨房の隣にある休憩室。食材搬入用の出入り口も存在する一角で、料理人達が休憩を取る時に使う場所でもある。今はお昼のピークを過ぎたので、ようやく料理人達も順番で休憩を取り始めるのだ。おやつであったり、夕食の仕込みなどもあるのだが、その辺りも、休憩無しで料理長が凄まじい勢いでやっていたりするので、分担は楽だったりする。
しかし半年前に料理の才能を見込まれて、紅魔城の厨房で働くことになった彼には、その喜びも束の間、周囲についていくだけでも一苦労してしまう本物の戦場の厳しさを思い知った。
料理の新しい技術やレシピを学べるのは個人的には嬉しいし、やりがいはあるのだが、料理長がとんでもない人なので、付き合い方が難しい。料理長の噂は聞いていたが、まさか自分の胴体よりも太い腕を持っている化け物だとは思わなかった。自分の華奢な身体など、その気になれば簡単に調理することが可能だろう。
だがまあ料理長とか、周りの料理人については、悪い人達ではないのでそこは問題ない。彼を悩ませているのは、この戦場に慣れることが出来るのかと、それと――

「――こらっ！　何俯いてんのよっ！」
「っ!?　は、はいっ！　すみません!!　って――」
不意に頭上から、鋭い声が飛んできた反射的に身を固くする。この半年間でよく怒られているので、直ぐに謝る癖がついた。
だが顔を上げて謝ったところで、その相手に気づく。先輩の料理人かと思ったのだが、よく聞けば女性の声で、見てみれば相手は知った女性の顔だった。
「……いきなり怒声を浴びせるのは如何なものでしょうか。このベアトのようにドＭであれば興奮するだけなのでともかく、普通の少年は萎縮してしまうのでは？」
「うっさいベアト。これ見よがしにため息ついて、暗い顔してる方が悪いのよ」
「……せ、セレス様に、ベアト様……それと――」
少年が顔を上げた先にいたのは、一番前で腕を組み、こちらを呆れるように見下ろすツリ眼と長い金髪を後ろで二つ結びにしているのが特徴的で、強気な印象もあるメイドと、白いボブカットの髪と、赤い眼、どこか真面目そうな雰囲気を醸し出しながらも、全然真面目じゃないメイド。
それに加えて、数名のメイドが彼女達の後ろにいる。その全員の名前を、少年はまだ憶えきれていないが、前に立つ二人の名前は知っていた。
この城のメイド達を束ねる副メイド長の内の二人――セレスとベアトだ。
少年としても、関わることの多い二人のメイドは、休憩中のこちらを見下ろしながらも、何やら気遣うような雰囲気で、
「……あんた、そろそろ厨房の仕事には慣れたの？」
「えっ、あっ……その……まぁ……」
「何をどもってるのよ。はっきりしなさい！」
「うっ……そ、その……ぼちぼち、です……」
またピシャリと叱られたので、少年は辛うじてそう答える。目線をあちこちに動かして逸らし、彼女達をあまり見ないようにしながら。

それを見ていたもう一人、ベアトは前に進み出ながら、
「まぁまぁ。怯えずともよいかと。セレスはこう見えて、落ち込んでる人や何かに躓いている人を放っておけないタイプなんです。仕事で悩んでいる人を見かけたら、それとなく発破をかけたり、アドバイスをしたりと、実は面倒見の良い人だと有名で――」
「っ、そ、そんなんじゃないから！　余計なこと言うな！」
「は、ははは……」
ベアトが真顔で説明した言葉を、またしてもセレスが注意する。
しかし少年には乾いた笑いを漏らすことしか出来ない。そもそも、それどころじゃない。
ベアトなどは、あの料理長の一人娘であり、メイドでありながらも料理を担当することもあるので、それなりに見ることも、話しかけられることもあるが、やはり慣れないし、セレスの方も、こうやって暗い顔をしているところを見られると、こんな風に注意されるので知っている。
他のメイド達は、名前を知っていたり、顔を知っていたりと曖昧だ。まだ半年なので、数多くいるメイドを憶えられずとも仕方ないと、先輩は言っていたのだが、それはそれとして悪い気がしてくる。
他のメイド達は、それに気づくことなくセレスの方を囃し立てるように、
「まあ、セレスさんって、こう見えてすっごい優しいからねー」
「この間なんて、小さい子が宝物を無くしたって聞いて、一日中探してあげてたりしてたし」
「仕事がまだ出来てない子に、付きっきりでフォローしたりするもんね？」
「あんた達まで……！」
ぐっ、と歯噛みするセレスに、周りのメイド達が生暖かい眼を向ける。
だがそれを無視して、セレスは少年の方を見ると、
「……ふんっ。言っとくけど、そういうんじゃないから。暗い顔されると、あたしまで気が滅入るのよ。せっかくこんな恵まれた場所で働

いてるんだから、ちょっとの失敗なんて気にしないで、もっと前向きに働きなさいよ！」
「……は、はい……」
「それじゃ、あたしは行くから。ほら、あんた達も」
「はいはーい。それじゃあ、頑張ってねー」
「応援してるよー」
と、それだけ言って、彼女はメイドを引き連れて仕事に戻る。他のメイド達も、ひらひらと手を振って休憩室から出ていく。
だが、少年からすると気が気じゃなかった。いつ、バレてしまうのかと戦々恐々していたのだから。
「……それでは、ベアトも仕事に戻ります」
「あ、はい……」
と、最後にベアトの方も休憩室から出ていこうとする。
だがその直前で一度止まると、こちらを横目で見て、
「微妙にエロの気配がしますが……まあ敢えて触れずにおきましょう。あまり悶々としないように。それでは」
「っ！」
その言葉に、少年は思わず背筋を凍らせる。
バレてしまっているのかと絶望しかけ、羞恥が襲い、敢えて触れないと告げられて微妙に安心しつつも、しかし緊張は晴れない。
「う、うぅ～～……！」
様々な感情が混ざり合い、何とも言えないうめき声を上げる。
これこそが、少年のここで働く上での悩みの一つだった。
「――おーい。ちゃんと休憩してるかー……って、どうした？」
と、そこに、厨房の方から一人の男性――この城に住み込みで働く料理人の一人で、少年を直接指導している先輩がやってくる。
少年の様子を見て訝しむ先輩に、少年は意を決して告げる。
城の中で一番親交が深い先輩であれば、同じ男性でもあることだし、この悩みを解決出来るのではないかと、
「……先輩っ、その、僕、悩みがあるんです……」
「……悩み？」

はい、と頷いて少年は答えた。それは、
「――そ、その……む、ムラムラしてしょうがないんですっ！」
「――えっ」
悩みとは、この城が――男性にとっては目の毒過ぎるということであった。

紅魔城に住む者達の殆どは、女性である。
理由は下っ端には想像付かない。もしくは、何とも言えないので薄々感づいていても言わない。
ともかく、女性が多く住んでいることは事実だ。その数は、全体の9割以上を占める。何しろ、男性の方を数えた方が圧倒的に早い。魔人レオンハルトに、使徒であるリー。それ以外だと、住み込みの料理人として働く十名の中の六名が男性で、その家族に数名がいるのみだ。
それ以外は全て女性である。それも、その誰もが絶世の美女、至高の美少女である。
人間の集落に放り出せば、多くの男性に想いを寄せられ、あるいは求婚され、その肢体を狙われ、不幸になるか、幸福になるか――いずれにしても、その美貌によって人生が狂いかねないような者達でもある。
だが、ここにおいて、その美しさは問題にはならない。彼女達が、如何に容姿に優れ、男であれば魔が差して襲いかねないような美少女であっても、あの魔人レオンハルトの下級使徒、その庇護下にある者達を狙う馬鹿はいない。性欲よりも、畏怖と畏敬が勝る。魔物将軍や魔物隊長といった者達はレオンハルトに近しくなるにつれて、その尊敬の念は高まるため、畏れ多いとなり、近しくない魔物兵であっても、魔人の強大さ、とりわけその中でもトップの位置に座するレオンハルトの存在を考えた時に、頭に恐怖が過るのだ。
一時の欲望に流されたとしても、その先に待つのが地獄。そこに乗る馬鹿はいない。

あるいは人間のコミュニティで、レオンハルトが人間などであれば、一時の欲に流される愚か者も存在するかもしれないが、魔物社会ではそうはならない。魔人を怒らせて生きていけるほど魔物界は甘くないのだ。

故に、彼女達の安全は保たれるし、彼女達も快適に過ごすことが出来ている。人間では彼女達を見ることすら叶わないし、魔物であれば叶うかもしれないが、その美貌を見たところで、欲望を募らせるような存在はいない。それらが許されるのは絶対的な権力者であるレオンハルトのみだ。

だが、唯一の抜け道があるとすれば――それは料理人に他ならない。

魔物という種族は、そもそも料理という概念が無かったくらいであり、料理を得意としていない。殆どの食べ物は生で食べられることから、その必要性が無かったためでもあるだろう。

今となっては美食文化が、レオンハルトシティを中心に発達し始めたが、それでも魔物の料理人というのは少ないし、いても人間の料理人に劣るのが一般的だ。

故に紅魔城の厨房では、ミシュラン一族を中心に人間の料理人が活躍している。彼らはレオンハルトに召し抱えられた恩義があり、何百年、あるいは千年以上も厨房で働いている。故に今となっては、男性でありながらも、レオンハルトの庇護下を受ける大切な存在として認められた――下級使徒の紋章だって持っている。

数こそ十名と少ないが、それでも忠誠を損なうことなく料理を提供し続けている献身をレオンハルトは見逃さず、また料理人達も、それを誇りとしている。

しかしそれとは別に、一般の人間、それも男性がこの城に住む。あるいは入ることが出来るのも料理人くらいであったのだ。

何十年か、何百年かに一度、料理人が外から連れてこられたり、抜擢されたりすることがあるが、その度に、地味に彼らを悩ませてきたのが、この城にいる美女達である。

魅惑的な曲線を描く肢体。出るところが出ていて引っ込むところ

は引っ込んでいる。そんな美女達の殆どが、男性を誘惑するための淫靡なメイド服に身を包んで働いているのだ。
魔物界では常識が違うのか、意外にも露出が高い衣装を着るものが多い。その例に違わず、ここのメイド服は、個々人によって差異があったりはするものの、ウエスト部分を見せつけていたり、スカートが物凄く短かったり、胸の谷間の部分が大きく開かれていたりするのだ。
そうでない服であっても、彼女達のスタイルの良さ、美貌からすれば目の毒だというのに、それを更に押し出すかのように、メイド服は悪意あるデザインが幾つも練り込まれている。端的に言えば――あざとい。
だがそれで喜んでしまうのが男性である。フリフリのミニスカートから除く太腿やおみ足のチラリズム。そこに長めの靴下を組み合わせて絶対領域を作ってみたり、あるいはガーターベルトでエロティックに見せる。ウエストの細さや身体のラインを強調するためにコルセット、あるいはへそ出し、あるいは背中を開けていたり、あるいは肩出しで、その美しい肌を見せつけたりする。挑発的に盛り上がった胸元などは、それだけでもたゆんたゆんと重そうに揺れて目が奪われるというのに、態々胸の谷間を開いたり、巨乳の上半分を見せつけたり、あるいは谷間の部分に穴を付けたりと、これでもかと男性の情欲を煽るための構造をしている。
それを着るのが、ここの女性達であり、だからこそ、男からすればどこを見ていいのか分からない。
歩いているだけで沢山の美女とすれ違い、窓や家具などを一生懸命に掃除しているメイド達の、その後ろ姿――突き出たお尻や美しい身体のライン、後ろからはみ出て見える乳房の盛り上がりなど、一々いやらしい。例え巨乳でなくとも、ここの女性達のスタイルは抜群であるし、少し幼い感じの少女達も、その趣味の人たちからすると悶えたくなるような美少女だらけで堪らないだろう。
椅子に座っていて、顔を上げたら、美女の爆乳が数十センチ離れた先で揺れていて、視線を外せば掴みたくなる細い腰や、女性らしい柔

らかさを想像させる太腿が見える。そもそも顔だけじっと見ていても、ドキドキしてしまうような可愛さ、美しさ。それが何名も並んでいると、本当にどこを見ていいか分からない。

そして何よりもキツいのが、そういった状況を、肉体が勘違いしてしまうことだ。

仕事をしている時はまだいい。不意打ち気味にドキリとさせられる場面はあるが、仕事に集中していれば耐えられる。

だが、例えば休憩中に一人。密室に自分という男性一人と、むしゃぶりつきたくなるような美女が一人、あるいは幾人も。そういった現実とは思えないほどの特殊な状況に、血は高まり、反応してしまうのである。

通常、生きていては一人お目にかかれるだけでも幸運といえるレベルの美女。それが何人もいて、一応は同じコミュニティの中で働き、一応は気にかけてくれたり、話しかけてくれたりする。

その現実は、普通の人間にとって、普通に見られるものでもないし、体験出来ることではない。

故に身体は勘違いをする。この雌達が、手に入ると。

本能は正直だ。如何に手を出してはいけない相手とはいえ、これだけ情欲を掻き乱すような状況になれば、心の奥底からは欲望が滲み出そうになる。

それを必死に理性で我慢するのだが、やっぱり本能では、女性と触れ合うことを望んでいるのだ。

そして新しく半年前からこの城で働き始めた少年は、正にそのような症状に陥り、悩んでいた。仕事に集中出来なくなるくらいには。

だからこそ、少年はとうとう相談することにしたのだ。

「それで……僕、どうしたらいいんでしょうか……？」

「あ、あー……なるほどな。そういう悩みか……」

料理のことについてなら幾らでも答えてくれる先輩でも、それを聞いて苦笑いをするのは避けられなかった。

だが少年の方からするとその悩みは深刻で、今直ぐにでもどうにかしたいものなのである。

「……いやまあ、分かるけどな。確かに、ここはどこを見ても美女しかいないし、メイド服もすっごいアレだからな……」
「……はい。アレなんです……」
　敢えて言葉を濁す二人。というのも、メイド服のデザインを考えたのは、十中八九彼らより地位の高い者であるからだ。
　おそらくは使徒か、メイド長さんとかその辺り。そして可能性として考えられるものの中に、最も偉いレオンハルトが考えた可能性だってある。彼の趣味という極めて高い可能性を鑑みると、とてもではないが、エロいとか卑猥みたいな言葉は使えない。
　故にそこは濁しつつも、先輩料理人は少年の隣に腰掛けながら、顎に手を当ててその悩みをどう解決するかで悩み始めた。それを見た少年が、
「……先輩方は、そういう感じにはならないんですか？」
「ん？　ああ、まあ、殆どの奴はもうとっくの昔に結婚して子供もいたりするからな。長くいすぎて慣れてるってのもあるし……」
「結婚……先輩も？」
「俺はしてないが……なんだそのほっとした顔は」
　胸をなで下ろした少年を見て先輩が眉をひそめる。少年は微笑を浮かべ、
「先輩が同じで良かったです」
「おいこら。俺は一応、付き合ってる奴はいるっつーの。相手がミシュランの女だから認められてないだけで……」
「えっ、そうなんですか？」
　少年の問いに、先輩は頷く。微妙な表情で、
「ああ、ミシュランといっても、料理長みたいなバリバリの直系じゃないけどよ。ただ掟で、料理勝負で認められないと結婚することは認められないらしい……俺は昔に連れてこられた外様の料理人だからな。あの化け物一族と張り合うのも、今考えるととんでもな道を選んじまったというか……はぁ」
「……先輩も苦労してるんですね」
「おう……というか、俺のことはいいんだ。問題はお前の方だろ。お

前は……その、なんだ。女性経験とかないのか？」
「うっ、その……」
　先輩から問いかけられると、少年は顔を俯かせる。そして言い辛そうに小さな声で、
「……ない、です」
「へぇ……意外だな。お前、顔も悪くないし、何となくモテそうな感じするけどな。人間街とか、牧場の時の知り合いとかで良い感じの女とかいなかったのか？」
「そんな、僕、全然モテないですよ……牧場では、料理の勉強ばっかりしてて、仲良い友達はいても、女の子は僕に見向きもしてなかったですし、Ａ級に選別されて人間街に住ませてもらえるようになってからも特には……女性のお客さんは多かったですけど、それも特に何もなかったですし……」
　ここに来るまで、人間街でレストランをしていた三年間は、女性のお客さんはいたが、関係が進展するような相手はいなかったという。それを聞いた先輩は、一応は頷き、
「なるほどな……つまり、お前は生まれて１８年、真面目に料理の勉強だけをし続けてきて、女性に一切触れずに過ごしてきたもんだから、今になって女とヤリたくて仕方ないと」
「そ、そそそこまでは言ってないですよ！」
　あまりにも直接的な言葉を言ってきたため、少年が慌てて否定する。何となく、恥ずかしいことのような気がしたからだ。
　しかし先輩は口元をニヤつかせ、
「別に隠さなくてもいいだろ。男同士だ。気持ちは分からんでもない。俺も……もうありえねぇほど昔だが、若い時はそんなんだったぜ。おっぱい！　尻！　セックスセックス！　射精、射精！　みたいな感じでな」
「そ、そんな卑猥な……だめですよそんなの……」
「別に駄目じゃねぇよ。こんくらい、男なら普通だ。男なら、そういう時期は必ずある。とにかく、女と触れ合いたい。ヤリたくて仕方ねぇって時がな」

「……そ、そうなんですか……？」
「それが自然だ。男が女を魅力的に思うのは当たり前のことだぜ。だからお前が、おっぱい揉みたい、尻を撫でたい、そんでまあ色々ヤッて射精したいって思うのは普通のことだ」
「……」
　もはや謎の頼もしさすら感じるレベルで胸板を叩いて断言する先輩。確かに、それらをいけないことだと思っている少年も、謎の説得力を感じてしまうほどだ。しかし。
「……だがまあ、それは俺に言って正解だったな。俺はまあ、割りといいかげんなおっさんだからいいけど、他の奴らは堅苦しい奴らも多いからな。レオンハルト様の女であるメイドに欲情したとか、馬鹿な事言うなって怒られるだろうよ」
「えっ、でも……男性はそれが当たり前だって……」
「当たり前でも、言っちゃいけねぇことってのがあるんだよ。そりゃああいつらだって、昔は今のお前みたいにムラムラしてしょうがない時期もあっただろうが、それを口にするとどうなるかって考えると、それを押し殺すしかない。人間は本音を隠して建前を口にしなきゃならん時も多い。例え、お前の気持ちが理解出来るものだったとしても、立場上とか色んな事考えた上で、結局は、馬鹿な事を言うなって怒るしかねぇんだよ」
「そう、なんですか……」
「ああ。だから仕方ねぇ。これは別に、レオンハルト様の女だからっていうか、人の女に欲情したとか、実際にしたとしても表で普通に口にするのは駄目だからな。ましてや、上司ってなると怒られてもしょうがない。もっとも、レオンハルト様はそれくらいで怒ったりしないだろうけどよ。周りがそう思うかは別ってことだ」
「駄目なこと……」
　先輩にそう諭されて、少年が自分の罪深さに落ち込む。人間牧場出身なだけあり、主人への不敬ともいえる考えに、少年は自らを恥じているのだ。
　だがそんな少年の肩を、先輩は叩いて笑ってみせる。

「おいおい、落ち込むなよ。普通は駄目だが、俺に相談するのはいいって言ったろ？」
「えっ？　それはどういう……？」
「だから、身内同士であーだこーだ言うくらいには問題ないって話だ。ずっと押し殺してるのもキツいだろ？　気の置けない一部の奴と話したり、妄想したりして、後で一人で発散すればいい。そうすりゃ気も紛れるだろ」
「……！　先輩……」
　肩を回して親身になってくれる先輩に、少年は感謝を覚える。変な人だとは思っていたけど、やっぱり良い人だと、
「……でも、いいんですか……？　もしバレたら先輩も……」
「そんくらいやんねぇとしょうがねぇだろ？　お前が我慢出来ずにやらかして、上役の俺が責任取らされる可能性を考えたら、こっちの方がマシだしよ。経験豊富なおっさんとして、上手なガス抜きの仕方を若人に教えるくらいは構わねぇだろ」
「……そ、それなら、お願いします」
　少年は意を決してお願いする。そういった話題を人とすることすら初めてなので、妙に緊張してしまっていた。
　対する先輩は、軽い調子で任せろと頷き、
「……それで？　お前さんはどういうのがタイプなんだ？」
「ど、どういうの……？」
　少年は首をかしげる。どういう意味なのだろうと。それを見て、先輩が改めて、
「だから、どういう女がいいのかってことだよ。色々あんだろ？　巨乳が好きとか、お姉さん系が好きとか、年下が好きとか、ちょっとロリ系が好きとかよ。そういうのが分かんねぇと何も言いようがねぇだろうが」
「そ、それは……！」
　少年は質問の意味を理解し、顔を赤くしながら思考する。
　おそらくは、自分の男の部分がもっとも反応し、興奮してしまうようなのは、どんなタイプなのか。ということだろう。

羞恥を覚えながらも、少年はゆっくりと考え、
「……む、胸は……お、大きい人の方が……」
「ほうほう。他には？」
「……と、年上とか……」
「ほーう。まあ、割りとよくある感じだな。そんで、Ｓか？　Ｍか？」
「ＳとＭ……？」
「責めるのが好きか。責められるのが好きかってことだ」
ちなみに、おっさんは断然責められる方が好きだ、と先にそうカミングアウトする。
それを聞いた後だと、何故か心にあったハードルが少し低くなった気がして、少年はそれほど間を開けずに答えた。
「……よく分かりませんが……責められるほうが……」
「なーるほどなぁ。なんかまあ、大体分かってきたような気がするが……それで、どんな妄想で抜いたりするんだ？」
今度はそんなことを聞かれる。だが、
「……抜く？　どういう意味ですか？」
「えっ？　知らねぇのか……？　ようは、どういうことを考えながら自家発電すんのかって――」
「自家発電……？」
「……お前、まさか……」
先輩がにわかに嫌な予感を覚える。それを確かめるべく、もっと直接的な言葉で、
「……オナニーしねぇのか？」
「……オナニーってなんですか？」
「おおぅ……」
真っ直ぐに問い返され、先輩は頭を抱える。
そして更に確認の為に、
「……フェラとかパイズリとか分かるか？」
「それも聞いたことないです……ひょっとして、何かの隠語ですか？」
「いや、隠語っつうかそのままというかだな……」
そこまで聞いて、先輩は少年が性的な知識が無知か、それに近いこ

とを確信してため息をつく。女の子が無知であるなら色々と捗るのだが、若い男が無知と言われても真顔にしかならない。あまりにも子供過ぎてどうしていいか迷う。だが一応は、
「はぁ……ったく、牧場ってのは性教育とかしねぇのか……？　そりゃあ拗らせるだろ……」
「先輩？　あの、出来ればその言葉の意味を教えていただけると助かるんですが……」
「……はぁ、しゃーねぇなぁ……」
　一度相談を受けると言った手前、ほっぽり出すのも性に合わない。教えてやるか、と先輩はそれらを口頭で説明してやる。すると、
「……っ！　だ、男性器を、口や胸で……!?　そ、そそそんなことしてもいいんですか……!?」
「言っとくが、この辺りは全然ポピュラーな部類だからな。ぶっちゃけもっとマニアックなのや、エグいのもある」
「そ、そんな……！」
　顔を赤くしながら頭を抱える少年を先輩は見下ろす。軽いショックを受けているようだと。
　ただ、色々と常識が崩れながらも、悶々としているのか、色々と考えながら悶えていた。それはいいが、こんなところでおっ立てるのは止めろと言いたい。幾ら性欲逞しい年頃だとはいえだな、と、
「……しかしまあ、そこまで初心だとおっさんにはお手上げかもしれねぇな」
「えっ……!?　そ、そんな……！」
「うーん、どうしたもんか……ここじゃあそんなネタとか手に入らねぇからな……」
　というか、そういったオカズ提供だけなら、ある意味で幾らでも歩いているのだが、それらをネタにしろ、とは言い辛い。それはそれで、悶々としてしまうだろう。
　もっとも、少年がここに住み込みはじめ、百年も経てば自然と諦めが付くというか慣れてしまうだろうが、そこまで保つだろうかという疑問が残る。

そして相談を受けた手前、出来れば解決してやりたいとも思う。せっかく良い腕を持っているのだから、そんな思春期の暴走なんかで壊したくないと。
故に先輩は悩み、悩んだ末に、
「……さすがに畏れ多いが……頼んでみるか……」
先輩が悩んだ末に答えを出す。立ち上がりつつ、少年を見下ろし、
「よし、何とかしてやろう」
「ほんとですか!?」
「ああ、大きな胸が大好きで悶々としてしょうがないお前の悩みを解決するために、あの方の元に連れてってやる」
「そ、そそそんなこと……というか、あの方って……？」
どもる少年の問いに、先輩は答えようとする。頷き、
「それはだな――」
答えようとしたその時だ。
「――フハハハハハ！　貴様ら、何の話をしている!?」
「っ……！」
「っと、りょ、料理長、どうかしたんですか？」
休憩室に入ってきたのは、身長１８０センチほどの先輩をゆうに超える巨体を持つ大男。
この厨房の――否、料理界のマエストロ、ガストロノミー・ミシュランその人だ。
筋骨隆々の肉体をピッチピチのコックスーツに包んでやってきた化け物のような男は、相変わらず凶暴かつ不敵な笑みを浮かべながら二人を見下ろす。
「うむ、私も休憩に来たのだッ！」
「えっ？」
「料理長、休憩とか必要――いや、取ることあるんですね……？」
少年がその言葉に間の抜けた声を出し、先輩も、料理長って休憩必要あるんですか？　と言いそうになって慌てて言葉を飲み込む。
この間も、新しい魔道具だというブラックなんちゃらと殴り合ってきて、いい汗かいた、と豪快に笑っていた料理長に、休憩が必要だと

は思えない。
だが料理長は確かに休憩を取りに来たようで、
「休憩ついでに――日課の鍛錬をしに来たのだッッ!!」
「あっ、そういう……」
「……なるほど、理解しました」
フハハハハ、と笑いながら料理長が休憩室の真ん中で鍛錬を始める。フンッ、フンッ、と声に出しながら腕を振り、あるいは足を動かす料理長。なんだか、急激に部屋の中が狭く感じるのだから不思議だ。加えてなんだか暑苦しい上に、シュゴオオオオオオオッ！　シュゴオオオオオオッ！　と、鍛錬で聞こえるはずのない謎の音が聞こえ始め、物凄く怖い。
「案ずるなッ！　私は鍛錬をしながらでも普通に会話を行うことが出来るッ!!」
微塵も安心出来ない。猛獣と一緒に檻に入れられた人間というのは、きっとこんな気持ちなのだろう。猛獣も、反復横跳びで残像を出し始める奴は御免被りたいはずだ。
「それより……貴様らのさっきの会話……大きな胸がどうとか言っているように聞こえたが、どうなのだ？」
「っ!?」
「あ、あー……聞こえちまってたんですかい……」
少年が驚愕し、先輩が諦めたように呟く。少年の方は怯えているが、料理長であれば、ただそれだけであれば怒ることはないだろうと思いながら、
「大きな胸がいいねって話をしてただけですよ。他愛もない、好みの話です」
「っ！　ほう！　貴様らもそうなのか!?」
「えっ？　貴様らもって……まさか料理長も？」
うむ！　と力強く頷く料理長に、マジか……という思いが芽生える。料理長にまともな性欲があるとは知らなかった。雌とは、料理を極めるために喰らうものッ!!　とか普通に言いそうなので何とも言えない。娘の方なら性欲アリアリだろうが。

しかし考えてみれば、料理長とて、妻もいれば娘もいる。一応、生物学的には人間のはずだ。ならばおかしくないはずだと、そう思って、
「フハハ！　貴様らも大きな胸が好きだというなら、何故この私に言わなんだッ！　そんなに大きな胸が好きだと言うならッッッ――」
そう言って、料理長は自らのコック服に手を掛けた。あれ、なんだか嫌な予感がする、と少年と先輩が心を一つにしていると、その予感が当たってしまったのか、
「――私のこの逞しい胸を好きなだけ視界に収めるといいッ!!」
「ひぃっ!?」
「ちょっ!?　りょ、料理長!?」
服を脱ぎ捨てた料理長が、二人に向かって全力のポージングを行う。
筋骨隆々、逞しいというか逞しすぎるその肉体を見て、二人は思った――そうじゃない、と。
「りょ、料理長！　それはちょっとまた別の――」
「フハハハハハハッ！　遠慮せずともよい！　私のバストは１５０センチあるぞッ！　大きな胸が好きだと言うなら、幾らでも見て触っても構わぬッッ！」
バストと胸筋を一緒にするな。そんな言葉が喉まで出かかったが、あまりの筋肉の圧に言葉を失う。少年に至っては卒倒して、怯えていた。まだ半年ばかりの新人に、全開の料理長は早い。長年働く者達でも慣れないというのに。
「いや、もはやその程度では生温いッ!!　貴様らも、好きだと言うならこの私と同じ程度の筋力を目指すがいい！　さすれば、さらなる料理の深奥を覗くことも可能だッ!!!」
「い、いやいやいや!?　筋肉鍛えても料理は出来ねぇでしょうが!?　ポージングしただけで料理は出来ないでしょう!?」
先輩は、自分達も鍛錬に参加させられることを察して、必死の抵抗の代わりにそう言った。だが、
「……否、出来るッッッ!!!」

「絶対出来ないはずなのにこの人、出来るって言い切りやがった!?
その自信はなんなんだよっ!?」
「セックスしただけで、料理は出来ませんが子供は出来ます！　つまり、ベアトの勝ちですね!!」
「呼んでもないのに痴女が来た!?」
　休憩室に料理長の一人娘である副メイド長のベアトまでやってくる。ぶっちゃけ、見た目的には料理長より見れるからマシだが、頭のおかしさでは似たようなものなので帰ってほしい。
　何しろ、この二人が集まると高確率で親子喧嘩が始まってしまうのだ。
「フハハハ！　胸の大きさでこの私にも敵わぬ小娘が、私に勝つなど笑止ッ！　何時も通り、蹴散らしてくれるッッッ!!」
「くっ、レオンハルト様にも愛された、ベアトの１０５センチのバストを愚弄しましたね!?　いいでしょう！　これは戦争！　私は私の乳の誇りに懸けて、父を倒しますッ！」
「……っ！　……っ！」
「おいしっかりしろ！　気持ちは分かるが気をしっかり保て！」
　結局、この日の少年は先輩に連れられて部屋で休んだものの、使い物にならず、後日また相談するということで話を終えた。まだ解決出来てない上、今度は相談の内容が別のことにすり替わっていそうだと思いながら、先輩も頭を抱えた。
　――因みに、親子喧嘩の結果はメイド長さんの乱入で止められたので、引き分けでした。

メイドの日常2

魔物界最大の都市、レオンハルトシティ。その中心にある紅魔城に住む9割は女性である。

もっと言うなら、メイドである。

レオンハルトが大陸中から千年以上かけて集めた（諸説あり）絶世の美少女達。メイドとして働き、彼に身も心も捧げる二百人以上の下級使徒。

永久保護魔法の効果で何百年、あるいは千年以上生きている彼女達は、この世界においては選ばれた者達だといえる。

長年生きており、下級使徒となろうとも、所詮は人間。人間は本来、苦しめられる運命にある生き物である。

魔物に苦しめられ、その遊び道具として生きて、死ぬ。実際にそのような時代となった現在において、レオンハルトの庇護下にあるメイドというのは、圧倒的な勝ち組だ。

安全が保たれた城の中で、快適かつ優雅な暮らしを行える。メイドとしての仕事はあるが、それも無理のない範囲で行われるものであり、強制というわけでもない。

加えて、ぶっちゃけるなら魔物界で一、二を争う金髪イケメンに寵愛されるおまけ付きだ。おまけというより圧倒的メインなのだが、これも別に強制ではない。敢えて言うなら、希望制である。

だが、全くの苦労がないという訳でもない。特に、管理職に就いているメイドなどはそれなりに気を揉む事が多いのであった。

「――ええっと……ここは、こう、で。ここにシフトを入れて、と」

メイドが、机の上に紙を置いて事務作業をしている。輝くような黄金の髪を持つ彼女は、この城のメイドを取り仕切る役目を持つ副メイド長の一人――エクレアだ。

昔は新人として、先輩の個性に揉まれたのも遠い昔の話。今では十数人のメイドに指示を出す立派な管理職として働いていた。

というのも、彼女は元王女であり人を使うことには慣れている。リーダーシップを発揮出来る上、問題解決能力も高く、こういった事務作業も完璧にこなせるので、この人事は当然のものであった。
昔よりも仕事は増えたが、やりがいはある。それに、ご主人様の為を想うと、これくらい幾らでもこなしてみせる。いや、みせたいと思っていた。
故に基本的に仕事に苦労はない。同僚は皆良い人だし、付き合って苦はない。
だが、唯一微妙に気を使うものがある。それが、
「……そろそろシフトを決めてしまわないといけませんわね……」
それは、メイド達のシフトだ。
それもただのシフトではない。――夜のシフトである。
自分達が仕えるご主人様を、お慰めするための重要な仕事。ぶっちゃけ仕事というか、半分はプライベートというか、ただの順番決めではあるのだが、彼女達にとっては何よりも重要なものである。
だからこそ、偏ったりするのは避けなければならない。皆平等に愛するのがご主人様の望みだ。誰かが悲しむことをよしとしないので、この辺りには気を遣わなければならない。
もっとも、一日で朝と風呂、夜という三回の出番があり、それぞれ１０人程度、特に夜は2、３０人くらいなら愛してみせる御方なので、正直人数の割には出番はかなり多い。一月に一度、必ず自分達のために取られる休日では、一日中相手をしてくれるのである。
一月あれば、２００人以上いるメイドが、最低でも必ず5回は肌を重ねる。週に一回以上は必ず相手をしてくれるし、満遍なく愛されているという自覚がある。
冷静に考えると、ご主人様の身体はどうなっているのか。大丈夫なのかと心配になったりするが、大丈夫そうな上、そういうところが素敵だと思ってしまうため、基本的には変わらない。
そういうわけで、気を使うとは言ってもそこまで問題があるわけでもない。皆、充分過ぎるほどには抱かれてるのだから。
しかし、充分以上、機会があれば幾らでも抱かれたい。癒やしてあ

げたい。慰めてあげたいと想う人物は、それこそメイド達の総意であり誰しもが願うことであるため、シフトは多めに入れてほしいと全員が希望を出す。
　というか、それ以外の日中なんかでも機会があれば手を出してほしいと願っている。ご主人様は真面目なので、それこそ休日でもない限りは、基本的に日中にお愉しみすることはない。朝と風呂、夜という三回の時間を必ず守る。例外は、短い休憩時間中くらいだ。
　しかしメイドの方は、彼が皆の為にも役目を真面目にこなしているということを理解しつつも、もう少し肩の力を抜いてほしいとも思っている。
　だからこそ、メイド達はわざと男性の情欲を煽るような露出が高い、或いはあざとさを全面的に押し出したような衣装を身に纏い、仕事中に出会ったらそれとなく胸の谷間を強調して見せたり、ご主人様がムラムラするように、そしていつ襲われてもいいようにと色々と工夫をしているのである。中には行き過ぎて、とんでもない痴女になっているメイドもいる気がするが、基本的には問題ない。何故なら、
……まあ、城内はほぼ女性ですし、レオンハルト様を慕う者ばかりですから問題はないですわね……。
　そう、いやらしくても問題ない。どうせ相手はご主人様だけだし、城内に住む殆どの女性はご主人様を慕っているので一般的な配慮を行う必要はない。
　ここは魔物界。その中の魔人の城。人間の国のように公序良俗を気にする必要はないのだ。
　それでも男性が城内を行き交っているのであれば、それなりに気にする必要はあるが、城内を出歩く男性は使徒のリーや、一部の料理人を除けば皆無であり、来客にさえ気をつけていれば何も問題はないのである。
　エクレアも例外ではないので、当初来た頃と比べて可愛いメイド服を身に着けている。個人的に露出は控えめにしているが、胸元だけは屈んだ時などにきちんと見えるようにとペールやメイド長さんが計算してくれたので気を使っているし、幸いにも事務仕事というレオン

ハルトと関われる絶好のチャンスがあるので、そういう時はそれとなく、胸を押し付けたり――

「……こほん。さて、ちょっと聞いてまわりましょうか……」

頭の中がピンク色になってきたところで、自分を戒めるために咳払いをする。周りの目を気にする必要はないとはいえ、一人で悶々としているところを見られるのは些か恥ずかしいものだ。

エクレアは椅子から立ち上がり、紙を手に持ったまま部屋を出ていく。向かうのは、同じ副メイド長がいるであろう先々だった。

副メイド長。メイド長を務めるメイド長さんの下に位置し、８つの班に分かれてメイド達を指揮する立場であり、誰が言い出したのか、遊びで八大冥土、という呼称があったりするらしい。９人いるが。

だがその個性は、一般メイドと比べても中々に癖がある気もする。いや、そもそも一般メイドですら色々と個性溢れる面々なので大差ないかもしれないが、一番の古株や、あの料理長の娘などを見ているとそんな気がしてくる。

これから訪ねる面々も、それなりに濃いものだ。例えば、

「――だぁぁぁぁ!! このメイド！ お前、メイドの癖に遠慮無さすぎだろう!? この偉大なるガウガウ様に向かって……！」

「いや、ガウガウ女史のことは魔法研究の先達として大いに尊敬しているが、それとこれとは話は別だろう。同じ研究者として部屋が散らかりやすいという気持ちは分かるが、メイドとしては看過出来ない。そこをどいて貰おう」

――噂をすれば。

エクレアは、とある部屋の前で何やら言い争いをしている二人を見つけた。

一人はガウガウ・ケスチナ。見た目は子供っぽいが、魔法史に残る天才であり、つい先日もとんでもない物を作り上げたとかで話題になった。

そしてもう一人は、長い艶のある黒髪を靡かせたクールな印象のメイドであった。彼女はガウガウに向かって冷静に、

「部屋を片付けさせてもらおう。もしくは……そうだな。この間のブ

ラックアイ。あれの細かい理論について、色々とご教授してくださると……」
「どう考えてもそっちがメインじゃないか！　くそっ……なら待ってろ！　後で適当にレポートを書いてきてやる！　後は勝手にしてくれ！」
「フフ……感謝する。ガウガウ女史」
　眼鏡の奥で目を細めて微笑を浮かべた彼女の名は――アイシャ。
　副メイド長の一人であり、女性としては長身、左目の下にある黒子や大人っぽい雰囲気と、ほんの僅かに焼けたような色の肌が特徴的の、とんでもない色気を持ったメイドである。
　その胸元にあるそれは、メイドの中では同じ副メイド長である紅月をも僅かに越えて一位の膨らみを誇る。
　まあこの城のメイドであれば、その多くが該当するのだが、胸が大きくてスタイルも良いし、かなりの美人だ。
　人間時代は、とんでもなくモテたのではないかと噂の人物だが、真相は定かではない。本人の弁では、〝研究ばかりしていたから、男を相手にする暇はなかった〟とのことで、ＮＣ期ではそれなりに知られた魔法研究者だったらしい。専門は魔法科学。何でも、人工的に人間を作ろうとしていたマッドな人だったらしく、それなりにヤバい実験もしてきたのだという。故に、同じ研究者としてガウガウを尊敬していたりするが、ガウガウからは嫌われている。何でも、昔仲違いして別れた従姉妹に似ているらしい。
　ともあれ、彼女はその昔、あの魔王ナイチサに囚われてレオンハルトに下賜されたという。メイド同士での身の上話は、仲良くなると自然に話に上がるため、エクレアもその辺りの事情は本人から聞いている。普通にエクレアよりも先輩であるため、昔は世話になったものだ。そう思いながらも、エクレアは部屋に戻っていったガウガウを満足そうに見送るアイシャに近づいた。
「アイシャさん」
「ん……ああ、エクレア女史か。何か用かな？」
「ええまあ。シフトのことで少し」

端的に用件を口にする。しかし、
「ああ、それならいつも通りそちらに任せるよ」
と、アイシャはシフトについて書かれた紙を一瞥しながらも、特に意見を口にせずにこちらに任せると言い切る。
毎度のことではあるが、余裕のある振る舞いにエクレアは息を入れ、
「相変わらず、話が早くて助かりますわ。ですが……たまには意見を口にしてもよろしいと思いますけど……」
「それはそうかもしれないが、構わないだろう。いつがいいとか、あれこれ言ったところで極端に偏ることはない。シフトを管理している君やメイド長も、そういった不平は望まないし、何よりもご主人様が望まない。そうだろう？」
「……まあ、そうですが……」
そう言われれば頷くしかない。確かに、自分達はご主人様に多く愛されることを望んではいるが、それに加えて、同じメイドとして生きる皆を大切に思っているのだ。
それは相手も同じだと、そういうことだ。信頼していると言外に示しつつ、アイシャは、
「まあいつだろうと、ご主人様に愛されることに変わりはない。なら、いつ抱かれるかを考えるより、必ず訪れるその時に備え、その時にどれだけ悦ばせることが出来るかを考えた方が、有意義だとは思わないか……？」
「それは……そうですね」
ふふ、だろう？　と意味深に笑みを浮かべ、その豊満なバストを腕で持ち上げるように寄せながら流し目を送るアイシャの問いに頷く。
それと、
……それにしても、相変わらず……色気が。
いつも思うが、やはり女性から見てもアイシャは、なんかエロい。
しかもエロいと言っても、いつも暴走してるベアトとはなんか違う。あっちはエロいとは言っても、ベアト自身が痴女でエロいことを考えているだけな気がするが、アイシャの方は滲み出てくるようなエ

ロさを感じられる。
　知的な印象を感じさせる眼鏡の奥の瞳に、情欲の炎が隠されているようで、淫靡な雰囲気が漂っている。正に、大人の女性の色気という感じだ。本人がスタイル抜群の美女であるため、雰囲気だけでなく、肉体的にもエロいので、女性が見てもなんだかドキドキしてくる。自分が言うのも何だが、本当に男性からアプローチを掛けられたことがないのかと疑ってしまうほどだ。
「……とりあえず、そういうことであれば期待に応えられるように努力致しますわ」
「ふふ、君も昔に比べて成長したようで何よりだ。一緒になった時はよろしく頼むよ、エクレア女史」
「……ええ、こちらこそ」
　メイドの間で言う、一緒になった時、というのは当然、夜伽などの時の話だ。１０人、２０人、あるいは全員という場合もあるので、複数人で一緒にというのは日常茶飯事であり、別段、特筆すべきことではない。
　それよりも、昔のことなどを出される方が問題で、
「後、成長は止まってますから」
「永久保護魔法の効果があるからな。しかし、それはそれで少し残念なこともある。効果外であれば、彼に揉まれすぎて、更に成長することもあり得るのだが……」
「いやまあ、小さい子達は確かに喜びそうですけど……相対的にはプラスなのでは？　というか、アイシャさんはもうそれ以上大きくならずとも……」
　メイド一の爆乳が何を言っているのかと半目になる。それ以上大きくなったら、一部のメイドがあまりの格差に真顔になりそうだ。特にリムとか。
　しかしまあ、レオンハルトは巨乳好きなので、ちょっと分からなくもないとエクレアは思っていると、
「そうとは限らない。最近だと、私以上の者もいるようだしな」
「え？　ああ……お町さん……」

一瞬、何を言っているのかと思ったが、メイド以外にそういえば、アイシャを越える胸の持ち主がいたことを思い出す。当然、彼女もレオンハルトの女ではあるので、メイドではないが仲間のようなものだ。それ故に、
「ちょっと前までは私と紅月の2トップだったのだがな。今では上がいるし、私も負けないように頑張らねばならないだろう？」
「……ですわね。悦んでいただける分には喜ばしいことですし……」
アイシャの言葉に同意する。レオンハルトはそういうことで贔屓をしたり、扱いを変えるような方ではないのでそういった心配はない。彼が悦ぶのであればそれでいいのだ。
しかしまあ、せっかくなので経験の差を見せつけてやるのも一興だということ。お互いに競い合えば、それはそれでレオンハルトも悦ぶし、お互いの技術も上がる。
実際古株のメイドほど、その技術は高い。レオンハルトの趣向や、感じるポイントも理解しているので、技術も相まって性的趣向をくすぐることに長けている。
技術指南役を務めてる使徒のペールから教わり、受け継がれるものだ。一番の古株であるリムやメイド長さんなどは、なんだかんだで凄いテクニックがある。
新人の子以外は、割りと極まっている節もあるが、新人は新人で、初々しさが妙にツボをついていったりするので油断ならなかったりする。最近だと、魔人姉妹の方々などが、無意識ではあるだろうが、そういった感じで興奮を助長しているらしいと噂で聞いた。
「では、わたくしは次の方を訪ねてきますので」
「ああ。私も、そろそろ仕事に戻るとしよう」
ともあれ、問題がないのであれば次に行くのみだ。
聞くことは聞いたので雑談はそこそこに、エクレアはアイシャと別れて次の場所に向かう。
次は――
「……！」
と、エクレアは城の玄関に向かっている途中で、視界に映ったもの

に気づく。
それは目的の人物達と、それ以外の者達。今彼女達に声を掛けるわけにはいかない状況だ。
故にエクレアは、歩幅を狭めながら自然に歩きつつも、それを待つ。頭を下げる準備をしつつも、おそらくは別の場所に通されるだろうと思いながら観察することにした。
「――ようこそお運び下さいました、アッティラ閣下」
「うむ。レオンハルト様は――」
「既に部屋でお待ち頂いております。案内致しますのでこちらへどうぞ」
「頼む。お前達、ゆくぞ」
「はっ！」
玄関先にいたのは、自分達メイドとは似ても似つかない、巨大な魔物だった。
大型の魔物。全体的に丸いシルエットを持つ彼らは、魔軍の重鎮たる魔物将軍達である。
だが先頭を行くのは、その魔物将軍を更に一回り大きくしたような魔物だ。黄色い魔物将軍とは違い、暗い青色と、球体の中に人の顔のようなものを浮かべる魔物。
それを、エクレアは知っている。魔物界にいれば、知っていて当然の相手だ。
魔軍を指揮する七体の魔物大将軍の内の一体だろう。確か、アッティラと言う魔物大将軍だ。
他のメイドと比べて、事務仕事を手伝うこともあるエクレアは一応の知識がある。
……何でも、国狩りの際に多大な貢献をして、魔物大将軍の中でも一番の影響力があるとか。
魔王ナイチサが治めるＮＣという前時代から、魔王ジルが治めるＧＬ期に代わる際に起こった大事件として、魔王ジルの国狩りがある。
全ての人類国家を破壊し、その文明を崩壊させて、魔物の支配下に置こうという政策だ。その結果、人類は人間牧場という施設に収容、

奴隷化、家畜化されることとなる。
その時期においては、自分達の主人であるレオンハルトを始め、全ての魔人に使徒、魔軍が全力で人類圏を攻め滅ぼしたため、この城でも色々と忙しい時期だった。
自分達が下級使徒になったのもそのちょうど時期だ。人間という立場が低くなると見たレオンハルトの対策。自分達を守るためのものだ。
そして、その国狩りにおいて一際活躍したのが、視界に映る魔物大将軍アッティラだ。
この城にも度々訪れ、レオンハルトと顔を合わせている。
しかし本人はとても無口で、何を考えているか分からない。分かっているのは、国狩りの際に容赦のない殺戮と破壊を繰り返し、今現在でも冷徹過ぎるほどに淡々と人間牧場の指揮を執っているということ。
そこに複雑な思いを覚えないといえば嘘になるが、レオンハルトのメイドに、下級使徒になった時点で色々と割り切ってはいる。故に気にしないようにしながらそれを見送り、それとは別にメイドの方を見た。
「将軍方もどうぞ♪　レオンハルト様がお待ちですからね♪」
「……うむ」
接客を担当している金髪のメイドを見る。髪を後ろで二つ結びにし、ニコニコと愛想のいい笑顔を浮かべている彼女は、副メイド長の一人であるセレスだ。
ツリ目で気の強そうに見える、しかしかなりの美人で、やはりスタイルも抜群の美少女。そんな彼女に微笑まれた魔物将軍が一瞬、そのたわわに実った胸元に目が行ったのを、エクレアや、おそらく彼女も見逃さなかった。
だが特に何を言うでも、何が起きるでもない。エクレアはこの後のことを考えて息を吐きながら、セレスはニコニコと立っているだけである。
しかし暫くして、その場から魔物大将軍や魔物将軍がいなくなり、

その場にメイドしかいなくなると、セレスはその笑顔を途端に崩した。
「……キモいキモいキモい！　最悪……！　あの魔物将軍、あたしの胸をいやらしい目で見てたし……！　ほんと、ぶっ飛ばしてやりたいわ！」
「……はぁ、気持ちは分からなくもないですが、少し落ち着いたらどうですの？」
　歩幅を通常のものに戻して近づき声を掛ける。他のメイド達とも挨拶を交わしつつ、演技上手なセレスに更に近づくと、彼女もこちらに気づいた。
「だって、キモいもんはキモいでしょ!?　まったく、人間も魔物も男ってのは昔っから変わらないわね！　胸ばっかり見るんだから！　気づかれてないとか思ってるのか知んないけどバレバレだってのよ！　ほんと、幾らあたしが可愛いからって……タダで見せてやるほどあたしは安い女じゃないの！　今度から金取ってやろうかしら！」
　急に目をキッと鋭くして、先程の魔物将軍や男に対する不満を口にする彼女は、とてもではないが先程までニコニコと笑顔で接客していた人物とは思えない。
　これでも昔は踊り子だったらしいが、裏ではやはりこんな感じで愚痴っていたのだろうな、と想像させてくれる。そういった不満みたいなものは、この城にいるメイドであれば割りと理解出来るものが多いのだが、彼女の場合はかなり熱いというか、文句が絶えないものだ。
　しかし他のメイド、セレスの部下であるメイドから声が上がる。それは、
「でもセレスさんって、レオンハルト様にはどうしてるんだったっけ？　――はい、どうぞ！」
「はい、セレスさんがレオンハルト様を前にした時のモノマネ、行きます！　――〝ご主人様ぁ♪　好きぃ、好き好きぃ、しゅきぃ、大好きぃ♪　ねぇ、チューしてぇ……♪　おっぱい揉みながらベロチューしてくれないとやだぁ……むちゅ、ちゅうううう、れろれろれろぉ♪〟」
「っ～～～～……！　は、ははは っ倒すわよあんたらっ!?」

セレスが顔を真っ赤にしながら部下に怒る。ごめんなさーい、とそんな反省してないだろうメイド達が謝る。どうでもいいが、接客担当のメイド達だけあって、モノマネとかそういう芸達者な子達が多いなぁ、と感心させられる。今のモノマネも、大分セレスの声に似せてたし、割りと言いそうというか、言ってるのでちょっと笑いそうになってしまった。笑ったらチョップされるので笑わないが。

しかし目敏いセレスには見破られたのか、目を細められ、

「……エクレア。ひょっとして、あんたまで笑うの我慢してたりしないわよね？」

「……いえ別に。ただ、楽しそうだなと思っただけで――」

「〝やぁん♪　レオンハルト様ってばおっぱい好きぃ♪　もっと乳首弄ってぇ♪　あたし、レオンハルト様に乳首弄られるの好きなのぉ♪〟」

「〝ご主人様かっこよすぎぃ♪　レオンハルト様ぁ、あたしのご主人様ぁ♪　早くオマ〇コしてぇ♪　あたしのここ、レオンハルト様のこと想いすぎてもうきゅんきゅんしちゃってるのぉ♪」

「く、くく、ちょっとあなた達、やめ……っ」

「こらあああああ――!?　だから止めろっってんでしょうが!?」

「あーん、ごめんなさーい♪」

「反省してまーす♪」

くねくねしながらセレスのモノマネをしていたメイド達が舌を出しながら謝り、そして逃げていく。セレスの方も手に拳を作って追いかけようとしたが、逃げ足の速さを見て一度は諦める。後で折檻はするだろうが。

「くっ……あの子達、後で絶対泣かす……！」

「変わりませんわねぇ……」

「あんたはあんたで、なに染み染みとしてんのよ！　同じ副メイド長が舐められてるんだから怒りなさいよ！」

舐められてるというか、あれはあれで純粋な愛情表現。つまり慕われているのだろうとエクレアは分析する。踊り子だったが、人の役に立ちたくて神官になるようなセレスだ。それだけに彼女は人が良く、

かなり面倒見が良くて、特に後輩からは慕われているし、先輩からも弄りやすくて面白いと評判なのだ。
　レオンハルトが好きすぎてあんな感じになる者は幾らでもいるが、そのギャップが一番大きいのはセレスだろうし、からかわれるのも無理はないかもしれない。
　もっとも、自分があんな風に弄られたらたまったものではないが、他人事なので笑ってみていられる。そう思いながら、
「まあとりあえず、シフトのことについて聞きに来たのですけど、今は大丈夫かしら？」
「……あんたも、随分と動じなくなったわね……別にいいけど」
　ジト目をこちらに向けてくるが無視する。誰のせいかと言われれば、セレスも含めた個性のある周囲の者達のせいだ。
「何か希望はありますか？」
「……ちょっとそれ貸して」
　はい、と仮シフトが書かれた紙を手渡す。すると、セレスはそれを食い入るように見て、
「ちょっとここ！　ここは前の日にしてほしいんだけど!?」
　案の定、変更してほしいと言われた。なのでエクレアは責務を果たすため、
「……一応聞きますけど、どうしてですか？」
「そんなこと決まってるでしょ!?　あたしは、３日に一回は最低でもレオンハルト様に抱かれないと調子が出ないの！　だから前の日にして！」
「と、言われましても……」
　いつものことではあるが、結構全員が均等に間が開かないようにしてるので、調整というのは結構難しい。
　なので、やるとしたら――
「……でしたら、この３日目を夜。この３日目から数えて４日目の朝ならどうです？　これならほぼ中３日ですわ」
「ん、朝……」
　その提案にセレスが考え込む。割りと美味しいのは間違いないは

ずだ。
　というのも、朝という時間帯は、意外と人気がある。夜に比べて時間的余裕がそこまでないのが気になるが、それでも朝一のレオンハルトのそれは、中々に魅力的なのだ。量もすごかったりするし。
　なので、十中八九了承するだろうと待っていると、
「……それでいいわ」
「はい、分かりました」
　譲歩成功。とはいえ、入れ替えた分だけ調整が必要だが、それはそれで何とかなりそうではある。後は、
「夜には渡そうかと思いますが……起きてますか？」
「あー……ごめん。多分寝てるわね。だって明日は……」
「……まあ、そうですわよね」
　そりゃあそうか、と夜にはもう寝てるというセレスに理解を示す。
　というのも、明日はレオンハルトの休日だからだ。
　一月に一度の、自分達の為だけの休日。それは一日中レオンハルトとイチャイチャすることの出来る一日。
　だからこそ、前日は早めに休むメイドが多い。夜の当番でもない限りは、かなり早い時間に床につくのだ。
「まあそういうことでしたら、折を見て明日のどこかで部屋に置いておくか……もしくは明後日の朝一にでも渡しますわ」
「……そうね。それでお願い。いつも悪いわね」
「これも仕事ですから全然大丈夫です。サボったりしたら、ご主人様に申し訳が立ちませんから」
「ん、それもそうよね。ありがと。それじゃあ仕事に戻るわ」
　最後に、身内にだけ見せる柔らかい笑みを浮かべて短いお礼を告げると、セレスは仕事へと戻っていった。
　……とりあえずは、こんなところですか。
　一応、聞いて置かなければならないところは聞いて回ったし、後は正シフトを完成させてメイド長さんに確認してもらい、その後で他の副メイド長に渡す。
　最後に副メイド長が自分の班のメイド達に通達すれば終わりだ。

シフト表は割りと一日仕事というか、結構長いこと掛かるので、エクレア担当の仕事の中では結構キツいものだ。
だがこういった疲れも、ご主人様と触れあえば癒やされる。
しかも明日は休日だし、それを思えば今から楽しみになってくる。
他のメイドも、今日は明日を待ち望んで仕事に励んでいることだろうと、エクレアは執務用の部屋に戻っていった。

彼が彼として生まれた日

――初めて知った感情は、〝苦しい〟だった。

最初はそれが苦しいことだと気づかなかったが、後から――〝ああ、これが苦しいってことなんだ〟と気づいた。

緑の少ない荒野。広々としているが柵で仕切られた限られた空間。多くの人と、人ではない何かが同じ様に苦しんでいる。そこが初めて見た風景。

母親から初めて掛けられた言葉は〝ごめんね〟だった。その母の悲しそうな表情で〝悲しい〟というものを知った。

父親はいない。知らない。他の子はいたりいなかったり。憶えた少ない言葉で母親に聞いてみたが、やはり悲しそうな顔をする。それから聞くことは止めた。

しかし聞いとけば良かった、と直ぐに後悔した。母親がある日突然、死んでしまった。

〝死〟は知っていた。何故知っているかは分からない。ただ、この場所ではありふれた事だったから。だから知っていたのかもしれない。

だが、今までは特に感情が動くことはなかったが、そのとき初めて涙を流していることに気づいた。胸が痛い。苦しい。悲しい。しばらくその感情は消えてくれなかった。柔らかい草は他の身体の大きい人間に取られている。土の上で眠るのがお決まりだったが、母の胸に抱かれて眠っている間は苦しみを感じずにいれた。何か温かいものを感じることが出来たのだが、これからは母はいない。父もいない。僕は〝孤児〟と呼ばれる者になった。

母がいなくなっても、苦しいは止まらない。毎日、〝魔物〟と呼ばれる人間よりも大きな生き物が殴ってきたり、蹴ったり、色々と暴力を振るってくる。しばらくは母を失った悲しみと痛みで眠れなかった。

だがそんな日もしばらく経って変化があった。

身体の右側に違和感を感じる。最初は僅かな違和感だったが、時が

経つに連れて酷くなる。同時に痛みも感じる。またしばらくはその違和感と痛みにもがき苦しむ日々だった。
だがしかし、ある日突然にその痛みはなくなった。
何故だろうと疑問に思ったが、直ぐに気づいた。
――右目が見えない。
いつも見えていたはずの右側の視界は無くなり、見える場所が狭くなっていた。
それだけではない。右耳も聞こえない。匂いも分かりにくかったが、右だけ感じられない。
その日、毎日魔物から渡される食料を口にした時にも気づいた。右側だけ、味を感じない。
後から知ったが、これは病気というものであったらしい。それも相当に重い病気。
触覚以外の右半身の感覚が無くなったらしい。だが、これ以上酷くなることはないそうだ。それだけが救いだった。
この時、既に母が死んでからかなりの時間が経っていた。
身体がほんの少し大きくなり、ちょっとだけ頭が回るようになったと感じる。だから、というわけではないが、ある日、ふと思い立って柵の外に出た。
――柵の外はどうなっているのだろう？　そう疑問に感じたためだ。
それに、苦しみというものから抜け出したかったのもある。痛いのも嫌だった。
魔物の目を盗んで柵の外に出てしばらく、歩き続けたが、行けども行けども風景はそこまで変わらない。多少の変化はあったし、妙に身体は高揚していたように感じる。不安もあったが、その時はそこまで悪い気分ではなかった。
そしてしばらくして、自分と同じ人間を見つけた。何やら硬そうで尖ったものを持っている。魔物がたまに持っていた物にも似ていた。痛みを与える道具だ。格好も、温かそうでしっかりしている印象でした。

ちょっとだけ怖いと感じていたが、柵の外に出てから何も食べてない。食べ物を求めて話しかけることにした。
その大きな男の人は最初、僕の姿を見てぎょっとした表情となり、しかし直ぐに笑みを浮かべて、〝どうしたんだ？　親は？　〟と尋ねてきた。
――親はいません。食べ物がほしいです。そんな感じのことを口にすると、男は笑みを深めてこう言った。〝食べ物をあげるからついておいで〟と。
僕はその時、初めて、ささやかな〝喜び〟というものを感じました。食べ物が食べれるし、優しい人に会えたと。
ですが気づきませんでした。その時、僕は初めて――〝悪意〟というものに触れました。
食べ物を与えると言われてついていくと、鎖のようなものに繋がれて捕まってしまいました。〝まだガキだが、売れなくはねぇ〟と、男はそんなことを口にしていました。
そのまま捕まり、男に付いていきました。そうするしかなかったから。ただ、僅かながらでも水と食べ物をくれたのは嬉しかった。
何日か男についていくと、森の奥に入ったところで、建物が見えました。それと、男と同じようなしっかりとした身なりの人。
柵の内側にいた人間とは違う、外の人間と、その生活を見た僕は、初めて見ることばかりで驚きに満ちていました。
見たことのない食べ物。見たことのない建物。見たことのない服。見たことのない物。僕は思わず、男にあれは何、これは何、と聞いてしまっていました。最初の二、三個は教えてくれましたが、その後は顔をしかめた上で軽く殴られました。うるさい、と。それからは聞くことはせずに、じっと周りの物を見ていました。
大人しくなった僕に満足した男は、一つの建物に入りながら言いました。――まずは〝酒〟だ。
酒、というものを知らなかった僕は首を傾げながらも大人しくついていきました。
中に入ると、そこは異質な空間。

嗅いだことのない匂い。仕切られた板の向こうの壁に並べられているのは、液体の入った容器。どうやら、それが酒らしい。そしてここは〝酒場〟という酒を飲むためのお店だと男は機嫌良さそうに言います。そこでふと、柵の内側では魔物がそれを飲んでいたことを思い出しました。だからといって酒のことを深く知れることはありませんでしたが。

〝おい、来たぞー！　お客様だ！　〟――男が大きな声で言うと、奥から女の人が出てきました。

その女の人は、とても綺麗な人でした。

クリーム色の髪を後ろで結った――シニヨンというらしい――スタイルの良いお姉さんで、柔和な笑顔を見せるが芯の強そうな女性。エプロンの前掛けで手を拭きながら現れた女の人に、思わず見惚れてしまう。

女性を見たこと無い訳ではない。柵の内側にも、ここに来るまでも女性はいました。

だけど、ここまで肌に汚れの一つもなく、明るい笑顔を見せる女性を見たことはありませんでした。

その女性はまず男を見て、〝あら、また来たの？　しかもこんな時間に〟と言いました。男が〝別にいいだろ〟とデレッとした笑みで返し、〝いつものだ〟という言葉で酒を頼みます。そこでようやく、女性がこっちを見て、

「はいはい――って、あら……？　そっちの子は？」

「！」

女性が僕に気づきました。棚に掛けられた酒の一つを取ってコップに注ぎ、それを男に渡しながら。しかし男は、

「気にすんじゃねぇよ。こっちはただの売り物だ」

「売り物？」

「外で見つけてきた。多分、牧場からの脱走者だ。親はいねぇらしい。ま、痩せてるガキでも金にはなる。人手は人手だからな。がははは！」

「……」

そう言って、男はコップを傾けて馬鹿笑いをします。会話の内容はよく分かりませんが、気分はそこまでよくありませんでした。
だけど女性はこちらを見ました。じーっと見て、
「ふーん……ふふ、可愛い子ね。男の子？」
「！」
「あん？　そうだが……何だお前。ガキに興味あんのかよ」
微妙に不機嫌そうに男は言いました。どうにも、女性が興味を示しているのが面白くないようです。
ですが女性はそんなことを気にもせずに微笑のまま、
「子供は普通に好きよ。可愛いじゃない」
「はっ、こんな痩せっぽちのガキが可愛いか？」
「子供は皆可愛いわよ。それに……確かに痩せてるけど顔立ちは整ってるし、ちゃんと綺麗にしてあげたら化けるわよ」
「ただの汚ぇガキだ。弱っちそうで才能も無さそうだし、討伐隊には売れねぇな。何も出来ずにくたばるのがオチだ」
「あら、じゃあどうするの？」
「そうだな……適当に人手欲しがってるとこに売るか……いや、見た目が良いってんなら物好きにでも売ってやるか！　掘り甲斐があるってたんまりと金くれそうだしよ！　ぎゃはははは！」
「はぁ、下品ね……」
「事実だ！　ま、命があるだけでも儲けもんだし、助けてやった礼をしてもらわねぇとな！」
どうやら男は、よく分からないが自分を誰かに売りつける気らしい。何となく嫌だったが、逆らうことは出来ないので黙っている。
しかし、
「でも、そっかぁ……」
「あん？　なんかあんのかよ？」
女性がこちらを見たまま、何かを考える素振りをする。男が問いかけるもしばらく返事を返さず、じっと見つめ続けた。
こちらも、よく分からないが視線を合わせた。
するとやがて、何を思ったのか笑顔を見せると、

「……ねえ、頼みがあるんだけど」
「ん？　お、おお。お前の頼みなら、多少の無茶でも聞いてやるぜ！」
男が勢いで言う。すると女性は、それじゃあ、と前置きし、
「――この子、私に売ってくれない？」
「……え……？」
女性の言葉に、思わず声を漏らす。しかし、
「おう、それなら――って、はぁ!?　売ってくれないってお前……お前がこのガキ買うのかよ!?」
それよりも大きな声によって掻き消された。男は、女性がそんなことを言うとは思いもよらなかった様で、妙に狼狽えていた。
しかし女性の方は全く動じておらず、微笑を浮かべ、
「あら、駄目？　ちょうどうちの店もそろそろ私以外の人手が欲しかったのよね」
「だ、駄目ってこたぁねえが……マジで買うのか？」
「長く使えば、普通に人手を雇い続けるよりも安く済むわ。だから、思い切って購入してみようかなって」
「だからって……よりによって、こんなガキじゃなくても……」
男は視線をチラリと斜め下に向けて言う。まだ不満そうだった。
だが女性の押しは続き、
「それで、幾らかしら？」
「……1万ＧＯＬＤ」
「あら、子供の相場はもう少し安いって聞いてるけど？　吹っ掛けるつもり？」
「……今の適正価格だ」
「そう？　なら、キリング商会さんのお店訪ねて聞いてこようかしら」
「ここまで連れて来るにも金は掛かったからな！　嫌なら買うなよ！」
「……そう。ならいいわ。1万ＧＯＬＤね。ちょっと待ってて」
「えっ？　いや、待――」
と、男が呼び止めるより早く、女性は奥へと一度引っ込んでいく。
そして直ぐに袋を抱えて戻ってきて、

「――はい。１万ＧＯＬＤ。ちょっと多めに入ってるかもだけど、釣りはいらないわ」
ドン、とカウンターの上に置かれた袋の重さが音になって伝わってくる。それなりに大きい袋に入れられており、男の眼が驚きに変わった。
「ま……マジか……いや、その……」
「何？　まさか売らないつもり？」
「うっ……」
そう問われて、男の目が迷う。女性と、金の入った袋。そして子供の間を視線が行ったり来たりとする。
だがやがて、その金の入った袋を掴むと、
「……分かった。交渉成立だ」
「……それは良かった。それじゃ鍵渡してくれる？」
ほらよ、と男が鍵をテーブルの上に差し出す。女性がそれを手に取ると、それをきちんと確認した上で男は立ち上がった。
「今日はもう行くぜ。こんな大金持ったままじゃ落ち着かねぇからな」
「そう？　じゃあお代の方はサービスしておくわね」
「……おう」
最後にそっけなく返事をして、視線をちらりと横に向けると、ため息を吐いて酒場から出ていった。
そうして酒場の中が二人だけになると女性はカウンターから出てきて、近づいてくると、
「さて、と。あなた、名前は？」
「……」
屈んで目線を同じ高さに下げて告げてくる。少年は自分の名を、
「……無い」
「――無い？」
不思議そうに首を傾げる女性に対し、少年は頷く。名前は……あったはずだが、憶えていない。
何せ物心がつく前、完全に言葉を理解する前に、自分の名を知る母

親は死んでしまったのだから。
　そういった複雑な事情を、女性は完全に理解してはいないだろう。しかし何か予感のようなものを感じたに違いない。
「……名前が無い、ね。そう……でも、それだと困るわ」
　と、そう言って、女性は右手を伸ばしてくる。少年は、殴られるのかな、と大人が手を伸ばしてくることに反射的に身体を跳ねさせたが、そうはならず、
「――ガイ」
「……？」
　告げられる。最初は分からなかった。だが続く言葉で気づいた。
「貴方は、ガイ。ガイ、あなたは今日から、うちの子よ」
「……ぁ……」
　女性の柔らかな手が、ガイの頭を撫でた。
　その優しげな手つき。女性の全てを包みこむかのような慈愛に満ちた表情に、ガイは驚き、声を漏らす。
　黒い髪を撫でつける。前髪の右側が、右目を覆い隠すように伸びているガイの髪。そこを女性は何気なく触れて、
「……っ！　あなた……もしかして右目が……」
「……う、うん。見え……ない……」
　ガイもそれに、恐る恐ると頷いた。なんてことのない事だが、それを知られるのが怖いと思ったのは初めてだった。
　だが女性は、それを聞いても苦笑し、
「……そう。大変だったのね」
　と、ガイの頭をもう一度撫でてから立ち上がる。そして、
「さて、それじゃあどうしようか？　働くのは追々でいいとして……あ、お腹空いてない？　何か飲む？　……って、先に身体洗った方がいいわよね」
「……うん」
「うん、それじゃあ中に行こっか。――ほら、おいで」
　と、女性はガイの手を握って酒場の中へと連れて行こうとする。
　その手はとても柔らかくて温かい。熱というだけではない。

それは初めて他人から受けた――人の〝善意〟であると、この時のガイは、まだその温かさの正体に気づけなかった。

少年奴隷としての日々

「――貴方は何故、かの御方と戦いたいと願うのですかな？」

そう彼に告げてきたのは、魔女だった。

そこは玉座。魔が住まう紅の城の中心にある王の為の場所であり、ここ５００年は使われることが殆ど無かった権威の象徴。

将への訓辞、辞令、褒賞。戦争が多かった時代では、この場所で諸将に命令を下すことも多かったが、地上を魔物が支配し、戦争が消えた今、この場所は正しく飾りと言ってもいい。

しかし、そこに座る者の偉大さは失われてはいない。

「――決まっている。奴が、俺よりも強いからだ」

単純かつ簡潔にそう答えたのは、その城の玉座に座ることを許された唯一の人物だった。

その者の見た目は人間だった。

軍服と呼ばれる物にも似た黒のロングコート。裏生地は赤く、縁は金。中にはこれまた真っ赤のシャツと、黒いネクタイを身に着けている。ズボンは長く、黒に近い青、紺色のものであり、底が紅い黒の靴を履いている。

見る人が見れば、それは軍人。それもコートの装飾などから相当に地位の高い者だと見受けられるが、コートの前は開かれており、多少曖昧な印象を生む。軍人としては少しラフで、あまりにも堂々とし過ぎている。

彼の見た目も、それに拍車を掛けた。

輝くような黄金の髪。血の色にも似た紅く鋭い瞳。衣服の下にある肉体は無駄が極限まで省かれ、鍛え抜かれ、戦うことに特化した細身の身体。男性としては完璧とも言える容姿。一つの完成形。その実直な性格を表したかのような鋭い瞳は見る者を威圧し、自然と相手に緊張感を抱かせる。

そして彼を彼たらしめんとするその異常な存在感の大きさ。その赫赫（かっかく）たる雰囲気は、やはり衣服と同じく、軍人としては外れている。

それは――〝王〟の威容。

例えるならば、人間が獅子を眼の前にした時のもの。
戦うため、周囲を従え、敵対者を狩る。戦士の中の王。
そして、人ならざる魔の気配を携えた者。
その存在感は人を超越した種族である証左だ。
身に秘めた力は人などでは収まらない。人の皮の中に無理矢理化け物を飼っている。
彼を眼の前にすれば誰もが本能的な危険を訴え、自然と頭を垂れるのが相応しい在り方だと錯覚させる人物が、この玉座の主だ。
その玉座、彼が肘を掛けて険しい表情で何かを考えている横では、異常なほどに長く、白い髪をした少女がいた。
見た目はそれなりに綺麗で、美少女と形容しても問題ない者。だがその表情、雰囲気からは飄々としたものが滲み出ている。
そんな魔女は、かつての王に言った。その目的を聞いて、
「ほう。強いから戦いたいと。相手が己を圧倒するほど強い存在で、ともすれば己が負けるかもしれない。そんな存在であるからこそ、参謀閣下は挑む価値があるとそう仰られるのですかな？」
「無論だ」
間髪入れずに、参謀閣下、と呼ばれた男は答えた。
愚問だと言外に伝えるかのような答え。相手によれば、その言外の圧力に膝を屈してしまいかねない程の重圧。
だが魔女は屈さずに続けた。感心するように、
「負けるつもりはない――と？　ふふ、まあ参謀閣下殿ほどの御方であればその自信も皆が納得するでしょう」
魔女は男を称賛する。純粋に。謳い上げるように。
「最強の魔人にして、あらゆる戦争を指揮し、その全てを勝利に導いてきた稀代の指揮官。剣士としても世界最強。魔物の黄金時代を築いた魔物界の英雄にして、人類史においては始祖の英雄にして剣の王とまで称される閣下であれば、誰もがその勝利を疑わない。人間に負けるはずがない。ただの人間に執着していることさえ、周囲の者は不思議に思うでしょうな」
「……買いかぶりすぎだ。俺は大した男ではない」

「自分が思う自分の印象と、他者から見た印象は、得てして少なからず乖離するもの。己を完全に客観視出来る者はそうはいません」
「ふん……まあ、些か持ち上げられすぎだというのは理解しているがな」
「しかしそれほどの実績を、閣下は残してきた。得てきた物の多さからそれは明らかでしょう」
　しかし、だからこそ、と、魔女は言う。笑みのまま表情を変えず、
「――解せない。負ける、ということがどういうことか知らない閣下ではありますまい？」
「ああ。負ければ少なからず、積み上げてきた物は崩れ、得てきた物が失われるかもしれない。もっとも、もしそうなったとて、致命的なところでの損失は回避するつもりではあるが」
「ええ、そうでしょう。私が視えている部分でも、おそらくはそうなる。閣下は己の大事なものは、決死の覚悟で守り抜くでしょう。例え、魔王に逆らうことになってでも」
「――だがそうなるつもりはない」
「ええ、ええ。そうでしょうが……そうなってくると、またしても解せない」
「……ほう？」
　魔人の眼が鋭く細まる。視線を横に移した。――どういう意味だ？　と、問いかけるように。
　魔女は微動だにしない。口だけを動かす。
「その前に聞きたいことが一つ。閣下は私と同じく、あの御方を次代の支配者に据えるべく行動している。その未来から逸脱するつもりはない――そうですな？」
「……ああ」
　魔人が僅かに間を開けて頷く。魔女も頷き、
「で、あればお聞かせ願いたい」
　と、魔女は続けて、
「閣下は、あの御方と戦いたい。この一件で、かの御方が支配者となる道筋を辿ることを目的としている」

「ああ」
「だがその一方で閣下は、戦いにおいて負けるつもりはないと言う。閣下が負けなければ、目的の成就が確実なものではなくなるかもしれないのに」
「……」
　魔人が無言になる。表情はお互いに変わらない。魔女は、その魔人の内心を覗き込むように告げる。
「率直に言いましょう、閣下。その行動は、極めて矛盾している。――結局のところ、閣下は何がしたいのか？」
「……」
　魔人は言葉を返さない。何を思っているのかも分からない。魔女の読心においても、その深い部分は読み取れない。
　靄が掛かっているかのように、ナニカに邪魔をされてしまう。それが何かは分からない。だから口で問いかけた。
「この際、予言の結果は置いておきましょう。重要なのは閣下の〝意志〟です。閣下は、かの御方を仮に打ち破ったとして、そこでどうするおつもりか？　よもや、魔王様に頼んで魔人にしてもらう――などとは言いますまい」
「……それが、お前が俺に興味を持つ理由だと？」
「ええ、閣下の在り方は、極めて矛盾している。目的と行動が結びつかない。火を点けるために、水を汲んでいる。そんな歪さがある」
「矛盾、か。俺としては、そういう意識はないがな。ただ欲張りなだけとも言えるだろう」
「そこがまた不可解。目的が二つあることは珍しいことではないが、閣下の在り方は、まるで中身で別々の人間がそれぞれ舵をとっているかの様だ。それこそ、あの御方の様に」
　あの御方であれば、そういったちぐはぐな行動にも説明がつくと、魔女は言う。しかし、
「閣下には、それがない。閣下は正真正銘、一つの人格を持ち、一つの魂を持つ。魔王から分け与えられた血――魂によって、その存在の格は引き上げられているものの、それ自体は他の魔人と大差ない。であ

るならば、閣下は何がおかしいのか――」
魔女は言う。答えは、
「結論――何もおかしくない。そして、それこそが解せない。おかしくないのがおかしい。閣下が使う力は、明らかに普通の事象ではないというのに、それは普通だという答えが出てしまっている。あの御方とは違う何かが、閣下には必ずあるというのに」
「……俺が普通ではないと見るか」
「ええ。気づいてしまった今だからこそ、酷い違和感を感じる。冷静な貴方は、己の目的の為には一切の慈悲を捨てて邁進することが出来るが、同時に己の欲望の為に情熱を注ぐ修羅でもある。その二つが、極めて高いレベルで融合し、成り立ってしまっている。優秀、という言葉では収まらない。〝二律背反〟という言葉は、正しく貴方様の為にあるようだ」
二律背反。二つの相反する命題が同等に成り立ちながらも、両立することの出来ない矛盾、パラドックスに陥っている状態。
彼はその権化。正しく、二律背反の魔人であると、魔女は言う。
「しかし成り立っているのは事実。謂わば、黄金率。異なるもの同士が混ざり合っていても、あの御方のように不安定ではない完璧な状態。一体どうすれば、こんな存在を――いや、こんな状態を作り上げられるのか。閣下、私は貴方様が、本当は元人間じゃないと言っても信じるでしょう。それほどに、貴方様は――」
「――俺は人間だ。間違いなく、な」
魔女の言葉に機先を制し、魔人は告げた。
「普通の人間ではないことは認めてやろう。だが、俺は俺だ。俺の根本は人間。この世界の人間として生まれてきた人間だ。それが魔人となり、今ここに存在しているに過ぎない」
「……ふむ」
魔女がここで初めて、顎に手を当てて考える仕草を見せる。だが、
「……やはり規格外（バグ）、ということですかな？」
「好きに解釈するといいだろう。俺の存在を他者に説明したところで、理解が得られるとは思っていない。また、得ようとも思っていな

い」
　魔人は言う。視線を横から正面に向け、
「どんな規格外であれ、この世界に一個の存在として生まれた以上は己の足で歩いていくしかない。それは奴であれ、主人公（ヒーロー）であれ、誰だって同じだ。己の意志がどこへ向かうか――それを決める権利は、誰にだって存在する」
　何かを思って、そう言った。魔女はそんな魔人を見て、
「……道理ですな。如何に高尚な存在とて、生み出してしまった時点で、その自由意志を止めることは叶わない。故に、そういった人の可能性こそが、この世を変える唯一の手段であるのだから」
「そうだ。だからこそ、俺は人に期待する。その意志こそが、何よりも美しいものだと知っているから」
　故に彼は人を好む。期待する。人の弱さや醜さを知りながらも、その美しさだけは変わらないものだと信じている。
　ただ強いだけではない。揺るぎない〝意志〟を持つ強者。そんな人間の輝きを、彼は真っ向から相対して上回りたいとも思っている。
　熱くなりたい。優先すべき目的とは別に、戦士として戦うに値する戦士を、彼は渇望し、求めていた。
　その想いの一端を見た魔女は、ふむ、と再び笑みを浮かべた。玉座に座る彼の横顔を見て、
「閣下があの御方以外の強者――ドラゴン王や、悪魔へと挑まないのはそれが理由だと？」
「さて、どうかな。前者は力を十全に発揮できるとは言い難い。後者については、今は時期尚早だ」
「左様ですか。では、あの御方については……あくまでも一挙両得を狙うつもりだと？」
「ああ。俺は、俺を圧倒出来るかもしれないほどの強者を越え、勝った上でその目的を達成する。お前はお前で、勝っても負けても目的を達成出来るようにすればいい」
「……」
　魔女がそこで沈黙する。しかし笑みは絶やさず、すぐに、

「閣下は、二兎追う者は一兎も得ず、と言う言葉はご存知かな？」
「――出来ないのか？」
「出来る――否、してみせる」
即答。力強い答えだった。
それは魔女の執念を表すかのような声。外法にその身を染めながらも、世界の未来だけを考えてきた未来視の魔女の願いを示すかのようだ。
だが彼女はそれを言うと戯けるように力を抜いて肩を竦めると、
「もっとも、どちらに転ぼうが支障はないと言うべきでしょうか。閣下が仮に勝利したとしても、多少タイミングをズラして改めて魔王に当ててしまえばよいでしょう」
「ふん、それもそうか」
魔人があっさりと納得する。どちらにせよ、その人物には踊ってもらおうと言うのだ。
「今はどうしているか分かっているのか？」
「無論。現在は、とある隠れ里にある酒場で少年奴隷として働いているところですな。生まれてからというもの、それなりに不幸ではありましたが、不幸中の幸いと言いましょうか、酒場の女主人が善人であったようで。しばらくは平穏な日々を過ごせるでしょう」
「……しばらく、か。ということは――」
「ええ、長くは続きません」
あっさりと魔女は言う。その者の未来を視て、残酷な運命を告げる。
「かの御方の可能性は……まあ、この時代にしては、それなりに波乱万丈ですな。単純に不幸という言葉でも言い表せない。浮き沈みの激しい人生と言うべきでしょうか」
もっとも、全体的に低いところで収まってはいますが、と魔女はとある人物の人生をそう評する。
魔人が僅かに目を細め、
「……それで、魔物を憎むようになると？」
「魔物ではなく、〝悪〟と言ったほうが正しいでしょう。そしてその

要因となるのが、これから起こる事柄。この時期は後の人格形成に大きく影響を及ぼすだけはあり、極めて重要な事柄の一つ。その酒場と女主人。その一連の事柄は何しろ――」

と、魔女はその言葉を宙に乗せた。

「かの御方が、かの御方として真の意味で誕生する――謂わば、〝もう一人〟の産みの親。こう言っても過言ではありませんから」

――ガイ。それが新しく名付けられた少年の名だ。

「……起きないと」

朝。ガイは目を覚ますと、ベッドから起きて、外に水を汲みに行かなければならない。それはガイを買った酒場の女主人から言いつけられた仕事だからだ。

既にベッドに女主人はいない。朝早くに起きて朝食でも作っているのだろう。台所の方から良い匂いがする。寝室から出ると、やはりと言うべきか、台所に女主人の後ろ姿。ガイはゆっくりと近づき、言われた通りに、

「……おはよう、ございます……」

「――あ、起きたんだ。おはよう、ガイ」

朝の挨拶。朝起きて人と会うなら、まずは挨拶をするのが基本だと、ガイは教えられたのだ。

挨拶は人と接するに当たっての基本らしく、他にも寝る時や物を食べる時、お店にお客さんがやってきた時など、挨拶には様々な種類があって、それらを時と場合によって使い分ける。

その通りにガイは行った。朝は、おはよう、だ。

それに加えて、敬語。丁寧な言葉遣いを使う。

ただこれについては自然と使える。おそらく、柵の内側――牧場の人間達が普段から魔物相手には使っているところを聞いていたからだろう。癖になっているとも言える。女主人からは、自分には敬語でなくともいいと言われているのに、出てしまったりするのだから。

「もう少しでごはん出来るから、先にお水の補充、お願いしてもいい

？」
「……はい。行ってきます……」
女主人に優しくそう頼まれ、ガイは家から出る。
家は酒場の奥。二階建ての建物であり、二階は寝室で、一階は台所やリビング、物置などがある。それほど広くはないが、酒場を合わせればそれなりに大きな建物だ。そもそもガイからすれば、これでも目を見開く程の寝床なのだが。
「……」
外に出ると、そこは幾つか同じような建物が並ぶ場所。皆、それなりに身なりがしっかりとした普通の人間がそこいらを闊歩しているのだ。
さすがにそろそろ慣れてきたかもしれないと、ガイはその間を歩いていく。目的地は井戸だった。水が汲める場所。そこに向かうと、
「――あ！　来やがった！」
「あ……」
聞き覚えのある声に反応して目を向ければ、そこには同じ様に水を汲みに来たであろう子供達。ガイと同じくらいの年の頃であろう子供達が数人いた。
そのうち、声を上げたのは男子で、三人ほどのグループ。そんな彼らは、ガイのことを見るなり、無邪気な笑みを浮かべた。
「おい、ガイ。お前、新入りの癖になに先に汲もうとしてんだよ」
「そうだそうだ！」
「ほら、順番譲れよ！」
「……うん、どうぞ……」
男の子達にそう言われてしまえば、ガイは譲るしかない。言い返す、逆らう、といった意志が希薄なガイにとって、その言い分に対して特別な意味は無かった。
ただ相手の方はそうではない。あっさりと順番を譲ったガイを見て、彼らは表情を歪ませる。
「相変わらずなに考えてるかわっかんねー……なんなんだよこいつ」
「気持ち悪いよな」

「よそ者の癖にな」
「……」
怪訝な目で陰口を叩かれる。当然、聞こえる位置でだ。
しかしガイはそれを聞いても反応しない。そういった悪口を聞いたところで、苦しくともなんともない。別に殴られた訳でもなければ、数少ない食べ物を取られた訳でもないし、ただ悪口を言われただけだ。
信じられないくらい温かい家で、雨に濡れることもなく、ちゃんとした衣服を着て、土の上どころか、草の上よりも柔らかい場所で寝られる。綺麗な水を飲むだけでなく、身体を洗えるし、食べ物も今まで食べてきた物がなんだったのかと疑ってしまうほどに美味しいし、何よりも、殴ったり蹴ったりしてこない優しい飼い主がいてくれる。
こんなに幸せな生活が送れる場所だ。以前居た場所――牧場と教えられた場所に比べれば恵まれている。
この程度の悪口は悪口にも入らない。むしろ話しかけられるだけでも優しいものだ。
だからガイは、彼らの微小な悪意を感じながらも何も言うことも反抗することもなく、彼らが水を汲み終わるのを待って、それから水を汲む。すると背後からまた声が来た。
「ばーかばーか！」
「あーほ！」
「お前なんて認めねぇからなー！」
「あ……」
そう言って、三人は水の入った桶を持って帰っていく。ガイは思わず、引き留めようとするように僅かに手を前に出しつつも引っ込め、
「……お別れの挨拶……したほうがよかったかな……？」
女主人からは、同年代の子供とは仲良くしたほうがいい、と言われていた。それは出来ていないし、やり方も分からないが、挨拶くらいはした方が良かったかもしれないと、それくらいは考えつく。
だが行ってしまったのならどうしようもない。ガイは水の入った桶を持って酒場へと戻っていく。

「お帰り。ありがとね」
「……はい」
水を汲んでくると、女主人からお礼を告げられる。そのまま水場で顔と手を洗うと、
「朝ご飯出来たから食べましょ」
「はい」
そう言って、二人でテーブルに着く。ガイにとっては、とても楽しみな時間であり、心なしか足早に席に着いたのを見て女主人が微笑を浮かべた。
そして二人で食事の挨拶。それを終えると、ガイは早速朝食にありついた。
「はぐ、んぐ……はぐ……」
お皿の上に乗ったパンやスープ。卵といったものを、慣れない手つきで食器を使い、食していく。
どれもかなり美味しい。ガイにとっては、食べ慣れてない味。初めて食べた時の衝撃は忘れられない。こんなものを、外の人間は食べているんだと、感動したものだ。
だが、これらの食事は外においても恵まれた方らしい。
人里。魔物から隠れ潜むようにして暮らしている人間の暮らしは、それほど裕福ではない。しかし、冒険者や魔物討伐隊といった、一部の糧を得る力を持つ人物や、それの恩恵を得ている一部の商人など、それに関わることが出来れば、これくらいの食事や酒であれば手に入らないことはないのだと言う。
この酒場を経営している女主人も、数年前まではかなり稼いでいたらしい。その時の稼ぎと伝手を使って酒場を開き、贔屓の客もいて、それなりに繁盛しているという。
だから生活は安定しているらしい。少なくとも、ガイという少年奴隷を買って、まかなえるほどには。
「ふふ……よく食べるわね。最初に比べてお肉もついてきたかしら？」
「……？」

テーブルの反対側から手を伸ばし、ガイの頬を指でつつく女主人。
その笑みは優しげだが、行動の意味が分からずにガイは首を傾げる。
咀嚼中なので口は開けない。どうしようかと迷ったところで、
「やっぱり顔立ちも整ってるし、将来はモテちゃうかもね」
「んぐ……モテる？」
「女の子から好かれやすくなるかもってこと」
そう言われ、ガイは考える。だが、
「……よく、分かりません」
「ふふ、まだちょっと早いかな？　でも、同じくらいの女の子から喋りかけられたりしない？」
また問いかけられ、ガイは考えた。思い出し、
「……するかもしれない」
「あ、やっぱり？　それじゃあ今度は、女の子の扱い方も教えなきゃね」
「……それが今日のお勉強？」
「今日はまた文字の読み書きと、社会常識の予定だけど……うーん、それじゃ、そっちもちょっと教えよっか」
「……分かりました」
「あ、また敬語」
「……すみません」
「ふふ、まあ慣れないのならしょうがないわ。そっちも追々やって行きましょう。さ、朝ご飯も食べちゃって」
「……はい」
と、ガイは残りの朝食を食べ終えると、そのまま勉強の時間となる。
お皿を片付け終えた後のテーブルを使って、今度は女主人が買ってきたという本や紙などを並べるのだ。
「……良い？　こっちの文字は――」
女主人が隣に座り、丁寧に教えてくれる。
ガイが女主人に買われてからというもの、日課となっている時間だ。
物をあまりにも知らなかったガイに知識を、考えさせる力を身に付

けさせるためだと言う。
柵の内側の世界のことを〝人間牧場〟と呼ぶことも、女主人に教えてもらって初めて知った事実だ。
なんでも、世界は魔物の支配しており、多くの人間は人間牧場で家畜として飼われ、外で暮らす人間も、安全に暮らせる場所は極わずか。保証も何もない世界だと言う。
この辺りも、社会常識として教えてもらえた。最初は挨拶などの初歩的な常識からではあったが、最近はもっと広い部分のことも教えて貰える。例えば、
「魔王、というのは……？」
「……魔王は、魔物達の王ね。魔人っていう物凄く恐ろしくて強い化け物達の王でもあって……正直、私も詳しくは知らないんだけど……人間の敵である魔物の王様って憶えておけばいいと思うわ。きっと、関わることはないと思うし……」
「……分かった」
こういった魔物についての知識も教えて貰える。
しかし彼女は冒険者でもなければ、魔物討伐隊でもない。彼らであればもう少し詳しいことを知っているらしく、彼女もまた、常連のお客さんに教えてもらったという。
ガイとしても、興味がないと言えば嘘になるが、今はそれよりも、この場所でちゃんとした生活を送るため、彼女の為に頑張ることが最優先だ。
だからこそ、彼にとってはこうやって苦労を掛ける時間よりも、夕方からの時間の方が大切ではある。
「――がはははは！　おい、坊主！　酒のおかわりもってこいや！」
「……畏まりました」
「坊主！　こっちもおつまみ１０人前追加だ！」
「……畏まりました……！」
夕方から夜にかけての時間。それは酒場の営業時間である。
常連を中心に、冒険者や魔物討伐隊の隊員と呼ばれる人物。荒くれ者が酒を食事を楽しみにやってくる。

席は満席で、ガイも店員として常に動き回っていなければならない。
しかしガイはまだ子供で、やれることにも限りがある。知識も不十分で、料理なども作れず、せいぜい簡単なつまみや、酒をグラスに入れたりすることしか出来ない。
だが、
「ガイ。次はこっちの皿洗い、お願いね」
「は、はい……！」
相変わらず優しくそう指示を出してくれる女主人。今までは、彼女一人で店を切り盛りしていたというのだから驚きだ。
今も常連のお客さんの話に付き合いながら、お酒やつまみを出し、たまに料理をしに裏に戻る。その動きには一切の無駄が無いし、笑顔も自然なものだ。加えて、汗一つかいてないというのだから驚愕せざるを得ない。
だがガイにとって、お店の稼ぎは生活に直結する重要な時間。だから出来る限り、女主人の負担を減らそうと動き回る。ただでさえ、自分を養い、昼には勉強を見ているため、営業時間を短くしているのだ。これ以上、迷惑を掛けたくはない。
毎日少しずつ出来ることを増やしながら動いていると、気がついた時には店じまいの時間となる。それが終われば、一日もほぼ終わりだ。
「それじゃ、身体を洗ってから寝ましょうか」
「……はい」
大きめの桶に、沸騰させたお湯を水で中和し、温かいお湯を作る。それを使って汗などを流し、身体を洗っていくのだ。温かいお湯に布を浸けて、身体を拭いたりすると凄く気持ちが良い。一日の終わり、汗水流して働いた後のそれはそれは格別だ。
だが、最近になって妙に困ったことがあるとすれば、微妙に恥ずかしいということ。
ガイにもよく分かっていない。だが、女主人と一緒にそれを行っている時間は、妙に身体が熱い気がする。

特に服を脱いだ彼女の身体を見ていると、特に身体が熱い。
しかしだからといってそれをしない訳にはいかないし、原因も分からないまま、ガイは羞恥を感じながらも水浴びを終え、ベッドへと入る。
ベッドは一つしかなく、ガイは女主人と一緒に眠る。その時には、一日にあったことを話したり、色々と話したりすることも多いのだが、今日は違った。
「……ガイ……」
「……？　なんですか……？」
「……ううん。何でもないわ」
苦笑しながら女主人がガイの頭を撫でる。
何か言いたげな様子ではある。ガイも時折女主人が見せるこれが気になる。
だが、ガイにはそれを問い返すほどの強い意志を未だ持っていないのだ。故に、話はそこで終わってしまう。
「ふふ、今日も疲れたでしょ？　そろそろ寝ましょうか」
「……うん、おやすみなさい」
「おやすみ……」
そうしてガイは、温かさに包まれながら夜を過ごす。
平穏で平和な日々。信じられないほどに恵まれた幸福な生活をガイは享受し、これから自分は、ここで暮らし続けていくんだと思った。
――だがガイは、直ぐに気づくことになる。
この世に人が安心して暮らせる場所は極僅かである。
その場所も、薄氷一枚。
何か些細な切っ掛けで地獄へと崩れ落ちる――砂上の楼閣でしかないのだと。

混沌の産声

夜の暗闇はこの時代の人類が暗黒時代に生きていることを嫌でも分からされる時間帯だ。
夜行性で生きる一部の魔物達が活動を始めるというだけではない。昼間は目立たなかった灯りが、夜になると非常に目立ってしまうのだ。
それ故、野良で生きる人間達の多くは、夜になると明かりを消す。活動する場合はほんの僅かな蝋燭の火に頼り、明かりが外に漏れないように、窓がない家などが流行っている。
夜は恐怖の時間帯。その時間帯に、外で構わず馬鹿騒ぎなどをする者達がいれば、それは頭がイカれているか、騒いでも問題ないほどの力の持ち主だ。それか、
「ははははは！　酒が美味ぇなぁ!!」
「ゲへへへ！　酒、美味シイ！　楽シイ！」
――魔に属する者達であるかだ。
夜の帳が下りた大地の上、堂々と宴会を開いているのは、赤や青といった肌の色をした筋肉質な異形の者達。
頭に角を生やして泥酔する彼らの名は、鬼。
本来であればＪＡＰＡＮ――もっと言うなら、地獄で働き、暮らしているはずの者達である。
しかし彼らはそうではない。何故、鬼達が大陸のど真ん中で宴会を行っているのか。その原因は集団の中心にあった。
「――グビグビ……んぐ、ウィ～……ヒック、ハーッハッハッハッ！　おいこら馬鹿ども！　もっと酒を持ってこーい！」
「へい親父！　お注ぎしやす！」
鬼達の宴会。その中心で酒を文字通り、浴びるようにして飲んでいるのは、周りの鬼よりも一回り大きい黒い鬼だった。
髭や濃い顔が特徴的なその黒鬼は、鬼であって鬼ではない。
その色濃い気配は周囲の鬼達の比にならない。鬼達も、その黒鬼に子分のように付き従っている。

それもそのはず――彼は魔人レキシントン。
世界の支配者層である魔人の一体であり、力自慢の鬼達を従える強大な鬼でもある。
そんな彼は人間牧場の運営を完全に部下の魔物将軍に任せて放ったらかしにし、毎日を好き放題に生きていた。
故に彼の機嫌は良さそうに見える。今の所は。
「ぷはぁ！　あー……」
レキシントン用の巨大な盃に並々と注がれた酒を飲み干し、しかしレキシントンは虚空を見て、何かを考えるように声を上げる。
「どうかした？　レキシントン」
「あ、これってもしかして……」
そしてそのレキシントンを傍らで見るのは、レキシントンの使徒である二人。ジュノーとアトランタ。
全裸の美男子と美女。浅黒い肌を惜しげも無く晒している鬼と悪魔の使徒達は、レキシントンを見て何かを察する。
その直後。
「あーーーーー!!　つまらんつまらんつまらんっ!!!」
不意に、レキシントンが大声を上げた。
天まで届くほどの声量で、癇癪を起こしたように地面を殴りつけたレキシントン。
彼の怪力振りを示すように地面が僅かに揺れたところで、レキシントンを最もよく知る使徒二人は察したように表情を変える。
「あっ……やっぱそういう……」
「お、落ち着いて下さい、レキシントン様！」
ジュノーが軽く息をつき、アトランタはレキシントンを宥めようとする。
だが、
「ジュノー！　アトランタ！　お前らは分かるか!?」
「主語がないからわからないよ、レキシントン。……いやまあ分かるけどね」
「やはり、戦いたいと?」

レキシントンの憤りが混じった問いに答えるアトランタ。
それを聞いたレキシントンは再び大声を上げた。
「そうだ!!　酒に女！　そりゃあいいが……戦いが足りん!!　どこかに活きのいい奴はおらんのか!?」
「まーた始まった……」
ジュノーが呆れたように呟く。それほどに、この光景は見慣れたものだったからだ。
魔物の黄金時代。世界は魔王の、ひいては魔人の物となり、彼らの邪魔をする者はいなくなった。
多くの魔物は喜んだし、魔王の治世は安泰。彼らの支配は揺るぎないものとなっている。
だがそれを喜ばない者もいる。それがこのレキシントンだ。
「あーあー！　昔は良かったのう！　適当に戦場に出れば人間の兵がうじゃうじゃと……取るに足らん雑魚ばっかだったが、それなりに愉しめたというのにだ！」
「そんな昔は良かったってお爺ちゃんみたいなこと言わないでよ」
「なのに今はどこに行っても腰抜けしかおらん！　愉しめるのは魔人くらいだ！」
「では、またノスかレオンハルトにでも喧嘩を売りに行きます？」
戦いを愉しめないと今の世の中を嘆くレキシントンに、アトランタがそんな提案を行う。しかし、
「あいつらとはここのところやり過ぎてちょっと飽きたわい！」
「とか言いながらどうせまたそのうちやりそうだけど……ならレイは？　あっちもよっく喧嘩相手探してるって聞くけど」
「ああん、レイ？　……ああ！　最近魔人になったあの小僧か！」
「いやいや……幾らなんでも魔人くらいは憶えてようよ……ま、それでこそレキシントンって感じだけどさ」
「では、レイを探しに、牧場でも訪ねに行きますか？」
「……だが断る！　あの小僧は……微妙に唆らん！　たまになら悪くないかもしれんが、どうせそのうち、向こうから喧嘩売ってくるからな！　その時で構わんわい！」

何を思ったのか、それすらも断るレキシントン。
酒、セックス、戦の三つを愉しみとしている彼にとって、一つでも愉しみが消えることは我慢ならないことだった。
「はぁー、参った。どうするかのう……もういっそのこと、地獄にでも戻って、閻魔の奴でも殴りにいくか……？」
「閻魔って……確か鬼の王様だっけ？　その辺の事情、あんまり詳しく知らないんだけど、どうなのよジュノー」
「あー、閻魔ねぇ……まあ結構真面目な性格で、相当強かったはずだけど、喧嘩を買うかどうかは微妙かなぁ……」
「あー、つまらん！　つまらん！　戦って略奪して酒飲んでレイプしてぇーーー!!」
「結局そうなるよねぇ」
と、ジュノーが欲望を叫んだレキシントンを見て苦笑する。
この後に起こす行動はもう決まっているのだ。
故にジュノーとアトランタ。そして配下の鬼達も、宴会の終わりを悟って立ち上がる。
最後にレキシントンも立ち上がり、二本の巨大な金棒を持ち上げながら言った。
「おいお前ら――人狩り行くぞ!!」
「へい、親父!!」
「グヘヘ、人狩ル！　略奪スル！」
レキシントンの号令。それは彼を親父と慕う鬼達にとっては絶対のものだ。
〝人狩り〟と呼ばれる、魔物達の間で流行りの愉しみは、レキシントンにとってもそれなりの暇潰しになる。
運が良ければ、冒険者や魔物討伐隊といった、それなりに活きの良い人間達との戦いが愉しめるし、略奪やレイプも出来る。彼にとっては一石三鳥なのだ。
「ハーッハッハッハッ！　さっさと準備をしろ馬鹿共！」
「やれやれ……それじゃあまあ、出来る限りは探してみようか。それなりに賑わってるところをさ」

「私達にお任せくださいレキシントン様！　必ずや、人里を見つけ出してみせますから！」
「おお！　そういうのは任せた!!」
　ジュノーとアトランタが、レキシントンや鬼達の代わりに、人里がありそうな場所を捜索する。野良の人間が多く住まう人里は、今の時代だとそれなりに見つけにくい場所に建てられていることが多いので、闇雲に探しても徒労に終わることが多い。
　とはいえ、人里がそれなりに残っているのは、魔軍が本腰を入れていない。つまりは、ある程度は放置しているからというのが、理由としては大きいので、それなりに知恵があれば見つけ出せないこともない。
　ジュノー達や、そこらの魔物の部隊が捜索して見つけられるかは確率的には半々だが……これが魔軍、レオンハルトが指揮を行っていた場合、見つけ出せない訳がないのだ。
　魔王の命令などが出れば、人間はいつでも滅ぼされる。それをしないのは、魔王が人間を苦しめることを望んでいるから。
　そしてそのおかげで、レキシントンのような好戦的な者達の退屈を紛らわすことにも繋がっている。
　そしてレキシントンの使徒である彼らに、人間の事情を慮る必要などない。
　レキシントンも、人間の事を考えて、自らの欲望を我慢する必要などない。彼は魔人。あらゆる自由が与えられている大陸の支配者なのだ。
　故に彼らはあっさりと、近くの隠れ里を襲うことを決めたのだった。

　――ガイの少年奴隷としての日常は、牧場で過ごしていた日々が嘘のように平穏そのものだった。
　毎日、朝早く起きての水汲みに勉強、酒場での労働は楽しいことばかりではなかったが、それでもガイにとっては全てが新鮮かつ平和な

ひとときだ。
魔物に殴られることもなければ、飢えることも、凍えることもない。毎日、優しい女主人と一緒に、美味しいご飯を食べて常識を学び、温かいベッドで眠ることが出来る。同年代の子供、特に男子からの風当たりは強かったが、それも無視をされたり、悪口を言われたりする程度の可愛いものだ。牧場での虐待に比べればなんてことのないこと。
「――ほら、ガイ。こっちもお願いね」
「わかった」
ガイは女主人の奴隷として数年の時を過ごした。
当初、やって来た時よりかは性格も明るくなった。多少、内気な性格で表情が動きにくいのは変わらなかったが、それでも彼が普通の少年であることはもう疑いようがない。
ガイは普通の人間の生活、常識、知識、考え方などを女主人や周囲の人間から学んでいった。
生きていくためには食料が必要で、それを得るために何らかの行動を起こさなければならないということ。人間の場合は金か物々交換によって、欲しい物を手に入れることが出来る。
「良い？　悪いことをしちゃ駄目よ？　人から奪ったりとか、そういうのは……」
「……どうして？」
その方が楽なのではないか、とガイは率直な疑問として思った。
しかしその問いによって、女主人が僅かに苦笑、何かを憂うような表情になる。そして、
「……人間はね、一度悪いことの味を憶えちゃうと、真っ当な道に戻りにくくなるの」
「……そう、なんだ」
「そう。誰だって本当は分かってること。人から奪った方が楽だって。でも、それをやったらどんどん堕ちていく。都合の良い言い訳で自分を正当化しながら、その味から離れることが難しくなる」
〝ガイ。人間ってのは、欲深いのよ〟――そんな言葉が印象的だった。

女主人のそんな教えに、ガイは素直に頷いた。悪いことをしてはいけない。道徳を学んで来ていないガイではあったが、それがなんとなく、いけないことだというのは理解していた。
また、酒場の常連である冒険者だという男からはこんなことも言われた。
「ガイ。世の中ってのはな、正しいことばっかじゃ生きていけねぇんだ」
「……どうして？」
「世界ってのは厳しいからさ。真面目にやった奴は馬鹿を見るように出来てんだ」
「悪いことをしろってこと？」
「そうじゃねぇ。そうじゃねぇが、賢い奴ってのは常に抜け道を探してるもんさ。何も真っ黒になる必要はない。真っ白じゃ生きていけねぇなら、灰色って選択肢もある」
冒険者をやってると特にそうだ、と酔っ払った声で男は言う。
「同業の妨害や獲物の横取り……搦め手や罠、嘘をついたりすることも時には必要だ。戦闘も同じ。奇襲に騙し討ち、相手の弱いとこを突くってのが一番やり難いし、相手にも効く。何も正面からバカ正直にぶつかる必要はねぇ。こちらが劣ってようが戦いってのは相当な力の差でもない限り、それでひっくり返せる」
「……強い方が勝つとは限らない？」
「おお、そうだ。分かってるじゃねぇか。それで？　弱者が勝つにはどうすればいい？　真面目にやったところで結果は見えてる。だが、どうしても勝ちが欲しい。他に何をおいてもだ。そういった道理に合わない結果を求める場合、何をすればいい？」
「……ズルいことをする？」
「そういうことだ。お前、今ここで俺と戦うことになったとして、勝てるか？」
「……勝てない」
「正面からやればそうなる。だが、俺が酔っ払って寝てる時にでも襲いかかれば、お前が勝つことも全然ある。……とまあ、こんな風に、ど

うしても結果が欲しい場合にはこういうズルいことを――」
「――うちのガイに何を教えてるんですか？」
「……あ……」
気がつけば男の後ろに女主人が立っていた。
途端に男が顔面蒼白になる。冷や汗を垂らす男は、ガイに最後にこう言った。
「……ガイ。こういう、もう何をしても勝ちの目がない明らかに負けるっていう時はだな……命乞いや早々に謝ってしまうのも手だ」
「うふふ、そうねぇ……でも、命乞いをしたところで相手に許す気がない場合もあるから、そういう時は逃げた方がいいわよ。――もっとも、私の方は逃がす気はないけど」
「……駄目？」
「――駄～目♪」
――次の瞬間、男の叫び声が酒場を埋め尽くす。
屈強な大男が宙を飛んでいくのを、ガイは初めて見た。
そんなこんなで、ガイの日常というのは賑やかに過ぎていった。
そしてガイはこう思った。
――自分は、これからもここで生きていくんだろう。
何となくそう思った。
ガイは心身ともに成長し、歳もおそらくは１０歳を越えた頃。
彼は再び、世の厳しさを知ることとなる。

その日、ガイは珍しく酒場ではなく家の方に籠もっていた。
理由は酒場が休みだから。女主人は、今日は用事があると言って朝から出かけてしまっていた。
実のところ、それほど珍しい話でもない。女主人は時折、店を閉めてどこかに行くことがある。
頻度はあまり高くはないが、場合によっては3日は帰ってこないこともある。
そういう時はガイが家の留守を任されるのだ。

もっとも、これはガイが成長してきたごく最近からの事ではある。
それ以前はずっと家にいた。だが最近は、
「……暇だ」
机に座って、何となく本を読んでいたガイはぽつりと呟く。
酒場を閉めている時、女主人がいない時、ガイは寂しさと暇を覚える。
以前はそんなことを感じることもなかったが、今はそうではない。何かしていないと落ち着かないくらいである。
とはいえ、ガイに友達はいないし、一緒に遊べる相手はいない。それに留守を任されている以上は用事もないのに外に出るのはよろしくないし、もっと言うなら今はもう夜で、外に出たところで何も出来ることはない。
だからガイが出来るのは勉強か、本を読むことくらいだった。自分で簡単な夕食を作って食べた後は、片付けをして本を読む。知識をつけることも出来るし、ガイとしても本を読むことは嫌いではなかった。
だが、一人の時間は落ち着かなかった。
早く帰ってこないかなぁ、と何度目かの言葉を内心で呟くと、家の戸が開く音がした。
「――ただいま」
「！　おかえり」
女主人が帰ってきた。ガイは教えてもらった挨拶を返す。もう言い慣れた言葉だった。
「大丈夫だった？」
「うん。何もなかったよ」
「そう……」
「……？　どうかしたの？」
女主人の表情がいつもより優れない。そのことに気づいたガイは首を傾げてそれを問う。
だが、
「……ううん。何でもないわ。それよりお腹空いちゃった。ガイ、何

か簡単なもの作ってくれる？」
「あ、うん。わかった」
何時も通りの優しい笑み。それが見えたところでガイも安心する。
ガイは台所に立ち、女主人から教えてもらった料理を作る。酒場を手伝う上で覚えたことだ。
「はぁ……美味しそうな匂いね～。ガイ、また上手くなったんじゃない？　もう私よりも上手いかも？」
「それほどでもないと思うけど」
ガイとしては女主人の料理の方が、自分で作ったものよりも美味しいと感じていたので、本心からそんなことを言う。
そしてガイは料理の手を進めながら、ふと後ろを向いて女主人が椅子に掛けた外套を左目の視界から確認した。
そこにほんの僅かに、赤い染みがついていることに気づきつつも、ガイは何も言わずに料理を続ける。そして、
「……出来たよ」
「ん、ありがと」
女主人が食事の挨拶を行い、ガイの作った料理に手を付ける。一口食べ終え、
「……うん、やっぱり美味しい！　ガイ、腕を上げたじゃない！」
「……それほどでも……」
褒められるのは悪い気はしないが、妙に照れるので止めてほしい。そんな内心を表すかのように素っ気ない態度を取るガイ。
だが女主人はそうやって料理を褒め称えながらどんどん食べ進め、それを三分の二ほど食べ進めたところで言った。
「……ねえ、ガイ」
「ん、なに？」
「もし……もしね。私が……ここを離れて、別の場所に行きましょうって言ったら、あなたはどうする？」
それはガイにとっては、よくわからない、理解出来ない問いかけだ。答えが決まっている質問でもある。
だからガイは即答した。表情を乱すことなく、

「？　ついて行くよ？」
「……いいの？」
「……何が？」
　意味が分からずに問い返す。続けて女主人が笑みで言った。
「……ふふ、そうよね……ガイ、ちょっとこっちに来て」
「……？　うん」
　ガイが椅子から立ち上がり、女主人の元に近づく。
　何だろう、と疑問に思った次の瞬間、ガイは柔らかいものに受け止められた。
「ガイ……ありがとね」
「……ど、どうしたの？」
　ガイは不意の出来事に混乱した。女主人にこんな風に抱きしめられることなど、今までは無かったことだったから。
　その感触にガイは鼓動が強くなるのを感じたが、それとは別に疑問にも思う。女主人がここまで弱々しく感じられたことは今までに無かったから。
「こんな私のところに来てくれてありがとう」
「……」
「ふふ……なんて急に言われても何のことか分からなくて困るわよね」
　女主人は自嘲するようにそう言った。そして少しの間を置いて、
「――私、本当は悪い人なの」
「……えっ？」
　ガイは思わず間の抜けた声を出す。
　女主人が本当は悪い人。それは一体、どういう意味なのかと疑問が頭の中を回る。
　だがその答えは直ぐに女主人の口から伝えられた。
「今まで生きるためには何でもしてきたの。人の命を奪ったり、騙したり、時には身体を売ったり……魔物を倒したり真っ当な仕事をする時もあったけど、昔の私はあまり褒められた人間じゃないのは確か」
「……昔？」

「一応、足は洗ってね。昔の稼ぎで酒場を開くことにしたの。あなたを買ったのも、そういったことで稼いだ汚いお金」
ガイは無言になる。理解は出来るが、よく解らないというのが本音だ。
悪いことをしている。その内容は幾つか解らないものもあるが、それより、
「……今は何もしてないんだよね？」
「誘われることはあるけどね。ただ……今日みたいに魔物を倒しにいったりはしてるの」
今まで隠していてごめんね、と女主人は言う。続けて、
「……最近ね、今更だけど感じるのよ。私が、こんなに幸せでいいのか、って」
「……悪いことをしたから？」
「そう……あれだけ人に酷いことをしてきた私が、こんないい子を拾って、順風満帆で……毎日楽しく暮らしてていいのかって」
それは罪の意識。
過去にやってきた事を懺悔するかのように、女主人は打ち明ける。
「人の親にはなれない筈だったのに……こんな、まるで親子みたいに接して……ふふ、我ながら滑稽だわ」
「……よく、分かんないけど――」
と、今度はガイが言う。自嘲し続ける女主人に対して、
「僕は……ここが良い」
「っ……ガイ……」
「悪い人でも何でも……僕はここで一緒に、暮らしていたい……です」
そう、そんなことは関係ない。
ガイは既に、ここを自分の居場所だと決めているのだ。
昔に悪いことをしていた悪人だからって、その心は変わらないし、現に変わっていない。
だからガイは腕に込める力を強くする。
「だから……いい。その、泣かなくても……」
「……あ……」

女主人が声を漏らす。その子供の気遣い。抱きしめる腕の強さ。まだ子供の弱々しい力だが、確かに力を込めていると分かるその感触に、人の温かさを知る。
そして、
「……ガイ、ありがとう……あなたは――」
そうして、女主人はガイに言葉を告げようとする。
今まで敢えて口にしてこなかった言葉を。偽物の関係を終わらせ、本物の関係を始めるために、その言葉を口にしようとした。
そんな時だった。人里に、悲鳴が響き渡ったのは。
「――うぎゃあああああああああああっ!?」
「っ!?」
「っ……！　今の悲鳴は……！」
外から聞こえたのは、明らかに尋常ではない断末魔の叫びと、地を揺らすかのような轟音。
同時に明かりと、続けて何名かの叫び声が響く。
それを聞いて、ガイは身体を固まらせるのみだったが、女主人の方は違った。
「……ガイ。物置の中に隠れてなさい」
「っ……で、でも……」
「――いいから。私は大丈夫。直ぐに確認して戻ってくるわ」
「っ……う、うん……」
その女主人の表情を見て、ガイは驚く。
何せ、その表情はガイが今まで一度も見たことのない表情であったからだ。
冷たい目。感情が伺えない表情。戦士ではなく、闇に生きる者としての雰囲気を漂わせた女主人に、ガイがその凄みを感じ取る。
だが、そんな女主人は最後にガイと視線を合わせると、いつもと同じ優しい笑みを見せてこう言った。
「――良い子にして待ってるのよ、ガイ」
「！」
普段と全く変わらない温かい笑顔。

それはガイを安心させるためのものだった。
「……気をつけて帰ってきてね……！」
「……うん。じゃあ、行ってくるわね」
と、女主人は物置部屋に入っていくガイを見つめ、守るべきものを確認しながら懐の得物を確認した。
――動ける。
なら、動かない理由はない。
「……十中八九魔物か……それとも……」
と、女主人はそう呟きながら、家の外に出ていこうとした。
――だがそれは出来なかった。
「っ……何、この気配……？」
外から、尋常ではない者の気配がする。
女主人は昔の職業柄か、気配というものに敏感だった。
外で活動するには、魔物の気配、人の気配、罠の気配、そういったものに敏感でなければならない。
そうでなければ生き残れない。特に彼女は人に恨まれやすい上、容姿の整った女だ。襲いかかってくる者達を撃退するのに、気配察知は何よりも役に立つ。
その感覚が、女主人にこう言っている。――外に出るな、と。
今直ぐここから立ち去るのが正解。外に出て、その何かに見つかってしまえば命はないと、本能が訴えている。
――どうする？
気配は徐々に近づいてくる。しかも、真っ直ぐとこちらに向かって。
こうしている間にも、外の叫び声。下卑た声を上げる何か、建物が倒壊するような音が響いている。
やはり魔物だろうとこの時点で確信する。
人里には見張りの兵などがいる。冒険者を中心にそれなりの戦力だって抱えている。盗賊などが襲撃を掛けてくれれば、これほど一方的にやられることはないはずだった。
どうするか。予定を変更して、ガイを連れて逃げることを考える。

それを頭の中で計算に入れ始めた時、その気配は急激に膨れ上がった。
「――ここかあーーー!!」
「っ……!!」
瞬間、酒場の壁を無理矢理ぶち破ってくる大柄の存在を、女主人は目視した。
「ハーッハッハッハッ！　酒の匂いがするぞ!!　ここは酒場か！　っと、んん？」
「……！」
女主人は眼の前に現れた化け物に、今までにない恐怖を感じた。
黒い肌をした筋肉質の化け物。頭から角を生やした、尋常ではない存在感を放つ生き物。
まさか、と思う。よもや、この場所に伝説級の化け物がやってくるとは、と。
冷たい汗が背中を伝う。その化け物と目があってしまった。
「おう！　女までおるのか！　こりゃーついてる！　今日の儂は運が良いな！」
「……お酒を、ご所望でしょうか？」
震える身体を必死に抑え、女主人は意を決して化け物に話しかける。
大丈夫だ。いつも通りにやればいいと、
「……おお、儂を見ても引かんとは、中々に良い女だ」
「ありがとうございます。……それで、ここに来たのはお酒を所望してのことですか？」
「くくく……ああ、そうだ！　酒と女を貰いに来た！」
女主人が思った通り、やはり目的はそれらしい。
だから女主人は言った。気づかれないように丁寧にお辞儀をしながら、
「分かりました。それでしたら、ここにあるお酒は全て差し上げます。どうぞご自由にお持ち帰り下さい」
「ハハハ！　随分と親切だのう！　なら遠慮なく――」

と、その化け物は店の中を見渡して酒を確認する。
だが、
「んんー？　ちょいと少ないのう……おい！　酒樽はないのか!?」
「……そこにあるので全てでございますが」
言う。気づかれてはならないと。
しかし、化け物は匂いを嗅ぐように鼻を鳴らすと、
「ハーッハッハッハッ！　嘘をつくな！　奥の方から酒の匂いがするぞ!!」
「っ……」
女主人は言葉に詰まる。
確かにある。酒だけなら幾らでもくれてやるし、隠す必要はない
その場所に、守るべき者がいなければ。
だから女主人は、血が冷めるような感覚を得つつも、表には出さずに化け物を呼び止めた。
「――お待ち下さい」
「ああん？」
女主人は言う。自分の服をはだけさせながら、
「それより先に……やることがあるでしょう？」
「……ほう？」
化け物の顔が好色に変化する。それを成功と見て、女主人は更に身体をさらけ出しながら続けた。
「女を、放っておくつもりですか？」
「……ハハハ！　確かにな！　なら先に――」
と、化け物が女主人との距離を詰めてくる。
女主人は衣服を半分ほど、脱ぎ捨て、スカートをたくし上げて女の色香を振りまきながら思った。
――掛かった！
化け物が手を伸ばしてくる瞬間、女主人は動いた。
「――――」
相手の背後に瞬時に回り込むと、懐からナイフを取り出し、そのまま化け物の後ろ首目掛けて全力で振り下ろす。

――獲った！
そう確信する。それほどに、完璧な一撃だった。
今まで生きてきた中でも最高の一突き。どんな魔物だろうと、これなら一撃で殺せる。
そう思っていた。そのナイフが、実際に当たる直前までは。
「――おお……？」
「なっ……!?」
――ガキン、と。
ナイフは化け物の後ろ首に当たる直前、結界のようなもので弾かれてしまった。
完全な不意打ち。防げるはずのない一撃を防がれてしまった衝撃に絶句する。
対する化け物は首の後を右手で掻くと、
「……ハーッハッハッハッ！　不意打ちとはやるな、女！　ここまでで一番いい動きだったわい!!」
「一体何が――くあっ!?」
化け物の手が、女主人の足を捕まえる。その握力に思わず悶絶しかける。
「こ、の……っ！」
再びナイフを化け物の目を目掛けて投擲。どんな生き物も、眼球を鍛えることは出来ない。
故に貫通するはずのそれは、しかしまたしても結界のようなものに防がれて床に落ちてしまった。
「……ハハハ！　悪くない！　悪くないが……相手が悪かったな!!」
「――か、はっ……」
そのまま床に叩きつけられると、一気に肺の中の空気が押し出される。
肋骨が折れた感触、口から血を吐く感覚。身体から力が抜けてくる。
「ハーッハッハッハッ！　さて、愉しませてもらうぞ!!」
「う……ぁ……」

覆いかぶさってくる化け物を涙で滲む視界で捉えながら、女主人は内心で告げた。
……ごめん、ね……ガイ……。
自分が買った少年奴隷。息子のように思っていた最愛の少年の事を想いながら、女主人は引き裂かれる痛みを味わった。

――悲鳴。
耳から聞こえるのは最愛の人の悲鳴。
馬鹿笑いをする怪物の笑い声。
――悲鳴。悲鳴。悲鳴。頭の中でそれらが反響する。
かつて聞いた叫び。柵の内側では日常だったその苦しみの声。
悪意の坩堝。止まらない痛み。終わらない苦しみ。
――悲鳴。悲鳴。悲鳴。悲鳴。悲鳴。悲鳴は止まらない。
耳を塞いでも。左側だけしか聞こえないはずの聴覚を塞いでも。
それらは止まらない。
見るのが怖い。逃げなければいけない。助けなければならない。
自分の大切な人を。
震える手で物置の戸を開き、その先を覗き込む。
悲鳴はその先から聞こえる。怖ろしい気配もその先から感じる。
見たくない。
だが、行かなければならない。
もう失いたくない。どうにかしたい。自分が犠牲になったとしても。
左目で覗き込む。唯一見える視界。その目で扉の先を覗き込む。
だが、その先には――
「いやぁあああああああああッ!?」
「っ!!!」
悲鳴。そこから聞こえるのは悲鳴だ。
「あがっ、かひゅっ、が、やっ、やめ、てぇ……ッ……」
「ハーッハッハッハッ！　誰が止めるか！　死ぬまで犯してやる！」

荒い息を漏らす怪物。馬鹿笑いをし、最愛の人に覆い被さり、血が流れる下半身に黒い何かを突き込むその姿。
その身体に爪を突き立てている。赤と白の液体で濡れたその姿。体中に青痣を作り、虚ろな目で苦悶の声を漏らすその人物。
それこそが、少年の新しい居場所だった、大切な――
「う……ぁぁ……」
化け物に犯される女性。それは、いつも優しげな表情で頭を撫でてくれていたあのひと。
そう。彼女は――
「う、あああぁぁぁぁ……!!」
気がつけば、そこで声を漏らしていた。
声を上げてはいけない。そう本能で防いでいたにも関わらず。
「――あん？　誰だ？」
「――！」
その声に反応して、化け物の顔がこちらを向く。
それだけで、恐怖が一気に押し寄せてきた。
弾かれるようにして、少年はそこから走り出す。
声を出していただろうか。どうやって、どこから逃げたのだろうか。
似た化け物に追いかけられたような気もする。無視されたような気もする。分からない。
分かるのは、ただそこから逃げ出したかったということだけ。
この場所から。この地獄から。この苦しみから。この恐怖から。この悪意から。どうしようもなく逃げ出したかった。
だから少年は走った。訳も分からず、自分の中の衝動に従い、本能のままにそこから逃げ出そうと走った。
この苦しみから逃れたい。逃げれば、何もかもが助かると、そんなことはあり得ないのに何故かそう思った。
逃げて、逃げ続ければ、助かると思った。また普段通りの日常に戻ると思った。
そうやって逃げて、逃げ続け――気がつけば、周囲の音は聞こえな

くなっていた。
「はぁー……っ、はぁー……っ」
体力の限界。身体が少年の足を止めた。
気がつけば木々が生い茂る森の中。
周囲には誰もいない。何もない。ただ草木があるだけだ。
そこでようやく、幾ばくかの冷静さを取り戻した。
だが取り戻したことで、再びその出来事を思い出した。
――悲鳴。
「ぁ……」
――怪物に襲われる最愛の人の姿。
「っ……うっ――」
身体の内側がざわつく感覚。饐えた匂い。
気がつけば、胃の中のものを吐き出していた。
ビチャビチャと地面に撒き散る吐瀉物。
だが全てを吐き出しても吐き気は止まらない。
気持ち悪い。もう何もかもが。
だが、いずれはその感覚も一旦は収まる。
するとまた思い出す。
――苦痛に喘ぐ女主人の姿。
「う、ぁ……」
――同じ様に殺されていく人里の人々。
「あぁ……!」
――誰も彼もが。死んだ。
「う、あぁ……!」
――自分の居場所は無くなった。
「あああぁぁ……ッ!!」
――その全てが夢ではないことに気づいた。
逃げ出せていない。その苦しみ。絶望。地獄からは全く逃げ出せていない。
全て現実。これほどに酷い事が現実で起きた。
――ガイは再び、全てを失った。

「うあああああぁぁっ……!!」
母を失った時と同じ悲しみ。久しく感じていなかった悲しみをガイは思い出す。
忘れていた。思い出したくなかった。この悲しみの味を。
大切な人の顔、仕草、思い出が思い起こされ、その度に深い悲しみが、絶望してしまうほどの悲しみが心を襲う。
痛みを伴う――死にたくなるほどの深い絶望の味を思い出す。
その喪失感は、以前よりも大きい。
幸福の味を一度でも憶えてしまったガイの心は、以前よりも格段に脆くなっていた。
もう自分には何もない。
全て、全て、あの怪物たちに奪われてしまった。
あの悪意に。大切なものを何もかも。
だから――
――許せない。
どくん、と強く鼓動が脈打つ。
それは初めて感じた――〝怒り〟。そして、〝憎しみ〟。
――アア、許セナイ……憎イ……。
更に強く脈打つ。
それは今まで一度も感じなかった右側の感覚。ナニカの産声。
――そうだ……許せない……!
また脈打つ。
ガイの心の声に共鳴するように。
――ソウダ、怒レ……。
強く脈打つ。
それは何の声か。
――本能ヲ解放シロ……!
脈打つ。
自分の声だ。他ならぬ、自分の心の声だ。
――コノママデ良イ筈ガナイダロウ……?
脈打つ。

一体これは何だ？　本当に自分なのか？
――アア……俺ハオ前ダ……。
脈打つ。
違う。これは自分ではない。
「ぁ……」
そこで気づく。
悲しみに濡れていた筈の自分の顔。
その口元の右側が――綺麗な弧を描いていることに。
――アレガコノ世ノ正シイ生キ方ダ……。
「……あぁあああ!!」
地面に頭を叩きつける。
何だこれは。この声は。一体誰だ。
――女……本当ハ、俺ガアアシタカッタ……。
「……違うッ!!」
――ナノニ、アノ化ケ物に奪ワレタ……オ前ガ、モタモタシテイルカラダ……！
「うるさいっ!!　黙れッ!!」
そんな筈はない。訳が分からないことだ。
――ジャア、何故オ前ハ興奮シテイル……？
「……は……？」
内なる声が、そう指摘する。
自然に、右手が動く。己の股ぐらを差す。
そこは、あの化け物と同じ様に、起立していて――
「う、あああああああああああああああああああああああッッ!!!」
頭を押さえて掻き毟る。
地面に頭を叩きつける。
「消えろッ！　消えろッ!!　こんなのは、僕じゃないッ!!　僕はッ！
僕は……ッ!!」
――馬鹿ナ事ハ止メロ……気絶スルゾ……！
「うるさいッ！　お前の言うことなんか聞かないッ！　お前の言うことなんか……!!」

――グッ、頭ガ……止メロ……才前……ハ、俺、ダ……！
「違う……僕は、僕……で……お前、は……！」
頭から流れる血。痛みを無視して自分の頭を殴りつける。
そして気がつけば、声は聞こえなくなっていた。
だが代わりに、意識も朦朧とし始め、
――僕、は……。
己の中に生まれた新たな意識。もう一つの人格。
その誕生を自覚しながら、ガイは森の中で気を失った。

居場所を探して

――大陸で最も危険な場所とは、一体何処だろうか。
それは人によって色んな答えが考えられる。
ある人はこう答えるだろう。大陸西側にある魔物の森だと。
狂暴な魔物が跋扈する前人未到の地は、力無き者の侵入を許さない。即座に魔物の餌となる危険な場所だ。
ある人はこう答えた。大陸中央部にある世界一の標高を誇る山、翔竜山だと。
魔物だけではなく、狂暴なドラゴン種の住処となっているその山を踏破した人間はいない。
またある人はこう答えた。東の島国、ＪＡＰＡＮ。その中でも鬼が大量に湧くという死国だと。
そもそもＪＡＰＡＮが危険な土地として知られている。妖怪や鬼、地震など、人を殺すものは数多く存在する。
また別の人はこう答えた。大陸北部の極寒地帯こそが、最も危険な場所だと。
吹雪が吹き止まない極寒の大地は、普通の人間では直ぐに遭難し、命を落としてしまう危険地帯だ。
他にも危険だと呼ばれる場所は多々ある。奈落、蝦夷、魔人の街、地下迷宮など、この大陸では危険な場所には困らないほどに沢山の危険地帯が存在する。
だが、そんな中で誰もが納得して、最も危険な場所だと推す場所がある。
少なくとも、〝人間〟であれば近づきたくもない。出来る限り離れていたいと思うその場所。
その場所の名は――――魔王城。
大陸東部に存在する魔王の城。世界を支配する魔軍の本拠地にして、最恐と称される魔王が住まう場所。
人間にとってその場所は、正しく地獄を体感出来る場所である。

魔王城二階。
そこには、魔王が配下と謁見するための場、玉座の間が存在する。
居館とも呼ばれるそこはかなり広く、フロアに足を踏み入れても、その先にある玉座はまだ遠い。大柄な魔物や魔人にも配慮して作られたと思われるその場所は、侵入者からすれば一種の迷宮のようなものに映るだろう。
しかし、視界では玉座が遠くとも、音では確かに玉座が近くにあることを教えてくれる。
定期的に聞こえてくる人間の悲鳴や呻き声。それらは警備についている魔物ですら戦々恐々としてしまうほどだ。そもそも通常の魔物兵では、その先にいる魔王や魔人が発する常軌を逸した圧迫感で先には進めない。彼らが意識的にその重圧を抑えてくれればいいが、生憎とそれを抑えてくれるような優しい人物は殆ど存在しない。
故にこのフロアに足を踏み入れられるのは、魔軍でいえば最低でも魔物隊長や魔物将軍などの高位の魔物でなければ物理的に不可能である。
仮に人間がこの場所に侵入するのであれば、それなりの強さと胆力を持った人物でなければならないだろう。耐えられたとしても、そこから感じる異様な気配を感じて、直ぐに引き返すのが普通だ。
そもそもこんな場所まで入り込んでくる時点で普通ではないのだが、人間とは過去の歴史から学習出来ない愚かな種である。何か高尚な使命――それこそ、人間を解放する。魔王を倒すといった、勇者のような高い目標と信念を持って魔王城に挑むのだろう。
何らかの勝算、伝説と呼ばれるような武器や防具。魔法などの技術も含めて、何かがあったからこそやってきたのだと推測は出来る。
だが、思う。真に魔王や魔人の恐ろしさを、強さを理解出来ている者がいるならば、そもそもここには来ないと。
本当に魔王並の実力があったのならともかくだ。あくまで仮定のあり得ない話だが、それくらいでなければ、この魔王城に真正面から乗り込んでくる奴など、自殺行為が過ぎる。百回自殺してお釣りが来

るレベルだ。
「――つまらん。無謀な人間は嫌いではないが……馬鹿も過ぎると不愉快だな……それ」
「ひぎっ、いあああああああっ！　あああああああああ！」
「やべでぇ……だずげて……ッ」
「あ……あぁ……」
「……」
そんなことを、玉座の間の惨状を見て、偶然その場に居合わせた魔人ケイブリスは思った。
魔王城の謁見の間。大陸の支配者にして全ての魔族の王である魔王ジルが御わすその場所。
つい今しがたから、その場所は魔王ジルが日課の人間虐めを行う拷問場となっていた。
玉座に腰掛け、肘掛けに肘を立てて頬杖をつく魔王ジルは、つまらなそうに磔にされた人間達を見ている。
異常に長い水色の髪に、手足が黒く、不思議な紋様が浮かんでいる全裸の美女。見た目だけなら男が幾らでも寄ってきそうな彼女が、魔王ジルだ。
だが、その存在感はこの場にいる魔人全てのものを足したとしても、なお上回る。
そう、今ここにいるのは魔王ジルと魔人ケイブリスだけではない。魔王ジルが腰掛ける玉座の横には、
「全くもって愚か極まりないですな……ジル様の言う通り、不愉快極まりない……ふんっ！」
「あぁあああああああああッ!?　がひゅっ、く、うぶ……っ！」
一人は、ケイブリスと同じ魔人四天王。
岩のような肌を持つ巨漢の男。老人のような白い髪を持ったその魔人は、魔王ジルの側近でもある地竜の魔人――ノス。
その実力は魔人の中でも上から数えた方が早く、魔人四天王の中でも一番に名前が挙げられる存在で、魔王ジルに強い忠誠を誓っている男でもある。

そんなノスは、愚かにもジルに挑みかかった人間達をもう片方の側近と共に軽く一蹴すると、そのままジルの命令に従い人間達を磔にし、そのままジルと共に人間ダーツに付き合っていた。

そしてもう一方、

「……」

「あああうっ！　うぐっ、かはっ……！」

無言のまま、淡々とジルの命令に従って人間を痛めつけるのは、誰もが知る魔人筆頭にして魔軍参謀だ。

金髪灼眼の美丈夫。魔物界の英雄と名高い最強の魔人にして、魔王ジルの腹心である魔人――レオンハルト。

人間を一蹴し、命令のままに動いているレオンハルトの表情は微動だにしないし、口すら動いていない。ただじっと、人間達をその鋭い威圧的な視線で見ているだけだ。

まあ、ここまで見れば理解出来るだろうが、この人間達は最高に運が悪かった。

……よりによって、この面子がいる場に乗り込んでくるとか……幾ら何でもアホすぎる……人間の中ではあまりにも絶望的過ぎて自殺でも流行ってんのか？

ケイブリスは玉座からちょっと離れた場所で、磔の調整をしたり、一緒になってちょっと虐めたり、死んだ人間を横に捨てたりと、完全に雑用をしていた。

これはケイブリスとしても運が悪い。自分がいつも定期的にやっている謁見に、偶然この人間達がやって来ていたのだ。

玉座の間にやって来ると、ちょうど何名かが逃げようとしていたので軽くはたいてそれを阻止し、そのまま虐めに参加しているのだが、状況を見て、あまりにも人間が馬鹿過ぎることと、運が悪すぎること、それに加え、この状況の恐ろしさに戦慄し、色んな意味でげんなりとしてしまっていた。

やられている相手が自分じゃない上に人間なのでどうでもいいが、仮に自分だったとしたらやはりあり得ないことだ。

魔王ジルだけでも勝てないどころか逆らえないというのに、魔人四

天王では最強と言われる魔人ノスと、魔人最強の魔人レオンハルト。
この三人に勝負を仕掛けるとか、幾ら何でも頭が悪すぎる。それとも狂人か何かだろうか。
確かに、地面に転がっているそれなりに強力そうな武器やらアイテムやらはあるが、それが例えどんな効果だろうとこの三人に通じるかは甚だ疑問でしかない。それらが全て砕かれ、断ち切られていることからも明らかだ。
状況的に何となく推察出来るが、おそらく、対面した時点で一撃離脱でも考えたか、もしくは使ってみて全く通じなかったから逃げようとしたかのどちらかだろう。
そしてノスとレオンハルト、たまたまジルに貢物を渡そうと来ていたケイブリスに止められたということだ。
はっきり言って、どれだけ強力な人間が徒党を組もうとも、これだけの面子がいる魔王城を落とすことは不可能と言っていいだろう。仮に闇討ちや襲撃を仕掛けるにしても、誰かが一人になった時を選べばいいというのに、複数まとめて相手にしようというところが現実の見えていない人間らしい愚かさだ。
「ふん……せっかくだ。壊れるまでは遊んでやろう」
「いぎぃっ!?　やべ、で……！」
「かといって簡単に壊しもしない。なに、物理的に死にそうになれば回復してやろう。――ほら、次はレオンハルトの番だ」
「……はっ」
「あ゛、あ゛、あ゛、ッ!!　いだいぃ……っ！　じぬ……死ぬぅ、ぐぅっ！」
「ふふ、ジル様の慈悲に感謝するのだな……出来る限り、長く生かしてやろうというのだ。嬉しいであろう？」
人間ダーツに興じているジルやレオンハルト、それとノスを見て、ケイブリスは若干引き気味にそれを眺める。
ジルの作った魔法の棘で、磔にした人間を殺さないように串刺しにしていくという悪魔のゲームだが、それ以上にジルの気配の方がケイブリスには恐ろしかった。
……早く帰りてぇ……！　ジルだけでも怖くてしょうがないのに、

うざってぇノスはいるし、それにレオンハルトも今日はなんかピリピリしてるしよぉ……！

ジルとノスはいつも通り怖すぎる＆陰気でウザいのコンビだが、レオンハルトの方は普段よりも無口かつ、鋭い気配を感じる。

まあ、こういった人間虐めがあまり好きじゃないことは知っているので、口数が少ないことはいつもの事かもしれないが、どうにも何かを気にして上の空にも見えるのだ。

それが何かまでは分からないが、ひょっとするとレオンハルトの意識は、この場にはないのかもしれないとも思う。

もしくは単純に、嫌なことでもあったか、だ。だとすると機嫌が悪いということなので、ケイブリスとしてはますます帰りたくてしょうがない。

「む……一人死んだか。仕方ない――おい」

「は、はははい、ジル様！　今直ぐ片付けさせて頂きます！」

ジルに名前すら呼ばれずに命令され、ケイブリスはきびきびと雑用に勤しむ。世界広しと言えど、魔人四天王の一席を敷く魔人ケイブリスを顎で扱き使えるのはこの場にいる面子くらいだ。

死んだ人間を磔から下ろして適当にその場に捨てようとしながら、横目でジル達を見る。すると、

「つまらんな……適当に遊んだら部屋にでも行くか。レオンハルト。お前はどうしたい？」

「はっ。私で良ければ、お供させて頂きたく思います」

「……くくく、お前も、昔と比べれば多少は素直になったな。全く、中々に唆らせてくれる……」

レオンハルトの従順な態度と発言で、ジルの機嫌が幾分か回復する。それを見て、

……相変わらず気に入られてんなぁ、おい。

魔王ジルのレオンハルト贔屓はいつものことであるため、最早魔人の間では周知の事実だし、見慣れた光景でもある。羨ましく思う者もいるだろうが、ケイブリスとしてはあのジルと一日の大半を共にするというのは、恐ろしすぎて羨ましくとも何ともなかった。何でも、こ

こ最近はジルの命令もあって仕事以外の時は四六時中ジルと一緒にいるらしい。
その部分だけはレオンハルトに同情するぜ、と内心でそう呟きながら、ケイブリスは視線を向けるのを止めて雑用に戻っていく。このジルやレオンハルトに敵うような人間は絶対に現れないだろうな、とも思いながら。

――気がつけば、そこは森の中だった。
「……っ」
化け物の襲撃から辛くも逃げ切った少年、ガイは己の身体に走る鈍い痛みを自覚しながら立ち上がる。
昨晩、少なくとも数時間は必死に走り抜いたせいだろう。おそらくは筋肉痛。痛みの原因はそれだ。
だがそんな身体的な痛みなど、今のガイにとってはどうでもいいことだ。
深い悲しみは未だ消えていない。胸がズキズキと痛む。
しかし現状をどうにかしなければならないのが現実。このままでは野垂れ死ぬだけだ。数年前、牧場から逃げ出した時とは違い、その程度の考える力は身に付いていた。
だからといって、何をどうすればいいのかは見当もつかないが、とにかく何かをすれば――
――やっと目覚めたか……。
「っ……！　お前……！」
心の中の声。それは昨晩、気絶する前に聞いたそれだ。
しかも昨日よりもはっきりと声が聞こえる。そんな声の持ち主に、ガイは怒りを乗せた声を宙に乗せる。自分の中に向かって、
「消えろ……！」
自分の胸を、その右側を叩いて言う。触覚以外の感覚はない場所だ。だが、
――っ、止めろ馬鹿……！　俺の身体を傷つけるな……！

「うるさい！　これは、僕の身体だ……！　お前は喋るな……！」
例え感覚を失っていようが、右側も自分の身体であることには違いない。
強い意志を以てその右側の何かを追い出そうとする。同時に、頭や胸が痛む。すると、
――くっ、ぐぬぬ……今はまだ、無理か……！
そんなことを心の中で言う何か。続けて、
――だが、忘れるな……！　お前は俺だ……！　この身体も、半分は俺のものだ……！　いずれは、俺、が――
「っ……声が、収まった……？」
そんな言葉を最後に、右側からの、心の中で発生する声は収まった。
同時に痛みも収まる。ガイは自分の両手を見ながら改めて確認する。
そうして内側の問題も含め、自分の身体を確認し終えると、周囲を見渡して、改めて自分が何処にいるのかを確認した。
「ここは……」
そこは――森。
一面の緑。新緑で満たされた場所。
生い茂る草木。木々の枝葉からは僅かに木漏れ日が差しているが、何処を見ても人の手が入った場所は見られない。
大自然そのままの光景。人里があった森とはまた別の、それも格段に広いであろう森林地帯だ。
「……とりあえず、歩かなきゃ」
人がいる場所を探さなければならない。そのために歩き出す。
前に聞いたことがあるのだ。人里は、魔物から隠れ潜むために、山奥や森の奥に存在することが多いと。
それにもしかしたら襲撃された里の生き残りがいる可能性がある。
何をするにしてもまずは現状の把握。そして目的を設定して、そこに向かうための道筋を順番に辿ることだ。
酒場に来ていた常連の冒険者からは確かそう教わった。それに、女主人からも――

「……」
ガイはそこで思考を止める。
幼い頃と同じ、深い悲しみに襲われた時にそれを止める方法を自然に行う。
感情が消えたような感覚。牧場で生きるために自然と行っていたそれらは、今もガイの中に染み付いていた。
そうしてゆっくりと歩き出す。まずは真っ直ぐ。森の中の歩き方など分からないし、どれが正しいのかも理解してないが、とりあえず移動しなければならない、といった己の中の観念に従って歩き出す。
一歩一歩、木の枝や地面の土を踏みしめて歩く。だが直ぐに、
「……！　あれは……」
大きい木の影に隠れる。
その理由はガイの視線の先。人間とは違う異形の生き物――魔物の存在にあった。
人間の足が生えたイカの様な魔物や、羽の生えた小さい虫のような魔物など、魔物がそれなりに生息している様で、
「……見つかったら、駄目……」
魔物は人間よりも強い。教えられた知識だけでなく、それを実際に目の当たりにした今は、よりその危険性を感じられる。
屈強な男、武器を持った冒険者や魔物討伐隊の隊員などであれば魔物を倒す術も心得ているというが、生憎とガイにはそれは分からない。
今はまだ小さい身体を駆使して、魔物に見つからないように隠れながら森の中を進んでいく。
何となく、途中で見つけた丈夫そうな木の棒を手に持ち、いざとなったらこれを使おうと心に決める。棒を手にした時、ちょっとした高揚感のようなものを感じてしまい、
「……えい、えい」
軽くぶんぶんと振り回してみる。
何となく、大人になったようでそれは楽しく感じてしまったが、直ぐにそんな場合ではなかったことを思い出して歩き出す。そして今

度は、
「……お腹空いたな……」
腹が減った。
いつもであれば、朝食。もしくは昼食も食べ終わっている頃かもしれない。
だというのに今は何も口に出来ていないのだ。空腹には幼い頃に慣れていると思ったが、最近ではそれなりに腹を満たせることが多かったのもあって、久し振りに腹が減ってしょうがない感覚を思い出す。
「けほっ……喉も……」
加えて喉も渇いた。
水を飲みたい気分だが、当然、水はない。
雨でも降ってくれれば、昔のように雨水を飲むことも出来るのだが、そんな気配も感じない。
我慢してひたすらに歩き続ける。
目覚めてから一時間か二時間は経っただろうか。それでも周囲に変化はない。森の中だ。
だが自分には変化があった。それは、
「痛っ……」
足に痛みを感じる。昨晩も含めて長時間歩き続けてきたせいだろう。
少し靴を脱いで確認してみると、擦れて皮が剥けているし、赤く腫れてるところもある。
しかし、だからといって立ち止まっている訳にもいかない。再び靴を履いて歩き出す。森の中は小石や木の枝、苔なども多い。素足で歩くよりはマシだ。
再び一時間か、もしくは二時間。ずっと歩き続けていて変化もないので、時間の感覚も曖昧だ。日が傾いているということは時間がそれなりに経っている証拠だとは思うが、それがどれくらいなのか理解出来るほど知識はない。ガイはまだまだ勉強不足であることを自覚した。

そして何より、体力が尽きてきた。歩いているだけなのに息が乱れる。
せめて食べ物――いや、水でもあれば良いのだが、水は手元にない。井戸があり、いつでも水が飲める人里は恵まれていたのだと改めて理解する。
そして、もうすぐで日没であることも理解する。日の色が夕日の色に変わってきた。夜になるまでにどうにかしなければマズいことは何となく理解しているが、だからといってガイには歩き続ける以外に出来ることはない。今更ながら、夜の間に魔物に襲われなかったのは運が良かったと思う。
一度、何処か隠れられる場所で休んだ方が良いかも知れないとも思う。
「はぁ……はぁ……」
しかしガイは歩き続けた。
理由はガイ自身も理解出来ない。あるいは、思考する力もあまり残っていなかったのかもしれない。
ただ歩く。緑の中を歩き続ける。
歩き続ければ、森を抜け出せるか、もしくは人里に辿り着くだろうと信じて。
ガイには遭難に関する知識はない。森の中を目印もなく、闇雲に歩き続けることが自殺行為だということは知らない。
もっとも、知っていたところでこの状況を脱せられるかどうかは微妙なところであったが、少なくとも知っていれば、ここがどういう場所かを理解することが出来ただろう。
知る人は知っている。そこは大陸中心部の大森林地帯。
「……あ……」
茂みを掻き分けて進んだ先。深い森の奥にあるその場所は、
「青い……人……？」
空気が変わる。澄んだ空気を感じる。人の気配もだ。
流れる水の音。人の話し声。視界で確認してみれば、そこに水色の髪に長い耳を持つ綺麗な女性達の姿。

それは子供も大人も、皆同じような髪色と耳をしており、額には青や赤といった綺麗な宝石のようなものが煌めいている。
そして誰もが整った容姿をしていて、男性が見当たらない。
ガイには知る由もないその場所。幻想的なその光景に目を奪われる。
だからだろう。近づいてくる足音に気づかなかったのは。
「――――誰？」
「っ……！」
女性の声がすぐ近くで聞こえ、ガイは身を縮こまらせる。魔物やあの化け物ではないことは確かであるはずだが、この時のガイには、未だそのトラウマが残っており、知らない人に急に声を掛けられただけでもビクついてしまった。
――逃げなきゃ。咄嗟の判断で固まった身体を無理矢理動かそうとする。しかし、
「あうっ……！」
やはり体力に限界が来ていたのだろう。足がもつれて転んでしまう。
身体を地面に打ちつけ、膝を擦りむいてしまう。そんなガイに向かって、それを目撃した女性は怪訝そうに目を細め、
「……人間の子供……？」
「っ……」
「……随分とボロボロのようだけど」
近寄ってガイを見下ろしたその女性は、クールな印象を感じさせる長身の美女だった。
ストレートの長い髪。額には赤いクリスタル。全体的に引き締まった綺麗な身体のラインをしている。
ガイも思わず見惚れてしまうほどの美女。もっとも、ここで見た女性は皆見惚れてしまうほどの美貌ではあったのだが、
「それで、貴方はなんでここにいるのかしら？」
「……逃げて、きた……」
「逃げて……ね。それじゃあ親は？」

問われ、ガイは一瞬脳裏にちらついた光景をかき消しながらも答えた。声は細く、
「親、は……」
「……そう。何となく分かったわ。身寄りのない子、ということね」
「……」
呆気らかんと、その女性はガイの状況を理解して口に出した。
ガイは何も言えずに無言となる。だが女性の方は、顎に手を当てて何かを考えつつ、小声で、
「……人間か。まあ、見た目も良いし、暇潰しにはなるわね」
「……え……？」
「何でもない。それより貴方――」
と、ガイが問い返すより前に、女性はガイの身体を持ち上げながら言った。脇に抱え込むように雑に扱いながら、
「行くところがないなら私の家に来なさい。――私が飼ってあげるわ」
彼女はガイにとって、新たな転機となるその言葉を発した。
ガイが思わず困惑しながらも、
「飼う……？　そ、それより、ここは……？」
ここがどういう場所なのかを問う。明らかに普通の人間には見えなかったからだ。
すると女性は言った。ガイを抱えたまま歩き出して、
「ここはカラーの暮らす里、〝ペンシルカウ〟で、私はこの里の女王の側近、ミストラル・カラー。そして、貴方の飼い主になる人よ。――理解した？」
「……カラー……？」
「ああ、そこから説明しないといけないのね。とても面倒だけど……飼い主として最低限の事を教える必要はあるわね」
「あ、あの……？」
そもそも、飼われるというのはどうなのだろうと訊ねてみようとする。しかし、
「飼い主が考え事をしてるのだから黙りなさい」

「え、でも……」
「それと、私からの命令に対する返事は基本〝はい〟以外認めないわ」
「うっ……それは――」
「――返事」
「は、はいっ」
「よし、良い子ね。そうやって良い子にしていればそれなりに可愛がってあげるから努力しなさい」
有無を言わせないその態度に、ガイも思わず従ってしまう。
そもそも幼い頃は牧場、人里でも、良くしてくれたとはいえ、立場としては少年奴隷であったガイだ。牧場で化け物相手ならともかく、また飼われることに対して、そこまでの忌避感は覚えない。
それに一応は助かったということになるのだろう。ガイはその安心感から、疲労が一気に押し寄せ、眠るつもりでそのまま意識を手放すことにした。

これから先

大陸北部。そこは万年雪の極寒地帯であり、生ある者の侵入を拒む天然の要害だ。
極度の低温により吐息は白くなり、身体から徐々に熱を奪い、体温を低下させていく。視界は一面の白。酷い時は一寸先も見えないほどの吹雪によって、自分が今何処にいるか、方向の識別すら不可能である。足元どころか、場合によっては体ごと埋まってしまうほど雪が積もっていることもあり、単純に進むだけでも困難でもあった。
その極地ともいえる気候の中故、そこには人どころか殆どの生物が住み着かない。居るのは寒さに強い抵抗を持つ一部の魔物くらいであり、冒険者や魔物討伐隊でもよっぽどの物好きでなければ近づかないし、魔軍もこの辺りは支配を半ば放棄している。
だがそんな中、その場所を歩きながら会話をしている二人組がいた。それは黒いレオタード風の衣装を着た長い黒髪に長い耳の女性と、赤い軍服と眼帯を身に着けたガタイの良い男の二人で、
「……これ、道合ってる？」
「ええ、おそらくは地図通りかと」
微妙な表情で、黒髪カラーと呼ばれる使徒――ハンティは、地図を確認している使徒仲間であるリーに道を確認する。
順調と言われたことで、ハンティは再び前を向いて先へ進む。リーの方も表情は変えない。それでもハンティの方は多少の呆れを含んだ様子で肩を竦めると、
「……それにしても、このような場所に出向くことになるなんてねぇ……」
「……ハンティ様は不服ですか？」
「少なくともピクニックには不向きだよね。修行にはもってこいだけどさ。レオンハルトも、あたしらに任せないで自分で行けばいいのに。普段から行き慣れてるっぽいしさ」
多少の不満。それを言葉に乗せて愚痴とし、同僚の使徒に放つ。しかし、

「……まあ、レオンハルト様はよくサイゼル様やケイブリス様をここに連れて来ると聞き及んでいます。どちらも、〝涼しくていい〟、〝強くなるにはもってこいですね！　ありがとうございます！〟と声を震わせながらお礼を言っていたりするそうですから、出かけ先としては好評かと」
「……前者はともかく、後者は完全にご愁傷様だよね。震え声が実際に聞こえてくるようだよ」
　でもまあ、とハンティはそこで不敵な笑みを浮かべ、
「実際に強くなれるのは良いことだよね。ここは厳しい環境なだけに、丸一日留まっているだけでも強くなったのが実感出来るし、いい修行場だよほんと」
　時折レオンハルトとの模擬戦を、ここで行うことすらあるハンティは、面倒だと言いながらもここに来たことを喜んでいる節がある。それを見抜いたリーは、少し間を置きながらも、
「……左様ですか。私も――いや、今度軍の訓練の一環として、氷雪地帯の踏破、遊撃訓練を具申しますか。レオンハルト様がやっていたのであれば、私や、配下の者共も喜んで参加することでしょう」
「……魔物兵が耐えられるかどうかは微妙だけどね。ここに丸一日留まったところで、普通の人間ならレベルアップじゃなくて死ぬだけだろうしさ」
「しかし寒さ程度で死んでいては、レオンハルト軍の名折れのような気が……」
「いやまあ、寒さだけじゃなくてここには厄介な魔物も多く生息するしね」
　ほら、とハンティは寒さにそこまで堪えた様子もなく平然と前方を指差す。するとそこには、
「……あの白いモコモコした物体は……魔物ですか？」
「あれは雪うさぎだね。さすがのリーも知らないか」
「申し訳ありません。この辺りの事については資料も少なく……とはいえ、名前くらいであれば頭に入っておりますが、あれが凶暴さで知られる雪うさぎだと？」

「ああ。見た目はアレだけど結構唆る相手だよ？」
と、口元に笑みを浮かべるハンティ。それに対し、リーは少し苦笑いをしていた。
「……まさか、あんなナメクジのようなモンスターが雪うさぎとは。あれを唆ると言う感性は私には理解しかねますが……レオンハルト様であれば唆ると言うのでしょうな。であれば、私も感性を磨かねば……」
「見た目よりも面白いのは奴らの獰猛さ。あの赤い目から発射される光線は相手を麻痺させ、行動を封じている間に触覚から強酸性の液体を分泌し、獲物を溶かしてズルズルと吸い込んでいく――とまあ、人間は良くあれの餌食になってるそうだね」
「なんともグロテスクな……」
「好物は女の子モンスターのフローズンらしいよ。ユキが前に文句言ってたね。レオンハルトから聞いた話だと、サイゼルと一緒に付いてきて遭遇した時に、同胞の恨みとか何とか言って、逆に食い返してたみたいでさ。頭おかしいよね」
「……何ともまあ、個性的と言いましょうか」
その雪うさぎの群れが近づいてくるに連れて、リーは何とも言えない微妙な表情になる。別にあのキチガイ使徒の行動に頭が痛くなった訳ではない。どうとでもなるのだろうが、それでもこの数のモンスターは面倒な事に違いなかったのだ。
しかも、
「……なにか数が多い上に、後ろの方から何か巨大な魔物までやって来ているのですが……」
「――あっ、今日は運が良いね。〝冬将軍〟まで来るなんてさ」
ハンティが若干声を浮かれさせて告げた先には、白髪で肌の白い老人の様な見た目をした巨人がおり、真っ直ぐこちらへ向かってきていた。
「冬将軍というと……大型の魔物でしたか」
「ここらじゃよく現れるよ。あれが現れると吹雪が強くなるのが特徴でさ。雪うさぎとセットで現れることは滅多にないけど、氷雪地帯の

名物を二つ一緒に見れるなんて、今日は良い日だね」
「普通に考えたら最悪では？」
　普通の人間的には即死コースの凶悪な魔物二種類に遭遇しながらも、ハンティは不敵な笑みを浮かべている。それに対し、リーは白い息をつき、
「どうしますか？　逃げることも難しくはないでしょうが……戦いますか？」
　判断は任せるとそう言ったつもりなのだが、ハンティはそれに対して頷きながらも、
「まあ、戦った方が愉しいからね。それに冬将軍を放置してると吹雪が強くなってきてさすがに寒いし……」
「そうですな。……と、そういえばレオンハルト様が寒さ対策の方法を言っておりましたので、それを実践するのに良い機会でもありましょう」
「……なんかレオンハルトが言ってたってだけで微妙に嫌な予感がするけど、一応聞いとこうか。どんなやつ？」
　はい、とリーが頷く。本を懐にしまい、拳を握りながら、
「――寒いと思うなら、体温を下げなければいい」
「……さすがに意味不明過ぎて言葉に困るんだけど。この軽くマイナス３０度は下回っているこの場所で、どうやって体温を下げずにいればいいと？」
「はい。要は、魔法などで物理的に凍らされるならともかく、気候程度の弱い刺激くらいであれば自力で体温調節をしてしまえばいいだろうとのことで。自力で凍傷にならないように身体を温めることさえ出来れば、寒さ如きは敵ではない――そう仰っておられました」
「……あの馬鹿は常識ってものを忘れちゃったのかな？」
　絶句もツッコミもしなかったハンティはまだ話についてこれただけ良かった方だろう。
　しかしそう問い返されてもリーは全く動じなかった。更にそれを上回る論を口にする。
「理論や常識などに囚われて己の限界を狭めるな――とのことで」

「……うわー、レオンハルトなら言いそー」
「実際、私もそう思います。その言葉に強く感銘を受けまして……並の人間や魔物であっても不可能な事はないと知りました」
今度こそハンティは半目で呆れ返る。雪うさぎの群れと冬将軍に囲まれてることも忘れて。
いや、何を言われても無理なものは無理だと思う――そんな言葉を飲み込み、代わりに捻り出した言葉は、
「……レオンハルトは魔人だし、私らは使徒だからともかく……並の人間や魔物だと難しい気もするけどね」
「確かに、魔人の方々の抵抗力であればそもそもこの程度の寒さで音を上げることはないでしょう。しかし、耐性をつけるという意味ではレオンハルト様と同じ事が出来るはず。レオンハルト様が言うように、出来ないと最初から諦めて掛かれば何も成せはしない」
「いやー……どうだろうねぇ……」
熱くなってきたリーの熱弁に、ハンティは冷ややかに答え始める。
しかしリーの口は止まらず、
「いや、人間であっても魔物であっても誰でも出来る可能性はある。レオンハルト様程の高みには届かずとも、レオンハルト様を目標に、レオンハルト様の様に目標に向かって邁進すれば必ず。それに、剣王伝にもこう書いてあります。レオンハルト様の幼少期は決して恵まれてはおらず、己の努力で王の座を勝ち取ったと」
つまり、とレオンハルトへの忠誠を一種の信仰レベルまで捧げているリーは唱える。
「レオンハルト様は、その足跡は……我々に夢を与えてくださっているのだ……！　レオンハルト様ならば出来る。レオンハルト様ならば、諦めなければ何でも出来る。そして我々のような凡夫も、レオンハルト様には決して届かずとも、諦めなければ、その足元くらいには絶対に届くのだと……！」
「……アー、ソウダネー。レオンハルト様、スゴイネー」
ハンティが最早、ツッコミを放棄する。何でもかんでもレオンハルトを基準にするのはどうかと思うが、信仰の自由があるのでそこにつ

いては何も言わない。
　ただ半目を向けながらリーの熱弁を話半分に聞く。
「思い返してみれば、私もレオンハルト様を信じて前に進み続けたからこそ、魔物将軍から魔物大将軍になり、こうして使徒にまでなれたのだ……！」
「……じゃあ人間が、レオンハルトに届く可能性はあると思う？」
「む……」
　ハンティはリーを正気に戻すために敢えてそういうことを言ってみる。だが、実際に気になっていたことでもあったのも確かだ。
「レオンハルト自身、そういう相手を待ち望んで――いや、まるでいつかそういう輩が現れるって確信してるみたいだけどさ。ぶっちゃけ、あたしとしては幾ら何でもそれはないって思うんだけど。そりゃあ、人間贔屓はあたしとしても良いんだけどさ。戦いの相手としては……」
「……私としても、それは難しいかと思います。レオンハルト様の考えを否定する気は全くありませんが……レオンハルト様に匹敵し、ましてや上回るような存在など……」
　リーとしては、信仰を揺るがすほどのものなので、簡単には認められないのだろう。
　しかしとはいえ、
「……ま、石丸やあの勇者みたいな怪物が生まれてくる可能性もあるから一概にあり得ないとも言い切れないけどね」
「む……であればやはり……かの者達も、剣王伝の影響は少なからず受けていたはず。つまり、レオンハルト様のように努力したからこそ、あそこまで至れた。レオンハルト様という英雄に惹かれたからこそであるなら、やはり彼らも同志ということに……？」
「なんでそうなるのさ……」
　リーが再びぶつぶつと頭おかしいことを言い始めたので、ハンティが呆れる。
　そうしている内に、雪うさぎを何十匹かまとめて吹き飛ばしたハンティは、ふと後ろを見て、

「――あ、リー。後ろ来てるよ」
「――む！」
冬将軍がリーに向かって襲いかかろうと腕を振り上げていた。
しかし直前でハンティに声を掛けられ、リーが即座に後ろに拳を放つ。
すると冬将軍の身体の中心が、拳によって穴を開けられ、
「ふむ、感謝します。同志ハンティ様」
「同志言うな。あたしは別にレオンハルト信者じゃないっての」
と、言いながらも、冬将軍を一撃で倒したリーを見て、ハンティは目を細める。
それは完全に、獲物を見つけた竜の眼差しで、
「……ねえ、リー。任務が終わって戻ったら、ちょっとあたしと模擬戦でも――」
「……申し訳ありませんが、私はレオンハルト様に忠誠を誓ってはいても、ハンティ様の戦闘に付き合えるほどにゴ……ではなく、腕に自信がありませんので……」
「今ゴリラって言いかけたよねぇ!?　あんたまで遂にそういうことを……！」
「お、おおおっ!?　お、落ち着いてくださいハンティ様!?　誤解です！
私はゴリラと言おうとしたのではなく、ご……ご……そう、豪腕と言おうとしたのです！　魔物将軍や配下の兵の間でもハンティ様の豪腕ぶりは有名でしてな！」
「……へぇ？　皆どんな風に言ってるの？」
「それはもう皆、口を開けばゴリラゴリラと――ハッ!?」
ハンティの誘導尋問に引っかかったというか、勝手に墓穴を掘ったリーが顔を青くする。使徒になって大将軍時代よりも落ち着いた振る舞いを見せるリーには珍しい動揺の仕方だった。
だが、動揺してもおかしくないほどに、ハンティが恐ろしかったのも事実で、
「ふ、ふふふ……その狼狽えっぷりだと、あんたらまで影でそんなことを言ってたってことだよねぇ……？」

「ち、違います！　ご、ゴリラと言いましても、その強さだけを例えて言うのみで……むしろ、人気で言えばファンクラブが存在するほどにハンティ様は兵の間で大人気で――」
「へぇ……ちょっとそれも含めて、今度〝教育〟してあげないとねぇ……」
「……わ、私も、その……教育されてしまうのですか？」
「あはは！　逃げてもいいよ――逃げられるものならねぇ……！」
「ひっ!?」
ハンティの口元に出来た綺麗な三日月のような笑みと、妖しく煌めく赤い瞳を見て戦慄する。主の様な、高揚した時のハンティだ。
バーサクモードというか、本気モードに近い。ハンティが真の姿を現す前兆とも言える。
つまり、この時点でリーとその部下達が絞られることが決定したということである。
いつの間にか、残った雪うさぎの群れすら逃げていってしまった雪原の上で、リーはレオンハルトに祈った。
……れ、レオンハルト様ならこの窮地を脱することも出来る！　であれば、使徒である私も、被害を軽減することくらいは出来るはずだ……！
レオンハルトに信仰に近い忠誠を捧げるリーはそう確信する。足を踏みしめて、
「……ハンティ様！　とりあえず、任務を続行しましょう！　今回の任務は、ハンティ様が狙っていたあの人間に関わることですし、ともすれば戦うこともあるかもしれません！」
「……ふぅん？　まあいいけど？　分かってたことだし、終わったところで忘れることはないからさ」
誤魔化せなかった……！　とリーは内心で焦る。そして今度は策を考えるための時間稼ぎとして、
「……と、とりあえず任務を優先して頂けると……」
「……ま、それはそうだね。それじゃ、行こっか」
ハンティが表情を崩して歩き出す。何とか時間稼ぎは出来はした

が、
「いやぁ、〝あの人間〟も愉しみだけど、終わった後も愉しみだねぇ……」
「そ、そうですな……」
リーは再び祈った。
頼むから、これから行く先でハンティが満足出来るようなイベントが起こってくれ、と。

目が覚めた後、ガイは直ぐに働くように言われた。
一応はソファに寝かしてくれたらしい。緑の多い広い木造の家の中で、自分を見つけた女性、ミストラル・カラーは本を読んでいたが、自分が目覚めると直ぐに、
「――あ、起きたわね。なら、早速ご飯でも作ってもらおうかしら」
と、台所と食材の場所を教えられて食事を作るように言われた。
ガイとしては、まだ何が何だかよく分からないが、染み付いた癖からか頷いてしまっていたし、よくよく考えなくても自分に行く場所は無い上、飼われるのであっても居場所は出来るのでそれでもいいや、と素直に食事を作り始めた。
時刻としては日が沈む直前。気を失ってからそれほど経っていないみたいだった。
自分としても腹が減っていたので、さっと二人前の食事を作る。そうしてテーブルに差し出すと、
「……貴方、ちゃっかり自分の分まで用意して……」
「えっ……だ、駄目ですか？」
言われてからはっとする。
奴隷というものは、普通は主人と一緒に食事をすることなどないはずだと。
以前の生活の癖でやってしまったと、眉間に皺を寄せたミストラルに見られ、バツが悪くなってしまう。
だが彼女はこちらを見て軽く息をつくと、

「別にいいわ。どうせ食べさせないといけないのだし、分けると手間も掛かるし」
「あ……ありがとうございます！」
「ただし、私が何か取ってとか命令したらそっちが優先よ。分かったなら座りなさい」
「は、はいっ」
　言われて椅子に座る。すると程なくして、料理を一瞥、香りも嗅いだミストラルが料理を一口食べると、
「……美味しいわね。手際も悪くなかったし、貴方、ここに来るまで別のところで料理でもしてたのかしら？」
「え、あ……えっと、酒場、で、働いてて……」
「ふぅん、道理で。これなら少なくとも料理は任せて良さそうね」
　淡々と仕事についてのことを口にするミストラル。
　その間にガイは、軽く以前の事について思い出してしまい、悲しくなってしまっていた。ちびちびと料理を口にする。
　だが、そうしていると再びミストラルが口を開き、
「そういえば、貴方の名前を聞いてなかったわ。あるなら教えなさい」
「……ガイって言います」
「ガイね。分かったわ。それじゃあ改めて聞くけど、ガイ。貴方、ここで私のペットとして飼われる気はある？」
　その平然と口にしてきたペットという言葉に、ガイは少し怯む。一旦悲しみが引っ込み驚きが勝った。戸惑いつつも、
「ペ、ペットですか？」
「そ。私の暇潰しの為のペット。ついでに身の回りの雑用もこなしてもらう」
　はっきりとそう言われてしまい、ガイは言葉を無くす。
　だがそんな様子を見たミストラルが淡々と、
「その代わりに私は貴方を養うし、必要なら知識や物だって与える。ペットと言っても虐待する気もないから安心しなさい。躾くらいはするかもだけど」
「そ……そうですか……」

それってどうなんだろう、と思ったが、聞く限りでは悪い人でもなければ悪い契約でも無さそうだった。自分一人で生きていけないガイには、やはり誰か飼い主や雇い主といった人が必要である。それが得られるのであれば、
「……お願いします」
「あら、結構あっさり決めたわね。それはやはり、行くところがないからかしら？」
「……はい。僕は、一人ですから」
「ふぅん、人間って大変ねぇ」
食事を口にしながら、別段暗くもならずにガイの身の上話を咀嚼してしまうミストラル。その言葉を聞いて、ガイは気になることがあった。答えてくれるだろうか、と思いつつもそれを口に出す。
「あの……あなたや、ここにいる人達は一体……？　そもそも、ここは……」
「ああ、私の事は、ミストラルさんかミストラル様、もしくは飼い主なのだからご主人様とでも呼びなさい。敬称無しじゃなければ何でもいいわ」
「……ミストラルさん。その、ここにいる人達は、人間じゃないんですか……？」
それでいいわ、とミストラルが機嫌良さそうに微笑を浮かべる。その上で彼女は質問を受け止め、
「質問に答えてあげるわ。私やここにいるのは、カラー。人間とは少し違う、亜人種ね。この森に集落を作って生きる女性だけの一族よ」
「女性だけ、ですか……」
「ええ、男性はいないわ。見た目も生まれてから大人になった後は死ぬまで変わらないし、魔法や弓に長けていて、人間よりも身軽で、基本的には上位と言っても差し支えはないわね」
亜人種、カラー。魔法や弓に長けていて、不老。全て初めて知ることを聞かされ、内心で驚きが膨らんでいくガイ。世界にはそんな生き物までいるんだな、と感心しながらも、懸念を口にする。それは、
「えっと……それじゃあ、魔物とは……」

「魔物？　――ああ、魔物に襲われることでも心配しているのなら、その心配はいらないわ」
「えっ？」
予想外の言葉を言われてガイは間の抜けた声を出す。
亜人種といえど、魔物でないのなら魔物の脅威から隠れるためにこういった場所に集落を作ったりするはずだと聞いていた。
ならばそうじゃないのかと、そう表情に出ているのだろう。ミストラルはそこで微笑を浮かべ、
「人間が不思議に思うのも無理ないかもしれないけど、このカラーの里、ペンシルカウは魔物――魔軍には、襲われないことになってるのよ」
ペンシルカウ。それが気を失う前にも聞いた、この場所の名前。
そのペンシルカウが魔軍に襲われない理由を、ミストラルは口にした。
「本当はあまり口外するのは駄目なんだけど、特別に教えてあげるわ」
と、内緒にしなさい、と命令されながらもガイはミストラルの話を聞く。それは、
「この場所は――いえ、カラーは、ある魔人の庇護を受けてるのよ」
「魔人……」
それは酒場に居た時も、何度か耳にした言葉だ。
詳しく教えて貰えることは決してなかったが、世界を支配する魔王の配下の特別な存在だと聞いている。
「……魔人って、魔王の配下……ですよね？」
「そうよ。地上最強の生命体である魔王より血を分け与えられた忠実な下僕。約二十体はいるとされ、魔王には劣るものの、人間や魔物では歯が立たない伝説級の力を持つ存在。謂わば、この世の支配者層で、何をしても許される、良くも悪くも自由な存在ね」
「自由……」
「そう、自由。今を生きる地上の生物……特に人間には縁のないものね。魔人は人間を苦しめようが殺めようが、魔王の命令に反することでない限りは何をするにも自由。咎められることはないし、またその

圧倒的な力から、物理的に逆らえない存在でもあるわ」
「それ、は……」
そう言われて、ガイは頭の中に一つの存在が浮かんでくる。
それは予感の様な、確信めいたものだ。
自分の住んでいた人里を襲った怪物。身の毛がよだつほどの重圧を全身から発していた存在。
あれが、魔人なのかもしれないと。
喉が鳴り、汗が滲み出す。恐怖が呼び起こされそうになり、
「……魔人と聞いて、嫌な思い出でも思い出したのか知らないけど、ここにいる限りは魔人に襲われることもないから安心しなさい」
「……魔人に、襲われない……」
顔が露骨に青くなったガイを見て、ミストラルが目を細めながらも安心するように言う。その理由が分からないガイに対して、続けて彼女は言った。
「さっきも言ったけど、カラーはある魔人の庇護を受けてるのよ」
「……で、でも、それ以外の魔人は……」
ガイは頭を働かせて口にする。その魔人の庇護を受けていたとしても、別の魔人が襲ってきたりすることはないのかと。
だが、ミストラルは微笑みながら言った。不敵とも取れる表情で、余裕そうに、
「まあ、普通の魔人ならその懸念も出てくるわね。でも、魔人の世界にも上下関係ってのがあるのよ」
「……上下関係？」
「貴方も分かるでしょう。この世界では、〝力〟が全てだって」
「あ……」
それは、以前にも聞いたことのあるこの世の理にして、誰もが知っているルール。
力ある者が強く、偉い。弱き者は全てを奪われる、弱肉強食の掟。
誰もが言葉には出来ずとも、本能や経験として実感しているはずのその法則を、ミストラルは口にした。
「魔人といっても強さには幅があると言われてるわ。もっとも、その

辺の序列は人間やカラーにも詳しく分かるものではないけど、例外として、明確な序列を示せるものがある」
序列。人間の間でも分かりやすく理解出来る魔人の強さを示す称号があると、ミストラルは言った。
それこそが、
「――〝魔人四天王〟。それと、〝魔軍参謀〟に〝魔人筆頭〟。これらがそれに当たるわね」
「……なんか、凄そう……ですね……」
率直な感想をガイは口にする。だが、
「なんか凄いんじゃなくて、実際に凄いのよ。魔人の中でも一握りの強者が選ばれる――らしいんだから」
「……らしい？」
何故そこで曖昧になるのか、とガイは首を傾げる。するとミストラルが視線を横に向け、
「……私も、聞いた話だからそこまで詳しくはないのだけど……魔人の中でも最も強い魔人達が選ばれるらしいわ」
そのうち４体が、魔人四天王だと、ミストラルは言う。指を４つ立て、直ぐに折り曲げつつも、
「そしてその上位にいるのが、魔軍の総指揮を行う魔軍参謀と、全魔人を統率する魔人筆頭。名実ともに魔人最強と言われ、他の魔人も彼に逆らうことは出来ないらしいわ」
「……」
途方もなく大きな話を聞かされてるような実感の無さを感じつつも、ガイはその凄さの一端を理解する。
それほど強いのであれば、それこそ何でも出来るのだろうな、と。
そして疑問として、ミストラルの口ぶりが気になった。
「彼……ですか？」
「ふふ、まあそういうことね」
と、ミストラルが得意気に言う。笑みを浮かべ、
「このカラーの里を庇護している魔人。それこそが、魔軍参謀にして魔人筆頭である、あのお方なのよ」

だから他の魔人は、この場所にも手を出さないのだとミストラルは口にした。
ガイは納得する。急に聞かされたばかりで、全てを理解しきった訳ではないが、
「……じゃあ、ここは安全なんですね」
「そうよ。だから安心することね。びっくりするくらい平和で、やることが無くて退屈してるくらいなのだから、ここは」
そう言って、ミストラルは食事を再開した。ひとしきり語って満足したようにも見えるし、退屈というものを憂いているようにも感じる。
ガイは同じ様に食事を再開しようとして――しかし、忘れていたよ言うようにまた疑問を口にした。
「その魔人は、なんて言う魔人なんですか？」
魔人にも名前があるとは聞いているし、なんとなく聞いておこうと何気なく口にした質問だ。
しかし、
「知りたいのなら自分で調べることね。有名だから、知ろうと思えば簡単に知れることよ」
「……はい」
既に答える気分では無くなっていたのか、素っ気なく突っ撥ねられるガイ。
だが、色々と収穫はある。ここでもまた、沢山学べることがありそうだった。
特に、気になることといえば、
「……ミストラルさん」
「……何？」
再度の質問。食事に集中し始めているからか、若干不満そうにも見える。
だが構わず意を決してガイは言った。それは、
「――〝魔法〟についても、色々と教えてくれませんか？」
――ガイにとって、将来の切っ掛けとなる出来事の一つだった。

衝撃事件

魔法と一口に言っても様々な魔法がある。
攻撃魔法、幻覚魔法、補助魔法、情報魔法。神魔法や召喚魔法、付与に呪術、陰陽術などの変わり種まで、多岐に渡っている。
無論、魔法のエネルギーになる魔力を用いるには才能がいるし、魔法理論なども含めた個人の研鑽が必要となる。もし将来的に、子供を魔法使いにしようとするのであれば、物心がつく前、3歳頃からの教育が望ましく、それ以降からは歳を重ねるごとに習得が難しくなる。
それだけ、魔力を練ることにはコツがいる。才能がある者であればあっさり出来るようになることもあるが、そうでない者だと十年、二十年と掛かるかもしれない。
これが意味するところ。それは、魔法は誰でも使えるが、魔法の世界というのは個人の才能に酷く左右される世界だということだ。
どの分野でも似たようなことは言えるが、魔法の場合は特に酷い。才能が無ければ、殆ど使い物にならない程度の魔法しか使用出来なかったりもするのだ。
逆に才能がある者が、数十年と研鑽を積んだ魔法使いを数年で追い抜くこともざらにある。一説では、それがあるからこそ、魔法使いは己の弟子に、簡単には全てを教えず、出し惜しみをするとも言われており――
「――とまあ、そういうことよ」
「……なるほど……」
床の上に座ったガイは、ソファーに腰掛けながら読書をする飼い主、ミストラルに片手間に魔法というものを教えられていた。
このペンシルカウにやって来て既に一週間。魔法を教わり始めたのは今日が初めてだ。
というのも、魔法について教えてほしいと言った日、彼女とはこんなやりとりをした。
『――今は嫌よ』
『そう、ですか――って、今は？』

『今はまだ、貴方が使えるペットなのか分からないし、明日には私が飽きてほっぽり出すかもしれないでしょ？』
『……だから……今は駄目？』
『そうよ。少なくとも……そうね。一週間もすれば、貴方がどれくらい良い子なのか分かるでしょうし、これからも飼っていけるかどうかが分かるわ。だから一週間後に教えてあげる。私の暇潰しとしてね』
『は、はぁ……分かりました』
――とまあ、そんなことを言われて一週間。
ガイはその間、一生懸命に働いた。
三食の食事だけでなくおやつも作り、家の掃除や植物の手入れ。雑用から気まぐれな命令まで何でもこなした。元々働くことには慣れていたためか、それほど苦ではなく、ミストラルからも、〝それなりに使えるようね〟とお墨付きを貰った。
故にその褒美も兼ねて、彼女が仕事が休みだというので昼間から軽く魔法についての座学を教わっていた。
ミストラル・カラーはこのペンシルカウを治めるカラーの女王の側近をやっているらしく、それなりに立場があり、日中は結構出かけていることも多い。
だが、家に帰ってくると、彼女は必ず退屈そうに溜息を漏らしながら、ガイに食事を作るように言いつけてソファーに寝転がる。
休日のだらけっぷりは凄く、今のように服をだらしなく着崩しながら、半目でソファーに寝転がり、お菓子を摘まみながら本を読んだり、単にゴロゴロしていたりする。
よっぽど暇なのだろうな、と常に忙しくしている酒場にいたガイとしては、だらしない女性はどうかと内心で思いつつも、特にそれらを口に出すことはなく真面目に働き続けた。
だが、そんなことを考えていると、
「……その目は何？」
「っ、あ、いや――うっ」
ペシッと頭を軽く叩かれる。機嫌が悪そうに眉をひそめつつガイに視線を向け、

「ご主人様のことを社会不適合者を見るような目で見て……そういうのは隠していても分かるのよ」
「……ごめんなさい……」
「はぁ……駄目ね。全然駄目。私は今、気分が悪いわ」
そう言って本を閉じ、不貞腐れたように寝返りを打ってこちらに背を向けてしまうミストラル。
こうなると、一日中機嫌が悪い時もあるのだ。
だがこういう時は放置しておくのが逆効果なので、ガイは仕方なく近づくと、
「申し訳ありません、ご主人様……」
「……」
「僕が悪かったです……だから、機嫌を直して下さい、ご主人様」
「……しょうがないわねぇ……」
「わっ……!?」
ソファーに横になって背を向けるミストラルの前に座り、ご主人様と呼びながらひたすら謝り続ける。こうすると、その日の機嫌にも寄るが、多少機嫌を直してくれるのだ。
今日は割と直ぐに機嫌を直してくれたからいい日だ。しかし、
「くすぐったいんですが……」
「我慢しなさい」
「……はい」
と、ガイの身体を突いたり撫でたりするミストラル。
どうにも本気でペット扱いしているようで、時折こんな風に弄られてしまうのが常だった。
その後も、ひとしきりガイは弄られると、ようやく身体を起こしたミストラルが本を開きつつ、
「――とりあえず、教えることは教えるけど、魔法を習得出来るかどうかは微妙なところね」
「えっ？」
そんな、と表情が顔に出てしまったのか、ガイの様子を見てミストラルが息をつく。

「何を驚いてるの？　先程の事をもう忘れたのかしら。魔法は、出来るなら早めに教育を受けないと習得は難しいの。それに、才能にも左右されるから使えたとしても使い物になるかどうかは怪しいものね」
　ましてや人間だし、とお菓子を摘みながらそんな身も蓋もないことを口にするミストラル。そうしてガイを見下ろしながら、
「貴方、今幾つなの？」
「……えっと……多分、１０歳は越えてます……」
「ああ、年齢が分からないのね。まぁ……見た限り、１１歳から１３歳くらいってところかしら」
「そう……なんでしょうか」
「もう面倒だから今決めておきなさい。ガイ、貴方は今日から１３歳。それでいいわね？」
「……はい」
　年齢を今決めろ、と言われながらも決められてしまったが、ガイとしては頷くしかない。渋々ではあるが、あながちそれほど間違ってはいないような気がするから断りにくいことだ。
「それで、やっぱ１３歳なら遅すぎるわ。人間なら3歳くらいから教育を受けるべきだし、カラーなら1歳になる前、生まれて半年くらいにはもう魔法を教えられるのよ」
「そ、そんなに早く教えられるんですか……？」
　言葉を理解出来るのだろうか、という疑問が沸き立つ。しかし、そんな疑問を見透かしたようにミストラルが目を細め、
「カラーは数ヶ月程度で、人間で言う5歳程度には成長するのよ。だから何もおかしくないわ」
「……なるほど」
　つまり、実質似たような時期に教わるということか、と得心する。
　とはいえ、自分の問題が解決した訳ではない。
「じゃあ僕は十年遅いから、魔法の習得もそれだけ難しいってことですか？」
「まあ、概ねそんなところ。さっきも言ったけど、魔法の習得には個人の才能が関わってくるから実際のところやってみなければ分からな

いけど……結構な確率で無駄に終わることは確かね」
「……それじゃあ、どうして――」
「どうして魔法を教えてくれるのかって？　それは――」
と、ガイの質問を先取りして、自分で答えようとする。間を置いて、それは、と、
「暇潰しよ」
「えぇ……」
「ぶっちゃけるけど、私、今の生活に飽きてるのよ。毎日同じことしかしてないし、退屈を紛らわせるのはたまに届く本とか娯楽の類くらいだし。かといって、今の時代じゃ外に出るのも危なければ、そもそも立場的に簡単に外には出られないわ。掟にも反するし」
「そうなんですか……」
女王の側近をやっていると聞いているし、確かにそれだと外には出にくいのかもしれない。
つまらなそうに言うミストラルに、ガイは別の事を聞いてみることにした。
「あの、掟って……？」
「掟は掟よ。色々あるから全部説明するのは面倒だからしないけど、外に許可なく出たりするのは駄目だし、人間を里に招き入れたりするのも駄目ね。人間禁制の里だし」
「え、それじゃあ僕――」
ミストラルがそこでいい笑顔になる。不敵とも取れる笑みで、
「あら、今頃気づいた？　そうね、貴方が今ここにいることも掟に反してるわ」
「……っ！」
ガイは目を見開く。人間が暮らしていないことにはそういった理由もあるのかもと、
「だから、見つからないようにしろって……」
「そういうことよ。見つかったら追い出されるから覚悟しておくことね」
「う……分かりました」

確かに、それは困る。
ガイは一人で生きる能力もないし、居場所もない。せめて一人で生きていけるような何かを習得し、成長してからではないと外では何も出来ないだろう。
そのための魔法習得でもあるのだ。自分に才能があるかどうかは分からないが、色々と試してみるしかないと、
「でもまあ、見つからなければなんとやらね。私も退屈でしょうがないし、危険な人間という訳でも無さそうだから問題ない。こうやって暇潰しも出来るのだから良いことよね」
と、ミストラルはガイに淹れさせた紅茶の入ったカップを持ち上げ、それを口元に持っていきつつ、
「もっとも、貴方が魔法を使えるかどうかは微妙だけど――」
「――〝アンコク〟」
「……えっ？」
それは、ミストラルが初めて――それこそ生まれて初めて本気で驚き、間の抜けた声を出した瞬間だった。
ペットに対する御高説を聴かせながら、紅茶を口に含もうとしたところ。その間に、ガイはミストラルから渡された初心者用の魔法の指南書を見て、そこに書かれた一説を何となく口にした。
言ってみればそれだけ。だが、起こった事象はそれだけではなかった。
アンコク。攻撃魔法にある５つの属性の内、闇に属する初級魔法だ。
別名、闇の矢とも呼ばれ、闇の塊を相手にぶつける魔法である。
それは魔法使いであれば、それほど難しい魔法ではない。言った通り、初級魔法だ。
だが、だからといって、今まで一度も魔法の教育を受けたことがない１３歳の少年が、適当に口に出したところでいきなり発動出来るようなものでもないことは確かだ。
――だが、
「っ……!?　――バリア！」

「あっ!?」
ガイの手に集まり、そして撃ち出されたのは、確かに闇の塊であった。
収束した魔法の光が煌めく。こぶし大の、普通のアンコクではあったが、咄嗟の事態にミストラルは慌ててバリアを張った。
闇の塊がミストラルのバリアに激突し、そのままあっさりと消え去る。
ガイは自分のやったことに唖然としつつ、ミストラルは険しい表情を浮かべている。
先に声を出したのはミストラルの方で、
「……ガイ……貴方、飼い主に……いえ、それよりも――」
「ご、ごめんなさいっ!!」
ガイが慌てて謝罪する。ペットの身で攻撃魔法を飼い主にぶつけようとしたのだからこれは折檻されてもおかしくない。
しかし、慌てて謝るガイを見下ろしたミストラルは、そこでしばらく黙り込むと、
「あの……ご主人様……?」
「……黙りなさい」
「っ、はい……」
黙るように言われたので、言われた通りに黙り込むガイ。ミストラルは顎に手を当ててガイに鋭い視線を向け続ける。
「……馬鹿げてるわね」
今起きたことを、ミストラルは小声でそう評する。馬鹿げたことだと。
だが、それによって己の中に湧いたのは、興味や面白味といった感情だ。
故に、ミストラルは鼻で笑ってみせると、
「ふ、ふふ……まあ、いいわ。許してあげる」
「本当ですか……?」
「ええ。でも、それとは別に気が変わったわ」
「え?」

発言の意味が変わらずに戸惑うガイに対し、ミストラルはこう告げた。決定事項だと言いつけるように、
「適当に最低限の事だけ教えたら止めようかと思っていたけど……面白そうだし――」
と、ミストラルは一旦区切りながら、
「ガイ。貴方に、魔法というものを本格的に教えてあげるわ」

「――提案を断られた？」
「ああ、そうさ」
「申し訳ありません……レオンハルト様」
紅魔城。魔王の懐刀と称される魔人の城の一室で、その当人である魔人の影は眉を顰めた。
報告にやって来たのは使徒であるハンティとリー。ハンティは腑に落ちない表情で、リーは心底申し訳ないという様子の表情を浮かべている。
とりあえず、断られた理由を知らなければ、と魔人レオンハルトは声を作る。執務室の椅子に深く腰掛けながら、
「……話をするだけだ。なのに、何故断る……？」
「さあね。その辺りのことはよく分かんなかったけど、取り付く島もなかったよ」
「命令通り、幾つか交渉を持ちかけてみましたが、それも叶わず……」
「ふむ……」
ハンティとリーの報告を聞いて考え込む仕草を見せるレオンハルト。正直、断られるとは思っていなかっただけに、その理由がいまいち理解出来ない。
……まさか真実を知ってなお、魔人と人間という垣根を持ち出してくるような奴ではないと思っていたが、考えが浅かったかもしれないな。
それとも、また別の理由でもあるのか、と思う。全てを知った奴であれば、他に理由があるかもしれないと。

そしてそれは、ハンティの続く言葉によって肯定された。
「向こうの要求を呑むなら、話をしても良いとは言ってたけどね」
「！　その要求とは何だ？」
やはり何かしらがあるのかも知れないと、レオンハルトはその伝言内容をハンティに促す。その要求とは、
「……何でも〝魔人レオンハルト本人と直接会って話がしたい〟――だってさ」
「俺と直接……？」
一瞬、その内容は首をかしげるものだと頭に疑問符を浮かべたが少しして、なるほど、とも思う。ともすれば、奴はその得た物によって、己の秘密すら理解しているのかもしれないと、
「後、これは出来ればって言ってたけど……レオンハルトと一晩を共にしたいとも――」
「――それはあり得ないな」
頭を抱えそうな要求を即座に突っ撥ねる。やはり、その悪名高い趣味までは変わっていないようだった。レオンハルトは軽く息をつきながら、
「俺に男と寝る趣味はない。そんなことを要求してくるようなら、無理に行くこともないな……」
「……相手が好意を持っててても？」
「……まるで俺が、好意を持ってくれる相手なら誰でも受け入れるような言い草だな……？」
「あながち違うとも言い切れないでしょうが」
心外だな、とハンティの言葉に目を細める。ハンティの隣に座るリーも、無言だが肯定していそうな雰囲気を醸し出してるので、レオンハルトは軽く呆れながらも、真面目に己の信念を答えた。
「俺は自分を安売りするつもりはない。俺が愛せるのは、俺に好意を持つ、俺が認めた女だけだ」
でないと自分の価値が下がるし、自分の価値を認めてくれた相手の価値も下がってしまう。
レオンハルトは自分の事を最高の男だとは思っていないが、そう

思ってくれてる者達の信頼を裏切る訳にはいかない。だから自分には、その高みを維持し続ける必要がある。
　それを理解してくれたのだろう、ハンティはそれを聞いて、ふっと笑みを浮かべると、
「なんか色々格好いいこと言ってるけど……結局はホモが怖いし嫌いなんでしょ？」
「――んなもん当たり前だろうがッ!!」
　久し振りに怒声でツッコミを行う。冷静さを保っている近年では珍しいキレた表情で、
「なんでホモ野郎共はどいつもこいつも俺を狙ってきやがる……！俺はノーマルだって分かってる筈だろうが……！」
「あ、スイッチ入った」
「レアなレオンハルト様を見れて感激です……！」
　ハンティが半目になり、リーが感動したように目を見開き、拳を握る。レオンハルトは手近にあったボトルを口に含み、飲み干しながら、
「ただでさえ、最近は忙しくて本体は城に帰れないほどにヤられてるっつーのに……今度はホモにまで狙われなくちゃならねぇのか!?」
「……もしかして酔ってる？」
「飲んでるが、酔うほど飲める時間すらねぇんだよ!!」
「レオンハルト様どうか気を確かに……あまり怒鳴ると、レオンハルト様の圧力でカップが割れそうに……」
「っ……と」
　リーの言葉によって、レオンハルトが落ち着きを取り戻す。頭を振り、疲れたように息を吐くと、
「……悪かったな。少し取り乱した」
「あんた、分身とはいえあんまり怒鳴ると窓ガラスとか割れるんだから気をつけなよ。並の人間がこの場にいたら気絶してもおかしくないんだからさ」
「……ああ、自覚してる。リーも、注意してくれて助かった」
「勿体なきお言葉で」

ハンティやリーの忠言に頭を冷やしたレオンハルトが再び、グラスを取る。今度は軽めの果実酒を口にしていると、ハンティも少し真面目な表情で、
「魔王城でのお勤めで相当溜まってるみたいだけど、せっかくだし、あたしがストレス発散相手にでもなろうか？」
「もしよろしければ、私もお相手致しますが……」
「……いや、いい。気持ちは有り難いが、今はこっちの方が重要だ」
と、レオンハルトは話を戻そうとする。少し考えた上で、
「とはいえ、俺はしばらく魔王城から動けない。俺本人と会いたいと言うなら、分身が行くのも失礼な話だ。条件を満たしていないとも取られる」
「それでは、しばらくは保留にしておきますか？」
「ああ、本体に暇が出来れば行くことにしよう」
もっとも、それは本体を拘束してるジルの機嫌次第であるので、いつになるかは分からないが。
魔王や魔人の感覚的には、一年から数年程度まで掛かるかもしれない。
故にしばらくは我慢するしかないな、とレオンハルトは結論を出す。しかし、
「少しばかり癒やしが欲しいところだな……」
「……じゃあ、白兎とでも遊んでくれれば？」
白兎。レオンハルトが溺愛してる一人娘の名を出され、レオンハルトは僅かに目を見開く。
「名案だな。最近は他の用事に掛かりっきりで時間が取れていないし、分身なのが残念だが、久し振りにピクニックにでも行くか……」
「！　それでしたら是非この私に護衛の任をお申し付け下さりたく！」
「ああ、その時は頼むぞ、リー」
ははっ！　と、心なしか嬉しそうに了解するリー。何気にリーも、主君の娘に仕えることに喜びを感じている様なので、こういったイベントの時は関わりたがるのが常だ。

もう一体の使徒も、こういう時はよく手を挙げてくるのだが、
「――大変ですわーーーー!!!」
と、その時。大きな声を上げてノックも無しに部屋に入ってくる女性がいた。
それはいつもの、金髪ツインテールに青い軍服を着た快活な印象の美少女で、
「急になんなのさ……」
「キャロル様……？」
「……どうしたキャロル。何かあったか？」
皆がその使徒、キャロルの登場に反応を見せる。
キャロルがこうやって騒がしく登場するのはいつもの事なのでそこまで驚きはない。こうやって大変と言いながら入ってきたが、実は大したことなかったりするのも常だ。
故にレオンハルトは冷静に声を作る。たまには注意でもしようかと、
「それがレオンハルト様、大変ですの！　実は――」
「……今日は何だ。またサイゼルとハウゼルの喧嘩か？　ガウガウが何かやらかしたか？　どちらにせよ、少し冷静に――」
「――白兎様が、家出しましたの！」
「……え？」
瞬間。レオンハルトの時が止まった。

「……は？」
「……ん？　どうした……？」
「……あ、ああ……いえ、すみません……少し呆けてしまいました……」
その衝撃は魔王城でお勤め中の本体にまで波及した。
レオンハルトが狼狽えるというあまりにも珍しいものを見たジルは、軽く頭に疑問符を浮かべたが、直ぐに笑みを浮かべ、
――くく……もしや、今になって私の身体にでも見惚れたのか……

？　そうだとしたら……随分と可愛いことだが……。
　内心で、そんなことを思い、機嫌が良くなる魔王ジル。遂にこの鉄壁の男も堕ちたか。もしくは堕ちかけているか。攻め時は今だ、とジルは頭の中でこちらを見ながらも視線を彷徨わせるレオンハルトを見て、その新鮮な反応に喜んでいた。

　――無論、レオンハルトの意識は分身の方に偏っていた。
　魔王ジルへの奉仕の最中だが、本体は分身の方に意識を集中させながらそれを聞く。己の一人娘が家出したと聞いたレオンハルトの分身は、これ以上ないほどに固まり、
「……探せ」
　と、しばらくしてまずは一言。
　それを皮切りに、レオンハルトは立ち上がり、迫真の表情で、
「白兎を探せ!!　今直ぐ!　全員で!!　一刻も早く――いや、というかもう俺が行く!!　俺が探す!」
　――完全に取り乱した。
　もはや仕事や用事、あらゆることを忘れ、あるいは後回しにすることを決めてレオンハルトの分身は言う。今にも動き出そうというところで、キャロルが慌てたように、
「お、落ち着いて下さいましレオンハルト様!　一応、手紙を預かっていますの!」
「!　それを早く言え!　見せろ!」
　と、キャロルが懐から出した手紙。それを慌てて受け取りながら、レオンハルトは急いでその手紙に目を走らせていく。
　だが、
「家出ねぇ……どうせいつもの冒険だと思うけど、なんて書いてるの？」
「家出と言うからには、余程の事なのでしょうが……」
　ハンティとリーが分析しつつ、レオンハルトの反応を待つ。
　しかしいつまで経っても反応は無く。

「あれ？　レオンハルト？」
「レオンハルト様が……止まってる？」
「や、やはりあの内容は見せない方が良かったのやも知れませんわ……」
　レオンハルトが手紙を持ったまま完全に固まっている。キャロルだけはその理由を半ば理解している様子だった。
　しかしこのままでは埒が明かないため、ハンティがしびれを切らしたようにレオンハルトから手紙を奪う。
「え～と、なになに――って、うわぁ……」
「こ、これは……なんと酷い……！」
「……心中お察し致しますわ……」
　三体の使徒が手紙の内容を見て、納得したように顔を引き攣らせる。
　その白兎からの手紙には簡潔に、こう書いてあった。
『パパの嘘つき。嫌い。家出をします　白兎』
　一人娘からの〝嘘つき〟、〝嫌い〟という言葉の刃に加え、〝家出〟という実際に行動に出るというおまけ付きの口撃。
　それによってレオンハルトは、
「――――――」
「れ、レオンハルト……？　って、うわ!?　マジで気絶してる!?」
「め、メディーーーック!!　メディック！　今直ぐ衛生兵をここに呼べ!!」
「い、一大事ですわー!!　大事件ですわー!!」
　その結果が――気絶。
　世界最強の魔人レオンハルトという怪物。その怪物を打ち倒そうとして誰もが果たせなかったこの気絶という偉業は、他でもない愛娘によって果たされることとなった。
「――――」
「んんっ……レオンハルト……？　もしや、寝ているのか……？」

そして本体の方も、軽く気を失っていたが、それを見たジルは、
「……くくく、ははは……今まで一度も私の閨で寝たことが無かったというのに……くく、気でも許したのか……？　く、くふふ……！」
事が終わり、まさかその後で自分の上で眠るなど思ってもいなかったジルは、本当は気絶しているとも知らず、力を抜いた男の重みを全身で受け止めながら、妙にご満悦な様子だった。

家出しました

カラーの里、ペンシルカウ。
その女王の側近であるミストラルの家では、この場にいてはならない筈の者がいた。
「――ガイ。もう少し魔力の扱いには気をつけなさい」
「はい、先生」
ガイと呼ばれる右の前髪が長い少年の傍らに立ち、ミストラルは丁寧に魔法の事を教えていた。
というより、教えざるを得なかった。
「貴方、運が良いわよ。僅かだけど、人間にしては魔法の才能がある。将来は魔法使いになれる可能性があるわね」
「！　……それは本当ですか？」
「ええ」
ただ、とミストラルはガイの期待に満ちた質問に対し、それを戒めるように顔を強張らせて言った。
「魔法を放つ時は、敵に使うでもない限り、もう少し注意して撃ちなさい。でないと、自分や周囲を傷つけることになるわ」
「うっ……ごめんなさい」
ついこの間、ミストラルに向かって魔法を放ってしまったことを思い出してバツが悪そうな表情で謝罪するガイ。
だがミストラルは怒らずに続けた。その言葉に何かを思うように目を細めながら、
「……とにかく、魔法を試す時は魔力を抑えて使いなさい。それを身につけるために、先に魔力のコントロールを重視して鍛えてあげるわ」
「はい……！」
ガイが良い返事を返す。魔法を教えてくれることに喜んでいるのだろう。
しかしミストラルとしては、
……こうでもしないと、こっちが危険だわ。

ついこの間のこと、魔法を教えて初日のガイが魔法を発動した。
それが初歩魔法とはいえ、魔法を教えて初日で魔法を発動させるなど、普通はあり得ないことだ。
ガイに魔法の才能があることは不思議ではないが、まさかここまで規格外の才能だとは思いもよらなかった。
故にミストラルは方針を変えた。
最初は適当に魔法を教えたら、後は自分で学べ、とほっぽり出すつもりだった。
しかしここまでの才能となると、放置するほうが危険だ。独自に学んだとしても高レベルの魔法使いになることは確定しているが、このままだと自分でも敵わない魔法使いになる可能性がかなり高い。
魔法の腕が高まれば高まるほどに、自分が人間の子供を飼っていることがバレかねないし、何よりも、将来を考えるとちゃんと教育しておかなければ危険だ。
ミストラルは人間を自然に下に見ているし、信用もしていないが、軽くは見ていない。人間の力はカラーを超えうるのだ。それは歴史が証明している。
別に恨んでいる訳でも嫌っている訳でもないが、油断すれば危険な事は理解している。
さながら人間で言うところの猛獣。檻や柵の中で飼っている内は良いが、野良に出て、人の味を覚えたら手がつけられなくなる。カラーにとっての猛獣は人間だ。
そしてガイは、正に猛獣の子供。躾を誤れば、その鋭い牙は容易にこちらを切り裂く。
故に子供の内からきちんと飼いならし、自分やカラーへ危害を加えないようにしなければならない。大人になって立派な魔法使いなったからと、このペンシルカウを襲われては洒落にもならないのだ。
「ガイ。魔力が乱れてるわ」
「っ、ごめんなさい……」
「別にいいわ。それより、集中出来ないなら一度休憩にしましょう。おやつの用意を頼めるかしら？」

「あ、はい！」
こちらが休憩しようと言い、おやつの準備をするように言うと喜んで従順に命令通りに動くガイ。
……大人になってもこのままなら可愛いし、安心出来るのだけど……油断は出来ないわね……。
ミストラルからして救いだったのは、ガイが己を飼い主だと認めていることだ。
牧場生まれの牧場育ち。その後は多少、野良の人間にも育てられたようだが、まだまだ奴隷根性は染み付いている。
それに加えて、己がガイを普通に可愛がっていたことも相まって、この環境を嫌がってはいないようだし、魔法の教育もしていることから、こちらに感謝していることも目に取れる。
だが何度も言うように、ガイは猛獣の子供だ。子供の内に上下関係を染み付かせておかなければ、大人になってこちらの手に負えなくなった時に怪我をする。
逆に言えば、大人になってもガイがこのまま変わらず、こちらと良い関係を築けるのなら、それはミストラル――いや、カラーの里にとって有益となる。
大人になってからであれば、一芝居打って正式に迎えてやってもいいだろう。そうなれば、ガイは更にこちらに感謝する。
……ただの暇潰しの為に飼ってみようと思っただけなのだけど……まさかの収穫ね。
元々、ガイは人間しては容姿も整っているし、特別変な思いもなく普通に飼おうと思っていたところだ。なので飼い続けることに対しての心構えのようなものは必要ない。
強いて言うなら、猛獣の子供を飼っているという認識を強めることだ。大人になってからもこちらに悪意のようなものを持たないよう、これまで通り普通に接してやればそれでいい。
後は里の者達にバレないようにすることだが――
「――ミストラル様！」
「！」

「っ……！」
不意に、玄関がノックされ、外からはきはきとした女性の声がミストラルを呼ぶ。
おやつを準備していたガイが肩をびくんとさせて驚くが、ミストラルはガイに近づいて小声で、
「……どうやら仕事みたいね」
「あ、えっと……それじゃあおやつは……」
「私は後で頂くから先に食べていいわよ。休憩したら、本でも読んで引き続き勉強でもしてなさい。魔法の発動は？」
「……ミストラルさんがいない時は、使っては駄目」
「よろしい」
「ミストラル様ー！　女王様がお呼びです！　至急――」
「聞こえてるわ！　今出るから大声を出さないでくれる!?」
「！　畏まりました」
と、外の声が収まる。ミストラルは静かになった周囲に合わせるように更に声を落として、
「それじゃあ、行ってくるわ」
「……いってらっしゃいませ」
ガイの挨拶を聞いて、僅かに微笑を浮かべると、ミストラルは玄関から家の外に出た。
するとやはり里の警備兵――伝令としてやってきたカラーの少女がそこにおり、
「先程は失礼しました！　ミストラル様！」
「別に構わないわ。それより、今日は何の用？　特に女王様からは用事は聞いていないのだけど」
それはミストラルにとっての小さな疑問の一つだ。
この里で、休日の自分をいきなり呼びつけることなど、早々あるものではない。村は基本平和なので、側近を務めている自分を呼びつける、急を要するような事と言えば精々、人間が攻めてきたか、あるいは――
……まさか。

と、ミストラルは内心でその事例を察しつつも、伝令の答えとなる言葉を待つ。そう言えば、いつもより張り切っているように見える。浮ついているとも。
そしてやはり、彼女は嬉しそうに答えを告げた。それは、
「はい！　――お客様がお越しに！」
「っ！　それは……！」
お客様。その単語を使うべき相手は、このペンシルカウにおいて非常に少ない。
故に何よりも大事な用事なのだ。ミストラルは、事の重要性を理解して頷く。
「なら、このまま村の入口かしら……」
「はい、仰る通りで！　女王様は先に行っていると」
「そう。なら、早く私も向かわないとね……」
ミストラルは足早に村の入口へ向かう。その足取りは軽く、浮ついてしまっていた。

カラーの森の奥深く。カラーの里、ペンシルカウに続く入口では、巨大な荷車と共にそれを警備する兵達がいた。
彼らは本来、この森には似つかわしくないはずの魔物であり、魔軍の兵――魔物兵でもある。
大部隊ではなく、森に入ってきたのは少数の部隊であるものの、その警備の質という点で言えば、申し分ない。それどころか、過剰ですらあった。
荷車を守る魔物兵は魔物兵の中でも最も強い、赤の魔物兵。そしてそれを指揮するのは、ベテランの魔物隊長と魔物将軍だ。
だが、更に大きい魔物将軍もいる。それを見た、村の門を守るカラーの警備兵達は、ひそひそを声を交わしあった。
「ねえ、見てあれ……」
「うわ、大きい……あんなのいたっけ？」
「何、あんた達知らないの？　あれは――〝魔物大将軍〟よ」

カラーの警備兵の中でも勤続年数の長い少女が門の上の櫓から下を見て告げる。
その先には、荷車を止めて部下を怒鳴りつける大柄な個体がいた。
「――何度言ったら分かるのだ、お前達はッ!!」
「も、申し訳ありません、大将軍閣下！」
人間の死体を前に怒りつけるのは、魔物兵の何倍もあろう、丸い球体を身体の中心に据えた巨大な魔物だ。
腹の中にある人の顔と、上部にある顔が同時に怒りに染まっている。
何故か通常の魔物将軍や他の魔物大将軍と違い、赤いマントを身に着けたその魔物大将軍は、よく見ると他にも綺羅びやかな装飾品を身に着けている。
そのどれもが一目で値打ちものだと分かる美しい品々。大きな宝石の付いた指輪を嵌めた手を振り動かし、彼は大仰に部下の魔物兵を叱りつけていた。
「これで何度目だ！　この森を汚さぬよう、殺す時は血を出さずに殺せと言っているだろう、この私は！」
「は、はい！　重ね重ね申し訳ありませんでした！　カエサル閣下！」
「謝ってすむと思うのか！　見ろ！」
見ろ、と魔物大将軍カエサルは地面に付着した人間の血を指差し告げる。
「おお……！　何ということだ……！　この美しい森が！　美しいカラー達の住まうこの森が！　人間の血で染まってしまうとは何たることか!!」
酷く悲しんだ、という風な身振り手振りを見せながらカエサルは言う。それを見て傍らにいた魔物隊長が、
「し、しかし大将軍閣下！　お言葉ですが、血を出さずに殺すというのはあまりにも……！」
「あまりにも……何だ!?　出来ないとでも言うつもりか!?　精鋭たるレオンハルト軍の一員としての誇りはないのか!?」
「そ、そういう訳ではありません！　しかし――」

「ええい！　言い訳ばかりか、貴様！　ならば見ていろ！　こうするのだ!!」
「っ！　まさか……!?」
魔物隊長や周囲の魔物兵が怯える中、大将軍カエサルは先程即死した人間を右手で掴み上げると、
「――我が偉大なる力を見ろ！　〝エイジングハンド〟!!」
「！　うわ、何あれ……!?」
遠巻きにそれを見ていたカラー達が引きながら声を上げる。
魔物大将軍カエサル。彼が掴み上げた人間の死体が、徐々に年老いて、干からびていく。
反対に、カエサルの方は何故か身体が艶々と輝き始めた。
「やべぇ……何だあれ……!?」
「カエサル閣下の老化の手だ……！　初めて見た……！」
魔物兵すらもその力に怯える中、とうとう人間は骨になり、その骨すらも、最終的には粉になり、消えて無くなってしまった。
異様な力で周囲を畏怖させるカエサルは、それを行いながらも上機嫌になり、
「ハハハハハハ!!　見たか諸君！　この私の偉大なる美しき力を！　こうやって、芸術的に殺すのだ!!」
「っ……し、しかし、それは、カエサル閣下だけにしか――あぐっ!?」
魔物隊長が怯みながらも進言しようと進み出た瞬間、カエサルが魔物隊長の首を掴んだ。
「ん～～～？　なんだ、まだ言い訳か？　言い訳は美しくないぞ？」
「ひっ!?　そ、そういう訳では……お許しを!!」
カエサルの手は、魔物隊長の首を掴んでいるが、苦しいと感じるほどではないし、その大将軍としての特異な力も使ってはいない。
だが、その手に掴まれていること事態が何よりの恐怖だ。カエサルがその気になれば、魔物隊長は３０秒もしない内にこの場所から消えて無くなるだろう。先程見せられたばかりだ。その光景はまだ目に焼き付いている。
「魔物隊長。私はな、醜いものが嫌いだ」

「ぞ、存じ上げております!!　美しいものを好み、醜いものを嫌うのだと！」
　そんなことは誰もが知っていた。しかし、改めてカエサルは言う。
「そう！　私は美しいものが好きだ！　人だろうが物だろうが、美しければ何でも許せる！　女だろうが男だろうが、美しければ愛せる！　美しい者の命令しか聞きたくないし、醜い者は死んでも構わないと思っている！　それが私だ！」
　カエサルは大仰に、低く、しかし通る声で思想を歌う。芸術好きで演劇や歌劇を好むカエサルだ。こういった仰々しい演出的な説教は珍しいことではない。
「私がレオンハルト様をお慕い申し上げているのも！　レオンハルト様が誰よりも強く、そして美しいからだ！　今まで多くの人間、魔物を男女問わず愛でてきたが、レオンハルト様の美しさは正に魔人一だ！」
「そ、それも存じ上げております！」
「そうとも!!　故に、私は恵まれている！　美しい魔王ジル様を旗印に戦い、美しき魔人の方々――レオンハルト様にケッセルリンク様！　カミーラ様やアイゼル様などの多くの美しさを目にすることが叶っている！　……醜さの塊であるケイブリスやノス、レキシントンが魔人であることは業腹だが……」
　最後にボソリと言いながらも、カエサルは強さと美しさを併せ持つ魔王と魔人達を称賛し、気を取り直して上を見上げながらまた別のものも称賛する。
「私は種族で差別をしない！　いつも暴走しがちなアッティラの馬鹿のように人間だからと、彼らが創り出した芸術や食文化までをも否定はしない！　いつも部下を怒鳴り散らし粛清するイヴァンのような醜い真似はしない！　美しいものは美しい！　良いものは良いのだ！」
「お、仰る通りかと！」
　魔物隊長も必死に同意を返す。反応が悪いと機嫌が悪くなることを知っているのもあって、魔物隊長もそのノリに合わせるように声を

張り上げた。
　その甲斐があってか、カエサルは再び魔物隊長に視線を向ける。
「おお、そうだ！　分かっているではないか！　ならば私の夢は何か知っているな!?」
「勿論です！　美しいものを集めた、美しい場所で美しく過ごすことです！」
「フフ、美しい宮殿で、が抜けているぞ。――だが、そうとも！　私はあのレオンハルト様のように！　手柄を立ててていずれは自分専用の美しい黄金宮殿を建ててそこに住むのだ！　絵画や彫刻に音楽！　宝石や数々の調度品を並べ立て、私が集めた選りすぐりの美しい者達を従者とし！　この美しい魔物の黄金時代を守り抜くのが私の務めであり理想だ！」
「素晴らしい理想かと！　カエサル閣下！」
「そうだろうそうだろう!!　願わくば、私もレオンハルト様の使徒になり、その寵愛を頂きたい……！　もしくは魔人になってジル様の寵愛を頂きたい……！　はたまた他の美しい魔人の方々の寵愛を……！　強欲にもそれを望んでしまうのだ……！」
　何故ならば、とカエサルは溜めを入れて言う。皆の注目を受けていることに上機嫌になり、マントを翻し、
「何故ならこの私も――美しいから!!」
　決めポーズを決めて満足そうにドヤ顔をするカエサル。その時間を、たっぷり余韻も含めて数十秒取ったカエサルは、やがて魔物隊長を掴んでいた手から力を緩め、
「……これで分かったか？　私は醜い言い訳は嫌いなのだ。言うのであれば、もっと美しい言い訳をするがいい。努力したが叶いませんでした、とか、カエサル様の美しさに目が眩んで――とか言うなら、私も寛大に美しく許してやれるというもの」
「は、はい！　ご指導ありがとうございます！　美しいカエサル閣下！」
「フフ、よせ。そんなに褒めるな。美しい美しいと……そんなに私は美しかったか？」

美しい、と褒めると途端に機嫌が良くなるカエサル。実際にどう思うかはさておいて、更に問いかけられては、魔物隊長ももう一度言うしかない。
「はっ！　美しいです！」
「ハハハハハ！　よせよせ！　誰がそんなに褒めろと言った！　世界一の美形だと、そこまで言えとは言ってないぞ！」
「えっ……!?　あ、はい！　申し訳ありません！」
――誰もそんなこと言ってない。そう誰もが思ったが、それをツッコめる者はいなかった。
カエサルは無類の美しいもの好きであり、同時にナルシストでもある。芸術好きで男女種族問わずに多くの愛人を囲う変態でもあり、醜い者には容赦をしない暴君でもあった。
しかしそれでも、他の大将軍よりもマシではある。部下の教育も、一応は必要以上にやり過ぎることはないし、美しい者限定だが、命令も忠実に聞くし、美しい者であれば人間だろうと厚遇する。
故にカラーという美しい種族を、彼は気に入っていた。魔物大将軍になって直ぐに自ら、魔人レオンハルトに向かって、カラーを保護するようにお願いする程には。
故にある意味で、信頼を受けたカエサルはカラーの里への援助物資などを運び出す極秘部隊の指揮すら取っている。美しいものだけは裏切らない。何も言いつけなくてもカラーを守るために他の大将軍や魔人には伝わらないように動いてくれるくらいだ。
だが、当然彼だけでは色々と拗れる可能性がある。故に、ペンシルカウに向かう時は誰かしらがついているのが常だ。
「フフフ、そんなに私の美しいところが見たいか。ならば良いだろう！　次は私の美声を披露しようではないか！　ゆくぞ――」
と、誰もそんなこと言ってないのに、急に歌いだそうと準備を始めるカエサル。その背後から、カエサルよりも小さい人間のような影が近づくと、
「――いい加減……！」
「むっ？」

声が聞こえ、カエサルが振り向く。しかしその瞬間、
「――長いですっ!!」
「へぶっ!?」
「か、カエサル様!?」
魔物大将軍カエサル。体長3メートルをゆうに超える巨大な魔物が、背後に回っていた女性に蹴り上げられて吹き飛ぶ。
それをやったのは黒い外套に、白いレオタード風の衣装を着た、長いストレートの紫髪が特徴のスタイルの良い美少女だった。
「あはは、村の入口でいつまでその一人芝居してるんですかぁ？　いい加減、お優しくて美しいペールちゃんも我慢の限界ですよう？」
「ペ、ペール様……」
魔物大将軍を蹴り飛ばした魔人レオンハルトの使徒。元カラーのペールが、額に青筋を立てた笑みを浮かべていた。魔軍でも魔人に次ぐ上位の使徒。それも最強の魔人の使徒の怒りに怯えをみせる魔物隊長や魔物兵。
しかし村の入口でその登場を見たカラー達は、途端に色めき立った。
「あ、あれは……ペール様!?」
「きゃー！　今回はペール様が来たわ！」
「レオンハルト様はいないみたいだけど、ペール様が来てくれるなんて……！」
魔人の使徒とはいえ、元カラーであるペールはカラーの間では有名人である。
同じく使徒になったが、始祖であるハンティ。魔人になったが、遥か昔にカラーを守った伝説の夜の王であるケッセルリンク。
その後継者で、カラー繁栄の礎を築いたペールはカラーにとっての英霊のような存在。中興の祖といっても差し支えがなく、現在も彼女や彼女の主である魔人レオンハルトの支援を受けているのもあって絶大な人気があった。
故に、魔物に属する彼ら彼女らであっても、レオンハルトの縁によるものであれば村を挙げて歓迎するのが習わしである。

「――カラーの里、ペンシルカウへようこそ。ペール様にカエサル様」
「あ、どうもですよう」
「ぐ、ぐ……一体何が……？」
村の門の前に現れたのはペンシルカウの現女王と、その側近であるミストラル・カラーだった。
女王は穏やかな笑顔でペール達を迎え、側近であるミストラルは静かに控える。幾ら相手が元同族で友好的とはいえ、女王を差し置いて側近が出しゃばるような真似は控えるのが当然だ。
というより、ミストラルは内心で分析しつつ、静かに驚いていた。
……魔人レオンハルトの使徒であるペール様と魔物大将軍のカエサル……流石に尋常じゃない気配がするわね……。
何気に使徒や魔物大将軍カエサルを初めて見たミストラルは、その身に秘める力を感じ取り、畏怖する。一応、始祖であるハンティは何度か見たことあるし、魔人レオンハルトも一度だけ目にしたことはあるが、巡り合わせが悪く、その二人以外は見たことなかったのだ。
女王様や古い同僚の話だと、来る者はその時々によって違うとのことだが、最近は始祖様以外の使徒が来ることはかなり少なくなっていたらしい。
とはいえ、別に物資が届かなかったりするわけではないし、見捨てられた訳でもないのだから不安に思う必要はない。単純に、村のカラー達が残念がるくらいだ。
「そっちの子ははじめましてですよね？」
「私の側近で、ペンシルカウの防衛部隊隊長のミストラルですよ」
「……ミストラル・カラーと申します。ペール様、カエサル様、以後お見知りおきを」
ペールに目を向けられ、女王の紹介でミストラルが挨拶する。
しかしペールは近くに寄ってきて笑顔だが、カエサルはまだ遠くにいて、
「って、何してるんですか？　早くこっちに来て下さいよう。魔物大将軍なんだから、さっきの蹴りくらいで――」
「美しい私に傷はないだろうか、念のため確かめておこう……はっ!?

誰だ美しい貴様！　そのような美しい奴、私以外にいるはずが――私だった!!」
「ほんとに何してるんですか!?」
懐から取り出した鏡を見て、一人で馬鹿なことを言っているカエサルにツッコむペール。女王はニコニコとしていたが、魔物兵やミストラルはげんなりするしかなかった。
「ふぅ……申し訳ない。あまりの美しさに頭が混乱してしまいまして……」
「いつも頭イカれてる癖に何を、〝今おかしくなりました〟みたいな雰囲気出してるんですか？　多分、皆そう思ってますよ」
「ペール様、辛辣すぎて同調し辛いです……」
「ふふふ、いつも賑やかでいいですね」
……いや、賑やかっていうか、心臓に悪いのだけど……？
ミストラルは呑気に笑う女王を横目に冷や汗をかく。
周りのカラー達も平気そうだが、どう考えても感覚が麻痺していると思う。
今目の前でおちゃらけている二人は、どちらか一体でもペンシルカウを壊滅させることの出来る化け物だ。友好的だからその心配はないとはいえ、それだけ強い存在が眼の前にいて、自由にしているというのは、防衛部隊を率いている立場上どうしても落ち着かない。
例えば、何かの間違いで振り回した手が誰かに当たれば、それだけでか弱い者は骨や内蔵を潰されるだろう。カラーの中で女王の呪いを除いた白兵戦で最強と自負する自分でも、本気で戦おうが全く敵う気がしない。
ただまあ魔人レオンハルトを一度見ていることもあって、こちらも感覚を麻痺させられているから耐えられているとも言える。
味方と考えれば心強いし、安心出来る。
しかしまあ、近くで暴れるのは勘弁してほしいものだ。
そうやって内心で防衛上の懸念を考えていると、女王がペールから物資のリストを受け取っていた。一緒になってそれを見ながら、
「今日は……あらまあ、人間もいるんですね？」

「そろそろ繁殖用の人間も切れたと聞きましたからね。牧場から健康で若く、見た目もそれなりに良い人間をいつも通り出荷しにきましたよう」
「醜い者はいりませんからな。労働力や家畜としてなら役に立ちますが、本来なら視界に入れたくもない。美しい一族、カラーの役に立てるというなら幾らでも納品致しますとも。ええ。我らが牧場は数も相当いますからな！」
「それはまあ……ありがとうございます。助かります」
　自慢気に言うカエサルに、ニコニコと笑顔でお礼を言う女王。その横で、ミストラルは既に仕事を行っていた。
「それじゃあ積荷を確認の上、倉庫に運んでちょうだい。人間は牢屋よ。逃げ出さないとは思うけど、一応気をつけて」
「了解です、隊長」
　部下に向かって命令を下すと、カラー達が積荷に向かい、それらの中身を確認の上、倉庫に運んでいく。微かに気配と、時折呻き声が聞こえる荷車が人間だろう。それらには別の指示を出す。
「こっちは食料で、こっちは石材だ。重いぞ。こっちはその他。娯楽品なんかも入ってる。雑に扱うと壊れるのもあるから注意してくれ。人間の手錠の鍵も渡しておく」
「はい。いつもありがとうございます」
　向こうの魔物隊長と、こちらの部下が軽いやり取りを交わしながら積荷を運んでいく。
　中身は様々な物資だが、何も魔軍と同盟していたり、彼らの統治下にあるわけでもない。
　この物資、支援は、あくまでも魔人レオンハルトが、個人的にペンシルカウを援助しているという事になっている。魔軍ではなく、自分の所有物を渡しているだけという体だ。
　しかし実際には、立場的に相手の方が上位ということには違いない。そもそも魔軍は世界の支配者。そのＮｏ．２と言っていい魔人レオンハルトが、こちらと同格などあり得ないことだ。
　認識的には、守ってもらっている。保護下にあるというのが立場的

には近い。事実としてこうやって物資を貰ったり、ついでに掃除だってやってくれる。自分達にとってはそれなりに苦労する野良の人間――冒険者や、魔物討伐隊。それら崩れの盗賊なども、魔軍にとっては娯楽。少数の人間相手など戦闘にはならず、ただの狩りでしかない。

先程も人間の死体を、この魔物大将軍という化け物が灰にしていたが、どうやら相当暴れたらしい。痕跡は殆ど残っていないが、森の匂いに混じって、周囲から微かに血の匂いを感じる。

……全く、嫌になるわね……。

圧倒的な力の差。生まれながらの強者と弱者。いつの時代も変わらない不条理を感じる。

楽が出来ると考えればそれはそれでいいのだが、ぶっちゃけ日々の生活が退屈に感じる理由が、この目の前の化け物達だ、とミストラルは諦観した瞳でそう思う。

昔はこれでも、歴史に名を残すような魔法使いにでもなってやろうと努力したものだ。カラーという種では苦労するかもしれないが、外の世界を冒険してそれを叶えてやろうとも。

だが、そうやって力をつけて、ペンシルカウの防衛隊長への辞令が女王から下った矢先に見たのが、カラーの始祖であるハンティ・カラー。そして、魔人レオンハルトだ。

感じたのは、圧倒的な不条理。

天地がひっくり返っても、眼の前の怪物には傷一つ与えられない。

こちらが長い時間を掛けて費やした鍛錬を、一瞬にして無に帰す才能の差。

まるで自分が馬鹿に見えるほどの存在を目の当たりにしたミストラルは、それっきり修行を止めたし、馬鹿馬鹿しい夢を見るのも止めた。

そんなことをしなくても自分は、このカラーの森という狭い世界の中ではほぼ最強だ。だからこれ以上の修行は無意味。どれだけやったところで、眼の前の化け物たちが住む世界には辿り着けない。才能の差。生まれついての力の差は絶対だ。多少の個人差はあっても、そ

の優劣が変わることはない。歴史が、今の世界が証明している。
だからミストラルは、人間を下に見ていた。世界を支配する魔物が上位で、人間は下位。カラーはその中間。強いものが世界の在り方を、弱者の立ち位置を決める。いつの時代も変わらない世の摂理だ。そこに自分達の意志などは関係ないし、自由もない。入る檻を決められるだけだ。
その点を考えれば、同胞達が酷く賢く、自分だけが馬鹿に見えたものだ。昔は逆に感じたが、今では自分の方が間違っていたと思う。
魔人レオンハルトに群がろうとする英雄大好きな同胞達のその行動は、酷く合理的で正しく、だからこそ面白くなかった。当然過ぎて。
今更ながらそれに気づいたミストラルだが、だからといって他の同胞の様に媚を売ったり、本気で好意を持ち、ファンになることは出来なかった。それこそ今更だ。感謝もするし、見た目もいいとは思う。強さに憧れはするが、どうしても畏怖の感情の方が強い。
そして何より、今更そんなに熱くはなれない。冷めきってしまっている。
狭い世界で程々の自尊心を満たしながら、楽に生きるのに慣れてしまっている。その上で、退屈だと感じてしまっているのだから客観的に見れば救いようがない。
かといってやっても無駄なことをやり続けることは出来ないし、自殺するような趣味もない。
何もかも雁字搦めだ。この世界は。
そう心で思い、酷く空虚な気持ちになっていると、不意に相手側、ペールが女王やこちらに向かって声を掛けきた。笑顔で、
「……そういえば、聞きたいことがあるんですけど、いいですか？」
「あ、はい。何なりとどうぞ」
「……」
女王に続いて、無言のまま首肯する。特に思うこともなく、条件反射で会話を試みようとしていたが、しかしミストラルは不意打ちを受けた。
「――最近、人間の子供をこの辺りで見かけませんでしたか？」

「人間の、子供でしょうか？」
「……！」
ペールの問いに鼓動が跳ねる。表情まで動いてしまってはいないだろうか、と思うもおそらくは大丈夫の筈だ。ポーカーフェイスには自信がある。
しかしその問いがミストラルにとって厳しいものであることは変わらないが、
「どのような子でしょうか？」
「人間の少女で、見た目は小さくて可愛い子です。真っ白の綺麗な髪をツインテールにしてて、ＪＡＰＡＮ風の衣装を身に着けてて、刀を携えた少女です」
「生憎と見てませんね……その子が何か？」
「……」
……どうやら、ガイではないみたいね……。
一瞬、ヒヤッとした。使徒が探す子供を匿って飼っていたなど、どう転んでも厄介事にしかならない。退屈を紛らわすために危険を承知で飼っているとはいえ、魔人絡みの危険まで覚悟している訳ではないのだ。精々、女王や村の者にバレて怒られる程度。それくらいなら別に構わないし、キツい処罰を受けることはないと高を括っているだけだ。
だが、ガイではないとしても微妙に気になる話だった。ミストラルは話に参加して問いかけてみることにする。
「その子供が何か？」
「ええ、まぁ……なんと言いますかね。ちょっとその子供を探してましてね。もし見つけたら連絡をくれませんか？　ああ、くれぐれも危害を加えないように。色々と危険です」
問いを掛けると、ペールが視線を彷徨わせながら困ったように苦笑してそう答えた。心なしか、焦っているようにも見える。隣の魔物大将軍の方は特にそんな様子もないが、
「あら……危険と言うと、その子供が強いとか？」
今度は女王が問う。するとまた、ペールは言葉を迷わせ、

「ええと……それも間違いではないんですがね……とにかく、見かけても報告だけでお願いします。危害を加えたり、捕まえようとはしないでください。万が一でも傷を負わせようものなら――」
「……傷を負わせるとどうなるんですか？」
再び問う。するとペールは腕を組んで迷った末に、
「……死ぬんじゃないですかね？」
「えっ？」
「死ぬんですか!?」
思わず間の抜けた声を出してしまう。女王も思わずツッコんだ。ペールは頭痛を感じている風に頭を押さえ、
「ああいや、さすがに保護下にあるカラーどうこうはないと思いますし、生半可な相手では傷つけることも出来ないとは思いますけど……嫌な思いをさせるくらいなら人間でも出来ますからね……ちょっとその場合は、その人間は死にますね、ええ。確実に……」
……え、なにそれ……怖いのだけど……。
ペールの言葉に軽く引きながら戦慄する。どういうことなのかはよく分からないが、ただの人間の少女にそんな力があるのかと驚く。それとも呪いでも受けてるのだろうか、とも。あるいはやはり、
……ガイ以上に、才能に溢れた人間とか……？
時折、人間にも化け物が生まれるということは知っている。ガイはそこまではいかないだろうが、将来はかなり期待出来るくらいの人間だ。
しかし子供で強いとなると、大人になる頃にはそれこそ歴史の中に出てくる化け物みたいだ。
と内心で歴史上の偉人の事について考えていると、不意に思い出す。それは、
「あっ」
「ん？　なんですか？　何か心当たりでも？」
「いえ、その……不躾なお願いではあるのですが……」
「え、ペールちゃんにお願いですか？　もうしょうがないですねぇ……可愛い元同族の頼みならこの美少女使徒ペールちゃんが、大サー

ビスしてあげますよう！」
「ハハハ、これは面白い！　誰もそんなこと言ってませんよペール様！」
「あなたにだけは言われたくないんですけど!?」
「美しきボディーブロー!?」
「ああっ!?　またカエサル様が吹き飛んだぞ!?」
　ちょっとうるさいから黙ってほしい――そう口に出さなかった自分を褒めたかった。
　気を取り直して、ミストラルはペールに向かって真顔で本を差し出し、
「――サイン下さい」
「……ああっ、そういう……真顔で言われるから何かと……そういうことなら――」
　と、ペールがその本を受け取り、何処から取り出したのは、ペンでさらさらとサインを書いてくれる。
　それを見て、ミストラルは内心で満足した。
　……サイン入り剣王伝……ペンシルカウだとそれなりに出回っているけど、私の持っているのには無かったから癪だったのよね……。
　それに、一応は子供の頃から読んでいるし、ファンではある。
　ミストラルはお礼を言いながらも、なんだかんだでその日は悪い日ではなかったと思い返すことになるのだった。
「――あ、お、お帰りなさいミストラルさん……！」
「ただ、い――」
　――そうなるのだと信じていた。
「あ、お邪魔しています」
「……ごめんなさい。留守中に勝手にあがってしまい……」
「ききー！」
「おお、上がらせて貰ってるぜ、悪いな」
「……ふむ……しかし、カラーの里の家はＪＡＰＡＮの物に似ておるな……我は落ち着くぞ……」
「このホットケーキ、甘くて美味しいわ……でも、もう少しはちみつが

欲しい」
「……え……えっ？」
夜。ペールやカエサルなどを女王と一緒に見送り、仕事を終えて家に帰ると、そこにはテーブルを仲良く囲む異形の者達の姿。
魔法使いらしき人間の女の子、小さい猿、なんか燃えてる半裸の男、九本の尾を持つ狐っぽい胸のデカい女、何やらデカい剣を持った赤い髪の少女。
そして何より、つい先程、手を出したら死ぬとまで言われた少女と、同じ特徴を持つ少女がお茶とおやつのホットケーキを食べていて――
「……」
「あ、あの、ミストラルさん？　なんでも、この人達は、家を出てきたので僕のように匿ってほしいと……ミストラルさん？」
「どうも白兎です。家出して行くところがないので一晩匿ってください」
ミストラルは、事情を説明しようとするガイや、白兎と名乗った少女がぺこりと行儀よく礼をしたのを全て無視し、自分でテーブルにあった熱いお茶をカップに入れると、それを持って離れた窓際にある椅子に近づき、ゆっくりと腰掛ける。
そしてお茶を一口。熱くて香ばしい液体が喉を通り、己の身体を芯から温める。ほっとする気持ちだ。
そして窓の外にある星空を見上げると、深く深く息を吐き、
「……私、今日死ぬのかしら……」
「よ、よく分かりませんが死なないでください……！」
ガイの慌てたツッコミを耳にしながらも、ミストラルは現実逃避したい気持ちでいっぱいだった。

カラーの里で一泊

「――それで、貴方達は一体何なのかしら……？」
カラーの女王の側近、ミストラル・カラーはガイの慰めも手伝い気を取り直すと、改めてその不法侵入者一行に向かって問いかけた。
すると彼らはやはり順番に、
「通りすがりの冒険者、白兎です。これから英雄になる予定です。因みに、こちらは私のお友達、通りすがりの猿の藤吉郎」
「きー！」
「……通りすがりの冒険者のお付きのイヴです。色々とすいません……」
「通りすがりの不死鳥の戯骸だ。まあ、よろしくな」
「……我は通りすがりの……九尾の妖怪だ。名はお町と言う」
「私は通りすがりの……そうね……甘いもの好きのベゼルアイよ。この名乗り方が流行ってるみたいだから一応便乗しておくわ」
「……」
その六人――そもそも人じゃなさそうな面子を訝しむように観察するミストラル。
どう見ても怪しいし、微妙に胡散臭い。冒険者とは言うが、まともそうな人間がイヴと名乗った魔法使いくらいしかいないのだ。
「……色々とツッコミたいところはあるけど一先ず置いておくことにするわ……。私はこの家の主で、このペンシルカウの防衛隊隊長を務めてるミストラル・カラーよ。こっちは、ペットのガイ。というか、名乗ったのかしら？」
「あ、はい。通りすがりのガイです」
「妙な影響受けてるんじゃないわよ」
「す、すみません」
何故かガイまでこの怪しい奴らに影響を受けて名乗ったので、ピシャリと注意しておく。すると今度は相手の方から、
「ええっと……ほんと、色々と申し訳ないのですけど……ちょっとお願いさせて頂いてもよろしいですか？」

「……イヴ、だったかしら？　お願いってさっきのこと？」
申し訳無さそうに謝りながら進み出てきた小柄な桃色髪の少女――イブに向かって問う。
一応普通の人間に見えるが……何となく、少し嫌な感じもする。
というのも、一筋縄ではいかない雰囲気が隠れているような気がしたのだ。
「はい。私達を一晩、泊めて頂けないかと……」
「……貴方達のような怪しい連中を？」
「耳が痛いですが、その通りです。ですが、そちら様やこの里の迷惑になることは決してしないとお約束します」
丁寧かつ、柔和な笑みを浮かべてそう言うイヴ。そこでようやくミストラルは気づく。
何となく一筋縄じゃいかなそうと感じたのは、どうにも女王のような、交渉事などに長けたような頭が回る者を思わせるからだ。
きっと、彼女がこの一行の交渉役なのだろう。旅をするに当たって、そういった役割も重要だ。
だが、ミストラルはそれを聞いても、溜息しか出てこなかった。視界の中に、相手の苦労が垣間見えたから。
「……後ろ、見たほうがいいわよ」
「……えっ？」
イヴがこちらの言葉に従って背後を見る。そこでは、
「将棋盤と駒がありますね。せっかくですし勝負しましょう、お町さん」
「我はそこまで得意ではないのだが……まあ良かろう」
「ふふん、私は強いですよ」
「ききー！」
「どうした、藤吉郎……って、おお、もうお菓子無くなったのか」
「私も、ホットケーキのおかわりを所望するわ。後、シロップと蜂蜜とバターを貰える？」
「そういえば私も対局のお供にお菓子とお茶が欲しいです」
「え、あ、はい……それじゃ作ってきます……」

「――なに好き勝手やってんですか貴方達は!?」
フリーダム過ぎる背後の状況に気づいたイヴが吠える。一筋縄じゃいかなそうな雰囲気は消えた。
というか、
「なんですかイヴさん？　――あ、イヴさんもおかわり欲しいんですね」
「イヴは何気に食いしん坊だよな」
「何？　火起こしからしないと駄目なの？　時間も掛かるし、戯骸の上に鉄板置いて焼きましょう。そのほうが早く焼けるわ」
「俺でやんのか？　別にいいけどよ……火力調整が難しいんだよなぁ」
「え、えっと、じゃあ……また焼きますか？」
「ええ、私の分も――って、そうじゃありません!!」
イヴが全力でツッコんでいるのをミストラルは半目で呆れながら見る。何と言うか、苦労人っぷりが滲み出ていて哀愁が漂っている気がした。
「貴方……苦労してるのね」
「――ええ、まあ。私、家出少女ですから」
「白兎さんには言ってないでしょうが今の!?　絶対私への同情ですよ!!」
自分で言うんだ……、と皆が若干同情の視線を向ける。
そんなことをしている間に、ガイがイヴに向かっておずおずと、
「あ、あの……ホットケーキ、一枚目焼けたので……良かったらお先にどうぞ」
「見て下さいよ！　私、こんな初対面の少年からすら憐れまれてるんですけど!?」
「さすがはイヴさんですね。凄いです」
「きききき！」
「なに笑ってんですか藤吉郎！　ぶっ殺しますよ!?」
「きぃっ!?」
「……ホットケーキ食べていい？」

「ベゼルアイさんはもう清々しいくらいに甘いもののことしか頭にありませんね!?」
「……そんなことないわ。ちょっと、そこのミストラルちゃんと口調が被ってるなぁ……とか」
「――とか、じゃありませんよ！　滅茶苦茶どうでもいいですから!!」
「ちゃん付けされた……」
「貴方は貴方で、もっと他に気にするべきことがあるでしょう!?」
　心底忙しそうというか、自分すら巻き込んでツッコミを入れてくるイヴに感心する。他に気にするべきことがあるだろ、と言われ、ミストラルは正直に答えた。
「いえ……ここまでくると、逆に面白くなってきたわ」
「面白いで済ましちゃうんですか……」
「一番面白いのは貴方よ。友達になりたいくらいだわ」
「――貴方まで私をおもちゃにする気ですか!?」
　ぜぇぜぇと肩で息をするイヴ。そろそろ限界だろうか。もっと退屈を紛らわすために見ていたい気もするが、
「……まあ、一晩くらいなら泊めても構わないわ」
「え、えぇ……？　この流れで許可するんですか……？　正直私が言うのもなんですが、追い出した方がいいですよ？」
「貴方、どっちの味方なのよ……」
　泊めてもらうための交渉で出てきたイヴが、何故か追い出した方がいい、と言ってしまう珍事にミストラルは困惑する。イヴの方も何が何やら分からなくなってるような気もするが、とりあえず答えとして、
「というか、追い出すにも追い出せないでしょうし……」
「……コメントに困りますね。否定は出来ませんけど」
　そうだろう、とイヴの回答にミストラルは納得する。
　明らかに怪しい不法侵入者達。当然、追い出すことは真っ先に考えたものの、
　……これ、全員私より強いわよね……。
　そう。そもそも、物理的に追い出すことが難しい。

ミストラルは、そこそこ自分の強さに自信はあるし、そんじょそこらの人間には負けないという自負がある。
だが、目の前にいる者達――そもそも人間じゃない者達も、人間も皆、明らかに自分より強い気配がするのだ。
騒ぎを起こして無理矢理ここにいれなくすることも出来なくもないが、そんなことをすれば、ガイを飼っていることもバレてしまうため、出来れば大きな騒ぎにはしたくない。
となると、相手がこちらに危害を加えないことを信じて、一晩泊めてしまった方がいい。何となく、そんな雰囲気は感じないし、時間はもう夜。時間的にはそれほど長く居させる訳ではないし、明日になったらさっさと出ていって貰えばいいだけだ。
個人的にはその素性とかが大いに気になるが、好奇心はにゃんにゃんを殺す、とも言うし、素性の詮索は止めておいた方がいい気がした。
特にあの白兎という少女。使徒が探していたりするし、周囲に連れている者達もヤバそうな連中。それに白兎自身がこの中で一番底知れない気配を感じることを考えると、知ってはならないことを知ってしまいそうで怖い。
それこそ、禁忌に触れてしまったりすれば、死もあり得るような気がする。さすがにまだ死にたくはない。
とはいえ、相手もそう簡単に秘密を口にしたりはしないだろうし、大丈夫だろう。なので泊めることを覚悟すると、ミストラルは目尻を押さえた上で軽く息を吐き、
「……まぁ、構わないわ。ただ、ベッドはないわよ？　毛布があるくらいだから、その辺は期待しないで」
「！　ありがとうございます！　ですが、その辺りは抜かりはありません！　せっかくの家出ですし、夜更かしする覚悟は出来てます！」
「いや、気持ちが分かりますが寝ましょうよ、白兎さん……」
そんなこんなで、怪しい奴らを泊めることになってしまった。

ガイは初対面の彼らに驚き、落ち着かない時間を過ごしていた。

ミストラルが仕事に出かけた後、家でおやつを作って食べ終わり、一人で勉強をしていた時に急に現れた一行。
『今日はここで寝泊まりさせてもらいましょう』
『いやいやいや……不法侵入はさすがにどうかと思いますよ、白兎さん……』
『つーか、人いるじゃねぇか』
『カラーの里なのに人間の男の子がいるのね』
『ふむ……奴隷か何かかの……？』
『うきっ！』
そんな彼らを、不思議とガイは迎え入れてしまった。
迎え入れるしかなかったとも言えるが。
……凄く、濃い人達だ……。
今まで会った人達の中でも特段に濃い者達。
そもそも人間なのかどうかすら分からない者達だ。
しかし害意は感じない。
存在感は凄いが、それは怖いものではなかったのだ。
だが、かといって馴れ馴れしく話かけることも難しい相手だった。
だからガイはおやつを作り、それが終わったら再び一人で勉強を続けることにした。
一泊すればここを出ていくと言うし、彼らがここにいるのは短い時間だけだ。耐える、というと変だが、この時間さえ過ぎ去れば日常に戻ることになる。
それまで大人しくしていようとも。
だが、
「おや、魔法の勉強ですか」
「っ……！」
少し離れた場所にある机で本を開いて勉強を始めると、白兎という少女が話しかけてきた。
何故か殆ど目を開かないで過ごしている謎の少女だ。刀、という武器を常に持ってもいる。
年頃は一見すると近いように見えるが、どこか年上のような雰囲気

も感じられ、一体何歳なのかが分からない。
色々と不気味とも言えるが、とはいえ、話しかけられれば無視することは出来ない。
「……魔法を、覚えたくて……」
「ふむ。そういうことならイヴさんにアドバイスしてもらうといいでしょう」
「いや、アドバイスも何も座学はそれほど言うこともないのですが……本に書かれてる内容が分からないというならともかく、そういう風でもないみたいですし……」
と、白兎の後ろからイヴという少女までやってきた。微妙に呆れ気味の様子で、先程からも他の面子に注意して回っていたところから、かなり苦労している様子が見受けられる。
「……それよりも、ガイ君、でしたか。貴方……」
「……？　な、何ですか？」
そのイヴが不意に、表情を真面目なものに変えてガイを見る。かなり距離が近く、肩を触れられていたため、ガイは何となしに緊張してしまう。一体何だろうと疑問を感じていると、
「……いえ、やっぱり何でもありません。先程はホットケーキを振る舞ってくださってありがとうございますね」
「あ、はい。それは別に……材料も僕自身も、ミストラルさんのものですし……」
「それでも作ってくださったのはガイ君ですから、お礼を言うのは当然のことですよ」
と、肩から手を離し、距離を取ったイヴが笑みを浮かべてお礼を言う。
結局何だったんだろう、と不思議に思うが、聞き返すことも出来ないのでガイは勉強に戻ろうとして、
「どうして魔法を習っているんですか？」
「……えっ？」
と、今度は白兎の方から質問が来た。思わぬ質問に声を漏らす。
その質問を頭で理解し、その答えも当然存在するので頭の中にはっ

きりと現れる。しかしガイは、
「……出来ることを増やしたいと思ったからです」
嘘ではないが、自分の中の本当の答えを避けて回答した。
実際質問の答えとしては微妙なところだ。じゃあ、何故出来ることを増やしたいのか、とそう続けて問いかけられてしまいかねないもの。
だがそこまで考えは回らず、ガイは誤魔化そうとし、後からそのことに気づいた。
しかし白兎は、
「……なるほど。出来ることを増やそうとするのは良いことですね」
「あ……」
と、追求することはなく、微笑を浮かべてその答えを褒めてみせた。
何やら大人のような対応をされて、ガイは途端に自分が答えを誤魔化そうとしたことが何故か恥ずかしく思ってしまう。
しかし少し離れているとはいえ、色んな人がいるこの場で口にすることは、それこそ恥ずかしいような気がした。
「……僕、そろそろ寝ます」
「おや、もう寝るんですか？」
白兎が軽く首を傾げながら訪ねてくる。しかしガイは本を仕舞いながらも、
「……明日も早いですから」
そう告げて自分の寝床のある奥の部屋に向かった。
今から寝とかないと時間が無くなってしまうと、またしても嘘ではないが誤魔化すような言葉を作って。

「じゃあ、私も寝るわ。貴方達はこの居間を使って好きに寝てちょうだい。毛布はそこの棚に置いてあるのを使って」
「分かりました。オールする気満々ですけど、ありがとうございます」
「だから寝ましょうよ、白兎さん……」
「……何でもいいけど、あんまり騒がないでちょうだいね……」

「さすがに外は真っ暗だの」
「火でも点けてやろうか？」
「キャンプファイアーしましょう！」
「うきー！」
「火事を起こす気ですか!?」
「騒ぐなって言ってるのだけど!?」
　夜もかなり更けてきた真夜中。ガイは既に寝床へ向かっており、ミストラルが残った面子の不安さにイヴと共にツッコミを入れて頭を抱える。それを見たイヴが横を向いて迫真の表情で、
「……ミストラルさん。そのツッコミの切れ味……貴方、中々良いストッパーですね。どうでしょう、このまま寝ないで私と苦労を分かち合いませんか？」
「――今直ぐ寝ることにするわ」
「後生です！　後生ですから！　この面子だと真面目な人が私しかいないんです！」
「今日は自分にスリープの魔法を掛けて寝ることにするわ。絶対に途中で起きないようにね」
「それはそれでどうなんでしょうか……？」
　それじゃあ、とイヴの必死の引き止め虚しく、ミストラルも寝室に向かったところで、イヴは大きく溜息を吐く。
　居間にはこれで自分達、家出してきた一行だけになった。貴重なツッコミ用の人材もとい、胃痛を分散するための人柱になれそうな相手が消えたことを残念に思いつつ、しかし、それはそれで話さねばならないことを話せる、と思いもする。
　近くで聞き耳を立てていないことを、白兎と共にそれぞれの能力で確認を取りながら、
「まったく……いきなりペンシルカウに忍び込んで寝泊まりするなんて……何度も言いますがむちゃくちゃですよ……」
「ふふん、しかしまだ追手は来てません。灯台下暗しというやつです」
「ききー！」
　白兎とその肩に乗った藤吉郎が自慢気に胸を張る。イヴが半目を

向け、戯骸が煙管から炎を吐き出しながら、
「ハハッ、まあ確かに、レオンハルトの影響が大きいここに隠れてるなんて思いもしないかもな」
「とはいえ、直ぐに見つかる気もするが……あのハンティもどうせ探しておるのだろうしな……」
お町が真面目な表情でそう言った。するとイヴが息を吐きながらも気を取り直して、
「……先生は今、極秘任務の最中ですし、他の使徒の方々も最近は忙しいと聞いてます。レオンハルト様も本体は魔王城に缶詰めらしいので、多少は時間はあるかと思いますけど……それよりも、これだけの人数を巻き込んでしまっていることが私としては何とも言えないんですが……」
「全員、私のお友達ですから」
当然の様に言う白兎を見てると、ツッコむ気が失せてくるから困る。そう心の中で思ったイヴは、ようやくおやつを食べ終えて一息ついている同行者に目を向けた。
「……まあ、私や藤吉郎、そして戯骸さんはともかく……お町さんとベゼルアイさんはなんで来たんですか？」
「……友の頼み事は無碍には出来ん。正直、レオンハルトの迷惑になることはしたくないのだが……心配なのもあってこちらに同行することにした」
お町は憂いを帯びた表情でそう言った。どちらかというと、白兎の友達とはいえレオンハルト寄りの筈だが、何かあった時の為についてくることにしたらしい。
その心配はありがたいが、出来れば白兎を止めてほしかったとも思う。イヴはそう思いながらももう一方に視線を向け、
「それで、ベゼルアイさんは……」
「強引に誘われたわ」
「……白兎さん？」
ジト目を白兎に向ける。いつの間にか横に倒したお町の尾を背もたれにしていた白兎は当たり前のように、

「強引ではないです。ただ、事前に家まで行って、街のお菓子食べ放題券を差し出したら快くついてきてくれました」
「だからしょうがないのよ」
「ええ……」
　ベゼルアイの甘いもの好きにイヴは困惑するしかない。そんなことで釣られないでほしいものだ。
　イヴが頭を抱えていると今度は興味深そうな表情でお町がベゼルアイに、
「魔物の産みの親、聖女の子モンスターか……よもや街に住んでいたとは、初めて知ったぞ」
「あら、結構昔から家を貰ってそこに住んでるわよ。魔物も沢山住んでるし、お菓子も美味しいし、拠点にするには丁度いいのよね。城にもたまに行ってるし。同じ聖女の子モンスターのセラクロラスなんかもたまに現れるわ。だからそれほど珍しくはないわよ」
「……そうか」
　お町はベゼルアイの言葉を聞いて納得する。何気にベゼルアイはレオンハルトと千年以上の付き合いのため、比較的新参なお町や他の者達が知らなくても無理はないのだ。
　とはいえ、戯骸などは例外らしく、
「俺は知ってたぜ。家が近所だからな」
「ええ、お隣さんね。反対側のお隣さんのジーク君と一緒に仲良くさせて貰ってるわ」
「お隣さんって……ああ、そういえば皆さんは一番街にお住まいでしたね……」
　レオンハルトシティの一番街と言えば、高級住宅街であり、最低でも魔物将軍が住むような屋敷や邸宅がある一角だ。
　そのため特殊な立場のベゼルアイや戯骸なども住んでいるらしい。魔人の別荘もあるため、彼らがお隣さんであっても不思議ではないのだろう。イヴは納得したが、
「……はぁ……それじゃ、それはいいですけど……白兎さん？」
「何ですか？」

改めて白兎を見やる。夜更かしの準備でもしているのか、城から持ってきたお菓子や娯楽品を並べている辺り、相変わらず緊張感が無くて困る。お泊まり会ではないのだが、
「……家出の理由……はともかく、これだけの人数を連れてきて何をするつもりですか？」
「まあ、それは確かに気になってたがなぁ……」
戯骸が同調する。家出の理由は自分や藤吉郎だけではあるが、一応知っているのでいいとしても、態々これだけの面子を集めた理由はいまいち分かっていない。
計画的に家出をしたが、街を出る際に外で待ち合わせをした時には、白兎は戯骸にお町、ベゼルアイを一緒に連れてきており、イヴは藤吉郎と共に驚いたものだ。
故に白兎に問いたいのは、その理由。白兎の事だから、何かしらの狙いがあるのだろう。こう見えて結構用意周到なのが白兎なのだ。
今度は何を企んでいるのか、イヴは内心で訝しみながら答えを待った。すると白兎は、不敵な笑みと共にその赤い瞳を開いてみせ、
「――冒険には仲間が必要ですからね」
「……はい？」
気が抜けるようなことを言われたようで、イヴは思わず聞き返してしまう。しかしどういう意味かと改めて言葉にする前に白兎は皆に向かって、
「そろそろ私も、一端の剣士として名を上げようかと思いまして」
「名を上げる……？」
お町の疑問の声に、白兎は頷いた。
「そうです。これまで何度か旅をさせてもらっていましたが……どれもパッとしない結果に終わり、何かを達成することが出来ていません」
「ああ、まぁ……いつも途中で帰りますからね。あんまり長い外出は……その……」
イヴが得心しながらも言葉を濁す。白兎が日頃から気にしていることだったからだ。

外に出て自由に旅をしてみたいという白兎だが、それが真の意味で叶ったことは一度もない。
というのも、白兎の父親の言いつけのせいだ。
……ああ、なるほど。そういうことですか……。
それを思い出し、イヴはようやく全てに合点がいく。家出の理由と繋がることだった。
確かに、認めさせるためにはこういうことも必要かもしれないが、言いつけの理由も理解出来るため、イヴとしては何とも複雑な気持ちになる。
そうしていると白兎もイヴの言葉に同意し、刀を握る手に力を込めた。
「はい。あまり長く外に出ることは許されてませんし、外に出る時も監視が付いてたりします。なので今回は、それを無視して色々と自由に冒険をしようかと」
「別にいいけど、具体的には何をするの？」
「ベゼルアイさんはあっさりですね……」
あっさりと了承するベゼルアイを横目で見つつ、気が抜けそうになりながらもその問いの答えを待つ。白兎は、はい、とまた頷き、
「とりあえず、伝説のお宝でもゲットしようかと」
「伝説のお宝か……高い目標を立てるのはいいが、当てでもあるのか？」
「あります」
「あるんですか……」
戯骸の問いにもあっさりと答えた白兎に、もはや白兎を止めることは不可能だな、と諦めが入るイヴ。そんなイヴの心も知らず、白兎は少し楽しそうに、
「つい先日、父上の部屋に忍び込んでとっておきの宝の情報を見つけてきましたので、それを取りに行きます」
「それはまた、とんでもなくヤバそうね」
ベゼルアイの言う通り、魔人レオンハルトが持っていた宝の情報とか、何気にヤバいものが見つかってもおかしくないような気がしてく

るから困る。
「きき―!」
「……〝それは、どんな宝なんですかい？〟と、藤吉郎が言ってます」
「ふふん、それはですね――」
藤吉郎の言葉を通訳して代わりに質問するイヴ。ぶっちゃけあまり通訳したくなかったが、よく考えるとその情報を知っておいた方が何にしても役に立つと思い、やはり通訳した。自分がしなくても戯骸が通訳出来る上、白兎も大体は何を言っているかが分かるため、隠しても意味がないことでもある。
それに白兎の方も、宝の情報を皆に言いたくて言いたくてしょうがなかったのか、今日一番の得意気な表情を見せる。ドヤ顔とも言っていい。白兎は、そんなドヤ顔でこう続けた。
「何でも――聖刀日光という武器だそうです」
「聖刀……つまり、刀ですか」
「そうです。そろそろ私も、父上のように伝説の武器の一つや二つは手に入れておかないと箔が付きません」
「……まあ、それくらいなら……」
と、イヴはその名前を聞いて思考し、何となくそれくらいならいいかもしれないとも思う。
とんでもなく危険な事を言い出すならともかく、伝説の武器を手に入れたいというくらいなら可愛いものだと感じてしまうのだ。
実際、レオンハルトがたまに迷宮に出かけて武器などをコレクションにするために持ち帰ってくることもあるため、その情報にもそれなりに信憑性がある。
おそらくは、迷宮に潜るだけ、というのもいい。これが地獄とか悪魔界に行こう、みたいな話なら全然変わってくるというか、一般人的には全力で止めるところだが、さすがのイヴも迷宮くらいであれば慣れたものだし、それを手に入れて白兎が満足するならそれに越したことはないのだ。
「というわけで、明日から始まる冒険の最初の目標として、それを手に

入れに行きましょう」
「しょうがないですね……」
「きき！」
「ハハッ、面白そうだな」
「強引だの……」
「それに随分と楽しそうね」
　皆が口々に笑みや苦笑を浮かべながら頷く。最初の目標とか言っているのが不安でしょうがないが、イヴも現実逃避気味に頷いた。
　いざとなったら泣きついてでも止めることにしよう。一般人なので止められる気はしないが、とイヴはいつもの事すぎてこれくらいでは痛まなくなってきた胃を擦った。
「――というわけでお泊まり会の定番だというコイバナとやらをしましょう」
「唐突に何なんですか……というか、意味分かってます？　この面子だと無理でしょう……」
　ちょっとだけ真面目な話が終わった途端、脈絡無しに白兎がそんなことを言い出した。
　恋バナ。いわゆる恋愛トークだが、この面子にそんなものを期待するのは無理だろうと、我ながら悲しいことを言ってみるが、
「ききっ」
「え？　そんなことない？　昔、いい感じになった相手との話をしてやろう――って、それ相手もさるぼぼじゃないですか。猿同士の恋愛話なんて聞きたくないですよ」
「おお。恋バナなら得意だぜ。経験なら誰にも負けねぇ」
「男同士の話はもっと聞きたくないんですけど!?」
「……ふむ、それなら我の話をしてやろう。この間、レオンハルトと――」
「娘の前で親の恋愛話はＮＧ!!」
「恋バナは無理だけど、どんな子を産んできたかなら話せるわ」
「ベゼルアイさんのそれはもっと生々しいじゃないですか！　それも駄目ですっ！」

「イヴさんは我儘ですね……」
「誰のために注意してるか分かってますかねぇ!?」
イヴはまるで、自分のノリが悪いみたいな風に視線を向けてくる白兎にもツッコミつつ、このままでは朝までツッコミ続けることになり胃が持たないので、どうにかして寝る雰囲気にもっていけないかを思考することにした。

真夜中の指導

真夜中のペンシルカウ。
夜番のカラーを除き、誰もが寝静まった村は静寂そのものである。
それは防衛隊隊長を務めるミストラル・カラーの家も例外ではない。
彼女の家はペンシルカウの中でも外周部に近い外れにあるため、里の中心部に比べて更に静かだ。
家の中で騒いでいた白兎一行も、イヴの説得が功を奏したのか、眠る必要のない者達も一応は横になったり、壁にもたれかかって静かにしている。
白兎やイヴ、藤吉郎などはお町の尻尾をベッドと布団、枕代わりにして埋もれるように寝ていた。
故にこの家で起きている者はいない――筈だった。
「……」
すくっと音も無く起き上がったのは居間ではなく、別室の寝床で寝ていた少年、ガイだ。
彼は先程までは一応寝ていたのだろう。少し眠そうにしながらも目元を擦り意識をきちんと覚醒させると、ランプを点けて家の中の音に聞き耳を立てる。
どうやら皆寝静まっているようであった。
これなら日課をこなすことに支障はないと、ガイは部屋の窓を音を立てないようにそっと開けると、部屋の中に置いているとある物を手に、そのまま外に出た。
家の裏手。敷地内ではあるが、人の目がないその場所はちょっとした原っぱとなっており、木箱などが置かれているのみだ。
十分なスペースが確保でき、誰にも見つからないその場所で、ガイはランプを屋根に引っ掛けると、そのまま日課を始めた。
「――えいっ……！」
それは、素振りだった。
ガイが手に持っているのは、年季が入っている古びた剣。それを手

に、ガイは素振りをし始めたのだ。
「やっ……！」
縦と横に素振り。声は、大声じゃなければ気づかれないだろうが、一応は注意しつつ行う。
傍から見れば、子供の遊びに見えるだろう。実際、ガイの素振りはお世辞にも上手いとは言えないものだ。
腰は入っていないし、振り下ろす際の剣の軌跡が安定せずにぶれまくっている。余分な力が入っているし、剣の重さに振り回されているのか、時折たたらを踏んでしまうこともある。
だがガイはこれ以上ないほどに真剣に取り組んでいた。
ふざけているわけではない。全力でやっていた。
ガイの顔は真面目そのもの。額に汗を流しながら、腕が痛むのも無視して剣を振っている。一月前程から始めた日課だが、未だに慣れない。ぎこちなさは拭えていない状態だ。
しかしガイはそれを止めることはない。少なくとも一時間以上はこれを続けるつもりだった。
「――こんな時間に素振りですか」
「っ……!?」
だが、不意に掛けられた声によって止めざるを得なかった。
背後から聞こえたそれに反射的にビクッと身体を跳ねさせ、後ろに振り向くと、そこには既に寝ているはずの白兎という少女がいた。
「な、なんでここに……」
「素振りの音がしたので起きてしまいました」
「そんな――」
「いえ、そちらが悪いわけではないのでお気になさらず。私、とても耳が良いので。普通の人なら気づきませんよ」
「……」
そんなことを淡々と告げる白兎は、相変わらず瞳を閉じたまま、こちらに顔を向けている。見ているのかどうかすら不明だったが、ひょっとしたら見ていないのかもしれないと何となく思った。
聞こえるはずのない音を聞いていたというのも意味がわからな

かったが、実際にこうして気づかれてしまってる以上、彼女の言を信じるしかない。ガイは半ば諦めたように息を入れると、
「……起こしてしまってすみません」
「いえ、ですからお気になさらず。それよりも――」
と、謝罪を軽く流しつつも白兎はこちらに近寄ってくる。そして間を置きながらもガイが疑問を感じるより先に、
「素振りは再開しなくていいんですか？」
「……それは」
ガイは言い淀む。出来ることなら続けたいとは思っていた。
しかしこうやって気づかれてしまった以上、そして音で気づかれてしまった以上、今日はここで止めた方がいいかな、とも思っていたのだ。
しかし続けるように促されると迷いもする。しかも更に続けて、
「せっかくですから、私が少し指導してあげましょう」
「えっ……し、指導ですか……？」
指導。つまりは、剣を教えてくれるのだと言う。しかし、
「で……出来るんですか？」
「心配は無用です。こう見えて私――貴方の百倍は強いので」
自分よりも小柄な少女故にそう思ったが、改めて対峙してみると、その自信に満ち溢れた言動と振る舞いに底知れない何かを感じてしまう。
ガイが喉をゴクリと鳴らすのと同時に、白兎は一度微笑を浮かべ、しかしそれを直ぐに引っ込めて真面目な顔に戻ると、
「とはいえ、一晩ではそれほど多くの事を教えることは出来ませんし、とりあえずは素振りの矯正から入りましょうか」
「矯正？」
「ええ。先程、少し拝見させて頂きましたが……貴方の素振りはとても酷くて見ていられません」
「酷いって……そんなには――」
「酷いですよ。我流にしても、もう少し整っていて欲しいところです」
己の素振りが酷いと、ここまで言われてしまうと何も言うことが出

来ない。自分では、それなりの鍛錬になると思っていただけに、ガイはショックを受けて下を見る。
　だが、
「しかし――強くなりたいのなら、基本を反復することは良いことです」
「……！」
「貴方は運が良い。剣の道を志して間もない頃に、私という優れた指導者に会うことが出来たのですから。下手な指導を受けるくらいなら、我流で通した方がマシというものですが、やはり師が達人であることに越したことはありません」
　自分の事を優れた指導者とまで言い切る白兎。よっぽど自信があるのだろう。凄みを感じて呆然とする。
　そうして白兎はこちらを真っ直ぐに見据えて、腰元の刀に左手を沿えながら、
「理由はどうあれ、強くなりたいのであれば基本は欠かせない。そもそもあらゆる物事において、基礎は最重視されるもの。武術……剣理に於いてもそれは同様」
「それは……何となく分かる」
　何か物事を覚える時に、まず初めに覚えさせられるのが〝基礎〟。今必死になって学んでいる魔法にしても同じだし、料理にしても基礎を知らなければどうにもならない。
　武術に於いても、それは同じだと白兎は言う。それが意味するところは、
「基本の動きを身体と脳に完全に染み付かせなければ、高みに到達することは難しい。素振りはあらゆる動きの基礎であり、基礎がしっかりしているからこそ、応用を利かせることが出来ます。一々頭の中で全てを考えて動いていては遅い」
「……考えながら動いては駄目？」
「達人はあらゆる動きを考えるより先に、感じて無意識に動いています。無論、強くなればなるほどに判断速度、脳の処理能力も増しますが、それでもその速さは一瞬のもの。戦闘は高速の判断の連続で、そ

れらを正しく選んでいくには、やはり日頃の反復練習は欠かせません」
「考えるより先に感じる……」
それが無意識の動き。身体に染み付いた基礎の集大成となるのだと白兎は言う。
「長年の修練を重ねた達人は、年老いて身体能力が劣っていたとしても、蓄積された経験から正しい判断を無意識に選び取り、速さで勝る相手を打ち負かすことが可能だと言います。……まあ当然ですね。想定外のことより、想定内のこと。慣れているものの方が無意識かつ速く動けるのは自明の理でしょう」
「それは……うん。分かるような気がする……」
慣れている人の動きには迷いがない。
一々考えて動いているようには見えず、それでいて正確かつ迅速に、当然のようにその物事をこなすのだ。
だが、
「しかし――間違った動きを身体に染み付かせてしまってはいけません。一度覚えてしまうと、矯正するのも難しくなります」
「！」
自分の先程までの動きは正にそれだと、白兎は遠回しに告げる。
それでは意味がない。むしろマイナスになってしまうのだと、
「剣を構えて下さい」
「……はい」
素直にその指示に従う。いつもの素振りをするように剣を正面に構えてみた。
白兎は瞳を開いて、その赤い瞳でガイを観察しつつ、彼女自身も剣を抜いてみせた。
刀。ガイもあまり見たこともない細身の剣であり、ガイの持つ幅広で古びた剣に比べるとその刀身の細さや美しさが目立つ。それを彼女はゆっくりと軽く振り上げながら、
「剣を振る。その一連の動作は腕だけではなく、身体全体で行う動きです。身体の内側を意識してください」

「身体の内側……？」
まだ意味が分からずも、見よう見まねで剣を軽く振り上げてみる。その間も白兎の説明は続き、
「足の先の踏み込みから腰の捻り、呼吸を意識しながら脇を締め、胸から肩、肘は伸ばし、手首のスナップも欠かさないようにしながらその力を順番に。かつ連動させて力を剣に集約します。振る時は常に仮想敵を用意し、その相手へ振り下ろすことをイメージする。――基本はこのような形が望ましいかと」
「あ……」
白兎がお手本だと言うように、ごくごく自然な動きで、軽く剣を振ってみせる。
すると空を切る短い音が聞こえた。その姿勢は一切の乱れがなく、只々美しい。
一刀で見る者を黙らせ、息を呑ませるような素振りである。
それを、なんでもないことのように行った白兎は、刀を鞘に戻しながらも息を入れ、
「記憶しましたか？　剣筋が乱れていると両断することが難しくなる上、手を痛めますし、得物にも負担が掛かります。貴方の先程までの素振りは無駄が多く、腕を痛めるようなものでした。どのような形の剣を目指すにしても、素振りの基礎だけは憶えておくと良いでしょう」
「……は、はい……やってみます……！」
と、ガイは白兎に促されるように、剣を構え、先程の白兎の教えを思い出し、その動きをも思い返しながら剣を振る。
……確か……こんな感じで……！
腕を伸ばし、振り下ろす。すると、今までにない手応えを感じた。
「！　あまり、痛くない……」
「はい。まだまだ無駄が多く、直すべきところは多いですが、先程よりはマシになりましたね。特に肘から手首の動きはそれなりに改善されてます」
「……はいっ」

明確な手応えを感じて嬉しくなり、ガイはそのままもう一度剣を振ってみせる。しかし、
「あっ……」
「……どうやら、疲労が溜まっている様子ですね」
今度は自分でも分かるほどに素振りが乱れてしまい、白兎に吐息付きで呆れられる。彼女は頭を手で押さえながら、
「少し休憩すると良いでしょう」
「……はい……」
ガイは白兎が言う通りに休憩をしようとそのまま地面に座り込む。
すると白兎も、近くにあった木箱の上に飛び乗るように座り込み、
「せっかくですし、少し雑談でもしましょうか」
「雑談……」
「ちょうど聞きたいこともありますので」
白兎はそう言って、少し間を開けた。何となく、思考をしている仕草のような気がしながらその言葉を待つ。
するとややあって、
「先程、寝る前にも似たことを聞きましたが……貴方はどうして、剣や魔法を習得しようとしているのですか？」
「！」
問いかけに身を硬くしたことを自覚する。
それは確かに寝る前にも問いかけられたことであった。
己が魔法や剣を覚えようとしている理由。それも剣に至っては、何となく後ろめたいこともあり、このように隠れて練習に励んでいる。
――言うべきかどうかを迷う。
だが、この場を見られたことと、剣を振っているところを見られたことで、やはり言うべきだろうと思考が固まる。
それにどの道、明日になれば彼女達はここを出ていくのだ。そういう意味でも、言ってもいいか、と思う要因となり、ガイはゆっくりと口を開いた。
「……弱いから」
「えっ？」

「弱いから……強くなりたいんです……一人でも、生きていけるように」
最初の言葉は、小さすぎて聞こえなかったのか、意外で聞き返したのかは分からないが、再度、声を大きくして言う。
それはガイの心の奥底に隠している願望のようなものだ。憧れにも近い。
そして同時に、恐怖を抱えていることの証左でもある。
ガイは震えそうになる手を自分で止めて、続きを口にする。
「以前は分からなかったけど、今は分かるんです。弱いと……生きていけない。強くないと、自分や周りの人がいなくなっていくんです」
「それは……」
白兎がここに来て、初めて言葉を迷わせる。
それは残酷かつ目を背けたくなるほどに、この世の真実だ。ガイは既に、その真実に薄々気づいていた。
牧場で人間が虐められていた理由は？　自分が虐められていた理由は何だ？　母が死んだ理由は？
自分を拾ってよくしてくれた女主人が、自分を残して死んだ理由は何だ？
未だに一人で生きていけず、飼い主に迷惑を掛けている理由は何だ？
――全部、弱いからだ。
どうしようもなく。自分でも情けなく思えてくるほどに、自分は弱い。
誰かに守ってもらわないと生きていけないし、弱いから誰かを守ることも出来ない。
いずれ、今は自分を飼っているミストラルも、以前のように何かに襲われて唐突にこの世からいなくなるかもしれない。
そうなった時に、あるいはそうなった後に、自分には何が出来るのか。また誰かに飼われて、その人が死ぬまで守ってもらう生活を続けるのか。
それは嫌だった。

だから、
「僕は弱いから……これからも生きていけるように、強くならないといけないんです。大切な人を、もう失わせないためにも」
悲劇を指を咥えて見ているだけじゃ、何も変わらない。誰かが助けてくれることを期待しても、それが叶うかどうかは未知数。完全な人任せであり、弱い自分では天に祈ることしか出来ない。
だから、強くなろうとしている。だが、
「……僕はこんなだから……強くなろうとしても無駄だとは思うけど……」
「……やはり貴方……右半身が……」
「……うん。だから何をやっても弱いままなのは変わらない。普通の人よりも、僕は圧倒的に弱いから……」
右の顔を、右目を隠している前髪を掻き上げながら触れると、どういう訳か白兎もそれに気づいている様子だった。
だが不思議と驚きはない。何となくだが、眼の前の何でも知っている強い人ならば、知っているような感じがした。
「でもせめて……弱くても、何かが出来る強い自分になりたい。無駄かもしれないけど、やらないと……僕は――」
――自分の弱さに負けてしまう。
そう言い切る。それこそが、己の真実だからだ。
今でもはっきりと思い出せる。殴られる痛み。大切な人を失う悲しみ。強い化け物と対峙した時の恐怖。弱いことで苦しんだことは幾らでもあった。
その時の体験が、感情が、己の内側を掻き乱すのだ。
今も油断していると、何かが芽生えそうになる。内なる声に耳を傾けそうになる。
心に刻まれた傷が未だに癒えない。それを塗り潰すかのように、何かが噴出しそうになる。
心を強くもつためにも、強くなろうとする行為を止めることは出来なかった。
例え無駄だとしても。自分は――

「――無駄かどうかは、分かりませんよ」
「……え……？」
不意の上からの声に、ガイは顔を上げる。
気づけば自分は座ったまま頭を抱えていて、声を掛けてきた相手、白兎は木箱から降りて再び己の近くまで距離を詰めてきていた。
彼女はこちらを観察するように視線を向けながら告げる。
「……最初に見た時から違和感がありました。身体の中の音や、貴方の動きには、どうも右側だけ普通の人とは違う動き、普通と違う音が聞こえていましたから。それはやはり――右半身の五感を失っていることに起因するものみたいですね」
「……触れた感覚だけはあるけど……」
「触覚以外が存在しない。先天性か後天性か……それはともかく、病によって普通の人よりも劣ること。それが貴方のコンプレックスの原因の一つですか」
それだけが原因かと言われても、自分では理解が及ばない部分があるが、その通りである。故にガイは小さく頷き、
「……だから僕は弱いままで……何をやっても無駄――」
「――くだらないですね」
「……えっ？」
今なんて？　と言うように白兎を見上げる。しかし驚きで言葉が出てこない。
自分の悩みを一蹴してなお、白兎は続ける。再度繰り返し、
「病で右側の感覚が無いから、なんだと言うんですか？　私に言わせれば、それこそ弱者の甘え。言い訳に過ぎません。無駄かどうかは、やりきってから初めて分かることです。少なくとも、やり始めて二ヶ月か三ヶ月程度であろう貴方が言えることではありませんね」
「っ……」
言われ、ガイは心の中に不満の思いが生じる。
それは軽々しく自分の悩みを否定されたことに対するもので、
「……あなたに何が分かる。僕の気持ちなんて――」
「ええ、少しは分からなくもないですよ。私は生まれつき目が見えま

せんから」
「――――え」
今度こそ、ガイは絶句した。
生まれつき、目が見えない。視界が塞がったままだという白兎。
それは、触覚以外の右側の感覚がないガイとはまた別の――いや、それ以上かもしれない生まれついての不幸であり、普通の人間と比べて、生まれつき重い枷を付けているに等しい。
だがそんなことも感じさせない様子で、白兎は続ける。その赤い瞳を見開きながら、普通の人間と変わらない仕草で、
「ですが、見えないからといって不便を感じたことはあまりありません。色が分からないくらいですか。そちらは人から伝えられる想像力でカバーですね」
「……で、でも……見えないって……そんなの、どうやって……」
ガイは言い難そうにしながらも、疑問を口にする。今日見ていた限りでも、白兎は普通に過ごしていた。
人の顔を判別していたし、出来上がった料理を見て言い当てていた。音だけでは判別出来ないもののはずだ。
しかしそのガイの考えを否定するかのように、白兎は答える。
「視覚以外の五感が優れているので問題ありません。私が見えている世界は、普通の人間と大差ない――いえ、それよりも多くの景色が見えていますよ」
と、彼女はそれを証明するかのように、額に手を当てて、
「……今、居間にいる誰かが寝返りを打ちましたね。この体格、音から察するに、イヴさんでしょう。それと、ここから少し離れた道を通って、警備の兵が欠伸を噛み殺しながら歩いてきていますね。距離的に大丈夫そうですが、あまり大声を出すのは控えた方がいいかもしれません」
「――――」
言葉が出ない、とはこのことだ。無論、口から出まかせを言うことも出来るはずだが、白兎に嘘を言っているような様子は見受けられない。

「人や生き物の区別も、歩く際の歩幅や、空気を通る音。身体の内側から生じる音などで、体格から細かい顔つきまで普通に判別出来ます。ぶっちゃけ、貴方達のような視界に頼っている生き物よりも、見えていると自負しています」
「……す、凄いことを、平然と口にするんですね……」
「私にとっては当たり前の事です。それに、自分の長所は誇りに思うようにと、親には言われているので」
ですが、と白兎はそこで言葉を区切って続けた。
「周りはそうは思わないので、幼い頃から、それはもう気を使われましたね。……ぶっちゃけ、今でも過保護なのは変わってませんが」
「か、過保護？」
小さい声で最後に言ったことを聞き返すと、何でもありません、と声が返ってくる。どうやら色々と思うところがあるようだが、白兎はそれとは別に、自分の話を続けた。
「それでも、私に剣を教えてくれた父上は、目が見えないからと、娘だからと手加減はしませんでした。……何故だか分かりますか？」
「……」
ガイは少し考えた末に、首を振る。普通なら、そんなことは無理を通り越して虐待だと、客観的には言われるかもしれないことだ。
だが白兎は言った。それは、
「――真剣勝負の世界に、生まれもった病や才能は関係ないからです」
「……っ！」
ガイは目を見開く。
それは、目から鱗が落ちるような、己の胸に突き刺さるこの世の真実だった。
白兎は続ける。ガイが衝撃を受けて怯んでいることも無視して、
「特に戦いの世界は厳しい。相手が能力のない一般人だから。足の弱い老人だから。まだ年端もいかない子供だから。才能もない凡人だから。目が見えないからといって、手加減してくれる世界ではないんです。相手はそこを突いてくるのが当然ですし、力の強弱なんてものは関係ない。強ければ生き残り、弱ければ死にます。戦いの場に出る

のなら、どんな理不尽が襲ってこようともそれを是とする。その覚悟を以て望まなければならないと、父上は教えてくれました」
　弱い者が、戦いたくない者が戦う必要は何処にもないのだと言う。強い者に守られ続けることも、立派な生き方の一つ。強者に与することは、卑怯者の生き方と蔑まれる謂れはない。生物としては正しい姿であり、賢い生き方なのだ。
　だがそれでも。どうしても。
　どんな理由であれ、戦いに出るというなら、この世の理不尽に諍い続ける覚悟が必要なのだと、
「戦いは、良い意味でも悪い意味でも平等です。敵は貴方が弱いからと待ってはくれません。才能が無いから、身体に疾患を持っているからと手加減はしてくれませんし、寧ろ一般的に〝卑怯〟と呼ばれるような事をやってきます。そんな中で生き残り、勝利するには、実力でも運でも策でも何でもいい。何か明確な勝ち筋というものが必要です」
　だから、と白兎は、
「実力をつけるために、父上は私に厳しい稽古を課してきました。身体の動きに無駄が一つでもあれば怒られましたし、以前教えたことが出来ていないと、止めても構わないと突き放されました。戦いの厳しさを教え、諦めさせるかのように、何度も問われました」
　ですが、と、
「私は視覚が見えないことで発達した視覚以外の五感を長所に、父上の教えを胸に、己の才覚を鍛え上げ続け、それなりに強くなりました。そうなることで、さすがの父上も剣の修行を止めろとは言わなくなりましたが、未だに戦いの場に出ることは殆ど許してくれません」
「それは……心配してるんじゃ……」
　そう言うと、白兎は僅かに複雑そうな表情を見せた。視線を横に外し、
「……無論、それもあるでしょう。それと、やはり父上よりも弱いことが原因でしょうね。未だに私は、昔の弱いままだと、戦いの場に出ても無駄になると思われているのでしょう。世界にはとてつもなく強

い人も沢山いますし、その厳しさも確かに理解出来ます」
「……なら、どうして……？」
何故、そこまでして続けられるのかと疑問に思う。
今は強くなったとしても、強くなるまでには不安に思ったはずだ。
自分よりも才能のある人に諦めろとまで言外に言われて、何故続けたのか。
その答えは、
「……ええ、まあ。どうしようもない相手もいると理解はしてますが……生憎と私、諦めが悪いので」
と、白兎は微笑を浮かべ、
「目が見えないから、とか、勝てないとか……そんなことは、知ったことではありません」
「……！」
今日何度目かになる衝撃。白兎の強い言葉を、聞きようによっては、間の抜けた発言を聞いて表情を崩す。
だが白兎の方は至って真面目な様子で告げるのだ。
「何事も、実際にやってみて、結果が出るまではどう転ぶか分かりません。生まれついての弱点が、長所に変わることだってあります」
「そんな、ことが……」
「ありますよ。貴方にも、同じ事が言えます。無駄かどうかはやってみるまでは分かりませんし、少なくとも道半ばの今に、今の自分が弱いからといって、諦める必要はないでしょう」
「……」
ガイは白兎の言葉に、己を見つめ直す。
無駄だと心の奥底で思っていたはずの事は、まだ無駄になるかどうかは分からないと言われる。
それが例え、何の根拠もない口だけの言葉だったとしても、自信に満ち溢れ、実際に強くなった白兎の言葉はガイの心に酷く響いた。
厳しい言葉もあった。才能の有り無しは関係ない厳しい世界だとも教えられた。強いからこそ言える言葉かもしれない。
だが、

「……僕も……いつかは強くなれるのかな……？」
改めて問う。
自分は強くなって、一人で生きていけるように。
誰かを守れるようになるのかと、問いかける。
白兎は微笑のままで、こう答えた。
「――〝己を疑わないこと。剣の理は、その先に在る〟」
「……それは」
「父上から聞いた、私が好きな教えの一つです。己を信じ抜くことこそが、剣の理に到達するための道筋の一つだと聞きました」
「道筋の一つ？　ってことは――」
ええ、と白兎が頷く。それは、
「剣の理は一つではありません。つまるところ、強くなるための道筋は一つではないということ。貴方は、貴方だけの理を追い求めればいいんです」
「自分だけの……理……」
言葉を反復する。
言葉だけで言っても、完全に理解するには程遠い。
しかしその言葉は、己が強くなるための動機付けには十分なものであった。
だが、
「……ですがまあ、それはそれとして、限界に突き当たることもあるでしょう。幾ら努力しても、才能に負けてしまうことも多々ありますし」
「え、ええっ!?」
水を差すような言葉に、ガイは驚愕の表情を浮かべる。
先程も言われていたが、それにしても冷たく厳しい言葉だ。
冷水をぶっかけられたかのような感覚を得つつ、釈然としない表情で白兎を見る。
すると白兎は不敵に笑みを浮かべ、
「ふふん。そういう時はどうすればいいか知ってますか？」
「……どうすればいいのさ」

多少不満に思いながらも分からないので問いかける。白兎は自分の胸に手を当て、自慢気に胸を張ると、
「強い人や、周りの人に頼ればいいんですっ！」
「……それだと、今と一緒じゃ……」
「言ったでしょう。現実は厳しいんです。強くなるまでは、結局のところそうやって生きるしかない場合もあります。ですので――」
と、白兎はそこで手を差し伸べて言った。
「これも何かの縁ですし……せっかくですから、私が貴方のお友達になってあげます」
「え……えっ？」
予想外の言葉を告げられ、思わずきょとんと頭に疑問符を浮かべてしまう。
だがその反応が不満だったのか、白兎は浅く眉を立て、
「言っておきますが、私は超強いので、友達を守るくらいは朝飯前です。友達は大切にするものだと父上に教えられていますので、損はさせませんよ」
後半はやはり胸を張りながら言う白兎。
それに対し、ガイは困惑し、
「……で、でも僕……友達って初めてで……」
「……ふむ、なるほど……ぼっちですか……なら尚更、この友達の多い私が友達になってあげますよ！」
「……別にそこまでじゃ……」
有り難いが、ちょっとイラッとしてしまう。
だが嬉しい気持ちが湧いているのも事実だ。今まで、同年代の子供と友達と呼べるほどに仲良くなったことはない。
だからというわけでもないが、
「……友達って、何をすれば……？」
「別に何をせずとも友達は友達です。まあ今日のところは直ぐに別れることになりますけど、たまに遊びに来てあげますし、ガイさんが成長したら家に招待しますので一緒に遊びましょう」
「！　……う、うん……」

名前で呼ばれ、遊びにも来ると言われ、ガイは途端に嬉しく思ってしまう。
初めての友人が出来たというだけだが、心が温かくなるのを感じて表情を綻ばせていると、
「そうですね……では、これをどうぞ」
と、白兎が懐に手を伸ばし、何かを取り出すとそれをガイに手渡す。
渡されたのは、何やら紋様が描かれたコインだ。
「これは……？」
「まあ、身分証明が出来るものです。それを持っていれば私の家に来ても捕まるようなことはありません」
「……どんな家なんですか……？」
家に行くだけで捕まるとか、想像もつかないのでそう聞く。しかし白兎は口端を軽く上げると、
「今は秘密です。大人になったら教えてあげますので、楽しみにしといてください」
ふふん、と意味深に笑みを浮かべて言う白兎。それを聞いたガイは半目で、
「……そっちもまだ子供じゃ……」
「――誰が子供ですかっ！　こう見えても私は立派な大人です！　子供っていう奴はぶっ殺しますよ!?」
「え、ええっ!?　そんなに小さいのに……！　嘘じゃ――」
「嘘じゃないです！　次小さいって言ったら斬りますからね！」
真夜中に、騒ぎ合う声が響く。
あまり大声を出すのはよろしくなかったが、ガイは初めての友人が出来た喜びでそれを忘れ、思わずはしゃいでしまっていた。
そして思う。これからも、頑張ろうと。
明朝、白兎達が家を出ていくところを見送りながら、ガイは僅かな希望と友人を得てそう思ったのだ。

怒りの日

魔王城。人間にとって世界一危険な場所と呼ばれる魔王の居城。
しかし、魔物にとって世界一安全な場所かと言えば、そうとは限らない。
「はぁ……はぁ……っ！」
魔王城の廊下で息を乱し、焦った様子で走る魔物隊長がいる。
彼はこの魔王城の警備を行っている部隊に所属する兵士であり、魔軍に入ってまだ数ヶ月という新兵でもあった。
だが世界を支配している魔軍の一員になれた上、元々力があったことから直ぐに隊長に昇進出来たという喜びも束の間、魔物隊長は、この魔王城という勤務場所の危険さを思い知っていた。
ある意味で、その危険地帯から逃走しつつ職務内容に従い、謁見の間へ、もしくはその道中でそれを止めることが出来る誰かしらに会えないかと探して回る。
しかし結局は誰にも会えず、そのまま謁見の間へと辿り着いた魔物隊長は、切らしかけた息を整えつつ、その場にいた大柄の魔人に報告の声を上げた。
「――し、失礼します、ノス様！」
「……ふん。騒々しい……何があった？」
主のいない謁見の間にいたのは、魔人ノス。
魔人四天王にも名を連ねる、言わずと知れた強大な魔人の一人で、魔王ジルの側近を務める大柄で茶色い岩のような肉体を持った老人である。
強大な力を示すような、その物理的な圧力を持った存在感を感じて畏怖を覚えつつも、魔物隊長はノスの問いかけに答えた。震える声を抑えながら、
「い、一階の西側の廊下で、魔人レイ様と魔人レキシントン様が喧嘩を始めました！」
「……またか。懲りぬ奴らよ」
ノスは魔物兵のその報告を聞いて、半ば呆れるような響きで声を漏

らす。
魔人レイに、魔人レキシントン。どちらも血を好む魔人の中でも特に血気盛んな魔人達だ。いざこざが絶えない二人でもあり、他の魔人に喧嘩を吹っ掛けることも多々ある困った連中。
ノス自身も、魔人同士での喧嘩を行うことはあるが、主の事が最優先であるため、時と場合、場所は弁えるし、無闇矢鱈に喧嘩をすることなどしない。血湧き肉躍る闘争は、何の憂いもない状態で行うのが望ましいものだ。
だが、レキシントンやレイは違う。レキシントンは馬鹿で後先考えないので、好き勝手思うがままに行動するし、レイに至っては気に入らないことがあれば暴れる、そこらのチンピラでしかない。
どうせやるのであれば、魔王城とは別の場所でやればいいものを、と思うも、レキシントンはともかく、レイはジルを慕っているため、割と頻繁に魔王城を訪れる。
つまり今日は運が悪く、彼ら二体が偶然鉢合わせしてしまったのだろう。
「……あのレイのことだ。レキシントンの挑発にでも引っかかったのであろうな」
「け、喧嘩の原因は分かりかねますが、とにかく、このままでは周囲の損傷が……！」
「全く……あの馬鹿共めが……」
確かに、下から振動が響いてきているし、魔人の闘気とも言うべき戦いの気配が感じられる。
この魔王城は魔王の居城として設計されていることもあり、魔人が多少暴れても平気なくらいには頑丈ではあるが、それでも絶対に破壊出来ないというほどではない。
魔人が本気を出して攻撃すれば、城の一角とはいえ、それなりの被害が出る可能性がある。
多少であればともかく、あまりにも騒ぎすぎるようであれば止めるのが側近であるノスの役目でもある。
「一階、西側の廊下であったな……」

「はっ！　現在は、イヴァン大将軍閣下が被害を抑えようと部隊を率いております！」
「奴か……とはいえ、魔物大将軍には荷が重い」
魔人や使徒を除いた魔軍の最高位である魔物大将軍の内の一体とはいえ、魔人の喧嘩を止めることは難しい。
若い魔人であれば魔物大将軍でもそれなりにやれる可能性はあるが、そもそも無敵結界を突破出来ないので戦闘にならないのだ。イヴァンであれば相性は悪くないだろうが、無敵結界だけはどうにもならない。放って置くとイヴァンが突っ込んでいき、喧嘩の被害が拡大する可能性もある。
故にノスは早速向かおうとした。喧嘩を止める。つまり、二体とも叩き潰してしまえばいい。そのことに対する、僅かな喜悦を覗かせながらも、魔王ジルに対する忠誠を示すために忠実に動こうとしたところで、
――魔王城に、激震が走った。
「――！」
「ひぃっ!?」
眼下から伝わる振動と轟音。魔物隊長がその場でよろけ、ノスもよろけることこそなかったが、その場で足を止める。
「この気配は……」
そして感じた気配。それを読み取り、何が起こったのかを大体察する。
「……ふん。どうやら、喧嘩は終わったようだな……」
「え、えっ？」
つまらぬ、と言わんばかりに鼻を鳴らすノスに魔物隊長は頭に疑問符を浮かべるが、一々説明する気も起きない。
魔人二体の喧嘩。それを止めることの出来る人物など限られている。
この城にいる者の中であれば、尚更少ない。自分と主ではないとすれば、残りは一人しかいないのだと、ノスは興味を失ってその場から退出した。

――それは、ほんの少し前のこと。
「おっらあああああああああああッ!!」
「――潰れろ!!」
魔王城一階では、人外の戦いが巻き起こっていた。
その場に生じる現象はどれも苛烈。
轟音と共にその場に吹き荒れる雷や、怪力で地面や相手を穿った際に発生する衝撃波に振動。
髪を逆立て、怒りと共に放電し、喧嘩スタイルの肉弾戦を行う魔人レイと、その豪腕で二本の巨大な金棒を巧みに操り、雷に撃たれながらも鬼の打たれ強さで全てを受けきりながら修羅の笑みを浮かべる魔人レキシントンの戦闘は、並の生物では立ち入ることが出来ない魔境となっていた。
少しでもその場に近づけば、飛んできた流れ弾の雷や瓦礫に激突し、その命を落としてしまうこともある。
故に魔王城に勤務する警備の魔物兵達は、魔物隊長や魔物将軍も併せて、遠巻きに怯えながら眺めることしか出来ないでいた。
「ぎゃあああああっ――!?」
「ま、また雷が来たあ――!?」
「い、いかん！　下がれ！　後退だ！」
「く、くそ……こんなの止められるわけねぇだろ……！」
また一体の魔物兵が稲妻の打撃を受けて崩れ落ちる。それを見た魔物将軍の指示によって、兵達がまた後ろに下がった。
魔物兵達の誰も彼もが、魔人の戦闘に恐れを抱き、この場を放棄して逃げ出してしまいたい思いを抱える。
だが、それは出来ない。
兵としての使命感ではない。逃げれば、別の意味で危険であるからだ。
そんな魔物兵達が恐れるもう一体の存在は、最前線。黒焦げになった魔物兵の近くにいた。

「い、イヴァン様！　お下がりください！」
「……」
副官の魔物将軍が思わず声を掛ける。
その声の先にいたのは、巨大な魔物だ。
体長３メートル。重さは２トンを超える巨躯を持つ魔物は、中心にある胴体部分に人間の顔のようなものを浮かばせており、手には僧侶が持つような黄金の錫杖を手にしている。
そんな魔軍であれば誰もが知るその魔物こそが、世界で同時に７体までしか存在することが出来ないと言われる魔物大将軍の内の一体。魔物大将軍イヴァンである。
そんな彼は、黒焦げとなった魔物兵を見下ろすと、
「……お、おお……何ということだ……！」
錫杖を持ってない方の手で顔を覆い、悲しみに打ちひしがれたように片膝を床に突くと、
「我が兵士が、よもやこんなところで魔人の方々の喧嘩に巻き込まれて天に旅立ってしまうとは……っ！」
涙を一粒零し、魔物兵の死に心底悲しんでみせる。そこへ、
「い、イヴァン様！　そこは危ないです！　早くこちらへ！」
「おお……天主よ……！　我が身を案じてくださるとは……しかしそれよりも、今しがたそちらへ旅立っていった我が子らをよろしくお頼み申す……！」
「天主じゃありませんから!?　正気に戻って下さい！」
副官の魔物将軍が１０体ほどの兵を引き連れ、必死になってイヴァンの元に駆け寄り、その身体を皆で引いて下がらせる。体重差が物凄いのでかなり苦労していると、
「……む、曲者か!?」
「へぶんっ!?」
途中で引っ張られていることに気づいたイヴァンが、背後の魔物兵と魔物将軍を振り払う。
魔物大将軍の巨体。それほど力を込めていないとはいえ、軽い突き飛ばしを食らった彼らは軽傷を負ってしまう。

だが何とか正気に戻ってくれたのか、イヴァンは彼らを見て、
「ん、何だ。我が兵らではないか。どうした？　礼拝の時間か？」
「礼拝ではなく、任務中でありますイヴァン様!!」
「おお、そうであったな。任務中、それも魔王城の警備の最中であった。どれ、私が指揮を――ん？」
と、部下に言われて自分が何をしていたか思い出すイヴァン。だがそこで、魔物将軍や一部の魔物兵の傷を見て動きを止めると、
「その怪我は……！　誰にやられた!?　くっ、我が兵を傷つけるとは、何と卑劣な……！」
「――アンタだよ!!」
「もとい、魔人の方々なのでその発言は色々とまずいかと！」
魔物将軍と魔物隊長が続けてツッコミと注意を行う。イヴァンの軍から連れてきた者達であるためか、そのやり取りは大半の兵達にとっても見慣れたものであった。しかしイヴァンはそれすら聞いていないのか、杖を怪我をした者達に向けると、
「ふむ、とりあえず、治療をしてやらねば……〝回復の雨〟！」
「おお……！」
イヴァンが神魔法で部隊の面々の治療を自ら行うと、怪我をしていた者達が感嘆の声を上げた。
魔軍の中では比較的珍しい神魔法の使い手であるイヴァンの治療は、イヴァン個人の能力の高さも相まってそれなりに効果が高いものだ。
再び満足に動けるようになった彼らを見て、イヴァンは錫杖で地面を突き、満足そうに頷く。
「さあ、我が敬虔なる兵達よ……これで傷は癒えたであろう。己が使命を思い出し、再び任務に励むがよい……！」
「あ、ありがとうございますイヴァン閣下！」
魔物兵達は治療してもらったことに礼を言う。だがその裏でひそひそと、
「……きょ、今日は大丈夫なのか……？」
「大丈夫な筈だ……世話係の話だと、今日は朝起きてからずっと良い

ことしか起こってないらしいし、まだまだ爆発はしない……と思う」
「と、とりあえず怒らせないように注意しろよ……！　この状況でイヴァン様が怒ったら、それこそ目も当てられない大惨事になっちまう……！」
魔物兵達は優しいイヴァンを見ながらも、その動向に注意し、彼が何かをする度に身体をビクッと跳ねさせる。魔物隊長や魔物将軍もそれは同じで、周囲では甲斐甲斐しくイヴァンの世話、もとい護衛をするために付かず離れずの距離を保っていた。
それだけ、部下にとってイヴァンは怖ろしい上司なのである。
だがそれも、怒らせればの話。彼を怒らせるような何かを起こさなければ、イヴァンはずっと部下の怪我や死に嘆き悲しむ優しい存在だ。
だが、
「――む？」
「あっ、やば――!?」
不意に、宙を走って雷が飛んでくる。
魔人レイが放ったそれは、真っ直ぐにイヴァンに向かっていくと、
「――!!」
「い、イヴァン様!?」
「ま、まずい……！」
――雷撃が、イヴァンに直撃した。
魔人の放った雷の威力は、魔物兵をまとめて黒焦げにしてもあまりある威力。
それが直撃して、無事でいられるはずがない。そう思うのが普通だ。
だが、イヴァンをよく知る者達が心配しているのは、それとは全く別のことだった。
雷を受けたイヴァンが動きを止めて無言になっている。
彼の身体を跳ね回った電気が宙に消え、僅かな残滓として煙と帯電を起こしている。
そんな中で、

「――き……」
「い、イヴァン様!!　そういえば今日は、イヴァン様が好きな――」
魔物将軍が咄嗟に機嫌を回復させようと言葉を尽くそうとするが、遅い。
イヴァンの周囲からは、消えて無くなった筈の雷が何故か復活していた。
「き、貴様アアアア

「今直ぐ逃げねぇと……！」
一瞬でパニックに陥る魔物兵達。
理不尽を受けて怒りが頂点に達し、我を忘れたイヴァンの周囲にいれば、ただですまないと彼を知る誰もが知っているのだ。
だが、その怒りはまだ魔人に向いている。兵達にとってそれは僅かな救いだが、魔物将軍や魔物隊長からすればそれは救いでも何でもなかった。
「お、お待ち下さいイヴァン様!!」
「！」
一体の魔物将軍が、覚悟を決めてイヴァンに制止の声を投げかける。
イヴァンの顔が魔物将軍の方を向くと、
「……何だ貴様ぁ……我の怒りを止めおって……！　まず貴様から死にたいかあああああああああああああッ!?」
「お、恐れながら申し上げます!!　幾らイヴァン様とはいえ、相手は魔人であります!!　さすがにそれは無茶であるかと愚考致します!!」
魔物将軍は言い切る。それはイヴァンの身を案じるがゆえの本心だった。
イヴァンは一度怒れば、その怒りをもたらした相手を殺害する。それはどんな相手であっても変わらない。さすがに魔王のような相手に怒ることこそないが、前に牧場の人間が些細な事でイヴァンを怒らせた際には、その場にいた数百の人間だけでは飽き足らず、近くにあった人里を探し出して単身で突撃し、滅ぼしてしまった逸話すらあるのだ。
そしてその殺戮は時に部下にも及ぶ。止める事の出来る相手は限られているため、怒りが収まるまでは逃げるしかない。
だが、魔人に向かっていくことを放置することも部下には看過できない。
故に具申したのだが、
「……貴様、今なんと言った？」
「……え、ですから――」

「――我を誰だと思っているッ!!」
と、再度言葉を告げようとした直後、それを差し止めるかのように、
「この我が……あの程度の攻撃に怯むとでも思うのかッ!? あの程度の雷なんぞにぃ……!」
「で、ですが相手は魔人でありまして――ぎゃあああっ!?」
瞬間、魔物将軍はイヴァンの雷をその身に受けた。
「貴様アアアアアア!! まだ言うか!! このッ……貴様は粛清だ……!!」
「ア……ぐぅ……ッ……」
黒焦げとなった魔物将軍が地面に沈む。
だが、それだけではイヴァンの怒りは収まらない。
「貴様らも……! 何を逃げようとしておる……! そんなに我の怒りを受け止めるのが怖いかアアアアアアアアアアアアッ!?」
「ひいいい!? 将軍がやられたあああ!?」
「こ、こっちにも来るぞ!! 逃げろ!!」
「お、おやめ下さいイヴァン様!? うあああああああっ!?」
蜘蛛の子を散らすように魔物兵がその場から逃げようとする。
しかし、イヴァンは黒焦げにした魔物将軍の胴体を手で掴むと、そのままそれを持ち上げ、
「オオオオオオオオオオオオ!! 貴様らは粛清だアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
「やめ――ぎゃあああああああッ!!」
魔物将軍を魔物兵の真ん中に雷撃を纏わせてから投げつけ、また数十体の魔物兵が雷に撃たれて焼け死ぬ。魔物大将軍の魔人級の身体能力で魔物兵を容赦なく殴り殺し、巨体で踏み潰し、逃げる魔物兵は雷撃で後ろから撃ち抜いていく。
だがそれをしてなお、イヴァンの怒りは収まらない。その大本を消さなければならない。
「――この若造がアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」
「ッ……!」
「あん?」

喧嘩の最中であった魔人レイは突然、全力で突撃してきた巨大な魔物に目を向け、魔人レキシントンも割って入ってきた魔物大将軍に首を傾げた。
「誰だテメェは……！」
「我を知らんのかアアアアアアアアアッ!!　なら死ねぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!」
「っ……こいつ……！」
戦闘中の魔人レイに横からタックルを仕掛けたイヴァンは、そのままレイを全力で掴んで壁に向かって突撃していく。
レイは不意に現れた魔物大将軍に眉を顰め、更には自分の雷が殆ど効いていない事実と、魔物大将軍だというのに魔人に逆らって攻撃してくるイカレっぷりに更に表情を険しくした。
だが、一番ムカついたのはそこではない。不意打ち気味であったせいもあるが、タックルを振り解けずにレイは思わず舌打ちをした。
魔物大将軍の3メートルの巨体。体重2トンの重量。魔人クラスの膂力。そして体勢の悪さと雷が効かないことによって、レイは初めて経験する体当たりからの組み付きを食らっていた。
「オオオオオオオオオッ!!」
「ッ……この、イカレ野郎が……そんなに死にてェなら、望み通り消し飛ばしてやる……！」
「ハハハ!!　なんだか知らんが面白い！　儂もまだまだ暴れてやるぞ!!」
タックルで押して、そのまま壁に激突してレイを力の限り叩きつけると、無敵結界でダメージこそないが、魔物に投げ飛ばされ、壁に叩きつけられたという事態にレイも怒りのボルテージを上げる。
更にはレキシントンも喧嘩の相手が増えたことで楽しそうに金棒を振り回し始めた。
「く……ど、どうすれば……！」
逃げることなくその場にいた魔物将軍は、もはや収拾がつかなくなってきた現状に頭を抱える。
一応部下をやって、誰かしらに止めて貰えないかと他力本願な手は

打ったが、それはまだ期待出来そうにない。
とはいえ、このまま三体の化け物の喧嘩を放置しておくと、城の破壊が拡大していく可能性が非常に高い。
そして何も手を打たずにここに居続けること自体も、魔物将軍の身を危うくしている。
逃げるか残るか。何か別の手を打つのか。
ああでもないこうでもないと頭を振りつつ、そうしている間に三体の喧嘩が始まろうとしている。いっそのこと、現実逃避して部屋にでも閉じこもってやろうかと駄目な考えが頭に過り始めた時だ。
「――どいてろ」
「へ……？　あっ……！」
不意に響いた通る声に、魔物将軍は間の抜けた声をあげ、そして顔を青褪めさせる。
その相手の威圧感。言いようもない恐怖を感じて、思わず後ろへ後退る。
それはとても頼もしい援軍に違いなかった。
しかし、明らかに不機嫌な相手の様子に、魔物将軍は本能から腰を抜かし、直視することを恐れた。
魔物将軍がその赤い瞳から逃れるように顔を背けて頭を抱えているその間に、その人物はゆっくりと喧嘩をしている三体に近づき、
「――おい」
「あん？　誰――っ……!?」
魔人レキシントンが不意の声に振り向こうとした瞬間。その巨体が、轟音と共にふらりと揺れて倒れる。
「っ……今度は何だ……って――」
「アアアアアアアッ!?　誰、だ――」
普通では起きないような音を耳にし、レイもイヴァンもレキシントンの方に顔を向け、そこで表情を変化させた。
ふらりと前に倒れるレキシントンの後ろから出てきた人物。その顔と、尋常ではない存在感を察知した瞬間、最も露骨に変化したのはイヴァンの方だった。

レイの方は、軽く舌打ち。嫌な奴が割って入ってきたと相手を睨む。
だが、比較的慣れているレイから見ても、今の相手は――明らかに不機嫌な様子だった。
「……」
「う……ぁ……ち、違うんです、レオンハルト様……これは……っっっ――!?」
次にやられたのは、イヴァンだった。
イヴァンは顔を青褪めさせ、必死に言い訳をしようとする。既に怒りは消え去り、そこには恐怖の色しかない。
だがその鋭い瞳から逃れようとした瞬間、イヴァンは顔を壁に叩きつけられ、城が揺れるほどの一発を受けて気を失ってしまっていた。
それを見ていたレイは、じり、と僅かに右足を後ろに下げてしまった自分に苛つきつつ、
「……随分と苛ついてんじゃねェか――レオンハルト」
「……」
相手の魔人。相変わらず自然と見下されているようにすら感じるその鋭い威圧的な視線を向けてくる魔人レオンハルトに、レイは話しかけた。
だが、レオンハルトは言葉を返さない。いつもならムカつくくらいに説教じみた言葉を掛けてきたり、相手にされずとも馬鹿にするような発言を返してくるはずだ。
だが今はそんな気配すらない。鬱陶しいくらいに、重圧だけを感じる。
その対峙は猛獣を思わせた。いや、猛獣なんて生易しいものではない。怪物や化け物という言葉が相応しいだろう。
己の力ではどうしようもない強い生物が、眼の前で不機嫌になっている。
それは並の人間であれば、その場にいることすら耐えられない。
生物としての格が違う相手からの威嚇にも似た気の奔出は、その場にいる弱者の敵意や戦意を奪ってしまう。

事実、レイは今更ながらに気づく。先程まで外野で騒がしかった魔物兵の声が聞こえない。
皆、レオンハルトの背後――彼が通ってきた道の途中で気絶してしまっていた。
多少耐性のある一部の魔物隊長や魔物将軍の中には気絶していない者もいるが、それでも猛獣がこの場から立ち去ることを影でやり過ごそうとするように、膝を突いて震えている。
それは服従の誓いだ。
一種のカリスマであり威圧を受けた彼らの、防衛本能から来る全力を懸けた生き残る為の行動だ。
従うから助けてくれ――そう言わんばかりの行動であり、そうすることで心の均衡を何とか保っているのだ。
同格の生物である魔人のレイにも、問答無用で襲いかかるその気に、レイは眉を顰めつつ口を開いた。一撃で沈まされて床で呻くレキシントンや気絶したイヴァンを横目で見ながら、
「随分とまた化け物になりやがって……それとも、それがお前の本気か？」
「――お前程度に、本気など出すか」
「ッ……テメェ――ッ……!?」
とうとうレオンハルトが口を開いた。
だがそのレイにとってムカつく言葉を聞いた瞬間、レイは自分の腹に突き刺さる拳を受けて、悶絶して倒れ込む。
尋常ではない力。魔物将軍程度なら粉々になるレベルの力で殴られ、さすがのレイも声を発する事も出来ない。
気を失うことは無かったが、床から見上げるレオンハルトの眼は、いつもより格段に冷たく、見ているだけで、見られているだけで身体が冷えていくような感覚を得た。
だがレイには、その気に覚えがあることにも気づく。
魔王ジルが発する、恐怖を誘発させるような気にも似ているのだ。
最強の魔人が発するそれは、畏怖というのが近いが、化け物じみた存在感であることには変わりない。

速度はそれほどでもない拳を避けきれなかったのも、いつもよりも格段に重い圧力を感じていたからだ。

レイは、その場から去っていくレオンハルトの後ろ姿を見ながら、何故これだけ不機嫌なのか、その理由が気になりつつ、再戦を己に誓った。

子供の夢

その部屋の空気はいつもと比べて、とても静かであった。
主の性格を表すような実用性を重視した調度品は、その建物の厳かさに負けない程の最高級品ばかりでありながら、下品になりすぎないように配慮しているのか、派手さはそれほどでもない。成り上がり者が陥りがちな、自分の地位や名声、権威を見せつけるために用意させた、取って付けたような綺羅びやかなもので部屋を埋め尽くすような真似はしない。自分が単純に気に入ったものを置き、気に入らない物はどれだけ高級だろうが置かず、汚れれば取り替える、そんな普通の部屋の配置は、この建物の所有者にとって、このレベルの生活が特別でもなんでもない、〝普通〟であることを表している。
故に部屋の物が壊れようとも、決して怒ることもない。器の狭い者や、余裕のない者であれば壊した相手の責任を厳しく追求し、貴重な品を失ったことに憤るだろうが、本物の支配者であれば多少の財を失ったところで怒りはしない。真に世界の支配者であるのならば、財など幾らでも調達出来るはずだからだ。
だが、己が真に大切にしているモノ――替えの利かないような人や物が傷つけられるようなことがあれば、その支配者とて感情を持つ存在だ。怒ることもあるのが道理である。
故にその赤い城の主である魔人レオンハルト、その影はこれ以上ない程に不機嫌であった。
「……」
部屋にあるどんな高級家具や調度品、万人を感嘆させるような芸術品であっても、二千年の時を生きる怪物の存在感には敵わない。例え本物には及ばない影であっても、その鋭い目つきとその中にある赤い瞳を向けられれば、並の人間は蛇に睨まれた蛙のように動けなくなるだろう。
これはどの魔人にも言えることではあるが、そもそも魔人というだけで通常の生物とは生物としての〝格〟が違う。
彼らはこの世を支配するために生み出された、謂わば生まれながら

の王だ。魔人としての生を受けた瞬間から、彼らは地上のあらゆる生物を凌駕する力を持つ。
弱き者が淘汰され、強き者だけが上に立つ暴力の世界に生きる彼らは、鍛えれば鍛えるほどにその身に纏う存在感を増していく。
カミーラ、ケッセルリンク、ノス、ケイブリス――長い時を生き、魔人の中でも強者と呼ばれる者達であれば、皆一様に通常の魔人のそれを増幅させたような、その場を支配するような気を纏わせるものだ。
若い魔人が血気盛んに暴れようとも意にも介さない。同格の化け物ではあっても、歩んできた歴史が、経験が、実力が違う。
もはや、彼ら自体が一種の芸術品といっても差し支えない。最強の魔人と謳われるレオンハルトであれば、幾度もの戦場を経験しながら研ぎ澄まされた刀剣の如く、鋭く見る者を畏怖させる修羅の気を纏うものだ。
加えて容姿も男性として極まっているともなれば、その気も相まって、男性は単純に憧れ平伏し、女性であれば魅了される。次元の違う存在に嫉妬など覚えない。一体誰が、空に浮かぶ太陽や月、星々に嫉妬などするだろうか？
凡百の存在は、ただ見上げてその恩恵を享受するのみ。畏怖するか、憧憬を覚えるか、魅了されるか、恐怖するかは、見る者の心次第である。敵対する者には容赦なく降り注いで焼き尽くしてしまう灼熱の光であっても、内側にいる者にとっては何よりも安心出来る温かい光でしかない。敵にとっての英雄は憎むべき大量殺人者だが、味方にすれば何よりも頼もしい英雄でしかない。
つまるところ、彼は彼でしかない。
周りは彼の気に様々な反応を見せるが、レオンハルト個人は単純に不機嫌というだけなのだ。
そこには周りを威圧して怯えさせるような意図はない。問題を起こすような、仲が特別良くない同僚程度の相手であれば、機嫌が悪い分、多少キツい感じになってしまうだろうが、その程度でしかないのだ。
つまり――普段は修行がてらかなり抑えている自分の気を、不機嫌

さから抑えることが出来ていないだけである。
仕事をしている大人の男性が、嫌なことがあってちょっと周りに気を使う余裕がない事例と大差ない。
先程も本体の方が、起きた問題に対していつもとは比べ物にならないほどにイライラしていたが、思わず怒気を抑えなかっただけのこと。
レオンハルトという強大な存在がやっているからこそ恐れられ、噂が広がるほどに大事になってしまっているのだ。
実はその不機嫌さを引き起こした事件は、別に魔人同士のいざこざでも何でもないというのに、魔物界では魔人レオンハルトがここ数百年で一番の怒りを見せていると戦々恐々とし、ありもしない怒りの原因を考察されていた。
だがその原因は、一般家庭でも起こりうるような、謂わば普通の事件である。
魔人レオンハルトの影はその事件を憂いて、執務室のソファーに腰掛けて前かがみに俯いていた。
もしここに、並の人間が現れようものなら、泡を吹いて倒れることも有り得る――そんな場所にノックの音が響き、程なくして入室してくる者がいた。それは、
「――失礼致します。ご主人様」
「……メイド長か」
その部屋に入ってくるなり、優雅に一礼をしたのはこの紅魔城のメイド長を務める女の子モンスター、メイド長さんだ。
彼女は普段と全く変わらない柔和な笑みを浮かべ、魔人レオンハルトもいつもより低い声でありながらも応対する。恐れているような様子は見られない。
そもそも恐れる必要など、彼の身内にとってはない。不機嫌だといっても、身内に当たるような彼ではないし、そもそもその理由が思わず苦笑いしてしまうようなものである。
故にメイド長さんも、他の者達の例に漏れず、レオンハルトに普段通りに接した。笑みのままで、

「そろそろ昼食のお時間ですが如何致しましょう。ここに運ばせますか？」
「……いや、いい。料理長には悪いが、今日は食欲が湧かないからな」
「左様で御座いましたか。ではその様に。それと先程、魔人ケイブリス様の使者の方から言伝が」
「……内容は？」
「はい。急用が出来たので、予定した訪問をキャンセルしたいと。代わりに貢物を献上致しますので、平にご容赦を――とのことで」
「……分かった。構わない。貢ぎ物はいつも通りの対応をしてくれ」
「畏まりました」
メイド長さんが了承。レオンハルトの方も、言葉の上では普段とそれほど変わりない。
分身であるため、そもそも食事は本体以上に摂る必要がないもので、配下の者達が分身であってもレオンハルトはレオンハルトだと言うので食事休憩も一応いれたりしているが、いらないといえばいらないものだ。
ケイブリスの用事にしても、別にキャンセルだと言うならそれで構わない。元々貢ぎ物を送るためにケイブリスが定期的にやってくるだけのものだ。
言伝の内容はメイド長さんや使者を介して送られてきたものだから普通に聞こえるが、本当のところは、噂を聞きつけたケイブリスがビビって急遽訪問を取りやめたというのが真実である。しかし、レオンハルトはそれとは気づかず――というか、あまり気に留めていないので理由を推測することすらしていない。
メイド長さんが報告を終えて、他に何かありますかといつもの様にメイドとしての職務を全うしていると、再び部屋を訪ねてくる者がいた。それは、
「あなた様――と、何をしているのですか？」
「……紅月か」
と、やってきたのは和服を着た黒髪の美女。
レオンハルトの下級使徒であり、副メイド長の一人。そしてレオン

ハルトの娘の母親でもある紅月であった。
彼女はレオンハルトが未だに落ち込んでいるであろうと彼を慰めようとやってきたところであったが、その姿を見るなり目を細くする。レオンハルトの手元にあったもの、それは何かと彼の口から、
「……白兎が前に作ってくれたお菓子だ。ふ、ふふ……やはり美味いな……」
「なっ……！　ま、まだ残っていたと……？」
「当然だろう。少し食べて、ずっと保存していた。食べ切るのが勿体ないからな」
紅月が目を見開いて驚く。白兎という天使が作ったお菓子。あまりにも貴重であるそれを、未だ隠し持っていたことに驚いたのだ。
レオンハルトの方もいつもより陰気に笑いつつも、その白兎が作ったクッキーをボリボリと、一つ一つ味を噛みしめるように食べている。
そうすることで、家出した上に嫌いとまで言われた寂しさや悲しさを慰めているのだ。
だが、
「……ぐ、うう……！　白兎……何故家出を……！」
不意に、クッキーを食べていたことで白兎への想いが再び湧き上がったのか、頭を抱えて悶絶するレオンハルト。最強の魔人が、今一番に苦しみ、悩み、不機嫌さを隠しきれないほどに憂いていることがそれだった。
「ああ心配だ……！　何かあったらどうすればいい……！　くそっ、やはり今直ぐにでも全軍を挙げて捜索するか……？　いや、でもそれをすると大事になりすぎてしまう……！　やはり俺が探しに行くしかないのか……!?　だが、それも問題がある……くそっ、ハンティはまだなのか……!?」
「ハンティ様からの報告は未だ上がってきておりません。他の使徒の方々も同様で……」
「くっ……こんなことなら、もっと一緒にお風呂に入っておくんだった……！　寂しくて死んでしまうぞ……！」

「……実はそれほど心配していないのですか？」
ああでもない、こうでもない、と悶えるレオンハルトに、紅月は控えめにツッコミを入れる。
とはいえ、彼女の方も心配には違いなかった。
ただレオンハルトの方が、嫌いと言われた分だけ紅月のそれを上回るほどの反応を見せるので、多少落ち着いてしまっているだけである。
それに紅月としては、いつかこうなるかもしれないという予感はあったのだ。
――やはり、血は争えない。
家出を聞いた時、紅月の驚きがそれほどではなかったのは彼女の血筋と、書き置きのおかげであった。
白兎が家出をした日。紅月の部屋の机には、こんな書き置きが残されていた。
――〝ちょっと友達を連れて冒険してきますので、心配しないでください。父上には秘密でお願いします。　白兎〟
それを見た紅月は、本気の家出ではないことに安堵を覚えながら、やはり冒険好きの血が騒ぐのだろうと腑に落ちた気分になってしまったのだ。
元々紅月と白兎の血筋――藤原家は、結構荒武者気質というか、恐れ知らずでアクティブなところがある。ＪＡＰＡＮの武家にはありがちな体質ではあるが、一般的な武家だと、保守的な部分も併せ持つことが多く、その点で白兎の祖父に当たる藤原石丸などはそれに当て嵌まらない。
まるで父の無鉄砲さを見ているようで、紅月は懐かしく思ってしまった。
だからだろうか。それほど心配にもならず、寧ろ子供の成長を感じて嬉しさを感じてしまっていた。
実際、身体能力的には既に祖父を越えている。剣の腕だけはまだまだ及ばないだろうが、頼りになる友も連れて行っているようだし、一度見つかれば監視も付く。

故にこのような時代だが、紅月は大丈夫だという予感を感じていた。
しかし、父親のレオンハルトの方は、白兎よりも遥かに強く、世界の広さを知る故か、嫌いと言われたこと、家出という事態に衝撃を感じているためか、その成長の方に目が行っていない様である。
だからではないが、紅月は言った。秘密を守りつつも、最愛の男性を慰めるように、
「……貴方と私の子ですから、きっと大丈夫ですよ」
「っ……そんなの、分からないだろう……」
「白兎は強くなりました。あなた様も、一人前の剣士と一度は認めたではありませんか」
「……それは……だが……」
レオンハルトが紅月の言葉に言い淀む。
実際、白兎の怒りの部分はそれだろうと、紅月はほぼ当たりをつけていた。
白兎が嬉しそうに報告してきたのだ。――パパに、一人前だと認められた。これで自由に冒険も出来る、と。
しかし時代の所為か、レオンハルトは白兎が長期間冒険に出ることを認めず、冒険に出る際も常に監視を付け、しばらくすれば城に連れ戻される。それが白兎は嫌だったのだろう。嘘つき、と書かれていたのも、おそらくこれのことだという確信があった。
レオンハルトの、親として心配する気持ちも分かるので、紅月にとっては苦渋の選択ではある。
だが、こう思う。
――もし、父であったのなら、と。
きっと、幾ら親が止めようとも、
「……それに、目的を遂げるまでは止まらないですよ」
「……何……？」
言う。眉間に皺を寄せたレオンハルトに向かって、
「私達がなんと言おうとも……〝夢〟を追おうとするあの子の意志を止めることは出来ません」

「！」
――あなたも、そうでしょう？
その何かを追い求める、揺るぎない意志。諦めの悪さは、おそらくどちらにも似ている。
――親ならば、子の夢を応援するべきでしょうね……。
紅月は内心でその夢を応援する覚悟を決める。
だがそれは、
――まずは、今の状況を越えていく必要がありますよ……？
思う。父も、かつては冒険に出てその壁の高さに悩み、最終的には越えていった。
しかしその壁の高さは父の時の比ではない。越えることは至難だ。
だが、もし越えることが出来て、眼の前の父を認めさせることが出来たその時は――。
――母として、あなたの夢を応援しますよ……白兎。
それまでは、まだ過保護な親としてやらせてもらうと、紅月は微笑を浮かべた。

森の中で、その痕跡に触れた黒髪のカラーは目を細めて独り言をつぶやいた。
「……やっと見つけた。随分と、手こずらせてくれたね……」
魔人レオンハルトの使徒であるハンティは、数日の捜索の末、その森の中で対象の痕跡を発見していた。
上司の一人娘の捜索。出来れば戦闘がしたいハンティとしては、微妙に気が乗らない任務ではある。
だが心配であるという気持ちもない訳ではないし、放っておくわけにもいかない。故に割と本気で探し回っていたのだが、
「まさかカラーの森にいるとはねぇ……灯台下暗しって訳だ」
随分と巧妙なルート選択に、痕跡隠し。おそらく、白兎一人で考えたものではない。
イヴや藤吉郎。戯骸にお町にベゼルアイと、仲間はそれなりにい

て、皆優秀だ。
おそらくは自分がこうやって探しに来ることを予想して、色々と手を打ったのだろう。
こうなってくると、最初は面倒な気持ちも混じっていたが、別の楽しみが湧き上がってくる。
「抵抗してくるだろうし……結構愉しめるかもね」
口元に、抑え切れない笑みを浮かべてしまうハンティ。
先程も挙げた六人。誰もがそこそこの実力者であり、一対一では己に敵わずとも、複数ならどうなるかは分からない。
だからこそ、ハンティは期待し、喜びを感じてしまう。
何となく、白兎が冒険に出かけたくてしょうがないというのはよく監視したり、時には同行していたため理解していたが、悪く思うな、と。こちらも使徒として命令された身であるため、一応は従わなければならない。
だから逃げたければ、逃げてみせろ。不敵にそう思い、ハンティは一瞬にしてその場から消えてみせた。

「――む、森の中の気配が変わりましたね」
「ほ、ほんとですか？　ということは――」
森の中を歩く白兎一行。ミストラルやガイと別れて森を行くその道中で、不意に白兎は何かを察知して表情を変えた。
その反応にイヴも若干慌ててみせる。予想されていたこととはいえ、かなり早いと。
「……我は何も感じないが」
「ききっ！」
「私はそういうのには疎いから頼りにしないでくれると助かるわ。パワー系だし。……同じ使徒の身からするとどうなの？」
「……ああ、注意しな。アイツに距離は関係ねぇ――来るぜ」
ベゼルアイの問いを受けた戯骸が、端的に答える。その次の瞬間、
「――っと、追いついた」

「！　ハンティさん……」
「や、やっぱり追手は先生ですよねー……はぁ……」
　一行の進行方向にあった木の上に、黒髪カラーという目立つ風貌の使徒――ハンティが現れる。
　瞬間移動の魔法という反則級の魔法を使う彼女に、居場所を気取られた時点で見つかるのは一瞬だ。時間の問題ですらない。
　これほど追撃に適した相手もいないだろうと、一行は改めてハンティの厄介さを認識し、イヴに至っては恐ろしさをよく知るため、溜息を吐いてしまっている。
　そんな一行の反応を見下ろしながら、ハンティは白兎に視線を向けて呆れ気味に、
「……聞いたよ白兎。家出したんだって？　まあ、あたしとしてはとやかく言いたくはないから手短に言うけど……早く戻ってきなよ」
「……嫌だと言ったら？」
　白兎がそう言うと、ハンティが息を吐いた。木の枝の上で、幹に体を預けながら、
「……勘弁してよ。白兎が出てってからレオンハルトがすっごい不機嫌でさ。城の人達はともかく、魔王城だといつもより暴れてるみたいだし、色々と大変なんだよね」
「おいおいハンティよー。お前ならそこは喜ぶところだろ？」
「――ま、それはそうなんだけどね」
　戯骸の軽い質問に、ハンティが口元をニヤリとさせて同意すると、戯骸は笑ったが、一部からは引き気味の声があがった。
「うわぁ……さすがは先生ですねぇ……」
「清々しいくらいのゴリラっぷりだの……」
「私が言うのもなんだけど、パワープレイは戦闘だけにしておいた方がいいと思うけど？」
「よ、余計なお世話だよ!!」
　ハンティが声を荒げるが、一応はまだバツが悪いと思う感情が残っていたか、と完全なゴリラではないようで安心する。そんな気の抜けるやり取りをしていると、

「――まあ、ハンティはカラーの中でもカラーゴリラとして名高いからね。当然の反応よ」
「！」
「って、貴方までいるんですか……!?」
と、その場に声が響き渡る。
それはハンティの丁度反対側。一行が通ってきた道を塞ぐように現れた羽の生えた存在だ。
そんな彼女を見て、ハンティは更に声を荒げ、
「元はと言えばアンタのせいでしょうが、インデックス!!」
「あら、違うわ。ハンティの女子力が極端に低いからよ。貴方達もそう思うわよね？」
「口の減らない……！」
ハンティがぐぬぬと表情を崩す相手は――悪魔だった。
だがこの場にいる者達、城に住む者達にとっては馴染みのある悪魔である。
もっとも、戯骸などは知らないようで、煙管を口から離すと、
「っと、俺は初めて見るねぇ。どちらさんだ？」
「紅魔城の図書室の司書。そしてハンティの唯一の友達で、レオンハルト様の女で使い魔をしてる良い女のインデックスよ。よろしくね」
「唯一でもないっての！」
インデックスはハンティの憤りに近いツッコミの言葉を宙に浮きながら笑みで受け止める。
だがそんな中、イヴが恐る恐る口を開き、
「あ、あのー……インデックスさん？」
「どうしたのかしら、イヴ。そんなに顔を青褪めさせて。寝不足なら良くないわよ。寝ないとハンティみたいになるわ」
「あたしみたいにってどういう意味!?」
一々ハンティを弄るインデックスに、態々反応を返すハンティ。これでも付き合いの長い親友同士であるためか、妙に仲が良さそうに見える。
だがイヴとしてはそんなことよりも懸念することがあった。それ

は、
「別に寝不足でこうなっている訳ではなくて……もしかして、インデックスさんまで白兎さんを連れ戻そうと？」
問う。悪魔であるインデックスの戦闘力は、城の中でもかなり上位であるため、ハンティと同時に相手をして逃げ切るのは厳しいものがあった。
だがその懸念通り、インデックスは不敵に笑みを浮かべると、
「まあ、私としては、レオンハルト様の忙しさを少しでも緩和して、元の日常に戻ってくれればいいかなってくらいだけど……娘が家出してると、それどころではないのよ。だから今日はハンティのお手伝いね」
「う、うわー……やっぱりぃ……」
「きき……」
今度こそ、イヴが頭を抱えてしまう。イヴの肩に乗っていた藤吉郎が、〝元気出せよ〟とイヴにしか聞こえない心の声で頭を叩いて慰める。
一般人のイヴにとっては、使徒最強のハンティと、悪魔のインデックスを相手にする事態は荷が重いものだった。
だが白兎や他の面子などは、
「まあ、良いですよ。私は誰が相手でも負けるつもりも、今はまだ帰るつもりもないので」
「とはいえ、結構キツめだぜ？　どうする？」
「……我としては帰っても良いのだが……」
「このままだとお菓子券が貰えないから何とかしましょう」
「……もうちょっと恐れません？　私、戦ったら一番最初に死ねますよ？」
真顔になってイヴが言う。一周回って冷静になっていた。
すると白兎が咳払いをして、
「……ですがまあ、今はまだハンティさんと本気で戦うつもりはないので……」
「……ふぅん。じゃあどうするの？」

「ゴリラのお姉さんがお家に帰りましょうって言ってくれてる内に帰るのが身のためよ。力尽くだと結構怖いわ――って、痛い痛い痛い!?」
「あはは、そうだねぇ……！　力尽くだと、こんな風になるから……ねぇっ！」
「ちょ、ちょっと！　瞬間移動で背後に移動してからの羽交い締めは――あ、あああぎブ！　ギブよ！」
「何やってるんですか……」
イヴが呆れた様子でツッコむ。弄りまくっていたインデックスをハンティが瞬間移動をして捕まえ、力を込めただけだが、メキメキと音が鳴っているので、中々に痛そうであった。
だがその間に白兎が、
「では皆さん。アレを使いましょう」
「まあ、そうなりますよね……」
と、白兎の声を受けて、皆が一斉にあるものを取り出す。
ハンティは何をしても自分から逃げられるはずがないと高をくくり、インデックスを締め上げながら見ていたが、そのアイテムを見て顔色が変わる。
それは、
「か、帰り木!?　って、それは――」
「――ではまた」
と、慌ててハンティはそれを止めようとするが叶わず、白兎達は一斉に帰り木を折ってその場から消えてしまった。
残ったのはハンティとインデックスのみ。人外しかいないその場で、
「……普通に帰り木を使ったなら城に帰るはずだけど……拠点を別に設定していたとしたら、一体何処に……？」
「友人に暴力を振るうからバチが当たったのねぇ――痛い痛い痛い！　暴力反対！」
「ったく……また振り出しか……」
ハンティは口の減らない腐れ縁の親友を痛めつけながら、再び一か

ら探さねばならないことに溜息をついた。
帰り木の特性上、一度行った場所の何処かでなければならないはずだが、
「それにしても本当に何処に……？」

――その後。
「……」
「……」
「え、え……？　な、なんでまた……？　しかもいきなり……」
白兎一行は、とある家の中で、家主の睨みを受けてお互いに無言になっていた。
少年だけが、急に現れた一行を見て混乱して声を上げている。
そんな中で、最初に白兎が、
「……イヴさん」
「……はい……」
くいくいっとイヴの服の裾を引っ張って呼びつけ、それを促す。
するとイヴは、何とも言えない気まずそうな表情で頷き、引き攣った笑みを浮かべながら家主の、ミストラルの前に進み出ると、
「……あのう……」
「……何？」
ミストラルが一応問いかける先で、イヴは意を決して口にした。
にっこりと、冷や汗を垂らした笑顔で、
「……も、もう一泊――」
「――絶対に嫌よっ!!!」
――この後、滅茶苦茶宿泊した。

解けない呪い

「――それで、逃げられたと？」
「うん、まあ……そういうことになるね」
紅魔城の執務室で、ハンティはバツが悪そうにそう答えた。
傍らには、彼女の親友でレオンハルトの使い魔であるインデックスもおり、澄ました表情で、
「でも、何かしら目的があるみたいだったわね。少なくとも、ただの家出じゃないみたい」
「……目的？」
「それが何かまでは分からないけどね」
と、レオンハルトの問いに肩をすくめて答えるインデックス。その余裕綽々といった態度にハンティは半目を向け、
「……いつも思うけど、その自信はどこから来るのやら……普通に、冒険がしたいとかじゃないの？」
「――女の勘よ」
「あ、さいですか……」
「あら、良い女の勘は結構当たるものよ」
「あんた限定よ、それ」
「……随分とお気楽だなぁ。私が言うのもなんだけど、本当に大丈夫なのか？」
と、微妙な表情で告げたのは、ハンティの隣に腰掛け、手元の球体を弄りながらお菓子を食べているガウガウだ。手元の黒い球体――彼女が作り出した生きた魔道具、ブラックアイは調整中であるためか言葉を発しない。
そんな彼女に向かって、反対側、レオンハルトにもたれかかるように隣に座るインデックスは笑みを浮かべ、
「子供なのだし、それなりのやんちゃはするものでしょう？　だから動向さえ掴んでいつも通り監視でもしていれば大丈夫だと思うわ」
「いや、反抗期の子供を甘く見ると大変なことになりかねないぞ……親の言うことは聞かないなんて序の口なんだ……そもそも口を利い

てくれなくなるし、何か言えば暴言も吐かれる……子供だと思って言い争いをしてみれば、思ったよりも口が達者で苦労するし、中々納得してくれない……そして、最終的には家を出ていってしまうんだ……！」

「……なるほど。さすがに母となった経験のある人が言うことは違うわね。いい女でも敵わないわ」

「というか、なんかトラウマが蘇ってない……？」

ガウガウが頭を抱えて情けなく表情を歪ませている様子を見て、ハンティが困惑した様子で呟く。何気にガウガウは忘れられがちではあるが、子供を産んで育てた経験もあれば、別の物を生み出して育てたこともある。

しかもそのどちらも、様々な事情から子育てを失敗し、自分の元から離れていったこともあってか、ガウガウにとっては微妙にトラウマになっていた。

「う……とにかく、対応を間違えては駄目だ。だが、かといって上から言い聞かせても駄目。そもそも反抗期は大人になるために必要な時期だとも言われているし、この歳まで反抗らしい反抗が無かったことが寧ろ奇跡だとも言える」

「……そういえば、喧嘩の一つもしたことないよね」

「……」

ガウガウの言葉とハンティの問いかけを聞いて、レオンハルトが無言となって考え込む。だがその横、インデックスとは反対側となるレオンハルトの隣から、

「……言われてみれば、今回が初めてになりますね」

と告げたのは白兎の母親である紅月だ。彼女は彼女で、ある程度真相を知りつつも、今回は過保護を抑え、出来る限りは娘の成長を見守る腹積もりでいる。

とはいえ心配なのは変わらないので、いつもよりは表情に影を帯びていた。

そんな母親の表情で内心を察したのか、ガウガウは息を入れつつ、

「……まぁ、白兎は賢い子だからな。昔から聞き分けも良かったし、我

儘も殆ど言ってこなかったのもあって、その反動が出たんだろう。解決しようとするなら……私に言えたことじゃあないが、子供の言い分も、ちゃんと聞いてやってくれ。頭ごなしに……正論で、一方的に殴りつけるんじゃなくてな」
「ガウガウさん……」
「……」
ガウガウが普段は見せない憂いを帯びた表情で告げる。彼女は気にしていないように振る舞うが、やはり過去に子供との決別を招いてしまったことを悔いているのだろう。それはまるで自嘲にも似た響きを孕んでいた。
彼女が生きた魔道具を製作してしまうほど、研究に傾倒していったのも、もしかしたら……と、紅月などはそう思い浮かべたが、そのことを詮索することは無粋だと思考を打ち切る。
同じ親である紅月とレオンハルトもその話を真剣な様子で聞き入ると、それを見て何とも言えない表情になりながらも頭を掻いて、
「……結局どうするのさ。やっぱり、連れ戻す？」
今度はハンティが任務を継続するのか否かの意志をレオンハルトに向かって問う。
レオンハルトは暫しの間、考え込んでいたのか、閉じていた瞳を開いて息を入れると、
「……捜索は継続。だが、見つけても気づかれないよう、遠目に監視するだけに留めろ」
「……ってことは、事実上の放置？」
捕まえて連れ戻さないのかとハンティが続けて問うた。他の者達も同じ視線を向ける中、レオンハルトは首を横に振り、
「……いや、今は俺も動けない。俺が動けるようになったら――俺が直接行く」
その答えを聞いた瞬間、多少だがその場の空気が弛緩し、
「……ま、何か手伝えることがあったら聞いてやらなくもないからな。遠慮せずこの天才に相談しろ」
「……」

「……って、この無言はなんだっ!?」
気づけば、皆がガウガウの方に視線を向けていた。
特に、関わりが深く、茶化すほどの余裕を持ったハンティとインデックスの二人が口々に、
「あんた、本当にあの自堕落で最近は研究以外、何をするにもメイドかブラックアイにやらせるあのガウガウ？」
「いいえ、私が知っているガウガウなら、ソファに寝そべってお菓子を食べながら、〝面倒だからい～や～、明日やる～〟と、駄目人間のお手本の様な反応を見せるはずよ」
「なら偽物だね」
「お、おいっ、なんだその言い草は!?　私を何だと思っている!?　幾ら何でもそこまでクズじゃないぞ！　私だってたまには人の相談を聞いてやるくらいの器はあるからなっ!?」
「あ、いつものガウガウだ」
「あら、本物ね」
お前らなぁ……！　と拳を握ってぷるぷると震えるガウガウ。珍しくハンティにすらからかわれるというか、柄でもないことを言った羞恥に今更ながら襲われていたが、なんだかんだでその思いはしっかりと伝わっていた。
結局、肝心のレオンハルトは未だ魔王城でジルに囚われているために動けないため、それが解除されるか、どこかで機会を伺いつつ、それまではハンティが気づかれないように監視を続けるということでその日の話は纏まった。

――その頃、問題の白兎一行は、
「はぁ……やっと着きましたね……」
「きき！」
大陸のとある場所にある遺跡にたどり着き、イヴは疲れたと言わんばかりに前屈姿勢となる。
反面、藤吉郎や他の面々はまだまだ元気な様子で、特に白兎などは

期待に満ちた表情で告げた。
「ここが噂の遺跡ですよ！　お宝があるという！」
「へぇ、中々熱そうな遺跡だな。歯ごたえがありそうだ」
「……着いたのはいいのだが、その前に休憩はせんのか？」
「まあ、イヴちゃんが疲れて死にそうになってるしね」
　遺跡の前に辿り着いたが、お町やベゼルアイがイヴの様子を見て休憩を提案してくれる。すると白兎も、
「……そうですね。ここまで歩きっぱなしでしたし、イヴさんの為にも休憩にしましょう」
「白兎さんに皆さんも……気遣ってくれてありがとうございます」
「ま、人間のお前さんにはキツいだろうしな」
　と、皆が気遣ってくれたことに対して僅かに感謝の気持ちを覚えると共に、体力の関係で微妙に足手まといになってしまってないかと不安と申し訳ない気持ちが浮かぶ。
　だが皆もそこは理解している。なにせ、ハンティの追跡から逃れるべく、数日ミストラルの家に宿泊した後は、直ぐに森を出て目的地へと向かったからだ。
　というのも短時間でできるだけ遠くに移動した方が捜索から逃れられるだろうと考えたことと、そもそも逃げながら目的の物を入手するのも厳しいだろうという判断からだ。
　なら、さっさと目的だけでも遂げてしまえば、最悪連れ戻されるにしても収穫は得たことになると、イヴがそう提案した。
　その提案者が疲れてしまっていることが微妙に情けないが、彼女は人間でしかないので、他の面子のように人外の体力を持つ訳ではない。故に休憩を取ることにした訳だが、
「それじゃあ、一服しましょう」
「そうですね。遺跡の攻略前に軽食でも食べましょう」
　と、ベゼルアイの言葉に頷いた白兎が準備をしようと皆に言う。
　しかし、
「……誰がやるのだ？」
　お町の言葉にその場の空気が固まり、皆が間をおく。そして皆が目

を合わせ、
「……火起こしだけなら出来るぜ」
「我も火起こしなら……」
「パワーが必要な事なら出来るわ」
「ききい……」
「私、料理は不得手で……」
「――ああ、もう！　やりゃあいいんでしょうやりゃあ！　何で揃いも揃って出来ないんですか!?」
「イヴさん……口調が……」
　と、イヴがキレ気味に立ち上がって準備を行う。この面子、戦闘力はあるが、普通の冒険者のような細々とした雑務は不得手であった。イヴを除いて一番出来るのが、藤吉郎という有り様である。白兎は全く出来ないというほどでもないが、普段からやらない上、やる時は誰かに手伝って貰いながらやってるので、そこまで上手ではない。
　逆にイヴは、普段から師匠のガウガウの為に料理を作ったりしているし、そもそも人間牧場時代は料理もそこそこ学んでいる。故にちゃんとした料理人には敵わずとも、主婦レベルには到達していた。
「藤吉郎さん、手伝って下さい。戯骸さんは火、適当に下さい」
「ききっ！」
「おうよ」
　持っていた荷物から適当に調理器具や食料を取り出してテキパキと準備していく。もはや使徒を顎で使うことすら躊躇わない。
　そして残った面子は、
「……我も、レオンハルトの為に料理でも覚えた方がよいであろうか？」
「……ええ、そうですね。レオンハルト様の為というか、私の為に料理だけじゃなく色々な事を覚えてもらうと助かります」
「味見なら任せてください。味覚も敏感ですので、私」
「……白兎さんの味見は有り難いんですが、舌が肥えすぎてどこどこが足りないとか味の批評を細かく言われて凹むんですよね……」
「私、甘いものが食べたいわ」

「ベゼルアイさんのはただの願望ですよねぇ!?」
相変わらず騒がしいというか、こちらの負担が大きすぎる面子だと溜息が漏れる。胃に悪い。
とはいえ今更だ。慣れているとも言えるので適度にツッコミを入れて発散していく。ツッコミがストレス発散とかもうなんか病気になってないだろうか、と不安になりつつも料理を始めていき、
「……そういや、聖刀日光だったか？　それってどんな刀なんだ？」
と、火起こしを終えて残り火を適当に散らしている戯骸が何気なく質問した。
皆もそれなりに気にはなっていたのか、耳を傾けるとそれを知っている白兎は頷き、
「……そうですね。何でも、魔を払う刀だそうです」
「魔を払う、か。何か曰くがありそうだの」
お町が感想を言葉にして飛ばした。だが戯骸と藤吉郎の反応は、何やら得心した様子で、
「おー……だからなのか？」
「ききっ」
「……どういうこと？」
と、ベゼルアイ。いや、と戯骸が前置きし、
「……なーんか、遺跡から嫌な感じがするんだよなぁ……気の所為かもしれねぇけどよ」
「……嫌な感じですか？」
「ききぃ……」
イヴが気になって聞き返すと、藤吉郎も戯骸の言葉に同意するように頷いて鳴き声を上げた。
そして白兎も目を細め、
「……言われてみれば私も、妙な感じがしますね。そわそわすると言いますか……」
「我は何も感じぬが……」
「私もです……」
お町は何も感じていないと首を傾げたので、イヴもそれに同意す

る。
そしてベゼルアイは何やら考え込みながら、
「……私は……聖刀と言うだけあって、聖なる力みたいなのを感じなくもないような……」
「……何故か、印象がバラバラですね」
と、イヴはそれぞれの反応、感じ方が違うことが気にかかる。
推測出来ることといえば、
「……もしかしたら、魔を払う刀というのはそのままの意味なのかもしれませんね」
「何か特殊な力とかがあれば面白そうですよねっ」
「いや……白兎さんも半分は〝魔〟なんですから、そこは恐れた方が良いのでは……？」
呑気な事を言う白兎に緩くツッコむ。
だが、気の所為かもしれない、と感じるほどに微細な気配なので、そこまで危険ではないのかもしれない。
それに、レオンハルトから得た情報だというなら、レオンハルトも手に入れるつもりがあったはずで、別に普通の名刀の類である可能性も高いのだ。
しかしイヴは、気の抜けるパーティの皆を横目に、首を捻ると、
……それにしても、聖刀〝日光〟ですか……うーん、何処かで聞いたような……何処でしたっけ……。
その名に妙に聞き覚えがあるのだが、喉まで出かかっていながらも、思い出せない。その名を、何処かで聞いた憶えがある。
しかしとうとうイヴは思い出せず、自分達の為の軽食作りと、彼らの会話に集中せざるを得なかった。

――そこは、遺跡の奥。
「……」
その刀は、遺跡の最奥の祭壇に置かれ、鎖で動けないようにして囚われ続けていた。

薄い水色の光を発しているその刀の名、彼女の名は――日光。
百年ほど前、冒険の果てに生み出された魔を斬り裂くことの出来る聖なる力を持った刀であり、かつては名の知れた冒険者でもあった。
彼女は大切な仲間達との冒険の最後に、神と出会い、確かに念願だった力を得たはずだった。
いや、力は確かに得た。彼女は、人間にとっての希望となり得る力を確かに得たのだ。
だがその力は一人では扱えない。使い手が必須であった。
故に彼女は、この場所でただ一人、使い手を待ち続けていた。
かつて自分と消えた故郷、そして仲間達に誓った宿願を果たすために。
そのためならば、例えどんな苦汁を舐めようとも構わない。
自分が望んだ力の在り方とは違えど、力があるなら、とそれを甘んじて受け入れた。
他の仲間達がどうなったのか。それを考えなかった日はない。
だが今はただ、使い手を。自分が力を発揮する機会を、ただただ待ち望んでいた。

――それは大地の底。
「……これは……なるほど……面白い未来だ……」
未来に至る道筋。その過程を見た彼女は、深い深い地の底で動き出した――もう一つの災厄を見た。
「――オ、オォ……」
それは、並の生物ではない。
地の底に隠された場所。禁断の墓場で蠢くは、この世のどんなものよりも穢れた何かだ。
その声は、深淵から、地獄から湧き出る怨嗟に満ちた声であった。
「赦サナイ……」
漆黒の闇の中で枷に囚われているのは、その闇に溶けてしまうかのような漆黒の体躯を持つ何かだ。

彼は全てを恨んでいた。
「マギーホア……カミーラ……ライゼン――」
彼は己の末路を決定づけた者達の名を、覚えている限りの全てを列挙し、憎しみを込めて声に出していく。
彼はかつての地上の支配者。偉大なる種族の生き残りにして稀代の簒奪者。
彼はかつて、世界の命運を懸けた最後の戦いに負けた――罪人である。
「全テ……全テ……殺シテヤルゥゥ……！」
負の感情の全てを詰め込んだ肉塊。死ねなくなった生きる屍。
しかしその力は完全に失われず、未だ地上に災厄を齎すに十分な力を持っていた。
全身の黒の鱗。人を超える巨体に、あらゆるものを斬り裂く爪と牙。
血走ったように赤く輝く四つの目は、もはや映るもの全てを敵と見做している。
「アァ……痛イ……苦シイ……何故死ネナイ……」
巨大な魔の塊。穢れた暴君。
忘却された偉大なる種族、竜の魔王。大罪を犯したかの者の名を、今の人々は知らない。
地上に災厄を齎すことの出来る怪物。偉大なる種族が残してしまった最後の呪いだ。
「殺ス……！　手ニ入ラナイノナラ……何モカモ……！」
地の底で蠢く彼は、相手を求めて這いずり回る。
そして、その時は近い。
誰かが止めなければならない伝説の怪物。
それを止めるところを視た魔女は、愉快そうに口の端を歪めるのであった。

親子の在り方と新たな報告

魔王城。その謁見の間にて、魔人レオンハルトは信じられない言葉を聞いた。

「――もう、戻ってもよいと？」

「くく……ああ、好きにしろ」

玉座に腰掛ける魔王ジルは、何やら機嫌が良さそうな様子でこちらを見下ろして再度肯定する。

開口一番、もう戻っても構わないと言われたレオンハルトは、信じられないという気持ちでいっぱいになった。

……ジル……何を考えている……？　もしや、何かよからぬ事を企んでいるのか……？

レオンハルトは表情には出さずに思考する。もう少し掛かるという見立てだったのだが、こんなに早くに城に戻れるとは思ってもいなかった。

それだけに、何か裏があるのかと勘ぐってしまう。そろそろ、中々堕ちない自分に業を煮やして何かしら強引な手段を使ってこないかと警戒していたくらいなのだ。ここ最近は特に進展も無かったので、そろそろジルの方が我慢の限界を迎えるかと思っていたのだが……そんな時にもう戻っても良いと許しを得てしまった。

しかも機嫌が良いときている。こういう時は、大抵よからぬ事を考えているものだ。あのジルなのだし。

故にレオンハルトは少し迷いつつも探りを入れるために、

「……本当に、もう戻っても構わないのですか？」

と、敢えてこちらから再度の確認を入れてみた。理由を問いかけるように。

するとジルが口端を吊り上げ、

「ああ。あまり拘束し過ぎるのも良くない。少しは自由をくれてやらないとな……くっくっく」

……なんなんだその意味深な笑みは。

そして言ってることは微妙に嫌な感じなのに、どうにも良からぬ事

の気配がしない。
なんというか、本当に機嫌が良いというか、善意で言っているようにすら感じてしまうのだ。
だからこそ、レオンハルトは分からなくなる。しかし、この機を逃すことはあり得ないと、
「……ありがとうございます。では、戻らせていただきます」
「好きにしろ」
と、頭を下げて魔王城から立ち去ることにした。
だがその前にジルが、
「また呼ぶからな……レオンハルト……」
「……？　はい。その時はまた、よろしくお願いします」
後ろから何やら微妙に甘ったるい感じでそう告げられ、レオンハルトは頭に疑問符を浮かべながら謁見の間を後にする。
その道中で眉間に皺を寄せ、
……気の所為か……？　いつもより視線が熱っぽいような……。
こちらに対する妙な優しさや、今までと違う呼び方は、どうにも女特有の好意の進展を感じさせる。レオンハルトもよく感じるものだ。主に、城に入ってくる新人のメイドがこちらに惚れる時などに。それを思うと、
……もしや、俺が何かしてしまったのか……？
こういう時は、自分のした何気ない行動が発端であることも多い。故にその可能性を考えたのだが、思い当たらない。ジルとの行為、もとい生活、仕事に於いて普段と変わったことは行っていない。
いつも通り、淡々としたものであったはずだ。
一つ、普段と違うことをしたといえば、例の一件の衝撃で、ジルのベッドで思わず寝てしまったことだが、まさかそんなことでこうなるはずもないだろう。幾ら何でもチョロすぎる。ジルがそんなにチョロい筈はない。あいつは、恐ろしい女だ。
「くくく……愛い奴め……」

自分の上で寝るだけではなく、まだ城に居ることを望むようなあの口ぶり。
間違いなく、もう殆ど堕ちているな、とジルは暫くの間、顔のニヤケが止まらなかった。

……まあ、そんな訳ないか。
レオンハルトは自分の考えを、振り払う。幾ら何でも、ジルがそんなことで機嫌が良くなるはずもない。
故に何かの気まぐれだろうと、レオンハルトは深く気に留めることはしなかった。
それよりもやるべきことがあったからだ。レオンハルトは近くで控えていた使徒に問う。
「――キャロル。例の場所は？」
「はい。定期報告では、大陸北部のとある森だと言っていましたわ」
魔王城の廊下を歩きながらの使徒のキャロルとの会話。
その内容は勿論――家出した白兎とその一行の居場所の件だ。
誰が聞いているかも分からないため声を抑えつつ、名詞なども出すことはないが、極めて重要であるため、このまま向かうつもりであった。
だが、白兎の事は優先するにしても、他にもやることはある。
「……北部か。北部だと、例の塔にも行かなければならないし、ケッセルリンクの城にも牧場の視察も兼ねて行かないとな」
「でしたら、わたくしは先にケッセルリンク様の元へ行ってその事を伝えてきますわ！　準備もあるでしょうし！」
「ああ、そうしてくれ。……だが、少し声がデカいぞ」
「っと、申し訳御座いませんわ……」
「いや、構わない。声を抑えているところも、見ようによっては怪しいからな。大したことないことを口にする分には声が大きくても構わん」
「畏まりましたわ！」

と、再び大きな声で頷くキャロル。これも普段通り過ごしているという演出みたいなものだ。
自分という存在は思ったよりも目立つ上、注目されている。少し普段と違った行動を取るだけでも、自分が何かをしようとしていると噂になることは多いのだ。
今告げたことも、本命に比べれば大した情報ではないので、聞かれたところで大したことないか、そもそもどうにもならないこと。
こちらとしては、白兎の事と、例の奴の事さえ隠せればいい。それ以外は聞かれたとしてもどうにでもなることだ。
「キャロル。お前は城の転移魔法陣を使い、ケッセルリンクの城に行け。俺も問題を片付けた後で向かう」
「畏まりましたわ。その……」
「ん、どうした？」
キャロルが珍しく言葉を迷わせたので、どうかしたのかと訝しむ。
だが少しして得心する。その答えは、
「……わたくしは何も出来ませんが……その、不敬かもしれませんが、解決出来るよう、応援しておりますわ」
「！　……ああ、ありがとう」
理解し、レオンハルトは微笑を浮かべて礼を言う。
キャロルも、その一件に対してそれなりに考えてくれているというか、心配してくれているのだと。
故にレオンハルトは親の責務を果たすために行くことにした。――家出娘の元へ。

大陸北部にあるその遺跡の中で、白兎達はおもむろに立ち止まった。
「……おい、あれは……」
「明らかにそれっぽいのがあるの……」
戯骸とお町が呟く。視線が示す先は、そこで立ち止まった理由そのものだ。

遺跡の最奥。祭壇の様な場所の奥にある壁に、鎖で壁に縫い付けられたようにあるのは、淡い光を纏った一本の刀。
明らかに目的の物と思わしき、聖なる力を感じる刀剣を見て、皆思わず立ち止まり、それを眺めてしまっていた。
だがベゼルアイが不意に、
「……見た目は刀だけど、中身はお菓子だったりしないかしら」
「そんな訳ないでしょう……？　というか、ベゼルアイさんまでボケないで下さいよ……！　私をツッコミ殺すつもりですか!?　この中ではそこまでボケないベゼルアイさんまでボケたら、私は……！」
「わ、分かったから落ち着いてちょうだい。ボケてしまって悪かったわ」
何となく冗談として適当な事を発言してみたが、イヴから凄まじい反応があったので怯んでしまう。迫真の反応だったので、思わず謝ってしまうほどだ。
しかし謝ると、イヴはすくっと立ち上がり、
「さて、しかし……明らかにあれが目的の物みたいですが、早速手にしますか？　白兎さん」
「復活早いわね……でもまあ、そうしたら？」
「きー！」
ストレス耐性が付いて回復が異常に早くなったイヴや、そのイヴに半目を向けるベゼルアイ、イヴの肩に乗って迷宮でのサポート訳になっていた藤吉郎が白兎を促す。
ついでに斥候役の藤吉郎からの、罠が無いという合図まで頂き、後はそれを手にするだけという状態だ。
しかし、
「……白兎さん？」
「……」
「どうかしたのか？」
何故か、一行の先頭に立つ白兎はじっと固まったまま動かない。イヴが首を傾げ、お町も再度声を掛けるが、反応は返ってこなかった。
一番に喜び、刀に向かって突撃していきそうな白兎の無反応は、5

００年の付き合いがあるイヴから見ても無かった反応だ。
故に訝しむのだが、白兎から伝わってくる感情が、これ以上ないほどの喜びに満ちていたことで、イヴはその後の反応を予想し、軽く息をついた。
するとその瞬間、
「……遂に――」
「お？」
白兎が声を出した。
僅かに震える声。大声ではなく、ゆっくりと絞り出すように、
「遂に……冒険で、収穫を得ることが出来ました……っ！」
拳を握り、じーんと上を見上げて達成感に満ち溢れた微笑を浮かべる白兎。それを見て皆は、
「ああ……感動してたのね……」
「まぁ、何かしらを達成するのは初めてだろうからなぁ」
「その通りです！」
戯骸がそう言うと、白兎は上半身だけで戯骸を指差すように振り返った。我が意を得たりと言った風に、
「思えば、冒険の途中で強制的に連れ戻され続ける日々で、こうやってちゃんとした冒険を行い、父上に横取りされることもなかったのは初めてです……！　お町さんを仲間にするのも、最初は私が考えていたのに……！」
「ま、まぁ……それは何とも言えんがの……」
「白兎さんに斬られた思い出が蘇って顔が青くなっているようですので、その辺でお願いします、白兎さん」
「心を読むでない！」
お町が涙目で声を上げる。イヴが読む限り、どうやら相当なトラウマになっているようだった。
だが白兎の方はそれすらも、父に横取りされた風に感じているのだろう。監視も無かったし、これほど長い間外出するのも初めてだ。
それだけに感動は一入。白兎は喉をゴクリと鳴らし、前へ足を踏み出していき、

「っ……では……」
と、白兎だけが刀の前に進む。罠は無いとのことだし、皆白兎にそれを手にさせてやろうと見守るつもりでいた。
一歩一歩。恐る恐ると近づき、白兎は遂に刀の目の前まで距離を詰める。
そして、鎖に絡まったその刀を、人外の力で無理矢理引き抜くと、
「……やりましたーーーーー!!」
その刀を上に掲げ、白兎は喜びの雄叫びを上げた。祭壇の上で跳びはねて喜びの舞を踊る白兎。
「ひゃっほうっ！　やりましたっ！　やりましたよ皆さん！」
「おめでとうございます、白兎さん」
「ききー！」
「おう、良かったな」
「ふぅ……これでやっと帰れるの」
「ふふ、無事に達成出来て良かったわね」
皆が口々に苦笑交じりにそれを祝う。
白兎も、喜びで箍が外れたのか、無邪気に感情を発露して喜び、
「はい！　ありがとうございます皆さん！　これで――」
と、白兎がその聖刀日光と呼ばれる伝説の刀剣を握り、それをまじまじと見つめると、
「――こんにちは」
「はい！　こんにちは！　……えっ？」
突然、その場の誰でもない声が空間に響いた。
「今の声は……」
「もしかして……」
一番最初にそれに気づいたのは、白兎とイヴの両方。
白兎は異常聴覚を以て、その声の先を見破り、イヴはこの場の誰でもない感情が、その刀から流れてきていることに気づいて、察知した。
そう。その声を発したのは、
「……驚くのも無理はありません。ですが――」
と、その刀は女性の声でその場の皆に向かって告げた。

「私が――聖刀日光。魔人を倒す力を持った、唯一の刀です」
「やっぱり！　その刀、いわゆるインテリジェンスソードですよ！　意志を持った刀剣です！　白兎さん！」
「おー……こりゃおもしれぇな。武器が喋んのか」
「なんと面妖な……」
「……貴方が言うの、それ？」
　妖怪が面妖だと驚いていることに気になったベゼルアイだが、でも確かに、この場にいる世界でも珍しい存在達の中においても、意志を持ち喋る刀剣というのは珍しいものだった。
　皆が日光を物珍しさからまじまじと眺める。
　だが見られていた方の日光は、ようやくその場の面子の違和感を感じて、
「……私を手に持つ貴方……白兎さんと言いましたか。貴方の仲間はどうにも……異形が多いように見えるのですが、気の所為ですか？」
「ふふん、自慢のお友達です。勿論、意志があるならあなたも私のお友達ですよ！」
「……それはありがとうございます。ですが貴方も何処と無く嫌な気配が……それに、何処かで会ったような……？」
　日光が既視感と、妙な気配を感じることから白兎達を訝しむ。しかし白兎達はそれに構わず日光に声を掛けた。
「そういえば、魔人を倒す力を持つとか言ってましたけど、本当にそれだけの力を持っているんですか？」
「……ええ。勿論です」
　イヴの疑問に日光が答える。それこそが己の存在意義だと、そう示すように、
「私は、魔人や魔王が持つ無敵結界――それを破壊し、魔人に直接攻撃を加えることの出来る武器です」
「……え、ええっ!?」
「何気にとんでもない事を言ってるわね……」
「……色々な意味で、マズいのではないか？」
「へぇ、そんな便利なもんがあったのか。世の中、分かんねぇもんだ

なぁ……」
「き、ききぃ！」
「い、言ってる場合じゃないですよ!?」
イヴが驚きから抜け出せていないまま、皆の反応にツッコミを返す。さすがの衝撃であったためか、藤吉郎すら軽く焦ってツッコんでいるし、他の皆も驚いている様子だ。
魔人の無敵結界を突破する武器など、前代未聞というか、とんでもないにも程がある武器である。
はっきり言って、自分達の手には負えないとイヴは感じてしまう。それだけマズいものだ。
「驚くのも無理はありませんが……私は、人類に希望を齎す、その切っ掛けとなれる可能性を秘めています。貴方達に、魔人を倒す覚悟があれば、私は力を貸しましょう」
「い、いや、それは……」
イヴが言い淀む。魔人を倒すも何も、魔人側の存在だとは言い辛い雰囲気だ。
というか、明らかに人間じゃない奴らも混じっているのだから早く気づいてほしい。魔人を倒す力があるなら、使徒や魔人の血が混じった子供の気配くらい察してくれても良い筈なのだが、ボケているのだろうか。
だが、そうやってイヴが言葉を迷わせ、皆も何と言って良いものか無言を貫く中、
「……つまり、これで父上を倒すことが出来ますね」
「そういうことになりますね……まぁ、無敵結界が無いくらいで倒せたら苦労しないと思いますけども……」
「ハハッ、まあ俺の主も昔に挑んで全く敵わなかったからなぁ。使うにしても、化け物みたいな人間が持たねぇと無理だろ」
戯骸が昔を思い出し、煙管から火を吹かす。人類が挑み続け、殆どの者がその壁の前に断念した魔人と無敵結界。
その無敵結界を自力で突破した化け物を例外にするにしても、無敵結界が無くなったところで人間に負けるような魔人は少ないだろう。

それで負けるのであれば、伝え聞く、無敵結界が無かった時代にでも魔軍は負けていた筈だ。
しかしそうなっていないということは、結局のところ魔人の強さに屈してるということ。
もっとも、希望には違いないだろうが、それだけで勝てるというほど甘くはないという話だ。
そしてそれは、その力を持つ日光自身も理解しているのか、やや間があって頷き、
「……ええ、確かに使い手にも強さが無ければ厳しい」
「なら、私が使えば解決ですね」
「いやですから、使ったところで私達には有益になりませんよ……精々、親子喧嘩の時に使えるくらいですか……？」
「ハハハ！　そりゃあいい！　気が抜けない親子喧嘩になるだろうな！」
「……うぅむ……持ち帰ってしまえば、逆に安心出来るような気もするのだが……」
「ま、これすら押さえられてしまえばもう完全に人間に勝ちの目は無くなるわね……運が悪いというか……」
白兎は使う気満々の様だが、皆はそれぞれ何とも言えない反応を返す。
それを訝しんだ日光は、またしてもやや間をとって、
「……というか、先程から父を倒すだとか主だとか、不穏な言葉が聞こえるのですが……貴方達は一体何者ですか？」
「……」
「……何故、そこで無言に……？」
何やら猛烈に嫌な予感を感じる日光。その質問を聞いて、周りにいる面々がそれぞれ無言となり目を合わせる。
そして全員が意を決し、イヴなどは溜息を吐きながら、口を開き、その質問に答えることにした。
「私は白兎と言います。貴方の使い手になる予定の剣士で、魔人と人間のハーフです」

「そうですか……白兎、私の使い手に……魔人と人間の――――えっ」
「俺は戯骸だ。使徒だが、主はもういないんでな。はぐれ使徒ってことになってる。どうなるか分からないがよろしくな」
「きき！」
「おう、こっちの藤吉郎も俺と同じはぐれ使徒だな。〝よろしく〟だってよ」
「は、はぐれ使徒って……え？　え？」
「我はお町。二代目妖怪王を名乗らせて貰っている」
「妖怪王……ＪＡＰＡＮで人間を苦しめる妖怪の王……えっ？」
「色々と察するけど、ご愁傷さまね……私はベゼルアイ。魔物を産み出す聖女の子モンスターよ」
「魔物を……産み出す？　そ、その……少し待っ――」
「ああ、えっと……私はイヴです。一応普通の人間ですが、魔人に仕えてます」
「……普通の人間……？」
「い、いや、そこは疑問に思うところじゃないですから！　気になるのは魔人に仕えてるって部分でしょう！　気持ちは分かりますが落ち着いて下さい！」
　完全に混乱状態になった日光をイヴが気遣う。
　だが、やっと現れた使い手が、魔人に与する一行であったことに衝撃を受けた日光の困惑は相当なもので、
「……ひょっとして私は、夢でも見ているのでしょうか？」
「いえ、現実ですよ、残念ながら」
「……しかし、魔人に子供が出来るなんて話は、聞いたことが……」
「私がそうです」
「……」
「あ、完全に放心したわね」
「……そのうち復活するんじゃねぇか？」
「では、帰りましょう」
「良いんですかね……？」

白兎達は、放心状態の日光を抱えてもと来た道を引き返していった。

――だが、その十数分後。

「――帰してください！」

白兎に抱えられた日光が声を上げた。それを見て、

「おお、復活したぜ」

「帰してって言ってるけどどうするの？」

「まあ、そうなりますよねぇ……」

「当然であろうな……」

日光は魔人を斬り裂くための刀だ。

故に魔人ではないが、それに与する一行に力を貸すことは望まないだろう。当然の事である。

しかし白兎は、

「父上を一緒に倒しましょう！　昔からの仲じゃないですか！」

「まさかあの時の旅人が魔人の娘だなんて思いもしませんでした……！　早く帰してください！」

「まあ、それを言うなら、あの時の人間の子供が刀になってるなんて……どういう経緯でそうなったんですか？」

「いえ、それは……」

と、イヴが気になっていたことを聞く。道中、日光はお町と遭遇することになった冒険の途中で立ち寄った村にいた子供と同じ名前だということに白兎やイヴが気づき、日光も、子供の時に見た彼女たちを憶えていたため、その衝撃で日光も意識を復活させた。

だが、その子供がどうやったら無敵結界を斬り裂く刀とやらになるのか。そこが意味不明過ぎてイヴは疑問に思う。

しかし日光はそこで言いよどみ、

「……色々あったというだけですよ」

「……まあ、その辺りの事情は聞かない方が良さそうですね……しかし、大人しくなりましたね？」

一応、日光にも深い事情があるのだろうとそれを深く突っ込むことを止めるイヴ。表情は分からないが、人の心の機微は誰よりもよく分かるので、心を直接読まずとも、そこにはあまり人に話したくない何かがあるのだと察したのだ。
しかしそれはそれとして、帰してほしいと声を上げなくなった日光に抵抗しなくていいのかと問いかけると、
「……いえ、少し方法を変えようかと」
「方法を変える？」
「ええ――――こんな風に」
「！」
「え、ええっ!?」
キィン、と日光が眩い光を発すると、日光の身体が変化した。
どう見ても刀でしかなかった日光が、刀になる前と同じ――人の姿に戻ったのだ。
「はっ！」
「！　おおっと」
そしてそのまま、徒手で攻撃を仕掛け、その場から脱しようと試みるも、戯骸によって防がれ、僅かに下る。
遺跡を抜け出し、土の地面となったそこを踏み締めると、日光は素手のままで構えた。
「……驚きました……凄いです。人間に戻れるんですね？」
「ええ、ある事情から。ですので、この姿で抵抗させていただきます」
日光は気丈にも、六体の前で構えを見せて抵抗する素振りを見せる。
だがさすがに勝てる訳がないことはお互いに分かっていた。故に何故そこまで抵抗するのかと疑問に思いつつ、それとは別にイヴが、
「……人間に戻れるなら、どうして遺跡に囚われていたんですか？元々最初からあそこにいたとか？」
「……それは」
美人とも言える日光の顔が、僅かに眉をひそめて歪む。痛いところを突かれたという顔だ。

だが律儀にも、日光はその質問に答える。それは、
「……使い手を探して、各地を旅していたら……遺跡のトラップに引っかかってしまい……抜け出せなくなってしまったというだけです……」
「……思ったよりポンコツ？」
「……」
「あ、はい。謝りますから睨まないでください」
「ドジなのね……」
何となく、クールで完璧な美人っぽい印象だと人間に戻った瞬間に思ったのだが、一瞬でそのイメージが崩れかける。思ったよりは残念な人なのかもしれない。
だが白兎はそれを聞いて、微笑を見せると、
「いいですね。そういう人間らしさは好きです。というわけで、私と一緒に父上を倒しましょう」
「何がというわけなのかは分かりませんが、お断りします。……それに、父上とは――」
と、白兎から何度も聞くその言葉が気になった日光が質問を告げようとした時だ。
その場に、凄まじい気配と共に声が現れた。
「――白兎……お前、何をしている……？」
「！　父上！」
「っ……この気配は……!?」
森の中から、物理的な圧力を持つ気と、鋭くも困惑したような声が飛ぶ。
皆がその正体に一瞬で当たりをつけていると、声の持ち主は実際にその場に現れてみせた。
「……何故、日光までいる……？　どういうことだ……」
「……！　やはり、魔人レオンハルトですか……！」
日光が警戒心を露わにするが、現れた魔人――レオンハルトは、白兎達と日光を見比べて困惑している。だが直ぐにハッとすると、
「……そういえばここの森にある遺跡は……くっ、気づけたな……気

づくべきだった……！」
　レオンハルトが珍しく、してやられたという風な、苦渋に満ちた表情を浮かべて右手で顔を押さえる。
　何やら周りの者達が分からない失敗を思っているレオンハルトは、そこで衝撃から立ち直れないまま、日光に鋭い視線を向け、
「……契約はしたのか？」
「……！　何故その事を……!?」
「いいから、白兎としたのか？　答えろ」
「っ……！」
　日光はその有無を言わせない質問に怯む。
　以前見た時と変わらない――いや、それ以上の圧力はやはり魔人として最強の男に相応しいものだ。
　敵ながら、その威圧には驚愕せざるを得ない。日光は、少し悩んだ末に、ゆっくりと、
「……いえ、していません」
「……そうか。それだけは、朗報だな……」
　と、その言葉に僅かながらの安堵の息を漏らしたが、今度は白兎の方に視線を移す。
　白兎は気丈にも視線を真っ直ぐに見返したが、
「……白兎」
「……っ、何ですか？」
　それは、白兎が初めて見る父親の余裕のない表情だった。
　本気、と言い換えても良い。それほどに、レオンハルトはこの事に対する想いを抱えているのだと。
「……白兎。何故、家出をした？　そんなに旅に出たかったのか？」
「……っ、そうです！　私は、自由に冒険がしたかったんですっ！」
　と、白兎は父親からの問いに震えた声で言い返す。周囲の者達は親と娘の問題ということもあり、固唾をのんで見守っていた。
　それを感じ取りながらも、白兎は唇を噛みしめ、それを直ぐに直しつつ、
「それに……！　一人前になったら自由にしていいと言ったのは父上

じゃないですか！　約束を破ったんですから、悪いのは父上です！」
　と、手紙に嘘つきと書いた意味を改めて言ってみせる。レオンハルトは眉をひそめ、
「……ああ。その点については悪かったな。確かに、自由にさせてやれることは出来なかった」
「っ……なら――」
「だが……お前はどういうつもりだ？」
「どういうつもり……？　そんなの、最初から――」
「そういうことじゃない。お前が冒険をしたがっているのは分かっている。俺が聞きたいのは、何か目的や、計画でもあるのかということだ」
　レオンハルトは白兎の言葉に先んじて告げる。どういうつもりなのかと。それに対し白兎は、意味を測りかねつつも、考えた末に、
「……旅をして、強くなって……ち、父上の様になりたかっただけです！」
「……俺の様になってどうする？　いや、そもそも……どうやってなるつもりだ？」
「！　それは……」
　強くなって、という言葉はレオンハルトは求めていない。故に、その質問に咄嗟の言葉を返すことが出来なかった白兎。理由や方法が全く思い浮かばないというわけではなかったが、言い淀んだ時点でレオンハルトは息を入れ、白兎への言葉を続ける。
「白兎。お前は、この世界の厳しさを知らない」
「……し、知っています。この世界は――」
「いいや、知らない。知っているつもりになっているだけだ。知らないよりもよっぽど質が悪い」
　言葉を先に制され続けてしまう。まるで戦闘の時の様だった。
「お前は確かに一人前になった。常人よりは遥かに強い。そこらの奴らが集まったところで、お前に勝つことは出来ないだろう」
「そ、それなら……」
「だが、一人前程度ではこの世界を渡り切ることは出来ない。この世

界で完全に自由になりたいのであれば、最低でも魔人としての立場と、それらに襲われても全く問題ない程度の力がいる」
　何を言おうとしても通じない。経験の上でも能力の上でも父は白兎の上を行くのだ。
「俺とて、完全な自由には程遠い……いや、むしろ俺は囚われている方だと言っても過言ではない」
「……で、でも、父上は、最強で――」
「確かに俺は誰が相手でも負けるつもりはないし、それ以上の強さを求め続けているが……結局俺も、魔王などにはいつの時代も従って生きている。その点では、俺も自由ではない」
　いいか？　とレオンハルトは白兎に言い聞かせるように、
「真に自由になりたいのであれば――それはもう、魔王になるしかない」
　それ以外は全員、地上に生きる者達は残らず首輪を付けられているのと一緒だ。
　レオンハルトは、それを脱する方法も持っているが、敢えてそれを告げずに言う。絶対命令権が無かろうとも、力の上で負けているのならそれは同じ事だからだ。
「白兎。お前は、魔人に複数人で襲いかかられても勝てるほどに強いのか？　どんな卑怯な手を使われても生き延びていけるほどの抜け目無さや、時には泥をすすってでも生きるほどの生き汚さを持ち合わせているのか？」
「……そ、そんなの――」
「厳しいようだが、これが現実だ。多くの人間は、お前とは比較にならない程の過酷な環境で生き延びようと足掻いている。たった一日を生きるにも必死だ。俺達の様に、温かい部屋で周りを気にすることなく睡眠を取り、毎日腹いっぱいになるまで食事が摂れ、自分より上位の存在に遊び半分で殺され、苦しめられるようなこともない存在など貴重だ」
　自分達は、お前は、恵まれていると、そう指摘する。
　白兎はそれを聞いて、先程よりも気勢を衰えさせつつも、

「……父上も、その気持ちは――」
「俺も、完全には分かるとは言い難いかもしれないな。だが俺とて、幼い頃は守ってくれる親などおらず、毎日の食事を自分で調達するしかなかった弱い時期があった。魔物に怯えるしかない時期があった。その分だけ、お前よりはほんの少しだけだが、気持ちが理解出来る」
それでも、今の人間には敵わないだろうが、とレオンハルトは自嘲気味に告げる。
それは白兎にとって、初めて知る父親の幼い頃の話だった。
それらを一部教えた上で、レオンハルトは言う。現実を思い知らせるように、
「白兎、世の中には、野草を煮ただけの味も栄養も無く、腹も殆ど膨れない粗末な食事を笑顔で分け合い、時には取り合うような生活を送る人間が数多くいる」
続ける。それは、レオンハルトが娘に初めて語る世界の汚い部分だった。
「魔物界で育ったお前に金の価値はあまり理解出来ないかもしれないが……たった１０ＧＯＬＤ――いや、１ＧＯＬＤのためなら、子供だって人殺しをする。その日の糧を得るためなら何だってする。女なら……どんな醜い相手だろうと、身体だって開く」
「……っ……」
その話を聞いた白兎の表情の僅かな歪みは、レオンハルトの心を締め付けるには十分なものだった。
本当なら、こんなことは教えたくもない。聞かせたくもないことだ。
だがそれは、本当の意味で白兎の為にならない。
だからレオンハルトは続ける。白兎の為に、
「俺は自分と自分の身内、周りの生活を守るために、あらゆる力を獲得している。理不尽な目を受けず、ある程度自由に動くためには、単純な強さだけではなく、人を使い、味方を作り、情報を集め、緻密な計画を立て、用意周到に動かなければならない。周りの者達が、つけ入ろうとする隙の一切合切を排除して初めて、今の安定が成り立ってい

る」
　言う。それはレオンハルトとしては最も言いたくないことの一つだ。
「そのためには、時として、人に言うことを憚られるような汚いことだってする必要がある」
　それは、
「……白兎。俺が今の生活を守るために、魔王相手に男娼紛いのことをしているのを知っているか？」
「……えっ？」
　白兎が間の抜けた声を上げる。そんなことは露とも知らないといった表情だ。
　実際、知るはずもない。使徒や一部の近しい相手を除き、誰にも言ったことはないからだ。
「他にもだ。俺は今の牧場の体制を維持するために、毎月牧場から一人、人間を差し出している。痛みに慣れていない人間が好きだからと、外から攫ってきたり、まだ汚れていない子供やＡ級の人間から差し出すこともある」
「っ……それは……確か、時折いなくなる……」
「まあ、そのことについては多少は分かっているか。察しの通り、それは毎月送る、魔王様への献上品だ。それが俺が人間街という少数の人間でも優遇するようなシステムを作った際に、魔王ジルから出された条件だ」
「そんな裏事情が……」
「っ……」
　それを聞いていた人間牧場出身のイヴが驚きをみせる。
　確かに、脱走する子供などは時折いたし、牧場でも時折処分される子供がいる。そういった人間は使徒の誰かが連れて行く。どこかで処分しているのだろうかと思っていたのだが、そんな事情があったとは知らなかった。
　そしてもう一人――それを聞いてしまっていた日光は、無言のままその話に思うところがあるのか、考え込む。彼女もまた、不可思議に

思っていたあの人間牧場の裏事情を聞いて衝撃を受けている者の一人だった。
残酷な話だが、それは確かに、多数の人間を救っていることには違いなく、それ故にそのことを責めることが出来る者はいない。
ただ一人――当人を除いては、
「俺は皆が思うほどに完璧な魔人でも崇高な人格も持っていない。抵抗し、幸福でありたいと願う人間を容赦なく地獄へと突き落とす外道。女子供だろうが敵対すれば容赦なく切り捨てる修羅。血を好む魔人そのものだ」
「父……上……」
「幻滅したか？　俺はそもそもこの地獄を作り上げた張本人で、自分の益の為に他者を食い物にする魔人だ」
だが、とレオンハルトはそこで間を開けて言う。自分を擁護するつもりではないが、
「だが、世の中を知り、生きている者達というのは、皆そうやって生きている。時に強者に媚び諂い、策を企て、計算の上で生きている。殆どの者は、そうしなければ生きていけない。先程は俺も汚いとは言ったが、普通の人間よりは遥かにそういう手段を取らなくて生きることが出来る。そういう意味で恵まれていることも確かだ」
だから、と、
「白兎。お前が俺の保護から外れようとするということは、ただの自殺行為だ。親として、それを看過することは出来ん。ただでさえ、俺の娘という立場は目につく。それがバレるにしても隠し通せてたとしても、どっちにしろ茨の道だ」
と、レオンハルトは白兎へ、分かってくれと、そういう意味を込めて告げる。
「ましてやお前だけでなく……お前の友人――イヴなどの普通の人間まで危険に晒すつもりか？」
「……ぁ……」
「……そ、それは……」
白兎が短い声を上げる。イヴも告げられた厳しい言葉に何かを言

おうとしたが、レオンハルトの視線を受けて何も言うことが出来ない。白兎にそんなつもりはないと言っても、今はあまり効果がない。論点はそこではないのだ。
　イヴが何も言ってこないことを確認しつつ、白兎の表情を見たレオンハルトはそこで溜息をつく。今度は、自嘲気味な様子で、
「だが……それらは全て、俺がお前にそういった現実を教えてこなかったことに責任がある」
「……！」
　懺悔するかのようにレオンハルトが言う。それは、正しく謝罪しているかのようだった。
「無知は罪だと言う。しかし、他人が言うならそれで良いが、俺は親だ。親には、子供に教えてこなかったという責任がある」
「父上……」
「……俺はこれを機に、また色々と考えなくてはならない。だが、その前に……お前はどう思う、白兎。お前はこの話を聞いてどうしたい？」
「……私、は……」
　レオンハルトに父として問いかけられ、白兎が俯く。父に初めて、剣の修業以外で厳しい言葉を掛けられ、どうしていいか分からない様子だ。
　彼女にとって父、レオンハルトという人物は、誰よりも強く、完璧で、それでいて優しすぎるほどに優しい父親だった。
　だからこそ、彼女にとって、レオンハルトという人物は、
「……私は……パパを……パパと同じくらい強くなりたかったんです……」
　言う。それはずっと秘めていた白兎の気持ちだ。
　それは、
「……パパと同じくらい強くなって……、パパに認めてもらって……パパの助けになりたかったんです……！」
「俺の助けに……？」
　白兎が小さく頷く。その表情は、今にも泣きそうになっていた。

「パパは……いつも何かに悩んだり、お仕事で大変そうだから……私が立派になって自立すれば、少しでも負担が無くなるかもって……パパの悩みを解決出来るくらい強くなれば、もっと頼って貰えるかもしれないし、パパを心配してるママも喜んでくれるかもって、そう思って……」
「っ……白兎……」
父親を助けてあげたい。白兎の想いは、殆どが親のことだった。
「パパ以上に強くなれば、パパとママを困らせてる相手を……どうにか出来ないかと思って……！」
白兎の声が震える。それはもう、殆ど泣いていた。
「それに私は……生まれた時から目が見えないから……それでパパとママの足手まといになっちゃいけないと思って――」
「っ……ふざけるな!!」
それは、周囲の生き物がまとめて逃げ出すような、レオンハルトの怒声だった。
レオンハルトは我慢できずに、白兎に向かって距離を詰め、彼女の肩を掴む。
そして有無を言わせず彼女と視線を合わせ、
「お前の目が見えないから何だって言うんだ!?」
「っ……で、でも……私、幼い頃から迷惑を掛けてきて……だから――」
「そんなこと、お前が負い目に思う必要はない!!　いいか!?　お前がどんな病気だろうが、才能が無かろうが、親にとってはそんなことは関係ないんだ！」
「……でも……」
「でもじゃねぇ！　いい加減にしろ白兎！　俺はお前が俺に迷惑を掛けたことを怒ってるんじゃない！　周りの奴らに迷惑を掛けたことはともかく、俺や紅月に対しての迷惑をお前が苦に思う必要はないし、ましてや役に立つ必要なんてない！　そんなつまらないことを気にするな！」
そんな思い違いをしているとは思わなかったと、レオンハルトは自

分が情けなく感じる。まさか、そんなことを考えていたとは。
そして、そんなふざけた考えを許す訳にはいかない。正さなくてはならない。レオンハルトはそのために声を張り上げた。
「いいか!? 親は自分の子供を無条件で愛するものだ! 子供を愛さねぇ親なんて親じゃねぇ!! お前が何をしでかそうが、俺や紅月、他人に迷惑を掛けようが、強くなくても、目が見えなくても、そんなことはお前を愛する上では関係ない!」
「……パ、パ……」
白兎はそこでようやく、父親の真意を察する。
レオンハルトが言う言葉。それらは全て、白兎の事を思って言っているのだと、
「……俺がなんでさっき、あれだけ厳しい事を言ったか分かるか? 俺が、お前に監視を付けたり、自由にさせないでいるか分かるか……?」
「……っ……」
白兎は半ば理解していながらも、父親の初めて見る表情に言葉を返すことが出来なかった。
それは、あまりにも弱々しいものだったから。
魔人の浮かべる顔ではない。
それはただの、レオンハルトという一人の親の言葉だ。
「俺は……お前を愛していて……愛しているからこそ……只々心配なんだ……」
「っ……!」
それは縋るような言葉だった。頼むから分かってくれと、己の弱さを曝け出すような言葉だ。
「俺は……大陸の端で危険に遭うお前を守れるほど万能でも強くもない……お前の居場所が分からなくなったと言われた時は気が気じゃなかったんだ……だから俺は万が一、何かが起こった時に対処出来るように、本当は教えたくなかった剣もお前に教えたし、渋々だが経験だって積ませた」
もっとも、それは不十分であったのだが、とレオンハルトは謝罪す

る。
　白兎がそういった行動に出た背景には、レオンハルトの教育不足があったのだと自覚しているから。
　だが、言う。それらを認めてなお、レオンハルトは親として、
「頼むから……無謀な事だけはしないでくれ……冒険に出ても良いし、俺に出来ることなら何だってしてやる……お前が知らないことだって幾らでも教えてやるし、どんな時だって助けてやる……お前を守るためなら、俺はどんな強敵だろうと、無謀な相手だろうと立ち向かってやる……」
　だが、
「俺は無敵じゃない……お前が無謀な行動を取り続け、お前を守ろうとする俺は……いつか必ず、先に死んでしまう……」
「――！」
　表情を変えた白兎に、レオンハルトは、分かるか？　と問いかける。
「俺の命は重いんだ……俺が死ねば、俺が守っていた多くの人が死んでしまう……お前だって、きっと例外じゃない……だから、ほんの少しでいい。ほんの僅か少しでいいから……もっと自分を大切にしてくれ……！」
　と、
「俺はお前を愛していて……心配しているんだ……！　失うことなんて、もう耐えられない……っ!!」
「っ、パ……パ……」
　それは白兎も含めて、その場にいる誰もが知った、レオンハルトの内に秘めている弱さだ。
　レオンハルトは身内を失うことを何よりも嫌う。そしてその縁を結んだ者を大切にする生き方そのものが、彼にとっての弱さであり、唯一の弱点なのだ。
　仮にレオンハルトが一人であり、大切な者が一つもないのであれば、彼はきっと、無敵であっただろう。命懸けの戦いを計算無く続け、それでもなお生き残り、世界をどうにかしてしまっていたかもしれない。

だが、強くあり続けられるのも、その大切な者達のおかげなのだ。
それがなければ、王にも英雄にもなっていない。ただ強いだけのチンピラにでも成り下がっていただろう。
そしてレオンハルトのその言葉を、真正面から受けた白兎は、もはや様々な感情がないまぜになり、
「っ、ぐす、ひぐっ、ごめんなさい、パパぁ……っ!!」
父親に抱きつき、胸に顔を埋めて泣きじゃくった。
それはいつもの、レオンハルトの娘であろうとした白兎の顔ではなく、秘めていたただの子供としての白兎だった。
それを受け止めたレオンハルトは、腕を回して抱き返してやり、
「ああ、いいんだ……別に間違えてもいい……俺だって間違える……だから、これから学んでいけばいい」
「ふ、ぇぇぇぇん！　ぱぱぁ、ごめんなさぁぁぁいっ……！」
白兎が初めて、それこそ赤ん坊の時を除けば初めて泣いて、父親の胸に甘える。
それを見ていた周囲は、
「……ふふ、良かったですね、白兎さん……」
イヴなどは、白兎と付き合いも長く、その気持ちも半ば理解していたため、妙に感極まって笑みのまま潤んでしまう。
思えば、ずっと親に甘えたいという想いを秘めていた白兎だ。本音の部分では甘えたくても、父親の様になりたいからと、それを封印してきていた。
これからは、父親の様になる目標を例え抱き続けたとしても、甘えることだって出来るし、父親を倣って無謀な事をすることもないだろう。
そう思えば、今回の家出に付き合った甲斐はあるのかもしれないと、イヴは微笑ましく目でその光景を見守った。
その光景を見ていた日光は、自分の中に置き場のない感情が浮かんでくるのを感じた。

魔人と魔人の娘。人間を苦しめる諸悪の根源とも言うべき存在。
日光が殺すべき存在であり、絶対に相容れないと思っていた存在だ。
血も涙もない外道であり、人間を遊び半分で殺すような不逞の輩。
だが、眼の前の光景は一体なんだ？
魔人と魔人の娘が言い合いの末に抱き合い、涙を流す娘を親が慰めている。
目の前の魔人は、多くの人間を苦しめている化け物であるはずなのに。
なら、この光景は何なのだ？
とても血も涙もない魔人とは思えない。
この光景が、親子の語らいが、人間のそれとどう違うのだろう。
その説明を、日光には出来ない。目の前の魔人を殺すべきだというのに、そういった憎い感情が湧き上がってこない。
むしろこの光景を、ここに至るまでのそれを見て、よく分からないが良かったと感じてしまっている。
かつて告げられた事。考えた事を再び思い出してしまう。
即ち――人間と魔物の、何が違うのか。
少なくとも眼の前の魔人とその娘は、人間と同じ様に他人を慈しむ心を持っているように感じる。
他の魔人や魔物がそうだとは限らないが、それでもこの光景は日光にとって、自分の在り方を迷わせるものだ。
……私は……。
その答えが、今はまだ出てこない。魔人を殺すべきという答えが霞に掛かったように見えづらくなる中、日光は立ち去ることも出来ずに、その場に居続けた。

雨降って地固まる。そうなると思われていた数分後。しばらくの間、泣いていた白兎が落ち着きはじめた時だ。
実際に親子間の禊は済み白兎やレオンハルトが他の面々に謝罪を

していると、
「――レ、レレレオンハルト様ーーーーー!!　大変ですわーーーーー!!!」
　突然その場に、大声を上げながら全速力で走ってくる金髪ツインテールの姿。
　それを見てレオンハルトは、ひょっとしたら緊急の要件なのではと、皆との会話を一時中断した。
「……どうしたキャロル。いつもより声が大きいが……何か遭ったのか？」
「そ、そそそうなんですの！　とっっっっっっても大変ですわ!!
もうヤバいですの!!　前代未聞ですわ!!　そして、内密にすべきお話ですわ!!」
「分かったから、少し落ち着け。そしてさっさと話せ。緊急なら時間が惜しい。気にせず話せ」
「私の事は気にしないでパパを優先してください」
　と、白兎が言ったところで、キャロルが深呼吸をする。そしてレオンハルトの首に掴まったままの白兎を見つつ、
「……なんだか微妙にきになりますが、白兎様にも関係があることですので聞いてほしいですわ！」
「私にも関係があるお話ですか？」
「……？　何だそれは。それで緊急性の要件……？」
　レオンハルトは考えてみるが、分からない。紅月関連の事だろうか、と適当に当たりを付けてみる。
　しかし、緊急性と言う割には、キャロルの表情には余裕があるので、誰かに危険が迫っているといった要件では無さそうだとレオンハルトはリラックスしながらキャロルの報告を聞くことにする。
「では、言いますわよ――――」
　と、キャロルは迫真の表情で喉を鳴らし、勿体付けた。いいからさっさと言え、とレオンハルトがその言葉を待っていると、
「……ケッセルリンク様が……妊娠しましたわ!!」
「そうか。ケッセルリンクが、妊……娠……」

ん？　とレオンハルトはちょっとあり得ない言葉を聞いてしまい、真顔になる。
　他の面子も似たようなリアクションだ。というか、絶句している。白兎以外は、
「！　ということは……もしかして、私に妹が出来るんですか!?」
「弟かもしれませんわね！　とにかく、めでたいことですわー!!」
　やんややんやと喜ぶキャロルと白兎。そのコンビを見ながら、レオンハルトは引き攣った笑みを整えつつ、
「……い、いや、ちょっと待ってくれ……よく聞こえなかったんだが……何だって？」
　再度、何かの間違いではないかと聞き返す。しかし。
「ケッセルリンク様が妊娠しましたわ！　おめでとうございます、レオンハルト様！」
「ありがとうございますパパ！　私、ずっと妹か弟が欲しかったんですっ！」
「……」
「って、パパ？」
「どうかしましたの、レオンハルト様？」
　二人が首を傾げる中、レオンハルトはここ数百年で一番の放心状態となる。
　ケッセルリンク。言うまでもなく、魔人であり、レオンハルトの女でもある女性だ。
　だがこの場合、女性という部分ではなく、魔人。魔人同士、という部分が何よりも重要であり、
　……いやいやいや、そんなまさか……。
　と、レオンハルトは内心で冗談ではないかと否定してみる。
　だが、自分の体質は自分が誰よりも分かっているし、そもそも魔人同士でも出来ないということはない。確率はかなり低いだろうが、決して出来ないということはなく。
　かといって、そんなことがあるとは、
「一体どんな確率だぁーーーー!?」

「レオンハルト様の珍しいツッコミが出ましたわ！　やはり今日はめでたいですわね！」
「い、言ってる場合じゃねぇーー!?　と、とととにかく急いで向かうぞ……！　お前ら急げ!!」
「ふふん、今お姉ちゃんが行きますからね……待ってて下さい、名もなき妹！　もとい弟！」
「もう姉になった気でいる!?」
「きき！」
「ほう……レオンハルトの精ってすげぇなぁ……」
「羨ましい……我もどうにか……」
「やっぱり、一度くらい産んでみるべきかしら？」
「……私は、どうすれば……」
「とりあえず連れていきますわー！」
「えっ？　いや、待っ――」
　皆が口々にその感想を言い合いながらも、衝撃報告を受けて全力で走っていくレオンハルトを、その場にいた皆で必死に追いかけることになったのであった。

新たな命と新たな協力者

大陸北部。魔軍が世界を支配する上で、魔王ジルから全権を任されている魔人レオンハルトは、世界各地にある人間牧場と、そこを管轄する魔人達に、その一帯の土地を支配、領地として管理させている。

特に魔人四天王に名を連ねる魔人ともなれば、管理する牧場の大きさも領地も広い。魔軍を動かす上でも、大陸を四つに分割し、その方面の責任者としてもいるのだ。魔王ジルは統治や部下の管理に全く興味がないため、滞りなく人間の家畜化と支配さえ行っていれば特に問題はないのである。

その中で大陸北部と言えば魔人四天王の一角、魔人ケッセルリンクが統治し、彼女の居城がある土地だ。

大陸北部の氷雪地帯を除いたとしても、北部は全体的に冷帯であり、他の地域よりも寒さによる凍死が常に付き纏うため、人間の管理にも注意が必要であったりする。

そのためか、北部は全体的に、魔人としては良識を持つ冷静な者達が治めているところが殆どである。ケッセルリンク以外でも、魔人メガラスや魔人ジークが大陸北部地域の牧場を担当している。魔物大将軍イヴァンが治める牧場もあり、それについては評価が分かれるが、比較的、他の地域よりは人間の扱いは優しいように思えた。

魔物の方も寒い地域では人間程ではないが、あまりやる気が出ず、室内で暖を取りたい。一々外に出てまで人間を虐めに行こうとは、全くならないこともないが、他の地域よりは頻度が低いのである。

そんな大陸北部にあるケッセルリンクの城は――ざわついていた。

「ど、どどどどうすれば……！　とりあえず人払いは済ませたけど……何をすれば……!?」

城の玄関ホールにて、魔人ケッセルリンクの使徒であり、メイド長を務める少女、エルシールは明らかにテンパっていた。

最近は使徒としてもメイド長としても貫禄がついてきた彼女であるが、ケッセルリンクのメイドとして過ごしてきた史上――いや、魔物界史上で前代未聞の事態が起こったことに対して、彼女は動じずに

はいられなかったのだ。
だが、その後ろから呆れるような反応が来た。同じくケッセルリンクに仕える同様のメイド服を身に着けた赤い髪の少女と、それとは別の魔人――今回の一件に深く関わる魔人の使徒だ。彼女は玄関ホールにある支柱の柱に腕を組んだまま寄りかかり、
「少しは落ち着きなって、エルシール。気持ちは分かるけど、何も危機って訳じゃないんだから」
「そうだよ。城に詰めていた魔物連中も追い出したしさ。後はまあ……レオンハルト様が着くのを待つだけだね、とりあえずは」
と、言ったのは、魔人レオンハルトの使徒であり、話を聞いて瞬間移動で駆けつけたハンティと、ケッセルリンクの使徒メイドの一人であるバーバラだ。彼女たちはエルシールとは違って落ち着いた様子でおり、特にハンティなどは、さもありなん、と言った風に普段と変わらない様子だ。
そんな様子を見て、エルシールは多少は落ち着きながらも疑問を向け、
「ど、どうしてそんなに落ち着いていられるんですか……？」
「んー、まあ、レオンハルトだしねぇ……一人目の白兎が生まれた時点で、遅かれ早かれそうなることもあるかもって、予想はしてたよ」
レオンハルトのやることだから、と使徒である彼女でなければ分からない様なことを言い、肩を竦めるハンティ。それを苦笑で見たバーバラは、それとは別に、
「……私は、よく分かんないけども……魔人の子って言っても、ケッセルリンク様の子供には変わりないかなって……だったら、普通の子供だと思って、ちゃんと接してあげることを考えた方がいいんじゃないかってさ。勿論、立場が立場だし、ケッセルリンク様のサポートもちゃんと考えないといけないとは思うけど……」
「ば、バーバラ……貴方……」
後輩の言葉に、エルシールもハッとする。確かに、魔人の子と言えども、自分達の敬愛する大切な主の子供だ。
ならばその子供だって自分達の大切な身内に他ならない。それは

正しい。エルシールもそうするべきだとは思っている。
とはいえ、色々な観点から見ると、やはり心配になってしまう。今も寝室にはシャロンやパレロア、加奈代がケッセルリンクの元にいて容態を伺っているので大丈夫だと思うが、居ても立ってもいられない気持ちが湧いてくるのだ。
だがそんなエルシールを見たハンティは、軽く冗談めかすように右手を上げつつ、
「それに、あのレオンハルトとケッセルリンクの子供ともなれば、それこそ物凄い才能を持った子が生まれそうだし……成長したら、ちょっと戦りあってみるのも――」
「駄目です!!」
「――即答だね……」
ハンティが半目を向けて苦笑する。声を合わせたエルシールとバーバラは揃ってハンティに詰め寄り、
「メイド長として、お嬢様、もとい坊ちゃまを危険な目に遭わせる訳にはいきません!!」
「幾らハンティさんでも、それだけは駄目ですからね!? ハンティさん、手加減抜きでボコボコにしちゃいそうですし！」
「あんたら……あたしを何だと思ってるのさ……これでも手加減は上手な方なんだけどねぇ……」
「駄目なものは駄目ですっ!!」
一応、普段は使徒として先輩であり、主が世話になった人物、使徒の最強の存在であるハンティを立てている二人も、いずれ生まれる子供が眼の前のウォーモンガーの犠牲になると知れば、黙っていられない。全力で止めようとしてくる二人に、ハンティが若干、不満そうにしていると不意に、
「――まあ、始祖様なら子供相手でも強ければぼこぼこ～ってしちゃいそうですし、その判断は間違ってませんね」
「！ ――うっさい、ペール。教育に悪いで言ったら、あんたの方が上でしょうが」
と、その場に現れたのは同じくレオンハルトの使徒であり、ケッセ

ルリンクとはカラーの女王の先輩後輩の関係であるペールだった。
　彼女は悪戯っぽい表情を浮かべつつハンティを軽くからかうと、そのまま三人の輪に合流する。彼女を見たエルシールが、
「ペールさん……転移魔法陣でお着きになったんですね」
「まあ、さすがに様子を見たかったですからね」
　と、ペールが手を振りながら軽く挨拶。レオンハルトの城とケッセルリンクの城は、いつでも行き来が出来るように、城の中に転移魔法陣を設置してあり、魔力さえ注ぎ込めばいつでも移動が可能である。先に別件でやって来ていたキャロルと同様、それを用いてやってきたペールは機嫌良さそうな様子で口を開く。今回の一件は彼女にとっては朗報でしかないようで、
「いや～、とうとうケッセルリンク様にも子供が出来るなんて……感慨深いものがありますよう。これはペールちゃんの出番も近いかもですねぇ！」
「……そういえば、リーさんは来てないけど、何か用事でも？」
「って、バーバラちゃん、いきなりスルーしようとするのは酷くないですか？」
　まあいいですけどね、と相変わらずのノリでバーバラのスルーすら気に留めないペールはその質問に答えた。
「リーさんも来たがってましたけど、さすがにレオンハルト様も居ないのに、使徒全員が街を空けるのは駄目ですからね。私達の代わりにせっせと仕事してますよう？」
「よく言うよ。押し付けてきた癖に」
「あ、バレました？　さすがは始祖様、ペールちゃんのこと理解ってますねぇ」
　したり顔で言うペールに、ハンティは呆れる。今頃は仕事を押し付けられて、しかし責任感が強いため投げ出すことが出来ずにせっせと働くリーが目に浮かぶ。
　しかし、ケッセルリンクと特に関わりが深いペールが来たがるのも分かるので、リーとしても納得してないこともないだろうが。
「それで、レオンハルト様はまだ来てないんですか？」

「……いや、もうすぐだと思うけど……キャロルが伝えにいったからね。あたしが行こうと思ったんだけど、それを言う前にキャロル、走って行っちゃったし」
「あら、そうですか。……くふふ、レオンハルト様、聞いたらびっくりするでしょうねぇ。何せ、まさかの魔人同士の子ですし」
口元に手を当てて、魔人同士の子、という、劇薬となる可能性の高い存在を思い、しかし笑みを浮かべてみせる。
それだけレオンハルトを信頼しているとも言えるし、単に自分が慕う二人の子、というのが嬉しいだけだったりするペール。
そしてそれを聞いていたエルシールは、ふと、疑問に思っていたことを聞いた。そもそも、
「……魔人の子って……あの白兎さんが生まれた時に魔人でも子は作れるってのは分かりましたけど、互いに魔人でも可能なんですか……？」
「実際に出来てるだろう？　それが真実さ」
「そ、そう言われてしまうと何とも言えませんけど……それでも可能性は限りなく低いんじゃ……？」
ハンティに端的に答えを告げられて怯みつつも、再度問いかけてみるエルシール。するとハンティも今度は真面目な表情で、
「……ま、可能性がかなり低いのは間違いないね。そもそも女性の魔人が妊娠するってこと自体、新しい発見になるし」
「加えて相手も魔人。通常でも魔人が子を成すのは、通常よりもかなり確率が低いですから、これが魔人同士ともなると……それこそ、あり得ないことであるのは間違いないですよう。さすがはレオンハルト様ですねぇ」
「実際に起きたんだからありえないことでも何でもなくなったけどね。ほんと……レオンハルトの奴、どんな星の下に生まれてきたんだか……」
ハンティは呆れるように、ペールは面白そうに魔人の子という存在を語る。
それを聞いたエルシールやバーバラは、改めて主の妊娠が、とんで

もない確率を乗り越えた奇跡の産物であることと、これから生まれてくる子の希少さ、史上初であることを思って喉を自然に鳴らしてしまう。

そんな時だ。外から声が聞こえた。

「――――城内に報告致します！　魔人レオンハルト様がお着きになりました!!」

「！」

「……来たみたいだね。さて、あたしらも一緒に行く準備をしようか」

「ですね」

城の外からの声は、警備の魔物兵、及び、魔物隊長、魔物将軍のものだ。

基本的にケッセルリンクの城はケッセルリンクとその使徒メイドが管理しているが、城外の警備などには魔軍の人員を用いているし、魔物将軍であれば入城して報告を行うこともあるため、行き来が無い訳ではない

だが今は、機密保持の為に城から魔物を締め出している。今城内にいるのは、ケッセルリンクとその使徒メイド。レオンハルトの使徒のみだ。

そしてこれからの事を考えると、この体制は続くかもしれないと思いつつ、エルシールはバーバラに告げた。

「……魔人レオンハルト様を迎えます。行きますよ、バーバラ」

「……はい。メイド長」

バーバラも一メイドとしてエルシールに付き従う。

以前から、主と親しい間柄として、レオンハルトやレオンハルトの使徒達とも付き合いがあるが、今回の一件を切っ掛けに、様々な意味で協力、連携する必要があるだろうと予感し、彼女達は城門を開けた。

ケッセルリンクの寝室では、ベッドに腰掛けるケッセルリンクの姿と、その周りに付いている使徒達の姿があった。

だが、その状況を見て、有り難いと思いつつも微妙に困惑している

のは、ケッセルリンク自身だった。というのも、
「……少し、大げさではないかね？」
「いえ、妊娠が発覚した以上、ケッセルリンク様のお身体をこれまで以上に大事にお守りし、そしてお世話をするのが私達メイドの仕事――いえ、使命ですから」
ニコリ、と相変わらず隙のない笑顔を浮かべてそう言ったのは、ケッセルリンクの使徒の中でも一番の古株であるシャロンだ。
彼女の有無を言わせない雰囲気は、ケッセルリンクに作用するようなものではなかった筈だが、さしものケッセルリンクでも、今回の事については、彼女達から譲らないという意志を感じ取れてしまい、若干怯んでしまっている。しかし、言うべきことは言うのがケッセルリンクで、
「……まだ、妊娠が発覚しただけなのだが……」
「いいえ、ケッセルリンク様。失礼を承知で申し上げますが、それは甘い認識です。妊娠中は、極力、身体に負担を掛けるようなことは避けるべきです。ましてやケッセルリンク様は魔人。どんな症状が現れるとも限りませんし、細心の注意を払うべきだと具申します」
「これからは、最低でも二人はケッセルリンク様の側に付くことになりますからね。栄養管理などもこれまで以上に気をつけますし、何かあったら直ぐに申し付けてくださいね？」
同じ様に側に付いていたパレロアや加奈代も、ケッセルリンクに対して安静でいるようにと有無を言わせない雰囲気で告げる。
特に、パレロアなどは誰よりも真面目な表情だ。一度母として出産を経験し、子育ても経験していることもあり、ケッセルリンクに妊娠の疑いがあると最初に気づいたのも彼女であり、発覚してからも誰よりも落ち着いた対応で皆に指示を飛ばし始めたのだ。
少々過保護である気もしないでもないが、前代未聞であることも事実であり、皆が自分やお腹の子のことを思って動いてくれてることも理解しているため、嬉しく思い、感謝こそすれど、迷惑がるようなことはない。
「……ああ、分かった」

だが、喜びと不安が同時に沸き立つのは止められない。
愛しい人の子供を授かる。女として、これほど嬉しいことは他にない。
しかし、
「……魔人同士の子か……苦労を掛けてしまうのだろうな……」
「ケッセルリンク様……」
シャロンの心配するような声が耳に届く。これが普通の人間やカラーであったのなら、子供も普通に生まれ育つのだろう。
しかし魔人の子ともなれば、生まれてくる子にも、相応の責任と苦労が待ち受けている。
無論、今の世の中を考えると、魔人の子であったほうが安全なのは確かだが、
「……私は、本当に母となっても――」
「――その先は言うな」
「！」
言葉の途中でそれを止めたのは、ノック無しに扉を開いて現れた男。魔人レオンハルトだった。
同じく使徒のキャロルやハンティ、ペールなども後ろに続いてくる。それを見てシャロンが、
「おじ様に、皆様も……お早い到着で」
「全力で走ってきたからな」
「さ、さすがに疲れましたわ……」
「だからあたしが行こうとしたのに……」
「来ましたよう、ケッセルリンク様」
「ふふん、私もいますよ」
「あら、白兎様まで……」
と、息を整えるキャロルや、呆れるハンティ、笑みで挨拶を告げるペールの後ろから、レオンハルトの娘である白兎も姿を見せると、彼女を見てシャロンが近づいていき、
「……こんなに汚してしまって……駄目ですよ、白兎様。白兎様は女の子なんですから身だしなみには気をつけてください」

「わっ、しゃ、シャロンさん？　いつも言ってますが、私はもう子供じゃないですから、そういうのはやめてくれると――」
「駄目です。ほら、汚れを落としますからじっとしていてください」
「う、うぐ……な、何故かシャロンさんには逆らえません……」
　部屋に入ってくるなり、シャロンの可愛がりを受ける白兎を横目で見て、何とも言えない表情を浮かべるレオンハルト。何かを言おうとしたが、その前にシャロンの笑みがレオンハルトの方を一瞬向いて、それで黙らされてしまっていた。
　諦めたレオンハルトは白兎とシャロンから視線を切り、息を整えると、再びケッセルリンクの方を見て口を開く。告げる言葉は、先程の続きだ。
「……ケッセルリンク。色々と思うこと、不安もあるだろうが……一先ず、先に言わせてほしい」
　と、レオンハルトは咳払いをして、ベッドに腰掛けるケッセルリンクを真っ直ぐに見つめると、
「――ありがとう」
「っ……」
　レオンハルトが軽く屈んで、ケッセルリンクの手を浅く握りながらそう口にする。その彼の真っ直ぐな、想いの乗った瞳と言葉に、ケッセルリンクは何も言えなくなってしまう。
　だが彼の方は苦笑を浮かべて、
「……勿論、これからの事の不安や、懸念は色々あるだろう。だが、それらについては任せてほしい。考えるなと言われても無理だろうし、そこまでは言わないが……出来れば、母になること、子供の事に集中してくれ」
　他の事は全部自分が何とかする――そう覚悟を決めた表情で言われ、ケッセルリンクは胸の内が晴れやかになるのを感じて、
「……ふふっ、不思議なものだ。先程まではあれほど不安が渦巻いていたというのに……貴方にそう言われるだけで、とても安心する」
「……父親として、自分の……女や子供を守るのは当たり前の事だ。魔人だろうと、それは変わらない」

そうかもしれない。だが、
「……私からも言わせてくれ」
と、ケッセルリンクは温かい笑みを浮かべて先程と同じ言葉を告げた。それは、
「――ありがとう」
「……ああ」
「私が母になれる日が来るとは思わなかった……こんな気持ちになれるのも……貴方があの日、私の命を救ってくれたからだ……」
「……また古い話を……しかも皆が聞いてる前で言わなくてもいいだろうに……」
ケッセルリンクが告げると、レオンハルトが渋い表情となり視線を逸らす。昔は今よりもやんちゃしていたという自覚が彼にはあるようで、昔の話をするとこうやってバツが悪そうな表情を浮かべる。
それはまるで、昔の彼の様であり、愛しく、そして子供の様なその反応が何だか可愛らしいと思ったケッセルリンクは、ふと思い立ってからかうように、
「……〝男が女を助けるのに、理由はない〟……だったか？」
「っ……よく憶えてるな……そんなクサイ台詞……」
「ふふ、すまない。だが、愛しい男の言葉だ。何年経とうと忘れられるものか」
「……全く、お前は……」
レオンハルトが顔を手で押さえ、息を吐く。
すると、それを聞いていた他の面子が、
「そうそう。それでレオンハルト様は、ケッセルリンク様を拐かしたんですよね！　このペールちゃんと一緒に！」
「人聞きの悪い事を言うな、ペール！　拐かしてはないだろうが!?」
「……パパにそんな過去が……」
「駄目ですよ、白兎様。おじ様の悪い影響を受けては。おじ様は無自覚で女性への殺し文句を言う悪癖がありますから。さあ、あっちに避難しましょう」
「ぐっ……シャロンまで……」

昔話に乗っかってきたペールのせいで、レオンハルトがぐぬぬと表情を歪ませる。あまり見ない表情なだけに新鮮だが、ペールなどは更に続けて、
「いやぁ、懐かしいですねぇ！　あの頃はまだまだ右も左も分からない、初心でねんねなケッセルリンク様やペールちゃんを、レオンハルト様が優しく導いて……くんずほぐれつのあへあへな感じに……くふふ」
いやらしい笑みを浮かべて身体をくねくねさせるペール。それを半目でハンティが、
「いや……ほんと、何をどうしたらこうなるのか……最初見た時は内気な少女って感じだったのに……気づけばこんな頭がピンク色のアホな子に……」
「始祖様が気に病む必要はないかと。きっと、私の教育が悪かったのだろう……」
「辛辣ゥ!?　ちょっと始祖様だけならまだしも、ケッセルリンク様までその言い草は酷くないですか!?　というか、昔のペールちゃんの話は止めてくださいよう！」
「あんたが自分でしたんでしょうが……」
ハンティが肩を竦めて呆れ返る。周りを見て、
「どいつもこいつも、昔よりも変人になってさ……全く、常識を持ってるのはあたしだけだよね、ほんと」
「ぷ、ぷぷー！　女子力皆無で脳筋のカラーゴリラが何を言っちゃってるんです――うぎゃー!?　ちょ、ちょっとぉ!?　いきなり暴力は止めてくださいよう！　暴力反対！　ゴリラ反対！」
ハンティをからかってボコられるペール。最近ではよく見られる光景なので最早誰も気に留めない。そんな中、キャロルが、
「皆さんの変わりようは凄いですが……特に、わたくしの完璧さは昔よりも格段に進化！　してますわ……！　ふぅ、時の流れとは怖いものですわね……！」
「いや、お前が一番変わってないけどな……」
「ですの!?」

レオンハルトのツッコミでキャロルが衝撃を受ける。
そんなこんなで昔の話に花を咲かせていると、今度は、
「――おーい。来てやったぜ――って、人が多いなぁ……」
「！　ガルティアか」
「おう、レオンハルトにケッセルリンク。話聞いて様子を見に来たぜ。ガキが出来るんだってな？」
扉を開いてやってきたのは、二人の友人である魔人ガルティアだ。
彼は相変わらず、両手に肉などのいつでも食べれる食料を持っている。一日の殆どを食事に費やす彼らしく、急いで駆けつけてくれながらも、食事の手は休めていない。
「ガルティア……態々ありがとう。とはいえ、先程も言ったがまだ妊娠が発覚したばかりで、そこまで気にかける必要は――」
「ん？　ああ、言われてみりゃあそうかもな。だがまあ、挨拶くらいはしねぇとよ。ましてやダチ同士のガキだしな」
と、軽い調子だが、気にかけてきてくれたのだろうとその気持ちを汲み取る。そのままガルティアは椅子にどかっと座り、再び食事をしながら器用に話に参加する。
昔話ともなればかなりの数の事を知っているガルティアに目を光らせつつも、再びケッセルリンクに向き直ったレオンハルトは溜息をつき、
「……ま、俺だけじゃない。色んな奴らが助けてくれる。だから今は大人しく看病されとけ。――なんなら昔とは逆で、俺が食事とか作って食べさせてやろうか？」
「！　ふふ……ああ、それもいいな」
レオンハルトからも懐かしい話を出され、自然と笑みを零してしまうケッセルリンク。
そうやって賑やかさを楽しみつつも、ケッセルリンクはお腹にそっと手を這わせ、
……ああ、大丈夫だ。
生まれてくる子に伝えるように撫で付ける。生まれてきても、きっと愛されるし、誰かが助けてくれる。普通の子とは違うかもしれない

が、きっと幸せになれる。
そう確信し、ケッセルリンクは母となる覚悟と、子を育てる覚悟を今改めて決めた。

――それから少し後。
「……待たせたな」
「……いいえ、構いませんが……むしろ、日を改めてもこちらは……」
「……ふっ、魔人同士の身内事情を気にするか……だが、そこまで気にする必要はない。俺達の事情と、お前の問題は全く別のものだ。俺もここからは切り替えていく」
と、言葉が交わされる場所は、ケッセルリンクの城の一室。
そこを借りた魔人レオンハルトと、聖刀日光はお互いに椅子に腰掛けることもなく、立ったままで話を始めた。
「まずは謝らせてほしい。俺の娘が迷惑を掛けた――すまない」
「……っ」
話が始まった途端、迷惑を掛けたことを謝罪してくる魔人の姿に、日光は予想していたとはいえ目を細ませて驚く。その上で表情を持ち直し、
「……いえ、それほど迷惑を掛けられた訳ではないので構いません」
「……そうか。そう言ってくれるなら助かる、が……申し訳ないが、お前を直ぐに解放することは出来ない」
と、謝罪をした後だというのに、一番気にしていた問題を否定されて日光は息を詰める。
だが、これも予想していたことであるため、動揺は少なく、むしろ相手からすれば当然だと言うように息を吐き、
「……私が、そちらの秘密を握ってしまったからですか？」
「ああ。重ね重ね申し訳ないが、こちらの不手際とはいえ、俺の娘や、新たに生まれてくる子供の事を知ったお前を、このまま外に出す訳にはいかない」
分かるだろう？　と意味を問いかけてくるが、確かに理解出来る。

魔人の子という劇薬。人間はおろか、おそらくは他の魔人や、魔王ですら知らないかもしれないことを口外すれば、どのような事が起きるか予想出来ない。
最強の魔人の子ということもあり、きっとレオンハルトには恨みを持つ者も多いかもしれない。故に狙われて危険な目に遭うことは避けたいのだろう。自分とて、魔人には恨みがある。
だが、
「……決して口外しないと誓っても？」
「それを信用したいのは山々だが、信用するにはまだ判断する時間が足りないな」
やはり、と思う。出会ったばかり。ましてや百年程前は敵として出会い、再び再会しただけの間柄ともなれば、信用が置ける筈もない。日光も、レオンハルトを信用出来るか、という点でまだ疑問符が付くのは避けられないからだ。
しかし、日光からすると、迷う程度には判断材料があるのも事実であり、
「……分かりました。拘束を受け入れましょう」
「……理解してくれて助かる。決して不自由はさせないと約束しよう」
レオンハルトがほっとしたような息をつき、日光の待遇を悪いものにしないと口約束を結ぼうとする。
だがその前に、日光は口を挟んだ。
「――ですが」
と、前置きするように間を置いて、
「私にも、そちらを判断するための時間とそのための場が欲しい。拘束する場所は、貴方が住む街――いえ、城でお願いします」
「……受け入れよう。元よりそうするつもりではあったがな」
レオンハルトが頷く。こうやって話をしている分には、人間と変わらない。こういう部分も日光としては、どうにも悪感情が抱きにくい原因であり、複雑な気持ちになる。
だがあくまでも冷静に日光は声を作る。目の前の不可解な魔人に

対して、
「貴方には聞きたいことが山程あります。私達に黄金像を譲った件に始まり、あの街で人間を匿う理由……裏事情を聞いてしまった今では、どうしてそこまでするのかが分かりませんし……今思えば、黄金像を渡したことも、その使い道までもを知っていたのか……あの時の〝真実〟という言葉も、貴方は一体どこまで知って――」
「――少し落ち着け」
「っ……」
段々と熱を帯びてくるこちらの言葉に、冷水を浴びせるような効果を齎したその声。日光は我に返りつつも魔人の圧に若干怯んでしまう。
その様子に、レオンハルトは圧を解きながらもゆっくりと口を開き、
「……確かに俺は、お前が想像するように様々な事を知っている。黄金像の使い方……魔人や魔王の存在理由……世界の真実……」
しかしだ、と魔人は言葉を置いて続けた。
「それらを答えることも出来るが、その先に待つのは――深い絶望だ。真実は直視し難いほどに残酷で、並の精神力では耐えられはしない……また、それを知ったところでお前に出来ることは何もない。お前の仲間……ホ・ラガも、きっと同じ様な事を言うだろう」
「っ！　彼が何処に居るか知っているのですか……!?」
ホ・ラガ。かつて日光と共に魔人を倒すためにパーティを組み、旅をした仲間の魔法使い。彼の名を出され、日光が再び声に熱を灯す。しかし、
「ああ……奴は今、この世の全ての知識を得たことで絶望し、既に世捨て人となっている」
「そんな……彼は、ブリティシュに惹かれて同行したとはいえ、その意志は本物だったはず――」
「真実が、それほどの事だったというだけだ。世界をどうにかするために集まった真の英雄であっても、その真実の前には容易く膝を折る。知らない方が幸せな事もある……ホ・ラガは気の毒だったな。真

実を知る身として、素直にそう思う」
「……そこまでの……」
日光は戦慄する。気づけば額から嫌な汗が滲み出ていた。
レオンハルトが口にする〝真実〟。概要すら口にしてないその言葉には、とてつもない悪意が潜んでいるような気がしてならないのだ。
聞くことも憚られるような禁忌。それを聞くことが出来る分岐点の前に立っただけで、日光は嫌な予感を感じ取れてしまう。
だがそこで、ふと疑問に思ったことがある。それは、
「……貴方は、その真実とやらを知りながらも、普通であるように思えますが……」
圧倒的な存在感を放ちつつも、眼の前の魔人には世捨て人のような何かを諦めたような雰囲気も何もない。狂ってすらいない、極めて正常な精神状態に見えた。
だがそれを口にすると、レオンハルトは僅かに笑みを浮かべ、
「俺が普通か……まあそれについては、単純に情報の差でしかないな」
「……情報の差？　しかし、ホ・ラガは全知を――」
「全知とやらも、完全じゃないってことだ。奴が持つ情報と俺が持つ情報は違う。俺は全知じゃない。世界の細かい何もかもまでを知っている訳ではないが、決定的な、全知の奴らが知らない情報を持っている」
矛盾しているような話だがな、と彼は言う。日光はその引き込まれるような話を聞いて、その語り口からあることを思う。それは、
「……その言い方だと、まるで貴方も、世界をどうにかしようと目的を持っているように聞こえますが……？」
「……借り物の目的だがな」
「借り物？」
「……大した事じゃない。今の言葉は忘れてくれ」
小声で呟かれたその言葉が聞こえてしまい問い返すも、レオンハルトは直ぐにそれを忘れろと口にする。その上で話をまとめるようにレオンハルトは言った。

「お前が俺を信用するもしないも自由だ。だが、どちらにせよ拘束と監視は行わせてもらう。俺にも守るべき者があるんでな。だが――」
と、そこでレオンハルトは日光を真正面から見た。
それは今までとは違う雰囲気のもので、
「もしお前が俺を信用すれば、俺もお前を信用し、お前に様々な事を教え――その上で、ある計画への参加を要請したい」
「……計画、ですか。生憎と、私は人を苦しめるような企みには断じて――」
「――いいや、違う。むしろ救う方だ」
「……？　それはどういう……」
日光が問うと、レオンハルトは近くの窓から外を見てから言った。
「お前は復讐を望んでいるが……それよりも人が救われることを望んでいる。ならばお前は、必ず俺に協力出来る」
何故なら、と、
「その計画は――この暗黒時代を、終わらせるものだからだ」
「……！」
魔人のその言葉は、日光の胸を激しく打つものだった。

「――そういえば、男の子ですの？　それともやはり女の子が生まれますの？」
「カラー的には女性が生まれる筈ですよう」
「でも、魔人だからどうなるか……」
城に帰ったレオンハルトの使徒達が子供の性別について話をしている中、レオンハルトは謁見の間である人物を迎えていた。
「――それで、何の用だ？　進展でもあったか？」
「いいえ、かのお方については滞りなく進んでおりますれば……」
腰を折ったのは長い白髪に赤い目の魔女帽子を被った美少女。レオンハルトと協力している未来視の魔女、〝C〟だった。
だがレオンハルトはそれを聞くと、表情をしかめ、
「……なら失せろ。何の用事もないのに訪ねてこられても困る。今は

忙しくて、お前の与太話に付き合ってる暇もない」
「おやおや、酷いですな……しかしそういうことならまあ、では一つお土産を置いていきましょう」
「……お土産だと？」
はい、と未来視の魔女は言う。ニヤニヤと笑みを浮かべつつ、
「次に生まれてくる閣下のお子は――――男の子でありますよ」
「――――えっ」
「ではでは。私はこれにて」
と、それだけ言って未来視の魔女はその場から消えるように去っていく。
後に残されたレオンハルトはしばらく、子供の性別を教えられたことや、まさかの男の子であることに衝撃を受け、しばらく呆然としていた。

才能の覚醒

――その少年が住み着いて、数年の月日が経った。
「すぅー……ふーっ……」
家の中で床に座り、魔力を練る訓練を慣れた様子で行っている少年がいる。
歳の頃は15を越えた頃だろうか、既に子供ではなく、男としての顔つきとなったその少年は、毎朝の日課を終えると、背後から声が掛けられる。
「おはよう、ガイ」
「！　おはようございます、ミストラルさん」
と、その少年――ガイに声を掛けてきたのは、カラーの女性、ミストラルだ。
彼女は数年前からガイを家の中で飼い、気まぐれから魔法の師をやっていたりするそれなりに凄腕の魔法使いであり、カラーの女王の側近も務めている。
少し面倒くさがりな部分もあるが、身寄りのないガイにとっては恩人であり、もう殆ど家族同然の様に思っていた。
「直ぐに朝ご飯を作るので待っていてください」
「ん、ありがと」
ミストラルの方も、極自然にガイと接する。数年も経てば彼女の方も慣れたものであり、ガイが家の中を漁っていたとしても気にも留めない。朝飯の用意をするガイから視線を切り、読みかけの本を開きながら食事が出来上がるのを待つ。
そんなガイの後ろ姿に、ミストラルはいつもの様に声を掛けた。
「今日は遅くなるから、昼も夜も先に食べて構わないわ」
「分かりました。なら、掃除も洗濯も勝手にやっておきますね」
「お願い。後、分かってるとは思うけど――」
「洗濯物を干す際は、家の裏側に。そしてバレないように」
「……分かってるならいいわ」
何度も言いつけた事であるためか、先んじて言われ、ミストラルは

問題無さそうだと話を終える。いつもならまた別の話を続けるか、本を読むことに集中するかするのだが、日常であるため、それは時々によって違う。
だが今日はそのどちらでもなく、ふと思ったことがあった。それは、
……あの連中、随分前から来なくなったわね……。
本当にふと、気まぐれにそれを思う。別にそこまで気にしてる訳ではないし、来なくなってミストラルとしてはせいせいするのだが、ちょっと前まではガイが寂しそうだったのが頂けない。
何でもあの白兎という少女と友達になったらしいが、それから何があったのか、家を訪ねてくることは殆どなくなった。今でもたまに手紙などは来るが、それもここ最近は無くなっている。あの化け物連中と一緒にいるため、問題ないとは思うのだが、
……ここ最近は人間の襲撃も増えてきているし……まさかやられたとか？
と、何となく思ってみるも、あの面子的にそれはないな、とその考えをかき消す。単純に、何か事情があると考えた方が良い。
そんなことに思考を割いていると、
「――出来ました」
「っと……それなら頂きましょうか」
朝ご飯が完成し、ガイが皿を運んでテーブルに並べてくれる。取り留めのない考え事の時間はここまでだ。朝ご飯を食べて、時折ガイと会話をしつつも、頭の中は仕事の事を考える。先程も少し思考したが、
……最近は警備のしがいがある日も続いているし、気を引き締めるべきね。
と、今日の仕事について考える。里を守る責任者とも言えるミストラルには、この里に住む大勢のカラーの命が懸かっている。
それに、ここに住むガイの命もだ。それを思うと手は抜けないと思い、
……いつの間にか、自然とガイのことも考えているわね……。

ガイの事についても家族に近い感覚で考えてしまっている自分に苦笑し、ガイに首を傾げられるも、何でもない、と言って彼女は仕事へ向かう準備を進めた。

野良で生きる人間には、幾つかの種類がある。

一つは、隠れ里などに住む普通の人々。

彼らは野良で生きながらも、生存率は決して高くない。というのも、大規模な隠れ里や、警備の戦士が常駐していないような場所は、人狩りの格好の餌食となる上、食い扶持を稼ぐのも中々に厳しいものがあるからだ。

畑を持たないものでは、毎日の食事を得るだけでも命懸け。摂れなければ餓死だが、そうでなくても人狩りによって殺されるし、人間相手にも弱いので、生き残るだけでも至難だ。

それよりも、多少は良い生活を送れるのは、冒険者や魔物討伐隊といった戦う力を持った人々だ。

戦う力がある、というのはこの世界において何よりも重要だと言っても過言ではない。身を守り、他者を傷つけ、何かを得ることが出来る。

冒険者はダンジョンに潜り、貴重なアイテムや食料、資源などを得ることが出来るし、魔物討伐隊も同様だ。大きな隠れ里を拠点にし、警備の任務を請け負うこともあるし、その報酬で生活することも出来る。外を闊歩する魔軍から物資を奪うことだって不可能じゃない。あまり大きな事を起こせば、更に大きな軍が派遣されてくることがあるが、逆に言えばやりすぎなければ問題ないのだ。

だが、そういう冒険者や魔物討伐隊といった者達は、戦う力を持った者達の中でも勝ち組である。

中には、戦う力が少し弱かったり、もしくは元々そういう性根であったり、奪うことに味をしめた連中もいる。

良い人間もいれば、悪い人間もいるのが道理。そんな彼らが、冒険者や魔物討伐隊くずれの盗賊だ。

しかし、だからといって弱い訳ではない。並の人間に比べれば彼らとて、魔物と同じ様に思えるだろう。
実際、この時代で戦って生き残ることの出来る人物というのは、それなりにレベルの高い連中であり、魔物との一対一であれば勝ってしまうこともあるし、生き残る術に長けて、汚い手も平気で使う彼らを蹴散らすのは、それこそ相当に実力の差が無ければ難しいだろう。
「へへへ、おら行くぞ野郎ども！」
「おお！」
「カラーをとっ捕まえろ！」
――そして、カラーであってもそれは同じことだった。
「報告！　東側、南側から人間が攻めて来ています！」
「くっ……性懲りもなくまた……！　遊撃隊に指示を送れ！　何とか防衛ライン手前で食い止めるぞ！」
「私達も出るぞ！　弓の準備が出来た者から私に続け！」
「はい！」
「下手すれば、女王様に助けてもらう必要があるかもね……」
見張り台に立つカラーの里防衛隊のカラーや、哨戒を行っていたカラー達の報告の声が連続し、それを指揮するカラーの声も連続して響く。
それはここ数日でよく見られる光景であった。
カラーを襲う人間。それは何百年前から続く事であり、かつては立場が逆転したこともあったが、おおよそ全ての時代において、カラーとは人間に虐げられる存在である。
カラーの額にあるクリスタルは魔力が凝縮された結晶体であり、強力なマジックアイテムの媒体などの魔法に関連する物であれば様々な用途が望める〝資源〟であり、それは人間が地獄を見るこの時代でも変わらない。
盗賊の目的はそのクリスタル。それと、カラーそのものだ。
そもそも冒険者くずれの盗賊達は、人間を捕まえては奴隷にして売り飛ばすことで日々の糧を稼ぐこともある。それを仲介する商会もあれば、買い手も少なくない。

見目麗しいカラーともなれば、高い金を出して買う者も多い。単純に需要があるし、最悪、飽きてもクリスタルを抜けば資源にも金にもなるという都合の良い種族だ。
そのクリスタルなどの用途が知られてからというもの、カラーは人間との交流を完全に絶ち、また規模の狭い森の奥の集落に隠れ潜むようにして暮らすようになった。幸いにも支援者がいたおかげで残った集落はそれなりに繁栄しているが、時折、彼らの目を盗むようにして人間が襲撃を掛けてくることは避けられない。
カラーの里、ペンシルカウには戦士の数もそれほど多くはないため、幾ら魔法力が高く、弓に長けているとはいえ、日頃から魔物が闊歩する外で生きている人間にとって、それは魔物ほどの脅威に映らず、恐怖にも値しない。
強いて言うならカラーの女王だけが扱う呪いなどが恐れられているが、それも突発的な奇襲の連続には使いにくいものだ。
「――貴方達は東側に向かって。南側は私が行くわ」
「了解です！　ミストラル隊長！」
故に普段からの防衛力が物を言う。女王の呪いも、支援者による協力も、普段から当てにしてはならないものだ。
――とはいえ、こうも襲撃が続くと、さすがにキツいわね……。
防衛隊の隊長を務めるミストラルは、内心だけでそう思う。部下の何名かもそういった不安は抱いているだろう。
士気に関わってくるため、そういった弱音を口にすることはないが、懸念は共有している。何とか、女王か支援者の到着を待って、反撃に出たいところだが、
「とりあえず、今は何とか耐えるしかないわね……」
誰かに聞こえないように小声でそう呟いて、ミストラルは盗賊を倒すために戦場へと向かった。

――だがその頃。西の森の茂みの中では、
「……よし、そろそろいいか」

「本隊が東や南に引き付けられてる内に、手薄になった西から襲撃を掛けるぞ」
「へい……！」
それは戦いが始まってからこっそりと西側で息を潜めて隠れていた盗賊の一部隊であった。
数はそれほど多くはないが、彼らは手薄になった場所を突破し、そのまま中で暴れて混乱を起こす手筈となっている。
上手く行けば東や南も突破することが出来るだろうし、少し暴れてカラーを攫えば、それはそれで収穫になる。例え追い返されたとしても何かしらの収穫がなければ今の世で生き延びていくことは出来ない。
故に生きるためには、あらゆる手を尽くすのだ。同じ人間に手を出すことにも罪悪感など湧かないし、ましてやカラーともなればただの美味しい餌のようなものだ。躊躇う理由はない。
「行くぞ……！」
「おお……！」
そして盗賊達は息を潜めつつも一気に駆け抜け、西側から里に襲撃を掛けた。

――あとどれくらい、この日々が続くのだろうか？
平和な日々を過ごす少年、ガイにとって、その問いかけは毎日の様に脳裏に過ってしまう問答だった。
かつて地獄を見たガイだからこそ、平和であってもそのことを考えてしまう。
弱き者はただ食い物にされるだけの世界。それを恐れるが故に、弱さから脱却しようと強さを求めてもいる。
実際、数年前と比べれば、魔法もそれなりに使えるようになったし、剣はまだまだぎこちないが、多少は強くなっただろうことは確かだ。
しかしそれらを続けてなお、自分の中にある弱さへの懸念や、今の様な平和な生活を続けられるという自信は湧いてこない。

いつまでもここで暮らすことは出来ない。薄々と、ガイが感じていることだった。
いつかはここを出ていく日がやってくるだろう。それがいつになるかはまだ分からないが、自分が人間で、ここにいるのがカラーである以上は、留まり続けることは難しい。
だからガイは自分一人で生きていける力を得ようとしている。それが出来ているかはまだ怪しいが。
……僕は、これからどうやって生きていくんだろうか……。
ガイは唯一人、家主のいない家の中で自分に問いかける。
少し前までは時折話しかけてきていた右側の声も、最近は落ち着いており、全く聞こえない。消えてしまったのだろうかと疑うほどだ。
しかしそうではないことは、自分が誰よりも知っている。自分の中に、自分とは別の自分がいる感覚が確かにあるからだ。それを人に伝えることは難しいし、出来たとしても怖くて明かしたくはないが、それでもその――〝いる感覚〟というのは確かなものだ。
だが、問いかけたところで答えは返ってこない。自分の考えが正しいのかどうかの答えを得たいと無意識に思ってしまったことだが、声が聞こえずに煩わしくない反面、いるのに返事を返してこないのは、居留守を使われているようで不愉快でもある。
あるいは、最近は訪ねてこなくなった友人がいれば、少しは相談出来たのかもしれない。勇気がいることではあるが、他の者に比べれば話しやすいのも確かだ。
「僕は……本当に、ここにいてもいいんだろうか……？」
ここにいれば、また以前と同じ様に、周りの人が傷つき、亡くなってしまう。
そんな不安に満ちた想像を、トラウマを、ガイは未だに払拭出来ていないのだった。
だからこそ、一人でいることを考えてしまう。
一人ではいたくないが、そうした方がいいのではないかと。
そしてだからこそ、もしもの為に、一人で生きることの出来るように力をつける。

仮にそうせずに済んだとしても、その力で、同じ様な悲劇を起こさないようにするために。
だからガイは――
「……ん……なんだろう……？」
その時だ。
不意に、外から騒々しい音が響き、ガイは思考を中断させた。
何やら声も聞こえる。それも、何やら切羽詰まったような声だ。
「っ……何が……？」
その音に、外から伝わってくる空気に、ガイは覚えがあった。
嫌な予感がする。汗が滲む。息が乱れる。それは、何かが消える時に感じる――修羅場の予感だ。
「はぁ……はぁ……」
息を乱しながらも、ガイは確認をしようと震える身体を抑えながら、窓へと近づく。
するとそこから見えたのは、
「――きゃあああああ!!」
「っ……！」
近づくと、外の声や音もはっきりと聞き取れた。
と、同時にガイは外の様子が普段と違うことをはっきりと確信する。今のカラーの里は、日常のものではない。
「に、人間が入ってきたわ！　戦えない者は逃げて！」
「何でこんなところに……!?」
「す、直ぐに兵士を呼ばないと――きゃあっ!?」
集落の外れの方だけに、カラーの数は少ないが、それでも外はパニックになっている。
そんな中で、冷静に対処しようとしたカラーの一人が、何かを受けて地面に倒れた。
ガイはそれがおそらく、魔法のものであることに気づき、それが飛んできた方向に自然と目を向けた。するとそこには、
「逃がさねぇよ！　兵士もまだ呼ばせねぇ！」
「へへへ、まずは一匹ゲットだ」

「ひ、ひぃっ……!?」
そこにいたのは、ニヤつくような下卑た表情を浮かべた人間の男達だ。
誰も彼もが剣や槍などの得物を手にしており、中には赤い血が滴っているものすらある。
魔法を放ったのは、その中の一人だった。明らかに盗賊といった風貌の彼らは、負傷したカラーに近づいていく。
「どうします、隊長？」
「まだ村の外れか……へへへ、ちょっとくらい味見でもしていくか？」
「さっすが隊長！　分かってますねぇ！」
それは、明らかにそういった事を目的としている会話だった。
カラーを狙って襲撃を掛けた盗賊団。彼らの正体は明らかにそれだ。
捕まったカラーがどうなるかなんてことは、火を見るより明らか。それを理解してしまっているのか、カラーも顔を青褪めさせる。
「い、嫌ぁ!!　助けて!!」
「騒ぐんじゃねぇよ！」
「まぁ、ヤるならちょっとくらい反応があったほうが愉しいけどな」
「ちげぇねぇ！　がははは！」
それは、強い者が弱い者を虐げる光景。
かつてガイも体験し、目撃した光景と同じものだ。
それを見てしまった時、ガイの心臓は激しく脈打った。
「うっ……あ、あぁ……あぁっ……！」
激しい痛みを感じ、膝を床に突き、胸を押さえて苦悶の表情を浮かべる。
それだけではない。激しい頭痛を感じてガイは立っていられなくなってしまっていた。
……嫌だ……嫌だ……！　こんなのはもう、嫌だ……！
朦朧する意識の中で思うのは、トラウマ。
蘇った光景と、同じ事が起きようとしている現実の否定。
こんなものは見たくない。起きてほしくない。周りの人が死ぬの

は嫌だ。
激しい思いが痛いほどに胸を締め付け、ガイの呼吸を激しくする。
――なら、どうするかは理解ってるだろう……？
「……っ……!!」
そんな時だ。
その声は、弱りきったガイの心の隙間を潜り抜けるようにして、意識の中に入り込んできた。
――俺にやらせろ……！　あんな奴ら、俺の敵じゃない……！
「っ……ふざけるな……！　そんなことは……僕は……！」
――なら、このまま奪われ続けるだけか？　弱いままでいるのか？
指を咥えて見てるか？
「……！　そ、れは……っ」
悪意を持つもう一つの自分の声が頭の中に響き、意識を侵食していく。
弱者のままでいるのか。これを放置するのかと、もう一人の自分は問いかけ、そしてもう一人の自分を否定する。
――弱いお前はいらない……！　すっこんでろ……！
「い……や……やめ――――」
意識が闇に埋め尽くされるのを感じる。
それは後から生まれたが、確かにもう一人の自分。つまらないことを気にして弱者であり続ける自分を否定し、混沌に満ちた世界に適応するために生まれたもう一つの人格。
彼はようやく、この世に顕現する。
――ふはは……安心しろ……俺がやってやる……！　お前よりも、俺の方が俺の身体を上手く使える……！
――っ……ぁ……。
表のガイが抱えるトラウマ。そのショックで意識を失うのと同時に、彼の身体はもう一人の人格に入れ替わった。
――それは盗賊達が今まさに、捕らえたカラーに暴行を加えようと

していた時だった。
「……あ？　ねぇ、隊長……あれ……？」
「んあ？　何だ？　兵士でも来やがったか――って……」
一人の盗賊がそれに気づき、部隊を率いていた隊長や他の者達も同じ方向を見て気づく。
「……」
「……人間のガキか？」
それは、右側だけ長い前髪で目元を隠している一人の少年だった。
集落の外れに立つ一軒家から出てきたところであり、身なりはそれなりに整い、その右手には剣が握られている。
カラーの里に人間。それも子供。
剣を持っていることよりもそのことを不思議に思いつつも、盗賊達は子供が近づいてきたことを無警戒に眺める。
「おいおい、なんだてめぇ？　迷子か？」
「おい止まれよ。ここはガキの来るところじゃねぇぞ？」
「そうそう。俺達はこれから大人の時間を過ごすんだからな！」
「ガキは家に帰ってママのおっぱいでも吸ってろよ！　ぎゃはははは！」
「さもないと、怪我しちゃうぜ～？」
「……」
盗賊達が武器を片手に軽く脅しを掛ける。
しかしそれを聞いても少年は浅く下を向きながらも止まらない。そのことに訝しんでいる隊長。
そんな中、苛ついた盗賊がとうとう声を上げ、
「おい、てめぇ！　なんのつもりだ!?」
「――ああ、なるほどな」
しかし不意に、隊長が納得したように頷き、笑みを浮かべる。それを聞いた傍らの盗賊が、
「なるほどな……って、兄貴？　何か分かったんですかい？」
「カラーってのは人間がいねぇとガキを産めねぇ。だからどっかから人間を捕まえて、奴隷にしてんじゃねぇかって話を噂で聞いたことが

ある」
「……ということは……あのガキはここの奴隷？」
「そんなところだろうよ。奴隷になった奴の末路なんて知れてるし、お前らもよく分かってるだろ？　見たところ傷は少ねぇが、拷問を受けて頭がイカレちまったか……全くビビってねぇのは、もう恐怖を感じる心もねぇのさ」
　くくく、と可笑しそうに笑う盗賊の隊長を見て、他の盗賊も納得し、笑みを浮かべる。
「そんならやっちまいますかい？」
「ああ。可哀想に。同じ人間として心が痛むねぇ。このまま生き地獄を味わわせるのもなんだ。お前ら、介錯してやれ」
「了解です、兄貴！」
　そんなことは露とも思ってない表情で盗賊達が子供を眺める。三名の盗賊が集団の輪から外れて子供に近づいていき、他の者達は下卑た笑みで見据える。これから始まる凄惨な処刑ショーを期待しているのだ。
　近づいた盗賊達も、自分達の役割は分かっている。子供に近づき、軽く武器を見せびらかせながら、
「へへへ……おいガキ。これから親切なお兄さん達が、お前をあの世に送って――」
「――うるせぇ。死ね」
「へ――？」
　瞬間。起こった事に対して、直ぐ様理解出来た者は、当事者も含めて誰もいなかった。
　一人の盗賊が子供の肩に触れようとした時――その盗賊の頭部は、あっけなく宙に飛んだ。
　そしてその首が地面に落ちる前に、他の二人も首を断ち切られ、あっけなくその命を終える。
　誰も彼もが間抜け面で、自分が殺されたなどとは夢にも思わない表情で死んでいった。
　そして、それを見ていた盗賊達も、眼の前で起きたことに呆然と立

ち尽くす中、ただ一人、少年は人を斬った感触に右目を輝かせて笑みを浮かべた。
「……ふ、ははは！　さすがは俺様だ。こんな汚い親父なんて敵じゃねぇ……！」
その嬉しそうな声に、ようやく盗賊達は我に返った。
「て、てめぇ!?　ガキ！　自分が何やったか分かってんのか!?」
「チッ……馬鹿共が、油断しやがって……おいお前ら、そのガキを殺せ！　ガキだろうと俺達の邪魔をする奴は生かしておかねぇ！」
「おお！　言われずともぶっ殺してやるぜ！」
と、盗賊達は怒りの声をあげ、その場の隊長の命令を受けて少年に向かっていく。
「ガキがよぉ！　粋がってんじゃねぇぞ馬鹿が!!」
「うるせぇ雑魚。弱い癖に粋がるお前らの方が馬鹿だろうが」
「なんだと――」
あっさりと、言い返しながらも盗賊の一人を斬り捨てた少年は、口元にニヤついた笑みを浮かべっぱなしのまま剣を振るう。それを見て他の盗賊が、
「っ……！　こ、このガキ……！　またやりやがった……！」
「ただのガキじゃねぇ……!?　なんだこいつは!?」
ようやく、子供の強さが普通ではないことに気づく盗賊達。
しかし少年はもう、止まることはなかった。
「あぁ……これだこれ……！　この身体を動かして好き勝手振る舞い、弱者を踏み潰すこの感覚……これが最高なんだ……！　これが、俺が真に求めていた強さで……強者の生き方そのものだ……！」
彼は、初めて身体を動かす感覚と、初めて剣を振って人を斬り殺す感覚を同時に感じて高揚する。
今まで抑えつけられていた負の感情。発散出来なかった黒い意志が強く奔出し、盗賊達に狙いを定める。
その子供とは思えない殺気を感じて、盗賊達も冷や汗を流す。しかし数の利は未だこちらにあることから、彼らは歯を食いしばり、
「こ、の……舐めてんじゃねぇぞ!!　てめぇら！　やっちまえ！」

「う、おおおお!!」
盗賊達が、今度は隊長も含めて全員で子供に襲いかかる。
しかし少年の笑みは絶えることはない。
「ふはははは！　幾らでも掛かってこい！　全員ぶっ殺してわんわんの餌にしてやらぁ――!!」
剣を構え、盗賊達を相手する。
そこからは少年が行う――盗賊達の処刑ショーだった。
今まで練習では出すことは出来なかった、彼の剣の冴えは、完全に盗賊達を凌駕しており、複数人に囲まれても負けることはない。
剣の才能の覚醒。持つ者と持たざる者の、残酷な差がこの光景には表れていた。
「な、何……あの子……？」
それを見ていたカラーは、初めて見るその少年に助けられながらも、その光景に畏怖を覚えてしまう。
ただの子供が、剣一本で盗賊達を相手に大立ち回りを演じ、次々と盗賊達を屠っていく光景は、それだけ衝撃的なものだった。
「く、くそっ!?　なんなんだお前はよぉ――!?」
「俺は俺だッ！　俺はガイ！　俺こそがガイだッ!!」
その名を自ら口にし、とうとうガイは盗賊の隊長すらその剣で突き殺し、その場を完全に制圧する。
村の西から侵入した盗賊二十数名の死体が地面に散らばり、その中心でガイは己の勝利に笑い声を上げた。
「――はははははははッ！　どうだッ!!　見たかッ!?　俺が最強だ!!　俺こそが強者だ――」
と、その内気そうな見た目にそぐわない自信に満ち溢れた表情と高笑いを上げた直後。
不意にガイの声は止まり、そのまま胸を押さえてしまう。それを見ていたカラーなどは、どこか怪我をしたのかと心配するが、
「だ、大丈夫!?」
「ぐっ……く、くそ……お前……！　まだ暴れるか……ッ！　やめろ……まだ、俺にはやりたいことが――」

ガイは、立ち上がり近寄ってきたカラーではなく、何処かに声を向けると、憎々しげな表情を最後に浮かべて、そのまま気絶してしまった。

「ど、どうしよう……！　一応、助けてくれたんだし、助けないと……！」

そして気絶したガイはその場にいたカラーに抱えられ、そのまま里の中へと運ばれていった。

旅立ちの日

ガイは混濁する意識の中、自分を取り戻してゆっくりと意識を覚醒させた。

「っ……ここ、は……？」

普段暮らしているミストラルの家とは違う空気だ。そもそも、天井の景色も違うし、背面から感じる柔らかいベッドの感触も初めてのもの。

故に自分は今どうなっているのかと独り言を発した時だ。少し離れた場所から、

「！　目覚めました！」

「ほんと!?　それじゃあ早く女王様達に報告しなきゃ！」

ドタバタと部屋から何名かが出ていく音。慌てる女性の声。

それらを聞いたガイはようやく自分の置かれている状況を僅かながら理解した。

……僕は……里を襲った人間を見て、それで――。

盗賊らしき人間の集団。彼らがカラーを襲おうとしているのを見て、ガイは思わず飛び出していってしまったのだ。

そして、鍛錬で使っていた剣を用い、いつもとは違う鮮やかな剣さばきで盗賊達を圧倒し、そして斬り殺した。

しかしそれは、

……あれは……僕じゃない……！

そう。あれは自分ではない。自分の中に潜む、邪悪な何かの仕業なのだ。

しかし自分がやったことであることも事実だ。自分では認めたくないが、あれは自分の中の意識であり、自分の身体を使ったものであるのだから。

少なくとも、客観的に見れば、あれは自分がやったことだと誰もが言うだろう。

その証拠に、自分が身を起こすと同じ部屋にいたカラーの一人が、

「そ……その……身体は大丈夫？　あ、水でも飲む？」

「……あなたは……？」
「……憶えてない？　私、盗賊に襲われかけてて……それで、君が剣を持って助けてくれて……」
「……それは」
覚えている。
が、それを自分とはあまり認めたくはないため、視線を逸らし言葉を濁してしまった。
それを見て何を思ったのか、カラーは少し慌てた様子で頭を下げ、
「た、助けてくれてありがとねっ。君がいなかったら、私だけじゃなくて、他の子にも被害が及んだと思うから……」
「……そう、ですか……」
「あはは……あ、それと……目が覚めたら、女王様が連れてくるようにって命令されてるんだけど……歩ける？　それとも、もう少し休む？」
女王様。その言葉から思いつくのはただ一つ。カラーの里、ペンシルカウを治める女王のことだ。
おそらく、こうして見つかったこと。そして自分がしたことについての処分が決まるのだろうと、ガイは後ろ暗い気持ちからそう思った。
身体にはまだ僅かに倦怠感のようなものが残っているが、歩いている途中で回復するだろうと、ガイは判断する。故に首を横に振り、
「……いえ、大丈夫です。その、女王様の元に案内して貰えますか？」
「あ、うん。それなら付いてきて」
と、カラーが道案内をしてくれる。それに従い、ガイはその部屋を後にした。

カラーの女王が住む屋敷の中は、ガイが今まで見てきたどんな建物より広く大きかった。
聞けばここは、女王の居住場所というだけでなく、執務の際にも使ったりするため、それなりの広さを取られているのだと言う。

里の中では一番大きな建物であるらしい。とはいえ、お城などと比べたら全然小さいらしいが、ガイはそもそも城などを見たことがないためよく分からなかった。教えてくれたカラーも、実は聞いたことはあっても見たことはないらしい。

世界には、この屋敷よりも大きな建物があるのかと想像つかないものを感じていると、ようやくガイは女王のいる部屋に辿り着いた。

「……貴方が、ガイさんで間違いないですか？」

「！　は、はい。そうです……」

中には、女王らしき杖を持ったカラーの姿と、何名かのカラー達がいた。

その中には、ガイを飼っていたミストラルの姿もあり、女王の隣で複雑そうな表情を浮かべている。

それに気づきつつも、ガイは女王の言葉に頷くと、女王は真面目な顔で言葉を発した。

「この度は、人間の襲撃からカラーを救ってくださり、ありがとうございます。ガイさんがいなければ、少なくない数のカラーが犠牲となっていたでしょう」

女王は目を伏せ、頭を下げて感謝を述べる。同じ様に、側近であるミストラルなども頭を下げた。

それを見て、ガイは偉い人が頭を下げた事実に若干戸惑い、

「い、いえ、そんなことは……僕はただ……その……」

否定しようとし、しかし言葉が出ない。どう言えばいいのかが分からないのだ。

だがそれを見て、女王は微笑を浮かべる。口元に指を当て、

「ふふ、謙遜せずとも構いません。大勢の盗賊達の襲撃に対応を迫られ、手薄になった場所から侵入してきた盗賊達二十数名を、一本の剣で斬り捨ててみせたという報告があがってきています」

「で、ですから……その……」

「謙遜も過ぎれば嫌味になりますよ？」

「う……」

そう言われると、二の句が継げなくなってしまうガイ。謙遜してい

る訳ではないのだが、相手の言葉と笑みに呑まれてしまっているような形だ。
怯んでしまったガイの代わりに言葉を繋げるように、女王は続けた。
「事実として、ガイさんはカラーを助けてくれました。それが結果です」
それが全てなのだと女王は言う。だが、それに続けて意味深な笑みを浮かべると、
「……どのような経緯でここに居て、その場に居着いていたとしても、助けてくれたこととは別の問題ですからね。ねぇ、ミストラル？」
「っ……」
横目でミストラルに話を振ってみせる女王。ミストラルが詰まったのを見て、ガイも気づく。
やはり、自分がミストラルの家に厄介になっていたことはとっくにバレているのだと。
だが女王はそこでミストラルを責めるような言葉を一度だけ吐いたが、それを直ぐに消してこう言った。再び柔和な笑みで、
「しかし、そのおかげで命が救われたことも事実。今回の件、貴方への罪は問わないことにするわ、ミストラル隊長」
「……寛大なお言葉に感謝致します」
ガイがここにいる理由や、原因については追求しないという女王。それを聞いて、ガイは少しばかり安堵した。
このせいで今まで自分を住まわせてくれたミストラルに罰が与えられてしまうなど、恩を仇で返すようなものだ。
故にガイはほっと胸を撫で下ろした。しかし、
「――ですが、ガイさんにはここを出ていって貰わなければなりません」
「……やはり、そうなりますか」
「……」
女王の言葉に、やはり、という言葉を使うミストラル。
ガイも、その言葉に同意したいところだった。

薄々と、そうなることは分かっていたのだ。この屋敷の部屋で目覚めた時から。
いや、バレたら出ていかなければならないと言うこと自体は、ずっと前から分かっていたことであり、それほど驚きはない。
だが、寂寥感のようなものを感じるくらいだ。
そんな中、ミストラルは言い辛そうに、
「……しかし女王様。里を助けてくれた恩人に対して、ただ追い出すだけで済ませるというのは……その、あまりにも……」
「……うーん、それが掟なのだし、里に入り込んだことに目を瞑るだけでも優しいとは思うのだけど……まぁでも、一理あるわね」
と、女王は軽く考え込んだ末に、近くの者を呼びつけて何かを持ってくるように言った。
すると、直ぐにカラーがある袋を持ってくる。その速さから察するに、何気に予め用意していたのではと思うほどだ。
それを女王は手に取ると、ガイに向かって手渡す。
「これを差し上げますわ」
「……？　これは……？」
「その中に入っているのは、この里で作られた多くのマジックアイテム。それと、死んだカラーのクリスタルですね」
「えっ!?」
前者の物までは大人しく聞いていられたが、後者の、死んだカラーのクリスタルと聞いて、ぎょっとしてしまうガイ。
何故そんなものを、と分かりやすく頭に疑問符と驚きを浮かばせたガイに、女王は言った。説明するように、
「幾ら掟とはいえ、少年を着の身着のままで外に追放するのもあんまりです。聞けば魔法の腕もそれなりだとか。カラーのクリスタルは様々な魔法の媒体として使えますし、マジックアイテムも外で生きるには役に立つでしょう。外ではそれなりの値で取引されるとのことですし、売ればお金にもなります」
それを聞いて、ガイは一応納得する。
確かに、何もなしで外に行けば死にに行くようなものだが、これだ

けの装備があれば、外で生きるにしてもそれなりに保つ。
死んだカラーのクリスタルという部分には若干戸惑いが生じるものの、それに目を瞑れば有益であることには違いない。
そして、同じ様な結論に女王の隣にいるミストラルも至った様で、
「……確かに、それだけあれば旅をするにしても、何処かに定住するにしても大丈夫そうね……」
「ミストラルさん……」
呟く様なその言葉には、こちらの身を案ずるような響きが混じっており、ガイは思わず名を呼び、ミストラルを見た。
ミストラルの方も、目を合わせてくる。いつも通りのクールな表情だが、そこには何処か温かな色も混じっていた。
「……ま、いつかはこういう日が来るとは思っていたけどね……思ったよりは、長く楽しめたかしら」
「ミストラルさん……僕は……その……」
だがじっと見ていると、寂しさが湧いてくる。
何か言葉を発しようとしたが、上手い言葉が出てこない。
だからガイは俯いてしまった。しかし、
「……こら、何俯いてるのよ」
「っ……」
下から顔を向けて注意され、ガイは怯んでしまう。
そうだった。下を見ても、既にガイの身長はミストラルを超えてしまっている。
出会った当初であれば、俯いてしまえば表情を見られずに済んだというのに。
今はもう、それは出来ない。自分は、
「……ふふ、大きくなっても性格は中々変わらないわね」
と、ミストラルは懐かしむようにそう言う。
だが、そうだ。自分はもう、大きくなってしまった。
もうただの子供ではいられない。まだ大人ではなくとも、一人の少年。男として生きていかなければならない。
こうやって弱い部分を見せれば、直ぐにまた地獄に逆戻りだ。頼れ

る人はまたいなくなるのだから。
「……ガイ。貴方が何を抱えているかは知らないけど……」
そしてミストラルは、そんなガイの内心を見透かしたかのように言った。
「貴方の才能は、一級品よ。私に教えられることは全部教えたし、とっくに私なんか超えてる。それがどういう意味か、貴方には分かるかしら？」
「！」
ミストラルのその言葉は、いつも何かを教える時のような、試すような口調そのものだった。
それに答えられる時もあれば、答えられない時もある。今回は、
「……分からない」
首を横に振る。するとミストラルは口端に笑みを浮かべ、
「貴方はもう、昔の弱いままの貴方じゃないってことよ」
「――ぁ」
ガイはその言葉に顔を上げる。
それはかつて、ガイが欲し、目指したものだ。
「もう弱いだけの貴方じゃない。一人で生きることだって出来るし、誰かを守りたければそれが出来るだけの力もある。意志だって、昔と比べて随分と自己主張するようになったわ」
「……でも、僕は……まだ――」
言う。本当は、まだまだ教わりたいことがあると。
いや、そもそも――と言おうとして、
「――あと、その子供っぽい喋り方ももう止めなさい」
「えっ？」
突然の発言にガイは面食らう。
だがミストラルは毅然としてそれを注意した。
「そんなんじゃ舐められるわよ。言葉には力がある。弱々しい喋り方や振る舞いをしてると、周りからそれ相応の態度を取られる。それじゃあこの先も苦労するだろうから、この機会に改めなさい」
「……そんなの、どうすれば……？」

「まず、僕とかを止めなさいな。俺、とかでもいいでしょう？」
　言われ、ガイは考えることもなく嫌だと思ってしまう。特に、
「……〝俺〟って言うのは嫌だ」
「そうなの？　なら、〝私〟にしなさい。それで、何事にも動じないような毅然とした振る舞いを意識するの」
「……う、うん。なら――」
「うん、とかも駄目。そういう時は、〝ああ〟とか〝わかった〟って、一言だけ言えばいいわ。ちょっと素っ気ないような、クールな感じをイメージしなさい」
「……う――わかった」
「そう、それでいいわ。……後は、そうね――」
　ここを出ていく上でのアドバイスをしてくれるミストラルは、そうして、ガイの口調を改めさせ、後は何かないかと考えた末に、
「……ま、私の弟子なんだから、情けない真似なんか見せないで……元気でいてくれれば、それでいいわ」
「っ……」
　ガイはそれを聞いて、涙腺が緩んでいくのを感じた。
　だがそれは、強い毅然とした男としてはやってはいけないことだとガイは思う。
　故に必死に耐え、そしてミストラルも、
「……ほら、さっさと行きなさい。情けない顔が見られるわよ」
「っ……あ、ああ……！」
　ガイが後ろを向いて、その場から去っていく。
　自分の師からの最後の教えだ。それを守りたいと強く思う。
　だが、最後にこれだけは言っておきたいと、ガイは後ろを向いたままその想いを告げた。
「……ミストラルさん」
　と、自分を今まで世話してくれた恩人に向かって震える声で、
「今まで、お世話になりました……！」
「っ……」
　ミストラルが息を詰めた気配を感じる。しかし、

「ほ、ほら、分かったから早く行きなさい！　でないと酷いわよ！」
「っ……はい……！」
ガイが、ほぼ駆けるようにその場から立ち去っていく。
警備の兵が多少、一人で行くことに戸惑ったが、女王の目配せでそれは許可された。一人で外に出る最中に、狼藉など働かないだろうと信頼して、
「……全く、情けない顔が見られたくないのはどっちなのかしら……貴方でもそんな顔するのねぇ、ミストラル」
「っ、別に、私は……っ」
女王が初めて見る側近の表情に、軽く息をつく。呆れるような強がりだ。
そして、掟とはいえ追放してしまったことに今更ながら罪悪感が湧いてくる。
しかし、
「……別にこれで今生の別れとは限らない。その気になれば、貴方から会いに行くことだって出来るのだから」
「はい……そうですね……っ！」
「はぁ……ほんと、女王って貧乏くじねぇ……これじゃあ私が悪者じゃない……」
眼から雫を零す部下を見て、女王は呟き、ガイの旅立ちの見送りを終える。
だが仕事はこれで終わりではなかった。
「――さて、次は〝お客様〟を迎える準備をしないとですねぇ……」
女王はそう言って、別の恩人を迎えるために、周囲に指示を出していった。

カラーの里ペンシルカウを抜け、カラーの森からも抜けたガイは久し振りに目の当たりにする外の景色に懐かしいものを感じていた。
「……そうだ……確か、こんな場所だった……」
数年前にカラーの森に迷い込む時も、同じ様な道を見たような気が

する。
あの時は無我夢中であったため、周りのものは殆ど目に入らなかったが、今見れば気づけることは沢山ある。例えば、
「こんなに広い森だったんだな……」
自分が通ってきた道。背後に広がるカラーの森の広さ。
正面には一面の緑。上を見上げれば世界一の標高を誇る山、翔竜山が見える。
空に浮かぶ雲。地面に生えた草木。岩山や砂、荒野といったその何もかもが、子供の時にも見てるはずのものだ。
しかし、何処か新鮮さを感じられる。目新しいものを見ているかのような錯覚に囚われる。
それに、どうも身体が軽い気がするのだ。それは、
「……ああ、そういうことか……」
ガイはその錯覚に陥っている理由を理解した。
今までは、子供で、誰かに養われ、流れに沿って生きているだけだった。
しかし今は違う。これからは何をするにも自由で、自己責任。自分で考え、行動し、生きていかなければならない。
何からやればいいのか分からないほどに、取れる選択肢は今までよりも格段に多い。
……これが、大人になるってことなのかな……。
と、内心でそう呟いてしまうが、やはりミストラルに注意された口調などは直っていない。
ああ言われた以上は直さなければならないが、慣れるまでは苦労しそうだと思う。私、なんて今まで一度も使ったことがないし――
『なら、俺でいいだろ？　お前は一々細かいし女々しいんだよ』
「……っ！　お前は……!?」
不意に声が聞こえ、ガイは表情を崩す。
しかしそれは、外に聞こえている声ではなく、自分の中でのみ響くもので、
『安心しろ。俺の声はお前以外には聞こえない。俺としても、この状

態がバレるのは面倒だし、都合が良い』
『……お前は、まだいるのか……！』
自分で声を出す必要がないと本能で理解し、内心で声を飛ばす。
すると向こうもこちらにしか聞こえない声で、
『いるに決まってるだろ。お前は俺で、俺はお前だ。この身体を共有する一蓮托生の間柄だぜ。ははは……まあ、仲良くやろうぜぇ……！』
『――断る。お前などいらない。お前の悪意に満ちた意識など、御免被るし、そもそも仲良くする気なんてないだろう……！』
心の中でそう告げると、もう一つの人格は可笑しそうに声を響かせた。
『くくく、そう喧嘩腰になるんじゃない。それよりも、これからどうするかって方が大事だ』
『……何だと？　それは……私の行動のことか？　私の行動とお前になんの関係が――』
『馬鹿か。今言ったばかりだろうが。俺とお前は一蓮托生。お前が死ねば俺も死ぬ。やりたいことが沢山あるってのに、こんなところで死ねるか』
癪ではあるが、なるほど、と得心する。確かに、自分が死ねば自分と同じ身体にいるこいつも死ぬ。そうなっては困るという極めて分かりやすい理由だ。
しかし、
『……生憎だが、私はお前の言うことを聞く気はない。私は……私のやりたいようにやる』
『けっ、喋り方を変えたくらいでもういっちょ前の大人気取りかよ。そんなこと言わないで、また交代するつもりはないか？　俺なら、お前にもこれまでのふざけた人生を取り戻すような良い思いをしてやるぜ？』
『誰もそんなことは頼んでない』
きっぱりと断り、そのまま歩き出す。
全く、ふざけた旅路だと眉間に皺を寄せながら先へ進もうとする

と、
『チッ……あーあー、分かったよ。しばらくはまだ無理そうだから大人しくしてやる。だが、これからどうするかだけでも聞け。今度は悪巧みじゃないぞ。普通に生き残るための提案だ』
諦めたように、もう一人の自分がそんなことをつまらなそうに口にする。やはり、自分が死ねばこいつも困るのだ。故に嘘は言ってないように感じた。
だが、
『……聞く必要はない』
『あ？　ふざけるなよお前。こっからは考え無しに行動すれば死ぬだけだ。何をやってでも生き残ることが――』
『分かっているし、知っている。だから聞く必要はない。これからやることも、もう決まってる』
『……お前、何を――』
と、そこまで疑問を浮かべたところで、もう一人の人格は何かを察したように言葉を留めた。そして、再び納得の色の笑みを見せ、
『……ああ、そういうことか』
『ああ、そうだ。お前は私だ。だからお前が知ることは私も知っている。考え方は違っても、知識などは変わってない』
両者共に理解する。
お互いに同じ頭脳と身体を持っていることもあり、相手が得た知識や技術、経験などは共有されているのだ。
だからこそ、もう一人の人格が思いついたことは、もう一方も思いついて当然の事なのだ。
故に、ガイはこれからまずやるべきことを、明確にしていた。
『わかっているなら言わずとも良いだろう。ただ放浪している訳にもいかない。周囲に注意し、倒せそうな魔物を狩りながら、誰かを探すぞ』
『おお、完全に理解したぜ……だが、そのうち絶対に俺に代われよ。お前みたいな根暗じゃ愉しそうな事も出来そうにない』
もう一人のガイが言うことに、表のガイは訝しんだ。さすがにその

言葉だけで相手の考えていることを察することは出来ない。
『……愉しそうな事とは何のことだ？』
『そりゃお前色々あるが……最初は決まってんだろ――セックスだ』
『セッ――って、いきなり何を言い出している……！』
突然の卑猥な発言にガイは憤る。
しかしもう一人のガイは笑みを絶やすことはなく、
『くくく……何をかっこつけてる。お前だってやりたいだろ？　もう俺達もガキじゃねぇ。これからは良い女相手なら好きに襲ったっていいんだ。外じゃあ、強い奴が弱い奴を好きにするのは当たり前なんだからな』
それは正しく、悪魔の言葉だった。
ほんの僅かでも、自分の身体を共有する者として分かりあえるのではと思ってしまったが、それは間違いだと一瞬で気づく。ガイは更に声を鋭くし、
『ふざけるな！　そんなことが許されて良い筈がない！　今まで培ってきた教えを忘れたか!?』
『ははは！　笑わせる！　今までの経験や教えがあるからこそ、そう思うんじゃねぇか！　強い奴は、どれだけ好き勝手しても許される！
それが世界のルールだってな！』
『ふん……気分が悪い……お前の様な悪意に満ちた奴と話をしたのが間違いだった』
『くくく……そう言うな。さっきも言ったが、俺達は一蓮托生。だから仲良くしようぜ……？』
含みのある声色を聞きながら、ガイはそれを無視するようにして荒野を進んでいく。
悪意に満ちた人格が中にいて、声を飛ばすことが出来るのは癪に障るが、それでも生き続けるために考えて行動は取らなければならない。
『ふはは、まあ安心しろ。魔物には注意しなくちゃならないが、俺らと同じ様な年頃――いや、大人だとしても俺らに敵うような奴はそうそういねぇ。どこもあの盗賊共みたいな奴か、それにやられる雑魚ばっ

かだ。俺みたいに盗賊二十数人を無傷で殺せる奴なんていないからな！』
『何を根拠にそんなことを……世の中には、どんな化け物がいるか分からない。油断は駄目だ』
ガイは注意を自分に向け喧嘩しながら、目的を持って歩いていく。
少年ガイの旅立ちは、そんな自分自身との葛藤の中から始まったのだった。

――同時刻。カラーの森の中。
「……？」
「――どうかしたか？」
森の中を歩くのは、金髪灼眼。鋭い目つきをした異様な雰囲気を持つ男と、一人の少年だ。
少年は不思議なことに、この森に住む種族と同じ様な明るい水色の短髪と、額に赤いクリスタルが備わっており、男と同じ鋭い目つきであった。瞳も男と同じで赤く、容姿も同様にかなり整っている。まだ少年だが、男としての魅力を既に備えているといっても過言ではなかった。
そして何より――その少年が身に纏う存在感は、傍らにいる男と同じ種類のものであった。
体付きも既にがっしりと、少年にしては鍛え上げられた筋肉、引き締まった身体が服の隙間から覗いている。身のこなし、脚さばきも隙のないものであり、既に戦士としての基本は完璧に備わっていた。とても、まだ生まれて数年しか経っていない子供とは思えないほどに。
何も知らない者が見れば、大人とは言わずとも、年の頃１５かそこらの若い戦士だと誤認してしまうだろう。
そんな不可思議な少年は大人顔負けの眼光を背後に向けた後に男に告げた。
「……いえ、なんでも」
「……そうか」

男は少年のその言葉に納得する。男の方は気づいていたし知っていたが、態々言う必要のないことだ。故に今は少年の用事を優先するのみであると、男は足を前に進め、少年の名を呼んだ。それは、
「なら行くぞ――――アルベルト。この先がカラーの里、ペンシルカウだ。後始末は終わってるだろうな？」
「……はい、パパ。もうとっくに」
少年が濡れた地面を踏みしめ、頬に付着した液体を腕で拭いながらそう言う。すると男も同じ様に地面を見渡して確認し、
「……うむ、よくやった。なら行くぞ」
「！　ありがとうございます、パパ……！」
その褒め言葉に少年が僅かに喜ぶように口元に微笑を浮かべたが、二人はその既に終わった場所に目もくれずに先へ行く。
少年が見て、踏みしめていたその地面には――盗賊と思わしき男達、その数百名の死体が積み重なっていた。

アルベルト

――ＧＬ６５Ｘ年。

相も変わらず、世界は人類にとっての生き地獄である暗黒期。

既にこの時代が暗黒時代だという自覚すら殆どの者にはなく、これが世界の当たり前の光景だと誰もが認識する時代。

人が自由を得ていた時代の事は時の流れと共に忘れ去られ、今の人間は今の常識の中で生きている。

野良で生きる人間にとって、生きるための常識と言えば何といっても、魔物から身を潜めることに尽きる。

人間では魔物に勝てない。それが普通だ。

だが、追い詰められれば思わぬ力を発揮するように、何もしなければ死ぬだけのこんな時代では、戦わなければ生きていけないという思考に至った人間も数多く存在する。

そんな者達の生き方は、概ね二つに分類される。

一つは冒険者。もう一つが魔物討伐隊。言わずと知れた、戦う人間達である。

とはいえ質についてはピンきり。真っ当な手段で生きる糧を稼いだり、崇高な使命を掲げる者もいれば、完全に生きるための手段だと割り切り、次第によっては汚れ仕事に手を出すこともある。

そんな汚れ仕事を請け負う大規模魔物討伐隊――〝影の楔〟はその筋では有名な魔物討伐隊だった。

その成り立ちは古く、ＧＬ期初頭から存在したとされ、魔物に侵され、国が存在しない世界においては徒党を組んでいる人間達の中でもかなりの力を持つ組織である。

世界にある人の隠れ里の中でも最大の勢力である、あの〝鋼の騎士団〟や、現存する商会としては最大級の〝キリング商会〟に並ぶ人間勢力であるが、その方針、彼らがやる仕事は人として褒められたものではない。

彼らは魔物の討伐だけでなく、野良や牧場の人間、またはカラーなどを攫っての奴隷売買や、同業者が得た物資などを強引な手段で奪う

ことで生きるための糧と利益を得ている。出すものさえ出せば何でもやる集団として知られており、真っ当な冒険者、魔物討伐隊からは目の敵にされている。

だが、どんな素性の相手であろうと受け入れるというルールがあり、それが今の世の中では非常に適していた。訳ありの経歴を持つ者などこの時代では腐るほどにおり、同様に何をしてでも生き延びたいと思う者達も大勢いる。故に〝影の楔〟は、そういった真っ当な手段では生きていられない、生きていられなくなった者達の受け皿としてそれなりの需要があるのだ。

そんな影の楔には、幾つもの傘下が存在する。

名目上は影の楔の一部ではあるが、基本はそれぞれ活動したり、魔物討伐隊として部隊を率いていたりするのは影の楔内ではよくあることだ。名を借りることで商人や同業者との交渉を有利に進めたり、本隊からも仕事を回されたりと、恩恵があるので、野良で生きる無法者達にとっては非常にホットな職場なのである。

しかし、だ。何も美味い話ばかりが舞い込んでくることなどない。

時には、外れを引くことだってあり得る。

そう――彼らは今、大外れを引いていた。

「っ、助け――ぎゃあああっ!?」

「な、なんなんだよアイツ……！　攻撃が効か、ね、ぇ――」

カラーの森では今、狩りが行われている最中だった。

影の楔傘下の魔物討伐隊。彼らにとって、カラーの森というのは比較的美味しい仕事場である。

見目麗しいカラーという女だけの種族。人間とは違うから罪悪感は湧きにくいし、生け捕りにさえしてしまえば、そのまま売りに出しても、犯して愉しんでもいい。犯した後はクリスタルが資源として売れる。魔物ほど強くもない。はっきり言って、狩られるために生まれたような都合の良い種族なのだと、彼らは考えていた。

良い女は貴重だし、一匹捕まえれば分け前は取られるにしても一、二年は食うのに困らない。だから彼らは舌舐めずりをしながら、このカラーの森に足を踏み入れたのだ。

カラーの女の肌の感触。その先にある莫大な利益。それを想像して来たのだ。
「ぐっ、このやろ――」
「だ、駄目だ……勝てねぇ……殺され――」
しかし、狩りを想像してやって来た彼らは今、狩られていた。
狩るのは自分達で、狩られるのは相手だと思っていたが、現実はそうはならなかったのだ。
しかも、その現実は悪夢の様なものだった。それは、
「な、何をしてやがる……!?　相手は一人だってのに……!」
「し、しかし隊長！　あの男のカラー、化け物みたいな強さで……何十人で囲んでも全然攻撃が通じねぇって……！」
霧が掛かった森の中で、その魔物討伐隊の隊長は、部下の悲鳴を背景音楽にしながら報告を聞く。
相手は一人。しかも男のカラーだという。
そんなあり得ない報告を聞きながらも、夢だと言うことは出来ない。前方からは生々しい部下の悲鳴と、肉を斬ったり潰したりするような音が連続している。
隊長は苦渋に満ちた表情を浮かべた。
「クソが……カラーには男は居ねぇはずだろうがよ……！　見間違いじゃ――」
「――お前がこの人間達のボスか？」
「ッ……なんだ!?　どこから――」
突然の事だ。声が降り掛かり、隊長は目を見開いて部下達と共に周囲を見渡す。
しかし森の中には霧が掛かっていて視界が非常に悪い。襲撃前は霧なんて全く掛かっていなかったというのに、いざ攻めようという時になると途端に霧が立ち込めてきたのだ。そんな中では敵の姿を確認することすらままならない。
だがその声の持ち主は直ぐに見つかった。
尋常ではない気配を頭上から感じ、上を見上げるとやはり――太い木の枝に座り、こちらを見下ろす者がいた。

「……気づくのが遅いな。期待出来そうにはない」
「……ッ！　な、なんだてめぇは……？」
「名乗る必要性を感じない」
そこにいたのは、報告の通りの人物だった。
水色の髪と額の赤いクリスタルはその人物がカラーである証だ。
しかし彼の体格、髪の長さ。見た目は明らかに男のものであった。
男から見ても整った容姿に、寒気がするほどに鋭く、赤い瞳。大人としてはまだ僅かに身長が低いことから、意外と若いのだろう。少年か青年といった面持ちだ。
だが、その異常な存在感と殺気が、彼をただの少年だと感じさせない。
それは圧倒的強者のみが漂わせる支配者のオーラ。王の威容とも言うべき雰囲気を漂わせたその男のカラーは、冷たい表情で男達を見下ろしながら言った。
「……もう終わった」
「何だと……そりゃあどういう意味だ!?」
「……気づかないのか？」
寡黙に、必要以上の言葉を口にしない。そんな態度を見せるカラー男に、隊長は訝しみながらも途中で気づいた。
――部下達の悲鳴が、途端に聞こえなくなった。
つい先程までは聞こえていた悲鳴が止むという意味に気づけないほど、隊長の男は間抜けではなかった。表情を歪ませ、
「て、てめぇ……！　俺の自慢の部下達を……！」
「……自慢という割には弱かったがな」
「ッ……！　なんだとてめぇ!!　くそっ！　降りてこい!!　今すぐ殺してやるッ!!」
「た、隊長！　気持ちは分かりますが逃げましょう!!　勝てる相手じゃねぇっすよ!?」
カラー男の言葉を聞いて激昂し、挑みかかろうとする隊長を羽交い締めにして留める部下。隊長はまだ戦意があったが、部下達については既に戦意を失い、この場から脱しようとしていた。

事実、カラー男が現れたのを見た一人の人間は我先にとその場から駆け出していく。
しかし、
「――どこへ行くつもりだ？」
「っ!?　がふっ――」
逃げようとした先で声が直ぐ近くから聞こえる。その瞬間に、男は衝撃を受けて地面に倒れた。
腹に穴を開けて見上げた先には、槍を持ったカラー男の上半身だけがあり、
「っ、な、なん、で――」
「……ふん」
カラー男が槍を払い、地面に突き立てる。それを見て、隊長の男や残った部下達は今度こそ絶句した。
唯一、口を動かすだけの胆力が残っている隊長が無意識に疑問を呟く。
未だ、下半身は木の上に残っているカラー男の上半身を見て、
「な、なんだその身体は……!?」
「……大した技じゃない。霧になっているだけだ」
「――は？」
霧に、なっているだけ。その言葉を聞いた隊長は耳を疑う。
言い方もそうだが、その現象こそが冗談のような光景だった。
森に漂っていた周囲の霧。それらがカラー男の元に集まっていき、その身体を構成していく。木の上に残ったカラー男の下半身も、一度霧になって溶け、男の身体に集まっていき、再び元の身体に戻っていった。
そうしてしっかりと生物としての体を成した肉体に戻ったカラー男は手元に槍や剣、斧などを持って言う。淡々とした様子で、
「先程までの霧はオレの身体の一部。自由自在に動かせるものだ。――理解したか？」
「ふ――ふっ、ふざけんじゃねぇっ!!!　この化け物が!!」
「生まれ持った力の差異は戦いには関係ない、が……せめてもの情け

だ。選ばせてやる」
そう言って、腰が既に引けている隊長に向かってカラー男は言う。手に持った三つの武器を目の前の地面に突き刺し、
「――――決闘だ」
「……はぁ!? 決闘!?」
隊長の男が絶叫する。しかしカラー男は全く動じずに頷いた。
「そうだ。オレとお前で決闘だ。オレはそちらが選んだ武器で戦う。勝てば見逃してやるし、負ければどちらにしろ死ぬ。どうだ？」
一方的に次々と口に出される決闘のルールと提案。
そんなことを言われても勝てるわけがないのだから選べない。
だからというわけではないが、隊長の男は最早やけくそ気味に武器を構えてこう叫んだ。
「ざけんじゃねぇ!! 決闘だと!? ……なら素手で戦いやがれッ!!」
それならまだやれるかもしれないと、一筋の希望を求めて言う。
カラー男が持つ剣や槍、斧。それらは全て、部下達を殺したのか、血で彩られているものばかりだ。
そんな提案を呑むはずがないのだろうが、せめて素手で掛かってこいと、自暴自棄気味にそう口にしたのだ。
だが、
「……素手、か。まあ、いいだろう」
「……えっ？」
と、カラー男は予想に反して、あっさりと武器を手放した。
その意外な行動に隊長が間の抜けた声を出す。そして胡乱な表情で、
「くっ……や、やってやろうじゃねぇか!! 俺だって、ここまで自分の力でのし上がって来たんだ……！」
隊長も覚悟を決めてやる気を見せる。
しかしカラー男の方は、先程よりもさらにつまらなそうな態度を見せていた。武器を全て捨て、拳を握りしめる。そうしながら、
「……生憎と――」
「……へ？ ――っっっ!?」

一瞬。カラー男の方がぶれて見えたかと思うと、衝撃波が森を叩き、
「――オレは、素手が一番得意なんだ……！」
隊長はカラー男の拳を顔面に受けて、一瞬で絶命していた。
顔が吹き飛び、粉微塵になるほどの衝撃と威力。背後の木々までもが幾つか薙ぎ倒される。
残った部下達が絶句し、恐怖する中、カラー男はふと、それに気づいて眉を上げた。
「……しまった。森を傷つけてしまうとは……！」
「……に、逃げろ……！　殺される……!!」
あれだけのことをしておいて、森の心配をする化け物に異常性を垣間見たのか、残った部下達が一斉に悲鳴を上げながら蜘蛛の子を散らすように逃げていく。
だがそれを受けたカラー男は溜息を一つつくと、
「――逃さないと、言った筈だが？」
その言葉を発したのち僅か数分で、残党も皆殺しにしてしまった。
カラーの集落を襲った人間はおおよそ百名は居たが、対するカラー側から戦いに出たのは彼一人であり、念の為、後詰めで防衛隊が布陣しているのみだった。
だが彼がいる限り、その念の為は機能しない。
何故なら彼は、このカラーの里、ペンシルカウを守護する戦士にして、とある大英雄らの実子。その名は――
「――お疲れ様です、アルベルト様」
「……ああ」
――アルベルト。
世界で唯一の、男性でカラーの特徴を持つ人物であり、世界の支配者である魔人の血を引く、生まれながらの王である。

――オレは、生まれたその時から〝魔人〟だった。
魔人。それはこの世界の王である魔王から直接血を分け与えられ

た特別な存在であり、生まれながらの支配者である……と、教えられた。

だが、自分は魔王から血を分け与えられたりなんてしていない。寧ろ、身分や素性は公にはしないようにと言われているし、魔王は自分のことなど知らないだろう。

自分は、親である二人の魔人の血を継いでいるというだけだ。

特別、という認識はない。親の血を継いでいる。それは一般的な人間、カラー、生物であれば当たり前のことであり、変わったことではないはずだ。

しかし自分は特別であるらしい。生まれながらの魔人というのは初めての存在であるらしく、親の立場もあってか周囲は自分を目上の存在だとして扱う者が多い。

確かに、言われてみれば周囲の者達よりも自分は強いのだと感じれるし、あらゆる生物からの攻撃を無効化してしまう無敵結界も生まれながらに発現している。魔王の直接の眷属ではない。謂わば隔世魔人と言うべき存在で、故に他の者達とは違うというのは理解は出来る。

だが、自分にとっては驚くことでも何でもない。何故周りが驚き、期待し、畏怖するのかが、物心がついた時にはよく分からなかった。

しかし今はそうではない。自分はかなり成長が早い方であるらしく、理解するのも早かった。

この世の生物というのは、自分より強い者を敬い、恐怖し、期待するのだと言う。

それなら理解出来る。自分も、父親や母親。姉やその周囲にいる強者相手には、怒られた時などに特別怖く感じてしまうし、とても尊敬している。それと同じ様な感情を、周囲は自分に抱いているというだけなのだ。

……だが、それにしてもだ。

「……今戻っ――」

「きゃあーーーーっ!!! アルベルト様よーーーーー!!」

「アルベルト様ーーーー!! お帰りなさいませーーーー!!」

「こっち見てーーーー!! アルベルト様ぁーーーーー!!」
「……」
カラーの里。ペンシルカウ。
少し前から、自分は実家である城を離れて、このペンシルカウに住み始めた。
理由としては修行であったり、交友であったりと色々とあるらしいが、そこは自分が知るところではない。親が決めたことだからだ。故に理由は何でも構わないが、自分としては、母の元の種族であるカラーとの交友を深めることと、そのカラーの里を人間の手から守り、そのついでに経験値を稼ぐようなものだと理解していた。
自分には、カラーと同じ様な身体的特徴がある。水色の髪や額のクリスタルなどがそうだ。
だから自分は、自分と同じ特徴を持つ母の出身種族と聞いて、正直期待した。親睦を深められればいいと。似たような特徴もあれば、誰も自分の事を持ち上げ、期待せず、対等の立場で仲良く出来るのではないかと。
しかしそうはならなかった。その理由は、何でも、
「はぁ……アルベルト様、今日も滅茶苦茶格好いい……♡」
「なんであんなにカッコイイのかしら……?」
「そりゃあカラーの男性なんて初めてだし……」
「厳密に言えば違うらしいけど――でもそんなのどうでもいいわ!」
「はぁ、憂鬱……私、来週には子供作らなきゃならないのよね……アルベルト様が大人だったら、アルベルト様に頼むのに……」
……憂鬱なのはオレの方だ。
騒ぎの中から聞こえてきた言葉に一瞬にして頭を抱えたくなるアルベルト。というか、毎度ながら村を歩く度に人だかりを作るのはやめてほしい。
幾ら自分が、女性しかいない種族、カラーの唯一の男性の様な容姿を持っているからとはいえ、少し落ち着かせてほしいものだ。
それに、誰もが自分に近づき、隙あらば話しかけようとし、抱きついてきたりしようとするというのは中々に神経を使わせてくれる。

いつどこで誰が見てるのかも分からないし、迂闊な行動や言動は取れないし、気を抜けない。四六時中暗殺者に狙われているようなものだ。
頭を抱えようにも抱えられず、息だけを小さく吐いていると、後ろに付き従うように歩いているメイド服の女性が、
「……心中、お察し致します。坊ちゃま」
「よせ。何も言うな」
同情されても悲しくなるだけだから何も言うなと、母親の使徒であり、メイド長を務めるエルシールに言う。続けて小さい声で、
「後、坊ちゃまは止めてくれ」
「駄目です」
「……なぜだ」
「坊ちゃまは坊ちゃまですから」
いい笑顔でそう言われるが、答えになっていない。シャロンよりはマシだが、他のメイドも異様に可愛がってくるのでちょっと苦手だ。可愛がられるのが嫌というか、可愛がり方がどうにも圧が凄いのだ。距離感も凄く近い。
エルシールの呼び方矯正が上手くいかなかったことを内心のみで嘆きつつ、アルベルトはカラー達が道の両脇で集まり、まるで凱旋パレードの様になった真ん中を居心地が悪そうに進んでいく。
すると、女王の屋敷の手前に来たところで、
「お疲れ様でした、アルベルト様。お怪我はありませんか？」
「……大丈夫だ。特に怪我はない」
カラーの女王や、その側近達が並んでいて、その場で一礼してくる。
だがそれも、本当はこちらの方が立場は下のはずなのだ。こちらは住まわせて貰っている身で、ただの居候の戦士に過ぎないが、向こうはこの里の女王。どう考えても向こうの方が偉い。
「……毎度の事だが、こうも大げさに出迎えるのはやめてほしい。オレはただの一戦士の筈だ」
だからそう言ってみた。期待は出来ないが。するとやはり、女王は苦笑混じりに、

「申し訳ありませんが、それは無理です」
「……なぜだ？」
「確かに、アルベルト様の表向きの身分は、この村に住む防衛隊所属の一戦士。こちらのミストラルの部下です」
「やめてくれませんかね……それを言うの……。胃が痛くなってきます……」
　自分の上司であるはずのミストラルが女王を横目で見つつ、お腹を擦っていた。この間、胃薬でも取り寄せようかと言ってみたら、畏れ多いから、と必死で止められたので今回は自重する。こっそりと届けておけばそれでいいだろう。
　だが、女王はミストラルからの抗議の視線を無視して言った。理由の続きを、
「しかし、それはあくまでも表向きの身分。本当の立場と、アルベルト様のその容姿を考えると、とても上から命令出来るようなものではないですし、彼女達に我慢しろ、とも言えません。……というか、私が命令しても多分聞きませんよ」
「……それは問題だろう」
「――恋は盲目ですからね」
　いや、そんなことを自信満々に言われても困るが、とアルベルトは口には出さず、僅かに眉をひそめることだけで答える。いつもの事だが、どうにか出来ないものか。いや、出来まいと一瞬で諦めると、アルベルトは息を吐きつつ、告げることを告げた。
「……戦闘の余波で、森の木を少し倒してしまった。すまない」
「ああ、いえ……謝らずとも……後で部下に命じて回収しておきますので」
「頼む」
　と、木々を攻撃で壊してしまったことを謝罪し、背を向ける。力加減が出来なかった、自分が未熟だと白状しているようで恥ずかしかったが、これも成長の為だ。力を強めるだけでなく、コントロールも考えないとならない。
　そして後は帰るだけ、ということになるが、

「……エルシール。急ぐが、構わないか？」
「ええ、構いませんよ坊ちゃま。いつもの事です」
エルシールの了承を得て、アルベルトは足に力を込める。
カラーが周りにいて帰れない。だからこうするしかないのだと、
「――！」
アルベルトは跳躍し、一足で建物の屋根に飛び移った。
そしてそのまま加速し、建物の屋根を飛び移るように去っていく。
エルシールも同じ様に、少し遅れて並走してきた。それを見て、
「あぁん、アルベルト様ぁ～！」
「お話したかったのにー！」
下から、残念がるカラー達の声が聞こえる。申し訳ないが、収拾がつかなくなるから諦めてほしい。
中には、子供などもいるが、
「えへへ、私、将来はアルベルト様のお嫁さんになるのが夢なんだー」
とか、言っているのを見て、その親が、
「駄目よ！」
「ええ～、何で～？」
駄目だと注意してくれている。そりゃあそうだ。親なら、その辺の事はしっかりと教育するものだと、
「私がお嫁さんになるんだから駄目！」
「ええー!! お母さん、ズルい!! 私がなるの!!」
と、親と子ですらそれを理由にちっちゃい喧嘩をしていた。
……ふぅ、疲れるな。ここは……。
毎度、こんな反応を取られるのは少し疲れる。
とはいえ、だからといってぞんざいに扱う訳にもいかないのだと、
「……ん？」
「どうかしましたか、アルベルト様」
「……今、声が……」
不意に、耳に音を拾ったことで方向転換。
その声の聞こえる場所にアルベルトは急行する。
少し移動し、屋根から降り立ったその場所は、カラーの集落の中で

も建物が建ち並ぶ一角の裏手だった。
そこの影に、
「……けほっ、こほっ……」
「……誰かいるのか？」
「……ぁ……」
その木箱に寄り掛かるようにしていたのは、一人の少女だった。
普通のカラーの少女。右目が前髪で隠れた少女だったが、どこか様子がおかしい。何やら弱っている様で、
「……病気か？　親はどうした？」
「……あ、アル、ベルト様……」
さすがに向こうはこちらの事を知っているようだが、そんなことはどうでもいい。
「親は？」
「あ、けほっ……す、すみません……わたし、親はいなくて……けほ」
「親がいない？」
それはおかしな話だと訝しむ。この里で親がいない子供など、孤児くらいのものだが、その孤児も人間との戦いなどで死ぬことが激減した今では少なくなっているはずだ。
だがそれを聞いたことをアルベルトは直ぐに後悔した。
「その、病気で……」
「！　……そうか、すまない。不躾な事を聞いた」
「い、いえ……けほっ、気にせずとも、構いません……」
親が病気で亡くなり、そして咳を続けてる一人暮らしの少女。
何となく気になってしまい、
「……先程から咳をしているが、病気を患っているのか？」
「あ、はい……最近になって、けほっ、病気に、こほっ、罹ってしまったみたいで……けほっ、ごめんなさい」
返事の途中で咳をしてしまい、こちらに謝ってくる少女。アルベルトは首を振り、
「謝る必要はない。それより、大丈夫なのか？」
「けほっ……だ、大丈夫です……こう見えて、身体は丈夫ですので、け

ほ……えへへ、心配してくださって、けほっ、ありがとうございます……」
「……」
咳をしながらも、強がって笑ってみせ、心配してくれたとお礼を言う少女。
普通に考えれば風邪か何かかと思う。
だが少女は風邪にしてはかなり弱っており、やつれているようにも見えた。カラーは成長が早いから分かりにくいが、まだ子供のような年齢の筈でもある。それは自分も同じだから何となく分かる。
そんな子供が、一人で暮らしているというのは、
「……ちゃんと生活出来ているのか？」
「……へーき、です……お仕事も貰ってますし、けほっ、生きていく分には問題、ないです……けほ」
確かに、ペンシルカウは住んでいるカラーの数がそこまで多くないのもあって、別に何もしなくても問題なく生きていけるし、父が渡している物資を考えると、そういうことはあり得ない筈だ。それにカラーは同族には優しいので、困っている相手がいればちゃんと助ける場所でもある。
とはいえ、病気で一人暮らしともなると不安なのは間違いない。
「ちょ、ちょっとアルベルト様……そんないきなり――って、どうしたんですか？」
少しして、追いついてきたエルシールが背後で首を傾げる。それと同時にアルベルトは自分の中でやることを決め、
「……少しついてこい」
「え……？」
アルベルトは少女に近づきながらそう言う。すると背後から、
「アルベルト様……？　その、それはどういう……まさか――」
「下世話な事を思い浮かべるな。病気を治すだけだ」
「えっ――きゃっ！」
木箱に寄りかかっていた少女を抱きかかえて立ち上がる。
少女は驚き声を上げるが、それよりも困惑していたのがエルシール

で、
「……アルベルト様？　その、家に誰かを連れて帰るのは、あまりよろしくは……」
渋るように言うエルシール。だがそれを聞いて、アルベルトは眉を立てた。
「……病気の女を見捨てろというのか？」
「いえ、そういう訳では……ただ、女王に預けたり、薬を持ってくるという方法もあるかと思いまして……」
エルシールがやんわりとそう言う。
確かに、それが正論だ。自分の家は特殊でもあるため、あまり身内以外だと、許可を得た人物以外は連れて来てはならないとされている。
病気を治す。なんとかしてやるくらいなら、態々連れて行かなくても良い筈だが、
「……いや、駄目だ。連れて行く」
断固として拒否した。
しかし疑問が上がってくるのは当然で、
「えっと、何故ですか？」
「――〝勘〟だ。放置するのは危険だと感じている」
そう、何となくだが、この少女をここで放置していては駄目だと本能が訴えている。
それと、何よりもだ。
「これだけ弱りきった女を、男として放置は出来ない」
「っ……」
エルシールが僅かに息を呑む。そして僅かに間をおくと、
「……分かりました。ですが、ケッセルリンク様はともかく、レオンハルト様はなんと言うか――」
「パパに何か言われたら、全てオレの指示だとそう報告しろ。責任はオレが取る」
「……畏まりました」
ふぅ、と息を付いてエルシールが了承してくれる。何とか説き伏せ

たところで、アルベルトは少女に目を向けた。
「というわけだ。お前の病気を治す。少しの間、辛抱していてくれ」
「えっ？　えっ？　……けほっ、きゃあっ!?」
そう言って、アルベルトは再び跳躍し、屋根の上に登ると、そのまま家に向かって駆け出した。
そして、それを少し遅れてついていくエルシールはボソリと、
「……そういうところ、御二方にそっくりですね……」
弱った女性を放っておけないところ。その有無を言わせない強引さと優しさ。そして親に似た王の威容と、あの鋭い目で言われたら、ただの使徒でしかない自分達は従う他ない。
喜ぶべきか、呆れるべきかで迷いつつ、結局は苦笑で落ち着き、エルシールは最愛の主の息子を追いかけた。

初めての友達

その屋敷は森の外れにあった。
二階建ての木造。屋敷としては普通のものだが、カラーにとっては、一軒家は普通でも部屋が沢山あるような幅広の屋敷などは普通ではない。
だが、それも当然。この屋敷はある意味、カラーの女王などよりも偉い存在が住む場所であるからだ。
そしてそれを、ペンシルカウに住む誰もが公然の秘密として知っていた。
「けほっ……すごい……！」
だが知ってはいても入ったことはない。故に病気だからと連れてこられたカラーの少女は、その室内の広さに驚いた。咳が止められないことでバツが悪い表情になるも、連れてきた当人、アルベルトは気にした様子もなく、
「ただの別荘だ。大したものじゃない」
「急ごしらえで用意したものですからね。とはいえ、中身はそれなりに整えてありますが」
「へ、へぇ～……けほっ」
メイドだというエルシールまでそう言うが、普通のカラーからするとやはり大したものである。凄い感覚の持ち主だなぁ、と感心していると、アルベルトがこちらを見て、
「そんなことより――と、そういえばだ」
「……？　けほっ、なんでしょう……？」
何かを言いかけて言葉を止めたアルベルト。首を傾げて疑問を浮かべていると、
「……まだ名前を聞いていなかったな。名はなんと言うんだ？」
「あ……そうですね、けほっ……わたしの名は、メリルと言います」
別に名前を態々憶えてもらわずとも、アルベルトであれば無礼でもなんでもないのだから良い筈だが、相手は気にした。故に少女はメリルと、自分の名を名乗る。姓は皆、カラーなので名乗らなくても分か

る。アルベルトも厳密には違うが、便宜上はアルベルト・カラーを名乗っている筈だ。
だからアルベルトはそこで頷き、再び話しを進めようとして、
「メリル。今からお前の病気を調べる」
「あ、はい。お願い……します、っ、けほっ、けほっ！」
「！　どうした？」
咳が酷くなったメリルを見て、アルベルトが目を細める。そして押さえた口元から吐き出したそれに、更に険しい表情になった。何故なら、
「！　……まさか、血か」
「っ……た、大したものじゃ……けほっ……よくあることです」
よくあることだとそう言うメリル。しかしそれを聞いて、
「バカヤロウ……！　そんな訳があるか……!!」
「え……？」
アルベルトが不意に、凄い剣幕でメリルに詰め寄った。
それは先程までとは違い、丁寧な口調すら崩れたもので、
「……アルベルト様、その少女の病気をご存知なのですか？」
付き従っているエルシールですら知らなかったようで軽く訝しむ。
するとアルベルトは頷き、
「ああ……前に聞いたことがある……普通の風邪とは違う病気の事をな」
と、先程までよりは僅かに荒くなった口調を向けて、アルベルトは告げる。メリルを見下ろし、
「それは、〝けほけほ病〟だ……！　放置すれば、死ぬ可能性の高い重病だぞ……！」
「！」
「それは……」
死ぬとまで言われ、メリルやエルシールの表情が驚きで歪む。まさかそれほどの病気だとは思っていなかった様子だ。
しかしその深刻さをアルベルトは理解しているようで、眉をひそめながらも言う。頭を抱え、

「やはり連れてきて正解だったな……けほけほ病は放置すれば死に至る病だが、きちんと治療すれば問題なく治る病気だ」
「えっと、それなら直ぐに薬を――」
「――ええ、問題はそこですね」
と、不意にエルシールの言葉に割って入る声が響いた。
それは女性のものであり、この場にいない者の声であったが、メリルを除く二人には聞き覚えのある声。その相手は部屋に入ってくると、アルベルトは目を僅かに大きく見開いた。
「白兎姉……！　来ていたのか……！」
「ええ、ちょうど先程から。なので、話は全て聞こえていましたよ」
「あ、アルベルト様の、けほっ、お、お姉さん……？」
「しかし、何故急に……？」
姿を現した白い髪の小柄な少女を見て、メリルは困惑する。姉らしいが、どうにも小さいし、色々と違うところも多い。
しかし、その赤い瞳だけは同じものであり、彼らが姉弟であることを示しているかのようだった。
「今日はお姉ちゃんの私が、可愛い弟のために料理をする日でしたからね！　アルベルトの大好きなオムライスを！」
「……その予定はなかったと思うが……」
「ともかく、いらっしゃいませ、白兎様」
胸を張って何やら得意気な様子で言う白兎に、アルベルトやエルシールが何とも言えない表情を浮かべながらも歓迎する。だが白兎はそれを受けてもキッチンに行くわけではなく、そのまま留まりメリルに顔を向けた。
「ですがその前に……アルベルトのお友達の病気を何とかしないといけませんね」
「えっ……」
「……手伝ってくれるのか、白兎姉」
「勿論です。弟のお友達を見殺しにするお姉ちゃんではありませんよ」
「……そうか。助かる」

どやぁ、と得意気な笑みで告げる白兎に、アルベルトも息を入れつつ普通に感謝しているように見える。友達かどうかは微妙なところだが、メリルも態々それを口にすることはしないし、出来ない。厚意に水を差すことになるからだ。

とはいえ、問題があるのも確かな様で、まだ微妙に困惑しているエルシールが、

「ですが白兎様……治療と言っても、城に連れて行くのは――」

「まぁ、駄目でしょうね。そもそも、それを言うならここに連れてきた時点で怒られる気もしますが」

と、エルシールの苦言に白兎は傍らの弟を横目で見上げる。するとアルベルトは、

「……連れてきたのはオレだ。だから、怒られるのもオレ一人で十分。白兎姉もエルシールも、そしてメリルもそれを心配する必要はない」

「……アルベルト様……」

「ふふん、さすがは我が自慢の弟ですね」

メリルが自分の為に、何やら決まりを破っているアルベルトを心配して声を出す横で、白兎が何故か自慢気になる。エルシールが半目で白兎を見たが、それを気にするような姉弟ではないので何を言っても無駄であった。魔人と使徒の間柄なら、使徒が魔人に逆らうことはあり得ないし、他の種族だろうと魔人に逆らえる者など皆無に近いが、子供となると話は別である。

エルシールは内心で肩を竦めるような思いで、ならばと告げる。

「なら、そのまま連れていきますか？」

「そうですね。親御さんに連絡は済んでますか？」

「……いや、それは……」

「あ……わたし、身寄りがないので……けほっ」

「おや、そうでしたか」

アルベルトが言い難そうに眉をひそめた時に、メリルが気づいてそれを告げる。白兎はあっさりと頷いたが、そこで何を思ったのか、顎に手を当てると、

「……ならもう、いっそのこと引き取って、ここか城にでも住まわせた

らどうですか？　見たところ、まだ子供の様ですしね」
「……え、ええっ!?　けほっ！　そ、そんな……畏れ多いですよ……」
「……本気か？　白兎姉」
　メリルが驚き、迷いを見せつつも遠慮する。アルベルトの方も、眉間に皺を寄せながら姉に確認するように言葉を送った。
　すると白兎は首を傾げ、
「？　むしろ、そうするつもりで拾ってきたのかと思ってましたが違うんですか？」
「……そういうつもりはない。あくまでも、彼女の治療のためだ」
　そういうつもりはないと、アルベルトは言う。だが、それを更に追求するように、
「私にはそうは見えませんが。何と言うか……友達を欲しがってるように見えて仕方ありません」
「……！」
「……えっ？」
　友達を欲しがっている。そんな子供らしいことを耳にしたメリルは驚いてアルベルトの方に顔を向ける。
　彼の表情は、痛いところを突かれたという風に下を向き、更に険しくなっていた。
　だがそれを指摘した白兎は、微笑ましいものを見るように笑みを浮かべ、
「恥ずかしがることはありませんよ。アルベルトもまだ子供ですし、友達の一人や二人、欲しがるのは普通です」
「……そういうつもりで連れてきた訳じゃない」
「なら無意識ですね。まあ先に、病気で独り身と聞いて助けたくなったんでしょうが。後から徐々に、そうした方がいいかもしれない、と思い始めたというところですか。ああ、だから恥ずかしがらずともいいんですよ。ええ、私でも多分そうしますし、若い頃にはよくあることです。友達欲しさに親の言いつけを破る……ふふ、何とも青春っぽくていいですね」
「ぐっ……わかったからもうやめてくれ白兎姉……！」

自分でもあまり理解していなかった心の動きを赤裸々に暴露されたアルベルトは、顔を赤くして止めるように懇願する。
普段から大人っぽく見られるアルベルトだが、彼はまだ子供である。実年齢的には十歳にも満たない。
子供らしからぬしっかりした考えや成長。その見た目も相まって、正しく早熟していると言えるアルベルトは、そんな幼い思いを抱えていないかと思われがちだが、実はそうではない。
なんだかんだで、彼はまだ子供で、実は友達が欲しいし、好き嫌いが激しく、親や姉に甘えたがりの年頃なのだ。だというのに、周囲からの期待に応えようとし、親の様に完璧であろうとしていることから、そういった一面を極力見せないように振る舞っている賢い子でもある。
抱え込みがちな苦労人気質とでも言うべきか。親兄弟であればその辺りは見抜いているが、アルベルトとしては親にすらバレていないと思っていた。
故に恥ずかしい。一人暮らしで病気の少女を助けようと、それだけを考えていたのは事実だが、その先に、仲間や友達を求めようとする、幼い心の動きが働いていたというのは、完璧に振る舞っているつもりのアルベルトにとっては、非常に羞恥の色が濃いものであった。
その結果、アルベルトは耳まで赤くしながら、顔を隠すように頭を抱え込んでしまう。見た目的には青年程にも見えるアルベルトだが、その演じていない時の彼はまだまだ子供だった。
その本性とも言うべきそれを初めて見たメリルなどは、しかし驚きつつも遠慮がちに近づき、
「けほっ……えっと……わたしなんかでいいのなら、友達にしていただくのは、全然かまいませんけれど……けほっ」
「！　ほんとか……!?」
アルベルトが顔を勢いよく上げて再確認。それを見たエルシールは横の白兎に向かって小声で囁くように、
「アルベルト様……実はよっぽど、普通の友達が欲しかったんでしょうか……？」

「カラーの里だと、皆憧れて慕ってきてますけど、そういうのとはまた違うでしょうからね」
理想のカラー男像として見られ、邪な心を持たれることばかりなアルベルトにとって、普通の友達というのは何よりも欲しかったものだろう。白兎にも、少し違うがその気持ちは分かるものであり、故に弟にも友達が出来ればいいと敢えてそれを暴露してみた。
その結果、メリルというカラーの少女は咳をしながらも、純粋な笑みを浮かべ、
「はい、けほっ、大丈夫です。わたしもずっとお友達が欲しかったので、嬉しいですっ！　けほっ」
「……そ、そうか……なら、このまま家に住んでくれないか？」
アルベルトはまだ狼狽えつつも、嬉しそうにそんな提案をメリルに告げる。
背後では、エルシールと白兎が、
「……それは友達とはまたちょっと違うような……というか、このまま止めずにいていいんでしょうか？」
「ふふん、さすがは私の弟ですね。友達作りが上手です」
……あ、そういえばこっちもズレているんだった、とエルシールが真顔になる。
友達になってほしいから家に来てくれというのは、明らかに普通ではないのだが、白兎やアルベルトにとっては普通の定義が違う。
仲の良い相手や、仲良くしたい相手などは自分の住処に住んでもらうというのが当たり前の考えとして浸透しているのだ。
というのも、彼らの親がまず、真意はどうあれ、結果的に外から人を連れてきて自分の住居に住まわせるということをやっているし、子供である白兎やアルベルトもそれが当然の事だと常識として知っている。
加えて本能として、自分の側に置くことが何よりも安全だと無意識に考えていることから、彼らはこうやってナチュラルに囲い込みをするのだ。
もっとも、この時代だと全く間違っていない行動でもある。親しい

間柄の人物。家族、恋人、親友といった相手を危険な外敵がいる外に放置せず、失わないように安全な場所に留め置くのは生物的にも普通の事だ。
エルシールの常識としては、〝友達になる→じゃあ家に住んでくれ〟は意味不明すぎて困惑するものであるのだが、白兎やアルベルトにとってはそれが常識というか、本能的に普通のことだと考えている節がある。
そしてこれは、どう考えても親の背中を見て学んでいるというか、大体親の――主に父親の所為であることにエルシールは気づいたが、ぶっちゃけ母親である自分の主にも似たようなところがあるので何も言えない。自分だって拾われた身であることには違いないのだ。
だから無言で成り行きを見守ろうと眺めていると、アルベルトから提案を出されたメリルが戸惑いがちに、
「それは……けほっ、ご迷惑ではありませんか……？」
「そんなことはない」
「で、でも、タダで住まわせて貰うなんて、けほっ、そんな失礼なことは出来ません……」
メリルは無償でそんなことをしてもらうのが気になるのか、なおも辞退しようとする。
だがそれを見かねた白兎が、
「なら、メイドとして働いて貰いましょう。それなら問題ない筈です」
いや、一応親に聞いておいた方がいいのでは？　とエルシールが半目を向けながらも口には出さず、内心のみでツッコミを入れる。
だがその疑問をエルシール以外は危惧していないのか、普通に話が進んでいく。
「メイド……わたしなんかがそんな立派な仕事に……？」
「……仕事をすることで気が済むというならそれでも構わないが……」
「そうですね……とりあえず、オムライスは中止にして、父上にどうお願いするかも考えましょうか」
……あ……良かった、そっちの話に行ってくれた、とエルシールが

胸を撫で下ろす。白兎はそのことを考えていた様だ。するとアルベルトも腕を組み直しながら真剣そうに、
「そうだな……それも重要だ。――それと、オムライスはちゃんと作ってくれ」
「けほっ……オムライス、美味しいですよね……！」
「まあ、坊ちゃまの好物ですから……」
　オムライスの事を言う時が一番迫真の表情だったことに苦笑いするしかない。特にケッセルリンクが作るものが一番好きだった筈だ。アルベルトが生まれてから――正確には生まれる前からだが、料理をすることが増えて、今では結構な腕前となっていることもあり、ケッセルリンクがメイドの代わりに料理をすることも多くなっている。ここに一時的に住み着いてからも、定期的に誰かしら家族が会いに来て、一緒に食事をしたり、家族の時間を作っていたりするのだ。エルシール達メイドも、交代でアルベルトの世話をしている。メイド達にとってもアルベルトは大切なお方なのだ。
　そんな彼が、友達が欲しくて、珍しく我儘を言うのであれば、少しくらいはフォローしてやるのも悪くないのかもしれないと、エルシールがそう思った時だ。
「――まあ、多分一人くらいなら問題ないとは思うけどね」
「！　むっ、くっ……!?」
　飛んでくる声と共に攻撃が来て、アルベルトは防御を行った。軽く吹き飛ばされながらも体勢を立て直し、壁に着く頃には既にアルベルトも戦闘態勢に入っている。それを見て、メリルなどは身体を反射的に跳ねさせた。
「あ、アルベルト様……!?　けほっ、一体何が……!?」
「大丈夫ですから、そこを動かないでください」
「誰かと思ったら……またそういう感じですか……！」
　あまりにも突然過ぎる修羅場にメリルはビビるが、白兎などは軽く息を吐きながらも落ち着き、ただ刀に手を掛けている。
　そしてエルシールも一瞬、糸を出しかけ、相手を察知して反射的に攻撃を止めて、理解してから再び攻撃の手を進めようかと迷った。

知っている仲だが、アルベルト相手への奇襲は見過ごせないと眉を立てかけ、しかし、
「――手を出すなッ！」
「っ！　はい……！」
そのアルベルト本人にそう言われてしまえば、大人しくする他ない。
だが、せめてもの抵抗として襲撃者を半目で、なおかつ軽く睨むように見る。抗議の視線を送りながらも眺めるのは二人の戦闘だ。
アルベルトが素手の構えを取って直ぐに、相手はその場から消えてアルベルトの背後に移動した。しかし、
「それも読んだ……！」
「っ！　へぇ……！」
アルベルトの身体が霧になり、襲撃者の攻撃をすんでのところで躱す。攻撃を読んでいなければ出来ない動きに襲撃者が喜悦の笑みを口端に浮かべた。
「一本、取らせて貰う……!!」
「ははは、取れるものならやってみなッ！」
一瞬にして距離を詰めるアルベルト。
密着にも近い近接戦闘。そこはアルベルトの距離だ。
だが相手はだからといって簡単に攻撃を当てさせてくれる相手ではない。それはこの場にいる誰もが理解している。
当然、アルベルトもだ。
しかし、だからといって諦める彼ではない。
「〝衝撃拳〟……ッ!!」
「あ、マズいですね」
「え……？　わぁっ!?」
アルベルトが拳を握った瞬間、白兎が何かを察知してメリルを背後に隠す。そのまま刀を居合のように構えて、安全を確保しながら告げるのは、アルベルトが次に起こす技と現象の説明だった。それは、
「衝撃がこっちまで飛んでくる可能性がありますからね。念の為、私の後ろに隠れていてください」

「！　は、はいっ……！」
コクコクと首を縦に振るメリルをエルシールも横目で見た瞬間、アルベルトは拳を襲撃者に向かって放ち、
「――!!」
刹那、拳から衝撃が突き抜け、相手の身体を打撃し、そのまま背後の壁をも破壊した。
遅れて吹き飛ぶ相手と破壊の痕に、メリルは目を見開き、白兎は僅かに飛んできた衝撃の余波を軽く見えない剣で逸らす。
エルシールも軽く腕を前に出して風のようなそれを防ぐと、衝撃が収まったところで声を掛けた。
「……勝ちましたか？」
「――いや……避けられた」
と、アルベルトは拳を握りながら冷静にそう答える。
すると拳によりピンポイントで吹き飛んだ壁の奥から――ではなく、一瞬にしてその場に現れる影がある。それは、
「いやぁー、また腕が上がってるねぇ……！　愉しくなってきたじゃない、アルベルト」
「あ……」
メリルがそこでようやく気づく。
それもそのはず、カラーという種族に生まれて、眼の前のお方を知らない筈がない。
黒い髪のカラーといえば、誰もが知るカラーの始祖の事だ。あの伝説の方の名前を、アルベルトは息を入れて軽く諦めながらも呆れ、
「……勘弁してくれ、ハンティさん。あんたの相手をしていたら日が暮れてしまう。今日は時間が無いんだ」
「ああ、そうだっけ。それじゃあ、その後にでも相手してもらおうかなぁ」
と、悪びれるでもなく軽い笑みで腕を頭の後ろに回したのは、やはりカラーの始祖にして、あの魔人レオンハルトの使徒、ハンティだった。
そもそも、突然現れることもそうだが、いきなり奇襲を仕掛けて腕

試しをしてくる相手など、彼女ぐらいしかいない。毎度のこととはいえ、アルベルトもよく付き合っている方だと感心する一方で、エルシールなどは抗議を続けるように声を飛ばした。
「ハンティさん……？　坊ちゃまにちょっかいを掛けるのは止めてって言いましたよね？」
「ああ、ごめんごめん。強くなってるアルベルトを見ると、どうも気が昂ってさ」
「……はぁ、全く……」
　このカラーゴリラめ、と内心で毒づく。正直、一発くらい入れてやりたい気持ちもあるが、それをしてもハンティは喜ぶだけなので何ともやり辛い。
　というわけで、後でレオンハルトに告げ口することでお灸を据えて貰うとしようと、エルシールはやり返すことを決めておく。メイド長として情けない限りだが、こうするのがハンティが一番困ることだと理解しているが故のやり口だ。
　ケッセルリンクとアルベルトはそこまで問題視していないが、メイド達の総意として、あのカラーゴリラに影響されて野蛮に育ったりしたら目も当てられないということで、かなり注意しているのだが、相手も強敵である。アルベルトを出来る限り強くしたいようで、こういった奇襲訓練を繰り返しているのだ。
　だがまあ、こちらにももう一人頼もしい味方がいる。それが、
「――ハンティさん？　今日は私の可愛い弟が初めて友達を作った大切な日です。だから手合わせは遠慮して貰えると助かります」
「おおっと……白兎まで……ははは、さすがだね」
　ハンティが眼の前で起こった現象に軽く目を見開き、そして笑みを浮かべる。
　気がつけば、白兎は誰にも気づかれずに刀を抜き、その刀身をハンティの首筋に当てていた。
「えっ……けほっ、いつの間に……？」
「白兎姉の抜刀……また速くなっているな……」
「……正直、私にはもう全く見えませんね」

辛うじて気づいたのはアルベルトに、ハンティくらいだ。その二人も、意も読ませぬ抜刀に汗をたらりと流す。真正面で相対でもしていれば、さすがに為す術なく斬られるということはないのだろうが、単純な速さも然ることながら、気配の隠し方が絶妙過ぎる。

少なくとも白兎が攻撃の意志を持って刀を抜いたことを、この場にいる誰もが気づけなかった。

それはまるで父親の様な、起こってから相手に気づかせ、気づいた時には只々戦慄する――背筋が凍りつくような剣の冴えだ。

アルベルトが生まれてからの数年で更に強さに磨きがかかっていると、アルベルト以外の者達の誰もが気づいてしまう程の成長。

剣の腕もそうだが、やはり精神的な成長が一番大きいだろう。

その有無を言わせない気迫は、やはり父に似ている。ハンティも、さすがに主である父親と全く同じ気を纏わせてそう言われると、従わざるを得ないのか、面白そうに白い歯を見せて、きししと笑みを浮かべながらも、

「――分かったよ、今日は諦める」

大切な日みたいだしね？　とアルベルトを見ながら言う。するとアルベルトも、

「……そうだ。今日は、メリルの病気の件と、家に住まわせて貰えないかの提案。そして、オムライスの日だ。だから今日は難しい」

「……いや、オムライスはどうでもいいでしょ？」

「――重要だ」

「……さいですか」

ハンティが諦めたように半目を向けて頭を掻く。そして気を取り直し、

「でもまあ、お願いするならちょうどいいかもね」

「……どういう意味だ？」

と、アルベルト。その質問にハンティは簡潔に答えた。だって、と、

「――もうすぐで、レオンハルトも来るし」

カラーにとって、魔人レオンハルトというのは、特別な存在だ。
人間の魔人。元の種族からして部外者である彼を、ただ魔人だからといって特別扱いする義理はカラーにはない。
しかし種族などは、レオンハルトに限って関係ないのだ。それほどに、カラーにとってレオンハルトは恩人なのである。
歴史上、カラーを何度も救い、カラーの始祖ハンティ、元女王のケッセルリンクやペール、インデックスなどと縁を結び、このペンシルカウの創設にも関わっている。今なお里への個人的支援を続けており、魔軍がカラーを襲うこともないように配慮してくれている。
カラーにとっては、子供にすら語り継がれる英雄であり、更にはアルベルトの父親でもあるのだ。
今はアルベルトに里中のカラーが夢中だが、レオンハルトの人気も同じ様に根強く、里に来た際はその姿を一目見ようと人だかりが出来る。
故に、子供とはいえカラーであるメリルにとっても、雲の上のお方というイメージだ。ついさっき、友達となったアルベルトの父親とはいえ、直ぐにそのイメージを払拭することは出来ない。友達の父親という風な気軽な存在とは思えない。
――のだが、
「――――好きにしろ」
と、開口一番。お願いしたアルベルトの言葉に対し、レオンハルトが口にした言葉がそれだった。
壁の壊れた応接間。そのソファーに腰掛けたレオンハルトは、アルベルトとメリルを見て目を伏せると、息を吐き、
「……むしろ、いつになったら友達が出来るのかと不安に思っていたところだ」
「ありがとうございます、パパ……！」
「あ、ありがとうございます……けほっ」
アルベルトと共にお礼を言う。これからお世話になるのであれば感謝を告げるのは当然の事だ。
だが腑に落ちていない様子の白兎は、父親に向かって浅く首を傾げ

ながら、
「……家に人を連れてきてはいけないというのは何だったんですか？」
「……そのルールはあくまでも〝勝手には連れてくるな〟ということだ。普通に許可を出したら、幾らでも連れてくるだろう……特に白兎は」
「むっ、失敬な。そんなことしませんよ。私は子供じゃありませんのでっ」
頬を膨らましながら怒る白兎は、見た目だけで言うと明らかに子供だった。
だがレオンハルトは、白兎の怒りを軽く苦笑で受け止め、そして再びメリルに目を向けると、
「何か邪念を抱くような相手であれば考えるが……メリル、だったか。俺の見立てでも、悪い子でないことは見て取れる。むしろ、極めて純真だ。だから好きにしろ。手配もしておいてやる」
「そ、そんな純真だなんて……けほっ、わたし、そんなに良い子ではないです。今も、お世話になれば、美味しいオムライスを毎日食べれるんだろうなって、そんな邪心を抱いてしまっています……！」
「……なるほど、いい考えだな。パパ、今日からそうしよう」
「栄養が偏るから駄目だ……と、それは置いといてだ。その程度の事を邪心とは言わない。それが邪心だと言うなら、殆どの生物は極悪人になってしまう」
「ははは、ほんとだよね。それで邪心なら、うちの城にいる連中は皆とんでもない極悪人だ」
「そんなことよりも、私は毎日おうどんが食べたいです。そして、実は食べてます」
「何……!?　白兎姉、好物ばかり食べるなんてズルいぞ……！」
「ふふん、私は大人だからいいんです。アルベルトはまだ子供なので、好き嫌いせずに何でも食べることを覚える時期ですからしょうがありません。……というわけで、今日はオムライスの中にアルベルトが苦手なグリンピースを――」

「ッ!!　白兎姉！　後生だ……！　それだけはやめてくれ……！」
「ふふ、好き嫌いをしては私の様な立派な大人になれませんよ、アルベルト。これも試練です。あなたの苦手を克服させるために、お姉ちゃんは心を鬼にして――」
「――白兎。しばらくうどんは禁止だ。そして、そういうことはピーマンを食べれるようになってから言え」
「――横暴です!!　ピーマンなんて食べれなくても全く問題ありません!!　嫌いなものを無理矢理食べさせるのなんて酷いですよ!!」
「白兎姉、さっきと言ってることが違うんだが……!?」
「私は大人だからいいんです！　食べれないものはどんなに努力しても食べれませんから!!」
　白兎の言葉にアルベルトが立ち上がり、〝ならオレも毎日オムライスがいい！〟と子供過ぎる発言を口にする。
　気がつけば何故か、食べ物の好き嫌いと今晩のメニューについての議論が始まってしまっていて、
「……えっと、どうなったんですか……？」
「……話はまとまってると思いますよ」
　いつもの事なので、エルシールは慣れている。ケッセルリンクなどは、こういう場面だとニコニコと楽しそうにしているので、騒ぎになっても殆ど止めることはないし、メイド達も眺める癖がついた。そういう時間を、主や周囲の者達は大切にしているのだと。
　とはいえ、今日見たばかりのメリルが戸惑うのは無理ないことではある。ハンティなどが肩を竦め、
「とりあえず、城に着いてから病気の治療かな。食事は好きにしたらいいんじゃない？　そこのレオンハルトだって好き嫌いあるんだし」
「何!?　まさかパパも……！」
「本当だとしたらパパも人の事言えないじゃないですか!?」
「……余計なこと言いやがって……」
　と、ハンティに恨めしい視線を向けるレオンハルト。苦虫を噛み潰すかのように表情を少し歪めた後、しかしレオンハルトは薄く笑い、
「別に食べようと思えば食べれる。ただ、好んで食べることはないと

いうだけだ。苦手な物も、不思議と食卓には出ないからな、ふふふ」
「ず、ズルいです！　それ、料理人が気を使って出してないだけじゃないですか!!　忖度です！　横暴です！」
「……なるほど。その手があったか。ならばオレも、コックに向かってさり気なくオムライスが食べたいと圧を掛ければ……」
「あの、普通にお願いしては駄目なんですか……？　けほっ」
　メリルが最後にそんなことを言うが、エルシールとしては、平然と三人の会話に入り込んでいけたことが驚きだった。肝が据わっているのか、子供特有の恐れ知らずなのか。とにかく、メイドとしての適正はありそうだな、と軽く現実逃避気味にエルシールはアルベルトの初めての友達をそう評価した。

実家

魔人が治める街、レオンハルトシティ。
その中心部にある紅魔城に、メリルを連れたレオンハルト達は一瞬で到着した。
城の中に存在するとある一角。幾つかの魔法陣が床に描かれた部屋。その魔法陣の上から出てきたのはやはり、先程までペンシルカウにいたレオンハルト一行だ。
だが驚いているのはメリル一人である。幼く、まだカラーの森以外の多くを知らない少女は、その赤い城に到着した瞬間、純粋に目をキラキラさせて、感嘆の表情を浮かべた。
「す、すごいです……！　けほっ、こんな一瞬で遠く離れた場所に移動出来るなんて……！」
「……ただの転移魔法陣だ。それほど珍しいものじゃない」
「そうなんですか⁉　やっぱり、森の外は凄いんですね……！」
「いや、一般人基準だとかなり珍しいものだけどね……」
メリルの感動に、アルベルトはズレた回答を行う。生まれた時から魔人である彼にとって、魔人の秘術というのはそれほど珍しいものではなかったが、魔人以外には知られていなければ使うこともない魔法は、一般人基準だと十分珍しいものである。
故にハンティはズレた感性のアルベルトに半目の笑みを向けながら訂正を行うが、メリルなどは聞こえていないようで、けほけほと咳き込みながら床に幾つか描かれた魔法陣を見て声を上げていた。
それを何となく近くで説明しようとするアルベルトは、仲良くなろうとしているが、仲良くするやり方がいまいち分からないようで距離を測りかねているようであり、微笑ましい光景だと思える。
レオンハルト、ハンティ、エルシール、白兎といった四名はそれを見守っていたが、直ぐに迎えの声が聞こえてそちらに身体を向ける。出迎えてくれたのは、やはりと言うべきか、
「――お帰りなさいませ、ご主人様。お嬢様に若様。皆様方も」
「ああ」

「ただいまです、メイド長」
いつの間にか、ハンティの瞬間移動ばりの唐突さでその場に現れて、優雅に一礼してみせたのはメイド服を着た銀髪の美女。
この紅魔城のメイド長を務める突然変異体の女の子モンスター、メイド長さんだった。
彼女はメイドの務めに従い、主人とその子供、使徒という目上の存在を出迎え、主人の頷きを確認した後、メリルの方にも目を向ける。そして自然に、
「若様のお友達の方もようこそお越しくださいました」
「あっ……ご丁寧にどうも……けほっ、メリル・カラーと言います」
よろしくおねがいします、とぺこりと挨拶をしてみせたメリルに、メイド長さんも笑みを見せる。小さいのに礼儀が出来ていることに感心と微笑ましさを感じているのだろう。
実際にそれを口にしないのはメリルのその対応で、一人の淑女として見ることにしたからだ。
小さいのによく出来ている、というのは子供扱いしているようで微妙に失礼だということ。実際に子供なのだし、それを告げてもメリルが失礼に感じることはないだろうが、仕事に対しては真摯なメイド長さんはお客様に対してそれを告げることを遠慮しつつ、アルベルトが声を発する気配を感じ取ってそちらに身体を向けた。何を言っても対応出来るように、予測とその準備を行いつつ、
「メイド長。悪いが、メリルの為に薬と治療の手配をしてくれ」
「畏まりました若様。見たところ、けほけほ病の様ですね。直ぐに手配させて頂きますので、少々お待ちください」
「頼む」
アルベルトのその発言に、メイド長さんは何ら動じることなく了承する。それを見ていたハンティが苦笑交じりに、
「……いや、いきなり友達って分かったり、病気の判断したりとか、相変わらずの意味不明さだよね」
「メイド長さんはメイド長さんなので、常人の論理を当て嵌めるのは無駄ですよ、ハンティさん。メイド道を極めると、主人やお客様の要

望を予測――いえ、予知してしまうと言われています……！」
「……エルシールもそういやメイド長の弟子だったね。もしかして、エルシールもそういう……？」
「いえ、私などまだまだ未熟で……師匠には程遠いです。今の私はマスタークラスでも下の方。師匠はマスターロイヤルの称号を持つ最高位のメイドで、その力はマスタークラスのメイド、十人分にも相当する……！　主人が紅茶を望んだその瞬間には、既に紅茶がカップに注がれている、モーメントティーなど、数々の冥土奥義を始めとした――」
「絶対冷めてるよね、それ……」
　迫真の表情で説明するエルシールに、ハンティはげんなりとした表情を浮かべた。ケッセルリンクのところのメイド長でもあるエルシールは、もう何百年前からメイド長さんの一番弟子として師事しているためか、もうとっくにあっちの世界の住人というか、訳の分からないことを口走る、常識人の皮を被った異常者となってしまっている。
「全く……異常者だっていう自覚がない人は怖いね……」
「お前が言うな」
「……パパが言っても説得力が無いな……」
「アルベルトも十分おかしいですけどね。まともなのはこの私くらいです」
「お前達も言うな」
　レオンハルトがハンティにツッコミ、それを横から割って入ったアルベルトに更に白兎がツッコミ返し、またレオンハルトが子供二人にツッコミを入れる。異常者達が勝手に身内で潰し合っているようなやり取りを見たメリルは、妙にそわそわとしながら、
「……わたしも混ざった方がいいんでしょうか……？」
「――やめておいた方がいいですよ……死ぬほど疲れることになるか、異常者に取り込まれるかの二択なので……」
　と、途中で何やら苦労人オーラが窺い知れるような気配と、達観した雰囲気を持ち合わせた声がその場に響く。メイド長さんの背後に

ある通路から現れたのは、毛先が少し癖のある桃色のセミロングヘアーの少女であり、白兎の友人であった。
「あっ、イヴさん。ちょうどいいですね。皆に教えてやってください。誰が一番、この中でヤバいのかを」
「私基準だと白兎さんに一番苦労させられてるので白兎さんって答えますけどそれでもいいなら言ってあげますが――」
「――やっぱりいいです」
「きき!」
　真顔で親友であるイヴにそう言われてしまえば、さすがの図太さを誇る白兎でも引き下がらざるを得ない。イヴの肩に乗っていたはぐれ使徒の猿、藤吉郎が白兎の肩に飛び移り、〝元気だせよ〟と言った風に腕組みをする。その甲斐あってかは分からないが、白兎がこほんと咳払いを一つ行い、
「ですが、ほんとにちょうどいいですイヴさん。こちらのメリルさんがこれから、アルベルトのお友達としてここのお世話になるので、先輩として色々と教えてあげてください」
「アルベルト様のお友達ですか……」
　と、白兎にそう言われ、イヴもメリルの方を見る。するとその視線に気づいたメリルが笑みを浮かべ、
「メリル・カラーと言います。よろしくお願いしますね……けほっ、ええと、イヴさん」
「……ええ、こちらこそよろしくお願いしますね」
　と、イヴは自然にその挨拶を受け入れて軽く握手する。するとすぐに何かを読み取りつつ、
「……そうですか……貴方も、こちら側に来るんですね……」
「こちら側……ですか?」
　何のことか分からずにこてんと首を傾げるメリル。しかしイヴは相変わらず憐憫に満ちた視線を向けており、
「いえ、いいんです……これから私達は仲間……いえ、異常者に苦労させられる同志ですので、辛いことがあれば直ぐに私に相談してくださいね……!」

「え……は、はい……？」
ガシッと手を両手で掴まれながら迫真の表情でそう言うイヴだが、メリルは頭に疑問符を浮かべており、いまいち伝わっていない様子だった。
そして、その流れとは別にとある人物もやって来た。
それは集団。付き従う者達が四名に中心にいる主が一人。そしてその者は、アルベルトがある言葉を生まざるを得ないものだった。彼は僅かに目を見開いて、その言葉を宙に飛ばす。
「ママ……！」
「――ああ、おかえり。アルベルト」
ママ。アルベルトのその言葉が示す相手は一人しかいない。
魔人四天王の一人であり、かつては夜の王としてカラー集落の長を務めた女傑――ケッセルリンク。
魔人の中でも上位として知られる彼女は、しかし、普段見られるような冷たい気は鳴りを潜め、身内用の暖かい雰囲気に満ちていた。
周囲にエルシールを除いた四体の使徒――シャロン、パレロア、加奈代、バーバラを従えながらも、愛する息子の声に柔和な笑みで出迎える。そして傍らのエルシールにも目を向けると、
「只今戻りました、ケッセルリンク様」
「ああ。エルシールもご苦労だった」
「勿体なきお言葉に感謝致します」
同じ様に出迎えてくれる主に畏敬を示しながら礼を返す。望んでやっていることだからと、エルシールは師に倣ってその姿勢を崩さず、自然にその動作を行う。
すると続いたのは他の使徒メイド達だった。各々、アルベルトに対して礼をしつつ、
「お帰りなさいませ。アルベルト様」
「アルベルト様、また少し大きくなりましたか？」
「ふふ、お早い成長ですね」
「あら、少し服の裾が汚れてるわね……直ぐに取り替えましょう。さあ、坊ちゃま。服を脱がせますから両手を上げてください」

バーバラ、パレロア、加奈代、シャロンといった順に声を掛けられるアルベルト。特に、シャロンがいつもの圧を伴った笑みでアルベルトに近寄り、服を脱ぐように言うと、アルベルトは困ったように眉間に皺を寄せた。他の面々も含めて、彼女達を見ながら諦めたように吐息を吐くと、

「……子供扱いはよしてくれ、シャロン。服くらい自分で脱げる」

「駄目です。坊ちゃまは我らが主、ケッセルリンク様の息子で、生まれながらの魔人なのですから、使徒でメイドである私達にとっては主も同然。そんな尊きお方に、自ら服を脱がさせるなどさせてしまってはメイドの名折れです」

「そうですよ～、坊ちゃまはメイドのお仕事を奪うつもりですか？」

「アルベルト様のお世話は私達の使命ですからね」

「……まぁ、どちらにせよ、夕食前に汚れを落として頂かねばなりませんし、このままお風呂に向かって頂けると助かります」

「……パパ、助けてくれ」

「……これも試練だ、アルベルト。今のうちに人の使い方を学ぶといい」

メイド達の可愛がり攻撃にアルベルトがたまらず父親に助けを求めるが、レオンハルトにはそれっぽい言葉で突っ撥ねられる……実際には、シャロンの無言の笑みによって怯み、呆気なく撃退されてしまっていた。顔を逸らし、その視線を、息子からの助けを泣く泣く拒否すると、アルベルトは使徒メイド達に取り囲まれて服を脱がされていく。

するとその間に、ケッセルリンクは微笑ましい視線を一度切り、初対面の少女に顔を向けた。

「……君は？」

「あ、はい。けほっ、メリル・カラーと言います、ケッセルリンク様。その……アルベルト様……君の、お友達をさせてもらってます」

母親に相対して、先程までのようにきちんと挨拶を行うメリル。さすがに少し緊張していたようだが、先にレオンハルトと会っていたこともあり、それほど萎縮せずにカラーの作法に則った礼を行った。ア

ルベルトに対しての呼び方などはまだ迷っている様だったが。
　それを聞いて、ケッセルリンクは魔人としてではなく、母親としての顔でメリルを見ると、
「……そうか」
　と、一度頷き、何やら感慨深そうに間を置いて、
「……メリル」
「あ、はい。何でしょうケッセルリンク様。……けほっ」
　ケッセルリンクが少し屈み、メリルと視線を合わせると、小声でアルベルトに聞こえないように、
「アルベルトと仲良くしてくれると嬉しい」
「あっ……は、はいっ！」
　メリルの返事を聞いて、ふっと笑みを浮かべると、屈んでいた姿勢を元に戻し、
「今から厨房を借りて夕食を作るところだ。少ししたら、アルベルトと共に君も食堂に来なさい」
「！　はいっ、ありがとうございます！」
「ふっ……アルベルトは先にお風呂に入ってきなさい」
　今度はアルベルトに向かって言う。するとメイドに半ば服を脱がされかけているアルベルトが顔を戻し、
「それはわかったが……ママ。今日の夕飯は――」
「――アルベルトの好きなものだよ」
「！　風呂に行ってくる……！」
「あっ！」
　母親から望む言葉を耳にしたアルベルトは現金なもので、自らの身体を霧と化してメイド達の拘束から逃れると、少し離れたところで身体を元に戻し、そのまま大浴場まで一直線に走っていった。
　それを見たシャロンは、
「……お世話したかったのに……」
「……今日は諦めましょうか」
　と、残念そうに呟き、同様にエルシールがメイド達をそう纏める。
傍らではレオンハルトが半目を向けながらも、息を入れ、ケッセルリ

ンクに向かって、
「……同じものばかり食べさせるのはどうなんだ？　少しくらい、苦手な物も挑戦させた方が……」
「うむ、それもそうかもしれないが……私が作る時くらいは好きな物を食べさせてあげたいと思ってしまうんだ」
「やっぱり、こっそりとグリンピースを入れてあげましょう！」
「それじゃあ白兎の皿にはこっそりとピーマンを入れるべきだな、ケッセルリンク」
「ふふ、ならそうしよう」
「――あ、やっぱりいいです！　好きなものばかり食べましょう！」
「変わり身も神速ですよね、白兎さん……」
　アルベルトの食事に苦手なものを混ぜてあげようとした白兎がまたしても反撃を受けて、イヴから呆れの視線と声をもらってしまう。冗談だったのか、そこで夕飯の具材については話を切り上げ、レオンハルトが、
「それより白兎。紅月が今日は食後のデザートとしてお前の好きな白玉あんみつを作るって言ってたぞ」
「！　それは本当ですか!?」
「ああ。お前も今のうちに先に用事を済ませてこい。俺が出した宿題がまだ残ってるだろ」
　レオンハルトがそう言うと、うっ、と白兎が短い声を出す。微妙に嫌そうな表情で、
「そういえばそうでした……しかし……中々難しいんですよね……」
「分からないところがあれば聞きに来い。もしくはイヴや藤吉郎にも手伝ってもらえばいい」
「それもそうですね。では行きましょう。イヴさん、藤吉郎」
「やっぱり私にお鉢が回るんですね……あははー……はぁ」
「きき！」
　白兎がイヴと藤吉郎を連れて廊下に出て行く。
　すると残ったのは魔人二人と使徒達。それとメリルやメイド長さんのみで、

「では私は厨房に行ってくる。レオンハルトも楽しみにしておいてくれ」
「言われなくても、いつでも楽しみにしているさ。お前の料理は本当に美味しくなったからな」
「誰かのおかげだ」
　ん、と二人はそう言って自然な様子で近づき、唇を軽く合わせる。そのナチュラルな甘い雰囲気は恋人を通り越して夫婦にも見えるものだ。実際、１５００年以上の付き合いなのだから、並の恋人とは文字通り、年季が違う。周囲としても、レオンハルトとケッセルリンクに関しては見慣れたものなので殊更騒ぎ立てるようなこともない。そのやり取りを交わしてケッセルリンクが使徒メイドを連れたって厨房へと向かっていくと、残ったメリルに近づいてメイド長さんが、
「ではご主人様。私はメリル様の治療を進めておきます」
「ああ。それと、彼女はアルベルト付きのメイドを希望だそうだ。まだ本格的に教える必要はないが、さわりだけでも軽く教えてやってくれ」
「畏まりました。――ではメリル様。私に付いてきて頂けますか？」
「あ、はいっ。けほっ、お、お願いします……！」
　と、メイド長さんが僅かに緊張するメリルを先導して廊下へと出て行く。
　転移魔法陣を敷き詰めたその部屋に、最後に残ったのはレオンハルトとハンティであり、静かになったその場所でハンティが軽い笑みと共に、
「さぁて……それじゃ、ちょっくら付き合って貰おうかな？」
「……いいだろう――と、言いたいところだが、お客様が俺をご所望でな」
　と、レオンハルトが背後を軽く手で指して言う。するとハンティは相手を察して微妙な表情になり、
「あー……それじゃあしょうがない。適当にライゼンか戯骸でも殴ってくるよ」
「……せめて一声くらい掛けてやれ」

「大丈夫大丈夫。どっちも全然効かないしね」
そういう問題か？　とレオンハルトは訝しむが、そう指摘する前にハンティは瞬間移動で何処かに消えていってしまう。多分、数秒後にはどちらかが殴られてるんだろうな、と己の使徒の血気盛んさを改めて確認しつつ、レオンハルトは背後の扉から廊下に出た。
するとそこにいたのは――長い黒髪を持つ和服を着た美女で、
「……お話があります」
と、相変わらず無愛想な、硬い表情で言う相手に対し、レオンハルトは一度だけ鼻を鳴らし、相手の名を呼んだ。
「ふっ……そろそろ答えは出たのか？　――日光」

「……生憎と、答えはまだ出ていません」
魔人レオンハルトの問いに正直に答えた日光は、人気のない廊下で彼と視線を交わす。
話すことはこれまで、何度も考えてきたことで、数年経っても答えの出ない問答だ。粛々と、日光は語り始める。
「……この城にお世話になり始めて、それなりの年月が経ちましたが……やはり、ここは不思議な場所ですね」
「居心地悪いか？　魔人を倒すことの出来る剣の身としては」
日光は魔人の持つ無敵結界を斬り裂くことの出来る聖刀となった身である。
人間の姿にこそ戻れるが、今の彼女の存在意義は、使い手を探し、魔人を滅することにあるはずだ。
そして、そんな魔人を倒せる彼女だからこそ、魔人の居城であるこの場所にお世話になることは、当人の感情的にも居心地が良くないのではないかと、問うた。
しかし日光は、首を横に振った。
「いいえ――むしろ、良すぎるくらいです。魔人を倒すことの出来る武器の身で、そちらに良い感情を抱いていない相手だというのに……ここの住人は、そんなことを忘れてしまったかのように、親切にして

くれています」
そう。本来なら、日光が良くされる理由はない。
元々秘密を知ったことに対する監視も兼ねた軟禁ではあるが、そもそもとして魔人レオンハルトというここの絶対者に仇する者など、酷い仕打ちを受けても仕方がないはずだ。
しかし現実はそうはなっていない。むしろその逆。不自然に感じてしまうほどに、居心地が良い。
「同じ人間……いえ、それ以外の者達も、私に対して普通に接している。敵に対しての対応ではないかと」
言う。自分達は敵同士の間柄の筈だと。
しかしレオンハルトはそれには同意しなかった。苦笑しながら、その言葉に対しての反論を作る。
「敵、か。お前はそう思っているようだが、殆どの者はそう思っていない」
「……そんな筈は……」
ない。と言い切ることが出来ずに日光は言葉を止める。
実際に敵に対する対応ではないと感じているのは自分自身だったからだ。
だからこそ、次のレオンハルトの言葉に対しても、日光は言葉を作ることが出来なかった。
「お前は確かに、魔人を倒すことの出来る力を持っている――が、それだけだ。力を持っているだけで、実際にまだお前は、俺自身を斬りつけた訳でも、何かをしでかした訳でもない」
反論出来ずに続く言葉を聞く。レオンハルトは真面目な表情で、
「お前は魔人を倒すことの出来る聖刀――という肩書を持っているだけだ。ここの人間は、肩書だけを見てその相手を判断することはしない。まずはその相手自身を見る」
この俺もそうだ、とレオンハルトは言う。その上で、日光はようやく声を作った。
「……ならそれは――」
「お前が良くされているとすれば、それは周りがお前自身を見て判断

した結果だ。俺は不自由はさせないとお前に言ったし、メイドにもそう伝えたが、だからといってお前に対して親切をしろだとか、仲良くしろという事を言った憶えはない」
　だからこれは、自分自身で勝ち取ったものだと、レオンハルトは言う。悪い奴であれば、自然と排斥されると言う。
「どいつもこいつも訳ありで、そうでなくとも常人よりも長い時を生きてきた連中だ。自慢じゃないが、人を見る目は肥えている。だから、悪意や打算、他人を不当に蹴落とそうとするような奴は長くは居られない。自分から出ていくか、俺が追い出すか……もしくは、忠誠心の高い一部の連中が、気を使って排除してしまうかだ」
「……殺すのですか？」
「やはり人間を拾っていると、良い奴らばかりじゃないのさ。中にはとんでもない悪人が紛れていたりもする。そういう奴は殺してしまうし、殺すほどの価値もない小悪党は適当なところに追い出す。意地汚い奴はここにいなくても、他人を蹴落として勝手に生きていくものだからな」
「……なら、ここにいるのは……？」
「他人に蹴落とされたか、何か事情があるか……何にせよ、死ぬほど運が悪いことだけは確かだ」
　人間か、魔物か。もしくはもっと単純に環境か。城にいる人間の大半は、一度不幸になった者達か、不幸になりかけた者達。何らかの訳ありの人間が大部分を占める。もっとも、幸福でいられ続ける人間など殆ど存在しないが。
　特に今の世の中だと、余計にそう感じる。世の中には不幸が、生きることを諦めるほどの苦しみが溢れている。
　そんな中で、唯一幸福に生きられるであろう場所が、この魔人の懐であった。
　そしてだからこそ、日光は解せない。
　常人とは違う魔人ではあるが、それでも人間らしい感情を備え、実際に人間を救っている力ある魔人。
　そんな彼が何故、

「……なら何故貴方は……人を救いながらも、人を苦しめるのですか？」
救いたいと思い、救える力があるのなら、それはもう救うしかないだろう。
少なくとも、日光であればそうする。そう何度も言ってきた。そしてこう言われてきた。
「……俺が魔人だからだ」
魔人だから、人を苦しめる義務があるのだと。
魔人だから、魔物の事を考えて、世の中を動かす必要があるのだと。
理解は出来る。実際に、魔物にも社会があることを日光は知った。
それを維持するために眼の前の魔人が尽力しているのも知っている。
だが、やはり人間を個人的に救いながらも、苦しめるのは、
「……魔王の所為ですか？」
魔王。
魔人達を支配する魔族の王であり、人間にとっては悪夢の具現化とも言える最悪の生物。
魔人は魔王に従うしかない。だからこそ、彼はこんな手段を取っているのではないかと、日光は思い至ったのだ。
だが、
「……それもあるが、そうではない」
普段は答えないその先に、レオンハルトはとうとう答えた。
いつもなら、ここで問答は終わる。どんな寄り道をしたとしても、最終的にはこの結論に至り、問うてみてもレオンハルトはそこで話を切り上げてしまう。
それを答えたのは何故か。日光の心境を悟ったとでも言うのか。それによって信頼を得たのか。
日光にその理由を知ることは出来ないが、レオンハルトはとにかく告げた。そうではないのだと真剣な表情で、
「もっと根本の問題だ。例え魔王が居なくとも、俺は人間を苦しめるだろう」

「っ……！」
日光が目を見開く。
レオンハルトの言葉は、それだけ衝撃的なものだった。
「仮に障害が魔王だけだったとしたら、俺はこの問題をとっくに解決している。人類全てを救い、魔物も救うことが出来るだろう」
しかしそれは出来ない。何故なら、
「――――魔王だけならな」
「……え……？」
魔王だけなら。
その言葉の裏にある意味を、日光は理解することを拒み、間の抜けた声を出してしまっていた。
薄々と日光は感じていた。
彼に言われた真実という言葉。自分達が旅の終わりで見たもの。
そして今聞いた、魔王以外の障害という言葉。
幾つかの情報があれば、発想自体には至ることが出来る。
だが、常人であれば信じない。
否――信じたくない。
人間は自分の信じたいものを、真実と思い込む。
都合の悪いことは真実と認めず、無意識の内にそうではないと思い込む。
そうでないと困るからだ。
残酷で、直視し難い現実は、実際に目の当たりにするほどの衝撃が無ければ、それを信じることは出来ない。
仮に知ったとしても、その真実の重さに心が潰れてしまう。
日光にとっての不幸は、それに至るための経験や知識を蓄え、再三の言葉や信用の置ける相手の駄目押しによって、直接的な言葉に出さずとも、気づいてしまったことだ。
「……まさか……！」
声が震える。
そうでないと言ってくれと。
ただの幼子のように頭を抱え、悪夢から逃れようと心を震わせる。

そして眼の前の魔人を見上げ、その答えを待つ。
彼の口がゆっくりと開き、
「……その様子だと、お前もとうとう気づいたか」
と、怖いほど迫真の表情で彼は言う。
日光が最も聞きたくなかった言葉を――
「――お前の想像通りだ。人間と魔物。人間が苦しむ世界構造を作ったのは、紛れもない――」
――■だ。
その言葉を聞いた瞬間、日光は何かが壊れるのを自覚した。
「あ……あぁ……」
力なく、日光は膝を突く。
とてつもなく残酷な真実。
今まで自分が信じてきた価値観の崩壊。
自分が得た力さえも、もはや信じることが出来ない。
ホ・ラガが絶望して、全てを諦めたことがようやく腑に落ちる。
ほんの僅か。その一端を知っただけでもこれなのだ。全知を得て、何もかもを知ったホ・ラガが絶望するのも無理のないことである。
そして自分も、途方に暮れるような心境だった。
そうだとして、どうやって解決すればいいのか。
今まではその答えがあった。明確な目標があった。
だがそれを仮に達成したところで、目的は達成されないのだ。
故に日光は絶望しかけた。
だが、
「――諦める必要はない」
「……え……？」
と、一筋の光が差した。
それは本来、闇であるはずのものだった。
「俺は言ったはずだ。お前が俺を信頼し、俺に協力するというなら――この暗黒時代の終わりを見せてやると」
そうだ。確かに言った。
しかし、

「……でもそれは……この時代を終わらせたところで、結局は――」
「意味が無いことはない。全ての事柄には、必ず意味がある」
力強い言葉で彼は断言する。眉を立てた表情で、
「お前が旅の果てにその力を得たことも。真実を知ったことも。この場にいることも。全部意味があるし、作れる。無駄にしなければいいだけの話だ」
彼は肯定する。人の足掻きというものを。
それらは決して、無駄になることはないと。
「お前が人を救いたいと諍い続けることは無意味とならない。俺が保証してやる」
「……何故、そんなことが……？」
「俺には言える。そして、お前に道筋を付けることも出来る。最初言っていた通りにな」
改めて彼は言う。自分を城に連れてきた時のように、
「真実を知ってなお、人を救いたいと願うなら――立ち上がり、俺の手を取れ、日光」
「――――」
彼は手を差し伸べた。
「そこに到達するためには、必ず、お前の力がいる」
日光は暫しの間、無言で佇む。
……そう……ですね……。
確かに、足掻きたいと自分は感じている。真実を知ってなお、自分の心には、人を救いたいと思う願いが渦巻いている。
それ以上の絶望によって覆い隠されようとしているが、それは確かな真実だった。
そして同時に、彼の事を信じてもいいと思う自分もいる。
彼は魔人だが、悪逆非道な人物ではない。
家族や友人、恋人などの愛する者を持ち、他者を慈しむことが出来る。
城の中やこの街がその証明だ。
彼が作る理想とも言えるこの場所は、人間よりも人間らしい、暖か

い時間が流れている。
まるで夢のような場所だ。今が人間にとって生き地獄と呼ばれる世界だとは思えないほどに。
そして彼には何かを行うための確かな実力がある。力、知識、経験、立場――それらも全て、自分などより遥かに人々の助けになれるものだ。
「……私でも、何かが出来ると……？」
「ああ、必ず出来る。無駄にはならない」
真っ直ぐな眼で断言される。その鋭い視線に訴えかけれられる。
日光にとって、幸運だったのは、真実をしってなお、立ち上がるだけの精神力を持ち合わせていたことと――
「……なら」
信頼出来る協力者が、その場に居合わせたことだった。
「――私の力で、役に立てると言うなら……！」
と、日光はその手を掴んでみせる。
それは彼女が、世界に真の意味で諍う――始まりとなる瞬間だった。

魔物討伐隊

広い土の大地の上に、群となった影がある。
空は曇天。日差しはそれほど差していないものの、時折、横からの光によって影が出来るのだ。
しかしその影は直ぐに数を少なくしていく。一方の影は逆に勢いを増して動きを激しくしていく。
二つに別れた影の正体。それは魔物と――人間だった。
「――っ、反撃が来るぞ！　備えろ!!」
「お、おおっ！」
人間は誰も彼もが何かしらの得物を手に持ち、防具などの装備品を一応は揃えている集団であった。
彼らはこの辺りで活動する魔物討伐隊、〝魔狩りの戦士団〟という魔物討伐隊であった。
所属隊員数五十名。魔物討伐隊としては小規模に分類される一団であり、隊員の練度も中程度。団が発足してから約五年が経っており、それなりの戦闘経験を積んでいる、まともな類の魔物討伐隊であった。
柄は多少悪いが、冒険者や魔物討伐隊に所属するような者達の多くは荒くれ者であるため、それほど珍しいことでも問題になるようなことでもない。彼らにとって、魔物を討伐することは生きる糧を得るための大事な商売なのだ。
魔物の巣になっているようなダンジョンには高価なアイテムや、食料が手に入ることもあるし、魔物の素材は商人に卸せば売ることが出来る。この世界でそれなりの旨味を吸って生きるには戦いに身を投じる必要があるだけのことだ。
故に彼らはいつもどおり、魔物を探しながらも、そろそろ何処か適当な場所に野営地を築こうとしていたのだが、運悪く、魔物の群れと遭遇してしまった。
本来なら、魔物は彼らにとっての獲物でもあるのだが、その逆も然り。魔物にとっても、人間とは野良の獣の様なもので、狩りの対象で

しかない。
業腹ではあるが、魔物討伐隊といった魔物との戦闘経験が豊富な集団であっても、同数以上の魔物と戦うのは基本的にあり得ないことだと誰もが知っていた。
人間は基本、個人の強さで魔物に劣る。勿論、鍛えれば一部の魔物を上回ることも可能だが、それは才能のある者達の話であり、基本人間は個体差を数で補い、徒党を組んで戦うのが古来よりの基本戦略だ。
故に、同数であれば負ける。一人一殺すればいい、とかそんな簡単な話ではない。魔物よりも圧倒的に強い人間が一人でもいれば多少の数の不利を覆すことが出来るかもしれないが、戦いの規模が大きくなればなるほど、それは難しくなる。
５対５。１０対１０などであれば、戦術や状態、場合によっては同数で勝てる可能性もそれなりにあるが、これが５０対５０。１００対１００などになれば、途端に勝つのは難しくなる。それだけ戦力差に開きが出るからだ。
故に同数以上はタブー。安全マージンを取るのであれば、半分以下の数を相手に一方的に叩くのが望ましい。それ以上の数に遭遇した場合の対処法は、基本的に逃げることだ。
なので魔物討伐隊とはいえ、相手に出来るのは少数の群れ程度。大規模な群れや、ましてや魔軍などを相手に出来るのは、魔物討伐隊の中でも１０００に届く隊員数を誇る大規模な一団くらいであるし、そんな一団は片手の指で足りるほどしか存在しない。
そんな界隈では誰もが知る有名な魔物討伐隊であっても、魔軍のたった一個軍、二万の数には逃げるしかなく、相手を出来るのは哨戒や人狩りに出ている魔軍の分隊などである。
同業者の噂話だと、冒険者たった五人で魔軍の一個部隊、二百名を壊滅させられるほどの腕を持った冒険者もかつては居たと聞くが、今では眉唾ものだと殆どの者に信じられてはいなかった。
だから彼らは自分達を超える数の魔物と相対した時、真っ先に逃げることを考えたし、成功していれば逃げていたはずだ。

だがそうはなっていない。彼らの不幸はそれだった。
しかし、不幸中の幸いがあるとすれば、それは――彼がいることだった。
「――〝デビルビーム〟！」
「ッ!!」
魔法光が発生し、それと同時に闇の線が魔物の前面を叩いて死滅させた。
それを行ったのは動きやすい比較的軽めの鎧に身を包む、右目側だけを隠すような長い前髪を持った青年だった。
左手にロングソードを持ち、右手で魔法を放つ彼は、少し前にこの魔物討伐隊に所属しはじめた魔法剣士である。その名を、集団の前線に近い中心で指示を出す隊長は呼びつけた。
「――ガイ！　まだ行けるか?!」
「……ああ、問題ない」
暗い印象を感じさせる低い声が答える。長い前髪や表情の乏しさから陰気だと陰口を叩かれるガイだが、戦闘面での貢献は群を抜いていた。
「――〝ライトニングビーム〟!!」
彼は再び魔法を発動する。今度は雷の上級魔法だった。
魔物が雷の槍に貫かれ、一部が絶命し、その周囲にいる魔物にも多少の傷と痺れを与える。
それと同時に、ガイは魔物の群れへと突っ込んでいた。
「ふっ！」
「――！」
「グアッ!?」
「ぶぐぅっ――」
左手の剣を振るい、一刀で三体の魔物を屠る。魔物の血飛沫。断末魔を気にも掛けず、ガイは次の魔物に向かって斬りつけ、同時に魔法も放っていた。
「っ、今だ!!　押し返せ!!」
「あ、ああっ！」

「行くよっ！」
ガイが単身で魔物の群れの中で暴れたことで、魔物の群れに綻びが出る。それを見逃すことなく、隊長は指示を出し、隊員達もガイの強さに戸惑う者を出しながらも前に出て血に飢えた得物を振るった。
中心で暴れるガイだけに注力することは出来ない。故に魔物の群れは混乱し、剣や魔法に倒れ、次々と数を減らしていく。
数が少なくなってくると、逃げる個体もいた。魔物は基本的に、集団行動を得意としない。魔物の群れも、ただそこに何となく集まっていたりするのみで、意志の統一は殆ど取れていないのだ。
故に形勢が悪くなると逃げる者も出てくる。人間のように、指示を出せるような魔物は魔物の中でも数少ない。
そういったことが出来るのは、それこそ魔軍に所属する魔物隊長や魔物将軍といった魔物くらいであり、他にはバトルノートのような一部の魔物くらいである。だがそれも、魔軍以外だとあまり見ないレアなモンスターであり、冒険者や魔物討伐隊が相手にすることは少なかった。
彼らのような魔物がいれば、魔物は統制の取れた集団行動を取ることが出来る。そうなればキツいが、今はそういったことはない。
故にガイが活躍を見せてからの１０分後には、その場に生きた魔物はいなくなっていた。
「ふぅ……ヤバかったな……」
「ああ、疲れたぜ。さっさと剥ぎ取りを済ませようぜ」
「だが……へへっ、今日は飲み明かせそうだ」
と、ほっと胸を撫で下ろし、魔物の素材や落としたＧＯＬＤなどを集めていく魔物討伐隊の面々。ピンチではあったが、それを乗り越えた後の旨味は格別である。ＧＯＬＤを集め、魔物の素材などを商会などに売れば、五十人の人間が宴会したとしても大量のお釣りが来る。これでしばらくは食べるにも呑むにも困らない。
多くの者はそうやって徐々に欲に塗れた笑みを浮かべ始めていた。
そんな中、戦いの貢献者であるガイは、誰の輪にも混ざらず、一人で黙々と魔物の素材を集めていた。それを見た隊員達は、

「アイツ、戦いに勝ったっていうのに喜びもしねぇぞ……」
「ああ、不気味だよな……話にも混じってこねぇし、何考えてんだか……」
「あんな陰気な奴ほっとけよ。それより――って……」
隊員の一人が、誰かを探して周囲を見渡したところで、その姿を発見する。
だが声を途中で止めたのは見つけたからではなく、見つけた相手が、その人物に駆け寄っていたからだ。
「――ガイっ！」
「ん……」
と、それは見渡す限りの男所帯の魔物討伐隊の中において、唯一の高い声だった。
ガイも自分の名を呼ぶ声に反応し、振り返る。するとそこにいたのは、やはり女性であった。
「……トーチカか。何か用でもあるのか？」
「用はない、けど……でも、その……ガイは、今日も凄く強かったねっ！」
ガイがトーチカと呼んだ女性は、この魔狩りの戦士団の紅一点の隊員であった。
小麦色の肌と戦いの邪魔にならないように短めに切り揃えた黒髪。小柄だが出るとこが出ていて、顔立ちも整っている。この隊のムードメーカーであり、明るい印象をもたせる彼女は、紛れもない美少女であった。
誰に対しても分け隔てなく接し、笑顔を絶やさない彼女はしかし、得物としている槍を後ろ手に持ちながら、何やらぎこちない様子でガイに向かって話しかけていた。
それはひょっとしたら、無理して話しかけているのかもしれないが、それは彼女の頬が僅かに赤みがかっていることと、チラチラとガイのことを見たり、視線を逸したりとしていることから、別の事実を浮かび上がらせる。
しかしガイはそんなことを気にもせず、

「……大したことではない。いつもどおり戦っただけだ」
「それが凄いんだよっ。ボク達だけだったら、あれだけの数の魔物なんて倒せっこないんだし……その、だから、ガイは強いし……か、かっこいいと思うよっ」
と、何やら意を決したように言うトーチカに対し、ガイは暫しの間無言となりつつも、
「……そうか」
と、素っ気なく一言で終わらせた。
だがそんな反応すらも、トーチカは笑顔になり、
「え、えへへ、そうだよ。だから……えっと、これからも、頼りにしてるからねっ！」
それじゃあまた後で！　という言葉を残し、トーチカはそこから逃げるように去り、魔物の素材を集めに戻っていく。
だがその一部始終は、しっかりと隊員達に見られており、
「……チッ、アイツ……陰気で新入りの癖に、女には色目使いやがって……！」
「トーチカちゃんの優しさに付け入りやがってよ……ムカつくぜ」
「あんな根暗野郎のどこが良いんだよ……クソが」
彼らは口々に、ガイに対する陰口を叩き始める。
その様子は明らかに、ガイに対する嫉妬に満ちていた。
紅一点の女性隊員であるトーチカはこの隊のアイドル的存在であり、多くの隊員が彼女に好意を抱いていた。男所帯の小規模魔物討伐隊にとって、女性の、しかも可愛くて誰にでも優しい彼女は癒やしであり、色々と堪らない相手であるのだ。
だがトーチカは誰かにそういった好意を抱いているような感じはしないし、多くの隊員達が狙いながらも、牽制しあっていることから、いつからかちょっとした聖域と化していた。
互いの眼もあるし、一応は同じ隊に所属する仲間だ。無理矢理襲うようなことは出来ないし、かといって落とすことも出来ない。
であればこのまま密かに裏で盛り上がるくらいがちょうどいいと隊員達は思い始めていた。

そんな折にやってきたのが、ガイという男である。
少し前に多くの魔物の首を手土産に現れた不気味な男。その時のことを、古株の隊員達は皆記憶している。
『――私を隊に入れてくれ。腕には多少の自信がある』
魔物の素材を大量に入れた袋を手土産に、ガイはこの隊に入隊した。
素性は不明。だが、今の世でそういったことは珍しくもないし、そこはそこまで気にはならない。
だがガイはまだ大人にもなっていないガキの割に、入隊したての時からこの魔物討伐隊でもトップの実力を持っていた。卓越した剣技に上級魔法を軽々と発動する魔法の腕。古株の隊員どころか、魔物討伐隊歴２０年を誇る隊長ですらガイには敵わない。
性格はよく分からないが、内気で根暗。話しかけてもノリが悪くてやりにくい。それだけに殆どの隊員からの評判は悪く、不気味でしょうがなかった。
だが、そういった印象を抱かなかったものがいる。トーチカだ。
彼女はガイの何処に惹かれたのか、入隊して間もなくしてから、先程のような反応をガイだけに見せるようになった。
確かに、ガイはこの中で誰よりも強い。それに、前髪を伸ばしていて、表情もそこまで動かさないため分かりにくいが、顔立ちはかなり整っており、イケメンと言っても差し支えない容姿を持っていた。
だが、それはそれだ。ムカつくことには変わりはない。
あんな新入りの根暗野郎が皆のアイドルである紅一点の女性隊員から惚れられている。その事実は、酷く隊員達を嫉妬させた。
幸いなのはガイにその気がないのか、未だ手を出していないらしいことである。野営する際も、隠れ里に泊まる際も、テントや建物、部屋は違えど、同じ場所ではある。そういったことになればさすがに隊員達も気づけるのだが、そういった気配はない。
もしそうなれば最悪もいいところだが、あのガイという男の行動は読めず、何を考えているか分からないため、陰口を叩くだけに留めているのだ。

厳格な隊長にバレたら叱責ものでもあり、それも隊員達を露骨な行動に出させるのを躊躇させている。
――だがそれも、もうすぐ終わる。
「――皆、集合してくれ」
と、隊長が隊員達に集合をかけ、一瞬で隊列を組んで見せる。ガイもトーチカも、先程まで陰口を叩いていた隊員達も動きは迅速だ。腐っても魔物討伐隊の一員であれば、隊長の命令には即座に対応してみせる。のろまな奴は死ぬだけだと誰もが身にしみて理解していた。
「先んじて、斥候に出していた隊員が戻ってきた。この先に魔物の気配がない岩山の広場がある。今日はそこで野営を行う」
野営地の厳選は何よりも徹底して行わなければならない。毎回、隠れ里のような比較的安全な場所で夜を過ごすことが出来るとは限らず、そういう時は野営することになる。
夜に動くのは自殺行為にも等しい上、寝てる間に魔物に襲われでもしたら目も当てられない。明かりをつければ魔物を惹きつけるし、夜目が利かない人間と違って、魔物には夜行性の種も存在する。
故に野営する際は出来る限り魔物の気配が無い場所を選び、細心の注意を払う。故に隊長の話や仕事の分担はしっかりと聞いて理解し、遂行しなければならないのだ。
「――そして、最後に一つ」
と、隊長は少し顔を明るいものに変えて前置きを口にする。
隊員達が訝しみながらも、隊長の言葉を待つ。すると、
「以前より、空いていた副隊長を誰にするか決まった」
「！」
その言葉は、隊員達にとってはそれなりの朗報だった。
副隊長は結構前の戦いにおいて魔物に殺されてしまっており、それからはずっと空席の状態が続いていた。
だがそれが埋まるということは、指揮においても連携においても有用であるし、副隊長になったものは、それだけ権力を持つことになる。
こんな小規模の魔物討伐隊で権力もクソもないだろうと視野の広い者はそう思うかもしれないが、そう侮ることは出来ない。

小規模とはいえ、５０人もの人間が在籍する列記とした集団であり、組織だ。彼らにとっては、このコミュニティこそが世界の全てと言っても過言ではなく、その中での人間関係や地位というものは何よりも彼らを満足させる。

古株の隊員として、先輩として振る舞うだけでも気分は良いし、先輩に気に入られるだけでも悪い気分ではない。上位の者は下位の者に命令することが出来る。その鉄則はここにおいても当然の如く有効だ。

立場上は全員平隊員なので、仕事において命令することは出来ないが、古株の隊員がお願いするような形で仕事を割り振ったり、何かをさせたりすることは出来る。それより下の者は、組織内での人間関係を気にして、言うことを聞かざるを得ない。組織に所属する以上はこれらのルールに少なからず縛られてしまうのだ。

これを無視出来るのは、そもそもそんなことを気にしていない恐れ知らずの人間――ガイのような人物や、紅一点というある種の特権階級にいるトーチカくらいだ。その他大勢の人間にとっては、副隊長という隊長に次ぐ地位は何よりも重要なものだと言える。

故に古株の隊員達は誰が副隊長になるのかと期待や不安などの様々な感情が渦巻いた。誰もが、自分であればいいなと、想像を頭に描く。

そうなればここでの生活はかなり過ごしやすくなるだろう。隊長と自分以外の４８人の平隊員より上位の立場になることが出来るし、気に入らない相手に貧乏くじを引かせることも簡単だ。それに副隊長になることで、今までは見向きもしていない紅一点のトーチカも、自分に振り向いてくれるかもしれないと、根拠のない都合の良い妄想を頭に浮かばせる。

顔には出さずとも、それなりに古株で実力もあると自覚のある隊員達は内心でほくそ笑み、同時に同じ様な立ち位置にいる隊員達ではなく、自分を選べと天に祈っていた。

「副隊長は――」

そんな中、隊長が遂にその名を発表する。

その者の方へ、視線を向け、微笑を浮かばせると、
「――――ガイ。お前だ」
「……え……？」
それは誰が漏らした声だっただろう。
だが、呆然としたのは多くの者に共通することであった。
冷静なのは、任命を受けたガイと、隊長くらいのもので、他の者達は驚いていた。
「……私ですか？」
「ああ、そうだ。お前を副隊長に任命する」
隊長がもう一度告げる。その言葉で、今の光景が現実だと誰もが理解した。
そして真っ先に声を上げたのはトーチカであった。彼女は驚きながらもすこぶる嬉しそうに、
「おめでとうガイっ！　驚いたけど、ガイなら納得だよ！」
「ああ。俺もガイなら立派に務めてくれると思っている。お前は強さの上でも隊で一番だし、頭も悪くないからな」
隊長も続いて、ガイのことを褒め称える。堅物の隊長はガイのことを高く評価しているようだった。
だがそれを受けたガイは、珍しく困惑したような困った表情を浮かべ、
「……私でいいんですか？」
「ああ。是非受けてほしい」
「ガイなら出来るよっ！」
隊長の再度の頼みと、トーチカのキラキラした期待の視線。
それらを受けてしばらく考え込んだガイは、少し間を置いてから頷き、
「……分かりました。謹んでお引き受けします」
古株の隊員達にとって、最悪ともいえる発言を口にした。
だがその場の雰囲気は隊長やトーチカのせいで穏やかなものであり、
「うむ。なら決定だ。お前たちも異論はないだろう。副隊長はガイで

決定だ」
「……はい」
隊長のその言葉に異を唱えることは出来ず、古株の隊員達も内心、憎々しげに頷く。
その視線の先には、ガイの隣で彼を見上げつつ、頬を赤らめるトーチカの姿があり、
「えへへ……やっぱり、ガイは凄いなぁ……」
そのうっとりとした様子に、多くの隊員達は嫉妬を更に募らせることになった。

――その夜。
野営地のテントで一人過ごすガイは、人知れず深い溜息を吐いた。
顔を押さえながら、考えることはこれから先の事と、現状の停滞感の事だ。
……いつまで、これを続ければいい……？
カラーの森から一人、旅を始めた時からガイは少しずつ悩み始めていた。
ただ放浪する訳にもいかず、素性を隠して魔物討伐隊に入隊したのは良いものの、世界の暗さ、厳しさをガイは甘く見ていたのかもしれない。
魔物をただ討伐する日々というものは、なんとも味気ないものであった。
隊員達とはあまり仲良くはないし、親しい者はいない。強いていうなら、隊長やトーチカくらいだろうか。それ以外の者達からは距離を取られているように感じる。
出来れば仲良くしたいが、それも難しい。
どうやら自分はそういった人と距離を詰めるようなことが苦手であるらしいと初めて自覚した。
よくよく思い返してみれば、今まで親しくなった人達は皆、向こうから歩み寄ってくれていた。自分から距離を詰めて仲良くなった訳

ではない。
そして同年代の友達なども、今は何処にいるか分からない相手くらいで、それ以外は皆無であったことを考えると、人とどうやって仲良くすればいいのか分からない。
ましてや自分の素性を隠さなければならない身では、自分の話をすることも難しいものだ。
故に人と仲良くすることも出来ず、ただ魔物を討伐して生きる糧を得るだけの日々というものは、今までの生活と比べて酷く味気ないものであり、閉塞感を感じてしまうほどであった。
生きることがこんなにもつまらないとは思わなかったと、ガイは思ってはいけないことを思ってしまうほどに憂鬱だった。
『――なら俺に代わるか？』
と、そんなふざけた声が今日も聞こえる。
この声も悩みの種だった。
毎日毎日、悪の行為を囁きかけて来る上に、隙を見せれば身体の主導権を握ろうとしてくる。そのせいで気を抜くことが出来ない。自分がこの悪意に満ちた人格を抑えなければ、周りの人間に被害をもたらしてしまうことは確実だからだ。
だが、この声も毎日続けば精神も摩耗する。
殺せ、犯せ、奪え――それらの声が連続し、右手が時折、自分の意志に反して動いてしまわないかを恐怖し怯える日々だ。
そして何より――これも自分であることに、酷い罪深さを感じてしまう。
こんな悪意に満ちた人格を抱える自分が、こんなところでのうのうと生きていて良いのかとすら悩んでしまう。
それでも耐えて生きることが出来ているのは、今まで自分に強い影響を与えてきた人達の思いが、まだギリギリのところで心の糧となっているからだ。
『しぶといな……一回くらい代わってくれてもいいだろうに……』
――黙れ。と、強い念を送る。こいつを解放することはあり得ない。

この人格を解放した時に、どれだけの罪のない人間が犠牲になるのかは、考えたくもないことだ。
しかしこれは自分だけが一人で抑えて、抱え込んでいかなければならない。そう強く心を持ちながら、頭を抱えていると、
「――ガイ……その、起きてる？」
「！　……ああ」
不意にテントの外から声が掛けられ、ガイは返事を返す。
女性の声はトーチカのものだ。彼女は少し遠慮がちに、
「良かった……入ってもいいかな？」
「？　ああ……構わないが……」
だがこんな夜更けに何の用だろうと、ガイは頭に疑問符を浮かべながら、彼女を迎え入れることにした。

悪意に満ちた世界

「ごめんね、こんな夜遅くに。迷惑だった？」
「いや、大丈夫だ」
ほんの小さなランプの光だけが照らすテント内に足を踏み入れたトーチカは何処かそわそわと落ち着かない様子でまず謝罪した。
ガイはその謝罪をすんなりと受け止め流しつつも、彼女の様子がいつもよりも浮ついているように見えるのが気になり、内心で訝しむ。夜更けに訪ねてくることなどこれまで一度も無かったものだが――
『ぐふふ、これは夜這いだな。ヤっちまおうぜ』
死ね――と、もう一人の声に冷たい念を返す。その場合自分も死ぬことになるが、そうしたいくらいにふざけた提案だった。
彼女が真面目な用事や相談だったら失礼だろう。というか、そういうことに決まっていると内心で声を作りながらも彼女の言葉を待つ。響いてくる内側の声は無視していると、
「その……おめでとう、ガイ。副隊長に抜擢されるなんて、やっぱりガイは凄いんだねっ」
「……ああ、ありがとう」
何度も言われた言葉を、また改めて言われる。飽きた言葉ではあったが、それが純粋な気持ちであることは理解しているので素直に受け取った。
しかし内心ではやはり複雑な気持ちである。そもそも、副隊長など自分には荷が重いと考えているのだ。
もう一方の人格はこれを機に好き勝手してやればいいと言っていたが、副隊長という役職は自分には向いていないと思う。
そもそも隊員達からの人望はなく、比較的隊の中では新人であり、歳もかなり若い方だ。隊長が言っていたように、確かに実力だけなら自分の方が上だが、年上や古株の隊員達を差し置いて自分が副隊長というのはどうなのだろうと疑問を感じる。
強さが全ての仕事なのだから理屈の上ではそれが正しいような気もするが、どうにも自分の中でしっくりこない。人を纏めるような立

場に立ったことがないからやり方もよく分からないし、人との接し方にすら悩んでいるくらいなのだ。そんな自分がいきなり隊長のように人に命令し、従わせることが出来るのかと言われれば、やはり出来ないだろう。

それにもう一つの人格についての懸念もあるし、安易に自分を有利な立場に置くのもどうかと思った。

それでも受け入れたのは、隊長からの推薦を断りきることが出来なかったということと、理屈では強い者が上に立つということは今までの教えでも正しいことだと分かっていたし、一理ある。秩序を保つ上では、自分が上に立つことも有益になるかもしれないという判断だ。

というのも、最近の隊員達は自分を目の敵にするあまり、どこか緊張感が無いように感じる。魔物との戦闘の中で、一応は味方である自分に注視している場合ではないと思うのだ。

それともそんなにも自分の事が嫌いなのかと思うと、それはそれで落ち込んでしまう。自分は何か悪いことをしたのだろうか……やはり、もう少し愛想良くするべきだろうかと、自分の苦手分野について考えていると、

「――ガイ？　どうしたの？　なんか難しい顔してるけど……？」

「！　……何でもない」

と、少し顔に出てしまっていたらしい。顔を下から覗き込んできたトーチカが心配をしてくれる。

首をかしげる彼女に対し、表情を通常のものに戻して気を取り直すと、トーチカも〝ならいいけど……〟と言って再びはにかんだ。話を戻すように、

「……でもやっぱさ。ガイが副隊長になって心強いよ。隊で一番強いのはガイだしさ。戦闘でも口には出さないけど的確な判断してるんだもん」

彼女は戦闘中のガイの行動も見ていたのだろう。そうやって副隊長になったことを頼もしいと言って喜んでいる。しかし、

「……私などより、もっとこの隊のことを知る人物の方が……」

と、ガイは内心にあった正直な迷いを口にする。

既にやると決めた手前、そうしたほうがいいと今更断言するようなどっちつかずの発言は出来ないが、こうやって他の人がいない場所で多少なりとも話せる人物に吐露するくらいは許してほしいと、ガイは僅かに気を緩めた。ひょっとしたら、彼女からも似たような意見が出ないかと薄い期待をしたが、やはり返ってきた反応は首を横に振る動きで、

「ううん。確かに、ガイよりも明るくて、話が上手で、気が使える人は沢山いるけど……」

「……」

「あっ……そ、そうじゃなくてっ、そうだけど、ガイの方が頼りになるし、格好いいし、その……」

唐突に貶されて物凄く気分が落ち込んだが、どうやら本意ではないようで慌ててフォローをしてくれるトーチカ。彼女にすらそう思われていたというショックをガイは受ける。

『……やっぱお前……根暗って思われてたんだな……』

うるさい。別に根暗じゃない。ただ人との接し方が分からないだけだ。

それに自分が根暗なら、自分のもう一つの人格であるお前も根暗だろうと、ガイはもう一人のガイに憤慨する。

だがそうやって内心で落ち込みつつも、トーチカは何やら言葉を迷わせながらもじもじと身体を揺らし始めた。

その様子になにかむず痒いものを感じていると、やがてトーチカは下を向き、目線を横に逸らしながらか細い声で、

「……好きだから……」

「……えっ――」

「～～～っ……！」

耳に聞こえた言葉にガイは唖然とする。

目の前にいるトーチカは顔が真っ赤になり、もはや顔から湯気が出そうなほどにいっぱいいっぱいとなっている様だった。

だが、ガイはその告げられた言葉、想いに戸惑い、努めて理解しようと脳を回転させる。

何分、初めてのことなので勝手が分からず、理解も及ばないのだ。
しかしそうやっていると、とうとう羞恥が我慢の限界に達したトーチカが、
「んっ……」
「……!?」
と、不意に背伸びをし、顔をこちらに寄せてきた。
女性特有の匂いがふわりと鼻をくすぐったかと思うと、その際に感じたことのない柔らかさが頬に来る。完全に脳がフリーズした。
その一瞬とも言える出来事を終え、未だ固まっていると、トーチカは顔を真っ赤にしながら焦ったように我に返り、
「そ、そそそれじゃあね！　副隊長就任おめでとう！　おやすみ!!」
「あ……」
早口でそう言い、ガイが引き止める前にさっさとテントの中から退散してしまった。
一人、テントに残されたガイは訳の分からない身体の熱さを感じて、しばらく呆然と立ち尽くす。
『……ぐふふ、これは……』
その衝撃は内側で響く声に気づかない程であり、ガイはその後何も言わずに横になると、その身体の熱さを振り払おうとするように無理矢理眠りについた。
――トーチカがガイのテントから去ったその直後。
「……あの野郎……!」
奇しくも、トーチカがテントの中に入り、少ししてから出て行く場面を見ていた隊員達がいた。
三人の隊員は、隊のアイドル的存在である紅一点のトーチカと親しくし、とうとう副隊長になったことでテントの中で二人きりになるガイを妬み、憎しみを募らせる。
「くそっ、ふざけやがって……許さねぇ、ガイのやつ……!」
「あんなガキが副隊長とか、隊長も何考えてやがんだ……」
彼らはガイが副隊長になってしまったことで、ちょっとしたやけ酒をあおっているところだった。

古株の自分達を差し置いて副隊長になり、テントを一人で使えるようになった途端、女を呼んでイチャイチャし始めるなど、到底許せることではない。
しかし、ガイの強さは理解している。だからこそ、隊員達は突っかかっていくことも出来ずにこそこそと集まって愚痴を言い合うことくらいしか出来ないでいたのだ。
「ちくしょう……何であんな奴が……」
一人の隊員が妬み、嫉妬の言葉を呟くと、同意するような言葉が連続する。
それらは全て、何の意味も生産性もない、ただの愚痴でしかなかった。このまま続けていたとしても、朝になれば彼らは新副隊長であるガイの言うことを聞かなくてはならないのだ。
隊の規律を乱すようなことをすれば、隊長だって黙っていないだろうし、比較的真面目な隊員達からもひんしゅくを買う。隊の中の上下関係は絶対であるため、これからは嫌でもガイに従わなければならないのだ。
それが、彼らは嫌で嫌で仕方なかった。
そしてそれ以上に、トーチカという極上の女に好意を持たれているということが我慢ならなかった。
だからだろうか。その呟きは自然と口に出た。
「……なあ、もうやっちまわねぇか……？」
一人の泥酔した隊員がそんなことを口にする。
彼は特にトーチカに熱を上げていた隊員だった。
隊を起した時の初期メンバーであり、実力もそれなり、容姿もガイほどではないが整っており、ノリがよく、トーチカとの仲も決して悪くなかった。
だがそれはあくまでも、仲間に対する関わりであり、トーチカ自身は他の面子と変わらない接し方をしている。違うのはガイだけだ。それは見ていれば分かること。
その上、副隊長にすらなってしまったガイに対して、嫉妬を越えた憎しみ、敵意、殺意すら感じてしまっている有り様だった。

酒が入っているとはいえ、その敵愾心は偽りのものではない。その本気度を感じ取ったのか、僅かに冷静な隊員達が喉を鳴らし、表情を緊迫したものに変える。
「ま、マジで言ってんのか……？」
「でも、気に入らないとはいえ、一応仲間だぜ……？　仲間を殺るっていうのか……？」
「ていうか、そもそもあの化け物をどうやって殺るんだよ……？」
様々な言葉が出てくるが、出てくるものは全て弱気なもの。
確かにガイを少なからず憎いと思っている彼らだが、仮にもそれなりの時間を同じ場所で過ごしている。それだけに同じコミュニティに属する仲間だという意識は一応あるし、長く見ているだけに、ガイの強さはよく理解している。だからこそ、隊長が副隊長にガイを推薦した時も、反対の言葉は喉を通らなかった。強い奴が上に立つということは、冒険者や魔物討伐隊において別段珍しくないことである。故に彼らはその価値観に従い、反論を自ら黙殺した。
だが、その男は違った。
「いいや……あんな化け物、仲間じゃねぇよ。新入りの癖に先輩に気も使えねぇし、女だって掻っ攫っていきやがる。お前ら、アイツが憎くねぇのか？」
「そりゃあ確かにむかつくけどよ……」
「だろ？　それに知ってるか？　あいつ、どうやら右目が見えねぇらしい」
「え？　それマジかよ……!?」
「ああ。あいつ、分かりにくいがどうも右側を庇ってやがるし、右からの反応は多少悪い。顔も、右側は前髪で隠してやがるだろ？　あれは右目が見えないから、それを隠すためにやってるとかそんなところだろ」
「そ、そうなのか……」
思い当たるところはあったのか、隊員達もガイの右目が見えないという話をほぼ信じてしまう。
真実はもっと酷いものではあったが、彼らはそこまで気づくことは

なく、右目だけが見えないのだろうという前提で話を進める。
「で、でもよ……右目が見えないであの強さってことは、より化け物じゃねぇかよ……」
「そうだよな……あいつを殺るなんて、到底――」
「何ビビってやがる……！　あいつも人間だろうが。この稼業やって分かんねぇのかお前ら？　魔物すら頭か首、心臓を突けば死ぬ。足を断てば動けなくなるし、手を断てば攻撃手段はなくなる。目を潰せば死んだも同然だろうが。ましてや同じ人間なら、頭を潰せば簡単に死ぬ。死なねぇ奴なんてこの世にはいねぇんだよ……！」
　手に持っていたナイフをザシュッと目の前の乾物に突き立て、それに齧りつく男。その目は既に赤く染まっており、殺すことしか考えてないような顔つきだった。
「……本当に殺れんのか……？」
「殺れる。俺を信じろ。あんな新入りのガキに好き勝手されて悔しくねぇのか？　隊を好き勝手されて、女まで取られるなんざありえねぇだろうが」
　むしろ隊の規律を正す、正当な行為だと男は言う。
　それは煽動じみた一連の言葉であり、同じ様な負の思いを抱える彼らには、それは酷く心に刺さった。
「……そう、だよな……！」
「ああ、あんな奴……殺しちまった方が隊の為だ……！」
「あんな野郎にトーチカちゃんを渡してたまるか……！」
　隊員達が、次々とやる気になっていく。
　憎い相手は殺して排除してしまえばいい。これだけ同じ隊員達に憎しみを抱かれているのだから、殺されて当然だ。そんな奴と結ばれるなんてトーチカも不幸になる。だから殺ってしまった方がいい、と、己の嫉妬の感情に建前としての尤もらしい理由をつけ、男達はその気になる。
　それがただの醜い嫉妬ゆえの行動だとは気づかないし、気づこうとしない。人間の醜い欺瞞がここに現れる。
「罠に掛けちまえば簡単に殺れる……！　口裏を合わせて魔物に殺さ

れたとでも言えば隊長や他の奴らも誤魔化せる……！」
「ああ……！　なら――」
と、男の提案に乗るような形で、古株の隊員達はその意志を一つに統一する。
ドス黒い感情を胸に秘めた彼らの企みは翌日、実行される運びとなった。

――ガイが副隊長に就任した記念すべき初行動日。
一夜明けて野営地から出発した魔狩りの戦士団の一行は、拠点にしている隠れ里への道中にある森の中で魔物狩りを行うことにした。
だがその中で、隊の一部を指揮するはずのガイは、
「――あっ……」
「……」
少し距離を取った場所にいるトーチカと目が合い、彼女は視線を逸らす。それを感じて、
……落ち着かないな……。
どうにも、浮ついてしまってしょうがない。
彼女のこともそうだが、なんだかんだで副隊長になったことを喜んでしまっているのかと悩んでしまう。
単純に荷が重いというか、緊張しているだけのような気もするが、どちらにせよ、普段と違う気分であることは確かだ。
「――副隊長。俺達が付きますよ」
「！　ん、ああ……」
「いいですよね、隊長!?」
「ああ、ガイも副隊長とはいえ、まだ慣れないことも多いだろう。お前たちなら安心だ」
と、隊の皆も、普段よりかは自分と距離を詰めてくれているように感じる。隊を分ける際に、自分達からガイの下に付いてくれると、古株を中心に二十人程の隊員達が隊長に許可をとって自分に続いた。
その中にトーチカの姿はない。だからどうというわけではないが、

未だに恥ずかしがっている様子だった。
……副隊長になっただけなのに、見える景色がこんなに違うとは……。
一気に環境が変わったように感じて、最近憂鬱だったガイの心が多少明るくなる。
しかも今日は、もう一人の声も大人しい。大人しすぎていっそ不安に感じるほどだ。もう一人の人格が自分の中に現れてからというもの、殆ど毎日のように声が聞こえていたが、これほど静かだった日は未だかつてない。
故にガイも、今日はそこまで内心に気を向ける必要もなく、もう一人に対しての自らの罪深さや、死にたくなるような気持ちが浮かぶこともなかった。
「それじゃあ、ガイ。そちらは任せたぞ」
「……はい、了解です」
隊長の声に頷き、本隊と一時分かれる。
ここの森は普段からよく魔物の狩場として使っている場所である。故に出てくる魔物も大体把握している上、狩りの効率を良くするために二手に分かれることがままあった。
その一方を自分に任されるのは、副隊長であれば当然の事だ。
……とにかく、仕事に集中しよう……。
「……では行こう」
「――はい、副隊長」
部下を連れて森の中を進む。時折現れる魔物を倒しながら、素材を集め、野草やたまにある食物などを回収し、適時休憩を挟んで森を回る。
こうやって森の中を巡回して魔物を倒していくことは、この先にある隠れ里の安全にも繋がるし、隊員達のレベル上げにも使える。普通は隠れ里にあるレベル屋に行く必要があるが、ガイは自分でもよく分からないが、担当のレベル神というものがいるため、いつでもどこでもレベルを上げることが出来る。
そして連れの者達もついでにレベルを上げることが出来るため、実

力以外でそういった面でもガイは隊の中で重宝されていた。
後続、そして先行するシーフ職の者達に指示を出しながらガイは森の中を順調に進んでいく。気持ちとしても今日はかなり楽だ。もしこういった日が続けば、自分も魔物討伐隊の一員としてそれなりに平和な日々を過ごせるかもしれないと期待を抱いてしまうほどに。
以前のように仲の良い人と過ごすような日常をガイは欲していた。それがこの場所でも送れるのだろうかと期待をかけ、やはり世の中もまだまだ捨てたものではないと希望の光が差していた。
「……副隊長。ちょっといいですか？」
「……なんだ？」
「この先、妙な魔物の痕跡があってですね……自分達も見たことないものですので、副隊長も見て確認して貰えないですか？」
「……ああ、わかった」
「……へへっ、さすがは副隊長。頼りになりますね、ありがとうございます」
と、先行させていた隊員からそう言われ、ガイは案内に従って前に進んでいく。その際に言われた言葉も、普段であれば冷たい声色でしかないものだが、今日は違う。隊員達は軒並み好意的に接してくれており、これからもやっていけそうだという期待を更に強めていく。
頼られるというのも悪くない――そう思って先に進んでいったが、
「……？　何処にあるんだ？　その、魔物の痕跡は」
「ああ、はい。そこからちょっと……もうちょっと進んだ先です」
何故か中々その妙な魔物の痕跡とやらが見つからない。
だが隊員を信じて、その指示通りに数歩先に進む。
すると――
「――っ!?」
不意に、背後から何かに押され、前に更に数歩、進んでしまう。何を……!?　と声に出して背後を見ようとした瞬間、
「っ……!?　なに、が……？」
突如として身体から力が抜けていく。
咄嗟に嫌なものを感じてそこから逃れようと多少横にずれていっ

たが、それでも動けたのは数秒程度で、直ぐに地面に膝を突いてしまう。
僅かに見える左目の視界の端。そこに映ったものを見て、ガイは自分の身に何が起きたのかを察した。それは、
……無気力きのこ……！
そこにあったのは特徴的な紫色の、胞子を撒き散らすきのこ。無気力きのこだ。
森などのダンジョンに自生し、踏むと生物の気力を奪って無気力にしてしまう特殊なきのこであり、冒険者や魔物討伐隊では特に気をつけるべきものとして挙がる罠の一つ。
その胞子を浴びれば、どんな屈強な男でも最低数十分は動けなくなる。ダンジョンでそれを喰らってしまうのは致命的であり、だからこそ冒険者や魔物討伐隊ではレンジャー職による罠探知や罠解除が重要視されるのだ。
その例に従って、探索していたはずなのに、どうして――
「――へへ、副隊長ってば、動けなくなっちまったんですかい？」
「……！　あ、ああ……すまない。ドジをした……助けてくれ……」
何とか声を出しながら助けを求める。気力を奪う無気力きのことはいえ、ガイは声を出すことも、多少身じろぎすることも出来ていた。
それはガイの強さが人間としては既に際立ったものであることの証左であるが、ガイはそれをあまり自覚していない。
数分で動けるだろうと判断しつつも、回復は早い方がいい。状態異常を回復するような神魔法やアイテムを使えば回復は容易である。
だから声を出して隊員に助けを求めたが、そこでガイは、この状況がどういったことを指しているのかを思い知った。
「この化け物も、こうなっちまえばどうとでも出来るな……！」
「……な、に……？」
隊員の口から出てきた言葉に、最初、脳が理解をすることを拒む。
口から漏れ出るのはどういうことだという確認の問い。浮かべる表情は唖然、混乱。だが内心では何が起こったのかを半ば理解していた。

「へへへ……」
「副隊長……」
「ようやくかよ……」
　続々と集まってくる部下の隊員達。自分についてきた二十名近い隊員全員がそこにいた。
　そして彼らの表情は皆、何やらニヤついたような、人を小馬鹿にして愉悦に浸る、悪意に満ちた表情であり、ガイの心を酷く掻き乱した。
　もうここまで来れば頭でも認めたくはないが、認めざるを得ない。震える声で、ガイは問う。
「……何故だ……」
「あ？」
　先程まであった敬意の欠片もない反応が隊員達から返ってくる。
　その中心であるらしい男はその言葉を耳にしながらも、づかづかと近寄って足を振り上げた。
「……この瞬間を待ってたぜぇ、ガイ！」
「っ……ぐ……！」
　腹の真ん中に男の足が突き刺さり、ガイは動けないまま身体を前に折り、その場で苦鳴を漏らす。
「おらおら！　いつもの化け物じみた強さはどうした!?」
「……！」
　だがそれでは終わらない。今度はガイの左頬を思い切り拳で殴りつけて地面に転がすと、そのままガイの胸を踏みつけてみせる。
　痛みを屈辱と共に与えられ、幾つもの悪意を向けられるガイは、地面に倒れながらもなおも問うた。
「なぜ……こんなことを……？」
「ああっ!?　うっせぇなてめぇは!!　んなもん決まってんだろうがよぉ!!」
「うぐ……！」
　今度は顔面を踏みつけられる。男の靴の硬さ。靴の裏についた土くれで顔が汚れる。
　そして今度は、他の隊員達もガイに向かって蹴りを入れてきて、同

時に主犯の男の声と皆の声が連続した。
「皆、てめぇのことが嫌いで嫌いでしょうがねぇからだよ!!　この化け物野郎が!!」
「ムカつくんだよ!!　新入りでガキの癖に！　生意気に孤高気取りやがって!!」
「そのくせ女とよろしくやりやがってよぉ……！」
「副隊長に抜擢されていい気になってんじゃねぇよ!!」
「調子に乗ってんじゃねぇぞ!!　お前なんかトーチカちゃんに相応しくねぇ!!」
「ここにいる全員、てめぇに死んでほしくて集まった連中だ。つまりてめぇは、罠に嵌められたんだよ、馬鹿が！」
「全員で魔物に殺されたとか言って口裏を合わせりゃ、俺達が殺したこともバレねぇだろうしな！　ぎゃはははは!!」
「っ……」
　投げかけられる言葉は全て悪意に満ちた暴言だ。
「おら、いいから苦しめ！　命乞いの一つでもしてみろよ！」
「ははは、簡単には殺さねぇからな！　精々今までの積もり積もった俺達の鬱憤を晴らさせてくれよぉ？」
「右目が見えねぇんだってなぁ!?　これから左目も見えなくしてやるから覚悟しとけよ！」
　降りかかる暴力。それはなんの正当性もない醜い嫉妬によるものであり、身勝手な行為だ。それで笑みを浮かべる彼らは人の内側に隠された残酷性の具現化といえる。
「気持ち悪いんだよ、化け物！」
「お前なんて生きててなんの価値もねぇ！　むしろ害悪だ！」
「おお、だから俺達が殺してやる！　だから感謝しろゴミ屑!!」
「ほら死ね！　苦しめ化け物！　生まれてきたことを後悔させてやる！」
　道徳の欠片もない酷い中傷が投げかけられ、殴る蹴るの暴力。集団による袋叩き。虐待を受ける。
　身体的な痛みを受け続ける中で、しかしガイは痛みによる苦しみを

それほどでもないと感じてしまっていた。
思い出すのは、かつて人間牧場で過ごした幼少期の頃。
なんの理由も無く、ただただ苦しめられていた頃の記憶であり、むしろ懐かしさすら感じてしまう。
だが、その時よりも今の方が辛い。身体よりも、心が痛い。
何故なら、そこには〝悪意〟があるから。
牧場時代。降りかかる悪意は実はそれほどではなかった。
魔物は人間を苦しめることを常識としていて、無差別で事に及んでいたため、個人に対する悪意などは皆無であったし、それが義務であったことからか、ただただ職務の一環として投げやりにやるものすらいたからだ。
だが、これは違う。これは、ガイ個人に向けられる悪意だ。
大勢の人間が自分に対して、憎しみを、悪意をぶつけてくる。自分の存在を否定するかのように、酷い誹謗中傷と暴力を行ってくる。
全て、自分を苦しめるため。自分を殺すためだけのものだ。
……なぜだ……。
だから苦しい。痛みには慣れてしまっている。それより心が苦しい。
……どうして……自分がこんな目に遭わなくてはならないんだ……！
自分が一体何をしたというのか。ただ普通に生きていただけだ。自分なりに懸命に生きようとしていただけだ。
それほど多くを望む気はない。普通に過ごしていければいいだけだ。周りの人とちょっとだけでも仲良く出来ればそれでいい。
……人間とは……世界とは、なんなんだ……！
悪意、悪意、悪意、悪意――降りかかるものは負の感情のみ。
理不尽な理由で虐げられる。奪われる。苦しめられる。魔物に苦しめられ、痛みを知る人間でさえ、他者に痛みを与えることを、同じ人間を憎むことを止めることはない。
罪のない人間を苦しめて悦に浸ろうとする人間とは。それが許され、横行するような世界とは、一体何なのだ。

……もう、いいか。
ガイはふと、心が折れるのを自覚した。
もうこんな世界は嫌だ。悪意を受けるのは嫌だ。ただでさえ先の見えない世界で、人間同士ですら憎み合うような世の中は嫌だ。
身体は徐々に動けるようになってきている。抵抗することも可能だろう。二十人近くいる彼らだが、倒すことは造作もないことだ。
だが、肝心の自分にその気がない。
ここで彼らを跳ね除けたとして、一体何になるというのか。
もうこの隊にはいられないし、それどころか残った者達すら自分に悪意を向けてくるかもしれない。ここを離れたとしても、また同じ様なことが起きるかもしれない。
そうなるくらいならいっそ――死んでしまった方が楽ではないか。
心残りはあるはずだが、それが心の支えにならないほどにガイの精神は疲れ切っていた。
もうどうでもいい。こんな悪意に満ちた人生なんて。
だからガイはその瞬間、意識を手放そうとした。
――だがその瞬間。
『この時を待ってたぞ……！』
ガイの意識に滑り込んできたのは、もう一人のガイであった。

隊員達は、地面に蹲ったままのガイにひたすら暴行を加えた。
ただ己の憎しみに、本能に従ってガイを痛めつける。
もはやガイの服は汚れ、全身傷だらけになってしまっている。反応はない。だがまだ生きていることは気配で分かった。
しかし、
「……あー、反応が無くなってきたな。どうする？」
「そろそろ左目でも潰してやろうぜ。そうすりゃあ悲鳴の一つでも上げるだろ」
「ぎゃはは、ならそうするか！」
悲鳴が上がれば、本隊がそれを聞いて駆けつけてくるかもしれない

という考えにも、興奮状態の彼らには難しい発想だった。ガイの髪の毛を掴んで、頭ごとガイを持ち上げる。
そうして露わになったガイの顔を見て、男はナイフをもう片方の手に取った。
「ムカつく顔しやがってよぉ。グチャグチャにしてやるぜ――ッ!!」
と、男はナイフを左目に向かって突き立てようとした。
だがその時だ。動かないはずの右目が光を灯し、動いたのは、
「――ムカつく顔してんのはどっちだ、不細工野郎」
「――あ……？」
ガシッと。男の腕が止められる。
それは動けないはずのガイの腕だった。
その声を発したのはガイで、口端を歪める笑みを浮かべているのもガイだ。
だが、その纏っている雰囲気。気配は、今までのガイではない。
それを僅かに感じ取った瞬間、男は右目に熱いものが迸り、訳も解らず絶叫した。
「ぎ、あああああああああああっっ!?」
「くくく……うるさいぞブ男。目ん玉一つ潰れたくらいで何を叫んでる」
「ひっ、な、なんで動けるんだテメェ!?」
隊員の一人がガイから距離を取り、武器を手にする。躊躇なく、誰にも視認出来ないほどの鋭い一撃で男の目を潰したガイは、男の手からすり抜けて地面に降り立った。
そして凄惨な、余裕のある笑みを浮かべて周囲の隊員達を見渡す。
「あー、痛い痛い……身体中が痛いな……よくもまあこんだけ殴ったり蹴ったりしてくれたもんだ」
「っ……みょ、妙な考えを起こすんじゃねぇぞ、ガイ！　お前そんなボロボロの身体でこの数に勝てるとでも思ってんのか!?」
明らかに腰が引けた様子で隊員の一人が言う。だから当然、ガイは全く怯えもせずに余裕綽々といった様子で首を鳴らし、
「あ？　誰に口聞いてんだテメェ。この程度、ハンデにもならんわ」

と、ガイは腰元にあった剣を引き抜いて、構えもせずに自然体で剣をだらりと下に垂らす。
そして口元の笑みを更に吊り上げ、そして剣を軽く上げて言う。
近くにいたのは、目を潰された主犯の隊員。未だ目を潰されて苦しむ隊員に、ガイは無造作に目を向けると、隊員達も表情を変えた。
「おい、やめ――」
「――ぎゃあああああああああああっ!!」
ザシュッ、と。ガイは隊員達の制止の声を聞くこともなく、男の腹に剣を突き立てた。
そしてその上で剣を引き抜き、地面で苦痛に満ちた呻き声を上げる男に目もくれず、ガイは周囲に向けて言った。
「お前ら……逆に聞くが――まさかこの俺に、勝てるとでも思ってんのか？」
「ひっ……！」
その圧倒的な存在感。悪意に満ちた気配に、隊員達は表情を崩す。相手はたった一人なのに、その一人に彼らは怯えてしまっていた。
「ははは……いいな、その表情。殺し甲斐のある良い表情だ。やられた分、全部百倍にして返してやるから、精々命乞いの台詞でも考えてるんだな！」
「っ、お、お前ら、やっちまえ!!」
「お、おおっ!!」
隊員達が武器を抜いて構える。
しかしそれより先に、ガイは前に突っ込み、一瞬で二人を斬り殺していた。
「ふはははははっ!!　殺す感触は久し振りで愉しいぞっ！　お前ら、もっと頑張れ！　それで俺を愉しませろ！」
「ひぃぃ、や、やっぱり化け物だ……！」
「おい、怯むな！　やらなきゃ殺されちまうぞ……！」
「いや、それより逃げるぞ！　到底敵わねぇ……！」
隊員達がガイの強さとその恐怖に統制が乱れる。
それを見逃すガイではなかった。ガイは面白そうに笑みを携えて、

「ははは！　どっちにしろ殺すけどな、ばーーーーか!!」
「があっ――!?」
「ぐ、ぁ……！」
「やめ――」
連続で、肉を抉り、断つような音が鳴る。
数秒足らずで三人を更に殺してしまったガイ。それはもはや戦闘にすらなっておらず、ガイの一方的な殺戮になっていた。
「ふはははは、ああ、愉しいぞ……！　そうだ、こうやって生きるのが正解に決まってる！　俺は自由だ！　もう何にも縛られない！　ムカつく奴は殺して、欲しいものは奪い取る！　やりたいことをやるのが俺の人生だ！」
「ほ、本当にガイなのかよ、こいつ……!?」
「い、いつもよりやべぇぞ！　逃げろ!!」
とうとう戦うことを諦めた隊員達がその場から逃走を試みる。
だがガイの悪意に満ちた笑みは絶えることはなく、
「……人を殺そうとしといて、逃げられると思ってるんじゃねぇぞ……！」
と、ガイは魔力を収束させた。絶対命中する魔法によって、一度に多くの奴らを苦しめて殺してやろうと、
「くくく、ふはははは！　お前ら全員、皆殺しだ……ッ!!」
魔力の光。そして男達に命中する魔法の闇。
それによって身体の一部を消し飛ばし、苦痛に呻く者達の列を作ったガイはその悪意でもって己の生を謳歌しようと行動を始めた。

初めての体験

「――何をやっているんだ、ガイ!?」「襲われたから返り討ちにしてやっただけだが？」「ガイ……嘘……！」「嘘じゃないぜ、トーチカちゃん……ぐへへ、ちょうど、トーチカちゃんに用があったんだ」「え……？」「っ、よせ！　それ以上近づくな！」「ははは、邪魔するなら殺すだけだ！　死ねーーー!!」「ぐあああああっ!?」「気でも狂ったかガイ！　くそ、お前達武器を抜け！」「そんな、ガイ……やめてよ……！」「う……あぁ……っ、つ、強すぎる……！」「や、やめてくれ副隊長――ぎゃあああああ!!」「あ～、最高だ、この好き勝手する感じ……雑魚を容赦なく踏み潰す感触……堪らねぇなぁ……！　最高だぁ……！」「ひ、ひぃ……ば、化け物……！」「ははは、俺が化け物か！　そりゃあいい！　おら、化け物が来るぞ来るぞ来るぞ！　死にたくなきゃ逃げろ！　さっさと逃げねぇと後ろからぶすっと殺っちまうぜぇ～？　くっ、くくく、くはははははっ!!」

――失った意識の中で、ガイは夢を見ていた。

それもとびっきりの悪夢だ。

自分の形をした何かが、仲間を蹂躙し、容赦なく罪を犯していく光景。

狂ったように哄笑しながら、同じ人間を手に掛け、悦に浸る。弱者を喰い物にすることに愉悦を感じている。

それは世界のありふれた光景だ。

悪意が罪のないものを手に掛け、それが許される世界。より大きな悪意が、小さな悪意を飲み込んで喜んでいる。

人間の醜い欲望。支配欲。優越感。エゴ。それらをもはや隠すことなく自由に振るっている。

今までの酷い仕打ち。弱者として虐げられた過去。抑えつけられていた鬱憤を晴らすかのように、自分の中に巣食う何かは思うがままに強者としての生き方を見せつける。

吐き気がするような悪夢に、もう一人のガイは未だ意識を回復することは出来なかった。

「くくく……さぁて……これで邪魔者はいなくなったな」
「う、嘘……こんなのって……」
森の中。魔物狩りを行っていたはずの討伐隊。それに所属する生きた人間は、たった二人になっていた。
笑みを浮かべるガイの周囲には、魔狩りの戦士団に所属する自分以外の男全員の死体が転がっている。
自分を襲ってきた古株の隊員達も、悲鳴を聞きつけてやってきたもう一つの隊、隊長や他の隊員達も全員、ガイの手に掛かり、驚愕や嘆き、苦痛に濡れた表情で屍を晒している。
周囲には血の匂いが充満し、ガイの身に着けている服や得物は彼らの血が付着して汚れてしまっていた。
だがそんなことは気にもしない。弱者が自分の邪魔をしようとしたのだ。ならば死んで当然である。
強者が好き勝手する。それが世界の在り方。誰もが知っている理だ。
だからガイはその通りにした。罪の意識は全くない。こうするのが生きることだと経験上、知っているから。
しかしそんなことよりも、今のガイは只々興奮していた。
小難しい理屈など何もないし、もう一方の人格のように考える必要もない。
自分は今、極上の女を前にどうしようもなく興奮している。女を汚したくて堪らない。
血は滾り、己の股間は既に酷く起立してしまっている。今まで一度たりともそういったことをしたこともない。この身体、もう一方の人格が動いている時も、一切これを発散することはなかったのだ。
それだけに、ガイはもはや辛抱堪らない。
剥き出しになった性欲が心と頭を支配している。他のことなどどうでもいいと思っている。
ショックで腰を抜かしたのか、地面にへたり込む女に近づく。

女という生き物の丸み。肌の滑らかさ。造形の美しさ。その全てがガイの興奮を上昇させる。
だからガイは、かつてその行為を見た時のように、欲望のままに彼女に襲いかかった。
「いや、やめて……！」
トーチカが抵抗するが、彼女は自分よりも弱く、腰も抜かしている。刃向かえるはずもない。
そしてその抵抗が、何やら己の内側を駆り立ててしょうがなかった。
もはや荒い息をみっともなく晒しながら、ガイはトーチカに覆いかぶさるように抱きついた。
「はぁ、はぁ……！　っ、く……はは、す、すげぇ……なんだこれ……！」
女性の肌に触れた瞬間、ガイは身体に電流が走ったかのような衝撃を受けた。
初めて味わう女性の肌。それはもう、言葉に言い表せないほどの卑猥さであり、無条件に身体が熱くなってしまうものだった。
「う、くぅ……！　柔けぇ……！　気持ちいい、気持ちよすぎる！　はっ、はっ、女、俺の、俺の女だ……！」
ガイの手が乱暴にトーチカの身体を蹂躙していく。
胸、太もも、尻、足――何処に触れても気持ちいい。滑らかで柔らかい肌の感触は、男の身体にはないものであり、どうしようもなく性欲がグツグツと掻き立てられる。
「やめて……っ、やめてよ……ガイ……っ」
「あ、あ～～～、最高だぁ……！　も、もう我慢できん！」
興奮しすぎて、身体の抑えが利かない。
既にズボンの中で濡れているそれをトーチカの下腹や太ももに擦り付けるように腰をカクカクと揺さぶる。柔らかな肌に擦りつけるだけで、そういった行為に慣れてないガイは異次元の快感を感じて悶えた。
だがそれだけではもはや我慢出来ず、忙しなく乱雑にズボンを脱ぎ

捨てていく。
それと同時に、ガイの手がトーチカの服を力任せに破り、胸や尻、身体の大部分を晒させる。
そしてその奥にあるそれも見て、ガイはもう何もかもに興奮し、見ていた記憶と知識からそこに狙いを定め、一気に突き入れた。
「いやあああああああああっ!!」
「うっ……ぐ、こ、これ、やべぇ……!」
己の分身を熱いものが包み込み、そのヌルヌルした感触にガイは余裕なく呻き声を漏らした。
……ああ、気持ちいい気持ちいい！　気持ちよすぎる……！　なんだよこれ、最高かよ……！
女の中を掻き分ける感触。蕩けるような肉の感触は女を知らないガイに制御出来るものではない。
例えこのガイの性格がこうでなかったとしても、乱暴に自分勝手なそれを行うのは避けられなかったかもしれない。そう思わせるほどの初めての快感と興奮にガイはただただ本能に身を任せる。
「気持ちいい、気持ちよすぎる……！　う、はぁ、はぁ……最高だ……！」
女体の柔らかさ、気持ちよさを味わい尽くす。手を乱雑に動かし、身体を本能のままに動かす。その度に訪れる未知の快感に夢中になる。今のガイの頭は身体と直結していた。
ただ、欲望に正直に、自分の快感だけを求める動きは気持ちいいが、今のガイには気持ちよすぎて長くは耐えられるものではない。
故にその時が来るのは必然だった。
「うっ……ああ……ああああああああ!!」
己の中の性欲。その限界が迸り、訳も分からないほどの快感にもはや絶叫してしまう。
だがそれだけでは収まらない。ガイの得物は、未だ女を求めて飢えている状態のままであり、
「く、ぐはぁ、はぁはぁ……ふ、ははは……死ぬまで犯してやる……！　女、女って最高だ……これからも――」

「い、や……なん、で……」
トーチカのか細い声が響く中、ガイは森の中に笑い声と水音を響かせ続けた。
――だがしばらくして、愉しんでいたガイは不意に心の中の声を聞いた。
『――何をやっている⁉　やめろ貴様‼』
それは一度生きることを諦めて意識を手放したもう一人のガイだった。
焦燥したような、今起きていることが信じられないといった様子の声は迫真に迫ったもので、さしものガイもせっかくの行為に水を差されたという風に身体が止まる。反応をせざるを得なかった。
『俺達がずっとやりたかったことだよ、はははは！　おら、お前も快感は感じてんだろ⁉　うるせぇから大人しく愉しんどけよ！』
『っ、ふざけるな……！　こんなことが、許されていいはずが……！』
だが、そう言いながらもいつもの厳しさ、その勢いがいまいちなのはガイが言うように、もう一人の自分も未知の快感に戸惑っているのだろう。
心の中で会話を行いつつも、ガイは自分の手を止めてはいない。未だありえないほどの極上の快感が、腰下から送られ続けている。もう一人も心の中で悶えているのだ。ある意味気持ちが悪い気もするが、自分と考えればそこまで嫌悪感は湧かない。精々大人しくしてろとガイはひたすらに彼女を犯し続ける。
「うっ……くぅ～～～、これこれ、ほんと堪んねぇ……！」
『やめろ……！　罪を重ねるな……！　身体を返せ……！』
嫌だ――と心に念を送る。これまではずっとお前の番だったが、これからは自分の番なのだと意志を定める。
そもそもこれまでの、お前の弱者のような生き方はずっと気に入らなかった。強者の生き方を知り、世界がどういうものなのかを知っていながらの行動なのだから心底呆れる。
自分のように好き勝手やることこそ正しい生き方だ、とガイは腰を動かしながら、同時に両手で抵抗しようとしたトーチカの首を絞め

た。
　すると、下の締め付けも強くなり、
「うぉ……これもすごいぞ……！」
『っ!?　おい貴様！　何をしようとしている!?　馬鹿なことはやめろ!!』
　――もはや声は聞こえない。強すぎる快感に再び辛抱堪らなくなり、心の声をシャットアウトしたガイは、本能のままに首を絞め、腰を振り続ける。
　自分の下で、悲痛に濡れた表情をしている彼女のことも気にならない。己の最高の快感のために犠牲になれと、ガイはそれを続け、
「ぐっ、また……！」
　激しい快感に最後のダメ押し。全力を込めて首を絞めると今まで以上に快感が強くなり、ガイは再び迸る快感を解放した。
　荒い息と共に力を緩め、また続けようかと意識を彼女に向ける。
　しかし、
「……あ、死んじまってるな」
　と、うっかり力を強めすぎて、彼女は既に死んでしまっていた。
　そのことに多少の残念さは覚えたが、ガイは自分の得物を彼女の中から引き抜きつつ、大きく息を吐く。
「ふぅ～～～、満足だ。さて、これからは……」
　と、脱ぎ捨てていたズボンなどを回収し、ついでに周りの死体から物資などを拾いながらガイは笑みを浮かべる。
　何気に心の中の声が聞こえないが、意気消沈でもしたのだろうか。彼女や仲間を自分が殺したことでまた心が折れたのだろうか。その程度で折れるとは、やはりなってないなとガイは思う。やはり自分が主導権を握るほうがお互いのためだろうと。
「くくく……まあ隊は無くなったが、どうにでもなるか。幸い、経験は積ませてもらったからなぁ」
　落ちていた食料に齧りつきながら呟く。魔物討伐隊という食い扶持を稼ぐ手段は無くなったが、別に真っ当に稼がなくてもやりようは幾らでもある。

だからこそ、魔物討伐隊という世の中を知れる稼業をすることにガイは賛成していたのだ。
隠れ里の場所。行商人が通りやすいルートや、裏の人間と接触する方法など。世の中の渡り方を学習するのに、この隊は大いに役に立ってくれた。
最後に最高の楽しみを味わわせてくれたし、ガイ的には万々歳である。
「次は飯でも盗んで……いや、また女でも探すか。もっと他の女ともヤリたくてしょうがないしな、ぐふふ」
先程の女との行為を思い出して下卑た笑みを浮かべる。今まで経験したことはなかったが、本当に最高の行為だった。
これからはいい女を探して、見つけたら直ぐに犯そう。しばらく魔物討伐隊にいた経験上、自分より強い人間などいやしないだろうし、簡単にヤれる。
ただまあ、殺すとそれはそれで女が減るし、もう出来なくなるからそれは止したほうがいいかもしれないとガイは学習する。思わず快感に溺れて殺してしまったが、そもそも殺す必要はなかったし、殺さなければまだ愉しめたかもしれないのだ。
……それじゃあ行くか。
方針は決めた。欲しいものが出来れば奪い、お腹が減れば奪う。いい女は犯して回る。金も奪えばいい。
そして邪魔する者は踏み潰す。これからは好き勝手にやりたいことをして生きるのだ。
――そうしてガイは文字通り、第二の人生を歩み始めた。

「――と、言う風に順調に進んでいるようです」
「……順調、か……」
紅魔城の中心部にある玉座の間で未来視の魔女の報告を聞いた魔人レオンハルトは、眉間に皺を寄せた表情で呟いた。
それはお互いに共通する目的。ある人物の動向についてのもので

あり、極めて重要な計画の一つであった。
だがその過程は何とも言えない微妙なものであり、そういった話に慣れているレオンハルトだが、イマイチその人物の内面、性格を見通すことが難しく、その人柄を計りかねているところであった。
いずれは道が交わることになるし、嫌でも関わり合うことになるだろうが、その時のために分析を行っておけばより理解が深まり、今後の動きに活かせることもあるだろう。
だが、その人柄は極めて複雑で難しい。
レオンハルトがその男について知り得るのは概要くらいであるため、あまり深い部分のことについては手探りなのだ。
故に実際に見たり聞いたりして見極めるという普通のことを行っていた。そうやって思考を回しながら、
「……なら、お前がここに来るのもしばらくはなくなるか」
「ええ。もうじき、私も邂逅致しますのでそのための準備をせねばなりません。……寂しいですか」
「いや、すこぶる良い気分だ」
「……いつも思いますが、閣下は私に少々厳しくないですか？」
「待遇に物申す前に今までの行い、言動について胸に手を当ててみろ。俺の対応は当然のものだ」
「胸に手を当てる？　おや、閣下はあれだけの巨乳美女を抱えておられるのに、まだ乳房への渇望が止みませんか。まあそういうことなら、あまり自信はない粗末なものではありますが――」
「……そういうところだ」
「ふふ、これは失礼」
未来視の魔女のふざけた言動に目を細めるレオンハルト。指摘しても全く反省していないようなので溜息をつきたくなる。だがこんな相手でも縁を切ることは出来ないし、それこそ嫌でも関わることになる。故にいつものように諦めるしかないのだが、
「……まあいい。後はしばらくお前に任せる。何かまた再び動きがあれば連絡しろ」
「畏まりました。では、先程お伝えさせていただいた通りに、閣下もお

願い致します」
「ああ、任せておけ」
と、未来視の魔女との打ち合わせを終えると、彼女は直ぐにそこから消えるようにいなくなってしまっていた。
するとレオンハルトが直ぐに玉座から立ち上がる。じっとしているほどの時間の余裕はないからだ。やるべきことは山のようにある。故にレオンハルトは玉座の間から廊下に出ると、直ぐ様ある場所に向かった。
それは、
「――あ、レオンハルトさんっ！」
ノックをしてからその部屋に入ると、その部屋の主である羽の生えた美女が顔を明るいものにして駆け寄ってきた。先程まで本を読んでいたのか、栞を挟んだ本を胸に抱えている。そんな彼女の名をレオンハルトは呼んだ。
「本を読んでいたのか？　――ハウゼル」
「はいっ！　レオンハルトさんに薦めてもらいましたので……早く読んで感想を言い合えたらなぁと思って、えへへ」
本を抱きしめながらはにかむ魔人ラ・ハウゼル。
城に住む魔人姉妹の妹の方である彼女は今日も、読書に勤しむつもりだったようだ。
レオンハルトとしては話があるのだが、それが終わってからでも良いと思い、
「……そうか。なら、俺も本を読ませてもらっていいか？」
「！　はいっ、勿論です！　お好きなものをどうぞっ」
と、ハウゼルはその提案を快諾し、本棚にある本を指してそう言う。
今となってはハウゼルも自分の好きな本を色々と開拓しているようで、レオンハルトが読んだことのないような本もあった。だからハウゼルと過ごす時は逆に何か読ませてもらうことも多い。
ゆえにレオンハルトは本を一冊抜き出す。すると、ハウゼルがやはりいつものようにもじもじとし始め、
「……その、レオンハルトさん……いつものお願いしてもいいですか

？」
「――ああ、分かった」
頬を染めて、微笑を浮かべながらのお願い。その内容は分かっているため、レオンハルトは頷いてベッドの端に座る。
そして手招きするまでもなく、ハウゼルが近寄ってきて、こちらに背を向けた。
「……失礼します……」
と、ハウゼルがお尻を一度突き出し、スカートを整えるように手で下を通すと、そのまま下側を押さえてこちらの膝の上に腰を下ろした。
「んっ……えへへ、やっぱり、レオンハルトさんの膝は落ち着きますね」
「ふっ、それは良かったな」
微妙に恥ずかしそうにしながらも、喜びの方が大きいのか、背中をこちらに預け、すりすりと後頭部や背中を身体に擦りつけてくるハウゼル。
ハウゼルの身体の軽さ、柔らかさ熱さを感じる。お尻や太ももなども自然とこちらに擦りつけられるし、頭が動く度にさらさらの髪が揺れ動いてこちらの鼻孔をくすぐる。結構な甘えっぷりだが、最近ハウゼルと本を読む時はいつもこんな感じだ。彼女に頼まれるのだが、断る理由もないし、こちらとしても心地良いものには違いない。
それに、姉の方に比べたら甘え方も控えめであるため、特に思うこともない。姉のそれは自分の責任ではあるのだが。
そんなことを考えていると、レオンハルトの取った本をハウゼルが受け取ろうとし、
「私も一緒に読みますから……レオンハルトさんは、私の……身体に、手を回してください……」
「……ああ、分かった」
それはハウゼルにとっての合図に近いものだ。レオンハルトはその言葉通りに手を前に回し、ハウゼルのキュッとくびれた細い腰に腕を回す。

「ん、んぅ……」
するとハウゼルが悩ましい声を出して腰を少し動かした。
しかしまだ特に反応を見せたとか、露骨な行動を取ることはなく、ハウゼルは本を開く。
「では、読みましょう……あっ、早かったら言ってくださいね？」
ああ、と頷く。といってもハウゼルもこちらのペースを分かっているし、レオンハルトもハウゼルのペースを理解していた。
それに何より――この本を最後まで読めることはないと理解しているため、実はそれほど重要ではない。
そう思いながら、ハウゼルはページを捲って、一緒に読書を始めたのだが――
「ん……ふぅ……はぁ……」
一ページ。そしてまた一ページ。
読書自体は滞りなく、順調に進む。
レオンハルトも口実だと察しているとはいえ、一応読書自体もきちんとこなしている。
だがハウゼルの方はというと、時間が経つにつれて、
「ふぅン……ぁん……んくっ……」
段々と、ハウゼルの身体が熱っぽく、そして身体の揺らぎが大きくなってきた。
腰を左右に揺らしているが、別に座り心地が悪いというわけではない。いや、ある意味でそうかもしれないが、ハウゼルの目的はむしろそれだった。
「はぁん……レオンハルトさぁん……♡」
とうとう小声でこちらの名を呼び始める。その頃にはハウゼルの瞳はとろんと濡れており、息も乱れ、肌に汗が少し浮いていた。
そしてもはや確信じみた行動を取り始める。本を片手に、右手をお尻の下に潜り込ませ、こちらの股間に手を置いてきた。
「もう、こんなに硬くて……んぅ……♡」
細くてしなやかな指が、スリスリと棒状の得物をなぞるように撫でる。指先で先の方をカリカリと掻いたり、手の腹で撫で回したり、も

はや掴んで軽く上下に動かしたりと、完全にやりたい放題だ。
もっとも、ハウゼルのような美女に手で擦られることが嫌な筈もない。腰には甘い快感が走ってきている。
だがまあ、こうまで建前をもって、こういった行為に走ってくると、今日の目的とは別に悪戯心が湧き上がってくる。
どういう風に責めてやろうかと思いつつも、しかし目的があるのでやり過ぎてはいけないしと、思考を回し、そのままなすがままにさせてやろうと放置していると、とうとうハウゼルが反対側を向いて腰の上から降りた。
「はぁ、はぁ……逞しくて……レオンハルトさんのこれ……好き、です……んぅ♡」
本をベッド脇の台に置いて、両手で股間を撫で回してくる。そしてその可愛らしい発情した顔を近づけ、股間に顔を押し付けるように頬ずりしてきた。
こちらの腰の後ろに手を回し、お尻を高く上げながらズボンの上から得物にぐりぐりと顔をこすりつけてくるハウゼル。時折匂いを嗅いできたり、ズボンの上だというのに軽く口で食んできたりと、どう見ても欲しがっているような動きをレオンハルトは上から見下ろす。
……どうするかな……。
別にこのままハウゼルが望んでいるようにそういった時間を過ごしてもいいのだが、生憎と今日は彼女達に用があるのだ。
そのために先にハウゼルに会って、調えておこうかと思ったのだが、どうにも今日のハウゼルはいつもよりそういう気分だったらしい。
……だが仕方ない。少ししたら、ハウゼルを一旦放置してもう一人を呼ぶか……。
彼女達の問題を解決する一番の方法は、長年考えたが結局のところ、これが一番確実で信憑性がある。
故にレオンハルトは一度、ハウゼルをプレイの一環として放置させる方針を固め、もう一人を呼ぶことにした。
――魔人ラ・ハウゼルとその姉、魔人ラ・サイゼル。その仲直りの

ために。

最も効率のいい仲直り方法

紅魔城の客室。幾つも存在するそれらの一室に、二体の使徒は集まっていた。
「クケケケケ、おっすおっす～、来たよー火炎ちゃん」
「あ、来たんだユキちゃん……って、ノックくらいしてよっ！」
「めんごめんご」
「全くもう……」
魔人ラ・ハウゼルの使徒、火炎書士の部屋にノックも無しにやって来たのは、魔人ラ・サイゼルの使徒であるユキだ。
使徒の中で一番のキチガイと名高いユキと、使徒の中で最も臆病と自称する火炎書士。主同士の関係性もあって仲の良い二人は、いつものように暇を見つけて何となく顔を合わせていた。
呆れるような息を漏らす火炎書士は、お気楽なユキを不気味な仮面の奥から見ながらも一度本を閉じ、
「……というか、ユキちゃんが来たってことは……サイゼル様も？」
「そうそう。今頃はあのエロエロ魔人の手でサイゼル様がズッコンバッコンと大騒ぎしてる頃なんで可哀想な独り身は解散ってな感じで」
「そ、そういうこと言わないでよユキちゃん！　それに、え、エロエロ魔人って、レオンハルト様の事をそう言う風に言うと何されるか分からないよ!?」
声を張り上げてアワアワとしながら注意する火炎書士。しかしユキの方は気にしていない様子で、
「相変わらず火炎ちゃんは初心だなー。もっと私みたいにエロ本読も？」
「読まないよ！　というかユキちゃんも読んでないでしょ！」
「あ、バレてる」
すぐバレる嘘をつきつつ、ユキはケケケと軽い笑い声を室内に響かせる。

ツッコミに若干疲れた様子の火炎書士は、危機感があまりないユキに対して、少し声を落として言う。
「え、エッチなのはともかく……そういう発言は気をつけた方がいいよ。レオンハルト様も、優しいだけじゃないだろうし……」
「およ？　そうなん？」
「そうだよ。ただでさえ私達、もうここの秘密を知っちゃったりしてるんだから、今更この輪から抜けるなんて出来ないだろうしね」
と、火炎書士は自分の見解を話す。
臆病な使徒を自称する火炎書士としては、ここの秘密を握ってることは胃が痛すぎるものであった。
だがお気楽なユキはやはりいつものように軽い様子で肩を竦め、
「秘密ってどんなの？　実は冷え性とか？」
「そんなどうでもいいのじゃなくて、ほら……あの白兎ちゃんとかアルベルト様とか……」
「あー、チルドレン？」
「そうそれ。これ漏らしたら大問題だからね？　気をつけないと……」
白兎やアルベルトといった魔人の子。彼らのことを、結構前に主共々明かされたわけなのだが、火炎書士としては正直、重すぎる秘密を知ってしまったと頭を抱える思いだった。
ただでさえ魔人の子であり、そのうちアルベルトなどは魔人同士から生まれた、生まれついての魔人だ。
魔物界において、最強の魔人であるレオンハルトの注目度は高い。彼が何か行動を起こせば高い確率でそれらは噂になる。
この秘密の使いようによっては、レオンハルトという魔人に大打撃を与えることも不可能ではないのだ。
もっとも、火炎書士には主人であるハウゼルを裏切る気は毛頭ないし、ハウゼルや自分達がお世話になっている相手に仇で返すといったこともするつもりはない。
ただ性格的に、そういった悪用の仕方を思いついてしまうということと、情報の重大さに息が詰まるというだけである。

そしてもう一つ。これはまた、胃が痛くなるような心配とは違うが、ちょっと気がかりなことがある。
それは、ユキが偶然にも口にした。
「まー、ユキちゃん的には？　うちのぽんこつ上司がそれ聞いて顔真っ赤にして悶えてお股ぐしょぐしょにしてたし、新たなベイビーが生まれるんじゃね？　みたいな心配が大きいですねハナホジ」
「最後の単語だけで全然心配してる風に聞こえないけどこっちも同じ……ハウゼル様、明らかに意識してましたからねー……」
「姉妹揃って発情中か？　繁殖期か？」
うーん……あながち違うとも言い切れない、と火炎書士は内心で言葉を作る。
別にそれが悪いとは言えないのだが、ちょっと気になることでもあるし、あり得ないことではあるので使徒の身として気になることであるのは確かだ。
ユキも口ではこんな感じだが、気になっているのは本当の様で、
「サイゼル様が子守り出来るわけがないですからね。ケケケ」
「そこ？　……いやまあ、確かにそうかもだけど……その点、ハウゼル様はいいお母さんになりそうかも」
仮に子供が出来たら、火炎書士やユキもその子供にも仕えるというか、魔人の使徒としてお世話をしないといけないので他人事ではない。ある意味、主人の世話よりも大変かもしれないのだ。
「……でも、確率的にさすがにそれはないよね。ケッセルリンク様は、千五百年くらい付き合ってようやくそうなったらしいし」
「そうやって油断してるとうっかりぽっこりお腹が膨らんで元気なベイビー誕生ってことになるかもよ？」
「不安になるからやめてよユキちゃん……」
とはいえ、言うように確率的にはとんでもない低さであるため、心配は杞憂に終わるだろう。
現在、レオンハルトが二人の仲直りのために色んな意味で一肌脱いでいるが、そうはならないはず。
事前にその計画を聞かされた身としては、やはり主とその姉の仲の

修復が出来ればいいなと、自室で陰ながら応援しておく火炎書士だった。

サイゼルの部屋。
そこを訪れた魔人レオンハルトは部屋に入るなり、〝ちょ、ちょっとどっか行ってなさいよ〟と言われ、〝かしこまかしこま〜、後は若い者同士でごゆっくり〜〟と、相変わらずアレな発言をしながら入れ替わりで出ていったユキを横目にサイゼルと対峙する。
「……レオンハルト」
「今日はお前に用があっ――」
と、その先の言葉を口にしようとして、レオンハルトは途中で止めざるを得なかった。
何故なら、言葉の途中。二人きりになった途端、サイゼルがいきなりこちらの胸に飛び込んできたからで、
「い、いいから早くあたしを可愛がりなさいよっ！」
と、顔を赤くしながら強気に、それでいながらすでに頭を胸に擦りつけて甘えながら、サイゼルはそう言った。
これだからな……とレオンハルトは内心でなんとも言えない気持ちに襲われる。話が早くて助かるのも事実だが、サイゼルの甘えっぷりはハウゼル以上でたまに困らされる。
これも素直になる特訓を行ったせい――つまり自分の所為なので何も言えないが、ハウゼルに対して全然素直になれない辺りは、ほんとどうしたものかと悩んだものだ。
結局自分と二人きりの時は割と素直に要求を口にしてきたりするようになったが、姉妹仲の改善にはほど遠い。
故に前々から方法を考えていたが、結局はこの方法を使うことになってしまった。出来れば、別の方法が良かったのだが、仕方ないとレオンハルトは覚悟を決める。
「……サイゼル。今日はちょっと用事というか、提案があって来たんだが……」

「……何？　何でもいいけど、ほら……頭撫でたり、色々しなさいよ……！　話も聞くから……」
「……ああ、わかった」
と、サイゼルの頭や背中を撫でて可愛がってやる。すると背筋を震わせたサイゼルが表情を弛緩させ、
「ん、んぅ……もっとぉ……♡　これ好きぃ……♡」
……本当にこれで話が聞けるのか？
サイゼルの蕩けっぷりに疑問を抱いてしまうが、この言葉を言えば多少は正気に戻るだろうとレオンハルトは意を決する。
「ハウゼルとの仲直りの手筈が整った」
「！　それってほんと!?」
それを告げるなり、顔をがばっと上げて驚きの声を上げるサイゼル。レオンハルトはさすがに大切な妹のこととともなれば正気に戻るかと、内心ほっとする。これで元に戻らないようならどうしたものかと思っていたところだった。
「ああ、本当だ。もっとも、お前次第であることには変わりないがな」
「あたし次第……そ、それって、素直になって話してみるとか……？」
しかしこちらの続く言葉には不安そうな表情を見せる。やはり、この特訓を続けてからというもの、ハウゼルに対してはそこまで効果がないことを憂いているのだろう。それ以外の、特にこちらに対しては効果がありすぎるほどに現れたのだが、コンプレックスはやはり根深い問題の様だった。
だから、それ以外の解決方法を持ってきたのだと、レオンハルトは言う。サイゼルの疑問に首を振り、
「違う。……いや、最終的にはそうなるかもしれないか。素直になるための策ともいえる。かなり強引だが、最終的にはお互いの仲は改善されるだろう」
「……それが本当なら……う、嬉しいけど……出来るのか不安……」
「大丈夫だ。ふたりとも、普段やってることの延長線だしな」
「普段やってること……？」
ああ、と疑問符を頭に浮かべたサイゼルに対して頷く。

その方法とは――
「……聞いて驚くなよ――――３Ｐだ」
「……へ？」
サイゼルの顔が唖然とし、文字通り固まる。
それに対し、やはりそういった反応になるかと冷静に見つつも、言ってしまったことはしょうがないと、せめてこちらだけは毅然と対応してやろうと言葉を続ける。
「さ、ささささん……って……」
「聞こえなかったか。ならもう一度言うぞ――３Ｐだ」
「き、聞こえてるから何度も何度も言わないでよっ!?」
「それはすまん」
だがやはり顔を赤くしながらもツッコんできてるあたり、その意味くらいは知っているかとレオンハルトは頷く。
加えて、そのことに怒る可能性もあるかと思ったが、それもないようで安心する。
元々ハウゼルと関係を持っていることは知っているし、なんならそれに対抗している節もあるのだから大丈夫だろうとは思っていたが、問題は彼女を納得させることだと、赤くなったサイゼルの声を聞く。
「そ、そんなことで仲直りって……というか、あたしとハウゼルとレオンハルトって、無理無理無理！」
「ふむ、恥ずかしいか？」
「あ、当たり前でしょ！　特に、あの子の前でなんて……う、うぅ……」
「だが裸の付き合いという言葉もある。それくらいしておけば、もはや素直になることなど児戯に過ぎない。あっという間に達成出来るだろう」
「そ、そうなの？　でも……」
「それにハウゼルの方は準備が出来ている。俺の方は言わずもがな。後はお前の意志一つだ」
「う、うぅ……」
ハウゼルと仲直り出来ると改めて告げると、心が揺れたのか、若干迷いを見せるサイゼル。

今の状況を客観的に見ると、仲直りを口実に姉妹丼を頂こうとしてるクズ野郎の様だが、そういった目で見られるのはいつもの事であるため、もはや気にならない。気にしないように努めている。
実際、仲直りの方法としてはこれが一番可能性が高い。なにせ実績がある。同じ様なことをすればいいとは限らないが、同じ様に仲直り出来る可能性は高い。
故にレオンハルトは、心を鬼にしてサイゼルを引きずり込むことに決める。その表現は若干大げさだが。
まあ、こう言えば乗っかってくるだろうと、レオンハルトは悪魔の言葉をサイゼルに呟く。
「……ハウゼルとも、そういうことがしたくないか？」

部屋を移動し、そこにあった光景にサイゼルは息を呑んだ。
「ん……はぁ……♡　っく……あぁん……んふぅ……♡」
妹の部屋。そのベッドの上にいたのは、いつも喧嘩してばかりで仲良く出来ていない優秀で天然気味の妹、魔人ラ・ハウゼルだ。
だがその様子は、明らかに乱れている。
漏れる吐息は熱を帯び、肌を赤くしながら身じろぎを繰り返している。彼女の右手は股の間に挟まれており、そこで細かい動きを繰り返しており、何をしているかは一目瞭然であった。
部屋の中に入ってきたレオンハルトやサイゼルに気づかないほど、快感に夢中になってしまっている。
だがそこへ、レオンハルトは近づいて声を掛けた。
「……待たせたな、ハウゼル」
「っ……レオンハルトさん……♡」
さすがにその声には気づいた。そして待ち望んでいたかのように、ハウゼルが身体を僅かに起こし、濡れた瞳をレオンハルトに向けた。
そこでサイゼルとも目があった。すると彼女の表情は変わり、
「え……あ……ね、ねねね姉さん！　何でここに!?」
今更気づいたかのように慌てて、己の痴態を隠しはじめる。今更気

づいたところで既に見たのだから意味はないが、サイゼルもそれを見て、熱に浮かされたような気持ちになっているのは事実だ。
　しかし、今はまだハウゼルに対する普段通りの対応が勝り、
「べ、別に、姉として様子を見に来ただけだから……」
「そ、そうですか……って、何まじまじと見てるんですか!?　いいから出ていってください！」
「は、はぁっ!?　みみみ見てないけど!?　それに見てたとしてもあたしの勝手でしょ！」
「勝手じゃないですっ！　ここは私の部屋なんですから姉さんは出ていってください！」
「あんたの部屋って言うけどレオンハルトから借りてるだけでしょ！」
「それでも姉さんが勝手に入って来ていい理由にはなりません！　大体姉さんはいつもいつも――」
「ハウゼルも、いつもいつも妹の癖に――」
　顔を合わせた途端、いつものように言い争いを始めてしまうサイゼルとハウゼル。
　このままでは口だけではなく手を出し合ってしまうだろう。
　というかハウゼルも隣に自分がいることは見えているはずなのに、サイゼルにばかり突っかかっていく辺り、やはりこの姉妹は根本のところで相手を大切に思っているし、そこが非常に似ていると言える。
　だがこのままではまた喧嘩別れだ。
　それをさせないために、レオンハルトは隣のサイゼルにアクションを起こすことにした。
　ちょっとどうかと思うが、この争いを解決するためには仕方ないと、
「ひゃっ♡」
「れ、レオンハルトさん!?」
　こちらが起した行動。サイゼルに手を伸ばして抱きしめ、軽く脇腹を撫でるとサイゼルが艶っぽい声を上げ、ハウゼルも突然の出来事にようやくこちらを向く。サイゼルを撫でる手を止めずにレオンハル

トは言った。
「二人共少し落ち着け。部屋の中で喧嘩をされては困る」
「んっ、やんっ、で、でも……ひゃあんっ♡」
　口答えをしようとしたサイゼルを右手の動き一つで黙らせる。だがそれを見ていたハウゼルは姉の痴態を見てか、少し頬を赤くしながらも眉を立て、
「ね、姉さんずるい……今から、私がレオンハルトさんにされる番だったのに……」
「ら、らってぇ……♡　こんな、されたら……んんぅっ♡」
　早くも口元からよだれを垂らし、快感に喘ぎ始めるサイゼル。身体をビクビクとさせながら、こちらにしがみついてくるサイゼルに対し、ハウゼルは羨ましそうなものと、姉がやられていることと、自分の番だったのに、という対抗心など様々なものがないまぜになったような複雑な表情で喉をごくりと鳴らす。
　先程まで自分で自分を慰めていただけあって、ハウゼルはとうに出来上がっている。サイゼルが来たことで一時忘れていたようだが、身体の方は正直らしい。
　そんな彼女に向かって、レオンハルトは左手を空け、
「――ハウゼルも来い」
「え……」
　ハウゼルがその言葉にドキッとする。しかし戸惑った様子で、レオンハルトとサイゼルに視線を行ったり来たりさせて、
「で、でも……」
「サイゼルもこうなった以上、サイゼルを放っておくことは出来ないし、かといってお前をこれ以上放っておくことも出来ない。なら、二人一緒に――んんっ！」
　と、先の言葉は口を塞がれたことで止められた。
　それは右側から抱きついてきているサイゼルの唇であり、
「ん、ちゅう、んん、はぁ……いいからぁ、あたしとしよ……？　お願い……ちゅるっ、気持ちよく、してぇ……♡」
「んっ、サイゼル……」

無意識なのだろうが、こういう時の甘え方はサイゼルも凄まじい。もはやハウゼルを煽っているようにすら見えるほどに、レオンハルトに向かって身体や唇を押し付けてアピールをする。
それを見ていたハウゼルは、とうとう何かが切れたのか、身体を震わせて、
「……ず、ずるいですっ……！　私も……！」
「っ……！」
ハウゼルが空いていた左側を埋めるように抱きついてきた。そしてその勢いのままにキスをしてくる。
「ちゅっ、はぁ、んぅ……ちゅう、ん、はぁ……♡」
「ちょ、ちょっとぉ……あたしがしてたのに……」
「はぁ、はぁ……私の方が、先ですから……」
至近距離で軽い言い合いをする二人。
だが腕の中に二人。雰囲気も甘く、二人共出来上がっている状態。こうなればこっちのものだった。
「二人共、舌を出して顔を近づけろ」
「え、あっ……！」
「んんぅ……！」
二人の瑞々しい肌、女性の柔らかさと密着し、姉妹の身体を比べるように右手と左手を動かす。
彼女達のお尻、サイゼルのレオタードの中に右手を潜り込ませ、ハウゼルのロングスカートの中には左手を滑らせて、同時に撫で回す。瑞々しくすべすべとした弾力を楽しみながらも彼女達を感じさせると、二人は声を上げて、戸惑いながらも言う通りに舌を出してキスをしようと顔を近づけてきた。
そこに対して、レオンハルトは二人を誘導するようにして同時にキスをさせる。すると、
「んっ……！　は、ハウゼル……♡」
「あっ……！　ね、姉さん……♡」
当然だが、こちらだけでなく、サイゼルとハウゼルの二人の舌も合わさることになり、二人は羞恥に顔を赤く染めた。同時に二人の身体

がビクビクと震えたのを、抱きしめるこちらも感じ取り、それを見てからレオンハルトは更に告げる。
「気持ちいいだろう？　このまま三人でしたらもっと気持ちいいぞ？」
「こ、このまま三人で……」
「レオンハルトさんと姉さんと……」
快感の味を知っている二人が、これ以上の刺激を、それも心の底では慕っている姉妹も加わってやることに対して、期待し、熱に浮かされてぽーっとし始める。
二人の息が乱れ、見つめ合う。それでいながらまだ恥ずかしいのか、視線を時折外して、チラチラとこちらを見てくる。本当にやっていいのかと、問うてきているようだ。
それに対して、レオンハルトは口を開けることで答えた。言い訳の余地を与えるためだ。
こちらの命令。あくまでも、こちらとキスをする。その過程で、お互いの舌が触れるのは仕方ない。
そう言い訳が出来るようにして、踏み出しやすくなる。これは仕方のないことなのだと、自分の中で納得させる。
それを示し合わあせたように、二人は再び舌を差し出した。
「ちゅ、んっ、はぁ、んぷ……♡」
「れろ、んふ、はぁ、んちゅ……♡」
サイゼルとハウゼルと同時にキスをする。
三人の口が、舌が合わさり、ぴちゃぴちゃと水音を鳴らし、銀色の糸で出来た幾つかの橋を口の間に架ける。
その興奮は大きいようで、サイゼルとハウゼルはいつもよりも格段に熱を帯びた状態で乱れ、夢中になって舌を動かし始める。
それに巻き込まれているレオンハルトとしても、官能はかなり高められてしまう。
魔人姉妹。二人の美少女を両手に花状態で侍らせる。
二人の柔らかな肌に挟まれるように、身体の殆どが彼女達の感触や匂いでいっぱいになる。

二人の張りのある美巨乳。合計四つの乳房がむにゅりと胸板に押し付けられる。二人の衣装を押し上げる魅惑的なお尻を両手で揉み比べ、二人の美しくも女性的な太もも、足を絡ませる。

レオンハルトとしては慣れたシチュエーションではあるが、それでも同時に二人の自分の女を抱くのはいつだって気持ちの良いものだ。今回は彼女達の仲を修復させるためとはいえ、方法としてはかなり役得であることには変わらない。

アレな方法ではあるが、せめて彼女達にも楽しんでもらわないとな、とレオンハルトは彼女達を乱れさせるべく、服を脱がしながらベッドへと連れて行った。

姉妹丼

「えっと、そーっとそーっと……」
「……ゆっくりでいいから零すなよ」
紅魔城の主の次に豪華な部屋では、その主に似た目つきの青年のような少年がメイド服姿の少女と日常的なやり取りを行っていた。
時刻は三時。どうやらちょうどおやつの時間の様で、メイド服を着たカラーの少女、メリルは、レオンハルトの実の息子であるアルベルトに出す予定のお菓子とお茶をテーブルに並べており、危なっかしい手つきにアルベルトが注意している状態となっていた。
だがやはり、まだ慣れていないのか、ちょっぴり入れすぎてカップからお茶を零してしまい、
「あっ……失敗してしまいました……難しいですね。練習しないと……」
「……いや、構わない。メイドとしての働きを求めているわけではないからな」
アルベルトはそう言ってお菓子を一摘みするが、しかしメリルは軽く眉を立てた。
「駄目ですよっ。仕事を任された以上はちゃんとしないと」
「……ふっ、そうか」
真面目な奴だとアルベルトは感心する。正直、アルベルトとしては友人としていてくれればいいのだが、メリルの方はそうもいかないようだ。
少し話して分かったが、これで結構頑固な様で、言っても納得しなければ聞いてくれそうにもない。
だからアルベルトは若干諦めて言った。お菓子を飲み込みながら、
「一応このお菓子はメリルの分もあるんだが……そういうことなら食べるのは止めておくか？」
「えっ！　わたしのもあるんですか!?　なら食べますっ！」
と、一瞬にして席に着くメリル。先程まで見せていた仕事への責任感はどうしたと言いたいが、やるべきことは済ませているし、他に人

の目があるわけでもないので問題はないだろうとスルーした。
「せっかくのご厚意ですし、きちんと味わって食べないといけませんね」
「……ああ、そうだな」
それに、一人で食べるのはあまり好きではない。
普段の食事の時もそうだが、誰かしらがいたほうが個人的には賑やかで好きだ。
とはいえアルベルトはそれほど饒舌という訳ではないので、そういった賑やかな空間にいることだけで満足だとも言える。父親も母親も忙しいので、毎回一緒という訳にはいかないが、白兎も含めて誰かしらとは毎回同じ席に着いている。
「美味しいですっ！　こんなに美味しいの、食べたことありません！」
「……うちのお菓子、料理は絶品だからな」
お菓子を食べて感動するメリルにアルベルトは微笑を浮かべる。
するとメリルは改めて感嘆するように、
「はぁ～……やっぱり、アルベルトさんのお家は凄いですね。これだけ大きい家の子だと、欲しいものが何でも手に入りそうで羨ましいです」
「……そうでもないぞ」
メリルの何気ない言葉にアルベルトは否定で返す。
そうなんですか？　と首をこてんと傾げるメリルにアルベルトは頷いた。
「オレの欲しいものは、中々手に入れるのが難しいそうだ……」
「手に入れるのが難しいものですか？」
重ねて頷く。そう、確かにあらゆる物は言えば手に入るアルベルトだが、それでも欲を言うならば、
「……弟か妹が欲しいんだが、な。こればかりは難しいという」
「兄妹ですか。確かにいいですねっ。賑やかで楽しそうです」
そう。出来れば家族、兄妹がもっといれば楽しいと思う。
勿論、楽しいことばかりじゃないだろうが、弟や妹には期待されるだろうし、兄となるならば全力で守らなければならない。

しかしその為ならばその力をつけることに何の躊躇いもない。元より、家族や同胞を守るために力を付けているのだ。
それに白兎と行うように、兄妹同士で修行してみるのも面白そうである。
だがどうにも、それは難しいそうだが、
「大丈夫です、きっと叶いますよっ！」
「……メリル」
それが顔に出てしまっていたのか、若干元気づけるようにメリルが言う。
それとも天然なのだろうか、それは確信を持ったようなにこやかな表情で、
「お願いすればきっと叶えてくれます。アルベルトさんは良い子なんですから」
「……ふ、ふふ、そうだな。そうなるように、オレも願うとしよう……」
しかしその根拠のない明るい笑みにアルベルトも元気づけられる。
アルベルトはいつか弟や妹が出来るようにと心の中でそれを強く願い、再びメリルとのお茶会に興じた。

「はぁ……♡」
「んぅ……♡」
ベッドに押し倒し、己の上にいる裸体の美少女たちがそれぞれ片手を繋ぎ、熱い息を零している。
サイゼルとハウゼルの二人の姉妹。世界の支配者層である魔人、天女と見まごうほどの双子の美少女姉妹を同時に抱きしめて愛撫を行っているのは、魔物界の英雄とも名高い美丈夫、魔人レオンハルトだ。
それぞれ服を脱がせ、三人とも裸となったベッドの上で行われるのは、男性が見る淫夢のような行為だ。
すでに発情しきった二人の美少女姉妹は、三人でする行為――自分の好きな相手と同時にすることに興奮し、夢中になってしまってい

る。
　男性として好意を抱く相手であるレオンハルトと、喧嘩してても常に気にかけている、心の底では大好きな姉妹の片割れ。既にその行為の気持ちよさを知る二人にとって、そして初めて複数人でする彼女らにとって、眼の前に差し出された快楽の極致に抗うことは出来ない。
「やっ、あぁ、はぁ……んっ、ハウゼル……♡　あっ、んあっ、レオンハルトぉ……♡」
「んんっ、はぅ……んぅ、んくっ、姉さん……♡　やっ、んちゅ、レオンハルトさん……♡」
　レオンハルトの身体の上でサイゼルとハウゼルは絡み合う。
　三人の身体が重なり合う光景は淫靡かつ、複雑でもある光景だ。
　姉妹がレオンハルトの右と左から伸し掛かるように抱き合いながら、片方の手で片割れの身体を擦る。それに喘ぎ声を漏らしながら視線を向けるも、３人目を無視することは出来ないし、しない。レオンハルトの手が二人のお尻から、その奥にある秘境にまで伸ばされており、彼女達はその動きを感じ取って腰や身体をくねくねと動かし官能を高める。
　すでにレオンハルトの魔剣も戦闘状態。鋭く起立している。魔剣は姉妹が絡み合う足、太腿に挟まれるように当たっており、太腿やお腹を突つかれる感触、その存在感にサイゼルとハウゼルも興奮して身じろぎ。するとレオンハルトとしても二人のすべすべとした女性の柔らかさが全身に押し付け擦りつけられ官能を高めてしまう。魔剣も更に強くなる。
　並の男性ではこの絡みだけで達しかねないほどの甘い快感を受けながらも、それでは終わることはない。
　魔剣の主は更に魔剣を主張させ、次の攻め手に移る。あるいは、姉妹が自発的に攻めに移ったのか。戦闘中の状況の移り変わりは一目で判断することが難しいが、レオンハルトが不利となる体勢に移行したのは確かだった。
「はぁ、はぁ……凄い、大きい……♡」
「んっ、はぁ……逞しくて……♡」

二人の手がレオンハルトの魔剣に絡みついてきた。
合計二十本の指が魔剣を握り込み、その大きさと硬さを確かめるようにスリスリと撫で回す。ビクビクと震える魔剣を左右から見つめ合うサイゼルとハウゼル。そのうっとりとした視線に挟まれて、更に魔剣の震えは増す。二人共、個人としては魔剣の扱いを知っている身だ。
だが、その攻め手が二人に、相方が愛する姉妹となったことで、その攻め手はレオンハルトを攻め落とすに足る、破壊力を秘めた一撃となる。
「ハウゼル……♡」
「姉さん……♡」
二人の視線が魔剣越しに合わさる。魔剣がまさかと期待に震える中、そのまま二人の顔は近づいていき、
「「ちゅっ……♡」」
「っ……」
その瞬間、レオンハルトは魔剣の硬度がグンと一段階増したのを自覚した。
しかもなおもそれは続けられている。己の眼下で、
「ちゅっ、ちゅる、はぁ……ちゅ、れろぉ、んっ……♡」
「ちゅぱっ、あむっ、ちゅる、はぁ……ちゅ、はぁ……♡」
サイゼルとハウゼルが、魔剣の先端にキスを落とし、そのまま魔剣越しに舌を絡ませ始めたのだ。
ちゅっちゅっ、ぺろぺろ、と――姉妹が仲直りの証ともいえるベロキスを行っている。
それは見る人が見れば美しい、百合の花が咲くような光景かもしれない――間に、己の魔剣が無ければ。
ある意味で冒涜的な、それでいてちょっとした達成感すら湧いてしまうような光景。
レオンハルトとしてはその行為自体は慣れたものである。だからといって気持ちよくないというわけではないが、ちょっとした感動に襲われたのはこの状況だからこそだろう。

二人が魔剣に仲良く奉仕している。これは精神的に、中々にクるものがあると認めざるを得なかった。
魔剣に顔を埋める二人の姿は絶景そのもの。ちゅぱちゅぱと熱く濡れた唇や舌が這い回る度に、レオンハルトは堪らず息を漏らした。
「……いいぞ、二人共……」
思わず二人の頭に手を伸ばして撫でる。二人のサラサラの髪を手櫛して味わいながら、気持ちいいことを伝えると、二人の動きに更に熱が籠もった。全体を舐め回していた二人のうち、先にハウゼルが、
「はぁむ……」
魔剣を口の中に咥え込む。
そしてそのまま舐め回し、軽く頭を動かしはじめ、
「ちゅぽっ、ちゅぽっ……じゅる、んっ、んっ……ひゅき……♡」
愛情たっぷりの奉仕を受ける。
先端を口の中で舐め回し、筋を舐めたり、ちゅうちゅうと吸い付きながら扱き上げる。
熱い口内の感触に心地いい甘い快感を感じて頭を撫でてやっていると、もう片方から、
「ちゅっ、んっ、ずるい……あたしも……♡」
魔剣の側面に舌を這わせながらも、妹を羨ましそうに見るサイゼル。それに気づいたハウゼルが、魔剣からちゅぽんっと口を離すと、
「んっ……それじゃあ、どうぞ……はぁ、姉さん……♡」
「っ、あ、ありがと……」
と、あれだけ喧嘩していた二人が、あっさりと譲り、そしてお礼を告げていた。
やはりこの方法は正しかったんだな、と何ともいえない気持ちになっていると、再び魔剣が粘膜に包まれる感触を感じた。
「ちゅる、んっ、はぁむ、れろ、んっ、んっ、じゅる……おいひい……♡」
今度はサイゼルが魔剣を咥えてしゃぶりはじめる。
溝や先端を疎かにしない丁寧な舐め回しに、レオンハルトも腰を浮かせてしまう。

サイゼルの頭を撫でながら、その奉仕に身を委ねていると、再び交代し、
「んっ、ちゅる、じゅる、れろぉ……んっ、はぁ……♡」
「あぁむ……れろ、ちゅうっ、ん、んっ、んむ、はぁ……♡」
二人が交代交代で魔剣を咥えて奉仕を行う。
しかも片方がしゃぶっている間、もう片方はそれをサポートするように魔剣の側面や下側に舌を這わせていた。
こちらを見上げてくる二人の視線も魔剣の硬度を増す一因となる。口の中で大きくなり、震えてしまうことも、二人にはバレているのだろう。その度に奉仕が激しくなるのだから。
「……二人共、そろそろ――」
「んっ、んっ、んっ、じゅる、はぁむ、れろ、れろ、れろ……！」
「んっ、じゅる、れろ、ちゅう、はぁ、ちゅう……！」
気持ちよくなってしまい、そろそろ剣気を放出してしまうことを告げると、更に攻め手は激しくなる。
一度咥えるのを止めて、再び先端を二人同時に食むように舌を這わせるのは、もはや男のツボを分かっているのではないかと疑ってしまうほどだ。
二人を見下ろしながら、ゾクゾクと背筋を駆け巡る快感に堪らない気持ちになる。堪えることも不可能ではないが、生憎とそういう気が無くなってしまうような奉仕だった。
故に、
「っ……く……！」
「ん、れろ、あぁ……♡」
「ちゅっ、ん、はぁ……♡」
二人に見つめられ、舐められながら思い切り剣気を放出する。
二人の綺麗で可愛い顔や身体を汚し、快感に身を震わせていると、二人もうっとりとそれを浴びながら、しかし魔剣に再び口を被せてきた。
「はぁむ……じゅる、ちゅる……んん……♡」
「っ、サイゼル……」

剣気が欲しいのか、魔剣に吸い付いてくるサイゼルの口の中に軽く放出しながら、頭に手を置いて腰を自ら動かし、サイゼルの唇で魔剣を扱かせる。そしてある程度愉しむと、腰を引いてサイゼルの口の中から魔剣を引き抜く。引き抜いて欲しくなかったのか、腰を引く際に吸い付いてきて、ちゅぽんっ、と音が鳴る。そして、
「あぁむ……ちゅう、ちゅう、じゅる、れろ、んん……♡」
「く……ハウゼル……」
今度はこちらから突っ込む前に、ハウゼルが魔剣を咥えこんでくる。残った剣気を吸い尽くそうとちゅうちゅうと吸い付きながら、こちらも頭に手を置いて腰を動かし、ハウゼルの唇でも魔剣を扱く。それをうっとりとしながら舌をいつまでも這わせてくるので、このままずっとしゃぶらせてやろうかと思ってしまうほどだ。
「……ほら、次は別のところに注いでやるから」
「！　んっ……はぁ……お願い、します……私の、私達のここに、レオンハルトさんの……♡」
「！　ちゅる、んんぅ……レオンハルトの、ほしい……もっと注いでぇ……♡」
そう言うと、二人は口を離して、すっかり目をハートにしたまま欲しいと縋り付いてきた。
「ああ、任せろ」
レオンハルトは軽く彼女達の顔と身体を慣れた手つきで自然に、かつ高速に拭いてやると、その準備をあっという間に終える。百戦錬磨の彼にとって、女性のケアや次のプレイへの速やかな移行は極まっている。
人によっては、まるで場面転換してしまったかのようにも見えるほどの自然な移行。そういった行為を多く嗜む男としては必須の技術だった。
「はぁ、ふぅ……レオンハルトさん、あっ、んんっ……早く……♡」
「早くちょう、あっ、やっ、早く……ちょうだい……♡」
すっかりと出来上がった状態の二人が、こちらに尻を向けて左右に揺れ動いている。先程からではあるが、いつもよりも格段に発情し

きっている二人を見て、レオンハルトは僅かに思考を真面目なものにして、
……やはり、二人の感覚のせいか。
二人は気づいていないだろうが、彼女達がいつもより、レオンハルトがそれほど激しくしていないというのに感じているのは、二人の感覚が共有されているからだろう。
サイゼルを感じさせればハウゼルにも。ハウゼルが快感を感じればサイゼルにも快感がいくようになっている。元々同一の存在であることを知っているレオンハルトだからこそ理解出来るが、二人はよく分からないまま、三人ですることがいつもより気持ちいいのだと錯覚しているに違いない。
お互いにキスしあってた時なども、お互いの感覚が伝わって単純に倍の刺激になっていたはずだし、こちらが軽く弄ってやった時も、普段よりも出来上がるのがかなり早かった。
勿論、お互い好き合ってる同士、姉妹同士でそういうことをしているという精神的な快感も要因の一つだろうが、共感覚の影響が大きいことは間違いない。
そしてレオンハルトとしても、ここからは少し覚悟する必要がある。先程まではそうならなかったが、ここからはそうなる可能性が非常に高い。
一度呼吸を整え、覚悟を決めると、発情した二人の姉妹の内、サイゼルの方から剣を突き入れることにした。
瞬間、
「あ、あぁあああああああ～～～♡」
「うっ、あ、ひあっ……はぅ、～～～っ♡」
入れられたサイゼルが嬌声を上げるだけではなく、ハウゼルまでもが身体をびくんびくんと跳ねさせて、快感に喘ぐ。
きっとハウゼルは今、サイゼルと同じ、己の剣が中を掻き乱す感覚を味わっているのだろう。
それと同時に、左手でハウゼルの尻やその部分を撫でるとハウゼル自身だけではなく、サイゼルまでもが撫でられたように感じて声を上

げる。
　いつもより感じているためか、剣を包む感触も強く熱い。濡れてはいても挿入に若干の抵抗があるほどの吸い付きに背筋がゾクゾクとしてしまう。
「……動くぞ」
　と、しかしその堪らない快感を我慢して更に剣で攻撃に転じる。
「やっ、あっ、んんっ、はぁ、んっ、これ、しゅ、しゅごいぃ……あんっ、あぁ……♡」
「こ、んっ、こ、こんなの、あんっ、はぁ……んっ、はじめてぇ……♡」
　激しい突きによってサイゼルを喘がせ、同時にハウゼルも喘がせる。二人が身体を震わせ、更に快感を求めようと自ら腰を動かしもする。
　そうやって喘ぐ四つん這いの二人は、徐ろに視線を合わせるとそのまま顔を近づけ、
「は、ハウゼルぅ……♡」
「ね、姉さぁん……♡」
　ちゅっ、と口を合わせ、そして舌も絡ませる。
　するとレオンハルトの方にも――変化が来た。
「！　っ、これ、は……！」
　視界の変化。一瞬、頭の中の認識が弄くられるような目眩と閃光を感じた次の瞬間には、変化は起こっていた。
　サイゼルに入れていたはずの自分は、何故かハウゼルに向かって腰を振っている。
　ハウゼルの中の熱い感触を感じて魔剣が突然の出来事に強い快感を感じてしまう。
「はぁ、あああぁっ、うっ、はぁ……レオンハルト、さぁん……それぇ……もっとぉ……んんんっ♡」
「んむ、ハウゼルぅ……ちゅっ、はぁ、可愛い……んはぁ、れろ……あぁっ♡」
　眼の前で行われている光景は全くの逆。
　ハウゼルの中に突き込み、ハウゼルが強く喘いでいる。サイゼルは

快感を感じながらもハウゼルにキスを落とし続けていた。
やはり来たか、とレオンハルトは予想していた事態に、しかし予想以上のものを感じて呻いてしまう。
十中八九、サイゼルとハウゼル。二人とするならばこうなるだろうとは思っていた。
だが予想することと実際に体験してみるのとではまるっきり違う。
レオンハルトは初めて味わう、二人を同時に犯しているような感覚に熱いものを感じてしまっていた。
数多の戦闘経験を持つ彼にとっても、この感覚は初めて経験するものであり、容易に受け流すことは出来ない。
だがそれでも、快楽に対する耐性はある。故にレオンハルトは、次の瞬間にはハウゼルからサイゼルへと再び入れ替わる感覚を味わいつつも、普段通りに二人を攻めることに決めた。
「行くぞ……！」
二人の腰を掴む。太腿や尻にも時折手を置き、あるいは覆いかぶさるようにして胸を揉みながら、レオンハルトは攻めを続けた。
「ひゃあっ、ああっ、んあ、ひもちいいよぉ……あぁああっ♡」
サイゼルが激しい快感を感じて乱れる。その強い快感を示すように魔剣をきゅうきゅうと締め付けられる。
「ああんっ、んんっ、はぁ、んく、すきぃ、これしゅきですっ……ん、ん～～～っ♡」
しかし次の瞬間には、突き入れている人物はハウゼルに、片手で弄っているのはサイゼルの方に変わる。一瞬にして切り替わる鞘の締め付けに、魔剣も負けじと更に硬度と大きさを増していった。
「はぁ、んっ♡　っも、もうらめぇっ！」
「あっ、やっ♡　も、もうイッちゃうぅっ！」
相手の快感は自分の快感に。快感の相互作用を受けて姉妹はもはや蕩けきっていた。
紅潮した白い肌に汗を浮かせ、髪を振り回しながら、もはや気持ちよすぎて涙目になった二人が喘ぎ声をあげる。鞘の方もそれを示すように魔剣を奥へ奥へと引き込もうとしていた。

レオンハルトの方も二人を同時に感じて熱いものを感じる。もはやどっちを抱いているか分からないほどであった。
ただどちらも、己の魔剣を離さないと言わんばかりに強く吸い付き、欲しがっていることは確かだった。
――これは勝機に他ならない。二人の女性に求められ、しかも同時に剣気を放出出来るというのに出さないのでは男が廃る。
魔剣が否応無しに彼女達の中で雄々しく膨れ上がる。勝機を掴めと轟叫ぶ。
二人の中が強く収縮する――その瞬間、その強い快感で箍を外すように、レオンハルトは剣気を放出した。
「あ、あぁあああああああああ～～～っ!!」
「っ、くっ……!」
二人の中に、それぞれ剣気を放出する。
果たしてどちらが先にそれを受けたのか。レオンハルトには判断がつかない。
「はぁ、あっ……レオンハルトさんの、が、中でいっぱいぃ……♡」
「んっ、あぁ……こ、これだいしゅきぃ……ふぁ、んんっ……♡」
しかし、剣を一度引き抜くと同時に、その感覚が抜けて元に戻ったような感覚を得る。
その時、目の前に広がっている光景は、二人の鞘から、己が出したであろう白い剣気が入り切らずに溢れている光景であり、やはり二人同時に受け止めたのかと、その体験、二人の体質に不思議なものを感じてしまった。
――しかし、これでは終わらない。
「はぁ……ハウゼル……レオンハルトぉ……もっとしよ……♡」
「んんぅ……サイゼル……レオンハルトさん……もっと気持ちよくなりましょう……♡」
一段落ついたと息を入れていたレオンハルトは、しかし四つん這いになって這い寄ってきたサイゼルとハウゼルに軽く押し倒される。
こちらの身体に鞘を擦りつけながら、二人で汚れた魔剣に口づけしてぺろぺろとお掃除を始める。

そんなことをされれば、再び臨戦態勢に入るのは明白で、
「はぁ……また大きく……♡」
「んっ……これでまた出来ますね……あんっ♡」
「っ……お前ら……」
目をハートにさせて、仲良く奉仕を始めた二人に、どうやら仲直りは成功したようだと内心で一息つく。
しかし情欲の灯はまだまだ消えてはいないようである。一瞬、この後仕事もあるし、相手をすることを迷ったレオンハルトだが、まあいいか、と全然離してくれない二人が疲れて眠りにつくまで、しばらく相手をすることにした。

強盗

生物において、外敵というものは異種であるのが殆どである。
人間においても、それは同じ。人間にとっての敵は、世界を支配する存在――魔物や魔人、魔王といった生物である。
天敵といっても差し支えないかもしれない。人類の歴史とは、魔物相手にどう生き残るかという戦いの歴史であるからだ。
古くは戦いや防衛を行っていた人類も、魔軍に敗北し、多くの人間は魔物に家畜として飼われ、野良の人間も逃げ隠れるようにひっそりと暮らすようになった。
だが、それでもなお、人間にとっての外敵は魔物だけに止まらない。
人によっては、魔物という分かりやすい脅威より、こちらの方が頷けるだろう。
人間の敵は、同じ人間であると。
「――ははははははっ！　止まれーーー!!」
「っ、な、なんだ!?」
とある荒野。
魔物が比較的少ない地域を選んで、今では数少ないうし車を走らせていた物資を運ぶ商人、キャラバン隊は突如として進路を妨害する男の姿に慌ててうし車を止めた。
今の世界においても、商人というのは逞しく生き延びている。野良の人間が生きるのに、やはり物資を仕入れて運んだり、売り買いする彼らの存在は必要不可欠だった。
有名所でいえばキリング商会。その他にも、地域ごとに小さな商会を経営しているものがいたり、商人として駆け回っている者達は多数存在する。
そのうし車を走らせていた男達も、その商人に他ならない。
だが、人間が突然うし車を止めてくるなど、用件は二つに一つというものだ。
一つは、物資を売り買いしたいという取引の申し出。冒険者や魔物討伐隊であればお得意様であるし、そうでなくとも外で生きる人間で

あれば物資を欲しがるものは幾らでもいる。
しかしだ。男の欲に塗れたニヤリとしたその表情は、今から取引をしようという男の顔ではなかった。
それもそのはず。その男――ガイは、今や冒険者や魔物討伐隊などではない。
特定の稼業を営んでもいないが、敢えて言うなら、
「お前らの物資を全て、この俺が奪ってやる！　はははは、感謝しろ！」
「な、なんだとっ！」
馬鹿笑いをしながら積荷を置いてけと清々しいほどの強盗宣言をするガイ。
そう、彼は今や、盗賊。強盗、強姦魔、いわゆる悪人と呼ばれる類の人物だった。
以前の真面目な性格、理知的な部分を覗かせる表情はない。
今のガイは顔立ち、体格は同じでも、その精神が大きく違っている。
強欲で、傲慢。ある意味で、竹を割ったような真っ直ぐな性格をしている。悪い意味で迷わないというか、正直な人物となっていた。
今の彼にとって、人から物を奪ったり、邪魔する奴を殺したり、女を無理やり犯したりということは忌避することではない。以前ならいざ知らず、今のガイはこの弱肉強食の世界で、強者らしく好き勝手に生きると決めているのだ。
だからガイはいつもの様に、商人がここを通るであろうことをなんとなく予想して、待ち伏せていたのだ。
今までに何度か使った手口。それだけにガイの表情に迷うものはない。
「盗賊か。それもたった一人……」
「へぇ、度胸あるな。だが、運が悪かったな」
「あ？　なんだお前ら？」
真っ直ぐにずかずかと歩くガイに、しかしうし車から降りてきた武装した人間達が立ちふさがる。
数にして１０人程度だが、それなりに腕に覚えがありそうな身のこ

なしだ。体格もいい。
彼らを見て、胡乱な表情になるガイだが、男達は構わず告げた。ガイに向かって武器を抜きながら、
「俺たち、〝赤色の閃光〟が護衛しているキャラバンを襲うなんてよ」
「お前さんも腕に自信はあるようだが……相手が悪かったな」
「普通の相手なら何とかなったかもしれねぇが、俺たちに敵うわけ――」
「ごちゃごちゃ言ってねぇでどけ」
「――え」
と、男はその瞬間、近くで聞こえた声に何が起こったか分からないまま絶命してしまう。
「い、今何が……？」
「お、おい……リーダーが真っ二つにされたぞ……？」
だがそれは、同じく見ていたはずの護衛達も同じこと。
何が起こったか分からない。
だが、結果で分かることがあるとすれば、この眼の前にいる男が、剣でリーダーを真っ二つに斬り捨てたこと。
それを目にも留まらぬ速さで行ったということ。
そしてそれはつまり……この男が、自分達の何倍、何十倍と強いであろうことだ。
「はははははは！　邪魔するやつは殺すからな！　戦うなら好きにしろ！」
まだ二十歳といったような青年であるというのに、この強さ。その馬鹿笑いからは到底想像もつかないが、実力は本物であった。
それを察した時の男達の――否、その場にいる者達の行動は早かった。
「に、逃げろーーーーー!?」
「リーダーがやられたんじゃ俺たちじゃ敵いっこねぇよぉーーーー!!」
「ひいい、お助けーーーー!?」
「も、物は幾らでもやるから、い、命だけは……！」

護衛の戦士だけではない。そのキャラバンの商人や、何故かうし車から出てきた何人かの人間達も、その殆どがガイを凶悪な人物だと判断し、その場から蜘蛛の子を散らすように逃げ去っていく。
実際、人としては無類の強さを持ち、魔物相手でも無双してしまうような強さを持つガイには勝てないだろう。今までも多くの腕自慢の人間を斬り捨ててきているのだ。
ひょっとすれば、世界の何処かにガイに敵う人間が一人か二人はいるかもしれないが、それでも人間としては既に最強クラスであることを、当のガイは気づかずとも根拠のない自信で的中させていた。
ガイは自分で自分のことを最強だと思っているのである。
「ははは、逃げろ逃げろ。男は邪魔だしいらん」
だからこそ、彼らが逃げたところで追うこともせず、笑って見逃す。
自分の強さに絶対の自信を持ち、実際にそれに見合った実力を持つガイにとって、一々襲った相手を殺す必要はない。邪魔をしなければ見逃す。脅威とならないからだ。逃げて徒党を組んで反撃してきたとしてもたかが知れているし、その時はまた改めて殺してしまえばいい。
自分の強さに畏れをなして逃げる奴など、別に追いかけてまで殺す必要はない。ましてや殺しが趣味や愉しみという訳ではないのだ。面倒は少ないに越したことはないと、好き勝手生きることを好むガイにとっては当然の思考である。
だからだろうか、ここのところ悪行三昧のガイは意外にも、殺した数自体は少なかった。
それでも行ったことは褒められるものではないが、生憎と今はそれを止めようとする者も声もない。あの日からしばらく、もう片方の声はかつての自分の声が聞こえなかった時のように、聞こえなくなっていた。
存在は感じているので消えたわけではないだろうが、声は聞こえない。
それだけ今の自分の支配権が強固である証だろう。
「さぁて、とりあえず適当に金や物でも奪っていくか」

だが今の自分にはそんなことよりも、眼の前の金品、物資が重要だ。
別に金が無いならないで店から無理やり奪えばいいのだが、ガイも馬鹿ではない。お金がないと宿場に泊まることも出来ないのだ。見境なく強盗しすぎると、それはそれで不便になる。寝泊まりするのに無理やりという訳にもいかないのだ。
だからこそ、お金は奪っておく。そして食べ物なども奪っておく。良い感じの武器や防具などの装備品がないかと探し、貴重なアイテムでも落ちてないかと物色していく。今でも自分は十分最強だが、より強くなることを止めはしない。強い奴が好きに生きれる世界なのだ。強くなることは何よりも重要である。
「こっちの剣はちょっと使えそうだな……一応貰っとくか。それと、こっちのアイテムは――ん？」
「あぁ、うぅ……みんな、何処に……？　何で急に外に出ていったんですか――って……？」
そんな時だ。一つのうし車から、ボロ布を纏い、手錠を付けた少女がきょろきょろとしながら出てきたのは。
ガイはその少女と目が合い、瞬間的にその容姿を判断し、身体に電流が走る。
「……ほほう……？」
「あ、えっ……？　あ、貴方は……？　みんなは何処に行ったか知っていますか……？」
戸惑いながらも、話しかけてくる少女。
だがガイは顎に手を当てて、いやらしい視線で少女を品定めしていた。
身なりはボロく、少し汚れているが、小柄で可愛らしい顔つき。おそらくは奴隷か何か。それなのに、サラサラとしたセミロングのピンク色の髪を持っている。
体付きも結構唆る。胸はBかCくらいか。ちゃんと腰つきも女性らしいし、お尻の形もいい。
そこまで考えた時、既にガイの手つきはワキワキとしていた。いつものことである。ガイがこうやって女性を品定めして襲うことは、既

に日常となっているのだ。
「ぐふふふふ……ふはははは！　かわいこちゃんをいただきーーーーー!!」
「えっ？　――きゃっ!?」
エロに目覚めたガイにとって、可愛い子とエロしない理由はない。
即座にズボンを脱ぎ捨てて、じゃきーーーん！　と、剣を露出させると、そのまま奴隷の美少女に向かってダイブしていった。

荒野を遠くまで見下ろすことの出来る岩山。
そこは人の手では到底登ることの叶わない垂直の、細長い岩山だった。
しかしその頂上には今、人影が存在する。
黒いコートと顔の上部分を隠す仮面で正体を隠したその人影は、その場にいた何よりも異質な存在感を放っている。
この岩山を住処にしていた飛ぶことの出来る魔物は、彼を感じた瞬間にその場から何の躊躇いもなく逃げ出してしまっていた。
体格から察するに、男。それも無駄なく鍛え上げられた肉体を持ち、仮面の奥には想像を絶する魅力を秘めた男だ。
そんな彼は誰もいなくなった岩山の山頂で、とある一点を見下ろしながら傍らの影に話しかける。誰もいないはずのそこには、いつの間にか魔女が立っていた。
「……随分と、面白くなったようだな」
「ええ、そのようですね」
いつの間にか現れた白い魔女は、黄金の髪と赤い目を覗かせる彼に頷く。二人は共犯者であり、久方振りの邂逅となった同志でもあった。
「……あいつは本当に、〝奴〟とは関係がないのか？」
「……さてどうでしょうな。関わりはないようには視えますが……」
ふむ、と彼の質問に魔女は少し考えるように目を細くする。目の光が僅かに増したような気がした。

しかし魔女は息を入れ、今度は魔女の方から彼に向かって尋ねる。
「――それほどに、似ていますか？」
「……ああ。ところどころは違うが――懐かしく感じるほどにな」
彼の返答に、左様ですか、と魔女は頷く。二人はとある人物達のことを話していた。
一人は眼下にいるこの時代を生きた英雄。そしてもう一人は、また別の英雄だ。
特に彼の方はその二人を比べて、いつもより高揚しているらしい。かなり力を抑えているらしいのだが、ビリビリとした空気の震えが身体にまで伝わってくる。魔物が全て逃げ出すはずだろう。この彼に真正面から相対出来る生物など、地上には片手の指で数えるほどしかいないはずだ。
そんな恐ろしくも畏怖すべき存在が、仮面の下から漏れ出るほどに、今は笑っていた。
「くっ……くくく……ははっ……なるほど。行動もそっくりだな……くく」
「……活き活きと人生を謳歌していらっしゃいますねぇ……しかし、それほどに面白いですか？　罪のない女性が襲われているシーンだというのに」
別段、責めるつもりではなく、単純に疑問に思い、魔女はそう質問する。
そういった倫理観や道徳心のようなものは、こうやって生きるようになってから希薄となっている。忌避感は感じない。
だが彼の方はそうではないはずで、見慣れていて、必要とあらばそれを許しても、どちらかといえば眉をひそめるような御方の筈だ。
しかし彼は言った。自分の不謹慎さにも笑っているのか、苦笑気味に、
「ふふ、確かにな。冷静に、客観的に見れば奴は悪人で、鬼畜と呼ばれるような男だ。やっていることも、まるっきり俺の理念とは合わない」
「……では何故？」

再度の問いに、彼は頷いた。それは、と間を置いて、
「……説明が難しいな。それに、説明したとしてもお前に俺の気持ちは分からないだろう。それでも敢えて説明するなら、幼き頃に見た童話を久し振りに見て、懐かしんでいるような……そんな気持ちになってしまってるだけだ」
そう言うと少し落ち着いたのか、彼は笑みを潜めた。魔女は頷き、
「なるほど。――しかしそれは、どちらの事を言っているのですか？」
「前者を見て後者を思い出しただけだ。俺は眼の前の奴のことを、それほど知らなかったからな」
眼下の荒野にいる男に視線を飛ばしながら言う。だがその上で彼は再び、今度は少し嘆くように自分の掌を見て苦笑し、
「しかしだ。今の俺には、それを心から楽しむことは出来ないらしい。今の俺は、懐かしさを覚える反面、奴の下らない行動を見て純粋に、人間の愚かさ、失笑してしまうような気持ちにもなってしまっている」
「身体に、心は引っ張られるもの。幾度と身体を変えてきた私にとって実証済みのものです。貴方様もそうなっているのでは？」
「くく、違いないな。〝昔の俺〟と〝今の俺〟が、同じであるはずがない。その言葉は核心を突いている」
そこで今度は、心底愉快そうに笑う彼。本当に真実に近いことを言ったからこそ、可笑しそうに笑ってしまっているのだろう。
「もうすぐで、貴方様の真実も明らかになりそうですね」
「――――あいつが、俺の真実に耐えられるほど強ければな」
そう言って、彼は岩山に足を掛ける。飛び降りようというのだ。
「改めて言っておくが、俺はいずれ到達したあいつ相手に、手加減をする気も、ましてや負ける気もない。本気を出しても、あいつは死なず、物事が上手く運ぶというお前の言を信じてるからだ」
「……それは有り難いことで。私の未来視を信じて頂けていると」
「ククク、まあ俺も知っているからこそ、ある程度の信憑性はあるってだけだがな」
不敵な笑みを浮かべ、彼は言う。その力の奥底を未だ晒さずに、
「さて、そろそろお前が頼んだ嫌な役を果たしてくるとするか」

「ええ、どうかお願い致しますよ。私は見届けたらそのまま隊に戻りますので、貴方様も子供の待つご家庭に帰るといいでしょう」
ニヤニヤしながら魔女が言うと、彼は少し微妙そうな顔をする。悩ましいといった風に息をつき、
「……からかうなよ。本気で悩んでるんだ。色んな意味で……」
「これは失敬」
「もう行くぞ」
軽く謝罪すると、そのまま彼は足を踏み出して岩山から飛び降りていく。彼の身体能力なら、岩山から直接飛び降りたところでどうなることもない。その程度は千年以上前に克服したと言っていた。
「さて、私はここで観戦させてもらいましょうか――」
あの方にとっての一つのターニングポイントとなる出来事。
ここであの少女を殺し、この世界の支配者の脅威を改めて思い知らせるからこそ、あの方は世界の王への道を突き進むのだ。
彼には少し嫌な顔をされたが、これだけはこなして貰わなくては困る。
鋭い岩山の上で荒野を見守りながら、未来視の魔女はその出来事を思って笑みを深めた。

魔人の恐怖

「ふー……スッキリした」
時間にして一時間に満たない頃――ガイの行為は終わった。
少女の中から己の分身を引き抜いてさっさと後始末を済ませる。
そこらにあった適当な布で綺麗にしようと思い立つと、
「くすん……あ、あの……これどうぞ」
「ん？　あ、ああ……？」
少女が立ち上がり、近くにあった布をガイに向かって手渡す。犯したばかりだというのに平然と立ち上がってくることに微妙に戸惑ってしまったが、それよりも不思議なことがある。
それは、
「お水はいりますか？　それとも、お食事でしょうか……？　生憎と、ここでは料理が出来ないので簡単なものしかありませんけど……」
「……おう。じゃあ水」
「はい。どうぞ」
近くの荷車から水筒を取ってきてガイに向かって手渡す。その様子がやはり不思議だったが、喉がちょうど渇いていたので水筒の蓋を空けて喉を潤す。
もう少し見てみるかと、ガイは胡乱な表情で、
「……次は食べ物だ。出来る限り美味しいものがいい。なんかないか？」
「あ、はい。でしたら……こちらの果実と干し肉なんかはどうでしょう？　よくご主人さま達が食べていたものです。私は食べたことないので美味しいかどうかは分かりませんけど、多分美味しい方だと思います……」
「おお、果実は悪くないぞ。うむ、頂いてやろう」
「良かったです。では、どうぞ」
「うむ」
頷いて干し肉と果実を受け取る。携帯食料は基本的に酷い味のものが多いのだが、干し肉と果実は比較的マシな方だ。干し肉は貴重な

食べれる肉だし、果実も大体が美味い。美味い飯は少ない世の中なので、特に貴重で需要があるのだ。
奴隷時代に粗末な餌を食べ、酒場では一般的なものを、カラーの森では結構良いものを食べていたガイにとっては、冒険者がよく食べるような携帯食料など、出来れば食べたくないものである。貧しくて不味い物を食べてると昔を思い出すので嫌いだった。味については過去に食べ慣れているので皮肉にも我慢出来ないほどでもない。普通に食べることが出来るが、それがまた自分の生い立ちを思ってしまいイライラするので出来れば食べたくはない。
それだけに食事に関しては気を使っているというか、単純にこういった行商人を襲ったら良いものが沢山あるのでよく襲って奪うようにしている。
干し肉を齧り、果実を食す。水で喉を潤してそれなりに満足したガイは、ほっと一息ついて少女を見た。
そして改めて思うのは、
「……お前、逃げないのか？」
「えっ？」
「えっ、じゃないだろ。普通は真っ先に逃げるし、襲われたら泣いてどっかに行くだろ。なのにお前は……平然と世話してるし、なんなんだ？」
首を傾げる少女に問いかける。実際、ガイに襲われて逃げなかったのはこの少女が初めてだった。
基本的に強盗すれば、男はちょっと戦おうとして一人二人死んだところでガイの強さを認識し、逃げる。女はガイに汚された後に泣きながら逃げていくか、その場で死んだような眼になって動かなくなる。
大体二択なのだが、襲われてなお甲斐甲斐しく世話をしてくる少女はガイにとっても珍しく、興味が湧いたのだ。
故に問いかけてみたが、すると少女は少し戸惑いながらも、
「えっと……私は、奴隷ですので……ご主人さま達はもういませんけど……」
その言葉に眉をひそめる。そういえば先程もちらっとそんなこと

を言っていたな、と、
「ご主人さま達？　さっき逃げていった奴らのことか？」
「はい、そうです。私はこのキャラバンの奴隷でした」
「奴隷……」
奴隷。そう聞いて一瞬、奴隷だからと従う必要はないと思ったが、直ぐにそういうことかと察してしまう。
ガイは実際に過去、奴隷であったのでその時の生き方をよく覚えている。
生まれながら、もしくは物心ついた時から奴隷のような立場で生きている者は、逆らうということを考えることが出来ない。
何故なら奴隷として生まれた者は、奴隷としての生き方しか知らないからだ。
主人に付き従って生きることが正しいのだと心の底から本気で思っている。その境遇が嫌だと感じても、酷い仕打ちを受けたとしても、逃げるや逆らうといった概念がそもそもない。
別の生き方を知る、あるいは経験した者でなければ、その発想には至らないのだ。
人間牧場で家畜として生まれ、扱いは良かったとはいえ奴隷やペットとして過ごしてきたガイは、その内心をよく理解出来る。複雑ではあるが。
……だが奴隷か。
眼の前の奴隷の少女の事を思い、ガイはどうしようかと考える。
こういう可愛くて自分の世話をする奴隷を飼うのも、いいかもしれないと。
いつでも自分に付き従い、身の回りの世話を何でもやらせることが出来て、ヤリたい時にヤることも出来る。一石二鳥どころか、一石三鳥だと、ガイはほくそ笑み、
「おい、お前」
「？　なんでしょう？」
「俺のことをどう思う？」
そんなことを訊ねてみる。すると少女は考えるような仕草を見せ

た後、
「そう、ですね……強い方だと思います」
「ふはは！　それはそうだろう！　俺は世界最強だからな！」
「後は……お優しい方かと」
「……優しい？　俺がか？」
　強いと言われて機嫌が良くなったガイであったが、その後に告げられた言葉を聞いて頭に疑問符を浮かべる。自分で言うのもなんだが、優しいかと言われれば優しいことをした覚えはなかったし、別に優しくあろうとも思っていない。
　だが少女は微笑を浮かべて言った。
「はい。こう言うのも、その、不敬というか申し訳ないのですが……その、ご主人さま達みたいに、ぶったりしてこないですし……今も、私と普通に喋ってくれます」
「……ふーむ、人間扱いされてこなかったってことか」
「人間扱い？　……それは分かりませんけど……その、貴方の方が優しいと思います」
　だから、と少女は何の企みもなく、純粋な笑みを向けて、
「貴方の方が好きです」
「！」
　ガイは面と向かってそんなことを言ってきた少女に、思わず面食らう。
　それはガイにとって、初めてのことだったからだ。おそらくは、そういった意味じゃない、純粋なものではあるだろうが、ガイにとっては、
　……俺のことが、好き……。
　そうやって、他人から好意を少しでも持たれたこと自体が、初めてのことだった。
　以前のガイ――身体の主導権を自分が握る前のガイであれば、ちょっとした好意、親愛の情を抱かれたことはある。
　だがそれはガイであって、今のガイじゃない。自分に向けられた好意ではない。それはもう一人のガイが勝ち取った好意だ。

だが、今のガイはそういった人の気持ちはいらないと思っていた。自分はもう一人とは違い、強者として生きるのだ。
好き勝手、思うがままに振る舞う。その過程で他者にどう思われようとも関係ない。弱い奴らの戯言だと相手にしない。
しかし、こうやって僅かながらでも好意を向けられて初めて思うこともある。
それはガイにとって、気まぐれに近いものではあったが、確かな変化の兆しであった。
先程までの思いが僅かに強くなる。だからだろう、ガイはいつも通りにニヤリと笑みを浮かべ、
「……ふははは、そうか、そうか……」
「？　どうかしましたか？」
少女が小首をかしげる。何でも無いと首を振りつつ、ガイは意を決して口を再度開いた。
「……お前、俺の奴隷に――」
その言葉は、ガイの運命を決定づける言葉であるはずだった。
ガイという男が、真の意味で、この時代の英雄となり得るための分岐点。
――だが運命は、それを許さなかった。
「――――随分と、仲が良さそうだな？」
「っ……！　ああ？」
「っ――」
荒野のど真ん中で、急に響いた声。その存在感に一瞬だけ嫌なものを感じ取り、ガイは振り返る。
少女も同じ様に振り返り、隣で息を呑んだ。
そこに立っていたのは、怪しくも異常な存在感を醸し出す男だった。
黒いローブに仮面を付けた、正体不明の人物。先程の護衛の仲間、というわけではなさそうだ。
というのも、その人物は強かった。
「チッ……！」

ガイが即座にそれを見抜き、剣を抜いて警戒に入らなければいけないほどには。
今まで出会ってきた存在の中でも、別格の存在が目の前にいる。ガイは己より強いとはまだ認めることはせずとも、戦士としての本能から自然と最大限の集中をしていた。
だが、それでもなお――その一刀には気づけなかった。
「――――」
「あ……？」
剣を構えた途端、その一刀は、寸分の狂いもなく、ガイの隣を走り抜けた。
距離もある。それにガイはまだ、相手の剣を見ていない。見えていない。剣などどこにも持っていないように見える。
だが起きた現実に対し、戦士としてのガイはそれを斬撃によるものだと断定している。
そして同時に、ガイの頭は真っ白になった。
隣にいた少女の首が――飛んだのだ。
「……あ……」
事が終わってから、ガイは間抜けにもそれに気づく。
それはあまりにも、速すぎる一撃だった。
予測も回避も防御も不可能。察知することすら出来ない一撃は、慈悲深くすらあった。
痛みも苦しみも一切ない。きっと、何が起こったかすら分かっていないだろう。少女の表情は、先程までガイと仲良く会話していた時とそれほど変わらない表情だった。
だからだろうか。
ガイの心が、訳も解らずかき乱される。
とてつもなく嫌な気分になる。
まるで何かを邪魔されたような、途中で奪われてしまったかのような不愉快な気分だ。
だからガイは、見えない攻撃を察知して一瞬の間を置いた後――即座に斬りかかっていた。

「死ねぇーーーー!!」
ガイは一瞬にして男までの距離を詰め、飛びかかるようにして剣を振り下ろした。
それはガイにとって、今までで最高に近い一撃だった。これ以上ないほどに淀みのない洗練された斬撃。常人ではそれこそ、反応することすら出来ないであろう一連の動作。
しかし、
「……良い反応だ」
「っ!」
男はそれを、しっかりと見ていた。
ガイの動作を観察し、品定めをするように、細かな部分までじっくりと。
それはガイの動きが、完全に見抜かれているということに他ならない。
だが男は、だというのに何の行動も起こさない。
ガイは背筋に嫌なものを感じつつも、その剣を頭部目掛けて振り下ろした。だがそれは、
「――無駄だ」
「なっ……!?」
ガイの一刀が防がれる。
何か硬いものにぶつかったような感触。ガキン、と音が鳴った。手応えもおかしい。
まるで見えない壁に阻まれてしまったかのように、ガイの剣は相手の皮を斬り裂く手前で止められてた。
「如何に強くとも、人間ではこの壁を乗り越えることは出来ない」
「がっ――ぐ!」
そして同時に、反撃を受ける。
先程よりは遅い、それでも辛うじて見える程度の斬撃にガイは咄嗟の防御を行うが、それでも尋常ではない力で吹き飛ばされる。
まるで敵わない。敵う想像が湧かない。
それはガイにとって、久方振りに感じる恐怖だ。

自分よりも圧倒的に強い存在。かつてそれを見た時と同じような感覚を覚える。
自然と息は乱れる。肩が重く感じる。
それは眼の前の何かから発せられる異常な圧力の所為だった。
「……お前は、何なんだ……くそっ……！」
「名乗るほどの者じゃない」
と、男はそう名乗ることを拒否しながらもこう言った。
「俺はただの――〝魔人〟だ」
「ッ……!?」
魔人。
男が、魔人が、そう告げた瞬間、ガイは己の中のトラウマが呼び起こされるのを感じた。

意識が覚醒する。
それは表の人格の精神が揺らいだことにより生じた結果だ。
人格が違ったとしても、互いの記憶、経験、知識は共有されている。
故に、強固な精神の裏でひっそりとただそこにいたガイは、同じ恐怖を受けてその精神を再び表面化させた。
「――どうした？　気を抜いていると死ぬぞ？」
「ッ――！　あ……ぐっ!?」
ガイは突然の声と見えない斬撃を受けて背後に吹き飛ばされる。
吹き飛ぶ際に聞こえたのは打ち合う鋼の音。剣戟の際に生じる響きだ。
故に相手の使っている得物は剣なのだろう。未だにその剣が見えていないのが不気味ではあるが、感触からそれは確かな筈だ。
だがそれを高速の思考で判断する一方で、この状況を未だ正しく認識出来ていない自分がいた。
そして同時に、心からも声が聞こえる。それは、
『おいっ！　早く構えろ！　防御しろ！　死ぬぞ!!』
「っ……」

心から聞こえるのは久し振りと感じられる、それでいて全く嬉しくない声だった。
だが、それによってようやく状況を理解していく。
眼の前には――そう、魔人だ。
強盗を行っている最中、奴隷の少女を見つけ、会話をしていたところに魔人が現れ、少女が殺され、同時に攻撃を行ってしまい、戦闘が始まった。
その記憶を正しく認識し、眼の前の黒衣と仮面を身に着けた魔人が迫るのを感じ取って防御を行おうとする。だが、
「……僅かに、剣筋が変わったな」
「ぐっ……!?」
『おい馬鹿!? もっとちゃんとしろ！ お前が死んだら俺まで死ぬんだからな!?』
……うるさい。そんなことは分かっている。
心の中の声にそう返答しつつ、ガイは久方振りに己の身体を動かす感覚と、痛みを経て眉を顰めた。
そう、久し振りなのだ。体を動かし、戦闘を行うのは。
だが動きに支障はない。自分の身体であるし、そもそももう片方の人格が動かしていたことも相まって、業腹だが身体能力は向上している。むしろ動きやすいくらいだった。
しかし、それでもなお届かない高みにいるのが、眼の前の魔人だった。
恐ろしい。怖い。魔人は幼き頃に一度だけ見たっきりだが、それでもこれほどまでに強かったのかと驚愕する。
それはもう一人のガイも同じだろう。強者として生きてきたはずの自分は、実際に人間の中では敵う者がいないほどに強く、魔物であっても問題なく蹂躙出来るような強さを手に入れていたはずだ。
「……弱いな。お前の力はその程度か？」
「……！」
だが、結果はこのざま。
魔人の、おそらく剣による一撃は不可視のもの。手を動かしたと

思った時には、既に振り切れてこちらに届いている。距離が離れているとか、そんなことは関係ない。その一瞬で、動きの方も踏み込むのを認識した時には目の前に現れているし、何なら遠距離だろうと斬撃が飛んでくる。

そして全ての動きの過程が見えない。動と静の緩急が凄まじすぎるのか、動く前と動いた後、その直前の動きしか認識出来ない。

あるいは、己が未熟だからこそ、その動きが見えないのだろうとも推察出来るが、そうだとしても何もかも滅茶苦茶だ。

攻撃も行おうとしているが、そもそも先程の結界によって阻まれるだろうし、攻撃を行う暇すらない。防御だけで手一杯だ。

そして攻撃に転じたとしても、この異常な剣の腕を持つ魔人には通じないだろう。

今まで見てきた剣士の中でも、トップ。ダントツで一番だ。差が開きすぎて理解不能な剣技は、自分の事を未熟だと思わせてしまう。

『い、いいからずっと防御してろ!!　そんで隙を見て逃げるか、死んだふりでもしてやりすごせ！　なんとしても死ぬな!!』

『そんなことは分かっている！　だから少し黙れ！　気が散る！　私の邪魔をすればお前まで死ぬぞ!!』

『っ……クソッ！』

心の中の声に対して叫ぶと、もう一人のガイが苦渋に満ちた声を上げて、少し静かになる。

もう一人のガイもよく言っているが、自分達は身体を共有しており、正に運命共同体ともいえる間柄だ。どれだけ相手の事が邪魔だと思っていたとしても、もう一方が身体の主導権を握っている時に、ヘマをして死んでしまえば、自分も一緒に死ぬことになる。だからこそ、身体の主導権を思わず奪い返されたもう一人のガイは、それでもなお危機感を感じて表のガイに必死の声を上げるし、気が散ると言われれば黙らざるを得ない。それで困るのは結局のところ自分なのだ。

……しかしどうするか……!?

ガイはこの状況をどうするかと思考を巡らせる。それほど余裕はない。今もこちらの防御をくぐり抜けて、剣による切り傷があちこち

に出来てしまっている。このままでは出血による体力の低下、運動量が落ちるなどして、遅かれ早かれ死ぬことは間違いない。
だから何かしらの手を打たなければならないのだが、特に良い手立てはない。
逃げることは不可能だろう。直ぐに追いつかれる。
勝つことは出来ない。勝てるのならばそもそもこんなに危機感を覚えてはいないし、迷ってもいない。
せめて仲間の一人や二人でもいてくれれば――と思いもしたが、それほど変わらないかもしれないとも思う。この魔人相手に少しでも時間を稼げるような仲間など、今まで旅をしてきた中でも皆無だった。仮に自分より強い人間がいたとしても、この魔人よりは弱いだろう。それは確実に言える。この魔人は底が見えない。
ならやはり、癪ではあるがこの方法しかないだろう。とてつもなく怖い方法だが、致し方ない。
「っ、くっ！」
「……」
ガイはまず、ひたすら待つことにした。
防御を続ける。攻撃に転じず、ひたすらに防御のみを行い続ける。
目を凝らし、相手の攻撃を見切ることに終始する。他のことは考えない。ただただ剣を構えての防御だ。
その時が来れば行動に移すが、それまでは相手の攻撃に少しでも慣れるようにと集中し、防御だけを続ける。
その間にも生傷は増え、徐々に体力は奪われていく。我慢比べのようだが、もうこれしか道はない。
相手は防御のみを続けるこちらを見て、無言であった。何を考えているのだろう、仮面を被っているので表情は殆ど分からない。
ただその口元が真一文字に結ばれていることから、特に面白味は感じていないのではないだろうかと予測する。魔人の考えなど分かるはずもないが、少なくとも楽しんではいない。つまらないのかもしれないと、
「――もういい」

と、不意に魔人は呟いた。少し、こちらを吹き飛ばして距離を取らせ、
「お前がそれなりに出来ることは分かった。人間にしては、幾分かマシであることも。だが――」
そこでようやく、魔人はほんの一瞬、蒼く細長い剣の刀身を覗かせ、
「――これで終わりだ」
「！」
来た。
ガイは待ち望んでいた大技の到来を感じ取り、身構える。
剣による衝撃波。ビリビリと大気が震え、空間が悲鳴を上げている。
自分の方も余裕はない。しくじれば死ぬ。それだけに、集中力は普段とは比較にならないほどで、
「う、おおおお……ッ!!」
ガイは雄叫びを上げ、その衝撃波に呑み込まれた。

その斬撃の波。魔人の必殺技でもないが、大技にも見える技を受けて、大地が軽く抉れた荒野。
そこに立つのはただ一人――仮面を被った魔人だけだ。
「……ふん」
魔人は自分が技を放った先――抉れた地面の上で傷だらけになって倒れている人間の姿に鼻を鳴らす。
普通の人間であれば、今の技を耐えきれるはずもない。当然だが、死んでいると思うだろう。魔人の間では、人間を侮る風潮が未だに蔓延しているのだ。
それは人間が魔人より遥かに脆弱である以上は致し方ないところでもある。この場でかの人間が死んだと思い、立ち去ったとしてもおかしくはない。
だが、その魔人は普通ではなかった。
そして、人間の方も普通ではなかった。

「……可笑しな奴だ」
魔人が僅かに口元を釣り上げる。
先程までは笑みの一つも見せなかった魔人が、ようやく見せた喜の感情だ。
何故そうなったのかは分からない。
だが、人間が己の攻撃を受けて未だ生きていること。それに気づいたのは確かだ。
故に、魔人はこのまま無防備に倒れている人間に対し、とどめを刺すことも出来るのだが、
「――待っているぞ」
と、魔人はそれだけ言うとあっさりと踵を返し、その場から立ち去る。
気づいていながら、何故人間を見逃したのかは分からない。
聞いていれば、その言葉の意味を考えることも出来るのだが、生憎とこの場にはその魔人の言を耳にしたものは皆無であった。
ただ一人、生きている人間も、
――息を潜めろ……ピクリとも、身体を動かすな……！
ガイは、そのどちらの人格も、その場で死んだふりを続けて怯え続けることで精一杯だった。
魔人の恐怖。その強さを目の当たりにし、実際に経験した両者の意見は、大技に合わせて死んだふりを行い、やり過ごすことで一致していたのだ。
その死んだふりは、迫真のものであり、傍目には本当に死んだように見えるほどだった。
あらゆる感覚を切り、呼吸すらも最低限に抑える。胸を上下させることなんてしないし、眼だって白目を剥き続けている。
だが彼らにとっては文字通りの死活問題。必死の行動であり、その緊迫感は今までに体験したことのないレベルであった。
今襲われたら確実に死ぬ。何も出来ずに死ぬ。魔人が見ているかもしれない。気づかれたら終わりだ。
だがかといって、魔人が立ち去ったことを確認する術もない。もし

確認しようと少しでも動いた時、居なければそれでいいが、もし居たら一巻の終わりだ。もうガイには戦う力は残っていない。
どちらのガイも恐怖を感じて、黙りこくる。心臓の鼓動が激しく脈打とうとして、無理やりにもそれを抑える。動くな、動くな、と必死に自分の身体に言い聞かせる。
心の中では、やめろ、来ないでくれ、助けてくれ、死にたくない、と恐怖の声が木霊する。
それはどちらの声なのか、分からない。
あるいはどちらとも、同じ声を発していたのかもしれない。それほどに、今のガイは心を同じくとしていた。
一時間、二時間。時間が経ち、しかしその時間すらもガイには分からない。もしかしたらまだ数分か数十分しか経ってないかもしれないと、ガイはひたすらに死んだふりを続ける。
だがガイに差す光が茜色に変わり、そしてその光がなくなって月明かりに変わった頃――ようやくガイは鼓動を抑えながらも、意を決して起き上がってみることにした。
「……いな、い……」
恐る恐る確認すると、魔人の姿も気配もない。ずっと目を閉じていたので、夜でもそれなりに周囲の状況は確認出来た。
「っ、はーっ……はーっ……！　うくっ……」
だが体力がもう殆ど残っていない。
ずっと地面に倒れていたとはいえ、怪我は放置していたし、ずっと気を張っていたため、緊張を解いた瞬間に激しく息は乱れ、立ち上がったのに膝から崩れ落ちそうになる。
しかし、生きるためには治療を、怪我を治し、体力を回復させなければならない。このままここにいれば野良の魔物に襲われる可能性も高い。
そうしてガイは生きた心地がしないと魔人の恐怖から逃れるように、ゆっくりとその場から歩き出し、新たな寝床を探すことにした。
――死んだ少女のことはこの時、全く頭に残っていなかった。

聖女の子モンスター5

魔物界の最先端都市――レオンハルトシティ。
そこは相変わらず、世界のおおよその場所と違って、平和そのものであった。
しかし、その中心にある紅魔城は最近、その主を中心に慌ただしい日が続いていた。
「――子作りをしましょう」
「……何故だ？」
「興味深いから。……私が駄目なら別の子を選んでもいいわよ？」
紅魔城の一室。大きなベッドがあるその部屋を訪ねてきたのは、成体になった状態の聖女の子モンスターのベゼルアイと、その声と視線を受けた別の者達で、
「びえええええええん!!　ベーに寝取られたあああああああああああああああ!!」
「別に寝取ってないわ。そもそもレオンハルト君に寝取るという道徳的な概念は通用しないのだし。後、ベーって言うなって言ってるでしょう？　ハウ」
「びえええええええええん！　ベーがベーって言うなってえええええええええ！」
「そんな理由で泣き続けないでくれる？」
「……床がびしょびしょだな……」
レオンハルトとベゼルアイが呆れる視線の先で泣き続けているのは、ベゼルアイと同じく聖女の子モンスターの一体で、大地のハウセスナースだ。
幼体時のツインドリルではなく、青い短めの髪を持つ成体の彼女は、かなり久し振りに出会ったと思えば、いきなり泣き出したのでレオンハルトもほとほと困り果てているのだ。
そんなレオンハルトの頭上で、声が響く。天のお告げではなく、それは物理的に上に乗っかっている少女の言葉だった。
「にゅ～……そもそもハーちゃん、自分から避けてたからしょうがな

い……」
「そうね。自業自得って言うと酷いけど、半分くらいはハウのせいよ」
「びえええええええええん!! だってどうしていいか分からなかったんだもん! うわあああああああん!!」
「普通に束縛を止めて、子作りしようって言うだけでしょう?」
「うん……あ、そろそろ子作りする?」
「お前はまたそれか……とりあえず、頭の上から降りろ」
「んあ〜……」
上に乗っかっていた聖女の子モンスター、時のセラクロラスを掴んで降ろす。ベゼルアイと同じく、それなりの頻度で遊びに来る相手だが、何故か脈絡もなく結構懐かれているので、レオンハルトとしては気が抜ける相手だ。
しかも今日は、三体とも同じ目的を持って来ているので、レオンハルトはどうしたものかと頭を抱える思いだった。傍らには、一応使徒のペールを控えさせているが、
「うーん、カオスですねぇ。ですが選り取り見取りって感じで。さすがはレオンハルト様!」
「……感心する暇があったらこの場を収める努力をしてくれ」
「あはは〜、それもそうですね。それじゃあ――」
と、使徒のペールが前に出る。そして三体の聖女の子モンスターの横に立ち、三体を紹介するように左手を上げると、
「――そこに三体の聖女の子モンスターがいるでしょう? そこから好きな聖女の子モンスターを選んでベッドへ――」
「誰が進行役を務めろと言った? ……それに何かを思い出しそうなフレーズはやめろ。急に冒険の旅に出たくなる」
「冒険の旅?」
なんでもない、と右手で額を押さえながら話を打ち切る。あの作品、今はどれくらい出てるんだろうなぁ……と、懐かしいことを思い出してしまったが、考えてもしょうがないのでレオンハルトはその思考を打ち切る。
そんなことよりも今は眼の前の問題だと息をつき、

「……最近、夜が来る度――いや、昼でもそれなりの頻度で子作りを強請られるんだが、どういう訳だ？　俺は種馬じゃないぞ」
「でもレオンハルト君。魔人なのに最近はポンポンと子供作ってるじゃない。その所為じゃないの？」
「……それは……まぁ……」
　微妙に痛いところを突かれて何と言えばいいか分からなくなるレオンハルト。そんなつもりじゃなかったと言ってしまうのは色んな意味で失礼で、冒涜的ですらあるので言わないが、それでも計算外であったことは事実だ。
　もし出来たら出来たで良いと覚悟は持っているが、まさか魔人の低い確率を何度も潜り抜けられると、レオンハルトとしても色々と考えなければならないし、メイドなどの多くの女達もそういうことを期待し始めてしまう。別にそういう行為をしたからといって孕む確率が上がるわけではないのだから、何も出来なければそのうちほとぼりも冷めるだろうと思っていたところに、先日の件だ。
　それによって再びそういう熱が高まってしまうだけではなく、ベゼルアイを中心に聖女の子モンスターまでもが興味を示し始めた。
　ハウセスナースと再会出来たのは喜ばしいことかもしれないが、いきなり子作りとなると、レオンハルトとしても二の足を踏んでしまう。孕んで産むことに掛けては随一の能力を持つ聖女の子モンスター。それは魔人であっても絶対であるのかと悩んでしまうし、その可能性を考えると簡単には手を出せない。というか、
「……お前ら、俺の事が好きなのか？」
　問いかける。レオンハルト的には、一番重要なところがそれだ。
　好きでない相手とヤるというのは、レオンハルトとしては出来れば避けたい。やむを得ない事情や命令であるというのであれば話は別だが、そういうことを重視するのがレオンハルトの矜持なのだが、
「びえええええええん！　好きいいいいいいいい！　何番目でもいいからあああああああああ！」
「うゆ……？　そもそも夫婦だし……」
「好きよ。――子作り相手として」

「……待て待て待て。色々と聞き捨てならないしツッコミどころが多すぎる……とりあえず、ハウセスナースは泣くな」
ハウセスナースのその言葉は微妙に罪悪感を感じるし、セラクロラスからは聞き捨てならないというか、マジだとしたらとんでもない爆弾発言だ。首を傾げて、何故今更そんなことを聞くのか？　と言った風な感じなのが、色々と悩ましい。未来の自分をぶん殴りたい気分だ。
そしてベゼルアイに至っては、
「……まぁ、ハウセスナースとセラクロラスは、百歩譲って良しとしよう……」
「ぐすっ……ほ、本当？　あたしのこと好き？」
「にゅー……？」
鼻水を咬みながら問うてくるハウセスナースに、先程と変わらず、何故今更そんな話をしているのかと疑問に思っている様子のセラクロラス。
それらに、ああ、と頷きながらも、視線はベゼルアイに向く。相変わらずの澄まし顔の彼女に、
「だがベゼルアイ。お前は……なんだそれは？」
「抽象的な問いかけね。何って聞かれても、そのままの意味よ。子作りの相手として好き。だから問題ないでしょう？」
「ん……いや、それは……」
正しいようで正しくないというか、何ともいえない。その言い方だと、まるで――
「セフレみたいですね！」
「悪いが少し黙っててくれ」
「あぁん、辛辣ぅ！　でもそういうのも悪くないですよう！」
ペールが横から、口に出すことを憚られることを平然と笑顔で言うので、冷たくあしらう。本人は冷たくされても悦んでいるので良いか、と視界から外して考え込む。判断に迷うところだが、
「……異性としては、好きじゃないのか？」
「子作り相手として好きってことは、異性としても好きってことにな

るんじゃない？」
「何でお前の方が疑問形なんだ」
「かっるいですねぇ。私も人の事は言えませんけど」
ペールの言に内心で僅かに同意する。普通、好きかそうじゃないかの話をするのは、それなりに雰囲気が出るものなのだが、この場にはそういった気配が微塵もない。
それだけにレオンハルトも微妙な心持ちでいるのだが、ベゼルアイもそれを察してか一息つき、少し考えてから、
「……そうね。恋愛的な意味かは怪しいけど……異性としては一番仲も良いし、好きだと思うわ。色んな意味で、今一番子作りしたい男性よ」
「結局言ってることが変わってないような気もするが……」
「お互いに裸の付き合いをした仲よ」
「風呂に一緒に入っただけだけどな……」
「セックスに抵抗があるならキスだけでも出来なくはないけれど……」
「ん……うーん……」
レオンハルトは腕を組み、悩む。
最近、とある事情から初めての相手とやむを得ない行為を行っただけに、貞操観念というか、基準がおかしくなっているのかもしれない。
しかし価値観としては人間のそれというよりも、
「……生まれてくるのは、魔物なんだよな？」
「ええ、多分そうなるわね。私達が産めるのは魔物だけだから」
魔人と子供を作ったことがないから実証済みではないけれど、と後につけるベゼルアイに、レオンハルトは思考する。
……魔物ならいいのか……？
魔物の価値観として考えるなら、新しい種を作るだけ、という考え方も出来なくもない。魔物の中には親子としての意識が薄く、生まれてすぐに親元を離れて独り立ちする者も少なくないからだ。
しかし魔物とはいえ、自分の種で生まれてきた魔物ともなると、やはり責任は伴うと思う。というより、構わないでいる自信があまりな

い。例えただの魔物が生まれて、そこらで過ごしはじめたとしても、やたらと気にかけてしまうだろう。
だが、もしそれでもいいなら――
「……俺はおそらく、その生まれてきた魔物に対しても親として接するし、お前らにもそうあるように言うかもしれない。それでもいいなら……まぁ……」
「別にいいわよ、それで。……まあそもそも、魔人相手だと孕むかどうかも怪しいけど」
「それならそれで構わないんだが……」
「どうなるかは、やってみるまで分からない……」
セラクロラスがそんなことを言ったので、もしかしたらそういうことなのかもしれないと思う。
低い確率の魔人と、絶対に孕む聖女の子モンスターなら、半々くらいの確率になることだってあるだろう。もしそうなら、孕まない確率の方が高いことだってあり得る。
だがそんな中、
「ちょっと！　あたしを放って勝手に話を進めないでよね、ダーリン！」
既に泣き止んでいたハウセスナースが声をあげる。
ダーリン、という言葉に違和感しか感じないが、そういえば前の騒動の時もそんな風に呼ばれていたな、と思い出し、特にツッコむことはしない。
ハウセスナースは主にレオンハルトではなく、他の聖女の子モンスター達に向かって声を飛ばし、
「事情は色々分かったけど……もしするなら、あたしが一番最初だからね！」
「あら意外ね。てっきり、許さないとか色々言ってまた泣くかと思ったわ」
「ふふん、伊達に千年以上恋煩いをしてないのよ。そう、今のあたしは酸いも甘いも噛み分けた、恋愛マスター……！　いえ、恋愛王と言っても過言じゃないわ！」

「どう考えても過言よね。失恋王の間違いじゃない？」
「くどいわ！　ダーリンが誰を愛そうとどんなに汚れようと構わない！　最後に、このあたしの横にいればいいのよ！」
「おー……はーちゃんが男らしい宣言をした……」
「どうでもいいけど、ここまで来たらウェーも探して皆で集まりたいわね……」
「どうでもいいとか言うなっ！」
　大口を開けてベゼルアイに噛みつかんばかりの声を飛ばすハウセスナース。聖女の子モンスターの賑やかなやり取りを見ていたレオンハルトは、やっと話がまとまってきたと溜息をつくと、
「……とりあえず、繁殖期が来たら相手をすればいいのか？」
「ええ、そんな感じで頼むわ。後は流れで」
「だからあたしを放置しないでよ！　――ダーリン！　というわけであたしと新婚旅行に行きましょ！」
「何がというわけなんだ……？」
「んー……お腹すいた……何か食べさせて……」
「食堂に行け。はぁ……」
「レオンハルト様、お疲れのようですね。おセックスでもします？」
「お、をつければ何でもお上品になると思うなよ？」
　ペールの脈絡のない下品な誘いを蹴りつつ、レオンハルトは癒やしを求めて部屋の外に出て行くことにした。
　すると目の前にメイド長さんが現れ、
「お疲れさまです。ご主人様」
「メイド長か。……二人は今どうしてる？」
　どの二人なのかの指定のない問い。だがメイド長はそれだけで誰の事を聞いているのかを察して、淀みなく答える。
「――カイゼル様とルイゼル様でしたら、庭先で飛び回って遊んでいますよ」
　その返答を聞いてレオンハルトはほっとする。中庭に繋がる窓の外に視線を送りつつ、
「……そうか。喧嘩はしてないか？」

「今日は大丈夫の様ですが……ご休憩がてら、様子を見に行きますか？」
「ん……」
レオンハルトはその言葉に迷いを見せる。正直なことを言えば、様子を見に行きたいところだが、レオンハルトは考えた末に首を振り、
「……いや、元気であればそれでいい。仕事も溜まっているしな。今日は戻る」
「はい。でしたらそのように、お伝えしておきます」
「頼んだぞ」
と、レオンハルトはメイド長さんが優雅にお辞儀するのを尻目に仕事へと戻っていく。
考えること、やらねばならないことは山積みであり、レオンハルトは今日も忙しそうであった。

鋼の騎士団

山奥、その谷間に隠れるように存在するその場所は、以前彼が居た場所とは遠く離れた地にある隠れ里であった。

活気のある建物の外で、黒い髪で右目を隠した男は屈強な肉体を覗かせる褐色の男と相対する。

「――お前さんがウチに新しく入りたいっていう新入りか。名は？」

「……ガイだ」

ガイ。そう名乗った男に対し、筋骨隆々の男はその無骨な手を差し出しながらニッと笑みを浮かべる。

「オーケー、ガイ。魔物討伐隊――〝鋼の騎士団〟にようこそ。俺はお前の指導を頼まれたクーベロだ。よろしくな」

「……ああ、よろしく頼む」

ガイは差し出された右手に少し迷いながらも、同じ様に右手を差し出して握手を交わす。力強い握手だった。見た目通り、パワーには自信があるのだろう。

そうやって相手の力量を察しながらも、ガイは何も言わずに次の言葉を待つ。正直、指導などいらないのだが――

「……微妙に不満そうな顔だな？」

「！　ああ、いや……」

思わず見抜かれてしまったことにガイは少したじろぐ。しかし、

「いや、別にいいさ。入隊試験で問題ない成績を残したお前さんに、今更指導の必要は無さそうだ。察するに、何処かの魔物討伐隊に所属してたか、冒険者だったか、そのどちらかなんだろ？」

「……まぁ」

「ああ、悪い。過去の事を聞くのはマナー違反だったな。許してくれ。入隊試験を担当した奴らから噂になっててよ。もの凄い新人が来たって。それを聞いてたもんだからつい俺も気になって尋ねちまった」

悪いな、と再度の謝罪を受ける。特に気にしてはいなかったのでガイも、別にいい、と返すが、噂になったこと自体は微妙な気持ちだっ

た。
……このままではまた目立ってしまうな……もう少し、力を抑えるか。
『昔の悪事がバレると面倒だからな。精々頑張って隠せよ』
誰のせいだと思ってるんだ、と内心で静かに憤慨しつつも、その心の中の言には同意せざるを得ない。
古巣の魔物討伐隊を全滅させ、その地域で強盗、強姦魔、悪名高い盗賊として暴れ回ってしまったガイは、やむを得ずに遠く離れた地で新しく大規模な魔物討伐隊に所属することにしたのだ。
以前活動していた地域よりも離れていれば自分の名もまだ広がってはいないだろうし、大規模な魔物討伐隊であれば以前のようなトラブルは少なくなると考えたからだ。
それに加えて極力目立たないように努めることで、やっかみ、妬みを受けずに済むだろうという算段。正直、以前の出来事で人間に、人間の組織に属することは若干の抵抗を覚えたが、生きるためには仕方のないことだ。
これはもう一人のガイも同意したため、この鋼の騎士団という大規模な魔物討伐隊に所属することにしたのだが、
『……くくく、ここでまた力をつけて、次こそは……』
もう一人のガイは、また何かを企んでいるようで、そんな心の中のつぶやきが聞こえてくる。
その意図するところは同じガイであるため理解は出来るが、ガイとしてはもう関わりたくもない、ここでひっそりと生きたいという気持ちだった。
一応、もう一人の悪事を防ぐために心は強く持ちつつも、現実に適応しようと眼の前に再び集中する。クーベロと名乗った男は気のいい笑みを浮かべてこう言った。
「まあ、そんな訳で、普通は新入りにする決まりの指導は無しだ。その代わり、ここの案内をしてやろうと思う」
「……案内？」
「ああ。お前さんも、やるべきことは何となく分かってるだろうが、こ

この事はあまり知らないだろ？　だからまあ、これからお前さんの〝相棒〟となるに当たって、色々と教えてやろうってな」
なるほど、と頷く。確かにガイはここのことを何も知らない。
情報が大事であることは理解しているため、案内してもらうことは正直助かる。だが一つ、気になる言葉があり、ガイは再びオウム返しのようにその言葉を反復した。
「……相棒？」
「おおよ――って、そういやまだ言ってなかったな。お前さんはこれから、俺と一緒に仕事をすることになる。ウチの決まりでな。新人には誰かしらが付くことになってるんだ」
「……だから相棒、か」
「そういうことだ。改めてよろしく頼むぜ？　期待のルーキー！」
バンバンと笑いながら肩を叩かれる。少し気安いが、悪い人物ではなさそうだ。
これが女だったりするとまた面倒だったので正直助かる――
『チッ、むさ苦しいおっさんか。今からでもムッチムチボインボインのお姉さんに変えろって言え』――黙れ。お前の下らない指図は受けない、とガイはもう一人の声を冷たく拒否する。男で何の問題があるのか。女は厄介事の種になる。目立たないことを目標とする自分としては、こういってはなんだが、あまり女受けしなさそうなクーベロが相棒というのは助かる。
「とりあえず歩きながら話すか。でっかい酒場があってな。まずはそこに案内する」
『嫌だ嫌だ！　なんでこの俺がこんなむさいおっさんと二人で歩かなならんのだ！　ムッチムチが嫌ならせめて可愛い女の子に――』
「ああ、わかった」
ガイはギャーギャーとうるさい内心の声を無視して、クーベロの案内に続く。出来る限り意識を向けないようにしながら、ガイはクーベロの続く声を聞いた。
「そんでガイ。お前さん、ウチというか、ここのこと、どれくらい知ってるよ？」

「……悪いが、殆ど知らない」
「ふむ、そうか。同業者にしては珍しいが……まあそういうこともあるよな。よし、そんじゃあ改めて説明してやる」
と、クーベロはガイの言葉を特に指摘することもなく、さっさと流して説明に移行する。あまり突っ込んでこないのは正直有り難かった。
「ウチ――〝鋼の騎士団〟は、知っての通り、魔物討伐隊だ。一応、ここらじゃ――というか、俺が知る限りは最大規模の魔物討伐隊だな」
「……隊員はどれくらいいるんだ？　見たところ、かなり多いようだが……」
確かに、この隠れ里についてから、至るところに戦える戦士の集が確認出来る。そもそも人が多いこの場所からしても、この数はちょっと多い気がする。
既に以前いた場所とは比べ物にならないほどの数の戦士を見たような気がするガイは、クーベロからその数を聞いた。続く説明の中で、
「隊員の数は最近、ようやく千を超えたくらいだな。魔物討伐隊としては最大数だと思うぜ」
「！　それは……確かに……」
千を超える数の魔物討伐隊。予想以上に大規模な魔物討伐隊だったらしい。
魔物討伐隊は一般的なもので、数十名から構成され、大規模な魔物討伐隊でも百か二百程度だと聞いていただけに、さすがのガイも驚く。
そもそも、それだけの数を維持出来ていることが凄いのだと、
「驚くよな。まあ、普通は減る一方なのが魔物討伐隊だ。……だがウチはちょっと特殊でな。かなり大昔からこの場所で魔物を狩っていたらしい」
「大昔から？　それは一体……」
「想像つかねぇくらい昔さ。数百年は昔……それこそ聞いた話だと、嘘か真か、人間がもっと多くの数を率いていて、魔軍と対等に戦って

たころから、この里はあるそうだ。いきなり聞いても信じられないだろ？」
確かに。それは信じられない。人間が魔軍と対等に戦うなど、一体どれほどの数が、戦力が必要だというのか。
殆どお伽噺みたいな話を頭に入れつつも、ガイは一応その話に頷く。
「……随分と、歴史がある場所なんだな」
「そうらしい。何でも、ここの創始者は〝鋼の騎士〟と言われた凄腕の冒険者で、そいつの二つ名が魔物討伐隊の名前にもなってるみたいだな」
『けっ、何が〝鋼の騎士〟だ。かっこつけやがって。そんなもんより、俺様の方が百倍強いわ』
そんなわけないだろう、と一応否定するが、どうなのかは分からない。過去の偉人が自分と比べてどれほど強かったなど、確かめようがないことだ。
しかしこれだけ大規模な隠れ里、魔物討伐隊を興したのは確かに、功績としては偉人といっていいだろう。ガイはそういった英雄物語も嫌いではない。なんとなく、名前もわからない英雄に思いを馳せていると、クーベロが続いて言った。
「ウチの隊長は代々、その鋼の騎士の子孫らしいぜ。本当かどうかはともかく、実際、滅茶苦茶強くてな――と、噂をすれば……」
「……？」
クーベロに見てみろ、と視線で促され、同じ様に顔を左に向ける。
広い道の反対側。そこを歩くのは、おそらく外から帰ってきたばかりの一部隊だ。
その先頭に立つブロンドの髪の男が、周りの住人から声を掛けられているところをガイは見た。
「ロランさん！　お帰りなさい！」
「ロランさん率いる部隊が帰ってきたぞ！」
「ロランさん、今日はうちで食べていってくれ！」
人だかりの中心にいるのは、背中に剣を背負った美丈夫だった。

どちらかというと、中性的な、女性受けのよさそうな線の細い顔立ち。しかし身体はしっかりと鍛えられており、それが歴戦の戦士であることを窺わせる。先頭に立つその男は、人だかりに向かって一つずつ丁寧に言葉を返していた。
「出迎えてくれてありがとう。後で寄らせてもらうけど、今は通してくれないかな？」
ニコニコと爽やかな笑顔を浮かべて対応する男に、またしても里の住人が、特に黄色い声が膨れ上がった。
「きゃー、ロラン様ー！」
「はぁ、今日もロラン様は素敵ね……」
「ロラン様ー、抱いてー!!」
ストレートすぎる好意の声がこちらまで届く。クーベロが隣から、
「すげぇだろ。あれが鋼の騎士団のボス、ロラン隊長だ。……あの人気、あれで強いってんだから神様ってのは不公平だよなぁ……」
「あ、ああ……」
その人気ぶりは圧倒されるものがある。確かに、ガイの眼から見ても格好いい部類に入るが、
『……よし、殺そう。おい、ちょっと代われ。あんな奴より俺様の方が強くて格好いいってところをここの住人に見せつけてやる』
出来るかバカ、と言葉を返す。そんなことをすればまたしても居場所がなくなってしまう。
内心の声に頭を痛めていると、何となく、その隣に目がいった。そこには、
「……あの隣にいる魔女のような見た目の少女は？」
「ん？　ああ、あれはウチの副隊長のCさんだ。〝未来視の魔女〟って呼ばれててな。これも嘘か真か、未来が視えたりするらしい。あの人は逆に、男に人気だ。ミステリアスだしな」
長く真っ白の髪を持つ魔女帽子を被った彼女を何となく見る。確かに、見た目は可愛いし、男達からの声援も受けている。
どこか底知れない、ミステリアスさも、ここから何となく感じ取れた。

『ふむ、アリだな。襲おう』
襲わない。即時却下。考えるにも値しないとガイは視線を未来視の魔女から切ろうとする。
だがその瞬間、
「……フフッ」
「！」
未来視の魔女がこちらと視線を合わせ、笑みを浮かべた――ような気がした。
ガイが反応した次の瞬間には、未来視の魔女はそのまま正面を向いて、隊長と共に去っていく。その時には感情の読み取れない仏頂面となっており、
「どうかしたか？」
「……いや……」
『……おい。今あの魔女っ娘がこっちを向かなかったか？』
もう一人の自分も不思議そうにそう声に出して問いかけてくる。やはり、見間違えではなかったようだ。
しかし接点はないはずなので、誰か別の人間に向けて笑ったのか、勘違いだろうとガイは当たりをつけ、
「……何でもない。それより、案内を続けてくれ」
「おお、そうだな。よし、それじゃ次は酒場に行くぜ」
と、少し足の進みが軽くなったクーベロに続く。気のいい奴だが、やはり戦いに生きる荒くれ者。酒は好きなようだ。
そうしてガイは、未来視の魔女のことを一旦忘れ、クーベロの案内に再び意識を向けることにした。

そこは、荒涼とした大地と暗い色の空が広がる空間であった。
現実の世界、地上とは違う空の色と空気の重さ。行き交う者の姿は皆、例外なく角や翼を生やした異形の種族。
そこは――――〝悪魔界〟。
地上や天界とは別の場所にある異界であり、神に敵対する勢力、悪

魔達が治め、生活している土地である。
　その悪魔界にある、とある地方都市の屋敷には、その土地の領主である高位悪魔と、その部下達の姿があった。
「――うふふ、いらっしゃい、インデックス。数十年ぶりかしら？　中々帰ってこない部下を持つと上司は苦労するわね」
「……何の用でしょうか？　忙しいはずなのに、こうやって仕事をサボっている上司を見ると苦労しますね――ねぇ、フィオリ様？」
　屋敷にある領主の部屋。そこに呼びつけられて来たのは、インデックス。カラーの里、ペンシルカウの初代女王であった、元カラーの悪魔であり、第五階級の悪魔である。
　そしてもう一方、艶やかな笑みを浮かべる少女がいる。
　白い髪を二つ結びにし、全体的に青を基調にした露出度の高い衣装を身に付けており、背丈はインデックスとはそう変わらない小柄で華奢な体格。インデックスとは違い、一部分は負けているが、それでも身に秘める力はインデックスとは比べ物にならない。
　彼女の名は――フィオリ・ミルフィオリ。
　この領地を治める第参階級の高位悪魔。広大な悪魔界を支配し、治める君主悪魔。
　第参階級以上の悪魔は皆、一部の例外を除いて悪魔界の土地を治める領主である。フィオリもその一人だ。
　そしてインデックスは一応、所属の上ではフィオリの部下である。
　悪魔社会は階級制による厳格な縦社会であり、階級が劣るインデックスはフィオリに逆らうことは出来ない。第五階級にいるインデックスは悪魔の中ではそれなりに上の方だが、この場に限って言えばこの階級はそれほど意味のある地位とは言えない。ある人物の相手を除いてだ。
「あはっ、インデックスさんは相変わらず生意気ですね～。第参階級の悪魔であらせられるフィオリ様にそんな口を利くなんて、命が惜しくないんですかー？」
　赤みがかった紫色の髪を靡かせて、フィオリの横から声を飛ばしたのは同じく角と翼を持つ眼鏡の少女だった。

表面上は笑顔であり、スタイルも良い彼女は一見、誰もが好印象を抱くような人当たりの良い美少女である。
だがその内面の汚れを見抜いているインデックスは冷静にこう返した。
「その言葉、そっくりそのまま返してあげるわ、梨夢。第六階級の貴方が私にそんな口を利くなんて、命が惜しくないの？　それともバカなの？」
「あはは、辛辣ですねー」
インデックスの毒を耳にして、なおも笑顔を崩さない彼女の名は――梨夢・ナーサリー。
第六階級の悪魔であり、インデックスと同じくフィオリの部下である悪魔である。
かなりの性悪であり、人を苦しめて楽しむ部分のある悪魔だが、悪魔としてはそれほど珍しい質ではない。
しかしインデックスは、小物であり何かと絡んでくる梨夢はあまり好きではなかった。
幸いにも階級が一つ下のため、本気で疎ましく思えば黙らせることは容易であるのだが――インデックスはそこで違和感を感じた。
同時に、梨夢が意味深な笑みを見せる。
「でもざーんねん。今の私は、インデックスさんと対等ですから」
「……？　貴方、もしかして――」
「あら、気づきましたか？　ふふ、私、今回の昇級審査で第五階級に昇進したんですよ？　これからは同じ階級として、仲良くしましょうねー」
うふふ、と梨夢はインデックスに対して精神的優位に立ったのか、いつもよりも数段増して、胡散臭い笑顔を浮かべる。
インデックスは一瞬、苦々しい表情を浮かべたが、そこで嫌がる素振りを見せるのは梨夢の思うつぼだと思い、冷静に無視をする。ちょうどよく、次に口を開いたのはフィオリだった。
「残念だけど、それは無理そうね、梨夢」
「……えっ？」

と、フィオリがおもむろにそんなことを口にし、梨夢が唖然とする。
それを無視して、フィオリはインデックスに向き直った。
「インデックス。あなたにも、プロキーネ様から辞令が届いたわ。今日はそれを伝えるために呼び出したの」
「！」
「……それって、まさか――」
梨夢が表情を歪め、インデックスも静かに驚く。フィオリのみが小さく笑みを浮かべ、
「そのまさかよ。インデックス――あなたは今日から、第四階級。ふふふ、おめでとう。上司として、私も鼻が高いわね」
「そんな……くっ……！」
梨夢が露骨に表情を歪ませる横で、インデックスは何とも言えない気持ちでそれを受け止める。
正直、複雑な気持ちではあるが、人に命令されるのが大嫌いなインデックスとしては、階級を上げることが出来たことに一応の喜びはあり、
「……はい、ありがとうございます」
「うふふ、それにしても凄いスピード出世ね。やっぱり、貴方の御主人様のおかげかしら？」
「それは……」
インデックスがそのことを口に出され、言い淀む。それを梨夢は見逃さなかった。
「？　フィオリ様、その御主人様って……？」
くす、と笑みを浮かべてフィオリは告げた。部下に答える形で、
「インデックスが使い魔として仕えてるのは、魔人レオンハルトよ。知らないかしら？　あの月餅を殺した魔人よ。１０００年くらい前にそのことで一部話題になっていたわね」
梨夢がそれを聞いて目を見開く。魔人、という言葉もそうだが、悪魔にとっては後者の名の方が驚愕に値するのだ。
「月餅って……あの月餅ですか？　魂収集業務で今もなお続くシステムを作って歴代一位の収集数を更新し続けてるっていう……」

「その月餅よ。一昔前は悪魔界一の賢者とまで謳われていた偉大な悪魔ね。もし、彼が今も生きていたら、その功績で第弐階級はおろか、第壱階級にすら今頃は座っていたかもしれないわね」
「だ、第壱階級……」
梨夢が喉を鳴らす。第壱階級、というのは基本的に上昇志向の高い悪魔の中でも、強い野心を秘めた梨夢にとっても、得難い地位だ。
第弐、第参階級であれば数十は存在するが、第壱階級の悪魔は僅か七体しか存在しない悪魔界の支配者達だ。
その上にはもう、三魔子と悪魔王しか存在しない。通常の悪魔が昇進して得られる最高位の地位が第壱階級だが、その地位を得るのは当然だが至難だ。
そもそも一般の悪魔の最高位である第四階級から、領地を持つ君主となる第参階級には天と地ほどの差がある。階級としては一つしか違わないが、第四から第参への昇進は難しい。
そして第参階級になったとしても、そこから第弐階級になるには、他の領主を出し抜かなければならないし、それを乗り越えたとしても第壱階級になるのは不可能と言っていい領域だ。
事実、第参階級にいるフィオリはもう三千年近くその地位にいるが、未だに第参階級のままだし、他の君主悪魔も殆どがその地位を維持し続けている。
それだけ昇進というのは、上がれば上がるほどに難しいのだ。
逆に言えば、月餅という悪魔が成した功績は、それだけ悪魔にとって有益であったということである。
しかし彼はもう死んだ。千年程昔に、ある魔人に殺された。それが、
「それを阻止したのが、インデックスの使い魔としての主である魔人レオンハルト。確か……魔人筆頭だったかしら。魔人としては最高位の地位を得ているらしいわね」
「……」
「へぇー……そんな人のところで使い魔をしてるんですねぇ。でも、それと昇進になんの関係が？」

梨夢が純粋に疑問に思ったことを主に問うてみる。もし何か良い方法があるのなら、自分もどうにか利用出来ないかと内心で企みつつ、フィオリの言葉を聞いた。
フィオリは、簡単な事よ、と前置きし、
「強い者の魂は、それだけ価値がある。汚染魂が人間界でいう宝石のような価値を持つように、レベルの高い人間の魂は、ただ多くの魂を闇雲に集めるよりも価値が高い。昇進査定で優遇されるくらいにはね」
「！　つまり……」
フィオリが笑みを浮かべる。インデックスを見据え、
「強い魔人の近くにいれば、強い人間の死に目にあえる可能性も高いわよね？」
「……」
フィオリは言外に言う。
その魔人を利用して、質の良い魂を収集しているのだろう？　と。
インデックスはそれを聞いても表情を変えず、特に何も答えなかったが、梨夢は露骨にいい笑顔を見せた。
「なるほどー。それはいいですねぇ。さすがは出世頭のインデックスさんは頭が良いというかずる賢いっていうかー。……せっかくですし、出世頭の先輩に私も倣わせてもらおっかなー？」
梨夢がインデックスに擦り寄ってそんなことを言う。上手い儲け話を聞いたせいか、隠しきれない企みが口端に滲み出ている。
実際、インデックスはレオンハルトシティで死んだ人間――主に闘技場で亡くなった強い人間の魂を収集していた。
だが、
「――やめておきなさい、梨夢。それと、フィオリ様も」
「へ？」
「……ふぅん……？」
やめておけ、という忠告を突然行ったインデックスに、梨夢は間の抜けた声をあげ、フィオリは興味深そうに微笑を浮かべた。
そんな彼女達に対し、インデックスは呆れたような、苦笑混じりの

表情で、
「あなた達程度が手に負える人じゃないわよ、私の好きな人は」
誇るように、インデックスは言う。それに梨夢は若干イラッとしたのか、眉を立てた笑顔で馬鹿にしたように、
「はぁー、でも所詮は魔人ですよね？　確かに人間よりは厄介ですけど、悪魔に比べたら――」
「貴方は一瞬で消し飛ばされそうね、梨夢。いえ、そもそも出会った瞬間に恐れて膝を突くかしら？」
「……！　この――」
「何？　文句でもあるの？　第五階級の梨夢？」
「っ……！」
インデックスの言葉に怒りを見せようとした梨夢だが、その視線であっさりと黙らされる。第五階級と第四階級。差は一つだが、それだけで悪魔は逆らうことができなくなる。
実際、辞令を言い渡された瞬間にインデックスは先程までよりも強くなっていた。仮に逆らうことが出来たとしても梨夢ではインデックスに勝つことは出来ないだろう。
「……それで、私は駄目かしら？　その、あなたが好きだという魔人には敵わない？」
だが、第参階級であるフィオリには逆の事が言える。
第四階級のインデックスでは第参階級であるフィオリには敵わない。
フィオリは、インデックスが打算や利益でその魔人に近づいたのではなく、恋心が先にあるということに気づいたが、面白い部下の話には付き合ってやろうと軽く威圧しながら問いを投げてみる。
しかし、インデックスはその身に秘める強さや階級差に物怖じせずに言った。少し気勢を落としながらも冷静に、
「……ええ、貴方でも敵わないわ。そもそも同じ階級だった月餅が一撃で倒されたって聞いてるしね。最低でも第弐か、第壱階級の悪魔でもなければ歯牙にもかけないんじゃないかしら。……もしかしたら、三魔子相手にも――」

と、そこまで言ってインデックスは言葉を途中で切る。
レオンハルトの底知れなさは、好きな人という贔屓目無しだとしても異常であり、魔人としては規格外の人物だ。
だが、三魔子という魔王以上の強さを持つ怪物に敵うかというと、さすがにどうかと思う。
ただ、どこか期待してしまうのは確かではあった。
そしてそれを聞いたフィオリは、
「……ふふふ、そう。中々退屈しなさそうな相手みたいね」
自分の部下の中でも出世頭で、それに見合った高い能力を持つインデックスにそこまで言わせるレオンハルトという魔人に興味が湧く。
実際、インデックスの評は正しいだろう。フィオリは第参階級の悪魔の中でも、戦闘力に長けている訳ではない。月餅が一撃で倒されたというのなら、自分が下手に関わって機嫌を損ねれば同じ様に殺されてしまう可能性が高いのだ。
だが、フィオリにとって自分の命とはそれほど優先度の高いものではない。
フィオリが何よりも嫌うのは退屈で、何よりも優先するのは退屈を紛らわせる愉しみを得ること。それに比べれば、自分の命など重要ではない。
面白いという理由だけでインデックスという部下を重用しているくらいだ。長年生きていると、悪魔界の下が上に逆らってこないという環境は飽きる。何を言ってもはいはいと従順にしてくる部下はつまらないものだ。
だからだろうか。フィオリはインデックスを眺め、そして横に向かって声を飛ばした。
「梨夢。少し出てなさい」
「えっ？　でも――」
「命令よ。しばらく暇でも潰してなさい」
「っ……かしこまりました」
その言葉に疑問を呈しようとした梨夢だが、命令、という単語を出されてしまえば従順に従わざるを得ない。梨夢は腰を折り、そのまま

部屋から退出していく。
そしてしばらく、部屋の中に二人きりになると、インデックスはそれを不可解に思って眉をひそめながら声を掛けた。まだ用があるのかと、
「……話は終わりかしら？　辞令を言い渡すだけなら――」
「――インデックス。あなた、妊娠してるわね？」
「っ！」
不意の発言。確認しているかのようだが、断定するような強い響きの言葉に、インデックスは思わず動揺を見せてしまう。
それだけでフィオリにとっては十分だった。くす、と強張った可愛い部下を安心させてやるように笑みを浮かべ、
「そう。そうなのね。まあ安心なさい。人間だったなら大問題だけど、悪魔界の法に、魔人と子供を作ってはならないという法はないわ。悪魔界で、プロキーネ様が定めた法は絶対。逆に言えば、法にないことなら何をやっても裁かれる道理はないわ」
確かにそうだ。
悪魔が人間との子供を産むのは大罪。階級を大幅に落とした上で、厳しい刑を科されてしまう。
しかし魔人と子供を作ってはいけないという法はない。
法は絶対。悪魔界は三魔子の長兄、フィオリの上司でもあるプロキーネによって作られた法が絶対であり、三魔子ですら例外ではない。法に定められたことであれば第壱階級の悪魔だろうが三魔子だろうがそれを守る。その定められた法を侵せる悪魔がいるとすれば、悪魔王とその妻くらいだ。
はぐれ悪魔などは法を破る者もいるが、そもそも彼らが悪魔界に戻ってくることは殆どない。地上は天使が彷徨いているため、悪魔は大っぴらに地上に出れず、刑を執行することが難しいため、放置されているだけだ。
だが、そんなルールのことよりもインデックスが気になったのは、
「……なんで、それを？」
「あら、私達は魂を収集する悪魔よ？　新しい命の芽吹きを感じれな

い道理はないでしょう？　梨夢は気づけなかったみたいだけど」
どこまで本気なのか、フィオリはあっさりとそう言う。
だが、お腹の中の赤子の魂など、まだ微弱で根付いて間もないものであるため、気づくことは難しいはずだ。しかも、より大きな悪魔の魂が近くにあるため、やはり微弱な魂には気づくことが難しい。
「まずは上司としておめでとうと言うべきかしら？　魔人と悪魔が子を成すなんて聞いたことがないから色々と興味深いわね」
だがフィオリはそれに気づき、なおかつ咎めることもない。それどころか祝福の言葉を紡いだ。
しかしインデックスは苦い表情を浮かべる。それを素直に受け取れるはずもない。
「……ありがとう。でも、もしそのことを――」
「誰かに喋る気もないし、ちょっかいをかけようなんて今の所は思ってないから安心しなさい。そんなことをしても、面白くなさそうだもの」
と、インデックスが意を決して意志を示す前に、機先を制するようにフィオリが言う。
そうやって何度も言われてしまえば、さすがのインデックスも不可解な気持ちになる。悪魔は契約を重んじる性質上、実はあまり嘘をつかない。はぐれ悪魔ともなれば悪質な契約を結ぼうとするので何とも言えないが、真っ当な悪魔ほど、嘘はつかず、契約を遵守し、自分の吐いた言葉には責任を持つ。
フィオリは普通の悪魔とは言い難いが、それでも君主として何千年とこの地を治める悪魔だけはあり、意外と真っ当な仕事をしている。性格に癖はあるが、悪魔であれば別に変なことではない。
「……面白そうだから報告はしないと？」
「そういうことね。報告したところで特に面白味は得られないでしょうし。むしろ、その子供がどんな存在として生まれ、どういう風に育つかどうかの方が興味が湧くわ」
だから言いふらすようなことはしない、とフィオリは言う。
自分の愉しみ、退屈を紛らわせることを行動原理とするフィオリ

だ。ある意味で、その言には信用が置ける。勿論、油断をすることはないが、
「……男の子ならイケメン。女の子なら美少女ね。それだけは確定してるわ」
「――あら、いいわね。成長したら私の部下にくれない？　どちらでも可愛がってあげるわ」
「絶対に嫌よ」
　性格的に油断ならないが、どうにもフィオリとインデックスは妙に波長が合い、インデックスとしては微妙な気分だった。
　反面、フィオリとしては面白い部下なだけに、優遇したり便宜を図ってやることも多いのだが、
「うふふ、なら話は終わりよ。これからも頑張ってね。期待してるわ。部下としても、母親としても」
「言われなくとも、どっちも完璧にこなすわ。私は良い女だもの」
　そう告げて、インデックスは悪魔界と地上を繋ぐゲートを開き、そこを通って自分の居場所へと帰っていく。
　フィオリはその後ろ姿と、後に生まれてくる魔人と悪魔の子。そして悪魔に種を仕込んだ底知れない魔人の存在を思い、意味深に笑みを深めた。

初出勤

隠れ里の案内を終え、酒場で飲みすぎて眠りこけてしまったクーベロを置いて、ガイは寝床として案内された宿場で床についた。

次の日からは、さっそく魔物討伐隊としての仕事が始まる。

二日酔い気味のクーベロに案内されて隊の皆が集まる広場に集合すると、そのまま部隊の一つに割り振られて魔物討伐へと出かけた。

どうやら今日は遠くへ遠征するのではなく、同時期に入った幾人かの新人の教育も兼ねて、近場の森で魔物を狩っていくらしい。

新人は自分くらいなのではないかと思ったが、これだけ大規模な魔物討伐隊ともなると、入ってくる新人も数十人はいた。クーベロの話だと、半分でも生き残ってくれれば御の字だとは言うが、それでも驚異的な数字だ。

冒険者や魔物討伐隊になった新人の、7割は数ヶ月以内に死ぬというのがこの業界での通説だ。

実際に、前にいたところでもそんなものであったし、ここでもそうは変わらないだろう。魔物との戦いは命懸けで、訓練とは違う。

殺し合いの場の空気に慣れることは思ったより難しい。実戦においても訓練をさせてもらえるのであれば多少は生存率も上がるだろうが、実戦では相手は待ってはくれない。相手が魔物であれば尚更だし、魔物に支配されている外に出るのだ。逃げ隠れするのならばともかく、積極的に戦おうというのなら死ぬ確率が高くなるのが道理である。

故に今回の魔物狩りにおいても、新入りを中心に死人は出るだろうな、と、ある種達観した評価を内心で言葉にする。多くの者達の考え、その中には、自分も含まれているのだろうとも。しかし、

「おっ、やっぱやるなぁ、ガイ」

「……それほどでもない」

と、慣れた手つきで剣を振るい、魔物を斬り裂くと、それを見ていたクーベロから褒められた。

だが、以前までのような絶句であったり、怖れるような眼では見ら

れていない――そもそも手を抜いているからだ。
『……つまんねぇな。雑魚相手に時間掛けるとか……はぁー……』
もうひとりのガイも、退屈そうな声を内心で出す。癪ではあるが、同感ではあった。
しかし、こうでもしないと目立ってしまう。以前のように、実力を見せてしまえばちょっとした尊敬の念を抱かれ、ちやほやされることもあるだろうが、それ以上に怖れや、嫉妬の類が大きくなるであろうことは理解している。
そうなればまた同じことの繰り返しだ。嫉妬に狂った誰かが、自分に憎しみを抱いて殺しにくる。
そして新入りであり、人との交流が苦手で不気味な自分に味方する者はおらず、自分は放逐される。以前のような皆殺しは、正直自分が――正確にはもうひとりのガイが理由でもあるのだが、面倒な揉め事を避けるには、実力を隠してしまうのが手っ取り早いのだ。
だが、それでも周りに比べて、出来るほうになってしまう。これ以上力を出してしまえば、明らかに目立ってしまうだろう。
「ははっ、やっぱ新入りとは動きが違うな。頼りにさせてもらうぜ――っと」
と言いながらも、クーベロは手に持った巨大な大剣で、魔物を叩き切ってしまう。それを見てガイは僅かに目を細めた。
「……助力の必要は無さそうだがな」
「まあ、こっちも伊達に歳を重ねてる訳じゃねえからな。ただの力自慢だが、〝怪力〟の名に恥じない働きはさせてもらうぜ」
確かに、なかなかのパワーだ、とガイは内心でクーベロへの評価を上げる。
ただの力自慢だとは茶化してはいるが、その動きは熟練者のものであり、微塵の隙も油断もない。勿論、ガイからすれば問題にならない程度の強さではあるが、それでもそこらの隊員よりは明らかに強い。
『……というかこのゴリラ、明らかにそこの分隊長よりも強いだろ。なんでこいつが分隊長じゃねぇんだ？』
もうひとりのガイも、同様の事を思ったらしい。内心で頷く。明ら

かに自分とクーベロが所属する分隊の分隊長より、クーベロの方が強い。
だがまあ、事情があるのだろうと、ガイは詮索することはしなかった。もしかしたら向こうの方が古株なのかもしれないし、指揮が上手いのかもしれない。何も強いだけが、リーダーの素質というわけではないのだ。
と、そんなことを思いながら戦闘をしていると、聞き覚えのある声が飛んできた。
「――やあ、順調かい？」
「！　ロラン隊長！」
その声に、分隊長が反応し、同様に他の隊員も声の方向に顔を向ける。
すると部隊の横から迫ってきていた魔物を、ちょうど男が剣で一刀両断したところであった。それを見て、クーベロが隣で口笛を吹かす。
「ひゅ～、さすがは隊長。相変わらず、末恐ろしいくらいの剣の冴えですね」
「ははは、君のその力も、相変わらず大したものだと思うよ。――そっちの新人の実力も」
「！」
と、不意にクーベロとの会話の中に、自分も引きずり込まれる。ロラン。この鋼の騎士団の隊長を務める男の声によって。
その視線は僅かに鋭い。こちらに一挙手一投足を見て、興味を抱いているようだ。
……強いな。
昨日も見たばかりだが、こうして近づいてみると分かる。確かに、他の隊員とはレベルが違う。
ガイが今まで見てきた人間――いや、魔物を合わせても、これほどの実力者は見たことがない。
魔人は例外。しかし、自分の育て親でもあった酒場の女主人や、師でもあるミストラルよりも確実に強い。

それだけに、僅かに興味が湧くのと同時に、危惧を覚える。
強者は強者を見抜く。自分が手を抜いていることを見抜いてしまったかと危機感を覚えながらガイは口を開いた。
「……大したものでは……多少、慣れているだけです」
「そうかい？　その割には、余裕そうだったけど……副隊長、君はどう思う？」
「――さて、そうだね」
「む……」
続いて、林の奥から魔女帽子を被った白い長髪の美少女――未来視の魔女、Cがやってきた。
その登場にガイが眉を僅かに顰めたのは、その登場が神出鬼没だったからだ。
隊長が気づいた時には自分も気づいていたが、問題はそこじゃない。両方とも、ここまで近づかれてようやくその気配を察知出来た、ということがおかしい。
何か怪しげな魔法でも使っているのだろうか。そのことに驚異を覚える前に、興味を覚えてしまうのは魔法使いとしての性だろうか。そんな自問自答をしつつも、ガイは未来視の魔女の言葉を聞く。
「実力は一級品。頭も悪くなく、度胸もある。新入りの中では当たりでしょう。一廉の器があります」
「なるほど。君が言うならそうなんだろうね。――とはいえ、人に当たり外れをつけるのはよくないよ。他の新人達にも失礼だ」
「はい、失礼致しました」
隊長のロランの言葉を受けて、未来視の魔女は丁寧に謝罪を行う――が、ガイは何故かそれに違和感を覚えてしまう。
隊長に向かっての謝罪が、心にもないような行為に見えてしまっていたのだ。
だが気の所為かもしれない。その冷たい表情が素なのか、本当の素顔なのかもしれない。
会ったばかりで本当の素顔も何も分かるはずがないだろうとは、自分でも思う。しかし――

「……ふふ」
「……っ……」
――何故か。
彼女は、こちらをじっと見つめ、微笑んでいた。
それは昨日にも、初めて見た時にも浮かべていた、〝喜悦〟といった表情。
だが誰かが彼女の表情を見た時――あるいは、自分が見た次の瞬間には、その表情が消えている。
じっと見られ続けていることには変わりないが、その表情を見た、あるいは幻視したために、ガイはその慇懃な態度が、胡散臭く感じてしまっていた。
『ミステリアスでいい女だな。よし、抱こう』
――抱かない。くっ、やめろ。身体の制御を奪おうとするな。
こんなところでいきなり騒ぎを起こして、また放浪したいのかと内心で声を荒げていると、
「……どうかしたのかい？　少し、表情が険しくなっているけど……？」
「！　い、いえ、なんでもないです……」
「ははは！　まぁまぁ隊長。いきなり隊長と会って話しかけられたりすりゃあ、誰だってビビりますよ。自重してくださいや」
「そうかい？　そんなことはないと思うけど……皆、同じ人間じゃないか」
「いやー、隊長の強さは人間じゃありませんって。なあ、ガイ」
「……そうですね」
『俺がその気になれば二秒で殺せるな』
うるさい。そんな訳があるか。さすがに、最低でも数分は掛かるだろう――と、ガイは自分の見立てを内心で口にし、もうひとりのガイの自信過剰を正す。
だが隊長はそんなことを考えているとは知らず――そして、クーベロの言葉とこちらの同意にも釈然としない様子で息を吐くと、
「ふぅ……まあ、いつものことではあるけど、僕の扱いはいつもこんな

感じでね。過剰に持ち上げられているというか……頼りにされているのは嬉しいことではあるけど、僕だって普通の人間だからね。ガイ君も他の新人達も、よければ普通に接してくれると嬉しい」
その言葉に、ほとんどの者が苦笑いを返す。やんわりとした否定だった。
そしてその状況に、ガイは僅かに同情する。似た経験があるだけに、やはりこの男も、人よりも優れるがゆえの悪意を受け、孤独を感じているのだと。
ちょっとした親近感が湧いてしまうのと同時に、やはり自分の考えは正しいのだと、多少の切なさを感じながら改めて理解する。己が人の輪の中で普通に過ごすためには、己を隠し通すしかないのだと。
だからというわけではないが、ガイは隊長ロランの言葉に小さく頷き、
「……」
「……」
未来視の魔女からの視線を受けて居心地の悪さを感じていた。

轟々と雪塵が吹き荒れる大陸北方。
人が全く近寄らぬその豪雪地帯は今――
「はぁ……はぁ……ぐっ……！」
――目で捉えることの出来ない相手によって、余計に足を踏み入れることの叶わない聖域となっていた。
足が埋もれてしまうほどの雪の上で肩を押さえながら荒い息を吐くのは、赤い軍服を身につけた中年の男だ。
彼の名はリー。泣く子も黙る魔人レオンハルトの使徒であり、主の命令を忠実かつ速やかに実行する優秀な仕事人である。
使徒の中でも上から数えた方が早い圧倒的な実力を持ち、並の人間や魔物からすれば人の形をしているだけの化け物の一角。人類を脅かす強者の一人。
だが今の彼は、進むことも出来ずにその場に立ち止まることしか出

来ていない。目で捉えられない相手に対し、戦闘を行うことも出来ないし、そもそも戦えたとしても勝ち目がない。
リーの主であるレオンハルトも、戦えとは言わないだろう。それだけ無理のある相手だ。秩序を重んじる部分からいっても、リーが如何に任務の為とはいえ、眼の前の相手と事を起こすのはあまりよろしくない。
それはリーにも分かっていた。
だがしかし、せめてその理由くらいは持ち帰らなければ、使徒としての面目が立たない。
故にリーは不興を買うことも承知で、口を開いた。上空を見上げ、
「……何故、私の邪魔をするのか……お聞かせ願いたい……！」
と、言う。彼の者の名を敬称を付けて、
「魔人――メガラス様……！」
「……」
その言葉に反応したのか、不意に吹き荒れていた風が僅かに弱まる。
元々吹き荒れていた吹雪が、彼のその飛ぶ速度によって、更に荒々しくなっていた証左だ。
豪雪地帯において、その真っ白な装甲を持つ身体は、一種のカモフラージュのようにもなり、立ち止まっていても姿は捉えづらい。
だがその存在感を、同じ魔物の類ならば見逃すはずはない。
最速の魔人――――メガラス。
ホルスの魔人であり、リーがこの先に進むことが出来ていない理由が彼だ。
魔人であるメガラスに、如何に魔人であるレオンハルトの任務の最中とはいえ、逆らうことは出来ない。魔物界は縦社会。彼が使徒である限り、魔人には逆らえないし、実力の上から見ても逆らえない。
魔人級の実力を持つ使徒ではあるが、さすがのリーもメガラスには敵わない。
だからだろうか。メガラスもリーに戦闘の意志がないことを感じ取って立ち止まった。

それを見たリーは更に言葉を続ける。上空にいる最速の魔人に対し、
「私は今、レオンハルト様の勅命を受けてこの場所にいる……！　それを何故――」
と、リーが問いかけようとした時だ。魔人の中でも最も重い口が開いた。
「――そんなことは知らん」
「なっ……!?」
メガラスの言葉は、完全なる拒絶。
魔人らしいといえば魔人らしいが、リーからすれば驚愕に値する。
こういっては何だが――魔人レオンハルトの命を受けたと言えば、大概の魔人は黙るか、従順になる。
それほどにリーの主の威光は、魔物界では絶大である。
彼がかつての戦乱の時代のように、伝説を塗り替えなくなって久しいが、ほとんどの魔人はレオンハルトという魔人の強さを知っている。
あるいは知らずとも、感じ取る。彼の本気の戦いを見たことがない新参の魔人達は、それでもなおこちらを上回る実力に畏怖する。
だが眼の前のメガラスという魔人に、その気配はない。
断固として譲らないという硬い意志を感じる。
本気で、自分の主と――魔人レオンハルトと事を荒立てるつもりなのか。
あるいは、レオンハルトと事を荒立てる必要があるような――何か大事なモノがあるのか。
それはリーには分からない。分かるのは、メガラスが全く恐れておらず、場合によってはレオンハルトと衝突を起こしても構わないと覚悟しているということだ。
そんなメガラスの言葉をリーは聞いた。
「……レオンハルトに伝えろ」
一切の無駄のない簡潔な言葉を、吹雪の中からリーに向かって飛ばす。

吹雪の音が激しく耳を鳴らしたとしても、魔人の力ある言葉には敵わない。
魔人とは地上に生きる全ての生き物にとっての災害であり、その言葉は実行力を、力を伴う。
魔人がやると言えば、必ずそれは起こる。魔人の言葉はただの言葉ではない。謂わば災害予報。
もし彼らがどこどこで暴れると意志を持って言えば、その場所には惨劇が襲う。止められるのは同じ災害か、災害の上に立つ世界の支配者だけだ。
そんな脅しにも似た言葉を、リーは聞いた。
「ここは、この一帯は……俺の管轄の筈だ」
メガラスの言葉は真実だ。
大陸最北。大陸中の至るところに存在する人間牧場の中で、最も北にあるのがメガラスの管理する人間牧場である。
「この先に……この地に、手を出すな」
さもなくば、と、
「お前相手だろうと、容赦はしない……!!」
「……!」
その言葉の意味は、深い、裏にある意味はリーには分からない。
別にメガラスの危惧するような、この一帯で何かをしようとしている訳ではないが、それを伝えるにはリーでは力不足だった。
だがメガラスもその気配を感じ取ったのか、脅しを掛けた最後にこう言い残す。
「……話がしたいのなら、レオンハルトを連れてこい」
「……承りました。その言葉、主に伝えます」
「……」
実直なリーの、これまた簡潔な言葉を受け取ると、メガラスはその場から立ち去る。
一瞬にしてその場からいなくなった最速の魔人。後に残されたのは、手に持った手紙を、とある人物に渡すことが出来ず、悔しさで表情を僅かに歪めるリーだけだった。

「――という次第です……」
「……なるほどな」
　と、魔人レオンハルトは、執務室にて使徒の報告を聞いて頷いた。
「そうか、あのメガラスが……」
「なーんか、また面倒事の気配がするね。こんなことなら、やっぱりあたしがぱぱっと行った方が良かった？」
　傍らのソファーで休憩中なのか、腰を落ち着けてもたれ掛かっているハンティがそう言う。
　するとリーもまた、表情に影を落とし、
「……面目次第も御座いません」
「あ、いや、別に責めてる訳じゃないけどね。どう考えても不運というか、イレギュラーだし、それ」
　ハンティが行けば一瞬で終わることだったと、そう言ってしまったのが微妙にリーを落ち込ませることになるとハンティも気がついたのだろう。軽い謝罪とフォローを行う。
　実際、レオンハルトとしても特に責めるつもりはなかった。リーは高い実力と忠誠心を持つが、魔人相手となると荷が重い。致し方ないことだろう。
「さすがは始祖様。ナチュラルに傷心して帰ってきたリーさんの傷を躊躇なく抉るとか……それでこそ、カラーにその人ありと謳われるバーバリアンですね……！」
「……ぺ～ル～？　殴るよ？」
「あ痛っ!?　殴ってから言わないでくださいよう!?」
　相変わらず人を――というか、始祖であるハンティを誂うのが好きなペールが懲りずにハンティを笑顔で野蛮人呼ばわりし、速攻で肩を殴られている。ペールが肩を押さえながら、
「もう……最近は遠慮が全くなくなりましたよね……なんでこれで、お子様に人気があるんでしょう……？」
「む……それは私も聞きたいところですな。任務を失敗したばかりで

恐縮ですが、何かコツがあるのでしたら、私にも教えて頂けると助かります」
　ペールとリーのそんな言葉に、ハンティは、はぁ、と何ともいえない溜息を吐くと、少し考えた上で、
「……さあ？　正直、気に入られてる気はしないんだけどね。どっちかっていうと、子供特有の悪戯に巻き込まれてるというか……じゃれつかれてるだけな気はするけどさ」
「それがズルいんですよう！　私なんて遊びましょうって言っても何故か引かれることが多いんですから！　特にカイゼル様！　こんなにもエッチなお姉さんが遊んであげるっていうのに、何が不満なんですか!?　普通ならちょっとエッチな悪戯をするものだと相場が決まってるのに！」
「あたしはあんたの頭が心配になるんだけど……子供に何を期待してるのさ」
　と、そこまで言ったところでハンティが思い出したかのように表情を変え、
「――あっ、そういえば教育に悪いからって、ハウゼルがカイゼルに、ペールにはあんまり近づかないようにって伝えてたような……？」
「は、はぁ!?　そんな!?　それは横暴です！　断固として抗議しますよう！　ハウゼル様だって実はエロエロの癖に！」
「いや知らんし……」
「ペール様。これは致し方ないかと……」
　ハンティとリーの素っ気ない言葉を聞いて、ペールが腕を組み、ぷんぷんと不満そうに頬を膨らましている。その会話のやり取りを見聞きしたレオンハルトは、
「……だがルイゼルの方には気に入られているだろう」
「……まぁそれはいいんですけどね。女の子ですし、おませさんなのでお洋服とかお洒落の話とかするんですよう。最近だと、マニキュアとかに興味があるみたいですねぇ」
　それを聞いて、レオンハルトが納得したように、それでいてガッカリと、ハンティも僅かに顔をしかめる。特にハンティの方が、

「成長速度的にはおませって言うのも判断に困るけど……それより、ルイゼルは魔法の才能があるんだから、もうちょっと研究室の方にも来て欲しいんだけどね」
「ナチュラルにゴリラ思考するのやめてもらっていいですかね？　普通、女の子なら魔法とかの戦いの技術よりも、お洒落とかの方が大事ですよう」
「いや、でも魔人だし……」
「ぶっちゃけ、そっちの方は放っといても成長すると思いますよう？
　それこそ、魔人ですし」
　ペールとハンティがレオンハルトの子供達についての教育について語る。すると横からリーも、
「しかしそれで言うなら、アルベルト様は日に日に立派になっていきますな……暇を見つけては黙々と鍛錬を続けていますし……この間も、模擬戦を頼まれましてな……ふ、ふふ、ゆくゆくはカイゼル様も立派な男児となり、この私を顎で扱き使うのでしょうなあ……！」
　と、将来、自分が主の子供に仕える未来を想像して勝手にテンションが上がっていくリー。先程の失敗に対する反省は何処に行ったのか。忠誠心が高いが、それが行き過ぎて子供達に付き従うことを最近は夢見ている。
　時折――呼ばれ方はどうしよう、爺とかであれば最高なのだが……と真剣に首をひねっているリーを見ると、色々と崩壊してる気がしなくもない。
　だが将来を期待しているのは誰もが同じで、
「まあ、カイゼルとルイゼルも……特にカイゼルだけど、よく不意打ちしてくるからね。あれは将来が期待出来るよ」
「どっちもやんちゃですからね～。最近は新しい弟や妹が出来て、更に張り切ってるみたいですし」
「逃げる時など、飛び回って空中に逃げてしまうので、捕まえるのが一苦労しますな……」
　三者がそれぞれ次男と次女の思うところを口にする。
　どの言葉にも納得しつつも、レオンハルトは窓の外を見て、

「……まあ今は、キャロルが相手しているから特に問題は起こらないだろう。子供達に一番に気に入られてるのがあいつだからな……」
「あー……キャロル先輩、ほんと子供には懐かれますよね」
「よくよく考えたら子供みたいな行動してたりするし、当たり前なんじゃない？」
「ハンティ様……さすがにそれは……最近は昔に比べたら落ち着いていますよ。そう、昔に比べれば――」
と、リーがその昔――自身が魔物将軍、魔物大将軍時代を思い出したのか、苦笑混じりに言う。ぶっちゃけレオンハルトから見れば、今のキャロルとリーはそれほどノリは変わらないような気もするが、と、
「……まあいい。その件については一旦保留だ。折を見て、俺が直接メガラスのところに行く。確かに、あいつの管轄内を通るのに報告をしなかった俺の落ち度でもあるからな。だからリーに責任はなく、よって特に処罰もない」
「……寛大な処置に感謝します」
リーがその言葉に深々と頭を下げる。
これでその話は終わりだ。使徒に任せることも出来ないことであるし。
と、だがその言が気になったのか、ペールが、
「……というか、ただ通るだけなのになんでそんな目くじら立てるんですかね？」
「ああ、あそこには――」
と、レオンハルトは思わず答えかけて、
「……あそこには？」
「……いや、今のは忘れろ。俺が言うべきことではなかった」
「……？　はい」
ペールが釈然としない様子で、しかし主の言葉なので頷きを返す。
それを聞いてハンティが小さく、
「……ああ、そうか。そういえばあそこは……」
「あそこは……？」

と、ペールがハンティの言葉を拾って問い返す。しかし、
「……ああ、なるほどね」
「……って、レオンハルト様も始祖様もなんなんですか!? その意味深な感じは!? 忘れようとしてたのに、気になりますよう！」
一人で勝手に納得してしまったハンティにペールは憤慨する。
しかし、幾つかの情報から推察出来たハンティは別としても、その事情を、必要もないのに勝手に教えるのはあまりよろしくはない。
レオンハルトはかつて、その当人と交わしたやり取りと、それとはまた別の、今の主とのやり取りを思い出す。
『……俺が管理する牧場は、この場所にしてほしい』
『くくく……二代目魔王との約定は未だ生きている、というのが奴の言い分だ。私としてはそんなものを守る必要はないが……破るなら、死ぬことも辞さないと言う。くく、まあ異形の種族の保護など、私には興味はない。だから放置で構わない。奴が苦しみ続けているところを見るのは一興ではあったからな』
レオンハルトは、当人からの頼みと得た知識から推察出来る上に、今の主からその事情を教えられている。元々知っていたことではあるが、教えられたということは、知っていたとしても構わないということだ。
されど、かつての自分と似たような――いや、それ以上に気高い願いを、他人に不必要に教える気にはならない。
だがしかし、誤解を解く必要はあるだろう。
……奴の〝古巣〟に手を出すつもりはない、と。俺の口から言う必要があるか……。
時が来れば、多少の関わりは持つことも辞さないが、今は少なくともそのつもりはない。豪雪地帯に足を踏み入れるのは別件であるのだ。
しかし、子供達のこともそうだが、こうしてる今も進行している計画などを考えると、また少し時が空いてしまうかもしれない。
だが魔人にとってはそれも一瞬の事だ。レオンハルトはやるべきことを済ませるべく、再び使徒達に指示を出すことにした。

暴露

『――ちっ、たったこれっぽっちかよ。これなら強盗でもした方がマシだな』

『盗みと比べるな。これでも、討伐隊としてなら随分と恵まれている』

分かってる、という素っ気ない続く言葉を内心で聞いて、ガイは溜息を漏らした。

大規模な魔物討伐隊、鋼の騎士団に所属してから数ヶ月が経過し、ガイは建物の外に出ながら小袋を懐にしまう。

中身はジャラジャラと鳴っている。硬貨。つまりは金銭だ。

魔物討伐隊としての報酬の分け前について、もうひとりのガイは愚痴を吐いていたのだ。

だが、表のガイは特にそうは思わない。言ったとおり、魔物討伐隊としてなら恵まれた方であるからだ。

名が知られた討伐隊とはいえ、千人近くも所属しているなら、分け前は少なくなるかと思っていたが、どうやらそうではないらしい。盗みと比べればそりゃあ少ないが、そもそも盗みと比べること自体が間違っている。

大体どこの魔物討伐隊も、食料か金銭を報酬としているが、ここは基本的に金銭のみ。それを使って、隠れ里の中で必要なものを購入する形らしいが、規模の小さい場所であるならともかく、幸いにもここは物資も蓄えがあるらしく、大体の物は買うことが出来る。

実際、金の方が持ち運びも便利なのだからそうするべきなのだが、現実問題として、食料が少ない地域などではそれを売り買いする者達もかなりの高額を吹っかけてきたり、そもそも自分達の分がなくなるからと売ってくれなかったりもする。

そういう意味では、食料を自ら手に入れて自分達で直接分け合うことにも意味があるのだが、そういうのはこれだけ発展していれば必要ないらしい。

いわゆる、〝経済〟というやつだろうか。生憎と、ミストラルの家に住んでいた時に軽く用語は聞いたが、どういうものかはわかってい

ない。日々の生活や物流がうんたらかんたら言っていた気がするが、正直あまり理解出来なかったし、何やら夢物語を聞かされているみたいで実感も湧かなかった。
お金が必要だと、知識ではなく実感として感じ得たのも、一人で旅に出てからだ。人間の社会では金がいる。そんな当たり前のことを知って、初めて前に所属していた魔物討伐隊で報酬を貰った時は嬉しかったものだ。
だが今となってはそんな感慨もない。むしろ、これから次の報酬が手に入るまで、どういう風に使って、節約していこうか、などという考えばかりが巡ってしまう。自覚すると少しばかり悲しくなるような考えだ。報酬をもっと沢山貰えれば、こうやって考えを巡らせる必要はないのだろう。
そういう意味では、もうひとりの自分が身体の実権を握っていた時代の方が、裕福ではあった。欲しいものがあれば奪い取る生活というのは、他人の事を考えない場合と、報復されるリスクを考えなければ、効率が良い。勿論、ガイはその自分の行いを蛇蝎の如く嫌っているが。
しかし一応は懐が温まったため、鋼の騎士団が拠点としている建物を出て、店を訪ねることにする。すると頭の中で、
『あん？　作るのか？』
『……ああ。今日はこれから仕事もある。久し振りに、休憩の時にでも使おうかとな』
もうひとりの声に答えながら、てきぱきと店主に向かって食材を注文していく。
そうしてガイはあらかたの食材を買い終え、一度自分の部屋に戻ってそれらを一部置いていくと、再び外に出て今日の仕事場へと向かっていった。

「……ガイ。お前、何してるんだ？」
夜間における見張り任務の最中。ガイはクーベロのそんな訝しむ

ような声を受けて振り向かずに答えた。
「見て分からないか？　――食事を作っている」
ガイは簡潔にそう口にするが、人によっては素っ気なく感じるであろうその態度にも、クーベロは特に気にした様子もなく、未だ釈然としていない様子で、
「……いや、それはわかんだけどよ……正直、店行って食った方が良くねぇか？　もうすぐで交代だぜ？」
「腹が減った時に食べなければ、次にいつ食べれるか分からないぞ」
「シビアかつ真っ当な意見をありがとよ。ここが隠れ里の外周部で、基本的に魔物は来ないような安全な場所でなければ全面的に同意だ」
夜中でも酒場なんかは開いてるしな、と付け加えて肩を竦めるクーベロ。彼との会話はいつもこのような感じだ。
鋼の騎士団に入ってしばらく経つが、その中で仲良くなれたのはクーベロだけだった。
目立たないように努めたガイの努力の甲斐あって、比較的強い新人くらいの評価で収まったガイはしかし、持ち前のコミュニケーション能力の低さと根暗さ、素っ気なさなども相まって、仕事以外で話しかけてくる人は少ない――いわゆる孤高（ぼっち）のポジションを確立していた。
だがクーベロだけは最初に世話役として選ばれ、先輩として同じ部隊にいるからか、普通に任務が無い日でも話しかけて、食事や酒に誘ってくれたりする。
ガイも、別に一人であることは気にならなくなってきたため、別段誘いに応じる必要はないのだが、不思議とクーベロとはウマが合った。
クーベロは普通の荒くれ者の中年といった感じだが、その言葉や性格には、嫉妬や憎しみといった負の感情が殆ど感じられない。本当に気のいい奴だった。
加えて話上手であり、ガイの口下手さにも特に淀みなくやり取りを続けてくれる。
そして鋼の騎士団の中でもかなりの実力を持っていて、戦いの時にも頼りになる。クーベロがいる時は、後ろや他の実力が劣る隊員を気

にせずに済む。心を許せる唯一の戦友だ。
「というか、自分で作ったってろくなもん出来ねぇだろ？　店で食った方が美味いぜ。絶対」
　クーベロの方も、最初の頃より気安くなってくれている――が、その発言は頂けなかった。
「……なら試してみるか？　食べてみろ」
「えー、マジかよ……って、まあいいけどよ。こちとら悪食には慣れてるからな。そいじゃあ一口……」
　ガイが鍋の蓋を開け、用意していた皿に食事をよそい、クーベロへと差し出す。その見た目や香りに、まずクーベロは驚いた。
「香りは悪くないな……ってか、なんだこれ。店に出るもんみたいだが……まさか、マジで美味いのか？」
「いいから食べてみろ。話はそれからだ」
「お、おう……」
　と、クーベロはスプーンを使って、中にはいった具材を一口。
　すると途端に声を上げた。
「う、美味ぇえええええ!?　なんだこれ!?　お前、料理人だったのかよ!?」
「一応見張り任務中だ。大声を出すな……いくら、私の料理が美味かったとしてもな」
　注意の声を飛ばしながらも、意外とまんざらでもなさそうにガイが口端を歪める。その間にもクーベロの手は止まらず、
「いや悪い。驚いて大声あげちまった……にしても美味ぇなこりゃ。なんなんだこれ……ぶっちゃけテキトーに具材入れて煮込んでるようにしか見えねぇのに……」
「テキトーではなく、適当だ。きちんと味の調和を考えている」
『この筋肉ゴリラは分かってないな。何が店で食った方が美味いだ。俺様が作った方が美味いに決まってるってのによ』
　内心の言葉に、そこまで決めつけはしないが、ある程度賛同する。店の料理にも後れを取らないと自負しているのだ。
　クーベロはあっという間に差し出した料理を平らげ、

「いや、確かに凄いな、これは……ガイお前、料理人でもやってたのか？　今直ぐ店を開いてもこれならやっていけるぜ」
その言葉に悪い気はしないながらも、ガイは少し昔を思い出した微妙な気持ちになる。酒場で奴隷であった頃や、カラーの家でペットとして飼われていた頃を思い出し、
「……まあ、そんなところだ。料理は作り慣れている。ようやくここの生活に慣れたからな。久し振りに作ってみようと思ったんだ」
普段よりも饒舌に、ガイは語る。戦闘以外では数少ない特技のようなものだ。
ここのところはご無沙汰だったが、以前はよく作っていた。もうひとりのガイですらも、強盗で食材を奪った時などに作っていたくらいである。
だが、ガイとしてはあまり満足のいく出来ではない。というのも、カラーの森で食べていた食材に比べれば、圧倒的に質が落ちるからだ。
それでも色々と工夫して美味しくしてみたが、それでもやはり届かない。
根本的に、人が手に入れることの出来る食材では、カラーが手に入れていた食材には敵わないのだろう。質の良いものは貴重で、店にすら並ばないとも聞いている。
ガイとしては、牧場時代の餌を食べていた経験もあるので、どれだけ不味かろうとも食べることは出来るが、上を知った後だとやはり首をひねってしまう。贅沢な舌になったことを喜ぶべきか嘆くべきか。
だがまあ久し振りに作ったのだからこんなものだろうとさっさと食事に手を付けていると、
「――ガイ。少しいいかな？」
「っ……!?」
「うおっ!?　って、副隊長っすか……あんま驚かさないでくださいよ」
突然声と共に、暗闇からその姿を現したのは、鋼の騎士団の副隊長である未来視の魔女だ。
相変わらずの神出鬼没ぶり。気配をこちらに全く悟らせない彼女

は、ガイにとって得体の知れない相手である。
そうでなくとも、ここのところじっと見られているのもあって、ガイは苦手な相手であった。
その感情の読めない、それでいて観察されているような視線が、どうも好きになれないのである。
だからこそ、クーベロに対応を任せて無視してしまいたかったが、そうはいかないようだった。
「すまないが、クーベロ。席を外してほしい。ガイと二人きりで話したいことがあるんだ」
「は、はぁ……それは構いませんが、二人きりで……？」
と、見張り任務中であるにも関わらず、そんなことを提案する魔女にクーベロが首をひねる。しかし、
「あ――はは～ん、そういうことっすか？」
突如、思考が何処に行き着いたのか、なにやらいやらしい笑みを浮かべるクーベロ。絶対にそうじゃないであろう勘違いをしていることが手にとるように解る。故にやめてくれと懇願しそうになるが、
「そいじゃあまあ、俺は門の方に戻ってるんで終わったら呼んでください。それとも……もう帰った方がいいっすかね？」
「――いや、それには及ばないよ。すぐに済む……とは言わないが、それほど時間は掛からないから」
「へーい、了解でーす」
と、クーベロが立ち上がり、そのまま外周部を辿って隠れ里の入口にあたる門の方へと向かおうとする。
だがその前に、ガイに向かって振り返ると、
「……ニッ！」
「……」
いい笑顔を浮かべて、サムズアップを置いていった。
正直イラッとしたので、追いかけて一発ぶん殴ろうかと迷ったが、副隊長が用事があると言った手前、追いかけることも出来やしない。こういう時こそ、自分の口下手さが嫌になる。何か適当に言い訳をつけて回避したいのに、それもままならない。

「……それで、用事とは？」
だからガイは周囲に人の気配がなくなったのを読み取り、二人きりになってからさっさと用件を尋ねた。
それが終われば、この気味の悪い相手からも解放されるだろうと。
そんな思惑を知る由もない魔女は、こちらを見ていつも通り淡々と口を開く。
「――では、率直に言いましょうか」
ああ。何でもいいから早く終わらせてくれ、とガイは内心、投げやり気味にその言葉を待つ。
だがその冷静な表情は、魔女の一言で――凍りつくこととなった。
「――ガイ。あなたは少し前に、西の方で活動していた盗賊ですね？」
「――――」
息が止まる。
――何故そのことを。
――どうして知っている？
ガイの内心で起きた強い疑問の言葉がそれだ。
そして魔女は、今まで見てきたものと違い、感情が僅かに見える薄い笑みを浮かべると、言葉を続けた。
「強盗、強姦、殺人……色々と罪を犯してきたそうですね……ふむ、どうやら色々あったようで――おや、何故それを？　と、疑問に思っていますね？」
更に言い当てられる。それすらもお見通しなのかと驚愕し、未だに声が出せない――出すべき言葉が見当たらないガイは、ただ未来視の魔女の言葉を聞くだけだった。
……まさか、未来視……!?
いや、しかし、未来を読んだところで分かるはずも――
「まあ、そうですね。未来視ではありません。私は未来視が専門ではありますが……心読み。いわゆる〝読心〟も嗜んでおりましてね。あなたが黒い感情を抱いていて、それをかつて実行していたことは、ここしばらく観察していて分かりました」
「こ、心読み……だと……!?」

初めて聞く言葉だが、何を意味するかは分かる。だからこそ、ガイは信じられない、信じたくないような気持ちだった。
「驚くのも無理はないでしょう。私のようなものは世界広しと言えど、そう多くはない。このようにして露見してしまうなど、普通はないでしょうから」
運が悪かったですね、と魔女は何の気なしにそんなことを言う。
だがガイの内心は荒れ狂っていた。
……どうする……？
悪事が暴かれた。暴かれてしまった。
せっかくここで平和にやっていけると思っていた矢先にだ。
彼女はここの副隊長。彼女が周りの隊員や、隊長に告げ口をしようものなら、ガイの居場所はまたなくなってしまう。
だからだろうか。その心の中の声は、いつも以上にクリアに聞こえた。
『あー……バレちまったな……さて、どうする？』
と、もうひとりのガイは言う。何を？　とは聞かない。ガイもその先の言葉は分かっていた。
『――――殺るか？』
『……』
その、普段であれば一蹴すべき提案を、ガイは何も言うこともなく受け止め、そして動じることも無かった。
他ならぬガイ自身が、それを考えたからだ。
――ここで魔女を殺し、口封じを図ることを。
『なら、俺に任せろ』
もうひとりがそんなことを言う。頼もしい言葉だ。
『俺もここのところ、こいつの視線にはうんざりしてたところだしな……この状況だとヤれそうにないのが残念だが……殺っちまうのが手っ取り早い』
同意する。この状況だとそんな時間はない。
そもそもこの二人きりの状況で魔女だけがいなくなれば、クーベロや他の者も確実に怪しむ。

完璧に証拠を隠滅し、上手い言い訳を考えついたとしても、罪から逃れるには難しい。
だがそうするしか、自分が平和に生きる道はない。
もう嫉妬され、憎しみを受け、虐げられるような生活はたくさんだ。
自分はここで生きていくと、今度こそ決めたのだ。
「……そうか。知ってしまったか……」
「ええ、知ってしまいました」
未来視の魔女が改めて頷く。飄々とした様子で、あっさりと。
だからガイは、懐の剣に手を伸ばそうとする。
知ってしまったのなら、殺るしかないのかもしれない。不可抗力、という言葉が頭に浮かぶ。
そうしてガイは、初めて自分の意志で、黒い感情に身を任せようとし――
「――ですが、誰にも言いません」
「……は？」
しかし――魔女から告げられたその言葉に、黒い想いを霧散させざるを得なかった。
「な、にを……言って……？」
「ですから、誰にも言いません。貴方の過去に興味はありませんからね」
そう言って小さく笑い、未来視の魔女はその場から立ち去ろうとする。
だがそれを、戸惑う声でガイは引き止めた。
「ま、待て……！　なら何故――」
「重要なのは、過去よりも未来です。私は今後の貴方に期待をしている」
だから誰にも何も言わない。その罪を黙っている。約束する。
そう小さく笑って告げると、未来視の魔女は、何故そのことを態々言いに来たのかという、ガイの一番の疑問には答えずに、再び森の暗闇の中に消えていった。
「……何だったんだ……？」

『……分からねぇ……』
ガイの呟きに答える言葉は内心にしか無く、その心からの言葉だけが森の中に木霊した。

「……なんなのさ、アンタ……」
「……そんなこと言われてもな……正直、困る」
部屋の中で木霊したのは、使徒であるハンティの呆れるような声と、その主である魔人レオンハルトのバツの悪そうな声だった。
だがその声に割って入るものがいる。
赤に近い紫色の髪を持つ小柄で肌の色が少し焼けた美女の声だ。角や翼を持つ人間でない彼女はニヤリとした笑顔で、
「あら、レオンハルトの子種がそれだけ優秀だったというだけの話よ。別に驚くほどのことではないわ」
そう言って彼女は自分の露出したお腹を愛おしそうに擦る。そんな姿を見て、ハンティは何とも言えない表情で目を細めた。
「……いや、にしても頻発しすぎでしょ。魔人って当たる確率低いんじゃなかったの？　しかも、悪魔のあんたまでとか……」
「今までの努力が実を結んだだけ、とも取れるわ。そもそも、あれだけ毎日やって、孕んだのが9人なのだからむしろ少ないじゃない？」
「まあそれは……」
レオンハルトの使い魔であり、ハンティの数少ない友人。元カラー女王で第四階級悪魔のインデックスが薄い目の笑顔でそう言う。
ハンティも半ば一理あるとその言を認めるが、心の内ではあまり納得はいっていない。
だがそれを言い出せないのは、一応はめでたいことであるためだ。
新たな命を祝福しないわけにはいかない。自分の主の節操の無さは恐れ入るが、それは確かである。
しかもそれが親友の子だというのなら、さすがのハンティも空気を読むのだった。
口の中でもごもごと言葉を呑み込んだりしていると、インデックス

が続けて、今度はからかうような口調で、
「……というか、貴方はそろそろいい相手でも見つけたらどうなの？　ゴリラでも番を見つけるものなのに、ほんと貴方ときたら……」
「……あー、あー、聞こえない聞こえなーい。あたしはそういうのはいいからー」
「はぁ……」
耳を塞いであーあーと聞こえない振りをするハンティにインデックスが呆れを意味する息を吐いた。額に軽く手を当て、半目をハンティに向ける。
「……考え方を変えないと駄目ね。こういう考え方はどう？　恋人ではなく、子供を作るための相手を探すの。もっと原始的な雄と雌の番よ。元ドラゴンなら分かるでしょう？　良い感じの雄との子孫を作るためなら、ちょっとはハードルが低く――」
「――ならない。……というか、子孫なら似たようなのがいるし……」
「血を引いてる訳じゃないでしょう、カラーは」
インデックスの説得にもハンティはバッサリと拒否する。ここまでいくと男性に全く興味がなさそうというか、女性としてどうなのかと思わざるを得ない。
しかし、ハンティとしても複雑な想いはあるはずだ。
面倒見は良い方で、子供も割と好きな方なのは分かっている。子供の相手をすることだってあるのだ。
だが、ハンティには根深い何かがあるのだろう。そうしようとしない訳が。
それを薄々と感じつつも、インデックスは言い出せずに息を漏らすだけだ。さすがにそこの解決方法は、ハンティ自身の心の問題であるため、踏み込みにくいというか、ただ言葉だけで踏み込んでも解決しないであろうという読みがある。
「というか、あたしよりレオンハルトだよ。こっちは沢山作ってるんだから別にあたしは必要ないでしょ」
「……そういうものでもないとは思うがな……」
レオンハルトが遠慮気味に意見を口にする。

彼としても、思うところはあるだろうが、それ以上に子供のことで考えるべきことがあったりする上、ハンティにも子供の世話をたまに頼んでいるため、あまり強くは言えない。
そもそもハンティに対しては言わなくても構わないという節さえある。それはレオンハルトにもきちんとした理由があるのだが、インデックスには知り得ないことだった。
「……そういえば、前に悪魔界に行きたいって言ってたけど、そっちはどうするのかしら？」
インデックスが答えを半ば分かっている問いを投げる。確認の質問だった。そしてレオンハルトはその予想通りに、
「……今は子供のこともある。もう少し後になるな。あと数年もすれば、俺も――」
「……あと数年？　何かあるの？」
耳に聞こえた単語に単純な疑問を返す。しかしレオンハルトは少し間を置いて、
「……いや、何でもないが……だが、そうだな。もう少し経てば子供達も成長するし、俺も一通りの用事済んで手が空くだろう。行くのはそうなってからだな」
レオンハルトの答えに、なるほど、と頷きを返す。するとそれを聞いていたハンティが、
「行く時はあたしも連れていきなよ。愉しそうだしさ」
「……考えておく」
「なら私も悪魔界に注意喚起しておくわ。――カラーゴリラ来訪注意報を」
「……雷撃」
「――甘いわね。ツッコミとはいえ、その程度の魔法はもう私でも躱せるわ」
「へぇ……？」
第四階級の悪魔となったインデックスの実力は、地上だとかなり高い。ハンティのツッコミ用に力を抑えた雷撃なら躱すことも受けることも容易だ。

だが背後から、
「……一応、インデックスは身重だ。軽い魔法とはいえ、気をつけろよ」
「あっ、と。ごめん。素で忘れてた」
「別にいいわ。レオンハルトと私の子なら、赤ん坊であっても雷撃くらいなら耐えるはずよ」
「冗談に聞こえないのが恐ろしいねぇ……ふふ」
「恐ろしいなら最後に笑い声は響かないと思うんだが？」
「生まれてもないのに目をつけられるとは……我が子ながら過酷な運命を背負ってるわね……許しなさい、我が息子、もしくは娘。ママの友人はとんでもないバトルジャンキーなのよ……――あ、動いたわ」
「……まさか、恐怖で震えてるのか……？」
「そ、そんなわけないでしょうが!?」
「あ、また……」
ハンティの声に反応してお腹が動いたことで、インデックスがしばらくそのネタで弄り続ける。
レオンハルトはそのやり取りに微妙な表情を浮かべながらも、机の上にある手紙を一度引き出しの中にしまう。
その差出人には――〝ますぞる〟と書かれていた。

遺跡の調査

――その視線は、未だ続いていた。
「どうしたんだ、ガイ。また難しそうな顔してるぜ？」
隣を歩くクーベロの問いにガイは間を置いて答える。
「……いや、何でもない。気にしないでくれ」
「？」
ちらりと背後を見て息をつくガイに、クーベロが頭に疑問符を浮かべたが、その後の追求は無くなった。
というのも今は大仕事の最中である。あまり別の事に気を取られている余裕はない。
魔物の討伐――ではない。今日の仕事は先日、新しく発見された大規模な遺跡の調査だ。
魔物の討伐も重要な仕事ではあるし、隊の規模によっては日々の糧を得るためにそればかりを行う隊も存在するが、遺跡の調査というのは旨味もあれば希望もある。
新しく発見された、というところがミソだ。そこには危険も多く存在するだろうが、それも含めて何があるか分からない。
資源や食料、何か役に立つアイテムや宝があるかもしれないのだ。
「結構進んできたね、もう一踏ん張りかな」
遺跡の中にいた大型の魔物を斬り捨てたロラン隊長が、軽い口調だが、表情は真剣にそんなことを言う。
鋼の騎士団は魔物の討伐だけでなく、代々受け継がれる方針、目標として、魔人と魔王の打倒を掲げている。
勿論、戦う意識の高い鋼の騎士団の隊員達ですら、それが成し遂げられるとは思ってはいないが、隊長のロランは違う。魔人を倒すに足る伝説のアイテムを求めているのだ。
あるかも分からない希望に縋る――いや、縋るしかない。
ガイもよく知っているが、魔人は普通の人間が敵う相手ではないのだ。
だからこそ、多くの戦士は何かを求めてダンジョンに潜る。もっと

も、そういった者達は冒険者に多く、どちらかというと魔物討伐隊に所属するような者達は現実思考の人が多い印象だ。
明日の糧を得るために、仕事として戦っているのである。
しかし本音はそうでも、表向きはきちんとやらなければならないし、遺跡の調査自体は重要な仕事であることには変わりない。
そのため、この場にいる調査隊の面々は、誰もがいつもより真剣な表情で進んでいた。
未知の遺跡を調査するにあたって、鋼の騎士団全体から選りすぐりの隊員達を集めて調査隊を結成したのだ。
隊長は当然、ロラン。ガイやクーベロもその中に選ばれた。
そしてその中には――あの得体の知れない魔女もいる。
「……ふふ」
後方の部隊を率いている未来視の魔女。ガイがここ一ヶ月、気になってしょうがない相手だ。
あの暴露の夜から一月経ったが、その間、誰にもガイのことを話していない。
本当に告げ口しなかったのかと驚いたし、あれから接触すらしてこないのだ。安堵を通り越して不可解な思いが芽生える。
ひょっとしたら、あれは夜間の見張り任務中に見た夢で、現実では何も起きていなかったんじゃないかと思うほどだが、そんなはずはない。あれは確かに現実の出来事だ。
それだけに、ガイは気が気じゃない。あのことを話されたら、ガイは一瞬にして居場所を失ってしまう。
だが、だからといって今更行動を起こすことも出来ない。行動を起こせば危険が生じる。平穏が脅かされていない今の状況でそれを選ぶにはメリットが少なく、リスクが高かった。
「――炎の矢！」
「オォン……！」
魔物に魔法を放ちながら、遺跡や戦闘のことではなくそんなことを考える。消えていった最後のゴーストを見届けると、傍らのクーベロが息を入れて、

「はぁ、助かったぜ、ガイ。どうにも、ここは戦士には相性の悪いモンスターが多くて困るな……ははは」
「……気にするな。そういうこともある」
「ま、ここはお前みたいな魔法を使える奴の援護をするべきだな。俺達はガードだ」
もっとも前でも戦えるお前には必要ないだろうけどよ、とクーベロが笑いながら言う。
確かに、ここの遺跡はアンデッド系の魔物が多く、物理耐性を備えている魔物が多い。
そのため、クーベロのような魔法の使えない戦士職はどうしても苦労してしまう場面が多かった。
鋼の騎士団が如何に大規模な魔物討伐隊とはいえ、魔法を使える者はそれほど多くはない。調査隊にも数十人がいる程度だ。それ以外は全員戦士である。
なので魔法使いの攻撃を援護するべく、戦士達が前に出て魔物の攻撃を請け負っていた。
『俺には必要ねーけどな』
もうひとりの声に一々同意の声は出さずに、しかし頷く。実際、この程度の魔物であればガイなら、魔法を使わずとも倒せるし、魔法なら一番弱い魔法を撃ってるだけで簡単に倒せる。
実力のある戦士――ロラン隊長などはさすがで、剣でゴーストをばっさばっさと斬り捨てていた。それを見た周りの隊員達が尊敬の眼差しを彼に向ける。
自分も同じことは出来るが、やらない理由がそれだ。やれば目立つ。ここでは目立たないようにとしているのに、目立ってしまっては前と同じ様なことになってしまう可能性が高い。
手を抜き続けるのは疲れるし、悪い気もするが、悪意を受けないためにはこれも仕方がないことだ。
しかしそんなことを考えている時だ。
「――っ、隊長！」
「どうした――っ!?」

不意に先に行っていた斥候役のシーフ職の隊員が慌てたように声を上げると、その直後にロランやその周囲の面々も表情を変えた。
「おい、ガイ……これは……！」
「ああ……空気が……」
クーベロとガイもその変化を目にする。
遺跡の回廊の先から、紫色の靄のような、瘴気が漏れ出てきたことに。
「ぐっ……なんだ……!?」
「気分が……っ……」
「うう……吐きそうだ……」
瘴気が充満していくと、その場にいた隊員達が次々に体調を崩して頭や腹、口元を押さえる。
「やべぇな……これは……」
「っ……くっ……やむを得ないな……皆、撤退するぞ……！」
それはクーベロやロランも例外ではない。顔を青くして軽く膝を落とした二人。その頃には後方まで瘴気が充満し、ほぼ全ての隊員達が気分を悪くしたのを見て、隊長のロランが撤退を告げる。
慌てて後方に戻っていく偵察隊。そんな中、
「――おい、ガイ……お前は平気なのかよ……？」
「副隊長、大丈夫なんですか……？」
クーベロと、後方にいた隊員の一人が、それぞれガイと未来視の魔女にそんなことを問う。
なぜならその二人は、その二人だけは、
「……ああ、何もないが……」
「問題はないよ」
ガイは瘴気を受けても自分の体調に全く問題がないことを告げる。未来視の魔女も同じだ。
そう言うと、それほど大きな声ではなかったのに、それが聞こえていたのか皆に注目される。
なんだか嫌な予感を感じていると、隊長のロランが真面目な顔で二人を見て、

「……副隊長、ガイ。申し訳ないが……君達以外は瘴気の中を進めそうにない。だから……君達に遺跡の調査を命じる」
「……！」
ガイはその命令に怯む。しかしいつの間にか隣に来ていた未来視の魔女は全く迷うこと無く、
「了解しました」
頷いた。その快諾を見て、ロランも頷く。その顔が横に動き、
「……ガイ。君は新人とは思えないほどに有能だ。剣の腕もあって、魔法も使える。頭の回転も速い。そんな君と副隊長なら、この先の調査もきっと成し遂げてくれると思う」
「……」
隊長からそうやって褒められるが、そうやって評価されるのは悪い気はしない。
「まあ、ガイならいけるだろ。こいつ、いつも結構余裕そうだしな」
クーベロからもそう言われてしまえば、もはや断ることは出来ない。
「……わかりました」
「では一緒に行こうか」
「……」
だが、分かってはいたが、この未来視の魔女が一緒にいることは不満である。
せめてクーベロだけでも付いてきてくれれば寂しくないし、我慢出来るのだが……、
『ホモかよ』
うるさい。そういうことじゃない。
心の中の声に否定を返しつつ、ガイはどこか楽しそうな様子を滲み出す魔女と共に、遺跡の奥へと向かっていった。

その瘴気に満ちた遺跡の最奥。
腐食し、苔の生えた大理石の一角。その台座には、とある剣が鎮座

していた。
「あ～～～……暇じゃのう……」
それはくたびれた中年のおっさんの声だった。
部屋の中には誰もいない。人も魔物も、生き物というものは存在しない。
その声を鳴らしているのは他でもない――その漆黒の剣だった。
「そろそろ誰でもいいから来てくれんかの～～～、かわいこちゃんと贅沢は言わんから――」
と、その剣は言いかけ、しかし言葉を途中で止める。
「あー……でも儂、この分だと普通の奴じゃ使えんじゃろうし……相性の良い奴が来てくれんといつまでもこのままじゃ……」
剣になった彼は、かれこれ百年近く、この場所で使い手を待ち続けていた。
当初の願い、その思いは消えてはいない。消えてはいないが、こうまで暇な時間が続くと独り言は多くなるし、緊張感にも欠けてくる。
「はぁ～～～、早く魔人をズッタズタに斬り裂いてやりたいんじゃがの～～～……一体いつになるか……」
混沌とした気を漂わせるその剣は、その身に秘める魔を斬る力の行使を願う。
そんな彼の、魔剣の名を――――カオスという。
１００年ほど前に活躍した冒険者、エターナルヒーローと呼ばれる者達の一人であり、神に謁見して願いを叶えた、紛れもない英雄であった。

地下深くにあるその場所は、地上の光が届かない特殊な場所だ。
――――奈落。
深き地の底。闇が凝縮された地。この世で最も暗き場所。
数多の危険な名で呼ばれるようなその地は、
「さて、この者をどうしましょうか、第一使徒であるブラッドにお聞かせください」

「これだけの大物を殺すことなく制するとはさすがです。後はこの第一使徒であるピットにお任せください」
しかし――特に危険な空気もなく、いつも通りの弛緩したやり取りが続けられていた。
幽霊のハニー、ゴーストハニーの使徒であるブラッドとピットが、とある獲物を前に主へと声を掛ける。主へ、獲物の処遇を問うためだ。
だがそれより先に、獲物の方が声を上げた。
「ぐっ……巫山戯るな……！　この戒めを解け……！　魔人が……ッ！」
その獲物は、白の体毛に5メートル強の身体を持つ生物だった。
角や翼、尾を持つその生物は――ドラゴン。
かつて世界を席巻した偉大なる種族。
その生き残りであり、正気を保っている強大なドラゴンはしかし、その白の身体を血に塗れさせ、地面へと這いつくばっていた。
全身を鎖で縛られ、咆哮を上げるドラゴン。その威容は瀕死となってなお、並の生物を萎縮させるであろう。
だが生憎と、目の前にいる生物は並の生物ではなかった。
「――と、申しておりますが、どうします？　ますぞる様」
「……」
ピンク色のハニー、ハニ子が声を向けた先にいたのは、浅黒い肌に筋骨隆々とした肉体を持つハニーのような何かだ。
ハニーであってハニーではない。元々はハニーであったが、今はそうではない。
彼の名は――ますぞる。魔人ますぞるだ。
世界を支配する魔王のその忠実なる下僕。魔王に直接血を分けられた選ばれた存在。
並の生物とは存在の格が違う。例えドラゴンであっても、彼らは怯むことはない。
事実、ますぞるは今しがた、自身の住処を通りがかり、影武者である奈落の王を倒したこのドラゴンを叩き潰したところであった。

「……」
「何故、自分の住処に侵入してきた？　――と、ますぞゑ様は言っていますが、どうなんですか？　うふふ」
　ますぞゑの意志を伝達するべく、使徒ではないが友人のハニ子がそれを通訳する。
　そしてドラゴンはその問いに吠えることで答えた。
「知れたことッ!!　かつての脅威の気配をこの目で確認し、復活したことを一刻も早く同胞に伝えるためだ!!」
「……かつての脅威？」
「……」
　ドラゴンの迷いない答えにハニ子が首を傾げ、ますぞゑも何とも言えない雰囲気を醸し出す。
　代わって答えたのは使徒である二体だった。
「もしかしたら、先日見つけた隠し通路の先にいるアレではないですか？　第一使徒のブラッドです」
「ああ、我々が通販で取り寄せたエロエロ玩具――ごほん、失礼。嗜好品を開けてみようと場所を探している時に見つけたアレですな。第一使徒のピットです」
　言って直ぐに二人が殴り合いを始めたが、ドラゴンはきちんとその言葉に反応した。
「そうだ！　私はその存在を同胞に伝えねばならない！　四大聖竜か他の八大精霊竜――いや、生き残った者であれば誰でも構わない！　今は一丸となってかの脅威を滅ぼさねばならないのだ！」
　ドラゴンはそう主張する。血まみれになり、戦う力も残っていない彼は未だ覇気を失ってはいない。
「だと言うのに貴様らは邪魔をしおって……！　アレが地上に出ればお前達魔族も存亡の危機であるのだぞ!?」
　そう訴える。お前達ですら危険なのだと。
　しかし使徒は答えた。特に慌てた様子もなく、
「ほう？　我々が危険ですと？　面白い冗談ですなぁ、ピット」
「ええ、アレ一体は確かに脅威かもしれませんがね。我々全体の危機

とはなりえないと思いますね、ブラッド」
　小さく笑みすらつけて二体の使徒は言う。その脅威を知った上で、
「アレが地上に出たとしても特に問題にはならない。多少の人間、魔物は命を落とすかもしれませんが、奈落から出てくる以上、経路は読めている。直ぐに魔軍が動くことになるでしょう」
「並の魔人であれば確かに苦労するでしょうが、それでもますぞる様や四天王の方々……筆頭であるレオンハルト様や魔王様すらいる我々が敗北する可能性は微塵もありませんな」
　死に体のドラゴンであれば分かりませんがね、と皮肉を付け加えながらブラッドとピットは連続して声を繋げる。
　しかし背後のハニ子が、
「魔軍に協力してない私達が言ってもしょうがありませんけどね」
「それもそうだけどね！　ハッハッハッ！」
「ますぞる様の方針だからしょうがないのさ！　フッフッフッ！」
　ハニ子のもっともな指摘にテンション高めの笑いを響かせる二体。
　事実、ますぞるという魔人は今まで、魔王からの招集や魔軍への合流を拒み続けていた。
　前時代にあたる魔王ナイチサの時代も動かず、現魔王であるジルの呼び声すらも無視。魔人の中で唯一、人間牧場を支配していない。
　ますぞるはただただ奈落で、遊びに来るハニ子や使徒のブラッドとピットと一緒に大人しく過ごしているだけだ。
　３００年後に本気を出して世界を滅ぼす――これだけがますぞるが公言する唯一無二の目標ではあるが、３００年前にも同じことを言っていたりする。
「……」
「うふふ。まあ友人に相談の手紙を出しているから問題ないと考えていらっしゃるわ」
「おお、そういえば少し前に出しましたな。あれはいつだったか……」
「一月前のぷちハニーの定期出荷に合わせての手紙ですな。キャロルさんに頼んで届けて貰いました。それも忘れているとは……痴呆かな？　ブラッドよ」

「痴呆ということは年上ということ。つまりは第一使徒は私だと自ら敗北宣言をしたようなものだぞ、愚かなピットよ……！」
「物忘れをしたくらいで第一使徒を名乗りだすとは恥知らずだなブラッド……！」
「くたばれ第二使徒め……！」
　二人が再び殴り合うが、互いに物理耐性を持つゴーストハニーであるため、中々決着がつかない。
「くっ……何を遊んでいる!?　いいから縛めを解け！　いや、解いてくれ!!　私にはこれを伝える使命が……！」
「と、言っていますがどうします？」
「……」
　ブラッドとピットの緊張感のないやり取りにドラゴンが激昂し、しかし頭を下げてまで鎖を解いてくれと頼み込む。それをハニ子がどうするかとますぞぉに問うと、意志を聞いたのか、ハニ子は頷いた。
「ふむふむ……あ、そうですね。確かレオンハルト様の元には結構偉そうなドラゴンが居たはずですから、その時にでも聞いてみましょうか。ええと……あなた、お名前はなんでしたっけ？」
　偉そうなドラゴン、という言葉に反応しつつも白いドラゴンは答えた。
「……私の名ははるまき！　八大精霊竜の一角、ライトニングドラゴンのはるまきだ！　おい、ハニー！　その偉そうなドラゴンというのは一体誰のことだ!?」
「さあ……名前までは覚えてませんね。ますぞぉ様も知らないそうです。ブラッドとピットは……？」
「私も生憎と、名前までは……いや、キャロルさんから聞いたような気も……」
「確かに、なんという名前だったか……シュヴァイン？」
「馬鹿か、ブラッド。それは新しく生まれたレオンハルト様の息子の名前だ。……確かアプリじゃなかったか？」
「お前も失礼な奴だ。そっちは娘さんだろう」
「……どうやら誰も分からないみたいですね」

「くっ……それくらい思い出せ、ハニー共め……」
　ああでもないこうでもないと名前を出していくブラッドとピットに、ハニ子がまとめ、ドラゴンのはるまきが苦い声を出す。
「……」
「とりあえず、しばらくは放置するとのことです」
「まあもうしばらくすればレオンハルト様も来るでしょうからな。その間、我らの暇つぶし相手にでもなってもらいましょう」
「そうですな。レオンハルト様はお忙しい方でありますから時間は掛かるでしょうが……友人の頼みを蔑ろにするような御方ではありませんし」
「っ……巫山戯おって……！」
　はるまきが再び身体を動かすが、ガチャガチャと音が鳴るのみで鎖は解けない。
　脅威の存在を伝えられないことを歯痒く思いながらも、奈落はまだいつも通りであった。

魔剣

「二人っきりだね」
「……そうだな」
「雰囲気のある遺跡だね。この紫色の靄も遺跡の雰囲気に見事にマッチしている」
「……瘴気だがな」
「人気のない遺跡に男女二人。何も起きないはずがなく……」
「魔物は沢山いるぞ。しかも襲ってきている。良かったな」
「ふふ、随分と素っ気ない反応だね……っと」
と、襲い来るアンデット系のモンスターを魔法で葬りながら、ガイとCは二人だけで遺跡の探索を進めていた。
瘴気が充満する中を進みながらも、二人には何の影響も起きていない。普段と変わらない様子だ。
いや、正確に言うなら二人に変化はある。それは、
「それにしても……随分と強いんだねぇ？　隊にいる時は使っているのを見たことがない魔法に、隊長にも匹敵――いや、凌駕する剣捌き。惚れ惚れしてしまうよ。ずっと隠していたのかい？」
「……お前こそ、普段はそのようなニヤケ面を見せていないが、ずっと猫かぶっていたのか？　嫌な女だ」
「女性は多少ミステリアスな方が魅力的でしょう？」
『確かに、一理あるな』
『同意するな馬鹿者』
ニヤリとした笑みでガイに向かって流し目を送る未来視の魔女と、それに同意するもうひとりの自分に、ガイはうんざりした表情を浮かべる。
やはりこの変化は鬱陶しいものだった。普段、隊にいる時に見せるCの態度、性格は、寡黙で無表情なミステリアスな女性であり、隊員達からもそういった評価を得られている。
しかしガイと二人きりになったCは、魔女らしく飄々とした表情と態度、語りを見せており、ガイを先程から翻弄する。鬱陶しくてしょ

うがないものだ。
「それより、こちらの質問には答えてもらっていないよ？　私の前でその強さを出してしまっていいのかい？　告げ口されるかもしれないよ？」
　クスクスと、人を喰ったような笑いを響かせながら、Ｃは先程の質問を再度投げかけてくる。
　ガイは眉間に皺を寄せながらも、一応は答えた。
「……１つ目の秘密を知られてしまった時点で、こちらとしては大痛手だ。だから強さを隠していたと知られたところであまり変わらない。それに、お前は――」
「ふむふむ、なるほどねぇ。どっちにしろ喋られた時点で終わりだし、強さを教えておけば脅しにもなると考えたわけだ」
「っ……貴様、また心を読んだな……？」
「くす、すまないね。どうせ心を読まれて既に知られてる可能性があると考えていそうだったから、ご期待通りに読んでみたのさ」
　くっ、と魔女の言葉に歯噛みをするガイ。苦々しく思うのは、
　……白々しい。その前から読んでいた癖に……！
　魔女の行動にガイは悔しく思う。どう足掻いても秘密や考えていることは隠せそうにない。そのことを改めて思い知り、自分の行動に間違いはなかったと思う反面、燻るような苛つきがガイに頭痛を引き起こす。
　瘴気なんかよりもこの魔女の方が厄介だ、と内心で言葉を作りながら足はその場に止めない。倒した魔物からアイテムやＧＯＬＤを拾うのも程々に、遺跡の探索をガイは優先していた。
「……そもそも、この瘴気は一体何なんだ。何故自分達だけが……」
「さて、何だろうねぇ……もしかしたら、奥にとんでもないものがあるかもしれないよ？」
　何だそれは、と思うも、ガイは一応やり取りを続けた。
「……一応聞くが、どんなものがあると言うんだ？」
「ふふ、お決まりで言うと、巨大な魔物か、呪われたアイテムとかじゃないかな？　楽しみだね」

「……そうか」
どちらも楽しみと言えるようなものではないが、それを言う気にもならず、ガイは嘆息する。
どうにかしてこの魔女の口を黙らせることが出来ないものかと――
『チ○ポでも突っ込んでみるか？』
――どうしようもなく下劣かつアホで愚かで何のためにもならない提案を即棄却する。唯一の相談相手がこれとか、ガイは色んな意味で泣きたくなる。隊と別れてそれほど時間は経ってないのに、まともな性格のクーベロが恋しくなってしまうほどに。
もうこうなったらさっさと探索を終わらせようと、ガイは廊下の奥にあった石の扉を開いてくぐる。すると、
「――む？」
「おや……もしかして最奥かな？」
魔女の言う通り、扉の先に広がるその部屋は、今までとは悪い意味で雰囲気の違う場所だった。
広間のようになっている部屋で、真ん中に台座がある。そして、瘴気がこれまでよりも濃い。
自分達は何ともないが、仮に隊員達がこの部屋に来たら、命を落とす可能性すらあるのではないか。
「さて、鬼が出るか蛇が出るか……どうなるだろうね？」
相変わらずクスクスと笑っているだけの魔女を後ろに、ガイはその部屋に慎重に足を踏み入れ、何かがないかと周囲を見渡すと、
「！　あれは――剣、か？」
瘴気で包まれた部屋の中心にある台座の上に、剣のシルエットが浮かび上がる。
「どうかな？　近寄って手に取ってみてはどうだい？」
「……言われずともそうする」
魔女を後ろに置いて少しずつ近づいていくと、姿がより詳細に確認出来る。
それは尖ったような特徴的な鍔の剣だった。

持ち手と鍔、縁の部分が黒く、切れ味の鋭そうな刃が特徴のロングソード。
『ほう？　中々良さそうな剣だな』
もうひとりの言葉に同意するのは癪だが、素直にそう思う。
切れ味も良さそうというだけではない。
その剣はほんのりと赤い気を漂わせており、何処か惹かれてしまうものがあるのだ。
何やら凄い力を秘めていそうな剣。その存在に吸い寄せられるように、ガイはゆっくりと台座に足を掛け、その剣に近づいていく。
台座に突き刺さっているその剣は、眼の前まで距離を詰めればより力を感じられる不思議な剣であり、躊躇うことを躊躇させた。
「……ふっ！」
故にガイは、己の左手でその剣をがっしりと掴み、一気に引き抜いた。
そのまま軽く剣を掲げ、感触を確かめる。
「……なるほど。悪くない」
この剣は手に馴染む。相性が良すぎて怖いほどに、しっくりくるのだ。
調査で手に入れた重要そうなアイテムは隊に一度判断を仰ぐが、これは自分で使えないかどうか頼んでみよう。そう、ガイに思わせてしまう。
そうして剣を振ってみせ、見つけた業物の剣に内心で喜びの感情を覗かせていると、
「――はぁ、やっと〝使い手〟が来たか……」
「っ!?　な、何!?」
不意に、剣から声が聞こえ、ガイは柄にもなく声を上げて驚いた。
剣を再び確認してみると、剣の柄頭部分に丸い眼のようなものが二つあり、それがこちらを向いていた。
「今の声は……お前のものなのか？」
「そうそう、儂。儂の声」
おそるおそる確認してみると、やはり、その剣は頷くように意志を

持って喋り始めた。
「……う～～～む。美少女じゃないのは残念だが、中々強そうだし、相性も良い、か……よし！　合格！」
　何やら剣がこちらを値踏みするような独り言を漏らし、そして最後に合格と大声をあげると、ガイは訝しんだ。
「……合格？　それは、剣の持ち主として、ということか？」
「そういうこと。儂、こう見えて魔剣じゃから。――魔人を斬り裂くことが出来る、な」
「――ッ!?　魔人、を……!?」
　魔人を斬ることの出来る魔剣――その魔剣自身の言葉に、ガイは絶句しかける。
『ほう！　魔人を斬れるのか！　ふはは、それはいい！　それを持って御礼参りしてやるぞ！』
『馬鹿！　言ってる場合か！』
　と、言いながらも、それが可能であることにガイは戦慄する。
　その魔剣の話が本当であればだが、
「……その話は本当なのか？　にわかには信じ難いが……」
「試したことないけどマジっぽいぞ。こう……魔人を斬るぜ斬るぜ斬るぜーって感じの力がずっと湧き上がってるからな」
「……胡散臭いな」
「胡散臭くても本当なんじゃから仕方ない」
　魔剣の言はどうにもその口調と人柄（？）も相まって胡散臭さが凄い。しかし背後から、
「ふふふ……だけど確かに不思議な力は感じるね。どうやら本当なんじゃないかな？」
「お前に言われてもな……」
　もっと胡散臭い奴に言われても余計に怪しくなるだけだ。
　故に露骨に息を吐いたガイだったが、同じく背後からやって来た未来視の魔女を見た魔剣は眼を細め、
「ん……おお、かわいこちゃん――って、お前さん、どこかで……」
　何やら見覚えがあると言った風に魔剣が言葉を止める。少しの間

を置いて、魔剣は再び目を見開き、
「思い出した!!　お前さん、未来視の魔女だろ!?　まだ生きて……つーか、若いままじゃがどうなっとるん!?」
「……知っているのか？」
　大声を上げて驚く魔剣と未来視の魔女、どちらにも問うように声を送るガイ。しかし魔女は涼しい顔で、
「いや、私は知らないな。よく思い出して見てみるといい」
「いやいやいや、そんなはず――って、あれ？」
　未来視の魔女の言葉に魔剣が疑問符を頭に浮かべる。思い直したように、
「確かに……よく見れば顔立ちとか背丈とかが微妙に違う気が……まさか、子孫か何かか？」
「ふふ、そんなところだよ。私の一族は代々、魔女として生きているからね」
「ほーう、そうなのか……うむ、間違えてすまんかったな。魔女ちゃんの祖母かそのまた祖母か……誰になるかは知らんが、儂が人間の時に世話になったんじゃよ」
「ふふふ、それはそれは。態々ご丁寧にどうも。その御礼は墓前にでも伝えておくよ」
　一応は話がついたようだが、やはり未来視の魔女の言葉は胡散臭いと思う。
　だがそれよりも気になる言葉があり、ガイは反応した。
「人間？　元は人間だったのか？」
「……色々あってな。まあどうでもいいことよん。今の儂は魔人を斬れる魔剣じゃし」
「……そうか」
　何やら含みのある間ではあったが、深く追求はしない。誰でも隠したいことの一つや二つはあるものだ。事情だってあるだろう。それが剣になった相手ともなれば尚更だ。
「……それで、お前さんの名は？　儂はカオス。魔剣カオスじゃ」
「……ガイだ。今は魔物討伐隊に所属している」

「ほうほう。ということは、少なからず魔物には恨みがあるじゃろ？
魔人を殺したいじゃろ？」
『おお！　昔ボコボコにされたからな！　次会ったらぶっ殺そうと思ってたところだ！』
内心からの言葉がうるさい。その強い感情の発露も、表のガイにとっては気が散ってしまうようなものだ。
……恨みなら、無くもない。だが……。
そう、恨みならあるし、魔物や魔人を倒したいとは思わなくもない。
しかしその、カオスと名乗った魔剣の意志を問う言葉に、ガイは素直には頷けなかった。
「……お前がいれば、本当に魔人を倒せるのか？」
真剣な表情で、ガイは逆に問い返す。微妙におちゃらけた様子のあったカオスだが、その真剣な眼差しから真面目な質問だと悟ったのだろう。少し間を置いてカオスは答えた。
「……倒せる。少なくとも、傷を負わせることは出来る。あの無敵の壁を破ることが出来るはずじゃ」
「……なるほどな」
それはつまり、とガイは頷き、言葉を返す。それが意味するところは、
「……あの無敵結界を破ることは出来る――が、出来るのはそこまで。お互い傷を負うという対等の条件には引きずり込めても、魔人を超える力を得ることは出来ない。つまりは……使い手の技量次第、か……」
「……耳が痛いことを言ってくれるのう。だがそれでも希望には違いないじゃろう？　儂らの時代には――いや、今もか。魔人を倒す手段があるだけでも恵まれてるんじゃからな」
カオスはそれを聞いても誤魔化すことなくそれを白状した。そう、結局は魔人と戦う必要がある。
「〝無敵結界〟……魔人が必ず身に付けている、肉体に届く外部からのあらゆる攻撃を防御してしまう、文字通り無敵の結界のことだね。これがあるからこそ、魔人はあらゆる生物よりも強いといえる」

だけど、と魔女は改めて周知させるように説明する。
「魔剣カオス……それは魔人を超える力をもたらす訳ではない。無敵結界も脅威だけど、魔人の力は何もそれだけじゃない。無敵結界が無くとも、魔人は強い」
「……そういうことじゃな。だが、それでも誰かがやらないと駄目だ。そうしないと、人間の未来はない。この地獄は永遠と続く。だからこそ儂は……力を得て、それを振るうに足る使い手を待っていたんじゃ」
カオスの眼がガイをまっすぐに捉える。先程までのくたびれた中年のものではない。鋭い、戦士としての瞳だ。
「ガイ。儂は誰にでも使える剣じゃない。相性があって、使える者は限られている。この瘴気の中を進んでこれたということは、ここにいるお前さん達だけが、使い手の資格を持つということじゃ」
「……それなら……いや……」
「ま、察しの通り、そちらの嬢ちゃんは魔女っぽいし、お前さんが適任じゃろ」
「ふふふ、そうだね。そんな重そうなものを背負うなんて、私にはとてもとても」
何故か面白そうに魔女が肩をすくめて首を振る。何故だかムカつくが、それは道理だ。魔法使いに剣を扱わせるのは無理がある。
しかし、別の意味でもこれほど重いものを背負うのが、自分でいいのだろうか。正直言って、覚悟は不十分であった。
「……まぁ儂も、何も今直ぐ魔人を倒しにいこうとは言わん。本音を言えば直ぐにでも斬りたいが……色々と準備も必要だしな」
そんな迷いを見せるガイを見て、カオスが声を下げて言う。だが、どこか懇願するように、
「だが、頼む。儂を使ってくれ。儂はここで百年も待った。次の使い手が現れるとは限らん。だから――」
どうか頼む――と、実際には頭を下げてはいない、下げることは出来ないが、目を伏せて頼み込んでくるカオス。
その強い意志を、ガイは拒むことも、快く引き受けることも出来な

かった。
……どうする……いや、どうすれば……？
魔人を倒す剣を所有する。それほど大きな力を手に入れてしまえば、やはり自分としても責任があるはずだ。
すなわち――魔人を倒す責務が生じる。
その責務を、背負う覚悟が自分にはあるのか。
それがないまま、カオスを所有していいのか。
しかしカオスの言う通り、使い手が現れる保証はないだろう。
この瘴気が使い手を選ぶための試練だというなら、調査隊の面々――ロランやクーベロ。腕利きの隊員達もカオスを使うことは出来ないのだろう。
だとすれば――
『――ああ、まどろっこしい！　手に入れてしまえばいいだろうが！　無理になったら捨てるまでじゃ！』
『っ……！　き、貴様……待て……！』
己の意志が塗り替えられる。内側の強い意志によって。
こちらの心や意志の弱さに入り込んでくるように、ガイは人格をその瞬間、入れ替わらせた。そして、
「……よし、いいだろう！」
「！　本当か!?　本当だな!?　駄目って言っても聞かんぞ!?」
ガイの心強い頷きにカオスが改めて問いかける。
だが、ガイはそこでも右腕で胸を叩き、口元に笑みを浮かばせた。
「任せろ！　俺は最強だからな！　魔人くらい、いくらでも斬ってやるわ！　ふはははは！」
「お、おおう……何だか急に頼もしい感じに……」
「魔人を倒せるとしって喜んでるんだよ、きっと。彼は意外と好戦的みたいだからね」
『お、おい貴様ら!?　余計なことを言うな!!　私はまだ引き受けるつもりは――』
「魔人だろうが魔王だろうが俺が倒してやるわ！　大船に乗ったつもりでいろ!!」

「う、うむ！　そうじゃ……そうじゃな！　儂も力を貸すぞー！　行くぞ、ガイ！　魔人をぶった斬って血に染めたるんじゃー！」
「ふはははは！　任せろ！　そうと決まれば戻るぞ！　おい魔女！　お前は適当に説得しろよ！　カオスを取られたら俺様の決意が台無しになるからな！」
『おい、やめろ馬鹿!!　魔女も止めてくれ！』
と、内心で裏になったガイが必死に声を上げる。
しかし魔女は、ニィっとものすごくいい笑顔を浮かべ、
「ふ、ふふふふふ……はい、分かりました。説得は私にお任せください」
「ははは！　それでいい！」
『あああああああああああああああああああああああああああああああああああっ!?』
『うるさいわ！　黙ってろ！　もう決めたことだ！』
表になったガイが内心でもうひとりのガイを黙らせる。
極力声を聞かないようにし、身体の主導権を再び得たことと、魔人をぶち殺すための剣である魔剣カオスを手に入れて上機嫌となったガイは、一応調査隊と合流するべく大股で帰路についた。

小高い丘の上。そこは街の外れにある、彼女の修行場の一つであった。
二つ結びにした真っ白い髪を靡かせ、和装に身を包んだ小柄な彼女は、視覚以外の優れた五感によってか、はたまた勘によるものか、分からないが、何となく機会が近いことを予感する。
「……どうかしたのですか？」
ふと――その場に誰かの声が響いた。
その場には少女一人。しかしそうであるにも拘かわらず、丘の上には別の女性の凛とした声が響いた。
「……いえ、なんでもありませんよ。ただ――」
「……ただ？」

少女はそこでふっと微笑を浮かべて告げる。それは、
「もうすぐ、友人と再会出来るかもしれないと……夢を見ただけです」
「……そうですか……」
その少女の言葉を、もうひとりの彼女は何処か複雑そうな声色で頷く。
それが意味するところは――少女は知る由もないだろうが、自身にとっても懐かしい再会となり得るということだ。
故に少女の腰元にある彼女は頷いた。二本ある内の一本から声が響く。
「……私も、古い仲間と会えるかもしれません」
「そうなんですか？　なら、良い再会になるといいですね」
そう言って、しかし少女ははっとしたように言葉を続けた。
「……いえ、というか、会いたいなら私も協力しますよ？」
「ふふ……ありがとうございます。その心遣いだけで大丈夫です」
「そうですか……？　遠慮はしなくていいですからね！　なんていったって、私はもうお姉ちゃんですし！　長女ですし！」
腕を腰に当て胸を張り、これ以上ないくらいに得意気な表情を浮かべる少女。
そんな少女の、子供っぽくも微笑ましい様子を見て、しかし彼女は内心の複雑さを消せはしない。
そして先程の、〝良い再会になるといいですね〟という言葉にも頷けない。
なぜなら――その再会が、良いものとならないことを、他でもない彼女自身が分かっているから。
だからこそ、彼女は言うのだ。敢えて、
「……その時は、頼りにさせて貰います」
「ええ！　お姉ちゃんに任せてください！」
「……私は妹ではありませんけどね」
小声で指摘しながらも、少女はあまり聞いていない。
妙に緊張感の欠ける使い手の少女を思い、刀である彼女は内心で溜息をついた。

提案

魔物がこの世の覇者であり、人間が下位の身分であるということの象徴ともいえる場所が、人間牧場である。

世界各地に数十箇所存在し、魔人やその名代である魔物大将軍による管理のもと、様々な方針で運営されるそれらの牧場にも、やはり〝格〟というものが存在する。

牧場の規模。そして、どれだけ効率的な運営をしているかによって、牧場運営に勤しむ魔軍の兵隊達の評価は決まってくる。

逆に管理も杜撰で、脱走者も多い牧場は魔物界隈でもあまり評判が良くない。

前者で言えば、魔人四天王が支配する大規模な牧場が真っ先に名前が上がり、それ以外だと丁寧な運営で評判の魔人ジークの牧場や、効率性だけを重視して無駄を一切省いたパイアールの牧場などが評価が高い。

後者だと、そもそも管理を配下の魔物将軍に丸投げしている魔人レイや魔人レッドアイ、美少女以外は放置気味の魔人メディウサの牧場などが話題に上がる。

そしてそんな中、やはり魔物界最大の都市であり、そこに隣接する大規模牧場であるそこは、特殊な方針を掲げながらも、特に問題を起こさずに安定した運営を行っていることで有名であった。

魔軍最強と称されるレオンハルト軍。規律が行き届き、精力的で品のある魔物兵達が日夜汗水垂らして作業を行っている魔人レオンハルト直営の牧場は、今日も労働者、奴隷、家畜――そのどれもがきちんと己の役割を遂行していた。

そんなレオンハルト軍を指揮する魔物大将軍が、レオンハルトシティにある一等地。一番街と呼ばれる高級住宅街の屋敷の一室にいた。

「ふんふ～ん……」

美麗かつ繊細な調度品、家具が並ぶその部屋で、大柄な魔物は鏡の前で鼻歌を歌っていた。

彼の名は魔物大将軍、カエサル。レオンハルト軍を指揮する魔物大将軍である。
彼は非常に――個性的な大将軍であった。
「おお～う……ビューティフォー……今日も私は美しい……」
部屋の真ん中に置かれているのは、巨大な鏡であり、そこに映る自分の姿を見て、彼はうっとりと呟く。
カエサルは美しいものに眼がなく、それでいて魔物界一と言っていいほどの――ナルシストであった。
「この機能美に溢れたフォルム……それでいて、他の大将軍共とは違い、魅力に満ち溢れている……」
鏡の前でポージングを繰り返しながら自らを賛美するカエサル。
誰かがこの光景を見れば、間違いなく奇行。頭がおかしくなったのではと疑われかねないような行動だが、カエサルは至って大真面目。
他の魔物大将軍との違いは腹の中にある顔や、上部にある頭などの造形が多少違うだけなのだが、それでも彼は魔物大将軍の中で自分が一番美しいと心の底から思っているのである。
そしてこの行動は毎朝の日課であり、何なら夜にも、気が向いた時には昼にも行っている。つまりはいつものことであるのだ。
「――カエサル閣下！」
「む？　なんだ騒々しい。私の日課を邪魔するつもりか？」
だからこそ、部下がその姿を見たところで、狼狽えることはない。慣れているからだ。慣れてなければ内心で困惑する。
部屋に突然入ってきた副官の魔物将軍は、またか、と思いながらも表面上は冷静に、敬礼を返した。
「はっ、申し訳ありません。しかし、お伝えすることが……」
「ふっ……まあいい。聞こう。私は美しい魔物大将軍。その仕事振りも華麗かつ美しい……つまらぬ用件ならベッドで相手をしてもらうがな」
「っ……は、ははっ。では申し上げます」
その言葉に一瞬、ひぃっ!?　と声を上げそうになったが、それをすんでのところでぐっと堪える。そんな失礼な態度を見せればそれこ

そベッドに連れ込まれてしまう。
カエサルは男でも女でもイケるヤベー奴なので、その言葉は冗談でも何でもない。事実彼は、女の子モンスターだろうが、男の子モンスターだろうが、人間だろうが、それが彼にとっての美的基準を満たす相手であれば興奮し、それを頂いてしまう。
無論、彼は紳士なので部下相手には合意を得ようとするだろう。そういった意味では先程の言葉は冗談かもしれないが、カエサルの趣味趣向、これまでやってきた行動を知っている魔物将軍には冗談には聞こえない。
故に魔物将軍は速やかに己の職務を全うすることにした。震える声で、
「先程、魔物大将軍……アッティラ閣下。並びにイヴァン閣下がレオンハルト様に面会を求めてまして……」
「――何？　あの二人が？」
「はい。しかもどうやら、用件はいつもと同じなご様子で……」
「……ふん。アッティラの馬鹿が。イヴァンも、乗せられおって……」
その用件を聞いたカエサルは先程までの表情と打って変わって、真面目で上に立つ者としての顔を見せて溜息をつく。
自分と同じ魔物大将軍。それもアッティラとイヴァン相手ともなれば、自分が呼び出されるのも仕方がないことだと推測する。
「それで、レオンハルト様はなんと？」
「はっ。今は別件で忙しいため、お会いになるには少し時間が掛かると。ゆえ、ハンティ様とリー様、そしてカエサル閣下で対応しろとのことでして……」
「ふむ。了解した。あの馬鹿共の相手は面倒ではあるが致し方ない……」
使徒が二体に、同じ大将軍であるカエサルが対応する。
普段ならレオンハルトが一人で会って、適当に追い返しているのだが、忙しい時などはこういうこともままあるのだ。
「あやつらも、毎度の事ながら懲りないものだ……レオンハルト様が駄目と言っているのだからさっさと諦めれば良いものを……」

「……やはり、それほどにアッティラ閣下は……？」
「まあそうだろう。人狩りでは満足出来ずにあんなことを具申してくる始末だからな。……国狩りの時も、奴は随分と働き者だったからな」
「働き者……？　あの、それは良いことなのでは？」
その表現の仕方に違和感を覚えた魔物将軍が疑問を返す。しかしカエサルは不機嫌そうに、
「ああ。あまりにも働き者過ぎて、魔王様に評価されはしたが、戦闘行為を止めさせられたくらいには」
「！　……それは……人間相手とはいえ、恐ろしいですね」
「ただ馬鹿なだけだ。……さて、行くぞ」
魔物将軍もようやくその言葉の意味に気づき、喉を鳴らして戦慄する。
その行いを馬鹿と切って捨てたカエサルは、魔物将軍を連れ立って会合の場へと向かっていった。

レオンハルトシティの中にある魔軍の駐屯場所の一つであるそこには、訴えかける声が響き続けていた。
「何故ですか!?　何故に、人里の殲滅をご許しにならない!?」
「駄目だって言ってんだから諦めな！　あんた何様のつもりだい!?」
「いいえ、それでも言わせてもらいます!!　人類文明は唾棄すべき最悪の文明であり、速やかに破壊すべきだと!!」
その言葉の応酬に、警備の魔物兵やお付きの魔物将軍、魔物隊長らは戦慄し、身体をビクッと震わせる。
先程から強く提案を押し続けている魔物大将軍――アッティラ。
殲滅者。破壊者。殺戮者などと恐ろしい言葉で飾り立てられる彼の言葉に、意見出来る者は数少ない。
「口を慎めアッティラ！　貴様はただの魔物大将軍！　魔人であるレオンハルト様の意志に逆らうなど不敬だぞ!!」
女性ではなく、もうひとりの男の声も響く。

使徒であるハンティとリーは、レオンハルトに面会を求めにきた二体の魔物大将軍を相手にするべく、この場へとやって来て、使徒としての威圧も乗せた厳しい言葉を浴びせていた。
しかし彼らは怯んだ様子はない。いや、正確に言えば多少は怯むが、それでもなお言葉を返してくる。
「……しかしお二方よ。人間を間引くことに何の問題があるというのか？　魔物として生まれた我らが人の命を奪うのは、謂わば主の思し召しであると思うのだが……」
そうやって静かな言葉で言うのは、アッティラと共にやってきた魔物大将軍、イヴァンだ。
彼はアッティラほど憤慨し、騒ぎ立ててはいない。怒っている時の彼は暴君だが、そうでない時は部下思いで仕事に忠実な普通の魔物大将軍だ。――怒ってる時の狂いっぷりは魔物大将軍一だが。
そんな彼の言葉に対し、ハンティも言葉を返す。眉間に皺を作りながら、
「……人間をある程度生かすのは、レオンハルトの、そして魔王様の意思だよ。あんたらはそれを破るっていうのかい？」
軽くドスを利かせてハンティは告げる。その剣呑とした雰囲気に周囲の魔物兵がとうとう身体を震えさせた。
ファンクラブがあったり、ゴリラと噂されたり、普段は親しみやすく、実は部下の魔物にも慕われている彼女だが、それでもハンティは、使徒最強と称される女傑だ。
魔人級の戦闘力すら持つと言われる彼女の威圧に耐えられる魔物兵などいない。だがアッティラは、
「そうは言いませぬ!!　ですから牧場の人間は生かしているではありませんか!!」
「ならそれで満足しな。人狩りだって、あんたはやり過ぎるくらいにやってるだろう？」
「いいえ満足出来ません!!　人類文明は完膚なきまでに！　徹底的に滅ぼし尽くさなければならない!!」
「っ……この分からず屋が……！」

威圧すら物ともしないアッティラに、ハンティもさすがに怒りを募らせる。
ただでさえ、人間を家畜どころか、それ以下の存在として目を背けたくなるような鬼畜の所業を人狩りで繰り返すアッティラには普段から腹に据えかねる部分がある。
ある程度は割り切っているはずのハンティも、人を滅ぼそうとする彼には黙っていられないのだ。
「……全く、相変わらずお前は醜いなぁ、アッティラ。６００年前に行ったあの国狩りですら自分の〝趣向〟を満たせず、未だ暴れまわるとは……呆れを通り越して同情してしまうぞ」
「っ……黙れカエサル!!　まずは貴様から滅ぼしてやろうか!?」
使徒に対するものとは違い、同席していた同じ魔物大将軍、カエサルの言葉にアッティラは憤慨して怒りを口に乗せる。
その宣戦布告とも取れる言葉にカエサルも目を細め、
「ほう。やれるものならやってみろ。醜いお前と美しく、格好良く、魅力的で、愛らしさ、可愛らしさまで併せ持つ最高の私。どちらが勝つかなんて言うまでもあるまい」
「黙れ変態ナルシスト！　強い方が勝つに決まっているだろうが!!」
「まあ落ち着け同志よ……この場で喧嘩をしては主も悲しむし、受け入れてもらえることもより困難となるだろう」
「っ……ああ、分かっている……！」
イヴァンの冷静な言葉で一応は怒りを収めたアッティラ。だが提案が取り下げられることはなく、
「私は大規模な人間の隠れ里の居場所を突き止めました！　許可さえ頂けたら今直ぐにでもその隠れ里を粉砕、撃滅してご覧に入れましょう!!」
「だから駄目だって言ってんでしょうが！」
「レオンハルト様に会わせてくだされば必ず説得してみせます!!　弱者である人間が作った文明など、魔物の手によって滅ぼされるべきだと……！」
「レオンハルト様はお会いにならない！　我々が告げている言葉こそ

がレオンハルト様のお言葉だと知れ！」
ハンティとリーが続けて二者に拒否の言葉を浴びせる。
だが、そんな埒が明かなくなってきた議場に、不意に別の声が響いた。
「――いいだろう。そこまで言うなら認めてやる」
「!?」
「！　れ、レオンハルト様!!」
議場に現れたのは、この場の誰もを上回る凄まじい存在感を放つ金髪灼眼の美丈夫――魔人レオンハルトだ。
突然現れた魔人筆頭の姿に魔物兵らは身体を固まらせるが、ここは彼の街である。いつどこに現れても不思議ではない。
「レオンハルト！　なんで――」
「ハンティ。少し待て。……アッティラ。それとイヴァン。そこまで言うなら、お前達の提案を認めてやっても構わない」
「！　それは誠ですか!?」
「おお……とうとうレオンハルト様にも、主のご意思が届いたのでありますな……！」
ハンティの機先を制し、レオンハルトは二体の魔物大将軍にその提案を受け入れてもいいと示す。
ハンティとリー、それにカエサルはその言葉に驚きと困惑を見せるが、レオンハルトのその迷いのない言葉に、少し冷静に事態を見守る。
完全に許可した訳ではないのだ。その言葉は、
「先走るな。認めてやっても構わない、と言っただけだ」
そう。まだ認めてはいない。
レオンハルトには何かの考えが、思惑があるようであった。
だが、目先の欲と利益に喰らいついた二体の魔物大将軍は気づけない。ただその言葉の裏の意味には気づき、
「っ、何をすれば認めてもらえるのでしょう……？」
「簡単な事だ。お前達どちらかに〝仕事〟を頼む。それを受けて貰えるのなら、条件付きでその大規模な人里への襲撃を許可しよう」
「仕事ですか……」

「条件付き……」
イヴァンとアッティラの言葉に、レオンハルトは、ああ、と頷く。
そしてその仕事の内容と襲撃を掛ける上での条件をレオンハルトは伝え、内心、また事が一つ進んだとほっとしながら笑みを浮かべた。

遺跡の探索を終えた調査隊、もとい鋼の騎士団には、幾つかの変化が訪れていた。
「おーおー……いきなり有名人になったな」
「まあ儂、魔剣じゃし。喋る剣ってのも珍しいからな。そりゃ目立つじゃろ」
「ふふふ、加えて副隊長の私まで近くに侍らせているんだから仕方がないね」
そこは酒場。鋼の騎士団の本拠地である人里で最も大きい酒場であり、隊員達や人里の住人達もこぞって利用する場所である。
その店内にて、ガイは傍らに未来視の魔女であるCを横に座らせ、腰元の得物を適当に引っ掛けて置きながら、酒と料理を愉しんでいた。
その場には、同じく隊員で気の合う友人であるクーベロも困惑気味に周囲と得物を見ながら同席しており、
「未だにこの視線には慣れないな……まあ喋る剣ってだけで皆見たがるのも無理はないが。隊長でもなんでもないやつがいきなり所有者だしよぉ」
「なんだ、お前までなんか文句でもあるのか？」
「いや、別に俺はいいと思うぜ。ガイはなんだかんだで強ぇし、将来性もある気がする……というかお前、ちょっと性格変わったか？」
「何を寝ぼけたこと言ってる。変わってないぞ。俺は元からこんなんだ」
「……まあ、珍しく酒飲んでるし、明るくなったからいいのか……？」
クーベロがガイの様子を胡乱な目で見ていたが、そこまで気にすることもなく酒を呷る。酔っ払っているだけ、というのも考えられた

し、大したことではない。
だがガイの内心の方では、
『おい！　絶対にバレるなよ！　二重人格がバレたらまた異質な目で見られるぞ!?』
『うっさいな……分かってる分かってる。適当に誤魔化しとくわ。あー、俺はまじめまじめ、まじめ人間ガイ君じゃー！　ふはは！』
『馬鹿にしてるだろ……！　くそっ、ただでさえお前と魔女のせいで目立ってしまってるというのに……！』
内心で、入れ替わってしまった比較的善良なガイは、表のガイが危なっかしい行動を起こすことに気を揉みまくっている。
入れ替わってしまったことはしょうがない。いや、しょうがなくはないが、身体の主導権を握るにはまだ時間が掛かりそうであるし、何かの拍子やきっかけが無ければならない。
だからこそ、今は大人しくして――いられなかった。
「んっ……あのさ、幾ら何でも人前で胸を揉んだりするのはどうかと思うんだがね？　確かに構わないとは言ったが」
「硬いことを言うな。ぐふふ……」
「……儂と相性が良い理由がちょっと分かったかも。というか、前からこんな感じなん？」
「いや、前は……まあ女が出来てテンション上がってるだけかもな。前はぼっちで非モテだったし……ははは、まあいいんじゃねぇか？」
『やめろ馬鹿共ーーーーっ!?』
酒の席とはいえ、公衆の面前である酒場の中で平然と乳繰り合うガイと魔女に、もうひとりのガイはやめてくれと叫んだ。
『そもそも貴様！　私と同じで魔女は気味が悪いと言っていたんじゃないのか!?』
『……いやまあそうだが、ヤッてもいいなら別にそれはそれでいい。久し振りの女の肌だしな……ぐふふふふ』
『こ、この馬鹿が……！』
頭を抱えて蹲るような気持ちで裏のガイは表の行動を見続ける。
表のガイとしては言った通り、拒まない相手なら一応は美少女だ

し、近くにおいてやってもいいか、という判断だ。
得体が知れないし気持ち悪い感じはあるのだが、久し振りの肉体。久し振りの女の肌という誘惑には抗えなかった。
だがだからといって、魔女とヤろうかと行動を起こそうとすると、
『それだけはなんとしても阻止する……！』
『ぐっ……お前……！　それはやめろ……！』
身体の主導権を握ろうと、強い意志が内心で溢れ出してくる。
それによって身体が一時的に止まり、ガイに次の行動を起こさせないのだ。
『ぜぇ……はぁ……主導権を握られたとはいえ、行き過ぎた行動だけはやらせんからな……！』
くそっ、鬱陶しい奴め、と内心のガイに悪態をつく。
とはいえもうひとりのガイの意志にそぐわない行動を取れば、こうやって阻止される以上、やり過ぎることは出来ない。
大したことのない行動であればともかく、女を襲うことは善良なガイにとって、それだけ忌避すべき事柄だということだろう。
今の表となっているガイが、遺跡で剣を取ろうとした時も似たようなことだ。ガイがそれを強く望んだからこそ、迷いのあったガイに代わって、今のガイが表に出てきた。
ようは強い意志を持ち続ける方が肉体の主導権を握れる――綱引きのようなものだった。
それでも基本的に分が悪いのは悪い方のガイだが、とにかく今は好きに動ける。
だからこうやって久し振りのシャバを満喫しようとガイは愉しんでいたのだ。
「……しかし、視線が鬱陶しいな。何とかならんのか？」
「無理だね。ただでさえ、喋る魔剣の所有者として注目を浴びているし、私が説得した云々の話も広まってしまっている。しばらくは時の人だ」
「儂もむず痒いというか……正直、あんまり目立ちたくはないからの～……どうにかしたくはあるんじゃが……」

「女の子からの羨望の視線ならともかく、そういうのじゃなさそうだしな。はー、つまらん」
「ガイも随分と積極的になったな……」
クーベロがしみじみと言う。魔女以外は微妙に居心地が悪そうであった。
というのも、遺跡の帰り道で、魔女が魔剣を発見したことを隊に報告し、その所有者がガイであることを告げたのが原因だ。
隊長であるロランや副隊長を差し置いて新入りのガイがその伝説級であろう魔剣を手にすることに、不満がなかったといえば嘘になる。
しかし副隊長の説明。この瘴気の中を問題なく進めるようなものでなければ魔剣は扱えないということや、他ならぬ副隊長が、ガイを推薦していること。更には隊長の、
『……わかった。そういうことなら……』
という了承の言葉で、隊員達からも異を唱える言葉は無くなった。
隊長が納得している以上は、隊員達も声を上げることは出来ない。魔剣の所有者はガイとなった。
だがそうなると今度はその喋る剣の噂が広まってガイは一躍時の人となっている。今も遠巻きにガイと魔剣を物珍しそうに見る目や、嫉妬にも似た視線が来るのをガイは感じているのだ。
それがあるのは、人間である以上はしょうがない。どちらのガイもその負の感情を嫌いながらも、善の方は憂鬱そうに、悪の方は苦々しくも諦めていた。
あの隊長ですら、副隊長の説得の時には残念がり、微笑しながらも負の感情を滲み出していたのだから――
「……ん？　なんだ？」
「おや、騒がしくなったね……ふふふ」
そんな時。人混みがざわつき始めた。
ガイ達は特におかしな行動は取っていない。だからこそ、その様子を不可思議に思うのだが、その理由は直ぐに分かった。
人の波が二つに別れていく。間に道ができ、その間をまっすぐに進

んでくるのは、
「！　って、ロラン隊長じゃないっすか……」
「……やあ、昨日ぶりだね。クーベロ、副隊長。そして……カオスと、ガイ」
「ふっ……そうだね」
クーベロが軽く目を見開き、魔女は何故か愉快そうな笑みを見せて答えた。
ガイとカオスはすぐには何も答えない。そのロランがやってきたことと、その言葉の間に、何となく意味深めいたものをお互い感じたからだ。
「……何か用か？」
「うん……まあ、そうだね。ガイ。君に用事が……いや、頼みがあるんだ」
ロランには珍しく、歯切れの悪い様子である。その様子をクーベロはおかしく思い、魔女はより一層笑みを深めた。
カオスは先程からだんまりを決め込み、その場は静寂に包まれる。皆がガイとロランの言葉を耳にしようとしているのだ。
それを理解しながらも、ガイは答えた。ぞんざいな様子ではあるが、
「なんだ？」
「ああ。僕と――」
ロランは言う。衆人環視の中で、はっきりと、
「……僕と――カオスを賭けて〝決闘〟してほしい」
その言葉を、はっきりとガイは耳にした。
皆が息を呑み、まだ頭でそれを理解していない中、ガイは鼻を鳴らすと、
「……ふん、別にいいぞ」
「……ありがとう。それじゃあ明日の早朝……いや、お昼頃でいいかな？　今はお酒も入っているようだし、フェアじゃないからね」
「別に今からでも構わんが？」
「ははは……凄い自信だね。まあ、それは止めておこうか。出来る限

りフェアでやりたいんだ。魔物討伐隊の隊長が言うのも変な話だけどね」
　ロランとガイはそんなことを言い合って、さっさと会話を切り上げる。
　そしてロランが来た道を戻っていく途中で、皆の反応が返ってきた。
「あ、あの新入りと……」
「ロラン隊長が……」
「魔剣を賭けて……決闘？」
　ざわざわと観衆の声が酒場の中だけではなく、外にまで響いていく。
　そんな中で、更に注目を浴びているのにも拘わらず、平然と酒を呷るガイに、クーベロは慌てて声を掛けた。
「お、おい、ガイ！　お前、ロラン隊長と決闘って……しょ、正気か!?」
「ふん、やりたいって言うから受けてやっただけだ」
「そりゃあそうだけどよ……いや、というか、ロラン隊長はなんであんなこと……？」
　素っ気ない様子のガイに、クーベロは困惑しながら疑問を呟く。すると横で静かに見守っていた魔女が小さく声を飛ばした。
「ふふ……器の違いを認めきれないというのも、悲しいものだねぇ……もっと利口だと思っていたんだけど……」
「……まあ、あの優男が勝ったところで儂は使えんからな。自己満足でしかないのは確かだな」
　笑みを浮かべて言う魔女に、チップとして乗せられたカオスが、真面目な様子で決闘の無意味さを口にする。
　だがカオスの方は笑いはしない。そうやって足掻くことや、足掻いた末に無益で終わる者達を、この世の無情さを知っているからだ。
「……ガイ。聞くまでもないと思うが……どうするんじゃ？」
　その言葉に、ガイはやはりあっさりと答えた。
「普通にやるだけだ」
「……うむ、そうか」

普通にやる。その言葉だけでガイの意志を汲み取ったカオスはもはや何も言わない。事の成り行きを見届けるだけだ。
「さすがに鬱陶しくなってきたし、部屋に帰るか」
「ふふふ、私もお暇させてもらうよ」
ガイがカオスを連れて、そして魔女も席を立ってその場から去っていく。
さすがに住人達のざわつきが大きくなってきたからだ。
「お、おう……じゃあな――って、会計俺かよ!?」
最後に残されたクーベロは、自然と奢らされたことにツッコミの言葉を上げ、己も慌てて酒場から出て行った。

ガイＶＳロラン

――その男の生家は、この時代では普通じゃないものだった。
人間が魔物によって支配され、明日を生きることを出来るかも分からない時代。〝国〟というものはもはや過去の文献による言葉でしか知ることがなく、人間の普通の生き方は、人間牧場で家畜として過ごすことであり、それ以外の野良の人間でさえも、精々数百人程度の集落、隠れ里などが限界であり、その生き方は貧しく、先が見えないものであった。
だが男の家は違う。男の家には前と先があった。
今ある世界の中で最も大規模な隠れ里。千人以上の人間が隠れ住むその里の長。男の家は、代々その里の長を務めるものである。
かつての時代で言うならば、名家というものに近い。
男の先祖はかつて、魔物による世界の侵略から多くの人間を連れていち早くこの隠れ里を興し、多くの人々を救った英雄であった。
元々は冒険者を纏めていた組織の長で、それを引き継ぐようにして隠れ里の警備と魔物の世界において生き抜いていくための役割を担ったのが、彼と一緒についてきた多くの冒険者であり、今ある里に住む住人達の祖先である。
始祖ともいえるその英雄によって救われた里の人々だが、彼とてただの人間。寿命があり、やがて息を引き取る。
そうなった時に長を引き継いだのが、その英雄の子供であるのは、英雄を慕っていた多くの人々にとっては当然のことであった。
英雄の子供は願った。父のように人々を守り、救う――英雄になると。
実際にそうなれたかはさておき、少なからず英雄の子供は隠れ里を率いてその里を次まで守り抜いた。
するとやはり、その英雄の子供の子供――孫がそれを受け継ぐ。
既に英雄はいない。しかし子供は孫に言葉を託した。
――俺達がやるんだ。
俺達、という言葉に孫は一瞬当惑した。しかし、

――次は、お前の番だ。
その続く言葉によって意味を汲み取り、孫はその英雄の子供であった父のように、英雄であった祖父のように信念を定めた。
――人々の未来を守らなければならない。
そうやってまた、英雄の孫は同じ様に己を鍛え、やがて生まれてきた自分の子供にもそれを教え込んだ。
人々を守るために行うのは剣の修練。人々を率いるために、座学で様々な知識を身につける。そして師匠ともいえる自らの父から言われる言葉は、やはり同様のもの。
――やらなければならない。これは、自分達の使命だ。
自分達一族の、祖先の無念を晴らすための悲願の成就を。
人々を守り、次に受け継ぐ。そしていつか世界の救済を。
人々の上に立つ自分達は、それを必ず目指し、成し遂げなければならない。
そうしなければ人間の未来はない。必ずやるのだ。
それはとても崇高な使命であり、誰からも応援され、祝福されるものだ。
事実、高潔であり続けた男の一族は、隠れ里の住人に厚く支持されていた。
誰かがその役目を代わることが、向いている誰かに託すことが、叶わないほどに。
故に、その一族は、貴族のような厳しい使命を、呪いのような言葉を自分とその子孫に託し続けた。
そうするのが当然であり、それをしなければならないのだと、誰もがそれを己の役目だと思い込み続けた。
それが例え――戦いが嫌いでしょうがない、やりたくなかった者であっても、周囲の期待と親からの教育はそれを自分のものとして受け止めざるを得なくなってしまう。
先祖代々続く悲願を、自分の代で止めるわけにはいかない。
だからこそ、男はそうあろうとした。自分を矯正して、実際にそうなった。

もはや元々の自分がやりたかったことなど思い出せないほどに、物心がついた時から自分を騙し続けた。
その努力の甲斐あって、男は皆が理想とする長としての姿を自らに作った。
もはや使命を果たすことに迷いはない。しかしこうも思う。
この呪いのような宿命を、次に受け継ぐべきではない。
ともすれば、祖先の内にこう思った者もいたかもしれないが、男は自分の代でそれを終わらせることを願った。
願って、努力をし続けた。自分を捨てて、生まれてからここまでの時間を全て、祖先の願いを果たすために使ってきた。
――だがそこへ、男の根本を揺るがす事態が起こる。
魔人を斬り裂くことが出来る伝説の剣。正に男の一族が求め続けてきた理想の力。
それを――男よりも遥かに強く、才能に満ちあふれているであろう青年が手に入れてしまったのだ。
――何故だ。
それは男が生涯で最も強く感じた、負の感情であった。
男はそれをいつも通り、理性で強く抑え込んだが、自らの行動までは抑えることは出来なかった。
自分がやるのだ。自分がやるために、ここまでやってきたのだ。自分がやらないのなら、今までの時間は何のために――。
かくして男は、様々な事に気づかない振りをして、勝負を挑むことにした――他でもない、自分を納得させるために。

――翌日。
約束通り、昼頃の決闘を執り行うために、朝にはガイの部屋に決闘の場所を知らせる手紙が届いていた。
場所は隠れ里の裏手にある山。そこにある広場にて、ガイはロランと決闘を行うのだが――
「おお……結構人が集まってるな」

「まあガイはともかく、ロラン隊長の決闘だからな。そりゃあ集まるだろ」
「とはいえ、集まってるのは隊員ばかりのようだね。まあ隠れ里の直ぐ側とはいえ、山の中を指定したというのは、人が集まりすぎないようにするための配慮かな？　町中だと、住人全員が観戦しようと集まるだろうからね」
「なんだ……つまらん。野郎ばかりか。せっかく俺の格好いい姿を女の子たちに見せてやろうと思ったのに……」
『お前……何で受けたのかと思ったらそういうことだったか』
　もうひとりのガイの声にガイは頷く。当然だろう。でなきゃなんであんな奴とやりたくもなければやる意味もない決闘をせねばならないのか。
　見たところ、集まっているのは魔女が言うように隊員ばかり。隊員の中には女性もいるにはいるが、数は圧倒的に少ない。
　ゆえにこの時点でガイの目論見は外れたため、ガイは酷くやる気を無くしていた。
「はぁ……もう帰るか……？」
「いや、帰れないんでない？　ここまで来たのに帰ったら総スカン食らうじゃろ」
「ならお前一人で戦え」
「儂、剣！　ソード！　一人じゃ戦えない！　分かって言っとるだろ!?」
「チッ……しょうがないな……」
　カオスのもっともな言葉にガイが軽く舌打ちし、一応はクーベロ達の輪から外れて前に進み出る。
　すると同じタイミングで反対側から人影がやって来た。その相手は当然、
「――やぁ。約束通り、来てくれたんだね」
「ふん。時間を決めたくせに遅いから帰ろうかと思ったがな」
「それは悪いね。少し、準備に手間取ってしまって」
　そう。ガイがやる気を無くしかけた理由の一つが、決闘の時間を決

めたはずのロランの遅刻だ。
　これにはガイ達だけではなく、隊員達も僅かにざわついていた。時間に正確で約束を必ず守る隊長が、遅刻してくるなどおかしいと。
　だがそれだけに、何か理由があるのだろうとすぐにざわつきは収まったし、皆の期待通り、ロランはいつもどおりの格好で現れた。
　灰色の外套を身に纏い、腰元には一本の長剣がぶら下げられている。鋼の騎士団の隊長としての正装であり、普段から着ている戦闘装束であった。
「ん……あれ？」
「どうした？　カオス」
「いや……なんか……いや、まさかな……」
「急に何だ。はっきりしろ」
　カオスがうんうんと唸り始めたのを聞いて、ガイが眉根を潜める。そのタイミングを見計らっていたかのように、ロランは声を掛けてきた。
「さて、時間も惜しい。早速始めようか」
「……そうだな。さっさと終わらせてやる」
「……」
　決闘を始めようというロランの言葉。それに頷き、まだ何か考え込んでいるカオスを構えるガイ。その軽く見た発言に、周囲から声が漏れた。
「あの新入り、ロラン隊長相手にさっさと終わらせるとか言ってるぜ」
「馬鹿だよなぁ。ロラン隊長に勝てるわけねーっつうのに」
「隊長は百戦錬磨。いついかなる時も王道で、正面から相手を倒してきた正真正銘の騎士だぞ。あんな奴が相手になるわけがない」
「逃げても誰も笑わなかっただろうになぁ。……ま、そういう意味では度胸はあるみたいだ」
　決闘の結果を予想するようなやり取り。しかしそれらはすべて、ロランの勝ちに賭けられていた。
　それらの話を聞いてクーベロも苦い顔をする。同じ隊に所属する者として隊長は確かに慕っているし、恩もある。

だがガイと最も親しいクーベロとしては、不安でしょうがなかった。
「……副隊長。ガイの奴、昨日からすごく自信満々ですけど、もしかして物凄く強かったり？」
「――おや、よく分かってるじゃないか」
「――へ？」
クーベロが間の抜けた顔を晒す。
その問いかけは半ば冗談、そうあってくれという希望の発言であったのだ。
しかしそれを同意で返され、クーベロはまさか、と言葉を無くす。
そして同じタイミングで決闘は始まった。
「それじゃあ行くよ。合図は必要ないね？　ルールも――」
「――ああ、分かってる。どっからでも掛かってこい」
「それじゃあ、遠慮なく――ッ！」
そして直後の激突は、並のレベルでは視認できないほどの速度で行われた。
歴戦の隊員達でも目で追うのがやっと。それだけに、決闘は一瞬で終わるのだと誰もが幻視した。
次の瞬間にはガイが倒れている。そう思った。
だがそれは、連続する鋼の音と両者の動きによって否定された。
「……えっ？」
それは誰の声だったのか。あるいは複数で呟かれる短い音。
だが、誰もがその光景に驚愕していたのは間違いない。
「お、おい……見ろよ、あれ……」
「ろ、ロラン隊長が、斬り合ってる……？」
「互角に……あの新入りと……」
「新入りが、ロラン隊長の攻めを捌ききってるのか……？」
信じられない光景だった。
彼らの隊長であるロランという人物は、一言で言うなら――完璧な戦士。
おそらく人類では最強。人間という括りで彼に敵う戦士はいない。

どんな魔物相手でも剣一本で修羅場をも潜り抜けてきたロランは、誰もが憧れ、最強だと認める理想の戦士なのだ。
だがそのロランと、新人であるガイが互角に戦っている。
否――それどころか、ロランが攻めあぐねているようにも見える。
隊員達の技量では正確なところは分からない。
しかし、どちらが優勢かどうかくらいはわかる。
そして眼の前で行われている戦闘は――明らかに、ロランが苦しそうにしているため劣勢で、ガイの方が余裕を持っており、どう見ても優勢だった。
「「「あいつ、めちゃくちゃ強えじゃねぇか……!?」」」
意図せずして揃った声で隊員達が言う。
クーベロも同様にぎょっと表情を歪め、
「ガイの奴……実力を隠してやがったのか……！」
「ふふ……まあ、何か理由があるのだろうね。隠していたとはいえ、あの強さは尋常ではない」
未来視の魔女の意味深めいた表情と言葉に、クーベロは複雑になりながらも僅かに期待する。
「おお、ならやっぱガイが勝つのか……!?」
「結果はそうなる可能性が高いだろうね」
ただ、と未来視の魔女は小さな声でこう続けた。視線を反対の方にも向け、
「――実力を隠しているのは、ガイだけじゃないだろうがね」

始まった決闘。隊員達が遠巻きに円を作りながら見守る即席の決闘場で、ガイは剣を振るいながら鼻を鳴らした。
「ふん、なんだその程度か」
「……その程度とは言ってくれるね。これでも、結構やる方なんだけど……」
「俺にしてみればそこらの奴と変わらん」
言ってカオスを袈裟に振るえば、ロランは苦悶の表情で辛うじて防

御し、背後に仰け反る。
　戦いは終始、ガイの優勢であり、ロランは辛うじて戦闘を継続させているに過ぎなかった。
　だからこそ、ガイは思ったより弱かったことにつまらなそうに目を細め、周囲の隊員達も不安となる。だが、ガイの左手に握られたカオスだけが、ただただロランを難しい表情で注視しており、
「やっぱ町中でやればよかったな。態々こんなところまで来て、時間の無駄だ」
「……ははは、そういう訳にはいかないのさ……」
「あ？　なんでだ？」
　ガイの猛攻にとうとう構える力も無くなったのか、前屈気味の姿勢で腕をだらんと下に降ろしてロランは言う。
　俯いた顔の表情は窺うことは出来ない。その声色も、まるで勝負を投げてしまったかのように脱力している。
　――だからこそ、ガイも、周囲で見ているクーベロや隊員達も、決闘の終わりを悟った。
　ただそれに気づけたのは、違和感を覚え続けていたカオスと、未来視の魔女のみである。そんな場で、ロランの普段より低い声が、ガイの耳に向かって飛ばされた。
「これから見せる戦いを、住人に見せるわけにはいかないからね――」
「……？　それはどういう――」
「！　気を抜くな、ガイッ!!」
「何言って――ッ!?」
　一瞬の後。カオスの切羽詰まった声にガイは反応し、弛緩しかけていた気を持ち直し、なんとかそれを直前で見抜いた。
　――無音で踏み込み、左手に隠し持っていた短剣で背後から首に狙いを定めたロランを、ガイは辛うじて防御したのだ。
「な……なんだ今の!?」
「ロラン隊長がめちゃくちゃ速くなったぞ……！」
「いや、というより今の技は……!?」
　その速度は今までの比ではない。そして、その技は明らかに――

「――ああ、やっぱり駄目だったか」
ロランの吐息付きの声がその場に響き渡る。
右手の長剣と左手の短剣を持ったロランは、先程とは打って変わって、不敵な笑みを見せ、気味の悪さすら漂わせている。
「……お前、暗殺者か何かだったのか？」
「いや、そういう訳じゃないよ。ただ……こっちの方が得意ってだけさ」
言って、ロランは左手でガイを指差す。ガイがその行動に疑問を感じていると、
「後ろ、来てるよ」
「は？　何が――って！」
「残念。また外した」
ガイが一瞬、背後に振り向きかけたその瞬間、ロランは手に持っていた短剣をガイに向かって投擲していた。
それに気づいたガイは即座にそれをカオスで弾く。そしてロランの言葉に憤慨した。
「剣の腕だけじゃなく、随分と勘がいいんだね？　殺気は完全に消しているはずなんだけど」
「っ、この闇討ち野郎め……！　汚いぞ！」
「汚い？　面白い事を言うんだね。戦いに汚いことなんて何もないよ。魔物討伐隊なんかに所属してるなら尚更さ。戦いに負ければ死ぬんだから、勝つためには何でもやるのは当然だよね？」
「ろ、ロラン隊長……」
ロランが言いそうにない言葉を次々と耳にする隊員達。彼らが困惑した様子で固唾をのむ中、ガイの得物であるカオスが、
「……まあ、一理あるな」
「おい、どっちの味方だ!?　というか、気づいてただろ!?　気づいたなら教えろ!!」
「確証が無かったからのー。手つきや身体の重心が微妙におかしい気がしたんじゃが……いや、明らかに正統派の騎士っぽい優男が、まさかレンジャーとは思わんじゃろ」

「褒め言葉として受け取っておくよ。ちゃんと騙せたってことだからね」
カオスの言葉に礼を言い、外套の前部分を開いて再び戦闘態勢に入ろうとするロラン。
彼の装備。その出で立ちは普段とは違い、数十の短剣を腰元に下げ、鎧ではなく動きやすい身軽な装備で身を包んだ物であった。
「君が実力を隠していることは、君がここに来てすぐに気づいたよ。その身のこなしや言動……僕と同じ、〝嘘つき〟の匂いがしたからね」
「……ふん、実力を出す必要が無かっただけ――って、おい！　さっきから人が喋ってる時に攻撃してくるな！」
ガイが喋っている途中に玉のような何かを投擲してきたロランにガイは声を上げる。それを切り払うと、中から白い煙が吹き出してきた。
「っ……煙幕か！」
「相手の気をそらすのも戦いの基本だよ。もっとも、僕が好きなのは戦いじゃないけどね」
「！　ガイ、来るぞ!!」
と、ロランは煙幕の中にゆらりと動いて姿を隠す。カオスの声がガイの耳に届く。
かつて同様の戦闘職についていたカオスにはその動きには理解と知識があった。
そう、ロランの動きは戦士のものではなく――
「僕が行うのも、魔物相手に必要なのも、戦いじゃない。僕が得意なのは戦いではなく、闇に紛れて行う――〝殲滅〟さ」
「ッ……！」
「暗殺者か……!?」
「最も効率が良いのがそれというだけさ。面倒な戦いは、早く終わらせるに限る」
煙幕により視界が制限される中、短剣の投擲が幾つか、四方八方から行われ、ガイはそれを剣で防御する。するとすぐさま、音もなく踏

み込んできたロランの長剣と短剣による二刀流による連撃が来るが、
「っ、おい逃げるな!!」
「嫌だよ。君とまともに斬り合っても勝ち目がないことも分かってる。だから僕は……僕の本来の戦い方で相手をさせてもらうことにしたのさ」
　そのための準備に手間取った、とロランは煙幕の中でそう告げる。
「ちっ、面倒だな……」
「気をつけろよ、ガイ。シーフ、盗賊、暗殺者……レンジャーの戦いは何でもありだからな」
「分かっとる！」
　カオスの注意を聞きながら、飛来する短剣を剣で払っていく。すると不意に――そのうちの一本が、
「っっっ!?」
「なッ……爆発した……!?」
　ガイがその短剣を剣で防御した瞬間、爆炎がガイを中心に広がった。
　代わりに晴れていく煙幕の中で、姿を表したロランは言う。
「言い忘れていたけど、火薬を仕込んでいるものもあってね。これで倒れてくれれば楽だけども……」
「くっ、言う気もなかっただろうが!?」
「……ま、そんな甘くはないか」
　爆炎の中から傷を負いながらも戦闘の続行に支障がないガイを見て、特に残念がる訳でもなくロランは呟く。
　そのままっすぐ踏み込んでくるガイに、
「だが煙幕はなくなったな！　このままぶちのめしてやる!!」
「――ああ、そうするといいよ」
「っ！」
　ロランのまさかの頷く言葉に眉をひそめる間もなく、ガイはその足元のトラップに引っかかりかけて、横に飛び退いた。そこですぐにカオスは反応する。
「煙幕の中で罠を張ったのか……やりおるの」

「察しがいいね、魔剣カオス。ひょっとして、こういう相手と戦った経験でもあるのかい？」
「……そういう訳じゃないわい」
「？」
カオスがロランの何気ない質問に小さく答える。言う必要のないことだった。自分が人間として生きていた頃の話は。
その答えで察することはさすがに出来ず、ロランも頭に疑問符を浮かべたが、その間にガイは再び剣を構えて飛びかかっていた。
だが、飛んでくる短剣に、ガイはそれを躱すことで身を翻す。
「……」
「おや、今度は躱したね」
「……そうやって躱させることが狙いか」
「と……君の方も察しがいいね。だけど――」
そう言って、ロランはまた別のものを投げた。それは埴輪にも似た小さな爆発物。普通の火薬よりも威力の高いもので、
「ぷちハニーか!!」
「希少品だけど、商会にはそこそこ出回っていてね。重宝しているよ」
「はっ、そんなわかりやすいもん、躱せば――」
「そうさせないために手を加えるのさ――」
ガイの言葉が言い終わる前に先んじて、ロランは左手をガイに向かって投げたぷちハニーに向ける。
そして誰もが驚く言葉と結果を見せた。
「――炎の矢！」
「なっ……!?　くっ……！」
「隊長、魔法まで使えたのか……!?」
外野の声が響く。ガイは言葉を返す余裕もない。
ぷちハニーを躱そうと試みる前に、その手前で炎の矢がぷちハニーに激突する。
すると結果起きるのは――回避の動作を行う前に手前で爆発することとなる。
白い光がガイの眼の前を照らし、そしてロランの言葉が爆音の中で

響いた。
「――魔法が使えないなんて言った覚えもないよ……いや、言ったかもしれないけど……それも嘘さ」
先程よりも大きな爆炎が広がり、ロランや周囲の者達に向かって突風が吹き荒れる。
髪や外套などを風が揺らす中、ロランは淡々と答えた。
「魔法は一般的に躱すことが難しいとされる……だけど、斬り払うことや、何かを先に当てることで防ぐことは容易だ。しかし、魔法の、対象物に向かって飛んでいくという特性は使える」
目標物を敵そのものに設定しないことも、魔法においては重要だ。
相手を狙っただけのものは、動いたり、相手の行動で防がれる。
だがその手前の地面や、相手や相手より少しズレた直線状に位置する物に向かって魔法を放つことで、回避を僅かに難しくすることは出来るし、こういう風に使うことも出来る。
「何も馬鹿正直に戦う必要はない。相手が自分より勝っているというなら、それなりの戦い方がある。搦め手や罠、奇襲に騙し討ち、嘘をついたり、駆け引きを行うことも重要だ。人間には手段を選んでる余裕はないからね」
そう。魔物は基本的に人間より強い。
そんな中で冒険者や魔物討伐隊として生き残っていくには、劣った状態で相手に勝利するには、真っ白のままでは難しいのだ。
「騎士のようにまっすぐ戦って勝てるのは、選ばれた人間だけで……生憎と、僕はそうじゃない。だが、だからといって諦める訳じゃない。劣っていても、やりようは――」
「――強いほうが勝つとは限らない。真面目にやったところで結果が見えているなら……道理に合わない結果を求めるなら……手段を選ばないことも必要だ」
「！」
「ガイ……！」
ロランの言葉に割り込んできた声にロランは僅かに目を見開き、外野のクーベロはその名を呼ぶ。

爆炎が晴れる中、そこに立っていたのは、静かな表情でバリアを張っているガイの姿だった。
「……そう。よく分かっているじゃないか。良い薫陶を受けてきたようだね？」
「ふん、そうかもな」
首を鳴らしながら、ガイが真面目な表情でロランに視線を集中させる。
ぷちハニーの爆発をあっさりと凌いでみせたガイのバリア。
それはガイの魔法が、魔力が、並のものではない証拠であった。
「ガイの奴もやべぇけど、ロラン隊長もヤバいな……あんな技、一体どこで――」
幼少期からこの里で騎士として剣を振るっていたというロランの戦闘とはとても思えない。かの一族は皆、同様に正統派な剣術の使い手だからだ。
だがそんなクーベロの疑問の声に、隣りにいた未来視の魔女はこう呟くことで答えた。
「――十年近く前、まだ先代が鋼の騎士団とこの里を治めていた頃、その子供は一度、里から逃げ出したのさ」
「へ？　いきなり何を……つか、逃げ出したって……」
「課せられた使命に責任……それを為すための厳しい教育、他人の期待……その全てが嫌になったんだろうねぇ。まだ里に名もそれほど知られていなかった彼は、別の土地に逃げ、そこで己の本来の才能を見せ、好き勝手振る舞っていた」
未来視の魔女が言うその彼というものは、どう考えても眼の前のそれだ。
それをクーベロは理解しながらもじっと聞く。複雑なものを感じながら、
「結局は魔物相手に戦って生計を立てることになっていたし、戻ってきたけど、その間に彼の名は別の土地で酷く有名になっていてね。魔軍の一部隊、二百名余りをたった一人で壊滅させて、ついた異名が――〝殲滅〟のロラン。同業者からは嫉妬を買って何度も襲われたが、

それを予想して待ち受けていたかのように返り討ちにし、〝闇討ち〟のロランとも呼ばれていた。闇討ちしたのは、彼に嫉妬したたちの悪い同業者の方だけど、その渾名も間違ってはいない」
「……隊長に、そんな過去が……」
「ふふ、人に歴史あり。一見そうは見えないような相手でも、驚くような過去が隠されているものさ。君もそうだろう、クーベロ？　――古傷は癒えたのかい？」
「――――っ」
「ふふふ、まあそういうことさ。私や君も、そしてガイも、面白い過去を持っているのさ。隊長だって、腹に一物抱えていてもおかしくはない。人類としては破格と言える強さだ。何の理由もない、という方が不自然だろう？」
怯み、言葉を無くしたクーベロを尻目に、魔女はくすくすと笑いながら語る。
――だが、それでもなお、
「――ガイには届かない。幾ら破格の強さのロラン隊長とはいえ……〝規格外〟の彼相手に、勝ち目はないのさ」

石ころの意地

眼前で起きている凄まじい光景を、戦闘を見守る隊員達は信じられないという面持ちで見ていた。
「まさか、隊長があんな……」
「今まで、実力を隠してたんだな……どちらも」
「ああ……隊長もやべぇと言ったが……新入りの……ガイの方は、もっとヤバそうだな……！」
ぷちハニーによる爆発をバリア一つで完璧に防いでしまった結果を評して言う。
まさか、あの隊長ですら、こうやって実力を晒したロラン隊長ですら勝ち目がないのかもしれない。
誰もがはっきりとは口にしないものの、それを誰しもが予感していた。
そしてそれは、当人でさえも、
「……ははは、そうやってあっさりと防がれると、まいるね」
そう、本当にまいってしまう。
今まで隠してきた己の実力。その本気中の本気を、初見である手の内を見せてなお、それを容易に対処してしまう。
もう今までのように、隊員達から期待されるような、完璧な騎士であり続けることは出来ない。魔物狩りにおいても手加減していたことが露見してしまったのだ。今までの実績があるとしても、多少評価は落ちるだろう。
そのリスクを受け入れてまで、この勝負に本気を出して臨むことにした。なのに、
「君は、軽々と越えていくんだね……」
「――俺の方が強いからな。当然だ」
バリアを継続しているガイが告げる。
そう、当然なのだ。相手は自分よりも強いのだから。こちらの攻防をあっさりと対処してもおかしくない。
それは分かっていた、今も分かっている筈なのに――

「ふ、ふふふ……」
――どうにも、我慢ならない。
相手が己をあっさりと越えていくことが、どうしても。
「――白色破壊光線！」
「っ……！」
直後、白の奔流が自分がいた場所を通過し、地面を穿つ。
光線。レーザー系の魔法は躱すこと自体は難しいものじゃない。こちらから見れば点の動きでしかないのだから、そこから身体をずらしてしまえば避けられる。
だが、ガイの不敵な笑みにロランは嫌な予感を感じた。
「そんなにもこれが欲しいのか？」
と、ガイはカオスを掲げてみせる。
何を、と思った矢先、ガイはこちらではなく、山の谷間の方にカオスを振りかぶり、
「え、ちょっ!? ガイ、お前まさか――!?」
「ははは！ 欲しけりゃくれてやる！ 取ってこい!!」
「ぎゃーーーーー!?」
「!? くっ――!?」
ガイがおもむろにカオスを振りかぶり、谷に向かってぶん投げる。
世に二つとない伝説級の魔剣だ。それほど貴重なものを投げ捨てたのをみて、咄嗟にロランはそれを拾おうと動いてしまった。
――そういうことか……!?
直後に狙いに、相手の小細工に気づくも、拾うことを止めることも、防ぐことも出来ない。
慌てて跳躍し、カオスを手にとって回収する。すると、
「ぐっ、これがカオスの……!?」
「ははははは！ 引っかかったな！ 喰らえ！ 黒色破壊光線!!」
「儂もいるんですけどーーー!?」
空中でカオスの叫びが響く。
先程の白色破壊光線よりも更に威力の高い黒色破壊光線。見るのは初めてだが、魔法の最高峰、最強の威力を持つことは知っている。

それをガイの魔力で放たれれば、それは通常のものよりも威力が高いことは明白で、
「くっ……！　炎の矢！」
ロランは咄嗟に懐からぷちハニーを取り出して自分の真横に当たる空中に放り投げると、一瞬の間を置いて炎の矢をぷちハニーに向かって発動する。
すると、少し離れた場所で爆発が発生し、こちらを爆風で吹き飛ばそうとした。
空中での回避を行うためのやむを得ない処置。だが、
「ぐっ、あっ……!?」
爆風に加え、黒色破壊光線をほんの僅か掠ってしまう。
たったそれだけで、戦闘不能に持っていかれるほどの威力を感じ取り、しかし何とか地上に着地する。
「デビルビーム！」
「っ……！」
今度は範囲攻撃となる闇の魔法の拡散が、こちらを襲う。
今度こそ躱しきれずに吹き飛ぶが、苦鳴はなんとか押し殺した。
その時に、こちらの気分を悪くするだけであったが、相手の得物であるカオスも手放してしまい、ガイがあっさりとそれを拾ってしまう。
「よし」
「よし――じゃない！　お前、儂を本気で捨てる気じゃったじゃろ!?」
「そんなことはないぞ。あいつが絶対に拾うだろって思ってたからな」
「拾わなかったら儂、谷底に真っ逆さまなんですけど!?」
ガイが不敵な笑みを浮かべながら、囮にされたカオスの苦情を流してしまう。
それを視界で確認しながら、しかしロランはダメージを受け流すことが出来ないでいた。
……まったく、嫌になるね……。
たった一度、相手が攻勢を仕掛けてきただけで、己は瀕死の様相を

呈している。
膝を突き、長剣の方を杖のようにして息を乱す。戦闘でここまで追い込まれたのは、子供の時の訓練を除けば二回目。慣れているとは言えない。
だからだろうか。こちらが弱りきり、戦う力がないと見て、ガイはカオスとのやり取りを打ち切ってこちらに視線を向けた。
「だがまあ、終わりだろ。――おい、負けを認めるか？」
「っ……」
そんな屈辱の発言がこちらに掛けられる。
周囲の言葉も耳に入ってきた。隊員達の、心配そうな、息を呑んだ、
「隊長の負けだ……！」
「あのガイって奴、こんなに強かったのか……!?」
「いや、ありゃ仕方ねぇよ……ガイが、あんなに化物染みてたんだからな……」
そんな言葉が耳に届き、己自身でさえもそれに僅かながらでも得心してしまう。
それがたまらなく――嫌だった。
幸いにも彼らはまだ自分には幻滅していないらしいが、そんなことはもはやどうでもいい。
嫌なのは、我慢ならないのは――こんなにも弱い、己自身だ。
己を掻き毟りたくなるほどの嫌な気分に、もはや笑いがこみ上げてくる。
「ふ、ふふ、ふふふ……僕が、負ける……？」
あんなにも……生まれてから今日この時まで、戦いに身を捧げてきた自分が？
たった一日たりとも、剣を振ることをサボった日はない。逃げ出した時でさえ、己に染み付いた習慣は消えてくれることはなかった。戦い方を変えたとしても、戦いから逃げることは遂に出来なかった。
その時に気づいた。自分は、この宿命から逃れることが出来ないのだと。
逃れることを、望んではいないのだと。

これは――〝因縁〟だ。
己に役目を課した偉大なる祖先との、人生を掛けた決闘なのだ。
これに決着（ケリ）をつけなければ、己は新たな生き方すらも始めることは出来ない。
だから自分は、己自身の手で、それを成すと決めたのだ。
だが、選ばれたのは己ではなく、何処の誰とも分からない若者である。
こちらから見れば、ぽっと出の、あまりにも唐突に現れた規格外の存在である。
確かに強い。その強さは、こちらを心の奥底で無理やり納得させてしまう程のものだった。
――諦めろ。
――お前は選ばれなかった。
――相手はお前より強く、その使命を果たすのに相応しい。
――だから諦めろ。お前は負けたんだ。
そんな言葉が己の内に木霊する。
だが、
「……この程度で、僕が諦めるとでも……？」
――ふざけるなよ。
「何年……何十年、戦ってきたと思ってる……？」
それは相手ではなく、自分に対しての言葉だ。
「――まだ……！」
ふざけるな。
未だ魔人にすら届かない相手に、魔人を目標としてきた己が、同じ人間相手に諦めるとでも思っているのか。
「まだやるのか？」
「当たり前でしょう……！」
ガイのあっさりとした言葉が耳に届き、ロランはそれに是と返す。
分かっている。その温度差を。
ガイは己ほど、この戦いに意味を見出している訳でもない。ただ挑まれたから返り討ちにしているだけ。己は足元に転がってきた石こ

ろだ。
――なら転ばせてやる。
己がただの石ころだと言うならば、転ばせて転ばせて――何度も転ばせて、怪我を負わせ、最終的には打ち負かしてやる。
石ころというのは、思ったよりも硬いのだ。己の何倍もある相手が軽く蹴りつけた程度では壊れない。
「僕に負けを認めさせたいなら、全力で踏み潰せ……ッ!!」
軽く蹴りつける程度で壊れるものではないと知れ。
足を振り上げて、全力で踏み潰せ。
それでもなお、己は砕けない。やるなら同じくらい硬いものをぶつけてこい。
昔からだ。昔から、どれだけ戦いが嫌で、課せられた使命が嫌であっても。
「負けることが……諦めることが……僕は、大嫌いなんだよ……!!」
そう。逃げれば負けたことになる。
逃げれば諦めたことになる。
それに気づいたからこそ、己は一度逃げ出した筈の場所に戻ってきた。
己が目標とする存在を一度見て、絶望しかけたところで気づいた。
「さあ、行くぞ――」
長剣と短剣を右手と左手に構えてみせる。
そうして行うのは自分が持つ最大の必殺技。相手に必ず勝つための、全身全霊の技だ。
「ちっ……来るなら来い！」
「油断するなよ！　何かやってくるぞ！」
相手が剣を構えたのを見て、こちらもスイッチを入れる。
思い出すのは己が今まで培ってきた全てのもの。
闇に生きていた時代に得意としていた、己の本来の戦闘スタイル。
しかしそれは、培ってきた剣の腕も無駄にはならない。
魔物を皆殺しにした時と同じ様に――殲滅するだけだ。
「っ、増えやがった!?」

「残像だ！　惑わされるなよ！」
己は動く。
最後の力を振り絞り、残像が見えるほどの速度で相手の周囲を動き回る。
速度は己が最も得意とする部分である。
それだけ高速で動きながらも、足音を殺すことは造作もない。
どんな相手も、魔物でさえも――相手が気づく前に、その首や心臓を掻っ切れば死ぬ。
ならばこちらの方が劣っていようとも、必ず勝機はある。
「――〝アサルトモーメント〟……！」
相手の視界から己が消え、相手の背後を取った短い瞬間。
己は右手に持った長剣と、左手に逆手で持った短剣を振るい、相手の急所を狙った。
……獲った――ッ！
高速の思考の中で、己の必殺技が通じたことを確信する。
これで己の勝ちだと。
だが――
「――そこかぁ!!」
「っ……!?　ぁ……」
ガイは完全に消していたはずの己の気配すらも読み取り、振り向きざまに魔剣を振るった。
長剣と短剣が弾かれ、そのまま剣を横っ腹に喰らう。
その時に斬れなかった情けを感じ取りながら、ロランは酷い悔しさの中で思った。
――見誤っていた。
やはり、相手は己より数段強かった。
相手の実力を見通せないということは、それだけ強さに開きがあるということ。
これほど格差のある相手は、二度目だ。
一度目は他ならぬ相手。己の目標でもあった――
「……ガイ。君は……」

『――人としては悪くない……が、その程度では無駄だ。人の範疇では、俺には敵わない』
地面に倒れ、その言葉と姿を思い出しながら、
「君は……魔人を、倒しに行くのか……？」
「……知るか。俺の邪魔をする奴は誰であれ殺す。魔人だろうと誰だろうとな」
ガイの答えは使命に満ちたものではなく、どこまでも自由で身勝手なものだった。
だがそれを羨ましく思う。
自分も、それだけ身軽であったのなら、と。
そして同時に、己を越えた相手を心配に思い、
「魔人は、強い……途方もないほどに……」
「あ？　戦ったことでもあるのか？」
その問いに頷く。
一度目の敗北がそれだったのだ。よく覚えている。
「ええ……今のように本気を出して……無敵結界を解かれ、手加減されてなお……剣の頂には、全く届かなかった……」
「……」
「それは……まさか……」
ガイは無言だったが、カオスには覚えがあるようだった。
「取る手を尽く防がれ……命を見逃された……君も強いが、あれほどではない……どちらとも戦った僕には分かる……」
「……ふん！　見る目がないな。俺は最強だ。誰よりも強い」
「いやいやいや……自信過剰すぎじゃろ……」
カオスの低いトーンのツッコミを受けてなお、ガイは自信たっぷりにそう言ってみせる。
カオスは呆れているが、それでこそ、
「……ふふ、そうか……なら、君に任せるとしよう……副隊長」
「――はい、ここに」
「お、おい！　急に行くなよ!?」
呼べば魔女がすぐ近くまで寄ってきていた。まるでそれを予見し

ていたかのように。
少し遅れてガイともっとも仲の良いクーベロもやってくるが、ちょうどいいと、ロランは気絶する前にそれを口にする。
「……鋼の騎士団としても、魔人を倒す力を持ったガイを全面的に支援することを誓おう……副隊長とクーベロは、これからガイのパーティに入り、そのサポートを頼む……」
「了解しました」
「お、俺もかよ!?　いやまあ、構いませんけど……」
淀みなく了承する魔女と、狼狽えながらも了承してくれるクーベロを見て満足していると、横から当人の声が割って入った。
「おい、何を勝手に決めてる。俺は――」
「不服かい？　一応、決闘の報酬として考えていたことさ……これからは金や食べ物、物資の心配はしなくていい……これでも、僕は顔が広くてね……別の里でも支援が受けられるようにしておくさ……各地の情報も、出来る限り集めて君に渡そう……それから――」
「よしいいだろう！　俺に任せろ！」
「ガイ、お前な……」
クーベロが呆れるような視線をガイに向けるが、ガイはニヤリと笑みを浮かべてほくそ笑んでいる。
だがこんな時代だ。その判断は正しい。物欲に走ったとしても何も問題はない。
「……では、後のことは任せるよ、副隊長……そろそろ、気を保つのも限界だ……」
「承りました。……しかし隊長。思ったより余裕そうにも見えますが……もう少し働いてみては？」
「意識を保つことには自信があるだけだよ……察してくれ。身体中がボロボロで休みたいんだ……」
「はい。では後の事はおまかせを」
任せる、と最後は言葉にならずに、ロランは全身から力を抜き、意識を一度手放す。
――彼なら任せられる、と。己の中に納得を作り、満足を得ながら、

憑き物が落ちたかのような顔で、ロランは眠りについた。

決闘が終わり、隊長であるロランが気絶すると、その場は慌てたように動き出した。
「た、隊長！　お、おい！　早く里に戻るぞ！」
「ああ！　早く治療しないと……！」
「私、ちょっとだけ回復魔法使えます！」
「隊長を運びながら回復魔法を使える奴は隊長につけ！」
と、命に別状はないが、瀕死の状態のロランを助けようと誰もが動く。
それはロランが本性と真の実力を露わにした後でも、前と変わらないものであり、
「……さすがは隊長だな……まあ、あの人の人望は凄まじいし、特に問題にはならねぇか」
「……ちっ」
「そこで舌打ちとか分かりやすいの～……なんで儂と相性が良いのか何となく分かってきたわ」
うるさい、とガイは半目で呟くカオスに向かって短く返答する。
というのも、決着の瞬間に、ガイは一つ、予想外の事が起きたからだ。
それは、自分の中にいるもう一人のことで、
『おい、せっかく決闘のどさくさに殺してやろうと思ったのに、何で邪魔した？』
『――決闘のルールは予め通達されていただろう。相手が負けを認めるか、戦えなくなったら決闘終了。殺すことは禁ずる、とな』
『ちっ……態々介入してきやがって……』
そう。ガイは普通に峰打ちではなく、斬る気満々だったのだが、そこをもうひとりのガイの強い意志でふいにされた形だ。
とはいえ、結果的にはこれで良かったというのも理解出来る。
『もし殺していたら、また居場所が無くなるだろう……お前も、それは

理解しているとは思っていたがな』
『……うるさい！　そんなことは分かってる！』
もうひとりのガイの呆れるような声を聞いて軽くイラつく。
正直、こうやって人の事を考えながら動くのは窮屈なのだ。正直、もうとっくに目立ってしまっているし、決闘くらいであれば殺しても問題ないとは思ったが、あの人望を見るに、もうひとりのガイの判断が正解なのだが、それを認めたくはなかった。
ああやって色々と協力してもらえるらしいし、それはいいのだが、ガイとしてはもうひとりのガイの変な責任感の方が頭を悩ませる。
『カオスの所有者となった以上……やるべきことをやらねばな……』
『……ふん』
魔人に対する今までの経験や、ここまでの経緯から、もうひとりのガイは魔人を倒すことを半ば決意してしまっている。
そしてガイ自身も、もうひとりのガイほどではないが、魔人を倒して好き勝手してやろうと思っていなくもない。
せっかくカオスを手に入れたのだ。好き勝手過ごすことが出来ればそれでいいが、魔人をいざとなった時に倒せるというのは助かる。
なのでカオスを捨てる気も、立場を捨てる気もなかった。
ただもうひとりのガイの正義感というか、責任感だけが不安であった。
「――さて、それじゃあガイには、少し提案があるのだが……」
「なんだ？　つまらないことだったら犯すぞ」
「代償が厳しすぎねぇか？」
「ふふふ、それでも構わないが……」
「って、こっちは乗り気だし……」
クーベロがガイと魔女の言葉に気を揉み、一々ツッコミを挟む。そういう性分なのだろう。苦労しそうな奴だ、とガイは特に気にすることもなく、魔女に顔を向けた。
「いいから言え」
「……まあ、晴れてガイはこれから、魔人を――正確には魔王を倒す使命を帯びた訳だけどね。さすがにすぐに倒しにいくことは無謀すぎ

る。今は力をつけることが先決だと思うのだけど……そこのところ、実際にその力をもつカオスはどう思うかな？」
「……そうじゃな。確かに、ガイは強いが、今すぐ戦いに行くには不安がある。力や経験をつけることは賛成だ」
魔女に意見を求められたカオスは、自分なりの私見を述べる。やはり、今までの記憶や経験からも、魔人を倒すには準備を整えてからの方が良いだろうと。
魔人が正真正銘の化け物だと知っているカオスには、魔人を早く倒したいという使命に突き動かされてなお――いや、突き動かされているからこそ、もう少し力をつけるべきだという魔女の言葉に賛同したのだ。
だがガイの方はそれを理解していない様子であった。何かを苦労するのが嫌だという面倒くさそうな表情を浮かべ、
「別に俺はこのままでも構わんがな」
「その自信は大切なものだけどね。まだ強くなれるのならそれに越したことはないだろう？」
だから、と魔女は告げた。
ガイがもっと強くなるための提案として、
「どうにも、ガイは剣もそうだが、魔法の才能があるみたいだからね。剣についてはよく分からない私でも、魔法についてなら道筋をつけることは出来る」
「……何をする気だ？」
嫌な予感がしながらも問いかける。
魔女はニヤリと口端を歪めて告げた。簡単なことさ、と、
「――君を、私の〝故郷〟に招待したい」
何故なら、
「そこには、貴重な魔導書の数々が眠っていてね――」
故郷へ来ることの利点を、魔女はガイに向かって説く。
未来視の魔女はガイに力をつけさせるために、彼を多くの魔導書が待つ故郷へ、招待することにしたのだった。

決闘を行っていた隠れ里のある山の中腹。
その広場を見渡せる崖の上で、機能性を重視したようなドレスを身に着けた金髪ツインテールの少女は、その場にいる商人としての部下達を背後に、感嘆するような声を発した。
「――良いものが見れましたわね。色々と順調そうですし」
「に、人間にも、おっかない奴がいるんすね……」
「ああ……あんな化け物とは戦いたくねぇな……」
商家のお嬢様、といったような少女に、その部下ともいえる商人の格好をした人間達は先程まで行われていた光景に肝を冷やす。
人間を下に見ている彼らだが、今の戦いを見て人間を侮ることは出来ない。
やはりこれまで以上に慎重になろうと心に決めながら、彼らは上司である少女に声を掛けた。
「それにしても……観戦するならあの場にいても良かったのでは？　どうせ気づかれないでしょうし……」
「あの魔剣が無ければそうしてましたわ！　魔剣があると、貴方達はともかく、わたくしは気づかれてしまうそうですのよ！」
「そ、そうなんですか……にわかには信じ難い話ですけど……」
一応、上司である少女からあの魔剣の効果をさわりだけでも教えてもらった彼らだが、その効果は正直、全く信じられないものであった。
幾らなんでも、魔人を殺せる武器など、荒唐無稽にも程がある。
彼らは彼らの主君の強さ、恐ろしさを知っているため、それはあり得ないだろうと己の中で断じた。
だが、自分達が仰ぎ見るべき主自身が、そう言っているのだから蔑ろには出来ない。
自分達はただ、言われたことをやればいいのだ。
「それで、これからどうするんですか？」
「ふふん、決まってますの！　この情報をお届けし、褒めてもらうのですわ！」
自信満々に言って、褒めてもらうことを想像して目をキラキラとさ

せる少女。相変わらずだなぁ、と思いながらも、聞くべきことは聞いておこうと遠慮気味に口を開く。
「いや、あの……店の方はどうします？　放置ですか？」
「――？　ああ、そうですわね。別に放置しても構いませんけど……商品を無駄にすると勿体無いおばけが出てしまいますわ！」
「つまり……？」
「品物だけこっそり持ち出す準備をしておくのですわ！　襲撃前夜に行えば間に合いますのよ！」
「了解しました。では、うし車の手配をしておきます」
「いつも通り、本部の人間として出入りして、輸送を通達しておきます」
少女の言葉に二体の商人が頷く。
少女は相変わらず高いテンションのままで、
「ええ、それでよくってよ！　貴方達も、あのガイとかいう人間には気をつけなさいな！　接触は基本厳禁ですのよ！」
「畏まりました。では――」
「早速向かいます――」
命令に恭しく頷き、商人達はその場から、崖とは反対側にある岩山の斜面を駆け下りていく。
商人とは思えない身のこなしを見せながら仕事に戻っていく二体を見て、残された少女は満足そうに鼻を鳴らし、
「ふふん。さすがはわたくしですわ。完璧な仕事振りですの」
と、そう言って自画自賛を行いながら、荷物を纏めていく。
彼女自身も、大規模な商会の代表として色々と人間の隠れ里で忙しい日々を送っているのだ。
だがその次の仕事は、
「このままやって来る制圧部隊に合流しないといけませんわね。後、帰りにお子様方へのお土産をどこかで――」
地図を取り出しながら少女は足を進める。地図を広げて見ながら、そのまま山道を降りていくような何気ない動作で、少女は眼の前の崖から飛び降りた。

だが少女に動揺はない。落下によって髪や衣服が揺られるも、地図に目を走らせながら少女は息をつく。
「はー、見届け役というのも大変ですわー。暴走しがちな不届き者ですし……」
そうして下の岩場に着地し、そのまま次の崖をまた飛び降りていく。
少女は異常な身体能力を見せながら、主から言い渡された次の仕事へと向かっていった。

魔法の隠れ里

決闘の翌日。
ロランに勝利し、名実ともに魔剣カオスの所有者となったガイは、早速未来視の魔女Ｃの提案を受け入れ、魔女の案内のもと、クーベロを連れて隠れ里から出立していた。
まるで逃げるかのように早い出発だが、それは間違っていない。というのも――
『おお、新入り……いや、ガイ！　昨日はよく眠れたか!?』
『魔人を倒せる魔剣の所有者になったんだよな！　頑張って魔人を倒してくれよ！　これはサービスだ！』
『いらっしゃい、ガイさん！　魔人を倒すために旅をするんだろ？　隊長から聞いてる。店の商品なら幾らでも持っていってくれ！』
『隊長以上の強さを持つあんたが魔剣を持ち、魔人を倒してくれるってんだから、未来は明るいな！』
その日の朝。自室から出ていつものように酒場で朝食を摂りに行ったり、商店で無くなった物資を補給しようとすると、あり得ない頻度で話しかけられる。
昨日までは、注目されてはいたが、皆遠巻きにひそひそと噂をするのみで話しかけてはこなかったし、その前まではガイの目立たないように実力を隠す方策が良かったのか、注目されることもなかった。
ロランを倒し、魔剣の所有者となっただけで、この騒がれぶり。最初はガイも気分が良かったが、
『……疲れる』
『疲れるな……』
表の人格となっている比較的悪いガイも、今は裏となっている良いガイも、同じ意見だ。
人に騒がれ、人にもみくちゃにされて、無責任な期待を受ける。そのテンションも高く、正直疲れるのだ。
どちらの人格も、根本的にぼっちというか、あまり大勢でわいわいするのが好きなタイプではない。悪い方は、まだ大丈夫な方だが、好

き勝手振る舞うことを止めなければいけない上、実はそれほどやる気のない魔人討伐の戦士に担がれているのを感じて、どうにも居心地が悪かったのだ。
魔剣を手に入れたから魔人を倒す――事はそう単純なものではないというのに。
だが隊員達はともかく、住人は魔人の強さなど知らない。隊員ですら、自分達より遥かに強く、魔剣があるのなら倒せるだろうという期待を掛けてきている。
それを現実的に見ているのは、隊長や隊員のごく一部。魔人の恐ろしさを知る者達だ。
そしてその、昨日決闘で倒したばかりの隊長からも、魔女の提案で訪ねた際に言葉を掛けられた。
『ははは、随分な人気者ぶりだね。昨日までとは大違いだ』
昨日、ガイがあれだけボコボコにしてやったというのに、その当人であるロラン隊長は五体満足のまま、既に里の長としての仕事をこなしていた。
同行していたクーベロが不安そうに、『身体の傷は大丈夫なんすか？』と聞くと、
『いや、本調子ではないよ。戦うのは無理さ。だけど、動くことくらいは出来るからね』
これも治癒魔法を掛けてくれた者たちのおかげかな、と笑いながら言うが、そんな訳がない。
神魔法に分類されるヒーリングなどの回復魔法は、身体の傷は治せても、体力までは回復しない。
瀕死の重傷ともなれば普通、常人であれば丸一日どころか、数日は寝込んでいてもしょうがないし、万全に戻すまではそれなりの時間が必要となる。
だがロランは見たところ、確かに万全ではないだろうが、それでも動くこともう支障はないように見える。意志が強いのもあるだろうが、やはり一流の戦士ともなると回復力も高いのだろう。
相変わらずムカつく爽やかな笑顔を向けてくるロランにイラッと

したのもつかの間、ガイは彼と魔女からの提案を受けた。
『話は聞いたよ。魔法の修行の為に魔女の故郷に向かうんだろう？
物資が集まっているなら早速出発するといい。ここにいても、僕のようにチヤホヤされてまともに動けないだろうからね』
『私の故郷までは半日……いや、このメンバーでならもっと早く着くことも出来るだろう。早速行こうか』
そう言われ、ガイはやむを得ず、その日の内に里から出発することにした。
魔法の訓練など、それほどやりたくはないが、里にいるのも居心地が悪い。だから表のガイは名案を思いついていた。
『……おい、お前喜べ！　魔女の故郷とやらについたら人格を交代してやる！　良かったな！　ふはははは！』
『……お前……魔法の修行がやりたくないだけだろう……』
『いや、俺は優しいからな！　そろそろ代わってやろうと思っただけだ！』
もうひとりのガイの呆れる声を聞きながらもほくそ笑む。なんと言おうが人格を交代してしまえば、自分は魔法の修行をやらずに楽が出来る。
一度覚えてしまいさえすれば、こちらも同様に魔法が使えるようになるため、とても楽だ。
練習とか特訓、修行が嫌いなガイは、そういうことが好きであろうもうひとりのガイに代わることを方針とし、上機嫌に魔女の故郷へと向かっていった。
「……まだ着かないのか？」
「もうすぐだとも」
深い深い森の中。
草木が生い茂る緑林の一帯を、一行は進み続けていた。
先頭を行くのは案内役の未来視の魔女、当然だが、先頭が魔法使いというのも陣形的によろしくないため、一応ガイやクーベロもそれほど距離を置かずに隊列を組んで進んでいる。
しかしそれを気にする必要がないくらい――彼らは強かった。

「ここまでかなりのハイペースで進んでいるからね。さすが選ばれた人員なだけはある。鋼の騎士団の精鋭とて、ここまでのペースで魔物を倒しながら進むことは出来ないだろう」
「俺は強いからな。当然だ」
「いや、俺は滅茶苦茶きついんだけどな!?」
と、声を上げたのはクーベロだった。
彼は巨大な大剣を手に持ち、前衛の盾役として扱われながらも、息を乱し、何とかついていっている有様であった。
「隊長に勝ったガイはそりゃそうだろうけどよ……副隊長も化け物だし、俺だけ一般人じゃねぇか……」
「ふふふ、そんなことはないとも。君は十分強い。かつてあった人間の国、軍であれば一軍の将軍級の強さだ」
「まー、儂の目から見ても、ガイと魔女の二人がむちゃくちゃに強いだけで、よくやってると思うけどねん」
「そいつはどうも……」
二人から褒められたが、あまり嬉しくなさそうに肩を落としながら息を吐くクーベロ。
実際、クーベロの実力は人間としてはかなり上位に位置するであろう強さなのだが、如何せん、他二人が化け物過ぎた。
魔剣の所持者で、規格外の強さを持つガイや、未来視の魔女として得体の知れない強さを持つC。そして、クーベロやガイは知る由もないが、かつては伝説のシーフとして名を馳せた、魔剣カオス。
彼らが人間やめているだけで、クーベロは強かった。人間基準で。
自慢の怪力もそこそこに役立っている。魔物を一撃で屠れるのは他の二人も同じなため、貢献度は普通ではあるが、
「はぁ……せめてまともなレンジャーがいればな……変なトラップを食らうこともないんだが」
「外界を旅する魔物討伐隊や冒険者にとって、レンジャー職の有無は命に直結するからのー。強すぎてゴリ押し出来るから死んでないだけで、普通ならこんな強行軍は速攻であの世行きよ」
「隊長がいれば楽だったでしょうね。見たとおり、彼は人類最高峰の

レンジャーの一人ですからね」
「そうなったら余計に肩身が狭いな……ま、安全なだけマシだろうけど……」
「いいから歩け。歩き続けて疲れてきた。こうなったらさっさと着いて休むぞ」
「その割には平気そうじゃなぁ……」
持ち主が強いことに越したことはないか、とカオスの方はガイの常識外な強さを内心では歓迎していた。性格がいまいち掴みきれないが、その程度は問題とならないだろうと。
ガイは森を行くこと自体はそれほど嫌いじゃない。というか、昔住んでいたカラーの森を思い出すため、実は意外と落ち着くのだが、それでも何時間と森を進むことになれば、さすがにうんざりしてくる。
ズカズカとガイが苛つきを見せつけるかのように前を行き始めた時――しかし違和感があってガイは足を止めた。
「あ？」
「んん？」
「急にどうしたんだ？　立ち止まって。早く到着するんじゃ……」
ガイとカオスが揃って声を上げる。疑問符を頭に浮かべた表情でその場に立ち止まった彼らをクーベロは半目で見たが、魔女はニヤリと笑みを浮かばせた。
「どうやら着いたね。その〝結界〟は、里の入口である証だよ」
「結界……？　よう分からんが、この先には進んじゃいけないような……」
ガイが自分の判断を不可解に思いながらも口に出す。だがそれに構わず魔女は進み出た。
「それが〝結界〟の効果さ。私の里には、人や魔物が近寄らないように、人払いと魔除けの結界を張っている。これを解除しないと、里に入ることを無意識に避けてしまうのさ」
そう言って、Cはガイが立ち止まった位置に並び、軽く手を掲げて何かを口ずさむ。
すると、何かが割れるような音が響き、

「――さあ、これで通れる。里は目と鼻の先だよ」
「ん？　おお、さっきまでの違和感が消えた！　進むぞ！」
頭がすっきりしたのか、再び活力を取り戻してガイは進み、その後ろを魔女とクーベロも続いていく。
そして数分歩いた先。そこには、
「おお……！」
「ここが……」
「な、なんかすげぇな……」
ガイ、カオス、クーベロと、三者が思わず声を漏らす。
森を抜け、結界を抜けた先にあったのは、幾つかの家や建物が立ち並び、水路や畑などがあるきちんとした隠れ里であった。
だが一番に驚いたのは、その里を行き交う者たちの姿が、皆ローブを身に着けた魔法使いらしき者たちであること。
頭まで隠すことの出来る様々な色のローブを身に着け、杖や水晶玉、指輪などの魔法の媒体となるものを身に着けており、小さな子供であっても、それは例外ではない。
ただ比較的、若い者が多いことが気になったが、大人もきちんといるようで、彼らは畑仕事や何かの作業を行ったり、子供に魔法を教えていたりしていた。
それらの光景に驚く、一行の前に立ち、Cは言う。
「――ようこそ、と言うべきかな。歓迎するよ。ここが我が故郷であり、私が長を務める――〝魔法の隠れ里〟さ」
まずは私の屋敷に案内しよう――そう言うCに連れられて、ガイ達は魔法の隠れ里に足を踏み入れた。

「お帰りなさいませ。C様」
「ああ、ただいま。早速だが、食事を用意してくれ。客人がお疲れのようでね」
「畏まりました。では、こちらへどうぞ」
Cに案内され、里で一番奥にある大きな屋敷に迎えられたガイ達

は、そこにいた魔法使いの少女に客間へと案内された。
そこでようやく一息。半日の強行軍を終えた彼らはどっかりと椅子に座り込む。
「はぁ～～～、やっと休める……いつもの倍は疲れたぜ……」
「軟弱だな。俺は全然疲れてない」
「いや、お前さっきは自分で疲れてたって言ってたじゃねぇか……」
「覚えてないな」
ガイの言葉にクーベロが軽く肩を竦めて呆れるが、それよりも身体を休めたかったのだろう。ツッコミの言葉はそこで途切れる。
代わりに聞こえた声と、その場に姿を現した者たちに、彼らは目を向けた。
「おきゃくさま、お茶をお持ちしました」
「お持ちしましたー！」
「ああ？」
そうやってお茶の乗せたトレイを持ってきたのは、まだ小さな子供であった。
やはりローブを身に着けた、短めで、軽い癖のついた金髪の少女達。
彼女達の姿を見て、ガイは軽く訝しむ。
「なんだ、お前のガキか？」
「いやいや、違うじゃろ。髪の色も違うし、あまり似てな――」
「――そのとおり。彼女達は私の娘たちさ」
「って、娘なんかーい!!」
ガイの言葉を冗談と受け取って否定しようとしたカオスだが、当人から娘と言われてツッコミを入れる。
だが、Cはその反応に愉快そうに口端を上げると、トレイをテーブルに乗せ終えた二人の少女を見て、
「まあ、正確には養子だね。本当の子供は別にいるから」
「なんじゃ……驚かせるなよ……」
「つーか副隊長、子供いたんすね……」
養子、と言われてほっと息をつくカオス。
カオスとしては、先祖である魔女を見たことがあるため、顔立ちや

髪の色から実の子供じゃないだろうと否定したのだが、やはりそうだったらしい。
だが魔女の意味深めいた笑みは止まらず、
「彼女達は、私の後継者候補さ」
「後継者候補？」
ああ、とガイの反応に頷きを返すCは続けて説明した。
「次のこの里の長――〝C〟の名を継がせるに足る、里きっての才能ある子供たち。長である私自身が育て、教育することで、次代へ受け継ぐために万全を期しているという訳だよ」
「は？　ってことはその名前は……」
「もちろん。私個人を表す名ではない。〝C〟とはこの里の長の称号。未来視の魔法使いとしての力を受け継いだ長が名乗る名前さ」
「そうだったんすか……」
何気ないカミングアウトを受けて、クーベロが微妙な顔をする。
だがガイは特に何かを思う訳でもなく、興味無さそうにしながらも話題を続けた。
「それじゃ本当の名前はなんて言うんだ？」
「本当の名前か……まあ、あるにはあるけど、特に面白味のない名前だからね。今まで通り、Cとか魔女と呼んでくれて結構だよ」
「ふーん、それじゃあそこのガキ共は？」
興味はないが流れの会話でガイがそう聞くと、Cが答える前に今まで黙っていた子供二人が揃って声を上げた。
「ネーシーです！」
「ラーシー・ジュリエッタ、です」
一人目は元気よく、二人目は大人しい様子で、名前を名乗る。
それは本当にただの子供が、教えられたように行儀よくしようとしている様で、Cのように気味の悪さが一切ないものだった。
だからだろうか、先祖を知るカオスなどは感心するような声を出して、
「は～……なるほどのー。ということは、この子供も、将来はお前さんみたいな得体の知れない感じになるかもしれんってことか」

そう言うと、ほんの僅かに、魔女は眉を動かした。
だが笑みだけはいつもと変わらないまま、少し間を置いて、
「……まあ、長を受け継いだのであればそうなるだろうね」
「ははは、副隊長にも、こういう子供の頃があったんすかね？　あまり想像つきませんけど……」
クーベロが冗談めかして言うと、魔女は更に目を細めて言った。
「……ふふふ、これでも昔は、もう少し明るくて朗らかな性格だったんだけどね。もっとも、今はその面影もないだろう？　自分でも、純粋だった子供の頃が思い出せないくらいだ。無理もない」
そうして、Cは二人の少女の頭をローブ越しに撫でると〝行きなさい〟、と、彼女達を客間から退出させた。
そしてトレイに乗った茶器を自分で手に取りながら、
「まあ、本命の後継者は別にいるからね……あの子達が長を受け継ぐことはないだろう。普通に子供を作って、〝未来〟の為に繋いでもらうさ」
「……？　そうか」
カオスがその魔女の言葉に僅かに違和感を覚えるが、答えが分からず、気の所為とも思える程度のものであったため、特に指摘せずに頷く。
実際、魔女の言葉は大事なことだった。人間の未来の為に、自分達は魔人を倒そうしているのだから。
魔女も得体は知れないが、人間の為に戦っていることには変わらないだろう、と微妙に怪しく思っていた魔女への評価を軽く見直す。もうひとりのガイやカオスにとって、そういった人間らしい行いは信用に値するものだ。
「私のことはいいだろう。それより、ガイ。君にはこれから、強くなってもらうためにある物を見せてあげようと思うのだが――食事が出来るまで、詳細を口にしてもいいかね？」
「む……まあ、いいぞ。話してみろ」
Cの前置きに少し考えた末に頷くガイ。だが内心では、
『おい、ちゃんと聞いてろよ。実際にやるのはお前だからな』

『この……！』
ふざけたことを、ともうひとりのガイは完全にこちらにやらせるつもりのガイに憤りの感情を強める。
確かに新たな技術の獲得――強くなるために新たな魔法を覚えるというのは魔人をこれから相手にする可能性があるのだから道理だし、魔法を覚えるのは嫌いでもない。そういった特訓とか練習などは、真面目なもうひとりのガイにとってはそこまで苦にならないものだ。
だが押し付ける気満々というのも、それはそれでムカつく。それでやらざるを得ないというのも癪だ。
叶うならば、その魔法の試し打ちをガイ相手にしたいところなのだが、それは叶わないだろうと諦めの息をつく。
しかし身体の主導権は久し振りに取り戻せそうなため、それを報酬だと思って頑張ることにしようと、もうひとりのガイは話に集中しようと意識を魔女に向ける。
するとちょうど、魔女は話始めた。
「ガイ。君は既に、最上級の攻撃魔法を覚えているし、本来であれば戦闘用の魔法について教えることはない。ちょっとした便利な魔法や、補助的な魔法などはまだ詰め込む余地はあるが、その程度を今更覚えたところで、魔人との戦いには役に立たないだろう」
「は？　それじゃあ何をやるんだ？」
「攻撃魔法も、一般に伝わっている魔法で黒色破壊光線よりも威力の高い魔法は殆どない。それに、多少攻撃性能が高い魔法とはいえ、魔人にとっては五十歩百歩。それほど変わりないものだ。まあ、君の魔力ならそれなりに効くだろうが、攻撃手段の一つでしかないな」
「……じゃあなんだ。魔力でも高めろってか？」
似たようなことではあるね、と、Ｃは頷きながらもそうじゃないと言う。
「普通の魔法では力不足……なら、普通じゃない魔法を習得すればいいのさ」
ガイならそれが出来る。そう確信を持った不敵な表情でＣは告げ

た。
「この里には、ちょっと危険な書庫があってね。危険過ぎるから普段は封印しているが、そこには封印するに足るだけの、危険な魔導書の数々が眠っている。どれもこれもが、少し見ただけで精神をやられかねないようなもの――〝禁呪〟と呼ばれるものが載った〝禁書〟とも言うべき魔導書達さ」
「禁呪って……めちゃくちゃヤバそうだな……」
クーベロが純粋な感想を述べる。喉をごくりと鳴らし、その禁呪とやらを想像し、恐れた。
「ガイには、そこに赴き、禁呪を習得してもらおうと思っている。持ち出すことが出来れば、そのまま持っていくのもありだね」
「持っていくのもありだね――じゃない！　どう考えても危ないだろうが!!」
精神をやられるような禁呪など、冗談じゃない――もうひとりのガイも、その危険性に内心から苦言を呈する。
だが魔女はその上で更に笑みを深めて言った。赤い瞳を輝かせて、ズルい言葉を、
「未来を見たから言うけど、ガイなら大丈夫さ。君は禁呪を問題なく習得出来るだけの才能がある。それこそ、私などとは比べ物にならないほどの、世界一の魔法の才能がね」
「本当なのか……？」
「胡散臭いんだが……」
カオスが訝しげに、ガイも嫌そうに眉をひそめる。
未来視の魔女の真骨頂である未来視。その凄さを、カオスは知っているだけに、問題ないのかもしれないと思っているが、ガイの方は単純に危険で面倒で嫌そうだった。
しかし不意に、ガイはもうひとりのガイがそれをやることを思い出し、
……なら別にいいか。
と、内心から来る激しい抗議を無視して、そうすることにした。
ただまあ、一応は釘を刺しておこうと、

「……本気で危なかったらやめるからな」
「ああ、それで構わない。私も、君に純粋に強くなってほしいから提案してるのさ。習得出来無さそうな気配を感じたら、そこでやめてもらって構わないし、必ず助けると誓おう」
誓おう――と言いながらも、魔女はガイが禁呪を習得し、問題なく使えることを確信しているようなので、その誓いは胡散臭いことこの上なかった。
そう言えばガイが納得するだろうというだけの言葉である。約束をそもそも結んですらいない。
だが魔女の胡散臭さは今更。ここまで来た以上、手ぶらで帰るのは時間を無駄にしたみたいでムカつく。
ちょっとやってみて、無理だったら腹いせに女でも犯して帰ろうと、ガイは心に決めた瞬間――
「――C様！」
「――おや、どうかしたかね？」
不意に、客間に最初に出迎えてくれた少女が慌てた様子で飛び込んでくる。
それをまるで予測していたかのようにCが慌てることもなく尋ねた。
すると少女は外を指して、汗を額に滲み出させながらこう言った。
「里に、侵入者が……！」
「へぇ……」
少女の慌てぶりとは対照的に、Cは落ち着いた様子で頷いた。
他の面子はその報告に疑問を感じたようで、
「侵入者？　この里には結界があるんじゃなかったか？」
「もしかして、それを破ってきたのか……だとしたらそれなりの使い手の可能性もある」
クーベロとカオスが冷静な様子で分析する。
クーベロは軽く腰を上げており、カオスも眉を立てて、いざとなれば相手をすると態度で示していた。
「ふふふ……二人共、心配することはない」

しかし、魔女は笑みを携えたまま、二人を窘めた。
どういうことだ、と言外に視線を向ける二人に対し、魔女は笑みのままお茶を一口飲み、
「――結界を張り直すのを忘れていただけだ」
「何やってんの!?」
「お茶飲んでる場合じゃないだろ!?」
声を揃えて落ち着いた様子の魔女にツッコミを入れるカオスにクーベロ。
だが、侵入者が入ってきてしまった原因は真っ先に判明し、微妙に騒がしくなる里の中で、魔女は窓の外を見ると、
「それよりほら――もう来てるよ」
「――はい。もう来てます」
「っ!?」
その声は、窓の外から聞こえた。
屋敷の隣にある一軒家。その屋根の上に立ち、声を送ってきているのは、二つの人影と三つの存在だ。
そしてそれを目にし、耳にした瞬間、ガイは立ち上がり、驚愕する。
その姿は見たことがあったからだ。
「……！　お前、まさか――」
「……久し振りですね――カオス」
そして同様に、カオスも懐かしい気配を感じてぎょっと表情を歪める。
想像通りの声と、こちらの名を呼ぶことに確信を得ながら、しかしカオスはガイのそれ以上の驚きに目を見張った。
「お前、は……」
「ふふふ……こちらもお久しぶりです、ガイ」
大きくなりましたね、と微笑んで言うのは、和装姿の少女だった。
白い髪を二つ結びにし、僅かに光を帯びた刀を持っているのは、ガイにとっては思い出深い相手だ。
その傍らで苦笑して会釈してくる桃色の髪の少女や、その肩に乗る小さな猿も、懐かしい。

彼女の名を、ガイは知っている。かつて、友人となった少女の名を、忘れるはずもない。
震える声でガイはその名を呼んだ。
「……白、兎……？」
「――はい。白兎です」
名前を呼ぶと、はい、と頷かれた。
昔と変わらない姿のままでそこにいる少女に、二人の人格の精神が揺れ動く中、その気配を感じ取った者もいた。
カオスだ。彼は、その異質な気配を正確に感じ取り、ガイに声を送る。
「！　おい、ガイ！　その少女――ヤバい気配がするぞ！」
「……何がだ？」
ヤバい気配というのが何なのか分からず、ガイは聞き返す。
するとカオスは自分の魔剣としての勘に従って答えた。僅かだが、その気配は間違えるはずもない――
「――魔人の気配がする」
「……は？」
間の抜けた声でその告げられた言葉に、何を馬鹿な、と言った風に見返す。
だが、そのやり取りを見て、他ならぬ相手から声が飛んだ。
「おや、さすがですね。魔剣カオス。確かに私は、魔人じゃありませんけど、魔人の血が入ってますから」
「っ……なら使徒か!?」
いいえ、と白兎は首を振り、昔馴染みのガイですら初めて知る真実を告げた。
「私は――魔人の子です」
「――――」
「なっ……!?」
「そ、そんなのありかよ……!?」
「ふふふ……」
白兎から告げられた衝撃の真実に、絶句するガイやカオス、クーベ

ロといった一同。
魔女だけが笑っていたが、それを無視し、白兎は手元の刀――カオスにとって縁のあるそれを携えながら、用件を口にした。
「まあそれと関係あるかは微妙なところですが……今日は、個人的に、ガイと戦いに来ました」
「……戦いに……だと？」
「ええ、私と仕合いましょう――ガイ」
「っ……!!」
行きますよ、と前置きに値する言葉を放ち、白兎は襲いかかってきた。

友人と仲間の再会

その空間は、この世ではない場所だった。
赤黒い空とただ広いだけの平面の大地。そこは次元の狭間に作られた異空間だ。
異界と称することも出来るその場所は、たった一つの用途のために、魔法に長ける彼女が作ったもの。
人目も気にせず、環境を破壊せず、周囲に気を配らなくていい――戦場であった。
「――今日はここまでにしておくか」
「っ……そう、だね……！」
その戦場にいるのはたった二人。
一人は、この異空間を作った始祖のカラー。伝説の魔法使いであり、最強の魔人の使徒である黒髪の元カラー。真の姿である竜の特徴を解放しているハンティ。
そしてもうひとりはその主。最強の魔人にして世界最強の剣士であるその男、魔人レオンハルト。
彼は今しがた、己の力を抑え込み、魔剣を空間の鞘に収納したところで、今日の模擬戦の終了を告げた。
息を乱し、地面に膝を突いているハンティは、その模擬戦によって全力を出し、満足するまで暴れ回ったところである。
故に彼女の表情は、笑みと、主の力の凄まじさによる苦さがないまぜになった苦笑。額に汗を垂らしながらも、ハンティは笑みを絶やさなかった。
「相変わらず、凄まじいね……」
「……」
対するレオンハルトの方は、無傷でそこに立っている。
ハンティが彼の使徒になってから続いている模擬戦。今日もまたハンティの敗北記録を更新したところで終わった。
だがレオンハルトの方は、ハンティの茶化すような本音とも取れる称賛の言葉を耳にしても、険しい表情のままであった。

魔剣を持っていた右手を見た後、その手で己の顔を隠すように押さえると、
「――――足りないな」
「！」
レオンハルトは、指の隙間からその鋭い目を更に細め、赤い目を更に轟々と輝かせて言った。
足りない。しかしそれは、ハンティを見たものでは、ハンティを評したものではない。
それは、自分の力を評したものであった。
「この程度では足りない。この程度では――まだ、弱い」
弱い、と。
そう聞こえた自分の耳を、ハンティは疑ってしまい、同時に変な笑いがこみ上げてきそうになる。
それは真面目に言っているのか。冗談にしか聞こえない。
最強の魔人が。世界でも上から数えた方が早い、地上で1、2を争える実力者が、自分のことを弱いと言う――これが冗談でないとしたらなんなのだ。
だがこの男は至って真面目だ。長い付き合いのハンティには、それが理解る。
だからこそ、ハンティはそのまま口にした。純粋なその言葉の感想を、
「……あんたが弱い？　冗談も程々にしときなよ。魔王どころか、神でも殺す気？」
冗談めかして言ってみると、レオンハルトは押さえていた手をどけ、口元に笑みを漏らした。鼻を鳴らすような笑みで、
「ふっ、それも悪くないな」
「……まったく、あんたって奴は……」
今度こそ、ハンティは呆れの半目をレオンハルトに向ける。
どこまで本気と思っていいか分からないのだ。
普通なら、馬鹿なことを、と失笑するものだが、この男ならやりかねないため、笑うに笑えない。

色んな意味で規格外の存在。自分の主はそういう奴だ。
妙に常人ぶる時があるが、その考え、思考は常人とは一線を画していることに間違いない。
故に続く言葉も、彼にとっては全て真面目で、自分にとっては道理のある言葉なのだ。
「俺はまだ、強くなる余地がある。限界を迎えていない」
「……だからこそ、弱いって？」
「ああ。その余地を埋めることすら出来ていないのなら、俺はまだまだ弱い」
何故なら、とレオンハルトは至って真面目で、不敵な表情で告げる。
「俺が求めるのは、限界を超えたその先。極限の境地だ。俺の求める理想は未だ遠く、この程度では実現すら危ぶまれるもの。なら――」
なら、と間を置いて彼は言う。
「地上を征する程度の力を持たずして、どうする？」
「……いや、まあ……」
理屈は分からなくもない、というニュアンスの表情で、ハンティは頭を掻いた。
地上で最強の存在になることを通過点と考えている辺り、自分の主は頭がイカれてる。
目標が高いという次元じゃない。目標が突き抜けている。
誰もが畏怖し、羨むような力と実績を持ちながら、未だ上を見ている。
そりゃ多くの化け物と呼ばれる連中が敵わない訳だ。人外の連中が持つ、自分の実力を信じるが故の慢心。〝停滞〟といったものが、この男には存在しない。
それは鍛えることを知った獅子のようだ。停滞せずに成長を求める。ある意味で、人間らしいとも言える。
他の魔人は、良くも悪くも己というものが強固であり、その器から逸脱することはない。
他者の考えを寄せ付けず、思うがままに生きる、この世の勝者の思考。王の思考だ。

レオンハルトも、それは変わらない。変わらないが、彼の怖いところはこれだけ強くありながら、他者と協調し、秩序を重んじることが出来る――傲慢に振る舞いすぎないことだ。
それは理想が高いことと無関係ではないだろう。現状に満足しているのであれば、それは停滞を引き起こし、思考も止まる。
彼が自分の力だけで無理やり解決するようなことはせず、慎重な立ち回りを常に行っているのは、彼の性根もそうだが、上を見続けているからだ。
そして同時に、下の事も考えている。それは二つの意味で、
「……それはいいんだけどさ。肝心の人間とやらの計画は進んでる？なんか戦う気みたいだけど、ぶっちゃけ戦うなら強くなりすぎない方が、趣味的には愉しめるんじゃない？」
ハンティは前にレオンハルトから聞いた話の進捗を問いかけてみる。
レオンハルトは常日頃から魔物界を――世界を魔軍参謀として采配しているが、そこには魔物と人間の営みを円滑に回すこと以外に、個人的な計画が存在する。
それは先程挙げた目標にも関係することだろうが、本当に個人的な趣味や趣向として、物事を進めることもあるのだ。
故に個人的に人間や誰かを助けることもあるし、また誰かと戦おうともする。そういう意味で、好き勝手はしているため、魔人らしいといえば魔人らしい。
単純に暴虐な行いをするものではない辺りが、ハンティや他の周囲の者たちからしても好ましい部分だが、戦いに関して言えば、常人には理解出来ない部分も確かに存在する。
彼は王でありながら、一剣士でもあるのだ。
だからこそ、戦闘を愉しむために、見どころのある人間を付け回すのはともかく、あまり強くなりすぎるとつまらない結果に終わるのではないかと危惧してみた。
だがレオンハルトは、そのハンティの問いに笑みを深め、
「……ふふ、そうとは限らない。ともすれば、俺の二千年の研鑽を、一

瞬で埋めてくる可能性だって有り得る」
「……またトンチキなことを……」
「それほど見どころがあるということだ。それに――もしそうなったとしたら心が躍るだろう？」
「それは……そうだけどね」
ハンティもその言には頷く。趣味的には理解出来るものだ。
だがそれが実現するかどうかは疑わしい。仮にとんでもない人間が出てきたとしても、ハンティ程度ならともかく、レオンハルトにたかだか二十数年で届き、追い越す可能性などあり得ないと言っていい。
それこそ、あの藤原石丸でさえ、レオンハルトに劣っていること自体は間違いなかった。
だが今回はそれ以上の戦いが実現するという。
だからこそ、ここのところは忙しい合間を縫って訓練に精を出しているのだろう。
とはいえ、ハンティとしては別の疑いもある。
そのことを思い、ハンティは眼を細めた。肩をすくめ、
「……さっきからたまに怒気を漏らしてるのは、その人間と白兎が友人だったから？」
「……」
「あ、また漏れてる」
やっぱり、とハンティは呆れの視線をレオンハルトに送る。
詳細は大まかには聞いているが、その件の人間とレオンハルトの長女である白兎が、どうやら以前の家出の際に知り合った、友人同士らしい。
普通なら、友人というだけでレオンハルトもこうはならないのだろうが、それが男であるというだけで、
「……く、くく……ああ、そうだな……あの男は、そういう意味でも待ち遠しい……いずれ、たっぷりと礼をしてやらないとな……！」
口端を歪めて笑うその様子は、並の人間なら卒倒して気絶してしまうほどの怒気だが、怒っている原因が原因なので、ハンティにはそれ

ほど恐ろしくは感じない。
というか、ただの親馬鹿だからだ。
「……はぁ……あんたの娘たちは、結婚どころか、男の友人作るのも難しそうだね……」
「――俺より強い奴なら考えなくもない……と言いたいところだが、さすがにそれは厳しいと俺も理解している。だから、俺が認めるに足る男であれば、考えてやる」
「それでも無茶苦茶厳しいじゃん……」
やはり、レオンハルトの娘たちは苦労するだろう、とハンティは頭を抱える。
ここのところ子供も増えてきているが、男兄弟の方はともかく、娘ともなればレオンハルトも厳しい目を向けるだろう。
そして何より、その相手の男の未来を思い、ハンティは同情してしまうのであった。

その戦闘の開始時、ガイは自分の身をゾクリと震わせた。
眼前、屋根の上から軽く跳躍してくる白兎がいる。その瞳は閉じられているが、見えているのだろう。真っ直ぐにこちらを見据え、刀の鯉口を切ろうとしている。
己の身を震わせた圧力は白兎のもの。寒気によってガイは、その初撃の予感に窓から身を乗り出し、そのまま魔剣カオスをその手に握った。
「――振りますよ？」
「っ……！」
白兎が声を送ってきた瞬間。その衝撃は来た。
「秘剣――〝白光〟」
「――ッ!!」
ガイはそれを、眼で捉えることが出来なかった。
戦士としての勘。相手から来る攻撃の気配。経験上、ここに来るのだと、相手の剣の軌跡上に剣を合わせることで防御を行っただけだ。

それによって何とかガイは、その神速の一刀を防御し、建物の壁まで吹き飛ぶことで難を逃れる。
そのまま建物の外、地面へと落ちていく中、頭上に見上げるその剣を振るった白兎は、既に一度剣を収めており、ほう、と感心の息を漏らした。
「やりますね。最初の一刀を防ぐとは。これで終わってもいいと思って放ったのですが」
「……っ……はぁ……はぁ……！」
「ガイ！　大丈夫か!?」
地面に着地し、息を乱してしまう。手に持ったカオスがこちらに心配の声を掛けてくるが、大丈夫な訳がない。
「……カオス……今の、見えたか？」
「いや、見えなかったな……くそっ、あんななりでも、魔人の子というわけか……！」
そう、ガイは今の一合を思い返し、己が九死に一生を得たことを理解する。
白兎が跳躍し、刀に手を掛け、そこに力を込めた。そして刀身が光を反射する僅かな煌めきを確認した。
辛うじて見えたのはそこまでだ。その後は、剣というより、もはや白い光が、まるで魔法のような何かが起こったようにしか感じられない。
その白い光はおそらく剣の一刀であり、あまりにも速すぎたことで生じた空気の摩擦。刃が空気を斬り、熱を起したことで生じる光。必殺の一撃だ。
防げたのは奇跡に近い。それこそ、白兎自身が事前に〝振る〟と伝えてくれなければ、ほんの僅かでも防御が遅れていればその白刃を身に浴びていただろう。
カオスもその剣を浴びたおかげで、相手が魔人の子であることを再認識したのか、強く睨みを利かせている。
だがガイは、いつの間にか入れ替わっていたガイは、そこまですることは出来なかった。

「……何故、私達は戦うんだ……？」
「！　おいガイ！　そんなこと言ってる場合か！　あいつはお前の知り合いかなんか知らんが、魔人の子じゃぞ！　気を緩めるな！」
その懸念を、ガイは十分に理解している。
理解しているが――それでもなお、ガイはカオスの声を無視して、友人に問いを投げた。
「……魔人の子だからか……？　だから、人間である私を――」
「あ、別に魔人の子として人間がどうこうとか、そういう訳じゃありませんのでご心配なく。ここに来てあなたと剣を合わせたのは、個人的なことですから」
ガイが言葉を言い終える前に、白兎はあっさりとそう言ってのけた。
僅かに空気が弛緩する。同じ地面に着地した白兎は、ガイとは違って自然体のままで収めた刀に手を添えている。そしてそのまま続けて、
「パパ――こほん、失礼。父上に言われて来た訳でもないです。ちょっと友人の噂を聞いたので、久し振りに会いに来たと言いますか。敵意はないので」
「はっ、魔人の子の言を信じられるか。友人だとか言ってるが、今ガイを殺す気だったくせに」
「殺すつもりはないですよ？　ええ。あくまで、殺すつもりで剣を振るっただけで、実際には殺しません」
「……は？」
カオスが白兎の言葉に間の抜けた声を返す。それに対し、白兎は何で疑問を持たれているか分からないと言った風に首を傾げるが、やがて頭上から、またガイの見知った声で指摘が届いた。
「……白兎さん。その説明だと意味不明というか、キチってる人みたいですよ？　誤解を解いた方が……」
「え？　どういうことですかイヴさん。私は殺すつもりで剣を振るっただけで、殺すつもりはないって言ってるじゃないですか」
「いや、だからですね……」

イヴ、と呼ばれた少女が屋根の上から下を覗き込むようにして白兎に声を掛け、そして頭を抱えている。
確か白兎の友人であった少女で、ガイがカラーの森に住んでいた時も、その姿を見たことも、声を交わしたこともある。
その肩に乗っているさるぼぼも見たことあるものだ。同じ様に頭を悩ませている様子である。
だがそんな中、白兎の腰元から声が飛んだ。それは、
「……つまり、この子は剣を振るう際、殺気を込めて実際に相手を殺すつもりで、剣を振るえと教わっていると。ただ、あくまでもつもりであり、実際に斬る瞬間は殺さないように寸止めをしたり、峰打ちに切り替えたりするということ……だと思います」
「？　だからさっきからそう言ってますよね？　後、日光さん。この子って言いますけど私はあなたより年上の、謂わばお姉ちゃんですので、そこのところ間違いなきようお願いします」
「いえ、まあ……」
何か言いたげな表情を――実際に表情は分からないが、そんな雰囲気を醸し出す刀。
魔剣カオスと同じように、意志を持って喋るその剣の名を、改めてカオスは静かに口にした。
「……やっぱりお前、日光か。そこで何をしてる？」
「……ええ。今は貴方と同じ経緯で……魔人を殺すことの出来る聖刀、日光となり、この子の剣となっています」
「おいおい……魔剣の次は聖刀かよ……！」
聖刀日光。
まるで魔剣カオスと対になるようなその存在に、窓から顔を出して心配そうに見ているクーベロなども表情を驚きに歪める。
ガイもその存在には、魔剣を所有しているとはいえ驚いてしまう。
だがカオスの方は、やはり知り合いなのだろう。軽く驚きこそすれ、それよりも重要な事柄についてを叫ぶように口にした。
「なら、なんでそこにいる!?　そいつは……魔人の子なんだぞ!?　儂らの仇のような――儂らが、倒すべき相手じゃないのか……!?」

そこには何かの想いがあるのだろう。カオスの言葉は、普段のものとは違い、どこか親しみを滲ませるものがある。憎し、というわけではない。親しいからこそ、何かを共有していたからこそ、激しく追求している。
だがその問いに、日光は間を置いて、カオスとは対象的に冷たい、冷静な対応を取った。
「――いえ、違います。彼女は、白兎は魔人と人間の子。厳密には魔人ではありません」
「同じ人間の敵じゃろ……！　そんな奴に、何故協力を……！」
「……」
カオスの続く言葉に、日光は黙ったまま答えない。
何を考えているのか。かつての仲間の事を見て、カオスは追求を止めようとはしない。
「……答えろ日光。お前の道に儂が、同じ目的を持っただけの儂らが何かを言う資格はないが、それでも同志だったはずだ。理由くらいは――」
「……あの時と、それほど変わってはいませんよ」
日光も、そのかつての仲間の言葉に何を思ったのか、口を開く。
剣と刀。同じ魔を斬るものとなった同志として、しかし日光は己の考えを口にする。
「私は……悟った。いえ、現実を、世界を知らされたというだけです。常人には直視し難い、悲惨で残酷な真実を……」
「……そんなこと、一体誰から教えてもらった？　……ホ・ラガか？」
「いいえ。教えてくれたのは白兎の父親。貴方も知っている、とある魔人から、教えて貰いました」
「とある魔人、じゃと？　……！　お前、まさか……！」
ええ、とカオスが察した様子に頷きで返し、日光は名を口にした。
「言わずと知れた最強の魔人――レオンハルト。私達がかつて旅の途中で出会った、あの魔人によって……私は現実を知り――」
そして、
「……あの方の、同志となりました」

「……っ！　あの魔人に誑かされたのか！　目を覚ませ！　そんなの、お前さんを利用しようとして適当な言葉を――」
「いいえ、カオス。私は誑かされてなどいません。話を聞いた上で……はっきりと自分の意志で、あの方に協力することを決めただけです」
「……！　くっ……」
かつてと変わらない、はっきりとした意志を示す日光を見て言葉を無くすカオス。
本当にどうしてしまったのかと内心で疑問に思う中、その持ち主もその会話を聞いて口を挟んだ。
「……まあ、その辺の事情は私もよく分かってなくて、聞かれても困るのであしからず。どうも、父上が何かしたようですね」
「ですねぇ……あの方はよくこういうことするので……その、何と言うかご愁傷さまです」
「ききー」
白兎の言葉を皮切りに、イヴやあのさるぼぼ――確か藤吉郎という名前の猿も苦笑気味の愛想笑いでお茶を濁そうとする。
一応戦闘中だというのに、あの子達や白兎が喋ると妙に緊張感がなくなるのは気の所為じゃないだろう。ガイは緊張感を保つのを難しく感じながらも、声を送る。
「……つまり、その……白兎は、ただ戦いに来ただけだということか……？」
「はい。再会した友人が強くなっていたなら、剣を合わせるのが道理ですよね！」
道理ですよね、じゃない。そんな拳を握りしめて笑顔で力説されてもそんな道理はどこにもないことは明白だからだ。いきなり斬りかかられる友人関係というのは、色々と間違っている。
だが、ガイは一つだけ安心していることがある。それは、
……邪気が、ない。
そう。白兎の言葉、表情、その様子には、憎しみや妬みといった負の感情がない。

敵意もなく、何かをしてやろうという邪気が一切存在しないのだ。そういった悪意に敏感なガイは、ある程度はそれを見破れる自信があるし、そういった感情を抱くものを苦手と、言葉を憚らずに言えば〝嫌い〟としている。
だが、白兎にはそれがない。
だからこそ、ガイは安心した。ただ戦いに来ただけだというその言葉に。
友人としての関係は、変わっていないことに。
「……私は、今でも、お前の友人なのだな……」
「？　そんなの当たり前じゃないですか。別に喧嘩もしてないですし、たった数年、十数年会わなかったくらいで友人じゃなくなる訳ないですよ？」
「……そうか」
会わなくなってそれなりに長いと感じていたが、やはり魔人の子供だからだろうか。それくらいの月日の流れは何ともないようである。
あの日、森で会った時とそのままの姿形で、白兎そこにいる。
容姿もそうだが、中身もまるで変わっていない。あの時のままだ。
だからこそガイは安心し、白兎の言葉を素直に耳にすることが出来た。彼女は気を取り直したように咳払いを一つすると、
「こほん。……では、戦いましょう！　色々と心配なのは確かですし！」
「……それは構わないが、心配？」
「ええ、あなた、魔人を倒すんですよね？　そう聞いてますし、その剣を持ってるってことはそういう気もありそうです。ですから友人のよしみとして、あなたの実力を測ってあげようかと」
「！　それは……」
魔人を倒す。確かにその目標を固め、強くなろうとここに来たのが今の自分の状況だ。
魔人の子である白兎にとっては、あまり良い存在ではないだろう。
それだけにガイは迷いを見せるが、白兎が特に深刻な様子でないことに違和感を覚える。よく言葉を噛み締めてみれば、魔人を倒そうと

しているこちらに対して実力を測ってくれるとは、まるでそれを肯定しているかのようだ。
だからこそ、ガイは眉を顰めて尋ねた。
「……魔人を倒すことを、君は是とするのか……？」
「……？　倒せるなら倒してもいいんじゃないですか？」
と、また微妙に感覚がズレているような気がする。
しかし今度は白兎がそのズレを理解したのか、顎に手を当てて考え込むと、
「そうですね……例えば、私があなたの全く見知らぬ他人を、それも悪人を殺すと聞いたら、あなたはどう思います？」
「……止めはしない。むしろ――」
「ええ、まあ。それと同じです。魔人の血が入ってるからといって、魔王や魔人を倒すことに不快感を覚えるとは限りません。まあ、良い魔人もいるので、そういう方は殺さないでほしいとは思いますけど」
なるほど、と理解してしまう。良い魔人というのは分からないが、白兎がこうなのだから、ともすれば人間と同じで、魔人にもそういった差はあるのかもしれない。
「おい、ガイ！　こんな話、真に受けるなよ!?　魔人は人間にとって敵だからな!?　魔王や魔人を倒さないと、人間の未来は――」
「……君の父親である、その、魔人レオンハルトという魔人も、殺さないでほしいということか？」
「駄目駄目！　殺さなきゃ駄目！　そいつ一番ヤバい奴じゃし！」
「……ちょっと黙っててくれ、カオス。どうなんだ？」
騒ぎまくるカオスの言葉を無視し、白兎の言葉を待っていると、すぐにその返答は来た。
「どうも何も……別に倒せるというならいいと思います。死ぬのは嫌ですけど。……ただ、無理だと思いますよ」
と、白兎は真面目な表情で告げる。それはむしろこちらを心配しているかのように、
「パパは滅茶苦茶に強いですからね。先ほどの私の必殺技なんかも、パパにとっては普通の一振りですし、魔人になってから今まで誰にも

負けたことがないとか……正直、同じ魔人でもパパのことを怖がってる人は多いみたいです」
私にとっては優しいパパですけど――と、白兎はそう付け加える。
桁違いの強さを持つ存在が魔人レオンハルトなのだと。
「私に負けるくらいなら、パパに挑むのは止めたほうがいいですよ。普通の魔人くらいなら何とかなるかもしれませんけど、四天王以上の魔人は基本的に魔人の中でも特に怪物で、人類最強レベルの相手でも全く戦いになりません。その中でも最強の存在が、私のパパですので！」
ふふん、とそこで自慢気に胸に手を当てて白兎は言った。
どうやらそんな父親のことが誇らしいようであり、結構ヤバい存在の話をしているというのに、ただの友人の家族自慢にしか聞こえないから困る。
「……そうか。なら……」
「はい。挑んでも構いませんが、強くないと駄目です。ガイさんの方が多分死んじゃいますので、それは嫌です。――ということで私の出番なんですよ！」
ビシッと人差し指をガイに向けて、白兎は言う。
「この私が、あなたの実力を測り、ある程度アドバイスしてあげます！
魔人を倒すために、あなたの剣の師匠として！」
「――それでいいのか魔人の子!?」
「あ、ツッコミ仲間がいますね。これで私は楽が出来ますよ、ふふふ」
「……そもそもそういう話でしたか……？」
窓から身体を乗り出す勢いでツッコむクーベロに、イヴが黒い表情でほくそ笑んでいる。何やら日光が困惑の雰囲気を醸し出している中で、それらの一切を無視してマイペースに白兎は続けた。
「さあ剣を構えてください！　友人同士、剣で語らいましょう！　あ、もちろん斬れるなら斬ってくださいね！　友人に斬られるのはちょっと愉しみです！」
「い、いや……」
子供っぽい純粋な感じでそう言われても困る。友人になら斬られ

ても愉しいっていうのはちょっと何言ってるか分からない。
だが、そうしないと止まってくれないような雰囲気であり、ガイ自身もそれが自分の、白兎の為になるのならと、
「……分かった。なら、せいぜい胸を貸してもらう」
「ふふん。存分に借りるといいですよ！」
白兎が胸を張った。だが窓から見下ろしている魔女がボソリと、
「借りれる胸はないようだが……」
「ぶっ殺しますよ!?　何を小声で馬鹿にしてくれてるんですか!?　耳が良いので聞こえますからね!!　……後、これでも成長してますから！　絶望的ではないです！　ここ１００年で、０．０１センチくらいは大きく……」
胸の事を言われた瞬間にぎゃーぎゃーと騒ぎ始める白兎。いや、正直同じことを頭に浮かべてしまったが、さすがに言葉に出すのは自重した。もうひとりのガイなら口にしていただろう。危なかった。
後、０．０１センチは完全に誤差というか、測り間違えとかだろうな、とそんなことを思っていると、
「……何か言いたげですが、何かあるならどうぞ？」
「……なんでもない」
嫌な殺気を感じたので咄嗟にその考えすらも引っ込める。読心でも出来るのかと聞きたい。そんな相手は魔女だけで十分だ。
「……なら、この怒りも友人にぶつけることにします！」
「それは八つ当たりと言うのではないのか……!?」
と、襲いかかってくる白兎の刀を、ガイは何とか防御しながらツッコミを入れる。
全く戦闘特有の緊迫した空気にはならないまま、ガイは白兎による試しに挑んだのであった。

前触れと予感

「さて、ガイ君達はそろそろ魔女の故郷に到着したころだろうか……」

隠れ里にある一番大きい建物。その上階にある奥の部屋は、この里の長であり、鋼の騎士団の隊長であるロランの執務室だ。

その部屋で今日もロランは、ガイとの決闘による身体の負担を自覚しながらも、己の役目を果たしていた。

体力は低下しているとはいえ、休んでばかりもいられないのだ。何しろ、彼は千を超える隊員達を指揮する鋼の騎士団の隊長であり、里の住人も含めれば数千の人間達の運命を握っている。

幾らここが外界と比べて比較的安全な人里であり、多くの人間が人らしい生活を営んでいるとはいえ、それにはそれ相応の努力と手配、適切な運営が必要である。

生きていく上では住居や食べ物、物資は欠かせず、常にそれらを確保するのに奔走している。

外界で獲得するだけではなく、畑などを作って自給自足を行っているが、それだけでは全ての人間の食料を賄うことは出来ない。足りない分は商会などから買い付けることも多いのだ。

そのためのお金や、取引に使える貴重なアイテムなどを獲得するためにも、鋼の騎士団を動かす必要はある。

ただ彼らとて、戦ってばかりはいられない。彼らにも生活はあるし、休日も必要だ。結婚して家族を持つ者もいる。

そういった者の中には隊を抜ける者もいるが、それを止めることは出来ない。彼らに別の仕事を手配しつつも、新たな隊員達を得て、使い物になるように教育する必要がある。

新人教練に力を入れると同時に、里にいる子供達にも簡単な物事を教えるための日曜学校などを開いてもいる。教師役には里に存在する貴重な識者やＡＬ教の司教、シスター。鋼の騎士団の分隊長達も時折その任を請け負っており、ロラン自身も一年に数回は子供達の前で教鞭を執ることがあった。

実はつい先程も、身体に障らないような仕事としてちょうどいい

と、子供達と触れ合ってきたところだった。
元気に動き、学び、屈託なく笑う子供達を見ると、己の役目に対する責任感と使命を強く自覚する。
生まれた頃から決まっていたお役目。望まない将来ではあったが、だからといって役目を放り出すことは出来なかった。
弱い人間――彼らが人らしく生きるためには、皆で団結し、力を合わせて生き抜いていく必要がある。
その舵取り、正確な判断が求められる長としての役目を担う能力を、自分は持ち合わせているのだ。
彼らが生きるのには、自分のような強い者が必要である。酷い驕りにも聞こえるが、それが現実である。
戦える者がいなければ、この里とて紛れ込んでくる魔物に襲われて壊滅するだけだ。
故に常に戦える者を生み出していかねばならない。自分とて、３０年もすれば戦えなくなるのだ。
その後継者として、子供を作って教育していかねばならないのだが、
……彼がこのまま残ってくれるなら、助かるけどね……。
先日、己を打ち負かしたガイという青年のことを考えて笑みを浮かべる。
今までは自分こそが人間で最強だと信じて疑わなかった。人以外で強い者は数あれど、人であれば自分より強い者はいないと。
だからこそ、役目に関して、自分がやらなければならないという観念に囚われていたものだが、彼という規格外の存在は、その妄執を木っ端微塵に打ち壊した。
故に今はとても清々しい気分である。自分以外にも、あれほどの強さの人間がいたということを、素直に認め、応援したいと思う。
魔剣カオス。魔人や魔王を殺すことの出来る伝説の武器を持ち、魔女の故郷で更に修行し強くなってくれれば、一族の悲願も成し遂げられるかもしれない。
そうなれば、もう戦う人材を捻出することも、外界での探索に苦労

することもない。人々が恐怖することも、苦しむこともない、平和を与えてやれる。こんな山奥で隠れ潜むように暮らす必要もなくなるというものだ。
だからロランは、負けたことを悔しく思うも、ガイという若者を純粋に応援したいと思う。嘘つきであり、捻くれ者の自分でさえも、人類の解放。魔人の打倒は何よりも願うものだ。
それが叶うのならば、それに越したことはない――そのためならば、ロランもガイの為に己の全てを擲つ覚悟だった。
まあ、まだ死ぬつもりはないけど、と内心で茶化すようにそんな決意を、人知れず固めていると、
「――隊長！　報告です！」
「！　何かあったのかい？　そんなに慌てて……」
執務室に、慌てた様子の隊員が入ってきた。
確か外界の監視、情報の獲得に向かわせている隊員で、自分と同じ、隠密行動に長けた者だ。
今までに様々な情報をもたらしてきた彼の慌てぶりに、ロランも嫌な予感を感じ取りながら目を細めて隊員の報告を聞いた。
「……はい、すみません。しかし、まずはこれを見てください。東側に出ていた分隊からの報告書です」
「……確認しよう」
ロランは隊員の手から密書を受け取り、その封を切る。密書と言うほどきちんとしたものではなく、手紙というべきものに近いが、外からの仲間の報告は全てこのようにしてやってくる――ロランはその中身を見て、表情を歪めた。
報告書に書かれていたのは、
「っ……魔軍に、大規模動員の動きあり……その数……正確な数は調査出来ず……」
少しずつ、手紙に目を通していく。
魔軍に動きがあったという報告。それは何よりも重要なものだ。
魔物討伐隊は、その名の通り、魔物を倒し、生きるための糧を得るための組織である。その中でも最強最大と称される自分達であれば、

どのような魔物の群れであろうと討ち果たしてみせるという自負があり、それだけの実績がある。
しかし、魔軍は別だ。
魔軍は普通の魔物とは訳が違う。通常組織だった動きを取らない魔物の中にあって唯一、統制された組織行動を取る最悪の暴力装置こそが、魔軍だ。
魔物兵の強さは人間の戦士の倍以上。作戦行動の際に動く魔軍の最低単位は、魔物隊長が率いる一部隊２００体か、魔物将軍が率いる一個軍２万である。
前者であれば何とか出来なくもないが、魔物隊長は強敵であるし、後者であれば勝ち目はゼロだ。どれだけ高名な冒険者、魔物討伐隊とはいえ、その数は数百程度で、千にも満たない。辛うじて千名の隊員数を誇る自分達でさえ、魔軍の一個軍にすら勝てず、壊滅させられてしまうほどの戦力なのだ。
故に魔軍を見かけたら、真っ先に隠れ逃げることはこの界隈での鉄則だ。
一部隊とはいえ、軍から別れた魔軍の哨戒である可能性もあり、下手に交戦すれば勝ったとしても大軍が押し寄せてくる可能性がある。捕捉されれば一巻の終わりだ。
しかし、大きな軍勢だからこそ、その動きは分かりやすい。
ロランが常にこの辺りの土地一帯に斥候を放っているのも、そういった動きを事前に察知し、可能であれば工作を行うためだ。
このような山奥であれば魔軍も殆ど近づくことはないが、それでも人狩りを趣味とする魔物が来ないとも限らない。故に、軽く姿を見せて別方向に逃走を図るなどして隠れ里から距離を取らせることもある。
とはいえ魔軍が大きく動く時は、向こうも物資の輸送などを行っているのが主なので、下手に刺激さえしなければ襲われることはない。だから今回も、その類かと思ったのだが――最後の数字を見て、ロランは声を震わせた。
「おおよその数として……っ――２０万……!?」

馬鹿な、とロランは自身の顔が青褪めるのを自覚した。
２０万。未だかつて、それだけの大軍が動きを見せたことを、ロランは見たことがない。
いや、それどころか、ここ百年、二百年――先祖が残している記録でも、魔軍が動く時はせいぜい数万の軍勢であり、１０万を越えるような軍勢の報告は皆無だ。
だが今回は、おおよそ確認出来るだけでも、２０万の軍勢が行軍しているという。
しかも、だ。
「真っ直ぐ東に向かってきている……哨戒に出ていた部隊と交戦し、誘導を図ったが、それに乗る気配も無し……だと……!?」
軍勢の位置が示されている場所は、ここより西の土地だ。
つまり、真っ直ぐ東に――こちらに向かってきているという。
「ど、どうするんですか、隊長……!?　もしかして、この場所がバレてるんじゃ……!?」
「っ……」
それはない、と頭の中で思いたいのは山々だが、隊員が言うように、この進路だとバレている可能性が高いと判断してしまう。
６００年近く、魔軍に存在を気取られなかったこの里は、山の奥。その谷間、窪地に作られた秘密の場所であり、普通に山に入っただけでは見つけることは不可能である。
故に魔軍も、この場所には立ち入ることは殆どないのだが、この迷いない動きを見れば、確信出来る――バレていると。
「物資の輸送ではない……報告が確かなら、この動きはどこかに攻め入るためのものだ……！」
魔軍とはいえ、その組織だった動きは人間がやるものと大差ない。
軍を幾つか分けた上で、一定の幅を保って行軍し、異常があれば本隊に知らせる。夜になれば適当な野営地を見つけて布陣し、天幕を張り、炊事の煙を空に浮かべて、夜番の兵を立てた上で眠りにつく。彼らも生きている以上、人間と同じように食事や休息を必要とするのだ。

彼らの上には魔物将軍という大規模な作戦行動を指揮出来る優秀な知恵の回る魔物がいるため、その動きは効率的なものであるのだ。
そして効率的だからこそ、その動きを見れば目的をある程度絞ることが出来る。
２０万もの大軍を動かすということは、それだけの数を動かすに足る目的があるということ。
そしてそんな目的は、一つしか思い浮かばない。
「……直ぐに各分隊長を招集してくれ。緊急の会議を開く」
「はっ、はい！　了解です！」
「後、この事はまだ町の人には伝えないように。箝口令を敷く。パニックになる可能性が高い」
「そうですね……！　そちらも了解しました！」
頼む、と短く告げて、隊員が早足で部屋を退出していくのを見送ると、ロランは一度だけ深く息をつき、目元を手で押さえて引き攣った笑みを浮かべた。
「２０万、か……要所に陣を築いて罠を張って防衛戦を行ったとしても、十中八九――いや、ほぼ勝ち目はない。一個軍であれば将軍を倒してしまえば軍は瓦解するが、相手は少なくとも１０個軍。兵の離散を引き起こすにはその数の魔物将軍を倒さないといけない」
魔物兵が集団行動を取れているのは、魔物隊長、延いては魔物将軍の指揮能力によるものだ。
彼らを倒せば魔物兵の統率は乱れ、軍としての体裁を保てなくなる。
だが、これだけの大軍勢であれば、希望であり絶望でもある推測も立つ。それは、
「２０万の軍勢なら、魔物将軍の上に立つ魔物大将軍か、魔人がいるはずだ……それさえ倒せれば何とか……」
と、口に出してはみたものの、それがどれだけ厳しいことかを、ロランはよく理解している。
「せめて彼がいれば……」
規格外の強さを持つ彼も、今は里にはいない。

呼び戻そうにも魔女の故郷の場所をロランは知らない。聞いても教えてくれなかった。
距離は知っているのでおおよその位置くらいは導き出せなくもないが、それなりに情報に長けたロランでさえ、その存在を知らない魔女の里だ。何か存在を悟らせないだけの仕掛けがあると見ていいだろう。
「自分達だけで何とかするしかないか……」
ロランはやれやれと肩を竦める。とんだ貧乏くじだと。このタイミングの悪さも、作為的なものを感じざるを得ない。
「つい昨日、全力で戦ったばかりだと言うのに……全く、嫌になるな」
しかしその瞳は、諦めのものではなく――意地でも何とかするという強い輝きを秘めていた。

――その戦闘が、経過してしばらく。
「っ、はぁ……はぁ……！」
「……」
ガイと白兎。二人は距離を取ったまま、じっと相手を睨んで動かない。
白兎は真っ直ぐ正眼に構え、微動だにしない中、ガイは腰を落とし、そして肩で息をしていた。
全身からは滝のような汗を流し、呼吸を乱している。
ガイに外傷は一切なく、また攻め立てられている訳でもない。終始、攻めているのはガイで、実際に白兎は自分から攻めに動くことは稀であった。
だが、ガイは彼女に向かって踏み込むことが出来ずにいた。ここまでの攻防は全て、白兎の僅かな攻めから始まっている。
「お、おい！　どうしたんだガイ!?　何もされてねぇのに、そんな息を乱して……魔法でも受けたのか!?」
クーベロが背後、屋敷の窓の方から厳しい声を飛ばしてくる。魔法でも受けたのかと驚愕の様子だ。

ガイとクーベロには実力差がある。クーベロは人間にしてはやる方だが、ガイと比べては赤子と大人。全く歯が立たないレベルだ。故に白兎との戦闘を理解出来ずにいてもしょうがない。
だがしかし――このにらみ合いに限っては、ガイはクーベロとほぼ同様の事を考えていた。
自分は何をされているのか、全く分からない。
白兎はじっとこちらを見ているだけ。赤い瞳で、まっすぐに小揺るぎもせずにこちらを見つめている。
ただそれだけなのに――踏み込む隙が全く見当たらず、ガイは酷い寒気を感じる。
機を見て踏み込もうとは思う。殺されないと宣言されているのだから、踏み込んでも構わないはずだ。
だがいざそれを行おうとすると、
「……」
「っ……ぐあっ……!?」
足を一歩動かしただけで、ガイは猛烈に嫌な予感を感じてその場から飛び退いた。
そして思った感想は――やはり。
勇気を出して一歩踏み込んだことで、打ち込めはしなかったが、得るものは、理解出来るものはあった。それは、
……間合いが、異常に広い……！
ガイが一歩でも距離を詰めた瞬間に、ガイは脳裏に、己が斬られる瞬間を幻視した。
それから理解出来るのは、視えてきたものは、白兎の異常な間合いの広さと隙のなさ。
小柄な彼女の身長は、１４０にも満たない。こちらとの身長差は３０センチ以上あり、その間合いは、相手の刀剣の大きさがあったとしても、手足の長さからガイより劣るはずなのだ。
しかし、白兎の間合いは広い。
ざっと見て――十メートル以上。それ以上近づけば、彼女は踏み込み、剣を抜く。

それはまるで、結界だ。魔法ではなくとも、起きる結果は同じようなもの。
己の間合いに入った全てのものを察知し、瞬時に両断せしめる――不可視の結界。
白兎の周囲にあるのはそれだった。
「……やはり、あなたではこうなりますか」
と、不意に白兎が少し力を抜き、隙を見せた。
同時に口を開き、ガイへと言葉を飛ばす。
それはこうなることを予見していたという言葉だった。
「……こうなる、とは……？」
「あなたに実力があることの証明ですよ。踏み込むことが出来ないのは」
そう言って、白兎は僅かに微笑を浮かべる。だが直ぐに真面目な表情で、
「多少なりとも剣を嗜み、私と戦える程度の実力者であれば、私の間合いと、剣気が感じれるはず。剣の腕の差から、踏み込む隙を見つけられず、また踏み込めば、斬られると幻視してしまう――結果、あなたは動けない」
自明の理なのだ、と白兎は告げる。
まるで教師、剣における師のように、白兎はガイに向かって親切にも解説を行う。
かつて子供の時にも、夜の裏庭で行ったように、白兎はすらすらと高説を述べた。
「これはあなたが、私の剣気を読み取れるだけの強さを持つ証明であり、同時に剣の腕は私に劣ることの証明です。私より強く、あるいは互角であれば踏み込む隙を見つけ出し、あるいは差がありすぎれば、私の気当たりに対する適切な対処が出来ず、ただただ怯えるだけとなる。つまりこれは――」
と、白兎は左手を一本立てて結論を言った。
「あなたの防衛本能、危機的反射が達人の様に、きちんと機能している証拠です」

「……それは、喜んでいいのか……？」
「はい。存分に誇ってください。弱ければ、訳も分からずに突っ込んでやられるだけですが、あなたは踏み込んだ瞬間、斬られることを予知して瞬時に飛び退いた。それは――私の術理に嵌っている証拠なんです！」
ビシッと、左の人差し指をガイに向けて、何故か誇らしげに告げる。
それはガイが予想よりも強く、出来る相手であったからだろうか。彼女はどうにも、そういうのを喜べる相手らしい。
「何度も言いますが、それを察知出来るのはあなたの才能です。相手が次にどんなことをしてくるかが理解出来ているのですからね。ただ、それを対処出来るだけの実力が、まだないだけで」
それは駄目なんじゃないだろうか、とガイは言葉に出さずに心で思う。
そして聞いている内に、更に白兎の強みを理解し、思わず口に出していた。
「……打ち込めないのは、君が眼ではなく、耳で周囲を探っていることとも関係があるだろう。背後だろうと、全く同じ結果になると見えたからな……」
「ほう、そこまで理解りましたか。さすがです」
と、白兎は今度こそ嬉しそうに笑みを浮かべる。軽く左耳を澄ませるように手を開いたままで当て、
「ご存知の通り、私は視覚以外で周囲の情報を得ている。真後ろだろうが暗闇の中だろうが、関係はありません。更には――」
と、今度は白兎は己の腕を指して言う。そこを動かして見せながら、
「私には、人間が動く時に生じる僅かな内部の音――筋肉の脈動や骨が動く音も察知出来る。つまり……あなたが動き出す直前に、私にはあなたがどう動くか、その一瞬先が読めている。それを読んでいることを、あなたは無意識に理解しており、自然と踏み込みを躊躇わせています」
『なんだそのメチャクチャな話は……』

内心でもうひとりのガイが何とも言えない様子で声を漏らすが、ガイも似たような気持ちだった。
なるほど、と思うと同時に、反則的な力だ、と理不尽に思いもする。
相手の動き出しを読めるならば、相手よりも速く行動に移れる。
それは戦闘において、圧倒的なアドバンテージだ。
特に白兎の剣は、速い。こちらが放つ雷撃よりも、その雷撃を、後から斬り裂いてしまうほどに。
「それと――私は踏み込みにも自信があります」
「っ……！」
瞬間、白兎は容易にこちらの懐に飛び込み、実演してみせた。
その動きは軽い。本当に兎が跳躍する時のような軽やかな踏み込みで、彼女は一瞬でその間を詰めてしまった。
一足で距離を詰める歩法。それはガイには理解出来ず、ただただ戸惑うばかりである。
「こっちはちょっとした技術です。力を無駄なく使い、消えるような移動を可能とする。私の間合いは、この一歩の踏み込みも合わせた広さです」
つまり、一歩で踏み込み、斬る。一瞬で行う動作。出来ることがそれだ。
ただ簡単に言っているが、それは達人の所業だ。
その一連の動きは剣士にとっては秘奥に値するもの。彼女はちょっとした技術と言っているが、そんなレベルではない。
常人ではまず不可能。天禀の才とそれに匹敵する努力があって初めて可能となる技術の結晶だ。
だが、白兎は言う。
「せっかくですから、ガイ。あなたにも、指導してあげましょう」
「……マジか」
「ふふん、大マジですよ。死なれては困りますし、強くなってくれるなら私も楽しいです。友人に出し惜しみはしません！」
白兎の方は自分で言うように、楽しそうだが、ガイは思わず頭を抱えてしまいそうな憂いがあった。

魔法の修行に来たというのに、何故か剣の修行もすることになっている。二つ同時はさすがにどうかと思ったが、
「……ここには、魔法の修行を……何やら、禁呪とやらを覚えるために、ダンジョンに潜らねばならないのだが……？」
「なら、そこでやりましょう！　禁呪が眠るダンジョンとか凄くワクワクしますね……！」
目をキラキラとさせて白兎は先程よりもテンションを上げて言う。
家の屋根の上から、呆れるような声色で、
「……白兎さん相手にそれは逆効果ですよ。むしろ、意地でもついていく気になっちゃってますし……」
「久し振りの冒険ですね！　どんなボスが待ち受けているんでしょうか……！」
「……そのようだな」
耳は良い筈なのに聞こえてないのか、白兎はまだ見ぬダンジョンに思いを馳せている。
というか、おそらくモンスターがいるようなダンジョンで、白兎と修行を行いながら進むとか、普通にキツいというか、拷問みたいなものだろう。
口には出さないが、白兎が一番の怪物には違いないのだから。
「ふふ……それはいい。せっかくだから、これを機に私達も修行をしようか」
「えぇ……大丈夫なのかよ……？」
魔女が不意にそんなことを口走る。隣にいたクーベロが困惑するが、魔女は愉快そうな笑みで頷き、視線を外に走らせた。
「ああ。幸いにも、そちらに腕の良い教師がいる」
「……えっ、私ですか？」
虚を突かれたように目を見開いたのは、屋根の上で観察を続けていた白兎の友人、イヴだった。彼女を指して言うCに、クーベロは訝しげに、
「……あの子は……普通の人間に見えるが、どうなんだ？」
「人間には違いないだろうがね。ただ、伝説の魔法使いと付与師の弟

子のようだからね。人間基準だとそれなりの大物ということになるだろう」
「そんなヤバい奴なのか……」
魔女の言葉に、クーベロが恐ろしげな視線をイヴに向ける。
しかし、それを受けたイヴは一瞬表情を歪めた上で、顔を引き攣らせ、
「い、いやいやいや……私、ただの一般人ですから……あんな化け物達と同列に語られても困るだけですからね？」
「見る目がありますね！　イヴさんは凄いんですよ！　私の自慢のお友達です！」
「いやいや、白兎さん……そう言ってくれるのは嬉しいですが、あまり持ち上げられると……」
と、白兎にまで褒められて、イヴは首を振っていたが、不意に動きを止めると、
「……あれ？　でも私、人間基準だとそれなりに出来ますし……かなりの実力者なのでは？」
自問自答をぶつぶつと繰り返すイヴ。そして少し間を置くと、
「……ふふふ、まあ私はそれほどでもありませんよ。少し魔法を嗜んでいるだけの、魔法使いです。ええ。魔物界では、それなりに出来ると自負していますが」
急に得意気な笑みを浮かべてきた。
なんかいきなりキャラが変わったようにも見えるが、ひょっとしたらそれが本来の性格なのかもしれない。人間相手に自信を取り戻したのだろうか。くすくすと笑みを漏らしている。
だがそんな弛緩した空気の中で、しかし、お互いに睨みを利かせあっている両者がいた。
「……おい日光。後で話を聞かせてもらうからな」
「……全てを話すことは出来ません、が……ここに至る経緯の一端であれば話しましょう」
ガイの帯剣である魔剣カオスに、白兎の帯刀である聖刀日光。
かつての仲間である二振りの刀剣がそれだけの言葉を交わすと、今

度こそ、その場の雰囲気は緩んだ。
「さて、そろそろ食事が出来るし、休憩にしたらどうだい？」
「ご飯ですか。いいですね。ガイは何が好きですか？　私はおうどんが好きです」
「……好きな食べ物、か。そうだな、私は――」
「普通に相伴に預かろうとしてますね、白兎さん……」
　魔女がその場を纏めるように、食事の準備が出来たことを知らせる。そうして続々と屋敷の中に人が入ってくる中、ふとクーベロがほっと息をついたように、
「……何にせよ、穏便に話がついたな……そういえば、何となくガイや副隊長は修行相手がいるみたいだが、俺はその間、どうすれば？」
　ガイには白兎。Ｃにはイヴと、一応の修行相手が何となく決まっているような気がしたクーベロは、ふと疑問を口にする。
　カオスでさえ、日光という旧友相手に色々とあるようなのだ。その間、自分は何をしようかと思ったのだが、
「何を言っているんだい？　君にも、相手はいるじゃないか」
「……え？」
　ほらそこに、とクーベロの足元を指差して見せる魔女。
　クーベロが間の抜けた声を出し、その指の先に視線を向かわせると、
「きき！」
「……え、さるぼぼ？　俺の相手？」
「さるぼぼではなく藤吉郎です。私のお友達です」
「あまり舐めないほうがいいよ。そんな見た目でも、彼は使徒だ。主を持たないはぐれ使徒だけどね。だけどその主は魔人史においても極めて強大な存在であるし、相手にはちょうどいいだろう」
「……え、ええ……？」
「きき――！」
　クーベロが白兎や魔女の言葉を聞きながらも藤吉郎という存在を相手に困惑するが、この後、クーベロは藤吉郎相手にそれなりの苦労を強いられることになるのだった。

炎帝

地平線上に蠢くその影は、幾重にも重なる赤や青、緑の集団だ。手が二つに足が二つ。胴体があり、手には武器。一糸乱れぬ動きで列を成しているのは、例外なくそれらの特徴を持つ者だ。

しかしその集団は、例え遠目で見たとしても、断定することは容易い。千年以上前であれば、これは人間の軍隊である可能性もあった。

だが今の時代。人間が国というものを失くし、忘れた今の時代では、答えはただ一つ。

――魔軍。

世界を支配する唯一にして最大の勢力。魔物の王である魔王を頂点に組織される純粋なる暴力装置。

魔王や魔人の命令を受け、その命令を遂行するために存在する彼らは、常に世界各地で組織され、牧場の管理を行っている。今は魔物の黄金時代であり、かつての戦乱の時代とは違う、平和な時代だ。

平時の軍隊というものは、その存在意義を軽く見失う。対抗勢力があるなら抑止力としての存在意義はあるが、その対抗勢力もほぼ存在しない今の時代では、魔軍がそれほど動くことは少ない。誰もが最低限の仕事をこなしながら、好きに暮らしている。

だが、その平野を行く魔軍は、魔王ジルの治世において、実に６００年振りともいえる大規模動員を実現していた。

その目的は単純――敵対勢力の殲滅である。

「いやぁ、さすがにこれだけの数が動くと壮観だなぁ」

「普段は精々、一個軍か二個軍くらいだもんな。いっても三個軍くらいだ」

「だが今回は１０個軍。約２０万だぜ？」

「幾ら何でもやりすぎだよなぁ、たかが人間相手に。愉しめる奴らなんて本当にごく一部だろ。これだと」

日中の行軍をある程度終え、上からの命令で野営の準備を行い始めた魔物兵達は、口々に初めての大規模動員について話題に出す。

魔物とはいえ、その寿命は人間よりも短かったり、長かったりとま

ちまちだ。
だが百年を越えるような寿命の魔物は数少ない。魔物将軍であっても寿命は約１００年だ。
それだけに、彼らにとってもこれだけの数で行軍するのは初めての体験であった。
前時代の魔軍の将兵が見れば、緊張感の無さに呆れ果てるような空間の中で、魔物兵達は平時と同様に同僚と会話に勤しむ。
「何でも、人間の里を包囲して殲滅するんだろ？　半分くらいは後詰で、残り半分は包囲網を形成するための兵員。実際に突撃するのは全体の一割にも満たないってさっき隊長がボヤいてたぜ」
「へ～、そうなのか。それじゃ俺らはきっとやることもねぇな。後で最近出回ってきたテーブルゲームでもして遊ぼうぜ」
「だなぁ……あのアッティラ様のことだ。じわじわと絞め殺すようにゆっくりと攻めるだろうし、作戦自体は長引きそうだ」
「あの方、ねちっこいもんな……結構根に持つタイプだし……その代わり、人間は誰一人として逃さない気なんだろうな」
「この数で包囲すればネズミ一匹逃げ出せないしな。その隠れ里とやらは終わりだろ、普通に」
「人間ってクソ弱えもんなぁ……なんであんなに弱いんだろ。この間なんてちょっと小突いただけで死んじまったしよぉ……加減が難しいっていうか」
「おいおい、気をつけろよ。一応は殺したら駄目ってルールなんだ。不慮の事故とはいえ、やりすぎると上から小言がくるぜ？」
「つっても、苦しめるだけってのが難しくてなぁ……」
「ああいうのにはコツがあるんだ。まぁ、時間もあるし、教えてやるよ」
魔物兵達が極めて平坦な会話を行う。
人間からすれば悪夢のようなやり取りも、彼らにとっては何の変哲もない世間話だ。
自分達の仕事についての愚痴。人間という家畜の世話が難しいと、ただそう言っているだけ。

そこには何の恨みも、負の感情すらも見当たらない。
この時代で生まれ育った魔物である彼らは、極めて自然に、人間を下に見ている。
牧場にいるのは家畜。野良で住んでいるのは野生の畜生。
まるで人間がうしなどの動物に接するかのように、彼らはただ生活の一部として、人間を苦しめている。それだけに、やることは残酷極まりなく、どれだけ泣き喚こうが、魔物兵達は淡々と己の職務を全うする。
だが、やはり中にはそれを愉しんでいる者や、別の感情を抱いている者がいる。
それが、本陣にはいた。
「ひぐ、がっ、あ゛、ぐっ！」
「……」
本陣。魔物将軍らが集まり、これから軽い軍議を行おうというその場において、悲惨な声が鳴り響く。
それらを固唾を呑んで見守る魔物将軍達。その視線の先には、裸のまま痛めつけられる人間と、将軍らよりも大柄な魔物がいた。
「ふふふ……苦しいか？　痛いか？　悲しいか？　お前はこれから死ぬのだぞ？」
「だ、だずげでぇ……じにたぐない……」
この軍を率いる魔物大将軍アッティラ。
彼は捕まえたばかりの人間を自らの手で痛めつけていた。
慣れない痛みに彼が悲痛な声を絞り出した時、アッティラの表情は醜く歪み、喜悦に満ちた声を上げた。
「ははははは！　いいだろう！　死にたくないんだな⁉　――ならば死ね！」
「っ！　……ぁ……っ……」
アッティラが足を上げて、人間の胴体部分を踏み潰す。
すると声にならない声をあげて、人間は死の間際の息を吐き出した。
「さあ、その死の恐怖をゆっくりと味わいながら死ね……！　お前達、

弱い人間はそうやって死ぬ定めにあるのだ……！」
死に際の人間を見下ろして残酷な言葉を送るアッティラ。その声が届いたかどうかは分からないが、その人間の顔は涙と血でグチャグチャで、悲痛に塗れていた。
そこに至るまでのやり口は、日頃から人間を痛めつける業務を監督している魔物将軍らでも、何とも言えない表情を浮かべてしまうほど。
別に人間に同情している訳ではないが、何もそこまでしなくとも、と思ってしまうのだ。
彼らは特に、人間に思うところがある訳ではない。魔物より下の存在である家畜。それ以上でもそれ以下でもないのだ。
だがアッティラは違う。これは魔軍の上層部。彼に近しい位置にいる将軍、隊長らの間では有名な話だ。
「あー、ムカつくな……もう死んでしまった……くそっ!! 脆弱な人間が……！ 何故もっと私に破壊を楽しませない……！」
彼は日課である殺人を犯したばかりだというのに、苛ついたように地団駄を踏む。
人間を殺してはならないというのが、魔王から魔物に与えられた命令だが、魔人や使徒といった特権階級が、突発的に少数の人間を殺す程度ならお目溢しされている。
実情として全く殺していないかどうかはともかく、人間殺しは魔物の間では大っぴらには出来ないものだ。
やるとすれば、殺してもいい野良の人間。だからこそ、人狩りが流行る訳なのだが、アッティラの場合は、野良だろうが牧場の人間だろうが、日課として人間を殺さなければ気がすまない質だ。
彼はどうしようもなく破壊が好きで、特に人間が持つ全てのもの――即ち、文明を破壊することが何よりの喜びだった。
人間が築き上げてきたものは例外なく嫌悪し、破壊する。魔物らしさを尊ぶ一方で、人類文明というのを嫌っていた。
「むしゃくしゃするな……おい、先程捕まえてきた野良の人間をもう少し連れてこい」

「はっ……しかし、もうすぐ軍議のお時間となりますが……？」
真面目な魔物将軍が、軽く伺うようにそんな問いを投げる。
するとアッティラは、魔物将軍に怒りこそしなかったものの、その血走った目を彼に向けた。
魔物将軍がビクリと身体を跳ねさせる中、アッティラは鷹揚に語りだす。
「ふ、ふふふ……貴様は分かっていないな」
「は、はい。それはどういう意味でしょうか……？」
恐る恐る魔物将軍が問い返す。周囲の将軍たちはその話を知っているため、やはり刺激しすぎないようにだんまりを決め込んでいた。
すると、アッティラは声を高くして言う。その声に怒りを滲ませて、
「魔物は、人間を嫌悪し、その全てを破壊し尽くすのが本懐なのだ……!!」
両手を挙げて、演説でもするかのように、彼は今を嘆き、昔を懐かしむ。
「だというのに、今の時代は滅ぼすべき人類も少なく、またその数少ない連中をすり潰すのに許可すら取れない始末……！　ああ、叶うならば、６００年前の国狩りのような最高の破壊を、私は奴らに与えたい……！」
だが、その中にはやはり怒りが滲み出している。
愉しみを得たいという割には、彼はその６００年前を思い出して苛ついているような気がした。
だからこそ、魔物将軍は会話相手の務めとして、響きを返す。
「人間がお嫌いなので……？」
「ははは！　いや、昔は嫌いじゃなかったとも！　国狩りの最中までは、奴らは私に愉しみを与えてくれる掛け替えのない存在だとすら思っていた。だが――」
そこで言葉を区切り、アッティラは強く噛みしめる。
その怒りの原因こそが、６００年前にあるのだと、
「あらゆる人類勢力を、人類文明を根こそぎ破壊し尽くしていた最高

の最中に、私は一人の人間と対峙した……！　忘れもしない憎き出来事……！　偶然見つけた逃走中の人間勢力を追いかけて皆殺しにしてやろうと思った矢先に、その老人は現れ、私に傷をつけて、あろうことか人々を連れて逃げおおせたのだ……！」

今思い出しても腹ただしい！　と、アッティラは同僚の大将軍がよくするように怒る。

彼にとってその出来事は、価値観すら歪めてしまうほどの出来事だったのだ。

「あの愚かな人間が……魔物に虐げられるべき人間が……あろうことか、魔物大将軍である私に反抗し！　あろうことかこの私を敗走させたのだ……！　こんな屈辱的なことがあるか!?」

「そ、それは……」

魔物将軍は絶句する。にわかには信じ難い話だ。

魔物大将軍アッティラは弱くない。当然だが、その強さは魔人級とさえ称えられ、国狩りで成した功績が最も大きいため、魔軍の中では比較的影響力は高いのだ。

魔物にとっては戦争で活躍した英雄のような存在。他の魔物大将軍もそうだが、彼らはそういった畏怖の存在だ。

そんな彼らが人間に負けたというのは、果たして本当の話なのか。鵜呑みにしていいか迷ってしまうほどの話だった。

だがアッティラの言葉は迫真のもので、

「ああ、理解している……！　あの時の私は弱かった……！　弱いのが悪かったのだ……！　あの時の傷の痛みは今でもよく思い出せる……私の身体は傷こそ再生するが、その屈辱は消えてくれない……！」

だから、とアッティラは拳をギリギリと握りしめて言う。

「私は誓ったのだ……！　人間を、今度こそ完膚なきまでに破壊し、もう二度とあのような秩序を乱すようなことはさせないと……！　人間が魔物に逆らうなんてことは、あってはならないのだ……！」

「……だから今回のこの布陣ですか……」

「そうだ！　奴らを真綿で首を絞めて殺すように、じわじわと嬲り殺

すのだ……！　幸いにも、ようやく許可も得た！　ちょっとした条件付きではあるが、それさえ守れば問題にはならない！　許可を得るために必要な仕事もあったが、そちらはイヴァンが行ってくれている！」

そう、何一つ問題はない。

ここ数百年。アッティラは何度も野良の人間を駆逐するように大将軍会議で発言し、魔軍参謀であらせられる魔人レオンハルトにも直訴してきた。

だがその要求は通らず、許可は一切出なかったのだ。

如何にアッティラが大将軍随一の功績を誇る者だとしても、それは自分の要求を通すほどの力ではない。

そもそも魔人は自分達大将軍よりも圧倒的上位であり、彼らが首を横に振れば、こちらの要求が通ることはない。

ましてや相手はあの魔人レオンハルトだ。魔人筆頭にして魔軍参謀。最強の魔人。魔物界の英雄など、様々な異名を持つ魔王の懐刀。

彼の魔軍での影響力は尋常ではない。魔軍では、魔人レオンハルトを英雄として尊敬、畏怖する声も多く、その多くはレオンハルトを信奉している。

7体いる魔物大将軍も、そのうちの5体――カエサルを筆頭として連中は全員レオンハルトの信奉者である。

ゆえに協力者はイヴァンだけ。イヴァンは割と頭がおかしいため、味方としては少し問題があるが、味方を選べるほどの余裕はアッティラにはなかった。

大陸南部を主に担当している大将軍として、南部の大規模牧場を運営している一応の上司、魔人四天王である魔人ケイブリスにも提案してみたが、最初の方は好きにしろという態度であったにも拘わらず、レオンハルトが反対していることを知ると態度が一変し、

『アッティラてめぇ……レオンハルトを怒らせるような真似したら俺がてめぇを殺すからなあああああ!?　肝に銘じとけ!!　この間抜け野郎!!』

――と、そのように怒られてしまい、全く当てにならない。

有名な話ではあるが、ケイブリスは異常な程に魔人レオンハルトを恐れている。魔軍の将兵の間では尊敬されているのとは反対に、魔人の間では近年全く戦うことのない魔人レオンハルトを軽視している者が、極一部だが、いるという噂だが、ケイブリスはその真逆で、一貫してレオンハルトを恐れ、彼に対して忠義を見せることに必死だ。

故に上司であるケイブリスは使えなかった。あれでも一応、魔人四天王最強の噂も高まってきている強大な魔人なのだが……。

しかし、そんな苦節を経て、アッティラは魔人レオンハルトからその許可をもぎ取った。

幾つかの条件や任務は依頼されたが、それを満たすために、イヴァンは極秘の任務に向かっているらしい。

その間に、アッティラは最近になってようやく見つけることが出来た大規模な人里を攻めることにした。

おそらく、一万人以上の人間が住む大規模な隠れ里。そんな大勢の活きの良い人間を破壊出来るなど、なんて幸運なのか。もはや積年の苦労の日々すらも忘れて、レオンハルトや他の大将軍共に感謝すらしたい気持ちだった。条件はあるが、人間一人くらいであればどうでもいい。それさえ兵に厳命しておけばいいのだ。

だがそれらも、これから人間を滅ぼして怒りを消費しきってからである。

それに、一応注意しておかなければならないこともある。

「――はぐむぐ……ふぅ、ごっそさん。悪くない味だったぜ。次はB定食をおかわりだ」

「むぅ、こっちの定石から外れた手は研究しがいがありそうですわね……」

本陣にある円形の机の一角に、魔物将軍らが少し距離を取っている二者がいる。

一人はこの作戦を許可した魔人レオンハルトの使徒であるキャロルであり、作戦の監視として同行している人物である。

彼女は暇なのか、机に将棋盤を広げてうんうんと唸っている。趣味の一つらしく、噂では魔物界一、将棋が強いとか。

そしてもうひとりが――魔人ガルティア。
異常な量の食事を魔物兵に運ばせ、それを次々と平らげていく彼は、ムシ使いという特殊な人間の魔人であり、レオンハルトが派遣した、今回の作戦の見届け役だ。
アッティラが唯一警戒しているそんな二人。彼らにアッティラは声を掛けた。
「ガルティア様にキャロル様……これから軍議を始めますが、あなた方の手を煩わせるつもりはありませんので、ご安心ください」
暗に――〝お前達は余計な事をしてくれるな〟と遠回しにお願いする。
実際、使徒であるキャロルはまだマシだが、魔人であるガルティアに動かれたら人里など一瞬で壊滅してしまう。
破壊の愉しみを奪われてたまるか、と内心で反抗しつつ、あくまでも大将軍として目上に対する穏便な声で告げると、
「ん？　あー、一々言わなくても俺は動く気はないぜ。レオンハルトからは見るだけでいいって言われてるしなー」
「わたくしも、特に動く気はありませんわ。レオンハルト様の命に歯向かうような真似をすれば別ですけど」
「……決して、そのような真似は致しませんとも」
一応、ガルティアとキャロルから動く気はないという言質を頂くが、完全に信用は出来ない。
キャロルの方はこちらが不穏な動きをすれば真っ先に動くだろうし、ガルティアの方も気まぐれな部分があると聞いている。幾らレオンハルトに言われているからといって、動かない保証はないのだ。
そう考えていると、案の定、ガルティアが続けて軽い笑みを浮かべ、
「だが、手こずるようだったら手を貸してやってもいいぜ」
「は……ははは！　ガルティア様も冗談がお上手ですな。この大軍で負けることがあるとでも？」
「いやぁ……どうだかなぁ、人間にも案外やる奴がいなくもないし……レオンハルトが目を掛けてるってことは、案外……」
ガルティアはそこで間を置き、食事を続けながらも何かを考えるよ

うに真顔になる。
だが少しして、再び口を開くと、
「……ま、考えても仕方ねぇ。俺はゆっくり飯でも食ってるから好きにしな」
「わたくしもそろそろお腹が空いてきましたわー。ガルティア様、少し頂いてもよろしいですか？」
「いいぜ。こっちのクリーム金魚シチューがおすすめだ。金魚の出汁が出てて中々味わい深い」
「いただきますわー！」
「は、ははは……ではごゆっくり……」
アッティラは食事をする二体を見て、僅かに顔を引き攣らせる。
……長く愉しむためにゆっくり攻めようと思っていたが、あまり長引くとこっちの食料が無くなるな……。
それなりに多くの食料を運んできたつもりだが、ガルティアがいるとなれば話は変わる。
場合によっては、近くの牧場に兵を送って輸送しなければならないかもな、とアッティラはその懸念事項に息を吐き出すのであった。

「……」
「ん？　どうしたラウネア？　だから食い物を齧って残すのは――って、あ？　それ本当か？」
コクコクと頷くラウネアに、ガルティアは少し考えた末に、隣のキャロルに小声で、
「おいキャロル。ラウネアが言うには……――が近くに来てるらしいぞ」
「……！　マジですの？」
「おお。近くの山にいるらしい。飛んでるとこを見たってよ」
「そうですの……まあ危ないことはないと思いますが……後でお声を掛けないといけませんわね……」
軍議が行われる最中に、ガルティアと小声でやり取りし、キャロル

は一つ用事が出来たとそのことを心に留め置くことにした。

「――それで、あの後はお前もどっかに封じ込められてたのか？」
「ええ。遺跡の奥で宝物のように鎮座されていました。それを彼女が拾い……」
「ふん、なるほどな」
魔法の里の一室で、二振りの剣は久しい再会のやり取りを行っていた。
勝負に一区切りがつき、お互いの持ち主が話をするのに合わせて、彼らも頼んで会話の席を設けてもらったのだ。
だがその空気は、昔のそれとは違い、気まずい雰囲気が流れている。
お互いに何かを感じながらも、それを口に出すことが出来ないでいた。
魔剣カオスも、二人になれば色々と言いたいことがあったはずだが、いざそうなってみれば何と言うべきか、言葉が出てこない。百年という時間は、人外の者達にとっては大したことがなくても、人間の感覚を持つ彼らにとっては長く、ぎこちなさを感じるのに十分な時間だった。
「……しかしこれだけは言っておきます。理解してほしいとは言いませんが……私の信念は、あの時から全く変わっていない。ただ、その過程を見直しただけです」
「……それが魔人に与することだとでも言うつもりか？　そんなのは――」
「ええ。だから理解しなくても構いません。もし立場が逆であったとしたら、私も私の行いを疑問視するでしょうから……」
「……お前、本当に何があった？　何か事情でもあるのか？」
かつての仲間のその言葉に、狂ったようなものは混じっておらず、かつての馬鹿真面目なものを見たカオスは、それだけに日光の言葉の意味を噛み締めて、疑問を投げる。だが、
「……すみません。事情を話すことだけは出来ません」

「……はぁ～～～……そればっかりじゃな。それだと、何を考えてるか全く分からん。今のお前を見たら、他の仲間はどう思うか……」
「理解しています。狂ってると見られても構いません」
ですが、とそれを承知しながらも日光は別のことも口にした。
「ホ・ラガであれば、私の行動を理解出来るかもしれませんね……」
「……あのホモが？　まあ奴はたしかに頭がいいが……」
その理由を考えて、カオスは唸る。だがそこで日光は話を流すように、
「……少し、喋りすぎたかもしれませんね」
「……何なんじゃ全く……」
カオスもそれを理解しながらも、答えが出ないため、止める術を持たない。
ただ、一つだけ言っておくことがあると、
「……言っとくが、儂も変わらんぞ。例え、お前さんが敵だったとしても、儂は魔人を……魔王を殺す。あいつらは、人間の敵だ」
「……ええ、分かっています」
日光もそれに頷く。カオスにも譲れないものがあるのだと理解し、その思いに懐かしいものを感じながら。
そしてその話が終わると、話題は別のものに移った。先程も少し話した、
「……そういえば、他の奴らはどうしてるか知ってるか？　ホ・ラガにブリティシュ……後、カフェも……」
「……ホ・ラガについては、心当たりがあります。ですが、他の二人については……」
「……そうか」
「出来れば、また会いたいものですね」
「ああ、そうだな」
お互いに、無事であるはずがない、という極めて高い可能性を感じながら頷く。
ホ・ラガは日光の話にも出たし、平気だろうが、ブリティシュはそもそも生きているかどうかすら怪しく、カフェについては別の意味で

心配だった。
だがその思いを共有しながらも、日光の方は、それを知る術があることを言わなかった。
彼に聞けば教えてくれるのだろうが、日光はそれを知ることを躊躇してしまっている。
色々と理由をつけて、仲間に会わないようにしているのだ。
道を決めたとはいえ、その姿をかつての仲間に見せたくはなかったから。
だからというわけではないが、日光は話題を持ち主のものに戻した。
「白兎とガイも、どうやら昔からの知り合いのようですね」
「そうみたいじゃな……はぁ、どうやったら魔人の子なんかと知り合うんだ……？　おかげで戦う意志が全然ないようだし……」
「まあ、色々とあるのでしょう。積もる話もあるようですし、しばらく時間を潰しましょうか」
「そうじゃの～……はぁ、これで魔人を殺したくないって言われたら儂はどうすれば……」
そうはならないだろうと思いながらも、日光は微妙にテンション下がり気味のカオスを窘めた。
今頃は、ガイと白兎も、真面目な話し合いなどを行っているのだろうか、と想像しながら。

「――ふふん！　私の勝ちですね！」
「……今のは卑怯だ。また私の心音を聞いただろう？」
「聞こえてしまったものはしょうがないですから！　それとも私に耳を塞げと言うつもりですか？」
「くっ……」
「これで私の２０連勝ですね」
どやぁ、と腰に手を当てて自慢気になる白兎に対し、ガイは眉間に皺を寄せ、屈辱の声を部屋に響かせた。

彼らは今、ベッドの上に胡座をかいて――白兎は正座だが――座りながら、白兎が持ってきた魔物界で流行っているというカードゲームで遊んでいた。
ガイはその手の娯楽に全く縁がなかったため、人間の間でも多少知られているトランプも含めた色んなゲームのルールを教えてもらい、実際に白兎とやってみたのだが、結果は連戦連敗。
ガイが初心者というのもあるが、それ以上に白兎が心理戦に強すぎた。
何かを質問し、それに答えても答えずとも、心音の強さでそれが合っているかどうかを読み取ってくる。生まれ持ったものとはいえ、反則級のやり方を続けられれば、さすがのガイも勝てるはずがない。
だが白兎の方は満足気だ。というのも、
「普段はイヴさんに負け越してますから勝つのは楽しいですね」
「……あの子はそんなに強いのか？」
「ええ、強いですよ。いえ、実力は互角なんですけど、イヴさんは相手の感情や心の中が読めたりするので、私以上にこういったゲームだと有利なんです！　卑怯だと思いませんか！　ガイさんからも今度言ってやってください！」
「――ああ、そうだな。今の君と同じくらいには」
「私はほら、目が見えないというハンデがありますので。イヴさんはそういうの無しに読んでくるからズルいんです」
「……」
目が見えないということを別に自虐的に言うでもなく、茶化すように言う辺り、彼女にとってそれは当たり前なのだろう。
だがそれを言われると、ツッコミ辛いから止めてほしい。当人が気にしていないとはいえ、他人からそれを言うのは難しいというか、どうしても気を揉んでしまい、憚られるものだ。
というか、昔も思ったが、白兎は凄く子供っぽい部分がある。見た目もそうだが、性格も、５００年近く生きているにしては、年頃の純粋な少女のようだ。
血なまぐさい日常を、彼女も見知って、あるいは体験しているはず

なのにこの邪気の無さは、それを子供の頃から日常としている魔人の子であるからだろうか、と複雑に思いもする。
だがそれがガイにとっては接しやすいのも確かであるため、彼女が魔人の子で良かったとも思ってしまうのだ。
『あのイヴって奴、魔女と同じで心読めるのかよ……もしかして、読心する奴って思ったより多いのか……？』
そしてもうひとりの人格は、イヴという白兎の親友の少女の話を聞いて、うんざりしたような様子だ。
確かに、読心をしてくるような相手は少し苦手だ。魔女のこともある。
とはいえ、魔女ほどアクの強い性格はしてないだろうし、意外と仲良くなれたりしないだろうか、とガイは地味に期待する。
そんなことを考えながらも、久し振りに会った旧友相手に、どう話しかけていいか迷いつつも、一応は交流を図ろうと自分から口を開き、
「……それにしても、慣れているな。よくこうやって誰かと遊んでいるのか？」
「そうですね。いつもはイヴさんとか藤吉郎とか、前に一緒に居た戯骸さんとお町さんとかとも遊んだりします。お町さんは、最近ＪＡＰＡＮを行き来するので少し頻度が減ってしまいましたけど……」
「ああ、あの……」
『なんかホモっぽい化け物と、ぼいんぼいんでエロい妖怪だな』
もうひとりの口の悪さに眉を顰めながらも、一応は同意する。確かに、そんな感じの者達だった。
そこまで話した覚えはないが、こうやって言われると懐かしく感じてしまう。
悪意はそこまで無さそうだったし、可能であればあの者達とも再会してみるのも悪くないかもしれない。そう思っていると、白兎は言葉を続け、
「後は、メイドの人達とか……あ、最近は弟や妹とも遊んでます！」
「妹に弟か……って、妹と弟？　まさかそれは……」

何気ない発言に、ガイは二度も確認の言葉を呟いてしまう。
すると白兎も、あ、と一瞬真顔になりながらも、直ぐに咳払いをして、
「こほん……今のは……そうですね。秘密にしておいてくれますか？
本当は言ってはいけないので」
「あ、ああ……構わないが……ということは、君の妹や弟というのも、やはり――」
少し戸惑いながらも質問する。別に言いふらすつもりはないが、気にはなる。
すると白兎はこちらを信頼してくれているのか、あっさりとうなずきを返し、
「はい。皆、魔人の子ですね。母親は違ったりするので、細かい種というか、私のように人間と魔人の子というわけではなくて、それぞれ違ったりしますけど」
と、何気にとんでもないことを普通に教えてくれる。
一応は魔人を倒そうと目標を立てている自分だ。顔は引き攣っていないだろうかと、不安に思いつつも、白兎に震えそうな声で問う。
「そうなのか……皆、良い子なのか？　しかも、どうやら複数いるようだが……？」
「はい！　皆私の自慢の弟、妹達です！　ちょっと寡黙だったり、ちょっと燃えやすかったり、お歌が好きだったり、働かないことを公言してたり、ちょっと太ってて目立ちたがりの食いしん坊だったり、野球ばっかりしてますけど少女漫画が好きだったり、ちょっと仰々しくて世界征服を目指してるけど人助けが趣味だったり、頼めば何でも出来たり……とにかく、皆ちょっとだけ個性的ですけど、〝普通〟の良い子達です！」
「そ……そうか……」
どこが普通なんだ、という言葉をグッと飲み込んで頷く。
凄く不安になる。前半はともかく、後半になってテンションが上がるにつれて、情報量が跳ね上がった。
この分だと、前半部分も、本当は色んな部分を省いて説明している

のかもしれない。
『……というか、白兎がちょっと個性的って言うことはだな……』
言うな。考えないようにしていたというのに。
そもそも全く普通でもない個性的な白兎が、〝ちょっと個性的〟と言う時点で、とんでもない変人集団であることは確定しているような気がする――という現実を、もうひとりのガイは容赦なく心の中でガイに叩きつけた。
ガイの頭の中には、白兎に似た男女にもの凄く濃いキャラ付けをしたような想像が広がっているが、母親が違うと言っていたし、そうとも限らないのが何とも言えない。
「機会があれば紹介しますね！」
「あ、ああ……そうだな……」
その機会が来ないことを願って、ガイは修行前の時間を旧友との交流に使った。

大陸東部にあるとある山脈。
北から南に掛けて大陸東部を東と西に分けるように連なるその山脈は、大陸全体で見てもそれなりに巨大な山脈だった。
標高も翔竜山程ではないが高く、山頂付近には雪が降り積もり、周囲の地形が確認出来るほど、遠くまで見渡せるようになっている。
当然だが、今の時代において態々山登りをするような人間はいない。
冒険者であれば可能性はあるが、彼らが登るのは比較的標高が低い山で、しかも登頂を目指すのではなく、その道中にある洞窟などのダンジョンが目的だ。
翔竜山のような高名な山でもなければ、危険で旨味の少ない、言ってしまえば娯楽か修行の為にしか人は登らない。
魔物であっても、登頂するものは空を飛べる者か、そもそもそこに住み着いている魔物だけだ。
だがそんな山の頂上に、今は人影があった。

「……あれが人里か……」
発した声は人のもの。故にそこにいるのは、少なくとも知能ある存在。
だが、人間であるかどうかは怪しかった。
その男の格好は、全身黒尽くめで、顔も黒いマスクで隠し、目元だけを見せているような異質な状態。赤く鋭い瞳が覗いていることから、やはり顔立ちも人のものであることは確かだろう。腰元に刀を差していることから、修行にやってきた剣士である可能性はある。
だが人間であれば――周囲の雪や氷を溶かし尽くすほどの炎を身に纏いはしないだろうし、頭部に角も生えていなければ、背中に羽も生えていない。
頂上付近に住み着く凶暴な魔物が怯えるほどの威圧感を発しもしないだろう。
故に、山の麓を見下ろしている彼は、人ではない。
ではその正体は何なのか――その答えは、傍らに駆け寄ってきた存在が口にした。
「ええっと……そろそろ満足しましたか～、カイゼル様？」
人外の男――カイゼルと呼ばれた人物の背に近づいたのは、赤いフードに不気味なデザインの仮面を身に着けた女性の声だ。
彼女の名は火炎書士。魔人ラ・ハウゼルの使徒であり、最も臆病な使徒を自称する慎重派でちょっと個性的な使徒である。
彼女は今、主のハウゼルではなく、しかしそれでいて、それに近いくらい大事な存在のお目付け役として来ていた。
それも彼がどうしても行こうとするからである。火炎書士としては今直ぐ帰りたい。主の方はともかく、他の人に怒られる可能性だってあるのだ。
だからそろそろ満足してくれないかな、と期待薄ながらも問いかける。するとやはり、
「……馬鹿野郎！　せっかく親父やゴリラに怒られることを覚悟してここまで来たってのに、手ぶらで帰れるか!!」
くわっ、とその鋭い目を見開いて声を荒げるカイゼルという名の人

外。
　その感情が僅かに高ぶると、その身に纏う炎も比例して大きく燃え盛る。
　一応同じ炎属性な存在として熱くは感じないが、その返答にげんなりとして火炎書士は肩を落とした。一応言っておこうと、
「……なら一ついいですか？　言い難いんですけど……」
「……なんだ？　言っておくが、俺様はまだ帰らねぇ。せっかく人里を見つけ――」
「――人里は反対側ですよ？　あれは魔軍の陣ですね。何をどうしたら見間違えるんですか？」
「……」
　火炎書士のその指摘に、カイゼルはすっと後ろを向いて確認した。
　すると確かに、目当ての人里が山の谷間、外部からは見えない位置に見えている。
　その場に何とも言えない雰囲気が流れる中、カイゼルは火炎書士から顔を見せないように腕を組んで胸を張ると、
「……も、もちろん俺様は最初から分かってたぜ!!　今のは火炎書士、お前を試しただけだ！　お前がちゃんと人里がどれか理解しているかとな!!」
「……そうですかー」
　清々しいくらいに震え声で強がるカイゼルに、火炎書士は敢えて何も言わない。微妙に残念なとこがあるのが、らしいな、と思いつつうなずき、火炎書士は話を戻す。
「まあ、あっちも見てたなら分かると思いますけど、今は魔軍が来てる……というか、ひょっとしなくてもあの人里に襲撃をかけようとしてるみたいですし、今は止めたほうがいいなって私は思うんですけど……？」
「あ？　なんで止めないといけねぇ？」
「あれ、多分１０万か、下手したら２０万くらいいますし、確実に助かりませんよ、あの人里。カイゼル様も危ないですし……」
　そう言って止めるように進言しようとしたのだが、カイゼルにとっ

て、その言葉は逆効果だった。
「ああ!? 俺様を誰だと思ってやがる!? 危険だろうが行くに決まってんだろうが!! 魔物兵のたかだか２０万程度、俺様一人で燃やし尽くしてやる!! もしくは斬り殺すでも可!!」
「えぇ……なんで敵対する気満々……? いやまあ、そりゃ戦闘的な意味で危なくはないかもしれませんけどね……あまり人目につくのはよくないというか、そもそも、白兎様を追いかけに来たのでは? 城を出る前に、その友人とやらを確かめるとか言ってたような……?」
「白兎姉も大事だが、そっちは後だ! 先に人里で用事を済ませる!! 人里が潰されちまってからだと遅いし、ルイゼルに先を越される訳にはいかねぇからな!!」
相当な自信家なのか、危険だろうが全く臆することなく、二十万の大軍を一人で倒すと拳を握って豪語するカイゼルだが、火炎書士としては頭を抱えてしまう言動と行動だ。
「そのルイゼル様みたいに、もっと安全で、レオンハルト様の影響下にある場所にした方が私的にはほっとするんですけどねー……ほら、カイゼル様もカラーの森行きません? 人間よりも強くて可愛い女の子がいっぱいですよ?」
「ぐ……確かに……そう言われればそうだ……」
切り口を変えて場所の変更を促してみると、先程までの説得よりは効果があった。カイゼルも考えるような素振りを一瞬見せる。
だがしかし、直ぐに首を振ると、
「いや、それはやっぱ出来ねぇ……! あそこはアルベルトの兄貴がいるし、何よりルイゼルの奴がいる! 前に熱くなって危うく火事になるとこだったし、兄貴に迷惑を掛けることは出来ねぇからな……!」
「あー、そういえばそんなこともありましたね。でもカイゼル様もかなり謝って、向こうも許してくれてましたし、別に構わないのでは?」
火炎書士もその時のことを思い出しながら言う。別に行っても構わないのでは? と。その二人がいるなら、カイゼルが熱くなっても

鎮火出来る。なのでそれがいい。というか火炎書士的にはそうしてほしい。気を揉む必要が殆ど無くなるからだ。
しかし、それでもなおカイゼルは首を横に振り、
「駄目だ!!　俺は森と相性が悪い！　いや、ある意味良いんだが、燃やしちまうかもしれないって考えると気が気じゃねぇし、何よりルイゼルが何かするってことは、間違いなく俺様は熱くなっちまう……！　あいつは……！」
ぐっ、と何かを堪えるようにカイゼルが両の拳をぎりぎりと握りしめる。
炎が吹き出て、再び周囲の温度が上がっていくのも、そのカイゼルの心情を表しているといっていい。それは凄まじいものだ。
だが火炎書士は、カイゼルが抱えているそれを知っているため、そのカイゼルの怒っているような声を聞いても、呆れることしか出来ない。
このカイゼルは、色んな意味で変人で、主に似ているのだ。
この直情的な部分とか、微妙に馬鹿なところは、どちらかというと、主の片割れに似ているのだが、
「……よし、やっぱりあそこに行くぞ！　戦いが始まるってんなら好都合だ!!」
「え、ええ!?　本当に行くんですか!?　やめましょうよ!?」
「クハハハハ！　安心しろ火炎書士！　俺様が出ることはねぇ！　あくまでも、探すだけだ！　俺様の求めるものをな！」
そうしてカイゼルが豪快に笑うと、火炎書士の後ろ首を掴んで宙に浮き上がる。そのまま飛んで行こうというのだ。
「もたもたしてると瞬間移動してゴリラが俺を捕まえにくるだろうからな！　さっさと行って良いポジション取んぞ！」
「あーもう！　たまには言うこと聞いてくださいよ～～～!!」
山々に、火炎書士の叫ぶような声が木霊する。
やはり使徒が――〝魔人〟に言うことを聞かせるのは厳しいのだろうかと、教育の仕方を悩みながら、彼女はカイゼルに連れられて麓に降りていった。

禁呪

ガイ達が魔法の里に到着し、白兎達と再会した次の日。
彼らは魔女の案内で早速、魔法の里の地下にある書庫迷宮の攻略を開始した。
「は～……地下にこんな迷宮があるとは、たまげたな……」
その迷宮の感想を率直に、魔物を倒し終わって武器を収めながらクーベロが表す。
見上げる視線は周囲の本棚。大量の本が詰まっているそれらの列だ。
どこを見ても本がまず目に入るその迷宮は、確かに他の者達にとっても珍しいものである。
「本が沢山ありますね！　これ、全部魔法の本なんですか!?」
「いえ、そうじゃないみたいですね、白兎さん。普通の本もあるみたいですよ」
「きき！」
文字を読むことが出来ない白兎がそう問うと、慣れているのかすぐにイヴが周囲を見て答える。すると続けて補足が横からきた。
「ふふ、ここにあるのはこの魔法の里が出来てから収集した本の数々。その中には魔法の本だけでなく、学術書から伝記、小説、絵本など、様々な種類の本だね」
気に入ったものがあれば持っていっても構わないよ、とそう口端を薄く歪めるような笑みで告げたのはこの里の長であるCだ。
彼女が禁書とやらがある最深部までの案内役。ゆえに彼女が先頭を行き、皆を導いている。
そしてこの書庫の持ち主でもある彼女の許可を得たことで、何となく道すがらに本を片手に取ってみる一行だが、
「本ねぇ。俺、本ってあんま読んだことねぇんだが……って、なんだこれ？」
クーベロが手にとった本を開いて、頭に疑問符を浮かべる。別の本を手にとったイヴが、その疑問の意味を答えた。

「これは……これでは、読めないですね。文字が今のものとは違います」
「今のものとは……ってことは、昔の文字なのかよ!?」
クーベロが驚き、昔という言葉に反応した白兎の得物、聖刀日光が本を見て、
「……相当昔のようですね。少なくとも、私の生きていた時代と今の文字は変わりないようです」
「古代文字って奴か？　って、それよりも――」
日光の言葉にかつての冒険者時代の癖からか、同じく周囲を観察して答える魔剣カオスは、周囲の本などよりも個人的に気になっていることを言おうとして、しかしその言葉を先に持ち主であるガイが発した。それは、
「……なぜ、白兎達まで……」
「それ！　ほんとそれ！　なんでお前らまで付いてきてるん!?」
「時間差ツッコミですか。あまり遅いと効果が薄いので、もう少し早く言うべきでしょう」
「きき……」
イヴの言葉を聞いて、肩に乗る藤吉郎が〝ツッコミ評論家みたいになってる……〟と、イヴのことをそう表すが、長い付き合いの白兎と、心が読めるイヴ以外には伝わらない。
だがその代わりに答えとなる言葉を白兎が口にした。首を傾げ、
「……？　普通、友人と久し振りに再会したらダンジョンの一つや二つくらい同行しますよね？　一緒に冒険してみたかったですし」
「いやいやいや、お前さん魔人の子じゃろう!!　そんでこれ！　魔人を殺すための冒険なんだが、それでいいのか!?」
魔人を倒すための戦力強化――ガイが強くなるための冒険に同行してくる白兎一行に、敵だという認識を未だ持ちながら、正気かと問う。
一方でガイの方は疑問は抱いているが、付いてきている事自体に不満はないようで、それを静観していた。
すると白兎は昨日と同じ言葉で、

「……昨日も言いましたが、別に魔人自体にどうこうって言うのは特にないので。殺せるかどうかはさておき、パパと親交のある魔人さえ無事ならそれで構いません」
薄情――とは一概に言い切れない言葉を皆に聞こえるように告げる。
魔人に仲間意識というものがあるかどうかは、この場にいる者達には分からない。が、少なくとも魔人の血が混じっている白兎にとって、同族というものに拘りは別にないようだった。
藤吉郎などは、きー、と鳴きながら、やはりイヴにしか分からない言葉で、〝同族意識くらいは無くはないっすけど、そうであっても魔人同士の殺し合いとか日常茶飯事っすからね！　自分の主も、昔はよく――〟と、使徒としての意見と、軽い体験談を聞かせてみせる。イヴにしか伝わらないが、イヴだけは微妙に見識を広めており、なるほど……、と僅かに感心の声を上げていた。
他の皆も白兎の言葉に、そういうものか、と程度の差はあれ納得する。カオスなどは理解はしても、未だ拒否反応があるようだったが、肝心のガイが不満を漏らすどころか、受け入れる姿勢を取っているため、唸ることしかできない。カオス一人では何も出来ないのだ。
「そんなことより……この魔女の里はどれくらい昔からあったんですか？　かなり風化してるようにも見えますけど」
「おそらく、千年以上は前じゃないですかね。城や〝先生〟の蔵書に、同じ文字で書かれた本があるのを見たことがあります」
白兎の質問に、イヴが自身の見解を口にする。すると魔女は笑みを深くして、帽子の縁を掴んで目元を隠すと、
「ふふふ……まあ、そんなところだとも。古代文字はかつて、人類圏を支配したＪＡＰＡＮの藤原家が台頭する以前に使われていた文字だ。つまり、少なくともそれよりも古い歴史があると、今は答えておこうか」
「引っかかる答えですね……」
魔女の煙りに巻くような答えにイヴが胡乱な視線を魔女に向ける。
白兎やイヴにとっては、その時代を知らないので読めはしないもの

の、知っていることであるため、そこまで驚きはない。
だが、ガイ一行にしてみればそれは失われた歴史の一端であった。
クーベロやガイが口々に、
「そういや、隊長からちょろっとだけ聞いたことがあるな……なんでも、大昔は人間が世界の半分を生活圏にしていたとかなんとか……あれ、やっぱ本当の話なのか？」
「……俄には信じられない話だ」
そう言うと、僅かに世代が離れているカオスや日光も、
「……ふん。つまり、結局は魔人が今の人間を地獄に落とし、今なお苦しめてるってことじゃろ」
「……そういう時代も、あったんでしょうね」
かつて世界を旅した偉大なる冒険者である二人も、生まれたのは僅か百年前に過ぎない。
人類史や世界史からすれば、彼らの活躍でさえもほんの少し前の出来事なのだ。
それに、その頃と今は何も変わっていない。百年経とうが、世界は地獄のまま一向に変わらない。
故に彼らはかつてあったという、人類の多くが国というものに属して生きていた時代に想いを馳せる。
だがそれも、その頃を知る魔女に言わせれば、
「……ふふ、とはいえ、記録を見る限りは、当時もそれなりの苦労をしていたようだがね。戦乱の時代、と言うべきかな。戦争が絶えなかった時代らしいが……」
「……それでも今よりはマシじゃろ」
「さて……これぱっかりは、当時を知る人間にでも聞いてみないと分からないだろうがね」
暗に、自分では窺いしれない、と苦笑して肩を竦めてみせる魔女。
それについての記録も、ここの書庫には存在するのだが、彼らにそれを知る術はない。白兎やイヴでさえも、その頃の知識は、聞きかじった程度のものだ。
藤原家征伐戦争や、死滅戦争といった有名であるらしい戦争につい

ても、起こった主な出来事や大まかな概要くらいなら知っているが、詳しく知るのはやはり当時を生きた存在だけだろう。本当の意味で彼らにはそれを知ることは出来ない。
何気に、この中で唯一古代文字が読める藤吉郎が、イヴの肩の上で古代の本を見て、ふむふむ、と唸ったり、〝懐かしいっすね。この頃はザビエル様もどったんばったんと大はしゃぎで――あ、ここの記述、間違ってるっす〟などと懐かしみ、間違っている記述を見つけたりとしているが、やはり彼の言葉は古代文字以上に理解するのが難しいため、真相を明らかにするのは厳しかった。
イヴだけが精々、眉を顰めているくらいである。断片的に見える心の声に、興味深いものが見えるため、先程から何とも言えない表情を続けていた。
「――と、そうしているうちに……着いたよ」
「お……」
「っ……これは……」
魔女が足を止めると、他の者達も立ち止まる。
そしてそこにあった大きめの扉を見上げ、そして中から感じる嫌な空気にまともな者ほど気分を悪くした。
「明らかにヤバそうな気配がしますね！　大丈夫ですかイヴさん！　藤吉郎！」
「なんでそんなに嬉しそうなんですか……私は、ちょっとキツいですね……こういう精神的な負荷にはあまり強くないですから……知っての通り、効きすぎるので……」
「きき！」
顔を青くして軽く額を手で押さえるイヴ。精神感応系の特殊な力を持つイヴは、この手の精神負荷も必要以上に読み取ることが出来るので、この手のものは苦手だった。
白兎や藤吉郎は割と平気そうである。やはり魔人に連なる者達はそれなりに耐性がある。近づいただけでどうにはなりはしないだろう。
「ふふ、耐性がないものはこれ以上は近づかない方がいいだろうね。

私でも、禁呪を目にするのは気分を害するくらいだ」
「うぷっ……気持ち悪い……ほんとに、こんなところに入んのか、ガイ……」
魔女は言わずもがなだが、禁呪どころか魔法や瘴気に全くの耐性がないクーベロは、蹲ることこそなかったが、口元を押さえて気分悪そうにする。
だがやはりガイの方は、
「……何ともないが……」
「儂のいた遺跡と似てるが……また別物じゃな」
「では、そちらの方にも耐性があるようですね」
普段どおりの様子でケロッとしているガイに、カオスと日光が見解を話す。魔女の見立通り、ガイにはこの手の精神汚染に耐性があるようだった。
「……だが、どうすればいいんだ？　禁呪の習得など……」
「なに、普通の魔法と変わらないさ。封印を解くから中に入って、適当に呪文を覚えてくればいい。その辺りは教える必要はないだろう？」
「そうだが……」
そう言って軽く腕を振り、扉に刻まれていた魔法陣を消してしまう魔女。
ガイは魔法の習得の際のやり方や気をつけるべきことなどは、カラーの里で魔法の師匠であるミストラルに叩き込まれている。今更意識することもなく、魔法を覚えることは難しいことではない。
とはいえ、今までと勝手が違うため、二の足を踏んでしまう。特に内心では、
『なんかヤバそうだな……おい、やっぱ止めて帰らないか？』
ヤバそうな気配を感じて渋っているもうひとりのガイの声が届く。
気持ちは分かるが、ここまで来て帰る訳にはいかないというのもある。
だが自分の身の安全が大事なのも確かなので、魔女の言う通り、ダメそうだったら直ぐに止めて帰ろうと思いながら、ガイは皆を置いて扉の先に進んだ。

するとそこにあったのは――
「……？　なんだ……薄暗くてよく――」
『おい、あそこになんかあるぞ！』
今までも決して明るい方ではなかったが、そこは更に薄暗い。
故にガイは最初、それに気づくことが出来ず、もうひとりの声でそれに気づいた。
部屋の、おそらく中央。そこにある見台に、一冊の本が置いてあった。
「どう見てもこれだな……」
『気持ち悪いデザインだな……』
軽くげんなりとしながらも近づく。見台に置かれていた一冊の本は、普通の本には見えない禍々しいデザインをしていた。
ごわごわとした装丁で、何かの皮や毛が使われているのだろうか。生々しい触感で、瘴気を放っているその本は、部屋の外に届いていた瘴気の発生源に間違いなく、一目でヤバい代物だと分かるものだ。
たとえ魔法の素人だろうと、これを見れば直ぐに踵を返して立ち去るだろう。それが賢明だ。
だというのに、ガイはそれに近づいてしまっている。不思議なことに平気ではあるのだが、さすがに本に触れてみれば、
「っ……なるほど……凄い力を感じるな……」
『大丈夫……か？　ははは、さすがは俺だ。それに、これなら――』
もうひとりの言葉に同意せざるを得ない。感じたものは同じだったからだ。
この禁呪の力があれば、魔人にも届きえるのではないかと、そう思わせてしまうほどの魔力を、本や呪文自体からも感じられる。
ゆっくりと本を開いてみると、呪文は幾つか記されているようであった。
つまり、それだけの数の禁呪が存在するということである。捲って幾つか確認していると、
『ん？　なんか剣技まで載ってないか？』
「……本当だな。これは……いや、魔法剣技……？」

中には、禁呪と謳いながらも、剣の必殺技のようなことが書かれているページもある。
どうやら禁呪を使用した上で、使うことを想定したもののようだ。
それを見るに、この禁呪を開発した――もしくは発見し、使用したか、とにかくこれを書いた人物は、ガイのような魔法剣士であったことが分かる。
「禁技――〝ラグナロク〟、か……」
『禁呪〝ハルマゲドン〟……〝アポカリプス〟……〝ディエスイレ〟……どれもヤバそうなことしか書いてないな。本当にこんなのが魔法で出来んのか？』
確かに、ここまで来てなんだが、微妙に疑わしくなってきた。
それも、記載されている禁呪についての説明が滅茶苦茶過ぎて、いまいち信用しきれない。
極め尽くせば、地上にいる全ての生物を滅することも不可能ではないとか、魔王に匹敵する身体能力を得るとか、色んなことが書いてあるのだが、幾ら禁呪とはいえ、魔法でこんなことが出来れば何も苦労はしないような気もしてしまう。
しかもこの本の著者は、どうにもこの禁呪とやらを使用したことがないか、もしくは極めてはいないのか、どれも曖昧な表現に留まっていることが、胡散臭さを加速させている。
だからだろう。ガイは甘く見ていた。
軽く呪文を読み進め、その一説を呟き、魔力を集中してみると――
「っ……く……あっ……!?」
『あ？　何をお前いきなり――あ痛たたたたたたっ!!　なんだ、これっ……!　おいやめろ馬鹿!!　頭痛い！　いや、全身痛い！』
瞬間、その負荷が――分かれて来た。
禁呪を使った際の代償。精神が崩壊してしまうほどの負荷。
それは不完全な形で、ガイに襲いかかる。
使用者一人の精神を崩壊させる禁呪の負荷は、二つの精神を持つ者には完全に作用せず、その負荷を軽減した。
完全にない訳ではない。

軽減ではあるが、それは内側にいる方が僅かに比率として多めに負荷が掛かってしまう。

だが、それでもその精神への痛みは、十分、実用に耐えるうものであり、

「……この、力は……！」

ガイの力を――文字通り、一変させるものであった。

氷の女王

調度が適度に保たれ、中央に１０人ほどが掛けることの出来る長テーブルがあるその部屋では、一つ以外の全ての席が埋まり、異常な緊迫感の中、会議が開かれていた。

「――斥候が持ち帰った情報によると、やはり数は１０個軍、約２０万の軍勢であり、これを率いているのはおそらく魔物将軍の上位種、魔物大将軍であり、その中でも大陸南部を管轄するとされる大将軍、アッティラが指揮していると思われます。……更には、まだ未確定の情報ではありますが、魔人がいる可能性も高いと……」

「大将軍だけでもヤバいってのに、魔人だと……!?」

「そもそも、二十万なんて勝ち目がない……どうすれば……」

１人がその場で立ち上がり、９人が席についたまま１人の説明を聞く。彼らは皆、人間ではあるが、普通の人間よりは明らかに体格が良かったり、顔つきが違ったり、只者ではない雰囲気を醸し出していた。

それもそのはず、彼らは魔物討伐隊の中で最も名の知れた鋼の騎士団、その１０個の部隊を率いる分隊長達だ。

隊員数千を越える鋼の騎士団は、隊員達を１０個の部隊に分けて、それを分隊長達が指揮している。百名の部下を分隊長が、その分隊長達を、隊長であるロランが率いて、副隊長である未来視の魔女がそれを補佐するといった、指揮系統である。

当然、その誰もが歴戦の強者であり、並の人間では束になっても敵わない高レベルの戦士達だ。

だが、どんな魔物の群れに遭遇しても冷静に対処してきた彼らの顔も、今は青褪め、酷い動揺が広がっている。不在の未来視の魔女に代わって現状の説明をしている分隊長も、冷静で動じていないように見えるのは言葉だけであり、報告書を持っていない方の左手は時折震えていた。

だがそれも無理からぬこと。幾ら鋼の騎士団が歴戦の魔物討伐隊だとは言っても、魔軍――それも二十万の大軍勢が押し寄せていると聞いては紛れもなく、〝死〟を覚悟しなければならない。

魔軍を相手にすること自体が基本的に避けられ、やむを得ずに相手にする場合も一部隊まで。一個軍を相手にすることもありえないとされているのだ。
当然だが、彼らにこんな経験は未だかつてない。戦闘は幾度も重ねてきたが、戦争を経験したことのある者はいないのだ。
その言葉すらも、今は失われ、古い書物や伝記小説でしか聞いたことのない事態が、自分たちの身に降りかかろうとしている。冷静で居られるはずもない。
「や、やっぱり、今直ぐ逃げよう……！　二十万なんて戦い様がない！」
「どうやってだ⁉　住人だっているんだぞ⁉　彼らを連れて、包囲網を抜け出すことは不可能だ！　騎士団総勢だけで行っても無理だというのに！」
「な、なら北に……山間部を抜けて逃げるルートを模索するのは？」
鋼の騎士団の本拠地でもあるこの隠れ里の人口は、一万人を超える。
当然だが彼らを見捨てることなど出来ないが、彼らを連れて魔軍の包囲網を突破することは不可能だと分隊長の1人が声を荒げて意見した。
比較的落ち着いている分隊長が北側に逃げるのはどうかと意見するも、少し考えた末に他の分隊長から、
「……難しいだろう。この周辺はともかく、山脈の北側は基本手つかずだ。道が険しいのは言わずもがな、魔物だって多い」
「そもそも仮に北の山脈から西側や東側に逃れることが出来たとして、その後はどうする⁉　そこいらにだって魔物はいるし、一万人で移動すれば目立つ！　住民を守り切ることは不可能だぞ⁉」
「仮に犠牲を出しながら何処かに逃げることが出来たとして……他の里に受け入れて貰えるはずもない……どこも、自分達が生きるだけで手一杯だからな……」
そんな反対意見が口々に上がってくる。
彼らの意見は冷静で的確なものではあった。騎士団の隊員達であ

ればともかく、普段は平穏な生活を送り、戦闘や行軍の訓練を受けているでもない住人達は、そもそも険しい山道を行くことすら難しいだろうし、それが出来たとしても魔物の問題があり、それをクリアしてもまた次の問題がある。故にその方策は使えない。更には、斥候からの報告書を手にしている分隊長からも、

「いや……そもそも、魔軍は山の方にも軍を派遣しているようだ。奴ら、数に物を言わせて山狩りでもする気なんだろう。完全に場所は割れているし、逃げ出すのは困難だ……斥候も、帰ってきたのは数名だけで、その殆どは魔軍に捕まったらしい」

「そんな……」

「っ、ならどうすればいいんだ!? このままじゃ――」

血の滲んだ報告書を片手に手を震わせる分隊長に、他の者達も絶望する。

逃げることは困難。かといって、戦っても死ぬだけ。

八方塞がりともいえる事態に、歴戦の分隊長達も活路を見いだせず、やはり死を覚悟せざるを得ない。

いや、魔軍の所業を考えると、死ぬことが出来るだけでも幸運かもしれないのだ。大きな組織なだけに、情報もそれなりに仕入れている彼らは、人間牧場でどのようなことが行われているかを知っている。

耳にするのも悍ましい、残酷な責め苦の数々。魔軍に捕まれば、まず間違いなくそれを実際に体験することになるのだ。

「お、俺らは死ぬのか……? いや、死ねるのか……!? このままだと俺達も捕まって……!」

「し、しかも南の牧場のアッティラだろ!? 積極的に人を狩ってるところを目撃されてるっていう……!」

「っ、まだそうなると決まったわけじゃねぇ……! なにか、なにか助かる道が……!」

普段は厳かな雰囲気の会議の場も、今は怒声と悲嘆に満ちた声が漏れる場となっている。

だがそんな中、唯一冷静で、誰もが期待を掛ける存在が、席の上座にいた。

「……皆、少し落ち着こうか」
「ロラン隊長……！　しかし、このままでは……！」
鋼の騎士団の隊長、〝鋼の騎士〟の異名を継ぐロラン。
新入りであるガイに負けたとはいえ、人類最強の一角として、隊員達から尊敬と期待を受ける彼が声を発したことで、視線が集中する。
次の言葉を待ちきれずに動揺している分隊長に対して、ロランは真面目な顔で頷くと、
「まあ、このままでは不味いね」
「そうです！　だから――」
「だが……あくまでも、このままでは、だ。そこに至るまでの時間はまだある」
「っ……それは……いや……ですが……」
「だから少し落ち着こうか。そうやって慌てていても、事態は好転しない。いつも言っていることだと思うけどね？」
そう言うと、今度こそ会議場は静かとなった。
急な事態に見舞われることは、魔物討伐隊として生きている以上――否、今の世界で人間として生きている以上はよくあることだ。
ゆえに生き残るためには、慌てず慎重に、冷静で的確な対処を選び続ける必要がある。
それが今まで出来ていたからこそ、６００年間もここは生き残ることが出来たのだ。
故にその意志を継ぐロランも、教えに則って極めて冷静にいるようにと努める。
完全に普段どおり、という訳にも行かないが、腹を括っている今となっては、特に動じることもない。
ただ少し、普段より冷たくなってしまっているだけだが、分隊長達はまだそれに気づかず、ロランに意見を求めた。
「……しかし隊長。何かしら手を考えないと、このままでは最悪の事態となります」
「そうだね。猶予は数日――いや、頑張れば一週間くらいはもつかな？　包囲は完成してるけど距離はまだあるし、向こうは徐々に包囲の

輪を狭めつつ、攻勢を行うつもりだろうね。完全な位置までは掴まれていないようだし、今のうちに罠を張って、どうにか――」
「お……お待ち下さい！　ロラン隊長！」
「ん？　なんだい？」
　ロランの続く言葉に待ったをかけるように分隊長。
　それに対してロランは頭に疑問符を浮かべたが、分隊長達からすれば恐ろしい事を告げられているようであった。
　その思いを代表して分隊長の１人が、
「もしや……た、戦うつもりですか？　あの数の魔軍と……？」
　恐る恐るそう問いかけると、ロランは今の状況には似つかわしくない、ニッコリとした笑顔を浮かべ、
「――そのつもりだけど？」
「!?」
　その言葉を聞いて、誰もが絶句する。
　分隊長の誰しもが、逃げ方を考えている最中だったのだ。そこにきての、隊長の戦おうとする言葉の数々。それを決定づける言葉。
　彼らは皆一様にありえないと表情を歪めたが、ロランはそこで苦笑交じりに告げた。皆に落ち着くように手で制しながら、
「まぁまぁ、そんな狂人を見るような目で見なくてもいいじゃないか。一応、これでもこの窮地を打破出来る可能性の高い方法を考えてはいるんだよ？」
「そ……そんな方法があるのですか……？」
　ようやく声を絞り出した１人がそう問うと、ロランは頷く。
　そこで皆からもほんの僅かに期待するような、とにかく耳を傾ける姿勢を見せるが、続くロランの言葉はその期待に応えるようなものではなかった。それは、
「逃げても助かる可能性は低い。となれば、戦うしかない訳だけど――」
　と、彼は一度間を置いて言う。
「二十万の魔物兵相手に勝ち目なんてないのは子供でも分かる。……でもまあ、数として見るから厄介に見えるけど、目的を絞れば活路を

見いだせないこともない」
「……と言うと？」
勿体付けるようなロランに、急かすように問いを投げると、とうとうその答えは来た。
「簡単な事だよ――――――要は、頭を討てば良い」
「――――――は？」
一瞬、何を言っているのかと脳がフリーズする分隊長達。
それが難しいから逃げる方法を考えていたのではないのかと。
だが、ロランの頭の中はそうではないようで、
「罠を張って侵攻を遅らせつつ、大将軍を誘い出して、殺す。その間、住人には北の山にある洞窟にでも隠れていて貰おうか。いつかは見つかるし、多少は運の要素も絡むけど、幾つかに分けて隠せば、一気に見つかることはない。多少の時は稼げるからね」
ああ、殺るのは僕がやるから安心していいよ、とロランはまるで事も無げに方針を語る。
その言葉に、口を挟むことの出来る者はまだいなかった。黙って彼の言葉を聞き続ける。
「ただ一応、君達や隊員達にもちょっと手伝って貰う。……まあガイ君や魔女が居てくれればかなり楽が出来たんだけどね……いないものはしょうがない。一応どうにかして呼び戻せないか試してみるけど、里の場所も分からないし、そっちを当てにしてられない。うん、やっぱり殺れるのは自分しかいないか」
うんうんと自分で納得しつつ、ロランは次々に方策を告げていく。
分隊長達はそこでようやく、彼の目がいつもの〝鋼の騎士〟としてのものではなく、冷たい暗殺者のものとなっていることに気づいた。
いつの間にか彼の纏う雰囲気は、背筋が凍るようなものとなっている。瞬きした次の瞬間には、首を刈り取られても不思議ではないと思わせてしまう。
だがそれに軽く恐怖しながらも、頼もしさを感じているのも事実であり、彼らは多少だが、心に火を灯し始める。
しかしその瞬間――会議室の扉は開かれた。

「――ほ、報告！　斥候が戻ってきました！」
「おや、早いね。どうだった？」
　直ぐに軽い調子で報告を促すロランに、報告にやってきた隊員は青い顔で告げた。
「そ、それが……戻ってきた者は命からがらと言いますか、殆ど死に体の様子でありまして……今は治療に当たらせているところであります」
「……そう。それで、何か情報は？　そもそも喋れる状態なのかな？」
　隊員の表情である程度を察しつつも、長として有益な情報はないかと問い返すと、隊員は懐から紙を取り出して、
「は……それが、その……こんな紙を、持ち帰って来てまして……ど、どうやら、敵からの物のようでして……」
「！　見せてくれるかい？」
　は、はい、と震える声の隊員からその紙を直接受け取るロラン。
　おそらくは、敵からの通達のようなものだろう。
　帰ってきた隊員も、拷問を受けた上で、里にこれを持ち帰るようにと言われたのかもしれない。そこに書かれていた事を理解して、余計にそう思う。
「……さて、敵にもどうやら事情があるみたいだけど……これを見て、どう思えばいいのやら……」
「隊長……？　そこには、一体なんと……？」
「……まあ、要は宣戦布告というか、今から攻めるぞっていう敵からの通達だね。だけど……こうも書かれている」
　ロランは未だ意図や関係が読みきれないまま、その紙に書かれている内容を皆に告げた。
「――〝これより、お前達人間とそれに連なる物を残酷かつ完膚なきまでに破壊し、滅亡させる。存分に恐怖するがいい〟……」
　そして、この続きこそがロランが分からない事そのものだ。
　そこに書かれているのは、
「〝――だが、ガイという名の人間を差し出せば、少しは手を緩めてやらなくもない〟」

「っ!?」
その名が出てきたことに、誰もが驚く。
今となっては誰もが知る新入りの名前だ。それが魔軍から出てきたことに驚かない筈がない。
交換条件にすらなっていないとか、そもそもそんな気はないだろうとか、色々と思うところがありながらも、頭の中はそちらへの疑問でいっぱいになる。
だがロランには、ちょっとした推測が立っていた。何の確証もないが、
「〝差し出す場合は、白旗でも揚げて人を寄越せ。存分にもてなしてやる。差し出さない場合は死ね。お前達に価値はない。我々を愉しませるために、精々泣き喚く練習でもしていろ〟――と、まあ随分と傲慢で人間を下に見ている者のようだね。ただ――」
ロランは言う。不味い事態になっているかもしれないと、
「……ひょっとしたら魔剣の存在は、既に魔軍にバレているのかもしれないね……」
それ以外にガイという人間に拘り、それを差し出すように言う理由はないと、少なくともこの時点では思い、ロランは嘆息した。
これでは、無闇に助けを求めることも出来ないと。
「……どうするんですか、隊長……?」
「……まあ、人類の為にも差し出す訳にもいかないね」
とにかく準備をしようか、とロランは分隊長に命令をしながらも、とうとう覚悟を決めた。
魔物大将軍をこの地で殺し――また自分もそこで、死ぬ覚悟を。

大陸中央。世界一の標高を誇る翔竜山。
その山の麓に広がる大森林地帯は、カラーの森とも呼ばれ、カラーという女性だけの亜人種が住む森だ。
カラーは現在、人間と距離を取っており、ペンシルカウというかつての王国と比べれば小さな集落で隠れ潜むように暮らしている。

カラーのクリスタルが強力な魔法の媒体となり、資源としての価値を見出され始めてからというもの、人間はカラーにとって、害為す存在でしかなくなっていた。
故にカラー以外の者はペンシルカウに存在しない。
だが、その中にも例外はある。
「――ルールルルル

し、更には何処からどうやって鳴らしているのか、楽器もないのに幾つかの音が混じった曲が流れて彼女の周囲を賑やかにしている。
「はぁーい☆　ワン・トゥー、ワン・トゥー♪　ポップなミュージックで可愛くダンシング♪　魅惑のボイスと華麗なステップで、貴方のハートを凍てつかせてあげるわ～♪」
明らかに人間ではないその女性は、周囲にあった人形の氷の間をスキップしながら歌って回り、幾つかのものは腰元のロングソードで砕いていく。
その全ては人間を凍らせたもので、砕いているのは辛うじて生きている者達。
極めて残酷な所業だが、それは彼女にとって、遺憾とも言うべき行動だったが、致し方ないとも割り切ってはいた。
彼女にとって大事な家族。自らに近しい者達を守る領域を汚したのだから、当然の報いである。その一連の過程を見てしまった魔物や、偶然空を通りがかったドラゴンは、急いで彼女から離れていく。
その存在感は普通ではない。生物としての直感が、彼女を恐れている。
だがそんな彼女に近づく者もいた。それは、
「パラララ～、パララララ～♪　どっけどけーい！　イカれた御方のお通りだ――!!」
ケケケケ、とイカれた笑い声を響かせる紫髪のツインテールの少女だ。
特殊な形状の腕や、和装風の衣装を身に着けてふわふわと浮いている彼女の名はユキ。
魔人、ラ・サイゼルの使徒である彼女は今、主と同じくらい見ていないと問題になりそうな相手に付き従っていた。
ポンコツ具合は主に比べて圧倒的にマシだが、別の意味で彼女は不安になる。
それはそれとしていつも通りに振る舞うのだが、その合いの手を聞いた彼女は振り返り、不満そうに頬を膨らませた。
「ちょっとぉ～？　可愛くない合いの手は止めてって言ってるで

しょ、ユキちゃぁん？」
「へいへい、かしこまかしこまですよ、ルイゼル様」
妙に甘ったるい声で告げるルイゼルと言う名の彼女に、ユキはいつも通りの変わらない笑みの表情で答える。
だがその返答はいつも通りで、なおかつあまり聞いてくれたことがないものだからか、ルイゼルは周囲を更に凍てつかせながら言う。
「いつも言ってるけど、可愛い可愛いこのわたしには可愛いお歌と、可愛い振り付け……そして従順なファンが必要なのよ！」
両手を上げて、自らの存在をアピールするようにしながらハイテンションに告げるルイゼル。続く言葉は彼女の在り方を示すものであった。
「つまり……そう、それは――アイドル！　わたしは魔物界一の……いえ、世界一のアイドルになるために生まれてきたの！」
自分の将来を思い、頬に手を当てて恍惚の表情を浮かべるルイゼルは、その感情の昂りに合わせて身に纏う冷気を増幅させる。
元フローズンの使徒、氷属性のユキには効かないが、普通の生き物には中々に堪える寒さだろう。
だがそのことにルイゼルは気づいていないし、ユキもまだ言う気はない。今はまだ問題とならないからだ。
その代わりに疑問を口にした。彼女がいつも言うことではあるが、
「アイドルって何？　それ食えるの？　コオロギより美味しい？　――つーかさっきの歌なに？」
「アイドルというのはキラキラしてて、みんなの人気者のことらしいわ！　歌って踊れて、ファンを愉しませるの！　――さっきの歌は考え中のわたしのテーマソングよ！」
わたしにピッタリねぇ、と相変わらず狂人っぷりを微塵も隠そうとしないルイゼルにユキは笑みを浮かべる。
そもそも彼女の親族が皆イカれてるので何とも言えないが、自分の目的にまっしぐらな辺りは兄にも似ているのだろう。
それを思い出し、ユキは面白いから、という理由だけでそれを問うてみることにした。

「それで、結局兄はどうするん？　途中ではぐれてるんですけど」
告げると、くねくねと身を捩っていたルイゼルの動きが一瞬止まった。
だが再び動き出すと、彼女はやはり笑みのままで、
「あらあら、決まってるじゃなぁい？　――後でた～っぷりと、オ・シ・オ・キ♪」
うふふ、と笑いながら軽く頬を染めて言う。
それは笑みではあるが、内側から何かの感情が漏れ出ているようで、それを表すように冷気の波が周囲に伝導した。
相変わらず面倒な兄妹関係だな、とユキは思う。まるで自分の主と友人の主の様だった。
その似たような関係性を知っているが故に、その兄妹間のことについてはあまり問題には思わない。喧嘩して周囲に被害を出すのは問題だが、両者は決して仲が悪い訳ではないのだから。
その証拠に、ルイゼルの口からはその件の兄のことについて言及される。
「そもそもアルベルト兄様や白兎姉様に会いに行こうって言ったのはカイゼルなのに、わたしがライブとマネージャー探しをするって言ったら、急に飛び出していって……ほんと馬鹿みたぁい」
はぁ、とそう言ってため息を漏らす。一応は猪突猛進気味な兄のことを憂いているようであった。ユキは相槌を打つように、
「ほら、あれじゃね？　妹に対抗してゲリラ的野外イベント決行、みたいな？」
「何一つ言ってる意味が分からないけど、絶対問題が起きるわよねぇ……そして絶対わたしまで怒られるわ！」
「いや、どっちもどっち」
そもそもどちらも許可を取らずに出てきてた気がするのだが、そんなことはとっくに棚上げ済みらしい。ツッコミの声を完全に無視してルイゼルは憂いの表情を見せる。
なので話題を別方向にシフトせざるを得なかった。
「マネージャー探しする？　ほら、そこの凍った松ぼっくりとかよく

ない？」
「微塵も良くないけど、マネージャー探しはしないと駄～目。ほら、こんなにプリティーなわたしにお付きの1人もいないとか、格好がつかないじゃな～い？」
「あれ？　あては？」
「ユキちゃんはママの保護者でしょ？」
「イエス！　初めての子育てにあたふたするぽんこつご主人様の代わりに色々と手配してやったのはこのユキちゃんですぜ！」
「ママはおっちょこちょいだものねぇ。料理だけは上手だけど」
　それも子供が生まれる前に猛練習――もとい、ユキや他の料理が上手い面子の鬼指導があって、ようやくある程度出来るようになっただけなのだが、ユキは敢えて言わなかった。自分を保護者扱いしてる辺り、主の尊厳というか、これ以上は親の威厳が息絶える気がしたから。
　ともあれ別の意味で滅茶苦茶なのは変わらない。苦労するという意味では似たようなものだ。
「というわけで、初ライブやアルベルト兄様に会う前に、マネージャーを見つけるわ！　それからわたしも白兎姉さまに会いに行きましょう！」
「ひゅーーー！　何がというわけなのかは分からないけどさすが――！」
「やっぱり、合いの手があると気持ちいいわねぇ！　さぁ、もっとファンの声援を浴びるためにペンシルカウに向かうわよ～！」
「ひゅーひゅー！　あ、冷気抑えないと確実にバレるくね？」
「あ、そうねぇ。抑えましょう」
　そこは一応、兄と違って落ち着いて自らが操る氷の力を抑えて向かうルイゼル。
　向かう先はカラーの里、ペンシルカウだが彼女にとって、マネージャーの条件は女性のやり手で親の関係者以外ということから、まだ見ぬ人材を発掘するために、最初に目をつけたのがそこだった。
　ペンシルカウは父親や兄の影響下にあるとはいえ、中にはまだ手つかずで有望な人材が残っているだろう。

それを問答無用で連れて行く――いや、そもそも自分の誘いを断る相手がいるわけないと、妙な自信を持ってルイゼルはその場から浮き上がり、飛んでいった。

――とあるカラーの家。

「――うっ……今日は妙に冷えるわ……何だか嫌な予感がするし、こういう日は家の中で引きこもるのに限るわね……」

そう言って、既に職をセミリタイアしているとあるカラーは、今日も家の中での引き篭もり快適ライフを満喫しようと、ソファーの上で布団に包まった。

動き出す事態

「さあさあ！　愉しい愉しい朝が来たぞ！　気持ちのいい朝の空気だ！」

破壊をもたらす両腕を振り上げ、空気を目一杯吸い込んで深呼吸。快活な振る舞いで自ら魔軍の陣頭指揮を執っているのは、魔物大将軍アッティラだ。

彼は随分と機嫌の良い様子で、朗らかに副官の魔物将軍らの前に立つと、やはり爽やかに声を掛けた。

「さあどうだ⁉　お前達、朝飯はちゃんと食べたか⁉　顔は洗ったか⁉」

「はっ！　準備は万全であります！」

「うむうむ、良いことだ！　朝飯を食べないと元気が出ないからな！　私など、今日はガルティア様よろしく二回もおかわりしてしまったぞ！」

ははは、と笑っていいのか分からない冗談を聞かされ、しかし大将軍の言葉に軽い笑いをせねばと魔物将軍の声が響く。

ガルティアであればおかわりが二回で済むはずもない。いや、正確には二回で済むかもしれないが、一回の量が桁違いであるため、同じではない。

それに現在、ガルティアが滞陣しているこの軍にとって兵站の問題は現在進行系の深刻なものであるため、そもそも笑えない。兵站担当の者達で算出したところ、輸送をしないのであれば一週間で食料が尽きてしまうという結果が出て、魔物将軍らは戦々恐々としているのだ。

帰りは近くの牧場に寄って食料を受け取りながら帰還する手筈が整っているため問題はないが、それでも本来は一ヶ月以上はゆうに賄えるであろう食料を一週間にまで落としてしまうとは、魔人ガルティア、恐るべしである。

冗談でも何でも無く、人里にガルティアを敵の味方として送り込んで兵糧攻めにしてしまった方があっさりと攻め落とせるのではない

かと思ってしまうほどだ。かつての戦乱の時代や国狩りにおいても、ガルティアの軍は人間から食料を奪っていくためかなり恐れられたそうだが、この食事量なら納得である。

アッティラの方も昨日までは同じように頭を悩ませていたが、今日は起きてから完全に気にしていないか、割り切っている様子ではある。人狩りの時もそうだが、アッティラはこういう時の機嫌がすこぶる良いのだ。

「食後の休憩も取ったな！　う～む、やはりいい朝だ！　今日は少し気温も高い気もするが――」

と、少し間を置いて、アッティラは告げた。彼らの前で、

「――人間を破壊するにはいい朝だ」

「はっ！　いつでもいけます！」

アッティラ軍の陣営は魔物兵２０万。魔物隊長１０００体に、魔物将軍が１０名の１０個軍。

そのうちの１０万が広範囲に包囲網を形成しており、残りの６万は後方支援に回している。

まず攻め込むのは２個軍の４万だ。これだけでもおおよそ１千人と思われる戦力を潰すには十分過ぎるものである。やられることはないだろうが、アッティラは人間を完膚なきまでに滅ぼすことを至上としている。一人足りとも逃すことはせず、生き残った者は捕らえ、苦しみを味わわせた上で皆殺しにしてしまうだろう。

幾ら野良とはいえ一万人以上の人間を殺すことは、魔王の命令がある以上は良くないことではあるが、そのためにアッティラは自らの牧場で人間達に無理矢理、通常以上の交配を行わせて増やしてはいる。許可も取ってあるし、何も問題はない。全ての憂いを取り除いたアッティラは、大きく息を吸って右腕を前に振り抜いた。

「さあ――奴らの文明を破壊せよ!!」

朝露に濡れる森の中、彼らは静かに声を響かせた。

「さて、準備は整ったかな？」

「はい。全住民の避難は完了。里、及び森の中に残っているのは我々、騎士団の人員のみです」
「侵攻が予想される森の各所に隊長考案の各種トラップも設置済みです」
　その隊長、ロランの声に分隊長は淀みなく答えた。魔物討伐隊として行動している時の良い緊張感を保っており、ロランはそれに頷いてひとまずは満足する。
「よし、それでいい。後は敵が攻めてくるのを待って、戦うだけだね」
「は。しかし、その……」
　分隊長が不安な表情を見せたことに、やはり完全にいつも通りとはいかないか、と諦めにも似た思いを口の中だけで吐き出しつつ、ロランは代わりに別の言葉を告げる。
「……まあ、不安なのは理解するけど、今からは切り替えるようにね。何しろ、君は分隊長なんだから」
「……はい。すみません」
　と、謝られ、ロランは嘆息する。やはり士気はいつもより低いな、と。
　とはいえ致し方ないことでもある。幾らロランが敵の頭を取ることを目標に、森林地帯でのゲリラ戦を展開することにしたといっても、敵の戦力は二十万。ざっと、こちらの二百倍の戦力だ。
　こちらの兵数と同じ数の魔物隊長がいると考えても、戦いは絶望的過ぎるだろう。
　だが敵の侵攻速度やその他諸々を考えると、やはり戦えないことはない。
「とりあえずは夜まで持ちこたえてみようか。夜になればこちらが有利となる。夜襲の手筈は整っているし、それに、だ。天運はあるようだしね」
「……？　何を――あっ」
　その時、頭に疑問符を浮かべていたはずの分隊長や周囲の隊員達が気づく。
　自分達がいる森の中。その周囲に、徐々に霧が立ち込めはじめてい

ることに、
「これは、霧……！　確かにこれは……」
「うん。こちらにとっては追い風だね。視界は悪くなるけど、向こうの方が敵数が多いことで同士討ちの可能性も高まるし、何より、こちらには地の利がある。訓練に幾度となく使ったこの森は、君達にとって庭のようなものだろう？」
それだけの訓練と戦闘を、君達はこなしてきたはずだとロランは言う。
微々たるものではあるが、これによって彼らの目にも一時的な希望が宿る。
それを後押しするように、ロランは全身を黒で統一した影のような装束と装備を翻し、懐から短剣を取り出しながら告げた。
「これだけ霧が深いと……僕も非常にやりやすい」
「っ！　なるほど……」
その刃の煌めきとロランの冷たい表情に、分隊長が喉を鳴らす。
こういう強い言葉と頼もしさを見せることは、実を言うとロランの趣味という訳ではないのだが、士気を鼓舞する上では重要なことだ。
英雄のような存在が味方に一人でもいれば、大多数の者達は戦意を保つことが出来る。
もっとも、自分は英雄には程遠い存在ではあるだろうが、とロランは自嘲してみせる。
暗殺者は闇に紛れるもの。名を高める必要も、自分の手柄を誇る必要もない。本来であれば、先日行ったような一騎打ちもロランとしては避けたいところだった。
そもそも戦う必要もない。自分にとっては〝闇討ち〟こそが最上である。
こういった英雄のような振る舞いは、きっと〝彼〟のような存在にこそ似合うのだろう。
偉大な先祖のような英雄には結局成れないだろうと思いつつも、この在り方が性に合うと、自分をさらけ出せたことに彼には感謝を覚える。

その彼のためにも、
「――行くぞ。大将軍の一角、ここで討つ」
「おお……！」
ロランは自分なりのやり方で、貢献してみせようと牙を剥いた。

魔物大将軍アッティラ率いる魔軍と鋼の騎士団の戦端が開始された明朝。
同じく森の中の小高い崖の上に、二つの人影があった。
「よーし、始まった始まった。まずはこの辺りで見物するぞ、火炎書士」
「はぁー……まぁ、見るだけならいいですかね……よし！　ここで見学しましょうカイゼル様！　持たされたお弁当もありますしね！」
「おう。切り替え早いなお前」
丘の上でどっしりと胡座をかいた魔人、カイゼルの横に、火炎書士もちょこんと膝を折って座る。
態々ピクニック用のシートを地面に敷きながら、持ってきていた弁当を開いて地面に置くと、カイゼルがそれを見て声を上げた。
「おお！　見ろよ火炎書士！　俺様の好物ばっかり入ってやがるぜ!?　これ食って良いんだよな!?　駄目と言っても俺様は食うぜ!?」
「そういえば急だったのもあってお弁当は料理長の特製でしたね。ハウゼル様ではなく」
「ああ、ママが作ると俺の苦手なもんも入れやがるからな……苦手を克服してほしいとか言ってよぉ……」
「意外と躾に厳しいですからね、ハウゼル様は」
そうなんだよ、とカイゼルは火炎書士の言葉にうんざりしたように頷く。
ともあれ彼としても無碍には出来ないのか、そのことで怒っているような様子はなく、炎も殆ど吹き出すことはない。
彼は自分の好物ばかりが入った弁当を手に取りながら、
「ママは勉強とかの時間をサボるの絶対許さねぇからな。そういう意

味では親父の方が気楽だ。親父は厳しいが、やりたいことをやればいいとは言うからな」
「レオンハルト様は好き嫌いが意外と多いそうですからね。城での食事も、自分の苦手なものは極力出さないように命令しているとか」
「何ぃ!?　そうだったのか!?　くそっ、親父の奴、なんてズルい真似を……！　俺様も次からそうしてやる！」
まぁ料理長がそれを聞いているかどうかは微妙なところではある、と火炎書士はその言葉を飲み込み、ついでに朝ごはんとなる弁当のおかずも咀嚼して飲み込んだ。急な出立だったというのに、カイゼルの分だけでなく、火炎書士の分まで渡してくれるのだから、料理長は良い人だと思う。人間ではないと思うけど。
同時に、横のカイゼルの弁当を見て、
「それにしても……茶色いですねぇ……」
「ああ!?　別にいいだろうが！　男なら肉食ってなんぼだろ!!」
カイゼルの好物ばかりが入った弁当というのは、やはり茶色い、と率直な感想を火炎書士が口にする。
ステーキやハンバーグ、唐揚げなど、とにかく肉類や揚げ物、脂っこいものが多いのだ。女性である火炎書士として色々と気になる弁当であるが、
……あ、よく見たらそれとなく野菜も入ってる……。
さすがは料理長と言うべきか、巧妙に野菜なども弁当に混じっている。揚げ物にしたり、付け合せで入っていたり、分量が少なめなので、分かりにくいが、一応の栄養バランスは考えられているのだろう。
この分だと、一見普通に見える他の料理にも何かしらの工夫がされているに違いない。
そして、まあ確かに、このメニューだと色々と気になるというか、ハウゼル様も献立を考えるよなぁ、と納得してしまいながら、遠くの魔物の群れを見て、
「やっぱり、勝てそうになさそうですねぇ……」
「まぁ、普通の弱っちい人間には酷だろうな。とはいえ、少しはやれる奴もいんだろ。そいつを見つけるぞ……んぐ、このハンバーグ、美

味ぇな……！」
　好物を食べて頬を緩めているカイゼルは、見た目としてはもう立派な大人だが、火炎書士には子供にしか見えない。普段付けているマスクも今はずらしているし、やはり似ているなぁ、と思いながら弁当を食べ進めて観戦を行うのだが、
「それにしても霧がうざってぇな!!　何なんだよこれは！　急に出てきやがって！　見えにくいだろうが!!」
「……いやまぁ……」
「はっ!?　まさか、アルベルトの兄貴が来たのか!?　それならしょうがねぇが……？」
「……多分ですけど、カイゼル様の所為のような気が……」
　気候にはそれほど詳しくないが、本で読んだことがある。カイゼルがいることで空気を熱しているため、周囲の冷えた空気と混ざり合っておかしなことになっているのだろう。
　この間も山の上で雪を溶かすほどに燃え盛っていたし、多少、気候に影響を与えても不思議ではない。
　そして知らずとも人間側に味方している辺り、カイゼルの思惑通りになっている気がして火炎書士は嘆息する。
　……天然なのにこの性質……やっぱりお二方の子だなぁ……。
　そして主の片割れにも似ている気がしなくもない。結構馬鹿というか直情的だし。
　ともあれ戦闘も始まったようで、カイゼルは霧に文句をつけながらも必死に観戦しようとしている。カイゼルが注目しているその人間側の勢力は確か、
　……鋼の騎士団、でしたっけ。お手並み拝見といったところですかね。
　自分的にはあまり興味はないが、カイゼルが言うので一応注目しておく。今の人間の最大戦力の戦いぶりを。

　曇天の空の下。響く雷鳴の下にあるその禍々しい城は現在の世界

の中心――魔王城。
だが普段のそこは静かなものだ。
人間どころか魔物ですら迂闊には近づかないため、賑やかさとは縁遠い場所である。
詰めている魔軍の兵ですら、常に緊張感を持って過ごしている場所である。
だが今その場所は、今までにないほどにざわついていた。
「お、お……おい……見ろよ、あれ……」
一体の魔物兵は震える声と身体を必死に抑えながら声を絞り出す。
遠巻きに見ているだけだというのに、その光景には恐ろしいものを感じざるを得ない。
その理由はもう一体の魔物兵が口にした。同じく震える声で、
「あ、ああ……し、四天王の方々が、揃い踏みだ……！」
そう。彼らの視線の先。魔王城の城門までの道を歩いている四つの影がある。
身長や体型、性別や元の種族など、何もかもがバラバラな彼らは、現在の世界における支配者達である魔人。
だがその魔人の中でも更に上位。他の生物を寄せ付けないどころか、同じ魔人であっても隔絶した強大な実力を持ち、その称号は、常に最強の者達が集う。
現在、ＧＬ期に於いてその席に着くのは四名。
偉大なる種族の王女。女王然とした威容を放っている白金の女竜――魔人カミーラ。
森の守護者たる夜の王。静かで悠然とした気を纏っている女公主――魔人ケッセルリンク。
かつては暴竜とも恐れられた堅牢な老躯。現魔王、ジルの信奉者――魔人ノス。
最古の魔人にして最弱だった者。強さだけを求め続ける異形の獣――魔人ケイブリス。
彼らは魔人の中でもその強さを魔王によって認められた四体の怪物――〝魔人四天王〟である。

「す、すげぇ……全員揃ってやがる……!?」
「世界でも滅ぼしにいくつもりかよ……！」
普段は大陸各地に与えられた己の領域にて城を持ち、大規模人間牧場の責任者としての任を与えられながら君臨している彼らが一堂に会するというのは、非常に珍しい。
戦争の多かった時代であればいざ知らず、今となっては百年に一度会えば良い方である。
現魔王であるジルは配下である魔人にそれほど興味がなく、干渉が少ないためか、招集を掛けられることもない。
そして何かがあったとしても、その強大さから動くことはない。仮に強い人間が現れたとしても、魔軍を派遣すれば大抵の問題は片がつく上、手こずるようであっても魔物大将軍か、魔人の配下である使徒。究極、魔人が出張ってしまえばどのような相手でも死ぬ。
人間が束になっても敵わない魔人を、数体同時に相手をしても勝ちかねない彼らが動く事態などない。彼らが暴れれば、その地域は滅ぶ。
まるで自然災害にでも見舞われたかのように、その地域を人の住めない土地にしてしまうことも不可能ではない。人類にとって魔人は災害に等しく、運悪く遭遇すれば過ぎ去ることを待つか、一目散にそこから逃げるしかない。四天王ともなればその力は極まっており、相手に一切の抵抗を許さないだろう。
滅多に干渉してこない魔王を除けば、彼らは大陸各地に領地を持つ王のような存在である。彼らの上位には魔人を統率する〝魔人筆頭〟と、魔軍全体を采配する〝魔軍参謀〟の二つしかなく、またそれらは誕生してから今まで同じ人物がその名を冠しているため、実質一人しかいない。
そして今日、彼らはその一人に呼ばれてやって来たのだ。
「――よく来たな」
「！」
開かれた城門の先で待っていたのは、彼らの想像通り、金髪灼眼の美丈夫。

他者を畏怖させる強大な気を纏っている最強の魔人――レオンハルト。
魔人筆頭であり魔軍参謀である彼の出迎えにより、その場には魔軍の最高幹部ともいえる者達が一堂に会する。
先程までは偶然居合わせたとはいえ、声の一つも交わすことのなかった四名は、彼に会ってようやく口を開いた。最初に声を発したのは、背後に使徒を連れた状態のプラチナドラゴンの魔人で、
「レオンハルト……四天王を全員、態々集めて何のつもりだ……？」
その表情は不機嫌そのもの。
何しろカミーラは他の四天王を嫌っている。
ケッセルリンクは気に食わないし、ノスは生意気で殺したくなる。ケイブリスは醜い。上級魔人の中でもカミーラが居合わせても不快とならないのはレオンハルトくらいのものだ。
カミーラは横目で他の四天王を軽く睨みながら言うが、それに真っ先に反応するのはやはり、彼女を軽んじてる人物だった。
「相変わらずよく噛み付いてくる……そんなにも過去の栄光に縋りたいか？　カミーラよ」
「っ、ノス、貴様……！　今直ぐ死にたいか……!?」
ノスの発言にカミーラの目が見開かれ、黄金の瞳が獣の如く凶相を作る。
同じ元ドラゴンという経歴があっても、カミーラとノスの仲は最悪と言っていい。ノスはカミーラの過去を知っている上、戦闘狂という質から容易に喧嘩を売ってしまうし、カミーラもプライドは高く、そのような挑発には暴力で応える。
だがそれを見て嘆息する者がいた。
「……毎度ながら飽きないな。少しは落ち着いていられないのかね？」
半ば呆れるような雰囲気で言うのはケッセルリンク。彼女もカミーラとは相性が悪いが、ケッセルリンクの方は自制が利く。そもそも彼女の方はそこまでカミーラのことを嫌っている訳ではないため、ノスのような露骨な挑発は行わないし、喧嘩は大体カミーラの方が売

るものだ。
故に彼女は見飽きた光景に、今回は関わらないようにと澄ました態度を取りつつ、さり気なく想い人との距離を詰めて隣へと行く。
その間にもう一名の魔人四天王も声を発した。
「……おいノス！　てめぇ、なに、カ、カカカカミーラさんに喧嘩売ってやがる!!　やるなら俺様は、カ、カカカミーラさんに加勢するぞおらあ!!」
「ケイブリス……貴様……」
カミーラのことを名前できちんと呼べずとも、強気な態度でノスに牙を剥く魔人ケイブリス。
その態度にノスが忌々しいと言わんばかりの低い声を滲ませるが、その態度こそがケイブリスの強さの証明だった。
そう、彼は今や四天王最強の呼び声も名高い強大な魔人。ノスとの実力差はまだそれほど離れていないとはいえ、ケイブリスにとって、もはやノスは格下なのだ。
とはいえ普段の彼なら、実力がまだそれほど離れてない四天王級の魔人に喧嘩を売るようなことはしないはずだが、想い人であるカミーラのことであるため、彼にしては勇気を出して怒声を放った。
だがノスが竜の瞳をケイブリスに向けると、
「お……お？　本当にやるのかてめぇ……？　……言っとくが、ここは魔王様のお城だからなぁ!?　こんなとこで戦うなんざ魔人の風上にも置けねぇって分かってんだろうなぁ？　だから止めたほうがいいなって俺様は思います！」
「……」
「……」
これには喧嘩腰であったノスやカミーラも黙り込む。
やはり強くなったとは言え、リスはリス。ケイブリスのその性格は変わっていない。
ノス相手にタイマンで優勢だったとしても、優勢程度ではケイブリスは勝負をしない。
１％でも負ける可能性があるなら尻込みするのがケイブリスだ。

同じ四天王相手にタイマンをするなどありえないことである。
カミーラと一緒なら、とちょっとはやる気を見せたのだが、そのカミーラもいつの間にか戦うような雰囲気では無くなっているし、ノスの凶相を見てケイブリスも腰が引けてしまった。
だがそんなケイブリスの様子にも効果はあるもので、
「……ふん、興が削がれたわ」
ノスがその闘気を引っ込める。
ケイブリスの情けない姿を見て、久方振りの闘争に沸き立つ血も冷え込んでしまったのだ。
「お……おう。それでいいんだ。無駄に争うことなんてねぇ。……ですよね、カ、カカカミーラさん!!」
「……話しかけるな。気分が悪い」
「う……」
ノスが引っ込んだことでほっと安堵の息を吐いたケイブリスが、親しみを込めてカミーラに声を掛けるも、そっけない態度を取られてしまい、黙るしかなくなる。
どうにかして仲良くなりたいケイブリスだが、未だカミーラからは相手にされていない。贈り物をこまめに送っていたりするが、あまり効果も出ておらず、ケイブリスはやはりまだ強さが足りないのかと特訓に精を出す日々を送っている。
そんないつも通りでありながら、魔物からすればヒヤヒヤして気絶しかねないやり取りの中で、とうとうレオンハルトも口を開いた。
「……まあ、元気が有り余っているようで何よりだ。これから告げる任務を考えるとな」
「に、任務ですか？　それは一体なんでしょうレオンハルト様！　僕は出来ることならやりますよ！　用事があったような気もしますけど！」
任務、という言葉に嫌な予感がしたため、予防線を張りながらも元気よく忠義を示してみせるケイブリス。異形の巨体が縮こまり、ペコペコとレオンハルトに向かって頭を下げている姿は、見ようによっては滑稽だった。

ともあれ、強い奴に逆らわないことでここまで生き残ってきたケイブリスなのだから仕方ない。
それを分かっていながらも、レオンハルトはケイブリスも含めて皆に告げた。
「……つい先日、奈落への調査に向かわせた魔物大将軍イヴァンが……任務中に、命を落とした」
「へ？」
「……ほう」
ケイブリスが間の抜けた声を上げる中、ノスが興味を覗かせる声を漏らす。
ケッセルリンクは予め知っていたため、特に驚くこともなくそれを聞いており、カミーラもあまり興味がないため黙っている。
「イヴァンを殺した怪物は現在、地上へとゆっくりと向かっているらしい。……そこでお前達に任務を与える」
だが次のレオンハルトの言葉には、皆一様に驚くしかなかった。
「――元魔王、アベル。これの〝討伐〟だ」

かかし男

地下の書庫迷宮。
その最奥地にある扉の前の広場にて、ガイを除いた面々はその知らせを聞いた。
それは、魔女が放っているという使い魔によるもので、
「さ、里が魔軍に襲われてる!? やべーじゃねぇかよ!?」
報告を聞いて真っ先に声を上げたのはクーベロ。鋼の騎士団に在籍している者の中ではそれほど在籍年数は長くないが、彼は隊長に恩がある。心配するのも当然だろう。
むしろ他の者達が落ち着きすぎなもので、
「どうもそうらしい。隠れ里の位置がバレた上での大規模な侵攻。交戦は既に始まっているようだが……さて、どうなるやら。一応、そちら側の意見も聞いてみたいね？」
と、視線を送ったのは白兎やイヴといった、一応は魔物側勢力に所属する者達だ。
魔女が規格外の見識を持つことを除けば、敵である人間側勢力よりも味方側の方が詳しいのは自明の理。彼女たちに聞いてみることで収穫が得られると思うのも当然の話だ。
その思惑を感じ取りながらも特に気にした様子もなく、白兎は数秒考えた上で発言する。顎に手を当てて思うのは当然のことで、
「……普通に勝ち目はないでしょうね。２０万の軍勢ともなればまず確実に魔物大将軍が率いているでしょうし、誰が来ているかは分かりませんが、魔人もいる可能性が高いです」
「まぁ、誰が来ていても変わらない気もしますけどね。人狩りに積極的な魔人に絞ってみても、魔人レッドアイ、魔人レキシントン、魔人メディウサに、魔人レイ……この辺りが有力ですけど、別の可能性もあります」
「べ、別の可能性？」
はい、とクーベロの返しに視線を横に向けて頷く。
その意味を理解して横の白兎も頷いた。

「私のパパが関与している可能性ですね。その場合で可能性が高いのはガルティアさんやケッセルリンクさんでしょうか。もしくは魔人ジークや魔人アイゼルといった魔人の中では比較的良識派の魔人の可能性もあります。しかし――」
こほん、とそこで咳払いをしつつ、白兎は考える。
もし自らの父が関与しているならば、人里を襲うことは何らかの意図が必ずある。
意味のないことを、父はしない。元々人を襲うことも好まない魔人だ。強い相手と戦おうとすることはあるが、その場合でも理不尽なことはしない。いや、父が戦いに来ること自体が理不尽な事態ではあるのだが。
とはいえ、その可能性は高いとも考え、白兎はそれを口にした。
「……確か、鋼の騎士団という魔物討伐隊の本拠地なんですよね？あなた達が在籍する。そこには、ロランという人間がいたと聞いてますが、あってますか？」
「……ああ、ロラン隊長はうちの頭だが……」
ならば、と白兎は言う。その話は前に父から聞いたことがあるのだ。
「〝殲滅〟のロランといえば、パパが話題に出したことのある程度には強者であったはず。最近……といっても１０年近く前ですが、以前にパパが剣を交えたとも言っていました。彼が目的であれば可能性もなくはないですが……」
「ならやっぱり――」
と、焦燥した様子のクーベロに待ったをかけるように言葉をかぶせる。それは、
「――いえ、ですがそのロランさんはガイさんに負ける程度の方ですよね？　その程度であれば、多少のお目溢しや勧誘をすることはあっても、彼一人の為に軍を派遣することはないはずです」
「ふふふ、まるで隊長やガイを雑魚扱い。それほどに魔人レオンハルトは強いのかな？」
「はい。その程度で、パパの食指は動かない。無論、普通の人間よりは

興味を持ってると思いますが……実は私も、この後会いに行ってみようかと思っていたところですしね」
白々しくも笑みを浮かべてそう言ってみせる魔女に白兎は淀みなく頷く。
魔人級の強さを持つ人間であればともかく、それに至らない程度なら多少の興味を覗かせても、軍を派遣する理由にはならないし、態々討伐する意味も薄い。
と、そこまで考えたところで、一個思い当たることがあった。
それは白兎がそもそも、ここに来れたことに関係することで、
「……もしかすると、目的はガイさんかもしれませんね」
「っ！　それって……どういうことだ？」
「ガイさんは魔剣を持っている。魔人を倒すことの出来る魔剣を。そして、そのことを知っている可能性も高い」
「ふふ、なるほどね。そういう理由なら、魔軍を派遣する建前にはなるわけだ」
魔女が可笑しそうに補足するが、別にそういう訳ではない。
単に、父が関わる理由となればそれが一番大きいというだけだ。
その辺りの目論見、目的は実の子供である白兎であっても計りかねるが、何か目的があって動いているということだけは分かる。
そうでないと説明出来ない不思議な行動を取る、という逆説的な推測ではあるが、まず間違いないだろう。
白兎の持つ聖刀日光についても知っていたようだし、もしかしたら魔剣を使って何かをしでかそうとしているのかもしれない。
それが悪いことではないだろう、という信頼はあるが、白兎にとっては少しいただけない。
何しろ、友達が関わっていることなのだ。
「とにかく早く戻らねぇと……このままじゃ隊長や里の住人達が危ねぇ……！」
「いや、ガイ君を待ってから行った方がいいだろうね」
「っ、なんでだよ副隊長!?　そんな余裕は――」
「余裕はあるのさ。視た限り、後数日か一週間は保つ。それまでにガ

イ君も禁呪を習得し終えるだろうし、それから皆で向かおう」
「……だが……」
「まぁまぁ、少し落ち着き給えよ。私や君だけで駆けつけても、出来ることは少ない。雀の涙程度の助力にしかならないが、ガイ君は違うし、ガイ君に付随するそこの白兎さん達も大きな戦力となる。そちらを当てにしたほうが勝算は高いと思わないかな？」
「……」
魔女が未来視の結果を言及するような言葉を告げると、クーベロも黙るしかなかった。鋼の騎士団はCが副隊長に就いてからはその助言で何度も窮地を救われたと聞いているし、実際にクーベロもそれに救われたこともあるのだ。
彼女が言うなら、とその言葉に納得は出来る。クーベロも考え無しという訳ではない。長い間戦ってきた経験と判断力は確かに存在する。
だが、未だこれほどの苦難に襲われたことがないため、動揺してしまっているだけだ。
一度落ち着けば理解は出来る。自分達の加勢程度では、何の意味もないということに。
己の無力さに無言で拳を握りしめる。そんな様子に横目を向けながら白兎は思う。
……しかし、何でしょうか。この妙な予感は……？
気にしているのは実は背後の事であったり、周囲の事であったりする。
主にガイのことではあるが、禁呪を習得するために中に閉じこもっているガイの気が、時折、急激に大きくなっているように感じるのだ。
そしてそれに関係するかどうかは分からないが、外からも強い気配を感じる気がする。
隠れ里での戦いもそうだが、何かが一斉に動き出したかのような動乱の気配を感じて、
……私も、いざとなればお友達の為に一肌脱ぎますか。
と、腰元の日光の鞘を握り、軽くそう決めた。

朝の森が騒がしく渡るのは、大勢の魔物の群れだった。
魔物兵。文字通り、魔軍の忠実なる兵士である彼らに指示を飛ばしているのは、青い強化スーツを身に着けた指揮官、魔物隊長だ。
「進め進め――!! 待ちに待った絶好の機会だぞ! お前達、気合を入れて進め!」
おお、と咆哮のような大勢の返事が返ってきたが、それだけで満足はせずに魔物隊長は声を張り上げながら自らも進む。
己を突き動かすのは、並々ならぬ野心であるとその魔物隊長は自覚していた。
魔軍に所属し、運良く魔物隊長となって数十年。比較的寿命の長い彼はしかし、魔物隊長のまま変わらない日々を送っていた。
だがそれも致し方ないことだ。今は平時。戦争などの争いはなく、やることと言えば人間牧場の管理や物資の輸送、警備や見回りといった普通の仕事しかなく、それらには分かりやすい手柄というものが存在しない。
厳密に言えば、仕事をうまくこなせているかなどの評価があり、それらが上司の魔物隊長や魔物将軍によって管理されているのだが、そういった要素での昇進は非常に狭き門なのだ。
よほど優秀で他と違う要素でもなければ、牧場の管理や警備など誰がやっても変わらない。となれば魔物隊長や魔物将軍は一応問題がない優秀な者達と定められた部下の中から、適当な者や、親交が深い者などを選んでしまうし、それでも魔物兵から魔物隊長になる数は非常に少ないし、魔物隊長から魔物将軍になれる者はほんの一握りだ。
戦時であれば戦死者などもそれなりに出るので昇進出来る数も多くなるのだが、そうではないのだ。彼が魔物兵から魔物隊長になれたのも、はっきり言って運が良かったと言うしかない。たまたま上司である魔物隊長の目に止まったに過ぎない。
魔物隊長は魔物将軍になることを夢見ていたが、魔物隊長になってから停滞を続けている。自分が魔物隊長になった時以上の運か機会

に恵まれなければ、魔物将軍になることは出来ない。
だからこそ、今回の動員は渡りに船。正に絶好の機会だったのだ。
大規模な魔物討伐隊とその本拠地の強襲。上司である魔物大将軍アッティラが立案、主導したこの作戦に、彼は運良く第一陣の先鋒として出ることになったのだ。
戦う敵がいて、攻め込む場所があり、将だっていれば、奪い取る物もある。今の世の中でこれ以上のチャンスはないだろう。
故に魔物隊長は確信した。ここで手柄を立てなければ、自分は一生魔物将軍にはなれない。
逆に言えば、ここが一世一代の大勝負なのだと、彼は並々ならぬ気合を入れてこの戦いに望んでいた。
「人影を見つけたら直ぐに近づいて殺せ！　相手は人間だ！　恐るるに足りん！」
そしてだからこそ部下を急がせる。魔物隊長は自分だけではない。他の魔物隊長とて、昇進の為に手柄を欲しているのだ。手柄に限りがある以上、急がなければ――
「しかし隊長！　霧で前があまり見えません！」
「影くらいは見えるだろう！　それに相手だってそれは同じだ！　警戒する必要はない！　脆弱な人間如き、近づいて殴るだけでも――」
と、魔物隊長が霧の中で周囲に向かって声を張り上げようとしたところで、別の声が響いた。
「前方に人影！　おそらく人間です！」
「！　でかした！　全員、人影の方向に向かって突撃せよ！」
「おお！」
「ひゃっはー！　殺戮の時間だー!!」
「牧場の人間の様に引き裂いてやるぜー!!」
人影を見つけたという報告に命令を下すと、魔物兵達の声が連続して響く。皆、野良の人間を狩れると息巻いている。
牧場の人間は痛みや苦しみに慣れていて楽しくないと思う者も多いのだ。野良の人間を大量に狩れる今回の作戦は兵達にとっても愉しい催しだろう。

兵に続いて魔物隊長自身もその列に加わりながら進むと、確かに人影が幾つか見えた。
故に彼とその部下は疑うこともなく、真っ直ぐ人影に向かって進んだ。
そして不意の衝撃に、彼らは訳も分からないまま地面に転げた。
「っ、なんだ!?　落とし穴か!?」
まず感じれたのは、地面の窪みによって足を引っ掛けたこと。
だがその次の衝撃については、更に確かな実害を被った。
頭上から降り注ぐそれらは、
「熱い!?　なんだ、熱湯か!?」
魔物隊長は他の部下と共に地面に転げながら、頭上から降り注ぐ熱湯にのたうち回りながらも、これが敵の罠だということを悟って必死に立ち上がろうとする。
霧で見えなかったが、おそらくは地上の動きと連動するように木の上にでも仕掛けておいたのだろう。足元にも仕掛けがあるはずだ。
だが、ただの熱湯如きでは魔物は死なない。人間だってこれくらいでは死なないだろう。
しかしその僅かな混乱の時間は、森に潜む者達が仕事をするのに十分な時間だった。
「ぎゃあああっ!?」
「うぶっ――」
「な、なんだ!?　誰かが――」
森の中で響く断末魔と、地面に倒れる何かの音。
それを聞いて、魔物隊長はようやく理解した。
霧に乗じて罠を張り、掛かったところを見計らって襲いかかる影の群。
味方がやる訳ないのだから、これは必然的に、
「気をつけろ!!　既に人間が――」
と。隊長の声は不思議にも途中で差し止められた。
「た、隊長は!?」
「分からねぇ!　さっきまで声がしたんだが――」

指揮を執るのは魔物隊長の役目だ。絶賛襲撃を受けている部隊の指揮官の声が聞こえなくなったことで、魔物兵達は更に動揺する。
だが運良く、一体の魔物兵が足元に転がるそれを見つけた。霧とはいえ、数メートル程度なら視界もある程度利く。
「――ひっ!?」
「お、おい！　一体何が――」
別の魔物兵もそれを見て息を呑む。
そこに転がっていたのは、首を刈られて死んでいる、魔物隊長であり――
「た、隊長が……！」
「やられたってのか……!?　いつのまに……！」
「な、なんだって!?」
「嘘だろ!?　そんなの――」
隊長の死骸を見つけた魔物兵達の声が他の兵にも伝播し、統制が乱れていく。
頭を失えば彼らは烏合の衆。個体としては人間より強くとも、一番強い者がやられたことで弱腰となるか、そうでなくとも酷く動揺してしまう。
だが必要以上にその動揺は広がらなかった。
何故ならある程度の声が広がったところで、魔物兵たちは前方からの襲撃と、頭上から襲い来る何かによって、一つずつ声を消されており、そのまま二度と意識を回復させることはなかったから。
「……」
それを木の上から見下ろすのは、黒の装束を来た影である。
影は他の者達に、予め決めておいたハンドサインによる指示を出すと、そのまま別の場所へと急行していった。

……まずは上手くいっているようだね。
霧の中を行き交う影、ロランは各地で行っている罠と襲撃の結果に一先ず安堵した。

森の中に予め設置した各種トラップや、霧の効果もあり、少数の部隊で行うゲリラ戦法は魔軍相手でもちゃんと機能している。
良い意味で誤算だったのは、魔軍がこちらを――というより、人間を舐めきっていることだろう。
こうなってみるまで気づかなかったが、今の世の中が何百年と続いている以上、この戦いは魔軍にとっても久し振りの戦争だということだ。
魔物も、個体差や種族差はあれど百年を生きる者は少ないと言われている。
となれば魔物兵や魔物隊長、魔物将軍とて戦争を知らない者達であることには変わらない。彼らは普段、人間牧場で意志の死んだ人間と接しているため、分かってはいても人間を必要以上に舐めているのだ。
仮にも人間と対等に戦争していた頃の魔軍であればこうも上手くはいかなかっただろう。相手を警戒し、ゲリラ戦で来ることも予想して何らかの手を打ったはずだ。
数が膨大であるため、焼け石に水ではあるが、初日はこの戦法だけでも乗り切れるとロランは見る。夜襲も行う予定であるし、何の手立てもなく突っ込んでくるだけならこうやって首刈り戦術も使える。
懸念は魔物大将軍と魔人であるが、こうやってゆっくりと侵攻している以上、いきなり彼らが出張ってくることはないだろう。つまるところ、彼らも人間を舐めているのだ。本気で潰すなら、数で押し潰すだけで事足りるし、魔人を投入すればこちらには為す術もない。
奴らが本腰を入れるまで。この状態をどれだけ保てるかが勝負だ、とロランはこの間にも同様の手で魔物隊長を刈ると、直ぐに木の上に戻ってその場から離れる。
他の動ける者達にも通達しているが、襲撃は基本、一撃離脱。成功しても失敗しても、一当てすれば下がる。逃げておけば霧の中ということもあり、同士討ちも見込めるし、混乱するならばさせておけばいい。それだけ時間を稼げる。
ただ、少しずつでも前に進まれれば里を発見される可能性は高まる

が、ロランの見立てではそれでも3日は掛かると見ている。
「！」
合図が来たので、一度里の方へと足を向けながら思う。里への道は意外と複雑なのだ、と。
隠れ里は山林の中、北から入ることの出来る窪地の中にある。
山脈の中にあるこの土地は少し複雑な地形であり、特に隠れ里へは魔軍が主に攻めてきている南からは容易にたどり着けない。
南から隠れ里がある方面は、際立つ岩壁がそびえ立ち、その先を行っても山しかない。
だがこの山の裏手には、北側の谷間から続く道があり、先を進めば隠れ里へと辿り着ける。
全方を包囲してはいても、北側は険しい山脈地帯であるため、自分達が逃さないように兵を並べているだけ。兵の侵攻は南側から。これだと発見までに時間が掛かる。
仮に道を見つけたとしても、そもそもこの山林地帯は大部隊が進軍出来るような切り開かれた森ではないし、隠れ里までの道は左右を崖に囲まれた一本道で、防ぐのに利がある。
まるで防衛戦を行うために作られたかのような場所だが、まさかこの里を開いた先祖はこうなることを予測してこの場所に里を作ったのではないかと、我ながら恐ろしい推測、妄想の類を浮かべてしまいフードの下で笑みを浮かべる。
妄想だと切り捨てるにはもったいない考察だが、答えは知りようがないので程々にしておく。
「――隊長」
「ああ、今戻ったよ。首尾は？」
「は。隊長の想定通り――いえ、想定以上の効果が出ています。連中、人狩りは得意でも山狩りは苦手な様で」
そうか、と短い言葉と簡潔な報告で分隊長と言葉を交わす。
森の奥。人一人が通れるほどの小さな隠し通路の先にある洞窟を司令部としているため、比較的ここは安全な場所である。夜襲に備えた隊員達などはここで寝泊まりをさせている。

その分、スペースは心もとないが問題はない。
物資などはまだ侵攻が進んでいない今の段階であれば里と人を行き来させることも出来るし、それが出来なくなっても、自分が崖を直接登って物資を運べばいい。
それに一応は手は打っているのだ。
「それで、先程の合図は？」
「はい。隊長が連絡した例の方々が到着しまして」
「なるほど、もう来たのか」
ロランが納得し、ここに通すように言うと、その瞬間、
「――よぉ、ロランくぅん？　お久し振りぃ」
「！」
背後に人の気配。そして直後に聞き覚えのある耳障りな声を感じて、ロランは咄嗟にその影を身のこなしで宙へと弾き飛ばす。
だがその相手は宙で体勢を整えてそのまま軽やかに着地すると、手元の短剣を翻して鞘へと収める。
そして口元を歪めると、正に悪人といった笑顔でこちらへ声を掛けてきた。
「ゲッヘッヘ、酷いじゃないか、ロランくぅ～ん？　元仲間もとい、ライバルである僕ちゃんをいきなり攻撃するなんてよぉ？」
「……いきなり背後から仕掛けてくる相手に言われたくないなぁ。というか、全然変わらないな、君は」
呆れるように肩をすくめて言うロランだが、いきなり攻撃したきたことで部下が剣を抜いてしまう。
「貴様！　何のつもりだ!?　隊長に向かって……！」
「何のつもりぃ？　いやいやいや、これくらいは挨拶だとも。なぁロランくぅん？」
「っ、その馴れ馴れしい口調も――」
「いや、いいよ」
「っ、隊長！　しかし……！」
「いいから。この男はこういう手合いだから気にするだけ損だよ。時間の無駄だ」

「……分かりました」
　その男の無礼な態度に怒りを見せた部下を手で制する。するとそれを聞いて男が再び馴れ馴れしく近寄って言葉を掛けてきた。
「そうそう、分かってるじゃないロランくぅん。俺達、〝影の楔〟の元同士だもんなぁ？」
「……それでスケアクロウ。依頼した仕事の件はどうなってるんだい？」
　スケアクロウ、と呼んだ一見、茶髪の優男にも見える痩躯の悪人顔に向かって簡潔に用件を伝える。
　同士、という言葉に軽く部下が喉を鳴らしたが、その程度の反応は覚悟している。半ばバレていることなのでもはや気にならない。
　気になるといえばやってきた相手の鬱陶しさくらいで、
「おいおい、連れないなぁ。あんなにライバルとして競い合ったんだ。もっと思い出話に花咲かせようぜぇ？」
「ライバルだった記憶なんてないんだけどな。結局、君、僕に一度も勝ててないじゃないか」
　そう言うとスケアクロウの顔が引き攣った。だが何とか表情を保ちつつ、
「ぐっ……おいおい、今の僕ちゃんは昔とは違うんだぜぇ？　なんたって、今や影の楔の頭目に尤も近い最高幹部の一人である――」
「そういう僕は鋼の騎士団の隊長な訳だけど、影の楔の最高幹部さんは僕にそういう態度を取るんだね？　ふぅん、そうかそうか。これは頭目に伝えておかないとね」
「ちょっ、おまっ!?　じょ、ジョジョジョークに決まってんだろロランくぅん？　やだなぁ、俺達友達だろぉ？　そういうのは無しにしようぜ？　な？」
「……はぁ、ほんと変わってないんだね……」
「隊長、この男は……ご友人なのですか？」
　ロランは首を縦にも横にも振らずに答える。それは微妙なところであった。
「ま、昔の仕事仲間みたいなものだよ。名前はスケアクロウ。こんな

んだけど、割と使えるような使えないような、小悪党で小物の判断に迷う男だよ」
「ゲッヘッヘ、どうもぉ、スケアクロウでぇす。ロランくぅんが頼みだから来てやったけど、あんまり舐めてると俺様のナイフでザクッと殺っちゃうぜぇ～？」
　と、スケアクロウは手元のナイフの刃をお手本のように舌舐めずりして自己紹介する。
　だがその直後、
「ゲッヘッヘ……」
「っ!?　な、なんだ……？　様子がおかしいぞ……？」
　急に膝を突いて倒れたスケアクロウに分隊長が訝しむ。
　それを聞いていたスケアクロウは頬を地面に付けたまま、気味の悪い笑みで告げた。
「な、ナイフに痺れ毒塗ってたの忘れてた……誰か、腰の解毒薬を……」
「……馬鹿なのか？」
「見たまんまだよ。多分、今回の仕事で死ぬだろうから覚えなくていいかな」
「スケアクロウ様……!?」
　と、背後で控えていたのか、黒装束の仮面で顔を隠したスケアクロウの部下と思われる二名がスケアクロウの腰元から解毒薬を取り出して彼に飲ませる。
　すると直ぐ様、
「ゲッヘッヘ……散々な言われようだぜっ……と」
　あっさりと立ち上がり、再び不敵な笑みでロランへと顔を向ける。
ロランはその様子に軽く嘆息し、
「毒舐めすぎて耐性がついちゃってるじゃないか。その癖、二流どころか三流っぽいから止めたほうがいいよ。君、詰めが甘いんだから冗談でもなんでもなく、そろそろ死にそうだし」
「し、死ぬとか言うんじゃねぇよぉ!?　僕ちゃんは死なねぇ！　そう、影の楔の頭目になって金も女も好き放題なウハウハな生活を送るま

ではなぁ……！」
ゲッヘッヘ、と相変わらず小物臭い笑みを浮かべて野心を見せるスケアクロウにロランは息を入れる。
気の抜ける相手ではあるが、今回の戦いにおいては蔑ろに出来ない相手でもあった。
「それで、頼んでいた物資は？」
「そいつぁ、愚問だぜぇ、ロランくんよぉ。僕ちゃん達が仕事を失敗する訳ねぇだろぉ？」
ほら、と手で合図すると、彼の部下と思われる人たちが積荷を持って現れる。
言うまでもなく、影の楔の構成員達だろう。
戦いをする上での物資――主に罠に使うそれらの材料は、ロランの昔の伝手で影の楔という大規模な魔物討伐隊に依頼したのだ。
彼らは鋼の騎士団とは違い、生きるために後ろ暗い汚れ仕事すら請け負い、稼業とする者達だが、金を出せばどんな仕事でも請け負ってくれる上に、情報に長けていたり、こういった普通じゃありえない場所にまで物資を運んできてくれる。
身のこなしが軽く、闇に紛れるような者達が多い影の楔ならではの仕事。これも一種の裏ルートと言えるのだろうか。
ロランはかつて影の楔に所属しており、次期頭目として期待されていたのだが、結局は抜けて鋼の騎士団に戻ってきた過去がある。
吹っ切る前であれば隠したい過去ではあるが、今となってはバレたところで何の問題もない。隊員達も、そんな自分を受け入れてくれていると感じられるのだ。
そんな自分についてきてくれる皆を守るためならば、遠ざけていた過去の縁だって利用する。有用なら利用しない手はない。
影の楔は、人間側勢力としては鋼の騎士団に次ぐ大規模魔物討伐隊である。彼らの手を間接的でも借りれるならこれ以上の味方はいない。
物資という意味では一番の頼みの綱であったキリング商会も、魔軍が関わるとなるとさすがにさっさと退散してしまっているし、外部で

頼れるのは彼らだけなのだ。
　故にロランは、保険としてもうひとつの仕事をスケアクロウに頼む。それは、
「後、これを届けてくれないかな？」
「んー？　これは何だ？」
「それはウチの副隊長や新入りに向けた手紙だね。これを魔法の里とやらに届けてもらいたいんだけど……」
「！　おいおい、ロランくんよぉ、魔法の里っていやぁ、どれだけ探しても場所が特定出来ない実在が危ぶまれるような場所だぜぇ？　そんな場所に行けって言われても、無茶な――」
「一応、大体の場所は割り出してあるんだよね。ただまあ、どうせ魔法か何かで見えないとか入れないとかそんな感じだろうから、近くで待っていればいいと思うよ？」
　ロランがそう言うと、スケアクロウではなくその部下が低い声で、
「……馬鹿な。そんな不確かな仕事を、我らが受けるとでも……」
「ゲッヘッヘ、確かになぁ。さすがにどんな仕事でも受ける僕ちゃん達でも、それは――」
　と、スケアクロウが断ろうとしたので、ロランは懐から一枚の紙切れを取り出し、それをピラピラと見せつけながら行った。
「あっ、こんなところに僕が先祖代々受け継ぐ財産の在り処とその金庫の番号が書かれた紙が――」
「――やりまぁす！　ゲッヘッヘ、僕ちゃんにやらせてくださぁい!!」
「スケアクロウ様!?」
「うわぁ……」
　ささっと、手紙を受け取ってしまうスケアクロウに、その部下が驚愕する。ロランの部下が、引き気味かつ同情に満ちた視線を向けるが、ロランとスケアクロウは気にした様子もなく、
「じゃ、頼んだよ。僕はまた戦いに行ってくるから」
「任せときなぁ、ちゃ～んと送り届けてロランくんの財産を受け取ってやるからよぉ……ゲヘヘヘヘ」
　言うが早いか、ロランは再びその場から消えるように移動し、戦場

へと戻っていく。
……まあ、ご先祖様も許してくれるよね。――許さなくても使うけど。
先祖代々受け継いできた財産。今回の戦いに使う物資に使った分を引いても、まだまだ蓄えのあるそれだが、それを使い切ることに躊躇もバツの悪さもない。
先祖とはいえただの死人だし、今生きている人間の方が大事に決まってる。文句があるなら化けて出てくるか、生き返ってから言いにくればいい。戦場の最前線でこき使ってやるから。
それに実際、ようやく見つけた人類の〝希望〟の為であれば、惜しくはないだろう。
ロランは自分の代でその宿命と決着を付ける覚悟を決めていた。他力本願ではあるが、人類が生きる世界を取り戻すために、己も労力を惜しみはしない。
……体の調子は7、8割ってところかな。戦ってるうちに回復してきたね。
だが、やらなくて済むならそれに越したことはない。
出来れば余裕のあるうちに戻ってきてほしいな、とロランは新入りの顔を脳裏に思い浮かべた。

鋼の騎士団の本拠地。今は魔軍との戦場になっているその一帯から離れ、影の楔の一団は森の中を木々から木々へ飛び移るようにして移動していた。
「……それでスケアクロウ様。やはり行くのですか？」
「当たり前だろぉ？　ゲヘヘ、魔法の里……いい響きじゃねぇか。お宝がいっぱい眠ってそうだしなぁ……！」
「……ああ、またこの人の悪い癖が……」
「この人が悪いこと企んで成功した試しがないんだよなぁ……殺されなきゃいいけど……」
「小物過ぎて見逃されるというか……それでいて妙に目立つから俺達

は逃げられるし、良いんだか悪いんだか分からねぇ上司だよなぁ……」
「ゲッヘッヘ！　待ってろよ魔法の里！　僕ちゃんが骨の髄までしゃぶり尽くして――……」
部下のひそひそ話に気づくこともなく、欲に目が眩んでテンションが上がったスケアクロウはナイフを一舐めし、
「げ、解毒薬……」
「スケアクロウ様ぁ――!?」
痺れ毒で自滅し、地面に落ちていくかかし男に部下は大慌てて彼を拾いにいった。

災厄

――それは少し前の事。

魔人レオンハルトの居城である紅魔城の中庭に、とある者が降り立った事から事態は動き始める。

白い体毛を持つドラゴン。彼は中庭にいるかつての上司を見て声を上げた。

「お久しぶりです……！　ライゼン将軍……！」

「……！　お前は……はるまきか!?　生きていたのだな……！」

「はい、恥ずかしながら生き永らえておりました……！」

ライトニングドラゴンのはるまきは、かつての上司である四大聖竜の一角であるダイヤモンドドラゴンのライゼンに震える声で報告する。

ドラゴン王を除けば最も頼もしい相手との再会に乱れた息を安堵のものに変えていくはるまきに、ライゼンは真面目な声色で問いを投げた。

「そんなにボロボロになって、一体どうしたと言うのだ？　というより、よく俺がここにいると分かったな？」

「……はっ。実は、地下に住むますぞえという魔人に教えられまして……」

「ますぞえ……確か、レオンハルトと親交のある魔人だったか……？」

「はい、そのようですね……最初は耳を疑いました。あのライゼン将軍が、魔人の居城に身を寄せているなど……」

ドラゴンにとってのライゼンとは英雄的存在である。

丸い者の王との戦い。ラストウォー。そして天使との戦いでその存在を知らしめた彼は一種の伝説のような存在であり、ドラゴンの鑑と称されるほどの者だった。

だがライゼンはそれを聞いて複雑な表情を浮かべると、軽く息を吐き、

「……まぁ、俺にも色々あってな。事情はそのうち話す。――そんなことより、久し振りに会ったのだ。どうだ、肉でも食っていくか？

ここの肉は美味いぞ？」
「いえ、生憎とそんな場合ではないのです……」
「……そうか」
バーベキューの誘いを断られて僅かにしょんぼりとした様子を見せるライゼン。偉大なドラゴンのそんな姿に、もしや餌付けでもされているのかと疑いを掛けてしまうはるまきだが、そんな筈はないだろうと馬鹿な考えを切って捨てる。
それよりも今は重要な話をしなければならないと、はるまきは再度口を開いた。
「――地下にて、アベルを見つけました」
「！　なんだと⁉　それは真の話か⁉」
その名を聞いて、ライゼンは今までの呑気な表情を一変させる。
アベル。彼はライゼンにとっても重要な相手であった。
「はい、そのことをお伝えしようと思ったのですが、地下に住んでいたますぞえという魔人と偶然遭遇し交戦……それから捕らえられてしまったのですが、ライゼン様と縁があるという魔人の伝手で、解放してもらいました」
ライゼンと伝手のある魔人といえば、一人しかいない。ライゼンは淀みなく頷いた。
「レオンハルトか」
「はっ。どうもかの魔人も、地下に妙な気配があるとそのますぞえから報告を受け、調査隊を派遣しており……その調査隊が壊滅したことで、私もこのことをライゼン様に伝えるようにと解放されました。……実は先程まで、魔王城でそのレオンハルトと会って来まして」
なるほど、とライゼンは頷く。今や世界を掌握する勢力を実質的に差配しているレオンハルトだ。そういうこともあろう。
それに妙に目敏い彼であれば、その手の情報をいち早く掴んでいてもおかしくないとライゼンは得心した。そういうことなら、
「して、レオンハルトは何と言っていた？　そのことも伝えに来たのだろう？」
「……はい。魔軍はアベルを討伐するために、魔人四天王とやらを全

員集結させ、地下へと向かわせる様で……その討伐隊に、ライゼン様も加わらないか、とのことでした」
「……なるほどな」
　殊更納得する。確かに、魔軍としてもアベルという元魔王の存在は捨て置けないだろうし、犠牲を少なくするために、強者だけを、少数精鋭の討伐隊を編成して向かわせるのは当然の事だろう。
　それに加えて、ライゼンにも協力を打診する。義理堅い奴のことだ。アベルとの因縁を理解していて、何も伝えないのもどうかと思ったのだろう。
　実際、アベルが復活したのであれば、ライゼンとしては関わることに是非もない。奴がああなったのには自分にも責任があると考えているからだ。
「ああ、承知した。直ぐに俺も、魔王城へと向かおう」
「は。であれば、私も――」
「いや、はるまき。お前はここで待機だ」
「！　しかし……！」
「ならん」
　同行を願い出たはるまきの言を即座に却下する。
　不満そうではあったが、ライゼンとしては行かせる訳にはいかなかった。
「……お前のその身体の傷……ますぞえやらとの戦いだけではないだろう？　アベルとも牙を交えたな？」
「……はい。奴を、放置することは出来ないと思い……」
「一蹴された、か。はるまき。敢えて厳しいことを言うが、今のお前ではアベルとの戦いの……戦力にはならん。足手まといだ。万全であればまだしも、その傷ではここに来るのも辛かっただろう」
「……ですが」
「ですが、ではない。今はここで傷を癒せ」
　と、ドラゴン種としての性かはるまきの性格か、食い下がろうとする彼に対し、ライゼンは目尻を下げて告げた。
「――同胞をこれ以上失う訳にはいかない。理解してくれ」

「っ！　……それ、は……」
はるまきもそれを聞けば言葉を失う。
彼もまた、同胞を失う悲しみを理解している者だからだ。
あの地獄を体験した、今を生きるドラゴンであれば誰しもが理解出来るに違いない。
そして僅かに湿っぽい雰囲気となったその場の空気を、吹き飛ばすように朗らかな声でライゼンは続けた。
「なに、幸いにもここの者達は俺にとって友人のようなものだ。お前にも良くしてくれるだろう。ここは居心地が良いし……何より、飯が美味い。しばらく療養するといいだろう」
「――はい。お客様のケアは私達にお任せください」
と、突然に現れた銀髪のメイド――メイド長さんが丁寧にお辞儀をして現れたことで、はるまきは一瞬息を呑む。
瞬間移動でもしてきたのか、と驚きの声を上げかけたが、今出すべき言葉はそれではない。お世話になるのだ。言うべき言葉と気持ちは、
「……は。かたじけない」
「いえ、お気になさらず。では怪我の治療から。――ミコト」
「……はい」
と、メイド長さんがその名を呼ぶと、同じ様に瞬間移動して、別の少女が現れた。
メイド長さんと似た髪の色。しかし髪の長さはそれほどではなく、短い。それほどシャキっとしている訳でもなく、眠そうな赤色の半目で、執事服を身に着けた少女が、姿勢だけは完璧な状態で薬や食事などを運んできていた。
すると直後に城の中から複数の騒がしい声が聞こえてくる。その内容は、
「あーーーっ!?　またミコちゃんが消えた！　せっかく代わりに働いてもらってたのにー！」
「おいおいアプリの姉御、ミコトの奴がいきなり消えるなんてよくあることだろ？　今更この程度で驚く必要は――って、おおい!?　おれ

の飯がない!?　どこに行きやがった!?」
「シュヴァイン兄さんは食べすぎなんだからたまにはそれくらいで我慢したら？　そんなことより外で野球しましょうよ。あたしがピッチャーやるから、アプリ姉さんはバッターで、シュヴァイン兄さんはキャッチャーね」
「フリースローで全員ノックアウトすればいいんだね！　完全に理解したよ、リリーフ！」
「何一つ理解してねぇよ!?　というかリリーフ！　お前、おれがデブだからってキャッチャーに指名しただろ!?」
「サードかファーストでもいいわよ？」
「どっちもデブがやるお決まりのポジションじゃねーか!!　いいか!?　おれは動けるデブだからむしろショートとかで機敏な動きをして観客の度肝を抜いてやった方が、エンターテイメント性があってだなぁ……」
「デブがマイナス要素であることは否定しないんだね！」
「――ええい！　うるさいぞ貴様ら!!　余の勉強の邪魔をするな!!」
と、何やら酷く個性的なやり取りを耳にし、その異様な一連の流れ、主に瞬間移動にはるまきは目を細め、かつての上司に問う。
「……ここは人外魔境か何かなのですか？」
「そのようなものだ。ここには、色んな者がいる。――俺も含めてな」
と言って、ライゼンは翼を開いた。
飛行の体勢。これから、飛び立ち、レオンハルトらの元へ向かおうと言うのだ。
「では行ってくる。アベルのことは任せよ」
「……は。ご武運を」
「うむ」
話し合いで解決出来るはずもない。そのことを理解しているため、はるまきもライゼンも戦いの覚悟を胸に宿して言葉を交わす。
そも、今のアベルに言葉が通じるはずもない。奴は完全に狂っている。
だがしかしライゼンや、彼に縁のある者の言葉ならどうなるか、と

はるまきは通じたとしても意味のない想像を浮かばせて、一度落ちるように眠りについた。

魔王城の正門前。
魔人筆頭であるレオンハルトに集められた魔人四天王の面々は、それぞれ思い思いに立ち尽くし、その時を待っていた。
空気はやはり良くないが、これはいつもの仲の悪さというだけでなく、彼らに言い渡された任務の内容に因るものである。
そしてそれに関係する相手も、今しがた空から降り立ってきた。
その威圧感は魔人にも匹敵――あるいは凌駕するほどの相手。それは、
「――待たせたか。そして……久し振りに見る顔もいるな」
「ライゼン……」
その名をカミーラが声に出す。レオンハルトだけでなく、他の面々にとってもこのライゼンという巨竜は面識のある相手であった。
レオンハルトに関係するケッセルリンクは言わずもがな。カミーラはかつての、名目上は部下として。
そして堅牢な岩肌を持つ彼もまた、ライゼンとは縁があった。
「ふ、ふふ……これはこれは……四大の一角が一魔人に使われるとは……随分と落ちたようだな、ライゼン」
「――貴様こそ、随分と立派に成長したではないか。意味もなく暴れていた無法者風情が出世したものだな」
地竜の魔人、ノスは見知った相手であるライゼンに対して皮肉な言葉を軽く応酬しあう。
ライゼンもノスに対しては軽い嫌味な言葉を隠しもしないが、その中にある語句に疑問を持った者がいた。
それは魔人レオンハルトの背後にて控えていた使徒のペールで、彼女は近くにいたカミーラの使徒である七星やラインコックに向かってひそひそと声を抑えながら、
「……無法者って、どういう事か分かります？　七星さん」

「でもカミーラ様にいつも喧嘩売ってるし、そんな感じだよね……ほんと、ムカつく」
興味本位で聞いてくるペールと、敬愛する主を蔑ろにする相手の話題に、軽く不満そうなラインコックに対して、七星は息を入れて説明する。
ドラゴンの間では有名な話だが、それ以外の者達が知らなくても無理もないと、
「……魔人ノス様は魔人になる前……ドラゴンの時代においては、名の知れた無法者でした。多くのドラゴンを手に掛け、指名手配までされていましたからね。その力は八大精霊竜を凌駕し、四大聖竜に届きうると噂に上がるほどで……結局ライゼン様によって捕らえられ、犯罪者として幽閉されていましたが……」
と、そこまで言って七星は一度言葉を溜める。その先は少し、批判に捉えられそうで口にするのを憚られたからだ。
だがそれが聞こえていたのだろう。ライゼンがその続きを、そして同じくだんまりのままその会合を見ていたレオンハルトの使徒、ハンティが補足を口にした。
「……アベルとの戦い、ラストウォーの戦力として、ノスも含めた罪人達も戦列に加えられた。戦争で活躍すれば恩赦を与えるという条件でな。多くの同胞を手に掛けた荒くれ者のお前を野に放つことは、正直俺にとっては不本意だったが……」
「……ま、あの戦いは激戦だったからね。ノスみたいな罪人も駆り出さなきゃならないくらいには」
「くく……随分と古い話を覚えておられるのですな。なに、私もあの頃は若かったというだけのこと。今思えば随分と浅慮な事をしたと、悔いていますとも」
「っ……良く言う……」
ノスの白々しい言葉にカミーラが吐き捨てるように呟く。プライドが高く、傲慢なカミーラと言えども、元同胞を手に掛けていたノスについてはあまり好きではないようで、露骨に気分が悪そうにしている。

その殺気にも似た視線を涼しく受け流しながらも、ノスは笑みを浮かべ、ライゼンを見上げた。
「さて……ここに来たということは、協力者ということでしょうが……どうですかな。久方振りに、竜同士の挨拶を交わしてみるのは……？」
「……見え見えの挑発は止めろ、ノス。今はアベルのことだ。奴が復活した以上、貴様とて仕える主の為にここで消耗するのは本意ではないだろう」
「おや、残念ですな。くく――しかし、道理ではある。今はお主如きに関わっている場合ではないのだ、ライゼン」
途中から敬語を止めて、挑発を交えながらもその言葉を認めるノス。竜同士の挨拶、というのはドラゴン種では挨拶代わりによく行われた決闘を示すものであり、有り体に言えばノスはライゼンに決闘を挑んだのだ。
しかしノスは本気ではない。何故なら彼にとっても、元魔王、という肩書を持つ存在が現れたことは、現魔王の信奉者として看過できない事態であるからだ。
それとは別に戦いを好む魔人とドラゴンの血が騒いでいるが、それはあくまで個人的な趣向である。過程でそれを満たせるのはいいが、あくまでも求めるのは結果。主の為にも、ライゼンとここで牙を交える訳にはいかない。無敵結界があれば傷は出来ないだろうが、それはノスの本意ではないし、何よりリベンジにはならない。
それに無敵結界があったところで、あのライゼンが相手ともなれば長期戦となる上、こちらも少なくない疲労が蓄積するだろう。
故に様々な意味で、ノスは牙を収めた。別に戦うだけならいつでも出来る。今はまだその時ではないと。
――だがそんな中、誰よりも内心で気を揉んでいる男がいた。それは、
（か、帰りてぇーーー!! アベルだぁ!? 馬鹿かお前ら!? 元魔王と戦うなんてあり得ねぇだろうが!!）
言うまでもない。この中で、規格外の巨躯を誇るライゼンを除けば

最も大きく、異形の身体を持つ魔人、ケイブリスである。
彼はその任務をレオンハルトより言い渡された瞬間より、ずっと如何にして逃れるかを考え、内心で荒れ狂っていた。
しかも眼の前では、ケイブリスにとっても見知った存在が現れ、ノスと敵意の混じった応酬を行っている。そのことも彼を動揺させた。
（レオンハルトのとこにデカいドラゴンがいるのは知ってたが、よりによってコイツかよ!?　アベルの攻撃喰らってもピンピンしてた化け物じゃねぇか!!）
ただでさえ、警戒しているノスだけではなく、ライゼンというかつて見た脅威がバチバチにやり合っているのは、ケイブリスにとって心臓に悪い。
先程からぶるぶると小刻みに震えてしまっているほどだ。
レオンハルトと親交があるとはいえ、他の魔人にとってそうであるとは限らない。ノスと喧嘩をして巻き込まれる可能性だってゼロではないのだから、ケイブリスとしては今直ぐここから退避したい気分だった。
だがそんなライゼンの瞳が、不意にケイブリスを捉えたことで、ケイブリスはその巨体をビクリと跳ねさせた。
ライゼンの眼が細められ、ケイブリスをしばらくじっと見つめると、声を唸らせ、
「むぅ……そこの魔人、どこかで見たような……もしや昔、会ったことがあるか？」
「い……いえいえいえ！　僕は貴方なんて知りませんよ！　うわぁ、凄い大きな身体だなぁ！　とても強そうで僕、尊敬します！」
「……まぁ、これだけ強い気配を漂わせる魔人ならさすがに憶えてる筈だしな。……しかしその情けない気配にはやはり憶えが……」
さすがに過去、アベルから戦力外扱いされ、時折戦いを穴の中でブルブルと震えながら見守っていたり、半ば雑用、召使いのような扱いを受けていた小さいリスが、これだけ強く大きくなっているとは思わなず、ライゼンも気づけない。
実を言うとケイブリスの認識では、ククルククルと戦っていたドラ

ゴンの中にライゼンがいたという記憶はあるので、面識はそれよりも遥か昔、実は同時代の生まれで最も歳が近いのだが、その頃のライゼンは既に強く巨大であったため、ケイブリスは豆粒のような存在であっただろう。知っているはずなのに思い出せないという気持ちの悪い感覚がライゼンを先程から襲っているが、ケイブリスが口を閉ざし続けているので気づくことは出来ない。

「……お喋りはその辺にしておけ」

と、いつものような鋭い命令というよりは、半ば呆れ気味の声がその場に響く。

その声の持ち主、レオンハルトは実際に呆れながらも、さっさと任務へ向かうように促す。

メンバーはこれで揃った、と。

「ライゼンの背に乗り、アベルがいる奈落の奥にある空洞へ向かえ。俺も後から向かうが、俺を待つ必要はない。倒せるなら倒しても構わん」

「……あ、なんだか急にお腹が――」

「ああ、任せてくれ」

「ふん……レオンハルト、お前の出番はない。奴は、私の手で必ず……！」

「ふふ、あのアベルと戦えるとは……さすがに血沸く……！」

「言っておくが、協力するのは今回だけだ。俺は俺で好きにやらせてもらうからな」

「ああ、任せたぞ」

その命令に真っ先に声を上げようとした者がいたが、直ぐにその声は別の声に覆い隠される。言うまでもなくケイブリスで、続くケッセルリンク、カミーラ、ノス、ライゼンの声にかき消された形だ。

レオンハルトはそれに気づいているのかいないのか、ともかく聞こえていない形で続きを口にする。

それは先に打った手のことで、

「偵察にはメガラスを向かわせてある。空洞に入ったら奴と合流してアベルの場所まで案内して貰え」

そうして、魔人四天王にライゼンを加えた一行は、元魔王アベルの討伐へ向かった。

そこは奈落の一部であり、奈落とは別の場所。
崩壊した縦穴から下に降りた先にあるのは、真ん中に空いた巨大な空洞を中心とした地下回廊だった。
その場所には、奈落とは違う空気が流れている。
生命が死に絶え、腐りきり、数え切れないほど骨がそこらに散らばるそこは、瘴気に満ちた猛毒の空間だ。
並の生物ではこの場所に立ち入ることすら叶わない。強い耐性や瘴気に適応するような相性の良い存在でなければ、この場所では数分と保たないだろう。
それ故に、この場所に存在する生物は魔物の中でも霊体などのアンデット系や、毒素に耐性を持った一部の魔物しかいない。
だがそれらの生物も、今となっては汚染の原因となったその生物によって死滅させられていた。
「オオォ……」
地の底でゆっくりと歩みを進めるのは、黒の鱗と巨大な翼を持つ生きた屍であった。
彼はかつての地上の支配者。天を支配する偉大なる種族に生まれた大いなる怪物。
蠢く大気を纏わせ、空のないこの地の底で雷鳴を響かせた彼は、大勢の魔物の死体を作り上げながら、地上を目指していた。
彼は既に怨霊に近しい存在。過去に受けた仕打ち、怒り、悲しみ、恨みなどの負の感情のみを糧にして動いている肉塊だ。
故にかつての部下である彼が姿を現しても、彼は何の反応も返さなかった。
「……アベル……」
暗い地の底に現れるは、その任を買って出た魔人の一体。
白い外骨格を持つ昆虫にも似た、ホルスの魔人――メガラス。

彼はかつて自分を魔人にした当人と、三千年近い時を経て邂逅していた。
だがその姿に、かつての面影はない。姿形は多少全体が錆びて、鱗が朽ちかけているくらいであり、それほど変わってはいないが、そこには何の意志も宿っていない。
そこにあるのは怨念。自分をこんな風にした相手、その怒りの妄執に取り憑かれた男の影だけだ。
「殺ス……殺シテヤル……俺ト同ジ痛ミヲ……苦シミヲ……味ワワセテヤル……！」
「……」
そんなかつての主の姿に、メガラスは酷い憐れみを覚える。
彼に未来はない。既に終わった存在だ。
最後に残ったその怨念でさえ、もうすぐ征伐され、今度こそ果てるだろう。
メガラスがここに、偵察の任を買って出たのは、最後に彼の姿を一目見ておこうと思ったからだ。
臆病で狡猾。好戦的なドラゴン種の中では変わりものであり、それ故に蔑まれ、屈折した上昇志向と破壊衝動を魔王になって露わにした愚かな魔王。
そのかつての部下や彼に与したドラゴンからも、彼の人格は影で蔑まれ、卑怯者だと後ろ指をさされていた。彼に関わったおおよそ全ての者達から、彼という存在は忌み嫌われているだろう。
メガラスはそれを完全に理解している。そうなるのも致し方ないと分かっている。人望がないのも仕方ない。彼は基本、皆が言うような人物だった。
――だがメガラスにとっては、恩のある相手だった。
『お前、面白い奴だな……悪くねぇ。名前は？』
『俺の部下になるならお前の同胞とやらの安全を保障してやる。安心しろ、俺は他の傲慢なドラゴンみたいに、他種族を滅ぼさなきゃ気がすまないような短絡的思考の馬鹿じゃねぇからな』
『ぎゃははは！　おい見ろよ、メガラス!!　お前の同胞とやらを

襲ってた四大一の馬鹿のカイン君を殺してやったぜぇ!?　おらおら、一緒に踏みつけてやろうぜぇ!!　いい気味じゃねぇか!!』

そう。奴はどうしようもない奴だった。

メガラス個人としては、好ましい性格ではない。アベルは言われるほど臆病な性格ではなかったが、ドラゴンの姫を奪い、世界の支配を目論む悪人であったことには違いない。

ドラゴン種の考えに馴染めず、それ故に排斥され、仲間から酷い虐めを受けていたという過去はあれど、彼は自分の意志で現体制に反逆することを選んだ。

その結果がこれであるなら、甘んじて受け止めるべきだ。

だが、だからといって、全く同情の余地がないと言えば、メガラスに限って言えば嘘になる。

彼は、他の聞く耳を持たないドラゴンとは違い、ホルスを保護することを約束し、実際に守ってみせた。初めに会った時は襲いかかってきたが、約束を結んで以降は、どれだけ卑怯で姑息な手を使おうが、ホルスを利用したり、あの場所を戦場にすることはしなかったし、幾人もの同胞を屠った四大聖竜の一角を討ち取った。

メガラス自身は酷使され、幾度となく厳しい戦場に駆り出され、殿などを任されたし、失敗した時などは酷い暴言を浴びせかけられたが、ついに最後の最後まで、その約束を破ることだけはしなかった。

だからこそ、メガラスは今この時まで、魔人としての生を全うしている。

最後の最後まで魔王として、罪人として裁かれながらも約束を守ったアベルと同じく、自分も約束通り魔人として、魔王に仕え続ける。

同胞の安寧さえ守ってくれるのであれば、自らも魔人で在り続ける。

それがメガラスの選んだ道だ。

今も生き続け、そして眠っているであろう同胞達。友人、親戚、仕事仲間や、仕え、守りきると誓った主に二度と会えなくなったとしても構わない。

だがこの道は、彼らを守ることは出来る。その道を定めたのが、こ

のアベルだ。
返しきれない恩がある。だからこそ、せめてその死に目を見に来たのだ。
「……俺もいずれ、お前のようになるのだろうな」
どこか暗い場所で、あるいは戦場で。誰にも思われず孤独な死を迎える。
ただそれすらも覚悟している。自分はただ魔人として、魔王に仕え続けるのみ。
主命とあらば、是非を問わず。どのような敵であっても挑み、主命を果たすために戦い続けるのみ。
それがメガラスの、〝魔人〟としての在り方だ。
「……悪く思うな」
かつての主を殺す手助けをすることに、たった一度だけ、謝罪することを自分に許すと、メガラスは踵を返して自らの任を全うするべく飛び立った。

夜闇の暗躍

永遠の闇。永久の孤独。
彼を襲う何かは、彼に代償としてそれらの苦しみを与える。
限界を超えた力。理に反した力を得る代償は甘くはない。
一度使用すれば正気に立ち返ることは不可能。
心を覆い、精神を崩壊させる禁断の呪いは使用者の精神が疲弊し、完全に狂気に染まるのを待ち、それからゆっくりと心を蝕み、最終的にはその全てを闇の中に飲み込んでしまう。
通常の人間が、これに抗うことは出来ない。どのような高レベルの魔法使い、それこそ歴史に名を残すほどの大魔法使いであっても、この孤独に堪えられる者はいなかった。
無限の時間を感じられる闇の牢獄。
そこに囚われた相手の心を、その何かは垣間見た。
苦しみ喘ぐ様を見て嘲笑ってやろうと。あるいは、親しき者に化けて心無い言葉による責め苦を味わわせてやろうと、悪意を以って近づいたのだ。
だが、そこにあったのは、
『……別に孤独でも何でもないな』
『……遺憾ながら、そうだな。相手がお前ということだけは不満だが』
――――え？
意志を持った闇は、味わったことのない感想を、衝撃を感じて間の抜けた声を思わず上げる。
今まで数々の人間の精神を崩壊させてきたその何かにとっても、その経験は、事象は初めて見たことなのだ。
――なぜ、精神が二つあるのか？
その理由が分からない。分からないが、その何かにとっては致命的なものであった。
理由は、彼らが心で会話しあう通りのもので、
『……どうやら禁呪というのは、使用者の精神に酷い負荷をかけてその心を崩壊させるもののようだが……どうやら、精神が二つある者に

はあまり効果が薄いようだな』
『みたいだな。魔女の奴が大丈夫だって言ってた理由はこれか。これくらいなら大した負荷じゃない。ちょっと頭が痛くなる程度で済む』
悠長な余裕のある会話を行っているが、実際に余裕はある。心を覆う闇は徐々に効果がないことを悟って薄まっているものだ。
精神が二つある者に対して、この負荷は正常に働かない。もとより、1人の精神を崩壊させるものだ。そう決まっている。
故に禁呪は、その例外を感じ取って負荷を掛けるのを途中で取り止める。学習したのだ。こいつの心は壊せない、と。
禁呪は、その理外のシステムエラーに付き合うようには出来ていない。禁呪と言えど魔法だ。その理に沿った動き方をするものであり、埒外の現象に対してはその負荷も等しく霧散してしまう。
たとえ二度、三度、これから禁呪をしようしたとしても、その負荷は微々たるもので使用者に異常をもたらすことはないだろう。それでいて、禁呪はその効果だけを正しく発揮する。
闇が晴れていく。禁呪が、彼に抗うことを無駄と理解したのだ。
そうして禁呪を習得することに成功した人間の魔法使いは、一時的に囚われていた檻から脱出し、意識を覚醒させた。

目が覚めると、そこは変わらず禁書の前だった。
「ん……終わったか。なるほど、これを続けていけばいい訳か」
『面倒だな……もう全部一気に終わらせられないのか？』
それは無理だ、とガイはもう1人の声に声を返す。
自分には上手く作用しないとはいえ、禁呪の負荷は並の人間の心を容易く砕くもの。複数同時に征伐しようとすれば何が起こるかは分からない。
そも禁呪を一つ使った時点で、何らかの負荷がやって来るのだから、その次を使う余裕はさすがにない。
もっとも、一度克服してしまえば異なる禁呪であっても、連続使用にも耐えられるだろうと見ているのだが。

『負荷が酷いだけで、他は普通の魔法と変わらない。これなら容易く極められるだろう』
『もういっそこの本ごと持っていかないか？　どうとでもなるだろ』
他の者達が苦しみそうだし、一応は魔女の所有物だ。それは悪い、ともう1人の案に首を振る。禁呪はこの場で全て習得し、覚えきる他ないだろう。
とはいえそれなりの時間が掛かる。この場所だと時間の経過が分かりにくいが、もう一日以上は経ったのではないだろうか。
腹が空いたり、眠気が無かったり、生理現象すら感じないのが不気味ではあるが、これも禁呪の魔力に満ちたこの場の影響なのだろうか。
だがそれでも要領は掴んだし、思ったより早く終わりそうではある。ガイはさっさと面倒事を終わらせるため、次なる禁呪の習得に取り掛かった。

「――思ったより、早く終わるかもしれんと思ったが……連中、存外に粘るではないか」
山の手前。陣容の最奥に作られた司令部で声を響かせたのは、魔物大将軍アッティラだった。
彼は今日一日の自軍と敵の戦いを評しながら、捕らえた人間の死体を横に放り投げる。それを部下が手早く回収、処分するのを横目で見ながら、アッティラはその場にいる別の者の言葉を耳にした。
「魔物が人間を舐めすぎだな。実戦から遠ざかってるんで無理はねぇが、練度も低い。地の利も向こうにあるし、奴さんの方が戦い慣れてる。妥当なもんだろ」
「……そうですな。我が軍の将兵にも落ち度があったのは事実でしょう」
未だに飯を食べ続けている魔人、ガルティアの言葉にやや間を置いて素直に頷く。自軍を貶めたようで少し眉をひそめはしたが、概ね事実であり、アッティラとしても思うところがあったゆえ、頷くしかな

かった。
過去、国狩りを行っていた頃の魔軍の将兵であれば、相手に地の利があろうが、ゲリラ戦を展開しようが、どっしりと構え、こちらの有利に戦闘を進められたはずだ。しかし、
「――アッティラ様！　また夜襲です！　前衛の部隊が奇襲されました！」
「……」
だというのにだ。今の将兵と来たら、たかが夜襲や奇襲如きでてんやわんやの大騒ぎ。
アッティラも、深い溜息を吐いてしまう。その上で、自分の務めとして、
「……落ち着いて対処しろ。明かりをつけ、周囲の部隊から応援を向かわせろ。そうだな……一軍まるごと使え」
「い、一軍を応援に……!?　お言葉ですが、それほどの事では――」
「昼間は遊んでいた兵も多いだろう。問題ない。後詰に待機させていた軍を夜番に使う。連中も、夜に紛れるとはいえ、一軍に攻めてくるような馬鹿な真似はしないだろうしな」
指示を与えてやりながら、その利を考える。遊ばせていた兵を夜襲のために使うのだから有用だろうと。
人間より強靭な魔物とはいえ、休息は必要だ。魔人や使徒であるならともかく、大将軍である自分ですら多少の休憩は必須である。
だがきちんと、やるべきことをやっていれば負けない。それをアッティラは理解していた。
「いいか。慌てずやるべきことをやれ。人間共が何をやろうが、どっしりと構えていればいいのだ。どう足掻こうが二十万の大軍を千人ほどの軍で破ることは出来ん」
「は、はっ！　では、そのように！」
伝令にやってきた魔物隊長が司令部から走り去る。それを見ながら思う。
……忌々しい人間共が……手こずらせおって……。
人間の癖に生意気だ、と忌々しく思ってしまう。

だがそうは思いながらも、口元が喜悦に歪んでしまうのを抑えきれない自分もいた。
思うのは――こうでなくては、ということ。
呆気なすぎてもつまらない。戦争であれば、このくらいの応酬がないと味気ないものだ。己は国狩りにおいて多くの国々を粉砕したという自負があるが、それでも全く損害を受けなかったという訳ではないし、中にはこちらの不利を強いられた戦いもあった。
その時はやはり、忌々しく思ったものだが、今思い返してみると、それすらも己の勝利を飾るための良い思い出だ。
獲物は狩り甲斐がなければつまらない。弱すぎて、存在すること自体が憎たらしく思う人間も、こういう時には役に立つと思ってしまう。
そうした思いから出てくる結論はやはり、人間は文明を持たず、野良で獣のように過ごさせるのが一番だということ。
魔物が時折狩りに出かけ、大きな人間を狩ったとか、手強かったとか、何人かがやられたとか、そういった程よい刺激を得られる娯楽の為であればその存在にも価値がある。
弱い人間であれば自然淘汰されるだろうし、強い人間であれば生き残る。弱肉強食の世界には相応しいだろう。
「ふふ……やはり来て正解だったな……」
「おーおー、随分と楽しそうだなぁ……ま、負けがねぇなら気楽なもんだが、他に手は打たないのか？」
ガルティアがまたしても質問してくる。この魔人も、かなりの古株なこともあり戦争、戦闘には詳しい。他の凡愚共とは違う、百戦錬磨の魔人だ。
見届け役とはいえ、一応はこの軍で最上の存在であるため、アッティラはその務めとして口を開く。策という策もないが、
「問題はないでしょう。今日一日で、兵もある程度は緊張感を持ったはず。幾ら敵が待ち伏せや奇襲を仕掛けてこようと、仕掛けられる罠にも限りがありますし、どれだけ上手くいっても寡兵で大軍を破るのは容易ではない。明日……遅くとも、明後日の攻勢には敵の阻止臨界

点を越えて集落に攻め入ることが出来るでしょうな」
「ほぉー、そうか。まあ何でもいいけどな。俺はゆっくりとそのお手並みを拝見させてもらうぜ」
「はい。ガルティア様にはごゆるりと我が軍の勝利をご観覧頂ければと思います」
慇懃に頭を下げ、礼を通す。
どうなってもガルティアが出るような事態にはならない。
だが、もし攻めきれないようであれば自分が出ることも考えている。自分もそろそろ愉しみたい頃ではあるし、人間の絶望の表情をその目に焼き付けるために、前線に行くことは必須だ。
そうしてほくそ笑みながらも、アッティラはふと気づいて声を上げた。ガルティアが座る席、その隣に視線を向け、
「……そういえば、キャロル様はどこに？　先程から姿見えませんが……」
「ああ、なんか用事があるとか言ってたぜ。すぐ戻ってくるってよ」
「左様ですか……」
あのレオンハルトの側近である使徒から目を離すのは若干不安だが、まあ問題はないだろう。元より大将軍の身で行動を制限出来るはずもない。
気に病むだけ無駄だと、アッティラは一旦休息を取ろうとガルティアに一言告げた上で司令部を後にした。

小高い丘の上。月明かりだけが地上を照らす闇夜の中で、一際目立つ存在がいた。
それは全身黒の衣装でありながら、炎を纏わせて自らが明かりとなってしまっている魔人であり、
「うおっ!?　おい、見えたか!?　またやりやがったぜ！」
「うーん……カイゼル様、目がいいですねぇ。私は何かが起こったのは分かっても、この距離だと何がなんだか……」
「なんだ分かんねぇのか？　目を凝らして気配を研ぎ澄ませば分かる

だろ」
「いやそんな事出来るのカイゼル様の父親とかご兄妹くらいですから……」
と、戦場を見渡せる丘の上でそんな緊張感のないやり取りを行うのは、魔人カイゼルと、彼のお付きとしてこの場にいる魔人ハウゼルの使徒、火炎書士。
相変わらずどっしりと胡座をかいて一日中ずっと戦場を眺めているカイゼルは、飽きもせずに毎回何かが起こる度に声を上げていた。
火炎書士はその話に付き合ったりしてはいるが、あまり理解は出来ていない。
というのも、丘の上から戦場を見渡せるとはいえ、辺りは背の高い木々が生い茂る山林地帯。
昼間は霧が出ていたこともあり、正直、ちゃんと観戦出来ているとは言い難かった。
カイゼルも霧が出ている時間帯は自分の所為とは知らずに色々と文句を言っていたものだが、夜になってある程度霧が晴れたところで、再び盛り上がり、その身体から昇る炎も轟々と揺らめいていた。
彼はその先を指差しながら言う。血筋のせいか、目や気配を感じ取るのに長けているのか、魔軍の陣の方を指し、
「あっちの方で、夜襲を掛けた奴がいるな」
「へぇ、それはそれは、勇気がありますねぇ……」
「おいおい反応が薄いな。たった1人でだぜ？」
「えっ？　1人でですか？」
夜襲、と聞いて、まあそういうこともあるだろう。そういうことをしなければ勝てないだろうし、とそこまで驚くことをしなかった火炎書士だが、1人、という言葉にさすがに驚いてしまう。
カイゼルが言うには、
「あっちの方は部隊単位の奇襲っぽいが、向こうの陣に突っ込んでいったのはたった1人だ。しかも、闇に紛れた上で物音一つ立てず、数十人か百人以上やられるまで相手に気づかせねぇ」
「……え、人間ですよね？」

「みたいだな。やりやがる。うちのミコトみたいな芸当しやがって……クハハ、おもしれぇ！」
膝を叩き、やはり炎をメラメラと沸き立たせながら、カイゼルは笑う。
鋭い目をその先に向け、告げるのは彼の目的だ。
「あの人間なら、俺様のお眼鏡に適うかもしれねぇ……よし、あいつを重点的に見るぞ」
「さいですか……まぁ、お好きにどうぞ」
「――見るのは構いませんが、そもそもこんなところで何をしてますの？　カイゼル様？」
「あ？　……って、キャロルじゃねぇか。なんだいたのかよ」
不意に背後から声が掛けられ、カイゼルと火炎書士の二人が振り向くと、そこにはレオンハルトの使徒であるキャロルの姿があった。
腰に手を当て、微妙に呆れるような色の表情を見せてキャロルは言う。カイゼルらがこんなところにいるとは、さすがのキャロルも情報を掴んでいなかったのだ。
「なんだじゃありませんわカイゼル様。レオンハルト様の許可は取ってますの？」
「ぐ……言っとくがまだ帰らねぇぞ！　目的を遂げるまではな！」
「あ、キャロルさん、こんばんはです」
「こんばんはですわ、火炎書士さん。それで、どういう訳でここにいますの？」
「実は、かくかくしかじかで……」
「これこれうまうまですわね。分かりましたわ！」
「え!?　今ので分かるんですか!?　ノリで適当言っただけなのに!?」
「キャロルにツッコむだけ無駄だ。こいつは俺達兄妹以上にぶっ飛んでる時があるからな」
火炎書士の適当な返しだけで理解してしまったキャロルに、カイゼルは頭を抱えるような思いを得る。
だが、やって来る関係者の中ではマシな方だとも思っていた。これが瞬間移動してくるゴリラなら、まず真っ先にぶん殴られるだろう。

躾と称して散々やられたし、無敵結界があるからと手加減もしない。衝撃は伝わるってのに。おかげでよく壁を壊してしまった。
「そんで、俺様のことを報告でもすんのか？　……つーか、まさかとは思うが親父もいるんじゃねぇだろうな……？　気配はしねぇが……」
「生憎とレオンハルト様は居ませんわ。別件で用事があるそうですの」
　ただ、とキャロルは一声置いて、
「それが終わったらこちらの視察に来るかもしれない、とも言ってましたわ。時間があれば、ですが」
「マジか!?　くそっ、それならなおのこと早く終わらせねぇと……！」
「……とはいえ聞く限り、それなりに時間は掛かりそうではありますの。なのでわたくしもカイゼル様に付いていきますわ！」
　ビシッとポーズを取って言うキャロル。それに二人は動じもせず、
「助かります。正直、私1人だと結構お世話が大変でして……」
「あぁ？　ふざけんな、そんなの……あ、いや、キャロルなら別にいいか。他の奴ならともかく」
「おほほほ、というわけでわたくしも観戦致しますわ！」
　カイゼルと火炎書士、二人の了承を得たことでキャロルもピクニックシートの上にお邪魔する。空になった弁当箱を避けると、そこで思い出したように、
「そういえば、お腹空かせてないかと思って、魔軍からお食事を拝借してきましたわ。いただきます？」
「おお、気が利くじゃねぇか！　ちょうど何か摘みたいと思ってたところだ！」
「もはや完全にピクニックですね」
　火炎書士の何とも言えない言葉が響き、丘の上ではちょっとした騒ぎが始まった。

「……何か大きな存在に見られてるな……もしかして魔人かな？」
　夜襲を終えて拠点に戻っている最中のロランは、血に塗れた頬を拭

いながら遠くの気配を感じ取る。
よく見れば遠く、丘の上が何やら明るいような気がするが、気の所為ではないだろう。
そこに何かがいる。自分ではどうしようも出来ないほどの何かが。
だが、敵意は感じない。ただただ見ているだけのようだ。
「……しばらくは放置するしかないね。何かしてくる気配もないし……一応は監視を置いて、動きがあった時にどうするか考えよう」
と、ロランはその存在を頭の片隅に追いやり、既に次の手の事を考えていた。
その存在が、色んな意味で彼にとっての台風の目になるとは知らずに。

「――アルベルト兄様、久し振り～、さっそくだけど、マネージャーに出来るようないい人材知らない？」
「……いきなりだな、ルイゼル」
夜の森。カラーの里、ペンシルカウ。その離れに作られた屋敷の一室にて、兄と妹は顔を合わせた。
1人は魔人レオンハルトの長男、魔人ケッセルリンクの子供でもある魔人、アルベルト。
もう1人は妹。魔人レオンハルトと魔人ラ・サイゼルの娘であり、兄妹達の中では次女に当たる存在、魔人ルイゼルだ。
鋭い目を向けながらも上座で腕を組み、その筋肉質な身体を微動だにさせず寡黙さを貫く長兄は、明るく騒がしい目立ちたがり屋の妹相手でもそれを崩さない。
だが口元を覆い隠すようなマフラーの下では、僅かに微笑を浮かべており、
「……面倒を掛けたな。オレの代わりに、里を襲う人間を始末してくれただろう？」
「あ～ん、そんなの全然オッケー！　アルベルト兄様が管轄してるカラー達を襲うなんて、ルイゼルちゃんにとってもオシオキ確定だから

～」
「ふっ、そうか――メリル」
「はい、アルベルト様」
　気にしなくていいと言う妹の気遣いに短く笑いながら、アルベルトは自分に仕える友人の名を呼ぶ。
　すると奥から、二人分の紅茶を入れたカップとそれを乗せたトレイを持って、優しげな目尻が特徴の美しいカラーが現れた。
　背中に弓を携え、腰まで届く長い水色の髪を持つカラーは美しく成長した、ルイゼルも面識のある兄の友人である従者であり、
「あ、メリルちゃんお久しぶり～」
「はい、お久しぶりです。ルイゼル様」
　柔らかい笑みを浮かべる彼女に、軽い挨拶を送るルイゼル。
　だが紅茶をルイゼルの前に置く美しい彼女の、その額の赤い宝石を見るとニヤリとした笑みを浮かべ、彼女が屈んだ瞬間に耳元で囁く。
「あれぇ～？　まだ〝そういう関係〟になってないの～？」
「っ!?　――あっ！」
「おおっと」
　瞬間、メリルの頬が赤くなり、その身体を跳ねさせると、手元が狂って紅茶のカップを落としてしまう。
　だがそのカップから溢れる紅茶を、即座に凍らせて手で受け止めたルイゼルは、その紅茶をカップに戻しながらイタズラっぽい笑みで、
「ふふふ、気をつけてね～？　ルイゼルちゃんの可愛いお顔やすべすべのお肌に傷がついたら大変だから～」
「も、申し訳ありません！　とんだ粗相を……！　すぐに淹れ直します！」
　と、いそいそと紅茶を淹れ直そうと裏に下がっていくメリル。その一連のやり取りを見たアルベルト。そしてルイゼルの横に控えていたユキは、
「……ルイゼル。メリルを誂うな」
「ケケケ、自分が原因なのにあの言い草とか、さすがのユキちゃんもないと思いますよ？」

「うふふ、ごめんなさぁ～い。ルイゼル、ああいういじらしい女の子を見ると我慢できなくて」
　と、悪びれもせずに謝ってはみせるルイゼル。アルベルトも軽い息を入れて呆れてしまう。
「まったく……」
「でもでもぉ、アルベルト兄様もあんまり焦らすのは良くないって思うな～？」
「……いい人材を探してると言ったな？」
「話を流されたわねぇ。でもマネージャー候補の方が大事だし、聞くわ！」
「ぶれねぇっすね」
　ユキの短いツッコミの声を無視し、アルベルトに向き直るルイゼル。
　アルベルトはその凶器とも言える逞しい腕を頬杖に突き、普段から険しい表情を少し考えるものにすると、
「最近、優秀な防衛隊長が引退した。本人はまだやれそうだったが、後進の育成の為に、と強く希望してな……今は里の離れで隠居している」
「へぇ、優秀なの～？」
「腕は確かだ」
　短い言葉だが、アルベルトのその言葉に勝るものはない。
　兄妹達の中でも最強の素質を持ち、完璧で、最も父親に近いとさえ言われるアルベルトの言は何よりも信頼出来る。
「アルベルト兄様がそう言うなら、優秀さは保証されたものね！　なら早速行ってくるわ！」
「……何をするか大体の予想はつくが……一応言っておく。許可は取れ」
「はぁい。分かったわアルベルト兄様」
　――まあ、わたしの誘いを受けないはずがない。とルイゼルは確信しているため、特に気にすること無く頷くルイゼル。
　そうしてアルベルトからその者が住む場所を教えられると、一目散

にユキを連れてその場所に向かった。

「……っ、夜はやっぱり冷えるわね……こんな日は家の中で毛布に包まって、1人でお鍋に限るわ……」

はふはふ、と1人家の中で贅沢に鍋を楽しむそのカラーはその日、久し振りに家の戸を叩く音に反応してしまった。

「……？　こんな時間に誰かしら……はぁ、せっかく人が引きこもってるって言うのに……」

と、立ち上がり、玄関に向かって歩を進め――しかし思い直して踵を返す。

「――無視しましょう。私は職を辞しているのだし、出て行く義務はないわ」

こういう夜分の訪問など、十中八九厄介事に決まっている。

君子危うきに近寄らず、という言葉がＪＡＰＡＮにあるという。その言葉通り、彼女は厄介事の種には近寄らず、再び鍋の置いてある机の前に戻ったのだが、

「――あ、お邪魔してるわ～」

「ザ・不法侵入ーーー!!」

「……ふぇ？」

思わず普段出さないような声を出してしまう。

夢か何かを見ているのだろうか。気がつけば、机には二人の女性――白いローブのようなものを身に着けた角と羽が生えた愛らしい笑顔の女性と、両腕が金属製のキチガイじみた笑みを浮かべる小さな少女がいた。

そして前者がこちらに向かって言う。鍋の中にお箸を突っ込みながら、

「あなたがミストラルねぇ？　――はむっ」

「……そうだけど……？」

――あ、肉食いやがった。と、ペンシルカウの〝元〟防衛隊長、ミストラル・カラーは呑気にそう思う。

どこか現実離れした光景に脳が追いついていない。
というか、現実であったとしても別に驚かない。
現職時代に、散々突飛な事態を目の当たりにしてしまったからか、今更この程度では動じないのだ。
特に、自分を一戦士だと言い張る化け物のような強さの部下には苦労させられた。
王にならないのなら、もういっそお前が防衛隊長になれ、と後継に指名してみたが、自分には荷が重い、とふざけた回答で断られてしまい、結局は他のカラーに後を任せたのだが、その子もきっと苦労しているだろう。
とはいえここにいるからには何らかの用件があるのだろう。害意は感じないので極めて落ち着きながらミストラルは対応する。身に纏った毛布を擦りながら、
「ええと……何の用事かしら？」
「決まってるじゃなぁい！　あなたを、お・さ・そ・い♪　しに来たのよぉ！」
「……お誘い……？」
と、言われてもちょっとよく分からない。
もしかして〝変化の時〟でも来たのだろうか。ちょっと天使っぽい見た目だし、自分ならきっと天使になるに決まってるし。
ただ天使が迎えに来るようなものではない気もする。それって普通に死んでるのではないだろうか。
それとも鍋のお誘いだろうか。いや、そもそも自分が開いてるのであって、誘うならこちらの方なのだが。さも当然の如く我が物顔で鍋を占拠してるので、こっちがお誘いを受けた立場だと錯覚しそうになる。
ただまあ、どちらでも構わないかと思い、
「……まぁ、材料は余ってるし、別にいいわよ。食べてく？」
「あら、いいってことね！　それじゃあ――」
と、彼女の手がこちらに伸びてくる。その冷んやりとした手が、こちらの頬を撫で、何かが入り込んでくる感覚を得ると、

「わたしの名はルイゼル。世界一のアイドルになる予定の美少女よ！
これから、二人三脚で頑張っていきましょうね～？」
「……は？」
――意味不明、と思ったのもつかの間、私はカラーをやめた。

早朝の天気

翌朝。
季節外れの熱を持った熱い大気が僅かに東側から吹き荒ぶ中、森の中でひたすらに探索を続けている一団があった。
それは全員が闇に紛れるような黒装束を身に着け、身を隠すような移動を繰り返す者達だが、今はその警戒も解かれ、くまなく周囲を探索している。
その集団の中心にて、痩躯の男は苛ついたように声をあげた。
「なぁ～んで、見つかんねぇのよぉ～～～!!」
「す、スケアクロウ様、お気持ちは分かりますが声を抑えてください」
「大声は、闇に紛れる者としてどうかと……」
「うっさい、そんなことわかってんだよぉ！」
分かってるなら態々大声で言わずとも……、とその一団、影の楔という魔物討伐隊の一員達は誰もが思ったが、茶色い髪に悪人顔の男、スケアクロウはこう見えて、影の楔では上から数えた方が圧倒的に早い権力者であり、あまり強く言うことは出来ない。
それに彼らとて、叫びたい気持ちにならなくもないのだ。夜明け頃に到着してから、今までずっと、この場所で目的の場所を探しているのだが、一向に見つからない。
やはり存在しないのではないかと、存在が危ぶまれる里の存在に隊員も、そしてスケアクロウも眉根を寄せて苦渋の表情を浮かべた。
「魔法の里があるなら絶対この辺りだろうによぉ……ロランの奴、まさかガセ情報を掴ませやがったか……？」
「さすがにそれは……幾ら相手がスケアクロウ様の元同僚の友人で、あの鋼の騎士団の長とはいえ、我らに嘘の情報を掴ませて益があるとは思えません」
「まぁ、そうだよなぁ」
それも理解している。そちらは本当に。スケアクロウ自身も、言いながらそれはないだろう、との見方をしていたのだ。
鋼の騎士団と影の楔は、別段協力関係にあるわけでもないが、それ

でも同じ魔物討伐隊で1、2を争う規模の組織であり、何かと交渉したり、場合によっては協働することもある。
取るに足らない同業者程度であれば、影の楔も食い物にすることを厭わないが、鋼の騎士団、そしてキリング商会だけはそういう対象としては見ていない。
何しろ敵に回すにはリスクが高すぎる。鋼の騎士団は言わずもがな、その兵力。キリング商会は今の外で生きる人間にとっては無くてはならないほどの大規模商会であり、多くの物資を抱えている。故に手は出せない。
その鋼の騎士団の隊長であるロランが、魔軍の襲撃を受けて隊の存続が危ぶまれるほどの一大事に、態々同じ人間同士で敵対するような行動を起こすだろうか。
「ロランの奴はかなり慎重だからなぁ。意味のねぇ嘘はつかないし、自らが不利になるような嘘はつかないよなぁ？」
スケアクロウはロランという人物の人となりをある程度知っているため、断言出来る。それはない、と。
ならば自分達が魔法の里を見つけられないのは、やはり彼も言っていた、何らかの魔法で隠蔽されているという可能性が高いのだが、
「魔法を使っても見つからねぇとか、どうかしてるぜ……！　この森はよぉ……！」
「申し訳ありません……何らかの魔法の痕跡はあるのですが、見つけられず……」
部下からも謝罪の言葉が飛んでくる。
影の楔にも魔法使いは少なからずいるので、その者達に魔法による結界や暗示の可能性も考えてそれらを解かせようと試みたのだが、今の所、成果は上がっていない。
こうなってくると、さすがのスケアクロウもいつものゲスの笑みも鳴りを潜めて、表情が引き攣っていく。
「このままでは、手紙を届けるどさくさに紛れて貴重なマジックアイテムをくすねて売りさばく大作戦が台無しに……！」
「……ブレないですね、スケアクロウ様……」

「ゲッヘッヘ、このご時世、誰かから何かを奪わなきゃ生きていけないのよぉ……！」
部下からの声も気にしない。スケアクロウは己が俗物であることを自覚しているが、改める気もないのだ。
この世は強者だけが生き残れる。抜け目なく、他人から何かを奪うことに容赦のないものだけが良い思いが出来る。弱者や変な優しさや同情を見せる者は飢えて死ぬだけだ。
とはいえ、食い物にする相手を見極めることも重要である。
スケアクロウはかつてロランという新入りが影の楔に加入してきた時、その技量を見抜いて真っ先に近づいた。
無論、他の同僚達のように新入りの癖に生意気な奴に痛い目を見せてやろう、ということではない。
影の楔の内情や、この界隈での暗黙のルールや、気をつけた方がいいヤツなどを親身に教えてやったのだ。
そのおかげか、ロランは他の馬鹿共のように自分を消すようなことはしなかったし、影の楔を抜けた後も鋼の騎士団という馬鹿でかい組織の長になったのだからスケアクロウの判断は間違いではなかった。
「いいかお前ら、この世で一番大事なのは判断力だぜぇ～？　僕ちゃんはこれまで、判断を間違ったせいで死んだ奴をごまんと見てきたからよぉ」
「……スケアクロウ様の生き残るための嗅覚は信用しております」
「おおよ！　僕ちゃんの助言には従うもんだぜぇ？　そう、あれはいつだったか……影の楔で幹部候補にまで上り詰めたとんでもなく強い女が昔いたんだがよぉ……幹部になるって話があがったところで、足を洗って酒場なんか始めやがってな。僕ちゃんが散々戻ったほうがいいって助言したってのに、たまに仕事を手伝うくらいで隊には戻らず、結局は魔人の襲撃を受けて死んじまってよぉ。イイ女だったってのに惜しかったよなぁ？」
「はいはい……何度も言い寄ったけどフラれたって話ですよね？」
「振られてねぇよぉ！　まだ口説いてる最中だったってだけだ！　時期が来れば落とせたはずなのよぉ！」

古い部下から呆れ気味にそう言われ、スケアクロウは憤慨する。
どうにも間抜けさが見え隠れするようだが、これでも生き残る嗅覚を評価されて影の楔でのし上がった猛者だ。周囲の警戒は怠っていない。
「それにしても、冬だってのに最近は熱いし、天気も荒れてるしよぉ……さっさと帰りたいぜ――お？」
と、不意にスケアクロウの感覚に引っかかったのは、何かから解放されたかのようなその気配だ。
他の隊員達も、気配に敏感な者ほどそれにいち早く気づく。
副官がスケアクロウに声を掛ける前に、スケアクロウは口元をニヤつかせて声を発した。
「……ゲッヘッヘ、どういう訳か分からねぇが……見つけちまったなぁ？」
「この急に現れた人の気配は、やはりそういうことでしょうな……」
「魔法か何かで隠蔽してたんだなぁ、やっぱり」
急に人の、正確には人里特有の気配や痕跡が見つかったことで、スケアクロウはやはり魔法だろうと判断する。
そして魔法によって隠していたのならば、やはりこの先にあるのは魔法の里。ロランに依頼された人物がいるという、存在自体が今まで危ぶまれていたその場所だ。
とはいえそれも今日で終わりだ。スケアクロウはその魔法の里を見つけたのだから。
「さぁて、ロランくんの依頼をこなしてやるとしますかねぇ……！」
舌舐めずりをしながら、スケアクロウは部下たちを伴って、その先に足を踏み入れた。

「ふふ……お客さんが多いと賑やかで楽しいね」
「……賑やかと言うには少しアレな気も……ああいえ、やっぱり何でもありません。よく考えたら、私がいつもいる場所に比べればマシです」

地下の書庫迷宮。ガイ一行は昨夜、そこでキャンプすることにし、今無事に朝を迎えた。
テントから出てきた未来視の魔女のその言葉に、皆の朝ごはんの支度をしているイヴは、自分の今の居場所の事を考えて目尻を落とす。
魔法で火を起こし、水を沸かし、持ってきた鍋やフライパンなどで料理をしながら見るのは、騒がしい朝の風景だ。
まだ食事も取っていない朝の時間だが、やることは割と過激である。それは、
「はい！　もっと腕を振ってください！　動きが悪いですよ！」
「ききー！」
「ま、待てって!?　くっ、ってかこの猿マジで強ぇ……!?」
「まだ軽口を叩ける余裕があるみたいですね。藤吉郎、もっと厳しく攻撃してください！」
「きぃー!!」
「っ、ま、待て……!?」
……ほんと、朝っぱらから元気ですねぇ……。
と、早朝訓練として、白兎が監督しながら、クーベロと藤吉郎の模擬戦をしている様子を見て染み染みと思うイヴ。
修行にしては結構ガチ目の戦闘をしているが、イヴからすればこれくらい、朝の光景で言うなら軽度のものだ。
イヴが普段住んでいる紅魔城だと、朝っぱらから破壊の音が連続するような修羅の地であるため、これくらいなら暖かい目で見守れるくらいにはなってしまった。
特に最近は主の子供達――白兎を含めた兄妹達のじゃれ合いもあったりして、何かと騒ぎが絶えないため、特にそう思う。
混ざるようなことになるのはただの人間として死んでもゴメンだが、師匠が師匠なため、たまに脳筋の群れに放り込まれるのが納得いかない。
それに比べればこうやって観戦しながら料理をすることのなんと平和なことか。迷宮の中だというのに、安息の地のように感じてしまう。

まぁ、紅魔城自体が即死級トラップが至るところにある高難度ダンジョンみたいなものですよねぇ、と軽くげんなりしながらも気を取り直して告げる。
「ご飯、出来ましたよ」
「――あ、それじゃあ終わりにしましょうか。二人共、礼」
「きき！」
「あ、ありがとう……ございました……」
白兎の声に従って、挨拶をする二者だが、藤吉郎は平然としているのに対して、クーベロの方はグロッキー状態。やはり曲がりなりにも、藤吉郎は使徒であり、クーベロは人間である。体力の差は如何ともし難いだろう。
普通に歩いてくる白兎と藤吉郎と違って、クーベロは地面を這いずるように食事を取ろうと近づいてくる。ボロ雑巾というか、ゾンビにも見えなくもない。
ここまですることはないような、と思いつつイヴは食事を器に取り分けて二つ分を手に持つと、先にクーベロの元まで近寄った。少し屈んで、
「お疲れ様でした。朝ごはんをどうぞ」
「お、おお……悪いな」
「お気になさらず。苦労していたのは見ていたので」
そう言って朝ごはんの乗ったお皿をクーベロの前に置いておく。
傷だらけの彼を横切って、今度は奥の扉まで近づく。そして若干迷いながら、
「彼の分はどうしましょうかね……？」
「扉の前に置いておいたらそのうち受け取るんじゃないかな？」
「一応、食事が出来ましたと声を掛けてみましょう。もしかしたら出てくるかもしれません」
Cと白兎にそう言われたので、そうしてみるか、とイヴは頷く。扉に近づき、ノックをした上で、
「ガイさーん？　朝ご飯出来ましたよー？」
――しかし、返事は返ってこない。

扉は黙したままだ。
危険なため、開けて中を覗く訳にもいかず、イヴは迷った末に、
「……ご飯、ここに置いておきますから、お腹が空いたら食べてくださいね？」
と、告げてみる。すると背後から魔女と白兎が、
「そもそも聞こえているのかな？」
「中で身じろぎはしてるみたいなので、聞こえてはいるんでしょうか……ちょっと分からないですね」
「きー！」
〝とりあえず、ガイは諦めて飯にするか〟という藤吉郎の声を読み取って、イヴは微妙な表情になる。
「……なんだか、引きこもりの子供を持った親みたいなシチュエーションですねぇ……」
「その場合、扉の前に私達がいるから出てこないということになるのかな？　家族と顔を合わせたくないだろうし」
「試しに扉の前から離れてみます？」
「よくわかんねぇがやめてやれよ……」
クーベロが瀕死の状態ながらもツッコミを入れる。その状態でツッコミを入れるとか、自分の仕事がなくなって楽でいい、とイヴはクーベロの存在を有り難く思いながら、自らも戻って食事に移った。
食事中の話題は、やはりガイがいつ出てくるかということで、
「ふむ、禁呪の習得には時間が掛かるみたいですね――はむ。今日も美味しいですね」
「ふふ、まあそれだけ強力なものだからね。時間を掛ける価値のあるものだとは思うよ。危険もそれだけ大きいけどね――ふむ、これはＪＡＰＡＮの味噌を使った豚汁だね？　そしてこちらはシンプルながらも出汁を加えた卵焼き……だし巻き卵か。それと梅干しのお握り……ＪＡＰＡＮの料理、和風の朝食もたまにはいいものだね、もぐもぐ」
「魔法に携わるものとして興味はありますが……あまり触れない方が良さそうですね……。朝食はまぁ、普段から白兎さんと行動を共にし

てますし、白兎さんの母親の出身地でもあるＪＡＰＡＮの料理を作ることが多いんですよ。それに、父親であるレオンハルト様の方も、何気にＪＡＰＡＮ料理が好きなので。本当ならもう一品くらい加えたいところですが、器材も材料もそれほど多くは持ってきていないのでそこは個人的にも残念ですね」
「……私も食べることにします」
「きき」
「ええっ!?　刀が人になった!?　つーかお前ら、のんびりしすぎだろ!?　もっとガイのこと心配しろよ！　いや、びっくりするくらい美味いけどさぁ！」
「二つの意味で、ありがとうございます」
クーベロが全ての事にツッコんでくれて有り難い、と深々と礼を告げるイヴ。料理を褒めたことに対しても感謝を乗せた形だ。
日光さんが食事に釣られて人に戻ったりして、大小様々な驚きがあっただろうに。助かる。クーベロはもうこのまま連れていってはどうだろうか、とイヴは己の心の安寧を保つためにそんなことを真面目に思う。
とはいえ、だ。確かにガイが早く出てきてくれないと、自分達もしばらくここで過ごすことになり、色々と大変である。
せめて持ってきた食料が尽きる前には出てきてくれませんかね、とイヴは豚汁を啜りながら呑気にそう思った。

雲間の直ぐ下を飛行し、目的地へと向かう強大な存在がある。
それは影の上では一体の存在に見えるが、実はそうではない。
一体の巨大な存在の上には、同じくそれに勝るとも劣らない程度の力を持った者達がいる。
彼らは皆、目的を同じとする者達だが、決して同志ではない。
目的の為に一時的に共闘する。一応は同じ勢力の者達ではあるのだが、その空気は決していいものではなかった。
「……そろそろか？」

「ああ。露骨に空気が変わってきた。近いだろう」
と、そんな中でそれほど関係性が悪くない両者が会話を行う。
前者は魔人四天王。カラーの魔人であるケッセルリンクで、後者はライゼン。四大聖竜の一角である。
残りの魔人四天王も含めて、彼らは元魔王であるアベルの討伐のために、奈落にある空洞へと向かっていた。
だがライゼンの背中に乗っている者達の間に会話はなく、その代わりにケッセルリンクとライゼンがやり取りを行う。
ケッセルリンクとライゼンはそれなりに交流がある間柄だ。過去、レオンハルトとの一件で知り合ったし、ライゼンが紅魔城に居候していると、それなりに関わることも多い。
レオンハルトの使徒であり、ケッセルリンクの後輩でもあるペールがライゼンと仲が良いのもあって、やり取りには何の支障もなかった。
そしてその会話の内容。空気が変わった、という言葉にケッセルリンクは軽く眉を引き締める。
「確かに空気が……空が荒れている気がするが、それはどういう意味だ？」
「……アベルの〝力〟だ。これは」
短く、そして何か思うところがあるような返答をライゼンが行う。
その言葉の意味を考えながらも、相手に遠慮なく問える間柄であるため、ケッセルリンクは率直に問いを投げた。
「……その力というのもそうだが、そもそもだ。アベル、というのは強いのかね？」
レオンハルトは我々でも倒せると言っていたが……、とケッセルリンクは呟く。
もたらされた情報、アベルのことをあまりよく知らないケッセルリンクが持つ情報で言うと、アベルの脅威は未知数なのだ。
魔王の血は殆ど残っておらず、全盛期には程遠い。加えて意志も希薄、あるいは狂気に染まっているため、総合的な戦闘力は魔人四天王よりも若干上に留まるという。

元魔王にしては強いのか弱いのか微妙なところだが、その本来の強さや、ライゼンの言う〝力〟とやらも気になり、ケッセルリンクは疑問したのだ。
今から相対するのであれば情報は知っておいた方がいい、と。だが、
「……ふっ、奴が弱いとでも言うつもりか？　そんな訳がないだろう……」
「む、カミーラ……」
と、ライゼンより先に答えたのは、意外にもカミーラだった。
ケッセルリンクという仲が悪い相手の問いに答えるというのは、ケッセルリンク自身も意外であったため、僅かに驚きを見せる。
軽く小馬鹿にしたような感じではあるが、カミーラは言う。弱い訳がないと。
「……奴は曲がりなりにも……あのマギーホアと互角に争った……魔王の力が薄まってるとはいえ、楽観的に構えられる相手じゃない……」
「……マギーホア。確か、ドラゴンの王だったか。その強さも伝え聞く程度でしか知らないが……」
ケッセルリンクも話でしか聞いたことがない。
昔の伝承で軽く聞いたことがあるし、レオンハルトから軽く聞いたこともあるが、やはりそれほど強かったのだろうか、と疑問符を浮かべる。
すると今度は別のドラゴンから返答が来た。――ノスだ。
「くく……そのマギーホアの強さとやらは、そこの友人がよく知っているだろう？　そこの生ける王冠でも良いがな」
「……っ」
「……ああ、奴は最強のドラゴンだった」
無論、アベルのこともな、と嫌味たっぷりに告げるノスにライゼンはしばし間を置いて答える。カミーラがもはや無言のまま歯を噛み締め、ノスを睨んだ。
ライゼンにとってマギーホアは唯一無二の親友である。アベルも、

彼にとってはかつての部下であった。
カミーラにしてみればどちらも己を道具扱いした憎き相手だが、ライゼンにとっては色んな思いがある相手である。
だがそのどちらも強さを知っていることに変わりはない。
そして言う。唯一知らないケッセルリンクの為に、ライゼンは、
「――マギーホアは、天候を操る力を持っていた」
「……！　それは……」
ケッセルリンクの表情が驚きに染まる。それほどの力を持っているのかと。
だがライゼンは当然のことのように答えた。昔を思い出すように。
「奴は全てのドラゴンの中で最強の力を持ちながら、その天候を操る力を持っていたことで、あらゆる戦いに勝利してきた。空を往き、空で戦うドラゴンにとって、空を操れる奴の力は無敵にも等しい。決闘だろうが、他種族との闘争だろうが敗北は無し。故にドラゴンは、他の種族から天空の覇者とも呼ばれた」
もっとも、それはマギーホアのことを指していたのだが、とライゼンは続ける。
続いてカミーラも、
「……マギーホアは怪物だ。丸い者との戦いも、ラストウォーも、そしてあの忌まわしき戦いでさえ、奴は1人で数千、数万の軍勢を相手にし、戦ってきた。だが……」
「そんな奴にもたった1人、互角に相対出来る者が現れた」
ノスが引き継ぐように言う。愉快そうに、彼もまた昔のことを思い出している。抱く感情は全く別のものだろうが。
「それがアベル。ドラゴンの魔王にして、奴もまた――天を操る力を持つ」
「……アベルの力とは、そういうことか」
「ノスの言う通りだ。その証拠に……この空だ」
と、ライゼンは周囲の空を、そして向かう先の空を指して言う。
そこには、生き物のように蠢く黒雲が巨大な塊となり、空を覆っている。

実際、先程から強風が吹き荒れ、雲間に雷鳴が轟き始めていた。
そしてこれこそが、アベルがいる証拠なのだと言う。
「全ドラゴンの中で、天を操る力を持つほどの存在はマギーホアとアベルのみ。そしてマギーホアでないとすれば、残るはアベルだ」
マギーホアではない理由を敢えて言わずに、ライゼンは断定する。既に世捨て人となった彼に今更このような力を振るう理由はない。
彼はこの力で、マギーホアに反逆したのだ。
「マギーホアとアベルがお互いに軍勢を引き連れての戦争は……終始、マギーホアの、我らの優勢であった。アベルの元に魔人や一部のドラゴンがいたとはいえ、多くのドラゴンはこちらの味方だったからな」
数の上では圧倒的にマギーホアが上。しかし、戦争は長引いたのだ。
その理由が、アベルの強さと、狡猾さだ。
「アベルは通常のドラゴンが思いつかないような策や奇襲で我らを相手にした。場合によっては逃げ隠れることも辞さなかったが……奴自身が囮となって1人で戦うこともあったのだ」
「……伝え聞く話とは、少し違うようだな」
「……ドラゴンの考え方だと、奴は臆病者で卑怯者だ。それは間違いない」
だが今の基準だと違う。奴は狡猾だが、臆病者ではなかった。
戦い以外にも取れる手段があり、そのことを考え、実行出来るだけの能力を持った特異なドラゴンだったのだ。
それを排斥して、道を踏み外させたのは他ならぬ自分達（ドラゴン）だと、ライゼンは心の中だけで思う。そのことを口には出さずとも、代わりにアベルの評価を正直に口にする。
「しかし奴は強かった。それこそ、マギーホアがいなければ奴がたった1人で戦っても奴の優勢だった。戦争の終わり頃には実際、1人となった奴を捕らえようとして、多くの同胞が犠牲となったからな……」
結局はマギーホアが捕まえて幽閉したのだ。

そして他の魔人達やアベルに味方をしたドラゴン達はマギーホアが残らず処刑した。
一部、逃げ出した者達もいたようだが、それについてはノスが、
「……そこのカミーラや……ケイブリス、貴様も逃げ出していたはずだな？」
「……」
「は、はぁぁ!?　僕、そんなの知りませんけどぉおおお!?　ノスてめぇ！　ふざけたこと言ってんじゃねぇぞ!!」
カミーラは無言で答えず。ケイブリスは露骨に慌て始めた。
どちらも、ラストウォーの後期、敗勢が決まった頃にはアベルの元を離れて野に散り、隠れ潜んだ魔人である。
ケイブリスはそのことを何とか隠したいようだが、ライゼンはそれを聞いて特に何とも思わず、
「ふむ……？　やはりあの頃にはいたのか。見覚えはないが……まあ良い。後はギリウムなども逃げていったはずだな。まあもっとも、必死に捜索させたカミーラなどと違って、ギリウムのことはマギーホアも忘れておったからな。――小物過ぎて」
「ああ、確かレオンハルトに殺されたという……」
ケッセルリンクが前に聞いた話を思い返す。確かレオンハルトが魔人になって真っ先に殺した魔人だ。
どうにも彼は彼で、戦争初期にあっさりとアベルを見限ったせいか、マギーホアの記憶にも残らず、それ故に探し出して殺されるようなことはなかったのだと言う。
ケイブリスはその時、弱すぎて戦争に参加もしていなかったので言わずもがな。後生き残っている魔人は、今偵察に出かけているというメガラスである。
メガラスについても思い出しながら、ライゼンは高度を下げていきながら声帯を動かす。高度を下げた理由についても、
「そろそろ奈落か。まあそういう訳で、とにかく、アベルは強い。奴の力、能力は今は劣っているだろうとはいえ、全盛期は俺とてただ耐え凌ぐしかなかった相手だ。――気を引き締めて掛かるのだな」

「……わかった。教えてくれて感謝する」
（帰りたい帰りたい帰りたい帰りたい帰りたい帰りたい帰りたい帰りたい帰りたい帰りたい――）
ケッセルリンクはその情報を教えてくれたことに対して眼下のライゼンに感謝する。
背後、黒雲が荒れ狂う度に巨体を跳ねさせ、先程からずっと震えているケイブリスが何かを呟いていたが、そちらは無視することにした。

氷の使徒

隠れ里の包囲戦。山林地帯での戦闘が二日目に入った。

「ぎゃははは！　ようやく俺達の番だ！　人間共をぶっ潰して――おわっ!?」

「な、なんだこれ!?　落とし穴か!?」

「馬鹿者！　罠に気をつけろと言っただろうが！　昨日の話を聞いていないのか!!」

戦いは昨日と変わらず、鋼の騎士団側が地の利と天の利――霧を活かしたゲリラ戦を展開し、アッティラ軍は昨日よりかは警戒しているものの、侵攻はまるで亀の如く進んでいない。

夜襲の甲斐あってか、多少は疲れを見せているかと思ったが、相手は突入する兵員を入れ替えているためか、それとも魔物の驚異的な体力故か、疲れている様子は見られない。

背の高い木の上を移動し、罠の設置と奇襲、偵察など全てを同時に行っているロランは、こちらを攻めようとする部隊を見て唸った。

……てっきり、昨日と同じ部隊を使ってくるかと思ったけど。

魔軍の兵が入れ替わっていることに気づいてロランは眉根を寄せる。

昨日より、指揮官の警戒度は上がっているが、肝心の兵士の方はまだ人間を舐めきっている様子だ。昨日、あれだけ痛い目を見せてやった部隊と同じ部隊、軍であればもう少し兵の方も気をつけていても良さそうなものだが、そういう訳でもない。

それが意味するところはすなわち、敵は慣れよりも夜襲による疲労を優先したということだ。

前線に近いところに陣取っていた軍には夜襲を仕掛けたが、さすがに全ての軍に夜襲を仕掛けられた訳ではない。途中から夜番の見張りも厳しいものがあったし、やはり敵の数は多い。後方でぐっすりと眠っていた軍だって当然ある。

だが疲労の色が薄い部隊が出てきたということはやはり、魔物と言えどもそういった生理的なものは無視できないということだろう。

彼らも人間と同じ。食事や睡眠を取らなければならない。
前々から分かっていたことではあるが、確認が取れたことでロランは薄く笑みを浮かべる。
つまりは兵糧攻めや夜襲は効果的だということだ。
夜番の見張りが厳しくともロラン1人でなら潜入してそれなりの損害を出すことが出来る。さすがに本陣まで忍び込むことは難しいが、食料を集めている場所などをどうにか見つけて叩きたい。
これだけの大軍であれば食料だってこちらとは比較にならないほど膨大だろう。全くもって羨ましい限りではあるが、そこを突かれた時の損害も馬鹿にはならないはずだ。
とはいえ今日はまだ、相手も大きな動きを起こす様子はないし、こちらも昨日と動きは変わらないだろう。注視して、動きを見定めなければならないが、やはり三日目か四日目がターニングポイントとなると思われる。
こちらの方が相手に損害を与えているとはいえ、被害が全くのゼロという訳ではない。魔物によってやられる部隊も出てきているし、こちらの兵数を考えると少しずつでも削られればジリ貧だ。敗北は必至である。
しかも敵の攻勢だって亀の歩みとはいえ、進んではいるのだ。今はこちらの戦法が上手くいっているから足を止めさせることが出来ているが、明日や明後日になればどうなるか分からない。場合によっては、今日にも対応されるだろう。
そうやって被害を出しながら遅滞戦闘を繰り返し、看過出来ない損害を出すか、阻止臨界点――里の入り口まで到着するか、その見立てが、三日目か四日目になるとロランは見ている。
そこが勝負どころだ。最後の一兵になるまで戦うのであれば一週間は越せるし、多少なら保たせることも可能だろうが、そこまで追い詰められては勝ったところで負けも同じ。
森や里がどれだけ壊されようと構わないが、人的被害を出し過ぎると勝ち残ったところでこの先を生き抜いていくことが出来ない。
里の場所がバレた時点で、もうこの場所に今まで通り居着くことは

出来ないのだ。別の拠点となり得る場所を探し、里を築く必要がある。そのために、鋼の騎士団の人員は必要だ。住民達では里を切り拓くような作業は出来ても、魔物と戦うことは出来ないのだから。
それ故の見立てである。四日目を越えてもチャンスはあるだろうが、そこまでいけば勝っても負けも同然。
故に短期決戦で大将軍を狩るため、各分隊長には小刻みかつ緻密な指示を送っている。
足止めをする必要はあるが、必要以上に足を止められても困るのだ。
それらの見極めのために、ロランは戦いながらも戦場全体を駆け回り、通りがかりながら部下の報告を聞いて指示を飛ばす。
「……ロラン隊長、大丈夫ですか？」
「……大丈夫、とはどういう意味だい？　負傷していないか、という意味なら今の所は無傷だよ」
「いえ、そういう意味ではなく……少しは休まれては？　昨日から動きっぱなしでしょう？」
報告を告げた後の部下が心配そうにそう言ってくるが、確かにその通りではある。
ロランは昨日から動きっぱなしで、それでいて一切寝ていない。明朝から霧に紛れて戦い、指揮を続け、夜になって部下が交代しても、夜通し夜襲を掛け続けた。
それで今に至る訳だが、ロランは休む訳にはいかない。部下の心配を嬉しく思いながらも苦笑し、肩を竦めると、
「休めるものなら休みたいけどね。今休んだら永遠に休むことになりそうだし、休めないよ」
「それは……ですが」
「まぁ、こうやって食事の時には身体を動かさないで休んでいるし、大丈夫だよ。これでも身体は丈夫だし。３日くらいの徹夜なら若い頃に経験していたし、今の僕は昔よりも強い。だから平気さ」
明るい笑みを浮かべ、軽くウィンクし、元気をアピールしてみせる。
すると分隊長は何とか納得してくれたのか静かな声で、

「……分かりました。では、私はこれで」
「うん。僕ももう行くから気をつけてね」
と、森の中で分隊長と分かれる。
そうしてまた1人になりながら、ロランは人の目がないことを確認した上で溜息をついた。というのも、
……まあ、3日くらい徹夜することは、仕事上よくあるけど……戦い続きで3日はキツそうだなぁ……。
嘘という訳ではないが、本当の事を言ってもいない。今のは部下を不安にさせないためのパフォーマンスだ。
本当は身体中痛いし、眠くてしょうがない。そもそも本当なら療養中というか瀕死に近い重傷を負ってまだ一週間も経っていないのだ。ぶっちゃけ疲れた。生きるのって辛い。今直ぐベッドに潜って寝るか、この場所を放り出して適当な人里で第二の人生を始めたいところだ。
しかし、そうは思いながらもロランは己の手の短剣に力を込めながら自嘲するような笑みを浮かべる。
「それが出来れば苦労しないんだよねぇ……」
そう、それが出来るような性質なら苦労しない。
もしそれが出来るなら、自分はまだ影の楔の一員で、一族の使命とか何もかもを放り出し、好き勝手していたことだろう。
だがそれが出来なかったため、一度は逃げ出しながらも戻ってきたのだ。
そうして今更ながらに気づいたのは、自分は捻くれているということだ。
ここで逃げれば、自分は使命の重さに耐えかねて逃げ出したということになる。
使命なんてくだらない。その考えは今でもそれほど変わっている訳ではない。
しかし、彼に使命を託すことが出来た今でも思うのだ。やはり、
「……やれる分はやってからじゃないと、次に進めないよねぇ？」
託した使命に貢献出来れば良い。せめて自分や祖先を納得させる

ことが出来るまでは。
第二の人生を始めるのはそれからで良い。このクソッタレな世界の、クソッタレな使命の結末を見届けてから、あの世で祖先にこう言うのだ――ざまあみろ、と。
そのために重要なぽっと出の若者がこの先、楽出来るように頑張るというのは中々にモチベーションが上がる。
やはりひねくれてるが、自分はこうなのだ。己の正義とか理想やらでは戦えない。
戦う理由はいい加減なくらいでちょうどよく、後は動機付けをどうするかなのだ。それさえ出来れば自分は幾らでも戦える。
故にその予想外の事態が起きた時、ロランは、最初に思わず笑ってしまったのだ。
遠くの林から立ち昇る赤い揺らめき。煙と熱気と共にやってくるそれは、
「――ははっ、こんなときに、まさかの山火事かい？」

山林地帯に置ける戦闘。包囲戦を展開しているアッティラ軍の司令部は、突如として発生したそれに慌てていた。
「閣下！　北東の森が燃えています！」
「見れば分かる!!　くそっ、まさか火攻めか？　だがそんなことをすれば向こうも危ういだろう……そのリスクを承知してなお、火災による壁でこちらをせき止めるつもりか……？」
副官の魔物将軍が伝令から受け取ったという報告を耳にして、大将軍アッティラは直ぐにその狙いについてを思考する。
人為的に山火事を起こすことによって、こちらの混乱を誘い、山に展開している部隊の包囲網を崩すことが出来る他、前線を押し上げることすら難しくなる。
無論、敵の陣地も山の中であるため危険を伴うはずだが、地の利は向こうにある。山の奥の木々が少ない場所、おそらく人里があるであろう一帯には火の手がこないと見たのかもしれない。

だがそれらの思考は全て、魔物将軍の続く報告によってかき乱された。言い難そうな様子で、
「い、いえそれが……どうやら人間共も慌てている様子で……おそらくは敵の策ではないかと……」
「はぁ!? じゃあなんだと言う!? 偶然山火事が起きたとでも言うつもりか!?」
「わ、分かりません!! 報告では、突然森が燃え始めたと……!」
「くっ……馬鹿な……!」
敵の策ではないと聞いて、アッティラは頭を抱える。火は好きだが、今ではないのだ。今火攻めをしたところで被害を被るのはこちらだし、敵もそれほど苦しむことはないだろう。
それに火を点けるなら人里の方である。山の木々に点けると厄介なことになるので普通はしないのだ。アッティラは一度落ち着きながらも、深い溜息を吐いて遠く、火の手が上がっている山を見る。
「山火事は長引くぞ……今の季節は乾燥しているし、今日は風も強い……あ、いや霧が出ているからそれほど乾燥はしていないのか……?
どうも、最近の気候は荒れすぎててよく分からん」
「異常気象なんでしょうかね……しかしどうしましょう?」
「山火事の様子を見ながら攻めは継続しろ。まだ火が燃え広がるまでには時間が掛かる。少し侵攻を急がねばならんかもな」
兵糧事情的に一週間と見ていたが、もう数日早く攻め落とさねばならないかもしれない。
ゆっくりと戦争を愉しみたかったアッティラはその火災に恨みのこもった視線を送った。

「――ちょっとカイゼル様!? 何やってるんですか!? めちゃくちゃ燃えてますよ!?」
「焚き火にしては大きすぎますわー!!」
戦場を見渡せる北東の小高い丘の上では、周囲の木々に燃え広がった炎を見て、二人の使徒がわーわーと声を上げていた。

だがその元凶。全身黒い服を身に着けた男、魔人カイゼルは鋭い目つきで怒声を零した。
「くそっ……ルイゼルの奴……！　って、なんだ？　今日はやけに過ごしやすい日だな――って、うお！　山が燃えてやがる!?　ひょっとしなくても俺様のせいか!?」
「だからそう言ってますわー！」
「そうですよカイゼル様！　無闇に森を燃やすと怒られちゃいますよ！　過ごしやすい気温であることは否定しませんけど！」
途中で周囲が燃えてることに気づいたカイゼルは、キャロルと火炎書士の再度の声を受けて我に返りかけるが、再びそのことを思い出したのか、
「ぐ……それはそうだ……が、仕方ねぇだろ!!　ルイゼルが何かしでかしやがったんだからなぁ!!」
感情に比例するようにその身に纏う炎を肥大化させ、カイゼルは拳をギリギリと握って燃えた理由を口にする。
周囲が季節外れの酷い熱気に包まれる中、火炎書士とキャロルは首を傾げた。キャロルは炎に耐性がある訳ではないので多少距離を取っているが、同様に、
「ああ……また何か感じ取っちゃったんですか？」
「そういえばリンクするという話でしたわね。カイゼル様とルイゼル様は」
周りが燃えている中での落ち着いた会話は使徒と魔人だからこそ。二人の質問にカイゼルは怒り冷めやらぬ状態で答える。地団駄を踏みながら、
「そうだ！　俺様とルイゼルは、普段はそれほどでもないが、相手が戦ってる時や身の危険を感じてる時なんかは、互いに互いの状況が分かっちまう！」
「ハウゼル様とサイゼル様みたいな感じですね」
「とはいえ、距離は関係ないようですわ」
一応それらを理解している両者も頷く。魔人ハウゼルと魔人サイゼルは姉妹であり、距離が近いと感覚を共有出来たりすると言う。

その息子と娘であるカイゼルとルイゼルも、たまに相手のことが分かる時があるらしい。子供の時からそれで相手のことを感じ取って駆けつけたり、それが原因で喧嘩したりと色々あったが、今回もそういうことなのだと言う。
「ですが、今回は何があったんです？」
「危機だとしたらお助けしないといけませんわー！」
二人の声がカイゼルに続けて飛ぶ。カイゼルがこれほどまでに怒るなど、とんでもない事態なのではないかと。
だが、カイゼルは告げた。迫真の声と表情で、
「ああ……危機じゃねぇが、どうやら俺様の先を越してマネージャーを作っちまったようだ……！」
「マネージャー……って」
「まさかのまさかですの？」
マネージャーという言葉に隠された裏の意味を思い、火炎書士とキャロルは何とも言えない表情で顔を見合わせる。
ルイゼルの場合、その言葉には〝自分達〟と同じ意味があるのだ。
それだけで結構な事件ではある。あるが、それを感じ取ったというカイゼルの方が今は問題だ。
彼は悔しそうに、そして憎たらしそうに拳を地面に叩きつけ、
「くっ――――そおおおおお!! アイツ、本当に作りやがったな!? 許せねぇ……！ 俺様より早く作るのもそうだが、性別の如何によっては燃やしてやる……！」
轟々と炎を立ち昇らせながら、文字通り燃えているカイゼル。
それは他の生物を震え上がらせる魔人の威圧感をも同時に放つものであったが、火炎書士とキャロルはそれを見て、感じ取っても困ったような苦笑いを浮かべてしまう。
カイゼルとルイゼルのことを知っていれば、カイゼルのこの怒りには呆れという感情が湧き上がるのだ。
「ま、まぁまぁカイゼル様。できちゃったものはしょうがないですし、ここは当初の予定通り、カイゼル様も候補を探してみてはどうですか？」

「そうですの！　それに、ルイゼル様のことですから、きっとマネージャーは女性ですわ！」
「……それもそうだな！」
「あ、チョロい……」
　火炎書士がボソリと呟いてしまうほど、カイゼルは一瞬で納得させられ、怒りを収めた。
　だが同時に、今度は別の意味で燃えてきたらしく、眼下の火の海を、正確には戦場を見て宣言する。
「クハハハハ！　待ってろよルイゼル！　次は俺様の番だ！　近い内に、俺様が最強の部下を連れて迎えにいってやる!!」
「さすがですわカイゼル様！　それでこそレオンハルト様の息子ですの！」
「はぁ……後でどういう風に報告すれば……それに、この山火事だと戦いも色々と厄介な感じになるんじゃ……？」
「気にするな火炎書士！　ママ達には俺様から言っておく！　戦場も、むしろ熱くなって結構な事じゃねぇか！　俺様の部下を決めるにはもってこいの戦場だ!!　クハハハハッ!!」
「うーん……いいのかなぁ……？」
　燃え盛る山林に囲まれた丘の上では、炎の魔人の高笑いと、最強の魔人の使徒による太鼓持ちのような声。そして頭を抱える使徒の溜息混じりの声が響いた。

　最強の魔人の娘。次女に当たる彼女は世界的に見ても強者の部類に入る。
　兄妹達の中でも兄であるカイゼルと並んで最強クラスである彼女はしかし、今まさに危機に陥っていた。
「ルイゼルてめぇ……！　オレの言いつけを破りやがって……！」
「や、ややや破ってないわよぉ!?　ちゃんと許可は取ったんだってば!?　お誘いしたら良いって!!」

魔人であるルイゼルは今、胸ぐらを掴まれて実の兄に凄まれていた。
彼ら兄妹の長男である魔人アルベルト。彼は呑気に戻ってきたルイゼルとユキ、そしてもう1人から話を聞くと、真っ先にルイゼルを捕まえてみせた。
父親を思わせる鋭い眼と気迫。崩れた口調は彼が怒っている証だ。
敵ではないため、殺意や敵意といったものは乗っていないが、それでも妹を怯えさせるには十分である。基本的に怖いもの知らずであるルイゼルも、最強の兄が相手となれば分が悪い。
ルイゼルの冷気を物ともせずにドスの利いた声で睨みを利かせている。すると外野から声が響いた。
「ケケケ、ルイゼル様怒られてやんのやんのー！」
「うっさいわよユキちゃん!! 煽ってる暇があったら助けなさい！」
「無理無理かたつむり。使徒は魔人に逆らえねーってもんですよ？」
「この薄情者ー！」
ユキはあっさりと助けることを諦めて部屋の中でお茶をずびずびと飲んでいる。意外と忠誠心が高いことが知られているユキだが、この件に関しては助けずとも問題ない上に自業自得なので助ける気はないのだろう。
彼女が役に立たないと見て、ルイゼルは胸ぐらを掴まれながら別の女性に視線を向けた。
それは、ルイゼルが先程連れてきた、アルベルトの怒りの原因である女性で、
「ならミストラルちゃん！　マネージャーとしての初仕事よ！　わたしを助けなさぁい！」
「……」
と、ルイゼルの視線の先。
ソファーの上で無言のまま半目をルイゼルに向けているのは、カラーの元防衛隊長であるミストラルだ。
だが今の彼女は防衛隊長どころか、カラーですらない。
そもそも姿が変わっている。

カラー特有の水色の髪は真っ白に。着ていた服は水色と白を織り交ぜた、微妙に露出多めの可愛らしいデザインの服な上、その背には何かの楽器のようにも見える弓を背負っている。
そして彼女からは全体的に、魔の気配が色濃く漂っている。
カラーを止め、生まれ変わった種族の名を、ミストラルはふと自分から口にした。淡々と分析するように、
「……はぁ、攻撃しようかと思ったけど、そういう気が起きないのは私が〝使徒〟で貴方が魔人だからなのか、私が諦めてるからなのか、どちらなのかしらね……？」
「ちょっとぉ！　扱いが酷いわよぉ！　使徒なんだから助けなさいよぉ！」
「使徒。使徒ねぇ……身体に今までにないほど力が漲ってるし、やっぱり、これが使徒になるってことなのね」
使徒になったことを喜ぶでもなく悲しむでもなく、淡々と事実として受け止めるミストラル。
そう。彼女は先程、ルイゼルによって、使徒にされたのだ。
いきなりすぎて驚いたというか、そもそも何が起こったか分からず、途中まで夢だと思いこんでいたのだが、途中でさすがに気づいた。これが現実であることに。
そしてアルベルトに使徒になった経緯を告げてやると、アルベルトが怒りを露わにルイゼルに詰め寄った。
アルベルトがこうやって露骨に怒りを見せることは珍しいというか、ミストラルは初めて見るので観察するように眺めている。使徒だというのに主がやられているところをソファーで寝転がりながら、
「了承はちゃんと取れと、オレは確かに言ったぞ……！　なのにお前は……ッ！」
「違っ、違うのよぉ！　わたしもほら、ミストラルちゃんと一緒でちょっと勘違いしちゃって……！　ミストラルちゃんも何か言って！」
「はぁ……というか何この衣装。やたら露出多いし……こんなの、ちょっと飛び跳ねたらスカートの中見えちゃうじゃない。この弓は

使い勝手良さそうだけど装飾が派手だし……旅芸人か何かみたいねぇ……あ、お茶美味しい」
　ミストラルは兄に詰め寄られるルイゼルを傍目に暖かいお茶を飲んでいる。アルベルトの従者であるメリルに淹れてもらったお茶だ。
「最近は冷えますからね。良いＪＡＰＡＮの茶葉がちょうど手に入ったので、温まって頂けたらなと」
「それ、半分くらいルイゼル様のせいってやつなんだよなー。――あ、饅頭食う？」
「貰うわ」
「何のんびりしてるのよぉ!?　主がやられてるのよ!?　ほら、早く助けて！　早くこのわたしを助けなさいよ！」
　ほんわかしてる使徒と従者を見てルイゼルが助けを求めてじたばたと叫ぶ。
　そんな情けない姿にアルベルトも息を入れ、
「助けを求める前に、お前は先にミストラルさんに謝れ……！」
「な、なんでマネージャー、もとい、使徒に謝らないと――」
「そうか……オレも、可愛い妹を殴りたくはないが……そういうことなら仕方ない……衝・撃――」
「はいはーい！　謝ります謝ります！　ミストラルちゃんごめんなさーーーい!!」
「変わり身早いわ……」
　一応、主ということになる相手の変わり身の早さに軽くげんなりするミストラル。
　しかしアルベルトが拳を握っていたし、謝るのも仕方ないかもしれないと、そう思っていると、アルベルトもルイゼルを連れたままその場に座り、頭を下げ、
「……すまない、ミストラルさん。オレがもう少し言い聞かせていれば……いや、付いていくべきだった……！　兄として、筋の通らねぇ妹の行いを謝罪する……！」
「いやあの……いつも言ってるけど、畏まられると困るのだけど……」
　相変わらず丁寧というか、魔人だというのに自分をさん付けで、し

かも謝罪とはいえ敬うような口調で言われると恐れ多くて微妙な気分になる。
だがアルベルトのこれはいつものことで、返す言葉も同じものだった。
「……オレはペンシルカウの一兵士に過ぎん。そしてあんたは、元防衛隊長。どちらの立場が上かは言うまでもない」
「貴方は魔人で、私はただのカラーなんだけど？　今は使徒だけど。どちらの立場が上かは言うまでもないわよね？」
「……それで、今後の事だが」
――あ、逃げた。勝った。
アルベルトが露骨に話題を流したため、言い返す言葉が見つからなくなったのだろうと解釈する。
彼はどちらかというと寡黙で、実直な性格であるためか、こういった言い合いに強い訳ではない。そのため、都合が悪くなったら無言になるか、話を流す癖がある。
嘘をついたり、ふざけたりすることが出来ないからか、苦渋の選択で誤魔化しなのだろう。
結局は負けず嫌いなだけな気もするが、それはいい。確かに今は、ミストラルの今後のことだ。
だがそれについては先んじて声を発する。ミストラルにも、思うところがあるからだ。
「別に使徒になることについては……いやもうなってるんだけど、構わないわよ」
そう言うと、少なからず驚きの色が表情から垣間見えた。そして途端にルイゼルが飛び上がり、
「ほら！　ほらほらぁ！　了承取れてるのよぉ！　だから言ったでしょ、アルベルト兄様ぁ！」
「……いいのか？」
「是非もないでしょう？　……というか、私としても都合がいいかもだし」
「ルイゼルちゃんのマネージャーになると、ルイゼルちゃんの可愛さ

を間近で見れるものね！」
「――ルイゼル、少し黙れ。……それで？」
しゅん、とすぐに落ち込んだルイゼルを横目に、ミストラルは言う。
それは自分の性質の話で、
「私、ダラダラする生活も好きだけど、刺激がない生活も嫌いなのよね……その点、使徒だとそのどちらも手に入りそうだし、意味不明で突然過ぎたけど、よくよく考えてみれば、結果的には悪くないかもだわ」
「わぁお。中々の欲張りさん。矛盾ってやつ？　わがままさん？」
「それほどでもないわ」
ユキが端的にそう口にするが甘んじて受け止める。それは嘘偽りないミストラルの正直な気持ちだったからだ。
最初こそ驚いたし、どうするんだと頭を抱えたが、よくよく考えれば得ではある。
どのみち、カラーだといつかはカラーを止めて天使か悪魔の人外になるのは確定しているのだし、それが使徒であったとしてもそこまで変わらない気がする。
面倒が多かったので職を辞しはしたが、ミストラルはワガママなのだ。
面倒は嫌いだが退屈は嫌いだし、しかしダラダラすることも好きなのである。
それに使徒になったことで力が湧いてきていることもミストラルの心を刺激する。昔は自分の実力で大成しようと燃えていた時期もあったのだ。その時の思いが再燃しそうになる。
さすがに使徒如きでそれが復活することはないが、多少の面白味はある。適度に強くなって適度な自尊心を得ることは出来そうだと。
などなど、下心と計算が満載だが、悪くないと思っているのは本当だし、ルイゼルという人物についても、まあ退屈はしなさそうだし、外れではないだろう。
あんまり魔人然としている相手だとこっちの肩も凝りそうだからあまり好きではない。それこそ、彼女たちの父親やアルベルトなどは、こちらも使徒としてちゃんとしないといけなさそうだからミスト

ラル的には外れだ。
　その点、ルイゼルは適当でも許してくれそうなのでなんとも気楽だ。ちょっとアホっぽいし。男じゃないからスケベな命令もされないだろうし。
「……うん。考えてみたけど、結構上手くやれそうね」
「……そうか。それならいいが……」
「なんだか失礼な事考えてそうだけどー、ルイゼルちゃん的には問題無しよぉ！　これで無事、マネージャーゲットだわ！　アイドル街道爆進中ね！」
　そのマネージャーというのがよく分からないが、意味不明も過ぎると考えなくていいから楽だ。考えても無駄だし。
　ミストラルは訳が分からないまま流すようにうなずき、
「……まぁ、これから適当によろしくね。ルイゼル様？」
　一応、これから楽をさせて貰う相手に、使徒として最低限の礼儀だけは通しておくことにした。

「――あ、カイゼルが私に怒ってるわぁ。多分、使徒のことねぇ。それと、カイゼルも対抗して使徒を作ろうとしてるみたーい」
「……なんだと？」
「……」
　――しかしどうやら、いきなり厄介事が降りかかりそうであった。

竜の魔王

ガイが禁呪の習得に入って二日目の昼。
暇潰しとして再びクーベロの修行に入った白兎は、不意にその気配を感じ取って動きを止めた。
耳を澄ますような手の動きを見せた白兎にクーベロは息を吐き出して頭に疑問符を浮かべる。
「……？　どうしたんだ？　急に……」
「……足音を消して忍び込もうとする複数の足音。どうやら客人のようですね」
割りかし手練のようです、と告げる白兎のそれに言葉を無くすクーベロ。
客人ということは誰かがやってきたということだろう。その言葉の意味は理解出来るが、それよりもその侵入を感じ取った白兎の方に驚き顔を引き攣らせる。
本当に耳が良いらしい。そんなレベルを越えているとは思うが、他の者達は特に驚きもせず、
「……魔女さん？　先程聞かせてもらった話だと、この里は結界によって外部から侵入できないようになっているという話ですが、その辺り、どうなっているので？」
「おやおや、結界が誤作動を起こしたみたいだな。ふふふ、これは失敬。私としたことがやらかしてしまったようだ」
「……よくもまあ心にもないことを……」
意味深な笑みを浮かべる魔女に、イヴが訝しむ視線を向け、近づきたくないやり合いを軽く見せる中、近くの地面に突き刺している剣と白兎の腰元の刀も声を発した。
「……魔物ではないようじゃがの。気配がせん」
「そうですね。侵入者はどうやら人間の様です」
と、魔人を殺すことの出来る剣としての能力か、魔物の気配はないと見て魔剣カオスはあからさまにやる気が削がれている。強いて言うなら白兎達を恨めしそうに見るくらいだが、肝心の持ち主は扉の向

こうであるため、結局は息を吐き出し、白兎の腰元の聖刀日光に窘められる。
「……それで、どうするんだ？　その感じだと里の人間じゃあないんだろ？　迎え撃つのか？」
「ふふふ、まあ落ち着き給え。こんな時の為に……よいしょっと」
クーベロの問いに意味ありげな視線を向けた魔女は手から魔法の光を発生させると、
「……これでよし。後はまぁ、放置で構わない」
「な、何をしたんだ……？　何も起きてないように見えるが……」
困惑するクーベロに更に笑みを深める魔女。そして背後の白兎が顎に手を当て、
「……察するに、何らかの魔法……いえ、迷宮から伝わるこの感じ、罠でも起動させましたか？」
「待っていれば分かるよ。一先ず、少し時間を潰してようか」
「勿体ぶりますね……いいですけど」
魔女のその言葉を一応は信用することにし、一同は一旦その場で待機することにした。

――その頃、書庫迷宮の内部では、
「ゲッヘッヘ……ここが魔法の里に伝わる書庫迷宮……お宝の匂いがプンプンするぜぇ……！」
黒装束の一団と、それを率いる痩躯の男性、スケアクロウの姿があった。
ただでさえ秘密の里の、貴重な物が眠っているという迷宮である。スケアクロウのゲス笑いにも、いつも以上の張りがあった。
だが部下の一部は困惑しているようで、
「やけにあっさりと通されましたな……」
「もしや罠なのでは？　迷宮も一筋縄ではいかない雰囲気ですし……」
「本当にここに目的の人がいるのかも疑わしいものですね」

と、ここまで来たこと、厳密には通されたことに違和感を覚える。
というのも、影の楔の一団がこの魔法の里に到着するなり、里の者にここへ行くよう案内されたのだ。
最初は普通に目的の人物はどこにいるかと、長に挨拶をしようとスケアクロウが丁寧に伺ったのだが、屋敷に通されたという目的の一行も長も、どうやらこの迷宮にいると言う。
手紙を届けに来た旨を告げもしたし、別に非礼なことも失礼なこともしていない。
だが自分達が言うのもなんだが、自分達は怪しすぎる。初対面で信用出来る類の人物ではないことは自分達が一番分かっているのだ。
だからこそ、親切に案内されたことも不思議であるし、迷宮に通されたことも罠だと考えてしまう。
だがスケアクロウの方は違うようで、部下達のその反応を笑ってみせた。
「いやいやいや、ぼくちゃんの勘だと、目的の人物はちゃんとここにいるんじゃねぇかなって思うぜぇ？」
「は……しかし、その……」
「しかしもだってもねぇよぉ？　それによぉ、確かにヤバそうな雰囲気の迷宮だが……こんくらいなら攻略出来なくもねぇだろうが」
「……それはまぁ、そうですが」
と、部下もその言葉にはあっさりと同意を返す。
影の楔も、後ろ暗いことを生業にしているとはいえ、魔物討伐隊には違いないのだ。
しかも彼らは影の楔の本隊の隊員。規模も練度もそこらの魔物討伐隊や冒険者よりも上である。
更に言えば、彼らの大部分はレンジャー職の者達で、隠密行動や罠解除、鍵開けなど、迷宮攻略に最適な人材が幾らでもいる。
故にどれだけ危険な迷宮であろうとも、難なく踏破出来るという自負があった。
そもそも魔軍の包囲網に潜り抜けてみせるような者達である。どれだけ危険な魔物がいようと、エンカウントしなければいいのだ。

「ゲェッヘッヘ！　だから問題ねぇんだよ！　罠だろうがなんだろうが、それを掻い潜ってお宝をゲットしちまえばいい！　幸いにもここは迷宮ってことになってんだろぉ？　ちょっとくらいお宝を奪っていっても問題はねぇって訳だ」
「……確かに。どちらにせよ、進むしかなさそうですし、スケアクロウ様に乗っかりますか」
　副官のその言葉を皮切りに頷きが連続する。その様子にスケアクロウは口元を歪めきった。
「そうだ、そうしとけぇ？　このスケアクロウ様に付いてくれば、いくらでも良い思いが――」
　と、そう言ってスケアクロウが足を一歩踏み出した瞬間、その場は光に包まれた。
「は？」
「えっ？」
　一部の部下達が間の抜けた声を上げる。
　だが熟練のレンジャーである彼らはその瞬間にはもう声を上げて動いていた。
「おらおら来たぜぇ!?　全員、退避しなぁ！」
「光から離れろ！　おそらく罠だ!!」
「！　はっ！」
　スケアクロウや古参の隊員達は直ぐ様その罠から離れ、同時に反応が遅れた者達に大声で反応を促す。
　新入りの者達も中にはいるもので、彼らも古参の部下に倣って背後に飛び退いた。
　するとやはり次の瞬間、先程までいた通路の床が消えてなくなり、眼下には底が見通せないほどの大きく縦に長い穴が出現する。
「危ねぇ……」
「どうにかなったか……」
　隊員達はいきなりの即死級トラップにさすがに息を撫で下ろす。
　だが彼らは前方からの叱責をすぐに受けることになった。
「何してやがるんだ、おめぇらよぉ!!」

「っ！　スケアクロウ様！　何故そちら側に……！」
見れば、穴の反対側、先に通じる通路側の方にスケアクロウの姿が。
部下達と離れて1人でそこにいるスケアクロウに、部下たちは一瞬困惑するが、彼の言葉がその理由を知らせる。
「馬鹿野郎かお前ら！　下がっちまったら先に進めねぇだろうがよぉ～～～!?　ああいう時は敢えて前に飛び込むんだ前に！」
「あ……も、申し訳ありません！　スケアクロウ様！」
確かに。穴の大きさはざっと見ても３０メートルはある。
この距離をジャンプで飛び越えるのは難しいし、実質先に進めなくなってしまった形だ。
いや、厳密にいえばスケアクロウほどの技量の持ち主なら壁や天井などを利用して進めないことはないし、一部の者達もそれは出来る。
ただ出来ない者もいるので、彼らを置いていくしかないことが問題だ。
実際、トラップは場合にもよるが前に進んだ方が得であることもある。
下がれば前に進む際に再び罠を通過、もしくは解除しなければならないが、進んでしまえば無視は出来る。もちろん、場合にもよるが、今回はスケアクロウの判断が正しかったということだ。
だからだろう、スケアクロウは呆れ半分だが、珍しく怒っている。
「おいおぉい……ぼくちゃん1人で進めってかぁ？　無理じゃねぇが、いざって時に使える部下がいねぇってのもなぁ……持ち運べるお宝の数にも限界ってものが――」
だがそうやって一瞬、警戒を解いた隙を突くように、再びそれは発生した。
「！　スケアクロウ様！」
「あぁ!?　今考えごとの最中――って、うぉ!?」
今度はスケアクロウのいる通路の奥から魔法陣と魔法光が発生し、スケアクロウを取り囲んでいく。
一瞬驚いたものの直ぐに切り替えて、ちっ、と短く舌打ちをしてその場から退避しようとするも、

「なんだこれ!?　逃げ出せねぇ!?」
　気がつけばスケアクロウの周囲に透明な壁が出現し、その場からの退避を許さなかった。
　そこでようやく、スケアクロウの顔色に青いものが交じると、彼は堰を切ったように慌て始めた。
「やべぇやべぇ……！　どうする……いや落ち着け！　こういう時は取り乱した奴から死ぬんだ……ぼくちゃんはまだ死にたくねぇ……なら――」
　だが、その間にも魔法陣は光り続けており、
「あー、やっぱり駄目だ！　こんなところで死にたかねぇよぉ～!?　ぼくちゃんには、影の楔の頭目になってウハウハな生活を送るという野望が――」
　その声は不意に、その場からかき消えた。
　何故なら、スケアクロウ本人が魔法陣に呑み込まれて、姿を消したからで、
「スケアクロウ様……!?」
「おい、嘘だろ……まさか、あの人が……」
「生き残ることには何より長けてたあの生き汚い人が……」
　部下達もさすがに動揺する。この場のトップが消えてしまったからだ。
　だが彼らが当惑し、何かを感じることも許す暇もなく、次の手が襲いかかってくる。
「っ、またトラップか……!?」
「後ろからは魔物も来てやがるぞ！」
　見れば今度は攻撃性のトラップ――魔法を撃ち出すものが前方から、そして後方からはアンデット系統に属する魔物たちが現れる。
　そこでこの場の指揮官となった副官は、苦渋に満ちた表情を浮かべながらも、切り替えて判断を下すことにした。
「……やむを得ん。撤退するぞ！」
「は、はいっ！」
　部下に指示を出しながら、迷宮からの撤退を決める。

それは、まだ死んだとは決まってはいないだろうが、スケアクロウの捜索すらも断念するものであった。

――え？　とその場にいる一般人は思った。

それは出現先にいたクーベロや、ギリギリで転移の罠だと気づいたイヴ。

そして実際に出現した男も同様だった。

眼の前に女が殆どの集団がいる。

だがどいつもこいつもただならぬ気配を漂わせた女だった。

その中で、魔女帽子を被った異様に長い白髪の少女が笑みを携えて口を開く。

「ふむ、どうやら捕えられたのは1人だけで、他の者は逃げ帰ってしまったようだね」

「私もそんな風に聞こえますが……1人だけ来たところで、どうしましょうか迷いますね」

と、白い髪をツインテールにしたＪＡＰＡＮ風の少女も突然現れた男に動じず、ふむ、と彼を目を閉じたまま見つめる。

そのことに、そしてこの状況に凄い不安を感じた男――スケアクロウは、咄嗟にゴマをするような笑みを浮かべて話しかけた。

「……いやいや、まさかいきなりこんなところに飛ばされるとは、さすがのぼくちゃんも驚いちゃったねぇ～」

「……あなた、侵入者ですよね？」

今度は桃色の髪の少女――イヴが胡散臭いものを見るような半目で問うと、スケアクロウは丁寧に腰を折った。

「いやいや、私は影の楔の最高幹部であるスケアクロウと申す者でしてねぇ～。鋼の騎士団の隊長であるロランくんから手紙を届けるよう依頼されてここまでやってきたのですよ、ゲヘヘ――というわけでこちらを受け取ってくれるかな？」

ピラっと、懐から手紙を取り出してみせるスケアクロウ。

一応はこれで信用して貰えるはずだと思いながらも、しかし別の部

分に反応する者もいた。
だがその声の先に、またしてもスケアクロウは、え？　と思う。
何故なら人の声を発していたのは、黒い剣や和風少女の腰元の刀であったからで、
「影の楔……懐かしい名前だな。後ろ暗いことばかりしてる魔物討伐隊だろ？」
「確かそうでしたか。カオスも、昔は関わりがあったはずですね？」
「仕事の仲介を頼んでおっただけじゃわい。お前らと旅に出てからは付き合いも切ったしな」
「……そうですか」
……いや、そうですか――じゃねぇよぉ!?
なんで剣や刀が喋ってんだ!?　と内心で凄まじい驚きを感じるスケアクロウ。
だが同時に、それらがとんでもないお宝だと疑いを持ってしまい、驚きよりも期待が大きくなる。
……奪い取って売り捌けば結構なお宝になる……が。
と、そう思いながらも周囲の面々を見て、冷静になるスケアクロウ。
相手は白い髪の魔女に剣士、魔法使いっぽい少女と謎の猿。そしてむさくてデカイ男。
しかも全員、それなりの使い手である気配がするし、更に驚くことに、この中だと一見、一番強そうな男が一番弱く、与し易いとスケアクロウは見えてしまっていた。
一対一であればともかく、これだけの面子を1人で制するのは現実的ではないと判断する。
だがそれもやり方次第だし、そもそも全員を相手にする必要も、倒す必要もない。
スケアクロウは腰元の短刀がきちんとあることをそれとなく確認すると、利き手ではない左手で手紙を持ち、無警戒かつ一般人のような適当な身のこなしで前へ歩みだした。
「ほらほら、そんなこより、手紙を受け取ってくださいよ。これさえ終われば、ぼくちゃんは帰りますのでねぇ」

「っと、ああすまねぇ。ロラン隊長からの手紙か」
と、相手の男がこちらから警戒を無意識に切って手紙を受け取ろうと近寄ってくるが、それは当然だ。
スケアクロウは今、相手に警戒されないように戦闘に関する全てのスイッチを切っている。
敵意や殺意を隠し、歩き方から身のこなしまで、戦う者ではない動きで、人好きする笑みで近寄ってきている。
だから相手の男、クーベロは気づかない。
その状態が既に、スケアクロウという男の術中に嵌っていることに。
そして不意に、
「うわっ……!?」
「!」
スケアクロウは、足元を縺れさせてこけてみせた。
地面に向かって身体が倒れ込む中、反射的にクーベロがそれを助けようと前に駆け寄ったその瞬間。
その距離、おおよそ一メートルに過ぎないものの、その距離を、スケアクロウは一瞬で詰めた。
――〝乱歩〟。
影の者に伝わるその技の名を、彼らは口にしない。
心でその技を思い、相手に知られる間もなくそれをお見舞いする。
戦意を隠し、転けたように見せかけて、低い体勢で相手の懐に踏み込む。
相手の虚を突いたその踏み込みは、一瞬、その視界の中から消えてみせる。
そしてその時にはもう遅い。相手の背後に影のように張り付いたスケアクロウは、腰元の短刀を即座に躊躇いなく引き抜いた。
――〝奇襲　影打ち〟。
「!」
そしてその短刀は、吸い込まれるようにクーベロの喉元に吸い込まれ――

「――面白い技ですね」
「ッッッ――!?」
――ることはなく、その前に小さな手がその刃を掴み取った。
至近距離の声と、魔物を思わせる赤い瞳に貫かれ、スケアクロウは酷い寒気を感じる。
……な、何しやがったこいつ……!?
いや、理解る。理解るが、脳が理解を一瞬拒んだ。
とんでもないことを、やりそうにもない少女にされて虚を突かれた。
よもや自分の動きが見破られ、あまつさえ止められるとは。
「な、なんだ!? 何が起こった!?」
そしてそのとんでもない事態に今更気づいた男、クーベロが驚いて声を散らしている。
だが喚きたいのはこちらだった。
もはや動くことも出来ない。その赤い瞳で至近距離から睨まれ、汗が吹き出してくる。
そんなこちらを嬲るかの如く、幼い剣士は言った。咳払いを一つ挟み、
「今の技を見るに、中々の使い手のようですね。全身の脱力、転げた振りからの低い体勢からの踏み込み、その速度、どれも熟練のものでした」
よく言う、と思う。
その技を見てから、後から追い抜き、なおかつ片手での白刃取りをしてみせた化け物に言われても嫌味にしか聞こえない。
そもそも何メートル離れていた? クーベロとの距離は少なく見積もっても5メートルはあったはず。
その距離を、こちらより後出しで踏み込み、追いついて止めてみせたというのは、勝ち目がないと感じるのに十分なものである。
だが褒めているのは本当なのか、少女はなおも続けた。じろじろと、赤い瞳でこちらを観察しながら、
「虚の突き方が特に良いですね。一瞬の踏み込みを消えたように見せ

かけるほどの低い体勢の踏み込みは、長い修行が必要でしょう。人間では、今の技を防ぐことは、同レベルの達人でなければ難しい。極めて優れた暗殺術です」
「っ……」
「おや、何故分かる？　という感じの表情ですね。まあ分かりますよ。似たようなものを知っていると言いますか……」
　と、そこで少女は間を置いて、告げた。その技と、スケアクロウの正体を、
「今のは、ＪＡＰＡＮに伝わる技術――忍術。そしてそれを使う貴方は、忍者。そういうことですよね？」
　告げられ、そこでようやくスケアクロウの口元に笑みが戻ってきた。引き攣ったものではあるが、
「おいおい……なんでもかんでもお見通されちゃあ、〝スケアクロウ〟の名が泣いちまうぜ……勘弁してくれよぉ？」
「大陸由来のレンジャー系技術とはまた違ったものですからね。すぐに分かります。私も、縁がないと言えば嘘になりますからね――それで、貴方は忍者ですか？」
　その質問には迷ったが、答えることにした。死にたくはないし、生き残る勘的にここでは正直に答えた方が良いと、
「……ゲッヘッヘ、別にぼくちゃんはＪＡＰＡＮで生まれ育ったって訳じゃないぜぇ～？　うちの頭目が、そうってだけでよぉ」
「頭目？」
「あぁ、頭目は日本人の女でな。何でも、先祖が凄い忍者で、それを継承してぇんだとよぉ。俺達、大多数の隊員にとっては、そんなことはどうでもいいが、頭目に資質を見込まれると、忍術の修行をさせられる。早い話が、幹部への近道ってことだよなぁ……」
「ふむ、なるほど。確かに、魔物の討伐にも役には立ちますからね」
　どうやら納得してくれたようで、先程までの寒気のする気配は徐々に鳴りを潜めている。
　だが未だに短刀から手を放してはくれず、
「この痺れ毒の付いた短刀もいいですね。これで斬りつけて麻痺させ

てから、人質にするなりそのまま誘拐するなり殺すなり、なんでもございという感じですか。つまるところ、こちらに害をなそうとした訳で、こちらは反撃をしてもいいということになりますが……そこのところ、どうでしょうか？」
「……げ、ゲへへ……いやいやいやぁ……そんなことを聞いて何がしたいんですかねぇ……？」
「いえ、簡単なことです――」
と、スケアクロウは嫌な予感を感じながらも、生き残るためにはそれを聞かざるを得ないと予感し、それを耳にした。
「――貴方には、働いて、役に立ってもらいます」

ここが、という声が反響した。
宙をゆっくりと行きながら、その中を探索するのは人外の存在。
だがそこは人外の者でなければ進めない、瘴気が充満した場所である。その名を、水色の髪の魔人は口にした。
「奈落にこんな場所があるとは……」
「正確には奈落と繋がった地下回廊になるらしいな。先程のハニーの話だと」
と、告げたのは魔人を乗せるドラゴン、ライゼン。
彼は先程、偵察の報を告げに来たという魔人メガラスの伝言を地下にいるハニーの魔人の通訳から聞いて、ここに案内されていた。なんでも魔人メガラスはまた先に行って様子を見ているらしい。
だがその視界と匂い、瘴気にはさすがの魔人達も眉をひそめる程度の効果はあるらしく、
「酷い臭いだな……」
「まったくそうですね！　……というわけで、帰るのもどうかなー……とか、僕は思うんですけど……」
「くく……竜と魔物の死体、か。察するに、アベルはここで既に暴れ回ったようだな」
「……そのようだ」

カミーラとケイブリスの会話ではなく、ノスの言葉に苦々しくも同意するライゼン。
実際、その光景は酷いものだった。
ライゼンが優に通過出来るほどの地下回廊は、死臭と瘴気に満ちた負の空間だ。
そして飛行し、眼下に見える地面にあるのは――竜の骨と、魔物の死体。
前者は完全に朽ち果てたもの。既に数百年、数千年は昔のものであろう。
後者は新しいものだ。ここを住処にし始めた魔物が死体にされたもの。屍肉が散らばっていることからもそれは分かる。
そしてそれすら気にならなくなるほどに、
「――近いな」
「ああ……忌々しい……！」
ライゼンが感じた感想をカミーラが憎々しげに同意する。
この地下回廊に入ってから、酷く彼の気配を感じる。
懐かしくも憎らしい。様々な想いが同居する――竜の魔王の気配だ。
それはこの空間に、自分達以外の生物がいないことと無関係ではないだろう。
かの者の気配に、あらゆる生物が恐怖し、逃げることを選んだ。
魔物であっても、かの災厄に敵うはずもなし。そもそも、奴は魔王であった者。魔物が逃げ惑うのも当然であろう。
そして当然、魔人である彼らも自然と口数少なくなる。
彼らとて、魔王の配下である魔人だ。本能として、奴に恐怖するはずの者達。
だが魔人四天王と呼ばれる猛者である彼らは、その恐れを最小限に留め、戦意を失っていない――「帰りたい帰りたい帰りたい……」――若干一名、物凄く震えている者もいるようだが、武者震いであろう。さすがだ。
そうして、ゆっくりと地下回廊を回り、降りていくと、その最下層

と思われる地面が見えてきた。
そこが瘴気の中心地。数多の屍肉と死骨、竜と魔物の亡骸が山積みとなったその場所は、荒れた地上の空と違って、酷く静かだった。
まるで何者も潜んでいないかのような気配。だが彼らには分かる。
「ふん……いるな」
「ああ――」
再びノスの声に同意し、ライゼンは声を上げることを決めた。ドラゴンとして、
「――いるのであろう!! 出てこい、アベル!!」
かの者を咆哮と共に呼び寄せた。
すると、その瞬間ではなく、少しの間を置いて、
「――――ゴォオオオオオオッ!!」
「っ！ やはり隠れていたか！」
屍肉と死骨の山の中から、突如、風のような速度でライゼンに飛び掛かる黒の巨体が現れる。
その姿、その声を、彼を知る者は忘れもしない。朽ち果て、狂気に染まりながらも、確かに彼は、
「アベル……！」
「これが、竜の魔王……！」
「く、はははははっ！ 本当に生きているとはな！ 面白い！」
「う、うわあああああ!? あ、アベル様!? ご、ごごごごめんなさい！ どうしてもやれって言われて……あ、あばばばば……」
それは獣を思わせる四足の黒の竜だ。
体長は十数メートルほどで、ライゼンと比べれば小さく見えるが、ドラゴンとしてはそれなりの巨躯。
四つの赤い瞳が彼らを捉え、そして凶暴な戦意を剥き出しにする。
「カミーラァ……ライゼン……！」
「……っ、久しぶりだな、アベル。挨拶するより先に不意打ちとは、お前も変わっていないな……！」
真っ先に首に向かって噛み付いてきたアベルに向かって、軽く眉を顰めながら懐かしむ声で言うライゼン。最硬と呼ばれる鱗は健在で、

例え竜の魔王とはいえその牙は鱗を貫くことはない。
だがアベルはそれに反応し、更に大きな動きを見せた。
「殺ス……何モカモ……！　全テヲ……！」
アベルが一度離れ、ホール状の地下回廊でその能力を行使する。
それを見て、ケッセルリンクは声を上げた。頭上に溜まるそれは、
「雲、か……？」
宙に集まり始めるのは、黒い雲。
地下であるにも関わらず、大気は震え、ホール内に竜巻や突風が吹き荒れる。
粉微塵になった骨も屍肉も、砂や灰と一緒に吹き荒れ、その場にあった瘴気すらも一緒に吹き荒らす。
天井を埋め尽くすほどの黒雲は轟音を立てながら周囲に稲妻を走らせ、あらゆる物を破壊した。
地下回廊が、奈落そのものが鳴動するほどの力を操り、アベルはその身にすら雷を落とす。だが、
「皆殺シニシテヤル……ッ!!」
竜としての咆哮を上げ、雷と共に殺意を撒き散らす。
その身体は無傷。それどころか、雷をその身に纏わせてしまう。
そうして彼はかつての様に、低い、獣のような体勢を取る。
彼の戦闘態勢。狂気に染まってなお、ドラゴンとして、魔王として戦ってきた経験は身体が憶えている。
それを見て、ライゼンは同じく背の翼を広げ、咆哮するように告げた。
「油断するな……！　奴は魔王としての力を失ってなお、お前達以上に強いぞ……！」
「ギィグアアア

魔王の戦い

始まった戦いに、ライゼンは咄嗟の回避を行った。
いきなりだな！　と感想を得て、横へと疾走を行う。
通常のドラゴンの十倍程の巨体を誇るライゼンだが、その機動力は並のドラゴンを凌ぐ。獣の様に四足を使い、アベルの飛びかかりを避けると、避けきれたことに安堵する。
まともに食らったとしてもダメージを負うことはないだろうが、念には念を入れることに越したことはない。敵はあのアベルだ。正気を失っているとはいえ、何かダメージを負わせる予想外の手段を使ってきてもおかしくはない。
故に回避。幸いにもこの地下回廊は広い。自分が疾走し、暴れ回っても問題ないほどに。
だがそれはアベルも同じだ。アベルは攻撃を避けられたと見ると、今度は助走付きで更に別の相手に向かった。
「カミーラァァァァ!!」
「アベル……！　貴様はここで殺す！」
相手はカミーラ。咆哮し、その名を呼びながら彼女に向かって突っ込む。
その怒りすら感じられる感情の昂りは、ライゼンに対するものよりも大きい。が、それも致し方ないだろう。
ドラゴンにとって、アベルにとって、カミーラとは全ドラゴンと戦争になってでも欲しかった相手だ。正気を失っていたとしても、その相手を完全には忘れてはいないのだろう。
攻撃を加えようとするアベルに対し、カミーラは飛び上がってその手を広げた。
両の手にある五本の指から伸びるのは、ドラゴンの爪。それも魔人になって強化された、変幻自在かつ、あらゆるものを斬り裂く爪だ。
それによってアベルを切り刻もうとカミーラは攻撃を避けながら爪を操る。
だが、

「カミーラ！」
「っ、くっ！　速、い……！」
アベルの機動力を甘くみてはいけない、とカミーラに声を上げ、フォローに入る。
爪を躱し、カミーラに向かっていったアベルを吹き飛ばすように突撃し、躱されながらも間に入る。
その間にもアベルは雷を纏いながら、その速度を高めている。
地下回廊の最下層ホールを滅茶苦茶に駆け回り、大気を操って周囲を破壊しながら速度を増すアベルは、正に災厄。かつての魔王の姿に相違ない。
その規模こそ以前より劣ってはいるものの、戦闘スタイルに変わりはないようだ。
「この速さは、中々に辛いものがあるな……！」
「ああ、気をつけろよ！　奴は元々、速さだけならドラゴンの中でも上位だった。それが魔王になって力を増し、奴は最速のドラゴン――いや、最速の魔王となったのだ……！」
そう説明している間もアベルは駆け回り、カミーラを守るこちらに四方八方から攻撃を加えてくる。
空を往くドラゴンは、地上での機動力を疎かにする者も多いが、アベルはそうではない。
四足を器用に使い、時折ステップを踏み、あるいは尾を利用し、緩急でタイミングを外しながら加速を続けていく。
それはかつて、彼が己の指揮下にいる際に教えたものだった。
地上だろうが空中だろうが、アベルはこちらを凌ぐほどに速い。だが、
「ふん……だが、以前よりは遅いな……！」
そう言ったのは同じく昔のアベルを知る魔人、ノスだった。
彼はローブを翻し、拳を握りながらも戦意を立ち昇らせる。
アベルの戦闘を見てなお、沸き立ち、凶相を浮かべていた。
「ああ……！　かつてのアベルなら、その姿を視認することすら難しい！　大勢の同胞が、奴に触れることすら出来ずに散っていった程だ

からな……！」
　その無法者としての顔に思うところはあるが、その意見には同意する。
　やはり魔王としての力はもう殆ど残っていない。絞りカスの如き力しかないのだろう。その強さは以前よりかなり落ちている。
　だがそれでも魔人を上回るほどの力は見せている。そのことが、ノスを愉悦させ、そして一方で憎悪させた。
「その力、血沸く……が、忌々しい奴だ……！　今はもう、貴様の時代ではない……！　ジル様の時代だ……！」
「ガアアアアアアアアアッ――!!」
「ふん……！　言葉も介せぬ獣が、ジル様と並び立てると思うな……！　オオオオオオオ……！」
　ノスがアベルの攻撃を受け、一瞬表情を歪ませたが、口元には笑みも残る。
　ローブを脱ぎ捨て、ノスは低い体勢で突進した。
「貴様はここで始末する……！」
　それは巨大な岩を想起させるものだった。
　地竜の特性である〝膨張硬化〟。
　ダメージを受ける度に、その箇所の装甲が硬く分厚くなっていく。
　岩石を思わせるノスの肉体は無骨で、それ故に凶悪だ。
「潰れろ！」
　大地の拳がアベルに向かって振るわれる。
　それは容易に躱されるように思えた。しかし、
「――ミストモード」
　気がつけば、ケッセルリンクの姿がなく、そこには霧が漂い始めていた。
　瘴気や荒れる大気に交じるのは黒い霧。
　そして彼女の声が聞こえるのは、その霧からだ。
「思うところもあるが、これも任務だ。早々に、始末させてもらう……！」
　そう、その霧はケッセルリンク自身。

物理攻撃の殆どを受け流し、それでいてケッセルリンクの攻撃はどこから飛んでくるかも分からなくなる、反則級の能力。
ケッセルリンクが幾つか持つ魔人としての能力の一つが、アベルに牙を剥く。加えて、
「舐めるなよ……！」
カミーラも未だ健在。
今度は上空に羽ばたき、その手から闇のブレスを放出する。
魔人四天王の内、３体が意図せず攻撃を合わせる。
「アベル、悪く思うなよ！」
そしてそこにライゼンも加わった。
四天王以上の力を持つドラゴンが体当たりを敢行する。
ライゼンの堅牢な鱗と巨躯による体当たりは、それだけで必殺の威力を持つものだ。
あらゆるものを砕き、あらゆる攻撃を通さない無敵の突進がアベルに迫る。
しかしアベルは、それら全ての攻撃に対し、行動を起こすことで退避してみせた。
それは、
「ギィガアアアアアアアアアアアアッ!!」
「……！　大気が……！」
アベルが一吠えすると、その頭上の黒雲と、周囲の大気が荒れ狂う。
それによって己を覆おうとしていた霧状態のケッセルリンクが払われる。
霧とてケッセルリンク自身であるため、大気で散らされれば実体と化して攻撃することも難しい。
そしてその雷雲から迸る稲妻は、直接カミーラを狙った。
「っ、チッ……!?」
普通の雷であればともかく、アベルの力を纏った豪雷は無敵結界を貫通し、カミーラに傷を与えうる。やむを得ずブレスで雷を吹き飛ばし、カミーラは舌打ちを発した。
その眼下では、ノスが既にアベルに肉薄していたが、

「グルゥ……！」
「っ……オオオォォ！」
アベルがステップを踏み、ノスの突進を躱してみせる。
そして一瞬、横に飛んだアベルは、そのままの勢いでノスに横っ腹から噛み付いた。
「離せ……！　忌々しい愚物が……！」
「ガアアアアアアアアアアアアアア!!」
アベルが噛み付いたノスの肉体を地面に向かって叩きつけ、衝撃を与えた後で横に投げ飛ばす。
言ったとおり、離してやったぞと言わんばかりの行動だが、実際にそれを言うこともなければ、正気を保っていたとしても言わないだろう。
既にライゼンが迫っており、そんな余裕はない。
「グウウウ!!」
「逃がすか……！」
アベルはライゼンに対しては攻撃で出迎えることはせず、その突撃を躱そうと試みた。
が、ライゼンもそう安々と逃しはしない。疾走するアベルを追いかけるようにホールを駆ける。
こちらを振り切ろうと緩急をつけ、何度もフェイントを入れてくるが、その程度には引っかからない。
なにせ、瞬間移動する血気盛んな同胞や、色々な面で化け物な強敵と戦っているのだ。
この程度で今更振り切れると思うな――そう心で思い、ライゼンはアベルを追いかけた。
すると、
「グガアア!!」
とうとうアベルが飛行し、宙へと逃げようとする。
だが、それをライゼンは見逃さなかった。
宙へと逃げていこうとするアベルの下をわざと通過し、即座に反転し、己の背をアベルに向けるようにする。

そうすると、アベルにとっては予想外の攻撃が飛んでくる。
「グギャアッ!?」
それは、ライゼンの尾だった。
「以前のお前であればいざ知らず、正気を失い、力も衰えたお前ではこれを避けきれまい……！」
そしてただの尾と思うなかれ。
魔王の攻撃にすら耐えるダイヤモンドボディ。それは尾とて例外ではない。
柔軟性を兼ね備えながら、その硬さを誇るライゼンの尾は、ムチのようにしなって相手を打撃する。
しかもライゼンの速度を乗せた一撃だ。人間の作る城くらいならこれだけでも粉砕出来る。
宙に昇りかけたアベルを打撃すれば、アベルは壁に向かって吹き飛ぶ。
負った傷に咆哮を上げながらも、しかし、壁に激突する前には復帰して翼でバランスを取ってみせた。
「耐久力も、未だ並ではないようだな……！」
これは長期戦になるやもしれない。そう思いながらも、ライゼンはふと、もう一体も何処かにいるのだろうかと周りを探ってみる。しかし、
……気配がない？　これは、隠れているのか……？
機を窺ってでもいるのだろうか。あの異形の魔人の姿が見えない。
あれほどの強さの魔人がこれほどまでに気配を消してしまうなど、ある意味恐ろしいものだ。あれに不意打ちされれば堪らないだろう。
アベルにも似た戦闘スタイルなのか、とライゼンは期待し、アベルに再び向かっていった。

地下回廊の最下層から離れ、眼下を覗き込んでその戦いを見るのは魔人ケイブリスだ。
彼は戦いが始まった瞬間、必死にここまで退避した。

それもそのはず、彼のポリシー的には、今回の状況はあり得ない。
……あっぶねー！　危うく、アベルと戦う羽目になるところだった……！
そんなのはごめんに決まってる。そう思って、ケイブリスは内心で毒づく。
そもそも、元とはいえ魔王と戦うのなんて狂ってる。
しかもあのアベルだ。ケイブリスは最古の魔人。当然、アベルにも仕えていたため、アベルの強さはよく知っている。
最速とまで言われる機動力に、自身も参考にした狡猾さ。
雷属性を無効にしてしまうＡＶ体質。天候を操る力。ドラゴンとしての強さ。
はっきり言って、今までの魔王の中でも上位の存在だ。例え魔王でなくなったとしても、ケイブリスとしては戦う気の起こらない相手だ。
魔人四天王だろうと戦うことは出来る限り避けたいというのに、それ以上の存在と戦うなんてあり得ない。
そう考えたケイブリスの行動は、やはり逃げ、戦いが終わるまで隠れ潜むことだった。
ただこれはこれで問題がある。一応これはレオンハルトから言い渡された任務だからだ。
……どうする……？　戦うのはありえねぇが、戦ってないと報告されたらそれはそれでまずい……！　アイツらを脅すか？　いや、そんなことをしても聞くような連中じゃねぇ。あのライゼンだっていやがるんだ……くそ！
どうにかして自分が逃げたことすらもレオンハルトに隠したいが、それすら不可能となると、何かそれらしい言い訳を考える必要がある。
だが切羽詰まったこの状況では、中々良い考えが思いつかない。
……か、形だけでも戦ってみるか？　戦うフリをするとか……戦ってるフリして、逃げ回ってみるか？
危険だが、ひょっとしたらそちらの方が一応戦ったという事実が残

るため、マシかもしれない。
それにケイブリスは、なんだかんだでこちら側が負けるとは思っていなかった。
四天王が3人。ドラゴンの化け物が1体。そして何より、後からレオンハルトもやって来るのだ。アベルに待っているのは破滅。それしかない。
そしてだからこそ、ケイブリスは今のうちに戦ってるフリだけでもする必要がある。
「そ、そうと決まればこうしちゃいられねぇ……！　今のうちに、どこか不意打ち出来る場所から――」
と、ケイブリスが慌てて踵を返し、眼下で行われる人外の戦闘を覗き見ながら隙を窺う。
とはいえアベルは速い。魔王時代よりは遅く、今のケイブリスであれば視認出来るとはいえ、攻撃を当てるのは至難の技だ。
ひょっとしたら、一発全力の攻撃を当てれば倒せるんじゃないかと欲も湧いてくるが、まず一発を当てるのが難しいんじゃないかと。
「――あ？　あれは……」
と思っていると、それは起こった。
眼下。空を往くアベルに対し、何者かが飛来し、アベルに体当たりを仕掛ける。
その白い体躯に、ケイブリスは見覚えがあった。当然だろう。一応は仲間の魔人だ。
「メガラスの野郎か……！」

「グッ!?」
「!?　お前は……！」
アベルが操作する地下回廊の大気。その嵐の中を、真っ直ぐに飛来する白い影が、アベルに向かって体当たりを行う。
ライゼンがその者を見て、懐かしい、と思う。先程も見かけたが、ここ最近は懐かしい者とよく関わるな、と、

「メガラスだったか……！」
「……」
しかし名を呼ばれても、メガラスは返事を返さない。
彼は無言のまま、アベルに向き直り、戦う意志を見せる。そして一言。
「……加勢する」
簡潔に言って、彼は再びその場から飛翔した。アベルの反撃の意を感じ取ったのだろう。事実、空に浮かぶ黒雲は次の瞬間、メガラスに向かって雷を落とした。しかし、
「……！」
それを、メガラスは躱す。
彼は速かった。飛ぶだけで大気を打撃し、衝撃波を発生させる彼は、全魔人の中でも最速。音速を超える飛翔速度を誇る、最速の魔人だ。
速さに耐えうる白い外骨格で相手に当たるだけでも、ダメージは入る。
そして今の、全盛期より遥かに実力が下がっているアベルであれば、メガラスは彼を捉えることが出来た。
かつてアベルに仕えていた魔人は何を思って戦闘に参加したのか分からない。だが、それがこちらにとって優位であることには違いないものだ。
「感謝する！」
「……」
戦士として感謝すると、無言だが、今度は確かな肯定を受け取る。
やはり彼は戦士だ、とライゼンは改めて確信する。かつての戦いでも、彼は敵側で唯一、戦士としての誇りが垣間見える存在だったものだ。
多くの同胞を手にかけられたことに思うこともあるが、それも正当な戦いによるもの。恨むには値しないし遺憾もない。
異種族ながらドラゴンの誇りに付き合うことの出来る相手。それがメガラスだ。

――だが、彼の加勢があっても、
「グ――ガアアアアアアアアアア!!」
「チッ……煩い奴だ……!」
アベルの猛攻は止まらない。
メガラスが与えたダメージくらいでは小揺るぎもしないのか、大気を操りながら再び空間内を駆け回るアベル。
全盛期より衰えたとはいえ、魔王の暴威を振るい咆哮するアベルに忌々しげに舌打ちをするカミーラを見ながら、しかしライゼンは目を鋭く細め、奴が行う動作を見た。
「！　ブレスが来るぞ！」
それはドラゴンの代名詞とも言える必殺技――ドラゴンブレスだ。
全てを灼き尽くす雷の吐息。アベルが備える必殺のブレスの構えを見たライゼンは皆に退避するように声を上げる。
かくなる上はこちらもブレスを――と、ライゼンが動作に入った時だ。
思わぬ一撃が、アベルに見舞われた。
「――〝スクイレルザン〟!!」
それは、ブレスの動作のために機動力を僅かに落としたアベルを狙って放たれた一撃。
アベルの頭上から、縦回転と共に落下し、そのままの勢いで大剣による斬撃を放ったのは、今まで姿の見えなかった魔人だった。
「ケイブリス……！」
「……逃げたと思っていたが」
ケッセルリンクが驚き、ノスが思っていたことを口にする。
しかしそれが聞こえていないのか、ケイブリスは自身の必殺技を放った後で、地面に向かって着地しながら切羽詰まった声を漏らしていた。
「し、死んでねぇ……!?　くそっ、やっぱり無理だったんだ……！　でも見ましたか!?　特に、か、カカカカミーラさん！　俺様、ちゃんと戦ってますよ！」
「……」

そのいつも通りとも言える小心で保身に満ちた様子にカミーラも普段の冷たい視線を向ける。
だがそのケイブリスの一撃は、全くの無意味という訳ではない。
「ギ、ガアッ……グ……！」
「さすがに効いたか、アベル……！」
痛みを感じているのだろうか。苦しそうな呻きを発したアベルにライゼンが、心の内でケイブリスを称賛する。
そしてすぐにケイブリスも気づいたのか、自身の攻撃が通じた様子のアベルを見て、
「あれ？　思ったより効いてる……？　もしかして俺様、アベルより強いのか……？」
と、何やら己の実力に疑問が生じたようでぶつぶつと呟いていた。
だが他の者はそのアベルの隙を見逃さず、既に攻撃の体勢に移っているし、アベルも苦しみながらもまだ倒れるほどではないのか、迎撃の構えを見せた。
しかしこの戦力なら、とライゼンはこちらが優勢であることを理解する。
かつての戦争の終盤のような、多対一の構図ではあるが、
「恨むなよ、アベル……！　既に死したお前を、自然に還す為だ！」
「グゥ……殺スゥ……!!」
そして地下回廊で轟音が響き、戦いはさらなる激戦へと移行した。

この地上で最も強く、恐ろしい存在の居室では男女の声が響き合っていた。
天蓋付きのベッドの中で、誰もが魅了される肢体を弾ませるのは魔王ジル。
そしてその下にいるのは、最強の魔人。魔王の懐刀である魔人レオンハルトだ。
そこで行われる行為はいつものこと。ジルが魔王になってから６００年続けられてきた行為だ。

尤も、愛情などというものは見えない――が、それだけ肌を重ね合わせれば、お互いに相手のことが解りもする。
故に魔王ジルは気づいた。そのレオンハルトの状態に、
「……最近は、随分と昂ぶっているな？　レオンハルト」
「……解りますか」
レオンハルトもそれを理解されてることを理解し、神妙に頷く。
息を軽く乱しながらも、レオンハルトは粛々と、そしてジルは喜悦を感じている様子で楽しそうに告げた。
「ああ。お前のことは最近、より分かるようになってきたぞ……くく、んっ、しかも今は、こうして繋がっているのだからな……」
ジルが己の下腹を蠱惑的に手でなぞる。その中にある普段よりも大きい感触を確かめ、己の快感を高め、そして締め上げるように。
並の男では腰が砕けてしまうほどの快楽を、ジルの中は孕んでいた。
が、レオンハルトはそれを受けても表情を少し歪める程度しか反応しない。
――だが、今日のそれは少し趣が違った。
ジルの中が更に窮屈になると、それに応えるようにレオンハルトのモノも一回り大きくなって跳ねる。
「くっ、はっ、あぁ……」
ジルが己を突き上げるその存在感に天井を見上げ、堪らないと言わんばかりに嬌声を漏らすが、それでも会話が止まることはなかった。
「くふふ……最近、色々と動いているだろう……？　魔軍を動かし、魔人を動かしている……んっ、それと、何か関係があるのか……？」
はぁ、と艶の籠もった吐息を漏らし、ジルは身体を前に倒し、己の下にいるレオンハルトと肌を重ね合わせる。
その逞しい肉体と、ジルの大きな胸が合わさり、横にはみ出すようにいやらしい曲線を描いている。
レオンハルトの頬に黒く染まった手を当てながら、ジルは問うた。
するとレオンハルトは、いつもと違い、軽い笑みを浮かばせた。
「ああ……そうだな。関係ないとは言い切れない。俺も、期待してい

るのだろうな」
期待。その言葉の意味を理解しながらも、ジルは不可解だった。
「強い人間がいると報告には聞いたが、お前を燃え上がらせるほどの筈はないと思うがな……」
「それはそうだが、やってみなければ分からないこともある」
と、更に口元を歪めてみせるレオンハルト。
そのことに、ジルは反応した。
なにせ、夜伽においてレオンハルトが己に笑みを見せてくれたことなど、これまでの記憶にないものだから。
それだけに、ジルは腰の奥から堪らない気持ちの昂りが湧いてくるのを自覚し、一際強く身体を抱く。
「っ、そう、か……お前が愉しみだと言うなら良いだろう……好きにしろ……！」
強がりとも言える魔王の威厳を出しながら、だが、とジルは命令する。
「……今日はいつもより発散したい気分だ……その昂りを、私に強くぶつけろ……！」
と、尻をレオンハルトの腰に強く押し付け、その存在感を貪るように動く。
ジルの奥がレオンハルトのものと接触し、それを押し付ける感触にジルは嵌っていた。
そしてレオンハルトの方も、おそらくは――
「……分かった。魔王の命令であれば仕方ない」
「――ぁ……！」
尻を両手でホールドされ、凄まじい快感の波が襲い来る。
そのことで頭が真っ白になる前に、ジルは確信した。
――レオンハルトも、受け入れている。
無意識にだが、それを確かに感じ、ジルはそのことを内心でほくそ笑むと、自身にもたらされる絶大な快感を享受した。

異常気象

迷宮での滞在も二日目の午後ともなれば皆も多少は慣れる。
基本的にやることがないので暇なのだが、思い思いのことをするなどして時間を潰していた。
その一つが、白兎が行っているそれである。
「ほら、二人共！　気を緩めないでください！　少しでも気を緩めたらご飯抜きですよ！」
「ってことはもう駄目なんじゃ――ぐあーーーっ!?」
「な、なんで僕ちゃんがこんな目に――おおうっ!?」
魔人の娘である白兎は、その小さな見た目に似合わず強い。
日光を抜いて彼女がやっていることは、主にガイの友人であるクーベロの指導だ。
ちょっと前までは藤吉郎に戦わせてアドバイスを送ったりしていたのだが、そんな時に現れたのが影の楔という魔物討伐隊の幹部、スケアクロウ。
彼はクーベロを襲おうとしたところで白兎に捕まり、その修業の為に利用されていた。
クーベロの相手としてスケアクロウを戦わせ、それを横で白兎がアドバイスする。それだけならまだしも、白兎も身体が鈍らないようにと、２対１で攻撃を防いでみるように言われたのだ。
無論、手加減はしているが、それでも白兎の剣は重く、速い。彼らは並のレベルではない人間の戦士だが、それでも相対するのは厳しい。
だが、それでこそ良い修行になるのだ。と、ふざけた理論を白兎が唱えるため、クーベロとスケアクロウは何故か死地に陥っていた。
「ひいいっ!?　もう駄目だ……僕ちゃん、ここで死ぬ……」
「あ、諦めるな！　こんなところで死んでたまるかよ！　俺もお前も、この戦いを生き延びるって約束しただろ!?　――１０分くらい前に！」
「！　そ、そうだ……僕ちゃんはこの戦いを生き残って、成り上がると

いう野望が……」
「ここで死んだらその野望だって叶えられねぇだろ!?　諦めんなよ！
俺達が協力すればやれる！　生き残れるんだ！」
戦闘の最中、クーベロがスケアクロウを激励し、立ち上がるように手を差し伸べる。
そこには、同じ苦難を味わった者だけで育まれた、確かな絆があった。
「っ……ああ、そうだな。僕ちゃん、まだ諦めねぇ！　まだ死ぬと決まった訳じゃねぇ！」
「そうだ！　俺達は、まだ生き残れる……！」
そうして2人は協力し、その窮地を脱するために力を込めた。しかし、
「――あ、手が滑りました」
「ぎゃあああああっ!?」
「す、スケアクローーーウ!?」
白兎が発生させた斬撃が、スケアクロウに直撃し、クーベロの叫びが迷宮内に木霊する。
あれ死んだんじゃね？　と誰もが思い、イヴなどは何とも言えない目でそれを見る。溜息付きで、
「何やってるんですか……もう夕飯が出来るので戻ってきてください」
「もうそんな時間ですか。早いですね。ほら、二人共ご飯ですよ」
「す、スケアクロウ……あんまり思い出もないし、特に性格とか好みとかも知らないけど、いいヤツだった……」
クーベロがその場で嘆きながら、すたすたと焚き火の前に戻ろうとする。が、すぐに起き上がる影があった。
「か、勝手に殺すんじゃないってのよぉ!?」
「あれ、普通に生きてる……？」
「ギリギリで変わり身の術を使ったみたいですね。さすがは忍者。次はもっと速くしても大丈夫そうです」
「お、お願いだからほんと、それは勘弁……」

白兎が忍者相手に楽しそうというか、かなりはりきっている様子だが、スケアクロウの顔は青褪めている。白兎の実力を感じ取り、なおかつ襲撃しようとした負い目があるためか、白兎相手に強く出ることも出来ず、ただただ従っていた。
「さすがは魔人の娘。容赦ないな。やっぱり、今のうちに殺るべきだ」
「それはさせませんし、しても有益にはなりませんよ。そもそも、半分は人間の血が入っていることを理解してますか？」
「ふん……」
それを見て、焚き火近くの地面に刺さったままのカオスと、その近くに置かれた日光がちょっとしたやり取りを交わす。
やはりカオスなどは未だに魔人側勢力とも言える白兎一行に気を許していないようで、口数も少なく、それでいてツンケンしていた。
だが白兎に気にした様子はない。それどころか、冷静な様子で顎に手を当てて、
「ガイさんと斬り結ぶ分には構いませんけど、殺されるのは困ります。私、これでも最近はやることが多くて」
「いやいや……白兎さん。そういう問題じゃないですよ？」
「殺人宣言されても、特に怒るようなことはない、か。ふふ、さすがはあの魔人の娘だね」
ズレている感性の白兎にイヴがいつもの様に呆れ、Cはそれに意味深な笑みを浮かべる。まだ二日目だが、何となく集団の立ち位置も確立し始めていた。
そして何気にその会話を耳にするスケアクロウは、1人で怯えきっている。
「ま、魔人の娘とか……そりゃ勝てる訳ねぇ……というかよぉ、めちゃくちゃやべー情報じゃねぇか……どうすんだ……？」
「あ、バラしたらさすがに斬るしかないので、その辺りは気をつけてくださいね」
「……やっぱり僕ちゃん、生き残れないのでは？」
白兎の何気ない一言に己の死期を悟り始めるスケアクロウ。ものすごい情報をゲットしたのはいいが、それを活かせる日は来そうにな

い。
　そもそもこの面子から逃れることすら出来そうにないのだ。
　だが一つだけ希望があるとすれば、
「……あれ？　でもこのままついていけば、僕ちゃん、魔人の下で良い思いが出来るのでは……？」
「いや、それは……」
　イヴがそれを耳にして言い淀む。正直、今の時代の人間としては恵まれているとは思うが、それはそれとして、全くの苦労がないかと言えば、イヴとしては思うところがある。
　故に言い淀んだが、スケアクロウにはその思いは届かない。やめといた方がいいとは思うが、
「……ゲッヘッヘ……そうと決まれば、影の楔なんて抜けて、こっちのご機嫌を取りまくれば……」
「……全部聞こえてますけどね」
　白兎は耳がいいので、何かに気を取られている時でもなければ、幾ら小声だろうとその音を拾ってしまう。
　スケアクロウの下心を耳にした白兎だが、だからといって溜息を吐くくらいで、具体的な行動は取らない。別にこのくらい、怒ることでもないからだ。
　むしろ逞しい人間は嫌いではない。スケアクロウは少しアレな部分もあるが、それでもその生きるために何でもするという精神はこの時代では評価されるべきものだ。
　それに、全く生かす理由がないとも言い切れない。
　その師とやらの話をどこかで聞いてみたいものだった。もしかしたら、面白い縁があるのかもしれない。
「はい、白兎さん」
「イヴさん、ありがとうございます」
　白兎はイヴから夕食の載ったお皿を受け取ると、それはそれとして別の部分に意識を向けた。
　それは背後にある大きな扉の向こう側。そこで未だに禁呪を習得しているであろう友人の事だ。

……だんだんと気が……いえ、これは魔力でしょうか。それが大きくなっているような……。
そもそもここに着いた時から思ったが、この扉の奥から感じられる魔力は、白兎ですら背筋に冷たいものが走るような何かである。
ガイが強くなるなら、と見送ったが、心配であることには変わりないし、ガイであろうその力の塊が大きくなるにつれて、別の懸念も湧いてくる。
……もしかしたら、ガイさんは本当に……。
本当にいつか、己の父を倒し、そして魔王を倒すかもしれない。
届くはずのないそのガイの目標だが、その可能性もあるかもしれないと思わされる自分に白兎は驚き、それを振り払うように夕食を口に運び始めた。
もし本当にそうなった時、自分はどうすればいいのか、その答えを先送りにして。

「ああ、くそっ、火がこっちにまで……！」
「おいお前達！　この辺りはもうだめだ！　離れるぞ！」
「熱っ!?　くっ、なんだってんだ、急に山火事なんて……！」
人間の隠れ里を襲うアッティラ軍の魔物兵達は、包囲網を形成する北東側の部隊を中心に、次々と移動を余儀なくされていた。
突如として発生した大規模な山火事。それによって二日目の戦線は混乱し、侵攻することは出来なかった。
一日や二日で山火事が鎮火することはないので、それによる対策に頭を悩ませるのは、本陣にいる魔物大将軍、アッティラに他ならない。
あいも変わらず、ガルティアが延々と食事をする司令部で、アッティラは苛ついた様子で声を上げた。
「くっ……大分時間を食ったし、このままでは侵攻を早める他ない……もたもたしていたら、山火事がこの一帯を覆ってしまい、侵攻はままならなくなる……」
「人間連中も死ぬだろうから良いんじゃないのか？」

「い、いえ、それは……」
それでは困る、と大っぴらには言えない。
軍勢を預かる将として、上司である魔人に、人間を苦しめたいから勝ち方を選んでいると言うのは、さすがに少し問題がある。
確かにガルティアが言う通り、このまま放置していればどの道隠れ里を潰すことが出来なくもないだろうが、それだとアッティラが楽しめない。
自らその苦しみ様を見て、実行するのが楽しいのだ。自然災害に知らないところで蹴散らされるなど、興醒めもいいところである。
「……レオンハルト様から頼まれた仕事もありますし、一応はこの足で人里に踏み込まねばなと……」
「ふぅん。そうか。好きにしたらいいんじゃねぇか？」
「はっ、ありがとうございます」
迷った末にあることを思い出し、アッティラはそれを言い訳に使った。
それは1人の人間を探すこと。この里にいるらしい〝ガイ〟という人間のことだ。
レオンハルトからの条件の一つとして、その人間を探し出すことが求められた。
無論、アッティラは人里に攻め込むためなら、とその条件を呑んだし、もっと言うなら、別に達成せずとも構わないと思っている。
たかだか人間1人、いませんでしたと報告すればいいだけの話だ。
故にこの時まで、アッティラはその任務のことを忘れていた。全員殺せばいいと思っていたのだ。
だがこれを言い訳にして、人里に強引に踏み込む口実にしておこうとアッティラは考えた。
しかしとはいえだ。山火事の件が解決した訳ではない。
防衛側に有利な事には変わりないため、こちらとしてはそろそろ本格的な攻勢に出るしかないのだ。
故にアッティラは決める。深く、息を吐き下ろして、
「明日は、私も出るか……」

そのことを決めた。
本当であれば、もう少しじっくりと攻めていき、もっと人間の苦しみ様が見られる段階で前線に出ていって絶望させてみたかったのだが、この際、背に腹は代えられない。
愉しむためにはこの段階から出て行くしかないのだ。
故に三日目の戦闘では、己が出ることを決め、そしてそう決めたことで僅かな安堵も得る。
一度決めてしまえばなんてことはない。山火事如きで、自分達の本気の進撃を止めることなど出来ない筈なのだから。
「それにしても……天気が悪いな。山火事といい……少し前までは何ともなかったというのに……」
外の天気を感じ取って、アッティラは溜息をもう一度吐く。どうせなら雪ではなく、雨でも降って火を消してほしいものだった。

「あ、カイゼル様！　雪ですわ！」
「あ、ほんとですね――って、カイゼル様がいるから、ここに届く前に溶けて無くなっちゃいますね……」
「ああ!?　仕方ねぇだろ!!　俺様はいつだって燃えてるんだからな！」
空から降り始めたその雪を見て、丘の上にいるカイゼルと火炎書士、そしてキャロルははしゃぎだす。
季節外れ――という訳でもない。今は冬だし、山の上だ。雪が降ってもおかしくはない。
しかしカイゼルという存在がいるために、ここ最近は熱かったり、霧を起こしたり、山火事を起こしてしまったりと、周辺地域に住む者達にかなり迷惑を掛けている気がしたのだが、ここにきての雪である。
「しかし、異常気象もいいところですね……」
「全くですわ！　誰かは知りませんけど、少しは自重してほしいですの！　ええ、誰かは知りませんけど！」

「誰か知ってんな……？」
カイゼルが疑念の目をキャロルに向けるが、キャロルは知りませんの、と口を硬く閉ざしてしまった。
こういう場合、絶対に喋らないし、絶対に喋らないということはカイゼルの父親が関わっている可能性が高い。
使徒は主の命令が最優先であるし、そうでなくともキャロルはレオンハルトの使徒の中でも1、2を争う忠臣である。
聞き出すことは出来ないし、そもそもあまり興味もない。というか、
「ちょっとは俺様のせいもあるかもしれんか……1割くらい……」
「どれだけ少なく見積もっても、3割くらいはあるのでは……？」
うるさい、と火炎書士を黙らせる。そんなことはない。少し燃えてるからといって差別しないでほしいものだ。原因なのは山火事と霧くらいのものだろう。
空の黒雲が雷を鳴らしているのを鬱陶しく思いながら、自分のところには降ってこない。厳密に言えば届かない雪を見て、カイゼルは突如として気づく。
「！　もしかすると……ルイゼルの奴のせいか!?」
「いやいや……ルイゼル様は冷えてますけど、別に雪を降らす能力とかありませんし……」
「氷くらいですわよね」
火炎書士とキャロルに即座に否定されるが、それすらもカイゼルは否定する。
「いや、俺様がルイゼルの気配を間違えるはずがねぇ！　絶対俺様に近づいてきてやがる！　くそっ、今度は俺様の邪魔をするつもりか!?　くっ、なんて奴だ……」
「えぇ……本当ですか……？　いまいち信用しきれないんですけど……」
「そうだとしたらどうするつもりですの？」
キャロルがそれを否定はせずに、どうするつもりかを問うてくるので、カイゼルは答えた。少し迷った末に、

「……よし！　こうなったら、俺様から介入してやるか!!」
「あ、ちょっと、まさか――!?」
　火炎書士が慌てるのを余所に、カイゼルは己の腰元にある刀に手をかける。
　それはカイゼルの得物である業物の刀だ。その名を、キャロルが説明する。
「炎刀〝閻魔〟ですわね！　レオンハルト様の刀剣コレクションの一つの！　ルイゼル様の氷剣〝ヘカテー〟と対になっているんですのよ！」
「誰に説明してるんですかキャロルさん……って、そうじゃなくて、まさか戦いに参加する気ですか!?　さすがに駄目ですよ！　それは！」
　火炎書士がこれまで以上に、断固としてそれをやめるように言ってくるが、カイゼルは落ち着いた様子で答えた。
「落ち着けよ火炎書士。それとキャロル、今はもう親父のじゃなくて俺様の剣だ。ルイゼルの剣もな」
　親父が趣味としてコツコツ集めていた刀剣コレクション。カイゼルとルイゼルはその中でもかなりの名刀、名剣を貰っていた。父親からのプレゼントの中では気に入っている方だが、今はそれはいい。重要なのはこれからやることだ。
「別に俺様がやったとバレなければ問題ねぇんだ。幸いにも、今は山火事が起きて、どいつもこいつもパニクってるからな。姿を見せさえしなければ大丈夫だろ？」
「それは……そうかもしれませんが、そもそも戦いに参加してどうするんです？」
　もっともな質問が火炎書士から飛んでくる。
　故にカイゼルは、マスクの下で口元を歪ませ、こう答えた。
「俺様直々に、少し試してやるだけだ。俺様の――〝使徒候補〟の実力をな」

覚悟の時

一筋の光すら差さない闇の中、ガイは壁を越えていくのを自覚していた。

魔導の深淵。禁忌の魔術。一つ使うだけで精神を崩壊させるに十分な力が己の中に渦巻いている。

それらは互いに反目しあい、己の中を、そして別の魔力を塗りつぶそうと争っていたが、少しずつそれは収まり、ガイの中に溶けていく。

そしてそれが進む度に、ガイは一つの理を見た。

魔法というこの世を構成する一つの術理。その中枢に至る理を、禁呪によって強引にこじ開けたのだ。

ガイは魔法使いとして優秀だが、それほどその術理を理解している訳ではない。

習得した魔法の数は少なく、それも全て戦闘に関係する攻撃魔法のみ。補助的な魔法は殆ど知らず、魔法理論は基礎程度しか知らない。

魔法使いとしての優秀さ、知識の深さであれば、歴史に名を残す伝説級魔法使いの中でも、圧倒的に劣る。

ともすれば、それ以下の魔法使い達にも負けるだろう。ガイの知識は、魔法使いとしてはそこそこのレベルでしかない。

だが、魔法の理論ではなく、魔法を扱った戦闘。魔法戦のその一点のみに限れば、ガイは歴史上の魔法使いの中でも最上位と言っていいレベルに達している。

生まれつきの魔法の才能と、禁呪によって得た限界を超えた魔法の力。その使い方を理解し、ガイは一つの結論に至る。

――魔人を、魔王を倒すことは、不可能ではない。

他ならぬ、この力であれば出来る。力があれば出来る。

魔王は魔王だから絶対無敵の存在という訳ではない。魔王は他の生物を上回る圧倒的な力を持つが故に、世界の支配者としていられるのだ。

仮に魔王と互角、あるいは凌駕し、上回るような存在がいるならば、魔王とは一勢力の長としての称号でしかなくなるのだ。

人間には魔王どころか、魔人に匹敵する存在すら誕生しない。ポテンシャルはともかく、人間は魔物にすら劣る。どれほど強大な戦士も寿命があり、全盛期だろうと魔人一体倒せない。人間は虐げられる。

だが力があれば、その全てがひっくり返る。

己という人外の力を持つ者がいれば、魔王の支配を揺らがすことが出来る。

そしてその事実に、ガイは高揚する訳でも達成感に包まれるでも、ましてや全能感に喜ぶこともない。

そこには酷い寂寥感があった。

そして己の想いに初めて気づき、それがもう叶わないと悟った。

――自分はもう……戻れないんだな……。

それはどちらの声だったか。あるいは両方の想いが乗った声だったかもしれない。

幼い頃、ガイは人並みになりたかった。生まれつき、親が死に、魔物に、周りに虐げられ、右半身の麻痺などの人並み以下の力しか持たず、人並み以下の生活を味わってきたガイ。

人並みになりたいという願い。それは己が、人並みでないことを自覚していた証だ。

人並みの生活を知らないはずの己が、それを不思議と知り、願っていることに疑問を感じていたが、今なら分かる。

人であるからこそ、人の生活を、本能が、魂が、求めていたというだけのこと。

どれだけ魔物が、人に獣のような生活を強い、それを当たり前として植え付けようと、今まで人として生活してきた遺伝子は消えることはない。

人には人の、魔物には魔物の、ドラゴンにはドラゴンの、カラーにはカラーの、生まれ持った形がある。

そしてお互いに違うからこそ、争いは生まれる。

違う存在が交わることで争い、憎しみ、負の感情は生じる。

そう、違う存在が交わってはならないのだ。

人の社会で生きた己が虐げられた理由は何だ？

答えは他ならない。人と違ったからだ。
人並み超えた力を持っていたからこそ、疎まれ、嫉妬され、憎悪され、負の感情を生む原因となってしまった。
そして今、己はそれを超える大きな力を得た。
魔王を倒しうる程の、とてつもない力だ。
もう二度と、人並みの扱いを受けることは不可能な、大きな力。
それを得た己は最早、人としてではなく、人外の者として生きるしかない。
そして大いなる力には、それ相応の義務と責任が生じるという。
例えそうでなくとも、己は人の枠に囚われた者として、魔王を倒さなければならない。
例え人として扱って貰えない人外の力を持つ者だとしても、人の代表としてそれを断ち切らなければならない。
自分達のように、違う存在は別個として在らねばならない。
一時は、力を得れば誰も失わず、人並みの生活が送れるのではないかと思ったが、それは違った。
自分がいない方が、人も嫉妬に駆られずに済む。
人並みでない自分は、人にとって害でしかないのだ。
だがそうだとしても、最後にそれを達成する。
「行くぞ……覚悟はいいな？」
『……チッ、仕方ねぇな……』
己の中にいるもう1人に確認を取ると、一応はその方針に賛同する。
人格の違いこそあれど、彼もまた自分で、自分もまた彼なのだ。同様の想いを感じて、同様の経験を経ている。多少の考え方は違えど、行き着く結論を否定は出来なかった。
だからガイは、己の意志でその扉に手をかけ、一歩を踏み出す。
魔王を倒し、世界を変えるために。

鋼の騎士団の本拠地。その隠れ里を巡る戦いも三日目に突入した。

日が昇る前に森に罠を仕掛け、一度報告に戻った鋼の騎士団の隊長、ロランは部下からの報告を聞いて眉を顰める。
「……やはり、あの山火事は魔人が引き起こしたもの……か」
「はい。監視していた人員が言うには、その魔人が火を森につけたのだと……」
この戦闘が始まった初日の夜。北東の丘の上に陣取る魔人の姿に気づいたロランは、直ぐ様目がよく、気配を消すことにも長けた人員を監視につかせた。
それによると、突如として引き起こされた山火事は、魔人が発生させた炎に因るものの可能性が高いという。
それはロランも理解出来る。ロランも夜中にその魔人の気配を感じた時、北東に不自然な明かりを見つけたのだ。その能力であるというなら、確かにそうなのだろう。だが、
「なら、魔軍も混乱し、攻めあぐねているのはどうしてだろうね……」
「……もしや、仲間割れ……いや、魔人の命令なら、魔軍は言うことを聞くはずで……ううむ……」
分隊長の考えに耳を傾け、ロランはそれはあり得ると思う。
魔人は二十体ほどいると噂されるのだ。それなら、
「魔軍も一枚岩ではないのかもしれないね。魔人が、魔軍の侵攻の邪魔をする――魔人が何故、という部分は気にかかるけど、僕らにとっては好都合だ」
「はい。こうして、無事に三日目を迎えられたのはそれもあってのことでしょう。無論、ロラン隊長の作戦と指揮、奮戦振りがあってのことですが……」
「……まあ、山火事がなければ、もう少し被害は大きかったかもね。……とはいえ、山火事で不便なこともある。これ以上火が広がり、里が包囲されれば、僕たちが逃げることも、洞穴に隠れている住民たちも火事によって死んでしまう。その前に、どうにかして決着を着けないと」
そう、それこそが懸念事項だ。
火が広がるペースはそれほど早くはないが、それでも時間的猶予が

あるわけではない。もたもたしていれば、被害も大きくなり、勝ったとしてもどのみち負けとなってしまう。
　早めに決着を着けなければならないのだが、そのために肝心なのは今日の魔軍の動きだ。
「……敵だって、この山火事の中、長丁場の戦闘になるのは避けたいはず……どうにかして、魔軍を引き込めればいいんだけど……」
「如何しましょう。直に、魔軍も再び攻勢に入るでしょうが……」
　ロランは部下から答えを急かされ、迷った末にこう答えた。
「……まだ現状維持。しかし、我慢出来るのは昼か……遅くとも夕方までだね。それまでは昨日までと同じ戦法で待つ」
「はっ、全部隊に通達しておきます」
「それと、北東の魔人は刺激しないように厳命。……とはいえ、もう監視は出来ていないんだっけ？」
「はい……北東は最も火の勢いが強く、監視の人員も近づくことも出来なければ、遠目にも火と煙で何が何やら分からないとのことです」
　それなら仕方ないか、とロランは残念に思いながらも顔には出さない。魔人の動向は出来れば押さえておきたかったが。
「……ほんと、ここ最近の異常気象には良くも悪くも振り回されるね。見なよ、今日は雪だよ。北東からは火が回り、空からは雪。遠くの空からは雷が鳴ってるし、もはや良く分かんないよね。これも、魔人の力だったりするのかな？」
「だとしたら、まさしく災害ですな……」
「まあさすがに、この気象が全部ってことはないとは思うけどね。とにかく、監視が出来なくても、魔人を見かけたら刺激しないことは同じ。見かけたら即座に逃走を試みて、直ぐに報告すること」
「はっ、畏まりました」
「さぁて、今日が正念場だけど、出てくるかなー……？」
　さすがに徹夜三日目、ともなると目の下にクマも出来るし、テンションも少しおかしくなる。三日間、戦い詰めのロランは、そろそろお目当ての獲物が前線に出てこないかと、ちょっとした狩人のような心境でそれを見守っていた。

が、その待ちに待った瞬間は唐突に訪れる。分隊長が出ていこうとしたその瞬間、外から伝令がやってきて、
「報告！　ロラン隊長、出ました！」
「！　どっちだ!?　魔人か!?　それとも――」
慌てて走ってきたのだろう。乱れる息を整え、伝令の隊員は答えた。震える声で頷き、
「――魔物大将軍、アッティラです！　前線に現れました!!」

魔軍の前線。大勢の魔物兵が本日の攻勢命令を出されるのを今か今かと待ち続ける中、その巨躯は現れた。
その存在に、多くの将兵は畏怖の視線を返す。
「さて……戦闘三日目で私が前線に出ることになるとはな……」
ズシン、ズシン、と地面を踏みしめ、雪の結晶が降り、燃える山を見上げて吐息を漏らすのは、この場に布陣する魔軍の頂点に立つ者。
魔物大将軍アッティラ。
彼が前線に出ることに、彼を知る魔物将軍、魔物隊長らは凄まじい頼もしさを胸に宿す。
「申し訳ありません！　我々が不甲斐ないばかりに……！」
「アッティラ様のお力に頼ってしまうことになるとは……！」
敬礼し、彼を崇拝する魔物将軍らは悔しさを滲ませた声を漏らす。
だがアッティラは特に気にすることもなかった。手を軽く振り、
「ああ、よいよい。どの道、前線には出るつもりだったのだ。それが早くなった、それだけのことだ」
「っ、しかし、それは我々の不甲斐なさが原因であり……」
「そうかも知れんが、そんなことを一々気にするな。戦争では何が起こるか分からないもの。過ぎた結果より、これから起きる未来に目を向けようではないか」
再度、気にするな、と声を出すアッティラ。その許しを得て恐縮しながらも、魔物将軍は問い返した。
「未来……で、ありますか？」

「決まっているだろう――我々が勝利し、人間共が残らず死ぬ。そんな未来だ。私が前線に出た今この時、それは確定した。故にお前達はこれまでの失敗を憂う必要はない。負ければお前達のこれまでの結果は処罰されるが、勝てばそれも笑い話。問題になることはない」

おお、と魔物将軍だけでなく、それを聞いていた魔物隊長、魔物兵らも声を上げる。

その圧倒的な自信に満ち溢れた発言にとてつもない安心感を、頼もしさを感じる。

何しろ、あのアッティラの言葉だ。魔物界で、アッティラの功績は有名である。

彼は魔物大将軍でも随一の英雄。魔物の黄金時代を築いた国狩りにおける立役者であり、最強の魔物大将軍。多くの国を、人間を、文明ごと破壊し、ついた異名が〝殲滅〟のアッティラ。

アッティラ軍に所属する者達は、その功績と恐ろしい力を知っている。

故に自分達に負けはない。そう確信出来る。

「さて、ならば開戦の号砲代わりに、一発撃ち込んで置くか――」

そしてそのアッティラは、その恐ろしい破壊の力を行使するべく、山の方を向いた。

魔物兵達が、ごくりと喉を震わせる。巻き込まれないとは分かってはいても、その力は恐ろしく、万が一にもその力がこちらに向けられないようにと祈るのみだ。

そんな魔物兵らの心配を余所に、アッティラは森に向かってその頭部を向けた。

鼻なのか口なのか。細長く、まるで砲のような筒状のそれは、正しく砲であり、アッティラの得物であった。

だがそれだけではない。よく見ると、彼の手や背中から伸びる触手。膝などのあらゆる場所には、その砲がついている。

その全てを人が潜むであろう雪と火の山へ、彼は照準を合わせた。

「人類文明は、唾棄すべき邪悪な文明……！　その全てを、私は破壊する……！」

アッティラは己の中にあるその想いを言葉の乗せて、殺気と共に宙へと飛ばす。すると彼の力が上昇し、彼の身体が光り輝き始めた。
それは黄金。すなわち、魔物の黄金時代を作り上げた栄光の力。魔物の敵を殲滅する、灼光の剣。
「消し飛ばせッ!!　――殲滅の剣!!」
刹那――アッティラの全身の砲から、光の砲撃が森へと放たれた。
それらは途中にある雪を、大気を、あらゆるものを消滅させ、突き進んでいく。
そして目標の森の一角へと着弾すれば、それは当然、森の一角を破壊し、消し飛ばす。
「――すげぇ」
そう言ったのは誰だっただろうか。その力を見たことがない魔物兵か誰か。幾数人か。
だが知っている者も知らない者も誰もが畏怖した。あれほど苦戦した人間の兵。罠が満載の森を、森ごと吹き飛ばすことで道を作った。
無論、この山林地帯の全ての森を破壊し尽くす程ではない。破壊したのはアッティラ軍の正面。半径１００メートルほどの一帯である。
だがそれでも、見晴らしが良くなった前線で、アッティラは上機嫌に言った。麾下の者達を鼓舞するように、
「これで分かっただろう。私の前では小細工など無意味！　立ち塞がる全てを撃ち抜いて消し飛ばしてやる……！　さあ、貴様らも私に続け！　文明破壊の音が聞こえるぞ！　殲滅のお時間だ！」
「お――おおっ……!!」
「アッティラ様に続け!!　人間共を殺せ！」
そうして、アッティラ軍はかつてない士気を持って、鋼の騎士団に襲いかかる。
三日目にして、両軍の本格的な激突が、今ここに行われようとしていた。

――だが、第三者の介入がそこにはあった。
「アッティラ様……っ！　火が……!?」
「何だ!?　火がどうした――」
「ロラン隊長！　山火事が……!?」
「っ、これは……！」
防衛の為に後退しようとしていた鋼の騎士団も、拓かれた森を前進し始めたアッティラ軍も、その両軍がそれを目撃した。
北東を中心に東側、北側と燃え広がっていた山火事が、ここに来て勢いを増したのだ。
その規模は、南の主戦場にまで届こうとしていた。
まるで生き物のように広がろうとする炎。
それを行使するのは、森の奥で隠れ潜んでいた一体の魔人だった。
「――そろそろ始めるか」
背中に炎を纏った魔人――カイゼル。
彼は森の中で1人、首を鳴らしながらそれを行おうとする。
周囲の森は、既に火炎によって森の体をなしていない。
その、彼にとっては心地よい炎の中で、彼は背後の丘に向かって声を掛けた。
「お前ら！　特にキャロル！　そこを動くなよ！　誤って燃やしちまうかもしれないからな!!」
「了解ですわー!!」
「いや、止めましょうよ!?　カイゼル様も、間違える可能性があるならもうちょっと控えめに……！」
二体の使徒はカイゼルの使徒ではない――が、家族も同然の相手だ。それを巻き込むことをカイゼルは許さない。ある程度なら平気かもしれないが、出来るなら迷惑を掛けないほうが良いに決まってる。
だがやりたいことは必ずやる。成し遂げる。自信家なカイゼルは火炎書士の言葉に大声で答えた。
「馬鹿野郎!!　俺様は火力重視――いや、出力重視なんだ！　ルイゼルの奴と違ってな!!」

「誇れることじゃないですよー!?」
大声でツッコんでくる火炎書士。心配性で臆病な使徒だ。そういうところも悪くはないが、母親の使徒であるため、口うるさくもある。心配ゆえの言動であるのは分かっているため、本気で蔑ろにする訳もないが。
「悪いな火炎書士……！　俺様はもう止まらねぇぜ……！」
カイゼルにとって何よりも優先する対象であるのは――妹のルイゼル。
彼女が行動を起こした時から、自分もこうするのは決まっていた。
そうでなければ、兄として釣り合いが取れない。
故にカイゼルは動く。己の、炎を操る力を使って。
「これだけの炎があれば、普段よりもっと燃え上がれそうだ……！」
カイゼルは炎に包まれた森で1人、力を放出する。
普段は危ないため、抑えつけているその力。魔人としての特異な能力。
その力に、カイゼルは自信を持っている。タイマンでは兄や姉にまだ敵わないが、広範囲の敵を殲滅する能力だけは、兄妹達の中でも誰よりも勝っていると。
「さあ、祭りの始まりだ……！　地獄極楽――」
カイゼルはこの一帯を覆う火炎と一体となった。大規模な火炎を身に纏い、その全てを彼は放出し、操る。
カイゼルが黒い翼を広げ、魔人としての気を増幅させた時、それに応えるように、山を囲むよう地面から炎が噴出し始めた。
そして最後に、彼は雄叫びを上げて炎を収束させ、それを纏った拳を地面に叩きつける。
それは、地獄を地上に顕現させるカイゼルの大技。全てを燃やし尽くす灼熱の地獄。
「――〝大炎熱地獄〟ッ!!」
その瞬間、戦場は炎に包まれた。

「なんだ――ぎゃあああああああっ!?」
「熱いっ、あ、ああっ!? 炎が、炎がああああああああああああ!?」
「地面から突然ッ、うぐっ、あがあああああっ!?」
運悪く、その炎に捕まった者達は、主に魔軍に所属する魔物兵達だった。
彼らは一様に、突然勢いを増した炎によって焼かれ、地面を転げ回る。
だが炎が消えることはない。彼らが逃れることも。地面を転がってどうにか火を消そうと足掻いたところで、周囲は全て、灼熱の世界だった。
その炎を消そうと思うなら、火種を消すか、その燃え盛る一帯から離れ、逃れるしかない。
しかし最低でも数百メートルの距離を進まねばならない。通常の魔物兵に、それは耐えられるものではなかった。
「くそっ、なんなのだこの炎は!?」
「わ、分かりません!! ですが、徐々に炎が広がっています! 山を包囲するように……!」
「なんだとっ!?」
突然の大火災。地獄と化した周囲の状況に、アッティラは慌てて前方を見る。
するとそこには確かに、燃え広がり、壁となろうとする炎と、燃えていない森の中心部があった。
まるで人間から自分達を遠ざけようとするような、作為的な炎の動き。
原因は不明だが、現実として、このままでは自分達はこの炎を眺めることしかできなくなる。
故にアッティラは決断を迫られた――が、前線に出た時点で選択は決まっている。アッティラは右手の砲を炎の壁に向けた。
「邪魔だ!!」
「アッティラ様!?」

部下の魔物将軍の声を無視し、砲撃する。光の砲弾が、炎の壁の一部を消し飛ばした。
それを見て、アッティラは部下に指示を出す。
「中に進むぞ！」
「そ、それは……しかし、あの炎だと――」
「馬鹿が！　今何を見ていた⁉　人間の殲滅が終われば、私が中から炎を吹き飛ばしてやる！　だからついてこい！」
「な、なるほど……了解しました！」
そうして、アッティラは一軍から分けた一部の部下と共に炎の中へと突き進んでいく。
そして森の中心部。隠れ里に続く林の中で隠れていたロランも、
「これは……酷い光景だ、が……僕らには、追い風となるかもね……」
と、腹を決める。この戦いの行く末を決める分かれ道。それがたった今、訪れたのだ。
「……全部隊に通達し、北側へと撤退。魔軍をこのまま引き付けるよ」
「は、はいっ……！　ということは、ロラン隊長は……？」
ロランは頷く。笑みを浮かべてみせ、
「ああ……ここからは、僕1人でやる」
都合がいいことに、踏み込んできた魔軍の数ならそれも叶う。1人で終わらせれば、隊員たちが被害に遭うこともない。
故にそう告げ、そして部下も、その想いを汲み取った。
「……ご武運を……ッ！」
「うん。まあ、そんな今生の別れみたいな雰囲気は出さなくていいよ。フラグが立ちそうで怖いしさ」
「はいっ……では、また！」
今にも泣きそうな表情の分隊長と分かれ、ロランは息をつく。
「それをやめてって言ったんだけどな……でもいいか」
それも仕方ない。こうなると、己も命を懸ける必要がある。
「――どこだ人間共⁉　全て、全て殲滅してやる……⁉」
遠く。視認出来る距離に、一際大きい魔物の姿。
魔物大将軍アッティラ。自分が討ち取るべき、敵の姿だ。

彼を倒し、己はその役目の一端を担う。その覚悟を決めた。
「ガイ君達はこの炎だと、間に合いそうもないし、あの大将軍も強そうだし……貧乏くじ引いたかな」
まったく。一番使命に燃えてない自分が、こんな大勝負に挑むことになるとは。
そのことに肩を竦め、自嘲気味の笑みを浮かべた後、ロランは声を張り上げた。
「――魔物大将軍アッティラ！　鋼の騎士団隊長、ロランはここだ！　命が要らなければついてこい!!」
「！　そこか……！」
部下の魔物兵を引き連れたアッティラが、こちらに強い殺気と敵意を向けてくる。実際にその手の砲を向け、
「っ、どこかのクソ人間を思い出させる顔でこの私に舐めた口を……！　雑魚の分際でいい度胸だ……殲滅してやる……！」
「殲滅されるのはそっちだ。馬鹿の魔物風情が」
「貴様ア――!!　殺してやる!!　地獄のような苦しみを味わわせながらじっくりと、命乞いをさせてから、それでも嬲り続け、最後はムシケラのように踏み潰してやる……！」
「おお怖い怖い。それじゃあついてきなよ」
怒り狂いながら追いかけてくる魔物大将軍を、ロランは背後に見ながら駆け抜けた。
そして思う――これが、己の最期の時かもしれないと。
部下にはああ言ったが、どうしようもなく死の気配を感じているのは、他ならぬ自分自身だった。

恐怖はすぐそこに

――それは数百年前のことだ。

『進め進め――！　人間共を魔王ジル様の名の下に殲滅しろ――！』

先代魔王様である魔王ナイチサ様から魔王ジル様が誕生して1年。その1年は魔軍が全ての人類国家を破壊する――〝国狩り〟が行われていた時代。

まだ戦える人間が数多く、徒党を組んで抵抗していた輝かしい最後の戦乱。魔物の黄金時代の幕開けとなる最初の戦争。

人間の血と恐怖と絶望が振りまかれる素晴らしい大陸で、私は軍を率いて人間を片っ端から殲滅していった。

『い、いやぁぁぁッ!!　やめてぇぇぇ――!!』

『この魔物！　この私が相手だ！』

『な、何でもするから許してくれ！　金なら払うっ！』

『魔物に屈する訳にはいかないッ！　持ち堪えるぞ！』

多くの人と人の文明を壊した。

女子供であろうと容赦はせずに平等に苦しめて殺してやったし、戦いを挑んでくる人間は丁寧にきちんと皆殺しにした。

弱い人間。醜い人間。人間とはどうしてこんなにも愚かでどうしようもないのだと失笑しながらも人間を殺していった。

中にはそれなりに強い者や手こずらせてくれる人間もいたが、それも最終的には殺した。

当時は疎ましく思ったものだが、今思えば勝利の美酒を彩るものであり、人間に存在価値がないという価値観は変えられた。

つまり――人間は魔物に苦しめられるために存在するのだと。

だからこんなに弱くて愚かでイジメ甲斐のある生き物が何億と存在するのだ。そうでなければこんなに沢山人間がいる説明がつかない。

この世の真理。答えを出した私はより一層、国狩りに励むことになった。

時には戦いだって楽しめる。強い人間といっても私に傷をつける

ことなど出来やしない。
ちょっと手強い獣のようなもの。結局は戦いではなく、狩りという娯楽でしかないのだ。
だから私は苦しめて殺し尽くした。この世の真理に則って、嬉々として。
……だがそんな時だ。
「――少しいいかな？」
「っ……！　全隊、止まれ！」
ある日。国狩りも終盤に差し掛かり、残るは逃げる人間の集団を幾つか追いかけて掃討するだけとなった時。
私は軍を率いてその集団を追いかけようとして……奴と出会った。
「何だ貴様は……！　死にたいのか老人め……！」
「……いえ、少し用があるだけです」
その老人は輝くブロンドの髪を持つ、老人にしては若々しい男だった。
白い外套を身に纏ったその老人は険しい表情でじっとこちらから目を離さない。
妙だ――と思う。
何故なら、目が死んでいない。
国狩りが始まって1年が経ちつつある現在、生きた目をしている者など殆ど存在しない。
どんな屈強な戦士であっても、既に諦めきったような目をしているものだ。
しかも眼の前にいるのはただの老人。
肉体的にも精神的にも老いさらばえた弱者中の弱者だ。
だと言うのに、この老人の眼は強い意志の光を宿し、顔も精悍さを失っていない。
魔物の一軍。それも魔物大将軍を前にして出来る顔でも態度でもない――そこまで考えて合点がいく。
「……ふんっ、狂人か。なら構ってる暇はない！　死ね！」
手の砲をその老人に向ける。集約する光は己の破壊の力だ。

今まで数多くの物を、城塞を、国を、人間を滅ぼしてきた殲滅の力。魔物大将軍最強とも謳われる所以の力。
これに耐えられる者は魔物と言えど存在しないと自負している。魔人であっても、無敵結界さえなければそれなりの傷を負わせられると思っていた。
だからこそ、光の剣が老人に発射された時――私は既にその老人から意識を外した。
「よし……さっさと進んで追いつくぞ！　人間共は目と鼻の先だ！」
狂人であれば虐めても楽しくはない。故にさっさと殺して人間の集団を追いかけるのだと。部下に指示を出した直後。
「――どこへ行くんですか？」
「……っ!?　前に出るなお前達!!」
「っ!?」
その声が煙の中から聞こえてきて、私は耳を疑うと同時に部下達に指示を出した。
部下達が私の指示に戸惑いを、そして私と同じ様に徐々に晴れていく煙の中に立つシルエットに驚きを見せる。
そこには先程までと同じ様に、無傷の老人が剣を携えて立っていたのだ。
「いきなり酷いことをしますね……危ないな……」
「っ……なんだ貴様は!?　一体何をした!?　私の攻撃を躱した、のか……!?」
「敵に手の内を晒す者などいませんよ」
「……！　生意気な……！」
ふざけた返しだ。
このようなふざけた老人。いつもなら直ぐにでも葬ってやるものだし、実際にそうしようとも考えた。
だが――動けない。
相手はただの人間。それも老人だ。さっさともう一度放つなり、近づいて攻撃するなりすれば一瞬で死に絶える。
そのはず。その筈なのに……そうなるビジョンが思い浮かばない。

不用意に飛び込めば、やられるのは己――そう本能が訴えかけている。
「くっ……！」
気がつけばその場で立ち止まり、腰を落として臨戦態勢に入ってしまっていた。
人間相手にはありえない本気の構え。相手の攻撃に備えて戦おうという状態だ。
額にも汗が浮かぶ。眼の前の老人から発せられる言いようもない威圧感に、己は、
「……どうしたんですか？　来ないんですか？」
「っ……」
老人がこちらを胡乱な眼で見る。
だが直ぐに得心したという風に頷き、
「……ああ、なるほど」
そして――私にとって一生のトラウマとなる言葉を吐いた。
「あなた――僕が怖いんですね？」
「ッッッ――!!!!」
瞬間、己の血液が沸騰するかの如く熱くなるのを感じた。
頭に血が登る。そんな戯けたことを。
魔物が人間を恐れるなど、ありえない。
ましてや自分は魔物大将軍で、相手はただの老人。恐れるべきは相手の方の筈だ。
だが現実は、
「き、貴様……よくも……！」
その事実を、他ならぬ自分で自覚して認めてしまっていて――
「ッ、貴様アアアアアアァァ――!!!!」
その事実を認められず、私は吠えた。
身体中の全砲門を開いて私は大地を踏みしめる。
「っ、アッティラ様?!」
「黙れ!!　貴様らは手は出すな!!　ぐ、グググッ！　よくもそんな戯けたことを抜かしてくれたな……!!　誰が誰を恐れてるだと……

!?」
怒りが、どうしようもない怒りが己の身を突き抜ける。
そして通常の人間であればその怒りに身を竦ませるほどの圧を与える。
が、やはり眼の前の老人は眼差しを鋭く細めて、
「あなたが、僕を、ですよ。恐れていないのなら……掛かってきなさい。剣は久し振りですが……あなた程度の大将軍なら相手にするのは造作もない」
「ッ……！　また……私を虚仮に……!!」
「あ、アッティラ様お待ちを！　あの人間、只者ではない様子！　ここは安全に全軍で取り囲んで――」
「――うるさいッ!!　この、クソ人間め……！　今直ぐブチ殺して後悔させてやるッ!!」
「……出来るものならお好きにどうぞ」
「ッッッ――!!　ゴアアアアアアアッッッ!!」
次に出る言葉は言葉ではなかった。
魔物としての咆哮。怖れを振り払い、眼の前の敵へと立ち向かっていくための意味のある声だ。
己の背中から光のエネルギーを噴射して高速で老人へと突っ込む。そうして手から出すのは同じく破壊の力だ。
「〝殲滅の剣〟ッ!!」
「……！　光の剣ですか……面白い身体ですね」
「黙れェ!!　もう喋るなゴミがァ!!　今直ぐこの剣で焼き尽くしてやる……ッ!!」
手から3メートル程に届く光の剣を創り出し、それを眼の前の老人に向かって全力で振るう。
触れたもの全てを光熱で焼き尽くす破壊の力。多くの人間を葬ってきたこの力は人間では対処不可能な代物である。
しかし老人は剣を振るった。こちらの剣の軌跡に合わせて弾くように、
「ふっ……！」

「ッ……!?」
連撃。眼の前の老人に剣を弾かれ、何度も剣を振るう。
――もうそのことが既に異常だった。
魔物大将軍の全力を剣でいなしてしまう人間の老人など、一体どこの世界にいるのか。
ありえない異常事態に酷く動揺する。
「ぐっ……このカスが……!!」
「！」
顔の砲塔を眼の前の老人に向けて力を集約する。今度は剣で防げるようなチャチな出力ではない。
城壁を一発で消し飛ばすような最高火力の一撃だ。
「喰らえ!!　殲滅の――」
「……ふっ！」
「がっ――!?」
砲を向けて光を放つ瞬間、老人がその砲塔を剣で横に向けて弾いた。
砲塔が向く先は老人のいる方向ではなく、大勢の部下がいる場所で、
「!?　あ、アッティラ様!?　お止めを――!!　うわあああああああああっ!!」
「っ、しまった……！」
熱線が大勢の部下を焼き払う。その威力の凄まじさは私がよく知っている。一般の魔物程度では絶対に助からない。
荒野を削り取るほどの一撃。そして私が苦渋に満ちた呻きをあげると、老人はそれを見て、
「危険な火力ですね……人間にとっては〝害〟でしかない」
「貴様ぁ……!!」
視線だけで相手を殺せればどれだけいいかと、この時ほど思ったことはない。
実際、魔物大将軍の射殺すような視線は並の人間であればショック死くらいはあり得るだろう。

だが老人は一切怯まなかった。それどころか、
「……あなたはここで倒れてもらったほうが人の為ですね……」
「な、なんだと……!?」
老人は小さくそう呟く。そしてこちらに向かって剣を向け、
「――あなたを排除させてもらいます。人類の未来の為に」
当然の如く、こちらを殺せる。殺すのだという意志を向けてきた。
それはまるで、気位の高い魔人が人間を殺す時のものに似ていた。
そう、まるでその意志の強さは、己が恐れる――
「っっ……！　ふ、ふざけるなあああああああ――ッ!!」
怒声を、今まで生きてきた中でこれほど大きく、これほど恐怖に満ちた怒声を上げたことは一度もない。
それは偏に……己の本能が訴えているのだ。
「うあああああああああっっっ!!」
「……っと。なるほど……中々……しかし、寄る年波には勝てないとは限らない。この程度なら……諦める筈もない」
攻撃が一切効いていなかった訳ではない。
何回かに一回は攻撃を掠らせ、老人を吹き飛ばすことにだって成功する。
しかし、何度攻撃しても老人は立ち上がってこちらに向かってくる。
傷を負っていない筈もないし、本来勝てる筈のない相手。実力差は歴然……とまではいかないまでも、地力の差はある筈だ。勝てる可能性は低い。
しかしこの老人は一切目の光を失わず、こちらを少しずつ追い詰めてくる。
足に傷を与えて機動力を削ぎ、更に砲塔を1つずつ潰してくる。背中の砲塔を壊されれば更に機動力は激減した。
それが進む度に――自身の死が近づいてくるのを感じる。
生まれてから一度も感じたことのない濃厚な死の気配。生まれながらの勝利者である魔物大将軍には縁遠いものだ。
「っ、な、なあマズいんじゃないか……？　アレ……！」

「あ、アッティラ様が止められるところなんて初めて見た……！　あの人間、一体何者だ……!?」
「ッ……！」
背後の部下の声に酷い屈辱を感じる。
己の劣勢を、己の恐怖を見破られ、なおかつ心配すらされている。
人間相手に醜態を晒している。人間より下に見られている。
死にたくなるほどの辱めを受けながら、しかしまだ死にたくないと必死に身体を突き動かす自分がいる。
考えたくはない。想像したくもない。
だがこのままでは、このままでは――確実にその時は来る。
この老人は一歩ずつ着実に、こちらを殺す道筋を辿ってくる。
死ぬ。死んでしまう。
こちらが、魔物が、一方的に与える筈の死が、自分に降り掛かろうとしている。
嫌だ。嫌だ。だが、老人はどれだけ抵抗しても襲ってくる。
剣を用い、こちらに迫り、そしてとうとう――
「はぁ……はぁ……これで、終わりです……!!」
「う、あ……！　やめ――」
老人の剣がこちらの腹のコアを突き刺そうとする。
引き絞った剣の動き。それを防御することも躱すことも間に合わない。
走馬灯。今、今まさにやってくる〝死〟を、自分はゆっくりと感じながら――
「――そこまでだ」
「……！」
「……あ……？」
ガキィンッ！　と金属が強く打ち合わされる音が眼の前で響いた。
その直前に聞こえた圧のある男の声。聴き憶えがある。
こちらの眼の前に見えるのは赤黒いコートの背中と赤く禍々しい長剣。
輝くような金髪に、弱い生物を圧倒する気を纏わせる男。

人間の様な見た目だが、その存在感は人ではないことが直ぐに分かる。
故にこの場にいる者も、誰もがその登場に怖れながらも喜び、対峙した人間の老人も眉間に皺を寄せてその名を口にした。
「魔人……レオンハルト……！」
「……久し振りだな――クエタプノ」
互いの名前を呼び合う。老人はクエタプノと言うらしい。
だがこの魔人――魔人最強で魔王の懐刀とも謳われる魔人レオンハルトが、何故その人間のことを知っているのか。
分からない。分からないが、両者の会話よりも己の身が助かったことに、屈辱ながらも安堵してしまっていた。
「レオンハルト様だ……！」
「レオンハルト様が来たぞ……！」
「は、はは……助かった……！」
部下の魔物達も化け物じみた老人の魔の手から逃れられたと喜ぶ。勝ったと。
普段なら相手を倒すまで勝ちを確信するなと叱ることだろうが、この場合は致し方ないだろう。
何しろ、魔人というだけでも人間には勝ち目がないのに、その魔人ですら敵わない、歯牙にもかけないと言われるレオンハルトと対峙すれば、相手に待っているのは敗北。即ち〝死〟だ。
だからこそ、この瞬間だけは怖れている相手であっても頼もしく感じる。そのまま、その老人をやってしまえと。
だが、
「……随分と老けたようだな」
「……人間ですからね。そちらは全然変わらないようで……それで、数十年前の続きでもやりますか？　やるなら相手になりますが」
そうだ。やってしまえ。その老人を殺せと強く心で思う。
しかしレオンハルトは、あろうことかその魔剣を空間にしまい込んで鼻を鳴らした。
「ふっ……年老いたお前と決着をつける気にはならないな。――お前

が魔人や使徒になるというなら話は別だが」
「……それこそ、冗談ですね。僕は人間です。今も昔も……そして、死ぬ最後の時までも」
「だろうな。そしてそれなら、一々お前を相手にすることはない」
と、レオンハルトはクエタプノという老人に背を向けてしまう。
多くの魔物が、え？　と思うのも束の間。レオンハルトは魔物兵に向かって鋭い通る声で告げた。
「全隊――今直ぐ任務を中止して拠点に戻れ」
「……え……？」
その命令を聞いて間の抜けた声と表情を出したのは誰か。自分かもしれないし、部下達かもしれない。
だが実際に全員、驚いていることには違いなかった。副官の魔物将軍など、レオンハルトの威圧感に負けず異論すら出してみせる。
「お――お待ちをレオンハルト様っ!?　それでは人間共が――」
「文句なら戻ってから聞いてやる。それとも……俺の前で、命令無視でもしてみせるか？」
「っ……ぁ……！　そ、それ、は……！」
魔人レオンハルトの赤く鋭い眼が魔物将軍を捉える。それだけで、魔物将軍は蛇に睨まれた蛙のように身体を震えさせながら姿勢を低く、そのままへたり込んでしまいそうなほどに萎縮する。
他の魔物たちも、気がつけばレオンハルトの気に当てられて今にも跪いて服従のポーズを取ろうとしていた。
レオンハルトの怪物じみたカリスマ。この魔人に逆らえばどうなるのか――そんなことは考えただけで恐ろしい。
故に誰も口を挟めない。そもそも魔人の言うことに魔物が逆らえるはずもないのだ。
故にこの場で発言が出来る者は魔物の中にはいない。いるとすれば、それは眼の前の老人、クエタプノだけだ。
「……どういうつもりですか」
「……なに、お前の心を折るのは骨が折れるからな。そんな余裕は今の俺に残っていないというだけだ」

「……僕はそちらには付きませんよ」
「かもな。だが、それならそれで構わない。お前をここで殺したところで、失った時は戻らないし、俺達に特別益もない……なら無用に時を浪費することもないだろう。生憎と、俺は忙しいんだ」
「……礼は言いません」
「望んでない――さっさと行け」
レオンハルトが最後にそう言うと、老人は剣を懐に戻してすたすたとその場から去っていった。
その後姿を、酷く憎々しい思いで見ていると、そんな思いも知らずにレオンハルトは、
「手出しは厳禁だ。戻るぞ」
「は、はっ……」
頷く、他ない。
魔人筆頭であり魔軍参謀であるレオンハルトの命令は魔軍で魔王の命令に次いで重い。ましてや自分は助けられた身。この状況では逆らうどころか、口を挟むことだって出来やしない。
だが……心の中では先程の老人に対する怒りで燃え盛っていた。
――殺してやるぞ……。
いつか絶対、殺してやる。
後から聞いた話だが、私が老人に苦戦して時間を浪費した所為で、あの老人の目的は達せられていたらしい。
要は時間稼ぎ。
人間たちが隠れ潜むための時間稼ぎの為だけに、あの老人は私を相手に大立ち回りを演じ……危うく殺すとこまで行き着いたのだ。
だからレオンハルトは今更老人を殺しても無駄だし、自分達に帰投命令を出した。
今更追いかけても無駄。探すなら、もっと大規模な山狩りを実行しなければならないが、それだけの兵力は生憎と連れてきていない。
それを聞いて私は思った。
いつかあの老人と、あの老人が守ったであろう人間共を皆殺しにしてやると。

時が経ち、あの老人が確実に死んでいると理解しても、それでも奴が守った人間とその子孫を殺してやると。
あの時の屈辱を忘れない。絶対に復讐してやると。
――この時まで、ずっと。私は人間を殺すため。人間を踏み躙る瞬間だけを生きる喜びとして生きていた。
あの時人間に感じてしまった〝恐怖〟を克服するために、その大本となる人間の里を殲滅する。
だから木の上を跳び交いながら逃げる、どこかの老人を思わせる人間を見かけた時――喜びと怒りが同時にやってきた。
またしても苦難に晒される屈辱を受けているため、怒りの方が大きいが……それでも待ち望んだ瞬間だ。
「――殺してやるぞ……貴様ら……!!」
「やれるものならやってみなよ！」
木の上から聞こえる減らず口。人間には似合わない生意気な口調に血管が震えるのを感じる。
森の中を走って進み、仕掛けられたトラップによって少なくない部下がやられたとしても気にならない。そんなことは私の因縁に比べれば瑣末事だし、そもそもあの程度の人間であれば私1人で事足りる。
人間の里を包囲するように湧き上がった炎の壁も、私の力なら脱出は容易だ。
だから問題はない。決着の瞬間は着実に近づいている。
奴が逃げる場所を失った時。それが人間の最後で、
「勝つのは私だ……!!」
――私の勝利の時なのだ。

「ふん……！　追い詰めたぞクソ人間め……！」
「……随分としつこいね」
そうぞんざいに言いながらもロランの意識はしっかりと背後の魔物へと向けていた。

魔物大将軍アッティラ。
現在この里を攻めてきている魔軍の大将であり、僕が倒すべき相手である。
炎の壁が山を囲んだことで踏み込んでこないかと思ったが、このアッティラは少数の部下を連れて真っ直ぐ、こちらを追いかけてきた。
何も考えてない馬鹿なのか、それとも何か策があるのか。まさかこれほど簡単に誘い込めるとは思わなかった。
好都合だ。森の中のトラップと山火事で奴の部下はかなりの数を減らしている。
討ち取る好機であるが、油断は出来ない。炎の壁も敷き詰めたぷちハニーによる地雷原も難なく踏破した怪物だ。全身の至るところにある熱線を撃ち出す砲塔も危険でしかない。
そんなアッティラは辿り着いた街の周囲を眉を歪めながら見て、
「クソッ!! 人間共がいない! お前ら探せ!! 探し出して殺し尽くすのだ!!」
「はっ!」
もぬけの殻となった街の姿を見て部下に指示を出す。少ない魔物の群れは魔物隊長を中心に周囲へと散っていこうとしたが――
「そうはさせないよ」
「何っ!? ――ぐあっ!!」
魔物兵との距離を縮め、死角から短剣を振るって即座に絶命させる。
別に探したところで街にはもう人はいないが、人がいると思わせるのも重要だ。ここで自分が止めることで、まだここには人がいると思わせることが出来る。
時間を稼げればそれだけ住人の退避を行おうとしてる鋼の騎士団の本隊の作戦の成功確率があがる。
故にロランは魔物を狙った。だが直ぐに、相手はただの魔物ではなくなった。
「――貴様の相手はこの私だクソ人間ッ!!」

「っ……！　来たか……！」
　怪物が動いた。巨体に似合わず背中から光のエネルギーを射出し、その勢いで一瞬で距離を詰めて手から発生させた光剣を振るってくる。
「光の剣……面白い身体をしてるんだね」
「ッ……！　黙れ貴様ああああああ!!　その顔で……!!　その顔でふざけた台詞を抜かすなあああああああ!!」
「っく、危ないなっ！」
　軽く言葉にしてみただけなのに面白いくらいに過剰な反応が来た。
　……何かあるのか？
　このアッティラから強い敵意を感じてロランは思う。恨みに近いものだ。
　だが生憎と心当たりがない。あるとすれば魔物を屠ってきたことだが、どうにもそれとは違う気もする。
　――しかしこれは使える。
　相手から冷静さを奪える。攻撃の激しさこそ増すが、どちらにせよ魔物大将軍の攻撃は普通の人間が耐えられるものではなく、回避に専念しなければならない。
　故に攻撃が単調になるほうが望ましい――だからロランは言葉を飛ばした。
「ふっ、随分と危険で間抜けな身体ですね！　人間にとって……害でしかない！」
「黙れ黙れ黙れェ――!!　殺す！　殺してやるぞ貴様!!　ようやく見つけた……!!　貴様を殺すことで……私は忌まわしい過去から決別するのだ!!」
「ッ……！」
　やはり、と思う。何かあるのだと。
　だが眼の前のアッティラの高速機動。背中の砲塔を移動の助けとして行う高速戦闘は、思ったほどキツい。
　速さには自信があるが、それでもかなりギリギリだ。相手の小回りがそれほど利かないからこそ避けられているが、最高速で突っ込んで

くるアッティラの攻撃はただでさえ防御不可能。攻撃を躱せば背後にあったものがクレーター状に消し飛んでしまう。
「貴様もこの人里も……！　そして人間共も……！　私は人間に関わる全てを殲滅する……!!　そのために私は生きているのだ……!!」
「――！」
光熱の攻撃の余波で突風が身を叩く。
地面を叩けば土が抉れる。攻撃1つ1つの結果が、その込めた力の凄まじさを物語っていた。
人間では勝てない相手。少なくとも、普通の人間では。
だがアッティラが言うように、こちらにとっても決着をつけるべき好機だ。
「……そうだね」
そう、自分の心はとっくに決まっている。
「ここで倒れてもらった方が……人の為かな」
アッティラという危険極まりない魔物大将軍は捨て置け無い。
命を賭して挑むことになる。
だが、自分が死んでも人類を救ってくれる者は他にいる。
選ばれた人間であれば、彼であればきっと、成し遂げてくれる。
だから自分は、その道中にある邪魔な石ころを1つ、排除するだけでいい。
今まで多くの魔物を殲滅してきた自分にとって簡単な仕事だ。やるべきことは単純。
この魔物を、
「――排除させてもらうよ。人類の未来の為に……魔物大将軍の一角、ここで落とさせて貰う」
「ッッッ……!!　言ったな……！」
それを聞いてアッティラの顔が更に歪む。
全身の力を込めているのだろう。光が収束しすぎて身体が高熱と化しているのか、身体から蒸気が吹いている。
酷く強い殺気。それと共に、アッティラは足を踏みしめ、
「二度も、二度も言ったなッ!!!　この私にッ!!　二度も!!　ハハハ!!

ブチ殺す!!　全身をドロドロに溶かしてゆっくりと殺してやる!!」
「やれるものならどうぞご勝手に――行くよ」
静かに殺気を込めて足を踏み込む。
ここを己と奴の死に場所にしてやると――ロランはアッティラへと全力で立ち向かった。

山を囲う炎の壁で赤くなった空。
そこにはその炎を発生させた張本人である魔人――カイゼルがいた。
「ああッ!?　あいつら、てっきり引き返すかと思ったのに普通に突っ込んでいきやがったぞ!?　クソッ！　予定が違うじゃねぇか！」
眼下で戦闘を始めた件の人間と魔物大将軍を見てカイゼルは苛ついた声をあげる。
カイゼルの予定では魔物大将軍とその配下の魔軍も、この炎の中には踏み込むまいと考えていたのだ。
だが実際には魔物兵達は炎の中に踏み込もうとするし、魔物大将軍に至っては実際に炎で囲まれた中央の山へと入っていった。
「クソ……こいつら、炎の怖さを知らねぇのか？　突っ込んだ分は責任は取らねぇぞ俺ぁ……」
自分の周囲にいたため燃やした奴らはともかく、勝手に踏み込んで死なれても困る。
「かといって炎を出さなきゃ人間共が魔物共に見つかって死んでたしよぉ……」
山狩りの妨害は自分の目的には必要だったし、人間の救出も自分の配下を作るためには重要だった。
それは今からでも全然修正が利くが、魔物共が思ったよりもしつこい。
様々な方法を使って炎の中に踏み込もうと――正確には山狩りを続け、人間を見つけようとしている。
よっぽどあのアッティラという魔物大将軍が怖いのか。それとも

己の父親の軍のように命令に忠実なのか。元々魔物は上位の命令には逆らわないが……。
「……面倒くせぇな。もう近くの魔物は全部燃やすか？」
どうせこいつら、人里なんかを狙ってる時点で親父に反抗的な勢力な訳だし、殺したって問題は無さそうだ。
強いて問題があるとすれば、
「やりすぎるとママに怒られるな……」
ママは魔人にしては優しすぎるので、人や魔物を燃やしたりするとめちゃくちゃ怒る。
戦いとか模擬戦、親父が定めた仕方のないことに関しては何も言わないが、今回はギリギリであるため、ちょっとどうなるか分からない。
だがそうだとしても、自分の目的を考えると止まることは出来ないのだ。
「……やっぱルイゼルと同じ様に、さっさと使徒を見つけねぇとな……」
ちょっと考えてみたが、やはり目的は変わらない。
そしてそうなると、やはり魔物共が邪魔だ。次なる行動を起こそうか――と思っていると、
「カイゼル様――!!」
「あ？」
眼下の崖の上から声が来た。高く聞き覚えがありまくる声。
それは親父の使徒であるキャロルの声だ。彼女は手を口元に当てて空を飛ぶこちらに向かって大声で告げる。
「カイゼル様――!!　マズいですわ――!!」
「カ……ル様――!!　……ろー!!」
「あ？　火炎書士も何か言ってやがるな……」
キャロルの声は大きいからよく聞こえるが、火炎書士はギリギリ聞こえない。
なのでちょっと近づいて声を拾おうとする。彼女らを視界に収めながら高度を下げ、
「なんだ!?　何がマズい!?」

「カイゼル様後ろ！　後ろですわー!!」
「来てます！　カイゼル様!!」
「あ？　後ろ……――ッ！」
そこでようやく気づいた。
背後から、親しみ深い気配が近づいていることに。
己が発生させている熱気。周囲の高温を下げるかのように、低温が周囲に発生していることに。
そして同時に、
「――カイゼルのお馬鹿さぁんっ!!」
「――ッ！　うおおっ!?　危ねぇ!!」
振り向くと高空から全身真っ白の、シスターにも似た衣装を着た美少女がこちらに向かって青い剣を振り下ろしてきた。
それを咄嗟に己の赤い刀で弾く。
そうして距離を取り、お互いに対峙してみると、やはりと言うべきか。
「テメェ……ルイゼル!!　もう来てたのか！　兄に向かっていきなり攻撃するとはどういう了見だ!?」
「――何言ってるのぉ？　あなたが勝手なことをするから私が来てあげたんでしょ～？　その面倒さを考えれば、一回くらい斬られても問題ないわよねぇ？」
「なんだと……？」
魔人ルイゼル。腹違いだが、自分と最も親しい妹を見て、カイゼルは思う――なんだそのふざけた言い分は、と。
カイゼルはその言葉に激しい怒りを憶え、続けてこう言った。
「……斬るなら――〝斬りますよ〟って一声掛けてからにしろっていつも言ってるだろうがッ!!」
「カイゼル様――!!　ツッコむところそこじゃないです――!!」
下からの火炎書士の声がうるさい。妹からの斬撃一回くらいなら喰らってやっても構わないが、いきなりやられるとそれはそれでムカつくし、これが正しい。喰らう箇所を定められないから危ないしな。
「……それでルイゼル……お前、使徒を作ったみてぇだな？」

「あら、やっぱり知ってる？　そうよ、マネージャーを作ったの。私の為に働いてくれるマネージャーをねぇ」
「ぐ、やっぱりか……！」
やはり嫌な予感は的中していた。
カイゼルは拳を握りしめて更に問う。まさかとは思うが、と。
「……男か？」
「……女の子だけどぉ？」
「――それならよぉし!!　嫌、駄目だがそれならギリギリ許してやる!!」
「――何気持ちの悪いこと言ってるのよ！　相変わらずキモい！」
「なんだとぉ……？」
ルイゼルの言葉に安堵したが、その後の言葉にイラッとくる。
兄として、その妹の言動は正さねばならない。
だから言った。いつも自分が言い含めていることを、大声で。
「ルイゼルお前……!!　――っ、キモいとか罵倒する時は語尾か語頭に〝お兄ちゃん〟とつけろといつも言ってるだろうがッ!!」
瞬間、周囲の空気が更に温度を下げた。

「うわぁ……相変わらずですね、カイゼル様……」
「兄妹同士、仲が良いのは素晴らしいことですの！」
「いや、そういうレベルじゃないですけどね……」
「……？　妹萌えというやつですわよね？　知ってますのよ？」
「……まあ、言ってしまえばそうなんですけど……はぁ、なんでこんな変なところだけお二人に似てしまって……」
崖の上で火炎書士は大きな溜息を吐いた。

「っ～～～！　気持ちわるい!!　気持ち悪い!!　なんでいつもそうなのよカイゼル!!　ルイゼルちゃんが可愛いのは分かるけど、私はアイ

ドルになるのよ!!　だからそういう気持ち悪いことは言わないくれるかしらぁ!?」
「なんだとルイゼルてめぇ!!　アイドルの前に俺様の妹だろうがアァン!?　なら俺様をもっと萌えさせろ!!　お前の一番のファンはこの俺様だ!!!」
「頭溶け落ちてるのかしら、この変態カイゼル!!　大体あなた、いつも勝手なのよ！　昔っから勝手な行動ばかりしてルイゼルちゃんを困らせて……！　あなたの所為で私がどれだけ怒られてるのか憶えてるの!?」
「うるせぇ!!　お前だって昔おねしょしたのを俺の所為にしたりしたの、忘れてねぇからな!?　分かってんのか！　俺様が否定した所為でママ達が俺達庇ってママ同士で喧嘩になったんだぞ!?」
「そ、それは……！　――って、そのことは言わないでっていつも言ってるでしょぉ!?　今直ぐ忘れて!!　忘れなさい!!」
「忘れられるかあんなもん!!　あの後、おねしょした布団をガウガウが調べるからって持ってかれて最終的にどっちがやったか突き止めるために尿検査までやらされたの、俺様は忘れてねぇぞ!!」
「ありましたねぇ……」
「懐かしいですわー。結局、レオンハルト様がルイゼル様とご両親２人を叱ったんですわよね」
「はい……大変でしたね……」
　カイゼルとルイゼルの口喧嘩を聞いて、キャロルと火炎書士が昔を懐かしむ。……といってもほんの数年前の話なのだが。
「この……！　大体あなたはいつも私に対抗して……！　魔法の才能、私の方が上だからって嫉妬しないでくれるかしらぁ!?」
「あぁ!?　なんだとコラ!!　俺様の方が剣術の成績は良いだろうが!!
　それにテメェ、理数系は得意でも文系はてんで駄目じゃねぇか!!
いろは順４７語全部答えてみろオラァ!!」
「はぁ!?　あんな古臭いの憶えられる訳ないでしょぉ!?　というかそれはママがそういうの駄目で馬鹿だから仕方ないの！　そういうところがずるいのよ！」

「分かってねぇなルイゼルよぉ！　うちのママは天然だからよく塩と砂糖を間違えるんだぜ!!　おかげでうちのおかずは甘いかしょっぱいか食べてみるまでは分からねぇ、味のびっくり箱だ!!」
「私のママよりマシでしょ!!　私のママなんて未だにテンパると訳の分からない行動起こすんだからねぇ！　この間なんてどこで聞いてきたのか、年頃の子供がエッチなことに興味がないのはおかしいって聞いたとかなんとかで、何故かエロ本を渡されたんだから!!」
「……あ、それ言ったの多分俺様かママだな。俺様が隠していたエロ本がバレた時に、親父がそう言えって言ったから……」
「あなたの所為なのぉ!?　ぐっ……あれでどれだけ恥ずかしい目にあったか……！」
「……なんか段々、ハウゼル様とサイゼル様に飛び火してきましたね」
「というか、そろそろいつもの始まりますわー」
キャロルが上を見上げてそう告げる。
その直後、周囲が熱気と冷気に包まれた。
「てめぇ……ルイゼル……！　今日という今日は許さねぇ……！　テメェに妹萌えの何たるかを叩き込んでやる……!!」
「気持ち悪い!!　この……こっちこそ、その変態振りを今日こそは矯正してあげるわぁ……!!」
両者が得物を構えたことで、２人の増す気が更に激しくなった。
カイゼルが持つのは赤い長刀。炎を纏わせる〝炎刀・閻魔〟。
ルイゼルが持つのは青い長剣。氷を纏わせる〝氷剣・ヘカテー〟。
２人の魔人がお互いを睨み合い、炎と氷の力を増幅させる。
そして両者ともに相手に向かって飛翔し、剣を振り被ると、
「オラァ!!　妹のお前は大人しく兄である俺様と結婚しろォ!!」
「気色悪いこと言わないでよ!!　いつも言ってるけど、あなた馬鹿なの!?　とにかく、さっさとルイゼルちゃんがアイドルになることを認めなさぁい!!」
赤と青の軌跡が交差し、いつもの下らない兄妹喧嘩が始まった。

決別の時

暗雲立ち込める空の下。
天を支配する者の圧倒的な力とは関係なく、一定してその周囲を禍々しく変貌させる場所があった。
魔軍の本拠地。世界の中心とも言える場所――魔王城だ。
その場所は遠くの空が雷に吹き荒れ、もはや天変地異のような変化を見せていても変わらず魔の雰囲気を漂わせる。
それはまるでこの場所に住まう支配者の揺るぎなさを示すようだ。
過去の遺物がどう足掻いても揺るぐことはないと、そう言うことだ。
そこに詰めている魔物兵などは多少の不安を持っていたが、それも上位の存在を眼の前にすれば怖れと共に安堵を浮かばせる。
そう、今彼らの前には――魔王とはまた別の、緊張感のない2体の上位者がいた。
「はぁー、暇ですねぇ……」
魔軍の将兵が集まる城門。その兵達の前で見るからにやる気の無さそうにぐでーっとした様子で霊体の様な生き物に寝転がっているのは魔人レオンハルトの使徒、ペールだった。
彼女は自ら召喚した幻獣をベッドや枕代わりにして気の抜けた欠伸を漏らす。
よくもまあこんな異常とも言える事態の状況で無防備に寝転がっていられるものだと兵達は表情には出さずに思うが、それも余裕の現れであるというのも理解しているため、軽く嘆息するに留める。
しかももう一体の上官だっているのだ。彼はペールの呟きに平然とマイペースに割り込む。
「退屈ですねぇ……こういう時はレオンハルト様にぐちょぐちょに犯されて快楽を貪ると共にレオンハルト様成分を補給するのが1番ですけど……今日は時間掛かりそうですし……」
「まったくもってその通りですな！　美しきレオンハルト様に寵愛を

受ける……それこそ、レオンハルト様に親愛を覚える全存在が望むことでしょう！　無論、この美しい私もそうです！」
「聞いてないですし、レオンハルト様はホモじゃないので無理だと思いますけど……まぁ、願う分には自由なんじゃないですかー？」
「――カエサルショック！」
ペールの言葉に大袈裟にリアクションを取って地面に倒れ込む巨大な魔物。
この変態でナルシストな彼だが、彼、カエサルもレオンハルト軍を指揮する魔物大将軍であるため、一般の魔物兵達からすると雲の上の存在である。
故に彼に安易なツッコミは入れられない。下位の者である場合、美しくない割り込みをすると変な難癖をつけられることだってあるのだ。
だから続く彼の呟きにも魔物達は微妙な表情を浮かべることしか出来ない。
「くぅ……レオンハルト様に親愛と忠誠を捧げ続けて早６００年余り……薄々分かってはいたが、やはりレオンハルト様は男は駄目なのか……？」
「分かってたんですか……ならもっと早く諦めたらいいですよう」
「……しかし！　私は美しき魔物大将軍カエサル！　多少の事で諦めることは美しくないと知っている！　故に諦めない！」
「いや、そこは諦めましょう。本人に断られてるんですから多少以上だと思いますよう」
「というわけでペール様。将を射んと欲すれば先ず馬を射よ、とも申します。ここはこのカエサルを優しく愛しては貰えませんか？」
「……幻獣ちゃーん」
「――おおぅっ!?」
カエサルが斜め上の頼みをペールにすると、ペールが眉を潜めて召喚魔法を発動し、それをカエサルに向かって放つ。しかしカエサルは幻獣の攻撃に身を悶えさせながらも、
「くっ……さすがはペール様……！　幻獣の攻撃は中々に身体にくる

……！　しかしこれは新手の情事とも言えなくはない……幻獣もよく見れば可愛らしい……くっ、しかし触れられないのがもどかしい！
触れることさえ出来れば私の超絶テクニックで昇天させてやれるのに……！」
『ッ……!?』
「変態過ぎて幻獣ちゃんまで引いちゃってますけど……暇潰しの鑑賞にしてはあまり気分は良くないですねぇ……」
ペールの感想にそれを見ていた大勢の将兵らも心の中で同意した。ペールが幻獣を戻したのもそれからややあってのことである。
だがタイミングとしては良かっただろう。ふと、ペールやカエサルらの背後、城門が開いて、
「！　レオンハルト様！」
「おお……レオンハルト様……！　いつ見ても圧倒的美しさ……！」
「……お前ら、何をやってるんだ？」
と、鋭い眼を更に細めて若干の疑問を覗かせたのは彼らの支配者、魔人レオンハルトである。
相変わらずの覇気に満ちた圧倒的存在感にその場にいる魔物兵も自然と背筋を伸ばして引き締める。
尊敬し、畏敬している魔軍最強の男の前では誰でもそうしなければと使命感に駆られるし――そもそも、彼の放つ〝恐神気（きょうしんき）〟と称される存在感がそうさせる。
数千年間、血と暴力の世界で圧倒的武力と謀略で魔軍を采配し、大勢の配下を従えてきた魔人の存在感はその強さも相まって、もはや他の魔人とは別格の気を発している。
今も、普段もレオンハルトは抑えてはいるが、それでも身体から僅かに滲み出ている気配だけで、魔物達はその凄まじさを感じ取れる。
この御方についていけば大丈夫だと、深い忠誠を思わせてくれるが……この御方が力を解放した時に、果たしてどれだけの数の魔物が立っていられるかと思えば怖れもある。
即ち、畏敬だ。魔人レオンハルトに対する畏敬の念を、兵達は彼を見る度に何度も思い起こされる。

その証拠に、彼らは誰もが直立不動でその練度、忠誠心を示す。上司2人は近しい分だけやり取りも普通のものだが、兵達にとってはやはり雲の上の会話だった。
ペールがレオンハルトが来たことで幻獣から地面に降り立ち、
「いえ、ちょーっと暇だったので軽く新兵訓練をしてたんですよう！
……というわけでレオンハルト様！　頑張ったご褒美にペールちゃんとランデブーしませんか？」
「……そうか。それはご苦労。後で労ってやるから今は我慢しろ」
「はーい♪」
「……このカエサルもレオンハルト様の為に頑張って新兵を鍛え上げましたぞ！」
「それじゃあまた芸術品でも上げますね。……それでいいですか、レオンハルト様？」
「……ああ、好きにしろ」
「む、むぅ……分かりました。ありがたく頂戴します」
望む物はそれではなかったが、主にそう言われてしまってはありがたく受け取る他ない。カエサルは膝を折ってレオンハルトの下賜に感謝を述べる。
そしてペールがレオンハルトの右腕に思い切り抱きついて頭や身体を擦りつけるが……レオンハルトはそれを気にせず一言だけ告げた。
「……少し出てくる。お前達は引き続き、任務に励め」
「了解ですよう。……ところで、行くのはどっちですか？」
この場で最上位の地位にあるペールが即座に了承し、続く言葉で質問する。
ペールの意味深な笑みと共に放たれた質問に対し、レオンハルトは珍しく、それを笑みで返した。

――それは少し前。
ガイが修行に入って3日目の朝のこと。

「――フフ、そろそろかな……」
「え？　何がですかCさん」
　魔法の里の地下にある書庫迷宮の深部で、Cの呟きを聞いたイヴは鍋をかき混ぜる手を止めずに疑問する。
「いや、そろそろガイの修行も終わる頃かと思ってね」
「……ああ、なるほど。ということは、この迷宮生活もようやく終わりですか……」
　イヴはようやくという思いで息を入れる。Cから読み取れる感情に僅かな違和感はあるものの、そのことについては確証がないため触れることはない。
　代わりに視線を外して捉えるのは最深部の扉の前。相変わらずはしゃいでいる友人とその他大勢で、
「ふむ、どうやらそろそろガイの修行が終わるようですし、貴方達の修行もこの辺りにしておきましょうか」
「あ、ありがとうございました……」
「げ……ゲッヘッヘ……危ねぇ、助かった……」
「長かったですね……」
「やっとか……」
　チン、と得物を鞘に収めて修行の終わりを告げる白兎と、その鍔鳴りの音を合図に気を抜くクーベロとスケアクロウ。
　白兎の得物である聖刀日光も白兎の腰元で息を吐き、ガイの得物である魔剣カオスは焚き火の近くの地面に刺さっており、修行の終わりと聞いて久し振りに声を出す。
　そろそろ食事も出来そうだし、ガイが戻ってきたらガイも交えて食事にしつつ、今後の方策を練るのだろうか、とイヴは考える。
　その辺りのことは自分達はあまり関係ないので、人間側の誰かに任せることになるだろう――そう思っていると修行を終えて肩で息をしているクーベロが乱れた息を僅かに整えてから、
「……ガイが戻ってくるってことは……ようやく里に……助けに戻れるのか？」
　そう言いながら彼は未来視の魔女、Cの方を見た。クーベロやガイ

が所属する鋼の騎士団の副長ということで、彼らにとっては上官に当たる。故に指示を仰ぐようにした。
　その質問にCはいつもの笑みを絶やさずに頷くと、
「そうだね。もっとも、間に合うかどうかはギリギリだけどね。使い魔で見たところ、魔軍の攻勢がかなり激しくなっている。保って今日の午後には趨勢が決まるだろうし、間に合わせるなら後３０分以内には出た方がいいだろうね」
「むぅ……それではガイに剣の修行をつけることが出来ないじゃないですか」
「そこはかとなく残念そうですね、白兎さん……」
「ええ、残念です。せっかく久し振りに会った友人兼弟子に色々伝授してあげようと思ったのに……」
　と、下駄をカツカツと鳴らして残念そうに言う白兎。それを聞いたCが、
「フフ……まあこれから教える機会など幾らでもあるのだからその時にしては如何かな？」
「……しょうがないですね」
　はぁ、と白兎が息を吐いて納得する。だがイヴとしては若干の違和感だ。白兎ではなく、Cの方で、
　……？　何か言葉に違和感がありますね……？
　相手の感情や考えている事が知覚出来るイヴの能力が疑問を訴えている。
　とはいえ嘘を言っている様子がない上、これ以上を読み取るには彼女に触れねばならない。
　そしてCは自分に一切触れようとしないので……もしかしたらこちらの力に感づいているのやもしれないとイヴは思っていた。
　ただ敵意は感じないので、必要以上の警戒はしなくて良いと思われる。――まあ必要分の警戒はしておくが。
　自分や白兎、それに藤吉郎がいるこちらに対し、いきなり不意打ち染みたことをしてくる筈もない。そんなことをしても勝ち目がないことは分かっているだろうから。

故に気になるのはそこまでで、次に考えるのは白兎と……ガイのことになる。
だがこちらが考えている間にCは提案をした。白兎らの方を向いて、
「……まあこちらが今から戻る旨を伝える伝令が欲しいところだね。向こうも希望がないことには持ちこたえられるかどうか怪しい。――ということでスケアクロウ君？」
「あ、僕ちゃん？　――オッケーオッケェ～イ。ロラン君に伝えてくりゃいいんだろぉ？　そんなのお安い御用だぜぇ～。ゲッヘッヘ……」
――あ、こいつ逃げる気だ。と、イヴはスケアクロウの思惑を読み取った。
同じ様に白兎もその真意を読み取ったのだろう。閉じていた瞳を開いて赤い眼差しでスケアクロウを見ると、
「……一応、釘を刺しておきますが……逃げたり裏切ったり、はたまた私達のことを別の誰かに喋ったりすればぶっ殺します。地の果てまで追いかけて斬らざるを得ないでしょうね」
「そ――そそそんなことする訳ないですよねぇ～！　やだなぁ、僕ちゃんこう見えて義理堅いんですよ、ハハハ……」
「……ならいいですが」
ゲス笑いすら封印して取り繕うスケアクロウ。これで彼はもう逃げられない。逃げる気もないだろう。白兎の今の言葉は本気だし、実際に逃げたら魔人の子であることを喋ったとして白兎が――いや、もっとヤバい人達が派遣される。
白兎は怖い時は怖いが、先生を筆頭に怒らせたらもっと怖い人達がこちらには沢山いる。逃げたとしても追いかけることは容易いので、彼が生きる道はこちら側にしかないと言える。
「で、ではさっさと行って伝えておきますね！　ゲッヘッヘ、では！」
彼もそれを分かっているのだろう。スケアクロウはわかり易い胡麻すりをしながらも、その場から一瞬で去っていった。
忍術によるものだろうが、彼の素早さは中々だ。というか、人間に

してはかなり強い方であることは先程までの白兎との模擬戦でよく分かっている。
……というか、ひょっとしたら私より強いかも……。
はぁ、とまたしても溜息が漏れそうになるのを飲み込む。周りが人外染みた奴らばかりで麻痺しそうになるが、私は人間の中では強い方の筈なのだ。
まあ私の本分は戦闘じゃなくて研究とかそういうのだし……と自分を納得させておく。肩の藤吉郎もそれを察してか、〝大丈夫っす。使徒で戦闘力はそれほどじゃないオイラに比べたらよくやってるっすよ……〟と慰めてくれる。……そう言われてみれば藤吉郎は使徒なのに戦闘力はそれほどじゃないし、それ以外のところで役立てているというのは良いのかもしれない。うん、元気が出た。やはり自分より下を見ると自信が出てくる。許してくださいね、藤吉郎。
と、そこまで考えたところで近くの魔剣カオスが扉の方を見て、
「……！　戻って来たか……！」
「！」
その声に反応し、皆が扉の方を向く。白兎などは扉がゆっくりと開き始める音を聞いて少し早めに振り返っていた。
書庫迷宮の最奥の扉は巨大で、開閉のスピードも緩やかなものだ。だがゆっくりと開くその奥からは――確かに先日まで見たガイの姿が現れ、
「……っ！」
――いや、違った。
少なくともイヴの感覚では。外側、見た目は全く変わってないように見えるが、
……内側に秘める魔力の量が……全然違う……！
そしてその魔力量に比例するかのように、その存在感、圧力も高まっていた。
以前まではどれほど高く見積もっても自分の倍程度だったのに、今では推し量ることが出来ないほどの魔力を持っている。
中で一体何をしてきたのかと問い質したいほどに。

「ガイ……だよな……？」
「まさかこれほどとは……」
「……」
　クーベロや日光がそのガイの存在感の高さに驚き、本当にガイなのかと問う。同じ様に驚いている白兎は声も出さずに何を思っているのか、真っ直ぐにガイを見えない瞳で見ていた。
　それらの視線を一身に受けるガイは、同じ様にしばらくじっとしていたが、やがて皆を一様に見渡すと、
「……ここで〝お別れ〟だ」
「……は？」
「へぇ……？」
　クーベロとCがそれぞれ違った反応を見せる。
　クーベロは訳が、意味がわからないと言う風に。
　Cは訳を、その言葉を発する意味を全て知っているかの様に。
　驚き、驚きもせずに、反応を見せた後、それを見てかガイは動いた。
　口元で小さく、何かを呟き、
「――！」
「うおわっ!?　ちょ――!?」
「っ！　速い……！」
　ガイが一瞬の踏み込みで魔剣カオスの元まで行ってそれを引き抜くと、もう一度踏み込んで出口に向かって駆けていく。
　その速度はこの中で随一の戦闘力を持つ白兎が驚愕する程で、
「くっ……！　イヴさん！　藤吉郎！　追いかけますよ！」
「えっ……って、ちょっと待ってください！　私らじゃ追いつけ――って、もういない!?」
「ききっ!?」
　気がついた時には白兎は一瞬でその場からいなくなり、ガイを追いかけていった。
　ガイのような力強い動きではなく、軽やかな動きで。……ではあるが、どちらにしてもただの人間である自分に追いつける筈もない。
　しかし追いかけない訳にもいかず、イヴは僅かに逡巡すると、

「……あー、もう！　道具とか置いていくの勿体ないじゃないですか……！」
「ききー！」
「えっ!?　あ、おい……待っ――」
「……フフ」
仕方なく、重要な物以外の全ての物を置いて白兎らを追いかけていった。
背後でクーベロが呼び止める声や、Ｃの笑みが微かに聞こえたが……それを読み取る余裕は今のイヴにはなかった。

「くっ……本当に速い……！　私が追いつけないなんて……！」
「あの力は一体……？　先日までとは別人の様でしたが……」
「まったくですっ！」
懐の日光の声に同意しながら必死に追いかける。
直ぐに追いかけたおかげで背中は何とか見える――が、そこから距離を詰められない。
むしろどんどんと差を広げられている。
白兎は己の速さ。踏み込みの速さには自信があり、自分の弟、妹達と比べても殆ど最速だと自負している。
長距離でならともかく……短距離でなら軽さと技術に秀でる自分が負ける筈がないと。
魔人の血を引く者達の中でそうなのだから、人間相手に負ける筈がない。そう思っていた。
だが今は、
……私が、負けている……ッ！
白兎はこのように引き離される経験はあまりない。
速さという意味でも、ほんの一部。それこそ父親やその家族とも言えるケッセルリンクなどの上級魔人クラスにしか負けたことはない。
だが今は、３日前までは格下であった人間に追い抜かれている。
それも急激に。こんな経験は今までにないし、あるとも思っていな

かった。
あるとしても、魔人の血を引く自分の弟妹らだけだと。
――そしてふと、父親の言葉を思い出す。
それは父親との修行の最中。人間のことについて語ってくれた時だ。
『――いいか白兎。人間の中には時折、短期間で劇的な成長を遂げる者がいる』
『……しかしお言葉ですが父上。それは父上の様な魔人を越えうる者ではないかと思いますが』
『フッ……ああ、殆どはな。だが中には俺に届き得る程の力に目覚める者もいる』
『……とても信じられません』
『だろうな……だが、お前にもそのうち分かる。人間の力。成長の速さ。そして――〝意外性〟ってやつをな』
――これがそうだと言うのですかパパ……!?
そんなことはあり得ない。過去も今も変わらずに思っていたことだ。
だが現実にはそれが起きている。眼の前で遠ざかっていく人間の友人はこちらの全力を出してなお追いつけない。取り残される程の成長を見せている。
剣の修行をしてやり、少しでも彼の目的を後押しするつもりでいた、その相手が――今まさに、上級魔人のそれを越える力を身に着けている。
それを自覚して、酷い焦燥感と自嘲、そして悔しさを憶える。
今まで自覚していなかったが、自分は彼を〝下〟に見ていたのだと気づく。
それがまず自嘲。そして、彼が本当にその願いを叶えるかもしれないというのが焦燥感の正体。
そして悔しさは――強さに自負を持っていた己が、あっさりとひとっ飛びに越えられてしまったことに対するもの。
「くっ……このっ……!」

そして思い出す。そういえば私は負けず嫌いだったと。
弟妹達との模擬戦では負けることはない。唯一危ないのはアルベルトくらいのもので、彼に対しては他の弟妹達とは違って少し意地になって本気を出してしまうことを認めている。
だが魔人として生まれてきた弟や、魔人の血を半分持っている自分や他の弟妹達と違って、今負けている相手は人間である。
心の底では、人間が魔人に勝てる筈がないと思っていた――それを眼の前で覆される。
ただの追いかけっこでしかない。だが、追いつけないというのは真実、敗北で、しかも己の感覚は彼に負けていることを認めてしまっていて――
「……行ってしまいましたね」
「……」
――気がつけば、足は止まっていた。
迷宮の外に出た時点で自分はガイを見失ってしまった。
そして日光がそれを察して声を送る。無言で立ち尽くす己に対し。
しばらく、歯を噛み締め、拳を強く握り、身体に震えが走る。
どれだけそうしていたことだろう。気がつけば背後から足音と声を知覚し、しばらく。
「はぁ……はぁ……や、やっと追いつきました……ぜぇ……ぜぇ……は、白兎さん……が、ガイさんは……？」
「キーッ！」
本気で走ってきたのだろう。汗だくで今にも倒れ込みそう――というか地面にへたり込んだイヴと、一応使徒であるためか元気な藤吉郎がいた。
だが自分の意識はそこにはなかった。
「……な――」
「ぜぇ……はぁ……な？」
イヴが息を乱しながらも聞き返してくる。
その直後、自分の感情が制御出来ずに、
「――なんなんですかもおおおおおおおっ!!!」

「っ!?　白兎さん!?」
「キキッ!?」
　私の声がうるさかったのだろう。イヴと藤吉郎がびっくりする。
　なんなら自分でもうるさい。耳が痛い。しかしそれに構わず、
「強くなった途端に無視ですか!?　ムカつく！　ムカつきます!!　それとも私程度勝負するまでもないってことですか!?　そりゃそうでしょうね！　く、悔しいいいいい――!!」
「え、えっと……白兎さん……?　大丈夫ですか……?」
「大丈夫に決まってます！　何もしてないですし！　くぅ……こうなったら――帰りますよ！」
「えっ!?　帰るんですか!?」
「キー！」
「帰ります！　帰って修行です！　もう知りません！　激おこですよ私は！」
「あ、はぁ……まあ、白兎さんがそれで良いなら……」
　いいんです！　と言って私は早足で歩き出す。
　後ろからついてくるイヴと藤吉郎を確認しながら、内心でガイへの言いようもない苛立ちに私は振り回されていた。

　――その頃、魔法の里を抜けた森では、
「……おいガイ。説明はあるんじゃろうな？」
「……別に。説明することなどない。ただ……」
「ただ？」
　自分の帯剣の問いに対し、ガイは正直に1つ、端的に答える。
　それは、
「……これからの戦いにはついてこれない。ただの……足手まといだ」
「……だから全員置いてきたと？」
「……ああ」
　荒野を人間を遥かに越えるスピードで駆けながら、しかし両者の間

には沈黙が流れる。
風の音が響く中、カオスは溜息を1つ溢し、
「……なるほど、そういうことか……はぁ、お前さんも不器用な奴じゃのう……」
「……」
「……ま、そういうことなら儂は何も言わんわい。お前さんの気持ちは分かったし……やる気はあるみたいじゃからの」
「……さっさと行くぞ」
「はいはい。……それにしても随分強くなったのうガイ。これならマジでいけるかもしれんぞ」
そうかもな……、と控えめに賛同し、ガイは走る。
己の力を正しく理解するガイは、カオスの評に驚くこともなく、当然のものだと頷いたのだ。
仮に足りないものがあるとすれば経験、地力だろう。
故に後はそれを高めればいい。そのために、まずは魔物を討つ。
『あーあ……せっかくまた逃げるなら女はヤっちまえば良かったのによ……つーか置いてこなくとも、使いようは幾らでも――』
『……黙れ。もう……人間に頼る必要なんてない。後は私達だけで十分だ』
『……ふん、まあそうだけどな。はぁ……仕方ねぇ……魔人とか魔王が美人であることに期待するか……』
内心の声が止んだところで、ようやくガイは自分の考えに集中出来る。
そう、後は1人で十分。それだけの力は手に入れた。
故にこれ以上、人の輪に関わる理由はない。関われば争いの種と……望まぬ犠牲を生むだけだ。
他の事に気を配る必要はない――魔王を倒し、この世に平和を取り戻す。その為だけに行動すると、ガイは人とは違う2つの心で決意した。

殲滅

衝撃に地が裂け、空を割った。
走る極太の光、その一線は魔物から放たれる物である。
「どうしたゴミ人間！　逃げるだけか!?」
「っ……！」
ロランはその声を無視して回避に専念した。
魔物大将軍アッティラの身体の至るところにある砲塔。そこにエネルギーが溜まる攻撃の予兆を見てその射線から離れるように横っ飛び。
数瞬後には先程までロランがいた場所、そしてその後方を光線が破壊していた。そして、
「くっ……里が……！」
巨大な熱を持った光線は里を燃やし、爆散させる。
受けることが不可能であるため、躱すことが必定であり、そうなると里が破壊されるのは当然の結果だ。
無論ロランもそれを覚悟していたが、こうも簡単にポンポンと壊されれば面白くはない。
……参るね……！　せっかく建物にもトラップを仕掛けておいたのにさ……！
この戦闘が始まるに当たって戦場に配置した幾つかの罠。
それらはこの里にも仕掛けられていた。
だがそれらもアッティラの砲撃によって建物ごと破壊される。
アッティラの火力の前には小細工など意味を為さないと、それを見せつけられているかのようだ。
それに火力も問題だが、問題なのは火力以外にもある。それは、
「――逃さんっ！」
「！」
里の中を逃げるように移動し、遠距離攻撃と奇襲――ヒットアンドアウェイで戦闘を続けるロランに対し、アッティラは距離を詰めようと背中と足から光を発射する。

それによって起こるのは……高速移動だ。
「ふん！　人間にしてはすばしっこいようだが……この私の速さにはついてこれないようだな!!」
「ぐっ……！」
アッティラが光を移動手段に使うと、一瞬でアッティラがこちらを逃すまいと大回りに回り込んでくる。
足と背中の砲塔で半ば浮いたように移動するアッティラの最高速度はロランを大きく上回る。
肉薄し、拳で殴りつけようと腕を振りかぶってくるが、それをロランは勝っている小回りで何とか躱して短剣を投げる。
「遅い遅い遅いッ!!　蟻のような遅さだなクソ人間！　そんなものがこの私に当たるとでも思っているのかあああああああぁぁぁッ!!」
「一々うるさいね……！」
大声を上げながらアッティラは光の出力を上げて短剣を回避する。
そうしてアッティラがロランから見て右に移動したところで、ロランはまだ無事な建物に向かっても短剣を投げ入れる。
するとその直後に爆発が起こる。
「むぐっ……!?」
「かかったね……！」
爆風を受けて僅かに身じろぐアッティラを見て、ロランは即座に反転。
両手に剣を持って機動力が僅かに落ちたアッティラと距離を詰める。
……狙うは奴の身体の中心にあるコアだ……！
魔物大将軍の本体。それは身体の中心に見える人間の顔のようなものである。
祖先が残した情報によると、魔物大将軍がそこ以外を傷つけられても時間を掛けて徐々に再生することが出来るが、身体の真ん中にあるコアを壊すことで再生もさせずに殺すことが出来るという。
故にロランも狙うのはそこしかない。そこを突けば倒せるのだ。
長期戦になればこちらの不利でしかない。アッティラが暴れてお

り、命令もあって魔物兵は手出しをしてこないが、アッティラが危なくなれば彼らも何をしてくるか分からない。
――だから早々にケリをつける。
短剣を一瞬で、ぷちハニー付きのそれに入れ替えてそれを放とうとする。
「――アサルトモーメント」
「！」
一瞬。
アッティラの視界から己を見失わせることに成功する。
その隙にロランは巨体の背後からアッティラのコアに向かって、
――獲ったッ……!!
剣を振り下ろす。
そして、
「――ッ!!」
己ごと、アッティラを至近距離での爆発に巻き込んだ。
全身を叩き、包み込む熱風。
気を失いかねないその激痛に、ロランは吹き飛ばされてもがきながらも――気絶しなかった。
……これしき、で……！　倒れてたまるか……っ!!
偉大な祖先は嘘か真か、〝死〟すらも乗り越えたという。
祖先を必要以上に敬ったこともないし、なんなら疎ましく思ってはいた。
だが己がその子孫であるなら……この程度で死ぬことなどありえない。
死ぬのはこの魔物が死んだのを見届けてからだ。死んでないうちは死んでたまるか。
だからロランは爆発に全身を焼かれ、吹き飛び、離れた場所に転がされながらも瞳を開いた。
「ッ、はぁ……うぐ……どう、だ……？」
手をついてゆっくりと立ち上がろうとする。
そして爆炎に包まれた巨体を見た。

倒すことが出来たのか、とロランは爆炎に包まれたアッティラの影を注視し続ける。
――だが、
「……この程度で……」
「……！」
声が届いた。
爆炎の中から聞き覚えのある魔物の声が。
ロランは歯を食いしばり、戦闘を継続し、とどめを刺すべく立ち上がろうとする。
だがその前に、
「……ああ……そうだ……」
「ぐっ……！」
爆炎の中からアッティラが何かを呟く。
ようやくロランもその全身を視認する。
そして気づく。
アッティラは傷つき、かなりのダメージを負ってはいるが――コアは無傷だった。

炎の中で、アッティラは独り言を口にする。
「ああ……奴は……あの人間は強かったな……ふふ、ああそうだ……あれは今まで戦ってきた人間でも最強だった……こちらの攻撃を容易に躱し……ただの剣でこの身体に傷をつける。危うくコアも破壊されかけた……」
だが、とアッティラは爆破の余波で出来た炎の中をゆっくりと歩いてくる。
「……それに比べて、これは何だ？　ただの爆発……たかが爆発ではないか」
ゆっくりと、アッティラはロランの方に歩いてくる。
ロランはまだ立てない。ぷちハニーの爆発を至近距離で受けたのだ。

死なず、気絶しないだけでも人外の所業である。
「これが貴様の必殺技……奥の手だと言うのか？　……だとしたら笑わせる」
だが眼の前の相手は――正真正銘の人外だった。
魔物大将軍。その中でも最強と称されるアッティラの強さは……それこそ、魔人と遜色ない。
「くくく……はははは……！　私は今まで、何に怯えていたのだ……！　こんなもので……！　この程度の人間が……！　私を倒せる筈はないのに……！」
だから人間では――勝てない。
勝てないのが道理なのだ。
「っ……！」
アッティラが近づいてくるのを見て、ロランは這いずりながら別の方向へと向かう。
それがアッティラの眼に映り、
「……どこへ行くつもりだ？」
「……はぁ……はぁ……」
アッティラが静かな声色で問いかける。
先程までの怒りっぷりが嘘のように思える。
しかし嘘ではないことをロランは感じ取っていた。
「勝てると思ったから勝負を挑んできたのだろう？　なあ？　その程度の力で……ああ、そうだとも。人間如きの……ゴミクズのような力で……！」
アッティラは踏み込む足に力を込め、その場を振動させる。声にも怒りの色が見て取れた。
その怒りは彼が身に纏う魔の気配と、全身の光を色濃くする。
――里が振動した。
「周りの魔物も……他の大将軍も……魔人も……魔王様でさえも……ッ！　この私が、人間に負けたと……人間に劣っているのだと……そう、こんなゴミクズのような人間に――」
「ッ……！」

アッティラがその場から退避しようとするロランを強く睨みつける。
視線だけで生物を殺せそうな眼差しだった。
怒気に敵意と殺気に恨み。今だけではなく、過去から生み出された全ての負の感情を幾つも混ぜ合わせ、アッティラは全身の力を増幅させる。
ロランの顔。それで思い出す過去の忌まわしい記憶。
多くの魔物に陰口を叩かれ、他の魔物大将軍からは露骨に見下され、魔人からは弱い奴だと鼻白まれ、魔王様からは興味を持たれなくなった。
その全ては、この人間の所為で、
「どいつもこいつも……この私がッ……！　この程度の人間に恐れ、劣っているのだと抜かしやがったのかアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッ……!!!」
「っっっ――！」
アッティラの怒りが光となって爆発する。
轟音と共に周囲に幾つもの光の熱線が発射される。
その被害は里の至るところを撃ち抜き、爆散させ、その破片すらも全て破壊する。
故に、背後に控えている者達も例外ではない。
「あ、アッティラ様！　おやめくだ――がぁあああああああッ!?」
「ひぃぃぃっ!?　魔物隊長!?」
アッティラの熱線が兵に当たることを危惧した魔物隊長が声を上げ――即座に熱線に貫かれる。
一瞬で瀕死状態となって倒れた魔物隊長と余波を受けて怯える魔物兵らに、アッティラは強い殺気を向けた。
「貴様らも……貴様らもオオオオオッッ!!　この私を馬鹿にしているんだなアアアアアッ――!!」
「ち、違いま――ぎゃあああああああああああっっっ!!!」
「や、やめてくれ――うがあああああああああああっっっ!!!」
「に、逃げろ……逃げないと殺される……！」

「こ、これが噂に聞くアッティラ様の癇癪か!?」
「い、いや……普段はこんな激しくねぇって――ぐぐあああああああああああああっっっ!!!」
「ひ……あ……あぁ……！」
次々と魔物兵が熱線の餌食になっていく。
アッティラは大事にしている筈の部下を殺戮しながらも気にすることもなく、普段とは全く違う様子で吠えるような怒声を上げた。
「私は魔物大将軍最強のアッティラ様だぞッッ!! 私を馬鹿にする奴らの一体どれだけが私に勝てるッッ!? どいつもこいつも、こちらが気を使っていれば調子に乗りやがってエエエエ!! 馬鹿にする奴らは全員殺してやる……!! 殲滅ッ！ 殲滅だアアアアアアアッッ!!」
「っ……くっ……!?」
周囲に無座別に放たれる熱線。
そのうち1つがロランを狙ったため、ロランは転がりながらもそれを避ける。
そしてようやく、この魔物の異名の所以を悟った。
「無茶苦茶な……〝殲滅〟とは、よく言ったものだね……くっ！」
そう、これがアッティラの〝殲滅〟たる所以。
彼が滅ぼすのは人類文明だけではない。
彼が一度、その力を全力で発揮すれば――その一帯を、焦土に変えてしまう。
そうして幾つもの国を――味方の魔物兵ごと殲滅してきたのだ。
いつしか人間に負け、魔王にも厳命され、その在り方を見失っていたが、アッティラの全力の戦闘とはこういうものである。
――全方位を常に砲撃する無差別爆撃。
全身の砲門はそのために。
光の熱線はより遠くまで生き物を貫けるように。
敵も味方も関係ない。
アッティラを中心に、半径4．6キロにある物は全てアッティラの殲滅対象だ。
その全てを破壊し尽くすまで、彼は止まらない。

唯一、他に止める方法があるとすれば――
「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッッ!!
全てエエエエッ!!　全て殲滅だァァァァァァァァッッ!!!」
――彼を倒すことだけである。

空を行き交う炎を纏う黒と、冷気を纏う白は激しく喧嘩を行っていた。
「――オラオラオラァッ!!　お前の攻撃なんて分かりきってるんだよルイゼルゥ!　んなチンケな氷がこの俺様に通用するかぁ!!」
「――それはこっちの台詞よぉ!!　あなたの単調な攻撃なんて当たる訳ないじゃなぁい!!　もうちょっと繊細に能力を使いなさいなカイゼル!!　――こんな風にねぇ!!」
炎を操ることが出来、出力重視で巨大な炎を飛ばしまくるカイゼルに対し、ルイゼルは氷を繊細なコントロールで操り、的確にカイゼルを四方八方から追い詰めようとする。
それは彼女の母もやるような氷のレーザーだが、避けにくいように彼女は相手を一度だけ追いかける誘導弾としている。
生まれつき空を飛べる両者にとって、直線的な攻撃は避けられやすいことを知っている。
故にルイゼルは力を工夫する。氷を繊細かつ自在にコントロールすることで兄との戦闘への答えとした。
「ほぉら!　避けてみなさいっ!!」
「避けねぇよバーカ!!」
「!」
対するカイゼルは己の炎を増幅させた。
様々な方向から迫ってくる氷のレーザーを、自分の全身に巨大な炎を纏わせることで即席の鎧とした。
そしてレーザーを防御したカイゼルはそのまま刀を持っていない方、左の拳を振り被り、
「獄炎――〝インフェルノ〟ッ!!」

「……！　もー！　相変わらず無駄な火力ねぇ……！」
ルイゼルはその攻撃の予兆を感じ取って、既に避ける機動を取る。
その直後、ルイゼルの予想通りに巨大な炎が直線に走った。
それはルイゼルを何十人も覆い隠せるような大きすぎる炎。
これがカイゼルにとっての答え。
火力で範囲を広げ、そのまま相手を押し潰す戦い。
速度や技のコントロールで負けても構わない。
相手を上回る火力で倒してしまえばいい。
剣の腕でも勝っているのだから接近戦で戦っても構わない。
とにかく一撃を当てて一発で伸してしまうことが、カイゼルの戦闘だった。
「ほんと、無駄にでかいのよねぇ！　カイゼルの炎！」
「クハハハハ！　おいおい褒めるなよ!!　好きになっても知らねぇぞ！　もう好きだけどなァ!!」
「褒めてないんだけどぉ！　むしろ今のを避けられるルイゼルちゃんマジアイドルよねぇ!!」
「妹系アイドルとしてなら認めてやるぜぇ!?」
「い・や・よ!!　そんなの流行らないわ!!」
「そういう問題ですか……？」
「どっちも頑張れですのー！」
彼らから下に位置する崖の上から火炎書士が呟くようにツッコミを入れる。
呑気に両方を応援しているキャロルにはもはやツッコまず、周囲の状況や2人のことだけを注視していた。
すると崖の上に登ってくる人影があった。それは、
「――はぁ……やっと追いついたわ」
「おや？　誰ですの？」
「！　び、びっくりした……え、えーっと、カラー……ってあれ？　おんなじような気配……って、まさか……」
白いストレートの髪のカラーを見て2人が頭に疑問符を浮かべる。
気だるげな様子のそのカラーはその言葉を聞いてある程度聞きた

いことを察したようで、頷きを入れた。
「ええ、想像通りよ。私はミストラル。上のわがままお嬢様の使徒になった可哀想なカラー。……ということで使徒の先輩方、お手柔らかによろしくね」
「ああ、やっぱり……」
「ルイゼル様の使徒ですのね！　それは是非よろしくしてあげないといけませんわ！　歓迎しますのよ！」
　火炎書士が後でどう説明するべきかと頭を抱え、キャロルは能天気に先輩風を吹かせている。
　そんな使徒３人の初顔合わせの場に、更に空から飛んでくる者がいた。
「へいへーい。そんな憂鬱そうな表情浮かべてどうしたの火炎ちゃん。もっと元気出していこーぜ!!　ほら、今日もいい天気～♪」
「いやだってこれ……後でハウゼル様やサイゼル様に説明しないといけないよ？　それを考えるとちょっとキツくて……って、ユキちゃんもいつの間に」
「イエース。みんなのキチガイ系アイドル、ユキちゃんですよ？　――ということで歌います！　あ～♪　どいつもこいつも四日市～♪　朝から晩までペペロンチーノ～♪　カブトムシを食せよ食せ～♪　いきなりクワガタ寝取られた！　はいっ、カブトムシカブトムシ～♪　カブトムシカブトムシ～週刊少年備前長船兼光～♪　しゃっくり、へいっ！」
「へいっ――じゃないよ……なにその変な歌……あたまおかしくなるよ……」
「カラーの森からここに来るまでずーっと作曲と作詞に付き合わされた私に対する感想は？」
「お疲れ様です……」
「歌詞が深いですわね！　わたくしは好きですわ！　へいっ！」
「さすがキャロルちゃん、わかってるぅ～、へいっ！」
「うん……いつものユキちゃんって感じ。もうなんでもいいやってなっちゃう」

ついにツッコミを放棄した火炎書士が、はぁ、と一息つく。隣ではミストラルに遅れてやってきたサイゼルの使徒、ユキがキャロルと共に続きを歌っていた。
そして一応常識人のような気がするミストラルの方は上を見て指差し、
「――それで、どうするの？　あれ。放置？」
「ルイゼル様とカイゼル様の喧嘩は……う～ん……何かきっかけがないと止まらないんですよねぇ……」
「クケケケケ。そうそう。他の魔人とか兄妹が現れて止めるとかねっ！　へいっ！」
「一番手っ取り早いのは近くにいるガルティア様を呼ぶことくらいですわ」

使徒四人がうーん、と喧嘩を止める方法について話し合うが、特に良い方法が浮かばない。
一番良さそうなのがガルティアを呼ぶことくらいだが、それにしても時間が掛かる。
出来れば早めに止めたいのが火炎書士の本音だった。他の使徒は割とどうにかなると思っている節があるため、そこまで焦ってる様子はない。
そうこうしている間にも上空では喧嘩が行われており、
「あ、そういうことなら一応来るらしいけれど……」
「――え？　来るって……すみません。一体誰が……？」
「私の元部下で私の主のお兄さん」
「へ？　――あっ」
火炎書士はそれを聞いて一瞬、意味がわからずに呆けてしまったが、直ぐに気づく。
そもそもカラーの森であれば関係する人物は限られているのだ。その中で、ミストラルの主、ルイゼルの兄と言うと、
「――アルベルト様も来てるんですか……！」

「いい加減諦めるんだなルイゼル！」
「っ……！　諦めるわけないでしょ！」
炎刀・閻魔と氷剣・ヘカテーの刃が合わさり、それぞれ熱気と冷気をぶつけ合う。
しかし剣技に於いてはカイゼルが一枚も二枚も上手である。
魔法であればルイゼルの方がカイゼルの何倍も優秀であるのだが、それでも今現在はカイゼルの方が有利である。
普段であれば互角なのだが――今は環境がカイゼルの味方をしている。
「つってもよぉ……これだけ有利だとちょっと弱い者いじめしてるみたいで良くねぇよなぁ？」
「！」
カイゼルが腕を上げて下から炎を吹き出させる。
それは眼下に広がる森。今なお轟々と燃え広がり続ける山火事を利用したものだ。
「おらよ」
「んもう！　面倒なのよぉ！」
ルイゼルが冷気でカイゼルが操る炎の鞭を防御しようとする。
しかしカイゼルの火力に、周囲にある炎を合わせられたら流石に防ぐことは難しいため、防ぐのは程々に炎の鞭を飛び回ることで避ける。
しかしこのままではジリ貧には違いない。そのためルイゼルは目を細め、僅かに圧力を強くする。
「……はぁ……こうなったらルイゼルちゃんも本気出すしかないかな～？」
「アァ!?　んだとぉ……さすがにそこまで付き合ってる暇はねーぞ……」
カイゼルが視線を背後。その山の谷間にある人間の集落を見ながら言う。
そこでは――カイゼルが使徒候補として見定めた人間が魔物大将

軍と戦っている筈だった。
そしてその気配は……段々と薄まってきている。
あまり時間はない。ルイゼルの本気を出せば、勝つにしても負けるにしても時間が掛かる。
それをよく理解しているカイゼルは、だからこそ一度大技でルイゼルを妨害することにした。
「〝豪炎刃〟――ッ!!」
「行くわよぉ……イッツ・ショータイム――」
カイゼルが刀を振り下ろし、炎の斬撃を飛ばす。
そしてほぼ同時に、ルイゼルが魔法を発動した。
手元にマイクが現われ、その準備が整う。
そうして2人がとうとう本気でぶつかりかける――その瞬間、
「――2人共……そこまでだ」
「何ィ!? って――」
「何よぉ!? 邪魔しないで――って、あらぁ……」
カイゼルの炎。それとルイゼルの魔法を間に入って止めた者がいた。
それは人形でありながら、流動した身体で宙にたゆたう存在であり、彼らの父親にも似た鋭い眼光を持つ筋肉質な男カラーの姿。
その名をカイゼルとルイゼルは呼んだ。前者は驚きの表情で、
「アルベルトの兄貴!?」
「アルベルト兄様……そういえば来てるの忘れてたわ……」
「……カイゼル……それにルイゼルも……テメェら……あれだけ言ったのに好き勝手しやがって……！ パパやママ達になんて言うつもりだ……!?」
レオンハルトの子供達。その中で長男であり、子供達最強とまで称される魔人のアルベルトが2人に向かって強烈な眼差しで凄む。
その身体から放たれる圧力を伴った気はカイゼルとルイゼルを萎縮させるには十分なもので、
「ま、待ってくれアルベルトの兄貴！ 俺様はただ、ルイゼルに対抗して使徒を作ろうとしてだけだ！ ――うぉあ!?」

「な――!?　ルイゼルちゃんの所為にしないでくれる!?　それはほら……アイドルになるためには必要なことだったし～……なんていうか、ルイゼルちゃんから溢れ出すアイドル力がそうしろって――きゃあっ!?」
　宙に浮かんだまま後退っていた2人は突如としてアルベルトの腕に首元を掴まれて引っ張られる。
　それは正真正銘、アルベルトの手だ。
　ただ身体を霧状にして腕だけをそれぞれ2人の近くまで飛ばし、実体化させてそのまま引っ張っただけ。
　単にそれだけなら魔人である2人なら逃げることも容易いが、アルベルトは徒手空拳を得意とすることから、単純に腕力も相当なもので、
「挙句の果てにこんな場所で喧嘩なんてしやがって……!　いつも他人に迷惑を掛けるなと言っているだろう!　そんなにオレと喧嘩がしてぇか!?」
「ひ、ひぃ!?　や、やめてくれ兄貴!　ママとパパには謝るからよぉ!」
「ちょっ、やめっ……なんでルイゼルちゃんまで……!　お、女の子をぶっちゃ駄目よ兄様?　ほら、こんなに可愛い妹を殴る気?　殴るならそこの燃えてる馬鹿だけにして、ね?」
　腕に掴まれたまま、恐怖したルイゼルがお願いするようなポーズでそんなことを言う。
　するとカイゼルはギロリとルイゼルを見て、
「あぁ!?　テメェ、幾ら何でもそれはねぇぞ!　可愛い妹だからって何でもかんでも許されると思うなよゴラァ!!　殴られるなら両方だろふざけんな!」
「だってアルベルト兄様の拳骨、めちゃくちゃ痛いじゃない!　嫌よ!　ほら、カイゼルこそルイゼルちゃんが好きなら代わりに殴られて!　私の代わりになって2回殴られて!」
「殴られてたまるか!　そうなったら代わりに俺様が殴ってやる!」
「はぁぁぁぁ!?　最低最低!　可愛い妹を殴る気なのぉ!?　変態の癖

に生意気よ！　ベッドの下の薄い本、氷漬けにしてハンティさんにチクるわよ!?」
「て、テメェ！　なんて恐ろしいことを考えやがる……さすがの俺様もそれにはドン引きだぞ……！　い、いやいや、それにあれは違ぇ。あれは……そうだ。シュヴァインの豚野郎とライブラの奴が俺様のベッドの下に隠しておいてくれって頼まれたんだ。ふー……ムッツリスケベな弟共を持つと苦労するぜ……」
「カイゼルはオープン過ぎるんだけどぉ？　というか、シュヴァイン君はともかく、ライブラ君は厨二病真っ盛りだと思ったらもうそんなことに興味があるのぉ？」
「へっ、馬鹿めルイゼル。男の成長は早ぇんだよ。あいつはああ見えて、俺様以上の変態だ。そう……ええっと、そう、確かあいつはロリコンのホモだ。その上巨乳フェチだ。――どうだ、救えねぇだろ」
「絶対嘘じゃないのよ！　ロリコンのホモってなんなのよ！　救えないのはカイゼルでしょうが！」
「……はぁ、その辺にしておけ」
と、２人の言い争いを見て、怒りが少し削がれたのかアルベルトが溜息をつきながら２人を止める。
上下関係とは不思議なもので、アルベルトがそう言うと二人共若干不満そうではあるが、言い争いを止めて大人しくなった。
それを見計らってアルベルトは言う。眼下の燃える山。そして人里を見下ろしながら、
「……とりあえず、ここでは何だ。一度帰るぞ」
「え……いや、ちょっと俺様の使徒が――」
「あ、はーい。ルイゼルちゃんは用事終わったし、帰るのさんせーい」
「あっ、てめっ、ずるいぞ」
再び言い争いをし始める２人に呆れつつアルベルトは言う。カイゼルに向かって、
「……お前の使徒については、また今度にすればいいだろう。オレも、作るな、とまでは言わん」
「……チッ、しょうがねぇな……帰るか」

「そうねぇ。帰るってなったらお腹空いてきちゃったわ」
不服そうだがカイゼルも了承し、これでルイゼル共々連れ帰ることに成功したも同然である。
まあ了承しなくとも、無理やり連れて帰るつもりではあったが。
何しろだ。地上の今の状況は、
……少し、嫌な気配がするからな……。
父に頼まれたこと以外にも、何やら凄まじい気配が様々な場所から感じる。
アルベルトはそのどれもに興味はあるが……さすがに弟や妹がいる場所で戦ってみたいとまでは思わない。
守りきれない可能性があるからな、と、
「……降りるぞ」
「へいへーい……」
「はーい」
そうしてアルベルトは一度、崖の上の使徒達と合流することにした。

竜の闇

地下回廊が、戦いで鳴る。
それは何十層と重ねられた音の響きだ。
響くは主に、風と雷鳴、大気を叩き、時に斬り裂く質量の連続。
壁も地面も天井も、全てが人外の力によって削られ、破砕音の音も混じってきている。
そして続く音色は、それを実際に奏でる彼らの声だった。
「――あああああああああっ!!!　うぜぇうぜぇうぜぇ!!　てめっ、この死に損ないのバケモンがっ!!　さっさと死にやがれやあああああああああああっ!!!」
「ッ……!　ガァァッ……!!」
稲妻を撒き散らしながら空と地を駆ける黒と赤の線――アベルに対し、特に大声を出して破壊を撒き散らしている魔人ケイブリスはその両の大剣をアベルへぶち当てた。
それを見て、同じく地上を駆けるライゼンは異形の魔人に感嘆した。
……まさか、あのリスの魔人がこれほどまでに強いとは……!
ライゼンと魔人四天王、それにメガラスも加えた5対1の戦いにおいて、もっともアベルに傷を負わせているのがケイブリスだった。
嬉しい誤算――と言っていいのだろう。ケイブリスの強さは他の魔人を凌駕するものであり、その実力は魔王時代とは比べ物にならないとはいえ、アベルにすら迫るものがあった。
無論、優勢となったのはそれだけが要因ではない。
この戦いが始まって既に30時間を越えたが、こちらはこちらで即席の連携に近いものを見せている。
「〝アモルの闇〟……!」
「ッ……!」
宙を行き、アベルの周囲を闇や霧で覆うことで視界を奪い、戦いが有利になるように牽制するケッセルリンク。
「いい加減にくたばれ……アベル……!!」

「カミーラァ……!!」
続くのはアベルや自分と同じ翼や尾を持つ元同胞のカミーラだ。
彼女はその鋭く伸縮自在の爪を用い、四方八方からアベルへと攻撃を繰り返す。
それは無論、アベルを倒すためのものだが、どれだけ弱っても最速とまで称された魔王だ。空中で飛び回り、それらを避けることも可能であろう。
だがそうやって視界や移動を制限されれば、攻撃を当てることも難しくない。
「オオオオオッッ!!　潰レロ、アベルゥ……!!」
「ガアアアアアアアッッ――!!」
地を駆ける岩の様な肌と装甲を持つ人物はカミーラと同じく、かつての同胞であるノス。
奴はアベルの攻撃を地竜の特性である〝膨張硬化〟で受け続け、身体を大きくしながらアベルへと突進していく。
既にその装甲はかなり分厚く、大きさ自体もケイブリスに近くなっている。
その硬さはこちらと同じように武器となる。故にアベルも無視は出来ない。
同じ様に爪を振るい、空へと加速、飛翔して逃げようとするが、
「――逃さん……!」
「ッ……!　メ、ガラスゥゥ……!!」
――最速の魔王には最速の魔人が立ち塞がる。
かつてアベルの腹心として幾重もの死地を潜り抜けてきた魔人メガラスは、かつての戦争――ラストウォーの様に空を飛翔し、空の覇者であるドラゴン、その魔王にも己が矜持とする速さで立ち向かっていく。
速さに任せた突撃はアベルの身体を少しずつ、着実に削っていく。
しかしそちらに気を取られればやはり自分やケイブリスが追いつき、
「終わりだ、アベル……!!」

「オラオラオラァ！　さっさと――死ねやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
「ッッッ――!!」
　既に多くの血を流し、動きも鈍っているアベルにダメ押しの連撃をお見舞いする。
　正面からの体当たり。そして吹き飛んだところをケイブリスが跳ね返すように大剣を振るった。
　真っ二つにはなってはいない――が、攻撃はクリーンヒットし、アベルが高速で壁に激突し、再び一部の崩壊を引き起こす。
　主の弱り具合に比例して、天井近くに浮かぶ黒雲も勢いを潜めているように見えた。
「……終わったか？」
「……」
「フン……モウ終ワリカ……ヤハリ、ジル様ノ足元ニモ及バヌワ……」
「……油断するな。アベルなら、まだ――」
「……あ？　もう、終わりか？　――よっしゃあああああ!!　俺様最強だぜぇぇぇぇぇ!!　ざまぁみやがれアベル!!　俺様はテメェが知る昔より格段に強えぇのよ!!　ぐあはぁはぁはぁ!!　……あ、見てましたか、カ、カカカカミーラさん！　僕、やりましたよ!!」
　……本当にやったのか？
　視界の中でケイブリスがカミーラに声を掛けて無視されるところを見ながらも、未だ警戒は解かずに土煙の中にいるであろうアベルに注視する。
　あのアベルであれば、やられたと見せかけての闇討ちを行ってくる可能性だってあるのだ。まだ気を抜くことは出来ない。
　しかし……まだ起き上がり、どう足掻いてもこれではアベルの負けは覆らないだろう。
　故に少し、ほんの僅かに、哀れみを憶えてしまう。
　とうに吹っ切れた筈だが、未だ死にきれていないアベルを見れば感傷にも浸りたくなる。
　だからだろうか。生きているならとどめを刺して、救ってやろうと

思い、近づいた。
その瞬間だ。地面に伏していたアベルが、
「――ライゼンッッ!!」
「……！　まだ生きていたか……！」
「なにぃ!?　――って、そうかアベルなら死んだ振りは十八番じゃねぇか！」
背後でケイブリスが喚いている。
前方からアベルが跳び掛かってくるが、
「無駄だアベル！　不意打ちだろうと俺にお前の攻撃は通じない！」
「――――」
そう告げた――が、アベルは変わらずこちらに攻撃を加えた。
やはり傷はつかず、とどめを刺そうと向かってくるアベルに対して爪を振り上げた。
だがその狙いはお互いに逸れた。
こちらの爪は宙を裂き、そしてアベルは真っ直ぐとこちらを振り切って、
「……っ！　狙いはカミーラか!?」
「アアアアアアアア!!　カミーラァァァ!!　マタ、マタ奪ッテヤル……！　オ前ラニ復讐スルタメニヨォ……!!」
「……っ！　巫山戯たことを……！」
アベルの咆哮にも似た叫びにカミーラが歯を噛み締め、眉をひそめて不快感を露わにする。
既に全身が血まみれになっているのにも関わらず、アベルは速度を上げてカミーラに向かった。
カミーラもそれを見て、反撃を試みようとする。
だが、
「っ……！」
「アア、可愛イゾカミーラァ……！　ソウヤッテ俺ニ何度モ歯向カオウトシテキタノヲ思イ出ス……！　最後ハ諦メテ屈服シテヤガッタケドナァ！　ギャハハハハハッ!!」
「……!?　アベルお前！　記憶が……!?」

先程までよりも意思を伴った声にライゼンが驚愕する。しかし、
「ギャハハハハッ!! 全部、全部俺ノモノダ……!! ドイツモコイツモブッ壊レロヨ……! 魔王デアル俺様ニ逆ラッテンジャネェ……!」
「何を言うかと思えば……魔王は貴様ではない……! 真の魔王はジル様だ……!!」
返ってきた言葉にノスが言い返し、ライゼンは思う――意識があるというよりは、本性をたださらけ出しているように感じると。
先程までよりは意味のある言葉を口にしているが、先程までと同様に会話は成立しない。
このような状態になって未だに生きていることが不思議でならないが、
「……どちらにせよ、貴様は放っておけん。アベル、お前の為にも……!」
「ギャハハハハ!! 俺ハ凄ェンダヨォ!! 他ノ同族トハ違ッテ頭モ切レル! ダカラ俺ガ王ニナルノガ良イニ決マッテル!!」
「っ……黙れアベル……貴様のような卑怯者が王など……!」
「……ア、卑怯者?」
しかし――動き始めた全員の言葉の中で、カミーラの言葉だけがアベルを反応させる。
僅かに動きを止め、しかし、直ぐに動いてカミーラに再び向かったかと思うと、
「ダレガ卑怯者ダアアア

ことを躊躇わせる程のものである。
そんな中で、アベルは吠えた。激昂した様子で、
「俺ハ卑怯者ナンカジャネェ!! ソンナノハ頭ノ回ラネェ馬鹿ナ同族共ノ言イ訳ダ!! ドイツモコイツモ!! 自分ノ頭ガ悪イコトヲ誇リダノナンダノデ言イ訳シ!! 正シイ筈ノ俺ヲ卑怯者ト言ッテ蔑ム!!」
「っ……それ、は……」
ライゼンはそのアベルの声の内容に覚えがあった。
それはかつて……アベルが幽閉される時にも主張していた台詞だ。
『頭を使って何が悪い!! 俺は頭を使って戦争にだって貢献したし、あの何体もの同族が倒された馬鹿デカい化け物だって倒してやった!! 狩りだって頭を使って他の奴らより多くの獲物を狩った!! 何か問題が起これば俺が態々頭を使って解決してやった!!』
ライゼンを含む四大聖竜や八大精霊竜……そしてドラゴンの王であるマギーホアの前で、アベルは吠えた。
「ナノニ誰モ俺ヲ認メネェ!! 俺ノ戦イハ卑怯者ダト戦友カラ蔑マレ!! 狩リハ大シタ理由モナク、ソノヤリ方ダト駄目ダト怒ラレ!! 問題ヲ解決シテモ浅知恵ダト周囲ハ俺を馬鹿ニシタ!!」
その時だ。ライゼンは初めてアベルが受けていた仕打ちを真の意味で理解した。
彼はドラゴンの社会において、ただの一度も……その働きを認められることもなかったし、良い評価をくだされることもなかった。
『テメェもだマギーホアぁ!! あの化け物を倒した時も、テメェは俺の功績を認めなかったなぁ!? 偶然とどめを刺しただけだと!! だから戦功には値しねぇ、むしろ今までの逃げ隠れて隙を打つような戦い方が厳罰ものだってなぁ!?』
それはマギーホアが決めたことだった。
しかしその時に初めて、自分にも責任があることと――ドラゴンの社会の小さくも大きい歪みの正体を知った。
「アリエネェダロウガヨォオオオオオオッ!! アレガ偶然ダト!? 冗談ジャネェ!! 何度モ言ッタンダ俺ハ!! アレハ他ノ奴ラガ攻撃シテ薄マッタ部位ヲ的確ニ狙ッタッテナァ!!」

「何を喚いている……！　煩い奴め……！」
放電に耐えるノスが腕で顔を庇いながらも悪態をつく。
その態度はかつてアベルの周囲にいた他のドラゴン達の様であった。
『なぁにがドラゴンは完璧だぁ!?　――馬鹿かテメェらは!!　揃いも揃って単細胞の馬鹿しかいやがらねぇ!!　幾ら身体や脳みその出来が良くても考えることを放棄するテメェらは全員残らず無能なんだよ!!　おら、聞いてるかマギーホア!!　テメェが馬鹿だから同族はいっぱい死ぬし、俺様にカミーラを奪われんだぜぇ!?』
その言葉にマギーホアはかつてない怒りを見せ、ひとしきり痛めつけた後に、アベルを地下に幽閉することを命令した。
『ハァ……ハァ……分かってねぇ……分かってねぇんだよテメェら……ぎゃはは……図星だったんで怒ったか……？　テメェらがもっと頭を使えてりゃ……グゥ、がはっ……戦いは……もっと早く終わって……同胞を救えてたかもなんだぜ……？　……ぐ、ハァ……俺を投獄したところで……これから先、どうせテメェらはいっぱい殺す……大勢死なせる……頭も使わずに馬鹿な突撃を繰り返せば誰だってそうなるだろうがよ……くくく……おまけに俺みたいな頭を使える奴すら迫害してりゃあ未来なんてねぇ……テメェら全員、残らず破滅すんのがオチだな……！』
それはアベルの最後の負け惜しみだったのだろう。まともに取り合う者などいなかった。
だが事実――自分達ドラゴンは破滅した。
天を覆う光の軍勢に対し、力や個では限界があった。
アベルはそれを予見していなかっただろうが……結果、その通りになったのだ。
『テメェら全員呪われろ……苦しめ……俺は死ぬまでずっとお前らを恨んで、破滅を願ってやる……！　救えねぇ馬鹿しかいねぇドラゴンなんざ、全員死んじまえばいい……！』
そう言って、アベルは地の底へ閉じ込められた。
それから彼はいつしか地下牢から消え、誰もが死んだと思い込ん

だ。
だがこうして今、全く同じ言葉を眼の前で吠えている。
「モウ一度、何度ダッテヤッテヤル……！　テメェラニ復讐スルタメナラ、俺ハ――！」
と、アベルはカミーラの方を再び向いて、その鋭い爪を突き立てようとする。
「何度デモ、繰リ返シテヤル……!!」
「っ……!!」
「……！　カミーラ!?」
「か、カカカカミーラさん!?　ちょ、待っ――」
最後の力を振り絞ったアベルの攻撃。
カミーラはそれを受けようとして――しかし受けきれないことを悟ったのかそれを躱そうとした。
だが奴はやはり、最速の魔王だった。
近くにいた己やケイブリスが駆けつけるより早く、カミーラにその爪が、
「――そこまでだ」
「ナッ……!?」
――振るわれることはなかった。
アベルの充分な速度を持った攻撃は、割って入った人型の男に弾かれた。
それはこの場において、アベル以外の全員が知る、金髪灼眼の魔人の姿で、
「げっ!?　も、もう来たんで――じゃなかった……早い！　もう来たんですか!?」
「ようやく来たか……」
「ふん……つまらん。もう終わりか……」
「……遅かったな……」
「……」
ケイブリスにケッセルリンク、ノスやカミーラがその姿を見て言葉を紡ぎ、メガラスも無言ながらその相手を気にする。

それぞれ吐き出す言葉と感情は違うが――誰もが同じ、1つの事実を思っただろう。
これで――終わった、と。
無論、それはライゼンも同じである。僅かに驚くカミーラの前に立つ男にライゼンは声を掛けた。
「……全く、随分と遅かったな、強敵(とも)よ」
「悪いな。色々と手間取って遅くなった……とはいえ、もう勝負はついてるか」
「グ、ガァァァ……！　誰ダ……マギーホア、カ……？」
先程の攻撃を弾かれたアベルがその気を感じ取り、誰だと言葉を吐く。
それに対し、手に何も持っていない状態で剣を構え、彼は名乗った。
「――魔人レオンハルトだ。魔人筆頭、並びに、魔軍参謀を拝命している。……そちらは元魔王アベルで相違ないな？」

地下回廊に到着し、アベルと対峙するレオンハルトはその竜の魔王と実際に対峙し、僅かに息を吐いた。
「……レオンハルト？」
それを目敏く、ケッセルリンクが気づく。やはり、近しい者には気づかれてしまうのかもしれない。
今の溜息。それが意味するところは、
「誰デモイイ……！　殺シテヤル……！　俺ハ全テニ復讐ヲ――」
「……ああ、お前の主張は途中から聞いていたし、きちんと理解した」
地下回廊に降りてくる道中で、既にその言葉は聞こえていた。
故にアベルの言いたいことは理解できるし、かつてアベルとドラゴン王……その体制側とどういった確執があったのかも理解した。
それは歴史を知るレオンハルトにとって興味深い事ではある。それは事実だ。
だが、それとは別に、
「だが――もういい」

「――ッ!!??　ギィヤアアアアアアアアアアアアアア!!!」
レオンハルトは剣を振るい、アベルの足を斬り落とした。
柔い感触、まるで泥を斬ったような手応えを感じ、レオンハルトはやはり嘆息する。
……仕方がないとはいえ、既に腐りきっているな。加えて弱ってもいる。
赤黒い血が地面にぶしゃりと落ちるのを見ながら、レオンハルトは魔剣を空間から取り出す。
今行った剣技――自分の居合すら見抜けない程とは思わなかった。
だからやはりレオンハルトは息を吐く。沸きかけていた血も冷たくなる。
「普段ならもう少し愉しめたのかもしれないが……今のお前は、俺にとって物足りない。お前では力不足だ」
「グ、ガ、ア……！」
――つまるところ、それは落胆だった。
今のレオンハルト……特に、来たる戦いに備え、色々と調整しているレオンハルトにとって、今のアベルはつまらない相手だった。
既に満身創痍。魔王状態とまでは言わないまでも、これが全快、無傷の状態であったのならば少しは愉しめたのかもな、と残念に思う。
事実、もう戦おうとすらしない。力の差を感じ取ったのか、アベルが悶え苦しみながらも、翼を動かし、そこから逃走を図ろうとする。
それが分かったため、その前にレオンハルトは動く。逃走しようとするアベルに近づき、
「ガアアアアアッ!!」
「……！　レオンハルト！　ブレスだ!!」
背後からケッセルリンクが声をくれる。応援は有り難いが、分かっている。
アベルの口の中で溜まるエネルギー。それはドラゴンブレス。ドラゴンの代名詞ともいえる必殺技だ。
それを受けてみるのも一興ではある、と少し迷うが、やはりつまらない戦いであることに変わりはない。

その力量だけでなく、この状態で無駄に長引かせるのも哀れでもある。故に、
「一々出させてやる義理もないな」
「ッッ、ッ、ァ……！」
今度は剣を使わず、素早く近づいて顎の下を蹴り上げる。
そうして口を閉じさせ、ブレスをキャンセルさせながら、レオンハルトはアベルの頭、正確には角を掴むと、
「そして……悪いが逃げてもらっては困る」
「――グガッ、ガ……！」
力ずくで、アベルの頭を地面に叩きつけた。
さすがに頭や角部分はまだ丈夫で、地面に叩きつけても折れはしない。
だが、更にもう一度、震脚の要領で上から踏み潰すように角を叩けば、
「ッ!? ガアアアアアアアアアアアアアアアアッッ……!!!」
「……こんなものか」
……勝負あったな、と地面に破片となって落ちる角を見てレオンハルトはやはり息を吐いた。

「……レオンハルト、また強くなっているな……」
「……ああ、そうだな」
ケッセルリンクの小さな声に、ライゼンも少し間を置いて同意する。
アベルを倒すくらい、レオンハルトなら訳ないとは思っていたのでそれに関する驚きはない。
しかし、ライゼンにとっては思うところのあるアベルがあれほどあっさりとやられて、足蹴にされるところを見ると、少し考えさせられることもあった。
やはり自分はまだ、完全には吹っ切れていないのだろうと、自分の女々しさに内心で苦笑してしまう。

そうしながら、意識は戦いが終わった周囲を観察していた。
他の魔人もレオンハルトが戦いを終わらせたのを見て、空気を戦闘時の張り詰めたものから弛緩させており、
「い、今の、レオンハルトの見えない斬撃か……？　俺様、いつの間に見えるように……もしかして、俺様って結構――って、そんな場合じゃねぇ……！　――レオンハルト様！　聞いてください！　僕、凄い頑張りました！　命令通り、沢山頑張って戦いました！」
「……ああ、そうみたいだな。よくやった、ケイブリス」
「いえいえいえ！　こんな奴、レオンハルト様や僕に比べたら雑魚ですよ！　あ、よろしければ僕がそいつ、処理しておきますよ！」
「……」
「……チッ……リス風情が……」
ケイブリスが真っ先にレオンハルトに駆け足でドタドタと近寄り、巨体を丸めてぺこぺこと胡麻をする。
一応はかつて仕えていた主をそいつと呼んで処理すると言っていることに、メガラスが複雑そうな表情を浮かべた……気がした。カミーラは分かりやすく、ケイブリスが調子に乗っているのを見て舌打ちをしていた。
すると次にノスが、
「……レオンハルト。ジル様は何と？」
「いや、特に追加の命令はない。報告を終えたらお前は一旦牧場に戻れ。そろそろ、ジル様が新しい玩具を欲しがる頃合いだ」
「む……そうか。ならばジル様の為に、活きのいい人間を選別せねばな」
「……ああ、そうしろ。お前もご苦労だったな」
「……ふん、貴様が来なければもう少し愉しめたものを……間が悪い」
レオンハルトがノスにも労いの言葉を掛け、ノスが小さく毒を吐く。
だがその空気はノスが他の魔人を相手にするような剣呑としたものはない。
やはり何百年と魔王の側近を務めている者同士ともなれば、不和は

起こらないものなのか。それとも、レオンハルトの人徳が故か……ライゼンにはその判断はつきかねる。
「カミーラもすまなかったな。お前にとっては興が乗らない任務だったろうに」
「……いや、構わない」
「そうか。それなら良かった。……ケッセルリンクも、ご苦労だった。怪我はないか？」
「ああ、大丈夫だとも。心配してくれて感謝する」
　ケッセルリンクがレオンハルトの気遣いに微笑を浮かべる。……その会話を、何故かカミーラがじっと見ていたのが気になったが、
「メガラスも偵察に……その分だと戦闘も参加したようだな。ご苦労だった」
「……ああ」
　メガラスに対しては簡潔に。レオンハルトもそれ以上が返ってくるとは期待していないのか、必要以上の言葉を交わさない。相性は悪く無さそうだが、どうやらあまり仲は良くないらしい。
　そして部下の魔人達への労いの言葉を掛け終えると、レオンハルトは顔を上げ、
「ライゼンも、すまなかったな」
「いや……むしろ感謝したい。お前がこの事を教えてくれなければきっと後悔していただろうからな……それより、アベルは……このままとどめを刺すのか？」
　話しかけて軽い謝罪をしてきたレオンハルトに気になっていることを問いかける。レオンハルトが未だに押さえ続けているアベルのことだ。
　既に歯向かう力もないだろうが、レオンハルトは念の為だろう、そのまま捕まえた状態で答える。息を入れ、
「いや、こいつは死なない。だからここに閉じ込めておくしかないな」
「――何？　どういうことだ？」
　予想外……とも言い切れないが、その答えに疑問する。どういう訳でアベルは生き、そんなボロボロの状態でも死なないのかと。

するとレオンハルトは頷き、己が押さえているアベルを哀れむように見下ろしながら、
「……詳しい説明は省くが、強い負の感情を抱え、魂の汚染が進むことで、その生物は死ねなくなる。アベルはその状態だってことだ」
「……そう、なのか……」
魂の汚染。負の感情。死なない。
レオンハルトの口から語られたその3つの語句に、思わずアベルを見て……やはり哀れんでしまう。
せめて苦しみから解放してやりたかったが、まさかそれすらも叶わないとは。
幾ら過去に罪を犯した罪人とはいえ、これほどの仕打ちはあんまりだと思ってしまう。……マギーホアには決して言えないことではあるが。
「アァ……痛イ……苦シイ……」
「！　アベル……」
しばらくそうやって見下ろしていると、アベルが再び呪詛の様な声を吐き出し始めた。
しかし今度は、怒りよりも悲しみが強く滲み出たような声色で、
「何故ダ……何故俺ハ認メラレナイ……俺ハタダ……自分ナリノヤリ方デ……役ニ立トウトシタダケダ……ソレナノニ、何故皆、俺ヲ虐メルンダ……」
「……」
「俺ハ……ドウスレバヨカッタンダ……何モ考エズニ死ネバヨカッタノカ……？　ソウスレバ、認メラレタノカ……？」
アベルの呪詛は止まらない。
ドラゴンの文明が滅び、人の時代になってなお、アベルはドラゴンを恨み続けている。苦しんでいる。
「アァ……痛イ……苦シイ……死ニタイ……死ネナイ……アァ……何モ手ニ入ラナイノナラ……イッソノコト全テ……全テ……自分サエモ……壊レテシマエバイイ……」
「……」

掛ける言葉は見つからない。
いや、ドラゴンである自分には何も掛けてはいけない。
アベルは罪を犯した。その罰が、未だに続いている。
ドラゴンであることを選んだ自分には、そう思うことしか出来ない。
「……さて、それじゃあ逃げられないように少し細工をする。悪く思うなよアベル……ライゼンも」
「……ああ、頼む」
だが、レオンハルトがアベルを地下に繋ぎ止める準備をしている傍ら、こうも思う。
――いつか、彼を救う方法が見つかれば。
その時は……ドラゴンではなく、かつて同じ時代を生きた仲間として、彼を救ってやりたいと。

「……これでいい、か……」
地下回廊の最下層に、汚染化したアベルを繋ぎ止める細工を施したレオンハルトは既に呻くことしか出来なくなったアベルを見下ろして呟く。
二代目魔王であるアベル。
その末路と、これからを思うと僅かながら同情してしまう気持ちもある。
だが、そんなこと――そう、そんなことよりだ。
「――もうすぐだな」
ク、と思わず漏れ出てしまいそうになる声と表情を直ぐに消す。良くない癖だった。
だがどうにも内心の気持ちは抑えきれない。
最後に思う存分愉しめたのは１０００年近く前。僅かながらでも昂ぶれたのは７００年程昔のことだ。
しかし今回はそれよりも……遥かに愉しめる。
確かに感じるのだ。その強い存在を。

今にも全身の力を、昂りを、吐き出したくてしょうがない。
正直、それを抑えるためだけにジルとのまぐあいをも利用しなければならないほどだった。
この昂りを、期待を、奴との勝負まで我慢出来る気がしなかった。
後数日とはいえ、それまでに仕事にも影響が出る可能性がある。故にちょうどいいと一度は発散しておいた。
しかし再び時が経てば昂る。今だってまた期待で胸が張り裂けそうだ。
故に数日後。とうとう何もかもを曝け出せるのだ。
「調子は充分だ……」
拳を握り、かつてないほどに己が高まっているのを感じる。
故にこそ、思う。――本当に、俺を倒せるのか？　と。
魔王を倒しうる奴こそが、この地上で唯一、俺に匹敵し得る存在だ。
奴が無理ならもう、地上でこれ以上の強者が出る可能性は限りなく0に近い。
なればこそ、期待する。
「クク、待ってるぞ――ガイ。この俺を、早く倒しに来い……！」
自分という障害を乗り越え、本来の正しい道筋を歩んでみせろと。

迫る脅威

隠れ里を包囲するアッティラ軍。
その司令部は外の光と響く音、それと部下からの報告で何があったのかを察していた。
「あ、あれはアッティラ様の……！」
「また暴れているのか……!?」
後詰の魔物兵、魔物将軍らが確認した空に走る光の線。
時折地上にも激突して爆発を引き起こしているそれは見知ったアッティラの攻撃だ。
周囲にいるあらゆる生物を殺し尽くす、まさしく殲滅の光。
その存在と癖を知っているが故に、司令部はその攻撃が届かない距離に敷かれている。
だが里を包囲する部隊の方はそうではない。
「どうする……？」
「ただでさえ山火事でこれ以上の前進――いや、待機すら難しいだろう……」
「撤退させるしかないのでは？」
「し、しかし、それでは後でアッティラ様に何を言われるか……」
司令部に集まった魔物将軍らが揃って対応策を考え出すが、アッティラへの恐怖があるため、迂闊な撤退行動は粛清される可能性がある。
かといって現状維持も難しい。放っておけば山火事が広がり、包囲網を形成している魔物兵らも犠牲になってしまう。
どうするかと魔物将軍らが頭を悩ませている時に、その声は響いた。
「あー、アッティラの奴が暴れてんのか」
「！　が、ガルティア様……」
声の先はテーブルで相変わらず食事をしている魔人――ガルティア。

彼は相変わらず食事を摂りながら、しかも全く淀みのない声で喋る。
まるで喋る口と食べる口が別々についているかのようであるが、それも相変わらずである。
だがその口から聞こえた言葉は、魔物将軍らにとって助けともなる言葉だった。
「んー、ならこのままだと兵共が死ぬだろ。撤退させとけ」
「し、しかしアッティラ様の命令では、包囲網の形成は厳命であり、死守するようにと……」
「ん？　あー、まあお前らが勝手にやったならともかく、俺の命令なら別に問題ねぇだろ？」
「……それは」
確かに、とその場にいる魔物将軍の誰もが頷き、または得心する。
この軍は魔物大将軍であるアッティラの指揮する軍ではあるが、率いているのはアッティラではない。
魔物社会は絶対的な階級社会であり、魔軍を率いるのは魔人である。
魔物将軍や魔物大将軍といった者達は、あくまで魔軍を統率、指揮するための存在であるが、その目的――方針などを決めるのはあくまでも魔人であり、ひいては魔王である。
魔人や魔王、あるいはそれらの命を受けた使徒などに何も言われなければ魔物大将軍が好きに動いても構わないだろうが、この場合は別だ。
魔人であるガルティアの命令に、それ以下である魔物将軍らは逆らえない。
それは魔物大将軍でしかないアッティラも同様だ。魔人が命令すれば首を縦に振る以外に選択肢はない。せいぜい、意見を具申する程度が関の山。
何千年と変わらない魔物界のルールがそこにある。
故に魔物将軍らはガルティアの命令に従えばいいし、そもそも従う他ないのだ。

――だから言い訳だ立つのだと、
「……畏まりました、魔人、ガルティア様。これより包囲網を形成している部隊を安全な場所まで撤退させます」
「おう、そうしろ」
ガルティアも魔物将軍が膝を突いて畏まるのを自然と受け取る。
魔人としては古株なので魔物に命令するのも慣れたものだし、そもそもの懸念としてガルティアはここからは自分が指揮する必要があるな、とも思っている。
「……まぁ、もしマジなら死ぬよなぁ……」
「？　何か仰いましたか？」
「ん？　ああ、何でもねぇよ。ただの独り言だ。それより――ふぅ、ごっそさん。美味かった。次はC定食追加だ」
「……畏まりました。――おい！　C定食追加だ！」
「はっ！　炊事場に伝えてきます！」
魔物将軍が配下の魔物隊長に命令すれば、魔物隊長が急いで司令部を出ていく。
その魔物社会のいつもの光景を見ながら、ガルティアは考えた。
……とりあえず、警戒だけはしとくか。レオンハルトの言ってたこともあるしな。
体内のムシ達に告げてレーダーで周囲の警戒を強めながら、ガルティアは再び司令部での食事を続けた。

「やっと降りてきた……ふぅ、とにかく、これで帰れますね！」
「出来れば使徒を作ってから帰りてぇんだがな……ちゃっかりこいつは使徒作ってやがるしよぉ……」
「カイゼルがのろまなのがいけないのよぉ、ぷぷぷ」
「アァッ!?　なんだとテメェ!!　使徒共々レアで焼くぞこら！」
「カイゼル様、どうどう、抑えてくださいまし」
「使徒になって早々焼かれるのは勘弁願いたいのだけど……はぁ……これがこれからの職場……不安だわ……」

「……オレの妹と弟がすまない」
あなたに謝られても……と、ミストラルは元部下で魔人で自分の主の魔人の兄というややこしすぎる関係の相手の謝罪に複雑過ぎる思いを浮かばせる。
しかしこの個性的過ぎる面子の中ではアルベルトが1番まともであることも事実だ。加えて1番立場的に上位でもある。
自分の主であるルイゼルや、その主の母親の魔人の使徒であるユキのおかしさは出会ってからここまでの道中で分かったが、他の者達も中々に個性的だ。
主の兄であり、元部下の弟である魔人カイゼルとかいう全身黒尽くめで羽が生えてて燃えてる変態とか、その母親である魔人の使徒である不気味な風貌だが、意外とまともそうな火炎書士という使徒。それと、あの魔人レオンハルトの第一使徒だというキャロル……というか、この使徒は以前に見たことがある。防衛隊長時代に。
この面子とこれから関わっていかなくてはならないという事実に不安しかないが……後ろ向きになっていてもしょうがない。
とりあえずこれから帰るというので、彼らについていこうと思うのだが、
「……でもこれ、結構な惨事だけど……放っておいて大丈夫なのかしら？」
「ん～？　どうしてミストラルちゃん？」
「……今戦ってるの魔軍でしょ？　同じ魔物側として加勢とかしなくていいの？」
主であるルイゼルが不思議そうに口持ちに指を当てて首を傾げてきたので、自分の思うことを率直に口に出す。
今の自分は使徒で、周囲にいる者達も魔人や使徒ばかりだ。
それが人間と戦っていて、魔物側は若干苦戦しているようにも思えるので、こちらが加勢すればいいのではと純粋に考えた。
しかしそれを聞いた者の内、おおよそ殆どの面子がなんとも言えない微妙な反応になり、
「……まあ、同じ魔物側といえばそうなんですけどねぇ……」

「クケケケ、要は同じ魔軍といっても仲間とは言い切れな～いって感じな訳よ」
「……そうなの？」
　同じ使徒である火炎書士とユキの言葉に素直に聞き返す。するとその背後でカイゼルが赤い目を輝かせて拳を握り込んだ。
「アァッ!?　俺が部下にしてやろうと思った人間共を皆殺しにしようとしてやがる奴らなんか誰が助けるか！　むしろ死ね！　人間の価値も分かんねぇ間抜け野郎共が……！」
「……なぁに？　カイゼル。もしかしてあなた、使徒どころか全員自分の部下にしようとか考えてたのぉ？」
「ああ、上手くいけば魔物から助けてくれた魔人として俺様に忠誠を誓うだろ？　親父のとこにいる人間共みたいにな。それをあいつらは……！」
「カイゼル様ってばそんな無駄に壮大なこと考えてたんですか……」
「うちのポンコツ主並みに馬鹿なこと考えてる？」
「さすがはレオンハルト様の息子ですわね！」
「うるせぇお前ら！　特にキャロルは親父の名前出すんじゃねぇっての！」
　カイゼルの企みを聞いた皆が呆れるような様子で囃し立てる。
　そんな中で、ミストラルと同じ様に、微妙な――言ってしまえば、神妙な少し真面目そうな表情で黙っていたアルベルトは息を吐いてからカイゼルに、
「……カイゼル。外の人間を信用しすぎだ。ずっと外で生きてきた人間と、うちの城や人間街で生きてる人間は違う。部下にしたところで裏切られるのがオチだ」
「そりゃあそうかもだけどよぉ、そこは俺様の溢れるカリスマでなんとか――」
「――カイゼルじゃ無理よねぇ。ま、私みたいに可愛いくて美しいアイドル魔人ならファンになりたいって傅くかもだけどぉ？」
「あぁ!?　なんだとテメェ!?」
「あら、なによ。やる気ぃ？」

「っ……」
カイゼルとルイゼル。二人の魔人が再び睨み合う。それをミストラルはルイゼルの斜め後ろで見るしかないのだが、
……っ、本人たちからしたら何気ない喧嘩でしょうけど……使徒の身でも結構クるわね……。
やはり魔人というのは改めて化け物だということを思い知る。正直、使徒になって少しは差が縮まったかもしれないと思い、昔の目標が若干再燃しかけたのだが……魔人同士の圧の伴った睨み合いなどはまだキツく、差がまだまだ大きいことが理解出来る。
「おい、いい加減にしねぇか!! またオレの前で喧嘩する気か!?」
「っ……す、すまねぇ、アルベルトの兄貴……ルイゼル相手だとついカッとなっちまって……」
「そ、そうよぉ、ちょっとは大目に見てよねぇ、アルベルト兄様」
「……まったく、お前らはガキの頃から変わらないな。別に喧嘩するくらいなら構わないが、周りを巻き込むのはやめろ。オレや白兎姉ならともかく、下の奴らが苦労する……」
「あぁ? あいつらが俺様達の喧嘩程度で苦労するタマかよ。むしろあいつらも喧嘩に混ぜてやると中々――」
「――何か言ったか?」
「な、なんでもねぇ……」
しかし、アルベルトが声を荒げたり、睨みを利かせると直に大人しくなる辺り、魔人の中でも上下関係があるのは確かなようだ。
それもやはり強さが関係しているであろうし、改めて元部下も凄まじい強さなのだと理解する。胃が痛くなってきた。
……というか、白兎って名前にも聞き覚えがあるのだけど……まさか……。
嫌な予感がする。いや、むしろ嫌な予感しかしないので考えない方が良さそうだ。他にも弟や妹がいるらしいし……うん。これから無事に生きていけるか不安過ぎて心の動きが麻痺してきた。
もはや心配しても無駄だろうな、とミストラルは溜息をついて崖の下の炎を見やった。酷い熱気を受けながら、ここまで来るのにも炎を

迂回したりして面倒だったが、ここから帰るのも面倒だなぁ……と、そう思っていると、
「……はぁ、さっさと帰るか。使徒作りたかったけどなぁ……」
「――そんな目的で城を飛び出したのか。はぁ……呆れるね……」
カイゼルのその何度目かの言葉に、この場にいる者から返答が来た。
しかしそれは、先程までこの場にいない者の声であり、誰もがその者を見る。
カイゼルの背後。崖の端に立っているのは、ミストラルと同じ、カラーの特徴を持つ黒髪の使徒で、
「あっ、ハンティさんですのー」
「げっ!?　出やがったな妖怪瞬間移動ゴリラ!!」
「！　始祖様……」
他の皆が反応するのに合わせて思わずミストラルは畏まった。
その相手――ハンティのことは当然知っているのだ。カラーの始祖であり、魔人レオンハルトの使徒でもあるハンティは、ミストラルも何度か彼女が里に訪れた際に話した目上の相手であり、さすがに面倒くさいとは言ってられない相手でもある。
そしてハンティであるからこそ、突然現れたことにも納得が行く。彼女の瞬間移動という魔法であるならば、この場に急に現れるのも訳なきことだ。
同じ使徒になったとはいえ、とても同格とは言えない相手。そのハンティにカラーの作法に合わせて礼をすると、ハンティの方もこちらに気づいて、少し驚き、直ぐに眉間に皺を寄せた。
その意味は、
「あんた……ミストラル？　っていうかその気配……あんたも……」
「……はい、始祖様。その……この度、魔人ルイゼル様の使徒にならせて頂いて……その……」
「はーい☆　ミストラルちゃんはルイゼルちゃんの使徒でーす。よろしくしてあげるんだゾっ☆」
「……そういうことです」

こちらの隣に立って目の辺りでピースをする謎のポーズを決める主に凄く文句を言いたくなったが、何も言わずに同意する。
するとハンティも微妙な表情で頭を押さえ、
「……あー、うん。大体察したからいいよ……はぁ、頭が痛いけどね……」
と、ハンティが一度間を置く。それはそれとして、と、表情を一変させて睨むようにカイゼルを見ると、
「……あんたの方は――何やってくれてんの……さっ!!」
「ぐあぁっ!?」
ミストラルの視界の中、ハンティが一瞬で消えたかと思うと、次の瞬間にはカイゼルの真横に移動してカイゼルの顔を思い切り殴っていた。グーで。
その瞬間、キンッ!! と弾くような高く重い音――おそらく無敵結界がハンティの鉄拳を弾いた音が響くが、それに反してカイゼルは地面へ倒れ込む。
すぐにカイゼルは頭を抑えてハンティを睨むと、
「や、やめろ鬼ゴリラ!! くそっ、相変わらず無敵結界の上からボコボコ殴りやがって……! 親父の使徒の癖に生意気だぞ! こっちは魔人だってこと忘れてんのか!? 上下関係忘れてんのか!?」
「――はっ、あんたみたいなひよっこ魔人の言うこと聞くわけないでしょ? せめてあたしから一本取れたら考えてあげるけど……それにまだまだ子供だし? 子供は大人から躾けられるもんで――しょっ!」
「ぐがっ!? ぐっ……だから殴るんじゃねぇっ!! 子供に手上げるなんざ最低だぜ!? 躾にも限度ってもんがあるだろうが!!」
「いやぁ……魔人の子供って無敵結界があるから躾が楽でいいよねぇ……幾ら殴っても怪我しないし」
「ダメージはなくても衝撃はあるっていつも言ってんだろカラーゴリラ!! 頭にも筋肉詰まってんのか!? ――あ、違う、今のはなし。違うからやめろ、やめろって!!」
「――言葉遣いが全然なってないよねぇ?」

「わ、わかったっつーの……くそ……す、すみませんでした……は、ハンティさん……」
「ん。そうそう。そうやって素直だと子供らしくて可愛げがあるってのに……成長が早いってのも考えものだよね」
「どの口が言いやがる……」
ハンティがボコスカとカイゼルを無敵結界の上から殴っていると、やがてカイゼルが反抗を諦めて大人しくなる。
それを見てなんとも言えない気分になってしまうが……よく見ると、同じ魔人であるアルベルトやルイゼルも若干嫌そうだったり、笑顔が引き攣っていたりするため、始祖様は意外と恐れられているらしい。さすがは最強の使徒と言われているだけはある。
そんなハンティに対して、この中で1番立場が上位であるアルベルトが腕組みをやめて向き直ると、
「……どうしたんだ、ハンティさん。パパからの伝言でもあるのか？」
「ん、まあそんなところ。……それより、アルベルトの方は別に畏まる必要はないんだけど、いつになったらその呼称は治るのさ？」
「……カラーとしての癖だ。あまり言わないでくれ」
「いやまあいいんだけどね」
ハンティはそこまで気にしてないと言う風に軽く笑う。すると横のカイゼルが、
「くっ……なんでアルベルトの兄貴はよくて俺様は駄目なんだ……」
「諦めなさいよぉ。ハンティさんにはルイゼルちゃんの可愛さすら通用しないんだから……また生意気なこと言ったら殴られるわよぉ？」
「納得いかねぇ……」
……またこそこそとルイゼルと会話してるけど、明らかに聞かれてるのよねぇ……。
まあそれをハンティは無視しているし、そこまで強く注意してるって訳でも気にしている訳でもないのかもしれない。あくまで躾だし、意外と甘いというか。暴言くらいなら普通に許すまでもなく実は気にしてない様に見える。
「それはそれとして……早めにこの辺りから離れるようにって伝えに

来たんだよね」
「……何かあるのか？」
「ん、まぁ……ちょっと、危ない奴が――、……っ!!」
ハンティの要件にアルベルトが問い返し、ハンティが理由を説明する途中。
不意にハンティは何かに気づいて、崖の方を向いた。
――轟音と共に、極太の光線がこちらも含めた周囲に走ったのは、その直後の事だった。
「うぉっ!?　なんだぁっ!?　カチコミか!?」
「カッチンコッチン光線？　こっちも撃つ？　撃っちゃう？」
「ユキちゃん、そんなこと言ってる場合ぃ？」
「そ、そうですよ!!　これは……火炎ちゃん的に結構危険水域っていうか……」
「あんたら、あたしが受け止めてるとはいえ……呑気だねっ――と!!」
光の光線をハンティが受け止め、やがて弾き返すことに成功する。
しかしだからといって空気が弛緩することはない。むしろ、光線が飛んできた先を見て更に緊迫した空気が流れた。
その先を見てアルベルトが鋭い目を更に細くし、
「――南西か。あっちは……人里の方だな」
「間違いないですわ！　というか、アッティラ大将軍の光線ですわね！」
「見れば分かるわよ……ああもうっ。面倒な……」
アルベルトの言葉通り、光線は人里と思われる方向。その場所から幾つも周囲に向かって無差別に飛んでいるようだった。
そしてそのアッティラという名前と大将軍という役職名――いや、種族名に心当たりがあり、ミストラルはその心当たりを面倒と称したハンティに向かって問いかける。
「……大将軍、ということなら、一応味方ということではないのですか？」
「普通ならね。でもアッティラがあんなに暴れてるってことは、味方も敵も関係ないってことで――、っ！　また来る！」

「っ!!」
「っ!?」
「わーーー!?　やっぱまた来たーーー!?」
　ハンティの言葉通り、再びこちらに向かって飛んできた光線は、今度はアルベルトの無敵結界によって受け止められる。
　驚いた自分や、叫ぶような声を上げた火炎書士が落ち着き、アルベルトが腕を払う。魔物大将軍の攻撃は無敵結界であれば弾けるが、僅かに衝撃を受けて地面に擦り跡と踏み込んだ際の足跡が残った。
「……ま、こんな感じで無差別に敵も味方も殲滅していくのがアッティラの戦いなんだよね……迷惑なことに」
「……面倒なんですね……」
　随分と厄介な性質だな、とまたしても胃が痛くなってくる。
　これだけの面子であれば安全そうではあるが、それでも危険があることには変わりないし、見てみた限り、万一自分が受け止めれば重症を負いそうでヒヤヒヤしてしまう。
　しかし他の面子――特に魔人は怒りの方が大きいみたいで、
「俺様達に攻撃を仕掛けてくるとは良い度胸じゃねぇか……！　よし、反撃しようぜ!!」
「ファンでもない魔物の分際でアイドルであるルイゼルちゃんに攻撃してくるなんて……生意気だゾ☆」
「……待て。やるならオレ1人で行く。お前らは手を出すな」
　と、それぞれかなりやる気であった。
　まあ魔人であるから当然とはいえ、あの凄まじい攻撃に対して難なく勝てる気でいるのが頼もしくもあり、恐ろしくもある。少なくともただの使徒でしかない自分達では勝てそうにない。――約1名は別だが。
「……まあ別にアッティラ程度、やるのは訳ないし、どうせ先か後かって話だけど……面倒と言えば面倒になりかねないね……」
「あァ!?　よく分かんねぇが、この俺様が魔物大将軍程度に負けるとでも思ってんのかご――ハンティさん!!」
「落ち着きなさいよぉ。別にルイゼルちゃん達が負けるとは言ってな

いでしょお？」
「……そうだな。少し落ち着け、カイゼル。……どういうことですか？　ハンティさん」
　身体から昇る炎がカイゼルの戦意を示すかのように強くなるが、すぐに妹と兄に窘められる。その言葉に続いて問いを投げたアルベルトに対して、ハンティは人里の方に視線を向けながら、
「……そもそもあんたらに帰ってくるように伝言しに来た理由が、これからここに来てアッティラを倒すかもしれない……〝人間〟の存在にあるってことさ」
「！　人間だと……？」
　ハンティのその言葉にアルベルトだけでなく、その場にいる者達が一様に驚いた様子を見せる。
　それは自分の主であるルイゼルも同様で、若干苦笑気味の笑みを浮かべながら、
「人間って……あはは、ハンティさんって冗談お上手～☆　人間が魔物大将軍に勝てる訳ないじゃな～い？」
「ルイゼルの言う通りだぜ！　そりゃ、多少はやれる人間がいるってのは分かるけどよぉ、幾ら何でも魔物大将軍に勝てる訳がねぇだろ？」
　ルイゼルとカイゼルの言に、ミストラルも心の中で同意する。
　人間と魔物の力の差は圧倒的だ。それはこの世界に生きる誰もが知っている。
　ましてや魔物大将軍など、人の手に余る怪物だ。
　ペンシルカウの防衛隊長を務めていた頃から魔物大将軍という存在を見て、そして今もその力を目の当たりにしている自分からすれば、そんなものは夢物語と言う他ない。
　力の上では魔人と同等とまで言われる魔物大将軍に勝てるのは、それこそ魔人しかいない。後はハンティの様な例外くらいだろう。それでもカラーの始祖、その使徒だ。
　人間はこの世界だと圧倒的な弱者であり、搾取される生き物。生まれた瞬間から決まっている生物としての差を埋めることは出来ない。

それは自分が何よりも理解していることだ。
だからそれを馬鹿馬鹿しいと、始祖様には悪いが真面目に聞くことはしなかった――その名がハンティの口から飛び出すまでは、
「……つまり、オレ達でもその人間は手に余るということか？」
「そういうことだよ。その人間――ガイって言うんだけど、そいつには何があっても近づくな。近づかせるな。それがレオンハルトがあたしに告げた命令であり、伝言の内容だよ」
「……え」
アルベルトとハンティの会話。その最中に出た1人の名前に、ミストラルは虚を突かれたように小さい声を吐き出した。
聞いた瞬間は理解が及ばない。しかしややあって、その内容を理解した。
……どういう、こと？　ガイって、あのガイ？　まさか……。
まさか、そう、まさかと思う。偶然ではないかと。
ガイという名前の人間は、知っている。他ならぬ、己がかつてペットとして飼おうとした人間の子供。同居人であり、召使いであり……そして、魔法を教えた弟子でもある少年だ。
今も生きていたとしたら、もうすっかり大人となっている事だろう。容姿は悪くなかったし、良い男になっている筈だ。
それに強さも――と、思う。あの才能は人間にしては破格だったと。
そうしてハンティが告げた〝ガイ〟という人間と、自分が知るガイという人間。それが一致する確率を考え、しかしその答えを口には出さずに話を聞く。こちらの考えを待たずに会話は進み、
「おいおい!!　だからって俺様達に芋引けって言うのか!?　攻撃までされて黙ってたら魔人の名が廃るぜ!!」
「……悪いけど拒否権はないよ。これは身内としての提案でも相談でもないからね。魔人筆頭、魔軍参謀である魔人レオンハルトからの〝命令〟。当然、あたしもあんたらも、それに従うしかない」
「ぐっ……それは……」
わかるよね？　という意味を込めたハンティの真剣な眼差しにカ

イゼルを始め、誰もが黙って頷く他ない。
むしろその魔人レオンハルトが最大限に警戒して絶対に出会わないように命令するようなガイという人間に対する不気味さが胸の内に浮かび始めていた。
ミストラルだけはずっと考え事をしているが、何を言えるでもない新参者の使徒の立場であるため、何も言えない。
そもそもこの事を言うのが正しいことなのかも判断がつかない。
――いや、使徒としては間違いなく話した方が良いのは間違いなかった
だが……やはり、齎された情報の重さを未だに受け止めきれていない。衝撃が大きく、ミストラルは黙り、考えることしか出来なかった。
「……まあまだ時間的な余裕はあるし、あたしは軍の撤退と人間の退避くらいの時間を稼ぐくらいはするけど……あんたらも２０分以内にはここから離れなよ」
「む……よし、ハンティさん！　それなら俺様も手伝ってやるぜ!!」
「は？　あんた話ちゃんと聞いてた？　あたしは瞬間移動があるからいざとなった逃げられるけど、あんたは――」
「ハッ！　いざとなったら返り討ちに――あ、いや違う。飛んで逃げるから平気だ！　ということで俺様にも手伝わせろよ！」
「カイゼル……あんた……」
「もぉ～、カイゼルってばお馬鹿ねぇ～……」
「み、見事に目的がバレてますよ！　カイゼル様！」
「さすがはレオンハルト様の息子ですわ！」
「キャロルちゃんそれしか言ってなくね？」
「……」
カイゼルが拳を握ってハンティにそう頼み込む――が、明らかに何か別の狙いがあるようであり、カイゼル以外にはそれはバレバレであった。
だがハンティは呆れながらも、何かを思ったのか、じっと、しばらく考え込み、
「……はぁ、まあ、最悪あたしが連れ帰ればいいか……」

と、小さく独り言を呟いて、
「――それじゃちょっとだけ仕事を手伝って貰うよ」
「お？　おお!?　マジでか!?　クハハッ！　さすがはハンティさんだぜ！　話が分かるじゃねぇか!!」
「えっ!?　い、いいんですか？」
　まさか許可するとは思ってなかった一同を代表して火炎書士がハンティに問いかける。すると目を細めたハンティが微妙そうに、
「ま、カイゼルだとこの山火事の中で難なく動けるしね……ただ、カイゼル。あんたはあたしと一緒に動いて貰うからね。自由にはさせないよ」
「おお！　いいぜいいぜ!!　よっしゃ!!　気合入ってきたぜ!!　言ってみるもんだなぁ、おい!!」
　カイゼルの喜びに比例して炎の勢いが強まる。するとそれを生み出した氷で冷やすようにしながらルイゼルが、
「よくやるわねぇ……幾ら目的の為とはいえ」
「クハハ、そうだろう!!　お前も来るか!?　ルイゼル!!」
「やめとく～、ルイゼルちゃん、疲れちゃったし、帰ってお風呂にでも入るわぁ――ほら、ユキちゃんにミストラルちゃん、帰るわよぉ」
「クケケケ、合点承知の助！」
「……わかったわ」
　と、ミストラルはルイゼルに着いてその場を後にしようとする。同じくユキや、名前は呼ばれてないが、アルベルトも並んだ。
　すると去り際に背後から、
「つれねぇな。ま、いいけどよ」
「えっと、それじゃあ私はどうしましょう……？　一応、お目付け役として来てるんですが……」
「んー、あたしがいるからアルベルト達と一緒に帰って先に報告してきたら？」
「そうしろ火炎書士!!　大丈夫だ！　〝お土産〟はちゃんと持って帰ってきてやるからよ!!」
「……そこはかとなく不安ですが、まあそういうことなら……」

そう言って、火炎書士も帰宅組に加わる。
そうして残されたハンティとカイゼルを気にしながら、ミストラルは山を降りていくのだが、
……ガイ……本当にガイなのかしら……。
やはり心の中では、これからここに来るというかつての弟子の事を考えていた。

鋼の意志

――もう体の感覚は殆ど無かった。
「ひぃぃ！　や、やめてくれ、アッティラ様……！　ぐあああああああああっ!!」
「なんでこんなところで……こんな目に……っ！」
「に、逃げらんねぇ！　逃げらんねぇよぉおおおおおおおおっ!?」
「だ、誰か……誰か……助けて……くれ……っ！」
しかし五感は生きている。体力も、まだ辛うじて残っている。
耳に届くのは周囲の悲鳴、叫び、助けを求める声。
それらは眼の前にいる巨大な魔物から攻撃を受け、逃げ惑う魔物兵の物であった。
だがロランは、それらの声が、魔物だけのものではないと思っていた。
今、この戦場は地獄で、遠くない未来――いや、今まさにこの場所から放たれる光線か、山火事、あるいは包囲する魔物兵によって逃げようとする人々にももたらされるであろうと。
だからだろうか。周囲の魔物兵すら哀れに思う。悲嘆を誘う。
彼らとて、こんな場所でまさか味方に殺される羽目になるとは思っていなかっただろう。
災難であり災厄。非道な行い。
魔物大将軍アッティラは正に、今世界に蔓延る傲慢な魔物そのものを体現していた。
「ハハハハッ!!　実に、実に良い気分だ……!!」
「っ……く、なんて、傲慢、な……！」
破壊の中心でアッティラは嗤う。それを見て、酷い嫌悪の感情が湧き上がる。
人間を殺すこと――だけではない。
そもそもこちらから人が死んでいるかどうかは分からない。確認出来るのは魔物が死んでいるところだけ。

そう、だというのにだ。このアッティラという魔物は自分と同じく、味方の魔物の死しか見ていないのに、こんなに喜悦に歪んでおり、
「ハハハ……ゴミ人間、随分と不思議そうだな……？　魔物兵を殺して喜んでる私が不可解に見えるか……？」
「っ……」
地面に這い蹲る自分にアッティラは気づき、そんな声を掛けてきた。まさか理性があったとは。てっきり暴走して理性がないものと思っていたため、不意を打たれたように表情を崩してしまう。
「ハハ、お前みたいな人間の雑魚には分からんだろうなぁ……？　この圧倒的な力！　強者としての権利を!!」
「……強者としての……権利……？」
ズシン、ズシン、とその巨体に見合った重量があるのだろう。ゆっくりとこちらに歩みを進めながらアッティラは話を続ける。
もっとも、その間も砲撃により殺戮の手は緩んでいない。彼は周囲で苦しむ部下など歯牙にも掛けずにこちらの質問の答えともなる力強い言葉を発した。
「そうだとも！　強者は弱者に何をしてもいい！　これがこの世の理だ!!」
ふざけた思想をアッティラは語る。両手を広げ、周囲の魔物兵を殺していることを確かに自覚しているというのに、
「つまり……強者である私が、弱い人間や魔物を幾ら殺したところで、罪にはならない！　今私がここに健在でいることがその証明だ……！」
「ぐっ……ふざけるな……狂った化け物め……そんなことが……！」
「ふざける？　狂っている？　――ハハハ！　ふざけてなどいないし狂ってもいない。貴様だって分かっている筈だ！　人間としては強い貴様なら、奪っても罪とならないこの世界の恩恵を人並み以上に甘受していない筈がない！」
「……っ」
アッティラの続く言葉に歯噛みするだけで何も言えない。
それはこの外道の言葉を、半ば認めてしまっていることと同義だっ

た。
　だがそれでも、ロランは辛うじて言葉を捻り出す。声を出すのもキツいが、それでも言わざるを得ない。
「そんな世を作ったのは……お前達魔物だろう……！」
「そうだとして、だからどうした!?　なんと言おうとこれが世界だ！　どれだけ醜い主義を、愚かな主張があったとしても！　逆に、どれだけ正しい主張や行動があったとしても関係ない！　強い奴の思い通りに世界は進むのだ!!」
　炎と血で彩られた道をアッティラは踏み潰して進んでくる。味方の血が多分に含まれていることなど歯牙にも掛けずに。
「善悪とは強弱だ！　そして、お前たち人間は弱い！　強者である我々に何をされても――いや、強者である我々に虐げられるためにお前達は存在するのだ！」
「っ、違う……ッ！　人間、は……お前達魔物に虐げられるために生まれてきた訳では――」
「――何も違わない！　私は正しい！　どれだけ残虐な行為に手を染めても実際に私を脅かす者はいないのが証左だ！　見てみろ！　私はここで健在だぞ？　大勢の人間を、殺してきた！　年端も行かぬ子供を踏み潰し！　妊婦の腹を掻っ捌き！　泣き喚く男共を磔にして燃やし、その前で妻と娘を犯し、殺した子供の肉を親に食べさせてやった！　戦場では味方の魔物すら殺してきた私が、今こうして生きている！　それが何よりの証拠！　私は強い！　だから何をしても正しいのだ！」
「違うっ!!　それは――が、ふッ……！」
　とうとう、アッティラがこちらに到達する。
　その巨体を支える脚が、己の片脚を踏み潰した。そうしながらアッティラはこちらを愉悦に満ちた表情で見下ろす。
「くくく……何も違わない。私は正しい。――だが……ハハハ、長い間、ご苦労だったな……！　この様な隠れ里でこそこそと何百年と隠れ潜み、反乱の意思を絶やさなかったことだけは褒めてやる……！」
「ぐ、あっ、あああああああああっ……!!」

ぐり、ぐり、と足を地面に擦りつけるようにして体重を乗せ、足を念入りに踏み潰された。
酷い激痛で声が抑えられない。それを楽しそうに見下ろすアッティラを何とか睨みつける。
……そうすることしか、出来なかった。
「思えばお前達には随分と苦労させられた……魔物討伐隊などとふざけた名前で何百年と活動し、魔軍の監視を欺いた……ハハハ……だが、それでも私の手腕に掛かればこの通りだ……！　ムシケラはムシケラらしく、ずっと隠れ潜んでいればいいものを、分不相応な願いを抱くからそうなるのだ！　ハハハ……！　……まったく……レオンハルト様の許可がもっと早く下りていれば、それこそ早く……１００年前には滅ぼせたものだが……」
……な、に……？
聞き捨てならない言葉が耳に届く。アッティラが小声で呟いた言葉だが、その声はしっかりとこちらの耳に届いた。
しかし、どういうことだと声を出す前に、アッティラは気を取り直したようで、もう片方の足を踏み潰し、こちらの意味のある言葉を潰した。
「が、あああああああっ……!!」
「フフフ！　悔しいか？　絶望したか!?　これがお前達の〝現実〟だ!!　これが〝世界〟だ!!　お前達人間では我々魔物には勝てない！　例えお前のような、兵どもを上回るような人類最強の戦士だとしても、我々のレベルからしたらムシケラ！　カス！　ゴミクズでしかないのだ！」
「っ、はぁ……はぁ……」
もはや体の感覚がない。
息も絶え絶えだ。激痛は絶え間なく襲ってくるが、それは問題ではない。
何よりも苦しいのは……己の弱さに対してだ。
情けない。魔物に反抗する勢力の、その意志を受け継いできた者として。

これ以上進むことは出来ない。自分はここまでだ。それが理解る。自分は、もうじき死ぬ。
だが、それでも――――人類の希望は失われていない。
「……――けるぞ……」
「……何？」
それでも、言う。
声を絞り出し、告げる。
情けないことこの上ないことは分かっている。だがそれでも、言ってやった。
「……お前達は……負ける……お前達が下に見る……人間の……手によって……ッ!!」
「……」
アッティラがそれを聞いて、黙る。
虚を突かれた様だった。だが、直ぐに嘲笑う声が漏れ出て、
「……くく……はははは……！　何を、何を言うかと思えば……そんな馬鹿げた妄想を口にするために言葉を絞り出したのか？　もはや喋るのも辛そうだが……ははは！　やはり人間は愚かだな……!!」
アッティラが嗤う。心底可笑しいと言うように。
「自分で言うのもなんだが……魔物大将軍程度にこの体たらくでどうやって勝つつもりだ？　我々の戦力は圧倒的だ、お前が何百人、何千人といようと、我々は打ち崩せない。叶いもしない希望を夢見るなど愚かだな……！　やはり人間は頭が悪い……これで弱いときてるのだから救えないな……ハハハ、愚かな下等生物が……！」
アッティラが嗤う。――言い聞かせるように。
「よくもまあ、そんな妄言を……！　見てろ！　お前の前で全て奪ってやる！　大人も子供も老人も、積み上げてきた物も全て、無惨に殺して壊して奪い去る……！　人類文明を破壊し尽くしてやる……!!
ほら、どうした？　嫌なら抵抗してみろ。そのゴミのような力で私を退けてみろ！　出来ないのか？　……ああ、悪い。もう立てる力も残っていないんだったな。ハーハッハッハ!!」
その嘲笑う姿を見て、告げてやる。

「……本当は」
アッティラという魔物の、芯にあるモノを。
嘲笑うように、口の端に笑みを形作り、
「――怖いんだろう……？　僕達、人間のことが……」
「……あ……？」
今度こそ、アッティラの言葉が止まった。
しかしそれは一瞬。アッティラはそれを聞いて直ぐに、自己防衛に因るものか、直ぐにそれを笑い飛ばそうと声を上げた。
「……ハハハ!!　ハハハハハ!!　何を言うかと思えば……怖い？　何を言っている！　私のような強者が、人間を怖がる理由などないだろう！　愚かだとは思っていたが、まさかそれほどに下等だったとは！　つくづく人間は救えないな！　やはり殺し尽くしてやったほうが――」
「……ははは……自分が、愚かで下等な人間を歯牙にも掛けない強さだと言うなら……それこそ、殺し尽くそうとする理由なんてないだろう……？」
「……貴様」
それを告げると、アッティラの声色が変わった。
先程までの嘲笑う声ではない。真に迫った声色だ。
まるでそれをやめろと、子供のように、聞きたくないと頼み込むような声色。
だが当然、それに構うことはしなかった。
「見ていて……その話を聞いていてなんとなく分かったよ……アッティラ……お前はどういう訳か、人間を怖れている……だから、殺すんだろう？　いつか……いつの時代か、人間の中に、自分を……自分達魔物を脅かす存在が現れるかもしれないと……」
「……黙れ」
「敵ながら……さっきから聞いていて、哀れというか……必死すぎて可笑しかったよ……。人間を、随分と意識してくれてるんだね……？」
「……黙れ……」

「本当に強いなら……それこそ、魔人のように、人間を怖れてないなら……一々目の敵にする必要もない……殲滅にこだわる必要はない……恨みがあるなら別だけど……そういう訳でもない……」
と、なれば。
「本当は怖くて怖くてしょうがないんだろう……？　ははは……はぁ……はぁ……なんとも笑えるね……最強の魔物大将軍と人間の中で怖れられるあのアッティラが、本当は誰よりも人間を怖がってるなんて……傑作だ……なら、この後現れる人間はきっとその怖れを証明して――――」
「――黙れえええええええええええええええええっっっ!!!」
「ッッ――、ぁ……ッ」
瞬間、アッティラはその感情を爆発させ、こちらを思い切り蹴り飛ばした。
意識を飛ばす――いや、飛ばさない。
何とかそれに耐える。もう死ぬ。やがて死ぬ。
だがそれでも……自分が生きている限り、アッティラをここに留めることが出来るなら、やはりまだ死ぬ訳にはいかない。
その時間で多くの人間が救えるかもしれないのだ。
……まったく、自分の弱さが嫌になるね……。
「黙れ黙れ黙れェェ!!　こ、のッ……!　このっ!　ムシケラがァッ!!　黙って聞いてればそんな妄言をよくもォォ……!!　私が人間を怖れてるだと……ッ!!」
「ッ――」
アッティラが己の身体を殴る。蹴る。吹き飛ばす。
身体がボロボロと削れていく。壊れていく。もはや欠損していない部位は存在せず、もう半ば死んでいる。
――だがまだ生きている。
なら死ぬ訳にはいかない。足止めを続ける。
……僕程度じゃ、こうやって足止めするのが精一杯か……。
「クソ!　クソクソクソッ!!　クソッタレがぁあああああああああ!!
お前達人間は……ッ!!　どこまで私を怒らせれば気が済むのだ

……!!　やはり許せんッ!!　人類文明は悪だ!!　人間は殲滅するべきだ……!!」

「――――」

もはや、言葉は出ない。出せない。

何故意識があるのかが分からない。もう身体の原型はなく、あらゆる臓器が破壊され、おびただしい量の血を流している。

心臓だってもう動いていない。もう、死ぬ。

だが、こうやっている間は確実にアッティラを留め、人を助けられる確率が上がる。

――なら死なない。勝てないが、少しでも人を助けるために最善を尽くすだけだ。

……でも――ガイ。君ならば……。

「死ね!!　死ね死ね死ね死ねェェェッ!!　早く死ね!!　何度でも死ねッ!!　何度でも殺してやるッ!!　どれだけ生まれてこようと、全員殺してやるッ!!　だから死ねッ!!　お前の様な人間がいるから、私はァァァッ!!」

もう、死んでいる。

頭が千切れて飛んだ。もはや身体に意識はない。死んでいる。

だが……未だ身体に残る何かが己としての自我を保っている。

……きっと君なら、この世界を……大勢の人間を救える。

自分には出来なかった。それだけの力がなかった。

祖先の意志を、血を継いでいるからといって、力が無ければ大事を成すことは出来ない。

他力本願で……自分の力では、ほんの僅かしか救えずに申し訳ないと思う。

しかし、それも悪くなかった。

……結局、血には逆らえなかったってことかな……。

逃げようと思えば逃げられただろう。生き残る道も確かにあった。

だが結局、自分はここに残ることを選んだ。

囮となって敵を引きつけ、時間を稼ぎ、里の皆を逃がす道を選んだ。

勿論、倒せれば1番良かったけど。

……これで良かった。
誰かの為に命を投げ出すなんて、馬鹿げているとずっと思っていたけど。
誰かにその無謀な願いを託すなんて絶対に嫌だと思っていたけど。
でも実際にやってみれば。
――思ったより……悪くない気分だね……――。
だから苦しみはなかった。
最期に、確かに――〝彼〟の存在を感じたから。

「はぁ……はぁ……ッ！」
その惨劇の中心で、アッティラは息を切らした様に荒い呼吸をしていた。
疲れた訳ではない。戦闘が激しかった訳でもない。
だがその相手の言葉に酷く掻き乱され、ひたすら痛めつけたのだ。
死人、死体同然の人間の男に、ひたすら暴力を見舞い、地面の染みになるまで踏みつけてやった。
だが、奴の首だけが少し離れた場所に転がってしまっている。滅茶苦茶に暴れるように暴力を与えたため、途中で運悪く身体から千切れたのだ。
だが、あれを踏み潰せばもうあの男の痕跡は消える。
「……ハハハ……どうだ……！　私は生き残ったぞ……!!」
アッティラはその男の首も消し飛ばしてやろうと早足で近づく。
再びの笑い声。しかし、その声に余裕はない。
戦闘による傷は殆どないのに、アッティラはまるで、焦燥したように余裕のない様子で笑っていた。
「魔物に反抗するからこうなるのだ……!!　下等な生物の分際で……！　我々魔物に逆らうな……！」
もはや彼は何も答えない。もう死んでいる。
だがそれでもアッティラは続けた。その言葉を否定するために。
「恐怖するのはお前たち人間の方だ……！　下等な人間め……！　お

前達など、生きてる価値などない……!!　全て私が殺してやる……この、魔物大将軍としての力で……!!」
そう言って、アッティラは右足を上げた。
奴の頭を踏み潰してやろうと。憎しみと怒り。
そして何よりも強い――もう1つの感情を込めて、足を踏み下ろす。
「殺し尽くしてや――」
――だが、
「――――どけ」
「な……ガあッ――!?」
足を踏み下ろそうとするその刹那。
アッティラは突如として湧いた声と、その何者かに蹴り飛ばされ、約15メートルの距離を吹き飛んだ。
地面を引きずり、建物の残骸を吹き飛ばす。そうしてようやく止まったアッティラは、しかしダメージはそれほどでもなく立ち上がり、自分を吹き飛ばした相手を見た。
「ぐ……何者だ……?」
「……」
「！　……人間……?」
その者は、何も答えなかった。
だが視界で確認する。
赤く染まった背景。火の粉舞う里の中央。アッティラが殺した男の顔を見下ろすそいつは、確かに人間だった。
顔の右側、右目をその黒い髪で隠した陰気だが若い、容姿の整った人間の男。
その腰元に黒い剣があることから、おそらく人間の戦士。
その者は何を考えているのか、しばらく死んだ男を眺め続けていたが、やがてこちらを見ずに声が飛ばしてきた。
「……お前は、魔物大将軍か?」
「……そう、だ、が……貴様は……――」
と、そこまで言ったところで思い出す。

黒髪の、右目を隠した黒い剣の剣士。
それは確か、事前に情報にあった男で、
「……ハハハ！　そうか、貴様がガイか!!」
「……だとしたら？」
その返答に、やはり、とほくそ笑む。
この人間こそが、レオンハルトが捕らえてくるようにと命令した――その標的。
全て殲滅する気でいたし、そもそも見つからないだろうからどう言い訳しようかと理由を考えていたところだが、こうやって見つけられたのは僥倖だった。
「私と一緒に来てもらおうか!!　――いやなに、返答は言わずともいい！　無理やり捕まえて連れていくだけだからな！」
「……」
少々痛めつけるが構わないだろう？　と敢えて相手に問いかけると、そのガイと思わしき男はやはり無言のままこちらを見ようともしない。
舐めているのだろうか。それとも、恐怖で身を竦ませてしまったか。――まあ何でも構わない。とにかく、こいつは適度に痛めつけてからレオンハルトに差し出そう。
「良かったな人間！　この場所で生き残るのはお前だけだ！　ハハハ！　嬉しいだろう？　お前だけが生き残れるのだからな!!　ハハハハハ!!」
「……そうだな。違いない」
「ハハハ！　分かってるではないか！　弁えてる人間は嫌いではないぞ！　――どちらにせよ、腕の一本や二本は」
引き千切ってやるがな……!!」
と、アッティラは背中の砲塔によって加速し、その男に向かって凄まじい速度で拳を振り上げた。
――だがしかし、アッティラは直ぐに気づく。そうするべきではなかったと。
己を吹き飛ばした相手であるということもそうだが、彼の目を、そ

の気迫を見て、気づく。
その人間の男は、まさしく――
「――この場で生き残るのは……私だけだ」
「……へ……？」
一瞬。アッティラが気づくことの出来ないその一瞬で。
アッティラはその足と砲塔を斬り飛ばされた。
「――ッ!!??　ガアアアアッ……アッ……!?」
理解が及ばない。
酷い痛みが、それこそ、アッティラが感じたことがなく、ただただ与えるばかりだった類の痛みがアッティラを襲う。
しかし、何故、と。
アッティラは人間の力量を正しく理解している。
それこそ、何百年と戦ってきたのだ。ある意味、どの魔物大将軍よりも人間のスペックに詳しい。
だからこそ、どれだけ強くとも魔物大将軍の身体を一太刀で斬り捨てるなど、出来る筈がないと思っていた。
だがしかし、現実にそれが起こった。
機動力を失い、地面に倒れ込むアッティラは何とか、辛うじてそれを理解しようとする。
だが、それで出てきた結論は、
「……ま、まさか……貴様が……」
「……」
アッティラは冷たい目でこちらを見下ろすガイを見上げる。
それはまさしく、人間だった。
魔物を殺すこともなんとも思わない。それでいて、魔物大将軍である自分をいとも容易く蹴散らしてしまえる人間。
――かつて、アッティラが見た人間と同じであった。
「……あ、あああああああああああああああっっっ!!」
アッティラは叫んだ。
みっともなく、かつて自分が痛めつけてきた人間の様に。
もはや戦う気も起こらない。眼の前の人間には勝てないと理解し

ているからだ。
だからアッティラが行うのは、かつての自分や、自分を痛めつけてきた人間と同じことで、
「や、やめろ……！　やめてくれ……!!　殺さないでくれ……!!」
――それは、ただの命乞いだった。
いっそ哀れに思えるほど、アッティラは魔物大将軍には似合わない、何の変哲もない命乞いをガイに行った。懇願するように。頼むから見逃してくれと。
――だがそれを受けたガイの表情は、どこまでも冷たかった。
「……」
「ひ、あ……い、嫌だぁぁぁ!!　死にたくなぁぁぁい!!　そんな眼で私に近づくなぁぁッ!!　あああああああああ!!」
「……」
ガイは何も口にしない。
ただアッティラに近づく。左手にその黒い剣を握り込む。
その表情には何もない。何も窺えない。
――彼の心情は、今や虚無だった。
あるのは強い決意のみ。このような惨劇を作り出し、人間を苦しめる魔物を殺し、この悪意に満ちた世界を――
「……死ね」
「嫌だぁあああああああああああああああああっっっ――!!!」
――終わらせる。
ガイの剣が魔物大将軍の本体であるコアを斬り裂く。
――それは決意であり、最後であり最初の一歩だった。
この瞬間、ガイは一線を越えた。
もう振り返れない。
人として、必要なモノを全て捨て去ることを決めた。
自分の大事なモノは全て捨て去ることを決めた。
何故なら自分はもう――人ではない。
人を越える力を手に入れた。
だからこそ、己は人と交わってはならない。

人でありながら人ではない者として在る。
ただ使命だけが己にはある。
今までの自分ごと、全てを過去にするのだ。
人々を苦しめる巨悪を倒し、この世を終焉に導く。
自分の大事な何かを守る。その為だけに、
「……もういいのか、ガイ」
「……ああ。もう、行く」
「……ふー……そうか」
ガイの左手にある魔剣――カオスが深い息を吐く。
彼もまた、使い手の強い覚悟を感じ取り、覚悟を決めたのだ。
だからもう何も言わない。これより先は、かつてカオスがそう決めて進んだ様に、人を捨てた修羅の道だ。
そのたった1つの目的の為に突き進む。
ただ、懸念があるとすれば――ガイの精神が、怖ろしい程に安定していることだ。
これほどの事態を目の当たりにしておきながら、一切揺らいでいない。動揺していない。
何も感じていないのではないかと思うほどだ。
だが、カオスは憂慮しながらもその懸念を呑み込むことにした。
彼も耐えているのだろう。その胸中を態々突く必要もない。
ガイはもう覚悟を決めているのだと、カオスは未来へ目を向けることにした。自分だけは一緒にいることになるのだから、せめて会話することで気を紛らわせてやろうと、
「……魔軍はもう撤退するようじゃが……どうする？」
「……捨て置く。魔女の案内通り、一度地下に潜って、それから……終わらせに行く」
「……そうか」
カオスが頷く。そもそも自分達がここに来る理由となった理由。いつの間にか忍ばされていた魔女の手紙が、どこまで信用出来るかという問題はあったが――それもどちらでも問題ないのだ。
仮に何の収穫が無かったとしても、然るべき後に決戦の地に赴くこ

とに変わりはない。
故にガイは、その場を後にした。
魔物大将軍を倒した経験は得た。通用するという確信も得た。
――魔王は倒せる。その確信を以て、ガイは決意した。
見る影もない隠れ里。そして見知った相手の亡骸を振り返ることは、もうなかった。

恐れる必要はない

――ＧＬ６ＸＸ年。大陸南部。

現在の大陸は全て、魔物界である。

６００年以上昔、前魔王ナイチサの時代にはまだ人間界が存在したため、魔物界という呼称も括りも存在していた。

しかし今は大陸全てが魔軍の支配下にある。

ゆえに魔物界という呼び名も今や過去のものとなっている。

それでも魔人が昔の癖で大陸を魔物界と呼ぶことはままあることでもあった。

そして今の大陸、魔物界は概ね５つに区切られていた。

厳密には２０数個存在する人間牧場を担当する魔人達がそれぞれの区域を自らの領土のように管轄し、支配しているが、その中でも更に大きな括りがある――魔人四天王と魔人筆頭による括りだ。

まず――大陸西部を魔人カミーラが。

次に大陸北部を魔人ケッセルリンク。

大陸南部を魔人ケイブリス。

そして大陸東部を魔人ノス。

最後に魔王城周辺区域――大陸北東部を魔人レオンハルトが治めていた。

魔王からの指示は全ての魔人、そして魔軍に通達されるが、厳密には魔人筆頭兼魔軍参謀である魔人レオンハルトが具体的な指示として各魔人とその下にいる魔物大将軍らに伝えることが多い。

何しろ現在の魔王ジルは統治に興味がなく、人間を苦しめられればいい。人間をその手で苦しめ、その慟哭や悲鳴、断末魔を自ら眺めることが出来ればそれでいいのだ。

ゆえに具体的な統治の方法や細かいルールは魔人レオンハルトが魔王ジルに伺いを立てた上で決め、各魔人、魔軍に指示を出していた。

とはいえ魔王ジルの治世が始まって５００年以上、特に大きな問題もなく、魔人の招集や命令もほぼない。

魔物視点では至って平和――と言っても差し支えがなかった。

――だがつい先日のことだ。とある指示が魔人レオンハルトから全魔人、魔軍に通達された。その指示はこうだった。

『――全ての魔人は自らの居住場所、あるいは安全と認識する場所に籠もり、魔王城及びに該当区域の立ち入りを禁ずる』

その指示に、魔人達は一瞬、理解が及ばなかった。なぜそんなことをしなければならないのかと率直に思った。

だが魔人達は遅れて耳に入ったその報告によって、その理由を理解する。

その報告とは――魔物大将軍アッティラが人間の手に掛かり、死亡したことだ。

魔物大将軍。それは魔軍においても同時に7体までしか存在することの出来ない替えの利かない特別な魔物である。

その業務は魔軍を指揮すること。魔物将軍は魔物兵2万体までしか統率することは出来ないが、魔物大将軍にはその上限はない。

そして当然、弱くはない。無敵結界こそ存在しないが、その強さは魔人級と称されることもある。

だから当然、人間に負ける筈などない。ありえない事態であった。

……しかし歴史を紐解けば、魔物大将軍が人間に負けたことはある。

魔人すら負けたことがあるのだ。絶対はない。人間に負けることも５００年もすればあり得ないとも言い切れないだろう。

多くの魔人達はその報告と推測、そしてその指示によって理解した。

おそらく――魔人レオンハルトがその人間を対処しようとしているのだと。

それは見ようによっては他の魔人を侮辱しているようにも取れた。人間如きに負ける可能性があると。

だがレオンハルトほどの魔人に指示されてしまえば言うことを聞く他ない。レオンハルトの機嫌を損ねて良いことなどない。

長く生きる魔人ほど、そのことを知っていた。……一部の魔人はその指示に従わずに好きに過ごしていたりもしたが、それでもレオンハ

ルトが魔人筆頭であり、魔人最強であることは疑いようのないことである。
ゆえに魔人達はその指示に半ばほど従った。魔王城周辺の大陸北東部には近づかない。もし近づけば後日、レオンハルトが罰を与えるという。
レオンハルトがそうやって罰則を指示に言い含めるのは稀であったが、それほどの事態なのかと一部の魔人は思ったし、他の魔人は何か理由があるのだろうとレオンハルトの指示を信頼した。
だがその指示を信頼していない、そしてレオンハルトそのものを軽んじている魔人がいた。
「――は――ぁ――い。久し振りー。ケーちゃん遊びに来たわよー」
「あぁ？　メディウサ、なんでここにいやがる。今は謹慎期間だろうが！」
間延びした声で大陸南部――魔人ケイブリスの根城に遊びに来ている魔人メディウサだった。
彼女はいつも通り、気楽な様子で異形の魔人ケイブリスの部屋に立ち入る。
醜く下衆。器が小さく、それでいて強さ自体は魔人四天王に連ねるケイブリスのことを嫌う魔人は多く、近づく者は少なかったが、魔人メディウサはその少ない魔人の1人だった。
2人はウマが合う。友人……と可愛い関係は名称として不適切かもしれないが、悪友には違いなかった。
そして悪友らしく、ケイブリスは突然訪問してきたメディウサに乱暴な言葉をぶつけた。そしてメディウサもカラカラと笑って間延びした言葉で答える。メディウサは退屈そうだった。
「だってー。レオンハルトの奴がこっちに行くな、あっちに行くな。安全な場所にいろってうるさいし、面倒だから……遊びに来ちゃったー♪」
「来ちゃったーじゃねェんだよ。レオンハルトの指示には従っとけ。安全な場所にいろってんだよ」
「だからほら、ケーちゃんの側なら安全でしょ？　魔人四天王最強？

だしさ。ここも安全だし、指示には背いてない」
「けっ……別にいいが、もし何か言われても俺様は庇わねェからな。俺様に責任を押し付けやがったらタダじゃおかねェぞ」
「しないわよー、そんなこと」
メディウサは心外だったのか、頬を膨らませて抗議する。しかしケイブリスは信用していないようで、虐め終わって死んだ人間の亡骸をぽいっと部屋の隅に投げ捨てた。
部屋の中には死臭がする。人間の死体。何日も放置している訳ではないが、血の匂いが充満し、時折死に損ねているのか「う……ァ……」と呻き声が聞こえる。1番不幸なのは死ねてない人間で、1番幸福なのは死ねている人間。
人が見れば口元を押さえ、その非道な行いに怒りを憶えるだろうが、2人は魔人。それも人間を魔人が楽しむための玩具、あるいは奴隷として見ている真っ当な魔人であり、その趣味の悪さも似たようなもの。
ゆえに特に居心地の悪さを覚えることもなく、平然と会話に興じた。メディウサが人間の腕を軽く足で避けてケイブリスの近くにあった椅子に腰掛ける。
「……というかさー」
「あ？　なんだ？　手遊びに人間が欲しいってんなら自分で取ってきやがれ」
「そうじゃなくて。前々から思ってたけど……ケーちゃんってば、レオンハルトにビビり過ぎじゃない？」
「……は？　メディウサ、テメェ……何言ってんだ？」
ケイブリスは一瞬、何を言ってるんだこいつ？　という目でメディウサを見る。思わず人間の女性を嬲る触手の動きが止まった。
だがメディウサは何もおかしなことを言ってはいない。平然とした様子で続ける。
「そりゃ魔人筆頭だし、確かに強いんだろうけどさー。……ぶっちゃけ、私からするとケーちゃんとかとそんなに変わらないように見えるっていうか……何ならケーちゃんとかノスの方が強そうに感じる

のよねー。だからケーちゃんがそこまでビビり散らかす必要ないと思うんだけど……」
　メディウサは率直に自分の意見、感覚から感じたことを告げた。
　言葉通りである。メディウサは、魔人レオンハルトの強さを理解していなかった。そのことに、ケイブリスはもう一度間を置いてメディウサに尋ねる。
「……おいメディウサ。頭がおかしくなったのかテメェ」
「おかしくなってないわよー。だって私、レオンハルトが戦ってるところなんて一度も見たことないし。そもそも本当に強いの？　私からすると、ただの巨乳好きの堅物って印象しかないんだけど」
　メディウサが続けて理由を述べる。
　レオンハルトが戦っているところを見たことがない。そして、メディウサにとってレオンハルトという魔人は、魔王ジルのお気に入りであり、取引によって人間の美女。それも巨乳の美女を渡すだけの間柄である。
　ゆえにメディウサは考えたのだ。もしかしたら魔王ジルに気に入られたからこそ、未だその席に就いているだけで、今はもうとっくに実力が逆転しているのではないかと。
　実際、今魔人の中でその強さが有名なのはノスやケイブリスだ。メディウサもこの2人についてはその強さをよく知っている。そしてその強さを知っているからこそ、あの大人しいレオンハルトがこの2人より本当に強いのかという疑問を持ち始めていた。
　最古参の魔人、ケイブリスであれば何かを知っているのか、あるいはその強いというイメージが先走って過剰にビビっているだけなのかと。
　だがケイブリスはしばし、息を止め……そしてややあって息を吐き、そしてそのメディウサの言葉を返した。
「メディウサ……テメェ……何も分かってねェな……」
「そう？　じゃあレオンハルトの何が強いのよ？　わかりやすい特殊能力なんかも聞かないしねぇ……？」
「あいつの……レオンハルトの何が強いか……」

「ほら、すぐに出てこないじゃない。やっぱりケーちゃんより弱いんじゃないの？」
ケイブリスが考え込んだところで、メディウサがすかさずそう言う。
しかしケイブリスは答えた。違ェ、と。
「――強みが多すぎて絞りきれねェんだよ」
「は……？　い――いやいや、そんな訳ないじゃない。レオンハルトの強みなんて、精々剣術くらいでしょ？　剣なら私やケーちゃんだって使えるじゃない」
メディウサは一瞬呆気に取られたが、すぐに剣如きが何だと言うのだと返す。
魔人には多くの特殊能力や技能が存在する。メディウサとて、石化という力を持っている。通用すれば一撃必殺と言っていい能力だ。
魔人四天王ともなればその技能や能力は多数存在する。ノスの膨張硬化やケッセルリンクの多彩な能力などに、ただの剣士でしかないレオンハルトが有利に戦える光景が浮かばない。
「その剣が訳が分からねェからな……」
「？　剣が訳がわからない？　――ああ、魔剣のこと？　噂でしか聞いたことないけど、もしかしてそっちにヤバい能力でもついてんの？」
「そうじゃねェ!!　レオンハルトの剣はな……とにかく、意味がわからねェんだよ!!」
だがケイブリスはそのメディウサの意見を真っ向から否定する。
レオンハルトと戦う上で、最も厄介なのはあの剣術なのだと。
「まずよ……そもそもレオンハルトの野郎が大人しいと言うが、そこがそもそも違ェんだよ。あいつは大人しいんじゃねェ。完全に殺気とか気配とか破壊衝動とか……そういうのをコントロールして抑えてやがんだ」
「はぁ？　じゃあなんで戦わないのよ。あいつ、よくレキシントンとかレイから喧嘩売られてるけど無視してばっかって聞いてるけど？」
「……例えばだ、メディウサ。人間のガキとか……いや、蟻だな。蟻に

喧嘩を売られたとして、喧嘩を買ってやろうなんて思うか？」
「……は？　何言ってんのケーちゃん。買う訳ないじゃない。もし売られたら踏み潰して終わりよ」
　メディウサはケイブリスのその馬鹿らしい質問に呆れ気味に答える。
　自分は魔人だ。人間も相手にならない。魔物も相手にならない。勝負の相手になるのは最低でも魔人であり、その魔人も２０体程しかいないのだ。戦える相手など世界中を見渡しても極僅かである。
　ましてや蟻に喧嘩を売られたところで、踏み潰すだけだ。なんなら相手にしないかもしれない。
「――それと同じだ」
「え……」
　メディウサがその一致を理解した時、ケイブリスは言った。
「レオンハルトにとって殆どの魔人は、虫けらに過ぎねェってことだ。喧嘩を売る価値も買う価値もねェ……叩き潰そうと思えばいつでも叩き潰せる。ムカつけば排除するし、決定的じゃなけりゃ放置してやってんだろうよ。あいつは魔王の命令とか魔軍の維持とかにうるせェからな」
「は……いやいやいや！　幾ら何でもそこまでじゃないでしょ!?
　そんな魔王じゃあるまいし……！」
「さっきの話の続きだがな。あいつの剣術はよぉ……見えねぇんだ」
「ッ……見え、ない？　速すぎるってこと？」
「それも合ってる。俺様も昔はそう思ったぜ……レオンハルトの剣は速すぎて見えねぇ!!　だから見えるくらい強くなれば、多少は勝ち目が見えるかもってな！」
　もっとも、ケイブリスは完全に勝ち目が出てくるまで戦いたくない性格をしているが、それはそれとしてレオンハルトと仮に戦うのならば剣が見えなければ話にならないと思った。
　ゆえに剣が見えるまで強くなった。そう、実際にケイブリスはそこまで成長した。
「そんで俺様は実際に見えるようになったんだぜ？　メチャクチャ頑

張って強くなったぜ。レオンハルトの剣も、見えるようになった」
だが、
「だけどなぁ……剣が見えたら……今度はもっとよくわからなくなっちまった」
「……わからない？」
ああ、とケイブリスは頷く。その経験を思い出し、その異形の手を震わながら、
「見える、そう見えるんだ！　剣が右から来る!!　そしたらそりゃ右から防御するだろ!?　んなもんどんなバカでもわかる!!　あるいはその軌道から逸れて躱すかだ！」
「……そしたら？」
「そう、そしたら……剣が左から来やがった」
「――――は」
メディウサは今度こそ、その荒唐無稽な話に言葉を失う。
……剣が右から来たと思ったら左から来た？
意味が分からない。矛盾している。過程と結果が結びついていない。
だが言うのだ。ケイブリスは。それが、レオンハルトの剣だと。
「だが別に逆側から必ず来るって訳じゃねェぞ!?　要はどこから剣が飛んでくるか全然わかんねぇってことだ！」
「……実はもっと速く剣を振れる……とか？」
「その可能性は確かにある!!　――が、それはそれで訳が分からねぇことに変わりはないだろうがよぉ!!　剣を振ったところが見えても、どこに剣が来るかわからねぇし、なんなら斬撃が同時に二つ来ることだってある！　剣は確かに一つしか持ってねぇのにだ！　かと思えば剣からビームみたいなの出しやがるしよぉ！　あいつの剣は理不尽の塊だ!!」
「……」
メディウサは何も言わなかった。ケイブリスが思い出してか、酷く苛つき、それでいて怯えていたから。
メディウサが知る良しもなかったが、ケイブリスはレオンハルトに

訓練をつけて貰うことがある。ケイブリスはその時の訓練の記憶を思い出し、その理不尽さに畏怖を呼び覚ましていた。
「わかるか!?　剣が見えたところで、別に意味はねーんだ!!　その剣に対応出来なきゃ意味がねぇ!!　だってのにあいつの身体能力は元人間とは思えないほど強ぇし！　魔法だって十分強ぇ！　おまけに分身だ分身!!　ふざけんな！　どうすりゃいいんだあんなの!!」
　ケイブリスは思わず力が入り、周囲にいた人間の女を殺してしまう。しかし気づかず、ケイブリスは頭を抱えて怒鳴り散らした。
　だが少しして、ケイブリスも落ち着く。その時には、部屋にはメディウサしかいなくなっていた。
「ゼェ……ハァ……しかもだ……レオンハルトは全然本気を出してねぇ。魔人との喧嘩や訓練じゃ本気も出さねーのよ……まだまだ底がありやがる。あれじゃまだまだ追いつけねェ……ある程度追いついたと思ったが、どう考えても千年コースなんだよあれは……いや、それでも追いつけねェかもな……」
「……あはは！　冗談みたいな話だけど……冗談だったりする？」
「別に信じなくても構いやしねぇが忠告しとくぜ……おれなら絶対に戦わねぇし、逆らいもしねぇ。おれ様が超えるか、隙を作れば……いや、作ってもどうだ……？」
「……なら他力本願にでもなったら？　ほら、魔物大将軍とやらを倒した人間とやらが倒すかもしれないじゃない？」
「ありえねぇな……レオンハルトが負けるなんてありえねぇ。もし負けたっつっても、生きてんならおれはレオンハルトがおれ達を油断させる罠や仕掛けなんじゃねーかと疑うぜ……あれでバカならまだやりようはあった気がするが、頭まで回るんじゃどうしようもねーのよ」
「……じゃ、魔王様に殺してもらえるように願ったら？」
「それなら……いける……よな？　まさか魔王にまで勝てるはずはねぇ……そう、絶対にありえない……よな？」
「よな、って……当然なんじゃないの？」

「クソ……レオンハルトの奴の底知れなさを考えるとそれでも不安になっちまう……！」
「不安なら人間でも虐めて気を紛らわせたら？」
「あ、ああ……そうだな――って、あれ？」
ケイブリスは周囲から人間を手繰ろうとして、しかしいないことに間の抜けた声を出す。
そんな中、メディウサは内心でそのケイブリスの話を思案していた。
……本当に、そんなことがある？
レオンハルトがメチャクチャ強い。ケイブリスがそこまで言うってことは本当に？
だが考えても実際に見ないことにはわからない。
「――ま、ケーちゃんビビリだし……そこまで恐れる必要はやっぱない……かな？」
人間を取りに部屋の外にいる部下を呼び出しにいったケイブリスを見ながら、メディウサは少し怪しく思いつつも相変わらず楽観的にそう呟いた。

「――アレは……化け物だね……」
その呟きが鳴らされたのは――奈落。
声の持ち主は回廊の高い位置。物陰に潜み、その人間を観察する黒髪カラーの使徒。
使徒ハンティは現在、主の命によってそれの監視任務に就いていた。
彼女がこういった任務に従事することは珍しくない。
最強の使徒と呼ばれるほどの戦闘力を持ち、瞬間移動を始めとする様々な魔法を扱えるハンティは監視や偵察、諜報にうってつけの人材であった。
主である魔人レオンハルトからも重宝され、信頼されている。
そのため最重要とされるその人間を監視していた。

だが彼女はここ一ヶ月のその人間――ガイの行動とその実力を見て、戦慄する。
額に汗を掻いて、思わず苦笑い。強い相手は好きで、なんなら好戦的に笑みを浮かべるのが癖となっているハンティだが、さすがに成した出来事は冷や汗を掻かざる得ないものだった。
「まさかあの汚染魔王……アベルを倒すなんてね」
そう。たった今の話だ。
ガイが奈落の最下層に於いて、封印された汚染魔王アベルを倒した。
あのライゼンに魔人四天王総掛かりでも苦戦し、長時間戦った相手。それを数時間足らずで打倒してしまったのはただの人間であるガイ。
魔物大将軍を倒したまではまだそれほどの脅威ではないかもしれないと考えたハンティだったが、その戦いを見て認識を改めた。
「ははは……何、あの魔法……？　それに動きが見えなかった……！」
ハンティは思わず乾いた笑いを漏らす。
ハンティは己の強さに自信を持っている。あのレオンハルトと模擬戦が出来るのも自分だけ。魔人が相手だろうと負けやしない。
ましてや人間相手に後れは取らない――と思っていた。
「まさかまだ私が知らない魔法があるなんて……あれはオリジナル？……いや違う。あんなのを人間が、たった数年か数十年の月日で作れるものじゃない……」
そして魔法において、ハンティは誰にも負けない自信があった。
魔法の知識。特定分野においては共同研究者であるガウガウ・ケスチナなどハンティを凌ぐ者も存在するが、単純な魔法戦闘においてハンティは誰にも劣っていない自負がある。
自分が使う瞬間移動でさえ、他の者には使えないし、それ以外にも様々な独自の魔法を扱える。
しかしその人間ガイが使う魔法はハンティの知識、才能を以てしても真似できない。
仮に同じ魔法を編み出そうとしても、最低でも何百年、あるいは千

年以上の年月が必要かもしれない。
だがガイは扱っている。何十もの絶大な効果を持つ魔法を。
「それに見たところ、何かしらのデメリットがあるはずなのに……それを背負ってる様子が見られない」
そしてそれだけの魔法。ハンティが簡単に解析しようとしてみたところ、どうやら禁呪と思わしき魔法の様で、何かしらのデメリット……例えば廃人になるような精神汚染など、何かしらのデメリットがあるように思えた。
しかしガイは正常だ。少なくとも、見た限りでは異常な様子は見られない。
そしてそれが何よりも不気味だった。――まさかデメリットすら克服してる？
「まったく……たまにこういう規格外が現れるんだよね……人間ってのは……」
ハンティは目を細め、険しい表情を浮かべる。あれだけの人間は久し振りだ。
人間は弱い。一般の魔物兵にすら敵わず、魔物隊長に勝てる者は更に少なく、魔物将軍を討てるほどの人間など一国に数人程度しかいない。
そして使徒や魔人を倒せる者など普通は現れないのだ。
だが……数百年。あるいは千年に1人。一時代に1人は規格外が現れる。
千年以上昔、人間界を統一した藤原石丸然り……魔王ナイチサに瀕死の重症を負わせた勇者クエタプノ然りだ。
元魔人の中にはそういった魔人に匹敵した人間もいた。ガルティアやパイアールなどがそうだ。
そう、規格外なのだ。普通の人間としては測れない。
そしてハンティの見立てでは、ガイの強さは――
「……届き得る……かもしれないね……！」
自分で言っていて信じられないことを呟く。
そう、ありえない。ありえない筈なのだ。

ハンティは自分の主人――魔人レオンハルトの強さを1番理解している。
剣術は言わずもがな、魔法も高いレベルで習得しており、隙がない強さを持つ。
ハンティの瞬間移動にも対応し、汚染魔王のアベルも弱っていたとはいえ一蹴してみせた。
魔物界にレオンハルトに敵う相手は存在しない。あるとすればただ1人――魔王くらいだ。
ただその魔王でさえも……レオンハルトであれば、と考えてしまう。
地力、スペックの高さで言えば魔王の方が上だが、数千年の戦闘経験に技術、戦術も含めて考えれば……レオンハルトは、魔王を倒し得る。
最強の魔人はレオンハルト。最強の剣士もレオンハルトで、この地上で最強の戦士はレオンハルトだ。
……正直、レオンハルトがどれだけ人間を信じようが、レオンハルトに敵う人間が現れるというのは半信半疑であった。
ハンティも信じてはいたが、本当に現れると勘弁して欲しいと思ってしまうのだ。
そう――ガイは、レオンハルトに届き得る。
危険な存在だった。レオンハルトはガイと戦おうとしている。
だがハンティは思う。使徒として……それを許していいのかと。
「ッ……今ここで、不意を討てば……あるいは……」
使徒としての本能がハンティの腰元の剣に手を伸ばさせる。
主である魔人に仇なす存在を、今ここで討てと。
それが出来るかどうかはさておいて、ハンティはその意志を持ってしまった。
だが、
「いや……それは軽率過ぎる……」
ハンティは肩の力を抜いて、剣に伸ばそうとしていた手を止める。
手汗が酷く滲み出ていた。ただの人間相手にここまで緊張したの

はそれこそ数百年ぶりだ。
「レオンハルトが負ける筈ない……そう、どれだけ禁呪を使っても……あの魔人のレオンハルトには――」
ハンティは自分の異空間で模擬戦をした時のレオンハルトを思い出し、やはり負けない筈だと思う。
――あの本能が恐れる強さを思い出し、ハンティはまた別の嫌な汗がにじみ出るのを自覚する。
人間ガイは、魔王ジルにすら打ち勝ってしまうかもしれない。
だが魔王の前にはレオンハルトがいる。魔王ジルがどうなろうとハンティ的には構わないが、ガイではレオンハルトに勝てない。
「人間を救おうとする意志は立派だし惜しいけどね……でも挑むなら、その時は地獄を見ることになるよ……」
ハンティは離れた位置から、ガイに忠告する。
聞こえる筈がない忠告だが、それでいい。届いてくれても届かなくてもどっちでも良かった。
ガイが奈落から立ち去ろうとしている。次の行き先はおそらく――魔王城。
魔王城には魔王ジルと、異空間で己を研ぎ澄まし終えた最強の魔人レオンハルトが待っている。
挑めばその結末は決まっている筈だ。
しかしそれもまた、レオンハルトの望みでもある。
「……でもまあ挑むなら……精々底を引き出せるように願ってるよ」
ハンティはその主の願いを呟き、その場から一瞬でかき消えた。自分の役目はもうほぼ終わった。
――そしてこれからは……誰も立ち入ることの出来ない最強同士の戦いが始まる。
――人間を救おうとする最強の戦士と、世界の秩序を守り、エゴを貫き通そうとする最強の魔人。
――ガイが汚染魔王アベルを倒して３日と１３時間と２７分後……彼らは遂に対峙するのだ。

最強の魔人と最強の人間

このルドラサウム大陸において最も高いその頂きに、彼はいた。

「――――」

その山の名は……〝翔竜山〟。

大陸の中心にそびえ立つ御山であり、多くのドラゴンが住まう非常に危険な山である。

歴史においてこの山の頂上に辿り着いた人間はいない。その理由は険しい山道やドラゴン、魔物に行く手を阻まれるなど多岐に渡る。

だがそれらを乗り越えたところでこの山の頂きに立つ資格を持つことは出来ない。

山の頂きに至るには王を倒さなければならない。

そしてその王の座にはかつてはドラゴンがいた。

だが今は違う。この山に君臨していた者は人であり魔である者に倒された。

大陸の支配者たる魔王。その魔王から血を分けられ魔人となった人間である〝剣の王〟。全魔人の頂点に立ち、魔軍の指揮者。

その男こそ――魔人レオンハルト。

金髪灼眼。整った顔立ちを持ち、黒と赤を基調にした礼服。軍服にも似た衣服に身を包んだその男は一見して普通の人間と変わらない。

だがその身から発する威容は紛れもなく人外の物だ。幾度となく死線を乗り越えた歴戦の戦士でさえ、魔人の前に立てば身を竦ませる。

魔人の中での強者。魔人四天王に数えられる者達と相対すればそれだけで死する可能性もある。

そしてこの魔人を前にすれば、自ら膝を屈して心を折る。頭を垂れて忠誠を誓う。

２０００年以上もの間、魔軍を差配し、幾万もの戦いに勝利し、魔人の頂点に立ち続けてきた男の気配はそれほどの特異性を持っていた。

ゆえに知性を持たなくなったドラゴンでさえ、山の頂点にて立つこ

の魔人には近づかない。
近づけばどうなるか。それを本能で理解しているから。その証拠に――
「――ッ!!」
――その鋭い双眸が見開いた瞬間。眼下にある雲海が２つに分かたれた。
数十キロ。いや、あるいはそれ以上。一瞬にして分かれた雲海。その現象を起こしたのは紛れもないこの魔人。
だがレオンハルトが何をどうしてこの雲海を断ち切ったのか。その謎を解ける者は数少ない。
人間であれば今の光景を眼に収めていたとしても何が起こったか分からないだろう。レオンハルトは腰に剣を差していない。その手には何も持っていない。世界最強の剣士と称されるレオンハルトだが、その代名詞とも言える剣はどこにも見当たらない。
だが雲海を断ち切ったのは間違いなく、レオンハルトが放った斬撃だった。それが分からない者に、この魔人に挑む資格はない。
そしてその絶技を仮に理解したところで、心が弱ければ挑むことも出来ない。そしてそれを乗り越えて挑んでも、力が足りなければ屍になるだけ。
まさしく魔人の所業だ。人では辿り着けない最高峰の力。
「相変わらずメチャクチャな剣だね」
そしてその力を目の当たりにし、慣れたようにフランクな口調で称賛し、現れたのは黒髪の美女だった。
額にクリスタルを持ち、長耳の女性だけの種族。カラーと思われるその美女だが、青い髪を持つカラーの特徴とは違う黒い髪を靡かせている。
そして何より異常だったのはその美女がこの場に現れたその方法。一瞬という言葉すら正しくない。現れたことに誰も気づけない。現れてからしか気づくことの出来ないその魔法を用いた移動方法。その尋常ならざる魔法の腕。
そして魔人には劣るがその美女もまた魔の気配を漂わせていた。

その美女の名を魔人は呼ぶ。
「……ハンティか」
レオンハルトはその美女。自らの血を分けた魔人の使徒であるハンティの名を口にすると翔竜山の尖った頂上から立てるだけの台地に降り立つ。
そしてハンティの顔に視線をやるとその表情は――呆れていた。
「いや、ハンティか――じゃなくて。どんだけ長いこと修行してんのさ」
ハンティはその理由を口にする。レオンハルトが修行に出ると言ってから1週間。その間ずっと居城である紅魔城には帰ってこず、ここで修行をしていたレオンハルトにハンティは息を吐く。
「あんたが修行してる間、こっちは大変だったんだけど？　あんたのガキが暴れたり脱走したり使徒を連れてきたり、それを知ったハウゼルやサイゼルがてんやわんやでなぜか喧嘩になったり、ガウガウが新しい魔道具の実験に行くとかいって勝手にライゼン使ってどっか行ったりするしペールとインデックスがあたしの変な本を流通させようとしてたからとっ捕まえたり、ガルティアはあんたに頼まれた用事が終わったらいつも通りずっと飯食ってるしケッセルリンクは落ち着いてるし――」
「……そうか。大変だったな」
「あたしの苦労を一言で終わらすな！」
ツッコミ代わりの〝雷撃〟がレオンハルトに向かって飛ぶ。その雷撃もレオンハルトに当たる直前で斬り払われた。
とはいえ何もしていなくても魔人の持つ無敵結界によって攻撃は防がれるとはいえ……ハンティは怒りの矛先を見失って拳を握り込む。
だがその前にレオンハルトが息を入れた。先程までの研ぎ澄まされた空気を僅かに緩めて告げる。
「わかった。俺が悪かったからそう怒るな」
「別に怒ってない。怒ってないから今度あたしと一戦しなさいよ」
「相当ストレスが溜まってるな……だが、わかった。それは了承しよ

う」
「お、言ってみるもんだね」
　戦闘狂であるハンティの願いをレオンハルトが聞き入れればハンティもけろっと怒りを収める。それを見てよくハンティと距離が近いペールやインデックスやガウガウが言う〝カラーゴリラ〟という呼び名が頭に浮かぶが……それを言えばハンティがより怒りに燃えるのは分かっているためレオンハルトは何も言わない。
　それに、だ。それよりも重要なことがあった。レオンハルトはハンティに尋ねる。例の人間のことを。
「それより……首尾はどうなっている？」
「ああ、うん。順調って言っていいかは分かんないけど……順調だよ。大将軍アッティラを退け、奈落でアベルを何度も地につけてたしね。確かにあんたの言う通りやばくなってるよ。あの人間……ガイは」
　そう――ガイのことだ。
　２０年近くハンティに命じていたガイという人間の監視任務。
　その長きに渡る任務が遂に終わりに向かっていた。その理由をハンティは口にする。ある占い師の予言。その通りになっていると。
「現在の位置は大陸南東部。南から北上して……魔王城に真っ直ぐ向かってる。狙いはやっぱ魔王だろうね」
「そうか。周囲の人間牧場及び魔軍の被害状況は？」
「そっちは被害０。魔軍に所属してない魔物の被害はあるけど人間牧場に近づく気配すら見せないね」
「眼中に無し、か」
　レオンハルトはガイの動きを端的に口にする。
　その理由もよく分かった。大義のためには犠牲を認めなければならない時もある。
　魔物兵をどれだけ倒してもキリがない。どれだけ魔物を倒そうと、魔人を倒そうと魔王を倒さなければ意味はないのだ。
　人類が古来よりずっと行ってきた魔軍に対する有効な首刈り戦術。それをガイは行おうとしている。
「魔王ジルの討伐だけを狙ってる。それは間違いないみたいだね。倒

せるかどうかは知らないし、あたし的には倒してくれた方が嬉しいけど……」
「――そういうわけにはいかないな」
「って、あんたならそう言うだろうね。だったらさっさと済ませようよ。もう皆待たせてるからさ」
「ああ。そうしよう」
レオンハルトの承諾を得て、ハンティはレオンハルトの身体に触れると彼女の代名詞でもある瞬間移動魔法を発動させる。
とはいえレオンハルトとハンティ視点では瞬間的に移動は行えない。
瞬間移動魔法の正体はアドミラル空間という位相のズレた空間を経由して移動する魔法であり、２人にとっては実際に翔竜山の頂上から目的の場所まで自らの足で移動することになるが――アドミラル空間に突入時点と脱出時点で現実の時は変わらない。
それゆえにレオンハルトとハンティが目的の場所に到達して目的地に辿り着いた時にはそれを視認し、その場にいた者にとっては一瞬でその場に現れたように見えた。
「どうやら準備は終わってるようだな」
「――レオンハルト様！」
ハンティと共にレオンハルトが姿を現せば――その場にいた魔軍の大軍勢が軍靴を揃える。
赤、青、緑の魔物兵にそれを率いる魔物隊長。更にその魔物隊長の率いる部隊を率いる魔物将軍。更にそれを率いる魔物大将軍の姿もある中、その先頭に立つのは魔人にとって血を分けた忠実な下僕である使徒。
「レオンハルト様。ご命令通り、レオンハルト軍５０万の布陣を完了致しました」
「ああ。ご苦労」
使徒リー。
魔物大将軍出身の４番目の使徒である彼はその寡黙で実直な軍人らしい見た目の期待を裏切らず、主に向かって報告すべき事柄を報告

する。
「それにしてもこれだけの軍勢を集めて使徒まで全員集合なんて何百年振りですかね。久し振りすぎてさすがのペールちゃんも血が滾りますよう」
使徒ペール。
カラー出身の３番目の使徒である彼女はお気楽な様子で久し振りに起こる大規模な事件と主の活躍の予感に楽しそうに口元に笑みを浮かばせる。
「念のためってだけでしょ。本命以外は大した相手はこないよ」
使徒ハンティ。
ドラゴン・カラー出身の２番目の使徒である彼女はこの任務の目的を思い、特段気持ちを震わせることもなく冷静にペールの言葉を否定する。
「何にせよ！　数百年振りのレオンハルト様の晴れ舞台！　わたくし達で存分に盛り上げないといけませんわ！　気合いを入れますわよ！」
使徒キャロル。
コマンダー出身の１番目の使徒である彼女は主人であるレオンハルトの活躍の場を思い、いつも以上に気合いの入った様子で謎のかっこいいポーズを取っていた。
魔人レオンハルトの４人の使徒。その全員が同じ任務に従事することは珍しいことだった。それも魔軍を率いての任務となると実に６００年振りとなるもの。
それだけに背後のレオンハルト軍の将兵もいつも以上の緊張感を持っている。
定期的に行われる演習とは違うその作戦は、交戦する可能性こそ低いと予め伝えられているものの、レオンハルトが直々に重要な作戦だと布告したほどだ。その内容をレオンハルトは口にする。
「任務の内容は理解しているな？　事が済むまで誰も魔王城に近づけるな。人間は勿論のこと。魔物や使徒。他の魔人が来た場合も追い返せ」

「魔人もですか？」
「……やれるやれないはともかくやっちゃっていい訳？」
レオンハルトの命令の徹底ぶり。魔人すらも近づけるなという命令にペールが首を傾げ、ハンティは僅かに目を細めて尋ねる。
レオンハルトはそれに改めて頷いて許可を出した。
「ああ。もっとも、強行突破してくるような可能性は低いがな。魔人達には俺から命令を出してある。破るようなことがあれば重い罰を与えるともな。それでもなお無視して近づいてくるようなことがあれば程々に相手をして足止めしろ」
「了解しました。……まあでもさすがに魔人の相手はペールちゃんには荷が重いので始祖様に丸投げしますね」
「命令を破りそうなのってレイとかレキシントンとかどうせその辺りでしょ。なら問題ないよ」
「魔人の相手を問題ないと言い切るとはさすがの始祖様。カラーゴリラっぷりに拍車がかかってますよう……」
「――その時のためにもウォーミングアップをしとかないとね。相手はペールにお願いするけどいいよね？」
「い、痛っ！　や、やめてくださいよう始祖様！　お、折れる……！」
ゴリラ扱いされたハンティがペールを関節技に掛ける中、背後で聞いていた魔物将軍らは魔人相手を問題ないと断言したハンティに尊敬と畏怖の念を抱く。魔人に匹敵する最強の使徒の名声はレオンハルト軍の中で特に浸透していた。レオンハルトの次に尊敬を集める程に。
そしてそんなハンティとペールのじゃれ合いを見ながらレオンハルトは更に告げる。
「ケッセルリンクとガルティア。サイゼルとハウゼルにも話は通してある。場合によっては応援を頼んでもいい。とにかく魔王城には誰も近づけるな」
「はっ」
「承りましたわ！」
リーとキャロルが良い返事を返すとレオンハルトは頷く。

「良し。なら俺はこれから魔王城に向かいジル様へ報告に向かう」
「はい！　行ってらっしゃいませレオンハルト様！　ご武運を！」
「後は任せたぞ」
キャロルら使徒に大勢のレオンハルト軍の魔物兵に見送られ、レオンハルトは1人、魔王城へと向かう――その人間との戦いのために。

ルドラサウム大陸東部。
その平原を歩くのはたった1人の人間の男だった。
『おい。気づいとるかガイ』
「……ああ。魔王の住まう城が近いな」
だが聞こえる声は2つ分。
黒髪の青年の暗く静かな声と中年の親父の声。その後者の方は青年、ガイの持つ剣から聞こえていた。
その意思を持つ魔剣カオスは相棒であるガイに対し、気づいたことを口にする。少しばかし緊張した様子で。
『それもそうだがそっちだけじゃないわい。大勢の魔の気配が儂らから遠ざかっとる。ちょっとどころじゃない不可解じゃ』
「……そうか」
『そうか、じゃないっての。もしかしたら罠かもしれんぞ？』
魔物の気配が近づいてくるのではなく遠ざかっているという不可解な現象に警戒するように言うカオスだが、ガイはそれを意に介さない。歩みを止めることもない。揺るがない意思で返答する。
「それならそれで構わない。邪魔が入らずに済む。好都合だ」
『……お前なぁ……』
「何だ？」
そのあまりにも決まりきった、揺るぎのない思考回路にカオスはほんの僅かに何とも言い難い感情になる。ガイが覚悟を決めた時から間近で見ていた思ったその気持ちを口にしようとして……しかしそれを。
『……やっぱええわい。お前の言う通りだ。確かに邪魔が入らんのは

儂らにとって好都合。何しろ――魔王を相手にするってんだからな。魔物一匹相手にする力も惜しい』

「ああ。分かっている」

そうしてガイは少しだけ足を早める。

目的の場所――魔王城の場所は予め魔物討伐隊から聞いているため知っている。人間が持つ魔軍の情報の中で最も簡単に手に入る情報であるため、その情報量も大したことはなかった。

何しろ魔軍はそれを隠そうとしていない。隠す必要がないのだ。矮小な人間が魔王城に近づいたところで何も出来ないし、むしろ来たいなら来てみればいい。地獄が味わえると歓迎すらしている。

そして人間側も近づこうとはしない。好き好んで死地に飛び込む者は少ない。

時折噂に聞く勇者を名乗る人物が魔王城へ向かったという話を聞くこともあるが、帰ってきたという話は聞いたことがない。その末路は十中八九、凄惨な拷問の末の死刑だろう。

あるいは今も生かされて生き地獄に晒されているかだ。魔王城に向かったなら死すら救いである。それを魔物も人間も、この大陸に生きる誰もが理解している。

しかしその死地に、ガイは真っ直ぐ向かっていた。

徐々に大地が荒廃し、空模様が禍々しくなるその道を、恐怖の１つもなくただ真っ直ぐ進んでいく。

考えるのは人類の救済。その元凶たる悪――魔王を殺すことのみ。

それを成すに足るある程度の力は手に入れた。その自信と覚悟がガイを衝き動かす。

ここまで生きてきて目の当たりにした人間の苦しみ。絶望の怨嗟。悲劇の坩堝。自身が体験したそれも含めて、その原因の大部分は魔物の存在にあるのだと確信を持っている。

少なくとも魔物がいなくなれば不幸の数を減らせるとそう確信して。

そうして進み、進み、進み――そうして、辿り着く。

『見えてきたぞ……』

魔剣カオスが言う。
剣の身でありながら感じる筈のない悪寒と汗をかくのを感じながらその禍々しい城の名を口にした。
『間違いない、な……あれが、魔王城だ』
魔王城。
その名の通り魔物達の王である魔王が住まう居城を視界に収め、ガイは1度足を止める。
――確かにこの世の何よりも、恐ろしいと感じられる。
とてつもない魔の力を感じられた。
それらは常人が踵を返すのに十分なもの。きっと多くの勇者、戦士がここまで来て絶望し、少しでも生き長らえるために帰路についたに違いない。その情景は容易に思い浮かべることが出来た。
そして思う。ガイもまた、ここで帰ればまだ生きることが出来ると。
どこかの隠れ里に身を寄せ、その力を以てしてそれなりに楽しく生きることは叶うだろう。今のガイはかつての力のなかったガイではない。そんじょそこらの魔物がどれだけ束になって掛かってきても負けることはないし、あるいは魔人すらも退けることが出来る可能性を持つ。
人に敬れ、女と愛し合い、子を作って満たされることが出来る。そんな未来を作ることは難しいことじゃない。それを、確かに理解する。
だがそれでも魔物への恐怖は終わらない。
その人の幸せですら、この今の世界の人間にしてはという但し書きがつく。
そして壊すことも容易だ。ガイがどれだけ強くあろうとも魔物が跋扈する以上、その危険は常に存在する。ガイを相手にせず、その大切な人を狙うことだって出来る。そうして悲劇を作ることが出来るし、実際に今の世は数え切れない程の悲劇で溢れている。
だからこそここでガイが逃げることは何の解決にもならない。
誰かがやらなければならないのだ。それをガイは理解する。

「――行くぞ」
だからガイは歩んでみせた。
自分の身の内にあるもう1つの人格を封じ込め、ガイは自分の意思で魔王城へ足を踏み入れる。
『……門番も、誰もいないな』
そして足を踏み入れてすぐに不可解に気づいた。
カオスが口にする。城内に、魔物の気配が殆ど存在しない。
まさかそんな筈は、と思う。だが確かに、城内の1階は魔物兵の1体も存在しなかった。
ただ代わりに感じる気配は、凄まじく濃密だった。
「……2階だな」
『ああ……とんでもない魔の気配が2つある』
それは魔剣であるカオスでなくとも、誰でも気づける程の凄まじい気配だ。力に多少の差はあるように感じられるが、矮小な人間の身ではそれがどれほどの差なのか推し量ることは難しい程の魔の力。それをカオスは戦慄しながらも口にする。
『1つは……魔王だな。そしてもう1つは十中八九魔人だ』
「……」
『どうするガイ。こうなったら何か手を考えるか……引き返すのも手だぞ？』
そしてそれが意味するところをガイもカオスも理解する。
魔王と魔人がいる。そしてガイ達の目的は魔王だが、魔人をすっ飛ばして魔王とだけ戦うことが出来るなんて甘い考えは出来ない。
魔人と魔王の2連戦になる――その絶望的な状況に、カオスは思わず撤退すら考慮した。
ガイの力がどれほどのものなのか分かっているからこそ、簡単に失う訳にはいかない。ガイは魔王を倒すことが出来るかもしれない人類の希望。だから厳しいと分かれば一旦下がることも悪くはない選択だ。
「……いや、このまま行く」
『！　ガイ……』

「覚悟はしていた。それに魔人相手にどこまで通用するかはまだ試してはいない。その試しとして魔人を使う」
だがそのカオスのあげた選択肢を突っぱねて、ガイはこのまま進むことを決める。
その発言は自信に満ちたものであり、あるいは不遜にも感じられるもの。
しかしその真意はどうなろうと魔王を倒すという決意の現れだ。魔王を倒すことが叶うならば、刺し違えることも辞さない。
その真意を正しく理解しているカオスはガイの返答を受けて息を呑む。そして、自身もまた覚悟した。
『……わかった。お前がそう言うなら儂も覚悟を決める』
「ああ」
『だが……それでも用心しろ。気を緩めるなよ。この上にいる魔人……その気配には覚えがある。おそらく上にいるのは最強の魔人だ』
「……最強の魔人か」
カオスの注意を受け、ガイもまたその脅威を認識する。
最強の魔人の存在を知らない人類もまた存在しない。
もはや御伽噺にも近い伝説の存在ではあるが、それが実在することは確かなこととして語られている。
魔王と同じく、相対することがあれば生存することは叶わない。畏れを持って語られるその魔人もまた上にいる。
それもまた理解し――ガイは階段に足を掛ける。
「誰が相手でも……やるべきことは変わらない。障害になるなら倒すだけだ」
『……ああ。そうだな』
そしてカオスもガイの言葉に頷く。そう。魔王を倒すなら最強の魔人であっても倒せなければ話にならない。
だからガイは進んだ。一歩一歩。確かな歩みを以て。
徐々に、更に濃くなっていく魔の気配を感じ取りながらも進んでいく。
その目は据わりきっていた。やがて辿り着いた、大きな扉を前にし

ても。
『……ここだ。この扉を開けたらいるぞ』
カオスが気配を正しく察知する。それに頷き、ガイは扉を開けた。
「……ここは」
ガイが辿り着いたそこは巨大な大広間だ。
玉座の間に続く道の道中。王へ謁見する者は必ず通る回廊の先にあるその場所。その扉の前。
「――来たか」
「！」
そこに1人の男が立っていた。
「魔剣カオス……それとその所有者ガイ」
『やっぱりお前か……魔人――レオンハルト』
その赤く鋭い双眸が、ガイとカオスを捉える。
そしてカオスもまた懐かしい相手との再会に短い言葉で答えた。人間の時に出会って以来、約１００年振りの再会ではあるが、その圧倒的な強さと存在感は今でも昨日のことのように覚えている。
「話には聞いていたがそれがお前の願いの結果か」
『おお。これで文句はないわい。この姿なら人間の時には叶わなかったお前を殺すことすら出来るんだからな』
「なるほど。願いが果たせるならどんな形でも問題はないか。確かにその力なら無敵結界を持つ魔人だけでなく魔王様にすら届くだろうな」
魔人レオンハルトは懐かしいその人間が得た力を認めてみせる。
魔剣カオスが持つ力は無敵結界を貫き、魔人と魔王を殺すことの出来る力であると。
「この扉の先にジル様が居られる。お前達の目的は魔王の討伐に相違ないな？」
「……ああ。死にたくなければどいて貰おう」
レオンハルトの確認の言葉に、ここで初めてガイがレオンハルトに向けて言葉を放つ。
ガイという人間とレオンハルトという魔人。その初めての会話

だった。
　レオンハルトとガイの視線が合わさる。魔王であるジルがこの先にいることを敢えて教えたレオンハルトは、その上でガイの不遜な言葉に冷たく反応した。
「面白い事を言う。この俺を前にして大口を叩けるその度胸は認めざるをえないな」
「邪魔をするなら殺すだけだ」
「……なるほどな。その意思は硬いと。ならまずは言葉で、その意思を確かめさせて貰おうか」
　と、レオンハルトは取り付く島もないガイの様子に目を鋭くさせながらも言うべきことを口にする。
「人間ガイ――魔人になる気はないか？」
「……何？」
　冷静な声で勧誘するレオンハルトと、それを聞いて眉を潜めるガイ。その２人のやり取りが、これから始まる２人の戦いの序章であった。

禁呪の力

「……今何と言った？」
その言葉にガイは耳を疑った。こうして、つい聞き返してしまう程に。
だがその返答は変わらない。レオンハルトは再度、視線を外すことなくガイに向かって告げる。
「魔人になる気はないかと――そう聞いている」
「……馬鹿な。ありえないことを。魔人になるなど……」
『そうじゃ！　バカも休み休み言え！　魔人になんざなる訳ないだろう！』
ガイはそれを否定し、カオスもまた強い言葉でそれを拒絶する。
それは人類のために戦う戦士にとって――いや、多くの人間にとって起こりうる忌避反応に違いなかった。
だがその反応を見越していたのだろう。さほど動じることなくレオンハルトは続ける。ガイの思うところを予想し、見抜いたように。
「お前達がそうやって拒否するのは人類のためだろう。ならば、尚更魔人になった方がその目的は達せられる」
『フザけたことを抜かすな……！　魔人になれば人類のためになるだと……!?　ありえないにも程がある……！』
「そう思うのはお前達がこの世を知らないからだ」
『ケッ……また説教か。前と変わらないなレオンハルト。また人間じゃ魔人は倒せないと能書きを垂れるつもりか？』
魔人になれば人間のためになると言われたガイは怒りを見せ、カオスはそのレオンハルトの口ぶりにかつて自分達が言われた言葉を思い出して忌々しく言い返す。
そしてまた同じ説教をするつもりかとカオスは予想したが……その予想に反して、レオンハルトはそれを否定した。
「いや、無駄とは言わない。お前達なら魔人を倒すことも魔王様を倒すことも決して夢物語ではないだろう。可能性は低いだろうが、それでも０ではない。可能性を感じられるのは確かだ」

だからそれを否定はしない。
その言葉に意外を思ったガイとカオスは続くレオンハルトの言葉も聞いた。その上で、レオンハルトはガイ達の目的を否定する。
「だが魔人や魔王様を倒したところで人を救えはしない」
「……その根拠は何だ？　人間を苦しめているのは紛れもなく魔の者達だろう」
「それは否定しない。だが、魔物を滅ぼし尽くすことなど出来はしない。魔王や魔人を殺すことが出来たとしてもそれは一時的な対症療法に過ぎない」
「何をバカな……」
レオンハルトの言葉を思ったより冷静に聞くガイ。
それは心のどこかで、このレオンハルトという魔人が自分と親交のある相手の父親だという情報を置いているからだろう。
そしてガイもまた、人を救う方法と聞いてそれを無視することが出来ないからこそだ。
魔人の言う事は信用出来ない。それは分かっている。
だがそれでも、あるいは――という思いはある。
もしそれが本当に人を救う方法であるならば。１％でもその可能性があるならば無視することはしない。
考えこそ変わってはいないが、ガイは人間を救うために手段を選ばないことを決めている。であればこそ人ならざる力を手に入れたのだ。
だからガイはレオンハルトの言葉に耳を傾けた。一切の油断なく、いつでも戦闘に入れるようにしながらも――
「ここまで来た褒美に教えてやる。魔王は――殺したところで復活する。何度でもな」
「なっ……!?」
『――っ!?』
そしてその絶望的な真実を聞いた。カオスもガイも、同様にそれを聞いて絶句する。
魔王が復活するというありえない、考えたくもない現実。

それを聞いて即座にありえないと言葉を返すのも必然だった。
「そんなバカな……！」
「本当の話だ。もっとも今の魔王……ジル様が復活するという意味ではないがな」
「何……？」
レオンハルトの言葉は聞き逃がせない事だった。
何しろそれが事実ならガイの考える人間を救うための方法が無意味と化すかもしれない。
だからそれを聞いた。正しい情報を得ようとした。現魔王は復活しないが魔王は復活する。その言葉の意味を。
「魔王は代替わりする。ジル様がもし死ぬようなことがあれば、次の魔王はまた別の者に受け継がれる。その魔王の力と一緒にな」

レオンハルトはその真実を告げて、目を見開くガイの姿を正面に見た。
魔王が代替わりすることを知る人間は意外と少ない。
それだけに多くの人間は魔王を殺すことが出来れば人を救うことが出来ると勘違いをする。夢を抱く。
甘い夢だ。意味が全くないとまでは言わないが、それでは根本的な解決にはならない。
「……魔王を倒しても……また新たな魔王が生まれると……そう言うのか？」
眼前。ガイが改めて確認するように問うてくる。
レオンハルトはそれを聞いて頷いた。その上で、更に厳しい真実を隠しながらガイに現実を突きつけてやる。
「そうだ。だからこそ、魔王様を倒すだけでは人は救われない」
そして言う。人類を救いたいのならば、その先を見るべきだと。
「お前は今、こう考えているな？『ならば何度でも倒すだけだ』と。確かに、それが出来れば解決するかもしれないな。現実的ではないが」

生み出される魔王をひたすら倒し続ける。そんな方法をまず思い浮かべることを予想してレオンハルトは思考を先回りする。
そしてレオンハルトはそれを絶対に実行出来ない理由を知っている。
だからこそそれは無駄だとはっきりと言う事が出来るが、その理由を口にすることはない。魔王を倒した者が魔王をまた倒せない理由を隠しながらも、別の部分でそれを否定する。
「人間には寿命がある。限界がある。お前が魔王様を倒せる力を持っていたとしても、それが通用するのは精々１００年足らずだろう」
「それは……」
「それにお前は1人だ。どれだけ強くとも個では限界がある。1人では世界中で苦しむ人間を救い切ることは出来ない」
「……」
ガイの反論を封じながらレオンハルトは現実を口にした。
そして別の手段を提案する。
「だからこそお前は魔人になるべきだ」
それは最初にガイが否定した提案だ。
魔人になることが長期的に見て人を救うことになるのだと、レオンハルトは心からそう思っている。
「魔人になれば寿命は存在しない。老いや病で死ぬことはなくなる。人間以上の力を得ることが出来る。この大陸で絶対の地位を得ることが出来る」
無言になったガイに力説してやる。
方法はこれしかないのだと。
「そうなればその力と地位で人間を救うことが出来るだろう。この俺のように、大勢の人間を長きに渡り保護することが出来る」
そうしてあえて嘯く。
その言葉は真実ではある。確かにレオンハルトはそうすることで多くの人間を救っている。人間牧場で、あるいは個人として人を保護している。
その数は人類全体として見れば微々たるものだが、何百年とそれを

行っていることから総数としてはそれなりの数になるものだ。
「人間を救いたいと言うならお前は魔人になるべきだ。そうすればお前が選んだ人間は必ず救われる」
使徒や下級使徒にでも任命すれば魔物に害されることもなくなる。
ジルもその部分にまで踏み込んではこない。そもそもジルは大多数の魔人には興味がないし、人類を苦しめることが出来ればそれでいいという思考の持ち主だ。
人類全体が苦しむ世の中を維持し、目に入った人間を苦しめることが出来るなら、視界に入らない人間が多少救われていたところで目をこぼしもする。
どうせその人間達が得た救いも、絶望に繋がるのだと確信して。
「なんなら俺がやり方を教えてやる。魔人としての生き方。人間牧場の運営方法。そして少なくない人を救う方法をな」
あるいはその先で更なる真実を伝えることもありえるだろう。
……いや、十中八九ガイは気づくことになるだろう。
だからこそその言葉は真実だ。嘯きながらも嘘は言っていない。伝えていない情報があるだけ。
だからこそ、レオンハルトは目的のため、心からガイの勧誘を行うことが出来た。だからこそ――
「――もういい」
「！」
――その言葉はガイに、届く筈がない。
ガイはその言葉を途中で差し止めた。
もうこれ以上、聞いても意味はないとそう判断して。
「何を言うかと思えば……貴様の言う事は全て欺瞞に過ぎない」
ガイは言う。レオンハルトの言葉は全て、人間にとって受け入れられる筈がないフザけた言葉だと。
「その力と地位で人間を救う？　長きに渡り人間を保護するだと？　ふざけるな……！　貴様はそのために大勢の人間を見殺しにしろと、そう言うのか……！」
そう。魔人になって人を救うということは、ある程度の犠牲を許容

するということ。
確かにレオンハルトの周囲。そのごく一部は救われているのかもしれない。その者達はレオンハルトに感謝しているのだろう。それを丸々否定する気はない。
だが一方でレオンハルトもまた魔人として、救った人間以上の人間を苦しめ、死に至らせていることに違いはない。
そのことは勿論、レオンハルト自身も理解していた。だからこそ、眉根を僅かに寄せながらも淀みなく返す。
「……全ての人間を救うことなど出来はしない。ある程度の犠牲は許容しなければならない」
「腐りきった正論だな。確かに、全ての人間を救うことは出来ない。だが貴様の言うことはどこまでも人間を下に見た傲慢な言葉だ……！　他の魔人や魔物と何も変わらない。結局、そこに人間の自由はない……!!」
「……」
ガイの強い意思の宿った言葉に、今度はレオンハルトが押し黙る番だった。
それは否定は出来ないこと。ガイや、多くの人類を救おうとした戦士が願っているのは、人間の救済であり、魔物の支配からの解放でもある。
魔物の支配を受け、魔物に左右される救いになど価値はない。
「貴様は少なからず人を救っていると言ったが、貴様の言うその方法では人間を真に救えてはいない……！　それは怯えているだけだ、従わざるを得ないだけだ、騙されているだけだ……！　何せ貴様の気分1つで命を奪われるかもしれないのだからな……！」
ガイは自身の経験を、今まで生きてきた人生を思い出しながら口にする。
ガイの人生は常に悪意と隣合わせであり、恐怖と閉塞感に苛まれ、何かに奪われ続けた人生であった。
人間牧場で生まれ、少年奴隷として育ち、居場所は常に奪われ続ける。

魔物に苦しめられるだけでなく、人にも疎まれた。そして、多くの嘆きと苦しみ。そして地獄を見てきた。
「人間を救うために魔人になれだと……!? この、今の世界を許容しろと本気で言うのか……!」
そう。ありえない。
魔物が支配する世界。人間が苦しむ世界。
大勢の、何億という人間が魔物に虐げられ、その恐怖に怯え、明日の朝日を拝めることに感謝を捧げ、それでも満足に生きることは出来ず、血を流し続けるこの大地。
それを許容することなど、到底ありえない。ありえる筈がない。それが許せるのは、もはや人間ではない。目の前の、人をやめた男のような。
「魔人レオンハルト……それを許せるのは、人ではない……! 人の運命を差配しようとする貴様は正しく魔人だ……! その魔人が、人の守護者を騙ろうとするなど片腹痛い……! ふざけている……!」
許せる訳がないとガイは強くレオンハルトを睨みながら絞り出すように声を吐く。
「はっきり言ってやろう。貴様の言う事は信用ならない。貴様は人に害をなす魔人だ……それ以上でも以下でもない……!」
「……ならどうするつもりだ?」
「貴様に教える必要はない。私は、私のやり方で人間を解放する」
そして揺るぎない覚悟を決めた瞳でレオンハルトに敵意をぶつける。
いつでも応じることの出来るように。
先手を取らないのは対話をまず選んだレオンハルトへの最低限の礼儀として。レオンハルトが戦闘態勢を取るのを待つ。
そしてそのレオンハルトは、ガイのその取り付く島もない態度を見て、難しい表情のままゆっくりと口を開いた。
「……俺は、人間を正しく評価しているつもりだ。舐めているつもりもない。さりとて傲慢であることも否定はしない。お前の言う事は一部正しいだろう」

レオンハルトはそれを自覚している。自分の精神状態は、確かに魔人然としていることを。
今の自分は、ガイのように人間が苦しめられているのを見て激しく憤慨出来る程の精神を有していないのだと。
身近な人間であれば、情が移った人間であれば心を傷ませることもある。怒りや悲しみに暮れることもあるが、何の関係もない人間が嘆き苦しんだところで、もはやレオンハルトは何かを感じることは難しい。
２０００年近い時を魔人として生きてきたレオンハルトは、その魔人としての職務を真っ当する中で人の苦しみに慣れすぎている。
多少不快には感じられたとしても、それがどうしても許せないことかといえば正直なところ、それをはっきりと肯定することは難しいのだ。
かといって面白いとは思わない。その趣味と趣向自体は変わっていない。人間の醜さも輝きもよく理解している。そのどちらでも心は動くこともある。
今のガイの姿を、そしてその言葉を聞いた時のように。
「だが……あえて俺はこう言おう」
レオンハルトは人間を正しく評価している。
ガイのことも正しく評価している。
人間の意外性は、魔を打ち倒す可能性を秘めていることを知っている。
しかし……このガイが言うような、根拠のない人を救うという言葉。
そして魔の者では人を救うことは出来ないというその言葉。
その２つは到底看過出来ないことだ。前者は、それが難しいことを知りながらも長年そのために動いてきた身として。
そして後者は、レオンハルトが何よりも大切に思っている存在を否定する言葉であるからこそ――レオンハルトは怒りを見せて右手を伸ばし、その剣を引き抜く。
「――人間風情が、図に乗るな」

「――ッ……！」
空間から引き抜かれる赤黒い魔剣――オル＝フェイル。
その瞬間に放たれるのはレオンハルトの今まで抑えていた濃密過ぎる魔の気配。殺気。覇気。物理的な圧力すら感じる程の目に見えない力の奔流。
魔王城の大広間が小刻みに揺れている。それを感じながら、ガイは己もまた魔剣カオスを構えて戦闘態勢を取る。
「やはりお前とは相容れないか……なら後は雌雄を決するだけだ。俺は俺の目的のために。お前はお前の目的のためにな」
『っ……気をつけろよガイ……！　魔物大将軍やあの地下で戦ったドラゴンとは桁違いじゃ……！』
「理解している。こちらも最初から全力だ……！」
ガイがカオスを持たない右手で血の色にも似た魔法の光を集める。
その禍々しさ。形容し難い魔法の光はレオンハルトもまた興味が湧くものである。
「魔王様を倒すと豪語する人間の実力がどれほどのものか……精々見定めてやろう――行くぞ」
魔人筆頭にして魔軍参謀。
最強の魔人であるレオンハルト。その最初の一撃は、最速の一撃でもあった。
「――〝瞬光〟」
それは今までに、誰1人として受けることの叶わなかった光の如き居合の剣。
１０００年以上昔の英雄。かの藤原石丸でさえこの剣には事前に察知して幻惑で躱すことを選ぶしかなかった。
常人では何が起こったかも分からずに断ち切られて絶命する。
その剣の通り道である空間でさえ、斬られたことに気づくのは一瞬後だ。
それほどの一撃。剣の王と呼ばれ、世界最強の剣士としても名高いレオンハルトの奥義の1つは、同じ魔人であっても防ぐことは難しい必殺剣だ。

そしてそれを、レオンハルト自身も理解している。これを防ぐならば最低限でも魔人四天王級。あるいは自身と同程度の力がなければ為す術もないだろうと。そう思っている。だからこそ――

「――禁呪〝アポカリプス〟」

「――何ッ……!?」

ガイが魔法の詠唱を一瞬で終えた直後、ガイがレオンハルトの剣を真正面から受け止めたことに、レオンハルトは純粋に驚愕することになった。

それは何が起こったのか、誰にも理解が出来ない正体不明の現象。

『今じゃ――!』

「ッ!」

「ぐ――!?」

そしてレオンハルトがその意味を理解するまで。冷静さを取り戻すまでに生じる一瞬しかない隙も、今のガイにとっては確かな隙として突くことが出来る。

カオスが叫ぶ中、レオンハルトと同程度に近い速さを持ったガイの剣が、レオンハルトの身に僅かに当たる。

そしてバキンと生じた音は――魔人が持つ無敵結界を、カオスが破壊した音であった。

だがそれ以上の結果は起こらない。

「っ……!」

『ぬおっ!?』

次の瞬間にはレオンハルトの剣撃がカオスを強く弾き返し、ガイの身体ごと後方に下がらせる。

カオスがたまらず声を上げ、ガイもまた口の中で舌打ちを起こす中、事実を正しく認識し終えたレオンハルトは剣を自然に下ろした状態で、耐えきれずに口端に笑みを覗かせていた。

「まさかこれほど早く俺の無敵結界に触れてくるとは……いや、それより今の身体能力は何だ……？　禁呪と言っていたな。その効果か？　だとしたら……なるほど。中々どうして面白い……！」

『チッ……傷の1つでも負わせられれば良かったんじゃが……でもこ

れなら通用するぞ！　向こうが対応してくる前に一気に行け！　ガイ！』
「ああ……分かっている」
ガイが再び詠唱を開始する。
魔法の力。その発動もまた一瞬で終わり、レオンハルトが反応する中、ガイの周囲には９つの魔法球が浮かび上がる。
「禁呪〝ヌメロロジー〟」
「！」
その魔法球はガイの周囲を回るように移動しながら光り輝く。
しかもその輝き。魔法の収束はレオンハルトも見覚えがあるものだった。
攻撃魔法の中でも最強の攻撃力を誇るその魔法が、ガイの生み出した９つの魔法球から、合図と共に同時に放たれる。
「〝黒色破壊光線〟！」
「――！」
通常の黒色破壊光線の――１０倍。
ガイの放つそれを含めた破壊の奔流が、レオンハルトに向かって一斉に放たれた。

ガイＶＳレオンハルト

魔王城の大広間に轟音が発生する。
それを起こした男――ガイは己の内に走る痛みや何もかもを無視して破壊の煙をじっと見ていた。
『どうだ……？』
「……いや」
自身の左手に持つ魔剣カオスとの短いやり取り。その意味は今の攻撃がどの程度通じているかという確認と問いかけだ。
あらゆる魔法効果を重複させ、強化することの出来る禁呪〝ヌメロロジー〟を発動させて放った黒色破壊光線は本来の威力の１０倍。
それも現在のガイが持つ膨大な魔力から放たれるそれは一般の魔法使いが使うものと桁違いの威力を誇る。
ゆえに、相手が魔人であっても通用するだろうと。そう見ていた――その見立てはやはり裏切られる。
「――やるな」
「!?」
その声が聞こえたのは、煙を晴らす斬撃――真空波が飛んできたのとほぼ同時であった。
更にその声が聞こえたのはガイの背後から。
斬撃を放ち、それがガイに届くより先に距離を詰めたレオンハルトはたった1人での挟撃を成立させ、その絶技を以ってしてガイに反撃を行ってきた。
「魔法の威力は申し分ない。この俺にも手傷を負わせるほどだ。禁呪と言ったか、どうやらその効果は魔法の効果を増幅させる物のようだな」
「ふっ！」
間近で聞こえたレオンハルトのその言葉に、ガイは返答することはない。
代わりとしてカオスの振り下ろしという返す刃をお見舞いする。
その刃の速度は今までのガイの何十倍も鋭く重いもの。レオンハル

トの剣に対応し、それを受け止めるほどだ。
　そしてそれもまたレオンハルトはその紅い双眸を細めて分析する。
「そしてこの俺についてくる程の身体能力。それもまた禁呪の力か。まさか魔法１つで対応してくるとは、禁呪とはいえ面白いことをしてくれる。代償はある筈だが戦闘に支障をきたすほどではないか」
「随分とお喋りだな……！」
「戦闘中のお喋りは嫌いか？　なら返さなくてもいい。俺と戦闘を成立させる人間は実に６００年振りになるからな。こう見えて気が昂ぶっているんだ。おかげでつい饒舌になってしまう」
『儂らの時は戦闘ですらなかったってか……！　どこまでも舐め腐った奴じゃの……！』
　カオスが鍔迫り合いの最中にそう割って入れば、レオンハルトはそれを鼻で笑う。それは肯定の意味だった。
「そういうことになるな。だがそう悲観するな。お前達もまた人間レベルでは最高峰だった。十分合格点ではあったが……俺に力を出させるには足りなかっただけのこと」
『ならガイの強さは貴様を脅かすのに十分っちゅうことか……！　それは良いことを聞いたのう……！　この手応えから見ても――貴様を殺すことは可能じゃ……！』
　カオスの刃がレオンハルトの持つオル＝フェイルを僅かに押す。
　それはガイの力がレオンハルトに迫るほどである証左であった。
　あるいは――僅かに上回っている。
　その微妙な力の具合をレオンハルトもまた読み取ったのだろう。世界最強の剣士である彼は、その剣を相手と合わせただけでその力量を察することも出来る。ガイの力が確かに、自分を殺しうる脅威であると認識したレオンハルトは――しかし、不敵な笑みを浮かべていた。
「ククク……そうだな」
「っ……！」
『ぐうっ!?』
　瞬間、レオンハルトの魔の気配が更に一段と強くなる。

物理的に放出されたと感じるほどの濃密なレオンハルトの気配に思わずガイとカオスはむせ返りそうになる。
鍔迫り合いの最中、間近で向けられるレオンハルトからの敵意や殺意。覇気や鬼気と言うべき全ての気配を凝縮したその正体は――レオンハルトの破壊衝動だ。
「本能が警鐘を鳴らしている。数百年動くことのなかったそれがようやくだ……！　ああ、感じるぞ……お前は強いな……！　その身に余る魔力に禁呪の力……！　魔を滅する剣……！　確かに俺を殺しうる力……！」
「ぐ、力が……増している……！」
『何じゃ……!?　剣の気配まで……！』
剣が押され、レオンハルトの力が増していることを察したガイとカオスは僅かに呻く。
だがそれが、数百年振りに発揮しようとしているレオンハルトの本気の一端だ。
そのパワーに置いてもレキシントンやノスを凌ぐ。レベルにして３００を超えたレオンハルトの強さ。
普段は破壊衝動と共に押し込められているレオンハルトの力が、ゆっくりと鎌首をもたげていた。
「感謝するぞガイ……カオス……おかげで久し振りに戦いが楽しめそうだ……！　強者にのみ向けられるべき俺の破壊衝動を発散することが出来る……！　お前らの血を見ることでな――！」
「ッ！」
『ぬおっ！』
そしてその力は突然、爆発したようにガイの身体を弾き飛ばすことで発揮された。
「簡単にやられてくれるなよ……！　さあ、行くぞ――!!」
そして間髪入れずに、距離を詰めようと飛び込んでくるレオンハルト。
最強の魔人との戦いが始まった。

魔人レオンハルトはガイの力を感じ取り、心が沸き立つのを抑えられなかった。
魔人は皆、血を好む。それはどんな穏健な魔人であろうとだ。レオンハルトとて例外ではない。その身には魔王には圧倒的に劣るが、破壊衝動を持ち合わせている。
だがレオンハルトはそれを極力抑え込めている。元来の趣向ゆえか、弱者に対しての破壊に興味は持たず、修行によって剣を振り発散するか、魔人同士の喧嘩によって発散するか、あるいはまた別のことで発散しているものだ。
だがそれでは満足出来ない。レオンハルトが個人として求めているその衝動は、強者との戦いでこそより発散されるのだ。弱者を殺しても満足は出来ない。そんなものは腹の足しにもならない。
だがレオンハルトの求める強者のラインに届く人間は少ない。
磨けば光る可能性を持つ人間。見どころのある人間であればそれなりに見ることは出来るが、それは本来レオンハルトが求める強者には程遠い。遥か下の物だ。
レオンハルトが興味を持てる。楽しめる相手となると最低でも魔人級。ある程度本気を出せるのは魔人四天王級が必要となるが――そんな相手は滅多に存在しない。
人間であれば１０００年以上昔に戦った藤原石丸。６００年近く昔に戦った勇者クエタプノなどが当たる。
それは２０００年近い時を生きてきたレオンハルトにとって、あまりにも少ないものだ。
それでも最初の頃はまだ楽しめた。レオンハルトが、まだ今よりもっと弱かったからだ。
だが強くなるに連れて、求める強者のレベルは高くなる。
そして徐々に強者は現れなくなった。
戦いのないという意味では、退屈な日々を送っていた。そんな時に現れた超新星こそが――今、レオンハルトの目の前にいるガイという男だ。

禁呪という魔法を使ってこちらとの戦闘を成立させるガイは貴重な存在だ。魔法使いの強者。今まで、レオンハルトがあまり戦ってこなかった相手だ。
魔軍においての魔法使い。その最強クラスといえば――あるいは魔人レッドアイ。
生物、無機物問わず寄生し、膨大な魔力を用いて破壊をもたらす魔法生物。
あるいはレオンハルトの使徒であるハンティ・カラー。
瞬間移動魔法を始めとする様々な魔法を高レベルに用い、複合魔法などの新魔法すら開発してしまった戦闘系の魔法使い。
あるいは、技術や知識という意味ではレオンハルトの城に居候し、研究を続けるガウガウ・ケスチナ。
レッドアイを生み出した優れた付与師であるガウガウは魔道具の制作において他者の追随を許さない天才だ。
そしてあるいは――魔王ジルなどもそうだろうが、そのジルを除けば……これほどの魔法使いにレオンハルトは出会ったことがない。
今まで出会ってきた魔法使い。魔王を除いた全ての相手を上回っている。そんな相手に、
……俺の剣を試すことが出来る……！
それを思い、レオンハルトは自然と笑みを浮かべた。剣を握る手に力が籠もる。発揮した力に反応して剣が唸る。四肢に力が漲る。
魔法という不可思議の力が、どこまでの物か。どこまで剣に抗えるのか。
「速さでは付いてくるか！　ならこれはどうだ！」
「！」
対応してみろ――と。レオンハルトは目の前のガイを試すべく、己の技を披露した。
「一瞬連斬――〝団子斬り〟!!」
――それは剣の達人。もはや神の領域にまで至ったレオンハルトのみが使える理を無視した剣撃。
ガイの四方。上下左右から振るわれる４つの斬撃は、そこらの武芸

者をあっさりと4等分にしてしまう反則級の剣技。
　これをどう対応するか。それをレオンハルトは見逃さなかった。この程度で死ぬなら興醒めだ。その信頼に応えるように、ガイが魔法を発動する。
「禁呪〝ハルマゲドン〟」
「ッ！」
　瞬間、ガイを中心に極光が――爆発が巻き起こった。
　それは城の大広間を、そして予め張ってある衝撃用。破壊用の結界がなければ城全体を燃やし尽くし、吹き飛ばすほどの極大の爆発だった。
　それを間近で受ける――そう思ったレオンハルトは、その爆発が届く。届いて身体を焼いた瞬間にダメージを軽減するべく奥義を放った。
「奥義――〝禍津風〟!!」
　それは剣を嵐の如く振るう人の想像を超える連撃。
　その剣技によって振るわれる連続の斬撃は、比喩でもなんでもなく嵐となり得る。
　例えるなら鎌鼬。それが、何百と一気に発生する如く。
　レオンハルトの斬撃が、竜巻のようになって周囲に吹き荒れ、近くにあるあらゆるものを両断する。
　それは禁呪の爆発でさえ例外ではない。
　僅かに対応が遅れながらも技を放ったレオンハルトは、その爆発を周囲に全て斬り捨てることでダメージを軽減した。
　だがそこで一息つくことはしない。すぐにガイの姿を確認し、次なる技を放つ。
「中々の威力だ……！　次はこっちからもお返しするぜッ……!!」
『あれは……！　ガイ！　あの技は受けるな！　あれはヤバい！』
「……！」
　レオンハルトが上段に大きく構えたことで、カオスは何かを思い出したのだろう。1度放ったことのあるその技を見て主人に注意を促した。その直後に、レオンハルトはガイを叩き潰すべく剣を真っ直ぐ

振り下ろす。
「〝震天〟――ッ!!」
「……っ!!」
地割れを起こし、天を割るほどの強烈な振り下ろし。
人間程度は粉微塵に出来るその斬撃をカオスの注意通り、ガイは受けなかった。地面を揺れるのを感じたのか、ガイは空中へ逃げるが、レオンハルトは逃さない。
「距離を取ったところで安全だと思うなよ……！　そこはまだ俺の間合いだ！」
「安全だと思ってはいないさ……！　だが、この距離は魔法使いの距離だ！」
互いに剣を、魔法を放つ。その動作に緩みも遅れも存在しない。
「〝天羽々斬〟!!」
「禁呪〝スティグマータ〟!!」
レオンハルトの突き。そこから発生する白い奔流。極太の剣気。
ガイの言葉と共に発生する白い光線。白色破壊光線にも似た光の攻撃が――レオンハルトの剣気と激突する。
「ぐっ……！」
「クハハ！　やるな！」
その破壊の激突は、互いに余波を与えることでの痛み分けとなる。あまりにも規模が大きすぎて相殺された僅かな余波でさえ互いに届き得た。
ガイがうめき声を上げる中で、レオンハルトは喜びの笑い声を飛ばす。過去を振り返ってもあまりないものだ――自らが出血することなど。
それをこうも容易く成したガイに、レオンハルトは徐々に高揚していく。
もはやその傷すらも、戦闘の楽しみなのだ。レオンハルトにとっては。互いの負傷は戦いを彩るスパイスでしかない。歓迎すれど忌避するものではないのだと、レオンハルトは怯んだガイに続けて攻撃を加えようとして――

「ッ!?」
――そこで気づく。自らの身体の内側を蝕むものに。
そして発生する激痛に。レオンハルトは、身体を一旦その場に留めることで対応した。その痛みに慣れ、現状を正しく把握し、敵にこの隙を突かせないように。
「これは……毒か……！　俺の体力……力を弱めている……！」
「気づいたか……！　だが気づいたところでそれは治せまい……！」
『よっしゃ！　やったぞガイ！　このまま一気に攻めて攻めてやっちまえ――ッ！』
「ああ。分かっている……！」
「っ……！」
自らの身体を蝕む毒。そして激痛を感じながら、レオンハルトはガイの突撃を捌く。
おそらくは先程の禁呪の効果。あれはおそらく、魔法というよりはそれこそ呪いに近いものなのだろう。受けた者の体力と力を削り、そして激痛を与えるという弱体化の呪い。
痛みに強い自身でさえ、眉をひそめてしまう痛みにレオンハルトは驚く。これは確かに効くと。激痛はこちらの集中力を乱し、毒は徐々にこちらの能力と体力を削っていく。
「ざっと数時間ってところか……？　中々えげつない魔法を持ってるじゃねぇか……！」
「安心しろ！　そこまで時間は取らせん！」
カオスを使ったガイの剣撃。その技術はレオンハルトより遥かに劣るとはいえ、その身体能力はレオンハルトに迫ったもの。弱体化の効果も相まって、レオンハルトは対応に僅かに苦慮する。
だがその対応もすぐに終わる――その頃にはガイもまた次の手を打っていた。
「〝粘着地面〟……！」
「！」
その対応に苦慮した一瞬の隙を突いて、ガイがレオンハルトの足元に魔法を発動させる。

それは触れたものに粘着して足止めする普通の魔法。いわば、小細工と言うべきものだ。
「舐めるな……！　こんなものが効くと思うなよッ！」
「1秒でも足止め出来れば十分だ！」
そう。レオンハルトの身体能力なら無理やり、地面を破壊して足を抜くことが出来る。
だがその時にはガイがまた少し早く魔法の手を打っていた。ガイの周囲に浮いていた9つの魔法球。それらが拡散することで。
「何だと……!?」
「〝黒色破壊光線〟!!」
ガイの魔法がレオンハルトに向かって飛来する。
足止めされたレオンハルトはそれを斬ることで防御とした。続いてやって来る9つの魔法球からの黒色破壊光線も、避けつつ避けきれないものは断ち斬ろうとして。
「ぐっ!?　なんだ!?」
レオンハルトは、動かした足が再び引っ付いたように動けなくなったことに困惑した。
先程の粘着地面の効果かと思ったが、その範囲内からは逃れるように動いた筈。だが、その場所に粘着地面が置かれていた。その意味を、レオンハルトはガイの言葉で理解する。
「魔法球は魔法を重複させることが出来る……それぞれ別のタイミングで、別々の魔法を使うこともな……！　悪いがそこも通行止めだ……！」
「ッ！」
粘着地面の重ねがけ。そうすることでレオンハルトの足を再び止めたガイは次なる本命の魔法を放つ。
こちらの行動を読み切ったようなその罠にレオンハルトが称賛と驚嘆を覚える中、ガイは9つの魔法球の照準をレオンハルトに合わせた。
「そしてこちらが本命だ……！」
9つの魔法球がそれぞれの色で光り、高速回転を始め、魔法光を発

生させる。
　そうして放つのは先程の黒色破壊光線？　１０のような力技の魔法ではない。やはりそれも禁じられた――魔法の破壊光線だった。
「禁呪!!　〝九色破壊光線〟!!」
「ぐ、おお……!?」
　９つの魔法球から放たれた破壊光線が収束し、より強大な破壊光線となったその禁呪が――レオンハルトに降り注いだ。

　ルドラサウム大陸東部。その平原で、周囲の警戒を行っていたハンティはその気配に気づいた。
「……！」
「どうかしましたの？　ハンティさん」
「もしかしてまた人間を捕らえたことを憂いてるんですか？　始祖様のそういうところは美徳ですけど、ちょっとは割り切った方が楽だと思いますよう？」
「浮かない顔ですな。何かありましたか？」
　同じく周囲を見回っていたレオンハルトの使徒、キャロル、ペール、リーもハンティの反応を見て声をかけてくる。
　ハンティは僅かに答えることに迷ったが、迷った末に答えた。念のため見ていた、その戦いの気配のことを。
「いや、ちょっとね……レオンハルトが随分と楽しんでるみたいだからさ」
「それは良いことですわね！　レオンハルト様が楽しんでおられるならそのガイという人間もここまで監視してきた甲斐がありますわー！」
「ふむ。レオンハルト様が楽しむ……やはり、それほど強い人間ということですな」
「なら問題ないじゃないですか。それなのにその表情をするってことは……もしかして始祖様、自分も行きたいとか思ってます？」
「……別にそんなんじゃないっての」

お気楽な使徒連中。レオンハルトへの忠誠心が限界を超えている他の使徒の言葉にハンティは呆れる。主に忠誠心を抱かない使徒の方が珍しいとはいえ、ハンティとしてはもう少し信頼を下げてほしいところだ。レオンハルトというだけで盲目的に信じてしまう当たりがあるキャロルとリー辺りは特に。

そしてハンティがげんなりしていると、話題はまた別のところに移る。

「それじゃないなら……あっ。もしかしてこの間志願してきた使徒候補の事ですか？　あの人、始祖様と真逆ですもんね」

「真逆……？　よく分かりませんが、それは一体どういう意味で……？」

「いやいやリーさん。真逆じゃないですか。主にある部分が……」

「あー分かりましたの。確かに真逆――って、駄目ですわよペールさん！　その煽りは禁句ですわ！　そして地味にわたくしにも効きますからやめてくださいですわ！」

「あはは、ごめんなさーい」

「あんたらね……というかペールだね。後でお仕置きかな。どこが真逆なのか、後で聞かせてもらうよ」

「じょ、冗談ですよう！　冗談！　それに誰もどことは言ってないじゃないですか！」

自分をからかうことが慣れてきたペールを軽く睨みつつ、ハンティは息を吐いた。

こうして勝手に色々と憶測されるくらいなら話しておこうとハンティは少し待って改めて口を開く。

「はぁ……ま、この面子なら隠すことでもないけどさ。レオンハルトが楽しみすぎて、アレ見せちゃいそうだなって思っただけだよ」

「アレとは……まさかアレのことですか？　まさか……人間相手にそれは……」

言うと遠回しにありえないという言葉がまずリーから返ってくる。

ハンティとしてはそれもありえると思っているが、どうやらそれは少数派の意見らしい。続くペールとキャロルの言葉も同様で。

「えー？　アレって……そりゃアレのことですよね？　ならありえないですよう。１０００年前の藤原石丸の時にも出さなかったじゃないですか。多分レオンハルト様的にはよっぽどのことがなければ見せない気がします」
「わたくし、レオンハルト様のアレも好きですわー！　でもハンティさんとの模擬戦くらいでしか出してないですし、出すことはないと思いますの！　わたくしとしては、もっと見たいのですけど……」
「見せないとは限らないでしょ。それこそほら、あのクエタプノって勇者の時はあのまま続けてれば見せてただろうし。相手が魔王を倒しかねないってレベルの相手なら……幾らレオンハルトでも劣勢は避けきれないだろうからね」
「だからってそこまで追い詰められますかねぇ？　それに多分レオンハルト様の気分にも寄りますよ？」
「ま、それはそうなんだけどね……」
　ハンティが懸念を口にすれば他の使徒達の間でも様々な意見が出る。さすがにない、というのがハンティ以外の意見ではあるが、ハンティとしてはちょっと怪しいと思う。この苦戦具合なら遠からずアレになってもおかしくない。そう思っている。
「最近のレオンハルトは特に期待してるというか……戦いがあまりなかったのもあってかなり疼いてるからね。我慢出来ずに暴発する可能性もあると見てるね。あたしは」
「……ガイという人間はそれほどですか」
「ふむぅ……始祖様がそう言うならそれもありえるんですかねー。ま、ペールちゃん的にはレオンハルト様がいいならいいと思いますけど。アレになったところでレオンハルト様はレオンハルト様ですし」
「同感ですわ！　レオンハルト様はアレでもレオンハルト様ですの！
　なのでこれ以上、この話題をするのは駄目ですのよ！　この話題は外部にバレるまでは禁句ですわ！」
「まあ誰もいないとはいえあまり外で話すことではないですねー」
「……ま、そうだね」
　キャロルの注意によってその話題は中止にされ、ハンティもそれに

素直に従う。誰も周りにいない平原。一応注意はしているとはいえ、話題に出さないことを律儀に守るキャロルはさすがの忠誠心と言う他ない。ハンティとしてはこれくらいなら全く問題ないと思ってしまうのに。

それにバレたところで……という思いもある。レオンハルトへの評価がまた多少上がるだけで特に問題ないと思ってしまうのだ。

……というか、大っぴらになってくれた方があたし的には合法的に挑めてありがたいっちゃありがたいか……。

なんてことを思いもする。さすがに使徒として最低限のラインは守るので、それを喧伝するようなことはないが、心の中では欲望に忠実にそんなことを考えてしまっていた。

とはいえ4人の使徒にはレオンハルト自ら教えていることなのでバレずともある程度は挑めるのだが。ハンティとしてはあのレオンハルトも含めてレオンハルトだからこそ、出来れば良い勝負をしてみたいと思う。

そして魔王城から感じる強い魔の気配を感じて更に思う。

あのガイという人間が、本気で魔王ジルに迫るほどの実力を持ち、レオンハルトを上回る力を持っていたとしても。

――あのレオンハルトには、敵わないだろうと。

魔物界の英雄

禁呪の攻撃は容赦なく最強の魔人を圧倒する。
九色破壊光線という戦略級の魔法を魔人レオンハルトに直撃させ、ガイは自らの力が最強の魔人相手にも十分通用することを改めて理解した。
無論、余裕という訳ではない。レオンハルトとの戦闘は、油断すれば一瞬にして斬り捨てられる危険性を孕んでいる。幾ら禁呪を扱えるとはいえ、ガイは人間なのだ。肉体の強度は魔人と比べるべくもない。
それに、幾ら魔法において比類なき才能を持つガイであっても禁呪を使うのにノーリスクという訳にはいかない。禁呪を1つ使う度に、常人であれば発狂するか、死に至る程の精神的な負担がガイに伸し掛かるが、それをガイは己の内にある2つの人格によって分散し、強引に踏み倒している。
（ぐおおおっ!?　おい！　いい加減にしろ！　さっきから痛いぞ！）
そしてその心の内から聞こえる抗議の声を完全に無視をして、ガイは目の前の魔人との戦闘だけに集中していた。
先程の黒色破壊光線とは違い、今度の魔法はさすがに効いただろう。弱体化の禁呪も効いている筈。体力だけでなく能力も削り、確実にこちらが有利だ。
「このまま押し切る……！」
『おう！　やったれガイ！』
魔人に対し強い効果を持つカオスを手に、煙が晴れた先。口から血を流していたレオンハルトとの距離を詰めるために駆け出す。どうやらそれなりのダメージを与えられた様子だ。こうして怯んでいる内に更なる追撃を与える。休ませはしないと、その思いで進んだガイの突撃に対し、レオンハルトは苦悶から笑みに表情を変化させながら呟いた。
「っ……さすがに効くな……！　まさかこうも押されるとは……！」
『おら、死に晒せ！　レオンハルト！』

「ッ！　休ませても貰えないか……！　容赦ないじゃねぇか……！」
ガイはカオスの剣撃をレオンハルトに向けて振るう。それは防がれ、反撃も返ってくるが余裕はある。先程までより確かに弱まったものだ。
これならこのまま倒せる。魔王を前に体力や魔力を削られる訳にはいかない。余裕を持って倒すという目標を完遂出来る。
禁呪の力込みとはいえ――ガイの実力は確かにレオンハルトを上回っていた。
「報いを受ける時だ……このまま倒れろ……！」
「ぐ、お……！」
魔法球から放たれる幾つもの魔法。カオスの剣。禁呪。それらを含めた怒涛の攻撃がレオンハルトを追い詰めていく。
苦悶に喘ぐレオンハルト。その様をガイは一切の緩みを見せずに視界に収めながら叩く。
――そしてその目が全く死んでいないことにも気づいていた。情報が送られ、その攻撃を予知する。
「奥義――」
「禁呪――」
ゆえに技を放つのは同時だった。こちらが攻撃に傾倒した僅かな隙を見て力を放出するレオンハルトに対し、ガイもまた己の禁呪の力をカオスに付与した。
そうして放たれるのは全てを滅する破壊の禁呪。それを剣に付与した複合奥義。全ての魔族を殺すためにガイが編み出した必殺の魔法剣技だ。
それが、レオンハルトの最高の剣技と激突する。
「〝魔仭王剣〟!!」
「〝ラグナロク〟!!」
互いに殺意を込めた――相手を必ず殺そうとする技が放たれる。
それによって生じる破壊は空間に悲鳴を上げさせた。魔王の攻撃にすら耐える結界が軋む。轟音と極光を発生させながら、大広間は破壊の嵐に巻き込まれた。

「ぐうっ……！」
「っ……！」
『なんつうデタラメな……！　じゃが耐えろガイ！　奴も苦しんどるぞ！』
その激突は、互いに痛み分けに終わる。
だが魔法効果がある分、ガイが押していた。レオンハルトの必殺剣を防いだガイは、肺の空気が押し出され、身体全体が軋むのを感じながらも何とかその場に留まることに成功する。さすがにすぐに攻めることは出来ない。
だがレオンハルトの方はその攻撃に耐えるべく片膝と片手を地面に突いていた。未だ魔剣を構え、戦闘継続の意思を見せている。まだまだ体力は残っている。この後すぐに立ち上がるだろう。その光景は、あくまで戦闘の中で生じた１つの場面を切り取ったものに過ぎない。
だがそれでもレオンハルトに血を流させ、片膝を突かせるというこの現状は――まさしく快挙に他ならない。
過去２０００年を振り返ってもそこまで魔人レオンハルトの体力を削ることが出来た者は未だかつて存在しない。
藤原石丸は死の間際の奥義を持って一撃を。勇者クエタプノは刹那モードの一撃で。レオンハルトの体力を削って血を流させた。
後者は横やりが入らなければそのままレオンハルトを圧倒することさえ出来ただろう。その再来――勇者と同じく、レオンハルトを倒せるだけの力を持ち、実際に倒せるチャンスが巡ってきている。
魔法の禁呪と魔剣カオスの力を持つガイは、魔族に対して相性が良かった。他の生物の追随を許さない圧倒的スペックを誇る魔人との力の差を禁呪のブーストで埋め、無敵結界を含めたその強靭な力、体力はカオスで削ることが出来る。
そしてガイの小細工も含めたその強さは、おそらく魔王にすら通じるだろう。ガイ自身もそれを自覚している。どれだけ魔王が強かろうと、禁呪とカオスの力。策を弄して戦えば魔王を倒すことは不可能ではないと。この最強の魔人との戦いで確信に至っていた。

油断は勿論出来ない。そして今しばらく、倒すには何手か必要とはいえ……ガイにとってのレオンハルトは通過点に過ぎないもの。
魔王に挑むための最後の障害。その練習台であった。その悍ましい魔の気配を断ち切る――その意思にも揺らぎはない。半ば勝利を確信しつつある。
「――どうやら……手段を選べる相手じゃないようだな……！」
「っ！」
――その禍々しい魔の気配が、更に一段上昇するまではそう思っていた。
本能から危険だと思わせる魔人の気配。
頭から血を流し、激痛に苦しみ、弱まっている筈の魔人の悍ましい気配が、この土壇場において更に強くなっている。
その事実をガイは重く受け止めた。戦士としての本能が身体に命令を下す。この魔人を今すぐ瞬殺しろと。
「認めてやる……ガイ。お前は確かに、この俺よりも強い。魔王を倒すと吠えるだけはある……これほど規格外の存在は初めて見たぞ……純粋な人間として、お前以上の存在は人類史に於いて存在しない……！」
「お喋りに興じる余裕はまだあるようだな……だが、それももう終わりだ……！」
「そう……お前は俺より格上だ……！　このままじゃ、この程度じゃ、俺は負けるかもしれない。死ぬかもしれない。この程度の研鑽じゃ、まだお前には届かない」
『死ね！　魔人レオンハルト!!』
視界の中で、魔人レオンハルトが獰猛な瞳でこちらを見つめながら呟く。高速で肉薄し、カオスを振り被る。禁呪を再び発動しようとする。
そうして２０００年を生きた最強の魔人に引導を渡そうとした。
そうして――
「だから……俺も枷を外そう」
「――ッ!?」

――と。魔人レオンハルトが呟いたその言葉を耳にした瞬間。
魔人の気配が膨れ上がった。
『ぬおおっ!?　何じゃ!?』
「っ、これは……！」
迎撃として振るわれたレオンハルトの剣をガードし、そのまま濃くなった気配から逃れるように少し下がる。カオスが動揺し、ガイもまた額に汗をかき、険しい顔つきでそれを見た。
「オオオオオオオッ!!」
魔人レオンハルトが、変化していくのを。
獣のような雄叫びを上げ。
周囲の空間を歪ませて。
古代の魔法文字が現れては消え。
魔の気配が色濃くなり。
その魔人の灼けつくような紅い瞳は変わらないまま。輝くような金髪が――真っ白に変わっていく。
「……ククク……ハハハ……ハーハッハッハッ!!」
――彼を魔人へと作り変えた……その魔王に酷似するように。
「ククク……身内以外に……この姿を見せるのは初めてだが……意外と悪くないものだな……！　何より……俺を殺しうる格上の強者が相手だ……そんなお前にこれから挑戦出来ると思うと……気が昂ぶってしょうがない……！　だが……こうなってくると楽しむだけじゃいられねえんだからままならないな……！　何せ俺は……負ける訳にはいかない……！」
「く……！　まさか、まだ力を隠し持っていたか……！」
『気をつけろ、ガイ！　ありゃおかしい……！　レオンハルトだけじゃなくて、あの剣も……!!』
――レオンハルトは魔人としての真の姿を解放する。その手に持つ……魔剣と共に。
「――おい、オル＝フェイル。久し振りにお前も起きろ。俺を殺しうる強敵だ。手段は選んじゃいられねぇ。お前の力も発揮するぞ」
『――了承シタ』

『なッ……!?』
「魔剣から、声が……!?」
――そして更に魔剣からの声を耳にし……ガイ達は驚愕した。
だがその驚愕はすぐに……命の危険を感じるものへと変わる。
「――!」
「!? ――ッ!!?」
『うおおっ!? 何が起こった!?』
カオスが知覚出来ない程の速度。ガイが見たレオンハルトの一瞬の剣を動かす動作。力が強まった瞬間――レオンハルトがガイの背後へ移動しており、その魔剣が間近に迫っていた。
「ククク、ハハハ……! これも防ぐか……! さすがだ、ガイ……!」
「っ……貴様……!」
その攻撃をギリギリのところで防ぎ、ガイは己の油断。敵への評価を改める。
魔人最強はやはり――そう簡単に倒せる相手ではないと。
「ククク、この状態でもお前はまだ俺の上を行くらしいな――だが俺は勝つ!! お前がどれだけ強かろうがな――!!」
「――!」
更に魔人の力が強まる中――第2ラウンドが始まった。

その力に気づいたのは今より１５００年以上昔――あいつが俺の身体、魂、存在を研究し、それについての考察を行った時だった。
曰く……俺には魔人化に際した特殊能力を備えていると。
生物が魔人と化した時、その身に備わった力は著しく強化される。
俺の剣の腕前が人間の頃と比べて次元の違うものとなったように。ケッセルリンクが様々な能力を獲得したように。他の魔人が特異な能力を発現させたように。俺もまた、１つの力を得ていた。
それは――限界を超える力。
世界の理を超え、あらゆるルールを踏み倒すことの出来る力。壁を

取り除くだけの力。
それが俺の魔人としての能力であり、俺が魔人として力を最大限発揮した時にのみ外れる枷である。
故に……その能力は単体では意味を為さない。
曰く、その力はただ限界を超える権利を与えるだけのものであると。枷を外したところで力が著しく上昇する訳ではない。劇的な強化が行われる訳ではない。
神の定めた理に歯向かう力はある。才能限界。勇者の理不尽な特異性。魔王の絶対命令権。神の扱う、力を減少させる祝福。そういったものを、無視することは出来る。
だがそれでも、己自身の力が無ければ何の意味もない力だと。
圧倒的な格上に対して反逆する権利はあっても、その力と意思が脆弱であればその可能性は無に帰するだろうと。
つまりは努力次第の力だと――あいつは言った。
だから俺は、その言葉に従った。
この力がなくてもやることは変わらなかっただろうが、それでもあるのとないのとでは雲泥の差だ。
この力があれば、俺の目的を達成する大きな一助となる。周囲の大切な者を理不尽から守れる可能性を強くすることが出来る。あいつの願いも叶えることが出来るかもしれない。
だから俺は進み続けるのだ。どれほどの理不尽。どれほどの困難が立ち塞がったとしても。
必ず全てを乗り越え、そこに到達してみせる。
魔人としての強い破壊衝動を解放しても、それだけは忘れはしない。俺の命は安くはない。俺が死ねば多くの大切な者が犠牲になる。苦しむことになる。それを看過することなど、到底出来やしない。
だからこそ、俺は俺の目的のために目の前の人間を叩き潰す。欲望と衝動。そして絶対に歪むことのない目的のために。
「この程度で俺が負けると思うなッ!! ガイ!! 俺はお前に挑戦する!! そして乗り越える!! この手で最強の人間であるお前を叩き潰し!! 魔王様に献上し――永劫に続く地獄の戦列に加えてやる!!

俺自身の欲望のためにな!!」
「ッ……!」
『何を勝手なことを……!』
そう、勝手だ。
目の前のガイという人間。その男の未来など考慮に値しない。
最優先で考慮するのは己の目的。己の欲望。大切な者のため。
それ以外のあらゆる者は己の都合の良いように動いていればいい。
大切なものを守るためならあらゆる犠牲を飲み込もう。
――だが安心しろ。最後には必ず救ってやる。
配慮をしよう。悲しみもしよう。怒りもしよう。少しでも気を紛らわせ、あるいは幸せであれるように気を使ってやる。その果てに絆を育むことになるなら、お前もまた俺の大切な者として扱い、その未来が明るいものになるようにしよう。
だがそれらは全て、俺の支配下に置いてこそだ。
――だから一旦、不幸に落ちろ。
お前が魔人になり、ジルに続く魔王の後継者となるならば……その隣で俺はお前を支えてやる。
そしてその果てをやれる限り、幸福にしてやる。俺の目的から外れない範囲で。
どれだけの悩みと罪悪感を抱えても関係ない。どれほどの偽善を行おうと、その偽善が偽善に見えないようにしてやろう。
その犠牲は全て、俺と周りの者。そして未来の幸福のために。
「ガイ!! この俺の正義のために、お前を潰してやる――ッ!!」
そう。それがかつて、己の正義を成した魔王から学び、得た答え。
多くの英雄が生きた戦乱の時代。様々な正義を持つ英雄の時代を乗り越えた俺が得た正義だ。
お前の正義と俺の正義は相容れない。だから、俺の正義に屈しろ。
「オル＝フェイル!!」
『――ハイ』
目の前の人間を己の正義に屈服させる。そのために、レオンハルトは己の得物の名を呼んで飛来した。

魔剣オル＝フェイル。あいつから貰ったこの魔剣は、俺との相性がこの上なく良く、そして強力だ。
斬れ味はどの刃よりも鋭く、その力は俺と同じく成長し続ける。
次元を割き、異空間１つを丸ごと鞘とするオル＝フェイルを完全に解放する。意思を持ち始めたことはどうでもいい。純粋な剣士として戦うことを好む俺としては邪道の技。
それを以って相手の背後へ移動する。
『またか……！　どうなっとるんじゃ!?』
「これは……まさか、瞬間移動か!?」
「結果的にそうなるな！　だがそうじゃねえ！　これは次元移動だ!!」
相手の疑問に、せめてもの矜持でネタバラシをする。知ったところでどうにもならないものだと知りながら。
オル＝フェイルが空間に収納されるのと一緒に、俺自身もまた１度別の次元に移動し、そして再び別の空間から現れている。それが瞬間移動のようになるだけだ。
もっともハンティの瞬間移動のようにどこまでも移動出来るという便利なものではない。精々、数十メートルが限度のもの。
だがその範囲であれば１度別の次元に移動し、そして同時に別の位置にオル＝フェイルの鞘の出口を移動させて現れることが出来る。
これらを一瞬で行うことが瞬間移動の正体。ハンティの時が止まった空間を経由する瞬間移動に比べれば、ただ速く現れる場所が読めなくなるだけの劣化技だ。
その技を用い、俺はガイの周囲を飛来する。一閃に次ぐ一閃。その場に留まらず、あらゆる方向から斬撃を繰り出す。
ガイの禁呪による弱体化。激痛。反撃。その尽く一切を無視して駆け巡る。
そしてその速度が最高速に達した時――
「神滅剣来!!　この身は邪悪を斬り裂くため、彼方より飛来する剣と化す!!」
「！」

オル＝フェイルの剣気が最大まで膨れ上がり、光となってその持ち手をも包み込む。
そして行うのは愚直な突撃だ。ただ最大最速で、全てを滅するオル＝フェイルの剣を、己の持てる全力を注ぎ込んで突きこむだけの破壊の剣。
だが、その愚直さ。シンプルさが何よりも強い。
「――〝ディザスターソード〟!!」
「ッ!!」
そしてその一撃が――魔王城の結界を貫いた。
だが……標的は健在のままだ。
その事実を認識し、その違和感を思考し……そしてあることに気づく。ガイの隠された右目の光に。
「……！　そうか……そういうことかよ……！」
ガイを貫くことのなかったその結果。直前で読まれて躱された結果に、驚きと共に怒りを覚える。
ガイに対してではない。それは気づけなかった己に対し、そして、その戦いに横槍を入れてきていた邪魔者に対し。
「その予知染みた予測……お前のものじゃないな……クハハ……!!
やってくれるじゃねぇか、未来視の魔女……!!」
「……何の話だ？」
しらばっくれるガイを無視し、俺はこの場にいない女に向かって言葉を送ってやった。

――とある里の地下。その場所で、未来視の魔女は水晶越しにその戦いを眺めていた。
「おやおや……まさか気づかれるとは……」
そしてその届いた言葉に対し、感心の言葉を返す。声は届かないが、それでも向こうはこちらの意図を察しているだろう。これは仕方のないことなのだと。
「だが悪く思わないでくれよ。ガイが負ける訳にはいかないのだ。そ

の全力の解放……その詳細までは読み取れなかったが……奥の手があること自体は気づいていたとも」
そう。かの魔人の強さは、ガイを倒しうる可能性を持つのだ。
仮に勝っても負けてもその世界の結果は大して変わらないのだとしても、その過程にガイの敗北という結果が起こることは、ガイという存在に於いてあまり良い未来を示していなかった。
だからこそ未来視の魔女Cは、ガイへの助力を行った。レオンハルトの情報を教え、己の持つ予知の力の一端を、一時的にガイへと譲り渡すことで。
「閣下。悪いが私はあなたよりガイの方が気に入っていてね。だから贔屓させてもらうよ」
そうして未来視の魔女はこの先、己が仕えることになる人間を遠方から見続けた。その先の運命が、より良いものとなることを願って。

ガイは目の前の魔人の戦闘力に警戒を強めた。
「ククク……後で覚えてろよ。だが今は……目の前の強敵から目を離す訳にはいかないからな……!!」
「あまり目の敵にされては困るのだがな……!」
「悪いがそれは無理だな。俺より強い人間を捨て置くことは出来ねえ。魔王様の忠実なる下僕として――お前を叩き潰す!!」
『ッ……また来るぞ!』
わかっている――と、カオスの言葉に内心で答えた。その直後に、レオンハルトは更に速くこちらに肉薄してくる。今度は次元移動を使わずに距離を詰めてきた。
禁呪で弱まっているとはいえ、近接戦において不利なのは変わらない。それゆえその攻撃を予知して下がるが――
「逃がすかッ!」
「く……!」
――その直後にはレオンハルトが背後に移動してきた。
元よりレオンハルトの剣の間合いはとてつもなく広いとはいえ、そ

の距離が近い方が力が発揮出来るのは言うまでもない。
魔法使いと剣士の戦いは、距離を詰めさせずに魔法を撃って迎撃する魔法使いと、それを耐えて近づき、剣撃を浴びせる剣士の構図となる。
それはこの極限の戦いにおいても変わらない。逃げながら戦うこちらと追いながら戦うレオンハルト。
そして先程よりも変わったことは、その追ってくるレオンハルトがより獰猛で凄まじく、そして手段を更に増やしたことだ。
「離れろッ――」
「離れんッ！　絶対にお前に追いついて剣を突き立ててやるッ!!」
禁呪を含めた魔法の連続。それを以ってしてレオンハルトを迎撃しようとする。
だがそれらを、レオンハルトは斬り捨てて、次元移動で躱し、あるいはただ耐えて直進してくる。
あるいは魔法をも使って。
「禁呪〝ハルマゲドン〟!!」
「また魔法か!!　ならこっちも魔法で返してやる!!」
レオンハルトが左手から魔法光を、獄炎の塊を発生させる。
並の魔法使いでは難しい独自の魔法。並の魔力では大した威力の出ないであろうそれを、レオンハルトは魔法の才と非凡な魔力でこちらに迫ってくる。
「〝ソーラープロミネンス〟!!」
「！」
『ぐっ……魔法まで使えるんか……！』
禁呪の爆発とレオンハルトの放った獄炎の爆発が激突する。
生じた凄まじい破壊の光に腕を覆う。そうして見えたのは、背後に移動してくる訳ではなく、その爆発の中をあえて直進して斬りかかってきたレオンハルトの姿だった。
「オオオオッ!!」
「っ……〝バリア〟ッ！」
予知が僅かに遅れ、カオスで防御しながらも同時に魔法のバリアを

張って不利な体勢をカバーする。バリアが一瞬で壊れるが、僅かに威力を減衰させカオスでの防御が行えた。
そうして体勢を立て直せば、再び距離を取って魔法を放ち続ける追いかけっこの再開だ。この状況を維持していれば、少なくとも負けはしない。相手は毒で体力を減らし続けている。時間を消費するだけで、長期戦に持ち込むだけでもこちらは勝てるのだ。
その考えは変わらない――筈だった。
「〝黒色破壊光線〟！」
「邪魔だッ!!」
９つの魔法球から連続して、様々な角度から放たれる破壊の光を、レオンハルトはその手に持つ赤く輝く魔剣で斬り捨てながら進んでくる。
その灼けつくような赤い目は、常にこちらを捉えて離すことはない。
そしてこちらもまたレオンハルトから目を逸らす訳にはいかず、結果その強靭な意思を秘める瞳と視線を交わし合うが……そこで分かるのはこの魔人の鮮烈かつ輝かしい生き様だ。
魔人レオンハルトの情報を得た際、レオンハルトの呼び名は幾つかあったが、主に魔物達から呼ばれている渾名がある。
それが〝魔物界の英雄〟というもの。
曰く魔王ジルの下で、この魔物が支配する黄金時代を作り上げた魔人レオンハルトを指す呼び名だ。
それこそ人類史が始まった開闢期の頃から――レオンハルトという男は常に争いの中に身を置き、民の生きる道を切り拓く〝剣の王〟として名を馳せていたらしい。
魔人に身を落としてからも魔軍参謀として戦闘を取り仕切り、魔軍の最強の将として常に人類の敵として戦争に勝ち続けた。
そうして魔族に繁栄を与え続ける最強の魔人に、多くの魔物は畏敬の念を持っているらしいのだと、そう言っていた。
そしておそらく、それは魔族だけではない。その魔人の周囲にいる人間も含めた全ての生物に恩恵を与えるものなのだろう。

レオンハルトの情報を集める過程で、他にも聞いたものがある。レオンハルトという魔人は人間にも救いを与えるのだと。
多くの人間を下級使徒として側に置き、人間牧場においても救いの糸を垂らしているレオンハルトは、その恩恵を受ける人間にとっても、間違いなく英雄なのだと。
魔物に支配された人間が、真に幸せな筈がない。そう考え、懐疑的に見ていた。
だがレオンハルトのその強い意思を秘めた瞳とその戦いぶりを見て思う――果たして、本当にそうなのか？　と。
多くの人間を苦しめる算盤を弾いている魔人が、人間にとって正義の筈がない。それは理解している。この魔人を倒し、魔王を倒し、人間を解放することが最上なのだと信じている。
だが一方で、間違いなくこの魔人に救われてきた人間もいるのではないか。この魔人が倒れることで、苦しむ人間もいるのだろうと。
それを理解しつつありながら、こちらの意思に陰りが差すことは勿論ない。この魔人を倒すことに迷いはない。
だが――
「手数ではやはり劣るかッ！　ならこっちはそれを補える程速く動かないとなァ！」
「っ……！」
その必死の形相で。追い詰められた楽しみだけでなく、使命を感じさせる表情を浮かべるレオンハルトを見て、どうしようもなく押される。
その必死になる意味を、戦う意味を理解し始めてしまったからだ。
この魔人は間違いなく人類にとっての邪悪だ。それは理解している。
だがこの魔人の戦う理由は――周囲の大切な者を守るためなのだろう。
それも1人や2人ではない。数多くの命を背負って戦っている。
そんな瞳で、こちらを見ている。
それに対してこちらは、人類全てという大きな物のために戦ってい

る。
名前も顔も知らない大勢の救われない人間のために、ガイは命を賭けて戦う覚悟を決めている。そこに揺らぎはない筈だ。
だがそれでも押されてしまうのは……やはり、その思いがそれほど強いのだろう。
戦況は常にこちらの有利。このまま維持しているだけで勝てるとはいえ、魔人レオンハルトの攻撃が1つでも。その一刀が当たるだけで人間であるこちらは致命傷を負いかねない。
多くの魔法を当てて、体力を削り、血を流し、劣勢に至りながらもこちらを倒そうと突撃を繰り返し、徐々に迫りつつあるレオンハルトに、その精神性と戦いぶりに、ガイは重圧を感じ始めていた。
このまま時間を稼いでいれば勝てる――本当にそうか？
先程からレオンハルトの動きに衰えを感じられなくなっている。むしろその剣の一振りは鋭さを増し、重みを増し、速さを増している。
それに呼応するように魔人の持つ魔剣の輝きも増し、もはやその刀身は赫焉によって輪郭しか見えない。眩しく鮮烈な輝きを放ち続けていた。
「そこをどけッ!! 倒れろッ!! その勝利は俺のものだッ!!」
「っ！」
――気圧される。
魔人の気配というだけではない。その確かな力から来る剣気というだけではない。
その意思の力。精神力に気圧される。
全てを斬り裂く赫焉の刃を振りまきながら、徐々にこちらに迫いついてくる魔人の姿は――恐怖でありながら、どこか魅せられるものだった。
「俺の刃を、お前に突き立てさせろォおおおお!!」
『っ、押されとるぞガイ！ 何とかせい！』
「ぐ……わかっている……！」
吠えながら突進し、剣を振るう魔人の対処に追われ続ける。
もはやその剣は防ぐので手一杯だ。元より剣技において渡り合う

ことは難しかったが、今はもう剣での反撃すら難しい。
遠距離から放たれる斬撃。赤い剣気の放出。魔力で形作った魔法の剣までも時折飛ばされ、そしてその余波でさえ、威力が増している。禁呪の効果で身体能力は常にこちらが上の筈なのに、何故か力で押されている。
魔人の全力で以って圧倒する。ただそれだけの戦闘方法が――こちらが対応に容易いと思っていたその戦法が――何よりも辛いものとなる矛盾を、ガイは感じていた。
こうなれば焦らされる。時間経過を待つ訳にはいかない。手をこまねいている余裕はない。これ以上体力と魔力を消費すれば、この後に待ち受ける魔王との戦いに支障をきたす。
ゆえにここでガイは迷った。どうするべきか。どう対応するべきか。レオンハルトのその強さに怯みながらも、禁呪を発動しようとした。
しかしそこで、己の内側からの声が届く。
『――あーっ！　ウザってぇ！　何をグズグズしてんだ！　もう代われ!!』
『何だと……!?　おい、やめろ――』
その精神の揺らぎに乗じて、ガイは意識を反転させた。
「！　……何だ!?」
「おっ、剣を止めてくれて助かるぜ。――だが死ね――っ!!」
「っ……！」
そしてレオンハルトが、ガイの身体ががくんと揺れたのを見て様子がおかしいと動きを止める。魔人にすると言っていたからか、殺すつもりまではないのかもしれないが、その様子見はガイにとって入れ替わる絶好の機会となった。ガイはそれを、己の内側から歯がゆい思いで見ることとなる。
「今度は……荒っぽくなったな……！」
「ははは！　こっちが本当の俺だ！　今までと同じだと思うなよ！　お前みたいなムカつく魔人はさっさとぶっ殺してやる!!」
「……クク、そうか。なら面白い。やれるもんなら……やってみるん

だなッ!!」

そうして今度は、もう1人のガイとレオンハルトの戦いが始まる。

第3ラウンドの開幕だった。

人生の終焉

――ルドラサウム大陸東部、魔王城。

そこは世界を支配する魔族の王、魔王が住まう禍々しい悪の居城。

人類を家畜に落とし、魔物の黄金時代を作り上げたその女性。

人どころか魔も魅了する美しさと全ての生物に恐れられる程の冷淡で残酷な最恐最悪の魔王――ジルが、魔王城の玉座に腰掛けていた。

「……」

そのジルに言葉はない。

普段は自身の側に控えている2人の魔人がいないこともあるが、その一方である魔人ノスがいたところでジルは言葉を弾ませることは少ない。

それでもこの場にいれば声を掛けてきて、それに気が乗れば返すくらいはするかもしれないが……ノスに構ってやるくらいならもう一方の魔人にジルは声を掛けるだろう。

「！」

そして、玉座の間が――否、魔王城が振動する。

ジルはその現象に反応し、口元に薄い笑みを浮かばせる。そのお気に入りの魔人の気配が、より色濃くなったからだ。

「――レオンハルト……随分と楽しんでいるようだな……」

魔王ジルがその名を口にする。

そう。そのお気に入りの魔人。全ての魔人の頂点に立つ魔人筆頭であり魔軍の全権を取り仕切るその魔人――レオンハルトが戦っているのだ。

ジルはその事を思う。そも、とある人間が魔王の命を狙いに来ることは少し前から聞いていた。

そして数時間前にはこれからその人間が来るため、その撃退を行う旨の報告を閨の中で聞いた。

加えて、その撃退は自分に任せてほしい事と、その人間を撃退した後で魔人にしてほしいというお願いをしてきた。ジルはその事を思

う。
「最初はどういうつもりかと思ったが……なるほど。人間でありながらレオンハルトがこれほど手こずる相手か……」
……レオンハルトの言った通りだな。
確かに興味深い。ジルは、その人間をそう評する。
他者に興味はないジルではあるが、配下の魔人がどの程度の強さを持つかは把握している。自身のお気に入りであり、最強の魔人であるレオンハルトであれば尚更だ。
その強さはそこらの魔人はおろか、四天王級の魔人を遥かに上回るもの。どちらかと言えば魔王である己に近い実力者だ。
魔王に備わった絶対命令権の存在で魔人は魔王に逆らえない。だが、それを仮に無視して考えるならば、レオンハルトの強さは魔王と戦っても戦闘を成立させるだけの強さはある。
他の魔人であれば絶対命令権の有無に関係なく戦闘にはならない。容易く一蹴出来るだろうとジルは己の強さをそう分析している。その強さに唯一、抗うことが出来るとすればこの地上においてはレオンハルトだけ。戦ったところでほぼ１００％ジルが勝つ。力の差は歴然とはいえ……己にそう思わせるだけでもレオンハルトという魔人は規格外なのだと。
つまるところレオンハルトに敵う存在はこの地上において自身しかいない。ましてや並の魔人を遥かに下回る人間など、レオンハルトが本気で戦えば抗うことすら出来ないだろう。一瞬で片が付く。
そう思っていたが……現実は、レオンハルトが苦戦している。
「ふん……取るに足らない不快なだけの人間であれば、レオンハルトたっての願いであっても蹴るつもりだったが……」
その人間を倒した後で魔人にしてほしいとレオンハルトから聞いた時、ジルは当然その理由を聞いたが、レオンハルトからは『見どころのある強い人間であるから』というどこまで本気かどうかわからない返答が返ってきた。
だがその理由はどうでもいい。レオンハルトがどんな理由でその人間を魔人にしたがっていたとしても、さして重要ではない。仮にど

れだけ愉快で愚かな人間であったとしても、人間である以上はどれだけ興味深い相手でも手駒以上にはなりえない。精々、退屈を紛らわすための玩具が良いところだろう。その戯れとして、その人間を魔人にしてやるのも吝かではない。他の魔人であればともかく、レオンハルトの頼みだ。少しくらいは聞いてやってもいい。魔人の枠は貴重だが、いらなくなれば消してしまえばいいだけだし、さほど考慮する必要はない。

重要なことがあるとすれば人間を苦しめること。そしてレオンハルトを如何に楽しむかだ。

頼みは聞いてやってもいいが、タダで聞いてやるのは勿体ないため、ジルは試しに嘯いてやった――『頼みを聞いてほしければ精々私の機嫌を取ってみろ。そしたら私も考えが変わるかもしれんぞ……？』と。

するとレオンハルトはその意図を察して、いつも以上に激しくジルを抱いた。

獣のように本能を解放させ、しかしその上で女を悦ばせる理性を携えたレオンハルトとのまぐわい。

しかもその中に相手を欲する愛すらも覗かせた上で――何度も。何度も。何度もまぐわって、そして奥に精を注がれた。

「くく……あれが今後も続くと考えれば安いものだな……」

ジルは軽く自らの下腹を手で撫でる。先程、何度も触れられたことを思い出しながら触れると軽く身震いした。

しかも今後は更に続く。レオンハルトの心も、徐々にではあるが傾いている。

この分なら後は何かの切っ掛け次第でこちら側に転ばすことも考えられる。人心掌握術について書かれていると思われる古代の文献にも、レオンハルトのような強い意思を持つ相手は生半可な手では堕ちない。時には強い1手。奇想天外な1手を打つ必要があると……そう書かれていた。やはり鵜呑みにはしないが、一理はある。レオンハルトを堕とすためには、これも良い機会であると。

「戯れにもなり得る……どんな人間かは知らないが、私とレオンハル

トのために、精々踊ってもらうとしよう……ふふ、くくく……！」
魔王の悪意に満ちた含み笑いが玉座の間に響き渡る。
そうしてジルは玉座から立ち上がった。ひたひたと、歩いて行く。
その行き先は――己の欲の赴くままに。

目の前の強敵。ガイの変化を、レオンハルトは見逃さなかった。
「次は俺様の番だ！」
「……ッ！」
ガイのその表情が、先程の堅く真剣なそれから荒々しいものへと変わる。
一人称。口調。動き。剣の振り方。それらにまで差異が起こる。
その現象を、レオンハルトは正確に把握していた。
……入れ替わったか！
そう。ガイの特異体質。２つの精神を持つというガイの強さの源。
それらを当然把握していたレオンハルトは、初見であるにも関わらずその現象を理解して素早く対応した。
身体は同じでも精神が違うのであれば、戦い方は変わってくる。好むやり方、戦闘における癖、思考――それらを改めて理解し、読み取らなければならない。
ある種、２人目と戦うようなものだ。それも、取るに足らない人間であればともかく、相手は規格外の力を持つ男。
「――お前の番などないッ!!　誰が相手だろうと勝つのは俺だ!!」
だからこそ油断はしない。楽しみこそすれど、余裕もない。
相手は依然として格上。ならばやはり、追いかけるだけだと。
「――なんてな」
「……あ？」
――そう思った直後、ガイは反転した。
大広間の扉。それを高速で開けて、外へと飛び出していくガイを、レオンハルトは虚を突かれて一瞬ではあるが動きを止める。
「ぐはははー！　ばーか！　俺様はお前らなんぞに興味はない！　好き

勝手に女でも探してエロエロなことをして過ごすんじゃ――――!!」
『ちょっ!?　何を言っとるんじゃガイ!?』
「っ……!」
――しまった、と。
ガイのもう1つの人格。そのおおよそを把握しているのに――いや、把握しているからこそ、それもありえると思いレオンハルトは急ぎガイを追いかける。
自分を倒す。魔王を倒す。その覚悟していた使命から逃げる――逃走。
そんなことをされればレオンハルトの計画は水の泡だ。何としても阻止しなければならない。
ゆえにレオンハルトは、カオスの制止の声も無視してバカ笑いをしながら逃げるガイを追いかけた。
「逃がすか……!　オル＝フェイルッ！」
オル＝フェイルの能力を用いた次元移動。それによって、ガイを追いかけるように廊下へと飛び出す。
「禁呪――」
「なッ……!?」
そしてその瞬間。こちらに反転していたガイが、その魔法球の照準を一斉にこちらに向けており……禁呪を発動させた。
「〝九色破壊光線〟!!」
「ぐ、オオオッ!?」
あまりにも唐突な、こちらの虚を突いた一撃だった。
レオンハルトはそれを食らい、防御をしつつもダメージを食らいながら大広間へと吹き飛ばされる。
「ぐはは！　かかったなバカめ！　誰が手負いの奴を残して逃げるか！　魔王とやらはともかくお前はここで死ね――ッ！」
「っ……ぐ……!」
そしてガイもまた大広間に戻ってきて吹き飛んだこちらに対し、追撃を行ってくる。
それを見てレオンハルトは、感嘆した。この土壇場でそんな小細工

を、悪知恵を利かしてくるその度胸。戦術眼に。
「く、ククク……やるな……まんまと騙されたぞ……！」
『全くじゃ。儂まで騙されたぞ……』
「騙される方が悪いだろうが！　卑怯でも何でも使って勝つのが戦いだからな！」
カオスを振り被って襲いかかってくるガイに、その躊躇はない。
先程までのガイよりも悪知恵に近いその戦法に、レオンハルトはやはり舌を巻くしかなかった。
数え切れない戦歴を持つレオンハルトの経験の中に、小細工や悪知恵、卑怯な戦法を取ろうとしてきた相手は大勢いた。魔人を相手に正々堂々と戦って勝利を収めようとする相手の方が少ない。その程度の差はあれど、誰もが策を弄してこちらにぶつかってきた。
だが、その尽くを真正面から粉砕してきた。その策を小細工だとあざ笑うかのように。己の剣で全てを斬り捨ててきた。
だがその小細工も、これほどの戦士がより効果的な場面で使うなら立派な戦法に。それもこちらに大打撃を与えるものに昇華される。
ゆえにレオンハルトは称賛した。
「そうだな……ああ、その通りだ……！　卑怯などと言うつもりはない……！　むしろ褒め称えてやる！　それも立派な戦術だ……！」
「男に褒められたところで嬉しくないわ！　いいからさっさと死んどけ！」
「だが俺は死なんッ！　それでも勝つッ！　全てを受け止めて勝利してやる……ッ!!」
レオンハルトは人間の努力を、可能性を、その意外性を認める。
どんな形であれ己の予想を超えてくる人間をレオンハルトは好んでいる。その強い意思を持つ人間を、その輝きこそが、人間の素晴らしい部分であると正しく理解している。
それが愚かさに映るか輝きに映るかは人それぞれだろうが、少なくともレオンハルトは嫌いではない。醜いことではない。己の私欲があまりに、どこまでも他者の足を引っ張り、その上自らを高めようとせず、現実逃避や言い訳ばかりを口にする――そんな豚共とは違う。

その強い力と強い欲。強い意思は魔人にも通じるところがあるものだ。
それを歓迎しない理由がレオンハルトにはない。
「ふん！　そんなに死にたいなら殺してやる！　食らえ！　禁呪！」
「！」
故に、レオンハルトは疾走した。踏み込んだ。
眼前のガイが、新たな禁呪を発動させる。巨大な邪竜を思わせる形の黒い炎。あらゆるものを焼却し、汚染する。その悪意の塊。
それをカオスに纏わせて、ガイは振るった。
「〝アジダハーカ〟!!」
「ッ！」
間近で、レオンハルトはそれを見る。ガイの剣の振り。迫り来る邪竜。
それらに対し、あえて距離を詰めていく。
その強大な力。自身を上回る圧倒的な力。
それを前にして、出来ることは己を弱者だと定義すること。まずは認めること。最終的には勝つ思いを強く持ちながらも、まずは力の大小を見極める。その上で対処法を模索する。
そうして使うべきは挑戦者の剣だ。相手と相手の力を動かし、後の先を取って勝つ剣。誇り高き、弱者の剣。
――使わせてもらうぜ……ッ！
己の内にある、その記憶を思い出す。そして放つ。目の前の、強者に対し。
「――〝円廻〟ッ!!」
「ぬおっ!?　な、何!?」
相手の力を受け流し、そのまま相手に跳ね返す。
間近に迫っていた邪竜を、その剣と共にガイの方へ跳ね返した。
「オオオオオオオッ!!」
「っ、ぐっ!?」
そうして出来た隙に、全力で剣を打ち込む。ガイの身体に、刀身が触れた。

だがそれは僅かにガイの右腕を切り裂いたところで、ガイがその場から消えることで防がれた。
後ほんの僅かでも遅れていれば右腕を斬り落とせたが、相手もさすがと言う他ないだろう。並の格上であれば今ので決着していた。
だがそうはならない。再び距離を取っていたガイが、右腕から流れる血を見て鬱陶しそうにしながらこちらを睨む。そして声を放ってきた。
「ぐぬ……お前、何だ今の技はっ!?」
「既に失伝した技だ。今より約１０００年前……この俺に剣で迫った人間の技」
そう。その技は、今ではもう己しか使えない懐かしき技。
己と共に剣の頂きに上がってきた英雄の絶技。
最強に挑まんとして構築されたこの剣で、かつて己は大きな傷を負わされた。
もっとも、格下を相手に態々選ぶべき技ではない。
己は魔人。そして世界最強の剣士。その己が、態々防御や回避、カウンターに寄った技の数々を敢えて見せる意味は薄い。
ゆえにこれまで、この技を見せる機会はなかった。あの強敵の技を失わせるには惜しいと習得したのはいいが、そうして分かったのは己には向いていない剣であるということだった。
相手より強い力を。速さを。技を。あらゆる部分で相手に勝る己に、この剣は必要ではない。格上を、少なくとも同等の相手でなければ使う意味もない。
――だがその格上がもし現れたならば……この剣は相手に届き得る無上の剣と化す。
「これはお前を認めた証拠だ……！　挑戦者には、手段を選べる余裕なんてありはしない……！　ありとあらゆる技を以って勝利する……！　たとえ人間の開発した技であろうと、それが意味を成すなら使わない理由は存在しない……！」
弱者の剣は強者にこそ意味を成す。
それを己に教えた強敵――藤原石丸の剣すらも用いて、レオンハル

トは挑んだ。
「かつて俺が食らった挑戦者の剣を味わえ――ガイッ!!」
「はあっ!?」
『な、ななな何じゃ――ッ!?』
叫び、そして技を放つ。
使うは幻惑。己の身体をその気迫と剣気によって、まるで本物のように見せる奥義。
そこに更に、本物の分身を交えた上で、肉薄させた。
「〝幽玄〟」
「っ!!」
自分の幻が、ガイに向かって斬りかかる。
その間に自分はガイの背後に一瞬で移動した。その小細工。ともすれば卑怯にもズルにも思える技と戦法の数々。
最強を自負するものとして使ってこなかったそれらも、今はあえて使わない理由はない。そして、使った以上は――
「俺が勝つッ!!」
「ぐおおっ!?」
――何が何でも勝利する。
そうしてレオンハルトは、ガイに全てを用いた。勝利だけを望んで。

ガイは目の前で増えたレオンハルトに、素直に間の抜けた表情を見せた。
だがそうしていられるのも一瞬。影が2つ。それに気づいて背後へ移動してきた本物に対処しようとして気づく一瞬。その一瞬あとに2つの影の内の1つは実体を持つ分身であることに気づく一瞬。
その目まぐるしい気付きと仕掛けの連続に、ガイは苦慮した。はっきり言って、こんなのはズルだ。反則だという思いを抱く。
「くそ……この卑怯者が！　正々堂々と戦え！」
「悪いがその余裕はないんでなッ！　やらせてもらう！」

苦し紛れに挑発。だがそれも効果は薄い。今の相手はそれこそ何でも使うのだろう。戦いにおいては当たり前ではあるが、それでも魔人がそんなことをしてくるのに理不尽を感じた。――自分は棚に上げた上で。

「ええいっ！　ならこっちも反則技を連発してやる！」

幸いにもこっちには腐るほど禁呪がある。先程、自分が内側に沈んでいる時はウザさの極みだったが、表に出ている時なら躊躇する余裕はない。精神的負担を半減――いや、６：４か７：３程度は受け持ってもらおうと禁呪を発動させる。

「禁呪〝ディエス・イレ〟!!」

「っ……！　召喚魔法か！」

「その通りだ！　死神に殺されろッ！」

禁呪を発動させれば、頭上から髑髏の天使が――大鎌を振り被り、対象に指定した相手をあの世に連れて行こうと戦い始める。使用した瞬間、相手は殺せるが使用者も発狂して死ぬという恐ろしい魔法ではあるが、分散出来ればそのリスクはほぼ無いに等しい。

「死神か……ならその死神すら潰すだけだッ!!」

「!?」

だがその死神が上段から振りかぶった大鎌は、レオンハルトの剣に受け止められる。普通は耐えうる道理はない技なだけに、召喚された死神ですら驚いているようだった。

だがこっちはそんなことは予想済みだ。その程度でやれるなら今までに何度も殺している。だからこそ、ガイは手を緩めなかった。

「禁呪〝ディエス・イレ〟!!」

「！」

連続で、もう一体死神を召喚する。

一体で足りないなら二体召喚すればいいだけだ。精神的負担？魔力の消費？　――そんなことは知らん。余裕がなくなったらすぐ逃げればいいだけだ。

だが今はまだ余裕がある。だから目の前の魔人は殺しておく。何となく邪魔だから。

「そら行け死神！　あいつを殺せ！」
「――！」
召喚された瞬間、もう一体の死神を見て「あれ？　なんか俺がもう1人いるくね？」みたいな感じで戸惑っていた死神だが、すぐに召喚者の命令に従って魔人へと向かっていく。
その間に邪魔な分身を別の魔法とカオスで殺しておく。それが終われば、次は本体だ。禁呪を用意し、そしてカオスを強く握り込む。
「奥義――」
「？」
「??」
だがその時にはレオンハルトもまた動いていた。レオンハルトの身体が、ブレる。
その瞬間、死神はレオンハルトを見失った――刹那。剣を振り終えたレオンハルトが目の前に現れる。
「――〝晨星剣落〟!!」
「うおおッ!?」
2体の死神を一瞬で斬り捨て、目の前で剣を振りかぶっていたレオンハルトの一撃を回避する――受けたら駄目だという予知に従って。
何しろその技の正体は、先程と同じ幻。
剣を振り、相手を斬るという行程だけを誤認させ、その瞬間に対応してきた相手の剣を本物の一振りで受け流して斬るという絶技。先程の幻を作った技の更に上位――いや、まさしく奥義と言える技だ。
しかしガイとしての感想は、「どこが弱者の技だ!?」というものだ。禁呪で召喚した2体の死神を瞬殺し、こちらに肉薄するようなズルすぎる技に転げながら思う。近寄ってくるレオンハルトに、新たな仕掛けと対応を行いながら。
「チッ……いい加減にしろ！　禁呪！　〝九色破壊光線〟!!」
「――！」
距離を詰めていたレオンハルトの身体を吹き飛ばすようにして魔法を放つ。
そうしてレオンハルトとの距離が離れ、相手が対応している間が

チャンスだ。相手が惑わしてくるならこっちも惑わすだけ。
そしてそれで――決着だ！
「禁呪！　〝無間地獄〟！！」
「ッ!?　これは……!?」
破壊光線を受けきった、あるいは躱したであろうレオンハルトが戸惑ったように周囲に視線を送る。
だがそれもそうだろう。その禁呪は、相手の五感を一時的にではあるが、消失させる技。
もっとも、高いレベルの神魔法の類やアイテムを使えば解呪も可能だが、それをするにしても隙は出来る。当てるのも難しいが、当たってしまいさえすれば必ず隙は出来る。
「今だ！　〝黒色破壊光線〟！」
「ッ――!?　オオオッ!!」
魔法球を四方八方に飛ばし、それぞれから破壊光線を撃たせる。ダメージを与えつつ、方向感覚を狂わせ、混乱させるために。
魔人が吠えた。弱体化の毒も効いている。強がってはいるが、相当の体力は削れている筈だ。
そしてこっちも、いい加減禁呪の使いすぎで精神的にも魔力的にも辛くなってきた。力を込め、魔法を食らってそれでも耐える魔人に、真っ直ぐに駆けていく。
「これで終わりだ！　死ねェ――――ッ!!」
魔人に特効を持つ魔剣カオスを突きの形で構え、突撃する。
これで心臓などの急所を刺せば終わりだ。相手は未だ闇の中。これを防ぐ術は存在しない。
……これで俺様の勝ちだ……！
こんな面倒な相手はさっさと殺すに限る。そうして後は適当に。一旦帰って女でも襲おう。人格が戻ればまた魔王を倒そうとするかもしれないが、この魔人を殺しておけばもしそうなっても少しは楽になるだろう。
そう思い、勝利を確信した。カオスの刃が、レオンハルトの胸に迫る。数十メートルの距離は禁呪の肉体能力の強化もあって一瞬で埋

まる。
そしてレオンハルトはじっとしていた。諦めたのか？　あるいは無駄なことに気配でも読んでいるのか。仮に読めたとしても、こちらが剣を突き立てる方が速い。
だからガイは、迷わずカオスを突き刺した。残り1メートル。５０センチ。１０センチ。そして――その距離が埋まる。
「……」
「ッ!?」
だがその瞬間――ガイはレオンハルトが、笑みを浮かべたのを見た。
諦めたような、受け入れたかのような真顔から一転。口端が吊り上がる。
しかしそれがどうしたと言うのかと、カオスを突き立てたその刹那――バキン、という何かに一瞬遮られたその音と抵抗がガイに伝わってきた。
「――ッ！　ここだッ!!」
「――は……？」
『な……ッ!?　今のは……無敵結界か!?』
その瞬間、肉を突き刺す感触が伝わった。レオンハルトが動いたのが分かる。その現象に、自分もカオスも驚いたのが遠く聞こえる。
目の前にいるレオンハルトが、僅かに動いたことで、急所からズレた。左の肩口に突き刺さり、驚く。
その理由は、２つある。そして……こうなった理由も一瞬後で理解出来た。
「普段は敢えてやることはないが、無敵結界は張りなおせる……すぐに張りなおしてやってもよかったが……こうして隙を作れたとこを見るに、勿体ぶって正解だったな……！」
「な、なっ……!?」
レオンハルトの声が、時間の流れに反して正確に、長く聞こえる。
それはこの結果を生じさせた理由だった。その無敵結界を張り直したことが。

「五感を奪われたのはさすがに驚いたが、不思議なことに無敵結界が壊されたことはまた別の感覚でわかる。壊された瞬間に動くことで致命傷さえ避ければ……勝ちを確信して隙を晒すと思ったぞ」
そう。この魔人が行ったのは、言うなればそれだけ。
カオスで確実に壊されるであろう無敵結界を、触覚として使ったのだ。
もう少しでも早く張り直していれば、魔法の攻撃は全て防ぐことが出来る。そうなれば戦いをまた有利に進めることが出来るのに――あえてそうしなかった。
その理由はレオンハルトが言うように、隙を作るためだろう。魔法でも剣でも何でも、無敵結界がもう無いものと思い、とどめを刺してきた瞬間に無敵結界を張れば、その攻撃を防ぐことで動揺と隙を作れる。
カオスであれば無敵結界が張り直されたその気配に気づくことも可能であっただろうが、あまりにも速い高速戦闘。その応酬の中で、決着がつくその時にまで気づくことは叶わなかった――あるいは、遅れた。
それがまんまと、自分が罠に引っかかってしまった理由だ。
「強かったぞ、ガイ。お前の強さは、俺を上回る。それは間違いない。禁呪込みだからと悲観することもない。お前の強さは、きっと魔王様にすら通じる」
「――！」
『いかん！　避けろガイ――ッ!!』
そしてそれが――自分が、魔人の剣を食らう理由だ。
「だがそれでも――勝つのは俺だ」
「っ――おおおっ!!」
「遅い」
レオンハルトの剣が、振り下ろされた。
そこには特別な技も何ひとつ存在しない。
ただただこちらより一瞬だけ早く、その魔剣はガイの身に届いた。

レオンハルトはその一太刀によって勝利を確信する。
負ける訳にはいかない。勝たなければならない。
そのためには自分の矜持は二の次だ。
かつての強敵の剣を解放し、罠を張って仕留めることも厭わない。
そして、ちょうどよいとも思う。
何しろこの剣は、この剣を振るったのは――大切な者のためだった。
あの時の石丸の剣は、その一心が籠もっていた。
己を超えようとする強い意思だけではない。大切な者の期待に応え、そしてその生き様を見せんがために。
ならばこの剣を振るうのにこれほど適している時はないだろう。
勝手ながら石丸から受け継ぎ、自らの物としたこの技は、強敵を前にして何かを守るのに適した技だ。
ゆえに、１０００年の時を超えてその絶技はこの世に蘇る。
そしてその剣は、強い勝利の思いを乗せて届く。あの時もそうだった。
――勝つのは俺だと、そう信じて剣を振るった。
ゆえに、その剣は届く。届いた。
「か、はっ……！」
「！」
――だが、生憎と。
その結末までも同じとは、限らなかった。

「う、おお……っ！」
それはレオンハルトが踏み込む一瞬のことだ。ガイは、レオンハルトに踏み込むのではなく、命だけは助かる選択をした。
手に持っていたカオスから手を離し、ほんの少しでも距離を取る。致命傷を避け、少しでも、ほんの僅かでも傷を浅くするために。
そうして少しでも戦う力が、あるいは逃げる力が残れば御の字だ。

そう判断して。
　そしてその判断は――正解であった。
「……っ……驚いたな……まさかカオスを捨てるとは……」
「ぐ、ぐぐ……っ、はぁ……はぁ……くそっ……たれ……！」
『ガイ……っ！』
　魔人の肩に、カオスが突き刺さったままガイは距離を何とか取る。身体の前面に大きな傷を、斬撃の傷を負って血を流しながらも、辛うじて２本の足で身体を維持する。
　そうしてレオンハルトに悪態をつき、その姿を視界に収め続けていた。気づけば禁呪の目眩ましも解けている。レオンハルトの鋭く紅い双眸が、しっかりとこちらを捉えていた。
　だがその様子に、さすがに余裕はない。
「元より……殺すつもりはなかった、が……立てる力を残されるとは、予想外だな……！　はぁ……ぐ……っ！」
「黙、れ……化け物、が……！　刺された、なら……死んどけ……！
うっ……っ、はぁ……はぁ……」
　魔人に特効を持つ魔剣カオスが刺さった状態で、体力も大きく削れている。そのおかげか、こちらの思っているより余裕はなく、苦しそうな表情を浮かべているレオンハルトに、ガイは忌々しく言葉を吐き捨てた。
　カオスを取り返すような余裕はない。何とか戦えなくもないだろうが、それでもカオス無しで戦えば、仮に倒せたとしてもこちらも死ぬだろう。
『逃げろガイ！　こいつは儂に刺されて弱っとる！　今ならまだ逃げられる！』
「ぐ……そんな、こと……わかっとるわ……！　チッ……はぁ……はぁ……」
　カオスもまた焦っている。そして悩んだのだろう。魔人を倒せる己を置いていくことに。
　だがガイの力を思い、カオスは逃げろと叫んだ。今ならまだ逃げられる。その言葉に間違いはない。

「逃がす、か……！」
「っ……！　まだ、動けるのか……！」
レオンハルトは足を一歩、前に動かしてみせる。
その化け物っぷりに険しい表情を浮かべながら、ガイは後退った。そして力を振り絞り、走ることを決める。レオンハルトもまた、すぐに追いかけてくるだろうが、禁呪の効果は未だ続いている。今ならまだ逃げられる。
「くそっ……覚えてろよ……次は絶対に――」
と、捨て台詞を口にしようとした。それを最後に、ガイはこの場を脱しようとした。レオンハルトが背後から、一歩。また一歩と血を流しながらも確かに近づいてくる。その魔人から、逃げるために。
そうして足を後方へと踏み出した瞬間。そう、その瞬間だ。ガイは、この世に生まれてから最も大きい衝撃を受けた。
「――どこへ行くつもりだ……？」
「――――あ……？」
目の前に――女が立っていた。

その女は、異質だった。
長く美しい水色の髪。女体の極致ともいえる、その美貌。美しすぎる、整いすぎた顔立ち。
手足が黒いことも些細な問題だと思えるほどの、極上の女。
――だがその存在を認識すると、同時に凄まじい圧迫感を感じる。
魔人が可愛く見えてくるほどのその濃密な気配に、女好きのガイでさえ只者ではないものを感じて背筋が寒くなるのを感じる。
一体この女は誰なのか。その疑問に薄々感づきつつも、その答えは後方の魔人から返ってきた。
「ジル、様……」
「レオンハルト――良い姿だな。似合っているぞ。その髪色。気配。そしてその傷つきよう……全てが新鮮だな……くく。中々に唆る姿だ」

レオンハルトが『様』と敬称をつける相手。
それはおそらくこの世に1人しかいない。それを、ガイも理解した。レオンハルトに刺さったままのカオスもまた。
『くそ……！　このタイミングで、魔王じゃと……！』
「……そして、それが魔剣か。中々に興味深い代物であるが……そちらは後回しだ。今は――」
そしてその――魔王の視線が、ガイを真っ直ぐに捉える。
「――お前の相手が先だ」
「――ッ!?」
魔王の手が、ガイを撫でるように動かされる。
それだけで弱まったガイの身体が、万力に押し潰されたように地面に仰向けに引き倒された。
その苦しみに、ガイは声も出せない。魔法の発動も難しかった。
「くく……惜しかったな、人間……お前が万全であれば、あるいは私ともそれなりに遊べたかもな……だがこうなってしまえば他の人間と変わらん……幾らでも料理できる」
「っ……ぐ……！」
魔王ジル――その存在が屈み、その黒い手でガイの顎を、首元を撫でる。
その肌の感触は極上のもので、触れられただけであるいは絶頂してしまいかねないものではあるが……魔王の発する圧倒的な暴威の前には、性欲など霞んでしまうだろう。
その指を少し動かしただけで、人間の命は容易に奪われる。それを思えば、欲情などしていられない。
ガイもまた、この状況では為す術がなかった。何とか、ゆっくりと右手をジルの方に伸ばしていくも、その腕に力はない。
「……く、くくく……まだ抵抗するつもりか……？」
それを知ってか、ジルもそれを嘲笑った。
無駄な抵抗だと。そんなことをしても無意味だと。ガイの感情を、読み取って。
「よっぽど死にたくないようだな……だが、安心していい。本来なら

ば拷問でもして生き地獄を堪能してもらうが……レオンハルトたっての願いだ。お前には――魔人になってもらう」
「ぐ……お、お……」
「嫌、か？　くく……嫌だろうな。魔王を殺して人間を救おうと考える程だ……魔に身を落とすのは耐え難い屈辱だろう。だが……だからこそ、そうなった方が面白い……！」
『くそ……ガイ……！』
ジルの、ガイを魔人にするという宣告。
それはジルにとって、相手に絶望と苦しみを与える手段だった。
元より人間を魔人にすることは、その人間をより苦しませるため。あるいは戯れとして、その愚かな行いを見物するために行っているに過ぎないことだ。
そして人類を救おうとここまでやってきてここまで戦ってきたガイのこともまた、その身を魔に堕とすことで苦しめる。
そのことは予想出来ることだった。何しろガイの手が、ジルの方へ未だ伸びてきている。よっぽど、死にたくなるほど嫌なことなのだろう。
その心情を思い、ジルは笑った。人間の苦しみこそ、ジルの喜び。これほどまでに嫌悪する魔に、その身を落とした時。この男はどんな反応をするのかと――
――ふにょん。
「……？」
――そうジルが思った時……そんな効果音が聞こえるような現象が起きた。
ジルは一瞬、何が起きたか分からなかった。というか、意味がわからなかった。
この人間は何をしているのか。身体を押そうとしているのか。心臓にでも狙いをつけているのか。そこから魔法でも放つつもりか。そんなことをしても無駄だと、この人間なら理解している筈。
なのになぜ――この人間は自分の胸に触れているのか。
それがわからず、ジルは僅かに時を止めて困惑した。ガイの表情

を、ゆっくりと動く口元を見る。そして、その感情と言葉を読み取った。
「……おっ、……ぱ……い……」
「……」
そして読み取れたのは……ただの性欲だった。
この死ぬ間際。どうされるか分からない極限の死地において、求めるものがまさかの胸。しかも魔王のそれ。
そのふざけているとしか言いようのないその言動に、ジルはじっとガイを見下ろした。そしてしばらく観察した上で――
「……くく、くくく……はははは……！」
ゆっくりと、そして徐々に大きく――笑い声を響かせた。
その声は、音の消えた大広間に響き渡る。カオスが何が起こったか分からずに困惑し、レオンハルトはその様子をじっと鋭い視線で見つめている。
だがジルは声を止めなかった。面白い珍獣でも見つけたかのように、笑って思ったことを口にする。
「く、くくく……！　何を、言っているんだこの人間は……聞いたか、レオンハルト……この人間はお前の言うように面白いぞ……！　底抜けに愚かだ……！　まさか、お前と渡り合う程の人間が、これほどにバカだとは……」
「……お気に……召しましたか？」
「くく……ああ。悪くはないな……戯れとしては十分だ。この男なら、下僕にしてやるのも悪くはない……！　お前の次に気に入ったぞ……レオンハルト……！」
ジルは機嫌良く、レオンハルトに向けて話しかける。レオンハルトはそれに対し、口を挟まない。挟める状況にない。ジルが現れ、こうなった以上はもう結果は決まっている。
ゆえにレオンハルトはその衝動を飲み込んだ。決着は不完全であるが、自分の求めた結果になるのなら悪くはないと。
「……それは重畳。では……ジル様……」
「ああ。お前の希望通り……さっさと始めるとしよう。その傷を放置

しすぎて死んでしまっては困るからな」
「……ご配慮、痛み入ります」
「気にするな――」
魔王ジルが、レオンハルトに促されてガイの口元に指を――その指先に、一滴の血を垂らす。
それは魔王の血。ジルの力の源である破壊衝動の塊。
それを、ガイの身体に与える。
「確か、ガイ、と言ったな……ガイよ。その身と心を魔に堕とし、この私を興じさせる下僕となるがいい……！」
「っ――――!!」
その一滴の血が、ガイの口の中に滴り落ちる。
そうしてジルは立ち上がった。ガイの身体が、光に包まれる。
――新たな魔人の誕生。
その光はこの地上に住む全ての人間を苦しめる、新たな魔王の尖兵が生まれた祝福の光。滅びの光だ。
「――っ……私、は……」
そうして光が収まる頃には、ガイは変貌していた。
その身も、心も、魂でさえも。もはや人ではない。魔のものに。
「新たな魔人――ガイの誕生だ」
「……ええ」
ガイが呆然と立ち尽くす中、ジルは愉悦を顔に浮かべ、レオンハルトはその双眸を細めて事が成ったことを受け止めていた。
そうして2人は、動き出す。
「では行くぞ……ガイはここで待っていろ」
「はっ……」
「っ……」
レオンハルトに負わせられた傷が全て完治し、そして魔人になったことを受け止めきれずに顔と頭を抱えているガイを一旦放置し、ジルとレオンハルトは玉座の間へと戻っていく。
その際に、レオンハルトは自らの左肩に刺さった魔剣カオスに手を掛けた。それを、一気に抜いて。

「――返しておく」
「！」
『ぐ……！』
レオンハルトの肩から血が吹き出るが、その傷はすぐに和らいでいく。見れば、ジルが指先から魔法の光を発していた――おそらくは、神魔法。ヒーリングの一種。
そうして再び、問題なく歩けるようにまでは回復したレオンハルトは、ガイに背を向ける。床に投げ落とされたカオスがその背を睨み、ガイもまたそれに気づいてどうしていいか分からずに視線を向けた。
そんなガイに対し、レオンハルトはそのまま去ることはしなかった。ただ、少しの間立ち止まって――
「……勝負にはケチがついたか。ともあれ、歓迎させてもらう。お前程の男が魔人になったのは喜ばしいことだ」
「……」
そんなことを、レオンハルトは告げてきた。
ガイは、ただその言葉を受け止める。自分が魔人になった。その事実を、ガイは髪で隠れていない方の表情を歪ませることで反応した。
「……なぜ……私を……」
「……何故、か」
そして、自然とそんな疑問が口から出る。
なぜ自分を魔人にしようと思ったのか。最初に聞いた人間のためとは、とても信じられない。
未だガイは魔人レオンハルトの言葉を信じてはいない。それだけに、何故だと強く訴えかけたい思い気持ちでいっぱいだった。
だが、レオンハルトから返ってきた言葉は――
「お前は……魔人になるべきだからだ」
「っ……」
――意味が、わからない答えだった。
それを口にして、レオンハルトはそのままジルの後を追って去っていく。
ガイはその答えに言葉を返せない。ただ、ゆっくりと両膝を突いて

項垂れた。
「――っ、～～～～！」
そして声にならない声を上げて、呻いた。
涙は流れない。どういう訳か、涙を流せるほどの悲しみは浮かばなかった。
ガイの心にあるのは、ただただ失意。絶望。またしても――自由を奪われたという暗い気持ちだけだった。

レオンハルトは、ジルの背を追いながらその結果に半分は満足していた。
満足したのは、ガイを魔人にすることが出来たことによるもの。
そして満足出来なかったのは、ガイと決着をつけられなかったことだ。
勝敗という意味では、引き分けというのに近い。ガイが逃走を図った時、レオンハルトは逃してはならないとそれを追いかける意思を見せたが、実際にはかなりギリギリの状態だった。
あと少し戦闘が長引いていれば、どうなっていたか分からない。ガイも満身創痍であったが、レオンハルトもまた体力を大きく削っていた。
それでもあの時点で有利だったのは自分。だから勝っていたのは自分だと言い張ることは出来るが、それは恥の上塗りにしかならない。ただの悔し紛れに過ぎない。ジルの横槍が入らなければ勝ってたなど、現実で仕留めきれていないことを考えれば言い訳にしかならない。
実際に、レオンハルトは悔しさを感じていた。
ガイに勝利するつもりで全開を出して挑んだこの勝負だったが、それが引き分けに終わったという事実は中々に認め難いものだった。
何しろそれは、まだ自分が弱いということと同義。
しかも、もう二度とあのガイと死合って決着をつけることが出来ないのだ。

魔人になったガイの力を感じて、何となく察した。おそらくだが、ガイの強さは魔人になることで、また少し変わっていると。
そしてそれは、自分にとって酷く相性の良い変化になっていることを――直前まで殺し合いをしていた鋭敏な気配で、察していた。
だからこそ、苦々しい思いが残る。ガイと、決着をつけられなかったことが。
……だが……これでまた1つ進んだ。
だが一方で、それに拘ってばかりもいられないことも理解している。
ガイとの勝負を求めたのは、あくまで個人的な欲求。衝動に過ぎない。より大きな目的とは比べられるものではないことだ。
だからこそ、1つ壁を乗り越えたことに僅かばかりの安堵を得る。
そして思う。ガイが魔人になったこと。そして、この俺と引き分けたことは、すぐに多くの魔物に――魔人に伝わるだろうと。
魔物払いをしたとはいえ、魔王城にいる魔物も0ではない。そして、先程までの戦いの気配を感じている者もいる。
あるいは覗き見している者もいたかもしれない。それを探るために割くような余裕はなかったため、勘でしかないものだが。
「……だがそれもいい、か」
その影響は至るところに出るだろうが、それも致し方ない。なるべきようになるし、なるべきようにする。悪影響は与えない。そんなことはどうにでもすればいいことだ。
問題があるとすればガイ。そしてジルだろう。そう思い、レオンハルトはジルの部屋に足を踏み入れて、その治療を一先ずは受けることにした。
背後で項垂れているガイを1人残して。
――そうして人間ガイは、魔人となることでその人生に幕を閉じた。
――だがガイの受難はまだ終わらない。
――レオンハルトとガイが引き分けたことは、すぐに魔人たちに知れ渡ることとなり、そのことが彼のこれからの魔人生において多くの

影響を及ぼすことになる。

魔人招集

――ＧＬ６ＸＸ年。大陸東部。
現在の世界の中心である魔王城。
普段は物静かで、聞こえる音と言えば人間の悲鳴やうめき声。警備の魔物兵が行き交う音ばかりなその城は、現在にわかにざわついていた。
「おい、聞いたか……あの話」
「ああ……聞いたけどよ、あの話ってマジなのか……？」
「少なくとも大広間の辺りはめちゃくちゃになってたからなぁ……ついこの間まで修繕してたくらいだしよ……それに西の山もちょっと削れてるだろ」
「ああ。それが？」
「あれも戦闘の余波で削れたって話だ……」
「うげぇ……ま、マジかよ……」
「城に残ってた奴が見たんだってよ……レオンハルト様も、相当酷い怪我を負ってたらしいぜ……」
「そ、そうなのか……ひえぇ……おっかねぇ～」
「今は魔人になってんだから当然だろうけど、俺達なんて一瞬で消し炭だろうな……」
魔物払いが解かれて1週間後の魔王城で、再び警備についた魔物兵がひそひそと小声で噂話をする。
その光景が城の至るところで行われていた。
それどころか大陸中でその話を口にしている者が見られるだろう。
現在の魔物界は、新しく魔人となった人間の男と魔人レオンハルトが……戦い、引き分けたというその話題で持ち切りだった。
特別な事件も殆ど起こり得ない現在の魔物界で起きた、その大ニュースは瞬く間に魔物達の耳に入ることとなった。
何しろ魔人レオンハルトと言えば、魔人筆頭にして魔軍参謀を拝命している魔人達の頂点。魔王様の腹心にして右腕だ。

一般の魔物から見れば雲の上の存在である大陸の支配者層である魔人。その魔人の中で、四天王よりも上位に立つ、かの魔物界の英雄が人間と戦い、引き分けたという話は多くの魔物達に衝撃と畏怖を与えていた。

そしてそれは――魔人達にとっても例外ではない。

「……」

玉座の間に続く大広間。

そこに足を踏み入れた魔人レイは、己と同じ濃密な魔の気配を感じ、そのもととなる大勢の魔人達に軽く目を向けた。

魔王ジルによる招集を受けて、既に多くの魔人達がそこに集っている。

普段は大陸中に散らばって好き勝手過ごしている彼らだが、魔王の招集を受ければそこに選択権はない。

普段は傍若無人に過ごしている魔人達も、比較的大人しく魔王の登場を待っていた。殆どの魔人は個々で少し距離を取って思い思いに待っているが、一部の親交のある魔人同士は集まって立ち話に興じていたりする。

そしてその話題は、魔物兵達が話しているものと相違なかった。レイもまた憚ることのない歩みで近寄り、親交のある2体の魔人に声を掛けた。

「ふん……もう揃ってンのか」

「おや……遅かったですね、レイ」

「ええ。貴方で最後です。四天王以上の方々は先にお着きのようですので」

魔人アイゼルと魔人ジーク。

どちらもレイと同じく現魔王ジルによって作られた魔人である。

その2体はどちらも物越しが柔らかく、荒っぽく誰ともつるまないレイでも会えば会話をするくらいの関係ではあった。

「つってもケイブリスの野郎以外は姿が見えねェが」

「それならレオンハルト様に呼ばれていきました」

「……レオンハルト、か」

大広間を見渡し、魔人四天王に名を連ねる魔人がほぼ見当たらないことに疑問するレイに、ジークが簡潔に答える。
それを聞いてレイは少し意味深にその名を口にした。何かを考えているのだろうが、その何かは誰であっても容易に推察出来るもの。アイゼルがそれを見て口を開く。
「やはり、既に聞いていますか」
「……ああ。ってこたァ……ガセじゃねェのか？」
「どうでしょうね。私としても気になってはいます。まさかあのレオンハルト様が、戦いで人間と引き分けるなど……正直に言わせてもらうと信じられませんね」
やはり話題はそれになる。アイゼルは普段から浮かべている優雅な笑みを崩し、真面目な顔で自らの所見を口にする。続く形でジークもまた。
「私も同感ですが……勝負事において、レオンハルト様が嘘を言うとは思えない。もしそれが嘘であれば、訂正が入れられる筈です。決闘の結果が誤って伝わることを、レオンハルト様は良しとしないでしょうから」
「ンなもんわかんねェだろうが」
「では、本当は違うと？」
「嘘をつくこともあんだろって言ってるだけだ」
考えたところでその真偽はわからない。結論としてはそういったところで、レイは苛立ちを感じているように舌を打ち、アイゼルとジークは思案顔となった。
そうして無言が生まれた3人の中に、軽い女の声が割って入ってくる。
「ちょっと何の話してるのー？　せっかくだから混ぜてくれない？」
「！　メディウサ……」
恥丘から生えた白い大蛇を身に纏わせた女の魔人――メディウサが話しかけてくる。
彼女もまた魔王ジルに作られた魔人。だが、その生活は自堕落で退廃的。自分の管轄する人間牧場から出てくることは殆どないため、顔

を合わせたのは2度目といったところだった。それも１００年以上は会っていない。
　ゆえにアイゼルは話しかけてくると思わなかったのか、純粋に驚きその名を口にした。そして代わりではないが、答えたのはレイだ。顔を合わせることすら珍しい相手にレイは不遜に応じる。
「あ？　なんの用だ蛇女」
「何よー。暇だし、ちょっとお喋りしようと思っただけなんだけど？　私が話しかけちゃいけないわけ？」
「ケイブリスの相手に飽きたのか？」
　メディウサが魔人ケイブリスとつるんでいるのは魔人の中では知られた話だ。それを揶揄され、しかしメディウサは特に気にした様子もなく答える。
「いやーそれがケーちゃんってば、どれだけ話しかけても反応ないのよね。何かまた考え込んでるみたいでさー。それで暇過ぎるから混ざりに来ちゃった」
「ハッ……どうせ怯えてんだろ。レオンハルトの野郎と引き分けたって話がマジなら、これから来る奴はあの野郎より上だからな」
　魔人四天王の一角にして異形の魔人であるケイブリス。その異常なまでの強者への恭順ぶり。強者に媚びへつらい、弱者に横暴振る舞うケイブリスの器の低さもまたよく知られている。
　大広間の隅でそのデカい異形の身体を丸めているケイブリスの背中を見て、レイは鼻で笑った。それに対し、アイゼルは何も言わない。アイゼルもまた醜さの権化とも言えるケイブリスのことがあまり好ましいとは思っていなかった。
　だが魔人一の紳士とも言われるジークは違うようで。
「レイ。陰口は感心しませんよ」
「……チッ」
　陰口を叩いているという事実を指摘され、気に入らなかったのか再びレイが舌打ちを零す。そんなレイとジークのやり取りを見て、メディウサが口を挟んだ。
「別にちょっとくらい良いじゃないの。今話題のあの話だって聞きよ

うによっては陰口のようなものだし？」
「……そうですね。真偽のわからない話を邪推するのは好ましいとは言えません。よろしい。ではこの話はこれで終わりとしましょう」
「え～。せっかくその話をしようと思ったのにー」
「……ですがメディウサ。貴女も分かっているでしょう。ここで我々が話したところで、事の真偽はわかりようがない」
ジークに言われ、頬を膨らませて抗議するメディウサに、アイゼルが横から口を挟む。気になる話題であることは確かだが、だからと言って話して何が分かる訳でもない。
ジークはもうその話をしないと決めたようで無言を貫き始めたが、メディウサは話す気満々と言ったところで、アイゼルのその言葉に対しても淀みなく返す。
「そりゃレオンハルトと親しくない魔人なら知らないだろうけどー……だったら知ってる魔人に聞いてみれば良いんじゃない？」
「親しい、魔人……ですか」
「そう。例えば――」
メディウサがその親しい魔人とやらに目を向けようとした時――ドカッと荒々しい音が鳴り、その直後にデカい声が大広間に響いた。
「はぁ――……暇すぎる！　おい！　そこのお前ら！　暇じゃし、儂とセックスでもするか！」
「は、はぁ⁉　な、何言ってんのよ」
その突拍子もない下品なことを口にしたのは、広間で胡座をかいて酒を呑んでいた鬼の魔人――レキシントンだ。
彼は己の膝を叩き、どこまで本気かわからないそんな提案を、２人の女魔人――ラ・サイゼルとラ・ハウゼルに口にする。
「何って……セックスじゃセックス！　意味くらいは知っとるだろう。儂とセックスせんか？」
「す……する訳ないでしょーが！　バカじゃないのあんた！」
「……レキシントンさん。そういう冗談は如何なものかと思います」
再度、口にしたレキシントンに冷気を纏わせるサイゼルは声を大にして怒り、熱気を纏わせるハウゼルは冷ややかな反応を返す。

それを聞いたレキシントンは顎を撫で摩りながら渋い顔をする。
「冗談じゃないんだがのう。なんなら儂と喧嘩でもするか？　それで儂が勝ったらセックスだ」
「や、やる訳ないでしょ！」
「……こちらにメリットないですね」
「ハハハ！　そういう反応をされると更にやりたくなるわい！」
「っ……や、やるっていうの？」
「まさか……本気ですか？」
レキシントンが豪快に笑い、金棒を手にして立ち上がったところでサイゼルとハウゼルもそれに警戒して腰を僅かに低くした。その姉妹の反応に、レキシントンは沸き立つ。
「ほぉ……2対1か。面白い！　儂は3Pも好きだぞ！」
「……！」
レキシントンが戦う意思を見せたことで、サイゼルとハウゼルもまた否応なくその手に武器を出現させる。サイゼルの手に氷結の女神。ハウゼルの手に燃える塔。氷のレーザー銃と火炎放射器。
それを見せたところで、他の魔人達も反応した。まさか本当にやる気か？　と。
だがそこで、最も速く反応を見せた者がいた。
「……」
「！　あなたは……」
「……誰よあんた。まさかあんたまでやる気？」
サイゼルとハウゼル。そしてレキシントンの間に、割って入って来たのはホルスの魔人――メガラスだった。
姉妹が警戒する中、メガラスは白い外骨格の身体をレキシントンの方へ向ける。
「……あぁん？　何じゃメガラス。邪魔する気か」
「……」
「邪魔するなら容赦せんぞ」
「……」
メガラスは言葉を発することなく、無言でレキシントンに意思を発

し続ける。その場に立ちはだかり、外骨格の身体を軽く鳴らした。
――やるなら容赦はしない。そんな言葉が聞こえてくるようだった。
「……相変わらず無口じゃのう。何を考えておるかさーっぱりわからんが……やるなら相手になるってことで合っとるか？」
「……ああ」
たった一言。頷き。肯定だけを返し、メガラスは自身の立場を明確にする。同じ仲間の魔人として、この場で争い合うのは看過出来ないことだと。
だが滅多に顔を合わせず、強いのに喧嘩にも応じないメガラスが立ち塞がったことで、レキシントンはよりやる気を見せた。
「ほう。それならそれで面白い。退屈凌ぎにはちょうど――」
「そろそろおやめになってはどうです？　レキシントン」
「げっ……ジーク」
そしてその喧嘩の仲裁に、アイゼル達のところにいたジークが近寄って割って入る。
その口うるさい相手の登場に、レキシントンは露骨に嫌な顔を浮かべた。そして彼の予想通り、ジークはレキシントンに向けて注意を促す。
「お嬢さん方の言う通り、そろそろ冗談はおやめになるべきです」
「けっ！　別にこれくらいええだろうが！　ちょっと口説いてからかってやっただけだ！」
「口説くにしてはあまり良いやり方ではないのは置いておくとして……ええ。確かにそれくらいなら自由でしょう。ですが、魔人同士の喧嘩にまで発展させるつもりなら見過ごす訳にはいきません。今我々は魔王様に召喚され、待機している状態。そこで諍いを起こすなど、貴方の忠誠心まで疑われかねませんよ？」
「言われんでもやるつもりはなかったわい！　ふん！」
ジークの注意を受け、金棒を床に乱雑に置き、再び胡座をかいて酒を飲み始めるレキシントン。忠誠心を持っているかは微妙にしても、そう言われてしまってはレキシントンとしても従わざるを得ない。

元よりそこまで本気ではなかったが、喧嘩の火種を潰されて苛立ちは感じているようだった。
　そしてレキシントンが姉妹やメガラスから興味を失わせたことで、サイゼルとハウゼルも自らの武器を消す。そしてハウゼルが一歩進み出た。
「……ありがとうございます。ジークさん。それに……えっと、メガラスさんも」
「気にすることはありません。人として当然の行いです」
「人……？」
「……」
　ハウゼルが２人に礼を言うと、ジークは人として当然だと告げ、サイゼルはそれに聞こえない程度の音量でツッコミを口にした。メガラスは無言で背を向け、再びその場から少し離れていく。ジークもまた姉妹を気遣ったのだろう。それだけを口にして距離を取っていった。
　その２人の対応を見て、ようやくサイゼルが声を少し大きくする。
「……何よあいつら。どいつもこいつも良い子ぶっちゃってさ」
「良い子ぶってって……駄目よ姉さん。助けてもらったんだからそんなこと言ったら。それに、メガラスさんはまだちょっと分からないけどジークさんは本当に良い人よ」
「何よ。というか……あの変なのと知り合いなの？」
「前に話したじゃない。ケッセルリンクさんに招待されたお茶会でお会いしたんです」
「はぁ？　何よそれ。聞いてないんだけど」
「話しましたよ。姉さんも誘ったのに興味がないからって言って断って……大体姉さんは閉じこもり過ぎです。少しは他の方とも仲良くしてください」
「閉じこもってるって……そんなのハウゼルだって同じでしょ。いつも本読んでるし。外に出てるって言うなら私の方が出てると思うけど」
「そういう意味じゃありませんっ！　大体いつも姉さんは――」

「ハウゼルだって――」
サイゼルとハウゼル。姉妹の軽い口喧嘩が始まる。
さすがにこの場で武器を取り出してやり合うようなことにはならないが、周囲としては鬱陶しいことこの上ないだろう。その中で、1人の少年が白い目を向けた。
「……うるさいなぁ。まったく……新しい魔人だか何だか知らないけどやっぱり招集は面倒だ……こっちは研究で忙しいってのに……」
不健康そうな青白い肌の少年――魔人パイアールは小さくぼやく。
魔人の中でも戦闘力は下位。しかし、それを補って余りある圧倒的な科学技術を持つ彼は、他の魔人達の争いにも興味を示さず、その諍いを低レベルなものだとして見下していた。
そして、パイアールのようにただじっとしている魔人は他にもいた。
「ん～～……」
広間の隅で、虚空を見つめている巨大な魔物――ではない。
その生物に寄生し、自由自在に操っているその赤い目玉――魔人レッドアイ。
数いる魔人の中でも残虐非道で知られるその魔人は、意味ある言葉を口にすることなく、思考していた。そうして見るのは、この大広間にある色濃い魔法の残滓。
(このデンジャラスなマジックパワー……このミーでも不可能なほどのマジックね。どうにかしてミーのパワーアップに利用出来れば皆ハッピーハッピーよ！　ククケケケ！)
魔人最狂で最強の魔法使いは、自らの不利益になる存在を排除し、自らの魔力を高めることだけを考える。そういった生物だ。
ゆえに他の魔人と馴れ合うこともせず微かに残った魔法の残滓を解析しようと試み、更にはこれからやってくる新たな魔人のことを思い、不気味な笑いを内側に忍ばせていた。
――だが、この場にいる魔人の中で、最もこの問題を深刻に捉えている者。深く考え込んでいる者は他にいた。
それはこの場にいる強大な魔人達の、誰よりも大きな身体と、誰よ

りも強大な力を持つ魔人。
魔人四天王の一角にして、その中で最も強い力を持つと噂される魔人――ケイブリスだった。
（ど、どうするどうするどうする!?　く、くそ！　何で俺だけ呼ばれなかったんだ!?　レオンハルトと引き分けた魔人とか、本当なら絶対に俺様より強いじゃねーか！　まさか俺だけ落とされるのか!?）
ケイブリスは、焦っていた。恐怖していた。その巨体を広間の隅で丸め、必死に考えていた。この話が、本当か嘘か。そして、それがどちらだとしても上手く生き残るために必死になって模索していた。
（い、いや待て……まだ本当だと決まったワケじゃねェ……で、でも話が嘘だとしてもそれはそれで不気味だぜ……レオンハルトに何か考えがあるってことだからな……何が目的だ？　またザビエルの時みたいに油断させて襲ってきた奴を殺すつもりか？　それともその新しい魔人に何かあんのか？　なんか魔人を貫ける魔剣とかの噂もあるし、それに関係してくんのか？　チクショウ！　考えたところでわかるワケね――！）
ケイブリスは強いストレスを感じ、頭を抱える。――だが、結果としてはいつもと変わらない対応となる。
強ければ媚びへつらう。自分と同じくらいなら念のため怪しんで敵対は決してしない。そして自分より弱いように見えたら……でもやっぱり引き分けたとか魔剣持ってるとか怪しいんで様子を見る。
魔人随一の小心者。長い物には徹底的に巻かれろが信条のケイブリスは、環境の変化と強者の気配に敏感だった。
そしてそんなケイブリスに話しかける者はいない。魔人の中でも彼は嫌われ者である。唯一話しかけるメディウサも、今は反応を返さないケイブリスから離れ、また別の者に話しかけていた。その相手は、
「は――ぁ――い。ちょっといーい？」
「あ？　おお、んぐ、はぐ……別にいいぜ。どうした？」
手に持った骨付き肉を口に運び続けているムシ使いという特殊な人間出身の魔人――ガルティア。

魔人の中でも古株であり、レオンハルトの友人としても知られる彼は、メディウサからの声掛けを食事をしながら対応した。メディウサも、そのことは知っているため驚きもしない。ただ会話のジャブとしてその事を指摘しはする。
「また随分と食べてるわねー」
「そうでもねぇさ。これは……んぐ、もぐ……ちょっとしたツマミだからな。謁見中は当然、何も食えねぇだろ？　だから今のうちに食いだめしてんのよ。はぐ、はぐ……謁見中に腹を空かさねぇようにな」
「……ちょっとしたツマミ程度には見えないけど」
その食事量。魔物兵に持ってこさせているその食事の量に、メディウサは呆れる。自身が一日に食べる食事の量を遥かに超えているからだ。
あるいはこの場にいる全魔人を合わせてもガルティアの食事の量には届かないだろう。魔人一のグルメであり大食いだと聞いているが、メディウサとしては後者はともかく、そんなに食べて味が分かるのかと疑ってしまう気持ちだった。
しかし、そんなことよりもとメディウサは早速本題に入る。
「ま、そんなことよりあんた、何も聞いてない訳？」
「あ？　何がだ？」
「わかってんでしょ。レオンハルトが新しい魔人と引き分けたって噂よ。あんた、レオンハルトと仲良いんでしょ？　何か聞いてない訳？」
「ん、あ――……その話か。その話なら生憎と、俺は何も聞いてないぜ」
メディウサの質問に、ガルティアは何かを思うように声を間延びさせたが、返ってきたのは他と同じ「わからない」という答え。
だが何か含みのある反応に、メディウサは話を続ける。もしかしたら、何か面白いことが聞けるかもしれないと。
「ふぅん。なら、あんたはどう思うのよ」
「どう思う？」
「レオンハルトが引き分けたって嘘だと思う？　それとも……本当の

ことなのかしらね？」
「ん、まあ、そうだな……」
答えてくれないかと思ったが、意外にもガルティアは食事の手を一旦止め、答える素振りを見せた。
それを見てメディウサはほんの少しだが期待するが……しかし、返ってきた答えは、メディウサの期待に沿うものではなかった。
「そりゃ、ありえるんじゃねぇか？」
「……へぇ。ありえるんだ。そう思う根拠は？」
「戦いに絶対はないからな。そういうこともあんだろ」
ガルティアの戦いに関する価値観から出た答え。それはガルティアの感想でしかなく、レオンハルトを少しからかう話の種を求めていたメディウサにとって、それは満足行く回答ではない。
すぐに興味をなくしたように息を吐く。
「……あっそ。もういいわ。それじゃ」
「おう。なんなら肉1つ持ってくか？　中々美味いぜ、これ」
「いらないわよ。あんたが食ってるの見てるだけで胸焼けするわ」
ガルティアの言葉を素っ気なく突っぱね、メディウサは距離を取っていく。
その背中を見て、ガルティアは再び食事を再開しながら呟いた。
「美味いのに勿体ねぇなぁ……んぐ……それにしても、引き分けくらいでそんな騒ぐもんかね……」
レオンハルトが戦いで引き分けた。それが本当なら確かに意外と言えば意外だが、騒ぐほどのことでもないとガルティアは純粋な感想を口にする。
気になるとしても勝負がどうこうより新しい魔人の方だろう。そちらについても、ガルティアは食事以上の興味を持ってはいないが、全く興味がないと言えば嘘になる。
何しろ新しい魔人のお披露目というだけでは、魔人に招集をかけることなどありえない。
なのに招集をかけたということは……魔人達に、何かを大々的に告知するためだからだ。

だからこそ、この場には魔人四天王がいない。ケイブリスが何故か残っているが……それはともかくとして、いない理由は十中八九、レオンハルトがその件で意見を聞くために呼んだからだろう。
そして魔人を全招集してもうしばらく経つ。若干1名、奈落にいる魔人がいないが、それはいつものことなので特に誰も気にしない。
ゆえに次にやってきたのは、この場にいない魔人四天王の1人だった。
「――全員揃っているようだね」
「！」
大広間の先。謁見の間の方からやってきたその気品溢れる女魔人の声に、誰もが反応を見せた。この場にいなかった魔人四天王の1人――魔人ケッセルリンク。
彼女は広間にいる魔人達を見渡して、集まっていることを確認すると簡潔に口にする。
「時間だ。全員、謁見の間へ」
そうしてケッセルリンクが先導するように踵を返せば、他の魔人達もそれに追従する。その命令に歯向かうような者や、文句を言う者も存在しない。
何故ならそれはケッセルリンクの命令ではなく、実質魔王ジルの命令だからだ。先程までは思い思いに待機していた魔人達も、その全員が従順になって動く。
酒を呑むことも食事をすることも誰かと諍いを起こすこともない。魔王の命令は絶対。それは魔人達でも変わることのない絶対の掟であり、その血に定められた本能だ。
ゆえに誰もが従った。謁見の間に足を踏み入れた魔人達は、膝を突いて臣下の礼を取る。
何しろ既にその玉座には、魔人達が仰ぎ見るべき存在が腰掛けていたからだ。
「……」
――魔王ジル。
大陸で最も強く、最も恐ろしい魔族の王が、その冷淡な目で眼下の

魔人達を見下ろしていた。
全く興味を感じていない。魔人達がどれだけ忠誠心を示そうとも、それに応えることもない。魔人達を呼び寄せたのも、配下の進言を許したに過ぎないのだろう。
そしてその配下とは、ジルの座る玉座の側に控える魔人のことだと誰もが知っていた。
だがそこには今、3体の魔人がいる。1体は魔人四天王の一角。地竜の魔人であるノスであり、彼は言葉を発しない。
口を開いたのはその中の1体。魔人達もよく知る魔人――レオンハルトだった。
「……ジル様」
金髪灼眼。魔人筆頭にして魔軍参謀。そして何より、ジルのお気に入りであるレオンハルトはジルに声を掛け、その意思を代弁する。配下に興味を向けないジルは、お気に入りの魔人の呼び掛けを聞いてようやく声を発した。
「――――面を上げることを許す」
たった一言。魔人達はその言葉を聞いて、ようやく魔人達は顔を上げてジルの尊顔を仰いだ。その圧倒的美貌。それが霞むほどの、恐ろしい目。
他に憚る者など何もない。恐れるものは何もない魔人達でさえ、ジルを目の前にすれば畏怖や恐怖を覚える。
だが今の魔人達はそれよりも気にかかるものがあった。
それはジルの側にいるもう1体の、見覚えのない魔人。その姿を誰もが目にした。
「ジル様に代わり、皆を労わせてもらう。ご苦労だったな」
レオンハルトのその上からの言葉に、文句を言う者は誰もいない。ジルのいない場。関係のない場であればレイなどは突っかかるだろうが、そのレイであってもこの場では大人しくする。ジルのいる場で不用意に発言するようなことはしない。
「さて……今日来てもらったのは他でもない。こちらにいる新たな魔人の紹介と、それに伴う辞令を皆に伝えるためだ」

レオンハルトはジルの代わりにそれを口にする。隣にいるその男の魔人に目を向けずに。
「この隣にいる男がジル様が新たに作られた魔人――ガイだ」
「……」
その名を口にし、皆に紹介する――その言葉を聞いて、魔人達はその視線を魔人ガイに向けた。
見た目は黒い髪の、黒を基調にした騎士のような衣服に身を包んだ、何の変哲もない人間の男。顔の右半分を前髪で隠し、軽く目礼をするガイに対する魔人達の印象は……それぞれ細かな表現の違いはあるが、概ね同じであった。
――陰気。
その表情も雰囲気も暗い。その身から感じる力は魔人なだけあってそれなりの力は感じるが、覇気を感じない。
顔立ちはそれなりに整っているのに、その陰鬱な気配がそれを台無しにしている。
その隣に威厳と覇気の塊とも言えるレオンハルトが立っているのもあって、よりその陰気さが目立っている。
ゆえに多くの魔人は疑問に思った。――本当にこの男が、レオンハルトと引き分けたのか？　と。
だがレオンハルトの続く言葉はその実力を示すものであり、魔人達を驚かせることになる。
「そして辞令だが、ジル様はこのガイを……新たな魔人四天王へと任命された」
「……！」
「……!?」
魔人達が言葉を発さないままに驚きを内心に浮かばせる。
魔人四天王。それは魔人の中で上位の強さを持つ４人の魔人にのみ与えられる地位にして名誉ある称号。
その地位は当然、通常の魔人達より上位に位置づけられ、立場は明確に分けられる。
四天王の地位より上は最高位である魔人筆頭と魔軍参謀。つまり、

レオンハルトしかいない。
つまり魔人達の中でも更に上位の支配者となる権利であるが……その四天王に、新たな魔人であるガイが任命されたことは驚愕を持って受け止められる。
それは力ある者の証明であるからだ。しかもそれは、また1つの事実を示していた。殆どの魔人はすぐに気づく。ガイが魔人四天王に任命されるということは――誰かが降格することと同義であり――。
「……それに伴い、残念なことであるが……カミーラから魔人四天王の座を剥奪することになる」
「!!?」
そしてその告知は、ともすればガイの四天王就任よりも衝撃を与える――特に、約1名には。
誰もがこの場にカミーラがいない理由を察した。プラチナドラゴンの魔人であるカミーラは、長いこと魔人四天王の地位に就いていた上位魔人である。
実力も高いが気位が高いことも有名なカミーラが、四天王を剥奪され、多くの魔人達に姿を晒すことは耐え難い恥辱だろう。それを慮り、レオンハルトが特例でこの場に姿を現さないことを許した――勘の良い魔人はそれを察する。ジルはそんなことは気にしないだろうと。
「今日の招集はそれを伝え、ガイの顔見せを行う為のものだ。――ではジル様……」
「……」
「はっ。では解散とする」
伝えるべきことを伝えたレオンハルトが伺いを立てると、ジルはそれに立ち上がってひたひたと歩くことで答えた。その意を汲んでレオンハルトが解散を言い渡すとレオンハルトとノス。そしてガイは付いていった。魔人達は頭を垂れてそれを見送る。
「……チッ……」
そして残された魔人達は、ジル達が完全に去った後にようやく姿勢を起こし、謁見の間を去っていく。

その中で不満を露わにするように舌打ちをしたレイは少しその場に立ち尽くした後、何かを決めたような足取りで他の魔人に続いて謁見の間を出ていく――それにアイゼルが声を掛けた。
「レイ。まさかとは思いますが……仕掛けるのですか？」
「……ちょっと歓迎してやるだけだ」
そう言ってレイはアイゼルの言葉を否定せずに城から出ていく道とは別の方向へ向かっていった。それを見送り、アイゼルは言葉を零す。
「止めても無駄、ですか……さて、何か大きな問題にならなければよいですが……」
そうしてアイゼルもまた謁見の間を後にする。
続々と魔人達が去っていく中、残っていたのは――
（……え、えええ～～～～!!? か、カカカ、カミーラさんが四天王じゃなくなる!? おいおい、それはやべぇぜ……カカ、カミーラさん、メチャクチャ怒ってんじゃねぇか……？）
四天王を剥奪されたカミーラに想いを寄せるケイブリスは、その対応に悩んだ。
（……もしかして、これはチャンスか？ カミーラさんの代わりにあのガイってやつを俺様がボコボコにすれば……）
ケイブリスはその可能性を考える。カミーラがガイに怒りを抱いていることは明白。もしかしたら戦いを仕掛ける可能性もある。
そのガイを、自分が代わりにボコボコにする。そうしてガイを四天王から降ろし、もう1度カミーラを四天王に戻してやれば、カミーラも自身に感謝すると、そう考えはしたが……。
（いや、ダメだ！ レオンハルトと引き分けたかもしれねー奴に勝負を挑むなんて危険な行為、出来るワケがねぇ！）
すぐにその企みを捨てる。その考えは、ケイブリスにとってあまりにも危険すぎた。思いつきはしたものの、到底実行出来る企みではないと。
（……ここは大人しく、カミーラさんを慰めに行くか……と、そう決まればこうしちゃいられねぇ！ カミーラさんを慰めて評価を上げる

チャンスだぜ！）

そしてケイブリスもまた、城の中にまだいる筈のカミーラを探しに行った。――そのカミーラが、今まさにその企みを実行しているとも知らずに。

魔人ガイ

ガイは己の置かれた新たな境遇を、ただ受け入れていた。
魔王ジルによって魔人に変えられた己の運命を、ただただ呪い、それを諦めるようにして受け入れたのだ。
「ガイ。お前には魔人四天王になってもらう」
「……」
「ジル様の命令だ。否応はない」
魔人になった次の日には、自身と死闘を行った魔人レオンハルトにそう告げられた。
ガイはそれを無言で首肯した。抵抗しても無駄だと思ったからだ。
魔人になってしまった自分は、既に魔王の手先だ。
もはや魔王を倒すことは叶わない。人間を救うことは叶わない。
魔人になったことで、己の肉体が人間の時よりも遥かに強化されたのは感じている。
だが一方で、何故か今まで使えていた魔法が使えなくなった。
それは自身が魔王を倒すために得た筈の力――禁呪だ。
不思議なことだった。魔力は飛躍的に向上しているのに、その禁呪がどうにも使えない。その理論も、やり方も頭に入っていた筈なのに。
ゆえにわかる。自身はもう、魔王は倒せない。
それどころかレオンハルトも倒せないだろう。あそこまで戦い抜けた理由は、禁呪を自由自在に扱えたからこそだとガイは理解している。
幾ら肉体の力が、その身に秘めた魔力が向上したからといって――禁呪が使えないなら己の強さは魔王に届き得ない。
だから無駄なのだ。魔人になって理解した。魔王ジルの力は、遥か高みにある。己の手に余る存在だと。
ゆえにガイは、諦めた。そして――気力を失わせた。
魔人になって自分の教育を任されたというレオンハルトの言葉に従い、多くの魔人達の前で顔見せを行った。

その中には、かつて自分を身請けした女主人を殺した魔人もいた。
だがそれもどうでもいい。今更その魔人を殺したところで何になるのか。どうにもならないからだ。
今のガイには全てを受け入れることしか出来ない。
「これからお前に、幾つかのやるべきことを教えるが俺はジル様に呼ばれている。割り当てられた部屋で待機しておけ」
「……わかった」
「ではな」
教育役のレオンハルトにそう命じられる。魔人筆頭にして魔軍参謀。魔人の最高位であり、魔軍も取り仕切る役目に就いているレオンハルトの命令もまた、魔人にとって優先すべきもの。
上位者の命令には従った方が利口であるとレオンハルトからは魔人になってすぐに教えられた。魔物の世界は力が絶対であり、強い者が上に立つ弱肉強食の世界だと。
「……レオンハルトと引き分けたそうだな？」
「……運が……良かっただけだ。それが何か……？」
そして強者と言えば――このノスもまた。
魔人四天王の1人であり、魔王ジルの側近であるその巨漢の岩肌を持つ男はレオンハルトが去った後にこちらを見下ろし、そのようなことを聞いてくる。
そしてその視線にはこちらを見定めるものと、どこか気に入らないという悪感情が見てとれた。悪感情に敏感なガイにはそれが分かった。
その証拠に、ノスは不満そうに鼻を鳴らす。
「ふん……何……レオンハルトと引き分けたと聞いたからどれほどの強者かと思ったが……蓋を開けてみれば強さを感じないのでな。疑問に思っただけのこと」
「……」
「そして……自身の力を侮られても怒りの1つも見せぬか……思ったよりもつまらぬな。ジル様も、何故このような男が気に入ったのか……」

ガイは答えない。そんなこと、こっちが聞きたいからだ。好きで気に入られた訳じゃない。
それに気に入られたといっても下僕としてだ。レオンハルトには劣る。
それを理解しながらもレオンハルトにではなくこちらにだけ不満を覗かせたのは、やはり信頼の差か。あるいは新入りがという思いがあるのか。
それともジルを殺しに来たという目的のことを知っているからか
――ノスは去り際に低い声で警告してくる。
「……まあよい。精々ジル様のために務めを果たすことだ」
「……理解している」
「……魔人は血の気が多い。新たな四天王の誕生に浮足立つ者も多いだろう。用心することだな……」
それだけ言うと、ノスはゆったりとした足取りでその場を去った。
『……ケッ。何が用心しろじゃ。殺気立っとる奴の言う事じゃないわい』
「……」
『……おい、ガイ。お前……どうするつもりなんだ』
ガイの持つ魔剣カオスが、ガイに尋ねる。
その声音は真剣で低いものだった。
「……どうする、とは？」
『決まっとるだろう。今からでも魔人や、魔王を倒すのは……』
「……もう、それは出来ない。やりたくてもな。お前も分かってるだろうカオス」
『……』
ガイの答えにカオスは言葉を返せない。
理解していた。魔人は魔王に絶対服従であると。
加えてガイの強さは以前に比べて劣っている。だからこそ、もはやそれを成すことは出来ないのだと。
「……部屋に戻る」
『ガイ……』

魔人を憎むべき悪と捉えているカオスだが、今の魔人になったガイへの憎しみはない。
好きで魔人になった訳ではない。魔人に変えられてしまったのだ。そうして目的を失ったガイに、カオスは掛ける言葉が見つからない。
――そうして重い足取りで、ガイは割り当てられた部屋へと戻る。
魔王城は巨大だ。巨躯を持つ魔人や魔物でも通れるように設計されており、その廊下も長く広い。
だがそれに反して生き物の数は少ない。
時折警備につく魔物兵を見るくらいで、だだっ広いその廊下にはガイともう1人の足音だけが響いている。
『！　あいつは……』
「――よお」
「……お前は？」
だから近づいてくる相手にはすぐに気づいた。カオスもまた見覚えがあると声を漏らす。
正面から歩いてきたその男は、ガイの行く手を阻むように廊下の中心で立ち止まると声を掛けてくる。一見して人にしか見えない相手だが、その姿にガイは見覚えがあった。先程謁見の間にいた――魔人の1人だと。
「魔人レイだ。さっき振りだな」
「……何の用だ？」
「大したことじゃねェ。ちょいと歓迎してやろうと思ってよ」
「……歓迎？」
「ああ。魔人流の歓迎だ――」
魔人レイ。そう名乗った男が、ポケットから手を出し、バックルで髪をかきあげる。
――それと同時に、稲光が走った。
「！」
「ッ――!?」
そしてその放たれた拳と電撃を、ガイは咄嗟に下がることで躱す。
不意打ちにも関わらずそれを躱せたのは、ガイの身体能力や反応速

度が魔人になって向上しているため。そして、レイが小手調べとして本気を出していないからだった。
「ほぉ……反応は悪くねェな」
「……どういうつもりだ？」
突然襲いかかってきたレイに、ガイは疑問する。帯電し、バチバチと身体から電気の音を鳴らすレイのその特異な能力を見て驚きながら。
「魔人同士で争うことはあまり推奨されていないと聞いていたが……」
「何だそりゃ。レオンハルトから聞いたのか？　だとしたらそんな考えは今すぐ捨てるんだな」
「何？」
ガイは訝しむが、レイは戦意を下さない。拳を構え、その上で魔人の先輩として正しいことを教えてやる。
「あの野郎は秩序がどうとかつまんねェことを気にするからやってほしくなくてそう言ってるだけだ。――だが俺達魔人にとっちゃ、こんなもんはただの挨拶でしかねェんだよ」
「……その、レオンハルトの意向に逆らうと？」
「禁止はされてねェ。それに、俺達が絶対に従わなきゃならねェのは魔王。ジルの姉御だけだ。レオンハルトの野郎が何を言おうと関係ねェな」
「……」
どうやら本気らしいことをガイは感じ取る。
謁見の間ではどの魔人も魔王の手前、弁えてはいたが、一歩外に出れば魔人を縛るものは何もない――そういうことだった。
魔王に逆らうこと以外であれば、あらゆる自由が約束される大陸の支配者――魔人はその誰もが自分勝手なエゴの塊だ。
「つまんねー能書き垂れてねェでレオンハルトと引き分けたって噂の実力を見せてみろよ……！」
レイの戦意を見て、ガイは魔人の習性とその社会の在り方を正しく理解する。

力が絶対。つまりそれは、魔王以外に憚ることのない暴君の集まりであることを意味していた。
レオンハルトも確かにレイの言うように、推奨はしないとは言ったが禁止まではしていない。
ならばここでガイがやり返したところで問題にはならない可能性が高いだろう。ここでレイを殺すようなことをすれば別かもしれないが、小競り合い程度で罰則のような何かが与えられる可能性は低いとガイも理解した。
だが、その上で――ガイは、戦わないことを選んだ。
「……悪いが期待には応えられないな」
「……あ？」
レイの立ちふさがる廊下の中心からズレて、端の方を通って先へ行こうとする。道を譲った。
魔人四天王であるガイがそれを行うことに、レイは面食らったようだった。プライドの高い魔人であれば絶対にやらないような行為。それに呆気に取られたレイは、去っていこうとするガイに背中から声と共に警告を放つ。
「ッ……！　待ちやがれ！」
「――ッ！」
レイの放電能力から放たれる雷撃。それを、ガイは防ぐこともなく無防備に受けた。人間であれば、その一発ですら黒焦げになって絶命する威力。それを受け、魔人であるからかそこまでのダメージは受けない。
とはいえ痛そうにはしていた。そのガイは、電撃の痛みから再び気を取り直すと、レイに向けて暗い声を放つ。
「……気は済んだか……？」
「……チッ」
その無気力。陰鬱とした気配と声に、レイは舌打ちを零した。そしてその苛立ちを、ガイにぶつけることなく収める。電撃も収まった。
「――白けたぜ。てめぇ……とんだ腰抜け野郎だな」
「……どうとでも言ってくれ」

「ッ……クソ……ムカつくぜ。ペテン野郎が……レオンハルトと引き分けたって聞いたからどんな奴かと思ったが、なんてことはねェ……ジルの姉御に気に入られただけの詐欺師かよ」
「……」
「消えろ。叩き潰してェところだがジルの姉御のお気に入りを消すこたァ出来ねェ……それにやる気のねェ奴を倒してもつまらねェからな。今回は見逃してやる」
「……そうか。では失礼する」
「チッ……」
レイの言葉に従い、さっさとその場を後にするガイに、レイは苛立ちが募っているようだったが、それを見逃して廊下の反対側へと荒い足取りで歩いて行く。
ガイは戦意を全く見せない。何を言われても怒りは覚えない。もはや、そんな気力はない。
それを示すような、そんなやり取りだった。これから先も、噂を聞いてちょっかいをかけに来る魔人が現れるだろうが、そのどれであってもガイは相手をすることはないだろう。部屋へと戻る道中で、ガイは何も湧き立つもののない自分の心を自覚してなおそれを受け入れた。
――その筈……だったのだ。ガイの部屋の前で待っていた、その魔人を見てもなお。
「――遅かったな」
「……！　お前、は……？」
ガイに割り当てられた部屋の前。そこに、凄まじく美しい女が立っていた。角と翼を持ち、魔性の美しさと高貴な雰囲気。そして、力強く濃い魔の気配を感じ取り、ガイは人目で理解する。この女も魔人だと。
雰囲気としてはジルに少し似ている。そんなことをガイが思ったその女魔人――カミーラはその瞳を鋭く細め、そして強い敵意と殺意をガイにぶつけてきた。
「私が誰かなどどうでもよい……私がお前に会いに来た理由は唯一つ

――貴様を狩るためだ……!!」
「――ッ、あ……!」
カミーラが、憎しみすら込めた一撃をガイに向けて放つ。
それは闇のブレス。先程のレイの攻撃が可愛く見えるほどの破壊力を秘めた一撃だった。
さすがに命の危機を感じたガイは、それを咄嗟にガードする。が、それでも吹き飛ばされてダメージを負わされた。しかも、カミーラの敵意は止むことはない。
「貴様が魔人四天王で、この私が四天王を剥奪だと……!?　そんなこと、認められぬ……!　貴様をこの場で倒し、力を証明してくれる……!」
「ぐ……やめ、ろ……!」
「ふん……!　恨むなら、貴様を四天王に推薦した者を恨むのだな……!　殺すことこそ出来ないが、精々痛めつけてやる……!」
吹き飛んだガイの下へゆっくりと歩みを進めながら追撃を仕掛けようとするカミーラ。その怒りは、自分の代わりに魔人四天王の座に座ったガイへと向けられている。
ガイの命乞いの声すらも無視して。
――だが、ガイのその声はカミーラに向けられたものではなかった。
ガイは、己の内に向けて制止の声を送るが、それを受けてももう1人のガイは止まることはない。意識が反転し、気づけばガイはもう1人のガイになっていた。
「ぐ……いきなり攻撃しやがって……!」
『!　おい……やるつもりか……!?』
そのガイが、カオスを抜いて立ち上がる。そのやる気にカオスは戸惑ったが、入れ替わったガイは止まらない。魔人としての本性を存分に発揮し、カミーラに敵意を向ける。
「やるに決まってんだろ!　おい、そこのアマ!　俺様に攻撃しやがってどうなるか分かってんだろうな!?　レイプされても文句は言えねぇぞ!」

「ッ……！　更に侮辱を……！　許さぬ……！　死なない程度に皮を剥ぎ……身体を燃やし……串刺しにしてくれる……ッ！」
「おーおーやってみろ！　ぶち犯してやらぁ――！」
ガイがカオスを手に魔法を詠唱し、カミーラは伸縮自在の爪を伸ばして戦う姿勢を取る――新たに魔人四天王に任命された魔人と剥奪された魔人。その２人の戦いが始まった。

プライドが高いカミーラにとって、自分の地位が降格することは耐え難い恥辱であった。
それは、それを伝えに来たレオンハルトに激してしまうほどだ。魔王ジルの命令でガイを魔人四天王に置き、側近にする。そのためカミーラから魔人四天王の座を剥奪すると聞かされた。
それは酷くプライドが傷つけられる出来事だった。何しろ、他の魔人四天王よりもカミーラが劣っていると突きつけられたようなもの。あの忌々しいノスより。気に入らないケッセルリンクより。醜きことこの上ないケイブリスより。自身が劣っていると大々的に侮辱されたようなもの。
それを受けたカミーラを、レオンハルトがせめてもの配慮として気遣ったが、それでカミーラの怒りが収まる筈もない。レオンハルトからの「部屋で待っていてくれ」という待機命令を無視し、カミーラは自身のために用意された部屋からは最も遠い場所にあるガイの部屋の前で待ち受けることにした。
そこでガイを倒し、力を証明する。あのジルが贔屓にする男を降格させるかどうかは疑問だが、それでもはっきりと他の魔人に負けるようなことがあれば再考させることは出来るだろう。魔人を取り仕切るレオンハルトとしても進言せざるを得ない筈。
だが、それらが為されなくても構わない。このやり場のない怒りを収めるには、目の前のガイという魔人を痛めつけなければ気が済まないのだ。
そうしてカミーラは、ガイに戦いを挑んだ。陰鬱なその男が、突如

としてやる気を見せたのには驚いたがやることは変わらない。むしろやる気を見せてくれた方が好都合。その上で叩き潰してこそ己の力を証明出来る。
――そのカミーラの考えは、早々に覆されることとなった。
「おらくたばれ！　黒色破壊光線！」
「っ……！」
凄まじい魔力。それを源泉に放たれる魔法の威力に、カミーラは顔をしかめた。
（この男……強い……ッ！　レオンハルトと引き分けたという噂は嘘ではなかったのか……!?）
戦闘が始まり、すぐにカミーラはガイの戦闘力が高いことには気づいた。
剣も魔法も使える。身体能力も高く、戦闘におけるセンスもある。
カミーラはレオンハルトが実際のところどれくらい強いのか知らないが、己に対し劣勢を強いるこの強さであれば、あるいはそれも可能なのかと思う。
「おらおら！　そろそろ……終わりだ――ッ！」
「ぐ、う……う、あぁ……ッ！」
ガイの魔法が、カミーラの身体を容赦なく貫く。
レオンハルトは謁見に向かう前、「ガイには手を出すな」と一言だけ忠告してきたが、それを無視してカミーラはガイに戦いを挑んだ。
――その結果が、床の上に無様に這いつくばる己の姿だ。
「ぜぇ……ぜぇ……さすがに疲れたな……禁呪を使えないとこうも苦戦するか……」
「く、っ……う……」
「だが俺様の勝ちだ……！　ぐふふ、よくもやってくれたな……！」
己に勝利したガイが、呼吸を荒くしながらも下卑た笑みで近寄ってくるのをカミーラは見た。声を振り絞って抵抗する。
「やめ、ろ……！　きさ、ま……！」
「誰がやめるか！　勝者は敗者から全てをいただく！　それがこの世の摂理だ！」

「っ……！」
ガイの手が、カミーラの衣服を乱暴に破り捨てる。
カミーラは殺意を込めた視線をガイに向けることしか出来なかった。
「うっひょー。良い身体だ。これは楽しめそうだな」
「ッ、触れるな……っ！」
「おっと」
苦し紛れに放った攻撃も、あっさりと躱される。
そうしてガイはカミーラの両手を片手で押さえつけ、そのまま覆いかぶさった。
「危ない危ない。まだ力が残ってたか。だが……もう力は残ってないようだな」
「く……！」
「ぐふふ、安心しろ。大人しくしていれば殺しはしない。ただ犯しまくってやるだけだ」
そうしてガイは己のズボンから、ソレを取り出そうとする。
これから行われる出来事を予測し、カミーラの内に耐え難い屈辱が襲いかかった。
（こんな男に……！　この私が……！）
魔人に成り立ての人間の男に敗北し、このまま犯される。
かつての王冠だった時のように。勝者の当然の権利だとして、乱暴に尊厳を踏み躙られる。
アベルから解放され、ドラゴンの世が終わり、その役目を終えた時から二度とこうはなるまいと思っていたが、まさかこの屈辱を再び味わうことになろうとは思いもしなかった。
（許さぬ……許さぬぞ……ガイ……貴様は、いずれ必ず……！）
もはや抵抗は出来ない。
ならばこの恥辱は、必ずその血で贖ってやるとカミーラは誓うことにした。
ガイの身体が近づいてくる。せめてもの抵抗としてその顔を睨みつけ、歯噛みしながら――

「――何をやっている」
「……ん？　――ッ、うごおぉ!?」
――だが、その時は訪れることはなかった。
廊下に響いた2人以外の声。聞き覚えのある男のもの。その直後に、ガイの身体が蹴り飛ばされ、後方へ吹き飛ぶ。
そうしてカミーラの前に現れ、ガイの前に立ち塞がったのは……やはり魔人の頂点に立つその男だった。
「……レオン、ハルト……」
「大丈夫か？　カミーラ」
己を気遣うその声音に、カミーラは己の身が安全となったことを理解した。

まさかとは思ったが、こうも手が早いとはな……。
レオンハルトは、傷を負い、服を脱がされ、無様な姿となっているカミーラを見て、心の中で嘆息する。
ガイが魔人になり、魔人四天王の座に就けることを告知してまだ2時間も経っていないのにこうなるとは……カミーラのプライドの高さを低く見積もり過ぎていた。
念のため早めに切り上げて様子を見に来て正解だったと、己の判断を軽く称える。もう少し遅ければガイはカミーラを凌辱していただろう。そうなればカミーラに消えない傷を残すことになる――いや、この時点で既にそうなっているやもしれないが、それでも犯されていないというだけでマシだろう。
そしてそれを行おうとしたガイ――魔人になって無気力となったと思っていたが、やはりと言うべきか、もう1人のガイの方はあまり変わっていないようだった。
「ぐ……レオンハルト……邪魔をしおって……！」
「……ガイ。俺は部屋で待機していろと命じた筈だ。それなのに、なぜカミーラを襲っている？」
「襲いかかってきたのはそいつからだ！　だから返り討ちにして頂く

もんを頂こうとしただけだぞ！」
距離を無理やり取らせたガイの言い分を聞く。下半身を露出していて見苦しいことこの上ないが、その言い分には一理あった。
「……なるほど。確かに、それならカミーラにも落ち度はある」
「なら邪魔するな！」
「そうはいかないな。悪いが邪魔させてもらう。俺の目の前で狼藉を働くことは許さん」
「ええい、納得いかん！　お前、魔人は自由だって言っとっただろうが！」
……やはり相当な女好き……いや、エロ好きなのだろう。記憶にある過去の……いや、未来の人物を思い起こさせる言い分だった。
そしてその言葉もまた正しい。魔人は自由。魔王の命令以外に従う必要は本来ない。魔人筆頭や魔軍参謀。魔人四天王といった地位に就いているからといって、強制力が働く訳じゃない。無条件で権力が機能する訳じゃない。
だが、多くの魔人や魔物達はその命令を聞く。その正しい理由を、ガイに教えてやる。
「俺はこうも言わなかったか？　命令に従わないのも自由。だが、その後どうなるかは自己責任だと」
「何だと？　どういう意味だ？」
「分からないか？　――お前に罰を与えるのも、俺の自由だってことだ」
空間に手を伸ばし、己の相棒である魔剣オル＝フェイルを抜き放つ。
それを見たガイの表情が引き攣ったのを見ながら警告する。
「俺が怖くないと言うなら俺の言う事に一々従う必要もない。反抗してみせるがいい」
「ぐ、ぬぅ……」
「こっちはまだカオスの傷が癒えていないが、それもちょうどいいハンデだ。ここでつけられなかった決着をつけるのも悪くはない」
もっとも、圧倒的に不利なのはガイの方だろうということには当然

気づいている。ゆえに、今のガイは相手にならない。多少は戦れるだろうが、それだけだ。俺に勝ち得る力は持たないと判断している。その上で、威圧してやった。
「分かったか？　俺がやめろと、そう言ってるんだ。それを無視するというなら、相応の痛手を負う覚悟をしろ」
「……」
ガイの表情が、苛立ちと焦りがないまぜとなったものになる。ガイもまた、今の自分ではこちらに勝てないことを理解しているのだろう。
その無言を肯定と受け取り、俺は剣を下ろした。
「理解したようだな」
「ぐぬぬ……この変態剣野郎め……」
「変態禁呪野郎に言われたくないな。さて……ガイ。今日ここで起きたことは他言するなよ」
「あ？　なぜだ」
「一々理由を言わなきゃ言う事が聞けないのか？　黙って言う事を聞け。これはお前の為でもある」
カミーラの名誉の為に、ガイに他言しないようにと釘を差しておく。信用は出来ないが、口約束でもないよりはマシだ。
それを理解したのかは分からないが、ガイは不機嫌そうに下半身を元に戻しながら言葉で頷いた。
「……けっ。わかったわかった。言わなきゃいいんだな」
「ああ。そうしろ。ならさっさと向かえ」
「？　向かえってどこにだ？」
「ジル様がお呼びだ。精々身を清めてから行くんだな」
ジルからの命令を伝えると、ガイは何とも言えない顔になった。
「……ジル、か。楽しみなような怖いような……」
「ふん……どうせならそのまま行ったらどうだ？　ジル様もお喜びになるぞ」
「うるせー。……しょうがない。逆らえる気がしねぇし、行くか。こうなったら開き直って楽しむまでだ」

ガイはどこか諦めたような、自然な様子でズボンを履いて、廊下を歩いて行く。ジルの部屋に向かうのだろうが、やはり魔人としての絶対命令権は効いているようだ。それを確認し、小さな満足を得たところでガイが立ち去るのを見送る。

そしてそこでようやく、カミーラに向き直った。……とりあえず、目の毒を解消しておくべきだとコートを脱いで、カミーラの身体に被せるとカミーラが小さくこちらを見て呻いた。

「っ……」

「傷はそれなりだな……仕方ない」

このままここで治療を行うのは宜しくない。幸いにも今は誰の目もないが、呑気にしていると誰かが通りがかる可能性がある。

なので人目につかない部屋にでも運ぼうと、俺はカミーラの身体の下に手を伸ばし、その身体を持ち上げた。

「悪いが少しの間我慢してくれ。人目を避けるためだ」

「……ああ……」

「よし。では行くぞ」

カミーラから許しを得たところで、俺はカミーラを抱えたまま近くの部屋まで移動を開始する。……カミーラには色々と言いたいこともあるが、まあ、今はいいだろう。とりあえず今は治療が優先だ。

俺は近場の部屋のベッドにカミーラを寝かせると、部屋の外で魔物兵にハンティと神魔法の使い手を呼んでこいと言伝を頼んだ。

――レオンハルトがカミーラを介抱しているその頃。

「……戻ってこねぇなあ……」

ガイに割り当てられた部屋とは真反対にあるカミーラの部屋の前で待ち続けるケイブリスは、廊下をきょろきょろと見渡しながら独り言を呟く。

「まさかもう帰っちまったか……？　ならやっぱ城まで直接出向くか……？　お土産とかも用意した方がいいだろうしな……つーか何て声掛けるかもまだ決まってねぇし、それを考えるためにも時間を置い

た方が……」
　カミーラがいつまで待っても戻ってこないことに焦れた腰が引けたケイブリスは、一旦帰って仕切り直すことを決める。
「……よし。そうと決まればこうしちゃいられねぇ……！」
　ケイブリスはそうして帰路についた。カミーラが未だ、城に留まり続けていることにもまた気づけなかった。

意外な提案

――魔王ジルの部屋。
部屋の中に、淫靡な音が響いていた。
「くく……どうした……？　ん、もう終わりか……？」
「ぐ、ぬ、ぬぉぉ……っ！」
ベッドの上に仰向けに寝かされ、魔人ガイは呻いていた。
その原因はガイの上に跨がり、緩やかに腰をくねらせる魔王ジル。
部屋に呼び出されるなり、一方的に貪られるように犯された。そのことをガイは思う。最初こそ悦んだし、今も気持ちいいが――
（き、気持ち良すぎる……頭がおかしくなりそうだ……！）
そう。問題は、気持ち良すぎること。
ジルに触れられた箇所が酷く熱い。その肌の感触。中の感触はこの世のものとは思えない程に極上だった。
もう1人のガイのせいもあって、それほど経験のないガイは一瞬で達してしまった。その後、男の意地で何度も攻めているが、ジルを攻め落とすには至っていない。
それでも快感は得ているのだろう。あるいは、ガイを屈服させて悦に入っているだけか――ジルの口元は釣り上がっていた。
「回復力とモノはそれなりだが……腕前の方は素人同然か。レオンハルトに比べればかなり劣るが、慰み者としては悪くない……」
「れ、レオンハルトだと……そりゃ、つまり……っ、うっ……！」
ジルのそれが、ガイの魔剣を強く包み込む。
その感触にガイは再び放出してしまっていた。その無様な姿を見下ろし、ジルは舌舐めずりをする。
「くく……精々私の下僕として、あいつの代わりに励むことだ……気に入れば頻度も増やしてやるぞ……？　ふ、くくく……！」
「あ、あへあへ……ぐ、こ、こなくそ……！」
ジルの言葉に屈辱を感じ、ガイは己を奮い立たせる。あのレオンハルトに負けてたまるかと。

そしてこのジルをぎゃふんと言わせてやると。そうしてガイが意気込むと、再び淫靡な音が響き渡る。
――魔人になったガイは自分の役目を理解し、一方は苛立ちながら励み、一方はそれをただ受け入れた。

――ガイがジルの部屋に向かい、その役目に励んでいる頃。
「愛人、だと……？」
「ああ。ジル様はガイを慰み者として気に入ったようでな。魔人四天王に指名したのもそれによるところが大きいだろう」
「っ……！」
魔王城の別の部屋でレオンハルトはカミーラの治療と共にガイの役割について説明したところだった。
ベッドに腰掛け、多少は回復したカミーラだが、その言葉を耳にすると再びその顔が怒りに染まる。レオンハルトはすかさずフォローのための言葉を作った。
「もっとも、実力があるのは確かだがな……とはいえそういう訳だ。奴は魔人四天王だが、四天王に任せているような仕事を振り分けることはない。ジル様から魔王城に詰めておくように命令されているからな。よって、カミーラ。お前は城を引き渡す必要はない。役割については今まで通り――」
「変わらないから大丈夫……だとでも言うつもりか……？」
レオンハルトの言葉を遮るようにしてカミーラが目を見開き、苛立ちを見せる。そうしてその感情をそのまま言葉にして吐き出した。
「あのノスや、ケッセルリンク……！　ケイブリスが四天王であるのに、この私がそこから落ちるなど……恥辱にも程がある……っ！」
「……」
「そしてガイめ……！　よもや私を犯そうとするなど……！」
その恨み節を、レオンハルトは部屋に備え付けのソファーに腰掛けながら聞いた。そして静かに問いを投げた。
「……どうするつもりだ？」

「決まっている……あのガイに、私を傷つけた報いを受けさせてやる……！」
「……そうか。殺さなければ多少やり返すのは好きにすればいいが……」
レオンハルトはそこで、気づかれない程度に言葉を迷わせる。
プライドの高いカミーラを傷つけないようにするには、それなりに気を使う必要があった。間違っても――今のお前ではガイに勝てない、などということは言わない。
だがその思いはあるのは確かなものだ。現在のカミーラは以前より実力が落ちてしまっている。この状態でガイに何度挑もうが勝てはしないだろうし、自分の見ていないところで挑めば今度こそ犯されかねない。
だからせめて勝てないまでも、簡単に決着がつかない程度に強くならなければ、また必ず敗北して屈辱を覚えるだろう。出来ればそれは避けたいという思いがレオンハルトにはあった。カミーラがガイに恨みを募らせたり、災いの種を残しておくことはあまり好ましくなかった。
しかし、だからといって素直に修行しろと言っても言うことを聞くとは思えない。ならどうすればいいか……レオンハルトは思考を回し、そして結論を出した。
「……そうだな。だが何をするにしてもすぐに実行するのはやめた方がいい。今はまだガイはジル様のお気に入りだ。あまり傷つけて不興を買うようなことをするのは良くないだろう」
「ならあいつが偉ぶるところを指を咥えて待っていろと？　ふん、そもそもジルがそんなことを気にするとは思えんがな……」
「俺が見る限り、危険には違いない。だから時期を窺え。もしジル様のお気に入りから外れるようなことがあればすぐに教えてやる」
「……ふん」
カミーラが鼻を鳴らす。さすがのカミーラもジルの機嫌を損ねるようなことは出来ない。長い間を取った後、渋々と口を開く。
「……気に食わないが、いいだろう」

「そうしてくれ」
そう言ってレオンハルトは立ち上がり、そのまま帰る姿勢を見せる。
だが、カミーラに背中を向け、2歩程足を進めたところで思い出したかのように声を上げた。本当に、今ちょうど思い出したといったように。
「――ああ。そういえばお前に良い話があるのを忘れていた」
「良い話だと……？　なんだ？」
レオンハルトは自然に、そして何気なく言う。カミーラの興味を引いて彼女を外へ引きずり出すために。
「――ちょっと美少年を狩りに、人狩りに行かないか？」

魔人達を招集した謁見を終え、カミーラとの約束を取り付けると俺はようやく城へ帰ることが出来た。
「――お帰りなさいませ、ご主人様」
「ああ」
城に一歩足を踏み入れると目の前にメイド長さんがいて優雅に一礼してくれる。ずっとここで待っていた訳でなく、主の到着を察して駆けつけたのだろう。そのメイドの鑑とも言うべき心遣いに内心で感謝しつつ、連れ立って部屋まで歩く。
「何か変わったことは？」
「はい。白兎様がご主人様にお願いがあると」
「白兎が……なるほどな」
「今は牧場の方へ出ていますが、お連れ致しますか？」
「いや、構わない。戻ってきた時にでも聞く」
白兎のお願いと聞いて、思い浮かんだものといえば、白兎の友人の事だ。それを察する。おそらくだが、白兎はその友人と会わせてくれとお願いするつもりだろう。
……まあ、少々危ないが、それも良いか……。
白兎と会わせることでどうなるかは少し未知数ではあるが、悪いこ

とにはならないと思いたい。
　それに、出来れば娘が友人のために動こうとしているのを止めたくはないものだ。メリットもあるし、その件についてもセッティングする必要があるな。そのことを頭の片隅に置いていると――
「あ……レオンハルトさんっ」
「ハウゼルとサイゼルか」
　廊下を歩いているこちらを見つけたハウゼルが華やぐような笑顔でこっちに近寄ってくる。その隣のサイゼルと一緒に。
「お帰りなさい」
「レオンハルト、戻ってきてたんだ」
「ああ。ただいま。ついさっきな――ん」
「んっ……」
　自然に距離を詰めて、求めるような雰囲気を出してきたのでハウゼルと軽く唇を合わせる。少し熱いハウゼルの柔らかい唇の感触が来た。触れ合うだけのそれを行い、唇を離せば次はサイゼルとも。今度は少しひんやりとした柔らかい感触が来る。
「んっ……ちょ、ちょっと……廊下でこういうのは……」
「してほしそうに見えたが……違ったか？」
「……違く、ないけど」
　するとサイゼルは顔を赤らめ、目を反らしながら小声で言う。もはや人に見せつけることすら厭わないハウゼルと違って、サイゼルの方は人目があるところだと恥ずかしがる。
　とはいえハウゼルとしたのにサイゼルとはしないとなるとややこしいことになる可能性があるため、する時は基本２人一緒か、交互にやって平等にする。２人の仲は改善しているとはいえ、それでもまだ些細なことで喧嘩しがちだからな。一応気をつけてはいた。
「そ、それより……大丈夫だったの？」
「ガイのことか？」
「そうよ。あの新しい暗そうな魔人なんでしょ？　その……レオンハルトに怪我負わせたのってさ」
　そして話題は今日の謁見のこと。正確には、新しく魔人となったガ

イのことに移る。
当然だが、俺がガイと戦い引き分けたことは身内の者全員が知っていた。魔物界中に噂が広まってるので当然といえば当然だが……何よりも、この怪我を負った身体を見ているからというのもある。
その怪我を負った部分を、ハウゼルが心配そうに見た。
「……怪我の方は、もう大丈夫なんですか？」
「傷はある程度塞がったな。もう後数日もすれば完治するだろう。……とはいえ、まさかここまで治りが遅いとは思わなかったが」
そう。カオスに負わせられた俺の左肩の傷は、未だ完治していない。
戦いの後にジルの神魔法で回復してもらったが、それでもまだ治りはしなかった。その後、城に帰ってからも開いた傷を処置し、包帯を巻いて止血し、しばらく安静することになったのだ。
魔人の再生力からすればありえない話だ。さすがは魔人を殺せる武器といったところで、その怪我を見た者達に酷く心配を掛けてしまった。キャロルなんかは大慌てしていたし、ハウゼルとサイゼルも心配で頻繁に見舞いに部屋を訪れに来てくれていた。子供の問題で忙しいのに悪いことをしてしまったな。
「……カイゼルとルイゼルはどうしてる？　また暴れたり脱走したりしてないか？」
「あ、はい。それは大丈夫です。ミコトちゃんに見張ってもらってますし……使徒と仲良くなるって意気込んではいますけど」
「……そうか。使徒のことはともかく、ミコトが見張ってるなら逃げ出す心配はないか」
どうやら問題児２人は優秀な妹に見張られているらしい。俺の子の中じゃあいつが１番強いからな。何でもありなら特に。
――などと噂をしていると。
「助かるけど……あの子、ちょっと苦手なのよね……気づいたら後ろに立ってるし……」
「――んぐ、んぐ……呼びました……？」
「ぴっ!?」

「み、ミコトちゃん!?」
突如、サイゼルの真後ろから聞こえてきた声に、サイゼルが短い声を上げて飛び跳ねる。
そこには執事服に身を包んだ短い黒髪の、眠そうな顔をした、サイゼルとハウゼルと同じくらいの身長の少女――ミコトが姿勢良く立っていた。
「……あまり驚かせてやるなよ、ミコト」
「ん、ふぁーい……」
「び、びっくりしました……姉さん。大丈夫？」
「だ、だから……驚かせるなっていつも言ってるでしょーが！」
「すみませんでしたー……」
全く悪いと思っていない眠そうな半目の表情のまま、ミコトが謝る。……相変わらずだな。腕は上げたようだが、この気の抜ける感じは変わらない。メイド長さんの子供で執事としての技能も高いのになぜこんなに気の抜ける性格をしているのかは常々不思議に思う。セラクロラスの子供というならまだしも、そっちはそっちでエロニートモンスターだからな……。
「……まあいい。それより……その手に持ってるのは何だ？」
「ん……お菓子」
「またお菓子か。あまり食べ過ぎるなよ。それと、見張りの方は――」
「――見つけた！　ちょっとミコト！　あたしのおやつ、盗んだの返しなさい！」
「ひゃっ!?」
――などと注意をして見張りのことに話題を移そうとしたところで、突如瞬間移動で目の前にハンティが現れる。どうやらハンティのおやつを盗んだらしい。地味にサイゼルがまだ驚いて声を上げていたが、ハンティはそれを無視してミコトに手を伸ばすが……ミコトはそれをするりと躱した。
「あ、バレた……それじゃ退散しますねー……」
「バレた、じゃない！　待てこら！」
「じゃあね……父上。見張り頑張るからまたお菓子お願いね……」

そしてミコトが一瞬でその場から消えるように移動すると、ハンティもそれを追いかける。その光景に少し呆れるが……同時に感心もする。ハンティからあれだけ逃げられるのはさすがだ。忍者としてもまた成長してるみたいだな。執事としてはどうかと思うが。俺は軽く息をつく。

「……とりあえず、ミコトに任せていれば2人も逃げ出すことはないだろう。それと、後で俺も注意しにいく。それまで待っていてくれ」

「あ、はい。それは良いですけど……レオンハルトさんはこれから何か用事が？」

「少しだけやることがあるが……どうかしたか？」

「ならそれが終わってからでいいんですけど……一緒にお部屋で過ごしませんか？　その、姉さんと3人で……」

ハウゼルが穏やかな笑みでそう提案してくる。サイゼルの方もまた。

「今日は……その、また2人で癒やしてあげようかなって……」

熱っぽい視線を向けてその言葉を伝えてくる。素直に嬉しい誘いだった。その意味が分からないほど鈍感ではない。

「……そうか。ならやることが終わったら連絡する。それまで待っててくれ」

「……はい。待ってます」

「……あんまり待たせたらダメだからね……？」

直接的な言葉は必要ない。何だかんだで2人とも長いからな。意思疎通を問題なく行うと、期待を込めた表情をした2人と別れる。

気がつけば空気を読んでいたのか、メイド長さんがいなくなっていたが、2人が去ったところで再び姿を現す。そうして告げてきた。

「部屋の掃除は既に終わっておりますので、いつでもお使いください」

「……いつもながら完璧だな」

「恐れ入ります」

メイド長さんが頭を下げる。そうして執務室までやってきたところでメイド長さんとも別れた。

――そうしてやるべきこと……カミーラとの約束のために仕込み

をキャロルに命じたところで……今度はまた別の人物の応対をする。
「……お町」
「ん……何だ……？」
――ぎゅう～～～～。
「……いや、別に構わないんだが……少し引っ付きすぎじゃないか？」
執務室に入ってくるなり、ずっと抱きつき続けている二代目妖怪王――お町にそう疑問する。
だがお町は、そう聞くと更に抱きつく力を強めた上でそれを否定してきた。
「そんなことはない……もう2週間も、我はレオンハルトに抱かれておらぬからな……むしろ足りぬ……」
「……それは悪かったな。2週間の空きでは、物足りないか」
「ああ、足りぬ……毎日でも足りぬくらいだ……ずっとこうしていたい……」
そう言ってお町は俺の胸に頬をくっつけ擦りつける。
ガイとの戦いのために修行して1週間。戦いの後の負傷で更に1週間。その間に1度も相手していなかったこともあって、いつも以上に情熱的なお町の抱擁を受け続ける。
このままでは仕事にならないな……そう思っていると、お町は更に告げてくる。
「……レオンハルト……我を使徒にするという話、考えてくれたか？」
「……その話か。前にも言ったが、それは茨の道となることを理解しているか？」
それは以前にお町から願われていて保留にしていた――使徒にしてほしいという話だ。
随分と俺に惚れ込んでいるお町が、それを言い出してくることは何ら不思議ではない。それを聞いた時も驚きはなかった。
だがその願いに応えて安易に使徒にする……という訳にはいかない。使徒化によってほんの僅かに低下する力などはさして問題ではない。その気になれば10体程度は作れると見ている。
しかし問題は、使徒にするに値するかという部分だ。それを思い、

俺はお町にこう問いかけたのだ。
「俺の使徒になるということは、人間の敵になり続ける宿命を背負い続けることになる。妖怪として人間の敵になる宿命を呪い、ようやくそこから解放されたお前が、もう1度その宿命を背負うことになるんだ。それでもいいのか？」
「……確かに、以前の我はその宿命を呪っておった。だが、今度のは違う。我が自ら選び取った定めだ。我を宿命から解放してくれたそなたの助けになりたい……それが人を害することであるというなら、我はそれを為す……」
「……」
「それに、そなたが仕事に忙殺されておるのを我は知っている……そのために、使徒を増やすことを検討しているのだろう……？」
「……ああ、そうだな。今は、そのための候補を検討している」
お町の想いを間近で耳にしながら、使徒を作ろうとしていることは認める。
その理由としてはやはり、自分の手足のように動ける存在が、もう少し欲しいと思ったからだ。
今の使徒、キャロル、ハンティ、ペール、リー。その4人は頑張ってくれているし、能力も高い。俺には勿体ないほどの使徒だと思う。
だが如何せん、俺がジルに拘束される時間も長く……仕事が少しだけ忙しい。その補助に加えて、今後のために外部で好きに動かせる手駒を俺は欲していた。下級使徒は多い俺だが、その殆どは城の中から動かせないし、外に出すには危険ということもある。不用意に動かすことは出来ない。
だから正式な使徒を増やせれば増やす腹積もりでいた。もっとも、無理に作るつもりもない。使徒は魔人にとって永久の時間を共にする相手。それだけに、使徒にする相手は慎重に厳選して選ぶ必要がある。乞われたからといって安易に使徒にする訳にはいかない。お町を信頼していない訳ではないし、むしろ信頼はあるが……先に挙げたことのような不安要素もあった。
それだけに安易に返事は返せない。かといっていつまでも保留に

し続けることも出来ない。だから俺は、不安を抱えるお町にこう告げた。
「お前のことも、前向きに考えている。近い内に答えは出るだろう。だからそれまで待っていてくれ」
「……我は必ず力になる。永久を共に生きる覚悟も出来ておる」
「知っている。だから安心してくれ。たとえ俺が、使徒にしないという選択を選んだとしても、お前が側にいることを拒みはしない――絶対にな」
強い意志を込めてそう言えば、少し力が緩んだ。……やはりお町も不安になったのだろう。
俺がガイと引き分けて重傷を負って戻ってきた時、多くの者がそれを目撃した。お町もそこにいた。そして他の皆と一緒に、不安を与えてしまった。
俺が消えていなくなるかもしれないという不安。あれだけ傷ついた俺を助けたいという想い。それもあって、また今日も強くそれを希望してきたのだろう。それを察して理解する。
そうして強い言葉を送れば、お町もまた理解した。
「……わかった。それならば、我は信じて待とう」
すっとお町が身体から離れる。そうして立ち上がり、部屋の出口へ向かった。そうして去り際に、こちらに振り返る。
「ではな。……今夜は待っておるぞ……」
「ああ」
その言葉に返事をしてお町を見送る。その意味もまた先程のハウゼルとサイゼルと同じであった。
「……さて。どうするか……」
お町がいなくなり、1人になった執務室で呟く。
使徒の話もそうだが、ガイのことやジルのこと。カミーラのこと。女のことや子供のこと。他の魔人や魔軍を差配する普段の仕事もある。
一先ず考えなければならないのはカミーラにガイか。ジルのことは常に考えているから優先も何もない。魔王の命令が来るならそれ

がどんなに突発的なものでも最優先事項になるからな。
「……次は白兎を呼び出しておくか。それから……」
思考を回し、ハンティかメイド長さんを呼ぼうかと思い立つ。そうして自身も椅子から立ち上がった――そんな時だ。部屋がノックされた。
「……あー、もしも～し。入っていいかな？」
「……ああ、構わない。入ってくれ」
聞き覚えのある女の声に、少し訝しく思いながらも許可を与える。すると部屋の中に、予想通りであり意外な人物が入ってきた。
「ガウガウか。珍しいな。お前から俺を尋ねてくるとは」
「そうだっけ？　……まあそれは置いといて……あー、参謀閣下は如何お過ごしで？　今は何をしてらしたんですかい？」
部屋に入ってきた、白衣を纏った小柄な少女……うちの魔法研究室の室長にして付与師であるガウガウ・ケスチナが、似合わないおべっかを使ってくる。俺は少し目を細めた。
「……何か危険な失敗でもして物を壊したか？　それとも人に迷惑をかけたのか？　もしくはハンティを怒らせたか？　なら俺がおすすめするのは今すぐ謝りに行くことだ。俺に出来ることはないぞ」
「そ、そんなんじゃないわい！　くっ、信用なさすぎだろ……この私……！」
狼狽えながらツッコミを入れた後、自身の信用のなさを拳を握り込んで嘆くガウガウに胡乱な目を向ける。ガウガウは魔法研究者としてこの上ないほどに優秀だが、色々と問題児だからな。そう予測したのだが……どうやら違ったらしい。改めて問いかける。
「なら用件はなんだ」
「用件がなかったら会いに来たらダメかな？　私は天才美少女魔法研究者のガウガウ・ケスチナ。あなた様の下級使徒ですよ？　たまにはこうして親交を深めたく――」
「用件はないのか。なら俺は行くぞ。暇なら明かりの点検をしといてくれ」
「ちょ、ちょっと待って！　待ってください！　なんか冷たくない!?」

部屋を出ていこうとした俺の腰にしがみついてくるガウガウ。それを聞いて、俺は足を止めた。その上で一応向き直る。
「俺が冷たく見えるか。なら心当たりはないか？　数年前の新年会に何かあったような気がするが」
「うっ……あ、あれはほら、ちょっとした失敗作って奴で……」
「そのせいで、俺はとんでもない黒歴史を作った訳だが」
「仕方ないだろーっ!?　というかアレはお前の酒癖が悪いから悪いんだろーっ！　おかげでこっちもめちゃくちゃヤラれたんだからおあいこだおあいこ！」
「あれは……いや、やっぱりいい。過ぎたことだ。それより用件があるなら早く話せ。こうして言い争ってる暇も惜しい」
ガウガウの言葉に反論をしかけて、しかしすぐにやめる。時間は有限だと気づいたからだ。
そして額を軽く押さえた俺に、ガウガウはその顔を下から覗き込むようにしてニヤリと笑みを浮かべてきた。
「へぇー……忙しそうだねー。ふふん、ならその悩みをこの天才が解決してあげようかな！」
「……一応聞こう。どうやって解決してくれるんだ？」
「簡単なことだ。忙しいならそれを代わりにこなしてくれる部下を作ればいい！　魔人なら使徒でも可！　そしてそのために私が出来ることがある！」
……何を言うかと思えば、こいつもそのことを知っていたか。
どうやらちょっぴり広まっているらしい。あるいはハンティ辺りから聞いたか。
しかしそれを知ってここまで来たということは、何か解決策が一応はあるのかもしれないと俺は僅かに期待する。ガウガウは本物の天才。あまりにも天才すぎて、レッドアイみたいな人に迷惑をかける代物すら作り上げてしまう困った奴だが、それでも魔道具作りにおいてガウガウの右に出る者は存在しないと断言出来る。ゆえに期待した。
「……今度はどんな魔導具なんだ？　使徒になった時の変化でも予想してくれればありがたいんだが」

「魔導具か……そうだな。ある意味で、これまでの最高傑作と言っても過言ではないかもしれない」
「お前がそこまで言うか……ならよっぽどのものなんだろう。聞かせてくれ」
ガウガウが言う最高傑作と聞いて、更に期待が高まる。そこまで言われるならさすがに気になってしまうものだ。
そして俺が教えてくれと乞えば、ガウガウもまた得意気な笑みを浮かべてみせる。
「ふふふ……レオンハルト。お前の悩みを解決する方法はここにある」
ガウガウが、自身を親指で指して言う。表情は歯を見せて笑う得意気なまま。
しかし俺には分からない。一体どこに魔導具があるのかと訝しげにガウガウを見て尋ねる。
「……よくわからないな。どこにあるんだ？」
「――私を使徒にしてみないか？」
「……は」
思考が硬直する。
それは戦闘の最中であれば致命的な隙になりえるものだ。もし以前のガイとの戦いの最中でこれほどの隙を晒してしまえば、俺は死んでいただろうと確信出来るほどの間を、自ら生み出してしまう。
数百年振りにここまで困惑したかもしれない――が、さすがに１０秒近く経ってもガウガウの表情が得意気なままで、むしろ目を細めてドヤ顔が更に加速したため、それが本気であることを理解する。理解、した上で……俺はゆっくりと口にした。
「……冗談か？」
「いやーレオンハルト……いやレオンハルト様は幸運だな！　なにせこの私を使徒に出来るんだ。私を手中に収めたなら世界を手中に収めたも同然だぞ。しかも見た目も可愛い！　本物の合法ロリだからな！　おまけに色気もある。頭も当然良い。その上……」
「……そうか。魔導具の研究のしすぎで気が狂ったか。痛ましい

……待ってろ。今すぐ治癒術師を……」
「失礼！　さすがに失礼すぎだろっ！　狂ってないわっ！」
　表情を崩し、勢いよくツッコミを入れてくるガウガウを見て、俺はようやく事態を理解する。ソファーまで移動し、思い切り背中を預けて息を入れた。
「冗談じゃなかったか……」
「いつも冗談みたいな発明をしてるからそう思ったか？　だが生憎と冗談じゃないぞ！」
「そうだな。確かにそうかもしれない」
　まさか冗談みたいな物を生み出す冗談みたいな奴から冗談みたいな話が飛んでくるとは思わなかった。しかも内容が先程のお町と一緒。雰囲気が真逆すぎて風邪を引きかねない。
「……どういう風の吹き回しだ？　お前は確か……使徒になる気はなかったように思えるが……」
「そんなこと言ったか？　……まあ言ったかもしれないな。でもそれも昔の話だ。忘れていい」
「……なら理由は？」
「それは勿論、永遠の命と若さ！　しかも生物として強くなれる！　しかも最強のイケメン魔人レオンハルト様の下で！　こんなのなりたくなり理由が浮かばないだろう！」
　意気揚々と、高らかに理由を口にするガウガウ。
　その目を注視する。その瞳。表情。身体の揺らぎ。それらを見て、ガウガウの人となりから真偽を判断する――いや、判断するまでもないか。俺は口を開いた。
「嘘をつくな」
「嘘？　いやいやいや、紛れもない本当の話。真実。トゥルーだって。私はレオンハルト様の下で永遠の命を得たいんだ」
「惚けるな。確かに嘘をついているようには感じないが、かといって本当の理由は話してないな？」
「本当の理由？　さて、なんのことか――」
「本当の理由を話せ。それを口にしない限り、俺がお前を使徒にする

ことはない」
「……！」
俺がそう口にすると、ガウガウの得意気な表情が少し崩れた。
そこに俺は追い打ちをかける。
「口にすれば検討してやる。お前が……そこまでやるくらいだ。それなりの理由があるんだろう。それを聞かせてくれ」
「……ふふ、くくく。やっぱり騙せない、か。そりゃそうだよね」
意外にも、ガウガウはすぐにそれを嘘と認めた。笑い、自嘲した上で。
「じゃあ言うけどさ……その前に1個お願いなんだけど……」
「なんだ？」
「本当の理由、誰にも言わないこと。ハンティとか特にダメだね。皆、私がシリアスなこと言うと調子狂っちゃいそうだしさ」
「……いいだろう。俺が他言することはない。誓ってやる」
「オッケー。それじゃ話すけどさ。本当のところは――」
――そうして俺は、ガウガウから使徒になりたいという本当の理由を聞いた。
使徒になることが必要だということを。その決意を。覚悟を、聞き届ける。
それが真実であることは、すぐに分かった。何しろ１０００年以上、同じ城で過ごしているのだ。
……だがそれでも安易に使徒にすることは出来ない。
その真実の言葉。本物の覚悟を見て納得するのも良い。改めて何かを見せてもらう必要はない。信頼関係は構築されているのだ。今更証拠は必要ない。
だがそれでも――その覚悟は見たいと思う。
だから俺は使徒に立候補してくる相手に、軽く試験を与えることにした。
ちょうど良く、人を狩る用事もある。それに同道させ、本当に俺と共にあらゆる物を犠牲にして、それでもなお目的の為に歩めるかどうかを試させてもらおう――そう俺は口にした。

牧場の最高傑作

その日、紅魔城ではとある話題で持ち切りになっていた。
「ねえ聞いた？　レオンハルト様が新しく使徒を作るって話」
「うん、聞いた聞いた！　それで今は候補を募ってるらしいね！」
城で勤務するメイド達は休憩時間や仕事の合間にその話をしていた。人間でありながらレオンハルトに救われ、下級使徒となった彼女達にとって使徒というのはよりレオンハルトに近いところでお仕え出来る憧れの立場である。
ゆえに使徒を探してると聞いて多くのメイドが色めき立っていたが、彼女達が候補に選ばれることはなかった。その理由もまた、彼女達には届いている。
「えー、それじゃ私も立候補しちゃおうかなー」
「無理無理。選ばれっこないって。使徒候補になるには、使徒の方々から推薦を受ける必要があるって話だし」
「え、そうなの？」
「うん。だからキャロル様にハンティ様。ペール様にリー様。使徒候補になれるのは４人だけだって話」
事情通のメイドは同僚のメイドに続けて説明した。
「だから枠はもうほぼ埋まってるって話だよ。私の予想だと、やっぱメイド長とか料理長……後インデックスさんとかお町さんで決まりかな」
「うわぁ……そうそうたる面子……それは確かに厳しいかも……」
「でしょ？　後は大穴でガウガウさんとか……噂だと親衛隊の子とかも立候補しようとしてるって噂が……」
「……」
――そしてそのメイド達の噂話を、城内の警備を行いながら聞いている１人の少女がいた。
ウェーブのかかった桃色のセミロング。２つのお団子を作った可愛らしいヘアースタイルを持つその少女はその小柄な体格もあって見目も麗しく可愛らしい。

だがその表情は硬く、そして勇ましかった。腰に差した剣は飾りではないのだろう。堂に入っていて、その手の甲には下級使徒であることを示す紋様が描かれている。
（遂に……この時が来た……！）
少女はその話を耳にすると見回りを行いながら内心で静かに沸き上がった。
レオンハルトの使徒。それは、この世で最も栄誉ある騎士の証である。
レオンハルトシティの選ばれた優秀な人間だけが住むことの許される人間街で生まれ育った彼女はそのことを知っていた。誰もが言っていた。
一流料理人の祖父と祖母。コロシアムでチャンピオンだった父とＡ級闘士だった母。優秀な少女の家族ですら届かなかった高みである下級使徒に、僅か１６才で上り詰めた少女は己の立場に誇りを持っていた。
３００人近くいる紅魔城のメイド。３０人程度いる料理人。２名の魔法研究者と人間の下級使徒は数多くいるが、その中でも人間で唯一女の子モンスターで構成されるレオンハルト親衛隊に入る栄誉を許され下級使徒となった少女は、たった3年でその親衛隊の副隊長にまで上り詰めていた。隊長が使徒であるキャロルであるため、実質的な下級使徒のトップに位置すると少女は自信を持っている。この立場を好ましくも思っている。
（だけど、まだ足りない）
しかし下級使徒であるというだけで満足することは出来ない。
少女の目標は、更に狭き門である魔人レオンハルトの正式な使徒になること。
そうして彼の剣となり、この鍛え上げた力で彼の助けになることだ。そのチャンスを、彼女はこの3年でずっと窺っていた。
（このチャンスを逃す訳にはいきません）
少女は早足で城内にある訓練場へと向かう。普段は親衛隊に所属する女の子モンスターがたむろし、時に訓練を行っているその場所

に、少女の目標である立場の上司がいた。その相手が、少女の名を口にする。
「あら、ミシェーラさん。どうかしましたの？」
「……キャロル隊長。折り入って頼みがあります」
レオンハルトの使徒――キャロル。
訓練場にいたその上司に対し、少女は告げた。強い意志と覚悟を秘めた瞳で。
「――このミシェーラを、使徒候補に推薦してください」
その若くして親衛隊の副隊長を務める少女の名は――ミシェーラ・姫原。
レオンハルトの使徒を目指す将来有望な女剣士である。

――大陸南部。
地下深くまで掘られたその大穴の前に、この大陸の支配者層たる魔人の一行はいた。
「ついたぞ。この迷宮が、人間の隠れ里だ」
「ふん……遂に穴蔵に住むようになったのか、人間は……」
魔人レオンハルトと、魔人カミーラ。
集団の先頭に立つ２人の魔人は、その迷宮の入り口を見て言葉を交わし合う。背後に立つ者達は口を開くことはしない。魔人の中でも最強のレオンハルトと上位に位置するカミーラの会話は、その場に居合わせた殆どの者に緊張感を与えていた。
そんな中、レオンハルトはカミーラに言葉を返す。
「迷宮には魔物が潜むもの。その盲点を突いたものだ。存外悪いものではない。生き残るための知恵としては十分なものだろう」
「ふん……浅知恵だな。それより……情報は、確かだろうな？」
カミーラの眼光が鋭くレオンハルトを貫く。人間であれば、そうして視線を向けられただけで怯え、酷く狼狽することになるだろう。
だがレオンハルトは当然、それに平然として頷いてみせる。
「ああ。この隠れ里に潜む人間の奴隷商人は……大量の美少年を抱え

込んでいるという」
「……」
「そしてその中にはお前が好む者もいるだろう。隠れ里を潰すついでの戦利品としては悪くないと思うが……不満だったか？」
レオンハルトはカミーラからの反応が薄いことを気にして、そう問いかける。この人狩りに誘ったレオンハルトとしては、出来ればカミーラにはもう少しやる気を出してもらいたいところだった。
だがやはり、先日のガイとの一件を未だ引きずっているのかもしれない。そう思いながらもカミーラからの返答を待つ。カミーラの視線が、レオンハルトから外された。
「……不満ではない」
「……そうか。それならよかったが……」
カミーラの言葉にレオンハルトは安堵する。約束を取り付けたこと。きちんとここまで来てくれたとはいえ、カミーラなら些細なことで苛立ちを募らせる可能性もあった。
だから問題ないなら良いと、そう思ったところで――カミーラは視線をレオンハルトからその背後の者へ移す。
「ない、が……今日は随分と人が多いな？」
レオンハルトの背後にいる、使徒ではない見慣れない相手に、カミーラは目を細める。その視線に、人間である者は畏怖を覗かせた。
しかしレオンハルトにとってはその質問も想定の範囲内である。何も言わなくても紹介はするつもりであったため、レオンハルトはそのまま彼女達を紹介した。
「ああ。俺の下級使徒だ。――お町、ガウガウ、ミシェーラ。挨拶しろ」
そうして3人が一歩だけ前に進み出てくる。
カミーラはつゆ知らぬことだが、その3人はレオンハルトの使徒候補である3人であった。新しく使徒を見繕うにあたって、希望者が多いことを見越したレオンハルトは己の使徒に推薦権を与えて候補を絞った。
そうしてこの場にいる3人が、レオンハルトの使徒の推薦をそれぞ

れ受けたその候補である。
「……」
1人は2代目妖怪王であるお町。
ペールの推薦を受けたお町は、カミーラに向けて無言で軽く会釈することで挨拶とする。言葉は発しない。弁えているというべきか、興味がないと言うべきか。カミーラ相手でも臆することはないが、逆に必要以上に畏まることもしないようだった。
「ふっふっふ、では次は私だな！　私の名はガウガウ・ケスチナ！　天才美少女――」
「……」
「び、美少女……あ、すみません。何でもないです。普通の下級使徒です。魔法研究者です。以上でーす……」
そしてお町の次に進み出た2人目は、ガウガウ・ケスチナ。
リーの推薦を受けた彼女は、身に纏った白衣を翻し、堂々と調子に乗った挨拶をかまそうとしたが、カミーラの冷たい視線を受けると身を縮こまらせ、小声かつ早口で挨拶を終える。目上の相手でも自らのペースを崩さず、調子に乗ることが多いガウガウだが、初対面のカミーラの圧にはさすがにビビって腰が引けていた。
そしてガウガウが終わると次は3人目だ。その少女が、堂々と前に出る。
「ご紹介に預かりました。レオンハルト様の下級使徒。ミシェーラ・姫原と申します。本日はレオンハルト様の供回りを務めますので、麗しきカミーラ様の視界に入ることをどうかお許しください」
「……ふん」
そして3人目は、ミシェーラ・姫原。
城内の警備を行う親衛隊の副隊長を務めている。上司でもあるキャロルの推薦を受けて使徒候補に名乗り出た若き才女は、礼儀の方でも優秀らしい。騎士らしく、短く、おべっかを使いすぎず、目を伏せ真剣な様子で頭を下げていた。
だがカミーラは鼻を鳴らすだけで興味を示さない。美少女であるというだけで基本は気に入らないカミーラにとって、3人の好感度は

マイナスからスタートする。
「……そいつらも連れていくのか」
「ああ。今回は魔軍は包囲させるだけで迷宮内には進ませない。少数精鋭で行くつもりだ。俺とお前とこいつらだけで進む」
「……いつもの使徒はどうした」
「別の仕事だ」
「……そうか。ならさっさと行くぞ」
「ああ。――お前らもついて来い」
「……わかった」
「りょ、りょうかーい……」
「はっ！」
いつもの使徒がいないことが気にかかった様子のカミーラだが、揺るぎないレオンハルトの答えに嫌々ながら納得する。警戒することもなく堂々と迷宮に足を進めたカミーラに、レオンハルトは頷きその背中に続くと、使徒候補の３人にも声を掛ける。
それもまた三者三様の返事だった。レオンハルトはそれらの反応も注意深く観察する。
何しろ今回のカミーラとの人狩りは、カミーラの機嫌取りやその強さを高めるための布石を打つのが目的だが……新たな使徒を決めるための試験的な意味も持たせてある。
ゆえにレオンハルトは３人の振る舞い。魔人の中でもやりにくい相手であるカミーラへの対応や反応。人間を相手にした時の反応やその実力。それらを含めて見るつもりであり、３人にもこれが試験であることは伝えてあった。ゆえに真剣にこの人狩りに臨むだろう。
そして心配もあまりしていなかった。３人とも優秀で高い実力を持っているのは知っている。
「……レオンハルト様」
「どうした。ミシェーラ」
だからこそ、ミシェーラが小声で話しかけてきても全く不安もなく応じる。牧場の人間街出身のエリート一家の出である少女は、まだ２０年と生きていないにも関わらず確かな強さと意志を持っている。

かなりの有望株であり、レオンハルト自身も頭の中で使徒の候補として考えていたほどの人物であるが――
「……ミシェーラは理解しております」
「……？　どういう意味だ？」
その言葉に、特に思い当たるものがなかったため、レオンハルトは素直にミシェーラに聞き返す。
だが、ミシェーラはその揺るぎない表情を崩すことなく、答えはしない。
「いえ、何でもありません。ただ伝えておきたかっただけです。このミシェーラ・姫原は、レオンハルト様の意志を完璧に遂行してみせますわ」
「……そうか。期待しているぞ」
「はい！」
レオンハルトはミシェーラの試験に意気込んでいるであろうその言葉をそのままに解釈し、期待していると告げる。
すると良い返事が返ってきたため、レオンハルトは満足した。前へ行き、カミーラに近い位置で歩き始めたミシェーラを見て、レオンハルトはその臆することのない度胸に感心する。
「……俺も行くとしよう」
そうして自分もまた迷宮に足を踏み入れる。あまりにも軽いものだが、リハビリにはなるだろうとそう思って。

――紅魔城に備え付けられた会議室。
そこで今期の牧場の選別結果についての報告と誘導。それらの仕事を終えたレオンハルトの使徒の４人は、話題を今行われているそれについて転換させたところだった。
「皆さんは誰が使徒になると思います？」
「さあ、誰でもいいけどね。……ガウガウ以外なら」
ペールのその質問に、少し投げやり気味に答えたのはハンティ。その表情には、己の親しい相手であるガウガウがその試験に参加した解

せなさがまだ残っている様子だった。それゆえか、その推薦者である相手に水を向ける。
「リー。あんた、なんでガウガウを推薦したのさ。ガウガウがアレなのはあんただって知ってるでしょ」
「は……しかしながらハンティ様。そのアレさを差し引いても、ガウガウ殿は優秀です。彼女が作った数多くの魔導具による魔軍への貢献度は計り知れません」
「ん……それはそうだけどさ」
「それに戦闘力という面で見ても、あのブラックアイという魔導具を開発してからはかなりのものがあります。あの発明力と強さをより魔軍のために……ひいてはレオンハルト様のために使って下さるというなら使徒としても魔軍の将としても歓迎しない理由は御座いません。ですので、推薦させて頂きました」
「……あのサボり魔が使徒に立候補ねぇ……一体何を考えているのか」
ハンティは椅子に深く腰掛け、頭の後ろに手をやりながら考え込む。ガウガウが使徒になるというその心変わりとも言うべき結論に至った経緯が分からない。
だが止めようにも下らない理由であればともかく、もし下らない理由でないなら安易に止めることも出来ないため、ハンティはそれを見極めるためにも静観を貫いていた。今回の使徒試験にも、推薦権を貰いながら誰も推薦していない。そのことをペールが口にする。
「というか始祖様は誰も推薦しなかったんですねえ。どうしてです？」
「使徒なんか軽々しくなるもんじゃないからね。メイドや女の子モンスターからお願いされたけど全部蹴ったよ。実力不足だって」
「はぁ。でもメイド長さんやインデックスさんとかは立候補しなかったんですか？　彼女達なら実力も十分だと思いますけど」
「来なかったからね。確かに、来たら推薦してたかもだけど……来なかったんだからしょうがない」
「はー。さすがですねぇ。あえてこのチャンスを見逃すなんて……ま

ああの2人は使徒でなくとも特別な立場に居ますから納得といえば納得ですけど」
「そうだね。後は……料理長とか、立候補してきたら推薦してたかな」
「もう殆ど化け物ですもんね」
「同感です」
「生物学上は人間なだけで人間はやめてますわね」
　魔軍の台所を預かるミシュラン一族の総代である料理長のことを全員が思い浮かべ、満場一致で人間をやめてるということで意見がまとまる。
　もっとも、ハンティとしてはどうせ使徒になるならそれくらいの化け物の方が慮る必要もあまりないので助かるといえば助かるが、立候補しないというなら仕方ない。他の候補について、話を持ち出したペールにも尋ねた。
「そういう意味じゃペールの推薦者も悪くないけどさ」
「始祖様もやっぱりそう思います？　使徒になるならやっぱりお町さんですよう。妖怪王って言うだけあって強いですし、レオンハルト様への愛情もかなり強いです。それにおっぱいもめちゃくちゃでかいですし」
「……最後の、いる？」
「いりますよう！　なんなら1番重要なところといっても過言じゃないです！　レオンハルト様の夜のお世話だって使徒の役目！　使徒になれば遠征先でも出来ますし、機会も多いです！　それだけにレオンハルト様の好みに沿った相手が使徒になってくれるに越したことはないですよう！」
「……使徒である必要ないでしょ」
「お町殿ですか……確かに実力は申し分ありませんな。レオンハルト様の好みというのも重要かと」
「ですよねー。だからやっぱお町さんで決まりですよう」
　ペールは自身の推薦者が使徒になるものだと自信を持っている様子だった。それにハンティは呆れてため息をつく。夜伽云々はハンティには縁のない話だった。興味もない。

同じく男性であるリーにも縁はないが、主人が満足するのであればそれもありだと思う。大前提ではあるが、大事なのは主人であるレオンハルトが納得すること。それが成されるのであれば、誰が使徒になろうと問題ではない。今こうして話しているのも、ちょっとした戯れの会話でしかないのだ。

とはいえハンティ以外の３人は自分の推薦者がレオンハルトの使徒になるのに最も相応しいと確信している。そうでなければ推薦などしない。推薦権を与えられた以上、それは自分自身も納得出来る得難き人材でなければならないと理解していた。

ゆえにレオンハルトの使徒として最も古株のキャロルは意気揚々と立ち上がって宣言した。

「確かに、お町さんもガウガウさんも悪くはありませんわ。――ですが！　レオンハルト様の第一使徒にしてレオンハルト様を最も深く理解しているわたくしの推薦した可愛い部下にして後輩こそ使徒になるのに最も相応しいとわたくしは確信しておりますの！」

「あー姫原さんね」

「姫原殿ですか」

「姫原さんですよう」

ミシェーラ・姫原というそのキャロルの候補を、誰もが思い浮かべる。この城ではかなりの新参者ではあるが、その顔と名前も誰もが当然知っていた。この場に彼女がいれば「ミシェーラ！　ミシェーラとお呼びくださいっ！」とツッコミを入れてくるだろう。それがお決まりであった。姫原と呼ばれるのは苦手らしいが、その反応が面白いのでからかう時にそう呼ぶのはお約束になっている。

そしてそんなイジられキャラなミシェーラだが、真面目に考えるとその優秀さはキャロル以外の３人でも認めざるを得ないものだ。それをハンティは口にする。

「あの子かー……ま、確かに優秀だね。まだ２０年も生きてないのにあの強さはかなり見どころあるよ」

「代々人間街で生まれ育つエリート一家出身ですな。近年の牧場の最高傑作で特Ａ級のコロシアムチャンピオン。同じ特Ａ級のイヴ殿を

強さで凌ぎ、素性を隠して戦った白兎様にも食い下がった。レオンハルト様が認めるほどの剣の才能と高レベルの神魔法を使いこなす才女で、一昨年には女の子モンスターだけで構成されるはずのレオンハルト様親衛隊の副隊長に就任。……確かに、才能という意味では彼女ほどの者はおりませんな」
「見た目も可愛らしいですしね。まあおっぱいは小さいですけど……あ、それと祖父と祖母の影響で料理が得意なんでしたっけ。地味にポイント高いですねえ」
「ふふん。それにわたくしが隊長を務める親衛隊の副隊長なだけあって、レオンハルト様の素晴らしさもよく理解していますわ！」
４人の使徒がそれぞれミシェーラのことを評価する。下級使徒となってまだたった数年ではあるが、ミシェーラが優秀であることは既に知れ渡っていた。
それだけにキャロルが使徒として強く推すのも納得するが、キャロルが強く推す最大の理由はそこではない。
「それに何より、わたくしは以前聞きましたのよ。新たに作る使徒としてレオンハルト様が候補として考えている相手……それがミシェーラさんであることを！」
「む……それは真ですかキャロル様」
その言葉にリーが驚く。確かにそれなら、高い可能性で使徒になることは否めない。
いや、レオンハルトが考えていたならほぼ確定だと言ってもいい。それがキャロルが強くミシェーラを推す理由だった。リーの問いに改めて強く頷く。
「勿論ですわ！　確かに聞きましたし、それにレオンハルト様は以前からまた使徒を作るなら次は剣士がいいと言っていましたの！」
「えー！　それならそうともっと早く言ってくださいよう！」
「ふむ……使徒の役割を考えている……ということですか。確かにレオンハルト様は剣士であるのに我らは……まあハンティ様くらいですか。それ以外は誰も剣を使えません。残念な……そう、本当に残念なことに……」

「こらこら。そんなことで落ち込むなっての」
世界最強の剣士であるレオンハルトの使徒なのに剣を使えないことに落ち込むリーに呆れながら慰めの言葉を一応かけるハンティ。その上で、ハンティもまたそのことを考えた。街の警備担当であるハンティは、牧場の選別においてＡ級を主に担当している。ゆえに人間街も担当していてよく行き来しているため、街の住人とは会話することも多い。
それどころか、幼少期のミシェーラやその家族とも、確か少しだけ会話したことがあった。この城に来てからも何度かやり取りを行っている。その体験から察するに――ハンティはちょっとだけ不安ではあった。
「んー……ミシェーラかぁ……」
「おや、ハンティさん。何か思うところでもありますの？」
キャロルに問われたハンティは、その懸念を口にする。気の所為かもしれないが、以前ちょっと変なやり取りがあったのを思い出した。
――それは少し前のこと。
『ハンティ様』
『ん？　ああ、ミシェーラ。何か用？』
それは紅魔城内でレオンハルトと二言、三言話して別れた後のことだ。
レオンハルトと別れてすぐにミシェーラが話しかけてきた。何かを理解した。察したというような真剣な眼差しで。
『ハンティ様……ミシェーラは理解しました』
『え？　何が？』
何を理解したのか。主語を話さないミシェーラに問い返すと、ミシェーラは首を振る。口にするのも憚られると言うように。
『いえ、大丈夫です。ここでは誰が聞いているか分かりません。このことは……ミシェーラの胸の内にだけ仕舞っておきます』
『……えっと……だから何が？』
『いえいえいえ！　大丈夫です！　全てわかりました！　なので安心してください！　このことは決して他言致しません！』

『いや、あの』
『ではミシェーラは訓練があるのでこれで！　今度模擬戦に付き合ってください！　それでは失礼いたします！』
『あ、ちょっと！』
ハンティが声を掛けるのも虚しく、ミシェーラはそこから逃げるように去っていった――そのことを思い出す。
あの時のミシェーラは不可解だった。追いかけて問い詰めることも考えたが、その当時は長年続いているガイの監視任務の最中。それで忙しかったため、また今度にしようと後回しにしていた。
それからしばらく経ち、ガイの監視任務が終わったのでそろそろあの時のことを尋ねてみようかと思っていた矢先の使徒試験である。なのでその真意は分からないが……どうも気になってしょうがなかった。
「……いやまあ……良い子だと思うけどね」
「……？　なら問題ないということですわね！」
「まあ……そうかな」
ハンティは結局、その不安を言語化出来ずに自身を納得させる。そして今行われているであろう試験に思いを馳せた。ガウガウでなければ誰でもいいが……他の２人も曲者であるし、どうなるかは読みきれないと。

（よし……悪くない面子ですね）
初めての外界。レオンハルトシティの外に出て、人の隠れ里があるという迷宮に足を踏み入れても、ミシェーラ・姫原は全く緊張も不安も抱いていなかった。
頭の中はこの使徒を見定めるという試験のことだけ。そのためにライバルとなる面々を見て、まずはその評価を下した。
（ガウガウさんは付与師……普段は自堕落ですが魔導具の開発においては右に出る者はいないほどの天才。魔法使いとしても高レベルで、戦闘も魔導具を使ったもので不得手ではない）

まず見たのは自身よりも更に小柄な少女に見えるガウガウ。
その本体の強さはそれほどでもないが、魔導具を使うと一気に厄介な存在となる。
（それにお町さん……妖怪については正直よく分かっていませんが、少し変わった魔法を使うことは知っています。雷の扱いではハンティさんに迫る程だとも）
そして女性にしては大きい。いろんなところも大きい。まさに妖しい魅力を持つお町も見る。
陰陽術。妖怪の戦闘には詳しくないが、お町が強いことは理解していた。ガウガウもそうだが、一対一の戦闘では少しばかし不利だろう。お町の方はまだ可能性はあるが、1度見たあの魔導具の対処はどうすればいいのか未だ分かってはいない。
もしこの試験が直接対決によって決まるのであればミシェーラは厳しかった。それを思い、幸運に感謝する。
（それにメイド長さんに料理長……後は司書の悪魔、インデックスさんもいない）
そして面子もたった3人で、ライバルになりえると予想していた面々も参加していない。
特にメイド長さんがいないことはありがたかった。純粋な戦闘能力としても高いが、メイド長さんの優秀さは戦いだけではない多岐にわたるもの。それを思えば、まだ料理長の方がいい。ミシェーラはそう判断する。
（人狩り……魔人の方々の庇護から離れて外で暮らす人間を狩ること）
そして次に、この試験で行われるこの人狩りというものについても思考する。
知能の方も優秀であるミシェーラにはその意義についてもきちんと理解していた。
（人を狩った数はさして重要ではないでしょう。これはおそらく、心を見る試験……！　人を想うミシェーラ達が、人を殺すような指示にもきちんと従えるかというもの……！）

そう。お町は妖怪だが、ミシェーラにガウガウは人間。人を傷つけることを、普通は好まない。
だが使徒になるということは、好きでなかろうとそれを行わなければならない時があるということでもある。全ての魔族、魔人ですら魔王様の命令に従わざるを得ないというように、使徒も上位者の命令には逆らえない。
レオンハルトという人間を守護する魔人でさえ、牧場というシステムを守り、こうして人を狩ることもあるのだ。それを好む好まざるに関わらず……そうせざるを得ないというなら強い意志を持ってそれを完遂する必要があるのだと。
（しかしそれは問題ありません。レオンハルト様がそれを行えと仰るなら、ミシェーラはそれを実行するのみ……！）
だが問題ないと断ずる。別に人間を傷つけることが好きという訳でもないが、この世が弱肉強食であることは理解しているし、レオンハルトが意味のないことはしないことも理解している。
人を守り、同時に人を害する立場となることは正しく理解している。そんな覚悟は、ずっと前に済ませている。
だからこそ、それだけなら問題なかった。そう、それだけなら。
ミシェーラには不可解があったのだ。それを頭の中でミシェーラは思考する。
（ですが……カミーラ様と共に行う意味はないはず）
そう。それは……この試験に魔人であるカミーラがいること。
これがレオンハルトとより親交のあるケッセルリンクやガルティア。ラ・サイゼルやラ・ハウゼルといった城内の事情にも詳しい魔人であればともかく、魔人の中でも気難しいと噂のカミーラを同道させる意味はない。
他の魔人相手の対応を見るためだとしても、それはまた別の機会にやればいいだけだ。同時に行う必要はないし、一石二鳥だからといってもまだ意味は薄いように感じられる。
だからこそミシェーラは思った——違う。そうじゃない、と。
（カミーラ様がここにいることには必ず意味がある……そしてそれ

は、ミシェーラの考えだとこうだ……）
　ミシェーラは考察した。深く考えれば必ずその意味を導き出せる。そして、実際に導き出した。
（キャロル隊長に聞いたところ、レオンハルト様は以前からカミーラ様を気にしておられた。そして、カミーラ様の方もレオンハルト様には気を許しておられると）
　レオンハルトとカミーラの関係を考える。
　だがそれだけでは意味を導き出すことは出来ないだろうが、ミシェーラは違った。優秀な頭脳からその答えを朧げに浮かび上がらせる。
（レオンハルト様は、自ら女性を口説くことはしない……そして、カミーラ様もプライドが高く、自らアプローチを掛けるようなことはしない……そう、つまりこれは――）
　ミシェーラはそこで確信する。この試験の、本当の内容は。つまるところ――
（レオンハルト様とカミーラ様のデートのサポート！　これしかないっ！）
　――そうして、そんな訳ない答えをミシェーラは導き出した。
（どちらも口にはしないものの惹かれ合っている焦れったい関係……人狩りを口実に逢引に誘うレオンハルト様……それを理解しながらもやっぱり素直になれないカミーラ様……）
　――ミシェーラの妄想は止まらない。
（この御二方を如何にサポートするか……！　最も上手く2人を近づけることが出来た者こそが、この試験の勝者ッ！）
　――やめろバカ。止まれ。レオンハルトや他の者が聞いていたら、慌てて止めるような思考をミシェーラは展開する。
　だがミシェーラはその思考を口にしない。
（おじいちゃんは幼い私に教えてくれた。一を聞いて十を知る……このミシェーラ・姫原。今回もこの難問を解き明かし、理解することが出来ました……！）
　一を聞いて十を知る――それはミシェーラが幼い頃に祖父から教

えられたことわざであり、ミシェーラが強く気に入ったことで自ら定めた座右の銘だった。
（そしておじいちゃんはこうも言ってました。沈黙は金……優れた者は多くを語らないもの……この答えはまだ口にしない方が賢明ですね）
――ミシェーラはおじいちゃんっ子だった。おじいちゃんは余計なことをしていた。
「倒せずともせめて1人は道連れに――ッ」
「邪魔です」
「ふぎゃっ!?」
「……ほう？」
魔物が襲ってきたことに気づいたのだろう。迷宮の陰から現れ、襲ってきた人間の首を一瞬で両断する。
その腕前は凄まじいものだった。その強さを初めて見たカミーラですら、レオンハルトが下級使徒にするだけあって良い腕をしていると少なからず認めてしまうほど。
「露払いはこのミシェーラにお任せを！　この……レオンハルト様に憧れて始めましたがレオンハルト様に全然及ばない剣術をご照覧あれ！」
「……」
「あいつ……何を言ってるんだ？　強いのに卑屈だな……」
「分からぬ……」
――だがその言動は明らかにおかしかった。というか、サポートが下手くそだった。カミーラは無言で、それを見ていたガウガウやお町もその意図が分からずに困惑してしまうほど。
だが本人は至って大真面目だった。
「さあ来い人間！　ミシェーラの必殺技……ええと、レオンハルト様は女性に優しいしかっこいい甲斐性があるアタックを食らえ！」
「おい……ミシェーラ？」
「何でしょうお優しいレオンハルト様！　ミシェーラの剣に何か思うところがありましたか!?」

「いや……剣の方は悪くない。良い腕だが……何だ。そのよく分からない言動はやめてくれないか？」
「ッッッ!!？　わ……分かりました……では、この方向性はやめておきますね……」
「ああ。そうしてくれ（この方向性とはどういう意味だ……？）」
レオンハルトがやめろと言うと酷く衝撃を受けた表情を浮かべた後に、少し気落ちして命令を聞く。レオンハルトもまたその言動に困惑しながらも、己を慕ってくれているがためだと流した。
（……おかしいなぁ。これじゃ駄目なんて……ということは、もっと気の利いたやり方をしろということ？　……なるほど。それはつまり――）
だがミシェーラの勘違いは止まりそうになかった。
そうしてレオンハルト一行による愉快な人狩りが始まった。

勘違い

迷宮内を進んで１０分もすれば、隠れ里の人間が襲いかかってくるようになった。
「おいお前ら！　何が何でも死守しろ！　商品を逃す時間を稼げ！」
「ああ！　わかっ――うわぁーー!?」
「ふはははは！　バカめ！　不意打ちも魔法も無駄無駄ぁ！　この天才ガウガウ様にかかれば迷宮なんてちょちょいのちょいだ！」
『イエス！　イージー！』
だがその人間達を、ガウガウは容赦なく蹴散らしていた。迎撃に出てきたレンジャーの不意打ちに反応して自動起動したブラックアイが自分の命令に従って拳や魔法を繰り出すと面白いくらいに敵が吹っ飛んだ。
「ぐあああああっ!?」
「くそ！　何も効かねぇ！　何なんだあの化け物は!?」
「魔人だけでも厄介だってのに……！」
倒れた仲間の死体を踏みつけて、次々と通路から人間が湧き出てくる。
ガウガウはその戦意に感心した。魔人がいると分かっているのになおも抵抗をするのは今の時代に生きる多くの人間の大多数にはない行動だ。どちらかといえば自分がかつて生きていた戦争だらけの時代の人間に似ている。あまり外に出ないため忘れていたが、牧場の人間と違って野良の人間はかなり活きが良いようだった。
「ふむ、逞しいな。少し出力を上げるか――ブラックアイ」
『イエス。マスターガウガウ。マジックパワーアップ』
「げっ!?」
「また来るぞ！　逃げろ！」
直線となった通路に進み出てきた戦士達が、こちらの魔法光を見て慌てて下がっていく――そこに魔法を放った。
「白色破壊光線！」
「!!」

ブラックアイに組み込んだ魔法威力向上の魔導具の効果によって、更に強くなった光線が通路を真っ直ぐに焼き払う。
そうして出来た多くの人間の焼死体は中々にグロテスクで無慈悲ではあるが、ガウガウはそれを見ても何も感じない。
戦いで人が死ぬのは当たり前だし、元より人が好きって訳でもない。かつては魔王や魔人を倒すための魔導具の研究に勤しんでいたが、それも人を守るというよりは自分という存在を周囲に認めさせ、後世に名を残すためであった。
もっとも憎んでいたり嫌いという訳でもないため、別に好き好んで殺そうとか傷つけようとは思わない。こうして外に出て人を焼く作業をするのも面倒ではある。
……だがしょうがない。それもやらなければならないことだからな。
これもレオンハルトの使徒になるためには必要なことだ。
だがそれも過程の1つでしかない。ガウガウの目的のために必要なのはまず、使徒になって人間をやめることと永遠の命を得ることだ。
そうすることでまた研究が捗ることをガウガウは理解していた。レオンハルトの使徒になることで得られる多大なメリット。そのメリットと引き換えに、レオンハルトの仕事を手伝う。……使徒としては不純というか忠誠心の欠片もないような感じだが、ガウガウにとってはそれですら珍しいことだ。
研究のために城においてくれたレオンハルトや研究を手伝ってくれているハンティや城の人にはこれでも感謝している。自分の研究を行いながら働くくらい、天才の自分にとっては訳ないことだ。
……勿論、そんなことはおくびにも出さないが。
だが行動としてガウガウは転機を自ら作り出そうとしている。使徒になることで、積極的に魔軍への関与と外部での行動が可能になる。
「悪いが、私の魔導具(こども)のための犠牲になってもらおうか」
ガウガウは再びブラックアイを動かし、迷宮内を進軍していく。

己の作る魔導具や身内のためなら多少の犠牲も止むなきことだ。
――何、人を殺すのも初めてではないし、レオンハルトの目的だって分かっている。それをついでに背負う程度もこの天才には訳ないことだ。
「しかしまあ……当然といえば当然だが歯応えがないな。せっかくテストしようと思って魔導具を沢山持ってきたんだが……」
ガウガウは広い空洞。洞窟のようになっている迷宮をほぼ素通りのように進みながら周囲を軽く見渡す。
そこにある光景は――蹂躙だ。
だがそれも致し方ないことだ。自分という天才だけでなく、自分と同じ使徒志望の妖怪王のお町や牧場の最高傑作とまで言われるミシェーラという剣士までいて、これだけでも過剰戦力だというのに――
「っ……ぁ……！」
「――ぁ」
「……つまらぬ」
「そう言うな。人間とは最後の最後まで追い詰めてみなければ分からないものだ。あるいはこの集団をまとめているリーダーがそれなりにできるかもしれない」
――魔人がいたならどうしようもないだろう。
それもその魔人は先日まで魔人四天王だったカミーラと最強の魔人と名高いレオンハルトだ。勝負になる筈がない。どんな強者もゴミのように殺される。
立ちはだかれるだけでマシというものだろうとガウガウは思う。自分ならこの2人が攻め込んできた時点で即降参だ。チビるかもしれない。というか、味方であっても怖いまである。
「……ここだな。ここから分かれるぞ。分かれてそこにいる人間を倒していけ。最終的には合流出来る筈だ」
「はい！　了解です！」
「わかった」
「……ふん」

そしてその上でレオンハルトは仕事に手を抜くことなく、手分けして中の人間を殲滅しようとする。包囲した上でこれとは中々にえげつない。魔軍参謀の手管だ。
その采配にはミシェーラやお町だけでなく、気位の高いであろうカミーラですら文句は言わない。レオンハルトの采配に問題がある筈がないと、長く生きる魔人程そのことを知っているのだろう。
ガウガウは己を天才だと自負しているが、軍師でもなければ軍を率いた経験もない。もし軍を率いてもそれなりにはこなせる自信はあるが、本職ともいえるレオンハルトには敵わないだろう。ガウガウもまた、そのことを知っている。
「ガウガウとお町はあっちの道だ」
「ああ」
ゆえにレオンハルトの指示にガウガウもまた従った。レオンハルトやカミーラ、ミシェーラと分かれてお町と一緒に行く。そのお町が、レオンハルトと分かれた後で残念そうに耳を垂れさせていた。
「レオンハルトと一緒に行くのではないのか……」
「あいつのことだし、この組分けにも意味があるんじゃないか？」
「ふむ。そうかの……では行くとするか、童よ」
「童ちゃうわっ！」
「むう……そうなのか」
「そうだし年上だしお姉さんなんですけど？」
「そうは見えなかったが……人間とは不思議じゃの」
「妖怪の方が不思議生物だ」
……中々に惚けた……いや、天然だな、この妖怪王は。そして乳もデカい。その存在に目をやり、若干恨めしく思いつつも2人で先へ進んでいくことにした。――爆乳狐なんかにこの天才ガウガウ様が負けるかっ！
「ガウガウとお町は多分問題はないだろう。あるとすれば、カミーラの方だな……」

別れ道から1人、迷宮を進むレオンハルトは時折散発的に現れる人間を斬り捨てながら他の面子のことを考える。
今回の人狩りは仕事の一環ではありつつも、カミーラのご機嫌取りと使徒を決めるための試験も兼ねているものだ。
それを考え、レオンハルトは態々キャロルが会長を務めるキリング商会を使ってここに奴隷商人を呼び出したり、色々と仕込みを行った。妙に人が多く、騒がしいのはそのせいだろう。
だが自分が通った道はすぐに静かになる――レオンハルトが剣を振るうまでもなく、大半の人間は気を抑えずに放出するだけで戦意と言葉を失わせた。
「魔人ッ……！　こ、の――」
「……」
そしてその中で、向かってこれるだけの優秀な戦士だけを即座に斬っていく。
「……脆いな」
そうして思うのは――退屈と残念だ。
ガイと戦った後だけに、以前よりも弱く感じてしまう。こちらからすれば撫でるような牽制の一撃で、人間の戦士はすぐに動かなくなった。
そうして進みながら、人間の装備や宝は貰っていく。持ちきれない食料や物資などの多くは後で残党狩りも兼ねて魔軍を突入させて奪うつもりだが、個人的に取れるものは取っていく。
「これは悪くない剣だな……こっちは宝石の指輪か……これも悪くない。魔道具の類はガウガウに後で調べてもらうか……」
刀剣の類はコレクションとして。宝石はちょうどカミーラがいるしご機嫌取りのための貢物とさせてもらおう。魔道具も回収していく。呪いが付与されるような変なものがあってもガウガウなら問題ない。
そして進みながらやはり考えるのは、カミーラとそれについて行かせたミシェーラのことだ。
なぜその組分けとなったのかと言うと、少し前――ミシェーラが直

接、こっそりとお願いしてきた。
『レオンハルト様。もし別れ道で別行動を取るようなことがあればカミーラ様のお供はこのミシェーラにお任せを。不足なくこなしてみせますので』
『それと一応確認なのですが、今回の一件はレオンハルト様がカミーラ様のために計画したもの……それに間違いないですね？』
――などと、曇りなき眼でそう言ってきたため、レオンハルトはそれを認め受け入れた。ミシェーラなら大丈夫だろうと信じて。
（たまによく分からない言動はするが……優秀で弁えてる奴だ。この人狩りの目的も正確に把握しているようだし問題ないだろう。幾らカミーラでも俺の下級使徒は殺さないだろうしな……こうして試してやるにはちょうどいい）
ミシェーラはレオンハルトの下級使徒となってまだ日が浅い。それだけに、評価はしているがガウガウやお町と比べればまだ分からない部分があるのも確かだ。
カミーラという気難しい魔人を相手に出来るか――それも含めて試させてもらおう。そう思い、レオンハルトは一足早く最深部に辿り着き、そこで他の面々が来るのを待つことにした。

「――下級使徒風情が……出しゃばるなよ。殺されたくなければな……」
「っ……は……」
別れ道でレオンハルトや他の使徒候補と離れた先で、ミシェーラは上級魔人による洗礼を受けていた。
レオンハルトの指示だからだろう。カミーラもまたその組分けに何かを言うことこそなかったものの、こうして圧をかけてくるくらいには機嫌は悪いらしい。ミシェーラはそのことを理解した。
（さすがのミシェーラもちょっと恐怖を感じますが……とはいえ、ここで引いてしまえば、レオンハルト様の使徒にはなりえません。勇気を出すのですミシェーラ……おじいちゃんも、勇気を持てる人間は素

晴らしいと言っていました……）
心の中で祖父の言葉を思い出し、拳を握りしめる。レオンハルトの使徒になろうという人間が、こんなところで引き下がってはいけない。それでは使徒になどなれる筈がない。
だからこそミシェーラはカミーラの圧に負けじと一歩踏み出した。先程はレオンハルトにやり方を咎められてしまったが、こうなればもっと直接的なアプローチを仕掛けるべきだろうと判断した。
ミシェーラは向かってくる人間をついでに斬り捨てて静かになったところでカミーラに話しかけた。
「恐れながら申し上げます……カミーラ様」
「……」
カミーラの視線が、ミシェーラを捉える。
上級魔人にまじまじと見つめられるだけで、普通の人間は身を竦ませるもの。
だがミシェーラはそれを乗り越えた。そして、口にした。核心に迫ることを。
「カミーラ様は……レオンハルト様のことを、どう思っていらっしゃるのですか？」
「……」
カミーラの眉間に、ほんの僅かだが皺が寄る。
（言った！　言ってやりました！　さあ、どうですかカミーラ様!?）
ミシェーラは自身の勇気を称える。そしてカミーラの反応を見た。怒りを覚えているという感じではない。どちらかと言えば、少し迷っているように感じられた。つまりそれは。
（想いは明白……しかし、それを伝えていいものか迷っていらっしゃるのですね）
そう。ミシェーラは理解した。だからこそ、次のカミーラの答えも理解出来るものだった。
「……それを……」
「は」
「それを……貴様に答える必要があるのか……？」

底冷えするような冷たい目と声で言われてミシェーラは身震いした。――よし、来た、と。

しらばっくれる。あるいは無視する。あるいははぐらかす。そう答えるしかない。なぜなら好きだから。好きだからこそ、伝える訳にはいかない。

そんな心の機微を理解したミシェーラは、しかし逃さない。レオンハルトからのアプローチを望めない以上、カミーラが少し心を開くしかないのだ。だからこそ、後押しとしてミシェーラは口にした。

「はい！　あります！　それはなぜなら――」

一呼吸置いて、言う。ミシェーラは告げた。

「レオンハルト様は……カミーラ様に、想いを募らせているからです……！」

「……何……？」

ミシェーラはその罪を甘んじて受けた。そう……主の代わりに、その想いを先んじて伝える罪を。

そうしてカミーラの反応を見逃さないように真っ直ぐに見つめた。

（さあカミーラ様……！　心の中に秘めた想いをどうか曝け出してみてくださいっ……！）

（こいつは……一体何を言っている……？）

レオンハルトに誘われた迷宮の中で、カミーラはその下級使徒の言葉にただただ困惑していた。

初めて見るレオンハルトが連れてきた下級使徒。その３人にカミーラは欠片も興味は抱いていなかった。美少女であることは気に入らないが、レオンハルトの趣味は理解している。そこには口を挟まない。

だからレオンハルトが一旦分かれることを提案してきた時も特に文句を言うことはなかった。先程訳の分からないレオンハルト賛辞をしていた人間の下級使徒がついてきても別に構わない。精々兵隊程度に使えばいい。それなりには強いようだから足手まといにはな

らないだろうと。
　もっとも、そうなるようなら見捨てるつもりではあった。レオンハルトには「そこらの人間に後れを取るような見どころのない人間だった」とでも報告すればいい。戦いの中の戦死であればレオンハルトも何も言うまいと。実際誅殺する気はないため、そうなる可能性は低いものではあったが。
　実際、人間など相手にはならなかった。そうして問題なく進んでいる最中に、カミーラはその下級使徒からの謎の言葉を受けて困惑した。それは確かだ。
　だが一方で……カミーラはこうも思った。
（……だが、やはりそうなのか……？）
　カミーラは内心でその下級使徒の言葉に疑惑を徐々に確信へ傾けようとしていた。
　何故ならそれは――カミーラもまた疑っていることだったからだ。
　先日のガイから助けられた一件の後から、カミーラは考えていた。
　――レオンハルトは、何故こうまでして自分を助け、気を使うのか、と。
　カミーラも蒙昧ではない。当然だが、レオンハルトが自身より遥かに強いことは理解している。
　だからこそカミーラは、カミーラなりにレオンハルトに気を使って弁えていたものであるが、それ以上にレオンハルトはカミーラのことを気遣っていた。まるで当初の、出会ったばかりの時のように、レオンハルトはカミーラのことを尊重する。
　その理由とメリットがカミーラには分からなかった。改めて考えてみれば、レオンハルトはおかしい。あれほどの強者であればもっと横暴に振るまっても良い筈である。他の魔人や、あるいはカミーラのように下位者を見下し、そんなことは知らないと我を押し通すことが出来る筈だ。
　だがレオンハルトはそれをしない。カミーラに対しては。それをカミーラは不可解に感じていたが、その予測出来る答えの1つに、この下級使徒が言った答えもまたあった。

（……だがこんな下級使徒の言葉を信じるのか……？）
しかしカミーラも信憑性を疑う。当然だ。カミーラも知るキャロルのような正式な使徒であればともかく、ただの下級使徒の言葉を真に受けていいものかと。
だが――
「……」
（一切揺るぎもしないとは……）
カミーラの鋭い威圧する視線を受けても、ミシェーラの瞳は揺らぐことはない。真っ直ぐだった。まるでレオンハルトのように。
とてもではないが、嘘を言っているようには見えない。ただの下級使徒がカミーラの観察眼を欺ける筈がないし、嘘を言っていたとしたらどこかに迷いや罪悪感が生じる筈だが、それもない。
むしろ真っ直ぐすぎてこちらが目を反らしそうになるほどであり、カミーラはその抵抗として目を細めた。そして確認のための言葉を作る。
「……それは真実か？」
「はっ！　紛れもない真実です！　カミーラ様！」
「……そう、か……」
頷きの言葉は上手くでなかった。それが真実であると徐々に理解していくにつれ、困惑も大きくなる。
だが一方で――悪い気はしなかった。
カミーラは疑問が氷解していくのを感じていた。レオンハルトが自分を好いているなら、今までの言動の数々にも納得がいく。気を使うのも好きな女に対してなら当然のものだろう。
だが一方で、今までの雄達とは違うことをカミーラもまた理解していた。
カミーラは過去を思い出す。
もはや遠い昔――カミーラがこの世に生を受け、まだ魔人ではなかった頃。
カミーラはドラゴン種の中で唯一の雌として、生きた王冠として扱われていた。

強い雄だけがそれを勝ち取れる。多くの雄がカミーラを求めて戦い……そして勝利した者は当然のものとしてカミーラを征服した。
そこにはカミーラの意思も何もない。ただされるがままになるだけだ。強い雄に、カミーラはただ屈服し、性の捌け口となるだけの道具に過ぎない。
どの雄もそうだった。どれだけ強くて立派とされるドラゴンも。マギーホアも。アベルも。その誰もがカミーラを道具のように扱う。
その日々をカミーラは漫然と仕方なく受け止めていた。そうして、その日々もいつかは終わった。
魔人となり、アベルが敗北し、ドラゴン種が滅び、人間が生まれ――カミーラは少しの自由を得た。
同胞が滅びたことに思うところはあったが、それでも自由を得られたのは素晴らしいことであり、カミーラはその日々をカミーラなりに優雅に過ごした。
――だがそうして魔人の社会で生きるようになっても、カミーラの苦境は終わりを見せない。
いつの時代もカミーラを超える強者は現れた。そして、その殆どがカミーラを下に見た。
それだけならまだしも、カミーラを求める雄はその誰もが横暴だった。先日のガイも、自身を超えたケイブリスも。その誰もが強者だからと気を大きくしてカミーラを物にすることを当然の権利として扱おうとする。
――だがそんな中で、レオンハルトだけは違った。
最初に出会い、同胞の魔人を殺したことを悪く思い、借りを作ってから、レオンハルトはカミーラを尊重した。様々な便宜を図り、協力した。
いつしかレオンハルトがカミーラより強くなってからもそれは変わらなかった。横暴な振る舞いも、少なくともカミーラには行うことはない。ただ自然に扱う。気を使っていた。醜くもない。
好意がありながらも、２０００年近い時をずっとそれで通している。

「それで……どうでしょうカミーラ様。レオンハルト様の想いに応えるつもりは……？」
「……」
　カミーラはそれらを思い、考える。その下級使徒の言葉も、本来なら無礼として厳しく躾けてやるところだがそれはしない。ただ考え、思ったことを口に出した。
「……ふん。さて、な……」
　カミーラは言う。目を閉じて、口元に微笑を浮かばせながら。
「少なくとも……悪い気はしない」
　そう――悪い気はしない。
　何しろレオンハルト程の男。おそらくこの世の雄の頂点に位置するような相手が、２０００年も一途に自分を想い続けているのだ。
　それはカミーラの自尊心を満たすものだ。カミーラは恋愛感情など自身には存在しないと思っているし、レオンハルトにもそれを感じていないが……それでも気分は良くなる。
（くくく……あのジルにすら靡かないレオンハルトが……私に好意を寄せているとは、な……）
　カミーラはレオンハルトが、ジルの愛人として扱われ苦労しているのを知っている。以前にレオンハルトが一言だけぼやいていたのを聞いていたからだ――『ジル様の相手も楽ではない』と。すぐに撤回し『忘れてくれ』とは言っていたが、それが本音であることは明白だ。
　そしてそれほどの強い意志を持つレオンハルトが、自分に好意を持っている。それは悪いものではない。下級使徒からの遠慮のない言葉も許してしまうほどに。
「おお……それでは……！」
「ふん……早とちりするな。まだ応えてやると決めた訳ではない……」
「！　そんな……！」
　目の前の下級使徒が己の言葉を聞いて、捨てられた子犬のような表情を浮かべる。それを見下ろしてカミーラは口端が緩んだ。――もしかしたらレオンハルトですら、己に断られたらここまでとは言わず

とも残念そうな顔になるのだろうかと。
　それを想像すると愉悦を禁じえないが……だがカミーラはこうも思う。
「ふっ……だがそうだな……レオンハルトが私の物になりたいと言うなら……それを受け入れてやるのも吝かではない……」
「それは……」
　下級使徒がごくりと唾を飲み込む。自分がそう答えたのが意外だったのかもしれないが、カミーラとしては意外でも何でもない。使徒や下級使徒を愛でてやることの延長線上だ。レオンハルトが受け入れるならば、そういうことを戯れとして行うのもありだろうと可能性を示してやったまで。
「案ずるな……悪いようにはしない。レオンハルトのことは気に入っているからな」
「それは重畳です……！　ミシェーラも罪を呑んだ甲斐がありました！」
「内緒にしておいてやるからそのことも安心しろ。それで……お前の名はミシェーラと言ったか？」
「はい。ミシェーラ・姫原と申しますカミーラ様！　現在はレオンハルト様親衛隊の副隊長を務めさせて頂いております！」
「キャロルの部下か……覚えておいてやろう」
「はっ！　ありがとうございます！」
「ふん……」
　道理で嘘のない奴だとカミーラは納得し、気分を良くしながらミシェーラを連れて迷宮の奥へと進んだ。

　人狩りはつつがなく行われ、済んでいった。
　レオンハルトが迷宮の最深部に辿り着いてしばらくすると、カミーラとミシェーラが。そしてその次にお町とガウガウがやってきたが。
「レオンハルト……くく、早いな。張り切っていたのか？」
「……ああ。そうだな。少し張り切ってしまったかもしれない（随分

と機嫌がいいな……)」
　何故かカミーラの機嫌が、分かれる前より遥かに良くなっているのを見てレオンハルトは困惑した。一体何があったのか。よっぽどお気に入りの奴隷少年でも見つけたのか。その奴隷の多くはガウガウとお町が見つけてきたようだが、カミーラ達が向かった方にも少しいたのかもしれない。
　あるいは……とレオンハルトは近づいてきたミシェーラを見た。
「何があった？」
「いえ、特に何も。ただカミーラ様と少しお話しただけです」
「……そうか。ご苦労だったな」
「はっ！」
　引き締まった良い返事を返すミシェーラに感心する。まさかカミーラに気に入られるとは……キャロルから何か聞いてたのか？あるいは何かカミーラの琴線に触れることが出来たのかもしれない。
「ガウガウとお町もよくやった」
「はっはっは。この天才ガウガウ様にかかれば大したことじゃなかったな！」
「うむ……我も頑張ったが、そこの童もよく頑張っておった」
「だから子供じゃないって言ってるだろっ！」
「……仲は深まったようだな」
　そしてガウガウとお町の方も特に問題はなかったようだ。あまり話したことがないように思えたのでそこは不安ではあったが、打ち解けられたなら組ませた甲斐があったと言える。人狩りも特に問題はなかったらしい。その心配は正直していなかったが。魔物討伐隊と言えど所詮は人間だ。そこそこの戦士程度じゃこの場にいる誰であっても止めることは出来ない。
　……分かっていたことだが、使徒になる前から使徒のような強さを持ってる3人だ。そこについては試すまでもなかったか。
　強いて言うならミシェーラが僅かに劣るが、それでも十分だろう。二代目妖怪王とレッドアイを作った付与師相手じゃ分が悪いのは致し方ない。ただの人間としては十分にトップレベルに達している。

後でこれらの評価も持ち帰って考えることにしようとレオンハルトは魔物将軍に指示を出して残党狩りと物資の運び出しを行わせながら自分達も帰り支度を整える。別にすることはないが――

「――ああ。カミーラにはこれを渡しておく」

「……これは？」

「迷宮内で見つけた宝石だ。貰っておいてくれ」

カミーラにそれらを手渡し、機嫌を取る。美少年に宝石というカミーラの好きなものを渡してやりながら、こうして外に出て人狩りを行うことに旨みがあると思わせておく。そうして次に誘った時にも誘いやすくしておき、その時にはまたちょっと強めの人間の戦士でも配置しておこう。少なからずこれでレベル上げにはなるだろう。段階を踏んで凶暴な魔物や悪魔を置くのも悪くないかもしれない。その言質を取っておく。

「今日は俺としても実りがあった。また今度誘っても構わないか？」

「……ふっ、いいだろう」

そうしてカミーラからあっさり承諾を得る。どうやらカミーラの方も気に入ったようだった。渡した宝石を手の中で弄び、その中の１つである指輪を取るとそのまま指に嵌めてみせる。

「お前からもらったこれもありがたく受け取ってやろう……」

「ああ。そうしてくれ」

「……他に何か言うことはあるか？」

……何か言うこと？

そう問われ、レオンハルトは考える。強いて言うなら、指輪をつける位置はどうかと思うが……しかしカミーラのことだ。深い意味はないのだろうとそう考え、率直に褒めておく。

「ああ。カミーラに相応しい宝石だな」

「当然だ」

微笑を浮かべるカミーラに、やはり機嫌が良いなという感想を得る。……とりあえずこれでガイの一件と四天王剥奪の件はどうにかお茶を濁していてもらおう。また不満が爆発しそうになったら適度に貢ぐなりどこかで解放させるなりすればいい。今はあまり不和は

起こしたくないからな。
――などと思っていると、横からくいくいと服を引っ張ったられたので向き直る。
「どうした？」
「……我には何かくれんのか？」
「……そうだな。なら帰ったら部屋に来るといい」
「ん……楽しみにしておるぞ……」
お町が何か土産を欲しそうにしていたのでそう口にして誘っておく。するとこちらも機嫌を良くしたため、後は問題ないと安心して帰路につくことにした。

――数日後。
「使徒試験のことだが……――を使徒にしようと思うんだがどう思う？」
「……別にいいけどさ。それ、なんであたしに聞くわけ？」
「お前が1番、使徒の中で厳しい意見を言ってくれるからだ。他の3人もそれが出来ない訳ではないが、お前の意見は厳しさを超えていっそ辛辣な時もあるからな。自分を戒めるのに役に立つ」
「……それって褒めてる？」
「褒めてるつもりだ」
俺はハンティを呼び出し、誰を使徒にするかという試験の結果。その判断を伝える。
「それにお前は唯一、使徒を推薦しなかったからな。平等に見れるだろう」
「……ま、そうだね。それなら言わせてもらうけど……別にいいんじゃない？」
そうして求めたハンティの意見は、特に問題ないというもの。俺はそれを受け取り、頷きの言葉を返す。
「そうか。てっきり反対するかと思ったが」
「なんでさ。別に反対する必要はないよ。使徒を増やすことの問題点

は、その使徒が信用出来るかどうか。それと魔人と使徒の力がほんのちょっと落ちることでしょ。なら問題ない。３人とも信頼出来るし、力に関してもあんたなら使徒が１人や２人増えたところでなんともないでしょ」
「……ああ。その通りだ」
　そして結果、やはり異論は出ない。そもそも候補に挙げられる３人は異論の出るような信頼の低い者達ではなく、誰が使徒になっても問題はないものだ。ハンティの言うように、信頼的な意味でも互いの実力的な意味でも特に問題はない。有能で信頼のおける相手であるなら引き上げてしまえばいい。だからこそ、俺は自分の判断を正しく感じる。
　だがそれでもハンティに聞いたのは、ハンティに近しい人物のことでもあるからだ。俺はそれを改めて尋ねる。
「だが良いんだな？」
「……ま、思うところがない訳ではないけどね。ただ……なんとなく、やりたいことは分かる。だから反対しないことにした」
「理由を聞いたか？」
「さあね。聞いても聞いてなくてもあたしの判断は変わらないよ。これでもあいつのことは信用してるからね」
「……そうか」
　ハンティの表情を見て特に問題はないと判断する。どうやら本当に納得しているらしい。それを見て、安心して次の話題に移れた。
「さて……なら通達と血の契約はこの後行うが……それより先に伝えておく。例の計画――都市の移転及び開発計画のことだ」
「ああ、その話？　それなら問題ないってさ。もう候補地の絞り込みと地質調査をリーが行ってるって話だよ」
「そうか。ならリーにも伝えておいてくれ。時間は長く……そうだな。数百年はかけても構わない。その代わり完璧な物にしろ――とな」
「ん。了解」
「それと３人も呼んでくれ。これから結果を伝え、血の契約を行うと

な」

ハンティに計画の話を改めて命じると、俺は使徒候補の3人を呼び出すことにした。魔人である己の忠実なる下僕――使徒を増やすために。

使徒の親睦会

魔人の血を分けた忠実なる下僕である使徒。
その使徒達が定期的で任意で集まる親睦会がレオンハルトシティのあるお店で、今日も開かれていた。そしてその主催者は当然――
「わたくしですわーー！」
扉を優雅かつ豪快に開け放ち、得意気な表情で特徴的すぎる挨拶を放ったのは魔人レオンハルトの使徒――キャロル。
魔人の使徒達の親睦会やお茶会などを定期的に開く、自称魔物界一の完璧使徒である。
「あ、やっと来た」
「もうキャロルさん遅いですよ～」
そのキャロルを室内で出迎えるユキと火炎書士。
魔人ラ・サイゼルとラ・ハウゼルの使徒をそれぞれやっている２人がお茶菓子を摘んでいた。
「あら、もう始めてますのね」
「はい。先にクッキーもお紅茶も頂いちゃってます」
「クケケ。先にロッキーとお線香も頂いちゃってます。バリバリ。お線香の香り良い匂いですわ～」
「もーまたユキちゃんってば。そんなものないでしょ。というかお線香は分かるけどロッキーってなに？」
「んー知らんけど、多分１４００年後くらいには生まれてきそうじゃね？」
「なにそれ……」
「ユキさんは未来視が出来ますのね。覚えておきますわ！　メモメモ……」
「真に受けてる!?　もうユキちゃん！」
「ごめんて」
３人の会話に場が賑やかになる。そうしてキャロルが席についたところで、亜麻色の髪のメイドが１人、紅茶をティーカップに注いだ。その少女もまた使徒――魔人ケッセルリンクの使徒であるシャロン

だった。
「うふふ、キャロルさんがいらっしゃると一気に賑やかになりますね」
「それほどでもありませんわシャロンさん。これくらいの人望、レオンハルト様の使徒であれば当然ですの！」
「ふふ、そうですね。……それで、今日は新しいレオンハルト様の使徒を紹介してくださると聞きましたが……その方はどちらに？」
「それは勿論わたくしの後ろに――」
　毎回出される招待状。その文面に書かれた今回の会のお題目をシャロンが口にすれば、キャロルが胸を張って背後にいるその人物を紹介する――誰もいないその空間を誰もが見て。
「いなくね？」
「いませんね……」
「……」
　ユキと火炎書士がツッコミを入れる。それを聞いたキャロルが背後を振り返って無言となった。そして、ややあってそれに気づくと――
「いませんわーーーー!!?」
「あ、ちょっとキャロルちゃん！」
　声を上げて走り出す。その速さは火炎書士の言葉も届かない。部屋を出ていってしまった。
　だがその直後に、また別の人物が部屋に入ってくる。
「……なんかキャロルが走り去っていったけど何かあった？」
「あ、ハンティさん。それが……新しい使徒の方がいないから探しにいったみたいで……」
「ああ。それなら1人は連れて来たよ」
「え？」
　ハンティが親指で指し示す先、背後から入ってくるその人物に誰もが目を向けた。
　それと同時に、含み笑いが聞こえてくる。
「くっくっく……とうとうこの私が公の場に姿を現す時が来たか……さあ刮目するがいい……！　この偉大なる天才付与師にして魔法研

究者。美少女の――」
「あ、ガウガウさん」
「ガウガウじゃん。おひさー」
「ガウガウ様、ですね」
「そう。その名はガウガウ・ケスチナ――って、気軽に挨拶するんじゃないっ！　私のせっかくの登場シーンが台無しだろっ！」
白衣を翻して現れたその新たな使徒の姿に、誰もが声を出した。
とはいえ驚きは少ない。レオンハルトの城に出入りする使徒からすれば、その少女は見覚えのありすぎる存在だったからだ。
レオンハルトの影響を強く受けたのか、目が真っ赤になり、なぜか髪の色にところどころ白いメッシュのようなものが入って艶が出た以外はその背丈も顔立ちも声もただのガウガウでしかない。格好も多少は変わっているが白衣はいつもと変わらないし、右目にモノクルを掛けてより研究者らしい格好になった以外はやはりガウガウでしかない。ガウガウがおめかしをしてきたといった印象だ。
とはいえ彼女を見たことがない者もいた。レオンハルトの城に出入りしている訳ではない。さりとて使徒同士ではそれなりに話す仲である全裸の男女が、ガウガウを見てフランクに声を入れる。
「へぇ、レオンハルトの新しい使徒か。いいじゃん。つるぺたでさ」
「ふーん。ま、よろしくねー。私はアトランタ。こっちの馬鹿はジュノー。レキシントン様の使徒よ」
「げっ……ジュノーにアトランタ。あんた達まで来てたんだ」
「そりゃ来るわよ。誘われてたんだから」
「まあ用事もあったしね」
その2人の声に真っ先に反応したのはガウガウではなくハンティだった。露骨に嫌そうな表情になるハンティにアトランタもジュノーも気にした様子もなく涼しい顔でシャロンの淹れた紅茶に舌鼓を打っている。相変わらず全裸のままで。それを見てガウガウは少し引き気味になった。
「おおう……さすがは使徒。魔物界にいて長いし、慣れたものだと思っていたがいきなり来るとびびるな……」

「全く服を着ないのはこの２人くらいだから安心していいよ」
「そりゃ俺の身体は美、そのものだからね。隠す方が失礼だろ？」
「服なんて着なくていいじゃない。こっちの方が涼しいし、あんたも脱いだら？　胸も小さいし、着ても着てなくてもあんま変わらな――」
「なんだって？」
「痛っ！　いたたたっ！　ちょ、やめなさいよっ！　あんたのゴリラ並の力で掴まれたら千切れっ……！」
「あれ……なんか既視感が。なんか仲良くなれそうだな……」
「ガウガウさんもよく怒られてますもんね」
　ハンティをからかったアトランタの耳がハンティに掴まれて痛みに藻掻き苦しむ。その様を見てガウガウは親近感を湧かせた。さもありなんと火炎書士が納得する。
　そしてまた騒がしくなったところで――部屋の扉が開いた。
「お待たせしましたわ！　レオンハルト様の新しい使徒を連れて来ましてよ！」
「あれ？　レオンハルト様の新しい使徒って１人だけじゃ……？」
「ふーん。よく分からないけど２人もいたんだ。それで今度の使徒は――」
　と、キャロルが新しい使徒を連れて部屋に入室してくると再び視線がそちらを向く。
　キャロルの背後。そこから進み出てきたのは、１０本の尾を持つ狐の妖怪――ＪＡＰＡＮの着物に半端に身を包み、胸の半分以上が露わになっている美女だった。
「わーお……」
「火炎ちゃん。驚きすぎて反応が外人みたいになってますよ？」
　火炎書士が、ユキがつい冷静にツッコんでしまう程の新しいリアクションを取るのも無理はなかった。
　その開けた着物の胸元から見える胸の大きさはあまりにも大きく、今にも零れ落ちそうなほどに実っていた。レオンハルトの城に出入りしていれば巨乳は数多くみるが、それでも見たことのない大きさで

ある。
「こちらがレオンハルト様の新しい使徒の1人であるお町さんですわ！　お町さん、こちらは使徒の皆さんですのよ」
「うむ……よろしく頼む」
　キャロルに紹介され、ぺこりと頭を下げるお町は意外と素直だった。――その際にも胸の大事なところが見えてしまうのではないかと思う程だったが、不思議と零れ落ちることはない。ただ長く深い谷間が見えるだけだった。それを見て各々が感想を口にする。
「それにしても……大きいですね……」
「うちのへっぽこご主人様が貧乳に見えてくるくらい？」
「ふーん。こっちは巨乳好きのレオンハルトらしいわね。ねえジュノー。あんたなんか巨乳嫌いだからたまらないんじゃない？　って……ジュノー？」
　だがそこで、1人だけ無言となっている者にアトランタが気づいた。同じレキシントンの使徒として、しかし巨乳嫌いを知っているためからかおうとしたその相手――ジュノーが、白目を剥いている。
「なん……て……こ、と……だ……」
　そうして白目を剥いたジュノーは、泡を吹きながらゆっくりと背中から倒れていった。
「ジュノーーーーーーーー!?」
「あれ？　死んでる？　心臓動いてないんだけど……」
「え、うそ!?　巨乳見ただけで!?」
「ケケケケケケ！　名付けて密室爆乳殺人事件！　死因は……乳です！　ケケケケケ！」
「ミステリーですわー!?」
「言ってる場合じゃないよ!?」
「とりあえず心臓マッサージでもしましょうか」
「シャロン……あんた呆れるくらい冷静だね……」
　シャロンの提案でジュノーの蘇生が始まると、幸いにもすぐに心臓が動き出し、息を吹き返した。
「うっ……」

「目が覚めそうだな」
「ちょっとジュノー！　あんた、巨乳を見たくらいで何死んでるのよ！　同じ使徒として恥ずかしいじゃない！」
「死んだ……？　……そうだ……俺は何か、とてつもなく醜いものを見た気がする……悍ましすぎる何かを……」
「……」
「待った、お町。今攻撃したらホントに死ぬから。雷抑えて」
「仕方ない……とりあえず治療の魔導具でも付けといてやるか……」
　意識を取り戻したジュノーの言葉に、お町が静かに怒りを募らせて雷雲が溜まっていたが、ハンティが慌ててそれを止める。ガウガウも呆れながら治癒効果のある魔導具をジュノーに付けてやった。
　そうしてもう少しだけ意識をはっきりさせると、ジュノーは目の前にいるハンティとガウガウを見た。
「ん……そこにいるのはハンティに……確か、ガウガウだっけ……落ち着くな……その貧乳を見てると落ち着く……なんて貧乳なんだ……貧乳すぎる……」
「――死ね！」
「――誰が貧乳だ！」
「ぐぼっ!?　～～～～～っ!!」
　倒れているジュノーの頭と股間をハンティとガウガウがそれぞれ蹴り飛ばす。
　そうしてしばらく痛みに悶絶したジュノーは……やがてゆっくりと動かなくなった。
「ジュノーーーーーーーー!?」
「また死んだ!?　ハンティの人でなし！」
「あんたも蹴ってたでしょうが！」
「ケケケケケケケ！　名付けて密室貧乳煽り殺人事件！　動機は……貧乳です！　ケケケケケ！」
「サスペンスですわー!?」
「だから言ってる場合じゃないよ!?」
「とりあえず医者を呼びましょうか」

「お主……冷静だの」
「それほどでも」
　再びジュノーを生き返らせようと奔走する使徒達。そんな中、再び扉が開いた。
「……？　（この状況は一体……？）」
　そーっと中を覗くようにしてやってきたのはレオンハルトの新しい3人の使徒。その最後の1人であるミシェーラ。
　ある一件が発覚し、主に怒られていたため少し遅れてやってきたミシェーラは部屋の中が騒がしいことに気づくと、その様子をおそるおそる窺った。そして考える。この、何やらよく分からない状況のことを。
（これは……もしやドッキリ？　ミシェーラを手荒く歓迎するためのドッキリでは？）
　そして理解する。何故か全裸の男が1人死にかけている状況。こんなものは、ドッキリでしかありえないと。
（それならミシェーラが取り得る選択肢は……そのドッキリを出来るだけ面白いものとすること！　普通に引っかかる振りをするだけでは普通すぎて面白くありません！　察するにこれはあのジュノーという人が主軸のちょっとした事件の設定。それならミシェーラはより深みのある設定で登場すれば……）
　と、ミシェーラは思考し、そして実行した。扉を勢いよく、蹴り破るようにして開け放つ。そして台詞を口にした。
「うっ……」
「あ……目を覚ましました」
「はぁ……ほんと、馬鹿じゃないの？　こんなことで何度も死にかけて、レキシントン様が知ったら大笑いされて――」
「見つけた！　ジュノー！　じっちゃんの仇！　死ねーーーーーー！」
「ぐおおおおっ!?」
「ジュノーーーーーーー!?」
「え、だ、誰ですかーー!?」

「ミシェーラ!?　あんた何してんの!?」
「止めないでくださいハンティ様！　そいつはじっちゃんの仇なんです！」
「じっちゃんの仇って……あんたの爺ちゃんまだぴんぴんしてるでしょーが！」
「ケケケケケケ！　名付けて――」
「もういいってユキちゃん！」
「ハプニングですわー!?」
「賑やかじゃの……」
「とりあえず止めましょうか」
――その後、ジュノーは誤解を解いたミシェーラの治癒魔法によって一命を取り留めた。

――そしてその日の夜。
「――と、そんな感じで親睦会は賑やかでしたわ！」
「……そうか」
帰ってきたキャロル達からの報告を耳にした俺は長い沈黙の後に息を吐くと右手で額を揉みほぐしながら思う。――使徒、増やさない方が良かったのか……？　と。
だがすぐに内心で頭を振る。まあ悪いのは概ねジュノーだろう。それと巡り合せが悪かっただけだ。後はミシェーラもだな……。
「……ミシェーラ。深く考え実行するのは良いが、その前に確認を取れ」
「うう……ごめんなさい、レオンハルト様ぁ……」
執務室の床に正座し、首から『私は悪いことをしました』というキャロルが作って掛けていった板をぶら下げて、涙目となって謝るミシェーラに呆れを感じる。
キャロル主催の使徒同士の親睦会のこともそうだが、それよりも問題なのはついさっき判明したミシェーラのとある勘違いのことだ。
――それは少し前のこと。

『――お前達3人を、使徒にすることに決めた』
『え……？』
『……それは……』
『……ほ、本当ですか？』
俺はその判断を3人に伝えた。
使徒を誰にするかという試しも含めた結果として、全員を引き上げてやることにした。ミシェーラの問いに俺は頷く。
『落とす理由がなかったからな。資質と確かな実力があり、覚悟と信頼がある。それなら問題はない』
『あー……でも力とか落ちるんじゃ……？』
『たかが3人使徒を増やしたところでそれほど力は落ちん。１０人２０人と増やすなら考えなければならないだろうがな』
使徒を増やせば支配力は落ちるが、そもそも自由意志を与えてる以上それはどうでもいいことだし、使徒の力が落ちるのも使徒の実力を考えるなら問題はない。元より見どころのある者しか選んでいないのだ。むしろちょうどいいくらいだろう。それに自分自身の力に関してもだ。
『あるいは……もし使徒を増やして力が落ちたなら、その分修行をして強くなればいいだけの話だ』
そう――全く問題がない。
使徒を作ることは俺にとってはメリットしか存在しないのだ。
むしろ大勢の使徒を持ちながらこれだけの力を持つという他の魔人や魔物に対するアピールにもなる。ガイと引き分け、俺の力を疑う一部の魔人への牽制にもなるだろう。行き届く目も増える。デメリットになりえることも自力でメリットに変えてしまえばいい。
『当然お前達にも助けてもらう。俺の力は魔人の中でも飛び抜けているが、それでも個人の力で出来ることには限りがあるからな。使徒になったからには存分に働いてもらうぞ？』
『っ……！　勿論です！』
『……我は、レオンハルトと共に行けるなら何でもしよう……』
『……んー、まあ、適当に？　恩の分くらいは働いてやってもいいよ』

三者三様の答え。だが、気持ちは伝わっている。
『なら血の契約を始めるぞ――』
俺は椅子から立ち上がり、3人に近づいていく。
そうして3人は――俺の使徒になった。
姿が多少変化し、力が上昇する。それを見届けた俺は3人を見た。
『これでお前達3人は俺の使徒となった』
そう告げると、膝を突いて忠誠を誓ってくる3人が顔を上げた。
『ああ……これで我も、髪の一片から血の一滴に至るまでレオンハルトの物……』
『ああ。お前の望み通り、お前は俺の物となった』
一心に愛情を向けてくるお町に応えてやる。
『うへへへへ……これで私も永遠の命を――じゃなかった。はっ。レオンハルト様に忠誠を誓います』
『……ああ。まあ……期待している』
微塵も忠誠を感じない。ただ目的のための契約といった感じでバレバレのおべっかを使ってくるガウガウに頷く。
まあ目的は俺も理解しているし構わない。ガウガウの目的。そしてその力は俺にとっても有用なものだ。問題ない。
『レオンハルト様……感謝します！　ミシェーラはこれより、レオンハルト様の剣となり、立ち塞がる一切の障害を斬り捨ててみせましょう！』
『ああ。期待している』
そして騎士のような忠誠を誓ってくるミシェーラに言葉を掛けてやる。元々忠誠心は高かったが、更にその思いは強まったようだった。どうやら喜びに満ち溢れているようで、口から言葉が次々と溢れ出る。
『ああ……このミシェーラ。今まで剣を振り、己を鍛えてきた甲斐がありました……！　試験でデートのサポートを命じられた時はどうなるかと思いましたが……ミシェーラは上手くこなしてみせましたよ……！　レオンハルト様……！』
『ああ。よくやったな……ん？』

『え？』
その時、俺は聞き捨てならない言葉を聞いて固まる。自分が言った言葉を理解していない様子のミシェーラも同様に。
沈黙が部屋の中に降りた――そこへ、ノックの音が響く。
『失礼します。レオンハルト様、今お時間大丈夫ですか？』
『お、イヴ！　見ろ我が助手よ！　この偉大なるガウガウ様は人間をやめ、永遠の命を得たぞ――っ！』
『はぁ……それはそれは。おめでとうございます。この城にいる限りは永遠の命を得たも同然だと思いますけど……』
『はーっはっはっは！　これで私は無敵だー！　今ならハンティすら恐れるに足らず！』
『はぁ……そうですか。あ、ミシェーラさんにお町さんも使徒になったんですね。おめでとうございます』
『うむ……天に昇るような心地だ』
『あ、イヴちゃん』
部屋を尋ねてきたのはガウガウやハンティの助手を務め、白兎の友人でもあるイブだった。
お町と出会った時も一緒にいた友人でもあり、牧場出身という縁もあってミシェーラとも友人でもある。
そして書類仕事が苦手なガウガウやハンティに代わってそれを行う有能な秘書でもあり、意外にも俺と関わることも多いその少女の登場を誰もが歓迎した。――そこで、俺はイヴに頼み事をする。
『……ちょうどいい。イヴ、ミシェーラの心を読んでくれ』
『え？　あ……はい。もしかして、ミシェーラが何かやらかしましたか？』
『な、何を言うんですかイヴちゃん！　私は何もやらかしてませんよ！　この通り、きちんと試験を通過して使徒になったんです！』
『……まあ、その試験のことでな。ちょっと気になる発言があったんだ』
『はぁ……分かりました。それでは――』
――と、イヴがミシェーラへと近づき、意識を向ければその心の中

は丸裸となる。
　そうして判明した事実は……俺の頭を悩ませるに十分なものだった。
『ミシェーラ……』
『え？　え？　あ、あの、レオンハルト様……み、ミシェーラ何か悪いことを……？』
　――そして俺はその勘違いを知った。
　それからは一旦話を聞いて、整理するためにミシェーラを使徒同士の親睦会とやらに送り出した後、戻ってきたミシェーラに反省を促した。きちんと誤解を解いた上で。
「うう……ごめんなさいレオンハルト様……」
「……」
　そうして今に至る。
　悪気はなかったのだろう。涙目になりながら謝るミシェーラを見下ろし、ため息が漏れる。
　……しかしカミーラへの好意か……どうすればいいんだ？
　そして俺は何度も考えたその勘違いをどう対処するかを悩む。誤解を解けば傷は浅く済みそうではあるが、それをすれば信用も下がるしせっかくカミーラを修行に連れていくのに良い口実になりそうだったのが全部台無しだ。
　……そう考えれば……むしろこのままの方がいいのか？
　騙すことになるという罪悪感さえ飲み込んでしまえば、この状況は酷く都合が良いものだ。どういう訳なのかカミーラの方も満更でもないらしいし、このまま勘違いを続けてもらった方が良い気もしてくる。
　あるいは嘘を真実にしてしまうかだが……カミーラ、か。また何とも言えない相手ではあるな……。
　俺は悩んだ末に、深いため息と共にその憂鬱な気分を飲み込む。そうしてミシェーラに告げた。
「……顔を上げろミシェーラ」
「うっ……でも……」

「いいから上げろ。そして聞け。お前は確かに独断で勝手な行動をした。だが、その行動には誤解を招くような言動をした俺にも責任がある。――よって、今回は不問とする」
「！　そ、それはいけません！　騎士は信賞必罰！　ミシェーラは悪いことをしたのですからきちんと裁かれないと……！」
「なら後で軽い罰を与える。だが、それは使徒や与えられた役割から解くようなことではない。お前にはこれからも俺の使徒として働いてもらう。お前の才能、そして忠義は認めているからな。反省して次に活かしてくれるならそれでいい」
「……！　れ、レオンハルト様……！」
　こちらを見上げて、感動したように打ち震えるミシェーラ。……どうにも先程までの印象と違い、どこかぽんこつのような、出来ない子のような印象を受けてしまうがそれも構わないだろう。才能は確かだし、バカな子ほど可愛いとも言う。思えば最初の頃のキャロルにも苦労したな……。
「……わかりました！　このミシェーラ！　今回の一件を深く反省して受け止め、次に活かします！」
「ああ。そうしてくれ。期待している」
「はいっ！」
　そうして元気のいい返事を聞いて頷く。まるで犬のような奴だ。許されたと分かった瞬間、満開の花のような笑顔を浮かべていた。
　ともあれこれでミシェーラの件は解決でいいだろう。カミーラのことは自分でどうにかするか……後、ミシェーラが今後勘違いであったことを口にする可能性を考えて後でそれとなく嘘じゃないことを吹き込んでおこう。この場で言うのは問題があるので言わないが。ミシェーラは嘘がつけない性格のようなのでそれを理解した上での運用が必要そうだ。
　そして、他の使徒については――
「それにしても……人間の使徒は見た目がほぼ変わらないと思っていたが私はまあまあ変わったな。別に私にこういう趣向やイメージは持ち合わせていないし、これはレオンハルトの影響か？　――なあレ

オンハルト。お前、実は真の姿が白髪だったりしないか？　もしくは白髪赤目フェチか？　服装もちょっとだけ可愛くなってるし、変態なのか？」
「……」
　遠慮のない言葉をぶつけてくるガウガウに、俺は何とも言えなくなる。肯定も否定もしづらい。
　俺はそれを聞かなかったことにする――が、すると今度は横からもう1人が抱きついてきた。
「……お町。どうかしたか？」
「どうということもない……ただこうしたくなっただけだ……」
「……」
　今まで通りの9本の尾に、1本の白い尾が増えて十尾となったお町がぎゅうぎゅうと抱きついてくる。……そして、地味に胸がちょっと大きくなっていて少し困る。そういう気分は完全にコントロール出来るため発情する事こそないが、気持ちいいことは否定出来ない。
「はーはっはっはっ！　おいメイド達！　レオンハルト様の使徒であるガウガウ様の命令だ！　料理と酒をたらふく持って来い！　これからは誰の言うことも聞かずに好きなものを食べるぞ！　サボりも文句は言わせないからな！　それと、今後私を呼ぶ時は――偉大なるガウガウ様、と呼ぶよーに！　なーっはっはっは！」
「……」
　そして視界の中でソファーに腰掛け、いつの間にか呼び出したメイドに大仰に振る舞って調子に乗りまくっているガウガウを見てまたしても何とも言えない気分になる。こいつは……なんというか自由すぎるな。そして呆れるほどに小物だ。……いや、逆に大物だな。俺の目の前でこの振る舞いが出来る辺り、呆れを通りこして感心してしまう。
　だがこのまま調子に乗ってもらっても困るので、今すぐハンティ辺りを呼んでお灸をすえてもらうか……などと考えていると先に動いた者がいた。
「はいはい。言うこと聞かなくていいですからね。先生も調子に乗ら

ないでください」
「なっ……!?　おい何をするんだ助手！　ガウガウ様の命令だぞ！　私イズ使徒！　魔物界で上下の関係は絶対だろーっ！　お前も私の言うことを聞くんだ！」
「いつもハンティ先生に逆らってた人の言うこととは思えませんね……そんなこと言うなら、ハンティ先生に隠してるガウガウ先生の秘密、暴露しちゃいますよ？」
「うぐっ!?　そ、それは……だ、駄目だ！　それが知れたらハンティはきっと火を吹くように怒るぞ……！　竜のように……いや、ゴリラのように……！」
「なら少しは抑えてください。何も喜ぶなとは言いませんから」
「うっ……くっ、し、仕方ない……この場では抑えてやろう……」
「はい。ありがとうございます」
　ガウガウの助手の立場でありながら、ガウガウを見事諌めてしまうイヴ。慣れているのだろう。淡々とガウガウを制すると――今度はこちらにも向き直った。
「それとお町さんも。そうやって所構わず抱きついていたらレオンハルト様も仕事になりません。むしろ困らせてしまいますよ？」
「む、むぅ……しかし……」
「これから幾らでも時間はあるんですし、色々と働いてくれた方がレオンハルト様も喜ぶと思いますよ。そうですよね？　レオンハルト様？」
「ん……ああ、そうだな」
「むう……」
「ほらほら。お町さん、今度料理でも覚えたいって言ってたじゃないですか。後で付き合ってあげますから行きましょう」
「……分かった。なら後で……付き合ってもらうぞ？」
「はい。約束です」
　そして今度は俺に抱きついて離れないお町を、俺から引き剥がすことに成功する。お町とも友人ということもあってこちらも慣れているようだった。――そして更に、お町を引き剥がした後はそれをじっ

と見ていたミシェーラをじっと見返して……。
「……ミシェーラさんも、変なことしちゃ駄目ですよ？　後、その考えは間違いですのでぜっっったいに実行しないでください」
「な……また心を読みました!?」
「読みたくなくても読めちゃうんですよ……ミシェーラさん、思念がちょっと強すぎて漏れ聞こえてくるんです」
「……ならそれは仕方ないとして、ミシェーラの考えが間違ってるとイヴちゃんは言うんですか？」
「はい。思いっきり間違ってます」
「な、何を根拠に」
「後で教えますから今は何もしないでください。そうしないと白兎さんに言いつけますよ？　今後ミシェーラさんからの挑戦は一切受け付けないようにって」
「――それは駄目です！　ミシェーラは絶対に白兎さんに勝つ予定ですから！」
「なら今は言うこと聞いてください。聞いてくれたら今度勝負の場をセッティングしてあげますから」
「……それなら仕方ないですね。仕方ないので言うことを聞いてあげます」
「はい。そうしてください。……あ、それとレオンハルト様。こちら今期の研究で使った費用の報告書。それと有用だと判断した研究の報告書です」
「……ああ、分かった。後で目を通しておこう」
「お願いします。……さて、次は白兎さんのところに行って……」
ミシェーラにも言うことを聞かせ、ついでに持ってきたのだろう書類をこちらに提出し、次の予定を小声で呟くイヴ。
それを見て、思う。もしかして、こいつが1番有能なんじゃないかと。
そして思った時にはつい言葉にしていた。
「……イヴ」
「……はい？　何でしょうかレオンハルト様」

「――お前、俺の使徒にならないか？」
「……え」
イヴが言葉に詰まる中、俺は思った――イヴが1番有能で、俺が求めている人材なのではないかと……。
その後しばらくイヴを使徒にしようと説得を重ねたが、結局色々な理由で断られたので諦めることにした。
だが今後使徒をまた作りたくなった時はイヴを第一候補にしておこうと心に決める。あるいは、他の誰かの使徒に推薦するのも悪くないかもしれない――そんなことを思った一日だった。
――この日、レオンハルトの使徒が3人増え7人となった。

性技指導2

――魔人レオンハルトの居城である紅魔城の夜。
その寝室では、今日も戦いが繰り広げられていた。
「やっ♡　あっ、あっ……♡　レオンハルト、様ぁ……♡」
巨大かつ豪奢なベッドの上。魔人レオンハルトの下で、女が喘いでいた。
桃色の髪に華奢で可愛らしい身体のその美少女の名はミシェーラ・姫原。
先日、己の使徒になったばかりのミシェーラをレオンハルトは見下ろしていた。己の魔剣を突き立てて振るう。自分の身体の下で、腕の中で、少女が甘く切ない声を漏らしながら可愛らしい姿を見せているところに嗜虐心と官能を刺激され、確かに興奮しながらも同時にそれを冷静に見ていた。
……そろそろか。
レオンハルトはミシェーラの身体をその手で撫でながらそう思う。白くてすべすべの肌。小ぶりな胸と細い腰回り。小ぶりだがしっかりとした柔らかさを持つ臀部を撫で、太腿もなぞっていく。
そうして触れる度に、身体をビクッと跳ねさせているミシェーラと己の身体の差を比べると、ミシェーラはやはり小さい。だがその小柄な身体で、懸命に己の魔剣を受け止めている。そのいじらしさを可愛く感じる。
結果、魔剣は主の興奮と鞘から齎される快感によってよりやる気を見せる。今なら動かしても痛いどころか、ただ気持ちいいだけだろう。そう判断したところで、レオンハルトは激しく魔剣を突き動かした。
「はっ、あああ♡　ああああぁぁ……♡　レオンハルト、さま、レオンハルトさま……♡」
瞬間、何度も達したかのようにミシェーラが震える。
「気持ちいいか？　ミシェーラ」
「はぁ……ああ、は、はいぃ……♡　こんな、ミシェーラ、初めてなの

にぃ……♡　あああぁ……♡」
目がとろんと蕩け、背中を何度も弓なりに逸らしているミシェーラは、生まれてきて初めて感じる快感に夢中になる。
だがそれはミシェーラが特別素質があるからではない。媚薬を使った訳でもなければ、調教をした結果という訳でもない。
「大丈夫だ」
「あっ♡　ああ……♡」
安心させるように言葉を送る。それと共に、レオンハルトはミシェーラの身体を正面から抱きしめた。
己の鍛え上げた男の身体と、ミシェーラの華奢な女の子らしい身体が密着する。腕の中に、身体の下にすっぽりと覆い隠すように抱きしめて互いの肌の感触と体温を感じさせると、ミシェーラが更に嬉しそうに身震いした。
「れ、レオンハルトさまぁ……♡」
ミシェーラの手が背中に回される。
そして自ら快感を求めて腰を揺らしていた。懸命に、すり寄るようにして。
「んんっ♡」
顔を寄せ、ミシェーラの唇に己の唇を合わせる。
始めは軽くソフトに。徐々に啄むようにして。求めてきた小さな舌と口内の感触を己の舌で蹂躙してやれば、ミシェーラが鞘をきゅうきゅうと締めてくる。
「いくぞ」
「あっ――あっ♡　あっ♡　あっ♡　ああっ♡　あああああ〟あ……♡」
それを合図にまた魔剣を振るいまくる。
もはや何をしても快感に繋がるほどに蕩けさせたミシェーラの身体と心に、的確に求めている動きと言葉をくれてやる。
「好きだぞ。ミシェーラ」
「っ、はっ♡　はいぃ……♡　み、ミシェーラも……大好きです……♡
っ、うあぁ……♡」

耳元で好意を囁き、敢えて強引に魔剣を押し込めばミシェーラは更に悦んだ。
その心理。そして身体の反応をレオンハルトは手に取るように理解している。
ミシェーラは今、幸せの絶頂にいる。
それは好意を寄せる相手と初めて夜を共にしているから――というだけではない。
勿論それもあるが、これだけ蕩けているのはレオンハルトが己の持つテクニックを存分に発揮した結果だ。
1年で女と身体を重ねない日は殆ど存在せず、1日に何度も行うことも珍しくない。そんな日々を千年以上行ってきたレオンハルトは百戦錬磨。膨大な経験を持つ。元から上手であった行為も、より洗練されていた。
故に初めての相手であっても――いや、初めての相手だからこそ手抜きはしない。
相手がそういう気分になれる日に。そういう気分ではない日を避け、夜は2人きりで誘い、会話をするところから始めムードを作った。その上で念入りに前戯や愛撫を行った後に始める。
そこからも幾つものテクニックを織り交ぜ、相手の弱点を責め続け――そうすることで初めての対戦であっても相手をここまで幸せにすることが出来るのだ。
無論、それはまだ本気ではない。全力ではない。全力でやってしまえば相手が壊れてしまう。魔人が全力でその衝動をぶつけるには相手側に慣れが必要なのだ。そこを慮っており、それも含めて本気で相手を幸せにしている。
だがそれでも――そこらの人間が与えられる快感の量は軽く超えている。
「あぁ……ぁ……っ……♡　れ、おん……っ……ぁ……はる、と……しゃまぁ……♡」
よってカーテンの隙間から光が差し込む頃には……瞳に焦点が合っていない、性感に蕩けきって気を失わせるミシェーラの姿があっ

た。
　眠っていても快感の残り香で時折身体をびくっと跳ねさせる。それほどに愛され、意識のない状態でさえ幸せの最中にいるミシェーラを横で見下ろし、時折その髪や頭を撫でてやりながらレオンハルトは息を入れた。
（……今日も良かったな）
　素直にそう思う。自分に好意を寄せる相手との行為はレオンハルトにとって確かに満たされるものだ。
　もっとも、性欲という意味では完全に満足しているかといえば嘘になるが、そこは加減する必要があるから仕方ない。魔人であり３桁を優に超えるハーレムの主であるレオンハルトの魔剣は、ほんの数回程度じゃ萎えることはないのだ。
　だが問題はない。衝動はコントロール出来るし、いつでも解消出来る。仕事を終えた後にでもまた楽しめばいい。それを思えば、仕事にも精が出るが――
「憂鬱だな……」
　――そこでふと、そんな呟きが口から漏れてしまう。
　あまりない事だった。魔人となって２０００年以上。ずっとその職務を遂行してきたが、その役目をやりたくない。行きたくないと思うのは本当に珍しい。
　叶うならばこのまま城に籠もってゆっくりと読書でもして過ごしたい。あるいは女と過ごすか、子供と過ごすか。ただ惰眠を貪るでもいい――そんな怠惰な人間のようなことを考えてしまう。
　だがそうはいかないからままならないものだ。魔人という何にも憚ることのない大陸の絶対強者であっても……魔王の命令だけには逆らえない。
「――ご主人様」
「……ああ」
　だから俺はベッドから身を起こした。仕事の準備を行うために、ノックして入室してきたメイド長さんの呼び掛けに答える。
「……まさかもう時間か？」

「いえ。ですが予定より早くに到着しそうなのでご報告に参りました」
「そうか」
ため息が漏れそうになるのを堪えて立ち上がる。
ミシェーラには悪いが、起きるまで待ってはやれないらしい。俺は寝室の隣に備わってる浴室へと向かいながらこれから来る指導の相手――魔人ガイのことを思った。

「お前は下手だな……」
ガイが魔人になってしばらく。
ある日、魔王ジルから静かに言われたのはそんな言葉だった。
寝所を共にし、「好きにやってみろ」とやり方を任されて望み通り好きにやった後、一息ついたところでのその言葉に、ガイは少なからずショックを受けた。
ガイはセックスが好きだ。女が好きだ。魔王相手というのは思うところはあるが、それは変わらない。どうせしなければならないなら開き直って快感に流されてしまったほうがいい。いつまでもぐずぐずとしているもう1人の人格とは違うと、魔人としての生を受け入れてジルというとんでもない極上の美女とのセックスにも意気揚々と臨んでいた。
――が、そこで突きつけられた「下手くそ」という言葉はガイの男としての尊厳を傷つけるのに十分なものだった。
これがそこらの女相手であれば分からせてやるところだが、相手は魔王。そんなことは出来ないと本能から従ってしまう。怒りを覚えてもそれを魔王相手に発散は出来ない。嫌でも頷かざるを得ない。
「レオンハルトにでも習ってみるんだな……」
そして更には別の男の名前を出され、その男に上手なやり方を学ぶようにまで言われてしまう始末だ。しかも相手はあの魔人レオンハルト。魔人になる前に戦って追い詰められた化け物で、女魔人を襲うのも邪魔してきたいけ好かない奴。そんな相手に、セックスを習えと

ジルは言う。
はっきり言って嫌過ぎる命令だが、従う他ない。魔王からの命令は絶対だ。それは理解していた。命令されて数日後にはレオンハルトにも通達され、その数日後にはもう予定が組まれていてこの日に街まで来いと命令までされてしまった。
正直それも無視したかったが、やはりジルの命令には逆らえないと結局行く羽目になる――が、何も自分である必要はないと、ガイはもう1人のガイに主導権を渡した。逆らえない命令への、せめてもの抵抗として。
（だからお前がやれ。俺は嫌だ）
（勝手なことを……）
そして――もう1人のガイは主導権を渡されて荒野を歩いていた。
ジルとの行為の際は毎回人格を代えていた。エロいのが好きな方の人格がやればいいと違いの利害も一致していたのもあって。
とはいえ性技の指導などこちらのガイも御免被るものだが――
「……どうでもよい、か」
だが、そう。今のガイにはどうでもよかった。
魔人になってしまった以上、やるべきことを見失った今のガイにはもう何もかもがどうでもいい。だからこそ、何もかもを受け身で考えていた。
もう1人のガイがやれと言うなら、魔王がそうしろと言うならばやる他ない。逆らったところで無意味だからと自分を納得させていた。
『……なあガイ』
「……なんだ？」
『……いや、やっぱいい』
「……そうか」
そして己の帯剣として未だ居続ける魔剣カオスもまた、大人しくしている。
今のように何かを口にしようとして――やめる。何かを言いかけて口にしない。そんなことを時折行うが、未だその先を聞けたことはない。

おそらくカオスもまた己のような諦観を抱いているのだろうとガイは推測していた。それを口にしたところでどうにもならないだろうと分かっている。だからこそ、無意味だとしてその先を口にはしない。

結果としてガイもカオスも、魔人としての生を漫然と送っていた。この生がこの先、永久に繰り返されるのだと思うと気が滅入るが、それもまた慣れていくのだろう。

あるいは楽しめるようにもなるのかもしれない。そんなことを思い、それを嫌だと思う自分とそれでもいいと思う自分もいてガイは少しの間自分の思考に悩む。

だが数秒後にはそれも考えても仕方がないと思考を放棄した。そしてやるべきことを機械的にこなすため身体を動かす。魔人になってからのこちらのガイの動きは概ねこれの繰り返しだった。

『おい、ガイ。見えてきたぞ』

「……あれか」

そして足を動かして歩き続けることしばらく――カオスの声に視線を前に向ける。

それまで下を向いていたことには気づかなかったが、それもどうでもよいことだ。ガイはカオスの声を受けて見えてきた巨大な街に目を細くした。

「レオンハルトの住まう城のある……街か」

『ああ。相変わらずデカい街だな』

「……来たことがあるのか？」

『ん……まあ、な。あんまり思い出したくないが』

カオスの何気ない言葉に質問するが、その微妙な返事にガイはそれ以上を聞くことはしない。もしかしたらその時もレオンハルトに敗北したのかもしれないなとそんなことを思いながらも見えてきた街に近づいていくと――

「――お待ちしておりました。魔人ガイ様」

「！」

街から少し離れた場所で待ち構えていたその赤い軍服姿の顎髭を

蓄えたダンディな中年男性――右目に眼帯を付けた魔族と思われる気配の人物の出迎えに、ガイは立ち止まった。こちらに向かって腰を折る相手にガイは問いかける。
「……お前は？」
「はっ。魔人レオンハルト様の使徒、リーと申します。本日はガイ様がお越しになると聞いて僭越ながら出迎えと案内の命を受けた次第で」
「……使徒、か」
魔人の使徒。知識としては知っているその存在の出迎えに、ガイは何となくその言葉を呟く。
魔人が他の生物と血の契約を行うことで作ることの出来る使徒という存在もまた、人間からすれば脅威であり害悪な存在だ。魔人の忠実なる下僕であり、魔人には劣るものの人間を優に超える強さを持つ使徒にもまた人間は苦しめられている。見た目の上では人間に近いのもたちが悪いかもしれない。そんなことを思いながらも、実直な様子のリーという使徒の案内にガイは普通に応じることにする。
「……ならすぐに案内してくれ」
「はい。勿論です」
ついて来てくださいと言うリーの後ろに言われた通りについて行く。
そうして街の中に入ったのだが……そこで見た光景に、ガイは純粋に驚いた。
「……！　これが……魔物の街なのか……？」
行き交う魔物の多さ。舗装された歩きやすい道。建ち並ぶお店の数々。そこから漂ってくる食欲を唆る香り。整った景観の良さ。
それはあらゆる部分で、人間の住む街とは隔絶した場所だった。こんなのが、野蛮で残酷な魔物の街なのかとガイは衝撃を受ける。
だがその勘違いはすぐに訂正された。
「いえ。魔物の街はここ以外にも幾つか存在しますが、この街程発展した街は他に存在しません。ここだけのものです」
「……そう、なのか」

「はい。この街はレオンハルト様の軍に所属する将兵のみが住むことの許された街。数十万の魔物がこの街で生活を営んでいます」
前を行くリーからの説明にガイは他の街もこうでないことにホッとし、同時に唯一とはいえ魔物がこれほどの文明を築き、人間より遥かに良い生活を送っていることに何とも言い難い気分に襲われた。
人間にも隠れ里というものがあるが、この街に比べれば隠れ里など精々村といったところだ。あるいは巣穴と揶揄されても否定はしきれない。それほどに差を感じた。
そして、その街の支配者があの魔人レオンハルトであり彼が住まう城もまたこの街の中心に存在する。ガイはそれを目にした。
「……あれがレオンハルトの城か」
「はい。紅魔城と言います」
「……あそこに向かうのか？」
「いえ。レオンハルト様は別の場所でお待ちです」
そして、てっきり城へと向かうと思っていたガイの予想は外れる。どうやら別の場所に向かうらしい。
（まさかそういうお店でもあるのか？）
心の中でもう1人のガイがそう口にするが、表のガイもまた同じ気持ちだった。指導をすると聞いてどういう風にするのかと思ったが、もしかしたら魔物でも抱かされるのかもしれないとガイは覚悟する。女の子モンスター……見目が良いものであればいいが、と男として普通の思いを懐きながらリーの後に続いた。
「……おい。あれってリー様と……もしかして……」
「バカ、見るなよ……プライベートなんだろ……」
「……」
道行く魔物兵からの視線に居心地が悪くなりながらもしばらく歩いて行く。すると――また違った雰囲気の通りに辿り着いた。
「……ここは……」
「娼館街です。主に女の子モンスターが営む娼館。人間を雇っている高級娼館などが軒を並べています」
「……やはり、そういうことか……」

女の子のシルエットが彩られた看板や客引きと思われる女の子モンスターや魔物兵がいるその通りを見渡し、ガイは己の予想が当たったことに軽く息を吐く。やはり気分が乗らない。人間とするのも女の子モンスターとするのもどっちも嫌だった。
「ではこの中へどうぞ。レオンハルト様がＶＩＰルームにてお待ちです」
「……ああ」
しかしガイは付いていくしかない。レオンハルトが待っているという最高級のお店――その一際大きな建物に足を踏み入れ、その中のＶＩＰルームとやらにガイは入室する。
「……来たか。少し早かったな」
「……ああ」
そして中に入れば――そこには目的の相手。魔人レオンハルトがそこにいた。
高級そうな赤いソファーに腰掛け、こちらに視線を送ったレオンハルトは、ガイに座るように視線だけで促す。心の中でもう1人のガイが文句を言っていたが、それを無視してガイは従った。その正面に座ったところで、レオンハルトは口を開く。彼もまた、息を入れて。
「……久し振りだな。どうだ？　魔人としての生活には慣れたか？」
「……さあ、な……」
「……そうか。どうやらまだ慣れてはいないようだな。が、それも仕方ない」
軽いやり取り。前置きでそんなことを問いかけてくるレオンハルトに曖昧に返せばその鋭い視線が意味深にこちらを射抜いてくる。何か思うところはあるのだろうが、それを慮ってやる必要はないとガイは無愛想を貫いた。必要以上に仲良くする必要はないと、あえてこちらから話を進める。
「……ここに来たのは、魔王の、ジル様の命令だからだ。その役目をこなしに来た」
「ああ、そうだな。甚だ遺憾ではあるものの、魔王様の命令は絶対。否応はなく、その命令は遂行するしかない。たとえ、目の前の男のセッ

クスを上達させろという命令であってもな」
レオンハルトがそう言って鼻を鳴らす。
当然と言えば当然だが、レオンハルトもまたこの命令には不満を持っているようだった。ガイもその点に関しては気持ちが分かるし同意する。なんでこんなことをしなければならないのか――思いとしてはそれに尽きる。
「……遂行出来るのか？」
「それはお前次第だな。幾ら俺の教えが的確でも生徒の覚えが悪ければどうしようもないかもしれない」
「……教える側の能力が劣っている、という可能性もあるとは思うが……」
「それはない。俺は以前にも同じ命令を言い渡されてそれを遂行している」
「……そうなのか」
それはまた何とも言えない情報を聞かされてしまった、とガイはげんなりする。もしかしたら魔王城で一言だけ挨拶してきたあの金髪の、アイゼルとかいう魔人のことかもしれない。互いに名乗って挨拶をし、こちらが魔王に呼び出されるとさっさと退散したら「……ジル様に気に入られているようで」と去り際にそんなことを言われた。羨ましい、というよりは若干哀れんでいるのを感じたので、もしかしたら同じことをしたことがあるのかもしれない。
「……ならさっさと始めてくれ。私は……どうすればいいんだ？」
「ああ。とりあえず女を呼んである。ここの娼婦だ」
「娼婦……それは……女の子モンスターか？」
「いや、人間だ。ここの娼婦は全員が人間。それも性技に長けたエキスパートが揃っているのが売りでな。魔物将軍や俺の配下である人間の下級使徒など一定の地位を持つ者しか入ることは出来ない。それだけに、女も極上の者が揃っている」
「……そうなのか」
「ああ。感謝しろ。お前のために今日は貸し切りにしてやったんだ」
と、言われても困る。女の子モンスターでなくて良かったという思

いと、人間を抱くのかという思いの２つがあってやはり微妙な気分だった。
　しかもそれを目の前の男に見られながら行うと思うと憂鬱でしょうがない。今すぐ帰りたくなるし、死にたくなる。
『……けっ。相変わらず人間を働かせておるのか』
「待遇は良くしてるつもりだ。特に優秀な人間にはな。……さて、そろそろ女が来る筈だが……少し遅いな。リー、確認して来い」
「はっ」
　カオスの毒づく言葉にもレオンハルトは淀みなく返す。
　そんな中で、娼婦の女性が来ないことが気になり、レオンハルトは使徒に確認に行かせる。何をするにしても女がいないことには始まらない。
　それからしばらく待ち続ける。……何となく気まずい。性行為の前の待合というのも相まって居心地が悪かった。
　だが始まってもそれは変わらないだろう。ならば今のうちに覚悟を決めておこうとそう思っていると――部屋の扉が突然開け放たれ、１人の少女が飛び込んできた。
「――おっまたせー！　性魔館のＮｏ．１嬢のアプリちゃんでーすっ！　よろしくねー！」
「……」
「……」
　――と……そうして部屋に入ってきたのは、天真爛漫で、どこか娼館には似つかわしくない筈の華奢な美少女だった。
（ほぉ……ちょっと小さいが中々の可愛い子ちゃんだな。これなら代わってやっても……ぐふふ）
　内心のガイの声に苛つきながらも半ば同意する。その少女の容姿は、確かに少し幼く見えた。身長は１４０センチ台で胸も小さい。白みがかった金髪のナチュラルなショートカットが可愛らしく、ハート型の髪飾りも少し幼く見える。服装は不思議なデザインのパーカーにニーソックス。パーカーの上の部分から少し胸元がチラ見えしている。もしかしたらパーカーの下には何も着ていないのかもしれな

い。
　総じて幼く見えるが、それでも不思議とこの場に似合っていると思ってしまうのは彼女の醸し出す不思議な色気のせいだった。体つきもあどけない顔立ちも振る舞いもこの性的な空間には似つかわしくない筈なのに、どこか慣れているようにも感じられる。Ｎｏ．１だと言っていたが、やはりテクニックは凄まじいのかもしれない。あるいは人間ではないのかとも思う。彼女の醸し出す妖しい色気は魔の者に近いものを感じられた。
　そしてその少女はこちらが無言でいると首を傾げる。頭に疑問符を浮かべるように。
「……？　レオンハルト様ー？　どうしたのー？」
「……」
「……？　おい、レオンハルト……」
　そして声を掛けたそのアプリという少女を見て、なぜかレオンハルトが無言となった。それも長いこと。その振る舞いに驚いたものの、すぐに気を取り直したこちらと違って、レオンハルトはアプリを見て真顔になっていた。まるで突然の不意打ちに思考がフリーズし、それを何とか処理でもするかのように。数秒間、無言となったレオンハルトは、それからようやく言葉を発した。落ち着くように努めた声色で。
「……ああ……なんで、お前がここに……？」
「んーっと、今日は女の子とエッチしたかったから遊びに来ててねー。それでお店の女の子全員気絶しちゃったから責任取って代わりにやって来ました！」
「……リー。説明しろ」
「は、はい。それがその通りでして……確認のため待機室へ向かったところ、全員が失神しておりました……そこにアプリさ――アプリ嬢がおりまして、事情を説明したところ自分が代わりにすると……」
「接待してるっていうからそれなら責任を取ろうと思ってきたアプリちゃんでーす！　よっろしくー！」
　難しい顔をするレオンハルトとは対照的に、アプリという少女は元

気いっぱいに笑顔を振りまいてくる。……よく分からないが、どうやら知り合いのようだ。何か問題があるのだろうかと思い、ガイは尋ねる。
「……何か問題があるのか？」
「んー？　ＮＧ無しだよ？　即尺ぶっかけごっくんも全部ありだし、道具も使用オッケー！　コスプレもシチュエーションプレイも対応してるしー。お尻も大丈夫だしー。――あ、でも過度に暴力的なのはＮＧかな。軽い首絞めくらいなら別にいいよ！」
「そ、そうか……」
　どうやら相当慣れているらしい。少し引き気味になりながらも、喉を鳴らしてしまう。こんなあどけない元気いっぱいの少女が、そういった行為の数々に慣れているとは……興味が惹かれないといえば嘘になる。
　それにここまで経験豊富な相手であれば確かに上手になるかもしれないと納得もするが……どうやらレオンハルトの方は納得していないようだった。
「……いや、待て。それは……認められないな」
「えー。でも接待なんでしょ？　だったら私にお任せだよっ！　５０分もあれば天国にご招待！」
「接待じゃない。教導だ」
「性教育もアプリにお任せ！　初めてで自信が持てない子もー、彼女との身体の相性に悩んでる子もー、性癖に悩んでる子もー、これから男優を目指す子も、全部教えちゃうよ！」
「……とにかく駄目だ」
「えー！　やだやだ！　エッチしたーい！　エッチさせてよー！」
　レオンハルトの拒否に元気いっぱいに。そして途中からは子供のように駄々をこねる少女に、レオンハルトは頭を抱えていた。言っている内容が全然子供らしくないが……。
「……そういうことは好きな相手とだな……」
「一目惚れだからいいよねっ！」
「……彼氏がいるんじゃなかったのか？」

「彼氏じゃなくてセフレだよ。それに彼氏だとしても1人に絞る必要ないもーん。好きな人がいっぱいいるならハーレムもありだよね！」
「……だとしてもこいつは駄目だ」
「えーなんでー!?」
「こいつ自身が乗り気じゃないからだ。同意がない行為は許すことは出来ない。――なあ、ガイ。そうだよな？」
と、そう言ってアプリが練習相手になるのを諦めさせようとするレオンハルトは、最終的にこちらに圧をかけることで同意のない行為は出来ないと反論を封じようとしてきた。
『……おい、ガイ。もしかしてあの子……』
「……ああ。確証はないが……」
そしてそのやり取りを見て、思い当たるものがあったのだろう。カオスがひそひそと囁いてくるのに頷く。もしかしたらそういうことなのかもしれない。思えば、妹や弟がいるとも聞いているし、似てないこともない。
もしそういうことであれば、ガイもさすがに抵抗を感じる。だからレオンハルトに乗って断ろうかと、そう思ったところで――アプリは近寄ってきた。
「え～？　そんなことないよね？」
「！」
無防備にこちらの隣に腰掛け、見上げてくるアプリに何故か緊張する。その小さくて白い手が、こちらの太腿を撫でた。
「ガイだっけ？　ガイもわたしとエッチしたいよねー……？」
「っ……！」
そして雰囲気が変わる。アプリの目が妖しく細められ、先程の元気さを全面に押し出した声ではなく、静かで少し低い声。それでもまだ可愛らしさも残る声が耳に届き、脳を揺さぶってきた。背筋がぞくっとする。隣に座られ、太腿をくっつけてきた。太腿を軽く撫でられる。それだけで身体が一気に熱くなり、血の巡りが良くなる。
そしてその血液はガイの身体の一部分に集まった。自身の意志、理性を軽く突破し、否応なく準備をさせられる。

「ほら……もうおっきくなってるー♡　しかも結構大きいねー♡
えっろーい♡」
「く……何を……！」
　耳元に口を近づけてきて、小さい声で囁かれるとそれだけで身体に快感が走った。つい表情を歪ませる。
　そんなこちらの反応を見て、アプリはくすりと笑った。そうして更に耳元に、更に口を近づけてきて――触れるギリギリの部分まで。脳に直接声を送るようにして、アプリは囁く。
「ね？　エッチしたいでしょ？　気持ちいいよー……♡　そのでっかいのでわたしのナカに挿れて掻き回したらすっごく気持ちいいよ……♡　やわやわでどこまでも入るのにきつきつのぷに穴がー……きゅうきゅうに締め付けてきてー……♡　男の子はみーんな、挿れたらすぐに出しちゃうんだー……♡　でも気持ち良すぎてすぐ復活して、そのまま腰振っちゃうの……♡　」
「ぐ……っ……！」
「想像しちゃった？　でもその想像、やろうと思ったらすぐに現実に出来ちゃうんだよー♡　だから……ね？　しよ？」
　可愛らしい声と共に息遣いが耳元を――いや、もはや脳をくすぐってくる。
　性衝動が身体の内側でグツグツと煮えたぎっているのが自分でも分かる。これまで生きてきてこれほど発情したことはない程に。
　そしてこの衝動を、頷くだけで発散出来るという。幸せが約束された行為が、そこにある。
　それを思い、ガイの鋼の理性ですら溶け落ちそうになっていた。それどころか、もう1人のガイが表に出て行こうと暴れ狂っている。
「ぐがが、もう辛抱たまらん！　ヤらせろー！」と。そんな声で煩い。ある意味その声があるからギリギリのところで踏みとどまっているとも言えるが。そして、そうして我慢している内に。
「やめろ。ガイを発情させるな」
　レオンハルトがいつの間にか立ち上がり、アプリの脇の下を後ろから持ち上げてガイから引き離していた。するとアプリが先程までの

色っぽい表情から年相応の表情へと変化させた。
「あーん。もうちょっとだったのにー」
「だから止めたんだ。とにかく、ガイは諦めろ」
「えー、絶対あのデカチン気持ちいいのにー……見えないところでするならいい？」
「駄目」
「ぶー……」
　そのままレオンハルトがソファに腰掛け、アプリもそのままレオンハルトの膝に座らされる――が、アプリは頬を膨らませて不満そうだった。
　ガイとしては助かったような惜しかったような……アプリが離れたことでようやく正気を取り戻したかのような心地だった。
「……何なんだ、その子は」
「……白兎と会っているんだったな。なら話すが、娘だ」
「はーい。アプリでーす！　よろしくねー、ガイ！」
「……やはりそうか」
「他言はするな。話す機会もなかったから言うのが遅くなったが、今日はそれを注意するつもりでもあった」
「……ああ、分かっている。話すつもりはない」
　――それに話す相手もいないからな。
　ガイは元気よくこちらに向けて挨拶をするアプリを見て、微妙な気持ちになる。そのアプリがどうというより……白兎のことを思い出したからだ。
　だがそれを聞くことは出来ない。会いたいとも思わないからだ。どんな顔をして会えばいいかも分からない。だからこそ、次にレオンハルトが話すまでガイは無言であり続けた。
「……ならいい。とにかく、アプリのせいで少しアクシデントは起きたが指導は行う。代わりの相手を用意するから少し待っててくれ」
「……ああ、分かった」
「あ、それじゃあ待ってる間フェラでもしてあげよっか？」
「駄目に決まってるだろ。なぜそれがいけると思った」

「挿入なしならいいかと思って！　じゃあ私が座学してあげるよ！
女の子の身体とセックス講座！　それならいいよね？！」
「……実技無しならな」
「大丈夫だってー。ちょっと互いに裸になるくらいはするかもだけどさー」
「……リー。アプリが変なことをしないように見張ってろ。変なことをしたらすぐに連れ戻せ。いいな？」
「はっ……了解しました」
「ぶー……しょうがないにゃあ……それじゃ真面目に座学だけねー」
『この子、エッチ好きすぎでしょ……』
「そういう風に生まれたからね！」
　ぐっと意味の分からないことを言って親指を立てるアプリに呆れながらもガイは何故か、レオンハルトが別の女性を連れてくる間、アプリから座学を受けることになる。
　それが妙に分かりやすく、為になるものであったのがまた驚きだったが……ガイの心は先程からささくれ立っていた。――かつての友人のことで。

――紅魔城の一室。
鏡を見ることなく、白髪を2つに束ねた1人の少女がそこにいた。
「よし、準備出来ました」
身だしなみを整え終えたその少女――白兎は椅子から立ち上がる。
それを見ていた刀が、白兎へ声をかけた。
『……行くのですか？』
「はい。ちょうど街に来ているらしいので」
『……』
白兎の帯剣となっている聖刀・日光が憂う様子を見せる。
そしてそれを、鋭敏な感覚で白兎は察した。
「大丈夫ですよ。生憎と魔人の相手には慣れてますし」
白兎は言う。いつものように、微笑を浮かべて。

「ちょっと友達と遊びに行くくらい――訳ありません」
そして腰に日光を差し、白兎は部屋を出て街へと向かっていった。

ガイの休日

レオンハルトは娼館を出ると、すぐに代わりを見つけるべく別の娼館に足を向けた。

通りに出て目当ての高級娼館に向かって歩き始める中、レオンハルトは内心で先程のことを思い出す。

……まさかアプリが来るとはな……。

エロ好きなのは当然知っていたが、娼館にまでやって来るとはさすがに思わなかった。ガイへの性技指導の場に現れるとはさすがに気まずいにも程がある。

今後は娼館を出禁にするようお触れを出しておこうと心に誓う。アプリの方もそうだが、頻繁に出入りさせてしまえば娼館の方が持たない。ただでさえアプリと一度寝た相手はアプリのことを忘れられなくなったり、他の相手では勃たなくなるという被害を出しているというのに、娼婦まで落とされたんじゃ溜まったものじゃないからな。

だが幸いにもアプリはまだ聞き分けが良い方だから大丈夫だろう。代わりの物をねだられる可能性はあるがそれは何とかすればいいと、そう思いとある娼館に入ろうとしたところで――レオンハルトは気づいた。ある店先で食事をしている魔物ではない……人間の姿に。

「ほほう……なるほど。これは大した味だ……街で人気だというのも頷けるね」

「……あいつは」

その店は出店であった。麺魔軒というラーメン屋の娼館通り店。レオンハルトの身内が始めたその店の軒先で、ラーメンに舌鼓を打っているその魔女には見覚えがあった。白くて長い髪に魔女帽を被ったその少女に、レオンハルトは近づき声をかける。

「……こんなところで何をやっている」

「――おお、奇遇ですな閣下。いやなに、ちょっと用事があって街を訪れたのですが以前来た時にはなかったお店が話題だったので食べてみたのですがこれが絶品で。閣下はお食べになりましたか？」

「……当然だ。何しろこの店の最初の客は俺だからな」

正確には俺とガルティアだが……そこまで伝える必要はないと未来視の魔女〝C〟を軽く睨む。
「そんなことより何をしに来た。まさかとは思うが、死にに来たのか？」
「いえ、そういう訳では。ちょうど人手が入り用かと思いまして」
「人手だと？」
「ええ。なんとなくそんな気がしたので訪ねに来ました。……人手、必要ではないですか？」
と、Cは見透かしたように意味深に笑みを浮かべてきた。
幻惑魔法でもかけているのだろう。周囲には違和感を持たれていない。強いて言うならこちらがいることに見かけた魔物兵達がぎこちなくなっているくらいだ。
そんな中で告げてきたその言葉に、もはや説明する必要は皆無だろう。俺は率直に言葉を返す。
「……お前が名乗り出ると？」
「ええ。ご不満ですか？」
「……いや、構わない。それならば手間も省ける。それに――」
「それに？」
「お前相手なら気を使う必要もない」
「ふふふ。中々に酷いことを言いますね。うら若き乙女に対して」
「何がうら若き乙女だ。横槍の件、忘れたとは言わせないぞ」
「その節は申し訳ありませんでした。ですが私も私なりに未来を憂いてやったこと。後悔はありません。その件で私をどうにかしたいのであればお好きにどうぞ」
「……」
ここで殺されようと受け入れる――涼しい顔でCはそう告げてきた。
それに対しレオンハルトは思う。ここでこいつを殺したところで、何の益もないと。
むしろ不利益にすらなりかねないものだ。だからこそ不満はあるものの、ここで短絡的に殺すようなことはしない。元よりそれほど恨

んでいる訳ではないのだ。殺るつもりもなかった。ゆえに、それを受け入れる。
「……よく言う。俺がお前を殺さないことなど分かっているだろう」
「ふふ、さすがにバレますか」
「当然だ。が、それはいい。お前がガイの相手になるというなら付いてこい。構わないな？」
「ええ。問題ありません。文字通り、一肌脱いで差し上げましょう」
相変わらずの飄々とした様子のCの返答を受け、レオンハルトは来た道を戻っていく。後はさっさと指導を終えるだけだと小さく息をついて。

街に出てきた白兎は、真っ直ぐにガイのところへ向かった。
「こっちですね。会ってますか？　藤吉郎」
「キキー」
「なら大丈夫そうですね」
肩に乗せたさるぼぼ。はぐれ使徒である藤吉郎にも確認を取りながら向かっていく。匂いなのか野生の勘なのか、人探しやモノ探しが得意な藤吉郎に加え、魔人の気配を白兎が探っていく。
レオンハルトがガイに会いに行ったのは分かっているのだ。ならばレオンハルトの気配を、よく知ったその気配を辿っていけばその場所に辿り着くことは容易であった。
ましてや遠方ではなく街の中であれば尚更。更に言うなら、もう1人も気配に敏感であり。
『……間違いありません。この建物の中に魔人が2人います』
「なら早速入りましょう！　ふふ、楽しみですね」
『ええ。……しかしここは……』
白兎が腰に差す聖刀・日光。魔人を殺すことの出来る刀もまた、魔人の気配には敏感で魔人探しには向いていた。
その日光もまた辿り着いたある建物の中に魔人が2人――レオンハルトとガイだろう。その2人がいることを示し、白兎は意気揚々と

建物に足を踏み入れる。
その中で日光は建物の雰囲気とその名前が怪しいものであることが気になったが……まあ、単なる会談場所に使っただけだろうと自身の懸念をはっきりと口にはしなかった。
「……？　この匂いは……それにこの声……」
だが、日光が何かを言うより先に白兎は自分自身で気づいた。その鋭敏過ぎる感覚が、建物の中で行われている何かを感じ取る。――防音に防臭もしっかりとしているその高級娼館も、白兎の異常とも言える感覚までは誤魔化せなかった。
だが意味はあった。何しろその部屋が見えるところに来るまでは白兎も、久し振りに友人に会えるウキウキ感も相まって気づくことは出来なかったからだ。
そして気づいたとしても――
「……どういうつもりか知りませんが……この程度で私が足を止めると思ったら大間違いです！」
「キキー！」
「その通りです！　中で何が行われていようと問題はありません！　私は大人ですので！　さあ行きますよ！　藤吉郎さん！　日光さん！」
『……』
――白兎は躊躇しなかった。妙に人が多いのもあって正確に何が起こっているかは分からないが、仮に何であったとしても問題はないとして、扉を開けた。
「久し振りですねガイ！　私が会いに来――」
そして白兎は……言葉を失わせた。
「挿れるぞ……ぐっ……」
「んっ……ん……な、なるほど……結構キツいですね……」
「愛撫が全然なってないな。技術も気持ちもまるでなっていない。ただ漫然と動かしてるだけ。０点だぞガイ」
「そんなに厳しく言ったらダメだよパパ！　ガイだって頑張ってるんだからさ！　ちゃんと頑張ればきっと上手くなるよ！　ほら、次は動

かしてー！　せーの……はい、いっちにー！　いっちにー！　ふれー！　ふれー！　お・ち・ん・ぽ！　頑張れ頑張れちんこ！」
「ぐっ……気が散る……！」
「……」
――白兎がそこで視た光景は……友人が、真面目な父や元気いっぱいの妹に指示と応援を受けながら見知った魔女に向かって腰を振るという光景だった。
その意味不明な情事を行っている姿に、さしもの白兎も固まる。だがゆっくりと言葉は出た。考えもせず、純粋な気持ちが口から出る。
「何をしてるんですか……？」
「……えっ」
「おや」
「あ……」
そうして声を掛ければ、よほど集中していたのだろう。部屋の中にいた全員が白兎の方を見た。
ガイが一瞬で気まずそうになり、未来視の魔女は知人を見つけたかのように自然に、レオンハルトもまた短い声を上げて真顔になる。
そんな中、白兎の妹であるアプリだけは笑顔のままだった。何故か両手に持っているポンポンで応援しながら姉に対し言葉を返す。
「あ、白兎お姉ちゃん！　奇遇だねー！　今ちょうど良いところだよ！　せっかくだし白兎姉も応援する？　はい、ボンボンもう1個あるよ！」
「な……な……な……」
白兎は目が見えないが、その代わりに他の五感が発達していて常人よりも空間認識能力が高い。
ゆえに見えずとも視えていた。ガイの身体の凹凸。そこで何をしているか。どんな状態になっているか。それらを正確に認識し、理解したところで――白兎は叫んだ。
「何をやってるんですかーーーーーーーー!?」
「ち、違う！　これは……！」
「何が違うんですか!!　最低です!!」

「れ、レオンハルト……事情を……！」
「そうだ！　最低だぞガイ！　俺たちにこんなことを強制しやがって！」
「レオンハルト貴様あーーーー!?」
「お、見られて興奮してる？　エッチだねーガイ！」
「そういう興奮じゃない！」
「何でもいいですからさっさと離れやがってくださいっ!!」
――こうして白兎はガイと再会を果たした。

――それから数十分程が経過して、ようやくガイは白兎と落ち着いて2人での会話の場を設けることが出来た。
「……久し振りだな」
「ええ、お久しぶりです。……それだけに、ああいう形で再会したくはなかったですが……」
「……それについてはすまなかったな……」
先程から再三に渡ってガイは謝罪を続ける。内心では、なぜ自分が……という思いでいっぱいだが、謝るしかない。元を正せば魔王のせいだが、それを口にするのもなんとなく憚られた。
それだけに白兎はガイを訝しんでおり、
「……まあ、いいでしょう。なぜあんな状況だったかは敢えて聞かないことにします」
「聞かないのか？」
「あの程度で動揺していては魔物界ではやっていけません。慣れてますからね。何か事情があるということで受け入れます」
その割には動揺していたようだが……とガイは思ったが、それを口にすればまた怒らせることになるのは目に見えているので何も言わなかった。
だがそうして気の抜けるような一件が流されると、今度はまた別の意味で気まずい思いが襲ってくる。
何しろガイは以前、白兎達を放って逃げたのだ。

そしてそれは決別の意味を持っていた。魔王を倒し、人類を救うため――あえて1人になることを選んだ。
そのためには交友関係は邪魔だとして。巻き込むことを非として自ら離れることを望んだ。
それだけにこうして再会するのは罰も悪く、負い目もあった。
……ましてや魔人となって再会するなど……恥以外の何者でもない。
だからこそガイは言葉が出ない。何と言えばいいのか。謝ればいいのか。それとも開き直ればいいのか。それすらも判断がつかない。
今のガイは寄る辺を、目的も何もかもを失った身。自分がどうしたいのかも分からなかった。
あるいは白兎によって断罪されるのであればそれでも構わない。
今のガイは生きる目的もない。死ぬ理由もないから生きているだけの惰性の存在だ。もう1人の方は魔人としての生を普通に受け入れているが、こちらのガイはそうではない。
だからこそどうなっても構わない。だからこそ、白兎が何を言うかを待ち続ける。
そして何であれ受け入れるつもりでいた。
「……とりあえず、ご飯でも食べに行きましょうか」
「……え？」
だからこそ、白兎のその普通すぎる言葉には戸惑ってしまった。
「……食事を……？」
「そうです。良い時間ですしね。まずは食事にしましょう。案内しますからついて来てください」
「あ、ああ……」
てっきりあの時のことを口に出されると思っていたガイは、前を行く白兎のその言葉にただ頷いて言われた通りについて行くことしか出来なかった。

――数分後。ガイは白兎にとある店へと案内された。

「……麺魔軒……？」
「ふふふ……ここは最近出来た人気店なんですよ？　既に支店を７つも展開しています。ここはその支店の１つですね」
「……よく分からないが……食事処か」
「ラーメン屋です」
「ラーメン……？　女の子モンスターか……？」
「そういえばいましたね。同じ名前のが……ですが違います」
と、そう言われてもガイには分からなかった。
そして白兎はガイのその反応を見て理解する――今の時代、野良で生きる人間には美食の文化が存在しないことを。
野良の人間は食べられるだけで幸運なのだ。味の善し悪しなど二の次。レストランのような上等なものはほぼ存在しない。大規模な隠れ里に酒場として一軒あれば良い方だ。そこで出される食事も簡単なものばかり。それだけに、ガイは料理のことを知らなかった。
「……ふむ。であれば新鮮かもしれませんね」
「美味しいのか？」
「ええ。特にここのお店はラーメンに限って言えば家のらーめんすら凌駕する美味しさなんですよ？」
ふふんと何故かそう言って自慢気になる白兎の様子を見て、ガイも少しだが気になる。その家の物とやらがどれほどの腕前なのかは知らないが、この街に住んでいるであろう白兎がそう言うならきっと美味しいのだろう。
実際、匂いだけでも香ばしく、お腹が空いてくるのが分かる。魔人になって食事を取る必要がなくなったため、一度も食事をしていなかったが食べるというなら別に構わないと、白兎と連れ立って店に入る。
「らっしゃーせー！　ご注文をどーぞー！」
「……店員もらーめんか」
「こっちは女の子モンスターのらーめんですね。他にはてんてんとか中華てんてんとかが多いですが、ここはらーめんが店員をやってるようです。注文はとりあえず普通のラーメンで」

「……なら同じく」
「はいはーい！　ラーメン二丁ありやっさーす！」
「ぶひー！　ラーメン二丁ありがとうございますぶー！」
　店に入り席につくと赤いチャイナ服を着たらーめんという女の子モンスターが笑顔で注文を聞きに来る。そうして厨房に引っ込むまでもなく注文を伝えていた。
「……ぶたバンバラもいるのか……」
「このお店の店員は基本ぶたバンバラとてんてん系列の女の子モンスターとらーめんだけですよ。本店の店長……オーナーがぶたバンバラとらーめんにすごい慕われてるんです。ほら肖像画もありますよ」
　言われてガイは店の壁に貼り付けられた肖像画を見る。そこには跳ねた金髪の頭をタオルでまとめ、腕を組んでるイケメン……体型や顔もかなりふっくらしていてぶたバンバラに似た男が描かれていた。
「確かにぶたバンバラみたいだな……」
「……ここだけの話ですが……私の弟になりますね」
「え……ほ、本当か……？」
「ええ。シュヴァインって言うんです。食いしん坊ですが料理上手な良い子なんですよ。本来女の子モンスターのらーめんしか作れない筈のラーメンを作れるようにしちゃって。それでラーメン屋を始めて大成功しました」
「そうなのか……」
　白兎からもたらされる衝撃の情報に何とも言えない気分になる。白兎の弟ということは先程のアプリと同じでレオンハルトの子供ということになるが……確かに顔立ちだけは妙に整っていると思ったが、太ってるのが残念すぎる。白兎やアプリは可愛いのにな……と素直な感想を抱いた。
「へい！　ラーメン二丁お待ちー！　麺が伸びないうちに召し上がるネー！」
　そしてそんなことを考えているうちに先程のらーめんがラーメンを持ってやってきた。出来上がるスピードもかなり早い。少し心配になるが、白兎がうっきうきで箸を割って食べようとしていたので信

用してガイもまたラーメンに手をつけた。
瞬間、芳醇な豚骨の香りと濃厚な味わいが麺と完璧に調和して口の中に広がった。ガイは目を見開く。そして思わず声に出した。
「う……美味い……！」
「ふふ、そうでしょう」
「なんだこの味は……美味すぎる……こんなもの、今まで食べたことがない……」
「食べ物が美味しいのがこの街の自慢ですからね。それと、本店は――というか、弟が直接作ると美味さが倍増します」
「これの……倍だと……!?」
それはあまりにも衝撃的だった。牧場で生まれ育ち、野良の人間としてまともなものを食べて来なかったガイの舌に、この味は強烈過ぎた。食べる手が止まらない。
しかも白兎が言うには本店は更に倍美味いという。想像がつかないが……白兎が言うならそうなのだろう。食べてる最中だというのに腹が空いてきた。
「……ならなぜ支店に来たのだ……？」
「本店はとにかく人気で並びますからね。最低でも2時間は並びますよ？」
「それほどか……いや、だがこれの倍なら確かに納得だが……」
確かにそれならばしょうがないかとガイは納得する。……だがそれでも行ってみたくなるのだから不思議だ。
「く……もう食べ終わってしまった……」
「ふ……ガイさん。理解ってませんね。食べ足りないというならこういう手があるんですよ――替え玉下さい」
「替え玉一丁ありやーっす！」
「何……!?」
さっさとスープを含めて食べ終えてしまったガイに、白兎はガイの知らないテクニックを見せつける。その呪文を口にすると厨房内で麺が再び茹でられ、それが皿に乗って白兎の前に出された。
白兎はそれをスープにつけて再び食べ始める。――スープまで飲

み干してしまったガイには出来ないことだった。
「そんな手が……!?」
「ふっ……憶えておくことですね。ふー……ふー……ずるる……」
「くっ……なんということだ……」
自らの無知。そして軽挙で迂闊すぎる行動に酷く後悔する。よくよく周りを見てみれば周りの客も皆同じことをしていた。目の前に出されたラーメンの魔力に夢中になって気づかなかったが、気づけたことだったのだ。
「ふっ……」
「ふっ……」
「ふっ……」
「ぐ……!」
そして後悔するこちらを見て軽く笑う魔物兵達。明らかにこちらをバカにしていた。
一瞬禁呪の詠唱を行うかとそんな衝動が湧き上がったが、なんとかそれを自重する。そもそも使えないが、使えたところでこんなところで使ってしまえば店が吹き飛んでしまう。それは出来ない。
ゆえにガイは諦める他なかった。白兎が食べ終わるのを待ってからガイは店を出る。
「さて……次は腹ごなしといきましょう」
「私はまだ食べ足りないが……次は何をするつもりだ？」
「腹ごなしですからね。次は……スポーツです」

――そうして白兎に連れられ、次にやってきたのは……球場と呼ばれる場所だった。
「ここは……？」
「野球場です。文字通り、野球をやるところですね」
「野球……？」
「……まあ、そうですよね。では説明しましょう。野球とは――」
当然、ガイは何が何だか分からないので白兎の説明を受ける。

そうしてグラウンドに連れ出され、グローブとボールを付けさせられた。
「……何となくだが、理解した。このボールを投げて……打ったり捕ったりするスポーツか」
「ええ。という訳でまずはキャッチボールをしましょうか」
そうしてキャッチボールを白兎と始めようとする――が、そこでグラウンドにいた別の者が話しかけてきた。
「おや、白兎様」
「どうも、カブレラさん。グラウンドの隅をちょっとお借りしてますよ」
カブレラという魔物隊長が白兎に近寄って話しかける。基本装備であると思われる剣は持っていない……バットを手に持った姿で。
「ええ。大丈夫ですよ。ローズ将軍――監督にも話は通してあるみたいですし」
「はい、勿論です」
「なら俺から何か言うことはありません。なんなら一緒に練習でも……と言いたいところですが、もしかしてそちらの方は噂の……？」
魔物隊長カブレラが恐る恐るとガイの方を見て尋ねてくる。ガイの方は若干気まずいが、白兎は特に気にすることなく頷いた。
「ええ、魔人のガイさんです」
「それはそれは……えっと、監督とキャプテンも呼んできましょうか？」
「お気遣いは不要ですよ。それと、ローズ将軍はともかくリリーフも来てるんですか？」
「ええ、キャプテンならちょうど走り込みに行ったところです」
「そうですか。なら大丈夫です。少し遊んでいくだけですので」
「分かりました。何かあったら呼んでください。――それではガイ様。失礼します」
「……ああ……」
そうして魔物隊長は被っていたキャップを取って頭を下げた上で去っていった。遠く、ベンチの方には魔物将軍の姿も見える。そっち

が監督だろうか。グラウンドに散らばる魔物兵達の練習を見ていた。魔物兵もこちらをちらちらと気にしてはいるが。
「この時間の練習はレオンハルト軍に所属する第１２軍、ローズ将軍率いるきゃんきゃんズの練習時間ですね」
「チームが複数あるのか……」
「はい。少し前に魔物達の娯楽として推奨されまして。その時に各軍から参加者を募ってチームを幾つか作ったところブームになりました。今では各軍の威信をかけたリーグ戦が毎年行われています。ちなみに昨年の優勝チームがこのきゃんきゃんズで準優勝がやもりんズ。３位がフローズンズでしたね。最下位は今年もハニーズでした」
「……そうなのか。案外暇なのか？」
「戦争がないので多少は時間を持て余してるのは否定出来ないですね」
　キャッチボールを始めながら白兎の説明を聞き、ガイは何とも言えない気分になる。人間があれだけ必死なのに……魔物は随分と楽しそうだった。
　よく見れば応援団と思わしき女の子モンスター、きゃんきゃんもちらほら見えるなとそんなことを思いながらボールを捕っては返すを繰り返していると白兎がまたも言う。
「ちなみにこのチームのキャプテンは私の妹です」
「またか。……どんな子なんだ？」
「野球好きです。エースで４番で昨年のリーグＭＶＰなんですよ」
　またしても自慢気に白兎は言う。どうやら家族思いらしい。妹のことを誇らしく話す白兎は普通の子供にしか視えなかった。
　しかし先程も言っていたが、どうやら今は走り込みに行っていていないらしかった。そのことを白兎は残念そうに告げる。
「いたら紹介していたんですけどね。残念です」
「……また今度で構わない。それより……君の兄弟は一体何人いるんだ？」
「私を含めれば９人ですね。１番下の子はまだ小さいのに勉強熱心で自分のことを余なんて言っちゃって可愛いんですよ？」

「……大家族なんだな」
ガイは端的にそう感想を告げた。白兎が自慢気なので水は差せない。本当のところで言えば、レオンハルトに対し随分とお盛んだなとかそもそも魔人は子供を作れたのかとか色々と際どい部分のことを聞いてみたかったが、先程あんなことがあったのもあってやはり聞くことは出来ない。
だが代わりに出た言葉は……ガイがずっと引っかかっていたことだった。
「それでですね。この間は――」
「……君は……なぜ私に構うんだ？」
捕ったボールを投げることなく、白兎に問いかける。
すると白兎もまた表情を落とした。笑みを沈め、ガイに言葉を返す。
「……なぜ構う、ですか……」
「ああ。私はあの時、君たちを置いていった。その意味を理解していない君ではないだろう」
「……まあ、それはそうですね」
「ならばなぜ私に……これほど自然に接することが出来る。思うところはないのか？」
そう。ガイはてっきり、そのことを指摘されて怒られるなり無視されたりするのではないかと思っていた。
いや、そうあってほしいとも思っていた。今更合わせる顔がない。そして、顔を合わせても以前ほど余裕はないと。
今の自分は人間ではない魔人なのだ。善ではない悪の化身であり、善なるものと交わるべきではない。
だからこそ会う気もなかったし、改めて絶縁を宣告するなり無視してくれた方が良かった。こうして一緒に過ごすような価値は自分にはない。
だから拒絶してほしいとそう思った。そういう意味を込めて言葉を送ったつもりだった。
だが白兎は、そんな自分を見て自然に返す。負の感情も何もない、

自然な様子で。
「……んー、思うところがないと言えば、確かに嘘になりますね。確かに、あの時はすっごいムカついて悔しかったですし、次に会ったら一発ぶん殴ろうと思ってましたが……」
「ならそうすればいい。私はそうされても仕方がない男なんだ」
「はい。そうかもしれませんね。――でもやっぱりやめました」
「……何……？　何故だ、それは……」
ガイはそのあっけらかんとした白兎の言葉に戸惑い、疑問を生じさせる。
しかし白兎は含むところなく素直に答えた。グローブを付けていない方の手を上げて親指を上げ、
「友達が落ち込んでる時は寄り添ってあげるべきですからねっ！」
「……友、達」
「そうです！　友達の少なそうなガイさんには分からなそうなので友達の多い私が教えてあげますが、友達が悩んだり落ち込んでる時にはこうして気晴らしに誘ってあげるのが友達のあるべき姿というものですよ！」
「……」
「まあ悩んでるならその話を聞くとか力になるとか色々ありますけど……それは話したくなった時でもいいですし？　そのためにもまずはちょっとでも気持ちを楽にしてあげようかと。……あの、何か言ってくれませんか？　黙られると滑ったみたいで恥ずかしいんですが……」
「……ああ、すまない、な……」
その言葉を受け、理解し、思ったところで……ガイはただ俯くことしか出来なかった。
あまりにも眩しすぎるその言葉に、どう返せばいいか分からなかった。ただ謝ることしか出来ない。それ以外に返す術をガイは知らなかった。そう、知らなかった。
「……私は魔人だぞ」
「え？　えっと……それがどうかしたんですか？」

「え……ああ、そうか……」
自分で言っておきながら気づく。魔人だから、という言い訳はこの子に何の意味もないことを。
魔人と人間のハーフ。そんな特殊な、自分が善とする物と悪とする物の血を併せ持つ白兎には、ガイが魔人であることなど関係のないことだった。
「……はっ！　まさか魔人だからって偉ぶるつもりですか……？　そうはいきませんよ！　確かに公の場であればそれも仕方ありませんが普段から偉ぶって上に立とうとするのは許しません！」
「……そうか……そうだな。確かに、関係ないか……」
「ええ！　関係ありません！　ガイさんが魔人になろうと友達の間に上下関係はありませんからねっ！　あくまで対等です！　なので毎回ご飯を奢れとかそういうのは聞きませんよ！」
「ふっ……そうか……」
白兎の言葉を聞いて、ガイは自分の心が少しだけ楽になるのを感じた。どこか気負っていた、絶望していた心が、僅かだが晴れやかになったような、気の紛れを感じられる。
魔人となり、人間を救うことはできなくなったことも、目的も何もなくなったことも何も解決はしていない。
だがそれでも、少しだけ気が休まるのを感じられた。今この瞬間だけは、その悩みから解放される。それを思い、ガイは白兎に感謝を告げた。
「ああ……確かに、気は紛れたな。感謝する、白兎」
「む……そうですか。だったら良いんです。私は友達思いですからね。お礼はいりませんよ。友達として当然のことですからね！」
「そうか……ならもう少し、付き合ってもらえるのか？」
「勿論です。まだ予定を全然消化出来てませんからね！　夜まで時間はありますからたっぷりと遊んでもらいますよ！」
「ああ、分かった。ならそうし――よう！」
「！」
ガイは力を込めてボールを投げ返す。すると先程よりも強く速い

球が白兎のグローブに収まった。
　白兎は不敵に笑みを浮かべる。
「……さすがは魔人ですね。球が重いです。しかし……野球はパワーだけでどうにかなるほど甘くないですよ！」
「ああ、教えてくれ。どうすればいいんだ？」
「ふふ、ノッてきましたね。でしたら次はバッティングです！　妹直伝の変化球で為す術なく打ち取ってあげますよ！」
「変化球……？　よく分からないが、付き合おう」
「ではこっちです。付いてきてください」
　幼い頃に会った時と変わらない。少女のまま駆けていく白兎を見て、ガイはその時のことを思い出す。
　そしてその時の気持ちを思い出させてくれた白兎に、内心でもう一度感謝を告げた。――この時間を設けてくれた彼女の父親にも、少しの感謝を覚えて。

――その夜。
　レオンハルトシティの外れ。営業時間を終えたその屋台に、２人の魔人の姿があった。
「ずる、ずる……はぐ、んぐ……ぷはぁ！　やっぱ最高だな、ここのラーメンは」
「ああ。相変わらず良い味だな」
「おう。これなら何杯でも食べられるぜ――おう、もう１００杯追加だ」
「――本当に何百杯も頼む奴があるかァーーーー!!」
　その屋台……麺魔軒の本店としてかつては使われていたその店の厨房に１人で立ち、座席に座る２人の魔人の内の１人――魔人ガルティアの頼む大量の注文を前に叫びながら格闘を続けているのはシュヴァインという名のイケメンの一際大きいぶたバンバラだった。
　豚王と書かれたパツパツの黒い服に身を包んだシュヴァインは、必死に麺を茹でまくりスープの継ぎ足しと仕込みを続け、盛り付けを

行ってガルティアに提供を続ける。表情は必死だった、思わずガルティアの隣に座るもう1人の魔人――自分の父親に助けを求めるほどに。
「おい親父ィ!!　頼むからこの人帰らせてくれ!!」
「すまないな。後１００杯だけ作ってやってくれ――ああ、こっちは替え玉追加だ」
「チクショーーーー!　営業時間より大変ってどういうことだよ!」
　シュヴァインは全力でラーメンを作り続ける。魔物界一のラーメン職人の名に懸けて。嬉しい悲鳴を上げながら。
　そしてレオンハルトとガルティアの間に座る少女もまた、アシストを行った。
「ガルティアおじさーん!　新メニューも美味しいよ!」
「新メニュー?　そんなもんがあんのか?」
「あるよー。メニュー隠してあるけどね。頼めば出てくるんだ!」
「そうだったのか……知らなかったぜ。ありがとよ、アプリ。ならそっちの新メニューも１００杯追加だ」
「何バラしてんだアプリてめーーーー!?」
「あ、わたしも煮卵ラーメンもう一杯!　油多めニンニク野菜カラメトッピング全マシ麺硬めで!」
「そんなオプションねぇよ!　面倒くせぇ注文やめろ!　おい、親父!　止めさせてくれ!」
「ん……そうだな。アプリ、少しは手加減してやれ」
「えー、やだやだパパおねがーい。今日一緒にお風呂に入るからー」
「作れ、シュヴァイン。父親命令だ」
「わーい。パパ大好きー♡」
「俺の味方がどこにもいねえーーーー!!?」
　チクショー!　と悲鳴を上げながらラーメンを作り続けるシュヴァイン。彼にとっての不幸は、類まれなラーメン作りの才能によってその無茶な注文をギリギリ1人でこなせるだけの技量と体力を持ち合わせていたことだった。
　そうして賑やかなラーメン屋台の中で、ガルティアとレオンハルト

は会話を行う。
「そういや今日はあいつ来てるんだろ？」
「ああ。もう帰ったがな。さっきまで白兎と一緒に遊んでた」
「へぇー、ダチだって聞いてたがマジだったのか」
「そうらしいな。俺としては少し複雑だが……おいアプリ。口元ついてるぞ」
「んー。取ってー」
「仕方ないな……」
　ガルティアは相変わらず食べながら、レオンハルトは一旦箸を置き、アプリの頬を拭いてやりながら今日街に来ていたガイについての話題をやり取りする。
　多くの魔人にとってそうだが、ガルティアもまた気にならない訳ではなかった。そのことを思い出し、何気なく問いかける。
「そういやお前、引き分けたんだって？」
「ああ」
「へぇ。ならよっぽど強いんだな」
「そうでもない。少なくとも、今のガイは俺と引き分けることは難しいだろうな」
「なんだそりゃあ。魔人になって弱くなったのか？」
「そういうことになるか」
「そりゃ珍しいな」
　何百杯目か分からないラーメンの汁を飲み干し、次の一杯に取り掛かりながらガルティアは多くの魔人、魔物が知りたがる真実を知る。
　だがそれを知ったところでレオンハルトがどうのガイがどうのとは思わない。フラットに感じたことを口にする。レオンハルトの質問に対して。
「信じるか？」
「そりゃあな。結果が引き分けってだけなら俺だってお前と引き分けたことあるぜ」
「そんなこともあったな。……また懐かしいことを」
「おお。自分で言って思ったが確かに懐かしいな。いつのことだった

か思い出せねぇくらいだ」
「ふん……まあ、確かに引き分け程度でごちゃごちゃ言う奴が多いのは面倒ではあるな」
「教えてやりゃいいだろ」
「説明する義理もないからな。魔人なら自分で見極めてほしいところだ」
「戦ってみないと分からないんじゃねぇか？」
「どう見極めるかは自由だ。だが見極めすら済んでないのに侮るような奴もいるからな」
「なるほどな」
　レオンハルトにしては珍しい愚痴にガルティアはラーメンを食いながら適当に返す。互いに気を使う必要がないからこその遠慮のないやり取りだった。
「なんならお前が俺の代わりに黙らせてきてくれてもいいぞ」
「残念だがそいつは無理だ。俺は食べるので忙しいからな」
「俺は作るので忙しいけどなーーーーーーー!!」
「何を言ってる。俺のが１００倍忙しいんだよ」
「俺の方が忙しいけどなーーーーーーー!!　親父ーーーーー!!」
「ぶーちゃんうるさい」
「豚って言うなやこら!!」
「だから使徒増やしたのか？」
「それもある。だがどいつも優秀な奴だったからな。使徒にするのに十分な奴らだったから契約しただけだ」
「お町さんおっぱい大きいしガウガウちゃん意外とお尻大きいしミシェーラちゃんも太腿エッチだよね！」
「こら、食事中にエロ話するな」
「えへへ、ごめんなさーい。あ、ガルティアおじさんの餃子１つもーらいっ！」
「ん……おお。最後の１つだったか」
「んぐんぐ……ん、まだ食べたりないねー！」
「良い食べっぷりだな、お前も食べ盛りか。よし、もう１つ奢ってや

る。餃子１０１人前追加だ」
「わーい！　ガルティアおじさんも大好きー！」
「むしろ金払うから帰ってくれーーーー!!」
「――よっすー。シュヴァイン兄さ……あ、父さんにアプリ姉さん、ガルティアさんもいたんだ」
「あ、リリーフ！」
「おお。お前も来たのか」
「何だ。練習帰りか？」
「うん。だからこっちで食べて帰ろうかと思って――ってことでチャーシュー麺１つね」
「むしろ増えた!!?　何だってんだチクショーーーーーーーー!!」
――屋台がまた賑やかになっていく。
それからしばらく食事の時間が続き、一行は城へと帰っていった。

勝ち組

この時代の人間……その生態は酷いの一言に尽きる。
なぜならその多くは苦しみに喘いでいるからだ。
多くの人間は人間牧場にて効率よく管理され、自分達の境遇にすら疑問を持たない時代。野良で生きる人間もまた魔物に怯える日々を過ごしている。
それは魔物討伐隊という魔物を倒して生きる人間の強者ですら例外ではない。彼らの殆どは生きるために魔物を倒しているだけ。それをせずに済むならそれに越したことはないのだ。
だが魔物という存在はどうしても避けられない。だから人間は苦しんでいる。人間の身で楽に生きることはとてつもなく難しいことだった。
だが……それならば人を止めることで掴み取ることは出来る。
その狭き門を通り抜け、その地位を掴みとって勝ち組となった者がいた。そう、その者こそ――
「ゲッヘッヘッ……！」
――スケアクロウである。
大規模な魔物討伐隊、影の楔の最高幹部出身のスケアクロウは現在、魔人レオンハルトの城である紅魔城にいた。
それも人間ではなく、使徒の身で。
「ゲーヘッヘッヘッ……！　全く、笑いが止まらねぇなぁ……！　くくく……まさか使徒になれるなんてよぉ……！」
スケアクロウは自分に割り当てられた部屋から出ると止まらない笑みを押さえるように顔に手をやる。
この人間時代には考えられない環境。割り当てられた部屋だけでも上等で、生活水準は人間を大きく超えている。スケアクロウが目標としていた影の楔の頭目ですらここまで恵まれた生活はしていないだろう。
それだけでも笑いが止まらないというのに、使徒になったことで人間時代よりも力に溢れてることを思えば更に笑いは止まらない。

「ほんとまさかだぜぇ……」
スケアクロウは自分が使徒になった経緯を思い出す。
――それは鋼の騎士団の隊長、知り合いでもあったロランの依頼を受けて隠れ里に戻った時のことだった。
『や、やべぇ……やばすぎる……！』
スケアクロウは鋼の騎士団の本拠地である隠れ里に潜入し、そこに攻め込む大規模な魔軍の軍勢を見た。
燃え盛る山。それを踏み越えようとする魔物兵。抵抗し、倒れる人間。
そんな中に潜入し、ロランに接触を果たそうと恐る恐る木の上からそれを見た。ロランが、魔物大将軍に呆気なく殺される様を。
『ひ、ひぃ……！』
その圧倒的な暴力。強さ。身を竦ませる圧力に、スケアクロウは即座に逃走を選んだ。戦っても絶対に勝てない。自分より強かったロランが手も足も出ない相手なのだ。勝てる筈もない。
それに戦う義理もないのだ。この世界で生き残るには何よりも判断力が重要だと心に刻むスケアクロウにプライドなんてものは存在しない。必要とあらば命乞いをし、媚びへつらうこともまた生き残るためには重要なのだ。
ゆえにかつての仲間が殺されたからと意気込んで魔物大将軍に挑むような愚は犯さない。即座に逃走を選び、包囲を脱出する。生き残るにはそれ以外の選択肢は存在しなかった。
幸いにもレンジャーとして隠れることに長けているスケアクロウにとって包囲から逃げることは無理ということはない。少なくとも戦うよりはマシな選択肢だった。この山火事で魔軍も混乱している。今ならまだ逃げられると――
『へぶっ!?』
『お？　何だ？』
――そう思っていたところだった。目の前に、翼を持った男が現れたのは。
目の前を突然横切ったその男に激突し、地面へと倒れるスケアクロ

ウの頭上に、その顔を隠した男が降り立った。距離が詰まると、不思議と熱くなる。山火事で温度の高いこの地域一帯の中でも、その男の目の前が1番熱かった。
　そしてその熱さと力を感じさせる男は、スケアクロウを見下ろして呟いた。
『人間か……まだ生き残りがいたんだな』
『げ、ゲヘ……（に、人間……？　ってこたぁ……まさか……ま、魔人!!?）』
　癖であるゲス笑いを引き攣らせながら、スケアクロウは呼吸が止まりそうなほど驚き、心臓を縮こませた。魔物大将軍ですら手に負えないというのに、目の前にいるのは魔人。
　影の楔の最高幹部であるスケアクロウには当然その知識がある。人間を隔絶した能力を持つ魔王の忠実なる配下。あらゆる攻撃を防ぐという無敵結界を持つまさに無敵の魔人のことはよく知っている。
　ゆえに逃げられない。補足されたと分かった時には、スケアクロウは必死に口を動かした。少しでも隙を作るために。
『で？　お前は何なんだ？　さっきのなんとかっつー人間の里の生き残りか？』
『す……』
『す？』
『す……すげぇカッコいい……！』
『！』
　――スケアクロウは全力で驚いた表情を作った。演技である。それも迫真の。
『マジで驚いたぜぇ……今まで生きてきてこんなにカッコいい憧れる存在は見たことがねぇ……！』
　絶体絶命の状況にあり、スケアクロウが選択したのは媚びへつらうことだった。
　それでどうにかして見逃してもらう。もしくは、そうして時間を引き伸ばし新たな策を練るか、相手の行動によっては隙を作って逃げる。

それを行うためにスケアクロウは必死になって口を動かした。
だが、
『……』
（ぐっ……や、やべぇか？　嘘だってバレたか？）
その男はスケアクロウのことをじっと見ていた。明らかに怪しまれているのを感じてスケアクロウが若干怯む。
だがそれでも口を止める訳にはいかないとぺらぺらと口を動かし続けた。やれオーラがすごいだのカリスマ性を感じるだの思いつく限りの褒め言葉を口にしたし、その中でも女にモテそうと言ったところでちょっとだけ反応があったのでそこについてもよく褒めた。妹がいたら妹にもモテそうとかいう訳の分からない褒め言葉を言うくらいには。
だがそれだけ必死だった。スケアクロウはいつの間にか正座になってひたすら初対面の魔人を称える。そして、しばらく経ったところで――
『ほ……本当にそう思うか……？』
『！』
来た、と思った。スケアクロウはその確認の言葉をチャンスだと確信する。信じているような雰囲気を感じたからだ。咄嗟にうなずく。
『ええ、勿論でさぁ……！　こんなに男気溢れる魔人の方は見たことがないですぜぇ……旦那ぁ……！』
『おお……そうか……おお！　そうだよな！』
そしてその顔を隠した魔人が喜んだのが分かった。突然肩を組んできて、大笑いするくらいには。
『クハハハハ！　分かってるじゃねぇかお前！　そうだ！　俺は出来る男なんだ！』
『え、ええ！　勿論です旦那！　あんたは出来る男ですぜ！　（熱い熱い熱い！　触れた部分が火傷する！）』
『だよな！　だってのに家の弟や妹は俺のことバカにするしよぉ……！　どいつもこいつも……！』
『ええ!?　そりゃあひでぇ！　旦那みたいに男気溢れた男をバカにす

るなんて！（弟や妹……？　魔人なのに兄弟がいるってのか……？）』
なんかよく分からない話にも同意し、テンションが上がるに連れて熱くなっていく魔人の温度にも我慢しながら必死に話を合わせることを続ける。
そうしてまた5分程話し込んだところで――その魔人は不意に気を静めて言った。
『……よし、いいだろう。お前、名前はなんて言うんだ？』
『す、スケアクロウと言いますぜ旦那……！』
『そうか。俺様はカイゼルだ。一応秘密なんだが俺様は魔人でな。秘密にしてるから、俺様が魔人だってことを知った人間は基本殺さなきゃならねぇんだが……』
『げ、げへっ!?（やべぇ!?　逃げ……って、肩掴まれてるから逃げらんねぇじゃねぇかよぉ～～!!　しまった～～～!!）』
物騒な言葉が聞こえ、スケアクロウが内心焦る中、カイゼルと名乗った魔人は言った。そこで初めて動揺を感じ取ったようで。
『おお、だが心配すんな。俺様はお前を使徒にすることに決めたからよ』
『げ……げへ？』
だがそこで――スケアクロウの未来に光明が差し込む。
それは素晴らしい、あまりにも素晴らしい救いの糸だった。おそるおそるスケアクロウは確認を取る。
『ま……マジですかい？』
『あ？　なんだ、嫌か？』
『いいいいいいえいえいえいえいえ!!　なりたいですぅ！　はい！　はい！　僕ちゃんなりたい！　カイゼル様の使徒になりたいです！』
『クハハハ！　そうだろう！　そうすりゃ別に殺す必要もねぇからな！　姉貴や兄貴も似たようなことしてるしルイゼルの奴も連れ込んだんだ。1人くらい問題ねぇよなぁ！』
『も、勿論です！　というか使徒になりたいです！　ならせてくだ

せぇカイゼル様！』
　まさかの提案にスケアクロウは全力で飛びついた。仮に何らかの条件を提示されても今のスケアクロウならなんだってするだろう。そんな勢いで頼み込む。
　そしてそんなスケアクロウの様子に気分を良くしたカイゼルが腕を組んでうんうんと頷く。
『俺様を尊敬するとは中々見込みがあるぜ。……よし、それじゃ使徒にしてやる。覚悟はいいな？』
『覚悟ならいつでも出来てやすぜぇ！』
『クハハハハハ!!　なら契約だ!!』
　――そうして血の契約というものを行い……スケアクロウは魔人カイゼルの使徒になった。
　それからはカイゼルの放つ熱気にも耐性がつき、カイゼルに抱えられて住んでいるという城に向かい……そこでカイゼルに関する衝撃のことを教えられ、城に住み始めた。
（まさかカイゼル様があの魔人レオンハルトのガキだと聞いた時は驚いたけどよぉ……あの前に会った白兎ってのもガキだって言うし、なんてことはねぇな。それにどうでもいい。重要なのは僕ちゃん自身のことだからよぉ……！）
　スケアクロウは自らが使徒になったことで過去最高の気分であった。その他のことがどうでもよくなるくらいには。所属していた影の楔のこともどうでもいい。今の自分は何しろ使徒。魔人の配下であり、魔族の中でもかなり上の存在だ。
　おまけにあの魔人レオンハルトの城で住むことになり、望みだった楽でウハウハな生活が手に入った。今まで食べたことのない美味すぎる食事の数々に安心して寝ることの出来る環境も手に入った。
　とすると後は女だが、それも苦慮することはないだろう。
（ゲッヘッヘッ……この城には随分と上玉が多いからなぁ……！）
　スケアクロウは廊下の陰に潜み、働くメイド達の姿を見る。
「でねー？　この間はママがお酒飲んだまま床で寝ちゃって……」
「あらあら、それは大変ね」

その美貌は誰もが凄まじい。隠れ里の最高級娼婦ですらお目にかかれないような美女、美少女がそれぞれアレンジしたメイド服を身に着けてせっせと楽しそうに働いている。しかも巨乳、爆乳率多めだし、それ以外も皆美少女しかいない。
「最高だぜ……ゲッヘッヘッ。さて……どうしてやろうか……」
まずは紳士に口説くか。使徒の立場をちらつかせればそれなりに靡く奴もいるだろう。この城で働くメイドの殆どは人間らしいからな。力が絶対と言われる魔物界でただの人間や魔物が使徒の己に逆らう筈もないし、そうでなくとも有利な立場でいればやりやすいのだ。
ゆえにスケアクロウは女を物色する。手始めに、ちょうど見かけた色気たっぷりの爆乳お姉さんでも口説こうかと。そんなことを思っていると――
「おお、スケアクロウ。何してんだ？」
「ゲヘ!? か、カイゼル様!?」
背後から自分の主であるカイゼルに声を掛けられ、スケアクロウは飛び跳ねる。使徒になった全能感とスケベな思考に囚われて人間の頃は常だった周囲の警戒を怠ってしまっていた。
「いやぁ……これはカイゼル様。本日はお日柄もよく……」
「おお。まあそれは良いんだがよ。何してたんだ？」
「い、いえ。別に何ということはないですぜ」
気安く話しかけてきたカイゼルは機嫌が良さそうだったが、それでも女を物色していたと言う訳にはいかないため、愛想笑いを浮かべて誤魔化す。
だがカイゼルはスケアクロウが見ていた廊下の角から先を見て、そこにいる複数のメイドを確認すると……低く小さな声で口にした。
「……あー……女か」
「っ!? い、いや……そんなことは」
「いや、隠さなくていいんだがよ。男なら誰でも……それこそ俺様も通った道だからな……」
「か、カイゼル様もですかい？」

何やら遠くを見るような目を浮かべて言うカイゼルにスケアクロウは尋ねる。魔人であるカイゼルなら女の1人や2人こますのは簡単そうに思えるが、どうやらそうではないようだった。カイゼルはため息をついて言う。
「ここのメイド……どいつもこいつも可愛くてエロいけどよ……全員親父の女だからな……手を出したくても出せねぇんだ」
「レオンハルト様のですかい？　そんな……ここのメイドって３００人くらいいるって聞きましたぜ？」
「それが全員親父の女なんだよ。しかも……女の方がべた惚れときてる。取り付く島もないくらいにな」
「そんなアホな……」
　まさか、とスケアクロウは思う。幾らなんでもその数はありえないだろうと。1人くらいは隙がある筈だとスケアクロウは何気なく廊下の陰からメイドを見て言う。
「……あの垂れ目と泣き黒子が印象的な色気たっぷりのゆるふわ金髪爆乳お姉さんも？」
「ありゃメグミさんだな。副メイド長はそりゃあ当然もうべた惚れだぜ。包容力がすごくて誰にでも優しいお姉さんだが夜はやっぱすごいらしい。新しく入ってくる奴のエロの指導係をしてるとか……」
「……その隣の１３歳くらいの可愛い褐色の女の子も？」
「あれはリーシャちゃんだな。アイシャっつー副メイド長の娘で親子でメイドをしてる。あいつもかなりエッチであんな小さい身体なのに何でも咥え込めるんだとよ。……言っとくがどれだけ幼く見えても俺達より歳上だからな。身体の成長が止まってるだけで」
「お、親子丼っすか……」
「ああ。しかもママとサイゼルのおばさ……お姉さんと姉妹丼までしてやがる。とんでもねぇ変態野郎だぜ、親父はよ」
「……なら、その隣のクールな爆乳美人さんは？」
「あれはユミさんだ。ミシュランって知ってるか？　家でもコックをしてる料理人の一族なんだが、その一族の中でも珍しく料理が下手らしい。そんで色々と挫折していたところを親父がなんやかんやして

惚れさせて……あんな澄まし顔でクールな印象だが親父の前では笑顔を見せていたずらっぽくなるらしいぜ。当然、夜もエロい」
「そりゃ……羨ましいっすね……」
「全くだ。親父の野郎……」
　通りがかるメイドの誰もが男心をくすぐる存在ばかりで、スケアクロウは唸った。カイゼルも同様に。
　そして廊下の陰から頭を出すのを２人してやめると、カイゼルはガシッとスケアクロウの肩を掴み、鬼気迫る表情を浮かべた。
「分かるか!?　この俺の苦しみ……！　生まれた時からこの環境に置かれた俺様のどうしようもなさが……！　まだガキの頃は良かったが成長するに連れて周りの女がどいつもこいつも可愛くてエロいと気づいた時の俺様の悶々とした気持ち！　その行き場の無さが分かるか!?」
「それは……お気の毒で……」
「おおよ！　街の噂じゃこの城は男の楽園だとか言われてるらしいがそんなこたぁねぇ！　楽園なのは親父にとってなだけで他の男からしたら辛いだけなんだよ！　１５００年以上かけて親父が集めた色んなタイプの良い女がいるってのに手を出すことは出来ねぇんだからよ！　分かるか!?　周りに良い女しかいない環境なのに全員親父の女で誰にも手を出すことが叶わない俺の苦しみ！　おかげで……おかげで俺様は……」
「あー……もしかしてカイゼル様って……童貞ですかい……？」
「――童貞で何が悪い!!!」
　そこでカイゼルは大声を上げた。全身から炎を立ち昇らせ、スケアクロウに向かって吠える。
「ああ、そうだ！　俺様は童貞だぜ！　でもな……ヤりたくてもヤれる相手がいねぇんだから仕方ねぇだろうが！　城から殆ど出れねぇってのに城にいる女はほぼ全員親父の女！　そんな環境でどうやって彼女を作れってんだ!?」
「そ、そうっすよね！　そりゃあカイゼル様は悪くないですぜ！」
「だよなぁ!?　だってのにアプリの奴は俺様を童貞童貞って煽ってく

るしよ！　最近はあの豚野郎にまで先を越されちまった！　アルベルトの兄貴はカラーからモテモテだしよ……！　これでもし1番下の弟のライブラの奴にまで先を越されちまったら俺様はどうなっちまうんだ……!?　あいつは半分悪魔だからきっと悪魔からモテるぜ……今はまだ思春期で女と関わるのを恥ずかしがってるがそのうち絶対ヤるだろ!?」

「いやぁ……それはどうでしょう……（知らねぇーーーー……!!　誰なんだよそいつら！」

「いや絶対ヤるだろ！　それもきっとエッロい悪魔だ……俺には分かる……そしたら俺はなんだ!?　まだ童貞か!?　童貞の王か!?　帝王か!?　童帝王か!?」

「お、落ち着いてくだせぇ……！　そんな称号ないっすよ！」

スケアクロウは必死にカイゼルを宥める。熱に耐性が出来たので熱くないのは幸いだが、このテンションの主に付き合うのはキツい。メイドの目もキツい。なので必死に抑える。

そしてなんとかカイゼルを落ち着かせることに成功した。

「はぁ……はぁ……だがよ……俺様は気づいたんだ……」

「な、何がですかい……？」

カイゼルが息を整えて一旦落ち着く。正直もう距離を取りたいが、仕方なくスケアクロウは話を聞いた。

「……城に来る女は漏れなく親父の物だ。だが俺様は殆ど外には出れねぇ」

「そうみたいですねぇ……」

「だが気づいたんだよ……俺様と1番仲の良い好きな相手は、どう転んでも親父の女にはならないし、兄貴や弟の物にもならねぇってことが……」

「へ？　そりゃあ誰ですかい？」

そんな都合の良い奴がいるならそいつを狙えばいいだろうとスケアクロウは思ったが……カイゼルの次の言葉を聞いてすぐに問題がありすぎることを知った。

「……妹だ」

「……え？」
「妹のルイゼルだ！　俺様の最愛の妹……！　最も近しく最も可愛い存在……！　それが俺様の運命の相手だと俺は気づいたんだ！」
　カイゼルは熱弁する。そして、スケアクロウは引いた。――いや、近親相姦はダメだろ……と。そういう常識はスケアクロウにも存在した。
「さすがの親父も娘には手を出さねぇ！　しかもあいつも俺様と一緒で中々外出許可は出ない身だからよ！　俺様は元々あいつのことが大好きだしあいつも俺様のことが大好きの相思相愛だ！　だから俺様はあいつと付き合うしかねぇ！」
「な、なるほど！　さすがはカイゼル様！」
「だろ!?　これが完璧な結論ってやつだ！　クハハハハ！」
　――とんでもないこじらせ童貞だった。しかも1番の変態だった。スケアクロウはそれを察して、しかし表には出さずに太鼓を持ち続ける。
　そしてしばらくそうしたところで、笑い続けるカイゼルに対してスケアクロウの方から切り出した。
「それでですね……今日は城の中を見て回ってくるので僕ちゃんはこれで……」
「お、そうだったのか。よし、だったら俺様も付き合ってやる。使徒がしっかりと馴染めるように俺様が案内してやらねぇとな」
「は、はい……お願いします……（いや、ついてこないでいいんだけどよぉ……せっかく使徒になったんだからデカい顔したいのにこれじゃ何も出来ねぇじゃねぇの……）」
　そうして理由をつけて距離を取ろうとしたが、結局カイゼルを連れてスケアクロウは城の見回りに行くことにした。
　だがその直後、背後から声が掛けられた。
「――良ければ私めが案内致しましょうか？」
「!!?　（な、何っ!?）」
　自分の背後に突然現れたその人物に、スケアクロウは驚愕する。そうして咄嗟に振り向けば、そこにいたのはメイドだった。それも、こ

の城のメイドの中でトップに位置する相手。
「あ？　……何だ、メイド長さんか」
「はい。それで、どうでしょうか？」
「いやいらねぇよ。俺様の使徒の案内は俺様がする。他のメイドにも余計なことしねぇように言っとけ」
「――左様ですか。それでは言伝を行っておきますね」
「ああ。そうしろ」
　メイド長さん。この城のメイド長を務めるというその突然変異の女の子モンスターに対し、スケアクロウは若干の恐怖を覚える。なぜなら。
（こ、この女、どうやって気づかれずに現れたんだ!?　ありえねぇだろ!?）
　スケアクロウは自らの気配探知に引っかからずに背後まで忍び寄ってきたそのメイド長さんに驚愕する。使徒になって更に力が増し、感覚もより鋭敏になった筈だというのに。メイド長さんはその感覚をあっさりと抜けて気づかれないままに声を掛けてきた。
　そのことを恐ろしく思う。
「チッ……また余計な気を利かせようとしやがって」
「か、カイゼル様……今のは……」
「ん？　おお。メイド長さんだ。お前も知ってんだろ？　この城のメイド長だ。メイドさんっつー女の子モンスターの突然変異体だな」
「そ、そうっすか……（い、今のがただのモンスターかよ……）」
　だがカイゼルに驚いた様子はない。自然なこととして受け止めていることにスケアクロウはツッコミたかった――「使徒や魔人に気づかれずに背後に忍び寄れる存在って怖すぎだろ！」と。
　長年野良で生きてきたのもあってスケアクロウの強者に対する嗅覚は鋭い。それだけに、あれをただのメイドと見ることは出来なかった。
「この城って当然ですけど魔物も働いてるんすねぇ……」
「そりゃあな。魔物もそれなりにいるぜ」
　もっとも全員女の子モンスターだけどよ、と語るカイゼルの言葉に

頷きながらカイゼルについて中庭に出る。
（中庭にいる巨大なドラゴンはいねぇようだな……ちょっと安心したぜ……さすがに使徒になった僕ちゃんでもあれに話しかけるのは勇気がいるからよぉ……）
　そして周囲を見渡し、中庭の主とも言える巨大なドラゴンがいないことにホッとする。
「――料理とはあああああああああああああああああああああああああああ!!!!」
「!!?!!!」
　――だがその安心も一瞬にしてなくなった。
　中庭に現れた体長２メートル超の怪物。それが中庭に生えているストーンガーディアンに素手でラッシュをかけて砕いていたからだ。
「狩猟!!　採取!!　破壊!!　調理!!　そして食らうッ!!　美しくも残酷な食物連鎖の理の上で行われることおおおおおおおッッッ!!!」
「ひぃ!?　ま、魔物ぉ!!?」
「料理長か……あれは一応人間だな」
「ストーンガーディアンッ!!　貴様の涙はあああああああああ!!　隠し味のスパイスに最適ッ!!　ゆえに狩るッッッ!!!　ゴオホオオオオオオオオオオオオオオッッ!!!」
「く、口から白色破壊光線出してるーーーーっ!!?　あれは何ていう魔物ですかカイゼル様ぁ!!?」
「料理長だ。辛うじて人間だな」
「あんなの人類じゃねぇよぉ!!」
　スケアクロウは咄嗟にナイフを構えながら怯え叫んだ。カイゼルは人間だと言うが、あれが人間なら野良の人間ももっと逞しく生きていることだろう。
「む……包丁の音か？」
「ひぃっ!?　来た……！」
　そしてストーンガーディアンを始末し終え、涙を採取した料理長という魔物がスケアクロウのナイフを抜いた音に反応して振り返った。スケアクロウが怯える中、料理長はギュピッ、ギュピッと足音を響か

せて近づいてくる。そしてカイゼルに気づくと笑顔を浮かべた。
「これはカイゼル様!! それと……そちらは使徒の方ですな!!」
「おお、まあな。スケアクロウってんだ」
「そ、そうだ！ 僕ちゃんは使徒なんだぜぇ！」
「スケアクロウ様ですな!! よく研がれた良い包丁をお持ちのようで!!」
ナイフだ、とは言えなかった。今のスケアクロウの頭にあるのは、如何にこの魔物を刺激せずに立ち去るかという一点のみ。
そしてその願いは大人しくしていることで成就された。
「フハハハハハ!!! それでは私はこれで!! カイゼル様!! それにスケアクロウ様!! 何かご所望でしたらいつでもお声掛けを!! 全身全霊をかけてお作りさせて頂きますので!!!」
「おう、なら後で部屋に適当に作って持って来い。２人分だ。今日はこいつと部屋で食うからな」
「承りましたッ!!! それではまた!! フハハハハハ!!!」
そうして高笑いをして料理長は去っていった。……そこでようやくスケアクロウはカイゼルの後ろから出ていく。
「あー……びっくりした……さすがの僕ちゃんもチビるかと思ったぜ……」
「お前も料理長にそんなにびっくりしたのか？」
「そりゃあそうでしょうよ……」
スケアクロウは正直に気持ちを吐露する。あれにびっくりしないような人間は存在しないと断言出来た。
だがカイゼルは違うようで平然としていた。スケアクロウの言葉を聞いて頭に疑問符を浮かべる。
「そんなもんなのか……？ 料理人ってのは皆あんなもんだろ？」
「違うよぉ!? あんな筋骨隆々の化け物ばかりな訳ないよぉ!?」
「え？ 料理人ってムキムキの奴とエロい女がなるものなんじゃねぇのか？」
「どこの料理人の話それぇ!?」
「お、おお……お前がそんなに言うってことはそうなのか……そうい

や料理長とメイドの女以外の料理人見たことねぇな……豚野郎は豚野郎だから除くとしても……」
「筋肉とエロってどっちも料理関係ないぜぇ……？」
　スケアクロウのあまりの剣幕にたじろぎ、カイゼルも納得する。カイゼルにとっての料理人は先程の料理長ガストロノミー・ミシュランとその娘であるベアトリス・ミシュランの2人くらいであるため、スケアクロウと認識の齟齬があった。その齟齬を少しだが矯正する。
「……まあ今の料理長もさっきのメイド長さんと同じで下級使徒だな。料理長の方は人間だが」
「逆の方がまだ納得が行くんすがねぇ……」
「なんでそんなに恐れてるのか分からねぇが……あ、だが下級使徒でも1人恐ろしいのがいるからよ。そいつには気をつけろよ」
「え？　まだこれ以上があんの？」
　カイゼルの言葉にスケアクロウは露骨に嫌な顔を浮かべた。メイド長さん、料理長と来てその更に上となると想像するのも恐ろしい。もはや使徒など関係なかった。魔人のカイゼルすら怯えるというその下級使徒のことを聞く。
「ああ……そしてそいつが今の親父の下級使徒のトップだな。そいつも一応人間だぜ」
「人間なんすね……」
「ああ。しかも人間牧場出身でよ……あまりにも優秀すぎて親父が下級使徒に抜擢したらしいんだが……最近になって親父が更にそいつを下級使徒筆頭っていう立場につけてよ。親父の秘書になりやがったんだ」
「さ、さっきのメイド長とか料理長を差し置いて……!?」
　カイゼルの迫真の言葉にスケアクロウも顔を歪める。あの底知れないメイド長にどう見ても化け物な料理長。それの更に上を行く人物となると、それ以上の怪物ということになる。少なくともスケアクロウはそう思った。
「……で、どんな奴なんですかい……？」
「……聞いて驚くなよ。そいつは……人の心を読むんだ」

「人の心を……!?」
「ああ。奴の前ではどんな恥ずかしい秘密もバレバレだ。隠し事は通用しねぇ。俺様がベッドの下にエロ本を隠してることや、ルイゼルのパンツでごにょごにょしたことや、豚野郎の取っておいたデザートを盗み食いしたことや、リリーフの部屋に漫画を借りに行く時にベッドでうつ伏せに寝てたリリーフのパンツを覗き見しようといつも注意を巡らせてることとか、そういうことも全部バレてやがるんだ……」
「……カイゼル様、最低っすねぇ」
「う、うるせぇ！　お前もそんなこと言ってられねぇぞ……！　あいつの前ではどんな奴も丸裸だ……秘密を握られたら最後、いつ誰にぶちまけられるか分からねぇんだからな……」
「う……確かにそれは……」
　色々と隠し事が、そもそも使徒になった経緯からして嘘をつきまくったスケアクロウはそのヤバさに呻いた。カイゼルも顔を寄せ、小声で更につぶやく。
「マズいだろ？　誰にも人に知られたくねぇ秘密はあるもんだ……なのにあいつぁ酷えことしやがる」
「な、何か対策とかないんすか？」
「まず会わねぇことだな。近づかなきゃ心は読めねぇ。距離が関係してるらしいな」
「な、なるほど」
「そんで名前はイヴってんだ。見た目は可愛いが侮るなよ。この城で奴ほどやべー奴はいねぇ。俺様が最近計画してる〝お忍びで娼館に行って童貞を卒業してみよう作戦〟も奴にバレちまえば全部おしまいだ……」
「娼館とかあるんですねぇ……」
「街の方にな。連れてってやるからバラすなよ」
「……ゲヘヘ、それは勿論。分かっていますともカイゼル様」
「おう。それで、対策はだな――」
　中庭の茂み。本館のすぐ下にあたるその場所で、カイゼルとスケアクロウはイヴという下級使徒への対策と今度行うスケベ心満載の作

戦について話す。
――そして、その数メートル上の窓から下を見て微妙な表情を浮かべる少女がいた。
「……」
「……？　どうしたイヴ？」
「……いえ、その……ちょっと悪巧みを盗み聞きしてしまいまして……」
その執務室にいたのは魔人レオンハルト。そしてその秘書として働いている少女――イヴだった。
新たに下級使徒筆頭という役職に就けられ、レオンハルトシティの人間牧場の責任者や様々な役割を与えられて事務方のトップとして出世を果たしたイヴはペールから支給された制服に身を包み、新たに舞い降りてきた問題に頭を抱えていた。
（はぁ……こっちは使徒に勧誘されて事実上の囲い込みまでされて板挟みにあってどうしようか悩んで苦労しているというのに……関係ないところでまたバカな問題が……）
カイゼルがバカなことをするのはいつものことだが、大抵は読むまでもなくバレバレなものだ。なのにカイゼルはイヴが心を読んできたとして妙に恐れてくるので、イヴとしては何とも言えない思いである。おまけにカイゼルの使徒になったスケアクロウという人物もまたバカな感じでカイゼルのバカな企みに協力しそうなので頭が痛い。
（……とりあえずレオンハルト様に言って叱ってもらうか止めてもらいますか……いや、でも止めたところでカイゼル様は何度でも計画しそうなんですよね……いっそ娼館から女を連れてきて童貞を卒業させる進言を……事が済んだ後に殺せば……いや、あるいは目隠しでもしてもらえればどうにかなりますかね……）
イヴは問題の解決方法を思考しながら、口ではレオンハルトにそのことを報告する。
そして報告をし終え、検討しておくと返答をもらったところで再び書類に取り掛かった。
（こっちは今期の人間牧場の報告書……こっちはツリー都市開発計画

の開発案をまとめた書類ですね。こちらは後回しでいいでしょう。それと来週の魔法試験のテスト問題……は、ガウガウさんの分が届いてないですね。私に半分は作らせといて全く先生は……）

思った時にはイヴは発言した。

「レオンハルト様。後でガウガウ様を殴りに行く許可を下さい」

「許可する」

「ありがとうございます」

許可を取り、再び書類に目を通す。

だがそこでレオンハルトから声が掛かった。

「やはりイヴがいると捗るな」

「恐縮です。ですがリー様に比べれば私などまだまだかと」

「リーも優秀だがな。最近は西に視察に行っていて書類仕事に取りかかれない」

「リー様もお忙しいですからね」

「ああ。それに他の使徒はあまり書類仕事が苦手だったり嫌がったりする者ばかりだ」

「えっと……何と言えばいいやら……」

「気を使わせたか」

「立場的に少し……」

「そうか。それはすまないな。……ならやっぱり使徒になるのはどうだ？」

「それはあの……申し出を受けたい気持ちは山々なのですが……その、もう少しお時間を……」

最近お決まりの勧誘を受け、イヴは申し訳無さそうに苦笑いで返す。するとレオンハルトも微笑を浮かべて頷いた。

「ああ。そうだったな。なら覚悟が決まったらいつでも言ってくれ。いつでも歓迎する」

「あはは……ありがとうございます」

下級使徒である自分が、魔人の方の使徒への勧誘を保留にするという中々に珍しいことになっているのを自覚しながら、イヴは書類に向き合う。

使徒になるのが別に嫌という訳ではないし、むしろ出世は望むところである。主であるレオンハルトのことも嫌いではないしむしろ好ましく思ってる。仕事も別に大したことではないし、何も文句はないのだが――

(はぁ……どうしよう……使徒になるのはむしろ望むところなんですけど……白兎さんをまず説得しないと……)

そう。親友である白兎の問題を、イヴは抱えていた。

だがそれが絶妙に難しい。言ったらまた妙に拗れそうな気がするので二の足を踏んでいた。心が読めるがゆえの悩みでもある。

(それに新しい魔人のガイという方を信用しているのもどうにかしないと……人間時代には気づきませんでしたが、あの人の心には強い悪が巣食ってる。信用するのは危険ですが、かといってレオンハルト様に告げ口するのも白兎さんにそれを言うのも……どうにか穏便に引き離せれば良いんですが)

先日再会した白兎の友人であるガイ。魔人となったその男と会った時のことも思い出しながら、イヴは内心で思考を続ける。――ともかくガイを近づけるのはよくない。もしあの悪い感情を持つガイが白兎やこの城に近づいてきたら面倒なことになるかもしれないと……そんなことを考えていた。

ガイの休日2

――大陸東部、レオンハルトシティ近郊。

「ぐふふ……見えてきたな」

その男、魔人ガイは再びレオンハルトシティを訪れていた。

先日から性技の指導としてその街を度々訪れるようになったガイにとってはもう慣れた道のりであり、特に道に迷うようなことはない。

そしてガイが街に行くのももはや珍しいものではなくなりつつあるが……だが、そのガイは今までのガイではなかった。

「指導なんて面倒なだけだからな。あいつに任せてやっていたが……あんな楽しい街をこの俺が放っておく筈がない」

悪人顔で口端を歪めながらガイは呟く。

それは普段のガイの真面目で暗い印象のものとはまた違う。

それもその筈、今そのガイは内側に籠もっており、表にはもう1人のガイ――悪い人格と呼ばれるガイが出てきていた。

「くくく、さてどうするか。とりあえず美味い飯でも食った後に娼館か。……ジルの身体は気持ちいいが疲れるし、精神的にもげんなりくるからな……こっちの方が気楽で良さそうだ」

ガイは街へと足を踏み入れながら、この後の行動を考えてほくそ笑む。一瞬、ジルのことを考えて微妙そうな顔を浮かべたが、今はそのことは忘れられる。

街の入り口で配られていたパンフレットを手に、街を適当に散策し始めたガイは時折彼に気づく魔物兵にぎょっと驚かれながらもそれを無視し、適当に進んでいた。

「あるいは城に忍び込むか……あの城は噂だと男の楽園らしい。城にいる女は全員とんでもない美女だらけだとか……」

『……レオンハルトの女じゃろ。やったら殺されるぞ』

「ぐ……うるさいな。そんなことは分かってる。だが……チッ……レオンハルトか……そうだ。奴をどうにかしないと……」

『……ま、何でもいいがな』

ガイの帯剣であるカオスが低い声で警告を行うも、すぐにどうでもよさそうに目を閉じる。
魔人としての生を受け入れてからのガイとカオスの関係性はかなりギクシャクしていた。こちらのガイであってもそれは変わらない。仕方がないことだと分かってはいるし他の魔人のように恨んだり殺意を抱くことこそないが、魔人として振る舞うガイにどうしても以前のように好感を持つことは難しかった。
そしてこちらのガイもカオスのことなどどうでもいい。自分のことだけが大事だった。
だからこそガイは自らの欲望を満たすために街を探索する。
「――ガイ……？」
「ん？　お……？」
――だがそんな時、ふと背後からの戸惑うような名指しの声にガイは振り返る。
そしてそこにいたのは……見覚えのある顔立ち。
「あ、あー……み……ミストラル？」
「……あら。よく分かったわね。魔人の……ガイ様？」
――そこにいたのは使徒になったかつてのガイの飼い主……ミストラルだった。

カラーの隠れ里、ペンシルカウの防衛隊長として過ごした経歴を持つミストラル・カラーは、紆余曲折を経て新たな生活を始めた。
カラーには変化の時という寿命が存在し、その時が来るとそれまでの行いで天使か悪魔へと変化することになる。それは誰でも知っているカラーにとっての常識だ。
ゆえにミストラルもまた、自分は天使か悪魔かどちらになるのだろうと漠然と考えつつ引退後の生活を送っていたが……。
「――ミストラルちゃ～ん。そこの雑誌取ってぇ～」
「……はい」
「ありがと～。ついでにマッサージもしてくれるぅ？」

「……仕方ないわね……」
「んっ、ん～……あぁ、効くわぁ……その調子でお願いねぇ」
――まさか自分が天使でも悪魔でもなく魔人の使徒になるとは夢にも思わなかった。
魔人レオンハルトの居城である紅魔城。その中の魔人ルイゼルの私室で、ミストラルは主の命令を聞き続けていた。
下着一枚でベッドにうつ伏せに寝転がり、街で発行されているというおしゃれな雑誌に目を通しながらぐうたらを続けるそのルイゼルは、とてつもなく仕えがいのある主だった。謹慎中で予定も何もないとはいえ、今日はまだ一度もベッドから起き上がっていない。服も着替えていない。ベッドでゴロゴロとして暇を潰している。
やはりかの魔人レオンハルトの子供ともなるとこういう生活をしても許されるのだなと少し羨ましくも思う。出来ることなら代わってやりたいぐらいだが、さすがにそれは出来ないので甘んじて使徒として働くしかなかった。
……ガイもこんな気持ちだったのかしらね……。
ダルいなぁ、と息を吐きながら思うのはかつて自分が飼っていたペットのこと。自分の身の回りの世話を任せ、愛玩動物的に飼っていた人間の少年。まさか今になってそのガイの気持ちが分かるとは。そう思ってると――
「――ちょっとルイゼル！　あんた、いつまで寝てんのよ！」
「げっ……ママ」
部屋の扉が突然開け放たれる。
そうして僅かに怒りながら部屋に入ってきたのは、ルイゼルに似た髪色とその羽を持つ美女。ルイゼルの母親である魔人ラ・サイゼルだった。
その登場にルイゼルは顔だけで振り返り、露骨に面倒そうな表情を浮かべた。ミストラルはマッサージを中断して離れる。サイゼルの意を優先して。
「って……起きてるじゃない！　起きてるなら起きてるって言いなさいよね！」

「ぶー、別にいいじゃなぁい……今日は何の予定もないんだし、オフの時くらいぐうたらしたって……」
「何の予定もないって……何言ってるのよ！　今日はあたしがご飯を作る日でしょーが！」
「あー……そうだっけぇ？」
「そうよ！　レオンハルトももう来てるし、ご飯ももう出来てるんだからさっさと起きてきなさい！」
「はぁ～い……」
　母親であるサイゼルの声に従い、気怠そうにしながらもベッドから起き上がるルイゼル。
　そうしてそのまま部屋の外へ向かおうとし――
「何そのまま行こうとしてんのよ！　ちゃんと服を着なさいよね！」
「えぇ……パパとママとユキちゃんにミストラルちゃんしかいないんだから別にいいじゃない……」
「駄目！　いいから服を着なさい！」
「はぁい」
　やはりワガママ放題なルイゼルとはいえ母親には頭が上がらないらしい。服を着始めたルイゼルにため息をつきつつそれを待っていると、サイゼルはこちらにも顔を向けて。
「あんたもルイゼルの使徒ならちゃんと注意しなさいよね！」
「ええ。それは……申し訳ありません。サイゼル様」
　注意され、ミストラルは謝る。……無茶を言ってくれるわね、と内心で嘆息しながら。
　使徒は魔人に服従するもの。立場的に逆らうことは中々難しいだろうとそう思っていたが、サイゼルの方は不満らしい。だらだらと着替え始めるルイゼルに呆れている。
「まったく……なんでこうだらしないのかしら」
「サイゼル様の血が入ってるからじゃね？　ケケケ」
「そうね。……って、どういう意味よ！」
「どういう意味も何も。サイゼル様も結構だらしねーですよ？　朝もユキちゃんが起こしてますし、料理の時に使う食材なんかも、基本ユ

キちゃんが選んで――」
「わ、わーー!! 言うなバカ!」
「おっと。口が滑っちゃいました。今日のユキちゃんはどうやら口が軽い日のようです。残念でしたね。今ならサイゼル様の雑料理も沢山入っちゃいそう!」
「雑って言うな! まったくあんたはいつもいつも〜……!」
――だがそのサイゼルを更に呆れさせ、そして諦めさせるのはその使徒であるユキだった。
その言動はキチガイを自称してるだけあって中々理解し難いものがある。ミストラルからすると主の親の使徒ということで若干上の立場であり関わることも多い相手だった。
「ふぅ……さーて準備完了〜! 今日も元気よく魔物界一のアイドル、ルイゼルちゃんで行くわよぉ☆ ……って、どうしたのママ?」
「な、何でもないわよ! ほら、さっさと来なさい!」
「はぁあーい♪ それじゃ行くわよ、ミストラルちゃん」
「はぁ……」
ルイゼルがオフモードからオンモードになってポーズを決める姿にミストラルはため息をつく。面倒だがついて行くしか選択肢はない。
そう思ってその背に続いたが、そこでユキがミストラルにだけ聞こえる声量で言う。
「手のかかる上司でお互い大変ですね」
「そうね……ん、えっ?」
なんか普通に話しかけられた。そのことに驚き、ユキを見るが、何かを言う前にその場は家庭のものとなった。
「……ようやく起きてきたか。おはよう、ルイゼル」
「おはよう、パパぁ」
部屋から出てルイゼルが挨拶をしたその先、普通の家の居間のようなその空間に、この城の主である魔人レオンハルトはいた。既に食卓に腰掛けている状態で。
何でも城の個室を一部改装して家族と共に過ごせるような居室を

幾つか作ったらしい。それでたまにこうして一緒に過ごす日を作ってるんだとか。
……カラー時代に何度か見かけたことはあるが妙にマメというか気を使う人だと思う。多分こういうところがモテる秘訣なのだろうと思いながらその家族の団らんを眺めた。
「レオンハルトも注意してよ！　最近ずっとこの時間まで寝てるんだから！」
「ん……そうだな。もう少し早く起きた方がいいぞ」
「えぇ～ちゃんと起きてるわよぉ。ただごろごろしてるだけでぇ」
「ぐーたらしすぎだって言ってるのよ！」
「だって外に出れないしぃ？　謹慎中なんだから出ない方がいいじゃない。ね？　そうでしょパパ」
「ぐ……ああ言えばこう言う……！」
「……まあ、程々にな。今度ピクニックにでも連れてってやるから我慢しろ。それとあまりサイゼルを困らせるな」
「はぁ～い」
……なんというか随分と気が抜けるというか、普通の家族みたいな会話してるわね……。
いや、実際に家族なのだから当然といえば当然なのだろうが、これが魔人の生活の一部だと思うとどうにも気は抜ける。
この街に初めて来た時も思ったが、やはり人間もカラーも魔物も魔人も対して変わらないなとそう思った。
「ミストラルちゃん。このサイゼル様特製の冷やしシチュー美味ぇですよ？　この中に入ったごろごろのカナブンが絶品で……」
「そんなもの……入ってるわけないでしょうがーーーー!!」
「料理長の料理と比べたら相変わらず雑よねぇ。食べれなくはない味だけども」
「……サイゼルの料理はそこが良いんだがな……」
「……はぁ……」
……いやでもここまで気が抜けるのはここだけかもしれない。
更に賑やかになった食卓を眺めながらミストラルはそう思った。

――そうして食事を終えた後は家族で過ごすからとしばらく暇を出され、ミストラルはふらりと街に出てきた。主が謹慎中であるためどうかとも思ったが許可を求めたらあっさりと認められたため、何気なく街を散策して暇を潰す。
「久し振りね」
「……おう」
そしてそこで偶然再会したのが――魔人となったガイだった。
昔と比べて大人になり、力も漲った様子のガイと言葉を交わす。どうにもぶっきらぼうで愛想がないが。
「ガイ？　貴方、昔と比べて性格変わった？」
「……そりゃ変わってるからな」
「変わってる？」
「な、何でもない。それより……ぐふふ。せっかく再会したんだ。一緒に過ごそうじゃないか」
「……まあ、そうね。そうしましょうか」
やっぱりどこか昔と違った印象を受けてしまい、ミストラルは少し戸惑いつつもガイの提案に頷く。
何気なく歩き始めながら思うのは、やはり色々あったのだろうということ。
カラーの森を追い出されてから何があったのか。詳しいところは分からないが、強くなったことに間違いはない。
それこそ噂では……魔人レオンハルトと引き分けたというほどには。
「それで、どこへ行く予定だったんだ？　何も予定がないなら、どこかで休憩でも――」
「そうね。ちょうどチケットがあるから見に行きましょうか」
「……チケット？　何のだ」
「野球の試合のチケット。外に行くならってことで貰ったの」
――だが多少変わろうともガイはガイだ。

せっかくだしどう変わったかも含めて一緒に過ごして観察することにしようと、ミストラルはレオンハルトから貰ったその2枚のチケットを見てそう計画した。

――その一方、ガイはまどろっこしい展開に内心で唸っていた。
（ぐぬぬ……せっかく人気のないところにおびき寄せて襲ってやろうと思ったのに……野球の試合だと？）
そう。ガイは今日、エロいことをする気満々だった。
こちらのガイの記憶にもある昔の飼い主と偶然出会った時は少し戸惑ったし、もう1人のガイを抑え込むのに多少苦労したが、よくよく考えればミストラルもまた美人だ。最初にヤる相手が彼女でも別に構わない。話の流れから野球の試合を見ることになったのは少し面倒だが……。
（……まあいい。最初は良い印象を持たせて油断させるか。上手くいけば楽にヤれるかもしれないしな。ぐふふ……）
（……なんか妙に下心を感じる気がするけれど……まあ成長した男の人って考えると普通のことよね）
ガイはやらしい笑みを浮かべながらミストラルと共に試合が行われるという郊外の球場へと向かう。ミストラルにその下心が気づかれているとも知らずに。
そうしてしばらく歩いてやってきたのだが――。
「いや～遂に開幕戦だな」
「なあ、今年はどこが優勝すると思う？」
「そりゃきゃんきゃんズだろ。なんたって昨年のＭＶＰのリリーフちゃんがいるからな！」
「あーきゃんきゃんズは優勝候補筆頭だよなー」
「俺としてはハニーズに頑張ってほしいなぁ」
「いや無理だろ……プレーの度に割れまくるし……」
「試合は面白いんだけどな。別の意味で」
「ライカンスロープズなんかも侮れないぜ。なんたって今年からは

……」
球場には、試合の観戦に訪れた魔物兵の群れがこれでもかというほど押し寄せていた。
その大規模な魔軍の襲来かと見紛うような光景に、さすがのガイやミストラルも圧倒される。
「随分と魔物共が多いな……」
「ブームみたいよ。選手のグッズや軽食、お酒もあるみたいね」
「意外と充実してるな……」
「何か貰ってくる？」
「ふん、せっかくだ。飯と酒は貰ってやろう。グッズはいらんけどな」
２人とも野球はよく分からないが、とにかく盛り上がってるのは確かなようなので多少は興味が湧く。ガイの希望で軽食と酒を貰った後はチケットのもぎりの女の子モンスターにチケットを渡して席まで案内してもらった。
「意外と広々としてるじゃないか」
「ＶＩＰ席って言ってたわね」
そしててっきり魔物兵の群れに混ざることになるのかと思ったが、２人が案内されたのはＶＩＰ席であり最低でも魔物将軍クラスが観戦する用の席であった。
そこにガイ達がやってきたことで僅かに魔物将軍達が視線を向けてきたが、声を掛けてきたりはしない。プライベートを邪魔しないように配慮でもしてるのだろうかとそんな気遣いを感じる。
そうして席についてしばらくすると、始球式とやらが行われる。どうやらそれが終わってから試合が始まるようだった。
「ん？　ありゃ人間か？」
「あれは……使徒みたいね。魔法ビジョンに出てるわ。ミシェーラ・姫原……魔人レオンハルトの使徒だって」
「げっ……あいつの使徒か……（でも可愛いな……）」
あまり聞きたくない名前が耳に入ってきて露骨に嫌そうな表情を浮かべるガイ。
そんな中、グラウンドではミシェーラがボールを手渡されマウンド

に立ったところだった。公の場に姿を現すレオンハルトの新たな使徒は、真剣な眼差しでバッターボックスに立つ魔物兵を見ている。
「……（レオンハルト様から任された大事な仕事……まさかこのようなものとは思いませんでしたが、これにも意味がある筈。この始球式にミシェーラが立つ意味……はっ！　まさか始球式にかこつけて反乱分子を始末しろということでは？　表立って処分するには外聞が悪いですがここでなら事故に見せかけることが出来ます。あの魔物兵もどことなくこちらを睨みつけている気もしますし、そうに違いありません。なるほど……そういうことであれば……）」
　ミシェーラが振り被る。そうして使徒になって増した全力のパワーで、バッター目掛けてボールを投球した。
「――死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!」
「え？　――うおおおおおおおお!!?」
「うわあああああああああ!!?」
「あ」
　そして気合一擲。全力で放ったボールは――ストライクゾーンどころかバッターボックスを離れて客席へすっぽ抜ける。
　使徒のパワーで投げられたボールはフェンスを貫通し、客席に激突した。魔物兵の一部が大声を上げて吹っ飛ぶ。
　騒然とする球場とマウンドで焦ったようで目を泳がせているミシェーラ。
　だがふっとニヒルな笑みを浮かべると。
「ま、まあ……失敗は成功の元とおじいちゃんも言っていました……なので次は成功する筈ですし、それではもう一球……」
「――やめろってのバカ!!」
「へぷっ!?」
　――そこでマウンドに瞬間移動で現れ、ミシェーラの頭をチョップして止めたのは同じくレオンハルトの使徒であるハンティだった。
　街の警備の責任者でもあるハンティはこの開幕戦においても警備に魔物兵を配置して自身も確認に来ていた。そこで行われた暴挙に、ハンティは眉を立てて怒る。

「本気で投げるなって言ったでしょうが！　それになんか死ねって言ってなかった!?」
「うぅ……そ、それはあのバッターを始末しようと思って……」
「いや、何でそうなる……って、いや待った。説明はしなくていいからとにかく行く。大分事故ってたけど始球式はこれで終わりだからね。そんであんたにはあの吹っ飛んだ怪我人の治療をしてもらう」
「えっ？　でもまだあの反乱分子の始末が……」
「いいから戻れ！　じゃなきゃ雷撃食らわせるよ！」
「ひっ!?　わ、わかりました！　それではミシェーラ戻ります！　お、お疲れ様でした―！」
　ハンティの脅しにぴゅーっと怯えて去っていくミシェーラ。それをハンティも追いかけた。
　思わぬアクシデントに球場が騒然し、警備の魔物兵が吹っ飛んだ魔物兵を担架で運んでいく。幸いにも死傷者はいないようだった。あれならヒーリングで十分に治るだろう。
「……始球式ってこういうもんなのか？」
「多分違うんじゃないかしら……」
　そして野球を知らないガイとミストラルは何とも言えず気分を少しげんなりさせる。
　とはいえ試合は中止にはならないようで、少し予定の時間を押した後、開幕戦とやらが始まった。きゃんきゃんズとライカンスロープズという2つのチームが試合前の一礼を行い、攻撃側は一部を除いてベンチへ。守備側はグラウンドに散らばっていく。
「魔物兵とか魔物隊長ばかりだな。……こんなの見てて面白いのか？」
「さあ、どうかしらね……でも1人女の子がいるわね」
「ふむ……（つってもここじゃヤれないしな。可愛くても見てるだけじゃつまらんしヤれない相手ならどうでもいいな）」
　多少聞きかじっただけのスポーツを知らない魔物がやるという光景にガイは早くもつまらなくなってくる。反面ミストラルは良い退屈凌ぎだと割と前向きに観戦しようとしていた。ルールブックとパ

ンフレットを見て色々と把握しようとしていた。
　そしてそんな2人の下に――1人の紳士が現れる。
「――よろしければ私が色々とお教えしましょうか？」
「っ！　あなたは……（この気配……）」
「あ？　誰だお前？　……魔人か？」
「はい――魔人ジークと申します。ガイ様」
　2人に声をかけた正装の黄色い長身の魔物は魔人ジークだった。
　ジークは丁寧に腰を折り、ガイに向かって挨拶した。それをガイは訝しげに見る。
「それで？　何の用だ？」
「はい。1つは偶然見かけたのでご挨拶に。そして、もう1つはどうやら困っていらっしゃるようでしたのでお節介ながら私もご一緒させて頂ければと」
「お前が？」
「野球のルール、チームや選手の特徴などは把握しておりますのでお力になれるかと。無論、断っていただいても結構です」
　紳士的にそんなことを提案してきたジークに、ガイは思案する。
（こんな気色悪い黄色い奴と一緒に肩を並べるなんざ本来なら嫌すぎるが……ここは懐の大きいところを見せてやるか？　なんかへりくだってるし、気分は悪くないな）
　ミストラルとヤるためにもイメージでも良くする作戦を思いつくガイ。
　それに邪魔になったら帰らせればいいのだ。そう思い、ガイは鷹揚に頷く。
「いいだろう。許可をやる」
「ありがとうございます。そちらの使徒のお嬢さんもよろしいですか？」
「……ええ、大丈夫です。お座りください」
　ミストラルにも一応許可を取った上で、ジークは2人が座る席に腰掛ける。……かなりスペースが狭くなった気がしたが、巨大な魔物用にも作られたＶＩＰ席なので問題はなかった。気にしないことにし、

ガイはジークに話しかける。
「それで？　今はどっちの攻撃だ？」
「きゃんきゃんズですね。あの兎が描かれた白いユニフォームの方です。そちらが先攻で、黄色いユニフォームが後攻のライカンスロープズです」
「ふーん。……ユニフォームがないとどっちがどっちか分からんな」
「身体能力やストライクゾーンなどの公平性を出すためですので仕方ないことなのですよ。とはいえ多少は特色も残ってます。ライカンスロープズの方は変幻自在の戦術。割と万能で隙のないチームでして」
「ライカンスロープ……ああ、あの変身する魔物か」
　魔物討伐隊出身としてガイにも魔物の知識はある。だからこそ名前を聞いてすぐにその姿を思い浮かべることが出来た。
　それによく見れば応援団の女の子モンスターがライカンスロープだった。何やら黄色い気ぐるみ……マスコットと一緒に踊っている。ガイもミストラルも眉根を寄せた。
「……なんかあれ、お前に似てないか？」
「はい。お恥ずかしながら……マスコットのモチーフとして協力してもらえないかと打診されたので」
「失礼ながら何故そのようなことを……？」
「ライカンスロープズは私が出資しているチームですので」
「って、お前のチームかよ！」
　ガイが思わずツッコむ。黄色いユニフォームもおそらくジークに合わせてのことだろう。何とも言い難いセンスだった。
「うにゅー……オーロラがこの時代に生まれなかったことを悔しがってる……」
「そうなのか。……って、あ？」
　ふと近くから聞こえた眠そうな声にガイは少し遅れて振り返る――が、そこには誰もいなかった。
　そして少し遠くで会話が行われた。
「ちょっとセラ。駄目じゃない。他の席に侵入しちゃ」

「んゆ……べーちゃんごめん」
「あっ！　あれっておハウちゃんの子供じゃない？」
「そうね。頑張ってるみたい……」
「……自分の子供に恋するとかはやめなさいよ？」
「ぼっ……！　さすがにしないわよ!!」
　少し遠くのＶＩＰ席で、特殊な女の子モンスター４体のそんな会話が行わていたが、ガイ達はそれに気づかず試合を観戦する。
「……？　どうかしたの、ガイ」
「……いや……何でもない。それよりこれはどんな状況だ？」
「得点のチャンスですね。１アウトランナー1、２塁。ここで打順は４番。バッターは昨年の最優秀選手であるリリーフ選手です」
　ジークが示す先。腰下まで伸びる長い水色の髪をツインテールにしてキャップを被ったツリ目の美少女が木製のバットを軽く回してバッターボックスに入るところだった。どうやら彼女がリリーフと言うらしい。その選手のことをジークは説明する。
「昨年は打者として三冠王に投手として最多勝。ゴールデンハニーグラブ賞なども受賞しました。今このリーグで最も怖い選手ですね」
「よくわからんがすごいのか」
「ファンは多いみたいよ。声援も大きくなったし、よく見たらグッズを持ってる魔物兵も多いわ」
「ふーん」
　対して興味なさそうにガイはそのリリーフとやらを見る。美少女ではあるが、どうやら女の子モンスターらしいしこの場ではヤれない相手とあっては興味は湧かない。ボール球を見送ってインターバルの最中のその相手を見続けるが――
「……！」
「……ん」
　――ふと目が合った気がした。
　気の所為かもしれないが、インターバルの最中に何気なくＶＩＰ席の方を見たリリーフとガイの視線が合わさる。
　ガイはそれを特に気にせず、もしかしたら目が合ったかもしれない

としてすぐに流した。合っていたとしても別にどうということはないからだ。
なので気にしていなかったが……そのリリーフはどこか気がそぞろになっている気がする。
その直後――
「――うっ!?」
「あ」
「お、ボールが当たったぞ」
「デッドボール……ですね。しかし、これは……」
リリーフの左肘。バットを構えていたところに投手の投げたボールがぶつかる。
その瞬間、会場がざわついた。審判がデッドボールを宣告し、一塁に進むようにポーズを取る。
だが膝を突き、左肘を押さえてぷるぷると震えるリリーフに、誰もが緊張した。特にベンチにいるきゃんきゃんズのメンバーは。
「や、やべぇ……ぶつけられたぞ……」
「なんで当たったんだ!? 普段ならあれくらい躱せるだろ!?」
「たまにあるんだよ……集中しすぎてんのか躱せない時が……そして、そういう時に限って……」
「お、おい……お前ら分かってんな?」
「く……抑えてくれリリーフさん……!」
チームメイトの魔物隊長や魔物兵に緊張が走る。
そして誰もが固唾を呑んで見守る中、リリーフはゆっくりと立ち上がった。そしてそのツリ目でキッと相手投手を睨みつけ――
「――てっめーーーー!!? 何してくれてんのよこらあああああぁぁぁぁぁぁぁーーーー!!?」
「ひっ!?」
激昂しバットを思い切り地面に叩きつけ、マウンドに向かって勢いよく走り出すリリーフ。それを見た瞬間、ベンチの選手がスタートを切った。
「やばい!」

「くそっ！　やっぱ我慢出来なかったか！」
「おい急げお前ら！　リリーフを押さえろ!!　押さえねぇとまた退場にさせられちまう!!」
「はい!!」
「キャプテン待ってくれーー!!」
　きゃんきゃんズの監督、魔物将軍ローズの号令を受けて選手達が走り出す。
　そして相手チームのライカンスロープズ。フィールドに散らばる選手達もまた。
「やっぱ来やがった！」
「おい止めろ！　投手がボコされるぞ！」
「くっそ――!!　今日こそは返り討ちにしたらぁあああああ!!」
「待てやめろ！　相手はリリーフだぞ!!　返り討ちにされるのが関の山だ!!」
「とにかく押さえろ！」
　そうしてライカンスロープズの選手もマウンドに駆け寄る。
　だがその時にはもうリリーフは投手の下に辿り着いて強烈なヤクザキックをお見舞いしていた。
　投手の魔物隊長が腹を押さえる。
「おいこのボケナスドクソ青瓢箪！　あたしの黄金の左手に何してくれた!?　あぁ!?」
「あ、あれくらい躱せねー方が問題あんだろ！　この女ヤンキーが!!」
「下手くそのくせにいっちょ前に人のせいにしてんじゃないわよチンカス野郎!!　マス掻きすぎてボールの握り方忘れたんじゃないの!!?」
「なっ……なんだとごらぁーーーー!!?」
「何よやる気!?　上等よかかってきなさい!!　あんたみたいなウスノロチンカス野郎はマウンドじゃなくて自分の部屋で無様にマス掻いてるのがお似合いよ!!　そのブサイクなアホ面をハニワ顔に矯正して送り返してやるから今のうちに鏡を注文しておくことね!!　鏡もあんたの気色悪い顔なんて映したくないでしょうけど!!」
「て、てめぇーーーー!!!」

キレたリリーフのとてつもない口の悪さに魔物隊長もまた激昂した。そのタイミングでベンチとフィールドの選手が２人を押さえ込みにかかった。
「お、落ち着いてくださいキャプテン！」
「あんた達離しなさい!!　あたしにボールをぶつけてきたそこのチンカス顔をボコボコにしてやるのよ!!」
「気持ちは分かりますがあんたはやりすぎるんですよ!!」
「だ、誰がチンカス顔だーーーー!!」
「隊長！　抑えてください！」
「うおーーーー!!　いいぞリリーフ様ーー!!」
「やれやれーー!!」
「おい観客!!　煽るな!!」
「ハンティ様を呼べ!!」
「医務室にいるはずだ!!　呼んでこい!!」
「は、はいっ！」
乱闘が始まり、球場全体が騒然とする。
その様を見ていたガイは思わず呆気に取られていた。ミストラルも同様に絶句している。
そんな中頭を抱えるジークに、ガイは尋ねた。
「……もしかしていつもこうなのか？」
「……ええ。いつもという訳ではありませんが……リリーフ選手はあいう事があるとすぐに怒って乱闘を起こすのでよく退場処分になるんです」
「最優秀選手なのに？」
「選手としては優秀なんですよ。退場処分を何度も受けて何度もペナルティを負ってなお成績はトップなんです……それとあれでファンも多いですからね。実のところ名物にもなっています。私としては出来ればやめてほしいのですが……特に口の悪さが……」
問題があるが良い選手ではあるらしい。紳士のジークとしては口の悪さが気になるようだったが。
「リリーフ選手！　退場――!!」

「退場!?　――じゃあその前にあいつボコらせなさい!!」
「……まあ、面白くはあったな」
「野球ではないですけど……」
「試合は始まったばかりですので……もう少し観戦すれば正しい楽しみが分かるかと……」
ジークにしては珍しく言葉を迷わせながらやんわりと観戦を続けるように提案する。それを受けて、ガイとミストラルも何となく観戦を続けることにした。

悪魔的接待

野球観戦を終え、球場を後にしたガイは魔人ジークと別れ、ミストラルと2人に戻った。
時間はもう夕暮れ時。思ったよりも試合は長く、見れないものではなかったが焦らされてしまった。
(ここまで我慢してきたからな……後はこう上手い感じにどこかで襲えば……)
「この後はどうするの?」
「ん……おお、そうだな……」
隣を歩くミストラルに聞かれ、ガイは考える――どこで、どのタイミングで襲うかを。
さすがに街中で突然という訳にはいかない。ならば人気のない場所に誘う必要があるが、その口実をどうするかだ。ある程度信頼は得られてる気はするので大丈夫だと思うが。
(もうここまで来たらいっそ酔わせて持ち帰るか? ここまで我慢したんだ。後1、2時間くらいなら……)
「――お待ちしておりました」
「あ……」
「ん?」
そしてガイが幾つかのレイプまでのチャートを頭の中で思い浮かべた時。不意に道先で少女が会釈をしてきた。
その待ち受けていたかのような言動にガイは訝しむ。一方で、可愛いからコイツも襲いたいなと思いつつ、ガイはあえて鷹揚に頷いてみせた。
「何だ、お前は?」
「……イヴと申します。レオンハルト様の下級使徒の。あの、何度かお会いになってますが覚えていらっしゃらないので?」
「あ……」
ガイはそこで思い出す。――以前会った時はもう1人の人格。そして服装が変わっているため、一瞬気づかなかったがその少女は確か

に白兎の友人でありガイとも何度も会ったことのある相手、イヴだった。
「お……おお！　勿論覚えてるぞ！　今のは冗談だ！」
「……左様ですか……」
　ミストラルをどう襲うかで頭がいっぱいだったガイはそのど忘れを取り繕うように笑ってみせる。――内心ではちょっと焦りながら。誤魔化すように自分から話し出す。
「それで？　この俺に何の用だ？　あー……白兎と会うなら今日はちょっとだな……」
「……はい。我が主からの伝令を伝えに来ました」
「我が主……って、レオンハルトの奴か！」
　どこか一歩引いたような様子のイヴから伝えられるレオンハルトからの伝令とやらに、ガイは苛立ちを表情に出す。もう1人のガイがどう思っているかはともかく、こっちのガイはレオンハルトが嫌いだった。苦手だった。
　禁呪が使えた頃の自分と互角に戦い、魔剣を突き立ててやったのに死なない化け物。そしてガイの一応の上司であり、逆らいたくても逆らいにくい頭の上がらない相手。
　そんな奴のことをこちらのガイが好きになる訳もない。当然、ガイは警戒した。そして何かを言われる前に拒否した。
「呼び出しなら行かんからな」
「ふむ……レオンハルト様のお誘いを断ると？」
「別に仕事でも何でもないなら断るのも自由だろうが！　今日の俺は休日なんだ。あいつに命令される謂われはない！」
「そうですか……それは残念ですね……」
　ガイがそう言ってレオンハルトの誘いとやらを断る態度を見せると、イヴは肩を落としてみせた。
（お？　意外にあっさり引き下がったな。……しめしめ……それならこのままミストラルを連れてどこかへ……）
　レオンハルトの命令ということもあってもう少し引き下がってくると思っていたガイは肩透かしを食らう。そして、それならそれでミ

ストラルレイプ作戦を実行するまでだとほくそ笑んだ。レオンハルトにこの街の滞在がバレているのが厄介だが、それくらいならどうとでもなる。いや、してみせると意気込んでいた。
　そう思っていたのだが――
「ガイ様のためにせっかく用意した美味しい料理も大勢の美女達も無駄になってしまいますね」
「……何？」
「はぁ……皆ガイ様と会えるからと気合を入れて接待の用意をしていたのに……あんなことやこんなことをするつもりで……」
「……」
「ですが仕方ありません。ガイ様が気乗りしないというなら今日の夕食会はキャンセルさせて頂きます。レオンハルト様にも、これからそう伝えて――」
　と、そう一通り口にしてイヴが踵を返そうとした。――ガイは咄嗟に口に出す。
「やっぱ気が変わった。レオンハルトの命令なら仕方ないな、行ってやろう」
「……！　それは、こちらとしても助かりますが……よろしいので？」
「構わん。魔人として上位者の命令には従わんとな。――ということでミストラルはまた今度な」
「……え、ええ。分かったわ」
　ミストラルが少し困惑するほど呆気なく釣られたガイは、ミストラルに別れを告げるとニヤニヤと笑みを浮かべて歩き出す。
「よし、案内しろ」
「はい。ではこちらへ……」
　そうしてガイはイヴの先導の下、レオンハルトのいる場所へと向かっていった。
　――そして残されたミストラルは、機嫌良く去っていくガイの背中を見つめて思う。
（……大人になって……そして魔人になってどう変化してるのかと思ったけど……案外普通ね）

久し振りの再会にミストラルとしてはガイがどう成長したかを確かめていたが、思ったよりも大人らしくなったという感想を得る。
良くも悪くも大人の男になったという感じがした。
（若干スケベな視線というか、身の危険も感じたけど……我慢してるだけマシね）
かつてのガイとは似ても似つかないが、それも色々あったからだろうとミストラルは納得する。スケベになったこともガイが大人になったことを考えれば普通のことだ。
むしろカラーの森を襲いにやって来る人間の雄よりもマシかもしれないとも思う。何が何でも女を優先するという訳でもないし、特別優しい訳でもない。むしろ粗暴になったように感じる。
だがそれでも嫌悪感を抱けないのは……やはりミストラルにとって、ガイは特別思い入れのある相手だからだろう。
「親心……って奴かしらね……」
ミストラルはそれを自覚する。かつての子供だった、おどおどしてあらゆるものに怯えていた頃と比べれば、魔人になって悪い人になったとはいえ、元気にしているだけで良いと思ってしまった。
「……さて、ガイもレオンハルト様の下へ行っちゃったし、私もそろそろ城に戻ろうかしら」
レオンハルトがガイに会うということは、おそらく家族の時間は終わっているだろう。あまり帰りが遅いと己の主に何を言われるか分からないと、ミストラルは帰路につく。
だがその足取りは今朝よりも少し軽いものとなった。

――レオンハルトシティ、とある店の一室。
「ぐはははは!!」
「きゃー!」
「やーん！　ガイ様ー♡」
「……」
その店は、レオンハルトシティに数百とある店の中でも最もグレー

ドの高い店であり、魔物将軍以上しか入ることの許されない会員制のレストランだった。
そしてその中でも最も広いＶＩＰルーム。魔物大将軍や魔人の方しか入ることの出来ないその広々とした個室に現在は――２人の魔人がいる。
この街の支配者であり、魔物界の英雄として名高い魔人レオンハルトと新たに魔人四天王となった魔人ガイ。その２人は、互いに顔を突き合わせての酒宴を楽しんでいた。
とはいえそれはサシ飲みという訳ではない。店に来たのは２人だけでも、周囲には接待としてレオンハルトに集められた人間の美女達が並んでいた。
ざっと見ても２０人近いその人間の美女達は全員がこの街の高級娼館で働く最高級の美女であり、接待にもそういうことにも慣れている極上の商売女達である。
そしてその美女の殆どが、大股を開けてソファに座るガイの左右に侍り、酒をお酌し、つまみを口に運んでいた。酒もこの店で１番高いものであり、つまみに出される料理もミシュラン一族の料理人が作った最高のものばかり。
それらを堪能してガイは笑っていた。そして、正面のソファに座るレオンハルトに機嫌良く話しかける。
「ぐはははは！　中々話せるじゃないかレオンハルト！」
「……気に入ってくれたようなら何よりだ」
「ああ、最高だ……！　ぐふふ……！」
「あんっ♡」
「やーん♡　ガイ様ってば、やらしー♪」
いやらしい笑みを浮かべながら、ガイは両脇に座っている女の子の胸や尻、際どいところに触れまくる。女の子達はそれに嫌がったりすることはなく、むしろ嬉しそうにガイの乱痴気騒ぎのノリに合わせるように楽しく笑っていた。
「飯も酒も美味いし女も良い女ばかりで気に入ったぞ……！　さすがレオンハルトだ……！　こんなことならもっと早くお前と仲良くし

とくんだったわ！」
「……グレードの低い店に入り浸られても魔物達が萎縮するからな。話は通しておくからこれからは俺の指定する高級店に行くといい。それなら良いサービスが受けられる」
「おお、そうしよう！　ありがとよレオンハルト！　ぐはははは!!」
「ふん……」
バカ笑いを続けて騒ぐ目の前のガイとそれに合わせる周囲の大量の女の子達とは対照的に、レオンハルトは静かにグラスを傾けていた。
接待に集めた美女達も殆どをガイの周囲に宛てがい、レオンハルトの隣には左右に座るたった2人だけ。
ガイが街にやってきたことをレオンハルトと同じく察知し、ガイの案内を自ら買って出た下級使徒筆頭のイヴと、ちょうどレオンハルトと共にいたため、付いてきた使徒のお町。
2人はレオンハルトがグラスを空ける時に静かにお酌し、口を開くことはない。イヴはずっと微笑を浮かべながらお酒のボトルを手に持っているし、お町はずっとレオンハルトにべったりとくっついているだけだ。この酒宴を形にするための役割を担っているだけ。
そしてそんな風に静かに酒を呑むレオンハルトに、ガイは見かねてちょっかいを掛けた。楽しそうに女の子のドレスの下に手を這わせながら。
「ぐはは！　しかし悪いな！　俺ばかり女を侍らせて！　お前はもうちょっと楽しまんのか？」
「十分楽しんでるから気にするな。俺には身内の女だけで満足だ」
「ん……」
レオンハルトが軽く酒を持っていない方の手でお町の肩を抱き寄せ、満足してるというのをアピールする。抱き寄せられたお町がその言動に少し喜んでいたが、ガイは気づかない。レオンハルトの言葉を受けて更に笑う。
「ぐはははは！　お前そういや巨乳好きなんだってな！　その割にはそっちのイヴの方は小さいみたいだが！」

「ふふふ。小さくてすみませんね」
「……別にそれだけが好きという訳ではないがな」
「ぐはは、そんな爆乳使徒を侍らせといてよく言う！　……そっちも気になるが……」
ガイの視線がイヴに。そしてお町にも向けられる。
エロいことが好きなガイとしてはレオンハルトの女もまた気にはなった。ヤリたくないかと言えば嘘になる。
だが――
「俺の女に手を出すのはやめておけ」
「……ぐはははは！　わかっとるわ！　女なんてこの世に腐るほどいるからな！」
レオンハルトの静かだが、僅かに先程より低くなった声にガイはやはり藪蛇だと意識を反らす。
確かにレオンハルトの女は極上の美少女ばかりだと聞くが、ここの女も負けてはいない。
ガイとしては適当にエロいことが出来る女がいれば問題ない。良い女で楽な女であれば尚更良い。
ジル相手はガイとしてもしんどいし、レオンハルトの女という狭いところを態々狙う必要もない。この世は魔物の天下なのだ。女とヤリたければ牧場から調達するなり野良を狩ってくるなり好きにすればいいし、幾らでも好きに出来る。あるいはレオンハルトの管理する娼館やこういう店に来れば楽しめる。――ガイはそれで十分だった。
ガイにとってはレオンハルトが思ったより話せて波長が地味に合うのが僥倖だった。最初はただの化け物で堅苦しいだけのいけ好かない奴だと思っていたが、思ったよりもスケベなことに寛容だし、普段表に出ているもう1人のガイと比べれば柔軟な思考を持っているように感じられる。
「ぐはは！　ぐはははは！」
「きゃーっ♪」
「ガイ様かっこいいー！」
「うはは、最高だ……！　おいレオンハルト！　せっかくだ、飲み比べ

でもするか！」
「……ああ、良いだろう」
美味い飯に美味い酒に最高の女達。魔人として贅を尽くした接待を受け、ガイの気分は最高潮だ。陽気にレオンハルトを飲み比べに誘うほどである。
そしてそんなガイの誘いを了承し、グラスを傾けながらレオンハルトはガイが己の思うように転んでいることに満足した。
――日中に街の警備を担当する兵から。そしてイヴからも報告が来た時はせっかくの休日の家族の時間を台無しにしてくれやがってと憂鬱と怒りがないまぜになった気持ちだったが、ガイに釘を刺しておくことも女を宛てがっておくことも重要であるため、それが叶ったことは良いことだった。
それにガイが、レオンハルトの知るような「世界中の美女は俺様の物」――だと言うような思考の持ち主でないことも幸いだった。
どうやらこのガイはエロいことが好きでも、全ての女を自分の物にしたいとか、女を大事にするという性質は持ち合わせていないようで意外にもその辺りには寛容だった。レオンハルトが女を侍らせてようが自分が気持ちいいなら問題ないとしている。
ゆえに似ているようで少し違う。ある意味で器が大きいが、粗暴で優しさはあまりない。女に対しても、他の人に対しても。
正しく『悪ガイ』とも言うべき人物だった。レオンハルトはそれを理解し、酒を飲み干していきながら思考を切り替えた。
（……さて。これでガイの方は問題ない。女も宛てがったし、そろそろ別室に移動か……あるいはもう少ししたら潰れるだろう。そうなったら俺も切り上げないとな……）
予定外に時間を取られたが、本来なら今日は休日である。ゆえに子供と過ごすか女と過ごすか。色々と自由に過ごせる日であったため予定を立てていた。本来ならこの時間は子供達を全員集めての夕食会を行おうとしていたのだが……ガイがやって来たことによりレオンハルトは参加出来ない。
今頃は子供達が和気あいあいと仲睦まじく夕食を楽しんでいるこ

ろだろう。それを思い、それに参加出来ないことにレオンハルトは小さく息を吐いた。

魔人レオンハルトに子供がいることを知る者は少ない。
地上では魔軍が跋扈しているが、その中でもかの魔人に子供がいることを知るのはその身内の者だけであり、今代の魔王ですらそのことを知らない。
ゆえにその秘密は守られているし、その秘密が守られる限り害はない。
そして地上で魔軍に――魔人レオンハルトに敵う存在がほぼ存在しない以上、害することの出来る相手も、限られている。
レオンハルトは強く、その身内の魔人も強い。配下の使徒、魔軍もまた強大であり、その子供も強い。
ゆえに人間如きでなんとかなる筈もない。仮にどうにか出来るとすれば魔王くらいのものであり、それ以外の誰も魔物界の英雄を脅かすことは叶わない。
――だが、地上以外にも範囲を広げれば、それを為し得る存在は幾つも存在した。
「――随分と発展しているようだね」
「は……」
陽の光が存在せず、しかしそれでいて曇天の日のような仄かな明かりに照らされるその場所。荒廃した大地の上に立つ街並み。それらを一望出来る崖の上の屋敷に――声が響く。
「土地の管理者としては嬉しい限りだ」
「恐れ入ります」
声を発するのは人の形をした者達だった。窓から街並みを見下ろす白と黒だけで出来た人形に、真っ白い髪をした少女とピンク色の髪となったその少女は畏まっている。
その理由はその人の形をした怪物が、畏まる2人の女性と比べて上位の存在であるからだった。

「――プロキーネ様もお喜びになられていたよ」
「……それは重畳ですね」
――何しろ彼女達は絶対的な階級制によって管理される悪魔であり、畏まる2人の悪魔よりも来訪した悪魔は上位の悪魔であるからだった。
その真っ白い髪を持つこの土地の領主である第参階級悪魔、フィオリ・ミルフィオリとその配下である第四階級悪魔であるインデックス・カラーは目の前の第壱階級悪魔に逆らう術を持たない。第壱から第壱拾弐まで存在し、それらに振り分けられる膨大な数の悪魔の中でも、第壱階級の悪魔は僅か数体しか存在しない悪魔界の絶対君主だ。
その上には三魔子と呼ばれる悪魔王の子供達。その三体の悪魔しか存在せず、上昇志向の高い悪魔達が目指し、辿り着くことの出来る最高位が第壱階級だった。
そして目の前にいる真っ黒い目をした女性の悪魔は、三魔子の長兄に当たるプロキーネの腹心を務める大悪魔であった。悪魔界の土地の管理。そこで起こる僅かながらの争いの裁定者でもあり、何が何でも自分で管理しなきゃ気が済まないプロキーネの補佐を務めるというだけでもかなり信頼されていることが窺える。
そしてその第壱階級悪魔は自らと自らの主の判断を薄い笑みを浮かべながら称えていた。その意味はこの場にいるフィオリやインデックスにも分かる。その理由を、悪魔は自ら口にした。
「やはり引き込んでおいて正解だったねぇ。インデックス・カラー……魔人と悪魔の子という前例のない話が舞い込んできた時はどうなることかと思ったが、結果として悪魔界に利益をもたらしているんだ」
「……はい。寛大な裁定に感謝しています」
「気にする必要はない。利益が見込めると思ったからこそ許したまでだとも」
「それでも感謝しております。私とあの子……ライブラが無事でいられるのもレペルタン様の裁定があってのものですから」
そう。インデックスがそう感謝を述べるように、この悪魔――レペ

ルタンこそインデックスとその子供の処遇を決定した悪魔であるからである。
　ゆえにインデックスは自らの愛しい男の次に目の前の悪魔に感謝していた。悪魔であるがゆえに信用こそしていないものの、レペルタンの裁定次第では追手の悪魔などを差し向けられ、危険に晒されていた可能性もあった。その危険がなくなっただけでも大いに感謝する理由がある。
　だがレペルタンはその感謝を受けても微笑を崩しはしない。相変わらず表情の読めない真っ黒い目でインデックスを見下ろしていた。そして告げる。
「そうかい。なら感謝のお礼代わりに君の愛しい男とやらを悪魔界に連れてきておくれよ」
「……レオンハルトを、ですか？」
「ああ。私も一度お目にかかって見たくてね。少し前にかの月餅を殺し、ついこの間は君とライブラ君にちょっかいを掛けにいったネプラカスを半殺しにしたそうじゃないか」
「……既にご存知でしたか」
「当然だよ。地上で起きることには興味はないが、悪魔界の管理は仕事なのでね。レガシオ様経由で耳にしたよ。ネプラカスが魔人にやられたと楽しそうに話してくれてね。幾ら魔人とはいえ第参階級と第弐階級の悪魔を倒せる存在と聞いて三魔子の方々も少なからず興味を持っているんだ」
「三魔子の方々が……」
　レペルタンの言葉にフィオリが恐縮する。その存在は悪魔界の中ではかなり重いものだ。目の前の悪魔と同様に、地上で生きる存在にとっては遥かに強大な――魔王に匹敵するような存在であるがゆえに。
「まあ微々たる興味であるがね。神界や配下の悪魔に関するものと比べればすぐに忘れる程度のものさ。あるいはもう忘れているかもしれないね」
「……レペルタン様は、それ以上の興味をお持ちだと？」

「部下の夫に当たるものだからね。一度挨拶くらいはしておきたいと思っているよ。フィオリだってそうだろう？」
「それは……はい。そうですね」
　レペルタンの言葉にフィオリもまた同意する。インデックスやライブラから話には聞いていても、実際に会って話したことはまだないからだ。会ってみたい気持ちは理解出来る。
　そしてその気持ちをインデックスも同様に理解はしたが……。
「……それでは伝えておきます。ただ……その、彼は忙しいので来るのはいつになるか分かりませんが……」
「何、数千年後という訳ではないなら構わないさ。時間はたっぷりあるからね。１００年でも２００年でもゆっくりと待たせてもらうことにするよ」
　魔人以上に長い時を生きる悪魔にとって、時間の問題は些細なものだった。上位の悪魔ほどその傾向がある。この辺りは魔人とそう変わりない。インデックスは承諾した。
「ではその旨、確かに我が夫に伝えておきます」
「頼んだよ。……ところで、今日はライブラ君はいないのかい？」
「ライブラなら今は地上ですが……ライブラに何か用事で？」
　ライブラがいないことを理解したレペルタンはその返答を受けて、ふむ、と頷いた。そして僅かに目を細くしながら涼しい声で告げる。
「大したことではないさ。私は子供が好きなのでねぇ。久し振りに会ってみたいと思っただけさ」
「……そうですか。では、それはまたの機会にでも」
「フフフ、楽しみにしているよ。……さて、今日はお暇させてもらうとしようか」
「もうお帰りになるので？」
「残念ながら私は忙しいんだ。３日後はボレロ・パタン様の性欲が昂る日でもあることだし、今のうちに厳選して準備しておかないとね」
　言って、レペルタンはその場から一瞬で消えてみせた。悪魔の用いる空間移動。それによって部屋に充満していた重苦しい圧力が消え、フィオリとインデックスは立ち上がる。そして両者共に息をついた。

「まさかレペルタン様が直接お越しになられるとはね……あなたの夫にそんなに興味があるのかしら」
「趣味的にそっちの意味はありえないのでは？」
「そうね。……でもさっきも言ったけど興味があるのは私も同じよ。そろそろ一度くらい旅行でもしに来ない？　家族揃って」
「それはどうでしょうね。……だけど今度修行には来ると言っていましたわ」
「修行？」
「ええ。子分も連れてやって来ると」
「……へぇ。それならいいかしら。楽しみにしておくわ」
そうして女性型悪魔達の会合は終わった。

――そしてその頃。
「ぶえっくしょーーーーん!!　ずず……何だ、どこかで俺様の噂話でもしてんのか……？」
大陸南部で巨大なリスの魔人が鼻を啜っていた。

ケッセルリンクの休日

――大陸北部。
その地域にしては緑が溢れるその領地に、魔人四天王の1人である魔人ケッセルリンクの城はあった。
「おはようございます、ケッセルリンク様」
「うむ。おはよう」
かつて魔人になる前は夜の王と呼ばれ、魔人になってからも夜間においては無類の強さを誇るケッセルリンクだが、朝日が昇ると共に寝て日が沈む頃に起きるという夜型の生活はしていない。
毎朝きっちりと同じ時間になれば目を覚まし、同じ時間にメイドが――ケッセルリンクの使徒である少女達がやって来る。今日の起床の挨拶にやってきたのはその使徒メイドの中でも最も古株であるシャロンだった。
「本日はお昼にレオンハルト様とアルベルト様がお越しになられます」
「うむ……それまでに準備をしておこう」
「はい。材料は既に揃っています」
「ありがとう」
普段、魔軍に出入りしている時。魔王に謁見している時などは高位の魔人らしい凄まじい圧力を放っているケッセルリンクだが、自分の身内しかいない場においてはその表情も声色も優しさに満ち溢れていた。
それも特に今日は、ケッセルリンクの愛する男と愛する息子がやって来る。それもあっていつもよりも更に穏やかな面持ちであった。
シャロンの淹れた紅茶を一通り楽しむと、ケッセルリンクは立ち上がり、自ら城の厨房へと向かっていく。普段はケッセルリンクのメイド達が用いるそこに、高貴なる魔人であるケッセルリンクが立つのは息子がそれを楽しみにしているためだ。
「おはようございます、ケッセルリンク様」
「パレロア。エルシール。加奈代。バーバラ。おはよう。……少し場

所を借りるが構わないかね？」
「ええ、勿論ですケッセルリンク様」
メイド一人一人の名前をきっちり呼んで挨拶を行う。彼女達もまた、今日のために食材の下ごしらえを行っているところだった。
メイド長であるエルシールに一応の許可を取り、ケッセルリンクは自分用のエプロンを身に付ける。
それは服飾を担当している加奈代が、息子のために時たま料理を行うケッセルリンクのために作ったものだった。
「うふふ。相変わらず似合ってて素敵です、ケッセルリンク様～♡」
「ふっ……」
加奈代の言葉に微笑を浮かべながら準備を始める。
その作業は材料の調達を除いて全て一から始めるものだ。
「……」
しかしその手際は良い。何度も何度も行った動作。そこに淀みはなく、メイドの中で最も料理の上手なパレロアに匹敵するものだった。
ゆえに準備を含めても時間はそれほど掛からない。出来上がった料理は約束の時間よりも早くに出来上がってしまうが――
「どうぞ、ケッセルリンク様」
「ありがとう」
使徒メイドのバーバラが持ってきた皿に乗せるクロッシュ――魔法の刻印が施されたそれには「ＭＡＤＥ　ＩＮ　ＧＯＷＧＯＷ」の文字も小さく刻印されている。
これは魔物界で流通するおおよそ全ての魔道具に刻印されているもので、ガウガウ・ケスチナという現在はレオンハルトの使徒となった魔法学者の作成した魔道具である証だ。
そしてそのクロッシュもまた、中に入れたものを入れた時の状態のまま保存しておけるという優れものである。
ガウガウ自身が研究やサボりで引きこもっている際に、いつでも温かい料理を食べられるようにと作成した１０も出回っていない希少な魔道具の１つを用いて料理を保存すると、ケッセルリンクはメイド

達と共に他の料理も作り始める。
普段であればここまではしないが、それでも行うのは今日が大事な日であるからだ。
何しろ――息子が、大切な人を自分達に紹介しに来るから。
そのためにケッセルリンクとその使徒メイド達は時間までに準備を行った。

――そしてお昼になるとまずはレオンハルトとお付きとして使徒のペールがやって来る。
そしてそれから少し遅れてケッセルリンクと同じ髪色をした美丈夫がやって来た――レオンハルトとケッセルリンクの息子である魔人アルベルトだった。
「ただいま、ママ。それにパパも」
「ああ、おかえり。アルベルト」
「半年振りだな。……そちらの娘も久し振りだ」
「ああ――メリル、挨拶を」
「は、はいっ！」
レオンハルトとケッセルリンクが視線をアルベルトの隣に向けたことで、そのカラーの少女は一歩進み出る。
そして何度も練習したかのように礼をした。
「お、お久しぶりですレオンハルト様。ケッセルリンク様。アルベルト様の下級使徒を務めさせて頂いているメリルです。そ、その、この度は……」
メイド服を身に付けたメリルはその艶やかとなった髪を靡かせ、緊張がありありと伝わってくる様子で一礼する。
その動作はお世辞にも慣れているとは言い難い。が――それでもケッセルリンクの表情は穏やかだった。レオンハルトもまた特に気にした様子もなく頷いてみせる。
「ああ、その話は聞いている。……が、まずは食事でもしながらゆっくり話そう。座るといい」

「あ、はいっ……！」
　レオンハルトに着席を促され、アルベルトに続いてメリルは席につく。その様子はやはり恐縮した様子だが、それも仕方ないだろう。ただでさえ魔人。それも、魔人の中でも頂点に位置するレオンハルトとそれに準ずるケッセルリンク。その息子であるアルベルトの３人の食事の場に列席しているのだ。緊張するのも無理はない。
「最近、森の方はどうかね？」
「ああ。一時期は少し襲いかかってくる人間も多かったが今は安定している。……それと、今度街を参考にして村に温泉施設を作ろうかと思っているんだが……パパ。許可をくれないか？」
「良いだろう。工事で足りない物資、人員が必要ならいつでも言え。最近はどちらも余ってるくらいだからな」
「ありがとうございます」
　だが一方でいつも冷静なアルベルトもまた、少し緊張していた。それもあって、好物であるオムライス――ケッセルリンクが作ったそれを前にしてもいつもより嬉しそうな面持ちではない。手をつけることなく、少し視線を迷わせていた。
「……パパ、ママ」
「……食べないのかね？」
「いや……このままでは緊張してメリルもそれどころではないだろう。だから……最初に改めて告げておきたい」
　だが隣で自分以上に緊張するメリルを横目で見て、アルベルトは意を決して口火を切る。真剣な眼差しを両親に向けた。そして食器を一度置いて。
「オレはこのメリルを……下級使徒から、正式な使徒にしようと思っている。その許可をくれ」
「……」
　そう。今日の家族での集まりは、アルベルトから伝えられたその許可を両親である２人に求めるためのものだった。
　レオンハルトの子供の中で、使徒を作ることの出来る魔人は３人いるが、その３人には使徒を作るのであれば許可を求めるように命令が

出ている。
……もっとも、アルベルト以外の2人は許可を取ることなく勝手に使徒を作り、罰を受けていたが……真面目なアルベルトはルールを破ることなく、正式に場を設けて2人に許可を取りに来たのだ。
ゆえに2人は緊張していたが……その緊張の中には、使徒化というものに対するだけでなく、また特別な感情も含まれていることをレオンハルトもケッセルリンクも見抜いていた。
「アルベルト」
だからこそ、ケッセルリンクは息子の名前を呼んで伝える。微笑を浮かべた上で。
「好きにしなさい」
「！」
ケッセルリンクは息子を信頼している。
そして、息子が選んだ相手を信頼していた。
「使徒を選ぶ権利は魔人にある。永遠を共にする相手だ。親とはいえ私が口出しすることではないとも」
「ママ……」
言葉数は少ない。だが、それもまた信頼の証だった。
アルベルトもまたケッセルリンクの言わんとしてることを汲み取っている。自分を信頼していること。そして自分が幸せであればよいと思っていること。
それらを理解し、アルベルトは深く感謝した。――だが、もう1人。父親からの声が飛ぶとその穏やかな空気はほんの僅かに引き締まることになる。
「アルベルト」
「！　……はい」
アルベルトは父である魔人レオンハルトを厳格な魔人だと思っている。厳しいだけじゃない。優しさも持っていることは理解しているが、教育方針はどちらかと言うと厳しい寄りだった。
娘ではなく息子であるのも関係してか、戦闘訓練を義務付けられたし、その内容も何度もアルベルトを実戦で叩き潰す苛烈なものだっ

た。
　ある程度成長してからはそれらもなくなってたまに軽く手合わせをする程度であるが、それでも父親が厳しい印象は拭えない。魔軍においても使徒においても人選は能力を重視することも知っている。
　だからこそ凡庸なメリルを自らが使徒にすることを認めてくれるかどうかが不安であった。断固として拒否されるかもしれない。そう思うとどうしても固くなってしまう。
　だが今回ばかりは引き下がるつもりもなかった。机の下で拳を強く握る。あるいは、認めてもらうために久方ぶりに戦うことになるかもしれないと。そんな覚悟もして。
　そうしてアルベルトはレオンハルトが言葉を発するのを聞いた。短くも、はっきりとした声で。
「好きにしろ」
「え……？」
　それは、母親と全く同じ言葉だった。
　てっきり厳しい言葉が飛んでくると思っていたアルベルトはその発言に虚を突かれ、間の抜けた声を出してしまう。
　だがレオンハルトはその様を見てふっと短く笑いながらも表情を引き締めて告げてきた。
「お前は強くなった。少なくとも、大切な人1人くらいは十分に守ることが出来るくらいにはな」
　レオンハルトは言う。父親として、大切な人を見つけた息子に対する薫陶を授ける。
「だが決して慢心はしないことだ。大切な相手は何が何でも守り抜け。失ってから後悔しては遅いからな」
「……！　はい……！」
　父親からの厳しくも己の為を思った確かな言葉に、アルベルトは強く覇気を持って返事をした。かの魔人レオンハルトの長子として、その期待には応える。
「メリルもアルベルトを支えてやってくれ」
「何かあればいつでも声を掛けてほしい。息子の使徒であれば私に

とっても身内のようなものだ」
「は……はいっ！　ありがとうございます……！　私なりに全力で……アルベルト様を支えさせていただきますっ！」
　レオンハルトとケッセルリンクの温かい言葉に、メリルもまた精一杯の感謝を述べた。
　そうして許可が取れれば、後は家族での食事の時間だ。
「さて、そろそろ料理を頂くか。今日の料理の一部はケッセルリンクが作ったそうだ」
「え……そ、それは……私などが頂いてもよろしいのですか……？」
「構わない。むしろ君にこそ召し上がってほしい。……息子の好きな味だ。君に覚えてもらえるなら息子も喜ぶだろう」
「……な、なるほど……！」
　メリルがちらりと横目でアルベルトを見るが、アルベルトはその視線に気づいて視線を逸らした。――照れ隠しのように目の前のオムライスを口に運ぶ。
　どうやら関係としては進展しているが、親の前ということもあってクールを気取っているようだった。レオンハルトとケッセルリンク。そして周囲で見守る給仕の使徒達も微笑ましくそれを見守る。
　そしてレオンハルトの背後についていた使徒のペールもレオンハルトに耳打ちし。
「レオンハルト様レオンハルト様」
「何だ？」
「私もせっかくですし、後でプレゼントを渡してもいいですか？　ほら、やっぱり夜の生活に不安があるでしょうし、ここは性技指南書を渡してアルベルト様の性欲を存分に受け止められるように教育した方が……」
「……」
　レオンハルトは耳元で聞こえるその言葉に、一瞬「馬鹿なのか？」と声を返そうと思ったが、冷静に考えると魔人が全力で性衝動をぶつけると他の生物では中々厳しいものがあるということも理解している。
　とはいえアルベルトがそれを理解していないようにも思えないし、

何だったらもう肉体関係は結んでいるようにも見える。なので改めて教育する必要はないようにも思えるが……。
「……変なことを教えるなよ」
「わかってますよう。ただ指南書を渡して、アルベルト様の性癖を教えるだけですから。ふふふ……」
「……」
なんでこいつが息子の性癖を知っているんだとレオンハルトは思う。そしてどんな性癖を抱えてるのか少し気になりはしたが、親に自分の性癖がバレるのは恥ずかしいどころの騒ぎじゃないだろうと思い、聞くのはやめておくことにした。
そしてその日――メリル・カラーは魔人アルベルトと血の契約を交わし、使徒になった。

――メリルがアルベルトの使徒になり、2人の住居があるペンシルカウに帰ったその日の夜。
ケッセルリンクの寝室。その上品なベッドの上には、レオンハルトとケッセルリンクの姿があった。
「ん……レオンハルト……」
レオンハルトは背中をベッドに預け、上から抱きついてくるケッセルリンクを抱きしめ返す。
互いに衣服は何も身に付けていない。ケッセルリンクの均整の取れた肢体。女性としての1つの完成形とも言える美しさを持つその肉体は惜しげもなく晒されている。
そしてその肌を、隙間もないくらいに強く密着し、擦り付けていた。
――レオンハルトはその肌の感触に息を漏らす。
魔人となると生物として、その個人が持つあらゆる部分が強化される。
ゆえに女であればその美しさ。肌の柔らかさ。その感触も人間における絶世の美女すらも超えた魔性の物となる。レオンハルトはそれを知っていた。

魔王の血を受け継いだジルが、その肌を撫でただけでも童貞なら達しそうになるような快感を齎す凄まじい美貌を持つように――上級魔人のケッセルリンクの肌もまた極上のすべすべさと柔らかさを持っている。

ゆえに肌を擦り合わせているだけでもその快感は凄まじいものがある。レオンハルトの身体の上で、豊満な乳房が押し潰れて柔らかさを伝え、臀部の下ではレオンハルトの魔剣を咥え込んで深く深くつながっている。そこに確かにあることをレオンハルトが尻を撫でることで確かめるとケッセルリンクの抱擁もより強くなった。

だが互いに激しく動いたりはしない。レオンハルトとケッセルリンクの二人きりの逢瀬はいつもこうだった。

互いの肌を、熱を、存在を、確かめるかのようにゆっくりと長い時間を抱擁したまま過ごす。古い魔人として時間の流れが常人とは違う2人にとって、その長く濃密な抱擁は終わってみれば一瞬に等しいもの。

だがその間は何よりも落ち着ける時間だ。そうでありながら、何よりも濃密な性感を感じるという矛盾の時間ともなる。

それを1時間、2時間、3時間……と続けていく。

「んっ……ちゅっ……はぁ……♡」

時折舌を絡め、唇と舌を合わせ合う。それもまた長く濃密なものだった。

仮にどちらかがただの人間であればその愛情と快感は飽和して何度も達しておかしくなるか――とっくの昔に。最初の段階で耐えきれずに欲望のままに動き始めるかのどちらかの現象が起きるだろう。

しかし、この2人に限ってそんなことはありえなかった。互いに互いを抱きしめあい、1つになったように感じられるほど深く繋がり続けて4時間。

「っ……イクぞ……ケッセルリンク……」

「はぁ……んっ……きてくれ……♡　あっ……♡」

互いにもうトロトロであり、煮詰まってグツグツになった性感が一線を越える。たまらなくなったレオンハルトが、ケッセルリンクをこ

れまで以上の強く抱きしめ動き始める。
　そうするとケッセルリンクもまた間近でレオンハルトを誘った。その表情、その声色は普段の優しい彼女でもなければ、公の場の厳しい彼女でもない。――ただの女の顔をしている。
　その自分にしか見せない女の顔と声。その仕草に、レオンハルトは激しく興奮する。気づけば彼女の臀部を鷲掴み、下から突き上げるように魔剣を激しく突き動かしていた。
「あっ……あっ……♡」
「っ……く……！」
　そして少しして――互いに一線を越える。
　その快感は快感も含めたあらゆる感覚に強い2人をして、頭の中が真っ白になる程のものだった。4時間分に煮詰まった末に吐き出される剣気は膨大であり、ケッセルリンクの鞘はそれを満杯にしてなお受け止めきれずに零れ落ちる。
「はぁ……はぁ……」
「ん……レオンハルト……」
　そして長い長いその時間もまた終われば、また少し落ち着いて互いに唇を交わし、身体を擦り付け合う。魔剣を鞘から抜くこともしない。互いに互いの身体を抱きしめ続ける。時折、レオンハルトが彼女の胸や腰に触れたり、ケッセルリンクも唇を落としてきたりとするがそれくらいの動きしか行わない。
　言葉数も基本的には少ないが――その少ない数の言葉もまた愛情に溢れたものだった。
「今日もまた……女としての幸せを貰った……ありがとう……」
「……言っただろう。俺の女になったからには、絶対に幸せになってもらう。これからも、幾らでも味わってもらうからな……」
　ケッセルリンクの言葉は、女として愛した男に愛され、その男との間に愛する息子を儲け、その息子がまた大切な人を連れてくるという普遍的な幸せを与えてくれたことに対する感謝だ。
　何しろ魔人になった身で、そのような幸せが得られることは本来ありえないこと。

だがレオンハルトはそれを与えた。そして、レオンハルト自身にとっても子供が出来たことは意外だったとはいえ……その言葉は自分の女に対しての宣告であり誓いの言葉だった。
ケッセルリンクだけではない。他の大勢の女を幸せにする。そのために最大限努力するし結果も必ず出すと強く決意をしている。
そしてその意志を誰よりも深く理解しているのがケッセルリンクであった。
「愛しているぞ……レオンハルト……」
「ああ……俺もだ」
「ふふ……」
誰よりもその想いを、過去も含めた苦悩も理解している。
ゆえにこそ彼を癒やしたいと思い、ケッセルリンクは魔人四天王という誰からも傅かれるような高貴である立場をレオンハルトの前でだけは脱ぎ去り、1人の彼の女となる。
「ん……ふぁ、む……♡」
「……っ……」
何度か達した後。そろそろ朝日が昇り始める夜明けが近づいてくる頃に、ケッセルリンクはレオンハルトの魔剣を自らの口に収めて綺麗にしていく。
その行為はケッセルリンクという魔人を知る人であれば信じられないような行為である。高貴な彼女がそのような奉仕を行うのは想像しにくい。
だが愛しい男の前ではその限りではなかった。髪をかき上げて少女らしい仕草すら見せて、ケッセルリンクは口を動かす。
そしてその様を見てレオンハルトは毎度のことながら息を漏らすしかなかった。もう何度もケッセルリンクと夜を共にしているとはいえ、何度見ても彼女のような高貴な女性が自らの魔剣に屈服して甲斐甲斐しくお世話をしてくる様子にはクるものがある。２０００年以上。ほぼ毎日、様々な美少女達と寝ているレオンハルトですら軽く声を漏らしてしまうほどに。
「っ……く……！」

「んんんっ……♡」
そして程なくして再び剣気を放出することになる。
ケッセルリンクはその剣気も飲み干してみせた。そして全てが終わると、カーテンの隙間からちょうど朝日が差し込んでくる。
「もう朝か……」
「足りなかったか……？」
「そりゃ本音を言えばずっとこうしていたいくらいだけどな……そうもいかないだろ」
「そうだね……」
終わりの時間が近づけば、互いに少しだけ残念そうな雰囲気を醸し出す。たった一晩だけで満足しきれるほどその愛情は薄くない。
だがそれで愛情が醒めるほど薄くもなく、名残惜しさはいつものことだ。そしてこれもまた愛情を更に深める要素となり得る。
「とはいえ……」
「んっ……♡」
そして――たまには延長戦が行われる日もある。
一緒にシャワーを浴びようと浴室に入ったところで……レオンハルトは背後からケッセルリンクを抱きしめ、その胸を背後から揉みしだく。
「……たまにはもう少し楽しんでも構わないだろう」
「ん……そうだな……ふっ……それにしても、レオンハルトは本当に胸が好きだな……全く飽きもしない」
「いつも言っているが人並みだ」
「その割には胸に触れるといつも大きくしているがな……あっ、んっ……♡」
――そうして朝日が昇ってからも、浴室では2人の声が静かに響き続けた。

ハンティとガウガウの日常

その空間は常人が決して足を踏み入れること叶わぬ空間だった。
「雷神雷光!!」「火炎流石弾!!」「黒色破壊光線!!」
全く同時に放たれるその魔法は、その全てが優れた才能を持つ高レベルの魔法使いが放つことの出来る攻撃魔法の頂点に位置する奥義とも言える魔法だった。
そのどれか1つでも放つことが出来るなら魔法使いとしては一人前どころか達人と言っていい。
だがその使用者のやり方は達人どころの騒ぎではなかった。何しろ――その魔法は全くの同時に1人で放ったもの。
どんなに優れた魔法使いであっても異なる魔法を同時に使用することなど出来はしない。それは現在その魔法に狙いをつけられた最強の魔人――レオンハルトであってもそうだった。
だがその魔人の使徒、ハンティは瞬間移動という歴史を振り返っても彼女しか使うことの出来ない絶技を用い、全く同時に、別方向からそれらの魔法を放つことを実現していた。
並の相手なら――いや、歴戦の戦士。人類最強クラスの戦士であってもこの攻撃の応酬を防ぐことは難しい。一瞬で塵と化すだろう。
「グラシエルエイジ!!」
「！　チッ……！」
だが相手はそのレベルよりも遥か高みにいる最強の魔人だ。
その代名詞とも言える剣技を用いない戦闘――魔法においてもレオンハルトはそこらの魔法の達人では及ばない高みにいた。魔人になってから得た魔法の才能と研鑽は、彼の剣技と比べればまだ理解出来る範疇のものである。
魔人の莫大な魔力を持ってオリジナルの魔法を用い、ハンティの魔法を相殺した。
「ハァァァァァァ！」
「っ！」
――だがその直後にはハンティが肉薄し、その拳を真正面から放っ

ていた。
　そのパワーは普段のものよりも遥かに強い。ハンティがそのドラゴンカラーの使徒としての真の姿を見せている。
　ゆえにその軌道は自由自在。空を自由に往き、地を駆け、空間を踏破する。
　その上でそのパワーは使徒最強であるリーのそれをも凌駕する。放った拳の威力はレオンハルトの生み出した巨大な氷山の一部を一撃で粉砕し、貫通する。
　これがそこらの人間であれば一発で粉々の肉片となりえる。ゆえにハンティは普段の力を遥かにセーブしているが、相手が自らの主であるレオンハルトであれば容赦をする必要はない。
　ともすれば殺意すら込めて拳を放った。無論、それはこの程度じゃレオンハルトは死なないという信頼があってこそのものだが――
「うぎゃあああーーーー!!?」
『ノーーーーーー!!?』
　それを受ける者――ではなく……それを見ている者にとってはたまったものではない。
　その戦闘の余波は、下手すれば流れ弾で死にかけるものだ。
　ゆえにレオンハルトとハンティのその戦闘を観戦していた使徒のガウガウは己の生み出した魔道具のブラックアイと共に悲鳴を上げた。そして自らの身の危険を思い、全力で言葉で訴える。
「やるな……！　剣を封じているとはいえ中々に苦労させられる……！」
「はん！　こっちとしちゃ随分なハンデを貰ってるからね！　そろそろ一本取らせてもらうよ!!　――グラウンド・ゼロ!!」
「複合魔法か……！　なら打ち破ってみろ!!　――プロミネンス!!」
「こらやめろーーーー!!　この私を殺す気かーーーー!!」
『エスケーーープ!!』
　ガウガウは叫びながらブラックアイに乗り込んだまま地面に飛び込むように伏せて衝撃に備えた。魔法バリアを張り、攻撃を防御するための魔道具をも発動しながら。

「!!」
「ひいいいいいい!!?」
そして次の瞬間には――空間に極大の爆発と豪炎が広がる。
それらはこの異空間の木々や緑の一切を吹き飛ばす。ハンティが作り出した異界にガウガウが手を加えた戦闘訓練用の異空間であるが、最強の魔人と最強の使徒の模擬戦に使うには些かまだ心許ない。
その証拠に空間が軋む音をガウガウは聞いた。ハンティの全力とそれに対応するレオンハルトの徐々に発揮される力に作り出した異空間は耐えられない。
「はい中止中止ーーーー!! もう終わり! これ以上は空間が壊れるから!」
「チッ……せっかく楽しくなってきたところだったのに……残念だね。これならもっと空間を補強するか、現実でやるんだったね」
「無茶を言うな。現実でこれほどの規模の戦闘を行えば周囲の被害が馬鹿にならない。異空間の補強であれば無茶ではないだろうが……それでも俺の全力には耐えきれないだろう」
ガウガウは必死にレオンハルトとハンティに両手を振って中止を訴えた。それを見てか空間の違和感を感じ取ってか、両者もまた戦闘の手を止める。
元より実験も兼ねてのものであるため止めてくれたが、これが本来の模擬戦であるならこの程度じゃ終わらない。それを思ってガウガウは恐ろしく思ったが、止まったことで安心してほっと息を吐いた。
「はぁ……終わったか……というか複合魔法なんて危ないもんを使うな! 今回の実験は通常魔法のみだって決めといたのを忘れたのか!?」
「……あー……そういやそうだったね。ごめん、戦闘に夢中になって……つい」
「ついじゃない! おかげでこの私まで死ぬところだったぞ! このカラーゴリラ!」
「……でもどれくらいの衝撃に耐えられるかって実験には役に立ったんだからいいでしょ」

「そっちじゃなくて急に使うなって話だ！　じゃなきゃ私が死ぬだろ!?　私が対応出来なかったらどうするつもりだったんだこの馬鹿！」
「わかったわかった……ごめんってば」
　ブラックアイを解いて地面に降り立ち、怒り心頭で詰め寄るガウガウにさすがのハンティも今回はバツが悪そうにする。ゴリラと言われてムッとしても自分が悪いので言い返さない。普段とは立場が逆転していた。
　そしてレオンハルトは頃合いを見てそれを止めるべく声を掛ける。
「……その辺にしといてやれ。いつもの調子で戦った俺の方にも責任はあるしな」
「勿論だ。徐々に威力を上げてくれって頼んだのに何いきなり全力出してるんだ？　馬鹿なのか？」
「……さて、それでは今回の実験は終了だな」
「そうだね。そろそろ戻ろっか……」
「2人して逃げようとするなーーーー!!」
　目を逸らし、話をはぐらかせようとしたレオンハルトとハンティにガウガウは怒りをぶつける。主だとか自分より強いだとかそんなのは関係なかった。
「はぁ……それとだな……ハンティ、お前は気にならないのか？」
「ん？　なにが？」
　そしてガウガウは更に言いたいことを口にしようとする。
　激戦を終え、ドラゴンカラーの形態を解いたハンティのその姿。それを見て……再び叫んだ。
「何がってお前……全裸じゃないか!!」
　そう。ハンティは今――全裸だった。
　レオンハルトとの激しい戦闘によって衣服がほぼ半壊して、大事なところが露出してしまっている。
　なだらかで起伏の少ない胸やそのスレンダーな身体も露わになっていた。そのことを指摘され、ハンティはそこで気づいたのか何とも言えない微妙な顔になる。
「あー……まあ……なら服貸してくれない？」

「何だその微妙な反応！　羞恥心とかないのか!?」
「いやだって……ぶっちゃけ慣れてるし……今更意識することも何もないというか……」
　正直に心情を口にするハンティ。――実際、激しすぎる戦闘によってハンティの衣服が破れることは、長年の模擬戦の中でよくあることであるため、裸を見られることにあまり抵抗はないハンティだった。
　といっても好き好んで見られたい訳でもないし、見せないで済むならそれに越したことはないが……真剣勝負の最中にそれを気にしても仕方がないため、ハンティはいつしかそれを気にしなくなった。
　その様を見てガウガウは呆れかえる。
「ハンティ……お前、女を捨てすぎだろ……これじゃ本当に野生の生き物みたいじゃん……」
「うっさい！　誰がゴリラよ！　さっさと白衣をよこしな！」
「ひっ！　ご、ゴリラって言ってないだろー!?」
「そもそも魔物界じゃ別に大したことじゃないでしょうが！」
「そ、それはそうだけどさぁ……というかレオンハルトの方は気にならないのか？」
「ん、そうだな……俺は……」
　と、言い合う2人にレオンハルトは少しだけ思考する。ガウガウから白衣を奪って身体を隠すように身に付けたハンティをちらりと見た。
（……やはり胸は小さいな……いや、それは別にいい。見た目やスタイルは綺麗ではあるし、性格はかなり好ましいが……やはりそういう目で見るには少し……）
「……ちょっと。何見てんのよ」
「……いや……」
　レオンハルトがじっと視線を向けていたのが気になったのだろう。ハンティが白衣の前を閉じてさっと身体を隠す。そこでレオンハルトも視線を反らし、ガウガウに言葉を返した。
「別に何とも思わないな。ハンティに女を感じたことはない」
「……」

レオンハルトの発言にそれはそれでちょっとイラッとしてしまい、そうなった自分にハンティは自己嫌悪した。
そしてガウガウはその言を受けて訝しんだ。
「本当か？　レオンハルトは変態だからな……ハンティの壁のような胸を見ても興奮するんじゃ……」
「雷撃」
「うひゃあ!?　や、やめろぉ！　いきなり撃つなぁ！　びっくりするだろー!?」
「チッ……ブラックアイがいるからこのくらいじゃもうお仕置きにならないか……次からはもっと威力の高い魔法か物理だ――ねっ！」
「ひゃあっ!?　そ、それもやめろーっ！　バリア！」
『ビースト……フィアー……！』
ノーモーションで放ったハンティの雷撃に、自動でブラックアイが防御を行ったことでガウガウは電撃のツッコミを免れた。続けてのパンチも防御する。――その流れを見てレオンハルトはガウガウの強さを分析した。
使徒になって身体能力も魔力も強化されたし、ブラックアイの性能もガウガウが魔法具を追加することで強化されているようだ。装甲が以前より固くなってるように思える。中から魔法も使えるし、ブラックアイの装甲を抜かないとガウガウを倒せないことを考えるとそれ込みで考えるならガウガウの戦闘力は使徒の中でも中々なものだろうと。
ただしブラックアイや魔法具がなければ高レベルの魔法使いという程度ではあるが……それでも十分だし、ガウガウが魔法具を手放すことがないから基本的にはそれを考える必要はない。
そしてそのブラックアイの厄介さは訓練相手として悪くないかもしれないとも思う。レオンハルト自身ではなく、使徒や魔物達にとって。
それを思い、計算したところでレオンハルトは発言した。ハンティとガウガウのじゃれ合いが一段落したところで。
「……ガウガウ」

「ぜぇ……ぜぇ……な、なんだ？」
「そのブラックアイのような自立した思考を持ち、戦うことの出来る魔導具だが……量産することは可能か？」
「――ん、あー、そんなことか」
　ハンティから逃げて息を乱していたガウガウだが、レオンハルトからの質問を聞くと表情を素の物に戻してあっさりと答えた。ガウガウの研究者としての顔だ。幼い顔立ちと見た目でもその頭脳は天才のそれ。専門的なことを語る口調に淀みは一切ない。右目のモノクルの位置を直して答えた。
「可能か不可能かで言うなら……可能だ」
「……そういう言い方をするということは、何か問題があるということか」
「1番の問題は材料が貴重であることだな。自立思考と動作に必要な多大な魔力を貯蔵出来るコアの作成には材料の調達も含めて長い年月がかかる」
「そういやそのブラックアイの宝石も滅多に見つからないものだったね。年数で言うなら数百年に1つ見つかれば良い方って」
「なるほどな」
　ガウガウの説明とハンティの補足にレオンハルトは頷く。確かに材料が貴重であるなら量産は難しいだろうし、その問題をクリア出来なくもないことを考えると可能であるのも理解出来る。
「なら時間を掛ければ問題はないということか」
「問題はあるぞ。この私が同じものを量産するというのは矜持に反するからな。……まあ、性能が格段に落ちる量産型と言うことであれば構わないが……それはそれで面倒ではある。魔道具に思考を持たせるのはこの私にしか施せない神業的な技術だからな。量産させるには手が圧倒的に足りない」
「ハンティでも不可能か」
「……無理だね。付与に関しては理論は理解出来ても実際に行うのはあたしは苦手だよ。何ならイヴの方が得意なくらいだけど……」
「そのイヴでも私には到底及ばないからな！　はっはっはっ！」

腰に手を当て、自慢気に胸を反らして笑うガウガウ。ふざけた態度ではあるものの、実際にそう誇っても全く問題のないほどの才能がガウガウにはある。
ゆえにその見解は信頼に足るものだった。続く言葉にもレオンハルトは傾聴する。
「もっとも、魔道具にこだわらないのであれば生物の製造は不可能ではないだろうが、そちらも茨の道だ。魔法で生命体を生み出すのはあまりにも高度な上に、仮に生み出せたとしても安定しないだろう」
「完全なホムンクルスの研究は始まってから随分と経つけど未だ成功した例は聞かないからね」
「他の人間や生物の魂と意識を移せるというなら理論的には可能な筈だがな。とはいえ、それも成功したという例は聞いたことがない、が……ふむ」
そこまで話したところでガウガウは顎に手を当てて考え込んでしまった。
だがこれ以上聞いたところで細かな理論については理解が及ばないだろう。ぶつぶつと呟き始めたガウガウを一旦放っておき、レオンハルトはハンティに声をかけた。
「また進展がありそうだな」
「ガウガウはあんなんでも天才だからね。……でもなんで急にそんなこと聞いたのさ」
「戦える魔道具の量産のことか？」
「そうだよ。今度は一体何を企んでるのさ」
ハンティからのその問いかけにレオンハルトは一瞬、どう答えるべきかと迷った。だが数秒後には思考した上で答える。
「ただの興味本位だ。ガウガウがどこまで出来るのかと思ってな」
「またはぐらかして……あんたがそう言うってことは何か思うところがあるってことじゃないのさ」
「否定はしない。だが興味があるのは本当のことだ。魔法科学の分野がどこまで進むのかには興味がある」
「……ま、別に何でもいいけどさ。そんなに技術の発展を考えるなら

パイアールにでも頼めば？　あっちはあっちで理解不能な技術の塊でしょ」
「確かにな。ガウガウと引き合わせてみるのも面白そうだ」
「向こうは良い顔をしないだろうけどね」
　唯一無二の科学技術を持つ魔人パイアールのことを思い浮かべ、レオンハルトは思案する。
　あまりその科学技術による恩恵を与えすぎるのは危険であるためそれはしないが、ガウガウと引き合わせれば両者に新たな発想が生まれ、面白いものが見られる可能性はある。
　あるいはレオンハルトの知る幾つかの高度な技術。それに似たものが生み出されるかもしれない。それこそハンティにも関わってくるあの技術なども――
「ま、あたしは戦えれば何でもいいけどさ。ガウガウの発明品は何だかんだいって面白いし、次も良い訓練になりそうで楽しみだよ」
「……」
　ハンティのその普通の笑みと共に発せられる好戦的な発言。そのいつものハンティとも言える言葉を聞いて、しかしレオンハルトはふと思う。
（……こんなんで大丈夫なのか……？）
　なんというか、また以前より好戦的になってしまった気がしてならない。そのためレオンハルトは僅かながら未来を不安に思う。ハンティのためや、自身の望む未来のためにも、ハンティには人を慮る心を維持してほしいのだが……と、そこまで考えたところでレオンハルトは質問を口にしていた。
「ハンティ」
「ん？　何さ」
「お前、好みの異性のタイプとかあるのか？」
「……」
　聞くとハンティが嫌そうな表情を浮かべた。半目を向けて、しばらく無言となる。そして数秒後に眉間に皺を寄せた上で言葉を返した。
「……急に何？　あんたまでインデックスみたいなこと言って……な

んか気持ち悪いんだけど」
「いや……そうだな。何でもない。忘れてくれ」
「……」
レオンハルトの訂正の言葉にもハンティは微妙な表情を浮かべ続ける。
だが、少しして疲れたように息を吐くと。
「別にないけど……強いて言うなら……うーん……強い男？」
「……」
ハンティが答えた。そのあまりの意外さに、今度はレオンハルトが無言となる。
そして微妙な空気が流れたところで、レオンハルトはその素直な気持ちを口にした。
「まさか答えるとは……こちらから聞いといて何だが、どういう風の吹き回しだ？」
「あんた達がしつこいからだよ。一度答えておけばもう聞かれることはないだろうし」
長年インデックスにいじられたのもあってその質問は飽き飽きとしているのだろう。もはや狼狽えるようなこともなく、ハンティはそう答える。
レオンハルトもその理由を聞けば納得した。さすがに辟易としていたのだろうと。
「……悪いな」
「別にいいんだけどさ。何で聞いてきたかは気になるね」
「興味本位だ。他意はない」
「……ま、別にいいけどね」
レオンハルトの答えに納得がいかなかったのだろう。訝しみながらも考えることをやめたハンティは切り替えて意識を別のことに移す。
「それより、本命の実験は一応成功かな。このくらいの空間なら耐久性もある程度はあるし、中に建物や人を移すことも出来る。色々なことに利用出来そうだね」

「ああ。使い道はこれからまた考える。ご苦労だったな」
「はいよ。それじゃ帰ろうか。おーい、ガウガウ？」
　魔法で生み出した異空間の実験を終え、レオンハルトとハンティは元の場所に戻ろうとガウガウに声を掛ける――が、そこでガウガウは飛び跳ねるように顔を上げ、声を大にした。
「――分かった！　分かったぞ！　これならいける！　おそらくいけるはずだ！　はーっはっはっはっ！」
「うわっ、びっくりした……分かったって何が？　また何か思いついた？」
「その通りだ！　またこの私が、魔道具の歴史に新たな1ページを刻み込むことになるぞハンティ！　こうしちゃいられない！　早速帰って実験だ！」
「はいはい」
「……まあ頑張ってくれ。やりすぎない程度にな」
　高笑いと共に目をキラキラとさせて研究意欲を燃え上がらせるガウガウにハンティは苦笑し、レオンハルトは控えめにエールを送る。
　また常人の想像を超えるような発明をするかもしれないと……そんな期待をして。

新たな別荘での休日

――大陸極東、ＪＡＰＡＮ。
大陸から分かたれたその地の最北部に、エゾという土地がある。
かつては人の手、そして現在では魔軍の手が多く入った京や江戸、なにわといった土地と違い、その地は深山幽谷で人の手の入らない土地であるがゆえに、ＪＡＰＡＮ特有の妖怪が多く住まう自然の土地だった。
だが現在では少なからず魔物の手が入る場所となっていた。
その山の麓。そこに住まう異形の妖怪達は口々に言い合う。
「まさか末知女殿様がお戻りになられるとはな……」
「ああ。しかも使徒になって俺達を統治するなんて……」
「つーことは俺達ってあれか？　魔物の仲間ってことになるのか？」
「さあ……でも別に何が変わるって訳でもないようだぜ。なんか命令があるまでは好きにしていいってよ」
「その辺りも今日聞かされるだろうぜ。なんか末知女殿様の主の魔人も来てるらしいし」
「そうだな。……ああ、そういやその名前はもう捨てたって話じゃなかったか？」
「え、マジかよ。じゃあなんて呼べばいいんだ？」
「さあ……それも後で聞かされるんじゃねぇか？」
「そうか……まあ、なんでもいいけどな。おかげでまた楽に暴れられそうだしよ」
――かつて妖怪王、狂星九尾・末知女殿の下、統治されていたＪＡＰＡＮの妖怪軍団。
その妖怪王が大陸に渡って魔人に嫁いだという話が広がってからというもの、妖怪達は統率する者を失い、自由に過ごしていた。
だが現在ではその妖怪達の多くが再びかつての妖怪王の下に付いていた。実際には、その妖怪王は妖怪ではないのだがその彼女の強さも恐ろしさも知っている上、使徒になってからも妖怪としての気配を漂わせる彼女に多くの妖怪達は恭順の意を見せた。

彼女の指示通りに山の奥に屋敷を建てたのも忠誠の証。かの魔人の別荘として使用するからしっかり作れという要請を受け、その要望通りにちょっとした規模の屋敷を建ててみせた。
「ズズ……」
そしてその日は魔人とその使徒――かつての妖怪王が屋敷を初めて訪れる記念すべき日であった。
屋敷の縁側。絶景とも言える大自然を見渡すことの出来るその場所に、普段の格好とは違う紅い紋様が浮かぶ黒色の着流しを身に着けたその魔人がいた。
「ふぅ……落ち着くな」
「お、お気に召しましたでしょうか……？」
「ああ。良い仕事をしている。妖怪とはいえ、さすがは日の本に住む日本人だな」
「ははっ……過分なお言葉を頂き感謝致します」
湯呑で熱いお茶を口に含み、息を漏らした魔人レオンハルトは、顔を右に向けて景色の邪魔にならぬように少し離れた場所で膝を突く妖怪に心からの称賛を送る。
元よりＪＡＰＡＮの文化を好んでいるレオンハルトにとって、この確かな和風建築のその趣は何よりも落ち着けるものであった。
ＪＡＰＡＮにも少ないながらも人間牧場があるため、そちらにもちょっとした建物は作っているものの、そちらは魔軍が仕事をするための施設といった用途の場所なので遊びの部分はあまりない。
だがこの別荘は違った。このエゾに建てた別荘は、魔軍とは全く関係のないレオンハルト個人の所有物であり、外装や内装にも仲介を通じて色々と注文をつけた。庭園が欲しいとか池でコイを飼いたいとか絶景を見渡せる露天風呂が欲しいとか襖の紋様はこれがいいなどと様々な要望を実現させた。
そしてＪＡＰＡＮの人間牧場の視察ついでに今日は実際に泊まりに来た。つまりこれが初使用であり、この目で完成した屋敷を見るのは初めてである。そしてその感想は、
……やはり作ってよかったな。

レオンハルトは内心で何度も頷く。大陸式の建物にはもう慣れきっているし不満も特にないのだが、やはりＪＡＰＡＮ式は落ち着く。

今度作る新たな城もＪＡＰＡＮ風にしてみようかなどと思ってしまうほどだ。……実際には、様々な理由で大陸式に落ち着くだろうが、ＪＡＰＡＮに作る別荘には自分の趣味を詰め込んでも全く問題ないし、こうして景色を見ているだけで心が安らぐのを感じていた。

普段から飲んでいるお茶もいつもより味わい深く感じる――そう思っていると、左右から声が掛けられた。どちらも女のもので、

「レオンハルト様、どうぞ」

「ああ」

右側からレオンハルトの持つ湯呑に急須で茶を入れるのは白髪を簪でＪＡＰＡＮ風に結って女中の格好をしたメイド長さんで――

「レオンハルトが気に入ったようで何よりだ……」

「ああ。これもお前が妖怪をまとめてくれたおかげだ」

「それも元はと言えばレオンハルトが我を救ってくれたからだ。気にする必要はない……」

「そういう訳にはいかないな。俺の使徒が俺のために働いたならそれを労い褒めるのが俺の務めだ」

「レオンハルト……」

「だが勘違いするな。これは魔人としての義務じゃない。他ならぬ俺がそうしたいからしてるだけだ。……だから素直に礼は受け取っておけ」

「っ……ああっ……レオンハルト……っ」

そして左側からレオンハルトの身体に抱きつくのは元妖怪王であり使徒のお町だ。

お町はレオンハルトの言葉を受けると頬を紅潮させ、抱いていたレオンハルトの左腕を更に自らの内側に抱き寄せ、その肩にすりすりと頭を擦り付ける。

使徒になってからもあまり変わらない関係性。お町にとってレオンハルトは主人であると同時に愛しい恋人であるがゆえに。

そしてレオンハルトもそれを許しているので主従関係でありながらも関わり方はあまり変わらない。同じ使徒のハンティが主従関係をあまり感じさせない在り方であるように、お町もまた使徒となってもこうしてレオンハルトによく甘えていた。
紅魔城においてはもはや見慣れた光景でもあるため――そしてそうでなくともメイド長さんは微笑を浮かべたままレオンハルトの右側で控えている。
だがその場に居合わせた女の妖怪……お町の元部下である黒い羽の生えた天狗の鎧武者のような姿の妖怪は居た堪れずに無言を貫いていた。
内心ではまさか妖怪王がここまで落ちているとはと驚きを持つと共に、出来ればここを早く離れたいとも思っている。
そしてそれを見抜いたのだろう。レオンハルトは再び顔をお町の方から妖怪に向けると欲しい言葉を口にする。
「もう下がっていいぞ」
「ははっ！　それでは失礼致します！」
畏まり、礼をすると足早に去っていく妖怪。
そうして3人きりになるとレオンハルトも改めて息を入れ、気持ちを仕事時のものから休日のものへと切り替えた。
「さて、メイド長」
「はい。何でしょうご主人様」
だがまだ命じなければならないことがあるとレオンハルトは左側で綺麗に正座をしたまま控えているメイド長さんに顔を向けて告げる。
「今これより明日まで、お前に休みを与える。俺達と共に休日を楽しむことを許す」
「……はい。畏まりました」
メイド長さんにしては珍しく、答えるまでに一瞬の間を置く。
それはメイドである自分が主の世話をせず共に休日を楽しむということをしても良いのかという迷いだが、それを行ってもいいことはもう理解している。――幾度と繰り返されたやり取りだからだ。

それゆえにメイド長さんは頭を下げてそれを了承した。そしてレオンハルトも別の者に命じる。屋敷の奥からやって来たもう1人のメイドに対して。
「メイド長が休みの間、俺達の世話は……紅月。お前に任せる」
「――はい。承知致しました」
恭しく。品のある慣れた様で一礼し、主の命令を受け取ったのは副メイド長の1人であり、白兎の母親でもある紅月だった。
ＪＡＰＡＮ出身。それも名家の生まれということもあり、ＪＡＰＡＮの女中の礼儀作法やＪＡＰＡＮ料理などＪＡＰＡＮの文化のあらゆるものに精通している紅月は今回の別荘の初使用に際してレオンハルトの世話をするために連れて来られていた。
また彼女自身としても故郷であるＪＡＰＡＮの地を踏めたことは喜ばしいことでもある。その心情を理解しているがゆえに、レオンハルトは更に言葉を追加した。
「次は白兎や他の者も連れて来たいところだな。その時にはお前にも羽を伸ばせる時を用意する」
「……はい。ありがとうございますレオンハルト様。その時を私も楽しみにしております。……ですがこうして故郷の土地でレオンハルト様にご奉仕出来るだけでも私は十分安らいでおりますわ」
「ああ。だが親子で故郷の地で過ごしたくもあるだろう。俺としても時間が出来ればそうしたい。期待していてくれ」
「くす……分かりました。ですが今は私のことはお気になさらぬよう……今日の主賓は御三方でありますゆえ」
「……ああ、そうだな」
くすりと紅月が笑うと同時に、レオンハルトの右側にメイド長さんが腰掛ける。そしてお町がそうしているように、レオンハルトの右腕にそっと抱きつくと、いつもの微笑にほんの僅かな茶目っ気を加えた。
「はしたない真似を失礼しますご主人様。……ですがご主人様が言うように休日ということですので……今日は少々積極的にご奉仕させて頂きますが構いませんか？」

「ああ、構わない」
「ふふ、ありがとうございます」
メイド長さんの腕の力が強まる。
そうしてレオンハルトの右腕はメイド長さんの着物越しでも主張する大きな乳房に沈み込んだ。
――着物で元々押さえつけ気味であるためいつもより弾力を強く感じる。しかし、それでも沈み込む柔らかさを兼ね備えるのはメイド長さんの胸が大きいがゆえだった。
そしてその柔らかさと共に感じるメイド長さんの熱を心地よく享受していたレオンハルトだったが……そうして右ばかり気にしていると、左からもまた。
「……我も今日は積極的に奉仕するぞ……」
――むにゅんっと。レオンハルトの左腕がお町の胸に挟み込まれる。
かなり大きい筈のメイド長さんよりも二回り以上大きいお町の乳房は、その危ない着こなしで谷間が完全に露出しているのも相まってレオンハルトの左腕をみっちりとその圧倒的な大きさで包み込んでしまう。
二の腕が完全に乳房で隠れてしまい、レオンハルトの身に付ける着流し越しに幸せな感触が撒き散らされるが、レオンハルトは眉をぴくりと動かしたのみで表情には出さない。いつも通り落ち着いた声で応対する。
「ああ、構わないぞ。今日は俺も余裕がある。４人でゆっくりと過ごすとしよう」
「ああ……」
「身に余る光栄に感謝します、ご主人様♡」
「ふふ、それでは私はお食事の準備をして参りますので何かありましたらお呼び下さいませ」
紅月が一旦その場を去り、縁側にはレオンハルトとお町とメイド長さんの３人だけとなる。
――そうしてＪＡＰＡＮの別荘を用いた初めての休日は始まった。

――俺は初めての別荘での休暇に心を落ち着けていた。
自分好みの別荘で静かに休日を過ごす。普段の賑やかなのも良いものだが、たまにはこうして少ない人数でゆっくりと時間を過ごすのも良いと。
それをまさに今実感していた。
「ではご主人様。こちらへどうぞ」
「ああ」
畳が敷き詰められた居間で紅月が用意した昼食に舌鼓を打った後、俺はメイド長さんに先導され、露天風呂へと足を運ぶ。
そこは俺が最も楽しみにしていた場所だ。
「おお……」
かっぽんっ――と、どこからか音が鳴る。
思わず感嘆の声を漏らしてしまったのはその露天風呂が俺の好みに合致していたからだ。
天然の温泉を汲み上げて作ったその露天風呂は石造りのものだけでなく檜風呂も存在し、多様ながら趣深いものとなっている。
そしてそこから見える景色はまさに雄大と言うべき大自然の絶景。遠くの山々、山間まで見渡すことが出来るその温泉に、俺は満足する。
風呂は俺が最も好む文化の1つ。魔人となってから遠征などで仕方がない時を除いてほぼ毎日欠かさず入浴しているほどのもの。
それだけにここまで好みの温泉を作ってくれた妖怪達に感謝の意を感じてしまう――が、まだ早い。湯を確認してからだと俺は掛け湯をしようと屈んだが……。
「ご主人様」
「レオンハルト」
たっぽんっ――と、背後からおっぱいが現れる。
脱衣所から俺に続いて露天風呂に足を踏み入れたのはメイド長さんとお町の2人だ。声掛けに反応し、2人に目を向けるが……当然だが2人の身には何も身に着けてはいない。何かで身体を隠すような

ことはなく、その身体を惜しげなく俺の前に晒している。
その裸体は見慣れたものとはいえ、何度見ても美しく情欲を誘うものだ。どちらも女性にしては背が高めで、足も長い。スタイルは抜群に良く、太腿からお尻、腰つきは女性らしい丸みを帯び、くびれている。白い肌はかくも美しきもので、見ているだけでその極上の肌質が想像出来る。顔立ちは言うに及ばず、美人という言葉だけでは足りないほどに美しいもの。
だがやはり最も目を奪うのはその乳房――おっぱいだろう。
こちらに歩いてくる度に重そうに、しかし確かに揺れるそのおっぱいはその大きさゆえに重く、そして揺れる。どちらも掌で収まらない程に大きい。特にお町のは顔よりも大きいおっぱいであり、自然と下乳に腕を回して乗せている。桃色の突き出た先端も含めてなんとも趣深いものだ。
「お背中をお流しします」
「身体を洗わせてくれ」
「……ああ、頼んだ」
そしてそれを俺は悠然と受け止める。２人の距離が抱き寄せられるほどに縮まってもそこでむしゃぶりつくようなことはしない。
無論それをしても構わないし、時にはそういう時もあるが――毎日のように入浴時はメイド達に身体を洗って貰っている身としては慣れているし、楽しみ方も全て理解っている。
まずは流れに身を任せてゆったりと楽しんでいった。温泉の雰囲気に合わせるように、２人に掛け湯をしてもらい、身体を洗ってもらう。
「ではいつも通り洗わせて頂きますね♡」
「レオンハルトの好きな乳で……んっ……♡」
そして圧倒的質量の塊が、身体に押し付けられる。
メイド長さんとお町は石鹸で自らの身体に――主におっぱいで泡立て、それをスポンジとして使った。ふわふわでもちもちでたっぷんたっぷんなおっぱいが身体の上を這い回る。
こうして洗われるのはいつものことだ。もっとも、普段であればメ

イドが１０人近くいて全身が挟み込まれるようにして洗われるのだが、２人だけであってもその快感は尊いものに変わりない。両腕を谷間で挟み込んで洗っている２人に、俺は褒め言葉を送る。
「良い心地だ」
「ふふ、ありがとうございます♡」
「我も良い心地だ……レオンハルトが我の奉仕で喜んでいるのを見ると……ずっとこうしてやりたくなる……ん……♡」
「んっ……」
ぎゅうううっ……っと。身体の前面と背面からお町とメイド長さんが同時に抱きついてきて、俺の身体が２人の身体に強く挟み込まれる。
そうすると当然２人の身体の感触が、特大のおっぱいが俺の身体の上で潰れて柔らかい感触で埋め尽くされる。その心地よさに思わず声を出した。耳元に２人が囁いてくる。
「んっ……お町様の言う通りです。今日はご主人様に喜んでもらうために……私達が癒やしの時間をご主人様にお送り致します」
「レオンハルトは何もせずとも良い……ゆったりと身体を投げ出して……日々の疲れを癒やしてくれ」
「ああ……それは助かるな……」
身体を滑らせるようにして、俺の身体に乳房をみっちりたっぷりと押し付けるメイド長さんとお町。
気持ち良すぎて軽く前面のお町の背中に手を回し、その背中や腰、臀部を撫でた。お町が身震いする。そして俺に間近で言った。おっぱいをこちらの胸板から上に滑らせながら。
「ん……無論、欲望を素直に解放してくれてもよいぞ……こうして……んっ……レオンハルトの好きな乳も存分に味わわせるゆえ……」
「ん……っ」
にゅる～～……っ♡　と、お町のおっぱいが胸から首元をなぞり、そのまま眼前まで移動してくる。
するとそのまま俺の顔をおっぱいで挟み込んだ。視界がお町の白い肌――乳間で埋め尽くされる。

「レオンハルトはこうして乳房に甘えるのが好きよな……存分に甘えてくれ……んっ……♡」
「ああ……」
顎の下から頬。目元などは言うに及ばず、耳までたっぷりと密着して包み込んでにゅるにゅるとおっぱいで顔を――もはや頭を挟み込んで洗われる。
だがそれで終わりではない。背後からもメイド長さんが、後頭部にその3桁超えのおっぱいを滑らせてきて。
「そうですよ。こうして……んっ……温かく包み込んであげますから頭を空っぽにして楽しんでください……♡」
「んっ……まだ顔が強張っておるぞ……首から肩まで力を抜いてよい……乳房に顔を預けて甘えてくれ……♡」
「はぁ……」
メイド長さんが後頭部から頭をおっぱいで包み込んでくると、こちらの首から上は３６０度。全方位がおっぱいに包まれた。
２人が手で谷間を寄せて、俺の顔におっぱいを強く押し付けてくれる。それがあまりにも心地よくて俺は言われた通りに力を抜いた。そうして顔を自分からゆっくりと動かし、お町の深すぎる谷間を顔で堪能する。
するとお町も更にぱふ、ぱふと何度も俺の顔に乳圧を加えて甘やかし、メイド長さんもそれに呼応して背後から首や肩を中心におっぱいを塗りつけてくれる。
「ふふ……ご主人様の得物も、心地よくなってますよ……♡」
「本当じゃな……ここも、洗ってほしいか……？　んっ……♡」
そして気づけばメイド長さんの手は魔剣を掴んでぬるぬると擦っている。
お町の股ぐらに魔剣の先端がぬるんと擦り付けられながら、それもまた心地よさを感じて俺は息を吐いた。このまま洗ってもらってもいい――が、このままじゃ温泉を味わう前にこっちに注力してしまう。
「ん……そうだな。だが……先に湯に浸かりたい」

「はい、分かりました」
「うむ……ならまた後でな……」
俺がそう言うと、メイド長さんとお町が魔剣を2人で掴み、にゅるにゅると軽く擦る。それからしっかりと洗った後、名残惜しそうに手を離し、再び湯で身体を流してくれた。
――そうして魔剣が臨戦態勢に入りながらも落ち着き……3人で湯の中に足を踏み入れた。
「はぁ――……」
「ん……これは……中々に心地よい湯だな……」
「少々熱めですが良い泉質ですね」
湯に身体を沈め、温泉を堪能する。思わず深い息が漏れた。普段溜め込んでいる憂鬱さ。ストレスが僅かでも吐き出されるような心地だった。
「良い湯だ……景色も良いし、気に入ったぞ」
「お気に召したようで何よりです」
「我も気に入った……それをレオンハルトと共に堪能出来る幸福も含めてな……」
「ああ。それは俺も同じ気持ちだ」
左右から、メイド長さんとお町が寄り添うように身を寄せてきたので、腕を広げて2人を迎え入れてやる。先程全身にたっぷりと押し付けられた2人の乳房が再び俺の胸の上に密着した。それもまた心地いい。……やはり熱いお湯とおっぱいの相性は良いな……と、天然物の温泉と天然物の爆乳を感触でも景色でも楽しむ。自然の山間部の雄大さを楽しみ、一息つくと左右でお湯に浮かぶ深い谷間や2人の白い首筋、熱めの温泉でほんのりと紅潮したうなじを目で堪能する。間近で2人の顔を時折見つめ、その美貌と向けられる愛情を享受した。
「ちゅっ……♡」
「ん……」
そしてそうやって間近で2人を見つめていると、自然と唇を落とされる。
しかも今のはお町と見つめている最中に、こちらの左頬に落とされ

たキスだ。俺は反対を向いてメイド長さんに言う。
「今キスをしたか？」
「さて……どうでしょうか。確かめてみては？」
「どうやってだ」
「直接味わってみれば分かるかもしれませんよ？　くす……♡」
　メイド長さんが口元に手をやってくすりといたずらっぽく笑う。そうやって気を引いてきたのが妙にいじらしくて可愛らしく、俺はその誘いに応じてメイド長さんに顔を近づけた。
「んっ……はぁ……ご主人様……♡」
　そうしてメイド長さんの唇の感触を味わう。愛情たっぷりの、吐息混じりのゆっくりとした接吻を味わった。
「むぅ……レオンハルト……こっちも……」
「っ……ああ……なら次はお町の番だな」
　だがそうしているとお町が軽く嫉妬し、こちらの頬に手をやってこっちを向いてくれと誘われる。それに応じ、俺はメイド長さんから唇を離すとそのまま反対を向いてお町の唇を奪った。
「はぁ……ん、ちゅ……レオンハルト……♡　もっと触れて……愛してほしい……♡」
「ああ。愛しているぞ」
「んぅっ……！」
　お町のリクエストに応え、そして自身もそうしたいからとお町とキスをしながらそのお湯に浮かんでいた爆乳を揉み上げる。
　掌の上にたっぷりの乳肉。手の中に収まりきらず、その大きさに見合った重さを持った、たっぷたぷのおっぱいを堪能する。掌に幸せな感触が弾け、突き立てた五指とそこで一揉み毎に感じる重さと柔らかさはあまりにも極上だった。ふわふわでたぷたぷでもにゅもにゅの感触。聞こえる筈のないオノマトペが頭の中で反復してしまう大きすぎて揉みきれないほどのそれを、何度も何度も、揉みほぐし、揉み回すように手の中で弄んでしまう。
　だがそうしてお町に注力していると、やはり反対側からもアピールは来た。

「ご主人様……興奮していらっしゃるのですね……♡　すごく逞しくなられてますよ……？」
「……ああ……2人のおかげでな……」
　乳白色の濁ったお湯の中で、メイド長さんの手が魔剣を握って洗っていた。その感触に、再びメイド長さんの方を向くと、もう片方の手でメイド長さんのおっぱいも揉み上げてキスをした。
「レオンハルト……腰を上げてくれ」
「……ああ……」
　そうしてメイド長さんの爆乳も掌で楽しんでいると、お町がこちらの右側から正面に移動してきた。その意味を理解しながらも、俺は抗わずにお湯の中に身体を浮かせる。自然とメイド長さんが背もたれになってくれた。
「んっ……相変わらず……硬くて熱い……」
　そうして浮き上がったこちらの魔剣は、お町のその3桁どころか1２０センチを優に超える爆乳でずっぽりと挟み込んでくれる。……熱いお湯の中でゆったりとしながらのそれはあまりにも心地良くて包み込まれた瞬間に息を漏らしてしまった。自然と首から力を抜き、メイド長さんに受け止められる。
「ご主人様、お加減は如何ですか？」
「ああ……どっちも最高だ。熱くてふわふわで……蕩けそうだ……」
「レオンハルトの魔剣も……はぁ……我にとっては包んでいるだけで心地よいぞ……それに使徒化のおかげか……以前にも増して馴染む気がする……」
「お町様の胸は今まででも城の中で1番だったのに以前よりも大きくなりましたからね。きっとご主人様好みになったのでしょう」
「うむ……我の身体は、全てレオンハルトの物だからな……。この乳房も、レオンハルトをより楽しませるためのものとなったのだろう……おかげで以前よりも気持ちよさそうな顔を見せてくれて……我は嬉しい……」
「っ……」
　お町が左右から強く、谷間を締めて魔剣を圧迫してくると、どうし

ようもなく感じてしまった。
だがそれも致し方ない。使徒になる前からお町のおっぱいは、ただでさえ極上だったというのに使徒になってからは大きさも触り心地も更に素晴らしいものになっている。数多のおっぱいを堪能してきたこの俺だが、お町のおっぱいの感触はその中でも随一と言える。おかげでお町が侍ってくると抗い難くて困るし、おまけにお町もこちらの好みをすっかりと熟知しているせいで隙あらばおっぱいを色んなところに押し付け、その気になれば本番の前に自ら挟み込んでこちらを悦ばせてくる。こちらが反応を見せるのが嬉しくて気に入ってしまったようだった。何度も行って単純に上手くなっているのもあってたまらなかった。
「ふふ、ご主人様が気持ちいいようで何よりです……♡」
「メイド長……」
そして間近ではメイド長さんが後頭部をおっぱい枕で受け止め、抱きしめるようにしながら囁いてくる。その色っぽい表情で――
「ですが……まだまだ……♡　もっと気持ちよくして差し上げますから……♡」
――ちゅっ。
「覚悟しておいてくださいね……♡　ご奉仕は、まだまだ始まったばかりですから……2人目が出来ちゃわない程度に頑張ってくださいね？」
「っ……ああ……」
「ふふ、愛してますよ……ご主人様……♡」
「んっ……レオンハルトのが胸の中で硬く……♡」
間近でキスと共に愛を囁かれ、うっとりとしてしまう。
ちゃぷちゃぷ、たっぽたっぽとお町がおっぱいをお湯の上で動かす音とメイド長さんの囁きを受けながら――俺はその休日、最初の昂りを間もなく吐き出すのだった。

カミーラとの休日

――魔人レオンハルトは常に問題に取り組んでいる。
魔人筆頭にして魔軍参謀という魔軍の要職に就き、多くの配下を抱えるレオンハルトにはやらなければならないことが沢山あった。
それは普通の人間が抱える問題と比べて規模の大きい、能力がなければ達成出来ない難題ばかりではあるが、能力があるレオンハルトにとってそれらの職務について然程悩むことはない。
今の時代が魔物の天下であることもあるが、そうでなくとも統制を執るということに慣れているレオンハルトにとっては大きな悩みにはなりにくいもの。軍事や戦いにおいては言うに及ばず、レオンハルトに解決出来ない問題はあまりなかった。
……だが、そんな中でレオンハルトを唯一悩ませるのが――人間関係に関することである。
魔人も人間も変わらない。知性ある生物であれば誰もが抱える悩みを、レオンハルトもまた抱えていた。
それも身近な友人や配下に存在するのではなく、街で最近話題の占い師とやらに相談しに行くくらいには悩んでいる。むしろ身近な存在には相談しにくいことを相談するのに占い師というのはうってつけの存在だ……と、レオンハルトはそう思っていたのだが――
「……お前か……」
「人を見るなり嫌そうな表情を浮かべるとは酷いねぇ、閣下」
その占い師は思い切り知人だった。最初に出会った時と全く変わらない容姿。長く艶やかな真っ白い髪を靡かせた若々しすぎる美少女――机に置かれた水晶の前で崩れることのない微笑を浮かべているその様は、まさしく未来視の魔女〝C〟に他ならない。
「それで本日はどういったお悩みで？」
「普通に進行しようとするな。ここで何をしている？」
「何を、とはまた異なことを。見てわかる通り、清く正しい占い師ですとも。この街への滞在は閣下自身がお許しになられたことと記憶し

ていましたが……」
「……ガイの性行為の練習台にうってつけだったからな。確かに認めはした。……が、街で占い師を開業したとは聞いていないが？」
「言ってませんからな。……おっと睨むのはやめていただきたい。以前にも言いましたが私のような普通の人間には閣下の放つ気は強すぎて身が持ちません」
　涼しい顔でそんなことを告げる魔女に、レオンハルトは少しばかりイラッとさせられながらもその気を収める。
「……まあいい。今度から何か動く時は報告しろ。ここに滞在を許す以上、お前もまた俺の管理下にある。勝手な行動はするな」
「ふふふ、まだ閣下の部下になった覚えはないのですが……良いでしょう。了解致しました。これよりは貴方様の部下のおつもりで動き、逐一報告を致しましょう。差し当たっては……そうですね。最近の過ごし方でもご報告致しましょうか。この街に住み始めてからというもの、随分と充実した日々を過ごさせて頂いておりますよ。最近は食べ歩きやショッピングが趣味になりまして。昨日は休日として朝から近くのカフェでゆっくりとパンとコーヒーをメインとした朝食を頂き、昼間は劇場で観劇を楽しみ、屋台で食べ歩きを行い、それから幾つか本と衣服を手に入れました。本のジャンルは主に最近話題だという漫画本で、衣服は魔法使いのローブと黒いタイツを数点。後は下着ですね。色は水色としましたが、閣下の好みは如何ようで？」
「如何ようで？　じゃない。戯れるな。重要なことだけ報告しろ」
「お言葉ですが閣下。男性にとって私のような美少女の下着はともすれば何よりも重要な物かと。隠れ里でもこの私の短いスカートと黒いタイツに包まれた奥底を探究しようと多くの男性がその目を向けておりました。その目はまさに未知を求めて迷宮に挑まんとする冒険者が如くギラギラしておりましたね。……ああ、そうそう。今は閣下のお子さんの使徒となっているスケアクロウとやらも覗いておりましたよ。主共々かなり飢えているようで、視線を何度も私の太腿へと向けていました」

「……カイゼルと会ったのか」
「ええ。変装して羽も隠しておりましたが。どうやら童貞のようで卒業のためにはどうすればよいかと熱心に話していましたよ。風俗に行く計画も立てているとか。閣下はそのことをご存知で？」
「……ああ、知っている。その対処はそのうち行うつもりだ」
「でしたらお早めに実行すると良いでしょう。あのままでは拗らせてしまいます」
「そうだな……そうしよう」
「はい。それで、お悩みはそれだけで？」
「……いや、違う」
　ふざけた応答を返してきたことに最初は視線を険しくしたが、気づけば自身の子供のことでアドバイスをされてしまい、レオンハルトは狐につままれたような感覚を得る。相変わらず胡散臭い上に口がよく回る。
　だが悩みを解決する能力において未来視の魔女の力は有用なことは認めざるを得ない。レオンハルトは続いて悩みを口にしようとした。――が、その前に。
「それと今度から私のことは〝Ｃ〟ではなくシビュレー。もしくはシビュレーちゃんとお呼びください。あの方を導いた時点で長の継承は済ませ、その名は返上致しましたので」
「……返上しただと？」
「ええ。神業染みた未来視の力も継承致しました。なので今の私は未来視の一族の長、Ｃ・バークスハムではなく、役目を終えた凄腕の占い師、シビュレーちゃんという次第で」
「継承したのにまだ占いは出来るのか」
「我々の一族の継承は、歴代の長の記憶、知識と共に技能ＬＶを１。１つだけ継承するものでして。一族の中で占いに優れたＬＶ２の人物に、長としての力として技能ＬＶを１加えることで占いＬＶ３という神業に等しい予知の能力を得ているのです」
「技能ＬＶを……？　そんなことが可能なのか？」
「一生に一度の奇跡のようなものです。これも禁術の一種でしてね。

これを行った術者は死亡します――が、私はその代償をまた別の反則技で踏み倒したのでまだ生きています。とはいえ、２度同じことは出来ませんがね。そういったことを期待していたのなら申し訳ない」
禁術と言われ、ガイの禁呪をその身でよく理解しているレオンハルトは驚きを得つつもその説明で得心する。技能ＬＶという世界の理についても当然だがよく知っていた。極稀でケースは限られているものの技能ＬＶが変動する事例も知っているからこそレオンハルトは頷ける。
だがそれが出来るというのは、やはり人間としては規格外な証拠だ。
「……なるほど。お前も大概だな」
「ええ。他の一族には出来ないし、するつもりもないことです。しかし私は未来のバークスハムとはまた違った特別でして。あのお方を二度と戻れない道へ引きずり込むための重要な役目を持っています」
「……ガイのことか」
あのお方、とこのＣ――バークスハムの一族であるシビュレーが言う相手はガイしかいない。
レオンハルトが口にするとシビュレーもまた頷いた。その微笑を更に魔女らしい形へと変化させながら。
「はい。私はあのお方を魔の道へと引きずり込む導き手。あのお方が苦しむことになると分かっていながら白々しくも近づき、嘯いた悪い未来視の魔女」
シビュレーは言う。魔女らしく、感情の読めない笑みを浮かべながら。
「それゆえに、未来のバークスハムと違ってあのお方の良き理解者、良き相談者にはなれない。あのお方に必要なのはもう少し誠実な人柄のバークスハムなのさ。私では、それは担えない」
「……ならお前の役目は終わったということか」
「いえ、いざという時の保険は必要なのですよ閣下。今の私はもはやかつてのような遠い未来を視ることは不可能だが、それでも生き続けることで出来ることがあるのは知っているのでね。誠実ではない、不

実のバークスハムである私にも使いようはある……こうして閣下が私に尋ねに来たように」
「……」
　シビュレーの要領を得ない曖昧な言葉にレオンハルトは暫し無言となって考え込んだ。が、すぐに考えたところで分かるはずのないことだとして思考を一旦隅に置くと代わりに別の言葉を掛けた。
「お前達にはどこまで視えているんだ？」
「閣下の思うほど視えてはいませんよ。未来視の術も万能ではない。視えるのは場面を切り取ったような僅かな光景のみで、細かいところを知れる訳ではないのです。我々が何でも知っているように思えるのは実のところ代々蓄え、受け継いできた知識の面が大部分を占めておりまして。足りない部分を未来視で補っているんですよ」
「……そうか。なら、確実な便りとは言えないな」
「ええ、なので今の私は占い師。とはいえ、的中率には自信がありますがね。――さて。そんな占い師風情のこの私、シビュレーちゃんに相談しにきた閣下はどんな悩みをお持ちで？」
　そこでレオンハルトのここに来た目的をシビュレーは尋ねる。それに対し、レオンハルトは苦い顔を浮かべた。相談しに来たは良いものの、本当に尋ねて良いのかという迷いだ。
「ご安心めされよ。私は適当に外すことでバランスを取っている占い師ですから、バランスが崩れそうな占いは本気を出しませんし、本気を出したとしても占えることも限定的であります。運命を大きく揺るがすような占いはしませんとも」
「……言われずとも、そこまで重要な問題なら占いなどに頼りはしない。今日はあくまで参考程度に……そう、指針を尋ねに来ただけだ」
「左様でしたか。でしたらどのようなお悩みで？」
「それは、だな……」
　レオンハルトは悩む。難しい顔で悩み、迷い、そして、他言は無用だと注意した上でゆっくりとその内容を口にした。
「……カミーラのことなんだが……」
「……ほう？」

そうしてレオンハルトは遂に口にした。――魔人カミーラの勘違いに対して、レオンハルトはどういう風に立ち回れば良いのか……その悩みを、レオンハルトはゆっくりとシビュレーに打ち明けていった。

――大陸西部。カミーラの城。

その豪奢な城の一室で、魔人カミーラは赤ワインを楽しんでいた。

薔薇の風呂と同様に好むそれを楽しむ姿。その美しさは比類なきものであり、カミーラの下級使徒である美少年達もカミーラの姿を見て恍惚とした表情を浮かべている。

「……あ、あの……カミーラ様？」

「……なんだ？」

だがそんな中で、そのカミーラに最も近い位置にいながら戸惑っているのは正式な使徒であるラインコックだった。

女性と見紛うほどに可愛い容姿を持つラインコックはカミーラのお気に入りであり、それゆえに特に可愛がられている。

今この時も赤ワインを楽しみながら、時折側にいるラインコックの頭や顎を撫でることがある。その可愛がり方はまさしく愛玩動物のようで、その度にラインコックは身体を震わせてしまうのだが――主の気がそぞろなことに、ラインコックは気づいていた。ゆえにこう問いかける。

「今日は機嫌がいいですね……」

「……そう見えるか？」

「は、はい。見えます」

「ふ……そうか」

ラインコックの問いかけに、カミーラは優しい微笑を浮かべてみせる。その表情も素敵でまたしてもラインコックは見惚れそうになった――が、それをすんでのところで堪えて、ラインコックは主の反応を仰ぎ見る。

赤ワインの注がれたグラスを一旦机に置き、やや思考に身を投じた

カミーラは、ラインコックの問いかけにこう答えた。
「別になんということはない……」
「そ、そうですか……」
「ああ、何もないぞ。ふふ……」
そう答えるカミーラは、自らの左手の薬指に嵌めた貴重な宝石をあしらった指輪をさらりと撫でて笑う。そこでラインコックは確信した。
（や、やっぱり何かあるーー!?　それレオンハルトから貰った指輪ですよね!?　カミーラ様!?）
ラインコックに稲妻走る。やはり、やはりだったのだ。
最近のカミーラが機嫌が良い理由は、やはりあの魔人――レオンハルトが原因だとラインコックは気づく。魔人四天王の座を剥奪され、苛立っていたはずのカミーラの機嫌が収まったのはレオンハルトと共に出かけ始めてからだ。
使徒達――下級使徒も含めた自分達はどうしたものかとオロオロしていたその時に、レオンハルトはどういう訳か指輪を贈り、何かをして主の機嫌を直してしまったらしい。
もっとも、それだけならラインコックは感謝するが……その要因が、レオンハルトを気に入っていることとなると看過出来なかった。
（あの魔人〜〜!　カミーラ様から寵愛をいただこうとするなんて……!　どうにかしないと……!）
このままでは主が結ばれてしまいかねない。そのことを内心苦々しく思うラインコックだが、ただの使徒の分際でカミーラよりも位の高い魔人に異議を唱えるなど出来るはずもない。そのことは理解している。
「……あ、あの!　カミーラ様!」
「？」
そしてその葛藤に全く気づいていないカミーラに、ラインコックは振り絞った提案を口にした。――己もデートの供に連れて行ってほしいと。

――それから数日後。
「がるるる……」
「……」
その日はカミーラと供を連れ立ってのお出かけの日だった。
レオンハルトは事前のアドバイス通りの場所へと――近くまではライゼンに乗って――向かって歩いているとカミーラの使徒のラインコックがこちらを警戒した様子で唸っているので、なんとも言えない思いを抱く。
……明らかに警戒しているな……。
ラインコックの番犬っぷりにレオンハルトは無反応を貫きながらカミーラと共に前を歩く。その少し後ろで自分に対して威嚇を続けるラインコックに、レオンハルトは軽く息を入れた。その直後。
「ぐるるる……！」
「ひっ……な、何よあんた……!?」
――背後で、もう一方の使徒がラインコックに対し威嚇を行う。レオンハルトはちらりとそれを見て、それが連れてきたミシェーラであることを確認すると嘆息した。ラインコックの警戒を感じ取り、ミシェーラの方もどういう訳か似たようなことをして対抗し始めたらしい。レオンハルトはカミーラと並んでいるため、自分で声を掛けずに背後の他の使徒に対応を任せながら聞き耳を立てることにした。背後では己の最強の使徒がそれを見かねたようで。
「こらこら。何やってるのさ」
「む、ハンティ様。いえ、こちらのカミーラ様の使徒がレオンハルト様に対して威嚇をしていたので……ミシェーラは追い返そうかと……」
「べ、別に威嚇なんてしてないわよ！　言いがかりはやめてくれない……!?　がるる……」
「このミシェーラが嘘をついているとでも……!?　ぐるる……」
「あんたらはわんわんか」
ハンティが2人の使徒のやり取りを見て呆れたようにツッコミを入れる。すると次に気が付いたのはまた近くにいた使徒達だった。

「弁えなさいラインコック。このお出かけはあくまでカミーラ様とレオンハルト様のもの。使徒が出しゃばってはいけませんよ」
「そうですわよ姫原さん！　完璧使徒であるこのわたくしの後輩であるなら、この七星やわたくしを見習って主の影となることですわ!!」
「うっ……でも……」
「み、ミシェーラは護衛として反応しただけで……それと姫原ではなくミシェーラです！」
「弁えなさい」
「言い訳無用！　ですわ!!」
「うう……」
「……申し訳ありません」
「どうでもいいけど影にしてはうるさいよ。あんたら」
　キャロルに七星。自分の第一使徒とカミーラの第一使徒が揃ってそれぞれの後輩を諌めているのを見て、レオンハルトは賑やかな旅路に微妙な気分になる。こんなことで本当に上手くいくのかと。
「……あれが目的の迷宮か？」
「……ああ。あの迷宮の最奥には財宝が眠っているらしい。それをお前にプレゼントしようと思ってな」
「ふっ……そうか。それは楽しみだな……」
「……」
　――と。そうして突然声を掛けてきたカミーラにもレオンハルトは応対する。今回の目的地。見えてきた迷宮の入り口に反応しつつ、気の利いた答えをプレゼントしてやればカミーラは薄く笑みを浮かべて喜んでくれた。
　この反応から見ても、カミーラが悪い気分ではないことは明らかである。長年の親交の賜物と言うべきか、レオンハルトは全魔人の中で自身が最もカミーラと仲がいいという自覚はあった。
　だが……だからといってこれ以上どうするべきかは悩みどころであった。レオンハルトは少し前に、この場所に行くことになったその相談の内容を回想する。
『ほうほう。魔人カミーラが、勘違いをしていると』

『……ああ。それで、どうすればいい？　良い結果に導くためにはどうすればいい？』
『良い結果とはどういう意味で？』
『カミーラの機嫌を損なわず、今まで築いた信頼が地に落ちず、関係性が失われるようなことにならないような結果だ』
『ふむふむ。なるほど。では占ってみましょうか』
――レオンハルトはその難題に対し、自らの中では答えが出ないため苦渋の決断で未来視の魔女を頼った。
既に未来視の技は失われているとはいえ、占い師としての腕前はまだまだ健在である。そのため、胡散臭いながらもレオンハルトはその魔女の言葉を信用した。
魔女の瞳と水晶の輝きがリンクする。そうしてその輝きが収まった後の言葉は、占い師らしい曖昧な言葉であり、占い師にしては明確な言葉であった。
『北の地――とある迷宮に向かうと良いでしょう。ふむ。とりあえずはそこに向かうことで良い結果に繋がるかと』
『迷宮か……それは良いが、それだけか？』
『ええ。後は……そうですね。期待を裏切らずにいるのが良いでしょうな。その勘違いが露見すれば閣下の望む結果にはなりえませんので』
『……信じていいんだな？』
『ご安心を。何を隠そう恋愛占いは私の得意分野でして。必ずや閣下の期待に応えられるでしょうとも』
『……そうか。分かった。ならとりあえずはそうしてみよう』
――と、そのような会話の果てにレオンハルトはカミーラを誘った。
もう既に何度も出かけているし、カミーラとの会話には慣れている。伊達に二千年近く関わってはいない。
それゆえにただの会話には問題は全くないが……カミーラが、こちらの好意が勘違いだと気づかないようにある程度は期待を持たせて振る舞わなければならないと、レオンハルトはいつもの自然なやり取

りに少しばかし好意を感じられるスパイスを含ませた。
それは先程のように「お前にプレゼントしたい」だとか「お前と出かけたい」などといった言葉を直接的にする程度のものである。……というより、そういったことしか出来ない。恋愛に関して器用なことは今までしてこなかったとレオンハルトは自らを省みる。
だがそれでも出来ない訳ではないが、おそらく行き過ぎた振る舞いは逆効果だろうと判断し、レオンハルトは自然を意識している。あくまでも普段の振る舞いで、自分の正直な気持ちを言動にするだけでいい。
いや、むしろそれ以外は蛇足であり余計なことだと思っていた。勘違いを助長している身を思えば何とも言い難いが、それでもカミーラに好意がない訳ではないし、カミーラと仲良くなりたい気持ちも嘘ではない。
なのでそれをストレートに、少しばかり匂わせるだけで問題はない筈だとレオンハルトは自身の振る舞いに自信を持っていた。心に思ったことを言うだけでいいのだ。何も難しいことはないと――。
「さあ行くぞ、カミーラ。今日の旅路はお前の美しさに磨きがかかるものとなる。俺が保証しよう」
「っ……ああ」
――そうしてレオンハルトはカミーラやお供達と共に迷宮へと潜っていく。
その自覚した言動が、凄まじくカミーラに効いていることを自覚しないまま。
(今日は随分と情熱的だな……だが、気分がいい。まさかレオンハルトの口からそのような賛美の言葉が聞けるとは……レオンハルトめ。よっぽど私のことが好きと見える……ふふ)
一方のカミーラは、レオンハルトの直接的な言葉に、凄まじい愉悦を感じていた。
レオンハルトは分かっていないが、普段は実直なレオンハルトが発する好意の言葉。その魔力は凄まじい破壊力を秘めている。
雄としての頂点に位置するレオンハルトの好意は、カミーラの心を

くすぐって仕方がなかった。
　元より宝石や美しいものを好み、それらで自身を飾り立てるのを好む性格。そしてプライドの高いカミーラにとって、レオンハルトという男が己を尊重して持ち上げてくれるのは、もはや快楽すら伴うほどの優越感をもたらしてくれる。
　ゆえにカミーラの機嫌は最高に良かった。それは傍目から見ても分かるくらいには。
　そして、それを見た使徒が恋心によるものだと勘違いを起こす程には。
「むぅ～……！」
「……膨れるのは良いですが、邪魔をしてはなりませんよ。ラインコック」
「むぅぅ～～……!!　分かってる……よ！」
　カミーラの使徒のラインコックが迷宮内を進みながら頬を膨らませて不満を露わにしている。かといって邪魔をする訳にはいかないことは七星に言われるまでもなく分かっているため、その不満は迷宮内で襲ってきたモンスターや偶然遭遇した人間に向けられた。ラインコックの振るうハンマーによって、生き物がぐちゃっと潰れる。
　それを見て、傍らにいた別の男は感慨深く言葉を口にした。
「ふむ……あのカミーラがああも雄に対して良い顔をするとは……」
「……そういえばあんた誰？　カミーラ様のことを知ったような口だけど、それ不愉快だからやめてくれない？」
「む……すまない。少し感慨深くてな、不躾であったか」
　と、そうラインコックに謝るのは身長が２メートルを超える巨漢の、彫りの深い顔立ちの初老の男性だった。
　その身なりは格闘家風であり、体躯は筋肉質。白い輝きを持つ長髪を後ろで一本に纏めており、それが尾のようにも見える。顔には大きな一本の傷痕があり、歴戦の戦士の風格を漂わせた男性。
　いつの間にか一行に加わっており、更にその男に対して誰も何も言わないのでラインコックもレオンハルト側の使徒か下級使徒か何かかと思って何も言わなかったが（カミーラが気になってそれどころ

じゃなかったとも言う）カミーラに対して敬称も付けず訳知り顔をする存在にラインコックは睨みを向けた。初老の男性が言葉だけで謝罪を行うが、名乗らない。本当に誰だとラインコックは疑問に思うが、その回答は別の所から来た。それは隣にいた七星や、周囲の索敵から帰ってきたハンティからで。
「……ラインコック。こちらの方はその……」
「あれ？　ライゼンの姿が変わるところ見てなかったの？」
「……ライゼン？」
　その名を聞いて、ラインコックは訝しむ。ライゼンとは確か、カミーラの旧知である巨大なドラゴンの名前であった筈だ。
　今はレオンハルトのところに身を寄せており、ここに来るまでに自分達もその背中に乗せてもらった。その大きさと身に秘めた確かな力を感じてラインコックは最初、少しびびっていたその相手が、この人間だという。
「い……いやいやいや！　え、何!?　ドラゴンって人間になれるの!?」
「いや、人間になるのではない。これは仮初の姿だ」
「ど、どういうことよ!?」
「……カミーラの使徒なのに知らないの？　高位のドラゴンは人型形態になれるんだよ。エネルギーを抑えるためのもので、滅多に使わない技だけどね」
「ふふん。後輩の教育がなっていないようですわね！　七星！」
「……うっかりしていましたね。ドラゴンの間では常識であるため、知っているものとばかり……」
「え……マジ？」
（ミシェーラ知りませんでした……てっきりレオンハルト様が連れてきた新しい下級使徒かと……）
　他の古株の使徒達が全員知っている様子なのを見て（※一名は除く）ラインコックはまじまじとその男を引き気味に見る。そしてライゼンは腕を組んで、苦々しくも頷いた。
「うむ……もっとも、ドラゴンであることを誇りにする俺としてあまり人前に出したくない姿ではあるのだが……迷宮は狭いからな。仕

方ない……」
「普段からその姿なら食事の量も抑えられるのに全く姿変えないからね。……ま、その方があたしとしてはやりやすくて助かるけど」
「殴りやすくて助かると言いたいのか……だからいい加減に俺をサンドバッグにするのはやめろと何度言えば……」
「サンドバッグにしていいんですか？」
「真似してはいけませんのよ、姫原さん。ハンティさんの行いはハンティさんだからこそ許される行いであって淑女がやっていい行いではありませんわ」
「ミシェーラです！」
「……昔を知る者が見ればどう思うか……あの四大聖竜筆頭のライゼン様をサンドバッグにするなど……正気の沙汰ではありませんね……」
　頭を抱える七星や、良い笑顔を浮かべるハンティといった元ドラゴンの使徒達がそう言うのを見て、ラインコックはようやくその男がライゼンであることを受け止める。
「う……だ、だからといってカミーラ様に失礼なことを言ったら許さないわよ……！」
「うむ。気をつけるとしよう。――それよりそろそろ最奥のようだぞ」
　ラインコックの意地から出た言葉を自然に受け止めて頷くライゼン。その威圧もライゼンからすれば全く動じるに値しないものなのだろう。
　そこに力の差を感じてラインコックは悔しさを感じるが、今はこのドラゴンよりもカミーラ様のことだとラインコックは集中を前方に向けた。
　そこではレオンハルトとカミーラが迷宮の最奥と思われる扉を開けたところで。
「さて……到着か」
「呆気ないものだな……もう終わりか」
「俺達が揃っていて苦労する障害など滅多にあるものじゃないから

な。仕方ない。――さて、財宝とやらはどこに……」
「――僕探してきます！」
と、ラインコックは一足早く財宝を探し当てて少しでもカミーラに褒めてもらい、同時にレオンハルトの功績を下げようといち早く動いた。迷宮の最奥に足を踏み入れ、その大広間の中を見渡す。
「ううーん。真っ暗で何も――」
「うおめでとうだにゃーーーー!!」
「うえええ!?　何!?　ボスモンスター!?」
――そして真っ暗だった大広間の明かりが、突然の声と共に灯る。
ラインコックは突然目の前に現れたその赤いタキシードを着た猫人間とも言える謎の不審人物に驚き、ハンマーを構える。
だがその警戒を無視し、相手はふざけた態度で名乗ってみせた。その迷宮の踏破者に対してクイズでも出題しようと、後続の集団に対して。
「わてはK・D！　キング・ドラゴンだにゃ。さあ迷宮の踏破者よ！　このまろとクイズで勝負だにゃーー！」
「く、クイズぅ!?　なんでそんなことしなきゃならないのよ！」
「なんでと言われてもおらがしたいからするのにゃー。久し振りすぎるので問答無用の有無を言わさず第一問！　今おらが履いているパンツの――」
「……貴様、は……」
「色は……あ」
――そうして問題を口にしようとした時……K・Dの目がこちらを見て声を発したその魔人――カミーラと合う。
「……」
「……」
その時、カミーラとK・Dはしばしの間、視線を合わせて無言となった。
K・Dの方はまさか再会するとは思わず。カミーラの方は、こんなふざけた奴がまさか奴だということを受け止めるのに時間がかかり。
そして他の者達――特にドラゴンの者達はその名前を聞いて

「うぅぅ～～～ん……？」と記憶を思い出して訝しむ者や、「まさか……」とその名前を聞いても到底信じられない者や、もはや修羅場に遭遇すると思わず絶句して白目を剥いている者など三者三様であった。

レオンハルトなどもまた遭遇するとは思わずに頭を抱え、この場所に来るようにグッと親指を立てて自信満々に指示をした魔女のことを呪っていたが、もはやその事態は止められない。

「……さ、さよならでおじゃ！」

「……！」

そして、先に動いたのはＫ・Ｄだった。

突然の遭遇からの混乱から復活したＫ・Ｄは真っ先に逃走を図ろうとする――が、その一瞬後にはカミーラもまた動いていた。

背中を向けたＫ・Ｄに対し、カミーラは珍しく全力で前方に向けて駆け出すと、その助走の勢いのままに拳を握りしめて振り被り――

「こんなところで……!!　何を、しているんだ……!!　こ、のっ……痴れ者がぁあああっ!!」

「うにゃゃ、あああああーーーーー!!?」

「ど、同胞ぉーーーーー!!?」

――脇目も振らずに真っ直ぐ。全力のストレートパンチをＫ・Ｄの顔面にお見舞いした。

ぶん殴られて壁際まで吹っ飛び、何度もバウンドして室内を跳ね回るＫ・Ｄを見たライゼンが雄叫びを上げた。

「か、カミーラ様!?　どうしたんですか!?　急にお怒りになられて……!!」

「ああ……ライゼンがこの反応でカミーラがあれだけ怒るってことはやっぱそうなんだ……」

「……」

「七星の思考が止まっていますわね。かつての主君が予想外の姿で現れたくらいで動じるとは……精神面での精進が足りませんことよ！

七星！」

「……はっ！　ミシェーラ分かりました！　つまり、あの猫人間

を殺せば財宝が……！」
「……ミシェーラ。ステイ」
「え？　あ、はい！　ミシェーラ、止まります！」
　そうして一行もまたカミーラの珍しいブチ切れと突然のグラップラー的な戦いの始まりに騒然となる。
　そんな中、その様子を見ていたレオンハルトは表情を無にしてそれを眺めながら思った。
「何がパンツの色、だ……！　私の使徒にふざけたことを抜かして……！　まさか今までずっとそのふざけた姿でそんなことばかりしていたと言うのか……!!」
「ち、ちがっ……痛っ、痛……！　か、顔は、やめっ……！　お、落ち着いてくれ、カミーラ……！」
「気安く私の名を呼ぶな……！　死ね……!!」
「うぎゃあああーーーー!!?」
（……これ、もしかしなくても俺が止めないといけないのか……？　それとも止めないで見守ってればいいのか……？）
　Ｋ・Ｄにマウントポジションを取ってラッシュを掛けるカミーラの背中を見ながら、レオンハルトは思う。――とりあえず、帰ったら真っ先に魔女（あいつ）を殴りに行こうと。

カミーラと温泉

――迷宮の最奥に辿り着いてしばらく。
「う゛、にゃ゛、ー……」
「ふー……」
顔面に大量のコブを作って床に倒れるＫＤ。
そしてＫＤをボコボコにしきってスッキリした様子で深い息を吐いたカミーラ。その様子を、他の面々が見守っていた。
「ど、同胞……」
「さすがカミーラ様！　容赦ないですわね！」
「途中、拳が見えませんでした……」
「……（ボコボコにされてるように見えるけど……あれまだ全然体力有り余ってるね……）」
「か、カミーラ様……」
「……」
ライゼンが唖然し、キャロルが呑気に褒め称え、ミシェーラが感心し、ハンティが内心でＫＤの状態を見てその内に秘めた強さを推し量り、ラインコックと七星も何て声を掛ければいいか迷う。
そんな中で、意を決してレオンハルトはカミーラに近づいた。
「……あー、その、何だ……もういいのか？」
「……」
恐る恐ると。レオンハルトにしては珍しく言葉を迷わせ、カミーラに声をかける。
するとカミーラはしばらく黙っていたが、ややあってゆっくりと口を開いた。
「……よくはないが……とりあえずはこれでいい」
「そ、そうか（よくはないのか……）」
どこまで痛めつける気だとは思ったが聞けなかった。そして、もしそうなった時は止める理由を見つけるのに苦労するのでやめてほしいと切実にレオンハルトは思う。何しろ、だ。

……ＫＤ……マギーホアか……まさかこんなところで出会うとはな……。
レオンハルトはボコボコの状態で床に転がっているＫ・Ｄ――猫人間を見て思う。
こんなふざけた姿。ふざけた言動では信じられないだろうし、情けない姿ではあるもののこのＫＤと名乗るドラゴン……マギーホアはかなりの大物なのだ。
遡ること２０００年以上昔――人間が生まれる以前はドラゴンの時代だった。
かつてのメインプレイヤーである丸いものや、今の人間よりも遥かに強く完成された種族であるドラゴン達の国――大陸統一国家トロンを建国し、最強のドラゴンとして君臨し続けたドラゴン王……それがマギーホアというドラゴンだ。
その強さは凄まじく、八大精霊竜や四大聖竜といった強大なドラゴン達を圧倒し、初代魔王であるククルククルと大勢のドラゴン達を従え戦い抜き、そのククルククルの跡を継ぐことになった二代目魔王であるアベルと互角以上に戦い、最後にはそのアベルを倒してしまい、大陸に平和を齎してしまうほどの馬鹿げた強さを持っている――その強さゆえに、神に見限られてしまう程に。
言ってしまえばその強さと偉大さはある意味、神のお墨付きだ。
当時を知るライゼンからもマギーホアについての話は色々と聞いている。最も強く最も偉大で、最もドラゴンらしい王であったと。
カミーラの扱いを決めたその性格や治世の良し悪しはさておき、その強さも成し遂げたことも本物である。それだけに、レオンハルトとしては興味深い相手である。
何しろ人類史以前の過去を知る数少ない存在であり……そして。
――この地上において……自身を上回る数少ない存在でもある。
（……だが……自重しなくてはな）
一瞬。誰にも気づかれない程度のほんの僅かな刹那の時ではあるが、レオンハルトの食指が伸びかける。
後先考えずにこの場でマギーホアに本気で斬りかかってしまえば

どうなるか――そんな破滅的な考えが思考の片隅に現れたが、レオンハルトはそれを思いながらも表に出すことはない。後先考えずに衝動に身を任せるようなことはしない。それを行う理由もなければデメリットも大きいのだ。

勝てる保証がないことなどはどうでもいいにしろ、自身の信念や大事な部分から外れるようなことはしない。

ゆえにレオンハルトは大人しくその話の成り行きを見守った。カミーラがマギーホア……ＫＤを見下ろして再び口を開く。

「それで……財宝はどこにある？　貴様が隠し持っているのか？」

「ざ、財宝というか景品というか……貴重なものならこの先にあるが……」

「ならそれをよこせ」

「……わ、わかったにゃ……」

カミーラの有無を言わせぬ要求にＫＤは頷くしかない。口の中をもごもごとさせていたが、さすがのＫ・Ｄもかつて自身が長きにわたって束縛して酷い仕打ちをした相手に対し「それはクイズ勝負に勝ってからだにゃ――!!」とは言い出せなかった。

それどころかふざけた言動すら謹んでいる。語尾に猫っぽさがまだ残っているが、それを聞いた時にカミーラの視線がまた冷たくなったのを見てＫＤはビクッとしていた。やめればいいのに……と誰もが思う。

「……随分と弱々しいというか情けないですね……本当にドラゴンの王様なんですか？」

「う、む……まあ、色々あったのだ……」

「まあカミーラ相手だからねぇ……」

（マギーホア様……お労しや……）

ミシェーラの素直な疑問にドラゴン勢が微妙な顔になる。色々あったとしか言えない。説明しにくいことだからだ。

特に今はカミーラが目の前にいるため、よりその説明は憚られた。ＫＤの擁護は誰も出来ない。

「それで、結局お宝ってなんですの？」

「！　そ、そうだよ！　本当にカミーラ様に相応しいお宝なんでしょうね？」
「……相応しいかどうかは分からぬが……貴重ではあるぞよ……」
キャロルとラインコックの質問に小声で答えるＫＤ。
そのＫ・Ｄは重い足取りで先頭を歩き、隠し扉の先を歩いてその宝のことを説明した。レオンハルトが発した質問に答える形で。
「どういうものなんだ？」
「……温泉だ」
「……何？」
レオンハルトや他の者が呆気に取られる。ＫＤの答えと、彼が案内したその場所の光景を見て。
「……何だ、これは……？」
「金色の温泉……？」
「うむ……その通りにゃ……だ。ここは特殊な効能が得られる金の湯がある迷宮でな……」
「キラキラ輝いてますわー！　すげーですわ！」
「……」
宝が温泉だと知ってカミーラが無言となる。レオンハルトも何とも言えない表情となり、喜んでいるのはキャロルだけであった――が、温泉であるというだけで判断するのは早計であるとレオンハルトは尋ねる。
「……どんな効能があるんだ？」
「この湯に浸かった者の経験値効率がしばらく良くなる……具体的には、１．５倍程度だ」
「あ、思ったよりいい効果だった」
「ミシェーラ分かりました！　この温泉は、レベル上げに使えます！」
「そんな誰でも分かることを堂々と……」
一応その効能を聞けば貴重な宝だという言葉にも誰もが納得した。カミーラが求めていたかは微妙だが、それでも使えるものであることには違いない。
特にレオンハルトやハンティのような強くなることに熱心な者に

とっては下手な財宝よりこちらの方が確かに良いものである。それを思いながらも、レオンハルトは少し思考した。
……なるほど。この温泉にカミーラを入れてレベル上げをさせればより捗るな……。
そこでレオンハルトは気づく。もしかしたら魔女の占いはこのことを示していたのかもしれないと。
ならばやるべきことは1つだった。レオンハルトは声を出す。皆をまとめるように。
「……なら入る、か。カミーラはそれでいいか？」
「……まあ、構わぬが……」
「レオンハルト様と混浴ですわ！　お背中流しならこのわたくしにお任せを！」
「ちょっ！　まさか一緒に入る気⁉　そ、そんなの……！」
「いや、普通に分けて入れば？」
レベル上げというものにあまり興味がないであろうカミーラも、風呂が嫌いという訳でもないし、ここまで来て収穫無しで帰るというのも味気ないとでも思ったのか、レオンハルトの提案を承諾する。
ラインコックが何やら勘違いをしていたが、ハンティの言うように分けて入ればいい話だ。そう思い、レオンハルトは一旦その場を後にしようとしたが。
「いや、その効能が得られるのは男女一名ずつのみ。それも一緒に入る必要がある」
「……は？」
「え……？」
ハンティやラインコックの間の抜けた声が響く。
それはつまり男女1名ずつで混浴をしろということで、中々にふざけた条件だった。再びカミーラの怒りが湧き上がる。
「貴様……まだそのようなふざけたことを口に抜かすか……！」
「し、仕方ないであろう……！　本当のことで……このお湯は男女で一緒に入らないと効能がなくなるのだ……！　それも効能を受けれるのは10年に一度のみで……」

「えー……何その条件」
「随分と限定的な……」
　カミーラの威圧にＫＤは必死に答える。どうやらおふざけでなく本当のことであるらしくハンティと七星は呆れていた。
　レオンハルトもまた頭が痛くなったが、この世界ではよくあることでもあるため、すぐに受け入れはする。受け入れはするが……何となく先が見えたのでレオンハルトはこの後どうするべきかに頭を悩ませた。
「……なら分かりました！　レオンハルト様とカミーラ様でお入りになってください！　ミシェーラ達は我慢しますので！」
　――と……やはりと言うべきか、そのようなことを堂々とミシェーラが口にしたのでレオンハルトは小さく息を吐く。キャロルがうんうんと頷いたのが見えた。
「さすがはわたくしの後輩、姫原さんですわね！　わたくしも賛成ですわ！」
「だ……ダメに決まってるでしょうが！　か、カミーラ様と混浴なんてうらやま……失礼すぎでしょ！」
「でもそうしないとレオンハルト様とカミーラ様が効能を受けることが出来ませんわ！」
「そうです。それともまさか……どちらか一方に諦めろと申すつもりですか？」
「う……いや、それは……でも……」
　ラインコックは否定するが、キャロルとミシェーラの言葉に気勢が弱まる。まさかカミーラだけに効能を受けさせろとは言えない。そしてあわよくば自分が……とも言い出せない。
　結果同じカミーラの使徒の七星に目線で助けを求めるが、七星もまた考え込んでいた。そして、考え込んだ末に七星は。
「……カミーラ様のご随意に」
「し、七星!?」
　――七星は考えるのをやめた。別に賛成も否定もしない。カミーラの意見が何よりも優先されることだと基本を思い出した。決して

考えることが面倒臭くなった訳ではない。
「……で、でもほら……レオンハルト様の方が良いかどうかは……」
「……」
流れが悪いと気づいたラインコックが、レオンハルトの方にもおそるおそる水を向ける。
そしてそれを聞いたレオンハルトは既にこの結果を予測して答えを出していた。ラインコックの言葉を飲み込み、自身の欲にも蓋をする。そして結論を口にした。
「……いや、俺は遠慮しておこう。さすがにカミーラと一緒に入る訳にはいかないからな」
「！」
あっさりと、そう口にしてみせる。その湯の効能を受けてみたいし、希少な温泉というのも興味があるが、それを泣く泣く諦める。
それにここで一緒に入るかと言ったところで関係性が良くなるとは思えなかった。好意を疑わせてはいけないが、下心を見せても良くはないだろう。
「カミーラは……使徒のどちらかと入ればいい。――さあ、行くぞ」
「了解ですわ！」
「せっかくの経験値効率を上げる機会だってのに……勿体ないねぇ」
「ハンティ様は向上心がすごいですね……！　ミシェーラ、尊敬します！」
「使徒の少女よ。尊敬するのは良いが見習ってはいかんぞ……間違ってもこうなっては……」
「雷撃」
「ぬおお!?　おいやめろ！　この形態だと無効化できんだろうが！」
「あんたが馬鹿なこと言わなきゃすむ話だよ」
そうしてレオンハルトは自分の使徒やライゼンを連れて踵を返す。カミーラが湯に入って出てくるまで先程の場所で時間でも潰していようと。
「な、ならカミーラ様……ど、どうします？　いつも通り、湯浴みの支度をしますか……？」

「……待て」
「！」
そうして後に残るのはカミーラとその使徒達だけとなる――筈だったが、カミーラはあっさりと惜しげもなく去っていくレオンハルトの背中を見て声を掛けた。
「……どうした？　俺に遠慮する必要は――」
「……いや、いい。許してやる……レオンハルト。お前が私の供をしろ」
「……何？」
――そしてカミーラから告げられた予想外の言葉とその後の展開に、レオンハルトは久方ぶりに困惑させられた。

……どうしてこうなった……？
「……レオンハルト。何をしている……？」
「……いや、何でもない……」
迷宮の最奥。ＫＤに案内された隠し扉の先にあった金の湯とやらに、俺は入ることになった。
入ることになっただけならいい。何も頭を抱える必要もないが……。
――それが、カミーラとの混浴ともなれば話は別だった。
しかも……しかもだ。
「……カミーラ」
「……何だ？」
「お前……自分で身体を洗ったりはしないのか？」
「……しないな。だが、それはお前もだろう……？　普段から使徒に世話をさせている筈だと思っていたが……？」
「……まあ、それは……そうなんだが……」
「ならさっさと洗え」
「……ああ」
反論する余地もなく、手を動かしてカミーラの身体を洗う。

そう、洗う羽目になっていた。そのことに、酷く動揺している。
というのも互いに全裸なのだ。温泉なので当たり前だが、カミーラの青白い肌が、その身体が――かつて大勢のドラゴンがその身を求めて争ったというその極上の肢体。女性としての1つの黄金比を形取ったその身体が、俺の目の前に晒されている。
かくいう俺も肉体にはかなりの自信があるし、それを褒め称えられることはあるとはいえ……自意識の問題か、酷く冒涜的な、イケないことをしている気分だった。
普段は自分で身体を洗ったりなどの諸々をしないからという理由で俺がカミーラの身体を洗っているのも、約得と言えば約得なのだがカミーラの機嫌を損ねる可能性を思うとそういう気分にはなれない。意図が読めないので言うなれば、怖かった。
「次は腕を洗うぞ。……構わないんだな？」
「……ああ」
「なら腕を上げてくれ」
「……」
確認を取り、お願いをすれば無言でカミーラが腕を上げてくれたので、そこを俺は手を滑らせて洗っていく。
背中を洗っていた時点で感じていたが、その肌の滑らかさはやはり極上のしっとりさと張りを持ち、触っていて気持ちのいいものだ。
俺は耐えられるが、並の男であれば耐えられないだろうな、と思う。カミーラの下級使徒とやらはカミーラの世話をしているらしいが、よく耐えられているなと感心してしまう。欲情して勝手なことをするのはカミーラの機嫌を損ねることになりかねないだろうしな。下級使徒の気持ちが分かる。俺もまた、恐る恐るといった気持ちだ。
「んっ……」
「……悪い。強かったか？」
「……いや、悪くない。そのまま洗え」
「……わかった」
……途中、カミーラが俺の手の動きに反応して声を少し上げただけでも細心の注意を払って動きを止めて確認を取る。

腕を洗い終え、今度は足を洗っていった。くるぶしからふくらはぎ。太腿のラインを両手でしっかりと洗っていく。無心で。心を鋼に――いや、スポンジにする。大丈夫だ。ポーカーフェイスには自信がある。際どいところを触ることになっても問題はない。

「……次は前も洗え」

「……いいのか？　さすがにそれは……」

「いいと言っている。さっさとやってみろ」

「……わかった。なら洗わせてもらう」

どこかこちらに厳しい視線を送ってくるカミーラの頼みに応じ、今度はカミーラの前に回ってカミーラの身体の前を洗うことにする……するのだが……。

「……んっ……」

――デカい……いや、違う。無心だ、無心。感想を心に抱くな。抱いても表には出さないように努めろ。なるほど、ＨかＩは超えてるな……じゃない。考えるな。俺は鋼だ。無心で洗え。変なことを考えるな。

「……ふっ……」

「……どうかしたか……？　やっぱりマズかったか？」

そしてその途中。カミーラがふっと笑ったので手を止めて身体から離した上でお伺いを立てる。

するとカミーラはその得意気な笑みのままこちらを見て。

「いや……何でもない。そのまま続けろ」

「……ああ。わかった」

結局、そのまま続けるように要求してくる。

その意味が分からない。分からない、が……どうやら機嫌は良くなっているし、失敗はしていない様子だった。

……まあ、このまま洗い終われば後は湯に浸かって終わりだ。それまで普通でいればいいだろう。

――カミーラはレオンハルトを試していた。

お出かけに誘われ、迷宮を踏破し、そこでマギーホアと出会ってひとしきりの暴力を振るった後……温泉が宝だと言われ、一対一で混浴する必要があると聞いた時はさすがのカミーラも少し迷ったし、必要性はないと考えたのだが。
（全く下心も出さないとは……レオンハルト。お前は本当に私のことが好きなのか？）
湯浴みを一緒にするという絶好の機会をフイにするレオンハルトのその様子に、カミーラは訝しんだ。
カミーラの考える雄という生き物は、好きな雌の前では――いや、魅力的な雌を相手にすれば下心や下卑た欲望を覗かせるものである。
先程再会したマギーホアですらそうだったのだ。あれもまた、自身を手に入れるために躍起になっていた雄の一体だったとカミーラは回顧する。そう、マギーホアほどの雄ですらそうなのだ。
だというのに――目の前の男は何だ？
自分という雌を、極上のそれを目の前にし、好意を抱いているのに――欠片も下心を覗かせず、混浴を遠慮するその姿勢は、紳士過ぎて些か不審に感じた。
道中でこちらを心底褒め称えるような口説き文句を口にしてきた時は、なるほど悪くない、と思ったものだが、こうしていざという時にフイにされてはカミーラとしては少し眉をひそめてしまう。
――つまるところ、カミーラのプライドが許さなかった。自分という雌に、何の反応も寄越さないレオンハルトを見て、少し苛立ちを覚えた。
ゆえに試してやることにした。一緒に湯浴みをする。そうして裸体を拝めばレオンハルトの雄の部分が垣間見えるかもしれないと、そう思い。
（だが……まさかここまでしなければならないとはな……）
そうしていざ裸体を見せたのだが……その時もレオンハルトの反応は薄く、紳士的で雄の部分はあまり見えなかった。
身体を洗ってる時でさえ、レオンハルトの表情に揺らぎはない。顔をじっと観察し、その視線や表情の揺らぎをずっと見ていたがそれら

が見えないことにカミーラは訝しみ、そして更にプライドを刺激される。
最初は際どいところまでは洗わせる気はなく、精々背中や手足程度で済ませようと思っていたが、それでも反応を見せないためレオンハルトが好むという胸まで洗わせることになったが……そこでようやく、レオンハルトは反応を見せた。
（眉が０．１センチほど下がったな……なるほど。やはり胸を好むか……）
カミーラはレオンハルトの僅かな反応を見逃さなかった。やはり、無心であるようには見えて無心ではない。理性を働かせて耐えているだけでレオンハルトは反応していた。
特に正面に回って胸を触らせてからはそれが顕著であり、一度気づいてしまえばレオンハルトもまた雄であることが分かる。いやらしさは感じないが、きちんと反応はしている。
（ふっ……あくまでも私を立ててみせるか……その心意気は悪くない……）
そして反応しているのが分かれば、その鉄面皮にも可愛げを感じる。
レオンハルトは自分を尊重して我慢しているだけというのが分かったのだ。そうなればカミーラのプライドも両方の意味で守られる。下心を出しすぎてる相手は嫌いだが、かといって何も反応を見せないのはプライドが許さない。
カミーラのその面倒くさい好みに、レオンハルトは見事応えてみせた。カミーラはレオンハルトのその反応に満足しつつ、身体を洗わせる。
（それにしても……洗うのが上手いな……）
そしてその身体に触れるテクニックもまた、レオンハルトは極上であるとカミーラは判断する。下心をあまり感じないのに、身体に僅かだが快感が走った。
その事実にどこか高揚を覚えながらも湯船に浸かる。レオンハルトと共に。

「……これは良い湯だな」
「ああ……効能だけでなく湯としても良いものなようだ」
その湯はレオンハルトの言うように確かに、湯としても良いものであるようでそれだけでもカミーラを満足させた。
だが、カミーラはその湯浴みとは別のところにも楽しみを見出してもいる。
「ふっ……どうした？　お前ほどの男が……まさか恥ずかしがっているのか？」
「……いや……あまり見るのも悪いと思ってな」
「くく……そうか。だが私は気にしない。好きにするといい」
「……ああ」
レオンハルトはカミーラの方をあまり見ようとしない。カミーラの方から視線を向け、からかうように言葉を向けてもその反応はそっけないものだ。
だがそれがただの気遣いであり我慢であるのならカミーラとしては問題ない。その内側に、自分への情欲をひた隠しにしているのだろうと思えば可愛いものだ。
「……それと……なんだ。せっかく効能を得たんだからレベル上げでもしようと思うんだが……お前も来ないか？」
「ふ……そうだな。いいだろう。お前に付き合ってやる。感謝するんだな」
「ああ、感謝する」
上からの言葉も自然に受け取り、素直に感謝を述べてくるレオンハルトのその振る舞いにカミーラは自尊心が満たされ、優越感の湯にたっぷりと浸かる。
そしてカミーラは改めて理解した――このレオンハルトという男は、自分の好みに完璧に合致する。自分と番になるだけ資格と価値を持つ……最高の雄であると。

――そして、温泉から出ると。

「お帰りなさいませレオンハルト様！　湯加減は如何でしたか？」
「ああ……まあ、良かったぞ」
「それは良かったですわ！」
「……ミシェーラ分かりました。これでレオンハルト様もカミーラ様もより強くなれるということですね！」
「いや、だからそんな誰でも分かるようなことを堂々と言われても……」
レオンハルトは使徒達の出迎えを受ける。
まだ少し緊張が残っていたが、終わってしまえばほっとした思いだった。
そしてカミーラの方もちらりと見て。
「えっと、その……大丈夫でしたか？　カミーラ様……？」
「……ああ。悪くない、時間だった」
「え……それはどういう意味で……？」
「……行くぞ」
「はっ」
「え、あ、はい……！」
湯を上がったカミーラが微笑を浮かべ、ラインコックと七星を連れて先にその場を後にする。その機嫌が良さそうな様子を見て、レオンハルトは自分達も歩き出しながら今回の遠出の結果を思う。
少なくとも、カミーラの機嫌が良くなったし、成果もあったのだから成功だと思っていいだろう。関係性も悪くはなっていない。
それに加えてＫＤ……マギーホアとも初めて会えた。そのこともまた収穫だ。そう思い、ＫＤの横を通って帰路についていく。
「……それではな、同胞」
「ああ……まただにゃ」
ライゼンとＫＤが挨拶するのを見た後に、レオンハルトは少し遅れてＫＤの前を横切った。
渡りをつけることも難しければ、何を話すにもこの場では難しいだろうと判断してカミーラと同じように特に何も言うこともせずに去ろうとする。

――が、そこで。
「――先程の殺気はそちらから私に向けられたもので合ってるか？」
「！」
不意に、真面目な声でそう問いかけられ、レオンハルトはその身を硬直させる。
ＫＤの見た目は変わっていない。その身に纏う力も、変わっていない。力を表に出してはいない。
それでもライゼンやカミーラ、ハンティも気づくことのなかった一瞬の揺らぎに気づいてみせたことに、レオンハルトは威容を感じ取る。
そしてその反応が、ＫＤにとっては答えに等しかった。
「ああいうのはやめてくれ。一瞬反応して対応しかけた……今更戦う気はないのだ」
「……そうか。悪かったな。そして……残念だ」
互いに簡潔に言葉を交わし合う。ＫＤの――マギーホアの言葉の意味を理解し、レオンハルトもまた率直に自らの思いを口にする。
そうして言いたいことを言えばレオンハルトも再びＫＤに背を向けて歩き出したが……マギーホアは更にこう告げてきた。
「アベルのことは礼を……そして謝罪を言わせてもらう」
「！　……いや、気にする必要はない。解決した訳ではないからな」
「それでもだ。あれは我々が残した負の遺物のようなものだからな……」
低い声で独り言のようにそう口にするマギーホアに、レオンハルトは背を向けたまま肩越しに彼の様子を確認する。
だが何かを読み取ることは出来ない。それもそうだろう。何しろ相手は自身の何倍の年数を生きてきたドラゴンの王。
それも真の姿を隠した状態で推し量れることは少ない。
ゆえに出来るのはちょっとした予想だけ。彼が、後悔を抱えているのではないかという想像だけだ。
「……カミーラのことを頼む」
「……そっちは頼まれるまでもないな。あいつはもうドラゴンじゃな

い。魔人、だからな」
「……そうか……ああ。それも、そうだ」
レオンハルトは予想する。
マギーホアがその気なら、カミーラの暴力など一方的に跳ね除けることが出来たのだろうと。
だがそれをしなかったのは偏にカミーラに対する申し訳無さ。謝意を感じているからに他ならない。
カミーラにはマギーホアに暴力を振るう権利があると、他ならぬマギーホア自身がそれを認めている。
あるいは殺されてもいいと思っているのかもしれない。殺せるかどうかはさておき――マギーホアからは生への執着や欲といったものを感じ取れなかった。
それゆえに、カミーラ以外から暴力を受けても抵抗しないのかもしれないが……こうして態々カミーラのことを頼んでくるのは未だ気にかけている。気負っている証拠でもあった。
だからこそ答えてやる。少なからず、付き合いのある相手。関係性を深めた相手として。
「俺は一度内側に入れたものを無責任に放り出したりはしない。だから心配するな」
「……ああ。なら少しだけ、安心するとしよう。……ではな」
「ああ」
その言葉を最後に、ＫＤの気配はその場から消える。それを確認してレオンハルトもまた歩みを前に進める。別れの言葉も呆気なく。
次に出会うことになるのはいつになるやら――あるいは、もう会うことはないかもしれないとも思いながら。

悪魔界の異端児

――ＧＬ６ＸＸ年。
世界が魔物の天下になって６００年余りが過ぎた。
人類が国を興し、独立して生きていた時代も遠い昔。人間は家畜。魔物に虐げられ、あるいは逃げ隠れながら生きることが常識とされている。
それが魔王ジルの時代だ。世界のどこにも魔王の敷いた理から逃れられる場所はない。
――否、僅かばかり存在した。
大陸の支配者である魔王と魔人。彼らは確かに世界を支配する絶対強者である。
地上に住む人間や数多の異種族が束になっても敵わない存在であることは間違いない。
だが……それはあくまで地上の話。
それ以外の場所に目を向ければ、魔王の支配下にない場所も存在した。
「あー、今日も疲れたぜ」
「よう。お疲れじゃねぇか。今日はどうしたんだ？」
そう――例えばそれは、常に薄暗い地下のような場所。
正確には空間。日が出ることがない常夜の空間でありながら、不思議と光に照らされたかのような明るさも同居するその不思議な土地。
ゆえにそこを住処にする生き物もまた不思議な生物であった。
「それが聞いてくれよ。久し振りに地上に出て人間と契約を結んだんだけどよ。その願いが『殺してくれ』だったんだ」
「……良かったじゃねぇか。すぐに魂回収出来たんだろ？」
「良くねぇよ……まさかそんな暗い願いを言い渡されるとは思ってなかったしな。おかげでこっちまで暗い気分になっちまった」
「そりゃご愁傷さまだな。最近の人間はそういう絶望した奴ばっかだから結構そういうのあるって聞くぜ」
「そうなのか？」

「ああ。なんか６００年くらい前から魔王が人間を死ぬほど苦しめるようになったらしいぜ」
「へー……そうだったのか。じゃあ魂集めも捗らないわけだ」
「いや、そんなこともないらしい。絶望しまくってるおかげでむしろ魂回収効率が高まったって前にレペルタン様が言ってた」
「ほー、そりゃ良いが……俺はあんま陰鬱なのは好きじゃないからなぁ」
「仕事が捗るだけマシだろ。それくらい我慢しろよ」
　角と羽の生えた人間にも似た者と獣に似た頭部と角を持つ者。異なる特徴を持った２体の生物が雑談に興じながらその土地を歩く。
　彼らの会話にはどれも人間や魔物の間では聞き慣れない単語が飛び交っていた。
　また別の場所でも――
「はぁー、やっと今日のお勤め終了や。今日は誰も通りかからんかったなぁ」
「終わったか？　それならこれから一杯行こや」
「お、それならワシ、綺麗なねーちゃんいる店知っとるからせっかくやしそこ行こうや」
「ええな。よっしゃ、それならぱぱっと空間移動しよか。座標どこや？」
　黄色い体皮を持つ魔物の如き外見の２体の生物が癖のある口調で会話を行っている。
　だがその２体は彼らが持つ特有の能力によって一瞬でその場から消えていってしまった。人間や魔物にはありえないその能力で。
　また別の場所では――
「おいお前」
「っ、な、何でしょうか？」
「ちょっとヤらせてくれよ。お前、俺より下だろ？　何階級だ？」
「……はい。第拾壱階級です」
「やっぱりか。だったら問題ないよな？」
「ええ……何なりとご命令ください――あっ！」

「へへ……ずっとヤりたかったんだ……！　やっと階級が上がったからな、もう我慢出来ねぇ……！　ここでヤらせてもらうぜ……！」
　触手を持つ異形の生物が、可愛らしい人間の女性に似た生物をその場で襲い始める。彼らの会話には階級という単語が出てくるだけでなく、襲われた女性の方は一切の抵抗を行わずに耐えるように異形の触手に纏わりつかれていた。
　更に別の場所。街の外れの路地では――
「た、頼む……！　見逃してくれ……！」
「えっと、それは……どうでしょうか？　ガゲちゃん？」
「ググガゲゴゴ……!!」
「あ……む、無理みたいです……」
「お、お願いします！　い……今まで集めた魂の分、回収して……ば、倍にして返しますから！」
「ゴゴグゴォ!!」
「すみません……ガゲちゃんが『絶対無理。はぐれ悪魔、死すべし』って言ってるので殺します。すみません……」
「ひっ……た、頼む、どうか……！」
「すみません……早くしないとこの後の会合に遅れてしまうので……すみません」
「待っ――」
「すみません――さようなら」
　鬼にも似た巨大な人型の生物が、人間の少女にも似た生物とその傍らにいる黒い影が濃縮して出来たような流動性のある異形の生物に向けて必死に命乞いを行うが――それも虚しく、気がつけば鬼にも似た巨大な人型の生物は真っ二つになって絶命していた。
「はぁ……やっと終わった……早く帰らないと……また怒られちゃう」
「ガガギゴ」
「うん……そうだね……はぁ……早く会いたいなぁ……」
　そして死んだ生物は死体が残ることはなく塵になって消えていく。それを為した生物もまた影になってその場からいなくなるとその場

に静寂が訪れた。
――だが、その彼らの誰もが同じ種族であった。
その名は――悪魔。
地上とは別の空間にあるこの悪魔界を住処にする生物である。
その姿は人間に近い者から魔物に近い者まで様々。中には更に異形に近い者まで存在していた。
彼らの任務は魂を集めることであり、そのために死んだ人間から魂を回収したり、人間の呼びかけに応え、願いを叶える代わりに死後に魂を貰う契約を結ぶなどの様々な活動を行っている。
聖なる物が苦手で普段は目立った行動を取らず極めて保守的な生き物であるが、人間や魔物と比べても平均的に強い力を持ち、上級悪魔であればかの魔人に匹敵、あるいは上回ると称される力を持っていた。
ゆえにこの悪魔界は地上に住む生物にとっては格上の怪物たちが跋扈する地獄のような場所であり、普通なら立ち入ろうとも思わない。立ち入ったとしても目立たないように行動するのが普通であり、そうして生き残った稀な人間によれば悪魔界は危険で恐ろしい場所だが、時に地上では手に入らないような宝や経験を得られる場所だと語られていた。
ゆえに一方。別の場所では――
「オラオラオラオラオラオラオラオラァ――――!!」
立ち塞がる大勢の異形の悪魔たちをその手に持った2本の大剣や鋭い爪で蹴散らす異形の魔物の姿があった。
「つ、強い……!」
「なんだあの魔物……!」
悪魔たちは自分たちを蹴散らすその魔物たちに腰が引けてしまう。
「……魔物ぉ？」
だが、悪魔たちは知らなかった。
その場にいる彼らはただの魔物ではない――魔人であることを。
「俺様をただの魔物扱いすんじゃねぇよ！　俺様は――ケイブリス！
魔人ケイブリス様だ！」

そしてただの魔人でもない。
魔人の中でも強者として認められる魔人四天王のその一角。
名だたる魔人の中でも最強に最も近いと言われる魔人ケイブリスであることを、悪魔たちは知らなかった。
ゆえに襲いかかった悪魔たちはその暴威に沈むことになる。
まさかこれほどの強者がこの地に訪れるとは思いもよらなかった。適当に遊んで食い物にでもしようとしていた悪魔たちは、その最期に自分たちを倒した魔人の強者らしい振る舞いを見て――
「……そしてこっちが！　最強の魔人にして世界最強の剣士！　魔人筆頭であり魔軍参謀であらせられる魔人レオンハルト様だぁ！　――そういうわけでささ、どうぞレオンハルト様！　この道は僕が掃除しておきましたよ！　ぺこぺこ」
「……ああ」
……そしてすぐに裏切られた。自分たちを蹴散らしたその魔人ケイブリスは、もう一体の魔人が通路から姿を現すとその巨体を丸めて頭を下げ、とてつもないへりくだりを見せていた。
「まさかこんな奴に、やられるとは……うっ」
その通路の門番悪魔たちの上役で責任者をしていた第五階級の悪魔はそうして気を失った。
彼を最後にこの場にいた悪魔たちは全滅する。そうして障害のなくなった道を魔人レオンハルトの一行は再び行き始めた。
「……ちょっと。あたしの分が残ってないじゃない」
「……いや同胞よ。先程反対側の通路にいたデカい悪魔を殴っていなかったか？」
「あの一体だけだよ。それに大きい割にはあんまり強くなかったし、正直物足りないね」
「……そうか……」
その一行の先頭を行くケイブリスやレオンハルトの後方。そこでぼそっと不満を口にした使徒ハンティの言葉をダイヤモンドドラゴンのライゼン（人間態）が拾い、その返答に呆れる。
一行を背後から襲った悪魔を倒しておきながらまだまだ物足りな

いと言うハンティは立派なドラゴン脳――いや、ハンティ脳だった。
ライゼンは最近、レオンハルトの子供たちの間で戦闘狂とか物理で解決することをゴリラとかを飛び越して「ハンティ」と言うことを思い出して何とも言えない気分になる。
時代が変われば流行りも変わるものだが、まさかハンティが内輪のノリとは言えゴリラと同様のスラングとして使われるようになるとは思いもしなかった。
「さすがハンティさん……今日もハンティしてますねー……」
「本当よね。ハンティするのはもう少し抑えてほしいところだわ」
と、早速そのスラングを使ったのはしゅたっとその場に降り立ったレオンハルトとメイド長さんの娘であるミコトとレオンハルトに付き従う悪魔のインデックスだった。
ミコトは眠そうに、インデックスはいつも通りからかうようにひそひそとそう言えばハンティが振り返る。
「……そこの2人。何か言いたいことがあるなら聞くけど？」
「なんでもないわよ。ね、ミコト」
「ん……何でもありませんー」
「……ま、いいけど。それよかミコト。その手に持ってるの何？」
「んー……そこに隠れてた悪魔の首……取っときましたー……」
2人の陰口を追求することをやめたハンティが代わりにミコトの持っているうねうねとしたボールのようなものが何なのか問いかけるとミコトがそれを持ち上げながら答える。悪魔の首だと。
それを聞いたハンティはやや呆れるようにしながらも感心した。
「さすがだけど……それまだ生きてるし、捨てといたら？」
「ん、トドメ刺さなくていいですかー……？」
「良いよ。目的は殺すことじゃないからね」
「分かりましたー……」
そう言うとミコトは近くにあった看板の上に悪魔の首を置く。
それを見たインデックスが近くのハンティに声を掛けた。
「ミコトは優秀だけど変わってるわね」
「そりゃレオンハルトの……下級使徒の中だとトップクラスに強いか

らね。変わってるのはまあ大体皆そうだから良いとして……というかインデックス。話通ってるんじゃないの？　さっきからめちゃくちゃ悪魔襲ってきてるけど」
　レオンハルトの子供、と言おうとしてケイブリスがいることを思い出したハンティは言葉を言い換えながらインデックスに質問した。
　その質問にインデックスは軽く思案顔になり、
「……話は通したわ。その上でこの対応ということは……むしろ気を使ってくれてるんじゃないかしら」
「気を使ってる？　どういうこと？」
「挨拶兼修行ってことは言ってあるからそのために悪魔をけしかけてくれてるんじゃないかってことよ。ご丁寧に程々の強さの悪魔ばかりだし」
　インデックスは背後で転がっている悪魔たちの群れに視線を送りながら言う。そこに転がっている悪魔の階級は大体第九から第五階級の悪魔たちであり、下はそれなりに数が揃っていて責任者として第五階級や第六階級の悪魔を配置するなどやけにしっかりとしている。
　全員が第四階級悪魔であるインデックスよりも下であり、いざとなったら言うことを聞かせられる辺りも作為的なものを感じていた。
「……なるほどね。そりゃ気を使ってるわけだ」
「ええ。だから向こうも今、私たちを歓迎する準備でもしているんじゃないかしら」
　ハンティの頷きにインデックスはこの領地の主やその上司のことを思いながら内心で呟く。
　――これも私の息子……ライブラのためなんでしょうね、と。

　――悪魔界南方にある土地、デザイアは地上から悪魔界に続く廃棄迷宮の奥から続く先から近い場所にある地方都市だ。
　荒廃した荒野と崖が組み合わさり、亀裂が入っている谷のような地形に建てられたその街はかつての人間の街よりも発展している。
　しかし自分の街ほどではないな、と客観的に間違いない感想をレオ

ンハルトは抱いていた。
「――お待ちしておりました。ささ、どうぞこちらに……」
「ああ」
だがそのことをあえてこの街の住人や、これから会う相手に言うこともない。
やるべきことはあくまでも挨拶なのだ。修行はついでに過ぎない。
そのためケイブリスは一旦ライゼンとハンティを付けた上で街やその外れで時間を潰すように告げ、崖の上の屋敷には自分とインデックス、そしてミコトだけを連れてやってきた。
インデックスは悪魔として紹介してもらうために。ミコトは1人でほっぽり出すのが不安なのと、本人の希望もあって同席させることにした。
そうして屋敷にやって来れば案内役の悪魔に導かれ、部屋まで案内される。悪魔サイズとも言うべき大きめの扉を悪魔が開くと、俺はそこで初めてインデックスの上司である悪魔たちと対面する。
「おや、もう来たようだね」
「……そのようですね」
「ひっ……」
「……」
応接室にも似たその部屋に入るなり、目に入った相手は4体。
一体は白い髪をツインテールに結った赤い目の少女でこちらを落ち着いたような、そして畏まったような様子で控えている。
一体は真っ黒な、まるで闇そのもので出来ているような体長3メートルほどの人型。全身を鎧で包み、頭部には髑髏を模した兜を身に付け、更には身の丈ほどある大剣を床に置いたままピクリとも動かず佇んでいる男とも女とも分からない相手。
そしてその陰に隠れるようにして前髪をぱっつんにした紫色の髪の少女がいた。シスター服にも似た肩から足元までを覆い隠す真っ黒で無地の衣服を着ており、その様子はどこかおどおどとしているだけでなくこちらを見た瞬間怯えるように隠れてしまった。
その少女に思わず目を鋭くしてしまうが、最後の一体。真ん中に立

つ長身の女性型の悪魔。黒と白だけで構成された衣服と肌と髪。見目は悪くないものの纏う雰囲気がこの中で最も色濃く、どこか不気味な印象を抱かせる存在を無視は出来ない。
「ほう、これはこれは……中々の存在感だねぇ」
その悪魔はこちらを視界に収めるなり、真っ直ぐとこちらを覗き込むように見つめながらニヤニヤと何が面白いのか笑ってみせた。
「……そういうそちらこそ大した存在感のようだが？」
「ほう。加えて洞察力も中々……さすがは魔人の中でも名高い魔人レオンハルトだ。君のその名声はこの遠い悪魔界にも届いているよ」
「それは結構なことだな。それより……そろそろ名乗ってもらえるか」
名前も知らなければ話をするにも不都合がある。そういう意味を込めて口にすれば相手もまた頷いた。
「これは失礼。私はレペルタン。第壱階級悪魔でこちらのフィオリやそちらのインデックスの上司だよ。普段は三魔子、プロキーネ様の側近をさせてもらっている」
そう言ってレペルタンと名乗った悪魔は丁寧に礼をした上でそのまま他の悪魔もまた紹介した。フィオリ、と呼ばれた悪魔が会釈する。
「第参階級悪魔のフィオリ・ミルフィオリよ。このデザイアの領主をしているわ」
「……魔人レオンハルトだ。普段家の者が世話になっている」
「それを言うならこちらこそ世話になっている、と言うべきかしらね」
フィオリ・ミルフィオリの名前は事前にインデックスから聞いていたためそれほど気がかりではない。
だが残りの2体――レペルタンともう1体の方は別だった。
「そちらは？」
「ああ。こちらはリアン。それとガゲ、だったかな？　ほら、君たちも挨拶したまえよ」
「えっ……い、いや、私は……い、いいです……す、すみません……」
続く挨拶が来なかったため紹介してもらうように視線を送りなが

ら言ってみるとレペルタンはそれを促してくれた。
　だがそのリアンと呼ばれた少女はよほどの引っ込み思案なのか挨拶することすら拒否しようとした。そのためか、レペルタンが更に言葉を追加する。
「挨拶しておかないでいいのかい？　ライブラくんの父親には是非挨拶しておきたいと事前にかなり意気込んでいた気がしたのだが……」
「そ、それは……その……」
「ここで挨拶しておかなければ次に挨拶出来るのはいつになることやら……」
「う、うぅ……」
「まあ君が挨拶しないと言うならそれでも構わないがね。ただ今後の仕事に支障が出るかもしれないが……」
「……わ、わかりました……」
　レペルタンの再三の促しが効いたのか、決心するようにおずおずと前に出てくるリアンという少女。がちがちに硬くなりながらこちらを見上げてくるその様子はどうも不憫になりそうなほどに緊張しているのが丸わかりだった。
「り……リアン、です……その……ご、ご子息の……ライブラ様の、お付きをしています……あ、こっちは私の友達のガゲちゃんです……」
「……ガギ」
「……なんてー？」
　背後からミコトがツッコミを入れる。
　それほどに小さい声だったし、もう1体に関してはなんて言ってるかも分からない。一応前者に関しては何とか聞き取れたものの、後者は言葉が分からないのでどうしようもなかった。
「あ……ガゲちゃんも、よろしくお願いしますって言ってます……」
「……そうか」
　更に小さい声で補足される。……正直色んな意味で不安でしかない。
「さて、挨拶が終わったところだ。歓談でもして親交を温めあおうじゃないか。……ああ、そうだ。私からの贈り物はどうだったかな？

そこそこ強くて痛い目を見せても問題のない悪魔をそれなりに配置しておいたのだが……気に入ってくれたかね？」
「……ああ。そうだな。それについては感謝する」
「それなら気を使ったかいがあるねぇ。ではまたこの後も適当な悪魔と戦ってみるかい？」
「……それもいいが……その前に聞きたいことがある」
「おや、何かな？」
自分の中に生じた疑念と確信。
それを見定めるために、俺は目の前の悪魔に問いかけた。
「俺の息子に近づいて……何が目的だ？」
「え……？」
魔剣を空間から取り出し、その切っ先を目の前の悪魔に向ける。
するとその悪魔――リアンは戸惑ったような表情をこちらに向けてきた。
「……おやおや、これは穏やかじゃないねぇ。一体どういうつもりかな？」
「その言葉をそっくりそのまま返させてもらう。どういうつもりだ？」
「ふむ。リアンのことが気に入らないのかな？　大事な息子に、女悪魔を近づけることが気に入らない。あるいは頼りないと？」
「そうじゃない。むしろその逆だ」
あくまでも白々しく質問をはぐらかそうとする悪魔に俺は言ってやる。
俺が感じた疑念と確信。その正体を。
「息子に――第壱階級悪魔を付けるとは、どういうつもりだ？」
「！　……ほう？」
俺がそう言えばレペルタンは目を見開いて驚いてみせた。隣で事の推移を見守っていたフィオリもまた同様に。
そして俺に剣を向けられながら全く動揺していないリアンもまた、俺を見上げて純粋に驚いているようだった。
「な、なんで……」

「ふふふ……なるほど。なるほどねぇ……いやはや、流石と言うべきか。最強と言われるだけはある……いつから気づいていたのかな？」
「最初見たときから力の大きさには気づいていた。お前やそこのガゲとかいう不気味な影に隠れていたがな」
俺はそう確信に至った理由をレペルタンに問いかけられたため説明する。
悪魔の強さ。力は階級によって大きく左右されるものだが、たとえそうでなくとも下位の悪魔は上位の悪魔に絶対服従という厳しい掟が悪魔界には存在する。
だからこそ、先程のやり取りはやや不自然だったのだ。俺から見た力量と合わせて、それは疑念を確信に至らせるだけのものがあった。
「だが確信したのはお前たちのやり取りだ。挨拶をしろと命令をしたのにも関わらず、それを拒否した上、その際に階級を名乗らなかったからな」
「ふむ……だが純粋な悪魔であればともかく、それだけでは普通は気づけない。単に私がそういう風に言えと命令した可能性もあるからねぇ。つまり、君は自分の力量を見定める目に自信があり、そして実際にそれだけ目利きに長けているわけだ。なるほど――あのネプラカスがやられるわけだねぇ」
俺が以前に叩き潰したネプラカスの名前を出しながらこちらを褒めるような態度を見せるレペルタン。
だがその反応を俺は信用しない。以前の件もあって俺は悪魔を警戒しているし、信用もしていないのだ。
だからこそ1度挨拶として見定めておく必要があった。息子のためにも、この周囲にいる悪魔たちがどんな思惑を持っているかを知っておく必要があると。
「答えろ。おまえは息子に近づいて……何をするつもりだ？　ネプラカスのように利用するつもりか？」
「わ、私は……そんな……その……」
強く意思を込めて再度問いかけるもリアンは戸惑いを見せるのみで意味ある言葉を中々発しない。

それを見かねてか再びレペルタンが助け舟を出すように割って入ってきた。
「ふむ。確かにリアンは第壱階級悪魔で、この私よりも強い悪魔界一の剣士であることは確かだが……些か誤解をしているようだねぇ。私も、そしてリアンも、君の息子を利用しようだなんて考えてはいないのだがねぇ」
「なら何のためにライブラに近づいた」
「ふふふ……それはだねぇ――」
「え、えっと……それは――」
真の目的を看破するために俺は再度問いかける。場合によってはここで一当てしていく必要もある。敵地で、しかも第壱階級悪魔の2体が相手ともなればさすがに苦戦するだろうが……もしこいつらが息子を何らかの陰謀に巻き込もうとしているのならこちらにも覚悟がある。
少なくともそれを見せつける必要があった。そのため、万が一そうなった時のための備えは用意してある。
「――あ、あのー……ちょっといいですか……？」
そうして2体の悪魔からの返答を待ちつつ覚悟を決めていたそんな時――背後からおそるおそる女性型悪魔が声を掛けてきた。
「……何かしら梨夢。今は見ての通り取り込み中よ」
「それは十分承知なんですけど……その、ライブラ様がお戻りになったのでご報告をと……」
「ええっ……!?」
「ほう……！」
フィオリが梨夢と呼んだ悪魔が、その報告――ライブラが帰ってきたという報告を告げた瞬間、部屋の中にいた2体の第壱階級悪魔がそれぞれ大きな反応を見せる。
リアンの方は顔に手を当て、ちょっと焦ったように顔を赤くし、レペルタンの方は口端を大きく吊り上げていた。
それはどうにも、俺の思った反応と違っていて訝しむ。そして、ほんの僅かに逡巡し、1つの答えを思いついた。

……まさか……。
「――父上！　母上！」
「！」
「あ」
そして俺がその答えを思いついた瞬間、莉夢の背後から凛々しい声が飛んでくる。
その顔、容姿、声、気配。その全てを感じ取って俺は、息子であるライブラと約一年ぶりに対面することになった。

――その少年は生まれついて他と違っていた。
と言っても他者と違うのは他の兄や姉、周りにいる者たちも同じだったので特に疑問には思わなかった。魔人と悪魔のハーフである少年は確かに他者とは違った特別だが、彼の兄や姉には本来出来るはずのない魔人同士の子供や魔人と人間のハーフ、魔人と聖女の子モンスターの子供など様々なルーツを持っている者ばかりな上、家にいるメイドや下級使徒たちも揃いも揃って特殊な事情であったり変な個性を持つ者ばかりだった。
なので少年は他と違っていることなど気にならず、特にこじれることのない幼少期を過ごした。母が教育に厳し目だったので多少勉強に比重を置いていたし、将来は父親のような良い男になるようにと様々な習い事をしていたが、特に不満はなかった。
とはいえ少年も遊びたい盛りなので時に言いつけを破ることもある。特に少年の兄の内の1人は脱走の常習犯であったため、少年に良くないことを教えていた。城下町や街の外の話なんかを聞いていると自分も見てみたいと思うのは自然なこと。ちょうど良いことにその兄や姉と同じく飛ぶことも出来たので隙を見て外に出るのは意外と難しくなかった。
『ほう……これが魔人と悪魔の子供か……面白い』
――だが、それが間違いだった。
街の外を軽く見て回って帰るつもりだった少年は、しかしその道

中。目の前に現れた怪物に囚われてしまった。
その怪物の名前はネプラカスと言い、少年の母と同じ悪魔であった。
人間の老人のような姿で近づき、少年を捕らえたネプラカスは少年を興味深そうに観察しながら悪魔らしい凶悪な笑顔を浮かべる。
『これは実験のしがいがありそうだ……クク、小僧よ。これから我ら悪魔の為に、存分に利用させてもらうぞ……』
悪魔は悪魔らしく、少年を実験材料に使うと口にした。
少年は抵抗しようとしたが身体が竦み、そしてそもそも圧倒的な力の前に為す術を持たなかった。
少年は絶望し、恐怖した。悪魔とはこんなに恐ろしいものなのかと。こんなに悪いものなのかと。
こんなことなら言いつけを破って外になんて出なければよかったと自嘲し、心の中で父や母に謝った。
そうして少年の人生はそこでめちゃくちゃになるところだった。
『おい、お前……俺の息子になにをしてる』
――だが、そうはならなかった。
恐怖し、絶望し、後悔する少年の前に、少年の父親が現れた。
少年の父親は囚われていた少年を一瞬にして救い出す。そして同じくやってきた父親の使徒である黒髪のカラー……少年の母親の友人であるその人に抱えられた。
そしてそこからは、戦いが始まった。少年の父親と凶悪な悪魔による壮絶な戦いだ。
その戦いが始まった時、少年は父親を心配した。少年は父親が強いということは聞いていたし知っていたが、それでも父が戦っているところはまだ見たことはなかった。
それだけに本当の姿に戻った凶悪な悪魔を前に負けてしまうのではと、そう心配したのだ。
――だが、その心配は無用だった。
『よくもやってくれたな……』
気がつけば、その凶悪な悪魔は地面に転がっていた。

全身から血を流し、ボロボロの状態で、掠れた声を出している。
そしてその異形の頭部を踏みつけているのは少年の父親であった。
『なあ、おい。随分と舐めた真似してくれたよな？　悪魔風情がこの俺の周囲でこそこそと嗅ぎ回りやがって……それだけなら見逃してやったもののまさか俺の息子に手を出そうとするなんてなあ……！』
『ガッ……うぐ……！』
少年の父は、少年が普段見たことのない荒々しい口調と態度で悪魔の顔を何度も踏みつけていた。その手に持った剣でいつでもトドメをさせるようにして逃さないようにしつつ何度もだ。
『魔人程度なら何とかなるとでも思ったか？　思ったんだろうなぁ？　そうじゃなきゃこんなフザけた真似はしねぇよな？』
『や、ヤメロ……！』
『――なら徹底的に分からせねぇとなぁ……！』
『グ――ガアアアアアッ!!』
父はそう言ってその剣で悪魔の目を刺した。そして執拗に剣を動かして苦痛を与える。
悪魔が悲鳴を上げてもやめることはしない。悪魔に怒りを、そして報いと恐怖を与えて上下関係を徹底的に叩き込もうとしていた。
『地上はお前の庭じゃないんだよ。ここは魔物の世界なんだ。人んちの庭で堂々と歩いてんじゃねぇよ』
それは少年が見る父親の初めての姿だった。親ではなく――魔人としての姿だ。
少年はそこで初めて、父が多くの魔物や人間から畏敬や畏怖を集め、そして恐れられているかを理解した。
『いいか？　これからは陰に隠れながら生きろ。ドブネズミのように薄暗い場所で、こそこそと俺に見つからないように恐怖し、俺に怯えながら生を全うしろ』
『ッ……！　き、貴様……！』
父は悪魔に対して、今後は自分たちに近づかないように命じていた。危害を加えないこと。魔物の邪魔をしないこと。そもそも地上に出ないこと。

そういった様々な命令を行ってみせた――近くに来ていた少年も知る父親の下級使徒。姉の友人であるその少女から何かを聞いた上で。

『……！　な、何故……真の名を……!?』

『クク、さてな。だがお前たち悪魔の弱点は分かってる。こうやって真の名を知られたら絶対服従しなきゃならない。そうしなきゃおまえたち悪魔は灰になって消えちまうわけだ』

『ッ……！』

『だからもう分かるよな？　俺の命令に従わなきゃ殺す……そんなことすらする必要もないことが』

父は強さだけじゃない。策略にも優れていた。

悪魔の真の名を看破させた上で、命令する。そうすることで絶対に命令を守らせる。

先程は恐怖と力の差を分からせた上で支配するのかと思っていたが、悪魔を信用はしない。守らざるを得ないようにして安全を確保した。

『分かったならさっさと薄汚い地下に帰って自分の失態を上司にでも報告するんだな。ま、そうなったお前もどうなるか知れたもんじゃないだろうが』

『ッ……ク、ソ……！』

そうして少年の父によって完全に封じられたそのネプラカスという悪魔は悪魔界へと帰っていった。

少年は無事に保護され、父と共に城に帰ることになったが……当然、その際には父と母からお叱りを受けた。

それはもちろん不甲斐なく、悲しいものであったが……少年は自分を戒めながらも、その時からある目標を立てるようになった。

『母上。余は……父上のようになりたい』

その目標とは――父のように強く賢く威厳ある存在になること。

凶悪な悪魔を一蹴し、知略に長けて様々な施策を実行に移し、多くの魔物、人間からも敬われる父という存在の凄さに少年は気づいた。

その父という存在があるからこそ自分も、そして悪魔でありながら

魔人と結ばれた母も無事でいられるのだとそう気づいた。
魔物の社会は完全な実力主義。力が強い者が上に立つように、悪魔の社会は階級社会であり階級が高い者が下位を支配する。
少年は前者に憧れ、後者を唾棄すべきものだと断じた。話を聞いていてそう思った。
だから少年は父のようになるために、まずは人助け――悪魔助けを行う……悪魔を知るところから始めた。
悪魔の血を持つ自分だけが悪魔の社会をどうにか出来るのではないかとそう考えた。
悪魔も母や母の上司、周囲の悪魔のように悪い悪魔ばかりじゃない。その上、ちゃんと魔物や人間のように考える力を持っている。
だからこそ自分も悪魔として変えられるはず――そう、1体の魔人でありながら多くの魔物を変える父のように。
父のように知識を蓄え、政治や謀略を学び、力を付け、そして他者に敬われるカリスマを得れば為し得ないことはないと少年は夢を見た。
それからは勉強に訓練も人一倍に頑張った。知識を身に付け、力を身に付け、母に言われるように容姿にも気に配って良い男であるように努めた。
そうして母と共に悪魔界にも訪れ、上位の悪魔に許された結果、そこで悪魔として問題を解決したり、また新たなことを学んだりと活動するようになった。
悪魔界は危険なところであるため制限付きではあるものの、そうして少年は――ライブラは父のような強くて誇りある悪魔を目指すようになった。
「父上！　母上！」
そして今日は悪魔界で働く自分を見に父と母たちが来ると聞いてライブラは急いで上司であるフィオリの屋敷へと駆けつけた。
「お久しぶりです！　父上！　母上！」
「あら、ライブラ。久し振りね。元気にしてた？」
「はい！　もちろんです！」

部屋に入って父と母の姿を見かけるなり、ライブラは思わず上司である悪魔や自分の付き人を務めてくれている悪魔がいることを忘れて駆け寄った。
そうして溢れんばかりの喜びを見せたのだが――
「また……強くなったようだな。ライブラ」
「！　はい、父上！　父上の言いつけ通り、余は修行を欠かしておりませんぞ！」
「そうか……それは良いことだが……」
ライブラを見るなり、どこか何とも言えない顔を浮かべる父――レオンハルトにライブラは首を傾げた。
「？　どうかしたのですか？　父上」
「……いや、何でもない。それより……俺たちに挨拶するのも良いが、この場にはお前の上司である悪魔もいる。そちらに挨拶するのが先じゃないのか？」
「！　す、すみません！　失念していました！　レペルタン様、それにフィオリ様も申し訳ありません……」
「いや……構わないよ。両親との久し振りの再会だ。是非こう……もっと喜んでくれたまえ」
「……レペルタン様がこう言うのだから報告は少し遅れても構わないわ。気にしないでちょうだい」
「はい……寛大な心遣いに感謝します」
ライブラは父の注意を受け、上司の悪魔たちに謝罪する――が、その一連のやり取りの中でもどこか様子がおかしいことにライブラだけが気づいていなかった。
だがそれも致し方ないことだった。ライブラにとってはコンプレックスであり、そのためこの場にいる面子は気を使ってあまり言わないが……ライブラの容姿には些か問題があった。
「ら、ららライブラ様！　あの、その……！」
「おお、リアン。お前もいたか。気づかずに済まなかったな」
「い、いいいいえ！　私はその……影が薄いので……か、影の中に隠れています！　すみません！」

その容姿は、第壱階級悪魔ですら身を隠してしまう程のものだ。
「久し振りー……ライブラ」
「ミコト姉上！　姉上も来ていたんですね！」
「んー……暇だったから」
「ふはは、またご冗談を。姉上はいつもお忙しいではないですか。――どこぞの愚兄共と違って」
「皆も来たがってたよ……可愛いライブラに会いたいってー……」
そして、その問題点をいとも容易く姉であるミコトが口にすると、途端にライブラは眉を立てた。
「姉上！　余は可愛くありません！　訂正してください！」
「……なんで？　可愛いのに」
「何でも何も可愛くないからです！　余は……そう！　男の中の男！　それを目指しているのですから！」
ライブラは真剣な表情でそう言って自らの着ている黒いコートを翻す。
だがその容姿は――ミコトの言うように、非常に可憐さに満ちていた。身長は僅か１３８センチ。長く艶のある黒髪をポニーテールに束ね、少しツリ目気味のぱっちりした目。長い睫毛に赤ちゃんのようなもちもちの白い肌。あどけないのに凛々しさも感じさせる顔立ちは女の子と１０人中１０人が見紛う程。
声もまた女性が少年の声を出しているかのようなボーイッシュさを思わせる。
つまり彼女――否、少年ライブラは少年でありながら女の子のような凄まじく可憐な容姿を持っていた。
（ふふ、ふふふふふ……今日もライブラくんは可愛いねぇ……あんなに自信満々に胸を反らして……その下に隠された少年乳首を思うと昂ぶってしょうがないねぇ……誘っているのかな？　その下のポークビッツと合わせてお姉さんが食べてしまいたいねぇ……！）
（う、うわ――――!!　今日もライブラ様かっわいい――――――!!
もうダメです、私、見てられません……ガゲちゃん……代わりに見ていて……後、隣の変態ショタコン悪魔が何かしでかさないように見と

いてください……私が守らないとライブラ様は変態に全身を舐めしゃぶられて穢れてしまいます……ライブラ様には一生綺麗なままでいてもらわないと……）

――そしてそれは特殊な趣味の女性から大ウケだった。

第壱階級悪魔である2人はそれぞれ悶えていた。1人はブツブツと小さい声で変態的なことを呟きながら。もう1人は影の中で顔を押さえて勝手な使命感で燃えている。

「……インデックス。おまえ、この状況を知っていたのか？」

「私の口から話すのは憚られたから……それにフィオリ様から黙っているようにって言われて……」

「レオンハルト様に直接この状況を見て理解してもらった方がよいかと思いまして……」

「……そうか」

そして悪魔2人が悶えていて何やら変態的なことを口走っているのを魔人の驚異的な聴力で耳にしたレオンハルトはげんなりする。

まさか自分の息子に悪魔2人が近づいた理由がそんなバカバカしいことだとは思わなかった。確かにライブラは息子にしては可愛すぎる容姿を持っていることは当然親として分かっているし、城内でも娘扱いされたり、最早男の娘だと言われたり、男だと分かっているのに可愛いからカイゼルなどは頭を時折地面や壁に叩きつけていたりするレベルではあるのだが……とはいえ悪魔まで魅了する程とは思わなかった。

「ライブラ。服がちょっと汚れてるわよ」

「っ、す、すみません母上……先程ちょっと戦闘で汚れてしまって……」

「気をつけなさい。良い男になるなら身だしなみを疎かにしては駄目よ」

「わ、分かっています。ちゃんと毎日髪の手入れも肌のケアも母上の言いつけ通り行っていますから」

「それくらいは当然ね。後は……そうね。この長ズボンはどうしたの？」

「え、えっとそれは……その、売ってあったので買いました。なんか父上みたいだなって思ってかっこよくて……」
「悪くはないわね。でも今のライブラにはまだショートパンツかスカートが似合うと思うわよ」
「う……で、ですが母上。丈の短いズボンはともかく、スカートはどちらかと言えば女性の履くものでは……？」
「あら、知らないの？　スカートは元々男性の伝統的な衣装なのよ」
「そ、そうなのですか!?」
「そうよ。ね？　レオンハルト」
「そうなのですか？」
「む……まあ……そうだな」
「ほらね。レオンハルトが言うなら間違いないわよ」
「そ……そうですね！　父上が言うのであれば……ではスカートは今後も継続して履くことにします！」
……若干母親のせいでもあるような気もしたが、レオンハルトは何も言わなかった。
教育の方はある程度インデックスに任せているし、おかげで子供の中でもかなり良い子に育っているので文句の付けようがない。
ただちょっと……環境は問題かもしれないとそう思った。利用される心配はなさそうだが、と。
「……ライブラ。久し振りに帰ってこないか？　久し振りに付きっきりで稽古を付けてやるぞ」
「！　そ、それは本当ですか父上!?」
「ああ。最近は時間が出来たからな」
「そ、そうですか……そ、それならあの、勉強とか、後はお食事とかも連れてって欲しいです……後は、お風呂とかも……」
「……ああ。構わないぞ」
「！　あ、ありがとうございます！　え、えへへぇ……やったぁ……」
「……」
レオンハルトはそのライブラの自身に懐いているが故の振る舞いを見て、内心で思った。

……ライブラ。男らしくなりたいならその腕を前にやって小声で喜ぶのはやめたほうがいいと思うぞ……。
「……さて、レオンハルトくん。我々の疑いも晴れたところで折り入って頼みがあるのだが……ライブラくんのチ……いや、お風呂の時にチン……写真を取ってきて貰えないかね？　必要とあらば大抵の願いは叶えさせてもらうんだがねぇ……」
「あ、あの……すみません……ライブラ様に付いて行ってもいいですか……？　すみません……お家に邪魔させてもらって護衛しますので……すみません……そ、それでちょっとだけライブラ様の私物を頂ければいいと思うんですけど……すみません……その代わりに殺したい人とかいれば請け負いますから……すみません、いいですか？」
「……駄目だ」
「そんなぁっ！」
「……下着姿は駄目かい？」
「いいわけあるか」
２体の第壱階級悪魔が変態的な頼みを囁いてきたのを聞いて、レオンハルトは毅然と言い返し、そして思った。
……とりあえずは大丈夫そうだが……今度またイヴ連れてきて真の名で服従させたほうがいいか……？
――そんなわけで最初の悪魔界の挨拶は無事に終わった。

――一方、街の方では。
「でさー。この間は……」
「うそー。マジー？　私なんて……」
「……」
街を何となく観光していた魔人ケイブリスは道を歩く女の悪魔と触手塗れのとんでもない異形が並んで歩いているのを見て思った。
（俺様を見ても何も騒がないし驚かない……なんか、意外と居心地いいかもしれねぇな……）
強いやつが多そうなこと以外は割と悪魔界にいても違和感がない

自分を思い、ケイブリスは悪魔界の空を見上げた。

予知の使徒

魔人というのは世界に２４体までしか存在出来ないこの世の支配者層だ。
魔人の上には魔王。そして下には使徒や多くの魔物が存在するが、魔人の数は常に限られている。
そのため魔人同士で交友する相手というのは常に同じ顔ぶれになりがちだった。
「どうでしょうレオンハルト様、お味の方は……」
「ああ、悪くないな」
「それは良かった。こちらの茶葉は西の方で採れた珍しいものでしてね。他の方々にもおすすめしている物なんです」
「ふむ……確かに、中々に芳醇な味と香りですね」
「以前ケッセルリンク様にも気に入って頂いた一品です」
意匠や材質にも拘った家具や調度品に囲まれたその場所は、目の前にいる魔人ジークの別荘の一室だ。
そこに招かれた俺と隣にいる魔人アイゼル――今日はこの３人でのお茶会。ジークに誘われて集まった魔人同士のプライベートな時間に興じていた。ジークは度々こういった集まりを開いており、魔人と親交を深めようとしているらしい。自分やアイゼル。あるいはケッセルリンクなどはその常連であり、参加するのはこれでもう何度目だったか。
ジークは毎回その魔人の好みであったり、あるいは人選もしっかりと選んでいるため、居心地の良さは保証されている。
例えばこの場には今アイゼルがいるが、アイゼルがいる時にはケッセルリンクや、時折ケッセルリンク主催のお茶会の方に招かれるハウゼルなどは呼ばないし、逆もまた然り。魔人同士の相性なども考えた上で交流を行おうと会を開いている。
「そういえばアイゼル。最近はまたよく人狩りを行っているようだな」
「ご存知でしたか。これはお恥ずかしい」

「また人を試しているのか？」
「ええ。しかし最近は良い輝きを見せる人間が少なくて、徒労に終わることも多いですがね」
「野良の人間も最近は大人しいみたいですね。一時、活動が盛んな時期がありましたが最近は強い人間が現れたという報告も聞きませんし」
「人間とは元よりそういうものだ。数が多く、多種多様な成長を見せるがその輝きにはムラがあるもの。人の輝きが見たいのなら長い目で見ることだ、アイゼル」
「はい。ご教授いただき感謝します」
さながらそれは貴族の集まりのようだった。魔人同士の集まりであるため、ある意味貴族のようなものであるのは間違いないのだが……人間の貴族ではなくあくまで魔人なので時折、人間視点では物騒な会話も差し込まれることはある。
人間が下等な生物であるというのは程度の差はあれ魔人の共通する価値観であるため、人間を話題に挙げればどうしたって人にとっては不快な、上位者からの言葉になるだろう。
とはいえそこで逆らったり怒りを見せるような気概のある人間は希少だし、いてもすぐに死んでしまう。どれだけ気概があろうと人間と魔人の絶望的な力の差は変わらないのだ。
……まあ中にはその魔人や、あるいは魔王に力を届かせる者も稀に現れはするがな。
そう思い、1人の男の姿を思い浮かべた。そうして紅茶をまた一口含むと――その時、部屋に1つの大きな気配がやって来た。
「よォ、ジーク。邪魔するぜ」
「おや……」
遠慮することなく、勝手知ったる我が家のように土足で部屋に上がり込んできたのは魔人レイだった。
お茶会に呼ばれていないであろうそのレイの登場に軽くアイゼルが反応する。そしてジークが応対するも、俺はあえて反応せずにカップを傾けることにした。

「レイ。ノックもなく部屋に入るのは感心しませんよ。それに、今日はお茶会で私がホストです。客人を喜ばせる責任がありますので、あまり勝手な真似はよしていただけると……」
「チッ……分かってンよ。気を揉まなくてもここで仕掛ける気はねェ。今日はちょっと話に来ただけだからな」
ジークの注意にレイは舌打ちをしながらも去るつもりはないのか、近くにあった椅子を持ってきてテーブルに近づけるとその椅子にどかっと無遠慮に座る。それを見てアイゼルが肩を竦め、ジークが更に息を吐いた。
しかしそれでも構わず紅茶を楽しんでいると、レイの前髪に隠れた眼光がこちらを射抜いていた。
「ようレオンハルト」
「……何の用だ、レイ。俺は今、紅茶を楽しんでいるところなんだ。用件があるならさっさと言え」
「ハッ……相変わらずスカした野郎だな。その面を見てると仕掛けたくもなるが……安心しろよ。今日の狙いはお前じゃねェ」
レイの挑発染みた言葉に付き合わず目線も合わせないまま先の言葉を待つ。喧嘩を買ったり、更に言葉をぶつけてもいいが、この場はジークの別荘でジーク主催のお茶会だ。
ゆえに穏便に済ませてやるために不要な言葉を慎んでいるとやがてレイが用件を口にした。
「ガイの野郎の居場所、お前なら知ってンだろ？　それを教えろ」
「……ガイ？　ガイに用があるのですか？　レイ」
「ああ。あの野郎をぶっ飛ばしてやろうと思ったんだが、魔王城にも奴が管理してる牧場の方にもいなかったんでな。こうして魔人筆頭サマに態々聞きに来たってワケだ」
ガイの名前を聞いてアイゼルが代わりに問いかけるとレイはその理由を説明した。居場所が分からなかったから聞きに来たと。
だがその説明だけでは不十分だ。それは俺だけでなくジークも思ったのだろう。疑問を口にする。
「ガイ様ですか。しかしレイ。以前はガイ様に興味がなくなったと、

そう言っていませんでしたか？」
「そうですね。ペテン野郎だの何だの言っていた覚えがありますが……」
「……一段上のペテン野郎だったってだけの話だ。この間、あの野郎に不意打ちされてな……！」
そう言って、レイはその時のことでも思い出したのだろう。怒りに呼応してレイの周囲でバチバチと電気が弾ける。
……そして俺もまた思い出した。そう言えば以前、悪ガイが酒に酔った勢いで話していたことを。確か、そう、こんな感じだったか。
『誰かと思えば……またテメェか』
『む……お前は……』
――魔王城でガイとレイは偶然出くわしたその時の話だ。
『チッ、またジルの姉御にでも呼ばれてたのか？　……まァいい。ほら、どけよ。腰抜け野郎』
――以前喧嘩を買われなかった時のことを思い出し、レイはおそらくガイに道を譲るように荒っぽく口にしたのだろう。
『……ああ。分かった』
『フン……』
――そしてガイはレイの言う通り、道を開けた。
レイはそれを見て気に入らないと思いつつも鼻を鳴らしてガイの譲った道を歩き、背を向けたのだろう。
その瞬間、ガイの口元がニヤリと歪んだのに気づくはずもない。
『――黒色破壊光線！』
「あ……？　なッッッ!!?」
突然の背後からの最上級魔法にレイは完全に不意を突かれて吹き飛ぶ。
すぐにそれが魔法。それもガイが放ったものであることは分かっただろうが、それが想像以上の威力であったことからレイは魔王城の廊下を転がり、そして怒りと共に立ち上がろうとして――
『ッ……テメェ……！　不意打ちとはやってくれンじゃ――』
『黒色破壊光線！』

『ぐおおおお!?』
――再び魔法によって吹き飛ばされる。レイが晒した隙を容赦なく突くように、ガイは魔法を連発した。
『白色破壊光線！　ジャクタイン！　雷神雷光！　ストップ！　絶対零度！　粘着地面！　ゼットン！』
『ごっ！　うがっ！　て、てめぇっ！　ふざけ――』
「うるせー！　貴様こそこの間はよくもやってくれたな！　黒色破壊光線！」
『ぐ、ぐあああああっ！』
――度重なる魔法の連続。それも不意を突かれた上での最上級魔法の連発にレイは為す術なく吹き飛ばされ、窓ガラスを突き破って魔王城の中庭へと落ちる。
真正面からしっかりと戦闘態勢を取った上であればレイもここまで一方的にやられることはなかっただろうが、戦闘においては僅かな隙が致命傷にもなり得る。
『ぐはははは！　よーし、今日はこのくらいで勘弁してやろう！　おっと、悪く思うなよ！　戦いに卑怯もないんだからな！』
『て……テメェ……待ちやがれ……！』
『ぐはははは！　誰が待つかバカタレ！　俺はこれから良い飯食って良い酒飲んで良い女抱くっていう大事な用があるんだよ！　……ジルの相手がやっと終わったからな……』
――中庭に落ちたレイに向かってガイは中指を立てて向けながらひとしきり高笑いをすると、少しだけ疲れたように低く小さい声を出す。
しかしすぐに気を取り直して自由を満喫するために背を向けた。
『それじゃあな！　お前はそこで草でも食ってしばらく寝とけ！　ぐはははは！』
『ッ……ガイ……！』
――そうしてガイはレイを放置してさっさと行きつけの店でたらふく飯と酒をかっ食らい、女を侍らせながら、飲みに誘われたため同席していた俺にその話をご機嫌に話した。

「……とにかく、ガイの野郎の居場所を教えろ。あいつにはやり返さなきゃ気が済まねェ……！」
……そして現在に至る。
レイはそのことでガイを一段上のペテン野郎だと評したのだろう。ただの腰抜けではなく、そう見せかけて隙を作るための策だったと思っている。
「……なるほど。確かにガイ様は気分の浮き沈みが激しい方のようでしたから……」
「……おそらく最初は気分が沈んでいたため相手にしなかったのでしょうね」
そしてそれはジークやアイゼルも同じらしい。
何度かガイと接したことのある魔人はガイはその時々によって態度や対応を変える人物だと思われているようだった。
実際にはただの二重人格であり、以前レイの喧嘩を買わなかったのが善ガイで、その時のことを思い出してやり返したのが悪ガイというだけなのだが……そう思うのも仕方ないだろう。
「……理由は理解した。喧嘩を売りたいなら好きにすればいい」
「だったら居場所を教えてくれンだろうな？」
レイにそう問われ、少し思案する。本気の殺し合いでもなければ多少の喧嘩は目を瞑っても構わないのだが、ガイの居場所を教えるということはおそらくその場が戦場になりかねないということでもある。自分の街でレイとガイを暴れさせるわけにもいかないため、レオンハルトは答えを工夫することにした。
「……さあな。ガイがどこで寝泊まりしているかは定かではない。だが、頻繁に魔王城に出入りしていることは確かだ。喧嘩がしたいのなら魔王城に詰めていればいいだろう」
「チッ……結局そこかよ……そんだけなら無駄足だったな」
こちらの答えは満足のいくものではなかったのだろう。悪態をついてみせるレイ。
だがそれでも席を立って部屋から出ていく素振りを見せたので魔王城には向かうつもりのようだ。俺はそのレイの背中に再度忠告し

ておく。
「忠告しておくが、どちらかが消えるような事態にはするなよ」
「殺さなきゃいいンだろ」
俺の忠告を分かっているのかいないのか、それだけ答えてレイは部屋から去っていった。
レイはああ言ったが、実際のところ弱くなったとはいえガイの実力はレイより上。そのため本気でやり合うようなことがあれば負けるのはレイで殺されかねないのはレイの方だろう。
「かなり昂ぶっているようでしたね」
「レイの性格上、やられっぱなしではいられないのでしょうが……それにしてもレイを一蹴するとは……やはり四天王に相応しい実力を持っているようですね」
ガイの方にも忠告しておく必要があるな……とジークとアイゼルの話を耳にしながらも俺はこの後の行動について考える。ガイについては忠告もそうだが、色々と問題もあるためお茶会が終わったら次はガイにも色々と小言を口にする必要がありそうだと。

――その男は運命を見通していた。
物心がついた時には、この先のあらゆる困難を甘んじて受け入れる覚悟を終えていたのである。
この時代の人間であれば物心つく頃には魔物に虐げられる現実を常の物として受け入れるか、あるいは朝日を拝めることがどれだけ尊いものであることかを理解し、毎日を恐怖するようになるかのおおよそ二択であるはずである。
だが男は違った。彼の一族は魔物も人間も発見することが難しい結界の中にあった。一族全員が魔法使いである未来視の一族――男はその生まれであった。
一族は幼い頃から魔法と、そして占いの術を学ぶ。そこに例外はなく、次代の長を決めるためにそれは必要な事柄であった。
男は幼い頃から頭角を現し、早期からその運命が決められていた。

技能レベルを調べる術を知るその一族では才能があると分かった時点で長となるための教育が始まる。
ゆえに男もまたその長になるための厳しい教育を受けることになったが――しかし、男は自分が長にならないことを予め伝えられていた。
一族の長に相応しいだけの才能があるというのにどうして――なんて、疑問は浮かばない。
男もまた理解していた。自分は長になるのではなく、別の存在になることを。
ゆえに男は一族として高い教育を受けながらも更に高いレベルを求めた。魔法や予知の術は勿論のこと、剣も学び、魔物を相手にした戦いの訓練も行った。
高い才能に驕り高ぶることもなく努力を重ねた。それを続ければ、大人になる頃には一族の中で最も優秀で強い者になるのは必然であった。
あるいは、大規模な魔物討伐隊の隊長にすら勝ちうる強さを持っていただろう。彼の実力、未来視の術も含めた力があれば、そこいらの人間や魔物は相手にならない。
だがそれでもまだ驕り高ぶることもない。男は幼少からずっと、落ち着いた人物であった。どこか達観しているとも言える――そう、男にとって、自分の実力は大したものでないことを知っていた。
何しろこの世には人間や通常の魔物より遥かに強大な存在――魔王がいるのである。
魔王やその配下の魔人。その下の使徒に比べれば自分など取るに足らない存在でしかない。それを男は冷静に受け止めていた。ゆえに達観していた。
――自分はこれから、その魔の世界に身を投じることになるのである。
男はそれを幼い頃から知っていた。そうなる運命だとして受け入れていた。
未来視の一族にとって、より良い未来を求めるのは使命である。歴

代の長たちは皆そうしてきたし、そうでない者もそうあろうと努力してきた。
――ゆえに男もまたそれに倣うまで。男は未来のために、全てを受け入れていた。
だが、受け入れやすさ、という意味で男にとってその相手が尊敬に値するべき相手であることは僥倖であった。
男は幼い頃から自分が仕えることになる王の存在を知っていた。
その王は人間時代から他者と隔絶した力を持っていた。達人に匹敵する剣の腕前に、達人などという言葉では括ることの出来ない魔法の腕前。
里に遺っている禁呪を全て習得し、自在に扱えるようになったというその王は、かつて最強の魔人相手にすら引き分け、魔王にすら届きうるものであったという。
そしてそれだけの力を持ちながら、人間らしい重い苦悩を持ち合わせていた。
男はこれから、それを支えなければならない――いや、支えたいと思った。
あらゆる運命を未来のために受け入れる覚悟であった男だが、それでも好みというものは存在する。尊敬に値する相手。信頼するに値する相手。そして、その身を案じて支えたいと思うほどには、かの王は不憫でもあり、魅力的でもあった。
ゆえに男は自らの意志でも受け入れた。主を支えることに、この先の一生を使うことを。
男は立派に成長し――やがて、時が満ちた。
男は里を出て、予知の通りにその場所へと向かった。人を避け、魔物を避け、そしてかつての祖先を頼り、その祖先が居候をしている城の主を頼った。
そうして男は――そこでようやく、仕えるべき主と対面した。
――強い意志を感じさせるその左目を見た時、男は自らの判断が間違いないことを予知だけでなく自らの直感でも確信した。
やはりこれは運命だったのだと男は膝を突く。

そして初めての言葉を発した。
「……ご紹介に預かりました。レーモン・C・バークスハムと申します――魔人ガイ様」
そう――その相手とは魔人ガイ。
そしてその白い長髪の美青年の名はレーモン・C・バークスハムと言い、彼はガイの使徒になるべく魔人レオンハルトの勧めという体で仕えるべき主と対面したのだ。
「ガイ様。どうか私めを使徒としてお側に置いてください」
そして願う。
運命が決まっているとしてもこうして自分の意思で願うことが大切だった。永遠を付き従う魔人と使徒として、重要な誓いを述べる。
たとえそれが永遠じゃないと分かっていたとしても、使徒はそうありたいと願うものなのだと男は真摯に努めた。
そして男はガイの使徒になる。そう、この瞬間から――
「……うーん、こいつはちょっと……パスだな」
「――――え」
――が、返答は違っていた。
男は、レーモン・C・バークスハムは人生で初めて驚きの声を漏らした。予定と、いや、予知とちょっと違う。予知では使徒になることは決まっているはずだったのに……。
「……おい、ガイ」
「なんだレオンハルト。紹介したい使徒候補ってのはこいつだけか？」
「……そんなに簡単に拒否しなくても良いんじゃないか？　一応こいつの能力とか……聞いた限りじゃ優秀だぞ」
「あー？　そうなのか？　それじゃあ……」
バークスハムはそこで目を見開いた。仲介してくれた魔人レオンハルトの言葉でガイが心変わりをする。なるほど。こういう過程を踏むのかと。
バークスハムの持つ予知も完璧なものじゃない。結果が仮に見えても過程まで全てが見えるわけじゃない。

ゆえにここで使徒になるために対面するという行動で結果に結びつくことは理解していたが、こういう過程を踏むということまでは分かっていなかったのだ。この場で再び予知をすればもっと分かるかもしれないが……少なくとも今のバークスハムにはそこまでの力はない。

しかしどんな過程を踏もうとも問題ない。バークスハムには全てに対応出来る自信があった。そのために今まで努力を重ねてきたのだから……ゆえに、ガイの次の言葉にもバークスハムは余裕を持って対応――

「なんか一発ギャグでもしてみろ」

「もちろんですとも。一発ギャグくらい私の……え？」

――出来なかった。

予想外だった。まさかこのような過程を辿ろうとは……。

「何だ？　出来ないのか？　それなら使徒になる話は無しだな」

「お……お待ちください……！　出来ます、無論、出来ますとも……！」

「お、そうか。それじゃやってみろ」

使徒になるには一発ギャグを披露しなければならない。

であればやるしかない。なぜこんなことに……などと思ってはいけない。いや、思ったとしても未来視の一族の名において未来を手繰り寄せるのみだ。ここで大爆笑を取ることが未来に繋がるのであれば取るのみだ。

ゆえにバークスハムは必死に思考した。一発ギャグ。そんなものはバークスハムのこれまで学んできたあらゆる物の中に存在しない。

常人ならばここで取り乱すだろう。しかし、予知のバークスハムは違う。一発ギャグという言葉に惑わされる必要はない。要は笑わせればいいのだ。気に入られればいいのだ。

ゆえにここは思い切りが肝心だ。変に恥ずかしがってはウケることも気に入られることもないだろう。この場で計算されたギャグを考えることも不可能。

「ではやります――おっと、こんなところにレモンとハムが」

バークスハムは意を決して実行した。ガイやレオンハルト。そしてレオンハルトに付き従う使徒などが静かにそれを見守る中、バークスハムは落ち着いたトーンで入り――

「バクバクバク!!　レモンとハムを食うバークスハム！　レモンとハムをバクバク食うレーモン・Ｃ・バークスハム!!」

――そして勢いよく架空のハムとレモンを食う素振りを跳びはねながら見せた。

ただのダジャレ――否、ただの自身の名前をかけたダジャレではなく、これはしっかりと計算され尽くしたもの。

自分のような一見して落ち着いた美青年が、このような下らないギャグを勢いよく披露するとは誰も思わなかっただろう。使徒になろうという人間が唐突にこんな下らないギャグを披露するとは。

ゆえにそれがギャップになり、そしてくだらなさが一周回ってウケるはずだ――と、バークスハムは計算した上で実行した。全ては未来のため。ガイ様の使徒になるため。

そして使徒になることは確定したことなのだからここでは自分の感じたやるべきことが真実であるはず。つまり、ウケは約束されたものだ。ゆえにこれくらいの恥は甘んじて受けよう。そう、ウケるのであれば――

「……」

「……ああ、なるほどな……」

「っ……！　ふっ……！　ふふ……！　（駄目です、笑っては……！ミシェーラは分かります……！　ここは空気を読んで笑わないべきだと……！　なのに、下らなすぎて……ふふ……！）」

「～～～～～っ！　（さ、流石だ我が子孫……！　誠実なるバークスハムよ……！　まさかこんな馬鹿げたことを躊躇いなく実行に移すとは……！　ふふふ、やはり君は私以上の天才だな……！）」

「……（なんか笑いのツボがおかしい人が２人ほどいますね……まあいいですけど。でも肝心のレオンハルト様やガイ様は微塵も笑ってないわけですが……）」

――５人中２人が笑っている。

つまり、ややウケだった。レオンハルトの使徒だという確かミシェーラと隠れてこっちを見ていたバークスハムの祖先の２人が笑っていて、肝心のガイやレオンハルト。そしてイヴという少女は笑っていない。

……こんなはずでは……とバークスハムは内心で頭を抱える。表向きは涼しい顔に努めながら。

「……やっぱパスだな」

「そんなっ!?」

「ま、まあ待てガイ……一発ギャグで使徒になるかどうかを決めるのはあまりにも酷だろう。そうだな……他にも試してやるのはどうだ？」

「じゃあ次はコントでも披露してもらうか。俺様の使徒になろうって言うなら出来るよな？」

「そ、それは……」

ガイの質問にバークスハムは戸惑いを見せる。

使徒になるためにまさかこんな過程が、試練が待ち受けているとは露とも思わなかった。これも自らの未熟ゆえか……とバークスハムは少し落ち込む。

だが未来のためならやるしかないとバークスハムは決心した。

「……では、考えてくるので少々お時間を頂ければ……」

「えー……時間かけるつもりか？　それじゃあやっぱ無しだな」

「ショートコント！　魔王！　……ぐっ……まずい、このままでは魔王に……ん？　こんなところにヒラミレモンが……」

――バークスハムは即座に実行した。未来を手繰り寄せるために。

そしてこの後、再びガイに何度もパスやチェンジを言い渡されることになり、バークスハムは危機感を覚えるが――一連の無茶振りが終わった後、改めて予知を行い、善ガイの時には普通に誠実に、悪ガイの時なら人間の女を調達して役に立つところを見せればどうにでもなると出たので後日、それを実行に移し、レーモン・Ｃ・バークスハムはめでたく魔人ガイの使徒になったのだが……それはもう少し未来の話であり、現在のバークスハムは未だ無茶振りを受け続け頭を抱

えていた。

魔王の休日

その日はレオンハルトの数少ない休日であった。
魔軍参謀として魔軍を運営し、魔人筆頭として魔人を統率し、紅魔城の城主として大勢の下級使徒、レオンハルトシティの魔物を治めている魔人レオンハルトにとって完全な休日は珍しいものである。
もっとも１０００年以上昔の時代、魔王ナイチサの時代よりは休める日も多くなっている。今は魔物の黄金時代。人間の国というものが存在せず、人間と魔軍の戦争が常だった時代よりは仕事が少ない平和な時間を過ごせている。
「ふんふ～ん♪」
それが今この時にも表れていた。
レオンハルトシティから程近い場所にある野山。自然豊かな原っぱにレオンハルトはいた。１人ではなく、隣にはレオンハルトの女である魔人ラ・ハウゼルを連れて。
「良いピクニック日和ですね」
「ああ、そうだな」
ハウゼルは久し振りに家族での時間を取れたことが嬉しいのか機嫌良さそうに鼻歌を歌いながらレオンハルトの手をぎゅっと何度も握り込む。
そう、家族の時間だ。
ゆえにそのハウゼルの隣からやや少し遅れて不満そうに付いてくるのはそのハウゼルとレオンハルトの息子であるカイゼルだった。
「チッ……何が悲しくてピクニックなんか……俺様はもうガキじゃねーっての」
「カイゼル？」
「っ……な、なんだよ、マ……ママ」
親に聞こえないように小声で悪態をつくカイゼルだったが、ハウゼルが反応してカイゼルの方を振り向くとやや怯えた様子を見せる。
その顔は普段付けているマスクもなく、カイゼルはそのレオンハルトによく似た顔をさらけ出していた。特に、鋭い目つきに野心を感じ

させるようなその瞳はレオンハルトが戦闘を楽しんでいる時の顔に似ているもの。
　それでいて髪色はハウゼルににた鴇色とも言うべき髪で、男にしては少し長いその髪を後ろで一本に結っている。
　総じて容姿は整っているが粗暴さが隠しきれておらず、チンピラの親玉のような雰囲気を醸し出す生まれ持っての魔人カイゼルは、しかし、自身の母親であるハウゼルには弱い。
　今も振り向いたハウゼルに対して顔を背け、苦虫を噛み潰したような表情となり、
「また熱気が抑えきれていませんよ？」
「うっ……！　う、うっせーな……分かってんよ。今消そうと思ってたところだ」
　ハウゼルの注意、足元の草に火が付いているのを指摘され、カイゼルは慌ててそれを足で踏み潰すことで消す。
　乾燥した場所や草木の多い場所では時折、熱くなるとこういうことが起こる。カイゼルは力は大きいがコントロールが未熟でそのことをよく注意、もとい教育されていた。
「せっかくの楽しいピクニックなんですから気をつけなさいね」
「……そもそもピクニックに行くつもりなんざ……どうせ外に出るならもっとこう楽しめる場所の方が……」
「――カイゼル？」
「っ、な、何でもありません……」
　ハウゼルの目がすっと細くなるとカイゼルは敬語になり大人しくなる。
　だがその様子を見てハウゼルもまた息を吐き出した。
「……はぁ。まったく幾つになってもカイゼルはやんちゃなんですから……」
「……まぁそれもカイゼルの良いところだろう」
「それは分かってますけど……」
　ハウゼルの子供に対する悩みにレオンハルトはフォローを入れておく。

確かにやんちゃぶりが目立つのは事実だが、その方向性さえ間違えなければカイゼルは子供たちの中では力も強く将来性は高い。
特に最近、使徒を作ったことでそれも僅かだが垣間見えていた。レオンハルトはちらりと横目でカイゼルを見て思う。ちょうど使徒と会話をしているところで、
「チッ……まあ来ちまったもんはしょうがねえ……確かに羽を伸ばせる機会ではあるしな……」
「カイゼル様、マジでいつもこもりっぱなしですからねぇ……しかしピクニックって何をするんで？」
「ん、ああ……大体見晴らしの良いところで弁当食って、適当に飛び回って遊んだり……後は野良の魔物相手に軽く戦ったりして、疲れたら読書か昼寝だな」
「……なんか普通の遠征と変わらないですねぇ……」
「まあな。だが一応それなりの楽しみはなくはねーけどよ。とはいえガキの頃から何度も行ってるから今更珍しくとも何とも……」
そう言ってからカイゼルは思ったのだろう。
自身の使徒が、元は野良の人間であるためピクニックを味わったことがないことに。
ゆえにカイゼルはそこで悪い笑みを浮かべた。
「……いや、そうだな。せっかくだしここは俺様がお前にピクニックの楽しみ方を教えてやる」
「え……それは……（いやいらないんですけど……というか僕ちゃんにはこの機会にレオンハルト様に媚びるという重大な使命が……）」
「文句はねぇよな？」
「へい！　もちろんですぜカイゼル様ぁ！」
「クハハハ！　それならいい！　よーしそれなら俺様もやる気が出てきたぜ！　来いスケアクロウ！　まずは良い感じの棒を見つけるぞ！」
「ぼ、棒？　よく分かりませんが分かりましたぜ！　ゲッヘッヘ……！　（よくわかんねーが主だし断れねー……！）」
急にやる気を出したカイゼルはその原因である使徒のスケアクロ

ウを先導するようにずかずかと先へ進み始めた。
　そしてそれを見たもう一人の同行者が慌てて付いていく。
「あっ、ちょっとちょっとカイゼル様ー！　待ってくださいよー！」
　その同行者はハウゼルの使徒である火炎書士だった。
「ちょっと付いていって見てきますね！」
「ええ、お願いね」
「はい！　――カイゼル様～！　あんまり遠くに行っちゃダメですよ～！」
　昔からカイゼルの子守やお付きも任されていた火炎書士は少し離れていってしまったカイゼルとスケアクロウにも主に一言伝えた上で追いかけていく。
　するとその場にはレオンハルトとハウゼルの2人だけになり、
「ふふ、やっぱり来て良かったですね。カイゼルもお友達が増えたおかげで楽しそうですし」
「初めはどうなることかと思ったが、結果的には良い影響を与えたみたいだな。特にカイゼルは下に誰かがいてこそ輝くようだ」
　2人で息子であるカイゼルの変化について話し合う。勝手に行動して使徒を連れてきた時はハウゼルもかなり怒り、レオンハルトとしても説教と折檻を行ったものだが、結果的に使徒が出来たことはカイゼルにとって良い方に転がっている。
　少し遠くでスケアクロウにピクニックの楽しみ方を自慢気に語っているカイゼルを見ればそれがすぐに分かる。カイゼルはやはり、面倒見が良い。
　特に自分を慕ってくれる下の人間に対してそれが発揮されるようで、それがあのスケアクロウの上位者を煽てる気質がマッチしているようだった。ケッセルリンクとの息子であるアルベルトとその使徒であるメリルのようにパートナーという感じではないが、かえってそれが合っている気がした。
　そのため最初はなにか不都合を起こすようであれば殺してしまうことも考えたスケアクロウだが、今では問題なく身内に迎え入れている。

「さて……この辺りか」
「そうですね」
そしてそんなことを考えながら良い感じの場所――木の陰に当たるその場所にシートを引くとハウゼルがその手に持っていたバスケットをシートの上に置く。
中にはハウゼルが作ってきたお弁当が入っている。全員の分の昼食だ。
「カイゼル達は……少し遠いな」
「ふふ、元気ですね。少し待ちましょうか」
弁当を食べようと呼びかけようとするもカイゼル達は少し遠くで何かを探している様子であるため、レオンハルトはハウゼルと共にシートに座って待つことにした。
「風が気持ちいいですね」
「ああ」
レオンハルトは木の根本部分にもたれるように腰掛ける。
するとハウゼルもまたその隣にやって来た。自然に、飾ることもなく。
「ん……」
肩を寄せ、頭をこてんと預けてくるハウゼルの身体の重み。常人よりは熱めの体温をレオンハルトは感じた。
もう慣れた感触だが、それだけに落ち着きを感じる。
……本当に落ち着くな。
ハウゼルからの偽りのない好意を感じながらの無言の時間を過ごす。
通常、無言の時間とは気まずいものだが、それが気の置ける相手や想いを寄せ合う相手であればそれは気まずいものではなく心地いい時間へと変わることをレオンハルトは知っていた。
それも共に長い時を過ごしている相手であれば尚更だ。ハウゼルとも結ばれて百年以上。
常に一緒というわけではないが、それでもそれだけ長い時を過ごしていれば落ち着いた時間をも楽しめるようになる。

「レオンハルトさん……♡」
――ちゅっ♡
……とはいえハウゼルもまた魔人としては若い。
それだけにまだまだ――あくまで魔人同士の恋愛としては――新婚気分といったところでこんな風に甘えてくることも多い。
だがそうやって甘えられることも勿論嬉しいことに変わりはなく、またそれを受け止めることも男の甲斐性だ。
ゆえにハウゼルからのキスを受け止め、そしてレオンハルトは目線を美しいハウゼルの方ではなく子供と使徒たちの方に向けることにした。
「また後でな」
「……はい。そうですね」
僅かに頬を紅潮させながら微笑を浮かべるハウゼルだが、甘い雰囲気は抜けきっていない。一見普通の子供を見守る穏やかな母親にも見えるが、その左手がこちらの右手を重なってしっかりと恋人繋ぎをしていることをカイゼルや使徒たちは見逃さないだろう。
それだけにレオンハルトはまた嫌がられることを察した。子供は意外と親のそういう雰囲気を見抜いてくる。こちらとしては普通にしているつもりでもどういうわけか甘い雰囲気を察して向こうの方が空気を読んで離れたりするからな。
そして逆にその気遣いをこっちも読み取れるため若干いたたまれなくなる。
……それにカイゼルの場合は誰よりも嫌がるからな……。
未だに童貞のせいか、こちらが行う恋愛や性の気配に敏感するカイゼルはフラストレーションを溜めてしまう。
それだけにあまりこういった気配は見せてやりたくはないが……しかしこれくらいであればしょうがない部分もあるため対処法が見当たらない。
いっそ女でも充てがって童貞を卒業させてやろうとも思うが、ハウゼルに黙ってやるわけにもいかなければ理解を得ることもまた難しい。

どうしたものか……と悩んでいると側に気配が来た。
「っと。やっぱりここにいたね」
「……ハンティさん？」
目の前に突然現れたのはレオンハルトの使徒であるハンティだった。
その彼女が表れて頭に疑問符を浮かべるハウゼルと同じく、レオンハルトもまた疑問を感じながら応じる。今日が休日であることは当然使徒であるハンティは知っている。それでもこうしてやって来たということは何か用事があるのだろう。レオンハルトはそれを察した。
「どうかしたか？」
「まあね。せっかくの家族水入らずのところ悪いんだけどさ……ジルがお呼びだよ」
「！　魔王様が……」
そしてその幾つか思い浮かんだ用件の中で最も最悪かつ回避出来ない用件を口にされ、レオンハルトは息を吐く。
幸いなのは隣のハウゼルもそれが回避出来ない用事であることを察してくれていることだ。
とはいえせっかくの休日が潰れてしまったことには変わりないが。
「……そうか。すぐに行く」
「……送って行こうか？」
「いや、いい。それよりも……そうだな。せっかくだから俺の代わりにここでカイゼルと遊んでやってくれ」
「ん、わかった――よーし、カイゼル！　こっち集合！」
「げっ!?　ハンティ!?　テメー何でここに！」
「ちょいとあんたの遊び相手になってやろうと思ってさ。久し振りに鬼ごっこでもしようか。そっちの……スケアクロウだっけ。それに火炎書士も付き合いな」
「ゲへ!?　ぼ、僕ちゃんも!?」
「わ、私もですか!?　い、いや～……火炎ちゃんは、そういうのはちょっと……」

「いいからいいから。それじゃ数えるよ。い～ち、に～い……」
「ぐ……クソ！　おいお前ら早く隠れるぞ！　捕まったらゴリラ以上のパワーで殴られちまう！」
「ええっ!?　ただの鬼ごっこじゃないんですか!?」
「俺様たちが子供の時に訓練代わりによくやった〝殴り鬼〟だ！　げんこつ食らったら負けってのがルールでな！　速さとか力とか耐久力とか精神力とか色んなものが鍛えられるぜ！」
「ただの罰ゲームじゃないっすか！」
「ひ、ひえ～！」
ハンティに子供の遊び相手を命じればノリよくハンティは付き合ってくれた。カイゼルたちが悲鳴を上げて喜んでいるのを見て、レオンハルトはハウゼルにも声を掛ける。謝罪の言葉を。
「……すまないな。また後日、埋め合わせはする」
「……はい。こっちは大丈夫ですから。気をつけて行ってきてくださいね」
「ああ」
少し心配そうにしながらも見送ってくれるハウゼルに頷きを返し、レオンハルトは急いで城へと戻ることにした。
……こればっかりは仕方ない。
数少ない休日とはいえ、魔王の呼び出しに応えないわけにはいかない。この辺りが魔人の辛いところだな、とレオンハルトはいつも通り気持ちを切り替えて魔王城へ向かうことにした。

――魔王城。
魔人レオンハルトは魔王城の廊下を早足で歩いていた。
その理由は単純明白。魔人の上位である魔王を、それなりの時間待たせているからだ。
……普段より少し遅れてしまったな。何も言われなければいいが……。
魔王ジルの呼び出しを何度も受けているレオンハルトにとって、そ

して何度も呼び出しているジルにとって、レオンハルトを呼び出してからどれくらいで辿り着くかというのは大体理解しているものだ。
どんなに遠い場所にいても一日はかからない。早ければ2、3時間もあればレオンハルトはジルの下へ参じる。
レオンハルトシティと魔王城の距離はそれほど遠くはないことや、ライゼンに乗れば早いことも理由としてはある。
何しろ他の魔人ではこうは行かない。飛行も出来る最速の魔人であるメガラスなどは別としても基本移動は徒歩であり、うし車を使って移動する者も少ないのだ。
ゆえに呼び出しを受けても魔王城まで辿り着くのは数日中と、曖昧なものだ。ジルも時間にはあまり厳しくないし、魔人も時間にはルーズな者が多い。
それにそもそもジルに限って言えば他の魔人の事はどうでもいいと大して気にしてもいないので、仮に呼び出したとしても無視するようなことさえなければ気に留めないだろう。
だがレオンハルトは別だ。
気に入っている魔人に対してはジルもそれなりにコミュニケーションを取る。レオンハルトやガイ相手には時間の遅れを指摘してそれを理由に嬲ってくるようなこともありえるのだ。
それゆえにレオンハルトは少し急いでいた。呼び出しを受けてからもう7時間程経ってしまっている。自分にしては遅い時間だ。
「――ジル様。遅くなりました」
レオンハルトはジルの部屋に辿り着くなり、ノックをして軽い謝罪をしながら入室する。
激高するようなことはないとはいえ何を言われるか。何であっても受け入れるとはいえ心構えは必要だし、適切な対応を選ぶ必要もある。
ゆえに覚悟をしていたのだが、レオンハルトは部屋に入って――そこで珍しいものを見た。
それは、自室にある本棚の前で、椅子に腰掛けて何やら魔導書を読んでいる――いや、研究している様子のジルの姿だった。

「む……レオンハルトか」
自身が部屋に入るなり、顔を上げて反応するジルにレオンハルトは珍しさを感じつつもいつも通り臣下として対応する。
「……は。遅くなって申し訳ありません」
「……そういえば呼び付けていたな。確かに、お前にしては少し遅かったな」
「言い訳するつもりはありません」
「ふん……そうか。それならオシオキでもしてやるか……」
やはりそういうことかとレオンハルトは特に心を乱すことなくじっと沙汰を、命令を待つ。いつも通り、交わることを欲してくるならその通りにするのみだと。
「……と言いたいところだが少し待っていろ。今は私も取り込み中だ」
――が、今回はそうならなかった。
いや、すぐにはそうならなかった、と言うべきか。ジルはレオンハルトに少し待つように命じる。やはり手元の本に集中していたのだろう。切りの良いところまで読むか、気分が変わるまでは事は始めない。そう理解したレオンハルトはジルの命令に応じて声を返した。
「……は。では自分は……」
「態々退室する必要はない。すぐに終わる。だから、そうだな……そこで座って待っていろ」
1度退室しようかと思ったレオンハルトだがその必要はないとジルに機先を制される。
そしてジルはややあって自分の目の前の席。小さい丸テーブルを挟んだ反対側の椅子に座って待つように命じてきた。なのでレオンハルトはその通りにする。
「分かりました。失礼します」
一声断った上で主である魔王の前に座る。
そしてレオンハルトは思った。ベッドの上に共に乗ることはよくあるが。
……何気に対面に向き合って座るのは初めてだな。

レオンハルトの記憶が確かであればこうしてジルと向き合って席に付いたことはない。
とはいえジルの視線は手元の本に落ちているが、それでも珍しいことに変わりはなかった。
そのためレオンハルトはしばらく、やることもないためジルを視界に収めた画角のままじっとし続ける。顔や視線をきょろきょろさせるようなみっともない、失礼な真似はしない。
ゆえに必然的にジルをじっと見続けることになるのだが……その時、ジルが視線を上げた。
「……何をじっと見ている……？」
「……は……見ている、ですか？」
そう言われ、レオンハルトは思わず聞き返してしまった。別にジルを見ていたというよりは視線を動かしていなかっただけなのだが、見ていたと言えば見ていたことになるだろうか。
そして主がそう言うのであれば自分の言い分など関係ないこと。それをすぐに思い返したレオンハルトはすぐに自分の言葉の間違いを正す。
「……いえ、そうですね。確かに見ていました」
「……気が散るからやめろ」
「はい。申し訳ありません。では見ないように致します」
ジルに言われた通り、レオンハルトは視線を外そうとした。
だがそこで更にジルから命じられる。
「……それはそれで気が散るな」
「は……ではどうすれば？」
「……お前も本でも読んで待っていろ。そこにある物なら好きにしていい」
そう言って自らの書斎を指差すジル。
……察するに、何もしないで待っている状態が気が散るということなんだろう。
レオンハルトはそれを理解する。なので少し戸惑いはしたものの了解を返した。

「分かりました」
答えて立ち上がり、そして本棚の前へ移動する。
そして本棚を物色するが。
……何気にジルの書斎を見るのは初めてだな。
本は良く読むし、何なら集めてもいる。紅魔城の図書室はもはや図書館と言っても差支えのないほどの書庫となっており、長い時をかけてレオンハルトが集めてきた宝の山だ。
それこそ人類の黎明期に書かれた一冊しかないような本も多数存在する。
そもそも本というのは貴重品だ。ＮＣ期の後期にもなれば印刷技術にも発展が見られ、街を上げて行うような土地もあったが、それでも広く行き渡るように多数刷られるような本は極少数であり、その大半は個人が書き記した手記のような一点物や、限られた土地やその国でのみ普及していたものばかりである。
そして藤原家の台頭で日本語が使われるようになり他の言語が廃れてからはおおよそ日本語の本が一般的になったが、それ以前は今で言うところの古代語や、更に珍しいがその土地特有の言語で書かれた本なども当然存在する。
レオンハルトは元々古代に生まれた人間であり、それから魔人になって長い時を生きているため古代語も当然話せるし読めるが、ジルの書斎には古代語で書かれた本もあるためおそらくジルもまた古代語を読むことが出来るのだろう。
だがそれもそうだろうとレオンハルトは思う。何しろジルは元々ＮＣ期の末期の人間であり、賢者でもあった。
その頃は日本語が普及していたとはいえ古代語の文献や歴史も残っていたので歴史研究家や賢者といった者であれば古代語の解読も不可能ではなかっただろう。
もっとも今はかつての人類文明の痕跡の大部分が消失しているため、今の人間が解読することは難しいだろうが、こうして残っているのであれば研究すること自体は難しくはない。そのため古代語の文献というものは歴史的価値のある相当な貴重品ではある。

レオンハルトにしても知らない本が幾つか見受けられた。戦争の度に収集して回っていたし、平時から配下に頼んで集めてもいたので大体は持っているものと思っていたが。

……しかし暇潰しには困らないな。

レオンハルトはやがて一冊の本を手に取ると再び椅子に腰掛ける。

ジルの気分が変わるまでとはいえ知らない本を読めるのは悪くない。

――そうしてしばらく、レオンハルトは読書に没頭する。

そして気がつけば読み終えていた。そしてその感想は。

……死ぬほどつまらないな……。

分類としては娯楽用の小説のようなものだったのだが、文章も稚拙ながらストーリーもどこか陳腐で退屈なものだった。ちゃんと最後まで読み終えた自分を褒め称えたいくらいに。

そして推測する。おそらく本を集めていた際に、自分の使徒達が気を使ったのだろう。あまりにもつまらないため主に収めることすら躊躇った――のかもしれない。それほどにつまらない内容だった。まさかジルの書斎にこんなものがあるとは……。

「つまらなかっただろう」

「！　は……」

だがそこで、不意に声を掛けられたことでレオンハルトは意識を現実に戻す。

一瞬、誰に声を掛けられたのか分からなかったが一瞬で気づいた。目の前のジルが、手元から視線を外さないまま本の感想について話しかけてきたことに。

ゆえにレオンハルトは応じた。魔人として魔王からの言葉に応えるように。

「……そうですね。率直に感想を言わせてもらうなら、これまで読んできた本の中でも最悪に入るレベルのつまらなさでした」

「だろうな。ここにある蔵書の中でも最も質が悪いものだ」

……そんなものを偶然とはいえ選んでしまったのか……。

レオンハルトは自身のチョイスが最悪であったことに心の中で嘆

息する。どうせ暇を潰すにしてももう少し有意義に過ごしたかったところだ。
「ふん……どうせ読むなら上から二段目。右から13番目の本でも読んでおけ。それなら退屈はしないだろう」
「……分かりました。そうさせてもらいます」
そしてそう思ったところでジルから別の本をおすすめされたのでレオンハルトは大人しくそれに従う。再び立ち上がって本棚に向かい。
「待て」
「！　……何でしょうか？」
「その前に喉が乾いた。茶を淹れろ」
「は。ではすぐに給仕に……」
「いや、お前が淹れろ。茶葉とカップならそこにある」
しかし今度はジルからお茶を淹れるように命じられる。
「……分かりました」
特に拒否感のある命令ではなかったのでやはりその通りにした。
それでも僅かながら疑問も感じるが、考えたところでジルの考えなど分かるはずがない。
なのでジルが魔法で作ったと思われる熱いお湯を使い、大人しくお茶をカップに注ぎ、そして再び本を手に椅子に腰掛ける。
そしてジルがカップを手にお茶を呑むのを確認した。
「……苦いな」
「……ですから給仕に頼んだ方が良いかと」
かなり間を取ってから苦いと端的に評したジルに何とも言えない気分になる。
レオンハルトは別段紅茶を淹れるのが上手いわけではない。知識としてはあるが、この場にあるものだけでは工夫することも出来なかった。
それだけに給仕に頼んだ方が美味しいものが飲めると提案しようとしたが、ジルは鼻を鳴らしてみせる。
「……もういい。これで我慢してやる」

「は……申し訳ありません」
「ふん……」
どうやら今は本の内容に集中する方が大事なのか、茶で喉を潤しながらも再び本に視線を落とし始めた。
それを見てレオンハルトもまたジルにおすすめされた本を開く。どうやら今度の本は哲学書のようなものだった。大衆向けの本ではなくこういった本をチョイスするとは如何にもジルらしい。
そう思って読み始めたところで――レオンハルトは奇妙な感覚を覚えた。
「……」
だが、その感覚はすぐになくなる。
「……読み終わったか」
「……はい。どうやら待たせてしまったようですね」
そして、気づけばジルはその本を読み終えたのか、あるいは研究に区切りでも付いたのか肘掛けに肘を付けながらこちらを眠そうな、あるいはつまらなそうな表情で見ていた。
レオンハルトはそれに気づいて軽く謝罪しつつ、お決まりの問いを投げかけた。
「それで、本日はどのような用で？」
「……聞かずとも分かっているだろう。いつものだ」
「は……」
いつもの、とそう言われればレオンハルトもすぐに気持ちを切り替える。ジルの呼び出しと言えば、性行為に他ならない。
ゆえにレオンハルトはそれを十全にこなすために立ち上がった――が、そこでジルから追加の言葉が届いた。
「だが今日は気分じゃない。帰れ」
「それは……」
ジルからの珍しい、気分じゃない、という言葉にレオンハルトは返答に言い淀む。
この何百年かで初めてのことだった。それだけにレオンハルトは迷ったが……。

「……いえ、分かりました。それでは今日のところはこれで失礼させていただきます」
魔王の臣下である魔人として、レオンハルトはそうあるように務めた。ジルの命令に従い、帰路につこうと部屋の扉まで近づいていく。
おそらく研究に進展があったか、別の興味でも思いついたのだろうと、そう察して。
「……いや、待て」
「！」
だが、そうして帰路につこうとするレオンハルトをジルが止める。
振り返ったレオンハルトにジルは言った。
「やっぱり気が変わった。するぞ。ベッドに来い……」
「……分かりました」
突然の心変わり。気まぐれにレオンハルトは何かを言いたくなったがそれを心の中で留めてジルの言う通りベッドへと向かった。
――そうして身体を重ね始めれば、いつもの魔王ジルがそこにいる。
「はぁ……んっ……やはり、お前はいいな……レオンハルト……！」
「ふっ、ふっ……お気に召したようなら、何よりです……」
「ああ……っ、他の男も試したし、ガイも悪くはないが……やはりお前が1番だ……！」
ベッドの上でジルの美しい身体に向かって腰を振る。
もう何百年と見慣れた光景。慣れた快楽のはずなのに、その快楽に衰えを感じないのはジルの女性としての魅力が極上であることの証拠だ。
普通の男であれば気持ち良すぎて一瞬で果てる。並の性豪であっても、何度も搾り取られてしまい、魔王の圧力もあって快楽はいずれ苦痛にも変わるだろう。事実、ガイなどはジルとすることにかなり参ってしまっている様子だった。
だがレオンハルトは快楽にも魔王の圧力にも慣れきっている。ゆえに至上の快楽を与えられてもそれを純粋に享受出来た。
「はぁ……はぁ……ほら、中に出せ……♡　搾り取ってやる……♡」

「っ……く……ああ……！」
ジルの膣内のヒダがレオンハルトの肉棒に吸着し、収縮する。足を腰に絡められ、腕で身体を引き寄せられた。
豊満な乳房がレオンハルトの胸板の上で潰れ、すべすべの肌が至るところに密着するとレオンハルトもまた命令通りに精を放つ準備を行う。ジルを満足させるべく腰の動きを強めて。
「はぁっ、あっ、うっ♡　ああ〝っ♡　うぐっ♡　はぁぁ〝っ♡」
「っ……出すぞ、ジル……！」
寝所でのみ命じられている敬語のない言葉と共に、レオンハルトはジルの最奥に自らの肉棒を思い切り押し付けた。
――そしてそこで精を解放すると両者に至上の快楽が訪れた。
「ああっ♡　ああああああああああああああああああ～～～～～……っ♡」
ジルの嬌声が寝所に響く。
強く締め付けてくるジルの媚肉の感触にレオンハルトは身震いしながら精を吐き出し続ける。何度味わっても参りそうなジルとの行為。その女性として完成された美貌を持つその身体に、自らの精を流し込む快楽は如何にレオンハルトと言えども耐え難いものだ。
「ふーっ……ふーっ……」
「ああっ〝……♡　あぁぁ……♡　う〝っ……♡　はぁ……〝♡」
そしてやがて、吐精が終わると互いに息を整え、快楽の余韻に浸る時間が訪れる。
「レオンハルト……お前は、私の物だ……」
性感に陶酔するジルからのお決まりの言葉を耳元で囁かれ、レオンハルトは荒い息を整え続ける。
何百年と続けてきたこの行為なだけに終わりは理解している。ジルを満足させた時が終わりなのだ。
そのためレオンハルトは再び腰に力を入れてジルを貫いていった――その快楽で身体を、頭を埋め尽くしてやるために。

イヴのお仕事

――ＧＬ９ＸＸ年。

――ＧＬ期の人間。その８割は人間牧場に収容されている。

大陸各地にある人間牧場の管理は一部の牧場を除けば管理は意外にも杜撰なものであり、抜け出そうと思えば抜け出せるような、広い土地の周囲に柵を張ってその中で放牧するような形を取っている。

ただそれでも逃げ出すことを考えないのはその大部分の牧場において人間の常識が刷り込まれているからに他ならない。

人間は魔物の家畜。楽しませるための生き物であり、魔物の支配下から逃れてはならないという価値観が染み付いている彼らは逃げ出そうとすら考えず、魔物に虐げられる日々を日常のものとして受け入れているのだ。

それは人類にとってとてつもなく残酷なことだが、かといって逃げ出すことが救いとなるかはまた別の話である。

残り２割の野良で生きる人間は牧場の人間が知らない安息を知るがゆえに、虐げられる恐怖を知る。

魔物に見つかれば終わり。人間としての尊厳を奪われ、痛めつけられ苦しめられ殺される。

それを知っているからこそ人間は魔物から隠れ潜むように暮らし、明日の朝日が拝めることを毎度感謝して生きている。

魔物を討伐して糧を得る魔物討伐隊ですらそれは変わらない。人間の中では強者となっている者達でさえ、魔物に比べれば不幸な人生を送っている。

つまるところ今の時代を生きる９９．９％の人間は魔物の支配下にある世界で不幸な人生を送っているのだ。

――しかし、極僅かに幸福な人生を送る人間も存在する。

それは大規模な魔物討伐隊や魔法の隠れ里の長などの野良で生きる人間ではない。

魔物に支配される世界では幸福な人生すらも魔物の支配下にある。

「仕事に行ってくるよ」

「ええ、行ってらっしゃい」
「お父さん行ってらっしゃーい」
「今日は休日だからせっかくだし公園にでも行くか」
「わーい！　それじゃ早く行こ！」
　それがレオンハルトシティにある人間街だ。
　魔人レオンハルト直轄の人間牧場があるこの街で才能を認められたA級の人間だけが住まうこの人間街では、この時代においても幸福が約束されている。
　衣食住が完璧に揃い、家庭を持つことを許され、魔物に一切虐げられることのない彼らの生活はその他の人間が羨み、嫉妬するほどのものであった。言わば彼らこそが人類の中で数少ない選ばれた者達であり、人間の中で最も幸福な生を送ることが出来る者達である。
　――が、更に上もまた存在した。
　人間でありながら魔人に認められ、魔人に仕える下級使徒として過ごしている者達がそれだ。
　レオンハルトシティの人間牧場の選別で言うところの特A級の人間。彼女たちは魔人レオンハルトの下級使徒として通常の魔物の上位にすら置かれ、おおよその人間が想像すら出来ない幸福な生活を、安全と共に保証されているのである。
「ふあぁ……」
　そしてその下級使徒の中でも最上位に位置する筆頭である少女がいる。
　それこそが今しがた、自室で欠伸をしてベッドから身を起こす少女――イヴであった。
　時刻は朝の7時。時計を見てそれを確認したところからイヴの一日は始まる。
「……さて、今日も一日頑張りましょう」
　顔を洗い、身だしなみを整え、服を着替えたところでイヴは自室を出ていく。
　今日は人間の中で最も地位が高く、幸福な生活を送っているであろう彼女の日常をご覧いただこう。

私――イヴは人間です。天才です。人の心を読むことが出来ます。
年齢はもうウン百歳でもう何百年も前にこのレオンハルトシティの人間牧場で生まれ育ち、１５歳になって特Ａ級と認められてから魔人レオンハルト様の下級使徒としてこの城に住まわせてもらっています。
とにかく上を目指していた私にとってはまさに願った通りの環境と地位であり、当初はそれはもう喜んでいました。
しかしそれも昔のこと。今ではすっかりこの生活に慣れ、そして能力を認められたことで更に上の地位、下級使徒筆頭などという地位に就けられ、毎日仕事に勤しんでいます。
もちろんそれ自体は喜ばしいことですけど……苦労もそれなりに多いんです。そう、例えば――
「さあ！　後はイヴちゃんの実食を待つのみ！　果たしてイヴちゃんは料理長とシュヴァイン様！　どちらに票を入れるのか!?」
「この俺の作った最高のラーメンに決まってるよなぁ？」
「たとえレオンハルト様の息子であっても料理勝負ともなれば手加減はせんッッッ!!　さあイヴ様！　早く実食を!!」
――朝食を取ろうと訪れた大食堂で、突然の料理バトルに巻き込まれたりします……。
正直なところ、意味が分かりません。私は朝食を食べに来ただけなのに。なぜデブと筋肉達磨という２種類の異なる肉の塊に圧を掛けられているのか。
「は、はぁ……そもそも何をやっているんですか？」
「最強の料理人を決める対決に決まってんだろ!?　この俺……いずれはラーメンの力で料理界を支配する麺魔軒の総大将であるシュヴァイン様がミシュランに勝つ……！　その世紀の一戦なんだよ！」
「ですからイヴ様にも是非ご賞味頂きたいッ！　既に他の審査員の方々は投票を終えて残りはイヴ様のみですから!!」
「はぁ……なるほど。そうでしたか……」

――全然意味が分からない。なるほどとは言ったものの聞いてもよく分からなかったので私は説明を求めるのを半ば諦める。そして自分で状況を推理することにした。

まず目の前で料理勝負をしているのは2人。この紅魔城の料理長にしてミシュラン一族の総代であるガストロノミー・ミシュランという人の形をした料理の怪物と。

「くくく……！　さぁ俺の作った新たなラーメンに全員屈しろ……！

ふーっ……ふーっ……！」

もう1人は真っ赤なスーツを着た金髪の豚バンバラ……失礼。レオンハルト様のご子息の1人であるシュヴァイン様です。見た目は太ってて顔立ち自体は良いけど太ってるせいで台無しな人間ですけどほぼ魔物に近い生き物で料理上手――取り分けラーメンという料理に革命を起こした料理界の革命児――と彼の出している麺魔軒のチラシに書かれていたのを見ました。

そしてそのシュヴァイン様が料理長と朝っぱらから料理バトルをしているのは……まあ時間の都合とやらもあるのでしょうね。どちらも料理人ということもあって忙しい身。料理長は紅魔城の厨房を取り仕切っているし、シュヴァイン様もデブですけど何だかんだ麺魔軒というこの街でも大人気で支店を何店舗も出してその功績でレオンハルト様からお小遣いを結構貰っている稀代の料理人で毎日それなりに忙しくしています。

なので勝負をするなら朝か夜が都合が良かったのでしょう。あるいは突発的なものだったのかもしれません。こういう勝負をすると誰かが聞けばちょっとした催しとして大々的に開かれる可能性もありますし。

そしてちょうど今しがた食堂にやってきた私に審査を頼むのは、その審査が割れてしまったせいなのでしょう。机に座って料理を食べたと思われる何人かのメイドや、それどころか現在も食べ続けているガルティア様もいて――なんでガルティア様がいるのかは一々気にしないことにしますが、そのガルティア様が食べながらちょうど言いました。

「はぐもぐ……ずるずる……うーん、やっぱどっちも美味えなあ……」
どうやらどっちに投票するかを未だ迷っている様子で食べ続けています。魔人一のグルメであるガルティア様に選んで貰えればそれが確実なのに決着がついていないのですから選べなかったかと見るべきですね。
「さあ食べろ……！　俺の太い麺を啜れ……！」
「まさかここまでもつれ込むとは……！　さすがはシュヴァイン様ッッ！　この料理長、敵ながら感動を禁じえない……ッ!!」
そして私に食べて欲しがっている、と……。
気持ち悪いことを言っているシュヴァイン様と相変わらず斜め上の感情表現を起こしている料理長を見て、私は軽く息を吐きました。
「はぁ……分かりました。食べればいいんですね」
「ああ、食べろ……！　そしてラーメンの虜になれ……！」
「ご賞味下されば幸いッッッ!!」
「はい。分かりました」
特にツッコミを入れずに私は頷きを返す。
……まあお二方とも料理は上手なのは間違いないですし、少し多めの朝食だと思えばいいですかね……。
ガルティア様ほどじゃないが、私もまたそれなりのグルメだと自負している。料理長の料理もシュヴァイン様のラーメンもどちらも何度も食べたことがあった。
それだけに私は一応期待して2人から出された料理を眺めた。
「くっくっく……先行は譲ってやるぜ料理長！」
「……ではお言葉に甘えてッッ！　私のお出しする品はこれです！
〝こかとりす蕎麦御膳〟！　ッッッ!!」
凄まじい勢い。謎の発光と共に料理が目の前に出される。ぶっちゃけ普通に出してほしい。
でも料理自体はまともなものだ。なるほど。麺類が得意なシュヴァイン様には麺類で真っ向勝負ですか。料理長らしいですね。
「最高品質のこかとりすを出汁やつゆに加え、更には天麩羅や薬味にもこかとりすと蕎麦に合う季節の野菜とオリジナルの調味料をミ

シュラン一族の料理術を以て調理致しましたッッッ!!!」
「なるほど。ではいただきます」
軽くない濃い説明を聞いてまずは一品目を頂く。うん、美味しいですね。料理長の料理が不味かった試しがないのでまあ分かってましたけど。
「――ご馳走様でした」
量も結構適切だったので完食してしまいました。正直文句の付けようがない料理でしたので、シュヴァイン様が何を出してくるか――まあ現在進行系でガルティア様が食べてるのを見てるのでどういうものかは分かりますけど……。
「なら次は俺の番だな……！　とくと味わえよ……！　これが俺の考案した新ラーメン！　いや、新料理！　――〝つけ麺〟だ！」
ばん、とシュヴァイン様の指示を受けた中華てんてんが私の前に料理を出す。なるほど、初めて見聞きする料理ですね……。
「ではこちらも。いただきます」
私は僅かな懸念を思いながらもシュヴァイン様の出したつけ麺に手をつける。うん、こっちも美味しいですね……太い麺と濃い目のスープが絶妙にマッチしています。新メニューと言ってましたが、これならまた人気も出るでしょうね。
しかし……。
「……なるほど。ご馳走様でした」
「っ!?　イヴ……お前……！　俺の新ラーメンを残しやがったのか!?」
シュヴァイン様が私が箸を置いたのを見て驚愕する。
だけどこれは仕方のないこと。私は問題点を指摘する。
「すごく美味しいですけど……朝に食べるにしては重いし量が多いです」
「っ!!?　な、何だと!?」
「というわけで私は料理長に入れますね」
「ば……馬鹿なっ……!!?　この、俺が……!?」
デブが衝撃を受け膝を突く。

勝負が決し、食堂でメイドたちの歓声が上がると料理長もまたシュヴァイン様に頭上から言葉を送った。仕えるべき人としてではなく、対等な料理人として。
「……料理とはッ!!!　相手のことを慮り、その好み!!　体調!!　環境!!　それらを考慮した上でお出しするもの!!!」
「っ……俺は、それを怠っていたのか……!?」
「……あえて多くは語りませぬ。ですがシュヴァイン様!!!　貴方の料理には挑戦の気概と確かな美味さを感じられたッッ!!　ですからこれからも料理道に邁進するのです!!　さすれば料理の深奥にいずれ辿り着くことが出来ましょうぞ!!!」
「っ……くっ……」
その高みからの言葉にシュヴァイン様は歯噛みする。
そしてゆっくりと立ち上がり、背を向けた。
「礼は言わねぇぞ……いずれ、俺のラーメンでリベンジしてやる……!」
「……フハハハハハ!!!　是非とも!!!　いつ如何なる時でも挑戦は受け付けますぞ!!!」
料理長の嬉しそうな高笑いが響き、シュヴァイン様の身体から流れた一滴の液体（多分涙じゃなくて汗）が床に落ちた。
「……これ、なんなんですか？」
「良い料理勝負だったな。次がまた楽しみだぜ。ずるずるっ……お、イヴ。それ残すんなら貰っていいか？」
「……ええ、どうぞ」
未だテーブルで食事を続けるガルティア様に残った料理を差し上げながら、私は食堂を後にすることにした。本当に何だったんだろうと朝から気が抜ける思いを感じながら。

朝から訳の分からないイベントに巻き込まれた後は仕事に移ります。なので食後の歯磨きを終えた後は執務室へ。
「それではイヴ殿、エクレア殿。今日もよろしくお願いします」

「はい。こちらこそよろしくお願いします」
「今日もお手伝いさせていただきますわ」
執務室へ向かうと今日は使徒のリー様と副メイド長のエクレアさんがいたので共に事務仕事を行います。
ここ最近、リー様は遠征によく出ているので城で事務仕事を一緒に行うのは久し振りです。エクレアさんの方はよく手伝ってくれるのでお馴染みですけどね。何でも元々は人間の国のお姫様だったらしく、それでこういった軍に関わる業務は得意だったとか。沢山いるメイドの中でもお姫様という経歴を持つ人は少ないので貴重な人材でもあります。
そして今日の事務仕事はこの3人で行いました。日によっては当然、レオンハルト様がいたり、ペール様がいたりしますが今日は別の仕事に出ている様子。なので3人で行うことは致し方ありません。
内容としては魔軍の補給、消費、備蓄についての書類や、各地の人間牧場の運営状況などの報告書が多数なのでそこまで大変でもありません。確認して、問題がなければ通す。問題があればチェックして上に報告。単純なミスであっても後で担当者には連絡して確認を取ります。
仕事としては重要ですけどそこまで難しい仕事ではないので、時折雑談も挟まれます。
「もう少しで昼食時ですね。リー様とエクレアさんはどうなされる予定ですか？　私はこの後も城での仕事があるのでこちらで摂る予定ですが……良ければご一緒に如何です？」
「昼食時には新兵訓練に顔を出す予定だからそこで摂るつもりだ。なのですまないな」
「そうでしたか。それではまた別の機会にお誘いしますね」
「わたくしは構いませんよ。後でご一緒しましょうか」
「ええ、お昼が楽しみですね。そういえば今朝は食堂で料理勝負があったんですが……」
……とはいえ今日のメンバーはちょっとお堅めなので雑談はそこまで盛り上がることはない。誰も悪感情を抱いているわけではない

し、話題によっては盛り上がるのだが今日のところはまあまあと言ったところだ。朝に起きた料理勝負のことについて話しながら仕事をしっかりと行っていく。
「リー様。後でガウガウ様に魔法を打つ許可をください」
「……許可しよう。しかしあまりやりすぎないようにな……」
「もちろんですよ」
よし。これで仕事をサボってるガウガウ先生にお仕置きが出来る。
そうしてガウガウ先生が提出していない書類について後で確認に行こうと頭の中で予定を組み込んでいると、リー様の方から話を振られた。
「……そういえばイヴ殿は……」
「？　はい。何でしょう？」
「あー、うむ……何だ……その……以前に比べて成長している様だが……それについて何か思うところはあるのか？」
「……成長について、ですか？」
「うむ。……いや、何もないのなら良いのだが……」
リー様にしては歯切れの悪い言葉選びが続く。
だけど私はそれを聞いて何となく何が言いたいのかを察した。
……多分、私をそれとなく使徒に勧誘しているんでしょうね。
触れているわけではないので正確な思考までは読み取れないが、言動や様子から推測は出来る。
リー様は元魔物大将軍で使徒だというのに結構人に気遣う一面がある。なので私が返事を未だに保留にしていることを尊重してあえて直接言葉にはしなかったのだろう。
その代わりに私の成長について言及して、歯切れの悪い質問を行ってきた。
というのも私は最初、人間牧場を出てこの城に下級使徒としてやって来た時よりも成長している。
それはレベルとかの話だけじゃなく、ちょっぴり歳を取って見た目的にも成長しているということだ。具体的には1年か2年くらい？

永久保護魔法が掛けられているこの城の中にいる限り歳は取らないし、そのおかげで城に住み込んでいる人間は長い時を生きているわけだが、城の外に出る場合には当然その効果を受けなくなる。
そして私はちょいちょい外に出るのでこの数百年でちょびっとだけだが成長しているのだ。ガウガウ先生の作った老化を抑える魔導具も持っていったりもするけど、それも永久保護魔法ほど完全ではないし、一品しかない貴重品なので私だけが常に所持しているというわけにもいかない。
……というか少しくらい成長したかったので意図的に調整した。永遠の若さと言えば聞こえは良いものの、さすがに15歳頃のほぼ子供の容姿のまま変わらないというのは色々と微妙な気分にもなる。
なので仕事やなんかで外に出て少し成長してみたのだが、そのかいあってか背も伸びた。具体的には4、5センチくらい。胸もちょっとだけ（こっちも数センチ程度）大きくなったし、まだまだ少女の見た目とはいえ明らかに子供だった以前の見た目からは脱却出来たんじゃないかと個人的には思っている。
なので老化を止めるなら後1、2年分か、もしくはこのくらいがベストだろう。親友が荒れることだけが懸念事項だが、成長に関しては向こうも諦めはついているはずですし。
……でも使徒になることに関してはどうでしょうかね……？
そして思考を戻す。リーの勧誘。自分が使徒になることについて、親友はどう思っているのかと。
私個人としては勿論あり。下級使徒としてここで過ごすのも使徒としてここで過ごすのも正直あまり変わりはない気がしているし、人をやめることになれば私の当初の目標もいよいよ達成ということになるだろう。
「……そうですね。成長については、個人的に良いことだと思っていますよ」
「うむ……そうか。……すまない。変なことを聞いた」
「いえ、気にしないでください」
なので私はリー様の質問に当たり障りない言葉を返しつつ微笑ん

でみせる。
――それからは普通に仕事を続け、気づけば午前中の業務を終えてお昼になっていた。
私はリー様と別れ、約束していた通りエクレア様と昼食を摂る。今日は朝に結構食べてしまったため、お昼は軽めにしておくことにした。
そうして私は中庭で食事を摂ろうとサンドイッチを持ってエクレア様と共に中庭に出たのだが……そこで今度はまたちょっとしたイベントに遭遇する。
「あれは……」
「白兎さんにミシェーラさんですね」
そう、自分の2人の友人。レオンハルト様の娘である白兎さんと私と同じ人間牧場出身ながら、レオンハルト様の使徒になったミシェーラさんが広場にて向かい合っていた。
「……白兎さん。今日こそは勝たせてもらいます」
「ええ、どうぞ。今日も胸を貸して上げますので遠慮なくかかってきてください」
「……（貸す胸なんてないでしょう……って言ったら間違いなく怒りますね。ミシェーラには分かります……なのでむしろ怒らせてみるとか……いや、やめておきましょう。そんなやり方で勝っても嬉しくありませんし……）」
「……何となく失礼なことを考えている気がしますね……」
（ミシェーラさん、また余計なこと考えてるんでしょうねぇ……）
どうやら2人はこれから手合わせをするらしい。
白兎とミシェーラ。共に剣の達人であり、レオンハルト様に師事していることもあってその手合わせは稽古も合わせてこれまでに何度も行っていることを私は知っている。
――そしてその勝負が、常に片方の勝利で終わっていることもまた知っている。
「……では――行きます！」
「……！」

勝負の始まりは互いの気配の変化だ。それが合図となり、ミシェーラさんが同時に距離を詰めた。
……だけどそこから先はよく分からない。何しろ2人の戦いは速すぎて未だ人間である私には正確なところは見えないのだ。ミシェーラさんが剣を構えて高速で近づき、白兎さんが居合の体勢で待ち構えたのまでは分かる。
だがその先は――一瞬だ。
「――〝絶剣〟！」
「――〝白光〟！」
すれ違い様の交差。
気がつけば白兎さんとミシェーラさんは互いに剣を振った状態で背を向けている。
「ぐっ……！」
「……勝負ありましたね」
そして白兎さんが抜いた刀を鞘に戻すと同時に、ミシェーラさんが脇腹を押さえながら苦悶の表情を浮かべる。峰打ちなので斬られてはないにしてもあれは痛そうだ。
しかし、ミシェーラさんは倒れなかった。膝を突くことなく耐えて、そして魔法の光を発する。
「い、いたいのいたいのとんでけー……よし！　治りました……！　もう1度！」
神魔法による回復魔法を使って傷を癒やす。
使徒になって増した耐久力も手伝って、すぐに立ち直ると再び白兎さんに勝負を挑んだが……それを見た白兎さんが呆れの色を見せた。
「……またですか。相変わらずタフですね……別に構いませんけど、魔力と体力を消費するだけで終わると思いますよ？」
「そうとは限りませんよ！　なので勝負です勝負！　次は絶対斬ります！」
「斬らないでくださいね。いえまあ斬れるとは思いませんが……」
「とにかくもう1度！　やあああッ!!」
「む……！」

「うぐっ！　……いたいのいたいのとんでけー……よし！」
「よし、じゃありませんが」
「問答無用です！　やあああああッ!!」
「えいえいえい」
「っ～～～！　さ、3回も……い、いたいのいたいのとんでけー……ふぅ、よし……！」
「それじゃ次は5回くらい打ちますね。よっ、はっ、とっ、えいっ、そりゃ」
「っっっっっ!?!!　う……あう……い……いたいのいたいのとんでけー……まだいける……！」
「……次は峰じゃなくて斬ってもかまいませんか？　前々から思ってたんですけど、ミシェーラさんの耐久力なら斬っても回復出来ると思うのですが……」
「そ、それはさすがにダメ！」
「ではもっと打ちます」
「痛っ……ちょっ……まっ……た、タイムですっ！　1度回復タイムを挟むことを希望しますっ！」
「まだまだ平気そうですね……せっかくですし新しい技とか試しても構いませんか？」
「ひ、卑怯ですよ！」
「真剣勝負に卑怯なんて言葉は存在しません。えいっ、目潰し」
「うわあああ～～～!?」
「ミシェーラさんは耐久力と力、そして回復力に優れています。なので1度相手の攻撃を受けてから返すための技と我慢……精神力を鍛えるのが良いでしょう」
「あ、アドバイスしないでください……！　ううっ……いたいのいたいのとんでけー……」
「ふっふっふ。妹弟子に手加減はしませんよ。せっかくですから今日も沢山鍛えてあげます。さあ行きますよ我が弟子！」
「み、ミシェーラはレオンハルト様の弟子であって白兎さんの弟子じゃありません！　――うぶっ!?」

段々と楽しくなってきた白兎によってミシェーラが滅多打ちにされているのを肴にサンドイッチをお腹に収めていく。
感想としては、相変わらずボコボコにされてますね……としか言いようがない。
一応ミシェーラさんもかなりの達人で才能のある剣士なのだそうだが、経験の差かそれとも生まれ持った才能の差か白兎さんには未だ敵わない。
まあ白兎さんはレオンハルト様の子供たちの中でも1、2を争う強さなので仕方ないとは思うが。この分なら一本取れるようになるまで大分かかりそうですね……。
「あ、イヴさん」
「っと……やっぱり気づきますよね」
視覚に頼らず世界を見ている白兎さんにとってこの中庭は十分に知覚範囲内だ。ゆえにサンドイッチを食べ終えて立ち上がったところで話しかけられる。――ミシェーラさんへの打ち込みを止めないまま。
「これから仕事ですか？」
「ええ。白兎さんの方は確かお休みですよね」
「はい。なのでもう少し訓練していこうかと。お仕事頑張ってくださいね」
「白兎さんも、少しは手加減してあげてくださいね」
「ふっふっふ。それはミシェーラさん次第です」
「い、イヴちゃん！　この人ドＳです！　ミシェーラには分かります！　なので助けてください！」
「あはは……白兎さんも意地悪でやってるわけじゃないでしょうから……その、頑張ってくださいね」
軽く白兎さんとやり取りを行う。友達同士の気安い会話だ。ミシェーラさんの助けにはエールを送っておくことにした。
「あ、それと夕食は一緒に食べませんか？」
「！　ええ、構いませんよ」
そして別れ際、白兎さんから夕食を一緒に食べないかと誘われたの

でそれを了承する。
そこには一見、何の不自然な部分もない。
だが色んなものが見える私達にとっては互いの思いを何となく感じ取っていた――何か話があるんだろうな、と。そんな気持ちが見えるような気がした。

昼休憩を終えた私の次の仕事は外回りです。
下級使徒とはいえ人間の身で魔物だらけの街に出るのは少し緊張する部分もありますが、下級使徒である証の紋様はきちんと身に着けているので魔物に不審がられたり襲われたりする心配はありません。
しかし、下級使徒であるからこその問題もないことはありません。
「おお……！　キャロル様！　それにイヴ様ではありませんか！」
「はい。完璧使徒のキャロルですの！　今日も元気にお仕事に来ましたわー！」
「はは……お久しぶりです、カエサル様」
レオンハルトシティの人間牧場。その管理棟にやって来るとそこにいたのは大柄な魔物将軍よりも更に大きな魔物大将軍。レオンハルト軍をまとめる魔物大将軍カエサルだった。
人間牧場の視察にやって来た私とキャロル様を出迎えた彼に私は軽く笑いながら挨拶を返す。
するとカエサルは大仰な振る舞いで更に言葉を返してきた。
「イヴ様は相変わらず慎み深いご様子ですな！　お美しい下級使徒である貴方様は魔物大将軍程度に過ぎない私めより上位の立場なのですから私のことは遠慮せず……ンッン～……カエサル、と呼び捨てにしていただいて結構ですとも！」
「はぁ……そう言われましても……」
本当にそんなことを言われても困ります。
確かに理屈の上ではカエサル様の言うことは正しく、下級使徒という立場は魔物社会、魔軍において魔物将軍や魔物大将軍よりも上位の地位に置かれています。

だからレオンハルト様の下級使徒である私は目の前にいる魔人級の強さを持つという魔物大将軍よりも上であって、顎で扱き使っても問題ないことになります。
しかし、人間の身で魔物大将軍を、しかも自分より圧倒的に強い相手に上から行けるかと言われると難しい。しかも親しくもありませんしね。ハンティ先生やガウガウ先生とかであれば出来なくはないんですけど、それはそれ。身内以外の相手にはやはり強気に振る舞うことは難しいです。
「あるいは！　美しきカエサル！　光り輝くカエサル！　あの星のようなカエサル！　などと呼んで頂いても構いませんが？」
「いえ、それは……」
更に遠慮したい呼び名を提案され、私は苦笑いを浮かべる。
すると隣にいたキャロル様が動き出して、
「そんなことはどうでもいいですわ。それよりさっさと行きますの！
今日はお客様も来ていますしね！」
「……キャロル様。どうでもいいというのは些か厳しいと言いますか……幾らこのカエサルの心が鋼のように強く美しくとも丸っきり無視されるのは堪えます」
「無視されているのはお客様の方だと思いますが……」
「なんとイヴ様まで!?　……ふっ……やはりこのカエサル……美しすぎて早速イヴ様に親しみを持たれるようになったらしい……さすがだこの私……良くやったぞ……美しきカエサル……！」
「早く進みましょうか」
「そうですわね」
――あ、なんか急に上から行ける気がしてきました。このカエサルって魔物大将軍、実力は高いし有能なはずなのに変人っぽいからですかね。
そういうわけで手鏡を片手に自らに語りかけるカエサルを無視して客人に向き直る。そこにいたのは白髪の美青年といった面持ちの使徒だ。
「それではバークスハムさん。行きますわよ」

「――ええ、人間牧場の案内、お願い致します」
キャロル様に声を掛けられ腰を折るのは少し前――といってももう何百年も前ですが――にレオンハルト様と激戦を繰り広げ、魔人四天王にまでなった魔人ガイ様の使徒、レーモン・C・バークスハム様だ。
何でも未来視、予知が行えるらしく城にいるシビュレーさんの子孫でもあるらしい。使徒になる際もシビュレーさんからレオンハルト様に紹介してもらい、使徒になったという経緯がある。
その際は私も同席したわけだけど……なんというか、その時の事は思い出すだけで痛々しい。
「む……イヴ様、でしたか」
「あ……はい。今日はよろしくお願いしますね。バークスハム様」
そして向こうもまた私に気づき、その時のことを思い出したのだろう。私に挨拶をしながら微妙な表情を浮かべてくる。
「……出来れば、あの時のことは忘れて頂きたい」
「……はい。もちろんです」
私が快く笑顔でそう言えば、バークスハム様から安心の感情が漏れ出てきた。やはりあの時の行動は少なからず恥ずかしかったのだろう。掘り起こしてほしくなかったので私が頷いてくれて嬉しくもあるといったご様子。
なのでここからは問題なく仕事に移行出来るだろうと。
「あの時のこととは何ですの？」
「……いえ、それは……ですね……」
キャロル様が反応してきたことでバークスハム様の顔が再び険しくなる。どう答えるべきか悩んでいるのだろうが、キャロル様相手に曖昧な反応は悪手だ。誤魔化すならはっきりとした方がいい。
「もしかして……何か秘密の話ですの？」
「いえ、そういうわけではないですが……」
「では話しても構いませんわね。イヴさん、教えてくださいまし」
「……以前にレオンハルト様やガイ様の前で一発ギャグを披露してくれたんですよ」

「イヴ様……!?」
今度は驚愕の表情を浮かべる予知の使徒バークスハム様。……いや、そんな「この未来は読めなかった……!」みたいな顔されましても……これくらい読んでくださいよ。あなた全然未来読めてないじゃないですか、とついツッコミたくなる。それと私を恨まないでほしい。キャロル様から言われたら下級使徒の私が従わないわけにはいきませんからね。なのでこれはしょうがないことです。
「一発ギャグ！　面白そうですわね！　せっかくですし、見せてくれませんこと？」
「そ、それは……」
バークスハム様がチラッと私やカエサル様、通路にいる魔物隊長や魔物兵を見る。一発ギャグを披露すれば当然彼らにも見られるだろう。それを憂いているんでしょうけど……正直、普通に断ればいいのでは？　と私は思う。
「く……しかしここでギャグを披露することで新たに波紋が生まれる可能性が……この人間牧場に私が来たのもまた未来のため……そしてこの展開になったということは……やはり、一発ギャグを披露した方がいいのか……？　そうすることでより良い未来に……」
しかし未来が視える使徒様にはとても深いお考えがあるのだろう。私には分からないけども。私には、この後バークスハム様がとてもとてもおスベりになって可哀想なことになる未来が見える気がする。
「……では、希望にお応えして……やります。……おっと、こんなところにレモンとハムが……レモンをバ――」
――そしてバークスハム様はとてもスベった。あのキャロル様が真顔になるくらいには。
「……ところでバークスハムさんはどうして今日はこちらへ見学に来たんですの？」
「すごい……キャロル様が話を流した……」
「美しいスルースキル……！」
私が軽く感動する横でいつの間にかカエサル様が大きく感動していた。急に隣に来られると圧を感じるからやめてほしい。後、ナルシ

ストな思念が飛んでくるのも地味に鬱陶しいからやめてほしい。
　そう思いながら私はいたたまれない様子のバークスハム様を見た。咳払いをし、キャロル様の質問に答える。まるでさっきのことをなかったことにするように。
「……ガイ様に人間牧場の運営を任されたのでその参考になればと思ったのです。それと、レオンハルト様の第一使徒であるキャロル様にも、使徒としての心構えを参考にさせて頂こうかと。ええ。使徒として、ガイ様のために私は何でもする覚悟でございます」
　バークスハム様が今回ここに来た目的を穏やかかつ誇らしげに口にする。なるほど、すごいですね……さっきのギャグのせいで良いこと言ってるはずなのに全然響かない……。
「……良い心がけですわね！　そういうことならわたくしも完璧使徒として応えて差し上げますわ！」
「キャロル様がまたしても言葉を飲み込んだ……！」
「キャロル様に気を使わせるとは……バークスハム様、恐るべし……！」
　……なんかすごい勢いでレオンハルト軍内におけるバークスハム様の評価が落ちている気がするけど気の所為ということにして先に進むことにする。
　今日はランクＤの施設。子供たちが過ごしているブロックの視察だ。バークスハム様が見学を希望してるので一通り見て回ることにはなるだろうけど、どちらにせよ最初はここから見るのが順序的にも都合がいい。
「こちらは５歳から１５歳までの子供を収容し、教育する施設ですわ！」
「ふむ、なるほど。ここで後の選別のためになるよう様々な教育を施すのですね」
「レオンハルト様の考案した美しいシステムだ……！」
　……でもやはり優秀ではあるのだろう。説明を受けてすぐに理解をしているのを見てそう思う。ここの人間牧場は他と比べても特異なシステムで運営されているため、手間も掛かるがその分、街の発展

や魔物の生活の役にも立っている。
もちろん魔王様の命令で人間を虐げることは当然行うが、優秀な人間であれば救いを得ることが出来るのだ。
通路から教室や運動場を見てそこで授業を受ける子供たちを見て懐かしく感じる。私もまたここで教育を受け、ここのおかげで何とか救いを得ることが出来た。
もし他の人間牧場で生まれでもしていたらゾッとする。なので私はかなりの幸運に恵まれているのだ。ここで今現在生きている子供たちも同様、努力すれば魔物並に生活出来るチャンスを与えられている。
だからこそ頑張らなければならないのだが、授業で努力の大切さを説いていても学習の習熟度にはどうしたって差は生まれるし、才能の差もあって成功を得るのが難しい人もいる。
それを思えばつくづく世界は残酷で無情だと思う。が、それに同情出来るような聖人ではないため私は子供たちのデータが書かれた書類を眺めながら子供たちを観察していく。
すると1人、興味深い子を見つけた。
「あの子は……」
運動場で遊ぶ子供たちの輪から大きく離れ、建物の陰で休んでいる少年を見かける。気になったのはその容姿だ。髪や肌が白く、目まで白い。病弱そうな見た目は整っていて可愛らしい少年。
目の色こそ赤くはないものの、白兎さんと同じ症状を持っていた。それだけに少し気になったが、
「学力でも体力でも低評価。特に際立ったところは見られない……ですか」
データによれば能力面で特に際立ったところはなく、それどころか見た目や弱さが原因で虐められているみたいですね。
私はそれを見て仕方のないことだと思う。能力のない人間。弱い人間は淘汰されてしまう。この人間牧場でもそれは変わらない。
だからこそ強くなる必要があるのだ。弱ければ生き残れないし何も出来ない。

「……イヴ様？」
「！　すみません。では行きましょうか」
「ふむ……」
　私が子供たちを観察して立ち止まっていたのを見てバークスハム様が声を掛けてきたので観察はそこまでにして再び歩き出す。いつものように優雅に私は仕事をこなすのみだ。

　人間牧場の視察と案内が終わり、本日最後の仕事を行うために私は再び紅魔城に戻ってきた。
　そうして次に向かった場所は――研究室と呼ばれる広めの部屋だ。
「失礼します」
「あー、イヴ。おはよう」
「おはようございますハンティ先生」
　部屋に入るなり私に声を掛けてきたのはこの部屋をよく使うレオンハルト様の使徒であるハンティ様だ。
　私の魔法の師匠の1人であり、この魔法研究室でよくお世話になっているため私は敬意を込めて先生と呼んでいる。普段とは違って白衣を身に着けているのもあって知的に感じられるのは気の所為じゃない。結構物理的な考えというか、脳筋なところが目立つとはいえハンティ先生の魔法の腕前、知識は凄まじいものだ。
「今日もやってるみたいですね」
「まあね。ここ最近はずっとだよ。おかげで私も付き合わされてさ。んっ……身体が鈍るというか疲れるというか。やっぱこもりっきりはよくないね」
「たまには身体を動かしてリフレッシュしては？」
「もうやった。さっきライゼンが帰ってきたからね。適当に殴っといたよ」
　仮にも伝説級のドラゴンをサンドバッグ扱い……やはりハンティ先生は脳筋ですね……。
　私は軽く呆れながらも、その発言をスルーして別の人に目を向け

る。この研究室の主であるもう1人の私の先生。知識や研究においてはハンティ先生を凌ぐ魔法研究における第一人者に。
「ガウガウ先生。おはようございます」
「ふむ……やはりこちらの魔導具じゃ相性が悪いな……少し式を組み替えるか。反応が鈍い。ブラックアイ、材料を」
『イエス、マスターガウガウ』
幾つもの魔導書。幾つもの魔導具。幾つもの魔法式。幾つもの成果物に囲まれながらブツブツと独り言を呟きながら研究している。
ハンティ先生以上に白衣の似合うその少女はレオンハルト様の使徒であるガウガウ先生だ。
色々と問題のある変人。サボり魔であったりするガウガウ先生だが、研究時にはその本領を発揮して様々な発明を行い貢献を行っている。胸元に装備してある目玉にも似た黒い球体。触手にも似たアームを伸ばして物を取るそれもガウガウ先生の発明品であるブラックアイという魔導具だ。自立思考を行い、ガウガウ先生の戦闘や行動をサポートする凄まじい能力を持つ魔導具であり、それを発明したガウガウ先生も魔導具作りにおいて飛び抜けた天才であるのだが――他がちょっとだらしないのがキズなんですよね。
「……ガウガウ先生！」
「ん？　――おお、イヴか。ちょうどいい。今ホムンクルスに新たな魔導具でも組み込んでやろうと思ってるのだが、イヴはどっちがいいと思う？　それかこいつの思考を直接読み取ってどっちがいいか聞いてみてくれ」
「……また中々マッドなことを……ホムンクルスに魔導具を仕込むんですか？」
「仕込むのはグリーンの方だけだ！　パープルの方は仕込まないぞ！
こっちに仕込むのは色々と問題があるからな！」
「問題なのは先生の倫理観の方だと思いますが……まあそれは今更ですね」
私は小声で呟き、息を吐いて水槽に入った2体の人間――に似た人工生命体を眺める。

男型と女型。ガウガウ先生の作り上げたその2体は魔法界の革命とも言える完璧な人造人間である。
……とは言え本当の意味での完成品は女型であるパープルの方で最初に作ったグリーンの方は失敗作なので別の運用方法を試そうとしています。
まあ先生は自分の作ったものを失敗作と認定するのを嫌がるので失敗作とは呼びませんし、どうにかして良い感じに動かすつもりなんでしょうね。そのために魔導具を仕込みまくると……。
「やっぱりマッドですねぇ」
「マッドだよねぇ。まあ魔導具を仕込むのはあたしもいいと思うけどさ。どうせなら戦闘用の魔導具仕込もうよ。背中に飛べるようになるやつ付けて、手からレーザー出せるようにするとか面白そうじゃない？」
「ゴリラ的発想だな、ハンティ……しかし悪くはないな！　どうせなら大盤振る舞いで使っていない魔導具を仕込みまくるか！　もういっそのこと腕とか足も分離出来るようにするとか！」
「お、いいね。それなら火も吹けるようにしようよ」
「もうなんでもありですね……普通に人体を模した魔導具だけじゃダメなんですか？」
「どうせ魔導具で補うなら魔法を付与した方がお得に決まってるだろう！」
「まあそれはそうですけど……」
ガウガウ先生の言葉に私は論破される。倫理観というものはこの場には存在しない。さすがに酷い人体実験などは行わないし、一線は守っているとはいえ生後2ヶ月ほどの人造人間が早くも改造人間になることが確定してしまった。
……でもなんか喜んでるっぽい思念が流れてきてますし、問題ないですかね……。
私は2体の人造人間に近づいて軽く思念を読み取ってみる。グリーンの方は問題があって調整中で未だ身体は動かせないが思考自体はしているので何となく分かった。パープルの方はもうほぼ人間

みたいなものなので今は眠ってて思考はしていない。こっちはこっちで気になる部分はあるけど、今問題となっているのはグリーンの方なので一応提案はしておこうと。
「……それなら生活に役立つ魔導具も加えては？　掃除とか料理とか出来るようになれば助手としても役立つでしょうし」
「おお、それは良いアイデアだな！　よし、採用！　足裏には埃を吸い込めるように……料理の方は手先から包丁とかフライパンを出せるようにしておけば後は熱を起こす方の魔導具と連動させて……」
「あんまり増やしすぎないようにしてくださいね。……ああ、それとガウガウ先生」
「何だ助手。それよりもこれから魔導具の作成に移るから手伝ってくれ」
「報告書、まだ提出なされていませんよね？　先にそちらを終わらせてからなら――」
「――脱出！」
「あ、ちょっと!?」
午前中に確認した報告書の未提出に関する指摘を行った瞬間、ガウガウ先生がその場から脱しようと部屋の出口に向けて駆けていく。
私は魔法を発動してそれを食い止めようとした。だがその前に、
「はい、ダメー」
「うっ!?　こ、こらハンティ！　離せ！　私は偉大な発明の最中なんだぞ！」
「いや、報告書くらいさっさと終わらせなよ。簡単でしょうが」
「やりたくないことは出来る限りしない！　それが私の信念だ！」
「そんな信念捨てちまいなよ」
「はいはい。それじゃガウガウ先生。ペンを持ってください。これから仕事が終わるまでしっかり監視しますから」
「くそー！　下級使徒のくせにー！　私は使徒様だぞ！　もっと敬えー！　私の代わりに仕事しろー！」
「尊敬はしています。だけど仕事は別ですよ」
瞬間移動で先回りしたハンティ先生に掴まれて逃げ出せないガウ

ガウ先生が子供のようにぶーたれるが私は耳を貸さずに持ってきていた書類の類を机の上に置いてガウガウ先生に向き合わせた。後は思考を読み続けて逃げ出す兆候があったらハンティ先生に目配せすればいい。
「ぐっ……仕方ない……この天才なら報告書くらい一瞬で終わらせられる……！」
「ならいつも一瞬で終わらせて提出してくださいよ」
「天才は常人と思考回路が違うからな！」
「言い訳は確かに常人とは違いますね……」
「本当にね」
調子のいいガウガウ先生にハンティ先生と共に呆れを見せる。
そこからはガウガウ先生が報告書を終わらせ、夕暮れまでガウガウ先生の作業を手伝うことにした。

変わらないもの

下級使徒の労働は奴隷と違ってきちんと考えられたものだ。

城で働いているメイド達。料理人。親衛隊も一日の労働時間はきっちり定められている。週に一日は必ず休日を与えられるなど待遇はとても良いものだ。

……正直なところこれだけ良い生活を送らせて貰っているのだからもう少し働かせても良いと思うし、この城にいる人間のほぼ全員がそう思っているのだがレオンハルト様は「主としての沽券に関わる」として休日を義務付け、労働時間もあまり長時間にならないようシフトを組むように私やメイド長さん、料理長などの各ポジションの責任者にそう告げている。

とてもありがたいことだ。野良の人間であればおそらく毎日生きる糧を得るために動いているというのに、私たちは〝何もしない〟という時間すら享受出来るのだから。

まあもっとも、メイド長さんや料理長はレオンハルト様に直談判してほぼ毎日働かせて貰っているし、メイドもレオンハルト様に奉仕したいと積極的に仕事をこなそうとするのだから実際にしっかりと休日を取っている人は数少なかったりする。これもレオンハルト様の人徳の賜物だろう。

ちなみに使徒にもなると休みとか働くという概念は存在しなくなる。使徒にとって主に仕えることや主のために尽くすことは当たり前だからだ。主に求められたことをこなし、それ以外の時間は使徒にとって様々だが割と自由である。使徒に完全な自由意志を与えているレオンハルト様であれば尚の事。伸び伸びと過ごすことが出来るだろう。使徒になることで能力が強化されることも大きい。体力も増えるので疲れることも少なくなるだろう。

「あ、イヴちゃん」

――と、使徒について再び思いを馳せながら廊下を歩いているとちょうどそこに使徒の2人がいた。

なので私は立ち止まり、挨拶を返します。

「お疲れ様です。ペール様、お町さん」
「お疲れ様ですよーイヴちゃん」
「イヴか。うむ……今日も元気そうで何よりだ」
使徒のペール様にお町さん。２人からの声掛けを受け、自然と会話を行う。お町さんは最初に白兎さんと一緒に出会った時から友達ですし、ペール様の方は使徒の中でもかなり親しみやすい方なのでコミュニケーションは取りやすい２人だ。
だからまあ一緒に過ごす時間は普通に有意義ではあるけれど。
……それにしても……相変わらず大きいですね……。
しかしだ。こうしてこの２人が並ぶと結構な圧を感じる。
それは使徒という上位生物特有の魔の気配というわけでもなく、性格的なところから来るものでもない。ただ単に、その豊かすぎる胸の膨らみから感じる圧だ。
いやまあ私が勝手に感じているだけですし、もう結構慣れて来てもいる。私だって多少は成長してますし……。
ただそれでもこの城にいると敗北感を感じることは多々ある。
何しろこの城で働いているレオンハルト様の下級使徒であるメイドの大半は巨乳だ。なので巨乳が珍しくないどころかスタンダードなので慣れるというか麻痺してくる。巨乳じゃない普通の大きさや貧乳も沢山いるし、この城に来る前ならかなり大きいと思っていたであろう巨乳もお町さんやペール様みたいな上位層と比べると小さく見えてくるという恐るべし現象が起きているのだ。何しろ私の頭より大きいですし……。
ま、まあでも私は私で成長しているし、胸は小さかったとしても十分に可愛いはずです、と私は２人の胸と自分の胸を見比べながらそう思う。絶世の美女、美少女だらけのこの城だとそれもまた感覚が麻痺しそうになりますが、私は十分に上位のはず。
「……イヴ？　どうかしたのか……？」
「！　い、いえ何でもないです。それより……お二方は何を話していたんです？」
そうして頭の中で胸や見た目のことについて考えているとお町さ

んが訝しんできたので何でもないように装う。別に敗北感なんて感じてないし、負けてるのは胸だけだとそう結論付けておく。
そしてその上で誤魔化すために質問をするとペール様が笑顔で答えてくれた。
「明日のレオンハルト様の休日にどんなエッチなことするかを考えてるんですよ♪」
「あっ、そういう話でしたか……」
と、私はペール様の言葉に気まずさを覚えてしまう。とはいえ下級使徒筆頭としてその話題も把握しておく必要はあった。私はちょっぴり感じる羞恥を堪えて2人に聞き返す。
「どんなものが候補に上がっているんです？」
「うーん、今回は時期的に水着イベントが安定ですかねー。ちょうど潮も満ちてますし、外でするのも悪くないです。もしくは以前やって好評だった制服シチュエーションプレイとかバニーガールでの接待風プレイも良さそう――って感じで話してましたねー」
「けもみみぷれい……というのも良いと我は思うのだがな……」
「それお町さんが1番有利というか相性良いやつじゃないですか。それは3回前の休日にやったんでダメですよう」
「ううむ……なら定番のろーしょん女体風呂や乳並べは……」
「その辺りはレオンハルト様も気に入ってますしいつも通りプログラムに加える予定ですね～」
「……また結構大規模になりそうですね。まあ仕方がありませんが……」
毎度の事ながらまたかなりのハーレムプレイを行うつもりのようなので私はシフトの組み方やスケジュールについて頭を悩ませる。何しろ人数が人数だ。
レオンハルト様の下級使徒はメイドだけでも５００人を超える大所帯であり、その全員がレオンハルト様に救われた経験を持っていることもあってかレオンハルト様を慕っている。
なのでその全員がレオンハルト様の女という世界一のハーレムを築いているのがレオンハルト様なのだが……そうなってくると相手

をするだけでもかなりの日数や時間がかかる。
普段の一日でも１０人くらいは平均で抱いていて、定期的に女性と過ごす日を作っては１００人くらいは抱くこともあるのだ。
そういったエロいことをする調整を行っているのが使徒のペール様であり、彼女はレオンハルト様を気持ちよくすることを常に考えている。条件に合致する美少女を見つけたら積極的に下級使徒にならないかと勧誘してレオンハルト様に捧げ、飽きが来ないようにシチュエーションやプレイ内容を考えたりしてイベントのようにローテーションを組んだりすることを提案したのもペール様で、下級使徒の女の子に性的な知識を教え込むのもペール様の仕事だ。
そしてそれに最近はお町さんも加わっている。お町さんはレオンハルト様を慕う女性の中でもかなり愛が深い人なのでレオンハルト様が喜ぶことは積極的に行おうとするし、何だったら情事にもペール様と同じで城にいる日はほぼ毎日参加している。
……そういえばそれも使徒になった特権と言えますね。
レオンハルト様と恋仲にある魔人の方と同じく、使徒になると寵愛を頂く際に優先されるためそれもまた下級使徒とは違う点だ。
とはいえレオンハルト様は個人の意思を尊重する方なので自分から女性を口説くことや夜伽を命じるようなことはしない。なので私なんかはそういった経験が未だないわけですが……。
「……ふーん……ふむ、ふむ……ほうほうほう……」
「っ、な、何ですかペール様？」
私がレオンハルト様の性事情について思いを馳せているとペール様が私を見ていた。
私の顔を見た後に、足元から順番に身体を品定めしているような、そんな気配を感じる。ニヤニヤと笑ってもいた。こちらを見通すような視線で。
「いえ、そういえばイヴちゃんも成長してそろそろ良い感じだと思いまして」
「な、何が良い感じなんですか？」
「ふふふ、分かってるくせに～。イヴちゃんも、そろそろレオンハルト

様に抱いてもらいます？」
「そ、それは……！」
　分かっていた質問が来た。が、分かっていてもちょっと動じてしまう。そういった話題は少し苦手なので。つい情緒が乱れて顔が赤くなる。
「そろそろ経験したいですよね？　レオンハルト様のことは嫌いですか？」
「い、いえ……別にそんなことは……」
「じゃあそろそろアタックしません？　きっとレオンハルト様も喜ぶと思うんですよねー。有能で可愛いイヴちゃんがアタックしたらきっと受け入れて愛してくれますよ？」
「それはまあ……そうかもしれませんけど……」
　ペール様はこちらに顔を近づけてニヤつきながら中々に卑怯な質問をしてくる。
　確かにレオンハルト様のことは嫌いじゃないし好ましく思っているし、性的な経験にも興味はある。もう少しで１０００年物になってしまうし、それもどうかと思っている。以前と比べて成長したせいか、ここ最近は欲求や好奇心が肥大化していることもあった。
　ただ今まで蓋をしてきたし、これからその蓋を外すにしてもその外し方がいまいち分からない上、他の問題や悩みのこともあって躊躇している。
　なので私は恥ずかしさを感じながらこう答える。
「……ええっと、出来ればもう少し待っていただければ……」
「ありゃ。まだダメですかー。それはしょうがないですね」
　私がそうやって解答を伸ばすとペール様はそこであっさりと引き下がる。無理強いは行わない。そういうスタンスはペール様もまた同じだった。
「でも気が変わったらいつでも言ってくださいね？　その時はペールちゃんもイヴちゃんのために一肌脱いでレオンハルト様の好みでも何でも教えてその場をセッティングしてあげますから！」
「うむ……イヴならばレオンハルトも喜ぶであろうな……我もイヴな

らば床を共にするのも吝かではない」
「あはは……ありがとうございます。その時は是非よろしくお願いしますね……」
　その時が来るなら出来れば自分のペースで行いたいので多分言わないし、初手からいきなり複数人プレイもちょっと……さすがに恥ずかしすぎて遠慮したい。
「あ、それとついでにイヴちゃんの性癖についても聞いてもいいです？」
「……ダメです。なぜそんなことを聞くんですか？」
「城内の性事情の管理はペールちゃんの仕事だからですよう！　もし特殊性癖なんて持ってたら大変ですしね。カイゼル様の妹萌えみたいな他に影響がありそうな性癖でも困りますし」
「……前々から思っていましたがよくレオンハルト様のお子様の性癖まで知っていますよね……どうやって調べたんですか？」
「ふふふ、そこは企業秘密ですよう。ちなみに管理のためにイヴちゃんにも教えとくと、アルベルト様はお尻好きでシュヴァイン様はロリコンです。なので気をつけてくださいね？」
「……聞きたくなかった情報をどうもありがとうございます」
「子供か……我もレオンハルトの子を孕みたい……」
「そ、それはまあ、その、頑張ってくださいね……」
　そうして私はペール様とお町さんと別れることにした。苦手なところは見せたくないので付き合いますけど、やっぱり性的な話は恥ずかしくて得意じゃない。
　そういう意味でも克服したいなと思いながら私は待ち合わせ場所へ急ぐことにした。

　夜になってもレオンハルトシティは仕事を終えた魔物達によって活気づいている。時間的に夕食時で飲み歩いている魔物兵も多く往来する中、私は白兎さんと合流して一番街――魔物将軍以上が暮らす邸宅が建ち並ぶ住宅街に向かい、その路地にポツンとある小さな屋台

に顔を出した。
「大将、やってるー？」
「おお、やってるぜー。――って白兎にイヴか」
「何ですかその挨拶は……？」
「ふっふっふ、以前教えてもらいました。こういうこじんまりした常連のお店で暖簾を潜りながらこの挨拶を繰り出すと常連っぽさが出せるそうです」
「また妙な知識を覚えてきましたね……それはそうとこんばんは、戯骸さん」
「おう、らっしゃい。何にするよ？」
「いつも通りおすすめをお願いします。お酒は……私は軽くて甘めを。白兎さんは？」
「私はいつも通り、何でも来いです！」
「あいよ」
　私と白兎さんは常連のお店――はぐれ使徒である戯骸さんのやっている屋台の焼き鳥屋に腰掛け、いつも通りの注文を行う。
　ちょっと前にこの街に移り住んだ戯骸さんだが、ずっと何もしないでいるのは暇ということで気まぐれで焼き鳥屋を始めたので私や白兎さんはここの常連として定期的に通っている。戯骸さんは私たちの友人でもあるのでそのやり取りは気安いものだ。
「今日はお町の奴は？」
「お町さんはレオンハルト様の方ですね。明日は休日みたいなので」
「かーっ！　そりゃ羨ましいもんだ。俺も1度くらいレオンハルトの奴に抱かれてみてぇなぁ……」
「キー！」
「それは難しいだろって藤吉郎さんが言ってますよ」
「おいおい、そりゃ分かんねぇだろ？　レオンハルトもいつか女に飽きて男に走る可能性が……」
「あったらさすがに困ります……」
「というか娘の前であんまり親の下の話はやめてくれませんか？」
「おっと。そりゃすまねぇな――っと、まずはお通しだ」

「ありがとうございます。それじゃイヴさん――乾杯です」
「ええ、乾杯」
戯骸さんがお通しを。そしてこの店を時折手伝っている同じくはぐれ使徒の藤吉郎さんが飲み物を私たちの前に出してくれたので白兎さんと乾杯する。常連なので出してくるお酒も私たちの好みのものだ。何百年か前から飲み始めたが、私はそんなに強くないのでいつも軽めで、白兎さんの方はかなり強いので何でも飲める。母親やその父親もかなり強いので血筋らしい。レオンハルト様も一応飲める方ではあるみたいですしね。
そしてこの戯骸さんの焼き鳥屋『一番星』だが私たち以外にもハンティ様が常連だったり、食通のガルティア様やレオンハルト様なども来るくらいには味は良い。火力と火加減が絶妙で知る人ぞ知る名店なんですよね。
「相変わらずすごい美味しいですねっ！」
「本当に美味しいです。流行ってないのがおかしいくらいには」
「そうなんだよなぁ。なんで流行らねぇんだろうな？」
「きー！」
「多分戯骸さんのせいではないかと……」
多分、というか絶対、戯骸さんが男の子モンスターを襲うせいですよね……。
昔は分からなかったけど、戯骸さんはいわゆるホモなので男性に性的興味がある。なので時折男を襲うし、ホモであることがこの辺りに住む魔物将軍にはバレているので避けられているのだ。
まあ見知った人だけで楽しめるのでそれはそれで良いんですけどね。
……内緒話もしやすいですし。
「……あの」
「……その」
「あっ」
なので早速話を切り出そうとしたが――そこで声が被ってしまい、互いに顔を見合わせてしまう。

「……白兎さんから話しても構いませんよ」
「いえいえイヴさんの方から……と、言いたいところですが、そうですね。私の方から話した方が良いかもしれません」
私が気を使って先にどうぞと譲ると白兎さんもまたそれに応じた。
カウンター越しに戯骸さんもいるがそこは黙って聞いている――いや、聞いていない振りをしてくれている。真剣っぽい話の雰囲気に水を差すようなことはしない。藤吉郎さんも一緒だ。
そして私たちもまた聞かれても構わないと思うからここを選んでいる。なので、2人に聞かれていることなど関係なしにその話は2人だけのように軽かった。
「イヴさん――私に気を使う必要はありませんよ？」
「……それは」
白兎さんからのその言葉に、私は言うまでもなく意味を理解する。理解出来る。
それはずっと私が考えていた、悩んでいたことだからだ。それを白兎さんは告げてくる。
「イヴさんがそうありたいと思うなら私はその意思を尊重したいですし、邪魔にはなりたくありません」
「……なら、白兎さんは別に構わないってことですか？」
「はい。当然じゃないですか。――イヴさんがパパの使徒になるなんて大したことじゃありませんよ」
と、白兎ははっきりとそう告げてくる。
その言葉は嘘じゃないものだ。私には分かる。白兎さんの心を読める私には、そこに一切の嘘が混じっていないことが分かった。
だからこそ私は息を呑み、そしてそれを吐き出す。何百年分かの溜息。私達の性質を考えれば遅すぎた歩み寄りに。
「……はぁー……やっぱり、気を使いすぎ、でしたかね……」
「そうですよ。なので私も、かなり気を使ってしまいました。なのでそこは互いに反省点ですね」
「ずっとそう思ってたんですか？」
「本当に最初の最初はどうかと思いましたけど……すぐにその気分は

なくなりましたね。別に何も変わらないことが分かったので」
私の質問に白兎さんは昔を思い返し、そして今を実感するようにして答える。私だけでなく、他の人のことも考えた上で。
「ガイさんが魔人になって、お町さんが使徒になって。それでも友達じゃなくなるわけじゃありません。そもそも私だって魔人の子供ですし特殊な存在であることには変わりませんから」
「まあ……それはそうですね」
誰がどうなろうと友達付き合いは続いている。そのことを白兎さんは微笑を向けて答えてきた。
それを見て私もつい笑みを浮かべてしまう。
昔からそうですが……やっぱり白兎さんは素直で前向きなんですよね。
だからか、ひねくれているはずの私もつい素直になってしまうのだ。
「なら使徒になりますけど、良いんですよね？」
「ええ。むしろ、是非なってください。イヴさんは優秀ですし、パパを支えてくれるなら嬉しいです。それに、なって貰わないと困ります」
「困るんですか？　それはどういった意味で？」
「これ以上、成長してもらっては困りますし」
困るという言葉に軽く困惑して聞き返すと言葉がすぐに返ってきた。
私が意味を理解して空白を作ると、白兎さんの方も1度間を置いてから怒りすら見せるように立ち上がり、指を突きつけてくる。
「というかですね！　何を普通に成長しちゃってるんですか！　普通そこは私に合わせて永遠のロリ体型でいるところでしょう！　お約束を破らないでください！」
「あ、あー……それはですね……」
「それは、なんですか⁉　絶対計算してましたよね⁉　ちょっと成長して私と差を付けるために！」
声を大にしてずっと思っていたであろう文句を口にしてくる白兎さんに、私は目線を反らして頬を掻く。計算していたところは実際に

あったため、バツが悪くなった。とはいえ、
……なんというか、白兎さんの方は良くも悪くも子供っぽさが抜けませんね。
目の前の友人の変わらなさを思って苦笑する。無論、成長はしているとはいえこういうところは変わらない。
なので私もまたそれに合わせることにした。白兎さんをからかうようにいやらしい笑みを携えて。
「もしかして……悔しかったんですか？」
「！　べ、別にそんなことは……」
「まあ白兎さんと違って、私は背も伸びましたし胸も大きくなりましたからね？　この成長ぶりから考えてもこれ以上成長してしまえばどんどん白兎さんと差が付いてしまうことになりますし……確かにそれは止めたいですよねぇ？」
振り回されるばかりなのであまり出すことのない子供の頃の私を思い出して白兎さんを煽ってみる。心を読める私にとって相手の嫌がるところを突くのは造作もないこと。
だけどそれをすると嫌われてしまうことは分かっていたため抑えてきていた。相手の心が読めるなんて生まれ持った能力も、他者からしてみれば気持ちの悪いもので化け物扱いをされるものだと思っていたために。
実際相手のことが見えすぎるのは心を読めると分かっていなくても相手からすれば気持ち悪い。なのでその能力を用いて利用することは極力避けてきた。
……だけど、ここにいる人達は嫌わない。
白兎さんやレオンハルト様。その周囲にいる人達はみんな、誰も彼もおかしい人ばかりで、それだけに妙に懐が大きかったり、遠慮がなかったり、細かいことを気にしなかったり、感情や気持ちを素直に表現してくれる人ばかりだ。
だからこそ私も素直になれる。相手の心を読んで、少しくらいいからかったとしても受け入れてくれると確信出来るから。
「それならそうと早く言ってくれれば良かったですね。ま、今から使

徒になってもこれ以上小さくなることは出来ませんから、私の勝ちは変わりませんけどね」
「ぐ、ぐぬぬ……！　言わせておけば……！　わ、私だって成長する可能性はありますし！　まだ負けたとは決まっていません！」
「ほぼ１０００年かけてこれなら私に勝つには何万年必要なんでしょうね？」
「くっ……か、勝ち誇れるほど成長してないくせに……！」
「白兎さん、今身長幾つでしたっけ？　私は１５０センチも超えましたけど。私の記憶だとまだ１４０センチもなかったような……」
「強さでは私が上ですよっ！　なので私の方が大人です！　そもそも歳上ですし！」
「見た目では私の方が上だと認めるんですね？　それなら別に良いですよ。私は白兎さんよりか弱くて年下の大人の女性ということで」
「っ……！　ぐぬぬぬ……！」
　私の言葉の攻撃に白兎さんはぐうの音も出ない様子。勝ちましたね。論破しました。
　さすがにその先の「白兎さんは私より強い歳上のロリババア」という煽り言葉は思いつきましたけどやめました。手が出ると困りますし。
「……まあ、いいですけどね！　私は全然、これっぽっちも気にしてませんし！」
「そうですか。ならこれ以上はやめておきましょう」
　白兎さんはそう言ってコップの中のお酒を一気飲みした。私も合わせてお酒を口に含む。ふむ、やっぱり美味しいですね。
「……ハハハ、お前らやっぱ面白ぇな」
「む、なんですか戯骸さん。あなたまで私を子供だと言うつもりなら斬りますよ？」
「そんなつもりはねーよ。……それよりもイヴが使徒になるたぁな」
「何か言いたいことでもありそうですね？　私が使徒になることについて戯骸さんは思うところでも？」
「別になんもねーよ。覚悟も決まってるようだしな。それなら俺から

言うことは何もねぇ」
　私たちの話に区切りがついたと見たのか戯骸さんが割って入ってくる。煙管から炎を出しながら笑った戯骸さんは私と白兎さんの前に新しいお酒を出しながら。
「だが使徒仲間が増えるのは嬉しいぜ――だからこいつは奢りだ」
「戯骸さん……ありがとうございます」
「おう。それじゃ俺も飲むから乾杯でもしようや」
「良いですね。それなら今夜は朝まで飲みますよ！　今夜は寝かせません！」
「いや白兎さん。その台詞は使い時を間違えている気が……」
「乾杯です！」
「乾杯！」
「キー！」
「って聞いちゃいませんね……まあいいですけど。乾杯」
　騒がしい友人達にやや呆れながらコップを掲げて酒を呷る。
　だけど……私にとってこの日常こそが、私の守るべきものだ。
　だからこそ私はそれを決めた――次の日。忙しいレオンハルト様に時間を作ってもらい、私は彼の前で片膝を突いて口にしたのだ。
「使徒になる申し出を受けたいと思います」
「……それは……随分と急だな」
「ご不満ですか？」
「いや、不満などあるはずがない。お前が使徒になりたいと言うなら歓迎する。……だが、理由を聞いても構わないか？」
　今まで保留にしてきたのにここで使徒になると決めた心変わりについて当然問いかけられる。
　だが私は素直に理由を口にすることにした。言葉を脚色することもなく。
「はい。理由は幾つかありますが、1番大きいのは……レオンハルト様と私の目的が合致すると思ったからです」
「俺の目的と合致だと？」
「はい。私は……この場所が、この環境が、ここにいる人が、好ましい

と思っています」
自然に心に浮かんだ言葉をそのまま口に出す。
「ここには私の大事な主や、大事な同僚、そして大事な友人がいます」
仰ぐべき主に一緒に働く同僚。そして大切な友人。
「私はそれを守りたいと思いました。以前のようにただ上を目指すのではなく、この環境と秩序を守り、大事なものを守る。そのために支えたいと……そう思ったんです」
正直な気持ちを口にする。自分の大事なものを守りたいと。
そしてその気持ちを同じくしているであろうと主の気持ちを勝手に読み取って口にする。
本来なら許されない。忌避されてもおかしくはないことを。
「私には人の心が読めます。この力を含めて、私は私の力を用いてレオンハルト様を支えたいと、そう思います」
そう。だからこそ、先に口にしておかなければならない。
「ですが心を読めるからこそ、私は人の知りたくない秘密でさえ時に知ってしまいます。――そしてそれは、レオンハルト様。貴方であっても例外ではありません」
もし使徒になればより接する時間も増えるだろう。
あるいはこの力が更に強化されるかもしれない。
そうなれば私は主や同僚、友達の隠したいことでさえ知るはめになりかねない。
「なのでもし……それを懸念されるのであれば、私は使徒にならない方がよいかも知れません」
私を近くに置くということはそういったリスクを孕むのだ。
そう改めて説明した上で、私は手を差し出す。
本来は不敬であると承知の上で。
「ですからレオンハルト様。もし私を使徒にしてくださるのでしたら……この手を取ってください」
私に触れて欲しいとお願いする。
それは暗に、心を読むと伝えていたし、実際に読むことになる。
今まで敢えて避けていたことでもあった。何しろレオンハルト様

は責任ある立場であり、内心を知られてはならない方でもあると思ったから。
勿論、触れても読もうと思わなければその深い秘密まで知ることは出来ない。だけど、敢えてそれを示してみたかった。
「お願いします」
「……」
私はレオンハルト様と視線を合わせる。その赤く鋭い目。魔人としての気配を強くしている彼に向けて。
しかし恐れはない。レオンハルト様がそうある理由を、私は半ば知っている――いや、推測しているから。
「……理由はそれだけか。なら――」
レオンハルト様が動く。私の意図をしっかりと汲み取ってくれた上で。
私の差し出した手を、容易く取って見せた。
「――俺の答えは変わらない。イヴ、お前のことはとっくに信頼している。その程度のリスクを口にしたところで、お前への信頼は何も変わりはしない」
「――！」
そしてレオンハルト様は、私にとって求める答えを口にした。
私は心に感動を覚えながら、思う。何しろその言葉は。
……やっぱり、親子なんですね。
たとえ私が何者になろうとも。心を読めるとしても。
私に対する想いは変わらない。だからこそ――
「ありがとうございます、レオンハルト様……私も、貴方様のことは信頼しています。そして貴方のことを支えたい。尽くしたいと思います」
「元よりお前には支えられている。だがこれからはより頼りにさせてもらおう。俺やお前の大事な物を守るためにもな」
「――ええ。より一層の献身を約束します」
だからこそ、私もまた信頼出来る。
初めて握るレオンハルト様の手。男の人の手。力強く温かい手を

握り、私は誓う。
以前までは素直になれなかった私の心に。目の前の御方を含めた大事なものを守るために……私はこの御方を支えてみせると。
「それならば早速、血の契約を始める」
「はい。お願いします」
――そしてレオンハルト様からの血の契約を受け入れれば、私の存在は新たに作り変えられる。
あらゆる能力が強化され、衣服が変化し、魂から別のものになった私はレオンハルト様の隣に立って、言葉を交わした。
「これからよろしく頼むぞ――イヴ」
「はい――レオンハルト様」
新しい私は主からの微笑に対し、信頼と好意、そして喜びから生じる心からの笑みを浮かべ、共に歩き出す。
――そうしてその日……私は人間をやめてレオンハルト様の使徒になった。

――新たに使徒になったイヴが俺の娘である白兎に会って話をしているところを見て俺は思う。
イヴは白兎の友人だ。だからこそ、俺の使徒になってからも変わらず友人として支えてほしいと。
何しろ、だ。白兎は友人想い。それだけに今後、友達に何かあった時に落ち込んだり悲しんだりする可能性がある。
――いや、確実にその時は訪れる。
俺はその未来を思い、憂いながらまた別の者と会っていた。
「レオンハルト。以前話していたことだが……本当に間違いはないんだろうな？」
その者とは――魔人ガイ。
そのガイの表とも言うべき顔が、俺に真剣に尋ねてくる。だから俺もまた真剣に答えた。
「ああ。魔王の寿命……いや、任期は決まって１０００年だ。そのタ

イミングで魔王は代替わりを行う。そうしなければ徐々に力は衰え、いずれは消滅してしまう」
「……そうか。ならば――」
表のガイは人を憂う。
ゆえにこそ以前俺から聞いた話を改めて確認し、そして僅かだが希望を抱いているようだった。陰鬱さを隠さない、その目に僅かながら光が灯っている。
「――もうすぐだな」
「……ああ。そうだな」
――ああ。もうすぐだ。
俺はガイの質問に嘘偽り無く答えながら思う。
確かに魔王には通常、寿命が存在する。
そして仮にそれがなくなったとしても、代替わりは必ず起こるだろうし――起こしてみせると。
聞きたいことを聞き終えて背を向けて去っていくガイの背中を見送り、頭の中で彼女の姿を思い浮かべながら……俺はその覚悟を自らに再度問いかける。
――そしてすぐに変わらない答えを得て歩き出した。

永遠の魔王

――ＧＬ１０００年。
人類が魔物によって支配され、千年の時が過ぎた。
「おらぁ！　もっと良い声で鳴きやがれ！」
「ひぐっ！　うぐっ！」
「あ〝ー……っ！　うっ〝！」
全ての国、文明が破壊され、人間は大陸各地に建てられた人間牧場に収容され、魔物を楽しませるための家畜として虐げられている。
「お、今回は親子だぜ！」
「当たりだな！　２人共仕留めて犯しちまおう」
「いやあああああっ！　やめてえええええっ！」
「お願いしますっ……！　子供だけは……！」
そして牧場に収容されていない人間もまた、その多くは魔物の行う人狩りの標的にならないように息を潜めて隠れ住んでいる。
魔物に見つかれば苦しめられ、尊厳を破壊された上で殺される。野良の人間は牧場の人間と違ってお目溢しが許される。
人間を殺してはいけないという魔王の敷いたルールも野良の人間に限ってはある程度は許されるのだ。
ゆえに魔物達は娯楽のように人狩りを行う。そこに慈悲は一切ない。
人がムシに対してやるように、魔物も人の事情を考慮したりはしない。
「ふわぁ……今日も平和だな……」
大陸を魔物が支配している。
ゆえに魔物から見て今の時代は平和そのもの。争いの起こらない魔物の黄金時代であった。
「なんかよぉ……たまにはもっと刺激的な狩りがしたいよな」
「普通の人狩りじゃダメなのか？」
「そういうんじゃなくて……もっとこう、対等な戦いがしてみたいっつーか……人狩りなんてやったところでこっちが勝つに決まってる

しよ」
「魔物討伐隊とかを狙いたいってことか？」
「まあ……でも魔物討伐隊もなー……狩る時はこっちの方が数も多いし強いし……絶対負けないから刺激が少ない気がするんだよ」
「……まあ言わんとしてることは分かるが……人間相手じゃそれもしょうがないだろ」
「まあな……でももっとこう、対等にバチバチにやり合ってみたいんだよな。それで強い人間の首を狩って昇進とか出来たら最高だろ？」
「あー昇進か。確かに、戦いがないと昇進は出来ないよな」
「そうそう。だからもっと人間には頑張ってほしいぜ」
「弱っちいくせに人同士ですらまとまれねぇからな、あいつら。まあ馬鹿なんだろうから仕方がないけどよ」
「マジでそれだよな。はー……俺ももっとバンバン戦って人殺しまくって昇進してー」
　人間は魔物よりも弱く頭の悪い下等な生き物。
　それが魔物にとっての常識であり、彼らは人間を苦しめることも殺すことも何とも思っていない。
　魔物を狩る魔物討伐隊という集団にしても、精々ちょっと強い獣が群れを組んでいるという程度の認識しかなかった。
「――やれ」
「ん……？　今なんか声がしなかったか？」
「気の所為だろ。それよりそろそろ交代の時間――」
　――そう、強い獣の群れもまた中には存在する。
　ゆえに事故が起こることもままある。
「ぐあああああっ!?」
「――何だ!?　急にどこから……！」
「人間です！　おそらく魔物討伐隊の……！」
「チッ……！　面倒な……すぐに蹴散らせ！　奇襲を掛けられたからと言って人間如きに殺されるな！」
「――そうか。ならお前も、その人間如きに殺される恥を受け取るがいい」

「!?　貴様……！」
「死ね、クズ共」
　時に流れる血は人間ではなく魔物のものになる。
「ぎゃあああああっ！」
「……こんなものか」
「若！　お怪我は？」
「支障はない。それよりも魔物隊長を倒した。指揮が乱れている内に追撃を行ってくれ」
「はっ！」
　かつての時代で人間が野良の魔物に襲われたり、ムシによって怪我をさせられる事故が起こるように、今の時代でも人間による事故は起こっている。
『さすがの手際ですね』
「魔軍は集団の頭さえ切り落とせば統制を失う。これくらいは常識だと思うが？」
『知識ではなく強さの方です。貴方も貴方の率いる党も強者ばかり。魔物を屠る手際にも無駄がない』
「これくらい出来なければ野では生きられない」
　そういった事故を起こすのが魔物討伐隊であり、あるいは一部の人間の強者であった。
　今日もまた大陸のある土地で事故が起きる。中性的な容姿と艶のある黒髪が特徴的な少年とその彼が率いる集団によって一部隊が壊滅した。
「魔物だけ狙ってもどうしようもありませんけどね」
「……コーラ。私がいつお前に助言を求めた？」
「……一応あなたのためを思って言ってるんですけどねー」
「それが本当であるという確証はなく、また信用もない。そちらの言動には矛盾がある」
　その少年はまだ年若いながらも達人級の剣の腕前を持ち、頭脳明晰かつ冷静沈着。そして野良で生きる人間には欠かせない警戒心と洞察力を持ち合わせていた。

「確かにそちらがもたらした勇者の能力に矛盾はないようだ。これにより私の強さは一段も二段も上昇したことに間違いはないだろう」
「だったらもう少し信用してくれてもいいんじゃないですか？」
「それはこちらが判断することだ。それに、私は都合の良い話を持ってくる者も〝信用してくれていい〟なんて言葉を使ってくる者を馬鹿正直に信用するような愚は犯さない。ましてや、人を救うために人を殺すべき、なんて嘯くような相手に心を開くことはない」
「それが人間を救う最短の道だとしてもですか？」
　ゆえに彼は勇者でありながら――勇者の従者という存在を全く信用していなかった。
　その腰に差した二刀の内、光る刀であるそれを従者であるコーラに突きつけながら彼は言う。
「何度も言わせるな。私の行動は私が決める」
「……はぁ……ええ、分かってますよ。もちろん」
「なら無駄口は慎んでもらおうか」
　溜息付きで頷いたコーラに続いて、少年は自らが持つ刀の方にも注意する。
「そしてそれは君も同じだ、日光。コーラよりはまだ信用はおけるとはいえ、君もまた経緯が経緯なだけに未だ値踏みする段階にあることを忘れないでほしい」
『……ええ、分かっています』
「分かっているなら構わない」
　少年はその聖刀・日光を鞘に収めると周囲にいる部下を呼び付けた。
「討ち漏らしは？」
「ありません。一個部隊２００体全ての討伐を確認しました」
「よし。ならば物資の回収を終えたらすぐに撤収する」
「はっ！」
　党首である少年の指示を受けて部下の侍達は動き出す。
　部下の練度は高く、連携も取れている。それを確認しながらも少年の表情は険しい。

「……これではまだ足りないな」
集団の力不足。そして、自分も含めて個々の力不足を感じて少年は目つきを鋭くする。
彼の目的である魔人――いや、魔王の討伐を思えばこの程度で足りるわけがないことは明白だった。
だがかといって、勇者の従者が言うように人を狙うことはしない。
だからこそ彼が考えたのは、人同士で徒党を組むことだった。
（個人での力には限界がある。利用出来るものは利用しなければ……な）
人間個人の力では魔王どころか魔人にも届かない。
そのことを彼は身をもって知っている。
「――宗近様。物資の回収、滞りなく完了致しました」
「ご苦労。では予定通り西の隠れ里へ向かう。全隊に指示を出せ」
「はっ。直ちに」
ＪＡＰＡＮ出身の侍、武士で構成された魔物討伐隊「大和剣平団」の党首であり、聖刀日光の使い手である彼の名は――宗近。
少し先の未来である魔人と共に戦争に身を投じることになる――今代の勇者であった。

――大陸東部。
不自然ですらある黒い雷雲が空を染め、魔の気配が充満するその城にはこの大陸を支配する魔物達の王である魔王が住んでいる。
この１０００年間、魔物達にとっては黄金時代を。人間にとっては暗黒時代を築いた最恐の魔王――ジル。
彼女はその全能力を人間を苦しめるためだけに使い、それ以外のことには興味を持たない魔王であった。
……が、そんなジルであっても僅かに興味を持つ相手が存在する。
「んっ……はぁ……いいぞ、レオンハルト……！　もっと、もっと動け……！」
「はっ……分かりました……！」

1人は金髪灼眼の最強の魔人。魔人筆頭兼魔軍参謀である魔人レオンハルト。
人類最古の王であり、世界最強の剣士である彼はその役目に従い、魔王ジルをその鋭い肉竿によって悦ばせていた。
――だがもう1人、ここにジルに気に入られた魔人が存在する。
「さあ……次はお前の番だ、ガイ……お前も私を犯せ……！」
「っ……わ、わかった……それじゃ行くぞ……ふんっ……！」
「んっ、あああああっ～～～……♡　いいぞ……お前も、少しは上手くなったじゃないか……！」
「まあ、な……（ちくしょう……なんでこの俺がレオンハルトでぐちょぐちょになったジルのアソコを犯さなきゃならん……！　クソ……気持ち悪いが気持ちいい……！）」
もう1人は魔人四天王である魔人ガイだった。
彼もまたジルに気に入られた結果、愛人にして下僕という立ち位置でジルの寵愛を受けていたが……その表情は快楽だけでなく別の意味でも歪んでいる。
今のガイはエロいことは好きだが、この数百年で何度もジルに犯された結果、もう1人と同じような強い苦手意識をジルに感じていた。快楽こそ感じるが、精神的に参ってしまいそうな重圧も感じている。
そして逆らおうにも絶対命令権が存在するためにガイは逆らえないでいた。ゆえに、レオンハルトの後という行為であっても大人しく従って腰を振る。
ジルの肉壺は愛液とレオンハルトが出した精液でぐちょぐちょになっており、更にその中をガイの肉棒がかき分けていく。
そしてジルとガイが乱れる様を、レオンハルトは見ていた。ジルを満足させるための3Pを十全にこなすためにレオンハルトはジルの胸や尻を弄るが、その表情は何とも言えない渋い顔だった。
毎日のように酒池肉林とも言える性行為を行い、人類の歴史が始まってから最も多くの女と恋仲になった最大のハーレムを築くレオンハルトであっても、この状況はどうにも渋い顔を隠しきれない。
それはジルが相手――という要素も含んでいるが、そもレオンハル

トは他の男を交えての性行為というものに及んだことがない。
また好んでもいなかった。凌辱、いわゆるレイプのようなものは人間の戦士時代に数度行ったことがあるくらいであり、その際にも1人の女を人目につかないところでやるような、戦争に勝ったその時代の兵士としては潔癖とも言えるような行為しか経験がなかった。
人間の兵士であっても魔物兵であっても勝った際の凌辱は当然のように行われるし、レオンハルトもその行為を時には黙認することもある。
だが自分は行わない。正義感ではなく好みの問題で。
しかしジルに命じられては是非もないため、レオンハルトはここ最近で何度かジルとガイによる3Pを行い、そうして半ば呆れの感情を見せていた。ここまで来ると嫌というよりも呆れである。
ガイほどジルの相手に辟易するような精神的摩耗を感じてはいないので、レオンハルトには余裕があった。慣れてしまい、感覚が麻痺している。
「っ……イク……！」
「出せっ……♡　私の中に……っ……あぁあああ～～～っ♡」
ゆえにガイがジルの中に精液を放出し、互いに絶頂する様もレオンハルトは冷静に眺めていた。僅かに眉をひそめはするし、その分の感情の揺らぎはあるものの淡々とやるべきことを済ませていく。
「満足致しましたか？　ジル様」
「っ……ああっ……今日も、悪くなかったぞ……」
「はぁ……はぁ……」
「では後始末を」
呼吸を整えているジルとガイを尻目にレオンハルトはタオルを三人分用意し、自分の身体を拭きながら更にはシャワーの用意をする。その手付きは完全に慣れたものだった。普段レオンハルトは身の回りのことを使徒や下級使徒に任せているため自分で行うことはないが、それでもこれくらいのことは普通にこなせる。
ジルは衣服を身につけることがないので着替えなどを用意する必要もないし、魔法で綺麗にすることも出来るとはいえ、こういう時は

気分的にきちんと風呂やシャワーで綺麗にするのが普通である。
なのでレオンハルトはそのようにした。風呂を溜めてからジルに声を掛ける。
「湯浴みの用意が出来ました」
「ご苦労。なら……ガイ。私の身体を洗え」
「……分かった」
そしてどうやら供にはガイが選ばれたのでガイと共に備え付けの浴室へ入る2人を見送り、レオンハルトは一足先に着替えを行う。
いつもの黒と赤を基調にした軍服にも似た衣装と足元まであるコートに身を包むとレオンハルトは1度ジルの私室から出た。
「お疲れ様です！　レオンハルト様！」
「お疲れ様です。今日はもう終わりですか？」
そうして部屋を出たところで2人の少女に声を掛けられた。1人はピンク色の髪をしたフリフリなお姫様衣装の剣士――使徒のミシェーラ・姫原。
彼女がキリッとした表情で礼をしてくるのを受け取りつつレオンハルトはもう1人からの質問にも答える。
「いや、まだ未定だ。今はジル様とガイが湯浴みを行っている」
「な、なるほど……」
「……左様でしたか。ではその間に幾つか報告をさせて頂いても？」
「ああ。頼む、イヴ」
そう、そのもう1人もまたレオンハルトの使徒である元人間の少女――イヴであった。
青っぽい白色。空色とも言える髪色で、白いショートパンツに青スカーフやブローチ、帽子に燕尾服風に裾が伸びてひらひらしたコートなど全体的に貴族のパーティにでも着ていくかのような凝った上質な衣装である。
そしてそれは使徒になってから得たものであり、その証拠にイヴからは以前にはない魔の気配を感じさせていた。
「ではまず最初に――城で行う予定の正月記念パーティですが、レオンハルト様が年明けすぐに魔王様の招集を受けたため命令通りレオ

ンハルト様抜きでパーティを行いました」
「そうか。何も問題はなかったか？」
「ええ、多少の騒ぎや物が壊れたりということはありましたが問題なく。……とはいえレオンハルト様抜きでのパーティに不満を持つ者もいましたが……」
　イヴはそこで軽い報告を行う。新しい年――ＧＬ９９９年からＧＬ１０００年になってからレオンハルトは魔王城に詰めていたため、毎年行う正月祝いを今年は行えていなかった。
　仕方ないこととはいえレオンハルトは残念に思う――が、それを見越してかイヴは微笑んだ。
「――なのでレオンハルト様を加えてささやかながら親しい者を集めてのパーティの準備を進めさせていますので、帰ったらそのパーティへの出席をお願い出来ますか？」
「……ああ。もちろんだ。手際がいいな、イヴ」
「それほどでもありません。使徒として当然のことですから」
　そう言って主に対して優雅に礼を行うイヴ。その行動はレオンハルトの内心を慮ったものであった。
　ゆえにレオンハルトもその独断を諌めたり怒ったりすることはない。自分を想ったがゆえのサプライズだ。歓迎こそすれ拒否する理由はない。
「み、ミシェーラも飾り付けを頑張りました！　それにプレゼントも用意しました！」
「そうか。ならそれも楽しみにしておこう。よくやったな、ミシェーラ」
「それほどではありません！　使徒として当然のことですから！」
「……ミシェーラさん。アピールするなら別の方向から行った方が……」
「そ、そそそそれくらいミシェーラには分かってますけど？」
「本当に分かってるんですか？　それと、今はあえて言いませんけどあまり変なプレゼントをしてレオンハルト様を困らせないようにしてくださいね？」

「……だ、大丈夫です！　ちゃんと頑張って選びましたから！　レオンハルト様にも喜んでいただけるはずです！　そう、ミシェーラには全部分かっています……！」
「本当に分かってくれてるならいいんですけどね……」
　そしてイヴが褒められたことで嫉妬したのかミシェーラもまたアピールを行ってくるも、イヴが心を読みながら指摘を行ったことでミシェーラは明らかに動揺する。イヴもまたその様子に呆れていたが……そのやり取りにレオンハルトは小さく笑みを浮かべた。
「ふっ……とりあえず、もう少し待機しておいてくれ。おそらくもう少しで帰れる。そしたら正月祝いと……いや、その前に褒美をやろう。分かったな？」
「！　ほ、褒美って……！」
　褒美という意味深な言葉を聞いてミシェーラが顔を赤くする。
　そしてイヴもまたミシェーラほどではないが頬を赤くして期待を覗かせる笑みを浮かべた。
「……それじゃあそっちの準備もしておきますね？」
「ああ。頼んだ――さて、そろそろ戻るか」
　レオンハルトは２人の頭を軽く撫でてから部屋へと戻る。１度部屋を出たのはあくまでもちょっとした確認に過ぎない。
　加えてあえて１度距離を取りたかったのだ。なので使徒である２人と軽く会話を行った後にレオンハルトは再びジルの私室に足を踏み入れる。
「――どういうことだ……？」
　――だがそこで、レオンハルトはちょうど異変が起きたことを感じ取る。
　レオンハルトがジルの私室に入ってから少し。シャワーの音が止まり、そろそろ浴室から出てくるかといったところで浴室からガイの声が聞こえてきた。
　レオンハルトはそこで静かに耳を傾ける。この感じはおそらく悪ガイではなく善ガイだろう。性行為が終わって、思うことがあったのか切り替わった――そんな推測を頭の中で並べ立てながら。

「聞こえなかったか……？　それとも、意味が理解出来ないのか？」
「……後者、です。魔王をやめないというのは、一体どういう意味ですか……？」
ガイの震える声とジルの愉悦を感じているかのような声が耳に届く。
その会話の内容を聞いて、レオンハルトは思った――遂に知ったか、と。
何しろレオンハルトにとっては既知の事柄ではあるが、ガイにとってはそれが初耳。それも、強い衝撃を受ける。驚愕の真実だろう。
ゆえにガイは意味が分からないと問い返し、ジルはそのガイが狼狽えているのが面白いのか、くつくつと笑いながら教えてやる。いっそ優しさすら感じさせるような諭す喋り方で。
「簡単な事だ。私は魔王だが……今の私には寿命が存在しない」
「そ、そんな……馬鹿なことが……」
「ないと思うか？　くく……だが真実だ。今の私は寿命が存在しない永遠の魔王……！　だからこそ、魔王をやめる必要はない……！」
「……っ！」
――ジルは、自分が永遠の魔王になっていることをガイに教える。
それはガイにとって、いや、人類にとって絶望の事柄だろう。
魔王に寿命が存在すると知らない者にとってはそれほど衝撃ではないかもしれない。
だがそれを知っている者。ガイのような者には絶望を与える情報であった。
ジルが魔王を退けばこの地獄は終わる。そう思っていただけに。
「だからガイ……お前は何も心配する必要はない。お前も、そしてレオンハルトもこれからずっと、永遠に可愛がってやる……！　くくく、はははは……！」
――おそらく、ガイは今絶望を顔に浮かべているのだろう。
ジルもまたガイの人間に対する気持ちを理解しているがゆえに。その事実を教えてやることをずっと楽しみにしていた。
そしてたった今、その楽しみが実ったのだ。ガイの絶望と諦め。そ

の表情から生じているであろう心の動きを思って味わっている。
「……ざけるな……」
――だが、ガイはそこで声を漏らす。
ジルの底無しの悪意に対し。ガイはある感情を沸々と湧き上がらせる。
「ふざけるな……！　ふざけるなッ！　なんで、そんな……！　そんなことが……！」
「ふっ、くく、くくく……！　どうしたガイ、何をそんなに怒っている。魔王が死なず、永遠の存在になったんだぞ？　私の忠実な魔人として祝福してはくれないのか？」
「ッ……ありえない……！　誰が、祝福なんてするものか……！　私は、そんなことは許さない……！　許してたまるものかッ！」
――ガイはずっと、そのことだけを希望に生きてきたのだろう。
魔人となって希望が失われても。ジルに支配されようとも。魔王の寿命という事実を知ったがゆえに、今日まで魔人としての生に耐え続けてきた。
だからこそ、それが失われた時――ガイの怒りは爆発する。
「……ほう？　許さないと来たか。ならばどうすると言うんだ？」
「決まって、いるだろう……！　私は、私は……戦う！」
ジルの愉悦。興味本位からの問いかけに、ガイは絞り出すような声で告げる。
それは本当に振り絞った覚悟の発露だっただろう。ガイにとっては、1度叶わなかった戦いへの決意だ。
それもあまりにも無謀な。それゆえに、ジルはそれを聞いても本気にはしない。
「……くく……ははははっ……！　戦う？　戦う、と……そう言ったのか？　ガイ……！　お前が、この私とか……？」
「ああ……そうだ……！　ジル……お前が、魔王であり続けるなど……私は許さない……！　それを阻止するためなら、私は戦ってやる……！」
ジルはガイの覚悟をあざ笑う。嘲笑する。

だがそれもそうだろう。ジルにとってそれは、あまりにも滑稽であるからだ。
魔人ガイは決して弱くはない。彼との戦いは同じ魔人であっても油断ならないものになるだろう。それこそガイが本気で相手を殺す気であれば相手の魔人もまた全力での戦いを強いられる。
「戦う、か……くく、そうか……」
だがそんなガイの強さも――魔王からすれば足元にも及ばない。
いや、そもそも絶対命令権の存在が魔人の反抗を許さないのだ。魔人ではどれだけ強かろうとも魔王に逆らうことは出来ない。
そして仮にそれが許されたとしても、だ。
「例えばこんな風に、か？」
「ッッッ……！　ぐあああああああああっ！」
――残酷なまでの力の差が存在するのだ。
それは例えるならムシと人間だ。
吹けば飛ぶような小さな動植物が人間相手に凄んでも何ら脅威を感じない。人間からすれば片手間に踏み潰せる程度のものだ。
それと同じだった。ジルの戯れに放ったと思われる黒い魔力の串に貫かれたガイは絶叫を響かせる。
「ははは っ……！　次は、こういう趣向が良いのか？　だったら受け入れてやるぞガイ……！」
「っ……！」
ほんの僅かな力の発露に城内が震え上がる。
大陸最強。地上を支配する魔王の力。
地上を生きる全ての生き物に恐怖を与える絶望の存在が放つ魔の気配は、直接ぶつけられていなくとも並の魔物や人間であれば戦意を喪失させてしまい、最悪死にすら至らしめるほどのものだ。
それを直接ぶつけられているガイの感じている圧力はそれ以上だろう。ジルもそれを理解している。ゆえにガイがどこまで耐えられるかを試して楽しんでいるのだ。その破壊への衝動を発散するように。
「……！　戦うことを……受け入れるのか……？」

「……ほう？」
――だがガイは、そこでもまだ折れない。
ジルに対し、強い敵意を、戦意を見せつける。
魔王の暴威に折れない下僕の姿に、そこでジルは更なる興味を覚えたのだろう。ゆえにそこで――ジルは告げるのだ。
「……くく、くくく……そうか。それならば戦ってやってもいいぞ」
「……っ」
――戦うことを、逆らうことを許容する。
「私を殺したいのだろう？　それならば今すぐにあの魔剣を持って私に斬りかかるなり、あるいは策でも講じて準備をしてくるがいい」
「……どういう、つもりだ……？」
「どういうつもりも何もない。お前の希望を呑んでやろうと思ってな……いつも可愛がっている下僕たっての願いだ。たまには餌をくれてやらなければな」
それは、魔王の余裕の表れだ。
そしてジルのガイに対する戯れでもあった。魔王と一魔人の戦いなど成立するわけがない。魔王が本気であれば何をしようと魔人に勝ち目はない。逆らうことすら出来ないから。
「だから好きにしろ。その怪我も治してやる」
ゆえにこそジルは戯れの一環としてそれを許してやる。
自分でガイに負わせた傷すら回復し、戦いたいなら準備をしてこいと鷹揚に構えてみせる。
その完全に馬鹿にした、下に見た態度にガイもまた苦悶の表情を浮かべるしかない。
「っ……後悔、するぞ……！」
「くくく……そうか。それは楽しみだな……！」
「くっ……」
ガイはそこで浴室から飛び出る。そして部屋の中にいたレオンハルトと目が合った。
「……」
「レオンハルト……」

レオンハルトはそこで大人しく控えながら、ガイに冷たい眼差しだけを送る。特に思うところもない。敵意もない。そんな表情で。
「っ……」
そしてガイもまたその対応に何も言わずに衣服を取ってから去っていく。
レオンハルトもまたそれを何も言わずに見送った。気配が離れていくのを感じ取りながらも、続いて出てくるジルに向き直る。
「……よろしかったのですか？」
「くく……別に構わない。それよりも喜べ、レオンハルト……お前にも久し振りに戦う機会を与えられてやるかもしれないぞ……！」
「戦うのはジル様ではないと？」
「いや、ガイが挑んできたのならば遊んでやる。だが……もしガイが他に仲間でも連れて来ようものならそれを奴の前で叩き潰してやる必要があるだろう？　ガイを折ってやるためにもな……！」
臣下としての態度でその是非も問うも、ジルは戯れとしての対応を隠そうとしない。
仮にどんな戦いになろうとも、ガイを嬲って遊ぶつもりなのだとジルはレオンハルトに示した。
「……分かりました。では念のため準備を進めておきます」
「ああ、そうしろ……もしもの時のためにな……くく、戦争ごっこに興じる準備をしておけ……ガイが本気ならお前もそれなりに楽しめるだろう。その時は、一緒に楽しませてやる……！」
「……はい。承知しました」
そしてレオンハルトに命じる。戦いの準備をしておけと。
ガイが単独で挑んでくるにしろ、徒党を組んでくるにしろ、遊んでやると。
永遠の魔王として、お気に入りの下僕と戯れるのも悪くはないとジルは機嫌良くその〝戦いごっこ〟。あるいは〝戦争ごっこ〟に臨むつもりだった。
――永遠に魔王であり続けようとするジルとそれを許さずに反抗することを決めたガイ。

――遊び感覚で戦いを受け入れるジルと本気でジルを殺そうと覚悟するガイ。
２人の感覚の違い。
ガイの決死の覚悟とジルの許容による戯れ。
そしてそれが後に――〝魔王戦争〟と呼ばれる戦争の引き金になる。

二度目の決意

人狩りは魔軍に所属する兵にとって定番かつ人気の娯楽である。
普段は人間牧場の警備や管理を行っている魔物兵らは時折、上官である魔物隊長に誘われて野に出る。
時には魔物兵だけで何となくそこらを散歩して見つけた人間を襲う――なんてこともあるが、人狩りは最低でも1部隊以上で行うのが基本とされていた。
理由は当然、安全を期するためである。幾ら人間が弱いと言っても数体の魔物兵であれば負けて死ぬこともないことではない。
そして魔物討伐隊と遭遇してしまえば瞬く間に狙われて狩られてしまうのだ。
それを防ぐためには集団で行動することが最も効果的だと知られている。何しろ魔物討伐隊は大規模なものでも精々１０００人程度の集団であり、魔軍の一個軍と比べればその差は大きい。
数でも力でも劣ることを理解している魔物討伐隊は、大規模な魔軍の軍勢と直接ぶつかり合うことはしない。戦う時は野良の魔物か、一個部隊以下の軍勢を狙う。
ゆえに複数の部隊で固まっていれば安全とされていた。もっとも、それでは狩りを楽しめる者が減るという問題もあるとはいえ、その基本は守られることが多い。
「おらー！　死ねー！」
「人間如きが魔物様に逆らうんじゃねぇよ！」
ゆえに今日もまた、ある魔物隊長は仲の良い複数の魔物隊長と自分達の部隊を率いて人狩りへ出ていた。
彼らの楽しみは拷問と凌辱、そして輪姦である。
牧場の人間では楽しめない人間の反応を楽しむためにあえて野良の人間を狙う。男であればその時思いついた適当な拷問で遊び、女は出来る限り嫌がるように犯す。家族がいればその前で。恋人がいればその恋人を拷問しながら。子供がいれば先に子供を殺してみたり。女の子であれば趣味じゃなくても犯してみたり。

人間基準で言えば鬼畜の所業を、彼らは好んで行っていた。
しかし彼らは魔物である。魔物であるがゆえに同族ではない人間の悲鳴や痛みは何ら心を傷ませることはない。
ゆえに今日もまた自分達の趣味を楽しむ一日となる予定だった――魔物討伐隊と遭遇するまでは。
「隊長！　押されています！」
「くっ……ふざけるな！　何をやっている!?　相手は人間だぞ！　人間如きに負けるなど魔物の恥だ！」
「し、しかし……あいつら、かなり強くて……」
「泣き言は聞かん！　泣き言を言う暇があったら殺せ！　魔物に舐めた真似をした人間を許すな！」
「は、はっ！」
魔物隊長は強い言葉で部下に発破をかける。
そして自身もまた大剣を用いて戦っていた。人間相手に。
だがその人間の集団はただの人間ではない、魔物討伐隊であり、その大多数が鎧や兜を身に付けた戦士であった。
それはかつて、多くの人間の国があった頃であればこう呼んだであろう。
「舐めた真似してくれてんのはどっちだ、クソ野郎」
「ッ！　ぐあああああ！」
――騎士、と。
「た、隊長がやられた!?」
「おいどうすんだ！　俺たちはどうすれば……！」
「冗談じゃねえ！　正面から隊長を殺せるような相手と戦えるか！」
「おい逃げるなよ！」
「ひ、ひえ～！　お助け～！」
重厚な鎧と兜を身にまとった騎士の一刀によって断末魔を響かせて倒れた魔物隊長に、魔物兵達も統制が取れずに動きが散漫になる。
「今だ！　やれ！」
「逃げる者は追うな！　残る魔物だけを片付けろ！」
騎士の中で分隊長と思われる者達が声を上げ、指示を出すと騎士た

ちは一斉に魔物達を叩き始めた。盾と鎧でガードし、剣や槍などの武器で攻撃する。
後衛には少ないながらも神魔法と用いるヒーラーや魔法使いも存在する。基本に忠実かつ練度の高いその部隊にとって、３個部隊程度は敵ではなかった。
「チッ……逃げやがったか。腰抜けめ」
そして3体の魔物隊長を全て斬り伏せたこの魔物討伐隊――「鋼の騎士団」の隊長であるその人物は殺しきれず逃げていった数体の魔物兵の背中を見て吐き捨てる。普段は偉ぶって弱い人間を虐めてる割に、いざ自分達がやられる側に回るとその弱い人間以下の言動を見せる。
そう――彼女は魔物が嫌いだった。
「お疲れ様です。お嬢」
「お嬢じゃねぇ。隊長って呼べ」
「っとと。すみません。癖で」
「チッ」
やがて見える範囲に魔物が見えなくなると、騎士団の副隊長と思われる体格の良い中年の騎士が隊長と思われる女性の騎士に近づき声をかける。
そして子供扱いをしてくる副隊長に隊長である彼女は表情を歪ませて舌打ちを行った。
とはいえそれも癖であり本気でキレるほどの苛立ちではない。
彼女が本気でキレるのは、自分たち人間をクソッタレな目に遭わせている魔物だけだ。
ゆえに彼女は、鋼の騎士の異名を引き継ぐ一族の正統後継者である彼女は怒っていた。
魔物と自分――そして、このような状況を招いたとされる自分の祖先に対し。
「……まあいい。それよりもさっさと移動すんぞ。増援を呼ばれちゃ厄介だ」
「ええ、そうですね。――あ、それとおじょ……隊長。帰ったら客人と

の予定が入ってるんでそっちにも顔出してくだせえ」
「あ、客人？　誰だ。〝商会〟か？　それともまさか〝影〟じゃねぇよな？」
「そのどっちでもなくてＪＡＰＡＮから来た魔物討伐隊らしいです」
「どこの馬の骨だそりゃ。田舎から来た雑魚と仲良くする趣味はあたしにはねぇぞ」
「そう言わんで会ったってください。同じ人間。同じ魔物討伐隊の仲間じゃないっすか」
「チッ……しょうがねぇな」
今日何十回目かにもなる舌打ちを行い、彼女は先代から仕えている副隊長の頼みを了承する。
鋼の騎士団の隊長として人間を守るのは大事な務めだ。
だからこそ同じ人間に手を出すような外道であればともかく、そこいらの人間であれば気に食わなくとも舌打ちをしながら受け入れる。
だが、そうやって人を守るよりも。
「それよりも魔人を殺せる剣の捜索にもっと力を入れろよ」
「そっちもちゃんと探してますよ」
「早くしろよ。それが見つかりゃ……こんなクソッタレな生活ともオサラバ出来るかもしんねぇんだからな」
――彼女は、魔物を殺すことを目的としていた。

『ガイ！　おいガイ！』
「はぁ……はぁ……」
魔王城の廊下でガイは呼吸を乱していた。
その焦燥した表情。動揺は尋常ではなく、ガイが帯剣している魔剣カオスもまた心配して声を掛ける。
『一体何があった？』
そして壁に手を突いてもたれかかるガイの側にはカオスの他にもう１人の姿もあった。
魔人ガイの使徒であるレーモン・Ｃ・バークスハムである。バーク

スハムはガイがジルに呼び出されている間、カオスを預かって近くの廊下で待機していた。
だが、ガイが部屋から出てくるなり焦燥していたため落ち着いた様子でカオスと共に声をかける。その答えを半ば知りながら。
「……ジル様の部屋で何があったんですか？」
「……ジルが……死なない……！　魔王が、居なくならないんだ……！」
『なんじゃと……!?』
「……それは……」
ガイの答えが絞り出される。
そしてそれはバークスハムの予想と外れるものではなく、カオスにとっても気持ちを同じくするものだった。
魔王の寿命が１０００年であることを知っている彼らにとって、ジルにも寿命があることはこの地獄のような世界における一筋の希望であった。
だがその希望は呆気ないものだった。ジルは魔王であり続ける。
誰かが止めない限り永遠に。だからこそ、
「……ではガイ様。これからどうするので？」
「……私は……ジルに宣戦布告した。奴と戦う……それを決めた」
『そんなことをして……大丈夫なのか？　今のお前は魔人じゃぞ』
「問題ない……ジルはそれを許した。お遊びとしか思ってないらしい……私を打ちのめして楽しむつもりだろう」
『っ……』
戦うことを決めたガイ。だがそんなガイの決意をジルはお遊びとして見ている。
自分の下僕が逆らってくるのもまた下僕で楽しむ可愛がりの一環であり、余興でしかないのだ。寿命がなく、圧倒的な力を持つ魔王ジルにとって時間をかけることも下僕が逆らうことも問題にはならない。それが楽しみに繋がるのだから余裕を持って受け止めることが出来る。
それでもガイのようなお気に入りでなければ捨てられるだけだろ

うが……ガイにとっては、その扱いは不服でも都合が良いことに変わりはない。
「では戦うことは問題ない。絶対命令権によって阻止されることもないと……そういうことですね」
「ああ……だからこそ、これから私は動く。魔王を……ジルを倒すために」
ゆえに自分にも僅かながら勝機があるとガイは考える。
魔王が本気なら戦いは成立しないだろう。ましてや準備を整えることなど無理な話だ。
だがそれを許すと言うならばやりようはあるはずだ。強大な敵を倒すのに、真正面からぶつかる必要はない。必要なのはなんでもすることだ。人間時代、魔物討伐隊として生きていた頃の経験をガイは思い出し、ガイは足に力を入れて再び立ち上がった。
「……カオス。協力してもらうぞ。それに……バークスハム。お前は……」
「勿論――お供致します」
バークスハムはガイの僅かな迷いに対し、迷いなく付いていくことを示す。
それを聞いてガイは目を見開いた。幾らジルが許したからといって危険を伴わないわけじゃない。最悪、殺され――いや、死ぬよりも辛い責め苦を受ける可能性だってある。
だからこそガイは、魔王に対して特効を持つカオスと違ってバークスハムに関しては付いてこないならそれでも構わないと思っていたが……どうやらそれは杞憂。余計な心配だったと気づく。
「……いいんだな？　最悪、死ぬことになるかもしれないが」
「使徒であれば、主に尽くすのは当然のことです。そして私個人としても、私はガイ様に付いて行きたい。そう思っていますので」
再度の確認の言葉にもバークスハムは淀みなく答える。迷いも悪意も存在しない。それを聞けばガイの方もまた腹を決められた。
「……分かった。お前のことも頼りにさせてもらう」
「ええ。頼りにしてください。この予知のバークスハム。全霊を持っ

てガイ様。あなたの力になりましょう」
「ああ」
バークスハムが使徒になってから既に長い時が経っている。ガイもまた彼に信頼を預けていた。――便利な手下として扱うもう1人と同様に。
（……俺は手伝わんからな）
（……！）
それは内心で生まれた言葉。今表に出ているガイだけが聞くことが出来るもう1人のガイの言葉だった。
表のガイは裏のガイのその消極的な態度に眉間に皺を寄せる。そして同じく内心に言葉を作った。
（貴様は……悔しくないのか？　ジルが永遠に君臨するなど……）
（チッ……ジルに勝てるわけないだろうが。戦ったところで無駄に苦しむだけだからな）
もう1人のガイは現実的に物事を考えていた。ジルと何度も交わっているガイは、あるいは今表に出ているガイよりもジルの脅威……いや、恐怖を思い知っている。
（だから表に出して苦しみを俺に押し付けるようなことはするなよ。後殺されるな。負けた時は命乞いしろ）
（っ……ああ、安心しろ。お前のような者に頼ろうとは思わない）
（本当は戦うこともやめさせたいくらいなんだから許してやるだけ感謝しろ。ふざけやがって……ジルと戦うってことは他の魔人……あのレオンハルトともまた戦うってことだぞ……勝ち目なんてあるわけないだろ馬鹿が……）
もう1人のガイの答えを求めない呟きが内心で響く。
表に出ているガイはそれを聞いて、また別の思いを抱いた。それはもう1人が言うように。
……レオンハルト、か。確かに、奴が立ち塞がるならジルの討伐も容易ではない……。
ガイはレオンハルトという魔人のことを思う。その強さも、性格も、ガイはそれなりに知っているつもりだった。

それだけにレオンハルトがこちらに無機質な目を向けてきた時は裏切られたような気持ちになった――が、ガイはそれを憎しみに変えるのを辛うじて思い留まる。
レオンハルトは魔人の中でも人間に対して慈悲深いことは理解している。人間牧場の運営方法や人間街の存在。人間を下級使徒として召し抱え、カラーの森を保護していることも知っている。
だからこそ人間を苦しめるジルに対して良い感情は抱いていないと踏んでいたが、それ以上にレオンハルトには守るべきものが数多く存在する。
……レオンハルトがジルと敵対すれば、当然その配下もまた危険に晒される。
ガイはそのことを思い、そして自身の友人であるレオンハルトの娘――白兎のことを思った。
ゆえにレオンハルトの態度にも理解を示す。魔王の懐刀であり続けることは、彼が彼自身の大切なものを守り続けるために必要なものなのだと。
だからこそ憎しみには至らず、ガイはぐっとその気持ちを飲み込んだ。当然だが、悪いのはレオンハルトではなくジルだ。それを履き違えてはならない。
『だがガイ。戦うにしてもどうする気じゃ？　儂やバークスハムとお前だけじゃさすがにどうにもならんじゃろう』
「……ああ。だからこそ、まずは仲間を……いや、同志を集める」
そしてガイがレオンハルトに対する感情を消化したと同時に、カオスから現実的な具体案を求められたためガイは答える。
単独で戦っても勝ち目が薄いなら協力者を募るしかないとガイはすぐに答えを得ていた。
敵は魔王ジルとその配下だ。仮にジルが命令せずとも、自らジルに反逆した自分を叩き潰そうと出張ってくる魔人の存在には何体か心当たりがある。それらを全て自分で相手をしてはただでさえ少ない勝率が０にまで落ち込みかねない。
「同志……ですか。なるほど」

「ああ……だが、魔人は当てに出来ないだろう。ジルに逆らってまでこちらに味方する者がいるとは思えない」
『ってことはつまり……』
「ああ――人間に協力を求める」
ガイは力強く言い切る。そう、必要なのは仲間ではない――同志。
魔王を倒すという目的のために、自らの命を捧げられる存在こそをガイは求める。
昔のように自分1人で、など甘いことは思わない。捨て石はどうしたって必要になることをガイは理解していた。
だがそれでも頑丈で強い石ころが必要だ。
そして捨て石である覚悟すら自ら持てるのが理想だが、あるいは騙すことも必要だろう。そうして死への道をガイ自らが舗装して向かわせるのだ。
その果てに――ジルを倒す。その大義名分を掲げて。
「時間が惜しい。まずは人里に向かおう。バークスハム、ここから1番近い人里は？」
「……それでしたら幾つか心当たりがあります。そして、協力してくれる同志についても可能性を感じるのが幾つか。なのでお任せください」
「なら頼む。行くぞ」
「はい」
バークスハムの判断を信じ、ガイは歩き出す。
魔人の身でありながら、再び人と交わることを選んだガイはその足で人里に向かっていった。

――大陸東部、レオンハルトシティ。
人間にとって新年を祝う風習は今や忘れられたものだ。
それもそうだろう。常に身の危険を感じている人間がそのような風習に興じている余裕はない。
ましてやこの街のように大々的に正月休みに沸いてゆっくりして

いるわけがなかった。牧場や収容所では今日も人間が虐げられ、労働が始まっている。
例外があるとすれば人間街と、レオンハルトの居城である紅魔城くらいのものである。
その２つの場所では人間もまた家族や愛する者と過ごす正月休みを楽しんでいた。そう、家族との楽しい日常を――
「――ほらほら！　逃げるならもっとしっかり逃げな！　そんなんじゃあたしには勝てないよ！」
「まず勝つつもりもねーよ！　ぐおおおおおっ!?」
――そう、楽しい日常を過ごしていた。
正月とは普段は忙しい家族もまた実家に集まり、共に過ごすものである。
それゆえ紅魔城の中庭では魔人レオンハルトの子供が一堂に会し、そして使徒のハンティによる可愛がりを受けていた。
彼らにとっては定番の〝殴り鬼〟の耐久版〝耐久殴り鬼〟――ハンティが鬼になり、殴り返すまで、つまり攻撃をヒットさせるか時間が来るまで終わらない訓練でありゲームを行っており、つい今しがたハウゼルとの子であるカイゼルがハンティにぶん殴られて壁際まで吹き飛ぶ。
「ふむ……相変わらず容赦がありませんね。さすがはハンティさんです……」
「正月でも関係ないゴリラっぷりは恐れ入るな……ふむ、これはグリーンアイに組み込めるか……」
「分析してねーで助けろよ白兎姉！」
「いえ、私はもう攻撃を当てましたので。後はお姉ちゃんとして皆を応援します。なので頑張ってくださいね」
「クソ！　もうクリアしてんのかよ！」
そしてそのハンティの容赦のなさを見て感心するのは長姉の白兎であった。彼女はハンティと同じくレオンハルトの使徒であり、レオンハルトや親達がいない今、戦闘データの収集兼見守りという役目についている使徒のガウガウと共にそれを眺めていた。

レオンハルトの1番上の子供として下の弟や妹たちがにぎやかに過ごしているのを見るのは中々楽しいものがある。今もカイゼルが何度目かの攻撃を食らって怒っているが、
「つーか白兎姉だけじゃねぇ！　全員どこ行きやがった!?」
「はぁ……はぁ……やっぱり、馬鹿兄貴は囮にするに限るよな……ぜぇ……ぜぇ……」
「って、おい豚ァ！　何逃げようとしてんだ！」
「ぶ……豚って言うな！　お、親父に言いつけるぞ馬鹿兄貴！」
「うるせーよ豚！　サボってねぇでテメェも戦え！　チャーシューにすっぞ！」
「揉めてる場合じゃないよ！」
「ぐおおおっ!?」
　ベゼルアイの息子であるシュヴァインが大して動いていないのに汗をかいて息を乱しているのを見つけてカイゼルが怒りを見せる。
　だがそれもまたハンティにとっては隙だった。瞬間移動は使わない、素早い動きで距離を詰めると再びカイゼルに攻撃を加えて吹き飛ばすとハンティは次にシュヴァイン――ではなく、その横の茂みに隠れている2人に視線を移した。
「リリーフ！　それにルイゼル！　見つけた！」
「げっ、見つかった!?」
「ちょっとぉ！　バカイゼルに豚くんがこっちで騒ぐから見つかっちゃったじゃない！　やられるなら2人だけやられてなさいよ！」
「だから……豚って言うなって……言ってんだろ……ぜぇ……ぜぇ……」
「う……うるせぇよルイゼル！　ずっと殴られてる俺の身にもなりやがれ！」
「カイゼル兄さん！」
「あ、なんだリリーフ……サイン？」
　隠れていたサイゼルの娘であるルイゼルがカイゼルとシュヴァインに向かっていつものように文句を口にし、ハウセスナースの娘であるリリーフはカイゼルにサインを送る。

「何々……送りバント？　――って、意味が分かんねーよ！　おわァ!?」
「あーやっぱ分かんないかぁ……ならしょうがないわね……行くわよ！　アプリ！」
　そして野球のサインであることを知って吹き飛ぶカイゼルに呆れたリリーフは同じく聖女の子モンスターのセラクロラスの娘であるアプリに声かけ、バットを握って共にゴリラ退治に向かおうとした。
「……で、そのアプリは？」
「……あれ？」
　だがそのアプリはいなかった。リリーフが頭に疑問符を浮かべ、その間にハンティはリリーフに雷撃を放つ。
「うひゃああ!?」
「あー惜しい！　バント失敗だね！」
「……って、アプリ……あんたまたサボり？　しかもまたミコトを買収したでしょ」
　リリーフが魔法の直撃を受けて痺れる中、ハンティは声がした方向に向き直る。そこは中庭の中心であり、居候のライゼンの頭上だった。そこにはアプリと、そのアプリを抱えているメイド長さんの娘であるミコトがいて。
「ふふん！　おやつを上げたら喜んで言うこと聞いてくれたよ！」
「ん……羊羹美味しい……もぐもぐ」
「てめー！　アプリ汚ねーぞ！　おい、ミコト！　俺のことも守ってくれ！　俺の部屋にある湿気った煎餅2つやるからよ！」
「だったらルイゼルちゃんのことも守ってくれていいわよねぇ？　ほら、カイゼルより良いものあげるわよ！　具体的には食べかけの饅頭3つよ！」
「あんたら、微妙にセコいね……っと！」
「んっ……同感」
　カイゼルとルイゼルに呆れツッコミを入れながらもハンティは魔法をミコトらに向けて放ち、同時に距離を詰めようとする。
　対してミコトはライゼンの顔を遮蔽物にしてそれを防ぐと素早く

アプリを抱えたままバックステップで逃げた。
「……おい、お前たち。遊ぶのはいいが俺の上で戦うのはやめないか？　こっちは食事中なんだが……」
「諦めろライゼン。今のハンティはゴリラモード。戦闘に夢中で周りがあんまり見えてないからな。……ところでその肉美味しそうだから少しもらっていいか？」
「そこはドラゴンモードと言ってほしいところだが……」
それらの動きを見たライゼンが更に呆れ、ガウガウに肉を分け与える。
そしてその間にも殴り鬼には変化があった。逃げたミコトのクナイをハンティが軽く剣で弾いたのを見て、
「――行くぞライブラ」
「はい！　兄上！」
「！　おっと……！」
その隙を突くようにハンティに肉薄していったのは拳を構えたケッセルリンクの息子であるアルベルトと、大鎌を構えたインデックスの息子ライブラだった。
その２人の連携攻撃を受け、ハンティは対応に迫られる――が、それでもまだハンティに攻撃をヒットさせるには至らない。
「連携してくるのはいいけど力不足だよ！」
「まだ始まったばかりだ……！　ふん！」
「今日こそは一本取ってみせますゆえ！　お覚悟を！」
「出来るといいわね！」
「！」
アルベルトの拳を躱したハンティが、そのままライブラの大鎌の横ぶりをくぐり抜けるように避けて背後に回る。
そこでハンティは足を振りかぶった。ライブラに向けて、一応は手加減した蹴りを叩き込む。
「う！」
「ライブラ！」
「弟思いはいいけどよそ見してる場合はないよ！」

「くっ……！」
ハンティとの攻撃と防御の応酬を行うアルベルトは吹き飛ばされたライブラを助けに迎えない。
だがそのライブラは吹き飛んだ先で別の人物によって図らずも助けられた。それは偶然その場所にいたカイゼルで。
「う、ううっ……痛い……だがこれしきで……！」
「お、おい……大丈夫か……？　怪我とか……（ちょっと涙目じゃねぇか……クソ……なんでこいつ弟のくせにこんなに可愛いんだ……？）」
「っ……！　さ……触るな愚兄っ!!」
「へぶっ!?」
しかし邪な視線とその身体に触れられていることを感じたライブラがカイゼルの顔をビンタする。
そしてその後にカイゼルがライブラに文句を言って軽い喧嘩が始まるが、その間にもハンティはアルベルトを追い詰めていた。
「あんたもやるようになったけどまずは一本！」
「ぐっ……！」
粘りを見せていたアルベルトにハンティが一撃を加えようとする。
だがアルベルトもタダでは終わらない。攻撃を食らうことを覚悟でハンティの剣を弾いてみせた。そしてそれに気を取られたその瞬間に。
「――隙あり」
!?　ミコト……！　（しまった……！　でも何とかガードは間に合う……！）」
背後にミコトが迫っていた。ミコトはそのクナイをハンティに振るおうとするも、この一刀だけならまだ辛うじてガードされる。
ゆえに奥の手はそれだけではなかった。
「ふ～……♡」
「ひゃんっ!?」
同じくミコトに降ろされてハンティに近づいていたアプリが、ハンティの長い耳に向けて息を吹きかける。

するとハンティはらしからぬ高い声を上げて身体をビクッと跳ねさせた。
そしてその間にミコトとアプリはそれぞれ手でハンティの身体に触れて。
「あっ……」
「いえーい！　クリアー！　やったねミコトちゃん！　ぶいぶい～！」
「……ぶい」
ミコトはデコを。アプリは尻に向けて攻撃というには優しすぎるタッチを行い、２人はピースサインを作って喜びを見せた。
しかしハンティの方は何をされたのか理解すると軽く眉を立てる。
「ちょっとアプリ！　今のは……！　な、何してんのよ!?」
「えーなんでもありだからいいでしょ？　ルールはちゃんと守ってるわけだしねー！」
「うん……ルールには従うべき」
「くっ……」
（今のハンティさん……ちょっとエロかったな……）
（あのハンティさんに女を出させるとは……）
（アプリちゃん、恐るべし……）
（不覚にも勃っちまった）
少し顔を赤くして歯噛みするハンティを見て、シュヴァイン、アルベルト、ルイゼルがそれぞれ何とも言えない気持ちを抱く。カイゼルはチンポジを整えていた。
そしてハンティも、今の自分の恥ずかしいところを誤魔化すように静かに口にする。
「……こっからは瞬間移動もありね」
「なっ……おいふざけんな！　それは無しってルールだろうが！」
「そーよそーよ！　ルールは守りなさい！」
「横暴よ！　スポーツマンシップに則ってよね！」
「いや、リリーフが言えることじゃないだろ……」
「うっさい！　とにかくこっからはもうちょっと本気で行くよ！」

「ぎゃー!?　ってまた俺かよ！」
　ハンティの瞬間移動解禁という言葉に子供たちから文句が噴出するも、ハンティはその不満を一蹴して瞬間移動でカイゼルの眼前に移動して蹴りをお見舞いする。
「賑やかでいいですね。私もまた混ざりたくなってきました」
「あはは……楽しそうでいいですよね」
「きー！」
「ゲへへ……そ、そうですかい（やっぱり正気じゃねぇな……って、見てる場合じゃねぇ。僕ちゃんはこの機会にミストラルちゃんとの距離を詰めるぜぇ～）」
（……またなんか不愉快な視線を感じるわね）
　そしてそれを見ていた外野――白兎の発言にアルベルトの使徒であるメリルが明るい笑みで同意し、カイゼルの使徒であるスケアクロウが媚びへつらいながらも隣にいるルイゼルの使徒であるミストラルの顔や身体に下卑た視線を向ける。
　そしてそれら全てのやり取りを何となく認識しつつ、白兎は心の中でも感想を口にした。
　……やっぱり賑やかでいいですね。
　正月に家族や親しい者と過ごすことは白兎としても満足が行くものだ。
　先程までは城から帰ってきたレオンハルトやそれぞれの母親もいたが、今は別の部屋にいて子供たちだけの時間を作っている。そのことについても白兎は不満はない。そういった時間も必要なのだと理解を示していた。
　……ガイさんも来られれば良かったんですが……。
　そして思うのはこの場にいない友人のことだ。
　だがしょうがないことだとも理解している。白兎の友人、ガイは友人であっても家族ではないし、この城に迎え入れられるほど白兎の親であるレオンハルトと強い信頼関係を築けてはいない。
　なので正月に一緒に遊ぶことは難しい――が、出来れば近い内にまた集まること自体は出来るだろう。

……後でパパにお願いしましょうか。

城に入れることは無理でも友達同士で遊ぶことは問題ない。なので白兎は後で父親に許可を貰おうと決めながらも、今は自分の弟や妹達との時間を楽しむのだった。

欲望

魔王は全ての魔物に人間を苦しめるように命令を下した。
それゆえに多くの人間を虐げるのは魔物である。これに間違いはない。
だが……人を苦しめるのは何も魔物だけではない。
「おい……今回の入荷はこれだけか？」
「はい。牧場にいた兵がいつもより多くて……」
「またか。最近はカラーの調達も難しくなってるし景気が悪いな」
「カラーを大勢手に入れられれば人間の奴隷なんか目じゃないくらい儲かるんですがね。――おら、何止まってんだ。さっさと歩けよ」
「こ、ここは……？　――うっ！」
「余計な疑問を持つな。さっさと行け。ここでは俺達のことを牧場を管理してる魔物だと思って大人しく従うんだ。従わないなら殺す。いいな？」
「……は……はい……」
それはかつての人の世と何ら変わらない光景であった。
とある迷宮の奥深く。地下に作られたそのアジトはとある魔物討伐隊の本拠地である。
その名を〝影の楔〟と言う。
忍者の開祖。その末裔が結成したとされるその組織は、鋼の騎士団と並ぶ大規模な魔物討伐隊でありながら、その在り方は普通の魔物討伐隊と大きく異なる。
魔物だけでなく――人も彼らの獲物であるのだ。
影の楔は生きるためならなんでもする。魔物も殺すし、人も殺すし、誰からも奪うしなんだって利用する。
隠れ潜む人間を攫うこともあるし、人間牧場からも攫って奴隷の調達もする。
「……なあ、少しまけてくれないか？」
「駄目ヨ。野良の人間奴隷は１人１０００Ｇ。女ならその倍アル。それ以下をお求めなら牧場出身にするカ？　それなら５００Ｇもあれ

ば十分ネ」
「くそっ……足元見やがって……」
「何か文句アルカ？」
「っ……いや、なんでもない……」
彼らにとっては同じ人間もまた売り物である。
商売相手は主に同業者や隠れ里に住む人間だ。
キリング商会と違って人身売買や薬などの非合法なものも売っている彼らの需要は人が人である限りなくならない。
「そっちの赤ずきんの姉ちゃん。ちょっといいかい？　へへへ……買えるか？」
「……ああ、買える。だが、どっちだ？」
「……は？」
「どっちだと聞いている。魔物殺しか？　人殺しか？　あるいは盗みか……いや、その感じだと身体か。すまない早とちりした。身体なら一晩８００Ｇだ」
「……す、少し高くないか？」
「当然だ。私は良い女だしここの最高幹部だからな。その分高い。他の娼婦なら２００Ｇから３００Ｇ程度が相場だから金がないならそっちで買った方がいい」
「ッ……そ、そうなのか……分かった。邪魔したな……」
「気にするな。良い夜を楽しんでくれ」
彼らは人の欲に敏感で、その欲に最も正直な集団でもある。
人間は酷く強欲で自分勝手な生き物であることを彼らは知っている。
人は、他から奪わなければ幸福に生きられないことも。
この魔物が支配する世の中では特に、他者を慮っている余裕がないことを彼らは知っていた。
「ゆ……許してください……！　俺達の負けです……！　だから……！」
「……」
そしてその青年もまた――この世界が弱肉強食であることを知っ

ていた。
４０名ほどの人間の死体が転がっているその中心にいる青年のことを周囲の部下達が口々に噂する。
「さすがは隊長だ……！」
「ああ……恐ろしい強さだな……」
「相手も見たところ弱くなかったが……」
「……次の棟梁はやはりグリムリーパー様で決まりだろう。他の四影刃の方々も強いが……グリムリーパー様だけは次元が違うように見える」
「ああ……それにしても、相変わらず不気味だな……見た目もそうだが、何を考えてらっしゃるのか……」
「おい馬鹿やめろ。聞こえたらどうするんだ」
その青年は全身を真っ黒いコートで身を包む白い青年だった。
その髪も、目も、肌も、全てが白で出来ている。
歳は２０代の半ば。顔はどちらかと言えば中性的で整っているが、その色味の無さと片時も表情を動かさない無愛想さが近寄り難さを生む原因となっている。
だがそれでもこの影の楔という集団で彼が受けいれられているのは――彼が、この組織の中でも圧倒的に強いからだ。
影の楔の戦闘部隊長にして最高幹部〝四影刃〟の１人である彼は、その真っ黒い大剣を赤く染めて命乞いをする男の前で佇んでいる。そこそこ名の知れた魔物討伐隊であったが、商売のことで揉めたことで争いが起こってしまった。
なので青年は１人で１人を除いた全員を斬り殺した。
「お願いします……殺さないでくださいっ……！」
「……」
地に頭をつけて必死の命乞いをする敵対者の前で、青年は考える――今日も心が動くことは何もなかったと。
彼は生まれついての不感症であった。
それは正しい意味のものだけでなく、物心がついてから１度も楽しみや怒り、悲しみという強い感情を抱いたことがない。

見た目が他と違う彼はそれが理由で他の子供にも虐められたが、虐められて暴力を振るわれても特に怒りも悲しみもない。
痛いが、痛いだけだ。そもそも痛みは生まれてからずっとあるので感情を動かすのに値しない。陽の光に嫌われ、ちょっとやりすぎる魔物に見つかった彼は赤子の頃から痛みというものをずっと感じていた。
だからこそ彼は他の人間が痛みに泣く理由も怒る理由も分からない。
強いて一つだけ言えるのは死ぬことを嫌がることだけは理解出来る。死ねば何もない。終わりだからだ。それゆえに、彼は感情を抱かずともそれだけは避けるように動いてきた。
そうして彼は人間にしては上等な生活を手に入れる権利を手に入れたが、彼の求めるものはそれでも手に入らなかった。
人よりも恵まれた生活を送れば楽しみや喜びというものを感じることが出来ると思っていたが、それも感じられなかった。他人と何をしようがどうでもよかったし、味覚がないので食事も楽しめない。異性を相手に性欲を満たすことも、不能であるせいで楽しむことは出来なかった。
――ゆえに彼は自分の求めるものを探すために旅に出た。
外の世界は多くの魔物と少ない数の戦える人間がいたが、それらを無視して、あるいは邪魔する者は殺してしばらく過ごした。
そうしている内にこの場所に流れ着いた彼は、食料に困らないことと情報が多く集まること。そして最も人間の欲に忠実であるという理由からこの影の楔に入り、最高幹部にまで上り詰めた。
「……もういい。行け」
「っ……あ……ありがとうございます！」
そうして現在――彼は何かを見つけるためにここにいる。
怒りでも悲しみでも喜びでも楽しさでもなんでもいい。とにかく、自分が心動かされるものを知りたかった。
そしてそれを味わってみたい。
「グリムリーパー様」

「……何だ？」
「棟梁がお呼びです。今すぐ部屋に来るようにと」
「……わかった。すぐに行く。先に行って伝えておけ」
「御意」
だからこそ彼はこの世で最も困難とされるものに興味がある。
コートの襟に隠れた首元。そこに刻まれた〝A〟という記号を右手で撫で、彼は地獄へと落ちていく。
自分の興味――ただそれだけのために。

この地獄のような世界であっても、三大欲求だけは生物に救いを与える。
人間牧場で家畜として虐げられている人間も、その時だけは日々の痛みや苦しみを忘れられるのだ。
日に何度かある食事で腹を満たし、一日の終わりには眠りにつける。
そして種を残すための交尾の時間になれば――特に雄は、苦しみを忘れるどころかこの世に生まれてよかったと思えるほどの快楽を得ることが出来るのだ。
その3つが保証されているという意味では、野良の人間より牧場の人間の方が恵まれているとも言えなくもない。
日々の糧を得ることに苦労し、常に腹を空かせ、魔物への恐怖から満足に睡眠を取ることも出来ず、異性と性行為を行うのも自分で探して口説き落とすなり買うなり襲うなりしなければならない。
もちろん上手くやれば牧場にいる以上に良い思いをすることも出来るだろうが、その上手くやることが難しいことは言うまでもない。
苦労して手に入れたものほど何の苦労もなく手に入れたものより価値がある――なんて考えを出来るほどの余裕もない。労せず手に入れられるならその方が良いに決まっている人がほぼ全てであり、今の世の中は人がどうしたって少なからず苦しむように出来ていた。
とはいえ雄にとって雌と交わってる瞬間はその苦しみを一時でも

忘れられることに変わりはない。
「んっ……♡　つー……れろぉ……♡」
「ちゅぷっ♡　んぅっ♡　はぁ……♡」
「れろ、れろ……♡　ん……ちゅっ♡」
――そしてそれは魔人にとっても同じだった。
その寝室は最も広く大きく豪奢なベッドが置かれており、男にとっての桃源郷のような光景が広がっていた。ベッドの中央には男が1人だけ。周囲には絶世の美女、美少女が男に侍るように、または群がるように身を寄せている。
「では……近い内に大規模な争いが起きると？」
「ああ……だから予め準備をしておく。リーにはカエサルに軍を動かす準備をしておくよう指示を出した。キャロル、お前もこれが終わったら親衛隊に通達しておけ」
「ん……ふぁい……♡　畏まりました、レオンハルト様……♡」
そしてその桃源郷を享受するのは魔人レオンハルトだった。
多くの恋人と関係を持つレオンハルトは魔王城から自らの居城である紅魔城に戻るなり、正月祝いを子供達と共に過ごした後、女達と寝室に入った。
そうして始まるのは世界一、有史一の極上のハーレムである。
ベッドの中心で魔人ケッセルリンクともう1人――レオンハルトに全てを捧げてる悪魔のインデックスが背もたれになり、雄々しくそそり勃つレオンハルトの肉棒には使徒のキャロル、ミシェーラ、そしてイヴが3人がかりで口と舌を使った奉仕を行っている。
「ってことはまたあのガイってのと戦うの？」
「場合によっては、そういうこともありうるだろうな……」
「なら気をつけてくださいね」
「本当よ。また以前みたいに怪我して帰ってきたりしないでよね」
「ああ、善処しよう」
「あっ……♡」
「んっ……♡　分かれば、いいんだけどさ……♡」
「「んっ……♡」」

そしてレオンハルトの身体の両側。左右から抱きつくように身体を寄せているのは魔人ラ・サイゼルとラ・ハウゼルの姉妹だった。
サイゼルは少しひんやりとしていてハウゼルは少し熱い。そんな2人のすべすべで柔らかい身体を堪能し、更に心配をかけないようにレオンハルトは腕に力を込めて2人を丸ごと抱きしめる。するとそれだけでハウゼルとサイゼルが甘い声を漏らした。自然と顔との距離が縮まったため、3人で唇を合わせ、舌を絡めさせる。姉妹の粘膜を同時に口で堪能する甘美さにレオンハルトは確かな快楽を得た。
しかしその贅沢な魔人姉妹の密着Wキスですら、得ている快楽の一部に過ぎない。
「相変わらずですねー。サイゼル様とハウゼル様は。まだまだ新婚さん気分って感じですよう――あんっ♡」
「次は我の番だからな……んっ♡　レオンハルト……♡」
「ああ、もちろんだ。お前達もしっかりと可愛がってやる」
「んっ♡　おっぱいはもう可愛がられてますけどね……♡　んんっ♡
レオンハルト様の大好きなおっきいおっぱい……♡　いっぱい触ってくださいね♡」
「我の乳房はレオンハルトの物だから……♡　んっ♡　好きに、触れて気持ちよくなってほしい……♡」
「ああ……気持ちいいぞ。ペール、お町……」
サイゼルとハウゼルを抱きしめたレオンハルトの伸びた手の先では、使徒のペールとお町がそれぞれ右手と左手を自らの乳房に押し付けてレオンハルトの掌を楽しませてくれていた。この場にいる女達の中でも最も大きい2人の爆乳を、レオンハルトは遠慮なしに両の五指を突き立ててわっしわっしと揉んでそのふわふわもちもちの感触を堪能する。雄の手。それなりに大きい男のレオンハルトの手でも掴みきれないだけの大きさの爆乳は幾ら揉んでも飽きが来ない中毒性のある感触だ。
「んっ……♡　気持ちよくなられてるようで……何よりです、ご主人様♡」
「こんなところでも、んっ♡　乳を味わえるのはあなた様だけですよ

……？　あんっ♡」
「ああ、感謝している……」
そして手だけでなく足の先にはその足をそれぞれ豊満な乳房で挟みこむメイド長さんと副メイド長の紅月がいた。
魔人や使徒がいる場であるため自重気味ではあるものの、レオンハルトの女という意味では対等だ。そして、それぞれレオンハルトとの子供がいるという縁でそのままベッドに付いてきた彼女たちはこの１２Ｐに交わりながらも一日中交わるレオンハルトに対する水分補給やエネルギー補給。あるいはちょっとした後始末や風呂場の準備などもメイドとして行う。
その献身に感謝しながらもレオンハルトは足先もまたおっぱいに包まれるという快感に僅かに息を漏らした。自分の恋人達に全身を包まれて愛されながら奉仕される快楽は何度も味わっているが、何度味わっても良いものだ。
「ふふ……それで、今日は誰から抱いてくれるのかしら？　私ならいつでもいいわよ♡」
「インデックス……そうだな、今迷っているところだ」
「私はいつでも構わない。レオンハルトは、絶対に皆を愛してくれるからな……♡」
「ああ、当然だ……」
背中から抱きしめてくるインデックスとケッセルリンクの言葉にも答える。この中では最も小柄なのに爆乳を持つインデックスと均整の取れたモデルのようなスタイルを持つケッセルリンク。２人のおっぱいクッションで受け止められるのがまた気持ちいい。
こんな風に全身を愛撫されては如何にレオンハルトと言えども長く耐えられるものではない――いや、耐えようと思えば耐えられるが、耐える必要はなかった。
「そろそろ出すぞ……っ」
「んっ……はい……いつでもどうぞ♡　レオンハルト様♡　れろぉ……♡」
「いつでも出してください……♡　ミシェーラ達がお口で受け止めま

すので……♡　はむ……んっ♡　んっ♡」
「レオンハルト様の濃厚な子種がほしいですわ……♡　はぁ……ちゅっ♡　んっ♡　じゅるっ♡　んんぅ……♡」
　股間を見下ろし、そこにいる3人に射精することを告げれば、3人の動きが激しくなった。イヴにミシェーラ、キャロル。可愛い使徒の可愛い顔を見下ろしながら悦に浸る。全員がこっちを見ていた。物欲しそうに、可愛い尻をふりふりと無意識に揺らしながら。肉棒に舌を這わせ、そして咥えて扱いてくる。口内の熱さと舌のぬめりを肉棒の色んな箇所で味わった。
「出る……！」
「あっ♡」
「んんっ♡　んんんんっ♡」
「んっ……♡」
　そして遂に精液を吐き出す。射精箇所はミシェーラの口内だった。3人が順番に咥えていたので誰に出すかは運次第。あるいはレオンハルトの気持ち次第だったが、今回はまずミシェーラである。
　もっとも、順番なんてものはあまり関係ない。結局は全員に数えきれないほど精液を吐き出すことになる。
「んっ……んっ……♡」
「あぁ……羨ましいですわミシェーラさん……♡　わたくしが欲しかったのに……♡　ちゅるっ……ぺろ……♡」
「れろ……んっ♡　口から少し飛び出していますからまずはそれだけで我慢しましょう……♡　ん……♡」
　精液を喉で受け止めて嬉しそうに瞳を閉じながら喉を鳴らすミシェーラを他の2人が羨ましそうにしながらも僅かに垂れてきた精液を舐め取っていく。
　そうして射精の快感を楽しみながらそれを終えれば、ミシェーラもまた口を離した。喉を鳴らし、口を開ける。他の2人も並んで。
「んっ……全部、飲み干しました……♡　レオンハルト様の精液……♡」
「ああ、偉いぞミシェーラ」

「え、えへへ……ありがとうございます……♡」
自分に褒められて普段とは違って顔を赤くしながらはにかむミシェーラを微笑ましく思いながら、レオンハルトは更にその肉棒を振るうべく一瞬の品定めを行った。
順番は関係ない――が、それはレオンハルトにとってであり、彼女達は出来る限り早く抱いて欲しがるものだ。それだけに時に彼女たちの願いを聞いたり、時に我慢している彼女たちを優しく受け止めてやる。
それがハーレムの主として求められる責任である。無論、最も偉いのは1人の雄であるレオンハルトだが、王もまた王らしい振る舞いを民に見せつける必要があるし、男としてもしっかりと彼女たちを愛するべきだとレオンハルトは考えていた。たとえ彼女たちが強く信頼し、愛し、弁えていてもこちらから歩み寄るのも時に必要である。
ゆえに次に誰を抱こうかと贅沢かつ不純な悩みをレオンハルトは行うのだ。それは凄まじく恵まれている。男としては酷く多幸感を感じられ、唆られるものだ。
自分を求めて期待している恋人たち――美女、美少女の可愛さ、美しさを再認識しながら選ぶ。誰もが男の性を煽るのに十分すぎる魅力を持っている。
そしてそれぞれが違うのだ。だからこそ、男が得る満足度は相当なものである。
「イヴ……挿れるぞ。尻を向けろ」
「……はい……♡　ありがとう、ございます……♡」
確かな優越感と幸せを感じながら、レオンハルトはやがて約束通り褒美を与えるためにまずは使徒のイヴに命令して尻を向けさせる。イヴは目を細め、期待と嬉しさを滲ませた微笑を浮かべながら四つん這いになり、命令通り尻をこちらに向けた。
「どうぞ、こちらへ……いらしてください。レオンハルト様……♡」
「ああ、行くぞ……！」
「んっ――♡　あっ♡　ああっ……♡」
イヴがおねだりでもするように可愛く尻を振る。使徒になり、抱か

れるようになってからそれほど経っていないが――あくまで魔人基準では――イヴは飲み込みが早く、そしてその特性から人の内心を慮るのに長けている。こちらが性的興奮を得るやり方も的確であった。そのイヴの膣内に、レオンハルトは自らの肉棒を突き入れた。

「既にとろとろだな……そんなに期待してたか？」

「……正直に言うと、はい……♡　でも、レオンハルト様も期待しておられましたよね？　私たちを抱いてやると、男らしい気持ちが読み取れました……♡」

「……ああ、さすがだ。よくわかったな……！」

「あっ……♡　レオンハルト様のおちんちん……♡　素敵、ですっ……♡　これ……んんっ♡　すぐに気持ちよくなっちゃいます……っ♡」

挿れた瞬間からヒダが強く肉棒に吸い付いてきたことを指摘しながらレオンハルトは腰を振る。自らの肉棒で、女のナカを、イヴの大事なところを突いて互いに快楽を得る。

自分の持つ陰茎で女を貫いて腰を振り、そして喘がせる。悦んでくれるのは雄にとっての征服欲とそれに付随する快楽を強く満たしてくれる。普段は見せない雌としての顔と甘い声を認識する度に精神的な悦楽が興奮を増長させ、全身に快楽を走らせてくれた。

「すごい感じてますね……♡　イヴさんも……レオンハルトさんも、気持ちよさそうです♡　あっ♡」

「ほんと、あんたってスケベよね……んっ♡　またおっぱい揉んで……っ、あんた、おっぱい好きすぎでしょ……♡」

「ああ……好きなのは否定出来ないな……」

だが、相手は1人ではない。

1人抱くだけでも十分な快楽と多幸感を得られるが、レオンハルトの場合は複数人。今回は11人もの美女を一斉に抱いている。

横にいたサイゼルとハウゼルの細い腰を抱いてその巨乳に指を沈めれば2人もまた顔を赤くしてこちらの欲を受け入れてくれる。

「ならこちらも……んっ……♡　好きなだけ感じてくれ……♡」

「良い女のおっぱいならこっちにもあるわよ♡　んっ♡」

「おっぱいなら負けませんよう！　ほらほら、レオンハルト様♡
ペールちゃんの、バカみたいにデカくてなが～いおっぱい♡　好きなだけ楽しんでくださいねー♡」
「レオンハルトの好みに最も合っているのは我の乳房だ……レオンハルト……もっと触ってくれ……♡」
　そして更に、ハウゼルとサイゼルだけでなくケッセルリンクやインデックスが背中におっぱいを擦りつけ、ペールやお町が魔人姉妹に並ぶようにおっぱいを並べて好きに触れるように誘導してくれる。
「ううっ……さすがにあれには勝てませんが……ミシェーラのおっぱいも触れたいはずです……！　ミシェーラには分かります……！」
「おっぱいがお好きなレオンハルト様もすごくかっこいいですわ……♡　はぁ……っ、んっ……見てるだけで……おかしくなってしまいますの……っ♡」
「ふふっ、もしお求めならいつでもお呼びつけくださいませ、ご主人様♡」
「立場では負けていてもおっぱいでは魔人や使徒の方々にも負けていませんよ♡　あ・な・た・さ・ま♡」
　更に、それで終わりではない。ミシェーラやキャロルの他の者に比べれば胸は小さい方――とはいえ、それもまた趣きのある膨らみを持っている――2人がそれぞれ胸を差し出そうとしてきたり、自分の股座を弄りながらいつものようにトリップしていたりしているし、メイド長さんに紅月もそのおっぱいの大きさを強調するように手で持ち上げたり、腕を締めてその長い谷間を見せつけてきたりしている。
　1人の身体。2本ずつの手足。1つしかない肉棒には勿体ないほどの女体の物量に、しかしレオンハルトは怯まず欲望のままに触れていく。
「ほら、姉さん……♡　一緒にやりましょう♡　レオンハルトさんの顔に……♡」
「……仕方ないわね。ほら、レオンハルト……こういうのが好きなんでしょ？　♡」
「「ぎゅうううう……っ♡」」

「んっ……！」
「ふふ……おっぱいで顔を挟んじゃいました♡　気持ちいいですか？」
「あんたってば挟まれるの好きだもんね♡　んっ、あんっ♡　ちょっと、もう吸い付いてきちゃって……♡　興奮しすぎだってば……♡　ん、ふふ……♡」
「私と姉さんの乳首が、んっ♡　はぁ……っ……♡　同時に舐められて……♡　んんんっ～～♡」
　そしてレオンハルトから動くだけでなく、当然女の方からも自ら考えて気を使いながら好きに動いてくる。その多くの恋人たちに振り回されるような感覚もまたレオンハルトからすれば愛されてる実感を感じられて楽しく気持ちいいものだ。
　ハウゼルとサイゼルが顔を間に抱きつくようにしておっぱいを押し当ててくる。２人の、姉妹のおっぱいだ。十分に大きい９３センチのＧカップ。その豊満な４つのおっぱいの間で顔を動かして柔らかさを堪能しながら、時折乳首を口に含んだり、舌で滑れば２人の抱きついてくる力とおっぱいの圧が増した。向こうからも求めてくる気持ちよさにたまらずレオンハルトは２人の細い腰の曲線をなぞり、お尻を撫でてその奥の濡れた膣にも軽く触れる。そうして次に向けた準備と共に、抱いていなくても女を十分に感じさせるのだ。
「んっ……♡　身体が少しビクついてるわよ♡　そんなに気持ちいいのかしら？　沢山の女の子に密着されて……♡　ふふ、いつもの事だけど、少し妬けちゃうじゃない……♡　後で、んっ♡　こっちもご褒美を期待してるわよ♡」
「レオンハルト……貴方が気持ちよくなっている顔を見るのが私の何よりの喜びだ……♡　だから存分に気持ちよくなって感じているところを見せてくれ……♡」
　背中からの包容。あまりにも贅沢な女体のクッションとしてレオンハルトの背中に身を寄せてくるインデックスとケッセルリンクの愛情と柔らかさにレオンハルトは背筋を震わせた。どちらもサイゼルとハウゼルよりも大きい乳房を背中で潰すように押し付けて来て

くれている。その肌の張りやしっとり感もまたたまらない。
「ふふふー♡　それじゃこっちは……もっと気持ちいい腕Wパイズリですよ～う♡　定番でお気に入りのお町さんとペールちゃんの、レオンハルト様専用おっぱいおまんこでー♡　レオンハルト様の腕をずっぽりぬっぽり挟んでずりずりしちゃいますねー♡」
「んっ……♡　こうして挟むと、いつも喜んでくれるからな……♡　抱いてくれる時も……乳房に顔を埋めて激しくしてくれる……♡　おかげで我も嬉しい……♡　叶うことなら、いつまでもレオンハルトをこの胸の中に収めていたい……♡」
「んっ……♡　こっちも、頑張ります……♡　うう……ちっちゃくても頑張りますから……♡　ミシェーラたちもこうして……レオンハルト様のことを楽しませますっ……♡　おっぱいでもお尻でも好きなところで……っ……♡」
「はぁ……っ……レオンハルトさまぁ……♡　わたくしは、レオンハルト様の逞しく力強い手に触れられるだけで幸せですわぁ……♡　はぁ……っ……あっ♡　だめ……っ……もうイッちゃいそうですわ……♡　はぁぁぁぁ……♡」
そうして右手と左手も、それぞれ別のコンビによって柔らかい感触に包まれる。
右手にはペールとお町が、そのこの中で最も大きいたっぷりの爆乳でレオンハルトの手どころか腕を包み込んでくれる。普段からレオンハルトを癒やし気持ちよくするために使徒の爆乳２人でコンビを組んでレオンハルトに奉仕することも多いため、コンビネーションは抜群だ。単体でも１３０センチ超えと１２０センチ近い爆乳。それも大きさだけでなく質も最高なのに、２人がかりでされたらその圧倒的な肉感で凄まじい多幸感に満たされてしまう。
だが左手もまたミシェーラとキャロルが抱きついていた。この中ではイヴと並んで華奢で小さい彼女たちも、当然のようにスタイルの良い可憐な美少女たちである。どちらも見た目は――中身はアレとしても――絶世の美少女。本物のお姫様のような美しさと可愛さを持っている。そんな２人の身体も、胸が少し小さくてもその肌は極上

のものだ。こちらも触れているだけで幸せになるし、こんな2人が自分の物で、とてつもない忠誠を、愛情を捧げてくれているのだから男冥利に尽きる。どう見ても傅かれる側な容姿の2人が自分に触れるだけで感じて股を濡らす様子はたまらない優越感を与えてくれる。

「あっ♡　あっ♡　あっ♡　レオンハルト様ぁ♡　ああっ♡」

――そしてそんな身体の各部位で奉仕を受けている間にも、腰は動いていた。むしろそれこそが本命。レオンハルトの股座に座るようにしてイヴがそこにいる。その膣内に肉棒をしっかりと収めながらだ。

そこに向けてレオンハルトは腰を振る。突き上げる。イヴの可愛く、それでいてしっかりと女性らしい丸みを持った尻を腰で突き上げれば膣内の媚肉が甘くレオンハルトの肉棒を擦り上げ、お尻と腰がぶつかった。女の子をバックで突くこの快感がまた中毒性がある。古来からあるその体位にレオンハルトもまた夢中になる。

しかも大勢の女に奉仕されながらだ。そのハーレムはあまりにも贅沢かつ甘美なもの。他の雄からすれば、美少女の数は限られているのだから他に分け与えてほしいと思ってしまうだろう。

しかしそれがある意味この世の縮図でもあった。力ある者が全てを得る。弱い者は何も得られない。

レオンハルトの持つ雄々しい肉棒――王の剣に貫かれて悦ぶイヴや他の雌はレオンハルトに夢中だった。雄の極致であり、完成形の1つでもあるレオンハルトという男に様々なきっかけで惹かれ、愛している。

だがあえてレオンハルトがこうしてモテる理由を1つに絞るとするならば――それはレオンハルトが強者であるからだろう。

この大陸はこうして強者が気持ちよくなれるように出来ている。弱い人間が今この瞬間にも酷い責め苦を受け、この世に何の希望も幸せも感じないままこの世を去ろうとしているだろう。

しかし強者はその瞬間にも楽しみを、快楽を得ている。それが残酷なこの世の縮図であった。

そしてその他と比較しての恵まれた立場や行為というのはそれだ

けでも優越感――また一種の快感を得ることが出来る。あえて誰も言葉にせずとも、その気分の良さが快楽に繋がっていることは誰も否定出来ないだろう。

――とはいえこの場でハーレムを享受するレオンハルトにとっては、そんなことよりも他者に愛されることに喜びを感じていた。指摘されれば否定はしないものの、彼にとっては好きな女達に愛情を向けられていることが何よりも重要視するものである。

「レオンハルト、様っ……♡　はぁ……ああっ……♡」

「っ……そろそろ、出すぞ……！　イヴ……！」

「はい、出してくださいレオンハルト様ぁ……♡　はぁ……はぁっ……あ、愛して、ますっ……♡　大好き、ですよ……♡」

「っ……」

――そしてそのレオンハルトの気持ちを、心が読み取れるがゆえに理解するイヴはそこでレオンハルトに最も効く言葉を送るのだ。

セックスの最中とはいえ、他にも人がいて――いなかったとしても直接言葉にするのは恥ずかしいものだ。

しかしレオンハルトがそういう求愛行為……性行為中のそういった言動に弱いと知るからこそイヴは恥ずかしさを感じながらもそう口にした。

「ああ……！　俺も、愛してるぞ……！」

「ああっ♡　れ、レオンハルト様ぁ♡　あっ♡　あっ♡」

その効果は覿面である。元々イきそうになっていたレオンハルトの腰が激しくなり、イヴはそのもたらされる快感に喘いだ。レオンハルトはテクニックもまた並の男の比ではない。肉棒でイヴの弱いところを何度も突いて感じさせる。

「あっ――あああああああ～～～～～～……っ♡」

「っ、出すぞ……！」

そしてイヴが絶頂したタイミングで、レオンハルトもまた精を解き放った。膣内が収縮する絶好のタイミング。相手の性感が最高潮に達した時に自分もまた射精する。

物理的にも精神的にもそのタイミングこそが最上のものであると

レオンハルトは思っている。ゆえに今日もまたそれを実践した。快楽で蕩けた表情を浮かべ、身体をビクつかせるイヴに自らの子種を注いで同じく凄まじい快楽を得る。
「はぁ……はぁぁ……っ……♡」
そうして女のナカで射精する至上の快楽を堪能した後は、少しの間そのままにして余韻も楽しむ。
イヴもまたその間に息を整えて言葉を絞り出せるくらいには回復する。そうして、口にした。
「んっ……気持ちよかったですか、レオンハルト様……娘の友達のおまんこに精液を注ぐのは……♡」
「……また答えにくいことを……」
「んっ♡　でも、レオンハルト様のおちんちんは、あんっ……♡　中で大きくなってますよ……？　ふふ……えっち、ですね……♡　――んっ♡」
「……ちょっとレオンハルト？　それはさすがに……あっ♡」
「……あなた様？」
イヴはあえてそんな背徳感を実感させるようなことを口にする。レオンハルトを興奮させるために良かれと思ってだ。
その証拠にイヴの膣内でレオンハルトの肉棒が僅かに膨らんだのを感じてイヴは微笑む。そしてサイゼルや白兎の母親の紅月がそれを聞いて少し引くような言葉の前置きを口にしたところで――レオンハルトはイヴの膣内から肉棒を引き抜いて、今度はそれをサイゼルに向けた。サイゼルをベッドに押し倒す。
「次はサイゼルの番だ……」
「良かったですね姉さん。それじゃレオンハルトさん、私はお掃除をしますね♡　――はぁ、む……♡　んっ♡　んっ♡　んっ……♡」
「ああ、頼む。気持ちいいぞ……」
誤魔化すようにサイゼルを押し倒し、その綺麗な足の間に肉棒を置く。すると四つん這いになったハウゼルが顔を近づけ、髪をかき上げながらレオンハルトの肉棒を咥えて唇の輪っかで扱いて口内で舌を使って舐め上げてくれる。

ハウゼルの美しい顔に肉棒が収められ、首を動かして奉仕してくれてる様に快楽と嬉しさを感じてその頭、髪を撫でればハウゼルが嬉しそうに肉棒に吸い付いてきた。普通より高い口内の温度から来る快感と、その熱心さにレオンハルトは頭を撫でながら優しく注意する。
「ハウゼル……気持ち良すぎるぞ」
「ん……ちゅぽんっ♡　ん……すみません。レオンハルトさんに褒められたのが嬉しくて……もっとお口でシてあげたくなってしまいました」
「そんな可愛いことを言われたらお前から抱きたくなってしまうからやめてくれ」
「私はそれでも……」
「ちょ、ちょっとハウゼル！　次は私の番なんだからねっ！　レオンハルトも……ほら……は、早く挿れてよ……っ♡」
ハウゼルが最後まで惜しみながらも、レオンハルトの肉棒を口から離す。そうして甘いやり取りをしたところでサイゼルから声がかかった。途中から、周囲の目もあるため恥ずかしそうにしながらもおねだりをしてくる。
だが一旦そういう空気になるとこういう複数人でのプレイの時は中々元には戻せない。
「でもまだ残ってるわよ。だから私が掃除するわね――ちゅっ♡　れろぉ……♡」
「ふっ……そうだな。なら私も手伝おう。んっ……♡　ちゅっ……ちゅっ……♡」
「え、ええっ？　ちょ、ちょっと！」
今度はインデックスが、まだ汚れているという建前を持ち出してレオンハルトの肉棒に横から舌を這わせた。すると便乗してケッセルリンクもまた空気を読んで反対側からレオンハルトの肉棒に舌を這わせる。
当然だがそれもまた気持ちいい。２人が期待を込めて見上げてくるので、レオンハルトは2人の頭を撫でてその快楽を享受する。
「んっ……これで綺麗になったかな？」

「多分綺麗になったんじゃないかしら。しっかり確かめてないから分からないけれど」
「いやいやいや、まだ駄目ですよう。まだ汚れてるので続いてお掃除パイズリしちゃいますねー♡　よいしょっと♡」
「そうだな……まだ汚れているゆえ、我も手伝おう。我らの乳間で、汚れを落としていってくれ……♡」
「おい、お前ら……」
　サイゼルが戸惑いを見せるが、しかしそれが終わっても流れは止まらない。今度はペールとお町がレオンハルトを押し倒してその爆乳でレオンハルトの肉棒を両側から挟み込んで動かし始めた。その快楽をまた堪能していると、次々と他も群がってくる。
「はぁ……はぁ……レオンハルトさまぁ……♡　わたくしも、レオンハルトさまの物に奉仕いたしますわ……♡」
「ミシェーラもお手伝いしますっ！　んーっ……♡」
「ならまた私も参加しますね。ちゅっ……♡」
「お掃除はメイドの務めですので、仕上げは私達にお任せくださいませ。ご主人様♡」
「あなた様の剣の手入れをさせていただきますわね♡　んっ……♡」
　キャロルにミシェーラにイヴにメイド長さんに紅月。続けて5人もまたお掃除という名の奉仕を行ってくる。
　その流れに置いてけぼりになったサイゼルはその場でわなわなと震え――
「っ～～～！　あんたらねぇ……っ、次は私だって言ってんでしょーが！」
「わっ!?」
「あっ、姉さん。そんな強引に……」
「大胆だな……」
「べ、別にこれくらい普通だから……ほら、レオンハルト……♡」
　そのまま、押しのけるようにしてレオンハルトの上に乗ってくるとその割れ目に肉棒を擦りつけておねだりしてくる。
　その様子がまた愛らしくてレオンハルトはその希望に応えてサイ

ゼルを抱きしめる。
「ああ、行くぞサイゼル……」
「ん……来て……あっ――♡」
皆の唾液でべとべとになった肉棒をサイゼルのおまんこに突き入れる。そうして再び激しく腰を振り、他の恋人も悦ばせ、また奉仕されながらレオンハルトはその1日――本当の意味での姫始めをその11人と行う。
――そしてそれが戦争前の最後の休日となった。

ガイ派

――大陸南部。
その日、とある隠れ里である集まりがあった。
「チッ……」
「……」
山中に隠れるようにして建てられたその隠れ里で最も大きな建物。その一室には既に数人が集まっている。
普段は会議などに使うその長方形の机が中心に置かれたその部屋で、席に座っている複数人の大半はその舌打ちをしたこの隠れ里のリーダーも務める魔物討伐隊〝鋼の騎士団〟の隊長である女傑を恐れていた。
先祖から受け継ぐブロンドの髪――多少癖がついており、乱雑に後ろでまとめているその髪と端正な顔立ちを持ちながらも、その表情は明らかに苛立ちに満ちている。上座の椅子に片足を上げる行儀の悪い座り方をしている様はまるで騎士とは言えない。
そんな不良少女のような様相だが、傍らにはしっかり剣と盾を携えており、傍らには副隊長である大柄で鎧を纏った顎髭の騎士が立っている。分隊長達が席につく中、彼が立っているのは彼個人が隊長の護衛を務めているからである。
そしてそれらの事実が彼女――スタークが鋼の騎士団の隊長である証明であった。
「……おい、ヴァルダ」
「はい。何でしょうかお嬢――じゃなくて隊長」
スタークの不機嫌な声に副隊長のヴァルダが答える。お嬢と呼びかけるのは彼がスタークを子供の頃から見ているため、その頃からの癖だ。
「影の連中はいつになったら来やがる。もう時間はとっくに過ぎてんだろうが」
「そうですねえ……確かにちょっと遅いかもしれませんね」

「チッ……だったらもう始めようぜ。なあ――宗近」
ヴァルダからの曖昧な答えを聞くとスタークは再び舌打ちをして反対側の席に座る1人の少年に声を掛けた。
そこにいたのは黒髪の中性的な容姿の少年であり、その顔立ちも衣服もＪＡＰＡＮ出身の日本人の物。
腰に刀を差した陰陽師にも似た衣服を身に付けたその少年こそ勇者であり魔物討伐隊〝大和剣平団〟の党首を務める宗近。
そして今回、この会議を開いた発起人である。彼の隣には同じく日本人の侍と思われる女性が控えているのみで他の隊士は全員外で待たせていた。ゆえに宗近はそのスタークの提案に適切な答えを返すことが出来た。
「……いや、もう来たようだ」
「あ？　なんでそんなことが――」
「――隊長！」
「！　ああ？　どうした？」
「影の楔の方々が到着いたしました。ここにお通ししても……うわっ!?」
「――邪魔するぜ」
会議室に報告のためにやってきた鋼の騎士団の隊員が隊長であるスタークに許可を取ろうとして、背後から押しのけられる。
そうして部屋に入ってきたのは6人を見て、スタークはその視線を鋭く細め、彼らを睨みつけた。
「……チッ……本当に来やがったか――クズ共が」
「ああ？　誰がクズだって？」
スタークが吐き捨てるように口にすると、それに反応して大男が食ってかかる。最初に隊員を押しのけて部屋に入ってきた男だ。
浅黒い肌をした禿頭のその男は両腕に包帯を巻いた筋肉質で悪人面をしていた。スタークや宗近と比べると上背は５０センチ以上の差がある。それだけに大男はスタークの姿を見ると途端に苛立ちを収めて口端を吊り上げた。
「って、おいおい……！　まさかお前が鋼の騎士団の隊長か？」

「何か文句でもあんのか？」
「はっはっは！　おいマジかよ！　鋼の騎士団の隊長が女だってのは聞いてたがまさかこんなチビだとは思わなかったぜ！　なあお前ら！」
「こっちは詳しい容姿知ってたネ。ブロンド髪のチビで見た目ヨシ。情報通り。だから驚かないヨ」
「私は知らなかったが……へえ、可愛いじゃん。今すぐにでも客が取れそうな上玉だ」
「……」
　スタークが鋼の騎士団の隊長だと知った大男はスタークの容姿を指して馬鹿笑いをする。同時に背後の仲間達にも声を掛けた。
　背に行商人が背負う大きな鞄を抱えている丸いサングラスをかけた小柄な男がスタークの容姿を既に知っていたと口にしたが、もう1人の赤いずきんを被った体格の良い金髪の美女は容姿を品定めし、それが一級品だと勝手なお墨付きを与える。
　そしてもう1人――襟を立てた真っ黒いコートと黒い手袋。背中に身の丈ほどもある黒い大剣を背負った真っ白い青年は、スタークや宗近などの部屋にいる人間を一瞥したのみですぐに興味を無くしたのか視線を外す。その表情に一切の揺らぎはなかった。
　だがその1人の無反応を除き、彼ら影の楔の反応が極めて失礼であることに変わりはない。
「……殺す」
「お、お嬢！　それは……！」
「何だ？　やろうってのか？　表でお行儀よく魔物を倒してるだけのチビが俺達影の楔の最高幹部、〝四影刃〟相手に勝てるとでも？」
「だったら試してみるかデカブツ。てめーの汚え顔をあたしが綺麗に整形してやるよ」
「ハッ！　面白え！　威勢だけはいっちょ前か！　だったら本当に試して貰おうじゃ――」
　スタークが強い殺気を大男に向けて放つ。そして傍らにあった剣に手を掛ければ、大男もまたその巨腕を前に構えてみせた。すると戦

闘の気配を感じ取って小柄な男も服の裾から刃を覗かせ、赤い頭巾の女も腰に下げていた2つの手斧を手に取った。
　室内で他の鋼の騎士団の分隊長や副隊長が慌て、宗近とその隣の女性剣士は視線をすっと細める。彼らもまた本当に戦いが起こるならいつでも動けるだけの強さを持った戦士であった。
「――やめな。あんた達」
「！」
　だがそうはならなかった。その前に、部屋の最後方。出入り口の方からはっきりとした女性の声色が届く。
　そしてそれを合図に大男らの動きも止まり、振り返った。
「いきなり喧嘩を売ってんじゃないよサソリ。鴉、赤ずきんもやめな」
「っ……と。いや、すまねえ棟梁。ついいつものノリで挑発しちまったぜ」
「まったく、あんたは本当に礼儀ってのがなってないねえ。いいから大人しく座りな」
「ええ、分かりやした」
　棟梁、という呼び名で呼ばれた妙齢の美女の一声で他の４人が大人しく席へと腰を落ち着ける――白い青年だけは先に座っていたが――そうして3人が殺気を消したところでスタークはその美女に視線を移した。
「棟梁……ってことはあんたが〝影〟のボスかよ」
「ああ。ちょいと紹介が遅れたが名乗らせてもらうよ。あたしが〝影の楔〟の現棟梁、ホオズキだ」
　紫色のドレスを着た、長い艶やかな髪と男を惹きつける色香を持つその貴婦人――ホオズキは自身が影の楔の棟梁であるとスタークや宗近らに挨拶を行う。未だ席に付かず、優雅にスカートを上げて礼をするとそのまま手で先に席に着いた４人を紹介した。
「そしてこっちは影の楔の最高幹部〝四影刃〟だよ――ほら、あんたたちも挨拶しな」
「棟梁の言うことなら仕方ねえ。名乗ってやる――サソリだ。よろしくな。主に盗品の仕入れと殺しを請け負ってるからよ。何かあった

ら言えや」
「鴉ネ。薬でも情報でも人間でも何でも売買するヨ。欲しいもの売りたいものがある時はいつでも声をかけてほしいネ」
「赤ずきんだ。先程はすまなかった。主に娼婦の斡旋と管理を担当している。暗殺も得意だ」
　棟梁のホオズキの言葉に従って名乗る四影刃の3人。その際に告げられたそれぞれが担当している仕事内容を聞いてスタークは眉を潜めた。再び僅かだが怒気を覗かせる。
「チッ……態々ご丁寧にどーも。絶対に利用なんかしねーがな」
「そんなこと言わずにいざという時は頼っておくれよ。こんな時代じゃ人同士、協力し合わないと生きていけないだろ？」
「っ……人を食い物にしてるてめーらがよく言えるな……！」
「それも考え方次第だと思うがねえ……まあでもそれはいいさ。今回は互いの主義を言い合おうってわけじゃないんだろう？　――ねえ、勇者宗近さん？」
　スタークからの非難の視線を涼しく煙管を吹かせながら受け流し、ホオズキは薄い笑みで宗近を見る。
　宗近はその声を受けて内心で素直に感心しながらも、表面には出さず疑問した。
「……よく分かったな。私が勇者で、今回の集まりの発起人であることはそちらには話していないはずだが」
「ふふふ……あたしらの情報網はちょっとしたものだからねえ。これくらいは大したことじゃないさ」
「……そうか。なら話が早そうだな。手間が省けて助かる」
「こっちとしても理解があるようで助かるよ。あたしらの稼業じゃ仕方ないとはいえ毎回突っかかられては話が進まなくて困るからねえ」
「……おい。それはあたしのことを言ってんのか？」
「そんなことはないさ。だからほら、さっさと話を進めようじゃないか」
　情報という部分で組織力を軽く見せつけたホオズキは再びスタークの睨みを躱して席へと移動していく。

だがそれに宗近は待ったを掛けることにした。
「待ってほしい。まだ紹介していない者がいるようだが？」
「……」
そう言って宗近は席に着いて無言を貫く白い青年と、ホオズキの斜め後ろを付いていくボロ布を纏った少女に続けて視線を向けた。
ホオズキもまたそれを指摘されると特に動じることもなく自然に返す。
「ああ、すまないね。その真っ白い色男はグリムリーパー。ウチの戦闘部隊長をしている男さ」
「……」
紹介を受けてもその白い青年、グリムリーパーは言葉を発することなく、僅かに息を入れたのみ。なのでそれを指してホオズキが続ける。
「ご覧の通り無口でねえ……必要に駆られる時以外は全く喋らないし他人に興味もない男なんだ」
「……よくそれで部隊長が務まるな」
「腕は1番立つんだ。だから無愛想だけどよろしく頼むよ」
「なるほどな。……それで、そっちの少女は？」
グリムリーパーについてホオズキから代わりに紹介を受けた後、時宗は続けてホオズキの隣にいた少女を見る。
とはいえ紹介されずともおおよそ予想はつく。１３５センチから１４０センチほどと思われる背丈からおそらく年頃は１０代前半。銀髪の短い髪と赤い瞳。顔立ちは可愛らしいが――その目は虚ろでどこを見ているか分からない有様だった。
更にはその外套の下から見え隠れする手足には擦り傷や打撲の痕があった。明らかに、人為的に付けられた傷だ。
「ああ、こっちはあたしが飼っている奴隷のアンだよ。ふふ、可愛いだろう？　こうやって撫でると――」
「ん……あー……」
「ほら、ちょっと反応するんだ。因みに名前の由来は〝あ〟と〝ん〟しか喋れないからなんだよ。ふふふ……ん、なんだい？」

「あー……あー」
「……ああ、そういえばそろそろ食事の時間だったねえ。――ほら、食べな」
奴隷の少女、アンの物欲しげな様子にホオズキは懐から瓶を取り出す。
そしてそこに詰まっていた赤い飴玉のようなものを一粒取り出すと、それを少女に手渡す。すると少女はすぐにそれを口に含み、頬を膨らませながら口内でコロコロと舐めて食べ始めた。
「あー♪　んー♪　んー♪」
「ふふ、この子はこれが大好きでねえ。毎日1つは食べないとグズりだすんだよ」
「……その飴のようなものは？」
「大したものじゃない。ちょっとした薬さ。食べると強い快楽が得られる。その証拠に……ほら」
「んー……っ……あっ……♡　あー……♡　あー……♡」
ホオズキが指し示した先、飴玉を食べていた少女は途中から目を見開くと舌を出して恍惚の表情を浮かべながら床に膝を突き、そのボロ布の中で両手を股の間に挟み、その幼いスジを弄り快楽を貪り始めてしまった。
「ほら、とっても可愛いだろ？　ふふふ……よーしよし。後で可愛がってやるから今は大人しくしておくんだよ？」
「あー、んー……♡」
「相変わらず棟梁の趣味はすげえな」
「とんでもない変態だけど意外と珍しくはないネ」
「これくらいの歳の子ならまだ普通だ。私も最初に売り始めたのは二桁にも満たない歳の頃だったからな」
「チッ……胸糞悪い……」
「……なるほど。どうやら説明を求めたのが間違いだったようだ」
薬の効果で快楽に蕩けはじめる少女の頭を撫でるホオズキ。その光景は変態的だが、影の楔の3人は見慣れているため特に動じることはない。

反対にスタークは露骨に嫌悪感を見せ、時宗も眉をひそめるのは避けられなかった。
とはいえ、だ。時宗はやはり影の楔を誘って正解だったと冷静に評価する。
鋼の騎士団と並ぶ大規模な魔物討伐隊である彼らの強さは一目見ただけで分かった――いや、部屋に入る前から分かった。
何しろ奴隷の少女以外の全員が、驚くほど足音がしなかった。
それが意味するところは全員が高レベルのシーフ、盗賊、ないしは忍者などのレンジャー職であるということだろう。魔物が跋扈し、何をするにも隠れ潜みながら行動する必要がある今の時代で、レンジャー系の職はパーティや魔物討伐隊には必須とまで言われる重要な職業だ。パーティ内に1人いるだけでも生存率は大きく違ってくる。
ゆえに時宗は彼らがこの時代でも大きな勢力を保っていることに得心する。影の楔の構成員の殆どはそのレンジャー職で構成されていると聞く。
更にはその最高幹部である彼らは見たところ、レンジャー職だけでなく他の戦闘手段も持っているようだった。実際に相対すれば彼らほど厄介な集団はない。
正面からのぶつかり合いなら鋼の騎士団が勝るだろうが――個人の戦いともなるとそうともいかないだろう。
しかしだからこそありがたい。これから話すことを思えば、戦力は多ければ多いほど良いと宗近は少女に意識を向けないようにして全員に向けて声を発した。
「では紹介も終わったところでそろそろ本題に入りたい――が、そのためにはもう1人……いや、2人ほどまだ紹介しなければならないな」
「ほう？　まだ参加者がいるのかい？」
「あん？　2人……？　おい、宗近。1人は分かるが、2人ってのは――」
「いいや、2人だ。順番に紹介させていただこう」

事前に話を通しておいたスタークが聞いてない話を耳にして疑問を口にしたが、それを被せるように止めて宗近は自分の右隣に座っている仮面の男性を紹介するために右手を上げる。
「こちらはキリング商会の会長代行を務めている――グリーンさんだ」
「……！　キリング商会……しかも会長代行だと……？」
宗近が隣にいる人物のことをそう紹介すれば、影の楔側から驚きの反応が出るがそれも無理ないことだ。
――キリング商会は古くから存在する商会であるが、謎が多い組織として有名である。
かなり古い時代から多くの商人を抱え、人類の物流を担ってきた彼らはこの時代においても野良の人間にとっての救いとなっている組織である。お金こそ取るものの、食料や様々な物品を売買してくれる。
魔物討伐隊にとっても彼らは取引相手であり、当然それぞれの組織や隠れ里を食っていかせるために積極的に交流を持っている。ゆえに商会の人間と言われても、そのことには疑問を持たないが……会長代行と言われれば話は別だ。
この場にいる大規模な魔物討伐隊。鋼の騎士団の隊長のスタークや影の楔の棟梁であるホオズキであってもキリング商会の会長には会ったことはないし、またそれが誰なのかも知らない。取引の際にもそれぞれ担当の商人とやり取りしたことは当然あるが、上の人間とやり取りを行ったことは皆無だ。
ゆえに会長代行という役職を耳にして誰もが驚きを視線に乗せた。宗近の隣に座っていたため、てっきり大和剣平団の一員かと思っていたがそうではなかったと。
そしてその会長代行と呼ばれる男――グリーンが立ち上がる。
「皆様どうもこんにちは。ご挨拶が遅れて申し訳ない。私はキリング商会で会長代行を務めさせて頂いております――グリーンと申します。以後お見知り置きを」
その挨拶はとても丁寧かつ穏やかなものだった。商人としては当

然とも言えるが――しかし、どうにも印象にそぐわないのはその見た目が異様であったからだろう。その会長代行を名乗るグリーンという男は、肌を一切見せていなかった。白衣にも似た白に緑の線が幾つも入ったコートに身を包み、ズボンも靴も手袋も全てそれらの色で構成されている。

だが最も特徴的なのはその顔が見えないことだろう。頭部を完全に覆い隠すその仮面は、ヘルメットとも呼ばれるそれであり、顔の前部分を黄緑色の不思議な素材で隠し、それ以外の大部分が白で構成されている。

そうして顔が完全に見えないため、その場にいる面々はそのグリーンという男のことを声や体格でしか推し量れない。おそらくは男だろう。その体格はどちらかと言えば細身。上背はそれなりにあるものの、明らかに戦闘員の身体ではなかった。

それだけに商人と言われれば納得は出来る。顔を見せないことは気になったが……それよりもこの会合に出席していることが疑問であった。

「あんたが商会の会長代行かい」

「ええ、私が会長代行です。現在会長は諸事情により姿を見せるわけにはいきませんので私が代理として出席させていただくことになりました」

「まさかこんなところで会えるとは思っていなかったよ。なにせキリング商会は今まで何の情報も掴ませない徹底ぶりだったからねえ……どういう風の吹き回しだい？」

「人類における重要な話し合いを行うため、商会からも代表者に来てほしい旨を宗近様からご連絡頂きました。なので会長代行である私で良ければと提案したところ快く受け入れて頂きました」

「彼らもまた魔物討伐隊ではないが、現存する組織の中では大規模なもの。そのため招待させてもらったが……何か疑問でもあるのか？」

「ふぅん……いや、何でもないさね。話を続けてくれて構わないよ」

そう言ってホオズキはグリーンという会長代行に対してあえて深くは突っ込まなかったが……相応に疑問を感じていることは明白だ。

そして宗近もまた多少の疑問はあるが……それでもこの場においては態々指摘することではないとしている。彼らもまた人間側の勢力であることには間違いない。ゆえにこの場では影の楔の面々に対するものと同じく、全員をとりあえず信用することにして話を進める。
「なら話を進めさせて頂く。――今回、皆を集めたのは他でもない。人類の今後を左右する重要な提案をさせてもらう。その提案の中核になるのが、この場にいる我々とこれから紹介するもう1人だ」
「……つまり、そいつも戦力だってのか？」
「ああ？　戦力？」
話を事前にある程度聞いているスタークが諸々をすっ飛ばして宗近に問いかける。
そしてその言葉は更に疑問を抱かせるには十分なものだった。サソリが憚ることなく疑問の言葉を漏らすと、宗近は軽く息を入れながら答える。
「そうだ。私が提案するのは、この場に集まった我々で――連合軍を組まないかというもの」
「あー？　何だそりゃ？　なんで手を組む必要がある？」
素直な疑問に宗近はむしろ安心を覚える。
これでやっと本題を口にすることが出来るのだ。その質問に答える形で、宗近は自身の目的を遂に口にする。
「人類を脅かす強大な敵を討ち滅ぼすためだ」
「強大な敵だと？　……おいおい、まさかとは思うが……魔軍……いや、魔人と争おうってんじゃねえよな？」
その言葉を聞いて一瞬の思案を挟んで察してきたサソリに、宗近は言い切る。
「おおよそ当たっているが少し違う。私が提案するのは魔人ではない――魔王の討伐だ」
「……は？」
その言葉は部屋に一瞬の静寂をもたらした。
魔王の討伐。その宗近の提案を脳で理解し、受け止めるまでの時間

だ。その間、おおよそ全ての人間、話を聞かされていない鋼の騎士団の分隊長らや影の楔の最高幹部達も困惑している。
「っ……くく、はははっ！　おいおい！　何を言うかと思えば……馬鹿じゃねぇのか？　態々俺達まで集めてそんな冗談を口にするとは傑作だぜ！」
「……ウケているところ悪いが、冗談ではない。私は大真面目に提案している。この場にいる面々の……いや、人類の総力を結集して魔王を倒す。そのための話し合いを行うために私はこの場を開いた」
「本気だとしたら尚更ウケるぜ。田舎もんの日本人に教えてやるが、魔人……魔王ってのは倒せねえんだぜ？　無敵結界ってのがあいつらにはあってな――」
「魔人や魔王に対する解説なら結構だ。そちらが説明する程度のことであればとっくの昔に理解している。理解した上で、魔王を倒そうと提案しているんだ」
「はっはっは！　だとしたらとんだ気狂いじゃねえか！　勇者様ってのは随分と自身家らしいな！　伝説の剣を持ってるからそうなっちまったのか？」
「剣ではなく刀だ。聖刀・日光。そちらこそ物を知らないようだな」
「どっちだっていいんだよ！　得物があるなら勝てるって言うなら苦労しねえぜ。いいか？　魔人や魔王ってのはどうやったって――」
　サソリが席から立ち上がり、宗近を馬鹿にするようにその提案を否定する。宗近は席についたまま冷静に話を続けようとしているが、サソリの上からの言葉は止まらない。続けて現実を教えてやろうと言葉を重ねる。
「やめな、サソリ。気持ちは分かるけど勇者の坊やにも話させてやりなよ」
「はっはっは！　おいおい棟梁様よ！　まさか本気でこいつの話を聞く気か？」
「……さてねえ。真面目に聞くかどうかも含めて聞いてから判断しようと思っているところさ」
「どう考えたって時間の無駄だぜ！　お前らもそう思うよな？」

「確かに、その可能性は高いネ」
「魔王を倒すか……茶飲み話にしてもあまり乗り切れる話題ではないな」
　サソリが声を大にして続けようとするのを1度はホオズキも差し止めるが、その話を真面目に聞いていないという意味ではサソリとそう変わりはない。他の幹部もそうだった。ホオズキは奴隷の少女を膝に乗せて頭を撫でているし、鴉に赤ずきんもどこか弛緩した、呆れる様子を醸し出している。
「……おい、いい加減黙れよ。こっちは真面目に話してんだ」
「あ？　何だ、チビの方も本気かよ。チビ同士仲が良いみたいだな！
　ははははは！」
「てめぇ……！」
「……不要な挑発はやめていただこう。それよりも、話を続けても構わないだろうか。魔王を倒すための具体的な方策について説明したい」
「いいや、説明するまでもねえなぁ。そんなもん真面目に聞くくらいなら帰って女でも抱いてた方がずっと有意義だぜ。そうだよなあ、お前ら――」
　サソリの変わらない言動に、スタークが怒りを見せて再び立ち上がりかける。宗近は目を細めながらも冷静を保って話を続けようとするも、再びサソリが言葉を被せた。そして仲間に同調させるように再び声をかけようとする。
　そしてそのタイミングでまたしても影の楔側から声が返ってくるが――
「……それで？　どうやって魔王を倒すつもりなんだ？」
「……あ……？」
　――その言葉は、サソリや他の面々が予想していた相手からのものではなかった。
　全員が、ほぼ初めて耳にする声に顔を向ける。その相手はグリムリーパーだった。
　この会議が始まってから無言を貫き続けてきた彼が声を発し、しか

も宗近からの提案に対する疑問であったため影の楔の面々は驚く。
「お……おいおい。お前まで何言ってんだ？　そんなもん、真面目に聞くつもりかよ」
「興味がある。だから聞く。それだけだ」
「はっ……急に口を開いたかと思えば……まさかお前がそんな冗談好きな性格だとは思わなかったぜ、グリムリーパーよぉ。それともアレか？　勇者様に興味が湧いたか？　お前が女に興味がないのは知ってたが、こっちの趣味だってんなら納得だぜ。そりゃ話が合わねぇはずだよなぁ」
「お前……」
「だがそういうことなら話は別だぜ。次からはそっちの奴隷を連れてくるからよ。仲良くしようや。お前の強さにゃ俺も一目置いて――」
サソリが今度はグリムリーパーに対して言葉を向ける。その粗暴かつデリカシーのない言動に、グリムリーパーはしかし怒りを見せない。
それどころか全くの興味も抱いていなかった。自身に捲し立てるように喋りかけてくるサソリにその白い瞳を向け、そこで返答をした。無感情のままに、
「……お前は――死んでも構わない人間か？」
「ッ……！」
無機質な殺気を発した。
それは恐ろしくギャップのあるものだった。声色や見せる表情が、その強烈な殺気と全く釣り合っていない。
その部屋にいる面々はその一瞬で室内に充満した殺気に身を固くした。怒りも敵意もなく、殺意だけがそこにある。この部屋にいる人間にはそれが理解出来た。一定の実力を持つ人間にだけ垣間見えるその異常性が。
そしてその殺気を直接ぶつけられたサソリは、全身の毛穴から汗が滲み出るほどの圧力を感じていた。その瞳には何の感情も興味も感じられない。まるで雑草でも見ているかのような視線だった。
「ち……違う！　つーか何でそうなるっ!?」

「何だ、違うのか。だったらお前は致命的に頭が悪い奴なんだな」
「な、なんだと……？」
　路傍に生えている雑草を刈り取ろうとしている――そんな気配を感じたサソリは声を大にして否定し、そしてグリムリーパーの声を聞いた。宗近の方を少し見て。
「お前は俺より弱いことを理解しているのに俺が興味を持ったこいつの邪魔をした。だから死にたいのかと思ったんだが、そうじゃないならそれを理解していない。つまり、致命的に頭が悪いことになる」
「ッ……そ、それは……いや……」
　否定しようとして否定しきれない。先程までの強気な態度など微塵も見られなかった。反論すれば殺される。そんな恐怖がサソリの口を重くする。
　だがその考えは間違いであった。グリムリーパーは既にそこを通り越して自らの意思を伝える。
「……いや、どちらでも構わないか。どちらにしても興味は湧かない。煩わしいだけだ。殺すから諦めてくれ」
「なっ……!?」
　それは無情な死の宣告だった。
　今更何を言おうと関係ないと言った様子でグリムリーパーは背中の剣を手に取る。そして無造作かつ無遠慮にサソリに近づいた。
「ちょ……ちょっと待ってくれ！　わ、わかった！　謝る！　謝るから許してくれ！」
「許すも何も怒っていない。ただ邪魔に感じただけだ。お前には興味は湧かないし、殺したところで喜びも楽しさも悲しみも感じないだろう。ただ、生かしておくよりも殺しておいた方がメリットがある。お前がこれから死ぬ理由はこれだ。理解したか？」
　それは事務的かつ最低限の言葉の羅列だった。不必要なことは口にしない。質問に対する答えと自分の意思。そして決定事項だけを伝える。
　その淡々とした様子に他の面々は動けない。鴉や赤ずきんといった同格の幹部ですら、ここで邪魔をしたら自分も殺されるかもしれな

いと口を噤み続けることに徹した。この場を適切に運営するために
いる鋼の騎士団の護衛や分隊長らも動けない。奴隷の少女に至って
は快楽を得ることすら忘れてホオズキの膝に顔を埋めて怯えていた。
　そして今最も恐怖を感じているサソリが床に手を突いた。抵抗し
ても無駄であることは分かっている。それだけに必死に謝罪を行う
ことを選んだ。
「っ……待て待て待て！　本当悪かった！　もう黙る！　だから殺す
のだけは勘弁してくれ……！　この通りだ！」
「命乞いも見飽きているからしなくていい」
「ッ……待ちな！　グリムリーパー！」
「待たない。もし殺してほしくないならこいつを生かすことで俺にど
んなメリットがあるかをお前が教えてくれ。俺には思いつかない」
「っ、それは……」
　グリムリーパーはその棟梁の方に視線を向ける。ホオズキは何も
言えなかった。この場でサソリを生かすための方法が分からない。
「……何もない、か。なら殺すが、諦めてくれ」
「ま、待ってくれ――」
　サソリの命乞いなど意に介さず、グリムリーパーがその大剣を振り
下ろす。
　それは大剣にあるまじき剣速だった。スタークやホオズキといっ
た現人類きっての強者ですら見切れないほどの。
「――待て」
「！」
　だが――1人だけその剣を見切れる者が存在した。
　後退り、逃げようとしていたサソリの前に立ち塞がり、その大剣を
その刀で受け止めていたのは宗近だった。
　自分の剣を止めてみせた宗近に、グリムリーパーが見下ろしながら
声を送る。
「……お前は強いな。俺の剣を止められる者はそういない……が、邪
魔だからどいてくれ。そいつを殺せない」
「メリットがあれば殺さない……そう言ったな？　ならばやめておい

た方が賢明だ」
「……ほう？」
　更に興味の声をグリムリーパーが漏らす。そこで宗近は告げた。ギリギリと鍔迫り合いを行いながら、毅然と目の前の死神にメリットを説明する。
「もしこの場で誰かが誰かを殺すようなことが起きれば、私は決して何も話さないし帰らせてもらう。私が言った魔王を倒す提案も取り下げるし、具体的な方策を聞かせもしない。また、仮に私達だけで実行してもそちらには決して関わらせない」
「……ほう」
「それでも構わないなら」
　グリムリーパーの剣から力が消える。そのタイミングで、宗近はそっと横にどいた。尻もちをついているサソリへの道を敢えて空けた上で告げる。
「殺しでも何でも好きにするといい」
「……」
「さあ、返答や如何に!?」
　凛とした、それでいてはっきりとした声で宗近がそう言えば、グリムリーパーが無言で宗近を見て、そして視線をサソリにも移した。
「……命拾いしたな」
「っ……あ……」
　怯えるサソリに一言呟くと、グリムリーパーはそれっきり再びサソリには興味を無くしたようで、剣を収めた上で席へと戻る。
　既に殺気は収まっていた。空気はまだ少し硬いが、それも宗近が胸を撫で下ろしスタークや宗近のお付きの女剣士が動いたことで僅かに空気も弛緩する。
「宗近様……」
「おい……大丈夫か？　……っーか悪いな。あたしが動くべきだった」
「……いや、問題ない。気にしないでくれ。それよりも……話を続けよう」

お付きやスタークの心配を宗近は受け入れつつも席に戻る。
そして僅かに剣を合わせたことでグリムリーパーという男の強さを感じ取り、あえて口にしなかった言葉を内心で作った――おそらく、スタークや他の者では止められなかっただろうと。
それほどに鋭く重い一撃だった。直撃すればサソリという男は真っ二つになっていただろう。
宗近は自身の実力がスタークや他の面々を遥かに上回っていると見ていたが、どうやらグリムリーパーだけは自分と同等かそれ以上の強さだと判断する。
「魔王を倒すための具体的な方策について話をさせてもらう。実際に協力するかどうかは全ての話を聞いてからで構わないが、それまで先程のような茶々は入れないでほしい」
「……ああ、勿論さね」
「私に異論はありません」
ホオズキにグリーンからの承諾を得て、宗近は頷く。サソリもまた大人しく席に戻っていた。心なしかその巨体が小さく見える。
そして先程強さを感じ取ったグリムリーパーについて、強さをしっかりと理解しながらも、しかしこう思う。
――それでも、最も強い戦力は彼ではない。
「それとこれから紹介するもう1人についても、過剰に騒ぎ立ったり、動揺して軽率な行動を取らないようお願いしたい」
「あ……？　どういうことだ宗近。さっきも気になったが、一体どんな奴を紹介しようってんだ？　しかもあたしにまで内緒なんてよ。お前じゃなきゃぶん殴ってるところだぜ」
「君にも黙っていてすまなかったが、それも必要なことだと理解してくれ」
「……まあ別にいいがよ……本当に誰なんだ？　紹介したい奴ってのは」
普段は荒々しいスタークも、宗近にはその鳴りを潜める。魔王を倒すことを目的に何度か話し合いをして友好を深めたことが利いたのだろうと、宗近は信用されていることを感じ取った。

「ではこれからここに呼ばせてもらう」
「呼ばせてもらう？　それってもしかして、これから使いを出してここまで呼びつけるつもりじゃないだろうねえ？　さすがにそこまで長い時間は取れないよ」
「既にここに来ているからその心配はない」
　と、ホオズキの疑問に答えながら宗近は内心でその指示を送る。そうして自分の部下を通じて彼を呼び寄せた。宗近が割り当てられたこの建物の部屋から、この会議室に。
「た、隊長！」
「あ？　どうした。宗近の呼んだ客が来たか？」
「は、はい。そうなのですが、その……」
「？　いいから通せ。話がいつまで経っても始まらねえだろうが」
「は、はっ！　では、その……どうぞ」
　やがて、鋼の騎士団の隊員が客人がやって来たことを知らせに部屋に報告にやってくる。
　だがその様子は少しおかしい。明らかに動揺し、歯切れの悪い様子にスタークは違和感を覚えたものの、宗近を信用してすぐに客人を通すように命令した。
　だが――その客人が部屋に入ってきた瞬間、部屋にいる大半の人間が絶句する。
「――邪魔をする」
「なッ……!?」
「っ……こいつは……!?」
「……ふむ」
　それは先程グリムリーパーが殺意を発した以上の衝撃だ。スタークが驚愕し、ホオズキも目を見開く。グリムリーパーですら強い興味を感じたようで腕を組んだままその来訪者に視線を向け続けた。
「……おい、宗近……まさかこいつが……？」
「ああ。紹介させてもらう」
　他と変わらず動揺するスタークの問いに宗近は立ち上がり、それを肯定するように来訪者の隣に立った。そして皆に向けてその名と、そ

の存在を告げる。
「彼が魔王を倒すために私達に協力してくれる同志――魔人ガイだ」
「……ガイだ。よろしく頼む」
そうして誰もが呆気に取られる中で名乗ったその男は、人間の天敵であるはずの大陸の支配者層――魔人であった。

会議室は魔人が現れたことで騒然としていた。
「な、なんで魔人が……」
「お、おい！　どういうつもりだ!?　魔人を連れてくるなんてよぉ！
まさか俺達を騙したのか!?」
「……まさかこんなところで魔人に出くわすことになるなんてね……ホント、どういうつもりだい？」
ガイの登場に鋼の騎士団だけでなく、影の楔も動揺を表に出す。ほぼ全員が警戒し、いつでも武器を取り、逃走に移れるようにしながらガイとその隣にいる宗近を睨んでいた。
「っ……おい宗近。こいつは何の冗談だ？　まさかとは思うが……魔王を倒す具体的な策ってのは……こいつじゃねぇよな？」
そしてそれは宗近を信用していたスタークも同じ。
魔物嫌いな彼女にとってこの場に魔人がいることは、恐れ以上に怒りを感じることだった。しかしそれをすぐにガイにはぶつけずに、剣と盾を持ちながらも魔人の隣にいる宗近に問いかけた。その宗近は皆の恐れと疑いの視線を向けられながらも、平然と言葉を返す。
「その通りだ。魔王を倒すために必要な方策とは彼――ガイに魔王を倒してもらうことだ」
「な、何言ってやがんだてめぇ!?　魔人に魔王を倒してもらうって……だ、大体何で魔王を裏切って人間の味方をすんだよ!?　普通に考えておかしいだろうが！」
「絶対騙されてるヨ……こいつ、私らを殺すつもりじゃないカ？」
「悪いけど信用は出来ないな……」
影の楔の最高幹部ですら動揺し、疑問を言葉にして宗近の提案を否

定する。それは棟梁のホオズキですら例外ではなく、疑いの意思を質問にして示す。
「仮にそれが本当だとしても……魔人じゃ魔王には勝てないだろう？」
「そ、そうだぜ！　魔王ってのはバカみたいに強ぇ魔人のその更に何倍も強いんだろうが！　人間と協力したところで勝てるわけねーのにそんなことを言い出すってことは……やっぱ俺達を罠にかけようとしてるんじゃ……！」
　仮に魔人が味方だとしても魔王に勝てるわけがない。彼らが知る情報から来る当然の疑問をホオズキが口にすると他の面々にも更に根強い疑念の種が植え付けられた。
　その白い死神以外は。
「おい……ちょっと黙れ」
「……あ⁉　な、何言ってんだ……魔人が目の前にいんだぞ？」
「黙れと言ってるのが聞こえないのか。なら魔人に殺される前に俺が殺しても構わないんだな？」
「っ……だ、だからそれは……」
　そうして口を挟んできたのはグリムリーパーだった。魔人が目の前に現れても落ち着いた様子を崩さない彼は、この場を黙らせて話を聞くために普段は回さない口を自然に使う。
「お前達は本当に頭が悪いな。そもそもこの魔人が本気で俺達を殺すつもりなら一々罠に嵌める必要はない。もしその気ならとっくに殺されてる。そうだろう、魔人ガイ」
「……ああ。そうだな。確かに殺すつもりなら態々こうやって話などしない。何も言わずにすぐに殺るだけだ。私なら１０秒もかからない」
「だろうな。噂に聞くガイの強さなら俺やそこの勇者でも相手にならない」
　グリムリーパーから話を振られたことで、ガイは静かに同意する。
　そして勝てないことを完全に理解しているからか、グリムリーパーもまた落ち着いていた。

「……グリムリーパー。あんた、その魔人のこと知ってるのかい？」
「今言わなかったか？　噂に聞いたことがあるだけだ。魔人四天王の1人である魔人ガイ。かつて人間の身でありながら魔王討伐に動き、あの魔人レオンハルトと引き分けたって話は俺がかつて居た場所では有名な話だからな」
「なっ……!?」
「それは……本当の話なのかい？」
「ハッ……マジだとすりゃとんでもねえ話だな……」
　グリムリーパーの口から語られるガイの逸話にその場にいる面々が今日何度目かにもなる驚きを見せる。ホオズキも静かにそれを飲み込み、スタークは何かを思ったのか吐き捨てるように呟いた。
　そしてそれらの反応を見て宗近が再び声を出す。
「……まさか知っている者がいるとは思わなかったが、おかげで幾つか説明の手間が省けた。――そう。彼、魔人ガイはかつて魔王を倒すために活動していた人間の戦士であり、最強の魔人に匹敵するほどの強大な魔人だ」
　宗近はまず、ガイから聞いたその経歴と強さを皆に説明するつもりだったが、偶然ガイの事を知るグリムリーパーがその場にいたため、その部分を省いて説明を続ける。他の者の疑問にも答えながら、
「それが……何だってんだ？」
「分からないか？　人間の身で魔王に勝てないというなら、強力な魔人を代わりにぶつければいい。その方が、人類だけで魔王に挑むよりも勝機がある」
　そう、宗近は魔王の強さをしっかりと理解している。
　理解しているからこそ、彼は以前に使徒を通じてガイと接触を持った時に提案されたこの作戦に臨むことにしたのだ。合理的に、それが正しい選択だと判断して。
「……勝機というかメリットがないネ。なんでそんなことに協力しないといけナイカ？　その魔人だけで魔王を倒すって言うなら1人でやればいいネ」
「……ジルに……魔王を倒すならその場を整える必要がある。何の策

もなく真正面から挑んでは負ける可能性が高い」
「その通りだ。当然だが、魔王には配下の魔人や魔軍が存在する。幾らガイが強くとも1人で挑めば勝機はない。袋叩きにあって殺されるのがオチだろう」
魔王を倒すためには少なくない戦力が必要だとガイと宗近は訴える。
だからこそこの場を開いたのだ。人類の力を得るために。大規模な人間の組織に協力を要請するために、この場を用意した。
「……なるほどな。あたしらにその魔軍や魔人の相手……足止めや妨害でもさせようってのか」
「……ああ。そういうことになる」
「チッ……要は引き立て役。あたしらにその魔人の手下になって戦えって、そう言ってんだろ？」
「そう思ってくれても構わない」
「っ……ふざけんじゃねぇ！　誰が魔人の手下になんかなるか！　あたしらは人間だぞ！」
宗近とガイの堂々とした厚かましい要求に、遂にスタークが爆発する。
魔物嫌いであり、魔物を殺すことだけに人生を捧げている鋼の騎士団の隊長である彼女は、人一倍魔物に対する憎しみが深かった。
だからこそ毎日のように魔王を倒したいと思っていたし、この地獄のような世界をどうにかしたいと考えていた。そのため宗近から魔王を倒すために協力してほしいと提案された時に意気投合し、共に魔王を倒すために他の人間の組織にも協力を求めることにも同意した。鋼の騎士団の本拠地であるこの場に影の楔という信用出来ない連中を招き入れたのもそのためだ。本拠地の情報は秘匿すべき重要な情報。かつてスタークの祖先が魔軍に囲まれて殺されたように、下手をすれば大勢の人間が犠牲になる。
だがそのリスクを犯してでも人間同士で協力すべきだという宗近の提案を受け入れたが――ここに来て魔人の部下になって協力しろという提案に、スタークは勝手ながら裏切られたような気持ちを抱

く。
「魔王を倒すって言うから協力してやったのに……！　まさかこんなふざけた提案だとは思わなかったぜ……！」
「魔王を倒すという気持ちに嘘偽りはない。私もガイも君も、その気持ちは同じだ」
「勝手に一緒にすんな！　あたしは……魔物を、魔人を許せねぇ！　協力なんて死んでもごめんだ！」
「お嬢……」
　スタークの強い怒りを見て副隊長であるヴァルダは苦い表情を浮かべる。彼はその理由を知っていた。スタークの父親である前隊長は、スタークが幼い頃に魔人に殺されている。
　父親に特に懐いていたスタークにとってその経験と抱いた感情は決して忘れられるものじゃない。いつかその魔人に復讐してやると、幼い頃から必死に訓練して力を高めてきたのだ。
　ゆえに魔人と協力して魔王を倒すという提案には同意出来なかった。
「……スターク。君の魔人への憎しみは私も理解しているが……ならば、どうやって魔人を倒すか、その方策は持っているのか？」
「んなもん……あるに決まってんだろ！　あんたが持ってる聖刀と同じ魔人を殺せる魔剣カオス！　あれさえ見つかればすぐにでも魔人をぶっ殺しまくって……！」
「そうか。だがそのカオスならこのガイの持ち物だ」
「……ああ。これがカオスだ」
『……まあそういうことじゃな。お嬢さんには残念じゃが……』
「っ……！　喋る剣……！　そいつは……本物の魔剣カオスか……!?」
　カオスについての情報をある程度は持っていたのだろう。喋る黒い剣と見てすぐにスタークは気づく。
　かつて鋼の騎士団でもある戦士が持っていたというその魔剣をまさか魔人が持っていたとは――と、スタークはそこまで考えたところで気づく。

ガイはかつて人間で、魔王を倒すために戦っていた。その話が本当であれば、その鋼の騎士団にいた戦士というのは――
「……そうか。てめぇが……！」
「……そうだ。私はかつて鋼の騎士団に所属していた」
スタークの気づきを察してガイはそれを認める。その方が話がスムーズに進むだろうという打算を内心で覚えながら。
「だからこそ私が魔王を倒すためにこうして動いていることはある程度信用出来るはずだ」
「そう。そして、スターク。君の先程の方策だが……カオスを手に入れたところで君の実力じゃ魔王には勝てないだろう。可能性は０と言っていい」
「っ……んなことはねえ……！　魔剣さえあれば……いつか魔王を倒せるくらいまで強くなって……！」
「残念ながら無理だ。私やそこの……グリムリーパーであっても不可能だろう。その全員が協力したとしても傷１つ付けられずに死ぬ。それが実際に魔王の力を知るこのカオスや日光。そしてガイの見解だ」
「っ……！」
宗近の冷静な反論にスタークがすぐに言い返すことが出来なくなる。歯噛みし、宗近を強く睨んだ。
だがそこでも宗近は視線を逸らさない。
「だが、魔人の力も借りれば勝てる可能性はある。現実的に、人間が魔王に勝つ方法は今のところそれしかないんだ。人間が人間のみの力だけで魔王に打ち勝つ。そんな理想が叶えばいいが、現実は厳しい。その理想が叶わないのなら現実的かつ合理的な手段で現状を打破するしかない」
宗近はスタークだけでなくこの場にいる面々全員に聞かせるようにそう言う。
魔物から人間を解放する。そのために出来る唯一の方法は、この魔人と協力するしかないことを。
「……魔王に勝利するために私に協力してほしい。私が君たち人間に

求めるのはそれだけだ。協力してくれるなら、勝った後で私が出来ることなら何でもしよう。それが報酬だ」
「――と、そういうわけだが……影の楔としてはどうお考えか？」
「――俺は構わない」
ガイが条件を口にし、宗近が具体的に問いかければ真っ先に協力すると表明したのはグリムリーパーだった。
「こいつらがどうするかは知らないが俺は協力する。勇者に魔人ガイに魔王……どれも興味があるからな」
「……そうか……いや、感謝する」
「ならば影の楔側に改めて問おう。魔王を倒すための同盟を組んではくれないか？」
グリムリーパーを除いて再度、今度は棟梁であるホオズキに向けて問いかけるとホオズキは思案していた。そして、膝の上の奴隷の少女を相変わらず撫でながら答える。
「……そうだねえ……参加しても構わないけど……協力の見返りや具体的な作戦、私らが何をするかも聞きたいところだねえ」
「っ!?　正気かよ棟梁！」
「黙ってなサソリ。棟梁のあたしの判断だ。……それで、どうなんだい？」
「そちらについてはこれから詳しく話させてもらう。因みに作戦に参加するに当たっての食料や武器などの物資。そして金銭に関してはキリング商会が受け持ってもらうことになっている。不便はさせないと誓おう」
「――ええ。勿論です。戦いに必要なものは全て無償で提供致しましょう。他の魔物討伐隊を雇うための費用に関しても全てお任せください」
宗近の言葉にキリング商会の代表のグリーンが淀みなく答える。そしてそれを聞けば――影の楔としても悪い話ではないとホオズキは判断した。
「太っ腹だねえ。ま、そういうことなら前向きに検討させてもらうとするよ。あくまでビジネスとしてだがね」

「それでも構わない。感謝する」
「っ……マジかよ……」
「金が稼げるなら私はどちらでもイイネ」
「棟梁の判断なら従うだけだ」
　ホオズキが参加を前向きに検討すると言えば、他の幹部にとっても嫌とは言えない。棟梁の命令は絶対。それが掟だ。許可なく破ったり組織を抜けるようなことがあれば報復される。
　ゆえにその掟を破れるのはグリムリーパーのような圧倒的な強者だけだが、グリムリーパーは参加を元々表明しているので問題なかった。
　だから後は――
「後は鋼の騎士団。スターク、君だけだ」
「……」
「どうする？　勿論、参加は自由だ。参加しなかったからと言って不利になるようなことはしないが……しかし、私個人としては君の率いる鋼の騎士団には参加してほしい」
　鋼の騎士団の参加。それを求め、宗近は言葉を尽くす。
　スタークはしばらくそれを聞いて考えていたが、宗近の声を聞いて頭をかく。そして、苛立ちをはっきりと露わにしながら――
「チッ……ふざけやがって……魔人と協力して魔王を倒すなんざ、本気でふざけてやがる……」
「頼む。協力してくれ」
「……どうするんで？　お嬢？」
「っ……あーあー分かった！　仕方ねぇ……協力してやる！　魔王を倒すためだ……そのためなら、お前の提案を受けてやるよ、宗近」
　そして宗近や部下達の視線を受け、スタークは決断する。鋼の騎士団の隊長として、その強い憎しみを今だけは噛み殺した。ガイに対し、強い視線をぶつけながら。
「ただし信用したわけじゃねえからな……！　少しでも怪しい動きをしたり怪しい動きをしたら……絶対に許さねえ」
「ああ……それで構わない」

「チッ……これでいいんだろ」
「ああ、ありがとうスターク。感謝する」
「……ふん」
ガイに対して警戒を露わにしながらもスタークが了承したことで宗近は思う――これでようやく最低限の戦力は揃いそうだと。
「ならこの場で具体的な内容を詰めた後、それに異論がなければこの場で同盟を締結させてもらうが、それで構わないか？」
「……ああ、構わねえ」
「こっちも問題ないよ。まずはその内容次第だがねえ」
「商会としても異論はありません」
「……問題はないようだな。それなら、ガイもこちらに座ってくれ」
「――ああ」
そこでようやく、ガイは席に着く。
人類の戦力が揃うその場に、魔人の身で出席したその日は魔王ジルに対抗する魔人ガイの勢力が、結成される歴史的な日であった。

レオンハルト様親衛隊

――大陸東部。
大陸一の大都市であるレオンハルトシティ。
そこは普段１００万以上の魔物が暮らし平穏を謳歌する黄金都市であり、かの魔人レオンハルトの居城である紅魔城が中心にそびえ立つ世界一安全かつ平和な街である。
だがその街は今、平時より僅かに慌ただしかった。
「おい……聞いたか？　ガイ様が魔王様に反旗を翻したって話」
「ああ、聞いた……隊長も言ってたぜ。それに備えるためのこの訓練の多さだってな」
「やっぱそうなのかよ……勘弁してほしいぜ。なんたってガイ様はそんなこと……」
「さあな……はぁ。本気で困るぜ。俺、来週には告白しようと思ってたのによ……」
「俺なんて来月には自分の店開こうと思ってたんだぜ？　それが戦争が起こるかもしれないってんでその暇がなくなっちまった」
紅魔城の入り口を警備する魔物兵は最近の慌ただしい街の状況とその理由を憂い、同僚に愚痴を零す。
このレオンハルトシティに住む大半の魔物はレオンハルト軍に所属する魔物兵であるため、必然的に軍が動く状況になれば街全体が動くことになる。
そのため最近は軍事訓練や模擬戦が普段よりも多く実施されているため、平和な日々を楽しんでいる魔物達にとって魔人ガイが反旗を翻したという話は彼らにとって明るいニュースではなかった。
だからこそ警備を行っている彼らも肩を落としていたが……それを表に出すわけにはいかない。
「っ……おい」
「やべっ……」
ゆえに紅魔城の城門が開いたのを見て警備の魔物兵らは背筋を伸

ばし、私語を止める。紅魔城は魔人レオンハルト様の居城であり、中に住んでいるのは全て下級使徒だ。
出入りが許されるのも魔物将軍やそのお付きの魔物隊長など魔軍でも身分の高い者であり、一般の魔物兵の首など簡単に飛ばせる者しかいない。
だからこそ彼らは襟元を正して紅魔城から出てくる者達を見た。
「では皆さん！　行きますわよー！　わたくしにしっかり付いてくるように！」
「遠足じゃないんですからキャロル隊長……」
そうして城から出てきたその集団を見て魔物兵達は身を固くする。
先頭に立って集団を先導するその金髪の少女は魔人レオンハルトの使徒であるキャロルだった。レオンハルトの使徒の中でも最も古株で側近中の側近である彼女の登場は比較的若い新参の魔物兵にとっては十分に緊張の対象である。
だが彼らが緊張する理由はそれのみではない。キャロルの背後にいるその集団もまた、一般の魔物兵達にとっては――いや、魔物であれば誰もが羨む存在である。
（うおっ……すげえ……！）
（あれがレオンハルト様の親衛隊か……）
（俺初めて見た……）
紅魔城から出てきたその集団――レオンハルト様親衛隊を見て魔物兵達は声には出さずとも全員が息を呑む。声に出して反応するわけにはいかない。規律に厳しいレオンハルト軍において軍規に背く行為や、そうでなくとも集団の和を乱すような行為は注意で済まない可能性がある。
だからこそ彼ら魔物兵が次に声を出したのはその集団が完全に去って見えなくなってからのことだった。彼らは集まり、その感想を口に出す。
「おい、見たか？」
「見た……マジですごかったな……」
「あれ全員がレオンハルト様の女なんだろ。マジでやべぇよな……」

「羨ましい……」
一般の魔物兵達にとって手の届かない存在。それらのみで構成された集団に、誰もが羨望と下心を向けてしまう。
だがそれも致し方のないことだった。特に男の子モンスターである彼らにとって、その女の子モンスターの集団はどうしたって惹かれてしまうもの。
加えてその女の子モンスターが突然変異種ともなれば――そこに下心が混ざってしまうのも仕方のないことではあった。

「今だ！　やれ！」
「囲んで倒せ！　こっちの方が数は多い！」
「少数だからと油断するなよ！」
「報告を密にしろ！　連中の動きに惑わされるな！」
魔軍の中でもレオンハルト軍は最精鋭の軍隊である。
それは戦争がなくなったこの平和なジルの時代においても変わらない。魔軍の中でも唯一、入隊時に新兵訓練を行い、正式に配属されてからも定期的な軍事訓練などを行うレオンハルト軍は実戦がほぼ存在しないこの時代においても高い練度を維持していた。
たまに他の軍と模擬戦を行っても全戦全勝であり、彼らに敵う軍隊はこの地上には存在しえない。
「――ティトゥス将軍！　奴らが二手に分かれました！」
「落ち着いて対処せよ！　向こうは寡兵だ！　その策に乗る必要はない！」
だからこそ今日のその模擬戦においてもレオンハルト軍の指揮官であるティトゥス将軍は決して過信ではない自信を持って臨んでいた。
「う～む……素晴らしい……！」
――そしてその模擬戦を、小高い丘の上から眺めて絶賛するのはレオンハルト軍を指揮する魔物大将軍カエサルである。
「戦況は今のところ五分……しかしよく戦っている」

そしてその隣には魔人レオンハルトの使徒であるリーの姿もあった。
リーは元々レオンハルト軍を指揮していた魔物大将軍であり、そのため使徒になった今でも大軍の指揮に長けている。今回のようにカエサルと共に軍事訓練や模擬戦を行うことも日常的に行われているものだった。
「このままでは……負けるだろうな」
「ええ……だからこそ素晴らしい……！　あの美しさに強さ！　まさか我が腹心たるティトゥス将軍がああも容易く打ち破られるとは……！」
そしてその魔軍切っての指揮官である2体の見解は――レオンハルト軍側の敗北であった。
『がおーがおーがおー』
『ぎゃーっす』
「ぐっ……！　くそ、止められん……！」
「らくがき獣が多すぎる……！」
「手を止めさせろ！　このままではキリがない！」
「ふへへー……どんどん行くっすよー」
「くそっ……早すぎる……！　なんて召喚速度だ……！」
模擬戦が行われているその森林地帯は大軍にとっては僅かに不利な地形であるものの、一個軍2万の軍勢を相手に１００にも満たない数では何も出来ないはずであった。
だが彼らは苦戦していた。
森の中ではそのたった１００の軍勢によるゲリラ戦が展開されており、様々な戦術によって軍が翻弄されている。
その1つが1体の女の子モンスターから次々と生み出されていくらくがき獣だった。
丸眼鏡を掛けた明るい髪色のその女の子モンスターは、らくがき獣を生み出すことの出来る〝スケッチ〟にしては見た目もその強さも大きく違っていた。普通のスケッチやその上位種である美人画伯やポリメーカーが1体生み出すのにかける時間で、彼女は何体も何十体

もらくがき獣を生み出している。
らくがき獣1体1体はそれほど強くなくとも束になってかかられると如何に精鋭のレオンハルト軍でも突破するのは容易ではない。
そしてその間に、その背後には獣が迫っていた。
「隙ありー！」
「ぐあっ!?」
「っ……またあいつか！」
突然、木々の間から1つの影が通り過ぎ、魔物兵に襲いかかる。
そうして一瞬見えたその姿に、部下を気絶させられた魔物隊長は苦虫を噛み潰すような表情で木の上に立つその小柄な女の子モンスターを見た。
「おっそーい♡　ねえねえ、そんな遅くて恥ずかしくないの？　そんなんじゃいつまで経っても捕まえられないよ？」
「ぐっ……言わせておけば……！」
「よせ！　挑発に乗るな！」
木の上から部隊を挑発してくるのは獅子の耳と尻尾を持っており、髪色も普通の〝猫またまた〟とは違って獅子に似た、そして小さく、挑発的で――そして何より速かった。
他の何体かの仲間と共に魔物兵を狩っていく彼女は未だ攻撃を避け続け、少しずつ魔物兵の数を減らしていく。
「どっせーい！」
「うわあああああ!?」
「おっりゃー！」
「うひいいいい!?」
そしてまた次の場所では、巨大なハンマーをめちゃくちゃに振るって雷を起こしまくる1体の女の子モンスターがいた。
こちらもまた普通の〝雷大鼓〟とは違う。雷大鼓よりも小さく、髪は赤色で短め。着ている服も洋風のフリフリの物であり――そして何より彼女の種族が持っているはずの太鼓と棒がなく、その代わりにハンマーを持っており、そのハンマーを叩く度に雷が発生して魔物兵達を痺れさせていた。

「よいっしょー！」
「くっ……！　近づけん！」
「隊長！　あれはどうすれば!?」
「ハンマーを振るった後の隙を狙え！　雷は……我慢しろ！」
「ええっ!?　ってことは……あれに突っ込むんですか!?」
「魔法使いは近づかなきゃ倒せん！　いいから行け！」
「は、はっ！」
　そしてその異質な雷大鼓に苦戦する間――本隊もまた少数の魔物による奇襲を受けていた。
「ふっ――！」
「ぐあっ!?」
「遅いっ！」
「ぐあああ!?」
　立ち塞がる魔物兵をその身の丈ほどの大刀で次々に打ち倒していく長身の女の子モンスターは最強種〝ソードマスター〟のように見えた。
　だがその見た目はやはり違っている。その顔立ちや長い髪、そして体の形がくっきり出るドレスのような衣装を身に着けているが、その衣服の上からでもそのスタイルの良さがよく分かる。男の子モンスターにとってその容姿は目の毒になるほどだ。
　だがその強さは圧倒的だった。最精鋭であるレオンハルト軍の魔物兵がどれだけ襲いかかってきても、それを物ともせず蹴散らしている。
「止まれ！」
「ここは通さんぞ……！」
「ここまでやって来たことは褒めてやろう……だが、ここまでだ」
「っ……！　お前達は？」
　だがその女の子モンスターの前に立ち塞がったのは3体の魔物隊長だった。しかもそれは通常の魔物隊長よりも強者の雰囲気を漂わせていたことで、彼女の足を止めさせる。そして名を聞いた。同じ戦士の礼儀として。

「我らはレオンハルト軍最強の魔物隊長である三剣士！　我が名はダルタニアン！」
「同じく三剣士、カトラス！」
「……ゲンリュウサイ」
「「ここを通りたくば我らを倒してから行け！」」
「……なるほど。面白い」
　高レベルの魔物隊長３体が立ち塞がったところで彼女は僅かにどうするべきかを逡巡する。ここで真正面から戦って倒すべきかと。いや、そうした方が良いはずだと目を燃やして槍を強く握る。
　だがすぐにその考えは捨て去ることになった。横から現れた味方の存在によって。
「こ、こっちを見ろー！」
「むっ！」
「増援か!?」
「あれは……きゃんきゃん……!?」
　茂みの中から飛び出てきた女の子モンスターに警戒し目を向ける３体の魔物隊長。
　だが３体ともその姿を見て目を見開いた。その姿は女の子モンスターのきゃんきゃんに似ていたが、きゃんきゃんではない。そのオーラから幸福きゃんきゃんと言うべきものだ。
　だが見た目はその幸福きゃんきゃんよりも大きい。通常１２０センチほどしかないきゃんきゃん種と違って、その幸福きゃんきゃんは１５０センチほどの体躯を持っている。髪も長く、どう見ても普通の幸福きゃんきゃんですらなかった。
　そして――どうしても魔物の本能とも言うべきものがその幸福きゃんきゃんに向けられてしまう。高い経験値を持つであろうその存在は、強さを求める魔物にとっても、そして男の子モンスターとしても目の毒だった。ゆえにその瞬間に、また別の増援が魔物隊長に出来た隙を突くことが出来る。
「えいやあああ！」
「隙ありー！」

「ぐっ……!?」
「何……!?」
「し、しまった！　つい気を取られて……！」
「〝師匠〟！　今だよ！」
「……ああ、助かった！」
　そうして木々の間から奇襲を仕掛けたのはまた別の女の子モンスター達だった。魔物隊長相手に攻撃を加え、出来た隙を見て〝師匠〟と呼ばれた女の子モンスターが魔物兵の間を素早く駆け抜けていく。
　そしてそこにはこの軍を指揮する魔物将軍ティトゥスがいた。師匠はその大刀を構えてティトゥスと目を合わせる。
「そこか！」
「……来たか！　迎え撃て！　私がやられれば終わりだぞ！　何としても私を守れ！」
「はっ！」
　師匠の姿を見たティトゥスが周囲の部下達に檄を飛ばす。魔物兵達がティトゥスの周りを固め、師匠を撃退しようとした。
「はあああああっ！」
「ぐっ……！　ま、待て！」
　だが師匠は止まらなかった。魔物兵の群れを倒し、一気に跳躍して刀を振り上げる。
　倒された魔物隊長が声を上げるも師匠は止まらない。そのまま、ティトゥス将軍に向けて刀を振り下ろし――
「……私達の勝ちだ」
「……ふう。負けた、か……」
　――その刀がティトゥスの眼前で止まる。
　そうして２人は共に勝利宣言と敗北宣言を行った。その瞬間、
「終了ですわ～～～～～!!　各部隊、それぞれ負傷者を回収しながら陣地に戻ってくださいまし！」
　森の中で聞き覚えのある大声が響き渡る。
　それはこの模擬戦の審判をしていた使徒キャロルの声だった。
「はぁ……まさか負けるとはな」

「あいつら容赦ねーな。いてて……」
「誰か運ぶの手伝ってくれ！」
「動けない奴いるかー？」
　決着宣言と指示を受けた魔物兵たちが一斉に負傷者の確認と回収を行い、森から撤収していく。
「……完敗だ。やはり流石だな」
「いえ、そちらも魔軍最精鋭の名に恥じない強さだった」
「そう言ってくれると助かる」
　互いの指揮官が健闘を称え合う。レオンハルト軍側はティトゥス将軍。
　そしてその相手はレオンハルト様親衛隊で、その指揮官は師匠だった。その２人が握手を交わす。
「ふむ、終わったか」
「いやはや……素晴らしい！　さすがはレオンハルト様の親衛隊！　大軍に不利なこの地形とはいえ、我が精鋭を打ち破ってみせるとは……！　エクセレント！　マーベラス！　ディモールトベネ!!」
「……興奮しすぎではないか？」
「興奮もしますとも！　あの美しい強さを目の当たりにすれば誰でも！」
　――そして模擬戦が終わったのを見て丘の上にいたリーとカエサルもまた移動を開始する。その道中での会話はカエサルの賛美に終始したが、それも仕方がないだろう。美しさを信条に置くカエサルにとって親衛隊はまさに理想の部隊であったのだ。
「ああ……叶うことならば私があの部隊を指揮したい……」
「隊長はキャロル様だ。それにお前では持ち味を活かせんだろう」
「それもまた口惜しい……！　おお……神よ……なぜ私は女の子モンスターに生まれなんだ……！」
「ただの女の子モンスターでも親衛隊には入れない。来世に望みをかけるなら突然変異種になることも追加しておくのがいいだろう」
「確かに！　ではそのように今日から祈っておきます！　神よ……！　どうか私を女の子モンスターの突然変異種に……！　バトルノー

トの突然変異種など私には適しているかと思うのですが如何でしょうか……!?」
「――帰ってからやれ。立ち止まって祈るんじゃない」
「おお！　これは私としたことがうっかり……！　申し訳ありませんな！　はっはっは！」
「……まあ分かればよいが……」
リーはカエサルの気が抜けそうな振る舞いに軽く息を吐きながら軍と親衛隊に合流していく。こんなのでもレオンハルト軍を指揮する魔物大将軍であるため能力は高い。なので注意はするもののそれほど強く咎めることはしなかった。その個性こそ、魔軍においては貴重なものである。
そのことは親衛隊を見ていても強く思った。全員が女の子モンスターの突然変異種であるレオンハルト様の親衛隊は、その強さも然ることながら個性も強いことをリーは知っている。普段は城の警備を行っており、キャロルの指揮する部隊でもある親衛隊は同じ使徒であるリーにとっても関わりが深い部隊なのだ。
その実力もレオンハルト様への忠誠心もまたよく知っているため、信頼している。彼女達であればこれから始まると危惧される戦争においてもしっかり働いてくれるだろうと。
「……」
（今日も見られているな……）
――そう、だからこそリーは問題を起こしたくないのだ。特にこの大事な時期に、色恋沙汰など以ての外だと、リーは背後の木の陰からこちらを見る1体の、きゃんきゃんにも似た女の子モンスターの気配を感じながら深い息を吐いた。

――レオンハルト様親衛隊。
それは魔人レオンハルトの居城である紅魔城の警備を行うレオンハルト直轄の部隊である。
その特徴は全員が女の子モンスターの突然変異種で構成されてい

るということ。
ゆえに親衛隊の総員は１００名にも満たないが、その実力は高くまさに少数精鋭という言葉が似合う特殊な部隊である。
また彼女たちは全員が魔人レオンハルトの下級使徒でもあり、その立場は魔軍において非常に高い。
そのため魔軍で最も華やかな部隊であり、多くの男の子モンスターの眼差しを受けながらも誰も手を出すことが出来ない高嶺の花のような存在であった。
「はぁ……」
そして、そんな誉れある親衛隊に所属する下級使徒がここにも1人。
彼女の名はフォーチュン。女の子モンスター、幸福きゃんきゃんの突然変異種である親衛隊の一員だった。
「今日も話しかけられなかったなぁ……」
フォーチュンは悩んでいた。
珍しく外に出ての模擬戦が終わった後の午後の休憩時間。フォーチュンは弁当を持ったまま木の陰で溜息をつく。
「やっほー、フォーチュンちゃん」
「こんなところにいたんすか」
「獅子またちゃんに神絵師ちゃん……」
そしてそんなフォーチュンを見かけて声を掛けてきたのは彼女の友人である親衛隊の2体、猫またまたの突然変異種である獅子またまたとスケッチの突然変異種である神絵師ちゃんだった。
2体とも親衛隊の中では分隊長を務めるレオンハルト様親衛隊の四天王であるが、同じ突然変異種ということもあって親衛隊は上下関係に厳しくない。全員がはぐれものということもあって、同じはぐれもの同士で仲間意識を抱いているのだ。
その中でもこの2体はフォーチュンと特に仲が良い2人であった。そのため、この2体はフォーチュンの秘密を知っている。
「もしかしてまたリー様のことで落ち込んでたんすか？」
「う、うん……また声掛けられなくて……」

「一気にアタックしちゃえばいいのにー。そろそろデートくらい誘わないと他の誰かに取られちゃうかもよー？」
「そ、それは嫌だけど……でも勇気が出なくて」
神絵師と獅子またまたが近くに座って弁当を広げながらいつも通りそれを話し合う。
そう――フォーチュンはレオンハルト様親衛隊でありながら、レオンハルト様ではなくその使徒のリーのことが好きだった。
そのきっかけは以前、フォーチュンがまだ1人だった時。
幸福きゃんきゃんの突然変異種として生まれたフォーチュンは、普通の幸福きゃんきゃんよりもオーラがあり、誰からも狙われる存在だった。
人間の冒険者だけでなく同じ魔物からも経験値として狙われ、どこにも落ち着ける場所がなかった。いつ誰に襲われて経験値に変えられるか分からない。
だからずっと1人で旅をしてきたし、このままずっと死ぬまで1人だと思っていた。
――だがそんな時だ。人間に襲われ、傷ついていたフォーチュンの前に彼が現れた。
『――大丈夫か？』
『あ、貴方は……』
人間の冒険者を拳でバラバラにしたそのダンディな風貌の使徒に、フォーチュンは最初、助けられながらも怯えを見せてその救いの手を撥ね退けた。
だがその彼――リーはその手を撥ね退けられても怒るようなことはせず、そして襲うようなこともせずにそっとフォーチュンを抱き上げた。
『ふむ……どうやら普通の幸福きゃんきゃんではない……突然変異種のようだな』
『い……虐めないで……ください……』
『……案ずるな。私は何もしない。そして……行く当てがないのなら私に付いてくるがいい。我が主……レオンハルト様であればお前を

救ってくださるだろう』
『そ、それは……』
『信用出来ないのも分かるが、それでも信用してくれ』
『……は、はい……分かりました……』
――そしてフォーチュンはリーに助けられ、彼に付いて彼の仲介で城に住まわせてもらうことになった。
親衛隊という突然変異種の女の子モンスターだけで構成される部隊に入り、そこで似たような境遇の仲間と知り合い、友人になり、安全な生活を送れるようになった。
そうして居場所を作ってくれているレオンハルトにフォーチュンは感謝をしている。
だがフォーチュンは自分をその場所に連れてきてくれたリーに惚れてしまっていた。
それ以来、フォーチュンはリーを目で追いかけ続けているのだが――未だ進展はなかった。
「まあリー様はかなり奥手の堅物っぽいですからネー。ペール様がこの間の即売会で会った時に言ってましたけど今までに1度も恋人を作ったことないみたいっすよ?」
「あ、聞いてきてくれたんですね……!」
「そりゃモチっすよ。友達の頼みっすからね」
「神絵師ちゃん……!」
神絵師ちゃんがにへらと笑ってその大きな胸を叩く。彼女はスケッチにしてはかなり絵が上手で、画力が高すぎる――スケッチ風に言えば画風が違いすぎるために排斥された過去がある。
だが今ではレオンハルトシティ一の人気漫画家。幾つもの連載作品を持ち、ペールが執筆する〝剣王伝〟のコミカライズも担当している漫画界における中興の祖だ。
「あたしはアプリちゃん経由で性癖とかも聞いてみたけど特に変わった趣味はないってさー。バニー好きとかなら良かったんだけどねー♡　もぐもぐ……」
「そ、そうなんだ……でも変な趣味がないなら良かったよね……?」

「そだねー。あ、でも特殊性癖とかなら受け止めてくれる人も少ないだろうからそっちの方が良かったかも？　男が趣味とかじゃない限りはフォーチュンちゃんにも可能性あるし……」
「確かにＢＬは可能性ないっすねー。まあでもそうじゃなかっただけ良かったってことで……」
「あ、でもその時はフォーチュンちゃんが男になれば良いんじゃない？　アプリちゃんに聞いたけど、性転換の方法もどっかにあるらしいよー？」
「さすがにそれは嫌だなぁ……って、リー様がそっちの趣味なわけないでしょ！　変なこと言わないでよ！」
「あはは、ごめーん♡」
　獅子またまたが全く反省してない甘い声で謝ってくる。彼女もまた同種から排斥された存在だが、その事情は他とはまた少し異なる。
　猫またまたはそもそも群れで行動せず孤立する種族なのだ。そのため見た目が違っていたところで干渉されたりすることはなかったはずだが、獅子またまたはむしろ群れで行動するのが好きであり、他の猫またまたに常に絡んでいく――本人が言うにはかなりウザ絡みをしてしまったため、そのことで排斥されたらしい。
　そして大勢の魔物がいるレオンハルトシティにやって来て、何となく親衛隊に入ってきたらしい。食べることやエッチすることが大好きで、レオンハルトの娘であるアプリとも友人でよく遊んでいるところを見かける。
　……ちなみに親衛隊の仲間から聞いた話だとかなり上手いらしい。そのことを思い、フォーチュンは少し恥ずかしくなる。
　とはいえリーと恋人になるならいずれはそういうこともあるだろうと知識は密かに身に付けていた。
「でも確かにそろそろ一声くらい掛けた方が良いかもっすね。そのリー様やレオンハルト様が言うにはそろそろ戦争が始まるみたいですし」
「しかも相手が魔人のガイ様ってのがちょっと怖いよねー。ま、ガイ様の相手はレオンハルト様とか他の魔人がやって、あたしらはガイ様

の味方についた魔物とかの相手になるだろうけどねー」
「そっすね。まあガイ様が勝つことはないと思うので心配はいらないと思いますけど――あ、それにかこつけて応援するとかはどうっすか？」
「うーん……でもそれってリー様の負担になりそうだし……」
「それはそうっすけど負担とか何とか言ってたらいつまで経っても進展しないっすよ？　レオンハルト様なんて今でも毎日のように女の子とエッチしまくりですし！　尊敬するレオンハルト様と同じように女の子としてみませんか!?　って今思いついたっすけどそんな感じでいけないですかねー」
「ありあり！　それでなし崩しにエッチして既成事実ゲットだよフォーチュンちゃん！　恋愛は押し倒したもの勝ちだし！　フォーチュンちゃんの超絶テクニックでリー様をアヘアヘにしちゃおう！」
「そ、そんなの無理に決まってるでしょ!?　そんな、いきなりそういうことするなんて……」
　神絵師ちゃんと獅子またまたのあけすけな肉食トークにフォーチュンが顔を赤くする。他の親衛隊と違ってフォーチュンは未だに処女を守っている上、本能に従いがちな魔物の中でもかなり奥手とされる価値観を持っていた。そういうことは、きちんと順序を踏んだ上で行いたいと思っている。
　とはいえ妄想するのは止められない。フォーチュンはその時のことを頭に思い浮かべ、顔を赤くする。
「で、でもそういうことになったら……」
「あ、妄想モード入った」
「フォーチュンちゃんも大概むっつりっすよねー」
　友人の2人がフォーチュンの態度に軽く笑いつつ呆れる。そして弁当に再び口をつけようとしたところで――
「――やっと見つけたぞ。こんなところにいたのか」
「あ、師匠ー」
「どうしたんすか？　師匠」
「あ……お、お疲れ様です」

そこで3人を見かけて近寄ってきたのは親衛隊の副隊長を務めているソードマスターの突然変異種である師匠だった。
親衛隊でキャロル様を除いて最も強くレオンハルト様への忠誠心も高い師匠は、その趣味以外ではあのメイド長さんと肩を並べるほどの女の子モンスターであり、魔物の鑑とされるような存在である。親衛隊の教練も担当しており、キャロルの副官として作戦指揮にも携わる重要な立場でもあった。親衛隊の隊員からも慕われており、ここにいる3人も師匠のことはその名の通り強く尊敬している。
「もしかしてまた決闘相手でも探してるんすか？　元副隊長……ミシェーラ様ならここにいないっすよ」
「師匠ー。次の勝負はメイド長さんと料理長のどっちに挑むんですかー？」
「む……それはまあ、どっちも捨てがたいところではある。メイドさんの突然変異種であるメイド長さんはとにかくあらゆることをこなす万能型であって手強そうだが、人間の突然変異種であると思われる料理長はやはり未知数で格上には違いないしな。だが、やはり次に挑むなら――」
「あ、あの……何か用があったんじゃ……？　それと、多分料理長さんは突然変異種じゃないと思います……自信はないですけど……」
「――おっと、そうだった。お前達、すぐに城に戻るぞ。これから来客がある」
「え、来客ですか？」
神絵師ちゃんと獅子またまたの言葉に反応して楽しそうに分析し始めた師匠をフォーチュンは恐る恐る止める。
そしてすぐに正気に戻ってくれた師匠は3人に城に戻るように告げた。来客があるため、親衛隊として城で出迎える必要があると。
「ああ。カミーラ様がやって来るらしい。だからすぐに城に戻るぞ。昼食休憩は一旦中止だ」
「あー、それなら仕方ないっすね。了解です」
「了解りょうかーい。ほら、フォーチュンちゃんも戻ろ？」
「あ、はい。了解です」

そうしてフォーチュンは3人と共に紅魔城へ戻ることにした――次の機会ではリーに何とか声を掛けられればいいなぁ、と思いながら。

――そして紅魔城の応接室では、1人の魔人がレオンハルトに対してある要求を突きつけているところであった。

「いいな？　レオンハルト……ガイは、私が狩る。そのために協力しろ」

「――そうだな……」

かつて魔人四天王から除籍された魔人カミーラからの要求を受け、レオンハルトは頷きながらも内心であることで悩んでいた。

そのあることとは……ガイとの戦いに参加したがる魔人が思ったよりも多いため、誰を参加させるべきか――ということだった。

調整

今更ではあるが、俺は魔人筆頭兼魔軍参謀だ。
その役目は魔人達を統率し、魔軍全体を指揮、差配することにある。
つまり何か有事が起こった際、どの軍をどれだけ動員するか、どの魔人に軍を任せるか。それらを決めるのは俺になる。
魔王の一声という何よりも優先しなければならない命令さえなければ尚更だ。魔王が俺に対し「良きに計らえ」といった大まかな命令しか出さない場合、俺は魔物の勝利のために好きなように魔人に命令し、魔軍を動かすことになる。
だからこそ俺はこれまで、魔軍の勝利というお題目の元、決定的な場面では自分に都合が良いように事を進めてきた。
明らかに私腹を肥やすようなことや目に見える造反を行うわけではないものの、実際はそれを行っているに等しいことではある。別に正当化するつもりはない。俺は俺の都合を最優先にしている。
その上で、俺の身内や俺に付き従う大勢の部下、魔物達のことも考えて物事を進めている。俺の都合に反しない中で、皆が出来る限り幸福になれるように努めている。
つまるところ俺がやっているのは〝調整〟であるのだ。全ての目的を果たせるように出来る限り、ギリギリのところまで調整する。
どうしても都合に反する場合は何かしらを犠牲にする必要はあるが、それでもフォローを入れて調整する。
言わば魔人筆頭兼魔軍参謀という役職に就いている俺は魔物を――いや、世界を差配する必要があるのだ。
――ゆえに、だ。今回のガイの反乱についても俺は魔王ジルの命令の下、俺の都合に合わせて起こりうる戦いに備える必要がある。
『ガイの奴は俺が闘る。だからお前は手ェ出すんじゃねえ』
ゆえに最初――魔王城で偶然出会った魔人レイにそんなことを言われた時、俺は『好きにしろ』とその参戦を認めてやったのだ。
ガイが反乱したことはすぐに魔物全体に、延いてはほぼ全ての魔人に知れ渡っていたし、ガイがジルに対し戦いを起こすこともまた既に

多くの魔人が知っている。
　だからこそレイがこう言い出すこともまた想定内であった。レイはガイに対し、日頃から「ペテン野郎」と言って憚らない。喧嘩を売って売られて、それからやられっぱなしという因縁がある。
　だからレイが勝手に動く可能性は既に考えていたのだ。それを思えば、事前に自ら申告しに来たのはレイにしては筋を弁えているじゃないかとむしろ感心してしまうほどだ。可能性は考えていたが、参戦するかどうか分からない状態よりは、参戦が確定している状態の方が読みやすいことは明らかである。
『ガイめ……ジル様に逆らうとは愚かな……！』
『……お前も参戦を希望するか？　ノス』
『無論……！　ガイが来るようなら儂が叩き潰す……！』
　だからレイの次にノスと会話し、参戦を決めてくれたこともまた俺としては読みやすくて有り難いことだった。
　ジルの信奉者であるノスに関しては、レイと同じでこちらが何をしなくても勝手に参戦してくるであろうことは読めていた。ガイがジルに戦いを挑むならばノスもまたジルの側で戦いに臨むだろう。勝手に突撃するほど馬鹿ではないが、ジルへの反抗を許すような奴でもない。側に控え、状況によっては打って出ることも迎え撃つこともある。あくまでジルの側近として、ジルの楽しみを奪わないようにした上での参戦だ。
　だからノスに関しても大した問題にはならないと俺は見ていた。ノスは強いが、ガイもノスにやられるほど弱くはなっていない。
　それにいざとなればどうとでもなる。だからノスの参戦も、俺は特に支障がなく見ていた。
『ちょっといい？』
『ハンティか。どうした？』
『一応報告にね。レキシントンの奴がガイを探して暴れ回ってるよ。〝ちょうど暴れたいところだっだんじゃ！　ガイは儂がやってやる！〟って言ってジュノーやアトランタ、配下の鬼達と酒飲みながら馬鹿騒ぎしてる』

『奴らしいな……まあいい。一応注意はしておけ』
『あいよ』
そしてしばらくして次に聞いたのはレキシントンが勝手に動いているという話だった。
戦いが好きで退屈しているレキシントンはガイに恨みがあるとか気に入らないということではなく、単純に魔王への反乱という魔人が動いても問題ない大義名分にかこつけてガイと戦いたいだけだろう。反抗したのなら大手を振って喧嘩を売れる。そんな風に考えて動いたことは容易に想像出来た。勝手に動いていることは少し呆れるところだが、レキシントンの場合は放置しても構わないだろう。
何しろこの戦いはガイから挑みかかってくることで初めて成立する戦いである。魔王城や各地の人間牧場に拠点を構えているジルや他の魔人と違い、反乱すると明確な意思を見せたガイの方は未だ隠れ潜んで戦いの準備をしていることだろう。
つまりどこにいるのか分からないのだ。ゆえにレキシントンのように闇雲に探し回ったところで見つかる可能性は極めて低い。
ガイとの戦いはガイ側を迎え撃つ戦いになる。だから今はこちらも準備だけを進めることしか出来ない。
『――後詰めだと？』
『オー、その通りね。だからガイとファイトする時はミーも連れて行くがよろし』
『……後詰めで構わないのか？　お前なら前線に出たがると思っていたがな』
『ノープロブレム。そもそも今のミーじゃあのデンジャラスガイの相手はリスキーね。だからタイミング見る。戦うのはガイのマジックパワーをしっかりアンダスタンしてからよ！　それからいつものキル・あなた！　クケケケケ！』
『……そうか。なら考えておこう』
そして雲行きが若干怪しくなってきたのはレッドアイが魔王城にいた俺に直接尋ねてきた時からだろう。
しかも無益な殺戮を好むレッドアイにしてはらしくない後詰めで、

最初には戦いたくないという申し出だった。
だがレッドアイの自らのパワーを高めるという目的を考えればそれもおかしなことじゃない。
そもそもレッドアイの思考はデジタルなものであり、殺戮を好むキチガイとは言え誰彼構わず挑みかかったりするようなことは決してしない。デジタルであるがゆえに、勝てないと判断した時は一旦見切りをつけて別の方向にその残虐性を発揮する。
だからガイに対してもその判断なのだろう。ガイの実力、魔法の腕を警戒し、まずは観察してから動く。ガイの強さを正確に見極めて、その上でガイに挑むか、あるいはまた別のやり方を行おうと言うのだろう。レッドアイの思考パターンは制作者から直々に教えてもらっているため、大体は把握出来ている。最近生み出された2人と違ってその思考はキチガイかつ不可解な部分もあるとはいえ、目的自体は分かりやすいものなのだ。
俺がその参戦を突っぱねてもレッドアイは大人しく従うだろう。多分だが。レッドアイも俺を敵に回そうとはしないはずだ。
『レオンハルト様。レオンハルト様宛にお手紙が届いてますよう』
『手紙？　誰からだ』
『ケイブリス様からですね。読みますよう。え～と……『レオンハルト様、ご機嫌如何ですか？　僕はすこぶる体調が悪く、調子も良くないので今は戦えません。なのでガイとの戦いには出さないようお願いします。今度たくさん貢物持って行きます。ぺこぺこ』ってな感じですね。何というか……文章から小物感が凄まじく滲み出てますねぇ……』
『……そうか』
『返事どうします？』
『……了承した。その旨をしたためて送っておけ』
『了解でーす。さらさらさら～っと』
後は……と、これは問題のない記憶だったな。ケイブリスから手紙が届いた時のものだ。
参戦を表明する血気盛んな魔人ばかりではなく、中にはケイブリス

のような……いやケイブリスみたいな魔人は他にはいないが……とはいえ戦いを好まない者や興味のない者も当然いる。
そういった者達は俺が招集しない限り戦いに出てくることはおそらくないだろう。なので心配はいらない。
そうして参戦してくる魔人は大体この辺りかと当たりをつけたのはガイが反乱を起こすと宣言してから数カ月後のことだ。
「ガイは私が、狩る。そのために協力しろ」
「――そうだな……」
そんな時だった。カミーラが城を訪ねてきて、ガイを狩らせろと告げてきたのは。
俺は思う。確かに、カミーラはガイに恨みがある。
ガイによって四天王の地位を剥奪され、1度は襲われかけたガイのことをカミーラが未だに恨んでいるのは知っていた。そう、知っていたつもりではあった。
そしてガイの方も、どちらのガイについてもそれなりに交流を深め、ガイが他の魔人とどのような関係でいるのかも大体は知っていたつもりだったが、その上でこう思う。
……ガイ……どんだけ嫌われてるんだ……。
ガイが他の魔人とあまり交流を持っておらず、それどころか善ガイも悪ガイもむしろ喧嘩を売るような言動をしていることもあってか、ガイを嫌う魔人はいてもガイを好む魔人はいない。強いて言うなら俺かジークくらいだろう。後は無関心か嫌いか、どちらとも言えないかのそれしかない。
「……どうしたレオンハルト」
「……いや、考え事をしていた」
「まさか私に協力しない……なんてことはないだろうな？」
「それは勿論だ。協力はさせてもらう」
「……ああ。それならいい」
ガイの嫌われ具合を再確認しながらカミーラからの催促を受け、俺は淀みなく答える。
だが答えながらも俺は考えていた。

何しろ、このままじゃ参戦する魔人が多すぎる。
ガイとその集めた同志を相手にするだけにしては過剰戦力である上、カミーラに関して言えばガイへのリベンジを果たせない可能性が高いのが問題だ。
「思えば……レオンハルト。お前と狩りに出かけるようになって４００年近く経つか」
「正確には３５０年前からだな」
「よく覚えているな……」
「大事な記憶は忘れないようにしている。忘れるはずがない」
「フッ、そうか……相変わらず歯の浮くようなことを言うやつだ……」
俺が思考している間、カミーラは既にその話が終わったものとして俺の返答に満更でもない顔をしている。
カミーラとの交流は大体いつもこんな感じではあるため俺は動じない。もう慣れている。
だがカミーラの提案と続く言葉に対しては考えざるを得なかった。
「だがそのお前のおかげで力が付いた実感がある……今の私なら、あの憎きガイを気持ちよく甚振れそうだ……」
「……」
カミーラが口端を吊り上げたのを見て、俺は冷静に考える。
確かにカミーラは強くなった。俺が誘ったレベル上げにも何度も付き合い、１０年に１回はあの金の湯に混浴しに行ったおかげでカミーラのレベルは以前にガイに挑んだ時よりも遥かに上がったし、俺は何度も身体を洗わされたおかげでカミーラの３サイズから感じる場所まで完璧に把握するくらいにはカミーラのことを知ったし、まあ仲良くはなったと言えるだろう。
……いや、後者はどうでもいい。それよりも問題なのはカミーラがガイに勝てるかどうかだが……俺の見立てでは厳しい勝負になるだろう。魔法の実力は落ちたとはいえ、ガイは強い。剣も魔法も達人級の腕前であり、魔物討伐隊時代から培ってきた経験。勝負勘は衰えていないだろう。
能力のスペックだけの話で言えばカミーラも負けてはいないが、純

粋な戦士としての技能と戦闘のセンスにおいてガイに軍配が上がると俺は見ていた。
だからカミーラがこのままガイと戦うようなことがあれば、カミーラはおそらく負ける。善ガイであればリスクを考えて殺すまではいかない可能性も高いが絶対ではない上、仮に死ななくともカミーラのプライドはまた深く傷つけられる。
「ふふふ……はーっはっはっは！　どうした？　貴様の実力はその程度か？」
「うるさい！　トランプで勝ったくらいで調子に乗るんじゃないわよ！」
……外野がいたくうるさいが、今はそっちにかまってる場合じゃないため無視する。出来ればカミーラのプライドが傷つけられることのないよう、また万が一を防ぐための策を打ちたいところだが……。
「……さっきから気になっていたが……そいつはお前の新しい使徒か？」
「ん？　――ああ、こいつは俺の使徒のイヴだ。紹介したことなかったか？」
「そっちじゃない。ラインコックとトランプで遊んでいる方だ」
と考えているとカミーラがそんなことを質問してきたため、俺が座るソファーの横に控えているイヴを軽く紹介するも、カミーラが聞きたいのはそちらではなかったようだ。
「……ああ。こいつは――」
「――ふっ。我が名を問うか……ならば答えてやろう！」
出来ればそのまま気にかけずに無視しておいて欲しかったが問われたなら仕方がないと俺は少し離れた場所でカミーラの使徒のラインコックと何故か遊んでいたそいつを紹介しようとして――しかし、その流れを感じ取った向こうの方からやってくる。
「我は天才マイスター、ガウガウによって作られたホムンクルスの成功体！　最強天才超カワで乳もデカい！　レオンハルト様に最も愛される生まれた時から完全な存在なパーフェクトラブガール！」
止める間もなくカミーラの前で名乗り口上を始めてしまったそい

つに俺は先を予想してフォローを入れるための文言を考えておく。
　実際、その名乗りは概ね間違っていない。そのメイド服に眼帯の彼女が、ガウガウに作られたホムンクルスの成功体であることも、それなりに強くて頭自体は良いことも、ピンクにも見える濃い紫色の長い髪や瞳を持つ可愛らしい顔立ちの美少女であることも、乳がお町を参考に作ったのもあってデカいことも間違ってはいなかった。
　ただ一個だけ訂正点を入れるとすれば……天才ではあっても、頭が良いかと言われると微妙な存在。
「そんなボクの名は――パープルアイ！　だ！　はーっはっはっは！」
「……」
「はーっはっはっは……は……」
「……」
「……ふっ……ぼ、ボクの凄さに声も……」
「……死にたいか？」
「ぴっ!?」
　極寒とも形容していいほどの冷たい目を向けるカミーラに気圧され、俺の後ろに隠れる最強天才超カワの乳のデカいホムンクルス。
　……だが絶妙に痛くて抜けているのがこのパープルアイだった。先程までの調子に乗った態度はどこへやら、少し焦り、涙目になりながら俺に助けを求めてくる。一応は護衛も兼ねた役回りを与えられてるはずなんだが……。
「れ、レオンハルト様～」
「……ふー……まあ待てカミーラ。今のはこいつも悪かった。だからそんなに殺気を出すな。――ほら、お前も謝れ」
「ご、ごめんなさい……」
「……ふん。別に怒ってなどいない。あまりの命知らずさに少し脅かしてやろうと思っただけだ」
「ひ、ひ～……れ、レオンハルト様ぁ……あの人、なんか怖い……」
「――何か言ったか？」
「ひっ!?　な、何でもないですぅ……！」

明らかに怒っているカミーラに威圧されて俺の後ろに引っ込むパープルアイ。やはりと言うべきか、パープルアイのこの空気の読めなさはカミーラと相性が悪かったか。そもそもカミーラと美少女は基本的に相性が良くない。良い関係を築けるのはキャロルとかミシェーラみたいな例外くらいだ。もしかしたらこのバカっぽい感じがワンチャンウケるかと思って試しに同席させてみたが、この実験は失敗だったか。
「……それよりもカミーラ。先程の提案だが、少し条件を付けさせてほしい」
「……条件だと？」
ならばと俺はこの時間で思いついた単純な手を実行するためにカミーラに声を掛けて話を戻す。
「ああ。ガイを狩りに行く際は、必ず俺と一緒に向かうことを約束してくれ」
「……それはどういう意図だ？」
僅かに緊張が走ったのは気の所為ではない。俺が懸念していることにカミーラもまたすぐに気づいたのだ。
だからこそ、ここからの言葉の選び方が重要。俺は気をつけながらその意味を正直に口にする。
「万が一の時、俺がお前に助力出来る。そういう意図だ」
「……ほう」
そう言えば、カミーラの目がすっと細くなった。
その理由もまた理解出来る。何しろこれはカミーラのプライドを刺激する言葉であるからだ。カミーラは、それをはっきりと言葉にする。何を気にしているのかを。
「……お前は、私が負けると思っているのか？」
「……ああ。その可能性がないとは言えないだろう」
「っ……言ってくれるな……」
俺がはっきりと、正直にカミーラの質問に答えるとカミーラは眉を立てる。それと同時に室内の空気が更に凍り、俺の後ろにいるパープルアイがビクッと跳ねていた。

しかしはっきりと口にすることもまた必要なことだ。俺は苛立つカミーラに向けて更に言葉を追加する。
「だがこれはお前を侮っているわけじゃない。勝負に絶対はないという俺の価値観から来るものだ」
「……奴は魔人と化したことで以前よりも弱くなった。そう言っていたのはレオンハルト……お前だったはずだが」
「ああ、それは嘘じゃない。だからこそお前にも勝機は十分にあるだろう」
２００年くらい前にカミーラに問われたので答えたガイの強さについての答えをカミーラは持ち出してくる。
実際に魔人になったガイと戦い、俺の答えを知るからこそカミーラは今の自分ならばリベンジが叶うと思ったのだろう。
そしてそれは間違いではない。未だガイの方が力は上とはいえ、勝負にならないほど実力が離れているわけではないのだ。カミーラにも勝機はある。
しかし負ける可能性も高く、実際に戦ってまた負けてしまえばカミーラのプライドが更に傷つく恐れがある。
だからこそ俺はこう言うのだ。カミーラの目を真っ直ぐ見た上で。
「しかし……負ける可能性があるのであれば、お前を１人で行かせるようなことはしたくない。万が一にでも、お前を失いたくないからな」
「……それは」
そしてそれを聞いたカミーラが長い間を取る。表情からも険が取れた。言葉を迷わせている。
やはりここが攻め時だろうと俺は言葉を重ねた。
「俺はお前の意思を尊重しよう。……だが、その上でお前に万が一が起こらないように、近くにいていつでも動けるように注意させてほしい。たったそれだけの頼みだ」
「……」
「頼む」
無言になったカミーラに真剣に頼む。カミーラに対しては嘘をつ

かず、意思を尊重しながら真面目に、気遣いながら正面から男として少し下から、しかしへりくだることなく堂々と頼むことがカミーラという魔人と付き合う上で重要なことだと俺は知っていた。
そして後は待ち続ける。カミーラの返答が来るまで。背後ではパープルアイがワクワクしている気配と、ラインコックがぐぬぬと歯噛みしている気配と、横にいるイヴからの「……女たらし」という少し呆れと嫉妬が入り混じったかのような気配からの呟きを感じたが、それら全てを無視して今はカミーラに注力する。
「……そう、だな」
そうしてややあって――カミーラは答えた。俺の頼みに対し、目線を横に逸しながら。
「……いいだろう」
「……そうか。受け入れてくれて感謝する」
「……礼はいらん。それより……そうだ。また来月には例の風呂に行く時期だろう。それを忘れるな」
「ああ。分かっている。いつも通り誘わせてもらおう」
「……ならいい」
俺の頼みを受け入れたカミーラは、俺の礼に対していつもの風呂を忘れるなと、そう言って立ち上がった。話は終わりだ、とそういうことだろう。
それにしても来月か……もし戦争が始まったら大変だが、都合をつけて行くしかないな……あるいは時期をずらすか。その辺りはまた後でその時になってから考えるとしよう。
俺はカミーラを玄関まで送っていくために同じく立ち上がって付いていく。
そしてその道中――
「あっ……」
俺の城には大勢の下級使徒が住んでいるため、当然玄関までの道のりでもメイドやら誰かしらとすれ違うことはままある。
だからこそそれは珍しいことではないが、ちょっと気がかりが起きたことで俺は僅かにその小さく声を出した人物に目を一瞬だけ向け

る。黒いフォーマルな格好をした、長身のスタイルの良い黒髪ロングの巨乳美女は当然俺にしても見知った下級使徒である。
　その手に書類を幾つか持っていることから、何か業務で報告することがあったのだろう。しかし、俺の方がカミーラと一緒にいるために声を掛けられず、緊張した様子で立ち止まって礼をした。客人、上位者に対する礼儀だ。それをしっかりと行っている。カミーラはそれに全く目を向けないが、それがむしろ礼儀に背いていない証拠である。礼を失すれば目に止まるからな。
「では軍を動かす時はこっちから通達させてもらう。それでいいか？」
「ああ。……」
　そうして俺はカミーラを玄関で無事に見送り終える。別れる際に、しばし立ち止まって無言でこちらを見ている時間もあったが、俺が何も言ってこないのを見るとすぐに背中を向けて城から出ていった。
「カミーラ様がいると空気が締まりますね」
「こ、怖かった～……」
「……礼儀をしっかりしていれば問題になることはない。お前達も……特にパープルアイは気をつけろよ。二度目はもっと怖いからな」
「お、同じ失敗は繰り返さないから問題はない！　完全だからな！……でも一応気をつける……」
「私から見ても結構怒ってましたからね。本当に気をつけた方がいいですよ」
「イヴが言うなら本当に苛立ってたんだな。……さて、それよりも――何か報告か？」
「あ……はい。その……幾つか改善案についてまとめてきましたのでご相談させて頂こうかと思い……」
　そうして注意を終えた後、次に声を掛けたのはカミーラと対面したため、その場で立ち止まっていた下級使徒である。その中でも5年前にやってきたばかりの新参である彼女は、任せられた仕事について俺に相談に来たという。なので俺は当たり前にそれを聞くことにした。彼女を褒めてやりながら。

「……さすがだな会長。昨日言い渡したばかりの案件をもう解決か」
「いえそんな……私は自分のやるべきことをこなしているまでです」
「任せられた仕事を十全にこなしている以上、褒め称えない理由はない。やはりお前に任せて正解だったか」
「それもレオンハルト様の慧眼あってのことです」
「ルナさんは謙虚ですね。もう少し自分に自信を持っても良いと思いますよ」
「……ありがとうございますイヴ様。しかし、今はまだはっきりとした成果があるわけではないので……あ、それとグリーン……グリーンアイ様にも助けられていますのでパープルアイ様にもお礼を申し上げておきます」
「おおっ……やはり我が兄は役に立っているか……！　さすがはグリーンアイ……混沌から湧き出た恐怖の改造人間よ……！」
「まあルナさんを表に出すには色々と問題もありますからね」
「ああ、そうだな」
　イヴの言葉に頷きながら俺は自らの下級使徒であり、キリング商会の会長であるルナの様子を観察する。
　クールなキャリアウーマンと言った印象のルナだが、その瞳は僅かにまだ揺れていて、落ち着きを取り戻そうとしている最中だった。
「……怖かったか？」
「あ……」
　ゆえに俺はルナの身体を抱き、落ち着かせるようにその背中を擦ってやる。
　するとルナは俺の胸に顔を埋めるようにしながら抱きついてきた。そして、小さく謝罪の言葉を零す。
「すみません……思い出してしまって」
「気にするな。辛かったらいつでも言え。仕事も放り出したって構わない」
「はい……ありがとうございます。レオンハルト様」
　俺がしばらく身体を抱いてやると僅かに内心で思い出していた恐怖を忘れることが出来たのだろう。その瞳の揺らぎが止まり、いつも

のクールで落ち着いたものに戻る。
――だが原因が原因なだけに、簡単には乗り越えられないだろう。
俺はその原因について考え、何度目かになる怒りを内側だけで浮かび上がらせる。やはり、あいつにはそろそろお灸を据えてやらないといけないだろう。ちょうどもうすぐで契約も切れるところだ。
加えてガイとの戦争も直に始まるだろう。俺を舐めたツケを払わせるには絶好の機会であり、試しにもなる。
そうして俺は腕の中にいる自分の女を抱きしめながら、魔人の中で誰を招集するかを決め、それを踏まえて調整を行おうと思考を巡らせた。
――それが各地の人間牧場が襲撃を受けたと報告を受けた……1ヶ月前の出来事であった。

開戦の狼煙

多くの魔物にとって、人間は都合のいい家畜でしかない。
魔物が欲望のはけ口とするには都合の良い見た目をしており、力も弱く頭も悪い。放っといても勝手に増えるし、殺すのも簡単。虐げたところで反抗もしてこない。
はっきり言ってしまえば下等生物であるし、なんだったら一周回って人間を飼い続けることに煩わしさや飽きすら感じる者すらいるほどには、魔物にとって人間は取るに足らない存在であった。
「おい早くしろ！」
「水持って来い！」
「何だ!?　何が起こってる!?」
「誰かが食料庫に火をつけやがった！」
「他の建物に燃え移る前に火を消せ！」
「クソ……一体誰がこんなことを……!?」
――ゆえに、その日もまた魔物達は気を緩めていた。
各地にある人間牧場。それは魔軍によって運営されている。
どれだけ小さな人間牧場であっても最低一個軍が駐屯しており、その一個軍が人間を飼育と虐待、見張りや巡回などの仕事を行っていた。魔軍の一個軍は1体の魔物将軍によって指揮されており、１００体の魔物隊長がそれぞれ２００体の魔物を指揮する2万の軍勢であり、１０００万以上の人間を飼育する大規模人間牧場でもなければ一個軍は牧場を運営するのに十分な数である。
何しろ人間は大人しく魔物に従順な生き物なのだ。野良で生きるような例外を除いて、人間は魔物の言うことに逆らわない。
その例外に関しても、その数は数十から数百程度。あるいは千人を超える魔物討伐隊もあるとは聞くが、だとしてもそれは魔軍の一個軍で十分に対処が可能な取るに足らない数である。
だからこそ万が一にも人間が襲って来ても十分に返り討ちに出来るだけの戦力が各地の人間牧場には備わっていた。
無論、人間が群れを成して魔軍の駐屯地を襲ってくるなどまずあり

えないことではあるものの、備えは重要である。そのことを魔物将軍や魔物隊長は当然理解していたし、魔物兵ですらその数には安心を覚えていた。
「将軍！　次の指示を……！」
「……」
「……？　将軍？」
――そして、だからこそ魔物達は虚を突かれた。
「大変だ！　しょ、将軍が……誰かに殺された！」
「はあ!?　嘘だろ!?」
「こんな時に冗談言うんじゃねぇよ！」
「殺すって一体誰が殺すんだよ!?」
「冗談じゃない！　将軍はおそらくだが、人間に――」
「……？　お、おい！　何が……」
――多くの魔物が寝静まったその夜、騒ぎに乗じて魔物将軍や魔物隊長が暗殺される。
それは魔物達が忘れていた脅威だった。
かつて魔物と人間の間で頻繁に戦争が繰り返されていた時代では誰もが知る常識。
人間は魔物より弱く、愚かな生き物である。
だが、弱いだけの生き物でもないということを。
時に人間は魔物を殺しうる。その数や力、知能を以て、種の存続と安寧のために戦い続ける生き物なのだと。
「今だ！　やれェ――！」
「うおおおおお！」
「うぎゃああ！」
「な、なんだ!?　人間!?」
「た、隊長！　どうすれば……!?」
「おい、将軍がやられたらしいぞ!?」
「え……じゃあ俺達どうすれば……」
「た、戦うしかねぇだろ！　相手は人間なんだ！　いつも通り殴ればすぐに大人しくなるだろ！」

「そ、そうだよな……！」
「――オラオラオラ！　死ね！　魔物共！」
「ぎゃあああ!?」
「おい！　全然止まらなねえぞ！」
「何だあの人間！　強すぎるだろ！」
「こ、このままじゃ殺されちまう……！」
「あ、おい！　馬鹿！　逃げるなよ！」
「ひいいい!?　お、お助けー！」
　人間の組織だった襲撃を受け、その日生き残った魔物達は僅かだが人間の力を思い知る。
　そして思い出した。かつて人間は、魔物と曲がりなりにも戦争をしていたことを。
「……どうやら、上手くいっているようだな」
「ええ。各地から報告が届いております」
　そしてそれは、かつて人間だった者達にとっても同じだった。
　丘の上で人間牧場を見下ろす人の姿をした魔――その魔人と使徒は、火の手が上がり、人間の襲撃に逃げ惑う魔物達を見て作戦が上手くいっていることをその目でも確認した。
　本来なら魔物側である魔人と使徒だが、今のこの２人――魔人ガイとその使徒バークスハムは魔王ジルに反逆の意思を示した裏切り者であり、各地の人間牧場で夜襲を仕掛けた魔物討伐隊の連合軍――人類軍の首魁とその参謀という立場にあった。
「襲撃をしかけた１８箇所の人間牧場、全てで目標を達成か。出来過ぎなくらいだな」
「魔物達は人間を舐めきっています。人を家畜とするその価値観が染み付いた戦争慣れしていない魔物兵では突然の夜襲への対応は難しいでしょう」
「それでもよくやったものだ」
「はい。影の楔を中心とするレンジャーやアサシンらの働きは大きいでしょう」
「うむ……正面から戦っては如何に実戦慣れしていない魔物兵と言え

ども人間に勝ち目はない」
ガイは魔人として、そして元人間としての視点で魔軍と人類の戦力を分析していた。
力の面でも数の面でも人間は魔物には敵わない。ゆえに正面から挑めばすぐに押し潰されて無惨に死ぬだけ――その見解はガイやバークスハムだけでなく、人類軍の中心人物達もまた同様であった。
だからこそ魔軍相手にどのような戦略、戦術を用いるかは満場一致で決まっていた。それをバークスハムが口にする。
「ゆえに我らは――徹底した遊撃戦にて魔軍を翻弄し、消耗を強いる」
そう、それが今の人間に出来る唯一にして最も効果的な戦法であると結論付けていた。
これから人類軍は夜襲を含めた奇襲や待ち伏せ、補給を破壊することに徹する。
そうして嫌がらせによって大物を少しずつ釣り出すことを目的とした作戦である。ゆえにその大物を思い、ガイの帯剣が声を出した。
『だが戦いはこっからだぞ』
「ああ。分かっている。ここからは――魔人が動き出す」
ガイの帯剣である魔剣カオス――魔人や魔王の無敵結界を破壊し、傷つけることの出来る唯一の剣であるその言葉にガイは神妙に頷いた。
遊撃戦を行っただけでは嫌がらせにはなっても決して勝てやしない。魔物に勝利するにはその上の存在である魔人――そして、魔王ジルを釣り出さなければならない。
「すぐに討伐軍が編成されるでしょうな」
「魔人は誰が出てくる？」
「そちらも既に視えています。第一陣は――5体の魔人が招集されている様ですね」
「5体……やはり事前に分かっていた通りだったな。となるとジルは未だ城か」
「はい。そしてそこには魔人ノスが控えています。なので魔王城に強襲を仕掛けるのは難しいかと」

バークスハムは手の内で浮かばせる水晶に視えた未来の景色をそのまま主であるガイに伝える。
未来視の一族出身の傑物であるバークスハムによる予知、未来視は作戦を練るにあたって大いに役に立っていた。遊撃戦を行い、魔人を釣り出し、狙いの魔人を倒すか足止めを行う。
そしてジルを釣り出すか周囲に魔人がいなくなった時点でガイがジルを強襲して倒す――人類軍が立てた大まかな作戦の概要がそれだ。
「……そうか。ならば予定通り、まずは削っていくしかないな」
「はい。しかしお気をつけを、ガイ様。他の魔人であればともかく、かの御方と戦えば今のガイ様では……」
「……分かっている」
だが無論、口で言うほど簡単なことではないことはガイも理解していた。バークスハムの進言、注意もまたそれを懸念してのことだとガイは眉間に皺を寄せながらその脅威について思う。
ともすれば、あのジルよりも厄介かつ勝利するのが難しいとバークスハムの予知で視えた存在。ガイにとって少なからず交流のあったその魔人の名を口に出す。
「――レオンハルト、か……」
魔人筆頭にして魔軍参謀であるその最強の魔人が出てくる。
かつて死闘を繰り広げたその相手の出陣は避けられない。
ゆえにガイは苦々しい、複雑な気持ちを抱えながらも大義のために割り切ることを決める。
――自分は決して魔人レオンハルトとは戦わない。
ゆえにレオンハルトの相手は……他に押し付けることを。
ジルを倒すために自分に付き従う人間を犠牲にする。そのことをガイは、眼下で戦いを繰り広げる人間達を見て僅かに逡巡したが――すぐに目を背けて背後に歩き出す。
きっと彼らの大半は魔物に、使徒に、魔人によって……無惨に殺されてしまうだろう。
だがそうしなければならないのだとガイは強く自分に言い聞かせ

る。
魔王を倒し、人類を解放するためには必要な犠牲だと割り切るしかない。
その覚悟と決意を胸に刻んで――ガイはその日、自分で始めたその戦争に身を投じた。

――大陸東部。
魔王城に程近い大規模な人間牧場。そこに建てられた大きな建造物は、大陸を支配する魔軍の司令部の1つだ。
ゆえに普段、その場所には最低でも数十万規模の魔物兵が詰めており、人間の飼育と管理を行っている。
言うなれば魔物の巣窟であり、野良の人間も決してこの辺りには近づかない。そこは魔物達にとっての安全地帯でもあった。今の世界で魔物を脅かす生物は存在しない。
そのため魔物達は平穏を謳歌していたが……それでも恐怖を感じる時が全くないわけではない。
一般の魔物を脅かせる上位者――魔人の存在。
その魔人が今日、普段はあまり使われることのない司令部に集まっているのだ。
しかも席に座るのは1体だけではなく4体もいた。その部屋の警備を行っている運の悪い魔物兵達は彼らの存在に普段は横行している私語を全く行わず、それどころか微動だにせずその場に立ち続ける。
強烈な魔の気配――魔人特有の存在感がその部屋には渦巻いていた。
「はぁーい。お待たせ……ってあら？　もう全員集まってたんだ」
そして沈黙が続く司令部にもう1体の魔人が姿を現す。
白い大蛇を恥丘から生やすその女の魔人――メディウサは既に席に着いている他の4体の魔人を見て呑気な声を漏らす。
すると今まで腕を組んだまま上座で目を閉じていたその魔人の瞼

が開き、その鋭い赤い眼光がメディウサを射抜く。並の魔物では萎縮して気絶してしまってもおかしくないそれを放つのは、全魔人中最強の存在である魔人筆頭兼魔軍参謀である魔人レオンハルトだった。
「――遅い。遅刻だぞ、メディウサ」
「えー？　嘘ぉ、ちゃんと時間通りに来たわよー」
「３２分の遅刻だ。お前のせいで、それだけ会議が始まるのが遅れている。早く席に着け」
「それくらい許してよ。というかちょっと細かくない？　時間まで指定されてたっけ？」
「お前にもしっかり通達はしている。――それとも俺が間違っているとでも言うつもりか？」
「っ……と。そこまでは言ってないわよー。ごめんごめん。……もう、ちょっと冗談言っただけじゃない……大体、なんで私まで呼ばれて……契約の更新がまだ終わってないからって――」
「メディウサ」
「はいはーい。何でもありませーん」
　レオンハルトが僅かに目を細めて威圧すると、さすがにその圧力には観念したメディウサが軽く謝罪をしながら席に着く。その態度は明らかに不満気で、頬を膨らませて愚痴を呟いていたがそれをレオンハルトは再度諌めた上で別に視線を移した。
「さて、これで全員揃ったな」
「ふん……ようやくかよ」
　円形のテーブルに足を乗せて鼻を鳴らしたのは魔人レイ。
　誰にも憚ることなく、常に苛立ちを抱え、暴れられる機会を伺っているレイはようやくこの退屈な時間に進展が起きたことで一応は聞く姿勢になる。
「クケケケケ！　ようやく始まるヒューマンダイ！　……のためのヒューマンキルミーティング！　さっさと始めるがよろし！」
　そして席に座るでもなくとある生物に寄生した状態でテーブルの前にいたのは魔人レッドアイ。
　デジタルな思考に没頭していたレッドアイもまた軍議が始まるこ

とでそのキチガイ染みたテンションを表に出す。
「……」
そしてそれら全てを見て冷たい表情のまま頬杖をついて佇んでいたのは魔人カミーラ。
レオンハルトを除くこの場にいる魔人の中では最も上位にいたはずのその魔人はただただ無言で上位者としての存在感を放ち続けている。
彼らは今回、反逆者であるガイとその一派を討伐するためにレオンハルトによって招集された魔人達であった。
「ではこれより軍議を始める――リー、報告を頼む」
「はっ」
魔軍参謀であるレオンハルトがその宣言と共に自らの使徒の名を呼べば、魔物大将軍出身の使徒であるリーがレオンハルトの隣で状況説明を行う。
「まず2週間前に起こった各地の人間牧場襲撃についてですが、襲撃が掛けられた18箇所全てで人間の集団を確認しております」
「ハッ……あの野郎はマジで人間と手を組んでるのかよ」
「はい。その可能性は高いかと。襲撃を受けた人間牧場は全て小規模かつ魔人のいない場所です。魔軍の情報に詳しい者がいなければこれだけ正確に手薄な箇所を狙うのは不可能です」
その場にいる者達にも見えるように広げられている地図には予め各地の人間牧場の位置や街や城などがある場所も正確に記され、襲撃を受けた場所にも印が置かれていた。
それを見れば相手が戦力の手薄な牧場を狙って襲撃を掛けていることもよく分かった。主に大陸南部と東部を中心に、魔人のいない場所だけを狙い撃っていると。
「ふーん……だから牧場が襲撃されたって割にはこっちは静かだったんだ」
「襲撃を仕掛けた集団の中に魔人ガイの姿は確認出来なかったと報告を受けています。魔人に傷を付けられるのはガイ様と勇者と呼ばれる人間のみ。下手に仕掛けては返り討ちに遭ってしまうという判断

でしょう」
「向こうの戦力は魔物討伐隊を中心としている。その数は多くとも1万や2万程度だろう。であれば被害は抑える戦略を選ぶのは当然のことだ」
「はい。レオンハルト様の言う通り、向こうは遊撃戦にて軍勢を釣り出し、夜襲や物資を狙いながらの各個撃破を目的としていると思われます」
　魔軍相手に正面から戦争を仕掛けても勝てるはずがない。何しろその数には何百倍もの開きがあるのだ。仮にこれが魔軍でなく同じ人間の軍勢だとしても勝ち目のない数。ゆえに遊撃戦を行いつつの首狩り戦術を行う以外に向こうの勝ち筋はない。
「だったらもう大軍で踏み潰しちゃえばいいんじゃない？　そしたら絶対勝てるし面倒もないでしょ」
　だからこそそんな意見が出てくるのも当然のことだ。それを口にしたメディウサ自身は、自分が働きたくない、面倒なことをさっさと終わらせたいという意思から口にしたものでも、その対策自体はシンプルかつ真っ当なものである。
　しかしその意見を、レオンハルトは否定した。
「普通ならそれでも構わないがな。だが今回は、その手は取らない」
「え～？　何でよ？」
「この戦争は勝つことがだけが目的じゃない」
　レオンハルトは言う。魔人として、絶対に従わなければならない上意。今回の戦争の主目的を。
「ガイを叩き、追い詰めること。それがジル様から俺達に与えられた命令だ」
「……要は遊びってことか」
「ああ。ジル様はガイが苦しみ、絶望することを望んでいる。そのためには奴が仲間にした人間相手にも一気に叩き潰すのではなく、真綿で首を絞めるようにゆっくりと嬲り殺しにする必要がある。無論、手加減した上でな」
「ハッ、なるほどな……さすがはジルの姉御。良い趣味してるぜ」

レオンハルトの語ったその主目的――魔王ジルの命令を聞いてジルを慕うレイが素直な感心を見せる。
そしてそれを聞けばどんな魔人でも納得せざるを得なかった。大軍を送り込み、轢き潰すのが最も確実で安全な手であるが、それをしても芸がない。
人間と、そしてガイには希望を与え、その上で追い詰めて絶望に叩き落とす。この戦争はそのための手段であり、つまるところ真剣勝負ではなく遊びなのだ。
普通に戦っては勝負にならないため、手加減を行う。そのために、敢えてレオンハルトは相手の誘いに乗ることを口にする。
「だから今回の討伐軍に関しても数はそう多くは出さない。その上で、お前達にはそれぞれ一個軍を率いて動いてもらう」
そうしてレオンハルトはその内訳を告げた。魔人達が率いる一個軍。そのそれぞれの担当を。
「まずはレイ――お前にはガイが潜伏している可能性の高い人間の拠点の1つを襲撃してもらう」
「……ほォ、悪くねェな」
大陸南部。その南端に近い地点にリーが駒を置き、その場所をレイの軍が担当することを告げる。
目的は〝影の楔〟という魔物討伐隊の拠点の捜索及び襲撃で、レオンハルトからの命令であっても担当自体は悪いものでないためレイは特に反抗することもなくそれを受け入れる姿勢を見せた。
「メディウサ。お前も役割自体はレイと同じ。人間の拠点を1つ襲撃してもらう」
「うわ、面倒くさそー。こいつに全部任せていい？」
「……この蛇女と一緒にやれってのか？」
「早とちりするな。メディウサが襲撃するのはレイとは別の拠点だ」
言ってまた地図に駒が置かれる。大陸南部中央の山岳部。そこが〝鋼の騎士団〟という魔物討伐隊の拠点があると思われる場所であり、メディウサが担当する軍が向かう先だ。
「しょうがないわねえ……ま、いいけど。それなら久しぶりに外の人

間で楽しませてもらおっかな」
「……後で細かい詳細を伝える。そして次にカミーラ。お前は俺と共に遊撃に加わってもらう。それで構わないな？」
「……ああ。それでいい」
　そしてメディウサの不穏な笑みとその言葉を無視し、レオンハルトは次に遊撃軍――自らとカミーラが指揮する軍を大陸南部西側の辺りに駒で示す。
「……って、なんでそっちは２人なのよ？」
「捜索のためだ。西側にあると思われる拠点は未だ詳しい地点が判明していないからな。途中で軍を分ける可能性がある」
「とか言って、本当は女の子と一緒にいたいだけだったりして？」
「だとしてもお前の関与することじゃないな。……さて、最後だが討伐軍全体の司令部を置く本陣をレッドアイ。お前に任せる」
「オーケーオーケー。ノープロブレムよ」
　メディウサの茶化しにもレオンハルトは付き合わず、最後に大陸南部中央の平原。そこにある人間牧場に本陣を示す駒を置き、そこをレッドアイに任せると告げた。
　ここまで特に発言せず黙っていたレッドアイだが、命令を下されれば軽くそれを了承してみせる。その様子はどこか上機嫌にも見えるが、実際に何を考えているかは同じ魔人であっても窺い知れない。
「加えてそれぞれの軍に俺の使徒を最低２人は付ける」
「……別にいらねェがな」
「ガイを発見し、お前達が戦闘に入った際のフォローを行うためだ。向こうには使徒のバークスハムや人間の実力者も少なからずいる。それらを排除しながら万が一にも魔物将軍を殺され、軍の敗走を防ぐための対策だ。向こうの狙いに付き合う以上、こちらも敵を一蹴出来るよう盤石の布陣で臨まなければならないからな」
「……ふん。そうかよ」
　レオンハルトの使徒が２人は付くという説明にレイはボヤキはするも、その理由まで説明されればそれ以上は文句を口にしない。言ったところで無駄。そして、どうでもいいからだ。どの道使徒では魔人

と戦えない。ガイと戦う際に邪魔が入るのも面倒。それならば使徒に露払いを任せるのはレイや他の魔人にとっても都合が良かった。
ゆえに問題なく布陣は決まる。レイの軍にミシェーラとイヴ。メディウサの軍にキャロルとペール。レオンハルトとカミーラの軍にハンティとガウガウ。そしてレッドアイの担当する本陣にはリーとお町がそれぞれ付くことになる。
そして魔人や使徒以外も精鋭を選んでいた。本陣には魔物大将軍カエサルも指揮に付き、各魔人が率いる軍は全てレオンハルト軍に所属する将兵であり、普段は出さない親衛隊までも参陣している。
それはレオンハルトの言うように、まさに盤石の布陣であった。
しかし布陣には問題なくともそれ以外の不安要素もあるためレオンハルトは改めて告げた。
「分かっているとは思うが、俺の指揮下で動く以上は俺の指示には従ってもらう。命令違反は厳罰だ。それを理解した上で行動しろ」
「チッ……」
「言われなくても分かってるわよぉ」
レオンハルトは命令違反を犯す可能性の高い2体の魔人、レイとメディウサに対して鋭い視線を向けながら釘を刺す。それに対しレイは舌打ちで、メディウサは頬を膨らませながら嫌そうに了承した。
「そして当然だが……相手が人間だろうとガイだろうと、負けることは許されない」
そして魔人達に改めてそれを言い聞かせるも、それに対し文句や不満を口にする者はいない。
魔人の殆どは自らの力に自信を持っている。そのためどうとでもなると高をくくっていた。ガイが如何に手強かろうと、同じ魔人の内のたった1体。それに加えて人間の軍勢。そんな矮小な相手に負けるはずがないと。
「では行くぞ――ジル様の名の下に、人間を再び絶望の底に落とす」
――それから、詳しい命令内容。敵陣営についての情報を共有した後、レオンハルトはその場にいる魔人と使徒。軍勢を指揮する魔物大将軍カエサル。魔物将軍。魔物隊長。全ての魔物兵に対し、そう宣言

する。
――ガイ一派を討伐する総勢１０万の軍勢が、その日の内に大陸南部の司令部に向けて出立した。
――そしてそれが人間達にとって千年振りの、多くの屍を積み上げることになる……地獄のような『戦争』の始まりだった。

初陣

――大陸南部。
その平原にある人間牧場には、現在魔軍の司令部が設置されていた。
「よし、これは運び終わったな」
「隊長。次の指示を」
「ああ。次はこっちだ」
「第１部隊から第２０部隊は先に休憩時間だ！　列に並び食事を取るように！」
緑、青、赤の魔物兵がそれぞれ魔物隊長の指示で行き交い、魔物将軍もまた大勢の魔物隊長に仕事を振り分けるその姿は統率の取れない普通のモンスター達とは明らかに違ったもの。
リーダー能力や統率能力を持つ魔物隊長や魔物将軍に率いられた魔物兵達は人間以上の組織的な動きで効率的に作業を行っている。
――たかが普通の魔軍と同じにするなかれ。
彼らは魔軍の中でも精鋭であるレオンハルト軍。
兵の練度、指揮官の能力などあらゆる面で他の軍とは違う彼らは自分達が魔軍の最精鋭であるという誇りと誉を抱き、その評価に恥じないよう気合を持って臨んでいた。
「うーむ……この美しく調和の取れた組織的な行動……！　ンン～～ビューティフルッ！」
そしてそんな最強のレオンハルト軍を率いる魔物大将軍こそ、その魔物兵達の動きを見て大げさに感動している――カエサルである。
「やはり我が軍は素晴らしい……そうは思わぬか、ブルータス」
「はっ。毎日の訓練の賜物でありましょう」
――レオンハルト軍所属の魔物将軍ブルータス。
カエサルの側近の内の１体である彼がカエサルの言葉に同意を返す。
「うむうむ。加えてレオンハルト様の美しい威光と私の美しさのおか

げだろう。皆美しい我々に恥じないようにしているのだろうな……
その心意気も実に美しい！」
「きっとそうでありましょうな」
「うむ、そうだろう。そうに違いない……そしてそれを理解している貴様もビューティフルだっ！　褒めてやるぞブルータス！」
「ありがとうございます。では我々もそろそろ夜襲に備えて休憩に入りましょう」
「うむ、そうしよう。それが美しい」
カエサルとの付き合い方を熟知しているブルータスはカエサルの自己完結気味な会話にも慣れた様子で応じる。
あらゆる能力に優れた完璧なカエサルの唯一の欠点がこの何事に置いても美しさを重視するこの癖だらけの性格だが、それゆえに美しさの極致として見ているレオンハルトには極めて従順であり職務も忠実にこなすためそれほど問題視はされていない。
軍務を真面目にこなしている以上、個性は尊重される。２０００年以上培ってきた文化や思想がレオンハルト軍には根付いていた。
「ふんっ……ふんっ……！」
そしてそのレオンハルト軍の最古参の将兵もまたそこにいた。
台の上に寝た状態で２メートル以上もある長い槍を上げ下げしているその男の上半身は鍛え上げられた逞しい筋肉が脈動している。
普段身に着けている赤い軍服の上だけを脱いで、そうしていつもの筋トレに励むダンディな男の名は――リー。
魔人レオンハルトの使徒である元魔物大将軍であり、軍歴２０００年以上のベテラン中のベテラン――レオンハルト軍の将兵から密かに〝兵士の父〟と呼ばれ慕われる使徒、魔軍の将である。
「はぁ……レオンハルト……」
そしてもう１人――近くに置かれた机と椅子に腰掛け、悩ましげな吐息を零しているのは１０本の尾を持つＪＡＰＡＮ風の衣装を着た爆乳の美女。元妖怪の使徒――お町。
共に主のレオンハルトによって本陣に振り分けられた２人は思い思いの時間を過ごしていた。

「お、お疲れ様です……リー様。た、タオルをどうぞ……」
「……ああ」
リーが筋トレを終えて立ち上がったのを見てタオルを持って駆け寄るのは、本来ここに1人でいるはずのない幸福きゃんきゃんの特別変異種。親衛隊のフォーチュンだった。
同じ親衛隊の仲間の働きかけもあり、今回レオンハルトからの辞令でリーの副官に就いたフォーチュンは懸命にサポートをしようとリーの一挙手一投足を見逃さないよう熱視線を送っていた。
そこには明らかに好意が入り混じっているものの、リーはそれを気づかない振りをしつつタオルを受け取ると汗を丁寧に拭い去り、衣服を着用する。
「ゆ、夕食をお取りになりますか？　あの、それなら私、取ってきますけど――」
「――いや、大丈夫だ」
「え、でも……」
「問題ない。食事なら、これから用意する」
「え……？」
フォーチュンからの夕食の申し出を断り、リーは言うやいなや、自らの荷物から道具と材料を取り出して準備を始めた。
土台を作り、火を起こし、網を熱し、肉を切り分け、それを串に1つずつ丁寧に刺していく。その際に調味料で味付けをするのも忘れない。
そうして網の上で1つずつ丁寧に焼き始めると、リーはそれをじっと不思議そうに見ていたフォーチュンに説明した。
「遠征時の食事はこれを摂るようにしている」
「そ、そうだったんですね……」
「ああ――お町殿。私はこれから食事を摂るがお町殿は？」
「うむ。頂こう」
「ではお町殿の分も」
言ってリーは再び串に肉を刺して焼いていく。
レオンハルトシティの名物である〝串焼き肉〟は街が建てられた

頃からある歴史の深い料理である。
　フォーチュンもまたそのことは知っていたが、リーがその串焼き肉を遠征時に決まって食すことは今まで遠征を共にしたことのないフォーチュンには知らない情報だった。
「……フォーチュン。貴殿も食べるか？」
「い、いいんですか？」
「栄養補給は戦いにおける重要な要素の1つ。怠っていい理由は1つも存在しない」
「は、はい！　ではよろしくお願いします！」
「……ああ。では用意しよう」
　肉を焼いていく様をじっと見るフォーチュンを見かねてリーがお町にしたように食べるかと問いかけるも、その返答が硬いものだったことを自覚し、気まずくなりつつも肉を焼くことでそれを誤魔化す。
　はっきり言って、リーはこういう状況が苦手だった――いや、普段ならばにべもなくあしらうだろうが、主であるレオンハルトが副官に就けた意味を考えるとそう簡単にあしらうことも出来ない。
　おそらくはこれはお膳立てなのだろうとリーは解釈している。リーにではなく、フォーチュンに対しての。
　つまりフォーチュンの想いは本物であり、それを見かねた親衛隊がレオンハルトに頼み、リーに近づけるようにした。そうして接点を増やし、然るべき時に想いを伝えるがいいと。
　思いの外副官としても優秀であるため――いや、優秀であったからこそレオンハルトもまた認めたのだろう――リーとしてもそれに文句はないが……とはいえ少しばかりいつもと勝手が違うのは否めなかった。
　しかしこれもレオンハルトから込められた期待なのだとリーは気を引き締める。フォーチュンを自らの部下としてしっかり動かすことが出来れば軍務もより円滑に進めることが出来る。兵数の多い本陣にフォーチュンを置いておくことは戦術上、悪くない選択でもある。
　ゆえに若干の気まずささえ乗り越えれば問題ないのだとリーは自

分に言い聞かせた。そして緊張している様子のフォーチュンを解き解そうとリーは思案し、世間話でもするべきかと口を動かすことにした。
「親衛隊では上手く――」
「――はーはっはっはっ！　リー様！　ご機嫌麗しゅう！　串焼き肉であれば私も一緒して構いませんかな?!」
――だが空気の読めないカエサルがリーの串焼き肉の香ばしい匂いに誘われてやって来たのでリーの試みは失敗に終わる。
「……ああ、構わない」
「ありがとうございます！　いやはや私は運が良い！　リー様と同じ陣にいてリー様特製の串焼き肉が食べられるとは！　ああ、やはりこれも私の美しさに見かねて天がもたらした幸運なのだろう……！
――フォーチュン様もそうは思いませんか?!」
「え、わ、私ですか？」
「勿論ですとも！　レオンハルト様の下級使徒にして美しき親衛隊の顔と名前は皆記憶しておりますからな！　実のところこうやって会話出来るのを楽しみにしていたのです！」
「紅魔城ではあまり話す機会がありませんからな」
「そうなのだブルータスよ！　祝い事や用事の際に紅魔城に出向くことはあっても親衛隊の方々と話す機会はあまりない……以前からそのことを私は口惜しく思っておった……美しき私と美しき親衛隊！
共に美しい存在であるというのに1度も交流がないのは勿体ないであろう！　そうは思いませんかな?!　美しきお町様！」
「知らぬ」
「ああっ！　その冷たき反応もまた美しい！　その一言でこの場の美しさ指数が限界点を超えましたぞ！　――まあ私がいる時点でとうに限界点は超えてますがな！　はっはっはっ！　イズ・ビューティフォー！」
「すみません……リー様、お町様。フォーチュン様も」
「……お前も苦労しているな、ブルータス」
「あいも変わらず喧しい奴だな……」

「私はその、大丈夫ですけど……」
　またしても自分の世界に入り込み始めたカエサルを見て、ブルータスが小声で3人に謝罪をする。
「カエサル閣下も久方ぶりの戦争に昂ぶっておるようですので……その、いつも以上にテンションが」
「理解している。大将軍という種族に生まれた以上、戦いを渇望するのは当然のことだ」
「はい……それに、正直なところ私もまた高揚しています。生きている間にこのような戦争を体験出来るとは思ってもいませんでしたから」
「今は平和な時代だ。無理もないだろう」
　元々同じ魔物大将軍であったためその気持ちは分かるとリーはブルータスの言葉に理解を示す。
　そしてそれはカエサルやブルータスだけではない。魔軍の将兵全てに言えることでもあった。
　戦いに慣れている魔物と言えども規模の大きい戦争ともなれば勝手は違うものであり、初陣には良くも悪くも心が乱されるだろう。精鋭と言われるレオンハルト軍であってもそれは変わらない。如何に精鋭であろうと、彼らは実戦を殆ど経験していないことに変わりはないからだ。
「……勇み足にならぬよう注意して見ておかなければな」
「それは……逸るな、ということでありましょうか」
「それもある。まずは戦場の空気に慣れ、自らが何者であるかを思い出すことだ。そうすれば自ずと為すべきことを為せるようになるだろう」
「自らが何者であるか……」
　リーの言葉にブルータスが呟く。そして近くで聞いていたフォーチュンもまたその言葉を受け止めていた。
　精鋭たるレオンハルト軍の将兵。厳しい訓練を乗り越えてきた彼らであればきっと良き兵士になれるだろうとリーは薫陶を授ける。
「不安になりすぎることはない。自らの力を発揮し、周りを見失わな

ければ結果は付いてくる。そして、結果が付いてこずともまずは生き残れ。さすれば成長が叶う。焦ることはない」
「……はっ！　そのお言葉……心に刻んでおきます」
「わ、私も刻んでおきます！」
「うむ。――では食事にしよう」
ブルータスとフォーチュンの兵士としての顔を見たリーは満足そうに頷きながら串焼き肉をそれぞれに渡していく。ちょうど良い焼き加減だ。
リーはそれを口にしながら思う――それに、この本陣であれば余裕はあるだろうと。
何かがあったとしても自らの力で何とかしてやればいい。それくらいの自信なら既に持ち合わせている。
そして、本当に大変なのは襲撃に出向いている他の軍だろうとリーは自らの同志達の武運を祈ることにした。

――大陸南部、南方。
木々が生い茂るその一帯。
その手前に陣を築いているのは人間ではなく統一された魔物の群れ。
「レイ様。陣を張り終えました」
「……おう」
そしてその魔軍を率いる魔人は――魔人レイ。
元人間であり、武闘派かつぶっきらぼうなその魔人はこの軍を指揮する魔物将軍ジョヴァンニの報告にも適当に答えていた。
「今食事を持ってこさせます。我らは戦場での食事にも力を入れておりますのできっとレイ様のお口にも合うかと」
「……」
「……ああ、そういえばメニューが幾つか選べるのを失念していました。レイ様はうし肉とこかとりす肉だとどちらか良いですか？　それと、苦手な物などありましたら伝えて頂ければなと……」

「……おべんちゃらが上手だな」
「っ……い、いえそんなことは……」
レイの前髪に隠れた鋭い眼光が魔物将軍を射抜くと、ジョヴァンニは言葉を迷わせる。コミュニケーションの取りづらさというか、素っ気なさに困っている様子だった。
なので私はそれを見かねて彼に声を掛ける。
「ジョヴァンニ将軍。レイ様に食事を運んでくるよう魔物兵に伝えて来て頂けますか？」
「イヴ様……はっ、了解しました」
背後から声を掛けてきた私を見るなり、畏まるのは私がレオンハルト様の使徒であるからだ。
魔軍において使徒の地位は魔物将軍どころか魔物大将軍よりも高いもの。
また実力の上でも上位である私は自信を持って振る舞う。軽く自らの能力を行使しながら。
「それとレイ様はおそらくうし肉を好むようですのでそちらのメニューでお願いします」
「……？　わ、分かりました」
私が小声でそう耳打ちすれば魔物将軍は「なぜそんなことが分かるんだ？」といった言葉を心に思い浮かべたが、それを飲み込んで陣内から出ていく。
そして代わりに私は魔人レイと相対した。にっこりと笑顔を浮かべながら。
「レイ様。ご報告をしてもよろしいですか？」
「……一々前置きを置くんじゃねェよ。それとも、俺の了解がなきゃ報告1つ出来ねェのか？」
「ええ。魔軍において上下関係は重視すべきものですから。使徒である私が魔人であるレイ様に勝手に報告など出来ませんよ」
「――なら俺がヤらせろよっったらお前は俺に抱かれんのか？」
私の営業スマイルを崩したいとでも思ったのか、レイ様が爆弾を投げ入れてくる。何とも下品な威圧であり冗談だが、私は表情を崩すこ

となくそれに答えた。
「それはやめておいた方が良いかと」
「何でだ？　上下関係は絶対なんだろうが」
「絶対とは申しておりません。あくまで、重視すべきと申したまでです。――それと、これはレイ様のためでもあります」
1度間を置いて魔人レイに告げる。少しまた機嫌を悪くするのだろうなとこの後の反応をある程度予想しながら。
「魔軍において上下関係は大事です。なので、レオンハルト様の下僕である私をレイ様がどうにかしてしまうのはその上下関係を揺るがす大事です。秩序を重んじ、身内が傷つけられることを嫌うレオンハルト様がお許しになるはずがありません」
「そんな脅しで俺が怖がるとでも思ってんのか？」
「レイ様から見て、自分の命と釣り合うほどの価値は私にはないでしょうと諌めているだけですよ。レイ様の気に入らないレオンハルト様の使徒である気に入らない私をやり込めるためだけに私を犯したところで、手に入るのは一時の快楽だけ。その後、烈火の如く怒ったレオンハルト様と戦って殺されて、レイ様は満足出来ますか？」
「ふん……どうだろうな。案外それも面白ェかもしれねえな」
「で、あればレイ様はガイ様とも戦えないことになります。それでも良いのでしたら後はご自由に。……それと、もしレイ様がそうしたとしても私も大人しくしている気はありませんので」
薄く笑いながら言葉にし、もしそうなったら勝てないまでも抵抗することを匂わせていく。本気でそうなると思っているわけじゃないが、そうやって思考を誘導するのが重要だ。こうやって多少骨のある言動を見せつつもメリットとデメリットも説明すればこのチンピラ気質の魔人レイも舌打ちしながら引っ込むしかない。
「チッ、気に入らねェな。強気な女は嫌いじゃないが、レオンハルトの女はどいつもこいつも強気が過ぎて気に入らねェ。ハンティと言いお前と言い俺を舐めてやがる。ムカつく女だらけだ」
「私の態度が気に障ったのであれば申し訳ありません」
「……さっさと報告しろ」

「はい。では報告させていただきますね」
魔人レイが口にする言葉は敗北宣言。負け惜しみのようなものだった。なので私は気にせずに再び笑顔を向ける。これでやっと報告が出来る。前置きしなければしなければで不機嫌になったりするのだからつくづく絡みにくい魔人だなと思いながら。
「森に偵察を出したところ、その奥に迷宮の入り口を発見しました」
「迷宮だと？」
「はい。おそらくそこが〝影の楔〟の本拠地ではないかと思われます」
「つまり……そこにガイの野郎が潜んでるかもしれねェってことか」
「ええ。なので明日の明朝、レイ様を含む複数の部隊で迷宮内の探索を行おうと思います。それで構いませんか？」
私はこの軍を率いる魔人様に作戦を伝える。私や魔物将軍が決めた作戦でも魔人が了承しなければ実施することは出来ない。魔物社会の辛いところだ。
「……なんで今行かねェ？」
「向こうは多くのアサシンを抱えていると言われています。夜の森で大勢のアサシン集団と対峙するのは被害が大きくなる可能性がありますので」
レイからの異論に、私は視線を軽く横に向けてもうじき日が落ちることを示唆しながら説明する。既に夕暮れも過ぎつつあり、後１０分もしない内に日が落ちて夜になるだろう。
迷宮内はまだしも、夜の森でアサシンと戦うのは出来れば避けたいところだった。
「だったら俺1人で十分だ。お前らはここで留守番でもしてろ」
「！　それは……」
だが、魔人レイはそんなことは知ったことじゃないと椅子から立ち上がる。そうしてずかずかと外に向かって歩みを進めた。
1人で何とかしてみせるという自信があるのだろうし、実際アサシンだけなら何をしようが魔人は倒せない。魔人が持つ無敵結界の前にはアサシンお得意の闇討ちも意味を為さないのは分かっている。

だけどそれを許すのはよろしくない。魔人ガイがもし現れたのなら、無敵結界は破壊されるし、そうなればアサシンの攻撃もレイに当たるようになる。
夜の森で魔人ガイとアサシン集団と相対するのは如何に魔人レイに魔軍と言えども敗北の可能性を強く考えなければならないほどリスクがある展開だ。
だからこそ今夜は平原で夜襲のみを警戒し、明日の朝、明るくなってから森に踏み込んだ方が安全かつ確実だ。それを伝えるために私は魔人レイに付いて外に出た。
「お待ちを、レイ様。夜の森に踏み込むのはリスクが大きすぎます」
「そうやってモタモタしてる間にガイの野郎に逃げられたらどーする。向こうもこっちが来てることには当然気づいてンだろ」
「拠点を手放すのであればそれはそれでしめたもの。それを繰り返していけばいずれ向こうは行き場をなくします。大軍に正面から挑むことになる可能性を考えれば、ここで拠点を早々に手放すことは考えにくいです」
「ここでは逃げるかもしれねェだろうが。どうせ拠点はここの1つじゃねェ。だったらもっと有利な状況になるまで逃げるのも手だ」
「それはそうですが、だとしてもここは1度様子を見た方が……」
夕暮れの陣地をレイが無遠慮に森に向かって歩いていく。これは、駄目かもしれない。レイは何としても今、森に入る気だ。
それはガイを自分が倒したい、戦いたいという気持ちがあるからだろう。ここで逃げられるくらいならリスクを背負ってでもさっさと仕掛ける。
それを止める方法は私にはない。いや、相当強引な方法を使えば出来なくはないかもしれないが、それをするにはまだ条件が――
「うわあああああ!?」
「!」
――そして、私が更に言葉を尽くそうとした時だ。
私の視界の先。敷いた陣地の森側が突如として吹き飛ばされる。魔物の悲鳴。声が響いたところで私は声を張り上げた。

「何事ですか!?」
「て、敵襲です！　森に……あ、あの御方が……！」
「っ……」
　吹き飛ばされてこっちまで転がってきた魔物隊長から言葉と気持ちを読み取る。
　明らかに動揺していた。それも不安と恐怖も入り混じったそれは、魔物隊長の言葉が真実であることを私に教えてくれる。
「ハッ……運がいいぜ。真っ先にお前と出会えるなんてな――なあガイ」
　そしてレイはその騒ぎが起こった瞬間には、それに気づいて吹き飛ばされた陣の外に全く恐れることなく出向いていった。
　私はその言葉に反応しつつ、同じく近づいて森の方を見る。すると、森の入り口に立っていたのはやはりと言うべきか――
「――確かに。最初にお前と会えたのはこちらとしても都合がいい」
　魔王ジルに反乱するガイ一派の首魁である――魔人ガイがそこにいた。
　魔物兵達は分かっていたこととはいえ相対する敵に魔人が、それも四天王に数えられるガイがいることに身を固くする。覚悟はしていただろうが、こんなにも早く出くわすことになるとは思っていなかった。
「な、なんですか!?　って――あれは魔人ガイですね！　ミシェーラ分かります！」
「それは誰でも見れば分かります！　それよりもミシェーラちゃん、警戒してください！　各部隊も戦闘準備！　近くに敵が控えているかもしれません！」
「はい！　警戒します！」
「は、はっ！　了解しました！　総員！　戦闘準備！」
　騒ぎを聞きつけて私と同じくこの軍に帯同するミシェーラちゃんがやってくるも、相変わらずズレたことを言っていたので言葉で警戒するように言っておく。そして遅れてやってきた魔物将軍の代わりに先んじて戦闘態勢を取ることを指示した。とっさのことでいつも

より対応が遅れている魔物兵達も、私や将軍、隊長らの指示を受ければようやく思い出したように一斉に動き出した。
そしてその間にも魔人ガイと魔人レイは相対し、レイがガイの言葉に対して苛立ちの感情を強くしていた。
「あ？　そりゃどういう意味だ？」
「決まっているだろう。お前なら、倒すのもそう苦ではないという意味だ」
「――言うじゃねェか」
ガイからの挑発を受け、レイに起きた反応は低くなった言葉や怒気の入り混じった殺気だけではない。
レイの身体の周囲に走る一瞬の光。パチパチと鳴り響くそれはレイが戦闘態勢に入った証である放電現象。
だがそれは未だ本気のそれではない。
「だったら……本当に倒せるかどうか試してみろよ！」
「！」
レイがバックルを取り出し、前髪をかき上げると同時――レイはその燻っていた怒りと共に電気を放出し、稲妻のように高速でガイに殴りかかった。
「オラァ！」
雷を纏ったレイの拳。魔人としての身体能力から放たれるそれは人間はおろか、魔物であっても再現不可能な破壊力を秘めている。
「ふっ！」
「チッ……！」
だが相手もまた魔人だ。魔人四天王に数えられる強者であるガイはレイの拳を背後に飛び退くことで躱し、返す刀の如く強烈な魔法光を発生させた。
「白色破壊光線！」
「……！」
数ある魔法の中でも最大の破壊力を持つ白色破壊光線は優れた魔法使いしか唱えられない超高等攻撃呪文だ。
だが使うだけなら私でも使える。実力が出るのはその光線の規模

や威力、あるいは魔力量による何度使えるかという部分だ。
ガイの放った白色破壊光線は私が放つのより一回り大きいそれである。ゆえに破壊力もまた悪い意味で想像がついた。
「おっ……らあああああ!!」
だがそれを魔人レイは拳で殴りつける。明らかに無茶な行為。普通の人間がやったのならば自殺行為とも言える所業。
だがその無理を通す。雷を先程よりも強く纏った上でのレイの全力のパンチは無効化するには至らずともある程度その威力を抑えることに成功していた。
「ハッ、大したことねェな！」
「……なるほど。少しはやるようだ。そういえば真正面から戦ったことはなかったか……」
「思い知ったかよ！　このままいつかの借りを返してやる！」
「私には覚えがないことだ」
「そうやってフザケてられるのも今だけだ！　このペテン野郎！」
冷静にレイの攻撃を躱し、魔法を放つ魔人ガイと雷を纏った肉弾戦を仕掛けにいく魔人レイ。
並の人間では見ることの叶わない高速の攻撃の応酬と一発でも当たれば人間はおろか魔物ですら致命傷を負うことは避けられない高威力の攻撃が同居している。
「っ……これが魔人同士の戦闘……！」
私は改めて思い知る。やはり、魔人というのは怪物。規格外の生命体の集まりなのだと。
使徒になった自分ですら人間の時と比べれば化け物になったという自覚はあるのに、それですら魔人の前では霞むものだ。
正直なところ、舐めていた。いや、過小評価していた。魔人レイは魔人の中でも武闘派として知られているが、レオンハルト様には相手にもされず、魔人ノスや魔人レキシントンといった他の武闘派の魔人との戦いには後れを取り、使徒であるハンティ様にも出し抜かれているという話は耳にしていた。
ゆえにもう少し弱いものだと思っていたのだが、どうやら自分の

思っていたよりは強いと私は評価を上方修正しながらも冷静にそれを分析する。
魔人レイの強さについて評価を改めはしたものの、それでもやはり魔人ガイの方が強い――余裕そうに見えると。
「お前に近づくと眩しくて鬱陶しい。少し離れて戦わせてもらうとしよう」
「そうかよ……！　だったらこっちは何が何でも近づいてそのすまし顔をぶん殴ってやる！」
「あっ！」
そして、その時の状況の変化に私は思わず声を上げた。魔人ガイが、森の奥へと下がっていき、それを魔人レイが追いかけたためだ。
「レイ様が森の奥に消えていきます！」
「くっ……仕方ない。イヴ様！　ミシェーラ様！」
「ええ！　半分はジョヴァンニ将軍の指揮の下、森の入り口で警戒！　残り半分は私達と共に森に踏み込みます！」
「ミシェーラ達に付いて来てください！　森に踏み込んで人間の拠点を襲撃しますので！」
「はっ！」
それを見て私はこの軍を率いるジョヴァンニ将軍と声を交わし、事前に想定した通り、半数は残り、半数で攻め込む作戦に移る。
事前に想定していた中でもあまりよろしくない方のパターンとはいえ、最悪ではない。そもそも想定される相手がアサシンとはいえ1万の魔物兵の軍勢を倒すのは容易ではない――いや、ほぼ不可能と言ってもいい。
無駄に被害が出る可能性があるからこそ夜の森に入ることを躊躇していただけで、被害をある程度覚悟すればこの数でも十分に圧殺出来る。
ゆえに本陣を魔物将軍らに固めさせ、私とミシェーラちゃん率いる部隊で拠点を攻略。あるいは森にいるアサシン達を狩っていく。魔人レイや魔物将軍、そして私達がやられないように対策を打ちつつ敵を倒す。

「では森に入ります。明かりを持って付いて来てください！」
「はっ！」
私は手元の魔導具を確認し、操作しつつもすぐに前を見て魔物隊長らに号令を出す。ガイとレイの戦いはレイの放つ雷のおかげである程度の方向は視認出来るものの、あまり離れすぎるとそれも怪しくなる。
出来れば追いつき、追いつけなくとも加勢しようとする人間の部隊を妨害出来ればいい。そうして出来る限り、レイが倒されないように時間を稼ぐ必要があった。
「いいかお前ら！　人間を見つけたら殺して構わん！　何か異常があればすぐに報告しろ！」
魔物隊長が魔物兵達に指示を送りながらも、私達の後に付いて森の中を急いで進む。出来ればガイとレイの戦いが確認出来るところまでは近づいておきたいが、妨害がある程度入るのは想定している。そうでなければこの森に誘き寄せている意味がない。
勿論、本来なら付き合わないのが良いが、この戦争は敵の策に付き合う必要があることはレオンハルト様より教えられている。ゆえに、こうして狙いに乗った上で全力で目標を達成することが求められた。
「ぐあああああ！」
「!?　どうした！」
「右側より敵襲です！　木々の上に人影を確認しました！」
「やはり仕掛けてきましたね……」
「総員警戒してください！　ミシェーラには分かりますよ！　敵が沢山忍び寄っています！」
そうして思考を回しながら進んでいると、右後方より悲鳴が聞こえる。魔物隊長同士の声掛けでそれが敵襲であると判明するとミシェーラちゃんも再び注意するようにと念押しした。
そこで戦闘態勢を魔物兵達は取り、足をどうしてもある程度止める必要がある。
「……！　ミシェーラ見つけました！　てやあああああ！」
「――ぐああっ!?」

薄暗くなってきた森の中で、突如として敵を発見したというミシェーラちゃんが前方に鋭く跳躍すると一閃し――そこにいた1人の黒尽くめの男、アサシンの1人を斬り裂いた。
「ふん！　大したことないですね！　ミシェーラには分かりますよ！　きっとあなたは下っ端です！」
「ミシェーラちゃん。あまり呑気なこと言ってないでどんどんやってください」
「はい！　ミシェーラどんどんやります！　これもレオンハルト様のため！　でやあああ！」
「ぐ、うっ……！」
前方で敵の死体に分かりきったことを伝えるミシェーラちゃんに声がけして働かせる。いつも通りアホの子だけどその強さは私よりも上だ。優れた剣士。それも使徒になって強化されたミシェーラちゃんの目の良さには如何に夜の森の中で忍ぶアサシンでも不意を突くことは困難を極める。
「隊長！　こっちも討ち取りました！」
「結構いやがるじゃねぇか人間共！」
「おらさっさと出てこい！　精鋭の俺達が相手だ！」
「最強のレオンハルト軍相手にただの闇討ちが通用すると思ったら大間違いだぜ！」
そしてミシェーラちゃんだけじゃない。周囲から幾つもの魔物兵による敵の撃破報告が届くと最初はガイの襲撃によって緊張していた兵達の士気も上がった。隣にいる魔物隊長も、
「夜の森とアサシンの組み合わせは厄介ですがこの数にはやはり太刀打ち出来ない様子ですね」
「ええ。ですが気をつけてください。どこから襲ってくるか分からないことには変わりありません」
「分かっています。魔物隊長には兵の中心に立って狙われづらくしつつ、そして部隊毎に視認出来る距離を維持させています。仮に誰かがやられてもすぐに敵の位置を発見出来るように」
「上出来ですね」

魔物隊長の言葉に私は頷く。レオンハルト軍は当然、起伏の多い地形や森林地帯での演習も行っており、少数の敵と森で戦う際の部隊の動きについてもしっかりとマニュアルが存在する。
人狩りなどの野蛮な行為を行う魔物は少ないものの、それをやらせれば魔軍一に上手いのがレオンハルト軍だ。冷静に、そして粛々と作業的に敵を狩っていく統率の取れた魔物の群れは人間からすればたまったものじゃないだろう。
しかし今は魔物兵達も初の実戦ともあって全体的に高揚している様子だ。私はそれを見て軽く魔物隊長に告げておく。
「それと、ある程度は仕方ありませんが熱くなって統率を乱さないように注意していてください」
「ええ、分かっております。如何に矮小な人間相手とはいえ油断は致しません。……とはいえ、さすがに少し拍子抜けではありますが」
傍らにいる魔物隊長は骨のある相手を期待していたのだろう。軽くボヤキを入れていた。
しかしそれもまたある程度は仕方のない部分だ。厳しい訓練を行ってきた精鋭である彼らも、敵がいなければその能力を発揮することは出来ない。
それでも待遇の良さから普段の仕事から訓練、日常生活における決まり事も守ってきている彼らだが、強くなったのなら戦って試してみたいと思うのは普通のことだ。
ゆえにフラストレーションを彼らは募らせている。自分達が力を発揮出来るだけの闘争相手を自然に求めていた。
「向こうにはガイ様や使徒のバークスハム様もいますよ。彼らが来ても同じ台詞が言えますか？」
「っと。すみません。少し、私も普段より落ち着かないようです。気をつけます」
「そうしてください。それに、人間にも何人か要注意人物が――」
私がそうして魔物隊長に情報を伝えようとする――そのタイミングだった。
「!?　明かりが……！」

「っ……飛び道具……！」
魔物隊長が手に持っていた明かり――レオンハルト軍において採用しているガウガウ先生製の魔導ランタンが、突如として割れる。
その瞬間を私は見た。ランタンに当たったそれは忍者が使うクナイ。それが木々の隙間を縫うように、恐ろしいほど正確に明かりだけを狙い撃った。
しかもそれは、私達の周囲を照らしていたものだけではなく、
「隊長！　こっちも明かりが！」
「落ち着け！　こっちも消されたがまだ明かりは十分にある！　周囲と連携を取り、敵を1人ずつ倒すだけでいい！」
遠く、辛うじて見える他の部隊でも同じようなことが起きていた。
「イヴちゃん！　大丈夫ですか？」
「はい。多少暗くはなりましたが平気です。それよりもこれは一体どういう意図で……？」
少し先に行って敵を倒していたミシェーラちゃんが見かねて戻ってきたのでそれに答えつつ私は思考する。多少明かりを消したところで、それほど意味があるようには思えない。まだまだ他の魔物兵達が持っているように十分に明かりはあるし、闇に乗じるにしてもこの程度じゃあまり意味はない。完全な闇にしたいのなら全ての明かりを、そうでなくともっと多くの明かりを消さなければ成し得ないものだ。
なのにどうしてか――と魔物隊長の持つランタンが壊されたため、私は他の魔物兵からそれを借りて魔物隊長に手渡そうとする。
「魔物隊長。これをどうぞ」
「――――」
「？　魔物隊長？」
だが反応がない。そこで私は訝しみ、もう少し近づこうとして――しかしその前に気づく。魔物隊長がゆっくりと地面に倒れていくことで。
「っ……!?　魔物隊長!?」
――魔物隊長が、既に死んでいることに気がついた。

そしてそれに私が気づくのに少し遅れて、近くにいた魔物兵がそれに気づく。
「うわあああ!?　た、隊長!?」
「隊長が死んだ！」
「おい嘘だろ!?　あの隊長が死ぬわけ……！」
「いやマジだ！　クソ、なんで……!?」
「いつの間に死んだんだ!?」
「た、隊長が死んじまった……」
自分達を指揮していた魔物隊長の死は、魔物兵達に混乱を与え、その統率を著しく乱す。
「くっ……！　（マズいですね……）」
リーダー能力を持つ特別な魔物以外に魔物兵は従わない。
とはいえ魔人や使徒であればリーダー能力はなくともある程度従わせることも不可能ではないし、統率技能を持っていればしっかり従うこともあることからここで狼狽えてはいけないと自分を律する。魔物兵に指示を送って戦わせる。それを行おうと口を開こうとし、
「皆さん！　狼狽えている場合じゃないですよ！　ミシェーラには分かります！　敵はすぐそこまで来ています！　警戒態勢を維持してください！」
しかし私より早く――ミシェーラちゃんが声を張り上げていた。
そういえば以前は親衛隊の副隊長もやっていたことを思い出す。ミシェーラちゃんは意外にも人をまとめるのが苦手ではなかったことを。
「し、しかしミシェーラ様！　隊長が……！」
「隊長がやられてもあなた達は負けません！　あなた達は魔軍最精鋭のレオンハルト軍です！」
「っ……そ、そうだよな……！」
「そうだ……俺達はあのレオンハルト様に認められた最強の兵士だぞ！」
「人間如きに負けるわけがねぇ！」
ミシェーラちゃんの言葉は少なからず魔物兵の戦意を奮い立たせ

た。
　それでも全員が全員というわけにはいかないだろうが、完全に敗走させるよりはマシだ。一万の内の２００名。たった一部隊と言えども戦闘を放棄されるよりは持ち直してくれた方が都合は良い。
「こっちにはまだ魔物将軍も私やイヴちゃんも！　後は一応、多分レイ様も生きてます！　ミシェーラには分かりますよ！　私達はまだまだ有利！　全然勝ってます！　なので動揺しないように！」
「おお！」
「言われてみりゃそうか……！」
「危ねぇ……危うくおかしくなって逃げちまうところだったぜ……！」
　魔物兵が持ち直し始めたのを見て私はほっとする。魔物隊長が急に死んでいたことには驚いたが、これなら――。
　……いえ、そもそもなんで魔物隊長は死んで……いや、明らかにあれは闇討ちでした。ならあれは、近くにいた他の魔物兵や、私にすら気づかれずに暗殺を成功させたということで……。
　と、そこで私は魔物隊長を殺した脅威が未だ近くにいる可能性が高いことを思い、周囲の警戒を怠らないように気をつける。いや、気を抜いていたわけじゃない。だけどより一層気をつける。何故見逃したのか。私の能力じゃ、見逃すはずがないとそう思ったところで――
（――魔物隊長を殺したのに兵が離散しない、か。多分あいつのせいだな。次はあいつを殺すか――）
　――その声を拾った瞬間、私は背筋に寒いものを感じて声を張り上げた。危機意識のせいか、聞いた瞬間にはその意味を理解していた。魔物隊長を殺したと思われる相手が次に狙うのは誰か――
「――ミシェーラちゃん！」
「っ!?　――うっ!?」
　――そして私が声を張り上げたのとほぼ同時に、ミシェーラちゃんもまた気づいて振り返り、辛うじてその黒い線を剣で防御する。
　だがその線は思ったよりも大きく、そして力強かった。咄嗟の防御だったとはいえ、ミシェーラちゃんをその場から大きく吹き飛ばし、

木の幹に背中を打ち付けさせてダメージを負わせるほどには。
「え……今何が――」
「み、ミシェーラ様!?」
「は……？　なんで俺、地面に転がって……？」
そしてミシェーラちゃんが吹き飛び、唖然とするその場にいた魔物兵達。彼らもまた、次の瞬間には斬られていた。
「――〝死円斬〟」
それは高い技能を持つ者だけが使える必殺技とも言うべきもの。
巨大な黒の線の正体は黒い大剣であり、それを用いて放つのは言わば回転斬りだった。
周囲にいた魔物兵を根こそぎ刈り取るその剣技は、恐ろしいほどに音が無く、鋭く、そして重い。
当たれば首だろうが胴だろうが真っ二つになって即死。
それはまるで死神の鎌だった。命を刈り取る無慈悲な漆黒の刃が闇の中で魔物達の命を冥府へと誘う。
「う――うわあああああ!?」
「なんだあいつ!?」
「駄目だ！　やっぱ勝てるわけがねぇ！」
「逃げろー！」
そしてその戦い方を、私は知っていた。その姿も、１０年以上前に見たことがあるそれと相違ない。
加えて商会経由で予め聞いていた情報からも間違いはない。白髪と白目。白い肌を持つ中性的なその青年は、子供から大人に成長していようとも見間違えようのない相手である。
「あなたは……ヨアン君、ですね？　それともグリムリーパーって呼んだ方がいいですか？」
「……やはり知っているか。まあ魔人レオンハルトの使徒であれば当然か……俺もお前達には見覚えがある」
それは当然のこと。数十の魔物兵の死体の上に立つその青年のことを知らないはずがない。
何しろ彼はレオンハルトシティの人間牧場出身。

そのコロシアムチャンピオン。特Ａ級にして――唯一の脱走成功者なのだから。
「やっぱり本人なんですね……それなら投降しませんか？　レオンハルト様もあなたの存在は惜しがっていましたよ。今でも投降するなら受け入れるようにと私達に指示を下すくらいには」
「そうか。だが、投降はしない。俺の求めるものがそこにあるとは思えないからな」
そして今の彼の肩書は魔物討伐隊〝影の楔〟の最高幹部〝四影刃〟の１人で戦闘部隊長。
彼らは皆名前を隠し、コードネームで呼び合うことが分かっている。そして彼はそこで〝グリムリーパー〟という名前を付けられたのだろう――その圧倒的な強さであればそれも納得だ。
「周囲に敵が無数にいる状況での使徒の相手……それも２対１か……先程の攻撃に反応してきたことといい、どちらも手強そうだな……」
黒い大剣を逆手に持ち、周囲から魔物兵が少なくなり、明かりが限りなく少なくなった状況で彼は淡々とした誰に言うでもない言葉を闇の中で零す。
「だがこの状況ならイーブンだな」
しかしその振る舞いには確かな自信を覗かせる。私やミシェーラちゃん。そして周囲の森にはまだまだ大勢の魔物兵がいる状況でのその自信は、おそらく彼の特異性から来るものだろう。それを私もやはり知っている。だからこそ彼の自信は納得出来るものだ。
――とはいえ、だ。
「使徒相手に有利と見ますか。さすがにそれは自信過剰では？」
「かもな。だがやれるだけやってみるだけだ。俺の求めるものがもしかしたらそれかもしれないからな」
私もまた手元の魔導具――剣を取り出しながら戦う構えを見せる。
剣はそこまで得意じゃないが、使徒になってからはそこそこ頑張っているし、魔法の腕前も培ってきた経験も幾つも持ってきた魔導具も全てが万全の態勢だ。
加えて立ち上がってきたミシェーラちゃんもいる。共にもう人間

ではない――使徒として強さはしっかりと培ってきたつもりだ。
ゆえに、如何に人間として最強クラスの相手であっても負けるわけにはいかない。
レオンハルト様の使徒として、しっかりと役目を果たすのみだ。
「仕方ないですね。では相手になります――ミシェーラちゃん。行けますか？」
「ええ！　ミシェーラ分かりました！　この人は昔なんか見たことある気がしますし、それに――」
「それに？」
「それに――めちゃくちゃ強いです！」
「分かりきったことを言わないでください！」
「――――いくぞ」
私達の戦闘の態勢が整った瞬間、グリムリーパーは背後に跳躍して夜の森の中に消えていく。
だがそこからいなくなったわけじゃない。彼は気がつけば、私達の背後からその大剣を繰り出し、その一閃の後には再び距離を取って姿を消す。
死神と呼ばれた人間牧場の最高傑作との戦闘――それが私達の初陣の相手だった。

狩る者

大陸南部にある山間部。
その木々の間を進むのは魔軍だった。
ゆえにその中心には魔物兵を指揮するための魔物将軍がいたが、そこにいたのはそれだけではない。
この一帯にあるという人里を探し、ガイ一派を滅ぼすために派遣された存在――魔人メディウサがそこにいた。
「ちょっとちょっと～？　いつになったら人里が見つかるわけ？」
「も、申し訳ありません。情報は正しいはずなのでもうすぐ見つかるであろうとしか……」
「その割にはここに入ってから人の気配がしないんだけど？　それに何だかさっきから同じような景色ばかりだし、迷子になってるんじゃないでしょうね」
「それはないはずですが……いや、でも確かに……」
しかし肝心のその人里が見つからないことにメディウサは不満をこの軍を指揮する魔物将軍に口にする。
山狩りを始めて数時間が経つが、人里どころか人間1人見つからないのは異常であり、情報が間違っているのではと思ってしまうのも仕方のないことだった。
「あー、もしかしてこれ……」
「ん？　なにペールちゃん。もしかして何か分かった？」
「ええ、はい。多分ですけど……」
そして誤情報や迷子を疑い始めたメディウサや魔物将軍にその呟きを届かせたのは魔人レオンハルトの使徒であるペールであった。
メディウサの質問に頷きながら何やら森の中を歩き、魔法で何かを確認していたペールは少しするとこの状況の答えを口にする。
「あ、やっぱり。これ結界が張られてますよう」
「結界？」
「はい。人払いのための認識阻害の効果ですかね。しかも相当高度な結界ですよう」

「何と……では我らはそれに引っかかって……」
「同じところをグルグルしちゃってるわけですねー。そりゃ見つからないはずです」
　元々カラーの女王をやっていたのもあってそういった結界や呪いに関しては詳しいペールがそれを説明すると魔物将軍は唸る。
　しかし理由が分かれば解決も出来るだろうとメディウサは楽観した声で問いかけた。
「ふーん、で？　その結界とやらはどうにか出来るのよね？」
「少し時間を頂ければ。それと、周囲にある怪しい置物とか印の類があれば報告していただけると。そういった触媒を使っている可能性もありますので」
「じゃ、それで。あたしはそれが終わるまで休憩してるから。終わったら報告よろしく」
「ええ、了解しましたよう」
　そう言って踵を返すメディウサにペールは笑顔でそれを了承する。使徒としての魔人に対する畏まった言動はペールの得意とするところだ。
「あ、それとさっき捕まえた女の子連れてきてもらえる？」
「はい。もちろん構いませんが……何に使うおつもりで？　一応襲撃中は趣味は控えるようにとレオンハルト様から言われてませんでしたか？」
「どうせやることもないし、ちょっとくらいならいいでしょ？　ちょっと味見するだけよ。良い山小屋もあることだし」
　メディウサはその山間部に入って唯一見つけられた人の痕跡――休憩所と思われる山小屋に視線を向けながら口にした。その山小屋のある地点を中心に魔物兵には周囲の捜索を行わせており、今はこの場所がこの軍の簡易的な拠点のようになっていた。
　ゆえにペールもまたそれを聞いて頷きを入れる。確かに、そこなら人目もつかないし少し休憩を取るくらいは出来るだろうと。
「なるほどなるほど。確かに息抜きは大事ですし、ではそのようにしますね～」

「あら、レオンハルトの使徒にしては話が分かるじゃない」
「あはは、お褒めいただきありがとうございます～」
ペールは笑顔でメディウサの言葉を受け止める。その対応は柔軟かつ適当なもので、メディウサにしてもその緩さは面倒な襲撃任務を行う中でありがたいものだった。
何しろメディウサが招集され、襲撃に向かうに当たってレオンハルトからはその趣味を控え、真面目に任務をこなすようにと命令が下っていた。メディウサの趣味である凄惨な凌辱を行うにしても、軍務を終えて拠点で休憩を取る――その決まった時間で行うようにと。
ゆえにペールは問いかけたのだが、メディウサは少しくらいなら構わないだろうと軽く考えて森に入る前に捕まえた女の子を魔物兵に運ばせることにした。
「それじゃ、後はよろしくー」
「はいー。ではごゆっくりー」
メディウサが軽い調子で山小屋に入っていったのをペールや魔物将軍は見送る。
そして姿が見えなくなったところでペールは懐からペンと紙を取り出し、そこに何かを書き込む。
「ペール様？　それは何を書かれて……？」
「んー、何でもありませんよう。報告書というか、ちょっとメモってるだけです」
「は、はぁ……では先程の指示通り、兵達には怪しいものを探させます」
「よろしくお願いしますよう。……さて、それじゃ攻略する準備もしましょうかねー」
魔物将軍に指示を出し、ペールは少し開けた場所で待機する魔物兵とは別の集団に近づいていった。
それは姿が同じ者達で構成される魔軍の大部分の将兵とは違い、全員が魔物でありながらも魔物兵スーツなどを身に着けず、そしてそれぞれの種とは違った見た目をしている特殊な魔物達の集団――レオンハルト様親衛隊だ。

「キャロルせんぱーい」
「おや、ペールさん。如何しましたの？」
「いえ、そろそろ人里の目処が付きそうなので親衛隊の様子を見に。……それとアレの相手にちょっと疲れたので……」
ペールが小声で不満を口にする。扱いにくい魔人相手の折衝はペールには慣れたものだが、それでもこうしてたまには愚痴りたくなる時もあった。仕事であるので万全にこなすが、面倒な相手と交流を図るのはそこそこのストレスが貯まる。なのでやらないに越したことはないし、こうして休憩を取るのも大事なことだった。軽く召喚した幻獣を操作し、結界内に踏み入れさせながらもペールは親衛隊との会話を行う。
「あーペール様、R―18G嫌いっすもんねー」
「いやぁ、平気ですけどね。好きじゃないだけで耐性はありますし。どっちかっていうとシンプルに営業トークに疲れたって感じですよう」
「即売会前の締め切りとか当日の挨拶回りとどっちがきついっすか？」
「キツさの種別が違いますよう」
ペールと仲の良い親衛隊四天王の1人である神絵師ちゃんが気安く話しかける。使徒と下級使徒という立場の違いはあっても共にレオンハルトの女でありレオンハルトシティで作家業を共に行っている2人は即売会や締め切りなどで苦楽を共にした――いわゆる戦友だった。
「目処が立ったってことはもうすぐで突入する感じー？」
「結界で隠れてるのは分かりましたからそれを何とかしたら突入ですよう」
「おお！　それじゃそろそろお祭りの始まりだね！　素振りして身体温めておかないと！」
「素振りするのはいいですけど何かに当てて雷発生させないよう気をつけてくださいまし！」
「モチのロンですキャロル隊長！　そういうのは戦いが終わった後の

打ち上げの時とか二次会までです！　三次会からは騒がしくしない！　ちゃんと覚えてますよあたい！」
親衛隊四天王である獅子またまたが更に軽い調子でペールに問いかける。
そしてペールの答えに対し、明るく大声で反応したのは同じく親衛隊四天王の1人である赤い髪の巨大ハンマーを持った小柄な少女。女の子モンスター〝雷大鼓〟の突然変異種であるトールであった。
その小柄な身体からは想像のつかない怪力でハンマーを振り回す魔法使いである彼女はキャロルの注意を受けながらも自信満々な様子で既に戦いが終わった後の打ち上げのことを考えていた。親衛隊の盛り上げ隊長かつ体育会系である彼女はオツムは少し弱いがその明るさと高い戦闘能力もあって頼りになる存在だ。
「ふぅ……ようやく突入か……」
「師匠！　何か気になることでもあるんですか!?　あたいならいつでも相談に乗りますよ！」
「いや、トールちゃんが相談に乗ったところで元気は出るけど具体的な解決策は出ないっすよね……」
「というかいつものアレでしょー。師匠ちゃん特有の悩みと言えば」
そして親衛隊四天王の最後の1人にして最も古株。現在は副隊長を務めているソードマスターの突然変異種である師匠の溜息に誰もが反応する。彼女が憂鬱そうな反応を見せている理由は、この場にいる者は全員が知っていた。
そしてそれを隊長であるキャロルが唯一注意をする。
「師匠さん！　いけませんわよ！　相手が格下であってもやる気は出さないと！　獅子はうさぎを狩るにも何とやら、ですわ！」
「何その諺っぽいやつ。あたし雪うさぎ狩ったことないよ？」
「レオンハルト様が前に言ってましたわ！　どんな小物相手にも手加減してはいけないみたいな意味ですの！」
「うむ……確かにその通りだ。どんな相手にも手を抜くのは失礼に当たる。戦士としてその心構えは勿論理解しているが……しかし、格上でないのがな……残念だ……人間相手じゃ格上など殆ど見込めない

……しかもこっちが圧倒的有利ともなるとな……」
親衛隊の隊員全員にとっての師匠でもある師匠は、キャロルからその言葉を聞いて当然理解を示すも、しかし残念そうな様子に変わりはない。
その理由はまさに彼女が語るそれだった。師匠は――とにかく格上と戦いたいという癖を持つモンスターだった。
「ふぅ……強くなればなるほど楽しい相手がいなくなるのは本当にどうしたものか……いっそレベルを下げることも考えたくなるな……そうすれば人間相手でもあるいは格上に――」
「駄目ですよう？」
「無論、冗談だ。さすがにそんなことをしては周囲にも迷惑がかかるからな。――やるのは誰にも迷惑がかからない個人的な決闘の時だけに決まっている」
「それもどうかと思うっすよ？」
「ふ……低レベルで格上を倒した時の快感は凄まじいんだがな……一発でも当たれば致命傷。ちょっとしたミスが命取り。肌がひりつき、焦りそうになるところをグッと堪えて勝機を見出し飛び込んでいく。そうして格上を討ち取った時のカタルシスは他では味わえないものだ」
「それ理解出来るの、レオンハルト様と始祖様くらいですよう」
「その変態的な趣味さえなければ完璧超人なんすけどね」
女の子モンスターの突然変異種としてはメイド長さんと並び称されるほどの美人かつ優秀な魔物である師匠だが、その趣味だけが彼女に憧れる隊員達にとっても理解出来ない部分である。
レオンハルトに仕えるようになるまでは人間の強者や魔物の強者を狙った格上狩りを行い続けてきた師匠は今回の戦いにおいても出来れば強者と戦うことを楽しみとしていた。
だがそれが叶う可能性は少ないことを彼女自身、この時点で理解している。事前に聞いていた情報として、この場所にいる鋼の騎士団という魔物討伐隊の中に、師匠より格上の人間はいないとされていた。
「しかしかといって勝ち目０の相手に挑むような自殺行為は出来ない

からな……その見極めが難しいところだ。今回の相手で言うならガイ様の相手は不可能だろう。しかし、バークスハム様ならどうだ……？　あるいは噂の勇者というのも期待は出来るが……」
「まーた分析し始めちゃったー」
「さすが師匠！　戦う相手の分析なんてあたいには出来ないことを簡単にやってのける！　そこに痺れます！」
「格上を倒すには事前の分析も大事らしいっすからね……」
「何でもいいですけど仕事はちゃんとこなしてくださいよう？」
「そこは抜かりありませんわー！　わたくし率いる親衛隊は、完・璧――な集団ですのよ！　レオンハルト様から言い渡された仕事は完璧にこなして見せますわ！」
「――うむ。もちろん任務はこなす。戦士として戦いには集中するべきだ。皆も緊張はしているだろうが浮足立たないよう気をつけるといい」
「了解です！」
　師匠の薫陶に親衛隊員達が凛々しい声を揃える。癖のある者も多いが、親衛隊は紛れもない魔軍きっての少数精鋭部隊であり、彼女たち以上に強く優秀な部隊は存在しない。
　――とはいえその集団から外れているとなると部隊としての強みは活かせないため、些か不安要素も存在した。それを師匠は口にした。
「フォーチュンも今頃はリー様の下で懸命に働いているだろう。彼女が親衛隊とは別の任に就いた時は些か不安であったが、きっとフォーチュンも親衛隊の名に恥じない働きをしてくれているはず。彼女に負けないよう我々も任務を完璧にこなし、レオンハルト様に勝利を届けなければな」
「おー！」
「そういえばあの子はリーさんの下にいましたわね！　確かに、リーさんに負けないようこっちも頑張る必要がありますわ！」
「まあこの分だと本陣も安心っぽいですしね。危なそうなのはどっちかっていうとイヴちゃんとかミシェーラちゃんの方っぽいですよう」

そう言ってペールは手元の魔導具を確認した。そうして軽く操作を行い、簡単なメッセージを送る――『問題なし』という意味を込めて。

大陸南部、中央部に位置する魔軍の司令部。ガイ一派討伐軍の本陣は徐々に静けさが訪れていた。

それは日が落ちて夜になったことで、大部分の魔物兵が休み始めたことによるものである。夜襲の警戒は当然行うとはいえ、大勢の魔物兵を動員する必要はない。

何か異常があれば銅鑼を鳴らしてすぐに叩き起こす。夜番を行う兵士達はそのことをしっかりと理解しながら見張りの任に務めていた。

「――敵襲――！」

「ちっ……またか！　次はどこだ!?」

――そしてその備えはしっかりと役立っているが……少しばかり役に立ち過ぎてもいた。

魔物隊長は魔物兵の報せを聞いて居場所を特定しようと声を出すが、しかし。

「こっちです！　東側入り口の……！　あっ、もういません！」

「もういないだと……!?　ふざけるな！　これで何度目だ！」

「すみません！　しかし、確かに複数人の人影が……！」

「くっ……なら探しだせ！　これではいたずらに兵を起こすばかりだ！」

「は、はい！」

見張りの魔物兵はしっかりと人影を確認した上で報告をしていた。黒い影が横切った程度でも気の所為だと済ますようなことはない。レオンハルト軍の魔物兵は優秀だった。

しかしその優秀さが彼らの睡眠を妨げている。その事実を見て、南側の入り口近くで何となくその考察をしていたフォーチュンは呟いた。

「もしかして……わざと気づかれるようにしてるんでしょうか……？」
「なるほど。その可能性はありますな」
と、反応したのは南側の見張り担当の部隊を指揮する魔物隊長ダルタニアン。
夜襲を仕掛けてこちらの睡眠を妨げるという遊撃戦における常套手段を理解した彼はフォーチュンの言葉に頷きを返しつつ周囲を見渡す。
「であればこちらの方でも敵が現れる可能性があります。より一層の警戒をせねば」
「そうですね……それとリー様やカエサル閣下にも報告した方がいいかもしれません」
「了解致しました――おい」
「はっ。行って参ります」
ダルタニアンの一声で近くで話を理解していた魔物兵が直ぐ様司令部の方へ駆け出す。
「はぁ……せっかく申し出たのに……リー様の手を煩わせてしまうなんて……」
「心配ご無用かと思います。リー様は軍務に真摯な御方。必要な事柄に対し腹を立てることはありませぬ」
「いえ、そういうことじゃないんですが……」
「？」
リーの役に立ちたい。役立つ存在だと思われたいフォーチュンは小さく呟くもダルタニアンは理解出来ずに頭に疑問符を浮かべた。さすがの優秀な魔物隊長もフォーチュンがリーに好意を抱いていることには気づけない。
だが代わりに、やはり他の異変についてはすぐに気付けた――その音を聞いて。
「むっ……！」
「？　どうかしましたか？」
「いえ、北側で音が――」

その直後、フォーチュンや本陣にいる者であれば誰でも気付ける程の大きな音が鳴り響く。
「うわあああああ!?」
「ぐっ……今度はなんだ!?」
――そしてその現象はフォーチュンらがいる南側とは反対方向。北側で起こった。
本陣を強襲するそれは間違いなく敵が放った魔法であり、それにより北側に敷かれた柵や門などが無惨に破壊される。
だがそれだけの破壊をもたらすには数人程度じゃ不可能。ゆえに今度の報告は空振りに終わらなかった。
「北側にて敵襲！　しかも今度は……いました！　北側に人間の集団を確認！」
「今の破壊は魔法か……！　数は!?」
「おそらく数千人規模かと！」
「大部隊だな……！　なるほど、こっちが本命か！」
「如何致しましょう！　――あっ……」
「？　どうした――あっ」
人間の集団を確認したことで応戦する指示を出そうとしたところで、北側にいた彼らは背後に来ていた2体の怪物を見て間の抜けた声を出す。
「……」
「こ、これはカエサル閣下！　お、起きていらしたのですね！」
その内の一体は今回の討伐軍全体を指揮している魔物大将軍カエサルだった。
普段はうるさいほどにテンションが高く、自分の世界に入り込みがちなカエサルはしかしいつもと違って無言である。
その理由を知るがゆえに魔物隊長は若干怯えていた。もう一体も怖いが、こちらもどんな反応をするのかと北側に敵の集団がいることも一瞬忘れて戦々恐々とする。黙ってカエサルの言葉を聞いた。静かなトーンから入ったその語りを。
「……睡眠不足は美を損なう恐れがあるのだ……」

「は、はっ！　理解しております！」
「うむ……当然のことだ。如何に馬鹿な野良の人間とはいえそれくらいは常識だろう。それなのに、この美しい私を起こすとは――」
　美しさを信条とするカエサルは、美しさに対する意識も高かった。その効果の程は実際にどうなのかは分からないとはいえ、カエサルには幾つものこだわりがある。
　その１つが睡眠だ。カエサルは毎日絶対に１０時間は睡眠を取る。美容と健康を維持するために必要なのは三大欲求であり、それら全てをカエサルは大事にしていた。
　ゆえにしっかりと栄養のある食事を取った後、大将軍特製の浴槽にて入浴し、しっかりと身体を拭いてから植物性由来の特製クリームを身体に塗った後、軽くストレッチをして耳栓とアイマスクをして就寝する。そのカエサルのルーティーンはこの遠征においても変わらなかった。日中はしっかりと働くし、事前にしっかりと睡眠を取れたならば夜に動くことも１日や２日程度ならば許容する。
「――醜い人間の分際で……！　この私の美しさを汚すつもりか……！」
　だが、唐突な夜襲による睡眠妨害はカエサルを怒らせた。
　ゆえに彼はその美しさを補充するためにこの司令部としている人間牧場から持ってきた１人の人間を無造作に地面に捨てる。
「ひっ……！」
　魔物兵がそれを見て怯えを強くした。何しろそのカエサルの手から解放された人間は、ボロボロの骨と皮だけになって干からびて死んでいたからだ。
「捨てておけ」
「……はっ！」
　カエサルの老化の手とも呼ばれる特異な能力を見て魔物隊長も内心では戦慄したが、それを表に出さずに命令を粛々と聞いて忠実に動く。魔物隊長の指示で干からびた人間の死体が魔物兵によって掃除されると、そこでようやくカエサルは僅かだが落ち着いた。
「全く……やはり野良の人間というのは救いがたい。弱者は強者の機

嫌を損ねないように生きるべしという世のルールすら遵守出来ない――そんな愚かな人間には罰として強者からの有り難い洗礼を以てあの世に送ってやるのが他ならぬ人間のためだ。そうは思わぬか？」
「はっ！　その通りであるかと！」
「うむ……そうだよな。醜い人間も生まれ変わって美しい存在になれるかもしれない。そして苦しい思いをして死ねば来世ではしっかりと世のルールを遵守出来る人間になれるかもしれないだろう」
　そして自己完結気味にカエサルは頷く。魔物隊長の返事にどれほどの意味があるのかは分からないが、少なくともこの場で怒りを発散するほど激高していないことは救いだった。
「であれば！　我が軍の全霊を以て！　この世の王者足る魔軍の力で！　人間を殺し！　我らの糧とするべきであると！　――そうは思いませぬか！　レッドアイ様！」
「――クケケケ！　あなた、中々グッドなことスピークするね！」
　カエサルは両手を上げて振り返り、大げさに、まるで天に語りかけるように同調を求めれば、そこにいたカエサルの上位者――魔人レッドアイがその輝いた身体の上から声を返す。
　ずしん、ずしんと一歩ずつ。その巨体を動かして北側にいる人間の集団に向けて近づくその身体は、レッドアイの物であってレッドアイではない。
　魔人レッドアイの寄生能力によって手に入れた現在のボディ。それをレッドアイは人間に向けてお披露目する。
「モンスタージェネラ～ル？　向こうにガイはいるか？」
「おそらくいないでしょうな！　あれは人間の群れ！　それもどうやら魔法使いの集団のようですぞ！」
「オーケーオーケー。ではミーが踏み潰すね。ユーらはヒューマンをエスケープさせないよう先に突っ込むがよろし。オーケー？」
「オーケーでありますレッドアイ様！　――さあ者共起きろ！　美しき王者の戦いの時間だ！」
　カエサルが魔物達に号令をかける。北側に布陣している人間の集団の数は人間にしては多い。

そしてこうやって夜襲を仕掛けながらも姿を現したということは、それなりの勝算があってのことなのだろう。向こうに明かりが少ないのも何らかの手段によって夜でも問題なく行動出来るようになっていると見るべきだ。

あるいは他にも策があるのかもしれない――が、王者はそれらを全て踏み潰して勝利するものだとカエサルは何が起こっても問題ないと自信を覗かせる。

「絶対的な力はそれだけで美しい！　それを思い知れるとは……幸運だな人間共よ！」

「来たか……ではもう1度、放て――！」

魔物兵が続々と布陣し、北側の人間に向かって近づこうとするとそこにいた魔法使いと思われる指揮官は再度の攻撃を命令し、近づこうとしてくる魔物達を火力で出来る限り倒そうとする。

それは少なからず、魔物達を殺すことに成功したが――彼らはその奥からやって来る光り輝く物体を見た。

「……!?　あ、あれは……!?」

「まさか……!?」

魔法使いと思われる集団の指揮官達がその形を見て戦慄する。本能的に恐怖する。

何しろその身体――レッドアイのボディは魔法使いにとって天敵であるものだった。

「ミーは天才！　なのでよくルックしておくがよい！　あのデンジャラスガイともし戦うことになってもこのボディならノープロブレムよ！　対策はパーフェクト！　メイクドラーマー！」

言ってレッドアイは人間達の前に姿を現す。魔法が得意なガイを相手に、レッドアイが選んだボディ。

それは――巨大な黄金のハニワだった。

絶対魔法防御の特性を持つハニー。その特殊個体であるゴールデンハニーに寄生しているレッドアイに魔法は無意味。ハニー特有の飛び跳ねる動きでどしん、どしんと近づいてくるレッドアイに、魔法使い達はは恐怖する。

「ぶ、分隊長！　逃げましょう！　あれでは……！」
「っ……駄目だ！　少しでも時間を稼げ！　幸いにも動きはそこまで速くない！　攻撃は効かずとも足を止めさせることは出来る！　撃ち続けろ！」
「はっはっは！　無駄なことを！　――では進軍！　人間共を叩き潰すぞ！」
「魔法無敵のこのボディに最強魔法使いのミーのコンボは無敵！　ベリー弱いヒューマン達！　最強のミーの戦闘をよくルックするね！」
『はにほー……！』
「ケケケ！　それではいつもの」
「おお、いつもの決め台詞ですな！　では僭越ながら私も一緒に！」
「――キル・あなた！」
　魔物大将軍カエサル率いる魔軍と魔人レッドアイが人間の集団に向かって戦闘を開始する。
　――そしてその時、南側ではフードで顔を隠した1人の人間が本陣に忍び込もうとしていた。
「……兵の大半は北側で戦闘を開始したようだな」
『ええ。注意が北に向いている今がチャンスでしょうね』
「ああ。今の内に、狩れる者は狩っておくとしよう」
　少年は腰に差した喋る刀と会話を行い、冷静かつ俊敏に本陣へと突入する。
「ぐあっ!?」
「！　どうした!?」
「――何でもない。大声を出すな」
「っ……!?　き、貴様は……」
　見張りに立っていた魔物兵を一刀に伏せ、近くにいた魔物隊長も斬り捨てた少年。
　その姿を――近くにいたフォーチュンが目撃した。
「っ……あ、あなたは……」
「……やはり見られてしまうか。本職の忍びのようにはいかないな」
　と、目撃されたことで少年は嘆息しながらもあえてフードを外し、

顔を現した。注目をあえて集めるために。
「――私は勇者、宗近だ」
「!?　勇者……！　報告にあった通り……！」
「ああ。そして、悪いが指揮官らしき魔物は狩らせてもらう」
　長い黒髪を後ろに結った中性的な顔立ちの少年は刀を手に、素早くフォーチュンに向かって駆ける。フォーチュンには反応出来ない速度だ。親衛隊の一員であり、普通の魔物に比べれば強いフォーチュンだがその能力は支援寄りであり直接戦闘には向いていない。
「――お逃げください！　フォーチュン様！」
「魔物隊長……！」
　そのため、それを理解している魔物隊長ダルタニアンは剣を構えて間に立ち塞がる――敵わないと知りながらも。
「さっきの魔物隊長よりは強いようだな」
「っ……抜かすがいい！　私はレオンハルト軍の三剣士！　ここで勇者を討ち取らせてもらう！」
「……残念だが」
「――!?」
　と、そう言った時には宗近は刀を払い、残心に入っていた。
「剣士としても戦士としても――私の方が何倍も上だ」
「っ……無念……」
　腹から血を流し、地面に倒れるダルタニアン。
　宗近は刀に付いたその血を払い、次に狙いを付けて走り出す。一片の無駄もない。ＪＡＰＡＮ一の剣士であり、卓越した剣の技量と速さを持つ宗近は勇者の特性をも理解しているがゆえ、単独での敵陣強襲を行い、敵の将をできる限り狩ることを目的としている。
　仮に負けたところで死なないし逃げられるという保証付きの達人による突撃は如何に魔物と言えども止めることは容易ではない。
「っ――！」
　そして相対して狙いを付けられれば、逃げることもまた難しかった。
　フォーチュンは自分ではどうしようもない存在が近づいてくるこ

とを知覚する。反応は出来ない。なのに感じられる。いわゆる走馬灯とも言える現象。
宗近には何の感慨もない。容赦も慈悲もない瞳がフォーチュンには見える。最弱モンスターであるきゃんきゃんを、何も気にせず倒す人間達の例に漏れないその表情を。
そしてフォーチュンは絶望した。こんなところで死ぬくらいなら、仲間のアドバイスに従ってさっさと想いを伝えておくべきだったと。現実は非情でいつ死ぬか分からない。魔物の世界は弱肉強食であり、そのことは理解していたはずなのに。
幸運にも安全が得られたことで忘れてしまっていたことを悔いる。そして、こんな部下ですらやられたら悲しむ優しさを持つあの方に内心で謝罪した。
「――しっ！」
「っ……!?」
「……え……？」
だがその時、フォーチュンの目の前でフォーチュンには理解の出来ない攻防が起こった。
横から現れたその赤い影は、低く身構えた状態で勇者宗近に突っ込み、その右の拳で刀を横合いから殴りつける。
そして身体が開いたのを見て左の拳による二撃目。そしてもう1度右の拳による三撃目。いわゆるフィニッシュブローを行おうとした。
だが宗近はそれに反応し、後方に跳び下がることで回避をする。
魔物隊長を一瞬で倒した強者である宗近を下がらせたその赤い軍服を着たダンディな男。その使徒の名を、フォーチュンは床に尻もちをつきながら口にした。
「リー……様……」
魔人レオンハルトの使徒であるリー。
その男が、フォーチュンの前に立っていた。以前と同じように、常に持っているはずの本――剣王伝を懐に収め、両手を空けた状態で勇者と対峙する。

宗近のことを、じっと険しい瞳で見つめた上で。
「……報告通りの容姿にその身のこなし……貴様が勇者で相違ないな？」
「……ああ、そうだが……そちらは……使徒、か？」
「――ああ。レオンハルト様の使徒……リーと言う。覚えておけ」
「覚えておく？　なぜだ？」
一瞬の攻防で警戒を行う宗近に、リーは間違いなく使徒であることを告げると再び、ゆっくりと構えを取った。両手を顔の前に置き、力強く拳を握りしめる。
そして決意を口にした。
「――勇者である貴様を狩る者の名であるからだ」
――この時を１０００年以上ずっと……待ち望んできたと。

鍛えあげられたもの

――魔軍の陣地がそれぞれ襲撃を受ける数時間前。

遠くに北側にそびえ立つ翔竜山が見えるその地域を行くのは俺が指揮する魔軍の一軍だ。

だがその兵はいつもより多少緊張しているのが分かる。

やはり初の実戦。それも俺や隣にいる上級魔人が居ることが効いているのだろうと俺は彼らの心情を理解しながらも、行う会話は兵の緊張を解きほぐすものではない。

多少の緊張感を持つことは実戦、それも初陣において悪いことではないからな。これも良い経験になるだろう。今回の戦争は実戦経験を積むのに利用出来る。

そしてそれは一般兵だけに限らない。

「――はーはっはっは！」

戦場で２つの異なる声が重なる。

一方は俺の使徒であるガウガウのものでもう一方はガウガウが制作した人工生命体パープルアイのものだ。

ペットは飼い主に似るというが、人工生命体もまた制作者にはある程度似るのかもしれない。戦場で高笑いを行う２人の姿は容姿こそ大きく異なるものの根本のところで近しいものを感じられる。

「さすがの性能だパープルアイ！　レベルの概念がない人工生命体でありながらこの戦闘力は歴史上類を見ないぞ！　誰だこんなやばい代物を作ったのは!?　――天才美少女の私だった！」

「そう、我は天才……！　狂気の天才魔導科学者によって作られた最強美少女ホムンクルス……！　そんなボク以上に完璧に作られたものは存在しないのだ……！」

「楽しそうだな……」

「ああ！　自分の制作物が自分のほぼ理想通りに出来上がっているのを見るのはやはり良い気分だ！　……まあ材料にレオンハルトの体液を混ぜ合わせたせいか、若干規格外の性能も備わってしまったが……それもまあ良し！　結果的に上手い方に転がっているならそれ

でいいんだー！」
「戦闘、雑用、性処理！　三拍子揃ったボクこそ最高の存在ということだな……！　マイスターガウガウよ！」
「そう！　だから私は天才なのだ！　もっと私を褒め称えろー！」
『マスターガウガウジーニアス！　マスターガウガウパーフェクト！』
「……まあすごいことではあるがな」
　痛い感じで紫色の瞳を輝かせるパープルアイに合わせ、自分の装備している魔導具ブラックアイにも称賛されるガウガウのテンションはいつも以上に高い。
　パープルアイの実戦でのデータなどを取れたのもやはり大きいのだろう。人間相手とはいえ、三千近い数の人間の部隊と戦うことなどこの時代ではまずないことだ。
「レオンハルト様。敵の殲滅を確認しました」
「そうか。では予定通り、隠れ里の捜索及び襲撃を行ってくれ。手順は覚えているな？」
「はっ。殺すのは武器を持ち、戦う意思を見せた戦士だけ。それ以外は捕虜として捕らえます」
「良し。ではこれより部隊を分ける――カミーラ。お前達もそれでいいか？」
「……ああ。構わない」
　今回の遠征軍の指揮官でもある魔物将軍ティトゥスからの報告を聞いて指示を送り、俺は近くにいたカミーラ達にも確認を行う。
　先程まで人間を相手に大規模な狩りを自ら行っていたカミーラはその手を赤く染めながら鼻を鳴らす。
「ふん……数は多いが手応えのある人間はいなかったな。ここは外れか」
「お疲れ様ですカミーラ様！」
「カミーラ様。こちらを」
「ああ」
　使徒のラインコックに労われ、同じく使徒の七星から血を拭くため

の白い布を手渡されながらカミーラは先程まで起こっていた戦いをつまらないものと評する。
　しかしそれも仕方のないことだ。この時代を生き残る魔物討伐隊に所属するような人間は牧場の人間どころか、かつて戦争が多く起こっていた時代の人間よりも警戒心が強く手強い者も多いとはいえ、魔軍と比べればどんぐりの背比べだ。
　ただでさえ目ぼしい強者がいない人間の軍勢に、魔人を、それもカミーラなどの上級魔人や、俺の使徒のような使徒にしては戦闘に長けた連中を送り込めばどうなるかは火を見るよりも明らか。
　仮にこの場に警戒対象である人間がいたところで結果は変わらなかっただろう。手強い獲物がいないことはカミーラにとっては残念なことだが、ある程度は仕方のないことだと理解はしているはず。
　それに何より――標的であるガイがいなかったことも相まって、カミーラの機嫌はいつもより悪いように思われた。
「……レオンハルト。次はどこへ向かうつもりだ？」
「無論それはガイのいる場所だ。着く頃には連絡が来る手筈になっている。とりあえず付いて来てくれ」
「……連絡だと？」
「ああ。ガウガウ制作の魔導具でな。簡単な連絡が行える」
　２つの軍が分かれて捜索に入っていくのを眺めながら、俺はカミーラの質問に懐から小さい板のような魔導具を取り出して答えると横からその制作者がまたしゃしゃり出てきた。
「その〝魔導通信電話〟もまた天才である私が発明した傑作の１つだ！」
「……なんかよく分かんないけど、それで何が出来るのよ？」
「ふっふっふ！　聞いて驚くなよ！　なんと！　離れた場所にいる者と言葉を交わすことが出来るのだ！」
「は？」
「それは一体どういう……？　テレパシー魔法の一種ですか？」
　ガウガウの説明にラインコックや七星は付いていけず頭に疑問符を浮かべるが……まあそれも無理もないことだろう。

未だ魔法電話のような技術も表向きには発明されていない中で、ガウガウの作ったこれは情報魔法の革命とも言っていい発明品だ。
「ふっ……テレパシー魔法か。確かにあれは便利だが私の発明品はその比じゃない性能を誇るものだ。通信距離は大陸の端から端までも余裕で届く上、魔法の使えない者でもこれさえ持っていれば同じ魔導具を持つ者さえいれば声を交わし合うことが可能なのだ！」
「……何それ。そんなこと本当に出来るわけ？」
「……確かに。にわかには信じがたいものですね……」
「まあ普通はそう思うだろうが、天才はそういった常識には囚われないものだ。ＪＡＰＡＮでは主流の陰陽術に目を付けた私はそれを応用し、組み合わせることで遠距離での通信を可能にさせる術を思いついた。魔導具を媒介に時間の概念に囚われない異空間を経由すれば互いの声を同時に交わし合うことも可能だと。そのためにはまずあのゴリラもといハンティと協力し――」
そうしてガウガウは自信満々に自分の作った発明品が如何にして作られたのかを説明しようとする。
だがその揶揄するあだ名を口にすると、ちょうどその後ろにその相手が現れた。
「……私がどうしたって？」
「うわっ、ハンティ!?　急に現れるな！　現れる前に1度連絡しろって言っただろ!?」
「あー……魔導電話？　と言ってもあたし持ってないし。あたしの分は他に貸してるって言わなかったっけ？」
「ぐっ……そういえばそうだったか……」
「そもそもあたしの場合はなくともこうやって直接連絡出来るから別にいいでしょうが。……で？　何？　もしかしてまたあたしの悪口？」
「わ、悪口は言ってないぞ！」
「いや、別にいいけどさ。――後で戦闘訓練に付き合ってもらうだけだし」
「そんな後で地獄を見せるくらいなら今怒れよ！」

「はいはい。それじゃもうちょっと後で怒ってやるよ。……それよかレオンハルト。もうこっちは準備出来たよ」
瞬間移動で戻ってきたハンティがガウガウを軽くいなしながら俺の命令をこなし終えたと報告を行ってきたため、俺は頷いてカミーラ達に再び向き直った。
「なら向かうとするか。カミーラ達も付いて来てくれ」
「ああ」
「ぐ……私の天才的な発明品の説明がまだなのに……」
『ドンマイマスター』
「情けないわねマイスター」
呑気なガウガウとその発明品達を無視して歩き出す。
森林地帯を捜索する魔軍の部隊とは1度離れ、近くにある施設へと少し時間をかけて向かっていった。
「あれは……」
「人間牧場？」
そしてやがて、その目的地が見えてくると背後からカミーラの使徒2人の疑問を感じる声を出した。
俺はそれには答えずに1度スルーし、その次のカミーラからの言葉に答える。牧場の前にたどり着いたカミーラがそれを見て、どこか得心したような表情を見せたからだ。薄い笑みを浮かべて、俺に声を送ってくる。
「ふ……なるほどな……最初からこうするつもりだったか」
「ああ。ガイがどこに現れようとこれを用いれば接敵することは難しいことじゃないからな」
そう答えて近づくのは地面に描かれた2つの魔法陣だが、その意味をカミーラも当然理解する。
何しろこれは――転移魔法陣。
魔人の秘術と呼ばれる高等魔法であるからだ。その存在も効果の程もカミーラは知っているし、ハンティが瞬間移動を行えることも先程のガウガウの説明で遠距離からの連絡を行えることも分かればやり方を理解するのはそれほど難しいことじゃない。

「ちょうど連絡も来たようだな」
俺の持っている魔導具から聞き慣れない音が鳴ったのを聞いて、俺はそれを確認する。日がちょうど沈んだタイミング。魔導電話の簡易連絡機能によって送られてきた通知によるものだ。
それによれば、相手はイヴでその内容は〝緊急〟の意味が込められた赤い光。
まだ文字を入力する機能は付いていないため、詳しい状況を聞くには電話をするしかないが、この通知が来たということは電話をする余裕がない――つまり緊急性の高い事が起こったということ。
事前に取り決めしていたこともあって俺は即座に声を出す。
「ハンティ。イヴからだ」
「じゃあ南だね。それじゃ行ってくるよ」
と、言うが早いかハンティが瞬間移動でその場から消える。
そしてすぐ、数分後に。
「おっけー。陣描いて来たよ。これでいつでも移動出来る」
「よし――それじゃカミーラ。先に向かってくれ」
俺はカミーラに転移魔法陣で移動し、ハンティが瞬間移動で描いたその場所――ガイが現れた南の森に向かうように告げる。
しかしカミーラからは疑問が来た。どこか訝しむように。
「……お前は一緒に来ないのか？」
「俺もすぐに向かうが、先にやることがある」
「……そうか」
カミーラが頷く。転移魔法陣の上に乗りながら、軽く目の前にある人間牧場と俺の方を見て。
「……くく……レオンハルト……」
「……なんだ？」
そして、笑みを浮かべる。
対して俺は何でもないように問いかけるも、カミーラには既にバレているようだった。あるいは推測でもしたのだろう。カミーラは俺に対し、くつくつと笑いながら確認を取ってくる。
「また悪いことを考えているようだな……？」

「……さて、な。俺としてはそんなつもりはないが」
「惚けなくてもいい。私は知っているぞ。この牧場は、あの女の担当だろう？」
「そうだったかもな」
俺はカミーラの言葉をやんわりとはぐらかしつつ転移魔法陣に魔力を込める。
そしてカミーラにもこちらから言葉をかけた。
「ガイとの戦いの際は注意してくれ。奴はその気になれば卑怯な手だろうと何でも使ってくる。正々堂々と戦えるとは思わないことだ」
「……ああ。分かっている。……そうだな、お前の企みも気にはなるが……今はこっちに集中するとしよう……！」
俺からの助言に自分の目的を思い出したようにカミーラは戦意を昂らせる。ようやくあのガイにリベンジが出来るのだ。そこには怒りの感情が強くあるだろうが、やり返せると分かれば怒りを飛び越して喜びすら覚えるものだ。
その目的の前では俺の企みは些細なこと。そう思い、カミーラは使徒2人と共に魔法陣の中心に立ち、
「武運を祈る」
「先に行ってガイを捕らえておいてやる。それでこの戦いは終わりだ」
「俺もこの後すぐに向かう――ではな」
魔法陣に十分な魔力が充填され、発動されればカミーラ達の姿はその場から一瞬で消えていなくなった。
そして残されたのは俺とその使徒達だけ。会話もまた気安いものが飛び交う。
「カミーラだけ先に行かせて大丈夫なの？　ガイにやられちゃうんじゃない？」
「やられるにしろ瞬殺はされないだろう。その前に割って入れば問題ない」
「この私が作ったグリーンアイからの情報だと相手にはそこそこ強そうな人間もいるらしいが……まあそれも本当にマズいことになるよ

うなら緊急連絡を入れれば済む話だろうからな！　何の問題もないというわけだ！」
「我が同胞が潜り込んでいるとは露とも思うまい。くっくっく」
「日光渡した勇者とあの脱走した元特Ａ級のヤツがいるんだっけ」
「ああ。だがそれも問題ない。誰がどこに現れようが対応策は仕込んである」
　ガイ一派の動きは既に掴んでいるし、そうでなくとも読みやすい。ガイの目的を考えれば狙いを読むことはそれほど難しくはないことだ。
　なので事前に策を仕込んで自分の都合のいいように動かすのにも苦労はしない。
　それでも強いて不安要素があるとすれば戦闘で予期しない相手がやられてしまうことだが……それも各地に戦力を置き、素早い連絡手段と移動手段を確立した時点でほぼクリアしたも同然だ。
　とはいえある程度のリスクはあるので油断は出来ないが、それでも俺の使徒達ならどうにかするだろう。
「それで用事とは何だ？　レオンハルト様。……もしかして、ここで休憩してボクとエッチなことを……」
「……違う」
「読みは悪くないぞパープルアイ。レオンハルトがこうやって動く際は大抵女絡みだからな！」
「そ、そうなんだ……へぇ～……」
「おい……誤解を招くようなことを言うな。いつもそうなわけじゃない」
「でも今回も女絡みだろ」
「……」
「あ、逃げた」
「レオンハルトは戦いと女で動く。これが基本の行動パターンだ。パープルアイよ、記憶しておけ」
「ふっ、言われずとも我が紫色の脳味噌はその情報を既に記憶している！　……ええと、メモメモ……」

「……いいから行くぞ」
何とも言えない質問に俺は無言で回答を拒否して牧場内に歩き出す。
そうして目的の施設内――メディウサの管轄する人間牧場の、〝美少女管理小屋〟へと足を踏み入れることにした。

目の前にいる赤い軍服の男――魔人レオンハルトの使徒であるリーが殺気を放出した瞬間、宗近はまた再び距離を取って回避行動を取った。
それは安全策であり、同時に様子見をして確実に仕留められる瞬間を作るためであった。
勇者の特性を理解している宗近にとって、時間を稼ぐことは場合にもよるが悪いことではない。回避に専念して時間を稼ぐだけで、宗近と相手の差はどんどん縮まっていく。
……先程の攻撃の重さから察するに、この使徒のパワーは尋常ではない。今は回避を優先に後の先を狙う方が無難だな。
内心でそう思い、宗近はリーから目を離さないままに口を動かした。言葉もまた相手から情報を抜き出す有用な手段。そうして勇者の持つ見切り能力の精度を更に上げる。不思議な力で見切れるようになるとしても、頭と経験でしっかりと理解した方がより動きが洗練されることは戦闘における基本である。そのため宗近は軽視せずに刀を構えながら最善を尽くした。
「……随分と力がこもっているようだが、人間に恨みでも持っているのか？」
「人間への恨み、か。確かにそれもあるだろうが正確には違う」
「だとしたら勇者に対するものか？　どちらにせよお門違いも甚だしい。人間をあれほど苦しめている魔物が、やり返されるのは当然のこと。人間にしてみれば当然の抵抗だ。仮にそちらの大事にしている兵や誰かがやられたところでそれを気にしてやる必要はない」
敢えての挑発を本心を交えながら行えば、相手もより怒って攻撃が

単調になる。
　そういった狙いがあっての言葉選びであったが、宗近の狙いに反してリーは冷静であった。静かに言葉を返す。
「そうではない。私が感じているのは、自分に対してのものだ」
「……自分に対してだと？」
「そう。ゆえに私がここで勇者を狩ることには意味がある」
　宗近の疑問を呈する言葉に頷き、リーは再び拳を構える。そして宗近が僅かに懸念することへの言及を行った。
「だから心配するな。他の者を集めて袋叩きにするような真似はしない。貴様は私の手でしっかりと追い詰めてやる」
「……それはどうも、とでも言えばいいのか？　そのような気遣いは結構だ。そのリスクもまた考慮している。あまり舐めないでもらおうか」
　宗近は自分の強さに確かな自信を持っている。魔王はともかく、魔人であっても下位の実力の者であればやり方次第で十分に仕留められると宗近は見ていた。
　だからこそ使徒如きに負けてはその計算も崩れてしまう。だから警戒は怠っていなかった。
「――それはこちらの台詞だ」
「っ！」
　素早い踏み込み。恐ろしいほど素早く眼前まで距離を詰めてきたリーはその拳で真っ直ぐに宗近の顔を撃ち抜こうとしてくる。
　危険を感じ、宗近は顔をずらしての回避を選択。そしてそれは見事成功するが、
「……!?　拳圧が……！」
　その拳の速さ――いや、パワーが異常だった。
　リーの放ったストレートパンチは宗近の顔を貫くことはなかったが、その数メートル先にあった魔軍の天幕や柵、見張り台といった陣内設備を吹き飛ばして破壊する。
　それは間違いなく必殺技並の威力を誇る衝撃波。つまり、それが意味するところを宗近は理解した。

……格闘ＬＶ２はあるようだな……！

衝撃や斬撃といったものを飛ばす技にはそれ相応の才能が必要であることを宗近もまた理解している。そのためリーの格闘戦の強さを推察した宗近は、あまり近づくのは危険だと返す刀を振るって間合いの差を利用することを決める。

当然、刀と拳では間合いに差はある。格闘家は剣士に対し、その懐に入らなければ基本不利だ。

ゆえに迎撃のような形でその拳や身体に傷を負わせることでリーに対し有利に戦闘を運ぶことにした。あるいは、見切りの精度によっては一撃で仕留めることも可能だろう。不服ではあるものの、長期戦を選ばざるを得ないかもしれない。そう、宗近が覚悟する。少なくとも北で戦っているものが完全に潰れるまでは余裕はあるだろうと宗近は読んでいた。

「――かかったな」

「……！　なっ……!?」

――が、そうして長期戦覚悟の安全策。距離を取りながらの斬り払いで攻撃と防御と回避を同時に行おうとしたその瞬間に、宗近の予想に反してリーは動いた。

先程よりもずっと速く。そして僅かに傷つくことも覚悟してリーは肩に刃を掠めながら宗近の懐に入ってくる。

「っ……！（マズい……！　あのパワーで殴られたら……！）」

「――殴りはせん。安心しろ」

「!?」

何を、と宗近が思う。先程まで手加減していたかと思うほどの――いや、間違いなく抑えていたスピードで宗近を油断させ、そのまま殴りつけてくる。

そう思った瞬間には、宗近は手を取られていた。その意味もまた、宗近は遅れて理解する。

「投げ技……！　いや、関節技か……！」

「御名答だ、勇者殿」

「っ……！　ぐ、あっ……!?」

腕を掴まれ、地面に引き倒され、関節を極められる――そう、それは投げ技であり関節技であった。
しかも手加減し、1度隙を作ったところで懐に潜り込んだ上での初見のそれは勇者の見切り能力の発動の条件に合致しないもの。
「……悪いが勇者の能力は全て把握している。見切り能力や不死に近い生き返り能力に、どんな時でも絶対に助かるとまで言われる幸運能力」
地面に倒され、腕を極められて押さえつけられながら宗近はリーの言葉を聞いた。
それは宗近も把握し、持っている勇者能力の話であり、同時にその対策の話であった。リーは、宗近にそれを教え込む。
――その身体を用いて実際に。
「!!　っ～～～～!?」
「――まずは腕を一本」
宗近の右腕。掴まれたそれが、逆側に力をかけられて素早く折られる。
痛みに悶絶し、それを耐える宗近を見下ろし、リーは続けた。その対策を口にする。
「ゆえに私は考えた。勇者を倒すためにはどうすればよいかと」
「っ……それが、これか……！」
「左様。初見で対応出来ぬほどのパワーとスピードを以て、見切り能力が発揮出来ぬよう初見の技で、殺さず、押さえ込み、後に助かっても動けなくなるよう――全身の骨を折る」
それが宗近の陥っていった罠であり、リーの仕掛けた策だ。
「私が千年の時間をかけて研究し、研鑽し続けた格闘術であればそれは可能だ」
――そしてリーは回顧する。千年にも及んだその……後悔と研鑽の日々を。

千年以上前――魔物大将軍であったリーは同僚であり戦友であっ

た魔物大将軍をたった1人の勇者の手によって失った。
リー自身もまた勇者の手にやられ、主であるレオンハルトによって使徒化され、救われなければ命を失っていたのだ。
ゆえにリーはそのことでレオンハルトに深く感謝し、一層の忠誠を、それこそ命を捧げて仕えることを決めた。
だがそれと同時に、リーは自らのある部分を呪った。
それは――自分の弱さ。
魔物大将軍として、一体の魔物として。リーは決して強くはなかった。
魔物将軍であった時代も自分は飛び抜けて強くも優秀でもなかったはずだとリーは自覚している。多少、他の魔物に比べて気を使ったり心を慮るのが得意であった――というのはレオンハルトや亡き友に教えられたことだが、それ以外にはっきりと言えるほどの強みがなかったことは事実だ。
自分には力もなければ知恵もない。また魔物としての誇りも薄いものだった。
使徒になって更に力が増してもリーのその思いは変わらなかった。自分は弱い。能がない。これまでの自分のままであれば、自分はまたあのような状況に陥った時にまた何も出来ずにやられてしまうだろうと。
それでは主であるレオンハルト様にも、自分のことを身を挺して救ってくれた友にも申し訳が立たない。
――ゆえにリーはそうならぬよう、鍛えた。
毎日、亡き友の残した槍を用いて身体を鍛え、格闘技の研鑽に努め、力を強めた。
毎日、亡き友のようにチェスや将棋の盤面を前に戦略、戦術について研究し、知恵を学んだ。
毎日、亡き友を見習って魔物としての誇りを自覚し、己の心を鍛えた。
主や亡き友が誇れるような兵士となり、自らの価値を証明する。
そのためにも、自分達が歯が立たなかった勇者に対してもその対策

を講じた。
いつか相対することになったとしても、以前のような無様は晒さない。そういう覚悟を持って今までの日々を過ごしてきた。
「敵を上回る〝力（パワー）〟！」
鍛え上げられた肉体は敵の抵抗を許さず、自分とその周囲を守ることが出来る。
「敵を凌駕する〝戦術（タクティクス）〟！」
備わった知恵や頭の回転は敵の取る策を読み、あらゆる状況に対応することが出来る。
「そして敵が持ち得ない魔物としての〝誇り（プライド）〟！」
その誇りは自分に自信を持たせ、そして敵に慈悲を与えない。いっそ残虐な程に敵を討ち滅ぼす心を授け、それを敵だけに向けることが出来る。
「私がこれまで鍛え上げたその3つを以て、これより貴様の全身の骨を粉々に粉砕する――そうして動けぬようになった貴様をレオンハルト様に献上してみせよう……！」
そして高めた強さは全て主のために捧げる。
レオンハルトはリーにとって〝光〟のような存在。見上げ、敬い、感謝し、捧げる。もはや信仰と言っていいほどの忠誠心をリーは持っている。
レオンハルトであれば魔物にとっても、そして人間や他の種にとっても救いを与えることが出来る。
その眩しい生き様を側で見届け、その一助になりたい――リーはそう願い、そのための研鑽を積んできたのだ。
ゆえに――
「観念するがいい、勇者。貴様ではレオンハルト様には届かない――私1人で十分だ」
「……！」
――ただの勇者如き、自分1人で十分に対処は可能だとリーは豪語した。
これから有言実行し、勇者の全身の骨を折っていく。不死だろうと

なんだろうとしばらくは回復不可能なほどに徹底的に。
ただの勇者であり剣士でしかない勇者宗近にこれを抜け出すことは不可能だと、油断は見せないまでもそう判断した。
「っ……なるほど。私1人ではどうやら荷が重いようだな……！」
――が、宗近もまたそれを理解する。
自分1人では勝てない。ただの剣士としての能力じゃ、勇者の力に頼るだけではどうしようもないと。
だから、やることは1つ。
「人が1人きりの力で出来ることには限界がある……！　そのようなこと、初めから分かっていたが……手の内を隠しておきたかった……少なくとも、私の手だとは思われたくなかったが……そうも言ってられないようだ……」
「!?　貴様、何を――」
「――遅いな……！」
リーが宗近の奇妙な様子と、その左手の裾からこぼれ出てきた札を見て、理解するより速く宗近の喉を潰そうと拳打を繰り出す。
だが、僅かに宗近の方が速かった。宗近は口にする。魔力を注ぎ込んだ上で、大陸にはない彼の出身地由来の術を。
「召喚――〝大天狗・根津血〟。そして〝童乱剣鬼〟」
「――っ！」
刹那、札から発生した力の奔流がリーの身体を後方へ飛び退かせる。
爆発でも起こったかのような白い煙の中、羽や角が特徴的な2体の影が加わっていることにリーは驚き、そして遅れて把握した。
報告にあった勇者宗近は、ただの勇者でも剣士でもないことを。
「――ほう?　今度は何かと思えば……使徒の相手か。これは中々梃子摺りそうな相手だの」
「――チッ……また呼び出しおって……鬼使いが荒すぎるのじゃこの童が……！」
自ら調伏した人外の者を従え、召喚し、戦わせることの出来る存在。その知識を、リーは頭の中から引っ張り出して口にした。そう、勇者

宗近は――
「貴様……陰陽師でもあったか……！」
「――ご明察だ使徒殿。故、これからは複数人で当たらせてもらうぞ」
人に近い姿の妖怪と鬼――それらを自在に操れる陰陽術の使い手
……陰陽師であった。

使徒の誇り

ガイ一派である人類連合軍の総兵力は約３万である。
内訳としては大小様々な魔物討伐隊が集まっており、人間側勢力に顔が利く鋼の騎士団が声を掛けた他、その多くはキリング商会が金銭などで雇った言わば傭兵である。
「ひ、ひいい!?」
「クソ！　こんなの勝てるわけがねぇ！」
「ゲヒャヒャヒャ！　ユーら、ベリーベリー弱い！」
つまりは寄せ集めの軍勢であり、それゆえ士気はそれほど高くはないと思われる。
魔軍の本陣に強襲を仕掛けた幾つかの部隊は魔人の強さに恐れをなして逃げ出していく。前金でかなりの金銭を支払い、リスクについても説明したにもかかわらず実際に直面してから命惜しさに逃げ出す――人間の愚かさと言うべきか。
「腰抜け共め……！　もう逃げおったか……！」
「副長殿！　第一陣が突破されました！」
「っ……予定よりかなり早いな……！」
――だが、もう一方の人間達も見れば、むしろ生物として正しいのは逃げた彼らなのかもしれないとも思う。
「なんとしても死守しろ！　時間を稼げ！」
「既にこちらの兵の大半が式神であることは露見している！　見目を気にする必要はない！　ありったけの式神で防衛しろ！」
「応!!」
魔軍本陣に夜襲を仕掛けた主要部隊。大和剣兵団と呼ばれる魔物討伐隊の隊員である彼らはＪＡＰＡＮ特有の魔法である陰陽術を用いてその数を水増ししてみせていた。
夜の闇の中では式神か人間であるかなど見分けはつかない。人間は殆どおらず、式神ばかりの軍勢であっても魔軍はそれに対応しようとそれなりの数を使ってくるだろうという彼らの作戦は今のところ

順調であった。
「うわ～すごい気合入ってるわね～」
　そしてその戦いぶりを見て呑気な声を出した紫色の瞳の美少女――こちらに移動してきた同類の声に私は頷く。
「決死の覚悟。そして信頼の表れでしょう。彼らの党首に対する信頼はかなり根強いようです」
「勇者だよね。アタシ覚えてるんだからっ♡」
「ええ、その勇者です。その勇者が、今のうちに敵の将を狩ることを強く信頼している」
　戦場を見渡せる崖の上から私は魔軍の本陣――大規模人間牧場に作られた陣の方を見て分析する。
　戦場には現在、魔物大将軍カエサルと魔人……レッドアイがいる。
　つまりそこにはいない者達が相対することになるだろう。
「相手はおそらくリー様かお町様になるでしょうね」
「えー？　それ絶対勝てるわけないじゃーん♡　リー様もお町様もめちゃくちゃ強いんだよー？」
「しかし強襲を仕掛けた。であれば相手が使徒であれ魔人であれ勝つ自信があるということ。勇者の力に加えて聖刀日光様を携えた彼の力は人類が希望を持つには十分な物なのでしょうね」
「無理無理。無理だって。人間ってめちゃくちゃザコだしー♡　絶対ボコボコにされるに決まってるじゃん」
「ええ。私もそうは思います」
　調子の良い彼女の言葉に同意を返しながらも、私は更に報告のための分析を続ける。
　――勇者宗近はＪＡＰＡＮ一の剣客でありながら凄腕の陰陽師でもある。
　魔物だけでなく鬼や妖怪の被害が絶えないＪＡＰＡＮにおいて彼の武勇は有名だ。多くの鬼や妖怪を討伐し、そして調伏していると言われるその実力は人間にしては破格。
　更には他者をまとめるだけの統率力や優れた頭脳も持ち合わせており、性格は冷静沈着かつ疑り深いもの。魔物討伐隊に属している人

間は警戒心の強い傾向にあるが、その中においても勇者宗近は特に警戒心が強いのだろう。
なにせ先の会合においても彼は自分の実力の全てを教えることはしなかった。剣の達人であることや日光を持つことは教えても、彼が優れた陰陽師であることは連合軍の主要人物の誰にも教えていない。
口では協力を求め、団結を謳いながらも信用していない――いや、警戒しているのだろう。情報が漏れることや裏切られることを。
そしてそれは概ね正しい。実際にキリング商会……私が会長代行をしている組織も実際は人間側の勢力ではなく魔物側。
私の生みの親でありマスターである偉大なるガウガウ様――その主であらせられる魔人レオンハルト様の息がかかった組織。それこそがキリング商会。
経営力においては並外れた才能を発揮しているが、過去のトラウマにより対人関係において若干の不安のある現会長であるルナ様の代わりに情報を集め、それを余さず伝えることが私の現在の任務だ。
だからこそ勇者の強さに一部漏れがあったのは私の落ち度であろう。
それを挽回するためにも出来れば有益な情報を得たいところではあるが……。
「メイクドラーマー！」
「うぎゃあああ！」
「……」
眼下で寄生生物を操り、進軍しながら最強の攻撃魔法を連発する魔人レッドアイを見て思う。
その魔法力はやはり桁違いのものだ。魔人になって強化されたその強さは無敵結界の存在が仮になくとも真正面から戦うには無謀と判断するべきものである。
戦うのであれば十分な情報を得た上で準備に準備を重ね、作戦を練った上で挑むべきだ。ただの人間の身でそれを怠っている以上、彼らに待つのは死という救いのない結末だけ。
だがそれを承知の上で彼らはここで時間稼ぎを行っているのだろ

う。
　自らの命を犠牲にすることを承知し、その上で魔族との戦いに臨んでいる。少なくともＪＡＰＡＮから来た彼らはそう見えた。最後の最後、悲鳴を上げ、苦痛の果てに死にゆく段階になって初めて弱味を見せる。
　それまでは決して逃げはしない。生物の本能に逆らう人間の愚かさとも言うべきその強さには、興味深さを覚える。
　不完全。失敗作であるが……同じ人間として、自分にも同じことが出来るかどうか。
　その好奇心が思考の片隅に現れては消えるのだ。
「そんなに人間を興味深そうに見てどうしたの？　グリーンアイお兄ちゃん？」
「……いえ、何でもありません。それよりも、君もそろそろ働いた方が良いでしょう。レオンハルト様から与えられた任務はしっかりと覚えていますか？」
「もちろんちゃんと覚えてるわよ。アタシは天才だからね！」
「ええ。そうでしょうとも。君は私と違って天才かつ完全な存在。……だからこそ魔軍と人間が戦っている様を見るのに夢中で、予定の時刻から数分ほど遅れているのに気づかないはずがない。その程度の遅れであれば足の速さでカバーしてみせるとそういう算段なのでしょうね？」
「あ……」
　私がそう言えば、その可愛らしく自信満々だった顔が虚を突かれて崩れた――が、それもすぐに焦ったように持ち直される。
「も、もちろん！　アタシがそれに気づかないはずないでしょっ！」
「はい。もちろん分かっていますよ。ですが、そろそろ急いだ方が良いのでは？　多少の遅れは許されるでしょうが、天才を自負する君が遅刻などしてはその自尊心に傷が付いてしまうでしょう」
「い、言われなくてももう行くわよ。それじゃあね！」
　私からの返事を聞く前に、ピンクにも近い長い紫色の髪を靡かせて彼女は焦ったように去っていく。

私はその後ろ姿を見送った。私とは違った成功作。完全な、いや、マスターが想定した以上の能力を持つ彼女は人間でありながら人間以上の完璧な存在。
それが誇らしくもあり羨ましくもある――が、与えられたもので努力するしかないのが人間という生き物でもある。
「ふむ……どうやら本陣も問題ないようですし、もう少し戦場の観察を続けられそうですね」
私はヘルメットに隠れた緑色の瞳で観察を続ける――全ては偉大なるガウガウ様のために。

陰陽師とはＪＡＰＡＮ特有の魔法使いである。
正確には魔法とは違う陰陽術――かつてＪＡＰＡＮの国主となり人類圏を制覇した藤原石丸の側近、悪魔月餅が開発し、それを技術として体系化したその術は札を用いて召喚を行ったり、式神を作ってそれを戦わせたりするなど様々な能力を発揮することが出来る。
そしてその中には調伏能力。鬼や妖怪といった人外の者を従わせることも出来る。
無論、それを行えるのは陰陽師の中でも優れた術者に限られるが、それを行っている以上は勇者宗近はその優れた陰陽師であるということ。
「……おい天狗。貴様から行け。で、まずぶっ殺されろ。その間に余が仕留めてやる」
「いやいや、それは私には荷が重く存じます故、貴方から突っ込んでは？　鬼であれば正面からの競い合い。喧嘩が花でありましょうに」
「妾をそこらの馬鹿な鬼と一緒にするでないわ。チッ……そもそも余がこんな目に……こんな餓鬼に従わねばならんのだ……」
「調伏された以上は従わざるを得ないでしょう。――まあ私の場合はそうでなくとも宗近様の頼みは是非とも叶えて差し上げたくありますが」
「貴様の趣味など聞いとらんわ……余はこんな餓鬼よりもっと大人の

いけめんのが好きじゃ……無論、鬼のような脳筋の馬鹿ではない者がな……」
リーはその二者――言い合いをする鬼と天狗を観察し、その戦力を分析する。
見た目としては大天狗の方は足元に届くほどの長い黒髪と黒い翼を持った長身の美女であり、その手には団扇と錫杖を。そしてその衣装は黒と青の入り混じったＪＡＰＡＮ風――いや、山伏というのであったか。歩きづらそうな一本歯の下駄に天狗風の衣装を身に着けた女の妖怪。
そしてもう一方の珍しい女の鬼の方は天狗の方に比べれば小柄である。真っ白い髪に赤目。額から２本の角が生えており、こちらもやはりＪＡＰＡＮ風の着物に分類される赤と白の衣装を身に着けた鬼は腰に２本の刀を差していた。
どちらも人に近い容姿ではあるが、その見た目も気配も人外の者には相違ない。そして人に近いからこそある程度強大な存在であることが察せられる。明らかな異形も警戒は必要だが、一見して異形ではないというのはそれはそれで警戒が必要である。
しかし、だからと言って見ているだけでは何も進まない。様子見も選択肢の１つとして有効ではあるが、先手を取って仕掛けることも戦闘においては圧倒的なアドバンテージを取り得る手である。
「！　言い合いしている場合ではないぞ！　敵に集中しろ！」
「……！　と、宗近様の言う通りのようですね……！」
「チッ……本当に手強そうな相手ではないか……！　本当に覚えておけよ貴様らー！」
ゆえにリーは先んじて動いた。
腕に力を込めて素早く踏み込み、拳を振り抜く。言ってしまえばただそれだけの攻撃だ。技術はあるが、それよりも速さ。そして何よりもパワー。当たれば人間を容易に貫き、骨や内臓を一撃で破壊し尽くすだけのそのパワーこそがリーの何よりの武器。
それを先程仕掛けた時のように手加減しない速さで放てば、同じ使徒であっても防ぐことは容易ではないことはこの千年何度も行った

使徒同士の模擬戦で実証済みだ。これを真正面から防げるのはレオンハルトの使徒の中ではハンティのみで、それ以外は皆躱すしかない。
「っ、貴様もいきなり殴りかかってくるでないわ……！」
「……！　ほう……」
だからこそ、振り抜いた拳がその鬼――童乱剣鬼と呼ばれた鬼の刀によって辛うじてでも受け止められたことにリーは驚きを生じさせる。
鬼である時点で小柄で、しかも女であることは何の判断材料にもならないとは思っていたが、自分の拳を止められるとは想像以上であったとリーは評価を上方修正しつつ次の手を防ごうと拳を交差させた――その瞬間、自分を大いに上回る速さで風の一撃がリーを叩く。
「その調子で肉壁になってくれていると助かりますわ」
「む……！（速い……！）」
知覚はしたものの防御しか行えない。反撃を行う前にその大天狗・根津血はリーを一瞬蹴りつけ、そして離れると突風を吹かせてリーの身体を吹き飛ばそうと体勢をぐらつかせる。
「片腕を取った代償はせめて支払ってもらうぞ……！」
「……！」
そのタイミングを逃すことなく、勇者宗近は片手だけで刀を握り、素早く通りすがるようにして斬撃を放ってきた。その剣もまた鋭く速い。そして確かな技術を擁するものであり、リーも片手間で受けきるには難しい一撃。
そして個々の能力も強いが何より連携が取れていることが何よりも評価に値する。やり取りを見ている限りでは信頼関係を築けているとは言い難いが、戦いとなればしっかり連携を取れるのは宗近の陰陽師としての腕か、あるいはこの2体の人外が戦闘に長けているからか。あるいはそれら両方だろうとリーは判断する。防御に使って左腕に軽い裂傷を受けながらも、リーは問題ないと足に力を込めた。
「ふんっ！」
「っ……！」

一旦天狗は無視して鬼に向けて拳を振るう。
再びその拳は交差した刀によって受け止められるが、完全には受け止めきれずに童乱剣鬼は背後に足を引きずりながら後退させられ、衝撃が突き抜ける。
「くっ……どんな馬鹿力じゃ……！」
「……鬼の力もこんなものか」
「何を……！」
「残酷な話だが……悪いが生まれ持ったパワーならこちらの方が上だ」
「ぐっ！」
拳を振り抜けば鈍い音と共に鋼を打ち付け、あるいは地面や建築物を破壊する。
その重さとパワーは魔物大将軍の使徒という最強クラスの肉体スペックを持つリーとの如何ともし難い生まれ持った実力差だ。
如何に鬼が力に恵まれた種族であろうとも、少なくともその鬼の大部分は魔物大将軍という魔人級の実力を持つと言われる種の強さ、パワーには劣るものだ。
その魔物大将軍でありながら使徒になったリーは、純粋な力においてハンティ以外の他の使徒の追随を許さず、あるいは魔人を含めても上位のパワーを持っている。
だからこそ鬼の中の強者であってもそう安々と防げるものではない。
「――ですが速さではこちらの方が上のようですね？」
「それは事実。だが、戦いようがない程ではない」
鬼に追撃を与えようとしたところで上空から飛んでくる風の打撃を防ぎながら、それでも一歩ずつ踏み出していく。
――これしきの嵐、ハンティ様の放つ魔法の連発に比べれば大したことはない……！
地面に足をめり込ませる勢いで力を込めて駆け出せば、この突進を防ぐ術はない。再び勇者を捕えて全身の骨を砕いてやるとリーはまるで全身に分厚い鎧を纏った重騎士のように――いや、あるいははる

か未来に作られる戦車のように突撃する。
　装甲においてはガウガウの持つブラックアイ程の硬さはないものの、パワーにおいてはその拳は戦車の突進、主砲の一撃にも勝る。
「安心しろ。一発でも当たれば終わりだ――ゆえに、手加減は行う。勇者の幸運を発揮させはしない」
「……！　なるほど、勇者についてはかなり熟知しているようだな……！」
　宗近の言葉に内心で是を返しながら拳を振り抜く。即死を狙ってはならない。そうなれば、勇者は必ず助かるための道筋を作ってしまう。
　だからこそ複雑骨折程度に留めて弱らせてから捕らえるのが最上。それもその際は、まだ見せていない幾つかの初見の技を持って一気にやる。
「だがその手加減が命取りだ……！」
「！」
　――が、そのためにはまず周囲も含めて弱らせる必要があるだろう。
「この脳筋が……！　よくもやってくれおったな！」
「3対1という数の利を存分に使わせてもらいましょう」
「……！」
　二刀の剣技でこちらに斬りかかってきた鬼と背後を取って遠距離からの攻撃を仕掛けてくる天狗の攻めにリーは対応する。
　一対一であれば容易に制圧出来る連中とはいえ、連携して襲いかかってくるのであれば如何にリーとて対応は難しいものとなる。全ての攻撃を完全に受けることや躱すことも難しく、小さな被弾が増えて微々たるものとはいえダメージが入れられるのだ。
　無論、一撃当たれば粉砕出来るのだが連携が上手い集団相手であればその一撃を当てるのが難しい。後衛や主力の者は躱したり逸してくるし、当たってもそれが前衛による防御中であればダメージは軽減され一撃とは中々いかないもの。
　つまるところこの状況はリー側からすると停滞であり、それを脱す

るには何か別の一手が必要である。
そしてその手段は援軍や奇手といったもので実現可能である。
「――舐めるなよ」
「！」
――が、リーはその頭の中に浮かんだ手段に対して半分は肯定し、半分は否定する。
更に強い力を込めて拳を放てば、轟音と共に大地が砕ける。
躱されても周囲に影響を与えるほどのパワーを以て、敵に圧をかける。無傷とはいかせない。直撃せずともこの進軍は敵を下がらせ、敵を恐怖させ、敵を圧倒する。
そしていずれは勝利する。王者の戦いとはそういうものだ。
「っ……なんという圧力……！」
「そう。これこそが王者の戦い。だが――」
誇りを持ち、戦術で場を整えた以上、最後に物を言うのはやはり力――いや、その力が圧倒的であれば、あらゆる戦術的不利も数的不利も覆し、踏み越えることが出来る。
これはあくまでリーの持論であり、他者がどう言うかはまた色んな意見があるだろうということは理解している。
だがリーにとっては、実際に見てきたからこそ言える絶対の理だ。
人間という弱者。その輝きを知らぬ彼らにリーは教えてやる。
「――レオンハルト様であれば、この程度ではない」
「うっ!?」
単純かつ愚直な蹴り。勇者の見切り能力を発動させぬよう、あえて単調な技を繰り出し、それを以て鬼をガードの上から吹き飛ばす。
そして告げるのは自らの理であり自信から来る言葉。
「3対1だから何だ。まさか貴様ら、数で優れば勝てるなどと世迷い言を口にするつもりではないだろうな」
「っ……一々言い返すのも癪だが、数の有利は明らかなものだ……！」
「それは互いの力がある程度拮抗した上での話だ。そうであれば数の力も意味を成すだろう。数によって強大な個を討つことも、ある程度は可能ではある」

リーとて元魔物大将軍。魔軍を預かる軍人の1人として、数がどれほどの力を持つかは十分に理解しているし、その有用性は当然認めているものだ。
だが――
「だが、レオンハルト様には通じない」
「……！　風を無視して……!?」
そう――最強かつ至高の存在にそのような小細工や戦術など通じはしない。
無論、レオンハルト様であればその戦術においても人間を上回ることは言うまでもないが、策を弄せずともレオンハルト様は全てを踏み抜けるほどに強いのだとリーは豪語する。
かつての戦争の時代では数百万もの人間の軍勢に先陣を切り、敵を撫で切りにして勝利を収めた最強の魔人。
国狩りにおいては単身で幾つもの敵国を落とした魔物界の英雄。
それこそがリーの主なのだ。
「そして、我々にも通用しない」
拳を繰り出し、衝撃波を飛ばしながらリーは自らがレオンハルトの使徒であることを誇りに思う。
人類黎明期より戦いの場に身を置き、数多の戦場で光り輝いてきた主の使徒であれることに幸福を感じる。
そして主の助けになれることこそ使徒の本懐。生きがいであるのだと強く自覚する。
だからこそリーは研鑽を積んできた。
主の助けになれるように。
主の名に恥じぬように。
「まさか貴様ら……この程度で勝てるつもりか？　策を弄し、数で多少上回り、塵の如き傷を山積みにすればいずれは倒せるとでも？」
現在、どちらかと言えば被弾の回数。ダメージを受けているのはリーの方が多いし大きい。
ゆえにこのペースを守り続けていればいずれはリーを倒すことが出来るだろう。理屈の上ではそうだ。

実際、勇者宗近は決して弱くはない。召喚した人外の者込みとはいえリーと戦闘を成立させることは出来る。拮抗することは出来る。
であればそれを長い時間続け、あるいは勇者の特性をも用いればリーを倒すことは決して不可能ではない。可能性としては十分にありえるものだ。
――だが、リーからすればその可能性は決してあってはならない。起こしてはならないもの。
「――否だ」
「……！」
聖刀日光の刃を躱しながら、リーは否定する。
魔人レオンハルトの使徒として、勇者の力や魔を討つ力如きを言い訳には出来ないしてはならないと。
「レオンハルト様の使徒である我々もまた、人間如きが多少策を弄したところで勝てるような存在ではない」
「随分と自信があるようだが、最強の魔人の使徒だからと貴様たちまでそうであるとは限らない……！」
「無論だ。だからこそ、そうあれるように努力しなければならない。少なくとも私はそうだ」
宗近の言葉にリーは同意を返す。
リーは自らの弱さ、至らなさを自覚していた。それが理由で失敗もしてきた。強くなろうとしなければ強くはなれないことをリーは知っている。
そして、だからこそ強くなったのだ。自信を、僅かながらでも得たのだ。
負けて屍を晒すようなことは決してあってはならないし、主の足手まといになることを決して是とは出来ない。
「ゆえに、貴様らでは勝てない。研鑽してきた年月が、積み重ねてきた想いの数が違う」
リーは愚直に自らを鍛え続けてきた。
ゆえに愚直に拳を振るいながら思うのだ――自分は、この愚直さこそが武器なのだと。

他の使徒と比べて特筆すべき技能を持たないリーにとって、自らを愚直に鍛え、素手で制圧することこそ己の武器であり在り方なのだと自負している。
かつての友――ヴラドが、バルカが、コウウが教えてくれた。
そして主もまたそれを認めてくれた。
戦いにおいては強さが、力こそが全てであり、想いは力の差を覆すものではないことをリーは理解している。
だが理解した上で、なおもこう唱えるのだ。
「私の拳に一切の曇りはない……！」
――ゆえに負けない。
仮に相手が自分を大きく上回る相手であったとしても、リーはその想いだけは捨てはしない。
主の為ならあらゆる障害を全霊を以て取り除いてみせる。主の命であればあらゆる手段を用いてそれを実現してみせる。力も策も全てを用いて。
主のような鮮烈な輝き。魅せる戦いぶりとは程遠くとも、愚直に踏み抜いてみせるのだ――この身1つで。
「捉えたぞ」
「っ……！　待て貴様！　余を誰だと……！」
「誰であろうと立ち塞がるのであれば砕くのみ――」
鬼の二刀をある程度の被弾覚悟で掻い潜り、リーは拳を引き絞る。
そうして放つのは主に捧げる最強の一撃だ。
1度見た技を見切る勇者の前ではあるが、勇者には放てないからこそ使う愚直な全力の一撃。
「〝獅子王拳〟！」
「――！」
その拳が、鬼の腹を打ち、その身を脱力させる。
「童乱剣鬼が……!?」
「ふむ。死なないか。やはり、高レベルの鬼なのだろうな」
宗近の強い驚きに対し、リーもまた起こった結果に小さく感心する。

普通の人間や生き物であれば身体に穴が空くほどの力で殴ったはずだが、今しがた吹き飛んだ鬼は口から血を吐き、気を失いはしたものの身体に穴が空くことも死ぬこともなかった。自分の拳を受け止めるパワーもそうだが、耐久力も並のものではないと。

そしてそれほどの存在を呼び出せる目の前の勇者はやはり脅威であり、油断ならない相手だと改めて思う。今しがた必殺技を用いて1人は排除出来たが、これが何度も続くようであれば考えねばならないだろうと。

強い意気込みを口にしながらも頭の中は冷静だった――ゆえに、リーは戦場の変化も誰よりも早く察せられる。

「だが、これで2対1――いや……2対2か」

「!?　――宗近様！」

「!?」

そして次にそれに気づいたのは空中でそれを見ていた大天狗だった。大天狗は宗近に飛んできたその攻撃――雷を自らの身で受け止めることで防ぐ。

「――戦場とは反対側であるのに何やら騒々しいと思えば……やはり敵襲。それもリー。お主が戦っておったか」

「ええ。ご助力に感謝します――お町殿」

「つっ……！　貴方は……」

「……！　新手……しかも、妖怪――いや、使徒か……！」

大天狗に向けて雷を放った存在――10本の尾を持つ狐耳の美女の姿に宗近は警戒を、そして大天狗は警戒だけでなく驚きと懐かしみを加えた苦笑いを浮かべる。

「ふふ……よもやよもや、こんなところで出会うとは……500年ぶりといったところでありますね――末知女殿様」

「根津血か……なるほど。調伏されて召喚されておるのか……であればここで倒したところでそのことは記憶出来ないであろう。倒しても問題はなさそうだな」

「多少であれば覚えておりますのであまりご無体なことはやめていただけると助かりますが……そうは言ってられないようですね」

「ならばそちらが引け。我は愛しのレオンハルトの為であれば容赦はせぬ」
「そうしたいところですが出来ぬ相談です。私も調伏された身……そして末知女殿様と同じく、気に入った男児のために働いておりますゆえ」
「……ふむ。そうか。なら引けないのも仕方ない……であれば後は戦うしかないの」
「ええ、戦うしかありませぬ」
「そうか……」
　と、ひとしきり会話を行うと姿を現したレオンハルトの使徒――お町はリーの隣に並んで勇者と大天狗と対峙する。
「お知り合いですか？」
「うむ。昔のな……我の配下の妖怪の中では最も強い妖怪であった」
「なるほど」
　リーはお町に投げた質問の返答で得心する。かつてＪＡＰＡＮで二代目妖怪王として君臨していたお町であれば確かに知り合いであってもおかしくはない。
　そしてその配下の中で最も強いとなれば更なる警戒が必要だとリーは判断する。
　それに相性もあるとは言え、先程からリーにとって最もやりにくい相手がその大天狗であった。空中を飛び回る相手に格闘戦しか行えないリーは攻撃を当てることが難しい上、向こうは遠距離からの攻撃で一方的にこちらに攻撃を通すことが出来る。
　ある意味で勇者よりも仕留めにくい相手。だからこそ、リーはまず鬼の方を排除し、それから勇者を仕留めるつもりであった。
　が――こうなれば大天狗の方はお町に任せればいいとリーは思う。
「であったが……問題はない。上手くやるゆえ、お主は勇者とやらに集中するといい」
「ええ、そうします」
「……お気をつけを宗近様。やれる限りはやりますが、もしもの時は……」

「分かっている。判断を間違うつもりはない……！」
お町が雷の形をした妖力を具現化させ、周囲がバチバチと帯電し始めれば知り合いである大天狗は警戒を口にし、宗近もまた防御式神を多数張り、身を低くして刀を構えた。
……まだ戦うつもりか。あるいは……逃走の隙を窺っているか。どちらにしてもその狙いを達成されぬよう気をつけねばな。
リーは内心でそう口にしながらも勇者だけを見据える。そして、視界の片隅で動き始めたもう一体の魔物を捉え、更に有利になる状況を予見した。
それは相手にとっては正に悪夢のような状況であろう。特に、お町がやって来たことでリーはそう思う。
「ゆくぞ……！　召喚――〝雷獣〟！」
「!?」
何しろ数が重要となる集団戦においては、自分などよりも元妖怪かつ陰陽師であるお町の方が――圧倒的に脅威であるのだから。

１０００年に１人の天才

――その戦いの中で、私は思い出していました。
『剣士と戦う際、最も注意すべきは間合いです』
それは私の親友にして主の娘である彼女と軽い戦闘訓練。修行と称した稽古を付けてもらっていた時のこと。
剣の達人である彼女は私にそう教えました。私からも言葉を返しながら。
『剣士だけでなく戦士全般に言えること、ですよね』
『はい、その通りです。さすがはイヴさん。座学においての理解の速さは誰よりも優れていますね』
ですが、と白兎さんは続けます。
『学習においては体験で学ぶこともまた最も深く理解を促すことの出来る手法です――と、イヴさんには今更言わなくても分かってることと思いますが、やはり実戦経験の中でなければ具体的な対応は学びづらいものです』
そう言って白兎さんは距離を取り、刀を構えます。
『得物の長さにもよりますが、大体1メートルから2メートル程。これが剣士の間合いです』
『剣士として戦うなら、その距離で戦うのが最適だと言うことですね』
『ええ。そして、この距離まで一瞬で踏み込める距離――』
再び白兎さんが距離を取った。
そしてその上で、踏み込んでくる。私には知覚出来ないほどの速度で。
『――と、大体4メートルから5メートル程。最低でもこのくらいの距離は保ちたいですね。これ以上離れた場合、近接戦闘系の脅威はほぼないも同然です』
私の首元に刃を当てながら言ってくる白兎さんに、私は半ば呆れながら言葉を返すことにした。
『……そうは思えませんけどね』
『まあそこは技量とか身体能力にもよります。パパの場合は間合いと

かほぼないも同然ですし。私でもこの倍くらいは軽くいけます』
ふふん、と自慢気に言う白兎さんは可愛らしいが、言ってることは全く可愛らしくない。
『つまり、魔法使いとして戦う場合はその間合いに踏み込ませなければ完封出来るわけですね？』
『ですね。なので、魔法を使えない戦士は魔法使い相手に普通は距離を取ることはありません。近づかなければ攻撃手段がなく、遠ざかればほぼ回避不能の魔法の餌食になりますから』
まあ今更というか当たり前のことですけどね、と白兎さんは言う。
だがこうやって初心に帰ること。基本に立ち返ることは大事なことだ。
特に新たな段階に進む時はそういった基本を思い出すことが成長の糧になり得るもの。
そのため私は白兎さんから剣士としての戦いの基本を教えてもらい、その上でまた応用として白兎さんだけでなくこの世の頂点に位置する剣士――私の主にも教えを請うた。
『魔法剣士は一見、近距離でも遠距離でも戦えるため隙がないように思えるが実際はそうじゃない』
『どういうことですか？』
それは私が使徒になって間もない頃。
情事を終えた後のちょっとした時間に何気なく質問してみれば、レオンハルト様は淀みなく答えてくれた。
『魔法の強みは回避がほぼ不可能であることにあることは知っているな？』
『はい。基本、放たれた魔法は対象に向けて正確に命中します。初級魔法に至っては追尾しますので1度放たれたら回避することは出来ません』
元々魔法使いとして何百年と先生たちの元で研鑽を積んでいた私にとっては基本中の基本。魔法の原理を答えてみせる。
だがそれが基本でありながらも、絶対でないことを互いに知りながらだ。私がそう答えれば、レオンハルト様は頷く。

『そう、魔法に回避という概念は存在しない――ことになっている。だが、絶対に魔法から逃れられないかと言えばそうでもない』
『そうですね。盾や何かでガードしたり、そもそも魔法の射線から逃れたりと回避する方法は幾つかあります』
『あるいは斬ってしまえばいい』
『……それが出来るのはレオンハルト様くらいでは……？』
魔法の回避手段への回答に『斬ればいい』なんてトンチキな事を言えるのはこのお方くらいだし、魔法を学んでいる生徒が言おうものなら赤点も良いところだ。
だが回避出来ることは間違ってない。魔法は基本回避不能。どれだけ動きが素早くとも追尾するので無駄とされているが、実際のところは限界がある。
例えば広範囲に効果を及ぼす氷雪吹雪や電磁結界などの魔法はその範囲から逃れれば躱すことが出来るし、ファイヤーレーザーやスノーレーザー。あるいは白色破壊光線などの光線系の魔法も真っ直ぐに飛ぶのでそれを躱すことは可能であるのだ。
回避が難しいのは初級か中級などの魔法になる。炎の矢や雷撃といった魔法はある程度相手が動いても追尾するようになっている。
だがそれすらも絶対じゃない。魔法が放たれた瞬間、超遠方に移動したり術者の背後に移動したりするようなことがあれば魔法は対象を見失って適当なところに当たってしまう。それはもう何百年どころか千年以上前――私が生まれるよりも前から実験で実証済みということだ。
例えば、数メートル程度の距離でハンティ先生に魔法を放っても、魔法が当たる前に瞬間移動でどこかに行ってしまえば魔法は的中することはないし、そこまでしなくとも何か障害物の陰に隠れるなどすれば魔法を防ぐことは出来る。
ゆえに魔法は絶対ではない。その上で、レオンハルト様は私からの緩い指摘を無言でスルーして話を戻した。
『……魔法は絶対ではないが、遠距離においては戦士に対して優位に立てる。それは間違いではないが、距離を詰められれば途端に魔法使

いは危機に陥る』
『その際に魔法剣士であれば剣を使ってその距離でも戦うことが出来ますよね？』
『ああ。だが、魔法と剣を同時に使うことは出来ない。それだけに、戦いの中の判断は普通の戦士や魔法使いより難しいものとなる』
『……魔法を放った瞬間はどうしたってガードが薄くなる。逆に剣を振るってる間は魔法を使えない、ということですね』
少し思考して理解した上でそう答えればレオンハルト様も話が早いようでその先をすぐに口にしてくれた。
『そうだ。素早い動作と詠唱によってほぼ同時に使うことは出来ても同時に使うことは出来ない。だからこそ、魔法剣士は注意しなければならない』
そうして幾千もの戦闘経験を持つレオンハルト様は魔法剣士の戦いの難しさを口にする。
『魔法を放った瞬間、剣士に踏み込まれれば剣を振るうのが遅れる。ならば再び距離を取るか。あるいはそのまま剣で戦うか。逆に相手が距離を取ってきた場合、こっちから距離を詰めて剣を振るうか。あるいは魔法を撃ち続けて近づかせないように戦うか――取れる選択肢は普通の戦士や魔法使いよりも多い』
だからこそ、とレオンハルト様は思い出しながら残念そうに言った。
『ゆえに凡百の者は迷う。判断を違えやすい。中途半端になりがちだ。取れる手段の多さに慢心し、成長を止めてきたであろう者を俺は何人も見てきた』
『……心中お察しします。ですが、理論上はどちらも使える方が良いはずですよね？』
『ああ。戦いにおいて切れる手札が多いに越したことはない。だが、物事を2つ以上極めることは至難の業だ。魔法に剣と、その両方を高レベルで使いこなせた者は数えるほどしかいない』
『その数少ない例こそ、レオンハルト様と――あの人ですか』
そう言えば、レオンハルト様の心は僅かに波立った。自分が褒めら

れて嬉しくなったのではなく、過去を思い出しての高揚だった。
『そうだな。剣と魔法、その２つを使いこなす者は非常に厄介だ。剣を中心に戦うか、魔法を中心に戦うかはそれぞれ違ってくるだろうが、相手からすれば高レベルの魔法剣士ほど戦いにくい相手はいない』
『なるほど……』
レオンハルト様は世界最強の剣士であるが、魔法だけでも上から数えられるレベルの術者である。
そしてあのガイ様も最強レベルの魔法使いであり、同時に剣もまた達人と呼べるほどには修めていた。
その二者ほどの魔法剣士、または魔法戦士というのは未だかつて存在しえないし、私もまたそうなれると思うほど自惚れてはいない。
だけど――凡百にならないだけの自信はあった。
だからこそ私はレオンハルト様にも稽古をお願いした。
『……ところでレオンハルト様。こっちの剣の方がまた硬くなっていますが……これはお慰めしたほうがよろしいですか？』
『そうしてくれるなら嬉しい』
『くす。ではご希望に応えますね――』
そうして私はお腹に押し付けられていたその硬い王の剣に顔を近づけて――。
（――と、そうじゃない。これは余計な部分でした）
私は思い出していた戦いのための座学や稽古のことを振り払い、目の前の戦いに再び意識を集中させていく。目の前のミシェーラさんが歯噛みするのを見て。
「ぐぬぬ……！　さっきから隠れたり出てきたり……いい加減にしてください！」
夜の森の中での戦闘は先程から膠着していた。
相手はグリムリーパーと名乗っている元牧場の特Ａ級の剣士だ。自分やミシェーラさんと同じ特Ａ級ということでその戦闘力は折り紙付き。
だが使徒と人間の身体能力の差は如何ともし難いもの。加えて２

対1ということもあって早々に終わらせることが出来ると思っていたが、その見積もりは大きく間違っていた。
「――！」
「！　また……！」
　木々の間から飛来する複数の投げナイフを弾き落とし、意識を周りに向ければ右斜め後ろから黒い大剣が振り下ろされた。
「はあっ！」
「……！　なるほど、これも防がれるか……」
「ええ、生憎と読めています。なのでそろそろ降参してくだされば こちらも楽出来るのですが如何でしょう？」
「それは無理な相談だ」
　何しろ今は退屈じゃない――そんな心の声を聞きながら、グリムリーパーの剣を防ぎ、剣を振ると見せかけて距離を取る彼に私は魔法を放つ。
「氷の矢！」
「――――」
　狙いを定めた上での魔法はほぼ回避不能であるが、グリムリーパーは木の後ろに隠れることで私の放った氷の矢を防いでみせる。
「今度はそっちですか！　待ちなさい！」
　私の横をミシェーラさんが駆け抜けていき、グリムリーパーを追いかける。身体能力では私よりも上であるミシェーラさんは当たりさえすれば人間を一撃で倒せるだけの膂力を持っている。
　だけど、ここまで1度も攻撃を受けていないグリムリーパーにこの程度の攻めは通用しない。
（こっちの使徒は直情的だがパワーが侮れない。もう一体の方はこちらの攻撃を的確に読んでくる上、位置取りや攻防の判断も上手いからやり辛いな……）
　木々の合間に隠れて移動しているグリムリーパーの心の声が聞こえてくる。
　私が使徒になって更に強まった読心の力は、距離にして私を中心に半径１０メートル程の範囲なら心の声を拾うことが出来るため、戦闘

においても大きなアドバンテージを取れる能力だ。
　それによればグリムリーパーはミシェーラさんよりも私の方をやり辛いと判断し、狙いを定めているのが分かる。だからこそ私は次にどこから攻撃が来るのか、どういった攻撃手段を取ってくるのかをある程度は読んで対応することが出来ていた。
　……だけどそれでも未だグリムリーパーを仕留められないのは幾つか理由があった。それは、
「っ！」
「――これも駄目か」
　第一に、グリムリーパーはとても素早いこと。
　大剣を片手で操れるほどのパワーを持ちながらも、グリムリーパーはまるで忍者のように木々の間を飛び回り、時折高速で接近して通りすがり様に一閃を放ってくる。
　そのスピードは使徒である私達を以てしても中々に捉えづらい。
　とはいえその場で戦い続けてくれるならやりようはある。そこで仕留められない理由こそ、第二の理由である彼の戦術だ。
「逃げ回ってばかりですか！　ミシェーラには分かりますよ！　それがあなたの得意戦術ですね！」
「……（その通りだが態々宣言する意味はないだろう。こいつはやはり頭が悪いようだな）」
　ミシェーラさんが森に向かって言葉を突きつけても当然答えは返ってこないが、私にはその心の返答が届いてくる。
　そしてそれは事実だ。グリムリーパーの徹底したヒットアンドアウェイ。一撃離脱の戦術は彼を仕留めることを難しくさせている。
「！」
「っ……！　（今度は真上から……！）」
　真上から飛来したグリムリーパーの大剣が大地を砕く。私はそれを躱し、追撃を仕掛けようとしたがそれよりも速くグリムリーパーは再び後方に飛び退いて身を隠してしまう。
　高速の不意打ちで大剣による強力な一撃を振るい、当たっても外れてもすぐに離脱。魔法を放つようなら木を盾にし、追いかけて来よう

ものなら同じだけ距離を取るか――
「く……！」
（こいつを近づけさせるのはリスクを伴う。やはり徹底するべきだな）
――あるいはこのように、投げナイフによる牽制で足を止めさせる。
おまけにご丁寧に投げナイフには毒らしきものが塗られているためしっかりと対応することが求められた。神魔法を使えるミシェーラさんがいるとはいえ、そう簡単に食らってやるわけにはいかない。
そして牽制を受け、こちらが彼を見失えば――
「――!!」
「っ……!?」
――今度は大木の後ろから、大木ごと一閃。
反応出来なければ一瞬で上半身と下半身が永遠に分かれてしまうであろうその一撃を身を屈めて回避。そして飛び退き様に今度は広範囲の魔法を放つ。
「氷雪吹雪――……!?」
「！」
――が、その広範囲の魔法の気配を察知したのか、グリムリーパーはその瞬間に離脱するのではなく距離を大幅に詰めてくる。
「っ、魔法についてもお詳しいんですね……！」
「調べれば分かることだ。大して難しいことじゃない」
広範囲魔法を躱すために敢えて踏み込んできたグリムリーパーに称賛の言葉を送ると淡々とした面白味のない言葉と共に笑っている場合じゃない大剣の横振りが返ってきた。だけどそれは、
「読めてますよ！」
「！」
そう、読めている。ゆえに私は更に踏み込んで鍔迫り合いに持ち込んだ。
「今ですね！　ミシェーラには分かります！　やあああああっ！」
そしてその直後に剣を振りかぶって飛び込んでくるミシェーラさ

んに追撃を任せる。その先の準備を行いながら。
「ふっ――！」
「むっ……！」
パワーで私を僅かに押したグリムリーパーがその場で飛び上がり、ミシェーラさんの攻撃から退避する。
だがそうして飛び上がった直後に、私は魔法の照準を合わせる。
「スノーレーザー！」
「……！」
空中での回避はさすがに間に合わないだろうと――そう思った直後。私は回避されたことを悟る。目の前ではグリムリーパーに氷の光線が当たった光景を見ながらも。
「やりましたか!?」
「……いいえ。どうやら躱されたようですね」
と、私は地面に落ちてきた丸太を見てミシェーラさんの言葉に答える。それは忍者の用いる忍術の１つだ。
「これは……変わり身の術ですか!?」
「おそらく影の楔に所属してから学んだ忍術でしょうね。牧場にいたころは使えなかったはずですから」
当然だが、牧場にいた当時より成長していることを思い、私は情報を更にアップデートする。
……やはり、普通にやっているだけでは時間がかかりそうですね。
このまま続けてもいつかは倒せなくもないかもしれないが、それよりも先に逃げられる可能性もある。向こうからすれば私達は絶対に倒さなければならない相手でもないからだ。私達がこの場に釘付けになってさえいればそれでいい。ガイ様が魔人を倒すまでの時間稼ぎ。魔軍のこの森の攻略を少しでも遅らせるための足止めだ。向こうからすれば私達が本気で臨んでいることを前提に作戦を組んでいるため、ここでの足止めは必要不可欠。
だが私達にとってはそうでもない。ここで大人しく足止めされているのもまたありと言えばありだ。私達はガイ様相手に戦うつもりはないし、拠点の攻略も絶対ではない。

目的があるとすれば、目の前の彼を捕らえることだろう。それも絶対ではないが、レオンハルト様からは出来れば捕らえろと命令を受けている。
なので使徒としてはその命令を忠実にこなすべきだし、私個人としても戦果を持ち帰って使徒として役立つことの証明としたい。
「ミシェーラさん。ちょっといいですか？」
「？　なんですか？」
「声は抑えてください。いいですか――」
なので私はそのための手を考える。私の読心の範囲外――おそらく10メートル以上、15メートル以内にグリムリーパーがいることを感知しながら、ミシェーラさんに耳打ちする。
そしてその上で、私は手札を1つ切ることにした。
「では行きますよ――〝メモリーソード〟」
私が先程から振るっていたその剣の名を口にして思う――後数手以内に、彼を詰ませてみせると。

グリムリーパーは明かりのない夜の森の中で気配を鎮め、忍び寄っていた。
（……先にあのイヴという使徒の方を倒さないとな。あっちの方が厄介だ）
相対する2体の使徒の内、イヴの方を倒すべくグリムリーパーは大剣を構えて音を立てず、正確にその位置を捕捉しながら移動する。
彼はその力や速さも優秀だが、それは彼の特異性ではない。
彼は生まれついて、目がよかった。遠くを見渡せる高い視力に動いているものを決して見逃さない動体視力。
そして何より――夜目が利いた。暗闇の中でも常人よりも遥かに見渡せる視界を持つ彼にとって、夜は恐れるものではない。
（次は別の攻め方を試してみるか）
そして使徒もまた、彼にとっては今のところ何かを感じる対象ではなかった。

とはいえ退屈ではないため、何かを感じさせる可能性は未だ残っている。
グリムリーパーが戦う理由はその極めて利己的なものでしかない。
だがその戦力は人類最強クラスであり、地の利があるとはいえ使徒2体を相手にしながらもまだ余裕があった。
（向こうはどういうわけか俺の攻め手を読んでくるが、それでも完璧というわけじゃない。どういうからくりがあるのかは気になるが……）
だが戦闘において慢心はしていない。
彼の人生はここまで、勝ち続けることで生き続けてきたのだ。幼少期から見た目が原因で虐めを受けてもそれをやり返し、能力を発揮してからは巧妙に成績を落とそうとしてきた人間街出身の子供たち――代々A級を輩出し続けてきた一部のエリート家系は、牧場の教師を務める親とすら結託してA級になろうと他の有能な子供を蹴落とし、あるいは取り入り、あの街においてより上の立場を得ようと画策している。
そんな子供たちの罠を回避し、それすらもねじ伏せてA級として卒業し、コロシアムでは自分よりも大人の人間相手に戦い勝ち続けてきた。
あの街から脱走する際も何体かの魔物を斬り捨て、野良に出た後もそのほぼ全ての戦いに勝ち続けてきた。
そしてそれは魔物と戦うようになってからも変わらない。
「光爆！」
「！（今度は向こうから仕掛けてきたか……）」
不意に視界が眩み、周囲が強い光によって照らされる――光系統の魔法を放ってきた相手にグリムリーパーは感心しながらも対応に回った。
「そこですね！　ミシェーラには見えましたよ！」
一瞬だが、強い光によってこちらの動きを止めつつ、その居場所がバレてしまう――その瞬間に使徒ミシェーラが肉薄してきた。
（こいつは馬鹿だが、力もあって速いし正面から戦うと面倒だ。また

どうにか距離を取って隠れないとな）
「はあああああっ！」
　ミシェーラの剣を1度受け止め、すぐにそこから離れる算段を頭の中で付ける。グリムリーパーは真正面からの戦いにも自信はあるが、使徒相手に2対1で戦うのは苦労することは目に見えているためそれは避ける。数で負けている以上は徹底して遊撃戦を行うのが良いだろうと頭脳面においても優秀であるグリムリーパーは冷静にそう判断していた。
　ぐずぐずしているともう一体からの魔法の追撃も来る。そのためミシェーラを相手にしながらももう一体も見て、いざという時はミシェーラも盾に出来るようにグリムリーパーは立ち回ろうとした。
「――迫撃水！」
「っ……!?　何……!?」
　――が、その目論見をいきなり外してくる広範囲魔法の発動にグリムリーパーはこの戦闘の中で初めて焦る。
　何しろ目の前には未だこちらとやり合っているミシェーラがいるのだ。広範囲系の魔法を使えば当然、目の前のミシェーラも巻き添えになる。
「ミシェーラさんは極めて魔法防御力に優れているんです。多少魔法を受けたところで問題にはなりません」
「っ……！　なるほどな……！」
　その答えを魔法を放った張本人から教えられ、グリムリーパーは不可解に思いながらも立ち上がった水の柱を受け、しかし木々に手をかけてそこからの退避を行った。
「あぶぶぶぶ！　そういう、ごぼ、ですっ……ぶくぶく！　げほっ、ごほっ！　これくらいの、水……ぶぐっ、なんとも、ないで……ぶくぶくぶく……！」
「……結構苦しんでいるようだが？」
「苦しいだけでダメージはそれほどではありませんよ」
　そうか、と鬼のようなことを言うイヴに対し内心で納得しながらも疑問は晴れない。

何しろ、だ。巻き添えにするのであればもっと効果的な魔法は幾つもあったはず。魔法は習得していないとはいえ、戦闘における知識としてグリムリーパーはおおよその魔法の効果を知識として知っている。先程からイヴが多様する氷雪系の魔法であれば、氷雪吹雪やシベリア、あるいは最上級の絶対零度などの魔法であれば広範囲であり、今の巻き添え覚悟の攻撃を回避するのは難しかった。

だがそれをしてこなかったということは何か狙いがあるはず――とグリムリーパーはずぶ濡れになりながらもそれを見定めようとした。

「ウォーターミサイル！」

「……！（また水の魔法か……！）」

イヴの掌から放たれる水弾。それを見てから木の後ろに隠れることで躱したグリムリーパーはその疑問を思考し――そして程なくして答えを得る。

「……なるほど。そういうことか」

「氷の矢！」

続けて放たれる氷の矢にグリムリーパーは先程よりも更に念を入れての回避を選択する。魔法を放った瞬間――いや、放たれる前に射線を外し、魔法の追尾を許さない。

そして内心ではその意図を看破する。水の魔法を放ってこちらをずぶ濡れにさせた理由は、氷魔法による拘束――あるいは大きなダメージを与えることを狙っているのだろうと。

氷の矢などの氷魔法単体であれば長く凍らされるような事態は起きずに少しのダメージを受けるだけで済むが、全身がずぶ濡れとあってはそうはいかない。魔法は精神に作用して効果が変わるものだが、生物以外の物や自然物に対しても効果を及ぼすように、如何に魔法防御が高くとも魔法で生じた結果までも無視は出来ない。

炎の魔法で火事を起こした場合、それによって燃え広がった火は魔法とは関係なく人や物を焼く。そのように、魔法は命中した対象の状態にも作用して効果を及ぼすものだ。

そのためずぶ濡れになっている自分が氷の魔法など受けようもの

なら、全身を凍らされる可能性があるだろうと、グリムリーパーは内心でそのリスクを感じ取る。
「スノーレーザー！」
「！（より一層気を使わないとな……いや、場合によってはそろそろ潮時か。圧倒的不利な状況においてまで戦う必要はない）」
放たれた氷の光線を躱しながらグリムリーパーは戦況を判断する。僅かだがこちら側がまた不利に傾いた状況では、撤退も視野に入ってくる。
既に自分と使徒2体の戦いのせいで他の人間や魔物はこちらから距離を取っていることは随分と前から感じていた。
そのため状況を把握するためにも1度離脱するのも良いかもしれないと、グリムリーパーがそう思った瞬間だ。
「逃しませんよ！」
「……っ!?（速い……！）」
先程よりも倍以上の速さで肉薄し、剣を振るってきたイヴにグリムリーパーは驚きその攻撃を防ぐ。
その理由もまたグリムリーパーは考察した。先程までは手加減でもしていた可能性を思い、しかしそんな様子はなかったとその可能性を頭の片隅に置き、しかしすぐにその考えを捨てた。地面を見て、その答えを得たために。
「氷の上を滑ってきたのか……器用だな」
「スケートは得意なんです――なんて冗談は置いといて、これも私の研究の成果の1つ。驚いてくれましたか？」
「魔法は詳しくない。それがどれだけすごいのか分からない以上、悪いが褒めてやることは出来ないな」
「女性を相手にする時はそれでも褒めてあげるべきですよ」
「重ねて悪いが、俺は女に興味はないんだ」
イヴの剣撃を受けながら会話に応じ、しかし頭の中は止まらず動き続けていた。
おそらくは魔法か、あるいは靴にでも仕掛けがあるのかと視線を落とし、イヴの足元を見てグリムリーパーはその効果をある程度は予測

する。
（氷の上での速度倍増……あるいは移動制御もか。そうでなければ……本当にスケートが得意なのか、か）
濡れた地面をスノーレーザーによって凍らせ、そこを滑ってきた。魔法か魔導具によって移動の補助も行ったのだろうとグリムリーパーは予測する。
だが正確な答えに関しては求めない。答えを得たところで意味はないからだ。
戦闘においては、この結果――イヴという使徒が氷の上では移動を難なくこなす上、速度が増すという情報だけを得ておけばいい。
「それは残念……でもないですが。まだまだ私と踊ってもらうのでそこは悪しからずお願いしますね……！」
「踊りにも興味はない。無理に付き合わせるなら――死んでもらうぞ」
「！」
剣に力を込めて振るう。それだけでイヴは対処に苦慮する。
やはりと言うべきか、このイヴという使徒は魔法の方が得意であり、剣の方は魔法ほど習熟はしていないのだとグリムリーパーは分析する。
無論、そこいらの人間の戦士と比べれば遥かに強く、技巧にも優れているが――自分と比べれば劣っていると。
（とはいえ使徒の身体能力と魔法の力もあれば早々に仕留めるには至らないな……それにもう一体の使徒の動向も気になる。目の前のこいつに集中しているわけにもいかないな）
グリムリーパーはいつの間にか、気配が消えているもう一体の使徒――ミシェーラの居場所が分からないことを訝しむ。
そしてその状況を鑑みて、グリムリーパーは自分の不利がより明確になったことを感じた。
自身の状態と環境の変化。目の前の使徒の戦闘力の向上に、もう1体の使徒の居場所が分からないこと。それらを思い、グリムリーパーは少しずつ不利な状況に陥っていることを冷静に分析する。

まるで1手ずつ追い込まれるように――このイヴという使徒に踊らされているような気がした。
（……やはり潮時か。未だこいつの能力が分からない状態で戦闘に付き合い続けるのはリスクが大きい）
そう思い、グリムリーパーはいよいよ撤退を考え始める。まだ致命的な不利に陥ってはいないし、戦闘の継続は十分に可能。勝機もあるとはいえ、ここで無理に勝ちに行く必要性は薄い。
ここまで戦ったことで魔軍の指揮系統は十分に乱した。目的は半ば達成している。
もういつ撤退しても構わない――そう思い、タイミングを見計らおうとしたその時。
「やはり剣での戦いは分が悪いようですね……！」
「！（向こうから下がったか。なら次は魔法か）」
近距離で剣を打ち合っていたイヴの方が後ろの飛び退いて下がったことで、グリムリーパーには逃げるための絶好の機会が訪れる。
次に放たれる魔法を躱し、あるいは凌いで隠れられれば撤退は容易だ。そう思い、グリムリーパーは把握済みの周囲の環境から、ちょうど真後ろにある大木に逃れるべく足に力を入れて踏み込んだ。広範囲の魔法が飛んでくる可能性もあるが、再び距離を詰めることは撤退を考えるとあまり都合は良くない。取りにくい選択肢だ。
ゆえにもし広範囲系の魔法が来てもグリムリーパーは凌げるように先んじて移動した――その直後に、イヴの掌から魔法が放たれる。その魔法は、
「――氷の矢！」
「……！（牽制かつ命中しやすい方を選んだか。だがそれもガードすれば問題はない）」
使いやすいその初球魔法の発動を見聞きしたグリムリーパーは、それを大木に隠れてやり過ごそうとする。そして氷の矢が失敗に終われば後はまた隠れ、投げナイフで牽制して戦闘継続の意思を見せながらの撤退を行う。
（退屈はしない戦いだったが……やはり何も感じないな）

グリムリーパーはこの戦闘における感想を端的に内心で作る。初めて使徒と戦ったが、楽しさというものは特にないし、感情が動かされることもない。

とはいえ退屈凌ぎにはなったことでやはり戦いに身を投じることは間違いではなかったと思う。この先も、あるいは退屈を凌ぎながら見たことのないもの、体験したことのないものを体験出来るかもしれないと期待した。

「これで――チェックメイトです」

「！（何だと……？）」

だが、その時――イヴからの声を大木越しに感じ、グリムリーパーは疑問した。

チェックメイト。チェス用語においてどんな手を使っても逃げられない最後の1手を指す言葉だ。

つまりイヴがそれを口にしたということは、彼女と相対するこちらこそが詰んでいると宣言するものであり――

「っ!? これは……？」

そしてその意味を測りかねている最中、グリムリーパーは自身に起きた現象に驚きを感じた。

――足が凍ったように動かない。

いや、それだけではない。両の手もまた、氷によって固められた。その場から動こうとして動けない。

「確保ー！」

「っ……！」

それと同時に、木々の隙間から隠れていたであろうもう1体の使徒――ミシェーラが両手を広げてグリムリーパーにタックルを行ってくる。

それは明らかに計算された動きだった。剣を構えず、ただ捕らえるためのその動きはこちらの動きが固まる一瞬を予見していなければ出来ないもの。

ゆえにグリムリーパーは種明かしをされる前に早々に理解する。ミシェーラによって、地面にうつ伏せに押し倒され、押さえ込まれな

がら。
「捕まえましたよイヴちゃん！　ミシェーラはやりました！」
「ええ、ありがとうございますミシェーラさん。そのまま押さえといてくださいね」
――目の前にやってきたこの使徒の女……イヴにしてやられたことを。
イヴの周囲にふよふよと浮かんでいた水の塊、流動している水の線を見てグリムリーパーは理解した。
「……なるほど、な。その操った水を導線にしたのか」
「……やはり頭脳の方も優秀ですね。おかげで話が早くて助かります――っと」
グリムリーパーの質問に対し、イヴは感心しながらも剣を振るってその浮いていた水をグリムリーパーの手足に再度、更に覆うように付着させ、それを魔法で凍らせて念入りに固定する。
その上で語った。もう逃げられないことをイヴが確信した上で。
「ご覧のように、私のこの剣――〝メモリーソード〟も魔導具なんです。そのため幾つか魔法を封じてましてね。先生程じゃありませんけど、使える手はそれなりに隠させてもらってます」
「……水を操る魔法か。最初の迫撃水はそのためのカモフラージュかつ下拵え。俺の思考、行動を読んだ上で俺を捕らえるために俺を指定の地点に誘導し、予め大木から地面に伸ばしていた水の線をやってきた俺の足に付けた上で氷魔法によって固める――そういうことだな」
「……さすがですね。ここまで理解が早いと逆に種明かしの楽しみが削がれると言いますか……いえまあ別に良いんですけどね」
「ミシェーラもそのために隠れていましたよ！　念のため！　こうやって押さえ込むために！」
イヴの仕掛けた作戦。その手を淡々と何でもないように口にしたグリムリーパーにイヴが肩を竦める。ミシェーラの方は自慢気だが、その力は緩んでおらず抜け出せる気配はない。
その上で、グリムリーパーは僅かだが感心した部分を口にする。
「……だがよく俺の動きが読めたな……仮に俺の思考を読めていたと

しても、ここまで行動を読むことは難しいだろう」
「――それはまあそうですけどね」
グリムリーパーのその言葉にイヴの眉が僅かに動くが、動揺することはない。
内心で驚きを作りつつも、イヴはその優秀さを知るがゆえにある程度バレるのは予測済みであり、確信に至らなければどうにでもなるという自信があった。証拠がない以上、あくまでもそんな風に思えるだけ。
実際に思考を読んでみても確信に至った様子はないため、イヴは自信を持って口にする。自らの価値を。
「ただ私は……あなたやミシェーラさんのように強さで選ばれたわけではありませんが、これでも特Ａ級なんですよ」
――人の心の声を聞き取れる能力が露見していない状態でのその評価は、また別の意味を持っている。
レオンハルトシティの人間牧場。能力によって評価され、選別されるその箱庭において、特Ａ級に振り分けられた人間は両の手で足りるほどにしか存在しない。
そしてその大半が戦闘。あるいは一芸のスキルにおいて特Ａ級だと認められた者ばかりである中――イヴは唯一、ある評価項目においてぶっちぎりの記録を持っている。
それは、
「――頭脳面において、私より上位の者はあの街の歴史において存在しません」
――知能面における特Ａ級評価。
レオンハルトシティの人間牧場においてその評価を持つのは今までにイヴしかいない。
それは言い換えると……１０００年に１人の天才であるということだ。
「私、こう見えて天才なんですよ。なので、あなたの行動パターンを予測するくらいはなんてことありません」
思考を読む、心の声を拾う――そういった特異な能力に魔導具を含

めた幾つもの手札も、それを扱う人間が凡百であれば十全に使いこなすことは出来ない。
　レオンハルトの使徒の中では実力は下位に甘んじているが、純粋な頭の良さにおいては付与師であり魔法科学の天才であるガウガウに比類するほどの天才であるイヴはこの圧勝の理由をそう説明付ける。
「私相手に初見でよく持った方です。次戦うとなればさすがにもう少し手の込んだ仕掛けや作戦が必要だったでしょう」
　初見の魔導具や2対1であったことを思えば、こうなるのは必然だったとイヴは言う。
　そしてその上で、
「ですが――仮に何度戦おうと、ここの戦いで私を上回ることは不可能です」
　純粋な知能においても能力においても、イヴを出し抜くこと。その手の読み合いで上回ることは不可能であるとイヴは自信を持っている。
　そしてそれを、半ばではあるがグリムリーパーもまた理解した。
「……なるほどな。それが俺がこうして地面に伏せている理由か」
「ええ。なので抵抗はしないでくださいね。大人しくしてくれれば悪いようにはしませんから」
「そうですよ！　帰ってレオンハルト様の沙汰を待ちなさい！」
「ふん……沙汰、か」
　イヴとミシェーラによる言葉を受け、グリムリーパーは鼻を鳴らした。
　そしてその直後――イヴはその心の声を拾って余裕の笑みから再び警戒の表情を作った。途端に言葉を飛ばす。
「！　――ミシェーラさん！　周囲を警戒してください！」
「え？　あ、はい！　警戒します！」
　イヴが剣を構えたままグリムリーパーを押さえ込むミシェーラを守るために辺りを見渡した直後――
「――白色破壊光線！」
「っ！　バリア！」

――唐突に、最上級の攻撃魔法が飛んできたことにイヴは驚愕しつつもバリアを張って防御を試みる。
「くっ……!?　ミシェーラさん！　回避です！」
「わ、分かりました！」
だがその威力はやはり普通のバリアでは完全に防ぐことは叶わない。それを察知したイヴの声でミシェーラが退避し、イヴもまたその攻撃をバリアによって防ぎながら大きく後退させられる。
地面に伏せているグリムリーパーだけをそこに置き去りにしてだ。
そしてその調整は、彼を助ける意図を示していた。
「――やはりと言うべきか、レオンハルト様の使徒は優秀ですね。普通の不意打ちは通用しませんか」
「……！　……なるほど。あなたもまたガイ様と同じくここにいたんですね」
そしてイヴとミシェーラが飛び退いた後のグリムリーパーの側に降り立ったのはイヴ達も知る使徒だった。現在謀反を起こしている魔人ガイの唯一の使徒であり、ガイ一派においてガイの次に警戒するべき相手。
「それで、次の相手はバークスハムさん、貴方も……ということでよろしいですか？」
「ええ。ですが悪く思わないでほしい。これも未来のため、致し方ないこと。ゆえ、少しばかり私がダンスの相手を務めましょう。これからより激しくなる……ガイ様の戦いの邪魔をさせるわけにはいきませんので」
――使徒レーモン・C・バークスハムがイヴとミシェーラの前に立ちはだかった。

積年の怒り

大陸南部の森林地帯。その奥地は深夜であるにも関わらず常に明かりが灯っている状態だった。
「おっ……らあああああ！」
「ライトビーム！　闇の波動！　白色破壊光線！」
しかしそれは明かりというほど生易しいものではない。
度重なる魔法の光と走る稲光は森を焼き、大地を砕き、立ち塞がる何もかもを破壊していく。
勿論、通常の魔法を用いた戦闘であればこれほど大きな規模にはならないが――魔人は別だ。大陸の支配者。人間や魔物を遥かに凌駕する彼らの戦闘はもはや人の手ではどうにも出来ない災害のようなもの。
「絶対零度！　ゼットン！　黒色破壊光線!!」
「ぐっ……おおおお！（クソ！　いつまでやっても攻撃がまともに当たらねェ！）」
――だが、その災害にも当然強弱があり、序列が存在する。
それを決定づけるための手段が戦闘……であるが、魔人レイは序列というものに興味はない。魔人四天王やそれ以上の地位を欲してはいない。
やりたいことは目の前のムカつく奴をぶっ飛ばしてスカッとすること。
だが、そのムカつく魔人ガイは常にレイの攻撃を躱しながら逃げ続け、一定の距離を保ったままレイを攻めていた。
「いつまでも逃げてんじゃねェぞ！　ペテン野郎！」
「私が悪いのか？　お前が逃さないようにすればいい話だろう」
冷たくムカつく言葉と共に飛んでくる魔法は全て上級魔法以上か、そうでなくてもそれ並の威力を持つ魔法ばかり。
その理由はガイの魔力が並外れて高いからであることにレイは気づいていた。レイに魔法の知識はそれほどないが、雷を使った戦闘を

行うことやレイのこれまでの戦闘経験においても魔法を相手にすることはザラにあるため並の魔法がどんな効果でどれくらいの威力があるのかは何となく理解している。
（なるほどな……！　この野郎、小細工が多くてウゼェが確かに強ェ……！）
だからこそレイにはガイの非常識さがよく分かった。
魔法1つ取っても並の魔法使いの何倍、いや何十倍の強さがある最上級魔法を連発し、未だに疲弊した様子も魔力切れを起こす様子も見せない。
だというのにガイは剣の達人でもあり、近接戦を行ってもかなりやるであろうことはここまでの身のこなしでよく分かる。常に帯電しており、剣でも触れれば痺れることを嫌ってかガイは遠距離での魔法戦に徹していたが、仮に近づいて戦っても問題ないことは明らかだ。
（が、嫌がってることは間違いねえ。ならどうにかして距離を詰めりゃあ……！）
だがレイは自らの勝利のためには近接戦に持ち込むことが必要不可欠だと確信していた。遠距離での戦いもレイには出来ないこともないし、実際ガイも完全な無傷とはいかない。散発的に放たれる雷。周囲に溜まる雷雲。増幅される雷の攻撃は時折、ガイに命中して僅かだがダメージを与えて入る。
だがそれはいつまで経っても致命傷にはなりえないものだ。ただでさえガイは常にバリアを張ってダメージを軽減しながら戦っている。遠距離からの雷攻撃では幾ら雷雲による強化が施されていたとしても上位魔人にはかすり傷程度のダメージしか与えられない。
（殴れりゃどうにでもなる……！）
だがレイもまた得意とするのは近接戦であり、自らの身体を用いての殴り合いだ。
殴れればバリア程度は砕け散り、ガイであっても無視出来ないダメージを与えられる自信はある。
だが問題はそこまでガイが行かせてくれないこと。徹底して距離を取り、魔法による圧倒的な火力でレイを寄せ付けないガイはレイに

とってかなりやりにくい相手であった。
「どうした？　いつになったら私を殴れる。それともそろそろ負けを認めるか？　それなら私も手間が省けて助かるが」
「ッ……！　安心しろよ……まだまだお前を殴りたい気持ちしかねェ！」
　安い挑発と共に放たれる魔法はその言葉ほど安くはない。レイもまた全力で雷を放ってガイの魔法をどうにか相殺する。
（距離を詰めねェとこのままジリジリと削られてくだけだ。なら、多少無理にでも突っ込んで距離を詰めてやる！）
　そしてその攻撃を防いだ直後に、レイは直感で思いついた策を実行した。
「オッラアアアアッ！」
「何度やっても無駄だ」
（ハッ、言ってろ！）
　内心でガイの挑発に言い返しながらもレイはガイを殴るための最適な方法を実行に移す――ガイへの攻撃を外した体で、地面を思い切り殴りつけることで。
「！　これは……目眩ましか」
『身を隠したぞガイ！　気をつけろ！』
（気をつける隙なんて与えねェよ！）
　地面を殴り、破壊を起こしながら土煙を上げる――が、その程度で隙を突けるほどガイという相手は温くないことをレイは思い知っていた。
　だからこそ、土煙を上げながら周囲に溜まっていた雷雲を周囲に集めてそれにより身を隠す。真っ黒い雲はこの夜の闇の中で、十分に目眩ましになりえるものだ。
　レイも一時的に帯電をやめればレイを発見出来る術は相手にはないし、出来ても間はあるだろう。
（その隙を突いてぶん殴ってやる！）
　そう思い、レイはガイから僅かに距離を取って回り込もうとした。そのまま後方に逃げるであろうガイの行動を先読みして――

「――しゃらくさいわ！」
「ッ!?　なっ――!?」
――だが、その予想に反してガイが突っ込んできた。
雷雲の中に飛び込み、その中に潜んでいたレイに向かってガイはその先程注意を促していた魔剣カオスを振り下ろしてくる。
「ぐおおおっ!?」
「死ねええええ！　――ぐうううう！」
そしてレイの体質を無視して斬撃を放ってくる。
その予想外の攻撃にレイは身を翻して致命傷を避けることになった。カオスをまともに食らうのはマズいことは魔人として本能的に分かる。ガイの剣士としての実力から考えても、まともに食らえば一発で致命傷になることもありえたためだ。
「チッ……確かに痛いが大したことないわ！　それよりそっちの方がダメージは大きいようだな！」
「っ……！（くっ……この野郎……！　また性格が変わったみてェに突っ込んできやがって……！　まさかこれを狙ってたのか……!?）」
そして反対に、ガイの方はレイの雷を直接食らっても大きなダメージとはならない。身体の前面を僅かだが斬り裂かれたレイと違って、余裕の表情を見せる。
「近づけば俺を倒せると思ったか！　馬鹿が！　お前なんぞ、この俺の敵じゃないんだよ！」
「……！　こんくらいでもう勝ったつもりか……！　てめェこそ舐めてんじゃねェぞ……！」
レイは傷を作り、血を流しながらも距離を詰めたことで反撃の拳を放ってやろうと更に一歩近づいて拳を振りかぶる。
そしてそれにガイも応じようとしていた。
「殺して分からせてやる！　死ねええええ！」
「！」
ガイの剣は鋭く重いものであることは先程の一撃で分かっている。見切りを見誤れば致命傷を負ってしまうだろう。

だがそれでもだ。近距離での殴り合いは望むところだとレイは血を熱くした。ようやくぶん殴るチャンスが来たと。ガイの剣を紙一重で躱してカウンターのパンチをお見舞いしてやると、そう狙いを定めたところで――

「――馬鹿が。敵の得意とする間合いで態々戦う必要がどこにある」

「ッ!? 何、だと……!?」

――しかし、目の前のガイは途端に動きを変えた。

殺意を込めたその表情。力を込めた剣。その腕の振り。全てを途中で取り止めて、冷静に背後に飛び退きながら右手に魔力を溜めて撃ち出してくる。

「――白色破壊光線!」

「ぐ――おおおおおおおおおおっっ!!」

それはもはや不意打ちにも等しい後出しの攻撃だった。

剣による近接攻撃を想定していたレイは、その咄嗟の行動に不意を突かれてガイの魔法を正面から受けて吹き飛ばされる。

森の木々を消し飛ばし、大地を焼くその魔法の威力を受けたレイは地面を転がりながらその不可解に内心で疑問と悪態をついた。

「ッ……く……! （途中で動きが……攻撃の気配ごと変わりやがった……!）」

「全く……これだから脳筋は嫌になる。幾ら相手がムカつくからと敵の狙いに無駄に乗るとはな……」

ガイの独り言にも等しい呟きを耳にしながら、レイはその行動がガイのペテンであることを半ば理解した。

ガイが変人であることは魔人の中では知られた話だ。冷静に話していたと思ったら急に粗暴になったり、逆に冷たい反応を見せたりする――そうして相手を騙してくることをレイは身を持って知っている。

今回もそれをやられたのだ。逃げると思わせて突っ込んでくる。突っ込んでくると思わせて距離を取る。

言ってしまえばただのフェイントであり、それ自体は誰もが行うような戦闘の際の駆け引きである。

だがガイのフェイントはそうだと気づかせない。神業染みたフェイントであった。
レイも馬鹿ではない。戦闘の際は相手の行動を見た上でしっかりと対応するように戦っている。
だがその予測がここまで通用しないとは思わなかった。
その上で剣も魔法も極めて高いレベルでこなせる魔法戦士というのは――やりにくくてしょうがない。
「無駄に被弾してしまったが……まあ許容範囲か。かなりダメージは稼げたようだしな」
「はぁ……はぁ……！　クソが……！」
レイは立ち上がりながらも息を乱して冷静なガイを睨みつける。
今の白色破壊光線の直撃はかなり効いた。直前のカオスの傷もあって、レイは致命傷とまではいかずともかなり体力を削られてしまっている。
これが普通の人間によるものであれば、数度の攻撃程度で息を乱すような無様は晒さない。魔人の体力は人間と比べて圧倒的に多い。
だが相手が同じ魔人であれば――しかも自分より上位の魔人であれば、こうして何度か攻撃をまともに食らっただけで明らかな不利に陥ることもある。
しかし実力が拮抗した戦いであれば何日も――それこそ何ヶ月も戦うことも可能な魔人を。
「このまま圧殺してやろう……貴様に恨みはないが……悪く思うなよ、レイ」
「っ……！」
――魔人ガイはこうして短時間の内に制しようとしていた。
魔人四天王でありあの魔人レオンハルト相手に引き分けたという噂を持つガイの強さについて、多くの魔人は半信半疑であった。
だがレイもまた理解する。ガイの強さ。その余裕から見える底知れなさを。
レオンハルト程ではないとはいえ、そのペテンの腕前から見るにその認識すら騙されている可能性があるかもしれないとレイは思う―

――が、それとこれとは話は別だ。
「ぐ……おおおおお……！」
「……まだやる気か？　あまり悪あがきをすると痛いのが長引くぞ」
「うるせぇ……余計なお世話だ……！」
相手が強いから、自分が不利だからといって早々に負けを認めることをレイはしない。
ダメージを負って苦しくてもまだ戦える。まだ発散出来ていない。
ならば目の前のムカつく奴を殴るだけ。腹の中の苛立ちを少しでも解消するために――暴れることを止めはしない。
「……せめて苦しまないように殺してやろう」
「やれるもんなら……やってみろよ……！　クソペテン野郎……！」
「なら望み通りに――白色破壊光線！」
「っ――おおおおおおっ！」
ガイの放つ最上級攻撃魔法に、再びレイは呐喊していく。
まだまだ死にはしない。余裕ぶって勝ち誇ってるガイに吠え面をかかせてやると更に意気込んで。
「――白色破壊光線！」
「!?　あ……!?」
「っ……何……？」
――だが、その反撃を、苛立ちの発散を寸前で邪魔される。
目の前に走った光の奔流。それが、ガイの放ったそれと激突し、周囲に衝撃波を撒き散らしながら相殺され収束していくのをレイだけでなくガイも見た。
そしてその正体を、ほぼ同時に2人は認識する。
「っと……なるほどね。確かにこりゃ強い。レイ坊やじゃ手に余るわけだ」
「てめぇ……！」
「――ハンティ、か……」
レンジャーのように身軽に地面に着地したのは黒髪のカラーのような見た目の最強の使徒。魔人レオンハルトの使徒であるハンティだ。

その突然の登場に、その発言もあってレイは殺意を持って睨みつけ、ガイは僅かに目を細くして思案する――後もう少しでレイを仕留められたのにと内心で歯噛みしながら。
「邪魔してんじゃねェよ……！　レオンハルトの腰巾着が……！」
「ハッ、お楽しみを邪魔されてご立腹かい？　でもあたしがこうして現れなきゃあんた、そのうち死んでたんだから少しは感謝したらどう？」
「何だと……！」
「……それで、次はお前が私の相手をするとでも？」
戦いに割って入ってきたハンティに、ガイはレイと違って冷静に声を送る。
そうしながらもその一挙手一投足を見逃さないようにしていた。何しろ、ハンティという存在はガイにとっても未知数の脅威。
使徒である以上、無敵結界を抜けないのだから魔人の相手にならないと考えるのは早計だ。あの魔人レオンハルトの使徒で、使徒の中でも最強と称され、目の前のレイのような魔人ですらあしらう実力を持つとされるハンティを舐めてかかることような愚を犯すつもりはない。
その強さと能力ゆえに、レオンハルトからは常に重要な仕事を任され、単独行動を行うことも多いことはガイも友人から聞いて知っている。
「そうだね。あたしとしても1回くらい戦ってみたかったし、頷きたいところではあるね」
そして――その魔法の腕前も、以前の自身に匹敵することもガイは知っている。
ゆえに警戒は最大限だ。以前の自分であればいざ知らず、今の自分よりも明らかに魔法の腕前が上である相手であれば、魔人の無敵結界もどうにかし、能力差を埋めてくるような手段を持ってきていてもおかしくはない。
魔人レイなどよりもよっぽど厄介な相手であると、ガイは不敵な笑みを浮かべるハンティを見ながら静かに言葉を返す。

「……ならば、違うと？」
「ああ。残念なことにね。あんたと戦いたい奴は多いこともあって順番ってのがあるのさ。最初はレイ。そしてそのレイが負けたら次は――」
『！　――ガイ！　何か来るぞ！』
「っ!?」
　そしてそのハンティの言葉を聞き終える瞬間――カオスがその気配を感知し、ガイはその声に従ってその場から急いで飛び退いた。
　その攻撃はガイが先程までいた地面を消し飛ばし、クレーターを作ってしまうほどの威力だ。おそらくは魔法――そう思いながらも、ガイの知識にある魔法とは違ったエネルギーを感じ取り、ガイはその攻撃を放ってきた相手が誰かを見極めようと気配に従って上空を見て――そして気づいた。
「――次はドラゴンの女王様が、あんたをご所望だよ」
「カミーラか……！」
　開けた視界。闇夜の月をバックに宙に浮いていたのは白銀の髪に角を持つドラゴンの特徴を持った美女だ。
　だがその気配は人でもドラゴンではない――魔人のものであり、しかもそれが上級魔人のものであることをガイは理解している。実際に感じるだけでなく、実際に過去にそうであったことを知っているからだ。
　何しろ、その魔人カミーラは――
「――ようやく……ようやく貴様を殺せる時が来たな……ガイ……！」
「っ……！」
「４００年程前に受けたあの恥辱……！　それを今日、貴様に返してやる……！　その身体をズタズタに引き裂いて、殺してやることでな……！」
　――かつてガイによって、その座を追われた……元魔人四天王であるからだ。

――魔人カミーラは高揚し、そして憤怒していた。
その理由は単純明快。目の前に憎き男、ガイがいてそれと戦う機会を得られたからだ。
今より４００年程前、カミーラはガイが魔人になった際に魔人四天王の地位を追われた。
他ならぬ魔王ジルによる除籍に直接異を唱えることは魔人として出来ない――が、その屈辱をガイに返し、地位を取り戻すことは出来るとかつてカミーラはガイに戦いを挑み、そして無惨に敗北した。
あわや犯される一歩手前までいった。その恥辱をカミーラは忘れていない。助けに入ったレオンハルトがいなければ、カミーラは消えない傷を負わされて更に屈辱を感じていただろう。
そしてそれからだ。カミーラがレオンハルトと共に狩りを――レベル上げを行うようになったのは。
それはそこらの人間や魔物を狩るような地味な作業とはいえ、レオンハルトは常にこちらの機嫌を伺い、乗り気になれるように趣向を凝らした。
カミーラの好きな宝石や美少年を配置したり、レベル上げが少しでも捗るように金の湯という特殊な温泉にも１０年に１度通うようにもなった。
「それによくも邪魔をしてくれたな……！」
「っ……何の話だ……!?」
――そしてその事もまたカミーラにとって、ガイに怒りを覚える理由だ。
ガイが魔王ジルから離反し、敵対したこと自体はカミーラにとって逆襲の絶好の機会を得られるからむしろ良いことだ。よく敵対してくれたと褒めてやるくらいには。
だが、その時期がちょうどレオンハルトと混浴の年と、月と重なったことで今年のそれは延期となってしまったのだ。
（あのレオンハルトに身体を洗わせる数少ない時間を……よくも邪魔してくれたな……！）

そう、１０年に1度の混浴の機会を逃した――そのことにもまたカミーラは怒りを覚えていた。
この世で唯一カミーラが認める雄であるレオンハルトによる奉仕の時間。最上の男であるレオンハルトが、自分に傅いて身体を洗ってくれる時間は、カミーラにとって１０年に1度の楽しみであった。
価値の高い宝石や美しい男を侍らせることを喜ぶカミーラにとって、レオンハルトという最強の魔人が、まるで従者のように自分の身体を丁寧に洗ってくれるというのは凄まじく滾る――そう、優越感を感じる瞬間である。
しかもその洗い方は上手い。というか気持ちいい。やっていることはただ身体を洗っているだけなのに、的確に快感を与えてくるのは「わざとやっているのか？」とカミーラも疑いを持ってしまうほどだが、そのことも途中からどうでもよくなっていった。レオンハルトの自身に対する好意は承知している。ゆえに多少の下心は許してやるし可愛いものだ。
……しかし１０年に1度、というのが中々カミーラを焦らさせるものであり、その期間を待つ間のカミーラは時折そのことを思い出しては溜息が溢れるほどだ。魔人としての時間間隔として１０年はあっという間であるはずだが、それでも１０年を待つというのはそれなりに焦れるのだ。
だからこそ、この１０年の間にカミーラは次の機会でレオンハルトに１０年の間を空けなくて済むようにこちらからそれとなく持ちかけるつもりであった――正確には、考えついたのは３００年くらい前だが、その内レオンハルトの方から言ってくれるだろうと待つこと１００年。それとなくアピールしてみること１００年。こちらから言うしかないか……いやしかしそれは私のプライドが……と葛藤すること１００年、と持ちかける決心をつけるまで結構な時間を費やした。
ただこちらからそういう風に誘うだけなのに何もそこまで悩まずともと下等な者は思うだろうが、カミーラ程にもなるとそれすらプライドが邪魔をする。ゆえにカミーラにしてみればそれを決めたこと

は中々の奇跡であるのだが……それを決めた矢先に、ガイの宣戦布告だ。
（どこまでも私の気に障る奴だ……！　ガイ……貴様だけは許さん……殺してやる……！）
そしてカミーラは更にガイへの怒りを募らせた。殺意と怒りを滾らせて、カミーラは力を入れてガイに自らの爪を突きたてようと凄まじい速度で肉薄した。
「っ！　（速い！）」
「言っておくが、昔の私だと思うなよ……！　貴様を殺すために、研ぎ澄ましてきた……怒りを募らせながらな……！」
ガイを倒すためのカミーラの持ってきた戦略は、レベルを上げて戦うという戦略とすら呼べないものである。
――だが、その単純な強化こそ強い敵を上回るためには最も効果的な方策である。
元々魔人四天王。それもプラチナドラゴンの魔人という種族的にも恵まれているカミーラの実力は魔人の中でも上位である。その怠惰な性格もあってレベルこそ劣ってはいたが、逆に言えばレベルが劣っていても他の魔人を蹴散らせるほどに、そのスペックは高いのだ。仮にレベルが同じでも、人間と他の種族では能力値が異なるように、魔人の中でも元の種族や個々の特性によって能力は違ってくる。
そんな中でプラチナドラゴンの魔人のカミーラの能力は、レベルが劣っている状態でも他のおおよその魔人よりも上である。
そのカミーラがレベル上げを行えばどうなるか。
「っ!?　（速いだけではない……！　力も以前と比べれば格段に強くなっている……！）」
「逃げられると思うな……！」
それは、純然たる種族差。肉体能力の差による暴力だ。
完成された種族であるがゆえに滅ぼされたドラゴン。そのドラゴンの中でも一匹しか存在しないプラチナドラゴンという種族の強さは他のドラゴンと比べても上位に位置する。
ゆえにただの人間や、ただの魔人に比べれば圧倒的に強い。そうい

う種族であるからだ。そもそもが強い種族。力も速さも。体力や魔力も。あらゆるステータスが人間を突き放している。
ゆえにカミーラはレベルが上がるのが遅いが、その上昇幅もそれに見合うほど大きい。
結果、カミーラは基礎的な能力――魔力を除けば、ガイを上回るだけの強さを身に付けていた。
カミーラによる爪の一撃にガイは押され、逃げようにもすぐに追いつかれる上、そもそもカミーラは飛ぶことも出来る。レイに行っていたような間合いの管理がカミーラ相手には行えない――
「――黒色破壊光線！」
「っ！」
――とも限らない。
カミーラの肉体能力による物理攻撃は先程のレイによるそれよりも更に苛烈かつ俊敏で、獣が狩りを行っているかのような恐ろしさがあった。その強さは間違いなく怪物である。
だが、ガイもまた怪物だ。魔力を込めた最上級魔法。その黒い奔流にはカミーラもまた脅威を感じて対処せざるを得ない。
「〝Dブレス〟!!」
その手からドラゴンの証たるブレス――闇の力を秘めた一撃を放ち、何とかガイの最上級魔法を防いでみせるも、ガイの魔法はこの程度ではない。一撃を防がれても次が、また別の魔法が次々と飛来してくる。
「……どうやら、レイよりは気を使って挑む必要がありそうだな」
『油断するなよガイ。カミーラの奴、言うだけあって昔より遥かに強くなっとるぞ……！』
「ああ――〝攻撃付与〟、〝防御付与〟、〝魔法付与〟、〝命中付与〟、〝魔抵付与〟、〝高速飛翔〟、〝ゆらゆら影〟――」
「っ……面倒なことを……！」
そしてカミーラがその魔法に対応している間、ガイは自らの能力を強化する魔法を、自分の知識にある使えるだけの全てをかけて自身を強くする。

純粋な身体能力で劣るのであればバフをかければいい――かつての人間時代、ガイがレオンハルト相手やその先の魔王を想定して用いていた戦法だ。
その時使用していた禁呪のような離れ技は使えないとはいえ、その強化もガイ程の術者となれば馬鹿にはならない。
「――さて、これで準備は終わった。レイに続いて、次はお前を戦闘不能にしてやろう」
「まだ私を怒らせるか……！　その度胸だけは買ってやろう……だが、その代償は高くつくぞ……！」
「来い」
「！」
怒りと共に振るわれるカミーラの伸びた爪と冷静なガイの魔法の応酬が始まり――その第二ラウンド……上位魔人同士の戦いは幕を開けた。